魔法科高校の『触れ得ざる者』

那珂之川

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら、生まれ変わって魔法科高校の世界に飛ばされていた。おまけに三矢家だって？　だが、本来知っているはずの原作とはどこか同じでも何かが違う……

これは、原作で存在し得なかった転生者というイレギュラーによって運命の歯車が廻る物語である。

追加エピソードが入った場合はタイトルの後ろに（※）が追記されています。

※原作（劣等生・優等生）ベースですが、オリ展開あり

※オリキャラも出てきます（プラスオリジナル設定）

目次

人物設定① 1
人物設定②（十師族） 9
人物設定③（護人・百家・国内外） 24
追憶編
プロローグ～転生しました～（※） 39
身内に論外扱いされる師範代（※） 49
体（てい）の良い生贄とは（※） 59
『四葉』の関わり（※） 69
フラグの折り方、知りませんか？（※） 77
そんなルート、私は知らない（※） 88
咄嗟に冷静な対応は取れない（※） 101
力不足と戦いの終わりに（※） 114
当主間の定時連絡（婚約話）（※） 127
魔工技師・上条洸人（※） 139
バレンタインと大人の事情 148
臨時師族会議 157
はるのあしおと（※） 167
入学編
僕は今、北の国にいます 181
別人のようで実は同一人物（※） 192
噛み合い始める歯車（※） 201
再びの邂逅（※） 212
不意打ちって痛いのよ 225

漸くのひととき　233
不思議な奴の評価　243
あったら即死だった（〇〇的な意味で）　251
二人の暴れん坊　261
ときには関節技　274
『実力』の相違　282
悠元の規格外さ　291
一日一往復（※）　300
新入部員勧誘週間①　311
新入部員勧誘週間②　318
疑似キャスト・ジャミング　326
剣道と剣術　335
慣れましたから　344
『白』の関わり　352
校内への襲撃　362
策士、策に溺れる　371
『白』絡みの後日談　378
無自覚の戦略級魔法（女性限定）　385
九校戦準備編
力の在り様　393
トーラス・シルバー　402
テスト勉強　415
1学期末考査結果　423
自分の恋路、他人の恋心　432
競技選定（丸投げ）　443

ギブアンドテイク ―― 452
『触れ得ざる者』 ―― 460
隣の芝は青い ―― 468
会議は踊る（進まないとは言っていない） ―― 474
エンジニアテスト ―― 481
理解、納得、当然の帰結 ―― 491
勝負事に手は抜かない ―― 499
建前と本音 ―― 506
建前は投げ捨てるもの ―― 514
常識外れに常識は求められない ―― 522

九校戦編

九校戦出発当日① ―― 530
九校戦出発当日② ―― 538
九校戦出発当日③ ―― 546
九校戦出発当日④ ―― 554
九校戦出発当日⑤ ―― 562
九校戦出発当日⑥ ―― 571
九校戦懇親会① ―― 578
九校戦懇親会② ―― 585
九校戦懇親会③ ―― 592
九校戦本番前日① ―― 600
九校戦本番前日② ―― 607
九校戦本番前日③ ―― 615
九校戦本番前日④ ―― 622
九校戦一日目①～本戦一日目～ ―― 633

九校戦一日目②　640
九校戦一日目③　648
九校戦一日目④　657
九校戦一日目⑤　664
九校戦二日目①～本戦二日目～　675
九校戦二日目②　684
九校戦二日目③　692
九校戦二日目④　701
九校戦二日目⑤　709
九校戦三日目①～本戦三日目～　718
九校戦三日目②　726
九校戦三日目③　734
九校戦四日目①～新人戦一日目～　745
九校戦四日目②　755
九校戦四日目③　762
九校戦四日目④　770
九校戦四日目⑤　777
九校戦四日目⑥　784
九校戦四日目⑦　791
九校戦四日目⑧　798
九校戦四日目⑨　807
九校戦五日目①～新人戦二日目～　814
九校戦五日目②　821
九校戦五日目③　830
九校戦五日目④　838

閑話　横浜ベイヒルズタワーの一幕 846
九校戦五日目⑤ 854
九校戦五日目⑥ 861
九校戦六日目①～新人戦三日目～ 869
九校戦六日目② 877
九校戦六日目③ 885
九校戦六日目④ 893
九校戦六日目⑤ 902
九校戦七日目①～新人戦四日目～ 911
九校戦七日目② 921
九校戦七日目③ 929
九校戦七日目④ 938
九校戦八日目①～新人戦最終日～ 946
九校戦八日目② 954
九校戦八日目③ 964
九校戦八日目④ 972
九校戦九日目①～本戦四日目～ 983
九校戦九日目② 991
九校戦最終日（※） 1000
夏休み編＋1
神楽坂の継承 1011
その笑顔は強敵（ラスボス）だった 1021
危険なものは分解するに限る 1031
婚前交渉は突然に 1039
身内から見れば劇薬、他所から見れば常識外 1052

神楽坂当主指名之儀 ―――― 060
ある意味、時既に遅し ―――― 070
内ゲバなんてやってる場合じゃないんだが ―――― 078
夢の続きを描く ―――― 087
ゆっくりできない夏休み ―――― 095
リターンにはリスクが伴う ―――― 105
堀全部埋めてから言う台詞じゃねえ ―――― 114
親の細やかな願い、子知らず ―――― 122
王に担ぎ上げる奴の気が知れん ―――― 129
横浜事変編
原作主人公に平穏という二文字は遠い ―――― 142
尻拭いする羽目になる悲しい現実 ―――― 150
黒幕呼ばわりだけはマジ勘弁 ―――― 158
無機物に仇の概念を抱くのは間違っている気がする ―――― 166
この場合、記憶を消すに限る ―――― 175
晴れのち朴念仁、所により人喰い虎 ―――― 185
気遣いと気苦労で実質プラスマイナスゼロ ―――― 195
嵐の前の静けさ ―――― 204
度が過ぎると管理できなくなる現実 ―――― 215
楽に考えたくなるのは仕方なし～論文コンペ当日～ ―――― 224
思惑を平気で超える規格外とその予備軍 ―――― 233
教えられない秘密は山ほど ―――― 241
片手間に大炎上 ―――― 250
灼熱と極光のハロウィン ―――― 262
来訪者編

仕事を増やすな、と叫びたい ―― 1272
政に疎い者、娘に悩む者 ―― 1280
伝染する常識外の系譜 ―― 1290
分の悪すぎる賭け ―― 1300
唐突な交換留学の話 ―― 1309
年の瀬の会合 ―― 1320
他人事であれば楽なこと ―― 1329
神楽坂家慶賀会 ―― 1335
触れたくなくても寄ってくるもの ―― 1343
力比べは必ず何かが犠牲になる ―― 1350
悪戯に対して塩対応 ―― 1357
道徳の概念は何処にあらんや ―― 1364
癖の強いものは治りづらい ―― 1371
彼（女）が言うと嘘に聞こえない ―― 1381
割を食うのはいつだって苦労人 ―― 1389
強化されると際立つ怪人の硬さ ―― 1396
片付けにも順序を決める ―― 1404
保安基準がバグっている ―― 1412
愚痴の一つや二つ ―― 1419
一足飛びで解決は難しい ―― 1427
強さは諸刃の剣 ―― 1434
人間離れと人外は得てして異なるもの ―― 1442
不思議な変化 ―― 1451
魔法と文民統制のバランス ―― 1458
英雄と戦略級魔法の天秤 ―― 1468

変わる流れ、変わらぬ流れ ―― 1475
政と軍の温度差、脚色された機密 ―― 1483
お互いの腹の探り合い ―― 1490
方向性が変わっても気質は変わらぬもの ―― 1497
バレンタイン前日 ―― 1504
バレンタイン当日① ―― 1511
バレンタイン当日② ―― 1519
結局こうなるバレンタイン ―― 1526
有機物よりも無機物に驚く ―― 1533
事案の処理は楽じゃない ―― 1540
物騒な茶番 ―― 1547
燃料にダイナマイトをぶち込んだ結果がコレです ―― 1555
苦労人の系譜は本質なのか ―― 1563
逃げるのならば倒すまで ―― 1573
耐性は別物なりけり ―― 1582
星を呼ぶ少女編
少し早い春休み ―― 1591
一度殴らないと恋に目覚めない理論 ―― 1598
少女との邂逅 ―― 1607
論外がいると霞んでしまう天才 ―― 1615
まるで人間砲弾がごとく ―― 1623
わたつみ救出作戦決行 ―― 1634
夜空に浮かぶ妹の幽霊 ―― 1642
大金という名の端金 ―― 1650
別の意味での慌ただしさ ―― 1658

七聖抜刀編

切っ掛けは夢の声 ―― 1665
千尋の谷に突き落として隕石を降らせる ―― 1671
傍迷惑な歓迎 ―― 1681
人間を辞める覚悟とは ―― 1689
朱に交われば赤くなる ―― 1698
その時、僅か1分 ―― 1710

ダブルセブン編

女性との難は続くようです ―― 1718
問い問われて返す先には面倒事 ―― 1726
帰って、どうぞ ―― 1735
珍しいものには目を向けたがる ―― 1743
穏便に進むのが一番平和的 ―― 1752
相手を出し抜く同族嫌悪の一例 ―― 1762
人がいいのと人が悪いのと ―― 1770
一番優先されるは感情論 ―― 1780
未熟な人間としての勘 ―― 1788
祖父世代のしわ寄せ ―― 1796
また一つ減る宿題 ―― 1806
驚きは猫被りに勝る ―― 1815
見方が変われば感じ方も変わる ―― 1823
一体誰を誘惑しているのか ―― 1830
あくまで兄妹間の問題 ―― 1844
少しずつ変わり始める歯車 ―― 1854
名は其方に、実は此方に ―― 1862

マイナス面も生じる誕生日 ―― 1873
捻じ曲がる執念 ―― 1880
『恒星炉』実証実験 ―― 1881
現実を見ていない者たちの哀れさ ―― 1888
金という名の力業 ―― 1899
理解はするが、同情はしない ―― 1910
振り向きざまに左ストレート ―― 1919
模擬戦の申し出と会頭の威厳 ―― 1928
理論を用いて証明する強さの一端 ―― 1936
意外と単純なもの ―― 1944
風紀は何処に ―― 1951
適度な休息は大事 ―― 1960
スティープルチェース編 ―― 1969
宿題と課題の板挟み ―― 1979
気が付けばオーバーラン ―― 1988
ヤバいわよ（競技的な意味で） ―― 1996
初夏の紅葉模様 ―― 2005
単純に出来ていたら苦労なんて負わない ―― 2012
表側の依存、裏側の人任せ ―― 2020
些細な癇癪と三つ目の厄介事 ―― 2028
騒ぎを最小限の労力で収める手腕 ―― 2036
論外が加わるとバグが発生します ―― 2044
弟子、空を飛ぶ ―― 2052
何事もないという違和感 ―― 2061
そんな役割は柄じゃない ―― 2070

誰しも最初から排除なんて望まない ―― 2080
油断はせずに行こう ―― 2089
カートレースにＦ１レベルを持ち込む暴挙 ―― 2098
気が付いたら過ぎた親切心 ―― 2106
慢心は出来ぬ ―― 2113
どうあっても苦労は増える ―― 2121
パラサイドール・クッキング ―― 2129
余所見をすると危険です ―― 2137
後は野となれ山となれ ―― 2146
一方的な論理の押しつけ ―― 2155
タワー一つ直せずして世界相手に戦えない ―― 2164
平穏な未来への一石 ―― 2173

古都内乱編

立場故の難しさ ―― 2181
無自覚は続くよ、どこまでよ ―― 2189
不気味すぎる信任率 ―― 2198
不審者に鉄槌（物理）を ―― 2207
慣れは違和感を生じさせる ―― 2214
要らぬ迷惑 ―― 2222
誰だって思ってしまう懸念事項 ―― 2231
烈との会談 ―― 2239
役割の押し売り ―― 2248
奈良の散策 ―― 2257
皆纏めて痛み分け ―― 2265
考えることが多いと頭痛になる ―― 2274

搦め手交じりの名誉挽回 281
物事の俯瞰は時において大事となる 290
所詮は高校生の身分なので 299
見られる歪み 307
緩衝が一つ追加するだけで変わる雰囲気 316
逃げ道まで塞がれる周到さ 323
避けても迫ってくる面倒事 332
嵐を諫めるための先手 337
清水の舞台から飛び降りる 346
礼を欠けば失する代償は大きい 355
いい加減隠居させるべき御仁の一例 364
異次元の妖すら逃げ一択 373
強敵に挑む装備に糸目は付けない 382
人すら殺めかねない天才の遺物 391
歪みを正すために 400
姉も姉なら妹も妹 409
在るべき輪廻に還れ 418
天才に弄られる埒外 426
四葉継承編 438
お前は一体何を言っているんだ 448
降り掛かる責務と突き付けられる事実の羅列 459
諭したら妹が増えたあの日 469
優先度の違い 480
大人らに振り回される子どもら 491
撃ち込まれた再会のツケ 500

安易に一撃必殺とはいかない ―― 10
現代魔法に甘んじるな ―― 20
母の繋がり ―― 25
家族を重んじるか、魔法を守るか ―― 30
堀を埋められ、激流に身を任せる ―― 41
対価の程度が分からない護衛 ―― 54
下手なアクション映画よりも臨場感がある ―― 60
騙して悪いが、これも仕事なのでね ―― 69
矢面に立つ埒外 ―― 72
妥当な判断だが、無意味だ。 ―― 78
二つの『アンタッチャブル』 ―― 87
望めど許されない寝正月 ―― 97
埒外だからこそ納得される判断材料 ―― 102
四葉家慶春会 ―― 107
新春の茶番劇 ―― 117
トリリオン・ドライブ ―― 126
婚約事情のおはなし ―― 136
白紙の運勢 ―― 145
師族会議編 ―― 152
燈也の率直な指摘 ―― 162
天才は惹かれ合う ―― 172
落ち込む末っ子と母に似る末っ子 ―― 180
娘の涙と妻の冷厳な言葉 ―― 190
七草香澄の憂鬱 ―― 202
味の分からない闇鍋なんて腹を壊すだけ ―― 212

約束破りの前払い、察する厄介事の火種 ―― 738
神楽坂の襲名 ―― 472
働けるものは治してでも働かせる社畜理論 ―― 527
歩く人間ドミノ製造機 ―― 542
天体観測しようぜ、お前お星さまな！ ―― 752
騒いでいたら心臓がもたない ―― 775
どう反応していいか分からない御身分 ―― 793
黒羽文弥婚約計画 ―― 832
似通った境遇、恋路の行方 ―― 812
皇たる者の決断 ―― 812
閑話　恐怖よりも現実的な打算を ―― 802
機密保持に爆発は付き物 ―― 793
桜に撒いても花が咲かない灰 ―― 783
紛失した爆発オチ ―― 848
万夫不当の武士（もののふ） ―― 859
妹が居ても治らないポンコツ戦略級魔法師 ―― 867
シリウスの建前 ―― 876
近いのに遠くなるような輝き ―― 885
具材争いをする日系米国人姉妹 ―― 897
フィクションですら匙を投げかねない ―― 906
師族会議　前編 ―― 916
師族会議　中編 ―― 929
師族会議　後編 ―― 936
逃げることも時には大事 ―― 946
閑話　ハンス・エルンストの七難八苦 ―― 955
―― 966

三枝（さえぐさ）と七草（さえぐさ）――――――

悩みの種は海の向こうから ―― 190
油断ならぬ相手 ―― 199
もう一つの任務 ―― 208
堀なんてものは既に存在しない ―― 217
名分は既に得た ―― 226
今日の海は時折氷柱が発生します ―― 234
触れてはいけないものに触れるという意味 ―― 243
おい、仕事（デュエル）しろよ ―― 251
次世代の苦労 ―― 259
任せっきりは面目が立たない ―― 268
気苦労の板挟み ―― 277
軍人としては一流でも、指揮官としては三流以下 ―― 285
矛先の判断 ―― 294
誓約書すら裏切る精神が染み付いている ―― 303
『十三使徒』の有効利用の一端 ―― 312
穏便な旅行がしたいです ―― 319
激動の時代・孤立編
エイプリルフールであってほしかった魔法 ―― 327
神楽坂の兄と三矢の妹 ―― 336
背伸びしたくなるお年頃 ―― 344
ラグ無き事態の発露 ―― 352
シュミットの懐疑、コントラチェンコの懸念 ―― 360
面子と面目の問題 ―― 371
マイナスの感情をプラスにする者同士の会話 ―― 380
嵌められた義勇兵 ―― 388

降ろそうとしたら雪だるま式に増えていく ―― 396
可能性を捨てることこそ愚かの極み ―― 404
浮かれていたら命が散るだけ ―― 412
建前が変わっても結果はあまり変わらない ―― 421
正気と我儘を疑いかねない壁 ―― 429
旧態の癖が抜けきらない身勝手 ―― 437
継がれていく立場 ―― 447
招待状の時点で感じる陰謀 ―― 456
三矢の兄弟姉妹（末っ子を除く） ―― 465
招待の受け取り方 ―― 474
勝手が分からないもの、無神経なもの ―― 483
判断が遅すぎる ―― 492
身近の恐怖の先にある強大な危険 ―― 500
現代魔法（おまえ）を殺す ―― 509
名目の上司の頭が高い ―― 518
ここからでも入れる保険がある ―― 527
閑話　未来の〝シリウス〟の苦悩 ―― 535
護人としての矜持 ―― 546
鑑みることが多い会談 ―― 555
逆鱗に触れる企み、意趣返しの一手 ―― 564
蜘蛛の糸にしがみ付く者の構図 ―― 573
お前に相応しい結末（ソイル）は決まった ―― 582
苦労を背負う若人たち ―― 590
私が貴方で、貴方は私 ―― 598
準備数日、調理３分 ―― 607

面倒事の前の面倒事 ―― 615
言論に躊躇いなど不要 ―― 233
消えた詩奈 ―― 236
三者三様の人外街道 ―― 236
海を隔てた苦難のはじまり ―― 363
損壊の危険性と逆鱗、知る者と知らぬ者の会談 ―― 413
どこまで堕ちれば気が済むのか ―― 365
既定路線のその先に ―― 936
領分に手は出さないが、私闘として手は出す ―― 513
最果てにて輝ける槍の一端 ―― 641
『十』の入れ替わり ―― 363
どちらにせよ常識外の相手 ―― 236
苦労性の未来予想図 ―― 233
若手会議① ―― 615
若手会議② ―― 382
縋るのならば、己の無力を証明したも同然 ―― 138
勇者という立場を平気で捨てかねない一例 ―― 123
杜撰以上に危険しか秘めていない ―― 804
想念の結果に生じたもの ―― 379
埃を被らせるほど勿体ないなら使うべし ―― 637
他所は他所、うちはうち ―― 883
名誉が欲しければ自分でやれ ―― 780
閑話　メイトリクス大佐 ―― 377
明確な拒否の為に ―― 237
新たな段階へ進むために ―― 643

最悪の随時更新 ―― 30
米英の政府（内輪）事情 ―― 38
対価無きプロジェクトなど無価値 ―― 39
リモート・トレーニング ―― 84
苦難と女難を背負い込んだ苦労人 ―― 86
見る者が誰しも恐怖しかねない光景（予定） ―― 88
収支上のマイナス面につき ―― 93
制限解除 ―― 93
四葉の代理（戦略級魔法師） ―― 98
傍から見ればテロリストみたいなもの ―― 103
エスケイプ・インベージョン編
蚊帳の内外では受ける重みも異なる ―― 109
知ることの責任 ―― 123
やってることはさながらカードゲーム ―― 139
今になって味わう規格外の片鱗 ―― 145
政務に似つかわしくないストレス解消法 ―― 154
意味合いを変える話し合い ―― 162
トーラス・シルバーの解散 ―― 171
意外な援護射撃 ―― 180
物理的に耐えきった椅子 ―― 188
悠元の〝夢〟 ―― 197
理想にしがみ付く者、現実を見据える者 ―― 204
無責任なやり方など許されない ―― 214
５０００兆パーセント無理な難題 ―― 240
ストレスの捌け口 ―― 403

見えてしまった未来を憂う老将 ―― 44
覚悟（けつい）、宿命（さだめ）、疑念（じつじょう） ―― 53
予期せぬ迷い人 ―― 62
次元の壁を超える可能性 ―― 71
過去からの来訪者 ―― 80
『ドラキュラ』を継いだ少女 ―― 89
世界からの難題という名の修正力 ―― 97
世界を渡った者同士の茶番劇のはじまり ―― 107
トリックスターのお茶目 ―― 116
指し手の数の暴力で戦いを進める ―― 125
非常識は理解が追い付かない ―― 134
天魔抜刀 ―― 142
デーモンを知る者 ―― 150
独眼竜 ―― 159
過剰戦力の極み ―― 168
他所は他所、此方は此方の道を往く ―― 177
大人たちの余計な横槍よりはマシ ―― 185
シリアスなのにコメディ基調 ―― 193
いるかどうかも分からない抑止力 ―― 202
一条家への訪問 ―― 211
弱い者虐めは勘弁 ―― 219
通じ合う者同士の邂逅 ―― 229
即刻シュレッダーに掛けたい気分 ―― 238
目に見えてくる後始末への流れ ―― 247
次を継いだ者達と更なる未来への苦悩 ―― 256

自分たちの不始末は自分たちでやれ　42
茶番の仕込み　75
急転編
過去から来た戦略級魔法師　42
閑話　英国首相の呟き　84
対岸の火事で済んでくれればいい　93
魔法師も池に落ちる　109
合間の恋愛・婚約事情　118
奮闘する若者たち、苦悩する大人たち　128
空を飛ぶ自律の重要性の一例　142
地の果てか海の底か　293
もう一人の戦略級魔法師の認識　337
蚊帳の外は平穏な日常　374
ブラッディ・ペンタゴン　432
失してしまった希望の花　463
軍人としての裁量　543
兄の優柔不断に呆れ返る妹　554
本来なら国家交渉のレベル　635
歳の近い師弟関係　643
不可思議すぎる旗頭　698
新ソ連艦隊侵攻　839
海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）　904
奪還・未来編
卵が先か、鶏が先か　1437
戦略級魔法師の在り方　1446
44614451
44424434442544154406439843904381437243634355434643374328431843094301429342842

誰が描いた構図なのか ―― 470
パターン：ヴィルヘルミナ ―― 479
出世欲を諦めた大天狗の憂鬱 ―― 488
魔法使いたちの津々浦々 ―― 498
閑話　とある出家人のけじめ ―― 509
臨む会談と望まぬ来訪 ―― 518
二代に亘る仕打ち ―― 526
目的地：ミッドウェー・パールアンドハーミーズ ―― 535
現場に出向いてきた国家元首 ―― 543
怒りの説教（肉体言語込み） ―― 552
シリウスの代替わり ―― 561
新たな英雄の旅立ち ―― 569
普通の概念の行方 ―― 578
フルスロットル ―― 586
面倒事の前では戦略級魔法ですら無力 ―― 594
飛び交う梅の花びら ―― 603
リスクヘッジの極致 ―― 611
襲撃そのものが既定路線 ―― 619
仙人ですら葬りかねない存在 ―― 628
問題の帰結 ―― 636
気苦労の永久機関 ―― 644
戦っている領域のズレ ―― 652
埒外を常識の世界に持ち込むと、無双になる ―― 659
世界への波及 ―― 670
当主となった家族の会話 ―― 678

後片付けの為の案件 ―― 687
外よりも複雑な内側の案件 ―― 646
電光石火の如く ―― 704
高校最後の九校戦準備 ―― 713
懇親会の挨拶回り ―― 722
高校最後の九校戦① ―― 730
高校最後の九校戦② ―― 739
高校最後の九校戦③ ―― 748
高校最後の九校戦④ ―― 756
高校最後の九校戦⑤ ―― 765
高校最後の九校戦⑥ ―― 776
高校最後の九校戦⑦ ―― 785
全てにケジメを ―― 793
働きに出すだけでも大変なこと ―― 801
九島家絡みの交渉事 ―― 811
未定の未来 ―― 820
遠近の将来設計 ―― 828
セキュリティで血反吐を吐く始末 ―― 838
違う、そうじゃない ―― 847
道のりは遥か先に ―― 856
運命が盛大に捻じ曲がった兄妹 ―― 865
触れ得ざる者としての未来 ―― 874

人物設定①

三矢　悠元（みつや　ゆうと：入学編～九校戦編）
→神楽坂　悠元（かぐらざか　ゆうと：夏休み編＋1～）
本作の主人公。前世は大学生だった。誕生日は2月14日。
年齢は7歳（転生時）→12歳（追憶編）→15歳（入学編）→16歳（春休み編）→17歳（師族会議編）。

〈当人の経歴〉

前世はカリスマじみた風格を持つ兄（後に従兄と判明する）と天才的な頭脳を持つ妹（従妹）の狭間におり、人一倍大人たちや同年代の人間による名誉やプライドで苦しんだことにより、名誉よりも実益を重んじるようになった。

行動の基本スタンスは『まず敵の心を完全に挫く、排除は最終手段』。前世の恋愛経験不足と転生した先の人物の事情が皮肉にも重なり、他人に対する恋愛感情が欠落していた。

元と剛三からの頼みで沖縄に行く事となった際、原作の中核人物である達也や深雪、彼らの母親である深夜、深夜のガーディアンである穂波と知り合う。

転生後に剛三を介する形で国内外を旅し、無自覚ながら様々な絆や因縁を抱えることになる。転生後から中学1年までは北海道で過ごし、中学2年から三矢家の実家で暮らすようになった。

料理作りと菓子作りに関しては無自覚の天才。「女性限定の戦略級魔法師」と言われることも。なお、本人は独学に加えて三矢家の使用人をしている矢車家の人間に教わっただけで、「普通」の出来であると言って否定している。九校戦において、父親から諭されて客観的な自己評価だけでなく、自身の恋愛感情を改めることになる。

〈家系〉

日本の魔法師社会を牽引する十師族・三矢家の三男。高校入学までは安全上の理由で「長野佑都（ながのゆうと）」という名で元や剛三の親族という体を演じてきた。高校入学からは三矢の名字を名乗るが、九校戦後に訪れた神楽坂家で次期当主の話を了承して神楽坂の姓を名乗る。その後、

２０９７年元旦を以て第１０８代神楽坂家当主に就任する。顧傑の事件が解決後、十師族体制の再編に伴い史上最年少で師族会議議長に選出される。

〈軍属関連〉

父親の誼から国防陸軍兵器開発部の特別技術顧問に「上条達三（かみじょうたつみ）」という名で所属している。未成年という観点から緊急時の出動であっても大幅な制限が掛けられており、統合幕僚会議による協力要請が無ければ戦線に出ることはない。

沖縄防衛戦の後、国防陸軍第１０１旅団に新設した独立魔装大隊に転属となり、諸外国からは［殲滅の奇術師（ティーターニア）］の異名で恐れられる存在となる。沖縄防衛戦後に特務大佐（独立魔装大隊内では技術士官としての所属）、横浜事変後に特務少将兼第１０１旅団特務参謀、周公瑾の処刑後に特務中将兼国防陸軍総司令官直属特務参謀へ異例の出世となる。

悠元が主導して設計した空母「ずいかく」「ずいほう」の所属を解決するべく、国防海軍特務大将と国防空軍特務少将に就任し、内閣総理大臣と防衛大臣以外では異例となる国防三軍の将官となる。

その後、魔法師としては異例の統合軍令部所属将校となり、独立魔装大隊を指揮下に持った第十三首都防衛旅団の旅団長兼三軍の大将職に就く。なお、本人としては『便宜として利用することはあっても、軍を牛耳る気はない』と断言している。

〈魔工技師関連〉

四葉家との関わりからＦＬＴ専属の魔工技師として働くことになる（法律の関係上「上条洸人（かみじょうひろと）」という別人に仕立て上げている）。その縁で謎の天才魔工技師「トーラス・シルバー」のハードウェア設計・改善要求担当を担うことになる。トーラス・シルバーの責任者である牛山ですらも尊敬せずにはいられないほど技術面での評価は高く、世界屈指のハードウェア設計者としての実績を重ねていく。

ディオーネー計画によってトーラス・シルバーは解散したが、これまで開発してきたＣＡＤのサポートは当面継続する。

〈魔法技術関連〉

魔法知覚力による先天的な異常聴覚を有するが、現在はそれを自在に制御できる術を確立している。母方の祖父である上泉剛三（かみいずみごうぞう）との関わりであらゆる経験を積み、想子（サイオン）のみならず霊子（プシオン）の完全制御へ至る鍛錬法を確立。現代魔法では難しいとされる複数のＣＡＤ（Ｃａｓｔｉｎｇ　Ａｓｓｉｓｔａｎｔ　Ｄｅｖｉｃｅ、術式補助演算機の略称）同時操作・魔法並列行使技術［ライトニング・オーダー］［サテライト・キャスト］を会得した。得意系統（一番よく使う系統）は振動系統全般。

転生特典による偶然の連発で、魔法式および魔法を認識した上でその魔法の起動式を書き出すという世界でただ一人にしか出来ない芸当の持ち主へとなってしまう。上泉家に伝わる神霊魔法［天神魔法（てんじんまほう）］を会得し、最大の秘術である［天照（アマテラス）］の正式な単独発動という天神魔法初代伝承者・安倍晴明（あべのせいめい）以来の偉業を成し遂げた。

〈武術関連〉

たった５年で２０年以上掛かるとされる新陰流剣武術師範代の印可を受けている（総師範の剛三からは印可を渡した時点で師範相当の実力を有すると認められている）。剛三曰く、新陰流の全奥義皆伝〝九葉（くすは）〟に最も近い人間の一人と目される。魔法科高校２年に進学時、総師範にしたがっていた剛三への妥協案という形で新陰流剣武術師範の印可を受けることになる。神楽坂家に戸籍を移した後、鹿島新當流の流れを汲む伊勢神道流（いせしんとうりゅう）の印可を受ける。僅か十代で師範クラスの実力は贔屓目ではなく、上泉剛三自ら鍛え上げた結果として身に付いたもので、剛三曰く「約定が無ければ、素直に新陰流剣武術の総師範の座を譲りたかった」とのこと。

○学年

１年Ａ組（入学編～）

↓２年Ａ組（ダブルセブン編～）

↓３年Ａ組（激動の時代・孤立編～）

○所属

生徒会会計（２０９５年４月～９月）

生徒会副会長（２０９５年１０月～２０９６年３月）

部活連副会頭（２０９６年４月～９月）
部活連会頭（２０９６年１０月～２０９７年９月）
軽運動部（武術鍛錬の関係で所属、体裁のため部長となっている）
○使用武装
フォース・シルバー・カスタム
「ワルキューレ」「オーディン」「ヴァルファーレ」
「セラフィム」「ラグナロク」
携帯端末形状汎用型ＣＡＤ
武装一体型ＣＡＤ
ブレスレット形状汎用型ＣＡＤ
天刃霊装［叢雲］
七聖抜刀［天叢雲（アメノムラクモ）］
神霊甲縛式・天魔抜刀［天都御魂叢雲（アマツミタマノムラクモ）］
○魔法
〈固有魔法〉
系統外・概念干渉魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］
概念分解魔法［天界爆裂（アカシック・ノヴァ）］
情報干渉魔法［八咫鏡（ヤタノカガミ）］
遠隔座標固定魔法［鏡の扉（ミラーゲート）］
系統外・精神構造干渉魔法［領域強化（リインフォース）］
〈現代魔法〉
有機物干渉魔法［癒しの風（フローラル・ウィンド）］［夢世界（ドリーム・ワールド）］
無系統魔法［術式解体（グラム・デモリッション）］［術式解散（グラム・ディスパージョン）］
［音響術式解体（サラウンド・グラム・デモリッション）］
構造硬化魔法［相転移装甲（フェイズシフト）］
光波空間収束魔法［流星群（ミーティア・ライン）］
大気操作魔法［オゾンバレット］
想子構造情報投射魔法［仮装行列（パレード）］［月影行列（ムーンエスケープ）］
［幻影夜行（ナイトメア・ファントム）］
物理構造情報分解魔法［トライデント］［雲消霧散（ミスト・ディスパージョン）］
系統外・精神構造分解魔法［霊魂霧散（スピリット・ディスパージョン）］

系統外・原子凍結分解魔法［極凍雲散霧消（フリーズミスト・ディスパージョン）］
系統外・情報読込保存魔法［記憶時計（メモリー・クロック）］

〈古式魔法〉

天神魔法［金鎖破鎚］［共鳴裂界］［夢現］
［天龍水鏡］［流水波紋］
［水遁流転］［結氷凍界］
［雷電］［迅雷電散］
［千鳥］［極星霊座］
陽・極式［天照（天照絢爛（てんしょうけんらん）／天陽照覧（てんようしょうらん））］
陰・極式［月読（月影観鸞（げつえいかんらん）／（月牙総濫（げつがそうらん））］
陰陽・極式合一［夢想天成］

喚起魔法［竜神］
天神喚起［天雷神龍］［霊亀］［鳳凰］［麒麟］
［白虎］［応竜］
天仙結界［影仙陣］［八卦遁甲］［白牢陣（はくろうじん）］
［金剛陣］
剣聖奥義［鳳凰烈破］［霊亀烈破］［麒麟招来］
武闘奥義［青龍嵐脚］［白虎雷神掌］［朱雀天翔］
陰陽結界［聖天八極護法式陣］

〈複合術式〉

反復加速移動魔法［表蓮華］
対大型構造物落下打撃魔法［裏蓮華］
電磁加速走行術式［ブリッツ・ロード］
事象改変干渉魔法［円卓の剣（ラウンド・ブレード）（グラム・バニッシュ）（術式終息）］
多重対抗障壁魔法［ファランクス］
水上・水中干渉走行術式［水中遊泳（アクア・ドルフィン）］
複合干渉系振動魔法［サラウンド・エアーマイン］
大気収束魔法［エアライド・バースト］
振動エネルギー収束砲撃魔法［フォノンティアーズ］
熱量変化領域魔法［超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）］
燃焼分解魔法［爆裂雲散霧消（バスター・ミスト・ディスパージョン）］

構造分子崩壊魔法［ホーリー・トライデント］
零加速複合障壁魔法［ミラーフォース］
魔法構造貫通魔法［死翔（ゲイ・ボルグ）の槍］
疑似瞬間移動魔法［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］
術式解体魔法［烈風月輪（サイクロン・チャクラム）］
古式複合・光波振動収束魔法［流星裂界（ミーティア・ディバイド）］
古式複合・光速素粒子領域魔法［天壌流星群（ミーティアライト・フォール）］
古代複合・精神構造情報干渉魔法［陽光疾走（サンライズ・オーバードライブ）］

〈戦略級魔法〉

光波振動収束分解魔法［天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）］
超光速素粒子収束魔法［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］
亜光速対消滅粒子収束魔法［太極八卦陣（コスモ・ノヴァ）］
相転移昇華広域魔法［天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）］
エネルギー質量分解魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］
高圧縮雷撃収束魔法［霹靂瞬光（ライトニング・ディザスター）］
超高圧雷撃広域魔法［雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）］
超加速電磁攻撃魔法［ヘビィ・メタル・バースト］
高濃度分子爆撃魔法［トゥマーン・ボンバ］
超長距離分子収束砲撃魔法［天極劫火（オメガ・フレア）］
大気操作魔法［オゾンサークル］
第四態相互高速移動魔法［シンクロライナー・フュージョン］
大規模質量体移動魔法［ミーティアライト・フォール］
事象概念破壊魔法［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］
情報粒子干渉魔法［流星雪景色（ミーティア・スノーライト）］

〈魔法行使技能〉

同一魔法連続発動：［ループ・キャスト］
多種類多重魔法連続発動：［ＦＡＥ（フリー・アフター・エグゼキューション）理論］
［ＰＦＥ（サイオン・フリー・エグゼキューション）理論］
魔法式複製：［チェイン・キャスト］［スキャニング・キャスト］

［リンケージ・キャスト］

多種類多重魔法同時行使：［ライトニング・オーダー］［サテライト・キャスト］

〈特殊技能〉

［天神の眼（オシリス・サイト）］

［複製（コピー）］

［創造大全（マテリアル・インデックス）］

○備考

転生者

十師族・三矢家三男（～２０９５年８月）

護人・神楽坂家

次期当主兼当主代行（２０９５年８月～２０９６年１２月）

当主（第１０８代目、２０９７年１月～）

師族会議・十師族議長（２０９７年３月～）

新陰流剣武術

師範代（２０９２年８月～２０９６年４月）

師範（２０９６年４月～）

第一高校・２０９５年度新入生総代

皇宮警察特務隊［神将会］

第一席・総長（２０９５年８月～）

元老院

四大老（２０９７年４月～）

国防陸軍（上条達三名義）

兵器開発部特務士官（中尉相当官：～２０９２年８月）

第１０１旅団特務少将兼特務参謀（２０９５年８月～２０９６年１２月）

総司令部直属特務中将兼特務参謀（２０９７年１月～４月）

独立魔装大隊特別技術顧問

（所属：２０９２年８月～２０９６年１２月、出向：２０９７年１月～）

国家非公認戦略級魔法師（２０９２年８月～）

総司令部直属特務大将（２０９７年４月～）
国防空軍（同上）
特務少将（２０９６年４月～２０９７年２月）
特務大将（２０９７年２月～）
国防海軍（同上）
特務少将（２０９６年４月～）
特務大将（２０９７年５月～）
統合軍令部（同上）
統合軍令部軍務顧問（２０９７年４月～）
ＦＬＴ（上条洸人名義）
ＣＡＤ開発第三課勤務（２０９２年８月～）
神坂グループ（神坂佑都名義）
トライローズ・エレクトロニクス理事長（２０９７年５月～）

人物設定②（十師族）

〈十師族〉

〈十師族・三矢家〉

魔法技能師開発第三研究所で開発された魔法師の一族で、十師族に選ばれる資格を持つ二十八家の一つ。神奈川県厚木市に本拠を持つ。他の十師族とは異なり、監視する地域を持たない代わりに魔法技術の開発や発展に余念がなく、そのノウハウを国防軍に提供している。

２０９７年２月に行われた師族会議の体制改革により、七草家に代わって関東地方の守護・監視を担うこととなる。

屋敷は第三研から車で１０分少々の距離にあり、最新式の魔法訓練設備を備えている。訓練器具の充実ぶりは魔法科高校にも劣らない。

現当主は三矢元。

三矢　元（みつや　げん）

三矢家現当主。年齢は５１歳（入学編）。

表（向きとは言えないが）の職業は国際的な小型兵器ブローカー。悠元の影響で国防軍をお得意様とする軍需企業のオーナーとしての肩書きを得る。

悠元に起こった異変を訝しむが、彼に只ならぬ才能の片鱗を感じて好きにやらせている。九校戦編開始の時点で悠元（中身に該当する魂）が転生者だと知っている唯一の人物。悠元に対して恋愛感情を優しく諭す。

最近は子ども達に触発されて魔法の訓練を再開する。妻とは幼馴染同士の恋愛結婚（本人曰く『恥ずかしくて黒歴史』）。義父との繋がりで四葉家の人間とも面識を持っている。

三矢家の本質である『与える者』として奮闘する。

三矢　詩歩（みつや　しほ）

三矢家現当主夫人。年齢は４６歳（入学編）だが、外見は一回り以上若い。

旧姓は上泉詩歩で、元と恋愛結婚して沢山の子に恵まれる。十師族として奔走する夫を陰ながら支えている。最近の悩みは娘たちの嫁

入りと孫の顔が見たいこと。ファッションやアパレル業界などといった非魔法分野の個人的なコネクションを有している。

三矢　元治（みつや　もとはる）

三矢家長男。年齢は２２歳（追憶編）→２５歳（入学編）。

父である元の跡を継ぐために当主と家業勉強の毎日。魔法の才覚が突出した弟や妹たちをどこか羨ましく思っている。沖縄の一件ののち、そこで知り合った穂波と婚約、翌年に結婚した。

下の弟や妹と比較すれば劣ってしまうが、同年代の十師族の魔法師としては優秀なレベル。三矢家お得意の「スピードローダー」を使いこなすほどの器用さや瞬発的な判断力を持っている。悠元の影響を比較的受けていない人間の一人。

三矢　詩鶴（みつや　しづる）

三矢家長女。年齢は１８歳（追憶編）→２０歳（入学編）→２２歳（激動の時代・孤立編）。誕生日は５月５日。

母に一番よく似た容姿で、怒る表情を見た者はいない。笑顔を浮かべながら怒るタイプ。

元継とは対称的に近距離は「護身術程度（とは言ってるが、剛三を木刀で黙らせる程度の実力はある）」だが、中・遠距離では他を寄せ付けぬほどの強さを誇る。

悠元がプレゼントした自身専用のロングボウタイプ汎用型ＣＡＤを所持し、実践したことはないが対人狙撃なら１０キロメートル以上は可能のレベル。１キロ以内なら百発百中で命中させられる。

得意系統は［スピードローダー］を併用した加速・移動・収束・発散系統の複合術式［一極徹甲狙撃（ディフェンス・ブレイカー）］。

入学編の時点で新陰流師範の免許皆伝を受ける。一高在籍時代、生徒会長選挙で重傷者を出すほどの暴動が発生。その流れで生徒会長に立候補・当選して就任することになる（詩鶴は新入生総代だったが、立候補に前向きだった子に譲っていた）。その際、親友の津久葉夕歌に生徒会副会長を頼み込んだ。

入学編開始時点で国立魔法大学３年生。大学卒業後は矢車家長男と結婚した。

三矢　佳奈（みつや　かな）
三矢家次女。年齢は１７歳（追憶編）→１９歳（入学編）→２１歳（激動の時代・孤立編）。誕生日は２月２９日。
先天的な異常視覚として強力な『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』を有しており、その影響で糸目となっている。更に彼女の魔法演算領域も特殊で、単一工程の魔法発動が複合術式よりも遅くなる（なので、態と複数系統の術式を組み込むことが多い）。得意系統は自身の見つけた加重系統基本コードをベースにした重力操作魔法。
普段は物静かなほうだが、興味のあることだと途端に饒舌となる。三矢家のヒエラルキーで母に次ぐ強さを持つ（本人曰く『それでも悠元には勝てない』）。
極度なまでのデバイスオタクで、分解したデバイスの数は５桁を超える（それらはちゃんと元に戻している）。悠元から貰った汎用型ＣＡＤを普段から愛用している（特化型ＣＡＤは彼女の持つ魔法特性上まともに使用できないため）。
「ライトニング・オーダー」や『円卓の剣（ラウンド・ブレード）』などといった技術や魔法など、悠元の影響を一番強く受けている。三矢家にあるＣＡＤ調整機は彼女による（魔）改造で、悠元曰く『世界でもこんなハイエンドの調整機はないだろう』と言わしめたほど。
一高在籍時代は新入生勧誘週間に生徒会役員であるにもかかわらず執拗な勧誘を受けたため、有象無象纏めて鎮圧。姉の詩鶴が生徒会長になる切っ掛けとなった生徒会長選挙で暴動者全員を鎮圧した張本人。
２年生の後半に生徒会長選挙へ立候補し、自身の『眼』を使ってまでも観衆を黙らせた。同時期、風紀委員長に就任した妹のトラブル解決に関して黙認していたが、校長の横槍に介入。祖父である剛三に同行してもらって妹の退学を取り消させた。
入学編開始時点で国立魔法大学２年生。新陰流剣武術師範代の印可を受けている。達也の婚約者となる。
三矢　美嘉（みつや　みか）
三矢家三女。年齢は１６歳（追憶編）→１８歳（入学編）→２０歳

（激動の時代・孤立編）。誕生日は１２月２４日。
佳奈のような『眼』は持たないが、異常な魔法知覚力による異常視覚を有している。加えて、本来の視界で知覚できない隠蔽術式や認識阻害といった干渉系統・対抗魔法を無効化する体質。
彼女に魔法を発動されたらその魔法に対処するしか現状における現実的な対抗手段がない（悠元がキャスト・サイレントや［円卓の剣］を生み出したのは彼女の存在あってこそで、それらの魔法か［術式解散（グラム・ディスパージョン）］で何とか無効化できる）。
得意系統は光波振動系を主体とした複合術式。体質云々を抜きにしても［ライトニング・オーダー］を使いこなせるだけの実力を有する。佳奈に次いで悠元の影響を強く受けている。容姿は同年代の平均以上だが、胸の大きさが三矢家の姉妹で下のほう。詩奈に姉のような兆候があることに若干コンプレックスを持っている。
人前で努力する姿を決して見せることはなく、隠れて努力を積み重ねるタイプ（家族のほとんどはそのことを知っている）。気に入った人なら遠慮なく本音で喋るタイプであり、公的な場でない所では遠慮なく彼女の基準でつけられた呼び名を使う。真由美との初対面では彼女の猫被りを第一印象で見抜き、家が同じ十師族かつ第三研の誼から何かと交友がある。
一高在籍時代は生徒会の勧誘を断って風紀委員会に入り、新入生勧誘週間では検挙・鎮圧率１００パーセントを記録。風紀委員長に就任してからは九校戦のエンジニアに絡んだトラブル解決のために当時の全一科生の約６割、全二科生の約１割を鉄拳制裁で鎮圧。
その件で校長に呼び出されるも、何も期待できない学校に言われる筋合いはないと言いのけて一時期退学になる可能性もあった（その時は三高に転校でもしようかと目論んでいた）が、姉のお蔭で立ち消えとなった。
２年生の後半に風紀委員長から生徒会長になるという前代未聞の大転身を見せる。ぶっ飛んだ発言を見せることもあったが、それでも二科生からはかなり好意的に見られていた。風紀委員会と生徒会の引き継ぎの書類もしっかりと作っており、人任せにすることがないこ

とから無駄に責任感が強いとも言われている。
入学編開始時点で国立魔法大学1年生。新陰流剣武術師範代の印可を受けている。十師族選定会議によるテロ事件が鎮静後、十文字克人と婚約した。

三矢　詩奈（みつや　しいな）

三矢家四女で末っ子。年齢は１１歳（追憶編）→１３歳（入学編）→１５歳（激動の時代・孤立編）。

生まれながらの異常聴覚（先天的な聴覚強化魔法）のため、聴覚をコントロールするイヤーマフを常時身に着けている。新陰流剣武術は習っていないが第三研での戦闘訓練だけは受けている。

歳の近い悠元を始めとした六人の兄と姉たちから可愛がられていて、原作の深雪レベルのブラコンを拗らせている模様（年々酷くなっているため、対策を講じても『暖簾に腕押し』状態になりつつある）。

誕生日が二日違いの侍郎のことは〝仲の良い弟〟のレベルだったが、少しずつ改善されている模様。好きなタイプは『お兄様のような人』。悠元が詩奈に魔法関連をあまり教えないのは「教えたら自分への依存癖が更に悪化しかねない」という危惧からくるもの。悠元からプレゼントされたイヤーマフ型ＣＡＤを愛用している。

三矢家の仕来りによって、入学編開始時点で『長野椎菜（ながのしいな）』と名乗っている。九校戦前あたりから新陰流剣武術を習い始めた。

矢車　侍郎（やぐるま　さぶろう）

三矢家に使用人として仕える矢車家の末っ子。年齢は１１歳（追憶編）→１３歳（入学編）。

念動力者。魔法演算領域の一部が直接制御型の移動系魔法により占有されているため、他の魔法を自由に使うことができなかったが、悠元の『領域強化』によってその制約が外れる形となる。加えて悠元からの紹介で元継が彼に新陰流剣武術の稽古をつけている。夏休み編時点で中伝の目録を修めている。

詩奈が悠元に懐いていることを羨ましく思いつつも嫉妬しているような複雑な感情を向けている。それでも、悠元の実力は並外れているものである、と認めている。

悠元が司波家での居候生活を始めてからは大分改善され、新陰流剣武術を習い始めた詩奈に負けないよう一層努力するようになった。異性に対しての免疫は少し弱く、侍郎を意識し始めた詩奈にやきもちを焼かれるようになりつつある。

ラウラ・カーティス→三矢　ラウラ（みつや　らうら）

三矢家の養子として入った五女。年齢は１５歳（南海騒擾編）。

ＵＳＮＡの政界の重鎮であるカーティス上院議員を大叔父に持つ。沖縄防衛戦の最中に渡航中、［マテリアル・バースト］によって発生した津波に攫われて、石垣島に流れ着く。そこに居合わせた舞元によって面倒を見てもらっていた。

石垣島を訪れた悠元によって記憶を取り戻し、その直後に発生した西果新島のテロ事件がきっかけで千葉寿和に惚れこみ、三矢家が仲介する形で千葉家へ嫁ぐこととなった。

伊庭　アリサ（いば　ありさ）→三矢　アリサ（みつや　ありさ）

三矢家の養子として入った六女。年齢は１３歳（四葉継承編）。

十文字和樹とダリヤ・アンドレエヴナ・イヴァノヴァの間に生まれた子で、十文字家の隠し子。母親の葬式で悠元と出会い、彼と実質的に義理の家族の関係となる。その時から恋慕の気持ちを忘れず、千姫からの婚約者の提案を迷わずに受け入れた。

居候していた遠上家（後の十神家）にいる茉莉花とは同い年で、悠元のことになると恋のライバル同士として争う姿勢を見せることも。悠元の特殊性によって諍いを持つことなく良き友人関係を築けている。

十文字家の固有技能を有していたが、悠元の魔法によって大幅に改善され、並行魔法演算技能［ブーストローダー］と多重対抗障壁［エアリアル・ファランクス］を獲得している。

〈十師族・四葉家〉

魔法技能師開発第四研究所を出自とする家系で、十師族に選ばれる資格を持つ二十八家の一つ。２０９５年４月時点では、十師族の中では三矢家、七草家と並び最有力とされている一族で、主導的地位を争

う地位にある。２０９２年８月に発生した沖縄防衛戦後に三矢家との関係模索を行い、上泉家の仲介によって水面下での協力関係を結ぶことになる。

特異的な魔法師を生み出す一族として知られている。四葉の本家と一部の分家は神楽坂家の血筋を引いているが、天神魔法は継承されていない。２０９５年３月に開かれた臨時師族会議により、正式に中部・東海地方を監視・守護している。現当主は四葉真夜。

四葉　真夜（よつば　まや）

四葉家現当主、深夜とは双子の姉妹にあたる。当代における世界最強の魔法師として目される。過去に起きた事件の影響で子を産めなくなってしまい、姉である深夜と半ば喧嘩別れのような状態になっていた。

それでも深夜に対してガーディアンを派遣したりするなど、それなりに気にかけていたことは事実。沖縄防衛戦後、剛三の手紙によって元造が深夜に頼んでいたことに加え、その責は元造自身にあるという内容を知り、深夜との関係を修復する一歩となった。

姉妹間の関係修復のきっかけを作った悠元に対して興味を持ち、彼の非凡さから達也と対等に並び立てる存在ではないかと考えている。

深夜が若返ったことにショックを受け、当主になってからあまりやらなくなった魔法の本格的な訓練を再開。その理由が『深夜よりも若返ってやる』という個人的感情だということは、本人以外では筆頭執事の葉山しか知らない秘密。

沖縄での一件後、悠元を自身の養子として迎え入れたいという話をして、深夜と年甲斐もない取っ組み合いになりかけたが、葉山のフォローで事なきを得た。

深夜ほどではないが、悠元に対して異性を見るような感情を見え隠れさせることが多い。四葉家の慶春会に際して自らを引き換えとして深雪や夕歌、水波との婚約を認めたり、達也が当主として継いだ際は悠元の専属使用人兼愛人として転がり込むことを公言している。

葉山　忠教（はやま　ただのり）

四葉家の執事長（筆頭執事）。四葉家先代当主（四葉英作（よつばえいさく））から仕え

ており、四葉家中の重鎮である。八人いる四葉家執事の中で唯一当主のプライベートに踏み込むことを許されている執事（バトラー）でもある。
　達也のことを軽んじておらず、魔法師として高く評価している。同時に警戒すべき魔法師として見ている節がある。悠元のことを「達也と並びたてる実力の魔法師」として評価しており、達也と悠元が良き友人になれるのではという真夜の言葉を肯定した。
　達也曰く「深雪よりも美味しいコーヒーを淹れる二人のうちの一人」とのこと（もう一人は悠元であるが、達也は隠している）。
　国家の枢密に立つ［元老院］のエージェントであり、千姫の弟子にして剛三に仕える人間の一人。彼の目下の悩みは、次期当主である達也に相応しい次代の執事長を託す相手の選定。

〈司波家〉

　司波　達也（しば　たつや）
　原作主人公。学年は1年E組（入学編）→2年E組（ダブルセブン編）。
　年齢は15歳（入学編開始時点）→16歳（九校戦編）。
　沖縄での一件で悠元と知り合う。彼のことを「不思議な奴」と述べるも、その実力を正当に評価しているとともに、彼に対して負けず嫌いな面を見せるようになる。九重寺での鍛錬に励んでいるのは彼への対抗心があると深雪が述べるほど。
　自身が使える［分解］と［再成］を悠元も使えると知っている数少ない人間の一人。また、裏の「ミスター・トーラス」を知る人物でもある。自身が使っているシルバー・ホーン・フルカスタマイズモデル「トライデント」「ババハムート」は悠元の設計によるもの。
　沖縄防衛戦後、戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］を制限する意味で精神干渉系魔法［誓約（オース）］を掛けられている。その解除は深雪が担う形である。十文字克人との会談前に全ての制限が外されたものの、力の振るい方に関しては悠元へ相談を仰ぐことで制御している形となった。
　深雪への甘さから周囲からはシスコンと揶揄されることがある（そこまで甘くないと否定はしている）。自身に対する恋愛感情は極めて希薄だが他人の恋愛感情に対しては極めて鋭く、妹の恋慕を知識だけ

でありながら見抜いていた。悠元なら深雪を託すに相応しいと思っている節があり、時折彼に深雪の対応を丸投げするようになった。

四十九院家のトラブルに巻き込まれた折、２丁銃の天刃霊装『交差する機械仕掛けの運命（クロス・エクセリオン）』を発現する。天魔抜刀形態は『トライデント・エクセリオン』。

パラサイト事件の折、達也自身と似たような境遇に置かれているリーナと知り合い、彼女に恋慕のよう感情を見せることになる。四葉家慶春会の直前、真夜から四葉真夜の実子であることが明かされ、四葉家次期当主としての指名を受ける。

司波　深雪（しば　みゆき）

原作ヒロイン。学年は１年Ａ組（入学編）→２年Ａ組（ダブルセブン編）。年齢は１５歳（入学編）→１６歳（ダブルセブン編）。

沖縄での一件で悠元と知り合う。彼との関わりで達也だけでなく、母である深夜や知り合いである穂波にも影響を与え、彼女もその影響を強く受けた一人。

悠元に対して達也と同じレベルの敬愛を見せつつも、どこか恋愛感情のようなものを見え隠れさせている。本人は恋愛感情ではないと言い張っているが、悠元からの言葉に動揺したり頬を赤らめたりすることが多い。

沖縄防衛戦後、達也に掛けられた［誓約］の影響で、自分の魔法を制御しきれずに暴走させてしまうようになる。

周囲（主に雫）の変化に触発される形だが、九校戦前の練習期間を境として悠元に対する感情を見つめ直すことになった。ただ、本人の恋愛観が偏っている（家族における恋愛事情が歪過ぎる）というのもあって、常識では考えられないような思考に行き着くことも。

九校戦編で悠元に対する恋愛感情を自覚し、千姫の提案を受ける形で神楽坂家次期当主の婚約序列第一位に選ばれる。神将会第六席に選ばれ、総長となる悠元の補佐を担うこととなる。

四葉家の慶春会において、悠元が問い質した四葉分家の罪と引き換えにする形で嫁ぐことになった（達也曰く『もはや茶番』）。

天刃霊装は２連装マグナムを内蔵した二刀流の小太刀『宵時雨（よ

いしぐれ）』。天魔抜刀形態は『江雪佐文字時雨（こうせつさもんじしぐれ）』。

司波　深夜（しば　みや）

達也と深雪の母親。沖縄での一件で悠元と知り合い、彼から『領域強化』を受けることによって病気も完治。更に、剛三の手紙によって妹である真夜との関係も修復傾向に転じた。沖縄防衛戦後、達也を四葉のガーディアンではなく自分の息子として扱いつつも、戦略級魔法の無秩序的使用を避けるために『誓約』を掛けた。

悠元のことがいたく気に入ったようで、将来は深雪の婿に迎えようとあれこれ手を尽くしていて、ＦＬＴの株主提案はその一環。尤も、あわよくば愛人的なポジションでそのお零れを貰おうとしている、と双子の妹である真夜は推察している。

魔法師としての能力は［領域強化］によって全盛期以上のものに強化される形となった（その影響で外見が２０代半ばにまで若返った）が、悠元の非凡さを鑑みて伊豆の別荘で療養という名の隠居生活を送るようになる。彼女のガーディアンをしていた穂波の後任者は既に彼女の世話役として付いている。

パラサイト事件で神楽坂本家に保護され、そのままの流れで当主の使用人兼愛人として働くこととなる。

桜井　穂波（さくらい　ほなみ）

深夜のガーディアン。沖縄での一件で元治と知り合う。彼が恩納空軍基地でアンティナイトを持った兵士を気絶させ、それが結果的に深夜を救ったことによって、ガーディアンである自分に対しての不甲斐無さと彼に対する興味を抱く形となった。自身を調整体だと明かしたにも拘らず、元治からの告白を受けた。

その後、悠元の『領域強化』によって調整体本来の問題をクリアしたため、剛三経由で渡辺家の養女となって元治に嫁いだ。元治とは三矢本家で仲睦まじく暮らしている模様（婚約や結婚のことは四葉家経由で達也と深雪にも知らされている）。元治の母である詩歩からは孫の顔が見たいとせがまれている。

司波　龍郎（しば　たつろう）

達也と深雪の父親。フォア・リーブス・テクノロジーの開発本部長をしている。椎原辰郎（しいばらたつろう）というビジネスネームを使用している。　深夜とは２０９４年に離婚が成立し、達也と深雪の親権自体は深夜が握る形となる。その半年後に愛人であった古葉小百合と再婚している。

〈十師族・五輪家〉

魔法技能師開発第五研究所で開発された魔法師の一族で、十師族に選ばれる資格を持つ二十八家の一つ。十師族の一角を占めているが、その地位は五輪澪という戦略級魔法師を抱えている事実に支えられている側面が強い。四国地方を監視・守護している。現当主は五輪勇海。

五輪　澪（いつわ　みお）

五輪家長女で、日本が公表している唯一の戦略級魔法師で「十三使徒」の一人。

年齢は２３歳（追憶編）→２５歳（入学編）。

身長約１５３ｃｍで少女のような容姿。肉体面はかなり虚弱。２０歳を過ぎた頃から体力の消耗を抑える為、動力付の車椅子を常用している。悠元の治療によって肉体面が改善されて健常者と変わりなくなるが、悠元の功績を隠す意味で車椅子はそのまま使っている。

悠元が見舞いの土産ということで持参してくる手作りの菓子や料理の被害をかなり受けており、彼に対して対抗心と嫉妬と恋愛感情が複雑に入り乱れた表情を見せることが多い（雫や姫梨からは明らかな恋慕であると見抜かれている）。

横浜事変後に示威行為も含めての海軍出兵に同行し、五輪本家に出戻る形となっていたが、２０９７年に東京への召喚命令を受け、そのまま悠元の婚約者として立候補した。

〈十師族・六塚家〉

魔法技能師開発第六研究所で開発された魔法師の一族で、十師族に選ばれる資格を持つ二十八家の一つ。熱を操る魔法師の家系である。東北地方を監視、守護している。

六塚　燈也（むつづか　とうや）

六塚家長男。年齢は１５歳（入学編）で、誕生日は１０月８日。学年は1年Ａ組（入学編）→2年Ｅ組（ダブルセブン編）。

六塚家現当主である六塚温子の遺伝子をベースに生まれた調整体だが、何の因果か普通の人間と同等の寿命を得た。魔法技能師開発第六研究所の実験体として過酷な実験を受けていたことに反発して脱走。その先で温子と出会い、六塚家に養子として迎えられる。第一高校への入学を進めている際にトラブルに巻き込まれ、その際に西城レオンハルトと出会う。

固有魔法である精神干渉系魔法『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』を含めて熱量操作系統に長けているが、その反面他の系統魔法の発動スピードは一流の魔法師の目安とされる３００ｍｓ台のレベルを切る程度（先述の魔法では２００ｍｓを切るレベル）。

遺伝子ベースの影響で男性でありながら女性のような容姿を持ち、男らしさを磨くために体力トレーニングの一環で山岳部に入る。４月のブランシュ襲撃の一件で五十嵐亜実と付き合うようになる。第三高校の吉祥寺真紅郎とは２０９２年の新ソ連による佐渡侵攻で偶発的に知り合い、女性扱いされたことを根に持っている。

パラサイト事件の際に救ったミカエラ・ホンゴウに惚れられ、亜実のこともあってなし崩し的に妻として受け入れる形になった。それを認める意味で温子から正式に六塚家次期当主として指名されることとなる。

七草　泉美（さえぐさ　いずみ）→六塚　泉美（むつづか　いずみ）

七草家三女。年齢は１４歳（入学編）で、香澄とは一卵性双生児の関係にある。

悠元とは香澄と泉美の誕生日パーティーで知り合い、その時に一目惚れした。その後、悠元とは婚約関係を結んでいたのだが、国防軍関係のことで三矢家（上泉家）の逆鱗に触れ、婚約が解消された経緯がある。

父である弘一からは可愛がられているが、先述の経緯もあってか本人は弘一に対して反抗するような態度を見せることがある。真由美の作ったチョコの味見の犠牲者その2で、泉美はそれを「恨みが込め

られたとしか思えないチョコのような何か」と評していた。
『恒星炉』証明実験の後、秘密裏に婚約が復活したことを弘一から知らされるも、喜ぶどころか睨み、最終的には弘一を魔法で気絶させるほどに父親に対する評価が冷え切っていた。
悠元との婚約が確定次第、六塚温子の養女として引き取られることが決まっている。
アンジェリーナ・クドウ・シールズ→六塚　理奈（むつづか　りな）
九島健とジョーリッジ・D・トランプ大統領を祖父に持つシールズ家長女。エクセリアとは双子の姉妹関係にある。
魔法師としての資質はピカ一で、USNA軍魔法師部隊『スターズ』の総隊長に許された〝シリウス〟のコードを受け継ぐものの、年齢や経験故のためにお飾り状態となりながらも［十三使徒］アンジー・シリウスとして活動している最中に達也と出会い、［パラサイト］事件を通して達也に恋慕する。
達也の婚約者募集に際して日本に来たものの、今度は自分に対する裏切りの嫌疑を掛けられる羽目となり、エクセリアに続いて日本人に帰化する意思を固める。六塚家の養子として引き取られる形となる為、燈也や先に養子となった泉美と兄妹・姉妹の関係となる。
魔法以外はポンコツとエクセリアに酷評される始末であり、その都度双子の妹に関節技を掛けられている。
〈十師族・七草家〉
魔法技能師開発第七研究所で開発された魔法師の一族で、十師族に選ばれる資格を持つ二十八家の一つ。元々は魔法技能師開発第三研究所の最終実験体で、三枝（さえぐさ）の名を与えられていたが、魔法技能師開発第七研究所に移管された時に七草になった。
入学編開始時点では十師族の中で三矢家や四葉家と並び最有力とされている一族。十師族の主導的地位を争う地位にある。十文字家と共に伊豆を含む関東を監視、守護している。
不得意とする系統が無いことを以て、逆説的に「万能」と呼ばれたりする。社交的な家柄で子供たちの誕生日パーティも盛大に招待客を呼んで祝っている。現当主は七草弘一。

七草　香澄（さえぐさ　かすみ）
七草家次女。年齢は１４歳（入学編）で、泉美とは一卵性双生児の関係にある。
悠元に対して恋愛感情はないが、本当の兄のように慕っている（泉美の機嫌を損ねたくないという本音も見え隠れしている）。そのため、バレンタインのチョコは市販の義理チョコにしている。姉である真由美の作ったチョコの味見の犠牲者その1でもある。
悠元とは香澄と泉美の誕生日パーティーで知り合い、最初は悠元に対して少し警戒したが、七草家と積極的に誼を結ぼうとしない悠元に疑問を持って関わりを持った。その際に双子の妹から睨まれる事態となり、恋愛感情は持たないと心に決めた。

〈十師族・十文字家〉
魔法技能師開発第十研究所で開発された魔法師の一族で、十師族に選ばれる資格を持つ二十八家の一つ。国家の最終防壁の役割を与えられており、『鉄壁』の二つ名を持つ。
七草家と共に伊豆を含む関東を監視、守護している。現当主は十文字和樹（～師族会議編）、十文字克人（師族会議編～）
十文字　理璃（じゅうもんじ　りり）
年齢は１５歳（ダブルセブン編）。元々の姓は蘇我（そが）で、母が十文字和樹の実妹にあたる。南盾島の事件で両親がスターズに殺され、その経緯を知った十文字家に引き取られた。
十文字家の固有魔法である［ファランクス］を知識が不十分ながらも使いこなし、［オーバークロック］なしでも克人と渡り合えるほどの資質を持つ。軍人の家系に育てられていたので日頃から体を鍛えることに余念がなく、普通の男性でも難しい２００キログラムのバーベルによるトレーニングをこなすスペックを有する。
古都内乱編で九島光宣に一目惚れし、周囲の後押しもあって光宣と付き合うようになる辺りは年相応の女子らしい側面が見られる。慌てると周りが見えなくなってドジを踏んだりすることが多い。なお、被害を食らうのは自分だけで、周りに心配はされても一切迷惑を掛け

ない。

1年生の時点で騒がしいクラスを掌握しており、クラス委員長もとい将来の学校三役筆頭候補として名が挙がっている。

人物設定③（護人・百家・国内外）

〈護人〉

〈護人・上泉家〉

旧群馬県高崎市に本拠を持つ。戦国時代の剣豪上泉信綱を開祖とした家で、数々の剣術の大本となった新陰流（しんかげりゅう）を発展させた新陰流剣武術（しんえいりゅうけんぶじゅつ）を確立。広く門戸を開いており、上段者クラスでは内情（内閣情報管理局）や公安（警察省公安庁）の職員・捜査官、国防軍の将校クラスを輩出している。

先述した部分で剣術家として大成しているが、上泉家そのものは広義的に陰陽道系古式魔法の大家に位置する。その根拠として上泉の血を引くものしか修得が許されない秘術の一つに陰陽道系古式魔法〝天神魔法〟が存在し、表の『天照（アマテラス）』を受け継いでいる。

神楽坂家と並んで『護人』と呼ばれる家系であり、十師族・魔法協会といった魔法師社会、国防軍や警察などの治安組織に対して非常に強い影響力を有している。現当主は上泉剛三（～九校戦編）、上泉元継（九校戦編～）。

上泉　剛三（かみいずみ　ごうぞう）

上泉家現当主（九校戦編まで）にして新陰流剣武術総師範。非公式ではあるが戦略級魔法師の一人。

年齢は入学編開始時点で８７歳、九島烈と同い年だが外見は４０代にしか見えない。

「六爪（ろくそう）」の異名を持ち、現在の十師族現当主達から「尊師」と呼ばれ、諸外国から「雷龍（ライトニング）」の名で恐れられる。世界群発戦争の超法規的鎮圧部隊に参加をしており、新ソ連の日本侵攻をたった一人で食い止めた。

四葉家の大漢復讐戦に元造との親友の誼で参加し、戦略級魔法を使わずに単独で１０００人（非公式記録では１００万人以上）を死に追いやった。その折に魔法演算領域を負傷し、長時間・高出力の魔法展開が極めて難しくなった。

元造から彼の娘たちに託された手紙を封印し、新陰流の為に余生を

過ごそうと決めていたが、悠元に見つけられて叱咤される。悠元の『領域強化』によって戦略級魔法の使用も可能となり、上泉家当主たる姿勢を貫くことを決意。日本の政財界の〝黒幕〟である東道青波を上から目線で語れる数少ない一人。

武術のことを除けば身内に非常に甘く、才溢れる悠元に対して自身の戦略級魔法である『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』を教えようとして門下生総出で止められる事態に発展する。

本人としては上泉家の現当主も新陰流剣武術の総師範も後進に譲りたいが、自身の子が全員娘しかいないため、上泉の血を引く三矢家次男こと元継が自身の孫娘である千里と結婚したことに一番喜び、九校戦の直前に家督を譲っている。

なお、神楽坂家の人間となった悠元に新陰流剣武術総師範を継がせようとしたため、それを知った元継をはじめとした剣武術の門下生全員で止められる羽目になった。

日本のあらゆる分野を支配する『元老院』の四大老の一角を担うが、自らの手を汚そうとしない者には一切容赦せず、基本的に自ら手を下すことを信条とする。四葉家筆頭執事の葉山の派遣主である。

上泉　元継（かみいずみ　もとつぐ）

三矢家次男、上泉家に婿入りして上泉の姓を名乗る。

年齢は１９歳（追憶編）→２２歳（入学編）。誕生日は１２月２５日。

先天的な認識阻害魔法を有し、その影響で狙撃などといった遠距離攻撃は苦手。その反面、近・中距離における魔法の多彩さは群を抜く。本来なら３０年以上掛かる新陰流剣武八奥義免許皆伝を２０歳の時点で認められている（元継本人曰く『弟に良い刺激を受けただけ』）

兄弟の中では現代・古式魔法のみならず、あらゆる魔術の対認識阻害、対隠蔽系統、対障壁魔法に最も秀でている。真っ向から十文字家の秘術『ファランクス』と渡り合える数少ない人物。対遠距離攻撃の為だけに本来習得が難しい知覚系魔法まで会得した埒外の一人。

武術には鋭いが、恋愛に関しては鈍感どころか朴念仁すら超えたレベルで、千里が『最終手段』を用いてやっと気付いたとのこと。その一件で千里とそのまま結婚まで至った経緯がある。

一高在籍時代はクロス・フィールド部に所属し、部活動会頭を務めていた。第二部室は剛三が彼のために作ったものであり、卒業後も入り浸っていたが、克人に譲り渡した。その経緯もあって彼とは親友に近い仲。

入学編開始時点で魔法大学を卒業し、九校戦編直前に上泉家の家督を継ぐ。神将会第二席：副長に座することとなり、総長となる弟の補佐を担うこととなる。

天刃霊装の解放状態は『龍爪（りゅうそう）』、天魔抜刀形態は『大典太光龍宗世（おおてんたこうりゅうそうせい）』。

上泉　千里（かみいずみ　ちさと）

剛三の孫娘。入学編開始時点で防衛大学校・特殊戦技研究科の３年生。

元々それほど魔法力は高くなかったが、悠元との関わりで急激な魔法力の成長を見せて一高では類の無い『二科生から一科生への編入』を成した人物。元継に恋慕していたが、あまりの元継の鈍感さに痺れを切らして、逆夜這いして既成事実を作る事態にまで発展。その結果、元継が大学卒業を機に学生の身分ながら結婚することになった。

新陰流剣武術は無論修めているが、彼女の場合は剣術と忍術に特化した能力であり、体術面は護身程度のもの。魔法の得意系統は放出・発散系統。

〈護人・神楽坂家〉

箱根に本拠地を持つ。陰陽師で名を馳せた賀茂氏と安倍氏の血脈を汲む家柄で、裏の天神魔法『月読』を守り続けている。古くは平安時代より『護人（さきもり）』として朝廷（皇族）の守護を担ってきた。その後に興った上泉家と共に日本を守護する存在として君臨している。

政財界に強い影響力を有し、時の内閣総理大臣ですらも頭を下げねばならない存在。広範囲の情報収集組織と陰陽道から培った天文占術による予知を併せ持つ。

神楽坂の本家に加え、九州地方・太宰府天満宮を守護する宮本家、中国・四国地方：出雲大社を守護する高槻家、近畿地方：伊勢神宮を守護する伊勢家が存在する。現当主は神楽坂千姫（～四葉継承編）、神楽

坂悠元（四葉継承編～）。

神楽坂　千姫（かぐらざか　ちひろ）

神楽坂家現当主（四葉継承編まで）。年齢は九校戦編時点で８４歳だが、外見上は２０歳代前半にしか見えない。剛三とは義兄妹の関係（千姫の姉が剛三の妻）にあたり、四葉家先々代当主の四葉元造とは従姉弟の関係に当たる。

世界群発戦争時、魔法協会による超法規的部隊に参加し、欧州・中央アジア方面で多大なる功績を上げている。彼女の得意属性が闇属性であることから『黒夜の孔雀（アルティミシア）』と諸外国から畏れられる（なお、それを名付けたのはウィリアム・マクロードの父親で、彼はその綽名を付けた腹いせで千姫から半殺しに遭った）。

自分の子と上泉家の子が女子ばかりとなったことに対し、上泉家当主である剛三と相談した上で元に対して「男子が三人生まれたときは、三番目の子を神楽坂家に迎える」と約定を交わす。九校戦で悠元が天神魔法『天照』を披露したことにより、彼を神楽坂家次期当主にすることを決める。

公的な場以外ではお茶目な性格で周囲を振り回す。公的な場では単衣を着こなすが、それ以外は外見の年齢相応のファッションを好んでいる。

二十代に神楽坂家の家督を継ぐとともに『元老院』の四大老の一角を受け継ぎ、現四大老メンバーの中では最長の在籍。国家の為と述べておきながらそれに反旗を翻すような真似をした東道青波の父と樫和主鷹の父を剛三と共に抹殺した。

四葉の筆頭執事である葉山は弟のような存在で、彼に魔法の手解きをした師匠的存在でもある。今の夢は早く当主の仕事や四大老を引退して養子となった悠元や孫を愛でること。

伊勢　姫梨（いせ　ひかり）

神楽坂筆頭主家である伊勢家の長女。年齢は九校戦編で１６歳。第七高校１年→第一高校１年Ａ組（横浜事変編）→２年Ａ組（ダブルセブン編）。

高校入学まで魔法力を隠していた。伊勢家は伊勢神宮の管理・祭事

を担っている一族で、姫梨も巫女として勤めている。一見すると大人しめな性格に見えるが、由夢と喧嘩をすることが多い（周囲から見れば喧嘩するほど仲が良い状態）。由夢との喧嘩を止めた悠元に対して一目惚れする。神将会：第三席で木属性（風属性）に長けている。

天刃霊装は十字槍型の『クラールヴィント』。天魔抜刀形態は『クラールヴィント・リーゼ』。

宮本　修司（みやもと　しゅうじ）

神楽坂分家である宮本家の三男。年齢は九校戦編で１６歳。第九高校１年（～来訪者編）→第九高校２年。

姫梨と同じく高校入学まで魔法力を秘匿していた。宮本家は太宰府天満宮の管理・祭事を担っている一族で、二天一流を興した新免武蔵藤原玄信を祖としており、彼もその剣術を修めている。九校戦で天神魔法を披露した悠元に対して興味を抱き、態と吹っかけたりするなど好戦的に見えるが、実際のところは戦いを好まない性格（本人曰く試合と勝負は別物）。神将会の第四席で火属性に長けている。

神楽坂家の家督継承には興味がなく「大人の腹芸は苦手」と零しており、悠元が次期当主となることには賛同している立場。

天刃霊装は炎を纏う二刀流の太刀『村正』。天魔抜刀形態は『千子都牟刈村正（センジツムカリムラマサ）』

高槻　由夢（たかつき　ゆめ）

神楽坂分家である高槻家の次女。年齢は九校戦編で１６歳。第二高校１年（～春休み編）→第二高校２年。

姫梨や修司と同じく魔法力を隠していた。高槻家は出雲大社の管理・祭事も担っていて、彼女も巫女として駆り出されることが多い。姫梨とは喧嘩することが多いが、彼女の人柄と実力は認めている（喧嘩する理由は負けず嫌いと姫梨のスタイルを羨んでいるため）。姫梨との喧嘩を止めた悠元に強い関心を持つ。神将会の第五席で金属性（雷属性）に長けている。

天刃霊装の解放状態は両刃剣の『雷切』。天魔抜刀形態は『雷切虎徹（らいきりこてつ）』

北山　雫（きたやま　しずく）

国内有数の財閥であるホクサングループの令嬢にして、神楽坂分家の一つである鳴瀬家の血を引く。第一高校1年A組（入学編）→2年A組（ダブルセブン編）。

母親である紅音譲りの『共振破壊』を得意とするが、細かな制御は苦手（悠元との訓練で徐々に克服している）。悠元とは上泉家の本屋敷で初めて会い、その時に一目惚れした。九校戦を通して深雪とは魔法だけでなく恋のライバル関係になる（悠元に惚れる女子を増やさないための共闘関係も含んでいた）。

新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイク決勝では悠元が組み立てていた砲撃魔法『フォノンティアーズ』を予期せぬ形で使うこととなったが、深雪をあと一歩のところまで追いつめた。

九校戦後に訪れた神楽坂家で悠元の婚約者序列第二位となり、加えて封印されていた魔法演算領域が解除されるのと同時に『神将会』第七位として悠元の補佐を担うことになる。

悠元と付き合い始めてから、魔法師としてもそうだが女性としての成長が加速し、3学期に差し掛かったあたりでエリカよりも胸が大きくなったと内心喜んでいた。

天刃霊装は長柄のハンマー型武装『グラーフアイゼン』、天魔抜刀形態は『グラーフアイゼン・リナーシタ』。

〈九頭龍〉

神楽坂家の諜報機関。筆頭の九重家を中心に、北海道方面の矢車家、東北方面の鳴瀬家、関東方面の吉田家、北陸方面の四十九院家、中部・東海方面の津久葉家、近畿方面の安宿家、中国・四国方面の高槻家、九州・沖縄方面の宮本家と、古今東西の古式魔法の名家に連なる面々で構成されている。

九重　八雲（ここのえ　やくも）

九重寺の現住職にして古式魔法の「忍術」使い。九重の姓は血縁者ではない先代から受け継いだもの。風間の紹介で達也や深雪の体術の先生を引き受けている。天台宗系列の末寺の住職は隠れ蓑であり、神楽坂家の諜報機関である『九頭龍』の長たる役割を担っている。何かと悪戯好きな性格で、達也や深雪だけでなく悠元にもちょっとした

試しをすることが多い。
古式魔法師から『果心居士の再来』と謳われるほどの実力を有しており、東道青波も一目置くほどである。
なお、そんな彼でも上司的存在となる悠元相手には「敵意を見せた段階で死ぬ未来しか見えない」と半ば白旗を揚げている状態。
エクセリア・クドウ・シールズ
↓九重　瀬理亜（ここのえ　せりあ）
年齢は16歳（来訪者編）→17歳（四葉継承編）。2096年1月の年明け、第一高校の1年A組に留学生として来る。学年は1年A組（来訪者編）→2年B組（ダブルセブン編）→3年B組（激動の時代・孤立編）
シールズ家の次女で、リーナとは双子の姉妹関係にあたる。彼女の前世は悠元の前世において実妹（後に従妹であると判明）に当たる人物であり、不慮の事故によって転生した経緯がある。誕生日はリーナと同じ1月4日。
リーナすら上回る実力を持つが故に世界最強の魔法師部隊であるスターズですら正式なナンバーを与えられず、表向きは存在しないナンバー・ゼロ〝ポラリス〟のコードネームを与えられていた。
とあるきっかけで悠元が転生者（前世の身内）だと知ることとなり、彼の婚約者になることを本気で狙っている。事件解決後、スターズを除隊して帰化、九重家の養子になる。2096年春からは第一高校へ編入する。
割とふざけることが多く、その度に悠元からキツイお仕置きを受けているが、本人はそれを楽しんでやっている節がある（雫談）。
『エシェロンⅢ』のバックドアシステムである『フリズスキャルヴ』のオペレーターの一人で、あくまでもファッションの流行情報や身内が無茶をしないか見張る為だけに使っている。
〈四十九院家〉
百家本流の家系。ルーツはかつての神道の大家であり、既に断絶した白川家（白川伯王家）に遡る。その白川家の血筋（偶然、本家の遠縁で白川の血筋を引く人間がいた）と伯家神道（白川流神道）を継い

でいるのが四十九院家にあたる。神楽坂家の諜報機関『九頭龍』の一角として北陸地方を守護している。本拠地は加賀一之宮・白山水鏡（しらやますいきょう）神社（じんじゃ）。

四十九院　沓子（つくしいん　とうこ）

四十九院家次女。国立魔法大学付属第三高校に通っており、学年は1年A組（入学編）→2年A組（ダブルセブン編）→3年A組（激動の時代・孤立編）。年齢は15歳（入学編）→16歳（ダブルセブン編）→17歳（激動の時代・孤立編）。

幼少期に悠元と出会った時に一目惚れ。悠元に命を救われたことで恋慕の気持ちが高まるが、男子と勘違いされたことがショックで女性らしさを磨くようになる。

水を操る精霊魔法に長けており、1年の九校戦ではバトル・ボードに出場してほのかと激闘を演じた。2年生の九校戦ではロアー・アンド・ガンナーに出場して準優勝している。

1年生の冬に悠元との婚約が結ばれることとなり、早々に関係を持つことになったが沓子本人としては「悠元に勝てない」と白旗を揚げるほどだった。

なお、沓子の胸のサイズは栞曰く「愛梨よりも大きいから妬ましい」とのことで、女子の先輩にも羨ましがられている。

〈津久葉家〉

十師族・四葉家の分家。その実態は中部・東海地方を監視する神楽坂家の諜報機関『九頭龍』の一角。精神干渉系魔法に長けており、四葉の魔法研究に携わる立場を有する。現当主は津久葉冬歌。

津久葉　夕歌（つくば　ゆうか）

津久葉家長女。国立魔法大学に通っていて、悠元の姉である詩鶴と同い年。年齢は21歳（来訪者編）→22歳（四葉継承編）。

四葉家次期当主候補の一人であったが、達也と深雪の実力を津久葉家の精神干渉系魔法『誓約（オース）』関連で誰よりも理解していたために、自身が四葉家当主になる事への執着は低かった。

横浜事変後、母親であり現当主の冬歌から悠元との婚約を命じられ、神楽坂家当主婚約序列第五位の座に座ることになった。元々親友

である詩鶴との絡みで悠元を見知っており、興味本位だったものがいつしか恋愛感情に変わったことを自覚するに至った。
　同じ立場の深雪とは気の許せる関係になっており、悠元についていけている深雪のタフさには正直「白旗を揚げるしかない」と零すほどだった。
〈導師〉
〈東道家〉
　古式魔法の派閥を纏める導師のひとつにして古式魔法の大家。政財界に強い影響力を有し、四葉家の前身にあたる第四研のスポンサーをしていた影響により、そのまま四葉家の経済的なスポンサーを担っている。『元老院』の四大老の一角を担う。現当主は東道青波。
　東道　青波（とうどう　あおば）
　東道家当主。四葉家のスポンサーを担う一人で、この国の抑止力を誰よりも追い求めている。この世界では剛三の娘の一人を妻として迎えており、悠元は義理の甥の関係に当たる。
　妻と娘の佐那には頭が上がらず、佐那が幹比古の写真を見て一目惚れしたことにより気苦労を背負う羽目となった。ただ、その弱みを見せる相手は青波自身も選んでおり、八雲には絶対に見せることなどないと決意している。
　実の父親が「四葉殺し」を実行したことによる罪の意識で、四葉家を部下から外して距離を置いた付き合いをしている。
　日本を陰から支配する『元老院』の四大老の一人として、国の行く末を案じている。
　東道　佐那（とうどう　さな）
　東道家の長女で青波の娘。第一高校1年B組（来訪者編～春休み編）→2年E組（ダブルセブン編～）。母方の繋がりで悠元とは従姉弟の間柄にあたる。年齢は来訪者編で１６歳。都内の普通科高校に通っていたが、３学期より第一高校に編入した。
　現代魔法中心となる魔法科高校で一科生となれるだけの実力を有している。婚約者として写真で見た幹比古に一目惚れしている。
　鉄扇を用いた攻撃や攪乱を得意としており、古式魔法としての使い

手で見れば指折りのレベルで、青波ですら手放しに誉めるほどの実力を有する。

吉田　幹比古（よしだ　みきひこ）

吉田家の次男。第一高校1年E組（九校戦編～春休み編）→2年B組（ダブルセブン編～）。類稀なる精霊魔法の使い手で神童と呼ばれ、自分の才能を微塵も疑わない傲慢ちきな性格だったが、中学時代の『星降ろしの儀』で竜神の喚起によって魔法に関する感覚が狂ってしまい、魔法科高校には二科生として入学する。

九校戦前のハプニングを機に達也と知り合い、悠元と再会（悠元とは高校に入る前からの幼馴染）してから自分と魔法を見つめなおすきっかけとなり、突如出ることになった新人戦モノリス・コードで「カーディナル・ジョージ」を破る大金星を果たすまでに魔法力が回復。悠元から教わった想子制御によってかつての神童と呼ばれた時期よりも強力な魔法師へと成長するに至った。

父から東道家への婿養子の話を聞かされ、横浜事変後にその話を承諾。佐那の押し切りで自分が気になっている美月とも関係を持つ形となり、恋人として付き合うようになる。

守護霊［諸葛孔明］を介する形で鉄扇型の天刃霊装［天鳳扇（てんほうせん）］を発現する。

〈百家〉

〈千葉家〉

百家本流の家系。新陰流剣武術より派生した分流で自己加速・自己加重魔法を用いた白兵戦技［千刃流（ちばりゅう）］で知られている名門である。『剣の魔法師』の二つ名が与えられていて、白兵戦用の武器を製造している。

五十里家、吉田家、上泉家とは家同士の付き合いがある。エリカとの繋がりで三矢家や神楽坂家とも縁がある。千葉本家の道場は東京と川崎の境界付近の海の近くにある。

千葉　エリカ（ちば　えりか）

千葉家次女。国立魔法大学付属第一高校に通い、学年は1年E組（入学編）→2年B組（ダブルセブン編）→3年B組（激動の時代・孤

立編）。年齢は１５歳（入学編）→１６歳（ダブルセブン編）→１７歳（激動の時代・孤立編）。

千葉家当主の千葉丈一郎とその愛人であるアンナ・ローゼン・鹿取の間に生まれた娘。元々千葉の姓を名乗る事すら許されなかったが、悠元との出会いによって欲目を出した父親から無理矢理千葉の姓を名乗る様に言われた。

入学当初は二科生クラスの魔法力しか有していなかったが、悠元の制御訓練を受けることで爆発的な成長を遂げ、更には口喧嘩相手兼クラスメイトのレオと切磋琢磨する形で新陰流剣武術の奥義である三の太刀［麒麟顕正］を会得した。

テニス部と軽運動部に所属しているが、１年の春に知り合った紗耶香のお願いで剣道部を手伝うことがある。他人の恋愛感情には鋭いが自身の恋愛感情には疎く、レオと恋仲になったのは１年冬のホワイトデーの時だった。

千刃流の技量は入学時点で印可の目録を有していたが、２年生秋の時点で速力自体が免許皆伝を有する兄二人すら凌駕しており、クリスマスの時点で修次を打ち負かした。２年生の九校戦でシールド・ダウン・女子ペアに紗耶香と出場して優勝している。

悠元から渡されたＣＡＤ『疾風丸（ハヤテマル）』に組み込まれた護石を介する形で守護霊（サーヴァント）の［モードレット］と契約、天刃霊装［燦然と輝く王剣（クラレント）］を発現。天刃霊装における奥義、伐刀絶技［我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）］を会得する。

〈その他の家〉

西城　レオンハルト（さいじょう　れおんはると）

西城家長男。国立魔法大学付属第一高校に通い、学年は１年Ｅ組（入学編）→２年Ｂ組（ダブルセブン編）→３年Ｂ組（激動の時代・孤立編）。年齢は１５歳（入学編）→１６歳（ダブルセブン編）→１７歳（激動の時代・孤立編）。

祖父であるゲオルグ・オストブルグの影響を強く受けており、両親と姉がいるが唯一魔法資質を覚醒した。自身を強化したり、手に持ったものや身に付けているものを強化する魔法に長けている反面、放出

系や遠隔操作系など離れた場所に作用させる魔法は不得意。
高校入学前、ひょんなことで助けた少年が燈也であり、高校入学した際に再会して一科生・二科生の枠を超えた友人となり、山岳部に入部した。
達也や悠元との出会いで魔法力の制御訓練を学ぶこととなり、二科生組では一番の成長株として頭角を見せた。横浜事変編では大亜連合の特殊部隊のエースである呂剛虎（ルウガンフウ）にカウンター技を炸裂して一撃を与えるほどに防御力が極まり、パラサイト事件においてはカーボンファイバーコートを着込んだ相手を難なく弾き飛ばす荒業を見せて敵を退けた。
［圧力波（マツハ・パンチ）］を更に改良した［ドラグーン・ブレス］で離れた相手への攻撃方法を会得するだけでなく、自身の得意とする硬化魔法もさらに強化された。護石を介して守護霊（サーヴァント）［ジークフリート］と契約。天刃霊装［バルムンク］と伐刀絶技［幻想大剣（バルムンク）・天魔失墜］を修得した。
〈外国勢力〉
〈ＵＳＮＡ（北アメリカ合衆国）〉
九島　健（くどう　けん）
九島家先代当主である九島烈の弟で、リーナとセリアの祖父にあたる。この世界では存命しているが、世俗を嫌って人が近寄りがたいロッキー山脈の山奥で普段は生活している。セリア曰く外見年齢は肉体の全盛期の状態を維持しているとのこと。
ＵＳＮＡ大統領にアポを取らず直接ホワイトハウスに乗り込むことが可能な人物であり、ＵＳＮＡ政府内にも顔が利くほど影響力が高い。
ジェラルド・バランス
ＵＳＮＡ軍内部監察局のナンバー・ツーであるヴァージニア・バランス大佐の甥にして、先代シリウスであるウィリアム・シリウスの実子。魔法師としての資質はスターズの隊長クラスに匹敵するが、戦いを好まない性格から軍人ではなく役人として生活している。
当人の魔法資質によってＵＳＮＡ軍統合参謀本部勤務兼国家安全保障局のエージェントとして国内外を飛び回っている。軍人として

は〝落第〟と当時通っていた士官学校の教官に評価されるが、魔法師としての実力で言えば一等星級（スター・ファースト）レベルとされている。
その反面、女運と苦労性に悩まされることとなる。
スターズによる叛乱事件後、自ら受け継いだ戦略級魔法［スピリット・ディバイダー］を秘匿する意味も合わせてスターズ総隊長〝シリウス〟をリーナから引き継ぐとともに、軍人魔法師としては異例の准将へ昇進する。
ジョーリッジ・Ｄ（ドナルド）・トランプ
ＵＳＮＡの現大統領。旧合衆国の大統領とまで成り上がった不動産王を祖先に持ち、とある人物に憧れて鍛えた結果、屈強な肉体を得るまでに成長。魔法師相手でも屈しない強靭さの為、護衛の必要性を疑われたりすることが多いが、本人が非魔法師であることは周知の事実。
ストレスが溜まると彼の手にしているものが破損するため、与党勢力はおろか野党勢力ですらも恐れるＵＳＮＡで最恐の政治家。孫娘にリーナとセリアがおり、二人に対しては甘い対応を取ることが多い。
非魔法師ではあるが天然の超能力者でもあり、自身を対象とする魔法を全て無効化するため、〝魔導殺し〟を難なくやってのけてしまう。過去にはスターズの指導教官を歴任したことがあり、当時の異名は〝奇跡殺し〟。
〈ＳＳＡ（南アメリカ連合共和国、南米連邦）〉
ディアッカ・ブレスティーロ
南米連邦初代大統領。その前は軍人として剛三や悠元と関わっており、その際の功績も含めて政治家への転身を余儀なくされた経緯がある。３５歳という年齢は政治家なら若輩だが、それを補って余りある非常識な経験則により巧みな政治交渉力を勝ち得ている。
敬虔なクリスチャンの側面を持つが、宗教による公私混同を一切しないスタンスは政治家として珍しく、その影響で国内の支持率は極めて高い。
ハンス・エルンスト（戦略級魔法師『魔王の再来（リターン・オブ・ルーデル）・魔王の帰還』）

２０歳という若さで連邦軍大佐にして国家非公認戦略級魔法師。ディアッカの義理の甥にあたり、元々ドイツ軍の軍人魔法師であった。ひょんなことからハンス＝ウルリッヒ・ルーデルの精神が自身の肉体に憑依することとなり、リアルチートの影響を受けて急成長してしまった。

更には潜入先の戦略級魔法師の孫娘であるナターリヤ・コントラチェンコを引き取ることとなり、周囲からはその子を将来の妻だと見做す者が多いものの、ハンス本人は未だに手を出していない。

〈西ＥＵ・フランス共和国〉

ヴィクター・セナード

フランス共和国大統領。国際魔法協会の本部があるイギリスに対する戦略として日本との誼を結ぶことに腐心する。気に入った人間を養子にしたがるのは、妻はいても子供が出来にくいという医師の診断結果と妻が子を欲しがるという願いをかなえるための物。

〈組織〉

〈神将会〉

正式名称は皇宮警察本部対魔法師特務課・特務隊『神将会』。七人の優れた魔法師によって構成されており、その詳細は最重要国家機密として秘匿されている。直接の命令権を持ちうるのは今上天皇のみと明記されており、皇族を始めとしたこの国の護りを司る。

天皇直属の超法規的な特殊部隊のため、実質的な指揮権は総長に委ねられており、そのバックアップを護人の二家（上泉家・神楽坂家）が行う。世界屈指の魔法技術の粋を集めた装備を持つため、表向きの戦力として数えられていない。

第一席・総長　〝草薙（くさなぎ）〟　神楽坂　悠元

（元十師族・三矢家三男、護人・神楽坂家当主）

第二席・副長　〝天影（てんえい）〟　上泉　元継

（元十師族・三矢家次男、護人・上泉家当主）

第三席　〝星見（ほしみ）〟　伊勢　姫梨

（神楽坂筆頭主家・伊勢家長女）

第四席　〃劫炎（ごうえん）〃　宮本　修司
（九頭龍・宮本家三男）
第五席　〃雷帝（らいてい）〃　高槻　由夢
（九頭龍・高槻家次女）
第六席　〃氷絶（ひょうぜつ）〃　司波　深雪
（十師族・四葉家、司波家長女）
第七席　〃天震（てんしん）〃　北山　雫
（九頭龍・鳴瀬家、北山家長女）

追憶編

プロローグ～転生しました～（※）

――――『魔法』。

一口に言えば、科学で実現不可能な物理現象を具現化するための奇跡の術。その代償として魔力といった要素を使っているのだから、俗に言う『等価交換の法則』には一切反していない。ただし、これはあくまでも空想上に描かれた夢のような能力だ。

そんな御伽噺の産物である魔法だが、〝この世界〟では２０世紀末に『超能力』を理論化・体系化した技術を指す。超常的な力とも言える魔法が発展した理由は、歴史の背景が強く影響している。

当時、核兵器を狙ったテロ事件が発生。その際、偶然にも居合わせた警官がその能力を有していたことで、魔法の存在は歴史の表舞台へ出ることとなる。

西暦２０３５年頃、地球の急激な寒冷化によって世界の食糧事情が逼迫した。それに伴うエネルギー資源の奪い合いが引き金となって、三度目となる世界大戦――――世界群発戦争（第三次世界大戦と表現されることもある）が起きた。

戦略核・戦術核兵器による全面核戦争に至らなかったのは、世界中の魔法使いが団結して核兵器に対する核抑止魔法技術を確立、それによる各国の核兵器をほぼ無力化。核の炎による人類滅亡を回避したことが大きい。

能力が極めて秀でた魔法使い――――戦略級の実力を有する魔法技能師、通称〝魔法師〟の育成に各国は鎬を削ることとなる。

約２０年にも及んだ第三次世界大戦によって、戦争終了直後は全盛期の半数以下にまで減少した地球の人口。大戦前に存在した国家群にも大きな影響を与え、世界各地で国家体制の再編という流れが加速した。

その流れの中で、封じられたも同然の核に代わる抑止力足り得る力が国家に求められ……国家の生存戦略として、魔法師の育成に傾くの

は無理からぬことだった。
そして、魔法という存在はある程度遺伝する。そこから考えられることは当然、優秀な魔法使いを輩出する存在になろうとする欲望。その為ならば人道的な倫理をかなぐり捨てた遺伝子操作も行われたほどだ。
日本においてその過程で生まれたのは……十師族（じゅっしぞく）や師補十八家（しほじゅうはっけ）をはじめとする魔法使いの一派。
彼らを国家の利益のために、あるいは兵器として利用しようと画策する者たち。この国の古（いにしえ）より技能として用いる者達との軋轢。
２０世紀末に魔法の存在が明るみに出て、１００年という時間が過ぎつつある……一般人、魔法の力を持たぬ者からすれば、目に見えない脅威にもなりうるそんな世界。
「……（お決まりと言うべきか、それともお約束と言うべきか）」
自分の名前は三矢悠元（みつやゆうと）。兄弟は兄二人、姉三人、妹一人と自分を入れて七人おり、６番目で三男に当たる。自分のいる三矢家は先程述べた十師族の一つに数えられ、父である三矢元（げん）の表向きの仕事は国際的な小型兵器ブローカーをしている。
何で、こんな客観的な説明口調かというと……所謂『異世界転生』という奴である。別にテンプレ展開となる『信号無視したトラックに轢かれた』……わけではない。
前世は大学生だったのだが、特に健康的な不調もなくポックリ逝ったようだ（眠っていた間の出来事だったので、死んだという認識が出来なかった）。で、気が付けばこの世界にいたという感じである。前世の記憶を引き継いでいるので当然名前も覚えているが、今更必要になることなどないと思う。
てっきり、某高校生探偵が謎の組織に襲われて薬飲まされたら小っちゃくなっちゃった現象が起きたのか、と錯覚したほど。心配そうにのぞき込む姉らしき人物からは『熱で記憶がおかしくなったのかしら？』と言われたことに少し心が傷ついた。
いや、向こうからすればそれが当たり前の反応なのだろうが、こちらとしても一体何が何なのかという気分でしかない。

その女性は「母さんを呼んでくるから大人しくしてて」と言い、部屋を後にしていた。病室という訳ではなく、部屋の間取りや調度品からするに自室の可能性が高いだろう。

ここに転生する際、女神さまみたいな人に会ったような気もするが……正直碌に覚えていない。まあ、それを覚えていたら贅沢なのかもしれないが。覚えているのはこの世界の知識や魔法、特殊技能を色々貰ったこと。それは追々話していこうと思う。

そういや、その女神さまから『ごめんなさい』を壊れたテープのように連呼されながらペコペコ土下座された記憶しかないのは……きっと自分の気のせいだろう。

そんなことを思っていると、扉が開いて一人の女性が駆け寄ってきて抱きしめてきた。安堵の表情を浮かべていただろうことはその声色からすぐに読み取れた。

「悠元！　ああ、よかった……突然あなたの想子（サイオン）が吹き荒れて、原因不明の高熱で丸一日寝込んでいたのよ。大丈夫？」

「はい。心配かけてごめんなさい、お母さん」

この転生した人物に三矢家に関する記憶があったので、その人物が母である三矢詩歩（みつやしほ）であることがわかった。最悪の場合は高熱で記憶を失う可能性もあったので、この元の体に記憶が残っていたことを感謝する。いや、ホントマジで。

普通ならどちらかの記憶が吹っ飛ぶ可能性もあっただけに、数少ない安心材料といえるだろう。「逆に不安材料は？」と聞かれると、この世界が『魔法科高校の劣等生（まほうかこうこうれっとうせい）』の世界であるという事実に他ならない。

だって、あの『司波達也（おにいさま）』がいる世界だよ？　某ゲーム攻略雑誌よりも安心できない材料が山積みだらけだ。しかも三矢家に関わる事象が記憶にあるだけに、難儀な家に転生したものだと思う。

まあ、『七』や『九』の数字を持つ家とかに転生したところで、それはそれで気苦労が山積みになっていたかもしれないし、結局どの家に生まれ変わっていても気苦労という点は何も変わらないだろう。

一先ず置いておくが、母の詩歩が言うには、意図せぬ魔法の暴走による魔法演算領域のオーバーヒートではないかと危惧していたが、半

日も過ぎたあたりで高熱は収まって小康状態になったとのこと。その魔法演算領域は人間の無意識領域に存在するため、迂闊に手を出すこともできない。

その辺をどうにかできればなあ、とか思っていたら頭の中で魔法式がひとりでに組みあがっていた。これには流石に吃驚するが、変に驚いて詩歩を心配させたくなかったので慌てて口を噤んだ……何かしらの切り札にはなりそうだから、心の片隅にでも覚えておこうと思った。

「けれど、数日は安静にしていなさいね」

「はい」

実際は自分の体調に問題はないのだとしても、ここは母親の言うことを聞くことにした。母が部屋を出ていくと、そのままベッドに横になった。

さて、どうせ数日は自室どころかベッドから動けないんだし、さっき頭の中で組みあがった魔法について試してみたいが、そう都合よく実験台が出てくるわけでもない。それなら知覚系の魔法でも習得できないかなと思案したら、またもや魔法式が完成した。

「……ないわー」

流石にここ十数分で2つの魔法を組み上げたことに絶句した。その辺は特典によるものなので、迂闊に言えることでもない。何せ、基礎単一工程の魔法でも起動式と呼ばれる電子データでアルファベット3万文字相当に匹敵する。それ以上の魔法なのでアルファベットに換算するとゆうに7桁は下らないだろう……そう考えると頭が痛くなりそうな話である。

ともあれ最小出力で魔法式を発動させると、空から地上を見下ろした視界のイメージが流れ込んでくる。所謂鳥瞰図だ。

試しに原作知識で覚えのあった『四葉家（よつばけ）』の本家を探してみたところ、ハッキリと見えていた。あの場所には確か認識阻害のための結界があるはずなのだが、それすらも軽々通過した。このままズームアップしたら家の中まで見えるかもしれないが、あの『触れてはならない者たち（アンタッチャブル）』と言われた十師族の一つだ。これ以上は

知覚されるかもしれないため、そこで魔法の発動を中止した。
　するとタイミングを図ったかのように扉が開いた。今度は小さな女の子だ。当然彼女のこともこの体に残っていた記憶ですぐに分かった。
「詩奈（しいな）、今はお勉強の時間じゃなかったかな？」
「ゆ、ゆうとお兄ちゃん！　目がさめたの？！」
　彼女は末っ子の三矢詩奈で５歳。
　言い忘れていたが、自分は２つ上なので７歳になる。
　原作では、自分の存在もとい、詩奈と歳の近い兄および姉はいない。つまり、三矢家の兄弟姉妹の構成が原作から変化しているのは間違いなかった。その意味で、同じ世界観でありながらも原作通りに進むかは解らない……早めに動けるようにしなければならないな。
　心配そうに覗き込む詩奈の頭に手を置き、撫でる。詩奈は少し吃驚したが、嬉しかったのか頬を緩ませていた。
「数日は安静とお母さんに言われたから暫くは動けないけど、心配かけてごめんね」
「う、ううん！　お兄ちゃんに何かあったら、わたし……」
　これ、ブラコンの兆候アリか？　と首を傾げた。そうなると三矢家の護衛兼使用人をしてくれている矢車（やぐるま）家の男の子に対して感情が希薄にならないだろうか？　というか、元々『三矢悠元』をしていた奴はどういう精神してたんだ……むしろあれか？　詩奈は末っ子だから甘やかされて育ったとかか？　この辺はわからん。
　……今寝たら、元の世界に帰れないかな。え、現実逃避じゃないかって？
　笑えよ、野菜王子（ベジータ）。

◇　◇　◇

「良かった、普通に立てる……」
　この体に転生して数日。ようやく母の許可も下りて（厳密には医者の診断というお墨付きで）ベッドから解放された。その間、ベッドで横になりながら知覚系魔法「万華鏡（カレイドスコープ）」を色々試運転していた。この魔法については色々あるのだが、一応知覚系魔法という括りにしてい

る。
　それだけならまだ良かったのだが、いろいろ大変だった。何せ、詩奈と同じ……いや、それ以上の異常聴覚を抱えていたのだ。自室が特殊な防音仕様になっていたことを後で知ったほどだ。幸い、ヘッドホン型の集音低減機があったので、外を出るときは当分手放せなくなるな、と思った。
　原作では主人公である『お兄様』の関係で四葉家に焦点が当たっていた。なので、三矢家のことなど殆ど解らなかった。これで同級生がいればもう少し知識があったのだろうと思う。兄弟姉妹絡みで強いて挙げるなら、原作では詩奈とそのすぐ上の兄と姉の三つ子とは、歳が8つ離れているぐらいの情報しかなかった。
　結論から言おう。
　身内に甘いのは四葉家だけではなかった。
　この世界の三矢家も同類であった。
「悠元、起きてる？」
「ノックする前に入ってこないでよ、美嘉姉さん」
「えー、これぐらい兄弟なら普通よ？」
　ノックもせず、悪びれもしない少女の名は三矢美嘉。元の三女で悠元の3つ上にあたる。割と大雑把な性格だが、結構面倒見がいい。敢えてノックをしないのは、悠元が異常聴覚を有するからこその配慮ということは気付いている。
　ただ、タイミングを読まずに入ってきては可愛がる節があるため、ブラコンおよびシスコンなところがある。本人曰く『私は可愛い弟と妹を愛でてるだけだから！』とのこと。
　そして、その美嘉を背後からハリセンで叩く少女が現れた。何故そんなものを持っているのかという疑問はあるかもしれないが。
「痛い!?　もう、一体……」
「美嘉？　ちょっとお話ししようか……」
「待って、佳奈姉さん!?　怒るのは精神的に良くないって!?」
「大丈夫、痛いのは最初だけだから。悠元、ちょっと美嘉を借りていくね」

次女の三矢佳奈（みつやかな）、歳は悠元の４つ上で別名対美嘉用最終兵器（リーサルウェポン）。普段からニコニコしている（糸目である）のだが、怒らせるとガチで怖い人。三矢の本屋敷で暮らしている人間のヒエラルキーでは母の次に強い。なので、悠元も佳奈の言葉にただ頷くだけであった。

長男の元治（もとはる）は現在第一高校に通っていて、中学３年の次男と中学１年の長女もいる。みんな何かと気を遣ってくれているのは、一度謎の高熱で倒れたからかもしれない。

（ここからどうするかな……）

流石に四葉の縁者でもないので、追憶編をどうにかするのは難しいかもしれない。最低でも『お兄様』の逆鱗に触れるようなことをしないよう生きていくのがいいと思う。死なないための保険は構築したが、それでも十全とは言えないかもしれない。

尤も、今できることなどたかが知れているという悲しい現実もある。何せ、いくら十師族の直系とはいえ、今の自分は７歳の少年でしかないのだから。ファンタジーのように年齢を無視した動きなんて、近現代に近しいこの世界では〝異質〟でしかない。

ともあれ、出来ることから始めてみる他ない、と気持ちを切り替えたのだった。

◇　◇　◇

三矢家当主・三矢元（みつやげん）は顔の前で手を組んで思案していた。三男である悠元が謎の高熱を発したことを聞いて焦ったが、熱も収まって医者の診断も問題ないと判断した。だが、彼の中で何かしらの変化があったことは間違いなかった。

「矢車（やぐるま）家の伝手で吉田（よしだ）家の魔法師に見てもらったが……［パラサイト］ではなく、れっきとした本人である、か……」

この数ヶ月、彼の言動は今までの病弱で引きこもりがちなものとは打って変わっていた。ジョギングなどの運動をしたり、書斎にある魔法関連の本をひたすら読みこんでいたり、仕事柄貰うことはあっても使うことのないＣＡＤなどを欲しがっては自室に持ち込んでいた。

この劇的な変わりようは物の怪の類を疑った。だが、使用人の伝手で紹介してもらった古式魔法の使い手からみた結果は『シロ』であっ

た。
「……私も、正直自分の眼を疑っていたほどだ。しかし……」
実際に本人を書斎に呼んで確かめた。「お前は一体何者か」と威圧交じりに。
［スピードローダー］で発動寸前の魔法まで構えるなど、実の子に向けるべきものではなかっただろう。だが、それに対して彼の放った一言は元自身の理解の範疇を超えてしまった。それによって発動寸前だった魔法をキャンセルしてしまうほどに。
「生まれ変わってこの身に生を受けた、か……与太話だと笑い飛ばすことも出来ただろうが、有り得ない話でもないな」
正直なところ、元は〝転生〟という事象を聞いたことなど今までになかった。魔法という限られた存在しか使うことのできないものを会得した側である元ですら、目の前にいた悠元の言葉に思わず絶句した。されど、それを指し示すだけの状況証拠が揃っている以上、彼の言葉を冗談だと片付けるにはあまりにも不躾であろう、と元は思った。
「詩歩だけでなく、あの子から詩奈のことについて真剣に相談されるとは思っても見なかったな」
気を取り直しつつ、元は悠元にいくつか質問をした。悠元は生まれてから今までの記憶は引き継いだが、詩奈の甘えように関してはむしろ尋ねられてしまった。『あのままだと、貰い手がいなくなりますよ？』という歳不相応の問いかけに対して、気が早くないかとは思った。だが、魔法師社会は早婚の傾向が強いために悠元の問いかけも決して早すぎた質問ではない。
なので、真剣に考えてはおくと返した。妻からも相談されていた内容を自分の息子から言われるとは思いもせず、苦笑を零したほどだ。
そこに加えて、彼はこうハッキリと断言した。
『三矢家の家督と家業は元治兄さんが継いでくれるのでしょう？　ならば、僕にその目があるとは思いません。御家騒動は三矢の力を削ぐだけ……正直に言って面倒事しか生みませんので』
これには元も思わず目を見開くほどに驚いた。とても7歳の口か

ら出てくるような言葉ではないと。元自身が幼かった頃でもそのような思考能力など持ち合わせていなかっただろう。しかし、だからこそ息子の魂が生まれ変わったと示すには十分な証左ともいえる。

『仮に、お前に十師族の当主に足る力があったとしてもか？』

『実力を競う程度ならばまだしも、三矢の家督や家業の椅子は一つしかありません。本音を言えば、これ以上身内を恨みたくなるような諍いは勘弁してほしいのです』

悠元の魔法師としての実力は未知数だが、少なくとも三矢の中で……いや、十師族という枠組みでも突き抜けた存在になるのかもしれない。大袈裟だとか身贔屓と言われそうだが、十師族の一角を担う三矢家当主として……魔法師としての勘がそう囁いていた。もし本当にそうなったとき、間違いなく長男の元治はお払い箱同然になりかねない。

その彼が三矢の家督など要らないと口にしたのだ。三矢の血筋を引く以上は何らかの形で関与は避けられない、と述べた上で。彼からすれば、目立つことこそ面倒事にしかならない……なので、元治に三矢の家督と家業を継がせてほしいと願った。

彼が生まれ変わる前の事情も相まって、元治の居場所を失くしてほしくない、もとい「奪いたくない」という思いもあったのだろう。

それを聞いた私はこう一言述べた。その言葉にはきっと、国防軍――十山（とおやま）（遠山）家に頭を下げねばならない三矢の現状をどうにかしてほしい、という願いも込められていた。

『そうか……事情はどうあれ、今の悠元（おまえ）は紛れもなく私の息子だ。望み通り家督や家業は継がせないが、お前の思うがままにやってみるといい。子の責任ぐらいは負わぬと父親として面目ないからな』

その言葉を皮切りとして悠元はいくつかのお願いをしてきた。無理のない範囲内であったために元も頷いて了承し、その代わりとして悠元に一つの提案をした。

妻の実家は武術や剣術の道場があり、そこから軍人や警察の人間を輩出している名のある流派。長男の元治は嫌がったが、次男の元継（もとつぐ）は自分を鍛える一環で通っており、長女の詩鶴（しづる）も門下生として通ってい

る。
　そこに悠元もどうかと提案したところ、彼は迷う間もなく「行かせてください」と即答した。その快い返事が気になって尋ねたところ、悠元が返した言葉は元を納得させるのに十分過ぎた。
「魔法師はアスリートやプロの職人と同じく身体が資本である。万が一、独り立ちすることになっても魔法抜きで切り抜ける力を磨くのは道理ではないか……確かに否定のできない正論だな。元治にも聞かせてやりたい言葉だ」
　そのやり取りだけ見ても、既に非凡な才覚の片鱗を見せている以上は少なくとも自分の手に余るだろう。おそらく、三矢家にとって現状をよくするための突破口になってくれるかもしれない。なら、十師族の当主たる自分にできることは……そう思いながら、使用人が淹れてくれた紅茶に映る自分の表情を見つめていたのであった。
「精一杯生きてくれ……生きられなかった〝あの子〟の分まで」
　元から漏れたその言葉が誰に向けてのものなのか……それを知るのは、この場にいる彼だけにしか分からないことであった。

身内に論外扱いされる師範代（※）

――西暦２０９２年７月末。

東京の都心から離れた閑静な住宅街。世界群発戦争によるシェルターの設置、戦後の再開発に伴って新たに区画整備された地域の一角――小高い丘に大規模な道場がある。

道場の名前は新陰流剣武術（しんえいりゅうけんぶじゅつ）東京支部。魔法の如何を問わず広く門戸を開いており、ここの門下生は警察・国防軍・消防などの第一線で活躍しているほどの流派。

剣術と格闘術、それに付随する形となる数々の魔法技能。それらを組み合わせた総合武術として、この国の治安維持組織のみならず政財界においても無視できず、魔法を使えない人間にとっても武道を極める意味では無視できない存在とも謳われるほど。

「しっ！　はっ！」

あれから5年が過ぎた。ここまでくるともう「夢でした」なんて言えないだろう……そう思いながら、悠元は迫りくる上段者の集団と乱取りを繰り広げていた。

誰の目から見ても魔法は一切使っていない。にもかかわらず、一人、また一人と倒されていく門下生たち。中には木刀を持っている者もいるが、それを綺麗に打ち払いつつ投げ飛ばす。

次々と倒されていく門下生とそれを成している悠元を満足そうに見ているのは、プロレスラーを彷彿とさせるような体格を持つ４０代ぐらいに見える男性。その傍には若い女性が正座で手合いを見ており、男性の様子に溜息を吐いていた。

「はっはっは、これだと悠元に新陰流師範代の印可を渡さねばならぬのう」

「御祖父様、悠元はまだ１２歳です。たった5年で渡したとなれば、新陰流の名折れと先代達が嘆かれますよ？」

豪快に笑っている男性の名は上泉剛三（かみいずみごうぞう）。悠元の母方の祖父で新陰流剣武術の総師範を務めているが、実際のところは親馬鹿ならぬ爺馬鹿といってもいいぐらい孫に甘い。

一方、溜息を吐く若い女性は三矢詩鶴（みつやしづる）、三矢家長女で悠元の姉である。彼女はまだ十代だが、既に師範代の印可まで到達した才女。
「なに、悠元はあの程度で折れはせぬよ。あやつらとて、この程度で折れてしまっては意味がなかろう？」
「それはそうですが……」
剛三の言ったことは悠元の年齢に不相応な評価とも聞こえるかもしれないが、新陰流剣武術に関してはいくら身内相手でも贔屓はしない。いい加減な武は相手だけでなく己をも傷つけるものだと誰よりも理解しているからだ。
今剛三がやらせている乱取りも悠元に対する試験ではあるが、同時に師範代の道筋が見えるほどの上段者も試験の一環で紛れ込ませている。尤も、その上段者も悠元に投げられて床に叩きつけられているが。
詩鶴が懸念したのは建前の問題ではなく、弟に極度の負担を掛けるべきではないことも含めた発言。特に悠元はまだ成長期であり、下手に筋肉をつけすぎると発育不良になりかねないという危惧も含めてだ。
実際のところ、剛三は悠元との初対面で桁外れた資質を見て、表向きは付き人としつつも実際は愛弟子同様の扱いという形で稽古を付けていた。それも普通ならば上段者ですら怪我をしかねない修行もしており、時折目撃しては剛三に説教していた。
それに挫けることなく寧ろ超えていく弟の姿に、詩鶴自身も奮起させられたという意味で強く言えずにいるため、せめて成長期でもある弟の背が伸びないようなことだけは避けて欲しいと願った。
その意図を察したうえで剛三は言葉を発する。
「解っておる。だからこの乱取りは『見極め』よ。これ以上の負荷はあやつの成長に支障をきたすからの。お主から一言言っておけば、悠元も無茶はせぬだろう……元継もそうじゃが、お前も人のことは言えんぞ？」
「……お恥ずかしい限りです」
謎の高熱から快復した悠元の存在は、他の兄弟姉妹にも影響を及ぼ

していた。末っ子の詩奈は今まで以上に勉学に励み、元継や詩鶴も悠元に触発されて実力をメキメキと上げている。
次女の佳奈と三女の美嘉も道場に通いはじめ、長男である元治もそれに触発されて護身術程度は扱えるようにするために通うこととなった。剛三は最初、元に「お主が強制したのか？」と問い質したが、その問いに対して元はこう答えた。
『悠元へ提案はしましたが、彼は寧ろ「自らを鍛えるためにも行かせてください」と懇願してきたのです。悠元が義父殿に気に入られて武術を磨くうち、他の子供たちも負けられないと奮起しはじめまして……』
寧ろ、元は申し訳なさそうに謝ったが、これには剛三も盛大に笑みを零した。
なにせ、三矢の次期当主となる長男も触発されて通い出したのだから、悠元の存在は三矢にとってよい刺激となったことは確かであった。
それは、武術一辺倒とも言える剛三にとっても同じ事であった。
「九校戦は来月じゃろう？　無理は厳禁じゃ。お前も三矢の人間である以上、九校戦で道場の鍛錬を休んでも構わん」
その結果として如実に表れたのは九校戦――――全国魔法科高校親善魔法競技大会だ。この時点ですでに卒業している元継と現在高校3年の詩鶴は出場した競技で高校生離れした実力を見せつけ、第一高校の総合優勝に貢献。三矢家の名を上げることとなり、十師族としての地位を固める形となっていた。
そして、この場にはいない高校2年生の佳奈と高校1年生の美嘉も選手として選ばれており、三矢の三姉妹の活躍が取り沙汰されるほどだった。
今年は一高の前人未到となる三連覇がかかっており、いつになく緊張しているのを見抜くように放たれた剛三の言葉に詩鶴はキョトンとする。何せ、普段はあまり『三矢』のことを口にすることはしない祖父だからこそ驚いていた。
すると、ザンギリ頭をした青年が声をかけつつ二人に近づいてき

た。それを横目で見た剛三はひとつ息を吐いたうえで「遅い」とでも言いたげな表情を浮かべつつ呟いた。
「爺さん、詩鶴が驚いているだろうに。詩鶴も生徒会長とはいえ、あまり気張るなよ？」
「やっと来たか元継。大方、矢車の坊主の面倒か？」
「アイツは磨けば磨くほど面白い。悠元が散々連れまわした甲斐もあって、資質は十分だな。侍郎（さぶろう）の親父さんが『息子は一体どこに行くのだろうか』と嘆いていたが……詩奈のことも考えれば、アイツが強くなるのは決して悪くない」
彼の名は三矢元継（みつやもとつぐ）。三矢家次男で悠元の兄にして新陰流剣武術師範代を務めている。
現在は魔法大学に通っていて、将来は上泉家に婿入りすることも決まっている。そのお相手は元継にとって幼馴染であり、従兄妹の関係にある。俗に言う『リア充』を体現したような存在と言ってもいい。
「元継兄さん、侍郎君はそんなに強くなれるの？」
「なるだろうな。とりわけ武術のセンスは俺以上だろう……悠元という論外の存在を除けばな」
詩鶴と元継が口に出した人物は、三矢家とかれこれ３０年来の付き合いのある矢車家の人間。三矢家からみれば矢車家は家事使用人兼護衛としての雇用関係にあり、そこの末っ子となる男子は三矢家末子の詩奈と誕生日が２日しか違わない。
そこに目を付けたのは他でもない悠元だ。
彼はその末っ子に様々な魔法実験という名の訓練を与えた。加えて元継が新陰流剣武術の稽古をつけ始めた。
悠元曰く『詩奈がこのまま自分に依存したら将来の貰い手がいなくなる。だから年の近いアイツをじっけ……鍛えてやろうと思って』という言葉を聞いた元継は彼の非凡さと先見の明に脱帽しつつも納得した。元継も詩奈のブラコンは早めにどうにかすべきと思っていた。
彼に一体どんな実験をしたのかと聞いたら今度は自分が実験台になりそうな気がしたので、元継は悠元の言葉の一部を聞かなかったことにしたのは言うまでもない。

「お前がそこまで言うとはな。よし、儂自ら稽古をつけてやろう」
「やめろ爺さん。悠元だってそれなりに加減していたのに、アンタが稽古をつけたらアイツが文字通り潰れる。おとなしく隠居していろ、年齢詐欺ジジイ」
「何を言うか！　生涯現役は続行じゃ!!」
上泉家は表向き魔法使いの家系ではない。名立たる魔法使いの家系ならば持つはずの［数字］を有していない。その娘が十師族である三矢家に嫁いだのは主に２つの理由がある。
１つ目は上泉家の持つ家柄の性質。
古くは剣豪上泉信綱を祖に持つとされ、長きに渡りその名を継承していく過程で多岐に渡る魔法使いの血縁も受け入れていた。
その結果、剣術だけの流派であった新陰流は体術を含めた総合武術、魔法を併用した武術に変化していった。新陰流が新影流と呼ばれていた名残からその音読みを拾い、新陰流剣武術と呼称するようになった。
その過程で他の流派に分岐したものもあり、その一つに百家本流である千葉家の［千刃流］がある。千刃流は軍や警察に大きな影響を与えるほどの名立たる流派だが、その〝本元〟である新陰流に対して最大の敬意を払っている。
また、裏の稼業として二十八家の武術教練にも手を貸していて、例え十師族といえどもご機嫌を伺わねばならない家柄である。更に上泉家は魔法技能師開発第三研究所のオーナーを務めており、三矢家のスポンサーである。
２つ目は剛三の功績というか人脈にある。
国内で『老師』と謳われる九島烈と肩を並べて戦ったことのある戦友。今は亡き四葉元造とは共に崑崙方院及び大漢の官僚に対して報復を行うほど仲が良かったらしく、それ以外の同世代の十師族とは友人としての付き合いをしていた。
そのため、現在の十師族当主らから『尊師』と一目置かれるほどの人物だが、本人はそれを傘に上泉家の地位を高めようとはしない。力を誤ればその先に待つものを誰よりも理解しているからこそ、その思

いを次代に継がせようとしている。
ただ、これらは周囲から見た上での〝尤もらしい理由〟である。
実際のところ、剛三の娘である詩歩が三矢家に嫁いだ理由だが、政略結婚ではなく本人達が幼馴染で恋愛結婚しただけ、という非常にシンプルな理由だ。何故かそれを政略結婚の線で見られた上で剛三の怖さに対する評価も上がった、というだけである。このことに剛三本人は苦笑していた。
「隠居と言わず、とっとと地獄に行って親友に会って来い！」
「何を言うか！　ワシの行き先を閻魔が立ち塞がるのならば、薙ぎ倒してやるわ！」
そんな剛三だが、とうとう元継と向き合って手合いを始めてしまった。これには悠元に倒された門下生も食い入るように観戦しており、思わぬ形で手合わせが中断してしまったため、悠元が詩鶴のもとに近付いてきた。
「お疲れ様、悠元」
「ありがとう、詩鶴姉さん。にしても……どうするの、アレ？」
悠元が指差しをしつつも目線を向けた先の光景――剛三と元継の手合わせというか、お互いに新陰流剣武術の秘術を使った状態での近接戦闘限定の戦い。秘術抜きだと間違いなく人殺しのレベルになる速さの体術の応酬が繰り広げられている。
二人がこうなると、短くても３０分はずっと戦い続けるだろうことは詩鶴も分かっていたため、短い溜息を洩らした後に悠元へ頼みごとをした。
「……悠元、千里さんを呼んできて。今の時間だと、台所で仕込みをしてるはずだから」
「それが最適解になるか……分かった」
詩鶴が述べた人物は、剛三の孫の一人であり、元継の幼馴染にして婚約者。二人を止めるには打って付けの人物であるため、悠元は急いでその場を後にした。
なお、その人物が来てどうなったのかと言うと、二人は喧嘩両成敗ということで１時間の滝行をする形となったのだった。

◇　◇　◇

この5年で肉体的にはだいぶ強くなったと感じている……〝大分〟という表現で片付けていいのかは疑問を呈する部分もあるが、口に出したら負けのような気がした。

ＣＡＤの設計・開発も父が兵器のブローカーをしているお蔭で製品も手に入りやすく、一気に進んだ。その見返りという形で市販用ＣＡＤの設計図を父経由でＦＬＴ（フォア・リーブス・テクノロジー）社に売った。かなりのまとまった金額になったらしく、父のご機嫌もいいようだ。

矢車家の末っ子である侍郎にも梃入れをすることにした。原作では魔法資質が足りなくて護衛を外されたのなら、足してしまえばいいと。彼の魔法演算領域の一部が移動系らしき魔法に占有されていることは知っていたので、ならば、と彼をとある魔法の実験台に選んだ。

この魔法は5年前にふとした発想で組みあがり、そこから改良を重ねた魔法。その効果は自分で検証して成功しているため問題はクリア済みだ。

――――系統外・精神構造干渉魔法［領域強化（リインフォース）］

この魔法は主に魔法演算領域のオーバーヒートの治療を目的としたものだが、それ以外の用途として無意識領域下における魔法演算領域の圧縮拡張および強度の上昇、肉体のリミッターに相当する部分の修復や肉体強度の修復・強化、想子体と呼ばれる情報体そのものの修復・強化といった総合的な治療の魔法として組み上げた。

これは主に自身の自動自己修復術式を掛ける際に自分がオーバーヒートを避けるためのものでもあったが、先天的に魔法演算領域が魔法によって占有されている魔法師への対処という目的もある。……尤も、自分の場合はどれだけのことをすればオーバーヒートになり得るか検証もできないが。自爆攻撃なんて危険すぎてできないし。

話を戻すが、侍郎の実験は成功。彼が本来持っている魔法を生かしたまま常人以上の魔法演算領域を得ることに成功したのは誰にも言っていない。侍郎が寝ている間に仕込んだので、知る人間は皆無だろう。それ以外にも鍛錬という名の魔法の実験を侍郎に向けて行っ

た。別に彼をいじめるわけではなく、［万華鏡（カレイドスコープ）］の能力の幅を見るためのものだったのは秘密だ。
　無論、こちらが得るばかりでなく侍郎にもプラスとなるような訓練を重ねている。詩奈のこともあってか複雑な表情を向けられるのは相変わらずだが、詩奈は実の妹なので恋愛の対象外だ。それは侍郎自身も理解してくれている筈なのだが、時折睨まれるのは何故だ。
　そんなことを思いながら自室で今製作中の代物を弄っていると、ノックの音がしたので入室を促す。すると、姿を見せたのは長男である元治であった。
　目覚めてから数ヶ月後に今の父から魔法込みで脅され、自分が転生者だと明かした。その上で三矢家の家督と家業は元治に継がせてほしいと頼んだ。いくらチートじみた能力を得たとはいえ、転生して数ヶ月の時点でも実力は未知数としか言いようがなく、正直三矢家の家督とか家業の争いなんて疲れるだけだ、と思っていたからだ。
　その翌日、元治が父から聞いたらしく、自分の部屋に来て事情を聞かれた。流石に転生者のことは父と自分の秘密なので、そこをぼかした上で『自分は三男なので、どの道家を出ることになりますから』ということも含めつつ話した。
　そんな元治は父の仕事である小型兵器ブローカーの手伝いをし始めており、三矢の次期当主としての引継ぎも少しずつ始まっている。そんな彼だからこそ悠元の弄っているものがすぐに理解できた。
「失礼するよ。って、これは長距離用のＣＡＤ、というよりは射程を延ばすためのライフル型ブースターかな？」
「正解です。まあ、個人に最適化したＣＡＤのほうがいいんですけど……って、済みません元治兄さん」
「謝らなくてもいいよ。元々用件があって来たのは自分のほうだから、キリの良いところまで作業しててていいよ」
　元治からそう断りを入れられたので、一息つくところで手を止めてから悠元は元治に向き直った。それを見た上で元治が話し始めた。
「急な話なんだけど、実は父から沖縄に出向くよう言われてしまってね」

「この暑い真夏の時期に沖縄ですか。何でまた？」
「観光ならまだ良かったんだけど……悠元は国防陸軍の真田中尉を知ってるよね？　以前うちにも来たし、悠元にも興味津々だった軍人さんのことは覚えてるかい？」
「ええ。視線が若干怖かったですが」
真田繁留（さなだしげる）中尉。国防陸軍に所属する軍人で、暗号の解読やＣＡＤをはじめとした魔法関連の兵装開発に長けている。三矢家で一度会ったことがあり、その際地下の作業室で組み上げ中だったストレージ換装タイプのデバイスを見て驚愕していた。何でも、同様のものを構想はしていたが、中々実現に至らずに四苦八苦していたところで目を付けられた形だ。
陸軍の技術士官が何故離島の沖縄にいるのか（陸上戦が想定されない訳ではないが、離島においては空挺隊や海兵隊、海軍が主力として動くことが多い）と思ったが、彼の専門分野を考えれば、軍人魔法師が集まりやすい北海道か沖縄になるのは無理もない話だ。
自分の場合は原作を知っているのと父が色んなデバイスを仕入れてくれたので、そこからの合わせ技もある。加えて自分の魔法で三矢家の地下（流石に屋敷の直下は拙かったので、広い庭の真下に来る形で生成）にＣＡＤ製作・調整室、演習場用の空間まで作ったせいで父が泡を吹いて倒れたこともあった。
地下空間自体は外側にこの世界基準で頑丈な囲いを作った上で、その内部にある土を範囲指定して分解魔法で消し去った。その囲いや地下空間の壁や天井、床などの材料は転生特典の一つ――［複製（コピー）］を使用して用意した。
この特典の定義は〝自身の五感のいずれかで認識できる無機物〟なら対象に入るようだ。あれ？　使い方次第ではヤバいぞコレ。現代魔法はおろか『超能力』を超えて〝無から有〟を生み出すようなものだ。今更ながら世界観無視の特典って気づいた自分が情けない……もしもの時に使うぐらいで手を打っておこう。
地下空間が完成した後、母である詩歩から「せめて、相談してからやりなさい」と説教を食らったのは言うまでもない。その時の謝罪は

小学生ながら一番綺麗な土下座だったと思う。

その後、ＣＡＤ調整などの設備を購入してもらうことにした。他の兄弟姉妹も使うことになるので、買って損はないと判断してくれたようだ。購入先はＦＬＴ社……まあ、性能的に信頼できるからいいけど。

これ以降、基本的に自室でやっていたＣＡＤ製作・調整は地下に持ち込み、ハード面の微調整や最終調整は自室でやるというスタンスに変わった。全部地下でやればいいとは思うだろうが、ここら辺は妹への配慮もあったりする。

体（てい）の良い生贄とは（※）

というか、今更思い出したことがある。西暦２０９２年８月――つまり追憶編だ。原作通りに進めてもいいとは思うが、祖父である剛三も元造の子である深夜と真夜を可愛がっていたと聞き及んでいる。この世界における修正力は不明だが、三矢家がここまでなっている時点で原作ブレイクを考慮するとか今更だろう。

ただ、自分はあくまでも三矢家の人間であり、原作主人公たちはあの四葉家の人間。いくら同じ十師族といえど、そこの線引きはきちんとすべきなのは間違いない。正直、どれぐらいのイベントに関わるかなんて分かったものではないからだ。

せめてもの救いはと言えば、自分自身が国防軍に関与しているということだが……この辺については、機会があれば述べることとする。

父が仕事の関係で国防軍というか十山家を嫌っていることは知っている。自分も実際に十山家の人と面会している。原作を見ているから知っているが、欲を出して捕まえようとか不届きなことを考えないでほしい。

真面目な話、自分たちがまともだという前提で〝試し〟とか〝再教育〟などと宣っていることが魔法師に対する嫌悪を助長させかねない、と理解してほしいものだ。言って解るなら誰も苦労なんてしないけれど。

「その真田中尉から悠元も連れてきてほしいと言われたんだ。君の技量なら軍で開発を進めている特化型ＣＡＤも形になるだろう、ってね。まあ、これは理由の半分かな」

「半分？」

「残り半分は黒羽貢（くろばみつぐ）さんからパーティーの誘いがあってね。その人は剛三さんの知り合いだそうで、個人的なパーティーだからということで父も断り切れなかったみたいだ」

その人物の名に聞き覚えがある。四葉家の分家の一つである黒羽家当主だ。祖父である剛三の縁から招待されたのだと元治は説明したが、まさかこんなに早い段階で彼らと接触することになるとは思い

もしなかった。そんなことを考えていると、元治はこう述べた。
「それで、悠元は『今使っている名』を名乗ることになる。僕もビジネスネームで同行することになるね」
「でも、自分はともかく兄さんは飛行機に乗った時点でばれますよ？
本人の名前が必要ですし」
未だに三矢の姓を表立って名乗っていない悠元はまだしも、次期当主である元治は既に三矢を名乗っている立場。その二人が揃って搭乗したとなれば、悠元が三矢の人間ではないかとバレる危険性がある。その部分については『問題ない』と言わんばかりに元治が断言した。
「そこは剛三さんが手配してくれることになった。パーティーに出る服装も準備してくれるそうだ」
「そうですか……でも、詩鶴姉さんだけじゃなく、佳奈姉さんと美嘉姉さんが落ち込むよなあ」
「そうだね。父もそこは相当悩んだと思うけれど」
そう、今年も九校戦の応援に行く予定だった（その際も三矢の名前を出さないように違う名前を使っている）。とはいえ、ここから本来の原作に介入して流れを変えるのだ。そのための準備はこの５年で考えうる限りの対策は施した。修正力による敵性勢力の増加は否めないが、最悪どうにかする方法はある。
残る問題は、身内が出場する九校戦の応援に行けないことによる対処だが、これについては二者択一である以上どうしようもない。
「今回ばかりは父さんと爺さんの差し金ですから、姉さん達のことは父さんに丸投げしましょう。最悪、爺さんの腰が犠牲になるだけで済みますから」
「悠元って、時々容赦ないことを平気でやるよね」
悠元の容赦ない言動を聞いて放たれた元治の言葉に、二人揃って笑ってしまったのだった。尚、本当に剛三の腰が犠牲になるとは、元治はおろか悠元ですら予測しなかったのであった。
◇　◇　◇
武術の関連で上泉家を訪れるようになってからというものの、上泉

家と三矢家を行き来する生活というよりは、上泉家に住み込みで剛三からの教えを乞う形となっていた。
いや、あれは教えというよりも無理難題を押し付ける様な鍛錬だっただろう。だが、強くなるためなら前世の平和ボケを払拭するぐらいやらないとダメと腹を括っていたし、あの『お兄様』だって経緯こそ違えど幼少期から鍛え上げられていたのだ。
尤も、こんなことを幼少期から考える時点で子供らしからぬ性分だと理解はしている。
『ほう……試しとはいえ中々やるではないか。遅めとはいえ、木刀を白羽取りするとは気に入ったぞ』
『それはどうも……（我慢だ、我慢。折角武術を教わるのだから、ここで文句を言っちゃだめだ）』
来訪した時に剛三から試しと言われていきなり木刀を投げつけられて、危うく死ぬかと思ったのは……今後もいい思い出にしたくないことの一つだ。
その後の修行も所謂〝人間卒業（げんかいとっぱ）〟というか仙人に至る為のものでもやっているかのような気がした。強さを得るために妥協はしないという自分の決意によって拍車が掛かり、つい先日新陰流剣武術の印可の目録を渡されることになった。
尚、上段者である門下生の先輩からは肩に手を置かれて同情されてしまった。解せぬ。
沖縄への出発前日。荷造りの準備のために上泉家の本屋敷を訪れていた悠元は、広間で一人座禅を組んで意識を整えていた。
何も事情を知らぬ人が見れば、精神統一の修行と見られるかもしれない。その部分は間違っていないが、悠元が今行っているのは自身の力の一つである［眼］の制御訓練。
今、悠元の脳裏には色彩が排除された情報体次元（イデア）――世界そのものの情報体であり、全ての個別情報体（エイドス）が内包されたプラットホームを、古代ギリシャ哲学の用語を流用してそう呼ぶ――が映し出されている。
現代魔法は、事象の付随情報にして。存在と表裏一体のエイドスに

干渉する技術。それを使うものはイデアの中にある個々のエイドスを認識している。
だが、それを意識して見分けることのできる者は、少ない。
自身の［眼］の訓練とはいえ、悠元は別に上泉家の秘密を探りたくてやってるわけではなかった。この力のことは剛三も気付いていたが、『屋敷の中では使うな』とかなり念を押されていた。似たような力を持つ佳奈にもかなり念を押していた。その理由は『詳しく話せぬが、この家はそういう家だからの』という文言で精霊魔法も絡んでいると予想した。
結果として、奥伝になってから入ることを許された上泉家の魔法関連の書庫に精霊魔法は存在したわけだが、屋敷内に張られた結界術式とおぼしきもの以外に精霊や霊子（プシオン）を活性化させるようなものは見受けられなかった。
（……ん？　何だ、これは……）
すると、悠元から見て上斜め前方にある額縁に何かが入っているのが視えた。それは、若かりし頃の剛三が友人や幼い娘と五人で映っている写真なのだが……剛三に聞いてもその詳細を教えてくれなかった。よく見ると、額縁が僅かに傾いており、最近動かしたような形跡が見られた。
この広間を訪れることのできる人間は限られている。剛三に彼の家族、元継に詩鶴、そして自分。だが、三矢家の人間がこれを動かす理由などない筈だ。
何はともあれ、気付いた以上は見過ごすこともできるが……自分の中の直感が、それではダメだと囁いていた。最悪剛三から叱られることも覚悟の上で、大気操作の魔法で自身を浮き上がらせ、額縁の裏蓋を外して目的の物を素早く取り出すと、額縁を戻してゆっくりと着地した。
悠元が手にしたものは色褪せた二通の手紙。そして、そこに書かれた差出人と渡す相手の名に驚愕することとなった。
「真夜（まや）に、こっちは深夜（みや）……二通とも差出人は元造（げんぞう）。爺さん、アンタって人は……」

どう考えても四葉家の先々代当主、現当主とその双子の姉の名。該当する人物の原作知識から察するに、元造が死ぬ直前に娘たちへの手紙を剛三に託した、ということなのだろう。額縁に映っている五人の内、一人は剛三でもう一人が九島烈（くどうれつ）の若い頃なのは間違いなかった。となれば、残る三人が手紙に書かれていた人物たちで間違いないだろう。

（最近動かした形跡があるとすれば、時折額縁の外に出しているのだろうな……武術に関して即決即断の爺さんにしては、優柔不断にも程があるわ）

常々『生涯現役を貫き通す』と豪語している祖父だが、そんな決意があるのならばこの手紙ぐらいさっさと渡せばいいと思った。だが、剛三もあの四葉の復讐劇に参加していたというのは噂ながら聞いたことがある。額縁に映る剛三の笑顔を見る限り、相当仲が良かったのだろう。

その親友を失って、自分だけがおめおめと生き残ったとするならば……真夜と深夜が剛三を責めるかもしれない。そう思うと、手紙を渡せずにいたのも納得がいく。

「……だが、それは違う」

勝手な憶測かもしれないが、元造は剛三に真夜と深夜の未来を見届けてほしかったのだろう。これはあくまでも〝四葉〟の復讐劇であり、親友とはいえ本来部外者の剛三を巻き込みたくはない。だが、責任感の強い剛三はきっと塞ぎ込んでしまう。せめてもの思いとして、元造は娘への最期の手紙を剛三に託したのかもしれない。

気が付けば、悠元は剛三がいる本道場の扉を力強く開いた。門下生の姿はなく、丁度走り込みや裏山の鍛錬で出払っていた。剛三も悠元の姿に驚くが、彼が持っているものに気付いて滅多に発することのない怒りを露わにした。

「悠元……お主、禁を破ったな！」

剛三は目にも止まらぬ速さで木刀を掴み、悠元に振り下ろした。まるで触れられたくないものと言わんばかりに。だが、怒りのせいで鍛錬の時よりも遥かに精彩を欠いた木刀の速度は、悠元が見た中で一番

遅かった。
　その木刀を二本の指で挟みこんで左足で打ち払い、その足を勢いよく床に叩きつけた上で剛三の裾を掴み、強引に右腕だけで投げ飛ばした。床に叩きつけられる音と木刀が床に落ちて転がる音が続けて響き渡り、剛三は呆然としていた。
「爺さん。人に散々約束を守れとか言っておいて、自分のことは棚上げですか？　この手紙は託されたんでしょう？　……他でもない四葉家の先々代当主、四葉元造（よつばげんぞう）殿に」
「……それは」
「なら、渡す相手が生きているうちに届けてください。部外者の俺に言えるのはそれだけです。もし届けなかったら……俺は爺さんを一生軽蔑します」
　ともあれ、約束を破ったのは事実であるため、悠元は手を翳して［領域強化（リインフォース）］を発動させた。剛三は悠元の魔法を自身の直感で察し、その魔法によって自身の古傷が癒えていくのを感じ取っていた。光が収まると、剛三は悠元から手紙を受け取りつつ立ち上がった。
「……悠元。先程の魔法は魔法演算領域を修復する魔法か？」
「まあ、そんなものです。有機物干渉なのでおいそれとは使えませんが……理解したのですか？」
「わしを誰だと思うておる。よーし、これで元継と最低でも半日は戦えるぞ……おっと、忘れていたな」
　剛三はそう言うと、悠元の頭に手を置いた。いつになく優しい笑顔を向けつつ、悠元へ大事なことを述べた。
「ありがとう悠元、いい喝を入れてくれた。凡そ３０年は些か寝坊しすぎじゃがな」
「いえ、爺さんがそう決意したのはいいのですが……寝坊による説教コースは確定のようです」
「それはどういう……ハッ!?」
　そう、悠元は気付いていた。確かに門下生の姿はなかったが、剛三の補佐として詩鶴の姿があった。その彼女はと言うと、先程剛三が持っていた木刀を握りしめていた。それこそ、柄の部分がひび割れそ

うなぐらい軋みの音が聞こえるほどに。
剛三は悠元の言葉に訝しむが、その言葉の真意に気付いたときには……既に『後の祭り』であった。
「チェストォッ!!」
「うぼあっ!?」
まるで日頃の恨みと言わんばかりの超音速を想起でもさせるかのような太刀筋に、剛三は床に突っ伏して脇腹と腰を押さえて蹲っていた。自分は倒れるのを抑えようかと思ったが、詩鶴から『逃げなさい』と言わんばかりの眼力を感じたため、後ろに飛び退いて躱す格好となった。
「……詩鶴姉さん。いくら何でもやり過ぎなんじゃ」
「いいえ、これぐらいで十分です。いくらお祖父様でも武術の鍛錬以外で身内に殺す気で木刀を振るうのは常軌を逸しています。その罰として暫く反省してください」
「し、詩鶴よ……腕を上げたのう……」
色々ツッコミどころしかなかったため、悠元はこれ以上何も言えなかった。
結局、手紙については剛三が渡すと約束してくれたが、その際に深夜宛の手紙を託されたのだ。この先の展開を読んでいたとは思えないが、流石に他家の人間とそう簡単に接点など持てないであろう……この時の自分はそう思っていた。

◇　◇　◇

経緯はどうあれ、元治と悠元は三矢家を離れて飛行機で沖縄入りすることとなった。悠元は「長野佑都（ながのゆうと）」という名（三矢家の仕来りで、高校入学まではこの名を名乗る）で「長野基晴（もとはる）」という偽名を名乗った元治とエグゼクティブクラスに搭乗する。
別にノーマルクラスでも問題ないと思ったが、ここら辺は剛三の孫に対する可愛がりの結果だろう。仮にノーマルクラスで騒ぎが起きても魔法を使わずに鎮圧することは一応可能だが、元治のことを考えれば妥当だろう。
そこまでは悠元も許容範囲内だった。元治も同意見だったのは言

うまでもない。問題は……同じ便に搭乗することとなった人物たちであった。何が問題なのかと言うと、空港のラウンジで搭乗案内を待ちながら情報端末を眺めていると、一人の女性に声を掛けられた。
明らかにこちらを知っている素振りを見せているとなると、親か祖父の繋がりだろうと思ったわけだが……その女性を見た瞬間に内心で驚いてしまった。
「ひょっとして、貴方達が剛三さんの言っていた二人かしら？　はじめまして、司波深夜といいます」
その女性の名は司波深夜（しばみや）、旧姓はあの四葉。現当主四葉真夜（よつばまや）の双子の姉……爺さん、今初めて俺はあんたを恨みそうになったよ。俺らに生贄（スケープゴート）になれと？　現に元治兄さんなんて深夜さんの雰囲気を敏感に感じ取ってるせいか、ガチガチで緊張しちゃってるじゃねえか。
深夜は魔法の影響で体が弱いといえ、無意識下で放たれるオーラが半端じゃない。『忘却の川（レテ・ミストレス）の支配者』と言われるのは伊達じゃないと感じる。「自分は平気なのか」という質問が飛んできそうだが、武術の訓練で散々剛三の殺気を浴びせられたせいなのか、この程度なら問題ない。
大体、相手は割と親しげに話しかけてきている以上、こちらが下手に警戒する理由はないに等しい。別にこれから戦うというわけでもないのだから。寧ろ達也まで出張ってくる事態になったら逃げるか土下座も辞さない。
「はい、長野佑都と申します。こちらは兄の基晴です。よろしくお願いします、深夜さん」
「な、長野基晴といいます。よ、よろしくお願いします」
傍から見れば、１２歳の少年に支えられる２２歳の青年の姿というのは不可思議に見えてしまうだろう……そんな様子を見て、深夜は笑みを零した。
「近くに同行者はいないようですが、お一人で旅行ですか？」
「いえ、今回は家族での旅行です。娘は息子に守らせていますから。機会があれば紹介しますので」
「機会があれば是非。こちらとしても、願ってやみません」

そう言って深夜が離れていくのを確認すると、元治はようやく緊張から解放されたように荒く呼吸する。
「す、凄かった。悠元はよく平気だったな？」
「道場で爺さんの殺気を何度も浴びてたせいかな。別にこれから戦うというわけじゃないし、安心していいと思う」
「そ、そうだな……」
そこで話が終わればまだよかったと思う。
何が起きたのかと言うと、深夜の紹介で彼女の子である達也（たつや）と深雪（みゆき）を紹介された。いくら何でも原作主人公とその妹との邂逅は早すぎんだろ……と心の中で呟いたのは、ここだけの話だ。
普通ならば深雪だけ紹介すると思ったのだが、ボディーガードみたいな立ち位置にいる達也も深夜は紹介した。どちらにせよ兄妹としての振る舞いをする以上はその練習という風にも見られる。
まあ、いくら剛三の知り合いとはいえ〝四葉〟と名乗るのは憚られる事情も理解できなくはない。彼らからすれば、こちらが（正確には自分だけが）司波家の実情を知っているという解釈など出来ないのだから。
「司波深雪といいます。よろしくお願いします」
「……司波達也です」
達也は深雪のガーディアンということで兄妹なのに妙な上下関係ができていたが、こちらとしては達也と仲良くして問題はない。というか、仲良くしておかないと命が危ない。マジな話で。
俺のそんな思惑を読み取ったのかは知らないが、深夜は悠元に向けて笑みを零していた。曰く『敵対しない限り、誰でも仲良くしようとするのは剛三さんそっくりね』とのこと。武術のことを抜きにすれば、確かに祖父は甘い。でも、なればこそ武術に関しては手を抜くことなく厳しく当たれる。言うなれば飴と鞭のようなものだ。
別に挨拶ぐらいだけならば苦労の内にも入らないだろう、と楽観視していたこの時の自分を後で本気で殴りたくなった。原作の追憶編が近く、しかもこの時期に飛行機へ乗るということは……同じ便に乗る確率が高い、ということを失念していた。

（何でこうなるんですかねえ……）

沖縄行きの飛行機の座席……二人が覆えるカプセルシートで悠元は何故か深雪の隣に座っていた。本来悠元が座る席は交換され、深夜の隣に座る元治が大変な目に遭っている。

隣に座る深雪もそうだが、どうやって乗務員を納得させたのかは聞かなかった。触らぬ神に祟りなし、とも言うが。

それを後目に深雪のほうを向くと、どうやら端末で現代史の勉強をしている。その邪魔をして機嫌を損ねたくないので、機内に持ち込んだ自作の折りたたみ型端末を引っ張り出し、キーボードを叩きはじめたのだった。

『四葉』の関わり（※）

私の名は司波深雪。私には両親と兄がいるが、父とお母様はそこまで仲良くはないし、兄に関してはお母様から「兄ではなくボディーガードと思いなさい」と言い付けられている。とはいえ、学校では表立ってそのように言う訳にもいかない為、あくまでも普通の兄妹を演じている。

普通の家族とは思えない振舞いだが、私はその理由を良く知っている。名字こそ違うが、お母様の妹――――叔母様の名は四葉真夜。この国だけでなく魔法に関わる者なら一度は耳にする〝四葉〟の名を持つ一族。そして、私はその一族の後継者として相応しい振舞いを心掛ける様、お母様に厳しく言いつけられていた。

魔法的な力が強いが故に体調を崩しがちなお母様。だからこそ、滅多にないお母様との楽しい旅行なのに、そこに兄がいるのは釈然としなかった。いくらボディーガード兼荷物持ちとはいえども。

ほとんど表情を変えることのない兄。いつもどこか一線を引こうとする兄。お母様も兄ではなくボディガードとして見ている……それが家族として歪なことだと私には理解できなかった。

そんなことを思っていると、お母様は何かを見つけたように『少し席を外すから、その場に居なさい』と言って、その場を離れた。私の視界に入らないよう兄は佇んでいる。それが正しいのかは私にも解らない。少しして戻ってきたお母様は「知り合いがいたから、貴女も挨拶しに行きましょう」と言った。

私だけかと思えば、お母様は兄も同行するようにと言い含めた。『深雪と達也の関係性を疑われない為にも、兄妹としての振る舞いを練習しておきなさい』というお母様の言い付けに、私はただ頷くことしかできなかった。

その知り合いはお母様からすれば年下の二人組だった。実年齢こそ分からないが、その内の一人は見るからに私や兄と変わらないぐらいの年齢だ。実年齢よりも若く見られるお母様とどういう関係なのかは気になったが、言われるがままに自己紹介した。

『――――長野佑都といいます。よろしく、司波さん』
その彼は兄に対しても丁寧に挨拶した。普通ならお母様はそれを良しとしないのに、この時ばかりは笑みを浮かべていた。『本当に剛三さんそっくりね』と述べたことに、私は疑問を持った。
彼を含めた二人は私達と同じ便だった。それを聞いたお母様は座席を交換して、私の隣の席は長野佑都と名乗った少年が座った。受け答えをするのには慣れているが、自分から聞き出そうという気持ちになれず、気を紛らわす様に端末を開いて勉強をしていた。
「……」
だが、やっぱりどうしても気になり、私は端末を閉じて隣の席に座る彼に接触を試みることにしようと目線を向けた。すると、彼もちょうど席を立とうとしていたところで、目が合った。
「ん？　何か聞きたいことでもあった？　それならトイレの後にしてくれると助かるけど、それでいいかな？」
「あ、えっと……はい」
大したことを聞こうと思ったわけではない。でも、優しく言いくるめられるとは思わず、私はそれに頷くことしかできなかった。
あまり他人に関わらない様にしてきた自分らしからぬだろうが、この気持ちは何なのだろう……勉学を重ねてきた私でも、彼に対する興味の根底にある感情は読み取れなかったのだった。
◇　◇　◇
「……はぁ～。実際こういう心境を抱く側になって初めて解るわ」
深雪の風貌は世界を魅了する、なんて表現が誇張でないと思う。幾らなんでもオーバーな……というのは実際に体感してみて解る。まさに「百聞は一見に如かず」だ。流石に思春期に入りたての状況だとそこまでは無いだろうと思っていたわけだが、その予想すらも覆された形だ。
あんまりトイレに引きこもっていたら不審がられるので、手早く用を足して身だしなみを整えてからシートに戻ると、自身の席でそわそわしている深雪の姿があった。傍から見れば『なにこの可愛い生き物』という評価を貰えるだろう。座席に座りつつ、深雪に話しかけた。

「司波さん、それで聞きたいことって？」
「へ、あ、はい。その、長野さんはお母様とどういったお知り合いなのですか？」
「佑都でいいよ。君のお母さんである深夜さんとは初対面だけど、僕の知り合いのお爺さん――――剛三さんって言うんだけど、その人が深夜さんとそのご両親をよく知っていてね。その縁で僕と兄さんを知っていたって形かな」
あの額縁の写真について聞いたところ、こちらの予測はほぼ当たっていた。そのついでではあるが、四葉家先々代当主との繋がりに加えて四葉の復讐劇についての詳細を聞かされる羽目となった。
大漢（ダーハン）を四葉一族と爺さんの３１人で攻め入って、死者が５０００人。そのうち爺さん一人で１０００人（数えられる死体だけで計算して）は葬ったらしい。その話を直接聞いたときはどこぞの一騎当千ゲームじゃねえんだからよ、とか言いたかった。現代に呂布奉先（りょふほうせん）が転生しました、と言っても通じてしまいそうだから困る。敵からしたら〝悪夢〟としか言いようがないだろう。
ただ、その時の後遺症で魔法を満足に使えなくなったと話していたので、試しに［領域強化（リインフォース）］を使ったところ、再び魔法が使えるようになったとはしゃいで、お仕置きで腰を痛めるというオチがついた。腰を痛めた原因は自分にもあるが、爺さんにもある……ある意味痛み分けという形に収まったのだった。
剛三は『お主が早く生まれておれば……いや、詮なきことを言ったな』と寂しそうに呟いていたのが印象に残っている。それだけ元造と剛三の間には他の人には言えない何かがあるのだろう。多分だが、親友関係にあったのかもしれない。
態々手紙を託される辺り、その憶測は間違っていないと思う。
そんな話の前に詩鶴からお仕置きを食らって横になりながら寝ていなければ、まだ美談として締まっていた……というのは言うまでもないが。
「それにしてもごめんね、司波さん。折角水入らずの家族旅行なのに、こっちも断らずに水を差しちゃって。こちらもちゃんと断れば司波

さんに迷惑を掛けなかったし」
「い、いえ！　お母様が私を慮って佑都さんと引き合わせたのでしょうし……佑都さんは、兄が怖くないんですか？」
怖くないのかって？　そりゃあ怖いよ。だってあの『お兄様』だもの。下手に深雪を泣かせたり傷つけるようなことがあったら、次の瞬間に［分解］が飛んで来て消し飛ぶわ。そのための術式も保険で組んでるけど、敵対しないのが一番の利だと思う。そんな内心の葛藤を表に出さないようにしつつ、悠元は述べた。
「寧ろ興味が湧いた、かな」
「え？」
「どういう事情があるのかは知らないけど、妹のボディーガードみたいなことを文句も言わずに実直にこなす……鋼のような心を持ってないと無理な芸当じゃないかな。歳が近い自分でも無理だと思うぐらいだよ」
今の達也がどうしてその役目――――深雪のガーディアンを担っているかは理解している。だからこそ口に出してはいけないことも納得している。そして、今はお互いに別々の目的がある以上、そう答えるのが限界だろうと思った。
「……そんな風に思ったことは、ありませんでした」
「まあ、仕方が無いと思うよ。そこまで親密にならない限り、他人の家族事情に一々口なんて出せる訳が無いからね」
見るからに深雪は驚いていた。気味が悪いとは口に出さないが、何の異論も唱えたりせず、その役目に従っている兄を目の前にいる人間が肯定したことに対してのものだろう。その点については、流石に当人の口から出ない限りは分からぬことであるが。
「そういえば、佑都さんはお兄さんとどのような用件で沖縄に？　観光ですか？」
「観光ならよかったんだけれど、今回は知り合いに会いに行くのが半分、あと個人的にその爺さんの知己がパーティーをやるというから招待されたのが半分かな。沖縄に来て海水浴やマリンスポーツ抜きでの旅行なんて勘弁してほしいし、どうせなら九校戦を見に行きたかっ

たけど」
　身内の九校戦を見に行きたかったという欲と、どうにかして達也とのラインを作っておくという保険の選択。悩んだ結果として悠元は後者を選択した。とはいえ、深雪に対して述べたのも本音ではあった。
　しかも、この先何が起きるのかも知っているというか、情報の段階で濃厚というのが非常に悩ましい限りである。いっそのこと津波で大亜連合側の大陸沿岸の軍港が軒並み使用不能になってくれたら楽だ、と思わなくもない。
「九校戦は私もよく観戦しに行くんです。その、もし良かったら今度一緒に見に行きませんか？」
「（まあ、これぐらいなら怒られないか）良ければぜひ」
　結局、着陸態勢に入るまでの長い時間を深雪と喋って過ごすことになった……あれ？　もしかして、フラグとかって言わないよね？　いや、深雪のブラコンが加速するイベント目白押しなので、流石にそこまでのことにはならないと……信じよう、うん。
　あくまでも今回は達也から殺されない為に上手くコネクションを構築することが主目的であり、深雪と仲良くなるのはその土台作りと割り切っていた。少なくとも、好意以上の目的を以て近付くのは今の時点で危険でしかないし、そんな気など毛頭ない。
　それがあんなことになるだなんて、いくらチートじみた能力を有したとしても予測なんて出来るはずなどなかった。
◇　◇　◇
　彼らと空港で別れた後、悠元と元治は宿泊先のホテルへ向かうために無人タクシーへと乗り込んだ。悠元はチラリと元治の様子を見ると、完全に疲れ切ったプロボクシング選手を彷彿とさせるような様相だった。このまま放置したら灰になりそうな印象を受けた。がんばれ兄さん、まだ（人生を）諦めるには早いぞ！
　そう言えば、祖父から託された手紙を渡しそびれてしまった。まあ、どこかしらで出会ったら渡せばいいし、最悪父親経由で四葉家に渡せればいいと思っている。

「兄さん、そんなに疲れるなんてどうしたの？」
「深夜さんに質問攻めにされた……なんとか三矢の人間であることは伏せられたけど」
「……兄さんは大人しくホテルで休んでていいよ。パーティーには最悪俺一人でも出れるから」
ご愁傷様、という言葉しか出てこなかった。この分では今日の夕方にあるパーティーにも支障を来たすだろう。
なので、大人しく休むように提案すると元治も大人しく受け入れた。下手にボロを出して三矢の人間だと明るみになる方がマズいのも確かであり、元治もその可能性を考慮して受け入れてくれた。
ともあれホテルの部屋で少し休んで昼食の後、通信端末に連絡が入る。受話器から聞こえてきたのは聞き覚えのある男性――――国防陸軍中尉の真田繁留（さなだしげる）の声だった。
『久しぶりだね、悠元君』
「お久しぶりです、真田さん。その様子ですと基地内からですか？」
『ああ。例のブースターとやらは持ってきたのかい？』
「一応ですね。まあ、今回はデモンストレーションも兼ねてますから」
沖縄に来た理由の半分は国防軍基地でのデモンストレーションも兼ねている。真田との関わりからもう一つの肩書も貰っていて、今の自分は三つの肩書を持つ人間ということになる。
「そういえば、先程のメールは〝連中〟がまた暴れたんですか？」
『……そうなるね。しかも、相手は君と同じぐらいの年頃の少年少女で、打ち負かされた相手は少年だったそうだ』
「……その件はちゃんと中尉に報告して叱責してください。自分が関与できる範疇にありませんので。それで、それだけなら態々そんなメールなんて送った上で連絡なんて寄越しませんよね？」
沖縄に到着して少し経った頃に届いた真田からの暗号メール。最初は基地への召喚命令かと思ったが、内容は基地の隊員数人が悠元と同じぐらいの少年少女にちょっかいを掛けて返り討ちにあったらしい。
多分だが、〝あの連中〟を打ち負かせる同年代の人間となると間違

いなく達也しかいない。ともあれ、自分は監督責任など持ち合わせていない特務士官なので、その処理は丸投げした。
悠元の言葉の真意を理解してから、真田が真剣な口調で尋ねる。
『流石に気付くか。国防陸軍兵器開発部の特別技術顧問である上条(かみじょう)達三(たつみ)特尉（本来は未成年が軍事に携わることを法律で禁じているため、暫定的に中尉相当官という形をとっている）、貴官に見解をお尋ねしたい』
「――それは、同僚としてのご質問と受け取ってもよろしいでしょうか？」
『ああ。大尉は最近の周辺海域の動きから侵攻の疑いあり、と睨んでいる。予測の域を出ない以上、貴官の意見を聞きたいと仰っていた』
ＣＡＤ製作における高い技術力から真田が上司である風間に掛け合い、特尉という形で在籍している。表向きは戦力ではなく武装面の技術顧問という形でだ。
この話を聞いたとき最初は断ろうとしたが、国防軍というか遠山（十山）家に対して下手に出ないといけない父のことを考え、三矢家の家業を何らかの形で黙認する代わりにその話を受けた。なお、未成年なので本名も伏せられている。
それだけならばまだしも、実家の情報提供の関係で真田はおろかその上官に相当する人物と誼を持つことになった。国外からの脅威となりうる情報はいち早く手に入れたいという魂胆は理解するが、まだ１２歳の人間に何を期待するというのだろう……と、普通の人間ならばそう考えるはずだ。
だが、以前真田と話している時に沖縄方面をうろつく大亜連合絡みの一件の情報を伝えると、完璧に的中させたことでその二人から情報源として頼りにされることになった。タダ働きはマズいと思ったのか、その対価として〝特尉〟の立場を手にしたのだ。
１２歳にして国防軍の仕事をしているというのは色々法的な問題だけでなく道徳的にも問題ありだが、そこはもう色々と諦めている。
「是か非かでいえば是ですね。ここ最近の潜水艦の動きや軍港周辺の情報からしても……最短でここ数日の内、とみるのが妥当かと」

『そうか。いやはや、君の見識にはいつも助けられてばかりだ。大尉には伝えておこう。基地で会えるのを楽しみにしているよ、悠元君』
「はい、それでは」
先ほどの回線を繋げた時点で情報遮断強化の魔法をかけているため、漏れる可能性はかなり低い。この5年の間に世界のあらゆる技術を吸収し続けてきた。その上で対策は練っている。
その一つが出発直前に完成したライフル型ブースター。コードネームは［サード・アイ・ゼロ］。ケース自体に特殊なセキュリティーを組み込んでおり、盗み出そうとしたら放出系の魔法が強制発動して感電する仕組みだ。
そんな軍関連のお話が済んだところで、悠元は私服から手早くスーツ姿に着替えた。
スーツを着ること自体もう慣れたもので、十師族などのパーティーには一応出席していた。名前を隠すために先ほどの「長野佑都」という名を名乗っていて、武術を習い始めてからは上泉家で暮らしている。ただ、爺さん自身のお節介で全国行脚レベルの魔法師の家訪問をしたり、海外に出て行って騒動に巻き込まれたりした。
最短距離で行くぞ、とか言っておいて富士山をほぼ登山装備なしで山越えするとか常軌を逸しているだろう……それを鍛錬と言うことで納得して成功させてしまった自分が言えた台詞ではないけれど。祖父と関わる事で色んな人物と出会ったが、それは別の機会に語る。

フラグの折り方、知りませんか？（※）

これから黒羽貢（くろばみつぐ）の招待に与ってパーティーに出席する。表向きは『剛三の親族の代理』という形だ。

なお、元治は深夜との会話で完全にダウンしていたため、パーティーには自分一人で向かうことになる。念のために銃形状汎用型ＣＡＤを忍ばせた上で、部屋を出た。

幸か不幸か、そのパーティーが行われるホテルは宿泊先と同じであった。ということは四葉系列のホテルということなのだろう。

そういう事情なら確かに手間はかからないが、そこに割り込める剛三の手際の良さに関心を覚えた。まあ、当の本人は今頃群馬の総本山で腰の痛みと格闘中だろうが。

警備の人に招待状を見せると、案内された先は個人のパーティーにしては大きすぎる会場。悠元を出迎えたのは高価なスーツを身に纏った男性であった。

「はじめまして、長野佑都と申します。此度は上泉剛三殿の代理として参りました」

「話に聞いていたが、とても１２歳とは思えぬ言葉ぶりですね。おっと、自分は黒羽貢と申します。よろしくお願いするよ長野君。ところで、もう一人参加すると聞いていたのだが…」

「兄は飛行機が苦手で疲れ切ってしまったようで。兄からも黒羽様に宜しくと言付かっております」

敵対するわけでもないし、ここは丁重に礼をするのがいいと判断する。とりわけ黒羽は四葉の諜報を担っている以上、下手な動きは死に繋がりかねない。かの［アンタッチャブル］とすら謳われた四葉家と敵対して変なことになるよりはずっといい……それを口に出すことはしないが。

一方、貢は悠元の歳に似つかわしくない挨拶に苦笑を浮かべていた。それは自分でも自覚しているが、ここまでのことになった原因の大半は祖父のせいである。

それに加えて、まるで自分ではない誰かを見ているような気がし

た。いや、俺には分かる。貢が見ているのは、俺を達也と重ねるように見ていることだ。そのことを態々咎める気にもならないし、ましてや今の自分は12歳の少年でしかない。

貢がその事実に自ら気付いて踵を正したので、自分から述べる必要も無くなったが。

「いやはや、その歳でそこまで流暢に喋れるとは。君の親の顔が見てみたいものですな」

「その半分は剛三殿のお蔭と言っておきます」

そうして貢は『ごゆるりと』と言いつつその場を去った。変に騒がなければ飲食をしても咎められるわけでもないので、早速食事にありつくことにした。今回のパーティー自体プライベートの趣が強いため、どうせ三矢家の人間である自分を知る人なんてほぼいないに等しい、と判断して皿に料理を盛り付けて食べ始めていると、二人の男女が近づいてきた。

「すみません」

「ん？　……えと、どちら様でしょうか？」

「ああ、申し遅れました。僕は黒羽文弥（ふみや）といいます。文弥と呼んでください」

「私は黒羽亜夜子（あやこ）と申します。私も亜夜子で構いません。先程父と話されていらっしゃいましたが……」

「長野佑都と申します。僕のことは佑都でいいです。今回は知り合いの代理で出席しただけですよ」

そういえばいたな、と思い返しつつ文弥と亜夜子の二人と会話することになった。二人からしても同年代の子が少ないので折角だから、という貢の計らいでこちらに来たらしい。色々話を聞いていると、二人の母親――黒羽亜弥（くろばあや）が自分の子どもらに近づいてきた。向こうも悠元のことは初対面というのは直ぐに分かったというか、同年代の子が来るというのは思っていなかったようだ。

「黒羽亜弥と申します。まさか、文弥や亜夜子と歳の近い子が来るなんて聞いておりませんでしたので。この機会に二人と仲良くしてくださいね」

「こちらこそ、長野佑都と申します。今日は上泉剛三殿の代理として来たまでのことですから」
流石に剛三という名を聞いて少し驚いたが、二人に何かを耳打ちし、自分に対して会釈してからその場を去った。それに続く形で文弥と亜夜子も頭を下げてから立ち去って行った。
どうやらこのパーティーの主賓が到着して、文弥と亜夜子もその対応に追われる形。四葉の分家である黒羽の二人が動くとなると……その予想通りに透き通るような声が耳に入る。それが深雪の発した声だということはすぐに分かった。
あまりジロジロ見るのも変なので、ここで［万華鏡（カレイドスコープ）］の出番だ。
（便利だねえ……相手に知覚させない魔法というのも。あんまりおいそれと人前で使えないけど）
すると、文弥と亜夜子が達也の姿を見つけて駆け寄っていった。自然と笑みを零す達也にもどかしい思いをする深雪。それをどうにも快く思わない貢と少し悲しげな表情を浮かべる亜弥。
実際の視界に捉えたわけではないが、変に罪悪感を持つのも可笑しな話ではないかと思う。そうさせた当人たちが罪の意識でその対象を縛るのはおかしなことではないか。
そんなの罪の償いではなく、ただ自分たちの罪から逃げたいだけではないのかと。
（自らを優秀だと驕り、あの悲劇を回避するために力を望み、その結果に達也という存在がいる……だからといって達也を孤独にするようなことをしたら、それこそ本末転倒だぞ）
怖いと分かり切っているのなら、対象をどうにかする前に自分たちの考えをどうにかすべきではないだろうか。自分たちの過ちから目を逸らしたいがために、達也の存在を見ようともしていないのではないだろうか……そう考えると自分も人のことは言えないな、と［万華鏡（カレイドスコープ）］を解除した。
（そうだな……達也とは対等でありたいと思う。一人の友人として……まずは、そこからがスタートラインかな）
この世界に転生して明確な目標ができた。これは別に自分が助か

りたいとかそういうものではなく、純粋に彼の力を知っているからこそ、彼の力になってやりたいと思う。なんにせよ、それを見越したようにあの武装も作ってきたのだから。
　そんなことを考えていると、自分に声をかけてくる人がいた。ドレスで着飾ってはいたが、紛れもなく今日の飛行機で同席した少女の姿がそこにいた。
「え……佑都さん？」
「おや……空港以来だね、司波さん」
　彼女の表情は必死に取り繕おうとしつつも、どうしていいか解らないようだった。それを見た悠元は深雪に対して柔らかい笑みを浮かべた。すると、何かを思い出す様に深雪が述べた。
「成程、知り合いのパーティーとはこのことだったんですか」
「僕も詳しいことは何も知らなかったけどね。司波さんも参加するなんて思っても見なかったし……ところで、司波さんは何に悩んでるのかな？　そんな風に見えたけど」
「……」
　四葉とは下手に関わるべきではない――――普通ならそう考えるのだろうし、深雪に対しては適当に話を聞くだけでいいと思うだろう。だが、自分の心はそれを許そうとはしなかったし、先程達也とは友人でありたいという目標が出来たのだ。それを叶える意味でも、彼の妹が困っているのなら見過ごすのは違うだろうという結論を出した。
　深雪は会場の入り口を見つめるような視線をしつつ、呟き始めた。その視線の先にいるのは文弥や亜夜子と話している達也の姿だった。
「兄は、私にはあんな風に笑ってくれなかった。でも、文弥君と亜夜子ちゃんには、笑みを浮かべていた……それが、どうしても」
「理解できなかったし、納得がいかなかった？」
「……はい」
　――――黒羽文弥と黒羽亜夜子。
　――――司波達也と司波深雪。
　前者と後者は魔法力の違いこそあれど、互いに四葉の血を引くもの。

違いがあるとすれば双子の姉弟と兄妹、あとは前者の関係には何のわだかまりもないが、後者の場合は達也が深雪の「ガーディアン」だということ。いくらなんでも四葉の部外者が下手に突いていい内容ではない。だからこそ、言葉を選びつつ悠元は言葉を口にする。

「自分は人より耳が良くて、先ほどの会話はある程度聞こえていた。お兄さんからすれば文弥と亜夜子ちゃんに対して会話する分に何の制約も課されていない。でも、司波さんと接する際は制約がある……そんな風に聞こえた」

「……」

「勿論、空港での自己紹介の会話も含めての推測でしかない。でもね、司波さん。一つだけ覚えておいてほしい」

「それは？」

これは、核心に触れるかもしれない。でも、自分も妹がいるからそう思っているところでもある。その意味も含めて悠元は深雪に伝えた。

――兄という存在はね、妹や弟を守ろうとする気持ちは誰にも負けないと思ってる。言葉には出さないけど、君のお兄さんも同じなんじゃないかな？

前世の時はそこまで人との関わりを重視してはいなかった。

単に人付き合いが面倒だった、というのもあるだろう。その自分が不安に駆られている少女を気遣う。その少女の正体を反則に近いことで知りつつ、表面上は何も知らないように振る舞う……まるで仮面でも身に着けているかのように。

けれども、自分の中にある目標を達するためには彼女の困った気持ちを整理してやるのも一つの方策だろう……打算的な思いが混じっているのは否定できないが。

あの後、達也との会話を終えた文弥や亜夜子も交えて会話を楽しみ、その後で会場の外を見回っていた達也にも軽く頭を下げた。部屋に戻ると、ようやく起き上がった元治に声をかける。

「兄さん、もういいのかい？」

「ああ。パーティーのほうは……いや、悠元なら問題はないか」

「別に十師族の当主たちと顔を合わせるわけじゃなかったから、大丈夫だよ」
元治からの言葉にそう答えつつ、悠元は上着をハンガーに掛けてソファーに座る。
『長野佑都』という仮面を意識がある限りで計算して6年弱という時間を過ごした。三矢家の肩書にすり寄ってくるのを避けるためのビジネスネームでもあり、父の付き添いで財界でのパーティーに出る際は〝元（げん）の親戚の子〟という体を演じてきた。
この名前で小学校も中学校も通っており、名を明かすのは高校入学の段階と父から言われていた。姓はともかく名前の呼び方自体は変わらないのでボロを出すことはなかったが、案外ばれないものだと思った。
三矢家の屋敷に出入りしていることは一部に知られているが、それはあくまでも『本家とは関係ないが、現当主の関係者』としての体である。悠元の振る舞いを見て、元は思わず苦笑を零したことなど結構あると述べるほど様になっていたらしい。
受け入れた側とはいえ、明らかに年齢不相応なのは流石に引っ掛かるようだ。言い訳がましくなるが、転生しても精神年齢自体は大学生相当のため、その状態で年相応の行動を取るよりもマシと考えた結果の行動である。
父のように思う人はいるだろうが、無理をしてボロを出すよりも礼儀正しく対応した方が相手の印象もいい方向にもっていきやすいことに変わりない、と割り切った。
「それで、明日は？」
「知り合いがクルーザーをいくつか所持していてね。それの手伝いをすることになりそうだ」
元治は船舶免許を取得している。魔法の面で力を伸ばす弟や妹達に負けたくない一心で猛勉強して取得したそうだ。三矢家は土地柄海にも近く、東アジア地域の情報収集を担っている。その意味で海のことを知るのは悪くないと元も取得を許可した。
週末になると東京湾や相模湾を三矢家所有のクルーザーで遊びに

行くこともある。この前の休みに相模湾へ出た際、家族で釣りをして悠元が大物を釣ったときは周囲が苦笑していた。

俺は悪くねえ！　と某親善大使のような言葉を叫んだのは記憶に新しい。そして、その大物を見て目をキラキラさせていた詩奈（いもうと）がいたのは言うまでもない。

◇　◇　◇

――西暦２０９２年８月５日。

早朝、悠元は紫外線を考慮して長袖のジャージに着替え、軽く流す程度に走る。真夏の沖縄なので早朝でも気温と湿度は高いが、この辺は魔法を使って、自分の周囲だけ上泉家でのランニングと同じ空気環境になるよう調節している。

昨日のパーティーというか、出発から精神を擦り減らすなどとは考えもしなかっただろう。母方の祖父が四葉家と親交を持っていたことは無論知っていたが、いきなり原作主人公とヒロインに遭遇するとか誰が予想できるか、という話だ。

しかも、ヒロインである深雪に割と興味を持たれた形となった。昨日のパーティーでは自分なりの考えで彼女に諭したが、それを以てどうなるかは二人次第であろう。

一応言っておくが、達也や深雪とは友人としての友好的な関係を求めているのであって、それ以上の関係は求めていない。彼らが孤立しない様にせめてもの逃げ道ぐらいは作れるようになりたい……と思っている。

元治はホテルで休んだおかげか、精神的に大分持ち直したようだった。

本人としてはあまり思い出したくもないだろうが、相手は四葉家現当主の姉なので無理もない。寧ろ、あの四葉の関係者相手に三矢の人間だと明かさずに乗り切ったのは、正直褒めてもいいだろう。似たような意味で、深雪の魅力の片鱗に耐えきった自分が言うのもおかしな話だが。

ホテルに戻ると、元治に引率される形で知り合いの業者を訪れることとなった。彼の名は渡久地（とぐち）といい、息子は現役の軍人をしている。

昔は防衛海軍の軍人として名を馳せていたらしい（ガタイが良くてサングラスを掛けており、いかにも海の男というか〝海坊主〟という綽名が似合いそうである）が、退役後は海を感じたいという理由で家族や団体向けのクルージングを営んでいるそうだ。

自分は剛三を介する形で知り合っており、見るからに厳つい出で立ち（ヤクザが見たら逆に泣いて逃げ出しそうな風貌）だが、話してみると結構気さくな印象を受けた。

最初にクルーザーの動かし方や魚群探知機などの計器類のレクチャーを受けた後、渡久地の監督を受ける形で団体のクルージングを受け持つこととなった。風貌で目立ってしまう渡久地のお陰で事なきを得た形だが、一度戻ってきたところで渡久地から16時のセーリングヨットでのクルージングを受け持ってほしいと頼まれた。

何にせよ、沖縄に来てクルーザーも悪くない……この時は自分もそう思っていた。その時に原作のことを少しだけでも思い出していれば違ったのかもしれない。

後悔は先に立たず、とは非常によくできた言葉だと思う。

「あら、基晴さんに佑都さん。あなた達がクルーザーを？」

「は、はい。よろしくお願いします」

「（どうしてこうなった……いや、マジで）今日は副長として兄さんの補助を担当します。よろしくお願いいたします」

完全に失念していた。原作のことはある程度記憶の中に入っているが、追憶編は後半が自分にとって衝撃的過ぎて、それ以前の構成が思い出せていなかった。

そんなことを心の中で思いつつ、悠元は深夜達に軽く頭を下げた。すると、元治がお付きである桜井穂波（さくらいほなみ）に見とれていたので容赦なく肘鉄を入れる。今はそんなことをしている余裕もないのだと。

「ほら、兄さん。色ボケしてないで出港準備をするよ」

「あ、ああ……そうだな」

その光景に深夜は面白そうに微笑み、穂波は首を傾げ、深雪はキョトンとし、達也は…相変わらずのポーカーフェイスである。今の達也にそこまでの反応を求めるつもりはないが。

クルーザーを動かすのはある意味力仕事でもある。とはいえ、武術を嗜んでいたおかげでそこまで重労働というわけでもない。爺さんの本気の拳に比べたら赤子の手を捻る程度のレベル。そんな自分もだいぶ毒されているな、と思う。毒されたというよりは染まってしまったというのが妥当な表現だろうとは思うが。

今日は西風がでているので、北北西の方向――伊江島へと進路を向けている。平然を装いつつも穂波のことが気になる元治の手綱を握っている悠元に深雪が話しかけてきた。

「佑都さん、夏の沖縄は南東の風のはずですよね？」

「東の海上に低気圧があるんですよ。まあ、台風になるほどの勢力ではないですし、大丈夫だと思います」

難なく受け答えをすると、深雪は離れていった。達也の視線が深雪に向いていることも気づいているが、気が付かない振りをしつつ計測器に目を向ける。

ソナーに表示されている魚群の群れらしきものを見て、スキューバダイビングとかしたら楽しそうなんだろうなと思っていると……明らかに魚群ではない大型の物体がソナーに表示された。

「兄さん、これ」

「これは……船の残骸、とは思えない。悠元、無線で呼び掛けられるか？」

「やってみる」

呼びかけるといっても……言語って何語になるんだ？　原作だと相手が解っているし中国語でもいいのだが、後で何か言われそうなので英語にすることにした。

すると、転生特典の一つが機能した。それは［言語理解］――相手が何語であろうが理解し、自分の思ったことを相手の言語で伝えられる。翻訳や通訳泣かせの定番チート技能である。

「海中に停泊中の潜水艦に告げる。ただちに所属を明らかにし、その場に浮上せよ――繰り返す、海中に停泊中の潜水艦に告げる。ただちに所属を明らかにし、その場に浮上せよ」

警告はした。全周波数にセットして呼びかけたので、問題はない。

最悪国防軍に連絡をつないで対処してもらう。
だが、相手から見ればたかがクルーザーだと思っているのだろう。案の定通信妨害を掛けてきたようだ。この時点で敵対する気満々だろうと内心ため息をつきつつ、操縦を元治に任せて悠元は四人に近づく。
クルーザーが突如速度を上げたことで四人も驚いているため、悠元が事情を説明した。
「お騒がせしてしまい申し訳ありません。どうやらこの近隣に潜水艦が潜んでいるようです。呼びかけに応じなかったことからして、国防軍の可能性は低いかと思われます――どうやら、警告もなしですか」
武術のおかげで気配や存在の探知能力も上がっている。クルーザーが速度を上げたのを見て、潜水艦も見つかることなど考えずに追跡している。二発の魚雷に気付いて四人は構えるが、それよりも早く悠元は懐から銃形状のＣＡＤを取り出し、海面に向けて魔法を放つ。更に海面に見える大きな影――潜水艦に対してもう一発魔法を放つ。
呆然としている深夜達に気を向けるわけでもなく、悠元は自身の異能で潜水艦の〝消滅〟を確認。悠元は元治に探知機で潜水艦の反応が消えたことを伝えると速度を落とした。そして、海面に浮き上がってきた魚雷にゆっくり近づくと、信管部分を〝凍結〟させて元治と小声で確認する。
「これって……あれかな？」
「そうだね。このタイプとなると……後で〝知り合い〟に確認してみるしかないね」
父親の職業絡みでそれが大亜連合で使われている代物だということはすぐに解ったが、あくまでも今の自分たちは『三矢』の人間ではなく、一介の民間人。それを今の時点で『四葉』の人間に明かすつもりなどない。
とはいえ、魔法を使った段階で悠元が魔法師だということを認識したのだろう。それに動揺する素振りを見せることなく、悠元は深夜達

に視線を向けた。彼女らの手にはＣＡＤを持っていたので、魔法師という単語を出しても問題ないと判断した。
「そうなるか……すみません、見たところ魔法師の方もいらっしゃるようですが、自分の魔法ではこの魚雷をただ海底に沈めるぐらいしかできません。ご足労をお掛けすることになりますが、ご協力をお願いできないでしょうか？　無論、使った魔法については知らぬ存ぜぬと致しますので」
「え、ええ……達也」
「分かりました、奥様」
悠元の魔法で魚雷を海に沈めた。それを確認してから達也はＣＡＤなしで手をかざし、放たれた魔法は魚雷を［分解］せしめた。お互いの魔法について必要以上にとやかく言うことはなく、元治がクルーザーを操作して港に引き返すこととなった。
その後、国防軍の沿岸警備隊に事情を聞かれることとなったが、こちらとしても突然のことで動揺が収まらないため、事情が聞きたいのであれば直接訪ねるように取り計らった。その方向で深夜らの了解も取れたため、この部分の対応についても問題は出なかった。

そんなルート、私は知らない（※）

その夜、元治と悠元が宿泊するホテルに来客があった。国防軍の事情聴取として来た軍人は風間玄信（かざまはるのぶ）大尉――元治と悠元からすれば知己でもある。当然会話を外部に漏らさないよう対傍聴用の結界魔法を張った上での対談となった。

「こんな夜遅くにすまないな、元治君に悠元。というか、災難だったな」

「とんだとばっちりだったのは否定しません。それで、司波家の方々には？」

「無論、自分が出向いて聴取を行った。特に得られるような情報はなかったが……主に対処をしたのは君だと言っていたからな。それで、こちらに出向いたというわけだ。早速だが、細かな事情を聞かせてもらえるか？」

潜水艦から発射されたのが発泡魚雷だということに触れなかったのは、気付いていたであろう達也が喋らなかったのか別の理由なのか……そこに触れることなく、風間は二人に問いかけた。

最初はソナーで異常な大きさの物体を発見。無線で呼び掛けたが、すぐに通信妨害が来たこと。こちらが逃げたのに合わせて潜水艦が追跡し、加えて発泡魚雷を発射されたこと……潜水艦の消滅については秘匿した。

一隻だけなら偵察か挑発的行為だけだろうという楽観視をした考え方を持ってしまうからであり、軍港からの情報でそんな考え方をされる方が困ると結論付けていた。

「すると悠元。それは大亜連合の潜水艦、ということか？」

「可能性としては。あの発泡魚雷は大亜連合で使用されているタイプのものだと直ぐに分かりました。魚雷の確認は元治兄さんとしていますので、まず間違いないかと。それを態々他の国が使用するにも効率が悪すぎます」

大亜連合軍の潜水艦を態々他国が使用するにも限度というものがある。使い捨てにして挑発するという可能性もあるだろうが、そうい

うことをして得をするのは専ら新ソ連ということになるだろう。
なお、新ソ連による佐渡侵攻の兆候が沖縄出発前に集めた情報で確認できたため、元に必要な情報全てを託した。元もデータ通信では危険だと判断したのか、上泉家に持ち込むと言っていた。剛三ならば北陸地方を監視・守護する一条家に情報提供をしやすいだろう。何せ、一条家当主の一条剛毅は剛三の名前の一字を貰って名付けられたからだ。
「ふむ……単に挑発だけで済む、とは思っていないようだな？」
「それだったら、ご丁寧に通信妨害までして発泡魚雷を使う理由にはなりません。自分たちの誘拐を目論んでいたのかと思われます……『一介の魔法師の方々』にこちらの身元を明かさずに済んで、正直ホッとしていますよ」
悠元の言葉に元治と風間は揃って苦笑した。
身元を隠していたとはいえ、この一件で三矢家が大亜連合を非難する大義名分ができた。だが、そのことを公表すれば元治だけでなく悠元の素性も明るみになる可能性がある。なので、三矢家としては動けないだろう。『四葉家』も同様の理由で動けないのは明白。
「そう言うということは、悠元は彼らの身元に心当たりがあるというのだな？」
「無論ありますが……深淵に首を突っ込んで命を落とす心意気があるのならば止めはしません」
「そうか……私も正直自分の命は惜しいから、今の質問は聞かなかったことにしてくれ」
「ええ、そうさせていただきます」
今の問答で風間は悠元が彼らの身元を把握していることにも気付いた。十師族直系の彼ですら下手に明かせないとなれば、凡その見当は付く。だが、風間の身にも危険を及ぼすとなれば悠元の警告は妥当だと判断し、風間はその質問を撤回した。
「それにしても、風間大尉は陸軍所属のはずですよね。離島の多い沖縄だと、専ら海兵隊――海軍と空軍の縄張りかと思うのですが」
「その認識は間違っていないが、この一帯は大亜連合に近いことも

あって配備されている魔法師が多い。自分は実戦経験を買われて恩納空軍基地で空挺魔法師部隊の教官も兼任しているのでな。部隊の連中は君にコテンパンにされたことで奮起しているようだ」

昨年、剛三の付き添いということで恩納空軍基地を訪れた際、一部の兵から『子どものくせに生意気だ』と謂れのない喧嘩を吹っ掛けられ、容赦なく叩きのめした。

「いや、あれは見学をしていたら喧嘩を吹っかけてきた〝レフト・ブラッド〟のせいであって、ムカついたので地面に埋めてやっただけですよ」

「う、埋めたって……」

国体やインターハイ・全国大会クラスの武術や格闘技経験者もいたわけだが、そのまま全員との組手が終わるまで相手させられた。それでも息が上がらなかったのは今までの鍛錬のおかげだろう。

その代わりに、人として大切なものを失った気がしなくもなかったが。

「爺さんはその時審判をしており、武術のことで一切言葉を発しませんでしたが、彼の基準で行けば部隊の連中は『ヒヨッコ』と扱われるかもしれません」

「剛三殿には私も随分お世話になっている。尤も、未だに一本も取れていないが」

「自分は手も足も出ませんでした……悠元は？」

「……一本だけなら」

悠元の言葉に風間と元治が目を見開いた。ある程度衰えたとはいえ、剛三から一本を取るのは至難の業。その甲斐もあって悠元は１２歳という若さで師範代に上り詰めた。付け加えるなら転生した影響もあるだろうが。

「そういえば、真田中尉の絡みでメールを貰ったのですが、年下の少年少女に喧嘩を吹っかけた馬鹿どもの件はどうなりました？」

「真田の奴め……其方は解決した。ジョーの奴がやられたのは先程事情を伺いに行った司波家の少年だったようでな。君と変わらない年頃の子とは恐れ入ったよ」

大方予想通りに達也が打ちのめしたようだ。彼らとて決して弱くはないが、流石に『相手が悪かった』と言わざるを得ない。
すると、風間はゆっくりと立ち上がった。そろそろ帰るつもりのようだ。
「夜分遅くに協力感謝する。そうだ、折角だから明日は基地に来るといい。元治君もどうだ？」
「自分にはきついので……悠元はどうする？」
「なら、お言葉に甘えます」
「わかった。朝6時に迎えを寄越すので、そのつもりでな」
基地に行くのは自分の肩書を生かしてのＣＡＤ開発のため。流石に国防軍の基地だし、彼らとのこれ以上の関わりは大亜連合による沖縄侵攻までないだろう……なんて思っていたら、フラグが回収されたようなことが起きた。
吸引力の変わらないただ一つの某掃除機もびっくりの回収能力だと思う……決して自分のせいではないと思いたい。

◇　◇　◇

――西暦２０９２年8月6日。
翌日、悠元は動きやすくも涼しげな恰好――半袖のシャツにサマージャケット、綿パンツ――で恩納空軍基地に来た。国防軍特務士官の証明書は念の為に携帯しているが、滅多に使うものでもないと懐に忍ばせている。出迎えたのは真田中尉であり、これには流石の悠元も苦笑を滲ませていた。
「久しぶりだね、悠元君」
「お久しぶりです、真田中尉。一応、これが例のブースターです」
悠元はそう言いつつ、大きめのアタッシュケースを真田に手渡した。真田もこのケースは悠元以外に開けられないと理解しているからこそ、この場で開けようとする素振りは見せなかった。
「それで、今日は手伝いというよりも訓練に参加するのかい？」
「そうですね。彼らのお邪魔でなければ」
「ハハ、寧ろ君がいると彼らも奮起するというものだよ」
それは奮起というよりも年下の人間に負けたくない心境だと思う

のだが、敢えて口に出すようなことはしなかった。
　真田に案内される形で基地の訓練施設に入ると、部下を指導している風間の姿があった。風間も悠元に気付いたようで、指導を別の部下に指示すると、悠元へ振り向いた。
「よく来てくれたな『上条特尉』。おっと、ここでは悠元と呼ぶべきだな」
「その辺は好きにして構いませんが、今からロープの昇降練習ですか？」
「ああ。悠元ならば運動にもなりはしないだろうが」
　風間がそう言ったのは、新陰流剣武術における準備運動と国防軍の準備運動があまりにも違うからだ。それに、悠元は剛三から直々に鍛え上げられている以上、「準備運動にもならないのでは」という意味を含めてのものだった。とはいえ、体を動かしたいのには変わりないので、ちょっと趣向を変えた運動にしようと考える。
「いえ、運動をしたいのは変わりありませんので……準備の為に柔軟だけやらせてもらえますか？」
「別に急かさないから、そこは好きにして構わないよ。そもそも、私に君の命令権などないのだがね」
　動きやすい服装に着替えて柔軟と準備体操を済ませた後、大人の軍人魔法師に混じってロープの昇降練習――――自力で五階建て相当の長さのロープを登り、天井近くから自力で降下するというもの。普通に考えたら怪我はおろか骨折しかねないが、加速系魔法・減速術式を用いて衝撃を軽減するというものだ。
　ただ、悠元の場合は降下する際に天井を軽く蹴って加速させ、地面すれすれで減速術式と大気操作の複合術式を用いて着地するという高速移動を行っている。下手すれば大怪我は免れない方法をこなせるのは、偏に新陰流剣武術の鍛錬の成果というか悪影響なのかもしれない。
　すると、真田の姿がないことに気付いた。そして、真田が戻ってきたところでその同行者の姿に悠元は内心で驚いていた。
（ケースを置きに行ったにしては遅すぎる……って、達也に深雪!?

そんな展開なんてあったっけか……あー、あの場面か）
確かに、達也と深雪が国防軍の基地を訪れるというのは何となく覚えていたが、その接点に風間と真田がいたことを忘れていた。こんなことを考えている間も魔法の制御は手放せないため、気が抜けない状態が続く。
すると、二人の視線がこちらに向けられていることに気付く。高速で動いているせいで、誰なのかを認識は出来ていないようだが……ここで、真田が『彼は長野佑都君と言いまして、彼の知り合いの誼もあって訓練に参加しているんですよ』と説明していた。
悠元の聴覚に関する事項は風間や真田も当然知っている。何を話しているのかバレバレだということを分かり切った上でやるとか、真田中尉は鬼畜であると思う。ロープ登りを終えて一息ついているところで、深雪から話しかけられた。
「あの、佑都さん」
「司波さんにお兄さんもか。二人は風間大尉の誘いでここに？」
「はい、最初は兄だけ誘われていたのですが」
「……」
あのですね、達也さんや。こちらとしては含むところなんて一切ないんですけれど!?
達也から明らかに睨まれている、というか『警戒されている』に近い。つまるところ、深夜から四葉の次期当主候補に繋がるような行動は慎むように言われているため、普通の兄妹を装っているのだろう。それに、国防空軍の基地で軍人魔法師に紛れて訓練に参加していたら、彼が訝しむ理由も自ずと理解できる。
だからといって、殺気も滲ませる様な視線は勘弁願いたい。こんな時に彼の『深雪に対する激しい情動』が働かなくてもいいだろうに、と思う。
ロープ登りの後は勝ち抜き形式の組み手となった。ここにいる面子は戦い方を知っている人間なため、以前全員を叩きのめした悠元からすれば準備運動以前の問題へと化していた。
つまるところ、悠元は参加せずに休憩モードとなっていた。風間も

流石に悠元から二度も心を折られたら兵士のメンタルが持たないだろうと判断したため、悠元の休憩をすんなり認めた。
なので、水分補給も兼ねて休憩したいと席を外して訓練場に戻ってきたら……悠元と達也は対峙することになっていた。悠元のそばには風間がいて、一連の事情を説明する。
「……すみません、風間大尉。どうしてこうなったか事情を説明してください」
「すまないな、〝悠元君〟。ジョーが君のことを話すと、達也君の目つきが変わってね」
悠元が出て行ったあと、風間は達也に手合わせをしないかと持ち掛けた。最初はボクシングで国体にまで出たことのある渡久地(とぐち)軍曹を一撃で沈め、次に琉球空手の使い手である南風原(はえばる)伍長を翻弄し、遠当てで見事に勝ち切った。
だが、ここまで大の大人がコテンパンにされたとあっては恩納空挺隊の面目が丸潰れであり(過去に悠元が一度潰しているのもあったため)、風間がもう一勝負提案したところで志願したのが〝ジョー〟こと桧垣(ひがき)ジョセフ上等兵。先日恩納瀬良垣で達也に沈められた［レフト・ブラッド］の軍人魔法師だ。
風間はその志願に『報復のつもりなら認められない』と明言したが、ジョセフは『雪辱であります！』と答えた。迷惑を掛けた側である司波兄妹(主に深雪)からすれば似たようなものという印象しか出てこないだろう。俺もそう思ってしまう。
本来、魔法を抜きにした手合いなのに魔法を駆使したタックルで攻撃を仕掛けたジョセフ。無論深雪は非難したが、達也はそれを制するような台詞を叫ぶように言い放った上で［術式解体(グラム・デモリッション)］によってジョセフの魔法を無効化、魔法と同時に放たれた遠当ての一撃であっさりと沈めた。
補足しておくが、現役軍人であるジョセフは決して弱くないし、実力だけで言えば南風原伍長と互角に渡り合う。単純に〝四葉〟という環境下で鍛え抜かれた達也が強いだけだ。
「ここにいる基地の魔法師全員に勝ったというジョーの言葉を聞い

て、彼もやる気になったようでな。君にとっても同年代である彼との戦いは決して無駄にならないと判断した……受けてくれるかな？」
「下手に断って機嫌を損ねたくありませんので受けましょう。ですが、本気でやりますからね？」
「……分かった」
　そして、ジョセフが『いやー、年下の少年に負けるのはこれで２回目だ』という文言の後に悠元のことを少し話したらしく、達也の目つきが変わった。達也は『可能であれば、彼との手合わせを所望します』と悠元との手合いを所望したというわけだ。
　とりあえず、この手合いが終わった後にジョセフを一度叩きのめすことは確定事項となったが。
（全く、こっちとしては含むところなんてないんだけれどな……偶然に偶然が重なっただけだし）
　その達也と数メートルの間隔で対峙しているわけだが、正直やばいなんてレベルのものじゃない。濃密な戦闘経験を積んできているからこそ出せる雰囲気、実際に人を殺めているからこそ出せる殺気、これこそが四葉のガーディアンたるものだと感じ取れた。
　風間から聞いていた限りでは殺気など感じなかったそうだが、多分深雪のことが大きく絡んでいるとなれば納得出来るだろう。とはいえ、新陰流剣武術の技巧はおろか、奥義なんて以ての外だ。あまり戦闘を長期化させるのはこちらとしても手の内を覗かれかねない。
（――仕方ない、か）
　そう考えて悠元は深く息を吐き、構える。それを見た達也は魔法が来るものだと無系統魔法を放つ構えをとる。
「……ごめんな」
　そう呟いた瞬間、達也の視界のみならず周囲の視線がある中で悠元の姿が消える。気配の行く先を感じ取った達也が次の行動を起こす前に、手刀で達也を気絶させた。
　簡単に言えば、古流の武術には特殊な呼吸法と歩法で相手の意識と無意識の間に割り込むことで相手の認識を逸らす技巧――［抜き足］があり、それを用いて達也の死角へ回り込んだだけのことだ。

正直、達也相手にこんな騙し手を使うのは今回きりだろう。そう思いながら気絶した達也を担ぎ、壁の近くに下ろした。すると、近くに駆け寄ってくる深雪の姿が目に入り、悠元は申し訳なさそうな表情を浮かべる。
「何と言ったらいいのか、ごめんとしか言いようがない。殺意を向けられてしまってな……心当たりなんてないし、俺もよく解らないんだ」
「いえ、その、恐らく兄は佑都さんのことを警戒してしまったのだと……思います」
それはガーディアンからくるものなのか、兄として妹を心配したのか……こればかりは解らないと零す深雪を見て苦笑した。
「それはそれで、妹を心配するいいお兄さんじゃないか……敵意や殺気を向けられるのはこれっきりにしてくれると助かるよ」
「はい……兄には、私からしっかり伝えておきますので」
深雪に達也のことをお願いすると、そのままの足取りでジョセフに近付いていく。近付いていく悠元は笑顔を浮かべていたが、口元が一切笑っていなかった。
「さて、ジョー。何を話したのかは想像がつくけれど……少し、頭を冷やそうか？」
何が起きるのかを察したジョセフが魔法で逃げ出そうとした瞬間、ジョセフの加速が下に向けられて、床にダイブする形でジョセフが叩きつけられた。
その衝突で室内に盛大な音が鳴り響いたため、これには周囲の軍人魔法師や深雪は目を見開き、真田は『流石は悠元君だ』と笑顔を浮かべ、風間に至っては頭を抱えていた。
後のことは風間と真田に任せてその場を去り、悠元はＣＡＤ開発をしている研究室に入る。もうフラグなんてお腹一杯だと思いながらワークステーションのキーボードを叩いていると、真田が二人をこの部屋に案内してきたのをモニターに反射する姿で確認できた。見るからに達也はＣＡＤを持っていないので、その辺も含めて真田が誘ったのだろう。

（……あー、何かそういう場面があったような無かったような……うろ覚えなのも駄目だな）
悠元のそんな心の呟きを尻目に、真田は達也にカートリッジ型ストレージ換装機能の入った特化型ＣＡＤを見せていた。このまま何とかなるだろうと思った時に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
声の出所はといえば、悠元の右側から覗き込むようにしている深雪の姿があった。
「……佑都さん？　どうしてここにいるんですか？」
うん、知ってた。そりゃ同年代の人間が国防軍の基地で作業していたらおかしいって疑問に思うよね。幸い達也の相手を真田が引き受けてくれているので、諦めたように悠元は作業の手を止めて深雪に視線を向ける。
「ここの士官と知り合いで、司波さんのお兄さんと話している真田中尉もその一人だよ。何をしているのかと言えば、ＣＡＤ開発を含めた兵装全般のお手伝いをしてるんだ。意外だった？」
「はい。魔法師だったこともそうですが……何者なのですか？　お母様の知り合いというのは間違いないと思いますけど」
「答えてあげたいけど、喋ることはできないんだ。色んな人から口止めされていてね。でも、一つだけ言えるのは……司波さん――――達也君や深雪さんとは、対等な関係でありたいって思ってることかな。直球でいえば友達になりたいってことだけど」
俺の力は姉や兄絡みでばれるのは時間の問題。特に十師族としては縁を結びたいと考える人間もいるだろう。組織という面倒事はあるだろうが、それによる力は無視できないと考えていたからだ。一人でできることなんて限界があるのはよく理解している。
父に問われたとき、転生した人間であることも明かしたのは三矢家の人間を嫌いになれなかったのが理由だった。以前の『三矢悠元』が病弱だったことを知らず、元気にはしゃいでいれば異質なものの存在を疑って当然だろうと思う。こればかりは自分の迂闊さを恥じた。
だが、父はこう言った。
「魔法という力を信じているのに、お前を信じられなければそれは『矛

盾』だ」
世の中には［レリック］と呼ばれる現代技術で再現不可能なオーパーツの存在がある。そういった存在がただ目の前に現れただけなのだ、と父は苦笑交じりに呟いていた。ただ、転生者をオーパーツ扱いされるのは甚だ遺憾の意を表したい。
実のところ、父は医者から自分の病弱の体が根本的に改善されたことを聞かされており、母やほかの兄弟姉妹たち、使用人らには『内密に呼んだ知り合いが秘術の治療魔法を使ったお陰で、悠元の病弱な体が治った』と言い含めていた。
秘術自体他人に教えられるものではないということは魔法使いの家系である以上理解しており、自分以外の家族はそれに納得していた。そのための辻褄合わせに古式魔法の魔法師まで呼んだ上で秘術と誤魔化した魔法を使っていた。
確か、父がその人を吉田（よしだ）と言っていたのは覚えている。あれ、どこかで聞いたな……どこかで思い出すだろうから、頭の片隅にでも留めておこう。
三矢の名や力を高めるためにお前を利用することもあるだろう、と父は言った……それは三矢の名を持って生まれ変わった以上、受け入れざるを得ないことだろう。それはもう覚悟を決めている。
閑話休題。
四葉の力は確かに強大だろう。それは母方の祖父からも聞いているし、自分も原作知識からそれを知り得ている。でも、その力を得た根底にあったものは『家族への深い愛情』だと思っている。
危険かもしれないし、無謀かもしれない。だが、四葉が自分の力を知ることになるのは免れない。だったら、彼らと向き合ってみるというのもまた一つの選択肢ではないかと自分は思う。
避けて孤立させて…それが回りまわって自分に害をなすなんて、流石に嫌なものだと思ったのも否定はしない。
俺自身、損得勘定でこの二人とは付き合いたくないと思っている。せめて仲の良い友人ぐらいにはなりたい。そういう関係があってもいい……クルーザーでの一件、警戒を持たれることを覚悟の上で魔法

を使ったのはそのためでもある。
　その言葉に深雪はキョトンとしたような目で悠元を見ていた。
「どうしたの？」
「あ、いえ……そんな風に言われたのは初めてでして」
「それじゃあ、お近づきのしるしにどうぞ」
　悠元はそう言いながら深雪にクッキーの入った包みを手渡す。市販のものではなく、悠元の手作りである。たまに甘いものが食べたくなるとこうやって自作することが多い。なお、その度に女性陣（主に姉達）から『反則』と言われていた。解せぬ。
　すると、達也と真田がいつの間にか近くにいた。達也は深雪の持っている包みからクッキーを一枚取り出し、自分の口に放り込んだ。たぶん毒見もかねているんだろう。返ってきた言葉はちょっと予想外だった。
「……美味しいですね」
「それはどうも」
　思えば、これが初めて達也と交わした会話だろう。
　その後、真田から達也にカートリッジ型ストレージを採用した特化型ＣＡＤを二機渡したいと言われた。この辺は『先行投資』という側面もあるのだろうが、それならば……ということで、今しがた弄っていた最新の試作機（試作とは言っても、ちゃんと安全マージンを確保した代物で、コスト度外視の代物）を渡すことにした。
　インストールする起動式に関しては、達也の要望をすべて反映させる形とした。その辺の対処を全て真田に放り投げたのは言うまでもない。
　後日、別件で連絡を取った時にこのことを達也に尋ねたら、彼はこう言っていた。
「毒見のつもりだったんだが、甘さも丁度良かった。ただ、別荘に帰ってから同じものを食べた深雪が『こんなおいしいものを作るなんて、佑都さんは卑怯です！　私も美味しいものを作って佑都さんを見返してやります！』と頬を膨らませつつ涙目で言っていたが……その意味が俺には理解できなかった。佑都、この場合は俺がおかしいのだろ

うか？」
……あれ？　ひょっとして深雪ルートですか？
そんなルートあるなんて聞いていないんですが!?
そして、達也が「もしかすると、深雪は悠元に任せた方がいいのかもな」と言われたことに異論を唱えたくなったのはここだけの話である。
知り合いになったとはいえ、妹の面倒を他人（ひと）にぶん投げるな、お兄様。

咄嗟に冷静な対応は取れない（※）

悪いことは起きてほしくない。人間誰だってそう思う。俺だってそう思う。だが、そういう悪い予感に限って的中するのは「どうにも勘弁してくださいコノヤロウ。こっちだってトラブルなんざ真っ平御免だ」といいたいが、待ってくれないのもお約束である。

――西暦２０９２年８月１１日。

元治と悠元は恩納空軍基地にいた。元々はＣＡＤなどの打合せのためなのだが、真田と意気投合した結果泊りがけになってしまった。こういうところは悠元の悪い癖だなと元治は窘めたが、それ以外にも理由があった。

「風間大尉。早急に警戒レベルを上げ、民間人の避難を最優先に開始すべきと具申します」

「……それは、根拠のある話ということか？」

「はい」

悠元は『上条達三特尉』として、前日の時点で警戒レベルを上げる――有事の兆候が見られるため、民間人の避難を早急に開始する――べきと意見を述べた。それを聞いた風間は先日一隻のクルーザーに向けて発泡魚雷が発射された事実を思い出しつつ、その上で悠元に尋ねた。

「敵は大亜連合、と見るべきか？」

「是と見るべきでしょう。こちらの映像情報では、厦門（アモイ）港に軍艦クラスの出航準備が確認できました。戦略級魔法師の乗艦の有無はともかくとして、この時期に新ソ連への牽制とは思えません。あの潜水艦の元々の目的が潜入工作あるいは人質を盾にする形での強襲揚陸とするなら……仕掛けて来るのは今日の夜遅くか明日の早朝とみるべきかと思われます」

悠元はそう言いながら、手に持っていた端末の画面を風間大尉に見せた。それは鮮明な航空映像というほかなく、確かに軍艦の出航準備が確認できるほどだ。これを見た風間は軍事衛星なしにここまでの情報を得ている悠元に恐ろしさを感じつつも、息を吐いて悠元を見

やった。
「貴官を敵に回せば、我々は忽ち丸裸だな……解った。避難に伴う大きな混乱を避けるため、民間人に対して今日の夜半に特別避難の要請をする。必要とあらば特尉からの画像情報を陸軍総司令部に渡すが、構わないか？」
「はい。小官の具申を聞いていただき、感謝しています」
「何を言う。真田はおろか柳も君がお気に入りだ。無論、私も友人として長い付き合いをしたいと思う」
「それは、こちらもそうありたいと思っています」
何事もなければそれでよし、何かが起きれば対処する。無論、元治には『特別避難の関係で今日は基地に泊まる』という風に言いくるめておいた。
そして、元治と悠元は基地のとある部屋にいる。特別避難を打診したお蔭で民間人は誰もいない。戦端が開かれた状況で帰るにも帰れず、この状況だと基地のシェルターに避難となるだろう。
「まさか宣戦布告なしの襲撃……やっぱり海の向こうか？」
「可能性としてはそれが高いね。新ソ連だと対馬で引っ掛かるだろうし」
国籍不明となっているが、沖縄を狙った時点で大体の予測はつく。せめてもの救いは戦略級魔法師が動いていない可能性が高い、というぐらいだろう。厳密には本当に動いていないことは確認している。
仮に大亜連合の『十三使徒』か彼に匹敵する戦略級魔法師が動くとなれば、それこそ沖縄方面が占領されてからの話になるだろう。その意味で大亜連合も楽観視しているのかもしれないが。
そんなことを話していると、扉が開いた。
「って、あら？　長野君たちじゃありませんか」
「佑都さんに、基晴さん!?」
軍人かと思ったが、姿を見せたのは達也、深雪、深夜、そして穂波の姿であった。向こうもこちらの姿を見て驚いていた。達也に関しては表情に出にくいので解らないが。落ち着かない様子の元治に肘鉄を入れつつ悠元が事情を説明した。

「ほら、しっかりしてよ兄さん。自分達は知り合いの用事で基地にいたのですが、突然の攻撃もあって動けなくなってしまって」
「そうだったのですか」
　結局、会話をしつつも元治が穂波に対して気になっているような節が見られた。あー、これは助けないと後々面倒なことになるな……そう思いながら達也と深雪を見ると、前に会った時よりもだいぶ兄妹らしくなったと思えた。
「佑都さん？」
「いや、二人が大分兄妹らしくなったんじゃないかって思っただけだよ」
「……不思議な奴だな、お前は」
　達也が自発的に放った一言は深雪だけでなく、深夜や穂波も驚いていた。その達也を変えたであろう長野佑都……彼は、一体何者だと。すると、部屋の外から銃声と思しき音が鳴っているように聞こえる。ざっと推測してもフルオートのアサルトライフルだろう。だが、悠元は持ち前の聴覚と三矢家の家業を手伝った経験から、その機種まである程度特定できる。
「達也。この場は何とかするから、外の様子を見てきてくれるか？無理にとは言わないけど」
「……達也。お願いできるかしら？」
「解りました、奥様」
　悠元に加えて深夜の言葉に頷き、達也は部屋の外に向かった。それを確認したところで深雪は悠元を睨みつけるようにしながら詰め寄った。
「佑都さん、今のはどういうことですか!?」
「落ち着いて、深雪さん。相手が銃だけを持っているのなら魔法でも対処できる。けど、その魔法を封じられたらどうする？」
「それは……」
「確かにその通りだ。ここには魔法師の軍人もいる以上、侵入してきた相手が対抗手段を持っていないとは限らない、ということか」
　魔法を封じられる。それは深雪だけでなく深夜や穂波も危険に晒

しかねない。悠元の意見に元治も同意する。その点、達也は体術をある程度叩き込まれているため、並の相手なら生き残れる確率が高い。加えて達也の能力なら確実に生き残れる。
（ここまでは既定の流れか……さて、どうしたものかな）
　すると、四人の軍人が入ってきた。全員［レフト・ブラッド］の二世だと思しき軍人。土地柄そういう構成になってもおかしくはないが、どうやら世界の修正力が〝そういう形〟で入り込んできているようだった。
「失礼します！　空挺第二中隊の金城一等兵であります！　皆さんを地下シェルターに案内します。付いてきてください」
　そう言い放つ軍人の言葉など無視するように悠元は彼らの持っているものをチェックした。先程聞こえた銃声の正体……とんだ間抜けだろうと思いつつ悠元は時間を稼ぐため、少し前に出て話をする。
「すみません、連れが一人外の様子を見ていまして……できることなら彼が戻ってきてからにしてほしいのですが」
「民間人はあなた方だけとなります。お連れの方に関してはすぐに合流できるよう計らいます」
　ここまでは既定路線。こうなってしまっては否定する材料もないだろう。おそらく深夜も彼らの存在を訝しんでいることだろう。なので、悠元はその口火を切った。
「そうですか。ところで、先ほど部屋の近くで銃声が聞こえたのですが、遭遇しなかったのでしょうか？」
「それでしたら、我々が速やかに排除しました。ですので……」
　まるで急かすような口ぶり。明らかに近くまで〝敵〟が来ているかのような……深雪が深夜と穂波を見るのと同時にまた一人部屋に入って来る影があった。
「ディック!!」
　突然のことだった。部屋に入ってきた桧垣上等兵に向かって金城一等兵が躊躇うことなく発砲した。そして、軍人の一人が何かの石みたいなものを手に握って前に突き出した。突然のことで対応が遅れた深夜や穂波だったが、この状況で動いたのは元治だった。

「（あれはまさか……）させるか!!」
「があっ!?」
　最大九種類の魔法式を常時待機・同時行使する三矢家の固有魔法［スピードローダー］。この状況でためらっては命に係わると判断し、指輪を持っていた兵士をピンポイントで気絶させた。それを見た金城一等兵は逆上してマシンガンを乱射する。
「くっそがあ!」
「っ!……滅茶苦茶だろうが……っ!!」
　物理障壁が間に合わないと判断して、深夜と穂波に襲い来るマシンガンの弾丸を悠元が弾き落とす。
　深夜のほうは穂波が防御魔法を張ったから問題ないと判断できたが、ここで悠元は気づいてしまった。援護しようとして深雪が穂波の防御魔法範囲から外れていること。そして、そのマシンガンの弾が元治と深雪に向かって飛んでいくことに気付いた。
　走馬灯とか細かいことは言っていられない。魔法を使うことも忘れて、悠元は一目散に駆け出した。

◇　◇　◇

　私は、今目の前で起きていることに反応できなかった。
　あの兵士が石みたいなものを握ってその手を突き出す前に、基晴さんが魔法を放った。そして逆上した兵士の弾丸の乱射を、お母様と穂波さんに向かっていった弾丸を佑都さんが止めてくれた。
　守ってばかりではいられない、と私もせめて援護をと射線を取ったのが拙かった。
　飛来するいくつもの弾丸。防御するという術を学んでいない私には止められない……私は瞼を閉じ、せめてもの抵抗で身を屈めた。
　だが、何時まで待っても弾丸が体を貫く痛みの感覚はおろか、飛んでくる気配がなかった……真っ暗な視界のため、一体何が起きたのかを分からずにいた。
「佑都さん!?」
　母様の叫びで私は瞼を開ける。すると、そこには手を広げて私の前に立っていた佑都さんの姿があった。

「まったく……守れなかったら、達也に怒られちまう……だろ……」
そう口にした佑都さんはゆっくりと倒れて、思わず抱きしめるような形になってしまった。そこで私は佑都さんの背中に触れていた手の感触が滑りのようなものを感じる。
私が佑都さんに触れていた手は真っ赤に染まっていた。そして、力もなく重みだけ感じる佑都さん……私は、そこで気づいた。これは自分の血ではなく彼の血……彼が何を成し、その結果が衝撃的な事実として私に降り掛かった。
「い、いやあああああああああ!!!」
私を庇おうとして、佑都さんがその身に銃弾を受けた。私が余計なことをしたから、彼に必要のない犠牲を払わせてしまった。
「嫌……嫌、です……」
今までただ受け取るだけの人生みたいなものだった。四葉の次期当主として相応しい振舞いを身に付けていく中で、私は周囲に信頼できる友人と呼べる人間はいなかった。
でも、そんな中で私から話しかけたいと思える人にやっと出会った。こんな私と対等に向き合い、私も対等に向き合おうと思わせてくれる人に。
兄との……ううん、お兄様との関係だって、彼が何気なく背中を押してくれたから、私は一歩を踏み出すことができた。彼がいてくれるなら、私もお兄様も今まで叶えることができないと思ったものを手にできるかもしれない。
この部屋を出る前、お兄様は確かにこう言った。
『……不思議な奴だな、お前は』
四葉のガーディアンとして、今まで明確に自分の言葉を発することのなかったお兄様を彼は動かした。「そんなことはしていない」と彼は言いそうだが、私にはそう思えてならなかった。きっと、お兄様も今の私と同じ気持ちを抱いているかもしれない。
『死なせたくない、失いたくない』
今の私の気持ちはこの感情で埋め尽くされていた。
だから私は叫んだ。本当なら使わせてはいけない魔法……自然の

摂理に逆らうがごとく、この不条理を捻じ伏せるための魔法を、私は願った。
「助けてください、おにいさまああぁぁ!!」
そう叫んだ直後、壁に突如穴が開き、駆け込んでくるのは私にとってのガーディアン……いえ、私にとって家族である兄の存在。
――よく深雪を守ってくれた。この恩は絶対に忘れないぞ、佑都。
その言葉を耳にして見上げると、お兄様が特化型ＣＡＤを佑都さんに向けていた。パッと見はいつもと変わらない表情だったが、どこか寂しそうな印象を強く受けたのだった。そして、お兄様がその魔法を発動させた瞬間、佑都さんの体から大量の白銀の想子が吹き荒れた。
その光景が、まるで幻想的な風景のように見えた。
◇　◇　◇
『第三者からの［再成］発動を確認――自己修復術式オートモード、停止』
『外部からのコアエイドス履歴データ、バックアップ読込申請――許可』
『ログからの遡及データ、バックアップとの整合を確認。修復作業――完了』
あー、失念してた。こういう突発的な事態の時って上手くいかないものだな。というか、自己修復術式ありきというのもダメだな。オートモードの定義付けは今後の課題としておこう。
脳裏に響いた〝声〟で達也が［再成］を使ったことは把握できた。恐らくは俺の自己修復術式にも気づいた可能性が高いだろう。銃弾に関しては致命傷にならない寸前で止められたが……無事に帰ったら魔法の訓練も含めて鍛えなおさないといけないな。
気が付けば深雪に圧し掛かっていたので、ゆっくりと距離を取る。深雪の表情は涙を零していた。何か言葉を発しようとしたのだが、

「佑都さん！」
その前に深雪が抱き着いてきたのだ。
え、すみません、説明プリーズお兄様！　と達也に視線を向けると『諦めてくれ』と言われてるような気がした。シット!!　そして、達也は［再成］で元治も復活させた。
「う……そうだ、佑都！　大丈夫か!?」
「あ、うん。基晴兄さんもよく反応できたね」
「道場で護身術を学んだお蔭だ……あの石は、多分アンティナイトだと思う」
元治としては［スピードローダー］を咄嗟に使ったことを反省しているのだろう。この状況で秘匿も何もあったものではないが。
気配を探ると、この部屋にいた連中は全て消え去っていた。恐らく達也の［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］……現時点では［分解］と呼ぶべきものだろう。何はともあれ、達也が敵を排除してくれたことには素直に感謝したかった。
とりあえず、悠元は泣きついている深雪を慰めるために頭を撫でた。
「あ……」
「とりあえず、落ち着いてくれるとありがたい。外の状況が落ち着いたわけでもないから」
「あ、はい……」
深雪が頬を紅く染めて急にしおらしくなったのでこれには首を傾げる。すると、笑みを零す深夜と穂波が悠元を見ていた。
「あらあら、深雪にも春が来たのね」
「この事態が落ち着いたら今日はお赤飯でしょうね」
「何故お祝い事になるのか理解に苦しみますが……問題は、今の事態が落ち着くかどうかなんですけどね」
深雪も落ち着いてくれたところで悠元は立ち上がり、部屋の片隅に置いていたケースを手に取る。さきほどのマシンガンは焦ったが、どうやら奇跡的に銃弾の被害を受けなかったようだ。
すると、その場に風間と真田が姿を見せた。二人の表情の深刻さか

らして、先程までここにいた兵士（ジョセフを除く）が裏切り者であることも把握していると思われた。
「真田中尉、基地の中で叛逆者が出たようですが……」
「ああ。大亜連合によるものだと断定した。君の情報が綺麗に裏付けされてしまったわけだ」
　真田の言葉に周囲の視線が悠元に向けられる。深夜からすれば達也や深雪と変わらないぐらいの歳の少年がそこまでの情報を得る手段を持っている――それこそ『実家』にも匹敵しうるだけの情報収集能力を持っていることに眼を見開いていた。
「あまり嬉しいことではありません。それに、今回の一件は自分の甘さを痛感させられました」
「そうか……ともあれ、叛逆者を出したことは完全にこちらの落ち度というべきだろう。何をしても罪滅ぼしにならないだろうが、可能な限りの配慮はする。何でも言ってくれ、『上条特尉』」
　その名前が悠元に向けられて放たれた言葉だと認識するのは周囲も理解した。元治も悠元は国防陸軍に特別な形で在籍していることは元から聞いていたが、こういう形で改めて知ったことに驚きを隠せなかった。
「まずは現時点での状況をお教えください」
「分かった」
　風間が現時点で判明している情報を口にした。
　敵が大亜連合というのはほぼ間違いない、と風間は断定するように述べた。それ以前から東シナ海で頻繁に宣戦布告紛いの挑発行為が横行していたため、それを大義名分に侵攻したとしても何ら不思議ではなかった。
　――名護市北西部の海岸には既に潜水艦揚陸部隊が上陸。慶良間（けらま）諸島近海の制海権は大亜連合側が掌握、敵と内通したゲリラにより、那覇から名護にかけての兵員輸送で妨害を受けたが、８割方の排除が既に完了している。軍内部の叛乱者もすぐに片が付くだろう。
　先日の潜水艦はその偵察も兼ねていたのだろう。虎の子の潜水艦を沈められて逆上した説も否めないが。ここまで念入りに計画され

た侵攻作戦ともなれば、原作で出てくる〝あの人物〟も一枚噛んでいる可能性が高い。まあ、こちらとしては下手に引っ掻き回して黒幕の人物を表に出すことで生じるリスクを負いたくないので、当分は放置でいいだろう。

それよりも、今は目の前にある危機的状況を打破するのが先決だと判断した。

「現状は理解しました。それで、風間大尉に真田中尉。この状況を打破するために自分も国防軍の士官として戦場に出ろ――――大尉殿はそうお考えだと判断して宜しいでしょうか？」

「本来であれば私にその権限などないのだが、今回は臨時の方面部隊指揮官としてこの場を任されている。かの万夫不当を成した武人の縁者に、私はこの戦いの未来を委ねたい。現状、この沖縄諸島方面において貴官が国防軍現有の最高戦力だと本官は信じている」

国防軍との契約の際、悠元は「前線に立たないこと」を前提として特務士官の地位に就いた。それは、悠元自身が未成年であるため、彼が表立って戦場に出れば要らぬところからやっかみを買うことにも繋がる。

だが、現在の状況はそのデメリットを考慮している場合ではなくなっている。ここの魔法師部隊全員を圧倒せしめた桁外れの実力を持て余す理由が既にない状況にあることは、風間や真田も……当然悠元も理解している。

かつて大越戦争で成した功績から［大天狗］と謳われた風間からすれば、本来未成年である彼を駆り出す事態となってしまったことを快く思わなかった。

だが、この場には……かの英雄に匹敵し得る戦力を有する少年がいる。風間は日本の未来と戦いの行く末を委ねるべく、力強い口調で悠元に告げた。

「貴官に統合幕僚会議の決定を伝える。国防陸軍特務士官上条達三（かみじょうたつみ）特尉、国防軍特務規則に基づき大亜連合の侵略からの防衛、並びに敵勢力を殲滅すべく〝独立遊撃部隊長〟として戦時協力を要請する……本官としても心苦しくは思うが、受けてもらえるか？」

それは、正規の指揮下にない悠元を〝ワンマンアーミー（方面部隊との命令上の齟齬を避けるため、将校相当の扱いを受ける）〟として独自の指揮系統で戦列に加えること。しかも、国防軍の最高意思決定機関である統合幕僚会議の決定となれば、風間も首を横には振れなかった。

元治の思いを知ってか知らずか、悠元は少し考えた後に風間と真田に視線を向けて真剣な表情で敬礼をした。この話を受諾した瞬間、悠元の階位は暫定的に真田を超え、風間と同等の立場へと変わる。

「統合幕僚会議の要請、確かに承りました。でしたら風間大尉、まずはここにいる方々を統合司令室に。また狙われない保証もありませんし、そこならばシェルターよりも頑丈なのは知っていますから」

「……解った、取り計らおう」

悠元の珍しく真剣な言葉に風間大尉は苦々しい表情を浮かべつつも頷く。すると、そこに達也が入り込んできた。

「アーマースーツと歩兵装備一式を貸してください。貸すと言っても消耗品はお返しできませんが」

「何故だ？」

この申し出に風間は問いかけた。その発言は達也が戦場に出るということを意味する。それも承知の上だと達也はこう言い放った。

「彼らは深雪を手に掛けました。その報いを受けさせなければなりません」

深雪を害しようとする者は敵、ということを示すような達也の発言。それを聞いた悠元は一息吐いて風間に提案した。

「大尉殿、彼を現地協力員という形で本官の暫定的な指揮下に置く、ということで如何でしょう？　装備品については、本官の予備を貸し与えても構いません」

「……そうだな。彼の指揮は特尉殿に一任する。司波君もそれで構わないかな？」

「はい、構いません」

「あ、そうだ。真田中尉、『アレ』の準備と……これ、お願いします」

「君も人使いが荒いね。だが、了解だ」

悠元から既にロックを解除しているケースを受け取った真田は苦笑していた。悠元の言う『アレ』とは正直スペックが高すぎて悠元専用ＣＡＤと化した代物のことだ。泊りがけの調整となったのはそれが原因でもあったりする。

この状況を原作知識も含めて見越していたわけだが、本当のことを彼らには言えなかった。とはいえ、基地内にいる民間人の数を減らせただけでも今回は及第点といったところだろう。

準備をしつつ、悠元は達也に向き直った。原作だと軍の指揮下に入ることを拒んだはずなのに……その意図を聞きたかった。

「達也と呼ばせてもらうけど、先程のやり取りを見ていただろうが俺は国防陸軍の特務士官だ。お前のことだから一人で突き進むと思ってたけど」

「……否定はしない。だが、お前は己の身を挺してまでも深雪を救ってくれた。その恩に少しでも報いたいだけだ……不足か？」

「いや、十分すぎる答えだよ。……俺からは命令というか、一つだけは守ってほしいことがある……『生きて帰る』こと。これが守れないのなら、気絶させてでも連れ帰るからな」

これから死地に向かう人間に対して酷な約束と思うかもしれない。だが、達也だからこそ実現可能な約束であり、彼と友人でありたいという願いを叶えるためには絶対に生き残ってもらわねばならない。

その意図はともかくとして、悠元の言葉に対して達也は静かに頷いたのだった。

「その上で命令というか、決定事項だな……敵に降伏などさせることなく一人たりとも生きて帰さない。奴らには誰に手を出したのかを分からせないといけない。いけるな？」

「無論だ……お前なら、降伏した奴は見逃せと言いそうだが」

「そんな情けも容赦も掛ける気なんて労力の無駄だからな」

長野佑都もとい三矢悠元。そして司波達也。かつて四葉の復讐劇を完遂した上泉剛三と四葉元造……その二人の孫が奇妙な縁で繋がり、肩を並べる。

この出会いが、やがて世界を震撼させる二人の戦略級魔法師として

名を轟かせることになるとは、その場にいた人間ですら予想などしなかったのだった。

◇　◇　◇

「お兄様……佑都さん……」

戦場に向かう二人。その姿を深雪はただ見つめることしかできなかった。思考が付いていかないというのもあるのだが、達也は深雪にこう言ったのだ。

――済まないな、深雪。俺は、自分の感情のままに行くだけだ。それと、アイツに少しでも借りを返したい。お前は母や穂波さんと一緒に大人しく待っていてくれ。

それは紛れもなく、長野佑都と名乗った彼に対しての恩義。今まで深雪のことや魔法の事以外に興味を示さなかった自分の兄が自ら興味を抱いた相手。

そして……深雪にとっても、自分から興味を抱いた人物。

彼に庇われたとき、深雪は一種の喪失感を味わいそうになっていた。それだけは嫌だ、と達也の名を叫んだほどに、自分の中で大きな存在となりつつあった。

そして彼に頭を撫でられたとき、ふと心の中に何だか暖かいものが湧き上がるような感覚に囚われた。様々なことを学んで知識としてきたことに苦など無かった深雪でも理解できない事柄に戸惑いを感じつつ、それを嫌とは感じなかった。

（佑都さん、それにお兄様……どうか、無事に帰ってきてください）

今の自分に出来るのは、二人が無事に帰ってくることを祈ること。そして、自分が感じた疑問を母に尋ねること。そう思いながら、深雪は深夜と穂波の後を追うように走り出したのだった。

力不足と戦いの終わりに（※）

恩納航空基地の統合司令室。そのモニターに映る光景はまさしくこの世の終わり――〝地獄〟と呼べるようなものだった。戦争という悲惨な出来事など外の世界のこと……そんな風に考えていた元治は頭をハンマーで殴られたような感覚だった。

『――いいか、元治。お前が思っている以上に戦争は簡単に起きる。それを覚えておけ』

沖縄に出発する直前、元から発せられた言葉はまさしく本当であったことを痛感した。それ以上に、自分よりも一回り幼い弟が戦場に出ていくことを……これほど自分が情けないと思ったのは初めてだろう。すると、後ろから声を掛けられた。それは元治が少なからず心想う穂波であった。

「どうされました？」

「穂波さん……いえ、今更自分が甘かったのだと痛感していました。深雪さんに深夜さんは？」

「あちらに。深夜様から基晴様が乱心して外に飛び出さないよう見張るように、と」

少し距離を置いたところで深夜と深雪が話していて、その内容は自分が聞くべきでないと判断した。そもそも、距離が離れている相手の会話を聞き取れるのは悠元と末っ子の妹ぐらいだけだろう。すると、穂波は申し訳なさそうな表情を浮かべつつ頭を下げた。

「ありがとうございます、基晴様。お蔭で助かりました」

「もしかして、アンティナイトのことかな？」

「はい。深夜様は想子の感受性が高く、キャスト・ジャミングが発動していたら……本来なら私が率先して止めるべきところを代わりに止めていただき、感謝しています」

想子の感受性が高い……強力なノイズを発するキャスト・ジャミングではその悪影響を強く受ける。穂波の言い方からして最悪死に至るほどの感受性であると察し、元治は頭を上げるように言った。

「頭を上げてください、穂波さん。偶々警戒していたら未然に防ぐこ

とができただけです。それに、自分もどうやら助けられてしまったようですから……魔法については聞きませんよ」
「基晴様……謙虚ですね」
「いえ。寧ろ、長男として力不足を痛感しました」
穂波の言葉に元治はそう言いながらモニターに視線を移す。そのモニターには大亜連合の兵士を相手に無双する二人の姿が写っていた。飛び交う銃弾の中をまるで意に介することなく潜り抜け、魔法で瞬く間に殲滅していく。
「自分はどうあるべきなのか……弟は命の危機から生還したのにもかかわらず、躊躇わずに戦場へと向かった。ちょっと抜けてるところはあるけど、僕なんかよりもずっと強いのは解っているつもりです」
彼を中心に弟妹たちは強くなっていっている。末っ子の幼馴染も彼の手ほどきを受けて実力をつけている。彼らから比べれば恵まれた立場にいるはずなのに、弱く感じてしまっている自分が確かにいた。魔法の資質は逆立ちしても勝てるはずがないのだと。
「ここで自分が出て行ってもただ犬死するだけ……ハハ。こうして現実を突きつけられると……笑うしかなくなりますよ」
「そうですね……私も、そう思います」
「穂波さん？」
「――私は普通に魔法師としての生を受けていません」
「っ!?」
穂波の言葉は衝撃的だった。その意味するところは遺伝子などの生体情報を『調整』された上で生まれてきたことを意味する。彼女の声は元治にしか聞こえないぐらいの音量だったため、元治は表情に出さないよう努めた。
「どうして、それを自分に？」
「自分でもよく解りません。ですが、あの時貴方が誰よりも早く魔法を放ったこと……守るべき役割を果たすはずの私ですら追いつけなかった。もしかしたら、貴方に興味が湧いたのかもしれません……基晴さん？」
色々衝撃的なことがあって元治の処理能力が限界を超えてしまっ

た。そして、元治の視界は……そのまま暗転してしまったのであった。

◇　◇　◇

（……凄いな）

これまで、達也を負かす人間など殆ど存在しなかった。大の大人相手でも勝って来たが、過信などしたつもりもなかった。その達也ですら、目の前に映る光景に一種の芸術のような錯覚を感じていた。

達也とほぼ同じフルフェイスのヘルメットと戦闘用のスーツを纏っているが、右手には武装一体型ＣＡＤと思しき太刀が握られており、左手には先日達也が譲り受けたものと同タイプの拳銃型のＣＡＤが敵兵に向けられた。

太刀が発した蒼穹の雷はまるで龍の如く敵部隊に向かっていき敵兵が瞬く間に蒸発し、放たれた銃弾を反射して侵攻軍の兵士を負傷させ、戦艦からの砲弾は太刀から迸る蒼穹の斬撃によって断ち斬られ、更には障壁のような魔法で兵士を容赦なく圧し潰していく。

さながら魔法による領域制圧能力は風間が言っていた〝沖縄本島における国防軍の最高戦力〟という評価に嘘偽りなどなかった。敵が降伏の姿勢を見せる暇など与えないと言わんばかりに、視認した敵の心臓を穿ち、頭部を吹き飛ばし、更には敵兵士を破裂させて、その亡骸からは自然発火の如く火が燃え盛って忽ち灰燼へと帰していく。

（俺が言えた義理ではないが……あそこまで人殺しを躊躇わないのは、恐らく〝同類〟なのかもしれないな）

その光景は達也のみならず、敵味方関係なく彼の存在感に呑まれていた、といっても過言とは思えなかった。だが、今は戦闘中であり、達也も自身の役割と佑都からの言葉を守る為にＣＡＤを敵味方に向けた。

◇　◇　◇

周囲にいた兵士は粗方片付いた。相手が白旗を上げる前に殲滅したので、相手の戦意など窺い知ることなど出来るはずがない。具体的には放出系魔法の雷撃によって敵兵士を瞬く間に感電死させていっている。この辺は祖父が得意な系統の魔法のためと、自分も雷系統の

魔法が好きだったからというのもある。
これには達也から「屁理屈だな」とツッコミのような言葉が投げかけられた。敵を容赦なく［分解］して味方の兵士を［再成］しまくったお前が言うな、と返したかったほどだ。
行き過ぎた殲滅行為を咎められないのかという疑問は生じるだろうが、これは自分の立場が特殊過ぎるのが原因。
上条達三特尉（悠元）は統合軍令部の許可が出なければ戦場に出せないほどで、文字通りの〝切り札〟。その彼の行動を阻害するということは統合軍令部の決定に対して異を唱えるに等しいため、彼の暫定指揮下にある達也もその影響下に属する。
逃げるのならば下手に追うつもりもないが、死に物狂いで向かってくる相手に情けを掛けた方が危険すぎる。戦争という方便こそあれども、結局は国家という後ろ盾を得たエゴイズムを有するテロリストに等しいのだから。
人殺しという行為は、前世の価値観が残ったままなら嫌というほど忌避していただろう。だが、新陰流剣武術の修行に加えて第三研での訓練で嫌というほど軍人魔法師と戦って来た側からすれば、この世界では甘えを見せた方が死ぬと理解しているからだ。
海上にいた艦隊は持参してきていたブースターで達也が実戦で初となる［質量爆散（マテリアル・バースト）］を発動。想定射程は５０キロメートルに設定したのが功を奏したようだ。
その影響で発生した津波については、エネルギー方向を真逆に反転する［方向反射（ベクトルリバース）］で押し返し、威力を完全に相殺した。
そこまではよかったのだが……何事にも予想外というものは起こりうるということなのだろう。
『――沖合６０キロに大亜連合の艦隊を確認！　推定1時間で到達します!!』
戦艦五隻、巡洋艦クラスが六隻、駆逐艦が２０隻……完全に負け試合で撤退ラインなのに、ムキになってしまっている。通信から聞こえる風間大尉や真田中尉ですらもうお手上げ状態だ。
もしかしたら『四葉』への復讐戦も兼ねているのかもしれない。「俺

たちがここまでやっきになっているのは、四葉の一族が大漢の同胞を潰したからだ！」……最も現実味がありそうで、一番面倒な理由だ。
「……こちら、上条」
『こちら総司令部。上条特尉、こちらとしては打つ手がない』
「それは理解しています――――風間大尉、自分が魔法で敵艦隊を掃討します。なので、後の責めは任せました」
仕方がない。これだけは使いたくなかったが、今回は敵が海上にいる。津波の影響を考えるならこの戦略級魔法しかない。それを司令室に提案すると『本当に済まないが、特尉に一任する』と半分投げやりな状態だった。
ホントに人の命を何だと思っているのか……四葉の復讐劇で滅ぼされた大漢から何も学んでいないのか、と問いかけてやりたい。それこそ、前世の宗教の権威が述べていた『霊的に生まれ変わることを望む』と言ってやりたいぐらいに。
「達也、聞いていたと思うが残りの敵艦隊は俺が対処する。これ使ったら想子無くなって倒れることになるんで、後は頼む」
「――――解った」
流石の達也も初めての［マテリアル・バースト］で想子保有量がギリギリのラインに達している。それを自身でも理解しているのか、達也の返事を確認すると一度瞼を閉じて再び開く。先程まで青色だった目が銀色に変化する。
――――転生特典［天神の眼（オシリス・サイト）］
物体を気配ではなく存在で見通す［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］のさらに上位版で、想子が続く限り距離無制限で人間の通常視覚で捕捉不能な物体も視覚化する力を持つ。それだけでなく、想子使用量は若干増えるが、最大〝数千倍〟の魔法威力上昇効果を持つ。
悠元が発動させるのは［万華鏡（カレイドスコープ）］。最初は知覚系魔法と説明したが、「万華鏡」の言葉通り様々な性質を併せ持っている。彼が発動するのはそのうちの一つを増幅させたもの。
「いくぞ。本邦どころか世界初公開だ」
悠元は専用の銃形特化型ＣＡＤを抜き放って空に照準を向ける。

［カレイドスコープ］をリンクさせた［オシリス・サイト］で沖縄近海・慶良間諸島近海に展開する大亜連合艦隊の位置を完全に捕捉し、ＣＡＤを構える左手を右手で押さえる。
「万華鏡（カレイドスコープ）――――［天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）］、発動」
引き金を引いて発動した魔法――――艦隊の上空に突如現れたプリズムの三角形は、立体の展開図が如く艦隊丸ごとを覆う大きさへと瞬時展開。そして中央の眩い光を放った瞬間、周囲に展開したプリズムもそれに続いて光り輝き、巨大な光の柱が海面めがけて落ちた。
基地のモニターにもその光景がはっきりと映っており、その系統の魔法を知る深夜は驚きを隠せなかった。
「……あれは、光波振動系魔法……？」
その光が消え去ると、そこにいたはずの艦隊はまるで手品でもしたかのように綺麗に消え去っていた。津波が起きることもなく、元から海上に何もなかったかのような落ち着きを確かに取り戻していた。その光景を誰もが呆然と見つめるだけであった……気絶した元治を除いてではあるが。
悠元はその魔法を放って気を失い、海に倒れこむ前に達也がそれを支えた。自身に掛けられた言葉を彼自身が成したことに、達也は感謝の意を口にした。
「本当にお前は不思議な奴だ。けれど、感謝しておく。お前のお陰で俺は……俺たちは無事に生き延びられたのだから」
そう呟きながら、達也はＣＡＤも回収して基地に帰還するのであった。
この戦闘により、敵勢力――――大亜連合軍が負った損害は兵士推定３万、軍艦・潜水艦は１００隻以上にも上る損失を被った。そして、この戦いによって二人の戦略級魔法師が歴史の表舞台に立ったということを世界はまだ知らない。
◇　◇　◇
悠元が次に目を覚ましたのは、見知らぬ天井であった。見るからにどこかの別荘のようだとすぐに解ったが、三矢家は沖縄に別荘など持っていない……上半身を起き上がらせると、扉が開いて深夜が姿を

見せる。
「あら、ちょうど起きたのね」
「ええ。えっと、ここは……」
「司波家の別荘よ。あのまま基地にいてもよかったのだけれど、深雪のこともあったから」
聞くところによると三日は寝ていたらしい。普段は使うことのない大規模魔法の連発だったから、一気に精神的疲労が来たのだろう。風間と交渉して司波家の別荘に運び込んだと説明してくれた。流石に子どもが国防軍の基地で寝ていた事実が口煩い主義者どもに知られたら、色々厄介なのは間違いない。
達也と深雪は四葉家の護衛を伴って一足先に東京へと帰った、と深夜が説明した。元治も先に帰ったそうで、恐らくは実家への報告とみられる。そこまで考えたところで深夜は悠元に問いかけた。
「ねえ、長野佑都君。いえ、三矢悠元君といえばいいかしら？」
「やはり気付いていましたか。元治兄さんでお察しになったのでしょうか？」
元治兄さんの［スピードローダー］で気付かないほうが無理ある。何せ、それを見た人物が四葉家現当主の姉だから。自分の本名を知っていたのは、多分剛三から聞いたのかもしれない。
「そうね。あれだけの速度で魔法展開できるとなれば発動直前で保持しているとしか思えないもの……そのお兄さんなんだけど、婚約者はいらっしゃるのかしら？」
「いえ、自分の知る限りだといないですが……まさかと思いますけど」
「穂波さんがね、一目惚れしたらしいのよ。一気に春が来たのは嬉しいけど……妹にどう説明したものか」
あの戦いのとき、元治が思考のオーバーヒートで倒れた。単純に色々ありすぎて処理が追いつかなくなっただけだが。それを介抱した穂波に告白したとのこと。『君の事情なんて関係ない。俺は君のことが好きになったんだ』という言葉に穂波は思わず涙を零したらしい。
意外に前向きだが、穂波さんは調整体。通常の人間の寿命からすれ

ば短い部類。それに加えて派遣してもらっている四葉家のこともある。
「穂波さんはその、何か特殊な事情を抱えていらっしゃるのですか？」
「あの子は生まれが特殊でね、そう長く生きられないのよ……」
「……解決する手段がないこともないですが、条件を呑んでいただければすぐにでもやります」
俺が提案したのは固有魔法［領域強化］で穂波の想子体と肉体の想子強度を強化し、寿命をある程度改善すること。そして深夜の魔法演算領域と魔法で損傷した大脳の修復、感受性の健常化のために肉体の想子強度を強化すること。
この二つの交換条件として提示したのは『時期が来るまで、達也と深雪の二人に自分が三矢家の人間であることを隠してほしい』というものだ。今言えば警戒される可能性が少なくないし、沖縄侵攻の傷跡もある。それがある程度癒えてから自分の口で喋ると断言した。
それに、俺は今回で図らずも達也の秘密を知った側の人間だ。その意味で三矢家も無関係ではいられなくなる……それはちゃんと理解している。その達也にとっての理解者は一人でも多い方がいいし、どのような事情があろうとも達也と深雪の母親を見殺しにする理由がない。
条件は呑んでくれるとのことだったので、早速治療を施した。穂波には『先日の襲撃で何か影響が残っていないかの確認』と言いくるめ、深夜も悠元の言葉に合わせる形で穂波を説得してくれた。
なお、治療した際に深夜の体が心なしか若返っていた。具体的な年齢を言うなら２０代半ばぐらいの姿に。何故に？
「穂波さんの家柄については爺さんに丸投げすればいいかと。こないだ漸く腰が治ったと言ってましたので、動いてくれますよ」
「……ふふ、本当に面白い子ね。気に入っちゃったわ。真夜も貴方のことが気に入りそうね」
深夜は笑顔でそう言って抱きしめてきた。やめて、柔らかいけど息が！　ヘルプ、ヘルプ！　マジでいくつ命があっても足りなさそうデース。ふざけてる？　これぐらい内心でやっとかないと間がもた

ないんだもの。察しやがれください。
その後はというと、実家（三矢本家）からメールが届いて、詳しいことは帰ってからということになった。これは無難な対応である。説教を受けることも覚悟しておこうと思う。
戦闘の影響（大亜連合による再侵攻の危険があったため）で空港が一時閉鎖されることとなり、三矢の本屋敷に戻るまでの約三週間、すっかり元気になった深夜のお世話になっていた。
最初は食事とかの世話ぐらいだろうと思ったのだが、何故か（バスタオルは巻いてるけど）浴室に乱入してきたり、ネグリジェや下着姿で添い寝してきたり……曰く「自業自得だけれど、今の達也にやっても反応が薄いし」とのこと。
言っておくが、自分にそういう偏った趣味は持ち合わせていません。
穂波さんからは『すみません、私は奥様に逆らえませんので……申し訳ありませんが、諦めてください』と言われたので、結局は受け入れた。あの二人に言えない秘密だな、これ。
加えて『お母さんと呼んでいいのですよ？』は流石にどうなんですか、と内心で苦笑したのだった。だって、あの父親を〝お父さん〟？……無理だな。今の父親の方が遥かに信頼できると思う。それを察したのか、『でもあの人をお父さんと呼ばせるのは嫌ね……』と深夜が零したことは胸の内にしまっておいた。
深夜のやっていることが母親としてのスキンシップ、と言うより……恋人に対してのアプローチにしか思えない。それを察したのか、深夜は俺の顔を自身の胸に埋めてきた。深雪もそうだが、その母親ルートも開拓した覚えなど皆無である。
「!?」
「どうした、深雪？」
「い、いえ……心なしか、お母様に対して嫉妬のような気持ちを抱いてしまって。やはり、胸が大きくなるように努力しないと」
「……そうか（すまない、佑都。頑張ってくれ）」
そして、何かを察した深雪は自分の胸に手を当てて、もっと成長す

る方法を模索し始め……それを見て、対象の相手の気苦労を心なしか察してしまった達也であった。

◇　◇　◇

大亜連合による沖縄侵攻は、反撃で大打撃を受けた大亜連合が撤退。

日本政府が珍しく素早い対応で今回の一連の事態を受けて大亜連合を批難した。

これに呼応する形で世界各地の諜報機関に対し、沖縄侵攻が大亜連合によるものだというタレこみと裏付けの情報ファイルが流れ、大亜連合はスポークスマンを通じて必死に反論するも、その声は声の大きさという多数決の圧力という形でかき消されていった。

今回の戦闘で質量分解魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］を使った達也は、非公式の戦略級魔法師『大黒竜也特尉』として、沖縄防衛戦後に設立されることとなる国防陸軍第１０１旅団：独立魔装大隊に配属が決まった。

そして、その後に光波振動系収束分解魔法［天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）］で艦隊を消滅させた悠元についても非公式の戦略級魔法師となり、所属が独立魔装大隊へと変更される。だが、あくまでも〝技術士官〟としての所属は変わらず、彼が戦場に投入される可能性は極めて低いままである。

衛星映像では存在していたはずの艦隊がまるで手品のように〝消えた〟ため、国家公認の判断ができないというものだった。

当然の対応だろう。何せ、［天鏡雲散］は発動したことを感知させない戦略級魔法だからだ。

運航の再開の目途が立ち、先に戻ることとなった悠元は那覇空港で深夜に見送られようとしていた。穂波については空気を読んでか遠くから見守っていた。

「わざわざありがとうございました。何かとお世話になってしまい、感謝に堪えません」

「礼を言うのはこちらの方ですのに……ですが、その礼は有難く受けることにしましょう」

深夜と穂波を助けたことに関しては、あくまでも二人の母親に加え

て兄の想い人を助けたまでのことだ。ただ、その代償として達也と深雪の母親ルートまで開拓するという訳の分からないことへ発展している。

それはともかくとして、悠元は思い出したように鞄の中へ腕を突っ込むと、一通の色褪せた手紙を深夜に手渡した。

「そうだ、当初は達也か深雪に渡したかったのですが、深夜さんに直接お渡ししておきます」

「……これは……っ!?」

深夜はその手紙の差出人の名で目を見開く。何故ならばその名は、自身の父親である四葉元造であったからだ。

「それはうちの爺さんが預かっていたもので……深夜さんに宛てた手紙です。すみません、こんな時まで忘れてしまっていて」

「いえ、それはいいのだけれど……ありがとう、悠元君。このお礼はいずれきちんとするから……」

そう言って、深夜は悠元の頬に口づけをする。驚きを隠せない悠元に対し、まるで悪戯が成功したような笑みを見せる深夜は耳元でこう述べたのだった。

「私はね、こう見えて狙った獲物は逃さないタイプなの」

……まるで意味が分からない。そう思いながら、慌ただしかった沖縄を離れることとなった悠元であった。

「……」

「深雪、落ち着け」

その頃、真夏なのにエアコン要らずどころか暖房が欲しくなるほどに冷え切った司波家のリビングにて、明らかに不機嫌となっている深雪と、それに対してため息が出そうな表情をしている達也の姿があったのは……ここだけの話である。

◇　◇　◇

穂波と深夜の治療は無事に成功し、深夜の想子感受性も一般的な魔法師レベルにまで落ち着いた。穂波の寿命云々については、こればかりは神のみぞが知る、と言えるだろう。そして、そう長くは生きられないだろうと諦めていた深夜はまだ生きられるということに心なし

か嬉しかった。
「……久しぶりね、真夜」
「ええ……姉さん」
　沖縄から戻った深夜はその足取りで四葉本家に出向き、真夜と改めて話をすることになった。達也の一件を入れれば6年ぶりともいえる姉妹の再会だった。
　真夜が人としての喜びの一端を失ったことで、お互いに蟠りが存在していた。だが、それを奇しくも繋ぎ止めてくれたのは、深夜の息子と同い年ぐらいの少年の存在だった。
「――――沖縄の顛末はこんなところね。それで、真夜。四葉家としてはどう動くつもりか、それを聞きたくて出向いたの」
「そうね……穂波さんのことは話を進めましょう。剛三さんも快く動いてくれるそうよ。あとは、三矢家当主とも話をしないといけないでしょうね。達也のこともあるし」
「事情が事情とはいえ、ということね。その口止めも含めて穂波さんに苦労を負わせるってところかしら」
　元治は達也の［再成］を体験してしまっている。その口止めも含めれば穂波を差し出すのも吝かではないと双方ともに一致している。どこか棘も含むような深夜の言葉を聞きつつ、真夜は意外そうな表情を浮かべていた。
「それにしても、意外ね。姉さんと穂波さんを治療してくれて、その条件が『本当の家名を二人に明かさない』ですもの」
「あんなことがあれば二人も落ち着かないでしょう……深雪は、達也を『お兄様』と呼ぶようになった。きっかけは聞いてないけど、恐らく悠元君ね」
「家柄としては『同じ』……でも、聞いた限りの子だと、きっと大変そうね。案外モテるんじゃないかしら？」
　真夜の放った言葉に深夜は一瞬目を見開くが、彼の容姿なら無理もないと思いつつ呟いた。
「真夜、義理の息子や娘をたくさん欲しがってるのかしら？　……あの子は大丈夫かしら。無駄に変なところで鈍いから」

「その意味では達也も大変そうな気がするわね……悠元君のような息子が欲しくなってくるわ」
　真夜の出した名前に深夜は眉を顰めつつも、四葉の現当主である自身の妹に対してはっきりと言い切るように宣言した。
「こればかりは譲らないわよ、真夜。悠元君は絶対うちの深雪の婿になってもらうんだから」
「たっくんに続いて悠元君もとか、姉さんは贅沢言わないでほしいわ。悠元君を四葉の養子にでもしようかしら？」
「むむむ……」
「うううう……」
「――――お二方、少し落ち着かれたほうが宜しいかと思われます」
　いつの間にか、悠元を中心に関係が修復しつつある姉妹の間でそんな会話が（葉山のフォローのお蔭で取っ組み合いにならない程度に）繰り広げられている中、悠元が盛大なくしゃみをしたのは言うまでもなかった。

当主間の定時連絡（婚約話）（※）

沖縄――――司波家別荘での休養も終わり、三矢家へと戻ってきた悠元はすぐさま元に呼ばれていた。いくら国防陸軍の特務士官とはいえ、自分の判断だけで軍事行動に参加したことからすれば流石に説教もあるだろうな、と思った。だが、実際に元から放たれた言葉は説教でなく謝罪も含んだ感謝の言葉であった。

「お前が自発的に戦闘へ参加し、非公式とはいえ戦略級魔法師になった……すまないな、悠元。十山家のこともそうだが、お前には何かと迷惑を掛けてしまっているな。本来ならば大人である我々が出張らねばならなかった」

「いえ、以前地下室を勝手に作った自分も迷惑をかけた側ですから」

「それは度肝を抜かれたが、今では家の者全員が便利だと言って利用している。今更捨てるわけにもいくまい。さて、ここからが本題だ」

元の説明によると、四葉家現当主である四葉真夜と会談をするということが決まった。日時は3日後で場所は都内にある四葉系列（表向きは四葉を連想させない名前になっている）のホテルとのこと。その場には元治と悠元も参加してほしい、と言われた。この時点で何を話すかは簡単に察することができた。

「自分と元治兄さんも含めてとなると、間違いなく先日の沖縄の一件ですか」

「そうだな。何はともあれ、これで三矢家は四葉家と縁を結ぶことができる。師族会議のこともあるので、あくまでも顔合わせや手打ちのようなものだ」

元から今回のことについての詳細な事情を説明された。

悠元は図らずも達也の秘密を知り、達也も悠元という異才を知った。実は元も元治と悠元の見送りのためお忍びで空港にいた。その際、偶然にも深夜と深雪、達也とすれ違ったと話す。

「もしやと思い、慌てて乗客名簿を調べた。司波という名字を見てすぐに四葉の縁者だと分かった……実は、深夜さんや四葉殿とは義父の繋がりで面識があってな。向こうもプライベートだったから声をか

けなかったのだろうと思う」
　三矢家は偶然気付いたが、諜報を担う七草家も調査して達也と深雪を四葉家の人間と疑うのではないかと考えた。高校に入って公衆の面前に立てば、自ずと目立ってしまうのは明白だろうとも推測した。
「お互いの魔法については詮索しない――――魔法師としての暗黙の了解だな。二人の素性についても四葉家が公表するまで秘匿する。無論、三矢家もだ。元々うちも高校入学まで素性を明かさないルールがある以上、認めないわけにもいくまい」
　下手に刺激して家を潰されるぐらいなら誼を持つのが賢明と元は判断した。穂波のことも既に聞いているようで、元治の嫁選びという仕事が減るのならそのほうがいいと安堵しているようだ。
「……表面上は元治兄さんの嫁に家の格は求めない、と見られますが」
「それで構わない。ただでさえ元継に詩鶴、佳奈に美嘉の実績が一高の学業や九校戦で示されている以上、これ以上は贅沢が過ぎるものだ。この辺の謙虚さはお前から学んだものだよ」
「いや、その言い方をされると自分が反面教師みたいなものじゃないですか」
　悠元の物言いに対し、元が笑みを浮かべていた。
　ただ、父親の言い分も理解できると悠元は感じた。元治を除く兄や姉達の成績もそうだし、元治も一応四葉家現当主の身内を救った側の人間だ。その功績に報いる形で穂波を嫁がせるのかもしれない。
　この場合、四葉家の関係者という線を薄れさせるために剛三が動くことも考えられるであろう。
「まあ、それは今更なのでいいですが……他の師族から警戒されませんか？　例えば、四葉と因縁のある七草家やうちのことを軽く見る十山家あたりは」
「三矢（ウチ）は縄張りをもっていないからな。その意味では気楽と言っていいだろう。前者については然程警戒はいらない。いくつか功績となる餌も与えたからな。後者については、お前のお蔭で大分楽になるだろう」
「自分は特に何もしていませんが……」

「先日、東道閣下と会談した。三矢家の家業に口添えをして貰えることとなったので、政府関係者とも繋がりができた。加えてお前が国防軍に入ることでそのコネも強化できたからな……十山家に何も文句は言わせん」
東道青波（とうどうあおば）。元第四研のオーナーであり、四葉家の〝スポンサー〟ともいうべき存在。聞けば剛三とも知己で、その誼で会談を持つことができたと元は説明した。だが、こちらとしては一切見覚えがないと首を傾げる悠元に元は説明を続ける。
「お前が新陰流の道場で励んでいる姿をご覧になったそうだ。それを見て剛三など軽々超える『抑止力』に足りえる、と断言していたらしい」
「既に戦略級魔法師がいるのに……いや、だからこそですか」
「お前の頭の回転の速さは一家で随一だな」
日本には政府公認の戦略級魔法師が存在する。五輪澪（いつわみお）――――十師族の一つである五輪家の長女。
原作では虚弱体質なのだが、この辺も悠元が梃入れした。具体的には肉体と想子体のバランスが崩れているため、想子を意図的に放出させる起動式を組み込んだＣＡＤをプレゼントした。その上で一定の負荷を掛ける肉体トレーニングを段階的に行うようアドバイスをした。
その表向きの理由をこじつけた上で〝治療魔法〟を施した。具体的には［領域強化］の改良版というものだが。
結果として車椅子要らずになったのだが、『敵を騙すには味方から』ということで車椅子生活は続けている。これをあっさり受け入れた澪が意外にも強かな性格だったことに苦笑したのは言うまでもない。
閑話休題。
大国となれば、複数いるのが当たり前の戦略級魔法師。その切り札が一枚だけというのは心許ない。だからこその『抑止力』として国を守れ、ということなのだろう。
既に戦略級魔法［天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）］を撃っているので問題はないが、実際のところアレよりもヤバい戦略級魔法はおろか、他国の戦略級魔法

師が使うものも軽い事前準備だけで使用できる。
　さらに、それを現時点で十数発撃てるだけの想子保有量に跳ね上がった。死にかける（沖縄のときは一度死んだようなものだが）と想子保有量が跳ね上がるってどういうパワーアップ方法なのかと思う……解っていても意図的にやりたいとは思わないが。
「今更ですけど、１２歳の台詞じゃありませんね。反省いたします」
「ふふ、それを自分で言うとはな。いや、好きにしろといったのは私だから、お前はお前の思うとおりにやれ……いずれにせよ、相手は四葉家の現当主だ。お前ならば問題はないと思うが、失礼のないように頼むぞ」
「はい」
　なお、四葉家当主との会談においては、現在名乗っている名ではなく本当の名を使うように言い含められた。というか、深夜に正体がバレている以上真夜が知らないという可能性は考えにくいだろう。
　それに、深夜の子である達也と深雪に関わることを少なからず知った以上はこちらも知られるリスクが当然伴うし、深夜と穂波を治療した件も考慮するものと思われる。
「ちなみにですが、自分が戦闘に参加したことに関して何か注意事項はありますか？」
「四葉殿からはどの道聞かれるから、そこはお前の判断に任せよう。ただ、侍郎や詩奈には話さないでくれ」
「自分から好き好んで話そうと思えない事柄ですが、了解しました」
　聞くだけでも現代の価値観を逸脱したような惨状しか出てこないし、それに共闘した達也の件もある為、元の釘差しについては了承の旨を口にしたのだった。
◇　◇　◇
　３日後、三人は指定された都内にある四葉系列（表向きは四葉家の関与を隠す為、いくつかの会社を挟んでいる）のホテル最上階――ＶＩＰルームに案内された。まず出迎えたのは執事服を身に纏った高齢の人物。四葉家において執事長を務める葉山忠教（はやまただのり）が頭を下げて出迎えた。

「三矢元様、それにご子息の元治様に悠元様ですな」
「ああ、今回の招待を非常に感謝している。二人とも、彼が四葉家の執事長である葉山殿だ」
　元からすれば師族会議で面識があってもおかしくはないと思いつつ、元治と悠元も頭を下げる。執事としての一線を弁えているとはいえ、現当主に対して意見できるだけの実力者なのは間違いないと感じる。
「三矢元の長男である三矢元治です」
「同じく三男の三矢悠元と申します。よろしくお願いします、葉山さん」
「これはご丁寧に、葉山忠教と申します。四葉の執事を務める雑輩相手に大変痛み入ります。それでは、僭越ながら御当主様のもとへご案内いたします」
　葉山の導きで通されたのは大きな会議場のような部屋。その上座に一人の女性が座っていた。遠くから見てもハッキリとわかる尋常ならざる雰囲気。彼女こそ『極東の魔王』や『夜の女王』とも謳われる四葉家現当主、四葉（よつば）真夜（まや）である。
　そして、元は真夜に対して頭を下げた。
「四葉殿。此度はお招きに与り、光栄に存じます」
「フフ、そんな殊勝にされてしまっては困りますわ、三矢殿。私達は同じ十師族の当主同士なのですから。それに、今回のことに関して礼を述べなければならないのはこちらの方ですのに」
　この場合、真夜の言い分も理解できなくはない。同じ十師族の当主同士である上、今回の場合は真夜の身内が三矢家の人間に助けられた形となる。
　だが、それに対して元が取った態度は七草家のように意地を張らず、敵対しない姿勢であった。
「四葉殿ならご存知のことでしょうが、私はそれほど尊大な人間でもありませんし、それに何かと七草殿とも近い身上。必要な時に頭を下げねば忘れてしまいますからな……それに、義父に四葉の強さを聞かされて育ちましたものですから」

「あらあら、そういうことにしておきましょうか。なら、夕食でもしながらお話しいたしましょう。葉山さん、お願いね」
「畏まりました」
　立場的に同じ十師族ではあるが、今回のことを笠に着ないという文言を含めた元の言葉を聞いて真夜はクスッと笑みを零した。東道青波のことも既に承知しているが、今はそのことに触れることでもないと思いつつ葉山に指示を出すと、彼は短い返事の後に音を極力立てることなく部屋を後にした。
「三矢殿、そろそろそちらのお子さん達を紹介してくださらないかしら？」
「おっと、そうでしたな。長男で次期当主の元治、そして三男の悠元です」
　元に促される形で元治と悠元は自己紹介をする。それを聞き終えた上で真夜は面白そうな笑みを二人に向けていた。
「四葉家現当主、四葉真夜と申します。先日は姉とその子ども達も含めて助けていただいたこと、真に感謝いたします」
　値踏みということでもないが、心の中まで見透かされるような視線に元治は緊張していた。逆に悠元は一周回って落ち着いていた。深夜と間近に対話したせいでそこまでの警戒感を何故か持てなかったのだ。
『ああ、やっぱり深夜さんの双子の妹だわ』
　という感想ぐらいしかでてこなかった。ともあれ、豪華な洋食のコースに舌鼓を打ちながら、沖縄侵攻のことで尋ねられたことに答えた。
　あれについては一応軍事機密なのだが（真夜曰く風間から聞き及んだとのこと）、悠元が達也と二人で〝殲滅〟したことを説明すると、元は冷や汗を流し、真夜は興味津々で聞いていた。
　その際に思い切って尋ねてみることにした。それは達也と深雪のことだ。
「四葉殿。先程の発言からして身内をお認めになるような言動が見受けられましたが……よろしいのですか？　他の師族が探りを入れる

やもしれませんが」
「どの道、今回のことで姉に気付いて七草家あたりが探りを入れるでしょう。それに、魔法科高校に入学すれば自ずと表舞台に立たされることは逃れられないことは言わずもがなですもの。無論、このことは秘密といたしましょうか？」
確かに、達也はともかくとして深雪は自ずと周囲を惹き付けてしまう。彼女のガーディアンである達也も芋蔓式に目立つことになるだろう。それに、魔法技術に対して好奇心旺盛な面は極端な感情を抑制されてしまっている達也でも難しい話だ。
まあ、原作主人公とヒロインに目立つなと言っても暖簾に腕押しするようなものだが。寧ろ障害物を通り過ぎるごとに『分解』しそうなものだ。
真夜の真剣な眼差しに臆することなく言い切った上で元治に肘鉄を入れつつ呟いた悠元に、元治は返事しかできなかった。
「ええ、それに異存はありません。兄さんも道連れなんですからね」
「あ、ああ……そうだな」
「やれやれ……」
「ふふ……」
そして、デザートも食べ終えて食後のティータイムとなり、漸く今回の会談の本編となる。十中八九沖縄絡みだということは予測していたが、その展開は少し驚いてしまった。
「さて、今回お呼び立てしたのは他でもありません。姉の護衛を務めている桜井穂波さんのことです。聞けば、そちらの元治殿が好いて告白なさったと聞き及んでいます」
「そのことは義父からも聞きました。……さしあたっては婚約、ですかな？」
「ええ。上泉殿より然るべき家の養女とすることを承諾していただきました。その後に婚約としたいのですが、よろしいでしょうか？」
「異存はありませんな。形はどうあれ、息子が自分から本気で好いたとなれば良き縁談でしょう。私も三矢の当主として、父親として肩の荷が一つ下ろせますからな」

然るべき家――――となると、三矢家の場合は現代魔法と古式魔法のどちらでも可能だが、下手に波風を立てないことを鑑みた場合、多分百家の適当な家を選ぶことになるだろう。剛三の場合、百家の全ての家と面識があるので、四葉としても間接的にその家との繋がりを得ることが出来るというわけだ。
「あら、そんな簡単に決めて宜しかったのですか？」
「寧ろ、此方が非礼を詫びねばならない次第ですし、それを快諾して頂いた四葉殿に感謝せねばなりません。何かと妥協しがちだった息子が自ら望んだのなら、私に異論を挟む余地はないでしょう」
完全に既定路線を組まれた形で、当主間のやり取りが完全に定時連絡ぐらいの言葉の羅列。何故かトントン拍子に決まる話についていけず、口が半開きとなっている元治に悠元は軽く肘鉄を入れる。
その様子を元と真夜に見られ、元は苦笑していて真夜は笑いを堪える様に口元を手で押さえていた。
「まったく……申し訳ない、四葉殿。うちの長子は些か作法に不慣れなものでして。三男は義父のお陰か、逆に礼儀作法が成っている始末ですので」
「ふふ。宜しいのですよ、三矢殿。しっかりされている息子の存在というのは、それだけで頼もしいということですから」
その言葉を聞いて元治は頬を赤く染めてうつむき、悠元は苦笑が漏れた。何で一回り上の兄の面倒を見なきゃならんのよ、とは思いつつ話を進めるよう元に視線を送った。それを見て元も頷き、真夜との話を進める。
後日、当人同士で改めて婚約の挨拶をすることで合意となった。ここまでは元治に関する要件だろう。つまり、ここから先は悠元に関する案件ということだ。
「先日、風間大尉と会談いたしました。聞けば、悠元殿は国防軍の兵器開発部、特別技術顧問兼特務士官という形で所属していると」
「ええ。それについては間違いありませんが……父経由ではなく、自分が直接四葉の魔法技術向上に寄与してほしいと？」
「そこまでは贅沢が過ぎるというものですし、師族会議の規則に抵触

してしまいます。そうですね……私の知り合いがＦＬＴの筆頭株主をしております。そこに何らかの形で所属してほしい、というのは如何でしょう？」

真夜はそう述べたが、ＦＬＴ社の筆頭株主は司波深夜――――実質的に四葉への魔法技術協力をしてほしいというもの。おそらく沖縄侵攻における達也の使った特化型ＣＡＤや『サード・アイ・ゼロ』のことも風間経由で知っているのだろう。

ただ、直接的なものだと三矢家と四葉家の〝共謀〟になってしまうため、ＦＬＴというクッションを置くことで追及を回避する、ということなのだろうと思われる。

今回の元治の婚約の引き換えというわけではないが、それを匂わせてくるあたり、流石は十師族の当主だろうと思いつつ、悠元はゆっくりと立ち上がる。

「そのお話は非常に魅力的ですが……ちなみに、仮に自分が籍を置くとした場合、どこに配属される形となるでしょう？」

「そうですね……葉山さん、どうかしら？」

悠元の疑問を聞いて真夜が葉山に問いかけると、躊躇う間もなく即答した。

「それでしたら、ＣＡＤ開発部第三課がよろしいかと。あの場所なら悠元様の才能を僻む者もおりますまい」

「成程。ということだけれど、いかがかしら？」

「異存はありません。改めてＦＬＴへの所属の件、よろしくお願いいたします」

こちらとしても願ったり叶ったりである。三矢家の地下でも開発はできているが、機密の問題というか詩奈が下手に触って怪我でもされたら困るという兄としての心境があった。妹は時として好奇心旺盛な面が強い……とりわけ自分のやっていることに関しては。

言っておくが、別にシスコンなわけではない。侍郎が詩奈の恋人になるなら許すだけの話だ……広義的にシスコンだこれー!?

詩奈のことは置いといて、どうせ四葉の秘密の一端に触れたんだ。こうなれば達也に敵対しないルートを進むためにできることはやる。

そういや、後でエシェロンⅢとフリズスキャルヴをどうにかしないとなぁ。宇宙に飛ばされて達也が『分解』で暴れたら責任持てるのか？　いや、愛国心の塊とも言うべき〝あの男〟にそんな気はないだろうな。『ディオーネー計画』の関係者の首が飛んでも俺には責任など持てないけど。むしろ地球滅亡のカウントダウン……洒落にならないな。

仕方ないから情報遮断魔法でも作るかな、と思った瞬間に魔法式が組みあがった。解ってたけど、無意識的に組みあがったらビックリするよ畜生……もう諦めたけど。

一先ず『ディープ』と『ベータ』は早急に組み上げる。『バリオン・ランス』も要検討かな。直感的に魔法式を組めるけど、ＣＡＤ調整はまだ完全マニュアルの領域まで踏み込めてないから調整の練習も必要である。やることが意外に多くて頭抱えそうだ。

あ、でもその前に専用のＣＡＤが必要だ、と察して内心溜息を吐いた悠元であった。

◇　◇　◇

三矢家との会談を終えて、部屋には四葉家の人間――真夜と葉山の二人だけとなった。

暫し流れる静寂の後、口火を切ったのは葉山であった。

「しかし、よろしかったのですかな？　三矢殿は好意的に見ておりましたが、穂波殿は……」

「一番懸念される問題をクリアされてしまったから、反対する理由も無くなったというわけよ。遺伝子レベルに改善が見られ、恐らく普通の人間ぐらいの寿命なら問題はない、と四葉（ウチ）の医者が太鼓判を押したんだもの」

この場に信頼できる者しかいないからこそ、先程とは打って変わった口調で述べる真夜。

「それに、姉さんの健康状態を健常者と変わらない様相まで変化させた……少し若返ったのはショックだったけれど」

医学的に寿命の短い調整体の寿命を延長する――確実に医学どころか自然の摂理に喧嘩を売るレベルの事実。魔法師としても一生

どころか将来の子孫まで食べていけるだけの功績。それを成したのは甥や姪と同い年の少年。
　更には、手の打ちようがなかった深夜の症状を改善せしめた。真夜としても、少なからず心配であった双子の姉の懸案が取り除かれたのだ。
「もしかしたら、悠元殿なら今まで四葉を苦しめていた一番の難題を打ち破れる、と？」
「そうね……でも、今回の一件でようやく理解できたわ。悠元君に無理強いはできないと」
「と、言いますと？」
「深雪さんよ。あの子、どうやら彼に好意があると姉さんから相談されたわ……難しいわね」
　深雪が悠元に好意を抱いているのは真夜としても見逃せない懸案である。ただ、片や国家非公認の戦略級魔法師であり、片や四葉家次期当主候補。彼の扱い次第で師族二十八家に軋轢を生みかねない、と理解している。
　悠元に無理強いをして深雪を悲しませたら確実に達也まで動く。向こうとしても四葉に敵対しないつもりなのは読み取れていた。
　そして、真夜は剛三から一通の手紙を受け取っていた。それは真夜の父である元造が剛三に託した最後の手紙。それがあったからこそ、真夜は深夜との関係を修復することができた。
「今回のことで姉さんと関係を修復できつつある以上、悠元君に下手なことはできない。彼本人にその意識がなくても、これは事実よ……それにね、葉山さん」
「何でしょうか？」
「『たっくん』が本音を言える親友に、あの子ならなってくれるかもしれない。ふふ、夢を見すぎかしら？」
　達也は、普通の魔法師にはない強大な力を持っている。その意味で同じような力を持つ悠元なら達也と対等に語り合える存在へなってくれるかもしれない……淡い期待なのかと肩を竦めつつ苦笑する真夜に、葉山は珍しく首を横に振った。

「いえ、奥様……悠元殿なら、何故か成し遂げられそうな気がいたします」
「それは、四葉の執事としての勘？　それとも、葉山さんの魔法師としての勘？」
「そうですな。強いて申し上げるならば、人生経験からくる勘にてございます」
「葉山さんらしい説得力がある言葉ね……一杯貰えるかしら？」
「畏まりました」
　静かに部屋を後にする葉山を見送ることなく真夜は窓の外に映る都会の夜景を見つめた。
　明かりで星など見えないが、その夜空にひとつ流れ星が煌いたような気がした。

魔工技師・上条洸人（※）

三矢家と四葉家の非公式会談から1ヶ月後、四葉家から三矢家に届けられた手紙（表向きはＦＬＴからの手紙）で悠元は元の呼び出しを受けることになった。恐らくはＦＬＴに関わる件での準備が整ったとかそういう類の話だろうと推測していたのだが、元が最初に言い放った言葉は理解の範疇を超えていた。

「――ＦＬＴの次席株主ですか？」

「そうだ」

「夢じゃ、ありませんよね？」

「夢であったと語れるなら、私も与太話の類として語りたいぐらいだ」

最初、何を言っているのか全く理解できなかった。それは悠元だけでなく、正面の机に座っている元ですらも頭を抱えたそうなそぶりを見せていた。普通ならば魔工技師としての入社手続きの準備が済んだぐらいにしか思っていなかったし、別に高望みなんてする気などないし、ＦＬＴの株式が欲しいとは一言も言っていない。

四葉（フォア・リーブス）の時点で四葉の息が掛かっていることなど明白だし、ましてやその会社の筆頭株主は司波深夜――四葉家現当主・四葉真夜の姉だ。先日の真夜との会談の中で彼女がＦＬＴの話題を出したあたり、恐らく深夜とは予めすり合わせをしていたのだろうと思う。

「それが自分にですか？」

「ああ。お前のことは高校入学まで秘匿しなければならないので、法的な所有者は私となってしまっているが」

「それは仕方がないことかと」

譲渡されるＦＬＴの株式は全体の約３３パーセント――総株式の約３分の１を譲渡するとか正気を疑うレベルの取引になっている。元々三矢家が裏家業の関係でＦＬＴとの売買契約を結んでいるため、ＦＬＴの株主になるという事実は「さほど混乱が見られなかった」と元は述べた。

「他の株主にどんな説得をしたら、こんな破格的な取引が成立するのでしょうか？」

「それは私が四葉殿に直接聞きたいぐらいだ。元々三矢を継がないからこそ、お前を四葉に引き込みたいのやもしれぬな」
「んな無茶苦茶な……」
四葉の本気度合いがヤバいように見えるが、実際のところは筆頭株主である深夜が悠元を引き込むための一手だということは……深夜本人以外知らない。
その根拠として挙げられるのは深夜と穂波の治療に関してなのだろうが、その秘密については深夜も秘密にすると約束している。流石に少し若返ったことで疑われるのは仕方がないと思う。
「それは置いておくが……お前が所属する予定のＣＡＤ開発第三課だが、達也君もどうやら一枚噛んでいるようだ。立場的には開発本部長の御曹司と言う体ではあるが」
元はそう言いながらＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課の調査結果を述べていく。三矢家の裏家業のお陰からか第三課の陣容を知ることとなったわけだが、元の目から見ても優秀な人材が冷遇されているという有様だ。
ここ最近だと、牛山欣治（うしやまきんじ）という冷遇された技術者を第三課に異動させている。恐らくは達也が血縁上の父親を〝脅した〟のだろうと思う。
一流のＣＡＤメーカーならば能力を重視するのがいいわけだが、技術者や職人という存在はどこか一癖や二癖もある性格の人間が少なくない。そういった部分での軋轢で部署の島流しという憂き目に遭ったという事例は多く存在する。
「それで、自分はどういう立ち位置に置かれるとかは分かりますか？」
「おっと、言い忘れていたな。悠元は表向き開発第三課の魔工技師として配属される。早速だが、明日ＦＬＴに出向いて欲しい。先達には既に連絡しているそうだ」
ＦＬＴの株主という立ち位置はあくまでもおまけ（という扱いにしては大きすぎるが）で、メインはＦＬＴの魔工技師として。流石に頻繁に出入りするのは要らぬ噂を立てることになる為、在宅勤務（リモートワーク）という形で働くことになる。正式な職員としての採用になる為、給料や福利

厚生などの待遇も受けられるとのこと。
　それに関して異論はなかったが、期日を指定されることによる懸念もあった。
「それはいいのですが……風間少佐の方針で達也たちと直接接触しない様に言われてるんですよね。まあ、何とかしてみます」
　接触しない理由は恐らく沖縄侵攻によるものが大きいが、これによって深雪と九校戦を見に行く約束が頓挫してしまった。これに関しての詫びの手紙を送ることも考えつつ、第三課へ手ぶらで行くには失礼だと思い、何らかの手土産を持参することにした悠元であった。
　最悪の場合は風間に責任を負わせることも吝かではない。別に恨みなどないが、彼の一言がなければ九校戦の観戦も可能だった話だけに。

◇　◇　◇

　上泉の総本山からでは遠いし、今は三矢の姓を名乗っていないのでＦＬＴへの訪問は東京の上泉別邸を使うことになった。これでも表向きは「株主となった親族の代理訪問」という体になっている。ＦＬＴの株式は大部分が深夜と悠元で保持しているが、残りの僅かな部分にも株主は存在しているので通用する形だ。
　ＦＬＴに入って受付に用件を伝えると、まず通されたのは社長室であった。元々四葉の息が掛かった会社なので、社長の彼も当然四葉家の意向を受けての人選となっている。
「はじめまして、長野佑都と申します。本名は別にありますが、家の仕来りによって公表出来ないことをお許しください」
「お話は既に伺っています。君の手腕のほども少しばかり聞いています。さて、開発第三課に所属するということですが……こちらが契約の書類になります」
　社長は明言こそ避けたが、間違いなく四葉本家から事情を既に聞いていたのだろう。手腕に関する部分は恐らく達也に渡した銃状特化型ＣＡＤのことが要因とみられる。彼からは自分が国防軍に関係する職務に就いていることを鑑みてのものなのか、魔工技師『上条（かみじょう）洸人（ひろと）』の名が書かれた契約書類を悠元に差し出した。正直、長野佑都

の名を使って身動きが取れなくなるよりはまだいい、と考えて書類を一通り読んでからサインして社長に返した。
「ありがとうございます。それで、今日はこのまま開発第三課のほうに出向きますか？」
「元からそのつもりで来ましたので」
「分かりました。主任には私のほうから話を付けておきましょう」
　社長からは開発第三課に関する話も聞いたのだが、その中には達也に関する話も含まれていた。開発本部長の息子にあたるのだから、出てこない方がおかしいだろう。原作だとトーラス・シルバーの功績を羨んで名誉を達也から奪ったわけだが、この世界でも同様のことが起きるだろう……彼の愛人の自己顕示欲を考えれば、起こらないと思える思考回路の方が正気を疑う。
　そんな司波家の家庭事情はさておき、いきなり初対面の相手に信用を得るのは厳しいと分かっていたため、自分の持っている別の肩書きを出すことも考えつつＣＡＤ開発第三課に踏み入れると、悠元を待っていたのは目的の人物――――第三課主任になったばかりの牛山であった。
「お、坊主が今日のお客さんか」
「はじめまして、長野佑都と申します……正式には三矢悠元ではありますが、これはオフレコでお願いします」
　アッサリとばらすのはどうかと思うだろうが、相手は職人気質な人間なので嘘をつくのは宜しくないと思ったからだ。牛山もその名前を聞いて驚きはしたが、すぐに気持ちを切り替えて悠元に話しかけてきた。
「いやー、思わず面食らってしまったよ。御曹司といい、近頃の若者は油断ならねえな」
「誉め言葉だと受け取っておきます。それで、ぶしつけなお願いになってしまうのですが……」
　そう言って、悠元は鞄から紙の束を取り出して差し出した。それを受け取った牛山が読み進めていくと、紙束を持っていた手が震えていた。それは恐怖というよりもＣＡＤ技師としての興奮に近かった。

それは、悠元がこの先のことも考えて設計した悠元専用の銃状デバイス。ネームはさしずめ『ワルキューレ』と『オーディン』――北欧神話から名を借りる形とした。
「もしかして……悠元君がこれを設計したのかい？」
「信じられませんか？」
「いや、同じ魔工技師として君の目から本気さが伝わってくる。こいつは将来自分なんかよりも大物になるという技師の勘みたいなものだが……こりゃ、大したもので片付けられるレベルなんかじゃねえ。今までのＣＡＤの技術が数十年分ぐらい詰まっているようなものだ」
内蔵する予定の内部機構は全て悠元の頭の中にしかないため、設計図に書かれているのはそれらを除いた基本的構造でしかない。だが、その洗練さだけでも現在〝御曹司〟から依頼されたカートリッジ型ストレージ採用型の銃状デバイス――その雛型としても十二分に完成している、と牛山は判断した。
「実は、御曹司から似たタイプのデバイスを頼まれていましてね。ループ・キャスト・システムを採用したデバイス設計をお願いされていまして……この設計図面を使わせてもらえませんか？」
「構いませんよ。こちらも牛山さんにデバイス作製をお願いする立場ですし、第三課に籍を置くので吝かではありません」
牛山には今後在宅勤務のＦＬＴ所属魔工技師『上条洸人（かみじょうひろと）』として第三課に籍を置きつつ、次席株主である三矢家の代理として時折訪れるという話で決着することが出来た。そして、デスクには盗聴などを考慮した魔法を設定しておき、帰宅の途に就いた。

◇　◇　◇

沖縄での戦いの後、伊豆の別荘で夏休みの残りを過ごしていた達也は、自らの立場を使って何かできないかと考えた。真っ先に思い浮かんだのは、自分の父親がＦＬＴの要職に就いているということだった。
そこから、沖縄から戻って来た深夜から母親呼びをするようにと言われた折、達也は深雪のガーディアンとして守り切る為のＣＡＤが必要だと直談判した。

それに対して深夜は「分かりました。達也、しっかりやりなさい」と短めだったが、今までにない柔らかな表情で言われたことに流石の達也も一体何があったのかを邪推せずにはいられなかった。

伝手は出来たが、達也の考えているプランで必要な技術は多く、難航を極めた。だが、そこで達也は沖縄防衛戦で見た佑都の魔法技術を思い出していた。

その時、達也は自身の『眼』で佑都の起動式を見ており、その中に起動式の最終段階に同じ起動式を魔法演算領域内に複写する処理を付け加えることで、二度目以降の起動式の展開工程を省略し、反復発動を高速化する技術が使われていることに気付いた。

その記述の完全な再現こそ出来なかったが、同一の魔法を魔法師本人の演算キャパシティが許す限り何度でも連続して魔法を発動できるように、ソフトウェア技術として完成させた。

達也はこの技術に『ループ・キャスト・システム』という名を付けた。

（……牛山さんから連絡があった時は、流石に驚いたな）

ループ・キャスト・システムを見据えたＣＡＤ『トライデント』の作製。その為に牛山を第三課へ引き抜き、彼に作製を依頼してから３日後、『試作品が出来ました』という牛山の連絡を受けて、達也はＦＬＴへと出向いた。

流石に早すぎるのではという思いもあったが、職人気質の牛山が嘘をつくとは思えない。何はともあれ、まずは実際に見てから判断するのが先決と考え、深雪にそのことを伝えると一人でＦＬＴに出向いた。

「お待ちしていましたよ、御曹司」

「いえ。それで牛山さん、頼んでいたものの試作品が出来たということですが……」

「ええ、こちらにあります」

牛山が案内したのは魔法の実験室。銃形状の無骨なデザイン――――試作品なので仕方はないが、それに加えて数種類のカートリッジ型ストレージも準備されていた。正直なところ、たった３日で達也の注

文に応えたところは流石だと感じていた。
「御曹司が望んでいた機能は搭載していますが、ＣＡＤ自体の調整は御曹司がいないとできませんので」
「分かりました」
　達也は手早く調整を済ませて早速魔法発動の手応えを感じていたのだが、かなりハードのレスポンスが良く、今まで使ったことのあるＣＡＤの中で一番手に馴染んで使いやすい代物だった。
　ループ・キャスト・システムについても問題なく作動していて、試作品とはいえ完成度は極めて高いと言えよう。これには達也も納得のいく出来だと言葉に発した。
　だが、それを聞いた牛山の表情はと言うと、まるで自分の功績ではないと言いたげにバツが悪そうな表情を垣間見せていた。
「凄いですね。流石は牛山さんです」
「……実を言っちまいますと、それの設計がちょっと行き詰まっていたところに天啓と言うべきか、凄い天才技師が第三課に配属されましてね。在宅勤務専門の魔工技師で上条洸人という御曹司と同い年ぐらいの少年なんですが……話が逸れましたね」
　牛山はその上条洸人なる人物がハードウェア部分の雛型を設計し、それをベースとして『トライデント』の試作品が出来たと話した。そして、その雛型となる銃形状デバイスはプログラム待ちとなった状態であることを明かした。
「初耳ですね」
「まあ、御曹司にＣＡＤ作成を依頼された翌日のことですから、知らなくても無理はねえでしょう」
　達也もＦＬＴの社内データは粗方見ていたはずだが、その人物の存在は達也でも与り知らなかった。となれば、ここ最近になってＦＬＴに就職した魔工技師ということになる。
「御曹司には、ループ・キャスト・システムでの手腕を生かして、そのデバイスのプログラムをお願いしたいのですが」
「……まずは、その設計図を見せてもらえますか？」
　牛山がその人物から預かった設計データを事細かく見ていく……

そこで、達也はこのハード設計をした人物に一人だけ心当たりがあった。『トライデント』の試作品を使った時の感触が、真田から以前貰った特化型ＣＡＤや先日の沖縄侵攻で使った「サード・アイ・ゼロ」と非常によく似ていたのだ。もしかしたら勘違いという可能性もあるだろうが、達也の中には確信に近いものを感じていた。

そして、牛山に依頼された二機の銃状デバイスの要求プログラムを見て、達也は確信に至った。以前、沖縄の基地で真田にカートリッジ型ストレージを使用する銃状デバイスを見せてもらった際、それらの設計の大半を〝彼〟がやっていると聞き及んだからだ。明らかに国家機密レベルのブラックボックスを抱えているハイエンドモデルのデバイス……達也は牛山から教えてもらった上条洸人のデスクに座り、メールを作成して送信した。

『お前、佑都だろ？』

直球すぎるメールかもしれないが、すぐに帰ってきたメールでは『流石深雪のお兄様だわ』と返ってきた。その文面を打ったのが自分だと良く分かったな……と少しばかり警戒したが、一緒に書かれていたプライベートナンバーとメールアドレスを見て持っていた携帯端末で連絡を取ると、ワンコールが鳴り終えるまでに通信が繋がって久々に聞く佑都の声が響いてきた。

『久しぶりだな、達也』

「ああ……にしても、良く分かったな。もしかしたら別の人間かもしれないのに」

『そこにある端末は映像通話も出来るから、それで少し確認しただけだよ』

よく見ると、モニターに内蔵のカメラが埋め込まれていたので「成程」と納得した。それはともかく、と佑都のほうから話を切り出した。

『それで、牛山さんに少しだけ聞いたんだが、第三課に出入りしてるんだろ？　可能な範囲で構わないから協力してほしい』

「それは構わないが、あれだけのハイエンドなデバイスでないとダメなのか？　見るからにブラックボックスも多いようだが……」

『あそこからスペックを下げると逆に足枷になりかねなかったし、真

田大尉から承諾を貰ってる代物だから。その代わりと言ってはなんだが、達也のＣＡＤである「トライデント」のハード設計を全面的に請け負ってやる』

彼が国防陸軍の技術顧問をしている上、真田や風間とも繋がりを持っていることは達也も知っている。真田から『トライデント』関連のことを聞き及んでいてもおかしくはない。それに、ここまでのハードウェア設計能力は間違いなく世界トップクラスである……と考察して、達也は一息吐いた。

「分かった。プログラムに関しては俺が全面的に面倒を見よう」

『助かるわ。流石にアレから更に複雑となると誰かの協力が欲しかったからな……そうだ、どうせならチームでも組むか？　名前はそうだな……「トーラス・シルバー」なんてどうだ？』

「佑都の名前が一切入っていないが？」

『いやー、流石に自分の名前を入れるとややこしいことになるからな』

これには色んな事情が含まれているわけだが、それはまた別の機会に話そうと思う。

この後、二人が未成年ということで牛山がそのまま監督責任者という形で加わり、三人一組による「トーラス・シルバー・プロジェクト」が発足した。その皮切りとして発表されたのがシルバー・シリーズの第一弾――――銃状デバイスの「シルバー・ホーン」とハイエンドモデル「フォース・シルバー」。それと併せてループ・キャスト・システムも発表され、ＦＬＴは世界に名立たる魔工メーカーとしての第一歩を踏み出したのだった。

バレンタインと大人の事情

私の名前は三矢詩奈（みつやしいな）といいます。三矢家の末っ子で、両親ももちろんですが兄や姉達も本当に私のことを可愛がってくれています。私は生まれつき耳が聞こえすぎるという異常聴覚を持っているため、魔法を使うにも苦労していました。

お父さんは三矢家の現当主で、お母さんとは恋愛結婚だったと聞きました。その時の馴れ初めはお父さんから『詩奈にはまだ早い』と言われてしまいました。お母さん曰く『恥ずかしがりやなの』ということだそうです。

長男の元治（もとはる）兄さんはお父さんの後を継ごうと猛勉強しています。そして、結婚相手も決まったそうです。由緒正しき家柄で「渡辺（わたなべ）家」という百家の一つだと聞きました。そうやって魔法使いの血を繋いでいくのは当たり前だそうです。

次男の元継（もとつぐ）兄さんはお母さんのほうの実家――上泉（かみいずみ）家に婿養子という形で家を出ました。偶に帰ってきてはお土産を渡してくれる面倒見のいい兄です。ただ、強い人を見ると戦いたくなるというのが玉にキズです。

長女の詩鶴（しづる）姉さんは現在魔法大学の2年生です。姉さんは高校からの親友である津久葉夕歌（つくばゆうか）さんを偶に家に招き入れていて、私も一緒に遊んでもらったことがあります。詩鶴姉さんは普段おっとりしていますが、武道に関してはかなり強いらしいです。

次女の佳奈（かな）姉さんは兄弟姉妹で唯一糸目です。その理由は眼の力が強いらしく、必要以上の負荷を避けるためにそうなってしまったそうです。それなら特注の眼鏡を掛ければいいのかもしれませんが、しっかりと制御するためには慣れるしかない、と言っていました。私の場合は聴覚が強いので、似たような悩みかもしれません。

三女の美嘉（みか）姉さんはよく一緒に遊んでくれます。本当にいつ勉強や魔法の訓練をしているのかわからないほどです。それでもお父さんやお母さんからすれば『やんちゃだけどよくできた娘』ということらしいです。

そして、二つ上で三男の悠元(ゆうと)兄様。私にとっての憧れであり、敬愛すべき人。昔はお母さんの実家で暮らしていましたが、度々帰ってきては一緒に遊んでくれます。最近は一高への進学のために家にいることが多く、私は勉強のために兄様の部屋を訪れます。その度に侍郎(さぶろう)君が不機嫌になるけど、どうしてだろう？

三矢家の使用人として働いている矢車(やぐるま)家の侍郎君とは誕生日が二日しか違わないので、私からしたら弟のような存在なのかな。悠元兄様は『侍郎なら詩奈に相応しいな』と言っていたのですが、それは護衛としての意味なのか、と尋ねたら兄様は苦笑していました。

『好きな人のタイプは？』という質問を聞かれたとき、私は『悠元兄様みたいなカッコいい人』と答えたら、兄や姉たちは揃って肩を落としました。どうしてでしょうか？

だって、悠元兄様は勉強や運動ができて魔法も上手で、おまけに料理や菓子作りも得意です。そして、容姿もカッコいいです。

それだけでなく、私の身に着けているイヤーマフ型ＣＡＤは兄様からのプレゼントで、これをつけていても外からの魔法に対する感覚が鈍くなくなりました。

確かに血が繋がっているので結婚はできませんが、付き合うとしたら兄様みたいな人です。これだけは譲れません。

そのことをお父さんとお母さんに聞かれたときに言ったら、お父さんは頭を抱えてしまい、お母さんは『あらあら』と笑みを浮かべていました。何かおかしかったのでしょうか？

◇　◇　◇

――西暦２０９５年２月１４日。

一般世間ではバレンタインデーとしてリア充とそうでない者たちの差が出る日。だが、俺からすれば誕生日でもあったりする……誕生日のことは幼馴染と家族以外に言っていないので、誕生日プレゼントがチョコになる有様というか、無理に考える必要はないと言っている。

姉さん達と妹からはチョコレートだった。お返しは『お願いだから市販のもので』と姉達に言われた。材料費節約するなら手作りがいい

のに……まあ、いいか。幸いにして、懐は温かいので問題はない。
妹の場合は『手作りのクッキーを下さい』と強請られたが、これはこれで可愛い妹の我儘だと思っている。シスコンだと言われても否定はしないが、彼女を娶ろうなどと言う気は毛頭ない。
誕生日プレゼントとしては、父からは武装一体型ＣＡＤ、元治からは魔法理論の本、元継からは……木刀が送られた。こればかりは周囲から総ツッコミが入る始末だったと言っておく。別に物騒な武器を送られたわけでもないので、これぐらいは次兄のお茶目だと思っておく。
矢車家をはじめとした使用人達からはハンカチやネクタイなどパーティーでのアクセサリー系を贈られた。侍郎からはネクタイピンを贈られた。個人的に高ポイントをあげたくなる。なお、それでも詩奈からすれば弟のような存在らしい。頑張れ侍郎。
誕生日関連としては家族内からは割といい反応だろう。幼馴染関連も特に問題は生じなかった。こちらに関しては問題ないと言っていい。
その一方、バレンタイン関連では問題が山積みであった……その根拠として挙げられるのはその翌日のことで、自分の机の上に積み上がっていたチョコの山。
別に韻を踏んだ訳ではないというのは察してほしい。
「はぁ……」
誰からなのかって？　それは……魔法師関係のチョコである。実家（厳密には本当の姓）を公表していない関係で大抵は上泉家に贈られるため、翌日にこうなることが発生している。だが、年々増えているのだ。
爺さんの絡みで顔を合わせることはあるが、それでも必要最低限の礼儀しかしていないはずなのにだ。しかも、年を経るごとに本命の割合が増えてきている気がする。
「えっと、響子さんはまぁ、義理だから問題なしとして……こっちは、一色家？　愛梨とそこまで親身になった覚えなんてないが、そうでなきゃ送ってこないか。んげっ、一条の妹もか……吉祥寺の奴、頑張れ

よ。将輝と揃って恋愛面はヘタレかよコノヤロウ」

長野佑都として色んなパーティーに顔を出すのは結構な頻度となっている。なので、魔法使いの家柄としてはマイナーな部類のはずなのに、結構親しげに会話をしてくる人が多い。大抵の場合は隣に爺さんがいたので、その有名税なのだろうが……ここにあるチョコのいくつかはそれの影響だろう。

国防軍関連で藤林家は解る。長野佑都関連なら一色家、一条家、五輪家、十文字家、渡辺家、千葉家、北山家、津久葉家……あれ？しれっと四葉の分家混じってね？　というか、一番最後の……ああ、確か詩鶴姉さんの親友の夕歌さんだっけか。数回ほど面識あったわ。

その半分近くは義理チョコだが、お返しは手作りのクッキーにしておこう。何故か女性陣には不評なんだよな……この前、五輪家の長女である澪さんに食べてもらったら『佑都君は私を泣かせたいの？』と言われた。誠に遺憾である。

流石に市販のものを買って贈るのでも構わないのかもしれないが、相手が手作りをしている以上は手抜きなんて出来るはずもない。そう言ったら北山家長女の雫には『佑都は女泣かせだね』とか言われるし、彼女の親友も苦笑していた……何故だ。

本名の『三矢悠元』名義では四葉家関連――真夜さんに深夜さん、それと深雪からである。深雪の手の込みように、何かチョコの材料以外に『名も無き底知れぬ何か』が含まれているような気がするのは……気のせい、ということにしておこう。

達也とは［トーラス・シルバー］絡みも含めて個人的に連絡はしているが、時折深雪絡みのことで苦労していることを滲ませるような文面が垣間見えていた。

別に深雪に対してアプローチを掛けた覚えなど微塵もないが、沖縄の一件からすると〝そういう可能性〟をどうしても疑ってしまう。尤も、それに対する答えを現状で持ち合わせていないわけだが。

「ここまではまぁ許容範囲だよな……だが、問題はこれらだ」

四葉家絡みと同じく本人名義という形で贈られたチョコが三つ。一つは義理だが、残る二つは手作りだ。そのチョコが市販だとか手作

りだとかは問題ではない。一番の問題はこの三つのチョコが同じ家の姉妹――『七草家』からのものだということだ。しかも、ご丁寧に『三矢悠元様』となっている。

別に個人的な面識がない訳ではない。すぐ下の妹である詩奈との付き合いもあるし、個人的にも何度か祖父の付き添いでパーティーに出席したことがある。尤も、当主への対応は祖父に丸投げしてそれ以上の関与を持つ気にはならなかった。

その三姉妹にも現状『長野佑都』として名乗っているし、詩奈も三矢の名をまだ名乗っていない。薄々勘付いているかもしれないが、昨年の時は態々三矢悠元の名で送ってきていなかった。たった1年でどういう変化があったのかなどあまり知ろうとは思わないが。

「……食わないで捨てるの勿体無いし、食べるけどさ……」

本来、本名は高校入学直前から明かすと決めていた。自分もその理由については納得していたし、父がそれを反故にしたとも思えない。だとするなら、七草家がお抱えの諜報組織を動かしたということになる。なので、このことを父に伝えると、どこかに連絡した上で「急ぎの用事が出来た」と言って家を後にした。

「つーか、あそこの長女は五輪家の長男と婚約してるんだろ？　というか、現当主も止めろよ……」

手始めに口にした深雪のチョコは……少し、ほろ苦く感じた。

三矢家には一つのルールが存在する。それは『高校入学まで三矢家の人間だと名乗らない』である。そのために母方の実家に送られ、別の名字を名乗ることになっている。現当主夫人の実家が上泉家であり、今も忘れない恩義のために『長野』の名字を用いている。

これは三矢家が東アジア地域の情報収集の役割を担っているためで、人質などによってその役目を果たせなくなることを回避するためのものだ。

末っ子の詩奈が三矢本家にいるのは矢車家との関わりが大きいのと、詩奈が武術を習うのを躊躇ったからである。それでも身バレの危険はあるために『長野椎菜』という名前で学校に通っている。当然、パーソナル・データもそれに合わせた無難な設定となっている。

高校入学時点という風に設定しているのは、魔法科高校で本格的な学習を受けるようになれば自衛の範疇なら可能という判断だと思われるし、それに魔法科高校は十師族のアピールの場でもある。〝最強〟の誇示というものは得てして面倒なものだ。

だが、七草家がその慣習破りをしてしまった形となる。過程はどうあれ結果は三矢家の慣習への干渉行為と受け取られてしまう（この時点で三矢と名乗っていないのは悠元と詩奈で、詩奈への危険が増すことを危惧した）。

それだったら沖縄防衛戦はどうなるのかという話だが、元治が『スピードローダー』を四葉家の縁者の前で使ってしまった以上は悠元の存在も明るみに出る。そこまで考えた上で元は秘匿を条件に四葉との交渉を行った。

元とて世界最強と謳われる魔法師を敵にするぐらいなら落としどころを探るほうがまだマシ、と判断したわけだ。

後日、七草家に出向いて現当主からの謝罪を受ける。

その際に十文字家当主代理の克人と面識を持つ。加えて七草弘一の娘である真由美、香澄、泉美の三人と面会することになった。三矢の名前を聞いた瞬間、克人と本名を知っているはずの真由美が揃って冷や汗をかいていた。おそらくその原因は姉だろうと尋ねると、二人揃って肯定したのだった。

理由を聞いたらこっちも心に傷を負いそうだったので、敢えて聞くことはしなかった。

◇　◇　◇

都内にある某高級ホテルの最上階。そこには数名の人間が集っていた。

関東地方の監視を担う七草家現当主の七草弘一と十文字家当主代理の十文字克人。

監視する地域を持たないが、関東に拠点を置いて魔法技術を国防軍に提供する三矢家現当主の三矢元。

所用で東京に来ていた北陸・山陰地方の監視を担う一条家現当主の一条剛毅。

四国地方の監視を担う五輪家から当主代理として国家公認戦略級魔法師の五輪澪。

そして、東海地方の暫定的な監視を担う四葉家現当主の四葉真夜。

だが、会場の雰囲気は重苦しいものだった。

その理由は、元が明らかに睨むような表情を、弘一に向けていたからだ。弘一はそれに対して表情は変えていないが、会場の空気は反七草の流れが形成されていた。

この状況で口を開けば言い訳という風にしか受け取れないだろう……それを解っていたからこそ、弘一は口を噤んだ。

「七草殿。三矢家の仕来りはご存じのはずだ。厳格なものではないゆえ、私とて口煩くは言わぬ。だが、我が三矢が担う役割に支障をきたす様な真似は看過できぬ」

三矢家の役割は他の二十七家も理解している話。既に三矢を名乗っている（一人は婿養子で名字は変わったが）五人の息子や娘もその慣例に従った上で各家に新年度の挨拶として書状を送っている。今回は元が問題提起人として呼びかけ、緊急的な十師族の会議という形となった。

「今だからこそ話すが、2年半前に起きた大亜連合の沖縄侵攻に私の息子二人も運悪く居合わせた。だが、二人とも十師族としてその名に恥じぬ働きを見せた……その教訓があったからこそ、私はより一層の情報網構築が不可欠と確信した。その三矢家の働きを妨害されるおつもりか？」

「三矢家が担うのは東アジア地域の情報収集。日本海沿岸防衛を担う一条家としても同時期に佐渡侵攻を受けた以上、情報収集の如何は死活問題になりかねない。七草殿、猛省されよ」

元の言葉に同調する形で剛毅も鋭い口調で弘一にぶつけるような言葉を放った。情報の有無は本気で生死を分ける重要なことだ。それのあるなしで被害も大きく変化する。周辺国家の情勢が緊迫している以上、その最前線防衛を担う一条家の負担は大きい。それに続く形で澪も言葉を発した。

「九州を監視する八代家に次いで大亜連合に近い五輪家も無視できる

話ではございません。無論、戦略級魔法師としても情報は死活問題です。では三矢殿、どのような対応が妥当とお考えなのでしょうか？」
「三矢家としては七草殿が今回のことを反省していただく姿勢を見せてくだされば、なので、後日私とその息子で七草家に出向かせてもらう。十文字殿、その際は立会人としてご同行願えますか？」
「承りましょう。今回の一件は表を担う十文字家にも責任はあると考えていますので」
三矢家としては師族会議の現体制に不満はない。なので、今回のことは七草家に反省の意思を示してくれれば十分と考えている。十文字家の代表代行である克人に立会をお願いしたのはその証明をしてもらうためでもある。すると、ここで真夜が元に問いかけた。
「ですが、それで本当に反省したと立証できるのか、ということになりませんか？　十文字殿を疑うわけではございませんが、何かしら目に見える形での証明は必要かと思われます」
「四葉殿。私としては同じ第三研からの者同士、諍いは起こしたくないのですが……では、現状暫定となっている中部・東海地方の監視・守護を正式に四葉家が担当していただく、というのはどうでしょう？
無論、今すぐに決められる話でもありませんので、来月行われる臨時師族会議に改めて提案させていただきましょう」
「っ!?」
三矢家は求める者ではなく『与える者』の側面が強い。それは第三研の研究成果を他の十師族に提供していることからして明白である。
元はその意味で四葉家に『十師族としての立場』を与えることによって七草家の罰とすることを提案し、弘一の表情が驚きに包まれた。その一方、提案された側の真夜は笑みを浮かべていた。
「あら、三矢家が別に担っていただいても構わないと思っていましたが、よろしいのですか？　三矢殿」
「これはご冗談を。現状、暫定ながら当該地域を担っている四葉家ならば、お互いに要らぬ労力を使う必要もありますまい。先んじて九島（くどう）閣下にご相談したところ、閣下もそれならば、と納得していただきました」

「九島閣下が納得されているのなら、反対する理由もありませんが……この話は臨時師族会議の時にいたしましょう」

後日、三矢家から他の十師族に対して通達を送った。長野佑都（ながのゆうと）――――本名三矢悠元（みつやゆうと）の公表。

だが、それはあくまでも十師族現当主に対してのものであり、それ以外に対する箝口令でもある。彼が実際に十師族として動くことになるのは第一高校に入学してからだ。

なお、悠元のことを調べていた八雲も剛三からの要請で達也への情報提供をあまりしないようにしていたのはここだけの話である。

臨時師族会議

――西暦２０９５年３月。

箱根のホテルの一角にて臨時師族会議が開かれた。今回は臨時の形だが、十師族の当主が全員揃う形での開催となった。本来ならオンラインで済むはずの会議で十師族当主全員が直に揃うという異例の事態。その目的は師補十八家のひとつである十山家の処遇にある。

経緯を説明すると、先々月――今年の正月早々に国防軍情報部が長野佑都、すなわち悠元の身柄を確保しようと動いた。目的は彼を脅威と見て『再教育』するというものだった。

だが、その襲撃場所が拙かった。

その時、悠元がいたのは上泉家の本屋敷――新陰流剣武術総本山だった。加えて、今年は千刃流（ちばりゅう）との親善試合も兼ねていたため、皆伝・印可クラスの人間も滞在していた。更には達也を除く独立魔装大隊のほとんどが滞在していた。

要するにロールプレイングゲームで言うところの「お宝をゲットするためにボスラッシュした挙句、裏ボスと隠しボスがいて、それを越えると強制敗北イベント」という挑む奴はマゾ認定してもおかしくない状態の有様だった。

実際のゲームに実装されていたら、誰しもがやりたがらないであろう状況がリアルで起きた……こうなれば、結果がどうなるかなど言葉にしなくても分かるだろう。

襲撃部隊は全員捕縛され、主犯格のつかさは剛三自らが相手をするという無理ゲーとなり、彼の気まぐれで生かされる形となった。

剛三は東京の別邸に十山家当主を呼びつけ、当主は娘の助命を懇願。

結果として十山家当主の要求は通ったが、その条件として『わしの係累や知己を誘拐、それに類するようなことは何の事情があろうとも認めない』とその場で誓約書を書かせた。

その条件は仮に国防軍の命令であったとしても有効であり、剛三はそんな邪な考えを持った奴など一人残らずあの世行きにすると高ら

かに宣言し、十山家当主を震え上がらせた。下手をすれば国家に対する反逆にも聞こえるが、それを成せるだけの力を剛三は持っているという証でもある。
更には、彼自身四葉の復讐劇に参加していたこともあり、身内を害されることについては人一倍敏感であった。その気持ちを軽んじていた十山家と国防軍の情報部は龍の尾を踏むようなことをしてしまった形だ。
事件発生から臨時師族会議を開くまでに何故約2ヶ月以上のタイムラグが生じたのかと言えば、七草家と十文字家が担っている役割を他の師族二十六家に背負わせるには重すぎる部分が多いため、最終的な処分をどうするのかで剛三が悩みぬいた結果である。
臨時師族会議を終えた七草家の当主――――七草弘一は、自身の書斎に娘である真由美を呼びつけた。真由美としてはバレンタインでの一件で更なる罰を受けることになるのかと冷や汗をかいたが、それに対する弘一の言葉は……ある意味拍子抜けだったことに真由美は首を傾げた。
「では、七草家は現状通りと?」
「ああ。四葉家が正式に中部・東海地方の監視・守護を担うこととなるのは痛かったが……十山家もとい国防軍の一件は七草にも責はある」
「……まさか、お父様は十山家の主張を呑まれて見過ごしたと!?」
弘一の言ったことは十山家が国防軍の一部を動員して上泉家襲撃を起こすことを掴んでいながら、それを隠していた……いや、彼らを黙認していたということだ。声を荒げる真由美に対し、弘一は口調を変えることなく説明する。
「三矢は四葉と緩いながら関係を持っていた。しかし、2年半前の大亜連合による沖縄侵攻を契機に両者は近付いた。その繋がりを緩められればと思い、私は十山家の動きに見て見ぬふりをした……だが、それは結果的に『尊師』の逆鱗に触れた」
弘一は沖縄に悠元が行っていたところまでは掴んでいた。詳細は不明となっているが、恐らくその際に四葉家との誼を結んだ可能性が高いと推測していた。ならば、悠元は格好の材料になると踏んだ十山

家の動きを掴んでおきながら見過ごした。だが、弘一は四葉への対抗心のあまり、長い事動いていなかった剛三の存在を思わず失念していたことに後悔した。
「……上泉剛三殿、でしたか」
「そうだ。第三研の現オーナーにして、新陰流剣武術総師範。彼は今回の件を踏まえて七草と十文字に対し、こう告げた――『わしの孫を見殺しにしようとしたのは言語道断。覚悟を決めろ、次はないぞ』とな」
「っ……」
聞けば１００人を超える規模の襲撃部隊だったと七草家の調査で判明している。
その国防軍の動きを、関東の監視をする二家は見過ごした。その責を取るために役割を果たせ、出来なくば消えてもらう……その意味を含んだ剛三の言葉を弘一が口にすると、真由美は表情が青褪めていた。
「剛三殿は大漢での四葉による復讐戦に参加し、文字通りの一騎当千を成した人物。全盛期より衰えた可能性があるとはいえ、数百人など軽く消し飛ぶであろう」
「では、どうされるおつもりですか？　まさか、メディアを使っての扇動でもされるおつもりですか？」
「……いや、何も出来ない。三矢の係累として剛三殿がいる以上、元第三研の七草（うち）はそれに従わざるを得ない」
そして、師族会議の中で三矢家から現当主の三男と弘一の娘である三女との婚約破棄を申し出された。間違いなく剛三と元の怒りを買ったからこその結果。剛三の本気というものを知っているからこそ、弘一は手を若干震わせながら真由美に言い放った。
「調べた限りでは、三矢の三男と誼を結びたいと考えているのは一条、一色、五輪、九島……恐らく四葉もここに含まれる」
「十師族の半分近くがですか……それと、四葉もなのですか？」
「正確には、ある程度釣り合う娘のいる十師族。一色は一人娘だが、年齢は彼と同い年。問題はないと見ているのだろう。四葉については

不明だが、その年齢相当の娘がいても不思議ではないな」
　前者の二つは然程年齢が開いていない。五輪家は年齢差こそ開いているものの、彼女の外見がもう少し成長すれば適齢の女性に見られる。九島家については調査の結果、親族に歳の近い女子がいるだろうという情報を掴むことができたと弘一は話す。
「そして、お前に黙っていたことだが……彼と泉美(いずみ)を水面下で婚約させていた。だが、今回のことを受けて三矢殿から正式に婚約破棄を言い渡されてしまった……お前にその気があるのならば、彼との婚約にシフトしても構わないと考えている」
「泉美ちゃんと……五輪家とは、どうされるおつもりですか？」
「その時はその時だろう。――――話は以上だ」
「……失礼しました」
　真由美が出て行ったあと、弘一は深く腰掛けた。あの時から既に30年は越えた……世俗と関わってこなかった剛三が動き、三矢は四葉との繋がりを模索し始めた。真由美を呼び出す前に弘一は自身の師でもある九島烈に助言を求めた。だが、烈は事情を聞いた上でこう言い放った。
『……弘一、お前は何時まで過去を清算しないつもりだ？』
　この言葉は衝撃的ともいえた。まるで、自分以外の生きている者たちはその時に負った傷や痛みに向き合いながら、各々の答えを出していたのだと……弘一はそれが一体何を意味するのか、理解しかねていたのだった。
　なお、真由美から婚約破棄のことを知った彼女の妹が弘一に対して敵意とも思える様な雰囲気を纏いつつ問い詰められることになるとは、この時の弘一にはそこまで考えが追い付いていなかったのであった。

◇　◇　◇

　一条家当主である一条剛毅は会議終了後、文字通り『飛んで帰る』ような動きで金沢の本家に戻ってきた。会議の内容を早めに伝達するということではなく、特に東京に残る用事もなかったので真っ直ぐ帰宅した、というだけである。

十師族の中で一条家は使用人を雇わないので、家事は基本オートメーション化している。余裕があるときには妻がその役目を担っている。その分防衛のために人手を割けるという広大な監視地域を持つ一条家だからこその事情もあった。剛毅の早い帰りに妻である一条美登里（みどり）が笑みを零しつつ夫を労った。
「お帰りなさい、あなた。会議は如何でした？」
「特段変わったところはないが、強いて言うなら正式に四葉家が十師族による監視体制の中に加わるぐらいだ」
「四葉家がですか。それは、波乱があったのでは？」
「いつも通り……いや、四葉殿は以前よりも心に余裕が出てきたように思えたな」
２年前の師族会議ではそれとなくという感じだったが、今回の会議で真夜の心の変化が会議の中での態度に垣間見えたと剛毅は語った。彼女自身辛い経験をしているのは知識として知っている。少なくとも、それと向き合った可能性があると考えつつも美登里に視線を向けた。
「将輝達は自室にいるのか？」
「はい。今日は久し振りに揃いますし、真紅郎君も来ていますので」
「俺としては意外だったのだがな……茜と思いきや、まさか瑠璃がな」
年齢からというか、一条家によく来る真紅郎に瑠璃が惚れた。なお、真紅郎は三高への進学を決めているが現状中学３年。瑠璃は小学２年……年齢差８歳という事実。それならまだ茜のほうが理解できると呟く剛毅に美登里は仕方ないです、とでも言いたげだった。
「恋愛に年齢は関係ありませんよ？　それに、茜は『白馬の王子様』にお熱ですから」
「その王子様が十師族――――三矢の人間だと知ったら、間違いなく騒ぐな……無駄に変な言葉を覚えるのは年頃なのだろうが」
２年前、一条家でパーティーを開いた際、『長野佑都』として参加していた悠元に茜が一目惚れして告白した。この時、茜は小学４年生。『あと６年、気持ちが変わらなければね』という言葉は彼なりの断り方だったのだろう。

すると、その現場を見た将輝は「お前、そういう趣味が……」という失言に反応して、悠元が将輝を関節技で締め上げた。そのついでに将輝と笑っていた真紅郎も巻き添えとなった。
悠元は我に返った後で剛毅と真紅郎の両親に謝罪したが、剛毅は首を横に振って悠元の非礼を許し、息子の失態に関して頭を下げた。真紅郎の両親もそれに続いて謝罪した。
魔法師の家系は早婚が望まれているが、大半は政略結婚になってしまう。剛毅も出来るなら三矢家のように恋愛結婚させてやりたいと思っているので、茜がある程度成熟すれば……とは考えている。
将輝が失言を向けた相手はかの大戦を生き延びた英雄の親族。剛三から内密に彼の正体を知ることとなり、こればかりは自分の息子とその友人が締め上げられても異論は唱えられない……と内心で溜息を吐いたほどだ。
「真紅郎君のご両親も嘆かれていたが、あの息子の迂闊さは一体誰に似たのやら……なんだ、美登里？」
「それは貴方だと思いますよ？」
「……先に食事にする。将輝達にもそう伝えてくれ」
「はい」
不意打ちのような美登里の言葉に、剛毅は誤魔化す様にしながら用件を伝えると、美登里は頷いてその場を後にした。それを見届けたうえで剛毅は自らの書斎に向かったのだった。
夕食後、剛毅は座敷に将輝を呼び出した。現状一条家の次期当主である将輝にも臨時師族会議の結果は伝えておくべきだ、と判断したからだ。
「――以上が今回の会議の結果だ」
「十山家は取り潰さない……三矢家はそれでいいと？」
「あの家が国防の闇の部分を担っているのは事実。だから警告でいい」
「……今後は最後の砦である七草と十文字が十山を庇えなくなった。そのことが重要だと今回の会議で結論付けたってことか」
今回の出来事は最後通告に近い。そして、剛三の言葉からするに三

矢だけでなく四葉への配慮も含んでいると剛毅は睨んでいる。彼は先々代の四葉家当主と懇意にしていたことは十師族でも周知の事実。そうなれば、四葉と対立する七草は今まで以上に役割への重点を置く必要に迫られるというわけだ。

監視体制の確立についても真っ当であると剛毅は考えていた。本州の日本海沿岸を担う一条家は監視体制の構築の難しさをよく理解している。その点において、暫定的な監視という浮付いたものから根を張らせるという形で四葉を十師族のシステムに組み入れることはプラスになると考えている。

「けれど、それは四葉の発言力を高めることに繋がらないか？　ただでさえ十師族の中で突出している。最近では三矢も発言力を増していると聞いている…今回のことは三矢と四葉の立場を際立たせたんじゃないかって」

「……続けろ」

「上泉殿のことは自分も面識があるから解るが、彼はとても野心家という風には見えなかった。けど、彼が動いたことでその二家はより親密な関係を模索し始めた。それを十文字殿はともかく七草殿が看過するとは…とても思えない」

将輝の言い分は、大漢への復讐戦でその力を際立たせた四葉が、地方の監視という地盤を得たことでその力がさらに強大化するという危惧。それに剛三が手を貸したのではないかという推測からくるものだった。幸いにして三矢の現当主は監視地域の保有を固辞したからこそ穏便に済んだというのも含んでいるのだろう。

「……ここだけの話、私は一条家の監視地域のうち、山陰地方を三矢家に担ってもらおうと考え、水面下で打診した。無論丁重に断られたがな」

「なっ!?」

「大亜連合の沖縄侵攻と時を同じくしての佐渡侵攻、それを忘れたわけではあるまい？」

北陸・山陰地方に加え、六塚家が担う東北地方の日本海沿岸まで一条家が防衛を担っている。だが、それを一つの家で維持し続けるのに

もかなりの負担を強いられている。
３年前、大亜連合による沖縄侵攻と同調する形で新ソ連による佐渡侵攻が発生した（同国は否定しているが、装備と部隊の練度から間違いないと剛毅は断定している）。
だが、事前にその兆候ありと上泉家経由で三矢家から連絡を受けた一条家は密かに佐渡の防衛体制を構築。敵は小規模であったが、奇襲部隊にも難なく対応して見せた。このお蔭で佐渡の研究施設にいる民間人を誰一人失うことなく守ることができた。
その時に出会った吉祥寺真紅郎（きちじょうじしんくろう）という少年に才能の片鱗を見た剛毅は、研究者だった彼の両親に魔法理学研究所への入所を勧め、彼はその才能を開花させて多大な功績を挙げた。それに、彼なら自分の息子とも対等に話し合える存在になってくれるだろうという親心もあった。ただ、それは息子にとって要らぬお節介だと揶揄されそうなので言うつもりもないが。
話を戻すが、その意味で一条家は三矢家に救われた形となった。真紅郎の両親をはじめとして、小さな島ではあるが貴重な研究者を失わずに済んだことは何よりも大きい。だからこそ、七草家の三矢家に対する横槍に対して毅然と発言したのだ。
家としての面子も確かにあるだろう。だが、この国は小国。周囲に大亜連合・新ソ連・ＵＳＮＡという大勢力を抱えつつもその存在を保っている。外からの脅威という明確な敵を前に家の面子や体裁にこだわっていては滅ぶ……それは歴史が証明してしまっている。
「仮に三矢家が隠岐も含めた山陰の監視・防衛を担ってくれれば、一条家（うちは）は佐渡を含めた北陸と東北沿岸防衛に集中できる。佐渡の要塞化も含めて、新ソ連が本格的な軍事行動を起こしても対処できるだけの体制が必要……語りすぎたな」
「三矢家は他の『三』の家とも連携して第三研の成果を国防軍に提供している。そして東アジアの情報収集を担っている……これでも足りない、と親父は考えているのか？」
「……８年前、私は三矢殿の招きで三矢の本家に行ったことがある。私一人だけだったから、お前は知らないだろう」

剛毅は三矢家の兄弟たちとも密かに面会している。三矢の仕来りは理解しているので、三矢の人間として紹介されたのは長男だけだった。それ以外の人間は親戚筋という扱いになっていたが、弟や妹たちであろうと剛毅は見ていた。

その中で三男と思しき少年の中に底知れぬものを感じた。歳は将輝と同じぐらいであったにも関わらず、彼の立ち振る舞いに年相応の少年らしからぬものを見たような気がしたのだ。

それから8年――――次男の元継を皮切りに、長女の詩鶴、次女の佳奈、三女の美嘉……三矢家直系の子は十師族の名に恥じない成果を挙げていた。剛毅はもしかしたら、その影響の先にあのとき出会った少年が関わっているのではと推測した。

「仮に私が求めずとも四葉は間違いなく動く。そうなれば七草も動く。わが一条家も、それに後れを取るわけにはいくまい」

「まさかとは思うがアイツの、長野のことか？　確かに上泉殿の親戚となれば解らなくもないが」

「……確かに彼は上泉殿の親族だ。上泉殿の息女にして三矢家夫人、詩歩殿の息子になる」

剛毅の言葉に将輝は驚愕の表情を露わにした。彼が理由があって別の名を名乗っていて、同じ十師族である三矢家の人間だという事実にだ。

「つまり、彼は三矢家の人間……親父は何時から知っていた？」

「あのパーティーの時、お前が無礼を働いた後で上泉殿から直接な。彼がその時三矢を名乗らなかったのは、三矢家の役割があるからこそだ」

「人質などによる圧力を避けるためか…」

将輝に対して口に出さなかったが、彼は一高に入学することを元から既に聞いている。正式な書状による挨拶を以て長野佑都という偽りの仮面を捨て、三矢悠元の名を名乗る。あの時出会った彼が何を巻き起こすのか、剛毅はどこか興味津々な心持ちだった。

「先程の将輝の問いかけだが、私は四葉が他の十師族を貶めない限り、自らの力を高めてくれるならそれでもいい。悪く言えば四葉を利用

させてもらうこともあるだろう。特に一条家と監視地域が隣り合わせになる以上は相互協力もありうるだろうからな」
「それは、新ソ連への抑止力に四葉を使うということか!?」
「不可能とは思っていない。その仲立ちに三矢を入れれば現実味は増す…本国は否定しているが、その当該国が戦略級魔法師をいつ投入してもおかしくはないのだぞ」
剛毅は日本海沿岸防衛の体制にバックアップとして四葉家の力を借りるという考えを明かすと将輝は驚愕した。そして、そこに三矢家の情報収集能力を組み合わせる形で対ソ連の防衛戦略構想を立てている。
現状国家公認の戦略級魔法師が一人しかいない以上、先日のような同時侵攻を想定した対応が求められていることを剛毅は強く感じていた。そのためには、一条家から娘を送り出すことも選択肢に入れねばならないと考えている。
そんな剛毅の構想を聞いた将輝はどこか現実味がないような面持ちを浮かべていたのであった。

はるのあしおと（※）

あれから更に2年。悠元は15歳になっていた（なお、彼の誕生日は2月14日……つまり、わかるな？　あとは察しろ）。

ＦＬＴ社のＣＡＤ開発第三課には表向き「上条洸人（かみじょうひろと）」という名で配属となった。形としては在宅勤務ということとなる。

メールには二年前に思い付いた絶対情報遮断魔法『五芒星（ペンタゴン）』を用いていて、ＦＬＴ社にある滅多に使わない自分の席にも自宅との専用通信端末を置いてもらっている。何でペンタゴンかというのは、その場のノリみたいなものだ。

この『五芒星』は５５秒間隔でランダム変化する５５桁のセキュリティが五重になっている。離れた場所の端末で同一のセキュリティにするには５５秒以内に異なる端末のインストールを済ませる必要がある。面倒なことだが、これも情報を秘匿するための苦労だ。

そして、ＦＬＴ社から新星のごとく現れた魔工技師『トーラス・シルバー』。その片割れは悠元である。

経緯を話すと、父親のコネでＦＬＴ社に出入りするようになった達也が会社の力で牛山をスカウトし、その牛山が悠元のＣＡＤ設計能力を見抜き、達也の特化型ＣＡＤの設計に関わる形となったのが大まかな流れだ。

その際に「開発者名がないといろいろ言われそうですし、トーラス・シルバーという名前のチームでいきましょう」ということになった。どうせ未成年の関係で情報は公開できないのだから、それでいい。個人名なのかチーム名なのかは表に出さず、『トーラス・シルバー・プロジェクト』という名称まで作り、個人名ではなく開発チーム名の証明書類を紙媒体として一応作っておいた。建前の証拠ってやっぱり大事だと思う。

この過程で達也に「お前、佑都だろ？」とバレた。

ＣＡＤの精密な設計ができる時点で自分ではないかと当たりをつけていたらしい。「さすおに」である。とはいえ、自分が三矢家の人間――三矢悠元だということは秘匿したまま。そういえば、こっち方

面で忙しくなって九校戦には結局行けずじまいだった。深雪への手紙は深夜経由で渡していたから、色々文句を言われたのはいうまでもない。

その引き換えという訳ではないが、達也専用の銃形状特化型ＣＡＤの設計図を送ったら向こうから悲鳴が上がったらしい。あれでも『サード・アイ・ゼロ』の焼き直しに近いんだけどね。汎用型までとは言わないけど、同一系統の起動式を最大２０種類までインストールできるようにしたし。

達也が打ったと思しき返信メールには「見たこともないプログラムで驚かせてやる」とのことだった。今のうちにぎゃふん、と言っておけばいいかな？……とか思っていたら「今のうちにぎゃふん、とか言うのはなしだからな？」と書かれていた。やだ、お兄様はエスパーか何かですか？

数日後、ＦＬＴから同一の魔法式を連続発動させるループ・キャスト・システムを発表。それを搭載したカスタマイズ性の高い『シルバー・ホーン』が発表された。それに加えてハイエンドタイプとなる『フォース・シルバー』も発表。

世界の名立たるメーカーであるマクシミリアン・デバイスやローゼン・マギクラフトの従来モデルを遥かに超える安定性と起動式の読み込み速度、安全性を確保した。

ちなみに、『フォース・シルバー』でも大本の３割の性能に抑えられている。

その大本は悠元の持つ白銀と漆黒の銃形状〝汎用型〟ＣＡＤ――フォース・シルバー・オーバーカスタム『ワルキューレ』と『オーディン』。

悠元の持つ設計能力と達也の卓越したプログラム構築能力があって完成したＣＡＤで、普段は処理速度と特殊機構のセーフティを掛けているが、全ての安全装置を外すと現在オーバーホール中の達也専用ＣＡＤ『サード・アイ』に相当する。これの完成の過程でソフトウェア開発を頼んだら達也にばれたというわけだ。

次は三矢家の状況。家業の兵器ブローカーは規模を維持しつつＦ

ＬＴ社との取引を始めた。『トーラス・シルバー』のことは家族の中でも元にしか言っていないが、そのお蔭で海外メーカーとの仲買も増えたと元は述べていた。国防軍についても独立魔装大隊との関係で十山家を気にしなくてもよい状況に持って行けた。まずは上々である。

長男の元治と穂波の婚約は２０９３年の３月に成立した。

その時期に合わせたのは師族会議の開催年だったことも含んでだと思うが、そこには別の事情も含まれていた。

剛三が思慮した末に穂波を養子として迎えることとなったのは『渡辺家』――――渡辺綱の末裔とされる百家支流の家系で、約一世紀前に衰退した後魔法師の家系として百家に名を連ねた。その家を選んだ理由は剛三がこう述べた。

「――――あの家に伝わるであろう『ドウジ斬り』。それを失わすのは惜しいからの」

剣術家らしい剛三の言葉だが、渡辺家にいる娘は千葉家の次男といい関係にある。その本流を汲む上泉家としての思いもあったのだろう。そこまで聞いて「ああ、あの人か……」とすぐに理解できた。

新陰流剣武術師範代として千刃流の道場に顔を出す機会があり、そこで千葉家の人とも交流を持った。千葉家の次男に勝負を挑まれ、つい本気を出して道場を一部破壊したことは記憶から消し去りたかった。

何にせよ、これで三矢家は四葉家、渡辺家、ひいては千葉家と縁を結ぶことになる。養女とはいえ十師族に嫁がせることとなるため、家格は自ずと上がることになるだろう。

次男元継は大学卒業後に上泉家へ婿入りし、剣武術師範の免許皆伝を与えられた。長女の詩鶴と次女の佳奈は魔法大学に進学し、三女の美嘉も魔法大学への進学のために受験勉強中だ。末っ子の詩奈は中学1年となり、侍郎も同じ学年である。魔法のほうも恐らく大丈夫なので、詩奈の護衛として申し分ないだろう。

で、残った悠元はというと、彼も受験生である。受験予定の魔法科高校の受験日は明日なのだが、夕食後に父である元の呼び出しを受けていた。それは受験の付き添いの件だ。

「私が行けば騒ぎになるからな。その辺は佳奈にお願いをした」
「いや、佳奈姉さんでも十分騒ぎになるんじゃないかと思いますが……先々代の生徒会長ですし」
悠元がそう述べたのには理由がある。悠元が受験する国立魔法大学付属第一高校（通称：一高）は悠元の兄二人と姉三人が卒業した学校だ。特に元継、詩鶴、佳奈に加えて現在高校３年の美嘉は揃いも揃って輝かしい実績を上げていた。
「そうだな……揃って『悠元に触発された』と言って努力した結果、とは聞いているがな」
九校戦だけ見ても、元継はモノリス・コードで負けなしの猛者、詩鶴は女子クラウド・ボールで史上初となる全試合三桁得点・無失点勝利を達成、佳奈は二代前の生徒会長として女子アイス・ピラーズ・ブレイク歴代最速記録を更新し、美嘉は今年度の前半まで生徒会長として本戦の選手兼新人戦のエンジニアを務め、二連覇の原動力となった。
これだけ見ても三矢家だけでどれだけおかしいか解るだろう。そして来年度にはその元凶となる悠元が入るかもしれないという状況。
「触発って……別に大したことなんてしたつもりはないんですけど」
「具体的には『お前のやっていた魔法の訓練を真似しただけ』と揃って言っていたからな。私も真似したらこの歳で魔法力が伸びた」
「さいですか……まあ、明日の件については了解しました」
魔法の訓練とはいっても、単にイメージ力を磨くための特訓でしかない。具体的には空想上の登場人物がやっていることを疑似再現できないか試行錯誤していたところを見られただけだが。結論から言うと「ビームはやっぱり大変だった」と言っておく。
試験自体は受験人数の関係上２日に分けられて行われる。試験自体は前もって勉強していたので問題なかった。というか、魔法工学のテストが簡単すぎた。この辺りはＣＡＤ製作のおかげかな。魔法実技も問題なくクリアした。一応機械を壊さない程度に加減はした……それでも１１５ｍｓはやりすぎたと思う。
付け加えておくが、自分の場合は十師族ということで他の生徒とは

別室で受験となったため、そこまでの大きな騒ぎとはならなかった。
　そういや、達也と深雪も同じ学年らしいので彼らも受験だったのだろうか（原作知識で）、などと考えていると、着信音が鳴ったので通話ボタンを押すと、その相手は自分もよく知る人物であった。
「こんばんは、風間さん。制服でないということは、今日は非番ということですか」
『ああ、一般回線でな。そういえば、第一高校を受験したそうだが』
「ええ、あとは試験結果待ちです」
　電話の相手は風間大尉もとい風間少佐（沖縄侵攻の功績で昇進）であった。服装が過ごしやすい服装だったことから、今日は珍しく非番だったことが伺える。第一高校のことについて触れてきたので、それとなく返した。
『まあ、悠元なら万に一つもあるまい。何せ、一高に旋風を巻き起こす三矢の一族だからな』
「旋風どころか竜巻に近いところはありますが……そういえば、彼については何か聞いてます？」
　兄や姉達（特に佳奈と美嘉）のやらかしたことだけでも苦笑しか出てこない。何せ、第一高校の『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』なんて言われたほどだ。口にしたくもないので伏せつつ達也について尋ねると、風間は思わず目を丸くした。
『おや、君ならば知っているかと思ったが』
「〝そちら〟の関係で接触を避ける様に仰ったのは少佐殿でしょう？
　精々プライベートナンバーを交換したぐらいですよ」
『トーラス・シルバー』の一件についても口頭で風間に伝え、彼の信頼できる人にだけその事実を公表している。連絡で済ませなかったのは何処で盗聴されるか解らないからこそである。無論、それに加えて『三矢家』のこともあるが。
『そうだったな。彼も同学年だから受験しているだろう……あのことは公表するのか？』
「するしかないでしょうね。何せ、合否の結果次第で先方からの提案を呑むことになりますので。少佐殿からすれば少し楽に……なりま

せんね」
『大方の事情は察した。良い結果を期待しているよ』
「はい。おやすみなさいませ」
風間との対話を終え、一息吐く。悠元は机の中から一通の手紙を取り出した。それは四葉家――――それも現当主である真夜からの手紙であった。その中身は悠元にとって驚くのと同時に、うれしく思えるような内容だった。
◇　◇　◇
魔法が発達したとはいえ、重要な書類などを紙媒体などで知らせる名残りからメール便などの郵便配達は残っている。司波家にはその合格を知らせる通知書が届いたわけだが、リビングの室温は暖かい日差しが差す外よりも低かった。
「――――深雪、少し落ち着け」
その原因は深雪が不機嫌であり、視線の先には兄である達也の入試の成績が書かれた紙。それによって深雪から魔法が漏れていた。達也は一息吐いたうえで深雪に声をかけた。
「あ……も、申し訳ありません。ですが……」
「魔法科高校における魔法技能の評価では妥当なところだろう。しかし、深雪がそれだけ高得点なのに二位とは驚いたな。流石は一高のレベルの高さということか」
深雪が文句を言いたくなる気持ちは察するが、達也の得意とする魔法技術は、魔法科高校の魔法力評価だと評価されない項目になってしまう。それでも合格できただけ良かったと達也は述べつつ、深雪の成績を見た上で率直な言葉を述べた。
「いえ、魔法も筆記もお兄様が教えてくださったお蔭ですよ」
「魔法はどちらかと言えば〝母上〟のお蔭だろう。後で合格したことを報告するといい」
「はい」
沖縄の一件の後、深夜は達也が深雪のガーディアンであることの前に自分の息子であることを見つめなおし、他の誰でもない司波達也として接するようになった。その流れで達也も深夜を『母上』と呼ぶよ

うになっていた。
　すると、達也は入学式の案内を見て目を細める。
「お兄様？　どうかされたのですか？」
「深雪、どうやらお前の上は十師族、それも三矢家の人間のようだ」
　達也が指差したのは入学式のプログラムに書かれた新入生祝辞の項目。そこには新入生総代の名前が書かれていた。
「三矢……悠元（ゆうげん）、でしょうか？」
「付けられたほうが呼びにくい名前ではないと思うが……しかし、三矢家か」
　達也も事前に調べていた。何せ、第一高校の『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』なんてまるで四葉家みたいな存在となれば、深雪への危険を考慮して調べなければならない。三矢家の七人の兄弟姉妹のうち、主に次女と三女がその原因を作ったまでは判明したが、それ以上のことは何も解らなかった。
「そういえば、深雪は昨年と一昨年の九校戦を見に行っていたな。何か知らないか？」
「確か、三矢佳奈さんと三矢美嘉さんという方なら直接お会いしました」
「直接？　会いに来たということか？」
「いえ、観戦していたら偶然隣にいらっしゃいまして」
　一昨年、深雪は女子アイスピラーズ・ブレイクで優勝した佳奈、女子バトル・ボードで優勝した美嘉と偶然出会い、色々会話させてもらったと話した。向こうも家のことは触れずに深雪と接していたので、四葉との関係を探られたような感じではないと述べた上で、昨年も二人と一緒に観戦したと話した。
「お二人も『三矢のことは触れないでくれると助かる』と仰っておりましたし、私も頼りになるお兄様のことを少し話しただけです」
「まあ、深雪のことだから信用するが……信頼できそうか？」
「はい。私のことも妹みたいな存在だと美嘉さんが。その後で佳奈さんから拳骨の制裁を食らっていましたが」
「……賑やかな姉妹だな」

そこまで聞くと三矢家が十師族だということを忘れそうになる、と達也は心なしか思った。それはともかく、と思ったところで電話が鳴った。設定された着信音で深雪がすぐに四葉本家からの直通だとすぐに理解した。
「この着信音は、本家からですか？」
「そのようだな」
達也が立ち上がって通話パネルを押すと、画面に出たのは現当主の真夜に加えて二人の母である深夜であった。同じく立ち上がって達也の隣に立った深雪も驚いていた。
「叔母上に母上。……これは驚きました」
「お母様、伊豆にいらしたのでは？」
二人はてっきり、深夜は伊豆の別荘にいると思っていたからだ。治療によって想子の感受性が落ち着いたとはいえ、元々人が多いところが苦手だったことと沖縄侵攻の心労を癒すために二人とは距離を置く形を取っていた。それに加えて昨年夫である龍郎と離婚はしたが二人の親権は深夜にあり、四葉の名のことを考えて司波の姓を名乗り続けている。
二人の驚く表情を見て真夜と深夜はそろって笑いを零した。
『もう、二人ったら。私は病人じゃないのですよ？　まあ、3年前までは病人みたいなものでしたが。二人とも、無事合格したそうね』
『姉さんも意地が悪いわね。さて、二人とも。まずは第一高校合格おめでとう』
「はい。ありがとうございます。お母様に叔母様」
「ありがとうございます、母上に叔母上。流石の情報収集能力ですね」
揃って同じ笑い方をするところは流石双子の姉妹だと思いつつ、二人の言葉に深雪が軽く頭を下げる。達也は礼を述べつつ四葉の情報収集能力を褒めるような言い方をすると真夜が得意げな表情を浮かべた。
『褒め言葉と受け取っておくわね。それで、二人に相談したいことがありまして……悠元さんのこと、覚えていますか？』
「あ……」

「ええ、無論です。彼の助けがなければ、ここに立っていることはなかったかもしれません」
　その言葉に深雪は彼のことを思い出す様に声を上げ、達也があの時の功績を過不足なく正当に評価した。過ぎたことに『もしも』というのはおかしいかもしれないが、それを聞きつつ深夜が二人に対して言葉を発した。
『それでね、二人がいいというのなら司波家に居候させたいの。幸い空き部屋はあるでしょうけど……どうかしら？』
「そうですね。自分は吝かでは……」
「是非お願いします！　お兄様、いいですよね!?」
「あ、ああ……そういうわけでお願いします」
　佑都の名前を聞いた瞬間、まるでエンジンにニトロでも追加した、と言わんばかりに瞳をキラキラさせているような妹を見て、これはもう止める術がないと判断して達也は深雪の賛同する声に同意せざるを得なかった。これでまだ深雪は彼に対して恋をしているような感じでないと言い訳しているのを達也は知っている。というか、何度も聞いている。
　だが、ここで達也は気付いていなかった。
　真夜と深夜が名前を出しているのは『三矢悠元』のことであり、達也と深雪の知る『長野佑都』ではないということに。加えて彼がどこに行くことになるかも聞いていない。その辺りも理解してやっている二人に疑問を感じることなど、暴走気味の妹をどう止めるか考える達也には思考のリソースが追いつかなかった。
『あらあら……達也さん、くれぐれも粗相のないようにお願いしますね』
「心得ています」
　何にせよ、二科生として入学することを何とか有耶無耶にできたので良かった、と達也は内心で彼に感謝の言葉を述べていた。
　◇　◇　◇
　魔法科高校に入る側もあれば、当然迎える側も準備に追われることになる。そんな忙しさが第一高校の生徒会室で繰り広げられている

中、生徒会長が座るデスクで端末のモニターを見つめている緩やかなウェーブがかかったロングの黒髪の女性（背丈のせいで〝女子〟と言っても違和感は生じないが）を見て、ショートヘアの女性が窘めるように声を上げた。
「こら、真由美。忙しいときに油を売ってるんじゃない」
「サボってなんかないわよ。というか、野次馬の摩利に言われたくないし、忙しくしてるのはリンちゃん達だもの」
ショートヘアの女性――第一高校の風紀委員長である渡辺摩利に対して、ウェーブがかった黒髪の女性――生徒会長である七草真由美は今出来る仕事がないと言わんばかりに反論した。すると、生徒会役員の男子が「この書類が書きあがったら、精査していただけますか」という援護射撃の発言に真由美が我が意を得たり、と言わんばかりの笑みを見せ、これには摩利も反論を諦めて真由美の興味を引くものに視線を移した。
「それで、真由美は一体何を見ていたんだ？」
「これよ、これ」
モニターにはニュースの記事が映し出されており、それは先日起きた横浜ベイヒルズタワーでの脱走兵の襲撃事件についてであった。日本魔法協会関東支部への襲撃は回避され、犯人である元国防軍曹長の魔法師も逮捕されたと記載されていた。
最近は魔法師排斥の動きや記事も目立っていて、真由美も十師族――『一』から『十』までの数字を冠する名字を与えられた師族二十八家の中でも最強に相応しい十の家系――の一角を担う七草家の人間として憂慮はしていた。尤も、七草家は他の十師族とのトラブルで忙殺されているところもあるわけだが、ここでは割愛する。
だが、そんな記事を真由美が楽しそうに読んでいたことが摩利にとって一番興味を引かれたところであった。
「けれども、何だか楽しそうに読んでいたじゃないか」
「それはね、ここよ」
「何々、『勇気ある謎の美少女魔法師の活躍により……』と。……これは、中々に骨のあるヤツがいたものだな」

「ちょっと無謀かなと思うけれど、この正義感は頼もしいわよね」
確かに、相手の持っている能力を考えずに突撃するのは真由美の述べた〝無謀〟にも繋がるが、結果として惨事に繋がらなかったのはその魔法師のお陰なのだろう。
問題はその『謎の美少女魔法師』なのだが、真由美が端末を操作して表示した画像はかなり解像度が低く、辛うじて対象の人物の輪郭が分かる程度であった。だが、摩利がどこかで見たことのある様な感じがして少し考え、何かを思い出したように声を上げた。
「ん？　……ん、ああ！　これって！」
「摩利も気付いた？」
真由美が端末を再び操作して、校内データベースの新入生一覧にある1年A組のフォルダから一人の女子生徒のデータを表示した。あの画像で真由美も目星を付けていた生徒の名前は司波深雪――――第一高校に〝次席入学〟することとなる人物である。
「ホント頼もしいわよね。こういう子が当校に入学してくるなんて」
「……真由美。その言い方だと、今年の新入生総代の彼が〝問題児〟という言い方になってしまうんだが？」
「別にそんなことは言ってないじゃないの！」
摩利が今度の新入生総代に対して触れたのは、摩利の実家とその彼の実家が義理の親戚関係にあるためだ。しかも、七草家と同じ十師族の一角を担う『三矢家』の人間にして、先日の入試結果では魔法実技で他を寄せ付けぬ結果を叩き出し、魔法理論では歴代一位の高得点を叩き出した。
「〝悠君〟は確かに私の目から見ても優秀だとは思うけど、魔法なんて見たことがなかったから」
「普通はそうだろう。だが、彼の兄や姉が常識外れの結果を出していて、入試結果にもその片鱗が窺えるのは事実じゃないか。何が不満なんだ？」
「別に不満という訳じゃないわよ」
摩利は真由美と家柄抜きに親友関係を築いていて、時折彼女から相談やら愚痴を聞かされることがある。摩利自身の実家も十師族の外

戚となった以上、そういった話題にも触れるべきということで父親から聞かされることが多くなり、その中には七草家の話題も当然含まれていた。

何があったのかと言うと……今年のバレンタインの時に三矢家と諍いを起こして相手の不興を買うような形となった事。その原因に真由美も関わっていたことだった。更には、水面下で結んでいた三矢家と七草家の婚約も十山家によるトラブルの為に解消されたことも聞き及んだ。

なお、その婚約解消を内心で一番喜んでいたのは……他でもない目の前にいる真由美であった。真由美の妹が密かに婚約を結んでいたことについては、それを進めていた自身の父親に「あんの腐れ外道タヌキオヤジ……」と超が付くほど不満げに漏らした事は、摩利だけが知っている秘密である。

「彼の入学を一番喜んでいたのはお前だろうに」

「べ、別にそんなことはないわよ！　それよりも、今は彼女の話題でしょ！」

（逃げたか……）

魔法師は一般的な男女よりも早婚を望む傾向が強い。それは魔法師としての能力を鑑みてのものであり、魔法使いとしての家格が高い家ほどそういう傾向が強まっている。故に恋愛結婚という自由度は家格と反比例する形で減少するのだ。

話題を逸らして逃げた真由美も親（主に父親）からの縁談で勧められた婚約者候補がいるのだが、乗り気ではなかったのだ。この学校には真由美と同格とも言える存在はいるものの、真由美からすれば彼は恋愛対象としてというより魔法師としてのライバルという印象が根強い。一条家にも名の知られた男子はいるが、真由美から見て年下ということで婚約対象から外されていた。

真由美が気に掛けているのは、同じ十師族の一角であり三矢家の三男。しかも、今度入学する新入生総代であり、生徒会長である真由美は既に顔を合わせている。真由美は否定しているような素振りを見せたが、摩利は自身の経験と照らし合わせて考えても、彼女が〝彼〟

を気にかけているようにしか見えなかったのだ。
その問題を先送りにしても、結局は返ってくる……ということは真由美自身も分かっているだろうと思い、摩利はこれ以上の追及を避けた。
「それで、どうするんだ？　何だったら風紀委員会に引き入れたいが」
「先に目を付けたのは生徒会よ。十文字君としては悠君を部活連に引き入れたいのでしょうけれど、不文律の手前もあって遠慮するそうよ」
部活連――――正式名称は課外活動連合会といい、第一高校内に存在する課外活動クラブ（俗に言う部活動）を統括する組織のことを指す。そのトップである部活連会頭は十師族の一角を担う十文字家の長男であり、既に十文字家当主代行としても活動している実績の持ち主。
すると、摩利が記事の中に気になる文言を見つけた。それは、犯人を取り押さえた人間が彼女ではなく別の人間だということであった。
「そうか……おや？　この記事を見るに、取り押さえたのは同い年ぐらいの男の子ということか」
「摩利、気になるの？」
「彼女の知り合いかは分からないが、もし入学するというのなら腕っぷしは十分あると見た。首根っこ掴んででも風紀委員会にスカウトするつもりだ」
犯人が元とはいえ軍人魔法師。それを相手に腕っぷしだけで圧倒できるということは、魔法の不正使用を取り締まる風紀委員は十分務まると摩利は判断した。尤も、その少年が魔法科高校に入学することになるという前提が付くのは摩利も当然理解している。
「次席入学の彼女に、三代続いて生徒会長を務めあげた〝三矢〟の弟に加えて〝六塚〟……今度の新入生は楽しみだな」
「ええ、そうね」
今年卒業した前生徒会長と入れ替わる形で入学することになる新入生総代の三矢悠元。
先日の元軍人魔法師を抑え込んだ次席入学者の司波深雪。
そして、東北から十師族の一角を担う六塚家から現当主の弟が三番

目の成績で入学する。
真由美はおろか摩利ですら、深雪も十師族関係者であるという事実を知ることになるのは……まだ先の話である。

入学編
僕は今、北の国にいます

――西暦２０９５年４月６日。
日本が桜舞う春の季節。今日は国立魔法大学付属第一高校の入学式。前世も含めれば２度目の高校生活。
今までは本当の名を名乗っていなかったが、居候の件も含めてあの二人に自分の事情をちゃんと説明できるかどうか緊張する……特に自分が十師族・三矢家の人間であるという事実に関して上手く話せるかどうか。
そんな不安半分、嬉しさ半分の状態だった数時間前の俺を返せ、と言いたくなった。それほどにご立腹を隠しきれなかった。
「何故？」と問われたら、理由は実に簡単だ。
長野佑都――もとい三矢悠元は今、第一高校がある東京ではなく北海道にいた。それも、華やかな雰囲気とは真逆の砲弾や人が飛び交う戦場の真っ只中に。
「――あんのクソ上司、これが終わったら覚えてろ！　お土産にでっかい木彫り熊を送り付けてやる!!　自主返送拒否でな!!」
そんな悪態をつきながら、襲い来る兵士――とは言っても、その兵士は全員防衛大学校の士官候補生であった。殺傷性の高い魔法は使用できないため自己加速術式を駆使し、手早く手刀で気絶させる。相手は平気で武装一体型デバイスを振り回してくるが、それを払いのけるとすれ違いざまに気絶させて次の相手へと視線を向ける。
（大体、相手は銃弾アリでこちらが接近戦オンリーとか……しかも、装甲車ならまだしも戦車まで持ち出すとかなんだよ!?）
候補生は平然と国防軍で制式採用されているライフルを使ったりしているが、悠元に関しては一切銃器や真剣などと言った武器の使用を禁止されている。彼らが使っている武装一体型デバイスはおいそれと使えないため、ただ投げ返したりするしかできない。

更には、悠元自身が使っていい魔法も自己加速術式と防御系統および対抗魔法のみという徹底ぶりであった。

どうしてこんなことになったのか、順を追って説明する。

悠元は上条達三特尉（かみじょうたつみとくい）として国防陸軍第１０１旅団・独立魔装大隊（どくりつまそうだいたい）に所属している。そして、彼の場合は達也と違って国防陸軍の兵器開発部からの出向という形のため、大隊内で使用する魔法技術による兵装の特別技術顧問まで担っている。

真田繁留（さなだしげる）大尉（沖縄侵攻の一件で中尉から昇進）もお気に入りであり、他の独立魔装大隊の隊員からも一目置かれている。加えて十代で新陰流剣武術師範代の印可を貰っている。

つまり、兵装の耐久実験として悠元に白羽の矢が刺さるのは無理からぬことだったし、悠元もその点に関しては納得していた。

今日が魔法科高校の入学式という点を除けば。

「俺はねえ！　大人やあんたらの都合の良い討伐対象（モルモット）じゃねえんだよ！」

そう叫びながら前進してくる戦車の弾丸を素手で掴むと、砲弾の推進力を体の捻りによる回転力に生かしつつＵターンさせるがごとく投げ返して戦車の足元で炸裂させた。その衝撃で戦車は走行不能に陥る。

今日は第一高校の入学式だと気を引き締めて家を出たら出合い頭に〝出頭命令〟を出されて北海道に強制連行される形となった。

本来、こういった軍関係の特務士官としての出頭は普通なら珍しくもない（非魔法師ならばともかく、軍人魔法師自体が少ないために軽度の緊急時でも呼ばれることがある）が、俺の場合は魔法兵器開発がメインの特務士官であり、戦闘面での出頭は基本的に〝想定してはいけない〟話だ。それこそ、沖縄の様な国家の存亡に直結し得る緊急事態でない限り。

その辺の事情を掻い潜って戦闘に参加させられる人間は二人しか存在しない。その二人の片方かあるいは……裏で指示を出した人間も掴んでおり、その辺は次兄と彼の幼馴染に話してあるため、既に対応待ちといった状態だ。

「こうなりゃヤケだ！　まとめて掛かって来いやぁ！」
　ちなみに、悠元は戦闘用の特殊スーツを着ておらず動きやすい服装に試作の対魔法防御コートを羽織っただけ。一応防御魔法として硬化魔法は使っている。というか、硬化魔法だけで物理防御はおろか魔法防御まで『事足りる』状態になっていた。ただ、顔バレを防ぐためにムーバル・スーツに採用する仮面を身に着けている。
　その様子を演習場から遠く離れた場所に設置された天幕――――備え付けのモニターで見ていた真田は、同じく独立魔装大隊に所属する柳連（やなぎむらじ）大尉に話しかけた。
「派手にやるね……柳、お前にあれができるか？」
「やろうと思えば真似出来なくはないが、ムーバル・スーツなしで戦車を相手にするのは御免蒙る。そんな命令を出されたら、命を捨てるものかと異論を唱えるだろう」
「だよな。俺だって御免だわ」
　今回のプログラムは防衛大学校の入学式の一環で行われている魔法戦闘のデモンストレーション……その相手に彼を選んだ上司は『意地が悪い』と二人は思った。
「そもそもの話、いくらデモンストレーションとはいえ、彼は表に出さないという話ではなかったのか？」
「僕もそう思ったし、上司に確認は取ったさ」
「それで、回答は？」
「師団長の命令だそうだよ」
　何せ、国家非公認の戦略級魔法師という事実に加えて新陰流剣武術の上段者を平気で倒すほどの実力を有する。これでは、下手すれば候補生のメンタルを折るようなものではないか……すると、二人のもとに一人の女性士官が近寄ってきた。
「お二人とも、こんなところにいたんですか？」
「藤林少尉か。データのほうは？」
「バッチリというか十二分に取れていますが……けれども怒ってますね、あれは。まあ、無理もないでしょうけれど」
　女性士官こと藤林響子（ふじばやしきょうこ）少尉はモニターに映っている光景――――近

代兵装はおろか魔法師も含む防衛大の候補生相手に無双している悠元の姿を見て深い溜息を吐いた。
　それも無理はない。彼が今日第一高校の入学式に出るはずだったことと、新入生総代ということも含めれば欠席なんてもってのほかだった。それも単なる魔法使いの家系ならばともかく、十師族の一角を担う三矢家ならば尚更だろう。
　だが、その彼を北海道に連れ出したのは他ならぬ真田と柳であり、悠元の参加を指示したのは直属の上司である独立魔装大隊（どくりつまそうだいたい）・大隊長の風間玄信（かざまはるのぶ）少佐だということも……その命令を下したのが師団長という事実も響子は知っている。
「この分ですと、お二人が出る幕はなさそうですね……」
「これで僕らが出張るとなると、それこそ対象が戦争になってしまうよ」
「真田……笑いごとにならん冗談はやめろ」
　実際のところ、デモンストレーションには真田と柳も出る予定だったのだが、強引に連れてこられて不機嫌この上なかった悠元が『標的役は自分だけでいいです。お二人がいると手が滑ってフレンドリーファイアしかねませんので』と言い放って、必要最低限の戦闘用装備を付けて出て行ったのだ。
　三人が見つめているモニターに映る候補生や戦車の状態。下手すると戦場跡でも見ているかのような光景から、彼の言ったことは非常に正しかったと納得せざるを得なかった。
「第一高校とご実家には先程連絡しました。明日の午前までの予定も合わせてですが」
「いやあ、仕事が早くて助かる。流石は［電子（エレクトロン）の魔女（ソーサリス）］だ」
「そう言うんでしたら、お二人も悠元君のフォローをしてくださいね？　本当なら第一高校の入学式に出席して、達也君たちに今日会う予定だったんですから」
「達也君か……彼らが直接戦ったら、どうなるんだろうな？」
　片や非公式の戦略級魔法師にして〝四葉〟の一族。片や〝三矢〟の系譜を継ぐ技術士官メインの非公式戦略級魔法師。配属上は同じ

部隊だが、お互い滅多に本気を出すことがない上に二人が揃うこともない。その意味で柳の興味を抱く発言は尤もだろう。それを聞きつつ、真田は苦笑を漏らした。
「その時は、僕らの手に負えない範疇の戦いが繰り広げられるだろうね」
「……その意見は的を射ているな」
「二人には決して唆さないでくださいね？　上司が胃痛で倒れても面倒は見れませんから」
　モニターには倒された兵士とひっくり返った戦車の惨状……まるで暴風でも通り過ぎたかのような光景が映し出されている。それでも、修理不能状態まで破壊したり死者を出していない辺りは流石の手際と言わざるを得なかった。
　これには真田のみならず、柳や響子も苦笑を禁じ得ずにはいられなかった。
「にしても、三矢の一族は一高の『触れ得ざる者』と呼ばれてるらしいが……こりゃ、納得かな」
「……今日の夜か明日あたり、富士の演習場に精巧な木彫りの熊が置かれるだろうな」
「はぁ……（少佐、ちゃんと責任を取ってくださいね？　私はそこまでフォローする気はありませんから）」
　デモンストレーション戦闘の後、富士の演習場に精巧な木彫り熊が降ってきて、軍関係者が宿泊するホテルのロビーに展示されることとなるのは別のお話である。そして、結果的に入学式を欠席する羽目になった悠元の機嫌を直すために、風間とその上司は揃って苦慮することとなる。
　敢えて言うなら〝二人の自業自得〟という他ない、と響子は内心で悠元の動員をそう評したのだった。
◇　◇　◇
　時をほぼ同じくして、東京・八王子。
（はぁ……どうしたものか）
　国立魔法大学付属第一高校の入学式。これからそのリハーサルが

行われるわけだが、講堂の前で納得できないと声を上げたのは深雪であった。これには達也も溜息を吐きたそうな表情が垣間見えていた。
「やっぱり納得できません！　どうしてお兄様が補欠なのですか！」
事の起こりは今朝のことだった。司波家に一本の電話が入って深雪が出たところ、伝えられた連絡事項に対して深雪が驚きの声を上げた。
『わ、私が新入生の答辞をですか!?』
本来新入生総代である人が急遽家の用事で行けなくなり、新入生で次席となる深雪に白羽の矢が立った。幸い答辞については予め用意しており、それを読み上げるだけでいいと伝えられた上で電話が切れた。つまり、深雪に拒否権がないというわけだ。
そうなると、筆記の成績が良かった達也にその資格があると蒸し返される形となる。新入生総代が十師族である以上は家の都合もあるのだろうが、何故だか文句の一つぐらいは言いたくなってしまったのだった。
別に、自分らが同じ十師族だから、という理由は一切含まれていないわけだが。
「深雪、解っているはずだ。俺の事情も、それができない理由も。仮に深雪の希望を叶えたとしても、余計に目立つことになってしまう。聡明なお前なら一番理解している筈だ」
「……はい」
［再成］と［分解］――――魔法師においても異質な達也の能力は表に出せない。それだけならばまだしも、自分たちがあの一族だと知られるのは現時点でマイナスでしかない。
それは一族に名を連ねる身として当然解っているからこそ、深雪は残念な表情を見せつつも素直に頷く。それを見た上で達也は深雪にこう呟いた。
「代理とはいえ折角の晴れ舞台なんだ。この駄目兄貴に深雪の堂々とした姿を見せてほしい」
「お、お兄様はダメ兄貴なんかではありません。ですが……解りました。行ってきますね」

達也の期待を込めたような言葉に少し照れつつも、深雪は決心したように講堂の中へと走っていく。それを見送ると、適当なところで時間を潰そうと歩き始めた。
（それにしても、佑都が来るのは明日か…思えば、あいつの年齢を聞いたことがなかったな…）
悠元の連絡先をＦＬＴ経由で聞いていた達也は、今朝早く『明日から司波家に居候することとなった』とだけ書かれていたメールを目にしていた。元々いつから来てもいいように準備はしていた（深雪が張り切って準備していたのは言うまでもないが）ので、それが正式に決まった程度であった。
考えてみれば、彼の誕生日も祝ったことがなかったし、年齢も聞いていなかった。３年前に出会った時の容姿から推測するに、自分や深雪と歳があまり変わらないだろう、と考えられるのが関の山であった。
今年は彼から『入学祝も兼ねて』ということで自分と深雪のＣＡＤをプレゼントしてもらい、深雪は大層喜んでいた。その反動が自分たちの片親達（父親とその愛人）の対応で深雪が拗ねて、已む無くフォローの言葉を貰ったわけだが。今度お返しに何かプレゼントしようと考えながら歩いていると、上級生らしき人物に声を掛けられた。
「新入生ですね。何かお困りですか？」
「いえ、大丈夫です（……ＣＡＤを身に着けているのか）」
達也は軽く頭を下げると、左腕にＣＡＤを身に着けているのが見えた。身長は深雪よりも低いが、スタイルは同年代の平均から見てもいいほうだろう。達也としては女性のスタイルに拘りなどないが。
「私は生徒会長をしている七草真由美（さえぐさまゆみ）と言います。七草（ななくさ）、と書いて『さえぐさ』と読みます」
「（七草……今年の新入生総代に続いて『数字付き（ナンバーズ）』か……）俺は…いえ、自分は司波達也と言います」
「司波君……ということは、今日答辞の代理を務めてもらう司波深雪さんとは双子なのかしら？」
「いえ、自分は４月生まれで、妹は３月生まれです。それにしても、自

分をご存じなのですか？」
　新入生総代の『三矢』に続いて『七草』と十師族が続く……それを表情に出すことなく、何故自分を知っているのか聞いてみることにした。もしかしたら『四葉』との関係を知られたかもしれないと探りを入れてみた。
　この時ばかりは感情に乏しい自分に感謝したくなったのは言うまでもないが。
「ええ。筆記試験では『悠君（ゆうくん）』と並んで歴代一位、魔法理論では満点で一位。教職員の間でもその秀才ぶりには驚かされていたわ」
　入試の結果というのは個人情報だろうに……そういうことを平気で喋っていいのだろうか、と達也は内心でそう思いつつ、その名前が気になったので問いかけてみた。彼女の口ぶりからするに新入生総代だろう、と達也は推測していた。
「……それは恐縮です。ところで、先程挙げた名前は誰なのでしょうか？」
「あ、知らないのも無理ないですね。彼は――――」
「会長！　やっと見つけましたよ!!　リハーサルが始められないじゃないですか!!」
　真由美の口から語られる前に、別の女子が真由美を見つけて叱るような口調だった。とはいえ、低い背丈のせいで何だか可愛げがある先輩だと少し思う達也に対し、真由美は申し訳なさそうな表情を向けた。
「ごめんね、司波君。では、またの機会ということで」
「いえ、こちらこそすみませんでした」
　ともあれ、七草家の人間にこれ以上詮索されるのは拙いと思いつつ、達也は頭を下げた上でその場を後にした。
　講堂には既に全体の半数以上を埋めるぐらいの人数が着席していた。軽く講堂全体を見るに、前方の席には制服に花の紋がある一科生（ブルーム）、紋が無い二科生（ウィード）が後方という状態が見て取れた。前の席に座って下手に目立ちたくないと思っていた達也からすればありがたい話で、後方の空いていた席に座って式まで眠ろうと思ったところ、

隣から声を掛けられた。
「あの、お隣宜しいですか？」
「ん？　ああ、どうぞ」
　達也の隣に座る形で二科生の黒髪の眼鏡を身に付けている女子と濃い橙色の髪を持つ女子が座り、黒髪の女子の方から達也に対して自己紹介をする。
「あの……私、柴田美月（しばたみづき）といいます。美月で構いません。よろしくお願いします」
「あたし、千葉（ちば）エリカ。あたしのこともエリカでいいわよ」
「司波達也だ。俺のことも達也でいい。よろしく、美月にエリカ」
　互いに自己紹介をし、エリカが司波、千葉、柴田で発音が似ていることに美月が笑みを零し、達也も少し笑みを浮かべる。それを見たエリカが意外そうな表情で達也を見ていた。
「どうかしたか？」
「いやー、達也君って顔に出ないタイプだと思ってたから、ちょっと意外ね」
「さっき出会ったばかりなのに、そういう言い方は失礼だろう。ところでエリカ、千葉家ってひょっとして［千刃流（ちばりゅう）］のことか？」
　『失礼だな』と思いはしたが、達也は少しお返しとばかりにエリカの名字について尋ねる。流石に魔法師で名の知られている家柄だということは自覚していたのか、エリカは苦笑を浮かべる。
「え、あー、まあね。やっぱり達也君も剣術に憧れがあったりする？」
「体術なら教わっているが、『君の場合、剣術の才能はからっきしだろうね』と、先生もとい師匠に言われたことならある」
「ず、随分ハッキリと仰る先生ですね……」
　今やっている体術の稽古には忍びの類になるような飛び道具の鍛錬もあったりするが、それは明らかに剣術ではない、と心の中で呟きつつ達也は言葉を続ける。
「まあ、いつものことだからあまり気にしてはいない。少なくとも、俺よりも剣術が上手な奴なら一人知っている。彼曰く『剛三の爺さんに叩き込まれただけだ』と教えてくれたが……エリカ？」

その人物は沖縄防衛戦のとき、専用の刀剣一体型ＣＡＤで敵を薙ぎ倒していた――――高プラズマ状態の刃で切断していた、というのが適当な表現だが、物騒なことを言うと余計な追及が来そうだったので〝剣術が上手な奴〟とマイルドに抑えた。

後日、仕事の合間に悠元（達也の認識では佑都だが）から剣術のことを少しばかり聞きかじっていた。すると、「えっ？」と驚きを漏らしたエリカの様子に気付いて達也と美月が彼女のほうを見やる。

「エリカちゃん？　どうしたの？」

「達也君、今『剛三』って言わなかった？」

エリカは達也の口から出た言葉に目を見開いていた。まさかこんな形で自身の知己の名前を聞くことになろうとは……思いもしなかった、のかもしれない。

「ああ、確かにそう言った。師匠に聞いたら、上泉剛三ではないかと言っていたな」

「……その人ね、うちの千刃流からすれば本流、新陰流剣武術の総師範よ」

「エリカちゃんのお知り合いですか？」

「知り合いっていえばそうなるわね。あたしも数回手合わせしてもらったけど、一回も勝てなかったのよ。師範代クラスのうちの兄貴たちでも掠り傷がやっとってところ」

「それは凄いな……」

千刃流のことは達也も知識として知っている。警察及び陸軍の歩兵部隊に所属する魔法師の約半数が千刃流の教えを受けていると云われていて、その師範代クラスですら掠り傷程度しか与えられないというのは、上泉剛三なる人物の凄さを物語っている。

いや、上泉剛三は世界史においてその名を知らぬ者はいないほどの存在として知られており、この国において英雄に足る人物として名高い。彼は魔法師のみならず武術においても卓越した技量を発揮しており、若かりし頃は国内の剣道大会を全て総なめしたほどの実力を有していた。

その人物に教わっていたとすれば、あの腕前も何となく納得できる

と達也は内心でそう感じた。
「しかも、兄貴たちは複数の魔法を使ってるのに、相手は硬化魔法以外使用していない。その人も凄かったけど、師範代クラスでも化け物よ。その人が連れてきていた二人の男子が兄貴達相手に完封しちゃったんだもの……同じく硬化魔法〝だけ〟で」
エリカの言葉に武術のことなどからっきしの美月は首を傾げたが、達也は驚く。とはいっても、極端な感情が出ない以上顔に出ることもなかった。すると、入学式が始まるアナウンスが流れ、この話はまたの機会で、ということになった。

別人のようで実は同一人物（※）

入学式は特に問題なく進んだ。

新入生総代の代理として壇上に立った深雪はしっかりとその役目を果たしていた。その答辞は一科生と二科生の違いなく協力して……とかなりギリギリの言葉を選び取っており、深雪でなかったらその大役は務まらなかっただろうと達也は冷静に分析した。

（しかし、深雪も内心ではそう思っているのかもしれないが……その人物には、少し興味が出てきたな）

達也の中では、新入生総代である人間が最強を自負する十師族でありながらも、その人物からすれば一科生や二科生の括りなど関係なしに切磋琢磨することを望むような文面を建前だけで片付けるとは到底思えなかった。警戒をする必要はあるかもしれないが、その人物と会話してみたいという興味も少なからず湧いていた。

◇　◇　◇

深雪からすれば、壇上でスピーチすることは何度か経験があったため、そこまで苦ではなかった。しかも、その内容自体も深雪にとっても共感できる内容が多かったため、寧ろ話してみたいと思ったほどだった。

ただ、深雪にとって疑問も生まれていた。本来新入生総代なる人物が読むはずだった手書きの答辞を一応読み込んでおこうと開いた瞬間、一種の既視感を覚えたのだ。

（……あの答辞の字の書き方はどこかで見たことがある様な……佑都さんの字に似ているのかしら？）

「司波さん、どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません」

似ているというか、実際には同一人物なので字の書き方や癖が似るのは当たり前なのだが、真由美からの問いかけでその思考を中断することとなった。真由美は深雪に対し、労うようにしつつも問いかけた。

「司波さんはどうだった？　その答辞を読んで」

「私としても共感できる内容でした。際どい文面が多くて、正直緊張してしまいましたが」
「そうですか。私としては、『悠君』も含めて生徒会に入ってほしいと思っています」
　真由美の発言の中に気になる単語――――恐らくは新入生総代である三矢家の人間であり、真由美の言い方からするに男子だろうと深雪は推察した。彼女が同じ十師族である以上は面識もあるのだろうが、深雪が気になって話しかけようとしたところで、その雰囲気を読まない輩が割り込んだ。それは主に深雪と同じ1年の一科生であった。
「会長、お話し中失礼します」
　その男子こと森崎駿（もりさきしゅん）を皮切りとして、一科生の男女がお近付きになろうと持ち上げるというか褒め称えるに近い言葉が深雪に浴びせられる形となった。深雪は何とか失礼のないように愛想笑いを浮かべているが、これでは可哀想だと察した真由美が助けを出してあげることとした。
「司波さん、お兄さんと待ち合わせをしているのではなくて？」
「え？　……あ、はい。お気遣いいただきありがとうございます」
　どうして自分に兄がいるのを知っているのか、とは思ったが、真由美が助け舟を出してくれたと察して礼をしつつ、真由美に続く形で体育館を後にした。そこから距離を取る形で先程深雪に話しかけていた一科生もいるが、そちらに対して気にすることなく真由美に問いかけた。
「七草会長。どうして兄のことをご存じだったのでしょうか？」
「実は校内の見回りでお会いしたのもあるけど、魔法理論のテストは『悠君』と同点の第一位ということで先生方の間でも噂になってたの」
「（お兄様と学力でほぼ互角だなんて……）今年の新入生総代の方は凄いのですね」
「うん、まあ、そうね……」
「？（何故でしょうか……会長の様子を見ていると、油断ならないと思えてしまうのは）」
　真由美の説明を聞いて、深雪は達也と互角の学力を持ちうることに

対して感心するように答えたが、それを聞いた真由美の如何し難いとも言える様な言葉に対して思わず首を傾げた。
何故かと言えば、真由美にとって色んな因縁があり過ぎて素直に評価できないということもそうだが、彼女自身が抱えている感情も含んでのもの。そして、その様子が何故か自分にとっても無関係ではない、と深雪の『乙女の勘』が警鐘を鳴らしているかのようだった。
なお、真由美の後ろには副会長の男子がいるのだが、深雪は今年の新入生総代の代理として答辞を読んだことを理解しているため、この高校の不文律である『新入生総代の生徒会勧誘』は先送りになると分かっていても、可能ならば声を掛けるべきだと真由美に視線で訴えているが……当の真由美本人は無視を決め込んでいる模様だった。

◇　◇　◇

入学式も滞りなく終わり、学生証も兼ねているＩＤカードを受け取り終えると、同じくカードを受け取ったエリカと美月に話しかけられた。
「達也君、ホームルーム見に行かない？」
「誘ってくれたのはありがたいけどすまない。この後、妹と待ち合わせしてるんだ」
達也からすれば、ホームルームを見るのは明日でも問題はないだろうと思っていたので、エリカの申し出を少し丁寧気味に断った。すると、美月が思い出したように尋ねた。
「もしかして、新入生答辞を読んでいた人ですか？　司波深雪さんと言っていましたし」
「え、ひょっとして双子？」
「よく言われるけど違うよ。それにしても、よく解ったね？」
「何というか、お二人の凛としたオーラが似通っていた、と言いますか……どうしました？」
「（霊子放射光過敏症か…）いや、御見それした。君は特段眼がいいんだと思ってな」
変に刺激して疑いを掛けられるよりはそれとなく躱す位でいい。威圧的だと逆にこちらが疑われるだろうと思いつつ言い放ったとこ

ろで達也に聞き覚えのある声がして、視線を向けると深雪がいた。
厳密には、その後ろに真由美と恐らく生徒会のメンバーだろうと思しき男子生徒が立っていた。ただ、男子生徒の視線が達也に対して敵視するような印象が含まれていることにやや眉を顰めた。
「お兄様。早速デートのお誘いですか？」
「深雪……その言い方は俺だけでなく、彼女たちに対しても失礼だよ。この二人はクラスメイトだ」
最近耳年増のごとく恋愛ごとに敏感な妹からそんな言葉が出たことに対して、自分がそこまで至れないということを理解しているのに、悪戯めいたことを述べた妹に対して窘めるように言い返した。
これには深雪もバツが悪そうな表情を見せつつ、エリカと美月に対して頭を下げつつ自己紹介をした。
「あ、申し訳ありません。司波深雪といいます」
「私は柴田美月です。美月で構いませんよ」
「千葉エリカよ。ねーねー、深雪って呼んでもいい？　あたしのことはエリカでいいから」
「はい。よろしくお願いしますね、美月にエリカ」
気さくに話しかけてくれるエリカに対して、深雪も彼女の名字を理解しつつ打ち解けていた。とはいえ、深雪だけでなく後ろにいる生徒会役員（主に真由美）のせいで周りの注目を集めてしまっている。
深雪が達也のもとに来たことで二人の関係性をそれとなく察したようだが、やはり達也が二科生であることが深雪との対比として認識され、野次馬のような同級生（主に一科生）から誹謗中傷同然の会話が聞こえる。
「次席の妹に劣等生の兄か…」
「同じ高校に入学して恥ずかしくないのかな」
幸い、深雪は達也に恥をかかせない様に堪えているが、このままでは深雪が魔法を暴走させて氷漬けの校舎に成りかねない。なので、この状況を収めるために達也が自ら切り出す形で深雪に問いかけた。だが、深雪からの回答を待つ暇もなく真由美がその答えを発した。
「深雪。生徒会の方々が後ろにいるようだが、いいのか？」

「構いませんよ。今日はご挨拶だけだと決めていましたから」
「会長!?」
「別に急いで決める、というものでもないでしょう？　深雪さん、詳しいお話はまた今度ということで。司波君も」
　真由美はそう言ってその場を後にする。男子生徒は達也を睨んだ後で真由美の後を追うように駆け足で去っていった。達也はその男子生徒に睨まれる覚えなどないし、今回が初対面の相手だ。すると、その様子を見たエリカがボソッと呟いた。
「あの人は確か副会長だったはずだけど……きっとアレね。会長さんに恋してるけど、そのライバルだと思って達也君を睨んでたんじゃないかな」
「甚だ迷惑な話だな。大体、どちらも今日が初対面の相手だぞ？」
　達也から見れば男子生徒もそうだが、真由美と明らかに面識を持ったのは今日が初めてだ。生徒会長としての彼女なりの気遣いなのかもしれないが、いきなり親しげに話しかけられるのは流石の達也でも警戒してしまう。なにせ、彼女は十師族・七草家の人間なのだから。
　すると、深雪が兄の言葉に対して辛辣とも言えるような言葉を吐き、美月は苦笑いを浮かべていた。
「お兄様は自分の容姿に鈍感ですから」
「あ、あはははは……」

◇　◇　◇

　その後、深雪のＩＤカード受け取りを済ませた後、お互いに自己紹介して達也と深雪、エリカと美月は途中でカフェテリアに寄ることとなり、少し寛いでからエリカが深雪に視線を向けていた。
「それにしても、深雪は周りの連中の視線を独り占めしてたけど、昔からああなの？」
「そうね。最近は余計拍車が掛かってきてる気がするわ」
「まあ、深雪の場合は想い人の存在もあるからな」
「お兄様、そんな想い人だなんて……佑都さんは……」
　深雪が女性として磨きをかけるようになったのは３年前の夏からであった。加えて、沖縄から帰ってきた母親が何故か若返っていたこ

とも相まって、彼女が女性としての魅力を磨いた結果……１０人いたら３０人の視線を奪う様な有様になっていた。
　すると、エリカは深雪の出した名前が気になって尋ねた。
「ん？　深雪、今佑都って言わなかった？　もしかして、長野佑都って言わない？」
「え？　エリカは佑都さんをご存じなんですか？」
「佑都とはもう一人の『ミキ』って奴も含めて幼馴染って奴よ。ま、佑都が新陰流剣武術を習ってて、千葉家の道場に来たのが切っ掛けってとこ」
　尤も幼馴染に恋愛感情なんてないけどね、と付け加えた上でエリカが説明すると、深雪はどことなく安堵したような雰囲気を纏っていることに達也が気付いた。敢えて指摘するようなことでもないため、そのまま話を続けることとなった。とはいっても、専ら佑都のことに偏ってしまうのは無理からぬことだが。
「エリカちゃん、長野さんってそんなに凄いんですか？」
「ありゃ、凄いという言葉で片付けられるなら誰も苦労しないわよ。剣術だけじゃなく、魔法も一級品よ……でも、変ね」
「変、ですか？」
　エリカは正直、『ミキ』はともかくとして佑都が魔法科高校に入学していないのが不思議でならなかった。確かに彼の近くには上泉剛三の姿が良く見られたため、彼が古式魔法の使い手で現代魔法が中心の魔法科高校への選択をしなかったのかもしれなかった。
　だが、エリカは事前に佑都から進学先を聞いており、その際に「魔法科高校に合格した。春から第一高校に通うけど、クラスは別になりそうだな」という発言まで聞いていたのだ。
「あたしね、先月に佑都から進学先を聞いたのよ。そしたら、第一高校に通うって言ってたんだけれど……あたしの勘からすれば、佑都は間違いなく一科生クラスだと思うのよ」
「壇上から見た限りでは、それらしい姿は見えませんでしたが……エリカ、それが嘘の可能性は？」
「ないわね。だって、多少は加工してたけど合格証明の画像まで丁寧

に送ってきたし」
　エリカは端末を操作して、その画像を三人に見せた。確かにプライベートに関わる部分は隠されているが、間違いなく今年度の新入生の合格証書なのは達也でも疑いようがなかった。深雪としても終始他の一科生に囲まれる形となったため、佑都を探す余裕がなかったのだろうと判断した。
　なお、その後もエリカから佑都に関する情報が出され、気が付けば深雪がエリカに迫る一幕もあったのだった。
◇　◇　◇
　エリカは達也たちと別れて、千葉家の離れに戻ってきた。一先ず制服から動きやすい恰好に変えたところで、ふと机の上に置いた端末が気になった。
「……やっぱ、気になっちゃうわよね」
　メールなら誤魔化される確率が高いと思い、思い切って電話をしたところ、ワンコールもしない内に通話が繋がった。そして、エリカの耳に聞こえてきたのは良く知る幼馴染の声であった。
『お掛けになった電話番号は、現在本人の不機嫌により繋がりません。ピーッという発信音と共に、最近連絡すら寄越さない幹比古への恨みも込めながらメッセージをどうぞ』
「……ミキのことはともかく、少しは真面目に話しなさいよ」
『エリカが冗談に乗らないってことは、今日はいつになく真面目な話か』
　いつもならば『ミキ』の名前を出しただけで軽く反応するエリカだが、その冗談すらスルーしたということは何かしらの疑問があるのだろう……と、電話の相手である悠元はエリカの問いかけを待った。
「今日、第一高校の入学式があったんだけど、折角だから待ち伏せしていたのに、あんたの姿がどこにもなかったのよ」
『あー、すまん。実は家の用事が入って今北海道なんだわ。もう一人の知り合いには連絡してたんだが……入学式に出れなかった不機嫌のあまり、忘れてた』
　エリカは悠元自身が何かしら振り回されていることを知る数少な

い当事者の一人の為、彼がいきなり北海道にいたとしても、別にそこまでおかしいとは思っていなかった。
「そ、それは大変ね……ま、正直なのは嫌いじゃないわ。今度新しくオープンするカフェのケーキセットで」
『あいよ』
　お互いに軽いノリだが、二人は『友人』としての距離感を保っている。それはエリカと悠元の間でしか分からないことである。連絡忘れの罰を甘んじて受けることを聞き終えた上で、エリカは更に悠元へ問いかけた。
「それでね、あんたのことを達也君と深雪が知ってたのよ……って、分かる？」
『司波達也に司波深雪だろ？　爺さんの繋がりで面識を持ったからな。ちなみにだが、今年の新入生答辞は誰が読んだんだ？』
「その深雪が答辞を読んだのよ……って、どうしたのよ？」
　ここで、悠元が問いかけたことにエリカは何の疑いもなくありのままに答えた。普通ならば新入生答辞を読んだ人物のことを聞くよりも、他に知り合いはいなかったのか、とか割とありきたりな内容にするはずだろう……とまでは咄嗟に考えが及ばなかった。だが、悠元の唸るようにも聞こえる声でエリカは疑問を覚えた。
『マジか……あの答辞は結構際どいワードが入ってたんだが』
「確かに『等しく』とか『魔法以外にも』とか入ってた……ねえ、佑都。それだとまるで答辞を書いたのが佑都であるかのような答え方じゃない」
『……その通りなんだよ。比喩でも嘘でも冗談でもなく、事実だ』
「はあっ!?」
　悠元の言い放った事実にエリカは驚いた。本来あの答辞は新入生代表である三矢家の人間が読み上げることになっていて、その代役を深雪が担ったことまでは察することが出来た。だが、エリカと話している相手はそれが自分の書いた答辞であると認めたのだ。仮に彼の言っていることが事実とするならば、今自分と話している相手――『長野佑都』は一体何者なのかと。

これもいい機会だと思い、悠元は一息吐いてエリカに告げた。
『達也と深雪には自分から明かすので今は秘密にしてほしいんだが……長野佑都という名前は家の都合と安全上の理由でそう名乗らざるを得なかったんだ。俺の本当の名前は三矢悠元（みつやゆうと）――――三矢元（みつやげん）の三男にして、今年度の新入生総代が俺だ。というか、千葉家にも俺の高校入学に際して書状は送ってるはずだから、当主であるお前の親父さんとその近辺は知ってるはずだぞ？』
「……幼馴染が十師族って、あの女みたいなことになってて頭が痛くなりそうよ。ってことは、あのクソ親父は無論のこと、バカ兄貴も知ってそうね」
『多分な。まあ、明日の昼過ぎには第一高校に行けるから大丈夫だと思う』
「じゃ、ケーキセット2つ追加で。あと、友達の分も奢りなさいよね」
『へーい』
悠元との連絡を終えた後、エリカは道場に偶々いた寿和から悠元のことを聞き、彼の言ったことが裏付けられる形となったことに本気で頭を抱えたくなったのは言うまでもない。

噛み合い始める歯車（※）

防衛大学校の入学式――――現役の候補生によるデモンストレーション戦闘は悠元が魔法科高校の入学式に出れなかったフラストレーションによって大惨事となっていた。

元々防衛大の学長から「弛んでるので絞ってやってほしい」と独立魔装大隊に頼んでいたのだが、それをたった一人の標的役が制圧しきったことに流石の学長も泡を吹いて倒れた。

そんなことは露知らず、悠元は真田や柳と組手を終えて休憩していた。

「やれやれ、流石は『殲滅（ティ）の奇術師（ター）（ニ）（ア）』と呼ばれた特尉だわ」

「まさか、［転（てん）］を逆に利用するとはな。感服ものだ」

「組手で使えても実戦では使えませんよ。下手すれば怪我しますので」

「確かに加減はしたが、怪我を覚悟すれば使える時点で末恐ろしいと思うぞ」

――――『殲滅の奇術師』

沖縄侵攻の際、艦隊をまるで存在しなかったように消し去ったことから付いた『二人目の戦略級魔法師』。あの光景をしっかり見ていた風間と真田、それと柳もそれが悠元であると知っている数少ない人間だ。仰向けになっていた悠元は起き上がって二人を見やった。

「とりあえず、木彫り熊は魔法の実験がてら富士の演習場まで〝飛ばしました〟」

「あれだけの魔法を使えて、組手の前にやったのは質量物を飛ばす超長距離射撃魔法の実験かな？」

「最終的な目標は『対大気圏外小惑星破壊用収束魔法』ですけれど」

「……悠元君なら平気で出来そうなところが怖いわね」

悠元の言葉に、いつの間にか来ていた響子が溜息を吐きつつ彼に視線を向けた。さっきまで演習で倒れてしまった木から魔法で木彫り熊を作り、それを魔法で飛ばした。一応これは響子に「富士の演習場まで飛ばしますから」と一言述べた上で行っている。そもそも、悠元

の事情を無視したのは上司の側なので流石にフォローできないと響子は感じていた。
「悠元君もごめんなさいね。本当なら入学式に出たかったでしょうに」
「気にしないで下さい、響子さん。っと、メールだ」
「組み手のときも持ってたのか……」
　響子の詫びに答えたところでメールの着信に気付いて悠元が端末を弄る。それを見た柳が組手の最中でも持っていたことと壊れなかったことに驚いていた。
「新陰流は硬化魔法を重点的に鍛えますから。組手をしながら通信端末の強度上昇および自身と端末の相対位置固定ぐらいできないと、爺さんから音速相当の木刀が飛んできますよ」
「僕らも剛三殿の高速で飛んでくる木刀を経験したけど、よく生きてるね……で、相手は？」
「達也からです。本来なら直接渡したかったんですが、別の連絡経由で渡しました」
　真田の言葉も尤もだと思いつつ、達也からのメールに目を通す。
　内容としては入学式に深雪が祝辞を述べたことや、クラスメイトのこと。その一人が剛三のことを知っていた……多分エリカだろうと推測した。そして生徒会長の七草真由美に何故かよく覚えられていたということ（プラス副会長の男子に睨まれたこと）。ここまでは良かったのだが、問題は次だった。
『入学祝いの関係であの人たち（深雪の血縁上の父親とその再婚相手）が深雪にばかり気を遣ったから深雪の機嫌が悪い。フォローはしたが、お前からも何か言ってやってほしい』
　おい、司波家絡みのフォローを居候する第三者にぶん投げんじゃねえよ、お兄様ぁ！　こちとら北海道に強制連行されてストレスが激おこトゥマーン・ボンバだよ！　……あ、その対策しておかないとな。一周回ってスッキリしたからメール送っておこう。
　とはいえ、深雪のプライベートアドレスを知らないから達也に返信するしかないが。

『明日から一緒に暮らすことになるけど、深雪の作る料理を楽しみにしてるよ。追伸・達也、大切なことを思い出させてくれて感謝しとく。明日は色々驚くと思うけど、気を強く持ってくれ』

居候のことと自分の正体をそれとなく仄めかす様な内容を送信した。その結果は……こうなった。

『ミッション・コンプリート』

フォローになってるか微妙だったが、達也の返信からしてどうにかなったと解釈した。とりあえず司波家が冷凍室になって達也が冬眠するような事態は回避できたようで何よりだ。

「達也君も妹さんのご機嫌取りには苦心しているのね」

「……他人事と思えないことには同情したくなります」

というか、俺からの連絡をどうやって誤魔化しているのかと思ったが、恐らくは母親の深夜経由だと適当に誤魔化しているのだろう。

その少し前、富士演習場のほぼ中央に落下してきた物体に国防軍は騒然とした。その飛んできたものというのは……

「木彫りの……熊？」

敵の攻撃かと思った兵士は全員首を傾げた。そこに姿を見せた風間が敵の攻撃ではないと説明し、部下に命じて木彫りの熊を一度基地内に運び入れた。結局基地内に置いても仕方がないと判断し、演習場南東エリアにある軍関係者用ホテルのロビーに運び入れた。

その作業が終わった後、風間は響子に連絡を入れたのだが、有無を言わせない物言いに風間は黙ってしまうこととなった。

「藤林少尉。先程演習場に木彫りの熊が飛来したのだが、何か心当たりはあるか？」

『少佐、彼を強制的に連れだしたことに関して、きちんと反省してください』

「……」

なお、富士演習場に飛来した木彫りの熊は『ハルノブ』という愛称が付けられて、これに触れたものは幸運になれるという噂が流れるようになったのは別のお話。

◇　◇　◇

入学式の日の夜、第一高校一科生1年の光井(みつい)ほのかはその親友である同じ一科生1年の北山雫(きたやましずく)と音声通話による電話をしていた。
この世界では音声のみと映像込みでのリアルタイム通話の両方があり、基本的に掛かる料金はあまり変わらない感じだが、後者はリモートやオンラインでの会議などに使われることが多い。
「その、今日はごめんね。いきなり取り乱す様な事をしちゃって」
ほのかがそう言ったのは、入試で見た達也の魔法行使が〝綺麗〟――大抵の人が魔法式の無駄で生じる光波ノイズを全く発しなかった――であり、てっきり達也を一科生だと思い込んでいたのだ。だが、実際の達也は二科生であったことに、思わず叫びそうになったところを雫が咄嗟にほのかの口を手で覆ったのだ。
『ま、ほのかが叫びそうになったタイミングだと思ったから。でも、ほのかがそう言っちゃうほど凄かったんだね』
入試の時は、ほのかと雫は受験番号の関係で別々の受験部屋に割り当てられたため、雫は深雪や達也の様子を見ることはなかった。なので、その二人のことはほのかから聞いた程度でしかなかったが、ほのかの受験部屋の周りが何だか騒がしかったことは覚えていた。
ただ、自分の将来が掛かっている大事な試験で余計なことは考えたくない、と雫は自分の試験に集中していた。
ほのかは普通の魔法師とは一線を画した存在の一人であり、光井(みつい)の名を示すがごとく光波系の魔法――古式の魔法で言うなれば『光』の属性にとりわけ強い適性を持っている。
ただ、それと引き換えに強い依存癖を持っているため、彼女を守るという意味も含めて雫は彼女と親友の関係を築いている。
「うん。司波さんは圧倒的な魔法力って感じだったけど、そのお兄さんは最小の魔法力で行使していたって感じかな……そういえば、雫も誰か探してなかった?」
『……気付いてたんだ』
「伊達に親友はやってないよ。多分だけど、佑都さんのこと?」
ほのかが出した名前に雫は小さな声で「うん」とだけ答えていた。
彼女が佑都と最初に出会ったのは北山家のホームパーティーでの

こと。第一印象はやけに大人びた男の子という感じだったが、雫も交えての会話で年相応の男子という印象に変わった。
ほのかも彼に対しては好印象であったが、その時に雫がどこか彼に対して恋愛感情を滲ませるような仕草を見せているのに気付き、親友の初恋を成就させてあげようと思った。それ以降、佑都とは仲の良い異性の友達という関係に収まった。
その後、雫やほのかが中学2年の時、佑都が同じ中学校に転校してきた。
二人の通っていた中学校の剣道部は、関東地方でも指折りの実績を持つ強豪だが、文芸部に入った佑都が何故か剣道部の臨時部員という形で大会に出場し、全国中等部剣道大会の男子部個人戦で優勝という実績を挙げた。
ただ、本人曰く「爺さんの有名税に引っ張られてのものだし、俺の剣は必要とあらば人を殺めるものだ。だから、剣道大会に出るのは一回きりだ」と言い、それ以降は文芸部でのんびり本を読み耽っている様子が印象的だった。
『てっきり、ほのかは佑都に惚れると思ってた』
「思わなくはなかったけど……私は、雫に幸せになってほしいって思ったし、佑都さんからもその気はないって言われちゃったから」
『それで、今の恋愛対象はそのお兄さんってわけだね』
「雫!!　……もう、今はそのことじゃないよ」
会話ではかなりストレートな表現になっているが、ほのかは一度佑都に尋ねたことがある。その時の答えは「これ以上依存される相手を抱えるのは辛いんで、友人関係で頼む」という、まるで実体験を交えたかのような言葉を聞いて、お互いに友人関係であろうという形で決着した。
少し話が脱線したことに気付き、ほのかが強引に話を戻しつつ雫に問いかけた。
「私は佑都さんの魔法を見たことはなかったけど、雫は知ってるの？」
『佑都の通っていた道場――――新陰流剣武術という流派なんだけど、そこで彼が魔法の練習をしていたのを見たことがある』

衝撃的な剛三との初対面――――そのことは追々語るが、雫はその後も佑都へ会いに何度か新陰流剣武術の道場を訪れたことがある。その時に彼の魔法も目撃したのだが、中規模エリア用振動系魔法『氷炎地獄（インフェルノ）』を涼しい顔で使いこなしていたのだ。

しかも、その『インフェルノ』を何と1メートル四方で区切って64面の高温域と低温域のマスを形作っていたのだ。それを見た雫は、その魔法の織り成す綺麗さに目を奪われていた。

『お母さんにも佑都の使ってた魔法を聞いたんだけど……それが本当なら世界でも指折りね、って言っちゃうほどだった』

雫はその魔法を母親に尋ねたところ、A級魔法師ライセンスの試験問題にもなる高難度魔法を同時に32も制御できる魔法師は世界でも類を見ないものであり、それを寸分の狂いもなくエリアの威力制御まで行っているとなれば……この国の魔法師ライセンスでは間違いなく評価できない、と返された。

「確か、佑都さんも魔法科高校を受けるって言ってたよね？」

『うん。合格して第一高校に通うって聞いてた。でも、見た感じ佑都の姿はなかった』

「私もそれはちょっと気になったけど……雫？」

『すー……』

「寝ちゃった……まあ、またの機会でいっか」

進路も聞いていたはずなのに、その彼を見かけなかったのは何故なのか……それを聞こうと思ったほのかだったが、雫がそのまま寝てしまったことで、このことはまた別の機会でいいかと判断して通話を切ったのだった。

◇　◇　◇

入学式の翌日。コミュニューターに乗る達也と深雪であったが、昨晩のことはどうやら引き摺っていないと達也は判断した。そもそも、表向きの血縁関係である以上、達也も彼らに対して必要以上の役割など求める気にもならなかった。

ただ、深雪としては期待と不安が入り混じった表情を浮かべていたため、達也は目を通していた端末を仕舞ってから尋ねた。

「どうしたんだ、深雪。これからの学校生活が不安なのか？」
「あ、その……昨日のことを思うと、お兄様のことを快く思わない方々がいる中でやっていけるのかと思いまして」
「ふむ……」
深雪の念頭にあったのは、間違いなく昨日の入学式後の事だろうと達也は推察した。
達也としては、二科生であるということに不満や不平を漏らしたりするつもりはないし、妹である深雪と比較されることなど以前からあったことだ。ただ、魔法科高校では魔法技能という面でその比較がされやすくなってしまっているのは確かであった。
でも、感情面の大幅な制約を課されてしまった自分とは異なり、それなりの礼儀作法をしっかりと学んでいる深雪ならば問題はないだろうが、この学校の差別意識を鑑みれば、深雪に近付こうという不届き者はいてもおかしくはないだろう。
「深雪は俺よりもしっかりしているんだ。少なくとも次席入学という確たる実績がある以上、邪険に扱われることはないだろう」
「そうでしょうか？」
本来ならばガーディアンである自分が深雪を傍で守るべきなのだが、学校内でそれをやってしまうと確実に目立ってしまうし、この学校には十師族の人間も通っている。
それに、妹と約束した「人間」らしくある魔法師を目指すためには、せめて学内のことは可能な限り独力で乗り切ってもらわねばならない。あまり気にしないようにしてほしいという願いも込めて、達也は話題を変えることにした。
「それに、今日から佑都が司波家（ウチ）で居候することになるんだ……ただ、疑問もある」
「疑問、ですか？」
「ああ。佑都が俺と共闘したことは深雪も知っているだろう？」
達也は佑都の一時的な指揮下に入るという便宜上の措置で大亜連合の沖縄侵攻を食い止めた。『分解』と『再成』以外の魔法をまともに使えない達也とは対照的に、現代魔法の加重系・放出系・光波振動系・

収束系と多岐に渡る攻撃魔法だけでなく防御魔法まで使いこなしていた。
　つまり、達也は何が言いたいのかというと、自分とは違って現代魔法を自在に使いこなしていた以上、佑都がもし魔法科高校に入っていたとするなら、一科生の可能性が極めて高い。それも、下手すれば深雪すら超えるであろう実力を兼ね備えた上で……と推察したのだ。
「実は、昨晩母上経由で佑都に聞いたというのは深雪にも話したが、どうやら高校の関係で居候するらしい」
「ひょっとしてですが、お兄様は佑都さんが魔法科高校――――第一高校に入学しているのでは、と思われたのですか？」
「ああ。だが、それらしい姿も見られなかった。エリカの説明を考慮するなら、昨日は欠席していた可能性もあるな」
　幸いにして、お互い一科生と二科生で別れているし、今日と明日は授業のオリエンテーションしかない。もしかしたら、どこかしらで遭遇する可能性だってない訳ではないのだ。
　達也の推察は正しく核心を突いていた。ただ、この時の達也は新入生総代が十師族であることから若干警戒していたため、その人物と佑都が結びつくとは思わず、考察の範囲外に追いやっていた。
　そもそも、新入生の出欠を正確に把握できていたのは、せいぜい教職員と生徒会役員ぐらいなため、これぱかりは致し方のない事であった。

◇　◇　◇

　第一高校に着くと、達也と深雪はそれぞれの教室へ向かうために校舎内で別れた。一科生と二科生は教室もそうだが、そこへ向かうための階段も別となっている。
　一科生と二科生の諍いを起こさないためとか、非常時の避難を考えてのものだとか様々な安全上の理由は存在するが、深雪にとってはあまり快くないものであった。そんな憂いの表情すら絵になってしまうためか、目を奪われて階段を踏み外す男子生徒の姿もあった。
（お兄様のことは仕方ないとしても、せめて佑都さんと一緒に歩ければ……）

そんなことを考えつつ、気が付けば1年A組の教室の前にいた。深雪は一呼吸置いてから教室に入り、「おはようございます」と述べて自分の席に着く。周りの視線は深雪に向けられるが、別に悪意や敵意を向けられたわけではないため、笑みを見せつつ自分の席に座ると、ツインテールの女子が話しかけようとしてきた。

「あ、あの、司波さひゃわっ!?」

自分の足で躓いて顔面から床にぶつかった女子生徒に対し、「大丈夫かな」とか「あんなあほっぽい子がA組に」とか色々な感想を述べていた。

ほのかとしては「完全にやっちゃった」という思いが頭をグルグル回転するように過っていたが、そこへ手を差し伸べたのは話しかけようとしていた深雪であった。

深雪に支えられる形でほのかはゆっくりと起き上がった。

「大丈夫ですか?」

「あ、ありがとう司波さん」

「どういたしまして。あの……」

深雪としては初対面の相手なので、ほのかの名前が分からずにどう尋ねようか考えようとしたところで、ほのかは迷わずに自分の名前を発した。

「光井です。光井ほのかです」

「司波深雪です。光井さん、よろしくお願いします」

「はい! こちらこそ!」

ほのかとしてはドジを踏んでしまったが、結果オーライとなったことに喜んでいた。その光景を深雪の前の席である雫が立ち上がってほのかの隣に立った。

「すみません、司波さん。ほのかはおっちょこちょいなもので」

「雫!? その言い方は酷くない!?」

「えっと、貴女は……」

「北山雫です。噂はかねがね」

ほのかを引き合いに出しつつも、雫は自己紹介をした。深雪も丁寧に返しつつ、雫の噂について尋ねてみた。同年代の噂となると、自分

にとっても無視できる内容とは思えなかったからだ。
「こちらこそ。ところで北山さん、噂とは一体何のことでしょうか？」
「噂というよりもほのかが司波さんのファンみたいなもので。正確にはお兄さんのファンらしくて、入試の会場で一緒だったと聞いてます」
「ちょ、ちょっと待ってよ雫！」
「あら、そうだったのですか」
淡々と話している雫に対して恥ずかしがるほのか。自分のことを必要以上に色眼鏡で見ていないのはありがたいことであり、仲良く出来そうだと感じていた。それに、達也のファンというのは、深雪としても安心できる材料の一つなのは間違いない。
すると、ほのかの反撃のような言葉に対し、雫が言い返す前に深雪が反応するようなことになった。
「も、もう！　大体、雫だって佑都さんのことが気になってるんでしょ!?」
「それは今言うべきことじゃない……司波さん？」
「深雪で構いませんよ。今、私が知っている方の名前が出た気がするのですが……？」
笑みを浮かべて尋ねる深雪に、意外そうな表情を浮かべるほのか、そして……深雪を興味深そうに見つめる雫の三者。
だが、その続きの言葉が出る前にオリエンテーション開始を告げるアナウンスが聞こえたため、この話の続きはオリエンテーション後にしようと取り決めてから各々の席に着いた。
全員――――正確には、ほのかの隣の席が一つ空いた状態でそれ以外が埋まっている。これにはほのかも疑問に思ったが、指導教官の教員が来たため、そちらに視線を向けた。
「皆さん、入学おめでとう。１―Ａ指導教官の百舌谷（もずや）です。難関である第一高校の中でも、Ａ組は特に優秀な成績で通過した方たちにより構成されています」
このクラスには入試成績の上位２５人が集められている形だ。百舌谷は生徒の反応を待つことなく説明を続ける。

「本日も家の都合で欠席している総代の三矢（みつや）君だけでなく、皆さん全員が優等生であり、期待を背負っていることを忘れないでください」
魔法科高校では、図書館や情報端末で学外秘の情報にアクセスすることが出来るだけでなく、実際に魔法師として活躍している教官の貴重な授業を受けることが出来る。ただ、魔法師の絶対数が不足しているため、一科生だけが後者の恩恵を受けることが出来る、と百舌谷は説明した上で今日の授業見学についての説明をする。
「この後は専門授業の見学です。午前中は基礎魔法学と応用魔法学、午後は魔法実技演習の見学を予定していますので、希望者は１０分後に実験棟１階ロビーに集合してください。他に見学したい授業があれば自主的に行動しても構いません」
そう言って、百舌谷は次の授業があると述べてから教室を後にしたのだった。

再びの邂逅（※）

ほのかの周りではどの授業を見に行こうか相談している生徒も見られた。中には二科生を中傷するようなものも見受けられたが、とにかく約束があるのでほのかが立ち上がって移動しようとしたところで、人とぶつかってしまった。ほのかが振り向くと、背丈が平均よりも小さめ――見た感じ、雫と同じぐらいの背丈の男子生徒が床に倒れていた。

「わっ!?」

「えっ……あ、ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか!?」

「あ、う、うん。僕のほうこそちゃんと見てなかったから……えっと、さっき盛大に転んでた子だよね？」

やっぱりそういう覚え方をされてる、とほのかは若干涙ぐんだが、これには男子生徒も悪かったと思って立ち上がりながら制服の汚れを軽く払いつつほのかに視線を向けた。

「あ、ごめん。えっと、僕は六塚燈也（むつづかとうや）というんだ。よろしく」

「えっと、光井ほのかです。えっと、六塚君でいいのかな？」

「燈也でいいよ。名字呼びは慣れてないし……光井さんは、見学はどうするの？」

男性生徒もとい燈也の名字に周囲はざわついているが、そんなのは分かり切っていると言わんばかりに燈也はほのかへ尋ねた。

「実は、親友と回る予定でして。もしよかったら、一緒に回りませんか？」

「本当に？　助かるよ。こっちだと知り合いが殆どいないから」

ほのかは燈也の申し出をそのまま受諾した。この時のほのかは彼の名字に対して深く考えておらず、先程の醜態を覚えられていたことに思考のリソースが割かれてしまっていた。ほのかは雫と深雪を誘おうとしたところ、雫はともかく深雪の周りには既に男子生徒が数人取り囲む形で話しかけていた。

「ちょっといいですか、司波さん」

「なんでしょう？」

相手の男子生徒の素性なんて知らない（そもそも、深雪は四葉家の特性上、社交界に顔を出す機会が極端に少ない）ため、深雪は話しかけた相手が同じクラスメイトの男子生徒という認識で問い返した。
「司波さんはどちらを回る予定ですか？」
「私は先生について……」
「奇遇ですね！　僕もです！　やっぱり一科生なら引率して貰う方ですね！　補欠と一緒の工作なんて行ってられませんよね」
（……彼は、生粋の阿呆ですか？）
燈也はその男子生徒に対して呆れ返っていた。彼は深雪の言葉を途中で遮ったばかりか、二科生を〝補欠〟と言い放ったのだ。
昨日の入学式の様子を遠巻きに見ており、深雪が他の一科生に取り囲まれる様子を目撃はしていたものの、近くに生徒会長がいる以上はおかしなことにならないだろうと判断して関与しなかった。その時に割り込んだ男子生徒――森崎ということも燈也は知り得ていた。
そして、彼も含めて一科生の何人かが深雪とその兄を比較していたが、そこに何の価値があるのか……と、燈也はそう感じた。彼の言ったことは遠回しに彼女の兄を侮辱している行為でもあることを認識できれば少しは違うのだが、生憎と百家の人間である彼にはエリート志向が強いのかもしれない。
とはいえ、このままでは深雪が可哀想だと思い、ほのかに声を掛けた。
「光井さん、司波さんを助けてあげて。僕は教室の外で待ってるから」
「あ、はい！　深雪さん、一緒に集合場所に行きましょう！」
こういう時は同性同士なら上手く行く――燈也の判断によって深雪を彼らから引き離すことに成功し、ほのかは雫と深雪の二人と合流して教室を出たところで燈也と合流した。すると、雫がほのかと燈也のやりとりを見ていたのか、燈也に話しかけた。
「あ、さっきほのかにぶつかった人だ」
「お恥ずかしながら……六塚燈也です。よろしくお願いします」
「北山雫です」
「司波深雪といいます。ところで、六塚君ってあの？」

「ええ、まあ。十師族・六塚家当主の弟になります。名字で呼ばれるのは好きじゃないので、燈也でいいですよ」
深雪に改めて尋ねられ、燈也は「自分なんかが名乗っていい名字じゃないんですけど」とまでは言わなかったが、そんな雰囲気を感じてなのか……三人は燈也の提案に頷いた。すると、ほのかはことの重大さに今更気付いて表情が青褪めていた。
何せ、十師族・六塚家の関係者に迷惑を掛けたという事実はクラスメイトに知れ渡る様な形となってしまったからだ。
「あの、光井さん。元々僕の不注意なので気にしないでください」
「え、えと……じゃあ、私のことはほのかと呼んでください！」
元を糺せば燈也自身の不注意もあるため、燈也はそこまで大事にする気などなかった。だが、ほのかの有無を言わさぬお願いを聞き、若干呆然となる燈也に雫が諭すような形で言い放った。
「……諦めて。あと、私のことも雫でいい」
「私は同学年の兄がいますので、深雪でいいですよ」
「えっと……じゃあ、ほのかに雫、深雪もよろしくお願いします」
燈也に深雪、雫にほのかの四人は揃って授業見学の集合場所へと向かった。その後ろをついて来るように歩いている男子生徒らの姿に燈也は溜息を吐いた。授業見学の為にルートが被るのは仕方ないが、目線が明らかに深雪へ向けている時点で半分ストーカー染みていると吐き捨てたくなった。
ここで、ほのかのブレザーが汚れていたことに気付いたが、深雪がＣＡＤなしでほのかの汚れを落としていた。それには感心しつつも、話題を逸らす様に声を発した。
「燈也さん、どうしたんですか？」
「ああ、大したことじゃないんですが。先程深雪に絡んでいた彼――百家の一つである森崎家の人間ですよ」
「知り合い？」
「知り合いという訳じゃないですよ。ただ、森崎家の「クイックドロウ」は魔法師社会だとそれなりに有名ですから。どうやら、深雪に気があるみたいですね」

ただ、深雪からすれば他のクラスメイトと何ら変わりないような受け取り方をしていたようで、燈也の説明には『勉強になる』と言わんばかりに頷いた程度であった。これでは森崎が深雪を振り向かせられる確率は皆無に等しい、と燈也は何となく感じていた。
「……もしかしてですけど、深雪さんは長野佑都って人を知ってますか？」
「……その聞き方ですと、北山さんは御存知なのですか？」
「雫でいいし、話し方も丁寧にしなくていい。佑都は中学２年に転校してきて、私やほのかと２年間同級生だったから」
「そうだったの……私は家族旅行中に出会ったんだけど、彼は命の恩人なの。勿論、文字通りの意味よ」
深雪と雫がどんどん親密となっていくことに、ほのかは少し悔しげだったが……ここで燈也が助け舟を出す形で会話に割って入ることにした。
「割って入るのは申し訳ないですが、その彼って魔法師なんですか？」
「間違いないし、かなり強い。確か、Ａ級魔法師ライセンスの試験問題にも出てくる［氷炎地獄（インフェルノ）］だったかな。それを綺麗に６４面も展開してたのは見たことがある」
「ろ、６４面!?　同一の魔法とはいえ、３２個の領域魔法展開はかなり高難度の技術ですね」
雫から言い放たれた事実には、燈也のみならず深雪も驚いていた。深雪は佑都が沖縄で達也と共闘していた事実を知っているからこそ、その実力を理解していた。達也が自身の魔法をフルに使えば、間違いなく互角に渡り合える……と、深雪はそう評価していた。
それから約２年半少々という時間が経過しているが、雫とほのかは深雪の知らない部分の佑都を知っている。その彼女が言うことには間違いなく嘘や誇張は含まれていないと推察した。
「佑都から色んな人と出会ったとは聞いてたけど、まさか深雪もその一人だったのは驚いた」
「それは私もよ、雫」
（な、なんだろう……仲良く話してるはずなのに、二人の背後に龍虎の

姿が見える様な気が……気のせい、かなあ？）
（おかしいですね……何かが点火すると修羅場になりそうな気が……）
クラスメイトとして親睦を深めている筈なのに、ほのかの目には深雪と雫の背後に龍と虎の姿が垣間見えているような錯覚を感じていることに首を傾げたのだった。燈也も似たような感覚に囚われており、せめてもの救いはその当該人物――――長野佑都という人物がいないことが救いであった。
この魔法科高校には「長野佑都」という人物は入学していない。その事実を知る者は……例え同じ中学校に通っていた雫やほのかであっても与り知らぬ事実であった。
◇　◇　◇
待ちに待った時が来たのだ。多くの犠牲（主に防衛大生や戦車などの兵器）が無駄死にでなかった（戦闘不能になっただけで、死んではいないが）ことの証の為に。
俺自身の理想を掲げるために。平穏な学生生活の成就の為に（なお、叶えられるとは言っていない）……別に核バズーカをぶっ放して宇宙に閃光を齎すわけではないが。
「ソロモンよ、私は帰ってきた……長かった……」
約一日ちょっとの拘束を経て、三矢家に帰ってきたのは正午前だった。昼食は帰りの飛行機の中で済ませてきている。このまま休みたい気持ちもあるが、この後の予定もあるので一高の制服に着替える。自室にあった荷物の大半は司波家に送ったので、誰かが入ってきても支障はないようにしてある。
自室を出て玄関に向かうところで、三矢家の使用人である矢車仕郎と出会った。
「これは仕郎さん」
「悠元様、これから学校でございますか？」
「少し軍のほうで手伝いを押し付けられまして……侍郎はもっと強くなれます。それこそ、詩奈を守り切れるぐらいに。自分が保証しますよ」

「悠元様……お気を付けて」
「はい、行ってきます」
　他の一高生からすれば遅い時間での通学。流石にこの時間だと目立ってしまうため、意識を意図的に逸らす体術で周りの目を掻い潜り、コミューターに乗り込む。着いたのは正午過ぎで一高の事務室でＣＡＤを預けると、そのまま職員室に向かおうとしたところで呼び止められた。
「君、新入生かな？」
「はい。実は昨日、家の用事で入学式に出れなかったものですから……」
　その人物は教師に似つかわしくないドレスコードで、胸元が大きく開いている。
　誰の眼から見ても〝特盛〟とも言えるような胸の持ち主ことカウンセラーの小野遥（おのはるか）は悠元の姿を見て声をかけた。
　この人が公安の関係者だということは原作からも自分の『調査』からも認識している。事情を説明すると、遥は思い出したように声を上げた。
「ああ、君が新入生の三矢悠元君だね。私はカウンセラーの小野遥と言います。君のＩＤカード交付やオリエンテーションを行いたいんだけど、カウンセリング室に来てもらっても大丈夫？」
「はい。それぐらいでしたら構いません」
　遥に連れられる形でカウンセリング室に入る悠元。とは言っても遥がカウンセリング室で準備していた時に丁度悠元が来た形だったので、タイミングとしては悪くなかった。
　ＩＤカードを受け取り、オリエンテーションを受ける。受講登録については明日の朝にしておけば大丈夫と言われた。そこまで話し終えた上で、遥は悠元に頼み事をする。
「それで、悠元君にお願いしたいことがあるんだけど……」
「それは、小野先生の本分であるカウンセリングに関することですか？」
「ええ。とはいっても、定期的に来て学校で困ったことがないかを聞

くぐらいなんだけど」
　もしこの人が本気で素性を調べようとしたら、捕まえて引き渡す覚悟はある。でも、面倒なのは御免蒙りたい。幸い学校のことで線引きしてくれるなら、こちらも学校のことで線引きすればいい。一応ドレスコードとしては刺激的すぎると指摘すると、本人がそれを指摘されて恥ずかしがる時点で無理をしているのは言うまでもないが。
「一応これでも新入生総代ですよ？　特に困るようなことは起こりえないと思うんですが……」
「けど、あの『三矢家』の人なんでしょ？　先輩の先生たちは戦々恐々としてたし」
「……え？（何やったんだ、うちの姉達は!?　父さんと母さんからもそんな話なんて聞かなかったし！）」
　学校のことはたまに家族から聞いていたが、それでも割かし良いところしか聞いていない。元継と詩鶴はまだいいとしても、佳奈と美嘉が一体何をしでかしたなんて何も知らない。
　これも折角の機会なので、遥に聞いてみることとした。
「実を言いますと、先生がたを怯えさせるレベルの話は一切聞いたことがなかったんです。なので、小野先生の解る範囲で教えていただけると幸いなんですが……」
「私も先輩の先生方から聞いた話が多くなるけど、それでもいい？」
「お願いします」
　で、遥からその内容を聞いた悠元は正直絶句した。何がって……ほぼ全部に近い。それだけのことをしたら『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』と名付けられても仕方ないと思った。ここで口に出すのもしたくないレベルだ。
「……すみません、入学早々にして挫けそうです」
「だ、大丈夫だから！　君なら何とかなると思うし!!」
「どうなんでしょうね。何せ、ここの先輩方は佳奈姉さんや美嘉姉さんを知ってる人が多いでしょうし……まあ、頑張ります」
　遥に頭を下げて悠元が外に出た頃には、外が夕焼けに染まっていた。気が付けばそんなに時間が経っていたのかと思いながら、悠元は下校するためにそのまま正面玄関へと向かった。

正面玄関を出ると、正門のあたりで騒ぎになっている（正確には人だかりが出来ている）のが目に入った。［万華鏡（カレイドスコープ）］で確認すると、どうやら一科生と二科生が言い争っているようだ。その光景を見て原作のあるシーンだとすぐに理解できた。

すると、一科生側の一人で想子の高まりを感知、二科生側の男子がそれを食い止めようと走り出した。そして、二科生側の女子一人も密かに想子を高めていて、それに釣られる形で一科生側の数人から想子の活性化――魔法の発動兆候が見られた。

見過ごすのも一つの方法だが、今日から司波家に居候する以上は自分のことも達也と深雪に明かさねば話にならない。その説明が早まると思えばいいと納得させた。

「……はぁ。ま、遅かれ早かれってやつかな」

［万華鏡（カレイドスコープ）］を解除して悠元は息を吐くと、意識を集中させる。彼が一歩を踏み出した瞬間、その姿が〝消えた〟。

◇　◇　◇

達也は困っていた。それは彼の傍で心配そうにこの状況を見つめている深雪も同様だった。決して深雪が煽ってこの状況を招いたわけではないということは事実であり、達也は深雪を慰めるように告げた。

「深雪、決して謝るなよ。お前が悪いわけじゃない」

「はい……」

彼らの視線の先には一科生の面々と二科生の面々が対峙していて、そこから少し離れたところに別の一科生の面々もいた。

二科生の面々というのはレオ、エリカ、そして美月の三人。レオとエリカの性格は何となく理解できていたが、美月に関しては達也ですら予想外だった。怯えつつも言うときにはきちんと言える芯の強さを持っているのだと感じた。

「僕たちは深雪さんに相談することがあるんだ！」

「そうよ！　司波さんには悪いと思うけど、少し時間を貸してもらうだけなんだから！」

そう主張する一科生の面々だが、それならば少なくとも二科生より

も一科生のほうが深雪との接点は自ずと多くなる。そのことを棚上げにして『時間を貸せ』というのは筋が通らないだろうとレオとエリカが反論する。
「ハンッ！　そういうのは自活（自治活動）中にすればいいだけだろ。俺らと違って接点は多いんだし、ちゃんと時間は取ってあるんだろうに」
「同感ね。そもそも、相談というのなら予め深雪本人の同意を得てからするものでしょ。一方的な言いがかりで深雪の意思を無視してる時点でルール破りよ。高校生にもなってそんなことも理解できないのかしら？」
「五月蠅い！　二科生（ウィード）が一科生（ブルーム）に指図するな！」
　初対面ではいがみ合っていたレオとエリカが同じ意見を持っていることに少しは驚いたが……態々人間としての倫理や道徳を説いているのに、一科生側の主張は『自分たちが優れているのだから、実力が劣っている二科生は黙っていろ』というエリート意識――悪く言えば〝子供じみた主張〟でしかなかった。それを聞いた美月が強い口調で言葉を発した。
「……同じ新入生じゃないですか。一科生（ブルーム）の貴方たちが、今の時点で一体どれだけ優れているっていうんですか!?」
　その言葉を聞いた達也は「拙いな……」と漏らしたが、周囲の状況にかき消される形となったため、独り言のような格好となった。
　その言葉に反応したのは、口元に笑みを浮かべた一人の男子生徒――森崎駿（もりさきしゅん）が声を上げた。
「どれだけ優れているかだって？　だったら、今この場で教えてやる！」
　彼が銃型特化型ＣＡＤをレオ達に向けると同時に、その言葉に続く形で他の一科生もＣＡＤを操作して魔法を発動させようとする。それを反射的に察したレオが森崎に向かって駆け出す。
「みんな、やめて！」
　更に、この状況を止めようと一科生の女子生徒もＣＡＤを操作して起動式を展開しようとしている。最早混戦状態の様相に深雪の視線

が達也に向けられる。
　それを察した達也は介入しようと考えたが、そこで何かに気付いて構えようとした手を下した。
「お兄様!?」
「……どうやら、俺が手を出すまでもないらしい」
「え？」
　達也の言葉を証明するかのように、生徒の展開していた起動式が次々と破壊されていく。達也は今起きている現象が高密度に圧縮した想子（サイオン）の塊で起動式のサイオン情報体を吹き飛ばす対抗魔法［術式解体（グラム・デモリッション）］によるものだとすぐに分かった。
　止めようとした一科生の女子生徒も［術式解体（グラム・デモリッション）］で起動式を破壊されたが、その反動を近くにいたもう一人の女子生徒が受け止めたおかげで大事には至らなかった。
「え……なっ!?」
「あ、あれっ……!?」
「な、何が起きたんだ……」
　そして森崎はというと、手に持っていたはずのＣＡＤが消えていた。森崎のデバイスを払い落とそうとしたエリカのＣＡＤもだ。これには森崎やエリカ、森崎に向かって行こうとしたレオも驚きを隠せずにいた。彼らの消えたＣＡＤを持っていたのは、達也から見て二人の更に奥側――――彼らの間に割って入ったと思しき一人の男子生徒だった。
「全く、何考えてんだか……こんな場所でＣＡＤ使って攻撃しようとするなんて、どうかしてるぞ」
（ん？　この声はどこかで……）
　彼らに背中を向けて立っている一人の男子生徒。肩の紋章からして一科生であることは判断できた。彼の左手にはエリカのＣＡＤ、右手には森崎が握っていたはずのＣＡＤがあった。
　すると、達也は彼の声に聞き覚えがあることに気付いた。少なくとも自分の知り合いだというのは間違いないと判断したが、それ以上の判断材料はこの時点で出てこなかった。

「一科生と二科生の違いなんて、入試の成績と一部の待遇以外同等の条件だろうに……大体、こんな場所で躊躇いもなく［クイックドロウ］や攻撃魔法を放とうとするとか正気の沙汰じゃないな。二科生を〝補欠〟だと見下して、百家のエリート気取りがそんなに楽しいか？なあ、森崎（もりさき）？」

この一瞬で何をしたのか理解できずにいる面々を睨むような形で男子生徒は振り向いた。その姿に達也、深雪、エリカ、この騒ぎを止めようとしたツインテールの女子にそれを受け止めたショートヘアの女子、そして森崎が驚愕していた。

「……（成程、昨日のメールはそういう意味だったのか）」

「……佑都、さん？」

その男子生徒――――悠元の姿に達也は昨日のメールの内容をここにきて理解し、深雪は制服を着ている悠元の姿に驚きを隠せなかった。暫し流れる静寂の中、それを破ったのは森崎だった。

「お、お前は長野⁉　何でお前が一科生に……いや、そもそも百家ですらないお前に邪魔される筋合いなんてない！　それを返せ――――」

「ほいっと」

「ぐあっ⁉」

森崎がＣＡＤを取り返そうと悠元に対して手を出そうとするが、明らかに動きが単純すぎるために悠元は自身の左足で森崎の足元を払った。森崎はその場で前方宙返りするような形となり、背中から地面に落ちる格好となった。

護衛を家業としている森崎家の人間ならば、この程度の衝撃でも耐えられると踏んでの行動だが、怪我を負わない様に衝撃軽減の術式を瞬時に展開した。森崎には特に怪我はなかったが、上体を起こしつつ悠元を睨んでいた。

「同級生へ敵意を向けてる奴に返す義理なんてないわ。それはそれとして、百家ですらない、ねえ……森崎、それは半分合ってて半分間違ってるな」

「な、何を言ってるんだ……⁉」

悠元は個人的に森崎と面識を有するが、彼の前で魔法技能を披露し

たことなどない。パーティーの要人護衛を森崎がしていた時にお互い面識を持った程度だ。
なので、悠元が一科生であることに驚きはしたが、彼は『長野佑都』である認識で邪魔をするな、とでも言いたげに叫ぶような口調を使った。
「何を言ってるのかって？　だって俺の名前は既に長野佑都じゃないからだよ」
「なっ!?」
確かに悠元の家は百家ではない。だからこそ『半分は正解』だと言い放った。家の都合で中学卒業まで名乗っていた名は、高校入学を境として使うことが殆どなくなる。
一方、森崎は目の前にいる人間が何を言っているのか理解できなかった。周囲の人間の大半も困惑している状況をよそに悠元は話し続ける。
「個人的な知り合いは何人かいるけど、大半は知らないか。そりゃあそうだ……だって、今さっきまで個別のオリエンテーションを受けてたから授業見学なんてしていないし、家の事情で入学式に出ていなかったから無理もないな。そもそもの話……〝本当の名〟を名乗れるのは高校生からという家の仕来りがあったし」
悠元の言い放った言葉に殆どの人間が疑問を呈していた。彼は一体何を言っているのか、と。授業見学はおろか入学式にすら出ていない――それが何を意味するのかも含めて。
（待て。佑都の言っていることが正しいのならば、深雪が代理で答辞を読んだことにも繋がる……まさか、佑都は――）
そこで達也が真っ先に気付いた。
確かに自分の知る限りにおいて〝一人〟入学式に出ていない人間がいた。
彼がいなかったから、深雪が代理で新入生答辞を読んでいた。
その人物の名前は入学式の案内に載っていたため、ハッキリと覚えている。
『三矢悠元』――以前に深雪が発した呼び名でないとするならば、

エリカから聞いた話も含めて、全ての点が繋がることになる。
達也が一つの結論に至ったのを察した上で一息吐き、悠元は改めて自分の名前を名乗る。
「十師族・三矢家三男にして今年度の第一高校新入生総代、１年Ａ組三矢悠元（みつやゆうと）――――それが俺の名前だ。別に覚えても覚えなくても好きにしろ」
第一高校の『触れ得ざる者』と言われるようになった十師族・三矢家――――現当主の三男であり、その元凶となった人物は第一高校に入学を果たした。
「……けど、これだけはハッキリと言っておく。自分が優秀だからと言って他人を見下すことしかできない奴は、俺の中で一番大嫌いだ」
なお、その事実は本人曰く『絶対に認めたくない』と付け加えておく。

不意打ちって痛いのよ

一科生と二科生の諍いを止めたのは、今年度の新入生総代。更には十師族の一角である三矢家の人間。その人物の登場に黙り込む面々を知ってか知らずか、悠元はハッキリと言い放つ。

「なあ、お前ら。ほのかはともかくとして、残りの連中全員が攻撃のための起動式を展開してただろ？　確かに校舎内でない以上ＣＡＤの携帯は許されるが、特段の事由がない限り相手を殺傷するような攻撃魔法は校則以前に犯罪行為と明文化されている――――違うか？」

その言葉に一科生側の面々が言葉を詰まらせる。だが、それだけでは足りないと判断して悠元は言葉を続ける。

「特に森崎。百家に連なる家のお前なら十分理解していたはずだ。法を破ることの意味もな。けれど、そのお前が真っ先に攻撃魔法を放とうとした。これでもし後ろにいる二科生の五人のいずれか、あるいは全員が怪我を負っていたら……この先は言わずとも理解できるだろう？　恐らく禁止用語を使ってまで一科生と二科生の違いをアピールしたかったんだろうが、そこまで言った以上は一科生（ゆうとうせい）のお前たちに『理解できない』だなんて言い訳は通用しない」

少なくとも、達也たちはＣＡＤを使って自ら一科生に危害を加えようとしていなかった。あくまで話し合いの範疇で解決しようとしていたのは明らかだ。

それを見てＣＡＤを先に手に取ったのは紛れもなく一科生の側。二科生のほうも展開しようとしたが、順序的に言えば正当防衛になりえた可能性が高い。

発動未遂で済んだからよかったものの、仮に怪我なんかさせれば魔法を放った一科生の家族に対する評価が著しく下がる。それは森崎家のような立場の家柄なら致命傷になりかねない。本人だけでなく一族までもその被害を受けることになる。

例え本人にその気はなくとも『簡単に人に危害を加えるような人間』なんて逆に危険だと判断されてしまう。護衛を家業とする森崎家は特にだ。

悠元がほのかと呼んだ女子の魔法だが、閃光魔法だということは理解できていた。威力も軽いフラッシュグレネードぐらいのもので、失明に至るようなものではなかっただろうが、念のために起動式となるサイオン情報体を［術式解体（グラム・デモリッション）］で破壊した。

自分たちが優秀だというのなら、自分たちのやっていることを冷静に判断できるだけの精神を磨くべきだと思う。何ならこの学校にはカウンセラーもいるので、そういった者との関わりで己の心を見つめ直すのも一つの手段だ。

とある著名な魔法師はこう言った――『魔法師は常に冷静沈着を心掛けるべき』と。その意味で悠元も人のことは言えないが。

悠元の言葉で一科生は全員の表情が青褪めていた。無論森崎も例外ではなかった。彼の言う通り、力づくで実行しようとしたことは言い逃れできないのだから。

そして、彼らにとっては追い打ちとなるような二人――真由美ともう一人の先輩と思しき人物が姿を見せた。二人はＣＡＤを見せた上で魔法を使おうとすればそれ相応の対処をすると警告を発していた。

「貴方達、何をしているのですか!?　人に向けてのＣＡＤの使用は犯罪行為です！」

この状況からすれば下手にボロが出るのは一科生の側だろう。別に助け舟を出すつもりはなかったが、悠元がＣＡＤを手にしたまま二人の前に出て頭を下げた。

「申し訳ありません。どうやら森崎家の［クイックドロウ］に皆が興味津々だったようで。後学のために集まっていたのを勘違いして横槍を入れてしまいました」

これには二人だけでなく、当事者の面々も驚くようなそぶりを見せる。別段嘘をついているようにも見えない悠元に、真由美の隣にいる女子生徒こと渡辺摩利（わたなべまり）は別の質問をぶつけた。

「なら、あそこにいる女子生徒が放とうとしていた魔法はどう説明する？」

「――彼女が放とうとしていたのは軽い目くらまし程度の閃光魔法

でした。ヒートアップしたのを止めようとして咄嗟に発動しようとしたのでしょう」
摩利の質問に答えたのは意外にも達也だった。どういう意図かはわからないが、何にせよ心の感謝はしておくこととする。その言葉を聞いた摩利は達也に問いかけた。
「つまり、君は発動段階の起動式を読み取った、と？」
「実技は苦手ですが、分析は得意です」
「――誤魔化すのも得意、というわけか」
棘のあるような言い方をする摩利に達也は動揺することもなく言い切った。それを見て、悠元もフォローする形で言い放った。
「さっきも言った通り、行き違いとなった上に変な横槍を入れて騒ぎになっただけです。先輩方のお手を煩わせて申し訳ありません」
こうなると先輩二人にはどう対処するのも難しい。それを判断したのか、真由美が口火を切った。
「もういいじゃない、摩利。確かに魔法を教え合うこと自体は悪くないですが、魔法の発動には細かな制限があります。それを習うまで魔法の自習活動は控えるといいでしょうね」
「……はぁ」
真由美の物言いに対して、ここで必要以上に出たら面目が丸潰れになる。これ以上の追及はあきらめたが、摩利は達也と悠元を見ると問いかけた。
「二人とも、名前は？」
「1年A組、三矢悠元です」
「1年E組、司波達也です」
「――成程。覚えておこう」
摩利は二人の名前――悠元の名前を聞いて少し驚いたが、納得したように踵を返してその場から去った。そして、真由美もそれについていく前に、悠元に近づいて小声で尋ねた。
「ここだけの話、本当に何もなかったのよね？　悠君？」
「本当に何もありませんのでお帰りください、七草先輩」
サラッと塩対応の言葉を言い放つと、真由美は若干膨れたような表

情を見せたが、「あっかんべー」という仕草を見せて摩利を追いかけるようにその場を離れた。
二人が去ったのを見計らうように、恨みがましいような声が横から聞こえる。
「借りだなんて思わないからな」
「別に貸したつもりはないから安心してくれ」
その男子生徒――――森崎の言葉に悠元は平然と答えつつ右手に持っていた特化型ＣＡＤを差し出すと、森崎は渋々それを受け取った。その上で達也を見据えながら言い放った。
「長野……三矢に名字を言われたが、僕の名前は森崎駿（もりさきしゅん）。森崎家の本家に連なる者だ。司波達也、僕はお前を認めない！　司波さんは僕たちと一緒にいるべきなんだ！」
あー、すっごい選民主義っぽく聞こえるな、コレ。自分が十師族の直系だからまだよかったけど、これが名も知らぬ家柄だったら面倒だったわ。すると、森崎はこちらにも視線を向けていた。
「三矢、お前にも絶対負けないからな！」
「ああ、負けず嫌いは嫌いじゃない。遠慮なく挑んでこい」
「……っ!!」
「お、おい、森崎！」
森崎は挑発のつもりだったんだろうが、あっさりと返されたことにどう言っていいか解らず、逃げ帰るようにその場を後にし、取り巻きの一科生も森崎に続く形でその場を去った。
これでようやく片づけなければならないことの一つが片付いたわけだが、ここからが本題……悠元は達也に視線を向ける。一方、達也の視線が明らかに警戒を滲ませる様なものだったことに、内心で溜息を吐きたくなった。
「さて、達也。どこから説明したほうがいい？」
「そうだな……お前が名前を偽っていた理由は、十師族であることを隠すためということか？」
「正解。うちの家業の関係から狙ってくる奴もいたからな……それぐらいは理解できるんじゃないか？　頭の回転が速い達也なら」

悠元が魔法使いの家関係ではなく、頭がいい達也なら解るだろうと言ったのは周囲に達也が四葉の関係者だということを悟らせないためだと理解する。その上で達也は問い掛けを続ける。
「なら、あの時出会ったのは？」
「〝全部〟父経由で話が回ってきていてな。断るに断りきれなかった」
「……そうか」
あの時――――即ち、沖縄侵攻の一件の時。国防軍に関しても黒羽貢の個人パーティーにしても全くの偶然で、クルーザーも父の繋がりから。さらに空港の時も剛三の差し金だったことは言うまでもない。これは嘘ではないので、ハッキリと言い切った。
「……あの時、どうして身を挺したんだ？　それと、どうしてそこまで俺を守ってくれた？」
前者は命を捨てようとしてまでも深雪を守ったこと。後者は達也が［質量爆散（マテリアル・バースト）］を使用する際、その防御と津波を押し返したこと。その質問に対して、悠元は躊躇うことなく言い放った。
「他の誰でもなく、俺がただそうしたかっただけ。三矢家の事情がどうとか十師族だからという理由なんて、その時はちっとも考えてなかったよ。まあ、名字を隠してた時点で実家を頼りたくないって思ってたことは事実だ」
悠元はそういいつつ、右手を差し出した。少し困惑する達也に悠元は笑顔を見せた。
「騙すつもりじゃなかった、なんてこれだと言い訳がましいな。俺は、十師族としてでなく一人の人間として……お前とは仲の良い友でありたい。これじゃダメかな？」
「……いや、変に疑ったのは俺もだ」
難しく考える必要なんてない。悠元が十師族であることを無駄に警戒しすぎていたのかもしれない。そんな懐疑的になっていた自分を苦笑するように、達也は自らの右手を差し出して悠元と握手を交わす。
「改めて、三矢悠元だ。名字呼びは慣れてないし、悠元でいいよ。よろ

しくな」
「こちらこそ、司波達也だ。俺のことも達也でいい。よろしくな、悠元」
そうやって熱い握手を交わす二人に、駆け寄ってくる一人の少女――深雪がまるでタックルするように悠元に抱き付いた。
「佑都さん!!」
「ふぐおっ!?」
「悠元!?（というか、深雪!?）」
深雪の行動に流石の達也も想定外だったようで驚くような素振りを見せていた。
何とかこらえることに成功して倒れるまではいかなかったが、鳩尾に痛みを感じる悠元に対して、深雪の表情はとてもキラキラしていた。周囲に眩いエフェクトが出ていても不思議じゃないぐらいに喜んでいた。
「佑都さん、あ、悠元さんでしたね。本当に会えて嬉しいです……」
「うん、こっちも会えて嬉しいよ……達也、以前よりパワーアップしてないか？」
明らかに沖縄の一件よりもパワーアップという名の悪化をしていることに悠元が尋ねると、達也はこう返した。
「その、周囲が発破をかけていたからな……主にお前も知っている人物が二名ほど」
「それで大体察した」
それで解ったわ、あの姉妹か！　深雪にこれだけの入れ知恵するとなったらあの二人しか該当しないわ！　達也も冗談は言ったりするけど、まだ深雪のことをちゃんと考えてくれてるからな。
そんな三人の世界になりかけているところを躊躇いがちに話しかけてきたのはエリカだった。
「あのー、お三方？　そろそろ現実に戻ってきてくれます？」
「あー、悪い。エリカ、返しておくな」
そういえば、と思いつつ悠元は左手に持っていた警棒型ＣＡＤをエリカに返した。すると、エリカがニヤニヤしながら悠元のほうを見て

きた。
「しっかし、うちの兄貴を完封した悠元と達也君の妹がねえ……」
「あんましふざけたこと言ってると、爺さんに頼んで八分修練フルコース行かせるぞ？　お前らの兄共々もまとめて」
「そ、それはマジ勘弁。和兄や次兄上だってグロッキーになるのに、無理無理」
（成程。エリカの言っていた意味が腑に落ちたな）
　悠元の言い放った内容で流石に調子乗りすぎたと反省するエリカを見て、達也は納得した。悠元が新陰流剣武術を修めている一人だということ。そして、彼はエリカの兄に対して硬化魔法だけで勝利を収めたことも納得できるような気がした。とりあえず、悠元は深雪を落ち着かせると、他にいる面々に挨拶をした。
「三度目の自己紹介になるけど、三矢悠元という。まあ、気付いているだろうけれど、あの『三矢』だ。でも、そんなことで遠慮せずに名前で呼んでくれ」
「俺は西城レオンハルト。俺のことはレオでいいぜ。よろしくな、悠元」
「柴田美月といいます。私も美月で構いません。よろしくお願いします、悠元さん」
　レオ、美月と自己紹介を交わし、少し打ち解けたところで悠元を呼ぶ声に反応すると、先程魔法を放とうとした光井ほのかという女子ともう一人――北山雫がいた。
「そ、その、さっきはありがとうございます、悠元さん」
「久しぶり佑都。ううん、悠元。まさか十師族だなんて驚きだった」
「久しぶりだな、雫にほのか。相変わらず仲がいいな……って、脇腹を抓らないでください、深雪さん」
「むぅ……」
（これでいて悠元に対する気持ちの自覚がないのだから困るな。まあ、それは悠元にも言えたことかもしれんが）
　ほのかと雫に接する悠元に深雪は無意識的に焼きもちをやくように脇腹を抓る。それを見た達也は内心で溜息を吐いた。

そんな会話の後、軽く自己紹介して……ほのかの提案で途中まで一緒に帰ることとなった。

漸くのひととき

ほのかの提案で一緒に帰ることになったのだが、男子三人（達也、レオ、悠元）の女子五人（深雪、エリカ、美月、ほのか、雫）という状態なので、他の男子からしたら羨むような状況である。

でも、二人から比べたらルックスが平凡だよなぁ……などと考えていると、話題はＣＡＤの話になる。魔法科高校に通う人間において必須のツールなので、そこに躊躇ってはいけないと思う。この前、次世代型のデバイス設計案を出したら、また仕事場から悲鳴が上がるほどの忙しさだと連絡を受けた。その原因が勤務している部署の主任にあるのは言うまでもない事だが。

「深雪さんのＣＡＤは達也さんが調整しているんですか」

「ええ。お兄様にお任せするのが一番ですから」

「少しアレンジしているだけだよ」

（少し？　深雪が違和感なく使える調整が少し？）

悠元がそんなことを心の中で思っている中、深雪が自身のＣＡＤを見せると、何かに気付いたように雫が声を上げた。

「深雪、その形状のＣＡＤって市販モデルじゃないよね？　カスタマイズモデルにもなかったはず」

「それは簡単よ、雫。だって、これは悠元さんからもらったハンドメイドだから」

雫は家柄から様々なＣＡＤに触れる機会が多い。なので、深雪の持つタイプが市販されている代物でないとすぐに気付いた。深雪の答えに食いついたのはエリカだった。

「え、ＣＡＤのハンドメイド!?　悠元ってば、そんなこともできるの!?」

「市販品をベースにしたアレンジだよ。流石に一からは組み立てられないし、システム面は既存の流用だからな」

「それでも十分凄いと思いますけど……ＣＡＤのハード関連の知識を持っていないとできないでしょうし」

大まかなシステム面は感覚で組めるが、細かいシステムの仕上げは

やっぱり達也に任せっきりである。本当はハード部分を一から設計しているのだが、それを言うつもりもないので割愛しつつ適当に誤魔化した。
「だったら悠元、あたし専用のＣＡＤでも作ってよ！」
「エリカには実家のやつがあるんだろ？　それに五十里家の仕事を奪っちゃ拙いわ」
「無理だ、とは言わないんだな……」
　実際のところ、銃型よりも刀剣型の方は結構試作がある。それこそ設計図段階で１００は超えているほどに。その段階で止めた理由の大半は設計の時点で実用性が皆無だったからだ。沖縄侵攻に使ったのはそれこそ実験兵器でしかなかった。
「アレンジ程度ならいけなくはないってぐらいだよ。そもそも、新陰流と千刃流の時点で剣の使い方が違いすぎるからな」
　千刃流は警察や国防軍に所属する人間が習うことからいわゆる実戦向きに分類されるが、新陰流剣武術は剣術・体術・忍術の複合剣術であり〝暗殺向き〟に分類される。
　古の剣豪こと上泉信綱から直に引き継がれたものとしては異質だろうが、刀剣による白兵戦闘という意味合いにおいては太刀を使う剣術の名残がそこに存在する。
「分かっちゃいるけど、悠元だって知ってるでしょ？　あたし専用のあのデバイス、取り回しがあまりにも不便なのよ」
「そら、巨大な出刃包丁を振り回してるようなもんだからな」
　門戸を開いているのはあくまでも剣術・体術のみで、忍術は裏の部分に該当。しかも裏を学べるのは上泉の血族者のみの〝秘伝〟に相当する。新陰流で使っている硬化魔法にしても厳密にはその魔法ではないが、秘伝であることを誤魔化すためにそう定義しているだけだ。
　悠元の言葉に反応したのは雫であった。
「エリカの話は興味あるけど、あそこの家の道場は本当に厳しい」
「雫、行ったことあるの？」
「うん、あそこのお爺さんの招きで。その時に悠元と初めて知り合っ

た」
「あんときは爺さんが雫のお母さんに向かって木刀投げたからな。慌てて割り込んで正解だったわ」
「どういう状況になったらそんな事態が発生するのよ……」
その時は雫の母親が試すように殺気を放ち、剛三が反応して木刀を投げたところに割り込んで木刀を掴み取った。その後で剛三に詩鶴がガチの説教（という名の物理攻撃）を行ったのは言うまでもなかった。
これについては深く触れることなく、途中で軽食タイムとなった。その合間を利用してレオとエリカが彼女の持っているＣＡＤについての説明が入る。
「刻印（こくいん）型のＣＡＤ？　伸縮が出来るってことは、中身は空洞同然だろ。よくガス欠にならないな」
「お、得意分野だけあって理解が早いじゃない。でも、あと一歩ね。別に常時流し込む必要は無くて、振り下ろしと打ち込みの瞬間に流し込めば左程重くないわ。ようは『兜割り』の原理と同じよ」
すると、エリカの『兜割り』という言葉に深雪が反応した。
「エリカ。兜割りって〝奥義〟とか〝秘伝〟に分類されるもののはずだけれど…それって、想子量が多いことよりもずっと凄いわよ？」
「もしかして、うちの学校に一般人はいないんじゃ？」
「魔法科高校に一般人はいない」
一科生や二科生の違いはあれど、入学を許された時点で魔法を使えるエキスパートである。その意味で美月の疑問に対する雫の言葉は至極まっとうなものである、と思った。
◇　◇　◇
「到着か。しかし、大きいな」
「否定はしないな」
レオたちと別れた悠元と達也、深雪の三人は司波家に到着した。二人で住むにはかなりの大きさだろう。悠元の言葉に達也は苦笑するような表情を見せた。ともあれ、中に入ろうとしたところで深雪が悠元の右手を両手で握った。

「ふふ、今日は腕によりをかけて作りますから、楽しみにしててくださいね」
「あ、ああ。まあ無理のない程度にな」
「やだ、悠元さんってば。そんなこと言うと張り切ってしまいます」
「……達也」
　何を言ってもプラス思考に変換されている深雪を見た悠元は達也に視線を向けるが、達也は首を横に振った上でこう返した。
「すまない、諦めてくれ。お前がうちに住むと決まってからずっとこんな調子でな。俺もお前の思った通りのことを言ったんだが……駄目だった」
「さいですか……」
　ともあれ、各々過ごしやすい私服に着替えたうえで少し豪華な夕食になった。鼻歌交じりに食器洗いをこなす深雪の様子を見つつ、悠元と達也はお互いに向き合いつつソファーに座って語り合うことになった。
「――さて、ようやく本音で話せる。十師族だと逆に喋れないこともあって面倒だわ」
「お前の場合、国防陸軍の絡みもある上にＦＬＴのこともあるからな」
「確かに。そうだ、荷物の片付けをしてくれたみたいで感謝する」
「主に俺ではなく深雪がやったんだがな。下手に触ると拙いものがあるかもって言ったんだが……」
　悠元がこれから住むことになる部屋の荷物はきれいに片付いていて、これは深雪が奮起しすぎた結果だと達也は説明した。悠元としては特段弄られても困るものはなかったため、素直に感謝の言葉を述べた。その上で悠元は話す。
「今回の居候の一件は四葉家現当主からの提案だ。少なくとも深夜さんは関与してるだろう……で、沖縄での一件以降お前たちとの直接的な接触ができなかったのは風間少佐からの指示だ」
「風間少佐が？」
「『特別技術顧問兼非公式戦略級魔法師　上条達三特尉』……それが俺の肩書の一つ。入学式に出席できなかったのは兵装テストを兼ねた

防衛大のデモンストレーションに強制参加させられたからだ。達也が呼ばれなかったのは『それだと秘匿する意味があるのか？』ということになりかねないからな」

本当なら入学式を欠席するつもりなんてなかったので、腹いせに対戦相手の兵士や戦車をボコボコにしたことを聞いて、達也は風間の対応に内心呆れつつも悠元の成したことに引き攣ったような笑みを零した。

「七草会長が呼んでいた『悠君』というのは……十師族関係の会合か」

「入学直前まで『長野佑都』で通す予定だったんだけどな。今年のバレンタインの時に七草家の情報網を駆使して掴んだらしい」

「誰から聞いたんだ？」

「七草家当主から。できれば顔なんて合わせたくなんかなかったがな……」

簡単に説明すれば、悠元が名を偽って三矢家と上泉家を行ったり来たりしている生活の頃、パーティーでの振る舞いから疑問を持った真由美が『バレンタインのチョコを贈りたいから』という理由で当主にプレッシャーを掛けて調べさせたらしい。

七草家の諜報を知った悠元の父である三矢元が怒り、他の十師族も巻き込んで事情説明をさせた。その結果、七草家当主が謝罪する結果となった。三矢家は五輪家とも懇意という関係になっていたことも七草家は掴んでいて、下手に刺激しない方が良いと判断したようだ。

この結果、十師族において三矢家は四葉家に次ぎ、七草家や十文字家に匹敵する発言力を持つ家になっていた。ほかの十師族とは違って監視する地域を持たないが、東アジア地域の情報収集能力や国防軍に魔法技術を提供する姿勢が極まった結果ともいえる。

一時は担当する家がない東海および中部地方の監視を三矢家が行ってはどうかという案も出たが、元はそれを固辞した上でその地域を暫定的に担当している四葉家が正式に監視を担うべきと提案。

この案は四葉家に好意的な六塚（むつづか）家、八代（やつしろ）家に加えて一条家、五輪家、九島家も賛成に回ったため、関東方面の監視を担う七草家と十文字家もそれに同意した。

これは、暫定という形で浮動している四葉家を十師族としての枠組みに組み入れるほうが得策だ、と悠元が元にそれとなく吹き込んだ結果である。

触れるのが怖いからと言って彼らを遠ざけたり排除しようとする方がもっと恐ろしいことになる。それは魔法使いという存在が表面化する以前の歴史が物語っていることだ。例えば、源平合戦（げんぺいがっせん）はその一例だろうと思う。平氏が源氏を必要以上に追いやって好き勝手にやったせいで源氏以外の反感も買う形となり、栄枯盛衰の一途を辿ったのだから。

この世界でも魔法師に対する報道の情報操作は行われるのだろう。不幸中の幸いなのは、それをコントロールする準備も心得もあることぐらいだ。前世のメディアの酷さは言いがかりを超えたレベルだったし……その実験も兼ねて3年前の沖縄侵攻に関する大亜連合の動きを諸外国にリークしたのだから。なお、そのこと自体については誰にも明かしていない。

「というか、あの人ってば五輪家の長男と婚約してるのにスキンシップ取ってくるんだぞ？　双子の妹たちはまだ理知的だから助かるが」

いくら婚約に乗り気でないとはいえ、自分にスキンシップを図ってくるのはどうなのだろう。スタイルは悪くないけど、せめて節度は守りましょうよ……と思う。

「それに加えて五輪家も……」

「まさか、五輪澪か？　最近は体調が良くなっているとの噂もあるが、お前の差し金か？」

「……ここだけの話、新型〝治療〟魔法の実験台のつもりだった。結果的に常人と変わらない状態となったが、秘匿のために車椅子は使っている形だ……秘密裏に、五輪家から婚約してはどうかという話にまで発展した」

〝治癒〟ではなく〝治療〟なのは、一時的な回復ではなく健常な状態への回復を目的とした魔法。達也はそれが悠元の編み出した新型の魔法式であると察した。五輪家としては娘の回復に寄与してくれた悠元との婚約も考えている。幸いにして悠元は三男のため、五輪家

に婿養子ということも考えているらしいと小声で述べた。
「父には断るよう言っておいた……なんでこう、十師族の面々が好意を寄せてくるんだろうな。こう見えて打算的に動くことが多いんだぞ？」
「それはお前の人徳だろうな。甘んじて受け取っておけ」
「阿呆か。いくらなんでも柵だらけの好意なんて受け取れねえよ……」
　言っておくが、前世ではモテたことなんてない。バレンタインなんて家族からしか貰ったことがない奴からしたら、こういう状況は懐疑的に見えてしまう。何か裏があるのではと思ってしまうわけだ。それに、散々出てきたパーティーで一条の次期当主とも面識を持ったわけだが……今度会ったときは一発〆るつもりなのはここだけの話。
　愚痴っぽく出てしまった言葉を聞いた達也の一言に悠元は天井を見上げるように項垂れる。すると、丁度食器洗いを終えて二人のもとに来た深雪と目が合った。すると、深雪はクスクスと笑みを零した。
「ふふ。悠元さんと話すと、お兄様も感情が出るようですね」
「そうか？　いつも通りだと思うが」
「今だからこそ言えますけど、3年前のお兄様は悠元さんに負けた後、『次こそは勝ってやる』みたいな気持ちを持ちながらＣＡＤを弄ってましたよね？」
「……流石は深雪だな。それまで同年代に負けたことがなかったから、そう思ったのは初めてだろう」
「お前と二度と戦いたくないって思うけどな、俺は」
　そんなことを思っていたとは初耳だな、と二人の会話に耳を傾ける。特定のこと以外で感情に乏しかった達也だが、基地での手合せ以降悠元に対しての感情も芽生えたのではないかと口にした。深雪が悠元の隣に座って三人での会話となり、達也は自ら己の秘密に触れる。
「悠元。俺が普通の魔法師にはない力を持っているのは知っているな？　その影響で俺は深雪以外のことに対して激しい感情を持てないことも……この前、母上から直接聞いた」

「まあ、どちらも実際見たり体感しているからな。それと、深夜さんを治療した際にその事情も無理矢理聞かされた」
「そうなのですか？」
　自分の母を治療したのは悠元である、という事実に達也と深雪は内心驚きつつも悠元の言葉に耳を傾ける。
「無理に聞きたくないと一度断ったけど、深夜さんは話した。その引き換えに……二人と仲良くしてほしいと頼まれた。それはあくまでもお願いであって、俺自身は三矢家の事情とか抜きにして親しくしたいって思ったけど」
「もう、お母様ったら……」
「必要以上に世話焼きな人だな、母上も」
「けど、深雪からしたら嬉しいんじゃないのか？」
「ええ。お兄様とお母様が本当の親子になりましたから、それはとても喜びました」
　自分の介入で深夜と真夜の関係も修復傾向にあり、穂波も救うことができた。ここからどのようなバタフライ・エフェクトを起こすかだろうが……その意味で十山家が一度フルボッコになったことはよかったかもしれない。
　次起きたら国防軍が滅びそうだ……ダメだ、冗談に聞こえない。
「一つ聞きたいんだが……達也からして、俺はどういう印象なんだ？」
「そうだな……不思議な奴だが、悪くはない。友人であり、相棒でもあり、戦友でもある……そんなところだな」
「それは嬉しい評価だが、不思議な奴ってどういう意味だよ」
「それだけ新型の魔法をポンポン生み出せるのに、周囲にそれが一切ばれないあたりが［殲滅（ティーターニア）の奇術師］だなと」
「ちっとも褒められてるように聞こえねえ……」
「ふふふ……」
　その後、達也の案内で司波家の地下室に案内された。そこには本格的なＣＡＤ調整機が揃っており、その下の階には演習場もあると説明した。ここにある調整機なのだが、大本の設計をしたのはほかでもない悠元であったため、直ぐに理解した。端末に自身のＣＡＤ用の台座

を接続して貰いつつ、二人に自分の持つＣＡＤを見せる。
「これが悠元さんの……」
「フォース・シルバー・カスタムのフルチューンバージョンで、白銀の『ワルキューレ』と漆黒の『オーディン』。達也の持っているシルバー・ホーンの原型だよ。カートリッジ型ストレージを採用してるけど、これでも汎用型……いや、厳密には自分の魔法特性に特化させたワンオフ型かな」
「成程。だからあれだけの高度なＯＳを含めたソフトウェアが必要だったわけか」
　現状５段階の出力リミッターを掛けているが、今の状態でも割と大規模演算を必要とする魔法は撃てる。３年前の戦略級魔法も撃てなくはないが、リミッター２つを外せば使用する想子量もかなり抑えられるようになった。達也は自分の使っている特化型ＣＡＤより高性能とあって興味津々である。
　すると、深雪が達也の発言に疑問を感じつつ尋ねてきた。その笑みが若干怖かったのは言うまでもなかったが。
「お兄様？　私に内緒でいつから悠元さんと直接連絡を取っていたのですか？」
「落ち着け、深雪。悠元は［トーラス・シルバー］なんだ」
「え？　あれは牛山主任とお兄様の二人組ではないのですか？」
「正確にはプログラム面を担当する俺とハードウェア設計・改良担当の悠元、俺らの保護責任者兼製作を担当する牛山主任の三人組で［トーラス・シルバー］というわけだ。……話してしまってすまない」
「いや、達也なら別に話していても問題ないと思っていたんだが。深雪も信頼できるって思ってたし」
　達也は口が堅いし、深雪も似たようなものだと認識していたので二人相手なら問題ないかと思っていた。ただ、達也から深雪に話してもいいかなどという言葉がなかったのは気になったが、今の今まで話していなかったことに内心驚いた。
「悠元さん、すごいです！　お兄様と肩を並べるだなんて、私はとても尊敬します！」

すると、深雪が悠元の腕に抱き付いた。柔らかい感触にドキッとしつつも、平常心を保つように心がけた。
「褒められても何も出てこないんだけどねー……」
「そういう反応ができるお前も大概だと思うが」
「言っておくがそっちの趣味はない」
別に女の子が嫌いというわけじゃない。前世との違いが鮮明すぎて反応に困るというのが正しいかもしれない。なので、慣れないというよりも『どうして俺に好意を向けるんだ？』という意味合いが強いな。だから、ドキッとすることはあるが淡白な反応になってしまうというわけだ。
せめて平穏な生活（司波家の中でという意味で）が送れますよう切に祈りたいと思う。

不思議な奴の評価

長野佑都（ながのゆうと）、もとい三矢悠元（みつやゆうと）。それが彼の名前だ。

彼との出会いは3年前の沖縄旅行だった。当時深雪のガーディアンとして母から厳しく躾けられていた俺は彼とその兄――――恐らく三矢元治（みつやもとはる）――――と出会う。第一印象では打算的という感じには見えなかったが、兄の方は母に対してどこか怖れというところも垣間見せていたので、変に警戒する必要もないと感じた。

那覇空港で別れた時、深雪が何処か名残惜しそうな表情をしていたのはよく覚えている。今にして思えば、深雪が自分から誰かに興味を持った存在は悠元が初めてだろう。

二回目は黒羽貢の個人パーティーの時。俺はその時疑問に感じていなかったのだが、俺が文弥や亜夜子と接している光景に疑問を感じた深雪がそこに参加していた彼を見つけ、密かに相談していたらしい。

あまり他人に対して深い接点を持たないよう過ごしてきた深雪が話していることに少し警戒してしまった。その彼は俺にも礼をして帰って行ったが、それは深雪の兄としてなのか、それとも深雪の護衛としてなのかは解らなかった。

三回目は母上の提案でクルーザーに乗ろうとチャーターしたところ、その同乗員だった。同い年なのに計器類を的確に把握し、無線で流暢に英語を話し、更には見たことがない銃型ＣＡＤで魔法を放った。

その時悠元が魚雷に使ったのは加重・減速系魔法だと解ったが、それを口にはしなかった。魚雷を調べた後でそれを沈め、俺が［分解］で魚雷を無力化した。潜水艦については彼が〝消滅〟させていたが、その時は潜水艦や魚雷に意識が向いていて気が付かなかった。これば かりは俺の怠慢だろう。

入学式の後で尋ねたら、あれは加重系と［分解］の複合術式で潜水艦を消し去ったらしい。俺以外にも［分解］の魔法を使えるのは驚いたが、他の誰にも言う気はない。下手すれば俺の使える魔法のことも

明るみになってしまうから。
四回目は恩納空軍基地でのこと。俺に敗北を喫したジョーから悠元の話を聞き、ここまで来ると打算的に深雪への接触を図っているのではと疑って彼に勝負を持ちかけた。四葉のガーディアンとして訓練を積んでいたことに過信はしていなかったが、同い年ぐらいの相手に負けないという自信はあった。
悠元が魔法師という情報を持っていたことから、俺は[術式解体]を使う構えをとった。だが、彼が自分の目の前から消えたと同時に、手刀で気絶させられた。数分後に目を覚ました時には、その姿はなかった。真田中尉からは『本当は戦いたくなかったらしい』と言われた。それは俺との実力差云々ではなく、俺の傍にいた深雪が理由だった。『佑都さんが悪いわけじゃありません。私から彼に話しかけているんです。兄さんはちゃんと反省してください』
悠元が何を言っても聞くとは思えないからこそ、彼は深雪に誤解を解いてほしいとお願いしていた。
そこまで言われて俺は自分のしたことを恥じた。悠元への必要以上の嫌疑は、ガーディアンとしての義務というよりも俺の中に残っている『深雪への強い情動』によるものだと改めて感じさせられたからだ。
その後、真田中尉の話を聞いて興味がわいた研究室で真田中尉の話に夢中になっていた俺は、ふと深雪の姿を探すと彼女は誰かが座っているデスクの人と親しげに話していた。そんな様子を見るのは家族や穂波さんなどの親しい人ぐらいだっただけに、気になって近づいてみると……それは先ほど手合せした悠元だった。
彼は深雪にクッキーの入った包みを手渡していて、俺は毒見のつもりでその袋からクッキーを手に取り、口にした。チョコチップクッキーだが、俺にとっては好みと言える甘さだった。この時、俺の悠元に対する印象は『深雪に心を開かせる不思議な奴』へと変わった。思えば、この時から俺も悠元に関して深雪と同じような存在だと思い始めたのかもしれない。
別荘に帰ってからそのクッキーを食べた女性陣が揃って難しい表

情やら『負けた……』という言葉が漏れていたが、男性の俺には理解できない世界だった。後日、別件で悠元にこのことを聞いても彼にも分からなかった。魔法を学んでいても分からないことはあるというのは不思議だと思う。

そして、大亜連合軍が沖縄へ侵攻したあの日。

悠元は深雪を守った。深雪が悲しむ姿を見たくはない……彼に対して俺は［再成］を使った。その際に自分も保有している自己修復術式のような反応が見られたが、そのことは心の奥にしまい込んだ。

その時から、俺にとっても悠元の存在は冷め切った自分の心に何かを感じさせるほどの人間だったと言えるかもしれない。

彼が国防軍の特務士官だったこともその時に知った。ならば国防軍の基地にいても不思議ではなかった。俺は結果がどうあれ深雪に手を掛けたという理由で参戦を希望した。その中には悠元に対する恩義も含んでいたのだろうと思う。

（凄いな……）

彼は右手に握った刀剣一体型ＣＡＤで数十人の兵士を瞬く間に斬り伏せ、斬られた兵士は超高温の炎に包まれて骨一つすら残らない。

左手に持っていた銃型ＣＡＤで複数構造同時展開型の防御魔法を射線上に飛ばして、生き残っている兵士を水平線の彼方へと吹き飛ばす。あれは今思えば十文字家の固有魔法である［ファランクス］の攻撃派生型だろうと推測する。

海上に姿を見せた艦隊を見て、悠元は真田中尉に例のライフルを打診。それはあの時悠元が真田中尉に渡したケースであり、［サード・アイ・ゼロ］と名付けられたライフル型ブースターである。これを雛型に俺が使うことになる［サード・アイ］が設計されるが、それは今置いておく。

それを用いて俺は実戦で初めて質量分解魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］を使用。その間の防御や魔法による津波を見事に対処しきった上で、彼は増援である敵の艦隊を戦略級魔法――――彼による呼称は光波振動系収束分解魔法［天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）］で艦隊などいなかったかのごとく消し去った。

『佑都さんのことは私が面倒を見ておきます。貴方達は先に東京へ帰りなさい。暫くは伊豆の別荘にいるといいでしょう』

母上と穂波さんは目を覚まさない彼の看病ということで残ることになり、俺と深雪は一足先に本土へと帰った。そして、言いつけ通り伊豆の別荘で残りの夏休みを過ごすことになった。

その際、『奥様』ではなく『母上』と呼ぶように言われてしまった。その時はこの変化に何があったのかなど解らなかったが、大人しく頷いた。深雪に話したらとても喜んでいたので、これで良かったのだと思うことにした。

今回の一件で深雪は俺のことに対する敬愛も含めて『お兄様』と呼ぶようになった。それに加えて深雪は悠元に対して想いを募らせるようになった。

恋ということに関して情動の感覚は鈍い自分だが、知識として深雪がどういう状態になっているかは読み取れる。そこから深雪に問いかけたが、「わ、私はそこまでは……ない、ですよ？」と頬を赤らめて途切れ途切れに返している時点で説得力が皆無だった。

加えて母上経由で送られてくる彼からの贈り物に喜んでいて、妹が悠元に対して作るバレンタインチョコも洗練が重ねられている始末。ここまで見ると悠元に対して義理チョコを贈っているだなんて見えないと誰だって思う。俺もそう思う。

それでも深雪は『命を救ってくれた人であり、お兄様と同じぐらい大切な人です』と言い張っているが、単に自分が悠元を好いているなどと認めたくないだけではないだろうか。

それを見た母上は深い溜息を吐いていた。普通の恋愛をしたことがない母上からしてもどう教えていいのか解らないのだろう。

自分も同意見だと述べると、母上は俺を見ながらもう一つ溜息を吐いた……何故だろうか。

『御曹司、実はうちにとんでもねえハードウェア設計のプロがいましてね。偶にしか会わねえんですが、若大将って呼んでるんです』

それからＣＡＤのことでＦＬＴ社に親のコネで入り込むようになって、ハードウェアにおいて超一級品の設計ができると牛山主任か

ら聞いた俺は『上条洸人』という名で在宅勤務している人間から依頼されて来たプログラムに対応するハードウェアの設計図を見た。その瞬間、それが［サード・アイ・ゼロ］の設計思想を受け継いだ上で小型化した超高性能のＣＡＤであることに気付き、洸人が悠元ではないかと疑ってメールを送ったところ、本人は肯定した。

彼の提案で［トーラス・シルバー］として活動するようになり、俺の使用しているＣＡＤも彼のハードウェア設計能力あってこそである。ただ、彼の非凡さは表に出せないものであり、俺も深雪には話せなかった。口止めの代わりとして俺もシルバー・ホーンのカスタマイズを全面的に依頼している。

悠元なら俺の使える［分解］も［再成］も知っているため、その専用ストレージ開発もお願いできるというわけだ。真田中尉曰く『悠元君の組んだ起動式は難解すぎて僕でも解読できない』らしく、彼に聞けば『感覚で組めるから論理的に説明できない』らしい。俺からしたら、悠元は埒外の天才だと思う。

そんな彼が本当は十師族の一人――それも『三矢家』の人間だった。

一高では悠元の兄や姉達（主に次女と三女）が成したことのせいで三矢家は『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』などと噂されていた。その意味で俺も無駄に警戒していたのだろう。

だが、彼は変わっていなかった。十師族だからという理由で威張ることもなく、俺に手を差し出した。友人になりたいという彼の言葉を受け取り、俺も手を出して握手を交わす。

その後、うちの妹が彼に対して突撃するといわんばかりの勢いで彼に抱き付いたことは驚いた。ただ、これでも深雪からすれば恋愛ではなく敬愛からくるスキンシップなのだろう。やっていることは恋愛感情に近いが、そのことは一々ツッコまずに置いておこうと思った。

そういえば、沖縄防衛戦の後、俺たちの後で帰ってきた母上が心なしか若返っていたような気がした。彼に聞いたら『治療はしたけど若返りなんて原因が分からないよ……』と言っていたので追求はやめた……彼も母上に苦労しているのだな、と思ってしまったのだった。

◇　◇　◇

司波家に生活の拠点を移しての初めての朝。

悠元は近くにあった端末で時間を確認して溜息を吐く。時間は朝5時――――いつもの時間に目を覚ましてしまう自分を恨みつつ、意識をハッキリとさせるためにシャワーを浴びてリビングに来たところで深雪がキッチンに立っていた。調理台の整頓具合を見る限りでは朝食の準備を終えた感じだろう。深雪は悠元の姿に気付いてあいさつを交わす。

「おはようございます、悠元さん」

「おはよう、深雪。もう制服を着てるけど、まだ学校には早くないか？」

学校の始業時間は8時丁度。司波家から学校までは３０分程度なので、そこから逆算しても1時間以上は余裕がある計算だ。すると、深雪が掛けていたエプロンを外した上でこう述べた。

「今日はお兄様の鍛錬に私も顔を出そうと思いまして。それに、悠元さんのこともありましたので」

「俺の？」

「はい。入学初日の時に兄が鍛錬をしに行っていたのですが、その際に九重先生から『その佑都君は僕も会ってみたいね。深雪君の入学報告はその時でもするといい』と仰ったものですから」

九重八雲。叡山の末寺と謳う九重寺の和尚で、九の数字を冠することから九島家との関係もある人間。れっきとした〝忍び〟――――古式魔法に属する忍術使いである。世俗を捨てた坊主なのに『手を出さなければセーフ』と言い張り、剛三爺さん曰く『煩悩を捨てきれていない生臭坊主でエロ坊主』という評価だった。

酷い言われようだが、実力があることも確かだ。何せ、上泉家に伝わる忍術と同系統の使い手であることも聞き及んでいる。

すると、トレーニング着姿の達也も起きてきた。挨拶を交わしたところで深雪が二人にコップを差し出し、それを飲み干す。律儀に礼をしてからコップを返す。その一連の呼吸を深雪に支配されたような感覚だった。

「さて、俺は行ってくるんだが、悠元もどうだ？」
「折角だからお言葉に甘えるよ。その九重さんから俺のこともってさっき深雪から聞いたけど」
「お兄様、なので私もご一緒します」
深雪はそう言って朝食の入ったバスケットを持ち上げた。随分準備が早いんだな、と達也はそう思いつつ深雪の制服姿に少し不安を覚えた。それも見越したうえで深雪が呟く。
「私ではもうお兄様の鍛錬についていけませんから。今日は先生に入学のご報告をするだけですので」
流石に制服姿の彼女が鍛錬に参加することはないが、それを見た時の『彼』の反応に対してだ。すると、達也は悠元に視線を向けた。
「そうか。まあ、深雪が俺と同じ鍛錬をする必要もないんだが、そういうことなら師匠も喜ぶだろうな。流石に他人の前で箍を外すようなことはしないと思うが……もしもの時は頼む」
「安心しろ。爺さんから『エロ坊主が本性を見せたら遠慮なくお見舞いしてやれ。儂が許可する』と言われている」
達也に対して、抑止力としての役目は果たすという悠元の言葉に二人は思わず苦笑を零したのであった。
その九重寺へは徒歩……という表現は妥当ではない。三人は魔法を使って時速６０キロほどのスピードで移動している。
深雪はローラーブレードで重力加速度低減・移動ベクトルの操作の術式を使用しての移動。
達也は加速系統――キックによる加速力増大と移動系統――上方への跳躍抑制を用いて走る。
そして悠元の場合は残留想子が残らないほどの最小出力で移動ベクトル制御・重力制御・慣性速度制御の複合術式を発動して走る移動方法。魔法に対する発動時間は二人に比べて短いが、それを体術の技能で補完している形だ。
一歩ごとに術式を起動しなければならない達也、一瞬も術式のコントロールを手放せない深雪、達也よりも短時間・小出力かつ複合した術式の発動をしなければならない悠元。

各々自らに課した訓練をしつつ、一路九重寺を目指すのであった。

あったら即死だった（〇〇的な意味で）

九重寺は司波家から（魔法を駆使した）徒歩で約１０分のところにある。達也に頼まれて深雪のローラースケートを外し、深雪の左隣につく形で階段を上っていくのだが、達也が先に入っていった寺の中からは野太い声が上がっている。

（……相手は武器持ちもいるのか。まあ、流石に真剣は使ってないだろうが）

音からして木刀も使っているようだが……でも、爺さんが投げてくる木刀に比べたらマシか。あれ、本気出したら１００本以上に分裂してるように見えるからな。最大で１万本という数もそうだが、その全てに〝質量〟を持たせる芸当は爺さんぐらいしかできないと思う。

新陰流剣武術に毒されてしまった自分の常識が恐ろしい。前世の価値観なんてもう欠片も残ってないと思う。この場合は『微塵も残らなかった』と評すべきことなんだろう……良い意味でも、悪い意味でも。

二人で寺の境内に入ると、達也が坊主というより『僧兵』と言わんばかりの連中相手に組み手をしている。達也は無論無手だが、相手は拳のみならず木刀を振るう者もいる。まるで時代がタイムスリップしたかと錯覚する印象が拭えない。

だが、達也はそれに関して卑怯などという振る舞いも見せずに木刀を打ち払い、坊主頭の連中――――九重寺で修業を受けている門下生を相手にしていた。

この形式の稽古が〝総掛かり〟と呼ばれるものなのはすぐに理解できた。ただ、新陰流剣武術の場合は対象の習熟度合いによって力量だけでなく人数が大幅に変わり、師範代の見極めの時は同レベルから上段者までの８０人を相手にさせられた。

なお、その光景を傍から見ることになった友人からは『人間卒業試験？』と問いかけられたことは解せなかった。

「門下生の動きを見る限り、達也の組手は中段者ぐらいが相手かな」

「悠元さんは、お兄様と稽古しているお弟子さんの力量が見ただけで

解るのですか？」
「構え方だけでなく、体の捌き方から相手の技量を図る訓練を散々やってきたからな。自分と同い年で中段者を相手にしている達也も十分凄いわけだが」
　すると、自分たちの背後に気配を感じる。特段殺気もないので見て見ぬふりをする。すると、その気配は声を掛けてきた。声の聞こえる方向は左側で当然深雪は左側を向くが、悠元の向こうには誰もいない。それを見た悠元がアシストする。
「深雪君」
「先生？　あれ？」
「深雪、左じゃなくて右だ」
「え？　右？……ひゃっ！」
　その方向を見た深雪は自分の右頬に誰かの指が触れられ、軽い悲鳴を上げる。すぐに気を取り直すと、深雪はそんな悪戯をした当人――――坊主頭の男性に対して抗議した。
「って、先生！　気配を消して忍び寄らないでください!!」
「僕は忍びだからねえ。気配を消すのは性みたいなもの。呼吸をするのと同じようなものだよ、深雪君」
「今時〝忍者〟という職種はありませんよ」
　深雪は忍者という表現を使ったが、その男性――――九重八雲（ここのえやくも）は、「それは違うよ」と言わんばかりの説明をする。前近代における身体能力が優れているだけの諜報員とは一線を画する、という意味で彼らを指す『忍者』ではないと。
「チッチッチッ、僕は忍者じゃなくて由緒正しき〝忍び〟――――忍術使いだよ」
「先生が古式魔法の使い手ということは存じておりますが……それなのに、なぜ先生は……」
　ああ言えばこう言う……のらりくらりと躱すあたりは〝忍び〟なのだろう。深雪もあきらめたように溜息を零した。そんな悪戯に古式魔法を使うのはどうなのか、という思いもあるだろう。すると、八雲の視線は深雪の隣にいる悠元へと移った。

「ところで深雪君、彼がひょっとして君たちの家で居候している子かな？」
「あ、はい。悠元さん、こちらの方が九重八雲先生です」
「初めまして、三矢悠元と申します。お二人に倣って先生と呼ばせていただいてもよろしいですか？」
　実年齢は５０代らしいが、３０代にしか見えない。これも魔法による影響だろう。その辺を顔に出さないようにしつつ無難な挨拶をした。すると、八雲は興味深そうに悠元を見つつ自己紹介をする。
「それは勿論。僕はこの寺の住職をしている九重八雲だ。故あって達也君と深雪君に体術を教えている世捨て人の物好きな坊主だよ。それにしても、三矢家とはね……これも何かの縁かな」
「先生は悠元さんのご実家をご存じなのですか？」
　八雲と十師族の一つである三矢家の繋がり。それが気になって深雪は尋ねるが、それをはぐらかすようにしながら八雲は深雪の制服姿に視線が移る。当然、悠元もその視線に気づいている。
「三矢家というよりもその関係筋の縁というところだよ。ところで深雪君、それが第一高校の制服かな？」
「はい。一昨日が入学式でして。今日は悠元さんの紹介と合わせて入学のご報告をと……先生？」
（どこが世捨て人なんだこれ、煩悩まみれのエロ坊主じゃねえか）
　ジロジロ観察している八雲に深雪はたじろぐ。悠元に至っては内心毒づくほどの有様だった。とてもじゃないが、先程の「世俗を捨てた」という言葉が形骸化しているように聞こえてくる。
「いいねえ、うん、実にいい。真新しい制服が初々しくて、清楚な中にも隠し切れない色香があって」
「……」
　次第に八雲は鼻息を荒くするような雰囲気で手をワキワキ動かしている。深雪に至ってはドン引きどころか怯えている。第三者の視点から見たら『女子高校生に興奮して、今にも襲い掛からんとする坊主の恰好をした不審者』の図にしか見えない。それ以外に見える人がいたらぜひ教えてほしいと思う。

「まるでまさに綻ばんとする花の蕾、萌え出ずる新緑の芽。そう、まさにこれは萌えっ!?」
八雲がその言葉を言い切る前に彼は表情を引き締め、身の危険を感じてその場に屈んだ。怯えていた深雪も八雲が屈んでいたことに驚いたが、彼の背後にいると予想した兄はいない。その兄は門下生と稽古しているのが見える。
そうなると……深雪は後ろにいた悠元に視線を向けると、彼の左手が真横に上がっているのが見え、その表情は呆れと怒りが組み合わさったようなものだった。
悠元は息を吐きながら左手を下ろした上で言い放った。
「九重先生、坊主頭でよかったですね。髪があったらバッサリいってましたよ?」
「いやー、全くその通りだよ。達也君以上に殺気を感じさせなかったのもそうだが……この場合は、手加減してくれたのかな?」
「深雪の前で彼女の知り合いをグロテスクにする趣味は持ち合わせていませんので……というか、試しましたね?」
悠元の「試す」という言葉に深雪はキョトンとするが、八雲は立ち上がって右手で自らの頭をペシッと叩いた。まるで藪をつついたら蛇ではなく虎を出してしまったような表情を二人に見せていた。
「さっき深雪君にも言ったが、僕は忍びでね。縁ある者は調べてしまう性質だ――――三矢悠元。三矢元の三男にあたり、高校入学まで長野佑都を名乗っていた。そして、君の母方の祖父は上泉剛三であり、君は新陰流剣武術師範代――――で、間違いないかな?」
「殆ど合っていますが、高校入学に際して総師範より師範の名乗りを許可されました。とはいえ、高校卒業まで師範代のつもりです。それはいいんですが……九重先生、『後は頑張ってください』ね」
「それはどういう……ムッ!?」
これから大変ですよ、という意味合いを含んだ悠元の言葉に疑問を浮かべる八雲だが、何かの気配を感じて身体を反転して、左腕を頭上に翳した。そこに飛んできたのは達也の手刀だった。
「師匠。深雪を怯えさせるのは止めてくださいと前にも言った筈です

が？」
「やるねえ、達也君。僕の背後をとると、はっ!!」
その言葉を皮切りに始まる達也と八雲の手合せ。ちゃんと深雪から距離を取るあたりは配慮しているのだが、それだったら先程の冗談はいらないだろう……いや、少なくとも自分の実力を図るつもりだったと八雲はそれとなく肯定していた。深雪の前で彼の首と胴体を分割するようなことはしたくないというのは本音だった。ホラーもそうだが、恐怖を与えるものって下手するとトラウマになりやすいのだ。
気が付けば達也と稽古していた門下生も二人の戦いを食い入るように見ていた。
「いつからこんな稽古を？」
「中一の１０月頃ですね。お兄様ってば、悠元さんに負けたことがよっぽど悔しかったようで……悠元さんはいつから武術を？」
「小三の７月ごろからかな。中一の７月には師範代の印可を貰っていたから、二人と出会ったのはその直後ぐらいになる」
「５年で師範代とは凄いですね」
転生のおかげもあるけど、調子に乗った爺さんのスパルタぶりも凄かった。俺としては強くなれることが嬉しかったから嬉々としてやっていた。それを見た爺さんも嬉々として修業のレベルを上げていき……気が付けば、５年で本来２０年以上掛けてやる修練を終えてしまった。
中には本来師範クラスでもやらないような鍛錬も含まれていたが、それに気付いたのは師範代の印可を渡された際に爺さんと思い出を懐かしむように鍛錬のことを話していた際、元継兄さんがドン引きしていたからだ。
爺さんを問い詰めたところ、「悠元が強くなるものだから、わしも張り切っちゃったわ」とテヘペロでもするかのような口調で言い放った。その後、偶々通りかかった詩鶴姉さんの説教があったのは言うまでもない。
何はともあれ、そのお蔭で周囲の兄や姉もおかしくなってしまった

が、俺は決して悪くない……多分。おそらく。
「いやー、もう体術だけなら敵わないかもしれないねえ」
そんな八雲の挑発めいた口調で言い放たれた誉め言葉に対し、達也は八雲に向かって走り出す。最初の方は体術のみで戦っていたが、八雲は途中から打撃を軽減する防御術式だけでなく達也に気付かれない程度の忍術まで織り交ぜていた。
だが、対する達也のほうは体術と自己加速術式で対抗していた。これは達也の持つ魔法特性が偏っているためと仮想魔法演算領域の精度の問題が大きい。本人曰く瞬時に組めるのは五工程が限界だと述べていた。
それに、周りが見ている中で迂闊に四葉の技術を使うのはリスクが大きのも事実なのだろう。
(流石に門下生の前で「フラッシュ・キャスト」は使えんよな……おおう、容赦ねえな)
飄々としつつ、まるで達也を子犬のじゃれつきに対処するかの如く攻撃する八雲に、単なるエロ坊主ではないという認識を持つに至った悠元であった。

◇　◇　◇

汗をかきつつも余裕の見られる八雲に対し、達也は土の上に大の字となっていた。スカートが汚れるのも厭わずに深雪が膝をつき、達也の顔についた汗をタオルでふき取っていた。そのタオルを達也が手に取りつつ、ようやく上半身を起こした。
「ありがとう、深雪。……スカートに、土がついてしまったな」
「いえ、お気になさらず」
深雪はそう言って立ち上がり、上着の裏ポケットから携帯端末型ＣＡＤを取り出して操作する。
起動式から情報を読み取り、深雪を中心に魔法陣が展開する。そして、薄く輝く霧が晴れた後には、深雪のスカートについていた土は綺麗に取り払われ、達也の服に付いた土埃もまるでなかったように取り払われた。
現代の魔法師は昔の魔法使いでいうところの杖、宝石、魔道書など

の道具や、呪印・印契といった触媒の代わりにＣＡＤを使用する。ＣＡＤには感応石と呼ばれる相互変換触媒によって魔法師から想子信号を吸収、それを変化させた電気信号でＣＡＤ内に蓄積された電子データ――――起動式を発動させ、それを今度は想子信号に変換して脳内の無意識領域にある精神機構、魔法演算領域に送り込んで魔法式を構築する。

魔法師の才能は遺伝子で決定される。想子保有量もある程度は遺伝だ。だが、それは先天的な資質であり、理論化・体系化していると はいっても明確な基準ではない。なので、転生して数年はこの世界における想子量の増加方法と魔法演算領域の強化について試してみることにした。

想子は『心霊現象の次元に属する非物質粒子で、認識や思考結果を記録する情報素子』となっている。ならば、書ききれなくなるほどの情報を想子に与えたらどうなるか？　結論から言えば、想子量は一定の年齢まで伸ばし続けることが可能。様々な体験だけでなく、前世でいうところのアニメや漫画の知識もこの世界の魔法理論である程度なら再現可能であり、そういった試行錯誤によるサイクルが結果的に想子量上昇に繋がると解った。

問題の想子体の強化は転生特典の一つ――――『思考した概念を魔法式に変換する能力』によって魔法式が完成したため、ここは省く。

魔法演算領域は、体格の大きさで魔法式の処理速度が決まらないことは原作から見れば解る。電子製品でいうところの中央演算装置そのものの性能を引き出す方法があるとするなら、それは魔法演算領域を普段から使いこなすことにあるのではないだろうかと考えた。

アスリートは日頃から練習を積み重ねて本番で力を発揮させる。職人も技術や知識を磨いて己の技能へと昇華させる。魔法師でいえば魔法を使用して感覚を積み重ねることが一番大事なのではないかと考えた。

あと、もしかしたら魔法演算領域は肉体でいうところの筋肉みたいな側面も持っているのでは……と仮説を立てた上で、魔法の練習をすることにした。

毎日一定量の練習をするのではなく、若干負荷を掛ける魔法訓練をしつつ、全ての系統をサイクル立てて行う。魔法を使わない休息日を定期的に設け、そういった日は筋力トレーニングなどに費やして肉体の超回復を促す。魔法訓練をする時間帯は身体が温まり、脳や神経も働いている夕方から夜とすること。食事はしっかりと摂り、十分な睡眠をとること。

ある程度の負荷が軽くなったと感じたら、今度はイメージを組み上げる練習のためにアニメや漫画などの空想上の動きを魔法である程度再現する動きを実施。こればかりは当初自分しかやっておらず、説明しても理解できないだろうと思ったからだ。なお、佳奈と美嘉に問い詰められてそれを教えた結果九校戦において異常な成績をたたき出したのだが、これについては割愛する。

結果として、感覚的な魔法の組み上げは目に見えるほど早くなった。無論、計測する際には単一工程・同系統の魔法を使用している。

流石に家の中（厳密には自室の中）ではできないと思ったので、家の地下に大規模の演習場やらＣＡＤ調整場を作ったのはこれが理由だったりする。なお、母である詩歩に怒られはしたが、詩歩が真っ先にそのトレーニングを始めた（理由は述べなかったが、多分年齢を気にしていたため）。気が付けば元治と詩奈を除く一家全員がそのトレーニング方法を取り入れていた（元治や詩奈だと喋ってしまう危険性があったため、ばれないよう各々日にちをずらしている）。

結果として、国防軍に技術を提供する三矢家において［スピードローダー］と同レベルの秘密技術になってしまった。何せ、一高に進学した元継、詩鶴、佳奈、美嘉が成した結果がそれを物語ってしまったというわけだ。

閑話休題。

深雪の提案で朝食となった頃には門下生も各々の鍛錬に戻っていた。縁側で朝食のサンドイッチを頬張る達也と八雲、そして悠元。深雪はというと、二人にお茶を渡したり皿に取り分けたりするなど甲斐甲斐しく働いていた。

八雲は何処か人が悪そうな表情を浮かべつつ、自らの弟子が差し出

した手拭いで口と手を清め、深雪に対して礼を述べるとこう呟いた。
「やっぱり、体術だけなら達也君にはもう敵わないかもしれないねえ」
弟子からすれば師匠の言葉は賞賛や羨みに聞こえ、深雪もどこか嬉しそうだった。悠元としても八雲の評価は嘘偽りなどないだろうと思う。だが、当の達也本人は先ほどの手合せから見ても、どこか納得しかねるような表情を八雲に向けていた。
「俺の手刀を受け止め、一方的にボコボコにされて『敵わない』などと言われても、手放しに喜べませんよ」
「それもそうだね。けど、僕は君の師匠であり、得意な土俵の上で戦っていたんだ。半人前の君に後れを取るようでは、弟子に逃げられてしまいそうだ」
「お兄様は、先生に褒められたことをもう少し素直に認められたほうがよろしいかと。せめて胸を張って高笑いするぐらいしても罰は当たらないかと思いますよ」
達也の言葉に対する八雲の言葉は尤もであり、それにフォローしている深雪の言葉に達也の苦笑から苦々しさが抜けていた。どうあれ二人は達也を褒めているのだと。この流れで言葉を発しないのも変だと思い、言葉を掛ける。
「そうだぞ、達也。九重先生が魔法を使わなきゃいけないほどの実力だって認めてくれたってことなんだから。まあ、胸を張って高笑いするのはお前のキャラじゃないだろうけれど」
「そんなことしたらチョット嫌な奴だろうに……ところで師匠、あの時悠元の手刀を何故受け止めなかったのですか？」
鍛錬をしているときでも達也は深雪の様子を気にかけていた。八雲があんな状態になった時、直ぐに行こうかと思ったが悠元が約束通り動いてくれた。達也が仕掛けた際は相手にしていた門下生を全員下した後だったので、こういうやり方も稽古の一環なのだろう。
達也は彼の放った手刀を八雲が自分の時のように受け止めるわけでもなく、屈んで躱したことに疑問を持った。八雲は話してもいいかと悠元に視線を向けると、悠元は軽く頷いた。それを見てから八雲は説明を始めた。

「悠元君の放った手刀はただの手刀ではなく、文字通りの〝真剣(かたな)〟だ。そんなものを振るわれたらいくら僕でも防御魔法じゃあ防げないからね。ただ、試しであることを理解してくれていたおかげでそこまで本気じゃなかったけど」
「……それは、彼の習得している武術にも関係あるんですか？」
「新陰流剣武術は己の心を刃とする［心刃(このは)］を得意としている。まあ、僕としてもこれ以上は言えない。何せ、古式魔法の秘術に触れてしまうから」
「ええ。それ以上言ったら爺さんに頼んで叡山行脚コースですから」
「というわけで、これ以上の詮索は止めてくれると助かるよ」
新陰流剣武術の本質を触れると本当に奥深いが、下手に言うわけにもいかない。というか、自分が感覚的に編み出した魔法式のせいで秘術が増えてしまった。
爺さんは「これは……確かに、明るみに出せぬな」と納得してくれた。何せ、内容を確認したら『本山』にしかないはずの術式の上位互換版まで感覚的に組んでしまったらしい。ナンテコッタイ。
「そもそも、悠元君の場合は［心刃(このは)］を使わずともこちらの土俵を引っ繰り返しそうな気もするけれど」
「必要に迫れば俺でも体術ぐらいは使いますよ」
「僕ですら一度も勝てなかったお師匠の教えを直々に受けた君に近付かれたら、いくら僕でも土塗れにならないと断言できないからね」
八雲は一時期剛三のもとで体術の指南を受けていた。その彼が直々に悠元を鍛え上げたことまで八雲は掴んでいたことも明かしつつ、先程の気配察知を含めれば勝てるとは断言できない……と坊主頭を掻くような素振りをしながら呟いたのだった。

二人の暴れん坊

フラグというものはえてして自動的に形成されるものと手動的に形成されるものがある。俗にいう『死亡フラグ』は後者の側だろう。恋愛に無自覚な人間が恋愛フラグを立てる場合は自動的と言っていいのか解釈に困るが。

コミューターによって満員電車というフラグはなくなったものの、駅から学校までの通学というイベントはまだ残っている。基本的に一本道なので、クラスメイトとも会う機会が増えることにもなる。

だからといって、周りから注目されかねない行動はどうかと思う。何が起きたのかというと、一高の生徒会長である真由美が手を振りながら走ってくるのだ。それも、自分と達也の名前を呼んでだ。

「悠くーん、達也くーん！」

「……達也、随分親しくなったんだな」

「いや、一昨日が初対面のはずなんだがな。それを言うならお前の方が知己じゃないのか？」

「バレンタインのために実家の力を使うような人を好意的に見れるか？　俺は無理だぞ」

「あ、あはは……」

小声で交わされる悠元と達也の会話を聞いて思わず苦笑を浮かべる深雪。確かに一歩間違えればストーカーや付きまといのレベルだ。そんな会話が交わされていることも気付かずに近づいてきた真由美は三人に声をかけた。

「二人ともおはよう。深雪さんもおはようございます」

「おはようございます、会長」

「おはようございます」

「おはようございます、七草会長」

そうやって挨拶を交わすが、悠元の呼び方に不服だったのか真由美は悠元に詰め寄った。

「む、悠君ってばダメじゃないですか。名字で呼んではダメって言ったでしょう？」

「親しき仲にも礼儀ありじゃないですか。通学路なんですから、かえって目立ちますよ。ただでさえ、先輩と自分は目立つ立場なんですから」
悠元は三矢家の人間で、真由美は七草家の人間。同じ十師族の二人がこんなところで親しげにしていたら要らぬ誤解を受ける。それを理解できない真由美ではなく、渋々納得した。
「今はそれで納得しましょうか……悠君に深雪さん、今日のお昼はどうするのかしら？」
「そう聞くということは、生徒会のお話ということですか？」
「あー、そういえば悠君はお姉さんから聞いていてもおかしくないでしょうね。ええ、その通りですよ。それで深雪さんにも声を掛けたいのですけど……」
そこで深雪は達也に視線を向けた。
事情はどうあれ達也は深雪のガーディアンだ。悠元は生徒会室に行き、深雪としても先程のことから生徒会室に行こうとする。結果として達也も行かざるを得ない状況になる。ここまでを理解したのか、達也は面倒そうな雰囲気を感じていたのだった。

◇　◇　◇

先程の真由美との邂逅もあってか、周りからの目線は自ずと多い。そうでなくとも、深雪という存在で男女問わず惹きつけている存在もあれば、その隣にいる達也に対しては敵意というよりも二科生に対する僻みの視線が多い。
「さっきのこともあるだろうが、目立つつもりが無くても逆に目立ってないか？」
「否定はできないな」
この辺は深雪が主因となっているため、達也も若干諦め気味であった。ともあれ、正門を越えて正面玄関から校舎に入り、二科生である達也と別れて深雪と一緒に教室へと向かう。
すると、深雪が嬉しそうな表情を見せていたことに首を傾げた。
「どうした、深雪。なんだか嬉しそうだな」
「いえ、昨日は憂鬱な表情をしながら『悠元さんと一緒に通えたら』な

んて思ってたのが叶いましたから」
「ああ……成程ね」
昨日は深雪一人だったのに、今日は深雪の隣に見知らぬ男子生徒が一人いて、仲良く歩いている光景は男子生徒からすれば羨望や妬みにも似たような感情を抱くのは仕方がないのだろう。
文句があるのなら受け付けるが、それを受理するのはこちら次第である。
1年A組の教室はある程度小規模のグループで構成されていた。深雪と別れて自分の端末を探し、見つけたところで雫とほのかに声を掛けられた。
「おはよう、悠元」
「おはようございます、悠元さん」
「おはよう、二人とも」
挨拶を交わしつつ、悠元は自分の席に座って自分のIDカードを端末にセットした。すると、ほのかはホッとしたような表情を悠元に向けていた。
「それにしてもよかったです。知り合いが隣の席だったので安心しました」
「まあ、名字もひらがな読みだと一文字しか変わらないからな」
「二人ともいいよね。私は席が遠くなるし」
光井（みつい）と三矢（みつや）なので、自ずと席は近くなる。その一方で雫は少ししょんぼりしていた。これはかりは成績分配の五十音順にした学校側の方針なのでどうしようもないだろう。そう思いながら悠元は立ち上がったモニターに目を通しつつキーボードを叩き始める。
「まあ、これはかりは学校側の事情があるし、どうにも言えないと思うけどな」
キーボードの練習は魔法訓練の合間にやっていた。これはCAD調整の練習も兼ねてだ。それを見た美嘉が『悠元より絶対上手くなってやる！』と本気を出した結果、九校戦で選手とエンジニアの二束草鞋をするだけの技量を手に入れていた。佳奈からは『グッジョブ』と褒められて抱きしめられた……何かと賑やかなうちの家系である。

それはともかく、カリキュラムの確認と履修登録を速やかに行って他に必要な情報がないか探っていると、二人が感心するように悠元のキーボード捌きを見ていた。そして、二人だけではなくそのすぐ後ろの席からも声を掛けられたので、悠元は手を止めて振り向いた。そこにいたのは可愛らしい容姿の男子生徒だった。女装が似合いそうな……というのはやめておこうと思う。

「へぇー、アシストを使わずにキーボードだけってすごいね」

「ん？　ああ、慣れたらこっちが早いからな」

「って、ゴメンゴメン。僕は六塚燈也（むつづかとうや）。僕のことは燈也でいいよ。得意な魔法は振動・加速系の射撃魔法になるかな」

「三矢悠元だ。俺のことも悠元でいい。得意なのは振動系全般になる。しかし、六塚家なら東北の五高が近いんじゃないのか？」

まさかの十師族ということに驚いた。いや、あれだけの原作介入をしたらどんなことが起きても不思議じゃないと思っている。その意味で燈也の存在は意外なものだった。というか、十師族なのに目立ってないのも不思議としか言いようがなかった。容姿からしても目立っていそうなものなのに。

「実は姉さん――現当主に一高への入学を勧められてね。理由を尋ねたら『あなたの志望を考えれば、一高の方がいいでしょう』と言ってくれたんだ。流石に目立つと思ったんだけど、この学校ではそこまで気にならなかったよ」

「うーん……それって、会長や十文字会頭の存在？」

「いや、『三矢家』――君のお姉さんの影響が残ってるみたいで」

うん、知ってた。

三矢の名を持つ人間が入れ替わりで来たんだ。そりゃあ噂はそっちの方向に行くよな。

そして、二人の会話に加わる形で雫とほのかも自己紹介して会話をする。というか、一年生で十師族関係者が〝4人〟は異常だと思う。自分が言うなって？　……これぐらいは言わせてください。お願いだから。その間にも燈也の後ろの席から視線が飛んでくるが、無視した。誰かって？　五十音の席順で考えれば解るだろうが、森崎のこと

だ。無論、その視線は燈也にも向けられている……本人は苦笑ものだ。
　履修登録も終えたのでモニターを収納した。すると、話題はその姉となった。
「ねえ、悠元。僕は会ったことがないんだけど、先代の生徒会長とは聞いたことがあるんだ。どんな人なの？」
「人当たりが良くて、気に入れば二科生でも親しげに接する姉かな。九校戦だと新人戦も含めれば女子バトル・ボード二連覇に女子クラウド・ボール三連覇、それで三年の時は女子アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝している」
「悠元のお姉さん、それでいて新人戦のエンジニアもやってたよね」
　三矢美嘉。三矢家三女で、一高では先代の生徒会長を務めていた。選手・エンジニアの両面で一高の二連覇に貢献。三年の時に種目をバトル・ボードからアイス・ピラーズ・ブレイクに変更したのは、彼女の前に生徒会長をやっていた次女の決勝最速記録更新を狙ったものであると知っているのは身内だけである。
「雫、知ってるの？」
「うん、何回かうちのパーティーで出会ったことがある。悠元は詳しいことを教えてくれなかったけど」
「それは勘弁してほしいかな。どうしても隠さなきゃいけない事情があったわけだし」
　そこまで聞けば優秀であるというだけで終わるのだが、彼女のやったことはとんでもないことだらけだった。新入生総代となったのはいいが、生徒会入りを辞退して風紀委員になる。新入生勧誘期間中に彼女は魔法・非魔法の区別なく騒乱行為を平等に鎮圧した。
　更には二科生に対する差別用語――雑草（ウィード）を使って二科生とのトラブルを起こした一科生を誰一人の例外なく鉄拳制裁した。相手が先輩だろうと男女関係なくだ。
　これには一年から生徒会役員だった佳奈も頭を抱えたが、咎めることはしなかった。生徒の幼稚性を放置する学校側の態度に呆れていたのは彼女も同じだったからだ。

それを受けてその年の生徒総会で一科生（ブルーム）と二科生（ウィード）の通称を禁止用語として明文化。表向きは言えなくなったが、それでも優越に浸りたい奴は陰ながらその単語を使うのをやめなかった。

「そのお姉さんのせいで悠元が要らぬ苦労を背負っているわけだね」

「……勘弁してくれ」

2年生になると、佳奈から指名される形で生徒会長に立候補。その代表演説の一言目は『文句があるのならかかってきなさい。いつでも相手してあげるから』と完全な喧嘩腰だった。その場で佳奈から制裁を食らったために少しはまともな演説となり、信任を受けて生徒会長に就任した。

暴れん坊みたいな印象もあるが、一科生の女子と二科生全体からはすこぶる評価が高かったらしく、個人的な友人だと二科生の方が多いぐらいだった。成績自体も問題はなく三年間通して学年総合一位、そして九校戦で優秀な実績も残している。その意味で教師だけでなく教頭や校長ですら手におえない代物だったというのは間違いないだろう。

その原因を作ってしまったのは他でもない悠元の存在あってこそ。だからこそ、遥から聞いた時は本気で頭を抱えたのであった。

なお、本人は現在魔法大学の一年生を満喫している。彼氏はまだいないとのこと。

「あとはそうだな……新陰流の印可を受けている。具体的には師範代相当といってもいいかな」

新陰流剣武術は剣術四奥義、体術四奥義を合わせて〝八葉〟と呼称し、ここに忍術を加えた九つの習得段階で見極める。現時点では元継が総師範補佐（皆伝・次期総師範筆頭）、詩鶴は師範（皆伝）、佳奈が師範代で美嘉が師範代相当（印可）となる。悠元の場合は剛三から直々に皆伝――師範相当と認められたが、とりわけ新陰流の師範をしたいわけではない。その辺は剛三も理解しているので、高校卒業までは師範代という形にしてもらっている。

ちなみに、八葉という呼称は剛三が総師範になってから取り決めたらしい。その理由もなんとなく察せるが、何も言わない方がいいだろ

うと思って聞こうとはしなかった。
ここでA組の担当教官が教室に入って来たので、会話を止めて各々自分の席に座った。
オリエンテーションの2日目が始まるわけなのだが、ここで教官の百舌谷が悠元に対して声を掛けたのだ。恐らくは入学式と昨日の2日間を休んだため、そのフォローをしようとしたのだろう。
確かに新入生総代が家の都合で欠席すること自体珍しい事なので、これから一緒に学ぶクラスメイトに対して自己紹介するのは吝かではない。
「三矢君。今日が初登校になりますので、軽く自己紹介をお願いします」
「分かりました」
その場で立ち上がると、周りのクラスメイトがざわついた。先程深雪と一緒に登校してきた男子生徒が十師族の直系だという事実に対してのものだろうが、わざとらしく咳払いをした上で自己紹介をした。
「今年度の新入生総代、三矢悠元です。入試の結果をゴールではなくスタートと改めて気を引き締めていきたいと考えています。あと、自分は卒業生である姉らと同様に二科生を下に見ることはしません」
自分の言葉に対して睨むような表情を向けている男子生徒もいたりする。森崎も無論その一人に数えられる。
そこまでエリート意識があるのならば上を目指す努力をしたほうがいいと思うのだが、自分よりも下の実力の人間がいると目が向いてしまうのは人間としての性なのだろう。
「別にこの意見を押し付けるつもりはありません。ですが、優れた魔法師というものは何も実力だけで決まるものではないと思っています。何はともあれ、よろしくお願いします」
単純に戦略級魔法というものがあれば、それに偏った見方をされてしまうのは仕方がないと思う。だが、単に魔法の力を示し続けていたのでは、いつか限界が来てしまう。四葉家はその中でも異質な例外だろう。

それはともかく、魔法を本格的に学ぶのは魔法科高校に入ってからが大半であるにも拘らず、入試の成績によるクラス分けでエリートぶる理由が良く分からない。
森崎が威張っていた理由は分からなくもないが、それ以外が二科生を卑下する理由なんて大体は惨めすぎる理由が殆どだ。周りが動揺するのを尻目にしつつ、そのまま自分の席に座った。
百舌谷から今日の授業見学について説明があり、魔法実技の教科の見学は教官がついて説明してくれるとのことだ。周りの反応を見る限り、昨日と同様の流れなのだろうと推察した。
どうしようか考えたが、工房見学はどこかのタイミングですればいいと思い、教官の案内についていく形にしようと席を立ったところで、深雪が近寄ってきた。
「悠元さん、今日はどうするのですか？」
「昨日は見学できていないから、大人しく教官に付いて行こうと思ってる。深雪はどうするんだ？」
お互いに名前で呼び合っているが、これを見てどう思おうが勝手にしてほしい、と思う。ただ、現時点で自分が深雪に対して恋愛感情はない……というか、分からない。
「折角ですからご一緒しようと思いまして。昼休みのこともありますので」
「……まあ、理に適ってるな。ほのかと燈也はどうする？」
「じゃあ、ご一緒します」
「僕も折角ですから」
流石に二人だけだと要らぬやっかみを買いそうなので、燈也とほのかを誘った。すると、深雪に遅れる形で雫もやってきた。
「悠元、私もいいかな？」
「別に構わないが、昼は生徒会室に呼ばれてるから、今日は一緒に食べれない。そこは勘弁してほしい」
「ん、分かった」
気が付けば自分を含めて五人の集団行動となっており、どう声を掛けようか悩んでいる人間もいれば、羨望の表情を浮かべて視線を向け

てくる生徒もいる。
　これには密かに溜息を吐いた悠元であった。
　今日は魔法工学と魔法幾何学の授業見学、午後からは昨日と異なる魔法実技演習を見る予定となっている。悠元は流石に昨日のことを知らないため、そのあたりを燈也が説明してくれた。
「昨日は基礎魔法学と応用魔法学の見学があったんですよ。その時、深雪が立派な回答をしまして……それで森崎が調子に乗ったようで」
「？　深雪と森崎に直接の面識なんて無いだろうに、何でそうなったんだ？」
「大きい声では言えませんが……先生からの質問で森崎が失敗しまして」
　教官が尋ねたのは放出系魔法の性質であり、普通ならば中学（主に中学生が通う魔法関連の塾）までで習う内容ではない。恐らくだが、森崎は百家の人間として深雪にアピールしたかったのだろう。その代わりを立派に務めた深雪に対して「俺の敵を取ってくれた」などと調子に乗った結果、二科生に対して席を譲るように威圧したり、放課後の一件に繋がった形だ。
「ええー……ちゃんと分かってないなら、そこは控えるべきだろうに」
「ですよね。僕もそう思いますよ」
　自分の身の丈に合った実力を身に着けていて自信満々ならば文句はないが、気になる異性に振り向いてほしくて、挙句の果てに家柄まで意識した結果ずっこけた……これを滑稽と言わずして何と呼ぶのだろう。
　燈也と話していて気が付くと、深雪や雫、ほのかが視線を向けていた。
「何の内緒話？」
「なに、昨日の授業見学のことについてな。声量を上げると要らぬ中傷を受ける奴がいるから」
「ええっと……森中君、でしたっけ？」
「ほのか……森崎君よ」
（ロクに覚えられてねえな、森崎……）

昨日のことが大きく尾を引いているのは間違いないだろう。ほのかからすれば、達也のことを認めない森崎に対して良くない感情を抱いてもおかしくはないが、少しはクラスメイトの名前を覚える努力をしてほしい……とは思う。

気が付くと教官が指定した場所に到着した。同じように見学を希望する生徒もいるが、声を掛けようか戸惑う生徒がかなりいる。

「声を掛けるのはマナー違反でもないのに、何で躊躇うかな。いや、原因は分かってるけどさ」

「そうですね……僕の存在もあるかと思いますけど」

十師族の直系二人（正確には四人だが）という対象が同学年にいる以上、どう声を掛けようか悩むのも無理はないだろう。別に声を掛けること自体を咎める気は更々ないのだが。そんなことを考えていると教官が来たので、教官の案内で魔法工学の授業を見学する。

魔法工学は魔法の学問分野の一つで、ＣＡＤなどの魔法工学機器等に関する学問である。入試の点数だが、魔法工学は文句なしの満点を取っている。実家でＣＡＤを自ら弄ったり、ＣＡＤの調整を自分一人でこなしているため、他の人間より魔法工学の知識はあると思っている。

ただ、魔法科高校の魔法工学は高等教育の性質上、自分のやっていることと比べてレベルがかなり落ちてしまうのは仕方がない。国防陸軍で兵器開発なんてやってると最高レベルの魔法工学機器に触れる機会が多いため、それと比較すること自体失礼だと思う。

午前の見学自体、特にトラブルが起きることもなく進んでいくのであった。

◇　◇　◇

上泉家の本家はかつて箕輪（みのわ）城が存在していた場所にある。かつての剣豪上泉信綱が仕えた長野家所縁の地に広大な敷地を持つ一族の長――上泉剛三は天井近くに掛けられた一枚の写真を見上げていた。そこに映るのは五人の人物であり、中央に映るのは四葉元造。その両端にいるのは九島烈と剛三で、元造の前にいる二人の少女は元造の子――深夜と真夜であった。

「のう、元造よ。お主の言っていた通りだったよ。あの戦いの後、深夜も真夜も儂も過去で止まってしまった……多分、烈や弘一もじゃろうな」

剛三は元造から深夜と真夜に手紙を託されていた。最初、死まで止まる様子のない元造を剛三は止めようとした。娘を親無しにしていいのかと。だが、剛三は止め切れずに自棄を起こして大漢の連中を相手に無双した。その結果魔法演算領域を損傷する結果となり、つい先日まで魔法を長時間使うことができなかった。

そして、その手紙を彼女達に渡すことも忘れるように、額縁の裏に仕舞い込んだ……自分が止め切れなかったことは罪であり、まだ少女であった彼女達は生き残った自分を恨むだろうと。だが、その選択は最悪の道を進もうとしていたことに剛三は気づいていなかった。

「気付いた時には遅かった……もう、どうにもならんとな……だが、やりおったよ。儂の孫がな」

その手紙を見つけたのは悠元であった。沖縄に出発する前日、額縁の微妙な重心のズレに気付いて裏蓋を開けたところ、二通の手紙が出てきた。それを追及されたとき、剛三は過去を穿り返された怒りから悠元に向かって木刀を振り下ろした。明らかに精彩を欠いた剛三に、悠元は木刀を片手でいなすと、剛三の袖をつかんで強引に一本背負いを決めた。

あっさりと投げられて呆然とする剛三に悠元はこう言い放った。

『生きているうちに届けてください。俺に言えるのはそれだけです。もし届けなかったら……俺は爺さんを一生軽蔑します』

そう言いながら悠元は魔法で剛三の魔法演算領域を修復した。そんな魔法など聞いたこともなかったが、剛三は喜びのあまりはしゃいだ。それを詩鶴が木刀を振るうという一歩間違えれば虐待にもなりかねないような一撃によって剛三は腰を痛め、これには悠元も呆れていた。

腰を回復させようかと悠元は提案したが、詩鶴の『悠元に木刀を振るった罰として大人しくさせたい』という提案を呑み、それ以上はしなかった。

沖縄防衛戦の翌日、腰の調子も戻った剛三は知己の仲介という形で、都内の高級料亭で真夜との会談に臨んでいた。
「久しぶりだな、真夜。本当に母親そっくりになったな」
「剛三殿も久しいですわ。それで、今日はどのようなご用件で？」
「まあ、まずは一献傾けようではないか」
剛三からすれば真夜の存在は娘同然ともいえた。ひとしきり語らったのち、剛三は真夜に本題となる手紙を差し出した。
「これは……」
「お前と深夜の父――――元造から託された手紙だ。大漢での復讐戦の直前に託されたが……すまない、真夜。儂は、元造を止められなかった」
「剛三殿？」
「あやつが父親として娘の幸せを奪ったことに怒り狂っただけなら止められた。だがな、元造はお前と深夜がこれから苦しむことになる未来を少しでも良くするため……お前たちを狙おうなどという考えなど二度と持たせぬために踏み切った」
元造は真夜が女性としての幸せを失ったこと、深夜がそのために真夜を「生かすために殺す」ことも想像していた。だからこそ、彼女たちに近い剛三に遺言ともいうべき手紙を託した。真夜の女性としての幸せを奪った〝過去〟とこれから起こりうる〝未来〟のために、元造は命を燃やし尽くした。
「儂も自棄になって戦った。だが、生き残ってしまった……そうなれば、儂はお主等を含めて四葉から責められてもおかしくはない立場よ。その手紙を封印して、残りの人生を新陰流に費やすことで終えようとした」
「……」
「そう思っていたんじゃがな……孫に見つけられて説教されてしまった。『託されたなら生きているうちに届けろ』と。いやはや、全く情けない大人だ」
真夜としては、剛三がそこまで弱気に話す様子など初めて見る光景だった。父からは『アイツは暴れ馬だな』と常々言われて育ってきた

ため、そういう面を見るだなんて思ってもいなかったからだ。
「真夜よ、生きているのならまだ話せる。相手が死んでしまったら、もう言葉を掛けてやることもできぬ。当たり前のことだが、儂らのような存在だと忘れそうになってしまうの……儂は届けた。如何するかはお前が決めるとよい」
そう言って剛三は立ち上がり、部屋を後にした。真夜の手には、若干色褪せた手紙が確かに握られていたのであった。そこで、頬に何かの感触を感じ取った真夜が手で拭うと、それは自身が流した涙であったことに驚きを見せた。
「ふふっ……涙なんて、何時ぶりに流したかしら……ありがとうございます、剛三さん」
その感謝の言葉を向ける相手は既にこの場からいなくなっているが、それでも口にせずにはいられなかった……そう思いつつ、その手紙を自身の懐に仕舞い込んだのだった。

ときには関節技

昼休みの時間となり、悠元と達也、深雪の3人は生徒会室を訪れることとなった。昔ならノックだが、セキュリティーの関係でインターホンを鳴らす。入室を促す声とロックが外れる音が聞こえ、悠元が先頭に立って扉を開けて中に入り、深雪、達也の順に続いて入室する。

中には真由美と摩利、そして生徒会メンバーと思しき二名がいた。それを見つつ、三人は頭を下げる。

「失礼します」

悠元が言葉を発しつつ頭を下げ、深雪と達也もそれに続く。達也から見れば二人の礼儀は完璧に近いというべきものであり、先輩たちを驚かせていた。それを見た先輩の一人がわざとらしく咳払いをすると、我に返るような形で視線を戻した。

真由美に近い順で悠元、深雪、達也の順に座る。この部屋には配膳機（ダイニングサーバ）も置かれていて、わざわざ食堂へ行く手間もないあたりは国策の教育機関というべきだろう。改めて1年組である三人が挨拶をすると、先輩たちの表情が変わる。正確には悠元の名字に反応した形だが。

それを見た悠元が改めて頭を下げた。

「うちの姉達がご迷惑をかけたようで、申し訳ないです」

「え、あ、うん……まあ、悠君は大丈夫だろうって信じてるから」

「信用されていないようにしか聞こえませんが……」

それを誤魔化す形で真由美が自分以外の生徒会メンバーの紹介を始める。

「それはともかく、悠君は顔合わせで、深雪さんは入学式で紹介したとは思うけど念のため……私の隣にいるのが会計の市原鈴音（いちはらすずね）。通称リンちゃん」

「同級生でそう呼ぶのは会長だけです」

「その渾名をつけたのは美嘉姉さんですね」

「正解です。色々破天荒でしたが、何かと退屈しない人でしたね」

鈴音は美嘉のことを淡々と評価していたが、それでも悪い人ではな

かったというのは本当だろう。風紀委員長の摩利のことはサラッと紹介して書記の子を紹介する。
「その隣が昨日会った風紀委員長の渡辺摩利。で、更に隣にいるのが書記の中条(なかじょう)あずさ。通称あーちゃん」
「会長！　下級生の前でその呼び名はやめてください！　私にも立場というものがあるんです！」
「……ああ、どこかで見たと思えば、前に佳奈姉さんや美嘉姉さんが家に連れてきてた人か。あの時は忙しかったから挨拶できなかったけど」
　悠元は直接の面識を持っていなかったが、佳奈や美嘉が気に入って家に半ば拉致られてきたことがあるのを覚えている。悠元の言葉に周囲の視線はあずさに向けられ、それに気づいたあずさは思わず身構えた。
「そういえば、中条さんはよく前会長に連れまわされていましたね」
「えっと、ごめんなさい」
「い、いえ、大丈夫ですから！　佳奈先輩や美嘉先輩には色々お世話になりましたから！」
　結局なんだかんだ言って「あーちゃん」という言葉をスルーした形となった。そして、生徒会はここにいない副会長の「はんぞーくん」を含めた四人ということになる。
　ともあれ、昼食となるわけだが、ダイニングサーバから出てきたのは四人分。摩利は自分の弁当を持ってきているので五人。残る二人の片割れである悠元は「新手のいじめか？」と思ったのだが、真由美は満面の笑顔で大きい包みをテーブルに乗せた。大きさが明らかにお重とかのレベルである。
「えっと、それは？」
「ふふ、私と悠君のための手作り弁当ですよ。遠慮せずにどうぞ」
　何しちゃってるんですかねえ、この人。アンタ婚約者いるでしょうに。こちとら五輪家と個人的に関わり持っているせいで知ってるんだよ。まあ、昼飯抜きは流石に嫌だから食べますけどね……深雪さん、笑顔なんだけど怖いです。弁当も一部凍り付いてるし。

「悠元さん、明日から私がお弁当をお作りいたしますね」
「いいのか？　……まあ、無理のない範囲で構わないからな」
「はい！」
　これでよかったのかなと達也を見ると、達也は何も言わずに軽く頷いた。弁当も元に戻ったので一安心である。すると、悠元は同じく手作り弁当を持参している摩利に視線を向けた。それに気付いた摩利は笑みを零していた。
「どうした、悠元君。手作り弁当は意外だったか？」
「いえ。渡辺先輩の彼氏さんに入れ知恵した甲斐があったなと思っただけですよ」
「なっ……あんなこと言うとは珍しいと思ったが、悠元君の仕業だったわけか」
「三矢の家としてはどちらも関係のある立場ですから。先輩のご実家とはうちの長兄絡みで縁がありますので」
　悠元からすれば、幼馴染と上泉家の絡みで摩利の彼氏の実家である千葉家と面識があり、長兄の婚約者が養子縁組した家こそ渡辺家である。つまり悠元と摩利は義理の親戚関係ということになるわけだ。
　まあ、摩利の指には絆創膏がいくつかあり、料理の腕は推して知るべしといったところである。
「悠元さんは本当に顔が広いんですね」
「要らぬ面倒も増えたけどね。一時期ロリコン疑惑掛けられたときは将輝（まさき）と真紅郎（しんくろう）を締め上げたけど」
　昔、パーティーの関係で一条家（いちじょうけ）に出向いたことがあった。一条家の長女に告白されるところを目撃した一条家の長男が『お前、そういう趣味が』とのたまったので、近くにいたショタ野郎とまとめて関節技を掛けて気絶させた。
　流石に怒られるだろうと思って謝ったが、こればかりは息子達の責任だと父親こと一条家現当主ともう一人のほうの両親に謝られた。
　それを見た一条家の長女は『お兄様と呼ばせてもらってもいいですか？』という言葉を言いながら眼をキラキラさせていた。これには断り切れずにその提案を呑んだ。

「悠君、それって一条家の将輝君よね？」
「ええ。優柔不断で初心なヘタレです」
「容赦がないな、悠元。相手は十師族の人間なのに」
引き攣った笑みを見せる真由美に対して、弁当を食べつつ答える悠元に達也は溜息でも出そうな表情で呟いた。既に卒業した悠元の姉達も大概だが、悠元もその例に漏れないほどの行動力があるのは間違いないと感じていた。
「というか、相手は『クリムゾン・プリンス』とも謳われる実戦経験済みの魔法師よ？」
「それは評価できますが、異性に対しての接し方を自分にばかり聞いてくるのは如何なものかと……自分でも不得意なことぐらいありますから」
「それで、その辛口評価というわけか……」
将輝もそうだが、「カーディナル・ジョージ」についても同様の相談を持ち込んでいた。それも結構な頻度で。これで恋愛相談を持ちかけようものなら「親に聞け」と丸投げしていただろう。
そもそも、実戦経験という意味ならば悠元だけでなく達也にも該当しうる話だが、下手に言ったところで真由美経由で七草家の耳に入るのは宜しくないと判断した。

◇　◇　◇

昼食を終えたところで真由美は本題を切り出した。
「当校の生徒会長は全校生徒の選挙によって選出されます。ですが、それ以外の役員は会長に選任・解任の権限が委ねられています」
良く言えば、学生の自主性を尊重する――悪く言ってしまえば、学校側としてフォローしきれないから丸投げしているようなものだ。この学校においては生徒会と風紀委員にＣＡＤの校内所持権限が与えられるため、生徒会は生徒会長に権限があり、風紀委員会は生徒会・部活連（全部活動の統括組織）・そして教職員推薦による選出方法がとられ、委員長はその内部選挙で選出されている。
「それで、これは毎年恒例とも言いますが……新入生総代を務めた１年生には生徒会役員になってもらっています。本来なら悠君――

コホン、悠元君だけなのですが、答辞の代理を務めた深雪さんの二人に声を掛けたというわけです」
確かに道理が通るだろう。すると、深雪が立ち上がって『それならば……』ということで達也の生徒会入りを懇願した。だが、それは生徒会規約において出来ないルールとなっている。生徒会を構成するメンバーは『一科生だけ』ということを鈴音から言われ、それならば仕方ないと深雪は諦めた。それを見届けた上で、悠元は立ち上がった。
「自分は特に異存はありません。生徒会の件、お引き受けいたします」
「悠元さん……先程は差し出がましいことをしました。改めて、よろしくお願いします」
特に入りたい部活動を決めているわけでもなかったし、それならばという気持ちもあった。あとは、ここで入らないと真由美あたりが騒ぎ立てそうだったのでおとなしく引き受けることにした。これに深雪が続いたのは少々予想外であったが。返事を終えて着席すると、摩利は何かを思い出したように手を挙げた。
「真由美、そういえば風紀委員の生徒会選任枠なんだが……」
「摩利、そのことは今選定中だって……」
「確か、風紀委員には一科生だけという制約は廃止されたはずだったと記憶しているんだが……」
その言葉に悠元は思い当たる節があった。その制約を廃止したのは二代前の生徒会長の時――悠元の姉である佳奈が生徒会長を辞する際の公約として掲げていたもので、二科生の殆どに加えて一科生の半数以上を味方につけた形で可決された。しかし、その実力に見合うだけの者がおらずに放置されたままであった。
すると、摩利の言葉を聞いた真由美は何かを思いついたように立ち上がった。
「ナイスよ、摩利！　生徒会は、風紀委員に司波達也君を指名します」
「ちょっと待ってください！　俺の意思はどうなるんですか！　大体、風紀委員が何をする仕事かも聞かされていないんですよ」
達也の気持ちもわかるが、それを言ったら生徒会の仕事の内容を聞

いていない悠元と深雪はどう解釈すればいいのだろう。深雪は兄が風紀委員に選ばれたことを喜んでいる。だが、このままでは達也が納得しないだろうと思い、説明を始める。
「風紀委員の仕事は魔法使用に関する校則違反者の摘発、および魔法を使用した騒乱行為の摘発。風紀委員長はこれに罰則の決定と、生徒会長と共に懲罰委員会に出席し、意見陳述を行う――――間違いないですか？」
「え？　ええ……悠君、よく知ってるわね」
「風紀委員長やってた姉がいましたし、オリエンテーションを担当してくれた教員からも聞きました。『懲罰委員会の歴代最高出席数』なんて聞いた時は盛大な溜息が出ましたけど」
兄はともかくとして姉達は本当に話題に事欠かない。
詩鶴の場合は2年の時の生徒会選挙で暴動が起き、副会長だった彼女が生徒会長になって副会長に親友を選出した。
佳奈の場合は2年の生徒会選挙の時、滅多に開くことのない〝眼〟で騒ぎ立てる生徒を黙らせた。
美嘉は1年生ながら風紀委員長となり、2年には生徒会長になるという大転身を見せた。
姉達は見事に全員生徒会長となっている。なお、元治は生徒会副会長、元継は生徒会長は柄じゃないと部活動会頭を務めていたとのこと……ほぼ全員生徒会関係者という有様だった。
「先程の説明ですと、喧嘩が起こったら力づくで止めなければならない、ということですか？」
「まあ、そうだな。魔法の使用の有無は関係ない」
「そして、魔法が使用されたらそれを止めなければならない」
「できれば、発動する前に止めるのが望ましい」
「あのですね、俺は実技の成績が低かったから二科生なのですが！」
話を聞く限りでは実力を行使して、相手を鎮圧する組織。魔法力が劣る二科生に務まるものではないという達也の言い分も理解できる……ただし、選出されたのがごく一般的な二科生であれば、の話だ。
一方の摩利は涼しげな表情を浮かべていた。なので、悠元は摩利に問

いかけた。
「渡辺先輩。いえ、渡辺委員長。昼休みも終わってしまうので問いかけだけになりますが、本来の風紀委員の任務だけを考えれば達也の言い分も正論です。この学校の魔法力評価でいえば二科生は一科生に劣るのは事実……なら、委員長は魔法力以外の部分で達也に何を期待しているのですか？」
「ふむ……おっと、予鈴が鳴ったな。悠元君、質問の答えは放課後で構わないか？」
「ええ。それで構いません」
　悠元としても摩利の考えは理解している。まあ、原作知識も含んだ上でのことだ。真由美の考えは自分にもわからないが、摩利を信頼しているということなのかもしれない。
　予鈴が鳴って午後の魔法実技見学のために移動している途中、深雪が尋ねてきた。
「悠元さん、渡辺先輩にどうしてあのような質問を？」
「達也は自分を過小評価しすぎるからな。悪く言えば逃げ道を塞いでるだけだが……その意味で、後押しをしようと思ってな。それに、極論ではあるけど、魔法を使わずに魔法を使った相手を取り押さえることも可能ではあるんだよ」
「そんなことが可能なのですか？」
「魔法系統にもよるが、それを実行したのがうちの美嘉姉さんだ」
　相手が魔法を使う際には、場合によって相手を認識しなければならない。なら、相手が認識できない範囲から取り押さえるのは被害を抑える意味でかなりベターともいえる。言うのは簡単だが実行するのが難しい……その意味で美嘉は『相手の知覚範囲を瞬時に見極める』ことに特化している。
　達也の場合、そんなことをしなくても体術だけで事足りる。むしろ彼に体術で勝てるレベルの人間など恐らく数えた方が早いだろう。
「まあ、何にせよ続きは放課後だな」
「そうですね」
◇　◇　◇

放課後、深雪と一緒に生徒会長から渡された許可証を提出してＣＡＤを受け取り、待っていた達也と一緒に生徒会室へと向かう。だが、達也の表情は一向に晴れない。本人としては気の進まないことだろうが、それだけではないだろうと問いかけてみた。
「どうしたんだ、達也。ただ面倒というわけでもないみたいだが」
「クラスメイトから激励されてな。自分としては気が滅入るというか……賛成も反対もしないんだな」
昼休み、摩利に質問をしたことからしても理由を尋ねただけで、それに対してどうするのかを口に出さなかった。達也に問いかけに対して悠元はあっさりとした感じで答えた。
「どう言ったって決めるのは達也だ。俺に決定権なんてないよ。まあ、どこかの誰かさんは達也がそうなってくれることを望んでいるみたいだけど」
「それはどなたの事でしょうか、悠元さん？」
「さあ？　俺には見当が付かないね」
まるで軽口を叩きあうかのような悠元と深雪だが、内心では達也が風紀委員になってくれることを望んでいるのだろう。この二人に結託されたら成す術もないな、と達也は思った。

『実力』の相違

昼間と違い、ＩＤカードによる認証システムの登録（達也は真由美と摩利に押し切られた）が済んでいるため、そのまま中に入る。

「……」

すると、達也を真っ先に出迎えたのは明確な敵意を含む視線であった。その発生源は昼間真由美が座っていた席の後ろ――――達也と身長は同じぐらいだが、やや細身ぐらいの男子生徒。

無論、その視線は悠元も気付いているが、なんとなく理由も察せるために気付かない振りをした。その人が真由美の言っていた副会長の「はんぞーくん」だということは理解していたからだ。

「失礼します」

すると、彼の視線は悠元と深雪に移っていた。まるで達也のことなど気にも留めないように……その証明として彼は三人に近づいてくるが、達也の横を平然と通り過ぎて、自己紹介をする。

「副会長の服部刑部（はっとりぎょうぶ）です。司波深雪さん……三矢悠元君。生徒会にようこそ」

その自己紹介の合間に謎の空白が生まれていたことからまた『姉絡み』だと悠元は察したが、そんなことを口に出すことなく「よろしくお願いします」と頭を下げた。そして達也に対してまたもや無視という形に深雪は不満げだったため、悠元が肩を指でトントンと軽く触れつつ視線を送った。深雪も察してくれたようで、気持ちを落ち着けていた。

まあ、こんな空気を作った張本人たちは呑気に挨拶をしてくるわけだが。

「いらっしゃい、悠君に深雪さん。達也君もご苦労様」

そういう風に話しかけてくるのを見て、服部の視線がこちらを向いていることに気付くが、こちらとしては別に敵対するわけでもないので気が付かない振りでもすることにした。そんな態度ではどう見ても真由美に気がある、と言わんばかりでバレバレである。別に教えてやる気にもならないので、無視一択である。

「早速だけど、あーちゃんお願いね」
「あ、はい！」
　真由美に渾名呼びは止めさせられないという諦めも含んでいるのかもしれないが、作業していたあずさは手を止めて立ち上がった。そして、摩利は達也を呼んで風紀委員会室に案内しようとした。実際に見てもらった方が早いという摩利の考えなのだろう。そんな流れを躊躇いなく切ったのは副会長の服部だった。
「渡辺委員長」
「何だ？　服部刑部少丞範蔵副会長？」
「フルネームで呼ばないでください！」
　服部家。百家支流の一つで、［忍術］の名門・服部家とは同姓だが無関係である。摩利の言葉に恥ずかしいと言わんばかりの口調で反論する服部。だが、摩利はそんなこともお構いなしに捲し立てる。
「じゃあ服部範蔵副会長」
「服部刑部です！」
「そりゃお前の名前じゃなくて官職だろ、お前の家の」
「今は官位なんてありません！　学校には服部刑部でちゃんと届けています！　……って、そんなことが言いたいのではありません」
　完全に弄ばれている服部に真由美は顔を背けて笑いを堪えている。こんな状況を作った張本人だというのに、少しも悪びれないのはどうかと思いつつ二人のやり取りを聞きながらあずさの説明を聞き続ける。何が聞きたいんだと問いかける摩利に対し、服部は達也を睨むように見た後、摩利に視線を戻しつつ発言した。
「その一年を風紀委員に任命するのは反対です。過去、二科生を風紀委員に任命した例はありません」
　生徒会の一員だというのに禁止用語を口にした服部に対し、摩利は毅然と対応する。
「いい度胸だな、服部。生徒会の一員でもあるお前が、委員長である私の前で禁止用語を口にするとは」
「取り繕っても仕方がないでしょう。それとも、全校生徒の３分の１以上を摘発するつもりですか？　そんなこと出来るわけがありませ

んよ」
　摩利の言葉に対しても怯まない様子の服部。ざっと数えて２００人以上――――そんなのは無理だという服部に摩利は悠元に問いかけた。
「悠元君、服部はこう言っているが……君の姉――――先代会長はどうだったか聞いているか？」
「佳奈姉さんから聞いた話だと、禁止用語によるトラブルで全一科生の約６割、全二科生の約１割を１年半で検挙してるそうで。人数換算で３分の１は超えますね」
「なっ!?　そんなことありえるわけが――――」
「何でしたら風紀委員会本部にある記録を見れば解るかと思われます。本人が面倒だけど事細かく記載した、と言っていましたので」
　そう言い放ちつつ、悠元はあずさの説明を聞くことに戻る。まるで現実離れした内容に動揺を隠せない服部だが、それでも達也を風紀委員に――――厳密には二科生を風紀委員にするのは納得できないということを主張した。
「風紀委員は実力で違反者や騒乱行為を取り締まる役職です。実力で劣る二科生（ウィード）には務まらない」
「確かにその通りだが、実力にも色々あってな。達也君には発動された起動式を正確に読み取る眼と頭脳がある」
「そんな馬鹿な。単一工程の起動式でもアルファベット３万文字相当になる。そんなこと出来るはずがない！」
　服部の常識からすればそうなのだろう。だが、それを可能とするだけの実力を達也は持っている。その意味で摩利の見抜いた資質は間違いではない。起動式を素早く正確に読み取ることができれば、今まで罪状が分からずに軽い罪で済んでいた未遂犯への抑止力にもなると摩利は述べつつ、達也を風紀委員に推薦する理由を説明する。
「それに、私が彼を欲する理由は彼が『二科生だから』という理由だ。今まで風紀委員は一科生のみで構成されており、一科生が二科生を取り締まる構図はあってもその逆は存在しなかった。その状態が一科生と二科生の溝を助長するようなことは私の望むところではない

……これは悠元君に対する答えでもある。これでもまだ申し開きはあるか？　服部副会長」
「っ……会長。自分は副会長として司波達也の風紀委員就任に反対します。魔法力の劣る二科生に風紀委員は務まりません!!」
……完全に意固地というか、屁理屈というか、駄々をこねてるようにしか見えんな、と思う。
服部の述べていることは『魔法力』による実力で風紀委員を決めるべきという主張。一方の摩利は『分析力』による実力で、取り締まる側の差別助長を取り除く方向に持っていこうとしている。こうやって並べると服部の主張は差別を無視してもよいと言うようなものばかりだ。
すると、ここで声を上げたのは深雪だった。やはり達也のことを貶されて黙っていられなかったのだろう。
「待ってください！　兄は確かに魔法実技の成績が芳しくありません。ですが、それは評価方法に兄の力が適合していないだけなのです！　実戦なら、兄は悠元さんと互角に戦えます！」
すっごく大きく持ち上げられてる気がする。いや、この場合は達也がだな。現に達也は「俺が悠元と？」と言わんばかりの顔をしている。確かに達也の『あの力』を使ったら互角になるんだろうが……世界が滅ぶよ？　本当に冗談抜きで。深雪さん、お願いだから言葉を選んでください。
きっと、この時ばかりは達也も同意見だろうと思う。
「司波さん。魔法師は事象をあるがままに、冷静に、論理的に認識できなければなりません。不可能を可能とする力を持つが故に、社会の公益に奉仕する者として、自らを厳しく律することが求められています。魔法師を目指すものは、身贔屓に目を曇らせてはいけません」
「身贔屓などでは――」
服部の言葉に対して内心「お前がそれを言うか」と思いつつ、ヒートアップする深雪を止める。これには少し意外だったと言いたげな達也を見てから、深雪に視線を向けた。
「深雪、少し落ち着こう」

「悠元さん、ですが」
「この状況で深雪がどうこう言っても身贔屓で片づけられるだろう？　なら、選手交代ってことで」
　こんな役割などしたくもなかったが、この雰囲気を変えるとするなら自分が出るしかないかなと思う。このまま達也が出てもいいんだろうけど、それでお互いの居心地を悪くするのもよくないと思った……変に苦労性かもしれないな、俺も。
　そう思いながら深雪の前に出て言葉を発する。
「服部副会長。先程貴方は『魔法師は事象をあるがままに、冷静に、論理的に認識できなければならない。そして、自らを厳しく律することが求められている』と仰った。それは先ほど達也の風紀委員推薦に関する渡辺委員長と七草会長に対する言動と態度からして、ご自分にも言えることではありませんか？」
「っ!?　お前も、司波達也の風紀委員就任を支持するというのか？」
　完全に面を食らったような服部に対し、冷め切ったような表情で悠元は言葉をつづける。
「ええ。確かに、魔法力という観点なら服部副会長の言う通り二科生は一科生に劣ります。ですが、魔法師の実力は必ずしも魔法力とイコールで結びつかないもの……とはいっても、納得できないかと思われます。現に会話が平行線ですからね」
　第一高校における魔法力の評価方法と照らし合わせた場合、達也の評価は間違いなく二科生レベルになってしまう。それ自体を別に否定するつもりはないし、達也本人もそれを不服とせずに認めている。深雪としては不服かも知れないが、こればかりは学校のシステム自体の問題なのだ。
　評価方法も問題だが、達也自身が持つ魔法も厄介だし、何より彼の出自が特級クラスの爆弾なのだ。これらの事実を知るのは、この学校に限定しても当人を除けば深雪と悠元しかいない。学校ですら全てを把握していない彼を評価など出来る筈がない。
　話を戻すが、この学校の評価基準だけで反対している服部に対し、学校での評価だけでなく先日の騒動を見た上での期待を込めた真由

美と摩利の推薦。恐らくだが、先日横浜で起きた魔法師による騒ぎの当事者であることも想像がついているのだろう。
　彼女らからすれば、相手が軍人魔法師でも素手で取り押さえた（実際には魔法を行使しているだろうが）達也ならば、魔法科高校レベルの生徒を取り締まれると睨んだ。だからこその風紀委員推薦でもあったわけだ。
「なら、七草会長と渡辺委員長が推薦している真意を測る意味でも実際に戦ってみればいいかと。服部副会長と達也で模擬戦をされては如何ですか？　」
「三矢……本気で言っているのか、お前は？」
「至って本気ですが？　このままズルズルと引き摺って遺恨を残すよりは建設的な提案をしているつもりです。というわけで、どうだろう達也？」
　明らかに睨み付けるような表情の服部に対し、悠元はその様子に臆することなく達也の方を向いてそう言い放った。ここから先は自分の出番だと察するように達也は悠元の横を通り過ぎ、窓際で服部と相対する。
「服部副会長、模擬戦をしましょう。別に風紀委員になりたいわけではありませんが、妹と親友の目が曇っていないことを証明しなければなりませんので」
「……いいだろう。身の程を弁えることの重要性を、たっぷりと教えてやる」
◇　◇　◇
　そして、真由美と摩利の宣言によって二人の模擬戦が原則非公開の正式な試合として組まれる形となった。場所は第三演習室にて、開始時間は３０分後。達也がＣＡＤを取りに行く前、悠元は達也に近づいてバツが悪そうな顔をしていた。
「申し訳ないな、達也。お前に要らぬ苦労を強いてしまって」
「いや、此方こそ助かった。お前の言う通り、あのままだと話が拗れたままで遺恨を残しかねなかったのは事実だろう。だが、お前が深雪の代わりに怒ってくれるとはな」

達也としては深雪の代わりを引き受けたことに驚きはあった。でも、深雪があのまま怒り続けても身贔屓だと片づけられていたことは確かであり、その意味で感謝しているような台詞を述べた。それを聞いて悠元は頭をガシガシと掻く。照れてるような様子に深雪も笑みを浮かべていた。

「怒ったというよりも一周回って冷静になっただけだよ……絶対に勝てよ。お前ならできる」

「ああ」

達也と深雪がＣＡＤを取りに行くのを見送り、悠元は二人より一足先に第三演習室へと向かった。演習室には既にやる気十分といった服部に、審判役となる摩利、彼女の後ろに真由美、鈴音、あずさの姿があった。戦いの邪魔にならないよう軽く頭を下げたのち、真由美たちに近づく。

「先程はすみませんでした。出過ぎた真似をして」

「いえ、こうなるのではと思っていましたので。三矢君……その、彼は強いんですか？」

「悠元で構いません……まあ、強いですよ。世辞抜きに」

悠元の謝罪を受け取りつつ、鈴音が名字を呼ぶことに慣れていない様子だったので、その辺を断りつつ悠元は話す。ただ、強いという言葉で片づける方が失礼だと思いつつ、悠元は息を吐いた。すると、真由美は悠元に問いかけた。

「言っておくけど、はんぞーくんは強いわよ？　魔法科高校の正式な試合なら負けなしよ？」

「でしょうね。それは彼の立ち振る舞いから解りますよ……ただ」

「ただ？」

「確かに一科生と二科生では魔法の発動速度に差が出ます。でも、実際の立ち合いでその場を動かずに勝負が決まるなんてごく稀です。それこそお互いに魔法を撃ち合うものでもない限り、あり得ないでしょう」

今回の試合ではその場を動いてはいけないというルールなどないし、移動エリアの制限もない。演習室内のみに限定されるが、それを

差し引いても、動かずに勝負が決まるとは思えない。恐らく服部は発動速度の優位性を生かして速攻を掛けるつもりだろう。だが、それが通じるのは〝平均的な二科生〟の場合だ。
「なら、どうやって勝つというの？」
「簡単ですよ。『相手より先に魔法を命中させればいい』んです」
「えっと、どういうことなんです？」
「それは、魔法の発動速度という意味なのでは？」
魔法を発動させる速度からいえば服部に軍配が上がる。だが、それはお互いが知覚出来る射線上にいることが前提となる。なら、もし服部が知覚できる範囲に達也がいなかった場合、どうなるか……疑問符を浮かべる三人に対し、この勝負はもはや〝茶番〟だと思っていたところに扉が開き、達也と深雪が姿を見せる。
達也は手に持っていたケースを隅のデスクに置き、ケースを開けて銃形状特化型ＣＡＤ一丁にストレージをセットして構える。動作は問題ないと判断して、右手に持ったまま模擬戦の初期位置に付いた。深雪は観戦するために腰を下ろしている悠元の傍に立った。
「先輩方と随分と仲が宜しいんですね？」
「言葉に棘が見えますけど？」
笑顔なのに言っていることが怒っているようにも聞こえ、悠元は肩を竦めつつ呟くと、悪戯っ子のような笑みを零しつつ、二人の戦いを観戦する。
「ふふ、それはどうでしょう……悠元さんは、お兄様がどうやって勝つと思われます？」
「あのストレージ、振動系統のやつだな。そうなると……まあ、三発撃ち込んで終了、だな」
二人からすればこの勝負自体、達也が勝つことを疑っていなかった。何せ達也の本来得意とする魔法が使えなくとも、達也の創意工夫や体術は既に高校生レベルでないことを知っているからに他ならない。
決して服部が弱いとは言っていない。だが、達也がこの学校において〝二科生〟という評価を下されたという意味を理解していない。

ならば、服部が勝つ確率はほぼ皆無だった。
そして、摩利のルール説明ののち、試合開始の声が響く。
服部はすばやくＣＡＤを発動させる――移動系統の術式を達也の足元に発動させて吹き飛ばそうと目論む。
だが、次の瞬間に服部は達也の姿が目の前から消えたことに驚く間もなく、体が突然揺さぶられるような感覚ののち、意識を失った。
その達也はといえば、右手に持ったＣＡＤを構えた状態で服部の背後にいた。
「……っ！　勝者、司波達也！」
摩利は一瞬の出来事に呆然とするが、立っている達也と床に伏せている服部を見て、試合終了の宣言をする。
何が起こったのか理解できない真由美、鈴音とあずさ。
兄が勝ったことに喜ぶ深雪。
悠元も同じく達也が勝った事を喜ぶように笑みを零した。

悠元の規格外さ

司波達也と生徒会副会長である服部刑部の模擬戦。
服部を壁際に寄せつつ、あまりにも一瞬すぎる決着に理解が追い付いていない先輩たちを他所に、ＣＡＤを片づけようとする達也を摩利が呼び止めた。
「待て。先程のあれは自己加速術式を予め展開していたのか？」
あれ、というのは達也が試合開始直後に見せた高速移動だ。だが、そのような素振りや発動した形跡がないことは摩利も認識していた。そうなれば隠蔽した加速術式なのかと考える摩利に対し、達也は否定するように説明した。
「いえ、あれは身体的な技術です。それは悠元が証明してくれます」
「達也が移動する際、達也の想子に揺らぎはなかった。なので、達也が言っていることは事実ですよ」
「兄は忍術使い――――九重八雲先生の指導を受けているんです」
「『あの』九重先生の!?」
深雪の言葉に一番反応したのは摩利だった。確かに自分以外でそういった武術を本格的に習っているのは彼女だろう。すると、達也が悠元に説明を促してきた。
「さて、悠元。全部〝視えて〟いたんだから、先輩たちにも分かるように解説してくれ」
「そこで丸投げとは、兄妹そろって意地悪なことで……」
達也の言葉で周囲の視線が悠元に向けられたため、諦めたように達也の一連の行動を解説する。
「試合開始直後、体術による高速移動で副会長の背後に回り、副会長で丁度重なるように多変数化させた振動系・基礎単一工程術式の三連射。副会長は想子の波の合成で外部から強烈な想子を感知したと錯覚、激しい船酔いのような症状に晒された。そこに達也の高速移動による圧縮された空気が飛んできて気絶……さて、採点は？」
「合格だな。文句なしの満点だ」
「それはよかった。赤点だったら同一の魔法が飛んできそうだ」

サラッと説明した悠元の言葉を聞いて納得するように述べた達也に、悠元は苦笑交じりに冗談を零した。深雪は悠元が達也の行動を当てたことを得意げな表情を見せていた。すると、そこで真由美が悠元に問いかけてきた。

「ちょ、ちょっと待って!? 同一魔法の三連射って言わなかった!?」

「それほどの処理速度があるのなら、実技の点数が低いということはないはずですが……」

「あー、それができるのは達也の使っているＣＡＤが理由です」

真由美に続いて鈴音の疑問に答えるように悠元が述べる。すると、いつの間にかあずさが達也の持つＣＡＤを覗き込んでいた。ああ、そういえばデバイスオタクだったな、と原作での知識を思い出しつつその様子を見た。

「あのー……ひょっとして、司波君の持っているＣＡＤってシルバー・ホーンじゃありませんか？」

「シルバー？ それって、あの天才魔工技師であるトーラス・シルバーのシルバー？」

真由美の問いかけにあずさがすっごくキラキラした表情で説明しつつ、達也のＣＡＤをまるで拝み倒すと言わんばかりに眺めていた。

「そうです！ ＦＬＴ専属で姿、本名、プロフィールなどが一切の謎に包まれた奇跡のＣＡＤエンジニア！ 世界で初めてループ・キャスト・システムを実現した天才プログラマー！ シルバー・ホーンというのは、トーラス・シルバーがフルカスタマイズした特化型ＣＡＤのモデル名で、ループ・キャスト・システムに最適化されているんです！」

……これだけ長い台詞を噛まずによく言えたと思う。普段は大人しいのに、興味のあることだと饒舌になるってタイプは……ああ、うちにも心当たりがあった。佳奈である。

あの人もＣＡＤになると眼の色を変えるからな。ＣＡＤじゃないけど『サード・アイ・ゼロ』を見たときなんかめっちゃ興奮してたからな。分解させて？ とか言われたときは全力で断ったけど。父以外の家族に言わなかったのは佳奈のことがあったからだ。

「でもリンちゃん。それだとおかしくない？」
「ええ。ループ・キャスト・システムは全く同一の魔法を連射するための……悠元君、説明した時に多変数化と言っていませんでしたか？」
「確かに言いました。具体的には座標・強度・持続時間・振動数の変数化ですね。尤も、この学校の魔法力評価では評価対象になりませんが」
「お見事だな、悠元。解説者に向いてるんじゃないのか？」
「褒められてる気がしねえわ……俺はスローモーションカメラじゃないんだぞ」
　真由美と鈴音の疑問に悠元が答えると、流石と言わんばかりの言葉を向ける達也に悠元は頭を抱えたくなる。深雪に至ってはそんな二人のやり取りを微笑ましく見ていた。すると、意識が回復しつつもよろめいている服部に一同の視線が向けられた。
「……実技試験の評価は、魔法の展開する速度、魔法式の規模、対象物の情報を書き換える強度で決まる。成程、テストが本当の結果を示していないとはこういうことか」
「はんぞーくん、大丈夫ですか？」
「だ、大丈夫です！」
　傍から見れば会長にいいところを見せようとして無理をしている服部の図にしか見えない。それはそうと服部は思い出したように、深雪と悠元に近づいた。
「司波さん、それに三矢。眼が曇っていたのは僕の方だった。許してほしい」
「いえ、私こそ生意気を申しました。お許しください」
「自分の方こそ、申し訳ありませんでした」
　服部と深雪、そして悠元はお互いに謝罪をした。ただ、服部は達也に対して謝罪をすることはなかったが、実力を示した以上は異論など出るはずもない。
　これで模擬戦も終わると思ったところで、演習室に一人の予期せぬ人物が舞い込んだ。
「――どうやら、既に決着はついたようだな」

「なっ……!?」
「十文字君!?」
その人物に一同が驚きを隠せない。何せ、この学校の部活動会頭を務めるだけでなく、既に魔法師社会の最前線で活動している人物――――十文字家次期当主にして当主代行、十文字克人が姿を見せた。克人は周囲の状況を見た上で服部と達也が模擬戦をしたと理解し、服部に声をかけた。
「服部、負けたようだな。その理由も、お前なら言わずとも理解している筈だ」
「っ……はい」
「なら、次に生かせ。胡坐など掻いていたら、また足元を掬われるぞ」
服部は克人の言葉を飲み込みつつその場を去ろうと思ったが、克人は服部の肩に手を置いた。まるで『見ていろ』と言わんばかりの視線を感じ、服部は立ち止まった。それを確認した上で摩利と真由美に近づいた。
「十文字君、この戦いは非公開なんだけど……一体誰から聞いたの?」
「別件でお前たちに用があったんだが、生徒会室に誰もいなかったのでな。そうしたら第三演習室が使用中だと聞き、もしかしてと思ったら当たったというだけの話だ」
真由美の問いかけに答えつつも、克人の視線は周囲に向けられた。そして、悠元の姿を捉えると彼の前に立った。体格もさることながら、その存在感はまさに〝厳〟と表現するのは過大などと言えるものではなかった。
「三矢。お前に模擬戦を申し込む」
「十文字君!?」
「それは構いませんが……理由をお尋ねしてもよろしいですか、十文字先輩?」
克人の言葉に真由美は驚く。三矢と十文字――――双方共に十師族の人間。その実力をぶつけ合いたいという意図も理解できるが、ここで模擬戦を申し込む理由を悠元は尋ねる。すると、克人は真剣な表情を浮かべつつその理由を述べた。

「一昨年前、俺は非公式にお前の姉である佳奈殿に挑んだ。立会人は当時風紀委員長だった美嘉殿だ。結果は……ファランクスを破壊され、俺が膝をついた。再戦を希望した俺に佳奈殿はこう言った。『私のあれは子供騙しみたいなもの。それより、私の弟の方がもっと強い』とな」

何言ってるんですかねえ、うちの姉は……あれを子供騙しと片付けていいのかは疑問に残るし。けど、そもそも自分以外だと佳奈しかできないのは確かである。だってあれ、最低でもスピードローダー前提の上で『エレメンタル・サイト』クラスの眼を持ってないとできない芸当だし。

「尤もらしいことを言ったが、お前個人にも興味があった……この申し出、受けてくれるか？」

「ええ――――僭越ながらその勝負、受けて立ちます」

でも、十文字克人の『ファランクス』と一度戦いたいと思っていたのは事実。それが通じるか否かの勝負――――3年生最強の一角と1年生新入生総代の戦い。そこに摩利が問いかけてきた。

「それはいいんだが、演習室の申請は大丈夫なのか？」

「問題ない。それも見越して1時間は延長するように追加申請しておいた。三矢、ＣＡＤの準備が必要なら待つが？」

「いえ、問題ありません」

悠元はそう言って上着に隠したホルスターから『ワルキューレ』を抜く。その銃形状ＣＡＤに一同は眼を見開く形となった。何せ、銃形状に加えてカートリッジ型ストレージタイプなのは理解したが、ＣＡＤに施された装飾はどのメーカーにも存在しないものであることは明白だった。

悠元は左手に『ワルキューレ』を持って初期位置に着いた。それを見た克人も相対する形で位置に着く。審判は成り行きで引き続き摩利が行うことになった。

「――――直接攻撃、間接攻撃を問わず相手を死に至らしめる術式、回復不能に陥らせる術式は禁止。相手に捻挫以上の損傷を与えない直接攻撃は許可する。武器の使用は禁止。素手による攻撃は許可する」

摩利が説明をしている間、ＣＡＤを片付け終えてケースを持つ達也は深雪の横に立った。深雪は小声で兄を労った。
「お疲れ様です、お兄様」
「なに、大したことじゃないさ……悠元に比べればな」
「やはり、十文字先輩の『ファランクス』が気になります？」
「そうだな。それ以上に十文字会頭を破った悠元の姉も気になるが」
〝鉄壁〟と謳われた十師族の一角を担う十文字家の秘術こと『ファランクス』。達也の見立てでは、自身が得意とする『分解』でも克人の『ファランクス』を破るには届かないと感じている。だからこそ、それを承知の上で勝負を受けた悠元がどんな手段をもってそれを攻略するのか興味があった。
それに、あのＣＡＤ――『ワルキューレ』にも興味があった。自分が組んだプログラムなのだから高性能なのは言うまでもないが、あれに搭載されたハードウェア部分の機構については完全なブラックボックスに近い。
達也たちが見守る中、克人は神経を尖らせる。悠元も『ワルキューレ』を握る手に力が入る。
その静寂が最高潮に達した瞬間、摩利の合図が響き渡る。
「始め！」
開始直後、克人が展開するのは当然『ファランクス』――全系統全種類の障壁魔法と対抗魔法を絶え間なく展開し続け、圧倒的な防御力と物理攻撃力を誇る攻防一体の魔法。これには真由美も驚きを隠せなかった。
「いきなり『ファランクス』を!?」
「あの構えは…!?」
克人はそのファランクスを前方に展開したまま、悠元に向かって突撃する。明らかにタックルで相手を気絶させようという魂胆なのは誰の目から見てもすぐに理解できた。だが、悠元はその突撃に臆することなく『ワルキューレ』を構え、引き金を引く。
（!?）
次の瞬間、『ワルキューレ』から起動式が読み込まれて魔法式が展

開、魔法が発動した瞬間に克人が展開していた『ファランクス』が砕け散った。それに克人が驚く表情を見せる暇もなく、いつの間にか彼の視界の範囲外に回った悠元の手刀によって克人は意識を失い、床に倒れた。

これには審判役だった摩利も一瞬呆然としたが、健在の悠元を見て試合終了の合図を下した。

「……勝者、三矢悠元！」

絶対無敵と謳われた『ファランクス』が砕けたことに驚く者、そうでなくとも十文字家次期当主を破ったことに驚く者もいる中、達也は表情にあまり出ていないが別の意味で驚いていた。その様子に深雪が気付いて声をかけた。

「お兄様？　どうかされたのですか？」

「深雪……悠元はとんでもない埒外の天才だ。彼の姉が会頭を破ったのは誇張でもないだろう。おそらく、その起動式を組んだのは悠元だ」

達也は『精霊の眼』で彼の発動した魔法の起動式を読もうとした。すると、彼は1つの起動式ではなく一度に13個の起動式を発動させていた。なので全てを理解することはできなかったが、あの魔法自体現在判明している系統魔法のいずれにも該当しない『新系統の魔法』だと理解した。

そしてもう一つ。三矢家の魔法技術である『スピードローダー』は最大9種類の魔法を発動直前の状態で保持することができる技術……恐らく、これが悠元の手によって改良されているのではないかと達也は推測した。でなければ、一度に13個の起動式を同時処理・展開が極めて難しくなるためだ。現代魔法において魔法の同時発動は極めて難しい技術に含まれているのもある。

悠元は『ワルキューレ』を懐にしまうと、倒れこむ克人に近づいて背中に手を当てる。一瞬想子の光が見えたかと思うと、悠元は手を放して立ち上がった。

すると、気を失っていたはずの克人は瞼を開き、ゆっくりと体を起こした。これには真由美と摩利も近くに駆け寄った。

「十文字！」
「十文字君⁉　もう起き上がって大丈夫なの？」
「ああ、軽く意識を飛ばされただけのようだからな。まさか、同じように『ファランクス』を破られるとは……三矢、あれは一体何なのだ？」
　三矢家にそんな魔法があったなど聞いたこともなかったが……」
　本来他人の魔法について尋ねるのは秘匿の関係もあってマナー違反。だが、少しぐらいの種明かしはしてもいいかと思い、悠元は息を吐いてから説明した。
「定義上は系統外魔法『円卓の剣（ラウンド・ブレード）』。佳奈姉さんが使ったのはそれを姉さん用に最適化させたものです」
「『ラウンド・ブレード』……待て、今最適化させたといったな？　お前は起動式そのものを調整できるのか？」
「いえ、起動式は弄っていません。厳密にいえば三矢家が本分とする『多種類多重魔法制御』――その技術である『スピードローダー』を大幅に弄っています。正直別物になってしまったため、三矢家の固有技能とも言っていいでしょうが……敢えて名付けるなら『ライトニング・オーダー』ってところでしょうか」
「なっ⁉」
　『ファランクス』を破る魔法だけでなく、三矢家が得意とする『スピードローダー』も『ライトニング・オーダー』と呼称する代物になったと話す悠元。そのことだけでも周囲の人間は驚きに包まれる。
　魔法技術を現在のレベルに進めるまででも膨大な時間がかかっているのに、それを更に進めたということに他ならない。
「いずれにせよ、対障壁干渉魔法といったところか……俺の負けだ。勝負を受けてくれて感謝する」
「いえ、こちらこそいい勉強をさせていただきました。十文字家の秘術である『ファランクス』はそうそう拝めるものでもありませんので」
「そうか……」
　克人と悠元は互いに握手を交わす。地味に力を加えるのは嫌がらせだと思うんですよ、十文字会頭。握手を終えると、克人は満足したような笑みを見せつつ演習室を去った。それを追いかけるように服

部も演習室を後にした。そして、驚きのあまり復活する様子がない、真由美の耳元に息を吹きかけた。
「はーい、ちゃんと復活してくださいねー。生徒会と風紀委員会がありますよねー……ふーっ」
「ひゃうっ!? ゆ、悠君!?」
「仕事残ってるんですよね？　ちゃんとシャキッとしてくださいね」
「あ、はい……（もう、ドキッとしちゃったじゃない……）」
全員を強制的に再起動（正気に戻した）をさせた後、生徒会メンバーは生徒会室に、風紀委員メンバーは風紀委員会本部に移動することとなった。自分が息を吹きかけたのは真由美と深雪だけで、あとは真由美に任せた。達也は割と早く復活した……そんな姿の達也はレアだと思う。
なお、深雪の耳元に息を吹きかけたところ、「ひゃんっ！」と悲鳴を上げた後に顔を赤らめて「ゆ、悠元さんは…ひ、卑怯です」と言われた。達也に意味を尋ねたら「頑張れ」とだけ言われた。謎である。

一日一往復（※）

全員を何とか現実に戻し、生徒会室に戻ってきた。端末の動かし方も一通り教わったが、そこまで難しいものではないと学び終えたところで、真由美がちょっと、という感じで手招きしてきた。鈴音に断った上で真由美に近づくと、風紀委員会本部を見てきてほしいと言われた。

「どうしてです？」

「実はその……摩利は片付けが苦手でね……」

「美嘉姉さんが知ったらスープレックスですよ、それ」

入学する直前、美嘉から摩利のことについて一通り聞かされていた。

引き継ぎの時、『あんたはいい加減なんだから、それでトラブルを起こしやすい。あと、常日頃から片付けておきなさい』と文面まで丁寧に残していたにも拘らず、風紀委員会本部は酷い有様になっているらしい。

流石に気になって見に行ったところ、文字通り酷かった。すると、この光景に見かねたのか片づけをしている達也がいた。その達也も悠元の姿に気が付いた。

「悠元、どうした？」

「いや、会長に言われて様子を見に来たんだが……俺も手伝うわ。二人だと大変だろ？」

「ああ、助かる」

「別にいいよ。どうせスープレックスをくらうのは委員長だからな」

悠元の言葉に達也は首を傾げるが、その言葉の意味を理解した摩利は冷や汗が流れる。摩利の前任者の制裁はある意味洒落にならないのを知っているからだ。

「……悠元君、できれば美嘉さんには」

「姉さんなら『第六感が囁いた』とか言って気付きますよ、絶対に」

「うぐっ」

別に言う気はないが、無駄に勘の鋭い姉のことだから言わなくても

飛んできて関節技掛けるところまでがテンプレである。悠元の関節技は美嘉直伝だったりする……美嘉の技の犠牲になっていたのは大概元治というのはここだけの話だ。
　片付けをしながら摩利が達也を風紀委員に入れた理由について触れる。すると、達也がそれに対して意見を発する。
「二科生対策としてはむしろ逆効果かと。同じ二科生の先輩たちは下級生に取り締まられるわけですから」
「だが、同じ1年からは歓迎されると思うぞ」
「一科生からは歓迎に倍する反感があるかと思いますよ」
　自分を送り出すように励ましたクラスメイトの顔が思い浮かびつつ、達也は摩利の言葉に対して反論めいた言葉を発する。そこに悠元が言葉を発する。
「達也、俺も1年の一科生なんだが？」
「悠元は例外中の例外だな。お前の姉達が、聞けば聞くほど人間離れしているようにしか聞こえないからな。無論お前も」
「酷い言い草だな、オイ……ま、反感っていう意味じゃ筆頭は森崎かな」
「森崎なら、教職員推薦枠で風紀委員会にはいることになったぞ」
「えっ」
　摩利の言ったことに対して、達也は思わず積み上げていたものを乗せ損ねていた。それを見た摩利は達也の驚く顔を見て笑みを零した。そのことには悠元も驚きを隠せなかったが、端末を立ち上げて状態を確認する。
「君たちも、驚くことがあるんだな」
「それはそうですよ」
「驚かなかったらただの強面ですよ、それ」
　しかし、未遂とはいえ森崎が教職員推薦枠とは驚きだ。燈也は……正直荒事に巻き込まれたくないってタイプだし、話が仮に来ても断った可能性が高いだろう。
「……悠元、それは俺のことを言っているのか？」
「俺、名前は一切出してないんだけど？」

「からかい方が深雪に似てきたな、お前は」
　そんな会話をしつつ端末のデータ整理をし始めたところで二人の男子生徒が入ってきた。腕章からして風紀委員だということは直ぐに分かった。その二人は挨拶をすると、摩利の姿が目に入った。
「ハヨーッス」
「おはようございます」
「お、姐さん！　いらしてたんですかい」
　姐さんという言葉は妙に合っているなと思いつつ、表情に出さないよう努める。すると、割と細めの男子生徒が踵を正して報告をする。
「委員長。本日の巡回終了しました。逮捕者、ありません！」
　その言葉に対して、摩利が返礼の代わりに姐さんと呼んだ短髪の男子生徒を丸めた紙で叩く。スパンッ、という乾いた良い音が部屋の中に響かせつつ、摩利はそれで頭を何度も叩きながら注意でもするように叫ぶ。
「姐さんって言うな！　お前の頭は飾りか！」
「そ、そんなポンポン叩かないで下さいよー……ところで委員長、新入り達ですかい？」
　摩利に叩かれた男子が悠元と達也に気付いて尋ねると、摩利はそれに対して答えた。
「横にいるのはな。端末を見ているのは生徒会役員で手伝ってもらっているわけだ」
「へぇー……そっちのは、紋無し、ですか」
「辰巳（たつみ）先輩、その発言は禁止用語に抵触する恐れがあります。この場合、二科生と呼ぶべきかと思われます」
　二人の男子生徒は悠元と達也を値踏みするような視線を向けていた。別段困るものではないと思いつつ端末を弄り続けていると、摩利が二人に純然たる事実を告げる。
「二人とも、そんな了見では足元を掬われるぞ。……ここだけの話だが、さっき服部が足元を掬われた」
「何と、入学してから負けなしの服部が？」
「ああ、正式な試合でだ」

「へえ、そいつは頼もしい限りだ」
「逸材ですね」
　それを見た摩利がニヤニヤと、からかうようにその事実を告げると、二人の生徒の表情は真剣味を増した。まるで褒めるような言葉に達也は驚くような素振りを見せた。すると、端末の調整を終えた悠元が近づき、摩利は視線を悠元に向けた。
「おや、そっちは終わったのか？」
「ええ。――生徒会会計、1年の三矢悠元です」
　役職については特に会長と副会長以外上下の関係もないため、書記に深雪が就任し、会計に悠元が就任した。すると、その男子生徒二人は悠元の名字にやはり注目した。
「三矢……すると、美嘉姐（ねえ）さんの弟ってことですかい？」
「ああ、そうだ。これもここだけの話だが……正式な試合で彼は十文字を破った。十八（おはこ）番である『ファランクス』を破った上でな」
「なっ!?」
「あの十文字会頭をですか……彼といい、今年の1年は逸材揃いですね」
　3年でトップクラスの実力を持っている克人を正式な試合で破った――それも1年の男子が、という事実。それも正当な評価をする二人に悠元も驚きを隠せない。すると、摩利は意外だろ？　と問いかけつつ喋った。
「この学校にはブルームだ、ウィードだとそんなつまらない肩書きで優越感に浸ったり劣等感に溺れたりする奴らばかりだ。正直言って、うんざりしていたんだよ、あたしは。それでも、前任者――美嘉さんはあたしの話をちゃんと理解してくれていてね。その縁で風紀委員長に抜擢されたわけだが」
　それでも摩利が入学して風紀委員になった時はかなり減った方だと話す。それを成したのは先代の風紀委員長――三矢美嘉だった。時には校長相手でも一歩も引かなかった問題児的な側面も持っていたが、一高において優秀な成績を打ち立てていたことも確かであった。

「幸い、真由美も十文字もあたしがこんな性格だと理解してくれているから、生徒会推薦枠と部活連枠はそういう優越感の少ない奴を選んでくれている。教職員推薦枠のこともあるからゼロってわけにはいかないが……君にとっても、居心地の悪くない場所だと思うよ」

その摩利の説明ののち、男子生徒二人は達也と悠元に自己紹介をする。

「3―Cの辰巳鋼太郎（こうたろう）だ。腕の立つ奴は大歓迎だ。よろしくな、司波に三矢」

「2―Dの沢木碧（さわきみどり）だ。歓迎するよ、司波君に三矢君」

「……1年の、司波達也です。こちらこそ、よろしくお願いします」

「同じく、よろしくお願いします」

達也と悠元は先輩二人と握手を交わしつつ挨拶をした。こうして忙しい一日が……まだ終わらなかった。その夜、悠元は達也にコーヒーを差し入れしようと司波家の地下に向かう。すると、CAD調整室から気配を感じて扉を開く。

「達也、コーヒーの……」

さて、状況把握を開始する。

モニターの椅子が横倒しになっている。達也が横たわっていて、その近くには深雪が座っている。達也は普通の過ごしやすい服装だが、深雪の場合は下着の上に1枚羽織っているだけ。

恐らく、夕方の模擬戦を見て深雪が対人戦闘も見据えた術式の調整を頼みに来たのだろうが……あ、二人ともこっちに気付いた。

「……悠元？」

「あ、あの、悠元さん。これは、その……」

「ああ、うん。CADの調整でイザコザあったんだよね。コーヒーはここに置いとくから、冷めないうちに飲んで。では、ごゆっくり」

……これでいいよね？　うん、兄妹のスキンシップに首を突っ込んだら馬に蹴られて地獄まで落ちそうだ。悠元はそう思いながら自室に戻り、明日に備えるのであった。

一方の達也はというと、悠元が今の光景を見て兄妹間の何かだと思ってそそくさと出て行ったところまでは読み取れた。本人もCA

D調整のためのものだとは理解しているだろう。
兄妹の禁断の愛というものは、いくら妹に対して激しい情動が残っている達也でも常識的に考えてダメであると認識していた。悠元も恐らく兄妹のいざこざ程度であると思っている筈だ。
「……お兄様のせいですからね」
「深雪、それは明らかに理不尽というやつじゃないのか？」
ただ、何をどう勘違いしたのか……深雪から放たれた謂れのない責任発言に、達也はそう返すしかできなかった。

◇　◇　◇

達也が風紀委員に選出された翌日、悠元は職員室に呼ばれた。個人で受けたオリエンテーションで伝え忘れた連絡事項の関係ではあったが、教職員側で処理できる問題とのことだった。ただ、一応伝えておきたいということで呼ばれただけなので、ものの３０秒も掛からなかった。
「あの程度なら別に端末のメッセージ程度でもいいのに……ん？」
すると、悠元の視界の先には３人の男子生徒の姿があった。先日の騒ぎの一科生（とうじしゃ）側であり、その中には森崎の姿も見受けられた。
彼らの表情は何だか「納得がいかない」という感じであったために聞き耳（『聴覚強化』で音の指向性を森崎らがいる方向だけから拾う）を立ててみると、彼らの話している内容は風紀委員に関してだった。
確か、今朝は〝欠員〟――――卒業した元３年生の風紀委員の抜けた穴のことで、実力が伴う役職だけに進学などが決まっている生徒に限定される――――の補充が間に合ったということで風紀委員会の招集が掛かり、達也が先に向かったことは知っていたので、そこでの顔合わせで森崎が達也と遭遇したのだろう。
「全く、おかしいと思わないか？　一体どんな手品を使ったんだか……」
「そう思うだろう？　しかも、生徒会推薦枠だとさ。どうせ、司波さんに泣きついたに決まってる」
（何で達也が弱い前提なんだ、こいつらは……）
仮に達也があの場に介入していた場合、体術だけで一科生側全員を

圧倒できると推察できる。
何せ、自分の場合は『抜き足』で彼らに割り込み、『術式解体（グラム・デモリッション）』で起動式を片っ端から吹き飛ばしたのだから、達也はそれに準ずる動きで制圧可能なレベルと予測している。
〝あの程度の技巧〟を見破ったのは確実に達也だけだ。エリカはそれとなく予想出来ているかもしれない。深雪は……勘だけで気付くかもしれないと思ったのは異常なのだろうか。
というか、燈也から聞き及んだ範囲だけ見ても、深雪にアピールしようとして失敗しているのに、自分にやられて懲りていないようだ。
尤も、その程度で心が折れるようでは魔法師として食べていけるだけの実力など到底身に付かないだろう……常識外れの鍛錬を受け続けて魔法師としての一般常識が破壊されているかもしれないが、精神を如何に安定させられるかが魔法の発動において重要な要素の一つとなるため、別におかしいことは言っていないつもりだ。
（てか、そろそろその会話を止めとけよ……深雪に凍らされても知らんぞ？）
結局、森崎たちの達也に対する〝悪口〟は1年A組の教室に入っても続き、「二科生（ウィード）が一科生（ブルーム）を取り締まるなんて失礼極まりない話だ」とか「僕の足を引っ張らないでもらいたい」などと平然と発言した。
そしてそれは、当然同じ教室にいる深雪の耳に入るわけで、結果として1年A組の教室は一気に気温が下がり、一科生の風紀委員――――即ち達也の悪口を述べていた3人も凍らされていた。これだけの事象干渉力を平然と発動できる深雪に内心で感心しつつ、事態の推移を見守った。
流石に〝全面凍結〟となれば対処するつもりでいたが、深雪は寸止めの形にしつつも生徒会役員として忠告し、森崎が了解の返事を返したところで深雪の〝魔法〟が解除された。それ以上のトラブルは起きないと判断し、悠元は「何も見なかった」ことにして自分の席に着いたのだった。
新入部員勧誘週間。新しく入った1年生を獲得しようと各部活動が躍起になる時期。この時は部活のパフォーマンスを行う関係で一

時的にＣＡＤの所有制限が緩む。この辺は生徒会長をしていた佳奈や生徒会長・風紀委員長をしていた美嘉からいろいろ聞いている。
「勧誘合戦？」
「ああ。各クラブからすれば人数確保は予算確保。ある意味熾烈になるわけよ。それだけだったら問題はないんだが」
「何かあるの？」
「これは表向きにされてない話だが、新入生の入試成績が各クラブに出回っていて、成績優秀者は特にターゲットとなる」
　普通なら個人情報保護とかに抵触しかねないものだが、学校側としては九校戦を睨みつつ、クラブ間で競争を煽って切磋琢磨させたいという狙いから見ない振りをしている、というものだ。当然、こんな事情は一部の人間しか知らない。
　当然新入生が知るはずもない話を悠元が知っているのは、自身の姉たちと今の生徒会長である真由美から聞いていたからだ。
「それって本当なんですか？」
「生徒会長をしていた姉３人と七草会長にも確認したら本当のことだってな。ほのかと雫もそうだが、燈也も真っ先に狙われる可能性があるから気を付けておけ」
「解ったよ、悠元。心に留めておくことにする」
　雫とほのか、燈也にそのあたりのことを伝えた後、立ち上がって教室を出た。何せ全校生徒とは言わないが数百人をたった９人の風紀委員で監視できる筈もなく、当然その補佐として生徒会も忙しくなるので、早速生徒会役員としての仕事というわけだ。
　するとその途中、先程教室にはいなかった深雪と合流して生徒会室に向かう。どうやら達也と途中まで一緒に行っていたのだが、『俺のことはいいから悠元のところに行ってやれ』と言われ、その言葉に従ったとのこと。
　別に深雪と付き合っているわけではないんだがなぁ……嫌というわけじゃないが、身の丈に合ってないような気がする。なお、当の達也は風紀委員会本部だろう。今日から勧誘週間なので達也は風紀委員として巡回することになり、二科生の風紀委員という前例のない要

員なのでトラブルが起こらないことを祈りたいが……達也ってトラブルメイカーな気質があるからな。
「達也がねえ……要らぬ気を回すぐらいなら、彼女の1人でも作って安心させろって言いたいが」
「体面的なことに興味がないお兄様にそれは酷ですよ、悠元さん」
「解ってはいるけどさ、ある程度刺激を与えていかないと別の方面で余計酷くなるだけだ……そっちの趣味があるとか言われたら、俺が真っ先に被害を受けかねない」
「……確かに、それはお兄様の風聞にも宜しくありませんね」
望み薄かもしれないが、何もしないよかマシ、ということだろう。そんなことを思いつつ、悠元と深雪は生徒会室に入った。
すると、忙しいとぼやきながらモニターを見つめている真由美に対して、その背後に立っている摩利は冷ややかな目を向けていた。
「おい、何だそれは？」
「えっ？　……だって、今日は私だけ配膳機（ダイニングサーバ）だったから寂しかったの！　って、いったーい！」
「そういうことは家でやれ！」
どうやら真由美は弁当のおかずのレシピを検索していたようで、摩利の鉄拳と説教が炸裂した。こんな光景など生徒会では日常茶飯事なので、メンバーの中で一番付き合いの短い深雪もすでに慣れていた。悠元に関しては真由美の性格を知っていたので、初見の時点で逆に納得していた。
日常茶飯事といえば、真由美がよく悠元に絡むので深雪もこれにはよく反応してしまうことだろう……修羅場というには程遠いじゃれ合いみたいなものだが。
新入部員勧誘週間は生徒会も風紀委員や部活連の補助に入る。部活連の幹部も風紀委員会の補助に入るが、違反者・逮捕者については基本的に風紀委員が対応する。その辺の説明を摩利がした後、悠元が問いかける。
「渡辺委員長。もし周囲に風紀委員がおらず、犯人が逃走を図った場合は？」

「その場合は自身で判断して対処してくれると助かる。流石に風紀委員だけで全てのトラブルを対処するのは難しいからな。できれば、連絡は私か真由美にしてくれ」
副会長の服部が部活連に詰めることとなり、生徒会長である真由美は逮捕者への対処という意味で生徒会室に缶詰めとなる。というか、生徒会メンバーがほとんど女性なため、残る男性メンバーとなる悠元が自動的に巡回要員となる。
なお、風紀委員長の摩利以外に真由美もその対象に含まれていることを小声で尋ねると、次のような答えが摩利から返ってきた。
(渡辺委員長は分かりますが、七草会長は何故ですか？　本部へ詰めることになる服部副会長ならまだ分かりますが)
(実は真由美が駄々をこねてしまってな……済まないが、この期間だけだから我慢してくれると助かる)
(……分かりました)
人が多いところからではなく少ないところを歩いていると、気が付けば体育会系部活動の部室の前に来ていた。部室の前にある立て看板からするに、ここはどうやら山岳部の部室らしい。すると、その部長らしき人に声をかけられた。
「お、入部希望者かい？」
「いえ、生徒会会計の三矢です。今は風紀委員の手伝いをしてまして」
「ここら辺は、流石にトラブルなんて起きないな。ところで今『三矢』と名乗ったようだが、ひょっとして美嘉先輩の弟かな？」
「ええ。姉をご存じで？」
その部長が言うには、美嘉は生徒会をしながら山岳部に入っていて、1週間でトレーニングコースを10周するまでになったと話した。それについていこうとしたら部員全員の体力が見違えるように伸びたことも話してくれた。
そんな姉の武勇伝を聞いたところで山岳部の部室に2人の男子生徒が来ていた。しかも、その2人はどちらも悠元にとって顔見知りともいえた。
「あれ、悠元？」

「レオに燈也？　これまた珍しい組み合わせだな」
「あはは、やっぱり意外でした？」
「そりゃあなあ……」
　外見的にレオは山岳部がバッチリ似合うが、燈也に関してはイメージ的に文化系がしっくりきていた。しかも、一科生と二科生というある意味異色な組み合わせ。どうやら2人とも山岳部に入るらしいが、燈也は大丈夫なのかと尋ねるとこう言った。
「大丈夫ですよ。夏休みは一日一回富士山の麓から山頂を往復（ジョギング）してましたから」
「……なあ、レオ。燈也の見る目が変わりそうなんだが」
「安心しろ悠元、俺もそう思う」
　仮に魔法込とはいえ、それを夏休みの間ずっとやっていたという燈也の発言に、やっぱり彼も〝十師族〟なんだと実感しつつ、悠元とレオは燈也の持つポテンシャルに驚きを隠せなかったのであった。

新入部員勧誘週間①

悠元はレオや燈也と別れ、人通りの多い校舎前広場に出てきた。早速入部歓迎も兼ねてトレーニングコースの走り込み、という部長の声とそれに元気よく返事する二人の声も聞こえたが、聞こえなかったことにした。案外気の合う二人なのかもしれない……ああやって意気投合する一科生と二科生が逆に珍しいかもしれないが。

周囲はクラブ勧誘で必死となっている。

（別に見世物になっているわけじゃないんだが、俺は客寄せパンダとかの類じゃないわ）

すれ違う人々から興味の視線で見られるが、それもそのはず。悠元の左腕には腕章が付けられているからだ。風紀委員のものとは異なる青と白からなる生徒会役員専用の腕章で、基本的には新入部員勧誘期間の時にしか着けることがない。

これは過去に1年の生徒会役員が勧誘の被害にあったことがあり、それを教訓に作られたもの。その被害者というのは悠元の姉であり、先々代会長の佳奈であった。

（『血染めの桜吹雪（ブラッディ・ブロッサム）』……佳奈姉さんについた渾名だっけ。本人は嫌がってたけど）

その際に魔法・非魔法系クラブを問わず全員を地に沈めたことから、語りに語り継がれて……卒業した今でも畏怖の存在として恐れられている。尤も、人見知りもしないので普通に接する分には優しい姉であることも知っている。すると、通信機ではなく携帯端末のほうの着信音が鳴り、悠元はそれを手に取って通話を始める。

「もしもし？」

『もしもし、悠元。佳奈だけど、今そっちは大丈夫？』

「佳奈姉さん。珍しいな、今は講義かゼミじゃないの？」

考えていた人物――佳奈から連絡がきたことに、姉は心を読む能力に優れているのかと思いつつ話し始める。その際、悠元は周囲に認識阻害を展開しているので、行き交う人々は悠元がいる場所を何故か避けて通ることを疑問に思わない。それは置いといて、大学生である

佳奈が連絡を取った理由を尋ねた。
『ちょうど講義休みだから大丈夫。えとね、美嘉から「あの二人、そっちに行ったからとっちめておいてって悠元にお願い！」って私に言って講義に行っちゃったの』
「その言い方だと誰が該当するのか解らないよ？」
『うん、そうだよね。萬谷颯季（よろずやさつき）と風祭涼歌（かざまつりすずか）の二人なら解る？』
　その二人なら面識がある。美嘉にとっての親友兼悪友みたいなもので、上泉家の別宅でも何度か見たことがある。確か二人はＳＳボード（スケートボード＆スノーボード）・バイアスロン部の所属であったことも美嘉から聞いている。
「それなら解るけど……」
「バイアスロン部だ！」
「取られた！」
　悠元が続きを言おうとしたところで、少し離れたところにその該当人物二名がいた。彼女らは脇に雫とほのかを抱えていて、その場を立ち去っていく。それを見た悠元は佳奈に対してこう告げた。
「佳奈姉さん、伝言は受け取ったって美嘉姉さんに伝えて」
『解った。無理はしないでね』
　悠元の口調で佳奈は凡その事情を察して短い言葉を選んで通話を切る。素早く携帯端末をしまうと、通信機を取り出して連絡を取る。それと同時に悠元専用の自己加速術式を発動させる。
「生徒会会計、三矢です。バイアスロン部のＯＧ二人が新入生の連れ去り行為を働いたために追跡します。風紀委員の応援をお願いします！」
　手早く用件を伝えて通信を切ると、悠元はクラスメイト達を抱えた二人を追跡するために駆け出す。
　当然、追跡してくる悠元の様子にショートヘアの女性こと萬谷、ロングヘアの女性こと風祭が揃って声を上げた。
「ほう、あの腕章は確か生徒会か。中々に腕が立ちそうだ」
「あの子、どこかで会った気がするんだけど……にしても、自己加速術式で追い縋ってくるなんてね。でも、捕まる気なんてないでしょう

？」
「当然！　飛ばすから捕まってろよ!!」
「いやあああああ!!」
　明らかに自動車並みの速度まで加速する二人のスケートボードに、ほのかの叫びが木霊するのであった。
◇　◇　◇
　別の場所で風紀委員による取り締まりを監督していた摩利は着信音に気付いて通信機を手に取る。その相手は真由美であった。
「こちら渡辺」
『摩利、今さっき悠元君から要請があって、バイアスロン部ＯＧ二人が新入生を連れ去ったって…』
「真由美、それって…あいつらか！　解った!!」
　真由美の言葉に摩利が続きを言おうとしたその時、萬谷と風祭が新入生らしき二人を抱えていることに気付き、手短に答えつつ通信をやや乱暴に切った。その上で近くにあった辰巳のスケートボードを借りることにした。
「鋼太郎、このスケボーを借りるぞ！」
「姐さん？」
「とうに卒業した不良どもに好き勝手やられたんじゃ風紀委員の名が廃る！　ちょっとシメてきてやる！」
　辰巳の言葉が返ってくる前に摩利は硬化魔法と移動・加速術式のマルチ・キャストを起動。二人を追いかけ始めると同時に彼女たちを自らの足で追いかけている悠元と合流して追跡を開始する。
　当然、追いかけられる側である萬谷と風祭も二人の追跡に気付いている。
「やっぱり来たわね」
「それって……ああ、成程。やはり来たか」
「止まれ！　過剰な勧誘行為は禁止だ！」
　しかも、追いかけてくる二人の形相が鬼気迫るものだったため、雫とほのかも叫ぶ余裕がないぐらいにガチでビビっている。彼らを見ていたらその背後に二体の金剛力士像が見えてきそうな様相ともい

えた。
「大人しく止まれ！」
「そう言われて止まるやつはいないよ」
悠元の言葉に対して萬谷は何食わぬ表情を見せている。だが、二人を抱えている分萬谷と風祭のほうが若干遅く、距離はじりじりと縮まりつつある。無論、これを黙ってみているわけでもなく、風祭は携帯端末型ＣＡＤを操作する。
「これで止められるとは思わないけど……」
風祭が得意とする気体流動制御術式――『下降気流（ダウンバースト）』を摩利と悠元に向かって打ち出す。二人にとっては向かい風の形となるが、萬谷と風祭の二人にとっては追い風となって加速する。
（凄いっ……）
タイミング一つ間違えるだけでも自爆技になりかねない魔法を放つ彼女に雫は感心した。無論、それを撃たれた側も黙っておらず、摩利は追い風を発生させて自身に掛かる向かい風を打ち消す。そして、悠元の場合はというと……ある意味別次元だった。
「面倒だな……斬るか」
そう呟いて、一息吐き……左手で手刀をするように構えて、唐竹割りの要領で振り下ろした瞬間、風を〝断ち斬った〟。これには萬谷と風祭も引き攣った笑みを見せていた。
「摩利も腕を上げてるが、何なんだあの１年……風祭の魔法を斬ったって」
「あんな出鱈目な芸当、美嘉だけで間に合ってるっていうのに」
（やっぱお姉さんも出鱈目なんだ）
雫は悠元の姉と何度か会っていて面識はあるが、彼女の魔法を見せてもらったことはない。曰く『私の魔法は見世物じゃないからね』といつも言っていたことを思い出していた。
冷静になりつつある雫とは裏腹にほのかはパニックで若干呂律が回らなくなりつつある。ここで摩利が硬化魔法で二人のスケートボードと地面の間に硬化魔法を掛けて強制的に停止を試みる。それで一瞬体勢を崩すが、風祭は冷静に対処して一時的に浮遊させ、その

魔法から逃れる。
「お返しだ」
萬谷は自身の得意魔法である局所地形変動魔法『ミニチュア地層(フォルト)』で障害物を生み出し、摩利と悠元はそれを乗り越えようとするが、風祭がそれを見計らって縦回転の気流操作を発生させる。無論、摩利と悠元はこれを打ち消すが、距離が離される形となった。
「くそっ、逃げられたか」
「いえ、ここまで来た以上は行先も決まってます。渡辺委員長、スケボーをお借りしても？」
「あたしも鋼太郎から借りただけだが……何をする気だ？」
摩利は大人しくスケートボードから降りて、今度は悠元がスケートボードに乗る。そして、懐から携帯端末型ＣＡＤを取り出して操作する。先日見せた銃状のＣＡＤだけでなくそのタイプのＣＡＤを所持していることに摩利は驚くが、その問いかけは彼の真剣な表情と次の言葉で綺麗に吹き飛んだ。
「決まってますよ。こちとら姉から頼まれたんです。それに、別に名前に拘る気はないんですが、散々コケにしてくれたんです……『三矢』を名乗る者として、看過なんて出来ませんから」
そう言い放った瞬間、悠元の乗るスケードボードを中心に魔法式が展開。その直後、それを起点にする形でジェットコースターのレールを想起させるような光のレールが出現し、悠元の乗るスケートボードは一気に加速した。

摩利と悠元を引き離した萬谷と風祭は本来の目的を果たすため、建物を曲がっていく。
すると、そこにはスケートボードを持つ数人の女子生徒たちがいて、彼女ら――特に部長である五十嵐亜実(いがらしつぐみ)は四人の突然の来訪に驚いていた。
「萬谷先輩!?　それに風祭先輩まで！　どうしてここに!?」
「スマンが話は後でな。ま、コイツらを頼む」
「新入生よ、可愛がってあげて」

躊躇いもなく放り投げられる雫とほのかを見た亜実は事実の整理が追い付かないながらも魔法を発動させて、二人が地面に激突しないように空気のクッションを発生させた。無論乗り続けさせるわけにもいかないので、支える形で二人を立たせた。

それを見た萬谷と風祭は軽く挨拶して、摩利達に追いかけられないよう急いでこの場所を去るために高速で走り出したその瞬間だった。二人の頭上を追い越す様な形で展開する光のレールに一同が驚く。

何よりも、そのレールを見たことがある先輩方――とりわけ、萬谷と風祭が驚愕に包まれる。

「この魔法は?!」

「嘘、だってあの魔法は美嘉にしかできない筈……っ!?」

萬谷と風祭が次の言葉を発しようとしたその瞬間、光のレールの上を何かが高速で二人の頭上を通過していった。

その刹那、萬谷と風祭に対して強烈な後方回転がかかり、一回転したぐらいで地面にゆっくりと降下する。これが魔法だということはすぐに分かった。気が付けば展開していたはずの光のレールもきれいに消え去っていた。

そして、二人の乗っていたボードはどこに行ったのかというと、萬谷と風祭の少し前方で停止したスケートボードに乗る男子生徒――悠元の両手に握られていた。

悠元は乗っていたスケートボードから降りると、ゆっくりと近付いた上で目が笑っていない笑顔を二人に向けた。

「生徒会会計1年、三矢悠元といいます。名字で気付いたかもしれませんが、先代会長である三矢美嘉の弟です。下手な抵抗はやめて神妙にお願いしますね、萬谷先輩に風祭先輩?」

「……わかった、抵抗はしない。美嘉の肉体言語(サブミッション)の餌食になりたくないからな」

「降参よ。美嘉に今年高校生となった弟がいるって聞いてたけど、ホント揃いも揃って、ね……」

これ以上抵抗したら、次は意識をブラックアウトさせるまで縦回転させる――その辺の意味を込めつつ言い放った悠元の言葉に、二人

は抵抗できないと判断して大人しくなった。
その後、摩利と応援に来た風紀委員に引き渡した悠元はようやく一息ついた……と思いきや、バイアスロン部の面々から興味津々の目で見られていた。それにプラスして雫とほのかも悠元に対して『話が聞きたい』と言わんばかりのオーラを向けていた。
「……解った。話ぐらいならいいけど」
「やった。約束だからね？」
結局、雫の懇願に根負けする形で悠元はバイアスロン部の説明を雫やほのかと一緒に聞くことになったのだった。
誰か、女性の上目遣いに勝てる方法を教えてください。
なお、二人の先輩については『私はお前らのノート係（ほごしゃ）じゃないって理解しなさいよ!!』という美嘉の叫びとともに放たれた関節技の餌食になったことは……その三人だけの秘密となったのであった。

新入部員勧誘週間②

雫とほのかは無事（？）バイアスロン部に入ることとなった。何でも先程の技は雫にとって感動を覚えるものがあったらしい。そんな雫に根負けする形でほのかも入部した形だ。

だが、それ以上に雫の視線は悠元に注がれていた。彼女だけでなく、ほのかやバイアスロン部の面々も興味津々といった表情だ。

「……解った、説明する。あれは定義的に言うなら『電磁加速・空気固定走行術式』というものだ」

「え、あの、いきなり凄い単語が飛び出したんですけど!?」

短縮して言うなら電磁加速走行術式『ブリッツ・ロード』。振動加速・放出・ベクトル操作などで電磁加速術式を、空中の空気固定を光波振動系・硬化魔法などで行い、空力・空気抵抗・慣性・重力などの制御を空力制御という定義で一括処理。状況に応じて多変数化も使うのもそうだが、最低でも一度に10個以上の系統魔法を同時行使して複合制御しなければならない高難易度魔法。

それらをゆっくり説明したのだが、一同には理解が追い付いていなかった。

無理もないだろうと思う。美嘉がそれを見たときに原理を教えたが難しいと思っていた。だが、彼女はたった1週間で安定化させたのだ。つくづく十師族は化け物だと思う……お前が言うな、とは言わないでほしい。

「まあ、普通には無理です。一度に二桁の魔法式同時行使なんて出来ないでしょうし、工夫せずにやったら10秒維持するだけで一般的な魔法師の平均想子保有量に相当します。それだったら『術式解体（グラム・デモリッション）』に使ったほうがマシってレベルです」

「あはは……それを使って平気でいられる三矢君ってすごいね」

悠元の言葉にバイアスロン部の部長である亜実は苦笑しつつそう答えた。そこで悠元は亜実に尋ねてみることにした。それは姉たちのことだ。

「ところで、あの術式を見知っていたということは、美嘉姉さんが何か

したんですか？」
「私も先輩たちに連れ去られたことがあってね。その時は美嘉さんに抱きかかえられたけど……本当に凄かった。『閃光の戦姫（リュミエール）』って名前は本当なんだなあって……あの人からはいろいろ教わったし、感謝もしてるの」
　美嘉の得意系統は光波振動系魔法の複合術式。その意味で『ブリッツ・ロード』は彼女の代名詞ともなった。なお、その魔法を自己加速術式との併用も可能で、美嘉は短距離の移動にも使っていたりするなどの器用さを発揮。それを平気でできるだけの想子保有量を持っていたのも事実である。
「ところで、あの先輩たちに使った魔法って？」
「あれは単純に気流操作で縦回転させて、空気のクッションでゆっくり着地させただけ」
「サラッと言ってるけど、あの魔法を使って更にその魔法って、三矢君はいくつの魔法をマルチ・キャストできるの？」
「うーん……試したことはないですが、３０は行けるかと」
「３０!?」
　え？　やっぱり驚かれるの？　うーん、『ライトニング・オーダー』を使えるのは俺以外に２人の姉（佳奈と美嘉）だけど、常時１０以上の術式をキャストできるように練習してたからなぁ。さすがに隠し切れないと判断して父にその存在は伝えているが、『ライトニング・オーダー』は切り札の一つとしていることを理解してくれた。
　すると、そろそろバイアスロン部のデモンストレーションの時間らしく、ついでということで一緒に移動している途中、校舎に寄りかかっている人たちを見つける。亜実の言葉からして狩猟部の先輩たちであると理解した。
「狩猟部のみんな……どうしたの!?　大丈夫!?」
「五十嵐さん……うん、大丈夫」
（この感じだと想子酔いだな……確か、第二小体育館で剣術部と剣道部の乱闘騒ぎがあって……となると、達也の奴『アレ』を使った可能性が高いな）

その原因まで大体把握したので、悠元は懐から携帯端末型ＣＡＤを取り出して魔法を発動する。周囲を穏やかな風が包み込むと、先程まで顔色が悪そうにしていた狩猟部の先輩たちの顔色もだいぶ良くなっていた。それを確認すると悠元はＣＡＤを懐にしまった。
「少し酔い覚ましをさせましたが、念のために体を休めたほうがいいです。恐らく外部から予期しないノイズを受けたのではないかと思われます」
「三矢君、原因に心当たりがあるの？」
「原因はわかりません。似たような現象を見たことがあったので、それを思い出しただけです」
すると、同じく狩猟部のユニフォームを着た女子――明智英美（あけちえいみ）が保健医である安宿怜美（あすかさとみ）を引っ張ってきていた。彼女の言っていることからして、英美は想子中毒の線を疑ったようだ。
怜美は彼女らを診た上で実技棟の演習室の一室で休むように指示。先輩方は自力で歩けるぐらいまで回復していたが、亜実達バイアスロン部と別れて雫やほのかと一緒に先輩たちの付き添いをする。
「ありがとね、助かっちゃった。先輩たちが君の魔法でだいぶ楽になってたし」
「大したことはしてないよ。軽い酔い覚ましみたいなものだし」
改めて４人は自己紹介して、仲の良い友人となる。英美の本名はアメリア＝英美＝明智＝ゴールディ。日英のクォーターで、母方の祖母は英国でも名門のゴールディ家。
ここでは話さなかったが、悠元の祖父である剛三はその人間と関わりがあるらしい。厳密には英美の両親の仲人をしていたとのこと……どこまで顔が広いんだとツッコミを入れたくなった。
すると、悠元の持つ携帯端末の着信音が鳴ったので手に取った。聞こえてきたのはよく知る人物の声だった。
「もしもし、三矢ですが？」
『私です、悠元さん』
「深雪？　どうして電話を……生徒会室に戻って来いと？」
『いえ、女子生徒と仲良くされているのを見かけたものですから』

その言葉に冷気にも似た殺気のような視線を感じ取ってその方向に視線を向けると、下の階の窓から深雪が見つめ合っただけで凍り付きそうな笑顔を向けてこちらを見ていた。怖えよ！　雪女も目じゃねえと思うぐらいの恐ろしさがヒシヒシ伝わってくるんですけど!?

揶揄とかじゃなくでマジで。とにかく気を持ち直して問いかけてみた。

「深雪……ヤキモチ？」

『……～～～っ!?　ち、ちち、違います！　とにかく、生徒会室に戻ってきてくださいね!!』

「はい、了解しました」

こちらの言葉に対して、今度はオーバーヒートでもしそうなぐらい顔を真っ赤にした深雪が目に入った。これ以上からかうと明日からコールドスリープしそうなので、その辺にしつつ通話を切った上でこっそり聞き耳を立てていた3人に向かっていい放つ。

「生徒会室に戻って来いってことだから、俺はこの辺で失礼するよ」

「あ、はい」

「解った」

「悠元君、またねー」

生徒会室に戻る途中、先程の深雪の態度について考えていた。

大切な人だからと言ってあそこまでの殺気は逆に引いた。こちらから指摘すると今度は顔を真っ赤にして反論していた。

一体どういうことなのかを悠元は測りかねていた。自身にロクな恋愛経験がないことは理解しつつも、どうも身の丈には合ってないと思ってしまう。達也やレオに比べたら容姿的に地味だと思う節がある。

（この辺は無駄に前世の感覚を引き摺っているんだよな……別に、好意自体に気付いていないわけじゃない）

それを１００パーセント信じ切れるだけの確証がない。勘違いでショックを受けて凹むぐらいなら、そこまで踏み込む必要はないと思っている。友人あるいは親友というテリトリーまで行ったとしても、それ以上は自分にとって未知の領域ともいえた。なので、小学校

と中学校では告白されても付き合うということがなかった。
「……せめて、変な噂が流れるような事態だけは避けないとな」
同性愛者なんて噂が流れたら消す手段はあるが、せめて使わないようにしたい。その意味で普段からの行動に気を付けようと思うのだった。
◇　◇　◇
悠元が生徒会室に戻ると部屋には鈴音だけがいて、本来いるはずだった真由美がいないことに気付く。すると、その辺も察して鈴音が声をかける。
「お帰りなさい、悠元君。会長なら部活連本部です」
「本部ですか？　もしや、懲罰委員会に？」
「いえ、今は事情聴取の段階ですね。第二小体育館での一件を取り押さえた司波君に状況を説明してもらっている、ということです」
鈴音からは第二小体育館で剣術部と剣道部のトラブルが起き、その原因である先輩を達也が鎮圧したという。それを聞きつつ、悠元は鈴音に報告をした。
「恐らくそれに関係ある出来事なのですが、バイアスロン部でのトラブル処理の後、移動していた時に想子酔いを起こしていた狩猟部の先輩数名と遭遇しました。狩猟部に入部した同級生の話では、妙なノイズを第二小体育館から感じたと言っていました」
実は自己紹介の後、何か心当たりか気づいたことはないかと英美に尋ねていた。すると、英美から狩猟部に入部して早速乗馬をしていた際、大人しかった馬が急に暴れだして近くにいた先輩たちが頭を抱えてその場で蹲った、と聞くことができた。
「想子酔い……『高周波ブレード』は異常な振動で聴覚に支障をきたす恐れはありますが、想子酔いとなるレベルの想子波を起こすようなものではありませんし……まさか、司波君が何かしたということですか？」
「……市原先輩、このことは内密にお願いします。もしかしたら『ブランシュ』にも関係してくる話ですので」
「っ!?」

悠元は達也のやったことに心当たりがあった。悠元も実際にその方法で同じことの再現に成功しているからこそ、その現象によって引き起こす影響も理解できていた。それをもし例の連中が見ていたら、達也にちょっかいをかけてくることは明白だろう。

とりわけ感受性の高い人間がその波動を浴びれば想子酔いを起こすことも理解していたからこそ、その対処法として想子波長調整魔法『癒しの風（フローラル・ウィンド）』も編み出していた。偽装の意味で穏やかな風を生み出しているので、知らない人間から見れば心地のいい風ぐらいのレベルでしかない。

「……そうですね。その子たちはどうしました？」

「安宿先生が実技棟を開放してくれたので、先輩たちはそこで休んでいます。自分はいつでも手を貸せるよう付き添いをしていただけですが」

「そうですか……解りました。このことは自分の胸の内にしまっておきましょう」

「助かります」

真由美に言わなかった理由は他にもある。

先日の十山家の一件で七草家と十文字家は上泉家から厳しい目で見られている。第一高校に反魔法組織団体の関係者が紛れ込んでいることも三矢家は既に掴んでいる。これを的確に対処できなければ……この先は自分でも言いたくはないぐらいのレベルだ。

それと、このことをきっかけとして、英美がほのかや雫を巻き込んで妙なことになるような気がする。仮に実技ができても実戦ができるとはならないことなど、一介の高校生が理解するのは無理だろうと思う……その意味で自分やあの二人は例外と言っていいだろう。

◇　◇　◇

その後、真由美と摩利、克人からの聴取を終えた達也を出迎える形で悠元と深雪、レオとエリカに美月、それとレオに連れられる形で燈也が一緒にいた。どうやら既に自己紹介が済んでいたと達也は理解した。

「六塚燈也といいます。燈也で構いません。僕自身、名字で呼ばれる

のは好きじゃないので。レオから凄い奴だと聞きました」
「そんな大したものじゃないさ。司波達也だ。俺のことも達也でいい」
「こちらこそ、達也」
　またも十師族ということだったが、レオ曰く『面白い奴』という説明で緊張が一気に解れた様で、達也と深雪は燈也と自己紹介を交わす。かく言うレオも最初燈也が一科生で十師族ということから身構えていたが、それを思わせないような雰囲気に加えて、同じ山岳部に入るということもあって打ち解けたらしい。
　遅くなったお詫びということで、帰り道途中の喫茶店にて達也が奢ることとなった。この程度のことなど達也からすれば小銭を使う程度のものでしかないが。レオが言うには先輩たちですらキツイと話す上級トレーニングコースを完走したらしい。これにはエリカが苦笑を浮かべた。
「体力バカっぽい奴ならともかく、そんな風には見えないんだけどねえ……髪を伸ばしたら、女の子っぽく見えそうだけど」
「お前なぁ……ってすまねえな、燈也」
「よく言われるから気にしないでいいよ。僕自身、一高への進学は姉さんの着せ替えファッションショーから逃げる意味合いもあったけど……」
　どこか遠くを見つめる燈也の目に悲壮感が漂っていることに気付き、一同はこれ以上触れないほうが燈也のためだと感じた。
　そのことは触れないように話題を変えようとしたところで注文した品が届き、各々口にし始める。すると、レオは達也が対処したトラブルについて問いかけてからサンドイッチを口にした。
「そういや達也、その剣術部の桐原先輩が使ってた魔法、殺傷性ランクBの『高周波ブレード』だったんだろ？　よく怪我しなかったな」
「あれは有効範囲が狭い近接魔法だからな。よく斬れる刀と対処は変わらないさ」
「それって刀の対処は簡単って言ってるようなものじゃあ……」
　達也の言い方を直訳すると美月の言い分に合致しうるのは確かだ

ろう。だが、深雪はそれに臆することなくハッキリと言い切った。
「大丈夫よ、美月。お兄様は強いから。お兄様に勝てるとしたら悠元さんぐらいでしょうね」
「へえー、悠元ってそんなに強いんだ」
「随分買い被られているような気もするけどな」
　深雪の評価を聞いた燈也が感心するように悠元を見る。その視線に気づきつつも悠元は自分の評価が多少脚色されていることに感想を述べた。そこに達也が少し笑みを浮かべて冗談めいた口調で発言した。
「だが、事実として俺に勝っているだろう」
「あれは3年前の話でしょうに。先日の動きを見てる限りだと、確実に奥義まで使わないと無理」
「アンタがそう言っちゃうぐらいなのね……」
　先日の服部との模擬戦と九重寺での鍛錬。それを見ている限りでは、自身が会得した奥義を解放しないと勝利までには至らないだろうという発言にエリカが達也の強さを再認識する羽目となっていた。

疑似キャスト・ジャミング

喫茶店にて達也の奢りに与る一同。
そこで、悠元が今日の出来事を思い出して達也に問いかけた。
「そうだ、剣術部で思い出した。達也、お前『疑似キャスト・ジャミング』使わなかったか？」
「……どうしてそれを？」
「別件のトラブル解決後に戻る途中、狩猟部の先輩方数人が想子酔いを起こしてた。で、狩猟部にいた同級生が第二小体育館からそのノイズを感じたと言っていた……聞いた時刻からして丁度剣術部と剣道部がトラブルを起こした時だったから、達也が桐原先輩の『高周波ブレード』に対して何かしたとしか思えなかったわけ」
悠元の言葉を聞いて達也の表情が真剣になる。それを見つつも彼の問いかけに対して自分が今日関わった出来事を簡潔に話した。すると、深雪が悠元に連絡を取った時のことを思い出していた。
「悠元さん、もしかしてあの時雫やほのかと一緒にいたのは…」
「その対処の付き添いってやつだよ。俺がそれを知ってるのは、同じ現象の発生方法を偶発的に見つけただけってこと。多分達也のやった方法と同じだと思う」
その方法は保有想子量にある程度比例することも判明している。達也ほどの想子保有量であれば、高い想子感受性を持つ人間相手なら簡単に想子酔いを起こせるだろう。
第二小体育館にいた他の生徒にそれほど被害が出ていなかったのは、その時間帯が二科生を中心とした非魔法競技系クラブのデモンストレーションだったことも幸いした形だ。それには触れないように言葉を続けた。
「七草会長の耳に入れるのは拙かったから、市原先輩だけにしか伝えていないがな。狩猟部の先輩方もちゃんと対処したから問題はないよ」
「……そうか。すまない、悠元」
「別にいいって。こっちも偶然だったわけだし……俺が気付かなくて

も深雪なら気付いていたかもしれないな」
「そうだな……深雪は勘が鋭いからな」
「もう、お二人は私を何だと思ってらっしゃるのですか…」
悠元は達也の謝罪を受け取りつつも咎める気はないと言い放った。その上で、悠元は自分が気付かなくても深雪なら気付くと言い張り、達也もその意見に同意するような発言に対し、深雪は首をかしげつつ自らの頬に手を当て、頬を赤く染めながら強めの口調で文句を言うような台詞を口にした。
これには真っ先に燈也が引き攣った笑みを零したが、悠元の言葉に気付いて問いかけた。
「照れているようにしか見えませんけど……そういえば、『キャスト・ジャミング』って言いませんでした？」
「それって、確か特殊な石が必要よね？　確か、アンティ…」
「アンティナイトよ、エリカちゃん。でも、それってすごく高価なものですよね？」
アンティナイト……久し振りに聞く単語である。3年前の沖縄侵攻の時、危うく使われそうになったのがそれによるキャスト・ジャミングである。産出量が少ないために宝石よりもかなり高価であり、国家指定の稀少軍事物資として厳重に管理されている代物だ。とても一個人で持てるようなものではない。
「俺は持ってないよ。アンティナイトは高価である以前に軍事物資だ。一民間人が手に入れられるレベルじゃない」
「言っとくけど、うちにもないからな？」
「え？　けど……」
このままだと美月は納得しないだろうと考えた達也は悠元に視線を送った。悠元がそれに気付いて軽く頷くと、密かに遮音魔法を発動させる。そして、達也は顔を近づけつつ唇の前に人差し指を立てた上で説明した。
「あー……これはオフレコで頼みたいんだが、俺が使ったのは『キャスト・ジャミング』ではなく、正確にはその理論を応用した特定魔法の妨害なんだ」

「……そんな魔法、ありましたっけ？」
「達也、ひょっとしたらだけどＣＡＤ同士の想子干渉を利用した方法かな？」
「ああ、正解だ」
　達也の説明に美月は首をかしげるが、そこで燈也が心当たりを思い出しつつ尋ねると、達也はそれに頷いた。一方、まだ理解が追い付いていないレオに悠元が説明をする。
「レオ、２つ以上のＣＡＤを同時に発動させようとしたら、想子波が干渉しあって殆どの場合で魔法が発動しない、あるいは魔法の効果が薄くなる現象は知ってるよな？」
「ああ、それは俺も経験してるから解るぜ」
「うっわ、身の程知らず。アンタにそういう高等テクが使えるわけないじゃない」
「なんだと!?」
「まあまあ」
「喧嘩は止めろよ……」
　何だかんだ言って気の合っているレオとエリカの『夫婦喧嘩』にはあまり気を留めず、騒ぎは止めろとそう呟いた上で悠元が説明を続ける。美月はお互いを諌め、燈也は苦笑し、深雪は微笑みながら話を聞いている。
「で、今回の場合だと『高周波ブレード』を妨害する起動式を展開し、もう一方のＣＡＤで全く逆の現象を引き起こす起動式を展開。二つの起動式を複写増幅して想子信号波を無系統魔法として放つ……それで魔法をある程度妨害して、桐原先輩をあっさり取り押さえたってところかな？」
「流石だな、悠元。今度から解説はおまえに任せたほうがいいかな？」
「俺はお前の通訳じゃないし、偶々同じ原理を見つけただけだよ。しかし、それだけのことが出来るＣＡＤなんてよく風紀委員会本部に２つもあったな。こないだの片付けの時に見つけたのか？」
　達也の冗談めいた言葉に悠元はため息交じりに呟きつつも問いかけた。この原理は、ある程度の性能を持つＣＡＤを使わないとまとも

な効果が出ない。そうなると余程の高性能機でないと『高周波ブレード』の妨害も難しいということも悠元は理解している。
「ああ。旧式だがエキスパート仕様の高級品がな。かなりカスタマイズされていたようだが……」
「んー、多分うちの姉が風紀委員長をしていた時に使ってたやつかもしれない。生徒会長になる際にお祝いでＣＡＤをプレゼントしたから、寄贈品として置いていったものだろう。達也がそう言うレベルのだと、使えていたのは美嘉姉さんだけだろうし」
　かなり極端な調整を施していたため、豊富な想子保有量を有していないとすぐにガス欠になるほどの仕様だった。そんなピーキーなＣＡＤのことを思い出し、それを達也が使って『疑似キャスト・ジャミング』を起こしたのなら狩猟部の先輩方の想子酔いも納得できる話だった。
「成程、それなら納得できる話だな」
「けど、そんな方法を見つける人が同じ学年に２人もいることは凄いよ。流石は三矢の一族に深雪のお兄さんと言うべきかな？」
「どうしたんだ、二人とも？　ハッキリ言ってすげえことじゃねえか」
　悠元の言葉に達也は納得し、燈也は悠元と達也を褒めるような言葉を述べた。だが、その褒められた方はあまり嬉しくなさそうなことにレオが首を傾げた。すると、達也が言葉を発した。
「オフレコの理由は二つ。ひとつはこの技術がまだ未完成だということ。二つ目には、アンティナイトを使わずに魔法を妨害できる仕組みそのものが問題なんだ」
　アンティナイト自体古代文明の遺産であり、産出量が極めて少ないことから現実的な脅威になっていない。だが、達也がやった方法が技術化されれば魔法師の社会基盤そのものが揺らぎかねない、と説明した。
「対抗手段を見つけるまでは、公表する気になれないからな」
「すごいですね、そこまで考えているだなんて」
「お兄様は少し考えすぎです。そもそも、相手が展開中の起動式を読み取るだなんて、誰にでもできることではありませんし。ですが、そ

れでこそお兄様です」
　美月が感心するように述べると、深雪は達也に視線を向けつつ皮肉も交えての言い草に達也は苦笑を浮かばせていた。
「……それだと、俺が優柔不断のヘタレだ、という風にしか聞こえないんだが？」
「さあ、どうでしょうか？」
「ははは……ちなみに、悠元は達也と同じ理由なの？」
　兄妹の軽いやり取りに反応しつつも、燈也は悠元に尋ねた。すると、悠元は一同を驚愕させる事実を言い放った。
「達也に悪いとは思うんだが……その技術、完成してしまったんだ。対抗手段もあるが、これはどう考えても公表できないと判断した」
「『完成してしまった』？　悠元、まさかお前は特定魔法の妨害術式を完成させたのか？」
「ああ……達也と深雪は一度見ている。俺が『あの人』に対して放った魔法――あの中にそれが使われている」
　悠元の放った言葉に達也と深雪は驚く。達也としては未完成の技術のレベルだった『特定魔法の妨害』を悠元は実用レベルとなる魔法として成立させたということを意味する。
　これにはエリカ、美月、レオ、燈也も揃って驚きを隠せない。もはや高校生のレベルを逸脱しているからだ。それを見た悠元はここから内緒で頼みたいと言いつつ説明する。
「…これはマジのオフレコなんだが。達也が風紀委員に指名された日の放課後、俺は十文字会頭と正式な試合をして勝っている。その際、彼の魔法を破るために使ったのが魔法発動の強制終了（シャットダウン）で起動式・魔法式・発動後の魔法を破壊する魔法だ」
「……そんな魔法、初耳よ？」
「だからオフレコなんだ。これの原理の大本は『キャスト・サイレント』と自分では呼称している。1種類限定だが、1つの系統魔法に対して相反作用を引き起こす魔法式を展開することで魔法発動を意図的に妨害させることが出来る……現状、これらの技術を使えるのは世界に二人だけしかいない」

正直、達也の眼を誤魔化すのは無理だと最初から分かっていた。だからこそ、ある程度の情報は与えるつもりだった。

固有魔法『円卓の剣』――――これは全系統全種・各種干渉に対する『キャスト・サイレント』を同時行使することで意図的に複写増幅を起こさせ、疑似的に一つの魔法式の塊として対象物へ直接ぶつけて爆発させ、そこにある起動式や魔法式を強制終了させる術式。『術式解体（グラム・デモリッション）』の実質的な上位互換版――――ちゃんと名付けるなら『術式終息（グラム・バニッシュ）』といったところだ。

魔法式が魔法式に作用できないのは、発動したタイミングによって各々の魔法式に対して自動的に魔法式干渉防止のためのセキュリティが生成されるようなもの。『キャスト・サイレント』は発動した同系統魔法のセキュリティを意図的に開けることを可能とするマスターキー的な役割を持ってしまったのだ。

悠元以外にこの術式を使えるのは同じく『ファランクス』を破った佳奈である。彼女も強力な『エレメンタル・サイト』を持っているからこそ、悠元のこの技術を理解して秘匿することを了承した。

悠元の説明には全員が黙ってしまうほどのレベル。言わずともそんな技術が明るみに出れば、魔法師社会の基盤が揺らぎかねない。いや、その前に『魔法式に干渉できる魔法式』の時点で魔法師社会全体が大騒ぎになりかねない。

悠元もそれを理解しているからこそ、それらの技術には個人に合わせた起動式の最適化を必須としている。それなしに使おうとした場合、精神力の過剰使用が起きて死に至るよう組まれている。

魔法式破壊という観点では『術式解散（グラム・ディスパージョン）』もあるが、自分の場合だとあれは『天神の眼』を併用するのが前提になる。ここ数年の訓練で眼の色が銀色に変化することはなくなった。単に慣れきったというのもあるだろうが。

「万が一の場合にも備えて、起動式自体に暗号化と専用化の記述も組まれているから問題はないと思うが……案の定、皆固まってるな」

「それはそうだろう、悠元。俺からしたら未完成のレベルだったんだぞ？　お前は別の意味で『カーディナル・ジョージ』になれるんじゃ

ないか？」
「なりたくもないし、徒に社会システム崩壊の引き金なんて引きたくもない。魔法無効化の十八番の看板はお前に背負ってもらった方が都合がいい」
　悠元は達也の言葉にそう返しつつもコーヒーの入ったカップを口にする。すると、深雪が真っ先に復帰して悠元を見やると、悠元に凭れ掛かるように身を寄せた。何か桃色の雰囲気を感じて再起動したレオ、エリカ、美月、燈也は２人の光景に固まる。
「流石は悠元さんです。それでこそお兄様と同じぐらい敬愛を捧げるに値します」
「やれやれ……深雪には敵わないな」
「……って、すっげえラブラブな雰囲気にしか見えないんだが!?」
『そうか（でしょうか）？』
『ごはっ!?』
　どう見ても恋人のような雰囲気を醸し出しているのに、２人揃って心外だなと言わんばかりの答えが返ってきたことにレオ、エリカ、燈也がテーブルに勢いよく突っ伏した。美月に至っては頬を赤らめてその場に硬直していた。これは助け船が必要だろうと達也が２人を諌めた。
「２人とも、冗談は程々にな。約一名冗談だと解ってないのがいるから」
「……え、ええっ!?　そ、そうだったんですか!?」
　何にせよ、上手く濁したことで悠元の言い放った衝撃的な事実も水に流せた形となったのだった。
◇　◇　◇
　勧誘週間も折り返しとなったが、トラブルは絶えない。いや、むしろ増えていると言ってもいいだろう……まるで、とある一件から意図的に増えているような印象を強く受けていた。
　達也に関しては巡回中に二科生の先輩による意図的な妨害があり、それをたまたま見つけたときは両成敗という形で強制的に気絶させた。

風紀委員の勧告に従わない場合は生徒会役員立会いの下で強制鎮圧が認められる……これは姉である美嘉が風紀委員長の時も同じことがあり、それを見た佳奈が臨時生徒総会まで開いた上で追加したルールだ。

自分にも数回ほどその敵意らしき魔法が向けられたが、その悉くを『術式解体（グラム・デモリッション）』で相手の魔法式を吹き飛ばした。その人間は制服ではなくジャージ姿だったが、体の運びで何を学んでいるかは読み取れていた。

（剣道を学んでいる……それと、あのリストバンド……『エガリテ』か）

魔法の発動速度から見ても二科生なのは間違いない。そうなれば剣道部の男子であの髪型の人間というところまで絞り込める……まあ、自分の場合は原作を知っているが、それがどこまで通用するかもわからない。ただでさえ自分というイレギュラーを抱えているのだから。

（……あいつ、阿呆か？　まあ、こっちも自然と意識を逸らさせながら歩いていたら、気付かなくても無理ないか）

その人物だが、次の日に襲撃された時と同じ格好ですれ違った。向こうからすれば自己加速術式で見えないとでも思ったのだろう。

それ以前に武術を嗜んでいるせいで自然と気配を偽る歩き方になっていた。ここ最近の意図的な妨害は自分でも億劫だと感じていたのかもしれない。

すれ違ったのは3年F組の男子、剣道部男子主将の司甲（つかさきのえ）。彼が誰から逃げるように走り去ったのかと思えば、それは達也であった。悠元は息を吐いて気配を元に戻すと、達也はホッとしたような表情を見せていた。

「なんだ、悠元か。師匠でも来たのかと思ったよ」

「悪いな。ここ最近の意図的な妨害は目に余るからな。姉達で懲りたかと思えば、反省してないとか幼児以下だろ。魂レベルで生まれ変わって出直せと言いたくなるが……厄介な奴の妨害を受けたみたいだな」

「……やはり、気付いていたのか？」

「同じ奴に妨害を受けていた。達也の場合は何となく察しはつくが、俺は別に『白』の連中と諍いを持った覚えなんてないぞ？」
恐らく達也の『疑似キャスト・ジャミング』を意図的に確かめようとしたのだろう。あわよくばその技術を手に入れようと画策する……魔法を否定しておきながら解決法に魔法を求める時点で矛盾しているとしか言いようがない。けれど、自分の場合は不明だ。考えられるのは達也に近しい人物だから人質に取ろうと画策したのだろうか。
「とりあえず、第一体育館だったか。あの連中の詮索はまた今度だな」
「そうだな」
ともあれ、真由美からの連絡があった乱闘行為の起きている第一体育館に向かうのだが、その前に悠元は屋上に視線を向けた上で一言呟いた後、視線を戻して先行した達也を追いかけたのだった。

剣道と剣術

――痛い目を見たくなかったら、大人しく引け。
「っ!? 今の……魔法?」
「び、吃驚した……」
「悠元さんの声、だったね」
校舎の屋上でクラブのユニフォームを身に着けている英美、雫、ほのかの3人は先程聞こえてきた声に驚きを隠せなかった。
あれは紛れもなく悠元の声であり、魔法によるものだとすぐに分かった。
「というか、姿が見えなかった……」
「悠元さん、光波振動系魔法も使えるみたいだから、それかな?」
「もしくは隠密系ね。流石に十師族相手に聞き出すわけにもいかないけど」
彼女らがここにいる理由は達也を狙う人間を突き止めようと動いていた。だが、深雪の耳に入れたら学校のあちこちに氷のオブジェが乱立しかねない。悠元の耳に入れても深雪に伝わる可能性があった。
なので、自分達でその人物を突き止めようと双眼鏡で達也を見ていて、その襲撃者が男子剣道部の主将ではないかと英美が言ったところで三人の耳に寺の鐘を近くで聞いたような感じの声が突然入ってきて、三人はビクッとなったということだ。
「でも、どうするの?」
雫は今のが警告だと認識していた。
今の彼は十師族――三矢の人間だ。その彼が警告した意味はそれとなく理解できる。
だが、ほのかの親友として意見を尊重したいという思いもあった。そんな雫の問いかけに、ほのかはこう答えた。
「流石に悠元さんだけじゃ相手にできない。だから、私たちでその襲撃者を突き止めよう!」
「……ほのか、えらくやる気になってるね」
「うん……(ごめん、悠元。こうなったほのかは私にも止められない)」

その根底には深雪が手を出すまでもないように（寧ろ、深雪が動いて氷像が後を絶たない状況になる前に）という彼女への強い想いが彼女を動かしていた。
これには率先して動いていたはずの英美も思わず後ずさり、雫は内心で悠元に謝罪しつつもほのかが危険な目に合わないよう決心した。
◇　◇　◇
第一体育館でのトラブル処理を終えて戻ってくると、ワークステーションの席でタブレット型端末を見つめながら考え込んでいる深雪の姿が目に入った。
悠元が扉を閉める音で漸く気付いたのか、深雪が慌てるように声をかけてきた。
「あ、お、お帰りなさい、悠元さん」
「ああ、ただいま。……それは、部活連からの？」
「はい……ご覧になりますか？」
「一応ね。どれどれ……」
深雪が考え込むほどとは一体どんな口述が記載されているのか……そう思いながら、悠元は深雪から渡された端末に記載された部活連の口述文を読み始める。
それは先日の剣術部と剣道部のトラブルの件で、剣術部２年の桐原武明（きりはらたけあき）が剣道部２年の壬生紗耶香（みぶさやか）に対する感情の発露からくるものだと本人の証言から音声変換された原文に書かれていた。
すると、深雪が悠元に問いかけた。悠元は武術において高い技量を持っている。だからこそ、その面からの意見を尋ねてみたかったのだろう。
「悠元さん、この桐原先輩の証言を……その、どう見ます？」
「言わんとしていることは理解できる。俺も学んでいるものは技を研鑽して己を高めるために進む『道（みち）』じゃなく、必要な時には人を殺めるための『術（すべ）』である。調べた限りだと、あの時桐原先輩が剣道部に対して魔法を使った相手は壬生先輩だけだったらしい。少なくとも、剣術と剣道の違いをそれなりに認識していると思うな」
一概には言えないが、『道』を〝目的〟とするなら『術』は〝手段〟

という言い方もできる。
剣道の場合は、明確に定められたルールの下で技を競いあうものである。
剣術は競技の場合だとある程度の制約を課せられるが、それでもいかに自分が斬られるよりも早く相手を斬るかに尽きる。いわば『人斬りの技』でしかない。
「桐原先輩の証言からして、この学校で壬生先輩に何かしらのトラブルがあった。それを切っ掛けに壬生先輩の剣道が実戦向きに変質した……それも原因が剣道部の人間だと考えている……成程ね」
桐原の推測はある意味的を射ている。それだけ桐原は紗耶香の剣を見続けてきたという証左ともいえる。だが、自分が襲撃を受けた件については深雪に深くは話していない。恐らく達也も細かい話はしていないのだろう。深雪をこの件に深く関わらせるべきか悩むところでもある……この件は達也にも判断を仰ぐこととする。
「十文字会頭があの程度の処分で納得しているということは、桐原先輩が反省していることを認識している、と判断していいだろう……(問題はこれによって『連中』が首を突っ込んでくるってところだが……必要以上に伏せてたら、爺さんを怒らせるだけだぞ)」
その最後の砦として自分がその役目を担わなければならない……そう考えると気が重くなる悠元であった。
◇　◇　◇
新入生勧誘週間の間に変わったことと言えば一つ。
魔法科高校には学内版の公益通報システムがある。これは一科生が力にものを言わせて二科生などにトラブルを起こした場合、表向きの通報では報復の恐れがあるために匿名の通報システムが備わっている。
ただ、前任の風紀委員長（先代会長）である美嘉はこれに頼らず色んな二科生と個人的に交友を持っていたため、ある意味有名無実の状態だった。
その公益通報窓口からの珍しい通報に『勧誘中のセクハラか？』と首を傾げる摩利だった。それは達也が故意の魔法攻撃を受けている

という匿名の通報だった。
この前日の夜に達也が珍しく自分から深雪のクラスメイト――それも女性である雫とほのかの名前を出したことに深雪は驚きつつも、彼女らのことについて尋ねられたので、それに答えた。悠元はそれを聞いて『あの3人だな……』とすぐに理解したが、口には出さなかった。
なお、その際達也が冗談めかして『深雪は俺のよりも悠元の写真が欲しいんじゃないのか？』と言い、悠元は飲んでいたコーヒーを盛大に噴出し、深雪は『そ、そんな、畏れ多いです！』と手を広げてブンブンという音が鳴りそうなほどに両手を振っていた。深雪さん、俺は貴方にとっての神様とか仏様のレベルなのですか？
一応言っておくが、噴出したコーヒーは魔法で綺麗にシミ一つなく消しておいた。
◇　◇　◇
新入生勧誘週間も終わり、学生の本分である学業をこなす毎日へとなっていた。
風紀委員として多忙だった達也も、平時の風紀委員の仕事となれば当番として与えられる二人一組の巡回任務へと切り替わっていた。
達也の場合は委員長である摩利か、初めに知り合った辰巳か沢木の誰かという形になっていた。同じ1年である森崎と同じ巡回任務に当たらなくてよかった、とこの時ばかりは摩利に内心感謝していたのかもしれない。
放課後になって帰ろうかと思ったところでレオに話しかけられた。
「達也、今日も委員会か？　勧誘週間は終わったんだろ？」
「ああ。今日は非番だからゆっくりできそうだ」
「大活躍だったな。今や有名人だぜ、達也。『魔法を使わず、並み居る魔法競技部のレギュラーを連破した謎の1年生』ってな」
「謎の、って何だ。謎のって」
その噂は当然達也の耳にも入っている。別方面では『反魔法主義団体が送り込んだスパイ』なんて噂も立っている。この間の襲撃を考えると、とてもじゃないが反魔法主義団体に味方する気にならないのは

確かだろう。悪い冗談も程々にしてほしいと思いつつも、レオに言い返す形で達也は呟いた。
「それに、俺なんてまだ生易しいレベルの噂だろ」
「ああ、悠元か。実力のあるバイアスロン部ＯＧ二人を見事に捕まえ、狩猟部の先輩方を癒し、遭遇したトラブルを悉く黙らせた『手品師（マジシャン）』なんて呼ばれてるんだっけか」
　この学校は広いようで狭いので、当然噂が広まるのは早い。現在の２・３年の先輩は悠元が先代・先々代会長の弟であることも既に知っている。それだけ『数字付き（ナンバーズ）』の意味合いは大きいものでもあると達也は理解している。そして、噂はこれだけではなかった。
「それで、もう一つの噂に関してお兄様の意見はどうなんだ？」
「そうだな……どこぞの見知らぬ奴ならともかく、悠元なら信頼できると思ってる……どうした、レオ？」
「いや、シスコンな達也にしては真っ当な評価だと思ってな」
「俺は深雪の保護者か？」
　そう、もう一つの噂は悠元と深雪が付き合っているのでは、という噂だった。
　共に１年Ａ組で生徒会役員、新入生総代とその代理を務めた２人。おまけに双方共に容姿が優れていて、達也から見ても仲が良い……そんな二人の様子からそういう噂がたっても不思議ではない、と達也は考えている。ただ、お互いが恋人という関係になるには、まだ早いのではなく〝遠い〟と達也は思っている。
　すると、教室が騒がしいことに気付いた達也がよく見ると、入り口から顔を出す様に覗き込んでいた深雪の姿があった。
　普段なら近くにいるはずの悠元がいなかったのは、彼が別の場所にいたからであった。
　風紀委員会室には、風紀委員長である摩利と生徒会役員なのに呼ばれた悠元の二人がいた。
　摩利は非番で、悠元も今日の仕事は既に片づけているため、既に暇である。すると、扉が開いて真由美と克人の二人が入ってきた。
「お待たせ、２人とも」

「失礼する」
　本来なら3年生のみの席に1年生が混じるという異質な状態。つまりこの時点で悠元を呼んだ理由は『三矢家』として呼ばれたことを意味していると察した。４人が席に着いた状態となったところで、真由美は話し始めた。
「さて、３人に集まってもらったのは先日の一件――――桐原君が行った壬生さんへの魔法攻撃の一件なんだけど……悠君はこの調書を読んだかしら？」
「ええ。深雪が目を通した後に読ませてもらいました」
　摩利は真由美から端末に転送してもらって目を通しており、ここにいる全員が目を通した形となっている。その上で真由美は克人に尋ねた。
「十文字君。桐原君に関して、何か気づいたことはない？」
「口述の調書については、桐原本人の口から聞いている以上のことは聞いていない。あれでいて力の責任を弁えている人間であることはよく知っている。流石に嘘を言っているとは思えない」
「壬生の剣が変質した、か……」
　ただカッとなってやったならここまで拗れなかっただろう。だが、桐原は壬生の剣そのものではなく変わってしまったことに苛立って諍いを起こした。こうなると、昨年――――つまり紗耶香が1年の時に何かしらの出来事に巻き込まれた……ダメもとで悠元は手を挙げつつ立ち上がった。
「すみません、ちょっと確認のために委員会室の端末を起動してもいいですか？」
「え？　ええ、いいけど……」
　悠元はそう言って端末を起動し、そこから昨年度に限定して剣道部か剣術部に関わる案件のみを検索する。一体何を調べているのか気にかかった3人は覗き込むように見ると、高速でスクロールするモニターに息を呑んだ。
　風紀委員会は発生したトラブルに関して物事の大小関係なく調書をデータ化する。

これは生徒が各々得意とする系統が異なるため、その対処の仕方を記録することでこの先就任する後輩の風紀委員達への被害を減らす目的もある。
悠元は3人の視線に一応気付きつつも検索を続け、そしてそのうちの1件に目が留まった。内容は昨年の新入生勧誘週間における剣術部のトラブルで、対処したのは風紀委員長である摩利であった。
「摩利、これは？」
「これは覚えている。剣術部のはねっ返り共が暴れてな。お灸を据えてやっただけだ……だが、これが桐原の一件に関係してくるのか？」
「どちらかと言えば壬生先輩のほうでしょうね。彼女が習っていた剣道の道場に一度だけ行ったことがあります……確か、時期的に壬生先輩が入学する直前だったかと」
新陰流は『表』となる剣術・体術の出稽古も時折行い、各流派との交流を積極的に行う。悠元も元継の付き添いという形で行った経験は何度かある。ただ、その時は剣を教えずに元継の補助に徹していたので、紗耶香の前で剣を振るうことはなかった。
その時点で『剣道小町』と呼ばれていた紗耶香の剣筋は剣道としての剣だったことは間違いないと断言できる。前世で武術はからっきしだったのに、生き残るための術として学んだ武術が人を見る目に生かせるとは皮肉なものかもしれないが。
「実際にその剣を見ていれば気付いていたかもしれませんね。その時のトラブルに居合わせたのは達也ですけど、彼からすれば門外漢みたいなものですし……ただ、桐原先輩の推測は残念なことに当たってしまっています」
「!?」
「なにっ!?」
「悠君、どういうこと!?」
残念そうに呟いた悠元の言葉に克人と摩利、真由美は驚く。つまり悠元は桐原の推測――『剣道部の誰かに壬生の剣が歪められた』という証言を肯定するようなものであった。
「実は勧誘週間中、自分は何者かの襲撃を数回ほど受けました。体の

運びからして剣道を嗜んでいる人間だとすぐに気付きました……それだけだったらまだいいんですが……」
「何かあるのか？」
「その人物は『ブランシュ』の下部組織『エガリテ』の構成員の印である三色のリストバンドをつけていました。しかも、3月に横浜で起きた一件も『ブランシュ』絡みだった……七草会長に十文字会頭、お二人の家はこの事実に気付いてましたか？」
悠元が言い放った事に3人は最早絶句に近かった。そこにいるのは一介の高校生ではなく、十師族である『三矢悠元』その人であるということ。
ここまで踏み込んだのは、この際ということで七草家と十文字家の反応を見るというものでもあった。少しの沈黙ののち、真由美が恐る恐る問いかけた。
「もしかして横浜ベイヒルズ東タワーで起きた事件、悠君もあそこにいたの？」
「ええ、いましたね。尤も、事件の解決に寄与したというよりも『依頼された仕事をこなした』だけですし、解決した当人には接触していませんから」
その日は奇しくも深雪の誕生日だった。横浜ベイヒルズ西タワーにある日本魔法協会関東支部に、悠元は呼び出しを受けた……時間的にはこの1時間後に達也が呼び出しを受ける形となったことは悠元も把握している。
呼び出した人物とは四葉家現当主である四葉真夜。そして彼女の付き添いである筆頭執事の葉山。二人からは『今日ここで起きる襲撃の証拠隠滅』を依頼された。
沖縄防衛戦における〝不可視の戦略級魔法〟を放ったことは深夜経由で伝わっており、情報操作を期待しての呼び出しだった。
その辺の操作は手持ちの魔法で十分可能だったし、万が一の場合は即興で魔法式を編み出すつもりだったので、幾分か気は楽だった。犯人を捕まえろなどとも言われなかった分、自分の仕事は楽ともいえた。それに、自分は達也の秘密を知っている外部の人間である以上、

その対価を支払っただけに過ぎない。
ただ、その報酬として支払われたものは驚異というか驚愕というか……これは、機会があれば話すことにする。
「……誰からの依頼なのか、それは言えないのか？」
「ええ。依頼主（クライアント）からの意向なので。魔法協会から依頼主を経由して引き受けた仕事です、とだけ。父から聞き出そうとしても無駄ですよ？
この件に関して言うなら、父は協会からの要請を受けて『自分が仕事を引き受ける許可』を出しただけですから、内容も知りません」
克人の言葉に対してそう答えた上で、悠元は3人に対してハッキリと述べるように言い放つ。それは、この件をしっかりと対処しなければ容赦はしないという裏返しともいえる発言であった。
「三矢家は既に『ブランシュ』とつながりのある人物の目星も付けています。この際だから言いますが……仮に誰かを犠牲にして『ブランシュ』のことを隠すというなら、この件の情報は全て上泉家に伝えます。これは自分と三矢家現当主、三矢元の決定です」

慣れましたから

悠元の言い放った衝撃的な言葉。それに反応したのは摩利だった。十師族に喧嘩を売るなど正気の沙汰とはとても思えないという発言に対して、真由美が沈痛な面持ちを窺わせるような表情をしつつ呟いた。

「正気なのか!?　七草と十文字の二家に喧嘩を売るなど……」

「摩利。これは私たちの家にも責任があるのよ」

「どういうことだ？」

摩利の言葉に対して真由美が話す前に克人がその事情を説明した。それには真由美も驚いてしまった。彼は十文字家当主代行として務めている以上、そういった情報の管理には厳しく当たらなければならない立場。

「師補十八家の一つである十山家。その家が悠元を誘拐しようとした……七草家と十文字家は国防軍が動いていることを知りながら、見過ごしていたことが上泉家の逆鱗に触れたのだ」

「十文字君、それは……」

「七草、渡辺も上泉家や三矢家とは無関係と言えない立場だ。なら、知る権利は当然あるだろう……三矢、そちらの要求はいったい何なのだ？　それを聞かなければ、どうにも動けぬ」

ここにいる時点でもそうだが、家の関係で摩利も当事者側に立たされている……その意味を含めつつ、克人は悠元に問いかけた。

「要求というか希望に近いですが……もし『ブランシュ』に関わる一件が大規模に発生した場合、七草家と十文字家が主体となって動いてほしいのです」

「無論そうするつもりだが、では何故それを希望に出すのだ？」

「自分が『エガリテ』のメンバーに襲撃された事実を受け、実家である三矢家が日本魔法協会関東支部経由で二家に依頼とする形を取りたいからです……すなわち、その大本である『ブランシュ』の日本支部壊滅作戦を実施するために」

原作では克人が壊滅作戦に参加していたので、なし崩し的に十文字

家が出てきて対処していた。
　そうではなく、『ブランシュ』日本支部壊滅を結果ありきではなくその建前をつくるために七草家と十文字家に責を負わせ、反魔法国際政治団体のテロ行為に屈することなく十師族としての力を誇示した功績を与える。
　原作の通りに第一高校への襲撃を行った場合は、日本政府と日本魔法協会から『未来を担う魔法師や魔法技術を狙った極めて悪質なテロ行為』と発表する。そして、司甲や壬生紗耶香など『ブランシュ』に関与した学生は表向きお咎めなし、カウンセリングを念入りに行うことを盛り込む……ようは情報交換――――『司法取引』の類である。ただ、洗脳の線も否めないので実質上の無罪放免となるだろう。
「ただ、そうなると一人でも動く奴が確実に出てきます。なので、もし一高の生徒がその壊滅作戦に参加する場合は『生徒会・部活連・風紀委員会からの選抜メンバー』という体を取ります」
「…成程。でも悠君、仮にそうなったとしても生徒達に命を懸けろだなんて言えないわ」
「風紀委員会も同じだ。学生の領分を超えているからな」
　真由美と摩利から言われたことは尤もである。悠元も別に一高の生徒に対して命を懸けろなどと気安く言うつもりもない。
「必要なのは建前だけですよ……最悪、自分一人でも動きますから。誰かの力をあてにするつもりもありませんので」
「そうなると、作戦に動けるのは俺だけだな。七草と渡辺は状況次第で学校に残ってもらう必要がある……だが、そこまでの事態になりうると想定しているのか？」
　克人の懸念も尤もである。相手がいくら反魔法国際政治団体で、しかも第一高校の中にその思想に汚染された生徒がいたとしても、余程の大事になるにはどうにも現実味が薄い。そういう考えに至っても仕方ないと判断し、悠元は自らの持つ情報を一部開示する。
「ここだけの話にしてほしいのですが、『ブランシュ』が密かにアンティナイトをウクライナ・ベラルーシ再分離独立派の方面から手に入れたという情報を掴んでいます。その仲介役にかなり大きなスポン

サーがいることも確認できました。それらが内密に日本へ持ち込まれたようです」
「アンティナイトって……まさか『キャスト・ジャミング』か？」
「そんな情報、よく手に入れたわね。いくら三矢家でも東欧方面の情報なんて簡単に手に入らないでしょうし」
「ええ、これに関しては『自分』の情報網です。情報の入手方法は教えられませんが」
　この情報については、原作の知識に加えてその裏付けを取っている。入手方法については、自分が編み出した固有魔法クラスの魔法を使用している。
　――電子・電波干渉系魔法『八咫鏡（ヤタノカガミ）』
　この魔法は端末の個人情報および位置情報の改竄だけでなく、電子および電波によるネットワーク上に存在する限りにおいて、全世界に存在するいかなるセキュリティも無視して傍受・情報システムにアクセスできる魔法。しかも侵入という形跡を一切残すことがないため、傍受・盗聴といった面にも多大な力を発揮する。一応色々実験したところ、世界最高クラスの通信傍受システムまでアクセスできている……正直絶句した。
　なお、これをかなりダウングレードさせた魔法式を作り、信頼できる国防軍の知り合いに提供している。
　悠元の語った情報から克人は気を引き締めるように声を発した。
「成程な。確かに『キャスト・ジャミング』に耐えうるだけの干渉力を持つ人間は限られてくる。ましてや、それ以前に実戦経験のある生徒など数えたほうが早いだろうな……解った、備えはしておこう。『エガリテ』の構成員が一高の生徒にいるという情報は既に聞いていたからな」
「そうしてくれると助かります。穏便に済めば自分のほうから爺さんに矛を収めるよう伝えておきますので」
「はぁー……それにしても、悠君は本当に規格外よね」
「私からすれば、お前ら3人全員規格外だと言ってやりたいがな」
「ちょっと、摩利！　それは酷過ぎない!?　大体貴女だって同じよう

なものじゃない！」
　先ほどまでの空気から一転して賑やかになったことに悠元と克人は顔を見合わせると、揃って苦笑を漏らしたのだった。
◇　◇　◇
　その翌日。昼休みの生徒会室にて摩利がニヤつきながら達也に『壬生を言葉攻めにした』という噂の真偽を問いただした。深雪から聞いた話だと、悠元が居なかった時に紗耶香が接触し、達也とカフェテリアで会っていたそうだ。
「達也、隅に置けないな……いや、この場合はむしろ喜ぶべきか？」
「そういうことじゃないさ。それと、先輩は淑女なんですから『言葉攻め』という言葉は使わないほうが宜しいかと思われます。妹の情操教育上宜しくありませんので」
「お兄様、私の年齢を勘違いされていませんか……？」
　悠元の冗談めいた発言に否定しつつも摩利を窘めるように言った。その言葉を聞いた深雪は苦笑を浮かべつつも達也の発言に緩めの疑問を投げかけた。だが、摩利はさらに調子に乗って発言を続ける。
「そうか？　話によると『達也君と話しているときに、壬生が顔を真っ赤にして恥じらっていた』とも聞いているが？」
　すると、どこからか冷気が発生し始めた。その発生源は言うまでもなく深雪であり、その影響を受けて弁当や湯飲みに入ったお茶が完全に固体と化していた。そして深雪の雰囲気は紛れもなく母親譲りともいえるようなもので、あずさも若干…いや、かなり怯えていた。
「お兄様？　壬生先輩と一体何を話されていたのですか？」
「ま、魔法!?」
「深雪さんって事象干渉力がよっぽど強いのね。夏場は冷房いらずかしら」
「すまん、からかいすぎた……」
　これには真由美が弁当を箸で突きながら深雪の魔法力を感心するように呟き、流石に調子に乗りすぎたと摩利が反省する中、生徒会室に穏やかな風が吹くとその冷気が消え去っていた。深雪がハッとそれに気付いた時には、悠元が深雪の頭を撫でていた。

「はいはい、少し落ち着こうか深雪。まずは達也から事情を聞くのが大事でしょ？」
「あ、はい……すみません、悠元さん」
「あれだけの事象干渉力を抑え込むとは……今、ＣＡＤを使っていなかったが？」
「ええ。下手にスペックの低いＣＡＤを使うと逆に発動速度が遅くなってしまい、致命的になりかねませんので。自分が使っているのはその意味で特注品クラスのものばかりなので」
　悠元は現状４つのＣＡＤを保持している。フォース・シルバー・カスタム『ワルキューレ』『オーディン』の２つ、携帯端末型ＣＡＤ、それと隠し持っている刀剣一体型ＣＡＤの４つだ。どれも特別なカスタマイズによって事実上のワンオフ機となっている。
　ＣＡＤを使わずに深雪の魔法を抑え込んだ悠元に達也は目線で感謝の意思を示しつつ、摩利に視線を戻した上で紗耶香との会話の内容について話す。
「――風紀委員の点数稼ぎか。それだったらうちの姉はどっちかに振り切れてるような気もするが……事実上の名誉職とはいえ、生徒会と部活連、それに教職員から高い評価を得ている人間でないとなれないのも事実ですが」
「こればかりは悠元君の言うとおりだな。その意味で壬生の言っていることは間違っているだろう」
「けど、風紀委員が高い権力を持っているのもまた事実。権力を傘に着ているとみられることもあるわ。正確には、それを吹聴している者がいるみたいだけど」
　正確に言えば、『ブランシュ』の下部組織である『エガリテ』に参加している生徒が風紀委員に対する風評被害を流している。そういえば姉の美嘉が風紀委員長をしていた時、トラブルの関係で二科生全体の約１割を拘束したらしいが……もしかしたら、それは『エガリテ』に関係している人間だったのかもしれない。
　すると、達也が立ち上がってその心当たりを口にした。
「その吹聴している者です。例えば、反魔法国際政治団体『ブラン

シュ』とか」
「!?　ど、どうしてその名前を!?」
いや、態とにしても驚きすぎでしょう。そんなの答えを言っているのも同じじゃないですか。というか、あーちゃん先輩は『ブランシュ？』と首を傾げている……今更ながら、美嘉が校長相手に一歩も引かなかったのは『反魔法主義に関する教育の甘さ』を理解していたからかもしれない。前に『賛成意見ばかり聞いても頭が痛いだけ。かといって狂信者の主張なんてあれは一種の宗教ね』とぼやいていたことからしてそうなのだろう。
都合のいいものは受け入れ、都合の悪いものは取り除く。それではいずれ衰退する未来しか見えない。
反魔法主義は魔法を否定しているが、それは極端な言い方をすれば『核兵器による人類滅亡容認派』とも言えるのではないか。そんな自滅願望という身勝手な理由で暴力を振りかざし、周囲に被害を与える……性質の悪いテロリストと呼称したくもなるというものだ。
「……情報なんて、一度広がれば塞ぐのは無理ですよ。達也が知っていたとしても不思議じゃないでしょう。問題はそんな反魔法主義を隠す側にあるかと。政府の対応は拙劣というよりへっぴり腰と言うべきでしょう」
「悠元、辛辣だな……」
一度妥協すれば彼らはつけあがってエスカレートする……そんなタイプの出来事を自分は知識として知っている。別にテロリストでなくともそういう『声だけ無駄にでかい連中』は前世で散々目にしているので、その例が『ブランシュ』によって一個増えたぐらいだ。
魔法による社会を肯定するということは、その恩恵を受けられない人も当然発生する。人間という生き物が画一的な能力を有していないために、魔法に依存しない反魔法主義という考えも出てくる。
だが、現実問題として国家を存続させるために戦略級魔法師という抑止力はもはや必要不可欠なのだ。そこに目をつけて『人道的救済』等とのたまっているが、現実が見えていない時点でお察しである。
「でもまあ、ここは国策の教育機関である。よって、主義や主張も政府

の意向が強くなる。その意味では生徒会長は難しい舵取りをしているので労わるべきかと」
「……悠君、慰めてくれているの？」
「でも会長、追い込んだのも三矢君ですよ？」
「自分で追い込んで自分でフォローする……まさに凄腕のジゴロだな。真由美もすっかり籠絡されているようだし」
「ま、摩利!!」
　別に婚約者がいる人間を籠絡するつもりなんて微塵もないと言いたかったが、またもや冷気が流れてくる。発生源は言うまでもなく深雪なのだが、今度は悠元のやったことと摩利の言葉に反応してのことだった。
「悠元さんがジゴロ…凄腕の……女泣かせ……」
「ストップ、ストップ！　とりあえず落ち着け！　というか別の妬みも混じってません!?」
　先ほどよりも地味に事象干渉力が強まってるため、周りに被害が及ばないよう苦慮する悠元を横目で見つめながら達也は静かに着席し、摩利たちに視線を向けた。
「……とりあえず、答えを待っているのは自分のほうですので、それを聞いて決めますよ」
「そうか。ところで、止めなくていいのか？」
「両者の問題に水を差して明日から氷のオブジェ状態はごめんですので。それに、これでも兄として妹の行く末は心配していますから」
「すぐ隣が冷凍室のような状態でも平然としている達也君が凄いと思うわ」
「……慣れましたから」
　別に慣れたくはなかった、という言葉自体は発しなかったが、それも含ませるような達也のある意味達観した言葉に、先輩三人は揃って苦笑を零すのであった。
◇　◇　◇
　そして、結局達也が力を貸す形で深雪は何とか落ち着き、ケーキを買って深雪のご機嫌取りをすることとなった悠元であった。

別に作ってもよかったのだが、そうなると別の問題が発生して拗れそうだったので、今回は我慢することにした。
「言っておきますけど、私は甘いもので機嫌が直るような安い人間じゃありませんからね。わかってますか、悠元さん？」
「そう言いながら一人でワンホールの８割食べちゃっても？」
「うっ……やっぱり悠元さんは意地悪です」
司波家に帰ってきて夕食後にケーキを堪能する。こんな風に会話をしていても二人は付き合っているわけではない……感情が欠けた自分にもこういうことはできるのだろうか、と達也は思いながら悠元や深雪のやり取りを微笑ましく見ていたのだった。

『白』の関わり

ケーキを食べ終えたところで本題に入ることとした。それは昼間の会話に出たブランシュの情報だ。

「反魔法国際政治団体ブランシュ。奴らは表向き市民運動を標榜しているが、その実態は立派なテロリストだ」

非人道的な政治テロを手段としているのに〝市民活動〟とはこれ如何に、とツッコミを入れたくなる。

「でも、なぜ一高の生徒にエガリテの構成員が……反魔法派は魔法を否定したいのではないのですか？」

「彼らはそう言っておきながら、表立っては魔法を否定していない。彼らは『社会的差別の撤廃』……では、差別とは何か」

彼らは魔法師の平均所得に触れて平等という名の格差是正を訴えている。魔法師が魔法で収入を得るのは不公平だ、というのが彼らの唱える主張。

「そんなこと言ったら、魔法を使わずにプロフェッショナルの職業に就いている人まで追及しないとバランスが取れないんだがな。魔法という『見えざる力』に囚われ過ぎて視野が狭くなっている」

「確かに悠元の言い分も解る。結局は方便が大事なのだから……彼らにとっての都合のいい『平等』を唱えるために他人を騙し、時には自分をも騙すためのな」

一流のアスリートだって始めからスポーツが上手だったわけではない。

アーティストだって始めから自分の才覚や技術を使いこなせていたわけではない。

魔法師だって膨大な量の理論や知識を叩き込み、魔法を研鑽していくために長い時間をかける必要がある。どの職業でも知識や経験の積み重ねが必要であり、とりわけ魔法師の場合は高度な技術を要求されることが多い。

彼らの主張は魔法師も機械と同じように画一的な性能を出せる、という風に考えているとしか思えない部分があるのは確か。

「……魔法から離れたくはないが、一人前に見られないことに耐えられない。第一線で活躍している人間はそれに見合うだけの時間を努力として積み重ねている事実に目を背ける。いや、言葉は悪いが劣っていると決めつけて現実から逃げている、というべきかな」
「容赦のない返しだな、悠元。だが、その弱さは解らなくもない。俺の中にもそういう気持ちは確かにある」
「何を仰っているのですか！　お兄様には誰にも真似できない才能があります！　それに、誰にも負けないように何十倍の努力を積み重ねてきたではありませんか！」
　普通と違う魔法師だからこそ、達也の心境は紛れもなく本物だろう。深雪はそれに対して達也の特殊性と努力を主張する。彼はそれを肯定した上で、そうでなければ連中のような甘い言葉に乗せられていただろうとも呟く。
「魔法が使えない者、魔法の才能に劣った者。彼らが主張する先に望むものとは……」
「この国を魔法の廃れた国にしたい、ということでしょうか？」
「それで利益を得るのが誰かとなれば……凡その察しはつく。気が付かないわけじゃないだろ？」
　この国は周囲を大国に囲まれながらも主権国家としての体を成している。その根底にあるのは戦略級魔法という存在が重要なファクターを担っている。
　ブランシュと昨今の魔法師排斥運動……ただ、この国に関してはかなり緩い報道に止まっているが、それでも魔法師としての力を奪おうとする連中の存在が確かにいる。表向きは友好を唱えながらも、裏では虎視眈々と力を削ごうとする……それを十師族が放置するはずもない。いや、放置などしてはいけないのだ。
「さて、こっから本題だな……俺の実家である三矢家は既に動いてる。エガリテのメンバーに襲撃を受けたから、名分は成り立つ。そして三矢家から日本魔法協会を経由する形で七草家と十文字家にブランシュへの策を講じてもらう形とした」
「……叔母様やお母様は、そのことを？」

「無論知っている、というか連絡済だ。今回については双方も納得して貰えたから、四葉が動くことにはならんだろう……というか、そんな事態になる前に上泉家が大きく動きかねない」
今回、四葉家には別件で動いてもらうことを〝助言〟という体で要請している。その為に『八咫鏡（ヤタノカガミ）』から数ランクは落ちるが、エシェロンⅢおよびフリズスキャルヴを視野に入れた暗号通信・情報収集・傍受をするための電子系干渉魔法『精霊の鏡（カーヴァンクル）』を提供することに決めた。これは国防軍にいる知り合いに渡したものとは別の術式で、術式自体の干渉強度は『精霊の鏡』が上になる。
それを渡す人間はかなり厳選し、現時点では真夜と深夜、そして元の三人だけに止める（個人認証のセキュリティも兼ねた暗号化・専用化処理を行う）。その際にフリズスキャルヴでの情報検索はあまりお勧めしないような感じを匂わせる文面にした。彼女ならその程度の芸当ぐらいはできるだろうという期待を持ってのことだ。
「まあ、達也あたりは率先して動きそうだから事実上の黙認だな」
「お前は俺を瞬間湯沸かし器か何かと勘違いしてないか？」
「でも、お兄様なら間違いなく動きますね」
「深雪まで……お前たち、実は双子の兄妹とかじゃないよな？」
二人は知らないが、今回四葉家への要請内容は『伊豆・横浜方面への情報網構築』というもの。これはこの先に出てくるであろう七賢人の1人に関係してくる。
彼がおそらくフリズスキャルヴを駆使することは目に見えているため、重要な個所への直接的な連絡網を兼ねてのもので、同じ第三研出身ともいえる師補十八家の三日月家にもその協力を仰いでいる。
「誕生日が一月以上違うんだから無理あるだろうに……」
「そういえば、悠元さんって誕生日はいつなんですか？　聞いたことがなかったような……」
「……2月14日」
「ええっ!?」
「……プレゼントがチョコってオチか。お前の場合は」
「家族以外だと話したのは二人が最初だよ……（深夜さんと真夜さん

はなぜか知ってたけど)」
いくら相手が賢人でもスーパーコンピューターレベルの処理能力を頭の中に搭載しているわけではない。最悪こちらには『万華鏡』と『天神の眼』がある。それと達也の『精霊の眼』で確実に追い込む。なぜなら……その人物というのは剛三からすれば『変な言いがかりで自分や四葉を恨む敵』と明言するほどの人物だったからだ。

◇　◇　◇

所変わって四葉本家。
当主の私室にて、真夜は葉山から渡された紙の書面に目を通していた。それを一通り読み終えると葉山に差し出し、彼は慣れた手つきで受け取ると速やかにその場で〝燃やした〟。灰一つも残さぬ卓越した技量に感心しつつも、真夜は呟く。
「――深雪さんが『世界から愛されている』なら、彼は『世界に認められている』なのでしょうね。言葉に出してはいないけど、フリズスキャルヴのことまで見抜かれてるでしょう……怖いと思う?」
「普通は見抜けぬでしょうな。ですが、深夜様からの報告では独自の情報網を持っていると聞き及んでおります。僭越ながら私めも恐ろしいと感じてしまいますが、幸い彼は剛三殿の縁で達也殿や深雪様――ひいては四葉に好意的でもあります。味方に引き入れるのは上策かと」
三矢家から電子系干渉魔法『精霊の鏡』の提供。その引き換えという形で伊豆・神奈川方面の情報網構築という〝助言〟を受けた。これはいわば三矢家からの要請ともいえる。
その根底にあるのは全世界傍受システム『エシェロンⅢ』の追加拡張システムであるフリズスキャルヴへの対抗手段のひとつということに他ならない。
「ですが、これは四葉にとって好機とみるべきであり、将来への保険でもありましょう。科学技術と魔法の違いはあれど、所在の解らぬものに頼り切るより、提供元が解るという遥かに安心できる材料は何よりも大きいでしょう。『白』への対処は彼らにお任せすべきかと」
「彼らが今の利を得て、私たちが未来の利を得る。彼らに気付かれな

いような貸しを作っておく……ふふっ。ヒルズタワーの一件といい、あの子は何をしてくれるのか楽しみね。増々引き入れたくなってしまうわ」

フリズスキャルヴで欺き、『精霊の鏡』で真の情報を掴む。二つの情報収集手段を得た真夜はその意図も自ずと察している。葉山としてもフリズスキャルヴに頼り切ることを危惧していたため、三矢家からの術式供与はまさに「渡りに船」とも言えた。

「ただ、役割をハッキリとさせ過ぎると端末を渡してきた連中も気付くでしょう。『表』の情報収集の吟味はお任せしてもよろしいかしら？」

「畏まりました。深夜様には如何されましょう？」

「私から話しましょう。『精霊の鏡』の暗号強度も見ておきたいですから」

変わりつつある四葉家。恐らく、そのことを一番よく感じていたのは当主である真夜なのかもしれない。

◇　◇　◇

その翌日、悠元と深雪は用事を済ませるために外出していた。

外出とは言っても、学校の生徒会に関わる買い物である。

「はわっ、発注ミスしちゃいました！　次の配達は週明け……しかも、ネットじゃ売ってないし……」

「あの、それでしたら私が買いに行ってきましょうか」

「すいません、すいません！」

学校の放課後に生徒会の仕事をしていたのだが、あずさが発注ミスをして買いそびれた備品が発覚。ネット注文できない品だったので深雪が引き受けた。その時のあずさの慌てっぷりがある意味微笑ましかったのはここだけの話である。

ただ、勧誘週間中の一件もあって一人で出歩かせるのは危険だった。ましてや深雪は歩くだけでも目立ってしまいがちだ。なので、その護衛として悠元が抜擢されたというわけだ。

なお、達也については紗耶香からの呼び出しがあったらしい。まあ、達也からすればそこまで期待しないと言い除けた上で断るのだろ

う。
「言い分は解るんだが……変に気を配らなければならない、というのは面倒なものだ」
「すみません、悠元さん。私のせいで……」
「深雪は謝らなくていいって。さっさと買い物を終わらせないと」
買い物ひとつするだけでも周囲の視線は深雪に奪われる。なので、2人の周囲に認識を偽らせる古式魔法を展開している。深雪からして『こんなに気にせず街を歩けたのは初めてかもしれない』とのことだった。人気者ってやっぱ大変だなと思っていると、深雪が考え込むような仕草を見せていた。
「どうした？」
「その、実は……っ!?」
「これは……（この街中でキャスト・ジャミングだと……）」
深雪が何かを話そうとした瞬間、2人の脳裏にノイズのようなものが走るが、双方ともに事象干渉力を上げて打ち消した。明らかに意図的なノイズ――キャスト・ジャミングの線を疑い、一旦買い物を切り上げてその発生源に向かって走る。走りながら深雪が悠元に話す。
「悠元さん。実はさっき、ほのかと雫、それに紅い髪の子が店の物陰から何かを窺うようにしていたんですが……」
「……っ！」
深雪の話から推測すれば、その女子が英美であるとすぐに判明した。三人が何かを追いかけていた……先日の一件からするに、その追いかけていた対象は男子剣道部主将の司甲（つかさきのえ）だろう。だからこそ、この件から手を引くように忠告はした。だが、彼女らは止まらなかった。
ノイズの強度は増してくる。場所的に監視システムの届かない路地裏――完全に姿を隠した男たちが数人。そして、蹲っている三人の女子生徒。男たちの手には、ナイフが握られていた。
それを見やる悠元は表情を引き締めて力強く一歩を踏み出した瞬間、彼の姿が消え……男たちのナイフが根元から綺麗に〝斬られていた〟。

「――――当校の生徒から離れなさい」
「全く、人の忠告を聞かないからこうなるんだよ……ま、言って解るなら苦労はしないか」
　顔をフルフェイスのヘルメットで覆った男たちに臆することなく、悠元と深雪は相対する。二人の視線はまるで氷をそのまま人間の表情に落とし込んだかのように冷ややかだった。
「ば、馬鹿な!?　このアンティナイトは高純度の特注品だぞ!?　このキャスト・ジャミングの影響下で動けるわけが」
「馬鹿はアンタらだろ。未知の妨害技術ならともかく、キャスト・ジャミングなんてどうとでもなる……深雪、三人を頼む」
「はい。悠元さん、御存分に」
　この場は悠元一人で事足りる――――それを理解したかのような深雪の発言を聞きつつ、悠元は一歩ずつ男たちに近付いていく。男たちの武器はナイフだったが、すでに使い物にならない。それ以上に、悠元から放たれる雰囲気がまるで獲物を狙う虎のように見えていた。
「ば、化け物が……!」
「キャスト・ジャミングを使って、躊躇いなくクラスメイト刺そうとしたあんた達がそれを言うか？　この狂信者（テロリスト）どもが」
　すると、我慢できずに男たちのうちの一人が悠元に向かって走り出し、拳を突き出す。だが、その拳が悠元に届き切る前に、その男性は横の壁に激突して気絶した。男たちには悠元がただ歩いているだけにしか見えず、無防備……それなら勝機があると男たちは次々と襲い掛かる。一対複数で狭い空間……普通なら男たちに分があるだろう。
「魔法は見えぬ力。だが、その資質はごく一部に限られ、極めて高い力を持つ者はその一握りしかいない」
　一人目の頭部をメットごと蹴って壁に打ち付けて気絶させる。
「魔法を使うにもその理論を正しく理解し、使いこなすまでに長い時間を要する。魔法師だって人間だ。機械のようにいきなり高精度のことなんてできるはずもない」
　二人目の鳩尾に拳を入れて卒倒させる。誰かに聞いてもらうわけでもなく、話しながらも攻撃は的確に決まっていく。

「魔法の存在があったからこそ核兵器による人類滅亡は回避された。尤も、魔法がその代わりとなったわけだが、誰にでも使える兵器が使えなくなった意味は大きい。お前らのような狂信者という存在がそんなものを持っていたら、危険極まりないからな」
三人目はすばやく投げ飛ばし、四人目は裏拳でメットごと殴りつけ、壁に強打させる。残る男たちに対して悠元はハッキリと告げる。
「てめえらは『三矢』に喧嘩を売った。だから買ってやる。悪いが、てめえらは――ここで拘束（チェックメイト）だ」
その残った男たちの腹部あたりに空気の塊のような何かが命中し、そのまま床に倒れた。
魔法を使うことなく全員を打ち倒した悠元は素早くＣＡＤを操作して魔法を発動させる。すると、この路地裏一帯に人払いの結界が発生した。手早く男たちを拘束させると、深雪たちのところに近付いた。
英美、雫、そしてほのかの表情は青褪めていた。悠元からこれ以上関わるなと忠告されたにも拘らず、今回のような事態を招いたのだ。偶々悠元と深雪がいたから助かっただけであり、今度はないと思っていい。
「さて、この場はこちらに任せてもらうぞ。忠告を破ったんだ、異存はないな？」
「……うん」
「そうだね……」
「はい……」
何よりも悠元は十師族の人間。この場においては自ずと力関係が最も強くなってしまう。悠元は実家に連絡して近くの喫茶店まで迎えを出すよう要請した。それが通ったので携帯をしまい、三人に話しかける。
「とりあえず、三矢家で車を出してもらえることになった。今日はそれで帰るといい。また襲われない保証がないからな……近くの喫茶店で待ってればいいから」
「……ありがとう」

雫が辛うじてお礼を言い、英美とほのかは頭を下げてその場を後にした。すると、深雪がどこかに連絡を取っていた。深雪から通信機を差し出された悠元は受け取りつつ電話に出ると、突然大きな声が聞こえてきた。

『やあ、悠元君！』

「～～～～!! 古式魔法で声を増幅させないでください！ 危うく鼓膜が逝かれると思ったんですから！ こないだの仕返しですか！」

電話の相手――――八雲の悪戯に対して説教めいたことを返すが、当の本人にとっては悪戯の範疇なのだろう。八雲は軽めの口調を崩すことなく悠元に問いかける。

『あっはっは……深雪君から聞いたよ。大変なことになってるみたいだねえ』

「笑いごとで済めば警察なんて要りませんよ。ま、今回は流石に警察じゃ拙いでしょうし」

『ブランシュ』のことだから警察関連にもパイプはあるだろう。とはいえ、内情（内閣府情報管理局）や公安（警察省公安庁）が動いてほしいとも思うが、動く気配はなし……そうなると、上泉家か九重寺の二択になるが、昨今の事情で前者は使えないということになる。

『で、魔法は使ったのかな？』

「いえ、体術のみです。キャスト・ジャミングのノイズ程度なら対策のしようはいくらでもありますし」

『そんなことが言えるのは君か達也君ぐらいだろうね。流石は新陰流師範代。さっき深雪君にも言ったけど、彼らの身柄はこちらで預かるよ』

「助かります。今回のことを爺さんが聞いたら、確実に木刀6本は持ってきますから」

『六爪（ろくそう）……それは本気だね』

最初聞いたときは何の冗談と思うが、実際に見たときは本当にヤバいと感じた。片手に3本ずつの6本持ち……どう考えても冗談の類にしか見えないだろうが、それが上泉剛三の異名――――『六爪』。

自分の場合は師範代の修行の仕上げに一度だけその状態の剛三と

対峙した。結果的に一本は取れたが、もう二度とやりたくない。何せ、慣性制御も無視した自己加速術式で飛んでくるのだ。普通に真似したら確実に死ぬレベルの話。

なお、そのことが元継の幼馴染（剛三の孫娘、悠元の従姉）と詩鶴にばれて説教ののち、強制滝行されていた剛三だった。曰く『死んだ妻に似てきてマジ怖い』とのこと。総師範の威厳は一体どこにあるのかと小一時間ほど考えていたのであった。

『それにしても、達也君といい君といい、深雪君には甘いね……深雪君はそう思ってないみたいだけど』

「俺はともかく、達也が許しませんよ。それではお願いしますね……というか、来てますよね？」

「ありゃ、ばれた？」

「先生!?　いつの間に……」

気が付けば背後にいる八雲に溜息を吐きつつ悠元は男達の身柄を彼に引き渡し、深雪と一緒に生徒会の買い物の続きをすることにしたのだった。

校内への襲撃

その後というか、厳密には達也が返事を待っていた紗耶香の言葉というのが、どうにも漠然としたようなものだったらしい。なので、達也としては『未公開文献の閲覧資格』と『魔法科高校の卒業資格』さえあればいい、ということだけ伝えて達也は去った。事実上の決裂ということだ。

その翌日、二科生による放送室占拠があった。幸いにも紗耶香のプライベートナンバーを聞いていた達也のおかげで割と穏便に済んだ。なお、深雪からそのことについてこと細かく聞かれたまではよかったのだが……ここで達也は、悠元に深雪の機嫌取りを丸投げした。深雪には甘いあのお兄様がである。

結果、達也の誕生日プレゼントの買い物に付き合うことで納得してくれた。

さらに翌日、生徒会（厳密には真由美一人）と有志同盟で急遽公開討論会が行われることとなったのだが、当然生徒会役員である深雪と悠元も参加する。

悠元とほのか、それに燈也の席が隣同士ということもあって、気が付けばそこに雫と深雪が来て『優等生５人組』となる。たまに英美も来たりしているが、それ以外の生徒は近寄りがたいと不満を垣間見せていた……別に話しかける分には問題ないと思うのは俺だけなのだろうか。

先日の襲撃の件は今後気を付けるようにと言い含めるだけに止めた。雫の家はかなりの大企業グループであり、その危険性も認識してくれていた。暫くは通学時に家の者が警護に就くようだ。

実は雫の家である北山家は三矢家とも関わりがある。雫と面識を持っていたり、雫の家族が上泉家に行ったことがあるのはこの辺の誼からくるものだ。

話を戻すが、二人の様子は揃って気が乗らないといった感じだった。これには燈也が反応する。

「二人とも気が乗らない、って顔をしてるね……彼らの主張って評価

待遇の改善だけど」
「生徒会に言うんじゃなく学校に言えって気もするが……そもそも、そんなこと言うなら魔法以外で実績を上げていて、評価が目に見えて不当な扱いなら通る話だぞ。そうじゃないなら奴らの主張は〝論外〟だ」
念のためにここ最近の生徒会・部活連の予算執行を全部ひっくり返して調べる羽目になった。
それを見ても大会実績から反映された予算を組まれているのは確か。魔法競技系が高いのは一概に言えばＣＡＤなどの魔法の備品購入に関連するものばかりで、それに見合った実績も示している。それを棚上げにして優遇というのは筋が通らないだろう。
「悠元さんの言うとおりね。実績なしに評価が欲しいというのは、その高い評価を受けている人達にぶら下がっている感じがするわ」
「深雪ってたまに思ったことをザックリ言っちゃうよね」
「悠元もそうだけど、深雪って意外と容赦ない性格？」
「そうよ、私って冷たい女なの」
冷たいねえ……冗談だと思うが、冗談に聞こえないんだよな。そう思っていると、深雪が笑みを浮かべて悠元の背中を抓った。
「痛いです、深雪さん。何も思っていないんですが？」
「いえ、私の勘が良からぬことを思っていると呟きまして」
こんな風なことがたまにあるものだから、周りの男子連中から『アイツ、深雪さんと慣れ慣れしくして……』などと小声で話しているが、〝全部聞こえてる〟ことを知らないのは幸せだと思う……この場で俺か達也の悪口を言った瞬間にその当人がコールドスリープになるだろう。
◇　◇　◇
そんなこんなで公開討論会が開始されたわけなのだが、想定された通りの展開となっていた。
「討論会じゃなくて七草会長の講演会になってないか、これ？」
「安心しろ、俺もそう思う」
もはや真由美の独壇場であった。いや、この場合は独演会と言うべ

きなのかもしれない。このまま終わればいいと思っていたが、そうは問屋が卸さなかったようだ。爆発と思しき振動……連中が攻めてきたことを意味する。ガス弾については服部が対処し、入ってきた襲撃部隊については摩利が気流操作でガスマスク内を窒素で満たし、窒息で気絶させた。

実技棟方面に向かうと、レオが複数の敵と戦っていたので、襲撃者全員に魔法をかけて上空に吹き飛ばすと、そこから横回転をかけて叩き落とす反復加速・移動系複合術式『蓮華（れんげ）』で黙らせた。

「なんか悲惨な光景になってるけど……死んでないよな？」

「大丈夫だ。ちゃんと加減はしてる」

「吹き飛ばすだけでも良かった気がするんだが」

達也の言い分も尤もだろう。その魔法を使った理由は単に悠元のストレス解消があったことは秘密である。すると、レオと自身のＣＡＤを抱えて走ってきたエリカと合流して状況を確認。すると、遥が悠元たちのもとにやってきた。彼女の話では、彼らの狙いは図書館――魔法大学の未公開文献や魔法技術が狙いだと話した。その上で『カウンセラー』として紗耶香に機会を与えてほしいと願ってきた。

「成程、そういうわけですか……達也、いくか」

「ああ、そうだな」

二人が走り出すのにつられる形で深雪、レオ、エリカも走り出す。そんな途中で悠元はエリカに話しかける。

「エリカ、壬生先輩と遭遇したらその時は頼む」

「……あんたじゃなくていいの？」

「この場合だとエリカにしか頼めない……まあ、将来の身内の尻拭いだな」

「げえっ……あの女の？　わかったわよ……納得いかないけど」

ここにきて原作を思い出すというのは恥ずかしい限りだ。なので、エリカに紗耶香との戦いを任せることにした。図書館は案の定乱闘模様になっていた。そこにレオが『装甲（パンツァー）』と声を上げて割り込む。今では珍しい音声認識タイプの武装一体型ＣＡＤだ。そして、悠元もここに割り込むことにした。

「図書館は三人に任せた。ここは俺とレオで引き受ける！」
「解った」
「お願いします！」
「頼んだわよ！」
　３人を見送ったあと、悠元は懐のホルスターからワルキューレを抜き、躊躇いなく引き金を引いたのだった。
　この時の様子を横目で見ていたレオ曰く『襲撃者全員を瞬く間に沈黙させたあたりはすげえが、あの乱闘状態で襲撃者だけを全員いっぺんに打ち上げて叩き落とすなんて芸当、俺には無理だろうな』とのことだった。
◇　◇　◇
　襲撃部隊は無事鎮圧し、図書館にいたメンバーも全員拘束完了。特別閲覧室からの情報漏洩は阻止された。司甲については風紀委員が取り押さえ（ほのかの光学系魔法によるリアルタイム撮影で居場所が判明した）、紗耶香はエリカの手によって鎮圧された。
　その後、保健室にて達也と深雪、悠元、レオにエリカの１年組、生徒会長の真由美、部活連会頭の克人、風紀委員長の摩利の面々がベッドで上半身だけ起き上がった紗耶香と対面した。
　紗耶香が言うには、入学当初摩利に剣を教えてほしいとお願いをしたのだが、すげなくあしらわれたことが屈辱的に感じ、司甲に連れられてブランシュのセミナーに参加した際に記憶操作を受けていたような発言があった。
　だが、ここで摩利が自分の発言を思い出すように呟く。剣の腕前では摩利よりも紗耶香のほうが上であり、今の自分に見合う相手と稽古してくれ、と思って言っていたらしいのだが……ちゃんとそのことを口に出していれば違ったかもしれないと感じた。呆然とした後に今までの一年は何だったのかと自問する紗耶香に達也は剣の腕は歪むことなく、しっかりと成長していたことを話した。
　千刃流の印可であるエリカが認めたほどの強さ……紗耶香は近くにいた達也に縋って泣いたのだった。
「……さて、問題はブランシュの奴らがどうしているかですが……」

「司波、まさかとは思うが……連中を叩き潰す気か？」
「無論です。俺と深雪の生活を脅かしたのです。その脅威の排除は最優先事項です」
　達也は克人の問いかけにも臆することなく言い切った。そこには妹に対する情動と四葉のガーディアンとしての責務もあると悠元は感じた。それと同時に、達也は反対意見を述べない真由美や摩利に少し疑問を持っていたが、その答えを克人が提示した。
「……三矢の想定通りか。解った、俺も同行しよう。十師族の一人として、一高の生徒としてもこの事態は看過できぬからな。七草に渡辺、お前たちは校内を頼む」
「ええ。摩利も異存はない？」
「ああ」
　意外にもすんなり決まっていく対応。これには口を挟むこともできないと達也は判断した。紗耶香もとても反対すべきではないと感じていた。すると、ここで深雪が問いかけた。
「ですが、彼らのアジトの場所が解らないことには……」
「それを聞くには……それが一番分かっている人から、ということかな」
　悠元がそう言いながら保健室の扉に目を見やる。すると、扉が開いて姿を見せたのは遥の姿だった。彼女のことは無論達也も気付いていて、見破られていたことに遥が恥ずかしそうな口調で呟く。
「やっぱり九重先生の秘蔵の弟子と上泉先生のお孫さんを騙し切るのは無理だったみたいね…」
　遥からはブランシュの連中が隠れ蓑にしているアジトの情報が齎された。その場所は廃棄された化学工場の跡地。昔環境テロリストの隠れ蓑として問題視され、夜逃げ同然で廃棄された経緯がある曰く付きだった。第一高校からそう遠くない場所であり、驚きを見せる面々もいた。
◇　◇　◇
　結果として保健室内にいる克人、悠元、達也、深雪、レオ、エリカが作戦のメンバーとなり、克人と悠元が車の準備ということで先に保

健室を出た。すると、克人が歩きながら悠元に問いかけた。
「三矢。もしかしたら桐原が志願してくるかもしれないが、構わないか？」
「それは達也に聞くべき言葉かと……でも、口述調書であれだけの啖呵を切ったのですから、今回の原因を作った奴は特に許せないでしょうね。その意味で同行はありかと思います。というか、車の定員的に連れていくとしたらあと一人が限界ですし、勝手に飛び出されるよりはいいでしょう」
　２年の実力者である服部は生徒会副会長であるがゆえに動かせない。風紀委員の面々も同様に校内の残党が残っている可能性を考えれば校内待機である。
　ならば、紗耶香との関わりが強い桐原に白羽の矢を立てるのは悪くない。彼の父親は国防海軍の関係者でもあり、その血を引いた桐原も実力は確かにある。その証左として彼は一昨年の関東剣術大会中等部で優勝している。
「それは、桐原がお前と同じ『剣術』の剣士だからこそか？」
「彼女の剣を捻じ曲げた原因を断つ。彼女に『剣道』のあり方を貫いてほしいから『人斬りの技』を持つ自分がその咎を負う。男として、実に筋が通っていると思いますけど？」
「成程、実に男らしい理由だ。桐原の如何は俺が決めよう……今もその意思が変わっていないのかとな」
「ええ、お任せします」
　克人は準備があるという悠元と別れてオフローダー（手動運転が可能な装甲車仕様の自走車）の準備を整えたところに、予想していた通りと言わんばかりに桐原が姿を見せた。
　彼の右手には鞘に納められた代物――――銃刀法の関係で刃引きはしているが、太刀を持参していた。
「会頭！」
「桐原か」
「会頭、俺も連れて行ってください！　今回のような無法、一高生として、自分にとっても見過ごせません！」

桐原のその言葉を聞いて、それは周りにも聞こえのいい方便だと理解した上で克人は『駄目だ』と言い放った。何故、と桐原が問いかける前に克人が以前のことを口に出した。
「桐原。以前お前が起こした騒ぎの後、俺に言っていたな。『壬生の剣を歪めた連中が許せない』と。そして、先ほど語っていた壬生自身の言葉を、お前も聞いていたのだろう？」
「っ!?……」
「その上で改めて聞こう……桐原、どうして志願した？」
桐原の言葉を文面ではなく本人の口から聞いていたからこそ、克人は桐原の本音を問いただした。『自分は『剣術』を選び、壬生は『剣道』を選んだ。アイツの剣は人斬りの技であってほしくない』という桐原の言葉は、紛れもなく彼自身の本心だと思ったからこそだった。
「最初、あれほど輝いていた壬生の剣を貶めた奴をこの手で叩きのめせればいい……そう思っていたことは事実です。そして、会頭や会長たちが壬生から話を聞いていた時、俺も壁越しに聞いていました……その連中がのうのうとしていることが許せない。これは、壬生のためとかそんな大層な理由じゃありません。俺の身勝手な我侭です！……お願いします！　どうか、連れて行ってください！」
「……いいだろう。あの時からその意思が変わっていないことを聞けて安心した」
「えっ……」
桐原のある意味自分勝手な理由。それが通るとは思ってもおらず、桐原は間が抜けたような声が出てしまった。そんな桐原に対し、克人は自身の思いも交えながら言い放った。
「口述調書に残る部活連の事情聴取であれだけのことをハッキリと言ったのだ。実に男らしいと逆に誉めたくなったほどだ……頼むぞ、桐原」
「……はい！」
◇　◇　◇
そして、悠元達が車に乗り込むと、達也に気付いて桐原が声をかけた。

「よう司波兄、俺も参加させてもらうことになった。宜しく頼むぜ」
「？」
桐原の言葉に達也は軽く頭を下げ、レオは事情が呑み込めずに首を傾げていた。
アジトに向けて発進したオフローダーの中で運転手を務める克人は悠元に『お前が作戦を立案したのだ。お前が指示を出せ』という言葉に周囲を見回すが、周りの視線が悠元が指示を出せと言わんばかりだったため、息を吐いて作戦を話す。
「まあ、作戦と言っても正面突破ありきなんですが……レオ、跡地のゲートに突っ込む直前で車に硬化魔法を発動。タイミングは達也が取ってくれ。クラスメイト同士のほうが連携も取りやすいだろう」
「おうよ」
「解った。それで、アジトへの潜入は？」
「正面からは俺と達也、それに深雪の三人で踏み込む。会頭と先輩は裏口からお願いします。レオは退路の確保、エリカはそのアシストとこちらで追いきれない連中の始末を頼む」
一応裏で勢力調査はしているが、彼らが想定外の切り札を持っていた場合に備えて自分が動かない選択肢はない。達也と深雪は下手に切り離すわけにもいかないのでそうした。桐原の抑え役として克人一人いれば問題はない。
逃げ出そうとする連中がアンティナイトを持っていない保証はないが、それでもレオとエリカなら不足はないと思っている。
「捕まえなくていいの？」
「相手はテロリストだ。そんな連中に余計なリスクを背負うのはご法度。最悪殺してでも止めたほうがまだマシだ」
捕まえたところで改心するとは思えないからこそ、悠元は始末という言葉を使った、その意図をエリカも理解してしまう。彼女もまた〝千葉家〟の娘である。
そして、跡地のゲートが見えてきた。ゲートとの相対距離とレオの魔法発動速度を計算に入れた上で達也が言葉を発する。
「レオ、今だ！」

「装甲（パンツァー）――――!!」

レオがＣＡＤを装着している側からＣＡＤの一部として車を認識し、車全体に硬化魔法が発動する。そして、魔法で強化された車は易々と鋼鉄製のゲートをぶち破り、車は無傷で敷地内に突入することができたのだった。

「やーい、へばってやんの」

「う、うるせえ……少し疲れただけだ」

なお、普段の倍以上の面積をカバーする魔法発動だったために、レオがへばっていたことをエリカが弄っていたのは言うまでもなかった。

策士、策に溺れる

レオやエリカと別れて工場跡に潜入する。微かに銃声音も聞こえたりするが、恐らく克人と桐原が戦闘を繰り広げているのだろう。

「…向こうは戦闘に入ったみたいだな」

「私の耳には何も聞こえませんでしたが……」

「気にするな、俺の先天的な特異体質みたいなものだ」

俺が転生した人物――『三矢悠元』は元々病弱だった。

原因は妹の詩奈と同じ先天的な異常知覚力を原因とした鋭敏すぎる聴覚……いや、妹よりも強力な知覚力によって肉体と想子体のバランスが崩れていたことによるもの。そこに転生した影響でエイドスと呼ばれる個別情報体が格納された情報体次元（イデア）自体が大幅に変化し、健康体になったとみている。

ただ、それでも鋭敏すぎる聴覚自体が消えたわけではなく、これを想子の流れで魔法感知能力を下げることなく聴覚を制御する術を身に着けた。

創作物でみられる『魔力の流れを血流に見立てて体内をくまなく循環させる修行方法』というものだが、これによって制御を可能にした。そのついでに魔法の展開速度や想子保有量が上がったのは……今のところ自分だけの秘密である。

詩奈にも聴覚制御という形でその術を教えており、数年以内にはイヤーマフなしでも普通に生活することが可能になるレベルまで落ち着くだろう……何だかんだ言って彼女もパワーアップしているような気がする。

というか、別の方向ではパワーアップしているのだが、それについてはあまり口にしたくない。

閑話休題。

その間に達也が『精霊の眼』で進路上にいる存在を見抜いていた。このことは悠元も知っている、というか珍しくも達也が悠元に教えた形だ。

3年前の沖縄防衛戦のとき、達也は自分の持つものより上位の存在

にある力を悠元から感じていたらしい。このことについての許可は『実家』から出ているとのこと。それには深雪も驚きを隠せなかった。
悠元もその情報の対価として自身の持つ『天神の眼』の存在を教えている。悠元以外に『天神の眼』を知っているのは達也と深雪の２人だけ。なにせ、『天神の眼』は『精霊の眼』以上の特異的な性質も持っているが、これは別の機会に話すことにする。
「――銃を持ってない奴がいるな。魔法師……リーダー格の人物かな。御大層に待ち伏せか」
「何にせよ、踏み込むだけだ」
既に一高の襲撃部隊が制圧されていることは知っているのだろう。ブランシュは警察関連などの治安組織にもパイプを持っていることは既に承知の情報だ。躊躇うことなく踏み込んだ先は真っ暗な部屋。ある程度進んだところでサッシが開き、部屋に夕日が差し込んでくる。
一瞬目が眩みそうになるが、光に目が慣れてきたところで銃を構えた兵士の姿が目に入る。だが、その中にまるで神父を気取るような服装をした人物が立っていた。彼は達也らに向けて解り切ったような口調で声に出した。
「ようこそ、司波達也君。そして、そちらの姫君が司波深雪さん。更に、君が三矢悠元君だね」
「成程。アンタがブランシュの日本支部のリーダー、司一（つかさはじめ）か」
司一を視認した上で悠元は隠し持っていた右側のホルスターから漆黒の銃形状ＣＡＤ――「オーディン」を抜き放つ。それに対して視線を送ることもなく、達也も右手に持つ特化型ＣＡＤ「トライデント」を司一に向ける。
「――勧告する。今すぐ武器を捨て、手を頭の後ろに組め」
この時点で達也は殺気を出していない。いや、殺気を出していたとしても気が付かない。殺気を制御することで己を律し、主の守護を最優先に実行する……四葉のガーディアンの極みともいえるだろう。そんな達也の勧告に動じる様子もなく、司一は寧ろ達也を誉め称えるような言動を口にする。

「いやはや、動じないとは流石だねえ。だが、知っているよ？　君は、あまり魔法が得意ではないのだろう？」
そう言って司一が合図を送ると、周囲の兵士たちは銃を構えた。明らかな脅迫ともいえるだろう。そして彼は達也にこう言った。
「――――こちらも勧告しよう。司波達也君、我らの同志になりたまえ」
今回の襲撃部隊にはかなりのコストと時間を要したことは痛手だと言いつつも、達也の持つ『アンティナイトに頼らないキャスト・ジャミング』という技術を欲した。そのために紗耶香を使って接触させ、異母弟である司甲を使って襲撃を行ったのだ。深雪は黙っているが、内心では兄を利用しようとしたことに腹を立てているのだろう。その目線はどこか冷たいものを感じていた。
「で、俺を狙った理由は……単純に達也を孤立させるための襲撃というわけか。道理で『無駄に多い付き纏い』がいたわけだ」
「っ!?　そんなの初耳でした……」
「最小出力の基礎単一系移動魔法で吹き飛ばしてたからな。回収は道場の門下生に任せていたし……達也は気付いていただろうが」
「まあな。だが、深雪に敵意がなかったから無視していたし、お前なら後れを取るとは思えなかったからな」
これが今回上泉家を動かさなかったもう一つの理由。
剛三はブランシュの総帥に心当たりがあり、その意味でも悠元に対して敵意を向ける可能性があった。そのために剣武術総本山の上段者を影ながらの警護として数人つけていたのだ。
悠元はそれを利用して、付き纏っていたブランシュの連中を残留想子が残らない程の最小出力で吹き飛ばし、その身柄の回収を彼らに任せていた。その彼らがどうなったのかは……面倒なので聞いていない。
悠元の言葉を聞いて、その恐ろしさを感じつつも司一は右手で自らの掛けている眼鏡のフレームを掴む。
「フフフ……流石は十師族に連なる人間。だが、そこまでわかっていてノコノコやってくるとは、所詮子どもだ」
彼は眼鏡を外して高く放り投げる。そして彼は髪をかき上げ、隠れ

ていた右眼を露わにして両目を達也に向ける。
「司波達也。我が同志となれっ!?」
自慢げに何かとしようとした司一だったが、突然何かが〝左手〟を起点に爆発したような衝撃で司一はその場に尻餅をつく。その隙を見逃さずに達也が「トライデント」で『分解』を発動させて兵士たちの銃を使用不能にする、流れるような一連の出来事に深雪は思わず目を丸くするが、悠元と達也は真剣な表情を浮かべたまま視線だけを動かして言い合った。
「悪いな、達也。銃の無力化を任せてしまって」
「いや、こっちも助かった、と言えばいいだろう。結果的に不意を打つことができた」
「何を言ってる。精神干渉系ならともかく〝光波振動系魔法〟ごときでどうにかなるお前じゃないだろうに」
「え？　えっ？」
一体何が起きたのか解らずにいるのは深雪だけでなく、司一やブランシュの兵士達もであった。それを知ってか知らずか、悠元は「オーディン」を司一に向けた。
「眼鏡を高く放り投げて視線を下に向けさせないようにし、左手に持っていたＣＡＤを操作して魔法を放つ――――〝視線誘導（ミスディレクション）〟と呼ばれる技法の一つだな。眼鏡に何の仕掛けもないことは見抜いていた……子供騙しで光波振動系魔法を使って明滅信号で相手の記憶を弄ろうだなんて、まるで性質の悪いカルト宗教だな。あんたらは」
「ひ、ひ、ひいいいいいいっ!?」
悠元の殺気を込めた視線に司一は兵士達を盾にするように奥へと逃げ出した。すると深雪がこの場を引き受けるということで悠元と達也はまるで兵士などいないかのように歩きだし、その姿に呆然としていたが……その1人がナイフを取り出して達也の背中に襲い掛かる。だが、そんな敵意を見逃すほど深雪は甘くなどない。
「あ、あ……体……が……」
「……愚か者」
ナイフを向けた人間がそのナイフごと凍り付き、達也に届くまでも

なく地面に倒れこんだ。その様子を見つつ、司一が出て行った先の前で2人は振り返ると、深雪に向かって告げた。
「程々にな、深雪。こんな連中はお前の手を汚す価値もない」
「それについては同感だな。ま、それの判断は深雪にお任せするけど」
「……はい。お二人とも、お気をつけて」
深雪の言葉を聞きつつ、司一を追う2人に呆然とする兵士達。だが、その意識を叩き起こすように深雪の口から怒気を含んだような冷たい口調で兵士達はその視線を深雪に向けた。
「――お前たちも運が悪い。お兄様に手を出そうとし、お前たちの仲間が悠元さんを襲おうとしたことがなければ、少々痛い目を見るだけで済んだものを――」
深雪はＣＡＤを操作して、兵士たちを囲むように巨大な魔法式を展開する。
それは冷たいを通り越して痛いほどの寒さ。深雪が得意とする振動減速系――その中でも高難度とされる極度凍結魔法の一つ。
――振動減速系広域魔法『ニブルヘイム』
窒素すら液体になるほどの力に兵士たちは成す術もなく凍り付いていく。
「私はお二人のように慈悲深くはない。けれど、祈るがいい……せめて命があることを」
その場にいた兵士たちは誰一人の例外なくその魔法によって凍結した。
『世界最強』と謳われたとある魔法師。彼女からもまたその魔法師の姉から受け継いだ人間であることを示すような冷たい雰囲気を感じ取れたものは……少なくとも、その場には誰もいなかった。
◇　◇　◇
達也と悠元は気配を探りつつ…正確には存在を『眼』で探りつつ最奥を目指す。この状況で対話などできないだろうと達也は躊躇いなく『分解』で扉の向こうにいる兵士の銃を使用不能にする。扉を開けて入り込む2人に司一は腕輪を起動してキャスト・ジャミングを放つ。同じように彼の前に立つ数人の兵士からも指輪でそれを発して

いる。
　普通の魔法師なら発動できないほどのキャスト・ジャミングに、司一はまるで勝利を確信したかのような笑みを浮かべていた。
「どうだ、魔法師。本物のキャスト・ジャミングの力は。これだけのキャスト・ジャミングの中で魔法を使える魔法師など世界中探しても誰もおるまい。お前らは完全な丸腰状態だ！」
「……三流どころか映す価値なし、と言ってやるかな。大体アンティナイトの出どころも解ってるだろ？」
「ああ、雇い主（パトロン）はウクライナ・ベラルーシ再分離独立派。そうなると支援者（スポンサー）は大亜連合か」
「今更何かと思えば、魔法が使えないお前らはここで死ぬだけだ」
　司一は気付いていない。目の前にいる二人が魔法などなくともここにいる連中ぐらい片づけられることを。そして、もう一つを指し示すために、悠元は「オーディン」のシステムを解放する。
「――キャンセラー起動」
　フォース・シルバー・カスタム『ワルキューレ』と『オーディン』。この二つのＣＡＤにはブラックボックス化している機構がいくつか存在する。そのうちの一つが「キャスト・ジャミング・キャンセラー」――キャスト・ジャミングの放つノイズに相反する波長の想子波を発生させて無効化する機構。悠元自身でもキャスト・ジャミングに対処可能だが、今回は〝実戦テスト〟という形で起動した。
　「オーディン」から展開する起動式に司一が驚くが、彼らが言葉を発する前に引き金が引かれて魔法が発動する。放たれたのは放出系の雷撃術式で、瞬く間に兵士たちが気絶した。これにはキャスト・ジャミングを止めてしまうほど驚いていた。
「ば、馬鹿な……キャスト・ジャミングの効果範囲内で魔法だと……」
　この状況では逃げるしかない。そんな彼の希望を断つように、突然壁に刃が生えるように向こう側から突き出てきた。次々と入る切れ目に壁が耐え切れなくなって崩れると、姿を見せたのは桐原の姿だった。彼は二人の姿と倒れている兵士を見て感心しつつも、目の前にいる司一に向けて太刀を向けた。

「へぇ……やるじゃねえか、司波兄に三矢。で、此奴は？」
「ブランシュ日本支部のリーダー、司一です」
「っ……こいつが……」
桐原の言葉を返すように淡々と告げられた達也の言葉で、桐原のスイッチがカチッと入ったような気がした。
彼がここに来た目的は紗耶香の剣を歪めた奴を叩きのめす……その人物が前にいる。そう思った瞬間、桐原は振動系近接魔法『高周波ブレード』を太刀に展開した。
「お前か……壬生を誑かしたのはぁー！」
「ひいいいいっ!?」
司一もキャスト・ジャミングを発動させようと腕を突き出すが、桐原の執念というべきか紗耶香の剣を歪めたことへの怒りか、発動するよりも早く桐原の高周波ブレードを纏った太刀によって腕を斬り飛ばされた。
たかが腕の一本だろうが、と追撃をかけようとした桐原だったが、そこで止めの声が入った。これには桐原も魔法の展開を止めて太刀を鞘に納めた。
「桐原、そこまでにしておけ」
「会頭……解りました」
相手はブランシュの日本支部リーダー。自分たちは軍人ではなく〝高校生〟なのだ。その一線を違えてはならないと克人はそう思いながら、司一の腕を止血した。彼が気絶して項垂れたのを確認して、克人は悠元に視線を向けた。
「……これで全部か？」
「ええ、恐らくは。後の始末はお願いいたします」
「元よりそのつもりだ……剛三殿に迷惑を掛けた、と伝えて欲しい」
克人と悠元がそう会話をしている際、達也がどこかに向けて魔法を使っていた。
その魔法は深雪が兵士達と対峙した空間に向けてのものだった、と理解できたのは……魔法を撃った本人とその力を感じ取った人だけだろう。

『白』絡みの後日談

事件は無事収束への方向へと向かった。第一高校の襲撃事件を受けて、横浜に支部を持ち、京都に本部がある日本魔法協会は声明を発表した。

反魔法国際政治団体『ブランシュ』と、その下部組織である『エガリテ』が第一高校の生徒を洗脳して今回の襲撃事件に発展したと説明。その上で彼らのテロ行為に対して〝一般市民への被害を最小限に抑えるための治安維持活動〟を行ったと声明を発表した。

さらに、今年3月に横浜ベイヒルズ東タワーで起きた魔法師による魔法協会支部襲撃事件（厳密には未遂だが）もブランシュの関与があった事実を公表。

この事件の解決には〝魔法協会から依頼を受けた魔法師が関与している〟という形になった。

なお、それぞれの事件に関わった魔法師の詳細については、一部を除いて『個人情報保護（パーソナルデータ）の観点から公表できない』との説明に止（とど）められた。

今回の事件処理に関わった七草家と十文字家に対して、生徒に死者を出すことなく迅速に混乱を収拾できたのは生徒会長を務めている七草家令嬢と今回の治安維持活動の陣頭指揮を執った十文字家次期当主の力あってこそ、という形に収まった。

壊滅作戦の際『生徒会・部活連・風紀委員会の選抜メンバー』とした建前は、結果として校内の残党を警戒するために残った真由美の評価となり、ひいては七草家の評価を上げることにもなった。

当の真由美本人は『父親のご機嫌取りのためにやったわけじゃないし、私お留守番だけだったし』と1週間ほどぼやくのが生徒会室で聞こえることとなったが。

そして、治安維持活動の陣頭指揮を執ったという形で克人の評価も高くなった。

十文字家次期当主としての働きに現当主も珍しく喜びを露わにした。当の本人からすれば同じ『十』を冠する家の関係で上泉家から厳

しく見られていたため、今回の一件が無事に済んだだけでも一安心と内心ホッとしていた。

上泉家からも克人を誉める書状が届き、近々挨拶に伺いたいと書状を認めた。相手に即して律儀に対応できるという強みが彼の評価を高めることにつながるのであった。

横浜の一件については、解決に寄与した魔法師に関係している家からの要請で声明に盛り込まれた。ブランシュもしくはエガリテが魔法師を洗脳し、魔法協会を襲撃させたという形に持っていくことを狙ってのものだ。

魔法科高校の生徒を洗脳できたのだから、その魔法師も洗脳されていた可能性がある……洗脳の如何はともかくとしても、その魔法師がエガリテの構成員を示す持ち物を身に着けていた事実は本物である。

その意味で『彼らの思想に洗脳されていた』というのは筋が通る話だ。

彼らを反魔法政治団体という隠れ蓑から引っ張り出してテロリストと認識させる。それは、間接的に政府の弱腰な姿勢を非難する意味合いを持つ。ちなみに、ブランシュ日本支部壊滅作戦ではなく治安維持活動としたのは、彼らを支援していた『スポンサー』に大きく関係していて、この辺は魔法協会と日本政府の政治的事情もあったりする。

七草家は密かに横浜の一件に関する調査を行ったが、この一件に上泉家が関わっていると判明した時点で調査を打ち切った。それだけ剛三の強さというものを七草家の現当主は理解しており、自分の師ともいえる九島家にも説得は難しいと判断していた。ここまでの秘密主義から四葉家の可能性を推察したが、それ以上の調査はできなかった。

その上泉家からは、『此度の働き、真に感服した。十師族としての働き、これからも見せて頂く』との意味が込められた書状が七草家に届けられた。

通信が主流の時代に剛三直筆の書状が届けられるというアナログさだが、受け取った側はこの書状に込められた重みにまるで鉛の板で

も持っているかのような感覚を覚えていた。
　今回の壊滅作戦に関わった人間には当然守秘義務が課せられた。表向きは『襲撃者たちが襲ってこないか巡回をしていた』という体のもので、ある意味嘘は言っていない。こういうとき、日本語は非常に便利なものだと思う。
◇　◇　◇
　横浜の中華街。
　その一角にある建物の部屋で長髪の男性は誰かと連絡を取っていた。冷静な口調で話す男性に対し、受話器から聞こえる男性の声は少々荒れていた。
『――――では、お前は早急に反魔法主義の圧力をかけるべきではないと言いたいのか？』
「然り。ネット上においても、ブランシュが各国で引き起こしているテロ行為が表沙汰になっております。魔法師排除への舵取りは極めて難しいかと」
　その点においては自分よりも貴方がご理解しているはずだ、とでも言わんばかりの口調を向けていた。この二人に一応の主従関係はある。だが、男性は会話の相手を信用していないし、それは向こうも同様である。あくまでも一つの目的で合致したから手を組む……いわば『ビジネスパートナー』ともいうべき存在ともいえた。
　それを理解したのか、相手はフンと鼻息を一つした上で告げる。
『まあいい、それはこちらで探りを入れる。お前は引き受けた仕事をこなせ』
「畏まりました、大師（マスター）ヘイグ……やれやれ、あのお方の癇癪……いえ、〝呪い〟でしょうかね。困ったものだ」
　長髪の男性は通信を切ってから、先程の口調からはとても出ないような言葉を口にした。だが、男性にとって先ほどの相手は『信じられない存在』という位置づけではあった。
　こちらの事情を何も知らないで……と口にしたくはあったが、教えてやる義理もないと彼は独り言ちる。
（ブランシュの蜂起。その際に私は『彼』の排除を目論見た……だが、

それが拙かったですね）

男性の名は周公瑾（しゅうこうきん）――――まるで三国志に出てくる呉の軍師周瑜（しゅうゆ）（字（あざな）が公瑾）に似た名前だが、それが彼の名前である。周はブランシュに手を貸す一方で、その危険度が最も高いとみた『三矢悠元』を密かに排除するため、追っ手を差し向けた。

だが、彼はその悉くを綺麗に排除した。更に周が監視として放っていた術から周の存在を認識した。これに慌てて周は術の発動を切った。今までにない恐怖の感覚を、周は覚えてしまった。

更に、差し向けた追手が上泉家に引き取られたことも拙いのだ。

あの家は周の得意とする術――――方術を無効化する術式の使い手が多い。『六爪』はその中でも方術『鬼門遁甲（きもんとんこう）』を熟知している。自分が出向いても捕まるだけでしかない。

（もう一度彼に出会ってしまえば、その時は私も無事では済まない。いえ、〝消される〟でしょう……あの人には悪いでしょうが、彼を相手にするのは御免です……裏のことは無頭竜（ノーヘッドドラゴン）あたりにでもお願いしましょうか）

周は悠元の排除を諦めた。彼はあの時、近くに人がいたから本気ではなかった。これが彼一人だった場合は……そんな考えを持ってしまった自分に周は笑いを零したのだった。

それが彼にとって正しかったのか間違っていたのかは……誰にもわからなかった。

◇　◇　◇

司甲や紗耶香をはじめとした面々は洗脳されていたということでまとめて『無罪放免』となった（その意味で紗耶香をブランシュに引き込む原因を作ってしまった摩利は、風紀委員会の引継ぎ資料作りを監視付きで行う羽目になっていた）。これには学校での放送室占拠事件における学校の管理体制の問題を浮き彫りにされたくないという意図も働いていた。

ただ、この一件が一科生・二科生という魔法力評価システムによって引き起こされていたことは事実であり、学科システム自体の見直しを迫られる形となった。

そんな中、悠元は紗耶香の病室にお見舞いに来てた。紗耶香はまさか悠元が来るとは思わず、キョトンとしていた。そんな彼女とは裏腹に、見舞いとして果物の籠を持ってきていた。
「君は確か……三矢君、だよね？」
「ええ。あと、悠元でいいです。変に意識してもらうのもおかしいですし」
悠元がここに来たのは、紗耶香の様子を見るためでもあり、もう一つは個人的な興味でもあった。それは剣道の剣士としての紗耶香に他ならなかった。
「あはは……悠元君って変わってるね。一科生なのに、司波君のことをちゃんと評価しているって妹さんが言っていたから」
「深雪がですか……自分がこういう性格なのは、ある意味姉のおかげでもありますが……というか、覚えてません？」
覚えてる、という言葉にマインドコントロールされていた時の影響がまだ残っているのか、些かハッキリしない感じで紗耶香は答えるしかなかった。
「え？　私と悠元君が？」
「あ、そういえばマインドコントロールされてたんですよね……厳密にはこの学校に入る前に〝2度〟ほど会ってます。一度目は壬生先輩が通っていた道場で。二度目は先輩が中学3年の時の中等部剣道大会の時にですが……その時は〝長野佑都〟と名乗ってましたね」
「……あっ！　中学2年生の無名の新人が並み居る強豪を抑えて全国優勝、一躍時の人になったあの子が悠元君!?」
この時ばかりは情報操作をフルに使った。本当に大変だった。
というか本来剣道部でもなかったのだが、偶々剣道部のトラブルに巻き込まれ、そこのエースをこちらは防具なしで突きの一撃。
それを見ていた顧問が懇願して『一回限り』という条件で出場した。負けるのは癪だったので、本気でやったら……気が付いたら全国優勝していたというオチが付いただけ。
その後、1年後に話を蒸し返される可能性があったので爺さんに頼んでおいた。何をしたのかは聞いていないし、知りたくもない。

「名前が違うのは魔法使いの家系の掟みたいなものですので、そこについてはツッコミを入れないでください。それに、剣道大会自体はあまり出たくなかったというか、目立ちたくなかったので1回限りです」
「あはは……それだけの腕があるなら、剣道でも名を残せそうなものだけれど」
「自分は強いて言うなら『人斬りの技』を修めている側の人間です。そこを違えるわけにはいきません。なので、壬生先輩に練習相手を頼まれても断らせてもらいます。下手に剣を歪めたらどこかの先輩が怒りそうですから」
　それに、自分は魔法師を目指していて、剣術や体術はその延長上にあるものでしかない。根底に剣道があり、その延長上に魔法がある紗耶香とはその意味で違うのだ。同じ考えを持たない以上、価値観は理解しても共有はできないだろう。
「……凄いね、悠元君は。ねえ、一つ聞いてもいいかな？」
「ええ。何でしょうか？」
「君のお姉さん――美嘉さんもそうだったけど、悠元君はどうして一科生なのに二科生の人まで平等に見れるのかなって。勿論、君の家である三矢家のことは、聞いてるけど……」
　紗耶香の問いかけは、確かに、魔法師としては疑問に思うところもあるだろう。その上で悠元は答えとなる言葉を述べた。
「――魔法科高校に入学を許可された時点で、魔法のエキスパートになれる資質がある。一科生は上位１００人、二科生は下位１００人で構成されてますけど……それに何の意味があるのかって話です」
　競争心を煽りたいのならまだしも、現状では優越感に浸る一科生と劣等感に溺れる二科生……学科システムとしては失敗の典型である。
　現に今回の一件で浮き彫りになった事実は消せない。学校側はゴールデンウィーク返上で学科システムの見直しをすることになったとＡ組の担当教員が呟いていた……ご愁傷様と言っておこう。
「俺は、この学校に入って何を成したいかが重要じゃないかって思うんです。魔法科高校に入ることは〝スタート〟であり〝ゴール〟

じゃない――――俺も、卒業した兄や姉たちもそれを解っているからこそ、一科生や二科生ではなく『同じ一高の生徒』として見ているだけです。まあ、三矢家（ウチ）は人の繋がりあってこそのお家柄でもありますから」

入学を認められても、それはその時の話だ。むしろこれからどれだけの経験を積めるかで将来は変わる。

ただ、その積む内容によって色々大変なのは言うまでもないだろうが……その典型例が身内にいるだけでも大変なことだ。その原因を作ったのが自分なだけに、余計頭を抱えたくなってくる。

すると、病室のドアが開いて桐原が入ってきた。向こうは悠元の姿を見て少し警戒していたが、悠元は答えたいことも答えたので、紗耶香に礼をしてその場を去ることにした。

その際『あとは先輩方でごゆっくり』とこっそり呟いてから病室を後にした。それが聞こえたのか否かは……まあ、どうでもいいかと思ったのだった。

後日、達也と深雪が紗耶香の退院祝いに行ったのだが、その時に二人で話していた内容から深雪にこう言われた。

『お兄様と話し合った結果、悠元さんはブラックホールを突き抜けて銀河の彼方まで飛んでいきそうだ、という結論に至りました』

誠ながら非常に遺憾である。というか、『アレ』もそろそろやっていかないといけないのか……忙しくなりそうだ。

無自覚の戦略級魔法（女性限定）

――――誕生日。

それは当該人物が生まれた日のことを指す。誰かに言われなくても解りそうな事柄だ。

自分の場合は『とあるイベント』と被っているためにプレゼントが変則的だが、それを毎年続けられると慣れてしまう。別に慣れたくて慣れたわけではないが。

『悠元お兄様！　プレゼントのチョコです！　去年より更に磨きをかけました！』

だからといって詩奈（いもうと）よ、力を入れる方向を間違えてどうする。

自分は血の繋がった兄であり、無理にこだわらなくてもシンプルなのでいいと言ったのだが……それを受け取るとき、彼女の後ろにいた侍郎から羨ましいような嫉妬のような複雑な感情を向けられていた。

妹はこれだけで済むのでまだよかったのだが……まあ、思い出すだけでも辛い記憶は思い出さないほうがいい。

そんなことはさておき、時はブランシュの一件が片付いた後。

悠元が居間で端末のキーボードを叩いていると、深雪が声をかけようかどうしようかと悩む表情を見せていた。その様子が可愛いと思いつつも表情に出さないように努めながら問いかけた。

「どうした、深雪？　相談事があるのなら乗るけど？」

「あ……えっと、実は明日のことでご相談がありまして……」

深雪が相談したかったことは明日――――４月２４日。それは達也の誕生日であった。

彼女としては、達也のためにいつもより気合を入れた料理を振る舞い、高校に入ってから入り浸るようになった喫茶店「アイネブリーゼ」でクラスメイトを呼んで軽めの誕生日パーティーの予定だ。

後半の部分に関しては自分からということではなく、エリカが予約していた。なお、パーティーの代金についてはエリカからの話を聞いた後に一括払いしている……それでも口座の桁が微動だにしないのは喜ぶべきなのか、悲しむべきなのかわからないが。

それで、都合がついたのは司波家にいる三人以外だとレオ、エリカ、美月、燈也、雫、ほのかの六人となった。なお、電話をかけてきたエリカ以外の五人は達也の誕生会だということを知らない。
「その、悠元さんに和食の心得があるのならお手伝いを、お願いしたかったのですが……」
「それぐらいなら、言ってくれれば手伝うよ？」
「本当ですか!?　ありがとうございます」
にしても、少々意外な提案である。深雪のことだから『私一人でもできますから』と言い張りそうなものなのにだ。その辺を聞いたところ、深雪はこう返した。
「お菓子作りはいつも泣かされてますから、料理ぐらいは驚いてもらおうかと思いまして」
泣かしてるつもりは微塵もないんだが……というか、そのせいで司波家のキッチンの出入りをかなり厳しくされている。達也としては一向に構わないのだが、妹に勝てないということで民主主義のルールが働いているというわけだ。
それでも深雪が外出している時を見計らって菓子作りはしている。それぐらいなら……と深雪も渋々認めているというわけだ。
「まあ、料理の手伝いはさんざんやってきたから、手伝うけど……今日は仕込みまでかな？」
ＣＡＤ製作の延長上で手先を器用に動かせる練習はないか、と考えた結果料理と菓子作りを三矢家の実家や上泉家で学んできた。これでも味に煩いうちの姉（長女）や従姉を納得させるだけの腕前はある。それでも深雪には勝てないだろうなと思う。
◇　◇　◇
何をやらせても得意な人はいる。そういうのはお伽噺だと思っていました。
お兄様の誕生日のために美味しい料理を作る。それには手を抜くつもりなんてありません。なので、今年は悠元さんにもその手伝いをお願いしたのですが……様になっているというか、動きに淀みがありません。まるで一流の料理人のような手捌きなのです。

聞けば、三矢家の使用人から教わったり、上泉家では門下生の食事番をすることが多く、その際に学んだと教えてくれました。
「味を見てもらえる？」
「あ、はい……大丈夫です」
美味しいのです。確かに美味しいことは事実です。それは、私ですらまだ届いていない領域。
私も努力は欠かさずにしてきたつもりです……でも、時に『天才』という存在はそれを凌駕する。こういう考えをしている時でも、油断はしません。包丁を扱う以上は指を切る危険性もありますし、この程度でお兄様を煩わせるわけにはいかないのです。
（悠元さんは……逆に何ができないのですか？）
前日にできる仕込みを終え、空いた時間でコーヒーを淹れようと豆を挽きながら考え込んでいた。お兄様以外の異性でここまでの思考を割く人は、正直言って悠元さん以外に考えられない。
入学してから色んな異性の人に話しかけられるが、そのどれもが耳障りのよくない言葉ばかりでウンザリしてしまっていた。
――貴女のような素晴らしい方と同じ学科に入れる栄誉を……
――一科生（ブルーム）の名の通り、我が校に咲き誇る花……
学校の評価システム上、お兄様とは同じクラスになれない。それは仕方ないとしても、せめて悠元さん……その時は素性のことを知らなかったので、佑都さんが同じ学年でいてくれたらいいなとは思っていた。
そんな淡い願いが通じたかのように、彼は同じ学年の生徒となっていた。彼は十師族の人間だと明かし、お兄様と握手を交わした。
この時、私の思考では彼が三矢家の人間だということをどこかに追いやっていた。理由はうまく言えないが、私にとって大切な人と一緒の学校に通える……それが嬉しいと思えたのだろう。
その前には彼の出自など些細なことだと……これは私が自分の出自を理解していたからこそ、そう言い切れたのかもしれない。
お兄様からは『お前は悠元のことが好きじゃないのか？』と聞かれたことは何度もあるが、私は誤魔化した。

私にとって、その命を投げ出してまで私を救ってくれた人。
こんな私と上辺だけでなく正面から向き合ってくれる人でもあり、私の力ではなく私自身を見てくれる人。
この気持ちは……まだ私にも解らない。
お母様も私の遺伝上の父親とは政略結婚だったため、恋愛ということを知るには書物などの知識を得るだけ。悠元さんへの気持ちは敬愛……今の私には、お兄様と同じぐらい大切な人。
でも、それが恋愛と呼べるものなのかどうかはハッキリとしない。
それに、悠元さんは私が思っていたよりも手強い。けれど『俺のように感情が乏しいわけではなく、彼の心は俺以上に苦しんでいるだろう』と以前お兄様が仰っていた。
だから、せめてお兄様や悠元さんに並ぶぐらいに強くはなりたい。あくまでも、私にできることを突き詰めていくだけなのだと……
（あ……また、やってしまいました……）
気が付けば、魔法がほんの少し漏れていた。これは少し恥ずかしかったが、お兄様が飛んでこなかったことと言葉に出なかったことだけは幸いだった。
……お二人は優しいけれど、その二人を癒せるようになりたい。
それだけは、今自信を持って言えることだから。
◇　◇　◇
４月２４日。
達也はいつものように九重寺へ鍛錬をしに行く。
料理の準備は基本的に深雪が担当し、自分はその味見兼バックアップだ。
達也が帰ってくると、着物に割烹着という装いの深雪に驚くような素振りを見せていた。
「今日は誕生日じゃないか、達也の」
「悠元……ああ、そうだったな。忘れていたよ」
「ささ、お兄様は席に座ってくださいね」
そうして達也は深雪の準備した朝食を頂く。その空気を壊さないために自分の朝食は自分で作って先に頂いたのだが……その時の深

雪はムスッとしていた。深雪には達也の朝食の準備があるため、手が離せなかったので仕方がない。ついでに深雪の分の朝食も作ることにした……どこか納得いかないような顔をされてしまったが。
「……うん。腕を上げたな、深雪」
「あ、はい！　お兄様に喜んでもらえて嬉しいです！」
　こうして見ると微笑ましい兄妹ですね、と思う。そんなことを思っていると、いつの間にか背後にいた深雪が満面の笑みで両肩を掴んでいた。地味に力が入っていて痛い。
「悠元さん、後でお話ししましょうか？」
「いや、俺が何したっていうんだ？　二人を見てたのだって、微笑ましい兄妹だなって思ったぐらいだし……深雪はいい奥さんになれると思うぞ」
「……悠元さんはズルいです、卑怯です、ジゴロです」
　それだけを言われても、理由が解らないと答えようもないし考えようもない。褒めたのが拙かったの？　とは思いつつも貶す要素もない。頬を紅く染めながらズルいとか卑怯とか言われても……こっちが困る。
　そして、いつの間にかそれを見ていた達也が一言。
「頼む」
「何を!?」
　俺は改めてこう思う。司波兄妹は色んな意味で難解な兄妹なのだと……原作でエリカが『この兄妹にツッコミを入れるほうが間違ってる』と言っていたが、まさしくその言葉通りだと思う。
「悠元……盛大に疲れてない？」
「まあ、色々あってな……パーティーまでには立ち直るから、気にしないでくれ」
　その夜、アイネブリーゼを貸し切る形で達也の細やかな誕生会が開かれた。
　実は達也の母親である深夜も行きたがったのだが、下手に行くと七草家の諜報に引っかかるため、日付が変わった直後に達也へ直接言葉

だけで祝った。プレゼントは既に送っているとのことらしい。
達也の叔母も行きたかったらしいのだが……これ以上語ると別の意味で闇を見そうだから慎むことにする。
すると、料理を持ってきたアイネブリーゼのマスターが尋ねてきた。
「しかし、今日は一体何の日かな？」
「お疲れ様会みたいなものですよ」
「実は達也君のお誕生会だったり！」
『ええっ!?』
案の定、達也の誕生日を知らない人間は絶句。
エリカも誕生月は知っていたが、誕生日を深雪に確認した時に色々誤魔化されたことに睨んだが、深雪は何食わぬ顔で微笑んでいた。こういう芸当をシレっとできるあたりは母親譲りなのだろう。
呼ばれた面々はプレゼントを用意できなかったことに申し訳なさそうな表情を見せていたが、ここでマスターが助け舟を出した。
「まあまあ、達也君も君たちに気を使わせたくなかったのだろう。このザッハトルテを僕と君たちからのプレゼントということにして、手を打たないか？」
「マスター、ありがとうございます！」
ケーキにロウソクを刺し、火を付けて達也が息でそれを消す。そして深雪の手で綺麗に十等分するという奇跡を垣間見た。
そして、ザッハトルテを食することになるのだが、ここで表情が変わる人間が数名出た。厳密に言えば『その人物のお菓子を口にしたことのある女子』――深雪、エリカ、雫の三人だった。
「美味しいです！　……って、深雪ちゃん？」
「ん？　どうしたの、美月？」
「その、口に合わなかったのかなって？」
「う、ううん。そういうことじゃないの。確かに美味しいんだけれど……マスターさん、このザッハトルテは一体どなたが？」
美月が心配そうに尋ねてきたので、深雪は上手く取り成しつつもマスターに聞いてみた。すると、マスターは苦笑しながらこう答えた。

「いやー、これについては悠元君が『大切な人の誕生日も近いので』ということで作ったんだよ。彼がこの前作ってくれたこれが美味しくて、レシピまで教えてもらったんだ」
その言葉に女性陣の面々が固まる。これにはマスターが苦笑し、悠元が首を傾げた。
「君も大変だね。色々と」
「うーん、やっぱり若干甘すぎたんですかね……うん、味は悪くないと思うんだが」
「美味いことは確かだな。お店でも開けるんじゃないかってレベルだ」
二人の言葉に達也は頷きつつザッハトルテを一口ずつ食べていく。
そこにレオと燈也が口を挟んだ。
「達也の言う通り、確かに美味しいんだが……勉強ができて容姿もよくて魔法も使えて、おまけに菓子作りもできるって反則じゃねえか？」
「むしろレッドカードクラスですね」
「一発退場ってそりゃねえよ……レオと燈也だってモテる容姿と思うんだがな」
「この中では俺が一番平凡だろうな」
別に菓子作りが上手な男性ぐらいいてもおかしくないと思う。料理や菓子作りは時として力仕事ともいえるし、それぐらいは許容範囲内ではないのか？
あと達也。容姿云々は抜きにしても、平凡という言葉はお前に似合わない。寧ろお前から一番遠い言葉だと思う。
この前、爺さん絡みの詫びも兼ねて七草家に手作りのクッキーを山ほど持って行った。
当主の娘たち……香澄は『悠元兄（にい）、ありがとう！』と喜んでくれた。泉美は『悠元お兄様、ありがとうございます。大事に食べますね』と言いながらキラキラ輝くような笑顔を見せていた。真由美は『悠君は鬼畜よ……』といいつつ部屋の片隅で体育座りをして落ち込んでいた。

綺麗に反応が分かれるって相当レアな光景だと思う。
あと、鬼畜は甚だ心外である……もしかして、体重を気にしてたのかな？　それは失念してた。
他の反応はホワイトデーの時から思い返すと……響子は『君って女心を擽るのは上手いわね』といい、澪から『私、大人の女性になるから！』と宣言され、将輝の妹である茜からは『私、お兄様のために一条家の者として精進致します。あと、あのどうしようもないバカ兄が申し訳ありません』とまるで実の兄を軽く貶すようなメッセージが届けられた。頑張れ将輝。
ここ最近は会っていないが、一色家の令嬢からは『いいですか、覚悟してくださいませ！』と宣戦布告のような返信文を投げつけられ、津久葉家にいるうちの姉の親友からは『君のこと、もっと知りたくなったわ』とメッセージが返ってきた……おかしい、ただ普通にホワイトデーということでお返しという名の手作りクッキーを送っただけなのにだ。
それで、ここにいる三名の反応は――――こうなる。
「まったく、悠元は相変わらずねー……ま、割り切れない人もいるみたいだけれど」
「……」
「……」
「二人とも、脇腹を抓らないでくれ」
割とさばさばした言葉だが、内心では『料理の勉強もしないと……』と思っているエリカ。そして、雫と深雪は揃ってムスッとした表情を浮かべつつ悠元の脇腹を抓っていた。これには美月とほのかが揃って苦笑を零したのは言うまでもなかった。

九校戦準備編

力の在り様

群馬にある上泉家の本家。新陰流剣武術総本山と名高いその場所は、城ではないものの広大な武家屋敷ともいえるような佇まい。それは、この家の力を形として成した、といっても過言ではない。

剣豪上泉信綱を開祖とする太刀を使った剣術の新陰流。彼のもとで剣を学んだ弟子たちは各々自らの流派を名乗る。彼だけでなく、彼の直弟子もこれを良しとした。

旧長野家家臣を登用した武田信玄の仕官要請を断り、彼は新陰流の布教のために諸国を流浪する。だが、信玄が遺したとされる書物には、信綱の容姿はまるで２０代半ばであったと記されていた。

彼の生年は西暦１５０８年とされていて、この時点で４０代後半。それを思わせぬほどの容姿を持っていた彼は魔法が体系化する前に存在した『超能力者』、突然変異的に生まれた第一世代とされている。

亡くなった時期は不明だが、少なくとも大坂夏の陣まで生きていたという記述が残っている……年齢換算で１０７歳。当時の平均寿命からすれば超高齢のレベルである。

剣術で様々な縁を築いてきた上泉家だが、信綱は自らの力を後世に引き継がせて『護り』の力とするために、諸国流浪をしながら様々な術を学んでいた。

武術、忍術、陰陽道、神道といったものだけでなく、大陸に伝わる道術や方術、果ては当時〝南蛮〟と呼ばれていた西洋の宣教師から宗教まで学んだ。『不可能を可能にする力』……その思考を高めるために外のことも知るべきだ、という信綱の持論だった。

それらの知識が信綱から十数代に渡って次第に融合し、更には信綱の弟子が興した武術も取り入れ、極め付けに魔法使いとしての技術を統合した結果、大成したのが新陰流剣武術である。

閑話休題。

上泉家の屋敷の一角。その座敷には２名の人物が胡坐をかいて

座っていた。
一人はこの家の主であり、新陰流総師範を務める男性――――
［六爪］、諸外国から［雷龍］の異名で知られ、魔法師界から『尊師』と呼ばれる存在。彼の名は上泉剛三。
もう一人は日本魔法師界において『老師』と謳われる存在。十師族という序列を確立した人物であり、約２０年前までは世界最強の魔法師の一人と目されていた人物。当時は『最高にして最巧』と謳われ、［トリック・スター］の異名を持っていた九島家先代当主、九島烈。
二人を何も知らない人間から見れば４０代と８０代の男性が顔を合わせている状況だが、この二人……実は〝同い年〟である。
「まったく、また老けたのか烈。ちっとは孫のために若返る努力でもしろっつーの」
「当面死ぬ気はないのでな。寧ろ年齢の半分以下にしか見えんお前のほうが化け物だ」
「言ってくれるじゃねえか……まあいい、この論争は水掛け論にしかならんな」
普段は威厳を保つために年相応の喋り方をするが、相手が相手なだけに外見の年齢相応の喋り方をする剛三。烈も剛三の性格を熟知しているからこそ、必要以上に煽ったりはしない。このままいくとお互い可愛い孫自慢になってしまって本題に入れない、と剛三が烈に促した。
「今回訪れたのは他でもない。お前が…いや、上泉家がここ最近動いていることについてだ。お前があの子らを高く買っているのは無論知っている。3年前だったかな……あの沖縄でのあと、四葉の動きが逆に読めなくなった。秘密主義を守りつつも十師族の枠組みに入った。このことは私も構わないと思っている。魔法使いにとって秘密というのは己の武器でもあるからな」
烈は四葉の力をどこかしらで危ぶんでいた。向こうも十師族に名を連ねながらどこか浮ついた存在であった。
だが、沖縄防衛戦の後、四葉家は三矢家に近付いた。当時の三矢家はその子息たちの目立った学業の功績もあって、十師族においてその

実績を固めつつあった。その三矢家に近付いた意味……烈は、そこに上泉家が関わっていると睨んだ。
「剛三、お前は四葉をどう見ておる？　このままいけば、四葉は十師族の中でも突出……いや、一つ上の存在になりかねぬ」
「……烈。上泉家の本質は『護り』――――即ちこの国全体の強さを護る存在であらねばならない。四葉の復讐戦の亡霊が生きている以上、身内でごたごたしているほうが足を掬われかねない。最悪の場合は四葉の強さを刃とし、その他の二十六家を盾とする。その要として俺の義理の息子である三矢家に奮闘してもらう……ここまでせねばならぬ意味が解るか？」
〝敵〟は大亜連合だけでなく、新ソ連やＵＳＮＡという三大国。規模も物量も劣るこの国が生き残るには外に味方を作りつつ、こちらの質を高めるしかない。
烈の視野の狭さを剛三は糾弾するように言い放った。剛三からすれば十師族同士の諍いなど言語道断。尤も、ついこの前までは我関せずに武術だけで一生を終えようと楽隠居していたのは否定しない。
彼に火を付けたのは、他でもない自身の孫の存在だった。
「まあ、俺も沖縄防衛戦直前まで楽隠居していた身だ。それまで十師族や師補十八家の争いを止めなかった責任は果たそう。どっかの〝馬鹿息子〟は精力的に動いているようだが、魔法師は兵器じゃないと何度言ったらわかるんだ……」
「……彼をそのように言えるのは、世界中を探してもお前だけだろうな。剛三」
「当たり前だ。うちの愛娘を誑かしたあいつに頭を下げる義理はない」
〝誑かした〟とは人聞きの悪い言葉だが、そう言いつつも彼の影響力は高いと剛三は熟知している。何せ、剛三と同い年の烈ですら断ることができない相手。この国の政財界の奥深くに存在する黒幕の一人なのだから。
それを上から目線で言えるのは間違いなく剛三だけだ、と烈は断言できる。

「…烈。俺は四葉の復讐戦の折、元造(げんぞう)から真夜と深夜の二人宛てに手紙を預かっていた。……だが、生き残った俺がどんな誹りを受けるか……それが怖かった。けどな、その3年前の沖縄防衛戦直前になって隠していた手紙を見つけられて叱咤された。『託されたなら届けろ』とな……いやはや、恥ずかしい限りだった」
「……成程、それがきっかけか。お前が動いたのも、四葉が変わったのも…その子のお陰か」
「お前は知ってるだろ？　長野佑都……いや、今は三矢悠元。恐らく新陰流の中で〝九葉(くすは)〟に近い人間だ。あの歳で既に［心刃(このは)］まで会得しているからな」
　新陰流は九の奥義の習得段階によってその位階を決められる。剛三の言い放った〝九葉〟は剣術の四大奥義、体術の四大奥義、それに加えて忍術の秘伝全てを皆伝の状態まで会得したことを示すもの。
　本来ならその習得に才ある者でも半世紀は掛かると言われるもの……その極地に孫が踏み込みつつあると剛三は断じた。これには烈も面白そうに呟いた。
「フッ、大亜連合に［雷龍］と恐れられるお前がそこまで言うとはな……確か、彼は第一高校だったか？」
「［仮装行列(パレード)］でも使う気か？　やめとけ、お前でも悠元には敵わん。寧ろ孫に塩を送るだけだぞ？　そんなことよりお前はもう少し自分の孫と話すように努力しろ、この阿呆が」
「孫が可愛いお前のことだから、それ以上の術式を教えているだろうに。何、九校戦には彼も出てくるだろう…『触れ得ざる者』と謳われた三矢の子息、彼ら以外にも楽しみができたな」
「人の話を聞け！」
　先ほどの雰囲気とは打って変わり、騒ぎ立てる剛三に対してマイペースな烈。『そんなんだから孫が祖父に甘えられないんだぞ、この妖怪ジジイ』と剛三が言った瞬間、『やるか？』『やってやろうじゃねえか！』と二人が臨戦態勢になったが、気が付けば傍に控えていた女性がニコニコしながら見ていたのに気付き、揃って大人しくその場に座りなおしたことは……その三人だけが知る秘密となった。

◇　◇　◇

ゴールデンウィークも過ぎ、学業主体の日常がやっと戻ってきた。

生徒会のほうは生徒総会用の資料整理と次期会長への就任要請を予めしておいた。誰かと言えばあずさだ。最初は乗り気でなかったが、今秋に発売予定である汎用型タイプのシルバーモデルをプレゼントすることで釣った。

実家の三矢家からは今回のことについて感謝された。とりあえず穏便に済んだので一安心といったところだろう。ただ、その際『老師』こと九島烈が急なアポを取ってきて対応したと言っていた。目的は自分を探るためだと言っていたが……態々司波家を訪ねてこなかっただけ配慮はしているのだろう。

達也からこの前使った［蓮華］の起動式を教えてほしいと打診があった。

多分、アレに使っている重力制御の記述が知りたかったのだろうと思い、提供したら驚いていた。なんと達也が現在組み上げている常駐型重力制御術式のほぼ6割が同じ制御記述だったそうだ。これは自分も吃驚だった。

なので、飛行魔法実現に向けたデバイス設計を頼まれた……まあ、テストタイプなのでそんな難しい機構は積むつもりもない。既存のスイッチ型デバイスを少し弄ればいけるだろうと早急に設計図を組んでＦＬＴの端末に送信した。飛行魔法の発表は7月の初め――――九校戦から一ヶ月は空ける計算だ。ここにきて［トーラス・シルバー］らしいことしてるな、と思う。

九校戦の関連で競技用ＣＡＤの設計を頼まれた。とは言ってもハードウェアは市販タイプをベースにして規格内に収めるだけの話だ。その競技用ＣＡＤのデモ用が九校戦の展示として置かれることになる。

商品シリーズ名は『シルバー・ブロッサム』とし、既に九校戦の共通規格のレギュレーションをパスしていて、発売開始はなんと九校戦初日にぶつけた。一部の一高代表メンバーにはこのモデルで戦ってもらうことになる。

ハイエンドタイプが目立つ［トーラス・シルバー］の手掛けた製品からすれば珍しいタイプだが、こういったところから慣れ親しんでもらうのと、汎用型の処理速度を本格的に特化型のレベルまで引き上げるためのものだ。
競技用ＣＡＤのレギュレーションとして設定されているのは、特定バージョン以下のＯＳ、起動式データや個々の想子波に応じた設定データを格納する記憶媒体の容量、ＣＡＤに組み込まれている起動式読込・処理装置の性能、加えて競技内で使用可能なデバイスのサイズの４つ。
なお、ＣＡＤの核ともいうべき感応石は選手のフルパフォーマンスを想定してほぼ高水準のものが標準的に使われるため、レギュレーションには含まれていない。
「だからと言って、このライフルはないだろう……誰に使わせる気なんだ？」
達也がそう零したのは、悠元が操作している端末のモニターに映ったライフル型競技用ＣＡＤの設計図。
昨年夏にドイツの魔工メーカーの一つであるデュッセンドルフで発表された汎用型ＣＡＤに照準補助を付けた技術。これにワルキューレやオーディンの技術も一部流用して組み上げたもの。これでも規格を余裕でクリアしている。起動式の格納メモリもソフトウェアでカバーすれば、個人の調整データ容量は十分に確保できる計算だ。
「一応雫前提だよ。そうだ、深雪が使ってるＣＡＤのオーバーホールもするから。今のうちに九校戦も見据えて調整しとかないと忙しくなる」
「あれでまだ弄るところがあるというのが驚きなんだが……」
「あと、達也の［トライデント］もオーバーホールする。こないだの一件から見て調整箇所も割り出せたし」
流石に達也の［トライデント］は九校戦仕様ではなく、本人の魔法特性に合わせた代物にカスタマイズするだけだが……一応達也がもしモノリス・コードに出ることとなった場合に備えて、九校戦仕様の

特化型ＣＡＤも〝４つ〟発注しておこうと思う。
　競技用ＣＡＤって画一的過ぎてデザイン性皆無なんだよな。ガチガチなものじゃなく、使っているものを見て楽しむのも醍醐味だろうに……まあ、そのための『シルバー・ブロッサム』シリーズなのだが。ＣＡＤに社名のロゴマークは入れないが、ようは広告塔代わりになってもらうというわけだ。この辺は既に大会運営に確認済みである。
「ところで達也。物は相談なんだけど……これを見てほしいんだ」
「ん？……お前、とんでもないものを考え付くな。これらのソフトウェアを組めと？」
「そういうこと」
　達也が見つめる先にはいくつかのＣＡＤの設計図が表示されている。そのどれもが九校戦を見据えた上での規格になっていることは読み取れたが、悠元がここまで本腰を入れてまともな部類のＣＡＤを組み込んでいたことに少し疑問を持った。
「飛行魔法の目途もついたし、別にいいんだが……どうしてここまで？」
「その九校戦だよ。少なくとも、俺と深雪は代表メンバー入りする可能性が高い。そこまではいいんだが……代表入りすると思われる俺と燈也以外の１年男子メンバーがパッとしない。森崎はそれなりにやるから入ってくるだろうけど、十三束（とみつか）は競技向きじゃないから代表入りは難しい……聞いた限りの入試情報だと、一科生だけで言えば大半は女子に偏ってる」
　３年前の九校戦で三高に総合優勝を取られた際、男子側の成績が悲惨だった。女子側は悠元の姉である詩鶴、佳奈、美嘉の三姉妹を主軸に主力メンバーが揃っていたため、大きく崩れることはなかった。
　この敗戦を機に佳奈と美嘉は九校戦後すぐにエンジニア適性の高い子を抜擢し、九校戦総合優勝を奪還した。そして現在の３年生が１年生の時にエンジニアを育成するよう言い含めたのだが……それを守らなかったためにエンジニア方面の人材不足が露呈している状況だ。
　恐らく、達也がエンジニア入りすることはほぼ確定と見ていい。

だが、燈也以外の男子にテコ入れは難しいだろう。克人に関してはテコ入れ不要とも言える。強いて言うなら桐原ぐらいしかいないだろうな……そう思いながら端末のキーボードを叩く。
「状況的に三連覇できるかという瀬戸際だってことを先輩方は認識してない。３年メンバーの誰かが崩れれば総合優勝も一気に危うくなる……佳奈姉さんと美嘉姉さんが揃って連絡してきたぐらいだからな」
「そういえば、十文字会頭を破ったお前の姉って何の競技に出てたんだ？」
「女子スピード・シューティングと女子アイス・ピラーズ・ブレイク。言っとくけど、あの魔法は使ってないよ。佳奈姉さんが得意とするのは振動・移動・加重・放出・収束系統の複合制御術式、それと［ライトニング・オーダー］を駆使した［九種行使連鎖（ナインス・キャスト・チェイン）］。当時観戦していた深雪に聞いたほうが早いだろう」
［九種行使連鎖］は意図的に多系統多種複合術式の事象干渉力を多変数化させ、相手の情報強化を妨害する技法。更には達也が服部との戦闘で見せた想子波の合成原理を応用し、９つの同一魔法を時間差で発動させて単一の魔法では出せない爆発的な威力と事象干渉力を叩きだす。
つまりは［ループ・キャスト］を自前で行使できる形となるが、この技法には［ライトニング・オーダー］が前提となる。
その［ライトニング・オーダー］とは、一度に最高３６種の起動式同時読込・魔法式逐次展開だけでなく魔法発動寸前の状態で保有・同時行使する［スピードローダー］の技能も加わるが、その保有を一時的にイメージ記憶化させることによって複写による同一術式の同時行使だけでなく魔法式保持による魔法演算領域の圧迫や想子消費を抑える高等魔法技術。
ここまで聞けばわかると思うが、四葉の秘術である［フラッシュ・キャスト］の技能に似通っている。だが［ライトニング・オーダー］は保持のために一時的な魔法式のイメージ記憶化を行うものであり、起動式をイメージ記憶として刻み込んで引き出す［フラッシュ・キャス

ト」とは考え自体似通っていても技術自体は全くの別物。
　しかも、この技能は高い魔法知覚力が必要であり、三矢家でも佳奈と美嘉、それに悠元しか現状は使えない。教えてはいないが、恐らく詩奈も使用できるだろうと踏んでいる。加えて、負荷軽減のためにＣＡＤ自体も特殊な感応石を搭載している。なお、このことは現在自分しか知らない秘密だ。
「今は忙しいが、代表メンバーがある程度形になったら連絡してくれって佳奈姉さんに頼まれててな。十中八九、檄が飛ぶだろう」
「厳しい人なんだな」
「普段は優しいんだけどね……会長が血の雨を見なければいいけど」
『それは大丈夫なのだろうか』と達也は思わなくもなかったが、口を噤んだのであった。

トーラス・シルバー

――トーラス・シルバー。

魔法師社会、とりわけ魔工技師の中において知らぬ者は恥、と言っても過言ではないほどの天才魔工技師（魔工技師：魔法工学技術師とは魔法関係の技術者）とされている。

北米のマクシミリアン・デバイスや欧州のローゼン・マギクラフトなどといった世界の名だたるメーカーでさえも、彼の動向を注目するほどに挙げた業績は計り知れない。

トーラス・シルバーの功績の一例を挙げればこのようなものだ。

――ループ・キャスト・システムの実現。

――特化型ＣＡＤの起動式展開速度の２０％向上。

――非接触型スイッチの誤差認識率の低下。

高速化が進む現代魔法において、同一魔法の連射化だけでなく特化型の起動式展開速度を２割も速くし、更には高速化で起こりやすい誤作動のレベルを下げる。

このいずれかの技術だけでも一生遊んで暮らせるほどのレベルだが、トーラス・シルバーはこれらをたった１年で成し遂げている。魔法関連の技術者としてだけではなく、各方面からしても喉から手が出るほど欲しくなる逸材なのは間違いない。

トーラス・シルバーは登場して間もなく数々の業績を成しておきながら、当の本人は顔出しＮＧという形で取材を拒否、人類史に名を残しながらもそのミステリアスさに、各種メディアでは一時期特集記事まで組まれるほどだった。

出身、年齢、性別、姿、経歴といった個人情報全てが謎に包まれていて、唯一判明していることといえば、日本の魔工メーカーであるＦＬＴ（フォア・リーブス・テクノロジー）専属技師ということだけ。そのトーラス・シルバーが実際にＣＡＤの開発・研究を行っているのがＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課。

「お久しぶりです、若大将。いえ、主任！」

「いや、主任は貴方ですよね、牛山さん」

……ある意味、この二人にとってお約束ともいえるやり取りであった。

◇　◇　◇

九校戦に向けた『シルバー・ブロッサム』シリーズもそうだが、飛行魔法の段取りも並行して進めていた。学業的には期末考査も近く、雫の家で勉強会ということが決まった次の日、悠元は達也や深雪と一緒にＦＬＴ社を訪れていた。

実を言うと、ＦＬＴの株式を取得しているというか深夜からの押し切りで2年前に取得させられた（現状未成年なので、元が代わりに保持している）。

調達資金はというと、父親である元が『お前のおかげで儲けた分』から出したらしい（取得金額は聞いていない）。結果として深夜に次ぐＦＬＴの次席株主という形となっている。なので、来社する表向きの理由は『株主である父からの視察依頼』で通している形だ。

ハードウェア設計や改善の提案自体は部署にある端末とのやり取りで十分なのだが、『シルバー・ブロッサム』シリーズは今までにないシルバーシリーズともいえるため、態々出向くことになった。それと、さっき話した飛行魔法のデバイスのこともあった。

先々日の司波家。その地下室で作業していると、達也から声をかけられた。

「悠元、少しいいか？」

「ん？　って、それは飛行魔法の？」

「ああ。ようやく形になったんでな」

常駐型重力制御術式――――加重系統魔法三大難問の一つである［汎用型飛行魔法］。それがようやく形となったらしく、テストを頼みたいということだった。デバイスのハード自体はまだ大きな改良を加えておらず、ひとまずソフトウェア部分での仮組というものだった。

「深雪にも試してもらうんだが、まずはほぼ同じ重力制御の記述を使っている悠元に試してもらいたくてな」

「まあ、理には適っているな。それじゃ、いくぞ」

スイッチを押すと想子が吸い取られ、起動式が読み込まれて魔法式

が展開する。感覚として制御魔法自体は０．５秒で終了条件を組み、魔法式の位置を記録するタイムレコーダー機能を取り付けた形だろう。特に吐き気などの精神に対する影響はない。連続処理による負荷も殆ど感じない。
「成程、ごく短時間で終了条件を組むことによって事象干渉力の影響を排除したのか。それと断続的な魔法式展開ならそれほど負荷にもならない。あとは想子保有量次第ってところかな」
「仕組みを解いたのは流石だと言いたいが、なぜ胡坐をかいて横回転しているんだ？」
「気分の問題ってやつかな、っと。全く違和感を覚えなかったな。これなら明日からでも飛行魔法で飛んでいけそうだ」
「お前の場合、飛行どころか宇宙に行けそうだがな」
『お兄様（たつや）、俺は人間です』と言いたかったが、その言葉を飲み込みつつ達也にデバイスを返した。すると、扉が開いて深雪が姿を現した。手にはコーヒーの入ったお盆を持っているのだが、服装はというと九校戦のミラージ・バットのコスチュームであった（深雪は６月初めの段階で声を掛けられていて、衣装も既に準備されていた）。
「お二人とも、コーヒーをお持ちしました」
「丁度よかった…って、ミラージ・バットのコスチュームか」
正直な話、達也は九校戦のことを碌に知らなかった。まあ、ＦＬＴと独立魔装大隊の訓練、それと深雪の家庭教師で長期休みが丸々潰れていたのは言うまでもなく、それは仕方ないだろうなと思う。
自分の場合は独立魔装大隊の特別技術顧問と新陰流剣武術の関係で訓練は免除されていたが、ＦＬＴの仕事に加えて長野佑都としての社交界への顔出し、加えて詩奈の家庭教師で夏休みが潰れていた。それでも九校戦のことを知っていたのは単純に転生特典というものである。
結局、九校戦に詳しい深雪が達也に録画していた映像を交えてレクチャーしていたのだった。
「いかがでしょうか？」
「可愛いよ。とてもよく似合ってる」

「まるでお伽噺に出てくる妖精みたいだな」
「も、もう、悠元さんってば……？」
深雪の着るコスチュームに対して、達也は率直に誉め、悠元は例えつつも深雪を褒めた。後者の言葉に少し照れたような表情を見せた深雪だったが、ここで何かしらの違和感を覚える。
座っているはずの達也が見上げるような形になっているのだ。そこで視野を広げると、達也が座っていたはずの椅子から浮いていた。それを見て深雪は何であるのかを口にした。
「飛行術式……常駐型重力制御魔法が完成したのですね！　お兄様はまたしても、不可能を可能にされました。私はお兄様の妹であることを誇りに思います！」
「ありがとう深雪。だが、これは俺一人の功績じゃない。悠元が使っていた重力制御の起動式がなければ、ここまで早く完成しなかっただろう」
「自分が提供した時にはほぼ6割が完成していたし、誤差の範囲だよ、誤差」
「4割は誤差といえるレベルじゃないと思うのですが……でも、さすがは悠元さんです」
その後、深雪による飛行魔法テストは無事終了。その週末にＦＬＴへ行くことになった。実際のところ、偶には兄妹水入らずでいいのではと思ったのだが、深雪の懇願により同行することになった。上目遣いに勝てたら……いや、勝ったら別の疑惑を掛けられそうだから仕方ないと諦めた。
「そういえば、二人と一緒にＦＬＴへ行くのはこれが初めてか」
「お前の場合は大概メールでのやり取りだからな」
「沖縄の後は本気で忙しかったの。爺さんの親戚の子というだけで全国行脚だぞ……九校戦の観戦にも行けず、残りは妹の家庭教師。中学生の長期休みが綺麗に潰れたわ」
「まるで著名なアーティストの全国ツアーみたいな響きですね……」
深雪の言葉はある意味間違ってない。何せ、独立魔装大隊関連で北海道と沖縄方面への挨拶。長野佑都関連で四葉家以外の十師族本家、

その全部に行く羽目となった（四葉家の人間とは伊豆で面会した）。
　さながら有名なアーティストの全国ツアーばり……いや、それ以上の過密スケジュールだ（３Ｄアバターによる形式が通例化している昨今のアイドル事情でも、実際に顔を出して活動しているアーティストがいて、昔ながらの全国行脚が続いている）。
　東北の六塚（むつづか）家に始まり、北陸の一条家、関東の七草家と十文字家、近畿（厳密には京都・奈良方面）の九島家、阪神・中国の二木（ふたつぎ）家、四国の五輪家、九州の八代（やつしろ）家という順番。仮に十師族の直系でも、普通ならだれか一人か二人顔を合わせればいいほうのレベル。自分は十師族の当主全員に顔を合わせた同年代でも稀有な人間となる。
　……こうやって振り返ると、普通の中学生からかなり乖離したものだと思う。
「それに、爺さんもあくどいっつーか……在籍してる中学への学力証明で、魔法科高校入試の模試とか言っといて実際は国立魔法大学入試の模試受けさせやがって……それでも７割は何とか取ったけど」
「待て、中学の時点で国立魔法大学の模試が７割って時点で既に高校生のレベルじゃないんだが」
「達也、それはブーメランかましているようにしか聞こえないんだが？」
「それはお二人とも、と仰りたいところです」
「酷いな、深雪は」
　これ以上は水掛け論というよりも氷のぶつけ合いみたいなものになりかねない、と判断したところで目的地となるＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課へと入っていく。すると、職員の一人が気付き、ほかの職員やその部署で働く魔工技師たちも声を掛けてくる。『御曹司』と呼ばれる達也もそうだが、『若大将』と呼ばれる悠元に深雪は思わず笑みを零していた。
「お邪魔します。牛山主任はいらっしゃいますか？」
「お呼びですかい、ミスター・シルバー。それにお久しぶりです、若大将。いえ、主任！」
「いや、ここの主任は貴方でしょう。牛山さん」

達也の言葉に反応する形で出てきたのはＣＡＤ開発第三課主任を務める牛山欣治（うしやまきんじ）。根っからの職人気質な人物で、達也がその技術力を高く買う形で引き抜いた人物。

実際、シルバーシリーズの作製は彼の手腕あってこそである。その彼から主任と言われたことに悠元はしれっと反論したのだった。

「すみません主任、お呼び立てして」

「いけませんなあ。ここにいるのは貴方方の手下だ。天下のトーラス・シルバーともあろうお方らが、謙り（へりくだ）過ぎちゃ示しがつきません。俺たちはあんた達の下で働けることを光栄に思っているんですぜ」

牛山やここの部署で働いている人たちは、高校入学前から悠元が三矢家の人間であることを知っている。一応ＦＬＴの社内的には『上条洸人』で在宅勤務をしている一介の魔工技師という扱いだが、悠元のハードウェア設計能力は家柄を抜きにしても世界トップクラスだと牛山は思っている。

なお、深雪は二人が褒められていることに感動を覚えていたのだった。平常運転（いつものこと）である。

「それは御尤もですね。ミスター・トーラスの並外れたハードウェア設計能力がなければ、ループ・キャスト・システムは実現しなかったでしょうし」

しれっと達也は笑みを浮かべて言い放つが、外聞的にトーラス・シルバーの功績はソフトウェア面で目立っている。されど、ハードウェアの部分においてもトーラス・シルバーは今までに比類なき功績を上げている。

ハードウェア部分において一例を挙げると、感応石の相互変換処理装置に関して３割の変換効率上昇、起動式を格納する新型データストレージにより読込速度を約２割短縮、人体との接触部分における想子透過のための新素材開発など。

これらは費用対効果も考えてハイエンドモデルである『フォース・シルバー』に組み込まれているが、この一つだけでも一生遊んで暮らせるレベルの実績である。

そして、これらを改良した技術が『シルバー・ブロッサム』シリー

ズに組み込まれる形となる。単純な設計能力だけでなく高度な技術をより使いやすくする能力は世界を探しても悠元に比肩する人間はいないと達也は思っている。

「並外れたって……俺は単純にシルバーもとい達也の組み上げるプログラムに見合うだけのハードウェア設計や改善提案をしてるだけで、マクシミリアンやローゼンにだってそれぐらいの連中はいるだろうに。無論、牛山主任もその一人かと」

「自分にできないことはねえでしょうが、天下のミスター・シルバーのプログラム水準を完全に許容できるだけのハードウェア設計やハード目線でのプログラム要求となれば誰にでもできる話じゃねえですぜ。それに、俺たちのようなプロが必死になって組み上げたデバイスを見ただけで問題点と改善案を提示する。それが出来るミスター・トーラスを下手に素人扱いしようものなら、名立たる魔工技師が失業しちまいますよ。さて、早速仕事の話に入りましょうや」

［トーラス・シルバー］の名前の由来は牛山と達也の名字である司波から捩ったものだが、ここに悠元の名前は入っていない。これには理由がいくつかある。

一つは、悠元がＦＬＴに出入りする切っ掛けとなった三矢家と四葉家の会談は、表向き『非公式』となっていること。この辺りの調べは七草家で付いているのだろうが、そこから達也ひいては深雪の素性がばれるのは拙いということで提案をし、真夜と深夜もそれを受け入れた。

二つ目は独立魔装大隊絡み。悠元が別の名――――上条達三という名で特別技術顧問に参画していることと関係する。仮の名字を同じにしているのは「兄弟、もしくは親縁の関係者」ではないかと疑いを持たせるため。

民間企業に勤める人間が技術者として軍事に携わるのは少なくないため、その為の綺麗なパーソナルデータも組み上げられている。なお、名前まで同じにしなかったのは軍事作戦に従事する関係上のことであり、独立魔装大隊では『魔法師兼魔工技師』として、ＦＬＴでは『魔工技師』としての線引きをしている。

三つめは原作知識絡みに起因する。原作よりもトーラス・シルバーに関する情報は厳重に管理しており、先に述べた軍事関連のところからも一切漏れないように、共通する技術は『ＦＬＴからの技術供与』という形にしている。

その意味で両方が動けなくなるのは拙い。ＣＡＤ関連はどうしてもソフトウェアに目が行きがちなので、達也は確実に動けなくなる。そこに悠元まで動けなくなるのは、周囲（厳密には周辺国家）にやりたい放題をさせかねない。

なので、悠元はあくまでも〝外部協力者〟という立場で参画している。同じＣＡＤ開発第三課にいるのに外部協力というのは筋が通らないだろうが、トーラス・シルバーのチームを立ち上げる際に立案した『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』というプロジェクトの中核メンバーに上条洸人の名で記載している。

そのため、名目上は別のプロジェクトである［トーラス・シルバー・プロジェクト］には外部協力という体を取っている。『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』には無論達也の名前も既に入っているため、逃げ道自体はすでに構築準備が完了している。その計画を名だけでなく実も兼ねたものにするのはこれからの話であるが。

そんな事情に加えて悠元と達也は未成年のため、成年である牛山にトーラス・シルバー・プロジェクトのチームリーダー兼保護・監督責任者を担ってもらっている。

牛山はいわば表の［ミスター・トーラス］であり、悠元が裏の［ミスター・トーラス］である。尤も、職人気質の牛山は自身を［ミスター・トーラス］とは名乗らないため、その名は基本的に悠元への呼称に使われている。

加えて、先ほど述べた含みも込めて、牛山は悠元のことを〝主任〟と呼んでいた、というわけだ。

閑話休題。

「こいつは、飛行デバイスですかい……テツ、予備はいくつある？」

「１０機です」

「バッカ野郎！　何で補充しとかねえんだ！　急いである分をかき集

めさせろ！　あとテスターの連中にも連絡しておけ！　飛行魔法のデバイスなんだぞ、世界の常識が変わることになるんだぞ!!」
　その言葉も御尤もだろう、ということで達也は先日司波家で試した飛行デバイスを牛山に見せた。同僚の技師に同型デバイスの数を尋ね、その答えを聞くと……叫ぶというかまるで怒鳴るように指示を飛ばし、急いで飛行魔法の実験が組まれることになった。
　飛行魔法の実験は成功したのだが、そのテスターである１０名が飛べることに嬉しさの余り、空中で鬼ごっこを始めたのだった。その結果、テスター全員が想子切れを起こすまで飛び続け、それを見た牛山が呆れるように言い放った。
「お前ら、アホか？　常駐型魔法がそんな長時間使えるわけねえだろうが」
「……やはり、起動式の連続処理が負担になっているようですね」
「そりゃあ、御曹司やお嬢様、若大将の想子保有量に比べれば、一般的な魔法師の想子保有量は微々たるもんですから」
　確かに牛山の言うとおりである。彼らの前にテストをした悠元と達也、深雪の想子保有量が桁外れているために負担を感じなかったが、それからすれば一般的な魔法師の想子保有量は微々たるもの、と牛山は言い放った。
　その間に悠元は端末を操作して飛行デバイスのハード設計を見直していて、このあたりの仕事の速さがトーラス・シルバーの片割れたる所以だと思う、と達也は感じた。
「想子の自動吸引スキームを見直しするのもあれだけど、常駐型重力制御魔法専用の回路構成やタイムレコーダー機能のための処理回路も考えたほうがいいかな……ざっと、これぐらいの改善案は出せましたけど……どうです？」
「いやはや、自分が一つ考える間にミスター・トーラスは１０個も考えちまう。ま、こっから先は俺の仕事ってことで、しっかりやらせてもらいますぜ」
「ええ、お願いします」
　その後、『シルバー・ブロッサム』シリーズの打ち合わせのために達

也と深雪を先に行かせて少し話し込んだ後、二人を追う形で悠元も牛山に挨拶をしてから第三課を後にした。
少し時間を食ってしまったので流石にお詫びの一つでもしようと考えていると……扉一枚で出口、と言うところで達也と深雪の後ろ姿を見つけた。彼らは悠元を待つために立ち止まっていたのではなく、悠元から見て二人の更に奥にいる人物たちで〝足止め〟を食らっているような形となっていた。
「――青木さん、ここには私だけでなく兄もいらっしゃるのですが」
「お言葉ですがお嬢様。この青木は四葉家の執事でございますれば、〝一介のボディーガード〟に礼儀を尽くせなどと申されましても、秩序というものがございますので」
一人は四葉家の執事序列第四位の青木。そして、もう一人は達也と深雪の血縁上の父親である司波龍郎。
「私の兄ですよ」
「畏れながら、深雪お嬢様は四葉家の次期当主を家中の皆より望まれているお方。お嬢様の護衛に過ぎぬそこの者とは立場が違います」
前者は面識を持たないが、後者は悠元がＦＬＴで働くことになってから面識を有した人物で、ＦＬＴの開発本部長という重職――という名の閑職に回されている。［トーラス・シルバー］の功績に関して口を出した人物とは愛人関係であり、現在はその愛人と同居している。
戸籍上達也と深雪の父親だが、彼の達也に対する扱いを深雪は快く思っておらず、春の時に司波家が危うく冷凍室に成り掛けた原因を作った人物。当の本人にその自覚など皆無なわけだし、達也も『所詮そんなものだ』と半ば諦めている様なのは言うまでもないが。
「おや、青木さん。口を挟んで失礼だと存じておりますが、ずいぶん穏やかならぬことを仰る。今のご発言は深雪以外の次期当主候補に対して余りに不穏当な言動だと受け取らざるをえません。もしや、叔母上は既に次期当主の指名を成されたと解釈して宜しいのでしょうか？」
「っ……真夜様はまだ何も仰せになられていない」
青木はあくまで四葉家の執事として話しているわけだが、達也に対

する扱いは深雪の逆鱗に触れるものでしかなく、怒りの感情が見え始めたところで達也がフォローという形で二人の会話に割って入った。
今のところは『四葉』の中でのお話なので、いくら十師族とはいえ他の家の事情ともなれば下手に首を突っ込めない。なので、悠元も暫く様子を見ることにした。
「これは驚いた。四葉の執事序列第四位にいる貴方が、次期当主候補である深雪に憶測を吹き込んだという訳ですか。さて、秩序を乱しているのは……一体何方なのやら」
「憶測ではない。心同じくする者同士、思いは通じる。心を持たぬエセ魔法師に理解できるとは思わないが……っ!?」
青木の言動が最早深雪を苛立たせるだけでしかないことは明白。その証拠に深雪の足元が凍り付き、下手すると通路はおろかＦＬＴの建物全体にまで悪影響を及ぼしかねない。
このまま二次被害を被る前に……と、悠元は自前の事象干渉力で深雪の魔法を抑え込みつつ近付いた。突如元に戻る深雪の足元に驚きを見せるものがいる中、達也は深雪の魔法を抑え込んだ相手をすぐに理解し、視線を後ろに向けた。
「悠元。すまない、世話を掛けたようだ」
「別にいい。話し声で家内のことだと判断して少し様子を見てたら、深雪の魔法が漏れたから何事かと思って対処しただけだよ」
達也と悠元の会話で、深雪も悠元の姿に苛立ちを抑えて表情を綻ばせ、青木と龍郎は呆然としている様な様子を見せていた。
「お久しぶりです、龍郎さん」
「あ、ああ。久しぶりだね悠元君。君がどうしてここに?」
「達也と深雪に誘われまして同行していただけです。それで、隣の方は先程の会話を聞くに四葉家の執事の方とお見受けいたしますが」
「……お初にお目に掛かります、三矢悠元殿。四葉家執事の青木と申します」
龍郎に深雪を怒らせることはあっても、深雪が龍郎に敵意を向けることはない。そんなことをしても無駄だと理解しているからだ。だが、青木は深雪の心情を理解もせずに達也を詰った。

大体、今の達也となったのは四葉家当主とその姉が達也に行ったことが原因であることを多かれ少なかれ聞いている筈なのに、それすらも棚に上げて侮辱した。ここまで事情を理解しているのは原作知識のお陰でもあるわけだが。

悠元は深雪の肩に手を置き、強い口調でハッキリと述べる。

「……自分は同じ十師族でも他家の者ゆえ過干渉に聞こえるかもしれませんが、いくら達也が深雪のボディーガードとはいえ、現当主の姉君が実の息子だとお認めになられていることを無視されて、何も仰らないのは如何なことかと存じます」

「!? 何故、三矢の者が……」

「そこまで知っている……ですか? 四葉家現当主であらせられる四葉真夜殿、そして二人の実の母親である司波深夜殿から直接聞かされただけのことです。青木さんがお気になさるようでしたら、実際にご確認されれば宜しいだけのこと。今のは独り言みたいなものですので。失礼します」

そう言って深雪の肩を自分の方に引き寄せつつ、彼らの横を通り過ぎた。それを見た達也も軽く礼だけをして反対側の横を通り過ぎ、扉の向こうへと消えていったのであった。扉が閉まったところで悠元は深雪の肩から手を放そうとしたのだが、深雪は悠元の服を掴んで離そうとしなかった。彼女の表情は今にも泣きそうな状態だった。

「悠元さん……その、ありがとうございます。ですが……」

「どの道四葉に関わった時点で遅かれ早かれだよ。しっかし、葉山さんと違って何も知らなさそうだったが…対応がえらく違ったな。俺が十師族じゃなかったらもっと酷かったかもしれん」

「何にせよ、下手なことも言われずに済んだのはお前のお蔭だな……感謝する」

「まあ、気にすんな」

こういう時って無駄に体を張ってしまうのが悪い癖なんだろうな、と思ってしまった。

ちなみに、強引に深雪の肩を抱き寄せてしまった件についてだが、本人からは『べ、別に気にしてませんから! そ、それに……やっぱ

りなんでもないです！』と顔を真っ赤にしながら弁解され、達也からは『お前はやっぱり天然のジゴロだな』と言われた。

こちらとしては、『誠に遺憾である』と言わざるを得ない。

別に深雪が劣っているというわけではなく、自分から遜った形だが、深雪は不満げな表情を浮かべて納得してくれなかった。何故だ。

テスト勉強

北山家。国内で指折りともいえる大財閥ホクザングループの大元。
三矢家は国際的な小型兵器ブローカーを家業としているが、その取引先としてホクザングループ傘下のメーカーとも取引をしている。
三矢家が悠元の働きによって東道青波（とうどうあおば）の口添えを貰うことができた折、ホクザングループ総帥である北方潮（きたかたうしお）――本名北山潮（きたやまうしお）と三矢家現当主こと三矢元（みつやげん）は正式にビジネスパートナーとしての誼を結ぶ。
悠元が雫と出会ったのはそれ以前の話になる。3年前、剛三の招きで北山家が上泉家の総本山に呼ばれた時だった。その後の北山家とのパーティーでほのかと面識を持つ形となった……好意を持たれないよう意識操作で上手く逸らすのは大変だったと言っておく。
なんでそんなことをしたのか、というと……彼女に関わるイベントであらぬ疑惑をもたれたり、面倒な奴にちょっかいを掛けられかねないと分かっていたからだ。原作知識ってホント大事。
「うわ、すげえなあ……」
「お屋敷なんて凄いですね……」
そう言葉を漏らすのはレオと美月だった。今回の勉強会に参加する面々は達也と深雪に悠元、レオとエリカに美月、燈也とほのかと英美に加えてこの家に住む雫の１０人。かなりの大人数だが、雫曰く『クラス全員じゃないから大丈夫』と言ってのけた。英美とＥ組の面々は初対面だったが、早くも打ち解けていた。というか、ある意味似た者同士の英美とエリカが意気投合していたことにレオが呆れていたのは言うまでもなかったが。
考えてみれば、自分は三矢家、達也と深雪は隠しているが四葉家、エリカは千葉家、燈也は六塚家、ほのかはエレメントの一族であり、英美は英国でも指折りの名門であるゴールディ家の末裔、そして雫は北山家の令嬢。
その意味で一般家庭という枠組み（レオは厳密にいえば違うが）で育ってきた二人からすれば大きな隔たりがあるのは確かだ。
「いらっしゃい。ま、遠慮せずに上がって」

今回の勉強会は期末考査に向けてのもの。入試の際にペーパーテストで1位から3位に入っている面々――――悠元、達也、深雪がここにいる……そうなると、質問が3人に飛び交うのは予想できていた。なので、受講している科目毎に面倒を見た方がいいだろうということになった。魔法言語学は入試で満点を取っている悠元が教えている。
「ここは、ラテン語で『Ｆｉａｔ　Ｌｕｘ』ってなるね」
「す、凄い…教養必須なのに先に言われた」
「そういえば、以前悠元さんが英語で無線を使って呼びかけてましたね」
そういえばそんなこともあったな、と思い返す。深雪だけでなく達也も思い出したようで、少し笑みを零していた。すると、深雪の問いに答えるように達也が言葉を発する。
「そういえば、この前ドイツ語の論文を端末で見ていたな。あれはローゼン・マギクラフトの公式発表論文だったか？」
「ああ、あれか。自動翻訳だと恣意的な解釈もありうるから。原文から落とし込まないと間違って解釈しちゃうし」
「日本語に英語、ラテン語にドイツ語……」
「悠元、通訳でも食っていけるんじゃない？」
「俺が目指してるのは魔法師だよ。そこは通訳を目指す人に任せるさ」
こんなことができるのは『言語理解』のお蔭だろう。というか、エジプト文明とかの古代文字まで解読できてしまうのはどうにかならなかったのだろうか……今更だけどさ。この後、サンスクリット語関連でも盛大にやらかしてしまい、度肝を抜かれた。
次に魔法幾何学。この分野ではフリーハンドで魔法陣を描くのだが、ほのかが練習をしている横で悠元がペンを小刻みに動かしていた。何をしているのかと覗くと、それは1センチぐらいの大きさしかない魔法陣に細かい描写を書き加えていた。これには驚いて声を上げた。
「ちょっと、悠元さん!?　一体何してるんですか!?」
「ああ、これ？　最小規模でできる魔法陣のイメージ練習みたいなも

のだよ」
「これは流石に小さくないですか？　これでどれだけの出力が……」
「これだけなら大型トラックだと1メートルしか吹き飛ばない」
「あの、トラックが吹き飛ぶだけでも十分凄いんじゃ……」
　大型トラックは規格において車両総重量が１１トン以上のトラックを指す。それで1メートルなら対人相手では空気抵抗を含めても約１００倍以上の距離を吹き飛ばすことが可能となる。大型トラックを基準としたのは、悠元が今までに経験した同じ流派の人間相手からの経験だった……この時点で基準が狂っている、といっても過言ではない。
　次に魔法工学なのだが……本人たちと深雪以外は知らないが、ここに「トーラス・シルバー」がいる。その意味で世界トップクラスの説明や解説をする形となった。これには解りやすいとレオやエリカも悠元と達也の説明に聞き入っていた。
「…凄い。魔法工学だけでいっても、二人とも高校生離れしてる」
「なに、深雪のＣＡＤを調整できるように齧った程度だ」
「趣味の範囲で学んでただけだよ。幸いうちの家業で世界各国のメーカーからＣＡＤを取り寄せて試してたし」
　二人の技量は既に齧ったとか趣味とかのレベルではない。その辺を理解している深雪はニコニコと笑みを見せていた。
「流石三矢家の御曹司……」
「御曹司はやめてくれ。三矢家はまだ普通の部類だよ」
「いや、六塚家の人間から言わせたら三矢家も十分におかしいですよ」
「……」
　おかしいのは解っているが、面と向かって言われると堪えるものがあるな、と悠元は思った。とはいえ、長期休み中に富士山への登山をジョギング感覚でやっている燈也が言えたセリフではないと思う。
　そして共通科目である基礎魔法学。ここに関しては魔法というよりも原理的に総合理科や数学といえばいいだろう。
　魔法は基本的にイメージが強く反映される。そのイメージがしっかりしていればいるほどその効力は強くなる。ようは術者の精神力

が魔法行使や魔法抵抗に強く依存する……この辺は創作物でもよくあることだ。
「例えば、硬化魔法だとその本質は『構成分子の相対位置固定』。基本的な用途として武器や防具強化で使われているが、これもイメージ次第では近接戦闘や遠距離での戦闘にも応用できる」
「硬化魔法で遠距離戦？　そんなことできるのか？」
「端的に言えば紐を括り付けた石を振り回して硬化魔法を発動させる。これで即席の長射程用鋼鉄製ハンマーだ。……で、殆どの人はやらないが、硬化魔法には『想子粒子で構成分子を意図的に特定の構造へと変化させたうえで固定すること』ができる」
　この魔法を発展させたものが新陰流剣武術で使われている物理無効化技能『相転移硬化（フェイズシフト）』である。バラしていいのかという疑問もあるだろうが、この技能は『表』の剣術・体術なら上段クラスである程度出来ないとまず死ぬ。冗談抜きで。
　この構造変化の技能は、構成変化前後の分子構成をしっかりとイメージしておかないと武器や防具が使い捨てとなってしまう欠点もある。なので、この魔法技術を会得するために竹刀や木刀が頻繁に使われている。最初構造変化を間違えて木刀をカーボンナノチューブの塊にして、周囲に驚かれた経験は今でも忘れない。
　悠元の言葉に周囲は驚きを見せているが、その中でも達也は『そんなことが可能だったのか』と驚くような素振りを見せていた。
「魔法、と難しく考えるからこんがらがる。世の中にはそういったエネルギーを用いて現象を意図的に起こせる機械だったり触媒があるんだし、調べようと思えば情報端末もあるわけだからな」
「うーん、わかってはいるんだけどね……」
　口には出さないが、『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』でイメージしたのはロボットアニメで見ることのある太陽光収束照射砲。あれのイメージをベースに分解魔法を付け加えたものである。現実的なものだけならそこが限界点となってしまうだろう、と悠元は考える。
　だがまあ、仕方がない部分もある。この世界は西暦１９９５年から分岐して今に至っている。その過程で娯楽に関しては前世よりも規

模が小さい。それに、第三次大戦による人口の急減と魔法という分野の体系化によって前世のような娯楽に割ける余力がない状態だ。
その意味で多くの娯楽に触れ続けてきた上で転生したというのはかなりの強みなのだろう。
勉強も一段落というところで休憩にした。すると、英美が話しかけてきた。
「そういえばさ、魔法実技といえば、この点数が九校戦のメンバー選出に考慮されるんだよね」
「あたしらは関係ないでしょうけどね。無論アンタも」
「余計なお世話だっつーの」
「まあまあ……雫ちゃん？」
九校戦の代表メンバーは実力順――――つまりは一科生から選出される。この手の話題は二科生の面々に縁の無い話となってしまうため、エリカ、レオ、美月の反応はやや薄い。だが、英美の言葉を聞いて待ってました、と言わんばかりに雫が言葉を発した。
「そう！　だから特に今回の試験結果は重要なんだよ……！」
「お、おう……あんなに燃えてる雫、初めて見たよ」
「雫は、九校戦のことになると目の色が変わるから」
普段はクールな雫が強めの口調を発したことに英美は驚きを隠せなかったが、ほのかの説明で何とか納得した。これには深雪も思わず口に出すほどだった。
「成程。ちょっと意外だったわ……私も九校戦は見に行ってるけど、雫の熱意には負けるわね」
「……深雪が珍しいことを言ってる」
「あら、ほのか。私にだってできないことぐらいあるわよ？」
その言葉が揶揄なのか謙遜なのか掴み辛く、ほのかと英美は揃って『あ、うん』と頷くことしかできなかった。
一度火のついた雫はここ１０年の九校戦データを表示した。そこには本戦・新人戦の一高代表メンバーが載っているのだが、その中の数名のパラメーターグラフが測定不能を示す『ＵＮＫＮＯＷＮ（アンノウン）』の表示となっていることに英美が気付いた。

「ねえ、雫。代表メンバーの中にパラメーターが出ていないのがいるんだけど……どういうこと？」
「何でも計測しようとしたら機械が変な数値を示したって聞いたことはある」
「えっと、この人の名前が三矢元継（みつやもとつぐ）？　ほかのものも……全部三矢の名字……あれ？」
　ここで三矢という名字を聞いて部屋にいる全員の視線が悠元に向けられる。その視線に観念したように、悠元は一息吐いた上で呟く。
「三矢元継は次男、三矢詩鶴は長女、三矢佳奈は次女、三矢美嘉は三女……全員俺と血が繋がった兄と姉たちだよ」
「……パラメータに出ないって、どんな強さなんだよ」
「というか、同じ意味で悠元も計り知れないわね……これだけ情報を集めてるなら雫は毎年見に行ってるんでしょ？　何か知ってる？」
　パラメータは各々の魔法適性を数値化したもの。それが全く出ないということは対戦相手にとって得意分野や苦手分野が読めない、ということだ。エリカは思い切って雫に尋ねてみた。
「5年前の九校戦……悠元のお兄さんが出ていた試合は全部見たけど、正直圧巻だった。あれは今でもハッキリと覚えてる」
　5年前――それは一高が初めて総合優勝した時。この時、当時3年の元継と1年の詩鶴という三矢兄妹が際立った。加えて七草家の次男も当時一高に在籍していたが、そのネームバリューすらも凌駕するほどの活躍だった。
　元継はたった一人で対戦相手全員を魔法で気絶させ、味方に損害を出すことなく勝利。敵曰く『正面にいたはずなのに魔法が当たらず、気が付けば気絶していた』と口をそろえて零すほどだった。
　元継の特性はＢＳ魔法（先天的特異魔法）――微弱な認識障害魔法が常に彼の体を覆っている。この特性は想子を消費しないものだが、元継はこの魔法を意図的に制御したり想子で増幅させる技術を確立。これには悠元も一枚噛んでいる。
　詩鶴の特性は驚異的な空間認識能力と演算能力。悠元から教わった訓練法で四方1キロメートルまでの物体を瞬時に認識できるよう

になった。加えて詩鶴専用に特化した「ナインローダー」によって、1年ながら本戦女子クラウド・ボールで全試合無失点勝利を達成している。
「悠元のお姉さんたちも凄いなんてものじゃなかった。ハッキリ言って高校生レベルじゃない。今の3年生でも勝てないと思う」
「美嘉姉さんは実際に女子クラウド・ボール決勝で七草会長を破ってるからな。あと、九校戦女子バトル・ボードの最速記録を未だに保持してる」
「現3年の最強世代が霞むって凄いですね……そういえば、悠元。既に代表入りの声を掛けられたと聞いてますが」
「ええっ!? って、そりゃ悠元は三矢の人間だからね」
燈也の問いかけに驚いたのは英美だが、十師族の直系だということで一人納得していた。それを見つつも一息吐いた上で呟いた。
「俺も吃驚したけどな。何せ、新人戦だけという括りなしで十文字会頭から提示されたからな」
「それは本当ですか!?」
「ああ。なので、本戦男子アイス・ピラーズ・ブレイクと新人戦モノリス・コードでお願いはしたが、正式決定は考査結果が出てからだろうな」
正式決定云々とは言ったが、どうせ出るのは既定路線だろう。なお、深雪は新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイクと新人戦ミラージ・バット、燈也は新人戦男子スピード・シューティングと新人戦男子クラウド・ボールに出場することもその場で聞くことになり、まだメンバー打診を受けていない一科生の面々は羨ましがっていた。
すると、ここで達也は悠元に言葉を投げかけるように尋ねた。
「しかし、お前がモノリス・コードに出るとは……体術は使えないと思うが?」
「格闘術に付与する魔法は既に決めてあるし、ちょっと思いついたこともあるからな。大会運営に予め確認はしたけど」
モノリス・コードにおいては、殺傷性ランクの高い魔法は禁止。魔法攻撃以外の相手への直接戦闘行為も禁止されている。なので格闘

術は使えない……普通の考え方ならそうだろう。だが、使えないわけじゃない。相手に直接触れなければ格闘術も使用可能になる――――つまりは魔法を付与した格闘術という形だ。

「まあ、三高は『クリムゾン・プリンス』とか『カーディナル』も出てくるだろうな……（勝てない相手じゃないが、負けないとは言えないな）」

直接攻撃ありなら関節技で片を付けるのだが、モノリス・コードは直接戦闘行為自体禁止だ。そもそも、想定される選出メンバーからして三高を倒せるメンバーとは言い難い。となれば他の選出メンバーには悪いと思うが、何らかの形でリタイアしてもらうほかないだろうと考えるのであった。

1学期末考査結果

私は九校戦の試合を観戦しに行ったことがある……いや、結構な頻度だろう。

ただ、いつもお兄様が一緒にいるわけではなく、あの一件以降からお兄様も中学生らしからぬ夏休みを送るようになった。ＦＬＴと国防軍の訓練、そして私の家庭教師で夏休みが終わっていたが、お兄様は気にすることなどなかった。

私一人では不安だから、とお兄様は同僚である藤林少尉に頼んでくれたようで、私は一緒に観戦していた。本当はお母様も一緒に行きたがっていたが、四葉の係累であることを隠すために私とお兄様のことを気遣ってくれたのだろう。

叔母様もそのことを心配されていた……一緒に観戦したいと駄々を捏ねていた、と母様から聞いたときは思わず苦笑してしまったが。

そんなお母様と叔母様だが、最近では将来私たちが九校戦に出ることも見越して本家当主の自室と伊豆の別荘にＦＬＴ社製の大画面モニターを買ったらしい。

あの人に買わせたのかもしれない。その意味で直接行きたかった、というのは理解できた。

お兄様はそんな二人に対して『母上と叔母上は一体何と戦っているんだ……』と零していた。こればかりは同意してしまった。

私が見ていた競技で一番白熱したのは、昨年の女子クラウド・ボール決勝。

同じ一高同士――――それも十師族の戦い。

対戦カードは、当時一高の生徒会長にして完全無失点勝利記録を保持する３年三矢美嘉（みつやみか）と、副会長にして昨年の新人戦で全試合無失点勝利を達成した２年七草真由美（さえぐさまゆみ）。開始前からかなりハイレベルな戦いが予想された。

その前評判通り、見ている側も呼吸を忘れてしまうほどの魔法の応酬。

本来３セット勝負の女子クラウド・ボールでまさかの全セット０―

0。男子クラウド・ボール並みの5セットに延長しても0—0という状況に、このまま勝負がつかないかと思っていた延長の第6セット。

ここで三矢美嘉が一気に動いた。それは三矢家が得意とする「スピードローダー」とは別物の技術といわれた三矢家の秘術が炸裂して、試合を一気に優勢へと持ち込んだ。

私はここで気付いた。彼女は、最初から長時間休憩(インターバル)なしの2試合連続相当の耐久戦に持ち込んだ上で勝負を決める、という作戦を決行していたのだと。

普通なら想子切れを起こすだけの作戦だが、それほどまでの想子保有量でないとできない芸当。彼女が入学した時には考えられないほどの成長だと周囲は驚愕していた。

私は、その人の強さから目が離せなかった。まるで、自分を救ってくれた〝あの人〟と同じような強さを感じていた。

——結果は161—0。三矢美嘉の作戦勝ちで、新人戦・本戦の同一種目三連覇を達成した。

◇　◇　◇

金沢にある第三高校、通称三高。

実技方面を重視した教育方針で、九校戦においても2回の総合優勝をしている。

今年は強力ともいえる1年が入学し、その面々が向き合って座っている。

男子は、一条家の次期当主にして『クリムゾン・プリンス』の異名を持つ一条将輝(いちじょうまさき)。

そして、魔法の基本コードの一つを発見した天才『カーディナル・ジョージ』こと吉祥寺真紅郎(きちじょうじしんくろう)の2人。

女子は、一色家の令嬢で『稲妻(エクレール)』の異名を持つ一色愛梨(いっしきあいり)。

そして、百家である十七夜栞(かのうしおり)、四十九院沓子(つくしいんとうこ)の3人。

本来なら愛梨にとって将輝の存在は同じ『一』の名を冠する二十八家の子。だが、一条家と一色家では十師族と師補十八家という『壁』が存在しているのもまた事実。

それをあえて飲み込んでまで愛梨が2人と相対しているのは九校

戦のことである。
「3年の七草真由美、十文字克人。それに匹敵しうる3年の渡辺摩利。これは既定路線なわけなんだけど、今年はとんでもない1年が入ってきた」
「『カーディナル』の貴方が随分と弱気ですわね。一体何があったのです？」
愛梨からすれば、いつも自信に満ちたような真紅郎の印象が強かったため、珍しく悩んでいるような雰囲気に少し驚きを感じていた。それを聞きつつも真紅郎はその名を呟いた。
「一高の1年新入生総代が、あの三矢家の人間だ」
「三矢……十師族が……」
「主らのその様子だと、一度出会っておるようじゃが？」
真紅郎の言葉に愛梨は驚きを隠せず、その言い方に何か引っ掛かりを覚えた沓子は男子2人に問いかける。将輝と真紅郎が顔を見合わせた上で頷き、将輝が話す。
「ああ、俺とジョージは面識がある。尤も、魔法で撃ち合ったわけじゃないから実力なんて解らないが……親父が高く評価するからには、只者じゃないだろう」
確かに只者ではない……将輝と真紅郎を関節技で気絶させた手際は凄いと思うが、魔法に関しては全く不明だった。一緒に作戦行動をしたわけでもないので、その辺は無理もない話だ。
「一条の現当主がそこまで言うほどの……ですか」
「加えて六塚家の人間まで一高に入学している。恐らく九校戦には出てくるだろう。無論、それ以外にも実力者は出てくるだろうね……三矢に3年の先輩たちが苦しめられた以上、楽観視はできないかもしれない」
一条、三矢、六塚、七草、十文字。今年だけでも十師族の半分が出てくるという状況。しかも、そのうちの四家が一高からという状況である。
将輝がその人物に強い関心を持っている父親のことを口にすると、栞は思わず声に発し、それを聞きつつも真紅郎は珍しく真剣な表情を

浮かべた。その理由は九校戦において三矢が打ち立てた実績に他ならない。
「三年前の三高（ウチ）は僅差で総合優勝したけど、女子はほぼ完敗だった。その後の成績でも女子だけ見れば一高が圧倒的だ」
「昨年の女子クラウド・ボールの試合なら私も直接見に行きましたが……恐らく、勝てないでしょう。七草の令嬢だからこそ６セットまで持ったようなもの。おそらく、あの人なら〝最低１０セット〟は可能だったでしょうね」
１０セット――それは男子クラウド・ボールを長時間休憩（インターバル）なしの２試合連続で行うようなもの。
そんな状況なんて当然愛梨にも経験がない領域のレベル。仮に対戦したとしても、勝てる可能性があったとは愛梨にも断言できなかった。
「彼がどの競技に出てくるかで対策は決まってくるんだけど……将輝は何も知らないの？」
「三矢の「スピードローダー」ならともかく、それ以外はサッパリ。親父も何も知らないらしい。何せ、九校戦に出ていた三矢家の人間は、全員得意魔法の系統自体が違う。だから彼が何を使うのかすら読めない」
「やれやれ、実際に戦う前からわしらを悩ませるとは、流石一高の『手品師（マジシャン）』じゃのう」
「ともあれ、出来ることをしましょう。彼が全部の競技に出るわけではありませんし」
「そうね、愛梨の言う通りよ」
愛梨の言葉に栞が頷き、ほかの人間も同意した。
確かに悠元一人で全ての競技に出ることはできない。だが、すべての競技に『関与する』ことが可能であることを彼らはまだ気づいていなかった。
愛梨ら女子組が去った後、徐に真紅郎が将輝に問いかけた。
「将輝、あのことは言わなくてよかったのかい？」
「……ジョージ。それは俺に生贄になれ、と言ってるのと同じになる。

それだけは勘弁してくれ」
「やれやれ、『クリムゾン・プリンス』の名が泣くよ？」
「好きでそうなったわけじゃないが、付いた以上は甘んじて受けてるだけだ」
あのこと――それは長野佑都が三矢悠元であるということ。
悠元が入学した事実は二十八家に届けられたが、先に述べた事実は十師族の範疇で止められている。これは、どのみち九校戦でお披露目になるからという三矢家の慣例みたいなものだ。
真紅郎がそれを知っているのは将輝が話したからに他ならない。
愛梨が悠元の入学を知らないような素振りからして、愛梨の父である一色家現当主の思惑もあるのだろうが、こればかりは将輝にも分からないことだった。
以前その絡みで被害に遭った身として、これ以上の面倒は勘弁だと話す将輝。これに対して、真紅郎は彼の異名を引き合いに出しつつ苦言を呈したのだった。
尤も、真紅郎もそうなる様な気がしたために、将輝の言葉を否定するようなことはなかった。
◇　◇　◇
――西暦２０９５年７月。
魔法科高校において、学ぶ内容は一般教科に魔法理論、魔法実技と国策の教育機関だけあってかなりハイレベルな内容だ。とはいえ、考査自体は魔法理論の記述式テストと魔法実技の２種類というあたりは魔法科高校らしいだろう。
魔法理論は基本教科である基礎魔法学・魔法工学の２教科、選択科目の魔法幾何学・魔法言語学・魔法薬学・魔法構造学から２教科、魔法史学と魔法系統学から１教科の計５教科の合計得点。
魔法実技は展開速度・魔法式の規模・干渉強度の３種類の評価で行われることとなる。実技に関しては入試と同じなので、どれほど成長したのかを示す目安みたいなものだ。
悠元が選択したのは魔法言語学と魔法幾何学、それと魔法系統学。
最初は魔法史学を取ろうかと思ったのだが、上泉家自体が魔法史学

の塊みたいなものであり、剛三からの経験を聞くだけで事足りてしまっていたので取るのをやめた。何せ、生ける第三次大戦の経験者みたいなものだ。
魔法言語学に関しては『言語理解』というチート技能のせいで１００点は簡単に取れてしまう。
魔法幾何学は……感覚的に何とかなってしまうとしか言えなかった。魔法工学は言わずもがなというか満点、系統学も何とかなった。
魔法実技のほうは、何とか機械を壊さない範疇でクリアした……９９ｍｓはさすがにやり過ぎたと思ってるが。
そして、１学年１学期末考査の結果が発表される。
成績上位者は学内ネットで氏名を公表されるのだが、魔法理論と魔法実技を合わせた総合順位の結果はこうなった。

１位　１―Ａ　三矢悠元
２位　１―Ａ　司波深雪
３位　１―Ａ　六塚燈也
４位　１―Ａ　光井ほのか
５位　１―Ａ　北山雫
６位　１―Ｂ　十三束鋼

「やったー！」
「１位から３位はまぁ、ある意味順当だね」
「悠元さん、深雪、燈也さんもおめでとう！」
「ありがとう、ほのか」
入試の際に成績順で均等にクラスを分けているのだが、上位５名が同じＡ組で独占となった。ある意味順当というべきなのかもしれない。次に魔法実技の順位はこうなった。

１位　１―Ａ　三矢悠元
２位　１―Ａ　司波深雪
３位　１―Ａ　六塚燈也
４位　１―Ａ　北山雫
５位　１―Ａ　森崎駿
６位　１―Ａ　光井ほのか

「燈也も流石だな。流石十師族だわ」
「その上にいる悠元と深雪も凄いんだけどね。雫は流石だね」
「ま、上手くいったからね」
　これについても順当というべきなのだろう。上位６人がすべてＡ組という時点でクラス分けに失敗している感が否めないが。ちなみに、上位３名は魔法の展開速度が２５０ｍｓを切っている。
「おい、なんだよこれ！　ありえないだろ」
「採点ミスじゃないのか!?」
　だが、記述試験となる魔法理論で波乱が起きた。クラスメイトが驚愕した結果がこれだ。

１位　１―Ａ　三矢悠元
　　１―Ｅ　司波達也
３位　１―Ａ　司波深雪
４位　１―Ｅ　吉田幹比古
５位　１―Ａ　六塚燈也
６位　１―Ａ　光井ほのか
８位　１―Ａ　北山雫
１０位　１―Ｅ　柴田美月
１９位　１―Ｅ　千葉エリカ
２０位　１―Ｅ　西城レオンハルト

　これだけ見ても、Ｅ組の面々――――正直に言えば自分と関わり合いのある人間たちがこぞってランクインしている。一番驚いたのはレオの驚異的な成績の伸びだろう。これについては燈也が山岳部の誼でレオに勉強を教えていたらしい……それは納得できる話だ。なお、一つ上にエリカがいるので、どういう展開になるかは火を見るより明らかだろう。
（悠元さんやお兄様と一緒に並んでる……）
「あー……雫も大変だね。いろいろな意味で」
「深雪のこういうところが残念というか……負けられないかな」
　深雪に至っては、理論の結果が自分よりも上にいる二人に喜んでいた。ある意味平常運転である。

というか、吉田って思い出した。あの人、多分幹比古の父親だわ。大抵『ミキ』か『幹比古』でしか認識してなかった……何度か面識はあるのだが、半年ぐらいは顔を合わせていない。まあ、こちらも大変だったからな。

エリカからは『ミキには話しておいたわ。十師族だからって遠慮するな、って』と聞かされた。その対価は既に払っているが、少し感謝はしておこうと思う。

とはいえ、こんな結果を見て『ズルをした』だの『実技ができないのに理論なんて理解できるわけがない』という声もあるが、それに対してハッキリとこういった。

「――自分たちが使っている魔法だって『不可能を可能にするためのもの』だろ。そんな『有り得ないこと』を当たり前のように使っておいて、この結果が『有り得ない』というのは矛盾じゃないのか？そんなことを言ってる暇があるんなら、自分の努力が足りなかったことを恥じるほうが大事だろう」

魔法実技で測るのはあくまでも魔法力の速さと大きさだ。たとえ魔法の展開速度が遅くとも、遅いなりに使い道は存在する。実戦には向かなくても、理論として基礎的な研究をする分にコンマ単位の展開速度はそこまで重要じゃないと思う。

そもそも魔法学と体系化されているが、大本は数学や物理学などの一般教科に帰結する部分が多い。確かに専門的な教科は高校に入らないと習わないだろうが、興味本位で勉強していて何か問題でもあるのか、と問いかけたい。

二科生はあくまで一科生よりも魔法実技の評価システムによって〝低い〟と判定されているだけであり、魔法実技そのものが全くできないわけではない。

そもそも、魔法科学校に入学できた時点で『魔法師の資質があると認められた』ということを忘れてはならない。なので、クラスメイトのそんな言い訳はただの〝逃げ〟だ。

この言葉に文句を言っていたクラスメイトは黙り、雫とほのか、燈也は揃って親指を立てて『グッジョブ』の意思を示した。どうやら、教

室が冷凍室になる事態は避けられたようだ。
その代わり、やたらご機嫌な深雪が自分の近くにいることで、他の男子のクラスメイトから羨望やら嫉妬やらの目線を向けられる羽目となった。どこかの弓兵（アーチャー）も言っていたが、一科生の変なプライドなんてそこら辺の犬にでも食わせてしまえ、と言いたくなった。
文句を言えないのは、自分が十師族の一員にいるのも無論理解はしているけど。
なお、この点数に納得できてないのは教員陣も同様だったようで、達也が指導室に呼ばれたらしい。実技ができないのに理論ができるのはおかしい、と……これは生徒の問題だけじゃなくて、学校全体のレベルの問題かもしれない。しかも、達也に転校を勧めてきたそうだ。
それは暗に『自分たちでは教えられません』と自分たちの未熟さを白状しているものだと気付かないのだろうか……そこまで解っていたら、そんなことなんて言わないだろうな。結局その話は断ったそうだ。
達也が以前『教育機関としての学校に期待しない』と紗耶香に言っていたことを彼女から聞いていたので、この辺をあっさり見抜いているのだろう。達也は『頼むから深雪に言わないでくれると助かる』と言っていたので、それについては了承した。
教員はおろか校長の氷のオブジェなんて見たくもないし考えたくもない、と思ったから。

自分の恋路、他人の恋心

僕の名前は六塚燈也（むつづかとうや）。六塚家現当主六塚温子（むつづかあつこ）の弟として生を受けた人間だ。

男なのにまるで女性のような華奢な体格をもって生まれていた……言っておくが、性別が男だということを示す生殖器はしっかりある。生まれは魔法技能師開発第六研究所――東北地方にある研究所で、僕は姉の遺伝子を使って生み出された調整体という存在だ。

調整体は本来、遺伝子の安定性を著しく欠いているために寿命が短いとされている。

だが、自分の場合は何の因果か本来の人間が持ち得る寿命以上を持っているらしい。そんな奇跡の存在である僕を研究所の人たちは、まるで実験動物のように見ていた。

生まれが生まれであったために六塚の名を与えられることはなく、『Ｎｏ．１８』という番号でしか呼ばなかった。

そんな生活に嫌気が差して、僕は研究所を抜け出した。

山に登り、誰にも憚ることなく自然を楽しむ。頂上から見える風景に、そういう生き方も悪くないと思い始めていた。

すると、僕を待っていたかのように一人の女性がそこに立っていた。

彼女こそが六塚温子……僕の遺伝上の姉でもあり、母でもあり、同一人物でもある……彼女は手を差し出してこう言い放った。

『ねえ……六塚家（ウチ）の家族にならない？』

僕は迷ったが、実験動物のまま一生を終える気になどなる訳がない……その誘いを受ける形で、僕は六塚の名を名乗ることになった。名前は番号からもじって『燈也（１８）』――これが今から１０年前の話。

姉はその後正式に六塚家当主となり、僕はその補佐を担っていた。

姉の両親は双方ともに遺伝子調整を受けた存在で、父は早くに亡くなっていたらしい。母親も父親の死で魔法力が急激に衰え、そこに姉が当主の座を継いだ。他人事のように話せるのは僕の生まれ所以かもしれないが。

それから3年……姉は僕に一つの提案をした。それは、進学を東北の第五高校ではなく関東の第一高校にするというもの。
これは、第六研に在籍する一部の連中が僕に関する研究を未だ諦めていないというものだった。
姉からの提案を知った第六研の連中が密かに追手を差し向け、僕は逃げた。姉譲りの熱量操作だけでなく、僕自身に備わった『熱源感知（ヒートレーダー）』という固有技能で追手を上手く躱すことができた。
いくつの山を越えたかもわからない……気が付けば、僕の目の前に迫りくる大型二輪の姿。
魔法を使おうという選択肢など思いつくはずなどなく、僕はその場に蹲った。
……だが、衝撃はいつまで経っても来ない。それを疑問に思った僕が目を開けると、何と大型二輪を受け止めるように跳ね飛ばされた男子の姿があった。慌てて駆け寄る僕の姿にその男子はこう言った。
『……ったく、とっとと逃げてりゃ世話なかったのにな。無事か？ガキンチョ』
普通なら死んでもおかしくない交通事故……のはずなのだが、その男子は痛みを堪えつつも立ち上がろうとしたので、僕は魔法で応急処置をした。とはいっても、熱量操作による痛覚の緩和だが。
結果、肋骨3本に罅が入る……うん、この時点でおかしい。何せ大型二輪が時速約６０キロメートル出してた状態でぶつかれば、間違いなく粉砕骨折は免れないはずなのに、と僕は前の前にいる男子が不思議すぎて理解できなかった。
連絡を受けて慌てて飛んできた姉が彼とその家族に頭を下げた。
今回のことは僕の過失という部分もあるので、それは仕方ないだろう……姉が支払った治療費の額を見て、向こうが愕然としていたのは今でもよく覚えている。口止めという部分もあったのだろうが、肋骨に罅だけで一束（１００万円）は誰だってビビると思う。僕も内心ビビってた。
僕を庇って助けてくれた彼の名前は西城（さいじょう）レオンハルト――その彼と一高で再会できないかと考え、姉の提案を受け入れた。

姉の計らいで、五高ＯＢがいる新発田家にお世話になることとなった。

現当主の理さんは電話という形で話したことがある。『男たる者鍛えることこそ大事』という感じの武闘派だが、特定のこと（それが何かは知らないけど）が絡まない限りまともだろうという印象を感じた。

彼の息子である勝成さんはよき人格者で、堤琴鳴さんも僕を可愛がってくれる。琴鳴さんの弟である奏太さんは最初のころ変に警戒していたが、琴鳴さんの説教と勝成さんとの会話で何とかなった。

理由を聞くことはしなかったが、姉が四葉家現当主に対して崇拝のような敬意を見せていたことからして、多分新発田家は四葉家の関係者なのだろう。そんな事を考えるようになってしまったあたり、僕も十師族――――六塚家の人間なのかもしれない。

その後、奏太さんとは偶に模擬戦をするぐらいの仲となった。僕としては異なるタイプの魔法師と戦える機会などないので、非常にありがたかった。

尤も、彼は負けず嫌いなので必要以上に迫ってくるときがある。その後は琴鳴さんの拳骨が奏太さんに炸裂するパターンがお約束となった。

なお、僕を捕まえようとしていた連中は『お引越し』したそうだ。なので、僕もそれ以上は問い詰めなかった。面倒なことは聞かないほうが幸せということもある。『触らぬ神に祟りなし』とも言うからね。

いくら東北と関東で知名度が違うとはいえ、六塚家はこの国の魔法師社会で頂点に立つ十師族の一つ。名前で近寄ってくる人間もいるのでは？　と身構えていたが、意外にもそれはなかった。

理由は僕よりも入試の成績が良かった２人のクラスメイトだ。

一人は三矢悠元。一高の『触れ得ざる者』と呼ばれている三矢家の係累で今年度の新入生総代。魔法実習でも卓越した技能を見せ、現代魔法における新技術を生み出すほどの頭脳を持ち合わせている。

加えて、非公開だが正式な試合で十文字家次期当主の『ファランクス』を破って勝ったと本人から聞いた。当人に自覚は無いが、その時

点で十師族でも最強格に位置する人物……もはや人間離れした存在だ。

もう一人は司波深雪。入学式で祝辞を悠元の代理で読み上げた才女。その風貌はまるで『芸術品を切り取った』かのような雰囲気を漂わせる。そして、口には出さないが……僕とどこか同じような印象を受けていた。

普段は物静かな少女なのだが、悠元や彼女のお兄さんが絡むと感情的になりやすい（雫曰く『残念美人』）。そして彼女が怒りや嫉妬といった感情を発露させるとそれに呼応して凍結魔法が発動する。

これは僕も経験がある。自分の魔法制御力が甘かったころ、自身の固有魔法である『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』が自動的に発動して周囲のものを凍らせる現象を引き起こしていた。

尤も、彼女の場合は自分よりもさらに強力な〝精神干渉系魔法〟なのかもしれない。お互いの魔法に関する必要以上の詮索は、マナー違反なので敢えて問う様なことはしないと決めているけどね。

お蔭で目立つこともなく、その二人とは同じクラスメイトの友人として誼を結んだ。

更に、この学校でレオと再会することもできた。あの時のことを話すとレオはキョトンとしていた。まさか十師族の人間を助けたなどとは露にも思わなかっただろう。

そして、その縁で同じ山岳部に入ることとした。入部初日で二人揃って上級トレーニングコース完走という伝説を作ってしまったことは……僕は悪くないし、レオも悪くない。富士山ジョギングに比べるとお散歩気分だね。

それから数週間が過ぎたころ、突如学校に襲撃者が現れた。幸い銃を持っているのは少数だったが、ナイフを持ったテロリストがバイアスロン部の面々を襲う瞬間、僕は躊躇うことなく魔法を発動させた。

熱量制御（エネルギー）によって空気中に存在する水蒸気で対象物を瞬間凍結させる魔法『零度拘束（アブソリュート・メイデン）』を発動。呼吸だけはできるようにしてテロリストを無力化した。

僕の場合、移動系魔法の基礎単一工程で上空に打ち上げるよりも

こっちのほうが早いという利点もあるので、躊躇うことなくその選択をした訳だ。
そこまでは良かったんだけれど……3年でSSボード・バイアスロン部部長をしている五十嵐亜実先輩の僕を見つめる眼差しが、何だか『恋する乙女の目』のように見えていた。そして、気が付いたら両手を握られていた。
『そ、その、唐突かもしれないけど……私と、付き合ってください……』
これが一目惚れって奴？　と僕は思った。
まあ、僕が介入する前に彼女が後輩のために奮闘した姿を見て『カッコいい』と思ったことは否定しない。なので、返事はOKした。周囲のバイアスロン部から冷やかしのような声援が飛んでくる。そこにはほのかと雫もいた……今度お返ししてあげようと思う。
生まれのこともあるが、元々家を継げるような立場でもないために幾分か気が楽である。ただ、先輩の弟が僕と同学年なので大変である……この前『あの姉さんにようやくまともな人が…』と涙を流しながら言っていた。
その後で先輩が前生徒会長譲りの関節技で弟を締め上げていたが。
『触れ得ざる者』に気に入られると強くなる……僕には理解したくない世界だと思う。
一応実家の姉に伝えると『今日はお赤飯じゃー！』と叫んでいた……耳が痛くなるので、大声はやめてほしい。あと、姉から一度実家に連れてくるようにも言われた。それは気が早いんじゃないかなと思った。
新発田家の人に伝えると奏太さんが『リア充は滅びろ！』と言い放ったが、琴鳴さんのヘッドロックで撃沈していた。それを見た勝成さんは苦笑いしながら僕の肩に手を置いた。
この家も姉ほどではないが、随分賑やかなことだと思う。嫌いじゃないけどね。
それから暫くは山岳部とバイアスロン部の掛け持ちという感じで毎日を過ごしていた。偶に悠元と深雪が鍛錬している武道場にお邪魔してはレオやエリカらと軽い運動をするようになった。

柔道限定の手合わせで深雪がエリカを投げ飛ばしたときはビビったし、レオもビビってた。投げられたほうのエリカも何が起きたのか理解できなかった。投げた方の深雪も思わず苦笑していたぐらいだ……『触れ得ざる者』の噂は本当だったのか、と感じてしまった。

バイアスロン部では五十嵐先輩の抱き枕的ポジションとなり、ほかの女子が抱き着こうとすると『私の燈也に手を出す奴は許さないよ？』と口元が笑っていない笑顔で敵意を露わにしていた。

そういう一途さも可愛いなと零すと、顔を真っ赤にして照れる姿に女性らしさを感じてしまう。そしてそれを周囲の部員が弄って先輩が逆ギレし、僕が止めるまででワンセットの流れである。

なお、その際ラッキースケベ的展開が数回ほど発生してしまった……先輩は恥じらいつつも『ここから先は人のいないところで…ね？』と呟いた。僕は学生生活を満喫したいので、そういうのはまだ早いかと思うんです。

それを見た雫からは『頑張って』と言われ、ほのかからは『参考にします』と言われた。前者はともかく、後者に関しては絶対参考にしないほうがいいと一応釘は差した。ほのかは今一つ自分のスタイルに自覚がないんだよね。で、先輩の弟もとい鷹輔からは『これからも暴れ馬の姉を頼む』と言われた……だから、気が早いって。

ここまで達観しているのは理由がある。僕と先輩の交際を聞いた姉が、なんと先輩を僕の許婚に認めるという書状を先輩の実家こと五十嵐家に送ったのだ。

勿論先方は大混乱。何せ、百家本流である五十嵐家が十師族の一つである六塚家に嫁ぐということ。そうなれば、先輩の実家の家格は自ずと上がることになる。

僕の場合は生まれのこともあるし、家を継ぐかも分からないけれど……とか思ってたら、姉から『近々六塚家次期当主候補に指名する』と言われた。早めに引退して僕に丸投げし、四葉真夜さんの追っかけでも始める気かな？　……頭が痛くなりそうだ。

僕は盛大に呆れ返ったが、先輩は逆にオロオロしていた。家柄の関係である程度は覚悟していたが、高校生の自分がそういった類に巻き

込まれるとは微塵にも思わなかったらしい。本当に私でいいの？
という思いもあったのだろう。
こうなれば肚を括るしかないし、僕も先輩と付き合うようになったことは嬉しいと思っている。形はどうあれ男性として見て貰えているってことだから。そのことを言ったら、先輩は顔を真っ赤にして俯いていたけど……変なことは言ってないと思う。
結果、他の十師族にも書状を送付する形を取りつつ僕と先輩の婚約を公表する形となった。一高には十師族と百家がいるので直ぐにその噂が広まり、先輩は質問攻めにあったらしい。僕の場合は悠元のお蔭で大した被害もなかったので、彼には内心感謝してる。
五十嵐家からは滅茶苦茶丁寧な書状が届いたようで、姉曰く『謙りも大事だけど、こっちが高圧的になってるようで頭が痛くなってくるわ』とぼやいていた。
僕の次期当主の件は六塚家の実質的な分家である六郷（ろくごう）家から既に了解を取り付けているらしい。こういうところは十師族の当主たる手腕が光ったと言うべきだろう。
先輩と付き合うようになってからは、生徒会長である七草会長や部活連の十文字会頭、風紀委員会の渡辺委員長にも顔を覚えられた。渡辺委員長は同じ百家という家柄から先輩とも仲良くなったようで、よく恋愛相談を受けているそうだ。
お相手は千葉家の方と聞いた……ひょっとして、エリカのお兄さんかな？　彼女からそういう話は聞いたことがないけど、名字からして関係者なのは間違いないだろう。
1学期末考査は学年総合3位。上の二人にはまず勝てないな、と内心苦笑した。そして九校戦も出場が内定した。
自分は新人戦2種目となるが、新人戦男子スピード・シューティングには恐らく『カーディナル・ジョージ』も出てくるだろう……彼には以前女の子と勘違いされた上で告白されたことがある。なので、そのお礼参りは達成しておきたい。
直接攻撃できないのが非常に残念なことだ……チッ。
おっといけない、本音が出てしまったね。

なお、そのことも含めて九校戦のことを悠元に相談したら、『お前と五十嵐先輩が付き合い始めた理由が分かった……ある意味同類だわ』と言われた。どういう意味なのだろうか？

◇　◇　◇

達也が話を終えて指導室を出てくると、そこには同じクラスメイトであるレオとエリカに美月、深雪と悠元の絡みで知り合った雫とほのか、それに燈也がいた。それだけの人数なので、人通りが少ない教職員棟でも目立っていた。

「達也、お疲れさん」

「お勤めご苦労様です、とでも言っておきましょうか？」

「俺はどこぞのヤクザじゃないぞ、燈也。些か面倒だったことは否定しないが」

そう達也が零したのは、指導室で問われていた内容――『実技ができないのに理論ができるのは、実技で手抜きしているからでは？』と疑惑を持ったらしいと達也が他の面々に話すと、それに疑問を呈したのは燈也だった。立ち止まったままだと目立ってしまうので、無論歩きながらではあるが……ただ、美形揃いなのでどう足掻いても目立つのは言うまでもない。

「確かに、二科生は一科生よりも実技が得意ではないのは事実かもしれないです。けど、それはこの学校の評価判定で〝低い〟だけであって、〝出来ない〟というのはオーバーな言い方だと思うんですよね……ああ、別に二科生の人を貶すつもりはないですよ？」

「分かってるわよ。燈也はどっかのデリカシーの無い誰かさんと違うって理解してるから」

「一々火種を突っ込まないと気が済まねえのか、お前は」

実技ができない、という単語をそのまま捉えるなら『魔法が使えない』ということになりうる。それだったら入学試験で行った魔法実技に不正があったのかと疑わざるを得ず、ひいてはその判定をした人間が疑われかねない。

そもそも、魔法実習の記録は残っているのだから、それで魔法を使えるかどうかも判定できるのにそれをしないで指導する――正直

言って『お粗末』と判断できるレベルの話だ。
「まあまあ。でも、燈也さんの言う通りですね。それで理論ができないというのは暴論にも聞こえますし」
「寧ろ指導教員がいないのに、理論の成績上位者で二科生が入ってきたことを評価すべきだと思う。うちのクラスメイトは『ズルをした』などと言ってたけど、自分の努力が足りなかったことを恥じるべきだと思う。無論、私自身もだけど」
「達也さんたちがそんなことする理由がないじゃないですか。悠元さんが止めてくれなかったら教室が極寒の冷凍室になってましたよ…」
　美月、雫、ほのかがそう口にすると、周囲の人々は多分深雪だろうなと想像し、達也はそれをフォローして大惨事を防いでいる悠元に内心感謝していた。流石に4月の一件のようなことが起きたら洒落にならないと思うのは事実だ。
「そういえばさあ、燈也は4月から五十嵐先輩と付き合ってるんでしょ？　ちゃんと彼氏らしいことしてるの？」
「週一ぐらいのペースでデートならしてますよ。あとは登下校も一緒にしてますし……残りはテスト勉強ぐらいでしょうか」
「お、おう……意外に動じないのね」
「これぐらいで動じてたらエリカの玩具にされかねませんからね。伊達に山登りで鍛えてませんし、これでも六塚家の人間ですから」
　面白半分に聞いてきたエリカに対してあっさりと答えた燈也に思わず目を丸くするが、彼の言葉に黙ったまま頷くレオ。すると、それを見たエリカがノートを丸めてレオの頭を叩いた。そこから始まる二人の『夫婦喧嘩』に周囲は呆れ返っていた。
　そんな様子を見つつ、燈也はあることを思い出して雫に尋ねた。
「そういえば……雫、あの一件の少し前から悠元に結構視線を送ったりしてるみたいですけど」
「そ、そうなの雫!?　全然気付かなかった」
「ほのかは仕方ないよ。……これでもアピールしてるんだけど、全然気付いてくれない」
　その雫の言葉に反応したのは、他でもないエリカだった。レオとの

喧嘩をすっぱり忘れ去るようにぶった切り、自己加速術式でも使ったかのような速さで雫の腕を掴んでいた。
「これは面白そうな予感。雫、カフェテリアで詳しい話を聞こうじゃない！」
「ちょ、まっ……!?」
「ま、待ってよ二人とも！」
「エリカちゃん！　すみません、3人を追いかけますので」
　エリカに拉致られる雫、そして慌てて追いかけるほのかと美月を見送る形となった達也、レオ、燈也の3人。その様子に達也は事情を知っていそうな燈也に尋ねる。
「燈也、何か知ってるのか？」
「新入生勧誘週間の2日目以降の話ですね。偶に態度にも出てましたし。尤も、悠元の場合は生徒会で忙しいですけど……」
「最近はお前の妹の鍛錬にも付き合ってるからな……あいつ、モテるな」
　燈也も詳しい話は聞いていないが、雫が5人で会話しているときに結構アピールはしている節はあった。けど、相手が難敵すぎると燈也は思う。何せあの『触れ得ざる者』と謳われた三矢家の人間だ。
「けど、その恋敵になりえそうなのが一番の難関かと」
「気分はどうだ？　深雪のお兄様としては」
「俺がどうこうできる問題でも無いだろう……下手に手を出したら火傷じゃすまないだろう」
　人の恋路を邪魔すると地獄に落ちる……そんな言葉もある。達也としては妹の恋路を応援してやりたいが、こればかりは当人たちの問題でもあるので下手に口出しもできない。妹から彼を誘導してほしいと言われたら別だが。
　今一つ恋愛感情を理解できず、踏み込めない深雪。それに対して悠元への恋愛感情を見せ始めた雫。この二人もそうだが、その感情を向けられる相手が一番の強敵だろう。
「全く、ああいうのを俗に朴念仁と言うんだろうな……どうした、燈也？」

「いえ、何でもないですよ（ほのかが向けている好意に気付かない時点で、達也も朴念仁ですよ……）」
「？」
達也は悠元をそう評したが、これを聞いた燈也の溜息が出そうなほど呆れた表情に、レオは首を傾げたのだった。

競技選定（丸投げ）

期末考査も終わり、いよいよ九校戦だ。

九校戦――全国魔法科高校親善魔法競技大会。

北海道、東北（宮城）、関東（東京）、北陸（石川）、東海（静岡）、近畿（兵庫）、山陰（島根）、四国（高知）、九州（熊本）にある魔法科高校の代表が一堂に会する魔法競技大会で、スポーツとしての側面が強い。前世で言うところの〝夏の甲子園〟クラスともいうべきメディア規模で特集も組まれ、競技自体もテレビ放映されている。

将来の国を担う魔法師同士を競い合わせて相互のレベルアップを図る――そして将来的に指導する側の人材不足を解消していくという狙いがある。本戦５日、新人戦５日の１０日間、各校の選手は鎬を削って己の実力をぶつける。

九校戦は国防軍富士演習場南東エリアにて行われ、毎年１０万人規模の観客動員を見込んでいる。限定メニューを出す屋台や各国料理のキッチンカーが並ぶだけでなく、各国の魔工メーカーの新機種展示なども行われている。

その意味で国内の政府関係者や魔法関係者のみならず、一般企業や海外からも多くの観客と研究者とスカウトを集めるほどの一大イベントでもある。

こういった催しを通して国防軍が怖い存在ではなく、国を守る存在として身近に感じてほしいという狙いもあるのだろう。前世でも自衛隊が祭りなどを催していたことから、力のあり方はただ相手を倒すためだけではない、と知ってほしいという思惑が見て取れる。

ただ、そういったところを見ずに騒ぎ立てる自分勝手な連中は一定数いるのだが。

〝物語の外側〟から競技をする側になるというのは稀有過ぎると思う。そんな自分の担当種目なのだが、先月の段階で克人から呼び出しを受けた。その場には真由美と摩利も居合わせ、４月のような状態となった。尤も、その時は生徒会室であったが。

遡ること１ヶ月前。その時はＦＬＴ絡みで少し忙しくしていた時

のことだった。
　その日は珍しく生徒会がない日（悠元が数日分の決済書類を会長の承認待ちにしてしまったため）ということで早めに帰ろうとしたのだが、真由美から呼び出しを受けて中に入ると、既に克人と摩利もいた。
「失礼します。って、会頭に委員長もですか……また厄介ごとですか？」
「大丈夫だ、三矢。まあ、頭を悩ますことなのには違いないが」
　厄介事ではない、という克人の言葉を信じつつ、誰も座っていない側の中央に座った。すると、真由美が話し始めた。
「お願いなんだけど……悠君には、試験の如何に関わらず九校戦に出場してほしいの」
「いきなりですね。というか、通常なら試験の結果を受けて九校戦の代表メンバー選定を行うはずでは？」
「無論その通りだが、今年度の新入生総代であるお前が手を抜かない限り代表落ちはないだろう。その点では七草や渡辺も同意見だ」
　確かにその通りではあると思いつつ、いきなり感は否めない。だが、克人は先んじて数名の有力な人間には既に声をかけている形だと説明した。その中の一人として悠元に声をかけたということを理解しつつも、思い切って尋ねた。
「それで、自分はどの競技に参加の打診を？」
「それなんだがな……私達も正直決められなかった」
　決められない、という摩利の言葉に悠元は首を傾げた。
　先日のブランシュの一件からてっきりモノリス・コードあたりを推薦するものばかりと思っていた。克人のファランクスを破っている以上その流れが妥当かと思ったのだが、そうでもなかったらしい。その理由を真由美が説明した。
「理由はね、悠君の魔法特性を私達は知らないの。悠君の姉二人の魔法特性や出場してた競技は殆ど違うから推測できないし、十文字君との模擬戦だってたった一発で終わっちゃったから」
「自分も一撃で決まるとは思わなかったがな……だから三矢、選択肢はお前に委ねる。この際、お前に対して本戦と新人戦の区別はつけな

い。先日の一件を無傷でこなしたお前なら、本戦と新人戦問わずにどの競技でも優勝を狙える位置にあると思っている」
　これは正直意外だった……最初は新人戦２種目かと思ったのだが、本戦出場でも問題ないと克人は断言した。とはいえ、本戦モノリス・コードには主力メンバーが固まっていることを考えれば選択肢から外れる。
　なので、ここで気になることを投げかけた。
「ちなみに、エンジニアの候補メンバーは８人揃ってるんですか？」
「え？　どうしてそのことを？」
「大事なことだからです。俺は知ってるんですからね？　姉達の忠告を無視してエンジニアの育成をしなかったこと。それを二人から揃って聞いたので」
　悠元の問いかけに３人の言葉が詰まった。どうやら全員心当たりがあるようだ。それもそのはず、先代会長とその前の生徒会長二人が引き継がせる際にその辺りのことを真由美、克人、摩利に伝えていた。
　摩利は大雑把だから忘れやすく、克人は家のこともあるので無理はさせられない。そうなると残ったのは真由美なのだが……それをしなかった理由は昨年の九校戦女子クラウド・ボール決勝の一件だろう。
「美嘉姉さんはこう言ってましたよ？　『摩利と克人は仕方ないけど、どうせ真由美のことだから私に負けた腹いせで忠告破ったんでしょ。それで三連覇なんてよくほざけるね。馬鹿じゃないの？　九校戦ナメてるの？　そんなんじゃ三高に総合優勝取られるよ？』と」
「七草……」
「真由美、お前というやつは……」
　こればかりは克人も摩利も若干呆れたように真由美を見つめていた。言い繕うこともできず、真由美は駄々をこねるように言い放った。
「ふみゅうう……だってぇ、悔しかったんだもん！」
「でももへちまもありません。いい加減にしてください」
「……は、はい……ごめんなさい」

……何で説教しなきゃいけないんですか、年下の俺が。しかも生徒会長に。視線を二人に向けると、克人は瞼を閉じて黙り込み、摩利は苦笑しながら態と視線を逸らした。姉二人から『今の3年はある意味融通が利かない連中ばかりだから』と言われた意味が少しばかり分かる気がした。

これぱかりは仕方ないな、と思いながら一息吐いた上で真剣な表情で告げる。

「では、本戦男子アイス・ピラーズ・ブレイクと新人戦モノリス・コードへの出場を希望します」

その二種目を選んだ理由は簡単。前者は本戦のほうがポイントが高くなることと、連中の妨害が原作通り行われるのなら片方は本戦のほうが都合がいい。万が一自分のＣＡＤに『アレ』を仕込まれても、自分ならその対抗術式で対処できる。

後者の場合、万が一大怪我に繋がる様な妨害があっても対処可能な点。それと、三矢家の家業から連中の客に対してのアプローチが可能ではないかと踏んだ。

最悪闇カジノに参加した連中の身元全部暴いて、全世界に向けて『テロリスト支援者』のレッテルを張った上でリークすることも視野に入れる。『無頭龍』のやっていること自体は非人道的なので、それを認めているもいないも関係ない。胴元をある程度信用してないと賭け事（ギャンブル）なんてできるはずもないのだから。

もし連中だけでなくその背後にいる彼が自分の前に姿を見せた場合、次は確実に〝消す〟。先日の一件はいわば〝警告〟ともいうべきもの。

これで『無頭龍』が予定通り妨害した場合……その時が連中の『絶望へのゴール』である。

「……わかった。それで話を進めよう」

「まったく、エンジニアの話をしようとしたら不機嫌になっていた理由がそんなんだったとはな。真由美、一度来てもらって説教されたらどうだ？」

「摩利!?　美嘉さんのお仕置きは洒落にならないから冗談でもやめて

！」
「あ、それなんですが……佳奈姉さん、ある程度代表メンバーが決まるぐらいで来るそうです」
克人はひとまず仕事が終わったことに一安心といった表情を浮かべる。
摩利は溜息交じりにそう呟き、真由美は珍しく慌てるような表情を見せていたところに放たれた悠元の衝撃的な言葉。
それを聞いた真由美は顔を青ざめており、アニメでよくある『全身から流れる冷や汗』が見えたような気がした。
「……え？　マジ？」
「マジです。まあ、日にちは言われてないので、いつかは解りませんが……逃げたら探ってでもガチで追いかけてきますよ。例え七草家に引き籠っても同じかと。言っときますけど、説得はできませんから」
佳奈は強力な『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』を持っている。なので、真由美が逃げようともその存在を捕捉して追いかけてくるだろう。彼女は克人のファランクスを破っているため、真由美が持てる抑止力はないに等しい。
あえて言おう。〝詰み〟であると。
◇　◇　◇
神奈川県厚木。三矢本家の屋敷の書斎にて、元は考え込んでいた。
彼の目の前にあるのは一台のモニター。その画面には文字の羅列が書かれていた。すると、ノックの音が聞こえる。
「どうぞ」
「――――失礼する」
「失礼いたします」
立ち上がって入室を促すと、書斎に入ってきたのは上泉家に婿入りした次男、元継の姿であった。
元が座るように促すと、元継は応接用のソファーに元と向かい合うような形で座り、彼と一緒に入ってきた女性――――元継の妻である上泉千里（かみいずみちさと）は元に対して礼をしつつ元継の隣に座った。それを見てから元は座って、二人に頭を下げながら告げた。

「元継、態々群馬から済まない。千里殿もご迷惑をお掛けする」
「お気になさらず。今日は東京の別宅から来ましたので」
本来なら自分の息子に頭を下げるということはないだろう。だが、今の元継は上泉家の人間。上泉家は第三研のオーナーであり、三矢家のスポンサーでもある。そうである以上、元として礼を失するなどあってはならない。
それを理解したのか、千里はやんわりと返したのを見つつ、元継が問いかけた。
「……それで親父、この時期にジジイじゃなく俺を呼んだのは、九校戦か？」
「ああ。香港系列のシンジケート『無頭龍（ノー・ヘッド・ドラゴン）』は恐らく剛三殿から聞いたことがあるだろう。ブローカー仲間から情報を仕入れたが、どうやらその日本支部が胴元で九校戦を賭けの対象にして闇カジノをするようだ」
元はブローカー仲間から闇カジノの噂を仕入れ、悠元から提供された『精霊の鏡（カーヴァンクル）』でその辺の情報を精査・収集した。その結果が元の目の前に映る闇カジノの参加者リストというわけだ。元はスクリーン型端末を元継に渡し、彼と千里はそれに目を通してから元に端末を返した。
これほどのことをハッカーなしにできてしまうことに、元は悠元に対して内心感謝をしていた。三矢家の役割を果たせるという意味を重く受け止めつつ、彼に対するＦＬＴの株式の件も代理保有を快く引き受けた。
とはいえ、表沙汰にもできないので他のブローカーとの繋がりは現状維持となったままだ。
「……成程。今年は一高にとって前人未到の三連覇がかかっている大事な時期……それを自分たちの身の保身と金で汚すというわけですか、下衆共が」
「ブランシュとは別口のようにも見えるが……いや、大本は繋がってるな。悠元を襲おうとした連中は大陸系の『ジェネレーター』だったわけだし。そういや親父、この前九島閣下がいらっしゃったみたいだ

が……悠元絡みか？」
　千里は誰にも憚ることなく連中を切り捨てるように吐き捨て、元継はそれを横目で見つつも先日悠元を襲おうとした連中の素性を呟きつつ、元に九島烈の来訪のことを尋ねた。
「それもあったと言うべきだな。九島閣下は四葉が魔法師を兵器ではなく人間として見始めたことに疑問を持っておられた。それと四葉の強大さも危惧されていた……ここだけの話だが、私は〝論外〟と思う。四葉に追随する形でほかの十師族が力をつけねばならないと解ったからこそ、私は悠元を自由にさせている。結果として、お前たちも良い影響を受けたことだろう」
　元はあの襲撃で当主と一族の半数近くを失いながらもここまで強大化した四葉の強かさは見習うべきだろう、と述べた。人道的の是非はあれども、この国の魔法使いは光と闇を抱えている。それは三矢家とて例外ではない。
　今の敵は内ではなく外。なればこそ、四葉を落とすのではなく手を結び、それに並ぶような勢いで強くなること。それを考えない時点で烈の考えは旧世代的だと元は考えている。表沙汰にはしていないが、3年前に新ソ連の佐渡侵攻を受けた一条家の現当主も元の意見に同意した。
「ああ。兄妹みんなが悠元の影響を受けた……無論、俺もだ。アイツは『大したことなどしてない』と言うだろうが」
「私ですら動かせなかった爺様を動かしたのです。あの子は、間違いなく大物になりますよ」
「そうか……話を戻すが、九校戦が始まる前に現地入りをしてほしい。私は九校戦が始まってから動くことになるからな」
　元は三矢家当主。十師族である以上は動けば目立つ。なので、自分の子ども達にそのフォローを頼み込むこととした。その意味を無論元継も理解したうえで頷く。
　長男の元治は留守の関係で動けないが、元継、詩鶴、佳奈、美嘉に加えて上泉家から千里の5人を前もって九校戦の会場に送り込む。それと、元は〝彼ら〟にも念のために打診をしようと動くのであっ

た。
「俺たちの…三矢の集大成と言うべき弟だ。元々観戦には行こうって話になってたからな。爺さんも張り切ってたわ……危うく〝アレ〟を使わせるために教えそうだったから門下生総出で止めたが」
「全く、いくら悠元君が可愛いからって御祖父様の『雷霆終焉龍(ヘル・エンド・ドラゴン)』はレギュレーション違反ですのに。九校戦で〝最上級〟は完全アウトですよ」
千里が隠しつつも言い放った言葉――それは上泉剛三もまた非公式の戦略級魔法師の一人であること。彼の魔法は下手すれば一発で一国が滅ぶレベルの力を持ち得ながらも秘匿する。
それを抜き放つときは国を護るとき、とそう決めた魔法を悠元に教えようとしたことに、元継と千里は揃ってため息を吐き、それを見た元は事情を察して引き攣った笑みを浮かべたのだった。
◇　◇　◇
「はぁ～、暇だねえ」
「まるで事件が起きてほしいような口ぶりで言わないでください」
「はいはい、解ってるよ稲垣(いながき)君……着信？　この音は外部からの？」
夜の高速道路を走る一台の車には、気怠そうに話しつつ運転する男性と、助手席に座る生真面目そうな男性の姿があった。
この二人は警察省の警察官であり、運転手が警部、助手席に座るのが巡査部長なのだが、年齢は運転手が年下。なので、助手席の人物は敬語を使いつつも説教めいた言葉で喋ることがよくある。年齢以上にその人物のいい加減さもその原因にあるのだが。
運転手の男性は、冗談でも言って良いことと悪いことがある、と助手席からの説教めいた言葉をあしらったところで、車内に取り付けられた連絡機に着信を知らせる音が鳴った。ただ、その着信音は登録外からのものだったことに首を傾げるような素振りを見せる。
「ほら、言った傍から起きたじゃないですか！」
「俺を疫病神みたいに言わないでくれ……もしもし、どちら様です？」
『突然の連絡を失礼する。私は三矢家当主、三矢元だ。千葉寿和(ちばとしかず)殿で間違いないかな？』

「三矢……十師族の……」
稲垣と呼ばれた男性が声を荒げると、男性――――千葉家現当主の長男にして統領である千葉寿和が窘めつつ通話ボタンを押す。すると、そこから聞こえてきた『三矢元』と名乗る人物に稲垣は驚きを隠せなかった。一方の寿和も気を引き締めつつ尋ねた。
「いかにも、自分が千葉寿和です。しかし、十師族の当主が百家本流の人間に連絡とは驚きましたが、どうやってこの連絡先を？」
『そこは魔法使いの守秘義務というものでな。警察の方相手でもそれは教えられぬ相談。さて、早速本題に入るのだが……其方を警察官ではなく〝千刃流（ちばりゅう）の剣士〟としてお願いしたいことがある』
「……それは穏やかではないですね。実家には？」
『上泉に行った息子が話を付けにな。貴殿の弟にもこの話は通している』
寿和は元が自分だけでなく弟にも打診していることに内心驚愕する。しかも、千刃流からすれば本流の新陰流の人間が動いていて、恐らく実家の当主である父親もその話を了承するだろう。そうなるとここで駄々を捏ねるべきではない……そう判断した寿和は元に問いかけた。
「……では、今から其方に出向いたほうが宜しいでしょうか？」
『そうしてくれると助かる。では後ほど』
通話が切れたことを確認すると、気持ちを切り替えるように寿和が稲垣に言い放った。
「……というわけで、稲垣君。定時パトロールは一端中断して、このまま厚木までドライブだ」
「やっぱり厄介事じゃないですか。警部、一度お祓いしてもらった方がいいんじゃないですか？」
「そりゃないよ、稲垣君」
こんな疫病神を上司に持ってしまったことを恨むような口ぶりで稲垣は愚痴るが、それをあしらいつつも寿和は車を飛ばして一路三矢本家のある厚木に向かったのだった。

ギブアンドテイク

期末考査も終わって数日後。悠元と達也、深雪は九重寺に来ていた。

とはいっても、今日は達也のトレーニングではなく深雪のトレーニングのため。厳密に言えば、九校戦で深雪が担当することになるミラージ・バットの練習のためだ。原作とは違って軽やかな動きを見せる深雪に、達也は妹の成長を複雑な心境で見ていた。

遡ること2か月前。生徒会の仕事にも慣れてきて、体を動かそうと悠元が学校の武道場に通い始めたのを聞いて、深雪があるお願いをしてきた。

『その、私に……新陰流を教えてください！』

純然な魔法師である深雪からすれば、同じタイプでありながらも剣術や体術を修めている悠元に頼むのがいいと判断したらしい。

深雪の意見を尊重させてやりたいと思いつつ、悠元は達也と八雲の二人に確認を取った。

すると、達也は深雪のお願いならと止めるのを諦め（深雪の泣き落としに完全敗北した）、八雲からは嬉しそうな口調で『寧ろ達也君を超えるぐらいに鍛えてくれるのを楽しみにしてる』と返ってきた。後者は絶対確信犯だろう。ボディーガードより強い魔法師って意味解らねえよ。

現状は師範代なので次に剛三の確認を取ったところ、弟子の一人ぐらい見てくれないと困るということで快諾。深雪の母である深夜には剛三から話をつけるとのことだった。

深夜からは（アドレスを教えていないのに届いた）メールで『不束者の娘のこと、宜しくね』と書かれていた……間に絶対何かが入っていそうな文面に、思わず頭を抱えたくなった。

武道場の使用許可は十文字会頭がすんなり出してくれた。面倒事にならないようにと一応『軽運動部』という体となっていた。

深雪の魔法特性を考えるなら体術一本に絞った方がいいと考え、基礎的な柔軟や体捌きから教える。新陰流は体術一つとっても柔術・合

気道・空手に留まらず、数多の中国拳法やムエタイ、カポエイラなどといった世界各国の武術も融合してその体を成している。
どこかの創作物で聞き覚えのある感じだが、「得るもの全てを糧とし、其を己の武とし、己の護りと成す」――――それが新陰流剣武術の教えである。
意外だったのは、基本が出来ていたお蔭でかなり呑み込みが早いことだ。それにしても、道着姿の深雪は……うん、刺激が強いというのは否定しない。手合いで油断してるとこっちが意識持ってかれるので気は抜けないのだが。
なお、道着は九重寺での鍛錬の時に貰ったらしい……深い意味はないが、あのエロ坊主を一度本山に送った方がよくないか？　と思わなくもなかった。
鍛錬自体見世物でないはずなのに、他のクラブ連中まで覗きに来る始末。
桐原が来たときは紗耶香に連絡して強制連行してもらった……その後で深雪から紗耶香のプライベートナンバーを知っている件について物凄い笑顔で尋ねられたが、今回のことを想定してのことと説明すると何とか納得してくれた。
この前非魔法系競技である空手部の連中が深雪を連れて行こうとしたので、その連中全員に奥義の一つである『青龍嵐脚（せいりゅうらんきゃく）』をお見舞いした上で、それを引き取りに来たほかの連中に少し殺気込の視線で睨み付けた。
相手が先輩だろうと、無理やり女の子を連れて行こうとした時点で有罪（ギルティ）だ。奥義はやりすぎだって？　魔法は使ってないし、連れて行こうとした連中全員気絶させただけなのでセーフ。
風紀委員の仕事を作ってしまったような気がしたが、対応に来た森崎から『お前、魔法なしでも強いんだな……』と感心された。同じく対応に来た沢木からは『今度マーシャル・マジック・アーツ部に来てくれ。歓迎するから』と言われた。男に好かれても嬉しくねえ…。
何故か深雪の好感度がやたら上がった気がした。ついでに風紀委員の巡回で偶に来る達也からも『お前は不思議だが頼りになる』と肩

に手を置かれて言われた。一言余計だよ、達也。
すると、その噂を聞いたレオと燈也、エリカも顔を出しに来るようになった。深雪のように体術は教えないが、柔道で体を動かすぐらいのレベルの運動をするようになった。加えて他の生徒会の面々も『軽運動部』の範囲で書類仕事で鈍った体を動かしていた。
前に深雪がエリカと手合わせをして、エリカを投げたときにちょっとビビったのはここだけの話だ……もしかして、兄や姉たちのようなパワーアップが起きてるのか？
ちなみに、こういったことに対して真っ先に来そうな達也が参加しないのは、八雲から『僕から一本取れたら悠元君に話をつけてあげよう』という条件があると達也本人から聞いた……絶対楽しんでるな、あのエロ坊主。
まあ、風紀委員の巡回がてら様子を見に来ることはあったりするが。
閑話休題。
九重寺には以前のように魔法を駆使した走りではなく、電動二輪車で向かうことになった。今回は競技の練習なので無理もない。なお、悠元が免許と電動二輪車を持っていたことに達也と深雪は驚いていた。
バイクはわかりやすいように達也が黒、悠元が銀とカラーリングを分けている。銀は目立つのでは？　という疑問もあったが、いざとなれば忍術でも使って認識阻害すると答えた悠元に二人は揃って苦笑するしかなかった。
その意味で九島家に行った意味はあったというものだ……現当主に嫁云々言われた時は本気で殺気を向けたくなったが。
別に一人乗りでもよかったわけだが、深雪は悠元の後ろに乗った。密着されるとその感触がスーツ越しに伝わるが、事故を起こしては本末転倒と割り切った。
そんな様子を達也が少しにやけるような雰囲気で見ていた。誰か、感情が乏しいこいつをドギマギさせるような女性が出てこい、と心の中で祈ったのは内緒である。

九重寺に入ろうとしたところで、八雲から荒っぽい歓迎をされる。通例とはいえ、それに驚いた深雪が悠元の背後にしがみつき、『み、見ないでください』と小声で言われた悠元は視線を向けるわけにもいかず、どうにも言えないような表情を浮かべる。

深雪の様子を達也はそれとなく察し、八雲は意味深な笑みを悠元に向けていた。

ミラージ・バットの練習と言っても本番のようなものではなく、八雲の古式魔法の一つである幻影魔法『鬼火』を深雪が手に持つ短い杖で両断していく。

深雪のＣＡＤ自体は既に九校戦用規格を見据えてオーバーホールしたものを使用しているため、ほぼ実際の挙動状態で練習が可能になる。これで他の人も合わせて対戦形式にできればいいが、練習できているだけでもありがたいのに文句は言えない。

両断した玉の数が５０を超えたあたりで達也は深雪に小休止の合図を送ったのだった。そして、達也は飲み物を八雲に差し出した。本来は深雪の役目なのだが、今日は彼女の練習なのでその役目を買って出ていた。

「ありがとうございます、師匠。場所を貸していただくだけでなく、修行の相手までしていただいて」

「なに、深雪君も僕のかわいい教え子だよ。尤も、最近は気になる彼に弟子入りして、体力もしっかりついてきたみたいだね。その意味じゃあ僕も顔負けという他ないよ」

「ええ……悠元も深雪のことを考えて鍛錬を積ませているようですから」

二人が話しながら見ている先では――――悠元が飲み物を差し出して、それを深雪が受け取って口にした。

新陰流に弟子入りとはずいぶん思い切ったことを……と達也は思ったが、九重寺でのハードな乱取りよりも悠元にマンツーマンで指導してもらった方が兄として安心できる……そんな一面があったのは否定しない。

「彼の修めた武術は特殊だからね。その意味で深雪君にもすんなり

合ったのかもしれない」
「師匠の教えがあったからこそ、と言っていましたけど……その悠元が古式魔法を使えるのは、正直驚きました」
達也がそう言っている視線の先で、今度は悠元が印契を結んで古式魔法を発動。人払いの結界の展開と『鬼火』を空中に浮かび上がらせて、深雪が再び飛び上がって両断していく。
悠元は当初古式魔法を使う予定などなかった。だが、八雲が『彼もこれぐらいできるよ』と言い放ち、深雪から「是非お願いします」と言われたので『やってやろうじゃねえか！』と内心で叫びつつ古式魔法を使う羽目になっていた。
彼自身、忍術の部分は秘術故に口外できないと言っているが、その理由も魔法使いの事情所以であると達也は察していた。なので必要以上に尋ねることはしなかった。
「新陰流の忍術は、僕の使える系統の忍術も取り込んでいたりする。無論、人払いの結界や『鬼火』ぐらいは簡単に出来るけど……あの若さで会得しているのは、間違いなく彼の才能だよ。折角だから、僕の『鬼火』でも追いかけてみるかい？」
「いえ、今日は深雪の練習ですし、遠慮して――――誰だ」
八雲の提案に対して絶対弄ぶ様な動きにすると読んだ上で断ろうとしたその時、何かを感じて発動した達也の『眼』に存在が引っ掛かり、それが気配へと変化した。警戒する達也に対し、八雲はその人物を受け入れるように声を掛けた。
「おや、遥クン」
「――――先生はともかく、司波君に気付かれるとは思いもしませんでしたけど」
「彼の目を誤魔化したかったら、気配を消すんじゃなく、気配を偽らないと。悠元君なら簡単に出来てしまうだろうね」
「成程。勉強になります」
八雲の呼びかけに答える形で姿を見せたのは第一高校のカウンセラーである小野遥であった。
その存在に気付いた深雪が悠元に視線を送りつつ地面に降り立っ

たところで、悠元は結界と『鬼火』を解除した。流石に突然の来客である遥がいては練習にならないと判断してのことだ。
「……どうして小野先生がここに？」
「警戒しなくても大丈夫だよ、達也君。遥クンは僕の教え子だ」
「お邪魔してごめんなさい。ミラージ・バットの練習中だったみたいだけど……司波さん、九校戦に出るの？」
「正解。深雪君はアイス・ピラーズ・ブレイクとミラージ・バット、隣にいる悠元君はアイス・ピラーズ・ブレイクとモノリス・コードに出場する」
「二人とも、２種目に出場するなんてすごいわねー！」
……明らかに白々しい二人の言葉の応酬に達也の不機嫌さは増していく。なので、悠元は八雲に声を掛けた。
「先生、達也が不満を爆発させる前に事情を説明したほうが宜しいかと」
「それもそうだね。遥クン、いいかな？」
「どうせいないところで喋るんでしょ？」
上手く会話誘導できたことに内心ホッとしたが、達也に驚くような表情を向けられた。その真意を深雪に視線で尋ねると、深雪は苦笑っぽい表情を浮かべていた。表情で語る前に言葉を発しろ。いや、フィーリングで視線を向けた自分にも言えることだが。
「じゃあ本人の了解が取れたということで。遥クンは公安の秘密捜査官だよ」
「正確には第一高校のカウンセラーとなってから公安の秘密捜査官になった、というのが正しいかな。それに、九重先生の指導を受けていたのは２年前から１年間だけだから、達也君の方が兄弟子になるわね。その後は上泉先生の教えを受けているから、三矢君も兄弟子になるってところかしら」
たった１年の教えであれだけの隠形ならかなりのレベルだろう。尤も、古式魔法を発動させているときにも遥の存在は気付いていたが、あえて言う必要もないので黙ることにする。
意外なのは剛三が遥を直接教えているということだ。ああ見えて

剛三は一途なので、単純に遥の特性を見て面白いと感じ、指導しているのは確かである。
剛三の教えを受けた総本山の上段者クラスは、内情や公安の秘密捜査官になっているものも多いので、その伝手もあるだろう。本来秘密なのに知っているのは、これも上泉家の成せる技というべきかもしれない。
「それにしては、見事な隠形でしたが」
「私の魔法特性だもの」
「成程――――ＢＳ（Ｂｏｒｎ　Ｓｐｅｃｉａｌｉｚｅｄ）魔法師でしたか」
「その肩書は好きじゃない」
まるで同年代の少女のような拗ね方に、達也は失笑を漏らしてしまう。
ＢＳ魔法。先天的特異魔法とも呼ばれ、生まれながらに強力な『超能力』に匹敵する能力を有する魔法を指す。
何かに秀でた、特化した能力は多種多様化した現代魔法から見れば一段下に見られがちだが、その能力を生かせる職業であれば「何でもできる」魔法師よりも秀でた存在に化けることもある。
「司波君に三矢君。本来、公安の秘密捜査官は極秘だからオフレコで頼むわね」
「分かりました」
「自分も他言はしません。その代わり、ブランシュみたいな連中が現れた際は早めに情報をお願いします」
「……分かったわ。ギブアンドテイクで行きましょ」
まあ、公安が動かない場合は最悪『八咫鏡』で全部情報引っこ抜いてシンジケートを潰すだけなんですけどね。そうなると彼女も可哀想なので、適当に〝臨時収入のバイト〟で動いてもらうけど。
◇　◇　◇
魔法大学付属高校にとって夏の九校戦、秋の論文コンペティションは一大イベントとも言える。
そして、この両方でトップに立った人間が過去に一人だけいる。

九校戦では女子スピード・シューティングと女子アイス・ピラーズ・ブレイクで新人戦・本戦2種目三連覇を果たし、一高の総合優勝奪還を果たす。
論文コンペでは、その人物が3年の時に『加重系統マイナスコード』という基本(カーディナル)コードの一つを発見するという論文発表を行い、九校の生徒の度肝を抜いて優勝した。
いつものように弁当を手に持った真由美は摩利と一緒に生徒会室に入る。すると、真由美が自分の座る席につかず立ち止まったことに摩利は首を傾げた。
「真由美？　どうした、顔が真っ青だぞ？」
「あ、ああ……」
「？」
まるでこの世の終わりでも見たかのような恐怖を抱いている真由美に、摩利は一体何が……と振り返ると、そこには夏らしくも露出が控えめな私服を着た糸目の女性が立っていた。
長い髪を前に垂らす形で結び、にこやかな表情を浮かべている人物に摩利は目をパチクリさせていた。
「摩利、お久しぶり。今日はちょっと……現会長に用事があったから、ね」
「か、佳奈さん？　お、お久しぶりです！」
「うん、久しぶり。早速だけど摩利……そこの腹黒(ア)狐(ホ)を捕えろ」
「ハッ！　神妙に縛につけ！」
「摩利の裏切者お!!」
――三矢佳奈(みつやかな)。三矢元の次女で現在国立魔法大学の2年生。
先々代の生徒会長にして一高の九校戦総合優勝奪還のチームリーダーを務めた人。
3年の時に論文コンペで加重系統マイナスコードを発表して優勝した人物。
そして、現3年の最強世代全員に勝った唯一の人間。
力関係により逆らえない彼女の指示により、摩利は真由美を拘束したのだった。

『触れ得ざる者』

「――何が起きたんだ」

ありのままに起こったことを話そう。

悠元は達也や深雪と一緒に生徒会室に来た。

その中に入ると、座った状態で口からエクトプラズムのような何かが出ている真由美に、苦笑しか出てきてない摩利。

鈴音は瞼を閉じて思考を放棄し、あずさに至ってはワークステーションのある机の下で縮こまっていた。そして、真由美の座っている席の後ろには糸目の女性がいた。

催眠術とか超スピードの方がまだ納得できる、と思わなくもない状況だった……思いつつも、この状況を打破するために声を掛けた。

「連絡は貰ってたけど本当に唐突だね、佳奈姉さん」

「ん？　あ、悠元。あれ、隣にいるのは深雪ちゃん？」

「お久しぶりです、佳奈さん」

「うん、久しぶり。あれから美人になって、羨ましく思えるね」

先ほどの雰囲気とは打って変わって和やかになっていた。その一方で佳奈と深雪の接点が分からない人からしたら、深雪も十師族？と思う人もいるが、そこを否定するように佳奈が口を開く。

「一応言っとくけど、深雪ちゃんとは九校戦の観客席で偶然出会っただけ。信用できないなら美嘉に聞くといいよ」

「い、いや、そこまでは言ってませんが……」

「渡辺先輩が丁寧な口調に……」

「佳奈姉さん、会長と会頭、委員長に正式な試合で勝ってるから」

それは現3年の真由美、克人、摩利が1年の時の話だ。当時生徒会長だった佳奈は、十師族のプライドを一度へし折るために克人の勝負を受け、ファランクスを破壊したうえで勝利。真由美にはスピード・シューティング勝負で完封。十師族ではないが、摩利とも正式な試合を行って彼女を叩きのめした。

そこまでした理由は『今のうちに痛い目を見とかないと後で面倒なことになる。特に真由美は厄介だと思う』と……実際、その通りに

なった。
いい加減現実に戻ってこい、と言わんばかりに佳奈は軽い電撃で真由美を現実に引き戻した。
「にゃうん!?……あ、あれ？　ああ、夢だったのね」
「……もう一発いっとく？」
「ごめんなさい！」
佳奈がここまで怒る理由も察しがついている。彼女と美嘉は九校戦で総合優勝を三高に取られた経験がある。その原因の一つが一定水準の技術を持ったエンジニアの不足だった。
二人は同学年からそれぞれ一科生2名、二科生2名のエンジニアの育成をしようとしたところで周囲（主に一科生）が猛反発した。理由は『二科生にエンジニアなんてできるわけがない』という感情的理由だ。
そこから端を発した一科生の二科生苛めというトラブルに、1年ながら風紀委員長となった美嘉が全一科生の約6割（その殆どが2・3年の一科生）を鉄拳制裁する事態にまで発展した。
校長の呼び出しを受けた美嘉は、彼を前にして臆することなくハッキリとこう言った。
『――――生徒の自主性とかほざいて何もする気がないのに、問題が大きくなったら呼び出して注意ですか？　校長をやめた方が自分の身のためじゃないんですか？』
これに校長は逆上して、教頭や教職員達の反対を押し切ってまでも美嘉を退学させようとした。だが、それを聞きつけた佳奈が剛三を巻き込む形で校長室に乗り込んだ（当時詩鶴は3年で受験生だったので巻き込まなかった）。
二人曰く『平和的会話』によって退学の話は立ち消えとなった……沖縄絡みの一件が回りまわって美嘉を救ったということらしい。
ただ、その反動という形で三矢家に一高の『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』という異名が付いてしまった、というわけだ。
姉達からすれば一科生も二科生も同じ一高の生徒であり、九校戦や論文コンペに一丸として取り組まなければならない時に二科生を除

け者にする風潮が気に入らなかった。だから、佳奈と美嘉は周囲なんて気にせずに二科生と打ち解けていた。
　三矢の名がどうとかいう連中もいたが、『気に入らないのなら私に勝て』ということで学校の制度を利用して正式な試合を組み、その悉くを打ち倒した。
　佳奈の正式な試合数は３年間で６６５戦……これは一高における歴代記録１位となっている。なお、歴代２位は美嘉の６１４戦である。
「私と美嘉で綺麗に掃除したかと思えば、春にブランシュの襲撃受けるし……真由美、技術スタッフは？　……悠元、どうなの？」
「現状候補は７名だけ」
「悠君!?」
　割と怒っている佳奈の問いかけに答える気のない真由美を見て、質問の対象を弟に向けた。悠元は佳奈の様子を察しつつ、手短に答えたことに真由美が声を上げた。
「ねえ、真由美。初っ端から行き当たりばったりで、本気で三連覇する気あるの？……そういえば、深雪ちゃんの隣は噂のお兄さんかな？」
「何の噂かは分かりませんが……自分は司波達也と言います。貴女のことは悠元から色々聞いています。宜しくお願いします、佳奈さん」
「そっか。三矢佳奈です。よろしく達也君……ふむ、君はできそうだね」
　できそう、という言葉に達也は若干警戒するが、そこで佳奈は深雪に視線を向けた。その表情からしてエンジニア関連だということを読み取ることができた。
「深雪ちゃん、いつもＣＡＤ調整はどうしてるの？」
「私はお兄様にお願いしています……お兄様、九校戦でも調整していただけないでしょうか？　技術スタッフも足りないと聞いていますし……その、だめでしょうか？」
「深雪……」
　こうなると達也に断る術はなくなる。退路は無くなったと感じつつ悠元に視線を向けるが、深雪を説得する方法がない、と悠元は首を

横に振った。
断ることを無理強いもできず、結局妹の頼みを聞く羽目となった達也は心の中で溜息を吐いた。
そして、そんな空気のまま昼食の時間となった。三連覇目指して頑張ろうと意気込んだ矢先に、その出発点を担った先輩からダメ出しを食らう情けない有様。それを示すかのように、真由美の表情は暗い。
「どうしたの、真由美？　相変わらず表情が暗いよ？」
「誰のせいですか、誰の……うう、折角意気込んでいたのに……達也君を推薦できる形になったのはいいけど……」
「でも、姉さんの懸念は正解ですよ。自分が言うのも変ですけど、特に男子は大丈夫なんですか？」
現状決定しているメンバーで見れば、こないだの期末考査の総合成績上位者は主に女子に偏り過ぎている。
1年だけを見ても男子は悠元と燈也、それと森崎に五十嵐鷹輔（いがらしようすけ）。女子は深雪、雫、ほのか、英美に加えて里美（さとみ）スバル、滝川和実（たきがわかずみ）、春日菜々美（かすがなななみ）が期末考査の総合成績上位者となる。
上位者には十三束も入っているのだが、魔法特性上九校戦の出場は無理ということになり、代表メンバーから外されている。
「確かに、新人戦枠は悠元君と六塚君で5種目の内4種目を辛うじてカバーしている状況。会長と委員長の立場が男女逆になった形ですね」
「懸念も分かるが、君らのように飛び抜けた人間は稀少だからな……」
「人のことは言えないと思いますよ、委員長。現3年の誰かがトラブルなどによって崩れた時点で本戦も危うくなります。総合優勝を三高に奪われかねません」
「……そう言われると、確かに気を引き締めないといけないな」
ちなみに代表メンバーの正式決定後、悠元が出場する種目自体は変わらないが、アイス・ピラーズ・ブレイクは新人戦枠で出ることになった。克人本人が本戦枠で出ることを忘れていた（メンバー選抜だけでなく、家の忙しさやらで追われていた）ためだ。上泉家のことで苦慮していたから仕方ないと思う……自分のせいだということは自覚し

ているが。
あとは、三高で出てくるであろう「クリムゾン・プリンス」の魔法特性を考えるなら悠元に任せるほうがいいだろう、という結論に達したらしい。六塚家の得意とする「魔法による熱量制御」でも一条家の『爆裂』への対策は難しいと燈也が言っていた。
ここに達也が技術スタッフとして入る以上、1年男子勢に何かしらの軋轢がかかるのは必至だが、正直面倒を見る気になれない。
というか、彼の実績を見ずに二科生だからという理由だけで嫌うのなら、代表メンバーなんてやってほしくないのが本音だ。けれど、そうなったらまた生徒会に負担が掛かるので口を噤む選択をした。
「ところで、姉さんは単にその辺の説教だけしに来たわけじゃないでしょ？」
「流石悠元。実はゼミの先生にお願いをして、九校戦の外部補助スタッフとして一高に来たの。セキュリティも登録してあるよ」
「だから生徒会室のセキュリティーが先輩に反応しなかったのですか」
「その、外部補助スタッフとは？　今まで聞いたことがなかったのですが……」
「それはね――――」
佳奈が言うには、魔法大学と防衛大学校から今回の九校戦に合わせて外部補助スタッフが派遣される流れとなった。
内容的には、九校戦本番まで選手の練習サポートや技術スタッフの技術指導や補助、戦術スタッフへの戦術指導をメインに行う。有体に言えば雑用係と言って良いだろう。
「実を言うと、私も知らなかったんだよね。美嘉が『どうにかしてあの聞かん坊な後輩共を正式な手段で指導できる方法がないか』って言いながら大学の図書館を漁って出てきた制度だったし。真由美、猛省」
「はい……」
この制度――――正式名は『魔法科教育研修』。これは九校戦が公式行事となった際に制定されていたのだが、人手不足や魔法大学・防衛大学校のカリキュラムなどの関係で使われてこなかっただけらしい。

誰も使わずに埃を被っていたようなものだったので、それを申請した時は大学職員も大慌てで過去の資料を掘り返す羽目になっていたと佳奈は話す。
　彼女はこの制度を使って大学の学期末考査を前もって終わらせ、今回の補助は受講科目の加点対象となることも決まっている。大学で所属しているゼミの担当教官も理解を示してくれたことが大きかった。
「私だけじゃなくて詩鶴姉や美嘉も対象に入ってるし、美嘉の親友もそうだけど……後は修次かな」
「しゅ、シュウが!?　何も聞いていないのですが!?　というか、九校戦の時期はタイへの剣術指導とか言っていたはずですが……」
「それなら母さんの実家の人が代わりに引き受けてる。今日の朝に決まった話だから、知らなくても無理ないと思うよ？」
　千葉家の人間まで駆り出したとなれば、恐らくは『無頭龍』あたりを睨んでの動きだろう。その辺の連絡は来ていないが、闇カジノあたりまで既に掴んでいる可能性がある。
　上泉家の動きは不明だが、代わりにタイへの派遣となると師範クラスあたりになる。考えられるのは元継の妻の父親、自分にとって叔父にあたる人物……これ、最悪爺さんが『無頭龍』のアジトに単独で乗り込むまであるな。６本使ったら建物が文字通り〝消し飛ぶ〟ぞ。
「ちなみにですが、佳奈さん。過去九校戦に１年の二科生が技術スタッフになった例は？」
「あるよ。５年前の九校戦直前に一科生の技術スタッフが１人倒れちゃってね。当時は二科生だけど私の従妹で、卓越した技量のエンジニアがいたからその人が担当したことはある」
　その人物は後に元継の妻となる千里のことだ。
　当時は一科生の面々が反発したが、『ダラダラ文句言うなら、俺と詩鶴のＣＡＤ調整だけやらせる。それで文句はあるか？　あるんだったら俺が全部引き受けてやるぞ』と当時部活動会頭だった元継の一声で全員が黙ってしまった。
　このことで千里の元継に対する好感度も跳ね上がったのは言うま

でもない。
　ちなみに、入学当初二科生だったのは、当時の千里の魔法力がそんなに高くなかっただけ……つまりは悠元の影響を受けた人間の一人ともいえる。
「ああ、千里さんか」
「そそ。次の年には一科生に上がったけど、その意味で達也君は二度目かな」
「自分の場合だと実技は苦手なのですが……」
「技術スタッフに一番大事なのは、選手の魔法特性などを理解したうえでＣＡＤ調整すること。それができないと戦術や新型魔法も無駄になるからね。そこに魔法実技評価は無意味だから」
　技術スタッフに求められるのは、魔法理論を十全に理解し尚且つ選手の特性を把握できるだけのスキルが必要である、と佳奈は断じた。加えてＣＡＤ調整に自身の魔法発動は要らないため、魔法実技評価をバッサリと切り捨てるように言い放った。
「大丈夫、美嘉があーちゃんと啓（けい）だけはばっちり完全マニュアル調整できるまで叩き上げたって言ってたし。私もあーちゃんを鍛え上げたし。だから、あーちゃんは自信を持って、ね？」
　啓とは２年の五十里啓（いそりけい）のことである。当人の傾向としては純理論畑の人間なのだが、美嘉が彼の許婚である千代田花音（ちよだかのん）から説得に入った。
　曰く『自分の命を預けるに等しいＣＡＤエンジニアの知識を把握せずに魔法師をやるなんて行為、ヘルメットを着けずに工事現場へ入るようなもの』と肉体言語（サブミッション）によるお話しをした上で花音からも説得させ、啓のＣＡＤ調整スキルを叩き上げた。
　あずさの場合は、美嘉に加えて佳奈も彼女のスキルアップのために尽力。その意味で三矢家の『与える家』らしい一面が出たといえよう。
「あ、はい！　でも、後輩の前であーちゃんの連呼はやめてください！」
「ダメ？」
「う……諦めます」

あずさは渾名の連呼をやめてほしかったが、悲しげな表情を見せた佳奈の問いかけを聞き、先輩兼恩人を悲しませたくないと諦めた。『諦めんなよ!』と某炎の妖精は言っていたが、それは時と場合によりけりであると強く感じた。

隣の芝は青い

昼食後、各々の仕事を片付けたり暇を潰したりしていた。悠元も最初は生徒会の仕事を片付けようかと思ったのだが、鈴音と深雪に止められた（悠元に任せきりにすると、いざという時に困る）ので已む無く引き下がった。なので、予め持ち込んでいた折り畳み型端末を起動させて、起動式の書き起こしを始める。

すると、テーブルの向かい側に座っていたあずさが声を上げた。その対象は制服の上着を脱いでＣＡＤの感触を確かめていた達也に対してのものだ。

「今日はシルバー・ホーンを持ってきてるんですね」

「ええ、ホルスターを新調したので馴染ませようかと思いまして」

「シルバー・ホーンだって!?　見せてもらってもいいかな!?」

すると、ここに一人の人物が達也に声をかけてきた。他でもない佳奈である。今までにない食いつきっぷりに流石の達也も驚くような素振りを見せつつ、トライデントを差した状態のホルスターを佳奈に手渡した。

「え、ええ……どうぞ」

「あー、いいね。色んなＣＡＤを見てるけど、シルバーシリーズには敵わないかな。高い技術力に溺れない挑戦的な姿勢に、ユーザビリティへの配慮も一級品。私の特性だと特化型は使えないし…どうよ、あーちゃん？」

「佳奈先輩の言う通りです。マクシミリアンのシューティングモデルやローゼンのＦクラス、同じＦＬＴのサジタリアスシリーズも凄いですけど、シルバーシリーズはそれすら上回るほどの幅広いカスタマイズ能力がウリですから！」

ＣＡＤ談義になると火がついて止まらない二人に達也も若干引き気味だった。これはいけない、と佳奈が思い返しつつ達也にホルスターを返す。それを受け取って身に着け、達也は制服の上着を着た。

「にしても、シルバー・ホーンって高校生からしたら結構高価だよ？　達也君はどうやって手に入れたの？」

「自分の場合は、知り合いの伝手でシルバー・ホーンのテスターをしているんです。なので、カスタマイズ面も結構優遇されています。言っておきますけど、自分も製作者であるトーラス・シルバーと面識はありません」
確かに間違ったことは何一つ言っていない。悠元の持つ2丁のCADをベースにシルバー・ホーンが設計され、そのフルカスタマイズバージョン「トライデント」を達也が使用している。そして、トーラス・シルバーは『チーム』であって個人ではない。その意味で世間的に言われる一個人のトーラス・シルバーとは面識などあるはずがない。
すると、ここであずさが思い出したように声を上げた。
「そういえば、三矢君も司波君のシルバー・ホーンと似たような銃型CADを持ってましたよね？」
「え？　私もそれは初耳。悠元、本当なの？」
あー、そういえば十文字会頭との模擬戦で「ワルキューレ」使ったから、あーちゃん先輩はそれを見てたもんな……。そんなことを思い出しつつ、佳奈の『眼』で見られる前に説明する。
「本当だよ。でも分解は絶対にさせられない。何せ、フォース・シルバーのテスターモデルで世界に2丁しかないからな……見るだけならいいけど」
「フォース・シルバーってシルバーシリーズのハイエンドモデルで、トーラス・シルバーが認めた人しか持っていないプレミアものですか!?　それのテスターモデル!?」
「うん、ホントは分解したいけど、悠元を怒らせたくないからそれは守るよ」
フォース・シルバーはハイエンドモデル故に国内向けにしか販売していない。ハードウェア技術も一部は軍事機密化しているため、公安や内情、それと国防軍のほんの一部にしか売り出していない。なお、達也の「トライデント」はオーバーホールによって中身はフォース・シルバーそのものと化している。
分解しようとしたら『アレ』使うまで覚悟はしてる。そう思いつつ

も懐から「ワルキューレ」と「オーディン」を取り出した。
白銀と漆黒の銃型ＣＡＤで、いくつかのブラックボックスを抱えた〝自分専用〟のデバイス。テスターモデルとは言ったが、実際には設計の大本でもあるそれを佳奈とあずさは手に取った。
「これがフォース・シルバー……まるで夢みたいです」
「凄い。世界最高峰の技術が結晶になったかのようなデバイス……ありがとう悠元。でも、どうして悠元がそのテスターモデルを持ってるの？」
その手触りと芸術性に暫くうっとりしていたが、落ち着いたところで二人から手渡しで返してもらい、懐にしまったところで佳奈が悠元に問いかけた。
「父さんが仕事の関係でＦＬＴの株主になったのは知ってるよね？その繋がりでフォース・シルバーのテスターをしないかって話が舞い込んだんだ。自分としても高性能のＣＡＤは使ってみたかったから、快く引き受けただけだよ。で、今もそのテスターは続けてるってわけ」
「むー……父さんってば、私がデバイスに興味があるって知ってるのに、悠元だけに話を持っていくだなんて」
これに関しても嘘は言っていない。佳奈に話さなかったのは、使う前にテスト用のデバイスを物理的に分解しかねなかったからだ。それだけ彼女の探求心は筋金入りであるという意味も含まれるが。
「姉さんに話を持って行ったら、テストする前にデバイスを分解しかねなかったからでしょう。そもそも、姉さんのＣＡＤだってＦＬＴ社製の特注品だし」
「ふえっ!?　そうなんですか!?」
「そうだね。調整や簡単な修理は自分でしてるけど、本体そのものは父さん経由だから…プレゼントしてくれたのは悠元だけどね」
実際のところは、今度の九校戦で使うシルバー・ブロッサムシリーズのベースモデルが佳奈と美嘉の使っているＣＡＤであり、自分や深雪の使っている携帯端末型ＣＡＤも、大本は佳奈の携帯端末型ＣＡＤをベースに組み上げたものである。魔法特性自体は異なるが、桁外れ

の想子保有量に耐えうるだけの性能を発揮している。
「それに、姉さんもある意味シルバーシリーズのテスターらしい。知り合いから今度出るシルバー・ブロッサムシリーズの大本は佳奈姉さんの持ってるＣＡＤって話は聞いた」
「……驚いたね。そこまでのコネを持ってるなんて……まあ、あんなライフル型ブースターを自力で作っちゃうぐらいだし、不思議じゃないかな」
　ライフル型ブースターと聞いて達也が微かに反応した。それを使った身としては心当たりがあって当然だろう。深雪もそれに反応する形で彼女が操作するワークステーションのエラー音が鳴った。これには達也が『偶々でしょう』と言ったことでそれ以上の追及はなかったが。
　すると、ここであずさが達也に尋ねてきた。
「ところで、お二人はトーラス・シルバーってどんな人だと思います？」
「……気になりますか？」
「そりゃ気になりますよ！　だって、あのトーラス・シルバーですよ！　ＦＬＴ専属で、一切のプロフィールが不明の謎の天才魔工技師ですよ？　ソフトウェアとハードウェアの両面で特化型ＣＡＤの技術を一気に１０年も押し上げた功績なんて前代未聞すぎます！」
「そうだね。私も調べてみたけど、綺麗に出てこなかったし」
　そりゃ出てくるわけがない。達也にもセキュリティ関連のことは話していて、彼のトーラス・シルバー関連の連絡は国防軍が使っているものより更に倍のセキュリティシステムを採用している。
　どれぐらいのレベルかというと……エシェロンⅢもといフリズスキャルヴでギリギリ破れるか否かぐらいのレベル。現状において、これを超えようとしたら『八咫鏡』か『精霊の鏡』しかない。
　ＵＳＮＡ・新ソ連・大亜連合・旧ＥＵのスーパーコンピューターを全部接続すれば超えられるだろうが、そこまでやろうとした時点で対策は打つつもりだ。
「…認識不足だったな。そう言われると天才というより埒外のレベル

だな」
「悠元はフォース・シルバーのテスターだし、もしかして会ったことがあるの？」
「いや、その辺はトーラス・シルバーも徹底してるらしくて、姿を見たことはないよ。さっき見せたデバイスもＦＬＴの職員経由だったし。姿を見せないってことは、案外年が若いかもしれない。未成年……それこそ十代の人間かもしれないね」
　ですから深雪さん、動揺してワークステーションのエラー音を出さないでください。まるで自分の発言に反応してるみたいじゃないですか。すると、佳奈が摩利の方を向いた。
「摩利、風紀委員会本部を借りてもいいかな？」
「え、あ、はい。それは構いませんが……」
「ちょっと話をするだけだよ。てなわけで、悠元。ちょっと話をしようか」
　あーもう、こうなるんじゃないかって察しがついてたわ。姉さん、マジで勘付いてるわ。達也に関しては自分が反応したせいでこうなったことに済まない、という視線を送っていた。
　事情が呑み込めてない周囲の人間を置き去りにしつつ、風紀委員会本部に入って扉が閉まったところで佳奈に問いかけられた。無論、遮音魔法は展開済みだ。
「悠元、正直に聞くよ……悠元がトーラス・シルバーなの？」
「……一部は正解。世間一般的に言われるトーラス・シルバーが『個人名じゃない』ことはうちの家だと父さんしか知らない。元治兄さんにもこのことは話していないほど徹底してるから」
「ふむ……なら、達也君もそういうことかな？　未成年なら情報非公開も頷けるし」
　佳奈の鋭さは散々経験している。少ない手掛かりと周囲の反応で全体の流れを見通してしまう。何せ、本人が遊びでやっているネット囲碁でトッププロ相手に勝利している……どこの囲碁漫画だよってツッコミを入れたくなったのはお察しである。
「ＣＡＤ製作はＦＬＴの職員だけど、それ以外は佳奈姉さんの想像通

りだよ。でも、秘密にしてほしい。これは名誉とかのレベルではなく〝諸外国への脅威〟になりかねないから」
「うん、それは私も分かるかな。じゃあ、今後汎用型ＣＡＤのテスト機があったら、それのテスターにしてほしいな」
「それだったら……これを渡しとく」
渡したのはシルバー・ブロッサムシリーズの後に出す予定の汎用型ＣＡＤシリーズ。それの先行テスト機であり、採算度外視のプロトタイプモデル。佳奈なら十全に扱えるだろうという期待を持ってのことだ。テスト結果に関しては父である元経由にすればいいと言い含めておいたので、大丈夫だと思いたい。だからと言って、そのお礼と言わんばかりに抱きしめないでください……柔らかいのは否定しないけどさ。
風紀委員会本部を出たところで予鈴のチャイムが鳴った。佳奈は放課後の代表メンバー選考会議にも出るらしく、生徒会室で時間を潰すそうなので、それを聞いた上で悠元は教室に戻った。
……後で達也から謝られたが、ああ見えて口の堅い人間なので大丈夫だと思いたい。大事なことなので二度言っておくことにした。
深雪から背中を抓られた。曰く『何だかそうしないといけない気がして』とのこと。解せぬ。
俺と姉さんは血が繋がってるの……ああ、そういやこの前詩奈から『お兄様の着る服、用意しておきますから！』とアイス・ピラーズ・ブレイク関連のメールが届いていた。何とか常識な範囲内となるよう父経由で母に伝えた……大丈夫だよね？　マジで。

会議は踊る（進まないとは言っていない）

四葉本家の当主の私室。そこに座るのは当代における世界最強の魔法師の一人と言われ、「極東の魔王」や「夜の女王」などといった異名を持つ女性――四葉家当主である四葉真夜。

実年齢は４６歳であるにも拘らず、まるで３０歳前後を思わせるような風貌の持ち主。同年代の人間が並び立っても、そうは見えないだろう。その彼女は……不機嫌だった。

「むすー……」

当主に有るまじきそんな気の抜けた声を出している真夜に、少し離れたところに控える四葉の筆頭執事である葉山はほんの少しだけ笑みを零していた。

今まで女性らしいことなど何一つしてこなかった真夜が３年前の沖縄防衛戦を切っ掛けに変わったのだ。自分にとっても娘みたいな真夜の〝成長〟に彼女の父親も空の上で喜んでいることだろう。

一つ懸念があるとすれば、そんな風に変えてしまった存在が彼女の姉の子どもと同い年であることぐらいかもしれない。すると、そんな風に考えていた葉山に真夜が問いかけてきた。

「葉山さん」

「如何しましたか、奥様？」

「悠元君に会いたい」

「……深夜様が臍を曲げられるかと」

明らかな直球の要求に葉山はせめてもの苦言を呈した。

彼は三矢家の人間であり、深夜の娘である深雪が気に入っている（本人曰く敬愛している）人物。加えて達也と二人の母である深夜の信頼も得ているのだ。それを一個人の事情で振り回すのは如何なものか、とまでは言わなかったが葉山はその辺も含めつつ述べた。

無論、これを理解できない真夜ではない。

「いくら私でも姉さんを敵に回したくなんてないわ。でも、あの子ったら私が『女性』であることを自覚させたのよ？　姉さんが若返ってたのは彼の魔法の影響なんでしょうけど……あれは、深雪さんの母親

としてじゃなく『女』の目だったわ。双子の勘ってやつだけど」
その切っ掛けは沖縄防衛戦の後。６年ぶりに会った真夜は深夜が自分より若い姿――――２０代半ばぐらいになっていたことに内心ショックを受けていた。しかも、悠元のことを話す彼女の目は深雪の母親というだけではなく、あわよくばお零れに与ろうとする『女性』の視線だった。
その後、悠元と実際に出会って興味本位でバレンタインを贈った。お返しで送られてきた彼の手作りの菓子で、真夜が今まで封じていた女性としての感情が一気に噴き出したのだ。
真夜は『姉より若い姿になってやる』という私的な理由で、最近はしていなかった魔法の訓練を再開した。それを見た青木が泡を吹いて倒れ、分家の当主達は本家当主の精力ぶりにどう反応したものか困惑していた。それを思い出した葉山は思わず笑みを浮かべてしまった。
「別に結婚とかは言わないけど、悠元君みたいな子は欲しいのよ……解ってはいるのよ。私も四葉の当主だから、その責務ぐらいは」
「成程。それで奥様は彼に『アレ』をお教えしたのですな？」
「そうね。使えるだなんて思ってはいなかったけど、まさか〝あんな使い方〟をするだなんて想定外だったわ……これで、〝３人目〟ということだけど。尤も、〝２人目〟は現状使えないんだけどね」
別に双子の姉を出し抜く意味は含んでいないが、真夜はある魔法を悠元に教えた。その魔法を応用して〝精神干渉系魔法〟を放ったことは真夜と葉山もその場に居合わせたからよく覚えていた。
彼の使える魔法はそれこそ文字通り〝底知れない〟ものだったと実感した。
「そういえば、奥様。先程魔法協会より九校戦の案内状が届きましたが……如何いたします？」
「参加いたしましょう。あの二人には会えないけど、悠元君なら会っても問題はないでしょうし、風間少佐にもご挨拶しておきましょう。恐らく閣下もいらっしゃるでしょうから……護衛の差配はお任せします」

「畏まりました」
『触れ得ざる者』と『触れてはならない者達』……その両者が再び邂逅したときに何が起きるか……それは、誰にも分からなかった。
◇　◇　◇
その日の放課後。部活連本部の会議室で開かれた九校戦準備会合は、開始前からピリピリした空気に包まれていた。
九校戦に出場するメンバーは選ばれるだけで成績評価の加点や長期休暇の課題免除が与えられ、優秀な成績を挙げれば評価に加点されるのは言うまでもない。
学校側がそれだけの配慮をするという意味合いにおいても、九校戦が大きなウェイトを占めているのは紛れもない事実である。なので、メンバーの最終調整という意味合いにおいて、この準備会合が無事に終わると達也には到底思えなかった。
それは早い段階で来ていた悠元達にも理解はしていた。
「さて、会議が茶番となるか踊り場となるか見ものだな」
「それ、どっちもある意味終わらない、って言ってるようなものじゃないですか……」
悠元の言葉に反応したのはほのかだった。
彼からすれば、正直文句がある程度紛糾するのは目に見えていた。だが、これでも姉たちが在籍していた時に比べたら遥かにマシなレベルだろうと思う。どう足掻こうが文句を言う奴がいなくなるとも思えない。そんな低レベルの押し問答を繰り広げるぐらいなら一度ぶち壊したほうがマシとも思っている。
「どう取り繕っても文句を言いたい人はいる、ってことでしょ？」
「正解だよ、雫。その意味で彼女が留守番だったのは不幸中の幸いだな」
実を言うと、深雪は最初この会議に出席する予定だったのだが、それを悠元が説得して生徒会室の留守番を任せた。ある意味深雪の推薦の代理人を悠元が担う形となったわけだ。予想できる展開からして、深雪のストレスを溜める様な展開など百害あって一利なしである。

「次の日によくて全員が風邪を引くか霜焼け、悪ければ冬眠ですね」
「……ほのか。兄として、俺はどう言えばいい？」
「えっと……すみません達也さん。私には、何とも……」
燈也の言葉がとても冗談では済まないということなど分かっていたため、兄としてどう取り繕うべきか悩む達也の問いかけに、ほのかは苦笑しか出てこなかったのであった。
会議室の空いていた席は次々と埋まり、全員が着席したのを見計らって真由美が議長席に座ったうえで声を発した。
「――――それでは、これより九校戦代表メンバー選定会議を行います」
会議の参加者は代表に内定している選手・技術スタッフ・戦術スタッフのメンバー、各種競技部部長、生徒会役員（深雪は生徒会室の留守番）、部活連の幹部……ここまでが通例だった。
だが、今年は外部補助スタッフが入るため、2名の人物が代表として会議に参加している。
一人は国立魔法大学2年、三矢佳奈（みつやかな）。今年三連覇が掛かっている一高の九校戦総合優勝奪還を果たした当時の生徒会長。基本コードのひとつである『加重系統マイナスコード』を発見し、『カーディナル・カナ』（一部では『カナ・カナ』とも言われている）の異名を持つまでになった。
もう一人は防衛大学校特殊戦技研究科2年、千葉修次（ちばなおつぐ）。当時の部活連会頭を務めあげていた人物であり、現在は予備役ながら千葉家の剣士としての実績も上げている。
その二人の紹介の後、メンバー選定会議は始まった。
達也の席は悠元達と同じく代表内定メンバーの座るオブザーバー席。当然、そんな異分子を目敏く見つける連中は一定数おり、会議の冒頭から1年の二科生がいることを疑問視する声が上がるのは当然だった。
しかし、達也は既に風紀委員として二科生ながら実績を上げていることは確かであり、好意的な意見があるのも事実であった。それでも反対意見が半数以上を占めるのだが、それは理論立てての反対意見ではなく『二科生』という感情的、消極的な意見というもので、案の定

会議は迷走状態へと突入していた。
「達也さんの技量も知らないくせによく言うよ……」
「うん……私も達也さんに調整してほしいかな」
雫とほのかが周りに聞こえづらい音量でそう呟いたのにも理由がある。
二人は以前部活動で調子がおかしくなった部活用ＣＡＤを修理しようと実験棟に足を運んだ際、ジャンク扱いとなったＣＡＤの整理に駆り出されていた達也と悠元の二人に出くわした。
不調気味だった雫の部活用ＣＡＤを悠元が修理し、ソフトウェアの調整を達也が担当した。そして、ついでにほのかの部活用ＣＡＤも調整した。結果として見違えるような使いやすさとなり、二人はその経験から達也に担当してほしいと思った。
尤も、ほのかの場合は単純にエンジニアとしての技量で見たわけではないのだが。
「おい、三矢。お前はどう思うんだよ？　二科生が技術スタッフなんて有り得ないだろ」
すると、同じく代表に選ばれていた1年の男子メンバーが悠元に話しかけてきた。面識はないので、多分他のクラスの男子程度の認識しかないが。というか、その彼の表情からして達也を非難したいだけというのが読み取れたことに内心腹立たしかったが、会議の邪魔にならないようなボリュームで問い掛けに対する答えを返す。
「二科生が技術スタッフを務めた前例はあるから、別におかしくはないと思うぞ。生徒会の推薦だってことは会議の発言で言ってただろ？」
「けど、九校戦に二科生如きが」
「少し黙ってろ。これ以上押し問答続けるんなら、先輩方の会議の邪魔になる」
「っ…!?」
殺気込の視線で睨み付けつつ、その男子生徒を黙らせた。
二科生如き？　だったら自分でＣＡＤ調整ぐらいできるんだよな？　と問いただしてやりたいが、今は会議中だ。変な言い合いになっ

て注意される前に会話をぶった切った方がマシと判断してその対応をした。男子生徒も何かを言いたそうな顔をしたが、諦めて前を向いた。

発言者の押し問答を聞いている佳奈と修次の二人の機嫌は、とても他の発言者が触れられるような状態ではなかった。つまりは最悪の部類だ。

佳奈は在籍中に二科生と交流を持っていたことから、一科生に偏重する様な発言の数々に対して言葉を発しなかったが、普段あまり見せることのない無表情ともいえる様子からして機嫌が悪かった。

修次の場合は異母妹と言えども同じ千葉家の妹が1年の二科生に在籍している。その意味で二科生云々という感情的、消極的な発言は心に来るものがあっただろう。幸い表情には出さなかったが、沈黙を貫いていた。

その二人の様子に耐えかねた形とはなったが、ここまで黙っていた克人がようやく口を開いた。然程大きな声ではなかったが、会議に出席する面々の無秩序な発言を止めさせるには十分ともいえた。

「――要するにだ。司波の技能がどれほどのものか分からない、ということで問題が紛糾している。なら、彼の技能を実際に確かめてみればいい」

「確かにその通りだが、具体的にはどうする？」

「実際にＣＡＤの調整をやらせてみればいい。何だったら俺が実験台になるが」

克人が提示したのは単純な案だった。だが、それには当然リスクが伴う案でもあり、誰もが言い出さなかったことだ。摩利の問いかけに対して克人は自らその相手になることを志願した。

ＣＡＤは何の調整もなしにすんなり使えるようなものではない。それはアスリートやアーティストなどが自分の適性や癖に合った道具を使用するように、魔法師の使用するＣＡＤも個々に合った調整が必須となる。

魔法師はＣＡＤに格納された起動式を読み取って自身の魔法演算領域に取り込む――平たく言えば、ＣＡＤと自分の精神を直結させ

るようなもの。特に近年のＣＡＤは、起動式の読込を高速かつスムーズに行うためチューニング機能を搭載しており、それだけ使用者への負担が大きくなる。

無論、ＣＡＤの調整が本人と合っていなければ、それによる弊害として精神ダメージを負うことになる。そのダメージはよくて魔法効率の低下、悪ければ幻覚症状などを負うほどのものであり、最新の高性能なＣＡＤほど精確緻密（せいみつ）な調整を要求される。

その意味で実力のわからない魔工技師にＣＡＤの調整を任せるのは大きなリスクを背負うことであり、克人自らの提案は勇気のあるものと言えた。

当然、それに対して『危険です！』やら『下手なチューニングをされたら、怪我どころでは済まないです！』と発言する者もいた。だが、ここでその意見を受け入れてはまた会議が逆戻りである。

「では、推薦したのは私ですから、その役目は私が」

次にその相手を申し出たのは真由美。けど、ここでそれは生徒会が達也を信用しきれていないと言っているようなもの。それに、生徒会には深雪が在籍している以上〝身内贔屓〟と受け取る輩が出かねないことを理解しているのだろうか。だが、そこに一人の男子生徒――剣術部で２年代表メンバーの桐原がその場で立ち上がり、声を発した。

「いえ、その役目……俺にやらせてください」

桐原のその志願に、４月でのあの一件から感じた〝漢気〟は紛れもなく本物である、と達也は感じていた。なお、そこら辺の話は悠元から詳細を聞いており、それが役立ったわけだが桐原本人のためにも口に出すことはしなかった。

エンジニアテスト

達也の技能テストは別の会議室にて行われることとなった。

代表メンバーはエンジニアという観点から内定している技術スタッフだけ（一部の代表メンバーもオブザーバーで残っている）が残る形となり、生徒会、各部部長、部活連の幹部と外部補助スタッフが見守る形となる。無論、悠元は生徒会という立場で1年ながらその場にいた。

学校が職員・生徒に開放しているＣＡＤ調整機は学校の実験棟に置かれているのだが、今回のテストでは九校戦で実際に使用する車載型の調整機を使用する。実際にインストールする競技用デバイスも九校戦の仕様に即したものを使用する。

それらを手際よく揃えられている時点で道具面の準備はしっかり進んでいる反面、人材面での滞りが目に見える形となったことは事実である。

達也が調整機に座り、桐原は竹刀を床に突き立てるような感じで手を添えつつ横に立っている。調整機横のＣＡＤ読取部には既に桐原が普段使用しているデバイスと、それと形状が同じ競技用デバイスがセットされている。その二人の背後を他の面々が見ている形だ。その中で1年は悠元だけなので、生徒会の面々というかあずさの隣に立っていた。

まずは調整機の立ち上げ。この時点から意地の悪い目が注がれているわけだが、達也からすればこれよりも遥かに高度なＣＡＤ調整機を使いこなしている立場なので、その程度で躓くこともなく速やかに起動し始めていく。後は完全に立ち上がるのを待つ時間で達也は真由美に提示されたテストの条件を確認した。

「――――課題は、桐原先輩のＣＡＤの設定を競技用ＣＡＤにコピーし、即時使用可能な状態にすること。但し、起動式そのものには手を入れない……これで間違いないですか？」

「ええ、それでお願い……どうしたの？」

真由美は達也の仕草に疑問を感じた。彼は首を縦にではなく横に

振ったからだ。
無論、達也がその課題に拒否を示したわけではないことは真由美も理解している。寧ろ『なんて課題を提示するのですか』とでも言いたそうな返しに疑問を持った。
無理もないというか、真由美も自分でＣＡＤを調整できるのにＣＡＤの基礎知識自体を理解していない。そのことに悠元は思わず頭を抱えたくなった。
そんな中、達也は立ち上がる調整機を見つめながら真由美のその疑問に答えるように呟いた。
「スペックの異なるＣＡＤの設定をコピーするのは、あまりお勧めできないんですが……仕方ありません。安全第一でいきましょう」
「？」
その言葉に真由美だけでなく、それ以外にも首を傾げる者が多いことに思わず溜息が出そうになった。
現代魔法において必須ツールともいえるＣＡＤがどういったものかを把握せずに使っているのか、と言わずにはいられない。例えて言うなれば「野球選手が自分の使うグローブ、バット、スパイクなどの知識を知らずにただ使っているだけ」に等しい。
せめてもの救いはエンジニアメンバーの反応からして彼らが理解しているということだ。
というか生徒会長、アンタ十師族だろうに。トップに立つということは魔法の知識を十全に学べるという恩恵を受けているのに、現代魔法の要であるＣＡＤの知識を知らないってどんだけズボラなんだと……いや、姉の忠告を負けた腹いせで破る様な人だから、ＣＡＤの常識に気付いてないんだろうな。
佳奈はエンジニアと同じ反応をしている……いや、むしろ確信している。達也がこの「自動調整なら破綻前提のＣＡＤ調整オペレーション」を成功させると。
無論、自分も達也がそんなへまを打つとは到底思えない。何せ、深雪の推薦を受けている以上、手を抜くなど言語道断だし、何よりも達也自身感情に乏しくても枯れてはいないのだから。

達也はそれ以上の無駄口を叩かず、作業に取り掛かった。
ＣＡＤ読取部から桐原が普段使っているＣＡＤの原データを抜き出す。その抜き出し自体は半自動化されているので作業の手際に影響するようなものではない。ただ、設定データをそのまま競技用デバイスにコピーせず、調整機に作業領域を作成してそこに保存したことに疑問を感じる表情を浮かべた者が数名いた。
次に使用者である桐原の想子波特性の計測。桐原がヘッドセットを装着し、調整機裏にある想子波計測用パネルに両手を置く。
これも通常の手順であり、自動最適化（オートアジャスター）機能付きの調整機であれば、ＣＡＤをセットして想子波を計測するだけで自動的に調整が完了する。
だが、自動調整自体はＣＡＤのストレージ容量をある程度使って調整を最適化するため、完璧な調整というには不十分。それに頼らずＣＡＤのオペレーティング・システムにマニュアルで直接アクセスして、どれだけ精密な調整を施せるかがエンジニアの腕の見せ所である。
『ありがとうございます。外していただいて結構ですよ』
想子波特性の計測が終わったことをヘッドセットの画面に出てきた達也の言葉を聞くと、桐原はヘッドセットを外して楽な姿勢となった。
普通の手順なら、後は設定を行うＣＡＤの自動調整結果から微調整を加えるだけで作業は完了する。だが、この時点で競技用デバイスに原データのコピーは行われておらず、調整機の作業領域に残ったままだ。
作業の手順ミスか、と疑問を浮かべる者は少なからずいた。だが、達也の表情は途方に暮れているどころか真剣な表情を崩していない。
彼は今この時も〝作業中〟なのだ。それを気付いているものはこの中で言えば……作業している本人以外に〝五人〟だけだと断言できる。無論、その一人は悠元に他ならない。
すると、好奇心を抑えられなくなったのか、真由美が頭を動かして達也の見ている調整機のモニターの光景を見た。

「えっ？」
とても女子には似つかわしくないと言えた、間の抜けた声を上げてしまった。
それを聞いた摩利も達也の操作している調整機のモニターに視線を向けると、漏れかけた声をすんでのところで抑えた。無論、この程度の雑音など気にすることなく達也は画面を見続けている。
本来ならグラフ化されている測定結果が表示されるのだが、調整機の画面に映るのは最初に作成した作業領域とは別のウィンドウで表示された無数の文字の羅列。それが現在進行形で自動で高速スクロールしている。
このデータと達也のやっている作業の意味を理解できているのは、少なくとも〝完全なマニュアル調整〟ができる人間でないと分からないだろう。何せ、真由美や摩利の表情からしてそれは読み取れなかった。
すると、文字列の動きが止まったところで達也はキーボードを叩きはじめた。
二つの開いたままのウィンドウに加えていくつものウィンドウが開いたり閉じたりしている。だが、聞こえてくるのは『何やってるんだ、アイツ』とか『キーボードオンリーなんて、今時古すぎる』などの台詞が飛び交う……完全に的外れの内容だ。
確かに、アシスト系が充実した今では珍しいキーボード操作主体の動きに目を奪われても仕方ないだろうが、それ以上に達也の行っているオペレーションがどれほど高度なものかを理解できている人間はどれぐらいいるのだろうか。
そんな中、達也の作業を見たエンジニアメンバーの一人である2年の五十里啓は感心するように呟いた。それを聞いた隣にいる2年の千代田花音がそれを理解していながらも問いかけた。
「へえ、凄いね。1年に完全マニュアル調整できる人間がいるなんて」
「あれって、啓もやってくれてるよね？」
「僕のする調整はあそこまで手際が良くないよ。一つ言えるのは、この場において彼のやっている作業の意味を理解できる人間は……数

えた方が早いくらいだろうね」
　達也のやっているやり方は、桐原のデバイスから抜き出した設定データを全手動で競技用デバイスのオペレーティング・システムに最適化させたＣＡＤの設定データに書き換える手法。この方法なら安全マージンを十分に確保した上で、想子波特性の測定結果をデバイスのキャパシティが許す限り調整に反映させることが可能となる。
　これだけの高度なオペレーションをこなせる人間が、この学校にいる生徒の中で言うなら〝上から数えた方が早い〟ということを少なくともエンジニアメンバーの一部に加えて、悠元と外部補助スタッフ代表の二人はしっかりと認識していた。
「――――終了しました」
　そして、ＣＡＤ調整は難なく終わった。
　元々起動式を弄らない前提だったため、それほど時間が掛からないものだった。
　早速調整の終えた競技用デバイスを桐原が身に着け、ＣＡＤを操作する。彼が起動するのは得意としている振動系近接魔法『高周波ブレード』を竹刀に纏わせる。このために桐原はそれを会議室に持ち込んでいたのだ。
　些かの引っ掛かりもなくスムーズに竹刀の周囲を魔法式が展開し、その展開状態を確認しながら桐原が軽く振る。彼が魔法の展開を終えて『試しが終わった』と判断して克人が問いかけた。
「桐原、感触はどうだ？」
「問題ありませんね。普段使っているものと、全く違和感がありません」
　克人の問いかけに桐原は即答した。
　それが彼の個人的な友誼による過大評価でないことは周囲の人間が理解している。４月の新入生勧誘週間の一件は殆どの人間が知っているため、達也と桐原の関係もある程度は聞き及んでいることだろう……殆どの人間は中途半端にしか知らない事実だが。それを抜きにしても、ＣＡＤを順調に作動させたことは誰の目から見ても明らかだ。

尤も、魔法をスムーズに発動できたという結果だけしか分からない人間もいたりするのだが。
「一応の技術はあるようですけど、当校の代表を務めるだけのレベルとは思えません」
「仕上がり時間も平凡だ。あまりいい手際とは言えない」
「やり方が変則的すぎる。それなりに意味はあるのかもしれませんが……」
そう言い出したのは2年の面々だった。彼らの思っていたことは生徒会の、それも生徒会長直々の推薦だったからこそハイレベルな調整技術を期待していたのに、出てきたのは平凡な結果だったことへの否定的な評価。
……馬鹿か、こいつら？　F1レースで言うところのメカニックやスポーツで言うところのトレーナーやマネージャー、コーチに『派手な動き』を期待する時点で彼らはエンジニアを一種のパフォーマーとでも思っているのだろうか？　そうだとしたら彼らは何も理解していない。
エンジニアは選手のパフォーマンスを最大限に引き出すための裏方であり、支えでもある。先代会長の美嘉が昨年の九校戦で選手とエンジニアを兼任していたことから、それを見ていた現2年の面々は盛大な勘違いを起こしているのだろう。非常に馬鹿馬鹿しいと言わざるを得ない。
そんなことは抜きにしても、という感じであずさが声を上げた。
「私は、司波君の代表メンバー入りを支持します！　想子波特性の原データを直接読み取って、自動最適化（オートアジャスター）を使わずに完全マニュアル調整を行いました。そして、デバイスのキャパの許す限り想子波特性の測定結果を反映させる技能は確かなものです！」
「……それは確かに高度な技術かもしれないけど、出来上がりが平凡なものだったら意味がないんじゃあ……」
「見かけは平凡でも、中身は違います！　あれだけ安全マージンを確保したうえで効率を低下させないことはすごいんです！」
「落ち着いて、中条さん。不必要に大きな安全マージンを取るより、そ

の分を効率アップに向けるほうが大事だと思うけれど？」
「……それは、その……きっと、いきなりだったから……」
だが、元々弁が立つほどの技量ではなかったので、同級生からの言葉に勢いが尻すぼみしてしまう。このまま立ち往生するかと思われたとき、今まで黙っていた佳奈が滅多に開くことのない瞼を少し開きつつ、真由美に問いかけた。
「……真由美、発言してもいい？」
「え？……あ、はい」
「ありがと……じゃあ早速、真由美に質問。何で達也君に『自動調整だと破綻前提のオペレーション』をやらせたの？　貴女生徒会長でしょう？　最悪デモンストレーションをした桐原君が大きなダメージを負ってたわよ？　そんなことになったら責任取れたの？」
その問い掛けに真由美は、ここに至って自分の提示した課題が〝推奨されない危険な条件〟だったのかを理解した。何も言えず黙ることしかできない彼女の様子に佳奈は深い溜息を吐いた。
「こういう場合は本来起動式も弄る前提でないと無理な話よ。大体、克人も摩利も無責任なことは言うもんじゃない。寧ろ真由美を止めるべきだった筈よ。ＣＡＤは自分の命を預けるものだって理解できてるでしょ？　もしかして、それすらも理解してない？　……そんなんだったら、三連覇する前に自分たちの魔法師生命が終わるわよ？何も言わなかったけど、修次やうちの弟だってそれぐらいは理解してるわよ？」
そもそも、競技用ＣＡＤに普段使っているＣＡＤのデータを直接コピーはリスクが高い。設定データはオペレーティング・システムだけでなくデバイスに組み込まれたプロセッサなどの各種機構に合わせて組み込まれている。当然、コピー元とコピー先の性能差が大きければ大きいほど、その調整はシビアなものとなる。
コピー元よりもコピー先の性能が高い場合は、少し調整すればそんなに問題はない。だが、今回のようなコピー元の性能が高い場合だとＣＡＤ設定の原データをそのまま引っこ抜いてコピーしても使えるわけがない。極端な言い方をすれば「最新版のスマートフォンの設定

データを引っこ抜いて、折り畳み型携帯電話の設定データに上書きするようなもの」なのだ。
最悪、設定の噛み合わせによる起動障害が起きて使用者に多大な精神ダメージを負わせるところだったというわけだ。それを回避できたのは偏に達也の功績と言うべきだろう。
「で、さっき〝平凡〟とか〝一応の技術〟とかほざいたのは多分今の2年だろうけど……グダグダ遠回りに言わずにハッキリ言えば？『二科生如きが九校戦に出るなんて許せない』って。そんな温いこと言ってるなら九校戦に関わるな、って私は断言するね」
普段はここまで饒舌ではないが、怒った時の口調は美嘉の姉らしいともいうべきものといえる。
すると、それに反論するかのように先程その台詞を言った男性生徒の一人が声を発するが、それを断ち切って佳奈がすかさず反論を入れる。ここまで来ると彼女は完全に怒っていると悠元は素直に感じていた。
「ですが、二科生は実力が」
「〝魔法実技〟はね。でも〝魔法理論〟は別。ＣＡＤ調整スキルに一科生レベルの魔法発動速度や魔法式の規模、干渉強度の項目が必須って一体誰が決めたの？　当然答えられるよね？　一科生という〝優等生（ブルーム）〟ならそういう知識も無論あるはずだよね？」
態々禁止用語を使ってまでも佳奈が言い放った言葉に、先程まで文句を言っていた者たちは完全に黙ってしまった。彼女の考え方は悠元にも通ずると達也は聞きながら思っていた。そして、佳奈はこう言い放った。
「九校戦は一高に在籍している全員で戦うようなもの。そこに一科生や二科生という括りは関係ない。確かにエンジニアはユーザーとの信頼関係が必要なのは理解してるけど、変な優越感や劣等感という下らないプライドで信頼関係を築く事ができないのなら、そんな人間に魔法師を目指して欲しいと思わない。九校戦だけでなく今すぐ学校を辞めてもらった方が自分の身の為」
それは過激な発言ともいえる。だが、三矢家はそうやって人との繋

がりで十師族としての地位を固めてきたからこその発言。そして、彼女は在籍中に多大な功績を上げた人間だということも周知の事実。
　そんな彼女が妹の退学を阻止するために祖父と校長室を訪れ、その際にも過激な発言をした。
『美嘉を退学させるのですか？　私はいいとしても、当主たる父や孫が可愛い隣の祖父が許してくれるか保障しませんよ？　三矢家…いいえ、引いては他の二十七家にも喧嘩を売りたいと考えていらっしゃるのなら、止めは致しませんが』
　だが、彼女も新入生総代で入学した人間であり、十師族の三矢家の一人。三矢家だけでなく上泉家に喧嘩を売って無事に済むのか…最悪、上泉家の要請によって二十八家総出で校長の実家諸共叩き潰される可能性がある、という事実に校長は屈した形となった。
　話は戻り、佳奈は言いたいことも言い終えたとでも言わんばかりに止めの言葉を放つ。
「私は、外部補助スタッフの代表並びに先々代の生徒会長として、1年司波達也君の九校戦技術スタッフ入りを支持します……修次は？」
「僕も外部補助スタッフとして、先々代の部活連会頭として司波達也君の技術スタッフ入りを支持する。彼のエンジニアとしての技量は間違いなく高校生の領域を…いや、大学生すらも超えたレベルにいる。三連覇を狙う一高の代表を担うに相応しいレベルだろう」
　三連覇の原点を担ったリーダー格の二人が達也の支持に回った意味は非常に大きい。
　反対していた人間の誰もが佳奈によって〝叩き折られた〟上、十師族の三矢家と百家本流の千葉家…どちらも個人的な実績を持つ二家の人間がエンジニアとして達也を推薦した訳だ。
　そこに加わる形となるが、服部が声を上げた。
「会長。私も、司波の技術スタッフチーム入りを支持します」
「はんぞーくん？」
「桐原に『全く違和感がない』と言わせた司波の技量は高く評価されるべきです。それに、九校戦は当校の威信を賭けた戦いです。三矢先輩の仰ったとおり、一高に在籍している全員で戦わねばならない総力戦

のようなもの。当然、代表選手やスタッフは能力的にベストメンバーで挑まなければならない。そこに1年だとか二科生だとかで拘っている場合ではありません」

達也のことに否定的だった服部が賛成したことに真由美は目を丸くしていた。

確かに魔法力主義の面は抜け切れていないが、彼とて2年ではトップクラスの実力者であり、伊達に副会長はやっていない。なんだかんだ言いつつも達也の実力は認めているわけだ……偶に真由美が達也に対して親しくしていることに嫉妬のような感情を向けるのはいつものことだが。

「――――服部の指摘は至極尤もだと俺も思う。司波は確かに、我が校の代表メンバーに相応しい技量を示した。俺も、司波のチーム入りを支持する」

そして、ダメ押しと言わんばかりに放たれた克人の言葉で、達也の九校戦代表メンバー入りが決まったのであった。

なお、この後風紀委員会本部で真由美、克人、摩利の三人が佳奈による説教を受ける羽目となり、それを扉越しに見た達也曰く『彼女の背中に筋骨隆々の神様の様な存在が見えた』とのことだった。

理解、納得、当然の帰結

達也の九校戦メンバー入りに深雪は喜んでいた。久々の姉のお怒りモードは見ててハラハラした。あれ、怒りだすと数時間は止まらないからな……ご愁傷様。３人で帰宅の途についたわけだが、達也が話しかけてきた。

「それにしても、中条先輩があそこまで見抜いていたとはな……どれぐらいの技量なのか知ってるか？」

「流石に達也レベルとはいかないけど、それに近い芸当はできている。俺は必死に頑張って達也に追いつくレベルだからな」

「そうか……なら、今度深雪の調整でも頼んでみるか」

司波家の調整機は九校戦よりも更に高度な調整機を使用している。実を言うと、三矢家の地下にあるやつも司波家と同クラスの調整機を使っている。なので、調整時は下着姿がデフォなのだが……止めておこう。あんな記憶は思い出したくもない。

「達也、お前は俺をどうしたいんだ？　調整を頼まれる度に寿命が縮むわ」

「悠元さん？　それはいったいどういう意味でしょうか？」

「深雪のあの姿に耐えられる自信がない」

「……私は、その、別に構いませんけど」

今は魔法とかを考えるので精一杯だ。なので、深雪の下着姿を見た日には……抑えられる自信がない。これはあくまでも性欲と言う意味であって、それがイコール恋愛感情と言うわけでもない……やっぱりよく解らないな。まだ浴室に突撃されたり、添い寝してきたりしていないだけマシだな。あのことはこの先も封印指定だ。

雫からはそれとなくアピールされているのは気付いているけど、自分の恋愛感情がハッキリしないまま中途半端に受け入れて寿命が縮むのは勘弁したい。なので、現状は気付かない振りのままだ。問題を先送りにしているだけともいうが。

あとはあの会長なんだよな……なんか聞いた話だと、五輪家の長男と上手くいっていないようだ。だからと言ってこっちにスキンシッ

プのウェイト増やすのやめてくれませんかねえ？　その度に服部刑部少丞範蔵副会長の視線が飛んでくるんですよ……カッコいいと思うんだけどね、その名前。本人はかなり恥ずかしがってるみたいだけど。

「でも、お兄様も私がおふざけした時に動揺されていましたけど」

「良かった……達也も普通の感性は持ってたんだな」

「待て、それはどういう意味だ？」

ともあれ、九校戦には三人とも出場することになった。達也は選手ではなく技術スタッフという形だが、メンバーの一人に選ばれたことに変わりない。

そして、悠元は新人戦の統括役を任される形となった。統括役と言っても新人戦全体の戦略を考える立場なわけなんだが……正直何もしたくない、と考えている。

別に手を抜きたいわけではなく、自分や燈也、あとは五十嵐を除いて達也のことを陰ながら謂れのない言葉で非難している面々だ（森崎も含む）。自分自身で努力することも忘れて陰口を叩いていることに力を割く連中の面倒を見る、という苦労をせねばならない。

正直言って見たくもないし見きれない、というのが本音である。

深雪への武術鍛錬の一件で森崎とはある程度打ち解けられた。だからと言って達也への連絡に俺を使うな。今度学校制度を利用して森崎を模擬戦でフルボッコにしても問題ない……でも、今度は俺自身が面倒なことになりそうだ。いったん保留だな。

「達也があらぬ方向の性癖を持っていないか、二人で心配してたんだよ」

「……そんなことはないから安心してくれ。寧ろお前は自分の朴念仁をどうにかしろ」

「それをお兄様がご自分で仰いますか？」

隠しきるのもそろそろ限界かと思った悠元は、二人だけに聞かせるように話し始める。

「達也に深雪。ぶっちゃけるけど……俺は他人への恋愛感情が分からない。いや、欠落しているといってもいいだろうな。といっても人為

的なものじゃなく、遺伝的なものと言っていい」
「……本当か？」
「嘘言ってどうするよ。前に3人で行動した時、俺に特異体質があるのは話したよな？」
異常な聴覚能力。それが三矢悠元と言う存在に根付いていた力。
前世でまともに恋愛していなかったというのもあるが、この体に転生してから彼の心の闇は思ったよりも深かった。何せ、異常聴覚のせいで小声で放たれる悪口や陰口も全部聞こえてしまうのだ……7歳という年齢でありながら、ある意味人という存在に絶望を感じていたのだろう。
絶望しきらなかったのは家族のお蔭とも言える。妹が割と……うん、それなりにまともだったのは、そんな感情を己の中に押し殺していたと思う。その前の魂は耐えきれずに消え去ったのかもしれない。今更聞くわけにもいかないし、聞けないけど。
「相手が小声で喋っていても全部聞こえる。この聴覚を制御するまでに色んな人間の発言を聞いてしまっている……酷い時なんて、テレビ番組の観客が小声で呟いたことまで聞こえたぐらいだし」
「そこまでの力だったんですか……」
『万華鏡』や『領域強化』を自身の体に試した際、自分の中に家族愛や兄弟（姉妹）愛という感情はあっても『他人への衝動的な愛情』というものが見つからなかったのだ。これは経験してないからだと思ったのだが、そうでもなかった。
試しにいろんな女性の写真を見てみた。可愛いとか綺麗とか、果ては性的な愛まではいくのだが……誰かを心から愛おしいと言うには遠すぎる気がした。
小学校や中学校でも同様だった。アイドルのようにチヤホヤされていた相手から告白された時、そこから嬉しいと感じても、心のときめきみたいなものが感じられなかった。何というか、分からないのなら試しに付き合おうとか思えなかった……一歩も奥に踏み込めなかったのだ。
3年前、深雪と出会ったときに緊張していたのは、前世での知識か

ら彼女の素性を知っていることが相手にとって知らなかったからであり、その枷が外れたときに『友愛』としてのカテゴリに収まったのだろうと思われる。異性として認識することはできても、性欲が発生しても、そこから恋愛という結びつきがどうにも見えてこなかった。
「お前でもその欠落を治せなかったのか？」
「元から無いものは流石に治せないからな。それはもう魔法じゃなくて神の領域だろう」
　前世での恋愛経験不足が皮肉にも噛み合った結果、恋愛感情の発生を起こさせないというものになっていた。深雪に抱き付かれても変に達観できていたのはそれが原因だった。
　まあ、元々なかったものが突然生まれる現象は自分が散々引き起こしているので、感情の発露はきっとあるはずだろう。なので、そこまで悲観はしていない。転生特典で感情を生み出す魔法式を作るというのも何かおかしい気がする。
「雫がアプローチをしてるのは当然気付いてた。でも、俺がこんな状態で中途半端に答えてやる訳にもいかない。最悪、関わった人間全員が傷つきかねない……だから、暫くは気付かない振りかな。雫に問い詰められたら言うつもりではあるけど」
「……」
「それが、現状で出せるお前の次善策と言うわけか」
「ま、何かしらの切っ掛けで掴めるかもしれないし、悲観はしてない。その辺は気楽にやっていくさ……折角達也がエンジニア入りしたのに気を悪くさせて済まない。お詫びに、今晩は俺が何か料理でも作るか」
　流石に重い話となってしまったので、これは自分の責任だろうと思って悠元はお詫びの方法を呟く。すると、それを聞いた深雪が必死になって叫ぶような口調で悠元に迫りつつ言い放つ。
「そ、それはダメです！　悠元さんは何もしないでください！　悠元さんはある意味私の代わりとして会議に出てくれたのですから、お兄様のお祝いは私にやらせてください！　それに、悠元さんの料理を作るのは私だけでいいんです！」

（深雪……自分で何を言ってるのか、分かってるのか？）
　それを聞いた達也は、悠元も大概だが深雪も人のことは言えないだろうと思った。仮にこの二人が恋人としてくっついたら一体どんな反応が起きるのか……それはそれで何故か〝面白そう〟と思ってしまった達也だった。

◇　◇　◇

　ささやかなお祝いということで司波家での夕食を楽しんだ後、その片付けは悠元と深雪が担当していた（料理と菓子作り以外なら問題はないと深雪が判断していた）。そのため、何もすることがなくなった達也はリビングに一人となったところで電話が鳴った。
　まるで図ったかのように鳴った電話に出ると、画面に映ったのは軍服を身に纏った軍人――――国防陸軍第１０１（イチマルイチ）旅団・独立魔装大隊大隊長・風間玄信（かざまはるのぶ）少佐であった。
「お久しぶりです。狙ったんですか？」
『いや、そういうつもりでもないが……そうなってしまったようだな、特尉』
　何とも曖昧な言葉だが、達也を特尉と呼んだということは、その通信が一般回線ではないと判断しつつ、達也は会話を続ける。
「リアルタイムで話をするのは、『サード・アイ』のオーバーホールの件から約1ヶ月ぶりですね。そして……その呼び名を使うということは秘匿回線からですか。よくもまあ、毎回一般回線のラインに割り込めるものです」
『簡単ではないがな。特尉、一般家庭の君の家は特にセキュリティが厳しすぎないか？　特に彼のお蔭でセキュリティの段階が一気に跳ね上がったとオペレーターが悲鳴を上げていたよ。まるで独立魔装大隊（ウチ）の情報機密レベル並だと』
「最近のハッカーは見境がないですから。余程深い階層にまで踏み込まなければカウンタープログラムは発動しませんので」
　司波家のシステムサーバーは厳重なセキュリティ――――深い階層に到達した瞬間、幾重のカウンタープログラムを仕込むレベルのものである。尤も、かなり大事なデータは悠元の提案を受けてオフライ

ン化させた端末で管理させているため、万が一破られてもいいようにはなっているのが救いだと達也は内心で呟きつつ、風間に問いかけた。
「それで少佐、本日はどのようなご用件で？」
『ああ。聞けば、特尉も九校戦に出場すると聞いてな。会場は富士演習場南東エリア……これは、例年のことだな』
決まったのは3時間前だというのに相変わらず耳が早いな、と達也は思う。いや、そういう傍受システムでも国防軍が所持していてもおかしくはないと思いつつ、表情には出さなかった。すると、風間は気を引き締めつつ喋る。
『だが、気を付けろよ達也。該当エリアで不審者の痕跡があった。加えて国際犯罪シンジケートの構成員らしき人影が目撃されている。時期的に見て九校戦が狙いだろう』
「国際犯罪シンジケート、と仰いましたが？」
4月の『ブランシュ』の一件に続いて、今度は国際犯罪シンジケートとは……とそう内心で呟いた達也。狙いは間違いなく九校戦の可能性が高いだろう。これは風間が発しなくとも達也には推測がついた。
『壬生に調べさせた』
「壬生といいますと、第一高校2年生、壬生紗耶香のお父君ですか」
『ああ。君とも少し話していたと聞いた。おっと、話が逸れたな。壬生は退役後、内情（内閣府情報管理局）に転籍して、現在は外事課長として外国犯罪組織を担当している』
「――――驚きました」
これは別に相槌を打つための言葉ではなく、達也が本心から驚いたものだった。紗耶香の父親とは彼女の退院時に話したが、彼が言っていたことからして〝自らの不徳の致すところ〟だと感じていたのかもしれない。
それ以上に、軍の不始末を武官・文官という意味で友好的とは言えない内閣府の情報機関にリークして協力を仰いだこともそうだが、対外諜報・防諜を担当する一責任者の娘が下請けとはいえテロ組織に関

与していたという事実も驚く。
　その辺を感じ取りつつ風間が話を続ける。
『犯罪シンジケートとテロ工作組織は似たようなものでも異なる……セクショナリズムは国家の業だ。幸い、剛三殿が間を取り持ってくれたお蔭で協力や情報交換もスムーズにできている訳だ。話を戻すが、壬生の調べでは香港系の犯罪シンジケート――『無頭龍（ノー・ヘッド・ドラゴン）』ではないかと見られている。追加情報があったら、また知らせよう』
「お願いします」
　ここまでは必要な連絡だと達也は認識していた。だが、ここから話すべきか少し悩んだ相手の素振りに達也は少し疑問を感じたが、その予感は風間の言葉で的中する形となった。
『それで、これが重要な課題なのだが……達也。君の方から悠元に何とか私からの連絡に出るよう掛け合ってほしいのだ』
「……彼に何をしたのですか？　まさか、４月の入学式の一件ですか？」
　聞いていたのか、という風間の項垂れた表情に達也は内心呆れ返ってしまった。
　悠元から防衛大のデモンストレーションに無理矢理参加させられていたことは聞き及んでいた。そのせいで入学式後の段取りも全部御釈迦になったと言っていて、彼からしたら『さあ、やるぞ』と言った瞬間に掛けていた梯子を外された形となったのだ。
　それは怒っても無理ないと思うし、そのせいで代理を務めることとなった深雪に詰め寄られた自分も被害者の立場だ。その辺のことは口に出しても仕方ないので、そのことは自身の心に留め置くこととしたが。
『『サード・アイ』のハードウェア更新に関してもそうだが、真田や藤林経由で依頼した軍関係の仕事は全てこなしているので素行上問題はない。だが、それ以外となると一向に聞く耳を持ってくれなくてな……『こればかりは大隊長が悪い』と真田や柳、藤林に釘を刺された』
「お言葉ですが少佐。彼にとって大事な高校の入学式を奪われたのですから、当然の報いかと思われます。寧ろ家のことを慮って関係を断

ち切らなかっただけまだマシ、と自分は考えますが」
自分にしてはかなり棘の入った言い方をしたな、と達也は思う。
彼がいくら独立魔装大隊の特別技術顧問とはいえ、自分と同学年の学生だ。その辺を失念していた風間の責任だろうとバッサリ切り捨てる選択をしたのは、気が付かないうちに自分も怒っていたのか、と少し思ったのは言うまでもない。
「解りました。確証はできませんが、自分が掛け合いましょう。無論、彼から一発貰う位は覚悟していただきますが」
『……分かった、感謝する特尉。それでは失礼するよ。君の方から悠元に『申し訳ない』と伝えておいてくれ。それと、師匠にも宜しく言っておいてくれ』
そう言って画面は暗転した。
彼への伝言や説得に加えて共通の師匠への伝言とは、つくづく自分も損な役回りをしているものだ、と思った達也であった。

勝負事に手は抜かない

「――――で、風間少佐から頼まれたってわけか」
達也が風間と会話している間、悠元は姿を見せなかった。
入学式の時にあれだけ色々悩んでいたものを無理矢理先送りにされたこちらの気分になれ、と軍としての正式な依頼は真田大尉か響子を経由する形にして、それ以外のプライベートな連絡は全部切っていた。
そして、今に至るというわけだ。
「まあ、あまり意地を張っても仕方ないって解ってる。どうせ九校戦で会うんだし、その時にでも話すよ」
「助かる。風間少佐には『最悪一発ぐらいは貰う覚悟はしてください』と言ったが」
「多分、その一発は俺よりも先に爺さんあたりから飛ぶだろうがな」
その意味で自分もまだまだ子どもだな、と深雪の淹れてくれた紅茶を口にしつつ、悠元の零したことに達也と深雪はそろって苦笑した。
すると、達也が気になることを尋ねた。
「にしても、お前の姉が現3年にあそこまで怒るとは……何かあったのか？」
「あの3人がまともな感性を持っていることは2人も知っているだろうが、それ以上に入学当初から1年の中で実力が『飛び抜けすぎていた』ことが問題だった」
「飛び抜けすぎていた、ですか？」
真由美、克人、それに摩利の3人は入学の時点でその片鱗を既に見せていた。同学年の中ではトップクラス……まあ、そこまでは普通だろう。だが、一番の問題はその3人と他の同級生の差が目に見えるほど開いていたことに起因する。
「とりわけ会長と会頭は同年代の十師族でもトップクラスの実力。1年の時点でまともに戦える同級生の相手がいない状況になったんだ……何が起こるかは想像がつくよな？」
「成程。切磋琢磨できる相手がいなかった、というわけか」

「そういうこと。多少乱暴でも実力を腐らせるわけにはいかない……佳奈姉さんが叩きのめしたのは、せめて切磋琢磨できる相手を務めてたってわけ」
　人格面ではある程度問題はないと判断していたが、魔法実技ではそうもいかない。なので、あらゆる手段を講じて彼ら3人の実力向上を狙っての行動だと悠元は説明した。その方法が乱暴になってしまったのは三矢家での訓練方法が原因だと付け加える。
「三矢家（ウチ）は屋敷の地下だけでなく、稼働している第三研で本格的な戦闘訓練を積む。その名残が3人への対応に繋がったことは否定しない。一応フォローのメールは送ったから、大丈夫だと思う」
「…何故会長たちのプライベートアドレスをお知りになってるのですか？」
「落ち着け、深雪。会長と会頭は以前名乗ってた名前の時に知り合って、もしもの時ということで連絡先を交換した。渡辺委員長とはうちの兄絡みで挨拶に行った時にだよ。委員長の彼氏とは面識もあったし」
　後は、強いて言うなら九校戦への思い入れもあるだろう。
　姉の詩鶴、佳奈、美嘉の三矢三姉妹で挑んだ九校戦で総合優勝を三高に取られた悔しさがある。長女に有終の美を飾らせてやりたかったという思いもそこにはあった……総合優勝三連覇という偉業をなし遂げられなかったからこそ、今年の九校戦でそれを達成してほしいという意味も含めて厳しく当たっているのだろう。
　その過程でやらかしたことについては……流石に擁護できないと思っているのも事実だが。
「勝負事に手を抜いたら死ぬぐらいの気持ちでやらないとダメ……爺さんの教えの影響もあるな」
「かなり強めの口調で言っていたからな。あれで心を折られない方が逞しいだろう」
「ま、現3年組には練習面でフォローすると言ってるし、そっちはお任せだな」
　これで折れる様なら文字通りの〝名折れ〟になるだろう。

佳奈も『あの程度で折れるならあの〝七草家当主〟の娘じゃない。狸の娘が狐というのは滑稽だけど』と評しているが、実力は認めている訳だ。他の二人もしっかりとフォローはすると言っているので、本戦組は外部の方々にお任せしよう。

それで今年の新人戦組だが、主力で言うなら現状はこうなっている。

スピード・シューティング
男子　六塚燈也　森崎駿
女子　明智英美　北山雫　滝川和実
クラウド・ボール
男子　六塚燈也
女子　里美スバル　春日菜々美
バトル・ボード
男子　五十嵐鷹輔
女子　光井ほのか
アイス・ピラーズ・ブレイク
男子　三矢悠元
女子　司波深雪　北山雫　明智英美
モノリス・コード
男子　三矢悠元　森崎駿　五十嵐鷹輔
ミラージ・バット
女子　司波深雪　光井ほのか　里美スバル

「……主だった男子がいねえ、マジで……フォローする気ないけど」
「いや、それでいいのか？」
「九校戦を前に凍傷（たいちょうふりょう）なんて笑えなくなるからな」
「？」

だってさ、同じチームメンバーなのに二科生どうこう言う奴をフォローしろだなんて……無理な話だ。一科生という無駄なプライドが巣食っている以上、根っこから取り除かなきゃまた繰り返すだけだ。いっそのこと二科生でまともな奴を鍛え上げて、一科生に捩じ込むか？　寧ろそれぐらいしか思いつく手段がない。

でも、それは九校戦後の話だ。今はこれからの九校戦のことを考えるのが大事……そう思いながらスクリーン型端末をしまった。
「先程の話ですけど、その意味だと悠元さんも当てはまるかと」
「腐ってるぐらいなら魔法の訓練に時間を費やすけどな、俺は、今は九校戦絡みの起動式書き起こしで忙しいし」
「そういえば、何の術式なんだ？」
「あれは燈也に頼まれた術式だよ。先日のテスト勉強の時に俺が見せた術式で閃いたらしくてさ」
あの術式は、少ない想子量で特定の系統効果を最大限発揮させるために効率化させた術式の一つ。それを自分の射撃魔法に組み込めないかと相談されたのだ。どうせ「カーディナル・ジョージ」のこともあるので、４つほど術式を提供する予定だ。
そのうち『数学的連鎖（アリスマティック・チェイン）』を燈也用にアレンジさせた術式を既に渡している。残る３つのうち一つは燈也本人から聞いた魔法特性なら楽に出来るであろう七草家の秘術である『魔弾の射手』、「カーディナル・ジョージ」が得意とする『インビジブル・ブリット』の改良版、そして……燈也の処理能力なら可能だろうと書き起こしているのは「カーディナル・ジョージ」対戦用の射撃魔法。
まあ、『魔弾の射手』に関しては自分で組んだ魔法式からの書き起こしをしただけなので、後は燈也が実際に使って調整を加える必要はあるが。
理論立てて起動式を組む達也とは違い、悠元の場合は想像から魔法を構築させた上で起動式に変換して書き起こすタイプ。それを可能としているのは『万華鏡（カレイドスコープ）』の魔法特性にある。
転生特典の『思考した概念を魔法式に変換する能力』は確かに強力だが、この能力だけではいつか脳の容量が埋まってしまうという欠点を持っていた。だが、運よくこの問題を解決することに成功していた。
この世界に転生したと意識がハッキリした時、最初に想像した魔法は『領域強化』と『万華鏡』……後者の魔法は『そこに在る事象全てを認識し、必要に応じて無限に展開する』という常識外れた特性を

持っている。そして、この魔法と『領域強化』が自分の固有魔法として記録された。
　それはイメージ記憶の領域だけでなく、本来無意識領域化にある魔法演算領域にも大きな影響を与えた。
　その結果、魔法演算領域と魔法式記憶（インデックス）の無限領域化だけでなく、魔法演算領域を意識化することが可能になったことで、一度想像した魔法式を起動式に逆処理することまで可能となった。しかも、その逆処理した起動式も記憶されるというおまけ付。
　これによって、本来の魔法演算領域を一切圧迫することなく『再成』や『分解』まで使えるようになったという訳だ。正直、偶然生み出した魔法がトンデモな特性を持っていたことに少しショックで一時期自室に籠っていたことは……内緒である。
「ま、燈也と相談した上で色々驚かせる算段は既に立てた。いくら『カーディナル』でも知覚系魔法がなければただのショタ野郎だ」
「悠元さん……凄いですね。もう起動式の準備を始めてるなんて」
「あの『カーディナル』をそこまで言える奴はお前ぐらいだろうな。だが、恐らく出てくる『クリムゾン・プリンス』――あの一条家の『爆裂』はどうするんだ？」
「それも防ぐ術はある。ま、速攻で氷柱１２本同時破壊をやってもいいんだけどな」
　アイス・ピラーズ・ブレイクについては、防御面も含めて１０個の術式を既に準備済みだ。モノリス・コードについても起動式の準備は既に終えている。実際の調整は自分でできるので問題はないが。ないのだが……
「会長から技術スタッフの補助をやれって言われた時は『何を言っているんだ』と思ったが……ま、いいけどね。新人戦は日程上女子のスピード・シューティングあたりしかまともに関われないし」
「成程、それで事前に燈也へいくつか起動式を渡したということか」
「ま、術式提供のメインはクラウド・ボールだ。　念のため会長と燈也にルールを聞いたけど、問題なかった」
　原作を見ていたところで色々疑問に思うことはあった。なので、昨

年の九校戦でちょっと入れ知恵を美嘉にしたところ、延長の末に圧勝した。それをベースにした魔法式の効率展開で行き着いたのが、テスト勉強の暇潰しで弄っていた魔法式というわけだ。今となっては三高に進学した彼らに含むところなどないが、勝負事である以上手を抜くつもりなどない。

すると、話を聞いていた達也が意地の悪そうな笑みを浮かべていた。それを見て悠元も思わず意地の悪い笑みを浮かべていた。

「お前も人が悪いな、悠元」

「そんな表情のお前が言うかな、達也」

「ふふっ……」

お互いに理解しているからこそ軽口を叩き合う二人。そして、そんな二人を見て笑みを零した深雪であった。

この二人を中心として、あらゆる人間を驚愕させるような展開が待っているということは……この時は、当人達にも分からなかった。

原作からいくつかの事象（『サード・アイ』のオーバーホール、飛行魔法の発表など）を先取りにしたお蔭で達也や深雪にも余裕が出来ていた。更には外部補助スタッフということで魔法大学と防衛大学校からも数名来る手筈となっている。

代表メンバー面の道具類や諸々の手続きは既に終えていて問題はない。こればかりは本気を出して片付けたら、鈴音に「助かりました。会長の愚痴が飛ぶ前に何とかなりましたね」と労われた。

それを聞いた真由美が「ありがとう、悠君！」と言いながら悠元に抱き付いて、深雪が凍り付くような笑顔で「何やっているんですか、会長？　会長の決裁書類は山のように残っていますよ？」と言いつつ真由美を引きはがそうとした。

そんな様子を見て「うらや……イカンイカン」と葛藤する服部刑部少丞範蔵副会長であった。

技術スタッフチームが実際に使う機器のチェックや動作確認は、過去九校戦に出場していてエンジニア経験のある佳奈と美嘉、そして元継の付き添いという形で顔を見せた千里が協力してくれたお蔭で、当初の遅れをきっちり取り戻して予定スケジュールに合わせた。佳奈

曰く『選定会議であそこまで言い出した手前、フォローぐらいはちゃんとする』との弁。
ただ、チーム入りをした達也の九校戦に合わせた制服の発注による遅れだけはどうにもならなかったが。
尤も、更に驚いたのは一高ＯＢ・大学ＯＢで上泉家へ婿養子に行った三矢家次男、元継もその外部補助スタッフで来ることになったことだ……大方、妻である千里が影響しているのだろう。
まあ、現３年で最強格である克人の『ファランクス』から真正面で当たれる人間など当校の生徒相手なら全くいないだろう。モノリス・コードでその相手ができる人間となれば、元継はこれ以上ないほどの適任者でもある。
何せ「防御魔法なんて掴めればいける」という訳のわからない持論で自分を含めたうちの兄弟姉妹全員をドン引きさせた人物。実際にそれを実行して本当に勝った人物でもある。そして、克人が一高に入学してから度々彼の所属しているクロス・フィールド部に顔を出しているらしい。その辺は佳奈からお願いされたようだ。
克人曰く「『ファランクス』に真正面からぶつかり合おうとする人間はあの人ぐらいだろう」とのこと。すみません、うちの兄が明らかにおかしいだけです。そして、お互いに意気投合して喫茶店で語らう仲だそうだ。なお、お互いにスイーツ好きの甘党だった……必要かな、この情報。
自分でもファランクスに真正面からやりあおうなんて思ってないし……模擬戦の時は状況的に仕方なかったので『円卓の剣』を使用しただけだ。
本格的にやるとしても、『ファランクス』に『ファランクス』をぶつけるぐらいだ。

建前と本音

――西暦２０９５年７月１１日。

達也が九校戦の代表メンバーに選ばれ、校内の雰囲気も本格的に九校戦モードへと突入する。

過去に九校戦代表を経験した外部補助スタッフの協力もあって、スケジュールの遅れは達也が着ることになる制服（懇親会などで着る一科生と同じもの）や代表ユニフォーム（技術スタッフのブルゾン）の発注と、エンジニアチームの打合せ関連。それと担当する選手の振り分けぐらいで済んだのは幸いだろう。

達也の場合は深雪、雫、ほのか達１年女子組六名を担当することになる（出場競技の関係上担当できない場合もあるため、その場合は別の技術スタッフがフォローする）。人選としては問題ない。

悠元はそれのサポートを新人戦統括役として行うことになる。『１年男子の面倒？　……正直投げたい。あんなのと向き合ってた姉さんたちは凄いわ』というのが悠元の弁だった。

学校総出という意味合いはクラブ活動でも同様で、持ち回りという形で代表メンバーの練習サポートを行うほどで、学校としての気合の入れようも理解できなくはない。

悠元と深雪の武術鍛錬も九校戦ということで一時中断し、生徒会役員として代表メンバーと各種スタッフの折衝役や調整役を担う形となる。そのため、他の代表選手と比べて練習時間は少なくなるが、文句はない。

尤も、悠元の場合はそれ以外の仕事もあるので、モノリス・コードの作戦自体は戦術スタッフである鈴音に一任した。使える魔法とポジションは臨機応変に組める、という利点を生かした形だ。悪く言えば丸投げとも言うが。

そして、一つ驚くことがあった。

学校側が代表メンバー（選手・スタッフ）に対して授業を免除する措置を取ったのだ。これは先日のブランシュの一件に対する〝罪滅ぼし〟の一つみたいなものだろう。三連覇が掛かっている以上は学

校の威信に関わることでもあり、その為にも選手やスタッフは九校戦に集中してほしいという思惑があるのは確かだった。
話を戻すが、今日はその発足式となる。達也が着ることになる代表の制服が今日届くので、5限目に講堂で行われる流れとなった。〝原作〟からすれば1週間程度は稼げた形だろう。
加えて明日から代表メンバーは授業に参加せず、各競技の練習を行うことになる。完璧に本番同様とは言えないが、それに近い練習設備が本校の敷地内に備わっている。これは美嘉の退学を取り消させた代わりに剛三の『詫び』ということで出資され、今年の初めに完成したばかり。
他の魔法競技とフィールド面で代替できないスピード・シューティングとアイス・ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バットの練習場だけでなく、福利厚生の部分も充実している。それだけでもかなりの気合の入れようだと分かる。
あと、ブランシュの拠点があった場所は、あの後速やかに民間企業の魔法による爆破実験という形で解体、第一高校の名義で土地が買収された。その2ヶ月後には一高専用のバトル・ボード練習場へと様変わりしていた。場所が離れているので練習場と本校敷地を結ぶコミューターまで敷設され、かなりの金額が掛かっているのは言うまでもない。
それを聞いたときは思わず頭を抱えたくなった。多分三矢家と上泉家が関わっているのは間違いないだろう。
また話が逸れた。
1年E組の教室が登校してきた達也に対して声援を送る歓迎ムードで包まれている一方、工学系志望の1年一科生からしてみれば屈辱とも思える扱いに嫉妬していた。無論、そんな空気は1年A組でも生まれていたのは言うまでもなかった。
「面倒」
「雫、そんな直球に言わなくても……」
「俺は別の意味で面倒だ」
「悠元まで……」

何かもう、色々言うことすら嫌という意味が籠った雫の発言にほのかが窘めるが、乗っかる形で放たれた悠元の言葉に燈也が溜息を吐いた。無論、二人が言いたい対象は異なるが、その彼らが複雑な感情を向ける相手が同じということだけは皮肉としか言いようがない。

無論、雫も悠元もその原因である人物を信頼している側なので、彼に対する文句はない。

「朝一番にいきなりあんなこと言われた時は流石にカチンと来たからな。これで深雪があの場にいたら氷像が出来てたな」

深雪は真由美に声を掛けられて（恐らく達也の制服の件で）生徒会室に向かったので、Ａ組の教室には悠元一人で入った。

すると、工学系志望のクラスメイトから「三矢、なんで二科生が九校戦のエンジニアに選ばれるんだ!?　おかしいじゃないか!?」と挨拶ではなく暴言ともいえる文句が飛んできた。

真由美、克人、服部にあずさ、そしてその技量を確かめた桐原が彼のエンジニア入りを認めたことを話しても納得せず、終いには「三矢家の力で彼を辞退させろ」なんて言い出したから、殺気を飛ばして気絶させた。

「睨んだだけで気絶させるって……誰にでも出来ることじゃない気がしますよ」

「出来たら人間辞めてる」

「……俺は人間です」

そんな奴だから殴る気も起きなかった。動揺する他のクラスメイトを無視して、やや乱暴に自分の席へと座った。その光景を既に登校していた三人も見ていたので事情説明はしなかった。

そして、今に至るというわけだ。

「けど、十師族の力を自分たちの手柄のように軽々しく思われてるのは問題だな……こうなったら予定を変更して、九校戦は派手にやるか」

「それ、僕に提供してくれた術式で〝地味〟って言ってるようなものですけど……」

『数学的連鎖（アリスマティック・チェイン）』、『燈也版魔弾の射手』、『インビジブル・ブリット改』

でも十分派手だし、対カーディナル・ジョージ用の『氷結連鎖光柱（フローズン・アリスマティック・ピラー）』もかなり驚くことになると思う。

達也が雫用に組み始めた例の術式に負けないインパクトは出せるだろう。何で知ってるのかといえば、それのテスト役を任されたからだ。達也の魔法力では『使い物にならない』とのレベルなので、ちゃんと機能するかの実験を頼まれたわけだ。あのライフル型ＣＡＤのこともあるけど。

「あれでも観衆の度胆は抜けると思うんだが……大丈夫、派手に構築（まかいぞう）するから」

「悠元さん、今サラッと凄いこと言いませんでした!?」

こうなったら、先日思いついた術式を燈也に渡す『氷結連鎖光柱（フローズン・アリスマティック・ピラー）』に組み込む。そして、自分が出る新人戦男子アイス・ピラーズ・ブレイクでは今まで実戦で使おうとしてこなかった〝空間収束系魔法〟の新術式を使用する。

魔法大学もとい『魔法大全（インデックス）』の申請は断るけどね。登録したらしたで面倒だし、そういうのは三矢の家柄的に相応しくないので。泣き落としししようものなら、暫く病院食を食べて大人しくさせるのも辞さないつもりだ。

◇　◇　◇

魔法科高校は午前3時限、午後2時限で構成されていて、これは全学年共通の時間割である。

４時限目終了後、講堂の裏に呼ばれた達也は技術スタッフのユニフォームとなるブルゾンに袖を通していた。左胸には第一高校の校章である八枚の花弁があり、深雪からすればとても嬉しそうな表情だ。

「中々様になってるな。いかにもエンジニアって感じがする」

「それは褒め言葉と受け取っていいのか？」

「いいと思いますよ、お兄様」

そんな風に達也と会話する悠元と深雪はテーラード型スポーツジャケットに袖を通している。それが代表選手のユニフォームということだ。そこまではいいのだが、達也は深雪とその傍にいる真由美

を窘める。
「それはそうとして……深雪に会長。その手に持ってるカメラは？」
「え？　勿論お兄様のお姿を収めるだけですよ？」
「そうそう！　達也君のこんな姿はいつも拝められるわけじゃないし！」
　達也の質問にそう言い繕った深雪と真由美は、明らかに誤魔化す材料として達也を対象にしていると察していた。というか、達也はこの場所に来る直前でとある会話を聞いていた。
『悠君、今度はお姉さんとツーショットで、ね？』
『どうして腕を組む必要があるのですか、会長？』『悠元さん、その、私と一緒に撮っていただけませんか？』
『……まあ、いいけど』
　流石にそのまま舞台裏の中へと入っていこうか躊躇うほどの応酬で、その渦中にいる悠元は大変なのだろうと達也は思った。というか、かたや婚約者持ちで、かたや恋愛の自覚なし……色々複雑怪奇だな、と内心で呟いた。
　助け舟を出す意味合いも含めて達也が中に入ると、深雪と真由美はお互いに笑顔を浮かべて取り繕ったような様子を見せていた。その近くには頭を抱えそうになっている悠元の姿があったのは言うまでもない。
　発足式は選手４０名、作戦スタッフ四名、技術スタッフ八名の５２名だが、プレゼンターを務める真由美と深雪の二名を引いた５０名の紹介となる。悠元の立つ位置は新人戦メンバーの一番最初――学期末考査で総合一位だったことからすれば順当で、そこに燈也、雫、ほのか、森崎と続く。並び順でいえば中央に近いので、否応でも目立つ形だ。
　すると、本戦メンバーの２年の女子――花音が目線を動かさずに小声で話しかけてきた。
「君が美嘉先輩の弟よね。アイス・ピラーズ・ブレイク、楽しみにしてるから」
「こちらこそ、千代田先輩」

「名前知ってたんだ……悠元君って呼ばせてもらうわね」
「ええ、お構いなく」
花音は悠元に名前を知られていたことに少し驚きつつも、表情に出さないようにしてそう返した。目線を舞台の下に移すと、一科生が前、二科生が後ろ……という流れの中に1年E組の面々が固まって陣取っていることに気付いた。
レオ、エリカ、美月、そして若干目を逸らした幹比古の姿があった。
悠元は深雪の付き添い、あるいは達也を呼びに行く関係で普通にE組の教室の中へと入ることが多い。そんな光景が数ヶ月も続けば、1年E組のクラスメイトも悠元のことを覚えてしまう。一科生なのに我が物顔もせず教室に入ってきて二科生と普通に会話する人間、それも十師族の一人という魔法師社会のトップカーストの存在。
そんな彼の等身大の姿を見ているからか、自分たちが劣等感に苛まれるべきではない、という雰囲気が1年E組で確かに生まれていたのだ。その行動力には間違いなく達也という存在が大きいのだと思う、と悠元は自分の想定外の功績を知らずにそう思っていた。
そして、真由美の紹介の後、深雪に競技エリアへ入るためのIDチップを組み込んだ徽章をユニフォームの襟元に着けてもらう。ただ、その表情が他の人に対応している時と違って蕩けそうな笑顔だった。
達也というよりも彼らの母親の情操教育は一体どうなっているのか問い詰めたかったが、彼女の笑顔に水を差すのもおかしな話なので、何も言わないことにした。触らぬ神に何とやらである。
燈也以降の面々には先輩たちと同様の対応を見せるあたり、淑女教育はしっかりしているのだが……なお、後で達也に尋ねたら同じような表情を向けられたと言っていた。
その上で『ただ、お前に対する表情は俺以上で、流石に不安を覚えた』と付け加えられた。しかし、どうにもならないと呟く達也に悠元は最早苦笑しか出てこなかったのだった。
九校戦発足式は1―Eの達也に対する想定外の大きな拍手はあったが、それをメンバー全体の拍手にすり替えてその場を切り抜ける形

となった。
余談だが、姉である美嘉は総合優勝二連覇が掛かった発足式の際『最後に……総合優勝出来なかったら連帯責任で全員坊主、無論私も坊主にする』と全校生徒の前で言い放ち、それが結果的に各選手のモチベーションとなって二連覇を達成したらしい。
当時1年だった服部や沢木曰く『ほぼ全員がガチで鬼気迫る様な雰囲気だった。二度とあんな心境で競技はしたくない』と言っていた。それもその通りだと思う……それに近い発破は掛けられるかもしれないが。

◇　◇　◇

「――――えっと、技術スタッフの中条です。宜しくお願いします！」
「同じく、技術スタッフの司波です。ＣＡＤ調整の他に、作戦立案や訓練メニュー作成を担当します」
発足式終了後、早速エンジニアと選手の顔合わせが行われた。本戦または新人戦の男子・女子という分け方となり、この教室には1年女子組１０名が揃う形となった。
本来なら達也は1年男子組を担当するべきなのだが、1年男子メンバーの大半が多少なりとも達也に対しての反感を持っていたためと、深雪達のことも考えれば妥当な人選だった。
あずさと達也も最初は1年男子のほうに説明をしに行ったわけなのだが、達也に反感を持っている1年男子の代弁者という形で森崎がこう言い放った。
――――僕たちは、二科生のサポートなど必要ない！
それが決定打となり、結局達也は予定通り1年女子のサポート役に回されることとなった。その分の皺寄せが他のエンジニアにまで波及したのは言うまでもなく、更に言えば達也の横にいる人物の存在もその煽りを受けていた。
「……悠元、お前はあっちに行かなくていいのか？」
「男子に自己紹介は済ませた。お前の言う通り、ＣＡＤ調整・作戦立案や訓練メニュー作成は技術スタッフの仕事だ。俺はあくまでも新人戦全体の戦略面を考えるだけ……自分のこともあるから、余計な思考

は割けない」
「よ、容赦ないね。悠元」
そう、新人戦統括役の悠元もここにいた。男子組には自己紹介した上で『それじゃ、女子がうまくやれてるか見てくるわ。二科生のこともあるし』と言い残してこちら側に来ていた。
向こうからすれば体のいい扱いなんだろうが、悠元からすればこちらの方がまだ楽だった。燈也には申し訳ないことをしたものの、その辺のフォローは追々考えているのでそれでチャラにしようと考えている。
そんな彼の容赦ない一言に英美が冷や汗を流しつつ呟いた。それに対する追及が来る前に悠元は話し始める。
「新人戦の女子はそれなりに揃っていると言ってもいい。だから新人戦男子はおまけ程度のつもりだ。幸いエンジニアは中条先輩と達也がいる。女子全種目上位入賞――それが今回の新人戦の目標だ」
目標としてはハードルが高いだろう。だが、それぐらいの目標でなければ戦えるはずもない。
いくらスポーツ色があると言っても、これは学校の威信を賭けた真剣勝負なのだから。

建前は投げ捨てるもの

発足式後の顔合わせにて新人戦統括役の悠元が言い放った言葉に1年女子代表の面々もやや困惑を隠せない。すると、その中の一人である雫が悠元に視線を向けつつ問いかけた。

「悠元、そんなにぶっちゃけていいの？」

「よくはないんだろうな。中条先輩の目の前でこんなこと言うのも」

「今更ですか!?」

だが、悠元は『新人戦男子はおまけ』と発言したことを反省しつつも否定しなかった。何せ、現状において各校に進学しているであろう面々を勘案した結果、現段階のまま確実に優勝できる算段があるのは新人戦男子3種目、女子は3種目前後とみている。

剛三によって全国を巡った際、魔法使いの家系を一通り頭に叩き込むよう言われていた。なので、同年代――同学年にあたる人間のことも無論把握している。

「だが、これでも中学時代は全国を回って魔法使い絡みの家は全部頭に叩き込んでる。残るは突発的に出てくる人間ぐらいだけど……その意味でライバル候補は三高だな」

「クリムゾン・プリンス」一条将輝、「カーディナル・ジョージ」吉祥寺真紅郎、「稲妻（エクレール）」一色愛梨。それに十七夜栞と四十九院沓子。十師族・師補十八家・百家の揃い踏み……正直、考えるだけで頭が痛くなってきそうな面子だ。幸いにして愛梨と栞以外の三名とは面識があり、凡その魔法特性も掴んでいる。

「仮に一つの競技で優勝したとしても、すぐ下を独占されたら新人戦優勝も危うくなる。だから、最低でも女子スピード・シューティングと女子アイスピラーズ・ブレイクは上位独占を狙う」

「ま、マジ？　マジで言ってるの？　悠元」

「当たり前だエイミィ。そうでもしなきゃ、今年の新人戦優勝は無理なレベルだ。心配するな。その為の算段はあるんだろ、達也？」

「それをこれから考えるんだが……かなり無茶ぶりをするな」

達也の言い分も分かる。だが、悠元は幸いにも技術スタッフの補助

も頼まれている身だ。多少の無茶ぐらいは覚悟の上でやることも決めている。それに、この場には完全マニュアル調整できるエンジニアが〝三人〟いるので、競技用ＣＡＤの性能をフルに引き出すことが可能である。加えて、例のＣＡＤも既に準備済みだ。

「ま、そこまで深刻に考えなくていい。今回の九校戦に合わせて〝生徒会から発注してた〟競技規格適合のＣＡＤも予定通り間に合ったからな」

「え？　悠元さん、そんなの初耳ですよ？」

「深雪は知らなくても無理ないよ。だって、その書類を見たのが俺以外だと七草会長と十文字会頭しかいないから。会長も即決して承認してたし」

それは単純にアリバイ工作みたいなものだった。ＦＬＴからシルバー・ブロッサムシリーズを九校戦での宣伝も兼ねて使ってほしいという打診の書類を一高の生徒会に送り、それを代表選手が使う関係で真由美と克人だけに見せて話を進めたのだ。こういう時ほど自分の立場というものは役立つと思う。

それが何なのかを達也は察していたが、あずさは首を傾げていた。まあ、これだけじゃなくて起動式のテコ入れも無論する。そのために自分が出る競技の準備は粗方済ませたのだから。

◇　◇　◇

翌日から本格的に九校戦の練習が開始された。代表選手だけでなく、スタッフも練習に余念がない状態だ。代表選手やスタッフが動いている様子を羨ましく見つめつつ、授業を受けている生徒もいたりするのはお約束といえるだろう。

九校戦が近いということで、メディアはどこも九校戦の特集が組まれている。魔法科高校という国立の教育機関である以上は個人情報も厳しく、顔写真などのデータは一部を除いて九校戦本番まで公表されない取り決めとなっている。昨年のデータから２・３年にスポットが当たる中、中学時代から活躍している面々――――三高に進学している「クリムゾン・プリンス」こと一条将輝、「カーディナル・ジョージ」こと吉祥寺真紅郎、「エクレール・アイリ」こと一色愛梨の３人もス

ポットにあたっている。
そして、そんな記事を鈴音は端末で眺めながら考え込んでいた。
（……きっと、『あの子』も出るのでしょうね……）
鈴音の実家である市原家は、元々師族三十家の一つである一花家から降格した現状二家しかない『数字落ち』の一つ。３年前の佐渡侵攻阻止作戦に一花家が反発して不参加の姿勢を取ったため、数字を剥奪された経緯がある。ただ、上泉家によって迫害などの差別は禁じられたため、一般家庭として気兼ねなく生活できるレベルとなっていた。
数字落ちの際、分家である鈴音の一家は偶々剛三の息子と知己だったことから、彼の招きで関東に移り住んだ。北陸の本家のほうはどうやら没落したと噂で聞いた程度。その本家にいた娘――鈴音からすれば従妹である少女は百家の一つである十七夜家に養子として引き取られた、と風の噂程度に聞き及んだ。
そこそこ親交はあったものの、３年前の一件を最後にお互いの連絡を絶っていた。自分には自分の、彼女には彼女の道がある。なら、必要以上に干渉しないのが礼儀だろうと鈴音は考えていた。だが、年齢を考えるなら九校戦に出てきてもおかしくはないと踏んでいた。なので、十師族なら詳しいだろうと真由美に尋ねた。
「ふぇ？　ふぁふぉうふぇのふぇいひょう？」
「会長、まずは口の中のものを飲み込んでから言ってください。七草家の令嬢がはしたないと思われますよ？」
二人は真新しいスピード・シューティング練習場の休憩室にいた。３連覇は確実と言われている真由美も珍しく気合が入っている。
その理由は、この前日に練習場の動作確認も含めたデモンストレーションの試合。真由美は一高在籍時代にスピード・シューティング３連覇を成し遂げた佳奈との一騎打ちとなり、そこでは文字通りの〝早撃ち〟勝負へと化していた。
そのハイレベルな光景に見ていた生徒も目が釘付けとなった。
結果は――１００―９９、９８―１００、１００―１００（コンマ単位でも同タイム）。３セットで１勝１敗１分け。２年のブランクがあるにも拘らず、真由美と互角に撃ち合った佳奈の凄さを真由美は

感じ取っていた。
佳奈からあれだけ心を折りに来るようなことを選定会議の時に言われたが、それでも折れなかったのは父親譲りのしぶとさなのだろう。それを指摘すると本人は絶対に拗ねるので口に出すことはしないが。
それに、真由美は1年の新人戦で佳奈に大分お世話になっていた側であり、ある意味〝師匠と弟子〟みたいな関係ともいえた。生徒会の仕事を佳奈自ら教えてもらったりするなど、可愛がられていた節はあった。
だからこそ飴だけではなく鞭も振るったりすると理解はしている。それを納得できるかはまた別の問題でもあるが。
「むぐ……ふう、別にいいじゃない。ここには私とリンちゃんしかいないわけだし。それで十七夜家のことね……確か、三高の1年にいるわね。リンちゃんの知り合い？」
「まあ、そんなところです。というか、会長はその辺のこともご存じなのでしょう？」
「そりゃあ、リンちゃんの実家のことはある程度聞いてるわよ。でも、一花家の事情なんて詳しいことになったら、それこそあのタヌキオヤジに聞かないと分からない話よ？」
自分の父親を躊躇いなく狸と言ってしまう神経はともかく、真由美の言っていることは間違っていない。師族会議で決まったことは全て七草家現当主である弘一が知っており、その子どもである真由美に全て伝わるわけでもない。
真由美には兄二人がおり、彼らなら知っているかもしれない。だが、彼女自身彼らに貸しを作ってしまうような感じがしたことから、あまり聞く気にはなれなかった。
「……それで、どうするの？」
「向こうが話しかけてくれれば対応はしますが、昔のようにはいかないでしょう。私は『数字落ち（エクストラ）』、彼女は百家の人間ですから、寧ろこちらが気を遣わなければなりません」
「もう、一々卑下しないの。私はリンちゃんに何があっても、他の誰で

もないリンちゃんだって信頼してるんだから」
「身長だけ伸びずに、スタイルだけは立派になった会長が言うと説得力がありますね」
「ちょっと、リンちゃん!?　身長はもう伸びないって諦めてるけど、今でも気にしてるんだから！　というか、若干怒ってる!?」
その背丈のせいで『エルフィン・スナイパー』という異名まで付けられている真由美。
本人は嫌がっているが、各種メディアでは大々的に『エルフィン・スナイパー、スピード・シューティング3連覇なるか』という見出しまで付くほどの名の売れよう。加えて十師族の一つである七草家長女というネームバリューから、男性だけでなく女性からも『お姉様』と呼ばれるほどの人気ぶり。
だが、当の本人は見るからに一人の男子にお熱である、と鈴音は断じる。婚約者のことは以前生徒会室で聞いていたが、どうやら上手くいっていない様子のようだ。
そのことを悪びれもしない真由美もどうなのかと思う部分はあるが、名家の座から落ちた身としては他人事みたいなもの、と鈴音は思っている節があるのは否定しない。
「怒ってはいませんよ？　少し呆れてるだけです。まあ、悠元君なら身長のことはあまり気にしないと思いますが……ライバルは多そうですね」
「……リンちゃん、最近辛辣じゃない？」
「美嘉先輩から『真由美(かいちょう)は甘やかすと調子に乗るから、厳しめに行かないと怠ける』とアドバイスを頂いたもので。頑張ったらこの前美嘉さんから頂いた悠元君の写真データでも」
「よーし、お姉ちゃん頑張っちゃうぞー！」
目の前にいる人間のご機嫌取(そうじゅう)りが本当に分かりやすくて助かる、と鈴音は思わなくもなかった。というか、気になる彼と並び立った場合、間違いなく姉よりも妹に見られるだろうということは……また別の機会の言葉として温存しようと思った鈴音であった。
◇　◇　◇

所変わって、バトル・ボード専用練習場。そのコース脇で競技用ウェットスーツを着ている摩利が体を休めていた。
すると、不意に差し出された冷たいスポーツドリンクが頬にあたり、摩利にしては珍しくも女性らしい悲鳴を上げた。
「ひゃっ!?……って、美嘉さん。驚かせないで下さいよ」
「ゴメンゴメン。でも、少しは水分取らないと午後から動けなくなるよ?」
「……いただきます」
それの仕掛け人もとい同じくウェットスーツを着ている美嘉は、むくれる摩利に軽い謝罪をしつつ言葉を返すと、摩利は渋々それを受け取って口にした。それを見た上で美嘉は摩利の隣に座った。先代と今代の風紀委員長という関係……それ以上に長男の関係もあって親戚という関係。そして、もう一つ…2人の間にはこのバトル・ボードで因縁に近い関係があった。
「昨年は辛勝といったところだったね……ていうか従姉妹みたいなものだし、敬語は要らないよ」
「……美嘉(おまえ)が出ていれば、また違ったのかもしれないがな」
「仮定の話でしかないよ。それに、元々バトル・ボードは姉さんが女子アイス・ピラーズ・ブレイクにいたからそれに避けていたようなもの。私の我侭で総合優勝を逃すようなことは御免だったし」
美嘉も一つ下である現3年メンバーの実力を高く評価していた。だからこそ得意としていたクラウド・ボールはともかく、バトル・ボードに摩利が出場することと佳奈の穴を埋めるためにアイス・ピラーズ・ブレイクへと競技変更を申し出た。
それを摩利からすれば『勝ち逃げ』と挑発されるような行為に思えてしまったことがあり、昨年のメンバー選定会議で険悪なムードが漂った。
「分かってはいるのだがな。チームリーダーとしての重さや総合優勝のために、時として妥協をしなければならないというのは」
「ここは私が譲るべきと思った。でも、摩利には悪いことしたなって思ったのは事実だよ」

「いや……私もそういう意味で未熟だと昨年の九校戦後に気付いた」
昨年の本戦女子バトル・ボード決勝。水に関わる競技で強さを発揮する七高に逃げ切る形で優勝はしたものの、相手のほんの少しのミスに助けられた部分で勝てた所を摩利は感じ取っていた。
九校戦後に一昨年の競技映像を見て、摩利は改めて美嘉の力の凄さを感じ取った。本来減速して曲がるカーブを彼女はなんとボードをレーシングカーのようにドリフトさせるという技巧を見せていた。一昨年は摩利も新人戦に出ていたが、自分のことに集中していてそこまで気を配れる余裕がなかった。
通常、そんなことをすればボードへの抵抗と遠心力で選手が投げ出される危険を伴う行為。
美嘉は自身とボードの位置を相対的に固定させ、最も負荷が掛かりやすいボードのフィンとボード前方下部に移動・加速系統の水流操作術式を4ヶ所発生させた。つまり水の中で動くタイヤのような動きを意図的に発生させて、その手法を成立させたのだ。摩利が硬化魔法で自身とボードの相対位置を固定するという方法は彼女の手法の一部を使ったものである。
「でも、未熟だと分かってるなら方法はある……私の手法、試してみる気はある？　随時4種類のマルチ・キャストができる摩利なら、そんなに難しくはないと思う。ただ…」
「ただ？」
「最初に言っておくよ摩利。この方法はかなり体に負担が掛かる。私の場合はそこに4種類のマルチ・キャストを追加して軽減させてるけど、摩利の場合だと〝回数制限〟付きの代物。それでも……会得する気はある？」
美嘉の言っていることは事実だ。
何せ、この手法は最高速度をほぼ維持したままカーブを曲がりきる技術。一時も術式制御が手放せない上に、ドリフト中は身体への負荷軽減を鑑みて移動ベクトル・慣性・空気抵抗・遠心力の制御まで組み込むのが本来の手法。けれど、それは合計9個の術式のマルチ・キャスト――これは十師族クラスの魔法処理能力が必要になる。一定

の回数を超えれば肉体が悲鳴を上げることも美嘉は理解した上で〝回数制限〟という条件を付けた。
　それを聞いて摩利は少し考え込んだ後、真剣な表情を向けて言い放った。
「それを聞いて、私が断ると思うか？」
「まあ、断らないだろうね。摩利は強さに貪欲だし……練習では速度を落とした状態でやるから、そこまで負担にはならないし、万が一は私が止めるから。回数制限は全力でやって一日に〝３回〟。４回以上やったら、間違いなく骨が折れると考えて」
「了解だ。なら、早速始めようか〝姉貴〟」
「……ええ、〝妹〟だからって加減はしないからね？」
　一高の最強世代――その一角である摩利の闘志は燃え滾っていたのであった。

常識外れに常識は求められない

――西暦２０９５年７月１９日。

国立魔法大学付属第三高校は石川県金沢市の外れにある。

いや、この世界においては広域行政区となった以上「元・石川県」というのが正しい。けれども、今まで使い慣れていたものが抜け切れるわけでもなく、その土地柄の特性なども相まって旧都道府県制度に基づいた呼び名で呼称することが多い。

マスコミでも「石川行政区（旧石川県）」などという表記を未だに使い続けているあたり、人々の間での認識は都道府県という単位なのだろう。

十師族の一角を担う一条家はそこから徒歩で３０分ほどの距離にある。この二つの立地の因果関係は単なる偶然に基づくものであり、十師族の力によって第三高校の立地が決められたわけではない。

偶々学校を設立するだけの広い敷地がそこに合致して建設された、というだけの話である。

その一条家の座敷で、一条家現当主である一条剛毅（いちじょうごうき）は息子であり一条家の実質的次期当主である一条将輝（まさき）を呼び出した上で問いかけた。

「将輝、九校戦の準備は進んでいるか？」

「ああ、勿論だが……何か気になることでもあったのか、親父？」

「なに、今年の九校戦は私も見に行くからな。息子の晴れ舞台を見に行く程度のことだ」

これには将輝も珍しい、と言いたげな表情を見せていた。何分、一条家当主である以上様々な案件の仕事で忙しい身分だから、現地での観戦は難しいだろうと思っていた。

将輝としては、初参加となる九校戦は幾分気が楽だったところに、まさかの父親が来るという事態。一条の名を持つ者として無様な戦いは見せられないというプレッシャーが心なしか憎く感じた。

だが、そんな心境を見透かしたかのように剛毅は話を続ける。

「美登里や茜、瑠璃も観戦しに行く。その為に九校戦全体の予定は既

に空けている。緊急の用件が入らない限り、問題はないと踏んだ」
「なっ……そんな話、初耳だぞ!?」
「言わなかったからな。それに、お前に対してどうこう言うつもりはない。不服か?」
「いや、不服ではないが……単に俺が九校戦に出るというだけで会場に赴こうという気質でもないだろうに、親父は。まさか、三矢悠元の存在か? ジョージたちとも話したが、実力がまるで読めないと言っていた」
三高は一時期、他校の偵察も兼ねて数人の人間を一高の周辺に送って探らせていた。だが、その悉くが失敗に終わっている。撮ったはずのカメラの画像は全てピンボケであり、偵察に行った人間もその目標の人物を捉えられなかったらしい。
それを耳にした将輝は一高の人間にそこまでできる人間がいるとするなら、多分目の前にいる父親が気にしている人物――――三矢悠元ではないかと踏んでいた。
「将輝、うちのデータベースに九校戦の全ての試合の映像データが残っている。その中で三矢の人間が出たものを全て見てみろ……私から言えるのはそれだけだ」
どれか一つ、ではなく〝全て〟? 剛毅の言い放った言葉の意味を将輝は掴み損ねていたが、剛毅は瞼を閉じて黙り込んでいた。仕方なく将輝は座敷を後にし、自室に戻って端末から一条家のデータベースにアクセスし、過去の九校戦メンバーから出場種目を絞り込んでその映像を目にする。そして、将輝は剛毅の言っていた意味と彼が悠元を気に掛ける一端に触れることとなった。

◇ ◇ ◇

その翌日、三高の参謀を担っているツインテールの女子――――渡良瀬奈々枝(わたらせななえ)は絶賛悩んでいた。彼女が三高の偵察部隊を指揮していたのだが、その悉くが不発に終わって自分の席に突っ伏していたのだ。すると、そこに声をかけてきたのは愛梨だった。
「奈々枝……見るからに落ち込んでいますわね」
「……そりゃ落ち込むよ。私の魔法でも見破れないって、相手が普通

じゃない」
　奈々枝は金沢魔法理学研究所に両親が務めており、その縁で訓練がてら遊びに行っていた。愛梨や栞とはその時に出会ってからの付き合いで、将輝にとっての真紅郎みたいな存在に近い。彼女は新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイクに出場する。
　その彼女の魔法――――遠くのものをまるで近くにあるように認識する知覚系魔法『望遠探知（サイト・シーイング）』を使用しても判明できなかったことに奈々枝はショックを隠し切れなかった。
　既に九校の代表メンバーの名前が記載されたパンフレットは各校に配られている。彼女はそれを基に新人戦メンバーの調査を行ったのだが、男子メンバーの大半、女子メンバーの一部以外は空振りに終わっていた。
「ゴメン、愛梨。私でも、もうお手上げ」
「奈々枝が無理なら、他の人に頼んでも無理でしょう。寧ろ、半分は調べられたのですから上出来です」
「うう、やっぱり愛梨は優しいね……」
　優しい、という言葉に愛梨は少し引っ掛かりを覚えつつ、奈々枝がチェックを付けたパンフレットを見やる。男子で調べられなかったのは三名、女子が七名の１０名。その人物の中には男子二人が名前を挙げた「三矢悠元」もいた。
（三矢に六塚に五十嵐……十師族と百家ですか。お父様に聞けば教えてくれるのかもしれませんが……）
　女子は司波深雪、北山雫、光井ほのか、明智英美、里美スバル、滝川和美、春日菜々美の七名。彼女は知らないが、その殆どが達也の担当する女子メンバーである。ものの見事に調べられなかった理由も彼女たちが知るはずもない。そこにとある人物が大いに関係していることにも……。
　◇　◇　◇
「……どうしたの、将輝？」
「ん？　ああ、ジョージか……ちょっとな」
　真紅郎は普段なら訓練をしているであろう将輝が図書館にいるこ

とが不思議だった。彼の呼びかけに将輝は軽く答えつつも端末で映像をひたすら見続けていることに首を傾げ、好奇心からのぞき込むと……端末の画面に映っていたのは昨年の九校戦の映像――――本戦女子クラウド・ボール決勝のものだった。

「へぇ～、正道を貫く将輝にしては余念がないね。というか、惚れたの？」

「そういうんじゃないよ、ジョージ……昨日、親父から〝三矢の人間が出た試合を全て見てみろ〟と言われてな」

真紅郎も剛毅とは面識がある。あの人に限って冗談を言うとは思えない……きっと、それを通して将輝を一条を担う人間として育てようとしているのかもしれない。尤も、その親心を目の前にいる人間が理解できるかどうかというのは不明だが。

「それで、訓練もしないで映像を見てたってわけか……で、収穫はあった？」

真紅郎の問いかけに将輝は首を横に振った。その上で将輝は呟く。

「親父が言っていることも分からなくはない……彼らが使っている魔法技術は既に高校生のレベルを超えていた。そこから学ぶこともあるんだろう。けれど……それだったら〝全てを見ろ〟とは言わない筈だ」

将輝としても吸収できる部分があったのは事実。三矢家の凄さを痛感したのも事実。だが、それだけなら剛毅の出した課題の答えにほど遠いと将輝は感じていた。真紅郎はその画面に目を落とすと、あることに気付いた。

「ねえ、将輝。実は僕もちょっと調べたんだけど……この三矢美嘉って人、1年の時の成績とそれ以降の成績が乖離してることに気付いた？」

「え？……本当だ」

美嘉の記録を見た場合、1年の時点でも十師族に相応しい実績なのだが……2年、3年に上がるにつれてその記録も伸びていたのだ。つまり、3年前の敗戦を機に実力を伸ばしたと解釈できるわけだが……真紅郎はもう一つの事実を指摘した。

「それと、彼女の傾向だとその試合以外は圧倒的点差による2セット決着。決勝の後にクラウド・ボールの試合がないとはいえ、同じ十師族の人間相手に6セット前提の戦略なんて最早普通じゃないんだよ」
「……普通じゃない、か。ジョージ、それだともし三矢の出てくる競技に当たったとしたら……」
「まず普通の戦略なんて通用しない。三矢家は『多種類多重魔法制御』をより実戦的に組み込んでいるといってもいい。最悪、三高（ウチ）は2位、3位の確保だけを考えないといけなくなる」
　尤も、目立った功績のあった出場種目が男子1の女子3という比率のため、男子の情報はほぼ皆無と言っていい。兄がモノリス・コードに出たからと言って弟が同じ種目に出るとは必ずしも言えないからだ。なお、元継はモノリス・コード以外だとクラウド・ボールに出場していたぐらいだ。結果は語るまでもないだろう。
「なあ、ジョージ。三矢の人間が同じ十師族の人間に思えなくなってきたんだが」
「……大丈夫だよ、将輝。それは既に僕が通った道だから」
　将輝と真紅郎がそんなことを言い合った同じ頃、その渦中の人物は「……ん？　どっかのヘタレコンビの悪口を聞いたような気がする……」と零していたことを二人は知る由もなかった。

◇　◇　◇

「スピード・シューティングの練習の付き添い？」
「うん。ダメかな？」
　生徒会の仕事でスピード・シューティングの練習場に来ていた悠元は、練習中だった雫からそうお願いされた。元々そのサポートのつもりで来ていたので、雫のお願いを了承することにした。
　練習場では本番会場のような大型モニターこそないものの、スコア測定器と対戦者の名前表示ぐらいは備わっている。本番と同じ大きさ・形・重さのクレーを同等の速度で射出して、予選時のタイムアタックや対戦用のモードといった本番さながらの仕様となっている。
　それが2レーンもあり、レーンの間には壁で仕切られているために隣のレーンの音が入ることはない。なお、もう片方のレーンでは燈也

と森崎が対戦形式で模擬戦をしている最中だった。時間割り当て的には新人戦メンバー組であり、雫以外の女子二人は休憩中とのこと。
「それじゃあ、始めてくれ」
「うん」
そう言って雫はライフル型ＣＡＤを構える。本番さながらのシグナル音の後、得点フィールド内を囲むように雫の魔法が発動する。そして、射出されたクレーを振動破砕していく。それは達也が雫用に組んだ魔法――『能動空中機雷（アクティブ・エアーマイン）』である。
実は達也からもこの魔法の改良点がないか見てほしいといわれている。とはいえ、達也の理論的なアプローチと悠元の感覚的なアプローチでは魔法に対するニュアンスも大きく変わってくる。なので、まずは雫がその魔法をどれだけ使いこなせているかを見るべきと考え、タイムアタックをしてもらっているという訳だ。
実際にそれを見つつ、悠元は達也が実際に組んだ『アクティブ・エアーマイン』の起動式を持ち込んだ折りたたみ型端末で確認する。その無駄のない起動式に悠元は感嘆していた。
（スピード・シューティングの競技特性を生かして『本人が引き金を引くだけで処理する』……これ、どこに改良点を見出せと？）
実際にこれを変数化した術式を既に９９個用意している状態。これだけでも戦えなくはないのだが……すると、パーフェクトを告げる音が聞こえ、目線を戻すと魔法を解除して一息つく雫がいた。
「どうかな？」
「計測タイムは問題ない。過去の予選通過スコアから見ても上から数えたほうが早いけど……雫はそれでも不安が残ると？」
「そうだね。対戦形式になったら綺麗に決まるとも思えない。達也さんの腕や戦術は勿論信頼してる。でも、ほのかほどじゃないけど不安はあるかな」
確かに、三高に雫クラスの演算能力を持っている奴がいてもおかしくはない。なので、できることなら勝率を上げたいというのが雫の本音であった。
そこまで言われては知恵を振り絞るしかない。そうなると、既に組

まれている起動式を雫の特性に〝合わせる〟手法がいいだろう。……それをやってほしいから、達也は改良をお願いしたのかもしれない。
「雫、ちょっと見てほしい」
「これって……『アクティブ・エアーマイン』に複数の干渉を追加するの？」
「ああ。その魔法の有無や威力も全部〝自動変数生成〟させた術式を組む。これでも雫への処理負担は元の起動式より3割もカットできる」
　達也が組んだ原型の『アクティブ・エアーマイン』は振動・収束系統の2系統2種。だが、悠元によって手を加えられたこの起動式は加速・加重・振動・収束の複合術式。
　本来なら倍以上の負荷が掛かる複合術式だが、負荷を大幅軽減するために通常とは異なるアプローチができる悠元ならではのアイデアがあった。それはこの魔法を〝限られた人間しか本来の威力で行使できないようにする〟というものだ。
　現代魔法は想子波の波長をある程度カバーリングするための汎用性を突き詰めた結果、その分の余計な魔力を消費している。これを専用化記述によって悠元と達也、使用者である雫の想子波特性パターンに絞ることで、余分な想子消費を省いた上でより高速な術式読み込みが可能となった。雫だけでなく二人のパターンも入れているのは、起動式の調整をしやすくするための措置である。
　体感的には従来の想子消費を最大約6割削減、約半分の起動式読込時間削減で魔法式の展開作業に移れる計算となり、更には魔法演算領域への負荷も最大4割抑えることに成功した。
　その記述処理は一見すると分からないが、処理が施された同一の起動式を同時行使させることで初めてその暗号コードがわかる仕組み。だが、その記述が分かっても解除できるのは起動式開発者の達也に発案者の悠元、使用者の雫しかいない。
　何せ、その暗号を解くには特定のアルゴリズムに基づいた復号化処理が必要で、それをアルファベット10万文字分解読する必要があ

る。特定の想子波特性パターンを登録している人間だけがその暗号コードを無視して調整できるというわけだ。
　ようは、古式魔法における術式隠蔽の考え方を現代魔法に応用したやり方、と言えるだろう。
「達也さんも凄いけど、悠元も凄いんだね」
「所詮俺のは達也の猿真似だけどね。大本は達也が組んだ起動式だし……一応達也に見てもらって、採用するか否かの判断はアイツに任せる。雫もそれでいいか？」
「うん、ありがとう」
　達也に確認したところ、その術式を決勝リーグ用の起動式として例のライフルと併せて使うことになった。専用化の記述処理技術も一応内密に話したところ、達也は感謝すると言っていた。あれだけの起動式となると『魔法大全（インデックス）』への登録は避けられないと見たのだろう。
　ちなみに、登録者以外の人間が『アクティブ・エアーマイン』を使おうとした場合、クレーを辛うじて割る程度の威力しか出ないことは自分と達也だけの秘密である。

九校戦編

九校戦出発当日①

――――吉田家。古式魔法の一つである精霊魔法（吉田家では天神地祇の教義に従って神祇魔法と呼称している）の使い手の一族。その一人である吉田幹比古は〝神童〟と呼ばれるほどの人物。

悠元も彼の父親と面識があり、その縁で彼とも知り合った。尤も、その時の彼は天才風を吹かせており、傲慢ちきな面があったのは否定しない。だが、今年の始めからまともに会うこともなくなってしまった。

その彼は第一高校に入学していたのだが、二科生。しかも、達也と同じ1年E組の人間として入学していた。少なくとも彼の魔法力に影響する何かが起こったとみるべきだろうが、今述べたいのはそんなことではなかった。

「達也、とうとう仲人でも始めたのか？」

「お前は出合い頭に何を言っているんだ……というか、いつの間に来ていたんだ……」

放課後、実験棟から強烈な霊子の波動を感知してその発生源に赴いたところ、その現場にいるのは達也、美月、そして幹比古の三人。冗談交じりに呟いた悠元の言葉に達也は息を吐きつつ窘めた。

首を傾げる美月に、どこか落ち着かないような様子の幹比古。これは自分の家柄のことだろうと察しつつ、悠元が幹比古に話しかけた。

「別に説教するつもりでも脅すつもりでもないのに何ビビってるんだ、幹比古。そんなに俺が本当の名字を明かさなかったことに不満があるのか？」

「え？　悠元さんは吉田君と知り合いなんですか？」

「こいつがエリカと知り合う以前の話だな。尤も、その時のこいつは」

「そ、それは言わないでくれ！　……全く、エリカの言う通り変わってないね」

悠元が続きを言おうとしたところで幹比古からのストップがか

かった。達也に事情を尋ねると、幹比古が精霊魔法の練習をしていたところに美月が邪魔をして、偶々近くにいた達也が対処をしたという話だ。
「成程ね……これでも頻繁にE組は行っていたのにすれ違わなかったのは、俺のこともあるけどエリカのこともか。ま、こればかりは本人の問題だけれど……偶には一度呼吸を置いたほうがいいと思うけどな。魔法は本人の精神状態をダイレクトに反映させるいわば〝心の鏡〟だ」
「っ……本当に、敵わないな」
「深くは聞かないけどな。ま、名前の呼び方は変わらないから、それで呼んでくれ。守らなかったらエリカと同じ呼び名を使う」
「善処するから、それだけはやめてくれ……改めてよろしく、悠元」
ともあれ、魔法の練習はいいがあまり迷惑のかからないところでやるといい、と一応の注意をしたところで解散となった。悠元は達也と美月の二人と共に、他の面々と合流するため移動していた。その最中、達也が問いかけてきた。
「ところで悠元、お前の使える古式魔法に精霊魔法はあるのか？」
「ああ。新陰流の秘術・外典（がいてん）の両方、各々の流儀に即した精霊魔法がある。前者の場合は陰陽道、後者の場合は宗教に根付いたものになる」
「陰陽道に精霊、ですか？　式神を使役するという印象が強いんですが…」
陰陽道と聞くと式神を使役して悪霊を退治するというイメージがある。実際のところ自分もそう思っていたが、陰陽道は思ったよりも奥が深い代物だった。
万物は陰と陽の二気から生ずるとする陰陽思想と、木・火・土・金・水の五行からなるとする五行思想を組み合わせ、自然界の陰陽と五行の変化を観察して瑞祥・災厄を判断し、吉凶を占う実用的技術――というのが陰陽道の基本概念となる。そのため、属性の概念を持ちうる精霊魔法の気質を保持している形だ。
新陰流剣武術の精霊魔法は、その開祖である人間が京都に赴いた折、その道に詳しい公家から陰陽道を学んでいたと信綱が遺した手記

に書かれていた。尤も、これは口伝の部分が多いために門外不出の〝秘術〟という類となっている。
　それ以外の真言宗や天台宗などから取り入れた術については、現存しているものも多いために「外に出しても問題ない」とする〝外典〟という位置付けになっている、という訳だ。
「本来はそういう類の触媒が必要なんだが、現代魔法の形式も取り入れることでＣＡＤを使えば発動できるようになった。新陰流はそういう柔軟さも兼ね備えているからな。尤も、人様の前でホイホイ使えるものじゃない」
　秘術も色々ヤバいものがあるわけだが、この類は一番ヤバい。何せ、それこそファンタジーで起こすような『手から炎を出す』とか『地形を変形させる』とか『洪水を起こす』とかの災害レベルの話だ。そら門外不出になると思った。
　この系統の陰陽道を考えた人は一体誰なんだと遡ったら、その人物の名前――『安倍晴明（あべのせいめい）』で全てを察した。その時点で考えるのを諦めた。こっから源義経（みなもとのよしつね）とか菅原道真（すがわらのみちざね）の超能力者説とかが出てきても、もう驚かないと決めた。
「成程。師匠も外典に属しているものならと言った訳か」
「そういうこと。新陰流の忍術はいわば古式魔法の図書館というわけさ」
「えっと、何が何だか凄い話ですけど……聞かなかったことにしておきますね」
　正直、この程度のことなど同じ類の古式魔法使いなら知っていて当たり前の情報なので、とりわけ隠すほどのことでもない。それに、悠元が古式魔法を学んだのはあくまでも知識という〝保険〟の意味合いが強い。使うとは言っても、精々認識阻害ぐらいでしかない。
　なお、悠元が近づいてきたことに直前まで三人が気付かなかったのは、5年の集中修練で無意識に刷り込まれた〝人に気付かせない歩き方〟をしているせいで、悠元自身が意識しないと周囲に気付かれなかった。これもある意味問題かもしれない。
◇　◇　◇

九校戦本番まで2週間にも満たない練習期間ではあったが、各々のテコ入れは完了した。
本戦組のほうだが、女子スピード・シューティングと女子クラウド・ボールで真由美の気合は十分。真由美本人は新人戦組の手伝いもしていたが、あれは昨年の腹いせも含まれているのだろう……摩利から鉄拳と説教を受けていたことからして、まず間違いないと思う。
その摩利が出ることになる女子バトル・ボードも、美嘉から教わった手法を持ち前の貪欲さで習得。とはいえ、それを使うのは七高相手の時だけとなる。ミラージ・バットも準備はできているらしい。他のバトル・ボード組はというと、服部が大分仕上がっていると美嘉直々に褒めていた。
女子バトル・ボードでは五十嵐亜実も出る。一応あずさ経由で亜実の適性に合わせた起動式は渡しているので、大丈夫だろう。空気で水面に干渉というのも中々に面白いと思う。
男子クラウド・ボールでは桐原が気合十分といった感じだ。紗耶香にいいところを見せたいという気持ちなのかもしれないが、本戦は3年生もいる以上油断はできない。女子クラウド・ボールに出る真由美は先に触れたので省略。
男子アイス・ピラーズ・ブレイクの克人、女子アイス・ピラーズ・ブレイクの花音も問題はなし。啓の技量が原作よりも上がっているので、花音が後れを取ることはないだろう。本戦モノリス・コードも克人がいる以上下手を打つことはないと思うが。
続いて新人戦組。
スピード・シューティングでは男子の燈也と森崎、女子の雫と英美、和美もほぼ仕上がっているようだ。懸念は三高の男子に「カーディナル・ジョージ」がいることと、女子の十七夜栞あたりだろう。その辺は達也も認識しているし、作戦は立案済みだ。
バトル・ボードでは男子の鷹輔を美嘉が摩利の練習の合間に鍛え、女子のほのかについては達也がしっかりフォローしていた。普段通りの走りができれば結果も期待できるだろう。女子のほうは三高の四十九院沓子が強敵となりうる。

クラウド・ボールについては、男子の燈也に敵う相手がまずいない。体力面で燈也のような芸当（富士山頂往復ジョギング）ができる人間などまず皆無に近い。女子ではスバルと菜々美が出ることになるが、彼女らにもテコ入れは済んでいる。アイス・ピラーズ・ブレイクの関係上達也はフォローできないが、啓とあずさがフォローに入ってくれるので問題はないだろう。

そのアイス・ピラーズ・ブレイクなのだが……準備は数回の練習で既に感覚を掴んでいるので問題はないと悠元は判断している。なお、同じ競技に出る深雪から「私の着る衣装を選んでください」と言われ、無難に原作知識から白の単衣に緋色の女袴をチョイスした。

あの身なりなら巫女と言われても遜色ないだろう。本人は凄く喜んでいたのでこれでいいか、と納得した。達也からは「まあ、いいか。深雪が納得してるし」と諦め気味に呟いていた。

女子の深雪、雫、英美も準備は万端だ。で、深雪から『私も新しい魔法が使いたい』ということで（達也から［アクティブ・エアーマイン］改良の件が伝わったため）振動加減速系統の起動式を一つ渡している。

雫にはスピード・シューティングの件があるため何も渡していない（雫本人が固辞した）が、英美には彼女の魔法特性に合わせた［インビジブル・ブリット］の起動式を渡している……完全に「カーディナル・ジョージ」泣かせである。

そういや、俺が着ることになる衣装はどうなるのか。いや、目立つことは覚悟してるけど変なのはやめてくれよ？　マジで。何とか三矢の良心が働いてくれることを切に祈る……今更ながら、うちの家の良心って母親と長男だと思う。あと、侍郎をはじめとした矢車家の方々。

ミラージ・バットは達也がエンジニアを担当することになるので問題なし。

で、残るはモノリス・コードなんだが……三人全員２種目組なので、成績次第では変に引き摺りかねない。自分自身も気を引き締めるが、森崎と鷹輔の問題が依然として大きい。運よく勝ち残れたとしても、

三高相手は……かなり自発的に動かないと無理だろう。
戦略・戦術面については鈴音と数回の打ち合わせで確認済みだが、森崎がプライドに引き摺られて独断での行動を取られたら厳しくなる。まあ、草原エリア以外ならどうにでもなる算段は付けた。
これに加えてＣＡＤ関連も万全に整えた。例の術式に関しても対策は講じた。その意味で爺さんの知識は非常に役立ったといえる。
さて、後はなるようになれ、だな。

◇　◇　◇

――２０９５年８月１日。
一高の代表メンバーは、九校戦の会場である富士演習場南東エリアに向けて出発することになる。九校戦の前々日入りは、遠方からの学校に練習場割り当てが優先されるためと、懇親会がこの日の夜に予定されているため、それに合わせての出発である。
尤も、一高の場合は自前の練習場を持った形なので、そこまで目くじらを立てるほどでもない。寧ろ他校から嫉妬の対象になっているかもしれないが。
「にしても、委員長はよく不満を漏らしませんでしたね？　千代田先輩あたりなら平気で言いそうなものなのに」
「立場が違うというのは理解しているさ。君もいずれ分かるだろう」
「魔法使いの柵も大変なものだな」
どう考えても達也が言っていい台詞じゃないだろう、と内心で毒づきつつ、悠元は達也や摩利の三人で代表選手が乗り込んでいるバスの乗降口付近にいた。厳密には達也がメンバーの出席確認のため、悠元は遅れている人物との連絡役、摩利は二人の付き添いという形だ。
流石に摩利は日傘を差しているが、二人は日傘ではなく、その上に浮かんでいる障壁のようなかなり薄い何かで日差しを遮っていた。
「しかし、器用なものだな。光波振動系か？」
「それと障壁魔法の併用ですね。光の屈折度を意図的に変化させて太陽光をシャットアウトしてます。これで単一工程術式よりも想子消費は少ないですが」
「単一工程よりも想子消費が少ない複合術式ってだけでおかしいと思

うぞ？」
「……まあ、美嘉もこんなことを連発していたから今更だが」
練習期間の後、摩利が美嘉のことを呼び捨てになっていた。三矢家と渡辺家の関係に加えて美嘉の性格を考えるならおかしくはない。
その繋がりから一つ。長男の元治と婚約相手である穂波についてだが、昨年6月に身内だけ（三矢家とその使用人たち、それと渡辺家の方々）で結婚式を挙げた。その時穂波が投げたウェディングブーケを受け取ったのは摩利だった……既定路線かもしれないが、彼女の彼氏の妹は大変だろうなと思う。

◇　◇　◇

他の十師族にはその結婚報告だけ書状で送るという形をとった。近隣諸国の状況もあるため、各々の事情に配慮してご挨拶だけという建前も添えて。
その中で内密ながら四葉家現当主である真夜がお祝いの書状を返事として送った。その使いを頼まれたのは黒羽家の人間――文弥と亜夜子の二人で、この時ばかりは悠元が対応した。
三矢家の人間で彼らを知っているとなれば、当然の流れともいえた……尚、文弥は尾行の関係上女装していた。無論、向こうは驚いていた。何せ、以前出会った人間が同じ十師族の直系だとは思わなかったらしい。
四葉家現当主はその事情を知っているはずなのに伝わってないということは、彼らの父親で情報が止まっていたのだろうと推測できる。そこにどんな思惑があるのかまでは読めないが。
「驚きました……まさか十師族の、それも三矢の一族だとは」
「あの時は訳あって隠していたからな。まあ、今後も友人としていい関係は持っておきたいと思ってるよ。家柄とか難しいことはあるけれど」
「そうですか。では、今後もよろしくお願いします。悠元さん」
文弥の女装については敢えて触れなかったが、そこで亜夜子が『よく文弥と分かりましたね？』と爆弾を投下した。慌てる文弥の肩に手を置きつつ、『仕方ないと分かっているから触れなかっただけだよ。

本人も嫌がるだろうし』と返しておいた。
そしたら文弥から『お兄さんと呼んでいいですか!?』と言われてしまった……その提案は断りつつ、友人としての付き合いならと言い含め、男（の娘）を愛でる趣味はございませんと断言しておいた。亜夜子は笑いを堪えるように顔を背けていたが。
こういう役割って達也の専売特許の筈なんだけどね。理解できぬ。

九校戦出発当日②

さて、本来なら既に会場へ向けて出発している筈のバスが未だ第一高校にいて、悠元と達也、それに摩利が立っているのはこの3時間前に遡る。

悠元は既にバスに乗り込んでいたのだが、ここでポケットにしまっていた携帯端末に連絡が入り、音声通話モードで繋げると聞こえてきたのは真由美の声だった。

『もしもし、悠君？』

「珍しいですね。どうしました？」

『実は、急に家の用事が入って集合時間に間に合わないの。……あんのタヌキオヤジ……』

後半のほうに呟いた言葉を聞かなかったことにしつつ、悠元は通話状態のまま立ち上がってバスを降りた。これには隣に座っていた深雪が少し寂しそうな表情をしたことにほのかが気付いたが、隣の席にいる雫も不機嫌になっていたのでそれを諌める側になった。

「悠元君、どうしたんだ？」

「会長が間に合わないそうで……現地で合流するとは言っているのですが」

バスを降りた悠元は外に立っている達也と摩利に事情を説明。ここで既に乗っている克人に相談しなかったのは、彼なら同じ立場として真由美の意見を尊重するだろうと踏んでいたからだ。

摩利と達也もその意見を尊重したかったが、代表メンバーの半数以上が下手に反発するのを避けて待つ方針に転換。真由美にもその意向を伝えたところ、溜息交じりに了解の意思を伝えて通話が切れた。他のメンバーにも真由美が遅れるため、それを待つということも伝えられたお蔭で特に大きな混乱はなかった。長時間待つということに不貞腐れる面々がいたのも無理はない。

真由美が告げた家の用事に関してだが、七草家当主だって第一高校のスケジュールぐらいは把握している筈だ。彼の子どもは兄が二人いるのに、3番目である真由美を無理やり呼び止めてまでそれに対応

させた時点である程度の予測は付く。七草家は十師族でも社交的な部類なので、悠元の実家である三矢家が余裕をもって出発の3日前に呼び出したのに、その辺の気遣いをできない訳がない。
　つまり、『七草家現当主ですら配慮せねばならない相手であり、尚且つ九校戦に出場する真由美にも面識があって損はない人物が急に来訪した』と考えるのが妥当。それに該当しうるのは3名だが、うち2名は既に現地入りしていると連絡があった。そうなると、残るは一人という訳だ。
　というか、これで原作通りのことが起こったら『その人物と七草家現当主が一高の代表メンバーが接触事故に巻き込まれることを知って、真由美の安全だけを確保しようとした』という疑惑を持たれる可能性に気付いていないのだろうか？
　その辺を十師族の力と七草家お得意の情報操作でどうにかする算段なのだろうが……この時点で七草家現当主と『かの人物』が接触していたとしても不思議ではない。この辺りは上泉家の領分なので、そちらについては全面的に任せるつもりだ。
　まあ、九校戦を楽しみにしている〝あの人物〟のご機嫌をみすみす損ねるようなことは率先してする必要もないだろう……なので、この可能性はないに等しいと考えておくことにする。
　大分話は逸れたが、その遅れている人物である真由美を待った結果、今に至るという訳だ。そして、その当人はサマードレス姿で軽快に鳴るサンダルのヒール音をＢＧＭにするかのごとく走ってきた。
「ごめんなさーい！」
「遅いぞ、真由美」
「ごめんごめん。２人もごめんなさいね」
「いえ、お気遣いなく。悠元、後は任せた」
　集合時間から1時間半の遅れで真由美が姿を見せた。達也は参加者一覧が表示された端末にチェックを入れると、悠元にそう言って技術スタッフの作業車両に向かって歩いて行った。彼の言った台詞は真由美のことや深雪のことだけではない、というのは当人同士にしか解らないが。摩利が日傘を畳んで乗り込み、真由美も乗り込もうとし

たところで悠元のほうを向いた。
「ところで悠君。これ、どうかしら？」
「お似合いだと思います。チームリーダーとしてアイドル的役割を買って出るとは、流石というべきでしょう。尤も、当校のメンバーだけでなく他校のメンバーまで引き寄せそうな気はしますが」
「……ふふ、ありがとう」
　真由美はそう言って指を絡めた両手を腰の前に持ってきて、上目遣いですり寄る。低い身長とそれに合わせた腰回りに対して、同年代の平均より大きな胸によってハッキリと谷間が見えている。そういうのは婚約者相手にやってください、と悠元は内心で溜息を吐いた。
「さて、時間も押していますので、早く乗り込んでください」
「え？　なら」
「あいにく自分の席は決まってますので、お気遣いなく。それに、会長も朝早くから〝閣下〟とお会いになられたようですから、恐らくお疲れでしょう。バスの中なら少しは休めるかと思われます」
　どうせ自分の隣に座らせようとしたのだろうが、悠元の席は既に〝指定席〟である。そこからずれたらバスの中が一気に極寒の世界に包まれかねないと理解しているからこそ、有無を言わせず真由美をバスの中に乗せたのだった。
　その真由美はというと、彼が言い放った単語に対してなぜ家の用事としか言っていない筈なのにどうやってそこまで理解したのか、ということに目を白黒させていた。
◇　◇　◇
「――――もう、悠君ってば私のことを何だと思ってるのかしら。せっかく隣に誘おうと思ったのに、深雪さんの隣に座っちゃうし」
　走り出したバスの中で、真由美は先ほどの驚きを忘れるかのごとく頬を膨らませて怒っていた。その様子を通路側の隣席に座る鈴音が生暖かい目で見ていた。その発言は受け取り方次第で深雪を〝恋敵〟――――ライバル視しているような風にも受け取れるだろう、と思いつつ淡々と呟く。
「的確な判断かと」

「リンちゃん？　今なんて言ったの？」
　鈴音の言葉に対して朗らかな声ではあるが、明らかに目が笑っていない怖い笑顔を浮かべる真由美。だが、その程度のことに動じることもなく鈴音は断じるように言い切る。
「会長の餌食を避ける、という意味において的確な判断だと申し上げましたが？」
「ちょっと!?　それは酷くない？」
「尤も、彼の渾名である〝手品師（マジシャン）〟の如く、会長の『魔顔（まがん）』も綺麗に躱されて通用しないでしょう」
　口で発言されただけなのだが、真由美は何故か鈴音の言葉を「魔眼」ではなく「魔顔（まがん）」で認識して、憤然とした様子で反論する。
「リンちゃん！　……もう、知らないっ」
　どうこう言おうとも平然とした友人の様子を見て、不貞寝するように目線を窓の外に向けた。すると、彼女の様子を心配してなのか、手にブランケットを持っている服部の姿に鈴音が気付いた。
「会長、やはりご気分が悪いんですか……？」
「はんぞーくん？　ええっと、そういうんじゃないんだけど……」
「他の生徒に心配を掛けたくない、という会長のお心を尊重すべきと思いますが、体調を崩されては元も子も……」
　服部の言葉に周りからそういう風に見えたのか、と思いつつも真由美は返したが、チームリーダーである真由美を心配してかやや強気な部分も見え隠れする服部が視線を下の方向に向けると、真由美がやや乱雑に座っていたせいか、サマードレスがめくれて太ももの一部が見えていた。これを見た瞬間、頬が赤くなっていって言葉のトーンが落ちていく服部。ここに鈴音が割って入る。
「服部副会長。どこを見ているんです？」
「え!?　あ、いえ、そ、そうだ、会長にブランケットをと」
「そうですか……では、遠慮なくどうぞ」
（何をやってるんだ、あいつらは……）
　態と胸元を手で隠しつつ期待の眼差しを向ける真由美。完全に悪乗りして遠慮なく掛けてくださいと言い放った鈴音。そして、両手に

ブランケットを持ったまま緊張のあまりフリーズしている服部。……最早茶番ともいうべき光景に摩利が溜息を吐く。

真由美がああやって服部を弄り、服部はそのストレスを二科生に向けて必要以上に見下す態度をとり、そんな様子を真由美が見て思い悩むという完全な悪循環を起こしているのだと摩利は睨んでいた。というか、昨年度後半の段階で美嘉が卒業する際にそのことを指摘していた。

ただ、悠元の存在によって真由美が服部を弄ることは減ったものの、服部としては悶々としてストレスを溜めているような節が見られる。そして悪循環は若干続いているような節がある……結果的に服部自身が割り切れていないのだな、と摩利は自分の中で結論付けた。

とは言うものの、真由美が自分よりも遥かに大きな気苦労を常日頃抱えている、ということも、摩利は知っている。

摩利の実家である渡辺家は家系こそ古いものの、あの渡辺綱（わたなべのつな）の末裔から一度は衰退したが、魔法使いの家系として百家の支流の一つに名を連ねた家柄。

その中で摩利は一種の先祖返りともいうべきか、親類縁者の中で突出した魔法の才能を発揮していて、家族からの期待も大きい。ただ、立ち位置的に百家の末流なので、魔法師社会においてはそこまで話題にならないだろうと摩利は思っていた……3年前までは。

大亜連合による沖縄侵攻阻止の2ヶ月後、家に30歳前後ぐらいの女性がやってきた。

その隣には前に摩利が通っている剣術の道場で見たことのある男性――上泉剛三（かみいずみごうぞう）と名乗る人物が彼女――桜井穂波（さくらいほなみ）を渡辺家の養女として迎え入れてほしいと願い出た。上泉家は新陰流剣武術で名を馳せた古式魔法の名家。名立たる魔法使いの家系でありながら数字を持たず、それでいて十師族に多大な影響を与えることから『零番目の十師族（ソーサリー・オブ・ゼロ）』とも言われた一族。

その申し出を渡辺家当主は快く引き受け、この8ヶ月後に剛三から穂波が三矢家長男である三矢元治（みつやもとはる）と婚約したことを発表した。つまり、摩利の実家はこれで十師族と義理の血縁関係を持ったということ

になり、百家支流の中における地位は高くなった。
尤も、摩利が同じ百家である千葉家の人間と恋仲だということは剛三も知っており、彼の取り成しで見合いの話が一切来ていないことを父親から聞いて内心安堵していた。
それに対して、現在、四葉家や三矢家と並んで十師族のトップに君臨している七草家の、跡取りでなくとも長女である真由美には、高校在学以前から縁談が舞い込んでいて、現在は同じ十師族である五輪家の長男と婚約関係にあると本人から聞いた（最近は良い関係と言えなくなってきているらしいが……）。
それでなくとも彼女自身、十師族の中で見ても「傑出した」と言えるほどの魔法の才能を持つ、将来の魔法界のサラブレッドだ。加えて生徒会長であることから要らざる気苦労を背負い込んでいる。いくら芯がタフと言っても、楽なことではない。なので、多少は見逃してやるべきだ、と摩利は思っている。
真由美で「傑出」という言葉を使ったが、では、三矢家の人たちはどういう評価を受けているのか、ということになるだろうが……「埒外」という言葉しか出てこない、というのが魔法界の偽らざる評価だ。
公表されている6人の現当主の子達のうち、長男以外の5人が突出して魔法の才能を発揮している状況（ここには新入生総代という形で才能を示した悠元も入る）。他の十師族の同年代から見てもあり得ない、といえるほどの力を持っている。
無論、既に上泉家へ嫁いだ次男は無理だが、長女から三女の3人に加えて悠元にも縁談の話は来ている。それだけの力ということと十師族としての立場から彼らを欲しがる家は多い。無論、他の十師族からも縁談の話は来ているが、丁重に断っている。理由は『本人たちが前向きではない』というのが元の言い分だった。
自身が第三研のオーナーである上泉家の人間を妻に迎え、長男が間接的に四葉家と縁を結び、次男が上泉家へ婿に行った。この時点でかなりのアドバンテージを得ている以上、元からすれば無理をする必要などない。
加えて自身の子ども達が常識外れの実力を手にした以上、三矢家と

して言うなら当分十師族の座は固いだろうとみている。
閑話休題。
摩利はそんな光景から窓の外に目を向ける。摩利の席は通路側なので、自ずと窓側に座る女子生徒――――２年生、千代田花音が目に入る形となり、その視線に花音が気付く。
「どうしましたか？」
「いや、窓の外を見ようと思っただけさ」
花音は摩利が次の風紀委員長にしようと目論んでいる人物であり、そのため達也に引き継ぎ資料を作らせていた（悠元もその一部を手伝う羽目となった）。
花音の実家である千代田家は本当の意味での「百家」――――その本流を担う家系の一つである。「十の位の次は百の位」みたいな洒落ではあるが、十師族・師補十八家に次ぐ家柄という意味を持つ。
十師族自体も１０の師族だけで構成されているわけではなく、師補十八家と呼ばれる１８の家と合わせて２８の師族から、その時代に〝強力な〟魔法師を有する家を選出し、「十師族」としている。
現状、真由美の七草家は特に優秀な魔法師を輩出することによって、四葉家は現当主である四葉真夜が当代において世界最強と目される魔法師であることから。更に悠元の三矢家は現当主の子らが同年代でも十師族トップクラスの実力を発揮しており、その代において世界トップクラスになりうると目されていることから、十師族の三巨頭とまで言われるほど。
現在の十師族は「一条（いちじょう）」「二木（ふたつぎ）」「三矢（みつや）」「四葉（よつば）」「五輪（いつわ）」「六塚（むつづか）」「七草（さえぐさ）」「八代（やつしろ）」「九島（くどう）」「十文字（じゅうもんじ）」であり、数字並びが綺麗に揃っているのはこのシステムが成立してから初めてのこと。大抵は数字の重複や欠番が見られるほどだった。
十師族とその補欠ともいうべき師補十八家、そしてその次に位置しているのが本物の「百家」。その一つに名を連ねる千代田家の人間である花音はそれに相応しい魔法力を有している。尤も、その彼女は元気なさげな様子なのだが、それは彼女の家の事情などという面倒事からくるものではなかった。

「宿舎に着くまで、たかが2時間程度だろうに。そのぐらいも待てないのか？」
「あっ、それ、酷いですよ！　私だってそれぐらいは待てます！　でもでも、今日は啓と一緒にバス旅行できると思ってたんですから。大体……」
そう、花音と彼女が口にした五十里啓（いそりけい）は許婚の関係にある。そして啓が絡むと花音はかなりヒートアップする。親同士が決めたこととはいえ、恋愛関係を隠しもせず悪びれもしない。余計なことに首を突っ込んだな、と摩利は内心で若干後悔した。
尤も、花音がここまでヒートアップしているのには、摩利たちの一つ前に座っている一組の男女――――3年生の五十嵐亜実（いがらしつぐみ）と1年生の六塚燈也（むつづかとうや）の存在もあるのだと推測できた摩利であった。

九校戦出発当日③

花音が許婚である啓と一緒にバス旅行できないことを摩利に愚痴っているその一つ前の席では、燈也と亜実が揃って苦笑していた。後ろがこんな状況なので、下手なことは出来ないとお互いに惚気ないよう努めていた。

「えと、ごめんね？　私の我侭で……」

「いえ、お気遣いなく。というか、副会長さんが会長さんにあそこまで狼狽えるのは、初めて見ました」

「あー……3年の中では割とよく知られてることだよ」

その情報の発信源は言うまでもなく真由美。亜実自身は人伝でしかないが、燈也と付き合うようになった一件以降、真由美とも交友を持つことになった。尤も、燈也とのことを根掘り葉掘り聞いてきて、その度に摩利が鉄拳と説教を食らわして帰るのがお約束みたいなことになっている。

服部のことは入学当初、山岳部の部長から聞いた程度の情報しかなかったが、その後に交友を持った3年の三巨頭組や色々な先輩から話を聞けるようになった。そして、燈也は2年の沢木に連れられる形でマジック・マーシャル・アーツ部に顔を出すことになったのだが……そのことを思い出して亜実が苦笑した。

「いきなり勝負を吹っ掛けられるとは思いもしませんでしたよ……あの後で会頭が担いでいったのは悲壮感が漂ってましたけど」

「私は騒ぎになってるって真由美が言い出したから覗きに行ったけど」

「あの時の先輩の表情は忘れませんよ。まあ、気持ちは分かりますが」

それは、約3ヶ月前のこと。

燈也はいつものように山岳部へ向かうと、部長と話す沢木の姿があった。燈也は風紀委員の先輩だと新入生勧誘週間の時に見ていて、挨拶をした。そして山岳部部長の話を聞いた沢木が彼をマジック・マーシャル・アーツ部の見学に誘ったのだ。

部活動を複数掛け持ちすることは認められているが、燈也自身格闘

技はあまり好きではない。あくまでも体を鍛えるという範疇で空手を習っている程度。加えて、最近街中で出会った〝面白い和尚〟の勧めで週末の夜中に体術の稽古をつけてもらっているぐらい。

「部長から入部初日で上級トレーニングコース完走した、と聞いたからでしょうけど、入部はしないっていう条件で見学だけさせてもらうことになった……そこまではよかったんです」

そこにはトレーニングの一環ということで他の部員と模擬戦に近いスパーリングをしていた服部がいた。そこに同学年では名立たる実力者である沢木が燈也を連れてきたのだ。それを見やった服部が鋭い視線を燈也に向けた。

元々見学のつもりだったのに……と内心で呟きつつ、沢木からの説得で服部と模擬戦という名のスパーリングをする羽目となったのだ。気が付けばギャラリーまでできている始末に燈也は「見世物じゃないのに……」とぼやきたかった。

だが、2年で名立たる実力者と1年の十師族の直系が模擬戦で戦う。このネームバリューに見たいと思う人間がいてもおかしくはないと思いつつ、燈也は納得して気を引き締めた。

「最初見たときは心配だったよ……真由美に摩利、十文字君は静かに見てるし」

だが、試合展開は亜実が予想したものとは丁度逆の展開。部活動の模擬戦なので、近接戦闘のみに特化した戦い。服部は自己加速術式を使って切迫するが、燈也にとって熱量を持つものが相手なら見えているも同然の動き。その悉くを紙一重で躱し切った。

そして、服部の視界に真由美が入って気を取られた瞬間、燈也の寸勁擬きが服部の鳩尾に決まり、気絶した。明らかに実力で勝ったとは言えない結果に、燈也は深い溜息を吐いた。

その後、「気合を入れ直さないと駄目だな」と言いながら克人が服部を担いで行った(真由美の許可は既に取っていた)。その後、一体何が起きたのかを知っているのは……当人同士だけだろうと燈也は思った。

「他の人は気付いてなかったから良かったものの、真っ当な勝負をし

て勝った、なんて言えませんよ……というか、後ろのお二人も聞いてるんでしょう？」
「あ、ばれてた」
「まあ、あの時は私も花音も見ていたからな。しかし、亜実のあの狼狽えようは今でも思い出せるな。今にも飛び出しそうだった訳だし」
「ちょっと摩利？　それ人の事言えるのかなぁ？」
花音、摩利、そして亜実。偶然にも同じ「百家」と呼ばれる家柄の人間で、全員恋人以上の彼氏がいる。その内花音と亜実は許婚の立場であり、同じ学校の生徒に婚約者がいるという所も一緒のため、亜実と花音は学年の垣根を越えて仲良くなっていた。
「亜実なら解ってくれるよね？　私のこの想い！」
「勿論だよ、花音。私たち、友達でしょ？」
「……燈也君も大変だな」
「流石に慣れましたよ」
摩利と燈也が仲良くなったのは、同じように学年が２つ離れた人間と恋愛関係を結んでいることから、いわば先輩でもある摩利にアドバイスを聞くようになったからである。尤も、付き合う前から両想いの摩利のアドバイスがどこまで生きるかは不明瞭だが。
◇　◇　◇
そんな光景を若干呆れるように見つめていた悠元。席は摩利の一つ後ろの通路側で、窓側に深雪が、通路を挟んだ向かいには雫とほのかが座っている。そして、悠元のすぐ後ろの席には克人が座っている。
これは真由美を待っている間に、他の男子生徒がお近づきになろうと何かにつけて声を掛けてきた結果である。深雪の隣にいる悠元に対して羨ましさや妬ましさを込めた視線が飛び交うが、それを見た悠元が特定の人物（同じく代表である１年の男子生徒）に向けて殺気を飛ばして沈黙させた。
「やれやれ……落ち着く暇ぐらい欲しいものだ。で……いつまで機嫌を直さないのかな？」
「……別に、お兄様も悠元さんも外で待っている必要なんてありませ

んでしたのに」
　その深雪は不満げだった。悠元が隣の席だということで嬉しいことに変わりないのだが、それ以上に、真由美一人のためだけにこの炎天下を過ごしたということに怒っているのだ。それを見た悠元は一息吐いた上で深雪に話した。
「俺は連絡役、達也はメンバー確認のため、いつ来るか分からなかった人を待っていただけのこと。それにな、深雪。この程度の事なんて俺も達也も苦労だなんて思っていない……まあ、倒れるようなら深雪に看病を頼んでたかもしれないけど」
「そうなったら誠心誠意看病します！　……分かってはいます。悠元さんもお兄様もそういう人間だって」
　理解はできても納得できない、と意味を込めつつ呟く深雪。それを見た悠元は深雪の頭を撫でつつ呟いた。
「それに、達也のあの誠実さというか生真面目さは染み着いたようなものだ。それはアイツの妹として誇っていいと思う」
「悠元さん……」
「……で、雫は何故に俺の脇腹を抓る？」
「……鈍感」
「あ、あはははは……」
　その言葉と頭を撫でられる気持ち良さにうっとりしたような表情を浮かべる深雪。
　機嫌が直ったかと思いきや、今度は脇腹に痛みを感じて視線を向けると、悠元が座る席の肘掛けに腰掛けつつその痛みを与えている雫が、不機嫌そうな表情を隠すことなく悠元に毒舌のような言葉を吐き、それを見たほのかが苦笑していた。
　だが、そんな場面を打ち破ったのは花音の言葉だった。
「危ない！」
　その視線の先に映るのは、対向車線を走っている運転手側の前輪のタイヤがパンクしたオフロード車。他の生徒たちには「危ないなぁ……」「こんなところで……」といった言葉が聞こえてくる。だが、同じように窓側に座っていた燈也がここで声を上げたのだ。

「あれは……バスを減速させてください！　こっち側に飛んできます!!」
　一体何を言っているのかと思う他の生徒たち。だが、その車は燈也の予想通り中央のガード壁に接触した直後、上方向の力が掛かって走行車線を隔てる中央分離帯を飛び越えてきた。
　その瞬間、バスが急激に減速する。その影響で雫が体勢を崩して悠元に圧し掛かる形となったが、何とか支えた。バスは止まったが、その車は道路上を滑りながらバスに向かってくる。
「吹っ飛べ！」
「消えろ！」
「バカ、止めろ！」
　だが、ここで更に状況が悪化する。花音と森崎をはじめとした数人の生徒が、飛んでくる車に対して無秩序に魔法を発動させようとしたのだ。原作なら雫も加わるのだが、彼女は悠元に支えられた状態から立ち直ったばかりなので、そこまで気を回す余裕がなかった（心なしか頬が赤く染まっていたのは言うまでもないが）。
　結果、キャスト・ジャミングを放ったような状態――想子の相克によって嵐のような状態を引き起こしていた。この状況で高い事象干渉力を持つ人間となれば……摩利は十文字に声を掛ける。
「十文字！」
「防御だけなら可能だが、想子の嵐が酷い。消火までとなると…」
　この状況は自分だけで乗り切るのは難しい、という克人の滅多に見せない焦りの表情を見て摩利はどうするべきか、と考えたところに提案したのは深雪だった。
「私が火を消します。悠元さん！」
「ああ。燈也、減速を頼めるか？」
「それぐらいなら！」
　悠元は深雪の言葉を聞きつつ、燈也に向かってくる車の減速を頼む。この状況なら克人が障壁魔法を使ってくれることも織り込んだ上で、懐から『ワルキューレ』を取り出す。躊躇うことなく引き金を引き、向かってくる車の無秩序に発動した魔法式を綺麗に吹き飛ばし

た。
　それを見た深雪が魔法で自動車を凍らせるわけでもなく、ドライバーを空気窒息させるわけでもなく、常温へ冷却することにより消火させる魔法を発動。その後、燈也がその消火した自動車を、魔法で摩擦によって生じる熱エネルギーを全て空気抵抗のエネルギーに変換させる形で速やかに減速。念のためと克人は障壁魔法を展開しておいたが、それに届く前で自動車は完全に停止した。
「よし。深雪、ちょっと失礼」
「え、悠元さん!?」
　そして、悠元が深雪に声を掛けつつ、窓を開けて外に飛び降りた。『ワルキューレ』で燃料系統の〝凍結〟を行ったうえで、ドアの接続部だけをピンポイントで〝融解〟させる。ドアを取り外して運転手を引っ張り出し、地面に寝かせた上で安否を確認するが、既に息絶えていた。
（免許証は……やっぱり『例の連中』絡みか）
　前もってある程度の情報は自分でも調べていたが、まさかそれに当たるとは……と悠元は内心溜息を吐きたかった。
　転生特典の一つである『天神の眼（オシリス・サイト）』の特性には〝瞬間記憶能力〟の側面もあり、一度見た情報は忘れずに保持される特性がある。そのため、『八咫鏡（ヤタノカガミ）』によって得られた情報を一々読み返す必要がない。免許証に書かれた名前は情報収集の過程でふと目に入った「関係者」であることはすぐに理解できた。
　更に自身の記憶や魔法から必要な情報を電子情報に複製・変換する魔法――電子変換魔法『情報編纂（メモリーライズ）』によって先ほど見た現象を映像のデータとして落とし込むこともできる。この魔法は感応石のような魔法ができないかと考えていた時に組み上がった偶然の産物で、3年前の時に風間少佐（当時は大尉）へ見せた航空写真映像は『万華鏡』による瞬間記憶から変換して端末のデータメモリに落とし込んだもの。
　別に軍事衛星ぐらい『八咫鏡』で乗っ取ることは出来るが、そこまでする必要もないと思ったから回りくどい手段を使っているのは言

うまでもないが。
とりあえず、このままでは後続の車の渋滞になりかねないため、自動車を重力制御術式で持ち上げて移動させる。厳密には引っ繰り返っている自動車に飛行術式を使用しているのだが、手を添えておけば持ち上げているようにも見えるだろう、という目論見があったのは否定しない。
すると、バスの後ろに止まっていた作業車両から達也が駆け寄ってきた。達也には悠元が使っている魔法の正体がわかったようで、諦めた様な表情を向けていた。
「悠元……いや、それなら持ち上げているようにしか見えないか。で、運転手は？」
「即死だな。ま、事故だなんて言えるものじゃないし……気付いたのは〝3人〟だな」
「俺とお前は分かるとして、誰だ？」
「燈也だ。アイツが真っ先にバスを止めるように声を上げた。多分、残留想子が検出されない最小出力の魔法行使に気付いたんだろう」
詳しいことは本人に聞かないと分からないが、流石は十師族の一人というべきだろう。そのお蔭で本来よりもスムーズに減速することができていたと思うし、車をほぼ原形のままで残すことに成功した。
ドアを外したのは運転手の救助を優先しての事なので、咎められることは恐らく無いだろう。
反動で雫の胸に顔を埋めるという状態となったが……そのあと、雫から「ほのかみたいに胸がなくてゴメン」と言われた。引き合いに出されたほのかは顔を真っ赤にして俯いていた。
それで謝られてもどう返せばいいか困った結果、「雫が悪いんじゃなく、飛んできた車が悪い」と返しておいた。事実だから間違ってないと思う。
すると、2人に話しかけてくる男性がいた。その男性に達也が警戒するが、悠元にとっては知己であったため、ゆっくり自動車を降ろしたうえでその男性に向き直った。
「そこのお2人さん、いいかな？」

「お久しぶりです、寿和（としかず）さん。達也、警戒しなくても大丈夫だ。エリカのお兄さんだから」
「成程、千葉家の……自分は、司波達也といいます」
「言われちまったが、千葉寿和だ。ま、本来は職務外なんだが、遭遇しちまったものはしょうがねえって気分だ」
「また稲垣さんとエリカにどやされますよ……」
　想定よりも早い、というか偶然通りかかった寿和に達也は頭を下げる。千葉家現当主の長男で警察省の警察官。加えて千刃流の免許皆伝を受けている人物ということは達也も無論知っている。彼のやる気のなさそうな言葉に悠元は辛辣な言葉を言い放った。
「分かってるさ。稲垣君にはバスの乗客に話を聞いて貰ってる。悪いんだが、車と仏さんを車線の脇に動かしてほしい」
「それぐらいなら……達也に運転手は任せていいか？」
「ああ、その方がいいだろうな。俺が車を動かすとなると力業だからな」
　達也の場合は動かすというよりも『分解』で消し飛ばす方が早いため、自ずと悠元がその役目を担う形となった。
　しかし、出発自体遅れていたにも拘らず、それに〝合わせた〟時点で大会運営に『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の息が掛かった人間の可能性を危惧しなかったのだろうか？　いや、多分諜報員が動いていたことから〝二段構え〟という可能性を取り除いていたのだろう。
　尤も、今後出てくる連中を考えれば何段構えになるか見当もつかないが……悠元はそう思いながらも自動車を再び浮かび上がらせ、車線横まで速やかに運んだのだった。

九校戦出発当日④

会場エリアは国防軍の管轄――――同じような治安組織といえども、毛色が違う者同士では色々な柵が存在する。なので、寿和は本来警察官としてここには来ていないのだが、念のためにと警察手帳などを携帯していたのが幸いしていたし、バスの中には十文字家の人間もいて、スムーズに事情聴取ができたことに寿和は内心ホッとしていた。

一高の技術スタッフが臨時で〝事故〟による車線変更の誘導を手伝ってくれているお蔭で、現状大きな混乱になっていないのが幸いだった。事故車両は車線横のスペースに移動され、運転手はバスにあったブランケットで顔を含めた上半身を隠している。

尤も、寿和は別の方面で頭を悩ませているわけだが……そこに稲垣が姿を見せた。

「頭領、到着時間は15分ほど掛かりそうです」

「ま、九校戦も控えてるんだから妥当なラインか……しっかし、これは事故と思えんな」

本来横浜方面を担当している筈の寿和と稲垣がここにいるのは、三矢家現当主から〝九校戦に出場する第一高校の警護〟を頼まれたことに起因する。とはいっても、出発自体が遅れて一高の後を追いかけるような形になったが、それが逆に功を奏したともいえる。

元々千葉家としては、九校戦の補助もとい家の〝売込み〟ということで、異母妹で末子のエリカが駆り出される手筈となっていた。そこに三矢家と上泉家からの依頼で寿和と稲垣に数名の上段クラスの人間が警護に入り、そして寿和の弟である修次も九校戦の外部補助スタッフとして駆り出されていた。

「偶然にも無傷で飛び越えてきた、ではないと？」

「普通に考えてブレーキ痕も残らない事故なんて有り得るか？　まあ、仏さんが心臓発作などで急死したなら解るんだが……おまけに、ガード壁の破損状況や車側面の塗装剥がれの少なさもおかしい」

状況から、稲垣の述べた事態と推測するのは無理もない。だが、そうではないと寿和は断じた。

単に運転手の加害事故なら、車を制御しようとブレーキを試みるのが普通の人間の心理。
しかし、対向車線にその痕跡がないことに加えて、ガード壁側に衝突した側と思しき車の側面には、ガード壁との衝突で生じるであろう塗装の剥がれなどがほぼ最小限で済んでいることに疑問を持った。
「言われてみれば……では、これは魔法が使用された可能性――――〝事故に見せかけた一高への妨害行為〟と？」
「可能性は高いな。稲垣君、他の八校で同様のことは？」
「聞いた限りでは無かった筈です。ですが、一高だけというのも」
九校のうち今年三連覇が掛かっている一高だけを狙った行為。まるで『一高に総合優勝してほしくない』とでも言いたげな妨害行為であると寿和は感じつつも、その先は自分の領分ではないと述べる。
「ここから先はお偉方の仕事だ。会場には〝閣下〟もいる以上、余計なことはないと思うが」
「それはないでしょうね。頭領のような疫病神がいるにしても」
「稲垣君、それは選手である彼らの前で絶対に言わないでくれよ？」
その言い方だと自分の存在が一高の生徒に迷惑をかけた、みたいな意味に聞こえるため、寿和は稲垣にそれだけは公に言わないでほしいと懇願しつつ、一高の選手が乗ったバスを見やっていた。
◇　◇　◇
バスの車内では、先ほどの混乱も収まっていた。だが、どこか気まずさがあったのも事実だろう。何せ、起こり得るはずのない出来事に遭遇して、下手すれば自分の命に直結するような出来事だったのは間違いないだろう。
その辺を察しつつも真由美は皆に向かって声を掛けた（なお、本人はバスが止まる直前までぐっすり眠っていた）。
「みんな大丈夫？　十文字君もありがとう」
「いや、自分は最後の抑え程度だった。三矢、司波、六塚が各々連携して、適切な処置で車を停止させたからな。寧ろ感心させられたと言うべきだろう」
あの想子の嵐が起こった状態で無秩序に発動した魔法式を吹き飛

ばした悠元。適切な威力バランスで自動車を消火した深雪。そして、減速魔法を使いつつも摩擦による熱エネルギーを全て奪うという芸当を見せた燈也。それらをお互いに干渉させることなく、しっかりと連携しきった三人を克人は率直に評価した。

悠元が魔法式を吹き飛ばしたことには必要以上の追及が飛ばなかった。何せ、一部の面々は克人との模擬戦を見ており、『ファランクス』を破壊できる以上は通常の魔法式も同様に破壊できるだろうという推測を抱いていたことだろう……尤も、悠元が使ったのは『術式解散（グラム・ディスパージョン）』であるが。

「三人もありがとう。素晴らしい魔法だったわ」

「ありがとうございます。ですが、燈也の声に気付いて市原先輩が減速魔法を掛けてくれたお蔭で魔法を選ぶ余裕ができただけです……な？」

「ええ、悠元さんの言う通りです」

「市原先輩、ありがとうございます」

三人のお辞儀に対して鈴音は無言で会釈をし、その様子を見た花音がポカンとした表情で背もたれ越しに深雪らの方を見ていた。これには摩利も驚きを隠せなかったが、納得できていた。確かにバスのブレーキによる制動距離を考えればすぐに止まれない。何かしらの要素がなければ……その意味で誰かが減速魔法を掛けていたと考えるのが自然である。

あの危機的状況でしっかりと状況を見据え、適切な対処を取る。迫りくる危険を予知した燈也の凄さもそうだが、的確に判断して対処した鈴音の行動力にも驚くとともに、鈴音の行動を把握できていた悠元、深雪、燈也の才能は恐るべきものと言えた。

「それに比べて、お前は！」

「いたっ！　何するんですか、摩利さん」

花音は摩利に頭を叩かれ、抗議の声を上げた。だが、摩利は更に説教の言葉を投げつけるように言い放った。

「森崎や他の面々は1年だから仕方ない部分はあるだろうが、2年のお前が真っ先に引っ掻き回すとはどういう了見だ。無秩序に魔法を

発動させたら、相克を起こしてまともな効果が出ないことぐらい知っているだろう。相克を起こした時点で魔法を解除しなかったのは、冷静な判断力を欠いていた証拠だ」
「……すみませんでした」
あの危機的状況において、一番求められるのは冷静な判断力。とはいえ、花音のような天才肌の人間には中々理解できないことだろう。
それ以上の才能を持っているであろう悠元、燈也は真由美や克人と同じ十師族である以上、修羅場を経験している可能性は高い。それに勝るとも劣らない深雪も修羅場を経験しているのだろうかと摩利は推測する。
「そういえば、燈也君。あの時、車がガード壁を飛び越えることを見越したような言葉だったが……何か見えたのか？」
「え？　ええ、まあ……ごく短時間ですが、魔法式が見えました」
燈也は小声で摩利にそう告げた。その音量の関係で亜実と花音にも燈也の言葉は聞こえていて、燈也の発言を悠元は自身の聴覚でしっかり聞き取っていた。無論、それだけではない何かが燈也の眼に見えたのだろうと推測される。
この言葉に摩利は神妙な表情を浮かべ、真由美は一体何があったのかを燈也に尋ねようとしたところで、バスが走り出す準備が整ったと連絡が入り、彼女はその対応に追われることになった。
◇　◇　◇
〝事故〟の後、偶然通り掛かった寿和と稲垣の協力もあり、３０分ほどの時間ロスで済んだ。出発の遅れなども合わせて、宿舎には昼過ぎに到着した。
九校戦の性質上、そこで活躍した選手が軍関係に進むことは珍しくない。寧ろ多いと言えるほどだ。国防軍としても優秀かつ即戦力になり得る魔法師を一人でも多く確保したいという思惑から、九校戦には全面的に協力している。
それは会場だけでなく宿舎も同様で、視察の文官や会議のために来日した諸外国の高級士官とその随行員を宿泊させるために使用しているホテルを、生徒と学校関係者の為に貸切の形で提供している。こ

の辺は魔法科高校が国立の教育機関だからこそできる芸当なのだろう。
　とはいえ、軍の関連施設である以上、民間の高級ホテルのような専従のポーターやドアマンはいない。本来は基地の当番兵がそれを担うのだが、高校生の大会ということもあって、荷物の運搬は自分たちですべて行うのが原則となる。
　作業車両に積まれた大型機器は降ろさないが、小型の工具やＣＡＤは微調整の関係もあるので、台車に乗せて運んでいくことになる。その作業をしている１年の技術スタッフと、彼を囲むようにしつつ談笑する三人の男女。その様子を服部は視界に収めたが、振り払うように振り返ったところで服部の次に降りてきた桐原から声を掛けられる。
「どうした、服部？　少なくとも、好調って顔には見えないぜ？」
「桐原……ちょっと、自信を無くしてな」
「おいおい、明後日から競技だぜ？」
　桐原は２日目のクラウド・ボールのみだが、服部は１、３日目のバトル・ボードと９、１０日目にあるモノリス・コードに出場する。その意味で服部の発言は、総合優勝にも影響しかねないような発言であることは、桐原にも理解できていた。
　服部は２年でも指折りの実力者――――３年のトップにいる三人に次ぐ実力者である。魔法力主義による主張や二科生に対する態度は桐原でも弁護できないが、才能だけでなくそれに見合った努力もしてきている。そう簡単に自信を無くすような人間でないことは理解している。
「一体何を悩んでるんだ？　そんな様子じゃ先代会長から関節技（サブミッション）が飛んでくるぞ？」
　まるで「悪い子がいたらお仕置きに来る」と言わんばかりに服部の前を通り過ぎる桐原の言葉に、服部は練習期間中に美嘉だけでなくバイアスロン部ＯＧの面々から鍛えられたことを思い出しつつも、歩き出しながら喋り始めた。
「さっきの事故……」
「ああ、ありゃ危なかったな」

「もしかしたら、死人が出ていたかもしれなかった」
「ま、その辺はきっちり対処していたから結果オーライでいいだろ。そんな現実にならなかった被害で悩むのは『たられば』の一種だろうに」
　桐原は、気休めのためだけに発言したわけでも、楽観視しているわけでもない。九校戦という大事なことが控えているのに、別のことでゴチャゴチャ悩んでいては競技に支障が出てくる、ということを含んだ言い分だった。無論、服部も桐原がそういう意図を持って発言したのだと理解しつつも、納得はできていなかった。
「あの時、俺は何もできなかった」
「下手なことをして収拾がつかなくなるよりは、遥かに良かったと思うぜ。その意味で立派な判断力と自制心を働かせたと評価できると思うが？」
「だが、三矢、司波さんに六塚は正しく対処して見せた。自分たちのできることをしっかり把握していたからこそ、会頭がもしもの時の抑えに回れたし、しっかりと声を掛けあっていた」
「得意と不得意の違いだと思うがな。司波妹は冷却系が得意と聞いてるし、六塚は加速系統に得手があるらしい。三矢の魔法式破壊は流石に驚いたが」
　服部の言葉に桐原は立ち止まって、冷静な事実分析に基づく発言を投げかける。悠元が魔法式を破壊した事実は驚きであった。しかし、服部がそのことを追求しないあたり、彼の放った魔法に心当たりがあるのだろうと思いつつ、魔法使いとしてのマナーとして聞かないように努めた。
「――魔法師としての優劣は、魔法力の強さだけで決まるものではない。三矢と六塚はまだしも、魔法の才能だけでなく魔法師の資質まで年下の女の子に負けたとあっては、自信を失わずにいられんよ」
「成程な。でも、そういうのは結局〝場数〟だからな」
　ここにきて服部の悩みを理解しつつ、桐原はハッキリと言い切った。それは桐原自身も経験した4月の一件からして、それを目の前にいる服部と比較する方が酷だと思わざるを得ない。

「場数？　実戦経験ということか？」
「ま、そんなところだ。あの兄妹はその点で特別だろう……兄貴の方は、ありゃ〝殺(や)ってる〟な」
「なっ……!?」
「実際に見たわけじゃねえが、雰囲気がな。４月の一件についてはお前も聞いているだろう？」
　あの場所にいたのは生徒会メンバーでも深雪、悠元の２人だけ。学校に残っていた服部にもその詳細は知らされていない。七草家と十文字家によって学校を襲ったテロリストを掃除した、ぐらいの情報が真由美から伝わっただけである。
「俺はあの時現場にいた。司波の兄妹に三矢もな」
「本当か!?」
「事実だぜ。司波兄は、ありゃヤバいな。海軍にいた親父の戦友たち――いや、それ以上の殺気をまるでコートでも着込むかのように纏っていやがった。妹の方は分からんが、あの場所についてくるだけの胆力を持ってるのは事実だろうな」
　名立たる実力を持っている桐原がそう断言するほどの恐ろしさをあの兄妹は持っている。あの程度の修羅場など既に通過したようなものだろうと桐原は断言した。それを聞いて服部は桐原に尋ねた。
「じゃあ、三矢は？　司波と同じだというのか？」
「そうだな……強いて言うなら、一高の『触れ得ざる者(アンタッチャブル)』――その名に違わぬ恐ろしさ、と言うべきだろうよ」
「……どういう意味だ？」
　まるで答えなのかそうでないのか分からない言葉に服部は思わず表情を顰めた。それを見た桐原は余計悩ませたな、とバツが悪そうにしつつも、いつもの様子に戻すような口調で声を発する。
「殺気の質のベクトルが司波兄と違いすぎる、と言えばいいだろうな。司波兄の殺気はハッキリと感じ取れたんだが、三矢の場合はその逆――明らかに殺気を発している筈なのに、殺気が感じ取れなかったんだ。まるで〝暗殺者(アサシン)〟が目の前にいるかのような感覚だった、と言えば察しはつくか？」

「……有り得るのか、それは？」
「道場の先生に聞いたらこう言っていた。『それは紛れもなく達人級（マスタークラス）の人間が成し得る芸当だ』とな。しかし、魔法師としての優劣は、魔法力の強さだけで決まるものではない、か」
殺気を制御する――――それは、最早剣術において極限の領域に踏み入れたことを示すもの。桐原は、悠元が深雪に新陰流の体術を教えている光景を何度か目撃しているが、その体捌きは紛れもなく自分を遥かに超えている、と確信せざるを得ないほどだった。
こんな小難しい話から現実に引き戻すため、桐原はからかい半分で服部の言葉を口にした。
「何が言いたい？」
「いや、その言葉がお前の口から出たと会長が聞いたら、大喜びするんじゃないか？　って思っただけさ」
「っ!?……」
桐原からの爆弾発言に服部は照れていることを誤魔化すように桐原を追い越して歩いていく。その様子にやれやれ、といった感じで彼の後を追うような形で歩いていく。
「二科生（ブルーム）や二科生（ウィード）だなんて言ってるが、たかが入学前の実技試験の結果じゃないか。現に二科生でもできる奴は少なくない。今年の１年は特にな」
桐原はそう言いながらも四人の姿を目に捉えた。恐らく、１年生の中でトップクラスに恐ろしいと言えるのはあの四人だと……燈也に関しては分からないが、他の三人と比較しても遜色ないほどの何かを桐原は感じ取っていたのだった。

九校戦出発当日⑤

さて、この九校戦に向けて表向きの準備を進めている中、裏の準備も進めてきた。いや、正確には3年前からスタートしていた。

大亜連合が世界各地の諜報機関にばら撒かれた沖縄侵攻のデータ（自分や達也のことは綺麗に消去済み）で奔走している間に、国内のメディアの膿を一掃した。

具体的には、〝内情と公安からの内部告発〟という形で魔法師支持派の国会議員に大亜連合のスパイのリストを一斉に送った。その中からは意図的に周公瑾とその関係者のデータを削除した上でだ。

これを見た議員たちはこれを機にとスパイ防止法の制定を急がせ、その2年後に施行となる。

その間に逮捕を恐れて大亜連合のスパイがこぞって出国を試みたが、その悉くが七草家と十文字家の包囲網に引っ掛かる形となった。他国のスパイも無論いるのだが、この辺は順序立てて行うのが妥当と判断した。スパイ防止法についてはＵＳＮＡが問い合わせてきたようだが、この辺は〝同盟国〟という枠組みで回避しているためにそこまで強い抗議は出なかったようだ。

それを悪用した場合の対抗策も既に練られているので、一応問題はない。

ここまでやれば将来の師族会議や二十八家の若手会議にも影響が出てくるかもしれないが、その時はその時だ。今やるべきは確固たる地盤の形成であり、その為の余計な横槍は勘弁願いたい。そのために必要以上の排除を行わないと決めた。

そこまでメディアの膿を出し切った理由は単純明快。この九校戦を誰の眼にも止まる位のメディア規模にまで拡大させること。九校戦のメディア規模はそれなりだが、実際のテレビ放映はケーブルテレビによる独占状態。この辺は会場が国防軍の基地内ということも含んでいるのだろうが……。

そのケーブルテレビ局に対して、全国にキー局を持つ放送局に放映権を売るという手法を取らせた。民放のテレビ放送だとスポンサー

のコマーシャルや試合のハイライトなどを挟むため、フルで見たい場合はケーブルテレビを契約すればいいだけだ。

加えて、会場となるエリアからは離れているが、東京に各種メディア向けの多目的プレスセンターを開設。その中からほぼリアルタイムで競技内容や出場選手の情報を得られるようにした、というわけだ。この辺は〝国防軍の好意的な世論形成〟ということで風間少佐に入れ知恵をした結果である。

流石に自分が出るのは拙いので、剛三経由で七草家を動かした。あの家の現当主なら十師族としての地位向上のために動くだろうし、メディア工作は十八番だ。無論、誰が入れ知恵したのか探ってくる可能性はあるだろうが、そんな痕跡は一切残さない。というか、上泉家の逆鱗に触れたら、責任問題ということで七草家の現当主は間違いなく強制引退を迫られるだろう。

剛三としても勢力の大きい七草家に今抜けられては困る、ということから上泉家と七草家の相互監視状態になっているが、これは既定路線である。

加えてもう一つ。この先に出てくる七宝琢磨（しっぽうたくま）と小和村真紀（さわむらまき）の二人に対しての〝釘刺し〟も込められている。魔法師の地位向上のために動くのは問題ないが、変な足の引っ張り合いはこちらとしても願い下げである。

そのための餌ということで、魔法協会（実際には七草家）から彼女の父親が経営している会社に〝九校戦のリアルタイム配信〟の話を持ち掛けさせた。そして七宝家当主に〝魔法師全体のイメージアップ〟ということで琢磨を芸能界デビューさせてしまうという手法を提案。

ある意味前例を作るようなやり方だが、野心家の琢磨なら七宝家の価値を上げるためと言えば断ることもない。真紀の口添えもあって、琢磨は秋に銀幕デビューを飾ることが決まっている（恋愛関係になるのは琢磨が大学生になってからの方がいい、と真紀に吹き込んでいるため、恐らく問題はない。俗に言う『逆光源氏（ひかるげんじ）』みたいなものだが）。

琢磨が同じ師族二十八家といえども、遠慮するつもりは毛頭ない。

三矢家は『与える家』だが、それは相手に少しでも誠意が見られると判断した場合に限られる。敵対した場合は苛烈に出ることも辞さない。この世界に転生した以上、自分もそうあると決めて生きてきた。そしてこれからもだ。

これとは直接関係ない話だが、この前、アメリカ大使館と上泉家経由でＵＳＮＡの大統領直筆の手紙が届いた。国家元首という立場上、差し出した相手以外誰も読むことが許されないからって、愚痴を呪詛のように書き連ねるのはいかがなものかと思う。

九校戦出発の３日前に三矢本家から呼び出しがあったのはこの手紙を受け取るためだった。なお、その手紙は本屋敷自室の金庫に厳重保管されている。流石に司波家に持ち込むのはアウトだ。

高校入学までは明確に魔法師だとばれない様に偽装していたため、一般人と変わりなく渡航できていたのだが、その折に剛三の紹介で知り合った。その際、『そうだ、九島将軍の孫娘は私の孫娘でもあるのでな。その子と婚約させよう』とか言い出した瞬間に剛三のＧＯサインが出たので、大統領を関節技で気絶させた。

紛れもない国際問題案件だが、その場に居合わせた副大統領から謝罪された。理由は孫娘のことになると暴走しがちになるらしい。大統領は非魔法師であるにも拘らず、止めるにも職員総出になるらしいので、それを一人で止めた手腕を高く評価された……自分、日本国の人間ですけどね。

一応その孫娘のことについて聞いたのだが、なんと双子の姉妹らしい……あれ？　彼女に姉か妹なんていたか？

将来、このことが厄介な問題を起こしそうで、内心溜息を吐いたのは言うまでもない。

◇　◇　◇

「――――では、あれは事故ではなかったと？」

九校戦の選手たちが宿泊するホテルの前で、深雪は周りの視線や他人の耳も考えて小声で問いかけた。それに対して達也は小さく頷きつつ小声で答えた。

「あの自動車の飛び方は不自然だったからね……燈也はどうやって気

付いた？」
「〝2回目〟を偶然見たときですね。あの状況から車を横回転（スピン）させる魔法を使った時点で、こちらの車線に飛んでくると予測したんです。そしたら、案の定〝3回目〟で綺麗に飛んできたって訳ですが…」
「私には何も見えませんでしたが……悠元さんは？」
「燈也と同じくらいかな。事象改変の痕跡はあったから間違いないだろう」
「事故」を最初から見ていた深雪からすれば、魔法発動の形跡を知覚しなかった。だが、ここにいる三人は魔法が使用されていたとハッキリ述べていた。達也と悠元はともかく、燈也もそれを見抜いたことに驚きを隠せなかった。これには燈也も苦笑を浮かべていた。
「僕の場合、六塚家の特性もあるのですが……僕の家は『熱量干渉』を得意としているのは悠元なら知ってるでしょうけど、その影響で瞬間的な魔法の感知や熱量を持った物体の運動予測を認識できます。車が中央分離帯を飛び越えると判断できたのは、その能力のお蔭です」
「成程、一種の『予知』みたいなものか」
「そんなところです。尤も、六塚家でこんな芸当ができるのは僕しかいませんが」
あっさりと話してしまう燈也だが、そこまで話さないと達也が納得しない、と判断しての言動だった。ここまで話すのは「悠元と達也、深雪さんを信頼してますから」と付け加えた上で言い放った燈也に三人は揃って苦笑してしまった。
「しかし、車のタイヤをパンク、車体のスピンに加えてガードレールを乗り越える……それを瞬間的に最小出力で行う高等技術ができる人間となると、つまり運転手の仕業ってところだろうな……ようは自爆攻撃ってことだが」
「卑劣な……！」
深雪の怒りは同情ではなく、そんな攻撃を平気で命じた憤りによるもの。それを察した上で悠元が宥めるように深雪の背中を撫でると、深雪の怒りも次第に収まっていく。……最近、深雪のストッパー役をやらされているようであまりいい気はしないな、と悠元は思うが、達

也はそんな光景を満足げに見ていた。
「元よりテロリストの取る手段はそのような非人道的な手段も辞さない。命じた側が命を懸けるなんて事例は稀さ」
「にしても、4月の一件に続いてこういうのは勘弁してほしいですね」
「違いない。ほれ、燈也は彼女のところに行った方がいいんじゃないか？」
「ですね。それじゃ、三人とも」
燈也が向こうで待っている亜実に向かって走り出すのを見送り、三人もホテルの中へと入っていくのだが……そこでまた足を止める形となった。まるでリゾートビーチに着ていくような露出の高い格好をした少女が壁際のソファーに座っていたが、ロビー内を歩く三人に気付いて声を掛けてきたのだ。
「やっほー、三人とも。1週間振りだね」
「ええ、まあ……それよりエリカ、どうしてここに？」
「何って、もちろん応援だけど？」
「二人とも、先に行ってるぞ。エリカ、また後でな」
競技の応援、にしては前々日から宿泊するということに疑問が浮かぶ。達也は他の技術スタッフとの打ち合わせもあるため、台車をスタッフの作業用に確保した部屋に運びこむため、足早に去って行った。それを軽く返しつつもやや不機嫌になっていた。
「あ、うん……挨拶ぐらいさせてもらってもいいのに」
「仕方ないだろ、技術スタッフとの打ち合わせとかもあって忙しいから。で……エリカ、お前がここにいるということは親の都合絡みと受け取っていいか？」
「……あはは、悠元は気付くよね。ま、そんなところ」
千葉家の事情は悠元も元から聞き及んでいて、その関係で幹比古やレオ、美月達も巻き込まれる形となったのは聞いている。とはいえ、深雪や他の生徒がいる手前で聞かせるわけにもいかないので、軽く触れる程度に止めた。エリカも悠元の配慮に感謝しながら軽い口調で返した。すると、そこにもう一人の女子――美月が走ってきた。
「エリカちゃん、お部屋のキー……悠元さんに深雪さん？」

「こんにちは、美月」
「こんにちは……って、悠元さん？」
　美月は挨拶をしつつも、悠元が珍しく美月を凝視していることに首を傾げた。何せ、彼女もそれなりに露出が多めで、下手すると扇情的に見られかねない服装だったからだ。それに気付いた悠元は謝罪しつつも、彼女の露出が多めな服装を勧めた人間に視線を向けた。
「いや、すまない。普段大人しめな美月にしては派手な服装だと……成程、そこにいる奴の仕業か」
「え？　ええ……エリカちゃんに、堅苦しいのは良くないって言われたので……」
「美月、悪いことは言わないから着替えた方がいいわ。とても可愛いし似合ってるけど、ＴＰＯにあってないと思うから」
「えー、そーかなー？」
　ちっとも悪びれもしてないエリカに対し、やっぱり派手だったのかと呟く美月。あまり服装でどうこう言うよりも本題という形で悠元が問いかけた。
「ところで美月、先ほどの台詞からするにここに泊まるのか？」
「はい」
「ここ、軍の関連施設……ああ、成程。お前の家のコネだな、エリカ」
「ビンゴ。ま、十師族である悠元なら解っても無理ないけどね」
　エリカの実家である千葉家のことは悠元も自分の実家絡みで聞き覚えがあるし、千葉家の人間と直接面識がある。加えて悠元からすれば母方にあたる上泉家――――新陰流剣武術から派生した千刃流を編み出した一族でもある。千葉家の人脈は警察や国防軍に広く浸透しており、白兵戦技に特化したスタイルと育成ノウハウを千葉家は持っている。
「でも、珍しいわね。エリカはご実家の後ろ盾を使うのが嫌いだと思っていたけれど」
「嫌いなのは千葉の娘だって色眼鏡で見られること。コネは使うものよ」
「成程、そういう考えは分かるな。俺も似たようなものだし」

悠元がエリカと仲良くなったのは、お互いに家のことを抜きにした友人関係を持ちたいと考えていたからに他ならない。尤も、エリカからすれば悠元は「自分とは別次元で生きているような運命の人間」とのことで、それを聞いた時は深い溜息が出た。

まあ、別の世界から来たというのは間違ってもいない事実だろうとは思う。

「けど、試合は明後日からでしょう？」

「今晩、懇親会でしょ？　あたし達も関係者だから」

「大体は察した。そしたら、そろそろ荷物の整理もあるし……」

「悠元さん？　……って、木彫りの熊？」

何で、北海道から飛ばした木彫り熊が此処にあるんだよ。しかも、綺麗な台座まで整備されて、説明用のプレートまで完備されている始末。

徐にその木彫り熊に近づき、プレートに彫られた文面を読み取る。そこに刻まれている文章に絶句した。これには深雪、エリカ、美月、そして荷物持ちをやらされていたレオと幹比古まで釣られる形となり、そこで幹比古と深雪がお互いに自己紹介した。

「なになに、この熊は『ハルノブ』といって、触った者が幸せになるという幸運の熊……どういうこと？」

「悠元さん、何か知ってるんですか？」

真実を言える訳がない。入学式に出れなかった腹いせで、倒れていた木から木彫り熊を魔法で彫って、質量物体長距離射撃魔法の訓練で富士演習場に飛ばした代物だなんて……真実に触れるだけで軍事機密レベルというおまけつきだ。というか、怒りとか妬みとかのマイナスの感情込めたらプラスになるって意味不明である。

「知り合いの軍人から話を聞いたって程度だよ。突然富士演習場に落ちてきた、とか言ってたし」

「なんだそりゃ……どれどれ……」

「レオ？」

悠元の言葉にツッコミを入れつつ、レオが徐にその木彫り熊に手を触れると、ほんの一瞬だけレオの想子に反応して光った感じがした。

思わず呆然とするレオに幹比古が問いかけた。
「え？　あ、いや、何でもねえ。思わず肌触りが良かったからな」
「なによそれ、そんなことあるわけ……」
「エリカちゃん？」
　すると、今度はエリカの想子に反応して光を発していた。あまりにも微弱なため、深雪には気付いていないのだろう。美月が首を傾げて問いかけると、エリカは我に返ったように取り繕った。
「な、何でもないわよ？　気分がすっごく落ち着いたような気がしただけよ」
「じゃあ、私も幸せにあやかりたいし……えっ」
　美月は軽い気持ちでその木彫り熊に触れると、確かに一瞬だったが美月の想子に反応した。思わず出た言葉に周囲の人間は美月を心配するように声を掛けてきたが、美月自身特に変化はないと話した。すると、エリカが幹比古に問いかけてみた。
「ねえ、ミキ。この熊を視てみるってことはできる？」
「僕の名前は幹比古だ！　……やってみるけど、あまり期待はしないでくれ」
　幹比古が古式魔法の一つである精霊魔法の使い手であることを簡潔に説明された後、幹比古は周囲に気付かれないように一枚の札を取り出して意識を集中する。すると、幹比古にはその熊を取り囲むように全ての属性の精霊が飛んでいることに気付く。
「（……これは驚いた。精霊標（せいれいひょう）がこんな所にあるだなんて）……いや、特に反応はないようだ。きっと、別の力が働いているのかもしれない」
　幹比古がその場で真実を口にしなかったのは、周囲の目や耳もあったからだろう。だが、それ以上にその木彫り熊が全ての属性を担う精霊標（せいれいひょう）――精霊の道標とも言われ、俗に言う「パワースポット」と呼ばれる代物に変化していた。
　精霊魔法の使い手はこの精霊標で各々の修業を行うことになるのだが、大抵は一つの属性しか持たないはずの精霊標の常識を覆しかねない代物が目の前にある。加えて、この近くには霊山ともいわれる富

士山の存在がある。その力も受け取っているようで、レオたちが反応したのはその影響だろう。
けど、これを一人占めしようとは幹比古自身考えていなかった。今の自分の実力では、この力を制御できるかも分からないからだ。
「そしたら、俺と深雪は荷物の整理があるから、またな」
「あ、うん」
悠元の言葉に幹比古は我に返り、そう簡単に返すことしかできなかった。
だが、そこにいた彼らは気付いていなかった。その木彫り熊が如何なる力を起こしたのか……こればかりは、それを作り出した悠元にすら分からなかった。

九校戦出発当日⑥

九校戦の部屋割りは本来二人一組を基本とする。とはいえ、今年は達也という存在もあって、一人はみ出す形となっていた。加えて、技術スタッフなので選手と一緒にするのは拙い。なので、その埋め合わせを他の1年男子に背負わせようとなった結果、悠元がその貧乏くじを引く羽目になっていた。

「でも、そのお蔭で誰かを招いて内緒話もしやすいわけだけど……そっちの都合は大丈夫か？」

「ああ、うん。まだ時間はあるからね」

悠元は先ほどの反応から幹比古が何かを掴んでいたと見破り、あのような言葉で強引に話題を断ち切ったのだ。幹比古のプライベートアドレスはこの前の実験棟の一件で交換していたので、難なく呼び出すことができた。

「で、幹比古は多分あれがとんでもない代物だって気付いたんだろうが……その製作者は俺だ」

「ほ、本当かい!?」

「ああ。でも、そうなった原理は分からない。何せ、腹いせで作った代物だから、何がどうなってああなったかまでは説明できない」

「は、腹いせで精霊標を作るって……」

悠元の言葉に愕然とする幹比古。そもそも、霊木でない普通の木から彫りあげた代物だ。それがあんな力を持つ代物になるだなんて想定もしていなかった。不幸中の幸いなのは、あれがそういった機能を十全に発揮するには悠元が近くにいないと発揮しない。

幹比古だけに話したのは、彼が精霊魔法の使い手だからということに起因するし、顔見知りだから彼の口が堅いことも知っている。

「でも、俺が近くにいないと力が発揮しないようになってるみたいだからな……多分、無意識的に陰陽道の秘術を使ってた可能性はあるけど」

「陰陽道って……それって、上泉家の秘術だよね？」

「まあ、母が上泉の人間だからな。これでも新陰流の師範代だし……

幹比古、ここ半年俺やエリカを避けていたのは、お前の実家にかかわる話か？」
　古式魔法には各々の儀式というものが存在する。それは言わば〝力の誇示〟――――伝統民族における成人の儀式で様々な試練を行う風習があるように、そういった儀式が吉田家にも存在していたりする。恐らく、その儀式によって本来幹比古が持っていたはずの魔法力が二科生レベルにまで落ちたと見ている。
「……どうして、そう思ったんだ？」
「お前との付き合いは、親父さん絡みの紹介でかれこれ７年だぞ？　人が変わったような性格の変化をしたら嫌でも気付く。そうなると、考えられるのは吉田家の『星降ろしの儀』ぐらいしかないからな」
　幹比古の表情が変わったことを悠元は見逃さなかった。どうやら推測は的中していたようだ。恐らく、今までの感覚とその儀式の時の感覚に大きなズレが生じて本来発揮できる魔法力を発揮できていない。
　それだけでなく、幹比古はどうやら達也を比較対象にしている節がある。二科生で風紀委員に抜擢され、誰の目から見ても確実な実績を上げている。しかも上級生だけでなく、既に卒業した優勝経験メンバーからの太鼓判で九校戦の技術スタッフに抜擢される……目標にしてもおかしくはないだろうが、それは違うだろう、と悠元は思う。
「なあ、幹比古。お前はお前で、俺は俺だ。当然魔法特性も違えば主体とする戦い方も違う。それを一緒くたにして同じ杓子定規で測れると思うか？　両方を修めているからこそ分かるが、ようは使い方だろう……ま、その先はお前自身の問題だし、〝バイト〟にも支障が出ちゃ拙いだろう？　あ、あのことは二人だけの秘密にしてくれると助かる」
「え、あ、うん……深くは聞かないんだね？」
「聞いたところでお前が怒るだろうからな。それに、エリカのことだから、幹比古を無理矢理ウェイターあたりにでも仕立て上げそうだが」
「有り得そうだから困る」という幹比古の言葉を聞きつつ、時間は大

丈夫なのかと尋ねると、そろそろ時間だと幹比古は言いつつ〝バイト〟に向かった。部屋を出て幹比古を見送ったところで、悠元は別の方向から歩いてくる人物に目を見開く。
「これは驚きましたね……お久しぶりです、葉山さん」
「悠元様もお久しぶりでございます。かれこれ〝4ヶ月ぶり〟というべきでしょうか？」
「その辺はまだ内緒ですので」
　少し茶目っ気を出すような口調で話した人物は四葉家の執事長こと葉山であった。というか、九校戦の一高選手が宿泊するエリアに堂々と出てきたのは少し驚きであったが。
「そのご様子ですと、ご当主様直々のお呼び出しでしょうか？」
「ええ。何分、ここには既に数名の十師族の当主の方々もいらっしゃいますゆえ、直々に出向く方がよろしいと判断したまでです」
　下手に連絡をして三矢家と四葉家のことを七草家に勘ぐられたくない、というのは理解できる。それに、堂々としていれば葉山をホテルの従業員かＶＩＰルームの応接役だと勝手に勘違いする者が多い。葉山の姿を見たことがあるのは、四葉家を除けば十師族でもかなり限られている。
「まあ、暇でしたし構いませんが、達也（あのふたり）と深雪がこの場にいなかったことは幸いですね……もしかして、狙ってました？」
「その辺はご想像にお任せいたします」
　ともあれ、少し身なりを整えてから、葉山の案内で本来高級士官の部屋として宛がわれるＶＩＰルームの一室に通された。すると、そこにいたのは紛れもなく四葉家現当主こと四葉真夜の姿であった。そこまではよかったのだが、悠元は内心溜息を吐きたくなった。
「お久しぶりです。相も変わらずのお姿で少し驚きですが……何故に自分は抱きしめられているのでしょうか？」
「だって、悠元君に会うのは４ヶ月ぶりだもの。少しでも補充しとかないと」
　補充って何を？　と問いかけたかったが、諦めたように悠元は真夜の好きにさせていた。というか、年齢的に自分の母とほぼ同い年の女

性がこうやって甘えてくるという違和感……いや、実を言うと、悠元の母である詩歩の溺愛のレベルに近かった。多分詩奈のブラコンは母の子ども達に対する溺愛の影響だろうと思う……多分。

葉山に視線を向けるが、当の本人は「私は四葉家の執事ですので」と言わんばかりの視線を向けていた。数分ほどすると、満足したのか真夜はもともと座っていたソファーに腰かけた。その招きで悠元は向かい側のソファーに座る。喋り方も当主らしいものになっていたが、あえてツッコミを入れるようなことでもない、と判断してスルーした。

「それで、自分に用件があるとのことでしたが」

「そこまで大した用事ではありませんよ。姉さんもいたく気に入っている子だから、顔を見せないのは失礼でしょうし」

「必要以上に買い被られている気もしますが……しかし、他のご当主の方々もいらっしゃるというのに、大胆ですね」

これでも三矢家の人間であることは一応周知の事実。この後の懇親会で〝鞘当て〟ともいえる他校の生徒との顔合わせがある。そうでなくとも他の十師族の当主と面識を持っている身分。話を聞いた限りでは、真夜以外だと既に一条家当主と五輪家令嬢、上泉家当主、九島家先代当主といったＶＩＰクラスが会場入りしており、この後実家である三矢家当主、それと七草家当主も会場入りする手筈となっている。

「だから、この時間にしたのですよ。七草家は三矢家（そちら）と四葉家（こちら）が接近していることぐらい掴んでいるでしょうから、放置しても問題ないと判断しました。閣下や剛三殿とも既にお話は済んでいます」

「そうでしたか。とはいっても、現状婚約などは父と祖父に任せていますし、そこまで考える余裕がありませんので」

「構いませんよ。学生は学ぶのが本分でしょうから。九校戦での活躍、楽しみにしていますよ」

本当に最初の抱きつき以外は四葉家当主らしい対応だったと思う。抱きつきに対して冷静な対応だったのは〝前例〟があったからだ。尤も、その時のことを口に出すことはしたくないので、控えておくこ

とにする。
　その後、真夜と世間話程度のことと達也と深雪の学校生活について話し、部屋を後にした。とりあえず自分の部屋に戻って仮眠でも取ろうかと戻ると、そこには奥側のベッドに腰掛ける真由美がいた。懇親会のこともあるので、制服に着替えていたが。
「何故にいるんです？　というか、部屋の鍵は？」
「マスターキー持ってるからね」
「プライバシーの権利を行使しますよ？　……で、本当は何しに来たんですか？」
　どうこう言っても聞く気がないと思ったので、諦めつつ手前側のベッドに腰掛けた上で尋ねた。単に自分に構ってほしくて来たとは思えない。真由美は九校戦代表のチームリーダーである以上、その辺も仕事もある。無論、自分も新人戦メンバーのリーダーみたいなものなので、人の事は言えないだろうが。
「あ、うん。あの事故のことだけど……燈也君から何か聞いた？」
「一応聞いてますが……そういえば、直前まで寝てたんですよね」
「それは言わないで！　で、どうなの？」
　どうせ、言い繕っても他の人から聞き出そうとするだろう。そうなると、可能性があるのは燈也に達也と深雪の３人だ。そうなれば七草家当主の疑惑も深まりそうなので、諦めたように話す。
「どうやら普通の事故じゃないと察したようです。自分もバスから出て現場を見ましたが、ガード壁の損傷が余りにも少なすぎました」
「それって……あれは、事故じゃないと？」
「……一般道ならともかく、高速で走る自動車専用道路のガード壁に自動車をぶつけたら、普通は無事じゃ済みません。オフロードタイプとはいえ、自動車の原形自体ほぼ残っていることがおかしいです」
　正直に言えば、一般論からの問いかけだ。
　高速走行の状態を維持したままガード壁に衝突したら、下手すればガード壁との摩擦によって火花が生じ、燃料に引火して大爆発を起こしかねない。そうでなくとも、接触によって自動車の破片が周囲に飛び散るだろう。だが、それが少ない状態でバスに迫ってきた。

この時点で、自動車とガード壁の間に何かしらの干渉が生まれていないと、車の原形がほぼ残る現象が成立しない、という訳だ。それを聞いた真由美も一つの可能性に至ったようで、表情を暗くしている。
「ねえ、まさかとは思うんだけど……ブランシュの一件の続きなの？」
「それとは別口みたいですよ。詳細は不明ですが」
というか、遅れてくるということを一体どこから聞いてあのような自爆攻撃に至ったのかを考えると……ここから先は言うまでもないだろうが、間違いなく大会運営に『無頭竜』の息が掛かった人間がいるのは確定だろう。
仮に、これが衝動的な犯行なら、同じ車線の側からバスに追突を試みるだろう。その方が一番早いし、ブランシュの残党なら非魔法に拘って後方から自爆テロをする可能性が高い。
だが、今回は反対車線から飛んできた形だ。しかも、本来の出発時刻から1時間半遅れて出発している一高選手の乗ったバスに対して的確に自爆攻撃をするとなったら、それこそ九校戦の大会運営スタッフ――それも連絡を受け持てるだけの役割を課せられている人間と何らかの関わりを持っていなければ、確実に成功などしない。
何せ、お互いに高速走行している状態から確実に成功させるのは至難の業。タイミングを誤れば単なる自爆になりかねないし、後続の作業車両に衝突する可能性が高い。加えて魔法使用の痕跡を残さないために瞬間的な出力ができる人間（プラス自動車）を平気で捨て駒にできる勢力となれば、自ずとアンダーグラウンド側か、それに準ずる勢力だと察しが付く。
てか、オフロードタイプって前世でも最低２００～３００万円以上はする代物だ。それを平気で〝必要経費〟にできる時点で相当の資金力がある。そして極めつけは父からの闇カジノの情報……一高に妨害をして一番得をする組織が胴元をしている。当然、『無頭竜』の工作員か彼らに弱みを握られている関係者を大会運営に紛れ込ませている可能性が高い、というわけだ。
「ただ、これで九校戦を中止したらそれこそ魔法協会――ひいてはこの国の魔法師の面子を潰しかねません。なので、選手である自分た

ちとしては、九校戦を全力で戦うことに神経を集中させるべきかと」
いくら十師族と言えども、国防軍の基地内で勝手に動くのは拙い。ならば、それを正当化するための理由があればいい。その為に国防軍方面の人脈に強い千葉家の人間まで動かした……残るは最後の詰めだけだ。
「なので、新人戦の統括役として早速の指摘なんですけど……服部副会長のフォローは競技開始前までにすべきかと」
「はんぞーくん？　確かにどこか不安な様子は見えてたけど、そこまで深刻という風には見えなかったわよ？」
「それ、本気で言ってます？」
彼女もそうだが、現3年の三人（真由美、克人、摩利）はどこか基準点をおかしい位置に持っていきがちなのだ。確かに、自分たちでも難しいことに対しては、正当に評価できるだけの器の大きさを持っている。
では、そうでない部分……例えば、この場合だとメンタル面の強さが該当する。その辺をカバーリングするのはエンジニアの務めだろうが、彼を担当するのが達也、あずさ、啓以外のエンジニアとなると厳しいだろう。
原因はここに来る途中の自爆攻撃による自分たちの行動なので、こちらからもフォローは入れるつもりだ。だが、ここはリーダーである真由美とサブリーダー的存在である克人、それと摩利にもフォローは入れてもらう。
折角自分の姉によって大分仕上がったのに、それを無碍にしていいのか、と。

九校戦懇親会①

服部のメンタル面に関して指摘したところ、真由美の放言に悠元は思わず溜息が出そうになったが、なんとか堪えた。

「魔法師はメンタル面が大きく影響します。先輩も選手全員が会頭クラスの強心臓の持ち主じゃないって理解してますよね？」

「悠君、十文字君はあれでも繊細なんだけど」

「解ってますよ、それぐらいは。でも、競技となれば自分の役割をしっかりと弁える人です。そういうタイプの人間はそうそういないので……っと、失礼」

悠元は真由美に一言断りつつ、携帯端末を取り出した。どうやらメールだということは真由美も理解できたようだが、端末の画面を見ていた悠元が、何だか「ご愁傷様」とでも言いたげな表情だったことに首を傾げた。

「悠君？　何かあったの？」

「えー……うちの長女こと詩鶴（しづる）姉さんからなんですが、どうやら服部副会長と桐原先輩が姉さんの餌食になってしまったようです」

「……まさか、詩鶴さんのアレを食らったの？」

その言葉に思い当たる節があった真由美は、表情が青褪めたまま凍り付いていた。

悠元の姉達は各々変わったところがある。三女の美嘉の場合は関節技、次女の佳奈の場合は整体マッサージ（先日、真由美が気絶していたのはこれを食らったため）、そして長女である詩鶴の場合は……ヨガだ。

その効果は抜群だが、その反面どんな人間も気絶する、というハイリスクハイリターンを地で行く代物。なお、それをやっている詩鶴は一回も気絶したことがない。悠元も数回ほどやっているが、最初の方は気絶していた。真由美も以前やったことがあり、効果は凄いと感心していたのだが、その反動として受ける痛みに軽くトラウマを感じていた。

どうやら、詩鶴が落ち込んでいる服部と偶然会ったらしく、彼の部

屋に案内してもらった上でメンタルトレーニングの一環でヨガをやらせた。そのついでという形で同室の桐原も巻き込まれたようだ。
　そのメールを見た上で、悠元はこう結論付けた。
「結果で見れば、大丈夫になったとみていいですね。折角なので、会長も受けたらどうです？」
「いやー、私は遠慮しておくわ。懇親会に出れなくなりそうだし」
　余談だが、その詩鶴のヨガを受けて家族で気絶しなかったのは、母である詩歩と最近の自分と最初から気絶しなかった詩奈だけであった。母は言うまでもないが、うちの妹が元からハイスペックとしか言いようがなかった。
　なお、詩鶴はよく侍郎を捕まえてヨガを受けさせている……妹絡みで付き合わせているのは言うまでもないが、平然としている詩奈に気遣われるのは侍郎も悔しいと思っているのか、鍛錬に一層熱が入っているようだ。その辺の線引きは兄や姉の領分なので関与する気にはならないが。
◇　◇　◇
　その頃、荷物の整理を終えたほのかは同室である雫に視線を向けた。
　九校戦フリークともいえる雫の熱の入れようは、親友であるほのかから見ても圧倒されるようなものだった。そんな彼女は、九校戦の出場選手のみに配られる大会要項の紙冊子に目を通しているのだが……それを見たほのかは指摘した。
「雫、上下逆になってるよ？」
「え？　……あっ」
　それにやっと気付いたという感じで、雫は思わず冊子で自分の顔を隠す。だが、耳まで真っ赤だったために、今の状態がどんな様子かを悟るのにあまり時間はかからなかった。
　そんな恋い焦がれる様子の友人に、ほのかは自分も気になっている〝彼〟に対してはこういう気持ちなのだと、この時ばかりは客観的に見つめることができていた。なお、実際その当人が目の前に現れたら、ほのかも今の雫のようなことになるのは言うまでもないが。

「……ほのか、からかってる？」
「そんなことはしてないんだけど……でも、ちょっと意外だったかなって」
小学校からの付き合いであるほのかと雫。いつも物静かだけど、自信無さげな自分をいつも励ます側の雫が、自分のような立場にいることを〝意外〟だとほのかは呟いた。
期末考査終了後、指導室に達也が呼び出された際に、雫が悠元への好意を口にした。その後、カフェテリアでその経緯を聞いたのだが、4年前の時点でどこかしら好意的に見ていた、と雫は呟いた。そして、雫とほのか、さらに英美が巻き込まれた襲撃で助けに入った悠元の姿に、雫は彼に対する好意を自覚したと話していた。
「意外？」
「うん。悠元さんとは私も面識はあるけど、雫が何の躊躇いもなく面と向かって話している同年代の男子って、それこそ数えるぐらいじゃないかな？」
「……言われたら、そうかも」
魔法科高校に入ってからはそれなりに増えているが、大抵の人は深雪に話しかけるのが大多数。そんな中で燈也や達也、レオといった男子とも関わりをもつようになった。それ以前となると、打算的なことを抜きにして雫と対等に話していた人間は、それこそ悠元ぐらいしかいない。
彼自身、十師族の直系という立場があるからこそ、一定の線引きはしていたのだろう。でも、雫からしたら北山家の娘ではなく北山雫その人を見ていた男子は……ほのかが知る限りにおいて、高校入学まで悠元しかいないだろうと思っていた。
なので、その好意に気付かなかったことにほのかは「意外」という言葉を用いた。
「応援、してくれる？」
「それは勿論、と言いたいけど……」
「うん、まあ、そうだよね。こういう時はお互い様ってことで」
正直、ほのかも自分のことで大変なのは雫も理解しているので、そ

こまで協力に無理強いはしない。それと、ほのかが好意を向けている相手は、雫にとって一番のライバルに成り得る人物の兄。ともあれ、そのライバルに「負けたくない」と雫は静かに闘志を燃やすのだった。

◇　◇　◇

パーティーというものは柵が多い。とりわけ、何かしらの力を持つということは、それにすり寄ってくる目聡い輩もいる。それを躱す為の術は見たり盗んだりして会得していた。

これでも伊達に「長野佑都」という仮面を被り続けてきたわけではない。自慢ではないが、現在の十師族の全当主をはじめとした魔法師社会の要人と面識があり、そこから話術を磨いていた。同年代の十師族の中でも、その振る舞いや話術は卓越していると四葉の筆頭執事からお褒めの言葉を頂いたほどだ。

「――面倒ですね」

「悠君もそう思う？」

無駄に磨かれた品性というものは人々を惹きつける。こういう場で気配を消すというのもおかしな話だし、十師族である以上は意識しての立ち振る舞いを要求される。周囲の人間――他校の女子生徒から興味津々で見られていることに、溜息を吐きたかった。それを見た真由美も同意するような言葉を吐いた。

九校戦の前々日に出発した理由が、この日の夕方に行われている懇親会。談笑するというよりは、これから勝敗を競うことになる他校の生徒と一堂に会しての立食パーティーは〝鞘当て〟の側面が強く、プレ開会式と言っても過言ではない。

その十師族の人間である二人が揃いも揃って「面倒」と言いたげな表情を浮かべていることに、達也はスルーすることに決めた。

技術スタッフは本来裏方なのだが、競技場内で活動するメンバーという枠組みの一員。よって、自ずとパーティーに参加しなければならない。パーティーとかレセプションの類を苦手とする意味では、二人の意見に内心同意した。

「達也は……どちらかといえば、隅っこにいるタイプかな」

「間違ってはいないな……」

ドレスコードは各学校の制服なので、あれこれ考える暇が省けたことに感謝している。とはいえ、こんな時だけのために態々一科生が着るブレザーを注文することになろうとは思いもしなかった（発注自体は深雪が担当していたので、断り切れなかった）。それが本人にとって若干ネガティブな様相を見せていた。
「ん？　悠君は達也君や深雪さんとパーティーで出会ったことがあるの？」
「プライベートなパーティーで一度だけですよ。尤も、その時は今の名字を名乗っていませんでしたが」
「そうですね。お兄様もどこか余所余所しかったですので」
「深雪は、時折辛辣だな」
　ちゃんとした面識を持ったのが沖縄で開かれた黒羽貢の個人的なパーティー。それ以前に空港で出会っていたが、その辺りのことは七草家辺りで調べはついているだろうと推測する。確かに嘘は言っていないのでボロが出る可能性は低い、と達也も判断していた。
「にしても、悠君も深雪さんに負けず劣らず、他校の女子の視線を集めてるわね」
「あまり目立ちたくはないですけど、これでもそういう立場である自覚はあります……深雪は何故に脇腹を抓る？」
「いえいえ、モテて何よりですね、と感心してるだけですよ？」
　それは単に「ヤキモチ」ではないのか？　と達也は言いたかったが、今の妹にそのことを言ったら、今度は自分に対しての文句が飛んできそうだったので、口を噤んだ。すると、深雪の態度を見た真由美が意地悪そうな笑みを浮かべていた。
「そうね、うちの妹も『お兄様』と悠君を凄く慕っていたわね。あと、一条家の妹さんもだったかしら？」
「……悠元さん。懇親会が終わったら、少しお話ししましょうか？」
　その問いかけに悠元は項垂れるしかなく、十師族の柵も決して楽ではない、と達也はそう感じていたのだった。
◇　◇　◇
　他校の生徒会役員（主に3年）と話しに行くということで、真由美

はその場を離れた。おそらく克人や摩利も同席するのだろうが、その３人が並び立って挨拶を受ける方は「ご愁傷様」という他ないだろう。十師族２人に、摩利は支流でも百家の人間で、三矢家と親戚関係にある。つまり実質的に師族クラス３人が並び立っている、と他校の人間が解釈しても過言ではない。

九校戦に出場する全ての代表選手・スタッフがこの会場にいるわけではないが、それでも３００人から４００人の大規模なものとなる。当然、それだけの規模なのでホテルの専従スタッフや基地からの応援で賄いきれるはずもなく、アルバイトと思しき給仕服を着た若者が行きかっていたりする。

悠元は二人と別れて、少し用を足しに会場を出た。会場に戻ってきたところで、知り合いの姿と出くわしたのは意外、というほどのものでもなかったが。

「あれ、幹比古じゃないか」

「あ、悠元……えっと」

「案の定、誤魔化されてウェイターに抜擢されたか……ま、いいんじゃないか？　幹比古の容姿なら物事も頼みやすいし」

「それは褒めている、と解釈していいのかな？」

幹比古の衣装は白いシャツに黒の蝶ネクタイ、黒のベスト。他のウェイターも似たような恰好なので、そこまでおかしくはないと思いながら声をかけると、幹比古の方は苦笑をにじませていた。彼としては裏方に回りたかったが、恐らくエリカが発破を掛けようとしてウェイターに仕立て上げたのだろう。

「変に強面のウェイターよりは話しかけやすい、だろ？」

「それ、レオのことを地味に貶してないか？」

「あれで強面だったら、それこそヤクザやマフィアは一種の化け物になるぞ」

しかし、幹比古の態度がどこか自意識過剰になっている面は否定できない。これでもエリカよりは長い付き合いなので、その辺の機敏を読み取ることは出来ると思っている……恐らくだが、父親から何かしら言われて渋々スタッフのバイトをしに来た、と解釈していいだろ

う。
「っと、バイトの途中だったっけ。仕事中に話しかけてすまないな」
「いや、気にしないでくれ」
そういって会場内をまた忙しなく歩いていく幹比古を見送った。すると、そのタイミングを計ったかのように一人の女子生徒が話しかけてきた。その女子は三高の制服を着ていたが、その顔に悠元は見覚えがあったので、直ぐにその人物のことを思い出した。
「――久しぶりじゃの、佑都」
「久しぶりだな、沓子。会うのは2年振りぐらいか」
四十九院沓子――神道系古式魔法を受け継ぐ百家本流の人間。
沓子の実家である四十九院家のルーツは、かつての神道の大家であり、既に断絶した白川家（白川伯王家）に遡る。その白川家の血筋（偶然、本家の遠縁で白川の血筋を引く人間がいた）と伯家神道（白川流神道）を継いでいるのが四十九院家である。
四十九院家は、上泉家と伯家神道の部分で繋がっているのだが、更に言うと先程会っていた幹比古の実家である吉田家も浅からぬ因縁がある。
白川家は、古代からの神祇官に伝えられた伝統を受け継いだ公家であり、皇室の祭祀を司っていた伯家神道の家元であった。そこに代々神祇大副（神祇官の次官）を世襲していた幹比古の祖先にあたる人物が吉田神道を確立し、神祇管領長上を称して全国の寺社に影響力を持ち、白川家との影響力差を逆転させた歴史がある。
尤も、これに関しては既に決着した過去の因縁であり、お互いに蟠りを持ってなどいない、と補足しておく。

九校戦懇親会②

悠元に声を掛けてきた女子生徒――――第三高校1年の四十九院沓子。まるで幹比古と別れたタイミングを見計らったような登場だったため、これには悠元も思わず苦笑する。

「しかし、蟠りは既にないんだろうが、彼が吉田家の人間だって解ってたんだろ？」

「直接の面識はないがの。まあ、直感みたいなものじゃったが」

四十九院家の人間は直感力――――いや、敢えて言うなら『未来予知』に近い能力を有している。これは白川家がかつて朝廷の祭事を担っていた名残とも言える。

そういった類に関わる巫女は神託や未来を予見する能力を有していたなどという伝説も残っているし、水というのは人を映し出す鏡でもあり、人を清める源でもある。その力が強い沓子は四十九院一族の中でも有力な人物に数えられるだろう。

「それで、顔見知りに会えたから、託(かこつ)けて敵情視察でもしてるのかな？」

「お主、相も変わらず意地が悪いの……む？　一条の御曹司の様子がおかしいの？」

「将輝の？　……ああ、成程」

悠元の言葉に沓子が引き攣った笑みを零したが、ここで沓子は遠くに見える将輝が誰かに見惚れていることに気付く。これには悠元も気づいてその視線の先を見たところ、そこには確かに一人の女子生徒――――深雪の姿があった。

「聞いた話だと、将輝の親衛隊なるものが同学年の女子で形成されてるんだろ？」

「誰から聞いたんじゃ？」

悠元が一高の制服を着ているので、その彼が三高の事情に詳しいことに沓子も首を傾げた。

「お前たちのところのショタ参謀(カーディナル・ジョージ)から……でも、騒いでる様子はないな？」

「普通なら親衛隊が荒れるんじゃろうが……寧ろ落ち込んでおるな」
　将輝とはあまり連絡を取っていないが、真紅郎とは特に蟠りもないので、偶に連絡を取っていた。聴覚強化でこっそり聞き耳を立てたところ、「あれは勝てない……」と零しながら涙目になっている親衛隊（一部を除く三高1年の女子メンバー）の面々。
　すると、何かを感じ取ったのか、その一部の女子メンバーである2人――一色愛梨（いっしきあいり）と十七夜栞（かのうしおり）が深雪ら一高の女子メンバーに近付いて挨拶をしていた。深雪の容姿を遠目ながら見た沓子も、彼女の整った美貌に目を丸くしていた。
「あの者……何者じゃ？」
「司波深雪（しばみゆき）。一高1年女子では実技と理論でトップの成績を誇るエース格。出場種目は新人戦のアイス・ピラーズ・ブレイクとミラージ・バットだ」
「ほほう……って、話してよいのか？」
「既に大会要項で出ていることだし、その程度で実力が外に漏れるわけでもないからな」
　沓子は司波という名字に疑問を浮かべているようだが、魔法使いの家系では新参の扱いのために知る者は少ない。なので、愛梨も「一般の方」という呼称を使った。これが本当の名字である「四葉」だったら、愛梨も血相を変えるのだろうな、と思う。
「というか、愛梨の奴から無駄に避けられてるのは気のせいか？」
「あー……それは、あやつの自業自得じゃの」
　真由美や達也に深雪と話す前、先日の事も含めて将輝と真紅郎に挨拶しに行ったところ、愛梨は挨拶もせずに避けていた。一色家の人間としては、話すこともないということかもしれないが、それにしたって些か露骨すぎた。すると、沓子は苦笑を禁じ得なかった。
　曰く「ホワイトデーのプレゼントに対する返事で、あんな宣戦布告に近い文章を送ったことに後悔していて、謝るにも愛梨の性格上素直になれないデフレスパイラルに陥っている」とのことだった。それ、競技に支障が出ないか？　と投げかけたところ、沓子も少し心配していたのは言うまでもない。

「栞も珍しく『それは愛梨の責任なんだから、自分で解決して』と言っておったからの。わしも同意見だったから放置じゃ……にしても、佑都。大会要項の代表選手にお主の名前が見当たらなかったが、スタッフでの参加か？」

「技術スタッフの補助程度ぐらいだよ。メインはエンジニアの仕事だし」

三高の1年の面々に対しては、これまで魔法を一切披露したことなどなかった。そもそも、九校の1年メンバーの顔写真は個人情報に抵触するために出場競技に出る段階で判明される形となっている。現状は中学時代から知名度のあった人間に限定される、というわけだ。

沓子も悠元のことを「長野佑都」として認識した上で話しかけているため、悠元も無難な答えを返した。確かに悠元（ゆうと）という名前なんて、普通に考えたら分りづらい部類だ。これが「人」とか「斗」ならまだそうじゃないかと推測できるだろう。

自分としては、この名前をいたく気に入っているので文句はない。

話を戻すが、悠元は確かに「長野佑都」という名前で登録していないため、その名前の選手として競技に出場しない。技術スタッフの補助も実際に頼まれた仕事なので、嘘は言っていない。

屁理屈に聞こえるかもしれないが、「カーディナル・ジョージ」がいる以上、使えるカードは何でも使う。将輝の繋がりから恐らく知っているであろう真紅郎が喋っていないのは、その話が十師族の中で止められている話だからなのかもしれないが、こちらとしてはそれが知れたところで何の痛手もない。

他の十師族のように特筆すべき秘術の類の魔法を持っているわけでなく、7人の兄弟姉妹全員が異なる得意系統の使い手ということも秘匿に繋がっている。

余談だが、どうせならと三矢家の本分である『多種類多重魔法制御』を生かした秘術を一つ作った。作ったというか、偶然の産物で披露するつもりはなかったのだが、今年の正月に国防軍の連中が自分を攫おうとしたので、その腹いせにぶっ放したら相手の装備（防弾スーツを含む）だけを綺麗に吹き飛ばした代物。反射的に急所を蹴り上げて、

遠くに放り投げたのは言うまでもない。自分に男性の裸をじっくり見る趣味はないので……時期が時期とはいえ、死んではないだろう。

熱量操作・気流操作・重力操作・密度操作・空気抵抗操作・慣性運動操作によって、あらゆる温度の空気を超高密度に圧縮してそのまま相手にぶつけたり、強制的に炸裂させて相手を吹き飛ばしたりする複合制御術式――――固有名称は『エアライド・バースト』。

ただの空気弾と異なるのは、この魔法で生成される空気弾が最高温度３０００度、最低温度―２７３．１５度(絶対零度)の振れ幅を持っていること。この空気を術者に対して影響を与えないようにするため、気流操作が必須となる。超高温と超低温の『エアライド・バースト』をそれぞれ展開し、一か所でぶつけ合うように炸裂させることで急激な温度変化による質量物破壊を可能とする。

更には空気弾自体を数枚の想子の膜で包み込んでいることから、擬似的な想子弾のようなものでもあるため、着弾・炸裂時は『術式解体(グラム・デモリッション)』に近い効果を発揮する。

威力自体も多様に変化させられるため、七草家の秘術である『魔弾の射手』と同じく、殺傷性ランクは事後的評価となる。その魔法を近くにいた美嘉と詩奈に見られたため、秘術として元に起動式を教え、三矢家の人間だけがそれを習得した形となった。傍から見ればただの空気弾と勘違いしてもらえるため、『スピードローダー』や『ライトニング・オーダー』を表とするなら『エアライド・バースト』は裏の秘術というべきだろう。

閑話休題。

沓子とそんな会話をしていると、深雪が二人に近付いてきた。深雪は明らかに笑顔なのだが、どう見ても別の感情が込められているようにしか見えない笑顔であった。その怖さに沓子も思わず冷や汗が流れるほどだった。

「悠元さん、このようなところにいたのですか……もしかして、逢引きですか？」

「そういう言い方はご法度だろう。三高の方に失礼じゃないか、深雪」

「あ……失礼しました。第一高校1年、司波深雪と言います」

「第三高校1年、四十九院沓子じゃ。まあ、よろしく頼むぞ」
深雪と沓子が自己紹介を交わした後、沓子が三高の生徒が固まっているところに戻っていくのを見届けてから、深雪に向き直った。
「彼女は爺さんの全国行脚の折に知り合っただけだよ」
「それにしては、大分親し気だったような気がしますけど……？」
「恋愛感情とかは一切ないから」
百家の人間としては割りと話しやすい部類だったので、友人として仲良くなっただけだ。偶に上泉家経由で手紙が来るのだが、数年前から胸の大きさを気にし始めたと書かれていた……誰か好きな人でもできたのかと思い、それ以上は聞かないことにした。というか、何故に男性である自分に対してそういう悩みを書くのか、という不明瞭な部分があったのは否定しない。
すると、深雪が徐に悠元の腕を掴んだ。
「悠元さんが他校の生徒を引き寄せかねませんので、行きましょうか？」
「人のこと言える立場とは思えないけど……まあ、いいよ」
周囲――他校の生徒から向けられる視線の中に、将輝から羨望やら嫉妬やらを含んだ感情もとい視線を向けられていることに気付くが、気付かない振りをすることにした。
どうせ、深雪に対してカッコいいところを見せてアピールしたい、という思惑がバレバレなのは見るに堪えないレベル。そんな思惑というかフラグ、粉々どころか『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』してやろうかと思ったのは、ここだけの話である。
その光景をどこか面白くなさそうに見つめる将輝に、それを見て苦笑を浮かべている真紅郎。
彼らの周囲にいる三高のチームメイトの男子は「何だあいつ、ひょっとして彼氏か？」とか、「一条みたいなイケメンとか、あいつ絶対女から寄ってくるタイプだな」などと口々に噂している光景に、いつもなら楽観視している沓子の口から溜息が漏れた。
「あやつら……まあ、男子らしいと言えばそうかのう」
「沓子、どこに行ってたの？」

「栞か。何、ちょっと顔馴染みがいたから挨拶してきただけじゃ……愛梨はどうした？」
　沓子は栞からの問いかけに答えつつも、テーブルに置いてあった自分のグラスを手に取っていた。その上で栞に尋ねた。
「どうしたって、私の後ろにいるけど？」
「……何をやっとるんじゃ、愛梨」
「仕方ないでしょう……佑都さんと平気で話してる沓子じゃないんですから」
　愛梨は栞を盾にするようにしていた。傍から見れば厳しい態度に見えるだろうが、栞と沓子からすれば、彼女が悠元と顔を合わせたくないのがバレバレであった。
　というか、まだ引き摺っていたことに沓子はおろか栞までも若干呆れ顔であった。彼が寧ろ心配するのも無理ないレベルだろう。普段なら自分に厳しい愛梨が……いや、その厳しさが逆に彼女を困らせていた。
「わしはあやつと〝友人〟じゃからな。まあ、愛梨が手を拱いているようなら、容赦はせぬが」
「沓子、それは火にダイナマイトを投げてるだけだと思う……」
「……解りましたわ。言っておきますけど、それはそれ、これはこれです」
　この場合は愛梨のプライドを刺激する方がいい……そう判断した沓子の言葉に栞は呆れたが、沓子の目論見通り愛梨は気を持ち直して、悠元の方へと歩いて行った。それを見た三高の男子連中がまたも騒ぎ始めたことに栞は沓子を見やった。
「というか、愛梨は薄々気付いてたけど、沓子も狙ってるんだ……七草さんのようなそんな体型（トランジスタグラマー）なのに」
「栞、それは酷くないか!?……自覚はしとるがの」
　栞の歯に衣着せぬ容赦ない発言に、沓子は声量を抑えつつも反論し、愛梨と悠元が会話しているところを見やっていた。
　沓子が悠元（長野佑都）と初めて会ったのは5年前。その当時は髪を伸ばさずにショートヘアだったのだが、同性のように見られていた

ことがショックだった。そのあとも何回か会ったのだが、やっぱり女性らしさが欠けていると自覚することになった。
バレンタインチョコを贈らなかったのは、沓子自身の女性としてのプライドもあった。せめて納得がいく手作りのチョコができるまで、彼には贈らないと決めた。女性らしさを磨くために家の手伝いもするようになり、髪も伸ばし始めた。愛梨や栞と出会ったのは三高に入ってからになる。
それでも、口調自体は自分のアイデンティティのために残していたが。あと、背丈はもう伸びないと諦めている。
ちなみに、沓子はサラシ派であるが、競技をするときは流石に外している。その時に栞から「ねえ、もいでいい？」と言わんばかりの目線が飛んできたのは言うまでもない。その視線の先は主に胸であるが。これには、流石の沓子も全力で拒否して逃走したのは記憶に新しい。
「ところで、二人の会話を後ろで聞いている司波じゃったか……恐ろしいな。彼女の後ろにいるのは、見たことがないな？」
「どうやら抑えに回ってくれているみたい……一高は一高で大変のようね。まあ、三高（ウチ）の男子陣もだけど」
栞の言葉通り、三高の1年男子生徒の面々（将輝は含むが、真紅郎は除く）は嫉妬ともいえる表情を悠元に向けていた。
悠元と愛梨が話している傍で怖いと思える笑顔を振り撒いている深雪。沓子と栞は知らない男子生徒こと達也が、ほのかと雫に呼ばれて深雪の抑えに回っていた光景を見て、二人は揃って「大変だな」と思った。
なお、その際に栞が達也を見て「あの人、いいかも……」と小声で呟いたことを沓子が耳にし、それで弄られることになろうとは栞も予想できなかった。

九校戦懇親会③

三高1年女子のエースである一色愛梨。その彼女から一言目に謝罪が飛んできたことは驚きつつも、特に怒りなどといった感情はお互いにないだろうし、何か琴線に触れる部分もあったのだろうと言い含めると、彼女はすっかり機嫌を取り戻していた。

その反面、背後にいる深雪の機嫌が反比例して悪くなるという有様で、これには流石の愛梨も「悪いことをしたかしら」と少し反省したのは言うまでもない。彼女が三高の集まっているところに戻った後、そのストッパー兼フォロー役である達也に詫びを入れると、達也は壁際に戻っていった。

「もう、悠元さんも悠元さんですが、お兄様もお兄様です」

「どう返せばいいのかわからないが……あれは、一種の職業病だな」

達也が深雪のガーディアンであるという以上、その役割を果たそうとしてしまうのは長年積み重なってきた彼自身の苦労と努力の結果だろう。

悠元は結局、深雪の傍にいる形でパーティーに参加続行となった。それを羨望の眼差しで見ている同校の1年や他校――特に三高の生徒からも目立っていた。これには思わず溜息が漏れた。

「嫉妬するんだったら品性を磨けよ……下心とか下らないプライドなんて、実戦を経験したら綺麗に吹き飛ぶんだが。というか、燈也は……あそこか」

「どうやら、お兄様のフォローをしてくれるようですね」

今まですれ違わなかった燈也は亜実と一緒にいた。今は達也の近くにいて、彼が深雪のストッパーになっていたことを労っているようだった。雫とほのかは丁度〝お花摘み〟ということで会場から離れていた。すると、一人のウェイトレスが飲み物を持参してきた。

「お飲み物はいかがですか？」

「いただこうかな。にしても、様になってるな、エリカ」

「ホント？　ま、達也君よりは褒めてくれてると思ってたけど……にしても、モテますなあ」

ウェイトレスもといエリカからグラスを受け取りつつ、率直な感想を述べた。すると、エリカは意地が悪そうな口調で悠元に小声で話しかけた。
「要らぬ気苦労を達也にも掛けたから、暫くは料理でも食べながら大人しくするけど」
「悠元さん。その、来賓の方の挨拶もありますけど…？」
「特定の人以外なら全員面識があるし、何も余計なことなんてしないだろう。エリカ、それ以上言ったら〝八分〟どころか〝尾根伝い〟に変わるけど？」
「あはは……じゃあ、私はこれにて。ごゆっくりー」
悠元の言い放った〝八分〟とは総本山のある群馬から富士山の八合目まで走っていき、そこで稽古する方式。〝尾根伝い〟は赤石・木曾・飛騨山脈全ての山の頂上を行きながら稽古するという常識外れのレベル。
なお、一番厳しいのは九州最南端から与那国島まで「走る」という〝琉球走り〟。気分はさながら武術の達人とか某巨大ロボットアニメの悪の組織みたいなノリだ……つまり、人間卒業試験と言ってもいい。自分はこれをやらされた……出来たことに驚いたし、やらせた側の爺さんも驚いていた。俺は、人間になりたい（もう遅い）。
悠元の言い放った言葉にヤバいと察したのか、エリカはその場から逃げるように去って行った。そして、入れ替わる形でほのかと雫が戻ってきた。雫は先程の悠元の言葉を聞いていたようで、それについて尋ねてきた。
「ところで悠元、誰かそういうことをする人がいるって感じに聞こえたけど……お祖父さん？」
「爺さんは有り得る。そして、同じようにそういうことを平気でしそうなのはもう一人いる」
壇上では魔法界の名だたる名士が挨拶をしていた。流石に十師族の当主が壇上に立ったら大変なことになるだろう……面白そう、とか言ってしでかしそうなのは一人いるが、その人に関しては執事の人が抑えに回ってくれている筈。

それはともかく、ここにいる大半が全国各地から魔法師の資質があると認められたエースクラスの存在。それを試す意味合いで悪戯を仕掛ける人間のことをよく知っている。

「尊師」こと上泉剛三、そして「老師」こと九島烈。この二人、顔を合わせる度に孫談義でヒートアップするわけで、偶に魔法のぶつけ合いをするわけだが、部屋のものを一切壊さずに相手を気絶させるルールで戦うという摩訶不思議で非常識なハンデ戦を繰り広げることがある。ともあれ、本質は同じ悪戯好きで若者を試したくなる性分なのだ。

何せ、烈との初対面において、彼は九島家の秘術である『仮装行列（パレード）』を使っていた……それは何とか見破ったが。

殆どの魔法師からすれば十師族のシステムを構築した人物であり、かつて世界最強の魔法師と言われたほどの実力者。その彼に会えるのを楽しみにしているものは多い。彼と剛三は生ける第三次世界大戦の語り人みたいなものだからだ。そんな彼らの期待を壊してやる必要もないため、悪口は言わないように努めた。

そして、九島烈の番となり、会場は暗くなって壇上に視線が集まる。

壇上にスポットライトが照らされるのだが、登場したのはドレス姿の女性。いや、正確にはその女性の後ろに「老師」こと九島烈の姿がある。

「あれ？　女性の人？」

「『老師』は男性って聞いてたけど……」

ほのかと雫のように気付いていない人間が大多数だろう。何せ、これは効果が薄いものの魔法だ。それも彼女らぐらいの魔法知覚力でも気付かないほど威力が小さいものの会場全体を包む精神干渉系魔法を行使している。

真っ暗な壇上に自然と視線が集まり、何らかの人影が壇上にあると認識できる者もいるだろう。そしてスポットライトが当たれば、そこにいるのは九島烈だと思い込んでしまうが、実際に出てきたのは女性ということで混乱してしまう。この手法も一種の〝視線誘導〟を巧みに使った手品みたいなものだ。

「悠元さん、これは……」
「悪戯好きな人だな、閣下も」
精神干渉系魔法に得手のある深雪は発動時に気付き、悠元も精神干渉系の魔法を使うことがあるために発動した段階で気付いた。なので、事象干渉力を少し上げたうえで雫とほのかの周囲に対精神干渉系の障壁魔法を展開する。すると、二人も女性の後ろに誰かがいることを認識できた。
まるで悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべている烈は女性に耳打ちをすると、女性は舞台袖に去っていく。そして、会場が一気に明るくなると、壇上の中央に烈が姿を見せたので、障壁魔法の展開を解除した。
殆どの人間には烈が突然姿を見せたようにしか見えないだろう。烈から視線を向けられたので、悠元は目立たぬよう目礼で返した。深雪にも向けられていたようで、彼女も目礼で返していた。
「まずは、この悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する。今のは魔法というよりちょっとした手品の類だ。だが、手品のタネに気付いたものは、私の見たところでは七人だけだった。更に付け加えるなら、私の手品に対して的確に対処したものは一人だけだった」
そう言いながら烈は目線を再び悠元に送った。「そこまでのことはしていない」と悠元は目礼で返した。会場の人々は烈の言葉に聞き入っていた中、彼はこう言い放った。
「もし、仮に私がテロリストで爆弾などを持ち込んでいた場合、それに気付いたものは七人で、的確に対処できたのは一人だけということだ」
烈の手品という名の魔法に気付くだけの魔法知覚力プラス精神干渉系魔法に対しての耐性が必要になる。七人の内、悠元と達也、深雪は確定として、残る四人の内の一人は真由美だろう。それ以外の三人は分からないが。
そうなると、これは悠元に対してというよりも、深夜の子どもである達也と深雪を試したものだろう。彼は一時期真夜と深夜の教師をしていたのだから、彼女らに似た感覚を二人から感じ取っていても不

思議ではない。
「魔法を学ぶ若人諸君。魔法とは手段であって、それ自体が目的ではない。
私が用いた魔法は規模こそ大きいものの、強度は極めて低い。
だが、君たちの殆どはその弱い魔法に惑わされ、私を認識できなかった。
魔法を磨くことは大切だ。無論、魔法力を向上させるための努力も怠ってはならない。
しかし、それだけでは不十分だということを肝に銘じてほしい。
使い方を誤った大魔法は、使い方を工夫した小魔法に劣るのだ。
魔法を学ぶ若人諸君。明後日からの九校戦では、諸君らの工夫を楽しみにしている」
烈の言葉に会場は静かなままだったが、すると、会場の中央あたりから反響するように聞こえてくる一つの拍手。そして、烈が放ったのと同じぐらい若い男性の声が、これまた反響するように会場内に響き渡る。
「いやあ、流石は『トリック・スター』の良きお言葉だ。にしても、高校生相手に悪戯が過ぎるんじゃねえのか？　烈」
「まったく、大人しいと思えばそこにいたか、剛三」
見るからに４０代ぐらいの男性が烈の視線の先にいたが、次の瞬間、彼の姿が壇上にいた烈の隣にいた。これには会場の人々も騒然とした。これを見た悠元は思わず頭を抱えていて、雫はその人物が誰かを知っているため、ジト目で壇上を見つめていた。
「……相変わらず、驚かせるのが好きで賑やかな人だね」
「それは爺さんにとって最高の褒め言葉だな……深雪にほのか、あの人が爺さんこと上泉剛三。外見からそう見えないが、隣の閣下と〝同い年〟だ」
「え？　あの人、パッと見でも４０歳ぐらいにしか見えないんだけど？」
ほのかの驚きも尤もだと思うが、事実である。雫もそれは真実であると告げると、ほのかは自分が夢でも見ているのかと思っていて、深

雪は身内に年齢詐欺の前例がいるため、苦笑を浮かべていた。剛三の登場に烈は横に移動すると、剛三はマイクの前に立った。
「自分は上泉剛三という。まあ、影武者だなんだと言われそうだが、紛れもない本人だ。言いたかったことは綺麗さっぱりと隣のジジイに言われてしまったが……」
年齢からして同い年を〝ジジイ〟呼ばわりするという失礼極まりない発言だが、それを平気でやってしまう剛三に烈は笑みを浮かべていた。
「自分から言えるのはただ一つ。他人を見下す前に、自分に落ち度がないかを見極めろ。勝負である以上、勝者もいれば敗者もいる。その時に見極められない者は早く限界が来る。最後に勝つことができる者は、どこまでも〝諦めない〟者である。明後日からの九校戦において、その姿勢が見えることを私は期待している」
ある意味武術家らしい剛三の言葉。所々から拍手が起こり、次第に会場全体の拍手へと変わっていく。自身も楽隠居という手段に逃げていたからこそ、その言葉は彼自身にも向けた言葉なのだろう。
それ以上に烈の放った言葉に対するインパクトを和らげる意味合いも含まれていた。
彼の言ったことは魔法の等級（ランク）よりも魔法の使い方――魔法を「道具」として割り切る、という今の魔法師社会の在り方に異議を唱えるようなものだ。そして、彼はそれを的確に実行して見せた、というわけだ。
「尊師」と「老師」。この二人の存在は非常に大きいと改めて実感したのだった。
◇　◇　◇
懇親会終了後、悠元が一人で泊まる部屋には悠元と深雪がいて、悠元はベッドの上に正座の状態だった。お互いに制服ではなく、いつでも寝られるような楽な恰好ではあったが。
深雪からの質問によって、沖縄防衛戦前後における交友関係（主に女性関係）を一頻り聞かれる羽目となったのは言うまでもない。そして、それを聞き終えた後、深雪はこう言い放った。

「私、今日は悠元さんと一緒に寝ますから」
一つの部屋に男女一組は拙いと思うのだが、更に深雪は同じベッドで寝ると言い出したのだ。まあ、手を出さなければセーフだろうと悠元は諦め、その提案を呑んだ。達也に相談しても深雪の泣き落としに屈するのは目に見えていたからだ。
そして、お互いに向き合う形で寝ることになるのだが、眠れなかったのは深雪の方だった。
(私が迂闊でした……悠元さんがこんな距離にいるなんて……駄目です、逆に落ち着かない)
悠元の場合は昼間の事故対応や懇親会での振る舞いで気を張っていたのか、疲れたように眠っていた。これでは自分が恥ずかしい思いをしただけではないか、と深雪は頬を膨らませた。とはいえ、相手は疲れて眠っているので、これがそうでなかったらその限りではないが……すると、深雪の思考の中に邪な思いが過り始めた。
(……折角だし、その、キスぐらいしても……外国では挨拶代わりにキスぐらいしますし……ああ、でも、やっぱり……)
補足しておくが、これでも深雪は悠元のことを「お兄様と同じぐらい大切な人」のカテゴリだと言い張っている。
司波家でコーヒーや紅茶を入れる時も、表向きは「お兄様と悠元さんが喜びそうな服装を」となっているが、実際のところは「悠元さんが喜びそうな服装を」という気持ちを最優先にして無意識的にやっている。そして、そのことに深雪自身気付いていない。
そして、深雪のこんな葛藤は、『眼』を通して別室で作業している達也にも伝わっていた。
(……やれやれ、深雪も鈍いようだな)
深雪自身、悠元が十師族である以上は、他方面との関わりを持つこと自体理解している。けれど、悠元が深雪のよく知らない他の女性と話していると、彼女の機嫌が悪くなる。これを見たのは、公の場で言えばこれが初めてだ。
深雪は学年2位の実力者なのだから頭の回転は速いが、どうにも悠元のこととなると周りが見えづらくなるようだ。恋は盲目という言

葉が実に妥当だと感じる。なお、当人にその感情はないと否定するだろうが。

悠元が得意としている料理や菓子作りは、あくまでもＣＡＤ調整の為に手先を鍛えるためだけのもの。彼の先生役となった矢車家の男性仕込みであり、本人曰く『姉（長女）や従姉を納得させる程度の腕前』と達也に告げていた。

それが（達也も理解できないが）女性泣かせの代物に変化した原因を尋ねると、「仕郎（しろう）さんの作る料理に奥さんが心を掴まれたらしいが……いや、でもなあ……」と首を傾げながら言っていた。それに加えて悠元自身の人徳もあるのだろう。尤も、（一部を除く）世の中の男性からは妬みをたくさん買っていそうだが。

結局、あれこれ葛藤して考え疲れた深雪がそのまま何もせずに眠ったようなので、達也は静かに息を吐いたのだった。だが、達也は気付いていない。その言葉は彼自身にとってもブーメランであると。

九校戦本番前日①

昨日だけでも色々疲れたこともあって、深雪よりも先に眠っていた。睡眠欲求にはどうやら勝てなかったが、変に緊張して眠れないよりは良かったと思う。正直に言えば、昨晩の睡眠欲に感謝したい気分だ。

そういえば、誰かが一緒に眠るのは久々なことだ……その対象は大概妹なのだが。本家にいると、まるで原作の深雪のように甘えてくる妹を可愛がる。その度に羨望の眼差しを向けないでくれ、侍郎。

俺だって必要最低限の道徳と倫理観は持っているので、いくら転生したとはいえ血の繋がった妹と結婚したいと言うつもりなど絶対にない。大体、本来なら両親が積極的に関わるべき問題なのに、詩奈の将来を詩奈以外の6人の兄弟姉妹で考える始末だ。

なお、朝起きた時に同じく目が覚めた深雪が頬を膨らませながら「やっぱり悠元さんはズルいです」と言われた。やっぱりって何!?

九校戦懇親会の翌日、悠元は自室に籠って持ち込んでいた端末のモニターと睨めっこを続けていた。モニターに映るのは現状での成績予測。これに『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の妨害工作を加味した場合、総合優勝のラインは原作よりも大分改善されている。

技術スタッフの補助を頼まれているとはいえ、1年の自分が本戦に首を突っ込むわけには行かないのだが……美嘉から〝あの走法〟を教わった摩利が規定回数以上使用した場合、女子バトル・ボードで優勝するためには、同じ競技に参加する亜実と小早川景子（こばやかわけいこ）にそのプレッシャーが掛かる。それに加えて深雪にも負担がかかるというおまけ付だ。

お互いに接触の危険があるのはバトル・ボードとモノリス・コード、それと落下の危険があるのはミラージ・バット。よって、この3種目を乗り切ることができればいい。それ以外の種目では対戦相手への直接攻撃は禁じられている。

（……打てる手は全て打っておくか）

そう思って悠元は携帯端末でどこかにメールを送ると、少し瞼を閉

じて意識を集中させる。そして、何かが組み上がったのを確認すると、悠元は端末のキーボードを叩き始めた。達也のようにキーボードオンリーの作業では時間がかかるため、脳波アシスト系もフル活用して起動式を組み上げていく。

その起動式が丁度組み上がったところでノックの音が鳴り、悠元が部屋の扉を開けると、姿を見せたのは燈也と亜実であった。

「すまないな、折角の時間を練習に使いたいのに邪魔してしまって」

「気にしないでいいよ。それで、用事があるのは先輩の方なんでしょ？」

「聡いな。先輩、これを見てください」

悠元はそう言ってモニターに映る起動式を見せた。これを見た亜実は驚きを隠せない。何せ、こんな走行術式なんて見たことがなかったからだ。当然、燈也もその術式なんて見たことがなかった。これが成功すれば、理論上他の選手からの妨害を意図的にカットできるというわけだ。

「これ、いつの間に組み上げたの？」

「構想自体は練習期間の段階から既にありました。ですが、下手すると『魔法大全（インデックス）』行きになりかねない魔法はどうかと思ったからです」

「つまり、申請が来ても断ると？」

二人だって4月のブランシュの一件は覚えているだろう。詳細は伏せられていたが、あの時学校の敷地内にある図書館の特別閲覧室から魔法大学にアクセスして情報を抜き取ろうとした。その時の教訓を生かしてセキュリティー強化しているなら……いや、あれを『フリズスキャルヴ』といった代物で抜かれて悪用される可能性が残っている。

なので、自分が一から改良に関わった魔法に関しては、申請自体すべて却下させるつもりだ。それでもしつこく登録したいと言ってきた場合、かなりの使用制限を掛けた上で登録することを条件にする。

例えば、魔法一発あたりの想子消費量をそれこそ『術式解体（グラム・デモリッション）』十数発分に書き換えるなどといった対策はする。〝書き換える〟というよりは現在の現代魔法の水準に〝戻す〟という形だが、そこについ

てはあまり触れないようにしておく。
「自分は名誉のために生きてるわけじゃないので。それで、練習期間時のタイムなら予選通過はほぼ確実でしょう。この術式は一応決勝戦用で、準決勝用には走行・妨害のための術式をとりあえず２０個ほど組んでいます」
「……燈也。悠元君って規格外過ぎない？」
「ええ。スリーカウント待たずにノックダウンレベルですよ」
　好き放題言われているが、これについてはスルーしつつ亜実に問いかけた。
「先輩がこの案を採用するなら、今から同タイプのＣＡＤに準備しておきます。何なら、市原先輩には自分から話を通しておきますが」
「それは私が自分でお願いしに行くよ。でも、別のＣＡＤ調整を今からエンジニアの人に頼むのは……」
「そこについては……自分がやりましょう」
　基本的に自分のＣＡＤぐらい自分で面倒見れないと拙いと分かっているので、ＣＡＤの完全マニュアル調整は仕上げてきている。というか、亜実が使っているものと同タイプのＣＡＤを端末に接続して、現在インストール作業を始めている。それが済んだら、亜実の想子波特性の計測データを基に個人調整を済ませるだけにしている。
「ちなみに、後者のものは過去に美嘉姉さんが使わなかった術式のサルベージです。姉さん本人から全部データを貰った形ですが」
　美嘉の場合は純粋に最高速度で後続との差を開き続けることで妨害を防ぐタイプ。走行補助に『ブリッツ・ロード』まで使っているため、それ以外の準備した術式は殆ど使用していない。それを亜実用に最適化させてインストールしている形だ。それらの術式自体は悠元が組み、それを美嘉が改良した形だということはここだけの秘密である。
　ここまでやって『例の術式』対策はどうなっているのかというと、バトル・ボードに関しては準決勝、３位決定戦、決勝でシルバー・ブロッサムシリーズを投入する。
　ＳＢ（Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ　Ｂｅｉｎｇ：非物質存在）魔法

『電子金蚕(でんしきんさん)』に対しては、現代魔法でのプログラム面での対策がほぼ不可能。ならば、ハード面から対策を打つことにした。具体的にはＣＡＤの核となる感応石と処理回路に対策を施している。それは、使用者および調整者以外の想子信号・非物質存在による魔法挿入を感知した場合、専用回路が起動して何も入っていないメモリに自動格納される（チェック上では処理演算用の一時格納メモリとして認識されるようになっている）。

この機能を動かすために「サイオン・セレクター」と呼ばれるハードウェアの機能を追加。これは登録された人間以外の想子波を感知した場合、特定の機能を発動させる機構。いわばセキュリティー面での機能なのでレギュレーション違反には当たらないし、この機能は「レギュレーションを超えないようにするためのリミッター」という形で前もって共通規格をパスしている。実際に性能リミッターの側面も持っているので、嘘は言っていない。

使用者本人が使う場合は専用回路と自動格納メモリが使用されないので、意図的に電源が入らない状態となる。いくら『電子金蚕』といえども電気信号を一切感知しない状態で干渉・改竄など出来るはずがない。

なお、チェック後に最終確認作業をする段階で自動格納メモリを空にする作業を行うが、手間としては1分程度で済む。調整用の全端末には『電子金蚕』を消去するための手段とプロテクトも備わっているので問題はない。ここにきてＦＬＴの株主兼魔工技師という立場は大きかったと思う。

残る小早川に対しての配慮は必要かと鈴音に確認したが、これ以上は負担の増加になる上、準決勝以上に上がれば同じようにシルバー・ブロッサムシリーズを使う、という判断で収まった。練習の段階で何回か使ってもらったが、評判は上々であった。

その起動式のインストールも終わったので、端末との接続を解除してＣＡＤを持ちつつ立ち上がった。

「そしたら、作業車両まで付いてきてもらえます？」

「うん。燈也はどうする？」

「うーん……ん？　悠元、そのラケットってなんです？」
燈也としては一頻りの準備を終えているし、体を動かすことは既にやっていたので作業車両に同行しようかと思っていたところ、デスクの横に置かれていたクラウド・ボール用のラケットが目に入った。一見するとただのラケットだが、燈也はそれがＣＡＤだと気付いた。
「ああ、これ？　ＦＬＴから送られてきて、桐原先輩に使ってもらう予定の『ラケット一体型ＣＡＤ』だよ。本戦組だと先輩本人と担当エンジニアだけに話を通してあるから、秘密にしてくれ」
「これ、ルール上使えるんです？」
結論から言えば〝使える〟。クラウド・ボールのルールでは「ラケットまたは魔法でボールを返球する」ことになっている。つまり、最低でもどちらか一方を使うというルールが設けられているが、これは競技の性質上というよりも現実的なところの問題。
ラケットでボールを返す場合、その瞬間に魔法を発動させるのは高等技術の領域に入るためだ。それこそ、途中で自爆攻撃してきた運転手によって車がガード壁を飛び越えたときのようなもの。
加えて、クラウド・ボールは最大９個のボールを追いかけることになるため、両方を駆使した場合に誤って対戦相手への直接攻撃を行わないためのルールである。尤も、そのルールを踏まえられない人間が九校戦の代表に選ばれるはずもないのだが。
このルールを厳密に言うなら、ラケットのボール接触面を使って物理的に返球する、あるいは自エリアの魔法による作用で相手エリアに返球する。このどちらかを守ればラケット一体型ＣＡＤも使用できると踏んだ。これは大会運営に確認済みであり、実際に使うことになる桐原にも試してもらっている。
使い方としては、ラケットにあるスイッチを押すだけ。それを入れるとボール接触面の両面に対し、桐原の特性に合わせた障壁魔法が展開する仕組み。これを全試合フルセットで使ったとしても想子切れを起こさないような消費量に抑えられている。
その感覚を掴んで貰う為、練習期間中は実際の試合に近い形で模擬戦を組んでいる。その対戦相手は桐原にとって大変だったのは言う

までもないが、詩鶴、美嘉、そして真由美の3人。いずれもクラウド・ボール全試合無失点優勝の経験者相手の模擬戦だった。
その後で紗耶香に世話を焼かれて、桐原が照れていたのは言うまでもない。加えて男子連中の嫉妬を買っていたことも付け加えておく。
「というか、悠元君も新人戦の選手なのにエンジニア補助まで兼任してるって、美嘉先輩のちょうど逆だね」
「……否定はしません。っと、そしたら行きましょうか」
作業車両では他の技術スタッフも一頻りの作業を行っていたが、達也と啓が使っている車両の調整機が空いていたので、それを使わせてもらうこととなった。悠元の調整風景を見ている燈也と亜実は驚きを隠せなかった。
達也と同じやり方をすれば、間違いなく達也のほうが早く仕上がるのは事実。なので、悠元の場合は想子波計測データをベースにオペレーティングシステムのデータを組み込んでいく方式を取っている。
本来の手順ではない裏技じみた方法だが、この方法を取る事によって本人の計測データをフルに生かすことができる。
亜実の場合はバイアスロン部の部長ということで選抜会議にも出ており、そこで達也のＣＡＤ調整技術を目の当たりにしている。そこで見た速度と遜色ない動きを悠元が叩き出していることに、彼の非凡さは魔法だけに止まらないと感じた。
これには啓も感心するように見ている。
「すごいね、彼も。選手でありながらエンジニアも出来るのはそうそういないよ。司波君は知ってたの？」
「ええ。偶に自分のＣＡＤ調整もしてもらっていますので」
厳密には、ＣＡＤ調整というよりハードウェアのアップデートとそれに伴うチューニングなのだが、敢えて言うことでも無い為に達也はそう表現した。
啓としては、彼のバックアップがあれば選手のパフォーマンスも安定しやすいが、二足の草鞋を履いてもらう無理強いも出来ない。いくら彼の姉がそうしたと言っていても、それをこなすには桁外れた体力と精神力を要求される。

美嘉は、昨年の九校戦で夕食会はおろか、懇親会にも出席せずにＣＡＤ調整を行う羽目になっていた（挨拶自体は真由美たちに放り投げていた）。その経験があったからこそ、美嘉は啓とあずさにＣＡＤ調整スキルを叩き込んだ上で、現３年組にエンジニアの大事さを説いていた。尤も、それを誰に対しても愚痴を零さなかった彼女自身の問題もあって卒業後も尾を引いてしまったわけだが。

そんな経緯を人伝に聞き、今の１年で自分以上の調整スキルを持っている人間がいることは心強い、と啓は感じていた。

「終わりましたが……どうです？」

「凄い。まるで自分の体の一部みたい。ねえ、ついでに自分のＣＡＤもお願いしていいかな？」

「構いませんよ。データは残ってますので」

その後、亜実からその話を聞いた真由美が「私のも調整して！」と悠元にせがんできたのは言うまでもなかった。それを傍で聞いていた摩利から説教を受けていたが、結局調整をすることになったのだった。

九校戦本番前日②

九校戦の前日、選手の多くは英気を養っていた。ただ、本戦と違って新人戦は４日目からなので、そちらに出場する１年生からすれば、緊張よりも興奮と高揚が勝っている。なので、大抵は同級生との団体旅行気分で燥いでいた。

その大抵に当て嵌まらない人間も当然いる。その一人である悠元は新人戦の統括を頼まれている人間なので、代表の各メンバーとの折衝もあったりする。

亜実のＣＡＤ調整を終えた後、悠元は真由美からの呼び出しを受けて、ホテル内にあるミーティング・ルーム――本来は士官の会議場として使われている場所に顔を出していた。

その場にいるのは、代表リーダーの真由美に本戦の統括である克人、他にも摩利、鈴音の四人に加えて悠元の五人。この事前会議については最終確認も含めての意味合いがあると事前に姉たちから聞いているため、特に身構える必要はなかったし、余計な外野がいないことは幸いといえた。

全員が揃って席に着いたところで、真由美が明日からのスケジュールについて話し始める。

「明日からいよいよ本番となるわけだけど、その確認の前に一つ連絡があるの。九校戦本番では、魔法大学と防衛大学校から会場警備と各校天幕（テント）の警備を出すことになったそうよ。それぞれ５０人ずつの１００人体制。うちの外部補助スタッフである各学校の在校生もその中に含まれているわ」

「初耳だな……理由は何か聞いてるのか？」

「双方とも『学校の集中講義およびアルバイトの一環』ということになってるけど、そのことは佳奈さんから直接聞くまで知らなかったのよ」

摩利からの問いかけを挟む形で放たれた真由美の言葉には、流石の克人も少し目を見開く。関東地方の諜報を担う七草家の令嬢が知らなかったというのは意外だし、そもそも１００人でも結構な規模であ

る。どこかしらでその情報が漏れていても不思議ではない。
　もしかしたら、七草家当主は知っていても真由美が知らなかった可能性もあるのだが、そうする理由が不明であると率直に感じた。
「意外だな。もしかしたら、弘一殿がお前のことを気遣って止めていたのかもしれないが」
「冗談にしても笑えないわよ、十文字君。あの父親がそんなに殊勝な性格とは思えないけど」
「真由美、お前な……」
　いくらこの場に真由美の本性を知っている人間しかいないとはいえ、十師族の当主である自分の父親をそこまで酷評したことに摩利も溜息を吐いた。
　真由美が佳奈から聞いた内容では、直接接触を禁じているモノリス・コードを除き、接触事故の危険性が大きいバトル・ボードとミラージ・バットではフィールドの直ぐ傍で待機、不測の事態が発生した場合の対応を行うとのこと。それ以外の競技は各校の天幕や作業車両の警備に当たる。
　モノリス・コードの場合はフィールドが国防軍の基地内という事情もあり、防衛大学校の生徒が会場の警備を担当。その代わりにミラージ・バットは魔法大学の生徒が会場警備を担当する段取りらしい。
「悠君は何か聞いてない？」
「今の話は自分も初耳です。なので、ご期待には添えられませんよ」
　会場警備と天幕警備については全く以て初耳のレベル。だが、４日前に三矢本家の呼び出しで久々に七人兄弟全員が揃った際、元治と詩奈を除く五人に元が闇カジノの情報を伝えると、佳奈はこう断言していた。
「――バトル・ボードで摩利を潰す気だね。尤も、そんなことをしたら三矢に対して間接的な喧嘩を売る、って連中が気付いていない筈が無いんだけど」
　現３年の実力者に限って話せば、真由美は直接攻撃の危険性が極めて低いスピード・シューティングとクラウド・ボールに出場する。克人はアイス・ピラーズ・ブレイクとモノリス・コードだが、彼は同年

代の十師族関係者でも指折りの実力者。加えて鉄壁の秘術である『ファランクス』を有している。その彼に不意を打てるとなれば相当の実力者だが、本戦出場メンバーに彼と同等の実力者はいない。

そうなると、接触の危険があるバトル・ボードに出場する摩利を狙い撃つ公算が高いのだが、彼女に手を出せば、養子縁組の関係とはいえ三矢家にも波及する可能性がある。加えて、亜実を狙った場合は六塚家が確実に動く。もう一人の女子バトル・ボード出場者である小早川は、彼女の担当エンジニアを務める3年の平河小春（ひらかわこはる）を美嘉がいたく気に入っていた。

男子でいえば服部も美嘉が練習を見ていた……実力のある先輩の誰を狙い打っても確実に十師族の人間が動くという地雷（おまけ）付だ。

「裏の組織の連中にそこまで理性があれば、が前提じゃないかな、佳奈姉さん。『無頭竜』の噂は少し集めてみたけど、粛清はかなり苛烈らしい……命乞いの為に選手なんかどうなってもいい、と考えてもおかしくはない」

「ま、西日本・東日本支部の幹部連中に日本人はいないようだからな……そうなると、悠元も狙われる可能性があるというわけか」

元継の言葉に悠元は何かを考え込むような仕草を見せていた。確かに接触の危険がないとはいえ、魔法の妨害が〝出場選手以外の内部から飛んでくる〟可能性が残ったままなのだ。これは、大会運営委員に連中の息が掛かった人間がかなりいることを既に掴んでいるからこその台詞ではあるが。

悠元はこれを一つの可能性として残しつつも、それに関する対策は既に取っている……この方法はあまり褒められたものではないが、三矢家にとっては〝大義名分〟を得ることのできる好機ともいえる。そのために防御系魔法の類は余り見せないようにしてきている。

『与える家』とて無から有を生み出せる存在ではない。時として十師族らしく「求める」ことも必要である。

「一応、七高対策で摩利にあの走法は教えたけど……大会記録（コースレコード）更新を狙って無茶して、途中でリタイアという危険性もあるから油断はできない。修次さんには言い含めておいたけど」

「……継兄さん。あらゆる魔法の可能性を考えて、バトル・ボードとミラージ・バットは佳奈と美嘉に見てもらったほうがいいかと。万が一、他校の人間が巻き込まれる可能性も捨てないほうがいいでしょう」
「だな。モノリス・コードは俺の十八番だし、個人的に国防軍との伝手もあるから悠元の出る試合は直接見ておこう。詩鶴は俺のバックアップを頼む。千里にもお願いするとしよう」
強力な『精霊の眼』を持つ佳奈と極めて高い魔法知覚力を有する美嘉なら迅速に対応できるし、モノリス・コードに出場経験のある元継が悠元の出る試合を見ることで対応する。そのバックアップに詩鶴、更にもう一人助っ人も入れる形だ。彼女は防衛大学校の生徒なので、モノリス・コードの試合会場にいたとしても何ら不自然ではない。
美嘉の言葉を聞きつつ詩鶴は元継に問いかけると、彼もその意見に同意した上で悠元の試合を見ると述べた。
この会話を聞きつつも、元が口を挟むようなことはしない。十師族当主である自分に出来るのは、彼らの後ろ盾になってやるぐらいだと理解しているからこそ、九校戦本番は留守役となる元治に対して必要以上の情報を与えていない。
「父さん、『ジェネレーター』に関してはどうなってます？」
「千葉家の方々にお任せすることにした。表向きは内情と公安の『短期集中訓練』となっている」
そこに加えて、独立魔装大隊と新陰流の上段クラスも表向きは〝観客〟として会場入りする。十師族の他の方々にも一応の事情説明は既にしているとのこと。
元は内心、自分の子ども達がこれほどまでに成長したことを素直に喜んでいいのか苦笑していた。幸いにも次男以下の面々は長男の家督継承に賛成しているため、特に問題となるようなことはないぐらいだろう。
閑話休題。
「一応確認はしたけど、詳しいことは何も教えてくれなかったわ。さて、各競技の戦略目標について再確認と行きましょうか」

真由美は、自分の父親から詳しいことが何も聞けなかったことに納得がいかないような表情を浮かべていたが、現実的な問題を議論するほうがいいと判断して、九校戦の一高の戦略についての確認を行うことにした。

明日は開会式の後、本戦男女スピード・シューティングの予選から決勝、本戦男女バトル・ボードの予選となる。この会議に出ている中での出場選手は真由美と摩利の二人が該当する。

なお、現時点において全種目のトーナメント表は一切発表されておらず、競技開始直前にその情報が開示される。理由としては公平性を保つため、とされているが……その状態で『無頭竜』の息が掛かった大会委員に改竄されたとしたら大問題だろう、と思う。その辺については過去に九校戦を経験している面々に判断を委ねることにした。

「楽観視なんかしたら、後で詩鶴さんから強制的にヨガ教室行きよ。摩利や十文字君も、そのつもりで覚悟して頂戴ね」

「……誰か被害に遭ったのか？」

「恐らく、服部と桐原のようだな。本人たちには事故の一件の不安も払拭されたし、いい発破になっただろうと見ているが……」

「ええ、その通りよ（本当は悠君から聞いただけ、なんだけどね）」

いくらスポーツ色が強いとはいえ、お遊びなどと高を括るような態度は許されない。3年前の雪辱を果たす意味においても、今年は何としても総合優勝しなければならない。彼女らには悪いが、利用できるものは何でも利用する……その辺りは七草家現当主の血を色濃く受け継いでいる、と摩利や克人は内心で真由美をそう評価した。

すると、ここで鈴音が二人に代わって真由美を評価しつつ、作戦スタッフのリーダーとして意見を述べる。

「流石はあの七草家の令嬢。会長でもやれば出来るんですね」

「リンちゃん？　それ、どういう意味なのかな？」

「チームリーダーとしての手腕を少し褒めただけです。作戦スタッフのリーダーとしては、本戦に関して特に言うことはありません」

特に、今回は決勝トーナメント・決勝リーグ対策としてＦＬＴから無償提供されたシルバー・ブロッサムシリーズを使うことになる。彼

らの存在を所謂〝広告塔〟に使うというわけだが、幹部の面々からの評判は上々だった。
　尤も、それを実際に使用するのは本戦の一部のメンバーと新人戦の男子の一部と女子全員に止まる。理由は一科生のプライドという陳腐なものだが、元々強制でないために真由美や克人も強くは言えなかった。予選と決勝リーグで別のＣＡＤを使う芸当ができるのは、完全マニュアル調整ができる人間が１年と２年にいるという現実も存在する。
「悠君。新人戦のほうはどうなの？」
「現状において種目優勝見込みは男子３種目、女子３種目と見ています。戦略や戦術は技術スタッフに一任していますが、男子の殆どはどうにも一科生としてのプライドが邪魔しているようで」
「つまり、男子の成績が女子に比べて振るわない可能性があると？」
「ええ」
　森崎はそれなりに仕上がっているが、同じスピード・シューティングに出場する真紅郎のことを考えれば系統相性の問題で分が悪い。現状、真紅郎に対して有効打を打てるのは同じ種目に出場する燈也だけと見ている。鷹輔も仕上がりつつはあるが、万が一の場合は燈也と亜実から発破をかけてもらう。
　悠元の場合は出場する２種目に対して既に道筋を立てている。これで大会運営が使う魔法に文句を付けたら、更に用意する魔法が最低でも１０個ほど増えるだけだ。いざという時は悪目立ちすることも考えなければならない……面倒な話だと思う。
　女子の場合はほぼ準備万端といった様相だ。悠元がエンジニア経由で提供した起動式に加えて達也の作戦、更にあずさのＣＡＤ調整スキルも原作より上がっている。ここだけの話、悠元がアイス・ピラーズ・ブレイク用にと深雪に提供した起動式を達也に見せたら、思わず表情が引き攣るような様相を見せたのは言うまでもないが。
「選抜会議の時にも思ったことですが、自分の力を十全に引き出すための努力が一科生の殆どで欠けていると思います。それ以上に、魔法師を目指すというなら魔工技師に対する知識不足や認識不足が著し

いと具申します」
「……三矢、それはお前自身のことも含めて言っているように聞こえたが？」
「いくら十師族の直系とはいえ、そこまで傲慢になれる性格ではありませんから」
ＣＡＤが自分の命を預けるものという認識が強かったからこそ、独学で魔法工学を学んでいた側面がある。ほかの生徒が自分の命を軽々しく扱っているとは思えないが、魔法という同年代でも発現する人が限られるほどの貴重な力は、他人との優越感からゲームのように他人の命や尊厳などを軽々しく考えたりする。異世界転移ものでよくある「力に酔う」傾向はその一端だろう。
天才だから何でもできる、というのは半分正解で半分間違いだろうと悠元は思う。『トーラス・シルバー』はどうなのか、という疑問が飛んでくるだろうが……現代の魔法師にとって必須ツールであるＣＡＤを製作する魔工技師（エンジニア）の存在を蔑ろにするな、という皮肉も多少は混じっている。そのためのシルバー・ブロッサムシリーズとも言えるだろう。
何が言いたいのかというと、先輩方の前でハッキリと実力を示してメンバーに選ばれた達也の存在を「二科生だから」という色眼鏡で見るのは如何なものか、ということだ。今回代表に選ばれている１年男子で達也の実力を認めているのは悠元と燈也、それと鷹輔しかいない（鷹輔には燈也がエンジニアの重要性を説いて、亜実が選抜会議の内容を話していたため）。
「だったら、俺が説得すればいいのでは？」と思う人間もいるだろうが、極めて難しい。正直な話、達也が克人や真由美、服部や桐原に加えて卒業生の推薦を受ける形でエンジニアに就任した時も文句を言われたことに加え、本来選手とエンジニアを同性で組む慣習を１年一科生の男子が拒否したのだ。
かと言って、燈也や鷹輔に説得しろと言うつもりもない。只でさえ下らないプライドで本来の慣習を拒否したのだ。ただ、達也の調整を受けたいと望んでいる１年女子のことを鑑みれば、それはそれで達也

の負担を重くせずに済むので必要以上に干渉する気も失せた。
結論としては、一度一科生としてのプライドもとい天狗の鼻を根元からへし折らないと無理、と判断した。悪く言えば投げやりとも言えるが。せめて同じ一科生の立場から言えることがあるとすれば、「一科生のプライドだけで勝てるほど九校戦は甘くない」ぐらいだろう。
結果だけを見てそれに至るまでの過程を推測できないのは仕方ないにしても、他の八校の1年も相応の努力を積み重ねている面々。ならば、自分たちと同レベル以上の人間だということを念頭に置かなければならない。
だからこそ、悠元の兄や姉達は十師族の直系と言う立場に甘んずることなく自分に出来ることを突き詰めて種目優勝を、ひいては九校戦の総合優勝を勝ち取った。
自分も九校戦は見に行っていない（厳密には沖縄防衛戦後）が、その練習に付き合わされた経験はある。なので、九校戦の実施種目については一通り経験している形に近い……そこから得た経験談である。
「ここまで来た以上はなるようにしかなりませんし、フォローも極めて難しいことになるでしょう。無論、燈也も自分も力を尽くしますが……想定を甘く見たとしても、男子と女子で明暗が分かれることになるかと」
「まるで経験してきたような言い方だな？」
「兄や姉たちの練習に付き合わされてきた経験からの発言です。すみません、不快に思われたのなら謝罪いたします」
「いえ、悠元君が謝る必要はないかと。寧ろ、あそこまでの的確な新人戦の戦略プランはそこから立てたものだったと知って、正直感心しています」
単に上の兄弟姉妹がいるというだけでなく、その練習相手になっていたというなら彼らの実力も読み取った上で戦略を立てる……摩利の問いかけに対する悠元の言葉に鈴音が反応した。ともあれ、大きな変更点はなく、九校戦を確実に勝っていくという方向で固まったのだった。

九校戦本番前日③

――五輪澪。

その名を聞けば、知らない人はモグリと言われても過言ではない魔法師。

十師族・五輪家現当主である五輪勇海の長女にして、世界でたった13人しかいない国家公認戦略級魔法師――『十三使徒』の一人であり、この国で唯一表向きに認められた戦略級魔法師である（国外にも非公式の戦略級魔法師が存在しているため、実際の戦略級魔法師の数は全世界に50人程度と言われている）。

彼女は戦略級魔法『深淵』の使い手だが、その余りある才能の代償として極めて病弱であり、容姿は十代前半と言われても違和感がない。体力の消耗を抑えるために動力付きの車椅子を使用している……抑止力のためや十師族としての地位を保つためとはいえ、彼女を人間ではなく『兵器』として見ている節は否定できない。

これが表向きにされている五輪澪に対しての印象と評価である。

では、実際の彼女はというと……こうである。

「悠元君、久しぶりー!!」

「…澪さん。他に人がいないとはいえ、少しは隠してください」

会議の後、澪からの呼び出しを受けて悠元が（当たり前だが）真夜が泊まっている場所とは別のVIPルームに足を運ぶと、執事と思しき人の案内で中に通された。澪は動力付き車椅子に乗っていたのだが……二人きりになった瞬間、澪は車椅子から飛ぶようにして地面に着地すると、駆け寄って悠元に抱き付いていた。

「偶にはいいでしょう？　使用人には見せられないんですから」

「寧ろ医者経由で知っていると思ったのですが？」

「私のことを知られたら、悠元君に迷惑が掛かるもの……何なら、そのまま婚約しても」

「はいはい、調子に乗らないでくださいね」

澪は本来丁寧な言葉を使うのだが、悠元に対しては無駄に疲れるということから口調を崩して話すことが多い。悠元は澪からの言葉に

そう返しつつ、澪をお姫様抱っこで車椅子に戻した。その一連の行動に対して、澪は顔を真っ赤にして俯いていた。
「ズルいよね、悠元君は。釣った魚にも律儀に餌をあげるんだもの」
「餌やりはもとより、釣り上げた覚えなど皆無なんですが」
悠元としては、澪の治療はあくまでも『領域強化（リインフォース）』をベースに組み上げた想子波長調整魔法――――いや、厳密には〝有機物・精神干渉魔法〟『癒しの風（フローラル・ウィンド）』の実験の意味合いもあった。
『癒しの風』は想子体と幽体、肉体の相互バランスに対して干渉を行う魔法。その副次効果および隠蔽としてマイナスイオンを意図的に発生させる放出系と気流操作の術式も組み込んでいる。
この魔法を作った理由は、単に『領域強化』の効果が強すぎた為。『領域強化』の効果対象とした魔法師の実力まで引き上げてしまうことが剛三と深夜、それと穂波に対して使用した結果から得られたためだ。
新入生勧誘週間の時に『癒しの風』を使ったのは、疑似キャスト・ジャミングによって想子体に変調を来たしていたため、肉体に対して想子酔いという症状を引き起こしていた。なので、それを軽減させる干渉を行っただけだ。変数設定によって効果範囲も容易にできるため、その時は狩猟部の先輩たちに対象を絞った。
ただあの時、その範囲内に亜実も入っていたことを失念していたが……燈也に確認したところ、あの日以降亜実の実力もメキメキと伸びていったらしい。恐らくは彼女の想子保有量に対して肉体とのバランスが合っていないと判断して干渉し、身体強化に付随して魔法力も伸びたのだろうと考えられる。
魔法って本当に末恐ろしいと思う。この場合は本来『その時不思議な事が起こった』というご都合的展開が起こりえない世界で、そのご都合的展開を起こせるだけの異分子である悠元が単に〝埒外〟なだけだが、本人は否定している。
「やっぱり、私の容姿なのかな……最近は成長してきてるけど」
「それはいい傾向だと思いますよ」
「むー、他人行儀なんてしてほしくないの！　本来なら、寧ろ私が敬意

を払わなきゃいけないんだよ？」
話を戻すが、悠元は魔法の実験のつもりでも、澪にとっては〝自分の命を救ってくれた恩人〟に他ならない。
国内の名立たる治療師でも解決策を見いだせなかった澪の治療を成した……その功績は、魔法医学界にとっても大きな出来事。彼の非凡さは十師族の中でも突出した存在だろう。だからこそ、澪の父親である勇海は彼女を悠元と婚約させようとしている。
加えて悠元は三男であり、三矢家長男が次期当主である以上は師族の当主に成り得ない。だが、非公式の戦略級魔法師である悠元は、澪と同じようにその存在だけで三矢家の要なのだ。
戦略級魔法師同士が婚姻となれば、確実に国内外へと波及しかねない。だからこそ、元は勇海の申し出を丁重に断った経緯がある。尤も、澪としては悠元との婚約は吝かでないと思っている。
「前にも話しましたが、ある意味騙していたのは事実です」
「魔法師なんて、騙してナンボみたいな所はあるけど？　十師族なんてその極みじゃない」
「否定はできませんね」
最初、悠元は非公開の治療魔法と断(ことわ)った上で彼女に『癒しの風』を使用した。だが、その説明では澪の魔法力を一切損なうことなく健常者と変わらない状態になったことへの理解が難しい。言うなれば〝不十分〟……納得できなかった勇海は、五輪家当主としてではなく、澪の父親として悠元を問い詰めようとした。
こればかりはいくら相手が同じ十師族で、魔法技術提供に好意的な三矢家とはいえ教えられる話ではない。それに、勇海の取った行動が魔法使いとしての掟を破ることに繋がりかねない。なので、被験者でもある澪が悠元からその魔法の大まかなことを聞き、勇海をそれで納得させていた。
「だからと言って、その詫びに澪さんと婚約させようとしている時点で七草家当主とやってることが大して変わりませんよ……魔法使いの家としては、次代に卓越した魔法師を残す意味合いで受け取るなら、それも正しい選択なのでしょうが」

「……え？　あの家からも？　もしかして、真由美さんの妹さんのどちらかと？」
「ええ、泉美ちゃんのほうですね。尤も、その後に起きた十山家のことと、バレンタインのダブルパンチで御破算になりましたが。主に前者が原因ですね」
　悠元自身、許婚の相手がいること自体はそれとなく聞いていたが、具体的な内容については婚約破棄を告げられるまで知らなかった。
　元としては、年を越す前（昨年末）まではその方針で行こうと考えていたらしい。深雪が悠元に対して特別な感情を向けていることは、元も知らなかったので無理もないことだ（バレンタインチョコ云々は元の妻である詩歩から『本人たちの問題』と釘を刺されていたため）。
「――――お父様？　せっかくの良き話を台無しにしてくれた代償は、どう支払っていただけるのでしょうか？　悠元お兄様と結ばれるチャンスをふいにされて……解っていますよね？」
「泉美、ストップ！　ストップ!!」
「お願いだから落ち着いて！　って、名倉さんが立ったまま気絶してる!?」
「……（娘の教育、間違えてしまったのだろうか？）」
　余談だが、そのことを後で知った泉美が、父親に対して殺気混じりの満面の笑顔を浮かべながら問い詰めた。これには姉である真由美や双子の姉である香澄も必死になって泉美を宥めていた。
　弘一は冷や汗をかきながら、娘の教育を一体どこで間違えてしまったのか、と自問自答していたのだった。これぱかりは弘一が原因ではなく、悠元という存在に出会ってしまったことが大きいというのは……この時の弘一には分からなかった。
　そんな経緯もあり、六塚家現当主の弟が五十嵐家長女を婚約者とする発表には、特に工作をすることもなく黙することを選んだ。そのことを知っているのは当人とその側近の執事だけである。
「泉美ちゃんから『今後はあの人を父親だと思いたくありません』と言われた時は返答に困りましたよ。少し落ち着くように言いましたし、真由美さんや香澄ちゃんにはそれとなくフォローしてもらうよう言

い含めましたけど」
　そのフォローの一環がホワイトデーのプレゼントも兼ねた七草家訪問だった。ちなみに、持参した大量のクッキーの半分は克人が引き取って十文字家に持ち帰ったところ、克人本人や彼の父親、克人の弟と妹から『美味しかった』と感想をもらった……どうか、フラグが立ちませんように。
「……そういえば、最近真由美さんのスキンシップが増えてたりする？」
「その印象は拭えませんが……でもあの人、洋史（ひろふみ）さんと婚約してますよね？」
「婚約者〝候補〟というだけだよ。何回か食事やデートらしいことはしてるけど……周りが変に持ち上げちゃって、結果的に『婚約者』って話になってるの」
　澪の言葉に悠元も思わず目を見開いた。
　あの七草家当主なら同い年以上の男性を婚約者候補に据えようと考えていたことは、泉美との婚約話でも理解していた。なので、てっきり真由美も婚約しているとばかり思い込んでいたのだ。
　達也がそのことについて自分で調べなかったのは、それが深雪に対して害をなすような話でもなかったために調べなかったのだろう。これぱかりは自分の早とちりだなと自省した。
「その話で思い出したけど、真由美さんから『悠君が、自分のことを名前で呼んでくれないんですよ』って相談されたんだけど」
「学校でその呼び名を使ったら、学校非公式のファンクラブから要らぬ嫉妬を受けかねません。唯でさえ、自分と真由美さんは年齢こそ違えど、同じ十師族の直系なのですから」
「それも納得できる話だよね……本人は諦めないと思うけど」
　呼び名一つで本人の機嫌を損なうのは嫌だが、彼女をアイドルのように神聖視しているファンクラブの面々から要らぬ疑いを持たれて、それで襲撃されるのは一番御免である、というのが悠元の出した結論だ。
「泉美ちゃんの問題で尾を引き摺っているのにですか……」

「むしろ、逆に好機だと思ったんじゃないかな。十師族は恋愛結婚なんて夢物語みたいなものだし」
「七草家のごたごたに介入する気はゼロですよ」
泉美との婚約解消も相まって、より拍車が掛かったのは否定できない。何せ、何度か出たパーティーでの態度と、一高に入学して生徒会に入ってからのスキンシップを比較すると、後者のほうがより直接的になっている。
「……まあ、うちの爺さん共々七草家に危機を与えてるような感じなのは否定できませんが」
「別に御破算になっても、五輪家にとっては痛手にならないからね。寧ろ私としては都合がいいし」
「いや、それでいいんですか……洋史さんが可哀そうですよ」
「都合がいい」というのは、悠元と泉美の婚約話が消えたことで澪にもその好機が出てきた、ということを意味する。澪の弟である洋史と真由美の進展は、健常な戦略級魔法師となった澪がいる五輪家にとって「おまけ程度」の話に格が下がったことも意味する。
念のため、自分の婚姻に関わることを剛三から聞いたのだが……剛三は「この国の護りを万全にするために戦略級魔法師の血縁を絶やさないことが大事だ」と述べていた。彼の子どもは戦略級魔法を使えないが、その孫である自分が戦略級魔法を使えるという事実上の隔世遺伝を起こしていたからだ。
その上で「民法など無視してでも複数の婚姻を結んでその血筋を増やすことこそ肝要」と力説された。つまり、待っているのはハーレム的展開ということに他ならない……マジで？　剛三は東堂青波を始めとした『黒幕』とも面識があるらしく、彼らの伝手を使えば政府を黙らせることなど造作もないらしい。おお、怖い怖い。
恐らくだが、達也もこの例外になると踏んでいる。何せ、剛三は深夜を知っているので、自ずと達也と深雪も知っている可能性が高い。転生という形で原作に介入している自分でも、こればかりは「流石、原作主人公」と思った。
前世の時はハーレムを羨ましいと思ったり、男の夢だなと思ったり

していたが……転生して魔法使いの家系に生まれ、各所に顔を出していく中でそんなのは〝遥か遠き理想郷〟だと率直に感じた。例えて言うなら、女子校が夢の花園とか理想を抱いても、現実はそう甘くないと突きつけられるようなもの。

そこに加えて、自分の場合は恋愛感情の欠落もある。そう簡単な話ではない、と溜息を吐きたかったのは言うまでもないし、剛三との話は二人だけの秘密である。

「男として情けないって思っちゃうね。せめて悠元君みたく女性の心を盗んじゃう人じゃないと」

「俺はどこぞの怪盗になった覚えはありません。てか、フォローもしないんですか？」

「無理。私には私の都合もあるからね」

血の繋がった実の弟に対してバッサリと切り捨てた澪に、悠元は思わず頭を抱えたくなった。この後、学校生活のことや九校戦の出場種目についての話をした後、悠元は漸く解放される形となった。

なお、帰る際に「私のことを置いてかないでー！」とか言ったので、母直伝のトール・ハンマー（こめかみグリグリ）をお見舞いする羽目になった……それを受けた後に「これが愛の鞭……」と呟いていた。

ダメだ、この戦略級（ローティーン）魔法師。早く何とかしないと。

九校戦本番前日④

深雪と雫、そしてほのかは、雫とほのかが宿泊している部屋にいた。深雪の場合は滝川和実と同室なのだが、和実が体育会系の先輩のところに遊びに行ってしまうため、一人でいるぐらいならと二人の部屋に遊びに来ていた。

深雪としては、達也か悠元のところに行きたかったが、前者は起動式の改良作業が残っているということで邪魔をしてはいけないと思い、後者は夜の遅い時間まで統括役としての仕事に追われていたため、自ずと二人の部屋に遊びに来ていた。

そういう理由はあるものの、クラスメイトであり仲の良い友人である二人のことを深雪は大切に思っている。その辺は悠元に対して〝想っている〟こととは流石に違うと述べておく。

「いよいよ明日から九校戦かあ……緊張するな」

「ほのか、私たちの出番は４日目以降よ。雫、明日のお勧めは？」

「七草会長のスピード・シューティングは必見。優勝は間違いないだろうけど、高校最後の年に『エルフィン・スナイパー』がどういうプレイを見せるのか楽しみ」

ほのかの言葉に少し笑みを漏らしつつ深雪が雫に尋ねると、端末を持った雫がそう答えた。

真由美は唯でさえ優勝間違いなしの前評判が高いことに加え、練習期間中は新人戦メンバーの模擬戦相手として面倒も見ていた。なので、その実力を肌で感じた雫だからこそ言えるが、あの時は新人戦メンバーを潰さないためにそれ程本気でなかったと断言できる。

何故なら、練習場のデモンストレーションで行われた佳奈と真由美の試合を録画した映像があり、それを見たからだ。

「佳奈さんと互角に撃ち合っていたのは、本当に見応えがあったわ」

「録画映像を見せてもらったけど、あれは思わず鳥肌が立った。あそこまでのハイレベルな試合なんてそうそう拝めるものじゃないから。生で見ていた深雪が羨ましい」

「私も録画映像を見たけど……あ、私が出るよ」

部屋に備え付けられた時計は２２時手前を指している。明日の試合に備えて上級生は既に眠っている人が多いだろう。とはいえ、消灯時間はない（戦術スタッフや技術スタッフがいるため、代表メンバーで一律に消灯時間が設定できない）ので、周りに迷惑が掛からない程度でお喋りに興じていた。扉をノックする音が聞こえ、一番近くにいたほのかが立ち上がって扉を開けると、そこには英美やスバルを始めとした1年女子メンバーであった。

「エイミィにスバル、それに他の皆もどうしたの？」

「うん。みんなで温泉に行かない？」

英美の言葉を聞いて、ホテルに温泉？　という繋がりを見いだせないほのかだったが、それを聞いた深雪が答えを出すように言った。

「温泉？」

「そういえば、このホテルの地下は確か人工の温泉になってる、って聞いたことがあるわ」

「私たちでも入れるの？　宿泊しているとはいえ、軍の施設なんでしょ？」

「試しに頼んでみたら、１１時までオッケーだって」

そうなれば特に断る理由もないということで、1年女子メンバー全員で地下の温泉に向かうことになった。

彼女らはそこで丁度温泉から上がってきたと思しき恰好の悠元と遭遇した。流石に髪や肌は濡れていない状態であったが、彼の恰好はＴシャツに黒のズボンという学校では滅多に見せないラフな格好だった。その色っぽさには思わず雫は頬を赤く染めていて、深雪もうっとりした表情を浮かべていた。これには他の1年メンバーも悠元のカッコよさにドキッとしていたのは言うまでもない。

「ん？　誰かと思えば英美に深雪、ほのかに雫……1年女子メンバー全員で温泉かな？」

「あったり！　でも、悠元は何で温泉に？」

「夜9時から貸してもらうようにお願いしてたからな。達也や同じ1年の面子と一緒に入ってただけだよ。俺が一番最後に出てきたってわけ」

ここの温泉はレクリエーション目的というよりも医療的な目的で使用されることが多く、温泉は湯着(ゆぎ)か水着着用であった。悠元はどうせならと達也、燈也、鷹輔に加えてレオと幹比古にも声を掛けた（幹比古は若干乗り気でなかったが、強引に押し切った）。そして、最後に上がってきたと英美に説明した。

「にしても、解っちゃいたけど……色っぽいイケメンだね、悠元も」

「俺は至って普通だと思ってるけどな。（残念な）イケメンなら三高の『ヘタレ野郎(クリムゾン・プリンス)』あたりだろうに……そしたら、ごゆっくり」

（今、発言の中に凄い言葉が混じっていたような気が……）

英美の言葉に悠元はそう返すが、ほのかは悠元の発言に凄まじいほどの嫌味が込められているのをそれとなく感じていた。悠元がその場から去った後、若干（？）トリップしていた雫と深雪を強制的に再起動させて温泉に入ることになった。

女子の場合は湯着を着るのだが、それでしっかり隠せているかと言われれば、水着よりも心許ない。というか、女性としての色っぽさも目立つ。1年女子メンバーの中でずば抜けてスタイルそのものがいいのは、他でもないほのか。なので、他の女子からすればほのかの胸に視線が行くのは、いくら同じ女性でも無理からぬことだった。

「見てもいい？」

「いいわけないでしょー！　雫、助けてー!!」

英美のオヤジ魂のような目つきと手つきが迫ってきて、ほのかは雫に助けを求めた。だが、無二の親友から返ってきた言葉は非情であった。

「……いいんじゃない？」

「雫!?」

雫からすれば、ほのかは『持っている者』に他ならない。浴槽から上がってサウナに足を向けつつ、理由を尋ねられたので雫はこう呟いた。

「ほのか、胸大きいから」

「雫ー!!」

ある意味〝お墨付き〟が出たことに気分を良くしたのか、英美だけ

でなく他の1年女子メンバーもほのかに迫ってくる。これはどうしようもなく叫んだところで、ある意味救世主ともいえる存在――――深雪が姿を見せた。流石に温泉なので、髪はポニーテールで結んでいる。

ちょっとした立ち振る舞いだけで人々を引き寄せてしまう深雪は、ほのかに向いていた1年女子メンバーからの視線を浴びる形となり、これには流石の深雪もたじろぐ。

「え？　えっと……」

「皆、ダメだよ！　深雪はノーマルなんだから！　余計なことすると、皆氷水で冷水浴する羽目になるからね!!」

そこに救いの手という形でほのかが援護してくれたおかげで事なきを得たが、深雪はほのかからそういう評価をされていたことに対して反論しようとしたが、この微妙な均衡状態を崩すのは拙いと判断した。

「……何やってるの？」

結局、サウナから戻ってきた雫がそれに終止符を打つ形で、温泉が比喩抜きの冷泉にならずに済んだと言えよう。それから女子の話は恋愛話というか昨日の懇親会も含めた話になっていた。

「そういえば、懇親会に三高のプリンス――――　一条の跡取りがいたよね」

「見た見た。彼ったら、深雪のことを熱い眼差しで見てたよね」

「実は前から知り合いだったとか？」

キャー、という黄色い歓声が飛び交う中、雫は深雪に問いかけた。

「深雪、どうなの？」

「一条君のことは、記事の写真で見た程度のことしか知らないわ。会場のどこにいたのかも分からなかったし」

完全な一刀両断、と言わんばかりのこの言葉を将輝が聞いたらショックで倒れること間違いなしだろう、と雫とほのかはそう感じた。それを聞いて、スバルはこう呟いた。

「まあ、そうだよね。深雪は三矢君にお熱のようだし」

「お、お熱って……そこまでは……」

「でもさ、さっき悠元とすれ違ったとき、惚れているような顔をしてたね。まあ、私もちょっとドキッとしたけど……」
「エイミィ？」
　彼女の言葉にどう返すのがいいのか深雪は思考の迷路に嵌り、そんな様子を見つつ放たれた英美の言葉に雫の表情が強張る。これを見た英美は乾いた笑みを浮かべつつ、話題を切り替えることにした。
「そ、それにしても、悠元は三高のプリンスより視線を集めてたね。単に容姿の良さだけでなく、一条君と同じく十師族というのもありそうだけれど」
「あれぐらいの振る舞いは普通にできるね。普段はあまりやらないって言ってたけど」
「私たちとパーティーで出会ったときはそんな感じだったけど、学校だとそんな印象を全く感じなかったことに驚いちゃった」
　意図的に対応を切り替えることぐらいは流石十師族の直系ということなのだろうが、それにしたって学校と先日の懇親会では偉く対応が違っていた。そのことは深雪もすごく感じていた。
「ねえ、深雪は何か知らないの？」
「私も特には知らないわ。尤も、懇親会の時は『面倒』と零していたけれど」
「め、面倒って……やっぱ、十師族って大変なんだね」
　いくら魔法師社会の頂点に立っているとはいえ、その十師族の直系がそういう席で言っていい言葉ではない。でも、それを口に出せるということは、それだけの面倒なことであると同時に、近くで聞いていた深雪に対して一定以上の信頼を置いていることは間違いないだろうと英美は思った。
「なら、好きなタイプはいないのか？」
「えと……」
「……」
　スバルの問いかけに深雪と雫は頬を赤く染めて黙ってしまった。どちらにしても、悠元のことを真っ先に連想してしまうからだ。これには英美もほのかに近づき、小声で尋ねた。

「ねえ、ほのか。深雪と雫ってやっぱり……」
「多分、エイミィが思ってる通りだと思う」
（これ、仮に二人がアイス・ピラーズ・ブレイクで直接対決したら……修羅場になるとか、ないよね？）
　奇しくも、深雪と雫は新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイクに出場する。同じ種目に出る英美は、彼女らの余波で自分にも影響が出ないよう祈ることしかできなかったのだった。
◇　◇　◇
　悠元は新人戦の戦略プランを完成し終えて、ホテルの外に出ていた。時刻的には日付を回ったあたりだろう。夏とはいえ、涼しい風が心地よく感じたのだが……その中に混じる〝悪意〟に悠元は眉を顰める。すると、作業車両から出てきた達也が悠元に気付いた。
「悠元、どうし……妙な連中がいるな」
「こんな時間に拳銃を出しているなんて、物騒極まりないが、なっ！」
　数は３人。その姿を達也と悠元は確かに捉えていた。すると、彼らに並行する形で生垣の内側を走る人物に気付く。悠元が先行し、達也はそのバックアップをすることをアイコンタクトで確認し、揃って走り出す。
　すると、１人のほうから放たれた短冊――古式魔法の類である呪符だろう。だが、銃を持った連中は生垣の向こうにいる人物を殺そうと銃を向けた。
（流石に間に合わないか……仕方ない）
　悠元は銃を持った連中に対して手を翳す。金色の光が彼の手から放たれ、連中に着弾した瞬間、持っていた銃が分解された。彼らがそれに驚く暇もなく、上空に放たれた呪符から雷撃が放たれ、連中は気絶した。流石に軍の関連施設である以上、照明が行き届いていないのでよくは見えないが、並行して走っていた人物が生垣を飛び越えてきたことは読み取れた。
「誰だ!?」
　精霊魔法――ひいて古式魔法を使用する生徒というのは、現代魔法を駆使する魔法師と比べると少ない。加えて、その声で連中もとい

賊に対して魔法を放った人物は特定できた。こちらに敵意はない、ということを示す意味でも悠元は軽く両手を挙げた。
「俺らだ、幹比古」
「悠元に達也？」
　そんな中、達也は賊の状態を確かめていた。『眼』で見てもいいのだが、それを隠すためのポーズでもあるのだろう。その間に悠元は幹比古に事情を尋ねていた。確かに精霊魔法の類なら〝敵意〟を感じ取ることができるので、その一環だろうと推測した。
「俺らは偶然外にいたんだが、俺が〝悪意〟を感じたのでな。達也にも事情を話して付いてきてもらったのさ」
「そうだったのか。僕のほうも訓練をしていたらそれを感じてね」
「で、連絡を取らずに一人で片付けようとしたって訳か……人のことを言えた義理じゃないけど、誰かを頼らずに何でも解決しようとするのはどうかと思うんだが？」
　幹比古は、悠元が新陰流剣武術の関連で秘術に相当する古式魔法（精霊魔法）を習得していると知っている。なので、彼の説明に対して違和感を覚えるようなことはなかった。そして、幹比古のほうからの説明を聞いて、悠元は一息吐きつつも問いかけた。
「というか、阿呆か？　孫子の兵法にも『敵を知り、己を知れば、百戦危うからず』という言葉がある。今のお前は敵を知る前に己を見つめきれてない状態だ」
「悠元……」
　恐らく、達也も幹比古の放った魔法に対しての〝無駄〟に気付いただろう。こちらが『分解』を使ってもよかったのだが、今回は将来幹比古にばれることも織り込んだ上で秘術を使用した。
　新陰流剣武術の秘術に相当する陰陽（光と闇）の二天、火・水・木・金・土の五行からなる古式魔法――――呼称は「天神魔法（てんじんまほう）」、その一つである金の属性魔法『金鎖破鎚（きんさはつい）』を使用した。
　天神魔法は通常の精霊魔法における発動プロセスとは異なっている。
　精霊魔法の場合、札や短冊などの呪符に情報を書き足し、それを媒

体として「存在」の定義から離れてイデアの海を漂っている「独立した非物質存在となった情報体」を支配下に置き、それを通して事象の改変を行うという三段構成となっている。

では、天神魔法の場合はというと……その発動プロセスが現代魔法に近い。自身で魔法の設計図（起動式）から魔法を構築し、事象改変を行うという2つのプロセスを主体とする。属性付与は事象改変の段階で「独立した非物質存在となった情報体」の属性情報を、使役者が発動した魔法に基づいて〝任意の属性に改変する〟という形となっている。

悠元が天神魔法を「ヤバい代物」と評したのは、その情報改変力が極めて高いためだ。流石陰陽師で名を馳せた人物なだけあって、その高度な術式をたった一人で完成させただけでなく、その時点で現代魔法を見据えていた先駆者と言うべきだろう……その時代の先取りが１０００年以上早すぎたのは言うまでもないが。

なので、この二つの発動速度については天神魔法が断然早い。現代魔法に近いということもあって、ある程度の準備と高度な知識さえ揃えば簡単に使えてしまう代物。なので、天神魔法にはそれを秘匿するために古今東西の魔術から得た知識による極めて高度な隠蔽が施されている。悠元が今回の九校戦において『アクティブ・エアーマイン』に施した処理の大本は、天神魔法の隠蔽術式から流用したものである。

とはいっても、中級以上は極めて高い魔法制御力を求められるため、まともに使えるのは十師族クラスが関の山だろう。

『金鎖破鎚』は金の属性――現代魔法で言えば有機物・無機物干渉魔法。一つの構成物になっている物体を強制的に定義破綻させ、分解してしまう魔法。威力を上げれば分子レベルへの分解魔法にも成り得るため、コンセプトは『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』に極めて近い。

これが秘術の一部として存在するわけなのだから、『分解』がどれだけヤバいのかを再確認する羽目となった。ちなみに、『再成』に相当する魔法も天神魔法に存在する……それを知ったときは頭を抱えたし、剛三も苦笑していた。間違いなく達也のことを思い浮かべたのだろ

う。
「別に誰かを頼ってもいいだろうに。ま、状況が状況だったから仕方ないのかもしれないが……そんな縛りがお前の実家にあったとは初耳なんだが？」
「……解った、話すよ。古式魔法を使える悠元なら、まだ理解してくれるだろうから」
そして、幹比古は話した。
1年前の『星降ろしの儀』によって、今までのように魔法の制御ができなくなり、魔法力が落ちたこと。
悠元やエリカを避けていたのは、そのことを知られたくなかったこと。
今回の九校戦の懇親会にバイトとして参加したのは父親の無理強いがあったこと。
いつの間にかそれを悠元の後ろで聞いていた達也のことは置いといて、悠元はこう結論付けた。
「お前さぁ……以前にも散々『星降ろしの儀』をやってきてるんだから、上位クラスの喚起をすれば、その前後でどうなるかぐらい想定してなかったのか？」
「え？　……いや、えっと……ゴメン、そこまで気にしたことがなかったから」
「ま、そうだよな」
単純な話だ。幹比古は1年前の『星降ろしの儀』で急激に魔法知覚力と魔法制御力が伸びた。だが、当の本人は今までと変わらない感覚で魔法を使おうとした。その結果、歯車がうまく噛み合わないような形となり、結果的に魔法力が衰えてしまったと錯覚を起こしているというわけだ。
先日、実験棟で喚起魔法の練習をしていたことが関連しているとするなら……恐らく、喚起魔法で呼ぼうとしていたのは〝竜神〟クラス――天神魔法でも水属性において高位の召喚魔法に属する類の代物だ。そのクラスを対象として喚起するとなると高速かつ高度な演算を求められるため、幹比古は〝竜神〟の演算能力に無理矢理引き込

まれたというわけだ。
その辺は原作知識と齟齬がないと思うが、場を改めて幹比古から聞くのが良いと判断した。
「理解はしたし、原因は突き止められた。達也、聞いてた代わりと言っては何だが、九校戦の後でもいいから、幹比古用にＣＡＤを用意するので調整してやってくれないか？」
「えっ……そんなことで解決するのかい？」
「別に構いはしないが……それより、これをどうする？」
そういえば、そんな連中もいたなと足元に転がる賊を見やった。すると、幹比古が提案をしたので、二人はそれに乗る形とした。
「あ、そしたら僕が警備の人を呼びに行くよ」
「じゃあ頼む。さっきの話はまた今度にしよう」
幹比古が頷きつつ、その場を後にした……すると、悠元は一息吐いた上で第三者から見れば〝誰もいない〟空間に向かって声を発した。
「さて……賊の対処を高校生に任せるどころか盗み聞きとは些か趣味が悪すぎませんか、風間少佐？」
「――やれやれ、既にお見通しか。いや、新陰流の忍術を学んでいるのだから、無理もない話だな。流石は上条特尉だ」
悠元の言葉に返しつつ、風間は姿を見せた。顔を合わせたのは３月下旬に三矢本家での連絡以来になるため、４ヶ月少々と言ったところだろう。彼の登場に達也はいつの間に、と思いつつも驚くには足りなかった。
風間は九重八雲から指導を受けた九重門下の筆頭であり、彼に本気を出されると達也も『眼』を使わなければ察するのが困難な相手。だが、その相手を悠元は幹比古と話している段階から見通していたことに達也は内心で驚いていた。
それは置いといて、悠元の入学式での行動を一切合財台無しにした当事者と被害者。厳密に言えば風間の上司もその当事者側なのだが……悠元は改めて一息吐いた上で頭を下げた。
「私的な事由で少佐殿からの連絡を絶っていたことをお詫び致します。この度は、本当に申し訳ありませんでした」

「……いや、こちらも悠元が学生であったことを失念していた。許してほしい」

風間としては、正直一発殴られることも覚悟してこの場に来ていた。だが、実際に起きたのは彼からの謝罪であった。これには風間も思わず動揺したが、すぐに持ち直して悠元に頭を下げた。これには達也も少し呆れていた。悠元に対してというよりは、その温情を受ける形となった風間に対してだが。

九校戦一日目①～本戦一日目～

とある某所。人知れぬ山奥に存在する大規模の屋敷。まるで格式高い神宮を思わせるような場所の最奥……大広間の上座には着物を着こなした一人の女性が佇んでいた。長い黒髪を携え、その整った容姿は誰しもを魅了するような芸術品の一言に尽きた。その彼女と相対する形で、甚兵衛を着こなした一人の男性が平伏の姿勢をしていた。

「面(おもて)を上げよ、九重八雲(ここのえやくも)。妾は其方に畏まって貰いたくはない。だからこそ、其方もそのような姿で赴いたのであろう？」

「自分とて神仏の区別は付けております。叡山の末寺の和尚如きが、賀茂(かもし)氏と安倍(あべし)氏から続く陰陽の大家の主に対して袈裟の格好は拙かろうと考えた次第でありますゆえ、このような軽装になったことをお詫びいたします。『月読(ツクヨミ)』を担う神楽坂(かぐらざか)家が主、神楽坂千姫(かぐらざかちひろ)殿」

男性こと八雲の言葉に、女性こと千姫は扇子を広げて口元を隠すと、柔らかい口調で笑みを零した。これには八雲もつられて笑ってしまった。

「うふふ、随分と口が達者になりましたね。この家は来客にそこまで仕来りが煩い訳ではありませぬが……八雲さん、彼と出会ったそうですね。如何でしたか？」

「いやあ、流石の自分も肝を冷やしてしまいましたね。あれは起こしてはならぬ〝龍〟そのもの。興味本位で彼の深奥を覗くようなら、間違いなく破滅します」

「果心居士(かしんこじ)の再来、と謳われた貴方らしからぬ言葉ですね」

「そうかもしれませぬ。ですが、これは本心からの言葉であります」

世俗を捨てた八雲ですら敬意を払う相手からの問いかけに、彼は率直な意見を述べる。元々〝彼〟の調査は、目の前にいる女性こと千姫からの依頼に含まれていた。依頼という体ではあるが、このことは八雲と神楽坂家、それに上泉家現当主も既に承知している話である。

神楽坂家は、それこそ十師族の更に上にいる存在のひとつ。滅多に表に出てこない存在だが、この国の政財界に携わる人間の誰しもが頭

を下げねばならない。〝黒幕〟とも言われる存在であっても、その例外ではない。事実、先の第三次大戦でこの国が周囲の大国に呑まれなかったのは、上泉家と神楽坂家のお蔭あってこそである。
「いつもなら煙に巻いてしまう貴方がそこまで言い切るとは……勝率は如何程です？」
「そうですねぇ……彼に『アレ』を本気で振るわれたら、精々３割が関の山でしょうね。剛三殿がいたく気に入った理由も頷けますな」
正直、八雲は現状や彼の実力を鑑みて「３割」と評価したが、ここに彼が新陰流の秘術の一つである天神魔法まで修得していた場合、その確率は更に下がるとみている。そして、その魔法は神楽坂家に属する人間も使用することができる。
八雲がそのことを知っているのは、自身を含めた古式魔法使いにとって上泉家と神楽坂家は『陰陽（いんよう）の大家』たる存在。古式魔法の一派には「伝統派」なる存在もいるが、その彼らとて違えてはならぬ一線の先に神楽坂家がある。
「しかし、何故に〝彼〟の調査を？　確かに彼は名だたる魔法使いの直系であり、上泉家の血を引いているのは事実ですが」
「……気になりますか？」
「無理にとは申しません。自分も命が惜しいものですから」
「うふふ……いいのですよ。元々貴方にも知って頂きたくてご足労願ったのですから」
千姫はそう言って八雲にその真意を話した。それを聞いた八雲は、自分も調べた彼の置かれている立場を察して、思わず苦笑を漏らしたのであった。
◇　◇　◇
賊に関しては風間が引き取る形となり、詳しいことは国防軍というか独立魔装大隊で調べると話した。これには悠元と達也も異存はないと返答した。明日の昼（九校戦一日目の昼）にでも話すということでも合意した。
銃を持ち込んでいたこともそうだが、彼らの行き先にあったものといえば一高の作業車両だ。未遂ということに加えて、競技への支障が

出ないようにという配慮なのだろうが。
一応、警護担当のスタッフというか姉達にメールは送った。代表選手以外に口止めされていたわけでもないし、彼らが巻き込まれる可能性も無きにしも非ずだからだ。屁理屈に聞こえるかもしれないが……風間には身内に伝えることを了承はして貰った。
天神魔法の使用に関しては剛三に確認をとった。すると、彼から返ってきた言葉は『九校戦本番で思う存分使用していい』というお達しだった。それはどういうことなのかを尋ねても、彼はそれ以上喋らなかった。
というか、大丈夫なのか？　と思う。天神魔法はその性質上、土地の持つ地脈の力などに強く影響を受けやすい。ましてや、富士演習場は霊山とも言われる富士山の麓。使い方次第では富士山を噴火させることなど造作もないレベルの話。
間違っても地形変動を引き起こすような魔法は、殺傷性ランク云々を飛び越えたものなので禁止。精神干渉系は中級までならギリギリだろうが、上級以上の殆どは確実にアウト。精神掌握系は対策しないとデメリットが多すぎるからだ。
そうなると、それ以外の属性魔法主体かつ式神系になる。除外したものでも、威力調整すればアイス・ピラーズ・ブレイクならある程度使える代物……まさか、そこで使えというのだろうか？　確かに一条家の『爆裂』を確実に封じれる魔法もある……爺さんが何を考えてるか知らないが、お達しは「使え」という意味合いに近いと感じた。
思わぬところからの言葉で悩む悠元をよそに、九校戦がいよいよ幕を開ける。
『いよいよ、全国魔法科高校親善魔法競技大会――――通称、九校戦が幕を開けます。今回は例年通り、本戦と新人戦を各5日間ずつ、計10日間に渡って開催されます。今年の注目は、一高が前人未到の三連覇を達成できるのか。それとも、三高が再び三連覇を阻むのか』
直接の観客（ギャラリー）だけでも延べ10万人。放送などのメディア視聴も含めれば、その100倍以上だ。それと、原作以上にメディア対策に力を入れたお蔭で、父親が珍しく上機嫌だと真由美が愚痴を零していた

が、それはこの際置いておく。
　1日目の競技は本戦スピード・シューティングの予選から決勝、本戦バトル・ボードの予選が行われる。競技の進行スケジュールが違うのは、純粋に一試合に掛かる時間の差だ。
「スケジュールの関係だと会長が先か。渡辺先輩が第三レースで、五十嵐先輩が第六レースだな……燈也からすれば、ありがたいと言うべきか？」
「そうですね。練習期間の時の会長は手加減していましたから、実際に見ないことにはどうにも……それに、何かしら参考にできますから」
「まあ、予選で下手打つようなら、詩鶴姉さんのヨガ教室行き確定だからな。会長もその辺りは認識してるだろう」
　最初に真由美の試技が行われるため、女子スピード・シューティングの会場に来ていた。達也の問いかけに燈也は苦笑しつつも答え、それを聞きつつも悠元はぼやくように呟いた。
　練習期間中、彼女のヨガの餌食になった人間を軽く挙げると……本戦メンバーほぼ全員（美嘉と特訓していた摩利は対象外だった）と1年女子メンバーであった（1年男子メンバーは悠元がいた為に除外された）。無論、深雪もそれに巻き込まれたが、気絶せずに乗り切ったので詩鶴から逸材と認定されたらしい。
「確かに効果は凄いんだよね。筋肉痛も綺麗に取れたけれど……毎回は受けたくないよ」
「ほのかの気持ちはわかる。深雪、よく耐えれたね？　私は無理だった」
　余談だが、そのヨガを受けた克人は詩鶴から「バランスが崩れる前に矯正しようか」という言葉の後に、容赦のない音と滅多に聞くことのない克人の叫びが木魂し、周囲の人々が青褪めていた。
　聞けば、骨格と筋肉のバランスが崩れかけていたらしく、気絶して数分後に目が覚めた克人は、体がいつもより軽くなったことを感じ、詩鶴にお礼を言っていた。その流れで「お前らもやるといい」という強制命令で本戦男子全員が巻き込まれたと言う訳だ。

別に無免許でやっているわけでなく、詩鶴は現役の大学生ながら魔法整体師と魔法治療師の資格を取得している。そして、整体マッサージが得意な佳奈もその資格を有している。その辺は剛三の口利きによって試験を受けられるように便宜を図ってもらったらしい。

閑話休題。

「悠元さんに頼み込んで体術を教えてもらったお蔭なのでしょうね」

「大分しなやかな動きも出来てるからな。とはいっても基礎中の基礎だけど」

座席は燈也、達也、深雪、悠元、雫、ほのかという形になっていた。会場内の関係者エリアではなく一般の観客席なのは、少しでも直に見ておきたいという考えがあった。

スピード・シューティングは、３０メートル先の空中に投射されるクレーをいかに早く、かつ精確に破壊する魔法技量を競うもの。予選は２４名（９校だと２７名だが、モノリス・コード以外の競技で成績順による足切りが存在する）による単独でのスコアアタック形式で行われ、スコア上位８名が決勝トーナメントに進める。

スピード・シューティングの決勝トーナメントは対戦型で、各１００個の紅白のクレーが飛び交う。制限時間内に相手よりも多く得点したほうが勝利（先に１００点を取った場合も勝利と見なすルール）となる。

「予選では、敢えて大出力による魔法で複数の標的を破壊する戦術も有効だが、決勝トーナメントでは精確な照準能力が必須となる」

「でも、七草会長は予選も決勝トーナメントも同じ戦術で戦うので有名ね」

今いる面子では燈也と雫が新人戦スピード・シューティングに出場することになるので、達也の言葉に二人はそれぞれ頷いた。すると、レオ、エリカ、幹比古、美月も姿を見せた。彼らが座っているのは最後尾かつ一番高いところなので、席も難なく確保できたというわけだ。幹比古とはその場で初対面の面々（ほのか、雫、燈也）と軽く自己紹介を済ませた。

達也たちがここにいるのは、空中で飛び交う物体の破壊をより広い

視野で見るためだ。そんな真面目さとは裏腹に、観客たちが前へと詰めかける理由……最前列の方向に視線を向けて、エリカが毒づいた。
「しっかし、みっともない男共ね」
「エ、エリカちゃん……」
「まあ、青少年だけではないようだが」
　彼らのお目当てである真由美の姿を見ようと詰めかけていると言う訳だ。異性だけでなく、真由美のことを「お姉様」と慕う同性からも強い人気。『エルフィン・スナイパー』という非公式のニックネームもあるぐらい認知度が高い。そして、スピード・シューティング用の競技服に身を包んだ真由美が姿を見せると、観客から黄色い歓声が飛ぶ。
「歓声を浴びる側に俺らも入っていくと言う訳だが、燈也あたりはコアなファンが付きそうだな」
「ちょっと、悠元!?　お願いだから言わないで！　僕も気にしてたけど！」
「その意味じゃあ、悠元は三高の一条君に負けず劣らずのイケメンだから、女の子のファンが増えそうよね」
　燈也あたりに男性ファンが付きそうな推測を述べると、その当人は叫ぶように懇願していた。そこに、エリカが意地の悪そうな笑みを浮かべながら言い放った。
「悠元さん……？」
「悠元……」
「俺の容姿は至って普通です。というか、二人とも脇腹を抓らないで。地味に痛い」
　深雪からは満面の笑顔で、雫からはジト目で見つめられて、その上脇腹を抓られる悠元に周囲の人間は思わず冷や汗を流した。これには話題を振ったエリカも苦笑いを浮かべつつ、達也に小声で問いかけた。
「ねえ、達也君。本当にあれで付き合ってないのよね？」
「間違いない。兄としては、いい加減自覚してほしいと思うんだがな……」

「それはそれで、大変なことになるような気もしますけどね」
燈也の言葉を聞いた二人は「確かに……」と心なしか納得できていた。すると、競技開始のため静粛にとの表示と開始の合図を知らせるブザー音が鳴り、観客らは殆ど静まり返っていた。
真由美の予選試技は正に圧巻とも言うべき強さを見せていた。飛んできたクレーに対して、一発も外すことなく撃ち落とす。結果は当然パーフェクトスコア。試技を終えて観客席から黄色い声が飛ぶと、真由美はゴーグルを外して笑顔で手を振る。
だが、観客の殆どは真由美の取った行動の対象が彼らではなく、一人の男子生徒にだけ向けられたものであるということを知らない。で、その対象は反応しないわけにもいかないので軽く手を上げる。
「モテるな、お前は。あの『エルフィン・スナイパー』に見初められるとは」
「ちっとも嬉しくねえ……」
女性として魅力があるのは否定しない。だが、バレンタインの時は二重で被害を受けていたのだ。名前のこともそうだが、真由美が送った手作りチョコは……良薬よりも苦かった。明らかに砂糖という概念を捨ててきた代物を何とか食べきったが、その後で食べた彼女の妹たちのチョコで救われたような気がした。
「何かあったの？」
「バレンタインの時にほぼ砂糖抜きのチョコを贈られた」
「……ええっ!?　砂糖抜きって、苦くないですか!?」
「カカオほぼ１００パーセントって……そういうお菓子はあったりするけど……」
苦い、と美月のように片付けられたらどんなに楽だったことかと思う。自分でも気付いていなかったが、ホワイトデーのお返しに大量のクッキーを持参したのは「あんな苦いもの食わせやがって。なら、甘いもの地獄じゃ！」という仕返しも含んでいたのだろう。思わぬところでストレスを貯め込んでいたのかもしれない。

九校戦一日目②

そのスピード・シューティングの様子を、一高の天幕内で佳奈と美嘉が見ていた。

彼女らは天幕の警備に来ているのだが、昨晩の不審者の件もあって数名ほど増員されていたため、天幕内の警備をしていた。万が一の場合は佳奈の『眼』があり、美嘉の体質によって隠蔽や認識阻害の類は見破れるという判断に基づくものだった。

美嘉としては昨年の九校戦よりもレベルアップしていると感じていたが、佳奈に至っては一つ溜息を吐いた。

「ん？　どしたの、佳奈姉？　まゆみんは大分仕上がってるのに」

「せめて『魔弾の射手』を多方向に複数展開して、速攻でやるぐらいの器量は見せてほしいと思うのは……私の贅沢？」

「まあ、七草家は元々『三枝（さえぐさ）』なんだし出来なくはないだろうけれど。それだと、相手が悉く折れるよ？　カートレースにＦ１持ってきて競争させる様なものでしょ」

佳奈の言っていることも、それに美嘉が苦言を呈したことも、見方を変えればどちらも正論である。すると、そこに鈴音が紙コップを二つ持ってきた。

「お二人とも、折角ですからどうぞ」

「ありがとう」

「悪いね、リンちゃん」

鈴音から紙コップを受け取り、中に入っている冷たい茶を口にする。その様子を見つつ、鈴音は佳奈に問いかけた。

「佳奈先輩から見て、会長はどうです？」

「まあ、あの時は私も柄になくムキになったかな。でも、あれで世界屈指の精密射撃能力者というのは……」

「佳奈姉、悠元と比較しちゃダメ。あれはホントおかしいんだから」

佳奈の言葉に誰と比較したのか察した美嘉は、姉を窘めるように呟く。すると、彼女の口から出てきた人物の名前に鈴音が珍しく首を傾げて尋ねた。

「……悠元君が何かしたんですか？」
「えっとね……リンちゃん、まゆみんってこっから富士山山頂に立てられたシャープペンの芯に命中させるぐらいの精密射撃って可能？」
「どうでしょうか……本人に聞かないと分かりませんが」
　この場所から富士山頂までの直線距離は約１３キロメートル。魔法を使用したとしても、それほどの対物狙撃を成功させるのは並外れたレベルの知覚力がないと無理である、と鈴音も認識している。だが、美嘉の言うことを鵜呑みにするなら、悠元はそれを実行可能としている点だ。
「一昨年の初詣の時、富士山頂にいた美嘉が携帯端末で本家の屋敷にいた悠元を挑発したの。そしたら、悠元の魔法と思しきものが美嘉の後頭部に命中した」
「ほんの軽くだったから被害はなかったけど、あれ以来怒らせたらダメだって知っちゃったし」
「待ってください。それはもっとおかしい気がしますが」
　三矢家の本屋敷があるのは神奈川県（厳密には旧神奈川県だが）厚木市。そこから富士山頂への距離は推定７０キロメートルを超える。いくら富士山がこの国で最も高い山とはいえ、その山頂にいる美嘉の後頭部にピンポイントで魔法を命中させるのは世界屈指どころの話ではない。
　それは、悠元がまぎれもなく世界最高クラスの精密射撃能力を有していることになるからだ。
「私はＣＡＤの補助なしなら１５キロが限界かな。詩鶴姉さんなら、本気だせば５０キロはいけてたし」
「私は５キロが限界だよ……リンちゃん？　ハトが豆鉄砲食らったような顔をしてるよ？」
「いえ、大丈夫です」
　鈴音は感じていた。悠元も大概だが、この二人もかなりおかしいレベルへ振り切れていることに内心溜息を吐いたのだった。せめてもの救いは、ここが天幕の奥だったことと周りに誰もいなかったことぐらいだと思った。

◇　◇　◇

バトル・ボードは人工の水路を全長１６５センチ、幅５１センチの紡錘型ボードを使って走破する競技だ。ボード自体に動力はついていないため、魔法で動かすこととなる。他の選手やボードに対する攻撃は禁止されているが、水面に魔法で干渉して間接的に妨害するのはルールの範囲内である。

元々海軍の魔法師訓練用に考案されたもので、水路自体に統一された規格は存在しない。魔法使用が前提のため、一般に普及しないと考えられているためだ。九校戦用のコースは全長３キロの人工水路を３周走ることになる。直線やカーブ、上り坂やスロープといった変化があり、純粋なスピードだけではなく巧みなペース配分やバランス感覚が求められている。

予選は１レース４人の６試合で１位のみが勝ち上がり。準決勝は１レース３人で行われ、決勝は準決勝の１位同士、三位決定戦は準決勝の２位同士で行われることになる。

ボードの最大速度は３０ノット超――――時速換算で５５キロから６０キロを出して、風除けもなく空気抵抗（風圧）をまともに受ける形でボードに乗っている状態を維持し続ける。これだけでもかなりの体力が消耗されることになるのだ。

この中ではほのかが新人戦バトル・ボードに出場し、その練習メニューと作戦立案を達也が担当。本番はアイス・ピラーズ・ブレイクとの兼ね合いもあるため、あずさが担当エンジニアとして入る。

「ほのか、体調管理は十分か？」

「大丈夫です。体力トレーニングはちゃんと続けてきましたので」

九校戦より大分前の話だが、達也はほのかに体力不足を危惧して、魔法の訓練だけでなく肉体面での体力トレーニングもするようにアドバイスしていた。達也本人としては日常会話程度のものだった。だが、ほのかにしてみれば自分が恋焦がれている人が心配してくれたことと、そのアドバイスは４月の時の一件で強く感じており、そのアドバイスを素直に受け取った。

ここまでは普通なのだが、そこからが凄かった。雫経由で悠元にト

レーニングメニューを考えてほしいと頼み込んだのだ。それなら達也に頼めばいいんじゃないか？　と尋ねたところ、ほのかは達也にあまり迷惑をかけたくない、という乙女心のような心理が働いていた。雫からもお願いされたので、悠元もそれの作成を了承した。

基礎的なバランス感覚を養わせるため、インナーマッスルを含めた体幹をしっかり鍛える方向性でのトレーニングメニューを渡した。外側のほうはどのみちバイアスロン部に所属している関係で身に付いてくるという判断だ。ほのかは『エレメンツ』の一族であるため、誰かに依存することでその強さを発揮することは理解していた。ならば、達也の期待に応えるためにトレーニングを頑張る方向性へと導いたのだ。

一応雫にもそのトレーニングに付き合ってやってほしいと頼んでおいた。彼女自身も４月のことは理解していたし、同じ部活なので親友として切磋琢磨するのがいいと思ったからだ。雫からは「トレーニングのお蔭で胸が少し大きくなったけど……ほのかに勝てない」と言われた時は反応に詰まったのは言うまでもない。やはり、同じ女性としてほのかのスタイルの良さは羨ましいのだろう。

自分？　スタイルの是非よりも内面じゃないのかな、というのが正直な感想である。顔がいいならなお良いぐらいだ。恋愛観が若干擦れているのは気にしないでほしい。

「ほのかったら、随分筋肉がついてきたんですよ」

「ちょっと、やめてよ深雪！　私はマッチョ女になる気なんてないんだから！　って、達也さんに笑われたじゃない！」

「今のは、ほのかの言い方がおかしかっただけだと思う」

深雪の言葉に達也が思わず噴き出すと、ほのかは頬を赤く染めて涙目で深雪に抗議しようとしたが、そこで雫の横槍が入る。

「雫まで！　…いいもん。私はどうせ仲間外れだし。二人と違って、試合は見てもらえないし」

「……ミラージ・バットはほのかの調整も担当させてもらうんだが」

ほのかがいじけたことに達也は笑うのを止めた。というか、何故自分が矛先を向けられるのか分からないという表情を見た燈也と悠元

は視線が合い、軽く頷いた。
「バトル・ボードは担当してもらえませんよね。深雪と雫は、二種目とも達也さんが担当するのに」
「……その分、練習も付き合ったし、作戦も一緒に考えたし、決して仲間外れにしているわけでは……」
　達也は頑張ってフォローしようとしているのだが、遂には口ごもってしまった。
「達也さん、ほのかさんはそういうことをいっているんじゃないですよ？」
「お兄様……少し鈍感が過ぎると思います」
「朴念仁？」
　女性陣――――美月を皮切りに、深雪と雫から達也への非難のような言葉が飛んできた。これにはエリカも万能超人と思えた達也の意外な面に笑みを零した。
「達也君の意外な弱点、発見かしら」
「君はもう少し乙女心を勉強すべきですよ」
「流石、彼女持ちは言うことが違うな」
　続けて放たれた燈也の言葉に悠元はわざとらしく頷く。だが、こんな理不尽な状況でも達也はめげないように悠元へ視線を向けつつ言い放った。
「悠元、お前もある意味同じだからな」
「勝手に道連れに……って、あのー、二人とも？　がっちり肩をホールドしないでください」
「そうですね。非常に不服ですが、お兄様の言うこともご尤もです」
「ん。放っておくとどんどん増えていくから困る」
　この二人は競い合っているのか共謀しているのか分からないが、いつの間にかほのかのことが回りまわって自分に矛先が向けられたことに悠元は溜息を吐きたかった。
　別にそんなつもりはなく、三矢の家らしく人の繋がりを形成しているだけなのだが……ここで幹比古とレオに視線を向けたところで打開策が出るわけでもない。燈也に助けを求めたところで厳しいツッ

コミが入るだけだろう。
結局、レース開始まで深雪と雫に両肩を掴まれたまま、項垂れるほかなかった。
「そしたら、レースが始まるまで燈也に乙女心の気づき方を教わるってのはどう？」
「その程度なら苦じゃないですよ」
「……」
なお、そのことで達也が回避に成功したわけではなく、エリカからの追撃で燈也から乙女心の気付き方を学ぶ羽目になった達也（プラス悠元）であった。その横でニコニコしている深雪を見て、これは断ったら肺まで凍らされると確信したのは言うまでもない。
そして、女子バトル・ボード第三レースが始まるのだが、その中でエリカが一際不機嫌な様子を隠そうとしていなかった。これには周囲が疑問に思う中、やっと解放された悠元が話しかけた。
「エリカ、まだ認めてないのか」
「そう簡単に認められるわけないでしょ……」
エリカが不機嫌な理由。それはこれから出てくる摩利が彼女の身内と恋仲にあるということ。それに対して不満げであるということもある。過去にエリカが摩利に対して勝負を持ち掛け、完膚なきまでに叩きのめしたのだが……それが切っ掛けで進展したことに納得がいかなかったのだ。
「悠元さんはご存じなのですか？」
「達也と深雪なら覚えてるだろうけど……ほら、俺らが生徒会役員に、達也が風紀委員に推薦された日のこと」
「……ひょっとして、悠元が入れ知恵したのは委員長の彼氏ということか？」
「ちょっと、悠元!?　次兄様に入れ知恵したのってアンタの仕業だったの!?」
流石に観客がいることもあるので、エリカは周りに迷惑が掛からない程度に叫ぶ。
悠元としてはその彼氏から真面目に相談されたのでアドバイスを

送ってやっただけだ。それに、摩利もその彼氏も上泉家に関わりがあるため、無碍にできないと判断してのことだった。
「次兄様？　エリカちゃんのお兄さんって凄い人なんですか？」
「コイツ、滅多に実家のことを話さない……いや、話したくないから無理ないのさ。エリカが不機嫌な理由は可愛がって貰ってる兄の彼女が渡辺委員長なんだよ。そんで、その兄が外部補助スタッフの千葉修次ってことだよ」
　エリカが下手に噛み付かないのは、悠元が新陰流剣武術師範代であり、その彼が自分の兄こと修次を破っていることに起因する。修次が千刃流免許皆伝の腕を持っているのに勝てない相手であり、自分では勝負にならないと理解しているからこそだ。
「……悠元、実は性格悪いでしょ。このシスコン」
「失敬な。俺は認めた相手なら素直に譲るぐらいの器量はあるぞ、このブラコン」
　お互いに悪口を言い合うような格好だが、冗談交じりだということはお互いに理解しているため、取っ組み合いになるようなことはなかった。これぐらいの気配りをレオに……いや、彼は彼で結構デリカシーがない発言をかますので、痴話喧嘩になっても無理はないだろう。
　エリカは何度か三矢本家の屋敷に来たことがある。その際、詩奈が悠元の妹であることを知った。その詩奈が悠元に対して見せている態度と悠元の可愛がりから『シスコン』と言い放ったが、その辺は自覚した上で悠元も答えを返す。だが、それを知らない人は姉に対してのシスコンだと勘違いしているようだ。
「悠元さん、やっぱり年上好きなんですか？」
「思いっきり勘違いしてるだろうが、血の繋がった人間に欲情なんてできないし……って、そろそろレースが始まるな」
「あ、逃げた」
　後でまた修次か摩利に入れ知恵してエリカを困らせると決意して、レースに意識を向けさせた。レース開始を待つ選手が片膝をついて対している中、摩利は悠々とボードの上に立っていた。そんなことが

出来るのは優れたバランス感覚を持っているからなのだが、見方を変えれば他の選手を傅かせる女王様のようにも見えなくない。
摩利の名前がコールされると、観客席の同性から「摩利様」と黄色い歓声が飛び、摩利も手を振る形で答える。これには燈也が思わず呟いた。
「分かってはいましたけど、すごい人気ですね」
「分かる気もします。渡辺先輩はカッコいいですから」
その反面、同級生から姐さんと呼ばれることに対して抵抗があったり、彼氏に対して乙女らしい一面があったり、しまいにはその彼氏の妹から小姑の如く睨まれている。そんな一面が明るみに出たら、ファンの子達はどういう反応をするのだろうかと思わなくもない。
本人にバレて剣術の練習台になるのは御免なので、それを口に出すことは決してしないが。

九校戦一日目③

女子バトル・ボード第三レースが開始された。すると、開幕直後に他校の生徒が後方に魔法を使用し、大波を発生させた。一種の攪乱戦術を使って抜け出そうとしたようだが、その当人まで引っかかっては意味がない。

摩利は難なく抜け出すと、硬化魔法と移動魔法のマルチ・キャストを使用した。

「硬化魔法と移動魔法の併用か」

「硬化魔法？　何を硬化してるんだ？」

「渡辺先輩は自身とボードを一つの構成物として、硬化魔法で相対位置を固定している。その辺りはこの前のテスト勉強で悠元が言っていた部分だな」

達也の説明にレオも思い出したようだが、その上で悠元が補足説明を入れる。

「硬化魔法の場合、その使用用途と名称に囚われがちだが、原理的に言えば振動系とも似通っている。構成する対象さえ認識できればいい分、その固定は意外と簡単なんだが……大抵の場合、硬化魔法自体に無駄が多い使い方をしてるのが多い」

「そりゃ、どういう意味だ？」

「ここに来る前、レオが達也に『ドライ・ブリザード』絡みのことを聞いてただろ？」

スピード・シューティングの会場から移動してくる途中、レオは真由美の連射力に感嘆する一方、ドライアイスの弾丸を作って飛ばし、さらには知覚系魔法のキャストで魔法のスタミナが持つのか、という疑問を投げかけていた。

「七草家は元々『三枝（さえぐさ）』の名字を名乗っていた。だからこそ三矢家と同じく『多種類多重魔法制御』には長けているわけだが……それは置いといて、硬化魔法にもエネルギーの変化は発生しているということを知らない人が多い」

元々形のあるものを更に固定しているので、状態変化で言えば固体

を更に固めたもの、という言い方が妥当だろう。エネルギー保存から言えば引き算だけの状態だ。ならば、どこかに足し算をしてやればいい。

幸い、レオは収束系統で密度面におけるプラスを発生させることでマイナス面を補っている。エリカの場合は自己加速術式に割り当てることで事象改変の負担を少なくしている。恐るべきことに、双方ともそれを無自覚にやっているという点だ。

「まあ、レオの場合はまだプラス面に振れる部分が多い。自己加速術式でも覚えれば、高速で移動して尚且つ頑丈なパワーファイターに化ける可能性がある」

「うげ、こんなのが高速で動いたら怖いわよ」

「人より速く動くやつが何言ってやがるんだか……」

話をバトル・ボードに戻すが、摩利は加速系統や振動系統など常時3種類から4種類の魔法をマルチ・キャストしている。後続との距離は開いていく一方。そして、滝のような段差に着地した瞬間、その巻き上げる水しぶきで後続の選手は転倒寸前の状態に陥る。これは勝負あっただろう。

「戦術家だな」

「性格が悪いだけよ」

「何はともあれ、1位は決まりのようですね」

エリカの言葉に達也は特に反論しなかった。燈也も苦笑こそしたものの、咎めはしなかった。戦術に限って言えば、性格の悪さも褒め言葉になるからだ。

現状1周目のコース半ばではあるが、摩利の準決勝進出は決定的なものとなった。

◇　◇　◇

バトル・ボードの予選は午後に第四レースから第六レース、スピード・シューティングは午後に準々決勝から決勝までとなる。悠元と達也は、スピード・シューティングのほうを観戦することにして一旦皆と別れた。昨晩の風間少佐との約束を果たすために、ホテルの高級士官用客室に向かう。

風間は軍歴と所属している部隊の関係上、少佐でありながらも階級以上の待遇を受けている。本来は大佐クラスが使用する広い部屋に、ルームサービスのティーセットを並べて、大隊の幹部と一服しているところだった。

「来たか。まあ、掛けてくれ」

「……今日は自分たちが士官として呼ばれたわけではない、と解釈しても？」

警備の兵士（風間の部下）に案内された二人に、風間はざっくばらんな口調で椅子を勧めたが、達也は幹部たちが連なる場所に座っていいのかためらいを見せた。それを察してか、悠元が先手を打つ形で問いかけた。

悠元と達也は未成年の関係上「特尉」という階級を与えられた特務士官だが、それは「国際法上の軍人資格を持つ非正規の士官」という意味合いだ。双方ともに軍の階級秩序に縛られているわけではなく、独立魔装大隊での作戦行動時において命令を遵守する。強制的な拘束力はないが、それでも上司である以上は同じ席に、というのは難しいと達也は思ったのだろう。

だが、同じ特務士官であっても悠元は違う立場にいる。独立魔装大隊の特別技術顧問という立場に加え、上泉家の係累でもある彼は暫定的な形で「特尉」に収まっているだけだ。

彼が国防軍で名乗っている「上条達三」が独立魔装大隊への所属変更直前、国防陸軍兵器開発部において与えられていた階級は「特務少佐」――沖縄防衛戦における情報提供によって民間人への被害を出すことがなかったため、その功績を踏まえてのことだ。悠元が風間との個人的な連絡を断れたのはここが起因している。

だが、そうなると大隊長である風間と同等クラスの待遇になってしまう。大隊内での軋轢など御免だと考えた悠元は、特尉という地位に収まる代わりとしていくつかの権限の保有を求めた。そんなものは通常の軍隊で考えられないことだが、独立魔装大隊自体特殊な部隊であることから、その提案は受け入れられた。そして、悠元が作戦への従事に対して最大限の協力を行うということで決着した。

「そうしてくれ、悠元君。今日は君たちを友人として招いたのだからね。無論、悠元君に無礼を働いた大隊長への『お仕置き』もあるわけだが」
「真田大尉……では、失礼します」
真田大尉の言葉を聞き、達也は悠元に内心感謝しつつ椅子に座った。それに続いて悠元も席に座ると、風間の副官というよりは秘書役に近い女性士官――藤林響子（ふじばやしきょうこ）少尉がティーカップを悠元と達也の前に置いた。
彼女をはじめとした幹部全員が平服姿で、制服姿の自分たちがかえって目立っているようで、悠元は内心で苦笑した。
「ティーカップでは様になりませんが、乾杯と行きましょうか」
「ありがとうございます、藤林少尉」
「どういたしまして、達也君。悠元君も久しぶりね。てっきりお断りするかと思ったのだけれど…熱湯ならあるわよ？」
響子の言葉に対して、悠元は苦笑を浮かべた。これには風間も冷や汗を流しつつ紅茶を口にしていて、他の幹部連中は響子に悪乗りしている部分が多少なりとも見られたことに、達也は『面白い人たちだ』と内心で呟いた。
「お久しぶりです、少尉。それは山中少佐の仕事を増やすだけですし、ちょっと古典的すぎるような気もしますが、真田大尉と柳大尉もお久ぶりです」
「ああ。『サード・アイ』の件では非常に助かったよ」
「久しぶりだな」
悠元の言葉に真田と柳も言葉を返す。そして、名前を出された医者兼一級の魔法治療師である山中幸典（やまなかこうすけ）軍医少佐は悠然とした態度で返してきた。
「心配しないでくれ、悠元君。たかが火傷で『大天狗』がどうにかなるわけでもあるまい。寧ろ、入学式の日に北海道まで飛んで防衛大の学長に泡を吹かせた君の頑丈さに驚くばかりだ」
「不意打ちがなければ、の前提は付きますよ」
「……悠元、お前も大概だな」

「無敵超人を地で行くお前がいうな」
お前は一体何をしたら倒せるんだとは言わないが、そんな皮肉も込めた悠元の言葉に周囲は笑みを零したりしていた。言われた方の達也はというと、自分の師匠ばりに気配を偽れるやつをどうやって倒せと？　とでも言いたげな表情を向けていたのだった。
そんな話は置いといて、悠元は風間に視線を向けた。
「昨晩の時点で既にした話の蒸し返しとなりますが、此度は私情によって少佐のお手を煩わせてしまい、本当に申し訳ありませんでした」
「いや、こちらこそ配慮が足りていなかった。折角の魔法科高校の入学式を欠席させてしまったのはこちらの落ち度だろう」
「確かに高校の入学式を欠席させてデモンストレーションとは……自分も加担した側だが、悠元君も済まないな」
悠元の謝罪に風間も頭を下げた。その様子を見つつ、柳は悠元に謝罪の言葉を向けた。これには悠元が首を横に振った。
「いえ。まあ、思うところは色々ありますけど……それで少佐、自分が入学式を休ませてまで参加させられた防衛大入学式のデモンストレーション戦闘についてです。昨年まで、そのようなものはありませんでしたよね？」
「……成程。確か、上泉家には現役の防衛大生がいたはずだな」
「ええ。にも拘らず、今年に入って急に決まった……依頼の出どころは国防軍情報部――〝十山（とおやま）（遠山）家〟ですね？　それが佐伯閣下経由で独立魔装大隊に回された。これに違いはありませんか？」
悠元から放たれた言葉に、風間は一瞬驚きはしたものの首を縦に振って肯定した。幹部の面々や達也は悠元が関わった一件に師族の一つが関与していたという事実を初めて知ったのだ。
この件は元継の妻である千里からその話を聞き、『八咫鏡』で全ての情報を洗い出した結果から導き出されたものである。この一件については、その当時は剛三の耳に入れておらず、悠元と元継、千里の三人だけでしか共有していなかった。風間に聞いたのは、独立魔装大隊の大隊長であるならばある程度知っているだろうと考えたからだ。

風間との個人的な通信を断っていたのは、情報部からの傍受を防止するためでもあったのは否定しない。何せ、４月からは司波家で居候している身なので、それが達也や深雪への被害になるのは何としても避けたいという考えもあった。
「……剛三殿はこのことを？」
「その時は知らせていませんでした。１月の件で懲りたかと思えば、その３ヶ月後ですよ？　こんなの爺さんの耳に入ったら、最悪爺さんの魔法で都心が灰燼に帰します……なので、父経由で七草家と十文字家に動いてもらいました」
「何をしたのかな？」
「――十山家への〝制裁〟です」
父親の元としても、十山家に散々苦汁を舐めさせられた身であり、上泉家自体が動くのは拙いと考えてその案を呑んだ。加えて七草家と十文字家も十山家の一件で上泉家に厳しい目で見られていたため、元の提案に対して条件を付け加えることなく呑んだのだ。
十師族の三家による十山家への制裁――それは内情や公安経由で上泉家の耳に入ることとなったが、剛三は自身が暴れないように手を尽くしたのだと判断し、事態の推移を見守った。
結果として、十山家は次回（２０９７年）の師族会議から４周期１６年の間、十師族への昇格を認めないという制裁内容となった。十師族で出来る範囲としては想定内で、その後の臨時師族会議にて正式に十師族当主全員一致での可決となった。
元々十師族への昇格を狙っていない十山家に対して甘い裁決と言えるだろう。だが、これは実質的な〝最後通告〟に近い処分。『数字落ち（エクストラ）』ではなく、文字通り十山家ごと潰すという警告でもある。加えて、国防軍情報部もその〝掃除〟対象に入ることと繋がる。
「次にやったら、爺さんの手によって十山家と情報部丸々消し飛ぶでしょう」
「剛三殿ならやりかねんな……穏便に済んだだけマシというものだな」
悠元と風間はお互いに頷きつつ、紅茶を口に含んだ。それを聞きな

がら達也は響子に尋ねた。
「少尉、悠元の祖父はそんなに凄い人間なのですか？　聞いた限りだと現実味がなさ過ぎて……」
「本当よ。達也君なら自分の祖父世代のことぐらい知っていると思ったけど」
「母上はあまり話したがらないもので……叔母上のこともありますから。自分は大叔父にあたる先代当主から聞いたぐらいの話しか知りませんので」
　真夜と深夜からすれば、父親の死の原因が自分たちを守るためにやったことでもあり、心に整理は付けてもそれを口にするのは勇気が要ることだ。なので、達也は自分の祖父にあたる元造のことといえば、その弟である先代当主こと四葉英作（よつばえいさく）から聞いた程度の知識しかない。
　その件は一先ず、ということで昨晩の賊についての話となった。ここにいる面子なら直ぐに口を割らせることは簡単だろうが、そこまで動く様子がない感じの報告となった。というか、警備自体もかなり強化された形なので、昨日のような賊程度なら十分対処可能なラインだ。
「昨晩の件だが、やはり『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の構成員だということに間違いなかった」
「狙いはやはり、九校戦ですか？」
「現在捜査中だ。何か分かったら知らせる……悠元、君の実家のほうで何か聞いていないか？」
　風間としては、迷惑をかけたことに加えて昨晩の一件は国防軍側の落ち度に近い。軍の関連施設への侵入を許してしまったのだから……悠元としては、確認したいことも十分だったので特に蟠りを持たないように話し始めた。
「『無頭竜』が動いている理由は簡単ですよ……自分たちの命が惜しいからです」
「命が惜しくて九校戦にちょっかいを？」
「九校戦の優勝校を当てる闇カジノですよ。５日前に三矢家の本屋敷

で父から聞きました」
　金額を聞いた限りではステイツドル（前世で言うアメリカドル）で数億単位――――通貨換算で数百億円単位の金額となる。
　もし一高が総合優勝すれば、胴元である『無頭竜』の東日本支部は最低1億ドルの損失になると元は睨んでいた。闇カジノ自体に参加したことはないが、その辺の噂話を同業者から集めていたと言う訳だ。加えて『精霊の鏡』で参加者リストも極秘に入手していて、参加者の資金力から計算した結果でもある。
「数百億なんて損失出したら文字通り『クビ』が飛ぶようです。裏の世界なんてそれが罷り通ってますし」
「……平気で話してしまうあたり、悠元君も立派な十師族の一人だな」
「褒め言葉と受け取っておきます。で、昨晩の一件もそうなんですが……ここに来る途中、オフロードタイプの車がガード壁を飛び越えて来ました。幸い被害はありませんでしたが、その一件も『無頭竜』の関係者による自爆攻撃でした」
　悠元はそう言って端末を取り出し、響子の端末に送信する。そこには魔法で鮮明に再現された自動車がパンクからスピンを起こしてガード壁を飛び越えてくる映像と、それに基づく分析結果であった。これには響子も思わず声が漏れてしまった。
「悠元、それは初耳なんだが……」
「燈也と深雪がいる前で話すわけにもいかなかったからな。会長が覗き見してくる可能性もあったし、その場では隠すのが妥当だと判断した。十文字会頭はともかく、他の連中には重すぎる話だろ？」
　それは確かに、と達也は納得する。あの事故現場で話さなかったのは、それに加えて真由美たちの存在もあったからだと推測した。どこかで聞き耳を立てられるわけにもいかなかったし、真由美が知覚系魔法で見てくる可能性もあったのは否定しない。
「にしても、あんな遅い時間に外を出歩いていたの？」
「これでも新人戦の統括役ですから。その戦略プランが一段落して外の空気を吸いに行ったところで、という感じです。そこに丁度車両から出てきた達也と合流した次第ですよ」

「自分の場合はＣＡＤの調整で車両に残っていただけです。流石に遅い時間だったので悠元と戻ろうとしたら、という感じではありますが」

ここにいる幹部の中で響子が一番年齢が近く、話しやすい相手だからこそ悠元と達也は気楽に話せる。軍務で鍛え上げているせいか、メリハリのあるプロポーションで目の毒になりやすい部分もあったりするが。

ちなみに、深雪も響子のスタイルを見て悠元に武術教練を頼んでいた節があるようだった。妹がそういう女性らしさを垣間見せている原因は、隣にいる悠元なのだろうと達也は確信していた。

九校戦一日目④

独立魔装大隊での会話の中、とあることについて山中は達也に問いかけた。それは達也が技術スタッフで出場しているということだった。いや、厳密には悠元と達也に関わる事情も含んでいるのだが。

「やはり技術スタッフでか。チームメイトは『トーラス・シルバー』のことを知っているのか？」

「いえ、山中少佐。それは一応秘密ですから」

「しかし、高校生の大会に『トーラス・シルバー』の二人は反則級だと思うけどね」

秘匿している以上は表に出せない。というか、今ばれると後々で拙いのはよく理解している。それを抜きにしても、三高には「クリムゾン・プリンス」と「カーディナル・ジョージ」、「エクレール・アイリ」の存在がいるので、これぐらいの反則は許してほしいと思わなくもない。

「彼らもれっきとした高校生ですよ。悠元君はともかく、達也君も選手として参加しないの？　フラッシュ・キャストの技術があれば、結構いい線行くと思うんだけど。『マテリアル・バースト』はともかく、『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』もあるんだし」

「藤林少尉、達也の魔法自体明るみに出したら拙い物しかないじゃないですか。現在確認されている『分解』の使い手が諸外国にいないのですから」

「悠元。言いたいことは分かるが、俺を取扱危険物みたいに言わないでくれ。それと藤林少尉、フラッシュ・キャストは一応、四葉の秘匿技術ですから」

悠元が「サード・アイ」の設計やアップデートに関わる過程で、四葉家の秘匿技術であるフラッシュ・キャストを知ることになってしまったが、そのことは軍事機密ということで秘密にしている。達也は自身の魔法の危険性を認識しているが、そうやって面と向かって言わないでほしいと呟きつつ、響子に対して窘めた。

「そういえば……悠元、昨晩お前が使った魔法は『分解』の性質を持っ

ていたようだが……」
「え？　悠元君、そんな魔法って存在するの？」
「古式魔法を使う人なら名前ぐらい聞いたことがあるかもしれません……天神魔法という名前の古式魔法――――いえ、神霊魔法(しんれいまほう)を」
悠元がその名前を口に出した瞬間、風間と柳、藤林といった古式魔法に関わる人間は驚きを露わにする。真田や山中は首を傾げ、達也も古式魔法に対して知識がないため、風間に尋ねた。
「少佐？　ご存じなのですか？」
「あ、ああ……古式魔法の中において精霊魔法の最終到達点とされる魔法だ。それを極めた者は自然現象そのものを操るとまで言われている。悠元、冗談ではないんだな？」
「ええ。何でしたら、今ここで使って外に霧雨程度の雨を降らせてもいいですが」
「いや、遠慮しておこう。こういう時の悠元は冗談を言っていないと断言できるからな」
悠元の言葉が冗談ではないと感じ、風間は興味本位で開けていいものでないと判断した。まさか、自分の暫定的な部下に幻とまで謳われた古式魔法の修得者がいることに肝を冷やすような心境だった。すると、さすがに理解が追い付かない真田が尋ねた。
「悠元君。一体どこで学んだんだい？」
「新陰流剣武術の秘術にありました。とはいえ、読み解くのは大変でしたが……」
天神魔法は安倍晴明(あべのせいめい)とその師である賀茂忠行(かものただゆき)によって編み出され、晴明は表の『天照(アマテラス)』、忠行は裏の『月読(ツクヨミ)』と陰陽に分けられた。根本的な術自体は表裏共通だが、先に挙げた二つの魔法を秘中の秘として隠した、と口伝を書き起こしたと見られる文章があった。
表は晴明から陰陽道に関わりのある公家によって口伝で受け継がれ、現在は上泉家の秘術として残っている。裏については伝承している家があるのだが……そこまで関わる気にもならなかったし、原作の範疇に無いもの。触れないほうがいいと判断して調べていない。
「では、何故それを使ったのだ？」

「将来的に使うことが避けられないと考えたからです。尤も、爺さんからは叱られるどころか『使え』と言ってきましたから」
「剛三殿がか……理由は？」
「何も答えてくれませんでした。まあ、それが分かるのは九校戦が終わってからだと思うので、深く考えないことにしています」
　天神魔法であれこれ考えるのは九校戦の後だと悠元は割り切っていた。今は『無頭竜』の一件と九校戦に集中しなければいけない。あれだけ啖呵を切っておきながら結果が伴わなかったら、みっともない以前の話になるだろう。流石にそれは恥ずかしいと思っている。
　それに、剛三から使用するように言い含められているため、古式魔法を使う面々で尚且つ味方になりそうな人を引き込んでいる節があるのは否定しない。山中の言葉に対して悠元が答えると、続いての風間からの言葉に答えつつ、少し冷めてしまった紅茶を口に含んだ。
「いずれにせよ、達也の〝本来の〟魔法は衆人環視の前で使えんだろう。悠元の天神魔法については、我々の胸の内に仕舞っておくことにしよう」
「そうしていただけるとありがたいです」
「しかし、悠元はともかく、自分が選手として出場する可能性は考えにくいのですが……」
「心掛けの問題、ということだ。解っているのなら、それでいい」
　結果的に達也が選手として出場することへの追及は避けられた形だが、その代わりとしてとんでもない事実を知らされたことに、達也は内心溜息を吐きたい気分であった。
◇　◇　◇
「二人とも、こっちこっち」
　風間たちとの会談を終えてスピード・シューティングの会場に来ると、観客席はほぼ埋まっている状況だった。すると、エリカが悠元と達也を見つけて手を振っていた。どうやら深雪と雫で席を確保していたらしく、それにお礼を言って座った。
「しかし、凄い人気だな」
「会長が出るからですよ。他のところはそこまで混んでいません」

「雫は五十嵐先輩の応援に行かなくて良かったのか？」
「自分の出る競技の雰囲気を感じ取ってほしいって言われたから。それに、そっちは燈也が応援に行ったから」
　亜実としては変に緊張することなく競技に集中したいので、と断ってきたそうだ。それでも燈也はバトル・ボードの応援に行ったらしい。達也はほのかに見辛くないか声をかけていた。その辺の気配りはできるのに、恋愛事になるととんだ朴念仁だと思う。すると、左の脇腹に鈍い痛みを感じる。気が付くと、深雪が笑顔を浮かべて脇腹を抓っていた。
「深雪さん、痛いんですが」
「どうしてなのかは自分の胸にお聞きになってください」
　まるでエスパーのように……いや、魔法はある意味「超能力」なので無理もないと思うが、それでも勘の鋭い深雪に対して落ち着くように宥めた。
「ふう……こんなことなら、男子バトル・ボードの第四レースでも見に行けばよかったかな」
「誰の応援ですか？」
「服部副会長の応援。こっちとしては蟠りもないからな……でも、そんなことしたら会長が拗ねるからな」
「拗ねるって……あの会長さんがねえ……」
　真由美の本性を知っている人間はかなり限られる。ここに座っている人間でも悠元、達也に深雪の3人だけだ。エリカであってもそのイメージを連想するのが難しいのだろう。その線引きをしっかり徹底しているあたり、七草家現当主の娘であるといえる。本人の前で言う気はないが。
「ところで、幹比古はどうしたんだ？」
「気分が悪くなったんだって。部屋で休んでるって言ってたわ」
「熱気に当てられたみたいですよ。私も眼鏡を掛けてなかったらダウンしてたかもです」
　達也の問いかけにエリカは軟弱とでも言いたげな口調だったが、すかざず美月が幹比古のことをフォローした。確かにこの観客席から

発せられる熱は感受性の高い人間にとって辛いものがあるのは確かだろう。
かく言う悠元も感受性が高い部類の人間なので、その熱気は嫌というほど感じ取れる。その辺りは感受性を制御すれば乗り切れると判断して、意図的に下げている。
すると、周囲の観客から歓声が飛ぶ。その原因を探るように競技フィールドを見やると、真由美が姿を見せたのだ。それを察するかのようにスタンドの其処彼処に設置されているディスプレイが「静粛に願います」との表示を示し、歓声は静まり返った。
（…しかし、相手にとっちゃ気の毒だろうな）
観客がほぼ真由美の応援団で埋め尽くされている状態なので、対戦相手からすれば完全アウェーの状態に近い。加えて、真由美は高校生の範疇を超えたレベルの実力者。最早〝消化試合〟といっても過言ではない。
その証左として、懇親会では現3年である彼らのことを快く思っていない連中がいた。「ただでさえ強すぎるのに、何故九校戦に出てくるのか」と愚痴を零したりする輩も見受けられた。
されど、いくら〝高校生のお遊び〟といえども十師族としての力を誇示しなければならない。国内外からの注目を集める九校戦はまさにそのアピールの場として相応しいことも事実である。この辺が、懇親会の時に真由美の言っていた「面倒」ということなのだろうと思う。
スピード・シューティングの競技開始を告げるのは5つのシグナル。それが下から順番に、音と共に灯り始める。すでに所定の位置についている選手――――真由美とその相手選手は小銃型ＣＡＤを構えている。すると、達也が真由美の持っているＣＡＤに気付いた。あれは予選で使っていたものとは別の機種で、シルバー・ブロッサムシリーズとも、雫用に組み上げられていた物とも別の代物であった。
そんな達也の考えを他所にシグナルが全て灯り、投射機から紅白のクレーが射出される。真由美は赤のクレーを、相手選手は白のクレーを破壊するのだが、そのスピードが明らかにデモンストレーションの時より段違いであると達也は感じた。

そんな芸当が出来るとするなら……達也は悠元に問いかけた。
「あのＣＡＤ……悠元、お前が関わったのか？」
「会長がどうしてもと言ったからな。ただ、即興品すぎて会長以外に使えない代物だけど」
真由美の使っている小銃型ＣＡＤは、彼女の得意とする七草家の秘術――『魔弾の射手』に全ての起動式リソースを振り分けた単一魔法特化型と呼ばれる代物。系統の組合せが同じ魔法を最大９種類インストールできる特化型を更に突き詰めたもので、これでも競技規格を余裕でクリアしている。
単一の魔法に絞り込むことで、終了条件さえしっかりと定義すれば擬似的なループ・キャストも可能。ただ、一つだけの魔法に特化させるやり方は戦術の幅を狭めかねないため、こんな代物は予選と決勝トーナメントで同じ戦い方ができる人間でないと使いこなせない。もしくは一つの魔法であらゆる汎用性を引き出せる魔法でないと、使い勝手が極端に悪くなるだろう。
「悠元。即興品であの会長さんが九校戦の競技に使えるＣＡＤって、その時点でおかしくない？」
「何言ってるんだか。あんなのハッキリ言って玩具（おもちゃ）レベルだぞ？」
「あれで……玩具？」
エリカの問いかけに対し、バッサリと切り捨てるかのごとく言い放った悠元。それを聞いた雫が目を丸くしていた。確かにライフル型ブースターという軍事的にもおかしいものを独学で作ったり、彼の持つ「ワルキューレ」や「オーディン」をはじめとした数々のシルバーシリーズのハードウェア設計を手掛けている悠元からすれば、既存品の焼き直し程度の小銃型ＣＡＤは〝玩具〟なのだろう、と達也は心の中で呟く。
真由美の放つ『魔弾の射手』は縦横無尽にターゲットとなる赤のクレーを的確に破壊していく。その行為は敵にクレーを撃ち落しやすくする行為でもあるが、それを補って余りある射撃速度でスコアをみるみる引き離していく。そして、構えを片手撃ちに変えて１００個目の赤のクレーを破壊し、試合終了のブザー音が鳴る。

それは最早高校生という枠組みで語れるようなレベルの話ではなかった。

続く準決勝、そして決勝でも真由美に勝てる人間はおらず、ダブルスコア以上の得点差を叩き出す。結果として、真由美は新人戦を含む女子スピード・シューティング三連覇を達成したのだった。

九校戦一日目⑤

当初の予定通り、女子スピード・シューティングは真由美が優勝し、男子スピード・シューティングも一高が優勝した。あずさが真由美に対して祝福し、真由美も笑顔で頷く。

「会長、スピード・シューティング優勝おめでとうございます！」

「ありがとう。摩利も無事、準決勝進出ね」

「まずは予定通り……いや、それ以上だな」

既に夜も更け、食事と入浴を済ませて寝るだけという時間。真由美の部屋に女子生徒会役員（プラス風紀委員長）が集まっていた。いや、正確には更にもう一人いるわけなのだが、その一人が端末とにらめっこする様にしながらキーボードを叩いていて、会話に入ってこないことに真由美は頬を膨らませていた。

「もう、悠君はこんな時ぐらい手を休めてもいいのに」

「仕事を増やしたのは会長でしょうに。それよりも、優勝おめでとうございます」

「ふふ、ありがとう。悠君に頼んだ甲斐はあったかな」

そう言いながら上目遣いを向けてくることに悠元は内心溜息を吐きたかった。先日会った澪との会談から、真由美の縁談が破談になった場合、自分にその矛先が向けられかねないという危惧があった。

別に真由美自身に思うところはないと述べておくし、女性としては魅力的だと思う。ただ、それに付随するものが厄介すぎるということも付け加えておく。

「準々決勝から使ってたＣＡＤって、三矢君が組んだものなんですか!?」

「既存品の焼き直しと市販品のプロセッサやアーキテクチャを繋げただけですよ……言っておきますけど、現当主様への説明はお願いしますね？」

「それは分かってるわ……根掘り葉掘り聞いてきそうなのが厭らしいけど」

真由美が使った小銃型ＣＡＤを組む羽目になった経緯は、練習場に

おいての佳奈と真由美の一戦後、佳奈が自分のＣＡＤのことを話した（トーラス・シルバーのことは綺麗に隠した）ため、そこから真由美が競技用ＣＡＤでいいから組んで欲しいと頼み込んできたのだ。
　その条件として、真由美の父親であり七草家現当主である七草弘一（さえぐさこういち）に対しての説明は真由美自身で行う、ということで決着した。ライフル自体魔法科高校の魔法工学レベルに落とし込んでいる（そのために佳奈と美嘉から授業内容をすべて聞いていた）ため、そこからトーラス・シルバーに繋がる可能性は極めて低い。
「それはおいといて。摩利もそうだけど、小早川さんに亜実も準決勝進出は凄いことよ」
「ああ、亜実の成長はあたしも驚かされた。燈也君と付き合い始めたことがプラスに働いたようだな……もっとも、直ぐに婚約者となっていたが」
「いいわよねー……ねえ、悠君」
「寝言は寝てから仰ってください」
　女子バトル・ボードは摩利、小早川、亜実の３人全員が準決勝進出を決めた。摩利も小早川の実力は知っていたが、亜実が一気に実力を伸ばしたことを素直に賞賛していた。そこに付け加えられた言葉を聞いて真由美は期待の眼差しを悠元に向けるが、それをバッサリと切り捨てたことに真由美はわざとらしく頬をプクッと膨らませていた。
「やはり、バスの中で言った通りになりましたね」
「ちょっと、リンちゃん！　……はあ。にしても、はんぞーくんも誘ったのに、ＣＡＤの調整があると言って残ってるみたいだし」
　服部も無事準決勝に勝ち上がった。詩鶴のヨガのお蔭でメンタル面が一気に安定したのが大きいだろう。とはいえ、本人としては他人の力で勝ったようなものであり、明日はエンジニアを務める木下という技術スタッフと準決勝以降の調整と作戦を念入りにするようだ。
「服部くんのメンタル面は落ち着いたんですが、夕食を持って行ったときに本人が木下先輩と作戦を念入りに再確認したいと言っていました」
「幸い、木下君は女子クラウド・ボールのサブエンジニアなので、抜け

ても問題は生じませんが……」
「和泉(いずみ)一人に任せるのもリスキーじゃないか？」
自分でＣＡＤを調整できるというのはエンジニアの負担を減らせるのだが、そう簡単に出来るものではない。限られた人数で遣り繰りするというのも楽なことではないからだ。そんな議論を繰り広げている中、あずさはずっと端末と睨めっこしている悠元が何をしているのか尋ねた。
「そういえば、三矢君は何をしているのですか？　態々折り畳み型端末を持ち込んでまでとなると、九校戦に関係しそうですけど」
「これですか？　九校戦には関係ありますけど、詳しいことは言えません。片方はそこにいる会長に頼まれた案件ですが」
「会長……フォローはしませんからね？」
端末には２つの起動式が表示されている。一つは真由美が明日使うことになる魔法の起動式。もう一つは、九校戦本番では使わずにお蔵入りとなりそうなものだ。後者の詳細は明かせないし、何より、その魔法は使用者の魔法特性に完全依存した起動式のため、本人以外では規定出力の１パーセントも出ないように組まれている。
悠元の言葉を聞いた鈴音はわざとらしく溜息を零した上で、淡々とした口調で真由美に言い放った。
「別に大したものじゃないわよ。『倍速反転(ダブル・バウンド)』をより高速化出来ないかって頼んだだけだもの」
「……真由美、美嘉に負けたことをまだ引き摺ってたのか」
「ふぐぅ!?」
起動式の改良についても佳奈から聞き及んだため、これも止む無く了承した。まあ、燈也に提供した術式のこともあるので、それで差引イーブンという感じではあるが……なお、燈也に渡した『改良版・魔弾の射手』は七草家の人間の誰も知らない。燈也からも一切漏れないようになっている。最悪の場合は『魔法大全(インデックス)』に掲載された射撃台座生成術式を改造したらそれに近くなった、と誤魔化すことも想定済みだ。
更に『ダブル・バウンド』の単純な高速化だけではなく、ちょっと

したサプライズも含んだ記述構成となっているが、これは使ってみてからのお楽しみというものだ。
　とても女子の口から出ていいようなものではない声を真由美が出したことはさておき、摩利の鋭い指摘に真由美は縮こまるような仕草を見せていた。これには流石に悠元もフォローを入れるのだが、それを聞いた真由美は悠元に抱き付いていた。
「渡辺先輩、そう虐めないであげてください。会長用の起動式はほぼ完成していますので、問題はないですよ」
「悠くーん！」
「会長？　なぜ悠元さんに抱き着くのですか？」
「深雪、ストップ！　ストップ!!」
　その行為を見た深雪が笑顔を浮かべて危うく魔法が漏れ出るところを、悠元が持ち前の事象干渉力で抑え込んだ。４月の時よりも勝手が分かってきたことに喜ぶべきなのかどうかは解らないが。その上で、エンジニアがらみの話に戻す。
「で、話を戻すのですが、エンジニアは誰が担当するのですか？　自分はピラーズ・ブレイクの試合を見たいのですが……」
「ＣＡＤの件と起動式のことを鑑みても、悠元君にはあまり負担を掛けられませんね。明日と明後日がオフの司波君にお願いしましょう」
「って、見に来てくれないの？」
「膨れないでください。試合スケジュール的に十文字先輩の試合とは被らないでしょうし、可能な限りは見ますよ」
　明日はクラウド・ボールの予選から決勝とアイス・ピラーズ・ブレイクの予選が行われる。大会のスケジュール上、真由美と克人の試合を敢えて被らせないようなトーナメント表になることは想定済みだ。この辺は視聴率を稼ぎたいメディア側の思惑も含んでいるのだろうが。ただ、そうなると花音の１回戦は見れなくなるだろうと思う。
　その後、真由美は深雪に達也への連絡をお願いした。その際にまだ抱き付いたままの真由美に対して満面の笑顔を向けた深雪を見た一同は、その怖さと真由美のスルー力に揃って溜息を吐いたのだった。
◇　◇　◇

「――――それで、こんな時間に来たというわけか。ここまで付き添ってきた悠元も大変だな」
「お兄様、私を幼い子どもと勘違いされておりませんか？」
　このホテルは軍の関連施設であるため、セキュリティー面はしっかりしているだろうと達也は認識している。だが、流石に遅い時間でもあるためと、万が一のことを考えれば悠元が一緒に来てくれたことを労った。これには深雪も珍しく頬を膨らませていた。悠元は他にも仕事があると言って深雪を達也の部屋に送り届けると、そのまま自分の部屋に向かっていった。
「まあ、連絡してくれたことは感謝するが……深雪。お前はいつまで自分の気持ちを隠し続けるつもりだ？　いや、この場合は自分の感情に嘘を付いていると言うべきか……」
　達也の言葉に深雪は俯いてしまう。兄としては妹の恋路を邪魔するつもりはないし、応援してやりたいと思っている。達也の持つ知識から推察するに、深雪の初恋の相手が悠元であるということまでは読み取れていた。
　悠元に対する行動を見る限りにおいても、それを感じていた。加えて、雫も深雪と似たような行動を取っていることから、彼女も悠元に対して好意を持っていると推測できた。
　自身のこと以外となると鋭い達也のことはさておき、その言葉を聞いた深雪はポツリと零した。
「分かってはいました。雫が悠元さんに向けている感情のことも。でも……怖いんです。今の幸せな時間を壊してしまうのではないかと……」
「そうか……すまない。新人戦が控えているのに、余計なことでお前の心を乱してしまったな」
「お、お兄様は悪くありません！　私がハッキリとしないから……」
　このことは新人戦の後にでもすべき話だったな、と達也は反省しつつ深雪に謝罪の言葉を口にする。それに対して深雪が弁明しつつ、何かを思い出したように頬を赤らめていた。どうやら、懇親会の夜に悠元の部屋に押し掛けた時のことを思い出したようだと達也はそれと

なく察した。
「一応言っておくが、俺は悠元なら素直に応援してやりたいと思っている。母上もいたく気に入っているからな。悪いことにはならんだろうと思うが……」
彼の力は強大である、と達也は率直に感じていた。実戦経験があり、尚且つ同年代で最強クラスの克人を破った以上、十代の十師族では「クリムゾン・プリンス」と同等以上の実力を有しているだろう。
加えて彼は達也の十八番である『分解』と『再成』を使用できる。更には神霊魔法という古式魔法まで会得した存在で、秘匿しているが魔工技師としても世界トップクラスのハードウェア設計能力を有している。
けれども、それで必要以上に威張ったりはせず、何の気兼ねもなく二科生の教室に足を運んだりしている。達也自身、服部との勝負の際に悠元を「親友」と自然と口にしたぐらいに、彼のことを認めているのは確かだった。
「もしかして、四葉……叔母様が関わってくると？」
「司波家への居候の件は叔母上からの頼みだったから、何かあるのだろう……お前にとっては大変だろうが、まずは新人戦だ。アイツは深雪への関心を逸らす為に派手にやるだろう。だから、気にせず存分にやるといい。先ほどのこともあるし、部屋まで送っていこう」
悠元は三矢家の家督継承に関わる立場ではない。ギリギリ長男の予備という辺りだろう。そこに四葉家が関与してくることは明白だし、深夜経由で真夜に深雪の心境が伝わっているのは間違いないと踏んでいる。
とはいえ、深雪は現状四葉家次期当主候補の筆頭筋。そこに悠元が四葉家の婿養子となる可能性もある……二人が結ばれる前提で考えていることに、達也は思わず内心で苦笑した。
それはともかく、フォローとしてはこれぐらいだろうな、と思いつつ達也は立ち上がった。そして、深雪が泊まっている部屋まで送り届けると提案した。
「いえ、作業中のようですから、お手を煩わせるわけには……」

「なに、これは遊びのようなものだから気にしなくていい」
達也が先程まで座っていた備え付けのデスクには、持ち込んだ端末が置かれている。そのモニターにはＣＡＤの設計図と起動式のデータが表示されているが、これに関しては〝遊び〟だと達也は述べた。それを聞いた深雪は思い出したようにクスッと笑みを漏らした。
「お兄様といい、悠元さんといい、それを遊びや玩具なんて言えるのはお二人ぐらいですよ？」
そんなことはないと思う、と返したくはあったが、それを言ってしまうと目の前にいる妹から言い返されてしまうと察したのか、達也は苦笑をこぼすことしかできなかった。一先ず機嫌が直った深雪を送り届けるため、達也はデスクに置いてあった自分の部屋のキーを手に取ったのだった。
◇　◇　◇
そこから少し前に時間は遡る。
女子スピード・シューティング決勝が終わった後、ホテルのＶＩＰルームの一室で二人の人物が顔を合わせていた。
「烈殿。先日お会いしたばかりだというのに、急遽会談の申し入れを受け入れてくださったこと、真に感謝します」
「なに、先日のあれはこちらの身勝手な都合によるもの。君が気に病む必要もあるまい」
一人は十師族の一角を担う七草家の現当主、七草弘一。
もう一人は十師族のシステムを構築した九島家先代当主、九島烈。
この二人は九校戦懇親会があった日にも会談をしていた。とはいっても、烈がアポなしで七草家を訪れ、真由美を無理に引き止めた上で学校のことについて尋ねた程度のもの。その際に烈は三人の人物――三矢悠元、司波達也、そして司波深雪のことについて真由美から聞いていた。
「まずはご息女の優勝に対して祝福を述べさせてもらおう。あれは実に見応えがあった。世界に名立たる精密射撃能力者となれば、君もさぞ鼻が高いことだろう」
「先生にそこまで仰っていただけるとは、感謝に堪えません」

「そこまで低頭にならずとも良い。それで、如何用の相談かな？」
烈は弘一が真由美のことを持ち出すのでは、と予測はしていた。弘一の口から出た言葉は正しく彼女に関することであった。
「先程出た真由美のことです。我々のような存在は早婚が望まれる風習にあります」
「無論、それは承知している。だが、確か彼女の婚約候補に五輪家長男がいたのではなかったかな？」
「それなのですが、お互いに上手くいっていないようでして。調べたところ、件の長男はどうやら三矢家の次女に対して恋愛感情を抱いているような節が見受けられました」
弘一は五輪家の長男が三矢家の次女――佳奈に対して恋愛感情を覗かせていると睨んでいた。お互いに同い年で同じ大学に通っているため、接点は真由美よりも多いだろう。無論、あらゆる諜報を駆使した結果ともいえる。
だが、三矢家の方からは五輪家に対して一切アプローチをしていない。長男が家督継承への段階を着実に踏み、次男が上泉家に婿養子となったため、無理に娘婿の家格を求める必要がなくなったのだ。
「その件は私も三矢殿から伺っている。娘たちは自由な恋愛でも構わないと思っているようだ。あれだけの高い資質を無視はできないが、それに対して私から無理強いは出来ない」
「それは分かっております。先生には三矢殿の三男と真由美の婚約にお力添えを、と思いまして……」
以前五輪家長女と悠元を婚約させてはどうかという話も持ち上がったが、それが破談となった経緯も弘一は掴んでいた。悠元に関しては泉美との婚約話もあったのだが、十山家の関連（プラス、バレンタインの一件）で上泉家を怒らせてしまったため、立ち消えになった経緯がある。なので、烈の力を借りる形で真由美との婚約相手に悠元を選択する方向に持っていこうとしていた。
悠元とは三矢を名乗る以前から親交があり、真由美だけでなく香澄や泉美と打ち解けている。そこで泉美を選択肢に出さなかったことは泉美を怒らせる要因になりかねないが、彼女とて姉の幸せを願って

いる筈だと内心でそう結論付けた上で烈に提案を持ち掛けた。
その弘一の提案に対して、烈は表情を変えることなく問いかけた。
「五輪家との縁談は如何するつもりだ？」
「お互いに合わない以上は解消するより他にありません。仮にその長男が三矢の次女と恋仲になれば、三矢を介する形で五輪と縁を結ぶことができ、四葉への牽制に繋がるかと……」
弘一の考えた案は、四葉と繋がりを持つ三矢を引き込んで、三矢と七草で四葉を抑えるという方向性に持っていこうというものだった。元第三研という誼があるため、そこに関しては元も納得してくれるだろうと踏んでいた。
その意図を読み切った上で、烈は口を開いた。
「……弘一。申し訳ないが、今はそれに力を貸すことが出来ない」
「……何故ですか？」
「剛三から三矢悠元君のことについてある程度聞き及んだ。彼の婚姻については、三矢家ではなく上泉家と〝神楽坂家〟がすべて取り仕切っているとな」
「!?」
烈が口にした言葉に弘一は驚愕の表情を浮かべた。
神楽坂家――陰陽道系古式魔法の大家にして、上泉家と並んでこの国の中心を担う『護人（さきもり）』とされる家。政財界に対して非常に強い影響力を有しており、時の内閣総理大臣であっても神楽坂家に対して頭を下げねばならず、その家に命令することを許されるのはこの国の象徴たる天皇だけである。
十師族の更に上の存在であるにも拘らず、上泉家と違ってこれまでこの国の表舞台に立とうとしてこなかった。その家に悠元の婚約者を決める権限が委ねられていることには驚きというほかなかった。
「君の娘と婚約させようとしていたことは、神楽坂家も無論知っていたであろう。だが、十山家の一件で遺憾と述べていたそうだ……これは剛三から聞き及んだことだ」
「では、元殿も認めていた彼と私の娘の婚約のことは、上泉家と神楽坂家の取決めがあったと……？」

「一切の断言はしていないが、恐らくそうであろう……四葉を弱らせようと逸ったのが拙かったな、弘一」
烈は、剛三が四葉の弱体化を望んでいないことは既に聞いていた。だが、このままでは十師族という相互監視システムが崩壊しかねないことも理解している。これで神楽坂家が上泉家と同調するような方針を持っているのだとしたら、早めに手を打つ必要があるだろうと烈は思慮した。
剛三の言っていたことも理解はしている。だが、烈は彼のように純粋かつ強力な魔法師でないため、力に対する恐怖を人一倍感じていた。その意味で、懇親会において的確に烈の魔法を対処して見せた悠元を如何様に考えているのかが烈にとって一番の疑問であった。
「先程『今は』と仰られましたが、それは如何なる意味なのでしょう？」
「――――先日、神楽坂家より書状が届いた。吉日を選んで次期当主を発表するとな。私の推測が間違っていなければ……彼がその次期当主候補に成り得ると踏んでいる」
これについては、正直「やられた」と烈は感じていた。神楽坂家はそれが誰なのかを明かしていないが、書状が送られてきたのは烈が九校戦観戦のために出発する直前であった。つまり、九校戦に出場する選手の中にその次期当主がいると睨んだ。
「先生は神楽坂家現当主をご存じなのでしょうか？」
「知っておる。あ奴はとんだ〝女狐〟で、剛三同様に食えぬ奴よ。一応の繋がりはあるが、一筋縄でいかぬ相手と心得ておくがいい」
上泉家と神楽坂家は魔法師としての力を維持するための相互婚姻を数代おきに行っており、少なからず血縁関係にある。つまり、上泉家の血を引く三矢家も神楽坂家の遠縁にあたる形となっている。このことは十師族でもごく一部しか知らない事実である。
なので、三矢家の人間から神楽坂家の次期当主が選ばれても不思議ではない、と推察していた。
本来、魔法使いの家系なら保有する遺伝子の関係で得意分野が偏る傾向にある。だが、今の三矢家の場合はまるで四葉家のように得意分野も特筆すべき体質も異なる。

それが何を意味するのかは烈でも解らないことだが、神楽坂家現当主も悠元に対して強い関心を持っていることは確かなことであった。

弘一に対して、神楽坂家との繋がりを持てるように配慮はするが、そこから先は弘一次第だと、口にはしなかったがその意味も込めた言葉を烈は呟いた。

口に出さないが、今年の九校戦終了後に神楽坂家当主が烈に対して呼び出しをしている。烈はそれを好機とみて、神楽坂家が十師族というシステムを如何様に見ているのか問いただそうと決めたのだった。

九校戦二日目①～本戦二日目～

前世の自分を簡単に言うと、ラノベやアニメ、漫画が好きな普通の男子。そこそこの進学校に通い、それなりにいい大学に受かって通っていた程度の人間。俺自身、前世で何かしら有名なことなどした覚えはない。せいぜい俺の家族が有名な人間というぐらいだ。そんな家族の中で、俺は「平凡」と言えるような存在だった。

前世の俺には兄と妹がいた。なので、転生しても然程違和感なく溶け込めたといえるだろう。言っておくが、魔法なんてものはない世界の一般市民である。年齢は、前世の自分と比較して兄が４つ上、妹は３つ下だった。ただ、生まれ月の関係で兄とは学年が５つ違っていた。

その兄は、非常にモテていた。まるで将輝の容姿に深雪の魅力を合わせたような感じだろう……例えとしてはそれが一番なのだが、引き合わせたくない組み合わせでもある。将輝に対して辛辣に出るのは、この辺が影響しているのかもしれない。

自分が高校生の時に一人だけ彼女はいた。俺が高校１年の時で、相手は同じ学校の同級生だった。学年のアイドル的存在で人当たりが良く、面倒見のいい性格をしていた。

彼女とは自宅に連れて行った際、偶然出会った兄と顔を合わせた後、別れることとなった。彼女からは「もっと魅力的な人に出会ったから……」と涙を零しながら頭を下げられたので、それに嘘はないと判断した。彼女自身、人が優しすぎて嘘を言えるような性格ではなかった。

その後、彼女は兄と付き合い始めていた。そんな経験があったから、俺は特定の異性と付き合うことを止めた。兄は「弟の彼女を奪う意図なんかなかった」と弁明していたし、俺も兄を恨むつもりはなかった。身贔屓を差し引いても、自分にとって兄は魅力的に映ってしまうからだ。

この場合だと彼女に何かしら恨むところはあるのだろうが、その彼女だけでなく兄からも土下座されてしまったため、このことはこれ以

降お互い触れないようにしようと取り決めをした。流石に彼女も気まずかったのか、学校ではお互いに「仲の良い友人」に徹していた。

こんな経験、普通の人間からすれば耐え切れないと思う。その意味で自分も普通じゃなかったのかもしれないが、こういう経験は簡単に相談できることでもなかったため、普通の感覚が麻痺していたのだろうと思う。「兄に奪われたのなら仕方ないか」と思っていた節があったのは否定しない。

俺が高校2年の時に研究者をしていた両親が不慮の事故で亡くなり、自分を含めた兄弟は隣に住んでいた母の妹夫婦へ預けられることとなった。

兄は本来大学院に行く予定だったのを取り止めて働き始めた。誰よりも家族を大切にしようとする兄を感謝こそすれ、恨みはしない。それに、俺と別れた彼女に対しても真摯に接していた。

俺としては、彼女に忙しくしている兄の面倒を頼む、という心境だった。その数年後に結婚し、お互いに万年新婚夫婦になりそうな雰囲気だったので、俺には到底真似できない境地だろうなと思った。

そんな経験があったため、高校や大学では単独行動を好んでいた。これでも同性の人間とはそれなりに良好な関係を築いていたし、問題はなかった。異性の同級生や先輩・後輩からは委員会などで仕事に付き合う程度だ。

バレンタインの時に仲の良かった同性の友人から「お前さ、そんなイケメンなのにチョコが0って逆にすげえよ……」と言われたが、お返し云々考えなくて済むから貰わなくても別にいい、と返した。なので、チョコは妹からだけだった。妹からは「彼女の一人でも作りなよ」と常々言われていた。けど、俺のことを憚ってなのか、そこまで強くは言わなかった。

無意識的に人を惹きつける兄という存在があったからこそ、それから比べれば自分の容姿は普通だと考えていた。けれども妹が言うには、俺は兄とは別の意味で人を惹きつけるが、触れるのも怖いということで無意識的に避けていると分析していた。

俺って鬼とか悪魔みたいに思われてるのか、と口に出すと……妹は

「違う、そうじゃない」と言いながら苦笑していた。その意味を聞くのが怖かったので、それ以上は聞かなかった。

自分の兄ほどではないが、これでも文武両道ぐらいは心掛けていた。学校では指を差されない程度の学績を維持していたし、運動もそれなりにできていた。精々普通の人より剣道が上手だったぐらいだが、何かしらの名誉を求めて大会に出ようとは思っていなかった。何分、自分の身内がとても追いつけないレベルの領域にいたことを知っていたからだ。

俺の兄は俺が高校に入った時点で世界に名立たる実績を残していたし、いくつかの論文を発表してその筋の世界的権威になっていた。妹は図らずも数学の難問を解いたことで世界にその名を知られた。そんな二人に比べたら、俺は「兄の弟（カリスマ）で、妹（てんさい）の兄」ぐらいの知名度しかない。いわばオマケ扱いだ。

自分がいなくなってから、兄とその妻、そして妹がどうなったのかは分からない。少なくとも迷惑は掛けてしまったのだろうな。前触れもなくポックリだったわけだし、驚きが大きいのだろうと思う。まあ、今更どうにも出来ないから、なるようになってくれていたらそれでいい。

この世界に転生しても、兄の呪縛は解けなかった。頭で理解はしていても、いつかそういうやつが出てくるのでは、と恐れているのは否定しない。それが運悪く噛み合って、他人に対する恋愛感情が生まれてこない。

転生特典で一応は試したのだが、それに対応する魔法式を生み出すことができなかったのだ。魔法はイメージを現実化する……なので、そのイメージを描けない自分がいくら試しても出てこないのは無理もない話だ。その代わりにとんでもない魔法が生まれたことは……心の中にしまっておきたいと思う。

それ以上に、俺は……誰かを好きになっていいのだろうかと思いながら、襲い来る睡魔にそのまま身を委ねたのだった。

◇　◇　◇

九校戦2日目は本戦クラウド・ボールと本戦アイス・ピラーズ・ブ

レイク。クラウド・ボールは午前に女子、午後に男子の試合となるが、アイス・ピラーズ・ブレイクは男子と女子の試合を並行して実施する。これはアイス・ピラーズ・ブレイクに使用する氷柱の準備が大変であることに起因する。

悠元はいつもと変わらない時間に目が覚めたため、眠気覚ましにミルクと砂糖入りのコーヒーを飲みながらモニターを眺めている。本来は本戦に関与しない達也が女子クラウド・ボールのサブエンジニアに急遽抜擢されたため、モニターのウィンドウに映ったＣＡＤの設計図を見つつ、今日の観戦はどうしようかスケジュールを確認していた。

すると、ノックする音が聞こえたので扉のロックを外すと、そこにはトレーニングウェア姿の深雪がいた。

「おはよう、深雪。どうしたんだ？」

「おはようございます、悠元さん。その、少し体を動かしたいので、付き合っていただけませんか？」

「そうだな……いいよ。軽い運動でよければ」

悠元としても体を動かしたかったので、深雪の提案を快く受け入れていた。その深雪はというと、とても嬉しそうな表情を見せていた。これには内心苦笑しつつも深雪の傍にいそうな達也の姿が見えないことに首を傾げた。

「そういえば、達也は？　てっきり『軍の施設とはいえ、必ずしも安全ではない』とか言って、一緒にいると思ったけど」

「お兄様は先程までいたのですが、『他の子の様子も見ながら走ってくる』と言いまして」

「アイツ、余計な気を回さんでもいいのに……それぐらい自分に対する好意に敏感になれと言いたいんだが」

「……そればかりは悠元さんと同意見です」

人のことを言えるのですかと深雪は言いたかったが、自分のことに対するブーメランになりかねないため、達也のことについては自身を少し棚上げするような形で同意した。悠元は、少し準備するから部屋の中で待ってくれと言いつつ、深雪を部屋の中に招き入れた。部屋の

外で待たせるよりはまだ大丈夫だろうという判断だった。
「そしたら、少し準備するから適当なところに掛けていてくれ」
「はい。あれ……悠元さん、それって特化型ＣＡＤの設計図ですか？」
深雪は達也からソフトの知識を、悠元からハードの知識を学んでいる。ある意味「トーラス・シルバー」の弟子ともいえる待遇だが、二人とも深雪に対して必要以上のことを教えたりはしていない。そんな経緯はさておき、二人の作業を見たことのある深雪はモニターに映る設計図からそれが何かを察して問いかけた。
「ああ、それ？　会長から得られたデータをベースに組み上げた特化型ＣＡＤの設計図だよ。とはいえ、正直『奥の手』で隠し持つぐらいの代物でしかないけど」
悠元はそう言い放ったが、同じ系統を組み合わせた魔法を最大９種類インストールできる特化型を「単一の魔法」に特化させるという手法は、本来実戦的ではない使い方になる。その実戦データから、本来特化型では不可能とされる異なる系統の起動式を使用可能な状態にし、最終的には汎用型を特化型の速度に合わせる手法を考えているのでは、と推察した。
これを九校戦を通して考えていたことに、深雪は気付いた。それを既存のソフトウェアを生かしつつハードウェアの方面で進化させている。悠元は、紛れもなく世界でトップクラスの魔工技師であると感じていた。
「まあ、データ自体は既に送ってるけどね。牛山さんのことだから、張り切って半日で仕上げて送ってきそうだけど……深雪？　何かおかしかったか？」
「いえ、悠元さんもお兄様も根は瓜二つだなと思いまして」
「……そしたら、行こうか」
「はい！」
悠元と深雪はこの時気付いていなかった。悠元が昨晩組んでいた起動式とモニターに映った特化型ＣＡＤの設計図――――それによって、誰しもが驚愕しうるとんでもない展開を引き起こしてしまうことに。

◇　◇　◇

達也はホテル敷地内を一人走っていた。無論、ただ我武者羅というわけではないが、九重寺に行くときのように魔法を併用するわけにもいかないので、純粋な体力トレーニングだけに抑えている。すると、自分の見知った気配に気づいて足を向ける。

ホテルの敷地内の奥まった場所――――そこには微弱ながら人払いの結界が張られていて、達也はそれを見抜きつつ中に入ると、武術の軽い手合わせをしている悠元と深雪の姿があった。

「ん？　深雪、そろそろ切り上げるか。どうやらお兄様が気付いたようだ」

「え……お兄様!?」

「済まない。人払いの結界を張っていたことは気付いたんだが……というか、俺に気付かせようとしただろ？」

本来人払いの結界自体気付かないものだが、達也は自身のことを試しているような感じがした。現に達也が入っても、特に害をなすことがなかったからだ。これには悠元が頭をポリポリ掻きつつ弁明した。

「文句は九重先生に言ってくれ。『達也君に結界系魔法の察知も教えておくのがいいだろう』と丸投げしたからな。俺は体の良いパシリじゃないというのに……ピンポイントで頭に直射日光でも浴びせてやりたい」

「師匠がそれに悪乗りして、俺に目潰しをしてきそうだからやめてくれ」

違いない、と悠元が零したことに深雪はクスッと笑みを漏らした。悠元は人払いの結界を解除して、ホテルに戻ることとした。部屋に戻って一通り身支度を整えてから3人で朝食に向かうこととなったのだが……その道中で喧嘩のような言い争いをしている3人の男女と遭遇した。

「……修羅場か？」

「いや、違うな。女子二人の方は……単純に喧嘩慣れか？」

「それを慣れるというのもおかしいような……」

制服は男子が九州にある第九高校、女子がそれぞれ第二高校と第七

高校の制服を着ていた。聞いている限りではお互いに知り合いであり、低レベルの悪口の応酬になっていた。「バカ」とか「アホ」とかの単純な言い合いなのだが。

これは無視してもいいだろうなと思ったのだが、気付くと第二高校の制服を着たサイドテールの女子が、高出力の魔法を放とうとしていた。それを見た第七高校の制服を着ている長い栗色の髪の少女も魔法を展開しようとしだした。

これは拙いと散切り頭の男子生徒も対抗魔法を放とうとしている。達也はそれらの魔法が現代魔法でないと判断していたが、ここで『術式解散』を使うわけにもいかない。それを察してか、悠元が手を翳して3人の魔法を強制破綻させた。

「ふえっ!?」

「ええっ、魔法が破綻した!?」

「た、助かった……」

これには3人も驚きを隠せなかった。まさか〝天神魔法〟を解除されるとは思わなかったのだろう。一体誰が……と視線を回すと、その先には一高の制服を着た悠元、達也、深雪がいた。その中にいた悠元が手を翳していたので、彼らから見れば悠元が魔法を破綻させたと推察しただろう。

悠元は手を下ろしつつ、その3人に向かって説教じみた言葉を投げかけた。

「こんなホテルの中で魔法を使おうとしない方がいい。今の魔法、下手すれば数フロアは吹き飛んでたと思われるが?」

「ホント済まない。ほら、姫梨(ひかり)と由夢(ゆめ)も謝れ!」

「う、本当に申し訳ないです……姫梨?」

「……え、あ、うん。本当に申し訳ありませんでした」

男子生徒の言葉に由夢と言われたサイドテールの少女も深く頭を下げたが、姫梨と呼ばれた少女は悠元に見惚れていた。少ししてから我に返ると、その女子生徒も慌てて頭を下げていた。それを見て反省していると判断し、悠元はそれ以上の追及を止めた。

「ま、今のは見なかったことにしておくけど、気を付けた方がいいよ」

そう言って悠元は手を振りつつその場を速やかに去った。達也と深雪も軽く頭を下げて去って行った。その様子を3人は見ていることしかできなかったが、サイドテールの少女こと第二高校1年高槻由夢は彼らを見て呟く。
「――――まさか、うちらの〝天神魔法〟を破るだなんて驚きだね」
「だからと言って、ここで『獅雷咆哮』を唱えていい理由にならんだろう！　反省しろ！」
「あいたっ！　修司ってば酷いよ！　それに姫梨だって『風神烈破』使おうとしてたし！……姫梨？」
男子生徒――――第九高校1年宮本修司の説教と鉄拳に、由夢は涙目を浮かべながら反論しつつももう一人の女子こと第七高校1年である伊勢姫梨のことを槍玉に挙げたのだが……姫梨から何の言葉も返ってこないことを不審に思った二人が彼女を見やると、彼女の表情は恋する乙女の表情だった。
「……由夢、これってまさかとは思うが」
「惚れたね。彼、一高の生徒だよね？　後ろにいた女の子は確か司波深雪だったかな」
「ああ、懇親会でうちの男子連中が見惚れていたな。三高の『クリムゾン・プリンス』も惚れていたようだったし」
「修司も？」
「阿呆。にしても、どうするんだ？　放っておいたら数時間は現実に戻ってこないぞ？」
修司と由夢は、彼が天神魔法を破ったことよりも、恋する乙女の表情を浮かべたままフリーズしている姫梨をどうしたものかと悩むことになった。結局、由夢が強制起動と称して姫梨の胸を鷲掴みにする羽目になったのは……3人だけの秘密であった。
「深雪さん？　痛いのですが？」
「もう、悠元さんは次々と惚れさせないでください」
「はい？」
そんなことに気付いていない悠元と、乙女の勘で新たな恋敵が増えたことを察して悠元の背中を抓る深雪。そして、それをみた達也が

こっそり深い溜息を吐いたのであった。

九校戦二日目②

朝食を済ませた後、達也は技術スタッフ用のブルゾンに着替えて、折りたたみ型の端末を持って女子クラウド・ボールの会場に向かった。こういうところの律義さを見つつ、悠元は端末を見ていた。それを見た深雪が首を傾げていた。

「悠元さん、どうかしたのですか？」

「いや、あの3人が同じ学校ならクラスメイトあたりかなって説明はつくんだが、綺麗にばらけていただろ？　ってことは、魔法使いの家系繋がりの可能性が大きいと思ってな」

少なくとも、自分が全国を回った時に知り合った記憶はなかったし、上泉家の絡みでも知り合ったことがなかった。新陰流剣武術関連の行事でも見たことがないのは確かだった。

だが、彼らの魔法力がかなり高いレベルにあることは間違いなく、しかも彼ら3人は〝天神魔法〟を使用していた。可能性があるとしたら、裏の天神魔法を受け継いでいる古式魔法の大家に繋がっている可能性が高いと踏んでいた。

「それで、3人の名字はともかく、名前だけは聞き取れたから代表選手にいるのかなと見たんだが……見事にいたという訳だ」

第九高校1年の宮本修司（みやもとしゅうじ）、第二高校1年の高槻由夢（たかつきゆめ）、そして第七高校1年の伊勢姫梨（いせひかり）。全員1年でありながら、あの時感じられた魔法力は深雪と同水準であった。そのいずれもが『数字付き（ナンバーズ）』でないというおまけ付きだが、上泉家の前例を考えると彼らも並外れた実力者であると感じていた。

修司は本戦男子クラウド・ボールのみ、由夢は新人戦女子クラウド・ボールのみ、姫梨は本戦ミラージ・バットのみのエントリーとなっている。だが、1年で本戦出場組というのはそれなりの実力がなければ務まる筈がない。それこそ三高1年で本戦ミラージ・バットに出場する「稲妻（エクレール）」の存在から考えるに、少なくとも十師族クラスと考えた方がいいだろう。

「先の話になるが、スバルと菜々美は苦労しそうだな……」

「苦戦、ではなく苦労ですか？」
「深雪もあの時、彼らの魔法力は感じてただろう？」
悠元の言葉に深雪も頷く。あの魔法力はこの場にいない達也も率直に感じていたことだろう。十師族の面々も恐らくノーマークの可能性が高い。〝原作〟にいない人物となると、こちらも本腰を入れて調べておきたいが……何となくだが、この３人とは近い内に知り合うような気がしたのだ。
その根拠は剛三から九校戦で天神魔法を使用せよ、というお達しが出たこと。その通りに従って悠元が天神魔法を使えば、間違いなくあの３人の目に留まる。それが一体何を意味するのかは流石に原作知識の範疇外なので知りようもないのだが。
「『数字付き（ナンバーズ）』じゃないのに十師族クラスの魔法力……まるで深雪みたいな存在だな」
「もう、悠元さんったら……あまりからかわないで下さい」
悠元は深雪の素性を知っている。でも、表にできないからこその冗談めいた言葉に、深雪は頬を赤く染めて反論していた。すると、そこに雫とほのかが姿を見せた。二人の様子を見た雫が若干不機嫌な様子であったことに、ほのかは引き攣った笑みを浮かべていた。
「やっぱ、悠元ってジゴロ？」
「最近よく聞くようになったよ、その言葉……てか、俺はジゴロじゃない。女性に対して真摯に接しているだけだ」
「それがジゴロなんですよ」
「……」
じゃあどうしろと言うんだ、と尋ねたかったが……これ以上続けても無駄な問答にしかならないと判断して、悠元はほのかに視線を向けた。
「ところで、二人はクラウド・ボールを見に行くのか？」
「アイス・ピラーズ・ブレイクは見ておきたいかな」
「私もそうしようかなって思いまして……」
確かに雫はアイス・ピラーズ・ブレイクに出るので、その感覚を掴んでおきたいのだろう。それを言うなら悠元と深雪もアイス・ピラー

ズ・ブレイクに出場するので、観戦するのは悪くないと思う。ただ、真由美の出場する女子クラウド・ボールの一件があるので、それを見ないと何を言われるか分かったものではない。
「そしたら、深雪は雫とほのかでアイス・ピラーズ・ブレイクを見に行くといい。俺は、女子クラウド・ボールを見ておかないと会長に何されるか分かったものじゃないからな」
「……分かりました。けど、大人しくしてくださいね？」
深雪さん、人を歩くフラグ製造機みたいに言わないでください……と言いたかったが、深雪だけでなく雫からも何かしらの言葉が飛んできそうだったため、口を噤むことにした。そんな簡単にフラグが立ったら、世の中の男子はフラグだらけじゃないか……と悠元は自身を一般人のように低く評価しながら、クラウド・ボールの会場に向かって歩いていた。
（あれは……あいつら、いっぺん地獄に落ちろ）
すると、若者の男性数人に囲まれている中学生ぐらいの男女に遭遇した。二人の姿はその連中の陰に隠れて見えないが、その連中の一人が手に持っている物でその男女の正体を察した悠元は、自己加速術式を駆使してその手に持っていた物を取り上げた。
それに驚く暇を与えることなく、『エアライド・バースト』を複数展開して彼らの急所に攻撃。怯んだ瞬間に男女の二人を担ぐと、自己加速術式でその場から急速離脱した。
そして、会場の物陰に着いたところで二人を降ろし、手に持っていた物――イヤーマフ型ＣＡＤをその女子に被せた。
「さて……下手に手を出さなかったことは評価できるかな、侍郎（さぶろう）。でも、あの時は椎菜を最優先で守らないとな？」
「えっ……ゆ、悠元さん!?　その、すみませんでした」
「いいよいいよ」
悠元の姿を見て目をパチクリさせる男子こと侍郎だったが、彼の手を煩わせたことに対して謝罪すると、悠元は何でもないと返した。一応認識阻害を全開で掛けていたので、自分がやったとばれることはないだろう。そして、女子こと長野椎菜もとい詩奈は悠元の存在に目を

見開いていた。
「え、お、お兄様？」
「こーら、ここでは別人なんだから。家のように接しちゃだめだよ？」
「あ、そうでした……ごめんなさい。でしたら、悠元様でよろしいでしょうか？」
確かに、この場では三矢の人間である自分が格上になってしまうのだが、何か無駄に格上げされたような気がした。それを気にすることなく二人に問いかけた。
「ま、いいよ。それで、二人だけで来たのか？」
「いえ、矢車家の人と一緒に。でも、侍郎君がふらついていたので、私が捜していたんです」
「……そういう放浪癖は元継兄さんに似たんだな。とりあえず、詩鶴姉さんに連絡して半日ヨガ教室行きだな」
「や、やめてください！　あれは、あれだけは……」
三矢家の中で詩鶴のヨガの犠牲になった回数（正確には気絶回数）をカウントしたら、間違いなく上位に入る一人が侍郎である。詩鶴曰く「ヨガは男を磨くためのレッスンですよ」といつも言い含められていた。それだけで、侍郎が詩奈に対してどのような気持ちを抱いているのかよく分かるというものだ。
尤も、侍郎にとってはヨガが軽くトラウマになりかけているのも事実だが。
「大丈夫だよ、侍郎君。私も一緒についてってあげるから」
妹よ。その言葉はフォローじゃなくて、追い撃ちどころか死体蹴りです……と悠元は内心で詩奈と侍郎の微笑ましい（？）やり取りを見つつも呟き、通信端末を取り出して詩奈の言っていた矢車家の人と連絡を取った。その１０分後、矢車家の人が来て二人は一緒に付いていったのだった。
妹が満面の笑顔で手を振っていたのには、手を振り返した……言っておくが、実の妹である詩奈を娶る気は一切ない。大事なことなので、何度も言っておく。
それを見送った直後、競技場の方から歓声が上がった。どうやら一

試合終わったのだと察したところで、悠元はそういえば、と思い返した。
「今の試合……会長のじゃね？」
ヤバい、実にヤバい。何言われるか分かったものじゃない。これで「私とデートしなさい」とか言われたら全力で逃げる。
いや、女性として魅力的なのは理解しているのだが、崇拝に近い形となっているファンクラブとか、彼女の父親とか、彼女の妹である双子のこととか……とにかく付随する事柄が面倒事に直結することだらけなのだ。ファンクラブの連中（プラス彼女の父親）に彼女が作った「良薬（バレンタインチョコ）を超えた何か」を食べさせてやりたい気分である。
とにかく2回戦以降の試合は見ておこうと思い、悠元は競技場の中へと入っていくのであった。
◇　◇　◇
悠元は案の定、真由美に1回戦のことを問い詰められた。だが、試合中にそんな集中力を欠くような行動はどうかという言葉と、知り合いが絡まれていたので助けたことを伝えると、渋々納得していた。だが、真由美の追及は止まらなかった。
「悠君、あの起動式は何なの!?　達也君に聞いたら、あれはもう『四重反転（クワドラブル・バウンド）』みたいだと言っていたんだから！」
「高速化するついでに回転軸変数を少し弄っただけですよ。会場中がみんな釘付けだったじゃないですか」
『四重反転（クワドラブル・バウンド）』――加速系統の逆加速魔法『倍速反転（ダブル・バウンド）』の加速率を上げるだけでなく、ボールに対して回転軸を3つ付与することによって予測不能の変化で相手を翻弄する魔法。この辺りは悠元が転生前に読んでいた漫画から参考にしている。
とはいっても、真由美に提供した『四重反転（クワドラブル・バウンド）』は速度を控えめに設定しており、実際の『四重反転』はとある選手のＣＡＤに組み込まれている。そんな事情は敢えて言わないが、真由美は頭を抱えたくなっていた。今回の九校戦は父親である弘一も観戦しているため、絶対に探りを入れてくる可能性があると踏んでいたからだ。
「あー、またあのタヌキオヤジに聞かれる案件が増える……悠君、実は

Ｓでしょ？」
「それについては分かりませんが、性格が悪いと言われたことならあります」
「それがＳって言うの！」
　結果として、全試合１セットだけで相手選手をリタイアに追い込むほどの得点――――全ての試合で無失点および２００点以上の大差を付けての勝利。決勝では２２８―０という１セットあたりの最多得点記録をマークした。
　真由美としてはやや不完全燃焼気味だが、十師族の直系としてこれ以上ないほどのアピールになったことは間違いない。
「何にせよ、妹たちも姉である会長が活躍して大喜びなんじゃないか、って思いますよ？」
「ううっ、それはそうなんだけれど……悠君、お昼は一緒に付き合いなさい！　これはリーダー命令です！」
「……分かりました。ですが、二人きりではあらぬ誤解を招きますので、こうしましょう」
　代表メンバーのリーダー権限は、そういう私利私欲のために使う為のものではないのだが……断ったら面倒なので、引き受けることにした。その代わりとして条件を一つ提示することにした。
「悠元お兄様、お久しぶりです！」
「久しぶりだな、泉美。香澄も久しぶり」
「悠元兄も久しぶり！　で、お姉ちゃんは何で不機嫌なの？　あれだけの完封勝利をしたのに」
「まあ、ちょっとした癇癪というやつだ」
　それは、真由美の妹である香澄と泉美の二人も同席させることだ。二人とはバレンタインの一件で屋敷を訪れて以来となるので、約四ヶ月ぶりだ。泉美は嬉しそうに悠元に抱きつき、それを見た香澄は相変わらずだなぁ、と思いつつ悠元に挨拶をした上で若干不機嫌な真由美について尋ねると、悠元は無難な答えを返した。
　なお、真由美が不機嫌な理由は試合のこともあるのだが、「二人きりがよかったのに……」と小声で呟いて不貞腐れているだけだ。

そんなことをしたらあの現当主に付け込まれるだけなので、香澄と泉美をこの場に呼んだという訳だ。これには真由美も渋々納得したが……すると、彼女は未だに抱き付いている泉美に対して笑顔を浮かべて問いかけた。
「ちょっと、泉美ちゃん。悠君にくっつき過ぎですよ？　人目もあるから離れなさいね？」
「え、別にいいじゃないですか。お兄様に会ったらいつもベタベタしているお姉さまに言われる筋合いはございません」
「……悠君、助けて」
姉の言葉をバッサリ切り捨てた泉美に対して、真由美は早々に悠元へ助けを求めた。その背景には泉美の婚約話が潰れた一件があるのだろう。
「ギブアップ早すぎじゃないですか!?　泉美、気持ちは理解するけど離れてくれないか？　これだと身動きが取れない」
「あ……申し訳ありません。お兄様成分を補充したくて、つい抱き付いてしまいました」
真由美のこれには思わず反応してしまったが、泉美に対してやんわりとした口調で窘めた。すると、泉美は我に返ったように悠元から離れて軽く頭を下げた。
というか、お兄様成分って何？　俺、そんな変な匂いでも出してるのかな？　一応ここに来る前にシャワーは浴びたんだが……首を傾げつつ悩んでいると、香澄が声を掛けてきた。
「大丈夫、泉美のちょっとした少女趣味の暴走だから」
「そうか？　なら、いいんだが……」
「もう、香澄ちゃんったら酷いです……今、凄い当て字をしたような気もしましたけど」
七草香澄（さえぐさかすみ）と七草泉美（さえぐさいずみ）――――真由美の妹で一卵性双生児である。とはいっても、香澄はショートカットでボーイッシュな性格をしており、泉美の方は肩にかかるショートボブのフェミニンな少女と分かりやすい。これで趣味や髪型が同じだったら見分けるのは大変だったと思う。

彼女らと面識を持ったのは4年前ぐらいになる。丁度沖縄防衛戦の1年前に七草家でパーティーがあり、剛三に連れられて弘一に挨拶をしたときに、真由美、香澄、泉美と出会った。その時に泉美から「理想の王子様」と言われたことは今でも覚えているが……どの辺りを見て王子様と言ったのかは理解できなかった。

「とりあえず、会長が優勝したんだ。お祝いの言葉を掛けてあげなよ」

「そうだったね。お姉ちゃん、優勝おめでとう！」

「お姉さま、優勝おめでとうございます」

「あ、ありがとう……あれ、おかしいな。私、二人の姉よね？」

いつの間にか、悠元が妹たちの手綱（コントロール）を握っていることに真由美は思わず涙が出そうになったが、周囲には他校の生徒や観客もいるので、何とか笑顔で誤魔化していた。悠元には実の妹がいることを真由美は知っているので、それぐらいの機微ぐらい読めるのだろうと無理矢理納得したのだった。

なお、そんな真由美の葛藤に対して、香澄と泉美は揃って首を傾げたのであった。

九校戦二日目③

本戦女子クラウド・ボールにて真由美が無事優勝を飾ったということで、彼女のリーダー命令によって一緒に昼食を食べることになった。とはいえ、お互いに十師族である以上は目立ってしまうため、妹である香澄と泉美も交えて食べることになった。

午後に関しては、真由美は天幕に戻り、香澄と泉美はＶＩＰ用の観覧席でアイス・ピラーズ・ブレイクを見るとのこと。折角だから一緒にどうかと泉美に誘われたが、そこはやんわりと断っておいた。二人と観戦したら間違いなく局所的なブリザードが吹き荒れそうな気がしたからだ……別に誰かのことを指して言ったわけではないが、被害がないに越したことはない。

それに、ＶＩＰ席だと他の十師族当主とも顔を合わせる羽目になる。ただでさえ新人戦が控えているのに、十師族の現当主たちと会って無駄な気苦労を負いたくないのが本音であった。

二人を送り届けると真由美が言いつつ、その場を去った。悠元はそのまま女子アイス・ピラーズ・ブレイクの試合会場に足を向けることとなる。

アイス・ピラーズ・ブレイクはピラーズ・ブレイクとも呼ばれ、縦１２メートル、横２４メートルの屋外フィールドで行われる。フィールドを半分に区切り、縦横１メートル、高さ２メートルの氷柱が１２本ずつ設置され、先に相手の氷柱を倒した方が勝ちというルール。

この競技は、九校戦の競技では最も大掛かりな舞台装置を使用している。それこそ真夏の時期に何百本の氷柱を用意しなければならないため、いくら国防軍の全面協力があったとしても大変なことには変わりない。

製氷能力の関係で試合会場は男女各２コートの４コート。一日にできる試合数は１回戦の１２試合と２回戦の６試合、計１８試合が限界だ。そのため、３回戦の３試合と決勝リーグの３試合は分けられる形となるため、２日間に渡る形となる。

そして、女子アイス・ピラーズ・ブレイクの２回戦――花音が出

る試合をスタッフのモニタールームに観戦しに来たのは、悠元、達也、深雪、そして雫の４人。ピラーズ・ブレイクに出場する面々（達也は新人戦女子の担当エンジニアだが）がある程度揃う形となった。
「千代田先輩の調子はどうです？　１回戦は最短時間で勝ったそうですが」
「調子は悪くないけど、空回りしないか心配なところはあるかな」
　達也が当り障りのない質問を投げかけると、啓は苦笑しながら返した。
　その一方、悠元は深雪と雫の板挟み（サンドイッチ）に遭う形となっていた。男子としては羨ましいのかもしれないが、下手なやっかみを買いそうで溜息を吐いた。達也はそれに見ない振りをするために悠元を生贄にしたのだろう……そうやって身軽に動ける奴が羨ましく思える。
「あの、お二人さん？　そこまで引っ付かなくても逃げませんよ？」
「ダメ。あの会長さんも油断ならない」
「雫の言う通りです。悠元さんを一人で行動させると増えていきますから」
　深雪さん、増えるって何が？　自分はそれなりの容姿を持つ普通の人間ですから……あ、魔法を使える時点で普通の人間じゃなかったわと思いつつ、悠元は諦めたように窓の外に映るフィールドを見やった。すると、それを見た啓が達也に話しかけた。
「君はいいのかい？」
「まさか、五十里先輩に聞かれるとは思いませんでしたが……自分としては、妹を安心して預けられる相手ですから」
「成程ね。十師族というのも楽じゃない、って彼を見てたら思うよ」
「確かに、その通りですね」
　達也から言わせれば悠元は「イケメン」の部類に入ると思っている。懇親会の時の反応を見るからに一目瞭然だろう。ただ、悠元本人にその辺の感覚がないのは達也もよく分からない。強いて言うなら、高校入学まで「長野佑都」として振る舞っていたため、その感覚が抜け切れていないと推察している。
　加えて、彼が三矢の人間という自覚はしていても、必要以上に拘ら

ないような気がしていた。それは、三矢の人間が一高の『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』と付けられたことに対して、余計な行動を取らないようにするためのものなのかは、正直達也も計りかねていた。

実際のところ、悠元が「普通」を強調するのは兄と姉４人のとんでもない功罪によって自分にも影響が出ているため、今後入学することになる詩奈に対して三矢のイメージを払拭するための方便のひとつなのだが、十師族という時点で普通というイメージはないに等しいということを悠元が自覚していなかったのだった。

それと、自分の容姿に関して自負というか自覚がないのは、単純に前世の兄に対する感覚が未だに抜け切れていないためなのだが、それを悠元が認識できていないのが主な原因である。

尤も、達也の一番の懸念は視線の先にいる深雪と雫が勝負をする場合、自分と悠元がどちらかの味方に付くことができない点だ。その点で言えば、悠元は深雪に対して彼女が使っている汎用型ＣＡＤのオーバーホールを行ったうえ、決勝リーグ用の起動式を一つ渡している。雫には決勝リーグを見据えた特化型ＣＡＤの設計を悠元が手掛けている。

これで差引イーブンとは言えないかもしれないが、達也も技術スタッフとして出来る限りの協力を二人にしてきた。

達也のそんな懸念を他所に、試合開始を告げる青のシグナルが点灯し、同時に音がフィールドに鳴り響く。その音と共に、地鳴りが生じた。

「地雷源」

達也は眼前の光景からその名称を呟いた。

速さだけでなく、多能性が現代魔法の特徴だが、やはり人である以上は魔法師にも得意・不得意が生じる。魔法の才能が遺伝するものである以上、その得意・不得意も引き継がれる。

四葉家のように一族一人一人の特性がまるで異なる、というのが例外なのだ。その意味で現在の三矢家の次男以下の面々はその傾向を持っている……その原因は悠元にあるわけだが、本人は否定している。

話を戻すが、有名な一族にはその共通する特性から、個人に対するものとは別に、一族に対する二つ名が贈られる――というか、付けられる。一条家の「爆裂」や十文字家は「鉄壁」、七草家は逆説的に「万能」、千葉家は「剣の魔法師」と呼ばれたりする。

ちなみに、三矢家も最近二つ名で呼ばれるようになったのだが、付いた二つ名は「摩訶」。その由来は魔法特性に優れた5人の魔法師の得意分野がバラバラなことや、その実績がまるで〝摩訶不思議〟のようだと言われるようになったためだ。その二つ名を聞いた瞬間、父の表情が引き攣っていたことは今でもハッキリと覚えている。

話が逸れてしまったが、花音の実家である千代田家の二つ名は「地雷を生み出す者」、即ち「地雷源」。千代田家の得意魔法は振動系統・遠隔固体振動魔法、その中でも地面を振動させる魔法を千代田家の魔法師は得意としている。材質を特に問わず、「地面」という概念を有する固体であれば発動可能である『地雷原』が、相手フィールドに対して直下型地震に似た上下の振動を与え、確実に氷柱を砕いていく。

相手は振動を抑えようと移動系統の魔法を駆使するが、最大12本の氷柱に対する情報強化や対応は完全にマルチ・キャストの領域だ。相手フィールドの地面そのものを対象とする『地雷原』のスピードに追い付いていないのが見て取れた。

すると、相手が攻撃優先に切り替えて魔法を発動し、何の守りもしていない花音側の氷柱があっさりと崩れた。これには啓が苦笑を浮かべていた。

「思い切りがいいというか、いい加減というか……倒される前に倒しちゃえって考えなんだよね、花音って」

「いえ、まあ……戦法としては、間違ってないと思いますが」

防御を一切考えず、攻撃一辺倒に割り振って速攻で敵側の氷柱を倒す。一見すれば無謀な特攻にも近い戦術だが、同レベル以下ならその戦法も十分アリだ。何せ、防御用に魔法力を割くことなく攻撃に全てのリソースを注ぎ込むわけだから、相手が攻撃優先になれば魔法の威力を上げるだけで速度に対応できる。

それに百家本流の千代田家クラスとなれば、同じ百家か師族クラス

でない限りその戦術で十分に勝ててしまう。逆に言えば、花音が小難しいことを考えられない性格ともいえるが。
尚、花音がスタッフルームに向けて笑顔でＶサインを向けた後、悠元たちの姿を見た花音は制服に着替えて悠元に近づくと、肩に手を置いてこう言い放った。
「悠元君。こっちの世界に来ると楽だよ」
それが何を意味するのか解らず、悠元は首を傾げた。その言葉の意味を察した啓は苦笑いを浮かべ、達也は頭を抱えたくなった。花音は悠元の両隣にいた深雪と雫に対して何かを吹き込んでいたようだが……聞かない方がいいと判断して、聴覚強化は使わなかった。
◇　◇　◇
そんな一幕はさておき、花音が３回戦進出を決めて意気揚々と一高の天幕に引き上げてきた一同だったが、その中にいた作戦スタッフが難しい表情をしていて、重苦しい雰囲気を浮かべていた。流石にこれは何があったのかと啓が尋ねた。
「何かあったんですか？」
「男子クラウド・ボールの成績がやや思わしくなかったので、総合優勝の見通しを計算し直していたんです」
九校戦はポイント制で競われる。本戦はモノリス・コード以外だと１位が５０ポイント、２位が３０ポイント、３位が２０ポイント。モノリス・コードはこの２倍となるため、かなり重要となる。４位以下のポイントは、スピード・シューティング、バトル・ボード、ミラージ・バットが１０ポイントとなり、クラウド・ボールとアイス・ピラーズ・ブレイクは４位から６位に５ポイントが加算される。新人戦はこの２分の１のポイントとなる。
つまり、いかに優勝するかというよりも、同じ学校で上位をいかに独占できるかが総合優勝に大きく影響してくる、というわけだ。
「やや思わしくなかった、と言いますと？」
「１回戦敗退と３回戦敗退。桐原君が決勝リーグに進んだ形ですね。彼の奇抜なＣＡＤのお蔭ともいえるでしょうが」
他の２選手とは異なり、原作では２回戦敗退だった桐原へのテコ入

れによって決勝リーグまで勝ち上がっていた。鈴音の言った〝奇抜なＣＡＤ〟とはラケット一体型ＣＡＤのことだ。彼の使っているものに真由美も使った『四重反転（クワドラプル・バウンド）』がインストールされている。

その３名によるリーグ戦だが、その中に今朝出会った３人のうちの１人である宮本修司の名前があった。これには悠元だけでなく、深雪も思わず声を上げた。

「悠元さん、あの名前は……」

「ああ。やはり、決勝まで上がってきたか……」

「三矢君？　誰か知り合いでもいるのかい？」

「知り合いというか……今朝、偶然顔を合わせた人たちがいまして。その一人が、第九高校１年の宮本修司です」

別にお互い自己紹介したわけではなかったので、魔法発動を止めたという事実をぼかしつつ彼は要注意だと呟いた。鈴音の目から見ても、１年が本戦に出てくるのはそれなりの実力がないと出来ないと分かり切っていた。

念のためにと彼の試合データを見てみたところ、鈴音の口から思わず驚きの声が漏れた。

「これは……全試合で無失点勝利。３回戦で三高の優勝候補相手に完封とは……」

「それって、彼も会長クラスってことですか？」

「完全にノーマークでしたね。ですが、状況で言えば三高も同じでしょう」

向こうにとっても寝耳に水のレベルだろう。決勝リーグは修司と桐原、そして、優勝候補とは別の三高の選手という組み合わせになっている。現在の試合は修司と三高の選手だが、状況は修司が優勢。その得点差は……１セット目開始３分で１００点差を超えている。そんなことはさておき、作戦スタッフの２年生が試算結果を鈴音に伝えた。

「現在のリードを考えれば、女子バトル・ボード、男子ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バット、モノリス・コードで優勝すれば安全圏だと思われます」

つまり、この時点で現在進行中の男子クラウド・ボール、明日結果が決まる男子バトル・ボードと女子アイス・ピラーズ・ブレイクは計算に入れないということなのだろう。そのどれもが現2年の主力メンバーが出場している競技であり、出場選手である花音の前で言っていい台詞ではないと思うが。

更に言えば、新人戦のことを全く考慮に入れていない形となっている。まあ、始まってすらいないものにどうこう言えるわけではないというのは理解できる。だが、その見通しは現3年の主力がすべての種目で優勝する前提で組まれていて、万が一の場合のアクシデントに対応できない仕組みとなってしまっている。

「つまり、現3年が出場する競技ですべて優勝しなければならない、ということですか」

「三高との得点次第では、新人戦が総合優勝に影響してくる可能性が高くなるでしょう」

このあと、男子クラウド・ボールの結果が報告された。優勝は修司、準優勝は桐原、3位が三高の選手となった。天幕にいた為に試合の細かい流れを見れなかったので、悠元は桐原のところへ足を運んだ。隣には紗耶香もいたので声を掛けようか迷ったが、向こうが気付いたので場の流れを見た上で話しかけた。

「お疲れ様です、桐原先輩。それと準優勝おめでとうございます」

「ああ。つっても、お前から『アレ』を勧められてなければ、いいところ2回戦敗退だったがな」

できれば自身の力で勝ちたかった、という辺りは桐原らしいと紗耶香も笑みを零し、それに気付いた桐原はいじける様に視線を逸らした。

「それで三矢、ただ労いに来たって訳じゃなさそうだな？」

「ええ。決勝リーグで先輩が戦った九高の1年のことです」

彼の試合はピラーズ・ブレイクの試合の関係で見ていなかったが、今朝会った時の立ち振る舞いから剣術を嗜んでいるような雰囲気を感じた。剣術を学んでいる桐原や、観戦していた紗耶香あたりなら何か気付いているのでは、と思って問いかけた。

「彼とは朝食の前に偶然会ったのですが、どうにも剣術を修めているような立ち振る舞いが見えましたので」
「やっぱりお前も気付いたか……あの動きは剣術を学んでなきゃ出来ねえだろう」
「私は遠くからだったけど、もしかしたら二天流じゃないかって。名字も単なる偶然とは思えなかったかな……先生に電話で聞いてみたけど、多分そうじゃないかって」
二天流――――この国の剣豪である宮本武蔵（みやもとむさし）が編み出した剣術。その発祥が九州であることと、彼の名字が奇しくも同じ〝宮本〟であること。単なる偶然とは思えないと紗耶香は述べていた。
加えて、彼女が通っていた道場の先生に聞いたそうで、丁度悠元と同い年ぐらいの男子と面識があったらしい。
「動きもそうだが、なんつーか……同じ剣士の匂いというか、雰囲気があった。まるで真剣を持った侍が目の前にいるかのような雰囲気だったな。ま、司波兄に比べたら温い感じではあったが」
「それって、彼は実戦経験があるっていうこと？」
「そこまでは分からんが……ま、とにかく自分の実力を客観的に見ることができたんだ。これはこれで悪くねえよ」
紗耶香がフォローしてくれているので余計なお節介だったかな、と悠元は思った。すると、悠元は紗耶香から感じる想子の密度が４月の時よりも段違いになっていることに気付いた。単純に吹っ切れて剣道に打ち込むようになっただけかもしれないが……念のために尋ねることとした。
「ところで壬生先輩。見た感じ想子の密度が上がっているように見えますが……」
「え？　うーん、私も分からないかな。もしかしたら、春の一件のモヤモヤが取れただけかもしれないけど」
「そう言ってるが、俺の目から見ても壬生の魔法力は確かに上がってるんだよな」
紗耶香の魔法力に対して冷静に分析している桐原も、４月のブランシュ襲撃の頃から魔法力が上がりつつある。九校戦以前だとしても、

特にこの二人に対して何かした覚えはない。
　そうなると、魔法以外で何かしらの影響を与えたというのが妥当である。というか、この世界って『その時不思議なことが起こった』という事象自体起こりえないはずだ。一体何が彼らに対して影響を与えたのか……3人は揃って首を傾げたのだった。

九校戦二日目④

新人戦は明後日だが、明日で本戦が一区切りとなるため、新人戦統括役として本格的に動くこととなる。とはいえ、悠元自身アイス・ピラーズ・ブレイクとモノリス・コードに出る関係で、５日ある新人戦の内４日は競技に拘束される形となる。

そのため、大まかな戦略プランは立てていても、実際の戦術や作戦面は全て作戦スタッフと技術スタッフに丸投げとなる格好だ。作戦スタッフの鈴音もこれについては承知している。技術スタッフ８名の内、完全マニュアル調整が出来るのは啓、あずさ、達也の３人。

新人戦のスケジュールでは達也が女子スピード・シューティング、女子ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バットの３種目。あずさが女子バトル・ボードと女子クラウド・ボールのサブを担当するというスケジュール。啓は本戦ピラーズ・ブレイクと本戦モノリス・コードの関係で割り当てられていない。

これに関しては、本来同性で割り当てる筈の方針だったところに１年男子の半数以上（主に森崎）が強く反対したことと、深雪とほのかが達也に担当してほしいと懇願したのが原因だった。確かに選手とエンジニアの信頼関係が重要なため、１年男子は他の手が空いている技術スタッフが担当することになる。

幸いなのは、燈也が魔法工学系に強い関心があり、ＣＡＤ調整スキルを覚えたいということで佳奈から直々に叩き上げられたことだ。明日の女子バトル・ボード準決勝では亜実のサブに燈也を入れるよう進言した。

厳密には自分が留守番役で天幕から動けなくなるため、技術スタッフの補助代理を頼んだ形だ。完全マニュアル調整の領域までは届かなかったが、それでも８割以上マニュアル調整できるので、無いもの強請りよりはマシだと思うことにした。

燈也本人に関しては、その次の日に新人戦男子スピード・シューティング、そのさらに翌日が男子クラウド・ボールに出場することもあって無理にとは言わなかったが、本人はそれを聞いて志願した。理

由は「恋人の結果が気になっちゃうので、自分の試合にすら集中できないのは困るから」と言っていた。まさかの惚気めいた言葉に対して、聞いた側の悠元は苦笑しか出てこなかった。

悠元自身の場合はというと、自前でＣＡＤ調整できるので男子ピラーズ・ブレイクの作業スタッフは他の２名に集中させられる。

自分が使う汎用型ＣＡＤは現代魔法しかインストールしていないが、仮に九校戦に使用されているチェック機から起動式のデータを引き抜いたとしても、個人最適化記述の関係で基礎単一系以下の威力しか出せないような仕様になっている。

そもそもとして、チェック機自体に起動式の読み込み機能はあっても追加・削除機能は付いていないし、さらに言ってしまえば厳格なレギュレーションを理解できないエンジニアが選ばれることがまずない……性善説に頼った考え方なのかもしれないが。

何故チェック機のことを知っているのかと言えば、九校戦の大会運営で使用されている機器の殆どは悠元が基本設計を担当したため、その仕様も全て頭に入っているからだ。

その引き換えとは言わないだろうが、大会委員の情報を秘密裏に引っこ抜いた。けれど、そのことは同じ一高生――――達也にも話していない。何せ、「黒だよ、真っ黒ぉ！」と叫びたくなるぐらい大会委員の半数以上が『無頭竜』に侵食されている状態だったからだ。調べれば調べるだけ無駄に疲れたのは言うまでもなく、この情報は内密に元へと渡した。

時間は桐原たちと会う前に遡る。

悠元は、男子ピラーズ・ブレイクの２回戦を見に来ていた。目的は２回戦最終試合となる克人の試合で、元々一人で見に来るつもりだった。

だが、ここで思わぬ人物たちと遭遇することになり、隣には２人の女子がいた。一人は二高１年の高槻由夢（たかつきゆめ）、もう一人は七高１年の伊勢姫梨（いせひかり）。近い内に会うだろうと思っていたが、こんな早く再会するとは思ってもみなかった。

「あの……隣、空いてます？」

「ええ、どうぞ」
「って、今朝会った人じゃない！　あの時はゴメンね」
　その少し前、姫梨がもじもじしながら悠元に問いかけると、悠元はそれに見ぬ振りをして座るように促した。すると、由夢が悠元に気付いて声を上げるが、周囲には観客もいるので声量は抑え目にしていた。悠元の隣に由夢が座り、その隣に姫梨の席順となった。これには姫梨がムスッとした表情をしていたが、由夢からは「気にしなくていいよ」と言われてしまったので、悠元はその言葉に従うことにした。
「お気になさらず……それで、今朝見かけたもう一人の観戦には行かなくていいんですか？」
「気にしなくていいよ。アイツなら優勝しちゃうでしょうし……あ、自己紹介がまだだったね。あたしは第二高校1年の高槻由夢。で、こっちの照れ屋さんは七高1年の」
「もう、由夢ってば！　コホン、第七高校1年の伊勢姫梨と申します。宜しくお願いいたします」
「これはご丁寧に……第一高校1年、三矢悠元といいます。よろしく、高槻さんに伊勢さん」
　悠元が名前を出すと、由夢と姫梨は揃って驚いていた。まさか自分たちの魔法を止めたのが十師族の直系であるという事実に対してのようだ。二人の様子からして、天神魔法を定義破綻させるだけの実力者がいるとは露程も思っていなかったのだろう。すると、由夢が小声で問いかけてきた。
「ねえ、君って〝天神魔法〟を使えたりするの？」
「……使えますよ？　母方が上泉家の人間ですし、これでも新陰流剣武術の師範クラスなので」
　まさか直球で聞いてくるとは思わなかったが、下手に隠すことではないし、三矢家と上泉家の繋がりは調べればすぐに出てくることだ。新陰流剣武術のことは現状師範代と名乗っているが、名乗りを許可されているのでそれ相応と言うのは別におかしくないと判断した。
　それを聞いた由夢は、目を丸くしつつ乾いた笑みを浮かべた。何せ、その横から睨むように見ていた姫梨がいたからだ。

「あ、あはは……そっか、成程ね。そりゃ止められて当然だよね」
「由夢？　三矢さんに何を吹き込んでいるのかしら？」
「え？　強いて言うなら姫梨の弱点とか」
「な、なななっ!?」
「大丈夫。そんなのは一切会話の中に出てきてないから、落ち着いて」
活発な由夢に大人しめの姫梨。お互いに正反対だからこそ喧嘩もするのだろう。すると、フィールドの檜に動きがあり、双方の選手が登場する。
克人の格好はと言うと、クロス・フィールド部で使用している防護服と思しき格好をしていた。大まかなフォルムは元継の時と変わっていないので、それから推察した。一方、克人の姿を見た相手選手は委縮気味であった。
「クロス・フィールド部の防護服みたいだな。あの人らしいな」
「あー、あれ、本当に高校生？　年齢詐称してない？」
「由夢……でも、存在感がまるで〝巌〟ですね。あの歳で『鉄壁』の名に相応しい出で立ちとは感心します」
由夢の言いたいことも理解はする。
中身は繊細で天然だが、外見が高校生の域を超えてしまっている。まるで、生まれてから最初に発した言葉が「責任」と言っても違和感が全くないと思うほどだ。
何気に本人も苦労しているだろうが、彼の弟や妹も苦労しているのだろうなと思う。横に並んだら兄弟（妹）というよりも親子と言われても無理が生じない……そんなことを口に出したら、確実に本人が傷付くので口を噤む。
そして、シグナルが全て灯り、試合が開始された。克人は自陣の氷柱を箱状の『ファランクス』で覆った。相手選手は魔法を放つが、『ファランクス』の鉄壁とそれに囲まれた克人側のフィールド内に発生している事象干渉力で魔法発動が思うように出来ていない。
「えげつないな……相手からしたら、自身の想子が切れるか、別の『ファランクス』が展開されて上から押し潰されるのを黙って見ているしかない」

「……姫梨、手持ちの魔法で行けそう？」
「辛うじてですね。多分由夢だと『紫電』を使わないと無理でしょう。私でも『風絶』を使わないと、何層にも重なった守りは突破できないかと」
『ファランクス』に関しては、あの時の悠元でも『円卓の剣（ラウンド・ブレード）』を選択したほどの防御力を有している。今となっては別の方法もあるのだが、それに関してはあまり見せたくないのが本音である。
由夢と姫梨はそれを破る方法を推察していた。先ほど出した名前は悠元も知っているが、敢えて口には出さない。何せ、その魔法は天神魔法でも高位に属する魔法であるからだ。
このままでも克人の勝利は揺らがない。だが、ここで克人が動いた。何と、相手フィールドの氷柱の前に直方体の『ファランクス』を展開した。
現状で2つの『ファランクス』の展開――そして、櫓の上で槍を突き出すような構えを取り、掌底を放つかのように前に突き出す。相手フィールドに展開していた『ファランクス』が伸びて、進路上にあった3本の氷柱を立て続けに破壊した。
「攻撃型の『ファランクス』……紛うことなき〝槍〟か」
そして、残り9本の氷柱も同じように『攻撃型ファランクス』で破壊し、相手選手を完封。克人はこれで3回戦進出となる。
しかし、そんなことをせずとも自前の事象干渉力と『ファランクス』による氷柱の圧壊で倒せるだけの相手だったのに、態々『攻撃型ファランクス』を見せた理由――すると、克人が視線を悠元がいる方へ向けていることに気付いた。恐るべきは克人の空間認識能力だろうが、その目線にはメッセージが込められていることを感じて、悠元は周りに気付かれないよう真剣な表情を見せて目礼をした。
（多分、『円卓の剣』に対する礼儀として、奥の手とも言える『攻撃型ファランクス』を俺に見せた。そして、この国の魔法師の頂点に立つ十師族として、その名に恥じぬ戦いを見せろということなんだろうな……会頭（あのひと）らしいな）
悠元の反応を見て自分のメッセージが伝わったと解釈したのか

……櫓の台座が降りていく中で、克人は少し笑みを浮かべていたのだった。

◇　◇　◇

その様子を天幕で見ていた真由美は、克人があそこまで気合が入っていることに驚きを隠せなかった。まさか『攻撃型ファランクス』を2回戦で出すとは思っていなかったのだ。これには傍にいる摩利も同様だった。

「ねえ、摩利。どう見る？」

「今から新人戦に出場する男子に発破を掛けたいとも思えるが……確か、悠元君が十文字の試合を見に行っていたな？」

「恐らく、4月の一件のお返しに『攻撃型ファランクス』を見せたのかもしれないわね。十文字君も素直じゃないというか……」

その言葉は真由美にとってブーメランではないか、と摩利は思ったが口に出さなかった。悠元と克人のことは摩利が審判をしていたのですぐに思い出せたが……あの時悠元が使った『円卓の剣』に対して、克人はその返礼として『攻撃型ファランクス』を見せたのだろうと真由美は推察した。

「加えて、同じ十師族としてそれに違わぬ力を見せろ、ということでしょうね。新人戦男子ピラーズ・ブレイクには三高の一条君もエントリーしているから」

「十師族同士の戦いか……真由美はどう見る？」

「……分からないわ。一条家の『爆裂』はピラーズ・ブレイクでも使用可能だから、一瞬で勝負がつく可能性も捨てきれないでしょう」

真由美も悠元の実力を測りかねていた。内密に1学期末試験の結果は見たが、魔法実技に関しては文句なしのトッププクラス。だが、彼の得意系統自体読めずにいた。前にも述べたことだが、過去に活躍していた三矢家の人間の得意系統がバラバラで、結果的に将輝との勝敗が全く予測できないのだ。

「一応深雪さんにも聞いたのよ。でも、彼女ですら悠君の得意系統が分からないと言ってたわ……一応、ホームルームでの本人の申告では〝振動系統全般〟とは言っていたらしいけど」

「振動系統全般だと？　……確かに、美嘉の使っていた魔法を使えたのだから、無理もないが」
　摩利は美嘉の得意とする『ブリッツ・ロード』を悠元が使ったところを目撃している。なので、光波振動系魔法は使えるのだと認識している。だが、それだけでは涼歌の『下降気流（ダウンバースト）』を手刀で斬ったことに説明がつかない。そのことについては、本人から『新陰流に関わる事項なのでお教えできません』と言われてしまい、それ以上は聞けなかったのだ。
「悠君に直接聞いたのよ。本当の得意系統は何なのかって……そしたら、何て答えたと思う？」
「……分からないな。何て言ったんだ？」
「――収束系魔法。彼はそう言っていたわ」
　真由美にはそう話したが、厳密には別系統の魔法である。『エアライド・バースト』はその系統魔法を生み出す過程で出来た副産物だ。そんな悠元の事情を知らない真由美は思わず頭を抱えたくなっていた。
「正直読めないことだらけよ、殊更悠君のことに関しては……」
「好きなのか？」
「……そ、そそ、そんな訳ないじゃない！」
　摩利の問いかけに対して、真由美は頬を赤く染めて反論していた。あれだけ露骨な言動やスキンシップを見れば、誰だってその線を疑うだろう。態度と言動が明らかに一致していない目の前の人物に対し、摩利はこう言い放った。
「だが、バレンタインの一件で拗れたんだろう？　そのことは父から聞いたが……正直、真由美が悪いんじゃないのか？」
「私だけじゃないもん！　泉美も賛同してくれたんだから」
「お前なぁ……」
　娘二人にせがまれて断らなかった七草家現当主も結構な親馬鹿だ、と摩利は溜息を吐きたかった。ここが天幕の奥だったから、まだ外に会話が漏れていないのがせめてもの救いだった。
「というか、入学式の段階で判明すると分かっていたことだろう？

どうしてそんな無茶をした？」
「最初は冗談半分だったんだけど……あの父親も『それならいけるか……』と提案を呑んじゃったのよ。それがこんなことになるなんて思わなかったの。上泉家が動くなんて思わなかったし」
「分かったから、少しは落ち着け。お前は代表チームのリーダーなんだからな」
いや、そこは最悪を想定して動くべきなんじゃないのか、と摩利は自分らしからぬほどに冷静な心境だった。良くも悪くも風紀委員長の前任者である美嘉の薫陶があってこそなのかもしれないが、摩利は真由美に対してリーダーらしく毅然とするように窘めたのだった。

九校戦二日目⑤

悠元がホテルに戻ってくると、フロントから部屋の鍵をもらう際に小包を3つ預かった。そのうちの一つは達也宛なのだが、同じ高校なので……ということだった。悠元は自分の宿泊している部屋に戻って、達也宛の小包はデスクの上に置いたままにして、残る二つの小包を開けた。

（片方は新人戦に間に合わすために急ぎとは言ったが……牛山主任、頑張りすぎでしょ。製作担当の技師にまた無理を言ったのかもな）

その辺りは九校戦が終わった後に差し入れでもしておこうと思いつつ、中から出てきたハードケース――大きさ的には持ち運びやすいサイズのアタッシュケースが2つ。その一つ目を開いた。

2つのアタッシュケースの内1つは2丁の銃形態特化型ＣＡＤ。これは市販されておらず、九校戦のレギュレーションギリギリに設定された性能の代物。とりあえず、その内の1丁を端末に接続して、起動式のインストールと自動調整プログラムを起動させる。もう1丁はケースにしまったまま蓋を閉じると、別の小包を開けた。

2つ目の小包もといケースに入っていたのは、幹比古の精霊魔法に最適化されたＣＡＤ。これも九校戦の規格に適合している。

正直、これを使わずに済めばいいとは思っている。いくら何でも連中が十師族の直系を事故に巻き込むようなオーバーアタックは考えづらいが……いや、連中の最奥にいる奴は四葉に対して強い恨みというか、一方的な妬みに近いものを持っている。四葉の延長上で他の十師族だろうと喧嘩を売ってくることは容易に考えられる。

ましてや、三矢家は上泉家と繋がりを持つ。〝奴〟が剛三のことをフリズスキャルヴで調べ上げていたとしても何ら不思議ではない。その剛三も〝奴〟を今度こそ葬り去ると覚悟を決めている。

もしもＵＳＮＡが介入した場合、ホワイトハウスに『雷霆終焉龍』を撃ち込むつもりらしいが……正直、剛三が一人で広域魔法のオンパレード（パレード）をかましたら、いくら『仮装行列（パレード）』でもよけきれない。何せ、相手の位置座標を無視して事象干渉力で押し潰す〝無差別攻撃〟だ。

それにしても、国家相手に平気な顔で言い切るのはどうかと思う。
修練ということで剛三の広域魔法を経験したことならあるが、普通は上段クラスでも無傷で乗り切るのは難しい。無論、それを無傷で乗り切った……爺さんはとても喜んで広域魔法をいくつか教えてくれたのだが、殺傷性ランクを考えてくださいと言いたかった。最低でもランクAって洒落になってません。
なお、それを知った詩鶴による説教と半日ヨガコースと相成ったことは……殆どの人が知らない。上泉家当主と総師範の威厳は一体どこにあるのだろうと思う。単に孫に構ってほしいだけなのかもしれないが。
話を戻すが、無頭竜の評判は各国の軍関係者にとってもよくはない。『ソーサリー・ブースター』と呼ばれる非人道的な代物絡みが一番の理由だ。なので、内密に上泉家経由で無頭竜のアジト関連の情報を各国の諜報機関に流してある。強制突入のタイミングは新人戦モノリス・コード1日目に合わせた形だ。
USNAでは『スターズ』もフル投入して制圧に当たるようだ。この国とは違って、前世でいうカナダ・アメリカ合衆国・メキシコの3国が合体した形なので、精鋭部隊を惜しみなく使う理由も解る。
閑話休題。
悠元は2つ目のケースをしまうと、1つ目のケースと達也宛に届けられた小包を担いで部屋を後にした。すると、丁度隣の部屋に入ろうとしていた達也と出くわした。今まで言ってなかったが、達也の宿泊している部屋と悠元の宿泊している部屋は隣同士である。達也は悠元が持っている小包に気付いて問いかけた。
「悠元、その小包は？」
「達也への届け物だよ。自分にも届いていたんだが……ケースのほうは例の特化型CADだ」
「あの人は、また急かしたな……今開けるから、運び入れてくれるか？」
達也は部屋の鍵を開けて中に入り、悠元もそれに続いた。悠元がアタッシュケースと小包をデスクに置くと、達也はケースをデスクの下

に仕舞い、小包の開封作業に入った。小包のカバーを外すと出てきたハードケースの中身はというと、見た目は剣というより麺切包丁を大きくして鈍器にしたような印象だった。
「これは、硬化魔法を見て作った感じかな？」
「ああ。流石にお前の言っていた技術までは搭載できなかったが。お前が会長に対して組み上げたＣＡＤに対抗したくなったのさ。流石に『トーラス』レベルとまではいかないが」
「あれでも市販品の有り合わせだし、高校の魔法工学レベルに落とし込んでるけどな。あそこから更に手を加えるとしたら『シルバー』のプログラムがなきゃ無理だ」
　原作を見ているので知っているが、硬化魔法の起動式一つだけを提供する単一機能型ＣＡＤである。これの設計には、悠元が真由美に提供した単一魔法特化型ＣＡＤと、摩利の硬化魔法の使い方を見て設計されていると達也が述べた。
　達也が悠元のハードウェア設計能力を認めているように、悠元も達也のソフトウェア開発能力を高く評価している。それを踏まえての軽口に揃って笑みを浮かべたのだった。悠元はそれを手に取り、軽く振る。
「ちなみに、他の起動式は入れられるのか？」
「一応はできるが、切替式のセレクタが必要になるからな」
「それもそうか。ま、いざとなったら出店からＣＡＤをいくつか調達すればいいし」
　そんな風に軽く言ってしまう悠元の収入は、ＦＬＴの株主と魔工技師としての報酬、それと国防軍からの給料も合わせると完全な高所得者の部類に入る。個人口座の残高を見ると、いつも頭を悩ませている。
　前世の身分では考えられない金額の多さに、悠元は未だその金銭感覚を引き摺っている。ただし、ＣＡＤ関連経費は自分の身を守るための〝必要経費〟という形で度外視している。
　とても一介の高校生では考えられないことだが、「トーラス・シルバー」関連の収入が一番ウェイトを占めている。何せ、フォース・シ

ルバーシリーズでも国から9割の補助が出ていて1台当たりの値段が１００万円の大台を超える。普通に買ったら１０００万円単位のレベル……住宅が一戸買えてしまうような価格だ。

普通のＣＡＤ一つとっても国の補助ありで高級家電製品と同等以上（前世でいうところの据え置きゲーム機レベル）の値段になるため、魔法師が魔法で収入を得るというのは至極真っ当ではないかと思う。それを理解できない阿呆な連中もいたりするのは、様々な思考を持ちうる人間だからこそともいえるが。

なお、悠元の持つ『ワルキューレ』と『オーディン』はブラックボックス部分が多いため、まともに価格をつけようとしたら最低でも数百億円に上る。これは数々のＣＡＤを見てきた達也にその二つを見せた時の答えだった。

悠元はそのＣＡＤを起動させることなくケースの中に戻した。流石に部屋の中でテストして備品を壊すわけにはいかないからだ。

「ちなみに、レオに試させる予定だろ？」

「そうだな。お前だと出力の関係で３０メートルぐらいは平気で伸ばしそうだからな」

達也がこのＣＡＤに積んだ硬化魔法の起動式に似たものを悠元はやったことがある。

あの時は、直径2メートルほどの岩を硬化魔法で１００メートルまで引き離して振り回したことはある……それをやった時に風間から「君はどこまで規格外なんだ」と言われてしまった。

自分としてはハンマー投げの要領で振り回しただけなのだが、その反応に納得がいかなかった。確かに、普通にやったら遠心力で関節が外れる案件だろう。なので、自身にも硬化魔法で対策はしたのだが……それで規格外といわれるのは心外です。人間卒業試験とも言われた新陰流剣武術の武術訓練はクリアしてしまったので、埒外というのは渋々認めていたが。

え？　同じじゃないかって？　言葉のニュアンスの問題なんです。察してください。

ちなみに、爺さんは１００本の木刀を硬化魔法で引き伸ばして振り

回すことがある。それを風間少佐に言ったら「あの人はもう人間じゃない」と返ってきた。成程、あれが人外の到達点なのだと勉強になった。

最近、外見が４０代から３０代後半へと逆走してる爺さんにピッタリな言葉だろう。若返った理由は多分『領域強化』による魔法演算領域の修復だろうと思う。細かいことに関しては不明のままだ。

まあ、それをこの場で言うのは憚られるので黙ることにしようと決意したところで、部屋の外にいる気配に気づいた。達也も気付いたが、あえて反応を待つ辺りは厭らしいと思う。入ってきても大丈夫かというやり取りの後、深雪、エリカ、美月、ほのか、雫、燈也、レオ、幹比古が入ってきた。流石に達也１人で使っているとはいえ、部屋の中に１０人は多く、ベッドの上に座る人までいた。

その中で真っ先に興味津々といった感じでデスクに置かれたＣＡＤを見ていたのはエリカだった。レオも興味があるような素振りを見せているのだが、エリカに対抗してなのか視線をワザとらしく背けていた。

達也は深雪にそのＣＡＤのことを説明すると、ハードケースの蓋を閉めて、レオに呼び掛けると同時に放り投げた。その程度の反射を危なげなくこなしたレオに達也はそのテストを頼んだ。

二人がテストのために野外演習場へと行ったため、心配そうな表情を見せていた深雪と興味ありげなエリカの監視をすることになってしまった。何かしらで興味を逸らさせるのがよいと判断し、悠元はデスクの椅子に座ると意識を集中させて手を前方に翳す。すると、五芒星と逆五芒星を組み合わせた魔法陣が展開していることに周囲の視線が向けられる。

「悠元、その魔法陣は一体……？」

「これか？　まあ、古式魔法の練習みたいなものだよ。単に魔法陣を展開させるだけで、改変自体を起こさせるわけじゃないから」

「もしかして、上泉家の秘術なのか？」

幹比古の問いかけに悠元は頷く。これは天神魔法における共通の魔法陣であり、魔法式ではない。とはいえ、この魔法陣自体もかなり

の事象改変力を有しており、これを通す形で現代魔法の基礎単一系魔法を使えば、微々たる消費で強力な事象改変を起こすことが可能である。この部屋にいる面々ならば問題ないし、そもそも九校戦で使用する以上は基本中の基本ぐらい知ってほしいという思いがあった。

この魔法陣の起動式は厳重な記述によって守られており、修得する際は各々の想子波特性に応じた最適化が必須となる（個人に最適化されているため、それ以外の人間が使おうとすると全く発動しないため、固有魔法扱いとなる）。その方法自体も、口伝から書き起こされた文章の中で暗号化された部分を自力で読み解かないといけないため、新陰流剣武術において天神魔法を会得しているのは片手で数えるぐらいしかいない。

現状では総師範の剛三、総師範補佐の元継、そして悠元の３人だけだ。

「もしかして、悠元ってば新人戦で古式魔法を使うつもりなの？」

「現代魔法との併用になるけどな」

悠元は魔法陣の展開を止めた上でエリカからの問いかけに答える。元々現代魔法一本でいく予定だったのだが、剛三から言われた以上は現代魔法と古式魔法の併用になる。

幸い、天神魔法は現代魔法とほぼ同様の処理形式のため、ＣＡＤに組み込むのもそこまで苦ではない。セキュリティー面は手を尽くしているので、データを抜かれることはないだろうが、油断はできない。剛三も最悪の場合は魔法協会に直接圧力をかけると明言するほどだった……圧力（物理）にならないことを切に願いたい。

「二つを併用だなんて……そんな考えをしたこともなかったな」

「まあ、普通はどちらかに絞るのが一般的だろう。皆が皆、同じやり方は真似できないからな」

ただ、「自分の持てる最高クラスの天神魔法を披露しろ」と言われた時は本当にいいのかと確認はした。流石に会場を壊すわけにはいかないので、改変規模は抑えると明言している。

この時、悠元と剛三の間でそのやり取りに関して齟齬が発生しているのだが……これに気付くのは、実際に新人戦ピラーズ・ブレイクで

その最高クラスの魔法を披露する時になってからであった。
◇　◇　◇
　そのほぼ同時刻。ホテルのＶＩＰルームの一室では、三矢家当主である三矢元が、自分にとって義理の父親である上泉剛三と対話していた。元にとって、剛三の存在は実の父親同然に思っており、剛三も元を息子のように思っている。そんな二人は変に緊張することなく会話をしていた。
「それで、七草家とは上手くやれているのか？」
「あれ以降は特に蟠りもなくやれています。ただ、悠元と婚約をさせようと水面下で動いているようで……」
「やれやれ。国防軍のことがなければ素直に泉美ちゃんとの婚約を認めたというのに……やはり四葉に拘り続けるか」
　剛三は、七草家当主である弘一の行動理念に対して率直な意見を述べた。
　四葉が３０年以上前のあの一件後、人らしからぬ方針で急速に力を伸ばした。これに関しては、剛三が神楽坂家現当主に頼まれて〝とあること〟を四葉に施していた。その一件も剛三が四葉元造から預かった手紙のことがなければまだ穏便に済んでいたと思うと、結局は剛三の自業自得であり、その尻拭いを自分でやるようなものだった。
　尤も、そのことを自覚したのは孫に手紙を見つけられたからという情けないものであった、と剛三は内心で苦笑した。
「そうなると、また泉美ちゃんか？　それとも真由美ちゃんか？」
「どうでしょうね……五輪家長男のことは聞いていますが、下手に進めて周囲から要らぬ警戒をされたくないのも事実です。無論、本人たちの気持ちを優先させてやりたいとは思いますが」
　魔法師は早婚が望ましいとされているため、現在２０歳の詩鶴、１９歳の佳奈、そして１８歳の美嘉に対して縁談の申し込みが後を絶たない状況である。実を言うと、十文字家からも克人と美嘉の縁談を十文字家現当主から打診されている状況にある。詩鶴と佳奈に関しても、師族二十八家だけでなく百家から打診が来ている。
「娘達は私の薦める人間なら構わないと言っていますが、自分にとっ

てはそれが却ってプレッシャーです……なので、妻にも手伝ってもらっています」
「詩歩の御眼鏡に適うのなら問題はなかろうな。あやつは妻によく似ておる……そうなると、やはり悠元か」
それを元が推し進めようとしない理由は、悠元に対して好意を抱いている面々を考えた場合だ。いくら彼が非公式の戦略級魔法師とはいえ、このまま三矢家に置いておくのは十師族のパワーバランスを偏らせかねないということ。
彼に対しての縁談で表にしていない部分や一度断ったものも含めれば、十師族だけで一条家・四葉家・五輪家・七草家の４つが該当する。
四葉家に関しては、本家筋に極めて近い同い年の少女のことは元も知っていたが、その彼女が悠元に対して好意を抱いていると知ったのは高校入学後であった。その意味で悠元と泉美の婚約解消は相手にとって失礼だと思ったが、かえって幸運だった。それのきっかけが三矢家にとって天敵ともいえる十山家というのは皮肉ともいえたが。
話を戻すが、悠元をこのまま三矢家の人間として婚姻を結ばせるのは、十師族のパワーバランス的に宜しくない。ただでさえ三矢家は『護人』の一角である上泉家と縁戚関係にあるのに、これ以上の力は確実に十師族の一つ上の存在へと成りえてしまう。そうなれば、七草家や九島家辺りが横槍を入れてくることになると元は読んでいて、剛三もその意見に納得した。
悠元の婚姻に関しては、元の手から既に離れて上泉家と神楽坂家の両家に委ねられている。これは元と剛三が交わした『約定』に基づくものでもあった。父親として、元は悠元の問題を片付けるのが先決と判断し、それが片付き次第娘たちの縁談を進める方針だった。
「それで、例の件は約束通りと仰られたのですか？」
「多少予定は狂ったが、大筋で問題はないと言ってきおった。あやつ、直に見たいと九校戦にも顔を出すらしい。その後に約定を果たすことになるだろう」
「それは……神楽坂家の当主様を動かすとは、悠元も大物の資質があ

るということですか」
　元々その約束は悠元が１８歳の誕生日に履行される予定だった。だが、彼の予想外ともいえる成長と動きに際して予定を前倒しにする形となったため、結果的に3年ほど早まることとなった。剛三が悠元に新陰流剣武術師範の名乗りを許したのも、元を辿ればこの流れからきているものだった。
「あとは、あ奴が恋愛をもう少し理解できるようにならねばな……全く、誰に似たというんだか……」
「御義父（おとう）さん、それは貴方ではないかと……無論、人のことは言えませぬが」
「……男子で恋愛に敏感だったのは、元治だけだからな」
　剛三と元がここまで仲良くなったのは、恋愛に対する感受性が非常に似ていたためであった。ようはお互いに朴念仁と言われるほどの鈍感だった。恋愛観が母に似た元治はともかく、元継は元や剛三に似て超がつくほどの朴念仁だった。その気質がある悠元に対しても一筋縄で行かないだろう、とお互いに深い溜息を吐いたのであった。

九校戦三日目①～本戦三日目～

九校戦も三日目を迎える。ここからが表裏両面の意味で正念場となるだろう。

今日の競技は、午前が男女アイス・ピラーズ・ブレイクの準決勝（3回戦）と、男女バトル・ボードの準決勝と3位決定戦、午後がピラーズ・ブレイクの決勝リーグとバトル・ボード決勝。これで本戦が一段落して、明日からは新人戦となる。

悠元は、いつもより少し早い時間に目が覚めた。二度寝をして遅れたくもないため、眠気覚ましのコーヒーをセットして動きやすい服装に着替える。そして、出てきたコーヒーにミルクと砂糖を入れて口にする。

眠気覚ましなら何もいれないブラックコーヒーがいいのだろうが、悠元はブラックが苦手である。単純に苦味だけという飲み物でないことは分かっているのだが、この辺は前世で苦手だったことに起因する。別にお子様だと笑ってくれて構わない。

紅茶の場合はストレートで飲めないため、基本はミルクティーしか飲まない。

以前司波家でストレートティーを出されたときは渋々飲んでいた。それを見た深雪に口に合わなかったのかと心配されてその事情を話すと、達也と深雪は揃って「苦手なものがあったのか」と言いたげな視線を向けられたことがある。お前たちは俺を一体何だと思ってるんだ、とは聞かなかったが。

その反面、緑茶や抹茶は普通に飲める。それで周りからおかしくないか、と言われたことはあるが、それはそれ、これはこれということだ。良くも悪くも日本人なのは変わらないということだ。

話を九校戦に戻すが、ここまで勝ち残っているのは男子がピラーズ・ブレイクとバトル・ボードで各2人、女子がピラーズ・ブレイクで花音1人、バトル・ボードは全員がここまで勝ち残っている。『電子金蚕』のことを鑑みて、バトル・ボードは男女5人にシルバー・ブロッサムシリーズを使用してもらうことになる。

そのシルバー・ブロッサムシリーズだが、実は真由美にクラウド・ボールで使用してもらっていた。他の選手とは違ったデザイン性の高さと彼女の容姿や活躍も相まって、九校戦の会場に展示されたコーナーには人が殺到した。九校戦に合わせて即売所も設けられたのだが、本社に追加発注がかけられるほどだと牛山が述べていた。「流石主任ですな」と言われた時はすぐにツッコミを入れたが。

というか、国の補助ありでも数万円からなのに売れているのは、トーラス・シルバーの名と九校戦限定のデザイン（九校戦のロゴマークが入っている）ということで売り出しているからだろう。

真由美の使っていた特化型ＣＡＤは特に売れていた。前世で言うところの「〇〇選手使用モデル」みたいな感じだといえば分かりやすいだろう。後日、本人から散々言われる羽目になったのは言うまでもない。

今まで「トーラス・シルバー」が手掛けたものとは一線を画したデザインの機種だが、この辺はＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課にＣＡＤデザインができる人材がそれなりにいたことも起因している。

あの部署は所謂「陸の島流し」とも言われ、兵器的なデザインを好まない技師もそこに集められていた。そこに悠元は目をつけて、シルバー・ブロッサムシリーズは生まれたというわけだ。

これには開発本部長の現在の妻も納得いかないような顔をしていたらしいが、可能性を切り捨てたのは向こうだし、それに対して文句を言われる筋合いはない。冷たい言い方だが、完全な自業自得というものだ。

話が逸れたが、今日のスケジュールだとアイス・ピラーズ・ブレイクでは克人が準決勝第３試合で、花音が準決勝第１試合。バトル・ボードは男子準決勝第１レースに服部、女子準決勝第１レースに亜実と小早川、第２レースに摩利がいる。

どの試合も気は抜けないが、第２レースの組み合わせは摩利に七高の３年、三高の３年となっている。

予選の作戦では、摩利は昨年のラッププタイムペースで走り、美嘉が摩利に教えた『電光走破（ブリッツ・ドリフト）』は禁止するという条件で予選通過を果たし

た。準決勝で七高が出てきている以上、それは解禁するのだろうが……それだけでなく、摩利の基本的な走行スピードは、美嘉と遜色ない最高速度を出せる状態に仕上がっている。摩利自身が持つ昨年の決勝ラップより１０秒以上は早くなる計算だ。

その速度から逆算してコース最初の急コーナーを曲がる場合、七高がカーブに差し掛かって減速タイミングに入る段階で、摩利はコーナーを抜けている計算になる。無論、スタートの段階で大した妨害がないことも前提になるだろう。

それはさておき、今日も深雪からお誘いがあったため、彼女のトレーニングに付き合っていた。今日は人払いの結界を張らずに軽いジョギングと筋力トレーニングという形だ。すると、見知った気配が２人揃って走っていくのが目に入った。どうやら達也とほのかの２人で走っているようだった。

「アイツの場合、技術スタッフとしてほのかのトレーニングに付き合ってるつもりなんだろうな……何でしょう、深雪さん？　背中を抓って？」

「人のことが言えるのかと思いまして」

「……」

深雪としては、達也が見知らぬ人間にホイホイついていく性格でないことは知っているし、そもそも今の達也は深雪のガーディアンだ。彼女としても兄が恋愛に目覚めてくれるならうれしいと思っているし、彼女の母親も同意見らしい。

それでいて何故自分の背中を抓るのかと問い質すと、凄みを含んだ笑顔を向けられたことに悠元は返す言葉もなかった。

◇　◇　◇

朝食を済ませた後、悠元は真由美に呼ばれて天幕に来ていた。１日目からの幹部によるミーティングには九校戦の幹部育成という名目で参加していたため、その一環だろうと思われる。

それを理解しているとはいえ、深雪と雫には疑惑の視線を向けられていた。曰く「会長（真由美先輩）が油断ならない」ということだった。まあ、油断ならないというか、転んでもタダじゃ起きないという

べきか。
「悠君？　今、失礼なことを考えなかった？」
「いいえ、会長の気のせいだと思いますよ」
　剛三に連れられて各所を回った経験からくる面の皮の厚さで、真由美の鋭い問いかけに対して無表情で返した。これには「達也君みたいで読めないわね」と言われたが。それはさておいて、モニターではバトル・ボード準決勝の第1レースが始まろうとしていた。
「第1レースはつぐみんと小早川さん、それと九高の選手ね……予選タイムから見れば、つぐみんが1位確定でしょうね」
　真由美がそう呟くと、レースがスタートした。亜実は空気抵抗に対して、自身の乗るボードを起点として周囲を薄い膜で覆った。そのすぐ後方に小早川が付いて、九高の選手を一気に引き離しにかかった。
「これは……確かに、二人の実力からすればそうするだろうと見たけど……あの術式、悠君が考えたの？」
「どうしてそう思ったんですか？」
「序盤であんな使い方をしたら、普通の魔法師なら想子量が持たないもの」
　これは真由美の言うことにも一理ある。想子保有量に左右される作戦なのは間違いないが、それを序盤から終盤まで持続させるのは普通にできることではない。だが、この作戦は亜実自身の走行も含めて基本的に2つの魔法しか使わないため、亜実と小早川の消費が格段に抑えられるというわけだ。
「五十嵐先輩が使用している魔法は移動・振動・加速系の『空力防盾（エアセイル・シールド）』。術式そのものは『魔法大全（インデックス）』に掲載されている魔法ですよ」
　元の起動式は確かに『魔法大全』に掲載されている。だが、元の起動式では想子消費量が大きすぎるために亜実専用の術式として改良されている。その改良した張本人は紛れもない悠元だが。更に硬化魔法で亜実自身とボードを一つのオブジェクトとして認識する効果も付与されており、その魔法一つで摩利と同じような走りができる形となっている。

「『空力防盾』で空気抵抗をかなり弾くわけですから、五十嵐先輩が決勝に、小早川先輩が体力消費をかなり抑えた上で3位決定戦に進める。これは市原先輩とも確認したうえで決めた作戦です」
「悠君。私、そんな話は何も聞いていないんだけど？」
「渡辺委員長を本気で負かしに行きたい、という五十嵐先輩の意向を汲んでますから。会長に言ったら絶対に反対するか、委員長に漏れると市原先輩が判断してのことです」
　摩利が美嘉から走行術式を教わったのを見て、亜実は摩利と戦いたいという気持ちが芽生えた。それを燈也から聞いたため、悠元は亜実にいくつか術式を渡したし、それに加えて決勝戦を見据え、亜実専用の走行術式まで組み上げた。
　美嘉が『ブリッツ・ロード』から編み出した『ブリッツ・ドリフト』を破るために、自分もこれまでにないほど本気で組み上げた起動式だ。
「はぁ……摩利もそうだけど、皆揃って身勝手ね」
「会長がそれを仰いますか？」
「うっ……分かってるわよ」
　少し拗ねた様子の真由美を見つつ、悠元はモニターを見つめた。どうやら連中が準決勝第1レースに『電子金蚕』以外の手段で妨害するということはないようだが、油断はできない。
　幸いにも、佳奈と美嘉、修次が女子バトル・ボードの警備に加わっている。現状だとその三人だけがすぐに対応できる面々だろう。応急手当のことを考えれば達也も観戦する（というか、摩利に観戦するように強く言われた）ので大丈夫とは思う。
　いざとなったら『八咫鏡』で監視システムの記録を全部暴き出すのも考慮に入れておいたほうがいいだろう。原作で摩利が事故を起こした時の水面陥没がもし遅延術式でなかったとした場合、監視している大会委員も無頭竜の息が掛かっているか、それを操る奴のマインドコントロールの線まで疑わなければならない。
　ちなみに、懇親会の日に事故未遂となった車の件だが、警察省から「目的は不明だが、極めて悪質な犯行」として発表された。そのフォ

ローとして詩鶴がメンタルケアをしていた。ヨガの被害を免れた1年男子勢だが、服部よりも思考が単純だったおかげで大した影響は出ていない。そこに双方を貶す意味はないということを付け加えておく。

その反面、バスの事故回避に貢献した悠元と燈也、そして二科生でありながら技術スタッフに選ばれた達也の3人に対して納得いかないような視線を向けていた。前者はともかく、後者はとばっちりもいいところだろう。

森崎とモノリス・コードの絡みで話をしても、結局は達也のことを持ち出されて正直ウンザリだった。森崎と達也が同じ風紀委員というのもそれに拍車を掛けているのだろう。

一科（ブルーム）至上主義がなければ真っ当に実力を評価できるいい奴ということは確かだし、雫とほのかも4月の一高襲撃の時に森崎の意外な一面を見て、そう評価していた。「いつもそうだといいのにね」というほのかの意見と、雫の「同感だけど、多分無理だと思う」という言葉には同意してしまった。

女子バトル・ボード準決勝の第1レースは2周目に突入し、ここから九高の選手が巻き返すのは無理である。一方の男子バトル・ボード準決勝第1レースに出ている服部はというと、いつものスマートな感じからかけ離れたレース運びをしていた。これには悠元と真由美が揃って苦笑を浮かべていた。

「『這い寄る雷蛇（スリザリン・サンダース）』を応用して、水面に雷撃を撃ち込んで大波って……理には適ってるけど、はんぞーくんらしからぬ妨害ね」

（服部副会長、ストレス溜まってたんだな……）

すべての系統魔法を不得意なく扱える服部だからこそ出来る戦法であり、他の人間に真似できることではない。にしても、何かと正々堂々を心掛けるような服部らしからぬ暴れっぷりに、真由美は思わず頭を抱えていた。

彼が与えていたストレスが九校戦で発散された形となり、これには同じ生徒会役員である悠元も苦笑しか出てこなかった。そのストレスの中には、悠元に対する羨望も含まれていたのは、ここだけの話で

ある。
なお、こうなった原因は悠元にある。
実は鈴音から男子バトル・ボード準決勝の作戦について聞かれたのだ。服部ならどの系統でも行けることを思い出し、『這い寄る雷蛇（スリザリン・サンダース）』クラスの雷撃を斜め前方から水面に叩き込んで、後方に大波を起こせばいいんじゃないかと冗談半分で言ったところ、それが通って実行された形だ。
付け加えると、桐原が男子クラウド・ボールで準優勝したことが服部に対して発破を掛けた形となったようだ。言い出したほうも大概だが、それを通す人も実行する人も大概であると思う。
本戦男女バトル・ボード準決勝、第1レースの結果は1位が亜実で決勝進出、2位の小早川が3位決定戦進出となった。そして、男子は服部が1位で決勝進出となった。これには、男子ピラーズ・ブレイクの控室で服部のレースを見ていた克人も満足そうな表情を浮かべていたのだった。
◇　◇　◇
奇しくも同時刻。横浜の中華街。
某ホテルの最上階、金と赤を基調とした派手な内装の大部屋で、茶器を並べた円卓を囲むように5人の男たちがいた。部屋の壁には、金で刺繍された龍――――空中でうねりを巻く龍の胴体の掛軸が掛けられていた。その贅を凝らした派手な内装とは裏腹に、男たちの表情は芳しくなかった。それは、男女バトル・ボード準決勝第1レースの結果を聞いたためだ。
「なんなのだ、この結果は?!」
「幸い、女子の決勝に進出した選手は1種目だけだ。予定通りではあるが、渡辺選手を〝棄権〟にさせるしかあるまい。ミラージ・バットに替えの選手はいないようだからな」
そんなことを英語で平然と話すユーラシア人混血種の特徴を持った男たち。彼らにはこの国の魔法師の卵などどうなってもいいという思いしかない。寧ろ、彼ら自身の保身が掛かっているため、そのような思いなど初めからないのだろう。すると、ここで男の一人が声を

上げた。
「女子もそうだが、男子もだ。何故潰せなかった！　『電子金蚕』は入れていたのだろう!?」
「それが……当該選手に仕込んだそれが発動する前に、服部選手が大波を起こして転覆させたようだ……あの小僧め、運が良いようだ……」
　服部が昨年の新人戦とは異なる動きを垣間見せたせいで、彼らの妨害が阻止されてしまった。決勝に進出した以上は準優勝以上が確定となるため、彼らが目論んでいた三高の総合優勝へと導くプランに綻びが生じ始めていた。
　実際のところは、男子クラウド・ボールに対しても意図的にトーナメント表に細工をするよう指示を行ったものの、結果として三高ではなく九高が優勝し、桐原が準優勝する事態となった。
「ならば、『ジェネレーター』はどうした!?」
「それが、会場に紛れ込ませたものの、全員の消息が不明となった……残っているのは、ここを守っている連中だけだ」
　４月の一件で彼に貸し出した『ジェネレーター』が一人残らず帰ってこなかったことに憤慨したものの、更に九校戦で貸し出すよう〝首領（ボス）〟からの命令があったため、渋々受け入れた経緯がある。ここにいる誰もが本部の粛清など受けたくない、という思いしかなかったのだ。
「だからと言って、このままではここにいる全員が本部の粛清対象だ」
「〝彼〟に頼る気はない。だが、今回は大口の客を相当集めたからな……胴元の支払金額は決して安くない。今期の〝ビジネス〟にも大きく影響することだろう」
「……何か、手を打たねばな」
　男たちが言う〝彼〟に言われるがままやった結果、自分たちが破滅の道を進む。
　彼らは何も気付いていない。
　もう既に『触れ得ざる者』の逆鱗に触れたことを。

九校戦三日目②

女子バトル・ボード準決勝第2レース。それを控えた第三高校3年の水尾佐保（みずおさほ）は、後輩から激励を受けていた。
「頑張ってください、先輩」
「ありがとう。一高の渡辺に海の七高というとんでもないグループだけど、まあやれるだけやるわよ」
後輩に向けてそう言いつつも、佐保は昨年も準決勝で摩利と戦って敗れている。それに加えて昨年の決勝で摩利とデッドヒートを繰り広げた七高の選手が同グループだ。せめて三高の名に恥じないレースはしようと決めていた。
すると、その後輩たちからはそれに文句をつけ始めた。
「でも、組み合わせに大会運営の悪意を感じますよ」
「せめて一高だけでも、あのバス事故で棄権してれば……」
「えっと……」
人がいい佐保はその後輩の言葉にどう言おうか迷っていた。そんなことを一高の人間の前で言おうものなら、即座に諍いの種になりかねない言葉だ。そこに無頭竜が妨害のためにそんなカードを仕込んだことなど、彼女らはもちろん、佐保にも知るはずのない事実であった。
すると、そんな佐保を救うように一人の女子生徒――愛梨がその態度を窘め、それに続くように栞が言葉を発した。
「あなた達、そんなことを言うものではないわ。いくらこの場が三高の天幕だからって、軽口であろうとも人の不幸を願うような言葉は許されないわよ」
「愛梨の言う通りよ。魔法師（わたしたち）にとってイメージは現実そのもの。それに、懇親会で上泉殿が仰っていたことをもう忘れたのかしら？」
これには悪口を言っていた女子達も黙らざるを得なかった。何せ、相手が師補十八家の「一色」と百家の「十七夜」ということも大きいが、何よりも懇親会の来賓にいた人物――上泉剛三の存在は彼女らを黙らせるのに効果的だった。

何せ、彼は三度目の世界大戦を経験しながらも生き残った上泉家の現当主。魔法史学だけでなく、基礎魔法学にもその名が登場するほどの大物。とはいえ、等身大の彼を知っている人間からすれば、孫を可愛がりたがる爺馬鹿という印象なのだが。

「いやー、後輩に助けられてちゃ世話ないね。ありがとうね、一色に十七夜」

「いえ、お気になさらず。先輩、ご武運を」

二人の応援を受けて、佐保は女子バトル・ボードの準決勝第2レースに臨む。やるだけやろうと佐保は決心してスタートの合図を待った。そして、スタートと同時に摩利と七高の選手が飛び出した。これには佐保も遅れまいとスタートするが、既に前方にいる二人のスピードが速い。

(え、渡辺が更に速くなってるけど……あんな速度で突っ込む気!?)

七高の選手の速度すら凌駕した摩利を凄いと思うが、あんなオーバースピードでカーブなんて曲がれるわけがない。だが、摩利が珍しくボードに手をつき、前傾姿勢をとる。そしてボードを水路に対して横に向けると、まるで水路を滑るように速度を落とさず曲がっていった。

(嘘でしょ……え?)

これには呆然とする佐保だったが、するとその次に走っていた七高もカーブに向かって速度を上げていた。まさか同じ行動を……と思ったのだが、明らかに七高の選手の様子がおかしい。佐保に対しての被害はないが、このままでは七高の選手がコースの壁に衝突しかねない。

ここからでは距離があるのと、ルールでボードへの干渉が認められておらず、流石に間に合わないと思った佐保だった。が、ここで七高の選手のボードの水面が凹み、その勢いで七高の選手とボードが壁を超えるようにしてコースの外に飛んでいった。彼女とボードはその直後に魔法でゆっくりと降ろされているのを視界に収めつつ、今はレースに集中することを優先した。

(私、妨害すらできなかったんだけど……どういうこと?)

あの後、競技中止を示すフラッグが上がり、大会運営による判断は二人での準決勝の再レースとなった……その結果は、摩利がゴール直前で水路に転落。摩利が棄権という形で、残る一人となった佐保が自動的に決勝進出となった。

佐保は正直、一体何が起きたのかすら理解できなかった。妨害すら出来なかったのに決勝進出したということを、現実のものとして受け止めるには少しの時間を要したのだった。

◇　◇　◇

「はぁー……摩利ってば、何やってるの」

「面目ない……」

時間は夕方へと移る。裾野基地の病院――その病室にて、真由美は声量を抑えつつ窘め、ベッドに寝かされている摩利は謝るほかなかった。

摩利が準決勝で棄権した原因は、美嘉の打ち立てたコースレコードを更新しようとして規定回数を超えた『ブリッツ・ドリフト』を使用したためだ。人に散々言っておいて、自分も同じことをやっているようではダメでしょうと真由美は言いたかったが、流石に病院なので慎むことにした。

ゴールの直前、摩利は激痛のあまり気絶して水路に転落した。観客席から駆け付けた達也に加え、会場にいた修次の的確な処置が行われ、佳奈による重力軽減運搬によってここまで運ばれたことを聞かされると、摩利は顔を赤らめてベッドに深く沈み込んだ。

「そういえば、七高の選手は大丈夫だったのか？」

「ええ。コース傍に佳奈さんがいたお蔭で怪我もなかったけど……魔法力に対する影響は避けられないでしょうね。詩鶴さんもケアしてくれるそうよ」

「その後の展開が読めるような気がした……それで、その後のレースはどうなったんだ？」

準決勝第２レースで残ったのが一名しかいないため、３位は小早川で確定となり、４位は準決勝第１レースで３位だった九高の選手が繰り上がりとなった。

女子バトル・ボード決勝は一高の五十嵐亜実と三高の水尾佐保の一騎打ち。当初は白熱した試合になると思われたが、ここで亜実がとんでもない術式を披露した。
「〝水上・水中走行術式〟だと？」
「ええ。つぐみんが『ブリッツ・ドリフト』を会得した貴方と全力で戦うために悠君が組んだものだって。固有名称は『水中遊泳（アクア・ドルフィン）』……聞いた私ですら驚きよ。そんな走行術式、世界で類を見ないもの」
「……姉も姉だが、アイツもアイツだな」
ルール上水路を飛び越えてショートカットはできない。だが、逆に水深のあるところで水中に潜って走行するという方法は、コースである水路を外れないためルールに抵触しない。しかし、空気による抵抗よりも水による抵抗のほうが遥かに大きいため、そんな考えに至る人間はいても、明らかにバトル・ボード向きではない。
それを解決したのが複合走行術式『水中遊泳（アクア・ドルフィン）』――水抵抗のエネルギーを操作することによって、加減速を自在に行う術式。本人の周囲に空気の膜を覆う『エアセイル・シールド』を発展させた亜実専用の魔法である。
しかも、その空気の膜はイルカの形を成していた……これは、悠元なりに魔法という概念で観客を楽しませるという結果からそうしたものである。一応イルカも水の抵抗を出来るだけ受けないような流線型のボディラインなので、理には適っている。
「個人の魔法特性に完全依存した魔法だから『インデックス』の申請は断るそうだけど。まあ、そのお蔭もあってつぐみんが無事優勝したわ。つぐみんからしたら、出来れば貴方と戦いたかったんでしょうけど」
「それは理解したが……定着までどれぐらい掛かる？」
「そうね。日常動作に支障はないけれど……完治まで1週間は激しい運動の禁止。ミラージ・バットは棄権するしかないわ。今回は摩利の自業自得よ」
そのことだけは反論できないと摩利は諦めたように一息吐いたのだった。

◇　◇　◇

第一高校、３日目の結果は男女アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝（男子は克人、女子は花音）、男子バトル・ボードが優勝（服部）、女子バトル・ボードが先に述べた通り優勝と第３位に入った。当初の予定とは異なるが、亜実が摩利の抜けた穴をきちんと埋めてくれた形となった。

ただ、第三高校が追随してきているのは確かであり、男子バトル・ボードと男女ピラーズ・ブレイクで２位から４位を独占した。結果として、原作よりも２校の得点差が詰まっている状態となっている。

時間は夕食後。一高に割り当てられたミーティングルームには、幹部である真由美と克人、作戦スタッフの統括をする鈴音、明日からの新人戦統括役として悠元が、そして――――怪我をして安静にしたほうがいいと言われてる筈の摩利が座っていた。

「当初の予定だった４種目で優勝し、総合優勝への道筋もついたと言いたかったのですが……ここに来て、三高が予想以上に点数を伸ばしています。新人戦の結果次第では、総合優勝に大きく影響しかねないと見ています」

「済まないな。私が無茶をしなければ……」

本戦８種目を終えた時点で、第一高校が４００ポイント、第三高校が３３０ポイント。他の７校と比較して突出している状態で、新人戦全体と本戦ミラージ・バットの成績次第で三高に逆転される可能性がある。本戦モノリス・コードの場合は……正直、克人に勝てる人間が他校にいるのかと言われたら、数えるぐらいになるかもしれない。

男子ピラーズ・ブレイクの時の会話を考えるなら、それこそ宮本修司あたりだろうと思うが、彼は新人戦モノリス・コードにエントリーしていない。そうなると本戦モノリス・コードにも出てこない可能性が高い。高いというだけで絶対というわけではないが。

「渡辺さんが無茶をすることも織り込んで悠元君が術式供与を、六塚君が五十嵐さんの調整補助をしていましたから。というか、反省も込めてゆっくり寝ていても良かったのですが」

「言うようになったな、市原。日常生活をする分には問題ない」

どうせ何を言っても聞く気がないと分かっているからこその鈴音の言葉に、この時ばかりは流石の摩利も苦虫を噛み潰したような表情を垣間見せつつ、言い訳をするように呟いた。それを聞きつつ、克人が悠元に問いかけた。

「三矢。明日から新人戦が始まるが、お前自身の見込みはどうだ？」

「そうですね。明日のスピード・シューティングは、三高の吉祥寺真紅郎と十七夜栞が要注意かと。上手く六塚や北山に当たればいい線はいけると踏んでいます」

真紅郎の『インビジブル・ブリット』と栞の『数学的連鎖（アリスマティック・チェイン）』に対して有効な対抗手段を持っているのが名前を挙げた二人だ。準々決勝あたりでぶつかればいいだろうが、無頭竜の息が掛かった大会運営に決勝トーナメントのくじ運なんて期待できるはずがない。

この場合は、運というよりも〝実力〟で勝つしかないだろう。その意味で移動・加速系統を得意とする森崎では、加重系統を十八番とする真紅郎に勝てる方法がない。厳密には、勝てる方法がないわけではないが、それこそ真由美がやったような芸当ができないと厳しいだろう……それを求めるのは高望みしすぎだ、と言われるかもしれないが。

「バトル・ボードは五十嵐と光井がいけると踏んでいますが……どちらもメンタル面が本番に弱いところがあるので、少し不安ですね。特に五十嵐のほうは姉が優勝しましたので、変にプレッシャーが掛からないといいんですが」

この会議の前、夕食が終わってすぐに悠元は新人戦の統括役として1年メンバー全員を集めた。いろいろ考えた結果、悠元が放った言葉は「自分のベストを尽くす。それだけを考えろ」だけだ。あれこれ言っても絶対忘れるだろうと思うので、シンプルに収めた形だ。

その言葉を放ったときに深雪が目をキラキラさせていたが……大丈夫だよな、と思わなくもなかったので、深雪の担当エンジニアを務める達也に一応フォローというか様子見は頼んでおいた。

自分が言い放った言葉の中には「達也のことを認めない奴は分かってるよな？　そんなことを言ってる暇があるのなら、自分の出る競技

に集中しろ」という意味が込められている。自分たちを一科生(ゆうとうせい)だというのなら、言葉に込められた意味ぐらい理解できないと困る。これでも結果が出せないようなら、正直どうにもならないだろうと見ている。

自分に対することを含めなかったのは、それを口にしてもどうにもならんだろうと思った。自分が〝三矢〟である限り、どうしてもそれが付きまとってしまうからだ。

「嫉妬は理屈じゃない」というのは無論分かっているが、「魔法師は自らを厳しく律することが求められている」のもまた事実である。その程度の嫉妬ぐらい厳しく律することができないのなら、優等生というプライドにしがみつくだけの惨めな存在に成り下がるだけだ。

そのことを態々指摘してやる義理はないし、表情に出すこともしようとは思わない。自分はそこまでのお人よしではないのだから。

「その意味で、本戦ミラージ・バットに穴を開けたままというのは拙いかと。下手に緊張して結果が出なかったら、それが一番良くない展開ですから」

「理に適ってはいるな。そうなると、新人戦に出る達也君の妹に、光井と里見の三人がいるわけだが……悠元君なら、誰を推薦する？」

「深雪ですね。本戦ミラージ・バットには二人の1年――三高の一色愛梨と七高の伊勢姫梨がエントリーしていることも含めれば、それに匹敵しうる実力者を選ぶべきでしょう」

愛梨の実力はそれとなく読めるが、姫梨に関しては現状で未知数と言えるだろう。深雪は武術鍛錬で原作よりも身体能力が上がっており、加えてほぼ実戦形式での練習もしてきた。更に言えば〝奥の手〟もあるため、問題はないと見ている。尤も、今の段階では単なる提案に過ぎないが。

摩利の問いかけに対して悠元は軽めの口調で答えたが、それを聞いた鈴音はそれもありだと判断したようだ。

「成程。加えて司波君に担当してもらえば、本戦ミラージ・バットに出る残りのメンバーに技術スタッフも集中できますね」

そうは言うが、達也が事実上4種目…お手伝いも含めれば6種目

（女子クラウド・ボールだけでなく、女子バトル・ボードでも摩利の手伝いを少しだけした）を担当するということだ。これで予定通りモノリス・コードまでとなった場合、達也が担当するのは本戦・新人戦の7種目に増えることとなる。その場合を見越しての準備はしてきているので大丈夫だと思いたいが、こういう悪い方向性の予感というのはつくづく当たることが多い、と悠元は内心で溜息を吐いた。

結局、この後ミーティングルームに達也と深雪が呼び出されて、深雪の本戦ミラージ・バット出場が決まったのだった。

九校戦三日目③

　その頃、第三高校に割り当てられたミーティングルームでは、佐保が準優勝したことで祝福されていた。それに「ありがとう」と返しつつも、佐保の表情は晴れやかでなかった。それを見た渡良瀬が佐保に話しかけてきた。

「浮かない顔ですね、先輩」

「渡良瀬……だって、渡辺に匹敵する選手が同じ3年にいたなんて寝耳に水だったからね。それに、正直決勝に行けたのは単に『運が良かった』だけだし。決勝の五十嵐選手の術式、渡良瀬も見た？」

「はい。水中を水上と同じように走行できる術式は、吉祥寺も『聞いたことなんてない』と言っていましたので」

　あの「カーディナル・ジョージ」ですら完全に『寝耳に水』の状態だったのだ。試合をした当事者である佐保からすれば、決勝に行けたことだけでもラッキーだったのに、準決勝で戦った摩利に匹敵しうる選手が同じ3年にいたことが吃驚と言う他なかったのだ。周囲の人間は「新人戦なら三高が有利だ！」などと意気込んでいることに士気を高められたのは幸いだが、佐保としては、これで終わるとは思えなかったのだ。

「そういえば、渡良瀬は何か知らない？　五十嵐ってことは百家本流だと思うんだけど」

「五十嵐亜実……確か、先日父から六塚家現当主の弟と婚約していた人物だと愛梨から聞かされまして」

「……え？　婚約してるの？」

　六塚家の名前は佐保も知っている。というか、十師族の名字ぐらい知らないと魔法使いとして生きていけない基礎知識のレベルだ。その関係者が見初めたとなれば、それだけの実力を持っていても不思議ではないと佐保は溜息を吐いた。これには流石の渡良瀬も言ってよかったのか、と思ってしまった。そんな二人の会話も余所に、1年メンバーたちは摩利の棄権を喜ぶような会話をしていた。

「バトル・ボードで棄権した渡辺選手はミラージ・バットの花形選手で

もあったし、棄権になったのは天啓とでもいうべきなんじゃないか？」
「今年は新人も総合も三高の優勝で決まりだな！」
（……沓子が聞いていたら、「お主ら、他人の不幸で喜んだら罰が当たるぞ」なんて言ってたでしょうね）
渡良瀬は正直、この場に愛梨、栞と沓子がいなかったことが天啓だと思った。愛梨はクラウド・ボールの調整でこの場にはおらず、栞と沓子はそれぞれ、明日の新人戦女子スピード・シューティングとバトル・ボードのための最終調整を行っている最中だった。そして、今聞いたことは話せることじゃないと渡良瀬は確信していた。
すると、モニターの画面で臨時ニュースが伝えられた。
『ここで情報が入りました。第一高校は怪我で棄権となった渡辺摩利選手の代わりに、1年生の司波深雪選手を本戦ミラージ・バットの選手として申請しました。司波深雪選手は第一高校に次席入学し、先日の学期末試験でも――』
渡良瀬はここで、将輝がモニターに釘付けになっていることに気付く。正確にはそのモニターに映る深雪の画像に見惚れていたというのが正しいだろうが。けれど、渡良瀬はそれを見て人知れず溜息を吐いた。
「？　どうしたの、渡良瀬？」
「いえ、何でもないです」
いくら「クリムゾン・プリンス」でも下手を打つことはないと思うが、同じ種目には第一高校も十師族の人間がエントリーしている。しかも、渡良瀬ですら情報が掴めなかった生徒の一人なのだ。
それ以上に、渡良瀬は乙女の勘で「その恋が叶うとは思えないんだけどね……」と内心で呟いたのだった。どうしてそう思ったのかと言えば、将輝はああ見えて女性に対する接し方が苦手だということを渡良瀬は知っているからだ。尤も、そんな予想が当たるか否かは渡良瀬でも分からなかったが。
◇　◇　◇
深雪が本戦ミラージ・バットに出場することが決まったミーティン

グの後、悠元は呼び出しを受けていた。その相手は父親である三矢元なのだが、その呼び出した先は――――ホテル地下の温泉だった。
「まさか、こういう呼び出しとは思わなかったけど……」
「気にするな。偶には親子水入らずというのも構わんだろう」
「言いたいことは理解するけどね」
　お互いに水着を借りて、２人でサウナの中に入っていた。悠元自身は細身ながらこれでも鍛えている方だが、元のがっちりとした肉体はとても５０代とは思えぬものだった。剛三とは血が繋がってないのに仲が良いのは、その体格に起因しているのでは、とも思えた。
「悠元。お前の事情はまだ誰にも明かしてないのか？」
「明かしてないよ。父さんなら家族あたりに話していると思ったけど」
「言えるわけがないだろう……下手をすれば、『パラサイト』と疑われかねないからな。お前の場合はハッキリと違う、と断定できたが」
　悠元の事情――――元々この体に宿っていた魂ではなく、消えた魂の代わりに転生した存在であるということ。これをこの世界で知っているのは、自身以外では父親の元しか知りえないことだ。
　元の場合は、知り合った古式魔法の使い手こと幹比古の父親がいたからまだ理解できていた、と話した。
「明日から新人戦だが……何か、聞きたそうな顔をしているな」
「あ、うん……自分が十師族であるという意味を考えたときに、どうあればいいのかなって……」
　九校戦で力を示す意味は理解している。その意味で、真由美にしても克人にしても、既に高校生という枠組みをとうに超えている。それは自分にも言えたことかもしれないが……悠元のこの質問には、流石の元も思わず苦笑を浮かべていた。
「……難しい質問だな」
「現当主の父さんでもか？」
「無論だ。十師族はこの国の魔法師の頂点に立つ……つまりはこの国の魔法師の力を示す存在とはいうが、その力を揮うのにも制約が付きまとってしまうからな。面倒だとは思うが、これも力を持つ者の責任

だろう」
　出る杭は打たれる……その意味で、三矢家は同じ師族二十八家のひとつである十山家に対して、屈辱的な仕打ちを受けて来た身上。それを打ち破ったのは悠元であり、十山家と国防軍の失態を招いたのも彼のおかげである。けれど、九校戦では悠元に対して一つの注文を付けねばならないと元は述べた。
「九校戦は、当主たちから見れば〝児戯〟のレベルなのは言うまでもない。だが、十師族である以上は〝最強〟で在らねばならない。このことは元継をはじめ、詩鶴、佳奈、美嘉にも言い含めている。無論、選手として出るお前にも求められていることだ」
「爺さんにもその辺のことを言われたよ……その上で聞きたい。俺が仮に一条家の次期当主を倒したとしても問題はないのかどうか」
　悠元が出るピラーズ・ブレイクとモノリス・コードで将輝と当たる可能性が高い以上、十師族同士の戦いは避けられない。将輝は表立った実戦経験ありの魔法師で、二つ名まで持つ三高のプリンスだ。その一方、自分は表立った実績がなく、三矢家でも家督継承の立場にない。
　一条家の現当主から好意的に見られているのは確かだが、それとはまた話が別だ。自分自身、学校生活で十師族としての力を軽々しく見られるのは問題だと判断して、燈也にいくつかの術式供与を行った。彼の場合は他校の対戦相手に十師族がいないから問題ないが、自分の場合はそうもいかない。そんな悠元の問いかけに対し、元は思わず笑みを漏らした。
「ふっ……悠元のことだから、本気で倒しに行くと一言目に言いそうだったが。意外だな」
「やるからには手を抜く気なんてない。そんなことをしたら、十師族の力に疑いを残すことになると思うけど？」
「そうだな。そのことは気にするな……相手が誰であろうと、十師族の一角を担う三矢の力を見せつけて来い。私から言えるのはそれだけだ」
　ともあれ、全力でやっていいということなのだろう……流石に戦略級魔法がアウトなのは理解しているが。すると、元が何かを思い出し

たように悠元へ視線を向けて尋ねた。
「ところで、誰か好きな人はいないのか？　義父さんは女性に興味がないのかと心配していたぞ」
「生憎常軌を逸した趣味は持ってないよ……女性に興味ぐらいはあるさ」
　小学および中学では恋人の一人も作らなかったし、長野佑都として剛三の付き添いをしていた時も、せめて相手に悪い印象を与えないよう心掛けていた。将輝と真紅郎に対してはついカッとなった部分があったのは否定できないが。
　そんな肉体言語（サブミッション）絡みも含んだ事情はともかく、女性と付き合うという感覚がどうにも分からなかった。
「ふむ……なら、九校戦でお前と一緒に行動している子たち――――司波さんに北山家のお嬢さんはどうだ？　異性としての評価は？」
「見てたの？」
「知り合いから聞いたのでな。で、実際のところは？」
「そうだな……」
　原作知識とかを一切抜きに考えると、二人の容姿の方向性は異なるが、それでも女性として魅力的に映ると思う。男性としては、恋人として付き合えたら嬉しいだろう。
　けれど……自分と一緒に行動しているのは、雫の場合は小学校からの顔馴染みで、深雪は沖縄の一件で友人として付き合い始めたからだと認識している。懇親会では、いやと言うほど視線を集めてしまったが、それは深雪という周囲から視線を集めやすい存在がいたからだと結論付けていた。
　三高内で親衛隊とかが形成されている将輝に比べたら劣るだろう……という悠元の考えに対し、元はため息を吐きながら問いかけた。
「悠元。お前は詩歩に似て顔立ちの良い容姿だというのに、些か自己評価が低すぎないか？　それに、その二人は私にとっても知己の娘さんだ。お前が付き合っても問題ないと思うが……私の知らない事情が、何かあるのか？」
　これは話すべきか迷った。けれど、この世界で自分が転生者だと

知っているのは、目の前にいる今の父親だけだ。このまま引き摺るよりは話したほうがいい。それを信じてくれるかどうかは不明瞭ともいえるが、抱えたままよりは多少マシだと思いつつ、悠元は元の問いかけに答えた。
「……分かった、話すよ」
形はどうあれ、父親として息子を心配してくれている以上、彼に甘えてしまう形となるが……悠元はその辺の事情を話した。前世に兄がいたこと……自分が付き合っていた元彼女のことも含めて。それを聞いた元の表情は悲痛に満ちていて、信じられないというよりも辛い人生を送ってきた悠元の強さに感心していた。
「……お前は、強いな。いや、この場合はよく話してくれた、というべきだな」
「単に痩せ我慢してただけかもしれないよ？　もしくはとっくに壊れてただけかもしれない」
達観というか、悟っていたというか……その中には諦めも含んでいた悠元の言葉に、元は首を横に振った上で率直な感想を述べた。
「私なら間違いなく怒り狂ってただろうし、一発ぐらいは殴ってただろうな。好いた人を身内に奪われる……そんな経験などしたことがないから、憶測でしか語れないがな。好きにやってみろ、とは言ったのだがな……お前のことを汲み取れてなかった私の責任だな」
「いや、父さんは悪くない。こんな事情なんておいそれと話せることじゃないし、父さんも当主として忙しい身だから」
話すことができないというよりも、信じてもらえないという気持ちが大きかったのだろう。けれど、元はよく話してくれたと言わんばかりに悠元の頭を撫でた。こんな風に撫でてもらったことは前世でなかったために、新鮮に感じた。
「恋愛に対して臆病になる気持ちも分からなくはない。かくいう私も、詩歩に泣かれるまでは彼女への気持ちも、彼女自身が私に向けていた気持ちも理解できてなかったからな」
「……そんな話、初めて聞いたんだけど」
「恥ずかしい話だったからな」

元が高校生の頃、自分を鍛える意味で新陰流剣武術の道場に通い始めたときに詩歩と出会った。高校生時代の元の体格は、第三研での訓練を経たお蔭で今のような感じに近く、話を聞いた限りではまるで克人のようだと感じた。そう述べると、元は苦笑いを浮かべていた。

それは置いといて、その時点で高校2年生――――16歳だった元。一方の詩歩は小学6年生の11歳。しかも、奇跡的に誕生日が同じ1月1日という事実。そんなこともあって、剛三からは特に厳しく稽古をつけて貰っていたと話した。

「お前達のように奥義の会得まではいかなかったが、2年で中伝の目録ぐらいには至った」

「新陰流は中伝に行くまで最低10年は掛かるって言われるから、それでも凄いんだけど……」

鍛錬を続けていく中で甲斐甲斐しく世話を焼いてくれていた詩歩に、元はいつしか心惹かれていたような気がした。その一方、詩歩も自分の父のように逞しい元のことを好いていた。

周りから見れば相思相愛に見える雰囲気だが、当の元本人は気付いていなかった。いや、身分の違いということから、詩歩に対しては「父親である剛三が気に入っているから、気に掛けてくれている」と思っていたと話す。

「2年後、当時はまだ生きていた父から三矢家の次期当主として指名を受けた。その為の本格的な勉強をしなければならないということで、新陰流をそれ以上修得するのを止めざるを得なかった……その挨拶の時に、詩歩に泣き付かれてしまったのだ」

今から33年前――――そう、四葉家による大漢復讐戦の直後の話になる。

剛三も次期当主としての勉強をする元を無理に引き留めようとはしなかった。自身の娘も狙われる可能性というのを捨てきれなかったためだ。これには、当時存命だった剛三の妻も娘の身を案じて、暫くは周囲に対する警戒を強めるべきだと判断した。

なので、三矢家と上泉家は、国防軍への技術供与が出来なくなるデメリットよりも身内の安全を最優先にし、第三研を閉鎖してお互いの

安全のために関わりを絶つべきだと考えていたらしい。
「だが、それに真っ向から反対したのが詩歩だった。『元さん以外の男の人に嫁ぐなんて、絶対に嫌です！』と言われて、私に泣き付いてきたのだ。その時に気付いたんだ……私はいつしか、詩歩のことが好きになってたんだと」
　そのことが切っ掛けで、お互いの関係を絶つ話から結びつきを強める話に変わり、二人の縁談自体は元の両親と剛三の妻が主体となって進めた。曰く「剛三に任せると絶対に派手になる」とのことだった。
　元が挨拶に行った1週間後に婚約の話が成立、結婚はその5年後に行われることまでトントン拍子で決まった。お互いの気持ちを理解しあった二人の惚気ぶりに周囲からは「早く結婚しろバカップル」と冷やかしが飛ぶほどだったらしい。
「てっきり父さんが『娘さんをください』と言って、爺さんが『なら、わしに勝ってみせろ！』という展開かと勝手に思ってたけど……」
「正式な婚約の時に言われたんだが、詩歩が『いい加減にしてください、剛三様』と言って義父さんの心を折っていたから、そこまでの事態にはならなかったよ」
　自分の娘に名前で呼ばれたら、父親として心が折れるのは間違いないな……と二人揃って苦笑を浮かべていた。なので、悠元の姉たちの縁談はその時の経験に倣って詩歩が主体となって進めていると元は話した。彼女の御眼鏡に適う相手ならば、とのことらしい。
「お前もその意味で婚約を考えねばならない年齢だ。かといって、お前の望まない婚約も出来ることならさせたくはない。お前の前世の経験はこの際考えるな。自分の容姿と自己評価、それに加えて相手がお前に抱いている気持ち……お前が相手をどう思っているかを見極めてみろ。朴念仁と言われた私にもできたのだから、お前にもできる。自信を持て」
　お前は元（おれ）と詩歩（かのじょ）が愛する息子なのだから、と言って元はサウナから一足先に出た。それを見送った後で、悠元は一人サウナの部屋の天井を見上げていた。正直、甘えたことを言うなと叱咤されるのでは……と思ったが、元なりに捻り出した言葉を聞いて、自分の中で思い返す。

社交辞令というか、打算的な思考を持っている人間はこの際省くとする。

少なくとも、好意的なのは七草家の娘である真由美、香澄と泉美の3人で、泉美が兄のように慕ってくれている。一条家では将輝の妹である茜が自身を「お兄様」と呼んで慕ってくれている。

四十九院家だと沓子とは付き合いの長さから親しい関係にある。一色家の場合は初対面が社交辞令の挨拶程度であったが、九校戦の懇親会では愛梨が直接会いに来ていた。

千葉家の場合はエリカと友人（悪友に近いが）の関係にある。五輪家とは澪からの婚約話が一度持ち上がったが、自身の力の関係で断った経緯がある。

四葉家関連の場合はというと……当主である真夜からは好意的であり、双子の姉である深夜からも好意的な感情……それ以上を滲ませる様なものを向けられている。文弥と亜夜子とは良い友人関係とお互いに割り切っている。

で、深雪からはすごく好意的に見られているのは、今までのことから間違いないと思う。司波家に居候してからというものの、関わる機会が多くなったからというのもあるのだが、学校内で一緒にいる時間を考えると……あれ？

（……ひょっとして、深雪のことが好き……なのか？　もしかして、雫のことも……？）

その意味で雫とも高校に入ってから関わることが多くなった。彼女なりのアプローチ自体は気付いていたが、それが自分に向けられているとは今の今まで感じていなかった。考えてみれば、九校戦に入ってから一緒に行動するような機会が増えたことをあまり気にしていなかった自分が悪いのだが、それを嫌と感じてなかった。

というか、先に挙げた人たちのことを考えると、自分が「人誑し」と言われても反論できないことに気付いた。これでは前世の兄がしてきた経験を自分が体験しているようなものだ。

「ははは……笑うしかないって、これは。てかさ、下手すると〝兄貴〟以上じゃないか、これは……何で気付かなかったんだ、俺の阿呆が」

他人に物事を客観的に見ろ、だなんて偉そうなことは言えない。かくいう自分が出来ていなかったのだから。全くもって滑稽なことだと思う。この世界に転生して、自分の視点ではなく「三矢悠元」としてのフィルターを通して見ていた……そんな状態だった。その意味で『力に酔っていた』のかもしれない。

「まさか、これも見越して爺さんはあんなことを言ってたのか？　爺さん、変なところで鋭いからなぁ……俺が悪いことは承知してるけど」

正直に言って、笑うしかなかった。自分が転生した時点で前世との関わりは断ち切れたようなものだ。それを無駄に引き摺って、愛想のいい仮面を被って生きてきた……馬鹿だの阿呆だの言われても仕方ないだろう。

そもそも、この国の魔法師として最上位にいる十師族の直系に割り込み転生しただけでも凄いことなのに、それを凄いと感じなかったのは……この世界で生き残ることだけを考えていたせいだろう。

今にして思えば、元治に対してしっかりとするように言い含めたり、詩奈に対して可愛がったりする部分は前世の二人をどことなく思い出していたのかもしれない。その二人のように……そこまで考えたところで、悠元は深い溜息を吐いた。

（前世（むこう）でも今世（こっち）でも妹のブラコンは健在なり、か……）

あの時は言わなかったが、妹は原作の深雪レベルのブラザー・コンプレックスを拗らせていた。クラスメイトからは「リアルなブラコンってあそこまでになるんだな」と言われたことがあった。妹は天才と呼ばれていても、甲斐甲斐しく自分の世話をしていた……自分がポックリ逝った後、後追いしていたなんてガチで笑えないため、何かあった時のために遺書というか妹への手紙を遺していた。

確か転生したとき、神様にそんなことを言った記憶があった……確か『誠心誠意やらせていただきます！』とか言ってた筈だ。

そんな事情は置いといて、悠元はゆっくりと立ち上がってサウナを出た。流石にそろそろ次の人が入ってくる頃合いだろうと思い、脱衣所で速やかに着替えて、部屋に戻った。流石にラッキースケベ的な展

開は起こらなかったようで一安心だった。
「さて、明日から新人戦だし、とっとと寝るか」
1年メンバーを引っ張る側の自分が寝不足では格好がつかないからな、とそう言い聞かせながら悠元は眠りに就いたのだった。

九校戦四日目①～新人戦一日目～

悠元と元がホテル地下の温泉（サウナ）で語らっていた頃、ホテルの高級士官――――大佐クラスが泊まる部屋に剛三はいた。新陰流の総本山の規模が大きいとはいえ、剛三自身は必要以上の贅沢を嫌っていた。それこそ重要な行事などでもない限りは質素な食事で済ませているほどだ。

今回剛三がＶＩＰルームに泊まらなかったのは、武術家として自分の宿泊する部屋は狭いほうが逆にありがたいぐらいだったためだ。とはいえ、大会運営側の面子も立てる形でこの部屋を選んだのだった。

それはともかく、剛三は円卓に備え付けられた椅子に座っていて、円卓を挟んで向こう側に座っている３人の男女に目線を向けた。剛三にとって、その３人はよく知っている人間だが、悠元には話していない。何せ、その３人は〝裏〟の天神魔法に関わる人間だからだ。

「姫梨ちゃん、七高の先輩は大丈夫だったか？」

「はい。精神状態のほうも大分落ち着きました。とはいえ、魔法力の低下は避けられないかと…」

剛三に話しかけられた少女――――神楽坂家の筆頭主家である伊勢家の長女、第七高校１年の伊勢姫梨は少し落ち込んだような表情を見せていた。

本戦女子バトル・ボードの準決勝第２レースで起きた七高の選手のコースアウト。怪我などはなかったが、オーバースピードによる制御不能状態は当事者である選手に対して魔法への懐疑を起こさせてしまった。加えて、担当した技術スタッフもひどく落ち込んでしまったと話した。

すると姫梨の隣に座る男子が声に出した。そして、その言葉に続いて男子の隣に座る女子も声を上げた。

「電子機器の誤作動……となれば、『電子金蚕』が一番濃厚だな。しかし、単独で七高を狙い撃ったとは考えにくい。やはり、一高の渡辺選手と潰し合って、三高の選手を決勝に上げる為だったんだろうな」

「そうなると、あの組み合わせも怪しくなるね。トーナメント操作に監視システムの一部無効、加えてＣＡＤチェック……問題だらけじゃない？」
男子――――神楽坂家の分家の一つである宮本家三男、第九高校１年の宮本修司が七高選手の原因である古式魔法の名を呟くと、女子――――同じく分家の一つである高槻家次女、第二高校１年の高槻由夢は大会委員にその原因があることを指摘した。その指摘には剛三も溜息を吐いた。
「今回、被害にはならなかったから見ぬ振りはするが……三矢家からリストは貰ったが、半分以上が『クロ』だ。こうなれば、正当な競技が出来るかどうかも疑わしくなる」
「つまり、何らかの妨害は続くと？」
「バトル・ボードであれだけのことをやったのだ。警戒することぐらい向こうは読んでいるだろう。無頭竜の連中は会場に『ジェネレーター』まで送り込んでおったからな」
剛三は修司の問いかけに答えた上でそう断言した。対人競技で事故の可能性があるものと言えば、モノリス・コードとミラージ・バットが該当する。特にミラージ・バットは本戦に姫梨も出場するため、気が抜けないのは確かだろう。『ジェネレーター』に関しては既に対処済みなので、観客に被害が出ない状態はある程度確保できたといえよう。
「そうなると……剛三の爺さん、俺は新人戦モノリス・コードに出たほうがいいのか？」
「いや、その辺りは〝第二席〟――――わしの孫に見張ってもらう。補助には２人が付いているが……修司にもその補助を頼めるか？」
「つまり、何か起きること前提と言うわけか。分かった……お祖母様にも頼まれてるからな」
修司は諦めたように一息吐くと、真剣な表情を浮かべて頷いた。幸いにして、修司は本戦のクラウド・ボール１種目だけなので、割と自由に動けるのだ。すると、それを聞いた由夢が剛三に尋ねた。
「そういえば、私と姫梨で三矢悠元って人に会ったんだけど……知っ

てます？」
「ほう、あ奴に会ったか。その様子だと、天神魔法を止められでもしたか？」
「仰る通りです。まさか、高位魔法を瞬時に定義破綻させられるとは思わなくて……」
「姫梨ってば、彼に惚れちゃったみたいでさ」
「由夢!!」
「二人とも、落ち着け……」
　由夢の言葉に姫梨は頬を赤く染めつつも叫び、それを見た修司は双方に落ち着くよう諌めた。それを見た剛三は笑みを零していた。まさか、自分の意図していないところで自分の孫と出会ったことに、彼は何かしら〝持っている〟と感じていた。
「あ奴には元々武術の免許皆伝の段階に教える予定だったのだが……〝表〟の天神魔法を自力で会得しおった。あの難解な文章を己の力だけでな」
「マジか……ちなみに、どの属性を極めているんだ？」
　天神魔法は会得の難しさと魔法特性の関係で陰陽（光・闇）、五行（火・水・木（風）・金（雷）・土）の７属性のいずれかを１つ極めることが多い。加えて当主の場合は、〝表〟の場合は光、〝裏〟の場合は闇の属性を会得していることも次期当主の条件に含まれる。これは各々の魔法に関係しているためだ。
「驚くでないぞ、修司。あやつは――〝全属性〟だ」
「はあ!?」
「ええっ!?」
「そんなことが有り得るのですか!?　神楽坂家でも歴代最高クラスの実力を有するお祖母様でも、最上級の天神喚起まで会得したのが４属性なのですよ!?」
　剛三の言葉に修司、由夢、姫梨が続けざまに声を上げた。全ての属性を会得するということは最早〝神業〟の領域――それこそ、この魔法を編み出した陰陽師である安倍晴明と賀茂忠行の再来ということになる。三人の驚きをよそに、剛三は話し続ける。

「事実だ。悠元が偶々天神魔法を練習していた時に出くわしたことがあったのだが、あ奴は全ての属性魔法を同時行使までしていた。それを千姫に伝えたところ、九校戦に足を運ぶと言ってきた」
「祖母ちゃんが自ら来るって……流石に着物では来ないよね？」
「それは流石に目立つだろうよ。まあ、この間買い込んでた服でも着るとは思うが」
「多分、今頃実家で着ていく服を準備してるのでしょうけど……父様が頭を抱えそうですね」
神楽坂家当主は公的な場や行事以外だと現代風のファッションを好んでおり、ネットを駆使して流行を敏感に察知する。現当主である神楽坂千姫は一応「８４歳」なのだが、剛三以上に若い容姿に加えて、女性にとって理想のモデル体型でもあるために何を着ても似合う有様だった。
古式魔法の大家なのに、そういう所は必要以上に拘らない現当主に対して、姫梨は頭を抱えるであろう自分の父親を同情したのであった。

◇　◇　◇

九校戦４日目。本戦はミラージ・バットとモノリス・コードを残した形で一旦の区切りとなり、今日から5日間、1年生のみで勝敗を競う新人戦となる。ここまでの総合ポイントは第一高校と第三高校が競っており、その差は７０ポイントで第一高校がリードしている。とはいえ、新人戦の成績次第では第三高校に逆転優勝される恐れも出てくる。
新人戦の得点は本戦の２分の１（小数点以下が出た場合は切り下げ）とはいえ、総合優勝を狙うとするなら新人戦の結果が直結すると考えていいだろう。無論、出場する選手にとっても新人戦優勝は自分達の栄誉になる。
幹比古は、ホテルの敷地内にある場所――――先日見つけた場所なら、人知れず精霊魔法の訓練もできると足を運んでいたのだが、その場所に先客らしき気配を感じた。しかも、その場所に同調している精霊が明らかに多いことも気に掛かった。

（この力は……一体誰が……）
自分でもそこまでの精霊を集める技量はない。かつて〝吉田家の神童〟と呼ばれていた頃でも恐らく無理だろう。ならば一体誰が……先日の賊のことも考えてゆっくりと近付くと、開けた場所の中央に立っていたのは、幹比古がよく知る少年――――悠元であった。
「……凄い……」
嫉妬や羨望よりも先に、幹比古の口から出たのは驚きであった。彼から見た悠元の古式魔法……その光景があまりにも綺麗だった。
本来なら意識を集中させないと感じ取れない精霊がハッキリと見えるほどに彼の同調が強いということも感じていた。７つの属性を持つ精霊が一切列を乱すことなく、悠元の周囲をまるで虹が覆っているかのような光景だった。
すると、悠元が手を上に翳す。それに従って精霊たちが空に舞い上がっていく。まるで朝日に照らされて精霊たちが虹の光を放っているかのようだった。
その光景に幹比古が意識を奪われていると、悠元から声を掛けられたことに驚いた。
「幹比古、覗き見はあまり感心しないけど？」
「あ……ゴメン。あまりにも綺麗だったから……凄いね、悠元は」
「これでも一生懸命練習はしてるからな……なんだ、その顔は？」
まるで練習もせずに会得したみたいな返しは心外だぞ、とは言わなかったが、その辺も含めた悠元のジト目に幹比古は慌てて取り繕った。すると、幹比古はそこで悠元から今までにない雰囲気を感じ取っていた。
「ご、ごめん。ところで、何か良いことでもあったの？」
「……どうしてそう思った？」
「さっきの魔法だけど、無理が掛かってる感じがなかったし、一切の淀みが無かったからね。嬉しいことでもあったのかなって思ってさ」
「嬉しいことか……まあ、悩みの一つが解決したってことかな」
悩みと言うか、単に自分勝手な思考を抱えていたが、結局は自分の視野を狭めていたことに父親からの言葉で気付かされたというぐら

いのことだ。それによって自分の恋愛感情も自覚し始めたわけだが、敢えて口にしない。
「お返しに幹比古の訓練に付き合うよ。秘術関連は教えてやれないが、外典の神道系精霊魔法ぐらいは問題ないだろうし」
「はは……まあ、お手柔らかに頼むよ。神祇魔法も使えるんだっけ？」
「うちは、どちらかと言えば白川流に近いけどな」
そういうのって、大抵口に出したら負けフラグになるのがお約束だと思うので、考えるのは新人戦の試合が終わってからでいい。それまでは競技に集中する。
例えば、将輝の性格なら「俺は一条家の跡取りとして圧倒的な力で優勝しなければならない。そして、優勝したら最終日のダンスパーティで、正々堂々と司波さんにダンスを申し込もう」とか思いそうなのが目に見えている。
あくまでも自分の予想ではあるが、我ながらカッコつけてるようにしか聞こえない。けれど、将輝なら十中八九考えそうだから困る。
こちらとしては、異性との向き合い方（主に接し方や話し方）を教えた側と対峙するわけだが……正直に言って、何か腹が立ってきたな。直接戦闘ありなら美嘉姉さん直伝の関節技で沈めてやれたのに……そんな風に思ってしまう自分に思わず苦笑した。
「どうしたの？」
「元から恵まれてるリア充のことを思い出したら、爆発させたくなってきた」
「物騒なことを言わないでくれるかな……」
別に幹比古のことを言ったわけではないのだが、彼の言葉を聞いて「すまない」と詫びつつ、それ以降は表情に出さないよう努めた。
ともあれ、十師族としての力――三矢家の力を見せて来いと元に言われた以上、躊躇う理由はなくなった。将輝に恨みはないが、本気でやらせてもらおうと思う。念のためだが、会場を壊さないために威力を加減するのと手を抜くことは違うと言っておく。
◇　◇　◇
競技の順番は本戦と同じプログラムで進められる。種目はスピー

ド・シューティングの予選から決勝まで。バトル・ボードは予選が行われる。とはいえ、本戦とは違って開会式はないため、スピード・シューティングは午前が女子、午後が男子となる。

試合中にＣＡＤの調整はできないが、試合の合間に選手のコンディションを見て細かな調整を行うのはエンジニアの仕事だ。

技術スタッフは基本的に担当する選手の傍に付くことが多い。そのため、クラウド・ボールなどの試合数が多い競技ではメインとサブの二人が担当することになる。

同じ競技で複数人の体制が起きているのだから、同じエンジニアが同日の異なる種目を担当することはできない。

「それで、悠元は何故技術スタッフのブルゾンを着ているのですか？」

「１日目のサブエンジニアを達也から頼まれたからな。これに関しては気付いたら発注されてた」

「気付いたらって……」

一高の天幕で、燈也の問いかけに対して悠元はそう答えた。本来技術スタッフの定員は８人だが、別に選手がスタッフを兼任してはならないというルールはないし、それによって技術スタッフの補助が手厚くなったとしてもルール違反にはならない。

現に三高の場合は選手が作戦スタッフを兼任しているため、それに準えたような形だ。大体、自分でＣＡＤ調整できる真由美や克人のような存在もいる以上、実質的にその分の技術スタッフを増やしているようなものだ。

ようは代表選手およびスタッフの元々の定員や一人あたりの出場する種目数、エントリー人数さえ超えなければ、その辺の融通は各校の戦略として黙認されている、ということでもある。流石に本戦メンバーの２、３年生を新人戦の選手として持ってくることはできないが。

なお、技術スタッフ関連の前例を作っていたのが、悠元の姉にあたる佳奈や美嘉と言う存在であり、その二人をある意味育てたのは紛れもない悠元である。悠元本人としては「そこまでの技量を身に着けたのは本人たちが努力した結果である」と言い切っていたが。

「燈也に関しても急で申し訳ないが、俺が担当することになった。他の男子二人は固辞してきたから、元から担当している先輩に任せたけど」
「それは構いませんが……森崎もですか？　達也とはともかく、悠元とは特に蟠りもないはずですよね？　モノリス・コードは同じチームメンバーですし」
「アイツは負けず嫌いだからな。俺の力を借りるのが癪に障ったらしいけど……もう一人の男子のほうは、俺がＥ組の教室に出入りしていたことから毛嫌いしているようだ」
　悠元の場合は、恐らく真由美あたりが手を回したと思しき技術スタッフの着るブルゾンが準備されていた。ここに来る際、真由美だけでなく深雪や雫に写真を撮られる羽目になったのは言うまでもない。
　真由美はともかく、後者の２人に関しては競技も控えているので、彼女らのモチベーションやメンタルに貢献できるならと甘んじて受けることにした。
「強制はしないんですね」
「下手に強制して結果が出なくて、それで八つ当たりされるのも困るからな。ＣＡＤ調整は双方の信頼関係が一番影響しやすいから」
　燈也は、起動式の供与に加えて悠元のＣＡＤ調整スキルを一度体験しているので、悠元がＣＡＤ調整をしてくれること自体は既に受け入れていた。更に言うなら、燈也の彼女である亜実が優勝できたのも悠元から提供された魔法あってこそなので、燈也から見た悠元の評価は極めて高い。
　燈也やバトル・ボードに出場する鷹輔以外だと、森崎や他の男子に自分の調整を受け入れさせるのは難しいだろう。ＣＡＤ調整は選手とエンジニア双方の信頼関係が重要だ。そこで十師族として自分から押し付けても良い結果が出るとは思えない。
「それは確かに。そうだ、桐原先輩が使ってた『アレ』を使いたいんですが」
「魔法を変えなくていいんなら調整データの書き換えでいけるけど、それでいいか？」

「ええ。それでお願いします」
２日目から５日目までは、自身の出る種目の関係で補助はできないし、本来は１日目も天幕に詰める形となる予定だった。だが、深雪の本戦ミラージ・バット出場の関係で達也に負担が掛かりすぎていることを鈴音が指摘し、それを聞いた真由美が悠元に白羽の矢を立てた。悠元の代わりとして、天幕には服部が詰める形となった。
その為、女子スピード・シューティングでは雫を、男子スピード・シューティングでは燈也を担当することになった。女子スピード・シューティングのメインエンジニアである達也が雫の担当を悠元に任せ、雫も悠元が担当することを喜んでいた。その辺には雫が使うことになる魔法と〝例のＣＡＤ〟も関係している。
選手として活躍するよりも先にエンジニアとしてデビューするのは複雑な心境ではあったが、決まったことに文句を言っても仕方ないと割り切った。悠元が雫の担当をすることに対して深雪が若干不機嫌となったため、諌めることになったのは言うまでもないが。
「まあ、雫も燈也も俺が関わってるから、いくらか気分が楽だけど」
「改めてよろしくお願いします、悠元。ところで、エイミィのことなんだけど……」
原作だと、英美は寝不足で調子が狂っていたことがあった。アイス・ピラーズ・ブレイクでも同じ現象が見られたので、ああ見えて繊細な性格であると判断した。その為、ちょっとしたものを燈也経由で英美に渡していたのだ。
「アレ、効き目が強すぎたか？」
「いや、グッスリ眠れたって言ってたけど……違法のものとかじゃないよね？」
「問題ない。アレは詩鶴姉さんが調合した睡眠薬だよ。本人は薬剤師の資格も持ってるから、れっきとした合法だよ」
「……三矢家って、魔法使いの家柄ですよね？」
三矢家は、第三研の関係から国防軍に所属する軍人魔法師とも関わりが深い。物を壊すということは物を治すことにも長ける……その意味で、応急処置などの治療魔法は一通り修得することが義務に近

い。
魔法だけでなく薬などの知識も学ぶことになるわけだが、自分の場合は瞬間記憶のために辞書をパラパラ捲ったらお終いという手軽さ……分かってはいるが、これでいいのかなと疑問を浮かべることは多かった。
燈也の問いかけに対し、悠元はキーボードを叩きつつ答えた。
「三矢家は第三研の絡みが強いからな。軍人の魔法師と手合わせなんて結構あったし、その関わりで医療技術や医学の知識は嫌と言うほど学んできたよ」
「成程。にしても、選手よりエンジニアとしてのデビューが先になったことに関して、悠元は正直どんな気分です？」
「上手くは言えんな……魔法師というより魔工技師としての評価になるし、それが十師族としての力を示すことになるかと言われたら、俺には判断できないとしか言いようがないが……おや？」
すると、視線の先に作業をしている達也と隣に座るほのかの姿があった。二人の会話は『聴覚強化』で全て聞こえている。達也がほのかの試合を見に行くと言い、それを聞いたほのかは「約束ですよ！」とても嬉しそうにしていた。それを見ていた悠元は、自分の操作する端末のモニターに目線を向けつつ小声で呟いた。
「……燈也。あそこにいるのは『女誑し』か？」
「悠元、君がそれを言う？」
「返す言葉もないのは分かってるから、それは言わないでくれ」
その言葉に燈也は目を見開いて驚いていた。どうやら自覚するようになったことに対してだが……それを見た悠元は、苦笑を滲ませつつも自分の担当する二人の起動式とＣＡＤ調整を進めるのであった。

九校戦四日目②

私が悠元と出会ったのは3年前に遡る。

時期は8月下旬。珍しく両親に連れられる形で、弟の航(わたる)も一緒だった。

行先は群馬にある上泉家――魔法師を志す者ならば、少なくとも一度は聞くことがある武術の家系。武術に限らず、魔法使いの家系としてもその名を知らぬ者はいない。聞けば、母の実家である鳴瀬家と懇意にしていた家柄だと聞き及んでいたが、私はおろか両親もその家の現当主と会ったことがなかった。

その当主から「当人だけでなく、家族とも直に会いたい」という手紙が届き、父は入っていた予定を全てキャンセルするほどの慌てようだった。何せ、上泉家現当主こと上泉剛三は、あの第三次大戦を生き抜いた〝英雄〟なのだから無理もないと思う。これには母も苦笑いを浮かべていたけど。

上泉家は新陰流剣武術という総合武術を広めており、本屋敷はその総本山ということもあって、隣接する道場の敷地を除いてもかなり広かった。私の家である北山家の屋敷とは様式が異なるが、その広さに圧倒されてしまった。まるで昔の武家屋敷に足を踏み入れたような感覚だった。

案内ということで姿を見せた若い女性――その時は知らなかったが、彼女が悠元の姉である三矢詩鶴さんだった。彼女の案内で最奥の広間に通されたところで、母がその奥に座る人に対して殺気を向けたのだ。魔法師として警戒したのかもしれないが、それはその人も感じ取り、彼はいつの間にか木刀を投げつけていた。

それは躱せないと思った瞬間、木刀は私たちと奥にいた人の間に立っていた少年が掴んでいたのだった。

「爺さん、アンタは客人に向かって木刀投げつけるとか正気か!?」

「いきなり殺気を飛ばされて、つい反射的にな」

「俺が言うのもおかしいけど、少しは弁えろ!」

すると、少年は最奥にいた40歳代の人を「爺さん」と呼びつつ、先

ほどの行為を咎めていた。そこに、私たちを案内していた人が二人に近づき、少年から木刀を受け取ると、最奥にいた人に向かって容赦なく振りかざした。
「はーい、反省してください、ねっ!!」
「ふごおっ!?」
まるでゴルフのドライバーショットでもやっているかのように、私たちから見て左にある庭の池に吹き飛ばされる中年男性の光景に、私たち全員が呆気にとられていた。この家の常識はどこにあるのかと問いかけたかった。
男性を吹き飛ばした女性は「すみません、只今お席を準備いたしますので、その辺に座っていてください」と言いつつ、少年にテーブルと座布団の準備をするよう言い含め、少年もそれに頷いてその場を後にした。
その後の会談で、吹き飛ばされた当人こそ上泉家現当主兼新陰流剣武術総師範こと上泉剛三であったと知らされた。見るからに４０歳ぐらいにしか見えず、影武者かと思ったが紛れもない本人だと断言していた。魔法を極めると若さを保てるのだろうかと思った。
何を言っているのか分からないだろうが、私にも分からない。少なくとも、それが私にとっての少年――――悠元との初対面であった。その時のインパクトが強すぎて、一生記憶からは消えないだろうと思う。
その当時は「長野佑都」と名乗っていたが、悠元の魔法技能は非凡という言葉の枠組みで収まるものではなかった。彼の魔法をいくつか見たことがあるが、母に聞いたところだとＡ級ライセンスレベルの魔法を使いこなしているとのことだった。
それまで私とほのかしか同世代に同レベル以上の人間がいなかったところに、彼という存在が現れたのだ。そのことをほのかに話すと半信半疑だったのは言うまでもなかったけど、これには悔しさというよりも嬉しさが勝っていた。
ある意味常識外れの会談をした後日、北山家の屋敷で開いたパーティーに先日のお詫びということで悠元がやってきた。母はどこか

警戒していたが、父と弟は彼とすっかり打ち解けていた。私とほのかも魔法のことだけでなく、色んな話をした。今にして思えば、魔法のことや実家のことを抜きにして話した男子は、弟以外だと悠元が初めてだった。

なお、悠元とは魔法科高校の受験で会わなかった(本人に聞いたら、別の場所で受験していたため)が、私とほのかは深雪の存在に驚くことになったため、その時は彼のことを忘れていた。

魔法科高校入学式の日。新入生総代が三矢家の人間ということで、どういう人なのか少し気になっていた。入学試験で深雪が見せていた圧倒的な才能と実力。それすらも上回るのは一体誰なのだろうと。尤も、答辞は深雪が読んでいたためにその姿を見ることはなかった。

それとは別に、気が付けば悠元(その時は佑都だと認識していた)の姿を探していた。家のパーティーで彼が私と同じ学年だと聞き及び、あれだけの力を持ってるのならと思ったのだが……彼はいなかった。入学式に出ていないのだから当然なのだが、その時点で私は少し残念だった。

これにはほのかも同情してくれたけど、当の本人は深雪や達也さんに対して色々反応して大変だった。達也さんが二科生だったことに若干ヒステリックな反応を見せていたぐらいだ。その理由を聞いてはいたが、その辺は〝光〟に敏感なほのかだからこその理由とも言えた。まあ、彼女の奮闘(?)のお蔭で深雪ともお近づきになれたから、結果的に良かったと思う。

翌日のオリエンテーションで、ほのかの機転というか勢いのある行動で深雪と一緒に行動することになった。ただ、その時から同じクラスの森崎が深雪のことを狙ってか、私とほのかを無視してやたらと深雪に話しかけていた。しかも、数人の取り巻きを連れてだ。

森崎が百家支流の人間だということは知っていたが、彼の一科至上主義には付いていけなかったし、実力で言うなら私やほのかのほうが上であると思う。3人寄れば派閥が出来るとは言うが、別に私とほのかは深雪にそのような考えで近付いたわけではない。この国有数の財閥グループの娘である私が言ったところで何の説得力にもなって

ないけど。
その彼は二科生――――達也さんや彼のクラスメイトもとい後に友人となる西城（レオ）、エリカ、美月に対して一方的な因縁を吹っかけていた。二科生は「補欠」なんだから大人しくしていろと……無論、校則にそんな上下関係の順守は存在しない。トラブルを避けるために昼食の時は達也さんたちのほうから大人しく去って行った。
放課後、下校途中の深雪に森崎達がまたちょっかいをかけてきた。達也さんと深雪が兄妹なのは深雪から直接聞き及んでいたが、その二人が仲良く帰るところを森崎達が気に入らず、口を出してきたのだ。
エリカ達と一触即発の状態で、双方共にＣＡＤまで持ち出し、森崎だけでなく数人の一科生まで起動式を展開していた。これを見たほのかが閃光魔法を使おうとしていたその時、魔法の起動式が一つ残らず吹き飛ばされ、起動式破壊の影響で後ろに飛ばされたほのかを咄嗟に受け止めた。
そして、エリカと森崎のＣＡＤを取り上げていたのは１人の一科生――――そう、紛れもない悠元本人だった。
これには森崎が噛み付いた。確かに、彼（長野佑都）は上泉の名字でなかったし、百家支流の人間である森崎のほうが影響力を持つことになる。だが、彼は森崎の言葉を「半分正解で半分間違い」という返しで動揺させた。そして、彼の言い放った自己紹介の言葉は、その場にいた誰しもを驚かせた。
十師族・三矢家の人間で、今年度の新入生総代。あれだけの魔法技能を持っているのだから、十師族直系に匹敵する人間だと思っていたが……本当に十師族だとは思いもしなかった。
騒ぎを聞きつけてやってきた七草会長と渡辺委員長に対し、率先して前に出た彼の取り成しで事無きを得て、森崎達も大人しく引き下がった。そこまでは良かったのだろう。
達也さんとのやり取りで２人が知り合いだということは少し驚いたが、それ以上に驚いたのは……深雪が飾ることのない本当の笑顔で悠元に抱き付いたことだ。
この時、私は深雪に嫉妬していたのかもしれない。自分の知らない

ところで悠元と仲良くなったことに対して、私の心の中で靄のようなものが確かにあった。それに、深雪は私よりもスタイルがいい……悠元のことを内心で「バカ」と呟いていた。

４月のブランシュ絡みの一件で、私とほのか、それにエイミィの３人で達也さんを助けようとしたのだが、キャスト・ジャミングによって絶体絶命のピンチに陥った。その時割って入ってくれた悠元と深雪のお蔭で事無きを得たが……自分の無力さがとても悔しかった。深雪も凄かったが、悠元に至っては魔法すら使わずに体術だけで相手を捻じ伏せていたのだ。

その時の悠元の後ろ姿に、私は惚れていた。それから色々アプローチは掛けているのだが、当の本人には「糠に釘」のような状態だった。思い切って深雪のような方法を取っているのだが、それに深雪も気付いたように同調していた。

正直な話、深雪は悠元に対して恋心を抱いている……私の目にはそう見えていた。今回の九校戦では、新人戦アイス・ピラーズ・ブレイクで深雪と対戦することがあるかもしれない。私にとって、深雪は友人でもありお互いに切磋琢磨するクラスメイトだが、「好敵手」であり……「恋敵」とも言える。

そのことを考える前に、まずは新人戦スピード・シューティングで優勝する。そのお膳立ても達也さんがしてくれている。悠元も私の使う魔法の改良を担当してくれた。それだけでも十分嬉しかったのだが、これは正直予想外だった。

◇　◇　◇

一高の控室で、悠元は端末のキーボードを叩いていた。とはいえ、殆どの調整や作戦プランは達也の手によるもので、悠元がする仕事はハード面での動作確認や雫のコンディションに合わせた微調整程度ぐらいしかない。

目立つことを嫌がる達也だが、一度引き受けたことに関しては責任をもって最後までやりきるタイプの人間だ。彼が担当している１年女子の選手――厳密には深雪、ほのか、雫に英美の４人を除く残りの面々だが、達也が同学年の二科生ということもあって多少なりとも

アレルギー反応に似たものはあった。
だが、そんな懸念も達也は選手が使っている起動式の見直しや作戦立案に練習メニューの作成、加えて彼が調整したＣＡＤを使っていくことによって「見事に吹き飛ばした」というわけだ。
最終調整を終えたスピード・シューティング専用の小銃形態ＣＡＤを雫に手渡し、その動作確認をしてもらう。
「何か不具合があれば、今のうちに遠慮せず言ってくれ」
「大丈夫。寧ろ、自分のより快適すぎるぐらい」
雫の使っているＣＡＤは、国内でも五指に入るレベルの技量を持つ魔工技師がメンテナンスを担当している。その辺りのことは悠元も知っているというか、実際にその技師と顔を合わせたことがある。それほどの魔工技師の伝手は、雫の父親に起因する部分が多いし、母親もその要因である。
上泉家と雫の母親の実家である鳴瀬（なるせ）家は近所付き合いに近いレベルでもあったのだが、３３年前の四葉家関連の事件を機に一度疎遠になっていた。３年前を機に北山家の一家を招き、その流れで鳴瀬家とも縁を結び直した。
その辺の話は置いといて、雫は自分が持っているＣＡＤを見た後、悠元に視線を向けた。悠元の整った顔立ちを改めて見て、思わず頬が赤く染まっていくのをその熱で感じ取ってしまい、雫は俯いたのだった。
「雫？　具合でも悪いのか？」
「……悠元はズルいよ」
「その台詞、最近よく聞くよ……まあ、そんな冗談が言えるなら大丈夫だと思うが」
悠元は、雫絡みのことは練習によく付き合っていた達也に色々話を聞いているのだが、雫が達也を北山家のエンジニアとして雇いたいとかれこれ１０回以上は言っていると聞き及んだ。そこで悠元に飛び火しなかったのは、偽名とはいえ悠元がＦＬＴの専属技師として働いている関係から、達也が抑えてくれていたお蔭だった。
尤も、達也からは「その礼は俺にじゃなく、深雪に対する形で返し

てくれ」と言われたが。つまり、お兄様公認……ということは競技の前に考えることじゃないな、と一旦棚上げした。今は雫がスピード・シューティングで優勝するためのサポートに集中するのが最優先、と悠元は気を引き締め直した。

「冗談じゃないよ。ホント、悠元は朴念仁……あっ」

その雫の言葉に観念したのか、悠元は立ち上がって雫の頭を撫でていた。悠元としては、妹である詩奈を宥める際にそうしていることを雫にしてみた。

撫でられている雫の反応はというと、擽ったそうな表情を見せていた。けれども、雫にとってはそれだけでも嬉しかったようで、悠元は内心でホッと一息吐くような心境だった。

「今は雫の言葉に対して何も言えない。けれど、雫の担当エンジニアとして全力は尽くす。それで納得してもらえるか？」

「……分かった」

その言葉が聞けただけでも十分、と雫は漸く納得したような表情と答えを返していた。試合の前とは思えないような会話だが、これで雫本人のコンディションが保てるのなら安いものである。尤も、これによる代償を後で支払わなければならないことに、悠元は内心で溜息を吐いたのだった。

「雫、頑張れ」

「うん、頑張る」

別に嫌と言う事柄ではないし、自分の責任だということも理解している……と悠元はそう思いながら、控室を出ていく雫を見送っていたのだった。

九校戦四日目③

「隣空いてる？」
「あら、深雪。空いてるわよ。どうぞどうぞ」
深雪はエリカに対してそんなやりとりをしているが、実際のところは深雪とほのかの座る場所取りをしていただけである。
態々両端にレオと幹比古がいるにも拘らず、そんなことも露知らずに下心見え見えの連中が訊ねて来たので、事あるごとに殺気込の視線プラス嘘八百でエリカが追い払って確保していた席だ。
「ほのかさん、試合は大丈夫なんですか？」
「だ、大丈夫です！　私のレースは午後だから！」
美月の問いかけにほのかはそう返すも、上擦った口調と合わせて、見るからに緊張しているのがバレバレであった。そんな様子を見て深雪がほのかに視線を向けつつも落ち着くように諌めた。
「ほのか、今から緊張していたら試合までもたないわよ？」
「うっ……分かってはいるんだけれど」
「大丈夫よ、ほのかなら。お兄様も仰っていたでしょう？　あんまり考えすぎないようにってこちらの応援に来たのだから、今は雫の応援をしましょう」
ほのかに対する気遣いは達也の考えと深雪の考えが一致したものだった。前者は技術スタッフとして、後者は同じクラスメイトとしての視点の違いだが、生真面目で自信がなさすぎるほのかのことを考えれば、気を紛らわせるのがよいと考えたからだ。
ほのかも一応は納得して席に座った。
「そういえば、燈也さんは？」
「先輩方に引っ張られていったぜ。ま、人の恋路に何とやらって奴だ」
燈也は亜実に連れられる……いや、あれは強制連行に近かったとレオは感じていた。だが、燈也自身も嫌とは感じていなかったようだし、彼は午後から試合があるので、余計に疲れることは避けたのだろうと思った。
「アンタもそういう気遣いはできるのね」

「エリカちゃん、大人しく観戦しましょうか？」
「あ、あはは……（美月がドンドン逞しくなっていくわ……）」
こういうやり取りに慣れて来たのか、美月の凄みのある笑顔にエリカもたじろいで苦笑を浮かべていた。これにはレオも顔を背けつつ苦笑していた。すると、その美月が深雪の様子に気付いて声を掛けた。
「そういえば……深雪さん、大丈夫ですか？」
「？　美月、私は大丈夫だけれど？」
「あ、いえ……ちょっと、〝揺らぎ〟みたいなものを感じてしまいまして……」
笑顔でそう答える深雪から、その奥に秘めた何かが垣間見えたのか、美月は自分の「目」で視えたものをそれとなく感じ取った、と話した。すると、そこで幹比古が悠元の姿が見えないことに疑問を持った。幹比古たちは九校戦のパンフレットを手に持っており、出場種目は既に把握していた形になる。
「そういえば、悠元はまだ試合がない筈だけれど、やっぱり他のことで忙しいのかい？」
「実は、悠元さんが急遽雫のエンジニアをやることになりまして」
「それって、昨日のニュースで言っていた深雪絡みのことと関係あったりする？」
幹比古の問いかけを聞いたほのかが説明すると、それにエリカが追加の質問をした。昨日のニュース――それは、深雪が本戦ミラージ・バットに出場することであり、それに反応した深雪が呟き始めた。
「ええ、そうよ。お兄様に負担が掛からないように、という先輩方のご配慮はとてもありがたいけれど……あの会長は……」
深雪としては、達也の負担を軽くしてくれる配慮はとても嬉しかった。それだけ兄の功績を認めてくれているという裏返しとも言えたからだ。だが、その代わりに駆り出された悠元と観戦できる時間を奪った真由美に対して、妬みに近い何を抱いていた。
とはいえ、こうなったのは本戦に自分が出場することも関与しているため、その決定に異を唱えることが出来なかった。

加えて、担当するのが雫であることも深雪の不機嫌に拍車を掛けていた。達也としては別に悪気があったわけではなく、純粋に技術者としての視点から一番仕上がっていて悠元も練習に付き合っていた雫を選択したことは深雪も理解しているし、そう聞いている。悠元に関しても急遽決まったことであり、勝手が分かっている雫を担当するのは無理からぬことだった。

ただ、そう理解してはいても、納得できない一線というのがある。雫は悠元に対して恋慕しているのは確かであったし、アイス・ピラーズ・ブレイクの練習でも悠元は雫の面倒を見ていたと達也から聞いていた。

深雪が魔法技能に関して突出した存在であっても、恋愛はまた別の話。アプローチの観点では寧ろ雫にリードされているような状況に、深雪は「本気で負けたくない」と感じつつあった。今思えば、懇親会の夜にキスでもしておけば良かった、と内心で後悔していた。

ある意味ぶっ飛んだ思考が深雪の中を駆け巡っているが、これは深雪本人の事情も深く関係している。深雪（プラス達也もだが）は隠しているが、「十師族（アンタッチャブル）・四葉家」の直系にあたり、深雪は四葉家次期当主候補筆頭である。

四葉家現当主は昔の事情により子どもを産み育てられず、深雪の母親も政略結婚で達也と深雪を授かっているため、恋愛経験が皆無に近い。加えて、兄である達也も知識として恋愛を語ることはできるが、本人の感情が乏しいこともあって恋愛経験はない（達也の場合は深雪のガーディアンという事情も含んでいるが）。

おまけに、深雪に近付く人間は深雪の美貌に惹かれて群がるような下心の持ち主ばかりだし、母親のガーディアンをしていた人もまともな恋愛経験がない。現在その母親のガーディアンをしている人物はまだ恋愛感情を持っていないため、彼女から教わるというのも難しい。分家筋の人間に教わろうとしても、真っ当な恋愛観など皆無に近い。

そもそも、魔法使いとしての力を保持するためには、お互いに強い力を持つ者同士が結ばれるほうが後世に強い力を残しやすい。その

ことから恋愛結婚自体難しいため、人口の大多数を占める非魔法師の世間一般的な恋愛観を求めるのが難しいというのもあるのだが。

結論を述べると、書物などからでしか恋愛観を学ぶことが出来なかった「箱入り娘」同然に近い状態だった深雪に対し、真正面から接した初めての異性――――初恋の相手が悠元なので、恋愛経験自体は皆無に等しかったというわけだ。いくら兄を代わりに見立てても、実際に本人と接するのは勝手が違う。

閑話休題（はなしをもどそう）。

そんなことを考えていながらも笑顔を見せている深雪に対し、隣に座っているほのかが内心で助けを呼んでいた。

（み、深雪が怖いよー！　悠元さん、雫、助けてー!!）

「……何か、心なしか寒く感じるんだが」

「……アンタと意見が合うのは奇遇ね」

魔法が漏れて達也と悠元に迷惑を掛けないように、という自制心は辛うじて働いているため、観客席が冷凍空間になることはない。だが、今にも「フフフ……」という笑みと共に冷気というか寒気が漏れてきてもおかしくはない有様で、これにはレオが小声で思わず口に出した。それを聞いたエリカも小声でポツリと零したが、地獄耳と言わんばかりに、深雪がレオとエリカに視線を向けた。

「お二人とも、何か仰いましたか？」

深雪の笑顔に対して「いいえ、何も」と2人揃って返したことに、幹比古と美月は余計なことを聞いてしまったかと引き攣った笑みを零し、ほのかに至っては自分の試合に対する緊張が吹き飛び、深雪に対して怯えるような有様だった。これでは、ほのかよりも深雪が大丈夫なのかということになる。

多分、この状態を見越した上で、達也は深雪とほのかをスピード・シューティングの観戦に行かせようと仕向けたのだろう、と幹比古は言葉に出すことなく推察した。

すると、深雪が何かに気付いてポケットから通信端末を取り出していた。そのメールを読み進めていた深雪だったが、黙々と画面を操作して通信端末をしまうと、深雪から感じていた先程の空気がすっかり

収まっていた。
「深雪、どうかしたの？」
「何でもないわよ、ほのか。ほら、雫の試技が始まるわ」
「あ、うん……（多分、悠元さんからのメールだよね……ありがとう、悠元さん）」
　ほのかは今の事態をそれとなく察していたであろう悠元によるものであると推測し、ほのかだけでなくエリカ達も悠元に対して内心で感謝の言葉を述べていたのであった。もし、ここで深雪に声を掛けようなどという不逞の輩がいたら、間違いなく氷像が出来ていただろうと思いつつ、雫の試技を見守るのであった。
◇　◇　◇
　文字通り「ヒヤリ」とした一幕が繰り広げられている一方、そこから離れた席に3年生組――――真由美、摩利、鈴音……そして、亜実と燈也もその場にいた。競技が終わって燈也に甘えている亜実を見て、真由美は呆れたような表情で見ていた。
「まったく、燈也君は午後から試合だというのに……」
「メンタル面でのケアをしてもらってると思えば、非常にありがたいことではありますが」
　本来一高の天幕に詰めていなければならない側の真由美と鈴音だが、真由美は何があってもいいように音声通信用のレシーバーを耳に着けており、鈴音は「強制オフ」ということで観戦しに来ていた。
　尤も、鈴音の場合は出場する選手の中に自分の元身内がいることも理由に含まれているが。
「というか、真由美の場合はある種の『嫉妬』だな」
「その意見には同意します」
「ちょっと!?　二人して私が誰に嫉妬しているって言うの!?」
　摩利の言葉に鈴音も同意し、これには真由美が声を荒げて反論した。すると、亜実がいつの間にか燈也に甘えるのを止めて、真由美の隣に移動して肩に手を置いていた。燈也もそれに連れられる形で席を移動した。
「真由美、いくら自分が生徒会長で代表チームのリーダーとはいえ、そ

の権限を使って悠元君と司波さんを引き離そうとしているようにしか見えないよ？」
「はい!?　私はそんなこと微塵も思ってないわよ、つぐみん！」
（と言いつつ、顔が真っ赤になってますけど……）
　亜実の爆弾発言ともいえる指摘に、真由美の顔はみるみる赤くなりつつも、必死に「いくら私でも、そんなことはしない！」と弁解していた。本人の背の小ささも相まって、周りには姉に対して妹が駄々をこねているようにしか見えない、と燈也は思ってしまったのだった。
　身長に関しては燈也と真由美が同じぐらいで、しかも黒髪で瞳の色が同じ赤色をしている。二人の関連性は、家自体異なるが同じ十師族というぐらいで実際に血の繋がりはないのだが、前に亜実が冗談半分で真由美のようなウェーブがかった長髪の鬘を燈也に被せたところ、スタイルを除けば見事なまでに真由美と瓜二つになった。
　その画像を見た摩利と鈴音も「真由美と生き別れた姉妹？」という感想を抱いた。真由美自身も、それを見たときはドッペルゲンガーの線を疑ったらしい。それが燈也だと知ったときはショックを受けていたが。
「恋で絶賛悩んでいる真由美はさておくとして、アイツのエンジニアとしての腕を実戦で見るのは、これが初めてだな。北山には悠元君が調整を担当するのだったか」
「ええ。北山さんの練習にも度々付き合っていたと司波君から聞いています」
「摩利ってば、勝手に人を恋煩い扱いしないでよ……って、つぐみんも何で笑うの!?」
　半ば冗談も交じっている摩利の言葉に続いて鈴音がそう述べると、からかわれたことに対して恨みがましく呟く真由美の姿に、亜実は顔を背けて笑いを零していた。とてもチームリーダーに対する扱いではないな、と燈也は冷や汗を流していたのだった。すると、摩利が燈也に話しかけてきた。
「真由美から術式関連は聞いていたが……燈也君は、悠元君のエンジニアの実力を知っているのだったな？」

「急遽ですが、自分も担当してもらうことになりましたから。彼は『達也には一歩及ばない』と自己評価していましたが、完全マニュアル調整ができるだけでも十分凄いのですが」
この場では口に出さなかったが、燈也は射撃魔法関連の術式供与も受けている。様々なシチュエーションを想定しており、燈也の魔法特性に合わせた調整がなされている。そのどれもが本当に使いやすく、自分もそれなりに訓練は積んできているとはいえ、この短期間に魔法が上手くなったのかと錯覚しそうになったほどだと燈也は感じていた。
「五十嵐さんの『水中遊泳（アクア・ドルフィン）』、会長や桐原君が使った『四重反転（クワドラプル・バウンド）』も相当なものですが、悠元君に聞いたら〝ちょっとした改良〟程度だそうです」
「え？　あれでちょっとなの？」
「ええ。どうやら、かなり大掛かりな起動式をいくつか用意しているそうで。尤も、それは競技が始まれば分かることかと」
鈴音の言葉を聞いて、燈也は自身に提供された中で最も大掛かりな魔法のことがすぐに頭に浮かんだ。加えて、本人も選手として出場するので、鈴音の発言はその魔法のことも含んでいるのだろうと推測できた。
魔法技能自体も規格外だが、それを生み出せる発想力の強さに燈也が抱いた印象は「悠元を敵に回さないほうがいい」という結論だった。
「司波君については、1年女子の選手達から好評のようです。自分のCADを持ち込んでいる選手もいたぐらいですから」
「おいおい……競技に差支えるんじゃないか？」
「その辺はうまくコントロールしているようです。いざとなったら悠元君にも頼むでしょうから……会長、彼にこれ以上の負担は厳禁ですよ？」
鈴音は摩利の指摘にしっかりと答えつつも真由美に対して釘を刺した。何せ、本人の我侭みたいなもので女子クラウド・ボールの手伝いを2人にさせていたのだから、これ以上は彼らのやるべきことに支障を来たすと断言した。

「リンちゃん、私は何も思ってないんだけど？」
「聞くところによると、悠元君に会長のＣＡＤの調整をやらせていた、と司波君と渡辺さんから報告がありまして」
「ちょっと達也君に摩利ってば、ばらさないって約束した……てへっ」
「てへっ、じゃないでしょう！　悠元君だって明日から試合なのよ！」
　摩利が怪我で無理出来ないため、彼女が説教するということはなかった。だが、その代役として亜実の鉄拳と説教が真由美に炸裂したのだった。その痛みに頭を抱えて蹲る真由美を見て、亜実が先程言った〝推測〟に繋がっているのだと燈也は一人納得していたのだった。

九校戦四日目④

競技場の選手用出入り口から少し離れたところで、悠元はシューティングレンジに立つ雫の様子を見ていた。すると、近付いてくる気配に気付く。しかし、それは見知った気配であったため、悠元は視線を逸らさずに呟いた。

「達也、そっちはいいのか？」

「大分楽になったからな」

どうやら達也が担当している英美と和実の調整は割と早く済んだようで、試技まで時間があるということで雫の様子を見に来ていた。すると、達也が小声で問いかけてきた。

「ところで、昨日の女子バトル・ボードの件だが……あれをどう見る？」

「明らかに委員長を狙ったのだろうな……別の要因で棄権になったけど、昨年通りのタイムなら確実に事故を起こしていたからな」

もし、美嘉が基本的な走法や『ブリッツ・ドリフト』を教えていなければ、確実に原作通りの事故を起こしていただろう。新人戦バトル・ボードについては、達也がこれの対策も考えてほのかにシルバー・ブロッサムシリーズを予選から投入する方針に切り替えた。加えて女子バトル・ボードはあずさが担当するので、抜かりはないだろう。

「対策としては気休めかもしれないが、ミラージ・バットのＣＡＤチェックは万全を期したほうがいいだろう。新人戦と本戦の予選からシルバー・ブロッサムを投入するぐらいだけど」

「それが一番の現実的な案になるか。そうなると、モノリス・コードも気を付けたほうがいい」

「忠告感謝するよ」

そして、雫が構えを取る。

スタートの合図であるシグナルが全て灯り、雫は魔法を発動させたのだった。

◇　◇　◇

スタートと同時にクレーが射出され、得点有効エリアに入った瞬

間、クレーが粉砕されていく。だが、雫が狙いをつけているという訳ではなく、彼女はただ真っ直ぐに構えていた。可視化処理の魔法によって、観客席にいる人間にもそれは当然見えている。
「うわっ、豪快な魔法ね」
「もしかして、有効エリア全域を魔法の作用領域に設定しているのですか？」
「そうですよ。雫は領域内に存在する固形物に振動を与える魔法で標的を砕いているんです」
厳密には目標物そのものに標的を絞るのではなく、得点有効エリアとなる１辺１５メートルの立方体をカバーリングするように、半径６メートルの球状破砕空間を設定し、対象物に振動波を与えるという事象改変領域をポイントで管理している。
スピード・シューティングにおいては、予選から決勝まで選手の立つ位置と得点有効エリアとの距離といったステージに関わる要素が全て同じであり、それは対戦形式となる決勝トーナメントでも変わらない。せいぜいクレーの通るコースが異なる程度だ。そうなると、選手の立つステージに関わる部分を一々変数として入力するのは手間であり、そこを定数化しても何ら問題はない。
更に言えば、威力や持続時間も変える必要がない。
選手は番号で管理されたポイントに魔法を発動させるだけでいいので、ただ引き金を引くだけで思い描いた場所に魔法を発動させられる。魔法の連続発動もマルチ・キャストも自在にできるというわけだ。
尤も、現在雫が使っている『能動空中機雷（アクティブ・エアーマイン）』とＣＡＤは達也が組み上げた予選用であり、決勝トーナメントでは２種類のＣＡＤと悠元が改良した２種類の起動式を準備している。
本来なら考えられない〝３段構え〟だが、これはハードウェア設計において卓越した技能を持つ悠元だからこそできる芸当であり、達也は「完全にカーディナル・ジョージを騙すつもりだな」と意地の悪そうな笑みを少し浮かべてそう呟いた。一応この作戦は鈴音に伝達済みで、彼女も了承している。

その辺は伏せたまま鈴音が『アクティブ・エアーマイン』のことについての説明を他の3年と燈也にしていた。
「――――固有名称は『能動空中機雷（アクティブ・エアーマイン）』。司波君のオリジナルだそうです。大きな起動式なので、北山さんの処理速度があってこその魔法ではありますが」
「真由美の魔法とは、丁度発想が逆だな」
「……よくもこんな術式を考えつくわね」
悠元といい、達也といい、一体どういう発想力を持っていたらそのような魔法が考えつくのか、と真由美は若干呆れていた。
試技は終了して、結果は一切撃ち漏らすことなくパーフェクトだった。
すると、亜実が思い出したように燈也に訊ねた。
「そういえば、燈也もいくつか射撃魔法の練習をしてたよね？」
「ええ。とは言っても、他の人の真似事みたいなものですけど」
燈也は予選で『数学的連鎖（アリスマティック・チェイン）』を使う予定だが、それは三高の選手が使っているものであると事前の偵察情報で確認している。尤も、向こうは燈也の使おうとしている魔法など把握できていないのだが。

◇　◇　◇

「お疲れ様」
試技を終えてシューティングレンジから戻ってきた雫に、悠元はタオルを手渡しつつ労いの言葉を掛けた。いくらエンジニアが選手のサポートを担うとはいえ、そこまでの気遣いはまるでマネージャーだが、その辺を一々気にするほど繊細でもない。
「何だか拍子抜け」
斜に構えているわけでなく、率直な感想として雫はそう述べた。とはいえ、予選を突破できた喜びを隠しきれていない（隠す気があったのかは不明だが）。
新人戦における予選突破のボーダーラインは命中率８０パーセント前後――――つまりクレーを８０個以上破壊するのがカギとなる。尤も、１００点（パーフェクト）を出してしまえばそれ以上の点数はないので、同じくパーフェクトをたたき出した選手が８人も出ない限りはほぼ無条件

で予選突破ということになる。
「死角を突かれる可能性はあったが、杞憂に終わって何よりだ」
「それは流石に意地が悪すぎると思う。達也さんもそうだけど、悠元も心配性だね」
　悠元の言葉に雫は笑みを零しつつそう返した。新人戦の予選で試技やり直しとなるようなクレーの射出コース設定は大会委員にとっても致命的となる。そこまで織り込んだ上での達也が考えた作戦なので、何もないことが一番の喜びとも言えるだろう。
「さて、このまま次の準備に入ってもいいけど、三高の十七夜選手がＢブロックの一番最初の試技になってる。見に行ってみるか？」
「そうだね。それぐらいは見ておきたい」
　このまま決勝トーナメントの準備に入ってもいいのだが、幸いにして１番の強敵ともいえる三高の選手が予選Ｂブロックの一番手で出てくる。雫も同意見だったようで、手に持ったＣＡＤを控室に置いた上で（無論控室の施錠とＣＡＤのセキュリティーロックは掛けておくが）移動していると、雫の予選突破を労おうとほのかや深雪、それに観戦していたであろうエリカと美月の姿もあった。
「予選突破おめでとう、雫」
「ありがとう、ほのか。とはいっても、達也さんと悠元のお蔭だよ」
「俺は単に達也の補助をしてただけだよ。お膳立ては殆ど達也の功績だ……って、レオと幹比古はどうした？」
「飲み物を買いに行かせたわ」
　平然とパシリに使うあたり、力関係のヒエラルキーでいえばエリカが最も強いだろう。厳密にはレオが「どうしてお前の言うことを聞かなきゃいけないんだ」と不満げだったが、余計な諍いを避けるために幹比古が付き合っていた、と美月が補足してくれた。
「そういえば、悠元さん。ありがとうございます！」
「……あー、気にしないでくれ」
　ほのかの言葉で何を言いたいのかを察しつつ、悠元は何でもないと言いたげに返した。やはり深雪の機嫌を直したのは悠元なのかと察する面々に、ご機嫌な様子の深雪。そして、そんな光景で何があった

のかをそれとなく察した雫であった。すると、スピード・シューティング予選Bブロックのアナウンスが聞こえたので、全員で試合会場に移動した。

何とか席は確保できたが、結構人数が多い。これから試技をするのが三高の選手ということもあるのだろう。ここでほのかは自分と雫の間の席が空いていることに気付く。一体誰のためなのかと首をかしげていたが、そこに姿を見せた人物にほのかは思わず頬を赤らめていた。

「空いてるか？」

「うん、どうぞ」

そんなほのかの様子を気にすることなく、達也がその席に座った。すると、ほのかがカチコチになっていることに達也が気付くが、声を掛けようとする前に丁度試技開始のアナウンスとブザー音が鳴ったため、一旦静かにすることとなった。

第三高校1年の十七夜栞――中学時代は別の名字を名乗っていたが、リーブル・エペーでその名を轟かせていた。同じ地域に「稲妻（エクレール）」がいたため、彼女の実力を本当の意味で見抜けていたものは少ないが。

その彼女の試技が始まる。

栞は一番初めのクレーを振動魔法で砕くと、その破片を移動魔法で飛んでくるクレーにぶつけて破壊、更にそのクレーの破片を別のクレーに衝突させる。これらの流れを一つのラインでなく、複数のラインで同時破壊を行使する。彼女の持つ空間認識能力と演算能力あってこその魔法『数学的連鎖（アリスマティック・チェイン）』に会場はまたもや沸き立っていた。

「達也さん、今の魔法も『魔法大全（インデックス）』に載ったりするんでしょうか？」

「いや、あの選手が使った魔法は彼女の空間認識能力ありきのものだから、載ることはないだろう。ただ、個人特有の能力を突き詰めるやりかた――恐らく、金沢魔法理学研究所の訓練を受けているだろう」

「だろうな」

栞の特異的な能力――そこから彼女が研究機関での訓練を受け

ているということを達也は見抜き、それには悠元も同意した。とりわけ悠元からすれば現在も稼働している第三研（魔法技能師開発第三研究所）の訓練を受けていた経験から、そうではないかと述べたに過ぎないが、金沢魔法理学研究所は閉鎖された魔法技能師開発第一研究所の跡地に作られた施設。

中身がそのままとは言い難いが、元第一研の息が掛かっているのは間違いないだろう。第一研究所で行っていたのは「有機物干渉」――――とりわけ人体への干渉をメインに取り扱っていた。魔法師の人体実験は禁止されている（非合法では黙認されている部分も存在する）が、その流れを金沢魔法理学研究所が受け継いでいても不思議ではない。

「詳しいんだね」

「俺の場合は何度か実際に行ったことがあるからな。そこの訓練を受けたこともあるが」

「成程、断言できたのはその経験があったからか。俺は少し伝手がある程度だが」

その時は「カーディナル・ジョージ」が『加重系統プラスコード』の論文発表や学会で研究所にいなかったので、思う存分訓練を受けることができた。とはいえ、新陰流の武術訓練と自身が今までにやってきた魔法訓練が極まっていたせいで、研究所における最大強度の訓練でも物足りなさを覚えていた。人間卒業していないかって？　それは言わないでくれ。

記録されたデータについては彼の両親が明るみに出せないということで破棄してくれた。なので、真紅郎が自分の実力を知らないのも無理はないということだ。なお、その研究所で愛梨や栞とも面識を持った。栞からは「お互い、いい友人になれそうね」と言われたが。

「しかし、『恋愛未経験王子（クリムゾン・プリンス）』と『恋愛下手ショタ参謀（カーディナル・ジョージ）』に加えて『稲妻（エクレール）』に彼女も含めた実力者揃い……高校生の大会にしては三高が反則級（チート）だと思うんだが、どうよ？」

「今、おかしな言葉に当てていたような気がするが……その意見には同意する」

「悠元さんにお兄様、お二人が言えた義理ではありませんよ？」
何でそんなことが言えるのかといえば、以前にも話したが将輝の妹である茜絡みの一件の後、将輝たちとプライベートナンバーを交換して連絡は取り合っていた。三矢悠元を本格的に名乗ってからは、真紅郎としか連絡を取っていない……というか、将輝が単純に掛けてこないし、こちらからかけてやる義理もないというだけだ。その代わりに茜とは連絡を取っている形だが。
その連絡が大体将輝絡み――――異性との付き合いの案件が多いため、これが九校戦後になったらどうなるか予想が付く。一条家の次期当主だというのに、その辺の機敏を学ばなかったのかと……いや、自分の場合は兄がいたし、侍郎の兄とも懇意にしているので、その辺の付き合い方は嫌というほど学んでいた。それが回りまわって「女誑し」になっているのは否定できない事実だが。
それは置いといて、悠元と達也は中学時代に目立った実績がない。悠元の場合は家の関係で名前を隠していたし、達也は深雪のガーディアンである以上、自身が極力目立たないようにしていた。中学時代に輝かしい実績を上げている彼らが反則級だと述べると、深雪は笑みを零して言葉を返した。
「じゃ、そろそろ次の準備に行くよ。悠元」
「そうだな。自分もＣＡＤの最終チェックをしておきたいし。達也も頑張れよ」
「ああ、そっちもな」
雫と悠元はそう断って観客席を立ち、決勝トーナメントに向けての準備をするため、その場を後にしたのだった。

九校戦四日目⑤

悠元と雫は決勝トーナメントの準備をするため、観客席を離れて関係者用の通路を歩いていた。すると、二人の後ろから声が掛けられた。振り向くと、そこには先程試技をしていた栞と、その隣には愛梨がいた。

「第一高校の北山さん？」

「そうだけど、貴女はさっきの試技をしていた…」

「第三高校の十七夜（かのう）です。北山さんの試技は拝見しました。とてもいい腕をされていますね」

単に挨拶、というだけではないだろう。雫が予選Aブロック、栞が予選Bブロックということは、決勝トーナメントで言えば準決勝で当たることになる。すると、そんな悠元の予想が的中したかのように栞はこう言い放った。

「あなたと準決勝で当たるのを楽しみにしています」

「――――そっか、次の試合は勝つ自信があるってことなんだね。わかった、私も準決勝を楽しみにしてるよ」

鞘当てというか実質的な宣戦布告。栞の『アリスマティック・チェイン』は雫の『アクティブ・エアーマイン』すらものともしないという自信。それを感じ取ったのか、雫は滅多に見せない不敵な笑みを浮かべて栞の言葉にそう返した。

すると、栞は雫の隣にいる悠元に視線を向けた。

「無論、あなたもですよ佑都さん。勝負ですので恨みっこなしです……愛梨も何か言ったら？」

「わ、私ですか!? コホン……新人戦優勝は私たち三高が頂きます。悪く思わないでくださいな、佑都さん」

「この競技はメインの補助程度なんだが……まあ、二人の宣戦布告は素直に受け取っておこう」

栞から振られるとは思わず、愛梨は少し取り乱した後にわざとらしく咳払いをし、悠元に対して堂々と優勝宣言をした。それに対して強くは言わず、悠元は愛梨の宣戦布告を受け取るだけに止めた。その二

人が去った後で、雫はジト目を悠元に向けていた。
「悠元、モテるね」
「栞とはお互いに友人同士だと認めてるんだが……てか、『クリムゾン・プリンス』あたりから何も聞いていないのな。明らかに『長野佑都』だと認識した上で話しかけてたようだし……そしたら、準々決勝の準備でもするか」
「そだね。達也さんと悠元の『アクティブ・エアーマイン』で全員度肝を抜いて見せる」
　あと2回変身を残している、というのはフラグになりかねないが。雫の追及にそう返しつつ準備のために移動を再開した。雫も予選で使った『アクティブ・エアーマイン』程度で驚いては困ると言いたげな様子だった。尤も、準々決勝では達也が手掛けた照準補助付き汎用型ＣＡＤを特化型のように使用し、準決勝と決勝では悠元が設計したＣＡＤに加え、悠元が改良した『アクティブ・エアーマイン』を使うことになる。
「お姉さんのこともあるのに、悠元がここまで目立たないのも不思議だけど」
「あれか？　俺は幽霊みたく思われてるのか？」
「〝手品師（マジシャン）〟の面目躍如じゃないかな」
　手品師というより奇術師（イリュージョニスト）のほうがしっくり来ると思う。大陸の連中からは「殲滅（ティター）の奇術師（ニア）」という名称で呼ばれてるので今更だな、と悠元は内心でそう呟いたのだった。
◇　◇　◇
「女子は全員予選通過か……バトル・ボードのほうはどうなのかしら？」
「男子は2レースを終了していずれも予選落ち、女子は1レースを終了して予選突破です」
　一高の天幕では、真由美が独り言のように呟いた後で鈴音に問いかけると、（結果は既に知っているが）端末を見つつその結果を伝えた。鈴音は表情に出さなかった（そう表に出るようなものでもない）が、この結果は悠元が事前に予測していた通りとなった。

悠元は、原作知識としての可能性と本人たちの練習を新人戦統括役として見た上でその結果予測を出している。いくら自分という要素があるとはいえ、全体を変えるというのは難しいからだ。

他の選手への影響を抑えるため、４人の作戦スタッフの中で悠元が立てた新人戦の予測を知っているのは鈴音だけとなっていて、これには鈴音も納得した上で、他のスタッフだけでなく真由美や克人といった幹部にも話していない。

そんな事情など露知らず、真由美は男子の不振を少し嘆きつつも気持ちを切り替えるように呟いた。

「男子はあと1人か……女子は最終レースの光井さんが突破確実でしょうから、あーちゃんには頑張ってもらわないと」

真由美はここまでの経過を見るに、昨年と一昨年の九校戦で総合優勝した時から比べて、明らかに成績が落ちていると分かっていた。とはいえ、この場で口に出して他の生徒に動揺させる必要はないと判断していた。それは克人も同様に理解していた。

「〝3人〟の懸念通りになったという訳か……当校も技術者の育成に力を入れるべきなんだろうな」

スピード・シューティングに補助として悠元が入っているとはいえ、ここまでの成績を叩きだしたのは他でもない達也の功績によるもの。一科生に拘らないエンジニアの育成を強く主張していた歴代の生徒会長である佳奈と美嘉、そして2人の弟である悠元の懸念通りとなってしまったことをこの期に及んで理解するとは……と克人だけでなく、真由美や鈴音、摩利も強く感じていた。

◇　◇　◇

本来なら達也だけで担当する予定だったスピード・シューティングも、悠元が入ったことにより達也の忙しさは些か緩和されていた。達也が英美と和実の担当に集中している一方、悠元も準々決勝で使うＣＡＤを雫に手渡した。雫も予選と同様にＣＡＤの感触をしっかりと確かめていた。

「練習の時に少し使っているけど、問題がないかチェックはしてくれ」

「大丈夫。ところで……そのＣＡＤは？」

雫は、自分が手に持っているＣＡＤとはデザインが異なる小銃形態ＣＡＤ――――それが端末に繋がっている台座に収められているのが目に入った。少なくとも雫が知る限りにおいて市販されていないモデルだというのは確かだった。
「今セットしているのは、準決勝以降で使ってもらうＣＡＤだよ。雫が今持ってるＣＡＤをより洗練させた形だから、それに慣れていれば違和感なく使えるはずだ」
「それ、市販されてないタイプだよね？」
「知り合いの工房の人にお願いしたものだからな。それよりも、まずは準々決勝を確実に勝つことが大事だ」
〝知り合いの工房〟とは称したが、三矢家現当主（実際には悠元）はＦＬＴの次席株主なので、その伝手もあるだろうというぐらいは調べればすぐに出てくる。とはいえ、悠元が魔工技師「上条洸人」――――「トーラス・シルバー」の一角を担っていることは秘匿したままだし、それを本気で調べようとしたら四葉家から圧力が掛かる仕組みだ。
そもそも、メディアで言っているような「トーラス・シルバー」という個人は存在しないわけだが。ＣＡＤの設計・開発元としてその名は出しているが、開発者名として出したわけではない。実際にシルバーシリーズを販売する際はその辺をしっかり徹底しているので、ボロが出ることはないだろう。
そんな話はさておき、悠元は雫にそう言ったところで、雫が何か言いたそうな表情を悠元に向けていた。
「どうした？　何かあるんなら、遠慮せずに言ってくれ」
「その……予選の時みたいに、頭を撫でてほしいなって。そしたら、優勝できると思う」
「……その程度なら、お安い御用だよ」
雫のお願いに「なんだ、その程度か」と思いながら、悠元は立ち上がって雫の頭を撫でた。今更だが、これって自分に気を許しているのでは、とも思うのだが……今はエンジニアとして力を尽くすだけだ、とその考えを振り払った。
「こんなんで良かったか？」

「十分。達也さんのお膳立てに負けないぐらいだよ」
準々決勝用に組み立てられた振動・収束系統の複合術式の『アクティブ・エアーマイン』と照準補助付汎用型ＣＡＤを特化型のようにわざと限定した上でのハンデを負いつつも、雫は準々決勝を勝利で収めた。
次は準決勝だが、栞は間違いなく勝ち上がってくる。参謀に「カーディナル・ジョージ」がいる以上、準々決勝に使った魔法も解析されると踏んでいる。けれど、その準決勝ではＣＡＤも術式も更に変わる。特化型前提の作戦と見込んできても、汎用型を見据えたとしても、準決勝で初お披露目となる新型魔法には『アリスマティック・チェイン』対策まで組み込まれている。
向こうがこの短時間で仕上げたのか、と誤解するようならそれでいい。必要以上に警戒させて、出場する相手選手にいつも通りの実力を出させなくするのも戦略の内である。三高側はネームバリューというアドバンテージを持っているのだから、このぐらいは対抗しないといけない。
◇　◇　◇
新人戦女子スピード・シューティングは、準々決勝を終えた時点で勝ち残っているのが、第一高校が３人、第三高校が１人という状態となっていた。準決勝は雫と栞、英美と和実がそれぞれ対戦することが決まっている。その準決勝第１試合の直前、三高の参謀を務めている真紅郎は栞と打ち合わせをしていた。モニターから流れてくる放送を聞きつつ、真紅郎は栞に話し始めた。
「随分注目されているみたいだね」
「吉祥寺君ほどじゃないわ」
「はは、謙遜だね。さて、本題に入ろうか」
真紅郎は、雫が準々決勝で使用した『アクティブ・エアーマイン』が振動魔法と収束魔法の連続発動によるものと分析していた。収束魔法で仮想波動エリア内の自身が破壊するクレーのみを収束し、その反動で対戦相手のクレーを逸らしてしまうという方法。これによって雫の対戦相手の点数が伸びなかったところまで読み切っていた。

「一口に反動と言っても、最大９種類の起動式を使い分けているから準々決勝の相手も点数が伸びなかったんだろう。でも、君ならそのすべてに対応できるだろう？」
「――――当然よ」
　真紅郎も栞の能力と『アリスマティック・チェイン』への有効な対策は立てていないだろうと推測していた。準々決勝の魔法をそのまま使ってくると想定しての作戦……だが、それが完全に破綻するとは、この時の真紅郎にも栞にも予想できていなかったのだった。
◇　◇　◇
「正直、驚いたね……」
　観客席でそう零したのは幹比古だった。雫が準々決勝で使用したＣＡＤが「照準補助付〝汎用型〟ＣＡＤ」であったことに気付けた人間はそう多くないだろう。幹比古は古式魔法の使い手だが、父親の影響や自身のこともあって現代魔法の勉強も人一倍努力している。そこから偶然気付けたというだけだが……そんな幹比古の言葉に、隣に座るレオも頷いていた。
「そうだな。アレを達也が作っちまったって言うのが凄いな……」
「それもそうなんだけど、あの技術ってまだ市販品ベースでは一切ないんだよね」
　準々決勝の後、幹比古は達也のやったこと――――照準補助と汎用型ＣＡＤの技術がどこかで聞いたことがあると端末で調べ直すと、昨年の夏にドイツのデュッセンドルフで発表された技術であると判明。それをこの九校戦で実用ベースに仕上げた彼の技量に脱帽していた。
　そして、準決勝の選手――――雫と栞が出てきたところで、エリカが雫の持っているＣＡＤに気付いた。
「ねえ、ミキ。雫の持っているＣＡＤがまた違うんだけれど？」
「僕の名前は幹比古だ！　って……本当だ。さっきみたいな照準補助はついてないように見えるけど……」
　準々決勝で雫が使っていたものとは機関部の厚みが違う。正確には小銃の上部に付いていた汎用型ＣＡＤ『セントール』シリーズがないどころか、デバイス自体の形状がより洗練されていた。それが何を

意味するのかということは、すぐに理解できた。
「まさか、3機目のＣＡＤ？」
「マジ？　ってか、同一種目で1人の選手に3機も準備するって普通じゃないわよ」
　確かに普通ではない。だが、これも確実に勝利するための戦術のひとつだ。そのＣＡＤの存在は、同じ代表選手である深雪とほのかにも見覚えがなかった。しかし、あれだけのハードウェア設計が出来る人間となれば自ずと限られてくる。これには、燈也も冷や汗を流していた（亜実は摩利の代わりに真由美の暴走を止めるストッパーとして駆り出されていた）。
「深雪、あれも達也君のハンドメイドなの？」
「いえ、私にも見覚えはありません。ですが……」
「心当たりがあるんですか？」
「多分ですけど、あれを設計したのは悠元さんしかいないかと」
　その言葉に周囲が驚きに包まれる。以前、深雪が使っているＣＡＤは彼のハンドメイドであると説明したことがあるが、雫の使っているものを〝設計〟と発言した。つまり、彼が一から図面を引いてＣＡＤ設計をしている、ということを示すものであった。
「悠元さんは一体どこまで規格外なんですか……」
「いっそのこと、突き抜けたほうがかえって清々しく感じそうね。昼食の時にでも捕まえて、あたし専用のＣＡＤ設計でもさせようかしら」
「程々にしてくださいね、エリカ。僕の調整も悠元が担当するのですから」
　こうなったエリカを止めるのは無理だろうと思い、燈也も強くは言わなかった。レオと幹比古も意気込んでいるようなエリカを止めようとは思わなかったし、美月とほのかもこれには苦笑を浮かべていた。そして、深雪は内心で悠元に「ごめんなさい」と詫びていたのだった。

九校戦四日目⑥

新人戦女子スピード・シューティング準決勝。その第1試合となる第一高校の北山雫と第三高校の十七夜栞の対戦。シグナルが全て灯り、射出されるクレーを雫は『アクティブ・エアーマイン』で、栞は『アリスマティック・チェイン』で破壊していく。

「……流石に合わせて来たか。まあ、予定通りではあるな」

現時点では栞が若干のリードをしているが、ここまでは想定通り。というか、開始1分程度は準々決勝と同じ起動式を使う作戦ということを達也と既に打ち合わせている。

「でも、それはあくまでも『アクティブ・エアーマイン』に合わせただけの作戦、のようだな」

雫が使っている汎用型ＣＡＤは準々決勝で使用した9個の起動式の他に、新型魔法の起動式を５６個ほどインストールしている。その新型魔法というのは『多方向空中機雷（サラウンド・エアーマイン）』と呼称している。

基本的な発想は『アクティブ・エアーマイン』と変わらないが、収束魔法を自身が破壊するクレーに掛ける際、対戦相手のクレーの形状――破片であっても移動魔法と加重魔法のマルチ・キャストで吹き飛ばすという方法を用いている。単純に吹き飛ばすなら移動魔法だけでいいのだが、確実に『アリスマティック・チェイン』を抑えるため、定速系干渉を入れるという意味で加重魔法が入っている。

作戦通りに雫が動き、得点ペースは雫が一気に加速し始めた。栞のほうにも焦りが見え始めた。

（雫は細かな制御が不得手とは聞いていたからな……即興に近いとはいえ、例の術式もしっかり機能しているようだ）

最大９９個の起動式をインストールできる汎用型にしては3分の1以上を残した形になっているが、その残りを余しているわけではない。空きに入れた３１個の起動式は別の役割――『サラウンド・エアーマイン』の〝補助魔法〟を担っている。

具体的にはゴーグルに備わったヘッド・マウント・ディスプレイ（ＨＭＤ）にＣＡＤの交信機能を利用した照準補助システムを組み込んで

いて、得点フィールド内に存在する目標物――今回の場合は赤のクレー分布や軌道予測を知覚系魔法で読み取り、その得られた情報を機械で処理して、適切な変数値を魔法演算領域に送るというもの。尤も、今回の場合は競技用なので、その数値自体はかなり少ないが。

知覚系魔法は適性がないと修得が難しいとされている。それこそ卓越した空間認識能力がないと難しい。なので、起動自体は使用者が行い、それの細かな変数処理を機械でやってしまえばいいと思った。この発想は汎用型重力制御術式もとい飛行魔法デバイスのタイムレコーダー機能から得たものだ。とはいえ、性能のレギュレーションのこともあって普通は難しいと一蹴されるだろう。

魔法は「〝あり得ないこと〟を現実にする手段」ということ。なので、餅は餅屋という言い方はどうかと思うが、その情報の引き出しを情報体が詰まっている場所――情報体次元（イデア）に解決策を求めた、というわけだ。

魔法は個別情報体（エイドス）を書き換えることで事象の改変を発生させる。なので、そのエイドスの書き換えを利用して、エイドス自体に魔法式の変数を計算させるという方法を思いついたというわけだ。

今回の場合は、指定されたポイントに〝マーカー〟を付与し、そのマーカーに該当するエリアの振動破砕空間を発生させる、というものだ。マーカー付与の事象改変自体はかなり少ない事象干渉力で済んでおり、念のために雫への負荷軽減は万全にやってきた、というわけである。

なお、知覚系魔法については「インデックス」に掲載されているものを雫用に改良した上でインストールしているし、補助魔法に関しては『サラウンド・エアーマイン』に補助魔法の発動条件や終了条件が定数として設定されているため、使用者が意識して使う必要はない。

この辺の考え方は原作における戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』に使われている「チェイン・キャスト」の技術をほんの一部だけ使ったもの。ばれない様に対策は打っているので問題ない。

『アクティブ・エアーマイン』や『サラウンド・エアーマイン』の豪快さに目を奪われがちなので、雫がゴーグルを通して知覚系魔法を

使っていると気付くものは殆どいないだろう。可視化処理がされている以上は解析されることもしっかり織り込まれている。
視線をシューティングレンジに戻すと、栞の『アリスマティック・チェイン』が明らかに伸び悩んでいた。流石に少しやりすぎたかなと思わなくもないが、元々は向こうからの宣戦布告に答えてやった程度だ、と言い訳がましい感じで独り言のように呟いた。
「――勝負あり、だな」
そして、雫が１００個目のクレーを破壊して試合終了。結果は１００―６１……決して悪くないだろう。戻ってきた雫も笑みを見せていた。この後は3位決定戦の後に決勝戦となるが、見るからに栞のメンタル面が深刻そうに見えた。
この懸念通り、栞は3位決定戦で和実と戦い、準決勝では決して見せなかったミスを連発して4位。和実はこの時点で3位が確定した。残るは雫と英美の決勝戦ということだが、これについては雫が珍しく英美に宣戦布告していた。それを英美が受ける形とはなったが……波乱とも言うべき結果になっていた。
「……なんだこの、何？」
「それは俺も聞きたいな……」
実は、英美には彼女が普段使っているショットガンタイプのＣＡＤをベースに九校戦用のＣＡＤを渡していた。英美の魔法特性に完全特化させたモデルなので、無論市販はされていない。
各国の魔工メーカーは各々デバイスを開発しているが、商売柄として自国や周辺国の持つ魔法の特性にどうしても寄ってしまう。言うなれば、普段流通している商品がその国の習慣や文化に適合したものづくりをしているように、ＣＡＤも自ずとその影響を受けているというわけだ。それを生かして、悠元は英美の実家であるゴールディ家――旧ＥＵ圏のメーカーから購入したＣＡＤをベースに設計を起こした上で、ＦＬＴの製作工房に依頼していた。
加えて、達也が英美の特性に合わせた起動式を組み上げており、悠元も少しだけ改良に付き合っていた。
その結果……シューティングレンジでは一歩も引かぬ応酬へと発

展しており、悠元と達也は目の前に映る魔法の乱舞に対して「何が起きているんだ」という感想しか出てこなかったのであった。とても、こんな状況を作った当事者たちの言葉ではない。その事情を知るものがこの場にいれば、「お前らが言うな」と言われても仕方ない。

結果的にスコアは１００―９６。

新人戦女子スピード・シューティング決勝の結果から雫が優勝、英美が準優勝となった。

◇　◇　◇

時間が経過して正午。

一高の天幕では、浮ついた雰囲気が漂っていた。真由美は、その立役者である達也の背中をバシバシと叩いていた。そこまで痛くはないのだろうが、達也の表情は痛いというより面倒そうな様子だった。それを察してか、悠元は真由美に向かって諌めた。

「会長、達也が嫌がってますのでその辺にした方がいいですよ。嬉しいのは理解しますが……」

「あ、ゴメンゴメン。というか、何で露骨に距離を取っているのでしょう？」

「出合い頭に抱き付いて来られたら、周りに要らぬ疑いを持たれるからです」

一高の天幕に戻ってきた悠元と達也、それに1年女子メンバーを出迎えた真由美は何の躊躇いもなく悠元に抱き付いたのだ。これには雫の機嫌が悪くなっていたのを察して、亜実が真由美を引き剥がした。その上で、悠元は真由美と距離を取ったまま話していた。

「それはともかく、北山さんも明智さんも滝川さんも凄いわ！　みんな、よくやってくれました」

あまり押し問答しても仕方ないと割り切り、真由美は1年女子メンバーを労うと3人は揃って「ありがとうございます」と返していた。一つの種目で1位から3位の上位独占は快挙と言えるだろう。これを支えたのは紛れもない悠元と達也だが、悠元は昼から燈也のエンジニアを担当するため、天幕内で軽食程度の食事をしている。無論、それを用意したのは他でもない深雪である。

そんなこともあって、悠元ではなく達也に真由美たちの賞賛が集まるのは無理からぬことだった。
「上位に入ったのは選手であって、俺ではありませんが。それを言うなら悠元も評価されるべきだと思いますよ」
「それは分かっているさ。だが、君の功績も確かなものだ。今回の出場選手上位独占という快挙に、君のエンジニアとしての腕が大きく貢献しているという事実は、我々皆が認識を共有しているところだ」
「悠元君の実力は、会長の結果を見れば一目瞭然でしょうが……無論、北山さんの優勝に貢献していることも認識しています」
これで少なくとも達也の実力は一高のメンバー全員が認識せざるを得ない。認めることの是非はともかくとしてだ。雫のことについても、確かに悠元がエンジニアを担当したのは事実だが、それまでの準備のほとんどを達也がやってきたのも事実である。
「何か、自分でも信じられません」
「急に魔法が上手くなったって錯覚しそうです」
和実と英美の言葉に雫は頷いて反応した。すると、鈴音から『アクティブ・エアーマイン』が「インデックス」に正式採用の打診が魔法大学からきていると話すと、達也は立ち上がって悠元のほうに視線を向けた。
「そうですか……悠元の意見を聞きたいんだが？」
「断る方向でいいと思う。それでも執拗に迫るなら〝必要最低限〟でいいと思うけど」
「悠元、どうして？　『インデックス』に載ることは名誉なのに」
達也の問いかけに悠元がそう答えると、これに反応したのは使用者である雫であった。こんな雰囲気を下手に壊すのは拙いと思いつつ、悠元はこう返した。
「理由は色々あるが、下手に真似されて『アクティブ・エアーマイン』の印象を損ねたくないだけだよ」
「魔法の印象って……君は何を危惧しているんだ？」
「その辺は家の事情もありますが……今言えるのは、その魔法が〝誰にでも使える〟ということを誰よりも危惧しているってだけです」

三矢家は国防軍と密接に関わっている。その視点で言うなら、何の対策も講じずに『アクティブ・エアーマイン』を登録するのは危険だと判断しているからだ。この世界における魔法は軍事の面で密接に関わっている以上、それを避けて通るのは難しい。

それに、国立機関というだけあってその調査力は高いと認識している。登録の際、三矢家の人間だと判明している自分だけならともかく、達也が四葉家の人間だと知られるのは現時点で拙いので断る方針だ。

なので、どうしても登録したいと大学側がしつこいようなら、開発者名を不明にして登録する方針とした。「インデックス」には開発者不明の魔法もあるので、問題はない。この辺は剛三とも確認済みである。

「せっかくの喜ばしいことなので、これ以上水を差すのは控えておきます。そしたら、午後の準備がありますので失礼してもよろしいですか？」

「え？　ええ、午後もお願いね」

どうやら、準決勝と決勝で使った『サラウンド・エアーマイン』については『アクティブ・エアーマイン』の亜種ということで有耶無耶にできたようだ、と判断して悠元は天幕を離れて競技場に向かった。その後で大学側から申請依頼が来たが「まずは上泉家に許可を貰ってください」と一蹴しておいた。

プライドで一生遊んで暮らせるなら神業だと思う。

◇　◇　◇

第一高校の新人戦女子スピード・シューティング全選手による上位独占。この事実は他校にも波紋を呼んでいた。とりわけ今年こそ覇権奪取を目論んでいた第三高校にとっては過剰とも言わんばかりの反響を起こしていた。

「じゃあ将輝、一高のアレは、彼女たちの個人技能によるものではないと言うのか？」

第三高校に割り当てられた会議室にて、新人戦出場メンバーである１７人がそこにいた。なお、そこにいないのは愛梨、栞、それに沓子

の3人。栞は敗北のショックからか部屋に閉じこもっており、それを愛梨が心配していた。沓子は午後にある女子バトル・ボードのため、その場にはいなかったというわけだ。

一人の男子生徒の問いかけに、視線は将輝に集中していた。

「確かに、北山と明智の2人の魔法技能は卓越しているが、3位に入った滝川って子の能力がそれほどずば抜けているという印象は受けなかった」

「準決勝の敗北があったとはいえ、十七夜が3位に入れなかったのは痛いが……」

「そうだね。それに関しては僕の読み違いもある。一概に彼女の責任だと責められないね」

将輝の言葉を聞いて別の男子生徒が放った一言に対し、まさか〝あんな作戦〟を取ってくるとは思いもしなかったし、雫の『アクティブ・エアーマイン』の起動式を解析した時点で、その規模と発動速度から汎用型の可能性を捨て去っていた自身の落ち度もある、と含めつつ真紅郎はそう述べた。

「それは置いといて、バトル・ボードは今のところ三高（ウチ）が優位なんだし、一高のレベルが今年の1年だけ高いとも思えない」

ここまで（正午の時点）のバトル・ボードの結果は、第三高校が男子と女子共に2人中2名が予選突破。第一高校は、男子が3名中1名と女子は1名中1名に止まっている。真紅郎の言う通り、選手のレベルが飛び抜けて高いという印象は他のメンバーも受けなかった。これにはこれから出場してくる十師族の2人――悠元と燈也の実力を見ていないからこその台詞ともいえるが。

九校戦四日目⑦

第三高校の会議室では、新人戦女子スピード・シューティングの結果を踏まえてのミーティングが行われていた。真紅郎の放った一言を聞きつつ、将輝がその結果に至った原因を述べた。

「ジョージの言う通り、選手のレベルでは負けていない。となると、選手以外の要素で負けたとするなら筋が通る」

「――エンジニア、だね。多分、女子に付いたエンジニアが相当の凄腕だと思う」

単純な技術だけでなく、戦術面においても卓越した人材。そういう人間が高校生の大会に出てきている、というだけでも反則級だろうと真紅郎は自分のことを棚上げにしてそう述べた。

「それに、ジョージ。優勝した北山って子が使っていたデバイスだが……」

「うん、あれは汎用型だったね」

将輝と真紅郎は、栞の準決勝で戦った相手――雫の使っていたものが汎用型であることを対戦中に見抜いた。真紅郎の言葉は、彼ら以外の面々を驚愕させた。

「そんな……だって、照準補助がついてたし！」

「そうよ！　小銃形態の汎用型ＣＡＤなんて聞いたことがないわ！」

「どのメーカーのカタログにも、そんなの見たことがないぜ？」

次々に飛んでくる同級生の言葉を聞きつつ、将輝は冷静にそれらの疑問を解決するための答えを返した。

「確かに市販はされていないだろう。だが、照準補助と汎用型を一体化した技術は既に実例がある」

「マジかよ……」

将輝の答えに周囲は呆然とするが、そこにダメ押しと言わんばかりに真紅郎が答えた。

「去年の夏にドイツのデュッセンドルフで発表された新技術だよ」

「去年の夏!?　最新技術じゃないか」

「ああ、俺もジョージに聞いて初めて知ったからな」

一流の魔工メーカーで発表された技術をこの九校戦で披露する……真紅郎は、雫が準々決勝で使っていたＣＡＤが準決勝のプロトタイプ的位置づけではないかと推察していた。尤も、それを直接聞きだすわけにはいかないため、その段階で止まってしまったが。

細かいことを抜きにしても、それを実現できるだけの技量を持ったエンジニアがいるという事実は確かだろう。

「吉祥寺君は良く知ってたね。さっすが私たちのブレーンよ」

「うん。けれど、デュッセンドルフで発表されたものは〝ただ繋げただけ〟のものでしかなかったはずなんだ」

渡良瀬の言葉をそのまま受け取れず、眉を曇らせたまま紡がれた真紅郎の言葉を聞きつつ、将輝は立ち上がって窓の外を見つめていた。

「だが、北山って子が使っていたものは、特化型と同等以上の速度と精度、系統の異なる起動式を処理するという汎用型の長所を兼ね備えたものだった。それがエンジニアの腕で実現しているのだとしたら……そいつは到底高校生のレベルじゃない。一種のバケモノだ」

「1人のエンジニアが他の種目を担当するのは物理的に不可能だけど……」

「そいつが担当する競技は、今後も苦戦を免れないだろう。少なくとも2、3世代分のハンデを背負っていると考えるべきだ」

将輝はそう評していたが、これがまだ始まりに過ぎないということは将輝と真紅郎でも予測できていなかったのだった。

◇　◇　◇

午後の男子スピード・シューティング。元々3年の技術スタッフが全て担当する予定だったところに悠元が燈也の担当をすることになったため、少々忙しかった。

元々雫の調整自体は達也の腕前を信頼していたのでコンディションによる微調整程度で済んでいたが、燈也の場合は一度組まれた調整データを破棄し、彼の魔法特性に再調整する作業が必要だった。

天幕で悠元が端末のキーボードを叩いていたのは、計測から得られた調整データをＣＡＤにインストールするための作業の一環である。

緊張しがちなほのかの応援をするという女性陣に達也も同行させ

た。元々彼女の作戦を立案した人間が様子を見に行ったほうがいいだろうという悠元の気遣いだった。レオと幹比古は燈也の観戦をするらしく、離れたところでは服部、沢木や桐原といった男性の主力陣もその様子を見守ることとなった（亜実も行きたがっていたが、摩利が無茶をしないようにするための監視役で天幕に残っていた）。

「六塚君は予選Ａブロックの一番手か」

「沢木、そんなに嬉しいのか？」

まるで少年のような表情を垣間見せていることに対して、服部は肩を竦めるとともに息を一つ吐いた。この２人からすれば、燈也の実力の一端を知っている人間でもある。燈也はマーシャル・マジック・アーツ部には所属していないが、沢木と山岳部の部長の誼で偶に顔を出すこととなった。

女性のような顔立ちを持ちつつもその一撃は強烈で、『レンジ・ゼロ』の二つ名を持つ彼と同学年の十三束鋼（とみつかはがね）を魔法も使わずに沈めたのだ。沢木も挑戦したが、結果は燈也が勝利を収めた。

それでいて荒事は好まないと燈也は零していて、実はモノリス・コードの打診もあったのだが、それを辞退してスピード・シューティングとクラウド・ボールの２種目に出場することになった経緯がある。克人も本人がやる気のある競技なら良い結果も出せるだろうと考え、無理強いはしなかった。

「彼が本気で魔法を使ったところを見たことがないからね。そりゃ楽しみで仕方ないよ」

「お前なあ……まあ、気持ちは分からんでもないが」

まるで遠足前日の小学生のような面持ちを浮かべている沢木の言葉に、流石の桐原も呆れが混じったような表情を見せていた。とはいえ、桐原も十師族の人間である燈也がどんなことをするか興味があったのは否定しない。

「そういや、三矢が六塚の担当をするとはな。正直、十師族同士って反則じゃないのか？」

「その恩恵を受けていたお前が言うのか……ただ、三矢の実力は確かだ」

服部は、桐原の言葉にそう答えつつも競技フィールドのほうを見やっていた。既にシューティングレンジで競技の開始を待っている燈也の様子は、明らかに場慣れしているとしか思えない振る舞いだった。
「見事なもんだな。とても新人戦に出る奴の振る舞いとは思えねえ」
「ああ……」
十師族はこの国の魔法師にとって頂点に立つ存在……それは服部も理解している。それを抜きにしても、九校戦という大舞台を前に落ち着いた振る舞いができている燈也の様子を見て呟いた桐原に、服部は短く答えるしかできなかった。先日の事故（正確には事故未遂だが）でも悠元や深雪と共に連携して適切に止めた実力の持ち主。その実力を見ようと服部はいつの間にか目を凝らしていた。
競技開始のシグナルが鳴り、燈也は魔法を発動させる。最初のクレーを振動魔法で破壊した後は、その破片を移動魔法で次々と破壊していく。その魔法に服部は見覚えがあった。そう、女子スピード・シューティング予選で三高の女子こと十七夜栞が使っていた『アリスマティック・チェイン』そのものである。
5分間の試技の結果はパーフェクトで、文句なしで予選突破を成し遂げた。
「三矢も凄いと思ったが、六塚もバケモンだな、ありゃあ……」
「格闘だけでなく、射撃も得意とは。彼が山岳部というのが惜しいな」
「無理強いはするなよ？　どうした服部？」
「あ、いや……何でもない」
沢木から垣間見えた向上心に対して、相手が相手なので無理強いはするなと念を押すように桐原が窘めると、服部が何かを考え込んでいるような表情が見えた。それに気づいた桐原が声を掛けると、服部は我に返ったように返しつつもまた黙った。
「どうした、服部？　まさかとは思うが、先日の一件をまた思い返していたのか？」
「いや、そうじゃないし、本当に大丈夫だ」
服部は昨年の自分自身を思い返していた。一高の同学年ではトッ

プクラスであったが、流石に九校戦では緊張していた。けれど、先程の燈也の試技は観客の視線を一切気にすることなく完全に集中しきっていた。見るからに線の細そうな人間だが、胆力は現3年の面々にも劣らないと推察した。

現3年である真由美や克人と同じ十師族……その一端を、服部は改めて感じていたのだった。

◇　◇　◇

男子の予選が全て終了。第一高校は燈也と森崎が通過したのだが……森崎が少し調子を崩したようで、2位通過となっていた。ＣＡＤに細工をされていたわけではなく、単純に本人の調子とＣＡＤの調整が噛み合っていなかったのだろう。

その原因の一つに女子スピード・シューティングの結果のこともあるとみている。彼はガチガチの実力主義のため、二科生である達也に対して必要以上に敵対視している（同じ風紀委員というのもあるだろうが）。選手とエンジニアでは役割が違うとはいえ、彼の担当した選手が上位に食い込んだことに苛立ちを感じていたのかもしれない。

決勝トーナメントの組み合わせは、燈也と真紅郎が別のブロックのために直接当たるとしたら3位決定戦か決勝になる。森崎は準々決勝で真紅郎とぶつかる形となった。

「大丈夫でしょうかね……必要以上に思い込んで、かえって空回りしないといいのですが」

酷な言い方だと思うが、自意識過剰は本来の実力を出させなくする。護衛を家業としている森崎がその辺を弁えていない筈がないと思うが、ここまで来てしまった以上、割り切れるかどうかは本人の問題だろう。燈也の懸念に対して、悠元が答える。

「ここから先は本人次第だな……燈也はどうする？　このまま準決勝まで『アリスマティック・チェイン』で行っても問題はないが」

「では、そうしましょうか。他の射撃魔法はお蔵入りになっちゃいますが、決勝は〝アレ〟を使うわけですし。でも、よく思いつきましたね？」

「相手への直接的な干渉はできないが、フィールド自体に障害物を設

置するのは反則にならないからな」
　これは大会運営に確認している。というか、今までそういう考えをもって魔法を使用した人がいないというのも驚きだろう。高校生の大会で求める基準としては魔法のハードルが高すぎるのかもしれないが。それに、そういった類のものを設置するのはリスクが伴うため、知覚系魔法でもないと無理だし、そもそも事象改変による想子の消費が洒落にならないのだ。
「そういえば、カーディナル・ジョージとはどこで面識を持ったんだ？」
　以前聞いたときは触り程度にしか教わっていなかったんだが」
「そうですね。悠元なら大丈夫でしょうし、それほど時間はかかりませんから」
　燈也と真紅郎が面識を持ったのは3年前――――新ソ連（当該国は否定しているが）による佐渡侵攻にまで遡る。当時は姉のせいで髪を伸ばして結んでおり、男物の服は着ていてもボーイッシュな女性に見られていた。今でも見られる可能性があることは否定できないが。
　佐渡には観光目的で来ていたらしく、偶発的に島の中学校の周囲にいた敵兵を一人残らず殺し、そのシェルターで真紅郎と初対面を果たした（燈也は元々避難するついでで片づけていたらしい）。そこまでは良かったのだが、真紅郎が顔を赤らめて燈也を見ていたことに気付き、その場で説明したのだが……取り合ってくれなかったため、シェルターを出て全速力で実家（六塚家）に帰ったと説明した。
「法規的に問題はなかったのか？」
「ええ。姉が秘密裏に取り成したお蔭でその辺はどうにか。彼には自分のトラウマを弄られましたが」
「反則行為（ダイレクトアタック）だけはやめとこうな……というか、一条家の人間によくバレなかったな」
　一応、この部屋全体に遮音フィールドは張っているので問題ないが、まさか燈也が実戦経験のある魔法師だとは初耳だった。
　燈也はその時名前を名乗っていなかったので目立った実績として名を残していないが、佐渡侵攻の際に〝謎の美少女魔法師〟が「クリムゾン・プリンス」と並んでの功績者として名を連ねていたことは

知っていた。
〝秘密裏〟とは言ったが、その辺については深く聞かなかった。トラウマを思い出させるのはストレスにしかならない、と理解していたからだが。
「海水を凍らせた上で渡って帰りましたので。『クリムゾン・プリンス』との面識はありませんし、帰った後に髪をバッサリ切りましたので」
それでバレていないというのは、大方燈也が戦う際に熱量操作で視界を屈折させていたのだろうと考える。モノリス・コードを辞退したのは、その動きから見破られる可能性を危惧してのことだろう。クラウド・ボールに比べればモノリス・コードはより実戦的な魔法競技なだけにだ。
「なので、悠元には感謝してるんですよ。ぐうの音も出ないほど叩きのめしてあげます」
「……燈也なら、ぐの一文字が出る前に終わらせそうだな。調整は終わってるから、チェックだけはしておいてくれ」
その後、燈也は何の問題もなく『アリスマティック・チェイン』で準々決勝と準決勝で勝利を収めた。森崎に関しては善戦していたが、真紅郎の『インビジブル・ブリット』で得点を思うように伸ばせず、準々決勝で敗退してしまった。
真紅郎が決勝まで勝ち上がったことで、男子スピード・シューティング決勝は燈也と真紅郎の一騎打ちとなった。

九校戦四日目⑧

男子スピード・シューティング決勝。その観客席の最後列に栞は座っていた。女子スピード・シューティング準決勝で思わぬ敗北を喫したこと。それによって自分の心の弱さを強く感じてしまい、3位決定戦で本来の力を発揮できなかった。

(私、何しに来てるんでしょうね……)

部屋で塞ぎ込んでいた栞が何の理由もなく偶々モニターの電源を付けたところ、丁度燈也の予選の試技で、彼が『アリスマティック・チェイン』を披露したことに驚いていた。血の滲む様な努力の結果に得た魔法を使った一高の1年で、将輝と同じ十師族の1人。その彼を直接見ようと、栞は部屋を飛び出して試合会場に来ていた。

愛梨や沓子だけでなく、他の同級生に何も言わず来てしまったため、今頃呆れているのかもしれない。そんなことを考えていると、女性と思しき声が掛けられた。

「隣、よろしいですか?」

「あ……え、ええ……」

栞の隣に座ったのは、一高の制服を着た女子生徒。だが、栞にとってはその生徒と関わりがある。彼女が十七夜家の養子として引き取られる前に名乗っていた名字――〝一花〟の血縁者が隣にいたのだ。

その女子生徒もとい一高の作戦スタッフである3年の市原鈴音は栞に声を掛けた。彼女としても今の栞は見るに堪えなかったのだろう。

「女子の試合は見させていただきました……成長しましたね」

「それは、慰めのつもりなの?」

「生憎と慰める技量は持ち合わせていませんよ」

栞の問いかけに鈴音は淡々とした口調で返した。昔ならともかく、彼女と自分では置かれている立場が違う。なので、下手な慰めは彼女を傷つけるだけだと〝昔から〟知っている。

「でも、安心はしました」

「……安心？」
「ええ。あれほど自分が傷付けられても文句の一つすら言わなかった貴女が、そうやって自分を出せていることにです」
　鈴音の言葉に栞はキョトンとした表情を浮かべていた。それを見た鈴音は微笑みつつ、席を立ちあがった。
「貴女は、いい友人に恵まれましたね。私の出る幕でもなかったようです」
「それって……あっ」
　栞が視線を別の方向に向けると、そこには愛梨と沓子がいた。沓子が選手用のクーラージャンパー姿だったことから、どうやらバトル・ボードの予選レースから直行してきたのだと悟り、栞は思わず顔を背けてしまった。
「……そのお詫びと言っては何ですが、一つだけ教えましょう」
「お詫び？　一体何を？」
「北山さんの調整を担当していたエンジニアのことですが、彼は別の種目に選手として出場します。明日の男子ピラーズ・ブレイクを見れば分かりますよ」
　そう言って鈴音は愛梨と沓子に目礼をし、その場を静かに去って行った。先程の言葉を聞いて一体どういうことなのかと考える前に愛梨と沓子に声を掛けられ、栞は思わず謝罪の言葉を口にしたのだった。
◇　◇　◇
　その一方、燈也は決勝の相手である真紅郎と対峙していた。真紅郎のほうは驚きや既視感を含んだような様相を見せたが、気持ちを切り替えて話しかけてきた。
「六塚君だったかな。準決勝まで見せて貰ったけど、『アリスマティック・チェイン』を再現するとは恐れ入るよ」
「それはどうも。天才にお褒めの言葉を頂けるとは思ってもみませんでした」
「ですが、勝つのは僕です。相手が十師族と言えども、これは真剣勝負ですから」

２人はお互いの腕を賞賛しつつも、既に決勝の対決ムードであった。真紅郎の言葉に対して、燈也は不敵な笑みを浮かべていた。
「ええ、確かに真剣勝負です。『カーディナル・ジョージ』の胸を借りるつもりで戦わせていただきます」
燈也の言葉に真紅郎は改めて気を引き締めた。同じ十師族である将輝との付き合いでその力を目の当たりにしてきたからこそ、油断はできない。それに、真紅郎は燈也の振る舞いを見て、何か不思議な感じがしたのだ。真紅郎は武術を嗜んでいないが、魔法技術者としての勘というものから、まるで将輝のように実戦経験がある雰囲気を燈也から感じていた。
それを知ってか知らずか、燈也は先にシューティングレンジに行こうとした際、こう言い放った。
「――『あの時』の借り、返させてもらいますから」
燈也としては借りというより恨みなのだが、相手を必要以上に困惑させないのが一番だろうと考えたのかどうかはさておき、燈也の言葉に真紅郎は思わず首を傾げたのだった。

◇　◇　◇

男子スピード・シューティング決勝。
第一高校１年の六塚燈也と第三高校１年の吉祥寺真紅郎。十師族の一角である六塚家に連なる人物と『基本コード（カーディナル）』を発見した天才の対決に観客は盛り上がっていたが、モニターで「お静かに」との表示が出ると、その騒ぎの波は静まりかえった。
ゴーグルを掛けた双方が小銃形状ＣＡＤを構え、シグナルが点灯し始める。そして、全てのシグナルが点灯して、燈也は決勝用の魔法――『凍結連鎖氷柱（フローズン・アリスマティック・ピラー）』を発動させる。それによって得点フィールドの外側に４本の氷柱が出現したことに観客から驚きの声が上がった。対戦相手である真紅郎もこれには驚くが、明らかに無駄なことだと内心で呟いた。
（この状況でフィールド外にあれだけの高さの氷柱を!?……いや、その初動だけでも想子消費は極めて高い筈だ。一気に押し切る……え？）

すると、真紅郎は発動させたはずの『インビジブル・ブリット』が得点フィールド内で発動しないことに驚きを感じた。ＣＡＤの問題かと思ったが、入念にチェックしたので問題はない。そうなると、真紅郎は一つの結論に行きつく。

（まさか、得点フィールド内全域に領域干渉を掛けているのか!?）

真紅郎はそう予想したが、厳密には『半分正解』である。

『凍結連鎖氷柱（フローズン・アリスマティック・ピラー）』――特定範囲内に強力な領域干渉と加重系統プラスコードによる定速干渉の複合干渉を設定し、『アリスマティック・チェイン』の連鎖性と『アクティブ・エアーマイン』の収束魔法による対戦相手のクレー軌道の変化を取り入れた燈也専用の複合術式。

そもそも、燈也が使っていた『アリスマティック・チェイン』は連鎖の補助として収束魔法を予め組み込んでいる。それなしで栞のようなオリジナルの術式に近い動きはできないと判断した。尤も、燈也の魔法技能のお蔭でそこまで心配する必要もなかったが、本人もこれが使いやすいということでオリジナルの『アリスマティック・チェイン』には戻さなかったのだ。

ちなみに、この魔法式の展開の際に生成された４本の縦横１メートル、高さ１０メートルの氷柱については、燈也の得意分野が凍結魔法ということで悠元が組んだ〝遊び〟。

本来、アイス・ピラーズ・ブレイクの氷柱を作るだけでもかなりのエネルギーを消費することは分かっていた。なので、それを改良した凍結術式――悠元がテスト勉強の時に弄っていた魔法式を振動減速系に最適化させた術式を組み込んでいる。これによって、本来の３割未満の負荷で済んでいる。

氷柱生成によるエネルギーの総和の誤差は、クレーを破壊するための移動魔法と収束魔法、そしてフィールド自体に掛けられた定速干渉で帳尻を合わせている。

（やはり『インビジブル・ブリット』は対策されている。なら、別の魔法で……何っ!?）

真紅郎は『インビジブル・ブリット』を使えない原因が氷柱にあると読んで、『インビジブル・ブリット』で破壊した。そこまではまだ良かったのだろうが、真紅郎はそれによって自分が更なる苦境に立たされることになる。何と、真紅郎から見た得点フィールド内が光で満たされ、クレーが視認できなくなっていた。

この現象は「サンピラー」と呼ばれる現象を再現したもの。細かく砕かれたクレーの破片を核として氷晶を作り、得点フィールド内に擬似的なダイヤモンドダストを発生させる。その氷晶と太陽の光を合わせて、擬似的なサンピラーを発生させるもの。先程「遊び」と言った氷柱は、この状態を生み出すための補助要素と言っても過言ではない。

これだと燈也も同条件だが、彼の場合は特殊な知覚系魔法でクレーの動きを把握できるため、実質的に見えているも同然。真紅郎は勘と射出機からの予測だけで、外部から魔法の弾丸を撃ち込んで自分が狙うクレーを破壊するしかない。

完全な2段構えの魔法に観客も驚きを隠せず、決勝ということで実際に見に来た克人は、珍しく驚きを見せるような表情を浮かべていた。隣に座っている真由美もこれには驚きを隠せない。

「流石というべきか……これで、六塚の勝ちは揺るがなくなったな」

「ええ。リンちゃんから〝大掛かりのもの〟をいくつか用意しているとは聞いてたけど、フィールドに氷柱を立てるなんてアイデア、思いついてもそれを実行に移すのは、それこそ達也君か悠君ぐらいでしょうね」

完全な『インビジブル・ブリット』封じのための術式――その弱点を完全に露呈された形となった相手には気の毒だが、それを実行できるだけの想子保有量と魔法力双方がないと不可能ということもお互いに察していた。

燈也は、十師族の力を示すという意味で『フローズン・アリスマティック・ピラー』を使用したのだろうと真由美は推測した。尤も、燈也の場合は〝私怨〟も入っていることに気付いてはいなかったが。

得点は明らかに開いていく一方で、燈也が１００個目のクレーを破

壊した時点でブザー音が鳴り、観客として来ていた一高の生徒たちは歓喜の渦に包まれていた。結果は１００―１１……ほぼ完勝といっても差支えないだろう。
「これで、新人戦スピード・シューティングは両方とも優勝できたけど……」
「その辺は後で話すことにしよう」
真由美の言いたいことを察しつつも、克人は今話すことではないと窘めた。それには真由美も頷くだけに止めたのだった。
◇　◇　◇
女子バトル・ボードでは、予選最終レースに出場したほのかが１位となり、無事予選を通過した。男子のほうは鷹輔が予選を通過していた。その結果をミーティングルームで聞いた悠元は、真由美に背中をバシバシと叩かれていた。これには摩利も呆れたように見つめていた。
「凄いじゃない、悠君！　担当した２選手共に優勝なんて、これは快挙よ！」
「会長、落ち着いてください。悠元君が嫌がってます」
「あ、そうね。でも、嫌じゃないわよね？」
「自分にそんな被虐趣味はありません」
鈴音の指摘に真由美はわざとらしいような目線で訴えかけてきたが、それを一蹴するかのような悠元の言葉に真由美は不満げだった。これには摩利も思わず笑みを零していた。けれども、そこまで楽観視できるような状況ではなかった。
「もう……にしても、燈也君が優勝してくれたまでは良かったのだけれど……」
「三高の３人が２位から４位を固めてきましたね」
新人戦男子スピード・シューティングは燈也が優勝したものの、２位から４位が三高で独占された。２位と３位が女子とは逆の結果となっていたのだ。
女子の活躍を見て「今度は自分が」と意気込んだまでは良かったのだろう。運動競技でも盤面遊戯でも……無論、魔法競技でもヤル気が

なければ勝利に結びつかない。そうやって己の士気を高めるのは基本的なことで、一番の特効薬は紛れもなく勝利である。
けれどヤル気は時として「気負い」へと変わり、そこから容易に「空回り」へと発展する。その結果が男子の成績として示された形だ。
「男子と女子で逆の結果となったか……」
「スピード・シューティング全体から見れば、女子の貯金がしっかり効いていますし、そこまで悲観し過ぎるのはどうかと」
摩利の懸念も含んだような言葉に、鈴音がフォローを入れる形で自身の分析を述べたが、それでもこの場の沈滞したムードを拭い去るというところまでは行かなかった。
「そうだな、悲観しすぎるのも良くない。女子の結果が出来過ぎだったと言うべきなのだろうな。今日のところはリードを奪っただけでも良しとしなければ」
「しかし、男子の不振はスピード・シューティングだけではない。バトル・ボードも予選通過が1名という結果は無視できない」
男女別で見た場合、女子がスピード・シューティングで上位独占、バトル・ボードで3人全員予選通過。だが、男子の場合はスピード・シューティングで1人が表彰台、1人が準々決勝敗退で1人が予選落ち、バトル・ボードは3名の内1名が予選通過。
ここまで偏った結果の裏側にはエンジニアという要素も無視できない。
「男子がこのままズルズルと不振が続くようでは、今年は良くとも来年以降に差し障りがあるかもしれん」
「つまり、負け癖がつくということか？」
「その恐れがあるだろう」
克人の言葉に真由美と摩利は苦い顔をして黙り込んだ。魔法科高校のリーダーを自認し、常勝を自らに課している一高の幹部として、「今年さえよければ」という安逸に甘んじると言うことは決して許されない。すると、真由美が悠元にあることを問いかけた。
「ねえ、悠君。他の1年の様子はどうだった？」
この会議の前に、同室で1年の代表選手だけを集めてミーティング

を行った。進行役は統括役ということで無論悠元なのだが、男子と女子で温度差が形成されるほどであった。

調子が上向きの女子に対して、燈也や鷹輔以外の男子の調子が下向き……まるで部屋の中が軽い『氷炎地獄(インフェルノ)』状態となっていたことを思い出しつつ、声に出した。

「既に男子と女子で温度差がヤバい状況です。女子は言うまでもありません。2種目出る男子は何とかなってますけど、1種目しか出ない男子はかなり落ち込んでました」

女子に対しては、結果を正当に評価するだけに止めた。下手に持ち上げて男子たちにプレッシャーを与えたくないというのもある。九校戦でいつも以上に敏感な状態の男子の面々を下手に刺激しない方がいいと判断した。

「男子には、気負いせず少し肩の力を抜くようにだけ言いましたが、それ以上のフォローは入れるべきでないと判断しました。姉達にも敗戦のフォローはしなくていいと言い含めています」

「それは……流石に酷じゃないの？」

この場合は真由美の言葉も正論だろう。だが、悠元は言い訳すべきでないと判断して事実という判断材料を提示した。

「単に負けたことへのショックで落ち込んでいるのならフォローしていましたが、技術スタッフの中に達也がいることを未だに気に食わないでいる奴がいることと、自分が二科生と仲良くしていることを快く思ってない奴がいまして……この先は彼ら自身の問題でもありますから」

ここで自分が何を言ったとしても、相手がまともに取り合うとは思えなかった。『変なプレッシャーになった』とか後で言い訳されるのも困る。

加えて、悠元と達也がエンジニアとして関わった選手全員が上位入賞という結果まで打ち立てた。このダブルパンチで落ち込んでいる連中に手を施せと言われても極めて難しいだろう。

「成程、そういうことか……割り切れてないとは仕方ない」

悠元がそこまで言ったところで摩利が深い溜息を吐いた。彼女も

達也の風紀委員任命に関して服部から文句を言われた経験があるので、そのことを思い出したのかもしれない。
真由美も口に出すことはしなかったが、悠元から言われた事実に対して苦い顔を浮かべていた。
「男子の方は、梃入れが必要かもしれんな」
「しかし、梃入れと言っても今更何が出来る？」
そう、確かに今更なのだ。方法はなくもないが、その一つは技術スタッフに負担を強いることとなるので、正直お勧めできない。そうなると、もう一つの方法を選択せざるを得ない。祖父から言われたとはいえ、その方向性に転ぶことを内心で深く溜息を吐いた。
「梃入れは難しいですが、男子の士気を上げることぐらいは出来るかと」
「三矢、やれるのか？」
「どの道誰かがやらなければならないことです。できるかどうかではなく『やるしかない』と考えています。これでも新人戦の統括役ですので、その責務はしっかりと果たします。燈也は言わずともやってくれるでしょうから」
明日はクラウド・ボールの予選から決勝とアイス・ピラーズ・ブレイクの予選。奇しくも燈也と悠元――――十師族の２人が出場する種目だ。
ここで勝利して男子全体の士気向上に繋げられればいいのだが、アイス・ピラーズ・ブレイクの女子は達也が深雪と雫、英美の３人全員を担当する。彼女らよりも派手に目立たなければならないという課題を突き付けられているが、最早やるしかないのだ。
それに、克人からも十師族としての力を示すように突き付けられている以上、逃げるという選択肢は完全に排除された。目立つことによるデメリットは出てくるが、その時はその時だ。
「……そうか。頼むぞ、三矢」
「はい」
克人の言葉に悠元は力強く頷いた。この遣り取りに口を挟めるものは、その場に誰もいなかったのだった。

九校戦四日目⑨

ミーティングと夕食の後、悠元が部屋に戻って着替えようとしたところで、フロントから電話があった。その話を聞いた瞬間、「どうしてこのタイミングで？」という思いはあったが、相手が相手なだけに断るわけにもいかないため、その話を了承した。

軽く身だしなみをチェックした上で部屋の外に出て（無論部屋のカギは閉めるが）、指定されたＶＩＰルームの一室に向かうと、その入り口の前には私服姿の響子が立っていた。

「今は響子さん、と呼んだ方がいいですね。出迎えですか？」

「そんなところね。さて、入って頂戴」

響子の案内で中に入ると、椅子に座る一人の壮年の男性――懇親会で見かけた人物こと九島烈本人がいた。それを視界に入れると、悠元は頭を下げた。

「お久しぶりです、閣下。お見かけしたのは懇親会以来ですが、こうやってお話しするのは昨年夏以来ですね」

「ああ、久しぶりだな。あの時は見事なものだった。さて、遠慮せずに座ってくれ」

「では、失礼します」

九島家先代当主にして、十師族のシステムを作った人物。「老師」と呼び名の高いこの国でも屈指の魔法師であることは間違いない。

烈の言葉を聞いた上で、悠元は烈と向かい合う形で席に着いた。すると、響子がティーカップを置き、そこに紅茶を注いだ。無論、ストレートで飲めないことは分かっているので、牛乳を入れたミルクティーなのだが。

「それで、自分に何のご用でしょうか？　閣下が本屋敷を訪れていたことやその内容はある程度お聞きしていますが」

三矢家の本屋敷で烈が元から聞いていたことは、悠元の学校生活に関してだった。悠元が司波家に居候しているという事実は伏せたままで話したとは言っていたが、恐らく目の前にいる人物は気付いている可能性がある。それを踏まえた上で悠元は烈の言葉を待った。

「なに、君が明日と明後日のピラーズ・ブレイク、その後のモノリス・コードに出るとなれば、同じ種目に出場する一条の息子と戦うことになるからな」
「お言葉ですが閣下、父からは『三矢の力を示せ』と言われております。相手が同じ十師族であろうとも手を抜くつもりはありません」
会場を壊さないように威力を抑えることはあっても、それが即ち手を抜くことにはならない。ましてや「クリムゾン・プリンス」が同じ競技に出る以上、負けるという選択肢はない。それを読み取ったのか、烈が真剣な表情を浮かべて問いかけてきた。
「仮に私が止めようとした場合は、どうする？」
「その時は十師族の存在意義自体に疑問を投げかけることになりますが、それでも宜しいと？」
確かに、三矢家の十師族における地位は四葉家や七草家と同等の力となっている。だからと言って、他の十師族に配慮するようなことは、十師族そのものの意義である〝最強〟に疑問を投げかけられることとなる。そもそも、十師族は師族二十八家の中で強力な魔法師を選び出すもの。それに疑いを残すような結果などあってはならない。
烈の問いかけに問いかけで返すのは失礼だが、何故そんなことを聞いたのかが気に掛かった。目の前にいる人物は十師族というシステムに対して一体何を考えているのか……すると、烈は表情を緩ませた。
「……成程。流石剛三の孫なだけはあるな。今のは単なる戯れみたいなものだ」
「そうでしたか。にしては、かなり真剣な表情でしたが」
「……それも〝試し〟だと気付いていたか」
殺気も感じていたが、剛三の殺気に比べればまだ耐えられるレベルだった。爺さんの場合は魔法自体に殺気が籠るからな……そんなことを思いつつも、悠元は烈に視線を向けた。
その後は、学校生活のことを中心に聞かれた。その際に達也と深雪のことも聞かれたが、「仲の良いクラスメイトと友人程度」という風に返した。彼からはそれに対して必要以上の追及は来なかったが、この

九校戦で達也と深雪の正体に気付く十師族の一人。下手に敵対したくはないが、それとなく警戒はして損はないだろう。
悠元が去った後、響子は悠元が座っていた場所に座って烈に問いかけた。それは、彼をこの場に呼んだ理由を聞くためだ。
「御祖父様、どうして悠元君をここに呼ばれたのですか？」
「……響子、この話は剛三から聞いた事ゆえ、他人に漏らしてはならぬ」
烈はそう言って、剛三から聞かされたこと――悠元の婚姻は上泉家と神楽坂家が取り仕切っているということを話した。
そこに響子を関わらせることの是非はともかくとして、彼が国防軍に軍籍を置いていることを烈は把握している。奇しくも響子と同じ大隊にいるからこそ、孫娘である彼女にも話すべきと判断したのだ。
「私以外にこのことを知っているのは？」
「七草家の現当主だけだな。神楽坂家の当主とは面識があるが……剛三と同じく、何を考えているのかが全く読めぬ」
響子は烈から神楽坂家のことは聞き及んでいるし、実家である藤林家も古式魔法の一族ゆえに神楽坂家の知識はある。だからこそ、目の前にいる祖父は非公式の戦略級魔法師である悠元をどうしたいのか、と疑問に感じた。
「悠元君は、既に高校生を超えた力を持っていると風間少佐から聞いていますし、私自身も彼の凄さを目の当たりにしています。彼のことですから、会場を壊すような魔法は使わないと思われますが……よもや、三矢家を陥れようなどと考えておりませんか？」
「……それはない」
現状において、烈が抱いている四葉家に対する危惧は、深夜の子である達也に起因している。それと同等の問題として、悠元が出てくることによって三矢家に対する危惧まで生じている。
この為、烈は剛三と会談したのだが……剛三の答えは「俺の家族である三矢や、俺の親友がいた四葉を陥れるナンセンスで旧世代的な考えをする前に、お前は九島家にいる孫のことの道筋をつけろ、この耄碌妖怪ジジイ」というものだった。

烈はその事実を突かれ、剛三の言葉に対して反論をすることが出来なかった。
「失礼を承知で言わせていただきます。お祖父様、九島家は十師族だけでなく、師族二十八家の半数以上を敵に回されたいのですか？」
「無論、それぐらいは分かっておる。なので、神楽坂家当主に会って話をするつもりだ」
三矢家と懇意にしているのは、噂に聞く四葉家以前に一条家や七草家に十文字家、五輪家とも関わりがある。恐らく、クラスメイトの誼で六塚家とも関係があると響子は推察した。
加えて、上泉家がいるとなれば……それらを含めた響子の鋭い指摘に対し、今の烈はそう返すことしか出来なかった。神楽坂家との会談がせめてもの突破口になることを烈は期待していた。
その一方で、響子は祖父が何故悠元の実家である三矢家に圧力を掛けようとするのか……そのことが正直理解できなかった。
彼の力は実際に目の当たりにしているので、その恐ろしさも理解できなくはない。彼が達也と同等以上の力を持ち得ていることは響子の目から見ても確かであった。
だが、軍籍に身を置いている響子としては、烈に国の内側にばかり気を配るのではなく、国の外側にも目を向けてほしかった。そのような懸念を考えるよりも、未だに野心が燻っている大亜連合をはじめ、新ソ連やＵＳＮＡといった大国に呑み込まれないように国内を固めなければならないことを、情報に精通している響子は人一倍強く感じていた。
自身のいる部隊の設立理由は理解している。十師族に頼らない戦力の保有……とはいいつつも、実質は十師族に依存しているという矛盾を抱えている。
つまるところ、彼らの力なしにこの国の防衛が成り立たなくなっているのは、どう取り繕っても変えようのない事実。烈とて、かつては国防軍にいた魔法師の一人。そのことぐらい分からぬ筈はない……と響子は信じたかった。
◇　◇　◇

その頃、剛三は自分が宿泊している部屋に一人の女性を招き入れていた。見るからに２０歳代前半の容姿に今風の服装を身に纏っているが、剛三とてその女性に見惚れるということはない。何せ、女性は亡くなった妻の身内であるからだ。
「久しぶりだな。直接顔を合わせるのは１０年振りか……歳を取るわけだ」
「そう言いつつも、３０歳代後半に〝若返った〟貴方がそれを仰いますか？」
「相変わらず口が回る奴だな、千姫（ちひろ）よ」
剛三の目の前にいるのは、正真正銘神楽坂家１０７代目当主こと神楽坂千姫その人。上泉家よりも前から続く陰陽師の系譜を継ぐ一族の長だが、立場は上泉家現当主である剛三と同等。表裏となりてこの国を守護する『護人』の一角を担う。
本来は九校戦を直接見に来る予定などなかったのだが、孫娘からの連絡を聞いて急遽部屋を空けてもらった上で身支度を整えてきた、と話す千姫に剛三は苦笑を漏らした。
「それで、やはり目的は俺の孫か」
「ええ、剛三さん。あの3人は私の愛弟子でもありますから。あ、この場合は『お義兄様（にいさま）』とお呼びすべきでしょうか？」
「そういうお茶目は変わらぬな。3人から孫が天神魔法を止めたと聞かされてな。一応あやつにも天神魔法を使うよう言い含めている」
表沙汰にはなっていないが、今は亡き剛三の妻は千姫の実姉。つまり、剛三と千姫は義理の兄妹関係にある。なので、剛三は千姫の言葉に拒否を示さなかった。
力を示す――その意味で剛三は悠元に天神魔法の使用を指示した。それを聞いた千姫は手に持っている扇子を指で器用に回しつつ問いかけた。
「一応確認しますけど、『天照（アマテラス）』のことは？」
「万が一修得していたとしても、あれは使えないだろう。目晦ましや相手を気絶させるだけならともかく、〝心を書き換える〟『天照』など使えるはずもない。それは神楽坂に伝わるもの――〝心を消し

去ってしまう〟『月読（ツクヨミ）』とて同じだろう」
『天照』と『月読』――それは、天神魔法における極致。上泉家は『天照』を、神楽坂家は『月読』を代々継承していて、現当主である剛三と千姫は、各々その魔法を修得しているために当主として選ばれた。
「あの子たちはそこまでの極致に至っていませんので、その心配は杞憂ですが。剛三さん、彼は上泉家に伝わる天神魔法の口伝――それを全て書き起こした秘伝書をそこまで読み進めていると？」
「それに関しては俺も分からん。彼が天神魔法を会得したと分かったのは、３年前の沖縄防衛戦の後になるからな」
剛三はあの秘伝書を全て読み解いて『天照』を会得していた。悠元が高位の喚起魔法を会得していることから、あの秘伝書に書かれていた全てを読み解いたという可能性を剛三は考えていた。
「あの歳で『吉田家の神童』すら出来なかった〝竜神〟の完全制御を難なく成功させたからな。精霊魔法を使う古式の連中が聞いたら、必死になって彼を囲おうとしてくるだろう」
「あら、それは頼もしいですね。態々来た甲斐はありそうです」
心配そうな剛三に対して、千姫は柔らかい笑みを零していた。
〝竜神〟とは、精霊魔法において水の大循環の独立情報体とも呼ばれる神霊――という定義となっているが、天神魔法においては水属性の高位喚起術の一つでしかない。とはいえ、その難度は極めて高いことに変わりないが、悠元はその喚起と制御に成功している。
「しかし、あやつは不思議ともいえるな。一度は絶った筈の縁を繋ぎ直したのだから」
尤も、本人は否定するだろうな、と剛三は独り言ちるように呟いた。
剛三もとい上泉家と四葉家の関わりは〝１０年前〟を最後に絶っていた。だが、その縁を結び直したのは他でもない悠元であった。これには千姫も微笑んで剛三を見ていた。
「千姫には迷惑をかけたな。〝あの子〟のことを任せきりにしてしまったことは俺の不徳の致すところだ」
「いえ、いいのですよ。最悪の手段を用いずして回避できたのは事実

です。とはいえ、あの家の分家筋はあの子を〝罪〟として世界から遠ざけようとしている……そう願っておきながら、いざ手にしたら恐れる……まあ、人間らしいといえばらしいでしょうが」

剛三と千姫は〝あの子〟と呼んだ人物に深く関わりがある。何せ、その原因を生み出した当事者側だからだ。2人はこの国の護りを憂いていた。そして、かの家は復讐を望んでいた。その双方の思惑が不思議と絡み合い、一つのことを成した。そして、その力は3年前に証明される形となった。

だが、その人物の親族は彼の力を恐れている。元々それを願っておきながら、いざその力を知った際には彼を殺そうとしたことも千姫は知っている。

それを止めた今は亡き男性からは、万が一の場合は神楽坂家で引き取ることも相談されていたが、何とか杞憂に終わってくれた。とはいえ、未だ根本的な解決には至っていないが。

そんな2人でも悠元の成長は想定外だった。〝あの子〟と同等以上の力を持ち得る存在になった事実に対して、2人は悠元の力を外に出すべきではないと判断した。二家が彼の婚約もとい婚姻に関与しているのは、その理由が一番大きい。

「まあ、それは置いといて……彼は上泉に神楽坂の血筋を引くもの。約定通りに事を進めても？」

「それは構わぬが、相手はどうする？　無理強いは出来ぬぞ？」

「実は会場で面白いものを見まして。その辺は私にお任せくださいな、お義兄様（にいさま）」

剛三の懸念に対して、千姫はそう言い切った。「世界は狭い」……誰が言い始めた言葉かは忘れたが、実際にその通りであると千姫はそう感じていた。自分の孫も含め、この九校戦には神楽坂の血を引く者たちが集っているという事実。余計な連中が絡んでいるが、実力の読めない新人戦で手を出せるような勇気などある筈もない。

そんな〝この国の力を損なおうとしている連中〟はともかくとして……千姫は広げた扇子で口元を隠していたが、その表情はまさしく微笑んでいると剛三は察したのであった。

九校戦五日目①～新人戦二日目～

九校戦は5日目、新人戦2日目を迎えた。ここまで無頭竜による大きなトラブルや妨害は受けていないし、その辺の連絡も特に受けていない。そんなことを考えつつ、悠元はゆったりとした動きで構えを取っていた。

〝あの人物〟が介入してくることも念頭に入れていたが、その辺は祖父も理解しているだろうし、『鬼門遁甲』に関しての得手は髄一なので心配はしていない。尤も、祖父の場合は初手無差別という破天荒ぶりだが。

今日に関しては、達也にＣＡＤ調整のコンディションを見てやってほしいと深雪のことを頼んだ。深雪はやや不満げだったが、達也が悠元も競技に入るのでそれに集中させるべきと諌めてくれた。その代わり、試合は見に来てほしいと念を押されてしまったが。

すると、何かしらの物体が飛んできたことに気付き、悠元は足元にあった小石を素早く蹴り上げると、小石にだけ硬化魔法を付与して掌底で飛ばした。小石と飛翔した物体は空中で衝突して地面に落ちたところでそれを確認すると、飛んできたのは手裏剣だった。

それを拾い上げようとする前に自己加速術式を掛けて襲い掛かる人物が出て来たので、悠元は反射的に威力が軽めの『エアライド・バースト』を撃ち込んだ。

「ぐおっ!?」

相手が草むらに落ちるよう計算した上で発動したので、相手に対して特に怪我はなさそうだ。その人物の顔を確認すると、先日会った人物――第九高校の1年である宮本修司であったことに気付きつつ、悠元は冷ややかな視線を向けていた。

「一つ質問だが、お前は『無頭竜』と関係があるのかないのか？　あったとしたら軍に引き渡さなきゃいけないんだが？」

悠元の殺気も込められた視線に修司はどう言い訳したものか悩んでいた。悠元に対しては正直〝試し〟の程度だったのだが、難なくいなされたことに内心で焦りを感じていた。すると、そこに由夢と姫梨

が姿を見せた。どうやら修司を追いかけてきたのだとすぐに理解はしつつ、警戒は緩めなかった。
「もう、修司！　いくらお祖母様の指示だからって、やり方ってものがあるでしょう！」
「全くです。ちゃんと反省してください」
「あ、えっと……すまない」
　まるで無視されたような感じがしたが、悠元は殺気を引っ込めた上でその場が収まるのを待っていた。すると、彼女たちもようやく説教が済んだようで、悠元のほうを見て頭を下げていた。
「えと、ごめんなさい。これには事情があって……」
「お互いに矛を収めるということならそれでいいよ。しかし、こっちは今日から競技だというのに、手裏剣を投げられたら妨害行為だと思うから、もう少し考えてほしい」
　色々気になるワードはあるが、それについて尋ねる気はしない。競技に集中したいので、余計なことに思考は割けないという思いもある。なので、姫梨の謝罪を受け取りつつ、悠元は静かにその場を去った。
　何で朝っぱらから無駄に気を使わないといけないのか……と悠元は独り言ちたのだった。
◇　◇　◇
　今日は、クラウド・ボールの予選から決勝リーグ、アイス・ピラーズ・ブレイクは予選（厳密には一回戦と二回戦）となる。
　クラウド・ボールのほうは、女子がスバルと菜々美を含めた3人、男子は燈也を含めた3人が出場する。菜々美の場合は同じ予選ブロックに由夢がいて、スバルの場合は愛梨が予選ブロック決勝（準決勝）で当たる形となっている。
　燈也の場合はというと……予選は魔法オンリーで行き、決勝リーグは例のラケットで勝負をするようだ。あえて無失点には拘らず、最多得点を狙いに行くスタイルらしい。実際、練習期間の時はブランクがあるとはいえ、美嘉から得点を奪っていた。彼女から得点を奪えたのは真由美、スバル、そして燈也の3人だけだったことを付け加えてお

く。

この前、燈也から「部活で１０キロはウォームアップです。レオも同意見でした」と断言されたことに引き攣った笑みを浮かべてしまった。せめて４００メートルトラック1周程度ならまだ信憑性があると思う。それを涼しい顔でこなしてしまう燈也もおかしいレベルだが。

そんな事情は心の片隅に置いて、悠元は端末で今日のトーナメント表を確認する。

試合のプログラム自体は一応時間で区切られているが、ピラーズ・ブレイクの場合は試合の制限時間が設定されていないため、状況によっては試合プログラムの前倒しもある（破壊した氷柱の撤去や再設置などのインターバルを設けるため）。なので、いつ始まってもいいように基本試合会場にいることが前提となる。

（流石に、将輝とは同じブロックにならなかったな。けれど、彼に関しては『お気の毒に』としか言えないな）

予選トーナメント表自体は各校がばらける様になっているので、1つのブロックで同じ学校の生徒が戦うということはない。悠元がそう呟いた理由は、男子の第1試合に三高の一条将輝と一高の生徒が対戦するということ。

生徒の名前を憶えていないというわけではないが、その人物も悠元に対して快く思っていないのを知っている。けれども、それを表立って指摘して、結果を出せずに終わってしこりを残すのもごめんだった。なので、新人戦の統括役としては、選手として頑張ってほしいという一定の線引きをしているというだけだ。

尤も、対戦相手の時点で試合結果は見えたも同然であるが、口に出すことはしなかった。

というか、こういう融通は十師族としての対決を決勝リーグで見せたい、という大会運営やメディアの思惑もあるのだろう。こちらとしては、別に第1試合で当たっていたとしても不満はなかったが、向こうがそういう配慮をするのなら別に構わないと思っている。

しかし、昨夜の会談は明らかに〝戯れ〟で済むようなレベルではな

かった。祖父には及ばないが、これまでの彼の経験からくる密度の高い殺気はまさしく本物だったと言えるだろう。あの後、響子からお詫びのメールが届いていた。内容については祖父のしたことへの謝罪だったので、「特に気にしていない」と返しておいた。

誰も知らないことだが、自分の固有魔法である『万華鏡（カレイドスコープ）』には〝認識した存在の無限化〟という以外にとんでもない特性がある。仮に彼が原作で使ったと思しき魔法を使っていたら、自動発動（オートキャスト）して大変なことになっていたのは言うまでもない。

それはさておき、今日のピラーズ・ブレイクの試合スケジュールは、女子が一回戦第１試合に英美、第５試合に雫、第１２試合に深雪となっている。男子側は、悠元の一回戦は午後一番となる第１０試合なので、他の試合を観戦しに行く余裕があるのは幸いだった。

自身が使うＣＡＤのチェックと調整は済ませているため、後は直前の微調整ぐらいしかない。なので、本来担当する予定のエンジニアは、同じ種目に出場する２人の１年男子の調整を行うことになっている。昨日スピード・シューティングで急遽エンジニアに入ったことから、その信憑性も高まったという訳だ。

女子第１試合に出場する英美の様子を見るため、「櫓」の根元にある控室に行ったのだが……そこで繰り広げられている光景に悠元はジト目を向けていた。

顔を赤らめて誤解しそうな箇所を片手で押さえてモジモジしている狩猟部のユニフォームを着た英美に、疑問の眼差しを妹に向けている達也、それを見て反論している深雪の姿に、正直「何があった」と問いかけたかった。

「なあ……一体これはどういう状況だ？」

「悠元か。いや、実はちょっとな……」

「お兄様！　お願いですから、悠元さんの前で言わないでください！」

言わなくても大体の予測は付く。見るからに寝不足の英美に近付いた上で、こう言い放った。

「エイミィ、完全な寝不足だろ？」

「あ、あはは……はい……」

結構活発な口調が目立つが、こういうタイプに限ってメンタルが結構繊細だったりする。どうやら処方された睡眠薬を飲まなかったのだろう。なので、深雪は感覚遮断カプセル（完全防音、防振、遮光の閉鎖型ベッド）の手配をするためにその場を離れ、達也はフィードバックを強めにする調整を進める。

試合開始まで３０分以上はある。なら、自分の取る手は……英美に近付き、背後に回った。

「エイミィ、試合まで強制的に寝かせるから」

「え、一体何を」

英美がその続きを言う前に、悠元は英美の背中に掌を当てて想子を流し込む。それによって英美は意識を急に失ったが、悠元が素早く抱きかかえてベンチに寝かせた。これには達也も驚きを見せるような表情をしていた。

「今のは…模擬戦の時に、十文字会頭にやったことの応用か？」

「正解。分類的に有機物干渉だけど、相手の想子体を強制的に睡眠状態へ移行させるものだ。直接触れないと意味がないんだけど」

悠元がやったことは、想子体が睡眠状態だと認識させることで肉体も睡眠状態に強制移行させる技術。これに関しては、金沢魔法理学研究所での訓練が結果として生きていたことも大きいと悠元は話した。

「エイミィにやったこととは逆の方法――――強制的に覚醒させる方法が会頭に使ったものとなる。しかし、予選でこれだと明日が心配になるな。人の心配をしている場合じゃないから、手の空いている人間に頼むかな」

その辺は達也も心配していたようで、英美に関しては担当エンジニアとしても厳しく言っておくと述べたので、それに頷いた。

「それよりも、同じ男子の応援をしなくていいのか？」

「達也から言われるとはな……言っちゃ悪いが、第１試合の結果は既に見えている以上、それをバネに成長できるかは本人次第だ。第７試合に関しても『クリムゾン・プリンス』程とは言わないが、相手選手の実力は高い。変に肩の力が入っていなければ勝てる相手だが……」

一応男子の様子は確認したのだが、どうにも燈也の優勝の影響で肩

に力が入りすぎているようだ。それに加えて悠元や達也への嫉妬も見え隠れさせていたので、特に言葉を掛けることはなかった。成績もいいのなら、それぐらいの割り切りはせめて持ってほしかったのだが、こうなっては無理に言い聞かせることもできないだろう。
「こっちはこっちで競技に集中したいから、余計なことは言わなかった。今日のミーティングは昨日以上に『氷炎地獄』状態となりそうだ……」
「そうか……」
達也も昨日のミーティングのことは深雪から聞き及んでいたらしく、悠元の言葉が冗談に聞こえないと感じていたが、それに軽く反応するだけに止めて黙々と作業を進めていた。
◇　◇　◇
女子の一回戦第1試合は、英美が自陣の氷柱を5本残して二回戦進出を決めた。なお、本人は終わった後に達也からの手厳しい言葉を受けてカプセルの中で大人しく休んでいた。男子のほうは言わずもがな将輝の勝利で終わっていた。この競技では一条家の秘術である『爆裂』も使用可能であり、その様子はモニターに映る競技のハイライトで目を通した。
一高にとっては2試合目となる一回戦第5試合。つまり雫の試合となるわけだが、控室にて達也は既視感を覚えつつも、雫の格好に対して言うことを止められはしなかった。
「雫、本当にその格好で出るのか？」
「そうだけど？」
そんな問いかけに対して、何か問題でもある？　とでも言いたげに雫が返した。
アイス・ピラーズ・ブレイクは競技の特性上、直接攻撃がなく遠隔魔法のみで戦う。なので、競技に関してＣＡＤの操作を阻害するものでない限り、服装が大きく影響するということはない。一応服装自体も「公序良俗に反しないもの」というルールさえ守れば、本人にとって気合の入る服装で構わない。
なので、英美は狩猟部で使うユニフォームを身に着けていた。そし

て雫の場合は「振袖」を身に纏っていた。ＣＡＤ操作のことも考えて袖は小さめのものを選んでいて、襷を使うから問題ない、と雫は主張した上でこう言った。
「それに、千代田先輩やエイミィよりは地味だと思うけど？」
「そうか……（これじゃ、まるでファッションショーだな）」
色合いは確かに派手ではないが、振袖の時点でかえって目立っているのでは、と達也は思わなくもなかった。けれども、しっかりと着こなしている雫を見て、彼女のやる気を考えれば止める気にもならなかった。そのやる気の原動力の一端である悠元はというと、一般の観客席で観覧していた。近くにはレオや幹比古、エリカに美月が一緒にいた。
「ねえ、悠元。雫や深雪の近くに行ってやらなくていいの？」
「どっちかの近くにいれば『肩入れしてる』と見られるからな。現に昨日のスピード・シューティングでもそうなってたんだろ？」
観客席の深雪の様子を知らせてくれたのは美月だった。悠元としては、達也のクラスメイトということでいつでも連絡をとれるように各々のプライベートナンバーを知っていた。そのことが役に立った形だ。
それはともかく、昨日の様子からして下手に様子を見に行くよりは、ある程度距離を置くのがいいと判断していた。エリカと美月なら深雪も信頼しているので問題はないと判断したのも一因であるが。
「ま、昨日に関しては美月のお蔭でもあったけど」
「いえ、お役に立てたようで何よりです」
お互いに「友人」としての遣り取りであると認識している悠元と美月。これに関しては、面白くなさそうにエリカが呟いた。
「ちっ、折角弄ろうと思ったのに……」
「お前は何を言っているんだ」
人を玩具のように見るな、と悠元は内心で溜息を吐きたかった。

九校戦五日目②

女子アイス・ピラーズ・ブレイク一回戦第５試合。

雫が振袖姿で「櫓」に登場する。相手選手の風来坊的衣装にも少し驚きはしたが、それに目を奪われるということはない。精々奇抜な衣装だな、と思うぐらいだろう。雫がそれで動揺するような性格でないことは無論知っているが。

フィールドの両サイドに立つポールに赤い光が灯った。

黄色い光に変わり、試合開始を告げる青のランプが灯った瞬間、双方が動いた。

先手を取ったのは雫。自分の指を滑らせるように腕輪型ＣＡＤを操作し、自陣の氷柱１２本全てに魔法式を投射する。それに一拍遅れる形となるが、相手選手の魔法式が雫の氷柱に襲い掛かる。しかし、相手選手の魔法によって雫の氷柱が微動だにすることはなかった。

（流石に、雫はちゃんと仕上げてきているようだな）

選手の状態を監視するモニターを見ながら、達也は無言で頷いていた。

第１試合で寝不足だった英美とは違い、体調を崩しているということはない。『共振破壊』も『情報強化』も練習以上にスムーズに発動している。

雫が使っている『共振破壊』そのものは、彼女の母親である北山（きたやま）（旧姓：鳴瀬（なるせ））紅音（べにお）が得意としていた魔法。高校に入る以前から雫にとっては慣れ親しんだ魔法であり、高校入学の時点でも高い水準を誇っていた。

本来の『共振破壊』は、対象物に無段階で振動数を上げていく魔法を直接掛けて、固有の振動数に一致した時点、即ち振動に対する事象改変の抵抗力が最も小さくなった時点で固定し、対象物の振動破壊を行うという２段階の魔法。この魔法は直接的に行使する場合はともかく、今回のように間接的に仕掛ける場合、共振状態を常に把握しなければならない。

なので、観測機械に頼るのではなくそれを魔法の工程として、達也

は『共振破壊』の起動式に組み込んでいた。その魔法を学校の練習時間だけでなく、学校外でも相当の練習を積んだことが窺われる熟達ぶりを試合で発揮していた。

実際のところ、アイス・ピラーズ・ブレイクについても、悠元は雫の練習に付き合っていた。

東京にある上泉家の別宅――――正確には、新陰流剣武術の東京支部道場が隣接する屋敷なのだが、そこから少し離れたところの山奥に大規模な演武場があり、そこでマンツーマンの学校外練習をしていた。流石に司波家からは遠くなるため、九校戦までの2週間は上泉家の別宅で合宿という形となった。

その辺は達也から頼まれていたことにも関係しているが、雫からすれば、ライバルともいえる深雪以上の実力者相手に練習ができること。悠元からすれば、口の堅い雫だからこそ思い切って魔法の練習が出来る、という互いの利が一致したことも大きかった。

なお、ポンポン氷柱を生み出しては設置していく悠元の規格外さに、雫は「これは口外したら拙いね」と内心で呟いていたことなど悠元は知らないが。

自身が好いている男性と練習できることに雫が内心で喜んでいた一方、深雪の機嫌が悪くなった（この時点で既に雫が悠元に好意を持っているということを知っていた）ために達也がフォローするということとなり、新人戦女子スピード・シューティングの観客席で見せた深雪の態度に繋がっているという訳だ。

その機嫌を直す一環で、悠元は深雪に起動式を一つ渡したという事実も付け加えておく。

それはさておき、相手が雫側の氷柱を1本破壊するが、雫の想子波に一切の乱れは生じていない。最初から完全勝利するつもりはないのだろう。その欲目がないということは、逆に安心できる材料でもあった。雫が敵陣に残っていた4本の氷柱を綺麗に破壊し、二回戦進出を決めたのであった。

◇　◇　◇

その一方、女子クラウド・ボールでは観客がどよめいていた。ラ

ケットを使用しながらも一切得点を許すことなく完封するという芸当を見せた人物に、控室に戻ってきた菜々美はショックを受けていた。

彼女の相手は第二高校1年の高槻由夢。中学時代は全くの無名である相手に、菜々美は得意魔法である『虹色の跳躍（レインボー・スプリング）』で挑んだのだが、相手からポイントを一切奪えなかった。それだけならまだよかったのだが、菜々美は由夢の動きに驚愕していた。

（あれ、本当に人間の動きなの……？）

練習期間中、イメージトレーニングは人間の反射速度の限界で行っていた。それをこなせるだけ彼女のレベルは高いと言えたが、それを超える相手と遭遇するとは夢にも思わなかっただろう。

すると、控室にスバルが姿を見せた。彼女も落ち込んだ様子を見せていたため、負けたのだと察しはついた。

「菜々美……負けたのか」

「うん。アレ、とても人間の動きじゃないよ」

「三高の一色も同じだったからな」

敗戦のショックというよりは、自分たちの想像を超えた相手に当たったということへのショックというべきだろう。だが、彼ら以上のショックを受けることになる人物がいることを彼女らは知らなかった。

◇　◇　◇

女子クラウド・ボール決勝リーグ最終戦。第二高校1年高槻由夢と第三高校1年一色愛梨。

今大会のダークホースとして名乗りを上げた由夢に対し、中学時代に『稲妻（エクレール）』の名でリーブル・エペーの数々の大会を制した実力者である愛梨。ここまでお互い1勝しているため、勝ったほうが優勝となる大事な局面を迎えていた。

お互いラケットを使うスタイルによる超高速の打ち合いの応酬。第1セットは11―20と愛梨が先制する形となったが、これには観客席で見ていた修司が頭を抱えたくなっていた。だが、それは知り合いが苦戦しているという事実に対してではなかった。

「アイツ、この大事な局面で遊んでやがるな」
「みたいですね。まったく、あの子はそういうところがなければ〝一番弟子〟になれるというのに……それも彼女らしいですが」
強い人を相手にすると、その人の力を試したくなる彼女の悪い癖がこの場でも出たのだ。力への貪欲さから出てくる行為だが、対戦する相手に対しての行為とはとても思えない、と言われるだろう。
本来一定以上の実力差がないと成立しないその行為を平然とやるということは、即ち彼女がそれだけの実力者だということの裏返しでもある。
修司の言葉に対して、隣に座って観戦している姫梨も修司に同意しつつ愚痴を零すようにしながら呟いたが、それも由夢らしいと言い切っていた。
けれど、そんな遊びはここまでだろうと2人は確信していた。先日神楽坂家当主より「その存在感を示せ」と言われている以上、相手が師補十八家の令嬢であっても手抜きは許されない。
これは後で説教が入るな、と由夢の取った行動に対して修司と姫梨は揃って溜息を吐きたかったが、周りに観客もいるのでそれは慎んだ。
「一色のあれは、おそらく視覚と運動神経を直結させているな。見えた情報に対して反射的にボールを返すやり方だが……相手が悪すぎたな」
「ええ。ここから彼女は『雷電』を使うでしょう……出しましたね」
第2セット開始直後、今まで目まぐるしく動いていた由夢がコートの後方中央に陣取った。愛梨から飛んでくるボール全てが由夢側のコート前方を通過した瞬間、ボールの軌道がまるで由夢を中心に吸い取られるように変化する。そして、由夢がそれらを愛梨に打ち返すと、愛梨に届く直前で急激な加速と軌道変更を起こし、次々とポイントが加算されていく。
それは彼女が得意とする金属性の天神魔法『雷電』。特定の範囲内に使用者が設定した力場のフィールドを発生させるだけでなく、フィールドに入る方向で異なる情報を付与する性質を持たせること

ができる。クラウド・ボールの場合は周囲を壁で覆っているため、相対位置の固定自体は非常に楽ともいえる。
本来の使い方――――攻撃魔法としての『雷電』は、術者と相手をＮ極とＳ極――――即ち一つの磁石に見立て、自分に向かってくる攻撃を磁場転換で全て逸らし、術者から放たれた〝魔法を含む〟攻撃を全て相手に引き寄せさせるというもの。
一度相手を視認すれば、仮に相手が遮蔽物に隠れても攻撃を自動追尾してくれる便利さと、他の金属に引き寄せられない特殊性を併せ持っている。
『雷電』の殺傷性ランクは、出力や規模、力場フィールドが術者の攻撃に与える効果に加え、攻撃の場合は相手に引き寄せさせる魔法や質量体に依存する部分が大きいため、結果として完全な事後評価となる。
今回の場合は使用用途が攻撃用でないため、愛梨の側から入った場合だと由夢のいる中央方向に収束し、由夢のいる側からは、フィールドを抜けて一定時間後に急激な軌道変化を起こす性質を付与するというもの。
この辺の柔軟さが天神魔法の強さの一つでもある。
人間の視覚というのは、視界内に入った物体が急激な変化で視界の外へ斜め方向に移動した場合、それを追いきれない。愛梨は高速で飛んでくるボールを知覚するための魔法を使用しているが、それは全てのボールの存在感を強制的に認知させている。つまりは反射速度向上のために取捨選択ができないのだ。
ならば、と愛梨が前方に移動したところで由夢がコートの外側にある透明の壁を利用して相手コートに叩き込むだけ。
「そしたら、由夢をからかってやるか」
「そこは労うのじゃないのですか……？」
「だって、祖母さんの説教は確定だし」
「……それは、まあ、そうですね」
気付けば第３セットまでが終了。第２セットの得点は１８０―１２、第３セットは２０９―０。盛り上がる観客を尻目にしつつ、修司

と姫梨は席を静かに立って観客席を後にした。
女子クラウド・ボールは、優勝が由夢、準優勝が愛梨、第3位は三高の別の選手となった。スバルは4位、菜々美は6位入賞となり、控えめに言っても同校の複数の人間が入賞するのは喜ばしいこととともいえた。
◇　◇　◇
時間は正午。悠元は昼食（とはいっても仕出しの弁当だが）のために天幕へと戻ってきていた。
ここまでの一高の戦績は女子クラウド・ボールが2名入賞、女子ピラーズ・ブレイク2名が二回戦進出。一方の男子ピラーズ・ブレイクは2名が一回戦敗退となったため、残るは午後の最初の試合に出場する悠元のみとなっていた。
菜々美とスバルはほのかのフォローもあって立ち直っていた。特にスバルはミラージ・バットにも出るので、気持ちを切り替えてくれたことには安堵していた。
「悠元、あれはいいの？」
「エイミィは人の心配をする前に自分の心配でもしておけ……ま、俺自身にも言えることだけど」
英美がそう零したのは、見るからに落ち込んでいる1年男子のピラーズ・ブレイクの選手2人のことだ。それを視界に収めつつも、悠元は首を横に小さく振った。
自分が先日まで抱えていたこととは別のベクトルの話だが、一度や二度の敗北を引き摺る気持ちは理解できなくもない。けれど、その敗戦を糧にしないことには前に進めない。懇親会で剛三が言っていたことを思い出せてればいいが、見るからにそういう様子は見られなかった。
酷なことだが、こればかりは自身でけじめをつけるべき問題と悠元は認識していた。
「手厳しいね」
「別に負けることが悪いとは言わない。一番大事なのは、そこから自分が何をすべきかだろう」

その意味で、自分が今まで取ってきた行動は〝逃げ〟なのだろう。前世に常識外れの身内がいたせいというのもあるのだが……先日の父との会話でそれを自覚させられることになったわけだが、これはこれで大変だなと思いつつ、雫の呟きに答えていた。なお、深雪に関しては、悠元の隣に座っていて、とてもご機嫌な様子だった。

「……達也」

「すまない、諦めてくれ」

「白旗早くねえか!?」

先程まで達也と深雪は最終調整をしていたのだが、天幕に来て悠元の姿を見つけると、深雪が嬉しそうに駆け寄ってきた。それを妹に甘い達也が止められる訳もないことぐらい分かっているが、ダメ元で尋ねた悠元の問いかけに達也は残酷な回答を突きつけた。

そんなんだからシスコンって言われるんですよ、とは言わなかったが。

「そういえば、悠元さんと深雪は午後の試合だよね。２人はどんな衣装を着るの？」

「私は悠元さんに選んでもらった衣装だけど、オーソドックスよ」

「悠元、初耳なんだけど」

「聞かれなかったから答えなかっただけです。だから抓るのをやめてくれ」

ほのかの問いかけに深雪が答えたことを聞いて、雫がムスッとした表情を悠元に向けつつ脇腹を抓っていた。その痛みに耐えつつ悠元は雫の行為を窘めた。強く言わないのは、自分のやってきたことの結果でこうなっていることを自覚しているからだが。

「自分は母さんが選んだやつだ。本当は妹が選びたがっていたんだが、何とか諌めてくれた」

「妹さんがいるのですか？」

「うち、７人兄弟姉妹（きょうだい）で俺は６番目だからな。まあ、家の仕来りで妹はまだ三矢の名字を名乗ってないけど」

「７人って、魔法使いの家にしては多いよね……」

それだけ兄弟姉妹が多いというのは、十師族の家柄にしては多いほ

うだろう。話が逸れてしまったが、妹もとい詩奈は最初白のタキシードをチョイスしようとしていたが、流石にそれは……ということで母が考えてくれた。代わりに選ばれた衣装を見たとき、これはこれでいいのかと思わなくもなかった。

「まあ、自分が着ることになるやつも正統派な衣装だから、おかしいものでもないと思う」

色々悩んだ末、タキシードを着るよりは日本人らしいかということで納得した。これが前世で外国人だったら……いや、その場合でも間違った日本文化を学んだ挙句、喜んで着そうだなと思わなくもなかった。

別にどこかのポンコツ戦略級魔法師（アンジェリーナ＝クドウ＝シールズ）のことを指して言ったわけではない、と述べておく。

◇　◇　◇

その頃、第三高校の天幕では驚愕している人間が数名いた。

その数名――愛梨、栞、沓子の3人は、午後からの試合スケジュールを確認する際、栞が鈴音から言われたことを2人に話した。第一高校1年男子で残っている男子こと三矢悠元……その顔写真が表示された瞬間、3人の表情が凍り付いた。

愛梨は女子クラウド・ボールの敗戦のショックから素早く立ち直っていた。というよりも、自分を更に圧倒する存在に出会えたことをとても喜んでいた。これには栞と沓子も「愛梨らしい」と笑みを零して納得していた。

「彼が……十師族……？」

「これは、正直驚きね」

「成程のう。名乗っている名前が違うのだから、いくら名前を探しても出てこないわけじゃ」

彼が第一高校の制服を身に着けていたので、九校戦の関係者だということは想像が付いていた。だが、いくら名前を探しても出てこなかった。彼が今名乗っている名前がそれならば、長野佑都という名前を探したところで出てくるはずがないとようやく理解した。

「しかも、名前の読みが同じだから、なまじ勘違いしてしまうの。ま

あ、そこまでの意図があったとは思えぬが」
「でしょうね……どうする？　時間的には女子の試合と被らないけど」
「……見ましょう。私としても無視できませんから」
同じ師族二十八家としてだけでなく、同じ三高の1年にいる一条の次期当主――――将輝と当たる可能性がある十師族の一角を担う三矢家の人間。
その実力はしっかりと目にしておきたいと考え、愛梨は栞の問いかけにそう答えつつ、男子ピラーズ・ブレイクの試合会場に向かうこととなった。栞と沓子も愛梨の後を追うような形で付いていくことにした。

九校戦五日目③

昼食を済ませ、悠元は素早く着替えられるように学校指定のジャージに着替えており、控室で自身のＣＡＤの最終調整を行っていた。これ以上出来ることはあまりないのだが……悠元は小さく息を吐いた。

「悠元？　もしかして、緊張してる？」

「人並みにはな。これでも不特定多数の面前での魔法披露は初めてだからな」

魔法科高校での魔法の行使はカウントに含まないのかと思うが、厳密には非魔法師である観客の前で披露することなど未経験だ。加えて、この九校戦は国外でも中継されていると聞く。つまりは全世界に向けてのアピールともいえる……十師族とはいえ、その力をアピールする分には打って付けともいえるだろう。

雫の問いかけに答えつつ、悠元は汎用型ＣＡＤを手に取って感触を確かめた。問題ないと確認したところで、部屋の外――モニターで映されている男子試合会場の観客の多さに眉を顰める。

「というか、観客多くないか？　いくら十師族の名があるとはいえ、選手としちゃ無名に等しいんだが……『クリムゾン・プリンス』と勘違いしたとかじゃないよな？　見るからに大学の関係者もちらほらいるし」

「気持ちは理解できなくもないが……それについてだが、三矢。どうやらＶＩＰ席が原因のようだ」

悠元の疑問に答えたのは、様子を見に来た克人であった。この控室には真由美、克人、摩利の幹部３人がいて、男子クラウド・ボールのほうは服部が見に行っており、鈴音と手伝いに駆り出された啓と花音が天幕の留守番をしている有様だった。

話を戻すが、克人が言うには一条家、三矢家、四葉家、七草家の各当主（剛毅、元、真夜、弘一）、五輪家の長女（澪）に九島家の先代当主（烈）。更には上泉家の現当主である剛三も観戦すると説明した。

「会頭はご存じなかったのですか？」

「師族会議で九校戦の観戦に関する出席は取っていたが、自分もこれ

は想定外と言うべきだな。特に、四葉家当主がお前の試合を見に来るということに対してだが」
十文字家当主代行にしては思慮不足でないのか……とも思うが、七草家と十文字家が監視・守護の相互協力関係にあるとはいえ、七草家が掴んだ情報全てを教えるということはないだろう。情報というのは大きな武器なのだから。
三矢家と四葉家が協力関係にあることぐらいは承知していると思われるが、さらに細かいところは踏み込んでいないと推察した。
「といいますか、3年のお三方がここにいてよろしいのですか？　男子クラウド・ボールのほうもあるでしょうに」
「大丈夫よ。私だけでなく美嘉さんと互角以上に戦った燈也君が下手を打つとも思えないから。一応はんぞーくんには行かせたけど」
真由美の口調が猫被りをしていない時のものだが、実はほのかや雫も真由美や摩利に気に入られた人物となった。原因は入学2日目の一件も絡んでいると思われる。
真由美は「光井さんは将来の生徒会役員候補」と評し、摩利曰く「北山は将来の風紀委員候補」ということらしい。それに対してほのかはキョトンとした表情を見せ、雫が面倒そうな雰囲気を出していたことに苦笑を漏らしてしまったが。
控室には先程述べた3年生の4人以外に達也、深雪、ほのかまでいた。ほのかは3年組の登場に若干緊張していたのは言うまでもないが、その辺は達也がうまくフォローしていた。
そして、深雪はというと先程から悠元の背後に笑顔で立ったままだった。必要以上に持ち上げたり、変なプレッシャーをかけてこない分にはまだマシなのだが、どうやら自分と雫のやり取りを見て羨望のような雰囲気を感じていた。
「それで、深雪は何か言いたいのか？」
「あ、えっと……悠元さん、頑張ってください」
意外と普通に応援されたことに対して逆に動揺してしまったが、何とか表情には出さなかった。しかし、アイス・ピラーズ・ブレイクに出場する一高の1年男子で残っているのが自分だけになると、プレッ

シャーに近いような視線を天幕で強く感じた。自分が過剰に反応しているだけかもしれないが。
なので、その意味で深雪の応援は幾分か気が楽になったと言えるだろう。というか、新人戦のリーダーとしても、十師族に名を連ねる者としても、負けるという選択肢など取るつもりなど最初からないのだが。その意味で負けず嫌いなのは否定しない。
ちなみに、応援した深雪は顔を背けてはいたが、頭から湯気が出そうなくらいに耳まで真っ赤だった。その辺は達也にクールダウンのお願いをしておいた。
「頑張れよ、悠元」
「お前から応援を受けるとはな……ま、精々恥じない戦いをしてくるよ」
ピラーズ・ブレイクのために用意された服装に着替え、櫓の可動式足場に立つ。ここまでは自分から目立つということは極力避けてきた……と思うのだが、必ずしもそうとは言えないだろう。
どこか夢でも見ているような気分はあった。けれど、父から言われて自覚させられた。あの時に三矢悠元としてこの世界に目覚めたときに、この運命は決定づけられていたのかもしれない。ならば、〝手品師〟として精々見せてやろうじゃないか。
――ここからが、俺の〝表舞台（ステージ）〟だということを。
◇　◇　◇
男子アイス・ピラーズ・ブレイク一回戦第１０試合。この試合で出てくることになる三矢家現当主の三男こと三矢悠元。彼自身はその観客の数に首を傾げていたが、他校の生徒がかなり多かった。そんな光景を横目で見つつ、一般の観客席で見ている美嘉が思わず言葉を漏らした。
「多いねえ……ま、悠元の有名税みたいなものだけれど」
「美嘉がそれを言う？」
「あ、あはは……」
美嘉の言葉に佳奈が窘め、佳奈の隣に座っているエリカが思わず苦笑を浮かべていた。レオと幹比古は燈也の応援ということで男子ク

ラウド・ボールを見に行っており、エリカと美月をよからぬ連中から守るという意味で美嘉と佳奈が同席していた。
流石に十師族プラス一高の連覇に関わった生徒会長経験者となれば、観客と言えども2人を知っている者が多く、エリカは内心で感謝していた。
悠元に注目が集まるのは、過去に三矢家の人間が打ち立てた実績に加えて、悠元が昨日の男女スピード・シューティングにおいてエンジニアを担当したということからだ。エンジニアと選手を兼任しているパターンはかなり珍しいが、彼が関わった選手が優勝しているという事実から、選手としての実力を見たいと思うのも無理はない、と佳奈は推察した。
「そういえば、元継さんはどこに？」
「祖父さんのところにいるわよ。あれでも上泉の次期当主だもの」
「あれ呼ばわりって……兄さんの朴念仁には、私も一時期困ったけど」
元継はＶＩＰ席で剛三の付き添いという体をとっており、詩鶴と千里は男子クラウド・ボールを見に行くと言っていた。エリカは家の関係から理解できているが、先程お互いに自己紹介したばかりの美月にとっては、悠元の姉ということから不思議そうな目で見ていた。佳奈が美月の『眼』に気付いて色々レクチャーしたことから、自然と打ち解けていたが。
そんな風に話している彼女らとは別の席――――フィールドを挟んだ向かい側の観客席では、三高1年の生徒がある程度固まって観戦していた。その中には将輝と真紅郎、愛梨に栞、沓子も座っている。ここにいない面子は男子クラウド・ボールの試合会場にいた。
「さて、いよいよ彼の魔法が見られる訳だけど……将輝、難しい顔をしてるけど大丈夫？」
「え？　あ、ああ……というか、ジョージこそ大丈夫か？」
「一度の敗戦で引き摺ったら、他の選手に影響を与えかねないからね。それぐらいは僕も理解しているよ」
真紅郎の問いかけに将輝は少しだけ動揺しつつもしっかり答えた上で聞き返したが、真紅郎はしっかりと答えていた。研究者ならば失

敗の積み重ねなど日常茶飯事みたいなものだが、得意魔法である『インビジブル・ブリット』を封じられたショックが残っていることを将輝は危惧した。
だが、真紅郎も伊達に将輝と付き合ってきたわけではない。無論友人としてではあるが。
参謀である自分が動揺を引き摺れば、他の1年メンバーに波及しかねないと分かっているからこそ、素早く気持ちを切り替えた。尤も、真紅郎からしたら恋煩いを起こしている将輝の方が心配だと言いたい気分ではあったが、そちらの方は口を慎むことにした。
「将輝としては、やっぱり自分の家のこともあったりする？」
「……否定はしない」
将輝がそう言いつつＶＩＰ席に目をやると、そこには将輝の父親である剛毅が観戦していた。向こうも将輝の姿は視界に捉えているようで、彼の目礼に将輝も目礼で返した。
父親が自分の一回戦も見ていたことは知っている。同じ十師族として悠元の試合を見に来たというのも理解できる。だが、彼だけでなく他の十師族の当主まであの場にいるのは驚きという他なかった。
「将輝には止めてくれた礼があるから、これ以上は聞かないけど……本当に大丈夫かい？」
「本当に大丈夫だ」
真紅郎がそう尋ねたのには理由がある。
ここに来る途中、観戦しに来ていた将輝の家族――――将輝の母である美登里と、将輝の妹である茜に瑠璃の2人と遭遇したことだ。真紅郎は瑠璃から好意を持たれており、一条家に行くとかなりの頻度で瑠璃からのスキンシップを受ける羽目になっていた。
幸い、今回は他の人の迷惑になりかねないため、将輝の取り成しで回避できた。だが、茜が将輝に対して兄のように扱わなかったことを真紅郎は目撃していた。将輝が思わず声を荒げようとしたので、真紅郎は周囲の目線があるため必死に諌めたが……将輝本人の心が傷ついたのは言うまでもないだろう。
大丈夫だと主張はしているが、真紅郎はこのことが試合に影響しな

いことを祈るしかできなかった。
　そんな会話が繰り広げられる一方、愛梨と栞、沓子は観客席に座って試合開始を待っていた。
　警戒するのが司波深雪という存在だけかと思えば、よもや男子にも気になる相手がいた。尤も、栞から見れば愛梨と沓子は別の意味で彼を注目していると勘付いているのだが。
「そういえば、わしは家の関係で知り合ったのじゃが、栞はどこで知り合ったのだ？」
「金沢の研究所よ。愛梨も彼とはそこで出会ったけど……よもや、十師族だとは知らなかったわ」
　そもそも、栞は三矢家の仕来りなど知るはずがないため、彼が名前を隠していた意味も知らない。けれど、それはその家ならではの事情があるのだと推察はしていた。それは栞が十七夜家に来てから学んだ中に自分の知らなかった仕来りがあり、その類だろうと考えた。
「私も、彼が嘘を吐いていた、とは思っていないけれど……でも、彼が最高強度の訓練を難なくこなしていたのは見たことがあるわ」
「あの研究所の……それって、もう実験レベルの代物よね？」
「ええ」
　あの時は自分の目を本気で疑うほどだった、と愛梨は述べた。金沢魔法理学研究所の最高強度の訓練……安全を度外視した〝人体実験〟のレベルに相当するであろう訓練。それを彼は2年前――――中学2年の時点でクリアしていた。
　そこから更に強くなったと考えた場合、彼のいる領域は師族という枠組みで測れるレベルなのかどうかも疑わしい、と愛梨は考えてしまったのだ。
「末恐ろしいのう……」
　沓子とて、師族二十八家の人間の強さは理解している。だが、その一角に連なる人間である愛梨がそう述べたという意味を考えた場合、これから彼が見せる魔法がその強さの証明になりうるだろう、と半分興味津々で、もう半分は心配というか不安を覚えていた。
　そして、会場内に試合実況の音声が響き、フィールド内の「櫓」の

稼働音が聞こえる。
◇　◇　◇
これから始まる試合の様子をＶＩＰ席で見守っている面々。すると、剛三が烈に向かって毒づく様に言い放った。
「烈、昨晩うちの孫を試したようだな」
「……流石は剛三。隠し切れぬか」
「当たり前だ。あの程度のもの、隠せるとでも思ったか？」
この場には他の十師族当主もいる以上、剛三は〝殺気〟という言葉を敢えて隠した。無論、何が言いたいのかを烈も理解しており、剛三の次の言葉を待った。
「ま、お前の場合は孫娘から説教を食らったんだ。後は義妹（いもうと）の説教も食らうだろうし、俺からはそれ以上言わん。尤も、お前らは驚くこと請け合いだろうがな」
「上泉殿、それはもしや上泉家の秘術に関わるものですか？」
剛三の言葉に反応したのは弘一だった。悠元が上泉家の血縁であることは無論知っており、新陰流剣武術には七草家でも知らぬ秘術が数多く存在する。魔法のことを尋ねるのはタブーであっても、やはり探求心と地位向上のための力を欲する身として、魔法師としても聞きたいと思うのは無理からぬこと。その辺を察しつつ、剛三は述べた。
「そうとだけ申しておこう、七草殿。百聞は一見に如かず、という言葉が適切であるだろう」
「上泉殿、それは初耳なのですが……」
「わしだけではない。〝向こう〟からもそれが見たいと申してきたからな」
剛三の言葉に元が反応し、それに対する答えを述べた剛三から出てきた言葉に、それが何かを理解した元継が驚きを隠せなかった。
「爺さん、それは初耳なのだが？」
「お前にも隠しておったからな。あやつの力は、正直わしでも測り兼ねておる。だから、彼女に見極めてもらうことにした」
戦略級魔法師である剛三ですら測り兼ねると言わしめた悠元の強さ。なので、剛三はその力を正確に見極められる人物に託すこととし

たのだ。これには真夜が問いかけてきた。
「上泉殿、その彼女というのは一体何方でしょうか？」
「ここにいる連中なら、名前ぐらい知っておるだろう。『護人』の一角を担う神楽坂家現当主、神楽坂千姫。あやつがここから見える観客席のどこかから見ている」
「何⁉」
剛三の答えに一番驚愕したのは烈だった。まさか、神楽坂家当主自ら九校戦に来るというのは寝耳に水であった。烈が目線だけを動かして探るが、彼女は見つからない。いや、仮に見つけられたとしてもそれが正しいとは限らない。彼女の得意とする魔法は存在をまるで非魔法師から見た〝普通〟のように見せてしまう魔法だからだ。
どうあがいても探すのは無理だと判断し、烈は一息吐いた上で剛三に尋ねた。
「……剛三。彼女はいつから来ていた？」
「俺が知ったのは昨日の夕方だ。連絡を受けて部屋を取らせたようだ……昨晩、軽く会話はした。お前との会談も〝本家〟で応じると聞き及んでいる」
剛三とて彼女のことを十全に理解しているわけではない。だが、その程度のことなど彼女からすれば〝朝飯前〟なのだろうと感じていた。

九校戦五日目④

選手入場のアナウンスがこちらにまで聞こえてきて「櫓」が動き出す。

いよいよ本番か。さて、服装も含めてどういった反応をされるのか……まずは落ち着こうと瞼を閉じて意識を冷静に保つ。そして、足場が上がりきったところで瞼をゆっくり開いたのだが……観客の反応は沈黙一色だった。

目線だけを動かすようにして周囲を見てみたが、どの観客も同じようであり、そして相手選手の様子は……呆然としていたのだった。これには悠元も改めて瞼を閉じ、内心で若干疑心暗鬼になってしまった。

あれ？　俺、時でも止めたかな？　というか、そんな魔法ないな。そういう〝超能力〟はありそうだが……あれもそういう類みたいなものだし。別におかしい衣装でもないとは思うんだけど……何が悪かったのだろうか？　別に威圧とかしたつもりなど微塵もない。強いて言うなら、日頃の癖同然となっていた気配の抑制を敢えて止めているぐらいだ。

驚くとかそういう反応ぐらいは覚悟していたが、逆に静かすぎるのはこっちも困る……と悠元はそこまで考えてから深く息を吐いた。

あれこれ考えていた自分自身が馬鹿らしく感じてしまい、逆に緊張が解れた。その上で瞼を開き、改めて２４本の氷柱があるフィールドと、その先に立っている対戦相手を真剣な眼差しで見つめていた。言っておくが、別に殺気は一切込めていないと述べておく。

三矢悠元。十師族・三矢家現当主、三矢元の三男にして、第一高校における今年度の新入生総代であり、先日の学期末考査では魔法理論・魔法実技共に文句なしの第一位。公にはなっていないが、公式の試合で十文字家当主代行相手に勝利した人物でもある。

その人物を実際に見た観客たちは、彼の放っている存在感に圧倒されていた。いや、会場の空気を〝掌握〟していると言っても過言ではない。身に纏っている羽織袴と雪駄の姿が様になっていることもそ

の要因と言えるだろう。
尤も、その当人が周囲の反応に困ってしまうというオチまでワンセットだが。
◇　◇　◇
「……」
「様になってる、とかいうレベルじゃないわね……」
「真由美……写真を取りながら言う台詞じゃないぞ」
モニター室では、悠元が真剣な表情を浮かべて「櫓」にいる様子を、克人は何も言葉を発することもなく真剣な表情で見つめていた。沈黙に耐えきれずに真由美が真面目な発言をしているが、いつの間にか隠し持っていたカメラで彼の羽織袴姿を収めている行為を見て、摩利が溜め息交じりに呟いた。
達也は本来深雪の試合が次に控えている関係で女子会場の控室に移動するはずだったが、深雪から悠元の試合を代わりに見てほしいとお願いされて、已む無くこの場にいた。インターバルのことを考えれば、悠元の試合時間は女子の試合時間よりも短くなるだろう、という達也自身の予測もあったが。
真由美の行動には達也も若干呆れていたが、ここで雫が彼の姿を写真に収めようとせず、窓の外に映るフィールドをジッと見つめていた。そのことに気付いた達也は、雫に近付いて小声で尋ねた。
「雫。悠元の姿を写真に収めないのか？」
「大丈夫。実は既に撮っているから」
彼女も真由美に聞こえないように小声で返したのだが、強かなところは妹に似ているな、と達也は内心で呟きたかった。２人が変にいがみ合うことがないので、出場している競技に支障を来たしていないことが奇跡とも言えるだろう。
その意味で、悠元は本当に不思議という言葉でしか表現できないな、と達也は思った。
（しかし、相手選手が気の毒になるレベルだな……まあ、同情はしないが）
モニターで見るからに、悠元の体調は万全のレベルということが

ハッキリ見て取れた。そして、彼の相手となる第八高校の選手は完全に委縮してしまっているのが達也も認識できていた。
戦う前から既に勝負は見えたも同然だが、これはあくまでもアイス・ピラーズ・ブレイクの競技であり、相手へのプレッシャーで勝つ競技ではない……彼の場合ならやりかねないと思ってしまうあたり、自分もつくづく毒されているな、と達也は内心で呟いた。
◇　◇　◇
フィールド内のシグナルである赤が灯る。
それが黄色に変わって、青に変わり、試合開始となる。
開始直後、最初に動いたのは悠元。彼は、自陣の氷柱全てに魔法式を投射した。それは硬化魔法をよく使っている摩利が反応した。
「なに？　自陣の氷柱に硬化魔法を？」
摩利は、克人の『ファランクス』を破るぐらいの実力だから、てっきり領域干渉でも使うのかと想像していたが、悠元がそれや情報強化ではなく硬化魔法を選択したことに驚いていた。
そこから遅れて、相手選手が振動魔法の魔法式を投射して、悠元の氷柱を『溶かす』作戦を取った。だが、時間が少し経っても溶ける様子が見られない。それどころか、悠元のフィールドにある氷柱が綺麗な表面をしていることに、ほのかが気付いた。
「達也さん。悠元さんは硬化魔法しか使っていないんですよね？　それでいて、氷柱の表面が綺麗に見えるのですが……」
「それは間違いない。どうやら、悠元は硬化魔法で氷柱を〝整えた〟ようだ」
「整える？　どういうこと？」
ほのかと雫の疑問に達也は説明を入れる。
硬化魔法は収束系統魔法の一つ。その定義内容は〝相対位置の固定〟となっている。なので、彼はその処理をしやすくするために氷柱内の気泡を全部取り除いて分子レベルで固定。その上で氷柱の表面や水滴の水分子に干渉して、表面を水滴一つない綺麗な状態――即ち、純粋な水分子のみで構成された〝一切融解していない〟氷柱に整えた。

氷柱とフィールドの相対位置固定も無論掛かっており、1つの魔法で3つの事象改変を干渉させることなく同時に行うという高等テクニックを披露している。
「氷柱に3つの硬化魔法のマルチ・キャストとは……」
「それだけでも、世界でも指折りの事象改変能力を持っているってことね。いえ、寧ろ片手で収まるぐらいじゃないかしら？」
表面が歪な状態より整っていた方が事象改変の負荷を抑えられるが、彼の想子保有量ならそこまでする必要などない。これは懇親会の時に「老師」こと九島烈が言っていた〝工夫〟に対する返答だろうと達也は推察した。
「達也さん、それじゃあ相手の選手が悠元さんの氷柱を倒す方法はあるんですか？」
「そうだな……彼と同等以上の事象干渉力を以て、魔法を撃ち込むしかないだろう」
達也はそう答えたが、十師族クラスの事象干渉力に対抗出来るレベルの人間となるとそう多くない。仮に相手選手が魔法力のリソースを1本に集中させたところで、彼の「眼」を誤魔化せるわけがないし、的確な対処で完璧な防御を行うだろうとみている。
「悠君と同等……十文字君はいけそう？」
「正直分からない。あれで本気の事象干渉をしているという確証もないからな」
ほのかと達也のやり取りを聞いて真由美が克人に尋ねるが、返ってきた言葉は「分からない」であった。その言葉には真由美だけでなく摩利も真剣な表情を見せていた。
会場から感じられる悠元の事象干渉力は現時点でもかなり高いが、三矢家は七草家と同じく『多種類多重魔法制御』を得意としている。それこそ硬化魔法、領域干渉、情報強化のマルチ・キャストぐらいは簡単にできるだろうと克人は推察している。
そこまでやられたら『ファランクス』を用いたとしても勝てるかどうか不明である上、以前見せた『円卓の剣（ラウンド・ブレード）』のこともある。そう思ってしまう時点で、彼の持つ魔法の引き出しは文字通りの〝万能〟であ

ると感じていた。
真由美は、悠元が無意識的に漏れた深雪の魔法をＣＡＤなしで抑え込んだ干渉力を目の当たりにしている。それから比べればまだまだという印象を受けているのは確かであり、摩利も同じように感じていた。
この時点で相手選手の攻撃は無意味と化していた。それに気付いた相手選手は情報強化で耐え凌ぐ作戦に切り替えた。だが、そんなことを気にすることなく、悠元はＣＡＤを操作して起動式を読み込み、魔法を構築する。
そして、相手フィールドに魔法式が投射されるのだが、現代魔法で見たことのない魔法式が相手フィールドの氷柱を上下から挟み込むように展開し、相手フィールド全ての氷柱の中心に光のラインが縦に走ったように見えた。そこから氷柱が一気に白く光ったかと思った次の瞬間、全ての氷柱が瞬時に水蒸気へと化して、空中に舞い上がっていった。
試合終了のブザーが鳴り、悠元は瞼を閉じて静かに頭を下げた。だが、その場にいた観客は一体何が起きたのか理解できず、会場内は静寂に包まれていた。それこそ、実況のアナウンスの声が会場内にいる観客によく聞こえるほどであった。
◇　◇　◇
「爺さん、あれは……」
「ああ。よもや、古式魔法と現代魔法の複合術式とはな。ハッハッハ、つくづく儂の期待をいい意味で裏切ってくれる」
ＶＩＰ席で見ていた面々も驚きを隠せぬ中、元継と剛三は悠元の使った魔法を見抜いていた。厳密には天神魔法と現代魔法の複合術式で、使用した天神魔法は土属性の『共鳴裂界（きょうめいれっかい）』――――多方向から複数の振動波を対象物および特定の地点に送り込んで強烈な地震レベルの振動を与える魔法。
現代魔法で使われる『共振破壊』とは異なり、本人が認識できていれば起点が地中や海中でも発動可能な点に加えて、特定範囲や対象物〝のみ〟に効果を限定して発動することも可能とする。なので、悠元

が魔法を使った際にフィールドが振動しなかったのは、相手フィールドの氷柱のみを狙い撃ちにしたのが理由である。
だが、単純な『共鳴裂界』だけでは、瞬時に水蒸気へと化すことはないと分かっていた。精々かき氷レベルの細かさに砕けるぐらいだ。なので、彼が複合して使った現代魔法がその要因だと考えた。瞬間的に見えた光のライン……剛三は内心で一つの結論に達した。
(『相転移装甲(フェイズシフト)』を攻撃手段に使ったのも驚きだが……真夜の奴め、あやつに『流星群(ミーティア・ライン)』を見せたな)
剛三の予想は正解だった。
悠元が使ったのは、現代魔法の光波空間収束魔法『流星群』と構造硬化魔法『相転移装甲』、それと天神魔法『共鳴裂界』の複合術式。固有名は『流星裂界(ミーティア・ディバイド)』。
『流星群』で相手の防御全てを貫通させて氷柱の中心に撃ち込み、撃ち込まれた光を起点として『相転移装甲』で意図的に分子構造変化の強制破綻を起こし、氷柱の水素結合を崩壊させた。『相転移装甲』の強制破綻による結合崩壊は、過去に木刀をカーボンナノチューブにしてしまった経験から会得した技術である。
そして、間髪入れずに『共鳴裂界』で強烈な振動を与えられた水分子が一気に加熱し、昇華で水蒸気へと変化して空中に舞った、という流れである。尤も、この魔法はあくまでも無機物への干渉を前提としたものであり、対人戦闘を想定する場合は『分解』か『金鎖破鎚』を使った方が速いということを付け加えておく。
「剛三。あの魔法式は……もしや、例の魔法か?」
「ああ。アンタはわかるだろうな」
烈は以前に何度かその魔法を見たことがあった。そして、今回の九校戦では、彼だけでなく第九高校と第二高校にもその魔法を使う人間が存在した。その驚きに気付いたのか、澪が問いかけてきた。
「閣下、彼が使った魔法の存在をご存じなのですか?」
「ああ。天神魔法――陰陽道系古式魔法において最上位の魔法だ。存在は殆ど知られていないが、その魔法に関係しているのがそこにいる剛三の上泉家と神楽坂家なのだ」

烈の言葉で元を除く十師族の当主や澪は驚きを露わにした。その二家が『数字付き（ナンバーズ）』でないにも拘らず、多大な影響力を持っている理由は、その魔法の存在があるからこそだと理解したのだ。元については、天神魔法のことを予め剛三からレクチャーを受けていたため、驚く素振りは見せなかった。

「まあ、教えることはできないがな……さて、失礼する。元継、行くぞ」

「はい。失礼いたします」

「それでは、自分も一旦失礼します」

これ以上この場にいたら、間違いなく天神魔法のことを聞き出そうとしてくる……それを見抜いて、剛三は元継と共にその場を後にした。元もそれに続く形でＶＩＰ席を立ったのであった。

◇　◇　◇

試合が終わっても、先程の衝撃から会場の空気が未だに抜けきれぬ中、次の試合を見ようと移動している修司、由夢、姫梨の３人はお互いに黙ったままだった。すると、この空気に耐えかねた由夢が言葉を発した。周囲に人がいるので、声量を抑えつつ話した。

「彼、間違いなく土属性の最上位魔法を使ったね……それだけならまだ分かるけど……」

「現代魔法との複合術式なんて、一体どれだけの演算能力を持っているのか、ってことだな」

話している２人と黙っている姫梨は、天神魔法と現代魔法の両方を使いこなすだけの技量を持ち合わせている。だが、いくら天神魔法が現代魔法に近い改変プロセスとはいえ、その２つを複合させて同時に行使するという技術は持ち合わせていない。〝魔法が使える〟と〝魔法を合わせる〟では、その難易度が格段に違うのだ。

ここで、由夢は黙り込んだままの姫梨に視線を向けた。彼女の足取りはしっかりしているのだが、まるで心ここにあらずと言わんばかりの様子を見た由夢はジト目に変わっていた。

「姫梨、揉むよ？」

「いきなり何を仰っているのですか!?」

「別にどこをって言ったわけじゃないのに、何で慌てるかな……」

「お前が今までにやってきたことの結果だ」
由夢が納得いかないような表情を見せたことに対して、修司は辛辣ながらもそう言い放った。
自分たちの祖母が彼に対して課した〝試し〟もそうだが、剛三の言葉に関して正直半信半疑だった。だが、彼はそれに違わぬ実力の一端を指示した。それを目の当たりにしてしまった以上、認めざるを得ないだろうと修司は感じていた。それは由夢と姫梨も同意見であった。
尤も、姫梨の場合は悠元に対しての恋慕をより一層強めたのかもしれない、と先程の様子から察してしまったのは、ここだけの話である。

閑話　横浜ベイヒルズタワーの一幕

――西暦２０９５年３月２５日。

その日は奇しくも知り合いの誕生日だが、正式に三矢の名前を名乗る前のことだったため、その知り合いとは会えずじまい……になるだろうと思っていた。

未だ「長野佑都」を名乗っている自分に呼び出しがあると連絡を受けたのは、その前日。三矢家の本屋敷で父から手紙を渡されたのだ。

「この内容についてですが、父さんは何かご存知ですか？」

「いや、何も聞いていない。魔法協会からの案件だが、指名したのはお前だからな。恐らく、重要な案件故にお前が呼ばれたのだろう」

「三矢を正式に名乗ったわけではないのですが……分かりました」

ともあれ、断るという選択肢はなかった。奇しくも、知人から頼まれていたことを片付けるため、横浜ベイヒルズタワーへ行くことは自分の予定の中に入っていたからだ。そこに加わる形で日本魔法協会関東支部からの呼び出し。

メールではなくご丁寧に手紙ということから、その案件がどういう意図を持っているのか……自ずと察してしまった。この辺は国防軍に関わり始めたことからの経験によるものが大きい。

そして、手紙に書かれた呼出人の名――『四葉真夜』ということから、その案件が少々厄介だと察してしまったのだった。

まずは魔法協会に行く前、悠元はタワー内にある宝石店に立ち寄った。とはいっても、別に知り合いの誕生日プレゼントを買うわけではなく、知人から頼まれていた用事を片付けるためだった。知人――その店のオーナーは自分の姿を見ると、丁寧に頭を下げてきた。

ここのオーナーも自分が三矢家の人間だと知っている……理由は父親である元とオーナーが友人の間柄であり、元は彼のところで結婚指輪を買い、その縁で自分も知り合ったということだ。

「一応こちらになります」

「これは素晴らしいですね……ありがとうございます、御曹司。お蔭で助かりました」

「あの、一応はまだ名乗っておりませんので」
オーナーに渡したものは、父が「上泉洸人」に制作を依頼したということで作り上げた髪飾り。テーマをどうしようか悩んだ挙句、その店で扱うということも考えて雪の結晶をイメージして作り上げた。
一応魔除けの要素も取り入れた上で丁寧に作った……自分が女性物の小道具なんて作るのは初めてだったので、ＣＡＤを設計するぐらいの熱意を持って取り組んでいた。あくまでも単発のアルバイトだったので、こういった機会は二度とないと考えた上での作品だ。オーナーには大変喜んで貰えたまでは想定していた。
だが……まさか、それが回りまわって深雪の手に渡るとは思ってもみなかった。そのことを知ったのは、一科生と二科生のトラブルに介入した時である。驚きが表情に出なかった自分を褒め称えたかった。
流石に恥ずかしいので、未だにそのことは自分の胸の内に秘めたままだ。ただ、達也あたりは既に気付いているのかもしれない。
そんなことはさておいて、その店を後にした悠元は日本魔法協会関東支部に足を運んだ。受付の人からは三矢家の人間であると認識されているあたり、今名乗っている「長野佑都」ではなくなりつつある、と思わずにはいられなかった。
指定された部屋の中に入ると、以前お見かけした女性こと四葉家現当主である真夜と四葉の筆頭執事である葉山がおり、悠元は三矢家の人間として頭を下げた。
「これは、四葉殿に葉山殿。お久しぶりです」
「お久しぶりですね、悠元さん。でも、そんな他人行儀にしなくてよろしいですのに。葉山さん、お願いできるかしら？」
「畏まりました」
葉山が一時的にその場を後にすると、真夜は立ち上がって悠元の腕を掴むと……何故か、膝枕を受ける羽目になっていた。
「あの、何故にこういうことになっているのでしょうか？」
「それだけ気に入っていると解釈して結構ですよ。それで、貴方に頼みたい仕事があるのです」
どうあっても膝枕は解除してくれないようだったので、悠元は諦め

たように話の続きを促した。相手は当代の世界最強と謳われる魔法師なので、機嫌を損ねないほうがよいと判断した。自分も要らぬ諍いや争いは御免であったためだ。

苦笑を浮かべる葉山から紙の資料を渡され、素早く目を通すと葉山に手渡した。

「強化措置を受けた戦闘特化型の魔法師とは……成程、これから起こる荒事に対する痕跡の消去ですか。まあ、その程度ならお引き受けしますが、此処を襲撃するであろう魔法師への対処はしなくてよろしいので？」

「達也さんにお任せする予定です。今日は何の日か、悠元さんもよく分かっているでしょう？」

「ええ、まあ……いつものようにプレゼントと手紙だけですが」

そう、今日は達也の妹である深雪の誕生日。そんな日に巻き込まれるというのは……トラブルを呼び込む主人公気質は変わらないようだと悠元は思った。加えて、深雪の性格ならその荒事に対処しようと自発的に動くことは容易に想像できた。

ある意味兄妹でマッチポンプみたいなものだと思わなくもなかった。

「それでは、報酬の〝一部〟を前払いで渡しておきましょう」

真夜はそう言って、テーブルに置いた空のティーカップを宙に放り投げると、周囲が〝夜〟に包まれた。そして、光は的確にティーカップを綺麗に粉々にしていた。これを見た悠元は頭を抱えたくなった。

「……とんでもない報酬ですね。『流星群（ミーティア・ライン）』とは……」

「似たような系統の魔法を使ったと姉から聞いていますので、貴方なら行けるかと思ったまでです。それで、どうかしら？」

「まあ、行けますよ」

悠元はソーサーを手に掴んで空中に放ると、魔法を発動させて部屋の中を〝夜〟で満たし、光の雨を自在にコントロールしてソーサーだけを綺麗に粉砕した。その上で悠元は床に散らばった破片を気流操作で集めて、ごみ箱に破片を捨てた。そこまでやったことに、真夜はまるで子どものようにはしゃいでいた。

「ホント、貴方は凄いわね。姉さんを〝女〟として目覚めさせただけのことはあるわ」
「えっと……それに対して、自分はどう反応すればいいのでしょうか？　その、葉山さん……」
「そこは悠元殿にお任せいたします。私めに判断できる裁量はございませぬので」
　自分の介入という原因もあるのだが、四葉家が別の意味で『触れてはならぬ者達（アンタッチャブル）』になっているのでは、と心のどこかで感じていたのだった。この時のやりとりを今になって思い返せば、深雪だけでなく深夜にまで好意を持たれたと解釈できるのだが、真面目にどうすればいいのですか？……と、思わなくもなかった。
　その後、ベイヒルズ東タワーで事前に情報を貰った魔法師が暴れたが、深雪が持ち前の事象干渉力で完全に抑え込み、魔法を使わない実弾の火器も凍結魔法で無効化。相手がナイフを持ち出したところで割り込んだ達也が『分解』で魔法師のナイフを粉砕という形にし、鳩尾に一撃を加えた上で意識を飛ばして気絶させた。
　この一連の遣り取りを『万華鏡（カレイドスコープ）』で見つつ、端末のキーボードを叩いて情報操作を素早く完了させる。しかし、削除ではなく判明できない程度に画像を荒くする処理にしてほしいとは驚きだが……いや、完全に削除したら四葉家が動いたと七草家に勘付かれることを読んだのだろう。
「さて……〝仕上げ〟と行きましょうかね」
　本来はここまでが仕事の範疇。だが、自分はもう一つの楔を射ち込むことに決めた。この行為が原作に影響を及ぼすことは必至だが、自分が決めたもう一つの目標――魔法師が単なる兵器ではなく〝人間〟として在るための魔法。
　「ワルキューレ」のロックを外して、リミッターを全解放する。普通ならそこまでする必要はないが、今回は規模が規模なだけに万全を期す。「ワルキューレ」を頭上に向けて構え、自身の中で魔法式を構築する。そして銃口の前に魔法式が展開され、引き金を引いた。
　その瞬間、ベイヒルズタワーを中心に――この国の空は〝夜〟に

包まれた。

◇　◇　◇

今日は深雪の誕生日。とはいえ、深雪はそこまで強欲ではなく聞き分けの良い……いや、良すぎるぐらいの妹だ。第一高校への進学も決まって誕生日プレゼントは何がいいかと尋ねると、「お兄様から頂けるものでしたら何でも」というのは流石に困ってしまった。こういう時に悠元（この時は佑都だと思っていた）がいれば良かったな、と思わなくもなかった。

結局「俺の出来る範囲であれば一緒にいるし、お願いぐらいは聞こう」と言う羽目になった。そう言っても欲を出さないのが利口だと思わなくもない。ただ、これは俺に対しての場合であり、これが悠元だったらと思うと彼は苦労しそうだな、と思った。

どうしてなのかと言えば、悠元が司波家に居候すると決まってから、深雪はすこぶると言っていいほど機嫌がよかった。だからと言って、服装や下着などの意見を俺に求めないでほしい。一部を除いて情動的な感情を失っているとはいえ、性欲が枯れていないというわけではないのだから。

とはいえ、深雪には甘めな母上や叔母上に任せたら絶対に嫌な予感しかしなかったため、仕方なく相談に乗っていた。その意味で俺も深雪には甘いと思う。

身内の世辞抜きにしても、深雪は周囲の視線を集めやすい。尤も、本人からすればそんなことなど気にしていない……というよりも、下心のある視線などを見抜きつつ、見ない振りができるぐらいに己を律していた。深雪がそう決めた以上は、敵意でない限り俺も無視するし、深雪を襲う輩は適切に排除するだけだ。

春休みということもあって流石に人が多いので、深雪とはぐれないように手を繋いで歩いていると、ふと一つの髪飾りが目に留まった。雪の結晶をモチーフにした髪飾り……プレゼントのおまけとしては悪くないだろうと思い、それを購入して深雪にプレゼントした。彼女も喜んでくれたので何よりであった。

見た目のデザインだけでなく、魔除け的な意味において魔法陣を意

識したものだった。恐らくは魔工技師がアルバイトでデザインしたものではないかと深雪に述べた。後でこの髪飾りに『再成』を使った際、記憶の遡及でその髪飾りが悠元によって作られたと知った時、つくづく縁があるなと思った。

なお、このことは深雪に言っていない。こればかりは深雪自身が気付くか、あるいは悠元が話すほうがいいと判断した。

昼食の際、やはり深雪に視線が集まる。すると、店員からサービスということで「恋人パフェ」なるものが差し出された。俺たちは兄妹であると言う前に深雪が折角だからということで食べることになった。深雪から食べさせてほしいとせがまれて致し方なく食べさせてやるが、彼女としても初恋の相手である〝彼〟にこうしてほしいという願望を込めて、俺にせがんでいるのかもしれない。

昼食後、ウィンドウショッピングをしていると電話が鳴った。その相手から用件を伝えられて通話を切ると、内心で舌打ちをしたくなってしまった。深雪には魔法協会からの呼び出しということを伝えると、彼女もその呼び出し先が誰なのかを察してくれたようで、待ち合わせの約束をして俺は1人で魔法協会に向かった。

深雪の素性が今知られてはならない。なので、俺が単独で呼び出しを受けたのも理解できた。

その呼び出した当人たち――――叔母上と葉山さんから、政治的な案件である強化実験体の捕縛を依頼された。〝処理〟ではないというのは、時間が時間なだけという問題もあるが、魔法監視網に引っかかる懸念もあるのだろう。その上で叔母上はこう告げた。

「達也さん。今回の案件の後始末は既に別口で依頼しておりますので、気にすることは一切ありません」

「別口ですか？　もしや、国防軍か七草家ですか？」

「それとは違う、とだけ申しておきましょう。貴方も会ったことのある人ですよ」

俺が知っている限りで、高度な情報操作ができる人間は藤林少尉に限られている。もしや七草家とも思ったが、叔母上はそれを否定するような言葉を述べた。葉山さんに目配せをすると、彼は苦笑を浮かべ

ただけで何も言わなかった。これ以上は俺が踏み込めることではない、ということなのだろうと判断し、それ以上は聞かなかった。
葉山さんが見せてくれた資料には行動予測が書かれていなかったが、叔母上から今日襲ってくるという情報を聞き、俺は慌てて深雪のもとへと向かった。こういう時、深雪なら率先して動くだろうし、魔法に関しては圧倒的な干渉力に加え、相手の重火器を抑え込む魔法にも長けている。
だが、相手は強化実験体とはいえ元軍人魔法師。無論、白兵戦も得手がある以上は油断できない。間一髪でターゲットと深雪の間に割り込むことができ、俺は躊躇いなく相手のナイフを『分解』し、自らの拳を相手の鳩尾に捻じりながら打ち込んだ。そして、深雪の手を取り、素早く現場を後にした。無論、彼女にプレゼントした髪飾りも『再成』した上で、改めて深雪に手渡した。
本当に散々な一日になってしまったな、とは口に出さなかったが、機嫌の戻った深雪を連れて家に戻る頃には、夜となっていた。流石に疲れたなと思っていると、深雪が夜空を見上げていた。これには俺も疑問に感じたが、するとかなり広域に渡る精神干渉系魔法の発動を感じた。だが、明らかに敵意ではなく、まるで心を癒すような感じであった。
「お兄様……これって……」
「これは、光の雪か？」
深雪が徐に降り注ぐ光の雪らしきものに触れると、光が弾けて虹色に輝く粒子を放ち、空中に消えていく。そんな魔法など、俺も深雪も初めての体験であった。すると、深雪の表情がこれまでにない笑顔を見せたことに、俺は思わず声に出して問いかけた。
「深雪、そんなに嬉しいのか？」
「その、よく分からないんですが……この魔法を使ったのは、私とお兄様のように同じ考えを持ってくれている人じゃないかって、思えてくるのです」
希望的観測、といえばいいのかもしれないが、俺も深雪の言葉を否定はしなかった。きっと、俺も同じことを思っていたのだろう。

後日――――ブランシュ日本支部壊滅後、壬生先輩の見舞いをした後に葉山さんから事情説明を求められ、俺はブランシュ壊滅の経緯を話した。それと引き換えに、俺にだけ横浜の一件についての情報が開示された。深雪には伝えないように、という文言が付いていたのは、その内容で察してしまった。

横浜の後始末をしたのは佑都もとい悠元であり、叔母上が報酬の一部として『流星群』を見せて、彼は即興でそれを使いこなしたこと。加えて、彼が叔母上の魔法をアレンジして使用した精神干渉系魔法『流星雪景色（ミーティア・スノーライト）』がこの国全域に効果を及ぼしたことも書かれていた。

本当に彼は「不思議な奴」である、と俺は改めて感じたのだった。

九校戦五日目⑤

三矢悠元のアイス・ピラーズ・ブレイク一回戦の試合が終わり、沈黙から一転して興奮冷めやらぬ空気となっていた観客席に加え、モニターからは実況による熱の入った解説の音声が聞こえてくる。

そんな中、ＶＩＰ席の室内は並々ならぬ空気が漂っていた。そこにいる面々は苦虫を噛み潰した表情を浮かべていたり、驚愕の表情を見せたりしていた。そんな雰囲気の中、徐に立ち上がったのは1人の女性だった。

「それでは、失礼致しますわ」

四葉家現当主こと四葉真夜は、相も変わらず妖艶な笑みを見せながら部屋の出入り口に歩を進めた。すると、それに便乗したのは五輪家長女であり、国家公認戦略級魔法師「十三使徒」の1人でもある澪であった。

「それでは、私も失礼します」

それを見た葉山が先んじて扉を開けて、真夜に加えて澪が部屋の外に出たのを確認してから、ゆっくりと扉を閉めた。

その場に残ったのは剛毅、弘一、そして烈の3人であった。悠元本人と直接の面識を持つ面々で、彼が「長野佑都」と名乗っていた時からの付き合いがある。

剛毅は、自分の娘である茜が悠元に恋慕しており、彼に無礼を働いた息子を彼自身が鎮圧した〝恩〟がある。一条家としても三矢家には佐渡侵攻においての事前通知を受けていたことからの恩義もある。なので、茜を彼に嫁がせることは選択肢の一つとして考えていた。

弘一の場合は、娘の一人と婚約を結んでいたが、四葉への対抗心のあまり下手を打った形となり、婚約が解消された上に娘から厳しい目で見られることになった。今まで動くことのなかった上泉家を動かすほどの人物として、悠元をそれなりに評価していた。

烈の場合はというと、九島家の本屋敷で初対面の彼に秘術である『仮装行列（パレード）』を試したのだが、彼は一目で看破した経験がある。それは彼が新陰流剣武術を学んでいることからくるものだが、この時点で彼

の技量を正確に測ることはできなかった、というか剛三がいたので下手なことはできなかったのだ。
加えて、寝たきりがちになりやすい孫と彼は面識を持ち、歳が近いということもあって仲良くなっていた。その光景を見て複雑な心情を抱いたのは言うまでもないが。
「……七草殿は、彼をどう見ておられる？」
そう切り出したのは剛毅だった。先程の試合だけで彼の全てを把握できたわけではないが、明らかに「格が違った」のだ。
一回戦第1試合に出場した自分の息子こと将輝は、一条の代名詞である『爆裂』で速攻を掛け、あっさりと勝利を収めた。それはまさしく十師族の名に恥じぬ戦いである、と身贔屓を差し引いてもそう断言出来た。
だが、悠元の場合は違った。相手からの魔法攻撃を完全に防御した上で、相手陣地の全ての氷柱を同時に粉砕した。三矢の『多種類多重魔法制御』を披露した試合というだけではなく、硬化魔法のみで的確に複数の制御を行いつつ、瞬時に氷柱を改変するという世界でも片手に入るほどの処理能力を披露した。
氷柱への硬化魔法のマルチ・キャストは、まさしく一条家の『爆裂』封じということも含んでいると剛毅は察し、冷や汗が止まらなかった。
「彼の魔法技能の高さ自体は聞き及んでいましたが、ここまでとは思いもしなかった、というのが正直な感想でしょう」
〝万能〟と謳われる七草家……自身も魔法師として高い評価を受けている弘一も、内心では彼に対する関心と恐怖があった。昨年の九校戦で自分の娘を破った悠元の姉である美嘉にも強い関心を寄せていたが、先程の試合でそれ以上の興味を彼に対して抱いた。
それと同時に、同年代において飛び抜けた実力を有していることからくる恐怖も感じていた。三矢家が表に出している6人の子のうち、5人が並ならぬ才覚を発揮した……これに関しては、七草家にとって他人事で片付けられるレベルを超えていたのだ。
だが、幸いにして彼は三矢家の家督継承に興味などなく、現当主の

長男も彼には劣ってしまうが同年代では優秀な技量を発揮している上、現当主も長男への家督継承を進めていると調べがついている。
加えて、彼の婚姻には上泉家と神楽坂家がその全権を担っていると烈から聞き及んだ。なので、四葉家と言えども下手に手を出せる案件ではないが、上泉家の現当主は四葉家の亡き先々代当主と懇意の関係であったことと、現当主の真夜とも面識があるので、油断はならないと感じている。
その意味で、彼と泉美の婚約破棄は非常に痛手であった、と弘一は表情に出すことなく内心で独り言ちた。
「四葉だけでなく、三矢も台頭している。その意味で、彼がどこに身を置くのかで十師族のパワーバランスは大きく変化する、と言えるでしょう」
「……それは理解しよう」
先程の一戦で、悠元の技量の高さは折り紙付きだと剛毅も無論理解していた。なので、弘一の言葉にも一理はあると納得した。
今回のことだけを取り上げても、世界屈指の構造干渉能力を持つことは明らかで、同年代で言えば『ファランクス』を使いこなす十文字家次期当主の克人や、世界屈指の遠隔精密射撃能力を有する七草家令嬢の真由美と肩を並べる存在になったと弘一は見ている。
婚姻のことを差し引いたとしても、彼の存在を十師族が放置できなくなった。それは、ここにいる一条、七草、九島に先程までいた四葉と五輪、学生ながら当主代行ということで十文字、九校戦に来ていない二木、六塚、八代も彼を引き込もうとするだろう。奇しくも、彼は十師族の現当主全員と面識があるだけに尚更であった。
すると、剛毅は烈に問いかけた。
「閣下は、彼をどのように見ていらっしゃるのですか……？」
「弘一君の言った通り、彼が家督を継ぐか否かの問題ではないと思い知らされた。少なくとも、私の孫と同等以上の実力は兼ね備えているだろう」
贔屓目に見た上では、という文言は付くと烈は内心で呟いた。それは、悠元ではなく自分の孫に対してのものだということは口にしな

かった。
同年代で見ても、病弱ということを除けば孫の実力はトップクラスだ。だが、悠元の場合は現当主を含めた十師族全体においてのトップクラスの実力だと烈は推測した。仮に自分が戦ったとしても、勝率は良くて3割を切るだろうとみている。それは、非公式の戦略級魔法師である剛三があれほど可愛がっていることからも明白だと烈は思っている。
彼の婚約・婚姻が少々特殊なことになっているのは、三矢家に置いておくのが十師族全体のパワーバランスに直結すると元が理解していたからだろうとみている。
興奮で盛り上がる観客席と窓一つ隔てた空間は、これまでにないほどの雰囲気に包まれていたのは確かであった。
◇　◇　◇
無事に一回戦を突破して安堵していたジャージ姿（二回戦があるので、制服に着替える時間と手間を省くため）の悠元は、そのまま女子の会場――――第１２試合に出場する深雪の観戦をすることにした。とはいえ、雫はお互いの手の内を盗み見ないようにほのかやエリカたちと観戦するのだが、そこに加わっては拙いと考える。
とはいえ、モニター室での観戦は雫の機嫌を損ねてしまう。すると、そこに声を掛けてきた人物がいた。
「あら、悠元君」
「藤林さんに山中さん。お二人も次の試合の観戦ですか？」
「ま、そんなところだ。にしても、見ていた他の連中は慌てふためいていたな」
悠元が振り向くと、そこにいたのは響子と山中であった。周りのこともあるため、階級呼びはあえて避けている。それを察しつつ、山中が冗談めいた口調で先程の試合のことを口にすると、悠元は苦笑を浮かべていた。今頃国防軍でも問い合わせをしているのだろうが、それに関しては、正直複雑だった。
「なら、お2人と一緒に観戦してもよろしいですか？」
「あら？　悠元君はてっきり達也さんのところで観戦すると思ったの

だけれど？」
「そうしたいのは山々ですが、今回は事情が事情ということもありますので」
　先程の試合で目立っているために余計な諍いを避けるのと、どちらかで観戦してお互いの手の内を漏らさないようにするためでもある。練習期間中のこともあるので、雫の手の内を深雪に明かさないというのが一番の理由だが。尤も、雫のところで観戦したら、後で深雪に何を言われるか分かったものではない、というのもあるが。
「有名人は辛いというわけか」
「そんなところです」
　一応深雪と雫には断りのメールを入れて、響子と山中の２人と軍関係者席で観戦することとした。三矢家が国防軍との密接な関係もあり、すんなり許可してくれたのは正直ありがたかった。とはいえ、私服姿の大人に紛れて学生がいるというのは、少々浮いて見られるのは仕方ないと割り切った。
「……しかし、自分としてはいい感情なんて持てませんけれど」
　そう漏らしたのは、現状の国防軍に対しての不満からくるものだった。別に今の待遇に対しての文句ではなく、先日の十山家に関することが最も大きい。
　今年だけでも立て続けに２件……これで詩奈にまでちょっかいを掛けたら、その時は元継、千里、詩鶴、佳奈、美嘉、悠元の６人で対処することも内密に取り決めている。このことは元だけでなく剛三も黙認している事実だ。
　悠元が以前――７年前につかさと初めて出会った時、彼女の視線から感じるものは明らかな〝値踏み〟であったことを感じていた。なので、それ以降はつかさと遭遇しないように第三研への出入りを極力せず、上泉家での鍛錬に時間を費やしていた。
　己のことを棚上げにして「〝人間〟かどうか」を試すなど、人間の精神として〝壊れている〟と思う。この辺は自分の前世の比較からくるものもあるが。そうやって魔法師の居場所を無くしているのは、魔法を力として頼っている現状の国防軍に身を置くものとして言語

道断だろう。
　単なる「兵器」に判断することはできない。武器といった武力に止まらず、あらゆる力の善悪はいつも「人」という力の引き金を引く者の「精神（こころ）」による。高性能かつ学習・記憶能力を有する人工知能だって人間の意思や思惑が働いて作られたものだ。
　なればこそ、魔法師という存在は人であって兵器に非ず、ということを示さなければならない。魔法が使えなければ、魔法師でもただの人間と変わりないのだから。
「……君の言いたいことも理解はしよう」
「そうですね。山中少佐には達也君（かれ）に対する接し方を見直してもらわないといけませんから」
　何が言いたいのかを悟った山中は、渋々と言った感じで答えた。それに追撃という形で放たれた響子の言葉に、反論は野暮と判断したのか、山中は話題を変えるように窓の外を見つめた。悠元と響子もこれ以上この話題は続けたくなかったので、山中の問いかけに答える形で話を切り替えた。
「その彼が担当するのが彼の妹さんか。確か、学年次席だったか？」
「ええ。入学式の時は代理で答辞を読んでもらったようで」
「深雪さんのことだから、同級生の男子が詰め寄るほどに視線を集めたんじゃないかしら？」
　入学式の日のことは、一通りの流れを達也からまるで深雪の視点から見たように聞き及んだ。達也の事情は本人から聞いていたので驚くことも無かった訳だが、どうして達也からなのかといえば理由は簡単だった。
　深雪は興味のないことをあっさりと切り捨てられるのと、達也が深雪のことをしっかり視ていたことを考えれば、事情を把握しているのは後者だと理解できる。とはいえ、他の一科生の文言を一言一句違うことなく覚えているのは記憶の無駄遣いじゃないか、と問いかけたところ、達也から「癖みたいなものだからな」と返ってきたことには引き攣った笑みを漏らしてしまったが。
「聞いた限りでは、一科生の半数以上が押し掛けたようですよ。尤も、

本人は迷惑だとしか思ってなかったようですが」
「まあ、それもそうよね。深雪さんの性格を考えれば、無理もないわね」
「それほどの人材か……」
「止めておいた方がいいですよ。軍関係で彼女に何かするつもりなら、自分と彼が本気で止めにかかりますから」
その言葉に山中は失言だった、と顔を顰めた。それはつまり、独立魔装大隊に所属する非公式の戦略級魔法師を2人失うことになりかねない。これには響子も山中のフォローはできない、というかしない方向に回った。
「にしても、達也君は分かるけど……悠元君は深雪さんに気があるのかしら？」
「否定はしない、とだけ。今は九校戦を勝ち抜くことに集中したいので、これ以上は言いません」
響子の問いかけにそう答えながら、窓の外に映るフィールドに視線を向けた。
タイミングよく選手入場のアナウンスが響き渡ったので、これ以上の会話は止めて響子も試合の観戦に集中することとなった。

九校戦五日目⑥

時間は少し遡り、控室では深雪が表面的には静かな佇まいを見せているが、どこか落ち着かない雰囲気であることを達也は見抜いていた。伊達に深雪の兄ではないのだが、その原因も認識している。

すると、深雪の携帯端末にメールの着信があった。それに目を通した深雪はというと、どこかホッとしたような様子を見せていた。

「深雪、悠元からメールか？」

「あ、はい。どうやら藤林さんと一緒に観戦されるようで」

彼自身三矢家と国防軍の繋がりでその辺は誤魔化したと見られるが、深雪としては雫と一緒に観戦するのではないかと心配していたのだろう。かといってモニタールームで見ていたら雫の機嫌を損ねるので、競技に影響が出かねない。

実に大変な綱渡りをしている悠元に、達也は感心ともいえるような感情を覚えていた。響子ならば達也も気心の知れた相手だし、深雪も面識がある。なので、大丈夫と言えば大丈夫なのだろう。しかし、雫と仲良くしているかと思えば、一方的な肩入れだと今のようになったりと、コロコロと雰囲気や表情が変わる妹に対して、達也はほんの少し笑みを見せた。

「お兄様？　どうかされたのですか？」

「いや、深雪も大分正直になってきたんだな、と感心しただけだよ」

雫とほのかは観客席で見ると言っていたのでここには来ていない。

達也がそう言い終えたところで姿を見せたのは、真由美と摩利、啓と花音であった。克人は一高の天幕に戻ったと真由美が説明してくれたので、その辺について達也が尋ねるということはなかった。そして、深雪が準備ということで達也たちはモニタールームへと上がったのであった。

◇　◇　◇

深雪が「櫓」に姿を見せると、観客がどよめいていた。

観客だけでなく真由美たちも同様だが、達也はそれをＢＧＭ代わりとするようにしながら、テキパキとモニターの準備をする。流石に３

回目なので、その準備自体も大分洗練された動きとなっている。彼女らが話題にしているのは、他でもない深雪の着ている衣装にあった。
「似合いすぎて、正直驚くしかないわ」
そう花音が評するほどの深雪の着ている衣装――――白の単衣に緋色の女袴を身に纏い、白いリボンで長い髪を首の後ろで纏めたスタイル。整いすぎている本人の容姿と相まって〝様になっている〟という他なく、これでＣＡＤではなく榊か鈴、あるいは箒でも持たせるだけでも絵になってしまうほどだ。
「相手選手は可哀想に。完全に委縮してしまっているな」
「やっぱり、あの衣装も作戦のうちなの？」
摩利と真由美の表情と言動からして、これも達也の作戦なのだろうと思っていた。だが、隠すことでもないと達也は深雪の衣装についての事実を述べた。
「いえ。あの衣装は深雪が悠元に頼み込んで、悠元が準備した衣装ですよ？」
「……え？　それ本当？」
「本当です。採寸は彼の姉である佳奈さんがやったと深雪から聞きました」
悠元の母方である上泉家は、新陰流剣武術の知名度から剣術・武術の側面が強いが、れっきとした陰陽道系古式魔法の家である。それに、総本山のある場所の中腹あたりに神社があり、神道系の趣を併せ持っている。
そのあたりのことは真由美も知っているので、悠元が姉に採寸を頼んで服を準備させたという達也の説明は理解できなくもなかった。
「確かに悠君なら上泉家のこともあるし、準備できなくはないんだろうけど……」
観客全てを圧倒するような存在感を見せた悠元。
観客全てを釘付けにする存在感を放つ深雪。
真由美たちが深雪の服装に対して様々な感想を述べている中、２人がこの競技において最も強い存在感を放つだろうと、達也の視線は深雪の様子に向けられていた。

◇　◇　◇

モニタールームで自身の服装について盛り上がっていることなど知る由もなく、深雪はいつもより深呼吸した上で気持ちを落ち着けていた。

自身が感情を昂らせれば、無意識的に魔法を発動させてフライングとなってしまう。そのことを理解しているからこそ、本来の選手なら気持ちを高ぶらせるところを抑え込まなければならない。

けれども、自分のエンジニアを担当してくれている達也のことを思えば苦にならない。更に、自分のこの衣装を選んでくれた悠元の期待に応えたいという気持ちが、深雪の心をいつも以上に冷静にさせていた。

フィールドの両サイドに立つポールに赤い光が灯る。その音を聞いた瞬間、深雪は今まで閉じていた瞼を開き、フィールドを真剣な眼差しで見つめる。

深雪のその行為だけでも、周囲の観客席の全域から溜息が漏れた。その光景に、会場の壁際にてサングラスを身に着けて観戦している若い女性は、誰にも聞こえないほどの小さな声で呟いた。

「あらあら……あの子は美しく成長したようね」

その女性は笑みを浮かべながらその試合を見つめる。すると、ポールの光が黄色に変化し、更に青に変わった瞬間、強烈な想子の輝きがフィールド全域を覆った。

厳密には、深雪が自陣と敵陣の氷柱にそれぞれ魔法式を投射した形だが、その2つでは正反対の現象が起こっていた。深雪側の陣地では極寒の冷気が発生し、相手選手の陣地では陽炎が揺らぐほどの熱波に包まれていて、氷柱が融け始めていた。

だが、そこから程なくして自陣は氷の霧が発生し、敵陣は昇華の蒸気に覆われていた。

中規模エリア系振動魔法『氷炎地獄（インフェルノ）』――特定の空間内の振動エネルギー、運動エネルギーを減速させ、もう一方のエリアに逃がして加熱させることで、エネルギー収支の辻褄を合わせる熱エントロピーの逆転魔法。

魔法師ライセンス試験でＡ級受験者用に出題されることがあり、多くの受験者に涙を呑ませる高難度魔法だが、振動系魔法を得意分野とする深雪にとっては当たり前に使える魔法でしかない。

相手選手は冷却魔法を試みるが、まるで効果がない。

氷柱自体は内部に多くの気泡を含む粗悪な氷。その気泡が膨張して、熱で緩んだ氷柱がひび割れを起こしていた。それを見た深雪は魔法を切り替えた。

空気の圧縮と解放。それによって、相手の氷柱は跡形もなく綺麗に崩れ去った。

試合の一部始終を見た女性は、満足気な笑みを浮かべながら、何事もなかったかのようにその場を去っていくのだった。

◇　◇　◇

続くアイス・ピラーズ・ブレイク二回戦だが、女子二回戦第１試合は英美が無事に勝ち、準決勝に進出。明日は第２試合で勝利した栞と対決することになる。雫は二回戦第３試合に出場して、堅実な試合運びで準決勝進出を決めた。

本来なら、男子二回戦第５試合にあたる悠元と、女子二回戦第６試合である深雪の試合は別会場の同時進行となるのだが、ここで大会運営から「インターバルの関係」という理由で、男子二回戦第６試合がプログラム通り実施、悠元の試合（男子二回戦第５試合）だけが深雪の試合（女子第５・６試合）が終了後、同会場で実施という形に変更となった。そのため、スタッフ用のモニタールームは第一高校だけ同じ場所を使うことになった。

その為、悠元は控室で精神を集中していた。

（こっちとしては別にいいけど、それだったらブロック分けの時点で……いや、新人戦じゃ無理だな。何せ、事前のデータがないんだから読めるはずもないか）

この辺には各方面の関係者も関係していると思うが……試合（一回戦）の後、大会委員が来て自分のＣＡＤをチェックしたいと言ったため、素直に預けた。起動式をリークする危険性もあるが、その対策は怠りなく施されている。

おいそれと天神魔法や『流星群』の起動式なんて明かせるわけがないのは十全に理解しているため、それらの起動式は準決勝まで使う競技用汎用型ＣＡＤにインストールしていない。

一回戦はどうしたのかというと、硬化魔法で時間を稼いでいる間に「ライトニング・オーダー」で『流星群』と『共鳴裂界』を発動直前の状態で保持して『流星裂界』の準備を整えただけだ。

大会の規定においては、殺傷性ランクの制限さえ守ればＣＡＤなしでの魔法発動はルール違反にならない（これが違反扱いになると真由美の『マルチスコープ』、元継やスバルの『認識阻害』などが引っ掛かってしまう）が、それを誤魔化すためにＣＡＤにインストールした魔法を含めた複合術式を使用しているだけだ。

ＣＡＤから読み込んだのは『相転移装甲（フェイズシフト）』の起動式であり、硬化魔法の亜種扱いなので当然殺傷性ランクなんてない。その気になればＣＡＤを使わなくとも『万華鏡（カレイドスコープ）』で速攻発動できるという裏技もあるが、それは最終手段と割り切っている。

まあ、学期末考査の課題となった十工程の魔法展開に手加減していて１００ｍｓを切ってる時点で、低スペックのＣＡＤだと補助装置兼リミッターになっているのは否定しないが。

ちなみに、大会委員から返ってきたＣＡＤに『電子金蚕』が組み込まれていた（シルバー・ブロッサムシリーズは決勝リーグから使う予定だった）ため、剛三のもとに持っていって相談すると、対抗術式での反撃を許可された。

なので、対抗術式で『電子金蚕』を消し飛ばして、術者にフィードバックダメージが行くよう仕向けた。効果は相手が次第に強烈な眠気に襲われるだけのもので、傍から見れば「疲れてきたので眠くなってきたのだろう」という風にしか見えない。

起動式をコピーした痕跡は見当たらなかったので、ちゃんとセキュリティーが掛かっていた証拠であった。そもそも、『電子金蚕』もそうだが、インストールされている新種の魔法の起動式を勝手に公開したら、大会委員が十師族からの信頼を損ねるだけだが。最悪〝消えて〟も文句は言えないだろう。自業自得という他ない。

というか、原作を思い返すと飛行魔法の件は〝大人げない〟と言うに尽きる。今回の九校戦でも同様のことが起きると睨んで、かなり厳格に『安全装置』を組むように達也へ進言した。ハードウェアに関しても、飛行魔法に特化させたシルバー・ブロッサムシリーズを使用することも織り込んでいる。

なお、許可を出した際に剛三は「魔法師を失うことを何とも思わぬ輩など万死に値する」と言っていたが、それは過激すぎると諌めた。

悠元は試合後に佳奈と美嘉から聞いたが、どうやら前日のスピード・シューティングでエンジニアを担当した選手（雫と燈也）が揃って優勝したことで、他校から警戒されていると聞いた。その結果がかなり多かった観客の原因だった。

まあ、別に束になってかかってくるわけではないため、気にしない方針としたが。

「さて、男子クラウド・ボールはどんな非常識な結果になってるかな……」

そう言いながら悠元は備え付けのモニターの電源を入れて情報を確認した。

悠元の見立てとしては、出場選手３名のうち燈也は確実視。他の２名は変に肩の力が入ってなければ入賞はできると踏んでいたが……２名は一回戦と二回戦で敗退、燈也は決勝リーグに進出している。

問題はその試合経過だが、現在燈也が１勝した状態で決勝リーグ最終戦の第１セット終了後のインターバルなのだが……その得点がおかしかった。

「ええ……第１セットで２５０―２０って。これ、相手が第３セットに行く前にリタイアするんじゃ……あ、対戦相手がリタイアになった」

モニターでは相手選手の競技続行不能と判断され、燈也の優勝が決まった。当の本人は些か不完全燃焼気味なのが見て取れた。

ちなみにだが、燈也の予選の結果は、全て第２セット終了時に相手選手のリタイアという結果に終わった。１セットあたりの得点差が平均２１０点の時点で真由美レベルの実力者である。しかも、予選で

魔法、決勝リーグでラケットという変則スタイルという有様。相手選手が戸惑ったというのもあるだろう。
会場からの盛り上がりの声からそろそろ深雪の試合が始まるようなので、素早く衣装に着替えた上でモニターでの観戦をする。特に心配するようなこともなく、しっかりと『氷炎地獄（インフェルノ）』を制御しきっている。そして、数分後には一回戦と同じ結果がそこには存在した。
次の試合のための準備（主に氷柱の再設置）ということでインターバルは空くが、控室を出て「櫓」に向かって移動すると、試合を終えて控室（無論、別々の控室なのは言うまでもない）に戻る途中だった深雪と出くわした。深雪は嬉しそうな様子で悠元に近付いた。
「深雪、準決勝進出おめでとう。『インフェルノ』も問題なかったな」
「ありがとうございます。正直、悠元さんの試合が見れないかもしれないと思っていたのですが……」
大袈裟だな、と思いながら悠元は深雪の頭を撫でた。これには深雪が気持ちよさそうに目を細めていた。こういうところはどうしても妹に対する接し方になってしまうが……そうして頭から手を放すと、悠元はこう呟いた。
「あれだけ目立たれたら、これ以上目立つのは大変だが……ま、頑張るよ」
「はい。頑張ってください、悠元さん」
そう言って深雪が控室に向かうのを見届けた後、悠元は改めて気を引き締め直した。「櫓」の台座がある部屋に到着し、瞼を閉じて集中する。暫くしてアナウンスが悠元のいる場所にも聞こえ、台座がせり上がる。
男子アイス・ピラーズ・ブレイク二回戦第５試合――本日の最終試合となるその一戦に、観客は固唾を呑んで見守っていた。
ポールのシグナルに赤が点灯し、それが黄色に変わる。
青に変わった瞬間、今まで閉じていた悠元の瞼が開かれる。ＣＡＤから起動式が読み込まれ、自陣に硬化魔法で鉄壁の防御を展開。相手の選手は１本ずつ確実に倒そうと魔法力を込めるが、それでも氷柱には傷一つ入らず、綺麗な状態となっていた。

そして、悠元はＣＡＤを持っていない右手を上に翳す。すると、敵陣の上空に複数の魔法式が展開した。一回戦とは異なり、展開された魔法式の数は〝１２個〟――――上空の魔法式を見た相手は慌てて防御を強化しようとするが、それよりも早く悠元は右手を掌を相手に向けるようにして振り下ろした。

その瞬間、１２個の魔法式が１つの巨大な魔法式となり、そこから飛び出したのは光――――いや、厳密には雷を纏った光の龍が敵陣に降下し、氷柱と接触した瞬間に強烈な光が会場を包み込む。

観客たちは強烈な光に思わず目を瞑るが、光が収まって観客が恐る恐る目を開けると……敵陣にあったはずの氷柱が綺麗に消え去っていた。

相手の選手も何が起きたのか理解できなかった。選手だけでなく、殆どの人間がその意味を理解できなかっただろう。霊子を察知できるほどの知覚力を持っている人間か、精霊魔法に精通している人間でない限り、彼が使った魔法の難しさは理解できない。

悠元が使った魔法は、天神魔法において最上位の喚起魔法となる〝天神喚起〟――――光属性・金属性の『天雷神龍（てんらいしんりゅう）』。『電子金蚕』を仕込んだ『無頭竜』に対する返礼を込めた一撃。その意図を理解できていたのは、本人以外では事情を知っている剛三と、それを傍で聞いていた元継の二人だけであった。

それから少しして試合終了のブザーが鳴り、そこから一拍遅れる形で観客席から歓声が巻き起こる。軍関係者席やＶＩＰ席に座る人達からは対照的に戦慄や動揺のような雰囲気が見られた。

悠元は二回戦も無傷での勝利を達成、問題なく準決勝進出を果たした。

九校戦六日目①～新人戦三日目～

九校戦に出場する選手だけでも３６０名、作戦スタッフや技術スタッフなどを入れると４００名を超える。そうなると、食事も結構なものとなるが、毎日パーティーという訳にもいかない。

朝食は早いもの順のバイキング形式、昼食は基本仕出弁当だが、出店などで買って天幕などで食べることも許されている。夕食は３つの食堂を各１時間三交代で利用する。夕食が学校別なのは、翌日の競技の作戦漏洩を防ぐためのものである。

夕食の時間は、自校のメンバーが一堂に会する１日で一度の機会。その日の戦績で喜びや悔しさを分かち合う時間でもあった。

悠元の試合が大会運営によってずらされたため、１年メンバーでのミーティングは取り止める形となったが、その理由と言わんばかりに、第一高校の食堂は男子と女子で見事に明暗が分かれていた。女子の面々の中には、男子から追い出される形となった達也の姿もあった。

「はあ……頑張って優勝したのに、結局は針の筵ですか」

「あれはアイツらが悪い」

暗は、１年男子の半数以上が集まった一角。そして明は、１年女子が集まった一角だ。男子から爪弾きに遭う形となった悠元は、同じ目に遭った燈也と食事を取っていた。

溜息をつきながらもそう述べた燈也に対し、悠元は小さな声で毒づく様に述べた。

結果を出せなかったのは自分自身の問題だというのに、それを確かな成績を挙げている人間に八つ当たりするのは〝お門違い〟だろうと思う。余計な諍いは御免なので声量は抑えているが。

「一度染み着いたプライドって簡単に捨てれないからな。とりわけ、一高は『常勝』を背負ってきたわけだし、その代表ってだけでも、選ばれなかった生徒からすれば羨ましいものだろう」

今日の成績を見れば、女子クラウド・ボールで２名が入賞し、女子アイス・ピラーズ・ブレイクで深雪、雫、英美の３名全員が準決勝進

出。男子クラウド・ボールは燈也が優勝し、男子アイス・ピラーズ・ブレイクで悠元が準決勝進出。
女子に比べればやや見劣ってしまうが、男子もきちんとした実績を挙げている形だ。だが、男子の場合は実力を出し切れずに敗北しているパターンが多く、〝負け癖〟になっても不思議ではないだろう。ここから先は本人の問題だと悠元は思っている。
「懇親会で爺さん――――上泉殿が言っていたことにも繋がるんだがな」
「それは確かに……明後日のモノリス・コードは大丈夫なんです？」
「最悪の場合は、十文字会頭に活を入れてもらう」
下手に引き摺っていては第三高校の「クリムゾン・プリンス」や「カーディナル・ジョージ」相手に勝てるはずがない。そのことも念頭に入れて、最悪はそうするしかないと呟いた。幸いにも鷹輔がバトル・ボード準決勝に残っているのは正直大きいと思う。
それよりも、自分の場合はまずアイス・ピラーズ・ブレイクを勝ち抜くことに意識を集中させなければいけないが。
すると、悠元と燈也に近付いてくる女子――――雫の姿が目に入り、2人は視線を向けた。
「どうした、雫？」
「達也さんが困ってるから、助け舟を頼むって深雪が」
「彼自身の有名税でしょうけど……悠元、助けてあげましょうか」
「ま、そうだな」
達也は周りを1年女子に取り囲まれて質問攻めや賞賛の嵐を浴びていた。日陰者同然の生き方をしてきた達也がそういうものに慣れていないため、見かねた深雪の助け舟を出してほしいという雫を通してのお願いに、悠元と燈也はお互いに苦笑を浮かべつつ1年女子の喧騒に混じることとなった。
それほど親しくない女子生徒（統括役の悠元からすれば、同じ一高の選手程度の認識しかなかった）からすれば、十師族の直系が2人というのは流石に気後れするものもあったが、女子の成績からくる喧騒の前には、あまり意味は成していなかった。

その先陣を切るように、英美が話しかけてきた。
「あ、悠元に燈也！　燈也は優勝おめでとう！」
「ありがとう、エイミィ。今日は夜更かしせずにちゃんと寝た方がいいですよ？　明日は三高の強敵相手なんですから」
「うぐ、ご忠告どうも……悠元も正直驚いたというか、心臓に悪かったわ」
「ま、あれは現代魔法じゃなくて古式魔法だからな。これ以上は言えないけど」
燈也が笑顔を浮かべながら言い放った忠告をバツが悪そうな表情を見せて素直に受け取りつつ、悠元が見せた魔法について正直な感想を述べると、微笑みつつそう返した。すると、雫が悠元の一回戦のことについて尋ねた。
「そういえば、悠元は一回戦で防御に硬化魔法を使ってたけど……水素結合の相対位置固定って達也さんが言ってたけど、本当？」
「正解。その技術は色んな失敗があったからこそ出来るようになったけれど。攻撃に使った魔法は現代魔法じゃないけど、雫が得意とする『共振破壊』を限界まで突き詰めたものになる」
「そうなんだ……私にも出来る？」
「頑張れば行けると思うぞ。魔法師に大事なのはイメージなんだから」
天神魔法においては、各々の持つ理論や解釈によってその威力が大きく変わる。自分の場合は理科における分子レベルの結合を破壊するというイメージで使用しているため、『共鳴裂界』の威力はかなり高い。
流石に古式魔法関連は教えられないだろうが、現代魔法絡みならある程度は教えられる。
すると、「私も司波君に担当してもらえたら優勝できてたかも」という菜々美の言葉に達也からのアイコンタクトを受け取った深雪が窘め、菜々美は担当してくれた先輩のエンジニアに対して頭を下げていた。そこに英美が一言を加えた。
「ナナ？　自分の未熟をＣＡＤのせいにしちゃダメよ？」

「えへへ、はんせーい」
　そのことで声のボリュームは些か落ちていたが、それでも達也を称賛する声が止むことはなかった。そして、止めと言わんばかりの女子生徒の一人が発した「司波君を譲ってくれた男子には感謝ですね」という言葉に森崎がやや乱雑にグラスをテーブルに置き、何も言わずに食堂を去って行った。
「……追わなくていいんですか？」
「悪い奴じゃないのは分かってるが、こればかりはなぁ……森崎自身でケリを付けるべき問題だから、自分が口出しするわけにもいかないだろう」
　モノリス・コードに対して闘志を燃やしてくれるのはいいことだが、空回りしすぎるのも問題である。森崎はスピード・シューティングで真紅郎に敗れているので、その辺も加味すれば十分に行けるとは信じたいが。
◇　◇　◇
　魔法競技は非魔法スポーツ競技ほど性差は大きくない。何が言いたいのかと言えば、九校戦の新人戦が男女別になったのは今年からだ。
　男女混合とはいえ、身体能力が大きく影響するクラウド・ボールやバトル・ボードでは男子選手、そうでないアイス・ピラーズ・ブレイクやスピード・シューティングでは女子という棲み分けがある程度できていた。そのセオリーを無視するように出場して優勝する人間もいたりするが、それは置いておく。
　男子競技と女子競技では、どちらの人気が高いか。
　自ずと女子競技に一般客が集まり、男子競技に軍・警察・消防・大学などの関係者が集まる傾向になる。
　では、今年の新人戦の場合はと言うと。
「凄い人ねえ……」
「確かにな。男子の方も満員らしい」
　混雑とは縁のない、大会参加者の観覧席から観客席を同情の眼差しで見ていた真由美と摩利。

九校戦6日目、新人戦3日目。コンディションの公平を期すために試合順がひっくり返されているが、そうなると準決勝（三回戦）の第1試合が男子と女子で同じ一高の生徒――――悠元と深雪の試合が重複する形となる。

だが、昨日とは異なり、既に決まっている第1試合のプログラムや試合方針を変更することは難しいため、観客はどちらを見に行くべきかと迷う人も多かった。

「真由美はあっちを見に行きたかったんじゃないのか？」

「それはそうだけど……昨日の2試合を見ただけでも、悠君の非常識ぶりが凄かったもの」

世界屈指の精密射撃能力を有する真由美でも、悠元の魔法制御能力は最早世界トップクラスであると感じていた。特に二回戦で見せた魔法は、系統が異なるであろう12個の魔法式にプラスして硬化魔法を駆使するという同時行使を見せていた。

七草家でも現状8個が限界の多種類多重魔法制御を、彼は2桁の領域に乗せている。これだけでも三矢家の人間が今までの常識を覆した形だ。あれ以上がまだあるというのなら正直自信がなくなりそうで、真由美は女子の試合を観戦しに来ていたというわけだ。

「向こうは父が見てるだろうし、正直頭が混乱しそうだったから……」

「言わんとしていることは分かるがな……本人の前で絶対に言わない方がいいぞ」

それならば、まだ安心できるレベルの深雪の試合を見た方がいい、という真由美の言葉に摩利は同意していた。向こうに関しては克人が観戦するということなので、大袈裟に聞こえるかもしれないが、せめて克人が無事であることを祈るぐらいしかできなかった。

◇　◇　◇

男子アイス・ピラーズ・ブレイク準決勝第1試合。その試合は驚愕に包まれていた。

悠元はこれまで2つの魔法を披露していたが、彼はそこから3つ目の攻撃魔法を披露した。無論、試合結果は無傷での勝利を収め、決勝リーグ進出を決めていた。それを観客席で見ていた幹比古は驚きを

隠せなかった。
「……」
「吉田君？　大丈夫ですか？」
「え？　あ、うん……大丈夫だよ。（驚いた……まさか〝竜神〟を呼び出すなんて……いや、昨日のアレはそれよりも高位の神霊だった。それに比べれば楽なんだろうけれど……）」
　幹比古は悠元からのメールの「準決勝でお前にとっておきを見せるから」という文言を見て、男子の試合を見に来ていた。美月は昨日の悠元の試合を見て、霊子の力に慣れようという思惑もあって幹比古と同席し、それにレオとエリカが合わさった形だ。
　自分が『星降ろしの儀』で制御に失敗した〝竜神〟を完全な制御下に置くという神業に幹比古は驚いていたが、先日見た彼の訓練風景からして、それを使いこなすまでにかなりの練習を積み重ねたことは確かだった。
「何よ、ミキ。悠元に対抗心でも抱いたの？」
「僕の名前は幹比古だ！　……そうかもしれないね。その意味で、僕も未熟なんだと思う」
　悠元と初めて会った時、彼の力を軽視していたのは自分の方だった。それが、気が付けば彼に追い越されていた。
　天才という自負が逆に自分自身の限界を決めつけていた。彼はそのことを自分に伝えたかったのかもしれない、と思うのは自分勝手な考えだな……と幹比古は思わず苦笑してしまった。
「しっかし、あれだけの魔法を成功させちゃう悠元が恐ろしいわね」
「ま、4月の時にとんでもない離れ業をやってのけたから、何となく納得できちまうが」
「って、アンタは悠元の魔法を見てたんなら言いなさいよ！」
「無茶言うな！」
「まあまあ、二人とも」
　実際に複数人相手に『蓮華』でテロリストを鎮圧した光景を思い出しながらレオが話すと、そのことを知らないエリカがレオに詰め寄った。それを見た美月が2人を窘めるという光景に、幹比古は別の意味

で笑みを漏らしたのだった。
◇　◇　◇
悠元と深雪がそれぞれ試合をする前に、少し遡る。
達也と深雪はアイス・ピラーズ・ブレイクの控室に向かう途中、2人の第三高校の生徒と遭遇する。達也はその2人の顔ぐらいは知識として知っている程度のものだが。
すると、大柄な方の男子生徒が声を上げ、小柄な男子生徒も声に出した。
「第三高校1年、一条将輝だ」
「同じく第三高校1年、吉祥寺真紅郎です」
将輝の挨拶は、初対面の相手に対してとても友好的なものとは思えなかった。だが、達也は不思議と不快感を覚えなかった。将輝自身、リーダーとして振る舞うことが当たり前と言う、その風格を彼から感じとれた。
続けて真紅郎から放たれた言葉は、どこか挑戦的な雰囲気を覗かせていた。
「第一高校1年、司波達也だ。それで、『クリムゾン・プリンス』と『カーディナル・ジョージ』が何の用だ？」
達也も初対面の相手に使うような言葉ではなく、普段通りの言葉遣いを選んだ。害意でも悪意でもないことは確かであった。というか、同じ十師族の燈也や悠元ではなく、自分に視線が向けられたことに警戒も含んで達也は相手の言葉を待った。
「ほう、俺のことだけでなくジョージのことまで知っているのは話が早い」
「司波達也……聞いたことがない名ですね。ですが、もう忘れることはありません。恐らく、九校戦始まって以来の天才技術者。試合前に失礼かと思いましたが、僕たちは君の顔を見に来ました」
「弱冠13歳にして『基本コード（カーディナル）』の一つを発見した天才少年に『天才』と評価されるのは恐縮なことだが……確かに〝非常識〟だ」
真紅郎は先日のスピード・シューティングで燈也に敗れているが、敗戦のショックは見られないということだけでも、かなりのメンタリ

ティーの持ち主だということは見て取れた。
お互いに逆上とまではいかないものの、確かな意志を持って、敵として構えている。
「深雪、先に準備しておいで」
「分かりました」
少なくとも、この場で用件があるのは自分だけだ、と判断して深雪にそう述べると、彼女はそれに頷いて2人の横を通り過ぎた。その姿に将輝は目を奪われるが、その視線の行動は達也からの問いかけで遮られる形となった。
「……『プリンス』。試合の準備はしなくていいのか？」
「……僕たちは明日のモノリス・コードに出場します。君はどうなんですか？」
真紅郎は男子スピード・シューティング準優勝であり、将輝は男子アイス・ピラーズ・ブレイクの優勝候補の一角。将輝を〝筆頭候補〟と評さなかったのは、悠元の一回戦と二回戦で見せた戦績のせいで悠元が優勝筆頭候補としてメディアが取り上げたからであり、達也自身がそう評したわけではない。
そんなことはともかく、モノリス・コードに各校のエース格が揃うのは当然のことなので、真紅郎は達也がエンジニアを担当するのだろうと推察していたようだ。
「そっちは担当しない」
「そうですか。いずれ、君の担当する選手たちと戦ってみたいですね。無論、勝つのは僕たちですが」
明らかな挑発というべきなのだろうが、達也からすれば「それは、悠元という存在を認識した上で言っているのか？」と問いかけたかったが、そんなことを一々聞いて準備の時間を減らしたくないため、敢えて聞かないことにした。
「時間を取らせたな、次の機会を楽しみにしている」と将輝が言って、2人は達也の横を通り過ぎて行った。達也は振り返ることなくそのまま控室に入って行った。

九校戦六日目②

達也が将輝と真紅郎の非常識な来訪を受けた後、そのまま控室に入った。普段と変わらない様子でＣＡＤを調整したが、そんな達也に深雪が問いかけた。

「結局、彼らは何をしに来たのでしょう？」

「大方〝宣戦布告〟のような雰囲気を漂わせていたが……彼らは選手で、俺はエンジニアだ。魔法師として既に評価を確立している二人が悠元や燈也に宣戦布告するならまだ分かるんだが……」

正直言って、達也からすれば彼らよりも格下の実績になってしまうと思っていた。だが、達也が見ているのはあくまでも「九校戦の前まで」のお互いの実績であり、自分がエンジニアを務めた実績は「選手の頑張りによる結果」だと思っていた。

謙遜ではなく、本気でそう思っている兄に対し、深雪は深い溜息を吐いた。

「彼らがお兄様に対して向けていたものを気付かれたのは流石ですが、お兄様は些か自己評価が低すぎます。いえ、この場合は戦況の誤認ともいえるでしょう。お兄様がどれだけ注目され、意識されているのか。他校がお兄様の技術と戦術に対抗心を燃やしているのか、もう少し客観的に意識なさるべきかと思いますが……先日、私に対して言ったことをそのままお返しいたします」

先日、達也が深雪に対して悠元への感情を気付く様に言い含めたのだが、それを別の形で返されたことに達也は思わず目を白黒させていたのだった。

◇　◇　◇

男子アイス・ピラーズ・ブレイク準決勝終了後、将輝と真紅郎はお互いに真剣な表情を浮かべていた。それは、男子の決勝リーグで対戦することになる相手――第一高校1年の三矢悠元のことだった。

将輝からすれば、楽に勝てる相手ではないということだけは理解していた。何せ、ここまで自陣の氷柱（ピラー）を一切壊されることなく完封せしめていた。何よりも、将輝の目の前にいる参謀の真紅郎の表情がいつ

になく真剣だった。
「ジョージ、どう見る？」
「……将輝、かなり残酷なことを言うことになるけど、覚悟はある？」
「え？　……ああ、無論だ」
　真紅郎にしては珍しい前置きである、と将輝は思いつつも真紅郎の真剣な表情を見た上で頷く。それを見てから真紅郎は端末の画面を見せた。そこに表示されたのは、一回戦から三回戦までに使用された彼の魔法の分析結果だった。
「攻撃魔法に関してだけど、正直現代魔法では再現できないところを見るに古式魔法の一種で、恐らく生半可な障壁魔法では破られる。むしろ問題なのは防御魔法の方だ。彼はおそらく、氷柱の水素結合自体を対象として硬化魔法を使用している」
「水素結合に硬化魔法だと？　そんなことが可能なのか？」
「相手の振動魔法による温度変化でも一切融けなかったところを見ると、間違いないと思う」
　真紅郎はたかが硬化魔法だけでも鉄壁の防御力を誇っているという点を指摘したかったわけではない。氷柱が気泡などを含まず、一切融けていない状態へ変化させられることによる一番の懸念を口にした。
「そして、一番の問題は――――『爆裂』を使用不能の状態にさせられることだ」
「っ!?」
　一条家の秘術『爆裂』は液体を急速に気化させる発散系魔法。アイス・ピラーズ・ブレイクで『爆裂』が使えるのは、氷柱が外気温によって溶けたことで生じた水を対象としているからである。相手フィールドに液体が存在しない場合、『爆裂』は封じられたも同然となる。
　それで破れないのなら、圧縮空気による破壊も極めて難しくなると真紅郎は読んでいる。
「そうなると、勝つためには……」
「試合開始直後に魔法力の全てを注ぎ込んで『爆裂』を発動させる。彼は多分、決勝では領域干渉も使ってくる可能性があるから、速攻で破

壊できなかった時点で将輝の負けが確定する……博打みたいな作戦だけど、どうする？」
「やるしかないんだろう？　なら、やってやるさ」
男子アイス・ピラーズ・ブレイクの決勝リーグは悠元と将輝、それと三高の1年の三人である。この時点で同じ三高同士による消耗を避けるため、将輝が不戦勝によって1勝を確保している状態。もう一方の悠元は二連戦を余儀なくされる。
フェアな条件とは言えないが、これも勝負であると将輝は割り切った。
◇　◇　◇
第一高校の天幕は、ある意味お祭り騒ぎとなっていた。
女子アイス・ピラーズ・ブレイクでは三名全員が決勝リーグ進出し、女子バトル・ボードもほのかが決勝進出して、一名が3位決定戦に進出。男子アイス・ピラーズ・ブレイクは悠元が決勝リーグ進出を決め、男子バトル・ボードでは鷹輔が3位決定戦に進んでいた。
ただ、1年生男子選手の半数以上は一緒に浮かれることができずにいた。
いつも通りにやれば女子に見劣りしない成績を収められるだけのメンバーがいながら、気負いによる空回りでミスを連発して敗退、ますます焦りを募らせるという悪循環に陥っていた。
そんな中、女子アイス・ピラーズ・ブレイクの選手である深雪、雫、英美は天幕ではなくホテルのミーティングルームに呼ばれていた。そこで真由美から、というよりも大会委員会から3人を「同率優勝」にしてはどうか、という提案がされた。
それを聞いた瞬間、達也の脳裏によぎったのは「大会委員会が楽をしたいからと言うのが見え見え」であった。真由美としても、同率優勝で落ち着かせようという考えを読み取りつつ、エンジニアとしての冷静な分析を述べた。
「正直に言いますと、明智さんのコンディションはこれ以上の試合を避けた方がいいでしょう。準決勝は激戦でしたので」
「……司波君の仰る通りですので、私は棄権します」

英美の三回戦の相手は栞だった。緻密な制御で翻弄する栞に苦戦するも、『インビジブル・ブリット』を駆使して何とか勝利を収めたが、現状は辛うじて普通に歩けるレベルだ。

達也の指摘は非常に的確であり、英美自身も同率優勝に関しては辞退する考えを真由美に伝えた。それを見た真由美は視線を雫に向けた。

「私は……戦いたいと思います。深雪と本気で競うことのできる機会が、この先何回あるか……。私は、そのチャンスを逃したくないです」

「そう……深雪さんは、どうかしら？」

偽らざる雫の、魔法師として深雪に挑みたいという気持ち。それを聞いた真由美は深雪にどうしたいのかを尋ねた。

「北山さんが私との試合を望むのであれば、私にそれをお断りする理由はありません」

深雪も、雫との戦いに対して拒否は示さなかった。いや、深雪としても雫との戦いを望んでいた。この両者にある想いは、きっと譲ることのできないものだった。

午後一番の試合になるということで真由美が大会委員会へ報告するために部屋を出た。英美に続いて出ていこうとする深雪を雫が呼び止めた。

「深雪。少し、話がしたい……いいかな？」

「雫……ええ、いいわよ。お兄様、準備はお願いいたします」

「……分かった。あまり長話はするなよ？」

英美は首を傾げたが、達也は話の内容を察したのか、あまり長くならないようにと釘を刺す感じで述べた後、部屋を出ていった。ミーティングルームで向かい合う深雪と雫。一拍置いた後に、雫は問いかけた。

「深雪は、悠元のことが好きなんだよね？」

「――ええ。悠元さんのことは好きよ。いえ、〝愛している〟と言う方がいいのかしらね。でも、それは雫も同じなのでしょう？」

「勿論。私も悠元のことを〝愛してる〟って言えるぐらいに好き」

深雪と雫はお互いに悠元への感情に気付いていた。厳密には、最初

に悠元への恋愛感情を見せたのは雫で、そこから深雪が自分の抱いている感情に気付いた。
「スピード・シューティングの練習も、ピラーズ・ブレイクの学校外練習の時も、正直に言って嬉しかった。でも、深雪には申し訳ないかなって、思ってた」
「雫……私自身、それを聞かされてすごく動揺してた」
それ以前から悠元に対して、お互いにやきもちのような仕草を見せていたので、それとなく察しつつはあったが、お互いに尋ねることはしなかった。
「……ちょっと意外」
「あら、雫。私だって何事も完璧にこなせる訳がないわ」
練習期間中、深雪は悠元と雫が上泉家で練習しているのを達也から聞いたとき、どこか落ち着かなかった。自分自身のシミュレーションでも制御力の乱れから達也に制止されることも少なくなかった。ミラージ・バットの時も、それを思い出してしまっていた。それほどまでに、深雪は悠元に対して恋愛感情を抱いていることに気付いた。
そして、それは雫も同じだった。
「悠元が他の女の子と仲良くしてるのを見て、すっごくモヤモヤするような気分だった。それがやきもちだって気付いたのは襲われた後になる。深雪とは仲の良いクラスメイトだから、下手に聞けなかった」
「それは私も同じよ、雫。……お互い、似た者同士かもしれないわね」
「そうかもしれない。朴念仁な男性に惚れたって所も……悠元が相手じゃないけど、ほのかは苦労しそうだね」
雫の言葉に自分の兄のことが真っ先に思い浮かび、確かにそうである、と深雪は思わず笑みを漏らした。そう述べた雫も微笑んでいた。
すると、その二人に対して女性の声が聞こえてきた。
「あらあら、青春っていいものね」
「えっ!?」
「……いつの間に」
深雪と雫が思わず身構えてその声の方向を見やると、サングラスを

掛けた一人の女性がいた。見るからに２０歳代のようだが、扉から入ってきた様子が見られなかった。警戒させちゃったな、と女性はバツが悪そうな笑みを浮かべつつ二人に問いかけた。
「大丈夫よ。別に怪しいものじゃないから。そうね……貴方たちの母親の知り合いよ」
「お母様の、ですか？」
「お母さんの？」
　その女性の言葉に、深雪と雫はそれぞれの母親の姿を思い浮かべた。すると、女性はそんな二人に対してこう問いかけた。
「唐突に質問だけど、二人は三矢悠元君のことが好き、という解釈で間違ってないかな？」
「……ええ、そうですけど。貴女は誰なのですか？」
「あー、自己紹介してなかったね」
　唐突にそんなことを聞かれても警戒するのは当たり前だろう、と失念していたように笑うと、女性はサングラスを外して自己紹介をする。
「私は神楽坂家現当主、神楽坂千姫といいます。そして、悠元君の婚姻に関わっている一人だよ」
「神楽坂家……雫は知っているかしら？」
「確か、陰陽道系古式魔法の家ってお母さんから聞いたことがあるぐらい。詳しい事は何も知らないけど」
　色々突拍子もない言葉だらけで、正直理解が追い付いていない深雪と雫ではあったが、雫が記憶の片隅にあったことを呟くと、千姫が笑みを零した。
「お、紅音（べにお）ちゃんの娘は知ってたみたいだね。それで、二人に提案があるんだけど……決して悪い話じゃないし、疑問に思うなら後で二人の母親に聞いてみなさい」
「……深雪、どうする？」
「……先程、悠元さんの婚姻に関わっていると聞きましたが」
「ホントだよ。三矢の現当主との約束で、上泉家と神楽坂家が取り仕切ってるからね」

その後、千姫から提案されたことについて、深雪と雫はその話を受けることとなった。それを聞いた千姫が扉から普通に出て行ったあと、雫は一息吐いた上で深雪に向き直った。
「深雪。本気で勝負してほしい」
「勿論よ、雫」
お互い真剣な表情を浮かべながらも、どこか嬉しそうな表情を見せていた。というか、相手が相手なだけにお互い苦労しそうなのは、今に始まったことでもないからだ。
「へっくし!!……夏風邪でも引いたかな？」
一方、悠元はそんな会話が繰り広げられていることなど知る由もなく、盛大なくしゃみをしたのであった。
◇　◇　◇
九校戦の2週間前、悠元は達也に呼び出されていた。
アイス・ピラーズ・ブレイクの練習とモノリス・コードの戦術についての確認に加えて、生徒会の仕事で追われていたため、流石の悠元も若干疲れ気味であった。その様子に達也は少し悪いと思いつつも、頼むとしたら悠元以外に思い付く人がいなかった。
「雫のアイス・ピラーズ・ブレイクの練習に付き合ってやってほしい？」
「ああ。頼めるとしたら悠元しか思い浮かばなかったんだ。忙しいところで済まないとは思うが……」
達也は悠元に、雫が本気で深雪に勝ちたがっている、ということを伝えた。雫と深雪は細かな系統こそ違えど〝振動系〟を得意とする。その意味で雫の得意とする振動加速系――『共振破壊』と深雪の得意とする振動減速系の戦いでは、正直に言って勝ち目がないということも雫は理解していた。
「だが、俺は雫だけじゃなくて他の選手の面倒も見ないといけない」
「それは尤もだし、理に適ってるな。で、俺に頼むのは『共振破壊』を弄るのか？　それとも別方向の技術か？」
「俺とお前の共通したＣＡＤの使い方、と言えば分かるだろう？」
達也の言葉で悠元は雫に何をしてほしいのか納得した。悠元はそ

ういう使い方を滅多にやらないし、達也の前で滅多に見せたことはないが、それぐらいは出来ると読み切った達也の洞察力に両手を挙げて降参のジェスチャーを見せた。
「やれやれ、そんな使い方なんてあまり見せてないのに……ああ、3年前のことを思い出したのか」
「ああ、そうだ。それで、どうだろうか？」
「分かった。そしたら、学校外の練習になるから……効率がいいのは上泉家の別宅だから、出発前日まで司波家には帰れそうにないな。それでもいいなら引き受けるが」
　この時は達也も雫の熱意に応えてやりたいと思い、悠元の条件を呑んだ。これが引き金となって深雪の機嫌が暫く悪くなってしまい、それを諌めるために、達也は悠元にアイス・ピラーズ・ブレイクで使う深雪専用の魔法を頼んだのであった。
　正直に言って、達也は自分の妹がここまで特定の異性に対して感情を出していることは嬉しいことなのだが、彼に必要以上の負担が掛かりすぎないか少々心配していたのだった。

九校戦六日目③

午後一番となる男子アイス・ピラーズ・ブレイク決勝リーグ第1戦。

悠元と三高の選手との対戦は、相手が防御態勢に入る――――将輝との対戦前に消耗させることを見抜き、あえて防御をせずに『流星裂界』で相手陣地の全ての氷柱を一瞬で昇華させた。

相手の思惑に乗ってやる義理などない、と言わんばかりに速攻で片付けた。

アイス・ピラーズ・ブレイクの試合プログラムは、今の試合の後に女子の決勝戦、そして男子の決勝戦となる。この辺は視聴率を稼ぎたい思惑もあるのだろうと思うが……控室に戻った悠元は、モニターの電源を入れつつ、端末に先程使ったＣＡＤではなく、ジャージのポケットに入れていた拳銃形態の特化型ＣＡＤを接続した。

これは別に試合で使うつもりはなく、この試合の後に雫へ渡してやろうと思った代物。流石に『フォノンメーザー』だけで深雪に対抗するのは難しいし、そのお詫びとして渡す予定だった（余計な誤解がないように大会委員のチェックは通している）。

「ん？……あれ？」

すると、悠元は今接続したＣＡＤの起動式を見て、思わず声を上げた。

所々アレンジは加わっているが、それは紛れもなく『フォノンメーザー』の起動式であった。というか、よく見たら達也に渡した筈の特化型ＣＡＤなのは間違いなかった。

（何でここにコレがあるんだ？　確かにアレは機種も起動式もレギュレーション自体クリアしてるし、魔法は『フォノンメーザー』と同一理論の熱線攻撃魔法だけど……完全な別物だぞ）

一見すると普通の『フォノンメーザー』の起動式であり、特化型ＣＡＤも同じ機種なのだが……悠元が弄っていた起動式は、雫の魔法特性に完全依存した亜種魔法。個人最適化をする為に、記述の暗号化までされている代物。

あの魔法は『フォノンメーザー』と同等の想子消費だが、威力その

ものが違う。何せ、自分が北山家でのテスト勉強で弄っていた魔法式の改良版が組み込まれているため、計算上では雫の魔法力なら一発で氷柱６本吹き飛ぶと思われる。

悠元の手元にあるのはその起動式がインストールされたものではなく、達也の手が加えられた『フォノンメーザー』の起動式が入った同型のＣＡＤ。あの特化型ＣＡＤはこれを含めても〝２機〟しかない。

だが、その所持者やエンジニアから特に連絡は受けていないし、そのエンジニアがＣＡＤ管理に関して下手を打つとはとても思えない。

（まさか……昨晩のあの時に入れ替わったのか？）

一体どこですり替わったのかと思い返すと、実は前日の夜に雫が悠元の部屋を訪ねてきて特化型ＣＡＤの最終調整を頼まれた。その際、ＣＡＤの取り出し自体を雫に任せたのだが、丁度調整していた関係でＣＡＤが２機繋がれていた……恐らくそこですり替わった可能性がある。そこまで考えた上で、悠元は冷や汗を流した。

「試合が終わったら、後で深雪に肺まで凍らされそうだな……」

達也から何も連絡がないところを見ると、彼もうっかり見落とした可能性があり……試合が終わった後に自分の命の危機が迫っているという事実を突きつけられ、悠元はガックリと肩を落として深い溜息を吐いたのだった。

◇　◇　◇

悠元はそう思っていたが、達也としては悠元の調整スキルを信頼しており、雫のＣＡＤ調整も微調整だけで済ませたため、起動式自体まで見ていなかった。なので、ＣＡＤ自体入れ替わっていることに達也も気付かなかったのだ。

そんな達也は関係者用の観戦席にいた……両脇を真由美と摩利に挟まれる形だが。

二人のＣＡＤ調整を行い、どちらに付くこともなく観客席の最後列に座って観戦することも伝えつつ、頑張れとだけ告げた。その二人の表情は、お互いに対して本気を出すという意思表示だけでなく、お互いの気持ちの強さを量ろうというものだった。その相手は男子決勝

のために控室での観戦となっていたが。
「達也君としては、妹さんの方に付きたかったんじゃないの？」
「そうですね……彼がいれば、考えていたかもしれません」
それはそれでまた修羅場が起きそうな気がしたが、達也にはそう言うことしか出来なかった。その辺を察しているのか、真由美がムスッとした表情を浮かべていた。これには摩利が一息吐いた上で窘めた。
「真由美、なんでお前はそんなに不機嫌なんだ？」
「だって、これって悠君の争奪戦みたいなものでしょ？」
真由美は深雪と雫が悠元に向けている感情を知っていた。亜実から言われたことに対しての客観的な自己評価と言うのもあるのだが、どうしても家の事情で振り回されていることに対しての反動で、他人の恋愛事情には首を突っ込みたがる小悪魔的性格を発揮していた。なお、その度に摩利や亜実の説教と鉄拳が繰り出されるところまでワンセットとなったが。
「だったら告白すればいいじゃないか」
「一番の恋敵が泉美ちゃんなのよ？　下手なことして嫌われたくないもの」
真由美と摩利は達也を壁にするような形で小声で話しているが、誰が聞いているのかわからないので、そういうことは言わないでほしいと達也は思わなくもなかった。
「……実は達也君に似て、シスコンなのか？」
「なんでそうなるの!?」
「勘弁してくれ……」と内心で呟く達也の思いも空しく、真由美と摩利の談義は試合開始まで続く羽目となったのであった。
◇　◇　◇
「櫓」にこれから戦う二人が姿を見せると、観客席は静まり返っていた。
２４本の氷柱を挟んで対峙する二人の少女。
深雪は結っていた髪を縛っておらず、雫は襷を外していた。
それは、お互いに「何も縛られず、全力で戦うこと」への意思表示。
同じクラスメイトではあるが、手加減も情けも掛けないという決意。

尤も、殆どの観客は知らない。
彼女たちが本気で戦うのは、魔法師としての強さを競うためだけではないということを。お互いが恋い焦がれる相手への気持ちの強さ……それを嘘偽りなくぶつけるために。
そして、彼女たちも知らない。一人の少女の手に渡ったＣＡＤに込められた魔法によって、その決勝戦が熾烈を極めるということに。
（雫、貴女には負けたくない。何より……）
フィールドのポールが赤い光を灯す。
（深雪、私はあなたに挑戦する。でも、それ以上に……）
黄色に変化する。
（（気持ちの強さは、貴女（あなた）に負けない！））
そして、青に変わった瞬間、お互いが魔法を発動する。
雫は自陣に『情報強化』、敵陣に『共振破壊』を仕掛ける。対する深雪は『氷炎地獄（インフェルノ）』でフィールド全域に魔法を発動する。雫の『共振破壊』は深雪の魔法干渉によって抑えられてしまうが、『情報強化』によって魔法による温度改変を阻止することができていた。
自陣の氷柱を防御しながら敵の氷柱に攻撃を仕掛ける……傍から見れば互角に見えるが、当人たちにとっては互角ではなかった。
（届かない……！　流石は深雪！）
雫は学校外での練習の際、悠元に練習相手を頼み込んでいた。彼には深雪レベルの事象干渉力と得意魔法で相手をしてもらっていた為、こういう展開になることは想定していた。
深雪を倒すために手を貸していることについていいのか、と聞いたことはある。すると、彼は「深雪にとっての『ライバル』っていいと思わないか？」だった。あくまでも魔法競技での戦いだからこそ、力を尽くすと悠元はそう言いながら雫の練習に付き合ってくれた。
『情報強化』は深雪の魔法改変を阻止するが、『氷炎地獄』による周囲の空気の温度上昇による物理的な氷柱の融解には耐えられない。このまま時間経過に頼るようでは負けるだけだ……と雫は右の袖に左手を突っ込み、銃形態の特化型ＣＡＤを手にして構えた。
（２つのＣＡＤの同時操作!?　雫、貴女はそれを会得したの？）

その光景を見た深雪の心に動揺が走った。なぜなら、それは達也が得意とする――この場合は〝特異〟技とも言うべき高難度の技術。深雪は達也からＣＡＤの同時操作技術の習得を勧められていたが、自身の魔法制御力では想子の完全制御を必要とする技術に挑むのは早いと思っており、その技術の習得を断っていた。

（私、雫に嫉妬してるのね……）

そして、不意に悠元のことが脳裏を過っていた。悠元が雫の練習に付き合うきっかけは、そもそも達也が頼んだことだと聞き及んでいた。加えて、達也と同じく二丁銃のＣＡＤを所持している。つまり、自分の兄は悠元が複数のＣＡＤ操作技術を会得していると知っていた、ということになる。

その動揺で、深雪の魔法が一瞬止まった。

魔法の継続処理が中断する。

そこに、雫の新たな魔法が襲い掛かる。

（距離……出力……いける!!）

雫は特化型ＣＡＤの引き金（トリガー）を引いた。この時まで、雫本人も『フォノンメーザー』を放つと意気込んでいた。だが……放った瞬間に雫は驚愕の表情を浮かべた。

「……えっ？」

その引き金と共に放たれた熱線は本来の『フォノンメーザー』を遥かに超える太さの熱線となり、敵陣最前線の氷柱どころか周囲の氷柱まで破壊した……その数は９本。本来の着弾地点の床は少し焦げていて、自陣の氷柱もその余波で３本ほど破壊されていた。

これには観客席だけでなく、モニターで観戦している人間も、試合をしている二人も目を白黒させていた。雫に至っては自分の手に持っている特化型ＣＡＤを不思議そうに見つめていた。

その光景に対して、控室にいた悠元は盛大に頭を抱えていた。

「はあ……というか、想定以上だな」

悠元が雫に渡そうとしていたＣＡＤにインストールしていた魔法は量子熱線砲撃魔法『フォノンティアーズ』――『フォノンメーザー』の超音波量子化プロセスを悠元が自力で改良した魔法式と組み

合わせることで大幅な効率化と威力の上昇に成功した。
雫の魔法特性に完全特化した魔法のため、雫の専用魔法みたいなものと言っていい。彼女の事象干渉力を高密度に圧縮して放つようなものなので、計算上は深雪の『氷炎地獄（インフェルノ）』すら突破できる。とはいえ、一応安全を考慮して射程は相手選手の櫓に届かない程度に設定してあったが、しっかり機能してくれたようだ。
ちなみに、名前の由来は原作で雫が『ティア』と呼ばれることから名付けたのは、悠元だけの秘密である。
（……っ！　しっかりしなさい、司波深雪!!　最初に誓った筈……私は負けないと!!）
そんな動揺の中、素早く立ち直ったのは深雪だった。
彼女が選択したのは振動減速系――――広域冷却魔法『ニブルヘイム』。
この場合は温度差で氷柱を壊すものだと想定して、雫も『情報強化』で耐え凌ごうとする。だが、深雪の狙いは温度差による氷柱の破壊ではなく、その付着物にあった。
『ニブルヘイム』の冷却威力は最大にまで引き上げられていた。それこそ、空気中の分子すら液体にしてしまうほどの威力。そう、深雪は液体窒素を敵陣の氷柱に付着させた。だが、これぐらいのことは雫も読んでいた。何せ、深雪の見せていた『氷炎地獄（インフェルノ）』と『ニブルヘイム』の相乗攻撃は雫も悠元との練習中に体験済みだった。
このまま間髪入れずに『インフェルノ』を発動されれば負けは確実。ならば……雫の取った行動に摩利が声を上げた。
「防御を捨てた!?」
（覚悟は決めた。後は……イメージを強く持つだけ！）
雫は深雪の残り3本に向かって特化型ＣＡＤを向けた。この状況から『氷炎地獄（インフェルノ）』の発動は止められない。なら、先に深雪の氷柱を破壊する。深雪との魔法発動速度の差から逆算して、お互いの魔法はほぼ同時。
（雫……恐らく、判定狙いね）
無論、雫の考えは深雪にも読めていた。恐らく『氷炎地獄（インフェルノ）』では雫

の砲撃魔法に残り3本の氷柱が耐えられないと読み切った。ならば、と深雪は手に持っていたCADの数字キーを〝3つ〟入力した。

本来99個までの起動式しかインストールできない汎用型で数字キーを3つ入力するという動作はない。だが、これは誤作動防止のために悠元が設定したもの。何せ、その魔法は深雪の魔法特性に完全特化させた『深雪だけの〝氷炎地獄(インフェルノ)〟』。

(深雪……これが最後の勝負!!)

雫の放った『フォノンティアーズ』。

(雫……私は、負けない! いえ、負けられない!)

そして、深雪が発動した魔法――固有名称は『超越氷炎地獄(オーバード・インフェルノ)』。

悠元によって生まれ変わったA級魔法師でも高難度の二つの魔法がフィールド内で炸裂し、お互いの氷柱が破壊されるだけでなく、その熱でフィールドから大量の水蒸気が空中に向けて舞い上がった。

だが、水蒸気はすぐに止み、フィールドに残っていたのは……深雪側にあった1本だけだった。

『超越氷炎地獄(オーバード・インフェルノ)』――本来同じ広さのエリア同士である高温と低温のフィールドの規模を変化できるようにしたのがこの魔法の最大の特徴。エネルギーの総和は温度による振動・運動エネルギーで釣り合いを持たせるという強引さだが、個人に最適化しているので想子消費自体でいえば『氷炎地獄(インフェルノ)』よりも軽い。

今回の場合、深雪は防御を氷柱1本にだけ集中させて事象干渉力を圧縮、同時に領域干渉を展開することで『フォノンティアーズ』を耐え切った形だ。

その様子を控室のモニターで見ていた悠元は冷静に見ていた。単に開き直ったとも言うが。

(あれだな、こりゃ『矛盾』みたいなものだな……)

自分が手に加えた魔法同士がぶつかる……この場合は、雫の方が『矛』で、深雪が『盾』と言うべきだろう。別に自分自身で意図的にこの状況を引き起こそうなどとは思ってもいなかったが。

試合が終わって少し経った頃、携帯端末に着信が鳴ったので通話ボタンを押すと、聞こえてきたのは雫の声だった。

『悠元……』
「雫か……試合は見てたよ。よく頑張ったと思う。今の俺に言えるのはそれぐらいだけど」
試合が終わったとき、雫は最後まで真剣な表情を崩すことはなかった。だが、内心はとても悔しいのだろう。涙を堪えながら話しているのが聞こえてきた。なので悠元は雫を労った。すると、雫は悠元に想いをぶつけた。
『わたし……悠元が好き。ううん、愛してる。ホントは今すぐそっちに行って言いたいけど、深雪に悪いから』
「そっか。出来る女性に好かれるとは、俺は果報者なのかな」
『だから……私の分まで頑張って。絶対に優勝して』
まさかの雫からの告白だが、今答えは出せないと保留するような答えを返す。それを察したのか、雫は悠元に一つのお願いのような励ましをしてくれた。ここでしっかり答えなければ男じゃないな、と思った。
「分かった。『クリムゾン・プリンス』を瞬殺(フルボッコ)してくる」
『言っとくけど、魔法による直接攻撃は禁止だよ?』
「それぐらい分かってるわ……そしたら、また後でな」
『うん』
まさか冷静なツッコミが入るとは想定外だったが、それも雫らしいなと笑みを零した。何にせよ、約束した以上はそれを果たすのが男としての責務だろう。悠元は通話を切って一つ深呼吸をした後、羽織袴に着替えて試合開始まで精神を集中することにした。
その空間に他の人がいたら、まるで静かな森の奥地に踏み入ったような静謐さ……そう評するかのような雰囲気がそこにあった。

九校戦六日目④

雫が悠元との通話を終えたタイミングで、制服に着替えていたほのかが入ってきた。
ほのかが女子バトル・ボード決勝を見事に勝ち抜き、優勝を飾っていたことは雫も既に知っていて、労いの言葉を掛けた。雫が泣きそうな様子は見られなかったので、恐らく悠元と電話でもしていたのだろうとほのかは推察した。
「ほのか。優勝おめでとう」
「ありがとう。雫はその……凄かったね」
「うん。自分でもよく分からなかったけど」
よく分からない、という雫の言葉にほのかは首を傾げた。彼女がスピード・シューティングとアイス・ピラーズ・ブレイクでの練習をしていたことは知っていたし、『フォノンメーザー』のことも偶然知っていた。雫が『フォノンメーザー』以上の魔法を使ったことには、流石のほのかも目を丸くしたほどだった。
だが、その魔法のことをまるで知らないと言わんばかりの雫の様子を見て、ほのかは雫にこう言った。
「達也さんに聞いてみれば？　練習に付き合ってくれてたって、雫が言ってたじゃない」
「そうだね。達也さんなら、何か知ってるかもしれないし……でも、その前に悠元の試合は見たい。着替えるから、ちょっと待ってて」
ここで悩んでも答えは出ない。ほのかの言葉に雫は頷き、振袖から制服に着替えた。そして、雫とほのかは、男子決勝を見ようとモニタールームに移動した。すると、そこには先客――達也と深雪がいた。
「優勝おめでとう、ほのか」
「おめでとう、ほのか」
「あ、ありがとうございます！」
さっきまでお互いに戦っていた者同士、色々気まずいところがあったりするが、それは深雪も同じようだとほのかは微かに気付いた。そ

の辺を察してか、雫は特化型ＣＡＤを取り出して達也に見せた。
「達也さん。その、いつの間に『フォノンメーザー』をあんな風に弄ったの？」
「いや、俺があくまでも弄ったのは『フォノンメーザー』を少しアレンジした程度で、出力自体をあそこまで出せるようなものではなかったが……負荷は大丈夫だったか？」
「うん。達也さんにアレンジしてもらったものと同じぐらい使いやすかった」
　その一連の遣り取りで、達也があれだけの出力を出せる『フォノンメーザー』の亜種魔法を組んだのではない、と雫とほのかは理解した。すると、深雪がその特化型ＣＡＤを見て、あることを思い出した。
「お兄様。そのＣＡＤは……悠元さんが組んでいた設計図によく似ていますけれど？」
「よく分かったな。これは悠元が……深雪、他に心当たりはないか？」
「そういえば、悠元さんが会長の部屋で会長のものとは別の起動式を組んでいたようですけれど……もしかしたら、それかもしれません」
　深雪が見ていた２つの状況証拠……そこから導き出されるのは、達也の目の前にある特化型ＣＡＤにインストールされている魔法は、悠元が雫用に組み上げていた魔法、ということになる。
「そういえば……ＣＡＤ調整してもらった時、接続されていた同じＣＡＤがあって、手前だろうと思って手に取ったんだっけ」
「……気が付かなかった俺にも責任はあるな。これは俺が預かるよ」
「今更ですけど、悠元さんって同じ高校生ですか？」
「それは間違いないと思うわ、ほのか。とりあえず、悠元さんには後でお話を聞かないと」
　達也は正直、Ａ級魔法師でも高難度の魔法をあれだけアレンジできる悠元の才能は、一体どこから来ているのだろうと思いたくなるほどだった。ともあれ、特化型ＣＡＤは達也が預かることになり、モニタールームの椅子に座って観戦することになった。
　悠元に対して深雪の事情聴取（おしおき）も決定してしまうというオチまでついてしまったが。

◇　◇　◇

なんだ、今一瞬寒気のような殺気が……もしかして、お仕置きが決まったんですか、と内心で試合の後に凍らされることが確定しているような雰囲気を感じ取ってしまったが、試合の準備をするために控室を出たところで、妙な客人もとい真紅郎と出会った。

「試合直前に敵情視察とは奇策でも覚えたのかな、恋愛下手ショタ参謀（カーディナル・ジョージ）」

「今、とんでもない悪口が込められていたような気がしましたが……将輝からの伝言を伝えに来たんです」

「ふむ……で、その内容は？」

それはそれでメッセンジャーと言うより使い走りみたいなものだな、と内心で毒づきつつもその伝言を促した。すると、真紅郎から出た言葉は想像通りだった。

「『懇親会のことはずっと見ていた。お前に勝って司波さんを振り向かせてやる！』だそうです……こんなことのためだけに、僕を使わないでほしいです」

「なあ、将輝って俺のストーカーか何かか？」

「絶対に違うと思いますから、安心していいかと。仮にそんなことになったら、茜ちゃんが黙っていませんし、僕も本気で親友の縁を切ります」

「それは確かに」

後者の言葉がなかったら確実に誤解しか招かない内容である。というか、想像通り過ぎて逆に頭が痛くなりそうだ。溜息が出そうなぐらいに疲れ切っている真紅郎に対して、悠元はこう言い放った。

「将輝からの言葉は受け取った。その返事は試合で返すよ……今度会った時、何か奢るよ」

「はは……気持ちだけ受け取っておきますね」

用事も済んだところで真紅郎は将輝のところへと戻って行った。

それを見送った後に、悠元は「櫓」の台座に乗った。いよいよ決勝……相手は『クリムゾン・プリンス』こと一条将輝。だが、相手が誰であろうと関係ない。自分の持てる全力を注ぎこむだけだ。とは

いっても、戦略級魔法はルール上使えませんけど。

◇　◇　◇

新人戦男子アイス・ピラーズ・ブレイク決勝。

第一高校1年三矢悠元と第三高校1年一条将輝の対決。

奇しくも十師族の直系同士の戦いに、一瞬でも見逃すまいと観客全員がフィールドに視線を向けていた。

――白銀の携帯端末型の汎用型ＣＡＤを持つ悠元。

――真紅の銃形態のＣＡＤを手に持つ将輝。

ポールのシグナルに赤のランプが灯る。

それが黄色に変わり、お互いの表情が真剣なものへと変わる。

そして、青に変わった瞬間、お互いに魔法を発動させた。

将輝が発動したのは一条家の秘術である『爆裂』。それを本気の威力で発動させた。

だが、それが発動することがなかった。

（領域干渉!?……いや、そんな感じじゃない……え？）

『爆裂』が発動しなかった原因を探ろうとした将輝だったが、フィールドを見た瞬間、将輝は自分の目を疑っていた。目の前にある全ての氷柱が物音を立てることなく一瞬で消えていた。そんな魔法など、現代魔法の系統魔法では存在しない……将輝にとっては、完全に未知の体験であった。

悠元が発動させた魔法によって引き起こした光景は、一般の観客や関係者用の観客席、果てはＶＩＰ席に座っていた面々まで驚かせた。その中には、剛三と元継まで含んでいた。

悠元は、天神魔法の秘伝書を全て読み解いた上であらゆる術を覚えたのだが、その究極魔法である『天照（アマテラス）』の魔法式を解析したところ、単独発動以外の方法があることが判明した。いや、正確には単独発動自体が本当の意味での究極魔法を隠すためのものであった。

秘伝書を読み返しても正式な起動方法の記述がなかったのは不思議だったが、端末の計算結果から推測される魔法効果を読み取ったことで、その記述がなかった意味を理解することとなった。これに関してはおいそれと明かしてはならないことであり、究極魔法と言われる

意味を誰よりも理解した。
『天照（アマテラス）』の正式な発動方法――それは、『天照』に加えて陽（光）・陰（闇）・火・水・木（風）・金（雷）・土の７属性の最上級属性魔法を同時に行使し、五行による相剋・相生をそれぞれ繋げることで本当の『天照（アマテラス）』が発動する。
今回使用したのは『天照（アマテラス）・五行相剋（ごぎょうそうこく）』――自分で名付けた名称は『天照絢爛（てんしょうけんらん）』。神羅万象――魔法も含めた事象情報全てを〝書き換える〟ことで魔法発動すらなかったことにしてしまう空間情報干渉魔法。
開始直後に『天照絢爛』を発動させ、将輝の発動させた『爆裂』の魔法を光波情報に書き換えて定義破綻させた。そして、敵陣の氷柱も水蒸気の状態に書き換えて消し去った、というのが一連の流れである。
『流星裂界』や『天雷神龍』、竜神の喚起は『天照絢爛』を隠すためでもあった。祖父から天神魔法の使用について言われたので、それとなく目立つ魔法をかなり威力を抑えた上で使用したのも否定しない。なお、今回使った攻撃魔法は発動時間や規模、威力の調整をしないと平気で戦術級を軽く超えてしまう代物だということを付け加えておく。

◇　◇　◇

（発動したのは間違いなく『天照（アマテラス）』だった……だが、あんな効果なんて出せるものだと知らなかったぞ……）
ＶＩＰ席にて、剛三の隣に座っている元継は冷や汗を流していた。試合開始直後、悠元の周囲を七属性の精霊が飛び交い、氷柱が存在するフィールド全体に対して魔法効果を及ぼした。自陣の氷柱が一つも砕けることなく、敵陣の氷柱を消し去った。相手は持ち前の秘術で速攻を掛けようとしたが、それを発動させる前に『天照』でその発動を消し去った。詳細は彼に聞くしかないだろうと元継は考えた。
すると、剛三が思わず頭を抱えていることに気付いた。恐らく彼からして『天照』を使うとは思ってもみなかったのだろう。
「爺さん？」

「あやつの才能が末恐ろしいな……元継、行くぞ」
「あ、ああ……」
剛三としても、精々最上級の属性魔法が限界だと思っていた。だが、悠元は剛三との『持てる最高の魔法を使え』という約束から『天照』を使用したのだ。それも、秘伝書に記されていない――本来は当主しか知らない〝正式な発動方法〟で。
それを独力で成したという意味……天神魔法の開祖である初代伝承者以外単独で使えなかった魔法を、彼は使用したということに他ならない。
◇　◇　◇
試合を終えて「櫓」を降り立った悠元はそのまま控室に入ろうとした。すると、控室に見覚えのない気配を感じて、慎重に中に入る。すると、中には２０歳代ぐらいで今流行りのファッションを着こなす女性の姿があった。だが、その人が年齢相応の容姿でないことに悠元は気付く。警戒を崩さない悠元に対して女性は苦笑を浮かべた。
「あらら、警戒させちゃったかな」
「当たり前です。ここは関係者以外入れない筈なんですが……」
一体誰なのかを尋ねる前に、扉が開いた。
そこには剛三と元継がいて、悠元は思わず目を丸くした。
「爺さんに兄さん？　どうしてここに？」
「悠元、お前はどこで〝あの発動方法〟を……千姫、お前がなぜここにいる？」
「それは勿論、〝神楽坂家次期当主〟を見に来ただけですよ？」
何だかもう色々と訳が分からなくなってきた。元継に視線を送ると、彼は首を横に振った。つまりは「俺にはどうにもできない」ということだった。なので、悠元はこう言い放った。
「――着替えるので、大人しく外で待っていただけないでしょうか？」
悠元の言葉に千姫が「じゃあ私が着替えさせてあげるね」とか反応したが、剛三が千姫に拳骨を落とした上で首根っこ掴んで部屋の外に出ていった。それを確認してから着替えることにしたが、試合をする

よりもそれ以外のことで精神的に疲れたような気がした。
その後、達也にその辺りのことをそれとなくメールして、ホテルの一室――――千姫が宿泊している部屋に悠元、剛三、そして元継が招かれた。千姫は一呼吸でもするように遮音の結界を張ると、椅子に座って自己紹介をした。
「私は神楽坂家現当主、神楽坂千姫と言います。よろしく、三矢悠元君」
「名前を言われてしまいましたが、三矢悠元といいます。よろしくお願いします、千姫さん」
「そんな他人行儀でなくていいのですよ。いっそのこと『ちーちゃん』でもいいですよ」
どこかしら性格が真由美に似ているな、と思いながら剛三に視線を向けると、どうにもできないと言いたげな視線を向けられた。止めるだけ無駄と言うことらしいので、普段はさん付けということにした。
「さて……悠元。お前は『天照』の〝正式な発動方法〟をどうやって見つけた？」
「単純に『天照』の記述を見て、単独だと正式な発動方法ではないって気付いたんだけど……拙かったの？」
「拙いというレベルではない。あの魔法を正式発動できたのは初代伝承者以外だと、お前が初めてなのだ」
マジかよ……つまり、現時点で安倍晴明（あべのせいめい）しか正式発動できなかった『天照』を俺が発動させたということになる。やべえよ、やべえよ。冗談抜きのマジで。
盛大にテーブルに突っ伏した悠元を見て、千姫がクスクスと笑みを漏らしていた。
「俺、ひょっとして死ぬの？　処刑？」
「いやいや、そこまでは言っておらん。正直に言って、悠元の実力を見抜けなかった儂の落ち度だな。なので……千姫、儂は上泉家現当主として悠元を神楽坂家の次期当主に推薦する」
「……ねえ、爺さん。どういうこと？　さっき千姫さんが〝神楽坂家次期当主〟とか言ってたけど、それと関係あるの？」

「元の奴め、話してなかったようだな……説明しよう」
上泉家と神楽坂家の関わりは古式魔法の家として上泉家が興った頃――――約５００年にも及ぶ。二家は数代おきに婚姻関係を結び、魔法使いとしての血を色濃く残し続けてきた。今は亡き剛三の妻は千姫の実姉であり、剛三と千姫は義兄妹の関係にある。二人の容姿の年齢詐欺は前例がいすぎるためにもう慣れてしまったが。
「お前も知っておることだが、わしの子は全員娘しかいなかった。千姫のところは一人男がいるのだが……」
「私の子は筆頭主家こと伊勢家の当主を務めておりますが、『月読』を継ぐだけの実力がありませんでした」
神楽坂家に伝わる究極魔法『月読』。それを継げるだけの男子を神楽坂家は上泉家に求めた。剛三は考えた末、子に恵まれていた三矢家に白羽の矢を立てたのだ。男子が三人生まれたときは、三男を神楽坂家に養子として引き取りたいと。
「だが、８年前までお前は病弱がちだったのでな……高熱が出たと聞いたとき、最悪は神楽坂家に送ろうとも考えたのだが……それから、お前はまるで別人のように元気となった」
すいません、中身は別人です。つまり、三矢を名乗る前に神楽坂の名字を名乗っていた可能性があったということになる。そして、自分が沖縄防衛戦でやったことが原因とも剛三は付け加えた。三矢家が四葉家と接近したことで、上泉家と四葉家の関係も修復したと剛三は述べた。そこまで説明した上で剛三は悠元に問いかけた。
「そして、３年前の沖縄のこともだ……悠元。お前は一体何者だ？」
今まで気づかれないのがどうかしていた。元だけに止められていたのが奇跡的だったと思う。ただ、剛三と兄である元継はともかくとして、千姫は初対面だ。下手に警戒されるのでは、とも考えたが……剛三はそれを見越してか、「言い出したのは儂だ。だから、お前のことは儂が責任を持つ」と公言した。
観念して自分が〝転生者〟と言うことを打ち明けた。あっさり打ち明けるのは軽い決断とも思われるが、ここまで来たら味方を増やす方がいいと判断した。悪く言えば道連れとも言うけれど。

元継は少し驚きを隠せなかったが、剛三と千姫はどこか納得したような面持を浮かべていた。その様子からして事前に聞かされているのでは、と悠元は推測した。
「成程……元継は詳しく知らなかったようだな」
「詩奈に対する接し方が少し変わった程度だったので、あまり気付かなかったんだよ。まあ、心配するな悠元。どうあっても8年はお前の兄として過ごしたんだ。お前には千里のことで世話になったからな」
「朝起こしに行ったら、思わず回れ右して姉さんを呼びに行った記憶は忘れません」
「……それに関しては、すまない」
珍しく元継が起きてこないから、と詩鶴姉さんに頼まれて起こしに行ったところ、表現したら年齢制限掛かりそうな状態だったので扉をそっと閉め、大人しく詩鶴姉さんを呼びに戻った記憶はインパクトが強すぎた。
今更ながら、自分が今まで理性を保っていることが奇跡的だと思う。とりわけ司波家に居候している身としては。主に深雪に関わる意味で。
「今話したことを知っているのは、兄さんと爺さんに千姫さん、それに父さんだけです」
「そうか……何にせよ、お前はわしの孫だ。何なら『雷霆終焉龍(ヘル・エンド・ドラゴン)』を教えてもあだっ!?」
「爺さん、それは止めろって言ってるだろ!! ……すまない、悠元。早々にこのジジイが人生から引退できるようにするから」
「あらあら……前世でこういうことはありましたか?」
「ありませんよ、こんな経験なんて」
あっさり受け入れられたのは拍子抜けだったが、秘匿することも約束してくれた。魔法という非常識なものを使うからこそ、自分と言う非常識な存在も受け入れられたのだろう。
尤も、肝心なことをまだ話して貰っていないことに、内心溜息を吐きたくなった。その脱線原因を作った側の台詞ではないが。

九校戦六日目⑤

男子アイス・ピラーズ・ブレイクの試合後、控室で遭遇した千姫の招きで彼女の泊まっている部屋に来た悠元。自分が転生者ということを明かすことで話が脱線したが、その路線を無理矢理戻すことにした。

「それで、次期当主の話なのですが……」

「おお、そうであったな」

剛三の話では、元々高校卒業辺りを目処にしていたのだが、周辺国家の状況や国内の状況を鑑みて早めることにしたと話した。確かに4月の一件の裏で大亜連合が動いていたのは間違いない。厳密には剛三が忌み嫌う人物が関わっているのは間違いないだろうとみている。

「なので、悠元君は九校戦後に神楽坂家に来てくださいね。喜ばしいお話もありますから」

「……分かりました。細かいお話はその時にでも。まさか、元継兄さんと同じようなことになるとは思いもしなかったけど」

「普通はそうだと思うぞ、悠元。爺さん、これを見越して悠元に師範の名乗りを許可したのか？」

「正解だ。まあ、本当ならその前に名乗っても良かったぐらいだが」

喜ばしいお話って……どういう意味なのかは、敢えて聞かない方がいいと思った。男子アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝したとはいえ、明日からモノリス・コードがある。それに勝つことが一番大事なことだ。

悠元は明日のこともあるので、一足先に戻った。残った三人……その中で最初に口を開いたのは、元継だった。

「アイツがな……どこか違う世界で生きているような感じはしたが、まさしく違う世界からの転生とは」

「転生と言う概念はありますが、彼はその意味でも特別でしょうね」

「だろうな。あ奴には悪いが、この先の世界を担ってもらわなければならん」

彼が〝変わった〟ということは剛三も聞き及んでいた。陰陽道における大昔の妖の可能性も考えていたが、剛三自ら彼の鍛錬を行った結論として、彼はその妖に当て嵌まらないと判断した。
「千姫、お前の判断は？」
「初代様をはじめとした先祖の方々が退治された妖とは明らかに異なるでしょう。彼は間違いなく〝人〟であると。まあ、害を成さないのなら受け入れることも吝かではありませんでしたし、杞憂に終わって何よりです」
悠元は、現時点でも十師族という枠組みを突き破るほどの実力を有している。恐らく、十師族現当主の世代で比較しても彼に敵う人間は存在しないだろう、と剛三は考えている。この国の護りを担う一角として、剛三は悠元を神楽坂家に送り出すことを決めた。
千姫は、彼の言葉に偽りがないことを神楽坂家の当主としての直感で見抜いた。神楽坂の当主なら寧ろそういった存在が混じっていてもこの国の〝護り〟になるならば、と受け入れる覚悟もしていた、という発言に剛三や元継は苦笑した。
「やれやれ……それで千姫。悠元の婚約者に関しては？」
「彼に恋慕している人間を二人ほど説得できました。でも、驚きですね。元英（もとひで）叔父様の曾孫に紅紗（あずさ）の孫娘とは……世間は狭いものです」
（悠元、頑張れよ。上泉の次期当主である俺にはどうにも出来んからな。愚痴ぐらいは聞いてやるから）
剛三と千姫によって悠元の既定路線が着々と組まれていることに対して、元継は内心で弟に対して励ますぐらいのことしか言えなかったのであった。何せ、元継自身もこの二人によって既定路線が組まれ、最終的に上泉家次期当主となった。抗うこと自体無意味だと実感したからである。
きっと、悠元は自身と同じく魔法師としてそれなりに幸せな生活を送れればいい、と思っていたのだろう。高熱で倒れる前の悠元もそういう考えを持って生きていた。奇しくも同じ思考を持っていたからこそ、母も詩奈を除く兄と妹達も彼を受け入れていた。
（今の魔法医学でも解決する術がなかったことは事実だ。確かに不思

議だと感じていた）
　今の悠元の精神がかつての三矢悠元ではないと気付いているのは、三矢家では詩奈以外の全員であり、矢車家も侍郎以外の全員。元々の悠元は病弱で、それこそ１０年生きられれば良い方だと医者から宣告されていた。精神――――魂は変われど、彼を生き長らえさせてくれたことは三矢家にとっても嬉しいことだった。
　一番喜んでいたのは元と詩歩の二人。事情はどうあっても、二人の息子であるという事実は変わらないと決めていた。元治や元継、詩鶴に佳奈、美嘉は元からその話を聞き、五人で話し合った結果として彼を受け入れた。
　詩奈に対しては、無茶苦茶な論理で悠元と結婚したいというのを防ぐために秘匿された。侍郎については詩奈に対して甘い部分があるため、そこからの漏えいを防ぐ意味合いが強い。
　普通では有り得ないだろう。だが、あの謎の高熱で悠元が意識不明となった際、彼が死ぬという覚悟はしていた。結果として元々の魂は消えたのかもしれないが、記憶は全て引き継がれていた。元継自身、その彼を自然と受け入れていた。不気味さも少し感じたが、それを嫌とは思わなかった。
（諦めていたことを諦めないようにしてくれた。否定するかもしれないが、悠元……お前は三矢家を救ったんだ。だから、俺たちはお前を信じることに決めたんだ）
　それに、悠元のお蔭で自分の『認識阻害』を己の武器とすることができた。悠元からの恩恵は元継だけでなく、他の兄弟姉妹――――ひいては三矢家全体に大きな影響を与えていた。
　詩奈の悠元へのブラコンが悪化したことは、悠元も含めた六人が揃って頭を抱えることになったが。このこともあって、彼がどうあろうとも三矢家の三男であり、自分の弟であると納得するに至った。
　元継は彼への恩返しという意味も含めて、早々に侍郎を鍛え上げて詩奈の護衛に恥じない強さを身に着けさせようとしている。下手に名誉を求めない考え方は魂こそ変われど同じだな、と元継は内心で零したのだった。

◇　◇　◇

「――――では、雫が使ったあの魔法は悠元さんが改良したものなんですね？」

「……はい」

夕食の後、ティーラウンジにて半分冗談、半分本気で睨んでいる深雪から尋問みたいな質問を投げかけられたので、悠元は大人しく答えていた。その二人の他に、達也と雫、それにほのかが同席していた。悠元は、深雪に対するお詫びとしてケーキセットを奢る羽目になっていた。

「あの魔法――――付けた名称は『フォノンティアーズ』。『フォノンメーザー』の量子化プロセスをより効率化させた砲撃魔法になる。今だから話すが、世辞抜きの戦況分析では深雪が有利だと睨んでいた。深雪に渡した『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』まで使うことはないだろうと踏んでいたんだが……」

「まあ、結果的に悠元さんのおかげで優勝できたようなものですから、それは感謝しておきます」

深雪はわざとらしく拗ねた様な口振りを見せていたが、自分も悠元から提供された魔法のお蔭で優勝できたことは事実であり、頬を赤らめていた。

これには、ほのかが思わず笑ってしまい、雫もそれに連れられるようにクスッと笑みを零した。どうやら敗戦のショックからは完全に抜け出せたようだ、と達也は率直に感じた。

「ふふっ、深雪が拗ねてる」

「けど、偶然でもあの魔法のおかげで私は深雪と渡り合えた。だから悠元に感謝してる。悔しいのは否定しないけど」

雫から感謝の言葉を掛けられ、悠元は頷く形でその返礼とした。すると、そのやり取りを見ていた達也が口を開いた。

「あの魔法を見たときは俺もヒヤッとした。というか、あれは元々九校戦に出すつもりはなかったようだが？」

「達也、考えてもみろ。Ａ級魔法師はおろか軍人魔法師でも一部の人間しか使わない『フォノンメーザー』を砲撃魔法に改良したなんて知

られたら、間違いなく起動式を公開しろと言われるのは目に見えてるだろ？」
「確かに悠元の言うとおりだな」
軍事的転用を目論んでの起動式提供を要請してくるだろうが、国防軍は悠元に対して強く出れない。先日の十山家の一件で、国防軍に対して悠元および三矢家への高圧的な要請（人質を取るなどの脅迫）を上泉家が固く禁じたのだ。国防軍の中枢には新陰流の上段クラスの人間もおり、剛三の〝要請〟に応じた形となった。三矢家からの善意的な技術提供であれば可とした形だ。
達也に対してそういう風に接触してくることも想定されたが、これに関しても剛三が手を打っているようである。その辺は口に出さず、悠元は達也の言葉に対してハッキリと述べた。無論、周囲のこともあるので小声でだが。
「本来、『フォノンティアーズ』は九校戦の後に完成させる予定だったんだ」
「え？　あれで未完成なんですか!?」
「念のために威力を制限してたからな。完成したら一発で１２本の氷柱（ピラー）を破壊することのできる広域砲撃魔法の予定だったから」
『フォノンティアーズ』は雫以外の人間に使わせる気などない。その意味で「魔法大全」の申請は断る。確かに名誉というものは理解できなくもないが、国外（新ソ連、ＵＳＮＡを含む）からのスパイに襲われる可能性が残ったままの状態で名誉なんて求めたくもないのだ。
「その魔法もそうだが、深雪の使った魔法……『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』だったか。あれの起動式を見たときは驚きしかなかったんだが」
「まあ、改良する際にちょっとした技術も入ってるからおいそれと公表できないけど」
『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』が一般的な『氷炎地獄（インフェルノ）』よりも処理負荷が小さいのは、深雪の魔法特性に完全最適化させただけでなく、基本（カーディナル）コードである振動系統のプラスコードとマイナスコードそのものを改良したからだ。
基本コードそのものに改良の余地があるのかという疑問も尤もだ

が、魔法の前身である『超能力』という定義が既存の物理法則を無視する力の行使であるため、それを強引に物理法則への改変ということで汎用性を高めて落とし込んだのが現代魔法である。

第三次世界大戦という争いによる魔法技術の革新はあったものの、100年そこらで『超能力』を解析できるはずがない。基本コードに限らず、様々な魔法関連の難問はその証明ともいえる。

「それって、新種の技術ってこと？」

「いや、既存の技術を少し見直しただけだよ。それよりも、達也の担当した選手が上位独占とはな。流石深雪のお兄様だわ」

話を戻すが、悠元は基本コード16種全てを既に把握しているが、今の状況で公表すれば面倒事にしかならないと判断している。その改良版基本コードを用いた魔法は燈也に提供した『凍結連鎖氷柱（フローズン・アリスマティック・ピラー）』、雫の使った『フォノンティアーズ』、そして深雪の『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』の3つだけ。それらはいずれもワンオフの魔法となっているため、使用者と開発者以外では発動できないようになっている。

「その片棒を担いでいるお前が言えた台詞ではないんだが？」

「決勝リーグのあれは流石にノーカウントで」

余談だが、『アクティブ・エアーマイン』に関しては大学側がしつこかったため、開発者不明の新種魔法で登録申請を受理させた。尤も、申請した起動式は本元と同様の豪快さは出るが、威力に関しては基礎単一系の威力――想子の細波を起こす程度しか出せないように記述を弄った。理由は『軍事転用防止』というもので通した。

「優勝したというのにあまり労ってくれないのが悲しいものだ……ま、いいけどね。明日からモノリス・コードがあるわけだし、気が抜けないことに変わりないし。結局新人戦ピラーズ・ブレイクで優勝しても、同じ1年の男子連中の半分は不満げだったから」

「容赦ないね。ま、事実だけど」

今日の結果は、男子アイス・ピラーズ・ブレイクで悠元が優勝、男子バトル・ボードでは鷹輔が調子を崩して4位入賞。女子アイス・ピラーズ・ブレイクはスピード・シューティングに続いて3名上位独占、

女子バトル・ボードはほのかが優勝し、一人が3位入賞となった。
第三高校の優勝候補を破った悠元だが、夕食では同じ1年男子の半分から敵意のようなものに近い目を向けられ、関わるのも面倒だと判断して彼らから距離をとっていた。その原因には達也の活躍を気に食わないということと、悠元と達也が仲良くしていることへの反発も含んでいるとみられる。
新人戦のリーダーみたいな存在である悠元への視線を察してか、真由美や克人、摩利といった幹部の面々と一緒に食事をするということでその辺のフォローを済ませた形となった。
「悠元、新人戦統括役のお前がそんなこと言っていいのか？」
「事実は事実だからな。会頭から『お前は成すべきことを成した。だから気に病むな』とは言われたが、自分たちが空回りして敗戦したのに、勝った側の人間を素直に褒められないのはどうかと思う……というかだ。人のことを言えた義理じゃないが、お前は客観的な自己評価が低すぎるわ」
ガーディアンとしての生き方をしてきている達也に対して、いきなり自覚しろというのは染み着いた性分からして難しいだろう。だが、誰かが言わないとどうにもならない。かく言う自分も父親に諭されたからこそ、自己評価を少しずつ改めてはいる……ある意味、自分に言い聞かせるような口調で悠元は言い放った。
これには深雪も笑顔を浮かべて言い放った。
「そうですね。お兄様も悠元さんも揃って自己評価を過小に見ておりますし、朴念仁なのはいかがなことかと思われますが？」
「……悠元、この場合はどうすればいい？」
「笑えばいいんじゃないかな？　まあ、お前はそういうキャラじゃないけど」
「あ、あはは……」
「分かってたけど、深雪も容赦ないね」
別に達也のことを貶すつもりではないことは、ほのかや雫にも理解できていた。
達也の言う通り、確かに活躍したのは選手だろう。悠元も一枚噛ん

でいるが、その選手たちを支えて十全に戦えるだけの戦術や調整を万全にしたのは、他でもないエンジニアの功績。即ち達也の功績だと言える。

尤も、達也本人にその自覚がないというのは問題だと思う。殺意レベルの敵意とかを向けられたりするならともかく、高校生のレベルの敵意など、彼にとっては小波程度なのだろう……ガーディアンに対して職業病（ワーカーホリック）という概念があるのかは不明だが。

◇　◇　◇

同時刻。横浜・中華街。

某ホテルの屋上階にある部屋で、男たちは陰鬱で苛立たしげな表情を浮かべていた。それは、ここまでの新人戦の成績が自分たちの想定していたものとはハッキリと違っていたからだ。

「――――新人戦は第三高校が有利ではなかったのか？」

第三高校には中学時代に実績を上げた面々が揃っていた。対して第一高校は、男子に十師族の子息が二人いるが、確たる実績を持つ者が誰一人もいなかった。その読み違えが彼らをより一層苛立たせていた。

「このままでは、本命の第一高校が優勝してしまう。だが、九校戦を中止にする手段ももうない……こうなれば、せめてモノリス・コードで棄権してもらう他あるまい」

「!?　その中の一人は十師族である三矢家の人間だ。最悪、我々全員が本部の粛清を待たずに全員殺されるぞ!!」

男の一人はそう零した。だが、別の男性が声を上げた。前に進むも地獄、後ろに戻るも地獄……本部を無視して、利益のためにこのような企画（プラン）を実行したのが完全に裏目に出ている。

十師族に手を出したとなれば、三矢家だけで済めば御の字。だが、〝彼〟からの忠告では、三矢家だけでなく上泉家――――「雷龍（ライトニング）」まで動くということに男たちは戦慄していた。

「それ以外に取れる手段もあるまい……協力者に繋げろ。タイミングは第二試合だな」

既に第一試合のステージが決定しているため、男は第二試合で妨害

することを決定した。他の面々も「仕方がない」と大人しく従うこととなった。最早そうするしかないということに……九校戦終了後、東日本総支部のあるこの場所を早々に引き上げることも決めた。

だが、彼らは大きな誤算を犯していた。彼らのしたことは既に彼らだけへの『報復』で終わらないということを。

そして、もう一つ。

悠元は実家である三矢家以外の十師族や古式魔法の名家にその名を知られた。その中には彼を好意的に見ている家も存在する。その家が動くという可能性を、彼らは完全に見落としていたのであった。

九校戦七日目①～新人戦四日目～

伊豆にある一軒の別荘。そのリビングに置かれた大型モニターを見つめながら、一人の女性――――達也と深雪の母親である司波深夜は笑みを浮かべていた。そのモニターには、ハイライトという形でアイス・ピラーズ・ブレイクの男子と女子の決勝が映し出されていた。

「深雪もまだまだ詰めが甘いわね。まあ、完璧な人間より好感は持てるでしょうけれど……水波（みなみ）ちゃんにはどう見えたかしら？」

「あ、はい。確かに詰めが甘いという奥様の意見もご尤もでしょうが、深雪様は『誓約（オース）』で魔法制御のリソースを割いておられていて、あれだけの高難度魔法をしっかり制御しきったのは評価すべきかと思われます」

深夜の問いかけに彼女の新たなガーディアンこと桜井水波（さくらいみなみ）はそう返した。確かにA級ライセンスを保有する魔法師でも高難度の魔法である『氷炎地獄（インフェルノ）』と『フォノンメーザー』の発展形を深雪とその対戦相手である雫が披露したということに驚きを隠せていなかった。

「しかし、対戦相手の北山選手が深雪様をあそこまで追い詰めるとは……あの魔法は恐らく『フォノンメーザー』の亜種だと思われますが、あのような砲撃魔法は正直信じられません」

「そうね……まあ、そんな芸当ができるのは彼ぐらいでしょう」

「もしかして、達也様でしょうか？」

水波は達也の事情を深夜から聞かされている。それは達也が将来的に深雪のガーディアンを外れることが真夜と深夜の間で取り決められていることに起因する。

その代わりとして抜擢されたのが穂波の遺伝上の姪となる水波であった。能力的に申し分はないが、その実務試験と三矢家に嫁いだ穂波の代役を兼ねる形で水波は深夜のガーディアンを務めている。

そんな事情はともかく、水波の言葉に深夜は軽く首を横に振った。

「達也の魔法解析技術は確かに卓越しているわ。でも、明らかに『フォノンメーザー』よりも威力が上がった魔法を遜色ないレベルに落とし込むのは、今の達也でも難しいでしょう」

「でしたら、いったい何方が？」
「三矢悠元。うちの深雪が惚れて、達也が認めた……ひょっとしたら、達也と同等の〝切り札（ジョーカー）〟になりうる可能性を秘めた子」
深夜は悠元の試合を全て観戦していた。その中で彼が使った魔法の中に双子の妹の魔法である『流星群（ミーティア・ライン）』と思しき技術が紛れていることを見抜き、人知れず深い溜息を吐いた。どうやら妹は四葉に引き込むことも考えているのだろう……そう思うと頭を抱えたくなった。
「それは、一条家の『クリムゾン・プリンス』よりも上だと仰るのですか？」
「決勝がいい例ね。加えて実戦経験もあるから、モノリス・コードで一条の御曹司相手に後れを取ることはないでしょう」
そう話している深夜がまるで好いている人を応援するような面持ではないかと水波は感じていたが、それを口に出すことはしなかった。何せ、悠元の試合を深夜の隣で観戦していた時、水波は彼のアップがモニターに出た瞬間に頬が熱くなるのを感じていた。それを見た深夜はここぞとばかりに水波を弄っていた。
「ふふ、水波ちゃんたら……深雪と取り合いになって、彼は苦労しそうね」
「ちょ、ちょっと奥様!?　私は別に三矢様のことなんて……その……」
反論しようとすると、脳裏に思い浮かんでくる悠元の真剣な表情に水波は顔を赤くしていた。深夜はこれに対して水波もひとりの女性として恋愛感情を抱いたのだと笑みを零した。
彼女の調整体という事情を解決できる方法を深夜は知っている。だが、おいそれと話せない事情が多すぎるため、その詳細を知るのは四葉家でも現当主と筆頭執事、穂波と深夜に二人を診た担当医師だけである。
それが明るみになれば、更なる危険を生み出しかねないということを理解しているからこそ、深夜は事情を隠すために隠居みたいな生活をしている。尤も、魔法の訓練だけは別荘の地下に造られた訓練場で欠かさずに行っている。
（こうなると、達也の恋愛事情が心配になってくるわね……彼にどう

にかできないかお願いしようかしら）
　達也の今の事情を作り出した責任は感じていた。だが、そうでもしないと達也が感情を爆発させて魔法を暴発させないか不安な部分もあった。これは双子の妹もとい真夜も同意見であった。
◇　◇　◇
　九校戦は７日目、新人戦４日目。種目はミラージ・バットの予選から決勝、そしてモノリス・コードの予選トーナメントとなる。
　モノリス・コードは３対３のチーム戦。お互いの陣地に設置されたモノリスを奪い合う――――厳密には、モノリスに専用の魔法を撃ち込むことによって中に隠された５１２文字のコードを露わにし、そのコードを送信するか、あるいは相手選手全員を戦闘不能状態にすることで勝敗を決める。
　相手への肉弾戦・武器での直接攻撃は禁止されているが、魔法による攻撃はレギュレーションを超える威力でない限り問題ない。ステージは草原、岩場、森林、渓谷、市街地の５つからランダムで選ばれる。第一高校の第一試合は第六高校が相手で、ステージは岩場ステージに設定されている。
　ここまで原作とは異なる動きを見せつつあるが、『ジェネレーター』は既に排除したと内密に連絡があった。達也はミラージ・バットの担当エンジニアなので、万が一モノリス・コードで『無頭竜』絡みのアクシデントが起きても手を出さないように言い含めている。ほのかとスバルには「頑張れ」とエールを送るだけに止めたが。
　そして、モノリス・コードの防護服を身に纏った悠元は、チームメンバーである鷹輔から声を掛けられた。
「その、悠元。いいのか？」
「本人がオフェンスを志願したんだ。鷹輔はディフェンスを頼む」
「あ、ああ」
　元々、モノリス・コードに関しては悠元がオフェンス、森崎がモノリスの防衛、鷹輔が遊撃というフォーメーションを組んでいた。ところが、昨日の夜に森崎がオフェンスを志願してきた。どうやら達也の功績と悠元が男子アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝したことに対抗

心を燃やした格好となった。
　これは鈴音に任せていた戦術と異なる方針だったが、悠元は溜息を吐いた上で森崎の志願を受け入れ、鷹輔にモノリスの防御をお願いした。のちのち鈴音から手痛い説教が飛ぶことは必至だが、これで何かしらの切っ掛けを掴めればいいだろうと思っていた。
「お、おい！」
「……はあ？」
　試合開始直後、森崎は一直線にモノリスに向かった。これには鷹輔が慌てて、悠元は呆れ返ってしまった。相手がモノリスの前に陣取って待ち構えている時点で、１対３の対決を強いられるようなものだ。
　それに、森崎の領分は要人警護――自身に注意を向けたり逸らしたりすることで相手の油断を誘い、相手よりも先に倒す奇襲力にある。そのことも忘れて真正面からの突撃は流石に駄目だろう。十師族クラス……例えば「クリムゾン・プリンス」なら可能だろうが、防御面というよりも攻撃特化と言える森崎に、対複数は厳しいと言える。
　すると、向こうの選手の二人が加重系の範囲魔法を使用して森崎の動きを封じこんでいた。
（あの阿呆……自身を優等生（ブルーム）と高言するぐらいなら、自分の得意分野に照らし合わせて頭を使って考えろよ！）
　２対３でも問題はないが、面倒にしかならない。なので、鷹輔にモノリスを任せると、悠元は左手に持った銃形態汎用型ＣＡＤで自分の足元に向かって魔法を撃ち込む。そして、一気に自己加速術式でその場から消え去るように姿を消した。
　森崎が一直線に向かったのに対して、悠元はフィールドの外縁に沿って迂回する形で、相手チーム三人がいるモノリスに近付く。魔法による出力はごく短時間――鍛錬で使うことの多い魔法行使と足音を極力消す走法で一気に相手の側面へと切迫した。
　相手モノリスを視界に捉えた際、わざと魔法反応に気付かせるぐらいの発動時間に設定した自己加速術式を発動させると、魔法行使に気付いた相手選手は側面から走って来る悠元に驚愕した。

「なっ!?」
「やばい、迎撃を――――」
反撃の暇を与える間もなく、左手に持ったＣＡＤで収束系魔法『偏倚解放』を行使し、三人まとめて吹き飛ばして戦闘不能状態に陥らせた。文句なしに第一高校の勝利となり、加重系魔法の効果が消えたことで森崎はその場に両手と両膝をついて大きく呼吸をしていた。
第六高校が驚いたのは、遠くに見えていた第一高校が守るモノリスには二人いたはずなのに、そのうちの片方である悠元がいつの間にか自陣のモノリスの側面まで近づいていたことだ。これは悠元が自己加速術式で離れる際に撃ち込んだ術式が要因である。
魔法名は天神魔法における光属性の幻影魔法『夢現（ゆめうつつ）』。指定した範囲内の映像情報を魔法発動時の状態で維持する魔法で、いわゆる立体映像（ホログラム）を生み出す魔法である。今回はモノリスを起点に半径１０メートルの範囲で悠元と鷹輔の二人がいるという状態の映像を投影していて、当然その範囲外にいる第六高校の面々にはそう見えていた。
加えて、悠元がフィールドの外縁を走っていたのはその信憑性を高めるためだった。今回は、第六高校が開始直後に分散しなかったことと、三人の意識が完全に森崎に向いていたのを察したからこそ、その戦法を選択したというわけだ。
一応、鷹輔には前もってそういう魔法の存在（彼には天神魔法ではなく光波振動系魔法の類ということで誤魔化したが）を伝えていたため、彼はモノリスの防衛に専念していたというわけだ。
「――――それで、森崎君。何か弁明することはありますか？」
「……ありません」
第一試合終了後、第一高校の天幕の奥にて、森崎は鈴音からの冷たい目線と厳しい口調に対して何も言い返せなかった。もし悠元がフォローに入らなければ、一人減った状態で第六高校を相手にしなければならなくなる。尤も、鈴音の見立てでは、悠元一人で片が付くと見越していたからこそ、彼をオフェンスに置くことを決めていた。
「本来なら、悠元君がオフェンスにいることで森崎君と五十嵐君を自

由に動かす作戦だった筈です。貴方一人でモノリス・コードが戦えると本気で思っているのですか？」
「市原先輩、まだ試合はありますのでその辺にしてやってください」
「……そうですね。では、本来のフォーメーションで第二試合以降は行きます。異存はありませんね？」
森崎が小さく頷くのを確認した上で、鈴音はその場を去った。あまりしこりは残したくないな、と思いながら、悠元は森崎に向かって問いかけた。
「なあ、森崎。ずっと思ってたことだが、一体何が気に食わないんだ？」
「おい、悠元……」
鷹輔が窘めようとするが、悠元はそれを制して森崎を見つめた。確かに百家支流である森崎家としてのプライドもあるのだろう。第一高校の一科生としてのプライドもそうだが、特に森崎は達也に突っ掛ってきてばかりの人間だった。まあ、確かに傍から見れば司波家というポッと出の家の人間に負けるというのは我慢ならないのも理解できる。
「お前は確かに優秀な人間だと思うし、それに見合うだけの成績を挙げているのは誰の目から見ても明らかだ……そんなに全部勝ってないと気が済まないのか？」
「お前に分かる訳がないだろう!?　理論も実技も1位を取っている人間には俺の気持ちなんて……」
負けたくないという気持ちは分からなくもないし、何か一つでも負けていると気に食わないという気持ちも理解はする。けど、人間である以上は得意も不得意も存在する……その意味も込めて悠元は呟く。
「そりゃ分かる訳がない。森崎の苦労や悩みを聞くことはできても、結局解決するのはお前自身だ。けどな、俺だって常に成功してきたわけでもないし、負けも結構経験してきた。それだけは自信を持って言える……何かを証明したいのなら、次の試合で証明して見せろ。お前はさっきの試合と同様オフェンスに回って、鷹輔は遊撃に回ってくれ。最悪ディフェンスの俺一人で何とかするさ」

「なっ!?」
「悠元……正気か？」
「至って正気だが？　ま、市原先輩の説教には付き合うよ……これでも、森崎のやる気を買ってるつもりだが？」
悠元の言葉に森崎と鷹輔は驚きを隠せない。つまり、本来前面に出る悠元が完全に防御に回るということ。
そのフォーメーションは対第三高校に考えていた案から攻守を入れ替えた形だ。鷹輔は誰かをサポートするのが得意であるため、遊撃に回るという考えはあった。だが、「カーディナル・ジョージ」のことを考えればそこまで温存すべきと判断した形だ。
どうにかなる、と悠元が言い放ったことに鷹輔は思わず黙ってしまうが、これには森崎が不敵な笑みを浮かべた。
「だったら、乗せられてやろうじゃないか。後で吠え面かくなよ？」
「その意気だ、森崎」
「あ、あはは……」
ただ、問題は次の試合……第四高校に市街地フィールド。奇しくも原作で事故を起こした組み合わせだ。原作の知識では、この事故のことについて詳しく語られていなかった。
だが、いくつかの状況からして、一つの可能性が浮上する。それは〝大会委員が『破城槌』を使用した可能性〟である。
原作では、バトル・ボードにおいて精霊魔法らしきものによる水面陥没と『電子金蚕』によるＣＡＤ誤作動からのオーバースピードが引き起こされていた。会場の監視をしている大会委員に加え、監視システム自体を管理している人間に『無頭竜』の息がかかっていた場合、その証拠を握り潰すことは容易に出来ると思われる。そのためにレースを一旦中止にすることで有耶無耶にしたとみれば筋は通る。
モノリス・コードの場合、崩れやすいビル対策に加重系魔法を準備することは珍しくもないが、室内という空間がある市街地フィールドで『破城槌』を使った場合の殺傷性ランク変動のことは、魔法科高校に通う人間なら理解できる筈だ。
ましてや九校戦に出場する人間がレギュレーションを一番気にし

なければならないので、特定の状況下で『爆裂』と同列視できる『破城槌』を使う選択肢などある筈がない。なので、第四高校がレギュレーション違反の魔法をインストールするとは考えづらい。仮にインストールしていたとなれば、ＣＡＤのレギュレーションチェックの段階で確実に引っ掛かるからだ。

そこに監視システムの意図的な見過ごしと『事故』として有耶無耶にすることはして来るだろう……既に九校戦を中止にする手段を封じられた『無頭竜』の連中がそれをやったら、確実に〝悪足掻き〟とも言えるが。

やる気になっている森崎に水を差すようなことはせめて起こって欲しくないと思いつつ、悠元は僅かに笑みを零したのだった。

◇　◇　◇

女子ミラージ・バットの結果はスバルとほのかが無事予選通過した。夕方5時からの決勝まで待機だが、達也にとっては精神を休められる時間とも言える。達也は二人に声を掛けると、それに対してほのかがえらく上機嫌となっていた。ともあれ、選手の二人もしっかりと休息を取る為に天幕を離れた。

「お兄様はどうされます？」

「俺も部屋で休んでくる。深雪は皆とモノリス・コードの試合を見ておいで」

そう言って達也は天幕を後にし、ホテルの部屋でブルゾンを椅子に掛けて、ベッドに横になった。モノリス・コードに出場している――先日の宣戦布告をしてきた将輝と真紅郎のことも気に掛かるが、悠元との会話を思い出していた。

昨日の夜、達也の部屋を訪れた悠元は、遮音フィールドを張った上で無頭竜のことを達也と話し合った。

「――――なら、無頭竜のことは大丈夫なんだな？」

「ああ。とりあえず爺さんが動いてくれる手筈となったが……ここだけの話、無頭竜は色々やらかしすぎていてな。その一つに『ソーサリー・ブースター』がある」

『ソーサリー・ブースター』――――『無頭竜』がその供給源となって

いる魔法増幅装置。正直な話、これに使われている核となるものからして、非常に非人道的な代物だったのだ。
「それの核となるものに魔法師の大脳が使用されている……反吐というか吐き気を催す邪悪の所業だと思う。だから、この国だけの問題じゃなくなってるらしい。ＵＳＮＡではあの『スターズ』に所属している戦略級魔法師まで動いているらしいと聞いたからな」
「それ程の大事と言う訳か。というか、大脳を部品にするというのは……蠱毒（こどく）の原理か」
「恐らくはな」
ここだけの話、悠元が独力で作り出した『サード・アイ・ゼロ』に関してだが、あれは魔法の構築式自体の補助ではなく、人工衛星を使わずして超長距離魔法行使を実現させる「視覚強化装置」とも言うべきものだった。なお、設計データ自体は悠元の記憶に保持され、実物は沖縄防衛戦後に達也の『分解』で消し飛ばして貰った。
（……次の試合はここまで最下位の四高だ。悠元がいて取りこぼすということはまずないだろう）
悠元の言葉は「エンジニアとして働き詰めなんだから、休めるときに休め」ということだったので、達也は素直に頷いた。今頃、深雪は雫やエリカ達と一緒にモノリス・コードを観戦しているだろう。達也は、ゆったりと押し寄せてきた眠気に身を委ねたのだった。
◇　◇　◇
新人戦モノリス・コード第二試合、第一高校対第四高校の試合。
市街地フィールドのスタート地点として設定された廃ビルの一室で、悠元は〝悪意〟のようなものを感じ取っていた。
開始まであと7秒となった瞬間、天井に『破城槌』の魔法式が展開されたことを察知し、悠元は拙いと判断した。だが、次の瞬間――それとは別の『破城槌』の魔法式が自分たちの近くにある側面の壁に展開された。
（なっ……!?）
原作では有り得ない2発目の『破城槌』。それを食らえばいくら防護服を着ている自分たちといえども致命傷になりかねない。この状

況だとフライング云々よりも自分たちの守りを優先すべきと判断し、障壁魔法を展開する。

だが、元々崩れやすい廃ビルだったために『破城槌』の影響で連鎖的に足元まで崩れ、悠元たち第一高校のチームは崩落に巻き込まれる形となったのであった。

九校戦七日目②

新人戦モノリス・コード第2試合、第一高校と第四高校の試合はビル崩落によって試合中止。救護テントでは森崎と鷹輔の治療の様子を悠元が目を逸らすことなく見ていた。すると、そこに克人と真由美が姿を見せた。

「三矢……は、無事か」

「ええ、まあ……ですが、森崎と五十嵐の怪我までは防ぎきれませんでした」

致命傷や大怪我を避けることには成功したものの、森崎は左腕、鷹輔は右脚の骨折。本来完治まで1週間程度だが、魔法治療のお蔭で2日程度安静にすることで済んでいた。あとは各所に打撲や切り傷を負った。

反射的な魔法行使というのもあったが、原作知識では考えられなかった2発目の『破城槌』ということもあり、崩れてきたコンクリート全てをカバーリング出来ていなかった落ち度である。なお、悠元自身に関しては『相転移装甲（フェイズシフト）』で無傷である。

「お前は悪くない……寧ろ感謝しなきゃいけないんだ……」

「ああ。悠元がフォローしてくれなきゃ俺たちは良くてドロップアウトしてたかもしれない」

「森崎に鷹輔……」

怪我を負わせたことに関しては悠元の責任もあるかもしれないが、最悪を免れただけでも良かったと呟く2人に悠元は居たたまれない表情を浮かべ、真由美が思わずクスッと笑みをこぼした。

そんな中、悠元は気になることを克人に尋ねた。

「会頭。この場合、自分のフライング行為はどうなるのでしょうか？」

「今回のような緊急事態の場合、その辺りは配慮されるだろうが……この後、俺が大会運営本部に出向いてくる。お前のことも含めてな」

その上で克人は悠元に当時の状況を尋ねたので、悠元は冷静に当時の状況を話した。流石に『破城槌』が2回行使されたことは克人と真由美も驚きを隠せなかった。間違って発動できる魔法ではない代物

を第一高校に狙い撃ちしたことは無論だが、十師族の直系である悠元に対しての殺意とも受け取れるような所業という事実。
「そうか……その意味で、２人が骨折で済んだのは奇跡的だろう。七草、後は任せる」
「え、ええ……悠君、天幕のほうで話がしたいんだけど、いいかしら？」
『破城槌』１発でも屋内で使用すれば殺傷性ランクがＡに格上げされる。この時点でレギュレーションオーバーなのは間違いないが……すると、真由美が悠元に提案をした。ここでは話しにくいこともあるのだろうということで、悠元はその提案に頷く。
悠元が天幕に入ると、無傷で何事もなかったかのように歩く姿に驚きを隠せない先輩たちの様子に何か言いたくはあったが、そのまま天幕の奥へと入っていった。鈴音も表情には辛うじて出さなかったが、驚きはしていた。
すると、天幕に姿を見せた深雪や雫、その引率兼ストッパーみたいな形で前会長である美嘉が姿を見せた。
「司波さんに北山さん、それに美嘉さんも」
「あの、悠元さんたちの様子は……」
「悠元君は無事です、というか無傷です。ですが、ほかの二人は骨折や怪我を負ってしまいましたが」
鈴音は大会本部に向かうことになった克人のほうから一通りの事情を簡潔に伝えられていたため、安否のことを話すと深雪がホッとしたような表情を浮かべていた。雫は「まあ、悠元だし」と納得していた。美嘉に関しては、正直弟の非常識さに頭を抱えたくなっていた……自身の非常識さを棚に上げたうえで。
「無傷って……で、リンちゃん。悠元はどこに？」
「今さっき会長と一緒に奥のほうへと……恐らく当時の状況を聞きたいのではないかと推察して、そのまま黙って見送りましたが」
「そっか。何にせよ、これは大きな問題になりかねないからね」
そんな会話が交わされている頃、天幕の奥で真由美と悠元がテーブルを挟んで向き合う形で座った。無論、遮音フィールドをきちんと展開した上で。そのあたりのそつの無さは流石と言うべきだろう。

「流石ですね」
「ふふっ、褒め言葉と受け取っておくわね。それで、本題なんだけれど……悠君は、今回の一件とここに来る途中に起きた一件に繋がりがあると思う？」
「どちらも半ば殺意に近いものを感じたとするなら、可能性は大いにあるかと」
　ぼかした言い方だが、実際には「無頭龍（ノー・ヘッド・ドラゴン）」の繋がりがある可能性が高い……というか、大会委員を調べた結果を既に知ってしまっているため、その可能性が極めて高い、のレベルだろう。
　大会前日の賊のことについては、風間に口止めされている形なので言わなかった。
「試合開始前に探知魔法関係の魔法反応は感じませんでした。なので、対戦相手の第四高校のものではない可能性が高いかと」
「……ねえ、悠君。もしかして、大会委員を疑ってるの？」
「半分程度には。大会委員も人間ですからね。もし仮に賊の仕業だとしたら、それを見逃した大会委員の落ち度と言えるかもしれません」
　悠元自身、断言はしなかった。自分が巻き込まれた側で、あの時は最悪の事態を避けるために防御行動を取った。原作から外れた出来事への対処に専念したため、その辺の細かい調査は選手である自分がやるべきはないと判断した。それに、あの場には自分の兄である元継と従姉である千里がいる以上、何かしらに気付いて行動している可能性が高いため、自分が必要以上に目立つ必要はないというのもあるのだが。
「何にせよ、緊急事態の回避とはいえフライングしたのは事実ですから……新人戦モノリス・コードに関してはチームリーダーの会長にお任せします」
「え？」
「会頭が態々折衝しに行ったということは、何らかの救済案を求めに行ったってところでしょうから」
「……一切話してないのに、良く分かったわね」
　選手の選出をした責任というのもあるかもしれないが、十師族の直

系が狙われたことに対して、十文字家当主代行としての責任を果たすために克人が交渉を引き受けたのだろうと悠元は推察した。この辺は原作知識の部分も含んでいるのだが。
それに、緊急事態とはいえフライング行為をしたのは事実。なので、悠元は如何なる結果になろうとも受け入れるつもりだった。
すると、そんな考えを読み切るように真由美はこう言い放った。
「まあ、悠君には引き続き出てもらうことになりそうだから、準備はしといてね。十文字君もきっとそう判断するでしょうから」
「……分かりました」
克人のことだから「十師族の強さを見せろ」という文言付きで有無を言わさずに参加させてきそうだったため、悠元は内心で溜息を吐きたいような気分だった。これも力有るものの責務として頷くことしかできなかった。
残りのメンバーについては、真由美に何かしらの考えがあると思いつつも深くは聞かないことにした。
そして、奥から戻ってきた悠元に深雪と雫が駆け寄ってきた。
「悠元さん!」
「深雪に雫。まあ、俺は怪我もなかったけど……心配かけたようですまなかった」
「うん。悠元が大怪我するイメージが出てこなかったけど、あれだけの崩落だったから流石に心配だった」
雫に関しては練習期間中の合宿で新陰流の稽古の見学もしていたのだが、一歩間違えれば大怪我になりかねない訓練をこなす悠元の姿が脳裏に焼き付いていたようだ。とはいえ、ビル崩落という大事故に匹敵する事態には心配したようだ。
流石に天幕には先輩たちもいるため、頭を撫でるわけにはいかないと自制した。すると、そこに達也もやってきた。彼の表情は疑問を感じているといった印象であり、パニックとまではいかないが慌ただしい雰囲気は天幕の中に残っており、加えて天幕に深雪や雫がいることを不思議に思ったのだろう。
「達也か。もう少し休んでなくていいのか?」

「十分休んだから問題ない。して、何があった？」
「モノリス・コードの第２試合で開始直後に廃ビルの崩落があってな。まあ、他の２人は骨折程度で何とか済んだ」
　ここで悠元自身のことを触れなかったのは、今の様子からなら分かるだろうし達也の『眼』は誤魔化せないことを知っている。達也も今の悠元の様子を視たようで、無事であることを理解したようだ。
「自然的なもの……じゃないな。魔法か？」
「『破城槌』を受けた。正直言って、もう妨害とか言えるレベルじゃないんだが……」
「達也君。ちょっと奥まで来てくれるかしら？」
　すると、ここで真由美が達也を奥に呼び出した。多分新人戦ミラージ・バットで影響が出ないようにお願いをしに行ったのだろう。こうなると、新人戦モノリス・コードがどうなるか次第であろう。すると、今まで成り行きを見守っていた美嘉が悠元を抱きしめていた。
「あー、よかった。これでもし悠元が怪我なんかしたら、大会運営本部に殴り込んでいたんだから」
「姉さん……当たってます」
「スキンシップの範疇よ、スキンシップ」
　これには深雪と雫が顔を見合わせて頷き、悠元の腕を掴んで彼を美嘉から引き離した。そして、両脇を固められていた。両手に花というよりは連行される宇宙人みたいな心境だった。
「２人とも、自分は一体何処に連れていかれるのでしょうか？」
「悠元の部屋」
「とりあえず、お話の時間ですね」
　羨ましい様な、妬まれる様な……そんな複雑な視線を浴びながら、悠元はされるがままに天幕から連れていかれる羽目となった。そして、その引き金となった美嘉はそんな３人の様子を見て微笑ましい表情を浮かべてこう言い放った。
「悠元、女の子を泣かせちゃダメだからねー」
　それに対して悠元は何も言い返せなかった。なまじ前科があるだけに……

◇　◇　◇

所変わってＶＩＰ席の一室では、重苦しい雰囲気が場を満たしていた。

床に座って冷や汗を流している２名の大会委員。立ってはいるが俯いた状態の大会委員長。それを睨んでいるのは元と剛三に烈。それと、彼らを捕まえて連行した元継と千里。詩鶴は笑みを浮かべているが口元は笑っておらず、明らかに怒っていると読み取れるほどの凄みがあった。

「――――『破城槌』を撃ち込んだ犯人が大会委員だとはな。非常に遺憾と言わざるを得ない」

ビル崩落直前、間違って発動できるようなレベルではない魔法行使を発見した元継と千里が２人の大会委員を拘束。近くにいた防衛大の学生数人で加重系魔法を発動させてコンクリートの加重を軽減させる事態となった。大会委員は自分たちの関与を否定したが、本来対抗魔法などの救助・救命用の魔法しかインストールされていないはずのＣＡＤから『破城槌』の起動式が発見されると、彼らは顔を青褪めていた。

加えて元継が小声で「無頭龍」の関与のことを追及すると、彼らに反論する気力は既に無かった。事態の判断を仰ぐために元継が２人を強制的にＶＩＰ席まで連行し、現在に至る。

静かに烈は呟いたが、これは明らかに明確な殺意を持っていると判断してもおかしくないレベルの話。現十師族の三矢家に喧嘩を売る行為となるだけでなく、上泉家にも喧嘩を売った形だ。引いては十師族全体に喧嘩を吹っ掛けたと認識せざるを得なくなる事態に発展しかねない。

「無事だと聞いたが、下手をすれば息子やその学友が死ぬ所であった……残念だが、これでは大会運営本部を信用できないに等しい事態だ」

「同様だな。孫に手を掛けようなどとは笑止千万よ。とはいえ、大会自体を止めるわけにいくまい……」

元の言葉に続いてそう述べた剛三は、ゆっくりと立ち上がって部屋

の出入り口に向かって歩き出した。これには烈が問いかけた。
「剛三、どこに行く？」
「ちょいとお使いをな」
「――――なら、妾の孫たちも連れていくがよい」
剛三の表情は明確な怒りを示している……つまり、悠元を貶めた連中を〝滅ぼす〟とまでは言わなかったが、彼の雰囲気がそれを物語っていた。すると、扉が開いて扇子を手に持ってはいるが、現代風のファッションに身を包んだ若い女性が姿を見せた。これには烈が驚いていた。
「千姫⁉　なぜここに来た？」
「それは無論、剛三に手を貸してやるためよ。修司と由夢を付ける故、存分にやると良い。あの者共に龍の怖さを骨の髄まで見せると良い」
「ふっ……感謝するぞ、千姫」
千姫の言葉に剛三は不敵な笑みを浮かべると、とても実年齢に似つかわしくないほどの速力でその部屋を後にした。それを見届けると、千姫は部屋の中へ静かに足を踏み入れた。手に持っている扇子を広げつつ、それを仰ぎながら喋り始めた。
「さて、この状況じゃと大会運営だけに任せるのは選手たちを危険に晒しかねぬ。そこで、妾からの提案じゃが……魔法大学と防衛大学校から来ておる警備の一部を九校戦に出場する選手のレギュレーションチェックに回す。そこにおる者たちなら、問題はなかろう？」
「なっ⁉」
「嫌とは言わせぬぞ。これは上泉家と神楽坂家の〝要請〟じゃ。既に両大学の学長、それに魔法協会の会長と話は付けた。しかと心得よ」
上泉家と神楽坂家の〝要請〟。それは、この国の政府――――その長ともいえる内閣総理大臣であっても無視できないことを意味する。九校戦の主催である日本魔法協会の会長が承認している以上、大会委員長と言えども逆らうことは許されない。
「えと、私たちがですか？」
「佳奈と美嘉にも声は掛けておきたいな。佳奈の『眼』なら不正は一発で見抜けるだろうし」

「なら、決まりじゃ。烈よ、そやつらはしっかりと裁くんじゃな。お主との話は後日じゃ」
　千姫は用事もすんだのか、速やかに部屋を去っていた。気が付けば大会委員が気絶しており、それを成したであろう千姫の手腕に烈は冷や汗を流した。すると、それと入れ替わる形で入ってきたのは克人であった。彼はこの状況からして一波乱あったのだと判断しつつも、烈に尋ねた。
「失礼します……閣下、これは一体何事でしょうか？」
「十文字君か。いや、失礼した十文字殿。……実は、そこで気絶している大会委員が『破城槌』を打ち込んだのだ」
　烈は隠すことなく克人に今までの経緯を話した。その上で烈は悠元のフライング行為はあくまでも不測の事態による対応のため、それによる不利益を第一高校に与えることはしないと断言した。
「状況が状況のため、第一高校のチームには緊急措置として代理選手での出場を認める。大会委員長、異存はないな？」
「は、はい……閣下の意向にお任せいたします」
「十文字殿、今回は例外の処置のために色々大変だろう。なので、例外が多少増えても問題はないと判断してほしい」
「……ご配慮、感謝いたします」
　少しばかり難航するだろうと思っていたが、克人は烈からの〝お墨付き〟を貰える形となったことに感謝して頭を下げた。とはいえ、ここから本気で勝ちに行くためには〝彼〟の力が必要だと思慮しながら、克人は第一高校の天幕に戻っていったのであった。

九校戦七日目③

新人戦モノリス・コード、第一高校対第四高校の試合は大会運営による協議の結果、翌日に再試合という形で決着した。原作なら第四高校がここで失格扱いとなっていたが、そういう形で落ち着いたところを見ると、下手に失格扱いにして大会運営の不祥事を明るみに出されたくないという思惑もあるのだろう。

そういった無駄なプライドだけは一人前のように思える。まあ、彼らからすればひよっ子みたいな高校生から言われたくないと思いそうなので、口に出すことはしない。

深雪と雫からの追及（主に兄弟姉妹のことについて）を終えた悠元に連絡が入り、呼び出し先となった第一高校の天幕で待っていたのは克人であった。意外にも早かった折衝自体は向こうが折れる形での決着になった、と克人はそう述べた。

「――――以上の経緯で代理選手の出場を認めてもらえることとなった。予選の残りの試合は明日の午前に延期となる。三矢、色々思うところはあるだろうが、俺としてはお前に引き続き新人戦モノリス・コードに出てもらいたいと考えている。七草からも同意見だという旨は確認済みだ」

「異存はありません。寧ろフライング行為を理由に参加から除外されることも覚悟していましたので」

「あの場に閣下はおろか、上泉殿と三矢殿までいたのだ。大会委員長がそれを言い出せば、間違いなく針の筵であっただろう。寧ろ命の危機を率先して排除した姿勢は評価されるべきだと閣下が仰ったからな」

十師族の直系を貶めようとしたといっても過言ではない事故。その雪辱を晴らせとは公言しなかったが、その意味も含まれていると悠元は悟った。なので、ここで拒否するという選択肢はなかったし、そもそもモノリス・コード関連は真由美に丸投げという形を取ったので、自分に拒否権は存在しなかった。

悠元の続投は代理の選手を立てるという条件に含まれていなかっ

たものの、克人としてはここで悠元を外す選択肢はないと判断していた。彼なら他の代理の選手とも連携はとれるだろうとの判断も含まれているが。
「そうなると……いくら例外が認められるとはいえ、燈也は拙いでしょうね。3種目出場になってしまいますし」
「ああ。元々本人の希望を汲んでのものゆえ、六塚は選択肢から外すつもりだ。代理選手については俺と七草に任せてもらえるか？」
「ええ。その旨は既に会長に伝えてありますが」
　仮にそれが認められてしまうと、他校からの追及が飛んでくることは必至。場合によっては将輝が3種目目として本戦モノリス・コードに出てくる可能性も無きにしも非ずになりかねない。なので、そのあたりの配慮をしつつ選手を選ぶと克人は明言した。
（さて、どうする……って、そういや昼食がまだだったな）
　第2試合のアクシデントの後に救護テントで2人の様子を見て、真由美との話の後で深雪と雫に部屋まで連行されてお話をする羽目となり、それが終わると今度は克人からの呼び出しを受けて天幕にとんぼ返りする羽目となったため、気が付けばお昼を過ぎていた。
　本当なら午後もモノリス・コードの試合がある予定だったので丸々空く羽目となった。折角九校戦に来たのだから、支給された弁当に出店で何か買おうと天幕を出ると、ちょうど天幕の入り口の脇で深雪と雫が待っていた。
「2人とも、待っていたのか。別に中で待っていても罰は当たらないのに」
「ちょっとね。悠元、これからお昼なんでしょ」
「ま、そうだな。一緒に付いてくる分には構わないけど」
　真夏なので直射日光と暑さは普通ではない……と思ったら、2人の周囲が若干ひんやりとした空気を感じた。これは恐らく深雪の魔法なんだろうな、と視線を向けると、深雪は気付いてくれたことが嬉しかったのか、ニコリと微笑んだ。
「成程、ちょっとした練習かな？」
「流石は悠元さんです」

「そういう勘の鋭さは達也に学んだようなものだけどな」
　達也は新人戦ミラージ・バット決勝の微調整が済み次第、こっちに合流するとのこと。その際はほのかも一緒に来るらしい。なので、用事を済ませようと出店に向かったところ、一人の少女と遭遇することになる。
　ウェーブがかった母親譲りの髪に整った容姿。その少女は悠元の姿を見つけると、駆け寄ってきて悠元を抱き締めたのだ。これには深雪と雫が揃って反応した。
「お兄様、お久しぶりです！」
「……悠元さん、またですか」
「ホントジゴロだよね」
「言わないで……まあ、久しぶりだな茜ちゃん」
　一条茜（いちじょうあかね）――第三高校1年一条将輝の妹であり、現在小学6年生の彼女。人目もあるので何とか離れるように諌めると、茜もそれを察して悠元から離れた。
「知り合い？」
「第三高校の『クリムゾン・プリンス』の関係者ってところ……茜ちゃん、どうかした？」
「あ、いえ、そちらの方がとても綺麗で……」
　茜が驚いていた先にいたのは深雪であった。有象無象を惹き付けてしまう容姿は致し方ないな、と思わなくもない。これには深雪も苦笑を浮かべていた。どうやら自覚というものはあったようだ。
「けど、1人で出歩くのは流石に危険じゃないのか？」
「お母様もあちらにいらっしゃいます……って、こちらに来ました」
「もう、茜ったら……改めて、久しぶりね悠元君。息子が何だかんだ迷惑をかけていると真紅郎君から聞いているわ」
「いえ、まあ、思春期の男子ならそのようなものではないかと思われます。お久しぶりです、美登里さん」
　そこにさらに姿を見せたのは茜の母親である美登里。彼女は一色家の傍系でもあるため、一条家と一色家は浅い親戚関係とも言える。流石に色々目立ちすぎるのは拙いと理解してくれたようで、美登里は

挨拶もそこそこに茜を連れてその場を後にした。
「ところで、さっきの口ぶりだと『クリムゾン・プリンス』とは面識があるの？」
「初対面の俺に向かって特殊な性癖持ち呼ばわりしてきたのが奴だ。お返しはキッチリとして……その後は何度か連絡したぐらいの仲だよ」
「……成程。大方の事情は分かりました」
将輝を関節技で気絶させたこと自体は以前生徒会室で話していたので、そのことを思い出した深雪はその原因が茜との出会いにあるところまで読み切ったようだ。兄も兄なら妹も妹……つくづく司波兄妹は規格外の塊だと思う。それを口に出したら何かしらの反論が来そうだったので黙ることにした。
昼食は悠元の部屋で食べることになった。部屋には悠元のほかに達也、深雪、雫、ほのかの５人で食べる形となった。
「そういえば、三高の試合は見に行かなくていいの？」
「行ったとしても手の内全てを見れるわけじゃない。それに『カーディナル・ジョージ』がいる以上、向こうは偵察を警戒するだろうからな」
第三高校を含めた他校にも情報が行っている以上、悠元が偵察することを警戒するだろう。それに、アイス・ピラーズ・ブレイクの絡みで目立っているため、ひっそりと偵察することもできなくはないがリスクが高すぎると判断していた。そもそも、実戦経験のある『クリムゾン・プリンス』を相手にできる同学年の男子は正直数えられるレベルだ。
部屋にあるモニターではちょうど第三高校の試合が映っていた。
「元々試合だったはずが延期になって、それで他校の偵察に行って面倒事になるのも嫌だし」
「お前にしてみれば、情報がなくてもどうにかできそうだが」
「達也、幾らなんでも情報がない状態から万事上手くいくなんて所業は俺でも不可能だからな？」
現に『破城槌』の被害を防ぎきれなかったことがそれを物語ってい

る。
　それは置いといて、新人戦ミラージ・バットの決勝戦は１７時からの予定。使用するＣＡＤの調整も粗方済んでいるためにやることがないため、観戦しに行くことになりそうである。
「ほのかは大丈夫か？」
「はい。あ、そうだ。悠元さん、ありがとうございました！　アドバイスと練習が非常に役立ちました！」
「軽い保険みたいなものだったけど、役に立ったのなら幸いだよ」
　ほのかの技術面に関しては達也が改良した起動式と美嘉のコーチング、それと悠元が魔法隠蔽を見分けるコツを教えていた。
　精霊魔法にはダミーを施す隠蔽系の魔法がいくつかあり、本物の魔法と見分けるのは至難の業。だが、光に敏感なぐらいの感受性を持つほのかならそれぐらい行けるだろうと軽い気持ちで教えた。
　その程度のことは術式の秘匿に触れないので、特に躊躇いはしなかった。無論天神魔法関連は綺麗に避けているので問題はない。
　新人戦バトル・ボード決勝では第三高校の四十九院沓子と対戦することになったが、今までの練習の成果を出し切ったほのかが一枚上手という形で優勝を勝ち取った。この背景には達也への想いという力があったことも勝因の一つであった。尤も、その気持ちは当人に届いていない模様だが。
「その後、四十九院さんが先輩らしき人にもみくちゃにされていたので、私は大人しく去りましたけど……『助けてくれー！』とは聞こえたんですが、その……眼力がすごくて……」
「あー、それはほのかが悪いわけじゃないと思うぞ？」
「そうだね。ほのかは悪くない……でも、その胸は許せない」
「雫!?」
　そんなこんなで新人戦ミラージ・バット決勝。他の予選通過者と比べてほのかとスバルの動きは段違いともいうべきものだ。単に運動神経の差と言うよりも魔法の洗練具合で大きな差がついている。他校のエンジニアたちには青褪めた表情が見られたり、疑問を浮かべるものが多かったりしている。

それを1人のエンジニア――――達也が実現しているという事実は、まさに原作主人公ともいうべき所業であろう。そんな様子を表情に出すことなく真剣な表情を浮かべている悠元に深雪はクスッと笑みを零した。
「ふふっ……」
「深雪、おかしかったか？」
「だって、悠元さんは分かっているのにそんな表情をしているんですもの」
「分かっているからこそ顔に出したら拙いってことだよ。それぐらいは察してくれ」
「トーラス・シルバー」の片棒を担いでいることは、この場において知っているのは悠元と深雪だけ。その意味を込めた深雪の言葉に悠元はそう返しつつ目線だけを動かして周囲の反応を見やる。優れた光の感受性によって誰よりも早く飛び上がるほのかに、練習通りの動きを発揮しているスバル。それを支えているのは達也によって効率を高められた魔法。
教科書通りのやり方ではトップレベルだろうが、その教科書なんて通り過ぎたレベルは異質に映るのだろう……中には「まるでトーラス・シルバーみたいじゃないか！」と揶揄する人もいる……まあ、エンジニアがその1人なのは合っているのだが、敢えて口に出すことはしない。
「達也さんも凄いけど、悠元も十分おかしいレベルだからね？」
「雫……それは心にグサッと来るわ」
新人戦ミラージ・バットの結果は、ほのかが優勝でスバルが準優勝。この成績によって達也の不敗神話にまた1ページが追加される結果となった。尤も、彼からすれば代表メンバーとしての責務を果たしただけなのだろう。ご機嫌なほのかを見つつホテルに戻ったところで真由美が達也を連れてどこかへと行った。
これには残念がるほのかを他所に、雫は首を傾げていた。真由美のことだから、悠元も連れていくものだと思っていたらしい。
「どうした、雫？」

「うん。会長さんが悠元を連れて行かなかったのが気になったから。寧ろいないでほしいみたいな感じだったね」
「あー、そういうことか……ま、詳しいことは分からないけど」
悠元は新人戦の統括役だが、真由美は「悠君は彼女たちをお願いね」と念を押されてしまった。所謂達也の代わりとなる護衛役みたいなものかと察しつつ、悠元は内心溜息を吐いた。
憶測でしかないが、達也を新人戦モノリス・コードの代役に抜擢する際、彼の逃げ道として自分が使われる可能性を否定できないためにそうしたのだと考えた。真意が別のところにあっても驚くことはしない。
「ま、何にせよ引き受けた仕事みたいなものだし、部屋までは送るから」
「そういう律儀なところがジゴロじゃないかなって」
「そんなこと言われると何も出来なくなるんですけどねえ……」
「ふふふ……」
そんな会話が呑気に交わされている頃、ミーティングルームでは悠元の予想通りの展開……真由美が達也に対して新人戦モノリス・コードの代理選手を打診したところ、達也は自分が技術スタッフもとい二科生であることを理由（表向きは1種目しか出ていない1年男子から選ぶべきという理由）に断ろうとしたが、それを止めたのは克人であった。
「二科生であることを逃げ道にするな。お前は1年代表の21人に選ばれた人間だということは紛れもない事実だ」
代表メンバーとしての責務を果たせ……そう言われてしまっては、達也もそれ以上の拒否権を行使することなどできない。なので、「義務を果たします」という言葉と共に参加を受諾することとなった。
そこからは達也も少し柔らかい口調で尋ねた。
「それで、俺以外のメンバーは誰なのでしょうか？」
「1人は決めているが、お前に異存があれば変えても構わん。もう1人はお前に任せる」
「はっ？」

これには達也も驚きを隠せなかった。代理全員ではなく、幹部のほう（恐らく真由美か克人、あるいはその両方）で1名を決定した上でもう1名は達也の意向に任せるということにだった。少なくとも、新人戦の優勝を意識するなら変な人選にはしていないだろうと達也は推察した。

「時間が必要なら1時間後に来てくれ」

「いえ、時間は必要ありませんが……相手が了承するかどうか。それに、そちらで決めた代理も気になります」

「説得には我々も立ち会う。こちらで決めた代理に関しては……司波なら察しがついているのではないか？」

成程、と達也は克人の言葉の意味を察する。

新人戦モノリス・コードで無事である〝彼〟を出さない理由は存在しない。何せ、達也の説得にあたって真由美は「本気で新人戦優勝を狙う」と公言したのだ。その意味で要ともいえる戦力として彼が参加を続行してくれるなら、達也としてもやりやすくなる部分が大きい。

人選自体に有無を言わせない、という腹積もりだと理解して達也も悪乗りするような感じで質問を投げかけた。

「誰でもいいんですか？　チームメンバー以外から選んでも？」

「えっ、それはちょっと」

「構わん。この件は例外に例外を積み重ねている。あと一つや二つ例外が増えても今更だ。ただ、1—Aの六塚は無理だと思ってくれ。それをやってしまえば他校から槍玉にあげられるだろうからな」

「十文字君……」

真由美は躊躇ったが、克人のその一言で達也は確信を持つに至った。それに、そうしてくれなければこの状況での最適な人選は選べないと判断した。

「でしたら、1—Eの吉田幹比古を。ちなみにですが、そちらの指名は1—Aの三矢悠元ですか？」

「ああ、そうだ。七草との話し合いで決めた人選だが……不服か？」

「いえ、寧ろ最適の人選かと。彼には既に？」

「仮の打診程度にはな。正式決定のことはお前から伝えてほしい」

克人はそう答えたが、ほぼ完全に続投の流れが決まっていて、尚且つ達也とも友好関係にあることは真由美から聞き及んでいた。

その人選を達也が「最適の人選」と答えたことに、幹部の中からは大丈夫なのかと思わずにいられなかった。３人のうち２人が二科生ということよりも、第一高校でなにかと話題になっているその２人を組み合わせることがとんでもないことを引き起こしそうなことにだ。

「へっくし！　……風邪でも引いたかな？」

なお、その当事者はそんな彼らの心配を感知したかのようにくしゃみをするのであった。

九校戦七日目④

「――――というわけで、悠元。お前には引き続きモノリス・コードに出場してもらう形となった」
「嬉しそうに聞こえるのは俺の聞き間違いかな？」
「さて、どうだろうな。少なくとも、『クリムゾン・プリンス』相手に勝ち目が見えたのは確かだろう」
　達也の部屋には達也、悠元、幹比古の他にレオ、エリカ、美月の二科生組に加えて深雪がいた。本来なら難しいであろう一科生と二科生の混成チームだが、幸いにして達也と幹比古は同じクラスメイトである程度の手の内が分かる。悠元から見ても手の内が知れた相手なので、達也はその辺を見越して幹比古を指名したのだろう。
　その幹比古はというと、まさか自分が代理とはいえ選手として出場するなど寝耳に水であった。それを聞いた時にエリカが幹比古をからかったのは言うまでもないが。
「人を当て馬みたいに言うんじゃない……ま、拒否権は元より無いから受けるしかないんだろう。幹比古、腹を括れ。一高（うちこう）のトップがトップである以上、もう決まったことだから」
「……そうだね。仕方ないけど、やるより他にないか」
　悠元に加えて幹比古も承諾したことで一先ずチームとしての枠組みはできた。このチームにおいては達也がリーダー的なポジションで作戦立案を行う。本来は悠元の役割なのだが、お咎めなしとはいえフライング行為自体は事実なため、その代わりを達也が担当する。
「では、明日の準決勝までのフォーメーションだが……悠元、お前には自陣のモノリスを守るディフェンスを担当してもらいたい」
「え？　悠元がディフェンス？」
　達也の言葉には幹比古が思わず疑問を浮かべた。予選第1試合は幹比古も見ていたが、悠元の動きは相手を欺きつつ適切な火力で相手を戦闘不能にする技量を確かに備えている。その彼をあえて自陣のモノリスの防衛に回すというのは腑に落ちなかった。
　だが、悠元の反応はと言えば、達也の言葉に納得して頷いた。

「使える魔法を考えるなら、今のところは俺が前に出る必要がないってわけね……というか、結構あくどい事考えるな、達也は」
「なに、お前が三高相手にやろうとしていたことを考えるなら、これぐらいは単なる悪戯程度みたいなものだ」
　達也は強力な魔法を使えない（『分解』や『再成』自体人前で使えるような代物ではない）が、八雲仕込みの体術と持ち前の判断力や洞察力を考えるならモノリス開錠の役割を担うアタッカーに据えるのが一番理に適っている。幹比古は古式魔法の持つ特性を鑑みるなら遊撃に回ったほうが一番効率がいい。そうなると、モノリスを防衛する役割は悠元が担う形となる。
　加えて、悠元は無傷で生還したが、実はビル崩落の影響で何らかの怪我を負っていた……ぐらいに思わせたいのだろう。明らかに「カーディナル・ジョージ」対策なのは目に見えており、そこまで計算に入れている頭の回転の速さには正直脱帽ものである。
「次に、幹比古だが……遊撃を頼みたい。攻撃（オフェンス）と防御（ディフェンス）、それを側面から支援する役目だ」
「遊撃……了解した。けど、達也ならともかく、悠元に支援が必要とは思えないけれどね」
「お前は俺を一体何だと思ってるんだ……というか、エリカ。笑うんじゃない」
「ぷっくくくっ……いや、だって。実際その通りだと思うわよ」
　勝手に人外扱いされるのは……いや、ある意味人間卒業したから否定はできないが、せめて精神的な部分は人間でありたいと思っている。もう遅いとか言われたら部屋に引きこもる自信がある。
　何にせよ、フォーメーションについてはこのあたりとなったが……達也はもう一歩踏み込んだ質問を幹比古に投げかけた。
「ところで幹比古、『視覚同調』は使えるか？」
「……悠元、九重先生は達也にそこまで教えているのかい？」
「あの人、結構色々喋るからな。で、どうなんだ？」
「『五感同調』は無理だけれど、『感覚同調』をいくつか。視覚は無論使えるよ」

春の印象的な初対面の後、悠元は度々九重寺を訪れていた。その際には八雲の手荒な歓迎を受けることになり、その光景を見た達也が深い溜息を吐いていたのは今でも覚えている。とはいえ、試しの部分が多いので悠元もそれを理解した上での実力を発揮するに止めている。

八雲は密教系――――厳密には天台宗系統の忍術を修めている。密教系統は場合によって他の学問や系統の影響を受けることがよくあり、彼の場合だと陰陽道系統にも精通している。とはいえ、陰陽道を基本ベースとしている天神魔法とは完全な別系統の魔法と言っていい。

それはともかく、幹比古をここに送り込んだのは吉田家の現当主もとい幹比古の父親。なので、ある程度家の秘密が漏れたとしても文句は言わないだろう、と幹比古はそう述べた上で達也の問いかけに答えた。

「そうか……悠元、そういえば幹比古にＣＡＤを準備するという話はどうなったんだ？」

「あれか？　無論、準備したというか……知り合いがまた張り切っちゃったからな」

そう言って悠元は足元に置いてある２つのケースを持ち、それぞれ達也と幹比古に手渡した。達也に渡したケースには２丁の銃形状ＣＡＤが入っており、幹比古のほうには腕に付けるタイプのＣＡＤだった。

「達也の場合だと他の選手が使ってる特化型ＣＡＤじゃ足枷になるから、それを使ってくれ……ま、細かい話は後でするよ。幹比古のほうは、幹比古が持っているＣＡＤのデータから落とし込んでアレンジする形になるかな」

「成程、了解した」

「……達也もそうだけど、悠元もつくづく規格外だよね」

「身を守るものに手は抜けないってだけだよ。それに、作ったのは知り合いの工房の人だし」

達也に渡したのは汎用型の長所の一つを組み込んだ特化型ＣＡＤ。これでもレギュレーション自体はしっかりクリアしている。幹比古

のほうもシルバーブロッサムシリーズを基本ベースとしているため、レギュレーションの範囲内に収まっている。後者はともかくとして、前者の代物は特注品に近いので実質達也専用のＣＡＤと言っていいだろう。

達也からすれば、製作はともかくとして設計は間違いなく悠元によるものだと分かり切っていたので、細かい話は後で内密に聞けばいいだろうと納得した。幹比古は手に取ったＣＡＤを見て苦笑を漏らしていた。

幹比古の術式のアレンジは1時間できっちり終わらせ、部屋にいた面々が帰って行った。術式の感触は幹比古本人が寧ろ「今まで使った術式が何だったのかと思うぐらいだよ」と零すほどだった。

残っているのは達也に悠元、そして深雪の3人。奇しくもトーラス・シルバーの表裏にいる人間とその理解者という構図。すると、達也が特化型ＣＡＤを手に持ちながら問いかけた。

「悠元。このＣＡＤは見たところ汎用型に匹敵する容量のストレージになっているようだが……これで特化型なのか？」

「ああ。ストレージ自体は１１個に分割されていて、ハードウェアの機能で自動的に切り替えができるようになっているって仕組みだ。処理速度を上げるわけじゃないから、レギュレーションには違反しないし、間に魔法式を挟むから普通なら速度制限が掛かる。そもそも特化型ＣＡＤに汎用型クラスのストレージを積んじゃいけないってルールはないからな」

想子は情報を保有する粒子。ならば、魔法発動においてその思考が発動キーとして含まれている可能性があった。その仮説は「サイオン・セレクター」によって立証が成立したが、それは現状論文として発表はしていない。何せ、完全思考操作型ＣＡＤに繋がる可能性があったからだ。そのため、一般販売用のＣＡＤには「サイオン・セレクター」を搭載していない。

図らずしてというのは変だが完全思考操作型ＣＡＤは既に完成して2機存在する。そう、悠元の持つ「ワルキューレ」と「オーディン」である。

数々のブラックボックスを抱えているその2機には、この世界において数世代先を行くハードウェア技術が組み込まれている。「サイオン・セレクター」はその2機に搭載された想子自動認識選択装置――想子に含まれた発動したい魔法情報を読み取り、そこから必要な魔法だけを発動・展開する「サイオン・ディクショナリー」の廉価版みたいなものともいえる。

克人との模擬戦の際に13個もの起動式を同時読み込みするという荒業ができたのは、この機能があってこそである。

達也に渡したものは、「サイオン・セレクター」の基盤に特殊な魔法式を刻み込むことで11個に分割されたストレージを切り替えて発動するというもの。流石にレギュレーションオーバーとなる「トライデント」程とはいかないが、達也の持つ魔法技能（『質量爆散（マテリアル・バースト）』のために『誓約（オース）』が付与されている状態）でも発動に掛かる時間は500msレベルとなる。

使い方を工夫すれば『術式解体（グラム・デモリッション）』と系統魔法を2つのCADで同時行使も可能になった。元々そういう使い方に得手がある達也の戦術を狭めることなく、自ずとハンデを背負うことになる達也に対しての強化ともいえよう。

悠元の説明を聞いた達也は感心するような表情を浮かべていた。深雪に至ってはキラキラしているような眼差しを悠元に向けていた。

「全く……お前にそこまでやられると俺の立つ瀬がなくなりそうだ」

「自前で飛行魔法を完成させ、あまつさえそれを公開して世界中の魔法師相手にデータを取らせる達也が言えたことじゃないと思うが」

「気付いていたか。流石は悠元だ」

飛行魔法の公開自体に意図があることは既に読み切っていたというか、原作知識からして達也の目指す目標には適しているということで特に反対はしなかった。重力制御型熱核融合炉の実現のために飛行魔法を公開して世界中の魔法師が試したデータを送らせる……知らない人からすれば天使のように見えるだろうが、実際には目的のために手段を択ばない魔王みたいな存在かもしれない。

話をモノリス・コードに戻すが、CADにここまでのテコ入れをし

ても、達也が想定しているのは対「カーディナル・ジョージ」ということを悠元は察している。「クリムゾン・プリンス」については自分が相対することになるのだろう、と分かりきっていた。何せ、達也が準決勝までという前置きをしたということはそういうことなのだと理解できた。

「というか、エリカとも『彼女専用ＣＡＤの設計依頼』絡みで五十里先輩と話す羽目になったし……今年の夏休みも丸潰れになりそうだ」

九校戦終了後に神楽坂家へ赴くことに加え、ＦＬＴの新商品展示会の準備（主に飛行魔法搭載デバイス）、そして雫から海に行くお誘いを受けていた。現段階では悠元と雫、それとほのかの３人の予定を照らし合わせただけに過ぎない。

中学時代のような全国行脚はしないどころか剛三から「顔見せは十分」という言葉からして、魔法科高校に入った以上は余計な諍いになるので避けたというのが正しいだろう。

尤も、残りの夏休みのうちの数日は三矢の本屋敷に帰ることが確定している。主に詩奈と侍郎の宿題の面倒的な意味で。

「夏休み明けからは本気で気配隠して過ごそうかな……」

「……そうなったら俺でも探すのが大変になるから止めてくれ」

「お兄様？　なぜ私を見てそう仰ったのかお聞きしたいのですが？」

明日は新人戦モノリス・コードの残りだというのに、そういう緊張感よりも先の未来に話題が飛んだことは……まあ、変に緊張しなくていいと思わなくもなかった。

なお、悠元は深雪に捕まって強制的に同じベッド（悠元の泊まっている部屋）で寝ることとなった。達也に助けを求めるが、深雪の笑顔の凄味に根負けした。やっぱりシスコンのお兄様には勝てない相手だったか……と内心諦めた。

「深雪……それほど雫に対抗心燃やしてる？」

「……否定はしません。悠元さんはご自分がどれだけの異性から好意を持たれているか、今一度自覚されるべきかと思います」

深雪の言い分もご尤もだと思う。

しかし、悠元が今尋ねたいのはこの行動自体が〝婚前交渉〟に抵触

する可能性が高くなる、という事実である。
魔法師は通例というべきか、慣習で早婚が推奨されている。だが、その反面婚前交渉という類には敏感である……というのが、悠元が転生前に得ていた原作の知識。しかし、同じようでどこか違うこの世界では、婚前交渉や婚約といった婚姻関連のルールというものは家柄によりけりというのが大きい。
三矢家の場合はというと、現状結婚しているのが長男の元治と次男の元継の二人だけ。婚約にまで広げると長女の詩鶴が矢車家の長男と婚約していることぐらいだ。なお、後者については最近まで知らなかったが、詩鶴が侍郎を可愛がっている理由がそのことで腑に落ちた。ただ、公表自体は悠元のことが落ち着き次第、という形となっていることに思わず深いため息が出たのは言うまでもない。
佳奈と美嘉に関しては身を固める意味合いで話は進めているとのことなので、そこについては触れないことにした。ただ、そうなると詩奈は問題ないのかというところに行き着くわけだが、それについては……両親の頑張り次第だと思う。あと侍郎の努力次第も加わるが。
自分の祖父である剛三が婚姻に関して寛容というかハーレムを許容するような発言をしても、彼にはそう出来る力がある。恐らくは同じような立場の千姫にも可能だろう。
「それは自覚させられたけど……深夜さんは何て言ってたの？」
「……歓迎はしていました。母親ながら油断ならないとまで思ってしまいましたが」
「つくづく常識とか枠組みとかを悉く『分解』してるな、深雪の身内は」
「うっ……（ひ、否定できません……）」
魔法師という存在に一般的な常識すべてを求めるのはいかがなことかと思うが、それでも人間としての倫理観や価値観といった普遍的な常識ぐらいは持っていないと社会の中で生きていけない。ただでさえ、魔法という存在によって魔法師は非魔法師よりも厳しい法の理を課せられているだけにだ。
つまり何が言いたいのかというと、四葉家の異名である「触れてはならぬ者たち（アンタッチャブル）」がある意味一般常識破壊兵器（スタンダードブレイカー）になっている

のでは、と思わなくもないかなと思いつつ、悠元は明日のためにそのまま眠ることにしたのだった。

翌朝、深雪に「手を出さないなんて卑怯です」と言われた時は「深雪、お前は何を言っているんだ」と返さざるを得なかった。このことを達也に尋ねたら、無表情のまま何も返ってこなかったのは言うまでもない。

おい、諦めるなよお兄様。諦めたらそこで試合終了だって某監督が言ってたじゃないか……妹には勝てない？　あ、そうですか。

九校戦八日目①～新人戦最終日～

横浜・中華街。その一角にある横浜グランドホテル。今世紀前半、香港資本によって中華街に建てられたホテルで、その本来存在しない――客が知るはずの無い本当の最上階のフロアに『無頭竜』の東日本総支部が存在する。

元々このホテルの経営母体が無頭竜によって牛耳られていたのは事実であり、このホテルのみならず中華街という存在自体が外国人犯罪の温床とも言われてきた。だが、この国の政府は動こうとしていない。政治家という生き物は未来よりも今を大事にする傾向が強い。人の信任を得てその職に就くのだから、それ自体が悪とは言わない。

そのフロアにいる男たち……いや、その場に残っているのは1人の男性――ダグラス＝黄（ウオン）だけであった。

「な、何故だ!? 我々は殺していないだろう!?」

ダグラスがそう叫んだ先にいる人物――テーブルに置かれた高級の茶を注いで口を潤す男性。その傍には〝六本〟の真剣が刺さっている。茶を一杯飲んでそのカップを空中に放り投げると、そのカップは突如発生した蒼天の雷によって粉々に粉砕された。

「確かにそうだな。だが、我が国の魔法師を人とも思わぬその所業。たとえ貴様の信ずる神が許しても、儂は許さん。無頭竜には、今日を以て世界という舞台から消えてもらう……心配するな。何も知らぬあんたらのボスの娘は生かそう。尤も、自分の本当の父親も知らずに一生を終えることになるだろうがな」

この場にはダグラス以外の男たちや数体の「ジェネレーター」も存在した。だが、それを滅したのはその男性ではなく、ダグラスが逃げ出さないように監視している一組の男女であった。すると、その男性、というよりも少年が声に発した。

「九校戦を金儲けに利用するとは……下らねえな」

「まあ、気持ちは分かるかな。それで、上泉殿。いかがします？」

「お前たちは十分に働いてくれている。仕上げは……儂がやろう」

少年はその場にいた幹部連中や「ジェネレーター」を難なく処分し、

女性もとい少女は外部との連絡を寸断していた。これだけでも並の魔法師ではないという実力だということは、だれの目から見ても明らかだ。
男性――――上泉剛三は両手を真横に向けて掌を開く。すると、床に刺さっている真剣が彼の手に吸い込まれるように宙に浮き、片手に3本ずつの6本の真剣を握る。彼と真剣から迸る蒼天の雷光……これにはダグラスの表情が恐怖で引き攣っていた。
「た、頼む！　必要ならボスの情報も教える！　だから、命だけは……!!」
「今更必要ない。それよりも命乞いとは見苦しい。お前には、恐怖を忘れた連中の生贄となって貰おう」
気が付けば、ダグラスの傍にいた筈の男女もいなくなっていた。恐怖という感情で最早動くこともできないダグラスがその最期に聞いたのは、剛三の言葉であった。
――――七賢人、ジード・セイジ・ヘイグ。お前が四葉を狙うなら、元造の親友として儂が引導を渡してやる。
その日の深夜、横浜グランドホテルの最上部が超高圧プラズマと思しき現象によって融解。人知れず無頭竜の東日本総支部が壊滅した。無論、同日に西日本総支部も壊滅しただけでなく、この国以外の無頭竜の拠点――――総本部も含めて一斉に壊滅したのであった。
◇　◇　◇
中条あずさは一つの疑問を抱いていた。いや、疑問というよりは確信に近いものだろう。それは、あずさがミラージ・バット新人戦を見ていた時に他校の人間が発した言葉だった。
「――――くそっ、なんであんな小さな起動式であれだけの動きができるんだ！　まるでトーラス・シルバーみたいじゃないか!?」
（トーラス・シルバー……みたい？）
考えてみればそうだ。達也が担当している2人の選手は他の選手よりも洗練された動きを見せていた。それは単に選手自体の実力だけではなく、十二分に引き出す達也の立てた戦術やＣＡＤの調整力あってこそだった。

それだけじゃない。スピード・シューティングやアイス・ピラーズ・ブレイクの起動式アレンジ能力――――『フォノンメーザー』や『氷炎地獄（インフェルノ）』といったA級ライセンスを有する魔法師でも難関の魔法を高校生のレベルで実現させた能力。

汎用型と特化型を繋げる技術を実用レベルにも昇華させた能力……トーラス・シルバーでなければ無理なのではないか、という疑問があずさの思考を駆け巡っていた。その推測が確信に変わったのは、モノリス・コードの代役の関係で達也の部屋を訪れたときだった。

「失礼します。これが頼まれていた防護服で……司波君、三矢君は一体何をしてるんですか？」

「ありがとうございます、中条先輩。彼には吉田の起動式を見てもらっています。流石に古式魔法となると自分も手を出せないのが多く、彼の知識は必要ですから」

起動式を「見る」という単語にあずさは内心驚いていた。達也の言葉をそのまま受け取るなら、現代魔法なら自分一人でも何とかなるという言葉の裏返しでもある。

あずさはモノリス・コードを担当していたエンジニア（主に森崎と鷹輔）の代わりとして達也のアシストに入ったわけなのだが、ここには男女スピード・シューティングの補助エンジニアとして入った悠元もいる。

それでも術式の文法チェックの手伝い程度をすることになったのだが、ヘッドセットのディスプレイに映し出された文法自体、あずさにとって〝未知の領域〟と化していた。

（これは……起動式自体が大幅に書き換わってる？　これって、もう「アレンジ」とかじゃなくて「改造」に近いんじゃ……）

あずさはほぼ確信に近い形で達也が「彼」なのではないかという確信を得ていた。それだけでなく、あずさは悠元についても疑惑を感じていた。だが、「彼」という人物は一人しかいない。

（――――でも、もし「彼」という人間が存在していないのだとしたら……）

そんなあずさの混乱を他所に、新人戦モノリス・コードの準備は進

むのであった。
◇　◇　◇
九校戦８日目。新人戦最終日となるこの日はモノリス・コードのみとなる。とはいえ、ビル崩落という事故の影響で第一高校の予選がずれたことにより、達也と幹比古、そして悠元の即席チームは午前に予選の残り３試合、午後に決勝リーグという他校よりもハードなスケジュールで挑む形となる。
「一高（うちが決勝リーグに進むためには、四高との再試合、八高と二高の３試合に勝つのが一番の方法。けれども、八高と二高からクレームが入ってね……」
「出るからには勝ちに行きますよ……だろ、悠元？」
「まあな」
本来不戦勝で済むはずだったのに、代理での出場が認められたことに対する苦情は止むを得ない。なら、そこは実力で示せばいいだろう。達也の問いかけに悠元は短く答え、幹比古は笑みを漏らした。
観客たちは困惑といった表情を見せていた。アクシデントで代役が認められたこともそうだが、そのメンバーにスタッフや代表メンバーのリスト外の人物がいるということにだ。それを見た香澄は淡々とこう呟いた。
「……ま、仕方ないね」
「仕方ないでは済まないでしょう、香澄ちゃん」
泉美がそう返しつつも、どこか心配そうな表情をモニターに向けていた。その対象は言うまでもなく悠元に対してである。
昨日のビル崩落によって、第一高校と第四高校の試合は『再試合』という裁定が大会委員会から発表された。その裏側に大会委員が第一高校の選手に対して妨害行動を取ったという事態になったということは、彼女らに知らされていない。あれだけの崩落ということで心配していたが、命に別条はないと真由美から聞いたことで安堵していた。
それでも、本当に大丈夫なのかという不安は拭えなかった。
「それにしても…一人は代表スタッフだけれど、もう一人は……千里（ちさと

さん、ご存知ですか？」
「吉田家の次男だよ。まあ、古式魔法の家柄だから、わからないのも無理はないかな」
香澄の問いかけに、その隣に座るセミロングの茶髪の女性――――上泉千里（かみいずみちさと）がそう答えた。香澄と泉美の両脇に千里ともう一人の人物こと元継が少し険しい表情を見せていた。元継と千里が２人と一緒に観戦しているのは、元継が一高在籍時に七草家の次男と面識を持ったことで、七草家の主催したパーティーに出席したことが切っ掛けだった。
「えっと、元継さん？」
「ん？　どうかしたか、泉美ちゃん？」
「その、悠元兄様なんですが……あれは武器、ですか？」
モニターに映る悠元だが、まるで刀でも差すかのように身に着けている細長い棒のような何かが目に入った。だが、モノリス・コードでは直接攻撃のための武器使用が禁止されている。ああやって持っているということは単なる武器ではないと泉美も理解していた。
「あれは武器じゃなくてＣＡＤだな（しかし、あのような武装一体型は見たことがないな……）」
ＣＡＤのレギュレーションチェックを済ませているということを考えると、おそらく彼が使うのは汎用型しかない。特化型をあえて使うという選択肢は三矢家の人間にはいない。
直接打撃は禁じられているため、恐らくは魔法攻撃を前提にしたものである……そこまでの推測しか今の元継にはできなかった。
◇　◇　◇
新人戦モノリス・コード予選第３試合。第一高校と第八高校の試合となる。無論、その様子を観戦している将輝と真紅郎は達也が選手として出てきたことに少しばかり驚きはしていた。
「彼が出てきたこともそうだけど、三矢がそのまま続投とはすごいね。一体どんな手品を使ったんだか……」
「ジョージ、そこは魔法と言うべきじゃないのか？」
だが、彼らの予想ではあのビル崩落で大きく動くことはできず、悠

元はディフェンスに徹すると読んでいた。先日の宣戦布告が早くも実現しそうなことに将輝は内心笑みをこぼした。これには真紅郎も気づいて問いかけた。
「それよりも、彼がどこまでやるか……お手並み拝見と行こうじゃないか」
　各校が警戒するほどのスーパーエンジニア。その彼が選手として出てきた。使用するのは二丁の銃形状ＣＡＤに腕輪型のＣＡＤ。３つのＣＡＤを使うこと自体ハッタリではないと将輝は自身の直感でそう認識していた。
　対戦ステージは森林ステージで、第八高校の得意とするステージだ。だが、遮蔽物が多いステージは精霊魔法を得意とする幹比古にとって自身の力を最大限発揮でき、達也と悠元に関しても特に苦にはならない。
「それじゃ、打ち合わせ通りに頼む」
「うん、任せて。悠元はフォローしなくていいのかい？」
「そっちで１人受け持ってもらえたら十分。もしもの時は〝飛ばす〟から」
　試合開始のサイレンが鳴り響き、達也と幹比古が森の中に入っていくのを見届けると、悠元は意識を集中させる。すると、悠元の周囲――自陣のモノリスを覆うように光のカーテンが展開される。
「――光のカーテン？　見るからにオーロラっぽいけど……」
「あれは、私の使ってる魔法とは違う……」
　そう漏らしたのは、観客席で見ていたエリカとほのかだった。この時点で現代魔法ではなく古式魔法の類であると分かったが、一体何を目的にしているのかはこの時点で判明しなかった。
　そんな会話が交わされているころ、悠元は瞳を閉じて意識を集中させ、精霊との〝感覚同調〟で他の５人の動きをすべて把握する。『天神の眼』を使っても問題はないが、頼り切るのも問題がある。そろそろ達也が相手陣地のモノリスに到達する頃合いだと把握した。
　達也は素早い動きで第八高校のディフェンダーに切迫し、魔法を使わない体術による緩急で相手の魔法による狙いを外させ、その隙に加

重系魔法で相手の動きを封じる。動きながら相手に魔法を使用するというのは、その行動だけでも高等技術に足を踏み入れることになる。

その隙に相手陣地のモノリスへと走る達也に対し、第八高校のディフェンダーはＣＡＤを構えて魔法を放とうとするが、それに達也が振り向くことなく右手に持っていたＣＡＤで想子の塊――――『術式解体（グラム・デモリッション）』でディフェンダーの起動式を吹き飛ばした。

これには一部の人間が驚きを隠せず、その中の一人である真由美が呟いた。

「『術式解体（グラム・デモリッション）』……あれを使えるなんて、凄いわね」

「……凄い？　どういうことだ？」

射程の短さ以外欠点らしい欠点がない対抗魔法だが、その魔法には膨大な量の想子量が要求される。達也がそれを躊躇うことなく使うほど無謀な性格でないことは真由美も摩利も理解している。となれば、達也の想子保有量は一般的な魔法師のそれを大きく引き離すほどのキャパシティを有しているということになる。

「いわば力技の類よ。その意味で、あの時魔法式を吹き飛ばした悠君の想子保有量に匹敵するでしょうね」

現代魔法において想子保有量はあまり重視されない。継続能力よりも瞬発的な力が重視されがちなため、力技の類である『術式解体（グラム・デモリッション）』を使える人間など数えたほうが早いレベルだ。その意味で達也の想子保有量は十人以上の魔法式を吹き飛ばした悠元と同等であると推測していた。

達也は相手陣地のモノリスに隠されたコードを露出させることに成功。その際にＣＡＤを発動させて、連れてきていた悠元が使役する式神を喚起魔法で外に出して、ディフェンダーを引き付けるために離脱した。

（悠元、こちらは任せた）

（了解……その前に、片づけておくか）

達也が外に出した式神との〝視覚同調〟で第八高校のモノリスの開錠を確認すると、悠元は右手で腰にある細長いものを掴み、それを

払った。すると、悠元から少し離れたところにいた相手のアタッカーの1人と思しき悲鳴が上がった。
それで気絶したことを確認するまでもなく、右腕にあるクラムシェル型のウェアラブルキーボードを素早く叩きはじめる。
達也の作戦はこうだ。
達也がモノリスの開錠を行い、幹比古が精霊魔法でアタッカーの1人を引き付け、相手のコードを悠元が動かずに入力する。魔法は苦手だが、体術なら高校生級とは言えない達也がアタッカーを務めているのはこのためであり、加えて悠元が古式魔法を使うことができるため、この作戦が一番理に適うと判断した。相手のディフェンダーが2人の場合は幹比古が達也のフォローに入り、相手のアタッカーは最悪悠元が対処する。
その為の対策として使ったのが天神魔法の『天龍水鏡（てんりゅうすいきょう）』である。この魔法はオーロラのカーテンに周囲の地形を写し取ることで相手からの視線を遮断する魔法。相手からは視覚的にモノリスの位置が特定できないため、防御というよりは認識阻害の類に近い。相手がこちらのモノリスを気付かせなくしてしまうというのはルールに反しない。
そして、悠元が振るったＣＡＤは、天神魔法と硬化魔法の複合術式を組み込んだ武装一体型ＣＡＤ。離れたところに天神魔法による魔法の塊――この場合は想子の塊を起点に障壁魔法を発動させ、硬化魔法でＣＡＤとの相対位置を固定。それを相手選手に飛ばしたというわけだ。分かりやすく言うなら、ハンマーの打撃部分を生成してコントロールする方法。これは達也の『小通連』を参考に組み立てた術式である。
古式魔法と現代魔法の複合術式という芸当ができるのは世界を探しても現状悠元しか出来ない代物であるが、幸いにして森林ステージなので相手アタッカーに何をしたのかと気付く人間は少なく済む。
悠元が５１２文字目を打ち終えて送信、サイレンが鳴り響いて第一高校の勝利で終わった。

九校戦八日目②

「やれやれ、悠元が教えたのかい？」
「一応はな。尤も、達也ができるのはああいう芸当ぐらいだが」
先程の第３試合で悠元がコード入力を引き受けたのは、幹比古と達也で次の試合の連携を取らせるためのものだ。流石に即席チームであれこれぶっつけ本番になるのは致し方ない。なので、初戦は幹比古に相手を１人引き付けるという役目に徹させた、というわけだ。
悠元が先に戻ってきた幹比古に達也との連携のことを話していると、達也が木の上から降りてきた。
「達也、別に普通に歩いて戻ってきても良かったんだが？」
「師匠との鍛錬の癖でな。そこは勘弁してくれ」
「あはは……」
九重寺では、敷地内だけでなく寺の裏山（そこも八雲の所有する敷地となっている）での手合せもこなしており、その時に身についた癖だと達也は返した。これには悠元と幹比古が苦笑を浮かべるに止めた。
あの人なら平気で帰る途中に試すことぐらいやりそうだから困る。
続く予選第４試合は第二高校との試合。市街地フィールドでの試合にまたもや事故が起きるのでは、という危惧を第一高校の幹部の面々が抱いたが、特にそういったアクシデントは発生しなかった。
第八高校との試合から第二高校はディフェンダーを２人にし、アタッカー１人で第一高校のモノリスを攻める算段なのだろう。だが、今回コードを打ち込む役割は幹比古に任せており、悠元は武装一体型ＣＡＤを手にした状態で自陣のモノリスの前に立ち、瞼を閉じて意識を集中させる。
（……見つけた）
「がっ!?」
その姿を視認するまでもなく、悠元がＣＡＤのスイッチを入れると起動式が展開し、そのＣＡＤを横に振るうと、それに呼応するかのように相手選手の悲鳴が遠くから聞こえた。

魔法自体は第八高校との試合で相手アタッカーに対して使ったものと同じ。その悲鳴を聞いたところで悠元は通信機のスイッチを入れた。

「相手のアタッカーは潰した。そっちは手筈通り頼む」

『了解した』

『分かった』

通信機自体使ってはいけないというルールはない。今回使用しているのは、達也が持って行った幹比古の式神を確実に再活性化させるためのものだ。

天神魔法と古式魔法の精霊魔法は、魔法自体の性能差ゆえにあらゆる部分で差が生じている。例えば、今回のような場合では天神魔法なら多方面に分岐した複数の同調や再活性化を楽にできても精霊魔法ではそれが難しい。

そもそも、天神魔法が精霊魔法をも上回る事象改変力を出せる理由は、陰陽五行思想――陽・陰・火・水・木・金・土を発展させた〝七曜〟の考えに基づく術式だからである。

五行の属性間には相剋・相生という力関係が生じる。大陸の道術や方術には陰陽道の考え方を発展させた術も存在するが、天神魔法は五行の力関係を利用した魔法もいくつか存在する。これはあらゆるものを取り込んで昇華させるこの国の性質が大きく影響しているが。

その中で最上位の技術となる五行相剋は5つの属性の力を寸分の狂いもなく均等にすることで生じる干渉力の合成を魔法に用いる方法。その逆として5つの属性を均等に活性化させることで魔法効果を高める五行相生（ごぎょうそうせい）という方法もある。前者は破壊や分解、後者は再生や構築といった力に用いられる。

話を戻すが、〝七曜〟においては五行の力に陰陽の力が加わるため、五行の上位に来る陰陽の力によって情報体次元（イデア）に情報の空白領域を作り、そこに五行属性の魔法が投射される。光や闇属性の場合はある意味二重掛けに近い。

現代魔法のように情報を直接書き換えるのではなく、何もない状態（フォーマット）を生み出した上で術者の望む属性の情報を書き込む。書き換えだけ

で見ればどちらが負荷をかけていないのかは一目瞭然。その意味で天神魔法がいかに驚異的なのかが理解できるだろう。
幹比古がモノリスのコードを入力し終えたところで試合終了のサイレンが鳴り響くが、悠元はフィールドを出るまで警戒を解かなかった。結局何もトラブルはなかったものの、警戒しすぎて損はないと割り切ることにした。
◇　◇　◇
第四高校との再試合（本来は第２試合なのだが、第四高校の試合スケジュールの結果として第４試合の後に変更された）は市街地フィールドではなく渓谷フィールドへと変更された。
悠元からすれば『無頭龍』の妨害で立ち消えとなった試合。だが、達也の決めた作戦通りディフェンス役としてモノリスの防衛に就きつつも周囲を警戒する。気配がないことを確認すると、通信機のスイッチを入れる。
「達也、右方向からアタッカー一人。幹比古はそのまま真っすぐ向かえばディフェンダーに接敵する」
『分かった』
『了解…てか、反則気味だよね』
「雑談は試合後にしてくれ」
『天神の眼』は正直強力すぎるが故、あまり多用はしていない。そうでなくとも天神魔法の探索術式――水属性の『流水波紋（りゅうすいはもん）』でフィールド全体の人の動きを把握できてしまう。すると、悠元から見て遠くの方で魔法による爆発音のような音が聞こえてきた。
その音の正体は幹比古の放った精霊魔法で、一定空間内の水を瞬時に昇華させることで体積を膨張させて破裂させる魔法――『水炊（みずたき）』。使用用途は本来音によって意識を逸らしたりするレベルの魔法でしかない。
前日の準備の際、悠元が起動式に暗号化も含めて仕込んだ結果、殺傷性ランクは規定内に設定されているものの、立派な攻撃魔法へと仕上がっていた。その幹比古から通信が聞こえてくる。
『悠元、起動式を弄ったのは君だよね？』

「安心しろ、殺傷性ランクはルールの範疇に収めてあるから。当たり所が悪いと骨折は免れないが」
そもそも、原作だと『ファランクス』を用いたタックルが攻撃方法として認められていることを考えれば、『水炊』は単なる空気砲みたいなものだ。『偏倚解放』を使わせることも考えたが、慣れ親しんだ精霊魔法で同じことが可能なら後者の方が比較的楽になるであろう。
幹比古としては直撃しないように川のあたりで発動したが、その余波を食らったディフェンダーが守るはずのモノリスに直撃してしまったらしい。
今回は達也が相手のアタッカーを引き付けている形なのだが、国防軍の訓練だけでなく四葉家のガーディアンとして戦闘訓練を受けている達也を相手に出来る人間が逆に少ないだろう。止まって魔法を打つという既存の魔法使いの戦い方などしないので、高校生レベルにおいては一番厄介な相手と言ってもいいだろう。
第四高校との再試合は、特に苦戦することなく勝利を収める形となった。
◇　◇　◇
予選のすべての試合が終了後、将輝と真紅郎は揃って歩いていた。彼を好意的にみている他校の女子が多いが、将輝は無論視線に気付いていても声をかけることはしない。
それは、十師族としての体裁というよりも将輝が異性と話すことに慣れていない、ということを真紅郎は知っている。何せ、実の妹にすらきちんと接しているとは言い難い部分を何度も目撃しているだけに尚更だ。
「やはり、一高が決勝に残ってきたか。今まで通りなら一高は八高と対戦することになる筈だが……」
「まあ、その辺は文句を言っても仕方がないよ」
将輝は不満というわけではない。本来は順位の関係で第三高校と第九高校、第一高校と第八高校の対戦予定が、第一高校の都合によって第三高校は第八高校と対戦する形となった。
その辺の大人の都合に文句を言っても仕方がないと割り切ってい

たが、それでも将輝から文句に近い言葉が出たことに、真紅郎は苦笑しつつも窘めた。
　それよりも、ということで真紅郎は達也の話題を振った。
「彼は魔法技術というよりも、それ以外の部分で目立っていた。だから、強力な魔法は使えないと思ったわけだけど……二高との試合で確信を得た」
「そうなると、1対1に持ち込めれば勝機はあるというわけか」
「まあ、『術式解体（グラム・デモリッション）』には驚かされたけれどね。彼と正面から戦えば勝機はある」
　真紅郎はあくまでも達也と将輝の場合を想定している。予選第1試合はともかく、残りの予選では2試合ともに悠元が自陣のモノリスの周囲から動かなかったことで、決勝でも動く可能性は低いとみている。
　決勝では悠元を含めた他の選手によるコード入力による決着は避けたい。そうなると、将輝は勝負の鍵となる達也との直接対決に持ち込むべきだと考え、真紅郎も同意見であった。この時点で相手選手が『インビジブル・ブリット』対策を考えているということも想定はしている。
　すると、将輝が険しい表情を下のフロアに向けていた。其の視線の先にいたのは、奇しくもその噂の当人である達也と深雪が並んで歩いていた。この時点で名字が同じことから双子か兄妹だと気付けばいいものの、恋は盲目というべきなのか将輝はその可能性に至っていなかったのだった。
「っと、噂をすればってところか。恐らく、僕たちの試合を見に来るんだろうね……将輝？」
「…え、あ、そうだな。なら、見せてやらないとな。俺は逃げも隠れもしないってところを」
　一条家の次期当主としてその力を見せつける……この時、将輝の脳裏には深雪と手を取り合ってダンスを踊る光景が浮かんでいた。それを知るはずもない真紅郎は首を傾げたのであった。
　無論、視線は達也も感じていたのだが、その主が特定できなかった。

というか、他にも好意的な視線が飛んでくるために特定しづらかった。明確な敵意や悪意というものではなかったため、ここで「眼」を使う必要がないと判断した。其の視線の原因は達也の隣を歩いている自分の妹なのだが。
「お兄様？」
「いや、何でもない。深雪は大丈夫か？」
「この程度、なんてことはありません」
人のことを言えた義理ではないのだが、深雪は他人を惹き付けてしまうが故にそういった視線を疎ましく思っていたのは事実だった。その辺の躱し方を母親が教えていたお蔭で達也の負担も自ずと減っていた。尤も、その反動として〝彼〟が苦労を背負っていることになるのだが。
「お兄様もこれぐらいの機微を学んでいただきたいものです」
「……善処はするよ」
深雪は達也の事情を知っている。だからこそ、達也には幸せになってほしいという思いがある。人とは違う才能のために人らしからぬ生き方をしてきた達也が〝人〟であろうとする夢を目指している。そして、深雪は叶えられると信じている。
元々この夢は深雪が達也と2人だけで決めた夢。魔法師を兵器ではなく人間であることを目指す夢。それを聞いた母親は、思わず笑みを零したのは言うまでもない。けれども、この夢は深雪が想う相手に伝えていない。彼が何を目指しているのか……こればかりは深雪だけでなく達也にも計りかねていたからだ。
そんな思いが込められた深雪の言葉を聞き、達也はそう返すぐらいしかできなかったのであった。
◇　◇　◇
悠元が達也と深雪の2人と一緒にいなかったのは、昼食に誘われたからだ。先輩であったら断っていたかもしれないが、その誘った人物が断れる相手ではなかった。
その相手は将輝の父親であり、一条家現当主こと一条剛毅。その傍には妻の美登里や娘である茜と瑠璃までいた。ここに将輝がいな

かったことは幸いだと悠元は内心溜息を吐いた。
流石に「もし対戦したら負けてくれ」などと言われる訳はないと思っていたので、達也と深雪に事情を説明した上で一条家が宿泊するホテルの一室に招かれた。会話を交えつつの昼食で、隣に座っていた茜はいたくご機嫌だったことに思わず苦笑を零した。その後、悠元は剛毅と2人きりの会談に臨んだ。
「昨日と今日の予選はモニターで見させてもらった。実に見事と言うほかない」
「恐縮です。とはいえ、本来のチームメンバーは負傷してしまいましたが」
もし決勝で対戦する場合は観戦しに行くということだった。正直なところ、観客からはアイス・ピラーズ・ブレイクのように将輝と悠元の勝負が見られるのでは、と期待する声も少なからず存在する。まあ、それはその時にならないと言えないことなので、仮に口止めを約束されたとしても話すつもりはない。
「まあ、そのことはよい……率直に尋ねたい。君は、十師族という存在をどう見ている？」
婚約絡みのことは剛三や千姫から烈に伝わっていることを既に聞き及んでいる。なので、彼と交友を持っている七草家当主や剛毅、それと四葉家現当主はすでに知っているとみていい。
どうして婚約のことを思考の念頭に持ってきたのかというと、これでも自身の力を客観的に見る力はあるつもりだ。非公開とはいえ克人を倒したことは十師族の一部にも伝わっているだろう。加えて七草家が自分のことを結構調べているのは知っている。なので、春に雫たちがブランシュの連中に襲われた時は必要最低限の魔法しか使っていない。
自分の存在はその意味でパワーバランスを平気で崩しかねない。だからこそ剛三と千姫の実家が自分の婚約に関わっているというのにも納得がいく。原作主人公である達也も似たようなものだからこそ、彼の力を取り込もうと躍起になる意味も理解できなくはない。
だからといって、それを排除しようとする手段しか考えない輩がい

るのは人種の軛なのか、国家の利益なのか、それとも民族の性なのか……どれも考えうるから困る。
確かに力というものはどうしても「恐れ」を抱く要因になってしまう。それがいかなる力であろうとも……だからこそ、隔離するのではなく目の届くところである程度の裁量を持たせる。それでも不満や不安は付きまとうかもしれないが、変に封じ込めて後で暴発するよりは遥かにマシだ。
「そうですね……魔法師という存在自体が少ないため、意思の制御を行う組織は必要かと考えています。ただ、専守になりすぎるのは危険かと」
魔法自体誰にでも使える代物ではない。想子は誰しもが持っていても、魔法を行使するための魔法演算領域は現状遺伝的な要素が大きい。なので、師族会議で数が少ない魔法師のコミュニティを纏めてコントロールするというのは一つのやり方なのだろう。
けれども、古式魔法と現代魔法では考え方もスタンスも変わってくる。国家の兵器という存在から変わった師族二十八家をはじめとした現代魔法使いと元々「超能力」と呼ばれていた古式魔法使いの軋轢は確かに存在するからだ。
その意味で古式魔法の家系である矢車家を使用人として付き合いのある実家の三矢家は珍しい部類だろう。それに加えて上泉家という存在も加わる形であるが。
「危険、と言われるのか……」
「魔法使い特有の秘密主義も確かに必要なところはあります。ですが、必要とあらば公開するべきものもあるでしょう。その為に実家は情報収集を怠ることなく続けています」
別にどこかの連中のように「知る権利」を振りかざすつもりはない。だが、生命や財産に危険が迫れば自ずと防衛することになるので、そのための判断材料となる情報は必要不可欠。そのことが欠けていては勝てる勝負も勝てない。
かの孫子が遺した兵法も情報の重要性を説いているし、この国は情報不足で散々痛い目を見ている。残念なことに、そのことが欠けた思

想の持ち主が各方面にいるのも問題である。幸いにして自分のやったことでメディア関連や政府の対応がマシな方向に向いたことは幸いともいえるが。
「この国の内部には短絡的な思考を持っていたり、あるいはこの国の力を削ごうと考える者もいる状況です。正直こんなことは言いたくありませんが、今の政府の対応はやっとマシになったってところでしょう」
「……続けてくれ」
「力を持たざる者からすれば、力を持つ者への危惧を抱くのは無理からぬことです。それは今までの歴史が証明してしまっています」
守らなければならない秘密は確かにある。だが、秘密に拘り過ぎて必要な情報を開示しないことも問題である。
現代魔法の魔法師が増えた背景からすれば人道的な問題は確かにあるだろう。けれども、国家の安定を担う力として魔法が重要度を増している以上、そのことをとやかく言っている場合でないと認識させる必要がある。
核兵器を抑えるために魔法が抑止力となっているからこそ、魔法という存在は誰にでも無視できるものではない。それは誰もが分かっている事実ではないだろうか。
それでも「人道的な問題を無視するのか！」と叫びたい連中もいるだろうと思うが、自分たちの知的欲求のために道徳や倫理を平気で捻じ曲げて、最悪法律という理まで無視する連中に言えた義理など無い。
どこぞの軍人の言葉を借りるのなら、「お前たちの正当さを一体どこの誰が保証してくれるのか」と言うに尽きると思う。世論を扇動しておきながら「世論の代表」だと自負できる都合のよい思考能力には感心すら覚える。
褒めはしないし、憧れたりもしないが。
「まあ、出来ることとしては魔法師が非魔法師を守るぐらいですけれど、非現実的な理想論とも言えますし、無理でしょう……というのが自分なりの考えです」

全人口からの割合から見ても、一握りの魔法師で大半の非魔法師を守るというのは非現実的な問題だ。極端なことを言えば、日本列島丸々カバーリングできる結界発生装置や対外防衛システムでもないと無理な話だ。

話を十師族絡みに戻すが、国における魔法師の力を保つ意味で強力な魔法師を持つ家を選ぶというのは理に適っている。けれども、それはお互いを牽制しあうという目的にしてはならない。設立当初はそれがまかり通っていても、今の時代にそぐわなくなりつつある。

一部の人間は四葉家を危惧しているようだが、約３０年前の大漢復讐戦で一族の半数以上を失った状態からここまでの発言力を得ていることを純粋に評価するべきだろう。確かに非人道的な部分はあるだろうが、綺麗事だけでは立て直しなど出来ないと貫いた結果ともいえる。最近は別の意味で「触れてはならぬ者達（アンタッチャブル）」になっている気はするが。

現に三矢家の現当主である元は力を磨くことをあえて推奨し、必要に応じた情報提供を他の十師族に対して行っている。それでも相手を出し抜こうとしている師族の人間がいるのは事実だ……どの家が、とはこの場で述べるつもりもないし、相手を辱めるつもりもない。

そうすれば後でしっぺ返しを食らうだけだ、と気付いてくれれば御の字だろう。

九校戦八日目③

新人戦モノリス・コードの準決勝は第三高校と第八高校、第一高校と第九高校で対戦した。「予定通り」というのはどうかと思うが、結果は第三高校と第一高校が勝ち上がった。前者の場合は将輝が一人で第八高校の選手全員を戦闘不能にし、後者は幹比古が霧の結界を張ってコード入力で勝負をつけた。

それらの結果を天幕で見ていた真由美は克人に問いかけた。

「ねえ、十文字君。一条君のあれは挑発なのかしら？」

「そうだろうな。真正面から打ち合ってみろという思惑で司波を引き摺り出したいのだろうが、恐らく司波はその挑発に乗らないだろう」

将輝は移動型干渉装甲――――十文字家が得意とする防御魔法を用いて単独で相手チームを戦闘不能にした。真由美にはそれが克人と同じような戦闘スタイルに見えたのだ。

元々達也がアタッカーを務めていたのは、モノリスの開錠を担うアタッカーとして即席チームの構成において理に適っていたから。魔法実技の関係で二科生だが、それを補って余りある実戦力は確かなものである。

将輝はそんな達也を引き摺り出そうと挑発したが、それに乗ることはないと克人は読んでいる。何故なら、決勝となる草原フィールドで今まであまり動いていない悠元が前に出る算段が高くなったことに起因する。

「それって……悠君も前に出るってこと？」

「相手に『カーディナル』もいる以上は三矢も前に出ざるを得ない。尤も、一条の相手は三矢が務めることになるだろう」

「一条君と悠君が撃ち合うって、どんな勝負になるのか見当もつかないわ。ただ、一条君は苦しい戦いを強いられるでしょうね」

レギュレーション上『爆裂』は使えないが、それを差し引いても将輝の実力は準決勝で披露されている。その一方、「ナインローダー」すら超えた複数の魔法を同時行使可能な技術に加えて古式魔法も使える悠元と真正面から魔法の打ち合いになった場合、将輝には若干不利

であると真由美は推測した。
悠元と将輝は既に新人戦アイス・ピラーズ・ブレイク決勝で対戦経験があり、悠元が勝利を収めている。彼が前に出ることで逆に将輝を挑発する狙いがあるのでは、と考えられなくもない。
「だって、あのビル崩落でも無傷で生還したのよ。モノリス・コードのレギュレーションに即した魔法だと悠君にダメージを負わせる方法なんて無いに等しいと思うの」
「加えてあのＣＡＤのこともあるからな。単純な魔法の撃ち合いだと……正直、俺も予想がつかんな」
真由美は佳奈や美嘉から悠元の射撃・砲撃能力について尋ねてみたが、そのどれもが〝埒外〟すぎて判断材料になりえなかった。加えて廃ビルの崩落から無傷で生還したとなれば、防御能力は殺傷性Ａランク相当の魔法を無傷で乗り切れることを意味する。
克人もそんな悠元を相手にするほうが不憫だろうと考えていた。いくら相手が実戦経験済みの「クリムゾン・プリンス」とはいえ、悠元が負けるビジョンがどうにも浮かばなかった。なので克人はそう述べるに止まった。
「草原フィールドで見通しが良いという条件はこちらも相手も同じ。だが、多重魔法制御を得意とする三矢相手だと……仮に俺が対戦相手として戦ったとしても、正面切って勝つのは難しいと言わざるを得ない」
「……まあ、十文字君からすれば、そう言うしかないでしょうね」
悠元は『ファランクス』を破る術がある。流石に九校戦で使うつもりはないだろうが、それを差し引いても克人が悠元に勝てるビジョンを描くのは難しいだろう。
そんな風に悠元の規格外さを話し合っている頃、その当人は天幕の外にいた。
「へっくし！……風邪を引いた覚えはないが、誰か噂してるのか？」
「お前は不思議の塊だからな。噂されても仕方ないだろう」
「女性ならともかく、男性に噂されるのは身の毛がよだつわ」
悠元は達也と一緒にヨガのようなストレッチをこなしていた。お

互いに『自己修復術式』持ちという稀有な存在なだけに、下手な怪我によって自動的に魔法発動することも考えられなくはないからだ。
「しかし、三高の連中は浮かれていたな……優勝したも同然の様子だったし」
「……聞いたのか？」
「聞こえてしまった、のほうが正しい」
悠元の『聴覚強化』は常に制御下に置かれているが、時折わざと発動させて雑音が聞こえるなかで集中できるような訓練をこなしている。いうなれば一流のアスリートのように歓声の中でも集中力を途切れさせない訓練で、新陰流の鍛錬でもそういった状況下での手合わせを幾度となくこなしてきた。
訓練のつもりでストレッチの際に『聴覚強化』を発動させたところ、第三高校の天幕の方面からの言葉が丸聞こえで、これには内心で苦笑した。いくら決勝が草原フィールドに決定したからと言って、それが優勝確定という考えに至るのは正直呆れを通り越して感心すら覚えそうだ。
だからと言って「クリムゾン」や「カーディナル」が油断するなどとは到底思えないが。
「奇しくも作戦通りに事が運ぶとは……流石達也だな、と褒めておく」
「それはお前という存在あってこそだがな。流石は手品師だよ」
「寧ろ越後屋と悪代官みたいなものじゃないかな……ひゃっ!?」
すると、突然キンキンに冷やされた……というか凍っているタオルを掛けられて変な声をあげた悠元。達也がそれを仕掛けた張本人に目線を向けると、その当人こと深雪はクスクスと笑みを漏らしていた。
深雪は達也にも冷えたタオルを差し出すが、そこまで極端に冷えたものではなく、寧ろ丁度良い感じの冷たさであった。これには悠元がジト目を二人に向けていた。無論凍っているタオルで体を冷やしながら。
「うう……俺、深雪に何か悪いことしたか？　軽く凍傷するかと思ったぞ…めっちゃカチコチになってるし」

「ふふ、それはどうでしょうか？」
（……深雪、確実に根に持っているようだな）
原因は昨晩のことなのだろう。とはいえ、これに関しては達也も正直どう言ったものか困っているのも事実。
婚前交渉や深雪の身の安全を考えるなら悠元の取った対応は適切だろう。だが、兄として深雪の気持ちを最優先するなら深雪の取った行動にも一定の説得力はあるかもしれない。自分に色欲や性的欲求がないわけではないが、妹のそういった教育は母親任せになっていたことは事実であり、見るからに派手な格好を取ろうとするときは流石に窘めた。
そんな達也でも欲を感じないわけではないのに、まだ欲求をハッキリと出せる悠元が止まっていることに正直賞賛を送りたいと思った。
「はぁ……で、何がお望み？」
「祝賀会で一緒にダンスを踊ってください。逃げたりしないでくださいね？」
「……達也」
「諦めてくれ」
「知ってたよ畜生」
現時点で新人戦優勝は確定したが、これでいよいよ負けられないことに悠元は深い溜息を吐いた。この原作主人公兄妹（きかくがいたち）と向き合うと決めた以上は半分諦めてるようなものだが。
◇　◇　◇
その頃、剛三は自分の泊まる部屋に千姫を招いていた。それはこれから来る客人を迎えるためでもあった。すると、扉が開いて最初に姿を見せたのは四葉家筆頭執事である葉山。そして、彼が横に移動すると姿を見せたのは真夜であった。
いつもならば唯我独尊といった感じを見せる彼女であったが、この場において真夜は丁寧な口調で頭を下げた。
「上泉殿に神楽坂殿。今日はお招きいただいたことに感謝いたします」
「なに、わしらからすれば姪っ子みたいなものよ。とはいえ、〝スポン

サー〟である千姫からすればそうもいかぬか」
「あら、それは剛三義兄様も同じでしょうに。東道殿とは相も変わらずと聞いております」
「まあ、否定はせぬ」
古式魔法の大家である神楽坂家と十師族である四葉家の関係は深い。神楽坂家は国の護りとして魔法師の育成に水面下で力を貸しており、その一つとして魔法技能師開発第四研究所のスポンサーを引き受けていた。
第四研究所のスポンサーには東道青波の存在もあるが、剛三が彼に対してあまり快く思っていないのは彼の妻が剛三の娘の一人だからだ。剛三が烈との会談の中で「娘を誑かした」などと言ったのは、娘を大事に思う親馬鹿な一面から来ている。
加えて、千姫の先代当主の弟は四葉家に婿入りしていた。神楽坂家は当主に選ばれた者とその配偶者のみが神楽坂の名を継ぐことを許されており、これは家の仕来りの関係である。それだけ当主という立場と神楽坂の名は重いということに他ならない。
ただ、このことに関しては千姫と神楽坂家先代当主に剛三、それと四葉家先々代当主しか知らない事実である。
「それは置いておこう。真夜、お主に話しておかねばならんことがあってこちらに呼んだ次第だ。九島のジジイには話したが、七草の小童も恐らく聞き及んでることだろう」
「それは、どのようなことでしょう？」
「三矢家の三男である悠元君のことです。どうやら真夜ちゃんの姪が好いているようですから、四葉の当主である貴女に話を通すべきだと判断したのです。実は、深夜ちゃんにはその辺の事情を聞いています」
千姫は真夜や彼女の姉である深夜と面識がある。なので、深雪を見た瞬間に誰の子どもかなど簡単に気付いた。真夜も千姫の慧眼は昔から知っており、彼女に隠し事は難しいことも承知している。
それはともかく、千姫はそう前置きをした上で悠元の婚約について切り出した。

「既に知っているかもしれませんが、悠元君の婚約に関しては上泉家と神楽坂家で全て取り仕切っています。加えて、彼には神楽坂家の次期当主として指名することも彼に伝えています」
「それは……大丈夫なのですか？」
「問題ない。わしの妻は千姫の実の姉だ。なので、悠元も神楽坂の血を引いておる。まあ、元の子ども達全員が神楽坂の血縁者とも言えるがな」
　これには真夜も感心したような表情を見せていた。
　達也と同等以上の実力を有している悠元の存在は、将来において師族二十八家のパワーバランスを大きく揺るがしかねない……このことは彼を引き込もうとしていた真夜も理解はしていた。なので、護人である二つの家が彼の婚約を決めるというのも納得できる。
　加えて彼が神楽坂家の血縁者という資格から、彼が神楽坂家次期当主として指名される……つまり、彼は十師族という枠組みから外れて一つ上の存在になることを意味する。
「真夜ちゃん。悠元君の婚約の序列第一位に貴女の姪である司波深雪さんを選びたいと考えています」
「あら、序列ということは複数の婚姻でしょうか？」
「真夜よ。お前も知っているだろうが、現時点でも悠元の実力は其方の身内の一人と同じく戦略級魔法師クラスだ。そういった力を後世に継がせるため、複数の配偶者がいても問題はないと結論付けたからな」
　真夜は四葉の後継者に悠元を迎えることも考えていたが、神楽坂家次期当主に悠元がなり、その婚約者として深雪を嫁入りさせる……真夜は葉山に視線を送った。すると、葉山は黙ったまま頷いた。同意見であると察し、真夜は笑みを零した。
「異存はありません。ですが、婚約の発表はこちらの次期当主が決まり次第、ということでよろしいでしょうか？　一応再来年の正月あたりを考えているのですが」
「構いませんよ。最初は吉日を選んで次期当主の発表だけに止める予定でしたので。義兄様もよろしいですか？」

「構わぬ。こちらは既に当主継承の儀は済ませたが、発表は歩調を合わせる予定だったからな。真夜、上泉家の当主は孫である元継が継いでいるが、このことは正式な発表があるまで口を噤んでくれ」
　三者での会談が終わった後、泊まっている自室に戻った真夜は紅茶を注ぐ葉山に問いかけた。その表情はしてやられたというよりも感謝の念を滲ませるようなものだった。
「葉山さん。私の考えが読めるかしら？」
「大体は、と言ったところです。大方達也殿が絡んでいると推測いたします」
　現状の四葉家は深雪が次期当主の最有力候補となっている。今回の提案を真夜が呑んだのは、今現在の次期当主レースの梯子を取っ払って新たな候補を他の当主候補に紹介する段取りを組んでいる中で渡りに船だった。
　葉山は必要以上に喋らず紅茶の入ったカップを近くに置くと、真夜はカップを手に取って紅茶で口を潤す。
「悠元君が神楽坂家に入るとなれば、深雪さんが嫁入りでも最上の結果ということになるわ。姉さんは両手を挙げて喜びそうだけれど……詳しい話は九校戦の後で、ってことね」
　同じ十師族の直系同士ならば色々面倒事が付随してくる可能性が高かったが、悠元が十師族の枠組みから切り離される形となる以上は深雪を送り出すのにも弾みがつく。四葉家のスポンサーの一つである神楽坂家に嫁入りは非常に大きく、悠元と血縁関係にある三矢家との連携も組みやすくなるのは間違いない。
　周囲からは政略結婚の線を疑われそうだが、深雪が四葉家から離れることは出る杭を自ら撃ち込むようなもの。現状は達也と深雪が四葉家の係累だということを明かしていないため、どういった影響を与えるかは未知数のレベル。
「ところで、その達也殿がモノリス・コードに出場しておりますが」
「あの子も強かね。相手を平然と騙す悪知恵を教えたことなんてないのに、一体誰に似たのかしら……」
　達也は目立ちつつも必要なところは他の人間に功績を被せている。

流石に技術スタッフとしての功績は達也自身のものなので隠すことはできないが。
　そんな悪知恵を一体どこで身に着けたのかと零す真夜に対して、葉山は笑みを見せていた。これには真夜も思わず頬をプクッと膨らませていた。
「なによ、葉山さん。言いたいことがあるのなら、ハッキリ言いなさいよ」
「では、失礼ながら……それは奥様や深夜様に似ただけのことかと」
「私や姉さんは、どこぞの狸のように策略や悪知恵だけで生きているわけじゃないわ。心外よ」
　聞き方を変えれば相手への悪口ともいえるような発言だが、一番分かりやすい人物を例に挙げただけなのだと葉山は察しつつも真夜の言葉を待つ。それを見た真夜は一筋縄じゃいかない執事を見つつ、視線を窓の外に向けた。
「今回のこと、東道殿は御存知なのでしょうね」
「恐らくは。分家の方々へのご説明はいかがなさいますか？」
「それは再来年の慶春会で構わないでしょう。どうやら西のほうが慌ただしいですから、来年の正月は悠元君にお任せしましょうか。葉山さん、手筈をお願いいたします」
「畏まりました」
　春の時点で大亜連合が水面下で動いていることも、その協力者も既に掴んでいる。だが、今は泳がしておくのが吉だという葉山の意見を真夜は取り入れた。そんな慌ただしい中で正月など迎えたくはないというのもあるが。

九校戦八日目④

新人戦モノリス・コード決勝。本部席近くのスタンドはざわめきが起こっていた。その理由は十師族の当主やその直系、そして烈が座っていたからだ。

確かに決勝ではそれぞれ十師族の直系が対戦することになる。とはいえ、本部席ではなく直接見に来るということ自体、その試合が注目されているということ。その空気に耐えかねて香澄が言葉を零した。

「……なに、この状況」

「今回ばかりは私も同じですよ、香澄ちゃん……」

香澄と泉美は周りに迷惑が掛からないようにこの場所で観戦しようと先に来ていたのだが、次々と来る十師族の面々に対して挨拶をする羽目となり、加えてその中に自分の父親がいるという現実に緊張しがちであった。

「これってさ、多分悠元兄を見に来たってことだよね」

「そうでしょうね。それに、十師族の直系同士の対決ですから」

一条、三矢、四葉、五輪、六塚、七草、九島と十師族の半分以上がこのスタンド席にいる。それだけの家の人間を集めたのは一条の御曹司の力とは思えない、と香澄や泉美は薄々感付いていた。

2人は新人戦アイス・ピラーズ・ブレイク決勝の試合も観戦していた。一瞬で決着をつけた悠元の実力は恐らくモノリス・コードでも発揮されるのだろう。そう考えると、それを見に来たというのは分からなくもない話であった。

「ていうか、厚かましいって思わないのかな」

「そんなことを一々思っていたら務まらないのでしょう」

周りの目もあるので相手を伏せつつ小声で話しているが、香澄は自分の父親のことをそう酷評し、これには泉美も苦笑を漏らしつつ容赦ない言葉を呟く。双子の妹のこの一言には香澄も引き攣った笑みを漏らした。

その背景には自分の婚約を潰した父親への恨みも込められている

のかもしれない。すると、その言葉を聞いていた一人の人物が声を掛けてきた。
「あらあら、七草のお嬢さん達は中々に苛烈ですね」
「え？　えっと……」
「どちら様でしょうか？」
　社交的な七草家の令嬢である香澄と泉美でも見知らぬ女性。見るからに現代風のファッションを身に纏ったモデル体型の２０歳代ぐらいの女性。その女性は手に持っている扇子を指で器用に回しながら自己紹介した。
「神楽坂家現当主、神楽坂千姫と言います。名前は聞いたことぐらいあるかもしれませんが」
「神楽坂家……確か、古式魔法の大家と剛三さんからお聞きしたことがあります」
「えと、先ほどの発言は……」
「周りには聞こえていませんよ」
　千姫はこの時天神魔法を使用して２人の会話を周囲に聞こえないようにしていた。発動兆候を一切感じさせない発動方法は現代魔法では到底無理である。
　そう言って千姫は香澄の隣に座った。すると、２人を値踏みするように見た上でこう問いかけた。
「２人はモノリス・コードを見に来てるみたいだけど、だれかお目当てでもいるの？」
「私は妹の泉美がどうしても観戦したいと言いましたので、その付き添いです」
「香澄ちゃん！　……まあ、悠元お兄様が心配なのは否定しませんけど」
　千姫は無論香澄と泉美のことは事前に調べている。泉美が以前悠元と婚約関係にあったことも無論知っている。それが十山家の絡みで破談となったことも。それも含めて千姫は尋ねた。
　香澄は相手の格式の高さを考慮して丁寧な言葉遣いを使った。その事実に泉美が声を少し荒げるも、周囲の人たちのことを思い出して

ハッと我に返った。
「泉美ちゃんと言ったね。貴女は悠元君って人のことが好きなのかな？」
「えっと、その……はい。お父様が四葉家に変な欲を出さなければ、婚約は解消されなくて済んだのです……あのタヌキオヤジは……」
「泉美、お姉様みたいになってるから落ち着こう、ね？」
暴走しがちな香澄を泉美が窘める筈が、この時ばかりは香澄が泉美を窘める役に回っていた。なお、2人の姉である長女も最近は悠元に対してスキンシップが積極的になっており、それに比例して泉美の嫉妬具合も上がっていくという有様に香澄は内心で溜息を吐きたくなるほどだった。
本来、こういったことを窘める役割を担う彼女らの母親もとい七草家当主夫人は滅多に家にいない。それは社交的な一面を担う七草家の交渉役として全国各地を忙しなく動いているからだ。
◇　◇　◇
「ぷぷっ、あはははっ！　な、なによアレ……」
「気持ちはわからんでもねえが、あまり笑ってやらないほうがいいんじゃねえのか？」
それとは対照的に、一般の観客席にいるエリカは腹を抱えて笑っていた。これには隣に座っているレオが已む無く窘めることになった。それに対するエリカの弁解が意味を成しておらず、美月もフォローする羽目となった。
その理由は、フード付きマントを身に纏っている幹比古と同じような素材で出来たマントを身に着けている達也にあった。
「いやー、分かっちゃいるんだけどね。達也君のことだから、何かしらの策だとは思うんだけれど」
「エリカちゃんたら……凄い数の精霊が飛び交ってます」
美月は眼鏡を外してその様子を観察すると、精霊が悠元と幹比古の周囲に群がっていることに気付く。無論魔法を発動しているというわけではないのは当然のこと。幹比古のほうは身に着けているマントのお蔭だろうが、装備の補助なしでもそれ以上の精霊が群がってい

る悠元に驚きを隠せなかった。
とはいえ、精霊を認識できる人間は極めて少ない。いくら十師族の当主でもそこまでを見抜けている人間はほぼ皆無だろう。
その数少ない一人である佳奈はＣＡＤチェックが一段落したところでモニターに映る第一高校の面々を見ていた。悠元に群がる精霊を見て、感嘆に近い吐息が漏れた。
（あれだけの精霊を制御下に置いている……本当に凄いね、悠元は）
魔法を発動させているわけではなく、むしろ魔法が暴発しないように制御している形なのでルール違反に当たらない。精霊の動きを感知できる人間は現代魔法の使い手において数えられるレベルに入る。それこそ佳奈のように特異的な感知力でも持たない限り。
佳奈も天神魔法に関しては習得半ばといったところだが、それすらも越えた領域にいる弟に正直感心していた。
精霊を感知できない人間からすれば、決勝になって身に纏ってきた達也と幹比古のマントに注目してしまう。それは対戦相手である第三高校の面々にも言えたことだ。
「あれは……ジョージ、どういうことか分かるか？」
「そうだね。多分『不可視の弾丸（インビジブル・ブリット）』対策だとは思うけれど。単なるパフォーマンスのために用意したとは思えない」
チームメイトの問いかけに真紅郎はそう返した。単なるパフォーマンス程度でこの決勝に持ち込んだとは思えない。その意見には将輝も同意見だったが、もっと気になるのはそれを身に着けていない悠元であった。
（司波達也が態々動きにくいマントを身に着け、三矢悠元が何も身に着けていない……どういうことなんだ）
ともあれ、第一高校と第三高校の試合開始を告げるサイレンが草原フィールドに鳴り響く。将輝は機先を制するために特化型ＣＡＤを構えるが、それよりも早く圧縮空気の弾丸が第一高校側から飛んできた。無論、フライング判定は出されていないので将輝よりも早く魔法を発動させたということになる。
（なっ……!?）

それも、一度に複数の圧縮空気の弾丸が第三高校側に飛んでくるが、そのどれもが将輝たちを避ける形で１６発撃ち込まれた。これには第三高校のチームメイトが強気になった。
「……なんだよ、当たらなきゃ意味ないじゃないか」
「……（いや、違う……単に外しただけじゃない）」
だが、真紅郎はその空気弾が着弾した場所を見て、冷や汗を流した。何せ、その空気弾は第三高校のモノリスを中心点として四方に４発ずつ、目視で２メートルという均等な間隔で放射状に撃ち込まれた。空気弾自体は雑草を吹き飛ばして土が露出するぐらいの威力に抑えられているが、間違いなく射程内に収められているということ。
そして、そんな芸当が司波達也にできるとは思えない……それを示すかのように、第一高校のモノリスから両手に銃形状ＣＡＤを持ってゆっくりと前進する悠元の姿があった。
これには将輝も真剣な表情を浮かべて特化型ＣＡＤを構えつつ前進を開始した。
「やはり、彼が前に出ることになったか……大丈夫かね？」
「彼は魔法の引き出しが多いでしょうから、下手を打つ可能性は低いかと。加えて古式魔法にも精通していますから、達也君が前に出るより苦戦はしないでしょう」
「それは分かっているが……相手の手札を平気で潰せる彼にはさしたる問題でもないか」
そう零したのは観客席に座る山中と響子の二人。独立魔装大隊において、彼の実力は折り紙付きと言ってもいい。実家で磨かれた体術に加えて類稀なる魔法の才能を併せ持っている。元々達也が衆人環視の中で軍事機密に触れるような魔法を使わないか監視の意味も含んでの観戦だが、悠元が前に出たことでその危険性は大分減ったといっていい。
「一条君の『爆裂』はルール上使えませんが、それ未満の威力の魔法となると彼には意味が無いでしょう。何せ、例のデモ戦闘を無傷でこなして、真田さんや柳さんと手合わせをしたのですから」
「……正直な疑問だが、彼を倒せる手段はあるのかね？」

山中の発言は分からなくもない、と響子は苦笑を漏らした。独立魔装大隊で新陰流の道場を訪れることは度々あるが、上段クラスとなれば屈指の実力を持つ柳でも苦戦を余儀なくされるほどだ。その中で叩き上げられて師範クラスにいる悠元を倒せる手段があるのなら是非教授してほしいと思わなくもない。

将輝は前進しながら特化型ＣＡＤを右手に持って攻撃魔法を仕掛けるが、それが発動する前に悠元が右手に持ったＣＡＤ――『術式解体（グラム・デモリッション）』で撃ち落とし、同時に左手で持ったＣＡＤで将輝に向けて魔法を放つ。それも将輝の干渉装甲を破らない程度の威力に抑えた状態だった。

魔法の撃ち合いという光景に観客席は沸き立ち、第一高校の応援席も優勝できるのでは、という期待に満ち溢れていた。その一方、第一高校の天幕では真由美と克人、鈴音が悠元のやっていることに驚きを隠せなかった。

「ねえ、あれってＣＡＤを同時に使用しているのよね？」

「……恐らくは」

サイオン波を完全制御するという技術は現代魔法において確立していない。その為に複数のＣＡＤを使用することは高等技術の一つであり、安定的に使うのは難しいとされている。だが、モニターに映る悠元は２つのＣＡＤを同時に連続発動までこなしている。それはつまり、ＣＡＤを使用する際に発生するサイオン波を何らかの形で遮断しているということを意味する。

それを軽々とやってのけている悠元の実力は十師族の名に恥じぬものと言えよう。加えて彼が『術式解体（グラム・デモリッション）』を使ったことも驚きはしたが、アイス・ピラーズ・ブレイクの活躍に比べれば控えめだったのは言うまでもない。

そもそも、モノリス・コードのルールにおいて殺傷性Ａランク以上の魔法は使用禁止となっている。派手さがあまりないのは仕方のない話だ。

「でも、一条君に対しては攻撃が通っていないわね。悠君が力加減を間違えているとは思えないけれど……十文字君はどう思う？」

「攻撃の手数は減っていないどころか増えているところを見ると、三矢は何かを狙っている。単に一条を釘付けにしたいというわけではなさそうだ」
悠元は極力振り返ることなく、周囲に展開している将輝の魔法式を破壊していく。九校戦は魔法の可視化処理が施されているため、魔法式が砕けるという光景は一種の幻想的な光景を描き出している。それでいて将輝への魔法の威力を少しずつ、段階を踏んだ上で高めていく。将輝は表情に見せなかったものの、内心は正直焦りを感じつつあった。
（ここにきて特化型を持ってきたのが悪手になってるな……くそっ、司波を誘き寄せるつもりが三矢を引っ張り出すとは……）
悠元が動かないという確証はなかった。だが、準決勝まで彼がモノリスのディフェンスを担っていたことが将輝に対して慢心を生んでいたのは確かだった。真紅郎もあのビル崩落がなければ悠元が前面に出てくることも考えたのだろう。試合中に愚痴ることではない、と将輝は障壁魔法を展開して防御を高めた。
それでいて将輝の攻撃の手は緩めないが、発動するよりも早く悠元の『術式解体』で魔法式が砕けていく。
将輝の魔法技能は確かなものである。なので、悠元が考えた対抗策は今まで秘匿していた複数のＣＡＤの同時行使であった。正直『相転移装甲（フェイズシフト）』を使うことも考えたが、防衛大の学生や教官が見ていることを考えるとそれは控えるべきだと判断した。
この技術自体別に難しくはない。というか、その前提条件となる魔法力制御――――創作物でよく語られる魔力制御がしっかり出来ていないと難しい。現代魔法において魔法力制御はそれなりに研究が進んでいるが、どうしても発動速度ありきになる現代魔法の性質に加え、ＣＡＤという魔法発動のツールがある以上、制御自体あまり重視されていないのも事実。
確かに制御の鍛錬自体は地味な作業の積み重ねなので、速度や規模、強度を求める現代魔法とは肌が合わない。だが、これが出来ていないと天神魔法は習得できない。

古式魔法にはそういった想子制御の技術がいくつか残っているが、ハッキリとした習得法がない。あくまでも「効果がある」程度のもの。

これを、知らず知らずの内に昇華させて確立したということを悠元自身気付いていなかった。三矢家でやっていたことに加えて、上泉家にある想子制御の技法や自身の抱いていた制御イメージなどを組み合わせて昇華させた鍛練法を作り上げたが、これは今のところ悠元しかやっていない。

そこまで至った切っ掛けが金沢魔法理学研究所での魔法訓練ということから察してほしいと思う。

話を戻すが、想子制御の訓練によってサイオン波の制御が可能になったことで、干渉を起こすことなく複数のＣＡＤの同時使用も可能となった。それを平気で使うという意味を悠元自身は理解している。

（ここまでは予定通り……達也と幹比古も動いているな）

『視覚同調』で味方の動き――――達也と幹比古が真紅郎の動きを止めるために動いていた。幹比古の纏っているフード付きマントには精霊魔法が掛かりやすくなる魔法陣が編み込んであり、幻影魔法で真紅郎の『インビジブル・ブリット』が必要となる作用点の視認を封じる。ならばと真紅郎は達也に照準を向けるが、無論達也のほうにも対策はされている。

達也の纏っているローブにも魔法陣が編み込んであるが、これは達也の姿をずらす認識阻害の魔法陣である。確かに達也の魔法構築速度は二科生レベルだが、想子保有量は頭一つ以上抜けている。ならば刻印型術式のように想子を流し込むだけで発動できるほうが達也にとってはしっくり来るのだ。

加えて四葉本家と八雲仕込みの体術があり、真紅郎の『インビジブル・ブリット』の発動条件を熟知している以上は普通の魔法使いのように立ち止まる必要もない。

ここまではよかったのだが……真紅郎が二人に倒されそうになった時、将輝が仲間を助けようという気持ちが先行したのだろう。その結果、加減を考えないレギュレーションオーバーの圧縮空気の魔法を達也と幹比古に向けて放ったのだ。空中に展開している魔法式から

して数は１６発。対人魔法としての威力は洒落になってないレベルだと直ぐに察した。
「達也に幹比古！　その場を動くなよ!!」
『聴覚強化』は何も聞くだけの能力ではない。自分から発する声もその対象に含まれる。今回は拡散する自分の声に指向性を持たせて達也と幹比古にだけ聞こえるように言い放った。その上で右手に持ったＣＡＤで９個の起動式を同時読込、そして魔法式を達也と幹比古に向けて投射する。
そして、その魔法が放たれた直後に撃ち込まれた将輝の空気弾が二人に着弾したように見えた瞬間、草原フィールド全域が着弾予想地点を中心に吹き出すかのように発生した〝霧〟に包まれた。
「……いったい、何が起きたんだ……」
将輝は茫然としていた。
悠元からの攻撃に耐えつつ、真紅郎を助けようとして加減を考えずに圧縮空気弾を撃ち込んでしまった。だが、その次の瞬間には草原フィールド全域が霧に包まれていた。将輝自身、そういった魔法を使った覚えはない。試合中だというのに、先ほど自分がやってしまったことへの後悔と疑問……だが、それを知る暇は今の将輝に与えられていなかった。
次の瞬間、サイオンの波の合成と思しき激しい酔いが襲い、将輝の意識は暗転したのだった。
「……まずは一人」
倒れこんだ将輝を見やりつつ、悠元は警戒をしたまま呟く。
悠元はあの時、達也と幹比古に半球状の『ファランクス』を撃ち込んだ。ビル崩落の時にこれを使っていれば森崎と鷹輔も助かったと反省し、今回は躊躇いなく使用した。『ファランクス』に加えて悠元は天神魔法の水属性魔法で細かい水滴を発生させ、それを将輝の放った圧縮空気に乗せる形でフィールド全体の空気を急激に冷やして霧を発生させた。
それに加えて保険として認識阻害の意味で天神魔法の『八卦遁甲（はっけとんこう）』を使用している。原理自体は九島家の『仮装行列（パレード）』に似通っているが、

『八卦遁甲』は相手の行動全般を術者のいる場所とは別の座標にずらしてしまうというもの。
前者の場合は幻影を生み出すことで相手の意識をそちらに向けるものであり、後者の場合は相手を視認していてもその座標が書き換わっているという形だ。加えて敵味方の識別も出来るようになっているため、今回の場合は達也と幹比古を味方として設定している。
将輝を倒した魔法は達也が服部に向けて使った振動系・基礎単一系術式の多変数化発動による波の合成を応用した方法で強制的に気絶させた。
というか、動揺のあまり対戦相手に接近を許すというのはどうなのかと思う。いくら実戦を経験していたとしても、想定外の事態には対応しきれない甘さが出たのだろう。それを自分が言うのはどうかというツッコミは勘弁だが。
(うお、派手にやるな……で、達也は……やばっ!)
悠元が味方のほうに意識を向けた次の瞬間、雷が落ちて『視覚同調』で真紅郎が戦闘不能になったことを確認する。間違いなく幹比古の『雷童子(らいどうじ)』によるものだろう。さて、ここで残る達也はどこにいるのかといえば……その場所を確認した瞬間、悠元は反射的に『聴覚強化』を遮断して耳を塞いだ。
次の瞬間、増幅された単一系振動魔法がフィールドはおろか観客席にまで響き渡り、漂っていた霧もその振動で一気に晴れた。一体何が起きたのかと困惑している観客たちであったが、戦闘不能になっている第三高校と対照的に健在である第一高校。そして、試合終了のサイレンが鳴り響いたことで漸く第一高校が勝ったのだと察し、歓声を上げたのだった。
「――で、自分の鼓膜を破るほどに振動系魔法を増幅させた理由は?」
「お前たちが『プリンス』と『カーディナル』を倒したから……かもしれないな」
「いや、鼓膜が破れてて平然としているのはおかしくない?」
聞く限りにおいては、どうやら深雪からの励ましに兄として応えた

いような気持ちが含まれていた。加えて悠元が将輝を倒したことに対して負けたくないようなニュアンスも含まれていた。
　そんな風に話す達也とは対照的に、幹比古は鼓膜を負傷している達也を心配していた。というか、これが普通の反応だろうと思うとそんな風に反応できなくなっている自分も埒外だな、と悠元は苦笑を漏らした。
「幹比古。言いたいことは分かるが、達也はこういう風な奴だから諦めろ。ごく一般的な人間のカテゴリに当て嵌めようとする方が労力を使う羽目になる」
「悠元、お前がそれを言うのか？」
「あはは……（類は友を呼ぶ、ってやつなのかな）」
　幹比古は口にしなかったが、現代魔法と古式魔法を併用する悠元と、二科生とは思えないほどの実戦力とＣＡＤ関連の技術力を有する達也が思わず同類のように思えた。とはいえ、精霊魔法を使っている幹比古がそれを言えた義理はないのだが。

九校戦九日目①～本戦四日目～

新人戦モノリス・コードの優勝で、文句なしに第一高校が新人戦優勝となった。第一高校の代表メンバー、特に1年生も即席チームの件などで思うところはあるだろうが、とりあえず総合優勝につなげる大きな弾みとなった。

だが、そんな喜びとは裏腹に、先日達也を呼び出した同じ部屋にて、真由美と克人、そして悠元の3人が集まっていた。真由美も克人もその表情は決して宜しいものとは言えなかった。

「悠君たちが優勝してくれたことには感謝するわ。けどね……」

「何か問題が？」

「あの後、臨時で師族会議が開かれることになった。お前が悪いというよりも、威力制御を誤った一条の甘さが要因とも言えるが」

悠元が決勝で将輝との撃ち合いを選択したのは単純明快。モノリス・コードは団体戦であって個人戦ではないが、敢えて悪目立ちに近いパフォーマンスで、相手を引き付けるのも立派な戦術。

アイス・ピラーズ・ブレイクのような短期決戦ではなく、魔法の撃ち合いによる砲撃の持久戦もこなせるという力の誇示。これには克人と真由美も理解して納得した。試合開始直後に放った圧縮空気弾はその挑発みたいなもの。これも力を制御しきっているという見せ方であり、見事効果覿面だった。

決勝戦の後、克人は十文字家当主代行として急遽開かれることになった臨時の師族会議に参加した。そのことを真由美が知っているのは、真由美の父親もとい七草家現当主からの暗号メールに他ならない。三矢家では従来よりも遥かに高度化した暗号メールを使用しているため、その辺の事情は言わずとも理解できた。

「加えて、悠君がピラーズ・ブレイクで、古式魔法と現代魔法の複合術式を披露したでしょ？　それが九島家現当主の琴線に触れたようなのよ」

「教える気は更々ありませんよ。下手すれば修得している古式魔法の秘密にも触れかねないのですから」

教えるにしても相手との信頼関係が大前提。その意味で九島家とはあまり良い関係とは言えないかもしれない。何せ、試しとはいえ先代当主から殺気を向けられたことを、良いことだと開き直れるほうが凄いと言わざるを得ない。

同年代である烈の孫とは交友関係を持つが、現当主に対してあまりいい印象は抱いていない。古式魔法に関わるということは、その辺の柵にも配慮せねばならないという面倒さが付きまとう。その点で言えば神楽坂家と上泉家は、九島家ほどの諍いを持っていない。

悠元の言葉は既定路線だったようで、これには克人も静かに頷いた。

「それは無論承知している。三矢には本当に感謝している立場だ」

「で、自分がこれ以上何かをやれというのはおかしいですから……会頭がその役割を負う羽目になったというところですか？」

「その通りだ。で、三矢を呼んだのはもう一つ理由がある。お前が今後どのような立場に立つのか、ということだ」

克人が出場する本戦モノリス・コード。少なくとも決勝トーナメントに行くことは確定事項に近く、その場において十師族たる力を見せろという流れになった。新人戦モノリス・コードの決着自体があっけない幕切れになってしまったのがその要因だが、これに関しては、アイス・ピラーズ・ブレイクよりも魔法のレギュレーションが厳しく制限されている範囲内だと、魔法の派手さは落ちてしまうのも無理はない。

「父には尋ねなかったのですか？」

「無論問いかけはしている。その時に返ってきた答えは『三矢の家督を継ぐ立場ではないため、息子には自分で決めるよう言い含めている』だけだった」

加えて、臨時の師族会議の中で、克人は今年の春に悠元と克人が対戦した非公開の試合のことを弘一に尋ねられ、隠せることでもないと判断して正直に話した。それを聞いた他の十師族の当主の面々は、驚きを隠せなかった。同年代の十師族において、現状トップに等しい実力を備えている状況となったからだ。

違う反応を見せたのは、平然としている三矢家当主、笑みを浮かべた四葉家当主、やはりといった感じで納得していた七草家当主だったと克人は述べた。これには真由美が頭を抱えた。彼女もその試合の目撃者だが、父親の狡猾さを考慮して隠していたようだ。
「あのタヌキオヤジ……そんなことを十師族の当主たちが聞いたら、間違いなく悠君を囲い込もうと各々画策するに決まってるじゃない。三矢殿に喧嘩でも吹っかけるつもりにしか聞こえないわ。どうして十文字君は試合のことを話したの？」
「拒否できる状況ではなかったからな。只でさえ一条を下した三矢が、俺とどれぐらいの実力差があるのかと……加えて三矢、お前の姉である佳奈殿の試合のことも、七草殿は掴んでいたようだ」
「はあ、悠君に養ってもらいたい」
「寝言は寝てから言ってください」
つまり佳奈との試合のことを持ち出された以上は、そこで発言を拒否することもできないと判断したのだろう。元がそれに対して諌めたり止めようとしなかったのは、話しても問題ないと判断したまでのこと。なお、その辺の展開については、元からの暗号メールですべて知らされている。
「正直に言わせてもらえば、そんな下らない三文芝居に力を使うほうが無駄です。３年前の沖縄や、佐渡の一件を軽んじてるとしか思えないですよ。そんなことを続けてたら、船頭多くして船山に登るどころか船諸共海底に沈みかねないです。そんな見え見えの泥船に乗る気なんてありません」
自身が関わったことは伏せたが、どの道七草家あたりはその可能性に気付いていると考えていい。国防軍は特殊な状況を除いて、１７歳以下の魔法師の軍事行動参加を認めていない。悠元と達也が別の名で軍人として登録されているのは、その辺の事情も含んでいる。未成年の軍事行動参加は他の国でもやっていることなので、別段おかしいというわけではない。
このことを把握しているのは、推測も含めれば三矢、四葉、七草あたりだろう。九島家については、剛三から沖縄のことについて「烈な

ら言わんでも勘付くから言っておらん」という答えが返ってきた。
　先代当主に思うところはなくとも、今代に関しては快く思っていない一面が出た形だ。そうでなくとも、係累の藤林家――――響子が独立魔装大隊に所属しているため、そこから聞き及んでいたとしても不思議ではないと判断した。
「問いかけの答えですが、自分から進んで面倒事は御免です。されど、相手の一方的な論理で邪魔されることを許すつもりもない。それが今の自分に言える範囲内での答えです」
「……そのことを元殿はご存知か？」
「ええ。父は苦笑を浮かべていましたが、理解してもらえました」
　自分は三矢家の三男なので、このまま家内でどう足掻いても予備扱いでしかない。それに上泉家と神楽坂家のことも聞き及んでいる。この九校戦後に、恐らく自身の立ち位置も大きく変化することになるのだろう。そうでなければ、自分の婚姻を「護人」の家ぐるみで面倒を見ることにはならない。
　今の発言には「場合によっては十師族の立場も捨てる」とは言わなかったが、ある意味含みを持たせるような発言に聞こえたようで、克人と真由美は揃って渋い表情を浮かべた。
　相手自体の明言は避けたが、これは別に他の師族や百家などの魔法使いだけを指して言ったわけではない。この中には諸外国――――大亜連合、新ソ連、旧ＥＵ諸国、そしてＵＳＮＡも含んでいる。個人的にＵＳＮＡの現大統領と知り合っていても、それはそれというだけの話だ。第二次大戦のように、向こうの勝手な言い分でこちらが損害を受けることに、黙っていられるほどお人よしと呼べる時期はとうに過ぎたのだから。
　これでも自分の魔法力は戦略級クラスだと自覚はしている。この前、新しい戦略級魔法を組もうとしたら、ＣＡＤなしで展開完了速度が２００ｍｓを切った……ＦＡＥ理論とかそういったものに平気で喧嘩を売っているかもしれないと思い、一人落ち込んだことは記憶に新しい。終了条件を展開後１０ｍｓ、威力変数をゼロに設定していたので、展開はしても周囲に被害は及ぼしてない……この技術は以前

使った『流星雪景色（ミーティア・スノーライト）』で確立したものを流用している。
　その時に協力して貰っていた八雲からは「達也君を一発の大陸間弾道ミサイルに例えるなら、君はひとつの恒星レベルだね」と言われてしまった。納得いかねえ。
「はぁ、何だか悠君に一歩先を越されたような気分がするのだけれど」
「会長は仕方ないかと思いますけれど」
「……」
「ちょっと、どういう意味!?　って、十文字君も妙に納得したような表情をしないでよ!!」
　別に貶すつもりはないのだが、容姿に加えて父親に反抗したい年頃の娘の心情も相まって、年齢よりも幼く見えることがある真由美に対して放った悠元の一言に、克人は瞼を閉じて腕を組みつつ黙った。これを肯定の意と受け取った真由美が、声を荒げて反論するということになったのだった。
　切っ掛けは将輝が原因なのに、自分がその被害を受けるのは遺憾としか言いようがない、とまでは言わなかった悠元だった。
◇　◇　◇
　新人戦優勝パーティーは達也の耳の負傷のこともあって、総合順位の結果が出るまでお預けとなった。
　九校戦も今日を含めて残り2日。本戦ミラージ・バットの結果次第では総合優勝が決まるかもしれないという大一番のため、ほかのメンバーも手伝いに回ることとなった。達也がこれを幸いと見たのかどうかは不明だが……悠元は深い溜息を吐いた。
「で、何でこうなるんだかなぁ……」
「諦めろ」
「真顔で言うなよ……まあ、真顔になる意味は理解してるけどさ」
　スピード・シューティングの時とは異なり、悠元は深雪が使うことになる〝とっておき〟のほうの調整をやらされる羽目になった。達也曰く「重力制御術式自体の調整はそれを使いこなしている人間がいいだろう」ということだ。なので、達也は深雪の予選用のＣＡＤ調整をしている。

隠すほどではないが、その隠し玉は無論飛行魔法である。
「軽い冗談だけれど、少しは休ませてほしいわ」
「それも今日が終われば楽になると思うがな」
原作だと本戦ミラージ・バットは妖精をイメージしたコスチュームなのだが、ここでも変化が生じている。何というか、具体的にはフィギュアスケートに出場でもするかのような衣装に近い。無論全ての選手がそうではなく、従来通りに妖精のようなコスチュームで挑む選手もいたりする。
ＣＡＤのレギュレーションチェックは魔法大学と防衛大学校の学生で担当することとなり、それに反発した委員もいたが、烈の言葉で全員沈黙を余儀なくされた。その委員はこぞって「無頭龍」の息が掛かった者らだった……その当該組織はすでに壊滅したが。
その情報提供の一環ということで、遥を含めた公安の捜査官にも動いてもらった。「無頭龍」と繋がりのある組織や企業、個人などを虱潰しに炙り出すというもので、ここには意図的に中華街の面々は除外されている。
話を戻すが、深雪の場合は予選ということで、赤を基調としたコスチュームを纏っている。彼女自身の魅力も相まって、観客席にいる他校の男子の視線は釘付けであった。
今回は新人戦から急遽変更ということで、衣装の面で不安はあった(最悪妖精のコスチュームでも問題はなかった)が、その辺は達也というか、正確には深夜が一肌脱いだそうだ。そこにどんな意図を含ませているのかは分からない、と呟いた達也の意見に思わず肯定してしまった。
第１試合に出場した小早川は、想定以上の動きを見せて予選通過。原作では途中で落下事故が起きていたので、それがなくなった変化がどうなるかは今後次第といったところである。
続いての第２試合。深雪が出場する組には第三高校の水尾佐保がいる。
原作ならばともかく、今の深雪は新陰流の体術を習っている。類稀なる想子保有量とそれを支える強靭でしなやかな肉体。他選手の妨

害も何のその、といった感じで着実に得点を重ねている。これには達也も妹の成長を喜んでいるような表情が見られた。
「そんなに嬉しいか？」
「まあな。ここまで効果覿面なら俺も学びたいと思うが……」
「あのエロ坊主か」
「……ああ」
　達也に八雲を紹介したのは風間。彼とて体術だけを目的として紹介したわけではないことは無論知っているし、悠元も時折魔法の練習の一環で九重寺を訪れている。
　新陰流剣武術の総本山がある箕輪山の麓には天台宗系列の寺があり、そこの住職（厳密には〝忍術使い〟）が八雲と同じ師を持つ兄弟弟子の間柄に当たる。なので、剛三と八雲が知り合っていてもおかしくはないし、剛三自身も八雲に稽古をつけたことがあると答えた。
　なお、そこの住職も八雲のことを「世俗に沈んだ生臭坊主」と断言するほどに、彼の気質は筋金入りであった。魔法使いに普通とか一般常識という概念を求めるほうが間違いかもしれないが。
　そんな事情はおいといて、第二ピリオドが終了。ここまでの点数差を考えれば、このまま深雪が無理をせずとも決勝進出は堅いだろう。だが、それに追い縋る形で三高の選手も得点を伸ばしている。十分に逆転は狙えるという形だ。
　この状況に甘えるという選択肢は深雪に存在しない。なればこそ、と深雪は達也に提案をした。
「お兄様、〝アレ〟を使わせてください」
「ああ、分かった。頑張ってくるといい」
　本来決勝戦用にと温存していたもの。悠元はその判断を達也に委ねた。彼の気質からすれば妹のコンディションを考えた上で判断する……言い方を悪く言えばシスコンになってしまうが。
　深雪の想子保有量からして、ここで使用したとしても決勝戦に大きな影響は及ぼさない。一番影響が及ぶのは深雪以外の選手やエンジニアといった面々だろう。最終ピリオドが始まり、一斉に跳んでいく選手の中で一人空中に浮かぶ深雪。

常駐型重力制御術式――――『飛行魔法』の初お披露目である。
「あれって、まさか飛行魔法…!?」
「先月トーラス・シルバーが発表したばかりの術式じゃないか！」
「それをこの九校戦で……」
観客席にいる面々が完全に面食らっている状況。他の選手たちも何とか追い縋ろうとするが、光のエフェクトに対する相対距離で言えば、深雪に圧倒的なアドバンテージがある。例えて言うなら、徒競走の中で1人だけ馬術をやるようなものだ。
それに、焦りは集中力を欠く要因となって想子制御も甘くなる。というか、ＣＡＤありきで魔法を使うという手段は便利だが、「弘法筆を選ばず」という諺のようにいかないのか、と思わなくもない。
（……早めに手を打っておく必要はあるかもしれないな）
そんなことを考える悠元を他所に、深雪は飛行魔法で着実にポイントを重ね、最終ピリオドを終えて深雪が大差をつける形で決勝進出を果たした。

九校戦九日目②

深雪の試合後、彼女がシャワーを浴びている間にあったことと言えば、大会委員が飛行魔法のことについて達也を問い詰めるような様相が見られたことだ。だが、達也としてもこの動きは想定内だったようで、大会委員にＣＡＤを預ける形となった。

そして、悠元はというと自室で端末の画面と睨めっこしていた。画面に映るのは九校戦で使用するものではなく、その先を見据えた魔法の起動式。この端末自体はオフラインにしているため、情報漏洩の危険性は極めて少ない。

すると、脱衣所の扉が開いて深雪が姿を見せた。髪を乾かしていないのは態となのか……そう思った悠元は魔法を発動させて深雪の髪を瞬時に乾かした。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

異性を自室に入れるというのは流石に拙いと理解しているが、メインエンジニアを担当している達也から深雪のサポートを頼まれた以上は断れない。多分達也としては妹に対する甘さがもろに出た形なのだろうが、多分目の前にいる本人も片棒を担いでいるのだろう。

すると、本人はキョトンとした表情で首を傾げていた。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない。決勝戦のこともあるし休んでおけよ。その辺は達也からも言われてるとは思うが……何かしてほしいことはあるか？」

すると、深雪は何か言いたそうな表情をしていた。あまりぶっ飛んだ内容でなければ受け入れるつもりだったので、問いかけてみた。

「その、寝るときに手を繋いでくれませんか？」

「その程度なら構わないよ。流石に子守唄は歌えないけど」

「ふふ、そこまでは求めませんよ」

音楽関連は、科学や魔法的なことを除けば一般常識程度の知識しか持ち合わせていない。それは主に『聴覚強化』のせいで音楽ですら雑

音を増幅させる要因になってしまっていたのが大きい。
その辺の事情を察したのか、深雪は笑みを漏らしていた。一緒に寝てくれと言われたらどうしようかと思ったが、そこら辺を自重する理性は確かにあるようだ。
昼食を済ませて約束通り深雪が眠るまで手を繋いでいたが、彼女が完全に寝たことを確認したところで繋いでいた手を離してベッドの上に置き、悠元は再び端末と向き合った。
この世界の魔法は超能力に無い汎用性を謳っている。とりわけ現代魔法はそう言われているが、多様性で言うなら一番使えている知り合いは幹比古だろう。
特殊すぎる達也と深雪はともかく、それ以外の面々も魔法に関しては素人レベルと言っていい。まあ、教育システムにも問題があることなので深くは言えないことだが。
そもそもの前提として、超能力を魔法として体系化した折、最優先とされたのは核兵器への抑止力であり、それ以外の技術はそれほど重要視されなかった。あれこれ研究するよりも特化して核の脅威を取り除く……その傾向が後世の現代魔法研究や教育に影響してしまった形だ。
魔法を軍事力として使用することを考えたのは当時のＵＳＮＡの前身である合衆国が発端だ。彼らは他国の核を封じることで自国の核兵器を自在に使えるように画策した……世界の警察を自負していた国が考えていい思想ではない。というか野蛮の一言に尽きる。
軍事面の話はともかく、情報によれば大亜連合方面からの亡命者は後を絶たない。その裏で暗躍している奴は判明しているが、今は手を出すつもりなど無い。下手に罰するよりも動きを知らせる〝鈴〟を付けておいて監視したほうがマシだ。
別に彼本人に対してではない。いくら彼が姿を消しても彼がどういった経路を辿ったのかという情報は嘘を付けない。その感知方法は天神魔法絡みなので明るみに出せないが。
（……思い切って踏み切るのが一番だろうな。中途半端が一番危険だ）

これまでといえば身内絡みの強化が多かった。しかし、これから起こることを考えると周囲の知り合いの強化に踏み切ったほうがいいと判断した。その中には原作主人公である達也の強化も含まれている。

彼の場合、原作だと『誓約』は1つだけだった。だが、この世界の彼は3つの『誓約』を抱えている状態。そのうちの1つが深雪なのは間違いないが、残り2つは不明というほかない。解除自体は簡単だが、ここでリスクを冒す理由もない……悠元が達也に対して『領域強化(リインフォース)』を使わない理由がそれだ。

制約が掛けられているのは彼の『分解』『再成』の魔法強度制限と魔法力制限、それと想子保有量のリミッターの3つ。対象外なのは彼の仮想魔法演算領域ぐらいだろう。こんなことを正確に認識できるのは世界広しといえども悠元だけしかいない。

流石の達也でも魔法演算領域というブラックボックスに触れられないという事実もあるのだが。

すると、その噂をした本人が部屋に入ってきた。達也は深雪がグッスリ眠っているのを見て笑みを浮かべていた。

「達也、デバイスは戻ってきたのか?」

「ああ。まあ、飛行魔法が他校に知れ渡っている可能性は高いが」

「何も言わないのなら別にいいが、ルール違反行為を大会委員がやっちゃダメだろうに……閣下が何も言わないところをみるに、脅しの材料にしそうだな」

『トーラス・シルバー』が先日発表したばかりの重力制御術式。本来跳躍と着地を繰り返すのが一般的なミラージ・バットの戦術を大きく変えてしまうもの。

魔法は秘匿性を考えられている以上、飛行魔法を他校が使用した時点でルール違反を大会運営が率先してやったようなものだ。というか、何も言わなかった達也が他の選手を実験台にするのは目に見えていた。

その魂胆を見抜いた悠元は溜息を吐いた。

「お前も存外鬼というか……ただ、一人だけはトーラス・シルバーの飛

行魔法を使わないだろうな」
「心当たりがいるのか？」
「いるというか、恐らくそうではないかと思しき人物はいる……やっぱりか」
深雪が寝ているので、スクリーン型の情報端末でその映像だけを出すと、丁度予選の第４試合のハイライトが表示されていた。
予選通過者は第七高校の伊勢姫梨で、彼女は序盤から飛行術式を使用して他の選手を圧倒していた。得点ペースで言うなら飛行魔法を使う深雪と遜色ないレベルと言えるだろう。これには達也も感心したような表情を見せていた。
「これは見たことのない古式魔法だが……悠元は知っているのか？」
「天神魔法に浮遊や飛行といった術式は存在する。想子消費の視点で言うなら飛行魔法と同等クラスだ」
古式魔法には自在に飛行する術式が存在しているが、やはり術者を限定してしまう。仮にトーラス・シルバーの飛行魔法でも最後にモノを言うのは想子保有量の多さ。
そうなると、決勝戦は深雪と姫梨の一騎打ちになると踏んでいる。
そして、ミラージ・バット決勝戦を迎える。
気力十分といった感じで達也の励ましを受けている白を基調としたユニフォームを着ている深雪だが、ここでふと彼女は悠元に視線を送り、何か言いたそうな表情を見せていた。なので、悠元は深雪にエールを送った。
「深雪、勝敗は気にせずに思いっきり舞ってくるといい」
「……はい！」
満面の笑顔でスタート位置に向かう深雪を見て、励ましとしては上出来だろうなと思っていると、背後から不満げそうな視線が向けられていた。悠元がその視線を辿る様に振り向くと、頬を膨らましてご機嫌ななめの真由美がいた。その隣にいるあずさは苦笑を浮かべていた。
「ちょっと悠君！　深雪さんに甘すぎでしょう！　何で普通に応援しちゃうのよ！」

「えー……俺の隣にいる深雪の兄よりは厳しいつもりですけれど」
「悠元。それだと俺の対応は砂糖よりも甘いことになるんだが？」
「あ、あはは……」
そんな会話を繰り広げた後、決勝戦は開始された。
第1ピリオド開始とともに六人の選手は空中に浮かび、観客は大いに沸いている。予想通り飛行魔法を取り入れてきた形で、九校戦のレベルの高さを窺わせるものだった。だが、悲しい現実を言うならば予選で使った飛行魔法は何も弄っていないもので、決勝で深雪が使用しているのは彼女の特性に最適化させた飛行魔法。
それに、飛行魔法で飛べることと使いこなすことは違う。得点をみると、深雪と姫梨がお互いに競っているような状況。これには真由美も驚きを隠せなかった。あれだけの技量を持つ選手が深雪と同じ1年にいるという事実にだ。その反面、想子が続かずに脱落する選手たち。その点も「安全装置」となる自動降下が正常に働き、落下事故は未然に防げている。
「ちょっとホッとしたけど……勝ちを優先するなんて普通じゃないわ」
「負けたままというのは癪に障るのでしょう」
小早川も飛行魔法を使用することを選択したが、なんとか食らいついたものの最後は想子切れで脱落。それでも4位は上出来ともいえる結果ではないだろうか。残るは深雪、姫梨、愛梨の三人。すると、愛梨が跳躍と飛行魔法の連続使用で何とか1ポイントを取った。すると、ここで第2ピリオドが終了してインターバルに入る。
得点差で言えば深雪がややリードし、姫梨、愛梨と続いている。一瞬たりとも気が抜けない上、愛梨がポイントを取ったことで深雪の負けず嫌いに火を付けた。
そして、それは姫梨もであった。
「どうする、姫梨。ペースとしては問題ないけれど、司波選手相手にいける？」
「……ええ。私だって負けたくないですから」
迎えた最終ピリオド。先程よりも速いスピードで得点しようとす

る愛梨。だが、それよりもさらに速く到達する深雪と姫梨。この決勝戦は最早深雪と姫梨の一騎打ちに近い様相であった。トーラス・シルバーの飛行術式を駆使する深雪と、天神魔法を使って互角の戦いをしている姫梨……古式魔法と現代魔法の対決と言っても過言ではないだろう。

（まるで、空中のフィギュアスケートだな……）

二人のポイント差は数ポイント差。だが、人々はそれよりも空中を優雅に踊っているような二人の雄姿に見惚れていた。魔法を兵器ではなく人々に魅せるものとして……飛行魔法のお披露目としては、上出来というほかない。

最終ピリオドの終了を知らせるブザーが鳴り響き、深雪と姫梨、愛梨はフィールドのポールに降り立った。

最終結果は1位が深雪、2位が姫梨、3位が愛梨。この結果によって、第一高校の総合優勝は確定する形となった。

◇　◇　◇

原作ならば『無頭竜』の排除に達也が関わるのだが、既に排除された以上は達也にこれ以上の負担は掛からない。その分の負担を悠元が背負う羽目となっているわけだが。

ミラージ・バット決勝戦終了後、悠元は風間に呼び出されていた。先日の時とは異なり、風間は軍服を身に纏っていた（悠元は無論第一高校の制服だが）。

「九島閣下と会われていたのですか」

「正確には閣下が訪ねてきた。達也のこともそうだが、悠元のことにも触れてきてな。流石に四葉殿に聞かれていいようなものでもないため、君を呼ぶのがいいと思った」

風間は「忍術使い」と分類される古式魔法の使い手であり、一個人として現代魔法の象徴である十師族を快く思っていない。とはいえ、それを一部隊の隊長として部下に押し付けるわけにもいかない。そんなことをすれば、二人の戦略級魔法師を失いかねないからだ。

悠元に話そうと決めたのは、彼は独立魔装大隊の特尉である以前に国防軍特務少佐の地位にいる。特務兵と常備兵という違いはあれど、

同じ地位であることに変わりない。
「少佐の十師族嫌いは筋金入りですからね。とはいえ、俺や達也にそれを言われても困るだけですが」
「無論分かってはいる。私とて君らに喧嘩を売りたくはないのが本音だ。閣下は、どうやら四葉の弱体化を睨んで達也を四葉から引き離したいようだ」
「……無理だと思いますよ。まさか、九島閣下は四葉の内部分裂工作でもするつもりですか？」
　原作とは異なり、達也の母親である深夜が健在の上、深夜と真夜の仲は修復している。この状態で達也の存在を四葉家から引き離すのは極めて難しいといえよう。仮にそんなことをするつもりなら、こちらから九島家に情報面での内部工作を本気で仕掛ける。正直に言って内憂外患の言葉がピッタリ当てはまるようなものだ。
　戦略級魔法師という存在は確かに脅威だろうが、同じように自分たちは兵器だと強いてきた人間の言葉とはとても思えなかった。その辺を察しつつも風間は呟く。
「そこまでは仰っていなかった。閣下は兵器としてこのまま突き進めば、四葉が爪弾きにされることを恐れているのだ」
「現状、当主の真夜殿に隠居同然の深夜殿、そこに深雪と達也が加われば師族の中で一気に突き抜けますからね……止めなかった側にも責任があるとは思いますけれど、四葉家は大分落ち着いたので懸念されるような事態は今後次第で回避可能かと」
「そうだな……その意味で悠元の功績は大きいだろう。その意味で、悠元もそのバランスを崩しかねない要因となってしまった……分かるか？」
　そのあたりの自覚はしていた。というか、させられる羽目となった。
　この分だと風間は剛三から聞いていない話だろうと、悠元は自身の置かれた状況を話す。
「まあ自覚はしています。何せ、自分の婚姻は爺さんの上泉家、それに神楽坂家が中心となって進めています。父がその辺を了承している

ところをみると、近い将来自分は十師族の枠から外れることになるでしょう。流石に血縁関係までは排除できないでしょうが」
「……そこまでのことになっているのか。いやはや、悠元の規格外ぶりには驚かされるな」
風間はれっきとした古式魔法師なので、悠元が出した家の名に風間は深く溜息を吐いた。どちらも陰陽道系古式魔法の大家であり、文字通り十師族の上に立つ存在。その家が十師族である悠元を見出した……つまり、十師族に彼の将来は任せられないということを意味しているに等しい。
「それと、爺さんは神楽坂家現当主に対して俺を神楽坂家次期当主に推薦しました。向こうの当主の様子からして、俺が次期当主としてスライドすることは既定路線と言ってもいいかもしれません……現状では向こうの家から正式の通達がないので推測でしかないですが」
「そうか……このことは胸の内にしまっておこう」
悠元は、自分が三矢、上泉、そして神楽坂の血縁者ということは言わなかったが、その辺りを風間は察しつつも今話したことは胸の内にしまっておくと明言し、悠元はそれに頷いて同意した。
自分の祖父に限って今更嘘を吐いているとは思えないが、確定でない以上は断言できないからだ。
そして、風間は悠元にとある質問を投げかけた。
「そういえば、先日師匠に偶然会った。聞けば、新たな戦略級魔法を練習しているそうだが？」
「あの人は……ええ、正解です。正確には超遠距離砲撃魔法を戦略級クラスに仕上げるために九重先生の協力を仰いだだけですが」
悠元は現状『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』という強力な戦略級魔法を有している。2つ目の戦略級魔法を求める理由が風間にとって疑問であった……これに対して悠元が答えた。
「元々は魔法の民生利用を目的に考えていたのですが、それなら軍事レベルのものを一旦作り上げてから民生レベルに落とし込むのが手っ取り早いと考えた結果として生まれた副産物です」
戦略級魔法を「副産物」と言い張ってしまう悠元の規格外さに風間

は正直降参に近かった。少なくとも敵対はしないように心を決めたほうが良いと今の風間にはそう判断することしかできなかった。

九校戦最終日（※）

九校戦も残り1日。とはいえ、消化試合というわけではなく終わるまでは九校戦ということで観客席は盛り上がっていた。本戦モノリス・コードには克人、服部、辰巳が出場している。奇しくも達也と悠元からすれば顔見知りの面々ばかりだ。

「特に危なげなくといったところか。エリカは不満そうだな？」

「ある意味消化試合的な部分があるだけにね……」

確かに第一高校の総合優勝は決まったが、最後まで疎かにするわけにはいかない。ましてや十師族の1人である克人が出ている以上、狙うは本戦モノリス・コードも優勝しての総合優勝。決勝リーグ準決勝は奇しくも新人戦と同じ第一高校と第九高校の対戦だが、服部の奇襲力と辰巳の安定力、そして克人の鉄壁さで難なく勝利を収めていた。

その強さの噂を知っているからこそ、エリカは悠元の問いかけに対して不満げに答えた。すると、悠元はここで1つの提案をした。

「なあ、エリカ。それにここにいる面子に相談なんだが……明日以降予定は空いてるか？」

「何？　何かあるの？」

「まあ、ちょっとな。決して悪い話じゃない……というか、予定を空けられていることになるけど」

昨晩、悠元の部屋に一通の手紙が届けられた。

その中身は神楽坂家への正式な招待であり、手紙の中には達也や深雪だけでなく、雫、ほのか、レオ、幹比古、エリカ、美月まで招待すると含まれていた。恐らくこの招待のために各家に打診して予定を無理矢理空けた可能性がある。

なお、燈也は現3年の面々に連れられるというか亜実の誘いで国内旅行するらしい。帰ってきたら大人の階段を上っていそうな気がするが。

「そういや、俺のところにそんな手紙が来ていたな」

「って、アンタに届くなんて凄いこともあるわね。ま、うちにも来ていたってことはあの親父の承諾もあるんでしょうけど」

「はぁ……僕のところにも来ていたよ。多分父は承知済みだね」
「私のところにも来ていました。両親の承諾も得ていると書いてありました」
レオ、エリカ、幹比古、美月の二科生組は言わずもがな、雫とほのかも日程的に問題はないと返した。残るは達也と深雪なのだが、彼らは事情が事情なだけに色々複雑だった。決勝までの空き時間を利用して達也の部屋に移動して、達也と深雪、悠元の三人だけで話すことになった。
遮音フィールドを展開した上で達也が口火を切った。
「実は昨晩叔母上に呼び出された。神楽坂家への招待のことを話すと、是非受けるようにと言われてしまった。どうやら四葉のスポンサー絡みもあるような言い方をしていた」
「そうだったのですか。お兄様、ＦＬＴのほうは大丈夫なのでしょうか？」
「問題はない。その辺は悠元がきちんと仕事してくれたからな」
「大した仕事はしてないけどな」
今月下旬に行われるＦＬＴの製品展示会で飛行魔法のデバイスをお披露目する予定で、その準備は抜かりなく進めている。情報漏洩を考慮して達也にも『五芒星（ペンタゴン）』で司波家とＦＬＴにある達也の端末と接続済みだ。『ペンタゴン』にはセキュリティウォール的な役割も備えており、その発動プロセスはブラックボックス化している。
「てか、モノリス・コードが終わったら終わったで面倒事が多いな」
「面倒事ですか？」
「お偉方との挨拶なんて、出来れば回避したくはあるんだけどね……その意味じゃ達也と深雪も他人事じゃないからな」
技術面では達也が、実力だけでなくビジュアル面でも目立つ深雪という存在を無視するのは難しい。かく言う悠元も十師族に加えて出場２種目優勝という快挙を成し遂げている。なので話しかけてくる面々が多くなる可能性が一番高いというわけだ。
「ま、プロダクション方面は予め排除させるように爺さん経由で頼んだ。市原先輩に深雪の補佐を頼み込んでるから、大事にはならんと思

う」
「悠元さんが補佐についてくれないのですか？」
「軍人や政治家の面々にお前らを接触させたら拙いでしょ……その点、俺の実家は国防軍とのパイプがあるから変なことにはならないだろう」
　それは確かに、と達也は納得した。
　非公式とはいえ国防軍に所属している達也が必要以上に接触するのは好ましくない。繋がりから自身の『質量爆散（マテリアル・バースト）』を悪用する危険性があるだけに、そこらへんの対応を悠元が担うのは道理である。
「その辺は『殲滅の奇術師（ターニア）』の面目躍如だな」
「……達也。からかってるだろ、それは？」
「ふふっ……」
　本戦モノリス・コード決勝は第一高校と第三高校の対決だが、克人がたった一人で『ファランクス』を駆使して圧倒した。しかも、攻撃手段として用いるはずの『攻撃型ファランクス』を一切使わずしての勝利。
　その振る舞いには、まるで達也に対しての挑発も見え隠れさせていた。
　第一高校が総合優勝を果たし、前人未到の三連覇を達成。そして、ここから来年に向けて四連覇を果たすための道のりの始まりともいえる。
「……はぁ」
　九校戦の全日程を終えて、一種の解放感というか高揚状態にある生徒が多い中、悠元のテンションはこれ以上ないほどに下がっていた。別に深雪と約束していたダンスが嫌というわけでも後夜祭合同パーティー自体が嫌というわけではない。
　すると、そこに1人の女性が姿を見せた。一瞬第三高校の一色愛梨と思ったが、髪型は似ていてもより麗しい印象を受けた人物は悠元の姿を見て柔らかい笑みを零した。
「お久しぶりですね、三矢君。大分お疲れのようですね」
「どうも、お久しぶりです愛佳（まなか）さん。ここまでひっきりなしに話しか

けられると億劫にもなりたくなります……すみません、師族の方にとるべき態度ではありませんでしたね。お許しください」
「いえ、気にしないで下さい。娘が色々と迷惑を掛けたようでごめんなさいね」
一色家当主夫人である一色愛佳。彼女は悠元の謝罪をやんわりと受け止めつつ、愛梨のことについて謝罪の言葉を述べた。それはバレンタインの一件が主原因といえるだろう。
「そのことは本人から聞きましたので問題ありません。なので、お気持ちだけ受け取っておきます」
「それにしても、凄い人気ぶりですね。政治家に国防軍の方々、他校の女子……あらあら、あの子まで拗ねていますね」
「一体何をどう勘違いしたら睨まれるのか理解できないんですが……」
悠元が愛佳と話している間、愛梨がそれに気付いて睨むような視線を向けていた。相手は子持ちの既婚者なのに、口説くような度胸など持ち合わせていない。
愛佳に話しかけられるまでに、九校戦の関係者がひっきりなしだった。中にはスカウトを仄めかす様な挨拶もあったが、「寝言は寝て言え」という気持ちをかなり遠回し的な言い方で返しておいた。外国のCADメーカーの関係者にも話しかけられたが挨拶に止めた。
「って、もうこんな時間なのね。愛梨のこと、出来れば宜しくしてあげてほしいの」
「可能な範囲であれば良い付き合いをしたいとは思っております」
そこにどこまでの含みを持たせているかは分からないが、話もそこそこに愛佳はその場を去った。すると会場内に音楽が流れ始めて、ホールの中央では他校との交流も兼ねるようなダンスパーティーへと様変わりしていた。
どのみち深雪と踊るのは確定だし、少し休んでおこうかと移動しようとしたところで声を掛けられた。悠元がその声のほうを振り向くと、先日会った姫梨がそこにいた。
「悠元さん」

「ん？　って、伊勢さんか。ミラージ・バット準優勝おめでとう。正直凄いと感心させられたよ」
「あ、ありがとうございます。えと、その……」
「姫梨、そこで押し倒すぐらいに言っちゃえってあいたっ!?」
「発言を自重しろ、阿呆」
「……」
　姫梨の背後には背中を押すどころか突き飛ばすといわんばかりの由夢の言葉が放たれた瞬間、由夢の傍にいた修司の拳骨が彼女の脳天に炸裂した。それを聞いた姫梨は緊張しているのか、顔を赤くしてアタフタしていた。
　そんな茶番を面白いと思いつつも、助け舟を出すように悠元が姫梨に対して右手を差し出した。
「伊勢さん。よければ一緒に踊りませんか？」
「……はい！　よろしくお願いします」
　そうして姫梨と踊ることになったわけだが、悠元は突き刺さるような視線を感じる羽目となった。どうしてかというと、二人が踊っている場所から少し離れたところに深雪が将輝と踊っているからだ。
　深雪は笑顔なのだが、明らかにその視線だけで誰かを殺せるんじゃないかと思えるほどの鋭さを感じていた。肝心の将輝はというと、そんな深雪の様子に気付くことなく夢心地のような様相だった。
　次会ったときは「脳内お花畑王子（クリムゾン・プリンス）」とでも呼んでやろうか、と思わなくもなかった。
　で、その後は真由美と雫、愛梨や沓子とも踊ることになったのだが……真由美の場合は独特のセンスのせいで逆に目立ってしまった。その反面、三人は実家でダンスの作法も習っていたので、すんなり息を合わせることができた。特に雫は「折角ならドレスで踊りたかったかな」と零すほどに満足していたので何よりだ。
　流石に踊り続けるのも大変なので休憩を入れていたところ、達也が会場に戻ってきた。雫と踊っていた時に達也と克人が話をして、そのまま会場の外へ出ていったところはチラリと見ていたが、雫とのダンスに気持ちを切り替えていた。その様子はというと、どこか腑に落ち

ないような面持であったが。
「達也、この場合はお疲れさんと言うべきか？」
「……まあ、そうだな」
　話を聞くと、克人から「お前は十師族になるべきだ」と言われたそうだ。原作ではいざ知らず、今回の場合は達也と将輝が直接対決した訳ではない。そう言われた理由を達也は静かに語った。
「九校戦で新人戦女子メンバーの精神的支柱としての功績を見て、会頭はそう言ってきた」
「達也の尋常ならざる胆力を見ればそうなるか。大方七草会長との縁組でも勧められたか？」
「ああ。とはいえ、縁があるという意味ならお前が適任だと思うが」
「……七草家で内紛が起きるぞ」
「どういう意味だ、それは……」
　七草家でいえば、泉美との婚約を解消した関係はあれども……いや、それが契機となって泉美が悠元に向ける好意は益々強くなっている。そこに真由美が加わるとなれば、間違いなく真由美と泉美で衝突が起きかねない。香澄は中立を貫きたいが、血の繋がりの近さから泉美に加担する道を選ぶしかない。
　待っているのは、昼ドラなんて生温いレベルの血で血を争う修羅場……自分で思って洒落にならないと悠元は頭を抱えたくなった。
　そうして、そろそろ最後の曲に差し掛かろうというとき、二人の前に深雪が姿を見せた。将輝と踊った後は他の1年女子と会話を楽しんでいたようだ。
「悠元さん、約束を守ってくださいね」
　そう言って差し出される手。これには悠元が達也に視線を向けると、「行ってやるといい」と言わんばかりの視線を向けられたので、悠元は納得したように深雪の手を取った。
「それでは、僭越ながら深雪お嬢様のお相手を務めさせていただきます」
「やっぱり、悠元さんは生粋のジゴロです」
「……なんでやねん」

少し持ち上げたような言葉を吐いたつもりだったが、深雪にとってはかなり心に響いたようで顔を赤らめていた。そして深雪の言葉に対して悠元はそう乱暴に言いつつも、ゆっくり深雪の手を引いてエスコートした。

最後の曲と共に踊る悠元と深雪。

同じ高校生のはずなのに、色の違いがあるとはいえ同じ魔法科高校の制服を着ているはずなのに、二人のダンスは見る人全てを引き込んでいた。だが、そんな視線も二人は決して気に留めていない。まるで、彼らだけ別の世界にいるのかのような……そんな錯覚すら覚えていた。

「いやー……ありゃ凄いね。達也君としては、妹を取られて悔しかったりする？」

「……エリカ。俺はそこまで深雪に対して過保護になったつもりはないんだが？」

「ダメだこりゃ。これは重症ね……」

それをお前が言えた台詞じゃないと思う、と口に出すと余計に拗れると判断したのか、達也はエリカからの言葉を適当にあしらった上で視線を二人に向けていた。それは深雪を奪われることに対する嫉妬というよりも、寧ろ心から喜んでいる妹のようにありたいという羨望というべきなのか……そんな風に思ってしまったことに、達也は珍しく笑みを零した。

（この「感情」は、ガーディアンとしては本来不必要かもしれない。だが、嫌とも思えない……不思議だな。本当に不思議だと思う）

本来、特殊な事情を持つ達也が持ちえない「感情」。魔法なら理解できないものはない達也がそれを理解できるようになるのは……もう少し先の話である。

◇　◇　◇

最後の曲を終えてパーティーもお開きとなり、会場では第一高校貸し切りの優勝祝賀会が開かれている中、その主役の一人とも言うべき人物――悠元は一人、庭に立っていた。

十師族としての重圧からやっと一段落付けたという心情もあるに

はあるが……徐に自分の掌を見つめていた。先程の深雪とのダンスの余韻なのか、先程のことがまるで夢のようにも思えてしまったことに苦笑を浮かべた。
「……なあ、兄貴。俺は変われたか？」
ふいに出たその言葉は……今の自分の兄に対してではなく、前世の兄に対しての問いかけであるのは間違いないが、その問いが返ってくることなどない。
いや、悠元自身もそれぐらいは理解している話だ。別に返ってこなくてもよい。そもそも、誰かに答えを求めたわけではない。その言葉の意味は……他ならぬ自分自身にしか分からないものであった。
身内の才能に圧倒されて、ただ流されるのが嫌で……奪われたことにも妥協と我慢をしていた。ある種の〝劣等感〟を無意識の内に秘めたまま生まれ変わり、それが結果として恋愛感情の欠如に繋がっていた。
それを切り離して考えろ、という父のお陰もあって、ようやく己自身の見えていなかった恋愛感情と向き合えた。『灯台下暗し』とはよく言ったものだし、今までのジゴロだと言われたことも自業自得でしかなかった。
「……なかったわけじゃなく、あるのに見えていなかった。まだまだ精進が足りないな、俺は」
ここでふと、背後から近づいてくる気配に気付いた。頑張って誤魔化そうとしている努力は見受けられているが、〝彼女〟が元々持っている魅力というか、ある意味フェロモンのように周りの人間を惹き付けてしまう人物の方向を見やった。
「それで、何か御用でしょうか。深雪お嬢様？」
「……もう、何で気付くんですか」
「それはまあ、深雪のお師匠様ですから」
深雪がやや膨れっ面のような感じになっていることからして、恐らく驚かせたかったのだろうが、流石に八雲のような真似をするには精進が足りない。
しかし、深雪が一人で来るとは予想外という他なかった。

「達也はどうした？　……ほのかあたりにでも捕まったか？」
「寧ろ押し付けてきました。変な噂が立つ前にお兄様もまともだと印象を付けるためではありますが。雫も協力していますよ」
　達也の事情が複雑なだけに、温い程度ではダメだと判断した結果なのだろうが……その判断基準が一体どこにあるのかは聞かない方がいいと判断してスルーした。何にせよ、折角のチャンスを生かさないのは男が廃るというもの……悠元は一息吐いた上で、深雪に話しかけた。
「深雪」
「はい、何でしょうか？」
「ずっと先送りにしていたというか、俺自身が鈍感だったと言うべきか……俺は、深雪が好きだ」
　これは、今の人生において初めて自分から告白した。普段なら何かしら飾ることがあるのだが、この状況に置かれると飾りの言葉すら深雪の前では霞んでしまうようにも思えた。
「あれだけアプローチを掛けられたからという訳じゃなく……初めて会った時から、ずっと気にはなってた。最初は友人として仲良くなりたいぐらいの気持ちだったけど、いつしか、それだけで満足できなくなっていた」
　これが独占欲ということなのだろう。とはいえ、相手の嫌がることをするつもりなど毛頭ないので、深雪の意思を尊重したいと思っていた。
「好きというか、愛しているというレベルだと思う。まあ、返事は今すぐでなくとも――」
　深雪は悠元の言葉を聞いて心ここに在らずと言った面持ちだったが、彼女は微笑みを見せつつ、悠元の首にぶら下がるような形で腕を回した。そして、悠元の言葉を遮る形で自らの唇を悠元の唇に重ねた。
　時間にして、十秒ぐらいのファーストキス。互いの唇が離れた後、深雪は瞳から涙を零しながら微笑んでいた。
「ずっと、その言葉を待っていました。私の初恋を奪ったのですから、

二度と離してあげませんよ。それと……」
「それと？」
「悠元さんのジゴロは仕方ありませんが、一番は私でいさせてください。でないと、一杯甘えますからね？」
そこは拗ねるとかじゃないのかよ……とは思ったが、これはこれで大変だなとは思う。まあ、好きになった以上は責任を取るのがけじめというものだろう。
そんな風に思いながら、色々な意味を込めた言葉を発した。
「……やれやれ。深雪に関わったのが運の尽きということかな？」
「それだと私が……え？　どういうことです？」
「つまり、こういうことだな」
深雪は最初、悠元が深雪の悪口を言ったのかと思ったが、あまりそういったことを言わない悠元が「静かに」というジェスチャーをしたことで、それがブラフだと理解した上で小声で尋ねた。
悠元が指を鳴らすと、突然ホテルの上空で花火が打ちあがる。その音に乗じて茂みの中に魔法――軽い静電気を起こす程度のものだが――を撃ち込むと、中から悲鳴が聞こえてきた。
その悲鳴に続く形で倒れ込むように茂みから出てきたのは……二人が知る友人たちであった。
「あ、あはは……やっぱバレてたか」
「当り前だ。というか、達也は止めなかったのか？」
「一応は止めたんだがな」
達也を筆頭に、エリカ、レオ、幹比古、美月の二科生組と燈也、雫、ほのかの一科生組まで加わって様子を見ていた。これには悠元も頭を抱えたくなり、深雪に至っては真っ赤になった顔を見られたくなくて悠元の胸に顔を埋めている格好となっていた。
「うう……恥ずかしくてお嫁に行けません」
「大丈夫じゃない、深雪。婿候補が目の前にいるんだし」
「黙れブラコン」
しかも、達也が言うには最初から二人の様子を見守っていたそうだ。ガーディアンってそういうためのものじゃねえから！　この雰

囲気を察してか、雫が悠元の肩に手を置いて呟いた。
「何にせよ、続きは祝賀会で」
「俺に拒否権は？」
「ない。主役だから」
　こればかりは甘んじて受ける他ない……と、夜空を彩る花火が打ちあがる中、友人たちの生暖かい目に見守られつつホテルの中へと戻っていくのであった。祝賀会の会場に入ったところで、何かと勘の鋭い真由美に問い詰められることはあったが、何とか躱し切ったのは言うまでもない。

夏休み編＋1
神楽坂の継承

九校戦の全日程が終了した翌日の早朝。悠元は本来なら同じ第一高校のメンバーと一緒に帰る予定だったが、宿泊していたホテルの前に数台のリムジンが停まっていた。悠元だけでなく、達也や深雪に加えてレオと幹比古、エリカに美月、そして雫とほのかまでいる。

見るからにＶＩＰ待遇という様相を見て驚きを隠せない一行のもとへ、１人の執事服を纏った中年ぐらいの男性が姿を見せた。

「三矢悠元様にご学友の方々ですね。ご当主様より案内を頼まれました葉山と申します」

「…見るからに四葉家の執事の方と似ているようですが」

「彼は私の父にあたります。似ていても無理からぬことかと」

神楽坂家執事の葉山忠成（はやまただなり）。四葉家筆頭執事の葉山は彼の父親にあたるという。彼の案内でそれぞれリムジンに乗り込む。悠元の乗るリムジンには忠成と達也、深雪も同席することとなった。

「改めまして、達也様に深雪様。お二方のことは四葉家の先代当主はもとより、父からもお話を聞いております。内心驚かれたのではありませんか？」

「…ええ。葉山さんはご自分のことをあまり語らないものですから」

「おもわず声を上げてしまいそうになりました」

親子というだけあって、顔だちが似ているので深雪はもとより達也も驚いたと率直な感想を述べていた。かく言う悠元も驚きを隠せなかったことは同意した。

忠成は父親の伝手で神楽坂家の執事として務めることとなり、現在は神楽坂家の筆頭執事として当主の世話役を担っていると話した。

「お二人のことはご当主様と私、ご当主様が認めた者しか詳しい事情を知る者はおりません。とはいえ、司波様では間違われることもあるでしょうから、名前呼びになることはお許しください」

「ええ、分かりました」

四葉家絡みの話もそこそこに、リムジンは富士から離れていくが、その方向は南に向かっていた。向かう先は箱根にある神楽坂家の本屋敷。

神楽坂家は陰陽道の大家であり、古くを辿れば賀茂氏や安倍氏の血筋を引く伝統ある一家。春の一件の中心人物だった司甲の家も賀茂氏の傍系であったことは確かで、どこかで関わりはあったのかもしれない。元々は昔の都――京都市の北西側にその本拠を構えていたが、明治時代にこの国の首都が代わり、皇族の実質的な住まいも東京に移った際、神楽坂家もそれまでの本拠を取り潰して箱根にその本拠を移した。残さずに取り潰したのは魔法の秘密に関わるウェイトが大きい。

新たな本拠を箱根とした理由は、群馬に同じ「護人」の上泉家が本拠を構え、その分家が関東各地を担っている。なので、東京に別宅を置いた上で、霊山である富士山に程近い箱根を本拠とするのがよいと判断した。そこに加えて神楽坂家が戦国時代に伊勢平氏の流れを汲む北条氏と交流があり、忍びとして知られる風魔一族が北条氏滅亡後に神楽坂家に引き取られたことも決め手の一つとなったのだろう。

元々箱根周辺は国立公園だったが、これは神楽坂家の存在を隠すために公のカモフラージュとして使われた側面を持つ。十師族の守護範囲で本来伊豆半島は東海地方の分類に含まれるが、七草家や十文字家の守護範囲に含まれたのは神楽坂家の影響もあったりする。

伝統を重んじるのなら京都に残るのも一つの手段だが、彼らの本質である皇族の守護を成し遂げられないことこそ最上の恥と考え、本拠地の移転には一切躊躇うことなどなかった。

護るべきものは護るが、その目的のために手段を選ばない柔軟さは他の古式魔法の家からすれば〝異端〟ともいえる。元々陰陽師という存在は他の魔法使いからも異端のように見られていたことがあったので、それがぶり返した程度にしか認識していない強みも確かに存在する。

その代わりとして伊勢、出雲、そして大宰府――大規模な神宮・神社を神楽坂の分家に管理・守護させることで西国の守りをしっかり

埋めている。だが、京の都において神楽坂の空白を埋めようと古式魔法の家が乱立し、加えて十師族や「伝統派」という存在が出てきたことで複雑怪奇の様相を呈しているのは言うまでもない。
「本屋敷に着きましたら家の者に案内させますが、悠元様は私についてきてください。ご当主様が直々にお話ししたいそうなので」
「ええ、それは承知しております」
ホテルから出発して約1時間。リムジンは神楽坂家の本屋敷に到着した。外から見る限りにおいては平安時代の寝殿造と戦国時代の武家屋敷を融合させたような趣を感じるが、魔法による結界らしきものがうっすらと張られているのが目に見えており、一歩中に入ると過ごしやすい気温に最適化されている。
荷物のことや達也たちは出迎えた使用人らしき人に任せると、悠元は忠成の案内で大広間に案内される。その奥には現代風のファッションを身に包みつつもこの家の主らしい風格を滲ませている人物――神楽坂家現当主こと神楽坂千姫がそこにいた。
悠元は少し離れたところに正座で座り、頭を下げた。
「お久しぶりです、千姫さん」
「もう、私のことは『ちーちゃん』か『お母さん』って呼んでほしいのに。そう思わない、葉山さん？」
「奥様、無茶を仰らないでください。彼はまだ三矢家の人間なのですから」
千姫が頬を少し膨らましながらそう言うと、話を振られた忠成は苦笑を漏らしつつ窘めた。それはご尤も、と返しつつ千姫は手に持っている扇子を広げて仰ぎ始めた。
「分かってはいるのだけどね……はぁ、憂鬱よ」
「何かあったのでしょうか？」
「ねえ、聞いてよ悠君！」
まるで同い年の相手に愚痴を零すかの如く千姫は話し始めた。
千姫は悠元たちが来る前に烈と会談した。その時は正式な客扱いとして単衣を纏った上で会談したのだが、烈は四葉や十師族の扱いについて尋ねられたという。聞けば、十師族のシステムの根幹を考案し

たのは剛三と千姫と聞いたときは流石に驚きを禁じ得なかった。
「閣下の考案ではなかったのですか？」
「彼は十師族の発起人という立場なの。国防軍が現代魔法の魔法師を兵器としてしか利用しない事案は将来歪みを生みかねない。彼らに反逆させるのではなく、国防軍を腐らせないようにするための『切磋琢磨できる同等の勢力』が必要だった。とはいえ、私や義兄様の家では軋轢を生んでしまう。だから、義兄様の係累に三矢家がいたことを上手く使えないかということになったの」
　過ぎた力は争いにおいて有用でも平和になった世界では害を成す可能性がある。例えば、その時代において圧倒的な武を持っていた武将や、出鱈目過ぎる戦果を挙げて魔王と恐れられたエースパイロットなど、その後の人生は戦いと無縁の場所に送られたり処刑されるパターンが多い。
　その力を後世に伝える戦技教導という概念がハッキリしていても、そういった人間はある意味〝天才肌〟なので難しいことが多いのだ。
　話を戻すが、反乱などを起こさせないために公の権力を持たないが権威を持つ存在として十師族のシステムが作られた。だが、その意味の解釈をはき違えては困る、と千姫はそう呟いた。
「四葉の兵器らしさに対して、あまり酷いようならストッパーを掛けるつもりだったけど……悠君のお陰で四葉が真っ当な方向に向いてくれた。青波の奴は相変わらずでしょうけど、現状４人いる我が国の戦略級魔法師にあまりちょっかいを掛けないでほしいわ」
　達也を疎む四葉分家の存在に加えて諸外国の存在。加えて達也や深雪に対して何らかの接触を図ろうとする九島家や七草家。その懸念材料に入るであろう〝黒幕〟の一人である東道青波をそんな風に言うあたり、千姫が剛三と同じ立場にいるのだと悠元はそう感じた。
「十師族の面々は頭固すぎよ。あの爺は孫のことをちゃんと構ってやれって義兄様に言われてるのに変わってないし、七草のクソガキは真夜ちゃんのことを諦め切れていないし……改めて呼び出して叩きのめそうかしら。悠君はどう思う？」
「年齢差からして呼び捨てはできませんが、そう思わなくもない節は

否定できません」
単に十師族云々なら七草家現当主があそこまで四葉家に執拗に拘る意味が理解できないが、そこに昔の事情が絡むなら理解できる。
弘一はかつて真夜と婚約関係にあったが、昔の事件でそれが叶わぬ夢となってしまった。彼女が求める四葉を全て否定しきり、そして七草の正当性を認めさせる……この場合は弘一の正当性と言うべきだろうが。
それが分かっているからこそ、七草家の当主夫人は全国を飛び回ってあまり本屋敷にいないことが多いのだろう。諦めが悪いことを悪いとは言わないが、せめて今の妻に対しての愛情はないのかと思わざるを得ない。
まあ、今の三矢家のようにお互い恋愛結婚できたのが稀有な事例というのは否定できない事実として認識すべきだろう。
「さて、本題に入りましょうか。三矢悠元君、私こと神楽坂千姫は当主の権限を以て貴方を神楽坂家次期当主、ならびに神楽坂家当主代行に指名いたします。受けていただけるかしら？」
「一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」
「ええ。一つと言わず、いくらでも構いませんよ？」
「大体は納得しておりますが、当主代行というのはどういうことなのでしょうか？　見るからに健在である現当主の代行業というのは些か腑に落ちないので」
自分の力を考えるなら、十師族という枠組みにいるほうが面倒だし実家である三矢家に迷惑を掛けかねない。現状元治がその家督を継ぐための既定路線を崩そうと画策する輩が出ないとも限らないからだ。なので、神楽坂家にその籍が移ることは許容範囲内だった。
だが、神楽坂家当主代行というのは流石に首を傾げた。そこまでの権限をいきなり与えて本家や分家の人間が納得するのかどうか……その意図を察したのか、千姫は笑みを浮かべて説明しはじめた。
「悠君は現状において神楽坂家でも抜きんでています。何せ、あの『天照』の正式な単独発動は初代様以来の快挙。加えて新陰流の師範クラスということも義兄様より聞いております。それを聞けば例え分家

の当主達といえども反論できませんから」
　ハッキリとした実力を九校戦で示したからこそ、悠元が次期当主となることに口を挟む者はいないと千姫は宣言した。加えて千姫はこう続けた。
「今年の秋と冬、年明けからの不穏な流れは情報収集を担う『九頭龍（くずりゅう）』や天文占術の『星見（ほしみ）』から報告を受けております。悠君にはその２つの権限を自在に使ってもらえるようにしたいというわけ。そのための『当主代行』です」
「……つまり、夏休み明けからは三矢家ではなく神楽坂家の人間として動け、ということですか」
「ええ、正解です。夏休み明けと言うよりは、悠君が話を受けた時点で神楽坂家の人間となります。急な話になってしまいますが」
　天文占術は従来の占術をより高度化させ、最長で数年先の未来を占う代物。この術を修得できるのは神楽坂家の中でもごく少数に限定されており、現在は神楽坂の筆頭主家である伊勢家が担っていると千姫が説明した。つまり、この前出会った姫梨は『星見』の一族ということでもある。
「戸籍などの手続きは神楽坂家と上泉家で速やかに行います。一高の校長への説明には私も出向きます。悠君はある意味十文字君と同等以上になるというわけ」
「……分かりました。自分としても異存はありません。非才の身ですが、微力を尽くします」
　そう言って頭を下げると、千姫は笑いながら「悠君が非才なら、世の中の魔法使いが皆凡骨になってしまいますよ」と返されてしまった。いや、自分の場合は転生者という反則技あってこその部分があるので、それを抜きにしたら十師族の直系クラスぐらいだろう……え、違う？
　この話を受けた時点で、自分は三矢家ではなく神楽坂家の人間となる。法的根拠はどうにでもなると発言したので、このあたりの根回しは既に済んでいると解釈していいのだろう。
　とはいえ、一度自分で出向いてやらないといけない手続きはいくつ

かあるのが面倒だが仕方ない。なお、ＦＬＴ絡みや国防軍絡みは元々別の名を使っているので事情説明ぐらいしかないのは非常にありがたい。

（……殺気!?）

すると、どこからか飛び道具のようなものが飛んでくるのを察し、左手を翳してその飛んできたもの――――複数の手裏剣を指の間に挟むような形で掴むと、気配の感じる方向に本気で投げ返す。

その手裏剣はその気配が届く前に弾き飛ばされた……その人物の防御魔法に悠元は見覚えがあった。これには忠成が感心するように見ていて、千姫はというと笑顔を崩さずに口元を広げた扇子で隠していた。

悠元は怒りや呆れといった複雑な感情を浮かべつつも手裏剣を投げつけた人物に言葉を投げかけた。

「――――屋内だというのに、いきなり手裏剣はどうかと思うんですが。九重先生？」

「いやー、流石は悠元君だ。お見逸れしたよ」

そう言って頭を掻きながら姿を見せたのは八雲であった。どことなく飄々とした雰囲気は相変わらずで、九重寺で出会うときの動きやすい服装だった。彼が古式魔法の「忍術使い」なので別段可笑しくはないが、その彼が試すような真似をしたことに流石の悠元も警戒を露わにした。

これを見た千姫は助け舟を出すように声を発した。

「八雲さん、お戯れは程々に。いくら『九頭龍』の長とはいえ、悠君は貴方にとって上の立場になるのですから。あまり過激なことはしないでくださいね？」

「これは手厳しい。改めて、神楽坂家『九頭龍』の長を担っている九重八雲だ。まあ、普段は叡山の末寺の和尚だから、これからもそっちで接してくれると助かるよ、次期当主殿。いや、この場合は悠元君のほうがいいのかな？」

原作ではともかく、この世界において『九頭龍』の長である八雲。〝果心居士〟の再来、とまで謳われたほどの実力者が味方として……こ

の場合は部下ということになる。曲者なのは違いないが、敵に回したくないのは事実だ。エロ坊主という世俗に浸かり切った彼を正当に評価などできないが。
「後者でお願いします。というか、この屋敷には達也もいるというのに誤魔化しが見事ですね」
「これぐらい出来ないと彼の師匠としての面目が丸潰れだからね」
古式魔法の忍術使いである八雲が神楽坂家の情報収集を担っていることは別段おかしくないが、こうなると自分の情報は神楽坂家に伝わっていると解釈すべきだろう。彼が言うには、風間や達也にそのことは一切話していないと付け加えた。何せ、達也も八雲から古式魔法の知識はある程度聞いていても根幹に関わる部分は有耶無耶にされていると聞き及んでいる。
「それでは、悠君。こちらを」
すると、千姫は徐に一冊の本を差し出した。まるで平安時代にありそうな紙の冊子で、中の文字も時代を感じさせるものだが、朽ちたりすることなく綺麗に保管されているようだ。この世界には状態保存を維持する魔法も存在するのだろう……そう思っていたら魔法式が組めたことは心の奥底にしまい込んだ。
本当に転生特典が自重してくれない……かれこれ１００から先は数えていないし、公にもしていない。というか、公にしたら魔法界が引っくり返ること間違いなしだ。
悠元はそれを受け取って流し読みするようにページをめくり、全て目を通したところで冊子を床に置いて、ホルスターから「オーディン」を引き抜いて魔法を発動させる。
発動した魔法の対象を大広間から見える中庭の大きな岩に設定して魔法を放つと、その岩は綺麗に消えた。これには忠成だけでなく八雲も感心するように消えた岩を見つめ、千姫も満足そうな表情を見せていた。
悠元は「オーディン」をしまうと、再び千姫に向き直った上で正座した。
「――――お見事です。あれには幾重もの結界魔法が張られていました

が、それを見事に抜いた……『月読』も修得できたようで何よりです」
「あからさまに力を高めていたのは分かりましたから。それで、次期当主絡みの話はこれぐらいですか？」
「そうですね。もう1つ試しをしなければなりませんが……悠元君、今日の夜に何があっても拒否することを禁じます」
拒否することを禁じる、という意味が分からずに悠元は首を傾げた。別に命の危険が伴う試験ではなく、ある意味力を量るというのは間違っていないと千姫は補足したが、細かい意味までは理解できなかった。
八雲はそのままとんぼ返りするようにその場をあとにし、悠元は忠成の案内でとある部屋に案内された。どうやらここは神楽坂家の当主が使う部屋とのこと。見るからに複数の結界魔法があり、これ1つだけでも現代魔法の常識を覆そうなものばかりだ。ただ、これの構築方法は失伝していると忠成が説明した。
「第二次大戦の折、それを口伝していた当主の方が亡くなったため、それの修復方法も失われたと伺っております」
忠成がその場を後にして1人きりになったところで、悠元は『天神の眼』で結界魔法の解析に取り掛かる。この術式は本屋敷を起点として屋敷の周囲に流れる水流を力の発生源としている。結界魔法の術式を解析し終えたところで転生特典をフルに活用し、新たな結界魔法をこの屋敷に張り巡らせる。
ここまでした理由は外敵からの戦略級魔法の防御を主眼としている。そこまでの人物が近くにいたら対応する方法はいくつかあるが、ある意味保険と言うべきだろう。
ついでに既存の結界魔法も修復したので、あとでその方法を紙にでも書いて忠成経由で千姫に渡してもらうことも考えつつ、悠元は着替え始めた。流石に制服のままで寛ぐというのは宜しくないからだ。替えの服は既に準備されていたが、古式魔法の家なのに浴衣や甚兵衛ではなく現代風のファッションというあたりは現当主の意向なのだろう。悠元は黒のTシャツにダークグレーのズボンという格好を選択した。

着替え終えたところで忠成が姿を見せた。彼の表情は焦りも若干含んでいたところを見ると、先程の魔法も感じていたようだ。
「悠元様、失礼します。その、先程の魔法は……」
「あ……その、結界魔法を張り直しました。もうこの家の人間でもありますから。その方法は後で纏めますので、千姫母さんにはそう伝えて下さい」
年齢上は祖母と孫みたいなものだが、家督を継ぐ関係で悠元は千姫の養子となる。なので母親呼びとなるわけだ。真由美のように「悠君」と呼んだことに関しては、特に呼ばれ方の拘り等ないという単純な理由だ。
そういえば、筆頭主家の伊勢家から嫁を宛がうことも手紙の中にあった……十中八九姫梨のことだろう。彼女から好意を向けられている以上、断るのは礼を失することになる。先程の結界魔法を感じて、千姫は忠成を向かわせたのだろうと推察し、悠元は頭を下げた。
「いえ、頭をお上げください。悠元様……いえ、若様は非凡なる才能をお持ちなのですね」
「それなりに、ではありますが。ところで、達也たちのところに行きたいのですが、どこに？」
「達也様たちは客間で寛いでおります。そちらまでご案内いたします」
「助かります」
今度からはちゃんと許可を取った上でやろう……そんな風に思いながら、忠成の案内で悠元は達也たちのいる客間まで案内してもらうことになった。流石にこの屋敷の間取り全てを半日も経過していないのに把握するのは難しい。

その笑顔は強敵（ラスボス）だった

悠元が客間に来ると、達也と幹比古にレオだけでなく女性陣もその部屋にいた。達也と幹比古は部屋にあった将棋で対戦していて、他はＣＡＤの手入れをしていたり、談笑したりしていた。無論、全員制服ではなく動きやすい私服に着替えている。すると、真っ先に声をかけてきたのはエリカだった。

「お、悠元！　何か面白いことでもあった？」

「面白さ前提で話しかけるなよ……強いて言うなら、俺がこの家の次期当主になったぐらいかな」

その言葉を聞いた瞬間、その面々の中で古式魔法に精通している幹比古が、持っていた将棋の駒を床に落とした。それほどまでに動揺している反面、他の面々は驚くという反応を見せていなかった。

これにはレオが幹比古を気遣って声をかけた。

「おい、幹比古。大丈夫か？」

「あ、うん……悠元、それ本当かい？」

「嘘言ってどうするよ。ほい、落し物」

幹比古の疑問に悠元は答えつつ、床に落ちた駒を拾い上げて幹比古に渡し、そのまま幹比古の隣に座った。すると、この中でそういった疑問を問いかけたくなる性分の達也が、盤面を見つつも尋ねた。

「幹比古、それほど大事なのか？」

「あ、うん。この家――――神楽坂家は陰陽道系古式魔法の大家でね。でも、その次期当主が悠元というのは流石に驚いたよ」

「血縁上は大叔母ということにあたるらしい。今は養子の関係で母親ということになるけど」

他人事のように話せるのは、流石に色々ぶっ飛んだ話が多くて現実味が薄いという部分に起因している。一つだけ確かなのは、十師族・三矢家の人間ではなく護人・神楽坂家の人間として振る舞わなければならないということ。

これにはエリカが幹比古に問いかけた。

「ねえ、ミキ。神楽坂家の規模はこの屋敷だけでも確かに凄いけど、そ

れってどれぐらい凄いの？」
「僕の名前は幹比古だ！　……そうだね。神楽坂家は古式魔法のコミュニティで最上位に位置する。現代魔法の象徴ともいえる、十師族以上の権威を持つとされているほどだ。魔法協会も凌駕する存在とも言われてると、父から聞いたことがある」
「……マジ？　そんな家の次期当主に悠元が……」
「おい、人を化け物を見るみたいな目で見るな」
　現代魔法中心のコミュニティでは古式魔法のことを知るのは難しい。神楽坂家は四葉家のスポンサーのひとつであることも聞かされ、つまりは東道青波と同等以上の権威と権力を有している。だが、その力はあくまでも国を護るために使うことであり、専守防衛のみならず、必要とあらば先制攻撃も行う……つまり、積極的自衛権が護人の担う役割である。
「まあ、ある意味十文字会頭や一条と同等の立場になったってことだな。後日、魔法協会を経由して、師族二十八家や百家に、神楽坂家と上泉家の次期当主を公表するとも言っていたな」
「へ、上泉家って……まさか、悠元の兄さん？」
「だろうな。爺さんは公言してなかったが、恐らく間違いない」
　これで、三矢家は上泉家と神楽坂家に次期当主を送り出したという実績が出来ることになる。後は元治に家督を継がせれば、自ずと三矢家の立場は安定する。父親の性格からして、それを振り翳して敵を作ることはしないし、三矢家次期当主の元治もそんな性格ではない。どこかの家のように、他の師族を貶めるような真似をする必要などない。
「でも、悠元だから逆に納得できるかな」
「流石にそういう言い方はどうかと思うんだが……」
　これ以上自分のことをとやかく言われるのは面倒だと判断して、話題を切り替えるために一つの提案をすることにした。それは、先日考えていた自分の周囲の人間にかかわることであった。
「――私たち全員のレベルアップ、ですか？」
「ああ。春にテロリストの一件があり、九校戦に行く途中での出来事

もある。ここいらで、思い切って全員のレベルアップを図るべきだと考えた」
「後者のは……事故未遂じゃなかったのですか？」
「あれは春とは別口の連中の仕業だ」
ブランシュと無頭竜のことには触れないが、似たような事件が起こらないとも限らない。何せ、秋に開かれる論文コンペでは毎年何かしらのトラブルが発生している……それが起きる前に政府が止めろよ、と愚痴りたくなるが、止められないものに文句を言っても仕方がない。
それに、自分の調べでも大亜連合が動いているのは確かであった。このあたりの動きを新ソ連が黙っているあたり、大亜連合が勝てば儲けものぐらいに思っているのだろう。ＵＳＮＡの動きを見ても、大亜連合の動きを黙認している節がみられる。
「実際のところ、九校戦のトラブルもその連中の仕業だった。ま、そこら辺は実家で対処してもらったけど、それが今後もできるとは限らないからな。自分の身は自分で守れるぐらいになってもらわないと困る。なので……お前らには、今持っている魔法の常識を尽く破壊してもらう予定だから」
「え、いや、どういうこと？」
そのためには、まず彼ら自身が持っている「現代魔法の一般常識（セオリー）」を破壊してもらうことから始める。物理法則の改変如きで魔法というのは児戯に等しいと分からせる必要がある。すると、この中で現代魔法と古式魔法の両方に精通している幹比古が問いかけた。
「悠元。つまり、僕たち全員が使っている魔法自体に無駄があるということかい？」
「創意工夫以前の問題として、現代魔法そのものが欠陥と言ったら驚くか？」
「はあっ!?」
悠元の言葉に大声を上げたのはエリカだった。彼女だけでなく、悠元以外の面々も驚きを隠せていなかった。この中には無論達也まで含まれていた。そんな表情はレアだなと思いつつ、エリカを窘めた。

「そもそもさ、現代魔法は古式魔法以上の多様性を実現させたとか言ってるけど……確かに敷居は低くなったが、魔法自体のレベルも落ちたに等しい」
　現代魔法の出発点は、２０世紀末に核兵器テロを未然に防いだ超能力を有していた警察官が起点となっている。
　体系上における現代魔法の系統は加速・加重・移動・振動・収束・発散・吸収・放出の４系統８種に分類されるが、これは「物理法則の改変」という枠組みに止められている。精神干渉系は系統外だが、大半は相手を視認しないと使えない代物がほとんどだ。知覚系魔法は超能力らしい代物で、このあたりは魔法らしくある。
　悠元は天神魔法を学んだからこそ、現代魔法の大きな制約にもすぐに気付いた。その原因は……有体に言えば「魔法の軍事利用」が最も大きな理由だ。
「核抑止を前提とした以上、超能力をそのまま現代魔法に落とし込んだら主に軍事面でバランスが崩壊しかねない。当時の魔法師はそれを危惧して現代魔法を核抑止以上の役割を持たせなかった。研究者もその辺は苦心したんだろうけど」
「……悠元。お前はもしかして、現代魔法の基本（カーディナル）コードを全部解析できたのか？」
「ああ。深雪や雫に渡した魔法の起動式は、その基本コードから弄ったものが組み込まれている」
　達也の問いかけに悠元がそう答えると、周囲はまたもや驚く。あの「ジョージ」や「カナ」ですら１つ見つけたのがやっとという基本コードを、悠元はすべて見つけたというのだ。だが、悠元はそれを嬉しいと思えるような表情をしていなかった。
　何せ、悠元が現代魔法自体が欠陥だらけだと断言したのに、その基本コードなんて欠陥コードと言ってるに等しいからだ。
「加えて、魔法の制御技術もおざなりの状態という有様だからな。こうやって列挙すると、現代魔法自体改善の余地が多いんだよ」
「現代魔法の否定って……アンタ、十師族に喧嘩でも売る気なの？」
「別に喧嘩なんて売る気はないが、俺はもう十師族じゃないからな」

冷たい言い方だが、あるものをただ受け入れるだけでは成長など望めない。自分がそういった創作物に触れる機会の多かった世界にいた影響もあるだろうが、転生してからはそういった創作物の超常現象再現を目標にあれこれやった結果、今の現代魔法では到底無理なものが多いという結論に至った。

ハッキリ言って無駄が多すぎるのだ。なので、暗号化処理はしているが、自分の使う現代魔法は「現代魔法ではない別の魔法」を起点としている。それは天神魔法とも異なる魔法で、そのヒントは古代文明の遺跡から得た。ある意味古代魔法のアレンジと言ってもいいかもしれない。

以前言語のことについて触れたが、未だに研究の進まないオーパーツ関連のことも、転生特典のせいで解析できてしまった。このことは誰にも言っていない自分だけの秘密だ。

何でそんなところに行ったのかと言うと、理由は単純に剛三の趣味であった。剛三が魔法師ということは公然の事実だが、罰することはおろか止めることもできない。仮にそんなことをすれば剛三の魔法で周囲が消し炭に成りかねない。

例を挙げるなら、イタリアに行った際マフィアの抗争に巻き込まれたが剛三はそのトップを消し飛ばした。自分はって？　気配を偽って見つからない様に行動してました。

その意味で四葉と知己であるのは同類の誼（るいはともをよぶ）かと思わなくもない。

「魔法と言うからには、古式魔法のように手から火が出せたり、雷を出したり、それこそ現代魔法の振動系や放出系なんて目じゃないレベルでないとダメかな、と思って色々訓練してたからな」

「もしかして、私たちをそのレベルまで引き上げるということですか？」

「勿論。想子の制御が前提となるけどね」

その想子制御を中途半端に切り捨てたのは「愚か」と言う他ないだろう。ＣＡＤの存在は魔法の発動補助だけでなく制御補助まで担っているため、その辺を無理に考えなくていい利便性と引き替えに魔法師自身の制御能力を奪った。

確かにＣＡＤというツールがある以上、術者に求められるのは魔法式の構築制御と魔法の出力制御の２つ。展開速度と演算規模を求めるならそれで十分だが、改変強度に加えて魔法を安定的かつ効率的に使うには明らかに足りない。

「魔法師は事象を在るがままに、冷静に、論理的に捉えた上で己を厳しく律する」という言葉があるが、それを発言した人物は想子制御のことも理解していたのだろう。それが本人の意図せぬところで、単なる心構えだと勘違いされた節がある。その根拠は上泉家にあった当該人物の著書の初版本と、第一高校の図書館にある重版本でその辺りの記述が変わっていたからだ。この違いに気付いたのは自身の瞬間記憶によるものが大きい。

「想子の制御？　それぐらい誰にでも出来るんじゃねえのか？」

「そう言うんなら……レオ、こいつに想子を流し込んでみてくれ」

そう言って悠元がレオに手渡したのは、ルービックキューブサイズの黒い箱。だが、その表面には刻印が彫られており、紛れもなく魔法発動のためのツールだということは明らかだった。

客間の外がちょうど広い中庭となっていたので、実験というかテストはそこでやることとなった。レオはそれを前に翳して想子を流し込む。すると、彼の想子の色に呼応してオレンジ色のシールドが展開する。

「悠元、あれは想子障壁（サイオンウォール）か？」

「ああ、そうだよ」

達也の問いに答えつつ、悠元はレオと向き合う形で想子障壁の前に立つと、それを指で徐に触れた。これを見た悠元は盛大な溜息を吐いた。

「ダメだな、これじゃ薄すぎて防御も疎かだ。ご自慢の硬化魔法も十全の威力を発揮できないぞ」

「マ、マジかよ……じゃあ、悠元がやってみてくれ」

「ああ、いいよ」

レオからその箱を受け取ると、悠元は周囲に想子の光が漏れることなく白銀の想子障壁（サイオンウォール）を展開する。レオが展開したものよりも遥かに

高い密度の想子が収束していることに、周囲からは驚きの声も聞こえるが、悠元はエリカに一つ頼みごとをした。
「エリカ、こいつを破ってみてくれ」
「ちなみにだけれど、全力でやっていいのよね？」
「ああ、構わない」
悠元と相対する形でエリカは警棒を取り出す。いつもの軽い表情は消えて警棒を構えると、エリカの姿がその場から消えるかのごとく、一直線に向かっていく。
本来なら警棒に想子を流し込むだけだが、エリカはそれで破れるとは思っていなかった。だからこそ、千葉家の秘剣でもある『切陰（きりかげ）』の使用を躊躇いはしなかった。その辺の秘密は悪友である彼に頼むことも織り込んだ上での一撃。
だが、その秘剣をもってしても、彼の想子障壁に罅一つすら入っていなかった。
「う、嘘でしょ……」
「見事な一撃だと思うが、まだ甘いという証拠だな」
「参った、お手上げよ」
『切陰』を使っても破れなかったとなれば、彼が剣技を使った場合だと負けるのは必至。エリカは両手を挙げて降参のポーズを取った。
これには2人をよく知っている幹比古も驚いていた。
「エリカの剣術は相当なものなのに、それを防ぐなんて……」
「お兄様、悠元さんは想子障壁以外の魔法を一切使っていないんですよね？」
「ああ。それは間違いないだろう」
新種の魔法かと思ったが、悠元は箱に想子を流し込んでいるだけで、想子障壁以外の魔法は使っていないと、達也の『精霊の眼』でも読み取ることができた。達也は念のために悠元から黒い箱を受け取るが、刻まれた魔法陣以外は何もない普通の金属の箱だということは確かだった。
「単なる想子障壁であそこまでの防御力を発揮するとは……お前はやっぱり埒外の天才だな」

「九校戦で活躍したエンジニアが言っていい台詞じゃないと思うんだが？」
　そんなテストの後、屋外は流石に暑いので室内に戻ることにした。先ほどのエリカが使った技については秘密ということで納得してもらった。使用人が気を利かせて冷たい飲み物を持ってきたので、それを飲みつつ悠元が説明を始めた。こればかりはちゃんと説明しないとダメだと思ったからだ。
「想子の制御は、知覚・循環・構築の３つの要素から成り立っている。これらの要素がどれか欠けると制御に失敗するのは、古式魔法と現代魔法で共通と言えるだろう」
「……あの、悠元さん。そのようなことを授業では一切習っていませんが」
「知らなくても無理ないよ。だって、このことを知っているのは俺だけだから。今この瞬間からここにいる全員になったけど」
　想子を可視光線や可聴音波と同じように認識するのは、魔法を行使する上において必須の技術。だが、知覚するといってもその程度のレベルではない。魔法師は常日頃から想子の波に曝されているからこそ、明確に感じ取れていないレベルの想子までハッキリと認識できることが、本当の意味での知覚制御であり、そのレベルに到達すれば、戦術級や戦略級といわれるクラスの魔法も行使可能となる。
　悠元がその結論に至れたのは、『領域強化（リインフォース）』の実験結果と『聴覚強化』の完全制御あってこそなのは否定しない。毎朝欠かさずに想子制御の訓練は続けており、司波家での居候の時は地下室で一人黙々とこなしていた。
「そういえば、九校戦前の合宿の時に悠元が座禅を組んでいたのって、あれは想子制御の練習をしていたの？」
「正解。確かに起動式のアレンジや明確なイメージを持つことは必要だけれど、扱える魔法力が大きければ、各種の障壁魔法に頼らずとも想子障壁だけで大抵の魔法は防げてしまう。自身の魔法力制御に直結するわけだから、領域干渉装甲も簡単に追加できるし」
「悠元、十文字家の『ファランクス』に喧嘩を売ってるんじゃ……って、

そういや勝ってるんだったわね」
「えっ、それは初耳。悠元、どういうこと？」
エリカの言葉を聞いて尋ねてきた雫に対し、悠元は諦めたように以前克人と模擬戦をして勝利したことを話した。これにはほのかも驚きを隠せなかった。
そもそも、現代魔法は視認することが前提となっている魔法が多い。自身で事象改変を起こして放つという改変プロセスを踏まなかったのは、軍事的な問題もあったからだろうが。
知覚制御で周囲と自身の想子を認識し、循環制御でそれらの想子を制御する。この辺りがしっかりできていないと、魔法展開の際に余分な想子が外に逃げたり、あるいは無意識的に想子をＣＡＤに流し込んでしまう現象が発生する。複数のＣＡＤによる同時発動ができないのは、この辺の制御がおざなりになっているという証拠だ。
「魔法の構築制御は、起動式を魔法式に変換する際の想子制御や魔法の収束に出力制御、展開した魔法の維持がメイン。この辺は知覚制御と循環制御がなっていないと極めて難しい。それこそ特定の魔法に特化した魔法演算領域でも持っていないと無理な話だ」
達也が『質量爆散（マテリアル・バースト）』という戦略級魔法を使用できるのは、単に膨大な想子保有量と『分解』『再成』に特化した魔法演算領域を有しているからである。要するに、達也の魔法は『力技』というわけだ。その辺の事情は伏せておくが、別に達也を例えに出したわけではないということは断言しておく。
「その手本として俺ができる想子制御の一部を見せるよ。一応気を強く持ってくれ」
そう言って悠元は意識を集中させて周囲の想子を収束し、想子濃度を高める。一応言っておくが、天神魔法の技術は一切使っていない。強制的に想子を知覚させられる形となるため、周囲の人々の表情は強張った。達也に関しても流石に表情を変化させていた。そして、想子の収束を霧散させると、悠元以外の面々は呆然としたり息を荒くしていた。
「しょ、正直信じられねえ……」

「凄い密度でした……」
「こ、こんなに濃いなんて……」
「これぐらいの制御ができないと満足に魔法なんて使えないからな……というわけで」
サイオンの十全な制御が出来ないと、天神魔法はおろか普通の魔法ですらも想子の無駄遣いをした状態のまま。小手先の技術に拘るのもいいが、その大本の基礎を疎かにしていては強くなんてなれない。新陰流の修行も膨大な基礎の鍛錬の上に奥義があったからこそ、魔法でも基礎的な練習は疎かにできないと理解している。
悠元はそう言いながら、徐に立ち上がって廊下に繋がる襖を開いた。
すると、そこには先程悠元が行った想子制御の影響で床にへたり込んでいる姫梨と由夢、息を整えている修司の姿があった。それを見た悠元は満面の笑みを見せていた。
「これから想子制御の練習をするから、お前らも道連れな？」
その時の悠元の表情を見た達也は、彼がロールプレイングゲームでいうところの「強制敗北イベント」に出てくる強敵（ラスボス）なんだろうな、と心なしか思ってしまったのだった。

危険なものは分解するに限る

達也たちと姫梨、由夢、修二との邂逅。お互いに自己紹介をした後、昼食を挟んだ後で想子制御の練習法を教えた。無論有機物干渉に関わる部分が多いために、秘匿事項となるのは言うまでもないが。

「うう、家族には絶対に言えないじゃない……」

「それは僕もだよ……」

そういうところには目聡い父親の存在を思い浮かべつつ、エリカと幹比古がそろって自身の家族のことを漏らしているが、意識を集中させて制御の練習をしている。すると、どこかぎこちない様子を見せるレオに気付いて悠元が声をかけた。

「レオ、どうしたんだ？」

「あ、いや。言われたイメージは分かるんだが、どうにも引っ掛かるような感じがしてな」

「ふむ……レオ、全身から汗を捻り出すイメージを浮かべてくれ」

その原因に心当たりがあったので、悠元はレオの背中に手を当てる。そして、レオが言われた通りのイメージで想子制御を行った瞬間、レオの全身から膨大な量の想子が吹き荒れた。これには周囲の人間だけでなくレオ自身も驚いていたが、言われた通りに制御していくとレオの想子が収まった。

「凄かったね、今のは」

「レオ、どうだ？　まだ違和感はあるか？」

「いや……ってか、寧ろ体が軽く感じるな」

想子を循環させる制御は単に魔法を制御するだけのものではない。蓄積し過ぎた想子は魔法の制御だけでなく肉体や霊子体にも大きな影響を及ぼすため、それを定期的に循環させることで想子の根詰まりを解消させる意図も含まれている。

とりわけ収束系魔法を好んで使う人には顕著に見られる現象で、新陰流の場合は硬化魔法を使った後に、別系統の魔法を使用した鍛錬で余分な想子を抜き出すという手法が取られている。

この辺りのことは開祖である上泉信綱がそれを一番理解していた

ようで、流石天然の超能力者というべきなのかも知れない。
「……成程、こういう感じか」
レオは想子の〝過剰活性〟に陥っていたため、その詰まりを解消した結果として大量の想子が吹き荒れたというわけだ。レオはすぐに想子制御の練習を再開すると、今までよりもスムーズに制御できているのが見て取れた。
これを見て面白くなさそうな表情を見せているのはエリカだった。
「何でアイツが……」
「エリカちゃん、制御が乱れてるよ？」
「わ、分かってるわよ！」
そんなエリカを制御できる立場になりつつある美月も、練習初日だというのに、制御だけで言えばエリカを追い抜いている。これだけでも十分凄いが、もっと凄い奴もいる……悠元はその人物に視線を向けた。
「ほのかに雫、姫梨と由夢、修司に深雪も流石だが……お前が一番飲み込みが早いな、達也」
「コツは大方掴んだからな」
「まあ、お兄様ですから」
それで納得できてしまうのは流石原作主人公（おにいさま）という他ない。ともあれ、一朝一夕で伸びる代物ではないため、これから毎日練習することは確定事項となった。幸い神楽坂家の人間となったことは大きいだろう。
夕食は神楽坂家の食堂となるのだが、和風の外見とは裏腹に、食堂は和を基調としながらも現代風のテイストが混じったような趣であった。大きなテーブルが一つあり、そこに座るという感じは貴族の会食みたいなものだが、椅子ではなく畳の上にある座布団に座るのはこの国らしいと思う。
そこには悠元や達也たち、姫梨や由夢、修司に加えて千姫の姿もあり、加えてもう2人の存在があった。無論、悠元からすれば顔見知りであり、それ以外の面々も知っている人間であった。
「改めて、この度上泉家当主を襲名した上泉元継（かみいずみもとつぐ）だ。今日は神楽坂家

当主様の招待に与る形となった」
「現当主の妻となります上泉千里と申します。皆さんとは九校戦でお会いして以来なので久しぶりとは言えませんが」
悠元からすれば血縁上の兄や従姉で、悠元が神楽坂家を継ぐことで元継とは義理の従兄弟の関係になる。この2人をこの夕食の場に呼んだ理由を千姫が説明した。
「ここにいる皆さんは現代魔法を学んでいるために分かりませんでしょうが、私たち古式魔法の面々は皆さんのことを注視しております。ああ、別に皆さんに対して釘を刺したいわけではありません」
「……遠回しに話せば要らぬ誤解を受けるかと思いますよ、〝母上〟」
「そうですね。私も余計な諍いは御免被りたいものです」
悠元に母親と扱われたことに機嫌を良くしたのか、千姫は説明を続ける。
魔法師に関するあらゆる問題を解決するためには、現代魔法や古式魔法といった括りに囚われてはいけない。その第一歩として、現代魔法の象徴である十師族直系から古式魔法の大家の当主を選ぶ……血縁にしても、当人の能力にしても問題はない。その意味で身内の魔法技能を上げる方向に持っていったのは良かったと思う。
達也たちを一緒に招いたのは、悠元の友人として顔合わせをしたいという千姫の意向からくるものだった。千姫本人が実際の年齢を口にすると、まるでこの世のものとは思えない何かを見ているような感想が飛んできたのは言うまでもない。
食事の後、悠元は元継と千里の2人と会談することとなった。元々は同じ家の兄弟だったが、今ではお互いに古式魔法の大家――「護人」の立場となった。すると、元継は笑みを漏らしながら話し始めた。
「ふっ……まさか、兄よりも上の立場になるとはな。神楽坂家当主代行の悠元もそう思ったのではないか？」
「まあ、元治兄さんが三矢を継ぐのは既定路線ですから。今更三矢家に戻るということなんて難しいでしょうし、下手に十師族の諍いに巻き込まれるのは御免です」
「それは、悠元君の能力も含めてのこと？」

元治自身も現状、同年代の十師族からすれば上から数えたほうが早いレベルの実力を持つが、三矢家の魔法師という意味では、元継と悠元は元治を抜いている。これは千里も理解しているからこそ、彼女の問いかけに頷いて答えた。
「確かに、俺や悠元が今戻ったところで足の引っ張り合いになりかねん。そんなゴタゴタなど御免だからな……三矢の力を殺ごうと考える連中はいるやもしれんが」
「主に十山家でしょうね。まあ、侍郎や詩奈を利用するつもりなら、明日の朝日を拝めなくするつもりですが」
「物騒だけれど、私にとっても可愛い弟や妹みたいなものだし、吝かではないですね」
「お前らなぁ……ま、月見酒すら出来なくしてやることには同意するが」
平気で物騒なことを言っているが、あくまでも身内を害しようなどと考える連中限定である。あれだけの制裁を受けたのだから、いい加減大人しくなると思いたいが、国防軍の情報部のこともある。場合によっては問答無用の〝粛清〟も止むを得ないだろう。
「ところで悠元、試しについて何か言われたか？」
「拒否するな、としか言われていないかな。元継兄さんは何か知ってるの？」
「まあ、一応な……とりあえず、頑張れとしか言えない」
憐れむような表情を見せた元継と、顔を赤らめている千里の様子からして「そういう類」なのではないかと推察できてしまった……これが間違っていることを切に願いたいと思う。
すると、元継がとあることを問いかけてきた。
「悠元。どうやら友人たちにもお前の鍛錬法を教えたようだが……その意図はどこにある？」
「論文コンペのこともあるけど、今後のことを考えた場合、彼らに古式魔法の知識を教えないと大変なことになる。爺さんや母上はその辺りを鑑みて、俺と兄さんを当主や代行の立場に据えたんだろう」
原作知識ありきの部分も存在するが、それ以上に大陸の道術や方

術、果ては「パラサイト」のこともある。その部分で自分自身がどこまで関与すべきか悩んでいる部分は多い。ならば、どう動いても最悪の事態を回避できるように、彼らを強くするというのは一つの選択肢としてありだろう。
「無論、秘匿すべき部分は隠すけど……秋辺りには大亜連合が動く。仲介役は〝周公瑾（しゅうこうきん）〟という大陸系の人物で、春と夏の一件の裏には奴が関与していた」
「まるで黄泉返りでもしてきたような名前だな。国単位で動くとなれば、派遣される奴次第で本気度も窺えるな。俺の勘だと〝人喰い虎〟あたりは出てきそうなものだが……今すぐ排除はしないのか？」
「その後、冬は東がきな臭くなると聞いている。そこでゴタゴタが二重三重になるのは避けたい」
　排除できることならしておきたいが、大亜連合の後はＵＳＮＡ絡みの一件と続くことは間違いないと『星見』が予見している。ならば、ひとつずつ丁寧に排除するのが良いと判断した。
　古式魔法の知識を与えたり鍛錬法で強化することは、超能力から魔法開発の先進国であるＵＳＮＡや、古来の術式に長けている大亜連合への対策だけでなく、十師族で最も古式魔法に精通している九島家に対する布石もある。
「あの国がですか……そうなると、古式魔法にも精通している九島家の扱いには慎重になるべきですね」
「場合によっては、上泉と神楽坂で古式魔法の術式提供もしなければならんということか。そうなると、提供先は四葉と七草に十文字……実家は問題ないだろうが、念には念を入れよう。矢車家には爺さん経由で話すほうがいいだろうな」
　「パラサイト」の一件以降において、九島家の動きが今後の動きに影響しかねない。現代魔法では対処不可能な部分も出てくるため、その辺の対応はしていくこともお互いに話し合った。その上で、悠元はもう一つの提案を元継にした。
「で、さっき話した周公瑾の上にいるのが〝七賢人〟顧傑（グ・ジー）――『ジード・ヘイグ』とも呼ばれる奴で、爺さんが目の敵にしている人物だ。そ

いつが動いた時に、民間人への被害を極力無くしておきたいんだけど……」
「――――でしたら、神楽坂家の系列のホテルを使うといいでしょう」
悠元に救いの手を差し伸べるように千姫が声を掛けてきた。箱根を含めた伊豆半島にはいくつかの系列のホテルがあり、その一つにターゲットを集中させるのがいいと提案した。
「よろしいのですか？」
「相手は七賢人となれば、こちらもそれ相応の準備が必要でしょう。他国の人間を平気で実験材料にする連中の生き残りですから。ところで、それ絡みと言ってはなんですが……悠君にお渡ししますね」
千姫がそう言って渡したのは通信端末であった。千姫が言うには秘密裏に渡してきたものであるが、明らかに出所不明の代物を使う気にはならないと判断して悠元に手渡した。千姫の台詞からして、これのアクセス先というのはひとつ心当たりがあった。
「もしかして、これは『フリズスキャルヴ』の専用通信端末ですか？」
「ええ。一度だけ試しに使ったところ、明らかにこちらの情報を吟味するような〝悪意〟を感じたので、それ以降は一切使っていません。どう扱うかは悠君にお任せします」
天神魔法には通信端末の特定を困難にすることも可能だが、それを電子システムに組み込むという技術は実用化していない。『五芒星』についても魔法師だからこそ使えるシステムであり、非魔法師でも使える暗号通信システムが必要だと考えた。現状においてＵＳＮＡが……いや、エドワード・クラークがどこまで「トーラス・シルバー」のことについて踏み込んだかは分からない。
悠元は徐にその端末を空中に放り投げると、「オーディン」を構えて端末に向けて引き金を引いた。すると、端末はまるで空気の中に溶けていくように消え去った。
「悠元、消し去ってよかったのか？」
「危ないものが第三者の手に渡るよりはマシですし、それに『フリズスキャルヴ』の暗号強度はもう分かってますから……というわけで、兄さんと母上にこれを渡しておきます」

そう言って手渡したのは音声通信用のレシーバー。これには色々秘匿すべき技術が山盛りのため、個人の最適化が必要だと話した上で使い方を説明する。これは『五芒星』を組み込んだ暗号通信システムが採用され、現在国防軍で使われている暗号通信よりも桁外れの強度を有している。千里に渡すべきか悩んだが、彼女は必要であれば元継から聞いておくと断った。

「トーラス・シルバー」のことについても併せて説明しておいた。ここにいるのは上泉と神楽坂の人間だけであり、トーラス・シルバーの影響力も理解できるからこその根回し。

実を言うと、メディアがこぞって特集などで取り上げた際に、ＦＬＴから「トーラス・シルバーに関する不確定情報の流布を行った場合、然るべき措置を講じる」という通達を3度も送付したが、メディアは視聴率稼ぎという自分勝手な理由でそれを無視した事実がある。

それを「見ていない」で片付けたら、世界に名を連ねる魔工メーカーのＦＬＴに対する越権行為、もしくは業務妨害で追及することも可能。その行き着く先はＵＳＮＡへの釘差しの布石。「ディオーネー計画」を含めた対外政策を有名無実化するためのもの。

それと並行して「ＥＳＣＡＰＥＳ計画」の立案も進行中であり、そのための根回しは中学時代に培った剛三絡みの人脈からコンタクトをとっている。

「お前が『トーラス・シルバー』の片割れと言われると納得できる所業だな。今後はこの通信機で連絡を取ることにしよう」

「そうしてくれると助かります」

これで上泉家と神楽坂家の通信体制の第一段階は整った形となった。

細かい打ち合わせもそこそこに悠元は宛がわれた部屋に戻ると、４人分の布団が敷かれていた。それが敷かれてもまだ余裕のあるこの部屋には驚きを隠せないが、悠元は隣接する浴室のシャワーで汗を流すと、用意されていた下着と寝巻に着替えて、真ん中あたりの布団に潜り込んだ。

（まだまだ解決すべきことは多いけど、一先ずは小休止かな……）

思いの外疲れていたのか、悠元はそのまま押し寄せてくる眠気に身を委ねたのだった。

婚前交渉は突然に

「……」

真夏に布団で眠れなかったわけではない。寧ろぐっすりと眠れていた。だが、妙にスッキリとした気分なのは否定できない。しかも、寝る時は寝間着を着ていたはずなのに、起きた時には何も身に纏っていなかった。

(妙な夢だったな……でも、拒否するなとか言われたし……)

妙な夢とは、自分の視点を見ているような夢で、明らかに何も纏っていない深雪や雫、姫梨が抱き着いてきたのだ。肝心な部分はアニメとかでよくある〝不思議な光〟で隠されていたが。

ここで、ふと両脇の布団を見てみると……ゆっくり眠っている三人の女子がいた。そのうちの一人は肩の部分が見えているのだが、明らかに下着を着ていない。布団をめくって見るというのも相手に失礼だと思い、静かに起き上がる。

「……想定していたとはいえ、これはねえよ」

一応[天神の眼]で確認したところ、想定通りの展開となっていたことに頭を抱えたくなったが、ひとまずそのままシャワーを浴びて服を着ると、ゆっくり寝かせてやろうと思いながら部屋を後にした。

すると、その出会い頭に千姫が姿を見せた。

「おはようございます、母上」

「おはよう、悠君。その様子だと気付いたようですね?」

「自ずと、といったところは否定しませんが。ですが、よろしいのでしょうか?」

同じ部屋の布団に寝ていたのは深雪、雫、そして姫梨の三人だった。敵意や悪意はともかくとして、特にそれを連想させるような感覚はみられなかった。すると、千姫はその辺を説明しながら移動することとなった。

「特殊なお香を用いて、悠君の力を試したのですが……正直、予想以上でした。隠しカメラで様子を見ましたが、神楽坂の名に恥じぬかもしれません」

「……婚前交渉のラインを思いっ切り踏み越えているのですが」
神楽坂家に伝わる秘薬の一つで、男性としての力（子孫を残すための力）を試すために使ったとのこと。だが、千姫の予想を超えてかなり精力的にハッスルしていたと話す。というか、カメラを仕掛けてその様子を観察するって普通じゃない気がする。まあ、魔法使いに常識を求めるのが間違っている気もするが。
そもそも婚前交渉に含まれそうな案件なのだが、これも問題ないと千姫は話す。
「問題ありませんよ。本人たちには予め了承を得ていますし、あの三人は神楽坂家の血縁でもありますから」
「姫梨は分かりますが、深雪と雫もですか？」
千姫の妹が鳴瀬家に嫁いでいて、その彼女の孫が雫にあたる。そして、神楽坂家の先代当主の弟にあたる人物の名は東山元英（ひがしやまもとひで）……その息子にあたる人物の名は四葉元造――――四葉家の先々代当主であるため、達也と深雪は神楽坂家の傍系ともいえる。
一応言っておくが、移動型の遮音の結界を張りながらなので、この辺の話は二人以外に聞こえていない。
「婚約の序列については、深雪さん、雫さん、そして姫梨の順となります……まあ、これも現段階の話ですが」
序列に関しては九校戦での成績を勘案した結果だと話す。神楽坂家の直系を一番上に置かなかったのは、本人たちの恋愛事情を鑑みたとのことらしい。
上位三人の序列変動は起きないが、序列の格付けは増えていくと言いたげな千姫に尋ねた。
「現段階？　まだ増える、とか言いませんよね？」
「悠君の精力だと三人だけじゃ耐え切れない、と結果が出ましたので」
「……はい？」
予め言っておくが、そんなことを言われても実感が湧かないし、そこまでの甲斐性が自分にあるとは思えないからだ。
正直なところ、婚約者のことはある程度想定していたし、かつて婚約破棄された一件のこともあるし、三矢家にいた時も元から婚約に関

してのことは少しばかり聞いていた。バレンタインにおける本命の割合からすれば、自分がどう見られているかは客観的に把握していた。

いくら『複数の女性との婚約を想定している』と事前に言われていても、いきなり複数の女性と関係を持つ段取りに遭遇するだなんて誰も予想なんてできない。元継や千里との会話でその可能性は想定していたが、有り得るはずがないと……どうやら常識は悠久の彼方へと去ってしまったようだった。

下手に体を重ねるような事案となれば、高校生である自分らに悪影響を残しかねない危険性がある。魔法使い自体早婚が望まれていたとしてもだ。

その辺の対処を天神魔法絡みの秘術で対応可能なのは、この魔法を考え付いた人たちも色々苦労していたのだろうと思わなくもない。なお、その辺を考慮しての事なのか、使ったお香には最後の一線を防ぐ効力が含まれていた、と千姫がそう説明した。

「三人が起きましたら、改めて婚約者の顔合わせを行います」

「普通は順序が逆のような気がしますけど……分かりました」

千姫と別れた後、悠元は屋敷の裏手にある裏山を走っていた。普通に駆け上ったりするのではなく、魔法を駆使して木の上に登ったりなどを繰り返していた。

この辺の動きは新陰流剣武術の修行で自然と身に着けたものだが……ふと、見知った気配を感じて振り向くと、そこにはトレーニングウェア姿の達也がいた。

「おはよう、達也」

「ああ。おはよう、悠元」

聞けば、制御訓練と運動でどこかいい場所がないか、と千姫に尋ねたところ、ここを紹介してもらったと話す。流石に九重寺での体術の訓練はできないので、軽い運動ぐらいだと説明した。

「木の上を飛んでくるのは、流石に軽い運動の範疇を超えてると思うぞ？」

「分かってはいるんだが、師匠は平気で要求してくるからな」

「(やっぱあの坊主、一度沈めないとダメだな) 折角だし、軽い手合わせぐらいなら付き合うけど……どうする?」
「……お願いする」
　そうして始まる悠元と達也の手合わせ。最初は軽めのつもりだったのだが、達也の負けず嫌いから次第にヒートアップし、最終的には達也が地面に横たわっていた。流石に武術の達人クラスと認められている悠元相手には八雲と違う意味で大変だと実感していた。
　悠元は魔法で達也の服についた土埃を落としながら話しかける。
「あのさぁ……途中から相手を仕留めるような動きになったから、流石に命の危険を感じたんだが?」
「すまない、反省はしているつもりだ。しかし、本当に強いな」
「爺さんは子や孫に甘くても、武術だけは容赦なかったからな」
　その修行風景はとても人に見せられるようなものではない。例えて言うなら、著名な海賊漫画にいる毬藻頭とか言われる剣士の修行のようなものに近い。言っておくが、同じ上段クラスの人間でもそんな練習はやっていない。
　理由は『真似できる人が皆無である』からだ。
「悠元。深雪は色々手の掛かる妹だが、見放さないでやってくれ」
「仮にそうなったら、お前から[質量爆散(マテリアル・バースト)]が飛んできそうだ。間違ってもそんなことはしないと約束する」
「お前は俺のことをどう思っているんだ……いや、言わないでくれると助かる」
　原作とは違って、深雪のブラコンの度合いはマシな範疇に落ち着いている。その反面、彼女の母親に気に入られているという案件も抱えることになる。その意味では達也も自分の母親から恋愛事について心配されているそうだ。
「流石に司波家でそういうことはしたくない。というか、お前に無用のストレスを与えたくない。普通は無理だが、せめて平穏な学生生活を送らせてほしいと思う」
「……すまない」
「いや、いくら身内絡みとはいえ、達也が謝ることじゃないと思うんだ

が……」
婚約者の一件は四葉家の次期当主が決まってから正式発表となる。なので、深雪たちとは表向き〝仲の良いクラスメイト〟という形に落ち着いてくれればありがたい。流石に達也がいる前で今までの露出度が更に上がるということは……ないと信じたい。
達也がいくら感情に乏しいとはいえ、ストレスを感じないというわけではないのだから。
「多分、深雪のことだから自重しないような気がしてな。母上や叔母上が面白がる未来を思うと……先に謝った」
「諦めろと？」
「……」
「おい、黙るなよ達也」
この後に出た達也の言葉はというと、「うちの家系の女性陣は良く分からない」というものであった。四葉の係累である達也に分からないと言われてしまっては、悠元ですら「分からない」と諦める他なかった。
朝食後、悠元は千姫の仲介という形で改めて三人の婚約者と顔を合わせることになる。というか、三矢家や上泉家で教わった婚姻の段取りを無視していた流れというのには驚きしかなかったが。その三人の婚約者――深雪、雫、姫梨に対してこちらも自己紹介をする流れとなった。
「神楽坂家次期当主、神楽坂悠元だ。とまあ、自己紹介の流れはここまでとして……」
「何か疑問でもあるの？」
「疑問というか、階段すっ飛ばしにも程があるんじゃないかって思うんだが。普通はお見合いとかで面識を持ち、互いに交友を深めてから一線を越えるというのが常識的な段取りだろうに」
「あはは……否定はしませんが、お祖母様はそう言うことを面倒がる性格ですので」
昨晩のことがあるからか、三人のほうはどこかぎこちない様子を見せていた。なので、変に壁を作ってほしくないという意味を込めて言

い放った言葉に姫梨が苦笑を浮かべた。
　どうやら、女子三人でお互いの事情について話していたようで、深雪が四葉家の係累だということも聞き及んだとのこと。雫と姫梨からすれば逆に納得できたようで、その辺は秘密にするということらしい。
「それで、深雪は何か不満でもあるのか？」
「いえ、そういうことではなく……この先、悠元さんの妻が何人になるのかが気になりまして」
　現状は深雪、雫、姫梨の三人が確定として、今後増える可能性として候補に挙がるのは、一条家だと将輝の妹である茜、七草家でいうなら泉美、五輪家で言うなら澪も候補に挙げられるだろう。
「私も気になる。で、どうなの？」
「それを聞かれても……寧ろ俺が知りたい最大の疑問だよ」
　何せ、この時点でも十師族の一角である四葉家、国内有数の財閥グループを有する北山家、そして神楽坂分家の一つである伊勢家から娘を娶るだけでもお釣りが出ているレベル。
　ここから更に増やすとなると、間違いなく神楽坂家経由での婚姻の可能性が大きいが、正直未だに良く分からない家の繋がりなど、把握しようとするだけで頭が痛くなりそうな案件だと思う。
「最低でもエリカはまずないだろう。向こうも『悠元みたいな存在だと、正直私がもたないわ。親友程度の付き合いなら歓迎だから、程々が一番よ』とか言ってたし。それに関して取り繕う必要もないからな」
「エリカらしいわね」
「私は他校なのでそこまでではありませんが……あ、そうでした。夏休み明けには一高に転校することになりましたので」
　神楽坂家の事情を鑑みるなら姫梨の転校は妥当なものである。伊勢家自体は彼女の兄が継ぐことになるので問題ないと話す。なお、魔法師としての能力は姫梨より劣るとのこと。
「本当に急だね。ほのかは達也さんが気になってるけど……深雪としてはどうなの？」

「お兄様にいい出会いがあれば、私としては吝かではないというところよ。ほのかが本気でアタックするのなら、友人として応援するわ。それはそれとして、一番気になるのは……七草会長ね」
　正直なところ、泉美を考えるなら真由美の扱いをどうするつもりなのか……気になっているのは否定しない。あれだけ積極的にスキンシップを図ってくるのはいいとしても、姉妹で同じ人に嫁がせるのは色々問題が出てくるだろう。香澄とは苦労人的な友情が芽生えているかもしれない。何せ、香澄とはよくネットのチャットアプリで話をしているが、会話の大半は姉および双子の妹絡みのことになっているほどだ。
　その意味で言うなら深雪絡みの問題も残っているわけだが。森崎あたりも怪しいが、真っ先に名前を挙げるとするなら将輝になるのは間違いない。
「七草家の現当主がどんな策略を考えてるかは知らんし、考えたくもないが……その意味だと深雪も他人事じゃ済まないだろうな」
「確かに。三高の一条家（クリムゾン・プリンス）の御曹司は深雪を熱い眼差しで見てたし」
「深雪さんは人を惹きつけますからね」
「二人とも……私としては、悠元さんに嫌われないか不安で一杯ですのに」
　雫は九校戦のダンスパーティーで将輝と深雪（プラス達也）のやり取りを見ていたようで、姫梨は懇親会の時の雰囲気で感じ取っていたと話す。やや不安げな表情を見せる深雪に対して一つ息を吐いたうえで語る。
「正直に話せば、深雪に好意があるのは事実だ。下心を抱いていたのも否定できない。その結果が昨晩の有様だ……俺自身、他の男子連中と大差ないかもしれんな」
「そんなことありません！　悠元さんは魔法師としての私ではなく、私自身を見てくれています！　だから身も心も捧げたいと強く想うほど好きになった……あっ」
　深雪のある意味自爆に近い発言で、深雪は赤くなった顔を両手で隠していた。なかなか見ることのない深雪の様子に雫が思わず笑みを

零した。
「流石悠元だね。でも、そうなると正式に婚約を発表したら大変なことになると思う」
「何が流石なのかは置いておくが、初めは婚約者募集ということになるだろうな。まあ、俺だけでなく達也もそういった流れになりそうだが……察することはできるだろうが、秘密にしてくれ」
「大丈夫です。私の場合は祖母から聞き及んでいますので」
達也は制限こそ受けているが、まぎれもなく戦略級魔法師のひとり。これで完全な想子制御まで身につければ、仮想魔法演算領域であっても汎用の現代魔法で５００ｍｓを切ることも難しくはないだろう。
まだ恥ずかしさで身悶えている深雪の頭を撫でると漸く落ち着いたようで、深雪は余計な言葉を発することなく座りなおした。その反面、雫と姫梨がやや不機嫌となっていたので、あとでフォローすることも織り込んだ上で話を続ける。
「俺が神楽坂の次期当主となることは、明日に日本魔法協会から十師族と師補十八家、一部の百家に通達されることとなる。吝かではないんだが、色に溺れるのは流石になぁ……」
「え、えっと……」
「まあ、分からなくもない。むしろ私たちがもたなかったから。姫梨なんて凄かったし……主に胸が。妬ましい」
「雫!?」
昨晩の既成事実があるとしても、出来ることなら婚約相手を大切にしたいし、それに学生生活をリタイアするなんてことは避けたい。色々騒がしいが、楽しいことは事実だからだ。
そんな思惑を込めた悠元の言葉に深雪は苦笑を浮かべ、雫は昨晩の事実の一端に触れ、それを聞いた姫梨は何かを思い出したように顔を赤らめつつ雫がそれ以上言わないように窘めた。
◇　◇　◇
悠元が婚約者との顔合わせをしていた日の翌日、燈也は六塚家の本屋敷にいた。その経緯はというと……九校戦の祝賀会の翌日、学校に

戻ってからそのまま居候している新発田家に帰宅すると、エプロン姿の琴鳴が出迎えた。
「おかえり、燈也君」
「ただいまです、琴鳴さん。勝成さんはまだお仕事ですか？」
「ええ。そうそう、燈也君に六塚家からお手紙が届いていたの」
「手紙ですか？」
珍しい、と燈也は内心で呟いた。自分の姉もとい六塚家現当主である温子は九校戦の観戦に来ていたが、その際にスピード・シューティングとクラウド・ボールの成績を褒めてくれた。それ以上のこともなく仙台に帰ったので、これ以上の用事もないと判断したかったのだが……燈也は亜実から旅行のお誘いを受けていたのだ。
ともあれ手紙を確認すると、一度実家に帰ってこれないかということになった。一応亜実にその辺を加味できるか確認すると、亜実からは逆にその日の宿が取れなくなったそうで、出来るなら六塚家に泊まれないかとお願いされた。
なお、温子の返事は「大丈夫よ、問題ない」と返ってきたことに燈也は頭を抱えたくなった。
「六塚殿。此度は急なお願いをしてしまい、本当に申し訳ありません」
「構いませんよ、十文字殿。貴方のような立場では色々大変かと存じますが、それでも自由なうちに経験を積むことは決して悪いことではありませんから」
誘われた旅行は元々勉強合宿を兼ねていたため、亜実以外だと真由美と摩利、それに克人も一緒だった。悠元とは別の意味で目立っていることに関して内心で独り言ちたい気分の燈也に対し、克人と温子は十師族らしい会話を繰り広げていた。
すると、温子は克人に対してこう言い放った。
「近々、隣にいる燈也を六塚家の次期当主に推し、次の師族会議までに当主の座を譲ります。十師族は強き者が選ばれるのが道理ですので」
「……理解できなくはないつもりです」
克人がそう歯切れも悪そうな口調を述べたのは、克人自身の家にも関係している。

学生の身でありながら当主代行を務めているのは、十文字家現当主である十文字和樹（かずき）の魔法力の減少が大きな要因である。その辺の事情は六塚家の当主である温子にも詳しくは知らない。だが、燈也は十文字家の現当主の話を聞いてある程度の推察をしていた。

――自身が持つ魔法演算領域の許容範囲を超えた魔法力の行使。

他の師族から魔法技術の提供を受けていたとしても、ただでさえ『ファランクス』は多種類・多重を求められる複合術式。それを行使し続けるとなれば並みの演算規模では到底不可能だ。それは『ファランクス』を切り札にしている十文字家自体も例外ではない。

温子が推測するには、次の師族会議で十文字家の当主交代が起きるのは間違いないと考えている。なので、それまでに燈也を六塚家の当主に据えるつもりのようだ。

「これは内密のお話ですが、燈也は3年前に佐渡を訪れていて、その際に遭遇した新ソ連の兵士を一人残らず殺しました」

「それは初耳です。一条家からの報告では、謎の少女がその兵士を躊躇うことなく殺したという証言があがっておりましたが……六塚、本当なのか？」

「ええ。定期船の渡航記録には偽名で乗船していました。流石に六塚の名で乗れば、研究所がある関係で面倒でしたので」

燈也がその兵士の装備などを話すと、聞いた情報と一致したので克人は本当のことだと判断した。実力を示している以上、燈也が六塚家の当主になっても問題はないということになる。

温子は事実を織り交ぜて克人に話すことで、師族会議における燈也への継承をスムーズに行いたいという思惑だろう。引退後は表の職業である地熱発電の会長職に就いて、魔法技術による発電能力の向上を目指すとしている。

すると、ここで六塚家の使用人が部屋の中に入り、温子に手紙が渡された。彼女が静かに手紙の中に入っていた便箋に目を通すと、一つ息を吐いた。

「燈也、それに十文字殿。今七草さんと渡辺さん、亜実さんをお呼びしていますので、暫しお待ちいただけますか？」

「それは構いませんが……手紙の内容に関わることでしょうか？」
「ええ。そう受け取っていただいて構いません」
数分後、部屋に招かれた真由美と摩利、そして亜実が席に着いたことを確認すると、温子は襟を正すような素振りを見せた上で話し始めた。
「こちらは先程、魔法協会より送られた書状です。内容については、上泉家および神楽坂家の次期当主についてでした」
上泉家という言葉に克人も少し表情が強張り、真由美と摩利も表情を険しくさせる。春の一件がある以上、そういった反応は仕方ないと燈也は思う。その一方、その辺の事情を詳しく知らない亜実が首を傾げていたことに、少し癒された。
「上泉家の次期当主は上泉元継。三矢家現当主の次男が婿養子に行き、つい先日当主を襲名したそうです。そして、神楽坂家の次期当主ですが……三矢家三男の三矢悠元君です」
「……悠元が、神楽坂家の次期当主にですか？」
「ええ。書状の中には、上泉家前当主――剛三殿の夫人が神楽坂家現当主の実姉、と記されています。上泉家にもその旨が触れられていますので、まず間違いないでしょう」
温子は、神楽坂家との関わりはないが上泉家との関わりを有している。魔法協会を通しての通達ではあるが、手紙そのものは筆書きによる直筆の手紙。それを二家揃えてとなると、大分前からその辺の話を詰めていた可能性があると睨んでいた。
「三矢……いや、この場合は神楽坂と言うべきか。七草はどう思う？」
「本音を言えば、悠君の実力は十師族でもパワーバランスを崩しかねないと思います。十師族の枠組みから外れたことは、つまり彼を師族会議でコントロールさせないと言っているに等しいでしょう」
「七草さんの言うとおりかもしれません。彼の力が明るみに出た以上、何かしらで囲い込みを狙いたい家は少なからずあります。それを阻止したのは『護人』――十師族の更に上の存在で、主以外の何者にも干渉を受けない。国の守り手である神楽坂家と上泉家の２つだけです」

温子が護人の存在を明かすと、真由美と摩利、亜実は驚いていた。克人と燈也はそれぞれ話を聞いていたため、特に驚くようなそぶりは見せなかった。だが、更に驚くのはここからだった。

「とりわけ、神楽坂家は政財界に強い影響力を有しています。先日の九校戦で彼が見せた魔法は、恐らくその力を内外に示すためのものだったのでしょう」

「……悠元の魔法は文字通り『万能』に近いと思います。僕がスピード・シューティングで使った魔法も彼からの提供でしたから。姉上、そうなると三矢家に変な圧力がかかるのでは？」

上泉家と神楽坂家に養子を送り込んだ三矢家を他の師族が座視しているとは思えない。ましてや、男子はともかく未婚の女子が三人もいる状況だ。加えて三人とも魔法師として高い資質を示しているため、婚姻を結びたいと考えている家は少なくない。

温子も、三矢家現当主の元が師族会議の発言力を強めたい、と考えてそうしたわけではないと踏んでいる。そもそも、七草家のように発言力を強める理由がない。

「実を言いますと、さっき実家からの暗号メールで次期当主の件が送られてきました。婚約者云々のくだりは思いっきり無視しましたが」

「真由美……それで、六塚殿はどうされるおつもりですか？」

ここで尋ねたのは摩利だ。原作とは異なり、渡辺家は三矢家長男の嫁を養女とした実家の立場。百家でも発言力は上のほうになっているため、他人事では済まされない立場だ。温子もそれを分かっているからこそ、摩利の同席を認めた。

「変なことはしないつもりです。幸い、三矢家と四葉家にも良い印象を持ってもらえたのですから、損を被るのは得策ではありません」

何故ここで四葉の名を出したのか、と訝しむだろう。そこで燈也は新発田家のことを含めた上での発言だと推察した。

温子の部屋から燈也が宛がわれた部屋に移動することとなり、真由美は猫かぶりを止めるように言い放った。

「あー、美嘉さんが言っていた意味ってこういうことだったのね。上泉家のほうは千里さんでしょうけれど、悠君は正直読めないわね……

何よ、摩利？」
「いや、婚約者の話となると、お前なら諸手を上げて喜びそうなものだと思ったからな」
「正直に喜べないわよ！　あんのタヌキオヤジの思惑に乗りたくないし、第一泉美ちゃんと本気の話し合いをしなきゃならないのよ！」
「そこまでのことなの!?」
　今の台詞を聞いている限りだと、真由美が悠元に好意を持っているのは事実。だが、その最大のハードルが自身の妹という問題を抱えている。これには亜実も驚きつつ声を上げた。
「六塚はどう考える？」
「そうですね……悠元は深雪や雫と仲が良いです。深雪は分かりませんが、雫は立場的に問題ないでしょう。場合によっては複数の家と縁談を結ぶことも考えられますので、二人ともという可能性はありえなくもないかと」
　優れた力を後世に残すというのなら、現行の法体制を多少なりとも無視する方向になるというのが燈也の出した結論。神楽坂家は政財界に強い影響を持っているので、その辺の融通など問題なく行えると判断した。

身内から見れば劇薬、他所から見れば常識外

西暦２０９５年８月１５日。
８月１５日という日は、この国において２度目の世界大戦に敗れ、国の在り方が大きく変わった日。この数日前は３年前の沖縄と佐渡の侵攻があった日……奇しくもこの一ヶ月はこの国にとって鎮魂の節目である。
そして、もう一つの節目を迎えようとしていた。
「ふむ……」
石川県金沢市の一条家本屋敷にて、現当主である一条剛毅は届けられた手紙の便箋に目を通して考え込んでいた。魔法協会を通して通達された内容は、剛毅としても無視できるようなものではなかった。
「入れ」
「失礼します」
すると、声が聞こえたので入室を促すと、座敷の中に将輝が入ってきた。魔法科高校は既に夏休みに入っており、将輝自身も過ごしやすい私服姿だったが、それを一々咎めるつもりもない。剛毅が声を発する前に将輝が尋ねた。
「親父、一体何があったんだ？」
「先程、魔法協会を通して上泉家と神楽坂家からメッセージが届けられた」
「神楽坂家？」
上泉家のことは３月の臨時師族会議で詳しく聞き及んでいるが、神楽坂家という名前を初めて聞いた将輝はどういった家なのかを分かりかねていた。こればかりは仕方ない、と思いつつも剛毅は話し始めた。
「神楽坂家は『護人』という立場の陰陽道系古式魔法の大家。上泉家もその護人の一つであり、立場としては、この国の全ての魔法師において頂点に立つ存在だ」
「それって、十師族よりも上ということか？」
「無論だ。上泉家が警察省や内情、国防軍に強い影響力を持つように、

神楽坂家は政財界に強い影響力を及ぼす。それこそ、国家元首である内閣総理大臣よりも上の立場だ」
公の権力を持たない十師族に対して、護人の二家は公の権力を捨てていない。兵器として生み出された先の延長上にある師族のコミュニティと、人間としての有り様を捨てていない魔法師では、根底となる考え方も異なる。
「その護人に関わる話だが、上泉家は上泉元継に当主が継承された。彼は三矢家の次男にあたるが、上泉家に婿入りしている。そして……神楽坂家の次期当主に、九校戦でお前が戦った三矢悠元が指名された」
「……あいつが、神楽坂家の次期当主？　ちょっと待ってくれ！　上泉家ならまだ分かるが、古式魔法の家である神楽坂家の次期当主にアイツが、十師族が選ばれるなんて聞いたこともない」
将輝は混乱していた。
同じ十師族だった立場はこの数日で一変してしまったのだ。将輝は現状長男として一条家の御曹司だが次期当主ではない。その一方で悠元は三矢家を離れ、神楽坂家の次期当主として指名を受けた。これには剛毅も同意を垣間見せるような表情を浮かべていた。
「書状にはこう書いてあった。上泉剛三殿の妻が、神楽坂家現当主である神楽坂千姫殿の実姉とな。示し合せの可能性は否定できないが、両家は血縁を強く重んじている。なので、その可能性はないに等しいだろう」
「つまり、三矢家の兄弟姉妹は神楽坂の血縁者になるってことか……三矢殿は何か言っていたのか？」
「何も言っていないが、２日後に臨時の師族会議が開かれることとなった。その提案者は九島閣下となっている……そこで真意を問い質すつもりだ」
問い質す、という強めの口調を使ったが、剛毅は三矢家現当主である元がそれによって強権を揮う可能性は限りなく低いとみている。
むしろ、揮うことなどしなくてもいい。三矢家は、強力な魔法師を輩出した実績を古式魔法の家に養子として出すことで証明した。同

日、三矢家は長女の婚姻について古式魔法の家である矢車家長男と結んだことを魔法協会経由でメッセージとして出した。
　三矢家と矢車家の関係は他の師族にも周知の事実。古式魔法との繋がりを考える以上、その配慮を婚姻として結ぶのは無理のない選択である。こうした意味は、長男である元治への家督継承を完全に決めるという思惑がある。
「そうなると、三矢家を十師族から外すのか？」
「いや、逆だ。上泉と神楽坂の外戚である以上、外すという選択肢は取れない」
　師族会議では、会議を通さずに師族同士での共闘などを禁じている。だが、上泉家や神楽坂家は師族の枠組みにいないため、師族会議を通さずに話したり協力体制を構築したりしても、それに対して咎められる謂れ等無い。
　こればかりは、会議の呼び掛け人である烈と言えども咎めることはできない。ならば、どういった対応が取られるのかということとなれば……恐らく、三矢悠元という存在を十師族から切り離したことについての追及の場となるだろう。
「じゃあ……まさか、アイツを十師族に戻せなんて追及するつもりなのか？」
「俺にそんな権限はないし、そうするつもりもない。だが、烈殿や九島殿、それに七草殿は追及するかもしれない。四葉殿については、正直読めないな」
　どだい無理がある話だと剛毅は睨んでいた。彼の力は九校戦で目の当たりにしたが、将輝を完全に抑え込んだ上で勝利を収めている。しかも、アイス・ピラーズ・ブレイクでは、一条家の秘術である『爆裂』を完全に封じ込める芸当を披露した。
　謂わば抑止力としての存在感を見せつけるだけでなく、古式魔法も難なく使いこなしていた。こんな芸当ができる魔法師はそう多くないが、その中でも悠元は別格の領域にいると率直に感じていた。何せ、現代魔法と古式魔法の複合術式は、世界広しといえども彼以外にできる人間が確認されていないのだ。

その彼を十師族に留め置くのは、ハッキリ言ってしまえば大きなリスクを伴いかねない。下手をすれば、戦略級クラスの魔法制御能力を持ちうる存在を師族同士で奪い合うことにも繋がりかねないからだ。
それこそ、文字通り「血で血を洗う」かのような大事になるかもしれない。
「……確かに、三矢は強かった。あれだけの魔法制御を恙無くこなすのは、俺にも無理だ。間違いなく世界最高峰の魔法制御能力だ、とジョージも評価していた」
「俺もそう感じている。だから、一条家としては彼に対しての追及はしない」
「まさか……いくらなんでも、茜は早すぎるだろう!?」
「落ち着け、将輝。そこは俺自身も道理を弁えているつもりだ」
神楽坂家は次期当主に悠元を指名したが、婚約者の発表はしていない。現時点では白紙なのかもしれないが、そうである可能性は極めて低いと感じている。なので、剛毅は彼に好意を持っている自分の娘との婚約を推すことに決めていた。
「現時点では婚約となるであろうが、他が既に動いている可能性もある。なので、この書状に目を通した段階で、上泉家に悠元君と茜の婚約の打診をした。言っておくが、本人には決して話さないでほしい」
「それは構わないけど」
剛毅としては、目の前にいる将輝にもそういった類の話でもあれば、とは思っている。だが、目の前にいる息子も父親に似てしまったのか、容姿はいいのに異性に対して積極的になれない性格だということに、剛毅は内心で溜息を吐きたかった。
◇　◇　◇
所変わって四葉家の本屋敷。その当主の私室にはその部屋の持ち主だけでなく、彼女の双子の姉も同席していた。テーブルの上に置かれた書状に目線を少し向けた後、彼女――――四葉家現当主である真夜は、その向かい側に座っている人物に目線を向けた。
「姉さんの目論見が半分外された形だけれど、どう思うかしら?」
「それを言うなら真夜もでしょう。というか、上泉家と神楽坂家から

既に話を聞いているのでしょう？　そういう風に言いたげな表情をしているわ」
　真夜の表情を見て少し不機嫌な様子を見せる深夜。だが、そこに加えて秘密裏に悠元と深雪の婚約を結んだことは、深夜にとって喜ぶべき案件であった。
　２日後の臨時師族会議では、恐らく悠元の案件についての追及があるとみられるが、それについても真夜は説明した。これを聞いた深夜はというと、呆れるような表情を見せていた。
「臨時師族会議では、間違いなく悠元君のことについて触れることになりそうよ。四葉（うち）としては、深雪さんの婚約の件もあるから事実確認程度に止める予定よ」
「それは重畳。にしても、先生は何を考えているのかしら……彼という特大の火種を無理矢理抑え込んだら、それこそ火傷じゃ済まないというのに。三矢殿が穏便に出ている時点でそれを察するべきよ」
　悠元の力を間近に接した経験のある深夜の言葉に、真夜も軽く頷きつつ紅茶を口にする。四葉家としては、悠元を神楽坂家に送ったこと自体、相互の承認あってこそだということは既に知っているので事実確認程度の質疑に止める。
　だが、九島家や七草家あたりは十師族としての発言力を高めようとして、師族会議の知らないところで話を進めたという形で追及するかもしれない。
「にしても……次期当主の件、本気であの子を据える予定なのね。まあ、異存はないけれど」
「あら、何か新しい案件でも？」
「楽しそうに言わないでよ。いやまあ、私も楽しんでいるのは否定しないけど」
　深夜のガーディアン（正式には見習い）という形で護衛をしている桜井水波だが、どうやら九校戦の観戦をしているときに、悠元に惚れたと深夜は話した。報告程度に聞いてはいたが、目の前の姉と言い、女性を惹きつける力は正しく「世界に認められている」レベルだと真夜は感じていた。

四葉の次期当主最有力といえる深雪をすんなり外せた理由は、真夜と深夜で決めた5人目の次期当主候補が深雪に匹敵する実力者であり、深雪の賛同を最も得やすい人物の存在あってのことだ。だが、これはこれで一悶着あると確信に近い心境だった。
「彼の力は十師族で御しきれるものじゃない。かえって足枷になりかねないと思うわ。その彼が神楽坂家の次期当主というのは、寧ろ理に適っていると言うべきでしょう」
「ところで姉さん。千姫さんから内密に連絡をもらったんだけれど、深雪さんったら、張り切っちゃったらしいわ」
「司波家での居候生活でよく暴発しなかったわね」
そういう情操教育を施してきたことは深夜と真夜の責任だが、それでも辛うじて踏みとどまっていた深雪がそういうことになったということは、彼女自身の想いの強さなのだろうと思わなくもない。それを耐えきった側である悠元も大概と言うべきだが。
深夜からすれば実の母親なので、娘がここまで特定の異性に対して入れ込むのは、流石に想定の範疇を超えていた。思わず口から出た言葉に対して、こればかりは真夜も同意見であると言わんばかりに苦笑を滲ませていた。
「あの時、彼の初めてをこっそり奪っておけばよかったかしら」
「……それは、流石に悠元君が可哀想よ」
割と自重しない性格である真夜でも、この時の深夜の妖しい笑みと発言に対して窘める羽目となった。もはや娘のことを同じ男性相手の〝恋のライバル〟として見ているのではないだろうかと疑いたくもなってくる。それでも娘には甘い対応となったことからして、深夜も母親なのだろうと真夜は羨ましそうな視線を送っていたのだった。
◇　◇　◇
さらに場所は変わって、神奈川県厚木市。
三矢家の本屋敷において、三矢家の人間……厳密には、上泉家に婿養子となった元継や神楽坂家に行くこととなった悠元、未だ三矢を名乗っていない詩奈以外の兄妹に加えて、現当主の元と夫人である詩歩、そして上泉家の前当主となった剛三が広間に会していた。

相次いでのお祝いムードをぶち壊すかのような臨時師族会議の呼び出しのことを話すと、口火を切ったのは次期当主である元治だった。
「父上、今回の一件は余りに横暴が過ぎると思います。元々三家で話していたことに加え、『三矢の家督争いを避けたい』という元継と悠元の思いを踏み躙る様なものとしか思えません」
「分かっている。私もその辺をしっかり説明した上で、上泉家と神楽坂家を笠に着るような真似をするつもりはないとな」
「あやつめ、あれだけ釘を刺したのに他の師族のことばかり気にしておる……一度ぶん殴ってでも止めるべきかもしれんなあだっ!?」
流石に剛三の台詞は行き過ぎだと、娘である詩歩が剛三に拳骨を落とし、剛三はその痛みで蹲っている。これには周囲の人間が苦笑を漏らしていた。
「お父様は少し慎みを持ってくださいな。にしても、試しとはいえ息子に殺気を向けておきながら、此度はこれですか……呆けが過ぎるにも程があると思います」
「詩歩、お主のほうが余程過激じゃぞ……折角古式魔法と繋がりがあるのだから、孫の治療のために力を尽くす気はないのかと問うたがな」
剛三が話すのは、烈の孫のこと。類稀な才覚の持ち主で、悠元とは別の意味での〝天才〟といえる。だが、悠元は神楽坂家に入ることで、九島家で編み出された魔法の大本に触れることとなる。それを完全に修得すれば、誰の目から見ても悠元がその人物よりも上の実力を有する。
現時点でも十師族の枠に収まらない彼が更に強くなる……それを止めたいという狙いがあるのでは、と剛三は睨んでいる。
そんな烈たちの思惑に対して、美嘉がハッキリと言い放った。
「あれだけ強くなることを煽っておいて、強くなりすぎたら釘差しってバカじゃないの？　そんなことしてたら、国外の連中に飲み込まれるだけじゃない。いいようにされるのは一番納得がいかないし、腹が立つわ」

「美嘉……私も同じ意見よ」
誰かのご機嫌取りのために強くなったわけではない。
ここにはいない元継や悠元も、上泉家や神楽坂家に取り入るために新陰流剣武術や天神魔法を会得したわけではない。
これには詩鶴も静かに頷きつつ、力強い口調で話し始める。
「矢車家に嫁いだ身ですが、私とて誰かに気に入られようとしたわけではありません。何が起こるかわからないからこそ、最低でも自分の身を守るために魔法の力を磨いたのです」
「詩鶴……やれやれ、私は甘やかしたつもりなのだが、どうやら悠元の存在は強烈な劇薬だったようだ」
「今更ですよ、あなた」
この後、悠元の婚約者のことを聞かされた元は椅子から転げ落ち、詩歩はそんな夫をフォローし、美嘉は「なんで弟に先越されるのよぉ！」と叫び、詩鶴と佳奈はその婚約者のことを話し合い、剛三に至っては大笑いしていた。
「……何かあったの？」
そんな喧騒は、騒ぎを聞いて部屋の扉からこっそり覗き込んだ詩奈の言葉で我に返るまで続く羽目となった。

神楽坂当主指名之儀

西暦２０９５年８月１５日。神楽坂家本屋敷の大広間にて、数人の人間が最奥への道を作るような形で正装に身を包み、正座している。その最奥の座には、現当主である神楽坂千姫が普段は身に纏うことのない十二単を身に纏っている。

本来ならかなりの重量になるはずで、成人女性でも数人の侍女の助けがなければ動けない代物を千姫は誰の助けも借りずして軽い足取りで広間に赴き、誰の助けも借りることなく座った。この一連の動きだけでも神楽坂家当主という力の一端を垣間見せている。

「……いよいよ当主指名の式か」

そう呟いたのは、羽織袴を纏っている修司だった。神楽坂家分家である宮本家の中で一際天神魔法の資質があった修司は、実家の家督争いを避けるために千姫へ弟子入りした。その過程で由夢や姫梨と出会った。

すると、その隣にいる着物姿の由夢が呟いた。

「実家の姉や兄貴が出てこないのはありがたいけど、変な期待はゴメンよ……うちには修司がいるっていうのに」

「……ノーコメントでいいか？」

修司と由夢は恋人の関係にある。それを知った千姫は、２人を許婚の関係にしてからというものの、由夢のツッコミ役兼ストッパーとして修司が駆り出されている始末。これも惚れた弱みだと修司は半分諦めた。

すると、入口のほうから羽織袴を着た人物が姿を見せたため、お喋りもそこそこに２人は頭を下げた。

入ってきたのは、神楽坂家の次期当主として指名を受けた悠元であった。今日はその正式な指名式であり、伊勢家をはじめとした神楽坂の主家・分家に次期当主を公表するという大事な儀式。

千姫から数メートルのところで悠元は音を立てないように正座し、深々と頭を下げる。

「神楽坂家第１０７代当主、神楽坂千姫はここに宣誓する。妾の目前

における三矢悠元殿を我が養子とし、これより神楽坂悠元として第１０８代当主に指名するものとする。悠元殿、引き受けていただけるか？」
「謹んでお受けいたします。これより神楽坂の長としての力を損なうことなく、この国のために邁進していく所存にございます」
あまり伝統を重んじないとはいえ、神楽坂家の必要最低限の伝統はいまだに残っている。千姫としては投げ捨てたいところだが、そうは言っても捨てきれないのは神楽坂の人間故なのだろう。
その場にいるのは千姫と悠元以外だと、上泉家の当主である元継と当主夫人の千里、伊勢家と高槻家に宮本家の現当主、千姫の愛弟子である姫梨と由夢に修司、そして深雪と雫の婚約者に加え、古式魔法の繋がりということで幹比古も参列する羽目になった。
なお、ここにいない面々については、今頃箱根の温泉街で観光を楽しんでいる頃である。悠元の前世で知る箱根とは違い、神楽坂家の影響で外観は昔の倉庫を思わせる装いだが、中身は現代風のショッピングモールも存在する。この辺は千姫の趣味が強く影響していると思われる。
次期当主の指名式が終わった後、千姫は悠元を呼び止めた。その対象は悠元だけでなく、元継に修司、由夢と姫梨、そして深雪と雫まで含まれていた。事情を察したのか、千里は幹比古を連れて大広間を後にした。
「さて、神楽坂の神将会もようやく動き出すことができますね」
「神将会、ですか？」
「はい。上泉と神楽坂の７つの家で優れた魔法師を集め、この国の護りとする存在。それが『神将』たるものです」
神楽坂家次期当主である悠元を筆頭とし、上泉家当主の元継が副将、伊勢家の姫梨、宮本家の修司、高槻家の由夢、東山家（四葉家）の深雪、鳴瀬家（北山家）の雫の７人で構成される『神将会』。
十師族は〝最強〟を集めながらも様々な柵を持ちうる存在。だが、この会は既に突出した実力を持つ悠元を筆頭として、優れた魔法師たちをより高みへと登り詰めることも目的の一つとしている。ようは

十師族という公権力を持たない存在では色々な障壁があるため、それを取り払って超法規的活動を可能としたのが『神将会』の設立理由。
近年はあまり機能していなかったが、悠元と元継の存在で一気に現実味を帯びる形となった。その中に十師族の直系である深雪が入っているのは、十師族に対してのある種の配慮だろうと思われる。
現状十師族ということを公表していないからこそ、深雪は十師族の柵に囚われることなく行動ができる、という裏技めいた方法ともいえるが。
「そうなると、深雪と雫にも天神魔法を会得させるのですか？」
「そのほうがよいでしょう。ただ、雫ちゃんの場合は私の妹が掛けた術を解くのが先決でしょうが」
「え？　そんなものがあるの？」
雫が半信半疑といった感じで首を傾げている。深雪も気付いていないところを見るに、恐らく達也も気づいていない可能性がある。悠元の場合はというと、確かに何かしらの封印が雫の魔法演算領域に施されているのは分かっていたが、下手に解除していいものではないと判断していた。
千姫が雫の頭に手を置くと、想子の光が一瞬光った。そして、雫は少し酔ったような様子となり、近くにいた深雪が雫を優しく支えた。
「あ、ごめん、深雪」
「これぐらいは大丈夫よ、雫」
「雫さんの魔法演算領域もこれで十全の力を発揮できるようになりました。ついては、悠元さんに2人の教育をお任せいたします」
「まあ、分かりました。これも神将会の長たる役目なのでしょう」
現状全ての天神魔法を修得しているのは、他でもない悠元ただ一人。深雪と雫を除く他の面々もある程度の修得はしているし、元継は『天照』単体の発動は可能としているが、各々属性の適性があるために悠元が面倒を見るのが最適と述べて、千姫はその場を後にした。この後は神将会で親睦を深める意味合いも含めて話し合えということだろう。
なので、自己紹介をすることになった。

「神将会の長として、最初に自己紹介するか。元十師族・三矢家三男、神楽坂家次期当主兼当主代行を務める神楽坂悠元だ。まあ、公的な場以外では名前で呼んでくれ。堅苦しいのは嫌いだから」
「おっけー、よろしく悠元」
「気軽すぎだろう……でも、祖母さんが気に入った理由も分からなくはないな」
　色々型破りというか、常識外れな部分があるのは否定しない。転生者でもあり、この世界の魔法を誰よりも探求している……というか、自身の能力のせいで勝手に探求されていっているだけなのだが。一応天神魔法による遮音の結界を構築してから話している。その上で元継以外の面々に特殊な通信機を渡した。
　深雪はその通信機の製作者を察したようで、キラキラした目を悠元に向けていた。どの道、「トーラス・シルバー」対策で話しておかないといけないのは当然だが。
「同じく元十師族・三矢家次男、副長にして上泉家当主の上泉元継だ。俺のことも悠元と同様で頼む。普通なら年長者が音頭を取るべきなんだろうが、力があるのは悠元のほうだからな」
「兄さん、新陰流に関しては未だ師範相当で、兄さんとは違って正式な目録を貰ってないんだけど？」
「あの様子だと悠元を総師範にしかねなかったからな。俺と他の師範総出で止めた」
「……感謝する」
　神楽坂家の人間が上泉家の武術の総師範になんかなったら、色々ごちゃごちゃなことになりかねないと元継が説明した。それはご尤も、といった感じで修司も首を縦に振っていた。どうやら、剣術絡みで家督継承のいざこざがあったらしい。
「その気持ちはよく分かるわ。っと、神将会第四席、宮本家三男の宮本修司だ。修司で頼むぜ」
「宮本家というと、二天流の剣術家の家柄か」
「ああ、それと忍術のほうも多少はな。あれだけ綺麗な捌き方をされたのは悔しかったが」

「こっちも忍術は武術の一環で嗜んでいたし、一高に通うようになってからは九重八雲先生の指導も受けていたからな」
　八雲の名前を出すと、修司は羨望の表情を見せていた。遠く離れた九州でも八雲の名を知らぬ者はいないようで、八雲の師たる存在もそこに加わる形となっている。尤も、八雲のところに通っていたのは主に魔法の練習であり、毎回試しと言って飛び道具や体術を仕掛けてくる。あまりやりすぎるようなら『心刃』で飛び道具ごと叩き斬っていたが。
「へえー、あの九重先生のかあ。神将会第五席、高槻家次女の高槻由夢です。あたしのことも由夢でいいから。あと、修司のフィアンセですぴょんっ!?」
「少しは真面目にやれ、阿呆」
「……ボケとツッコミ役か」
「もしくは夫婦漫才？」
「そこの２人、それで解釈しないでくれ」
　由夢に関してはエリカと意気投合していたので、ある意味似た者同士なのだろう。高槻家は出雲大社の管理と守護を任されており、由夢は高槻家でも飛び抜けた実力を有している。下手すれば悠元の嫁候補に入っていた可能性があっただけに、修司と仲が良いのは一安心だった。
　なお、このまま２人を後押しするのは千姫からの伝達事項に含まれている。
「神将会第三席、伊勢家長女の伊勢姫梨です。悠元様の第三夫人候補でもありますが」
「３人目!?　姫梨、そこんところ詳しく！」
「……悠元、大変だな」
「うん、ありがとう」
　同じような目に遭っている兄から慰められるように声を掛けられ、思わず苦笑してしまったのは言うまでもない。
　そして、残る２人の自己紹介となった。
「神将会第六席、十師族・四葉家当主の姪にあたる司波深雪です。皆さ

んのような実力者の集まりに名を連ねることを光栄に思います」
「第七席の北山雫です。母は鳴瀬家の血縁にあたります。よろしくお願いいたします」
　深雪が隠さなかったのは、千姫から婚約者の案件について聞かされた際、神将会のことについても予め聞き及んでいたとのこと。既に知っている悠元と姫梨に雫、剛三経由で聞き及んでいる元継はともかく、修司と由夢は驚きを露わにしていた。
「十師族の直系って……でも、長と副長が元とはいえ十師族だし、あまり驚くことじゃないか」
「そうだな。四葉ってところも驚いたが、現当主と雰囲気が似ていたから逆に納得できたな」
「……あの、それだけなのでしょうか？」
　これには深雪が首をかしげていた。確かに四葉の先々代当主世代のしでかしたことは恐るべきものだが、彼らからすれば「その程度のことは〝正当な対価を相手に支払わせた〟だけ」という認識が護人の系譜の家が出した結論だった。なので、由夢と修司の反応は護人らしい一面を見せただけに過ぎない。
「深雪、これが『護人』の考えなの。確かにやったことは恐るべきことですけれど、四葉の払った代償はこの国の未来ある魔法師たちの可能性を示した。尤も、このことをまっとうに見れていない面々がいるのも事実ですけど」
「まあ、深く考えるなってことだ。少なくとも、ここにいる面子はお前を『四葉』というフィルターで見ないってことだ」
「悠元さん……あ、この場合は旦那様とお呼びすべきでしょうか？」
「……少し気が早いから、普段通りで頼む」
　まだ正式な通達ではないため、ボロが出ても困る。特にあの七草会長（こあくまけいじょし）は勘が鋭いのだ。別に「貴女のような勘のいい女は嫌いです」だなんて言うつもりはないが、自分と深雪は生徒会役員のために顔を合わせる機会は自ずと多い。
　しかし、この分だと将輝が深雪に告白しても成就する可能性はゼロに等しいと思う。ただでさえ、応援してやる気なんて皆無に等しいの

は否定しない。
「それで、通信機を渡したってことは、今後何かが起きるの？」
「大亜連合が動くようだ。現に、横浜の中華街には不法入国者が絶えない」
「横浜って……今年は論文コンペの会場が横浜じゃない」
自治性の高い中華街の特質に加え、難民受け入れによって大亜連合の力を削ごうと考える人間の思惑もあって、警察省の手もそこまでは及んでいない。この辺は以前九校戦絡みで出会った寿和や稲垣から事情を聞いている。
周公瑾が自ら動いて危険を冒す可能性は低いが、決して油断はしない。大亜連合の動きは『八咫鏡』で全て監視下に置いているが、どうやら大亜連合の特殊部隊――――それも〝人喰い虎〟の異名を持つ呂剛虎（ルウガンフウ）が動く可能性が最も大きい。
加えて、オーストラリア国籍に偽装した輸送船もとい軍艦が軍港に停泊していることも確認済みだ。オーストラリアというかその親分的存在であるイギリスも大亜連合に加担している可能性は少なからずあるかもしれない。
イギリス連邦自体が解体したとはいえ、オーストラリアがイギリスの影響下にあるのは間違いない。それは原作における扱いでも証明済みで、戦略級魔法『オゾンサークル』がその最たるものだろう。
これらの動きが顧傑や周公瑾によって引き起こされた可能性も低くはないが、彼らの唆しによって国家単位での動きを見せているというのは、国としての脆弱性を疑わずにはいられない。
少なくとも、周公瑾と顧傑については〝完全消滅〟させることも念頭に置く必要があるだろう。前者によって影響してくるものは九島家の動きになるが、下手に掻き乱す要因は少ないほうが対処もしやすくなる。原作知識から乖離するが、この時点で大分離れてきているから今更だろう。
ただ、急いては事を仕損じる言葉の通り、順番に片付けるのがこの場合は妥当である。変に入り乱れて状況が読めなくなるのは拙い。いくら自分でも処理能力の限界というものは生じるのだから。

「表立って動くのは大亜連合のようだが、ＵＳＮＡ、新ソ連、それに旧ＥＵ西側――――イギリスも加担している可能性がある。いっそのこと、太陽光収束光波でも放ちたい気分だよ」
「……あの、悠元君。そんなことできるの？」
「できるようになったというのが正しい。まあ、戦略級魔法になっちゃうけど」
「さらっと凄いことを……爺さんを止めて正解だな」
詳しくは言わなかったが、『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』をよりバージョンアップさせた戦略級魔法。『質量爆散（マテリアル・バースト）』よりも局地的な破壊に限定し、破壊の際に生じる衝撃波を全て上方に飛ばすことで周辺への被害を一切無くすことに成功している。
入学式の時に超長距離射程の質量物射出魔法を用いたのは、魔法の指向性の実験も兼ねていた。加えて『流星群（ミーティア・ライン）』によって効率的な収束方法を見出し、より強力な魔法に仕上がった。
まあ、ぶっ放したいというのは冗談めいた部分もあるので、それを察した元継は苦笑を垣間見せていた。誰も下手に敵を作りたくなんてないのは同じだから。
「戦略級魔法師は名乗らないのですか？」
「唯でさえあれだけの複雑な術式を使ったから、事実の後追いにしかならないと思ってる。国防軍のために力を身に着けたんじゃない」
過剰な自衛力と言われれば否定できないが、この力で諸外国に喧嘩を売りたいわけではない。小さな国には過ぎたる力だと口出しする者も出てくるだろう。周囲の大切な人間に危害を加えようとした場合、二度と手出しすることなんて無駄だと思わせる抑止力は大事だということも認識している。
国防軍に身を置いたのは、三矢家に対して高圧的な十山家を牽制するためで、十山家がそれ相応の報いを既に受けている状態。剛三が当主を退いても新陰流剣武術総師範の肩書は健在で、彼がより一層自由に動ける意味を理解していない。意味を理解したところで〝時すでに遅し〟なのかもしれないが。
澪を治療して健常者にしたのは、常に使える戦略級魔法として周囲

の目を集めるという思惑を秘めている。その反動として澪が悠元に惚れるということも起きているのだが。
「今後の行動は流れを見て決めなきゃいけないが、その前に臨時の師族会議があるらしい。議題は間違いなく俺の扱いなんだろうな」
「何故、十師族を離れた悠元を議題に……悠元の力が狙いか」
「恐らくな。俺が三矢に戻ったら家督争いになりかねんって分かってないなら馬鹿だろう……分かっていてやってるなら、かなりの悪質犯だ」
　三矢家のパワーバランスでいうなら、長男の元治はそれなりに優秀である。だが、それ以上に突出したのが次男以下の面々だ。恐らく詩奈もかなり優秀な魔法師になるだろう。
　だからこそ、元継は上泉家に婿養子となり、悠元も神楽坂家の養子となることを受け入れた。長女の詩鶴が矢車家に嫁ぐのもその一環だ。ここに詩奈も矢車家に嫁ぐ形となる可能性が高い。
　九校戦後、侍郎は元継によって長い髪をバッサリ切り落とされ、散切り頭になったそうだ。詩奈のほうは、侍郎に対する心境も少しは変わってきたようだ……ブラコンは相変わらずだけど。
「七草も九島も仲の良い知り合いはいるが、それはそれだ。人を害するような行為を見逃したり、人に殺気を向けたりする時点で好印象なんて抱けると思うか？」
「……私でも、さすがに無理かな」
「右に同じくです」
　三矢が下手に突出しないように大人しく家を出た形だというのに、それを咎めることが意味不明だ。自分自身神楽坂の血縁があるのは事実だし、相応の力を示した以上は神楽坂家に反対意見などなかった。
「幸い、一条に四葉、六塚に十文字はまだ穏便に済ましてくれるだろう。父さんが怒ってテーブルを叩き割らないことを祈るわ」
「確か、新陰流中伝だったと爺さんは言っていたな……」
　元の殺気を浴びたことがあるのは、兄弟姉妹の中だと悠元だけだ。その時の感覚からして、怒らせると魔法を放つよりも拳が飛んできそ

うだと思うほどだった。加えて、「ナインローダー」を改良した「ラウンドオーダー」――悠元が三矢家の当主専用に仕上げた魔法技術で、最大１２種類の魔法式を発動寸前の状態で温存させる魔法技術を彼は修得している。

原作とは異なり、より物理的に仕上がっていることに悠元は内心で溜息を吐いた。

ある意味、時既に遅し

京都にある日本魔法協会の本部。それが入っているビルの最上階に位置する会長の執務室では、一人の女性が座っていた。見るからに30歳代のようにみえるが、これでも二児の母でもある女性――五十嵐亜澄（いがらしあずみ）は、魔法協会の会長らしからぬといった感じに、疲れた表情を見せていた。

「はぁ……九島閣下からの要請となると断れませんが、正直胃が痛くなりそうです」

そう独り言ちた理由は単純明快。昨日、急遽九島家から面会の申し出を受け、亜澄が出迎えた人物は九島家先代当主の烈。当主の座を退いたとはいえ、元国防軍将校や十師族としての実績と信望は健在だった。

その烈から「急遽師族会議を招集してほしい」と申し出を受けた。流石に九島家単独でとなれば難しいが、出向いたのが彼である以上は断ることもできない。

理由は亜澄も察していた。というか、上泉家と神楽坂家の両家から師族二十八家と百家の一部に通達された内容の後に会議の申し入れを受けたため、議題も自ずと理解できていた。

その要因となったのは、三矢悠元――いや、既に戸籍上の手続きは済んでいるため〝神楽坂悠元〟と言うべきだろう。彼の実力は、先日行われた九校戦でハッキリと示された。何せ、出場した2種目で一条家の御曹司を破っての優勝は誰の目も誤魔化せない内容だ。

明日はその臨時師族会議が開催される。今回は急な話のため、半分以上の当主がオンライン回線での参加。一条家、二木家と九島家が本部である京都に出向く手筈となっている。

魔法協会としても事実確認はしておきたいが、変な諍いになって十師族の足並みが乱れるのは御免である。なので、亜澄は自分の娘が十師族の六塚家と婚約関係にあることを思い出し、六塚家にコンタクトを試みることとした。

「申し訳ありません、六塚殿。そちらもお忙しいのに急な連絡をして

しまって」
『構いませんよ、五十嵐殿。私も娘さんとは仲良くさせて頂いておりますから。それで、如何いたしましたか？』
「はい、実は――――」
亜澄自身、誰かに相談して自分のストレスを減らしたいという思惑もあった。それを女の勘みたいなもので察したのか、連絡を受けた温子は亜澄の相談内容に口を挟むことなく聞き手に徹した。
それを聞き終えた後、温子はこう提案した。
『――――幸い、燈也が悠元君の連絡先を知っているようですので、コンタクトを取ってみます。先ほどの話は彼に伝えてもよろしいですか？』
「ええ。当事者となればいずれ耳に入ってしまうことですから」
この時、六塚家には克人、真由美、摩利、それに亜実もいることは亜澄も知っていた。十師族に名を連ねるという意味を早く知ってほしい、という親心も含まれていたりするが。
◇　◇　◇
指名式の翌日、私服姿の悠元は電話（前世風に言うならテレビ電話）で元と通話していた。いくら神楽坂の養子になったとはいえ、元の息子であるという血縁関係までは捨てきれない。
とはいえ、公的な場では流石に別の家の人間として扱わなければならず、しかも護人の当主と同等である以上は、元のことを「三矢殿」と呼ばなければならない。年上の人間に下の立場にかける言葉遣いというのは難しい。特に自分の両親に対しては。
まあ、私的な連絡の場合は、いつも通り親子の会話ではあるのだが。
「――――とまあ、現状はこんなところ。父さんのほうは大丈夫？」
『美嘉を宥めるのが大変だった。お前が責められることよりもお前が多妻を持つことに対してだが』
「黙ってれば普通に美人の部類だと思うんだけど」
『……否定はしない』
臨時師族会議についてだが、千姫もこれには頭を抱えていた。あのまま元継と悠元を三矢家に置いたら、将来的に四葉家と同じように突

出していた可能性が高い。あわよくば両家を潰し合いで消耗させたいと目論んでいた可能性もある……というのが、千姫の出した結論だった。

だが、現実的にそれが不可能と言ってもいい。

まず、四葉家自体が大分落ち着いたというか、他より抜きん出た情報入手手段を持ち得ている以上、無理をする必要性が皆無。加えて、深雪が悠元の婚約者となったことで、三矢と四葉、上泉と神楽坂の連携も可能となった。

ただでさえ、真夜と深夜が魔法師として極めて高い実力を持っていることに加え、達也もそこに加われば自ずと目立つのは仕方がないことだ。

なお、達也の四葉家次期当主の可能性について深雪に聞いたところ、「叔母様とお母様ならやりかねないでしょうし、仮にお兄様が次期当主候補に立候補されるなら、私どころか同世代の次期当主候補は揃って辞退なさるでしょう」という答えが返ってきた。

父母世代とは異なり、達也を必要以上の色眼鏡で見ていないことが浮き彫りといえよう。

四葉家次期当主のことはさておき、悠元が元と連絡を取ったのは、お互いに何を考えているかという腹の探り合い……というより腹を割って話すというのが妥当だろう。

「提案者が九島閣下って時点で、九島家の現当主と先代当主に対する好感度がストップ安を更新しそうなんだが」

『そういえば、ふと思っていたことだが……閣下の孫に関しては治療しなかったのか？』

「爺さんが止めたし、俺もそうすべきじゃないと思ったから」

仮に彼を治した場合、九島家の現当主が悠元を引き込もうと婚姻を推し進める可能性が高かった。年相応の女性は九島家にいないが、藤林家にいる響子を婚姻の相手として押し込もうとする可能性が否定できなかったからだ。

沖縄防衛戦で当時婚約していた相手を失ったばかりの響子だ。傷心している彼女に対しての婚約は、流石に酷というレベルでは済まな

い。これは剛三も同意見だったので、特に対処はしなかった。その時点だと、自分自身のこともあって婚約に前向きじゃなかったことも影響しているが。

想子情報体や霊子情報体、魔法演算領域への干渉魔法は現代魔法において有機物干渉となるため、禁忌とされる部分も多い。『領域強化（リインフォース）』はその最たるものとも言える。それを抜きにしても、現状の人格的にはまともな彼を九島家が見放しているという現実に向き合え、と剛三は厳しく言い放った。

「響子さんが人格者なのは確かだけど、婚姻となると話は別だよ。大体、独立魔装大隊への所属も暫定的なものだから。どうせ九島閣下はその辺の事情も知っているのだろうと思ったけど」

『何かあったのか？』

「九校戦の九日目の夜に風間少佐と直接会話した。その際に達也のことを『惜しい』と閣下は仰っていたそうだ。加えて俺のこととなると……少なからず知っているというか、風間少佐がそれを匂わせる発言をしたのもあるけど」

別に風間のことを咎めるわけではない、という意味合いを含めつつ悠元はそう述べた。

明確な抑止力はあってしかるべきだが、国防軍には第二次大戦前のような軍拡主義を主張しかねない輩も少なからずいる。戦略級魔法という存在、それを扱うことのできる魔法師を軍の命令に従って引き金を引く〝兵器〟となるのは真っ平御免である。

そうやって増長した結果、どうなったかは歴史が証明している以上、先人の経験を基に行動するのが普通だが、どんなものであれ「力」というものは人を惑わす魔力を備えている。魔法が使えるか否かに関わらず、大事なのは己を律する〝心〟だろうと悠元は思っている。

それを無くせば、命じられたままに引き金を引く人形（へいき）でしかない。大事なことなので2回言っておく。

「俺としては、父さんが怒って議場のテーブルを叩き割らないか心配してるんだけれど」

『……実を言うとな、魔法協会を経由せずに七草家と九島家からお前

のことについての質問状が来ていた。それに目を通した後、思わずお気に入りのグラスを握力だけで砕いていた。仕郎さんに慌てて治療してもらうまで気付かなかったほどだ』
「おう……（ある意味遅かったか……）」
　元が言うには、三矢家内のこととはいえ、十師族でも最強格に位置するであろう悠元を勝手に十師族の外に出すことは、十師族の強さそのものに疑いを残すことになるという意図を含んだ質問状だった。
　元々がっしりとした体格だったため、掌が軽い切り傷程度で済んだのは良かったと思い、悠元は父親が割ってしまったグラスを見繕うことも考えつつ、静かに語り始めた。
「正直な感想を言うけど、身内のことすらしっかりできない連中に言われる筋合いはない……これが、今言える感想かな。強さを追い求めたいと言っておきながら、四葉家に対する姿勢のダブルスタンダードの時点で信用なんてできないけど」
『そうか……私としても、この体制を崩すつもりはない故に現状の立場を堅持するつもりだと宣言する。正直に言えば、お前と話してなければテーブルを叩き割っていただろう』
「……母上に許可は貰って直筆の書状は認めた。一応内容は確認してほしい」
『お前自身が書いた書状なら問題はないだろうが、わかった。一応目は通しておく』
　その書状には、今後起こりうる出来事の可能性も含めたことが書かれている。ちなみに、その持たせた相手は八雲であり、彼ならば相手を手玉に取ることぐらい茶飯事と言わんばかりに可能だろう。
　元との通話で三矢家の屋敷へ行く日程を話し合い、通話を終えたところで深雪が姿を見せた。結界のおかげで過ごしやすいとはいえ、深雪のワンピース姿は映えるものがあった。ただ、これには一つ問題がある……と悠元は眉間に指先を置いていた。
「深雪、オシャレをしたい気持ちはわかるが……流石に生地が薄くないか？」
「大丈夫ですよ。それに、悠元さん相手なら恥ずかしくありませんか

ら」
（達也、よく耐えてたな……）
　魔法科高校の制服も体のラインがハッキリと出るようなものだが、深雪が着ている白のワンピースは生地が薄いようで、水気を含むと下着などがハッキリと見えかねない。恐らく、このコーディネイトを仕立てたのは千姫だろうと思う。
　これだけ魅力的な深雪に対して、欲情を抑えていた達也に内心で賞賛を送っていると、深雪は悠元の隣に座って悠元に凭れ掛かった。別に拒否する事情はないため、深雪の好きなようにさせていた。
「悠元さんは、どうして神楽坂家の当主に選ばれることを受け入れたのですか？　悠元さんのお父様や千姫さんとの絡みもあるかもしれませんが」
「あのまま十師族にいると、実家でお家騒動が起きかねなかった。元治兄さんに家督を継いでほしいというのもあるけど、穂波さんには幸せになってほしいという思いもあったから」
　穂波のことは深雪も深夜から聞き及んでいた。なので、穂波が将来の十師族当主夫人という立場になってしまうが、それでも人並みの幸せを掴んでほしいという悠元の言葉を聞き、深雪はクスッと笑みを漏らした。
「それに、十師族という枠自体が面倒だったのさ」
「面倒、ですか？」
「四葉の係累である深雪に言うのはどうかと思うが、強さを追い求めておきながら出る杭を平気で打ち込む柵なんて俺の望むところじゃなかった」
　同じ組織であっても何らかの歪みは生まれてしまう。こういったところを無視した結果、大事になったのが原作におけるスターズの一件とみている。
　そんな連中がいるとわかっている以上、強くなって損はない。既に元継は天神魔法の更なる習得に励んでおり、姫梨や由夢、修司も天神魔法の研鑽に努めている。雫については千姫直々に天神魔法を教え込んでいる。

深雪に対しても今後は古式魔法対策の一環で天神魔法を教えていく形になる。本来の修得法から道を外れるが、千姫の許可が出ている以上は反対する理由もない。
「正直なところ、この国に敵は多い。周辺国家すべての戦略級魔法師を相手にしなきゃいけないなんて御免だが、その最悪の可能性を捨てるようなことはしたくない。皮肉なことだが、この国を守るための抑止力は確かに必要なんだ」
九重寺での魔法練習では、そういった連中の戦略級魔法を完全再現することも念頭に入れていた。一度出来てしまえば応用も考えつく……天神魔法を併用することで、『トゥマーン・ボンバ』を特定の天候条件なしに発動可能という有様だ。
既存の戦略級魔法を超えた「超戦略級魔法」も一応完成しているが、計算上ではアラスカ地方を丸々消し飛ばすことも可能という計算結果が出たため、封印案件となった。
「そのためには、十師族という枠内にいることが足枷になりかねないと判断し、爺さんと千姫さんの提案を呑んだ。その意味だと、深雪も他人事じゃないんだが？」
「……そうですね。でも、私もお兄様もまだまだ強くなれる……雫と戦ったことは、私にとって良かったのかもしれません。でも、雫に贔屓し過ぎるのはダメです」
「あれは偶発的な事故案件に近いからノーカンで」
しかし、主人公の妹を嫁に貰うということは、主人公（たつや）は義理の兄ということになるわけだ。つまり、俺からしても〝お義兄様（おにいさま）〟ということになる。このことについて達也から「お前に兄呼ばわりされると、背中がむず痒くなるからやめてくれ」と予め釘を刺されている。解せぬ。
気が付くと、深雪は後ろから体を密着させて来る。フローラルな香りだけでなく、とても高校1年生とは思えないほどの色気と柔らかさを感じるほどだ。
「あの、深雪さん？　当たってますよ？」
「当ててますから。家では何度も夜這いをしようか迷ったんですよ

？」
「理性が灰燼に帰すレベルで吹き飛ぶわ」
　気が付けば、深雪の顔が目の前にあった。そして、触れる程度ではあるが口付けを交わした。深雪の頬は薄らと赤みを帯びて、妖しく微笑む姿はまるで母親譲りだと感じた。なんでそんなことを知っているのかといえば、3年前の一件である……まだばれていないのが幸いだろう。
　いや、深雪自身気付いていて積極的な対応になっている可能性があるのは否定できないが。
「つくづく、俺の周りは積極的な女性が多いことで」
「否定はしません。あ、それで悠元さんに言っておかないといけないのですが……」
　深雪から『誓約（オース）』解除をする際に達也の額に口付けをしなければならないことを聞かされ、それに関しては問題ないと返しておいた。すんなり許可を出したことに対して、深雪から「その代わり、悠元さんにたくさん甘えますので」という文言が返ってきた。それを許可した俺もつくづく深雪には甘くなるようだ。
「という訳で早速……悠元さん……」
「仕方がないお姫様だね、深雪は」
　なお、この後の展開については……翌日の深雪の機嫌が良かったということから察していただきたい。

内ゲバなんてやってる場合じゃないんだが

九校戦の後も、慌ただしい夏休みが続いている。その原因が自分にあるのはため息の一つでも吐きたい、と悠元は思わなくもなかった。

臨時師族会議については、下手に決裂することなく比較的穏便に終わった。提唱者の烈をはじめとして、九島家当主と七草家当主から質問の嵐だったようだが、元はそれを上手くいなしてハッキリと答えた上で問い返した。

「――――九島殿と七草殿にお聞きしたい。貴方達は三矢家にお家騒動を起こさせたいと望んでおられるのか？　それとも、同等以上の影響力を持つ四葉家と潰し合ってもらうのがお望みか？」

今十師族という枠組みを崩壊させるべきではない、というのは悠元が元宛に送った手紙の内容でも察していたし、三矢家の情報網でも大亜連合内外の物流の動きが活発になりつつある、と判明していた。

その状況下で国の力を分断するようなことがあれば、それは格好に餌食になりかねない。とりわけ諸外国の軍事事情を把握している三矢家としては、その事態を避ける必要性が急務といえた。

家族はおろか、人前でも滅多に怒りを露わにしない元のストレートな言動に対し、真夜は苦笑にも近いような笑みを零しつつも元を窘めた。

「私ども四葉家にそのような気概はないですのに。ですが、そう疑われても無理からぬでしょうね……三矢殿。今後も私達に対して、情報提供はしていただけるのでしょうか？」

「四葉殿、それについてはお約束しましょう。私とて降りかかる火の粉を黙って見逃せない性質の人間ですので。ただ、広大な範囲を守る力はないため、国防軍や皆様の力に頼ることになりますが」

元は前もって剛三を通す形で、九島家と七草家以外の十師族に臨時師族会議で必要以上の追及はしないでほしいという〝要請〟を送った。その対価は、大亜連合内での軍の動きなどの軍事的な情報だ。

別に共謀ではなく、あくまでも要請であって強制権は発生しないし、剛三もとい上泉家もそれに反しての行動を咎めはしないと公言し

ている。それ以上に国外の動きを聞けば、下手な争いをするのはマイナスしか生まないと察しがつく。とりわけ大陸に近い八代家や、戦略級魔法師を抱える五輪家、日本海側の広大な範囲を守る一条家にとっては死活問題になりかねない。

「息子たちのお力を借りるつもりはない、と？」

「ええ、五輪殿。血が繋がっているとはいえ、次男と三男は既に別の家の人間です。彼らに相談や頼むことはあろうとも、命令や強制はできますまい。それが、父親である私なりのけじめです」

出来ることならこのまま三矢家の人間として育てたかった……それは元と詩歩の切実な願いだった。

だが、彼らは元の想定を超えて強くなった。とりわけ悠元に関しては、現代魔法と古式魔法の複合術式という類を見ない魔法師としての地位を確立した。このまま三矢の家にいれば、兄弟で争いを起こしかねないと判断したからこそ、元は約定通り悠元の神楽坂家の養子入りを呑んだ。

すると、元の後ろに一人の女性――神楽坂家当主である千姫が姿を見せた。

「――やはり、下らぬ茶番をしておったか。唐突に邪魔して済まないの。妾は『護人』神楽坂家当主、神楽坂千姫じゃ。此度は三矢殿にお願いをして話を聞かせてもらっておった」

「千姫……なぜこの場に出てきた？」

「国防軍に身を置いていた輩が気付かぬのか、戯け。それとも腑抜けたか、烈」

いつもであれば軽い口調で話すことの多い千姫が殺気を滲ませつつ、怒りを見せるような剣幕に、烈はそれに対抗するかのごとく表情を険しくさせた。

本来ならば、外国人工作員などの跋扈を抑える役割を担う九島家が大亜連合絡みの動きを知らないことに怒りを垣間見せている。烈に関しては、九島家当主の座を退いているために致し方ないとしても、国防軍の中には烈を慕っている軍人も少なからずいるので、情報を手に入れられない道理はない。かつて『トリック・スター』と呼ばれた

人間の面影もない、と千姫はそう感じた。
間近にいる元はおろか、他の会議の参加者ですら千姫が〝怒っている〟と感じられるほどの雰囲気が漂う中、千姫はハッキリと言い放った。
「三矢家三男、三矢悠元。彼のことは前々から神楽坂家で引き取ることを取り決めていた。今の彼は妾の養子にして、神楽坂家次期当主。十師族の中に置けば要らぬ争いになりかねなかった懸案を取り除いたことに感謝される謂れはあっても、そのことを追及される理由はないと知れ、下郎共」
「神楽坂殿……先ほど言われた意味は、一体どういうことなのでしょう？」
「弘一よ、其方の目も曇っておるとはな……いや、その意味で過去を払拭できておらん小僧であったか。知りたければ、ご自慢の情報網で調べるといい」
見た目こそ２０歳代だが、この会議の面々の中では烈の次に年齢が高い。加えて『護人』という存在によって千姫が最も格上の存在となっている。先程元が情報提供の継続を公言している以上、必要以上の情報を与える気はないと言わんばかりの千姫の発言に、問いかけた弘一もこれ以上の追及は避けた。
「神楽坂殿。ならば何故、我々に対してそういった事実を事前に開示していただけなかったのですか？」
「単純明快よ。変に出し抜く輩が出ないとも限らんじゃろう？　それに、前もって剛三殿から情報は貰っておったが、あれだけの魔法技術を持つ魔法師を危険だと断じて暗殺しようと試みる輩を可能な限り排除するためよ、九島の小童」
この答えは、ある意味達也に対しての対応も含んでいる、と真夜はそう感じた。ごく一部しか知らない事実だが、四葉分家の当主たちが達也を殺そうと目論んだ。だが、それを先代当主である四葉英作が強く禁じた。
悠元も同じような目に遭わせないため、千姫は大半の十師族には事前通知なしで悠元の神楽坂家入りを推し進めた。三矢家も彼の存在

による混乱を避けたいという願いを叶える形だが、三矢家への出入り自体は自由にさせることにした。
「烈よ、もしお主が間違った方向に突き進むというのなら、妾が直々に引導を渡そう。秋には西から虎が来て、戦争になるかもしれぬのだぞ……妾と剛三を失望させないでくれ」
千姫が去り際に言い放った言葉。それは、今年の秋に大亜連合が国家単位――――軍を動員してまでの戦闘行為が起こりうるという可能性に言及したもの。
特大級の爆弾が投下され、臨時師族会議は重苦しい雰囲気が続いたまま閉幕することとなった。
◇　◇　◇
神楽坂家での5泊6日を終え、雫の発案による海に行くこともスケジュール合わせができたため、各々家に帰る……自分の場合は三矢家の本屋敷に寄ってから司波家に戻ることになった。
深雪とは婚約関係になったとはいえ、公表していない以上は今まで通りとなるわけだが、ここで深雪が元と詩歩に挨拶をしておきたいとお願いをしてきた。
達也はこの後ＦＬＴに寄る用事があるため、自ずと悠元が深雪のエスコート役を引き受けることになるので、その提案を呑む形となった。念のため、認識阻害の結界を展開して余計な連中の目を欺く。この程度なら魔法監視システムの記録にも残らない。
「ただいま、というべきなのかよく分からないけど……帰りました、父さんに母さん」
「ああ。で、そちらの御嬢さんは……」
「はじめまして、司波深雪といいます。まだ公表されていませんが、悠元さんの婚約者と相成りました」
「よろしくね、深雪ちゃん」
屋敷の客室にて、元と詩歩の2人と対面する。先日の通話はプライベートの側面も含んでいたために親子の会話だが、今の悠元は神楽坂家の人間。当然話し方も変えなければならないのだが、いささかぎこちなくなったことに元が思わず苦笑した。

詩歩と深雪が女性同士の会話ということでその場を離れると、悠元は一息吐いた。
「父さんもお疲れ様。臨時の師族会議では質問攻めにあったと聞いたけど」
「あの程度は予測の範疇だった。九島殿がしきりに悠元を引き入れたがっていたようだが、そこは閣下が一喝なされた。そもそも、俺はおろか剛三殿と千姫殿が認めぬとは思うが」
その様子を聞く限り、烈と九島家現当主こと九島真言(まこと)では主張に隔たりがある。元々原作で力の劣等感を真言は抱いていたからこそ、烈の孫にあたる光宣(みのる)がその最たるものだ。
そもそも、烈の能力自体が成功率の低い強化措置に成功したからこそのものである、という事実を受け入れないのはどうかと思わざるを得ないが。
「罪滅ぼしのつもりかは分からないけど、閣下も寄る年波には勝てない、ということなのかな……流石に本人の前で言うつもりはないけど。こっちのスタンスで言わせてもらうなら、必要最低限の協力はするが、九島家に肩入れするつもりはない」
「それで構わない。お前が寄越してくれた手紙を読んだが、大亜連合だけでなく新ソ連、USNAも絡んでいるとなれば、3年前の再来も有り得るだろう」
仮にそうなった場合、澪や剛三だけでなく達也にも協力を仰ぐ。『深淵(アビス)』、『雷霆終焉龍(ヘル・エンド・ドラゴン)』、『質量爆散(マテリアル・バースト)』……そして、『天鏡雲散(ミラー・ディスパージョン)』を更に改良した新型戦略級魔法『星天極光鳳(スターライト・ブレイカー)』で対処する。
なお、ネーミングに関しては完全に前世の影響である、というのは誰にも言えない秘密。
「結局、千姫殿の一喝でお前の神楽坂家入りは認められた。四葉殿が必要以上の追及をしなかったことに、七草殿が訝しむ様な表情を見せていたが」
「この立場になってわかるけど、十師族って面倒な柵だと思う。父さんの前で言えた台詞じゃないけど」
「気にするな。元治に継がせることで三矢家の力を必要以上に突出さ

せないという気遣いがなければ、アイツに家業を継がせてお前を三矢の次期当主にしていたかもしれないからな」
　この国だけで４つ以上の戦略級魔法を有することはパワーバランスの面から警戒されるが、この国は国防軍の規模という点で他国に対して圧倒的に劣る。ならば、切り札の質を高めるしか生き残る術がない。
　これを咎めるというのであれば、その時は戦うという選択肢を取れなくするだけだ。いくら物資があっても、国は人民という基盤で成り立っている。それは根本となる主義主張が違っても、彼らの協力なしに軍は動かせない。最悪の場合は戦略級魔法師そのものを消し飛ばすのも選択肢として残している。
「ともあれ、佐伯閣下には内密に話しておこう。今日ではないが、面談の約束があるからな」
「そうしてくれると助かる。どの道、風間少佐にはこちらから話さなきゃいけないけど」
　家が変わったとはいえ、一度築いた縁を捨てる選択肢はない。三矢家はかなりの数の魔法師を雇い入れているが、他の十師族のように守護している地域を持っていないからこそ、独立魔装大隊とその大本である第１０１旅団とは協力関係を結んでいる。
　ただ、悠元自身は神将会の長として動くことが多くなるため、国防軍の軍人として動く機会はかなり減ることになる。それこそ独立魔装大隊や達也の武装面の面倒を見るぐらいだろう。そのことも含めた話し合いは後日しなければならないことも分かりきっている。
　元との面談を終えると、悠元は自分の部屋……自分が三矢の人間として過ごしていた部屋に足を踏み入れた。そもそも、この部屋をまともに使ったのは中学３年のときぐらいで、それ以外は上泉家の別宅や司波家にいることが多かった。
　で、真新しいシーツや布団カバーに交換してあるベッドには、妹である詩奈がグッスリ眠っていた。これには思わず一息吐くと、それを耳にしたのかゆっくりと起き上り、寝ぼけた表情をこちらに向けていた。

「ふぇ……お兄様、でしゅか？」
「自分の部屋があるんだからそこで寝なさい……ま、俺が言えたことじゃないけどな」
「詩奈、またこの部屋で……って、悠元さん!?　お、お久しぶりです！」
「久しぶり、侍郎。約束の日じゃなかったけど、ちょっと用事があって立ち寄ったのさ」
　侍郎の話を聞くに、詩奈が悠元の部屋のベッドで寝ていることはしょっちゅうらしい。まあ、今となっては年数回使うかどうかだろう。一応里帰り自体は千姫も認めているが、経路的には三矢家が道中の立ち寄りぐらいのレベルになってしまうだろう。
　あまり出入りして変な噂をされるのも御免というわけだ。
「悠元お兄様。お父さんや元治兄さん、お姉ちゃん達がお兄様のことを話していたのを聞いたのですが……お父さんの子どもじゃなくなったのは本当のことですか？」
「（そこは聞こえてしまったのか……）戸籍的にはそうなるが、血縁関係自体は変化しない。だから、俺にとって詩奈は妹のままだ。俺が話したってことは内緒にしてくれよ？」
「はい。侍郎君に相談したら本当かと疑われましたけど」
「それに関しては俺が悪かったから、もう許してくれ」
　詩奈の『聴覚強化』は、前もって教えた想子制御によって大分安定してきている。このまま順調にいけば、年内にもイヤーマフなしで普通の生活を送れるようになるだろう。その意味で詩奈は優れた資質を示している。
　侍郎のほうはというと、先天的な魔法の研鑽と想子制御を文字通り体で覚えさせたので、矢車家でも優れた魔法師として詩奈の護衛を務められるレベルに達している。新陰流については、元継の直弟子でもあるために成長スピードは群を抜くほどだと剛三が評していた。
「元継さん――――師範から中伝の目録を頂きました。そしてなんですが……」
「お兄様、私も新陰流剣武術を習うことにしました」
　聞くところによると、九校戦の一件で侍郎がますます鍛錬に励むよ

うになっただけでなく、あれほど習うのを嫌がっていた詩奈が自ら新陰流剣武術の修得を志願した。下手なトラブルに巻き込まれないためと、もしもの時の護身の術を学びたいということだった。今は武術の基本ということで、詩鶴が地下訓練場を使って教え込んでいるらしい。

このまま第三研へ出かける回数が少なくなればいいが、そうも言っていられないだろう。なので、侍郎には可能な限り詩奈に付き添うよう言い含めている。あとは、もし国防軍絡みの案件が来た場合、相手の如何に関わらず全て連絡するように約束している。

最悪の場合は『八咫鏡』で情報全部引っこ抜いて、二度と反抗する気すら起こさせないぐらいに騙した連中の心を圧し折る。殺すのはあくまでも最終手段だ。

「そうか。詩奈が決めたことなら反対はしないが、やるからには気を抜かずにしっかり励めよ。爺さんや元継兄さん、詩鶴姉さんは手抜きしてくれないからな」

「はい、お兄様！」

この後、深雪が部屋に来て侍郎や詩奈と対面したのだが、侍郎が思わず見惚れたことに悠元が侍郎の頭を軽く叩き、詩奈が侍郎の頬を抓る形となった。

俺の場合は婚約者に色目を使うなというヤキモチで、詩奈の場合は「侍郎君が他の女の子にデレデレしてると、何だかモヤッとするんです」ということらしい。俺の妹はどうやらヤンデレ気質にも若干目覚めつつあるのかもしれない。

刃傷沙汰になるようなことは絶対にするな、と侍郎にしっかり力説したところ、それを聞いた深雪から「悠元さんは呼吸するようにジゴロしますからね。加えて骨抜きにしてしまいますから、殺傷事なんて起きないでしょう」と言われた。

深雪さんや、ジゴロを動詞のように扱うんじゃありません。涼しい顔で甘い言葉を吐けるのは後にも先にも達也だけです。ただ、アイツの場合は噂をされてもクシャミなんて出そうにないけれど。

俺の場合はって？　公的な場でもない限り、冷静に振る舞うのなん

てしたくない。変に肩の力が入って疲れるからだ。

夢の続きを描く

ＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課。そこに籍を置いている「上条洸人」もとい悠元はプライベート用の研究室を宛がわれている。これは、ＦＬＴの株主提案をした深夜の発案によるもので、第三課がある研究室から直接行けるようになっている。

今の時期となると喫緊の案件はＦＬＴの新商品発表も兼ねた展示会。

既にトーラス・シルバーの飛行魔法絡みで世界各地からトーラス・シルバーに話を聞きたいという問い合わせが来ているが、これについてはＦＬＴの公式サイトで「トーラス・シルバーに対する案件の問い合わせはプライバシーにかかわる部分が多いために回答はしない」と発表している。

「沈黙は金、雄弁は銀」という諺があるが、それが通じるのは一昔前の時代の話だ。必要な情報は積極的に発信していかないと、後手に回った時に面倒なことになる。

ここら辺の案件をある意味明文化するため、神楽坂家を通して政府に未成年を含めたこの国の人民に関する個人情報保護の法律の立法化をお願いした。常日頃から魔法師の人権などとのたまっている野党議員への牽制も含んでいたりする。

人道的な措置を望むといいながら、その実は非魔法師の影響を強く受けてしまっているのが実情。そういった連中が望むのは、無力化されてしまった核エネルギーという利権なのだろう。魔法師がいなくなって一番の恩恵を受けるのは、間違いなく核のボタンを握れる政治家や非魔法師の軍人、それにテロリスト。

反対できれば何でもいい……報道の真実よりも自社の利益を追い求めているマスメディアにも同じことがいえる。なので、国営放送を作って政府情報の発信強化を促すことにした。スパイ絡みで政府の膿をかなり排除したからこそできることだが。

悠元は、宛がわれた部屋でオフラインの端末のキーボードを黙々と叩いていた。オンライン化しないのはエシェロンⅢやフリズスキャ

ルヴを念頭に入れた対策で、自分以外の人間が端末を起動できないようにするため、「ワルキューレ」と「オーディン」をプロテクトキーに使用している。この事実は自分以外の誰にも言っていない。

「……」

転生特典によって古代文明の文字も解読できたことで、アンティナイトの精製方法も判明したが、こんな事実は外に漏らすわけにいかない。

アンティナイトという物質が生まれた経緯は、想子を妨害して魔法発動を阻害する……つまり、想子を自動吸収して魔法を自動行使できるオーパーツ――いわゆる〝魔導具〟の存在があったのでは、とも考えた。

それと、アンティナイトはいわば意図的に魔法の行使妨害を起こす触媒。ならば、意図的に想子を収束したりする触媒の存在もあるはずだ。

単純に想子波を放出するだけなら簡単だが、それを意図的に乱れさせるのは、実は高度な技術と言ってもいい。達也が考え付いた特定の魔法のジャミングや『キャスト・サイレント』はかなり難易度の高い魔法に位置する。それよりも難易度が落ちるであろう触媒はあって然るべきだと結論付けた。

結論から言えば、それらの存在も証明できてしまった。悠元はポケットから白銀に輝く結晶を取り出し、目の前に翳した。その結晶は、悠元が魔法訓練の過程でできてしまった産物の一つで、いうなれば〝魔石〟のようなものだ。

(想子の原理自体はファンタジーの魔力と似通っているから、もしかしたらという思いもあった……これこそ、一番明かしちゃ拙い秘密だな)

一定の割合で混ぜた特定の金属の塊を結晶の核とし、想子を超高密度かつ高圧・高温の環境下に置くことで精製できた代物。これに想子を注ぎ込むことで通常の数倍から数百倍の威力を持つ魔法を行使できる触媒。「ワルキューレ」と「オーディン」は感応石ではなくこの結晶――「オリハルコニウム」と呼称したものを使用している。

この金属にはアンティナイトも含まれているため、普通なら手に入ることはないだろう。では、どうやってアンティナイトを手に入れたのかといえば、３年前に関わった事件で敵兵が持っていたあの石を国防軍で接収し、兵器開発部に回した上でデータの解析をＦＬＴに依頼した。その際に得たデータから複製したのだ。

まあ、上条達三特尉が上条洸人に依頼するというシュールなものだが、この案件自体は第三課でもごく一部の人間しか知らない。それこそトーラス・シルバーである悠元と達也、牛山主任だけしか知りえないことだ。

なお、原材料の殆どは足がつかないように『複製』を使っている。何せ、金や銀だけでなく、白金やチタンなどといったレアメタルまで使用するのだ。しかも、高純度の金属となればかなり値が張るため、簡略化するための手段をとった。

まともに精製なんてしたら、結晶１個作るだけでも戦闘機数機分に匹敵するだろう。それだけのコストを払ってもおつりがくるぐらいにヤバい代物なので、この結晶のことは自分と達也しか知らない。

その時に言われた言葉は、「お前は世界の破壊者にでもなる気か？」だった。衛星を使えば『マテリアル・バースト』を全世界に向けることができるお前が言うな。いや、『サード・アイ』のサテライトリンクシステムの発案者は自分だが、それを使いこなす人に言われたくないと思う。

すると、気配を感じたので結晶を懐にしまうと、姿を見せたのは達也だった。

「悠元、そろそろお昼の時間だが、どうする？」

「もうそんな時間か。食堂にでも行くか」

「ところで……それは、熱核融合炉の資料か？」

達也の目に留まったのは、悠元の机の上にある資料。

重力制御型熱核融合炉は現状加重系魔法の二大難問とされている。前世でも実験段階だった代物で、魔法という存在が増えても……いや、増えたことでより一層難問へと発展したというのが正しいだろう。

そこに加えて、群発戦争による科学技術面での衰退も大きく影響している。

前世の俺は、１人で生きていくために理系の道に進むことを決めていた。名字の関係で兄や妹の関係者だと気づかれる可能性はあっただろうが。それはともかく、その一環というか興味本位で核融合の論文やらに目を通すことが多かった。

原作だとやたら長い名前の略称として「ＥＳＣＡＰＥＳ」となっていたが、もっと分かりやすい形にした。

――Ｅｓｐｅｃｉａｌｌｙ
――Ｓｔｅｌｌａｒ―ｄｒｉｖｅ
――ＣｉｒｃｕｌＡｔｉｏｎ
――Ｐａｎ　ｐａｃｉｆｉｃ
――Ｅｎｅｒｇｙ―ｌｉｎｅ
――Ｓｙｓｔｅｍ

直訳すれば「特型恒星炉太平洋循環エネルギー送電システム」。核融合発電システムもとい恒星炉をこの国の新たなエネルギーとして定着させ、その副産物として海中の汚染物質を除去するという形だ。

そのためには、核融合の根幹を担う重力制御だけでなく、プラズマ状態への第四態相転移（フォースフェイズシフト）、中性子などの放射性物質を防ぐためのフィルターやバリア、クーロン力を制御する複数の処理を安定的に行えるシステムが必要となる。

現状、この実験だけでも複数人必要なものだが、実はその一端をひとつの魔法として完成させている。気付いた人もいるだろうが、多数の物理制御を必要とする『エアリアル・バースト』は恒星炉のシステムの根幹となる魔法なのだ。

それを三矢家の秘術としたのは、どの道実家にも家業的な意味合いで手伝ってもらう形となるのが分かっているからだ。魔法技術による発電というのは、魔法的なプロセスだけでなく、科学的なプロセスも含んでいる。現代魔法自体が科学的なアプローチによる代物なのは言うまでもないが。

「お前が海外から核融合に関する色んな資料を取り寄せていたのは

知っていたが、重力制御型熱核融合炉にでも挑戦するのか？」
「んー、流石に俺一人じゃ無理だろうと思ってる。それは達也にも言えたことじゃないのか？」
「否定はしないな」
　達也にはトーラス・シルバーのプロジェクトチームを立ち上げる時点で話していることだが、原作ではそれぞれ独立していたトーラス・シルバーとＥＳＣＡＰＥＳ計画……これのせいで色々問題も生じていた。
　そこで、ＥＳＣＡＰＥＳ計画の胆となる魔法技術やＣＡＤ技術のプロジェクトチームの代わりとして「トーラス・シルバー・プロジェクト」を立ち上げた。いわばＥＳＣＡＰＥＳ計画自体トーラス・シルバーが目指している目標という形として、ＦＬＴもとい四葉家を強引にでも引き込む形にした。兵器としての性質が強い四葉家が「人間」を目指すという皮肉も混じっている。
　その代償として、達也が四葉家を離れる選択肢はなくなる。そもそも、身内に甘い現当主が達也を手放すという選択肢など取るはずもない。分家の当主は難色を示すだろうが、場合によっては〝スポンサー〟という立場から諌めるのも必要だろう。
　更には、既に東道青波をはじめとしたこの国の重鎮に話を付けている。元との連絡や深雪との会話の後、客間にて現在の内閣総理大臣とも対面している。次期当主とはいえ、神楽坂を名乗るという意味を国家元首の深々としたお辞儀で知る羽目になった。
「だが、これは俺にとっての〝意地〟でもあり、〝夢〟だからな」
　カリスマや実績に溢れた前世の兄でも成しえていなかった核融合発電システムの確立。これは前世における最終目標であった。色々あって転生したおかげで、ハードルは極めて低くなったといっていい。
　常駐型重力制御魔法式継続熱核融合炉。現代魔法における難問。
　だが、この世界における神楽坂悠元（イレギュラー）という存在は、その難問を現実の元へと手繰り寄せつつあった。
「……まさか、目指しているものが同じだったとはな」

「夢を大っぴらに語るような人間じゃないからな、俺は」
「それもそうだな」
「それで納得されるのも困るんだがなあ…」
実際のところ、前世の夢は〝原作〟の本を読んで強く影響を受けていた。このことは、たぶんこの先も話すことなどないだろう。というか、恥ずかしいので言う気も起きないが。

◇　◇　◇

東京にある吉田家の屋敷。
幹比古は一人、広間で座禅を組んで精神を集中させていた。これは悠元から教わった想子制御の訓練法に基づくもので、各々集中しやすいやり方がいいと教わった。なので、幹比古は日頃からの精霊魔法の鍛錬で染み付いた集中の方法で取り組んでいた。
すると、想子を集中させていたお蔭で背後からの気配に気付き、幹比古は閉じていた瞼を開いて、体をその気配の方向に向けた。
「幹比古。すまないが、少しいいか？」
「あ、うん。どうかしたの、父さん？」
姿を見せたのは、吉田家当主であり幹比古の父親に当たる吉田幸比古であった。吉田家は長男で幹比古の7歳年上にあたる男子が次期当主候補であり、幹比古は昨年の『星降ろしの儀』の失敗とそれに伴うスランプもあって、吉田家の家督争いからは一線を退くような形だった。
幸比古自身、ダメ元で九校戦への観戦を促した。すると、幹比古は代理とはいえ九校戦に出場し、モノリス・コードの優勝メンバーとなった。更には彼と親交のある少年が古式魔法の大家と繋がりがあり、その家から招待を受けたので幸比古は即座に招きを受けた。
「先日は済まなかったな。お前にも思うところはあったかもしれないが」
「……気にしなくていいよ。父さんが発破をかけてくれたおかげで、僕も自分自身を見つめなおすことができた。それは確かなことだから」
神楽坂家の次期当主指名の儀式は本来身内向けだが、幹比古は同じ

古式魔法の家にして幼馴染という間柄から参列を許された。無論、これだけではないことも幸比古は理解している。何せ、目の前にいる息子は今もなお魔法力を伸ばし続けている。

既に〝吉田家の神童〟などと呼ばれた実力を上回りつつある、といううれしさの反面、吉田家の御家騒動を生みかねない状態にある。

「幹比古。お前の実力はこれからも伸びていくだろう。時期が来れば、私はお前を家から出さねばなるまい。ああ、別に神祇魔法を使うな、とは言わない」

「……(これって、僕も悠元のような状況に置かれるってことなんだろうね)」

悠元の力を目の当たりにしているからこそ、その教えの一端を受けた幹比古も自分の力が着実に上がりつつあるのは確かだった。現代魔法だけでなく、神祇魔法にもその影響が出始めているのは確かに感じており、幸比古の言いたいことも自ずと理解できた。

「そのことについて三矢殿に相談したところ、上泉剛三殿がとある家を紹介してくれるそうだ。幹比古には、その家に養子として行ってもらうことになる」

「異存はないけれど……その家って、一体何処の家になるの?」

「東道(とうどう)家。古式魔法の家を統べる『導師』の一族。お前も一度青波(せいは)入道閣下にお会いしたことがあるのは覚えているな?」

現代魔法の統括の象徴が十師族ならば、古式魔法を統べるのは『導師』と呼ばれる存在。この国において政財界の〝黒幕〟や、あるいは〝妖怪〟とも呼ばれている。その2つを更に超えるのが『護人』と呼ばれる面々にあたる。

幹比古は6年前に幸比古の述べた人物と対面している。纏う空気からは文字通りの〝閣下〟と遜色ない存在感であり、怖いもの知らずだった当時の幹比古も、彼を前にした瞬間に襟を正してきれいな土下座をした記憶が残っている。

「急な話ゆえ、この話は別に断っても構わない、と剛三殿は仰っていたそうだ。別に回答を急ぐわけではないので先ずは話だけでもと思い、お前に話した」

「……今すぐは流石に決められないけど、父さんがこの家のことや兄さんのことを慮っているのは理解できた。できるだけ早く答えを決めるよ」
「そうか……すまないな、幹比古」
現状の吉田家は、十師族の三矢家や百家の千葉家と繋がりを持ち、そこから『護人』とも繋がりを得る形となった。神楽坂の次期当主絡みに次男の幹比古が参列を許されたのは、今回の話自体が上泉家だけでなく神楽坂家の同意もあるとみている。
仮に幹比古がこの話を受けなくても、どちらかの家が分家あたりに幹比古を養子として受け入れる可能性もある。
（彼の息子――――悠元君は不思議な存在だ。幹比古、お前はお前の道を歩むといい）
幸比古自身、ほかの兄弟や従兄弟との争いで当主の座を勝ち取った。だからといって、自分の息子たちにそれを強いるのはまた別の話だ。
彼の力を取り込みたいのなら吉田家に残すのが得策だが、それはそれで要らぬ争いを生むだろう、と幸比古はそう感じていた。現に、幹比古の実力を感じて長男の元比古（もとひこ）もより一層鍛錬に励んでいる。
悠元が生み出した影響は、師族だけでなく古式魔法の家にも波及していくのであった。

ゆっくりできない夏休み

高校生らしい夏休みとは何だろう。

どうせなら、友人とどこかに出かけて人並みの幸せを享受したい……その辺が妥当なラインだと思う。必要以上に幸せを追い求めるのは己の身の破滅しかない。この世界だと魔法使いというだけで色んな制限を受けるわけだが、その辺は爺さんのおかげで退屈しなかった……二度と経験したくない記憶も数多く刻まれてしまったが。

ブラジルに行ったときは、戦略級魔法師であるミゲル・ディアスと対面した。彼は爺さんに対してまるで弟子のように接していたが、爺さんが昔海外に行ったときに武術の手ほどきをしたらしい。

滞在中に地方政府のゲリラ連中が襲ってきたときは、全員新陰流の体術で叩き潰した。そしたら、爺さんがキレて地方政府にカチコミに行った。自分は面倒事になると判断して、慌てるブラジル政府高官の話し相手に終始する羽目になった。

後日には各地の地方政府がこぞってブラジルに降伏。どうやら、地方政府が雇った野良の魔法師連中だったらしい（その裏で糸を引いていたのはＵＳＮＡだということも判明済み）。

なので、２年前から南米大陸はブラジルという国ではなくＳＳＡ（Ｓｏｕｔｈ―ｌａｎｄ　Ｓｔａｔｅｓ　ｏｆ　Ａｍｅｒｉｃａ：南アメリカ連邦共和国）という形になった。その際、ミゲルだけでなく初代連邦大統領からも感謝されて、連邦共和国制に移行して初めての第一勲に相当する勲章を贈られた。もはや意味不明である。

なお、この功績は全部爺さんに被せて情報工作したので、たとえエシェロンⅢでも剛三の功績でしか出てこないようになっている（実働部分は剛三が動いていたこと自体本当の事なので嘘は言っていない）。いくらＵＳＮＡの大統領でも、爺さんを敵に回すような行動は慎むだろう。

夏休みの宿題に関しては、九校戦の関係で免除されているので必要がない。というか、悠元自身優秀な成績を挙げたので、評価点がさらにプラスされることになる。二科生の面子に関しては、九校戦での観

戦の合間に無理矢理終わらせた。
その時に美月のスパルタさを垣間見ることとなったが。どうやら、エリカに振り回されることで精神面で強くなったのだろう。なお、幹比古に対しては気になるようなそぶりを見せつつある。
今は置いておく話だが。
「失礼します、風間少佐」
「よく来たな、悠元。まあ、適当に掛けてくれ」
霞ヶ浦基地にある独立魔装大隊の本部ビル。そのビルには悠元が「上条達三特務少佐」としての個室も宛がわれているが、基本的には誰も立ち入らないために必要最低限の設備しかない。それでも寛いだり仮眠できる分にはかなり優遇されている。
なので、ビルに出入りすることの多い響子に合鍵を渡しているが、あくまでも彼女の業務上に必要な秘匿性を確保するための配慮。彼女の立場上、情報管理が最も重要なことだからだ。そこに打算的なものは一切含んでいない。
悠元がビルを訪れたのは、主に神楽坂家に関する情報の共有。既に十師族を抜けた形なので、戸籍などの大まかな部分は神楽坂家に一任されているが、自身の魔工技師や魔法師としてのプライベートな部分の手続きは本人確認の部分があったりする。
ただ、身元が割れないように口座自体は「上条洸人」の名義を使用している。銀行自体もビジネスを主体としたプライベートの口座もこの世界にあったりする。でないと、ビジネスネームを使って取引している財界に大きな影響が出るからだ。
風間の執務室に入った悠元の服装は私服姿だが、それを咎めることはしない。今の悠元の立場は風間よりも同等以上となってしまったからというのもあるのだが、非常勤扱いの悠元に対して軍人云々と説法をするのは違う、と風間はそう考えていた。
「事の次第は神楽坂家からの書状で伺っている。上泉家の係累までなら予想はできたが、よもや神楽坂家の次期当主とはな……正直驚いたよ」
「それで、今後の自分の扱いはどうなるのでしょうか？」

「その件を話すために今回は態々来てもらった。流石に連絡一本で済ませられる事案ではなかったからな」
そう言って、風間は懐から白い封筒を取り出してテーブルの上に置く。それを受け取った悠元は中身の便箋に目を通すと、一つ息を吐いた。その便箋に書かれていたのは、上条達三特尉もとい特務少佐の扱いについてであった。
「第１０１旅団専属特務参謀……これは、今後の情報提供を主眼に置いた形でしょうか？」
「そう受け取ってもらっても構わない。併せて悠元の階級も〝特務少将〟へと飛び級の昇進となる。恐らくは先日――――十山家と入学式の迷惑料代わりだろう」
「別に国防軍で出世することが望みではないのですが、了解しました」
旅団長は弱い魔法資質を有しているが、魔法師ではない。国防軍としては、悠元への謝罪と共に、元十師族の人間を組み込むことで十師族への依存に対する批判に繋げたいのだろうと思われる。
だが、悠元は護人の立場として十師族をはじめとした現代魔法師だけでなく、古式魔法師のコミュニティもコントロールしなければならない立場に置かれる。このことに加えて十師族から婚約者を迎える立場だ。
「現状は秘密裏の婚約ですが、十師族にも一定の配慮はします、とだけ言っておきます。今後、作戦行動の歩調を合わせることがあっても、そちらの指揮下に入ることはないと思ってください」
「それで構わない。佐伯少将も同意見だったからな……達也（おおぐろとくや）も含めてだが、悠元という戦略級魔法師を失うほうが国益を損ないかねない」
護人の神将会の長、そして神楽坂家当主代行。この二つの肩書だけでも、古式魔法の使い手である風間からすれば頭が上がらない相手となってしまった。加えて、彼の国防軍の地位が旅団長と同等となり、非公認の戦略級魔法師でもある。だが、接し方自体をとやかく言うつもりは双方共にない。
話は今後の動向――――とりわけ大亜連合絡みに関することへと

移った。
「ふむ、呂剛虎に陳祥山か……これだけの人物が出てくるとなれば、手引きをしている人物は国内にいると？」
「周公瑾という人物です。三国志の周瑜公瑾と思いがちですが、まぎれもなく彼の本名です。そして、ブランシュ絡みの春の一件で俺を排除しようとした存在です」
　予め情報開示はするが、彼とその背後にいる人物には当分動けなくなってもらう必要があった。「無頭龍」のアジトの情報を国防総省（ペンタゴン）に流したのは、ＵＳＮＡ内に潜伏している黒幕を閉じ込めさせる狙いからくるものだ。
　加えて、メディア関連にも強力な一手を打ち込んでおいた。神楽坂系列のコンサルタント企業を使い、テレビ局や出版社といったメディア系列の株式を大々的に取得したのだ。いくらメディアでも大株主のスポンサーの意向を無視すればどうなるかなど理解できなくはないはずだ。分からなかったらただのバカと断じていいかもしれない。
　その資金源は「無頭龍」を潰したとき、賭けに参加していた連中に取引を持ち掛けて得た金額だ。大体５０億ステイツドル（約５５００億円）ぐらいにはなったらしい。その顛末は剛三から聞いたが、彼曰く「こういった策略はあのバカ息子を思い出すが……あいつの思惑には乗らせんよ」と呟いていた。
　それが東道青波のことだと知るのは少し先の話となる。
「魔法否定派の動きを封じるために結構リソースを割きましたが、狙いは概ね成功しました。どの道最低でも一年は動けなくなったようです」
「……分かってはいたが、我々が束になっても悠元には勝てないだろうな」
　ＵＳＮＡも結構慌てているのは情報として知っているが、反魔法主義者を匿う連中は政府高官にも結構いたりする。何せ、スターズの重要なポジションにいる魔法師の親族も例外ではない。それについては必要以上に咎めたりする気もないが。
「大亜連合だけならまだいいのですが、秘密裏に新ソ連、オーストラリ

アもといイギリス、それとＵＳＮＡまで動いているようです……大亜連合以外の国が同調して我が国に向けて艦隊を動かした場合、こちらで処理します」
「……大亜連合に専念しろということか。そうだな、それが一番現実的な案だな」
七草家と九島家を罰しなかったのは、横浜における対応と大阪方面の外国人工作員の対応を任せるためだ。残り２ヶ月半弱では人員的な欠損を埋めるのは難しい。それと、周公瑾の逃げ道として残すという選択肢の部分も含んでいる。
関われば破滅になりかねないと警告はした。もし関わった際の逃げ道は既に準備している。四葉家は既に未来の大きな利を得ている以上、現当主の真夜も必要以上に攻め立てる必要がなくなった……と、元との連絡を終えて深雪と一緒にいたときに掛かってきた連絡で知った。無駄に洗練された、無駄のない情報収集能力の賜物といえよう。
「別に、正面切って喧嘩を売る気なんてないのですが……この間、臨時師族会議で俺の処遇について七草家と九島家が問い詰めたそうで。父は『四葉と潰し合いさせたいのか？』と発言するほどでした」
「それだけ悠元という存在が大きいということだ。戦略級魔法抜きでも、世界屈指の魔法制御技術の持ち主だからな」
余談だが、以前ＵＳＮＡの大統領と顔見知りになったという話をしたが、その大統領は生粋のナショナリストで前世にいた某不動産王の大統領の親族にあたる。最初会ったときは余りに似ていたため、思わず名前を言ってしまうほどだった。
その話は置いといて、風間に十師族絡みのことを話したのは、その会議の提案者が烈だったことからくるストレス発散の意味も兼ねていたのかもしれない。それを聞いた側の反応は、完全に苦笑を浮かべていた。
「まあ、現状秘密とはいえ達也の妹と婚約関係ですからね。人の知らないところで話を進められたようなものですし、文句を言いたくなる気持ちも分からなくはないですが……かと言って、これ以上婚約者が

増えるのは、正直胃が痛くなりそうです」
「悩みなんてないものだと思っていたのだが、悠元は意外に繊細だな」
「九島家の場合、藤林少尉を婚約者として押し込んでくる可能性だってありましたので」
流石の烈でもそれはしないだろうが、九島家現当主ならやりかねないと風間も溜息を吐いた。悠元の特異性を知っているとはいえ、3年前に婚約者を失ってからの政略結婚は、彼女の心に大きな影を落とすことになるかもしれないからだ。
「話を変えるが、真田から『ムーバル・スーツ』が完成したと連絡を受けた。達也から得たデータと、悠元が防衛大学校のデモンストレーションでやった動きを最大限フィードバックしたそうだ」
「……自分が言うのもなんですが、大半の人間が廃人になりかねませんよ？」
「その辺は真田も弁えている。君や達也以外が着る分はアシスト系のフル装備になってしまうが」
そこに達也から提供される飛行魔法用のデバイスも加わる。動きやすい戦闘用スーツとはいえ、悪役としか思えない仮面の時点で着る気が失せてしまう。なので、本当に差し迫った時に袖を通すことになるだろう。
原作でも思ったことだが、デザインした人の悪意が籠っているとしか思えない。相手に恐怖などを植え付けるには効果的だが、なにも悪魔的なデザインにする必要が皆無である。
◇　◇　◇
小笠原諸島の一帯は、神楽坂家が基本的な管理を行っている。
いくら十師族とはいえ、守護できる範囲には限界が生じるし、国防軍との兼ね合いもある。それに加えて、無人島化した元有人島に資産家が別荘を建てるということがブームとなっており、結果として不動産という意味での管理は神楽坂家が担っている。
どうしてそんなことを知っているのかという疑問だが、指名された際に当主の仕事を覚える意味でいくつかの島の所有権を渡された。無論未成年なので、管理自体は元の所有者である千姫が行っている。

それらの島には別荘やショッピングモール、軍関係施設などが既に存在しており、その賃貸料だけでも十分に食べていけるレベルだ。陰陽道自体が風水も兼ねていて、運の流れを気にしたりする者は少なくないという証左ともいえよう。
「……悠元が養子に入った家って、うちよりもお金持ち？」
「かもしれん」
「いや、何で詳しく知らないのよ？」
「上泉家ですら、関東各地に道場があって、東京に別宅、北海道に大規模の演武場があるぐらいだからな。本職は大工・土木職って言ってたが……エリカの家だってそれなりに大きいし、クルーザーだってあるだろ？」
「いや、あれは訓練用だから楽しむためのものじゃないし、乗り心地は最悪の一言よ」
悠元が上泉家にいたのは武術や魔法を学ぶためであり、別に上泉家の内情を知りたくて入ったわけではない。上泉家は世界群発戦争で燃えてしまった家屋などの建築ラッシュで一気に財を稼いだらしい。
新陰流だけで食べれるわけではないため、本職に精を出していることは知っていて、その手伝いにも駆り出されたことがある。流石に鉄骨を機械なしで運んだことには驚かれたが。
「そもそも、親の実家とはいえ、俺が上泉の家にいたのは新陰流を学ぶためだ。別に取り入って婿養子になろうとか思ってもいなかったし……危うく新陰流の総師範にさせられるところだったが、元継兄さんが止めてくれた」
「あー……面倒な気持ちは分かるわ。うちもそんな感じだし」
「大変だね」
今日は友人たちと海に行くことになった。今回は北山家の別荘に招くということで雫が主催みたいな形だ。当事者に近いということで一番乗りしたところ、その直後に来たエリカと三人で話していた。
ここにいないほのかには、達也たちの道案内を頼んでいた。
それを最初提案したとき、雫からは「大丈夫かな、ほのかで。達也さんのことで舞い上がって迷子にならないといいけど」という発言が

飛び出し、ほのかが慌てるということがあった。
「『護人』という立場なんて、当事者にならないと分からないことが多いのさ。こないだ現職の総理大臣が訪ねてきて、頭を下げられたときはどう反応したものか困ったわ。仕方ないから笑顔で誤魔化したが」
「総理大臣は会ったことないかな。財務大臣なら会ったことはあるけど」
「あたしですら直接会ったことがない大物じゃないの。その人に会える時点で凄いってことじゃない……てか、何気に雫も凄いわね」
かくいう雫も父親の関係で財界の重鎮とそれなりに誼を持ち、エリカに関しては剣術の関係で警察や公安の幹部クラスと面識がある。魔法使いの家系に普通の人はいないようだ。
すると、いかにも船長のような恰好をしている人物が近づいてきた。流石に元ほどではないにしろ、それなりの恰幅な感じを滲ませている。その人物は雫の父親で、将来的には自分の義父になりうる人物――北山潮その人だった。
「悠元君、久しぶりだね。今年初めの新年会以来となるかな？」
「お久しぶりです、潮さん。この短い間に名前が二度も変わりましたが、今後も良い付き合いをしていきたいと思っています」
今年の四月に「長野佑都」から三矢悠元に変わり、そしてつい先日には神楽坂の姓を名乗ることになった。加えて、雫が水面下で神楽坂家次期当主第二夫人の指名を受けた形だ。
資産家である北山家も政財界に強い影響を有する神楽坂家の名前は知っており、妻の実家である鳴瀬家からの書状を見た時は驚いたという。
深雪や雫の婚約に関しては、当事者間だけでなく道連れという意味合いで達也たちにも知らされることとなった。流石に四葉家のことは明るみに出せないため、そこだけはぼかした形となっている。
「魔法師としては格上の相手に縁談まで組まれた以上、本来ならば私が頭を下げねばならないのだがね。いや、この場合は御相子というわけか。そういえば、妻も君に会いたがっていたよ」
「本当はお母さんも付いてきたかったらしいけど、私が全力で止めた」

「……悠元、アンタはマダムキラーの素質でもあるの？」
「エリカ、身内がいる前でそういう発言はするんじゃない。つーか、俺にそんな趣味はない」
鳴瀬家自体、神楽坂家の分家だと知ったのはつい最近のことだ。それは置いといて、雫の母親とは上泉家やパーティーで面識を持っているが、その際に言われたことは「うちの息子になってくれたら嬉しいのに」という文言だった。
どうやら、上泉家で剛三の投げた木刀を掴んだことが大きく影響しているようだ。
嬉しくないわけじゃないのだが、せめてその発言を娘や息子がいないところで言ってほしいと思った。それを聞いたほのかは苦笑しか出てこなかった有様だったし、雫に至っては頬を赤らめつつ「お母さん、余計なことを言わないで」と消え入りそうな声量で呟いていた。
彼女の息子からは「僕のお兄さんになってほしいです」という言葉もあった……まあ、雫と婚姻を結んだら、結果的にはそうなるのだろう。
「にしても、あの達也君がすんなり認めるだなんて……明日は槍でも降ってくるのかしら」
「本人の前で絶対に言うなよ？　てか、ばらしたら爺さんに頼んで琉球走りさせるからな？」
「悠元が一番人間を辞めてると思う」
「ははは……大丈夫かね？」
「ええ、まあ。これも運命だと思って割り切ります」
エリカからは「深雪と一緒じゃないの？」と聞かれたが、今回は用件の関係で神楽坂家に1泊してからここに来ている。どうしてもプライベート的な手続きの中で保護者の承諾を得なければならない部分もあるからだ。
東京に神楽坂家の別宅はあるが、今後も司波家の居候は継続となるようだ。千姫曰く「第一夫人候補として、当主の世話ぐらいは出来るようになってもらいます」とのこと。
早速業者が入って、司波家の防音工事を済ませたらしい……そうい

う目的のためとかじゃないよな？　あくまでもプライベートを大事にしてほしいという親心だと思いたい。費用は実家持ちなので気にする必要もないのだろうが。

リターンにはリスクが伴う

九重寺の奥の間。そこにはいつもの服装である八雲ともう一人の人物がいた。

高級スーツをピシッと着こなしている様はもとより、その人物の存在感が否応にも頭を下げさせてしまう力を持ち得ていた。その人物は東道青波――四葉家のスポンサーの一人であり、この国を裏から支える存在。

政財界の〝黒幕〟である偉丈夫の雰囲気を持ち得る老人は、八雲が点てた茶を一口飲むと、静かに茶碗を床に置いて話し始めた。

「神楽坂悠元……あれは、この国はもとよりこの世界そのものの〝要〟に成り得る。あの家のルーツである安倍晴明すらも超えうるかもしれぬ」

「抑止力ではなく要、ですか」

「彼は既に抑止力という領域を超えているであろう。九校戦はルールの範囲内で威力を加減したのだろうな。千姫殿が三矢家と密約を結んでいたとはいえ、彼女がある意味一番の利を得た形だ」

青波は神楽坂家の力を最もよく知っている。その神楽坂家が十師族という枠組みを破壊しかねない人物を養子として引き取り、次期当主とした。この時点で、神楽坂悠元という人物がこの国の護りとしての立場に就いた、と青波はみている。

「そなたは彼の武術や魔法の訓練にも付き合っているそうだが、どうか？　彼と対峙して勝てるか？」

「そうですな……彼に殺し合いを挑んだ時点で、拙僧の負けは確定するでしょうな」

八雲は少し考えた後、隠すことなく言い切る形で青波に答えた。新陰流剣武術の師範クラスに加え、彼の魔法は現代魔法や古式魔法にも通じるだけでなく、八雲の知らない系統の魔法まで会得している。達也ならばともかく、悠元相手では分が悪すぎて相手にしたくない。それでも彼への武術面での試しは続けている。

「生き残れば御の字、と言いたそうだな？」

「実は、神楽坂家のご依頼で彼の実力を試したのですが、拙僧の本気の隠形を見抜かれましてな。悠元君の機嫌を損ねれば、彼だけでなく達也君や深雪君まで敵に回しかねません」
「〝四葉〟深雪か……東山殿の曾孫を内密ながら婚約者にしたことといい、彼は一体何処に向かうのか……興味が尽きないな」
　彼は必要以上に魔法を使うことなどない。春の一件の時は、路地裏で遭遇した敵を撃退するのに武術しか使っていない。防衛大学校のデモンストレーションの際は魔法を使用していたが、それでも現代魔法のみだった。九校戦では古式魔法と現代魔法の複合術式を披露したが、それでも威力はルールの範疇に収まっていた。
「閣下はよろしいのですか？　四葉家が変わりつつあることに関して、この国の抑止力を危惧される立場として……」
「ただの兵器で終わるようなら、上泉と神楽坂が本格的に介入したであろう。それに、この国の切り札が４つに増えた以上、あとはその力を絶やすことなく継がせることこそ本懐。義父とはその点で妥協できた。茶の代わりを貰えるか？」
「畏まりました」
　青波からはいつも「茶の腕だけは上達せぬな」と嫌みを言われる始末。だが、別に八雲の点てる茶の味が不味いという訳ではなく、腹の内に秘めたるものを感じてなのか……皮肉めいた言葉であると八雲は察していたが、決して口に出さなかった。
◇　◇　◇
　所かわって四葉家の本屋敷。当主である真夜の私室で、彼女は通話をしていた。その相手というのは、十文字家当主こと十文字和樹であった。
「十文字殿、あれから調子はいかがでしょうか？」
『魔法力も全盛期のものと遜色なくなりました。治療師を紹介してくださった四葉殿には感謝しております』
「お気になさらず。当主代行である息子さんからも過分な礼を頂きました」
『克人は実直な性格ですので。それに上泉家のことも念頭にあったの

でしょう』
　和樹は数年前から魔法力の低下に苦しんでいた。このまま改善が見込めなければ、息子である克人に継がせるべきなのだが、和樹は教えるべきことを全て教えないうちに譲るのは心苦しかった。そこで、和樹はダメ元で上泉家に話を持っていくことにした。
　すると、現当主である元継は「四葉家ならば、その辺のことに詳しいかもしれない」という風に話を持っていき、真夜は深雪経由で悠元に依頼をしたのだ。
　こんな回りくどい方法を取ったのは、七草家の諜報を逃れるためであった。加えて、治療自体は病院でなく群馬にある上泉家の本屋敷で執り行った。無論、和樹には厳重な守秘義務が課せられることとなった。この連絡自体も真夜から『精霊の鏡』で連絡を取っているため、他所からの通信傍受の可能性は極めて低い。
『彼に対しては、私の魔法師人生を救ってくれた恩義があります。先日の件の後、三矢殿と個人的に相談したのですが……隣接している中部・東海地方の守護をなさっている四葉殿にも協力を仰ぎたいと思っております』
「私どもも監視で手一杯ですので、どこまでの協力ができるかは保証できませんが」
『構いません。春のことで叱責を受けた以上、本来ならば我々の範疇ですが、必要な時はご相談したいというだけです。十師族の柵のため、流石に共闘や共謀は許されませんが』
　恐らく、和樹は四葉家の情報網を頼みにしたいという思惑があるのだろう。三矢家だけでもかなりの情報網を持ち得ているわけだが、それ以上に七草家への依存を弱めたいという部分も見え隠れしている。
　そのあと、少し雑談をし終えて真夜が一息吐くと、タイミングを見計らったかのように葉山が姿を見せた。既にハーブティーの準備をしているあたり、この執事の空気を読む力は脱帽ものだと真夜は笑みを零した。葉山はハーブティーを真夜の前に置きつつ声を掛けた。
「どうぞ奥様。それで、先程の十文字殿の件ですが」
「弘一さんも存外嫌われたものね。まあ、一番嫌っているのは悠君か

もしれないけれど。自分の身元をばらされて、その上国防軍絡みの介入を見過ごす……これで好意を抱けるとしたら、余程の自虐体質でないと無理よ」
「仰る通りで」
別に、悠元自身が七草家との婚約を解消してほしいと言ったわけではない、ということを真夜は知っている。その婚約自体、３月の臨時師族会議の後で聞かされたことと深雪経由で聞き及んでいる。
それでも、彼に対する敵意に近い所業は誰だって許せないであろう。何せ、それを聞かされた深雪が笑顔で「七草家を凍結してしまいましょうか」と笑顔で言い放ち、悠元と達也が必死に宥めたのはここだけの話。
深雪としては、恋敵になりそうな真由美諸共処理するつもりだったのかもしれない。その憶測を考えたところで真夜は珍しく深い溜息を吐いた。
「色々面倒事は尽きないわね。未来の利を得ているから、その代償と思えば安いものかしら」
「その悠元様ですが、どうやらＦＬＴで核融合発電の研究資料を集めているようです」
「ワザと隠していないのは、気付かせる狙いもあるのでしょうね」
ハーブティーを口にしつつ発せられた真夜の言葉に葉山も頷いた。
魔法技術を用いた重力制御型熱核融合炉の開発はそこまでの規模ではないが進められてきた。そこに光明が差したのは、紛れもなく悠元の影響が強いと真夜は睨んでいる。現在、ＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課にて内密に熱核融合炉プロセスに必要となる魔法技術の実験も行われていると聞いている。
「四葉家（うちち）としては、次席株主である悠君の提案は受け入れざるを得ないわね。葉山さん、候補地の選定には恐らく神楽坂家も関わるでしょうから、いくつか候補地を見繕うようにと」
「場合によっては、プロジェクトの前倒しもあり得るとお考えなのですね？」
「ええ。千姫さんから手紙で忠告を受けた以上、あちらへの情報発信

もより一層吟味しないといけないわね」
フリズスキャルヴの危険性は葉山の指摘と三矢家からの手紙で周知しており、それを介しての検索は主に諸外国の経済的な動きに止めていた。政治と経済が密接にリンクしている以上、そこから軍事的な動きも見えてくる、というのが葉山からのアドバイスであった。ちなみに、アナログ的な伝達手段ではあるが、上泉家や神楽坂家が手紙を使っているのは情報漏洩を危惧してのことだ。
情報を調べるということは相手からその動きをみられる……絶妙な舵取りを要求されることに、真夜は思わず笑みを浮かべた。その笑顔で当主の負けず嫌いな部分を垣間見た葉山は、やはり血は争えぬと内心で零したのだった。
◇　◇　◇
達也たちも無事合流し、フレミングシップに乗り込んだ。
北山家の別荘がある聟島（むこじま）列島まで約6時間。最高時速１００ノットで移動しているため（空気抵抗軽減のためのシールドのせいもあるのだが）、魚釣りに興じるということもできないため、悠元は端末のキーボードを叩いていた。
合間に深雪や雫が飲み物や菓子類を持ってきてくれるので、そこまで不自由することはなかった。後で聞いたが、雫が北山家のハウスキーパーである黒沢女史から色々聞かされていたことも起因しているようだ。
いくら感覚的に魔法式が組めるといっても、理論的な部分が成り立っていないと意味がない。とりわけＥＳＣＡＰＥＳ計画においては、その部分が最も重要であるのは間違いないからだ。
「悠元、新しい魔法でも組んでるのか？」
「組んでる、というよりも改良だな。市原先輩に頼まれた案件だよ」
論文コンペの件に関わるのだが、実は悠元が魔法幾何学を取っている関係の話で、担当教員の廿楽計夫（つづらかずお）に論文コンペの論文を書いてほしいと頼まれ、以前詩鶴が書いていた〝大量破壊兵器〟に倣って核兵器に代わる戦略級魔法のあり方に関する論文を書いたら、選考から弾かれた。

それは既定路線だし、危険だと思われて準備から遠ざかれるほうがいい……そう思っていたら、鈴音がその論文を見た上でクーロン力制御の魔法式を改良できないか頼まれ、その試作をしているというわけだ。
「ほのか、何か知ってる？」
「悠元さんってば、授業で５つの系統魔法を連結させる複合陣を作ってたから」
「出来ると思ったからやっただけだし、案外すんなり書けるものだと思うけれど？」
（現代魔法の異なる系統の連結魔法陣なんて、普通は出来ない代物なんだが……）
なお、現状の魔法式でもクーロン力を従来の１億分の１に下げるという破格的な性能だが、ひとまずは１００万分の１で妥協するのがいいと思い、組みなおしている最中だ。
大体の目途は立ったので、移動の時間を利用して全員で魔力制御の訓練をしたり、深雪と雫に天神魔法の基礎を教えたりして時間を潰していた。朝６時出発ということで眠ったりする人もいる中、悠元は甲板で一人精神を落ち着かせて集中していた。
すると、そこに幹比古が姿を見せて悠元の隣に腰掛けた。
「悠元、ちょっと聞いてほしい話があるんだ」
「……お前が別の家の養子になる話か？」
「なぜそれを……って、悠元に聞くのは野暮だったね」
幹比古は悠元の情報収集能力を目の当たりにしており、彼が東道家のことを知らない道理はないと判断した。それに気づきつつ、悠元は口にした。
「その家のことを爺さんに問い詰めたら、爺さんの娘――――俺にとっては血縁上の伯母がその人の妻にあたるそうだ。子どもはいるそうだが、孫に恵まれないって言ってたな」
「……つくづく、悠元の親族って常軌を逸してるね」
「俺もそう思う」
東道青波が義理の伯父だと聞いた瞬間、俺は彼が偶に訪れる意味合

いを悟ってしまった。自分の妻の実家なのだから、その付き添いだとしても理解できなくはない。今この場（クルーザーの甲板）にいるのは悠元と幹比古だけであり、聞き耳を立てられないように遮音シールドを張っている。
「お前としては、美月のことが気になるのか？」
「え……えと、まだ悠元のような関係じゃないし、そもそも恋人でもないから」
「話の段階をすっ飛ばすな」
　今の幹比古の精霊魔法は、神祇魔法や喚起魔法だけでなく古式の精霊魔法で上級技術となる属性魔法の領域に差し掛っている。これはすなわち、吉田家で伝わっている精霊魔法の領域を超えつつあるということ。
　なので、幹比古に対して声が掛かったことは当然の流れだが、美月のこともあって中々答えが出せない。彼女の場合、両親ともに非魔法師の家系から生まれた突然変異型の魔法師なのだ。
「その美月なんだが、神楽坂家の筆頭主家にあたる伊勢家が養子縁組を申し出たそうだ」
「……それはまた、どうして？」
「彼女の眼の力だ。何も起こらないって保障はないからな」
　伊勢家は未来を見通す〝星見〟の一族。その特殊な術を身に着けるためには、それこそ〝水晶眼〟クラスの力がなければならないと姫梨は説明してくれた。上泉家で幹比古絡みの問題を片付ける一方で、魔法師の家柄としては弱い立場の美月を神楽坂家で保証する。
　そうした理由は、彼女の両親を政財界に強い神楽坂家で保護する狙いも含まれている、とみている。事実、彼らの仕事先を神楽坂家で買収したほどだ。
「言っておくが、俺は幹比古と美月のことに一言も触れた覚えなどない。そもそも、神楽坂の継承だって九校戦中に聞かされたわけだし」
「疑ってはないけれど……はは、神童だなんて浮かれていた自分が情けないよ」
「力を持てば増長してしまうのは無理ないさ。高校入ってあのまま

だったら、俺直々に叩き潰していたが」
「文字通り潰れそうだね、ソレ」
悠元は幹比古と話しつつも、7属性の精霊を周囲に収束させて制御している。それを見た幹比古は一つの疑問を浮かべて問いかけた。
「気になったけど、悠元は新しい天神魔法でも編み出す気かい？」
「まあ、間違ってはない。というか、大まかな形は出来たから、後は制御面を煮詰めていくぐらいのものだけど……せっかくだから、幹比古に面白い技術を教えるよ」
そう言って何も書いていない短冊を取り出し、懐から1本のペンを取り出す。そのペンに想子を流し込んで短冊にペン先を押し付けると、想子の光が短冊に刻まれて筆で書いた時と遜色ない仕上がりの代物が出来た。
「それ、ＣＡＤかい？」
「知り合いに頼んで作ってもらった神祇魔法用の特殊なペン型ＣＡＤだ。幹比古の想子特性データも入ってるから、このまま渡しても使える。試してみるか？」
「う、うん……凄い、こんなに手軽に。父さんや兄さんの前で使えないね」
天神魔法で触媒を使うことがあっても、基本的にはＣＡＤで事足りる。このペン型ＣＡＤは美月の護身用に精霊魔法を教える関係で作ったものだ。本人の思考を読み取って魔法式を即席で書けるという利点がある。おまけに、本人の想子があればいいので、壁だろうが床だろうが、しまいには空中にも書けてしまう。
刻印型魔法陣の技術を応用した投影魔法式の構築。これは世界でも初めての技術となるため、迂闊に漏らせないと幹比古はすぐに判断した。使うとしても、余程の緊急事態が差し迫った時の護身用にすると幹比古は述べた。
「魔法幾何学の授業でこういう技術ができないかなと試行錯誤して、知り合いの魔工技師に頼んで出来上がったからな」
「でも、本当に貰っていいのかい？」
「どうせ俺と幹比古以外には使えない代物だし、下手に分解しようと

したら爆発するようになっている……半径１０メートルは吹き飛ぶぐらいのな」

爆発と言ったが、厳密にはごくごく小規模のプラズマ爆発を引き起こす程度の起動式が組まれている。甘いセキュリティで秘密は守れないため、使用者にも相応のリスクを負うことにある。力というものは、いかなるものであっても責任と義務が付きまとってしまうからだ。

それを聞いた幹比古は、引き攣った笑みを浮かべつつも大事に使うと約束してくれた。ま、俺と幹比古以外の人間がそのペンを使おうとしたら、真っ先に解るようになっているので問題はない。

堀全部埋めてから言う台詞じゃねえ

「……達也」
「なんだ？」
「事情は察するが、泳がないのか？」
「……まあ、流石にな」
　到着もそこそこに、水着に着替えて楽しんでいる。本来なら昼食の時間だが、船の中で予め軽食程度の食事を済ませているので問題はない。
　ここにはいないレオと幹比古は遠泳で泳ぎに行った。悠元が誘われなかった理由は、エリカから「悠元が行ったら、確実に自信を折られるわよ」と忠告したせいだ。そこには、下手に引き離したら気にする女子が2人いることも勘案していたのだろう。
　なので、悠元は天神魔法の練習がてら、ビーチパラソルの下から海水で天然のウォータースライダーを作り、それを女性陣が楽しんでいるという構図だ。それだけのことを簡単にやってのけてしまう悠元の非常識さに、同じくビーチパラソルの下で涼んでいる達也は内心で溜息を吐きたくなった。
「普通は、あれだけの魔法を長時間維持するのも難しいはずなんだがな」
「現代魔法の場合はな。天神魔法でもちょっと工夫はしてるさ」
　こういうのを「最強（なろう）系主人公」というべきなんだろうが、かくいう達也も似たようなものである。すると、一通り楽しんだのか女性陣が近づいてきたので、魔法の行使をやめて海水を静かに戻していく。
「悠元さん、一緒に泳ぎませんか？」
「折角海に来たんだし、遊ぼう？」
「……そうだな。達也、覚悟を決めろ」
「どうやら、そうしたほうがいいな」
　お互いに羽織っていたパーカーを脱ぐと、やはり目立ってしまうのは達也の体に残る幾重の傷痕。悠元の場合は強力な自己修復術式のせいで残っていないが、達也は幼い頃から自己修復術式も満足に使え

ない状態から鍛えられていたためだ。
　それを見た女性陣は引いたが、已む無くフォローすることにした。
「すんごい鍛えてるな、達也は。それらの傷は努力の証ってことなんだろうが、九重先生はお前をどこに至らせるつもりなんだか、皆目見当がつかん」
「……ありがとうな、悠元。って、どうした？」
「お前から感謝の言葉が出るとは思わなくてな」
「どうしてそうなる。って、深雪も何故に笑う？」
　傷云々は男の勲章なのだとフォローした悠元に感謝の言葉を投げると、驚きを隠せない悠元はもとより、深雪は笑みを零し、ほかの女性陣は驚いたような表情を垣間見せていた。何にせよ、傷のことについて深く追及されなかったことは達也にとって良かったというべきことだった。
　その後、今度は空中に浮かんだ氷や炎の的に海水を利用しての的遊びに興じたのち、達也は悠元と想子制御の訓練に取り組んでいた。達也の飲み込みが思ったよりも早かったので、次の段階となる想子の収束・分散制御の特訓。なお、美月を除く女性陣は目の届く範囲でボートでの遊びに興じていた（美月はパラソルの下で休んでいる）。
「済まないな、悠元。お前も深雪や雫と一緒にいたいだろうに」
「別にかまわないさ。それに、近くにエリカがいると根掘り葉掘り聞きかねないと思ったからな。たまには1人でのんびりするのも悪くない……それに」
「それに？」
「どうせ夏休みが終われば、ほぼ四六時中深雪か雫の傍にいることになるし」
　同じクラスに加えて深雪とは同じ生徒会役員。加えて司波家に居候の身である以上、深雪と接する機会はおのずと多くなる。まあ、ＣＡＤ調整に関してはこれまで通り達也の領分だということは変わらないが。
「というかな……沖縄の時に、あれが打算的な行動だったかもしれないって疑わなかったのが不思議でならない」

「……折角だから聞きたいが、深雪のことは良かったのか？」
達也は、兄として妹を応援したい気持ちがあるのは事実だし、深雪にとっての初恋となれば、成就してほしいという叔母や母親の気持ちもある。
兄である達也自身が言うのもなんだが、妹は聞き分けがよすぎる分、ストレスなどを溜め込みやすい。その発散相手として悠元に甘えている。その辺は大丈夫なのかと思わなくもなかったのだ……主に、妹が暴走して悠元に描写禁止ラインを踏み越えるようなことについて。
「既成事実化した以上は受け入れるしかないし、俺としても深雪のことを好きでいるのは事実だ。そういった一線を越えたときは溜息しか出なかったけど」
「うちの家系は恋愛事に疎すぎるからな。お前のところは違うのか？」
「父方の祖父の代は知らんが、父さんと母さん、それに爺さんが恋愛結婚だったらしい。師族二十八家はおろか、魔法使いでも珍しいだろうな」
もしかしたら、七草家が三矢家や四葉家にちょっかいをかけているのは、現当主の恋愛結婚したことへの羨望やら妬みが含まれているのかもしれない。
それはおいといて、深雪のことはそれなりに好印象を抱いていた。原作のことからして、例え介入しても達也への依存が強いだろうと思っていたわけなのだが……結果として、自分への依存度合いが増していっている。
これについて、達也はこう説明してくれた。
「お前が魔法を放って気絶し俺が基地の司令室まで戻ってきた際、深雪の顔面が蒼白に染まっていたからな。それを見て、深雪は間違いなくお前に対して強い感情を抱いたのだろうと推察した」
「気絶していた間の話は深夜さんからも聞いたが……なるほどな」
「尤も、俺が問い詰めても深雪は『そ、そんなこと絶対にありません！』と否定していたが、態度とその後の行動でバレバレだった。バレンタ

インの時は、台所の雰囲気がまるで黒魔術の儀式のようだったが」
「いや、その表現は流石に酷くないか？」
すると、海風でボート――――とはいっても、サーフボードに毛が生えた程度のものだが、悲鳴とひっくり返ったボートを知覚した達也がすぐさま動き出した。ここで悠元が一歩出遅れたのは、原作のとある場面を思い出したための思考でワンテンポ遅れた。
（達也のやつ、主人公の例に漏れずラッキースケベ的な気質も持ってるからな……っと、急ぐか）
表面張力増幅魔法『水蜘蛛』で水上をまるで土の上を歩くかの如く駆ける悠元。その上で、波や風を防ぐために大気干渉結界を展開し、穏やかな波と風の状態に改変した。それに合わせて転覆したボートを元に戻し、ボートの中にある水を綺麗に排出。
どうやら達也をいつの間にか追い越していたようで、雫と深雪をボートの上に軽々と引き上げた。ボートには自力で上がったとみられるエリカがいて、重量のこともあるので悠元は水面に魔法を展開して立っていた。
「流石2人の彼氏ですなあ」
「茶化すな。っと、残るはほのかのようだが……」
そこで、達也がほのかをボートに上げようとしているのだが、ほのかが慌てた様子で上がることを拒否していた。これはアレだな、と察した悠元はボートに背を向ける形で回れ右をした。
悠元の取った行動に首を傾げる雫だったが、ほのかがボートに上がった状態を見て察してしまった。
「……悠元、気付いてたの？」
「何か嫌な予感がしたからな。知り合いとはいえ、巻き込まれるのはごめんだ……ボートを砂浜に移動させるわ」
◇　◇　◇
結局、砂浜に戻ってきても泣き止まないほのかを達也が宥めた（プラス雫が吹き込んだ）結果、達也はほのかのお願いを聞くこととなった。あの場合、達也がほのかの身だしなみよりも安全を最優先した結果の事故、と言えるだろう。

ともあれ、ほのかにとっては折角巡ってきたチャンスを生かし、達也とボートに乗っていた。さて、兄がそうなってることに対して妹の反応はというと、こうだった。
「悠元さん、あーん」
「あー……んっ。ふむ、これは美味しいな」
「何というか、カップルの雰囲気出しすぎじゃない？」
深雪としては、恋愛に対して良くない噂（アブノーマル的な趣味があるなど）が立つ位なら、いっそのことほのかに積極的にアタックしてほしいと思っていた。とはいえ、兄に甘えられない分を悠元に向けた結果、甲斐甲斐しくフルーツを悠元の口に運んでいた。これには流石のエリカも引き攣ったような笑みを零していた。
「とはいってもな、まともな恋愛経験なんて皆無に等しいぞ？　政財界や魔法師世界の腹黒い現実なら沢山向き合ったが」
「そうよねー、悠元はシスコンだものね」
「うるせえよ、超絶ブラコン」
ここで雫が関わってこないのは、ほのかを諭した責任というものでもあった。深雪もその辺は察しているので、雫のことを悪く言ったりはしない。婚約者同士で不穏な空気が流れるのはごめんである。
お互いに悪口を言いつつも、しっかり一線を引いている二人を見て、幹比古は思わず苦笑を零したのだった。
◇　◇　◇
夕食はバーベキューということで、八人は和気藹々と楽しんでいた。時折、達也とレオがフードファイトを繰り広げたり、女性陣が恋話で花を咲かせていたりと、特にぎこちなさは見られなかった。
その後、別荘の中で遊んでいる面々と別れ、悠元は一人砂浜に座り、静かに打ち寄せる波の音を聞きながら夜空を見ていた。
ここまで脇目も振らずに走り抜けてきた。ここからどういった未来が待っているかなんて見通すことはできないが。正直出来過ぎの部分があるのは否定しない。
（ん？　誰か来たようだな……）
砂を踏みしめる音と人の気配を感じて振り向くと、そこには大切な

恋人となった少女――――深雪の姿があった。深雪はスカートに砂が付くことも気にすることなく、悠元の隣に座った。
「女の子同士で会話を楽しんでいたんじゃなかったのか？」
「実は、雫からほのかのことについて相談されまして……悠元さんを探しに行くといって、そのまま抜けてきました」
　ようは、近くに深雪がいると達也が動けないと判断したのだろう。雫の言葉を聞いたとき、深雪は「流石にお兄様でも分別ぐらいはつけると思いますけれど……」と思ったらしい。それ以上に、深雪はもう一つの考えに至った。
「お兄様が四葉のガーディアンである以上、私のことを思ってくれるのは嬉しいって思っています。私もお兄様に頼ってしまっていますから。ですが……お兄様と私が目指す夢を叶えるためには、私たちも〝人〟であることを目指すべきではないかと」
　人身御供という考え方で何かを成そうとは思っていない、と深雪は語る。だからこそ、達也にも幸せになってほしい。彼の妹としてのささやかな願い……その一歩目になってほしいと、深雪はほのかの背中をそっと押してあげた。
「尤も、流石に私や雫のような方法は推しませんでした」
「それが普通だと思うんだが？　ほのかがやったら洒落にならん」
　とりわけエレメントの一族は依存体質が存在する。上手にコントロールできれば御の字だが、度が行き過ぎると日常生活にも支障をきたしかねない。なので、雫には昼のアクシデントの後で一応釘差しはしておいた。
「……なあ、深雪。一つ聞いていいかな？」
「何でしょうか？」
「どうして、俺を好きになったんだ？　こう言っちゃなんだが、結構利己的な人間だぞ？」
　深雪を知る人間から色々聞いてはいるが、せっかくの機会だからということで聞いてみることにした。こういう機会なんてそうそうあるわけでもないし、落ち着いて話ができる機会が今後も多いとは限らない。尋ねられた深雪は、一つ深呼吸をしたうえで話し始めた。

「最初は、お母様が笑顔を見せたことでした。あの頃のお母様は体調を崩すことが多く、心からの笑顔なんてあまり見たことがありませんでした。それを引き出した悠元さんに、興味が湧いたのです」
『領域強化』によって健全な状態へと戻った深夜だが、当時は魔法の酷使によって体調を崩しがちだった。そんな母親が作り笑いではない笑顔を見せた相手が悠元だった。
それから、深雪は飛行機の座席交換で悠元と隣同士になり、色々会話をした。
「魔法のこととか勉強のこととかを気にせずに話した異性は、実は悠元さんが初めてなんです」
「無意識的に人を惹きつけちゃうからな、深雪は。正直なところ、見惚れていたことを必死に隠したけど」
「そうだったんですか……それを言うなら、私も悠元さんに見惚れていたかもしれません」
自覚した今だからこそ言えることだが、一目惚れは恐らく飛行機での会話であると深雪はそう述べた。なお、悠元がプレゼントしたクッキーに関しては、いまだにあの領域に辿り着けていないと話す。いや、菓子作りに〝聖域（サンクチュアリ）〟とかの類なんて知らないんだが!?
「悠元さんこそ、第一夫人は私でよろしいのですか？　私、結構やきもち焼きですし……いろいろ自重しませんし……」
「（自重してない自覚はあったのか……）達也が色々規格外な時点で、多少のことは大目に見てるよ」
「悠元さん……そしたら、今度お背中を流しますね」
「せめてバスタオル装備は標準でお願いします」
15歳にしては発育が良いため、プロポーションは言わずもがな。ほのかですら、深雪の下着姿を初めて見たときに鼻血を出したらしい……情報元は雫からだった。雫としては、スタイルの差からくる嫉妬を覚えていたのかもしれない。
「私を救って、泣かせた相手は悠元さんなんです。なので……責任を取ってくださいね？」
「堀全部埋めてから言う台詞じゃないと思うんだけどね」

この後、雫の提案で彼女の部屋に連れ込まれ、深雪も加わって三人で眠る羽目になってしまった。なお、覗き見とかを考慮して一切手は出していない……はず。流石に熟睡している状態だと手を出したかどうかなんて分かるはずもない。ただ、朝起きた時に二人の胸を寝間着越しに触ってしまっていたので謝罪した。

雫は「胸大きくしたいし、別にいいよ」と顔を赤らめて呟き、深雪は「悠元さんなら胸だけじゃなく、全部を見てほしいです」と返しながら寝間着を脱いで密着してきた。それに負けじと雫も寝間着どころか着ているものを全て脱ぎ捨てて悠元に抱き着いた。

この世界の女子は肉食系の線が濃厚かもしれない、と薄々感じながらも朝早くから二人を抱くことになってしまったのだった。

親の細やかな願い、子知らず

ＦＬＴの新製品展示会の日。達也は深雪と一緒に東京ビッグサイト（世界群発戦争の際に軍関連施設として使われ、戦後は各種企業の展示会や即売会などのイベントホールへと役割を戻している）へと赴いていた。だが、悠元に関しては別件の用事ということで別の場所にいた。

それは、群馬にある上泉家の本屋敷。その離れにある座敷に招かれた悠元は、今や上泉家先代当主となった剛三と対面していた。

「神楽坂家での顛末は聞き及んだ。しかし……くくく、婚約者３人でも手に余るとは思いもよらなかった」

「俺としては、半信半疑の部分もあるんだけれど。兄さんは門下生に稽古の最中？」

「ああ、総師範は未だ儂が預かっておるからの。出来ることならお前に継がせたかったが……」

「ややこしいことになるから駄目だろうに」

いくら剛三の妻が神楽坂家現当主――――千姫の姉とはいえ、新陰流剣武術はあくまでも上泉家の根幹を成すもの。神楽坂家にも独自の武術がある以上、その線引きはあって然るべきだと悠元は断じた。

「千姫からは如何様に？」

「伊勢神道流（いせしんとうりゅう）については、鍛錬を免除される形となった。新陰流が同じ香取神道流の極意を取り込んでいる以上、残るは奥義伝授だけだろうって……そんな簡単でいいのかな、と思うけれど」

塚原卜伝（つかはらぼくでん）――――上泉信綱よりもその名を知られているであろう戦国時代の〝剣聖〟。この世界の彼に関わるエピソードも常軌を逸していた。信綱と同じように老いを感じさせない姿で、創作物と言われていた宮本武蔵との逸話も事実となっていたのだ。

何せ、道場破りのごとく自宅を強襲してきた宮本武蔵を鮮やかに迎撃し、その上で彼に剣術を叩きこんだという書物が存在している時点でファンタジーに両足突っ込んでいるレベルだ。坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）の一例からして、もう驚くのも馬鹿らしくなってきている。

この世界の戦国時代がゲームの動きをリアルに反映していても可笑しくない、と諦めた。
その彼は当時の神楽坂家当主に剣術を教え、その教えと奥義「一の太刀」を元に伊勢神道流を開かせた。神楽坂家に用意された自分の部屋に何故かあった手記によれば「立場的に弱い公家であるからこそ、自らを守る術に手を抜いてはならぬ」と記されていた。
というか、神楽坂家は公家の末裔ということに思わず溜息が出そうになったのは言うまでもない。前世は身内がおかしいけれど一般市民の階級だっただけに尚更だった。
「儂も調子に乗って総師範に至る試験を課したからの。やってのけた時は目を丸くしたわい」
「……そんな話、今初めて聞いたんだけど？」
「いやー、その、ついうっかりな」
「琉球走り」をはじめとした鍛錬は、総師範に至るための最終試験の側面が強いと剛三がここにきて明かした。自重しなかったのはお互い様、という言葉の後に悠元が溜息を一つ吐いたところで、剛三は真剣な表情を浮かべて尋ねてきた。
「ところで悠元。先日の臨時師族会議についてだが……烈とあの後電話で対談をすることになってな。どうにか九島家への協力を頼めないかと頭を下げにきおった」
「……はあ？」
そういう反応になるだろう、と剛三は悠元を見つつも説明を始めた。
元々、七草家と九島家に対しての追及は〝警告〟に止めてほしいとお願いをしていた。その理由は、七草家の本分であるメディア工作の主導権を神楽坂家が裏から奪ったことに対する〝詫び〟も含むが、最大の理由は大亜連合の論文コンペに合わせての横浜侵攻に対応できる人員を今減らすことは愚策であると考えたからだ。
その動きを見て処分するかどうかの判断材料にすれば問題はない、という意味合いもあるし、原作知識ありきの考え方で失敗した九校戦の一件も念頭にあった。

話を戻すが、剛三は烈から穏便な処分にしてもらったことには感謝しつつも、力を貸してほしいという曖昧な理由だった。あの御仁にしては歯切れの悪すぎるお願いに、流石の剛三も回答を保留にした状態で悠元に相談することにした、と話す。
「爺さんや母上があれだけ口を酸っぱくして言ったのにか？」
「十文字家当主の様子を七草家が掴んだようでな。上泉家が関わっているということで何かしらの探りを入れてきているが……お前の持つ固有魔法のことは、迂闊に話せぬ」
有機物干渉系魔法は一種の禁忌に近い部分が存在する。とはいえ、完全に忌避されているわけではなく、魔法治療などの医療分野や一条家の『爆裂』などといった限定的な使い方に止められているのが実情。
悠元の『領域強化』の効力は剛三自身も実感しているため、十文字家当主の治療に使うべきか悩んだ部分もあった。だが、いざという時の味方として協力関係を結ぶのがデメリットよりも大きいと判断し、剛三は悠元に治療を頼み込んだ経緯がある。
「（まあ、想定の範疇だが……）何か後ろめたいことがあるのなら、まずは自分たちでどうにかする術を編み出せ、というのは酷かな？」
「……やはり、九校戦での一件が尾を引いているか？」
「それもあるっちゃあるが、最大の理由は光宣（みのる）に対して九島家全体がまるで『隔離』するような扱いをしてることだ」
剛三の場合は自分の身内だったから、深夜の場合は友人になりたいと言い放った相手である達也と深雪に対してのお節介、そして穂波の場合は兄の元治と幸せになってほしいという思いから使用した。剛三は真夜と深夜の2人と面識があったので、もしもの時のストッパーになってくれるだろうという打算的な部分もあった。
仮に光宣を治した場合、メリットよりもデメリットが大きくなる可能性があった。とりわけ九島家現当主は力に拘っており、その魔法の根幹を知ろうとあの手この手で動きかねない。下手すれば年齢のかけ離れた婚姻を申し込んでくる可能性も否定できないのだ。
「達也の事情を深夜さんから聞かされたが……状況や境遇は異なるが、血の繋がった相手から疎まれてる部分は同じだと思ってしまう

よ。光宣の場合は直接的、達也の場合は間接的に家の関係者という文言が加わるけど」
「……ふふふ、やはりお前に十師族という代物は楔でしかなかったわけか。わしの慧眼も曇ってはおらんようだ」
「生涯現役と言い放った爺さんの台詞じゃないぞ」
急に年寄り臭い台詞を言い放ったことに対して、悠元はジト目を見せつつも剛三に辛辣な台詞を吐いた。それを聞きつつも、剛三は湯呑に入った緑茶を一口飲んだ上で悠元に尋ねた。
「悠元、お前は今回のあやつの動きをどう見た？」
「……恐らくだけれど、四葉家への〝抑止力〟を求めたんじゃないかって思う」
現在の十師族の当主世代で言うなら、筆頭に来るのは間違いなく四葉家当主である真夜。表舞台には出てきていないが、四葉家の縁者で深夜もいる。それに加えて当主直系に該当しうる達也と深雪の存在を含めれば、間違いなく四葉家は十師族でも抜きんでている。
それに対抗できるのは三矢家ぐらいだろうが、四葉家と間接的に協力関係にある以上は敵対行動をとる意味合いが不明。現当主であり自身の父親である元も四葉の恐ろしさを剛三から聞いて育った身。
なので、師族会議においては四葉と同等の発言力を有するが、それを傘にして会議を牛耳るというのは非効率的である、と理解もしている。
「厳密には、達也に対しての抑止力ということなんだと思うけど。言っとくけど、俺にとっての親友を敵としてみるのは難しいわ。それに、深雪のこともあるし」
「怖いとは思わないのか？　お前も聞いているのだろう？」
「そう思わないと言えば嘘になるけど、別に心を伴わない兵器を相手にしてるんじゃないんだから、問答無用で排除するのは間違ってると思う」
確かに達也の魔法は脅威的だろう、だからと言って問答無用で排除する方向性は間違っている。仮に彼が天涯孤独で、理解者が誰もいないという状態なら危険極まりないが、今の彼は家族もいて理解者もい

る。
（血縁上の）父親に関してはどうこう言えるような状況じゃないが……それを抜きにしても、彼は恵まれてるだろう。分家の当主たちが彼の力を危ぶんでいるが、それを望んだ結果の末路とも言える。
「……爺さん。達也の特性がああなるように仕向けたのは、爺さんと千姫母さんか？」
「なぜそう思った？」
『月読』を修得した時点で気付いた。達也が使っている魔法特性だと現代魔法の領域を遥かに超えてしまっているんだ……その最たる例が戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』」
魔法先進国ともいえるＵＳＮＡでも、質量をエネルギーに直接変換する魔法の成功例は存在しない。だからこそ、これから起こるであろう出来事の中に〝マイクロブラックホール〟という事例が発生する。
主人公という概念を考えれば妥当な力かもしれないが、いくら精神構造干渉魔法の存在があるとはいえ、そう都合よく『分解』と『再成』という力に特化させるというのは至難の業。だが、そう言った力の前例が存在しているならば、特化させることも出来なくはないと推察した。
天神魔法『月読』――単独発動では精神干渉魔法となるが、相剋・相生による発動では想子や零子などといった肉眼では不可視の粒子に干渉する魔法。五行相剋の場合、粒子に含まれる全ての情報を〝消去〟――広義的に言えば分解魔法の最上位に位置する。
では、再成魔法は何を基準にしているのかというと、『天照』の五行相生であると推察した。術者に対するデメリットを全てカットした最上位の再成魔法……達也のものは、その下位互換版とも言えなくはない。
「……どこまで推察しているか分からんが、確かに達也をああしたのは儂と千姫よ。力を望めばどういう末路になるかを四葉の連中に分からせるためだ……元造の最期の頼みでもあった」
「四葉の先々代当主が？」
「兵器としての末路は自分と賛同してくれた同世代の同志まで、とい

うのがあやつの台詞であったよ。このことは手紙を渡す際、真夜にも伝えておる」
周囲からそう望まれて生まれたとしても、彼は兵器としての宿命から解放するための礎として復讐戦を敢行した。仮に娘たちが復讐に走るようなら、それを諌めて止める役割を剛三に託した。
だが、彼は親友を失った悲しみのあまり、その役割を忘れるかのように新陰流に没頭した。その結果、四葉家が原作の通りの動きを見せていたことに繋がる。
「つまり、爺さんの尻拭いの片棒を担がされた身ってわけか」
「否定はせぬよ……神楽坂家へのことはお前の同意も得ずに進めたが、三矢の名を捨てたことに後悔はしておらんのか？」
「兄さんと血みどろの家督争いなんてしたくないし、こちらからお断りだよ。俺が家を出ても問題ないように国防軍の伝手も作ったわけだし」
国防軍に身を置くことを決めたのは、そもそも実家に対して高圧的に出てくる十山家のことを個人的にも疎ましく思っていたからであり、将来家を出たときの就職先のひとつとして考えていたからだ。
そもそも、三矢家の人間として過ごした時間よりも上泉家で過ごした時間のほうが長いため、感覚的には十師族としての自覚が上の兄や姉に比べれば薄いほうかもしれない。魔法科高校での姉（主に美嘉）の暴れ具合は、そう言った側面が表面に出た結果とも思えてくる。
「東道〝さん〟との伝手は驚いたけど、いざ話してみるとそこまでのものでもなかったかな……どうかしたのか、爺さん？」
「ククク、アハハハハ！　あの義理の馬鹿息子の威圧をそう言い切るとは、流石は儂の孫よ」
夏休み中に八雲の招きで東道青波と対面したが、千姫からは事前に「護人としての面子がある以上、彼に対して謙ってはいけません。寧ろ堂々としてください」と言われたため、彼の威圧に対して同等の威圧をぶつけると、彼は拍子抜かれたようにキョトンとした表情を見せていた。
十数分の会談の後、先に帰った青波を見送った八雲が戻ってくる

と、開口一番に「彼のあの表情を見れるとは、やはり神楽坂の次期当主は貫録も一際違うね」と言われた。解せぬ。
「話を戻すけど……深雪を婚約者に据えてる以上、達也は俺にとって〝家族〟になりうる存在だ。それを害する輩がいるというのなら、相手が例え戦略級魔法師だろうが国家だろうが問答無用で叩きのめす。滅ぼすのは簡単かもしれないが、それで罪もない当該国の民に恨まれるのは御免だからな」
別に戦争を望みたくはないし、それに巻き込まれるのも御免だ。
だが、自身の生存権や大切な人を奪おうというのなら、死んだほうがマシとも言える手段で徹底的に社会的抹殺を図る。それを逆恨みに思ってこちらの逆鱗に触れるようならば……その際は容赦なく〝消えてもらう〟だけだ。
だが、世界の版図が大きく書き換わって、犠牲となる非魔法師の数が増えても御免だ。なので排除はあくまでも最終手段ということになる。3年前の一件で人殺しを経験した後、いろいろ考えた俺なりの決意ともいえる。
これを聞いた剛三は、何も言わずに優しい笑みを零しただけだった。

王に担ぎ上げる奴の気が知れん

慌ただしい夏休みだった……一言で言うならそれに尽きる。

九校戦まではずっと魔法の練習漬け。九校戦では天神魔法を披露し、新人戦２種目で「クリムゾン・プリンス」を破っての優勝。神楽坂家で次期当主の指名（プラス婚約者の紹介）を受けた。

雫たちと海に行った後の残りは、東京にある神楽坂の別邸で姫梨や雫、深雪と魔法制御の訓練をしたり、司波家でも魔法漬けの毎日。加えて、三矢家に赴いて詩奈と侍郎の家庭教師をしていた。

達也とは異なり、独立魔装大隊での演習参加をしなくてもよい部分は助かったと思う。そこまでやられるとトップアイドル並みの分刻みスケジュールに成りかねなかったからだ。

なお、達也がＦＬＴやら独立魔装大隊絡みで家を空けるときは自ずと深雪と２人きりになり、婚前交渉というか既成事実の影響で甘えてくることが多くなった。流石に家事などをきちんとこなして、勉強もしっかりした上でのことなので自制できているわけだが。

このことに対して、達也も深雪の様子から気づいているような節が見られたが、追及どころか逆に謝罪された。曰く「妹を甘やかしている責任は俺にもあるからな」とのこと。変にストレスを溜めてほしくなかったのでコーヒーを淹れてやると、達也から感謝されてしまった。

まあ、これを見た深雪がムスッとした表情を浮かべたのは言うまでもないが……双方のマッチポンプになってないか、と思わなくもなかった。

夏休みが明けると同時に、もう一つの厄介事を片付けるために悠元は校長室にいた。悠元と向かい合うのは第一高校の校長である百山東（ももやまあずま）、その傍には第一高校教頭の八百坂（やおさか）がいる。

悠元自身と彼らに含むところはないが、百山は悠元の姉である美嘉を退学させようとした張本人。別にそうなっても逞しい生き方をするであろう美嘉のことは心配していなかったが、佳奈に加えて上泉家の不興を買った形だ。

そんな彼らが冷や汗をかいているのは、悠元の隣にいる着物を着こなした女性――――神楽坂千姫のせいだと、悠元は内心で溜息を吐いた。
「先日送った書状の通り、ここにいる彼は神楽坂家の人間となりました。私としても過去のことは一切掘り起こすことは致しませんが、もしものときは……分かりますね、百山の坊ちゃん？」
「……分かっております」
千姫は８４歳、百山は７０歳という年の差があるだけでなく、「護人」という存在は他の魔法使いの家系と一線を画している。傍から見れば、小娘に頭を下げる偉い人という図にしか見えないが……話を終えて校長室を出たところで、千姫は真面目な表情を崩した。
「もう、美嘉ちゃんのことがなければ真面目な話をしなくて済みましたのに……あの小童は、未来ある若者を〝補欠扱い〟にしないことに尽力すべきです」
「……いくら結界を張っているからと言って、校長室の前で言うべき台詞ではないかと」
戸籍変更に伴う手続きは全て完了している。悠元の手元には、「神楽坂悠元」という名前の学生証がある。それを懐に仕舞いつつ悠元は千姫に頭を下げると、そのまま１年Ａ組の教室に入った。
悠元の名字が変わったことはすぐに広まった。何せ、「数字付き」ではなくなったことのだから、それを甘く見るような連中は少なからずいた。更に付け加えるなら、姫梨が１年Ａ組に転入してきたことも大きい。
元々、魔法科高校は現代魔法の系統を学ぶための要素が大きい。古式魔法の場合は、普通の高校に通いつつ実家で魔法の訓練を積む傾向にある。幹比古の実家のように古式魔法と現代魔法を併用しているパターンは珍しい部類である。
そうでなくとも、古式魔法の家というのは秘密主義が現代魔法のそれよりも厳しい部分があったりする。自分自身がそういう立場になったことで理解できてしまう。
案の定というか、結構絡んでくる連中は多かったが殺気を放って黙

らせた。その中に森崎がいなかったことが不思議だったが……どうやら、モノリス・コードでの恩義があって手を出すことを控えたようだ。

その後、担任教官から神楽坂家の説明があり、絡んでいた一部の連中は顔面を蒼白に染めていた。自業自得と言う他ないので、それ以上の関わりは避けたが。

「面倒事を増やしてほしくないんだがな……まったく、ガキかあいつらは」

「悠元は無駄に精神年齢食ってるよね」

「雫、分かってるけどそれは言わないでくれ」

ただでさえ転生で通算年齢換算が３０歳を超えているのに、剛三の付き添いで色々経験したため、無駄に精神年齢だけ食ったような感じだった。流石に食堂を使えば面倒事にしかならないため、しばらく天気のいい日は屋上で食べるようになっていた。

とはいえ、暦は既に９月。そろそろ寒くなり始める時期なので、今後は食堂の利用になるだろう。

午後の魔法実習の授業。Ａ組では基本的に５人１組なのだが、悠元のグループは彼以外全員女子――深雪、雫、ほのか、姫梨となっていた。燈也は森崎のグループに入って上手くやっているようだが……男子の視線が突き刺さって鬱陶しかった為、ちょっと本気を出してＣＡＤに手を当てて１５工程の魔法を瞬時に展開した。

「ひゃ、１０５ｍｓって何ですか……」

「うーん、ちょっと遅かったな」

「十分早いと思いますけれど……」

「やっぱ非常識の塊だね」

段々辛辣になってくる雫の言葉に授業の後で落ち込み、その罰（？）として雫に膝枕をしてもらった。あくまでも罰だからな……してほしかったというのは否定しないが。

なお、同じ工程数の魔法展開を深雪は２２１ｍｓ、雫は２９２ｍｓ、ほのかは３０６ｍｓ、姫梨は２２８ｍｓでこなしていたことを追記しておく。

◇　◇　◇

放課後の時間となった。集まった生徒会役員で生徒総会の準備に取り掛かる。とはいっても、データ整理自体は終わっているので問題ない。本来なら難色を示していたあずさの次期会長立候補も予定通りとなった。

だが、来年はそうならないだろうと悠元は見ている。深雪はそれを聞きつつも、端末のキーボードを叩くことを止めずに尋ねた。

「どうしてですか？」

「今までの流れを踏襲するなら俺が会長に立候補することになるんだろうが、会頭は次の次あたりに俺を据えたそうな様子だったからな」

実は兄の元継も主席入学だったが、部活連の状況を鑑みて会頭になった経緯がある。別に男が生徒会長になってはいけない決まりなどないが、男子よりも女子のほうが受けがいいという俗物的な要素もあったりする。事実、生徒会長職は長女の詩鶴から佳奈、美嘉、そして真由美という流れになっている。

加えて、克人は悠元を部活連に入れたがっている節がみられる。元十師族とはなったが、それでも九校戦で「クリムゾン・プリンス」を破った結果は本物だ。服部も優秀ではあるが、克人のようなことができるかと言われれば不安が残るのかもしれない。

そもそも、見た目からして威厳のある克人とそうでない服部では同じようにできなくて当たり前だろう。

「とはいえ、風紀委員会が達也を手放すとは思えんが……こりゃ、美嘉姉さんが抜き打ちで来て説教かもしれんな。被害に遭うのは主に新旧の委員長だろうが」

「悠元君、どうにか回避できないのか？」

「いたんですか、委員長……言っておきますけど、今更ですよ」

美嘉としては、卒業生ゆえにあまり首を突っ込みたくないのは本心だろう。だが、きちんと引き継ぎ事項まで残しただけでなく、次の着任者を見越して風紀委員にも声を掛けていた。そこまでやって改善されないのは困る、ということでもある。

事実、達也と悠元が来るまで片付けられていなかった委員会室がそ

の証拠だろう。
「俺は戸籍から抜けましたが、血縁上は義理の親戚です。まあ、俺からは頑張ってくださいとしか言えませんが」
「辛辣だな。ところで……」
「今まで通りの呼び方で構いませんよ」
「そうか。悠元君、北山や司波と大分仲良くなったようだが……もしかして付き合っているのか？」
　ある意味想定していた質問であり、この辺のことは深雪とも話し合っているので動揺することはない。寧ろ、表情には出していなかったがご機嫌ということが伝わってくるほどだ。それを横目で見つつ、摩利からの質問に答えることにした。
「どうでしょうかね。何分、女性とお付き合いした経験はないもので。知識として聞くのと実体験は違うというのは、委員長がよくご存知かと」
「まあ、一理あるな……うまくはぐらかされた気分だが」
「気のせいかと思いますよ」
　なお、この場に真由美、服部、鈴音、あずさの４人はいない。生徒総会の議案もとい真由美の発案である〝生徒会役員の選出制限の撤廃〟の件で克人に相談しているとのこと。だが、それだけで部活連が関わることはない筈だ。
「にしても、生徒総会に何かしらの暴動が起きるのなら、風紀委員会が適任でしょう。委員長はここにいてよろしいので？」
「真由美に話は通したからな。部活連に声を掛けたのは、彼らにとっても決してマイナスにはならない話だよ」
「どういうことです？」
　それは、現状生徒会と風紀委員会のみに許されているＣＡＤの携行許可を部活連の幹部に限定したうえで認めるという提案。それに至った理由というのは、風紀委員会のハードワークが原因でもあった。
「部活動の新入生勧誘期間の忙しさは悠元君が経験済みだが、ＣＡＤ所持制限が一時的に緩むとはいえ、当事者側になる部活連が生徒会と

風紀委員会頼みというのは拙い……それに加え、新会頭となる服部の補佐に二科生の子が入るからな」
「まさかですが、壬生先輩ですか？」
「ああ」
クラス替え、それも一科生と二科生の入れ替えは特殊な事情がないと行われない。２学年が入学したばかりの頃、服部とあずさ、それに啓の３人がトップで僅差だった。
だが、夏休み前の１学期末考査……その魔法実技で大波乱が起きた。
１位　服部刑部
２位　中条あずさ
３位　桐原武明
４位　壬生さやか
悠元自身も魔法力が伸びたと公言した２人の成績が飛躍的に伸びていたのだ。とりわけ、二科生という劣等感を貼られたさやかにしてみれば、この成績は喜ばしいものと言えるかもしれない。ただ、二科生ということでさやかの九校戦参加は見送られる形となった（達也のエンジニア選出はこの後の出来事だった）。
こうなった原因を考えたところ、一番考えられるとしたら軽運動部での絡みが要因だろう。
桐原は得意分野が振動加速・収束系になり、軽い想子の過活性を起こしていたので想子の柔軟を勧めた。柔軟とはいっても、苦手と思っている分野の魔法でわざと想子消費を重くする程度のものだ。
さやかの場合はというと、憧れた対象――摩利とは異なる系統魔法を得意としていたにも拘らず、摩利と同じように魔法行使を試みた結果、想子の根詰まりを起こしていたため、それを取り除いてやったぐらいだ。
そもそも、現代魔法が「超能力よりも幅広い汎用性を持つ」の謳い文句通りに機能するならば、苦手とする系統魔法は存在しないということになる。だが、現実はそうなっていない。
この理由は実に単純明快。本人たちの潜在資質に対して魔法を教

える環境自体が整っていないことに起因する。ハッキリ言えば、しっかりとした教育を受ければ魔法力が格段に伸びるであろう二科生はかなり多いだろう。十師族や師補十八家、百家の人間の強みは高い魔法力だけでなく、それを維持できるだけの教育環境を自前で維持・管理しているのも大きい。

魔法師の育成に力を入れるというのなら、その前段階の時点で躓いているのは問題だと思う。この辺は道徳的な問題も絡んでくるので難しい話だが。

魔法科高校のハードルは単一工程の魔法展開速度に掛かるタイムが１０００ｍｓを一定ラインとしているため、トップとの差は１秒弱。まだ伸びしろのある高校生なら突き詰められるレベルの範疇だ。

二科生であるレオ、エリカ、美月がどこまで化けるか……幹比古はすでに化けたようなものなので割愛した。

閑話休題。

「春の一件があったからこそ、壬生を入れる意味は大きいと十文字は語っていた。桐原は複雑な面持ちだったそうだがな」

「悠元さん、お兄様はどうなるのでしょう？」

「服部先輩が達也と同じ場にいるのは嫌がるだろうから、流石に部活連はないだろうな」

変な話だが、１学年内でも既に派閥グループが形成されている。

これは学内掲示板やＳＮＳを漁って見つけたものだが、そのグループの最大派閥はなんと自身がリーダーのグループらしい。成績優秀者である一部の一科生に加え、二科生の半数近くがその派閥の中に入っているらしいが、そんな派閥を組んだ覚えなど皆無であった。

主だったところでは、Ａ組の悠元と深雪、雫にほのかや燈也。Ｅ組では達也とレオ、幹比古にエリカと美月……ここに姫梨も加わる形なのだろうが、そんな噂を立てられるほうが迷惑である。とはいえ、不利益を被っていない現状では変に絡まれなくて済むメリットもあるだろうと考え、しばらくは様子見ということで放置することにした。

「とはいえ、実働部隊なのに事務仕事のできる達也を千代田先輩が素直に手放すとは思えん。中条先輩相手なら多少強気に出て泣きつく

だろうな」
「生徒会のデータベースを大幅に弄って使いやすくした悠元さんがそれを言いますか？」
「アレンジの範疇だからノーカウントにしてくれ」
その達也なのだが、カウンセラー（公安の秘密捜査官）である遥が自身のカウンセリング担当である3年の平河小春（ひらかわこはる）に関しての相談を持ち掛けたらしく、その対応というか説得に追われていた。このことは遥との定期カウンセリングで聞き及んだことだ。
何でも、本戦ミラージ・バットにおける達也の活躍を見て、魔法大学に進学しても自分がうまくやっていけるか不安になっていた。加えて元々論文コンペのサブメンバーに抜擢されていたのだが、それを辞退したらしい。
達也が小春と関わることで、その妹にあたる平河千秋（ひらかわちあき）とも接点を持つ形となるが、これがどのような影響を及ぼすのか未知数だ。まあ、マインドコントロールは感情面の制御も含まれているため、そういった類で好意を敵意に変換してしまうようなことも想定したほうがいいだろう。
そもそもの話、千秋が彼らの駒の対象になりうるかは未知数の範疇と思っていいだろう。
「それにしても、深雪が何も言わなかったことに少し驚いたけどな」
「お兄様はご自分の評価を蔑ろにしがちですから」
「その意見には同意するが……多分、真由美の君に対してのスキンシップは増えるだろう」
「ファンクラブの連中が鬱陶しくなるので止めてほしいんですが」
◇　◇　◇
生徒総会当日。
真由美が提案した二つの案――――〝生徒会役員の選出制限の撤廃〟〝部活連の一部に限りＣＡＤの携行許可を認める〟は可決された。
達也が小春の説得に赴いた影響で、悠元が真由美と一緒に帰ることになったことがあり、襲ってきたファンクラブの連中を魔法抜きで気絶させた。

二科生の達也なら槍玉にあげていただろうが、悠元は先代・先々代の生徒会長と姉弟関係にある。下手に藪を突いて蛇どころか狼以上の代物なんて御免なんだろう。

問題が起きたのはその後。立候補者というか信任投票とも言える状況の中、あずさは壇上で演説を開始した。すると、二科生に対する反感を持つ者――この場合は反対派と呼称すべきだろう。

あずさは当然スルーしたが、それに対して噛み付いたのはあずさのファンというか親衛隊というべきなのか、演説そっちのけで言い争いを始めたのだ。

真由美だけでなく、服部や鈴音といった生徒会役員の制止も聞かず、風紀委員だけでなく最悪部活連も動くであろう中で、こんな下らない争いを座視しないであろう人物が暴走しないよう、悠元は一息吐いた。

そして、悠元の予想通り……深雪のその言葉は講堂に響き渡った。

「静まりなさい！」

それと同時に吹き荒れる深雪の想子。だが、同じ生徒会役員ということで一番近くにいた悠元が深雪の両肩を掴み、吹き荒れる想子を霧散させていく。

「ハイ、ストップ。講堂が天然の冷凍庫になりかねんぞ……愚痴は後で聞くから、ひとまず落ち着け」

「あ……すみません、悠元さん」

ただでさえ強力なのに、天神魔法や想子制御を学び始めた影響でその効果も強力になっていた。メリットというものは得てしてデメリットもあったりするが、悠元にとってはそれも承知の上でのことだ。

深雪は悠元を見た瞬間、自身の怒りがスッと熱が引くように冷めていった。それは冷ややかな感情ではなく、今の悠元の感情が明らかな怒りを持っていることに対し、思わず怖くなってしまった。

そして、悠元は深雪の近くにあったマイクを手に取ると、喋り始めた。

「――言いたくありませんでしたが、この際なので言わせていただ

きます。先輩の方々、あなた方は本気で私達1年の手本になる気があるんですか？　今の言い争いに加担していた人も、それを煽った側も……本気で魔法師を目指そうだなんて公言できるんですか？」

こんな連中を抱えてよくもまあ会長職なんてやってられたな、と内心で生徒会長を歴任した3人の姉を思い浮かべていた。

魔法科高校は一般の普通科高校と違い、国立の教育機関である以上は生徒もエリートの自負ぐらいあるのだろう。けれども、精神レベルが実力に追いついていないのは明白。自分だってまだまだ未熟だと思っているのに、この程度で満足して優越感やら劣等感を抱くのは、自分自身に対する努力を舐めているとしか聞こえなくなってくる。

「二科生がそのまま優等生になるだなんて誰が決めました？

二科生が一科生の補欠――――劣等生でしかないと決めつける意味は何ですか？

ライセンス試験項目の一部でしか評価していない魔法力に何の意味がありますか？

先代会長は卒業式の折、こう言っていました。『他人よりも先に自分の力を見極めろ。それが出来ないのなら、ただ時間を浪費にするだけになる』と。

まさか、先輩方は半年も経ってそれをすっぱり忘れたとか仰いませんよね？」

一科生は入学時点で２００人のうち優秀な上位１００人で、二科生は下位１００人。そこから教官の有無で明らかに差がついていく。

二科生は自ずと自力での学習を強いられてしまうため、達也や幹比古のように独学で根気よく学び続けなければならないが、彼らは魔法使いの家系ということが大きく影響しており、そうでない人々に対して魔法を教える機会が極めて少ないのは事実であった。

いくら教官が足りないからと言って、二科生へのフォローとして後進を育てる方向性（例えば、二科生から魔法大学に進学した人を教官に据えるなど）に持っていかなかったのは政府と学校の責任。そこに関して首を突っ込むのは敢えて避けた。どうせ、魔法科高校のカリキュラムが変わるのは確定事項とも言えるのだから。

学校内の不満を外に漏らさないためのシステムといえば理に適っているが、それがかえって学校内の軋轢を生んでいる。それが分かっていないのなら、教育機関に勤める資格はないと思いたくなるほどだ。

悠元の言い放った言葉に誰も反論できない。いや、彼の放っている威圧で強制的に黙らせられているというのが正しいだろう。悠元としては軽い感覚なのだが、講堂全部を覆う領域干渉には流石の真由美も冷汗が止まらなかった。

「文句があるのでしたらいつでも構いません。模擬戦がしたいというのであれば、受けて立ちますよ。……言いたいことは以上です。それでは中条さん、演説の続きをお願いします」

「ひゃ、ひゃい!!」

これを見た達也からの感想はというと、「お前は王にでもなるのか？」と言われた。流石に最高最善の王なんて柄ではないし、大勢の人を率いるだなんて無理だと返しておいた。どっかのロボットアニメの脇役が言っていたことだが、そういうのはできる奴がやってくれと言わざるを得ない。

神楽坂家の次期当主になる話を受けた側が言えたことではないが、あちこちで手広くやるつもりなんてない。

◇　◇　◇

「それで、この投票結果とはなぁ……」

そう摩利が呟いたのは、生徒会長の信任投票の結果を見ての感想だった。総投票数５５４票に対し、あずさの得票数は１８４票。規定による有効得票数を満たしているため、あずさが生徒会長となることは決まったわけだが。

「うう……」

納得がいかないような声をあげているのは深雪だった。それを見た達也も溜息を吐きたそうな表情を浮かべている。その両者を見て、悠元も疲れたような表情を見せていた。

総投票数５５４票で、あずさの得票数１８４票から差し引けば、残りは３７０票という大半がどこに消えたのかといえば、その結果を真

由美が呟く。
「悠君が２００票、深雪さんが１７０票ね……」
「……待ってください。私に勘違いして投票した人がいたのは百歩譲って認めるとしても、どうしてこういった書き方がカウントされているんですか！」
　単純に名前で書かれているならまだしも、深雪の場合は〝女王様〟だの〝スノークイーン〟という名称まで付与されてのものだ。とはいえ、ちゃんと深雪の名前が書かれていて、同じ名前の生徒はいないのだから、自ずと深雪の得票としてカウントされるのは無理からぬことだ。
「悠元君の場合は〝覇王悠元様〟とか〝悠元皇帝陛下〟とかもあったようだがな」
「王とか皇帝って、皇族に対して不敬にもほどがあるでしょうに」
「いや、ツッコミ入れる方向が間違っていると思うんだが？」
　冗談だとは思うが、深雪が女王様に対して悠元を王に例えたのだろう。何せ、悠元にカウントされた中には〝女王様と結婚しろバカップル〟という文言が一つ見られた。筆跡からして当該人物に心当たりがあったので、密かに仕返ししておこうと思う。
　すると、瞳を潤ませた深雪が悠元にしがみついていた。どうやらそう書いた人を特定してほしいらしい……何をするかは大体の予測がつくので、深雪を宥めることにした。
「落ち着け深雪。それに仕返ししたとしても何のメリットも生まない。それにさ……周りが女王様と思っても、俺にとっては可愛らしいお姫様だよ」
「悠元さん……」
　妹をあやすように頭を撫でると、深雪は心地よさそうな表情でしっかりと抱きしめていた。これで終わればよかったのだが、そうは問屋が卸さなかった。
　誰がといえば、真由美が悠元の背中に抱き付いたのだ。
「むぅ……悠君、デレデレしないの！　君にはお姉ちゃんがいるじゃない」

「七草先輩、何をしているのですか？」
「全く、お前というやつは……」
前後から女性に抱き付かれ、悠元は一周回ってかなり冷静な心境だった。正直、自分の分身が反応しなかったことを褒め称えたいと思ったほどだ。結局、摩利の拳骨が真由美に炸裂して引き剥がされ、深雪は笑顔を浮かべたまま真由美を見つめていた。
（……はあ）
（悠元、お疲れだな）
（労わってくれて感謝するよ、達也）
その日の夜、風呂に入っていた悠元にバスタオル装備の深雪が突撃し、色々大変だった。その際の出来事は口に出したくないが、今後の生活に支障をきたすようなことは一切無かったと断言できる。
彼女と別れてから一人ぼっちだった前世のことを、「悪くなかった」と今更ながらに実感したのだった。
今の人生もそれなりに悪くはないけど、もう少し心の平穏が欲しいです、安〇先生……え、無理？　そんな殺生な……

横浜事変編

原作主人公に平穏という二文字は遠い

新学期となり、新生徒会が発足して1週間が経った。

悠元はあずさの頼み（あずさに会長への立候補を打診した際の交換条件ともいう）もあって生徒会副会長になっていた。周囲からはあずさの次の生徒会長の有力候補とも言われているが、それと同じぐらい生徒会長の候補に挙げられているのは深雪である。

「お待たせしました、お兄様」

「お疲れ様」

元々、生徒会室を食堂代わりに使っていたのは、真由美の（ある意味）職権濫用でもあったため、生徒会の体制も変わったので食堂を利用するようになった。

一科生（A組の悠元、燈也、深雪、雫、ほのか、姫梨）と二科生（E組の達也、レオ、幹比古、エリカ、美月）では実技科目の関係で授業のカリキュラムも異なるので、どちらかが席を取るのが当たり前になっていた。

「すみません、達也さん。私のせいで遅くなっちゃって」

新生徒会のメンバーは、生徒会長・中条あずさ、副会長・神楽坂悠元と司波深雪、書記・光井ほのか、会計・五十里啓の5名で構成されている。

その裏では、部活連の新会頭である服部が悠元を副会頭に据えたがっていたが、生徒会のデータベースシステムを使いやすく弄った悠元にはその引継ぎも含めて生徒会に在籍してほしい、というあずさの懇願があったことを悠元は知っている。

「気にする必要はない。最初は戸惑うことも多いだろうからね」

ほのかは、夏休みの海水浴の一件以降、達也に対してやや積極的に声を掛けるようになっていた。その点については、達也も嫌がったりせずにしっかりとフォローしている。それを見るに、気があるのかどうかまでは分からないが。

まあ、変な趣味嗜好があるという噂に繋がる可能性は低くなるので、それだけでも深雪の溜飲は下がるだろう。
「しっかし……自分でやりたくないからって人頼みとかふざけてるとしか思えんぞ」
「悠元、それは思っても口に出して欲しくなかったんだが」
「ああ、すまん。分かっちゃいるんだがな」
当初の予定では、あずさは達也も生徒会に引き込みたかった。その理由は深雪に対してのストッパー的役割を頼みたかったのだ。
悠元は生徒会副会長とはいえ、彼頼みにするわけにもいかないし、何より新学期に入ってから軽運動部に入部希望者が増えてしまってその対応に追われていた（現状は秘匿すべき部分があるため、大半の入部希望を断った）。
兼部は可能としているので、バイアスロン部の雫とほのか、山岳部所属の燈也とレオ、剣道部に一応入っているエリカ、部活に入っていない幹比古と美月も軽運動部に入ることとなった。加えて姫梨も軽運動部に入ることとなった。
今挙げた面子からわかると思うが、部活動において一科生と二科生の部活動の線引きが自然とできている中、軽運動部は一科生と二科生の混成メンバーのために部外者を下手に入れるわけにはいかないのだ。
なお、この状況でも達也は軽運動部に加入していない。別に幽霊部員扱いでも構わないぐらいだが、変なところで律儀な部分がある。
その達也なのだが、生徒会入りを反対したのが新風紀委員長である花音。曰く「彼に抜けられると事務仕事が回らなくなる」と達也やあずさの前でハッキリと言ったのだ。結果的に、今年度は風紀委員会、来年度は生徒会役員になることで達也の処遇が決まった。
「軽運動部も元々は便宜上のものだったのにな……半分新陰流の道場みたいなことになってしまったし」
「いや、正直言って実家の鍛錬よりもキツイわよ？」
「そりゃ、エリカとそれ以外でメニューを変えるのは当たり前だろうに。印可を持ってる奴に基礎の素振りだけなんて失礼にもほどがあ

るだろ？」
「いや、それはそうなんだけれどね……」
元々は深雪に武術を学ばせる意味合いが強かったのだが、雫に伊勢神道流を教える関係で運動系の部活として機能する形になっていた。
新陰流剣武術と伊勢神道流は天神魔法のような表裏の関係に位置する。新陰流における秘術が身内にしか修得できないのは、伊勢神道流の奥義に属するものを学ぶという意味合いがあり、数代おきに婚姻を結ぶ際に武術の継承ミスを起こさせない工夫ともいえよう。
それを聞いたとき、鍛錬を免除された理由も自然と腑に落ちた。
「爺さんにそのあたりを聞いたら、エリカの親父さんが頼み込んできたらしい……十中八九、誼を結ばせてあわよくば、と考えたんだろうな」
「あんの腐れ親父……」
「エ、エリカちゃん……」
エリカが千刃流の印可ということは知っているので、皆伝クラスに至るための鍛錬メニューを考案している。加えて夏休み中に頼まれたエリカ専用の新型ＣＡＤも五十里と相談したうえで製作中だ。
（兼部のメンバーが半数以上だが）軽運動部の部員も増えたため、いつの間にか完成していた新築の演武場に割り当てられることとなった。その資金は上泉家と神楽坂家の折半だったらしく、上泉家お抱えの建築会社が関わっていたらしい。
すると、エリカが何かを思い出したようで、悠元に視線を向けつつ問いかけた。
「あ、そうだ。悠元、放課後空いてる？」
「今日に関しては生徒会もないと聞いてるが、何かあるのか？」
「えっと、うちの和兄（かず）のほうがね、悠元に頼み事をしたいそうなのよ。あたしが聞いてるのはそれぐらいよ」
特に用事は入っていないので、悠元は頷いてその用件を了承した。
しかし、千葉家の頭領であり警察官の彼が、何故自分に白羽の矢を立てたのか……その答えは、彼との対談まで考える羽目となった。
◇　◇　◇

てっきりエリカも一緒に来るのかと思えば、今日は剣道部に顔を出すということで同行はしなかった。彼女自身、実家である千葉家に対して快く思わない部分があることは知っているし、彼女の素性を同年代で知っているのは、悠元以外だと幹比古しかいない。

そうこう考えている間に、悠元の乗っているキャビネットは千葉家の近くに到着した。一応周囲を警戒するが、特に監視の目などはなさそうだ。だが、油断はしないほうがいいと一歩ずつ着実に目的地へと歩を進めていく。

百家「剣の魔術師」千葉家。この家の構造を一言で言い表すなら「迷路」の言葉に尽きる。事実、最初に来た時は思わず迷いそうになったため、『天神の眼』で家の構造を写し取るという反則技で切り抜けた。

流石にそれは一度きりで止め、2回目以降は目視と記憶だけを頼りにするようにした。

とはいえ、今回はそこまでの必要もなかった。

何せ、道案内というかエリカ経由で呼びつけた当人――――千葉家長男である寿和が出向いていたのだから。これには悠元も彼の前に立つと、お辞儀をする。

「お邪魔致します。今日は自分に御用があると聞き及んだものですから」

「いえ、こちらこそよくお出で下さりました、神楽坂殿」

寿和が、悠元のことを名前呼びではなく名字を使う……今回の用件は寿和の個人的な用事というよりも、千葉家かあるいは警察官としての相談かお願い事なのだろう。

エリカが深く聞いていなかったのは、トラブルと聞くと動かないはずの無い彼女に対し、下手に首を突っ込んでほしくないという釘差しも含んでいるかもしれない。

案内された客間にて、出された緑茶と茶菓子に手を付ける前に悠元のほうから話を切り出した。

「それで、今回のお話は千葉家の頭領としてでしょうか？　それとも、警察省の警察官としてでしょうか？」

「敢えて言うなら、〝両方〟と述べるべきでしょう」

そう言って、寿和は自身が関わった不審船に関する情報と、その船に乗っていたであろう人物が姿を晦ましたことを明かした。船に関しては当たり所が良かったので沈まなかったが、船籍などの基本的な情報しか手に入らなかったと話す。
「もしかしてですが、千葉殿は探していた当該人物が地下に張り巡らせられた水道を通ってどこかに逃げ込んだ、と睨んでいるのでしょうか？　……喋りにくいんでしたら、普段通りの言葉遣いで構いませんよ、寿和さん」
「助かります……奴さんの凡その目星は〝中華街〟だと思われる。そこしか大々的に匿える場所がないからな」
横浜の中華街は、前々から大亜連合からの亡命者を受け入れる〝受け皿〟となっていることは、元や剛三から聞き及んでいる。その特殊性ゆえに一種の治外法権が働いており、現政府でも下手に踏み入れない場所の一つとなっている。補足しておくが、大使館や共同利用基地などを除いてこの国に認められた公的な治外法権は存在しない。
寿和からその船の情報を貰い、そこから『天神の眼』で横浜山下埠頭に留め置かれた船の〝航路情報〟を読み取る。いくら乗組員が身を隠していても、船が通ってきた航路という情報を掻き消すのは至難の業。大陸の道術や方術でも大型の物体単位で秘匿・改竄は難しいだろう。そして、その航路を見た結果、内心で溜息を吐いた。
（何で輸送船が〝大亜連合の軍港〟を経由してるんだよ……こりゃビンゴかもしれんな）
おまけに、輸送船がもぬけの殻になる前に『鬼門遁甲』を使ったと思しき形跡があった。使った理由は、想定よりも早く魔法師が到着したときのことを考えて警戒したと思われる。警察省の警察官は大概現代魔法に通じているため、この国の古式魔法や大陸系の魔法関連となると弱くなる部分がある。この辺の解析が出来なくても無理はない、と思いつつ、悠元は真剣な表情で問いかけた。
「それで、自分を呼んだ理由は何でしょうか？　一応言っておきますが、中華街に関しての手出しは控えてほしい、と母上より言いつかっております。それ以外でしたら、可能な限りでの協力となります」

「その連中の狙いが論文コンペかもしれない、と睨んでいる。悠元君を呼んだのは、その際に民間人への被害が及ばないようにしてほしい」
無論、寿和も警察官としてできることはするが、相手が〝テロリスト〟を超えて〝軍隊〟などとなれば、警察官としての職務の範疇を超えてしまう。
恐らくだが、三矢家や上泉家も寿和からの要請は聞き及んでいるだろう。こうなれば、論文コンペ当日は何らかの形で民間人全員を横浜から遠ざける方法が望ましいが……そうなると、前世であったような〝特別厳戒態勢〟が良いのだろうが、仮に情報が漏れても問題ない方便が必要になる。
「お話は分かりました。このことは母上にもお伝えしてよろしいでしょうか？」
「ああ、元々そのつもりで話したのだからな。コホン……それでは、改めて宜しくお願いいたします、神楽坂殿」
◇　◇　◇
論文コンペとなると、該当しうる事項は一つある。とはいえ、今まで原作とは異なる変化が少なからず起きているわけであり、改めて敵の洗い出しはやっておくべきなのかもしれない。
そんな風に考えながら司波家に帰宅すると、出迎えたのはワンピースにミニスカート、その上からエプロンドレスを身に着けた深雪。流石に１０月という時期からして、ギリギリ家の中で着る分には問題ない格好だとは思うが、まるで誘惑しているようにも見えてしまうと内心で呟いた。
「ただいま、深雪」
「おかえりなさい、悠元さん。その、どうでしょうか？」
「月並みな感想だが、とても似合ってるよ。ところで、夕食の準備中なのに火元を離れていいのか？」
「もう出来上がっておりますので。後はお兄様の帰りを待っているだけです」
深雪から話を聞くに、２人の（表向きの）母親ともいえる司波小百合（しばさゆり）

が司波家を訪れていたらしく、どうやら国防軍の依頼でレリックの複製を頼まれたような事情だった。小百合は達也と話していたが、交渉が決裂して家を飛び出すかのごとく帰って行った。そして、達也が何かに気付いて身支度をすると、同じように家を出てバイクで後を追いかけたらしいと話した。

時折曖昧な表現なのは、小百合に対しての感情が見え隠れしている証拠なのかもしれない。

「間違っても達也がへまを打つとは思えんが……そしたら、着替えてくるよ」

「はい、わかりました」

私服に着替えてリビングに来たところで電話が鳴った。その着信音からして誰かからのものだと気付いた悠元は、そのまま通話ボタンを押すと、画面に表示されたのは悠元の予測通りの人物――――風間であった。

『おや、悠元か。達也は不在なのかな？』

「少佐、分かっていて仰いますか……大方その達也のことでしょう？

とはいっても、詳しい事情は知りませんが」

『魔法を使ったらしく、藤林がその痕跡を消すのに対応している。どうやら、相手は相当の手練れのようだ』

風間が〝手練れ〟という言葉を使ったということは、めったに被弾することのない（被弾しても瞬時に自己修復術式で回復してしまう）達也でも一筋縄ではいかない相手ということだ。そうなると敵対した人物は軍人、それも複数人で1人は狙撃手……その可能性を伝えると、風間も上がってきた報告からその可能性を予測していた。

「可能性の範疇は越えませんので、詳しくは達也から……っと、丁度帰ってきたようですね」

「悠元、それに風間少佐。その、お邪魔でしたか？」

『いや、構わない。今は達也のことについて話していたからな……早速だが達也、大まかの事情は察しているが、話を聞かせてくれ』

「了解しました」

そして、達也が小百合の乗っているコミュニューターに自走車から謎の

集団が出てきて襲撃。その対処をしている最中に遠距離からの銃撃を受ける形となったが、かろうじて回避に成功し、『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』でその狙撃手を消し去ったと報告した。

この時、達也の口からレリックのことが口に出されなかったが、小百合は四葉の末端ともいえる人物なのは風間も知っているため、〝彼女自身が目的で狙われた〟という形にしたようだ。

恐らくはレリックを解析したい、という達也自身の知的欲求も含んでいるのだろうと思い、それ以上は口に出さないように努めた。

尻拭いする羽目になる悲しい現実

「聖遺物（レリック）」。当時の技術では説明不可能な出土品であり、オーパーツという呼び方のほうが分かりやすいかもしれない。ちなみにだが、アンティナイトもこの類の代物に含まれている。

リビングに移動した達也がテーブルに置いたのは、小百合から押し付けられた代物。瓊勾玉系統のレリックが置かれた。自分も含めて3人分のコーヒーを置いた深雪も興味津々だが、悠元に関しては怪訝そうな表情を見せていた。

それを見た達也は、悠元が国防陸軍の技術顧問であることを思い出しつつ問いかけた。

「悠元、このレリックに心当たりがあるのか？」

「心当たりがあるも何も、陸軍で解析の手伝いをしてたから」

兵器開発部において一番解析能力が高かったこともあり、国防軍で所有・保管しているレリックやオーパーツの解析を頼まれることが多かった。手伝いとは言ったが、解析のメイン担当に据えられていたことは流石に話せないだろう。

正直な話、解析したはいいものの、どれか一つ表に出すだけで軍事バランスを壊しかねないものばかりだ。なので、達也が押し付けられた勾玉の観測報告に関しては大雑把にしていたのだが……それがこの勾玉だとは知る由もなかった。

「あの、初耳なんですが……」

「一応軍事機密だからな。細かいところまで行くと流石に話せないけど」

結論から言えば、その勾玉には魔法式の保存機能だけでなく、特殊な方法を用いることで外部から想子を取り込む機能も備わっている。勾玉を複製して特殊な魔法式を用いることで十全に使えるようにし、兵器の核にでもすれば非魔法師でも動かせる魔法兵器が出来かねない。

だから、その時点では大雑把な形にして国内外からの視線を逸らそうとした、というわけだ。早い話が自業自得ともいえるだろう。

「俺が把握しているのは、魔法式の保存機能らしい代物が観測結果で得られているってぐらいかな。それ以外のことはメインで担当していた人しか知らないことみたいだから」
「……成程、あの人の言っていたことは事実というわけか」
「そういえば、零からのメールで知ったんだが、論文コンペのサブメンバーになったんだって？」
　達也は、論文コンペのサブメンバーを結局辞退した小春の代わりとして鈴音が推薦した。達也が言うには、春の時に紗耶香の呼び出しを受けてカフェテリアで話していたとき、鈴音もその場にいたというか監視の役目を担っていたと推察したとのこと。ただ、本人にはそのことを問い質すつもりもないと断言した。
「ああ。その際、お前の姉がやらかしたということも市原先輩から聞いたぞ。お前も含めてだが……」
「ああでもしないとコンペのメンバーに選ばれそうだったからな。それが回避できたところで、今度は会場の警備に回されるオチなんだろうが」
　現在から遡って四代前――詩鶴が会長の際、兵器としての魔法の有用性という論文を書いて事前審査で却下。三代前の佳奈は大量破壊兵器に代わる魔法の有用性という題目と基本コードに関する論文の２本を書き、片方が審査で却下。美嘉に関しては魔法教育システムの抜本的改善策という題材を無視した形となり、これも却下された。
　何で知っているのかと聞かれれば、本人たちから直接聞かされたと答えるしかないのだが。
　補足説明になるが、決して変に目立とうと思ったわけではなく、ただでさえ九校戦で優秀な成績を上げている以上、三矢で論文コンペの話題を独占すれば要らぬやっかみを受ける為、派手にぶっ飛んだ内容を持ち出して正当な審査による却下を食らう形にしたというわけだ。
　悠元の言い放った言葉は、結局のところフラグ回収でしかなかったのは言うまでもない。
◇　◇　◇
　論文コンペの警備は９つの魔法科高校で代表メンバーを選出して

の合同警備となるが、そのリーダーを務めるのは九校戦本戦のモノリス・コードの優勝校が不文律となっている。少人数でのチームであるモノリス・コードがそのまま大人数の統率ができるのか、という疑問は当然あるのだろうが、今年に関しては問題ないといえよう。
「――――以上が論文コンペでの警備の大まかな内容だ。それで神楽坂、引き受けてくれるか？」
元部活連会頭となった克人が今回の警備隊のリーダー。十師族というネームバリューに加えて、警備や護衛となれば十文字家の『ファランクス』は適材適所ともいえよう。彼からの要請に対し、悠元は静かに頭を下げた。
「はい、よろしくお願いします、先輩。ただし、家の都合で動く場合はその限りでなくなりますが、よろしいでしょうか？」
「ああ……正直なところ、断るのではと思っていたが」
「まあ、毎年トラブルが起きている論文コンペをせめて今年ぐらいは無事に終わってほしい、という思いで微力を尽くすだけですが」
「いや、お前が微力なら大半の連中は塵に等しくなるぞ……」
トラブルが起こりうる可能性は既にあるわけだが、会場警備ができるというのならば、正式な手段でいたほうが面倒なことにならずに済む。それに、トラブルを好き好む連中に対して〝助太刀〟というお墨付きを与えられることにも繋がる。
悠元の放った言葉に対して、桐原は頭が痛くなりそうな表情をしつつも悠元を窘めた。同席している服部は苦笑を漏らす。
「言葉のあやというものですよ、桐原先輩。それで、今後の予定はどのようになりますか？」
「他校との打ち合わせは俺が受け持つ。神楽坂に関しては、当日〝遊撃〟という形で動いてもらうこととなる。なので、それまでは空いている時間で構わないから、警備隊の連中の相手をしてくれ」
つまり、鍛え上げて欲しいというものだろう。この辺は今年の九校戦の結果（特に男子の結果）が見るからに落ちていたのも起因しているかもしれない。こちらとしても、当日に向けての調整になるので克人の提案に頷いて了承した。

「基本は俺と神楽坂で鍛え上げるつもりだ。なので、遠慮せずにやってくれ」
「分かりました……というわけで、頑張って生き残ってください、服部先輩」
「あ、ああ……（沢木あたりは嬉々としそうだが、この２人相手だと大半の連中は先に心が折れるんじゃないのか……？）」
　奇しくも、今年度の九校戦において克人は本戦モノリス・コード優勝の原動力、悠元は新人戦モノリス・コード優勝の立役者。その２人相手というのは一部の人間なら喜ぶだろうが、先に精神が降参するのでは……と服部は内心で独り言ちたのだった。
◇　◇　◇
　論文提出を３日後に控えた日の夜、珍しく自室で授業の予習をしていた（知識は瞬間記憶でどうにでもなるが、気分的な問題でそうしていた）悠元だが、その作業はノックの音で止まる形となった。部屋に入ってきたのは達也だったからだ。
「どうしたんだ、達也？　ハードがシステムのクラッキングでやられたか？」
「いや、そちらは問題ないが……どうしてそう思ったんだ？」
「そりゃ、先日のことを考えたら国防軍絡みの案件狙いだと思う、と推測しただけだよ」
　司波家のセキュリティは、下手すれば世界最高峰に近い代物と化している。浅めのハッキングでもそこまでの情報は出ないようになっているし、そこから深く潜ろうとしたら「エシェロンⅢ」クラスのスパコンを数台直結させないと無理な状態になっている。
　そもそも、大事なデータはオフライン端末の中にしかないので、いくら漁ろうとも無駄の極みと言う他ないが。出てくるとしたら、魔法使いとしての一般家庭が持ちうるきれいな情報ぐらいしかない。
「セキュリティは無事だ。逆探知は試みたんだが、攻撃元が切断されたので特定はできなかった。それで、悠元に頼みたいことがあるんだが」
「俺にその攻撃元のアドレスを割り出せ、とでも？」

「それができれば苦労はしないが、凄腕のプロ相手だと至難の技だろう。こういったことをする連中に心当たりはないか？」
情報の痕跡自体は残っているので、特定することは〝遡れば〟可能だろう。恐らく、ここで情報が得られなかった場合は遥あたりにでも聞き出そうとするかもしれない。
達也の親や身内あたりなら嬉々として情報提供したいと言い出すかもしれないが、頼らないのは実家に迷惑を掛けたくないのか、あるいは男としてのプライドがあるのかもしれない。
「先日の達也が関わった案件についての話になるが、真田大尉に頼まれて狙撃手が使ったと思しきライフルを解析した結果、大亜連合で制式採用されていたものだった。それも、特殊部隊仕様のものだということもな」
「つまり、同じ連中の可能性が高いと睨んでいるのか？」
「それは風間少佐も同意見だった。しっかし、普通は外国製のライフルなんて簡単に持ち込めないはずなんだがな……もしもの場合、『大黒特尉』の出番もあるかもしれないな」
「……そうか」
３年前の沖縄戦で大亜連合の兵士と艦艇を殲滅した達也と悠元。その時点でも躍起になっていた連中が諦めたとは到底思えなかった。場合によっては『マテリアル・バースト』の使用も考慮に入れないといけないだろう。完成したばかりの「サード・アイ・エクリプス」の投入も具申するべきかもしれない。
悠元はそう思いながら、机の上に置かれたケースに手を置き、言葉を呟く。
「空即是色、色即是空」
『パスワード、認証しました』
静脈認証システムと音声認識のパスワード。二重のロックシステムを採用していることに達也は疑問を感じたが、その中に収められたものを見たことでその疑問は氷解した。中に入っているのは２丁の漆黒の拳銃型ＣＡＤ。刻まれたレリーフは竜を模したものだった。
「達也が軍事行動をする際、一切の制約なく動けるほうがいいと思っ

て組み上げたＣＡＤ。固有名称は『ババムート』で、スペックだけでいえば俺の持ってる『ワルキューレ』や『オーディン』に匹敵する。流石に『トライデント』を持ってることが魔法科高校の連中に知られてる以上、支障がないようにすることも大事だからな」

普段使うのは「トライデント」、軍人としての行動では「ババムート」を使用する。どちらもフォース・シルバーシリーズではトップクラスの代物のため、違和感なく使うことが可能だろう。

フレーム設計はＦＬＴで行い、システム関連は基本的に「トライデント」からのフィードバックで構築されている。達也の魔法特性に特化しているため、事実上の達也専用デバイスに仕上がっている。

「まあ、これ以上のことが何も起きずに論文コンペを乗り切れたら嬉しいんだけれどな」

「そういう言い方だと、起きてしまうようにも聞こえるんだが？」

「あー……すまん。ともかく、相手が国家ぐるみである以上、レリックの解析がすんだら俺のほうで引き取るよ。もしくは独立魔装大隊経由で戻すのもいいけど」

「……分かった。手間をかけるが頼む」

達也とて知的好奇心には勝てないが、深雪のガーディアンである以上は自身に降りかかる危険が深雪に影響を及ぼさない、とは断言できない。

だからこそ、悠元の提案を呑む形とした。ＦＬＴに持ち込んでも良いが、先日の襲撃者の素性を考えるならば悠元を頼るのも一つの手段として考慮することとした。

「それで、達也に試してほしいストレージを渡しておく。こいつには『ミスト・ディスパージョン』を更に改良した起動式が入っている。流石に普段使いはできないけど、そのデータは取ってほしい」

「向上心も流石だな。期限はあるのか？」

「特にないが、できれば年内のほうが望ましいとだけってぐらいかな」

達也に渡したのは『爆裂雲散霧消（バスター・ミスト・ディスパージョン）』――――対象物を陽子・電子・中性子レベルに分解させて再構築・急速燃焼させることで中性子の無秩序放出を抑える魔法。傍からその魔法を見れば、達也の魔法で対象

物が燃えて跡形もなく消え去った、という風にしか見えない。
　分子の再構築は魔法式で水素と酸素に予め設定されており、『トゥマーン・ボンバ』の発動工程を利用している。分子生成の構築魔法式自体世に出ていない技術だが、この辺は後に作るであろう『バリオン・ランス』へのヒントみたいなものだ。
　ただ、『ミスト・ディスパージョン』自体が軍事機密指定の魔法のため、特に期限は決めていない。いつ使えるかなんて分かったものではない、というのが最大の理由だ。
「さっきの心当たりの追加情報だが、エリカの兄である寿和さんと対談した。横浜や横須賀に密入国も相次いでいるらしい。口ぶりからするに、論文コンペを狙い撃ちにするつもりだろうと推測しているのかもしれない」
　横浜にある魔法協会支部のメインデータサーバをピンポイントで狙い撃ちにするのは、いくら凄腕のハッカーでも難しい……いや〝不可能〟だ。
　何せ、そこのセキュリティーに関してもテコ入れしており、エシェロンⅢクラスでない限りはプロテクトを敗れないように仕組んでいる。これを〝電子金蚕〟で潜り抜けた場合の対策も既に講じられている。
「どこまで話すかは達也に任せる。俺から話す気はないということだけ言っておく」
「どうしてだ？」
「そんな余裕なんてないからな。ただ、論文コンペの随伴人数は最小限に留めるべきというアドバイスぐらいはするけど」
　当日は〝侵攻軍〟の連中を止めるために前線行きを余儀なくされるのは確実。
　「そんな余裕」の意味は、論文コンペの警備の部分から表立っての補助ができないことに加え、足手まといに成り得る可能性のある人間は速やかに逃げるか、あるいは最初から会場に来るな、という意味を込めての発言だった。
　確実に人を殺す戦いとなるため、そんな覚悟なんて出来ない人に戦

いなんて強制するつもりはない。ただ、魔法師ということで無駄に正義感の強い人が多すぎる……自分で言うのもおかしな話なのは自覚しているつもりだ。

「……悠元がそこまで言うと、論文コンペ当日に何かあると言ってるようなものだが、これ以上のことは聞かないほうが良さそうだな」

「助かる。達也は論文コンペの準備で忙しくなるから、そっちに専念したほうがいい。荒事の相談ぐらいは受け付けるからな」

この話題が終わった後、悠元は自身の端末からどこかに連絡していたが……この行動がどういう意味を齎すのかなど、その時点で知っていたのは悠元本人だけであった。

黒幕呼ばわりだけはマジ勘弁

悠元と達也が話し合った翌日、悠元は軽運動部に割り当てられた道場にいた。

制服ではなく剣道着を身に纏い、腰に差しているのは小太刀程度の長さの業物。そこから1メートル間隔で置かれた巻き藁が5つ。そして、悠元は小太刀の柄を握って抜き放った。

すると、5つの巻き藁は綺麗な断面を残しつつ、斬られた上半分が床に落ちた。悠元は1歩も動いておらず、小太刀程度の長さでは1つ斬るのもやっとの太さ。だが、それ以上にその光景を見た人が驚くとすれば、彼の握っている小太刀には刀身がない。

悠元は刀身があるように柄を鞘に納めると、その断面をしっかり見ていた。すると、悠元は視線を感じた。敵意を感じなかったが、振り向いて姿を確認したところ、幹比古と美月の姿があった。

「どっかの連中が式を打ち込んできた、ねえ……幹比古が知りたいのは、その由来がどのあたりにあるかってことか？」

「そうだね。柴田さんを安心させたいっていうのもあるけど、僕も出所ぐらいは知りたいから」

上泉家と神楽坂家はこの国由来の術だけでなく、世界に点在する魔法系統の技術にまで精通している。幹比古としては、せめてどこのものなのかは知りたいだろうという知的欲求というよりも、その対策をしっかり練っておきたいのだろう。

「魔法科高校の防衛術式を攻撃しているのは大陸系の式だな。なので、その出所を逆探するために対抗式を予め打ち込んだ」

「対抗式？　対抗魔法とは違うのですか？」

「式――この場合は〝式神〟と言えばいいのかな。大陸だと〝化成体〟という言い方をするみたいだけど、対抗式の術式には様々な種類があって、今回は式と術者の〝回線〟を固定化して出所を探る方法だ」

事象の変化を起こすだけが魔法ではない。事象の保存をする魔法も当然存在する。その魔法は神楽坂家にあった天神魔法の秘伝書を

読み解いて会得したもの。それを組み合わせて出所を探ることに成功したわけだが、今のところは「調査中」ということにした。
「達也たちには内緒にしてくれ。幹比古は無論だが、美月も古式魔法使いの係累になるからこそ話したわけだし」
「……え？　悠元、それってどういうことだい？　柴田さんは何か聞いてる？」
「えっと、先日伊勢家の当主の方が来て、私を養子に迎えるということになりまして。私も驚いたのですが、両親はちゃんと納得していました」
　司甲の一例から考えて美月が〝先祖返り〟という可能性を考え、柴田家の家系図を一通り調べ上げた。その結果、約５００年前に安倍氏の傍系から分岐したかなり遠い親戚、という結論が出た。
　ともあれ、美月の力を悪用されないための後ろ盾として伊勢家が美月を養女に迎えることとなる。この辺りは千姫から聞かされた話のため、次期当主である悠元もその考えに同意していた。
「つまり、姫梨と美月が義理の姉妹になり、俺が美月の義兄になるって形かな」
「そうなんだ……って、あれ？　この刀、刀身がないよ？　もしかして、千葉家のような秘剣でも使ったの？」
「詳しくは言えないが、〝心刃（このは）〟の練習の一環だ」
『優れた天神魔法の使い手は、己の魂を武装として具現化する』
　これは、神楽坂家の秘伝書、その最後のページに記されていた一節。天神魔法は魂の固有武装こと天刃霊装（てんじんれいそう）を顕現させ、それと組み合わせることで真価を発揮し、あらゆる邪を祓う刃となる。
　だが、この技術は神楽坂家単独でも、上泉家単独でも至ることが出来ないようになっている。その理由は書かれていなかったが、恐らく力を持つことによる周囲からの要らぬやっかみなどを減らす為ではないかと結論付けた。
　悠元自身、高校入学の時点でその領域に至るところまで踏み入れたが、そこから足踏みを強いられていた。理由は言わずもがな、前世での恋愛経験からくる柵がその最大の障害となっていたからだ。加え

て、神楽坂家で読み解いた秘伝書によって、ようやく本格的な修行を行えるまでになった。
「美月は、『眼』の制御に関してどこまでいけた？」
「まだ強い光を感じることはありますが、大分落ち着きました。勿論訓練は毎日続けていますよ」
「僕も柴田さんも軒並み展開速度が伸びたからね。正直な話、傲慢になっていた一年前の僕自身を殴りたくなったよ」
　あまり触れてほしくなかったので話題を切り替えると、美月と幹比古は揃って展開速度が伸びたことに喜んでいた。幹比古に関しては過去の自分に対しての皮肉も交じっていたが。ちなみにだが、二科生組の展開速度の短縮は平均で３００ｍｓぐらいで、達也が９４０ｍｓから６１０ｍｓへの短縮と大幅に改善されたが、さらに凄かった人物が一人いた。
「レオはもっと凄かったね。単一工程の展開速度が４５０ｍｓまで短縮されていたから」
「その調子だと、一科生にクラス替えもありそうだな」
　レオの魔法展開速度は正直驚いたが、レオ自身も「上には上がいるし、まだまだ研鑽あるのみだぜ」と意欲が全く衰えていなかった。春の時に一科生から落ちこぼれ扱いを受けたことも起因しているのだろう。
　これを見て嫉妬を見せていたのがエリカである。なお、展開速度は７００ｍｓ代中盤にまで短縮されたので、これだけでも十分というほかないが。
「さて、俺は少し残って片付けをしないといけないから、先に帰ってても構わないよ」
「分かった。達也たちにもそう伝えておくよ」
「それじゃ、また明日」
　幹比古と美月が道場を出て行って、誰の気配もないことを確認した上で、悠元は広げた左手を前方に構える。一息吐いたうえで、悠元は静かに呟いた。
――――蒼天に射差せ、『叢雲（ムラクモ）』

悠元の左手を基点として蒼白の雷が展開し、その雷は一振りの太刀の形を成す。その柄を握って光を振り払うように振り下ろすと、蒼銀の刃と拵えを持つ太刀がそこにあった。悠元が巻き藁に向かって薙ぐと、巻き藁は綺麗に消え去った。

正直な話、この知識を知ったときは驚きもしたし、これでもまだ顕現した程度のものだと知った。前世で読んだ漫画や小説の話を思い出して、思わず頭を抱えたくなったのはここだけの話である。

片付けを終えたところで、悠元は天刃霊装の展開を解除した。そして、制服に着替えようと道場を後にしたのだった。

◇　◇　◇

悠元はそのまま九重寺に足を運んだ。元々警備のメンバーに選ばれているとはいえ、どちらかといえば克人の補佐役に近いポジションともいえる。なので、ある程度の自由がききやすいというのも事実だった。

九重寺に足を踏み入れようとしたところで、殺気を感じることに一息吐き、隠し持っていた手裏剣を一つ、傍から見れば誰もいない場所に向かって抜き放った。

すると、手裏剣がまるで宙に浮いたように止まったところで背景がグニャリと変化し、手裏剣を指の間で止めていた八雲が姿を見せた。

「いやー、流石だね。この場合は〝神楽坂の次期当主殿〟と褒め称えるべきかな？」

「忍術使いの癖とはいえ、あまりしつこいようなら斬りますよ？」

「大丈夫だよ。これでも達也君よりは抑えているからね」

一体何が大丈夫なのか、という疑問はそのままに、八雲の私的な居住空間である庫裏に通された。普段は八雲以外客を通す場ではないが、悠元は主である神楽坂家の次期当主。そうなれば八雲としても身内に近い扱いをせねばならなくなる証左だろう。

「そういえば、妙な物を預かったようだね」

「今回の場合は達也が、ですね。ＣＡＤの関係上、国防軍とのパイプというのは重要ですが……表向きの身内である達也と深雪には思わず同情してしまいますよ」

勾玉のレリックのことは、小百合に対する襲撃があった時点で神楽坂家も既に掴んでいる。八雲の言葉はその証明なのだろう。その後情報統制は行われたため、オンライン上にその事実があったことは抹消されている。
「かの人物は達也君の功績に嫉妬しているからね。彼の父親もその類なんだろうけれど」
「陣営に引き込もうとしても、株主からストップが掛かりますからね……俺も、今の時点で達也が研究者に引っ張られるのは好ましくないと思っています」
ＦＬＴの筆頭株主である深夜がいる以上、自分の息子である達也を龍郎や小百合の思い通りにさせるつもりはないだろう。かく言う悠元もその意見には賛同するつもりだ。
独立魔装大隊のこともあるが、魔法師を〝人〟として認知させるために今進めている計画の邪魔はされたくない。最悪の場合、自分の手でケリをつける覚悟はすでに持っている。
「それで、先日お話しした件についてですが……何か進展はありましたか？」
「閣下は『彼の提案に異存なし』と仰られていた。悠元君としては、達也君が本気を出さざるを得ない状況に陥ると睨んでいるのかな？」
「なるかもしれないですね。正直、周りは敵だらけなので」
スパイ防止法という法的拘束力はあるものの、非合法工作員（イリーガル）がこの国を訪れている。その中にはＵＳＮＡも含まれており、それの対処は『九頭龍』に一任している。
元十師族とはいえ、悠元はあくまでも魔法科高校の学生であり、国防軍のことやＦＬＴのことも巧妙な情報操作をしている。株主絡みでＦＬＴに出入りしているのも事実だし、元実家の関係で国防軍に知己がいるのも事実。
本当のことなので、態々嘘をつく理由にもならない。堂々としていれば、かえって分かりにくい。
「悠元君の懸念していた連中だが、当たりだったようだね。それで、君はどうするのかな？」

「最悪『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を使うことも視野に入れます。まあ、移動手段はどうにでもなりますから」
先日、達也と啓、花音が第一高校の制服を着ていた女子に付きまとわれていたが、その少女は逃走。その際にはロケットブースター付のスクーターという一般では出回ることのないものが使われた。
達也のトラブルを呼び込む気質（謂わば主人公気質とも言うが）を考え、八雲に相談して「九頭龍」のメンバーに見張らせていた。そこから得た情報では、大亜連合の特殊部隊が一枚噛んでいて、彼らを仲介したのは周公瑾ということも既に掴んでいる。
少女の正体も掴んでいるが、それを明るみにすれば春に続いての〝不祥事〟に繋がる可能性もあり、教員たちが二の足を踏む可能性が高い。とはいえ、トラブルを好き好んで突っ込みたがる奴もいるため、この辺はどうしたものか悩んでいた。
達也だけに限って言えば、トラブルのほうから歩み寄ってくる可能性もあるわけなので、この辺の対策は打っておこうと思う。
それだけだったらまだ良かったのだが、裏ではＵＳＮＡに加えて新ソ連、イギリスも動きを見せている。第一高校の生徒にも探りを入れているようだが、正直相手になるのかと思わざるを得ない。まかり間違って殺傷ごとにならないのを祈りたいと思う。
「そういえば、九重先生以外の『九頭龍』と面識はないのですが、どういった方々なのでしょう？」
「まあ、表立って名乗ることは当主関係者以外にないからね。悠元君が知らなくても無理はないよ」
「九頭龍」はその名の通り、神楽坂に所縁のある九つの家が各方面の情報収集を担っている。
組織の統括と関東方面を担う九重家を筆頭として、北海道方面の矢車家、東北方面の鳴瀬家、関東方面の吉田家、北陸方面の四十九院家、中部・東海方面の津久葉家、近畿方面の安宿家、中国・四国方面の高槻家、九州・沖縄方面の宮本家。
聞いたことのある名字ばかりであり、その中には縁の深い矢車家も含まれていたことに驚きを隠せない。その辺の事情を聞いたところ、

神楽坂家の傍系に当たる家柄とのことらしい（三矢家に使用人として仕えているのは矢車家の分家筋とのこと）。それを聞くと、侍郎の先天的能力もどことなく腑に落ちるような気がした。
　既存のものとは大きく異なる情報伝達特化の古式魔法を有しており、一般的に普及している電子ネットワークの影響を一切受けない強みを持っている。なお、津久葉家は四葉家先代当主との誼から「九頭龍」に名を連ねている。
「つまり、俺の情報は元からダダ漏れだったって訳ですか」
「君の場合だと、三矢家との約定もあったわけだからね。ただ、九校戦で君が披露した実力は僕ですら度肝を抜かれたよ」
　正直な話、政治要素も含みそうなことに頭ごと突っ込んでる気分だが、未来を変えるのも楽じゃないと思う。思い切って未来を変えるのなら周公瑾を排除するのが手っ取り早いが、そうなると顧傑が出張ってややこしい事態になりかねない。
　それを理解しているからこそ、正面切っての手ではなく搦め手を用いることに決めている。そのために、大亜連合にはある程度の損害を負ってもらわねばならない。だが、損害を負うのはその国だけで済ますつもりはない。
　すると、八雲が弟子から何かの紙を受け取り、それを読むと綺麗に燃やしていた。どうやら、諜報のほうで動きがあったらしく、八雲が口を開いた。
『人喰い虎』がＵＳＮＡの非合法工作員を殺したらしい。しかも、その工作員は達也君たちを監視していたようだね」
「よく気付かれませんね。相手もその筋ではエキスパートと伺っていますが」
「この寺もとい、本山も陰陽道自体は心得があるからね。尤も、天神魔法のように陰陽道を十全に使えるわけではないし、式神の使役も幾分か劣ってしまうよ」
　その夜、司波家でその話題が出たとき、達也がＲＰＧで言うところの魔王と例えられた一方で、悠元はどういう例え方をされたのかといえば、その結果を深雪が言い放った。

「満場一致で〝世界を操る黒幕〟ということになりました」
「よし、喧嘩売ってると解釈していいんだな？　キッチンを借りるぞ」
正直な話、〝魔王の親友〟ぐらいなら笑い話で済ませようと思った。だが、黒幕呼ばわりだけは絶対に納得がいかなかった。何故かと聞かれたら、まるで達也を操り人形にしているような気がしたからだ。俺に達也をコントロールできるような甲斐性なんてない、というのが正直な本音だ。
「待て、何を作る気なんだ？」
「秋ということでアップルパイでも作ろうかと。材料もあるし」
「やめてください！　私たちの心が折れますから!!」
「いや、俺は大丈夫なんだが……って、あの様子だと深雪に聞こえてないな。やれやれだ」
結局、アップルパイがその会話に参加していた全員に振舞われ、深雪は「美味しいのは確かなんですが、納得いきません」と頬を少し膨らませながら言いつつも食べ続け、雫は「……世の中、不公平だと思う」と呟き、姫梨は「成程……納得いかないという理由が理解できました」と述べていた。
達也からは「お前は女性限定で罪作りな奴だな」と言われた。解せぬ。
言っておくが、ごく一般的な材料とレシピを用いているだけなので、出来栄えが他の人が作った場合と大きな変化が生じるわけではない。
料理の師匠曰く「料理にとっての一番の調味料は笑顔なんだよ」と言っていたが、料理で笑顔を生み出している師匠とは違って、俺にはまだ遠い境地なのかもしれない……と、彼女らの反応を見てそう思ったのだった。

無機物に仇の概念を抱くのは間違っている気がする

論文コンペの準備は着々と進んでいた。

その間に起きたことと言えば、1年の二科生である平河千秋が無線式のパスワードブレイカーで何かをしていたところ、紗耶香が真っ先に気づき、結果としてレオが取り押さえるという顛末が起きていた。傍から見れば危ない光景だったらしいが。

その後、五十里と花音が千秋から事情を聞いた限りにおいて、九校戦で達也の功績を目の当たりにした姉の小春がコンペのメンバーを辞退したのは達也のせいだ、と発言したのだ。

「悠元君から見て、どう思うかな？」

「おかしな話ですね。何せ、コンペのメンバーのことは自分も聞いていますが、達也のメンバー選出は平河先輩も自身の代理として推薦していたはずです」

達也にその辺の事情を聞いたところ、小春と並行して千秋にも「無理矢理代理になる気はない」と言ったようなニュアンスを含んだ言葉を述べていたらしい。それを聞いた千秋もちゃんと納得していたはずだと。

姉の推薦があったとはいえ、妹もどこか思うところはあったのかもしれない。そこに誰かが誑し込んだとなれば、ある程度の辻褄は合う。

その辺のことは隠しつつ、悠元は五十里からの質問に対してそう答えた。

「ひとまず、安宿先生の判断で大学付属の病院に移ることになった。花音や千葉さんは納得いかなそうな顔をしていたけれど」

「……あの2人は、ある意味似た者同士ですからね。正義感が強いのは結構ですが、実力を半端に伴っているのが更に性質が悪いでしょう」

〝半端〟と評したことに五十里は自身の婚約者を貶されてムッとするのかと思えば、返ってきたのは苦笑交じりの表情だった。どうやら、五十里でも甘いと思うところはあるのだろうと推察できた。

花音もエリカも実力はあるだろうが、その実力が実戦で発揮できるかどうかは別問題だ。
「正直なところ、達也を困らせる手段としては温いという他ないですね。平河に教えてやる義理はありませんが、それこそテロや他国の侵攻レベルでないと彼が揺らぐということはないでしょう」
「えっと……冗談だよね？」
「この表情で冗談を言っているとお思いですか？」
「……君も元十師族とはいえ、中々濃い経験をしているね」
明確に言えば、それこそ深雪が大きく関わるレベルでないと達也が動揺することなど難しいだろう。この場に自分と五十里しかいないからこそ、彼に対してハッキリ言うのと同時に、口止めも込めている。
あまり深入りしてほしくないため、悠元は話題を切り替えた。
「話題は変わりますが、依頼した2機の進捗はどうでしょうか？」
「問題なく進んでいるよ。僕はコンペの準備があるから関わっていないけれど。それにしても、千葉さんと西城君専用のデバイスとは……まあ、その対価も貰っているから、うちとしてはありがたいけれど」
エリカは既に専用デバイスの「大蛇丸（おろちまる）」があるが、あれは破壊力こそ一級品だが、取り回しの面でエリカの長所である高速移動を生かし切れていない。なので、そのデバイスを譲ってもらう代わりにエリカ専用のＣＡＤを用意し、防御面はともかく攻撃面では決定打に欠けるレオにもＣＡＤを用意することにした。
作製自体は五十里家に委託としたが、基本設計は悠元が今までの試作デバイスのデータを基に一から図面を引いた（表向きはＦＬＴの魔工技師の伝手を頼ったことにした）。その対価として、刻印型術式の改良型を複数供与している。
そこに加えて、論文コンペで使うデモ機の全設計にも関与している。以前、達也に対して「余裕がない」と言っていたのはこのことも大きく関わっていたからだ。
この辺のことを詳しく言っても、理解できる人が少ないのと同時に自分の身の危険を増やすことになるので、達也には〝知り合いからのアドバイス〟という体でお願いすることにした。

「ところで、その2人は今どこで何をしているんだろうね」
千秋がパスワードブレイカーを用いていた騒ぎの一件以降、レオとエリカは揃って学校を休んでいた。二科生のためにそこまで煩く言われないが、公休という形となるように取り計らっておいた。なお、その2人が休んだことにあらぬ想像をした幹比古と美月、そこに加えて深雪も加わっていた（そのフォローは達也が取り成していた）。
「まあ、今頃は2人揃って叩きのめされてると思いますよ」
◇　◇　◇
悠元がそう発言した頃、レオとエリカは揃って道場の床に横になっていた。汗が流れ出るような有様で、双方共に呼吸を荒くしていた。とはいっても、いかがわしいことをしているのではなく、鍛錬を受けていた。
都心からみて郊外にある上泉家の別邸。そこには新陰流剣武術の東京支部も隣接しており、レオとエリカはその道場にいた。
横たわっている剣道着の2人を見ているのは、右手に竹刀を持った甚平姿の男性。彼の名前は上泉元継――――新陰流師範にして上泉家現当主、悠元の兄にあたる人物が2人の稽古を受け持っていた。
「2人とも、10分休憩な」
「は、はい……」
「ま、マジきついぜ……」
レオとエリカがここにいるのは、単に偶然だった。エリカは最初、レオを千葉家の道場に連れて行こうかと考えていた。すると、正門の前で私服姿の元継と遭遇したのだ。
元継は第一高校に用事があり、都合がついたところで出向いたところ、偶然にも2人と鉢合わせした。すると、元継は2人を見た上でこう提案した。
「……唐突だが、強くなる気はないか？」
武術面で規格外のセンスを有する元継は、遠距離に弱い半面で知覚能力を徹底的に磨き上げていた。加えて、悠元から魔法技術を教わったお蔭で、相手の考えていることの大半を仕草で感じ取れるようになった。

丁度侍郎の訓練も一段落したため、手持無沙汰となっていた元継は２人に目を付けた形だ。それを聞いたレオとエリカは考え込んだが、新陰流剣武術自体そう簡単に習えるものではないことはエリカでも知っており、折角の提案を受けることにした。

そして、新陰流の基礎鍛錬を終えた剣道着姿の２人が床に横たわっている今に至るというわけだ。

「その、悠元はこれを……？」

「ああ。アイツなら３セットはこなした上で爺さんや上段者との手合いをしていたからな」

「……人間辞めてるじゃないですか」

入念な準備体操の後、９方向に対しての斬撃の素振り１００回と片道２２０段にもなる石段の往復に体幹を鍛える筋力トレーニング。しかも、悠元はそれに加えて複数系統の魔法行使でそれを準備運動として３セットこなしている。

ただ、悠元の素振りは一般的な木刀と同じ長さの鉛の棒（木刀と同じ形状になっている）を使用しているので、普通なら関節や骨、筋肉に過度な負荷が掛かる（悠元は身体強化魔法を併用している）。いくら新陰流でも、そんな鍛錬をするのは悠元と剛三しかいない。

「だが、それでもアイツは強くなることを止めない。根底にあるのはきっと、生への執着なんだろうな。難しいか？」

「……少しは理解できなくもない、ですかね」

元継の言葉に対して、反応を示したのはレオだった。彼自身に流れている血が、まるで本能が囁くかのように呟いた。それを聞いた元継は、レオの心情をそれとなく察しつつも言葉を続けた。

「魔法師も順風満帆とは言えない。いくら十師族といえども、それは同じだった。かくいう俺も、数年前までは魔法をロクに使えない落ちこぼれに等しかったからな」

「えっと、冗談ですよね？」

「本当のことだ。それを救ってくれたのは、言うまでもなく悠元のお蔭だ」

悠元を起点として、三矢家の兄弟姉妹は卓越した魔法力を手にし

た。彼の持つ魔法技術は、まさしく世界の頂点に立ち得るであろう……元継はそう確信している。そこまで述べた上で、元継はエリカに尋ねた。
「エリカ。西城君に教えたいのは『薄刃蜻蛉』の技か？」
「……あ、はい。というか、どうやって気付いたんですか？」
「彼の筋肉の付き方や想子の使い方を見るに、近接特化型・硬化魔法中心のインファイターのようだったからな。それなら、もう一段階引き上げて……新陰流剣武術の剣聖四大奥義が一つ、『霊亀（れいき）』を教えよう」
「っ!?　正気ですか!?」
　上泉家に伝わる新陰流剣武術。その剣術の根幹を成す四大奥義――鳳凰、霊亀、麒麟、応竜の名を関する奥義は、本来であれば印可を与えられて初めてその奥義の概要を知ることになる。元継が出したその名は、薄刃蜻蛉の大元となった技。
　本来、一の太刀「抜刀」、二の太刀「招来」、三の太刀「顕正」、終の太刀「烈破」の全四段十六構成からなる四大奥義の習得には十数年を平気で要する。だが、元継はレオの持つ特性ならばそれを大幅に短縮できると踏んだ。それは悠元から想子制御の技術を教わっていることも起因している。
「無論、生半可な覚悟では身に着けられないことも予め言っておくが……どうするかな、西城君？」
「……お願いします。達也や悠元に頼らず、強くなりたいと思っているのは確かです」
「その意気は高く買ってやろう。エリカはどうする？　『麒麟』あたりならいけるかもしれないが」
「……はい。こちらこそ宜しくお願いします、元継さん」
　『麒麟』は千刃流における秘剣の大元となった奥義。だが、その修得には極めて精密な魔法制御が求められる。千刃流では、その制御を可能な限り簡素化することで実戦向きへと昇華させている。
　これらの奥義を新陰流の印可も与えていない人間に教えるのは、本来の筋で言えば宜しくないこと。
　だが、これは悠元からの相談を受けて元継が考えた結果、そこまで

教えて問題ないと判断（剛三からも奥義の伝授自体は元継自身の判断に委ねている）し、元継はゆっくりと立ち上がって竹刀を構えた。
「最初に言っておく。強くなりたいと願うのなら、自分に対する妥協や甘えは捨て去れ。それが出来なければ――――死ぬだけだ。これは爺さんの受け売りだが……始めるぞ。死ぬ気で付いてこい！」
武術に関しては一切妥協しない……新陰流に対する剛三の精神は元継にもしっかり受け継がれており、道場から悲鳴に近い声が響くのであった。
余談だが、この後剛三が喜び勇んで姿を見せ、２人をさらにしごき上げたらしい……２人が学校に戻ってきてからは、視線に対して殊更敏感になっていた、と達也が呟くほどに。
◇　◇　◇
前世において高等学校は週休二日制だったが、魔法科高校においては土曜も普通に（実習込の）授業がある……にも拘らず、悠元は達也に連れられる形で九重寺を訪れていた。その目的は「遠当て」用の練武場を改良したので来ないか、という八雲の誘いから来るものだった。
「きやっ！　このっ!!」
無論、練武場――――九重寺地下にある射撃練習場といっても実戦を可能な限り模した様な作りとなっており、壁四面のうち三面と天井に出現するターゲットを破壊していくというもの。ターゲット自体は１秒で隠れる仕様となっており、撃ち漏らした的の数に応じて模擬弾がペナルティとして降ってくる。
現在その練習をしているのは深雪で、持ち前の負けん気を発揮しているが、汗が滴り落ちる程の様相から、その訓練がいかにハードだと分かる。
「……悠元。今の難度の制御式は誰が組んだんだ？」
「詳しいことは聞いてないが、多分真田大尉じゃないかな。人の意識の隙間を突くような意地悪なアルゴリズムなんて、相当腹黒い人間じゃないと無理だし」
言っておくが、九重寺関連の設備設計やらターゲットの射撃プログ

ラムに関しては完全にノータッチであるため、こちらに非はない。この辺のことは「九頭龍」の部分にも抵触しうるかもしれない、と考えたからだ。
深雪が終わったのを見計らって、悠元はタオルを頭に被せるようにして掛けた。彼女はすっかり息が上がっており、床にへたり込んでいた。
「お疲れさん」
「ありがとうございます、悠元さん。あと、その……」
「……やれやれ、ご注文の多いお嬢様ですね」
深雪の望みを察して手を差し出すと、深雪はその手を取って起き上がる勢いそのままに悠元へ抱き着いた。これには八雲が「ほほう」と言いながら面白そうな表情を見せていて、達也に関してはやれやれと言わんばかりの様相を見せていた。
「悠元さん、私の仇を取ってください」
「深雪、物相手に八つ当たりはみっとも無いと思うんだが……とりあえず、次は達也の番だから離れようか」
負けん気は結構だが、無機物に対して「親の仇です」と言わんばかりの深雪の言い分に内心苦笑しつつ、達也はフロアの中央に立って、自身のＣＡＤである「トライデント」を前面に突き出すように構える。
わずか1秒しか展開しないターゲットを達也は分解魔法で複数同時に破壊というよりも〝粉砕〟していく。次々と出現する的に見向きすることなく、達也はＣＡＤの引き金を引いていく。
達也は一歩も動いたり視線を逸らしたりすることなく、ひたすら前を見続けていた。変化があったとすれば、ＣＡＤのトリガーを引く頻度が増す程度のものだった。
結果として、真田大尉が組んだ難度をあっさりとクリアしたのだ。こうでないと原作主人公なんて務まらないな、と悠元は内心で独り言ちた。
「深雪は同時に２０、達也は３６か」
「お兄様、流石です」
「今回の場合は敵が不規則に出てくるわけじゃなかったからな。そう

でないと２４が限界だよ」
「それじゃ、次は悠元君の番ってことになるかな」
ここまでの流れというか、深雪のキラキラしている目線を思えば、ここでやらないという選択肢はない。諦めたように息を吐くと、「ワルキューレ」を左手に握った状態で構えた。
この練習場にはご丁寧にシグナルやブザーなどあるわけがなく、唐突に練習メニューがスタートし、悠元は「ワルキューレ」を前面に構えた。
達也の時よりも遥かに複雑なアルゴリズムでターゲットが出現するが、それらを寸分違うことなく分解魔法で破壊していく。
常時１０から１４のターゲットが１００分の１秒単位で出現周期を意図的にずらされている……この制御式も中々にあくどいと思いつつ、悠元はトリガーを連続で引き続ける。
天井のターゲットを破壊することで発生する合成樹脂の砂に気を取られることなく、集中を途切れさせないようにしている。
そして、最後に四面全てに出現した４８のターゲットを同時に破壊したところで、練習メニューが終了したのを確認すると、「ワルキューレ」を降ろして静かに息を吐き、八雲に視線を向けた。
「九重先生、このアルゴリズムを組んだのも真田大尉ですか？」
「いや、違うよ。これはその制御式をもとに、知り合いに頼んで難度を上げてもらったものだよ」
「でしょうね……真田大尉よりも意地が悪いやつですよ」
そう言いつつ「ワルキューレ」を天井に向けてトリガーを引くと、突然出現したターゲット１２個を綺麗に破壊した。今回分解魔法を使ったのは、今編み出している最中の魔法にも大きく関与している。
達也の分解魔法と悠元の分解魔法は、同じようで実は異なる。前者の場合は『質量爆散』といった分子レベルまで現状引き出せているが、後者の場合は情報などといった〝概念〟にまで踏み入っている。
つまり、その気になれば的を破壊するというよりも消滅させるというレベルに近いが、今回はそこまでする必要もないと判断して粉砕レベルに止めた。

「恐らくですが……母上ですね？」
「正解だよ」
間違いなく真田大尉よりも技量や思慮深さが上位に来る人間の仕業。だが、風間に借りを作るようなことを八雲が許容するとは思えない。師弟の関係にあっても、風間が国防軍にいる以上はある程度の損得勘定が存在している。
そして、悠元ならこれぐらいは行けると踏んでの制御式の緻密さとなれば、神楽坂家の現当主である千姫の仕業だという推測に対し、八雲は笑みを浮かべてその推測を肯定した。
「流石だな、悠元。元十師族の名は伊達じゃないな」
「まあ、今回は攻撃範囲を限定してのものだったからな。無視していいなら、深雪のように範囲攻撃したほうが早いから……で、深雪さんは何故に脇腹を抓るのですか？」
「悠元さんはズルいです」
「いや、意味分からんから」
「大丈夫だ、悠元。俺にも理解できてないから」
後で確認したところ、仇を取ってくれたことは嬉しいが、まるで自分が足手纏いのように思えて拗ねた結果らしい。
一朝一夕で強くなれたら誰も苦労しない、と窘める羽目になったのは言うまでもない。

この場合、記憶を消すに限る

射撃訓練を終え、達也と深雪はＦＬＴに用事があると言って見送った後、悠元は庫裏の縁側に通された。恐らく、先日小百合が達也に押し付けたレリックのことだろうと推察すると、八雲は綺麗に丸めた頭を掻く様なしぐさを見せた。

「それで、結局はどうしたのかな？　悠元君は国防軍に伝手もあることだし、その辺は穏便に済ませたのだろう？」

「先生の予想通りかと思いますが、伝手を使って国防軍の兵器開発部に突き返しましたよ。小百合さんは怒り心頭でしょうが、あれは世の中に出回らせちゃ拙い技術の塊ですので」

名目上の株主である元に加え、筆頭株主である深夜に話を通した上でレリックを国防軍に直接返却した。達也はもう少し解析したがっていたが、こないだハッキングをしてきた相手が大陸系の古式魔法使いということを伝えると、深雪の安全も考えてレリックを悠元に任せた形だ。

達也の考えでは、魔法式の保存ができれば非魔法師でも魔法兵器を扱えると睨んでいた。実際のところ、悠元も陸軍の兵器開発部にいた時は、その思考を前提として勾玉の解析を行った。

だが、非魔法師ではその機能を使っても〝魔法を常時制御できない〟ということが判明した。非魔法師の場合、擬似的な魔法演算領域をＣＡＤで再現しないと極めて難しい、という難題中の難題が立ち塞がったのだ。

刻印型術式のように必要な変数入力をすべて定数化させた魔法式を用いたところで、今度は個人差のある想子保有量がネックとなりかねない。最悪、想子よりも先に精神力が尽きて死に至る可能性がある。それに対応する技術もあるが、こればかりは秘術に関わる部分に触れるため、兵器開発部での研究は強引に打ち切った。

いくつかの起動式を経由して保存された魔法式の制御を行う方法も考えたが、今の現代魔法で十全に使うために必要なコストが新型のＣＡＤ設計費用よりも高い、という考えるのも馬鹿らしくなる試算結

果に至った。
　なぜそんな金額になるのかと簡単に言えば、高濃度の想子に耐えうるだけの魔法行使能力を持っていないと無理、という結論に達したからだ。なお、その方策はデータの入ったメモリを魔法で分解したので、悠元の記憶以外では一切残っていない。
　ソフト面では可能な話でも、ハード面で可能にするとなれば、魔法演算領域を電子領域に再現させることが必要となる。その研究が一向に進んでいないのは世界中どこでも同じで、魔法演算領域自体をピンポイントで可視化するという魔法は世の中に存在していない……悠元という例外を除けばの話だが。
「ということは、悠元君は今回の件までにその解析を全て終えているということかい？」
「魔法式を保存できたとして、魔法式の使用継続・中断などの制御、魔法式への想子供給は結果的に使用者の負担となります。それに見合った演算能力と制御能力がなければ、魔法を一回使っただけで廃人になるでしょう。良くて想子中毒に見舞われる可能性もあります」
「……それだと、魔法師は単なる〝弾〟にしかならなくなる、というわけか」
　魔法演算領域を科学的に再現する方法が無い訳ではない。ただ、世界中でもブラックボックス同然の部分を完全に把握できているのは悠元だけ、という現実がある。そうでもなければ『領域強化』という魔法を行使することも難しい。
　この部分を公表しないのは、魔法演算領域に秘められた秘密に加え、現代魔法において根幹の部分に触れることになる。言うなれば、魔法先進国であるＵＳＮＡの立場を土台から引っくり返しかねないことに繋がる。
　なお、勾玉関連の情報は千姫に報告しているが、彼女もその力のことを危惧して秘密にすることを約束してくれた。
「そもそも、あの勾玉の解析は現代魔法や古式魔法でも無理でしたからね」
「ふむ、一体どんな方法を用いたんだい？」

「古代文明魔法（エンシェント・マジック）――古代魔法と呼称したほうがいいでしょうね。古代文明に残っていた壁画の解析で偶然覚えた産物ですし、その方法はいくら九重先生でもお教えできませんよ」
「それは大丈夫。いくら『九頭龍』の長といえども、僕の本能が触れちゃいけないと警告しているからね。世捨て人の坊主でも自分の命は惜しいものだ」
この辺は剛三の趣味で世界中を連れまわされた副産物と言っていいだろう。
義務教育であるはずの中学教育がかなり省かれ、剛三との旅行という名の鍛錬で費やされた……今にして思えば、真っ当な中学生活を一切送っていないことに涙が出そうになった。
いくら護人の立場で自由気ままな爺さんとはいえ、「スターズ」のいる基地に道場破りの感覚で入っていったのはおかしいと言わざるを得ない。マジで誰か止めろよ、と言いたくなったほどにだ。俺に止めろって？　……好奇心旺盛の塊とも言うべき爺さんを常時止められるような鋼の精神なんて持ってないので無理だ。
「――大人しくしなさい！」
「問答無用で戦略級魔法放っておいて、言いたいことはそれか！　このポンコツ魔法師!!」
自分の場合はというと、そんな爺さんの破天荒な行動に巻き込まれて、基地にあるビルを半壊させる羽目になった。後で「ビル全壊とは笑うしかないの」と爺さんは笑っていたが、もう半分はこの国の戦略級魔法師が『ヘビィ・メタル・バースト』を発動させたせいだ。
不幸中の幸いは、それ自体を〝演習〟という体にして不問にしてくれたことと、仮面のお蔭であのポンコツ魔法師に正体がばれなかったことぐらいだろう。魔法は優秀だが、それ以外がねえ……笑うしかなかったけど。
「そういえばですが……国防軍は例の人物が密入国していることについて、既に把握していると認識してもよろしいですか？」
「ああ、間違いない。主戦派を煽ることになると危惧して、かなりの情報統制を敷いているようだ」

小百合の一件以降、達也や悠元には一切の情報が流れてこない。双方共に特務士官という立場上仕方のないことだが、風間はもとより同等の地位に立っている佐伯からも情報の供与がないことを少し疑問視していた。

『人喰い虎』呂剛虎（ルウガンフゥ）の密入国の件（そこに陳祥山もプラスされる形となるが）に関しても、自身の調査と八雲の調査結果から確信を得た。

別に現在の待遇そのものに関して不快感を覚えるわけではないが、まるで管理するかのような扱いを受けていることを国防軍に身を置いた時から感じていた。それは、魔法の実験部隊である独立魔装大隊に移っても同様であった。

もし、国防軍がこちらに好意的であるならば、防衛大学校のデモンストレーションの一件だって起こりえていないのでは……そう邪推してしまうほどだった。風間が謝罪したので、その件のことはひとまず水に流す形としたが、次に余計な干渉をするようならば、その対応を真剣に考えないといけなくなる。

最悪、独立魔装大隊での研究データや兵器データの全廃棄も考えなければならないことに、正直やることが多いと愚痴りたくなってしまう。そう思っていると、八雲はそれを察したようで苦笑していた。

戦略級魔法師という存在を軽視しているわけではないし、自分もその枠の中に当てはまることは理解している。

だが、例え国防軍が管理していたとしても、実際にその引き金を引くかどうかは政府にその権限と責任が伴う。この国は軍事国家ではなく法治国家である以上、政治家が戦略級魔法の使用可否を握るのは当然の帰結と言えるかもしれない。核兵器という切り札を握れなくなった代わりとして、戦略級魔法を求めるのはごく自然な流れともいえる。

そのことによって、要らぬ欲を出そうとする輩が現れないとも限らない。だからこそ、自分は母や爺さんの推薦を快く受け取り、神楽坂家次期当主になることを決めた。節操無しのレベルで敵を作りたくなんてないが、相手が殺そうとする覚悟を持ってくるのならば、相応の対応をせねばならない。

とある主人公の台詞だが、「撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ」という文言が一番しっくりくると思う。
「それで、君はどうするのかな？」
「俺の戦略級魔法の使用許可権限を持ち得ているのは爺さんと母上だけ。これは独立魔装大隊に移る際に了承して貰った権限です。他の優遇措置はどうあれ、これを変更するというのならば、辞表を叩き付けて国防陸軍の士官を辞めるつもりです。正直、内ゲバなんてやってる暇があるんなら、国内全体の利益を考えろって言いたいですよ」
沖縄防衛戦の後、戦略級魔法『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』のことについては元と真夜、そして剛三に話した。実家は言わずもがな、四葉家は達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』を知った対価として。そして、剛三に話したのは何かしらの後ろ盾になってほしいという打算があった（国防軍は風間が報告すると思われたので、一切伝えていない）。
それを聞いた剛三は、悠元が戦略級魔法を使えることを神楽坂家に対して秘密裏に相談。その結果、戦略級魔法の使用許可権限（それと悠元の婚約者選定）を剛三と千姫の2人が担うこととなった。その影響は独立魔装大隊への所属変更の際、同席した剛三がその権限を佐伯に〝認めさせた〟形として表面化した。
「世俗の柵は大変だからね。だからこそ、僕のような世捨て人も出てくるわけだし」
「どこにいても柵が付き纏うのは分かっていましたが……まあ、今すぐに軍籍を外すようなことはしません。正式に神楽坂家当主の座に就くのが早まれば、その限りとは言えなくなりますが」
護人は権威をもちつつ権力を備えている。それは、この国を害しようとする輩が現れた場合、権威だけでは対処できないということを嫌と言うほど知っているからだ。上泉家は初代当主がかつて仕えていた主を失ったことに起因。神楽坂家は長きに渡る皇族を守り通すために様々な手段を用いることになったことが大きい。
護人である上泉家と神楽坂家の当主は「どの組織にも癒着してはならない」という不文律が存在する。
国を守るために協力・共闘の体制や技術供与を行うのは、最終的な

結果として国益に適うとなれば問題はない。だが、思想や信条を汲み取って特定の組織に対する必要以上の肩入れは出来ない。それが時として破滅への道になりうる可能性があるからだ。
護人自体は四つの家が存在していたが、半分は三度の世界戦争で没落し、日の目を見ることなく消え去った。その原因は特定の組織に対する必要以上の癒着に等しいぐらいの肩入れが遠因となっていた。
僅かな生き残りは、細々としながらも上泉と神楽坂の中に受け継がれたらしい。
悠元のＦＬＴへの魔工技師としての参加や保持している株式（悠元が神楽坂家に移ったが、所有権は成人するまで元の一時管理に変更なし）については、許容できる範囲の経済活動として千姫が認めている。神楽坂家が四葉家のスポンサーをしている以上、複数の繋がりを持つことは悪くないという判断だ。
スポンサーという立場を肩入れとみるかどうかだが、神楽坂家や東道家は必要以上の干渉を四葉にしておらず、あまりにも国の枠組みから離れすぎれば咎めるが、その心配はかなり減った、と言ってもいいだろう。
でなければ、四葉の次期当主候補筆頭である深雪を神楽坂家に嫁がせるという方策なんて出来る筈もない。
国防軍に関しては、本来の年齢規定を逸脱した特務士官自体認められるものではないが、一定の範囲内での協力なら可能としている。ただし、悠元の戦略級魔法の使用可否については、上泉家か神楽坂家の許可が下りない限り国防軍で使用することができない。
加えて、神将会として正式に活動することになれば、独立魔装大隊への関与はかなり薄くなる。個人的な付き合いを続けるにしても、軍事的なことについては一定の線引きを必要とするだろう。
「その意味だと、爺さんも大概おかしいんですけれどね。魔法師だと知られていても、あんなに自由に動けるのは」
「護人は皇族以外に拘束されない特記事項がある。政府が剛三殿を拘束する度胸なんて存在しない。寧ろ、返す刃で血の海が出来かねないだろう」

「B級スプラッタ映画も真っ青……いえ、真っ赤の光景が完成しそうですね。寧ろ、突然ゲームのキャラが飛び出てきました、と表現したほうがしっくりきそうですが」
「それは間違い無いかもしれないね」
剛三が上泉家当主でなくなったとはいえ、彼が公式の戦略級魔法師として公表されることはない。いや、むしろ〝できない〟。剛三が大漢で成した一騎当千の功績は世界中に知られており、そんな彼に対して世界各国の諜報機関や政府高官は『雷龍（ライトニング）』とは別の呼び名を用いる。
――『繋がれざる者（アンチェイン）』
三矢家の魔法科高校での扱いから見れば、剛三がそう呼ばれていても不思議ではないと思えてしまうほどに毒されているのは否定しない。慣れというのは人の感覚を鈍化させるというが、まさにその通りだろう。
どこの格闘漫画のキャラなんだよ、と内心でツッコミを入れたが。
だが、それに付き添っていた悠元に対しても二つ名があることをこの時の彼は知らなかった。どう呼ばれていてもあまり気にしていなかったのが幸運だったのかどうかは、それこそ神のみぞが知る。
USNA屈指の戦略級魔法師でも触れることが叶わず、彼の逆鱗に触れれば無傷で帰れることなど奇跡に近い所業。その在り様を、とある国の大統領がこう評していた。
――『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』と。
そして、その名が広まることになるのは……この先に起こることだというのも、今の悠元には想像すらしていなかったのだった。
◇　◇　◇
FLTに対してのハッキング攻撃はあったらしいが、これについては第三課の優秀な研究員たちに加えて牛山のリーダーシップの甲斐あって無事に終息した。
恐らくはレリックの分析データを狙ったものだと思われるが、そもそも達也と小百合のやり取り自体は第三課の人間に知らされていない上、小百合がレリックの複製を国防軍から請け負ったということな

ど知る筈もない。

だが、その一件は小百合に対する襲撃の翌日から細やかな噂程度の話として社内に知られていた。尤も、第三課に所属する人間からすれば「御曹司の功績に対する僻みなんだろう」と冷ややかな感じだったらしいが。

それはともかく、高校に入ってからよく通うようになった喫茶店ことアイネブリーゼで、悠元はジト目をしながら向かいに座る男子2人――レオと幹比古を見ていた。

「お前らなあ……論文コンペの準備が忙しいときに、創作物の主人公みたいなことしてるとか、俺を過労死させる気か？」

「いや、悪いとは思っちゃいるんだが……」

「こういうことは悠元が適任だろうと思ってね。燈也も同意見だったよ」

簡単に説明すれば、レオは上泉家での鍛錬の際、不可抗力でエリカの着替えを見てしまった。幹比古の場合は、学校での演習訓練（相手は克人）の後、差し入れの手伝いをしていた美月と一緒に食事をした後、畳による足の痺れから美月を救おうとして胸を鷲掴みにした。

双方共に一応解決した事案だが、迷惑を掛けたお詫びに何か作って渡そう、と2人が思案したらしく、その相談相手に悠元を選んだというわけだ。

この2人の主人公が持っていそうな気質は、きっと達也があのような性格（ある意味無敵超人とも言うが）だからこそ、釣り合いを持たせるためなんだろう、と思ったのはここだけの話。

「……それなら、割と簡単に出来る部類のほうがいいかな。クッキーでいいか。言っておくが、余計なアレンジしたら、うちの姉特製の青汁飲ますから覚悟しておけ」

「どんな代物なんだ？　健康によさそうな気はするが」

「エリカは頑張って飲み干したが……気絶した代物だ」

「青汁で気絶って一体何が入ってるの……」

味はまともと言うか美味しいのだが、飲んだ後に凝縮された苦味が一気に襲い掛かってくるイメージだと言えばいいだろう。そうとし

か表現できないというか、味覚以外で味を感じるとか意味不明すぎるというか……それを生み出したのは、うちの姉の一人である佳奈だ。
なお、その青汁を日頃から飲み続けている猛者が1人いる。誰なのかと言うと、末っ子の詩奈だ。もう既に三矢家の片鱗を見せているような気がしてならなかった。
予め言っておくが、その特製青汁の原料は合法的なものしか入っていない、とだけ付け加えておくこととする。
場所は相談の結果、幹比古の家で作ることとなった。
幹比古の実家である吉田家は神道系古式魔法の家なので、その弟子は女性の比率が高い。上泉家の場合は武術の側面が強いので男性の比率が高いため、少し新鮮味を感じる。
そして、菓子作りとなればそういうことに目聡いのが女性であるが……その好奇心は、時として残酷な一面を突きつける形となった。
「あはは……悠元は凄いよね」
「ああ、すげえよな」
「納得がいかないんだが……いや、マジで」
レオと幹比古がそれぞれ作ったクッキーをつまみ食いで食われないようにするため、悠元もごく普通のレシピでできるクッキーを作り、焼き上がったものを彼女らが食したところ、お通夜のような雰囲気が出来上がっていた。
2人と悠元の作ったクッキーに材料の差異は一切存在しないにも拘らず、こういった結果となったことに悠元は納得いかない様子を見せていた。
「美味しい……でも、何で涙が出るのかしら……」
「その気持ちはわかるわ」
「何でしょう、この気持ち……嫉妬、でしょうか？」
女性の弟子たちの中で妙な連帯感が出来つつあった。
この状況を生み出した当人が取った行動は、懐から筆ペンと短冊を取り出し、某漫画家キャラばりの速度で術式を書き上げていた。そして、徐にサングラスを取り出して自分自身に掛けた。
その術式に見覚えがあった幹比古が声を上げる前に、悠元はその短

冊を前に翳した。
「もう、いい加減にしろ！」
「うわっ、まぶしっ!?」
「悠元ぉっ!?」
　その術式は、以前調子に乗ったエリカを止める際、悠元が即興で書き上げた閃光を発する精霊魔法で、副次的に範囲内の一定期間の記憶を消去するというもの。まあ、宇宙人を相手に取り締まる某映画に出てきた記憶消去装置みたいなものだ。特製のサングラスをかければ防ぐことも可能である。
　閃光を発した隙に、クッキーをレオと幹比古が焼き上げた余りとすり替え、事無きを得た。なお、悠元が作ったクッキーの余りはどうなったのかと言えば……ちゃんと残さずに全部食された、とだけ言っておこうと思う。
　そして、レオと幹比古の作ったクッキーも無事に各々の相手へと渡ったのであった。

晴れのち朴念仁、所により人喰い虎

『魔法大全（インデックス）』。国立魔法大学で編纂・管理されている魔法の大辞典のようなもの。とはいえ、悠元からすれば上泉家の書庫に入り浸っていたために、魔法大全自体目新しい魔法などなく、それは神楽坂家で管理されている魔法関連の書庫でも同様であった。

そもそも、国策機関自体が現代魔法を推奨している上に、まるでＣＡＤを使うことが必須と言わんばかりの状態だ。悠元の場合はＣＡＤを使わずに戦略級魔法を使用することは可能で、ＣＡＤはその際に消費する想子を削減するためのツールという立ち位置である。

今日は雨のため、屋外での準備も警備隊の演習も屋内でやることになる。とはいえ、ここ最近は警備隊の練習に教官役として出ずっぱりだったため、悠元は図書館地下二階の保管庫で端末と睨めっこしていた。

「ここにいましたか」

「市原先輩。コンペの準備はよろしいのですか？」

「今日は屋外で準備もできませんし、デモ機のほうは司波君が詰めていますから」

悠元に声をかけたのは鈴音だった。ここ最近のデモンストレーションは問題なく進んでおり、あとは余計な横槍さえなければ、当日までにリハーサルの回数をこなす段階まで来ていた。すると、鈴音は悠元が端末で見ていたものに興味が向いた。

「ところで……それは、過去の魔法実験の文献ですか？」

「正解です。今学べる魔法では、限界なんてすぐに来てしまいますからね」

そもそもの話、一つの単純なベクトルを発生させる基礎単一工程魔法で、アルファベット3万文字相当は明らかに無駄が多すぎるのだ。

これを基本コードから根本的に書き換えて同等の威力を出そうとすれば、対象物のみに作用する構造式、術者本人の自爆防止のための構造式、それと威力などの出力変数に関わる計算式だけに絞ると大体1万文字まで削減できる。

では、残り2万文字の〝無駄〟は何なのかと言えば、その大半は外部に存在する想子を利用せず、個人の体内にある想子だけで行使しようとする制御式が組み込まれている。
「……学ぶ物自体に疑問を持つなんて発想は、正直ありませんでしたね」
「普通はそうでしょうね。ですが、現代魔法自体不便すぎるんですよ」
物理法則が強固なセキュリティを持っているように見えがちだが、実は想子自体が強力な復元力を有している。いわば質量保存の法則が想子にもしっかり適応されている。
仮に想子が現象として変化したとしても、性質が変化しただけで想子自体は存在し続けており、やがて元に戻る。この現象を利用して攻撃や防御などを行うのが「超能力」の基本概念であり、治癒魔法が永続的でないのは想子の復元力によるものだ。
精神干渉系魔法の場合は、一時的に想子の性質を変質化させるだけで、やがて解除される。『誓約』に関しては、『フラッシュ・キャスト』の技術を応用して魔法が刻み込まれ、半自動での行使をしているために魔法が消失しない。
そもそも、達也自身常にリミッターぎりぎりまで使うことがないのと（大体の場合は体術プラス分解魔法で事足りてしまうのもあるのだが）、それの枷を担っている深雪に負担を掛けたくないという達也の強い思いから、辛うじて『誓約』が壊されずに維持されている。
こう言うのもあれだが、高層ビルレベルの高さで綱渡りをしているような危うさである。
天神魔法が強力な神霊魔法となっているのは、術者本人だけではなく周囲に存在する想子を利用しているためで、その意味では精霊魔法が一番天神魔法に近くて理に適っている魔法と言えるだろう。同じ系統の古式魔法だからこそ、という意味をツッコまれると反論できないが。
なお、想子の特性と現代魔法の欠陥構造は三矢家で魔法訓練していた時に見つけたものだが、それを知っているのは悠元以外だと元、剛三に元継、それと千姫にしか言っていない。何せ、超能力研究の発端

となった旧合衆国もといＵＳＮＡが隠したいであろう事実に触れかねないからだ。
　現代魔法に欠陥があることは達也たちにも言ったが、洩らしたら拙い部類なのは全員が納得してくれた。これを真紅郎に伝えたら、きっとひっくり返ること間違いなしだろう……伝える気は毛頭ないが。
「現代魔法を不便と言い切ってしまう悠元君も大概ですね……今やっていることが無駄のようにも思えてきます」
「俺自身からすれば、決して無駄とは言いませんよ。どんなことでもトライアンドエラーの繰り返しで進歩していくのですから」
　そう言って、悠元は端末のキーボードを叩いて一つの魔法のデータを表示させる。それは、九校戦で亜実が使っていた『エアセイル・シールド』のデータであった。
「ただ、『インデックス』の基準も杜撰というか、稚拙なんですよね。この魔法だけで言っても、７割以上は改良の余地がありましたし」
「な、７割以上ですか？」
「ええ。これをそのまま五十嵐先輩が使っていたら、半周も持たずに想子枯渇を起こしますから」
　この世界に転生して数日間は自室のベッドから動けない状態だったため、最初にやったのは魔法式自体の解析だった。何せ、やることと言えば自室にある本を読むか、パソコンにインストールされたリアルタイム・シミュレーションをするぐらいしかなかった。
　転生特典で組みあがった『カレイドスコープ』と『リインフォース』の固有魔法と現代魔法の魔法式を比較した際、本来複雑な計算を要するはずの前者の処理速度が後者を上回ったのだ。
　そこで、転生特典を使って一切無駄のない基礎単一工程の魔法式を組み上げてみると、本来魔法行使に必要とされない無駄な制御式が見つかったというわけだ。こんなアプローチ方法ができるのは、世界中を探しても自分だけだろうと思われる。
「民生と軍事が表裏一体である以上、仕方がない部分もあるでしょうが。そういえば、市原先輩は何か調べものですか？」
「そうでした。実は、悠元君から提供されたクーロン力低減の魔法式

なのですが……司波君から聞いた話だと、一度手直ししたそうですね？」
「あー、そうですね。現状の理論上だと１００兆分の１にまで低減可能なんですが、そこまでやるといろいろ拙いと思いまして。最初は１億分の１にしたのですが、達也に確認したら珍しく驚かれたので拙いと判断して、結局１００万分の１に設定し直しています」
鈴音は驚きを通り越して感心していた。
彼女自身もクーロン力低減の魔法式は組み立てていたが、現状の知識ではどう頑張っても１０万分の１が限界であった。だが、目の前にいる彼はそれすらも軽く通り越した次元の魔法式を理論上は完成させていたということになる。
魔法力だけでなく魔法知識という点において、彼は最早一介の魔法師という枠組みから逸脱しつつある、と鈴音はそう率直に感じていた。
「やはり、１００万分の１でもやりすぎましたか？」
「いえ……ひょっとしてですが、悠元君の目標は司波君と同じ重力制御型核融合炉の実現ですか？」
「まあ、それも夢の一つってところですね。あくまでも〝目標〟ではありますが、〝手段〟でもあります」
核融合炉の実現は、現在の供給エネルギーのパワーバランスを大きく揺るがす。
尤も、公表していないだけで世界を大きく変えかねない技術のいくつかは完成させてしまった。それらも核融合炉実現のための副産物といえばいいが、現在の軍事バランスすら揺るがす事態になるだろう。
だが、後悔はしない。これも国を守るための方策として剛三や千姫に提案し、それらの技術を取り入れたものは既に完成している。
鈴音といくつか会話をした後、彼女と別れて図書館の外に出た。さすがに雨なので傘を差しての移動となる。そこでふと、達也の様子が気になった。
（確か、今日は実験棟でデモ機のプログラミングとか言っていたな

……目立つのが嫌いとか言っておいて、何だかんだ目立ちたがりだと思うわ）

それも主人公としての性なのだろう、と悠元が実験棟に向かって歩いていると、明らかに挙動不審な動きを見せる男子生徒が目に入った。その人物が風紀委員の腕章をつけていることと、後姿からして3年の関本という生徒だということはすぐに分かった。

どうやら、彼は実験棟に向かうようだ。

（あー……あのイベントか。とりあえず、様子でも見ておくか）

悠元は息を吐いて隠密をするような動きと消音魔法を展開し、一定の距離を保ちつつ関本の後ろをピッタリ歩いていく。関本が中に入っていくのを確認すると、光波振動系というよりも『流星群（ミーティア・ライン）』における光波収束の応用で意図的に〝夜〟を作り、ドアから漏れる光をシャットアウトして中に入る。

悠元が中に入ったところで、関本は達也に声を掛けていたが、明らかに寝たふりだということは『天神の眼』を使わずとも読み取れた。そして、関本はハッキングツールを取り出してコードをコネクタに接続しようとしたところで、予め待機していた花音が姿を見せた。

「関本さん、何をしているんですか？」

「千代田!?　なぜここにいる!?」

……杜撰という他ないというよりも、達也の異常性を少しでも知っていれば予想できなくはない話だ。加えて、関本は自ら警報を切っていたという行為を明るみに出した。これで彼の罪状は確定したも同然。加えて、寝たふりをしている達也が立ち上がって関本の背後にいる形だ。

関本にとって、事実上の〝詰み〟である。

「くっ……千代田ぁ!!」

それが、花音の振動系魔法を受けて気絶する前の、関本の最期の言葉であった……あ、死んでないから最後の、だったな。ついうっかりしていた。

花音の呼び出しを受けて、関本を運んでいく風紀委員や部活連の生徒に、花音の姿を見届けた後、達也がＰ９４（通称ピクシー）と呼ば

れる３Ｈ（人型家事手伝いロボット）に話しかけ、魔法痕跡の消去をしていた。
　手際の良さに感心していると、達也は一息吐いてからこちらを見るようにしつつ、声を発した。
「はぁ……師匠か風間少佐の癖でも移ったのか？　悠元」
「お、流石は達也。ただ様子を見に来ただけだが、妙にトラブルに愛されているというか、吸引力の変わらない回収力だな」
「止めてくれ……（千代田先輩はおろか、ピクシーのシステムに引っ掛からない時点でおかしいんだが……正直、師匠にも負けず劣らずかもしれん）」
　認識を逸らす意識を止めて声を発すると、達也は頭を抱えたくなるような仕草を見せた。達也の目の前にいる人物は、下手すると八雲と同等以上に自身の痕跡を綺麗に消し去ってしまう。さしもの達也でも、できることなら敵に回したくないと思うほどだった。
「そうだ、達也。いくら治せるからとはいえ、精神まで回復するわけじゃないんだからな。お前が倒れたら深雪が動揺するだろ」
「……そうだな。ありがとう、悠元」
　自己修復術式を持っているものだからこそ分かること――その当たり前のことを悠元から言われ、達也は自分が疲れているということを改めて認識していた。事実、根を詰めすぎたかなと作業中に思っていたところがあり、それに気付かせてくれたことに感謝の言葉を述べると、悠元は頭をガシガシと掻くような仕草を見せた。
「……明日は雨じゃなくて雪でも降ってくるのかな」
「人を異常な存在扱いしないでくれ」
「じゃあ朴念仁」
「……」
　夏休みの時、ほのかに告白されて一度断ったことを思い出し、既に婚約者もいる友人の言葉を否定する材料がないことに、達也は内心で溜息を吐きたくなった。
◇　◇　◇
　国立魔法大学付属立川病院。その４階のとある病室には、ベッドで

眠っている1人の少女とそれを見つめている糸目の女性の姿があった。
彼女は、この病院に入院している少女と直接的な繋がりはない。だが少女の姉とは同じ魔工技師志望として仲良くしていたことがある。今回の見舞いも少女の姉に頼まれてのこととなる。
(目を覚まさなそうだし、このまま帰る……っ!?)
すると、突然鳴り響く警報――暴力行為対策警報のアラームが鳴り響くと同時に、ドアのロックが掛かる。そして、女性はここで巧妙に気配を隠している人間が病室の前にいることに気付く。
(現代魔法というより……これは、大陸系の術者? ……おまけに、警報を鳴らした人間の気配が薄いとなれば)
すると、あからさまに乱暴な手付きでドアを破ろうとしている。これは覚悟を決めるべきだとCADを取り出したところで、ドアの向こうから女性にとって聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「人喰い虎……呂剛虎! なぜお前がここに!?」
「幻想刀(イリュージョンブレード)――千葉修次」
成程、と女性は先ほど扉を破ろうとした人物に合点がいった。恐らくは、最初からこの病室にいる少女の〝抹殺〟が目的だったというわけだ。そして、運よく千葉家きっての剣術使いがこの場に居合わせていた。
彼女は〝眼〟を見開いて外の戦闘の様子を暫く見守っていた。だが、体格の小さなほう――修次と思しき人物が片腕を負傷したような情報が流れこんでくる。
(互角には戦えてはいるけど……相手が悪いか)
相手は大亜連合特殊部隊のエース格。とても修次一人の手に負える相手ではないと判断し、その女性は病室のカギを魔法で開錠し、扉の向こうへ出ると扉を丁寧にロックした。
すると、修次はその女性――三矢佳奈の姿に驚きを見せることになる。
「こんにちは、大きな人喰い虎さん。ま、別に顔を覚えてもらう必要なんてないけど」

「佳奈!?」
「……――――『もう一人のカーディナル』、三矢佳奈……ガアッ!!」
修次と佳奈の挟み撃ちという形に呂剛虎は、佳奈を相手にするほうを選択した。修次は交戦で腕に傷を負っているが、それでも実力は一線級。それならば、と彼は鋼気功を纏って突撃を掛けた。
その行動を見るなら、普通は佳奈の身を案じることを優先するだろう。だが、修次は呂剛虎の判断が間違いではなかったとはいえ、馬鹿な選択肢をしたものだと少し同情してしまった。
「!?」
タックルが届く前に、鋼気功が強制的に解除された。魔法を強制的に終了させるという前代未聞の出来事に驚く暇もなく、いつの間にか彼の左側面にいた佳奈が彼の左脇腹に手を添えていた。
そして、彼女は短くこう呟いた。
――――玄武、重掌
その言葉を発した直後、呂剛虎の体が弾かれるように勢いよく飛んでいき、吊り下がった照明を巻き込む形で、対魔法師用の防護術式が展開している病院の窓ガラスまで貫通した。これには、修次がポカンとした表情を浮かべ、修次の後を追ってきた摩利も唖然としていた。
その一方、佳奈は何事も無かったのように両手を鳴らしながら何かを払い落とす様な仕草をして、摩利の存在に気付いて声を掛けた。
「お、摩利。彼氏さんとのデートだったのに、災難だね」
「あ、え、えっと……そうだ、シュウ！　大丈夫か！」
「大丈夫だよ。軽く抉られただけだし、幸いここは病院だからね……佳奈、ありがとう」
悠元も大概だが、その影響を強く受けている1人である佳奈も桁外れの実力だった。呂剛虎の魔法を無力化するだけでなく、たった一撃で呂剛虎を吹き飛ばした。佳奈は外の様子を見るが、呂剛虎は何とか逃げ出したようだ……4階という高さから落ちたというのに、頑丈だと褒めてやりたいような気分だった。
佳奈が新陰流印可の目録を持っていることは摩利や修次も知っているが、相手をまるで路傍の石のように吹き飛ばすという所業は誰に

でもできるものではない。
「いいよいいよ。私も偶々知り合いに頼まれて見舞いに来てただけだし……摩利、さっき私が吹き飛ばしたのは『人喰い虎』呂剛虎という人物」
「呂剛虎？」
「大亜連合本国の特殊工作部隊に所属する魔法師だ」
なんでそんな人物が、と摩利は少なからず思ったかもしれない。だが、魔法科高校は国策機関であり、国立魔法大学の付属学校。魔法師の育成機関だということは周知の事実である。それほどの大物がこの国にいて、論文コンペ絡みの〝関係者〟を狙おうとした……摩利とてその意味に気が付かない筈がない。
「というわけで摩利。修次は家の都合があるから無理だし、私も別件があるから難しいけれど、護衛に美嘉を付けるから」
「美嘉さんをですか？」
「摩利、君は義理とはいえ十師族の一角である三矢家の外戚なんだ。そこは自覚してほしい」
「……分かった」
狙った獲物は逃さない――まるで動物のような習性を持った人間だと思いつつも、呂剛虎が敵対者として認識した以上、1人で行動するのは危険だという修次と佳奈の真剣な眼差しに、摩利は素直に頷くことしかできなかった。
すると、佳奈は修次にデータメモリを差し出した。
「修次、寿和さんにこれを渡してほしい」
「兄に？　……何が入っているのかは、聞かないほうが良さそうだね」
「そうしてくれると助かるかな」
少し訝しむ様子を見せた修次だが、今回の一件に絡んでいると推察しつつも、それ以上は追及することなく佳奈からメモリを受け取った。
それを確認すると、佳奈は破損した箇所からそのまま飛び降り、重力魔法で何事もなかったかのようにゆったりと着地。そのまま歩いて外へと出ていった。それを呆然と見送った修次と摩利だが、そこで

我に返った時には既に遅かった。
「……あ、あの人は……」
「事情聴取が嫌で逃げたね……高校の生徒会長選挙の時と変わらないよ……」
彼女が高校1年の時、『民主的で自由な選挙』を標榜した生徒会役員に就いていた時、それに関わる揉め事が頻発。結局、重傷者が二桁に達した時点でその看板を降ろす羽目となったが、その対処をしたのが全部佳奈であった。
だが、彼女は「相手が暴力を振るったので、生徒会役員として已む無く対処しただけです」と言って事情聴取を避けていた。取り押さえられた当人らからも自分たちが悪いという証言しか得られなかったため、佳奈に対して必要以上の追及は及ばなかった。
「まあ、今回は僕が助けられた側だし……それに、僕でも彼女には勝てないからね。『圧斬り』を防御するどころか発動を強制的にキャンセルされてしまうから」
「……確か、前に悠元君が固有魔法を持っているといっていたな」
「摩利、それ以上の詮索は止めたほうがいい」
三矢家の兄弟姉妹の中で現状一番のヒエラルキーを有しているのは佳奈である。尤も、彼女曰く「悠元が一番のヒエラルキーを有していると思う」という言葉を聞いた対象の反応はというと……「一番ありえん」という一言だけであった。

気遣いと気苦労で実質プラスマイナスゼロ

陳祥山は、手負いとなった虎もとい呂剛虎の様子を見て驚いていた。

彼自身、呂の実力を一番よく理解している。念のために誰にやられたのかを確認したところ、あの病院に偶々千葉修次と三矢佳奈がいたと報告を受けた。

(三矢佳奈……一番会いたくない十師族と遭遇する羽目になるとは)

陳は達也と深雪の身辺もといレリックの出所を探っていたが、痕跡が綺麗に消え去っていた。その過程であの家にはもう一人の居住者がいること自体確認されている。

だが、その姿も痕跡も全く明るみに出てこない。辛うじて出てきたのは彼のパーソナルデータだけであった。

神楽坂悠元。旧姓三矢――――それは、先日料亭で周と会談した際、彼からの忠告の中にあった人物の名前だった。

「閣下に親切心ながら忠告しておきます。三矢悠元……いえ、今は神楽坂悠元と名乗っている少年がいます。彼の逆鱗に触れてはなりません」

「それは、どういう意味なのですかな？　周（チョウ）先生」

「言葉通りの意味です。私も直接の面識はありませんでしたが、間接的に見張っていた私をあっさりと捕捉したのです……これ以上のことは、私も申し上げられませんが」

最近不審な動きを見せている周がここまで断言した人物の関係者に手傷を負わされた。そうなると、平河千秋の暗殺のハードルは極めて高くなったといえよう。それよりも、喫緊に片付けなければならない事案が発生してしまった。

「状況が変わった。我々の協力者である関本勲が任務に失敗し、当局の手に落ちた。収監先は八王子特殊鑑別所だ」

周が関与した千秋とは異なり、関本は陳らが直接関与している。そこから情報が漏れると拙いと判断したのだろう。陳は呂に命令を下した。

「平河千秋は後回しだ。関本勲を処分せよ」
「是（シー）」
◇　◇　◇
「――――以上が、これまでの経緯になる」
『感謝する、悠元。この場合は神楽坂殿と言うべきかな？』
「やめてくれ、父さん。公的な場でもないのに序列を持ち出されたら、俺のストレスがマッハで溜まるから」
悠元は司波家の自室で元と連絡している。念のために遮音の結界は張っているため、外に会話の内容が漏れることはない。
寿和との会談の後、その内容は直に元へと届けられた。密入国の頻度の増加からして、既に数百人規模に膨れ上がっていると元は予測しているとのことだ。
悠元は魔法科高校での騒ぎ（千秋と関本のことも含めて）に大亜連合本国が大きく関与していること。それに加えて、元にレリックの話も伝えたところ、彼の表情は曇っているような雰囲気を見せていた。
「レリックの情報漏洩の原因は、国防軍の経理データからの流出だった。しかも、内部から人為的に洩らされたとみている……多分だけど、例の人物が関与している可能性が高い」
『ここまでの絵空事を実現出来る人物……周公瑾か』
「十中八九。陳祥山らの手引きも中華街ぐるみだったと調査結果が出た……とはいえ、今すぐは潰せない。潰すと厄介ごとが重なりかねない」
『カレイドスコープ』による航空俯瞰偵察で、大亜連合の軍隊が動いている情報を掴んでいる。今ここで周公瑾を抹殺するよりは、彼の手札や手足となる組織を丁寧に潰していくのがいいと考えた。その方針に対して、元も確と頷いたうえで悠元に問いかけた。
『国防軍に対して、この情報は？』
「周公瑾が国防軍にパイプを持っているから、情報漏洩を危惧して伝えていない。ごく一部の人たちには伝えたが……信用できるかは微妙かな」
悠元が独立魔装大隊に所属している以上、そういった発言は軍人ら

しからぬと窘めなければならないが、彼は特務士官であることに加えて国防軍が悠元に対して「軍事行動への参加」を強制することはできない。加えて、入学式における強制的な動員は悠元に対する優遇措置を蔑ろにするものであり、このことに関して剛三の怒りを買っていたことなど知らなかった。

千姫が悠元を神楽坂家次期当主に加えて当主代行に指名したことで、悠元は当主に次ぐ権限を有することになり、彼の身柄を国防軍で縛ることが事実上不可能となった。

なお、元がそれを知ったのは魔法科高校の夏休み明けだったので、出てきた反応は苦笑しかなかったとのこと。

『お前が神楽坂家に出向いていたころ、義父さんが1人で独立魔装大隊に乗り込んだらしくてな……風間少佐も含めて、隊員たちが死屍累々たる有様だったらしい』

「死人は出てないよな？」

『それは無かったそうだが、隊員の中ではトラウマになるものもいたようだな』

スポーツチャンバラで使うようなスポンジ製のチャンバラソード6本持ちで行ったらしいが、本気で振り下ろしたら地面を斬り裂いていたらしい……あれ、スポンジ製じゃなかったか？　と真田から話を聞いたときは流石に首を傾げた。

あの祖父に常識を求めたら帰ってくる答えは全部虚数になる、と諦めつつあるが。

「……そういえば、父さんに聞きたいんだが。風間少佐はともかくとして、佐伯少将は十師族に対して対抗心を持っているのか？」

『とりわけ九島閣下に対しては強い感情を持っているらしいな。その辺は悠元が詳しいのではないのか？』

「父さんも知っていると思うが、俺が国防軍に入った理由は三矢家に対して十山家の余計な横槍を入れさせないためだ。兵器開発の部分だって、周辺国の軍事バランスにかなり配慮してるからな……尤も、現時点でも快く思わん奴がいるのも事実だが」

自身の持っている知識でも限界はあるので、楽観した推測も入って

いるかもしれない。
正直な話、十師族に頼りきりの防衛能力に関して佐伯少将が警鐘を鳴らしておいて、その上で将来的には四葉家と組んで九島家もとい烈を最前線から追いやったことからして、達也の主導権を握るライバルを蹴落とした形と言っても不思議ではない。
悠元は結果として十師族でなくなったが、佐伯が悠元の戦略級魔法を欲しない理由にはならないだろう。とはいえ、烈ですら手に入れられなかったものを手にしたいという欲求をいち軍人が叶えたところで、その引き金を引くことなど不可能だ。
それをやってしまえば、それは即ち国に対しての〝反逆〟と見做されかねない。魔法は核兵器のように自由自在の制御が可能となる代物ではないのだから。それを操る魔法師を軍の力で縛るというのであれば、その魔法師の力を失わせることにもなりうる。
『悠元は、少将閣下を危険と見ているのか？』
「入学式の案件を情報部だけでひとつの旅団を動かすのは、集団行動を前提とする軍としてのルールを破ることになる。本来なら風間少佐が謝罪するのもおかしい話なんだよ……だとしたら、誰が俺に関しての動員許可を出したのか、ってことになる。無論、爺さんは論外だろうな」
かなり特殊な扱いを受けている悠元からすれば、入学式の一件は完全に想定外だった。何せ、兵器開発面において軍人としての拘束権限は存在しているが、これが軍事作戦となれば彼に従軍義務は発生せず、あくまでも〝協力要請〟の範疇に留まる。
防衛大学校のデモンストレーションはその兵器開発面での拘束権限が用いられる形となった。そして、それを発動できる人間は2人しかいない。
風間の可能性も捨てきれないが、彼の言動からして上官から命令されての体裁となっていたのだろうと推察。残る可能性は、風間ではないもう一人の拘束権限を持ちうる人間の仕業ではないか……という結論に至った。
先日の昇進も、悠元の心証を良くしておこうという目論見なのかも

しれない。
『……閣下は悠元の戦略級魔法を狙った、というわけか』
「それしかないと思った。その前例を作れば達也を引き込むのも容易いと思ったのだろうが、もう遅い。神将会の長として、神楽坂家次期当主となった以上は達也の力を悪用させるわけにはいかない」
だが、今は必要以上の対立をしておかない。ある程度の距離を置いた上で共通の利害関係が生じれば協力するぐらいが丁度よい。
その隠れ蓑として剛三の存在を最大限活用させてもらう形となるが、剛三曰く「楽隠居して塞ぎ込んでいた時に比べれば、敵味方の判別が楽になって済む」とあっけらかんと言い放っていた。これには、元継と悠元も揃って苦笑を滲ませた。
「今は目くじら立てる案件じゃないから置いておくが……横浜の〝計画運行停止〟の案件は上手く行きそう？」
『ああ。各運行会社は夜以降すべてストップし、丸二日は止まっても対処できるようにした。電力に関しては最小限の供給としたが……最初聞いたときは驚いたぞ』
論文コンペ当日の警備体制をテロリスト対策と同等レベルに引き上げ、横浜にある企業は臨時休業。横浜ベイヒルズタワーも臨時休業となる。
侵攻が想定される横浜市街地に在住の非魔法師のほとんどは、論文コンペを挟む形で各地方にある神楽坂家がスポンサーをしているリゾートに招待という形とした。表向きは〝計画的な大型メンテナンス及び計画運航停止に伴うお詫び〟という体をとった。
あと、魔法科高校のコンペ参加メンバーの帰りは全て大型バスでの移動とした。東京方面への退路が確保できれば、あとはどうにでもなると踏んでいる。流石に西日本側のメンバーに長時間のバスはきついため、ほとぼりが冷め次第、東京近隣の空港から国内線で帰ってもらう形となるが。
論文コンペで毎年トラブルが起きているのなら国で動いてほしいと思うのが本音だが、政治というのは決断力に欠けるというか、世論の代表と僭称しているに近いメディアが煩わしいせいで迅速に動け

ていないのだ。
「今年はトラブルで済むとは思えないからな。佳奈姉さんから呂剛虎の話を聞いた以上、本国が動くのは間違いないレベルだろう」
『……悠元は、どうするんだ？』
「警備メンバーで参加する以上、最低限の仕事は果たす。そして……母上から戦略級魔法の使用許可が下りた。つまりはそういうことだろうと覚悟はしてる」
　こちらの国に対して刃を向けるのなら、向けられる覚悟があると断定して対処する。その相手が誰であろうとも容赦はしない。それが仮に〝同盟国〟であったとしても。
◇　◇　◇
「それは災難だったな。ま、それを1杯飲んだら風呂でも入って自室で大人しく休んどけ」
「感謝する」
　達也は真由美と摩利、そして摩利の護衛をしている美嘉の付き添いという形で関本のいる八王子特殊鑑別所を訪れ、摩利による関本の事情聴取をしている最中、呂剛虎に襲撃されたらしい。とはいえ、呂剛虎が手傷を負っていたこと（摩利が以前遭遇した病院で修次に受けた傷が開いた）に加え、魔法を無効化してしまう達也と真由美の巧みな射撃能力、美嘉の制圧能力と摩利の『ドウジ斬り』で呂剛虎を捕えることに成功した。
　そして、国防軍と警察の共同作戦によって陳祥山は捕まらなかったが、実働部隊のほとんどを捕縛することに成功したと響子からの連絡があり、連絡を終えたところで悠元がホットミルクを差し入れた。
「……悠元。これで終わりと思うか？」
「本国の特殊部隊まで出てきて何も起きないなんて楽観視はできない。関係者の始末ができなかった以上、形振り構わず出てくるだろう。それこそ、横浜を火の海にしてしまうぐらいのことは考えないと」
　達也としては、深雪のことを考えると留守番してほしいと願っている。だが、枷を填められている状態で深雪を果たして守り切れるのか

どうかと思案している達也はふと気付くと、悠元がジト目で睨んでいた。
「お前なぁ、３年前のあの時と同じ目をしてたぞ。『俺一人の力で深雪を守り切れるのかどうか』って思ってただろう？」
「……お前は不思議な奴だな。アイドルのファンでもやっているような洞察力だ」
「同性に対しての性的欲求なんてねえわ。そんな冗談はともかく、俺も警備や別件のことがある以上は自在に動けなくなる。だから、必要だと思ったときは深雪に頼んででも枷を外せ。後のことは俺も手伝ってやるから」
　それはつまり、達也の持っている力をある程度解放しないと拙い状況になりうるかもしれないということを示す。その上で、悠元はモニターに向けて言葉を放つ。
「キャビネットオープン。シークレットコード『イクシオン』」
　その言葉と同時に、モニターにはいくつかの情報が表示される。それを見た達也は、その画面に映っているのが論文コンペ当日に予測されている敵の侵攻ルートだとすぐに理解できた。彼が国防陸軍第１０１旅団の特務参謀になったことは風間から聞いていたが、この情報を開示してもいいのかと思ったところで悠元が口を開いた。
「この予測は現在得られている情報から推測した可能性の高いルート。なので、現状は機密情報というよりも〝有識者の判断材料〟でしかないってわけだ」
「物は言いようだな。この可能性は？」
「このルート通りに進む確率が９５パーセント。でも、論文コンペを中止には出来ないだろうがな」
「どうしてだ？」
「こういうときほど、威信に対して意地になる国の悪癖が出るのさ」
　国の利益が掛かっている部分があるため、国策機関である魔法科高校の重要な行事である論文コンペを中止にするのは難しい。だからこそ、非魔法師を横浜からほぼ全員遠ざける形となり、残っているのは港湾施設や警備施設などの監視人員ぐらいだ。

「風間少佐には予め伝えていて、新装備の稼働テストという形で独立魔装大隊が横浜市街地の警護を担当するように仕向けた。十文字家や千葉家にも打診して、警察でテロ対策という名目の厳戒態勢を敷いてもらう」
神将会自体少数精鋭なため、大々的な封鎖はやろうと思えばできるが、今回は侵攻してくる敵を殲滅することに主眼を置く形とした。
ただ、陸軍だけでも限界はあるため、海軍にも動いてもらわねばならない。同じ国防軍なのに専門分野が違えば仲も悪く、剛三の存在が説得に大きな力となったことは事実だ。
「達也。神将会のことは深雪から聞いているか？」
「少しばかりはな。深雪もその一員になったと聞いているが」
「彼女も動いてもらうことになるが、あくまでも避難する面々の補助に徹させる。深雪と雫はまだ神将会としての実戦に耐えうると判断できないからな……とりわけ、深雪は優しいから」
春の一件の時、ブランシュのメンバーを凍らせた深雪はその後1週間ぐらい落ち込んでいた。その間のフォローを達也から押し付けられたときは流石に恨みの一つでも言いたくなったが、深雪の喜んでいる表情を見ていると断れる雰囲気ではなかった。
悠元がそう言うからには、相手を殺す実戦になりうることも想定していると達也はすぐに理解した。その深雪は丁度風呂に入っているので、その隙を見計らったようだ。悠元はモニターの電源を落とした上で、静かに呟いた。
「少なくとも、論文コンペというよりもその先に起きる騒乱で世界情勢が動くことになるだろう。全く、人種差別なんてしたくないんだが、欧州や合衆国の連中はどうしてこうも戦争をしたがる奴が多いんだか……」
世界の戦争は数多くあれど、世界戦争レベルの原因を作ったのは大西洋方面の国が引き金となっている。昔バルカン半島が〝火薬庫〟なんて表現をされていたが、ヨーロッパやアメリカそのものが火薬と導火線をワンセットにしたようなもの、と言っても過言ではないような気がする。

そもそも、戦争なんてエゴという名の爆弾の投げ合いの末に着火して勃発するものだが、それを差し引いても欧米の裏で利益追求のための組織が戦いを煽って、自らの利を得ているというのなら分かりやすい。

その役割を担っていたのが「ブランシュ」やら「無頭龍」などといったアンダーグラウンドに根城を持つ組織だが、その両方は既に壊滅している。かなり念入りに潰されたようで、それだけでも東西ＥＵ諸国やＵＳＮＡの持っていた恨みは大きいのだろうと推察できる。

「世界の主導権を握りたいという最大の欲求があるからじゃないのか？」

「俺には分からんな。そんなものを手にしたところで、絶対に歪みが生まれるだけだ」

「……確かにな」

悠元ならばその力を得ることは可能かもしれない、と達也は思っている。だが、当の本人はそんなことをしたところで単に恨みや妬みの類が増えるだけだ、と言って一蹴している。

先に述べた２つの組織の壊滅後、各国の政府が裏の利益を取り込もうと躍起になっているらしいが、尽きぬ欲を傍から見ている分には〝滑稽〟という他ない、と悠元は独り言ちた。

「ん……すまないな、疲れているのに引き留めて。先に風呂に入ってきていいぞ」

「そうさせてもらうよ……感謝する、悠元」

微かな物音で深雪が風呂から上がったことを察して声をかけると、達也は感謝の言葉を述べつつソファーから立ち上がってリビングを後にした。

「深雪。いくらなんでも、それは拙いから止めなさい」

「そんな……駄目でしょうか、お兄様？」

なお、深雪がバスタオル１枚でリビングに向かおうとしていたところに遭遇し、それを慌てて止める羽目となった達也であった。

妹に対する気苦労が別の意味で大変だ、とは口に出すことはなかったが。

嵐の前の静けさ

――西暦２０９５年１０月２９日、土曜日。

本来なら魔法科高校は通常通り授業が行われているが、悠元と姫梨は学校にいなかった。東京の皇居や霞ヶ関に程近い場所に神楽坂家の別邸――表向きは皇宮警察を担う旧宮家の屋敷という体を取っている場所に来ていた。

その屋敷で一際大きい大広間には、五人の男女が顔を合わせていた。

「では、明後日の動きとしては、先日話し合った通りということだな」

そう切り出したのは、神将会第二席であり上泉家当主である上泉元継。

神将会としては、非魔法師の殆どを当日までに横浜から遠ざけることにしている。その上で、中華街に対しては何ら警告を発していない。その理由は『自分勝手に治外法権を振りかざしている中華街に対して、政府の干渉が及ばないのなら放置するしかない』という今までの状況をそのままそっくり利用したものだ。

「ああ。これで連中が中華街を攻めなかったとしたら、裏切り者のはずの連中と手を組んでいた――いわばグルだと疑念を抱かせることになる。まあ、現状でもお互いに利用しあう形で足の引っ張り合いをしているようなものだが」

「かつての敵は敵のまま、ね……周公瑾もそうだが、その上にいる奴も手駒としか思ってないんだろうな」

第一席こと神楽坂家次期当主である神楽坂悠元の言葉を聞いて、第四席こと宮本修司は吐き捨てるようにそう述べた。ここにいる面々は全員周公瑾とその上にいる『七賢人』の一人のことまで既に知っている。

完全な協力体制とはいかないまでも、陳祥山と周公瑾は協力関係にある。このことは『九頭龍』の調査で既に判明している事実だ。

「その二人だが、日付で言えば本日の未明に中華街で会談をしていた。どうやら本国から艦艇が派遣されるらしい……3年前の復讐戦でも

やるつもりなのか、と愚痴りたくもなる」
「いつの間に……てか、よく掴んだね」
「九校戦の時に式神の監視網を中華街に張り巡らせたからな。爺さんが派手にホテルの最上部を吹き飛ばしたのがいい目晦ましになったようだ」
「あの……式神の維持はかなり負担が掛かる筈なのですが……」
悠元がサラッと述べた事実に対して、第五席である高槻由夢、第三席である伊勢姫梨は揃って苦笑を漏らした。
天神魔法とはいえ、式神の維持には膨大な想子量と術式制御が必須となるのが通例。かつての安倍晴明でも同時に12体の式神を操っていたが、それと同等レベルのことをやってのけている悠元に感嘆にも近いような笑いが漏れたのは言うまでもない。
「『霊亀』を使って中華街に限定しての監視をやってもらってるだけだ。いくら周公瑾が相手とはいえ、どこにいるかも分からない相手を見つけるのは至難の技だろう」
「四霊クラスの喚起魔法って、お祖母様を超えちゃってるよ……」
喚起魔法は上級クラスになればなるほど、制御だけでなく存在を掴むだけでも並の魔法師には出来なくなる。相応の魔法制御能力を持っていないと難しいため、四霊クラスを式神として制御していることに驚きの声が上がった。
「何言ってるんだ。お前らにも相応の実力はあるだろうに」
「少なくとも、俺らが束になっても悠元には敵わんだろうよ」
話が脱線しかけていることに悠元は面白くなさそうな表情を浮かべつつ、神将会の長として軌道修正をするように話題を変えることにした。未来の話よりも先に解決すべきは喫緊の課題である大亜連合の特殊部隊が主導となる横浜侵攻計画についてだ。
「戦線をある程度維持しつつ、魔法協会支部のメインデータバンクから魔法技術を盗むことは分かっている。呂剛虎が横須賀の外国人刑務所に移送されるのが明後日に急遽決まった……間違いなく政治的介入の影響だな」
「それは見逃すのか？」

「そこまで構っている余裕がないからな。それに……最低でも彼と陳祥山には生き残ってもらわないと困る」
単に排除するだけならば簡単だが、陳と呂に〝生き証人〟としての役割を負わせる。大亜連合と顧傑の繋がりを決定的に絶たせ、彼をアメリカ大陸に閉じ込める。そのことを付け加えた上で悠元は言葉を続ける。
「警察の動員という形で十文字家と千葉家は動かせた。一条家からも湾岸警備という体で応援は来るとのことだ。流石に一条家当主自らは来ないが、十文字家当主が自ら陣頭指揮に立つそうだ」
「悠元、ちなみにだが七草家には？」
「……あの家に借りを作ったら、こちらの秘密を探りかねないと判断して俺から声は掛けなかった。実家経由ではお願いしたけどな」
『ファランクス』という切り札が１つ増えるだけで選択肢の幅はかなり広がったと言ってもいい。前線に立つということはしないが、避難経路の安全確保を務めてくれるだけでも非常に助かる。
七草家に対しては、三矢家経由で魔法科高校の生徒の避難支援を頼むこととした。当日は真由美も会場入りすることになるため、名分は立つだろう。いくら自分の娘が大事とはいっても、ここでそれ以外の生徒を蔑ろにすれば、魔法師を守るべき象徴である十師族の名に泥を塗ることになる。
「悠元の強さの秘密を探ってきそうな雰囲気は感じるが……大丈夫か？」
「真っ当な理由で強さを求めるならともかく、こちらの推測している理由で求めているのなら論外だ。ま、いざとなったら七草家に乗り込んで話はきちんとつけるつもりだ……別に滅ぼしに行くわけじゃないから、その表情はやめてくれ」
強さに対して貪欲であろうとするのは別に咎めるつもりなどない。だが、その行き着く先が同じ十師族である四葉家を抑え込もうとするために使うのであれば、メディアの主導権全部を神楽坂家側に引き込むのも辞さない。
個人に対して好意を持っていても、現当主に対する感情は別の問題

でしかないと悠元はそう結論付けている。だからといって、何でもかんでも大事にするつもりなのでは、という視線は勘弁してほしいと思う。
　神楽坂家に入ってからにはなるが、やったことの大半は千姫と剛三が隠れ蓑になっている以上、自身に繋がる可能性は可能な限り証拠隠滅している。
「その気になれば嵐を起こすのもできますが、そこまではしなくてよいと？」
「横浜での〝第一段階〟は修司、姫梨、由夢、元継兄さんの４人で抑えてもらわないといけない。俺は論文コンペの会場警備がある以上、事情説明などの細かい仕事があるからな」
　現状の想定は、大亜連合の特殊部隊らによる第一段階、大亜連合本国艦隊による第二段階、そして……第三段階を考えなければならない兆候が別の国で起きていることを既に掴んでいる。悠元はそう言いながら、傍に置いていた折り畳み型端末を手に取って他の面々に見えるように端末の画面を見せる。
　そこに表示されているのは、本来ロシア語で書かれている暗号文を日本語に翻訳した文章であった。
「なっ!?」
「これは、本当なのですか？」
「綿密な調査と『モスクワからウラジオストクに送られた暗号電文』を解析した結果、確率は極めて高い。おまけに〝イグナイター〟がウラジオストクにいるようだ……彼が動いた場合、現状で対処できるのは俺だけになる」
　本来なら出張ってくるはずのない新ソ連の戦略級魔法師イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがウラジオストクにいる事実。こうなれば原作のような楽観視はできないと考え、最大限の警戒態勢を敷くように一条家へ連絡を入れている。
　最悪は横浜から遠距離狙撃も視野に入れることも必要だろう。
　剛三に頼むことも可能だが、彼が再び戦略級魔法を使えるようになったことは秘匿せねばならないし、内面上の年齢のせいで脅威に見

られない可能性がある。そうなると、3年前のように達也と自分が動くことになるだろう。
「爺さんは……いや、爺さんの魔法なら防御に使うほうがいいな。そうなると、悠元が動くしかないというわけか」
「理解が早くて助かる」
それに、ベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』にとって剛三の『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』は相性が悪い魔法なのだ。
『ヘル・エンド・ドラゴン』は戦略級魔法の中で最も性質が悪い魔法であり、その最大の特徴は全ての情報体を支配下に置いて、最大数兆ボルトという破格的な威力の電撃を広範囲に巻き起こす。そう、剛三が使う戦略級魔法は天神魔法をベースとした代物。だからこそ、元継は本気で教えさせるのを止めたというわけだ。
異なる術者がそれぞれ現代魔法と天神魔法を同領域内で発動させた場合、強力な事象改変力を持つ天神魔法が現代魔法の事象改変力を〝食らう〟のだ。加えて、『ヘル・エンド・ドラゴン』は魔法の行使地点に存在するもの――魔法を発動させた術者や物体にも強烈な雷撃によるダメージを与える性質を持つ。
ある意味で四葉元造の『死神の刃（グリム・リーパー）』よりも性質が悪いと言っても過言ではないだろう。

◇　◇　◇

ウラジオストクにある新ソビエト科学アカデミー極東本部。その一室に公認戦略級魔法師であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがいた。
新ソ連の情報部の調べでは、日本と大亜連合がもしかしたら開戦（3年前の一件があるため、一方的な休戦破棄と表現するのが妥当だが）するかもしれないという予測を受けていた。
その情報をどこから嗅ぎ付けたのか、「日本への再侵攻」を一部将校が騒ぎ立てたのだ。そのため、前回よりも多い数百人規模の部隊が派遣される形となり、ヨーロッパ方面に睨みを利かせていたベゾブラゾフが「失敗の際の保険」という形でウラジオストクに派遣された。
（軍人たちにも困ったものですが……ですが、これは好機かもしれま

せんね）
　ベゾブラゾフは3年前の沖縄防衛戦について独自で調べていた。その中で彼が目を引いたのは、数十隻にもおよぶ大亜連合の艦隊をまるで手品のように消し去った戦略級魔法についてであった。
　大亜連合がその魔法を放ったと思しき魔法師のことを「殲滅の奇術師（ティターニア）」と呼称していた人物の正体は結局掴めなかったが、今回のことでその人物が出てくるかもしれない、とベゾブラゾフは予測していた。
　このことについては、同じ公認戦略級魔法師であるレオニード・コントラチェンコも同意見だったと先程まで繋げていた通信で話していた。
　だが、コントラチェンコは通信の際、ベゾブラゾフとの会話の中で懸念を口にしていた。
『博士（ドクタル）。好奇心は結構なことですが、最悪は全てを切り捨てる覚悟も必要です』
「それは、相手が『深淵（アビス）』以外の切り札を持っているということでしょうか？」
『それもあるでしょう。儂が懸念しているのは、博士が気に掛けている「ティターニア」と呼ばれた魔法師の全容が未だ見えぬことです』
　コントラチェンコの言い分も理解できる、とベゾブラゾフは静かに頷いた。
　この3年間、かの国は大きな戦乱に巻き込まれていない。無論、それは当時いたであろう戦略級魔法師の存在を有耶無耶にしてしまい、日本政府はその事実を戦略級魔法の使用によるものと断言していない。
　そもそもの話、艦隊が消えたことは事実として残っているが、その過程に起きたことが痕跡として綺麗に残っていないのだ。そのため、いくら外側からの追及があったとしても、状況証拠がなければ一体何の仕業なのかも推測の域を出ない。
　日本の同盟国であるＵＳＮＡですら掴めていない以上、新ソ連でも当該の魔法師の情報は殆ど掴めていない。そもそも、そんな魔法師が

存在するのかと疑問視する噂もあるほどだ。
噂というものがある以上、〝火のないところに煙は立たない〟ことからして実在している。ベゾブラゾフは、艦隊の消滅を戦略級魔法と仮定しており、コントラチェンコも日本の戦略級魔法によるものだと仮定していた。
今回の艦隊は全て旧式の装備で固められたもの。ガス抜きというよりも〝廃棄処分〟を兼ねたものに近い。前回の佐渡上陸作戦よりも質が劣る分を量でカバーした形だ。
「閣下は、どのようにお考えなのでしょうか？」
『……勝手な想像ですが、儂はあの「繋がれざる者（アンチェイン）」をも上回る戦略級魔法師ではないか、という予感がしているのです』
『繋がれざる者』上泉剛三。その存在はベゾブラゾフですら人伝に聞いた程度の知識しか持ち合わせていない。
だが、コントラチェンコは違う。約４０年前、コントラチェンコが極東の部隊で日本侵攻を行った際、その艦隊を全滅させたのは剛三の戦略級魔法であった。その上、彼は単独でコントラチェンコが乗船している艦船に乗り込み、魔法を使わずしてコントラチェンコを圧倒した。
その後、彼は大漢での四葉家の復讐戦に参加し、正しく一騎当千の所業を成した。その後、彼が表舞台から退いたことでコントラチェンコは内心安堵していた。
上泉剛三をよく知るコントラチェンコの言葉には只ならぬ重みがある。それを通信越しながらもベゾブラゾフは老将軍の言葉を黙って受け取っていた。
「下手をすればウラジオストクが失われる……そう懸念されているのですか？」
『それぐらいの覚悟を持たねば、兵を生かして帰すことなどできぬでしょう。儂はそう考察しております』
「分かりました。閣下のご忠告、忘れることなきよう心に刻んでおきます」
３年前の佐渡侵攻の件は国として公に認めていない。今回の日本

再侵攻も表向きは〝新ソ連からの脱走兵〟という体を取ることが最初から決まっている。兵士が全員生きて帰れば、ガス抜きとしてこれ以上ないほどの結果となるであろう。
(最悪、この施設を消滅させてくることも念頭に入れねばならない……ですか)
そう内心で呟いたベゾブラゾフが窓の外から軍港の方向を見つめると、表向きはいつも通りの動きではあるが着々と進められていく出航準備。その光景に対して何を思ったのかは、ベゾブラゾフ本人にしか分かり得ぬことであった。

◇　◇　◇

場所は日本に戻り、東京のとある高層ビルの最上階。そこは世界的に有名なグルメガイドに名を連ねた店。そして、その個室には一組の男女が向かい合う形で座り、料理に舌鼓を打っていた。
「悠元君からしたら、少し物足りないかしら？」
「爺さんや母上ほど舌は肥えていませんよ。そもそも、普通なら1年先まで予約が埋まってる三ツ星レストランに入れただけでも驚いてますよ、安宿さん」
高校に入ってから初めて袖を通したスーツ（千姫に見立ててもらったものであり、それこそ政治家御用達のオーダーメイドもの）姿の悠元に対し、女性――――第一高校の養護教諭である安宿怜美はドレスアップとメイクをバッチリしてきた上で悠元の向かいに座っている。
神将会の会合の後、八雲から「九頭龍の一人と顔合わせするように僕が頼んでおいた」との文言で、指定された場所がここだという始末。そのため、先日渡されたばかりのスーツを引っ張り出す羽目になった。
「ここは神楽坂がパトロンをしているの。『九頭龍』の面々が食事をしながらこういった秘密の会議をしたりするのには打って付けというわけ」
「……にしては、気合入れすぎじゃないですか？　これじゃ、まるで見合いですよ」
「両親はその気があるんでしょうけれどね。私も、悠元君のことは遥

から聞いてるけど……本気で狙っちゃおうかしら？」
九頭龍関係で言うなら、鳴瀬家絡みで雫が婚約者候補になっている。他の九頭龍を担う家としても他人事ではなく、現に四十九院家では沓子を候補として千姫に推薦したらしい。現状三人でも身に余るというのに、先日の試しの結果からすれば〝それでも足りない〟とのこと。
自分という存在がどういう枠組みなのか……それを本気で知りたくなったのは言うまでもない。
なお、矢車家に関しては三矢家との友好関係のお蔭で、宮本家と高槻家は神将会のことがあったので無理に婚姻関係を結ばずに済みそうなのは重畳だった。
「安宿さんの容姿なら、逆に引く手数多のような気もしますけれど」
「魔法師って基本は政略結婚なのよね。それこそ、悠元君のご両親のような存在は稀有よ」
「理解はしているつもりですよ。あの四葉家もその類ですし」
怜美と会談することについては直前まで分からなかったし、下手すると泊りがけになるかもしれないということは八雲から示唆されていた（この辺は後で反応を見て楽しむためだろうが）ため、達也と深雪には「家の用事」ということで話はつけている。
しかし、遥の面倒を一時的に見ていた上、怜美が八雲の実質的な部下になるため、神楽坂家がその気になれば第一高校の情報を手に入れやすい環境ともいえるだろう。
「私も結構両親から責付かれてて。多分、悠元君の婚約者候補には入れられてるんじゃないかって思うわ」
「何と言うか、達観しているような口ぶりですね」
「どこの誰とも分からない人相手よりは安心できるから」
剛三と千姫は悠元の婚姻について一貫した考えを持っているため、婚約者が三人で済むというのは甘い考えでしかないし、気が付いたら両手で数える範囲を超えていた……というのが冗談で済まないと理解している。
だからといって、自分の目の前にいる男子に対しての色仕掛けとい

うかアピールは正直どうなのか、と愚痴りたくなってしまうのは……人間として真っ当な感覚を持っているからだと思いたい。
「尤も、爺さんと母上が三人で済ませてくれる保証なんて灰塵の如くのレベルですが」
「あら、これは私も戴かれちゃうパターンかしら」
「人を性欲の権化みたく言わないでください」
そんな冗談はさておき、話は本題に入る。怜美が端末を取り出したので、悠元も端末を出してデータを受け取る。そのデータはＵＳＮＡ関連の情報であった。予め八雲を通して大亜連合以外の諸外国の動きを見てもらっているが、ほぼ予測できる範囲に収まっているのは幸いだった。
「向こうは意図的に部隊の出撃を遅らせるみたいね。国防軍にはその情報が一切届いていないようだけれど……新ソ連のほうはどうするのかしら？」
「爺さん絡みの伝手を頼ることにしました。〝イグナイター〟が『トゥマーン・ボンバ』の使用に踏み切った場合、俺が対応することになるでしょう」
３年前の沖縄防衛戦をよりスケールアップした形となるであろう横浜での事変。現在の状況を鑑みるならば、達也の『マテリアル・バースト』を使用せねばならないところまで差し迫ることになる。
新ソ連については自身で対応しないと厳しい、と悠元は感じている。何せ、相手が戦略級魔法師である以上、今の一条家や国防軍では手におえない相手となるだろう。
「今日様子を見に行ったんだけれど、平河さんのマインドコントロールは解除されていたわ。本人は司波君に謝罪したいって言ってたけれど、論文コンペには連れて行かないことにしたわ」
「それがいいと思われます。現時点で危険が極めて高い場所に実力が半端な魔法師は足手纏いにしかなりませんので」
現時点で九頭龍も大陸系の術者が千秋を洗脳していたということは判明しているし、それが周公瑾の仕業だということは八雲も把握している。それと、彼女を狙った一件の時に〝妙に存在を誤魔化す感覚

〝を佳奈が掴み取っていた。
「神将会の長としては、初陣が凄いことになりそうね」
「トラブルを某メーカーの掃除機の如く吸い寄せちゃう人間がいますからね。まあ、それはともかく……周りの連中が平穏に過ごさせてくれないのなら、死ぬよりも辛い目に遭わせてやるだけですよ」
傍から見れば大言壮語のようにも聞こえるだろう。だが、神楽坂悠元という存在は、彼自身が思っているよりも遥かに強い存在である。
その意味を、向かいに座って微笑んでいる怜美も、このときはまだ気付いていなかった。

度が過ぎると管理できなくなる現実

――西暦２０９５年１０月３０日。

藤林響子は、独立魔装大隊のビル――悠元が普段使うことのない部屋を借りて職務にあたっていた。そろそろ休憩に入ろうかと思ったところで、上司である風間から呼び出しを受け、大隊長の執務室に姿を見せた。

「すまないな、藤林。丁度休憩に入ろうとしたところを呼び出して」

「いえ。それよりも、用件は何でしょうか？」

「少し長話になる。席を移動しよう」

風間としても、部下を立たせたままにして自分が座っているだけというのは彼の本意ではない。彼自身大隊長としての責務は理解しているが、それ以上に現場主義の思想が強い風間の心象を感じ取ったのか、響子は思わず笑みを零した。

執務室のソファーに座り、別の部下に命じて差し出されたコーヒーで喉を潤すと、風間が話を切り出した。

「〝特務参謀〟から情報提供があった。明日の論文コンペを狙う形での横浜侵攻……魔法協会支部襲撃も織り込んだ上での予想ルートも提示された」

「拝見します……少佐は、敵がここまでの大きな動きに出ない、と思われていたのですか？」

「たかが高校生の行事相手、と思ってはいたがな。だが、彼の指摘は至極真っ当なものだった。冷や水を浴びせられたような気分だ」

いくら高校生とはいっても、国策機関であり魔法関連の高等教育を担う魔法大学附属の学校。その九校が一堂に会して魔法技術の発表を行うのだ。これを座視するなどとは、魔法において後進国となる大亜連合として無視できる要素ではない――その言葉を聞いた風間は、自分の考えの甘さを痛感させられた。

散発的なゲリラ行為は予想していたが、提供された情報は間違いなくテロ行為や軍事行動に類するものであると察しつつ、風間はその情報を素直に受け取った。

「そういえば、明日呂剛虎が横須賀の外国人刑務所に移送されると聞いていますが……もしや、それも算段に入っているのでは？」
「……彼が国防軍に身を置きながらも信用していないのは、それを予測していたからかもしれないな。今回の情報提供に関しては、今のところ私と君しか知らない。真田と柳にはこちらから伝えるが、隊員たちにはテロ警戒――最悪は敵の排除を想定しろ、としか言えないだろう」
大亜連合に太いパイプを持つ人間が国防軍にもコネクションを持っている……そうなると、可能性が最も高くなるのは〝中華街〟である。予想ルートでは意図的に中華街への被害が及ばないように配慮されており、この国にも〝敵〟が存在しているという証左である。
「……少佐。一つお聞きしてもよろしいですか？」
「それは構わないが、何が聞きたいんだ？」
「その彼のことです。神楽坂の人間となった以上、彼の力を国防軍で管理することはできないでしょう。ですが、その彼に対して特務少将という地位は明らかな目的を持っていないとできないことです……幕僚たちは、一体何を考えているのですか？」
響子の問い掛けは一種の〝警告〟も含んでいた。
特殊な事情を持つ達也と異なり、悠元が現護人の人間となった以上、彼の拘束権限を持つのは神楽坂家現当主と上泉家先代当主。
その彼を特務少将という佐伯と同等の地位に与える意味……国防軍の上層部――制服組としては、彼の戦略級魔法を後ろ盾にしたいという欲が見え隠れしていることに響子が真っ先に気付いた。
その問いかけに対し、風間は静かに口を開いた。
「それについては私も測りかねているが……どうやら、閣下も含めて彼という切り札を手元に置きたい節はあるようだ」
風間が〝閣下〟と呼んだ相手が烈なのか、あるいは佐伯なのか……いや、この場合は〝両方〟なのではないのかと思案する藤林を見つつ、風間は言葉を続ける。
「彼の魔法は戦略級……いや、軍事衛星なしに全ての対象を照準に捉えられる意味で戦略や戦術など意味を成さないだろう。私個人とし

ては、彼という存在を敵に回したくないというのが精一杯出来る譲歩だ」
　その力の一端を3年前の沖縄防衛戦で見せつけられたからこそ、風間は悠元に対して敵対行動をしないと強く心に決めた。
　だが、そんな風間の思いとは裏腹に国防軍の内外で悠元を取り込もうと動いている有象無象の連中が後を絶たなかったことは事実だ。その一端には無論十師族をはじめとした現代魔法師側の動きも含まれている。
「〝全てを消し去り、何もなかったことにする〟戦略級魔法……悠元君から聞いたときは御伽話の類を疑いましたが、本当なのですね？」
「彼の固有魔法の産物らしい。そして、更に驚くべきことは……彼は現時点でこの世界に存在している全ての戦略級魔法の起動式を把握している」
「えっ……そ、それは本当なのですか!?」
　響子の驚きもおかしくはない、と風間は理解している。だが、残念なことにこれは事実である。
　風間がその事実を知っているのは、沖縄防衛戦の後に上泉家を訪れて悠元の独立魔装大隊への転属を願った際、悠元の口から発せられた言葉。その後、外に魔法反応が漏れない演習場で彼は達也が使った『マテリアル・バースト』――――周囲への影響を考えてごく最小規模ではあるが、戦略級魔法を見事に再現してみせたのだ。
　加えて、ＵＳＮＡではアンジー・シリウスしか使用できないとされる『ヘビィ・メタル・バースト』、旧ＥＵの『オゾンサークル』、南米――――現南米連合の『シンクロライナー・フュージョン』まで再現してみせた。
　これだけの戦略級魔法を使える魔法師を独立魔装大隊に転属させる意味――――悠元の本当の実力を秘匿させるための隠れ蓑になれ、と剛三から言われたような気分になったと風間は正直に吐露した。
「本来、魔法師一人に戦略級魔法は一つ……その常識を彼は破壊したのだ。尤も、『マテリアル・バースト』は達也の十八番だから使うつもりはないと断言していたが。それだけでも驚きなのに、彼のオリジナ

ルとなる『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』を更に改良した魔法を完成させたと師匠から聞いたからな」
「彼の存在は、秘密が一つ漏れるだけで世界が動きかねない、ということですか……達也君以上の取り扱いが要求されるなんて、前代未聞ですよ」
「それは私も同じだよ、少尉」
　戦略級魔法の起動式はその秘匿性を鑑みて、戦略核レベルのセキュリティーを敷いている。だが、そんなセキュリティーすら嘲笑うかのような悠元の特異性に、風間はおろか響子も頭を抱える羽目となっていた。そんな彼を国防軍で管理できるかと上司に問われた際、風間の出した答えは一つであった。
「以前佐伯閣下に悠元のことを問われた際、率直に『国防軍で扱える範疇を超えるので無理です』と答えた。それだけならまだしも、彼の絡みで大黒特尉まで巻き込むことになりかねない」
「……間違いなく、動くことになりますね」
　それはつまり、悠元を敵にしようものなら芋蔓式で達也まで敵に回すということを意味する。しかも、単なる戦略級魔法師２人を相手にするよりもかなり性質が悪い。なので、風間の出した結論は至極真っ当な範疇のものであると響子は理解して頷いた。
「その彼とは九校戦の後で直接話をした。大亜連合に関しては国防軍で対処してほしい、とのことだ」
「他にも動いている勢力があると……もしや、新ソ連ですか？」
「〝イグナイター〟がウラジオストク入りしたという未確認情報もある。そうなれば、彼にその対処を任せるしかないだろう。ただでさえ、達也の戦略級魔法の許可を取って貰ってしまったようだからな」
　この前日、風間は唐突に四葉家当主からの連絡を受けた。その内容は達也の能力を一時的に解除して戦略級魔法『マテリアル・バースト』の発動許可を風間に一任するというものだった。
　そこまでの事態になるとは思っていなかったため、もしもの時の切り札として有難く受け取ったが、その後に悠元からの情報提供で事態が思った以上のことになるという予感を覚えた。

四葉家と懇意の関係にある人間、そして現当主相手となるとその対象は限られてくる。その中で達也に近い人間の仕業となった場合、その候補の一人は間違いなく悠元だろうと推察した。
「そして、『サード・アイ・エクリプス』の実戦投入を行ってほしいと通達があった」
「あれを使うのですか？　確かに最終調整は既に終わっていますが……」
「サード・アイ・エクリプス」――達也専用ＣＡＤである「サード・アイ」をベースとし、達也が普段使っている「トライデント」の運用データを基に彼の『分解』と『再成』を最大限に発揮できるハードウェアを搭載している。
ハードウェアの殆どがブラックボックス化しており、その中身を知っているのは設計・作製担当である悠元ただ一人だけだ。下手に分解しようとすると特殊なセキュリティーが働いてＣＡＤを起点に半径１００メートルが消滅する仕組みだと聞かされた時、盛大な冷や汗が流れたのは言うまでもない。
真田は残念がっていたが、自らの命を引き替えにするほど自己犠牲の精神は持ち合わせていないといって引き下がった。国防軍であっても最高機密扱いになってしまうという意味を理解できない訳ではないが、その技術が外部――諸外国に漏洩するのを恐れた結果として無理矢理納得していた。
「今回の作戦内容を鑑みれば、津波を発生させる可能性が極めて高い。３年前のように彼がいるわけでもないし、それに『サード・アイ・エクリプス』は周囲への影響をごく最小限に抑えることが発動実験でも確認できている」
「確かに、彼の『マテリアル・バースト』は唯でさえ強力ですからね」
「そういうことだ。真田には私から話しておく。藤林は隊員たちに明日の〝行動想定〟を伝達してくれ」
「了解しました、少佐」
◇　◇　◇
その頃。司波家の地下室では悠元が端末と向き合っていた。モニ

ターにはＣＡＤらしきものの設計図と起動式データが表示されている。集中していた悠元が視線を背後に向けると、そこにはトレーニングを終えて汗を流した後の達也がいた。
「どうしたんだ、達也？　『バハムート』はまだ手に余る感じだったか？」
「いや、むしろ自分の体の一部のように馴染んでるぐらいだ。それよりも、悠元が作業しているそれは魔法治療用のＣＡＤか？」
達也はＣＡＤの設計自体出来なくはないが、ハードウェア部分ではどうしても悠元の発想力に数段劣ると自覚している。その達也でも悠元が今作業を進めているのは魔法治療のためのＣＡＤ設計図だとすぐに理解できた。
「正解。まあ、これも重力制御型核融合炉のための下積みの一環だけどな。想子粒子を使ったサイオンレーザー治療――――臨床実験自体は既に終わってるし、その人員も確保している」
想子の性質を知ったことで思いつき、試案自体は６年前の段階で元に提案した。
従来のレーザー治療では症状に応じて種類を変える必要があるが、高密度に圧縮したサイオンレーザーに魔法で〝改変〟することで汎用性を持たせることを主眼に置いた。これにより、細胞単位でピンポイントの魔法治療が行えるようになった。
ＣＡＤを操作する人員の部分に関してはどうしたのかといえば……これを解決した方法は至って単純なものだった。そう、魔法科高校の入試を受験した経験がある医学生にターゲットを絞ったのだ。
魔法科高校の卒業生を対象にしなかったのは、下手な情報漏えいを避けるためと想子保有量や想子制御の臨床実験も兼ねていたためだ。その実験を極秘裏に進めるため、元や剛三経由で第三研を利用させてもらった。
結果としては、魔法師ライセンスでいえばＢランク以上は堅いであろう。とはいえ、スパイなども考慮して当面は魔法大学付属病院のみで受けられるようにし、重篤な患者を対象とする。その為に政府にまで根回しをして法案整備まで漕ぎ着け、その治療を担当する医師は機

密遵守も兼ねて高い報酬が支払われる。
「想子をスパイラル加速させて一定の速度まで持っていき、それを患部に連続高速投射する起動式か……ループ・キャスト・システムを使っているのは理解できるが、曲線運動の魔法式なんて初耳だぞ」
「現代魔法自体が2次元運動の範疇でしかないからな。3次元的な動きが出来ないと難問が生まれて当然だと思うけれど？」
「その考えはなかったな……俺もまだまだだったようだ」
　従来のレーザー治療と比較して、復元力が高いサイオンレーザーは周囲への影響力を極力まで削ぎ落とすことができる。その復元力を逆に利用して安全な魔法治療への道を確立する――――ＦＬＴの功績となり、「トーラス・シルバー」の功績としてこれらの事項を〝11月1日〟に発表する。
　尤も、魔法治療だけで戦略級魔法を隠しきれるわけではないため、もう一つの大きな花火を打ち上げるつもりだ。
「まあ、これもトーラス・シルバーの名で公表はするが、諸外国に漏らす気はない。というか、使えないようになってるからな。そのセキュリティーを突破できる頭脳が奴らにあればの話だが……あ、あともう一つ。ＦＬＴと家電メーカーで連携して業務用だが〝魔導家電〟なんてものを発表する」
「……いまいち要領を得ないんだが」
「まあ、普通はそういう反応になるよな」
　ファンタジー世界で言うところの〝魔道具〟を家電に持ち込むというもの。この辺は雫の父親経由でいくつかの家電メーカーにサンプルを持ち込み、生産に前向きな回答を得られた。こちらの発表は同日だが、発表自体は家電メーカー側で取り持つこと（主に企業向けの説明会のために報道はシャットアウトする形となり、メディアに対しては公式文書のみでの発表に止める）が決定している。
「魔法要素とはいっても、家庭用の電気から想子に変換し、保存された魔法式を行使。電子回路や触媒で魔法式から出力されたエネルギーをコントロールするぐらいのシステム。これでも魔法師の手を一切借りないんだけれどな」

「……もしかして、あのレリックを解析したのは」
「ああ、俺だよ。とはいっても、あんな技術を軍事的に使ったら魔法師が〝弾〟にしかならなくなると分かってしまったから、国防軍に解析データは一切残していない」
ＣＡＤの基本サイクルからすれば、電気そのものを利用して魔法を発動させることはできなくもないと思う。だが、それができないのは感応石自体が電気信号レベルの電圧でないと耐えられないからだ。
そのため、感応石自体も特殊な製法で作られた高圧耐電用のもので、コア部分の技術は完全なブラックボックスとしてＦＬＴのごく一部の技術者しか知らない事実となっている。
刻印型魔法式をより発展させた〝投影型魔法式〟の保存機能は、あのレリックから得られた保存機能の一部を流用している。とはいえ、これを一般家庭で流通させるのはまだ拙いと判断し、ひとまずは業務用という形で神楽坂家系列の企業や上泉家系列の企業で導入してもらう。これのセキュリティーも世界トップクラスとなっていることは言うまでもないが。
「窓口自体は第三課で受け持つことになるけどな」
「あの人たちは荒れそうだな……逆に牛山さんは嬉々として取り組みそうだが」
「自業自得だよ。そもそも、達也をどうこうしようものなら深雪が笑顔で冷凍室を作りかねない」
魔法をより身近な存在とすることで反魔法主義の声を抑えていこうという狙いもあるが、世界的に有名なトーラス・シルバーが人の役に立つものを作るという姿勢を見せることで、この国にとって利益となる存在だということを人々の心に植え付ける。
「……ちなみにだが、その保存機能のデータは持っていたりするか？」
「一応な。他言しないと約束できるなら……ま、頑固な部分がよく似てる深雪のお兄様だから信頼はしてるけど」
「……」
そこまで似ているわけではないと反論したかったが、達也の脳裏には悠元に対しての負けず嫌いな面が度々出ていることを思い出し、こ

れでは深雪のことを強く言えないな……と思いながら、悠元が差し出したメモリを受け取ったのだった。
「データを入れたら綺麗に分解しといてくれ」
「まるでスパイ映画だな」
「おや、達也でも映画ぐらいは見るのか？」
「深雪に付き合わされて、という形だが。『お兄様は芸能に疎いのですから、こういうものぐらい触れていないとダメです』と力説されてしまってな」
　尤も、達也がそのお蔭で恥を掻かずに済んだのは……もう少し先のお話である。

楽に考えたくなるのは仕方なし～論文コンペ当日～

全国高校生魔法学論文コンペティション当日。
発表メンバーである達也とその付き添いである深雪たち、それにレオやエリカ、幹比古と美月はデモ機の護衛のほうを担当している。その際にも花音と一悶着あった……というのは、後日聞かされるわけだが。
悠元は共同警備隊のメンバーに含まれているため、朝一番に会場入りしている。前日は会場に近いという理由で三矢家の屋敷に帰った。
なお、朝起きたら自分に抱き付いている妹の姿を見て盛大な溜息が漏れた。
そんな些事はおいておき、遊撃の役割――謂わば独自の判断で持ち場を柔軟に決めれる立場の悠元は共同警備隊本部が設置されている部屋にいた。目の前には椅子に座る克人の姿がある。
朝一番ということで悠元と克人以外のメンバーはまだ到着していなかった。これを好機と考え、克人は悠元に問いかけた。
「神楽坂、周りに人がいない今だからこそ正直に聞きたい。コンペ関連を狙った一件がこれで終わるかどうかを……」
「渡辺先輩や七草先輩から聞いているでしょうが、今回の一件には〝大陸〟の連中が関わっています。それも、〝国家〟クラスの話です」
「今日改めて関本を訊問すると七草から聞いているが……父が今回の警備に加わっていた理由は、それが原因というわけか」
達也から話せば彼の身の内を調べられかねないが、悠元は諸外国の軍事事情に詳しい三矢の人間だった。加えて現在は護人・神楽坂家の次期当主である以上、独自の情報網を持っていても不思議ではないと克人は結論付けたような雰囲気を見せた。
「その連中の目的は、論文コンペだけを狙ったものでもないだろう。もしや、春の一件に類似したもの――魔法協会支部のメインデータバンクもその標的なのか？」
「メインがそちらで、コンペはそのついででしょうね……十師族として、十文字先輩はどう動かれるつもりでしょうか？」

今回のプランにおいて、ある程度の動きを把握せねばならないのは克人と将輝の2人。真由美も無論のことだが、摩利も動くことになるであろう。国を守るというよりは魔法協会に所属する者としての責務に近いが。
「無論、十文字家代表代行としての務めを果たすまでだ。神楽坂は……聞くまでもないだろうな」
「ええ。ただ、相手が形振り構わぬ場合は容赦なく殺します。エゴの凝り固まった連中相手に情けなんて掛けている暇はありませんので」
克人は、春のブランシュ日本支部壊滅作戦の時にも感じていたことだが、目の前にいる人物が明らかに〝人殺し〟の経験をしている雰囲気を感じ取っていた。それも、1人や2人などという両指で数え切れるような人数ではないということも。
2月に三矢家現当主の呼びかけで開かれた会合にて、元は3年前の沖縄防衛戦に彼と彼の兄である三矢元治が巻き込まれた、と明言していた。その際に彼が人殺しを経験しているというのなら、ある程度の辻褄は合う。
もし、彼がその防衛戦で「クリムゾン・プリンス」をも超えるような功績を上げているのだとすれば、七草家や九島家が必死になる理由も腑に落ちるのでは……克人はその推察を思考の片隅に置きつつ、口を開いた。
「分かった。神楽坂には、コンペ発表会場への経路となる場所を重点的に見てほしいと思っているが、可能か？」
「ここの広さなら問題なくいけるかと思います」
「予め言っておくが、会場のエントランスホールには一条を配置するつもりだ。何かあればこちらから指示を出すので、頼むぞ」
「了解しました」
悠元が振り返って出ていこうとしたところで、克人が何かに気付いて呼び止めた。
「神楽坂。お前が先ほど言った連中が仕掛けてくるとすれば、論文コンペの最中になるのか？」
「混乱を狙うとすれば、自ずとそうなるでしょう。参加者の大半は対

魔法師装備を持っている連中との戦闘経験がありませんから」
「……そうか。神楽坂も含めて警備隊員には防弾チョッキを着用させる。連中がどう動くか分からない以上、午前の警備からだ」
「分かりました」
防弾チョッキ自体も正直気休め程度でしかないが、それでもないよりはマシと結論付けた上で悠元に告げた。それを聞いた悠元も頷いてその場を後にした。
◇　◇　◇
悠元は特に持ち場を有していないため、他の警備隊メンバーが来るまで喫茶室でのんびり過ごしていた。会場に張った式神の結界で次々と会場入りしている生徒や関係者の姿を確認していると、そこに近づいてきた女性が声を掛けてきた。
「悠元君、朝早いわね」
「藤林さん。よろしいのですか？」
「達也君たちはまだ到着していなかったからどうしようかなと思ったの。そしたら、悠元君を見かけたというわけ。こういう時は、いろんな肩書きがあると便利よね」
その女性こと響子は悠元と向かい合う形で座り、コーヒーを口にした。
独立魔装大隊自体特殊な実験部隊という側面を持っているため、他の部隊に比べて魔法師の数や技術士官の割合が大きい。響子も表向きは防衛省技術本部兵器開発部所属の技術士官という形でここに来ている。
「昨日、うちの上司から事情は聞いたけど……達也君以上に扱いが難しいなんて難儀ね」
「成程、聞いたんですか……まあ、本当のことです。とはいえ、〝狗〟なんて真っ平御免です。こちらを害するつもりなら最悪の手段も厭わないつもりですから」
「敵対しないと明言したけれど……私も真っ先に白旗を揚げる自信しかないわ」
昨日、風間から聞かされた事実を尋ねるように呟くと、それが事実

だと述べたところで響子から苦笑が漏れた。これには悠元も苦笑を浮かべていた。彼を権力で下手に縛れば、間違いなく上泉家、神楽坂家、三矢家、そして四葉家まで動きかねない。
「予め藤林さんに話しておきますが、今回は〝皇宮警察〟も動きます」
「……どういうこと？」
「皇宮警察特務隊『神将会』――――俺が今代の長ですから」
「っ!?」
　正式名称は皇宮警察本部対魔法師特務課・特務隊『神将会』。構成メンバーである7人の魔法師は厳しい情報統制で秘匿されており、国家機密保護法において最上級となる〝国家重要機密〟に位置付けられている。そして、彼らに対する直接の命令権は国家の象徴たる今上天皇にのみ許されている。
　天皇直属の超法規的な特殊部隊のため、実質的な指揮権は長である悠元に委ねられており、そのバックアップを担うのは護人の二家が行う。世界屈指の魔法技術の粋を集めた装備を持つため、表向きの戦力として数えられていない。
　そのメンバーの長に悠元がいること――――それを明かした意味を響子は察してしまった。即ち、独立魔装大隊にも神将会の機密に対する責務を負わせるということだ。
「……上司にそのことは？」
「伝えていませんよ。下手に国防軍に伝わって軍事クーデターなんて起こされたら目も当てられませんから」
「確かにね……分かったわ。私から上司に伝えたほうがいい？」
「どのみち顔合わせがあるでしょうから、その時に明かします」
　音の振動を改変する結界により、周囲には非常に小さな声で話しているように聞こえることはともかく、悠元がそう提案したのは深雪のことがあるからだ。独立魔装大隊の幹部メンバーは達也の素性を知っているため、神将会に深雪が所属している意味を自ずと理解することになるだろう。
　どうして小声で話しているのかといえば、その理由は遥というか公安関係にあった。

「そういえば、公安が頻りに探りを入れていました。俺経由でも探ろうとしたみたいですが、その辺は爺さんに任せました。一応俺からも釘は刺しておきますが」
「達也君絡みもそうだけど、悠元君も含んでいるのでしょうね……国防軍でも無理なものを政治家や制服組が制御できるとは思えないんだけれど」
「……酷い言われ様には納得いたしかねますが」
春の一件後、上泉家からの圧力があったにも拘らず、公安の一部が遥を通して達也や悠元に対して探りを入れていた。その意図があまりにも見え見えだったため、悠元はどこ吹く風で適当に流していた。
そう言っても無駄なことは重々承知しているが、ある意味ダメ元のように呟く悠元を見て、響子は思わず笑みを見せた。いくら規格外の戦略級魔法師といえども、中身は15歳の少年だと思わずにはいられなかった。
まあ、実際には転生で三十路越えなので、精神年齢だけは同年代の倍以上という悲しい現実があるのは……口にしないほうがいいと思った悠元だった。
「そしたら、そろそろ達也たちも来ているでしょうし、案内しますよ」
「あら？　悠元君も共同警備隊メンバーなのに、持ち場がないの？」
「エントランスホールは一条が受け持つことになるので、俺は主に遊撃警備を任されまして。十文字先輩からの注文で会場ホール周辺の警備です。その程度なら式神の『視覚同調』で事足りますから」
簡単に言ってのけているが、五感同調をしながら自身の五感を維持しつつ自在に動く技術は高等技術の類である。古式魔法の人間である響子からすれば、戦略級魔法がなくとも抜きん出た存在ということに複雑な笑みを浮かべたのだった。
◇　◇　◇
悠元が響子の案内をする形で第一高校の控室を尋ねると、丁度達也と深雪がいた。悠元とともに姿を見せた響子に対して、達也と深雪の反応は友人に会うかのようなものだった。
「おはよう、達也に深雪。2人にお客さんを連れてきたんだが、丁度良

かったな」
「おはよう、悠元。藤林さんはお久しぶりですね」
「ええ、直に会うのは久しぶりね達也君。深雪さんは半年ぶりぐらいになるかしら。九校戦の試合は実際に拝見させてもらったけれど、凄かったわ」
「ありがとうございます、藤林さん」
響子1人でも問題はないであろうが、悠元が案内役を買って出たのは元々の実家が国防軍とのパイプを持ち、今の身分では古式魔法の家の次期当主。なので、同じ古式魔法の家である藤林家の令嬢と顔見知りであっても問題はないというカバーストーリーを作っていた。
すると、深雪は悠元に対してムスッとした表情を見せていた。これには悠元だけでなく、達也も苦笑を滲ませていた。
「深雪、藤林さんとはそういう訳じゃないからな……とりあえず、話せるうちに話すか」
そう言いつつ遮音の結界を張る悠元の手際に感心しつつ、響子が話し始めた。
「ムーバルスーツは予定通り完成して、達也君専用のものも持ってきているわ。真田大尉が君の注文に全力で応えてくれたから、運用の感想は忘れずにお願いね」
「成程……〝避けられない〟ということですか」
「悲しいことにね。この国の力を殺ごうとする輩は少なくないのよ」
達也は、独立魔装大隊が今日のテロ警戒態勢で〝非常事態時の戦力〟として横浜入りしていることは悠元経由で知っていた。もしもの場合は自身も参加して戦うことになることも想定はしていたが、今日は忙しい一日になるであろう、と内心で溜息を吐きたくなるような心境だった。
それを見た深雪も響子の述べた意味をよく理解している。とはいえ、今の段階で〝枷〟を外すわけにはいかないということも承知している。
「詳しいことはこの中に入っているわ。尤も、悠元君からすれば補足程度のようなものだけれど」

「いえ、感謝します」
データカードを渡した後、響子が部屋の外に出たことを確認した上で達也が素早く端末でデータを読み出すと、そこには大亜連合による侵攻作戦の通信データを文章化したものが表示された。
それに素早く目を通すと、達也は悠元に視線を向けた。
「……悠元。予想開始時刻は？」
「すべての段取りが揃う目途としては午後3時以降とみている。丁度第一高校の発表プレゼンと重なるか第三高校のプレゼンに被る形になるだろう。ホールの入り口付近は俺が固めるから、達也はレオたちに協力を仰いで万が一の時の対応を頼む」
もはや物騒なことが起きる前提だが、会場内にいる面々の中でまともに対応できるとしたら達也たちぐらいだろう。なお、他の神将会メンバーである元継と修司、由夢や姫梨については既に行動を開始している。
相手は恐らく対魔法師用の装備を持ち出してくるであろうが、悠元ならば問題はないと達也は結論付けた上で頷いた。
「悠元さん、私や雫は何も聞かされていないのですが……」
「今回、二人に与える役割は魔法科高校の生徒を無事に脱出させる役割を担ってもらう。無論、俺もフォローに入るが決して無茶はしないこと。いいな？」
「……はい、分かりました」
天神魔法の習熟度からして、まだ前線に出せるラインではないと判断した上で的確な役割を与えた。それに加えて危険な目に遭わせたくないという達也の心情も込められている。少し不満げだったが、自らの実力を鑑みた上で深雪は渋々頷いた。
「装備についてはこちらに届けられる手筈となっている。葉山さん――――とはいっても忠成さんのほうだが、彼が届けてくれる。通信機に連絡が入るので、聞き漏らしの無いようにしてくれ」
◇　◇　◇
「しかし、会場にいてもいいとは思うんだがな」
「そういう訳にはいかないだろうし、余計な諍いは御免だよ……っと、

深雪に客人のようだ」
客席に向かう達也と深雪の護衛を悠元がしている、という形に見える中、その途中で深雪に声を掛ける者がいた。言うまでもないだろうが、一条将輝である。
「司波さん！　お久しぶりです。後夜祭のダンスパーティー以来ですね」
「……ええ、こちらこそご無沙汰しています」
達也や悠元からしても2ヶ月ぶりとなるが、当人が声を掛けている対象は深雪だけであった。将輝に対して丁重な対応をしている深雪を見つつ、悠元は達也に小声で話しかけた。
「……あれは、明らかに狙ってると解釈していいのかな」
「かもしれないな……」
すると、深雪は将輝を持ち上げるような発言をしていた。「一条さんがいるのならば安心できます」というのは彼女なりの誤魔化しも兼ねたリップサービスなのだろうが、それが益々将輝の勘違いを加速させつつある。
とはいえ、この空気を壊して面倒なことになるのは御免だというのが悠元と達也の共通認識であった。
「蛙（かわず）の子も蛙、とはよく出来た言葉だと思うよ」
「否定は出来ないな」
兄の立場からしても、妹の綺麗さは一層磨かれている途上にある。その原因は自分の隣にいて頭を抱えたくなっている人物の影響なのだろう。
深雪としては、達也や悠元とは新人戦モノリス・コードで戦った相手という認識が強いのだろうと思う。その認識を悟らせないために丁寧なお辞儀と言葉を選んだ企みは成功したといってもいい。
それ以上に、将輝の狼狽え様は最早失笑ものに近かったが……深雪との挨拶を終えて将輝が去っていくのを見届けた上で達也が口を開いた。
「しかし、女性に対して免疫がなさすぎると思うが……」
「免疫がありすぎても困るだけだがな。まあ、あの恋愛下手野郎は実

の妹にすら手を焼いている始末だからな。乙女心というものが理解できないんだろう……俺にも全部は理解できないが」
「その意見には同意したくなるな」
「お2人とも……私はお母様のように男性を手玉になんて出来ませんから」
そんなことを言った覚えなど皆無なのだが、周りの異性から視線を引き付ける深雪がその言葉を口にしたところで説得力が全くないという現実に、悠元は思わず笑みを零した。

思惑を平気で超える規格外とその予備軍

午前中は特に動きもなく、悠元はホール出入口周辺の警備をしていた。

すると、明らかにこちらを見るような視線に気づいたため、本来の気配を偽る歩き方でその人物に近づき、気配を元に戻すとその女性は手に持っていた物を落としそうになったため、悠元が素早い動きと重力制御の術式で缶コーヒーの中身を一切零すことなくキャッチした。

「小野先生。コソコソしていたら、まるで悪いことでもしていると言わんばかりですよ。九重先生の言う通り、気配を偽る術を学ばないとダメです」

「あ、あはは……これでも自信あったんだけれどね。あっさり見破られるのが悔しいかな」

悠元から缶コーヒーを受け取った遥は悔しさを滲ませていたが、それでも悠元が真剣な表情を崩さないことに遥は一瞬たじろいだ。それは殺気にも近いような鋭さを遥も感じていた。

「小野先生……公安故に仕方がないことは理解しますが、あまり藪に首を突っ込んでいると蛇どころか〝それ以上のもの〟に遭遇しかねませんよ。例えば……自分もその一人ですから」

「っ……」

遥としても悠元の素性は把握している。だが、達也との関連性は未だに不明瞭のままだ。正確に言えば、悠元が達也と深雪の家に居候していることは知っていたが、それ以上の情報も出てこない上に十師族の一角である三矢家と達也の関係も不明。

このことについては剛三から直々に釘を刺されていたことを思い返していた。

『――――遥よ。公安は司波達也君の正体を探ろうとしておるようだが、儂から言えるのは……大人しく手を引けば、誰もお前を咎めぬよう働きかけよう。触らぬ神に祟りなし、ということだ。これは儂の孫も同様と思え』

彼の言葉が大袈裟とも言えなかったし、真剣な表情で語った言葉を

嘘だと断じる理由など遥は持ち合わせていなかった。とはいえ、直接の上司からの板挟みを受ける形で消極的な対応をしていたわけだが、今度はその対象である悠元から釘を刺される羽目となった。

「神楽坂君……貴方、一体何者なの？」

「さあ？　正直、自分自身も測りかねていますよ……アドバイスするとすれば、この先はパンドラの箱を開ける勇気があれば、の話と思ってください」

そう言って悠元が遠ざかっていくのを見届けた遥は、気が付けば缶コーヒーを握っている手が震えていたことに気付いた。その意味は、自分が神楽坂悠元という存在に対して〝恐怖〟という感情を本能で察していたということ。

もし、あの場で敵対する意思を見せていたら、間違いなく次の瞬間にはこの世にいなかったかもしれないという予感が脳裏を過った。

（何なの、あの子……上泉先生と同じような殺気を放ってた……それも〝相手を殺す覚悟〟を持ったものだった）

上泉家での鍛錬の際、遥は訓練の一環で剛三から発せられた本気の殺気を浴びて気絶した経験があった。それよりも若干緩めではあったが、悠元の殺気もそれに限りなく近かったのだ。

せめてもの救いは、それを感じつつも何とか意識を保てたことだと遥は内心で独り言ちたのだった。

◇　◇　◇

――西暦２０９５年１０月３１日、午後３時。

横浜市街はテロの厳戒態勢ということに加え、非魔法師の一般市民はこの場におらず、残っている非魔法師はといえば港湾警備の公務員ぐらいしかいない。そのため、本来賑やかなはずの横浜の市街地は完全にゴーストタウンのような雰囲気を漂わせていた。

その市街地を走っていく数台のトレーラー……その光景を横浜ベイヒルズタワーから見つめている一人の少女。彼女が纏っているのは魔法使いのローブというよりも現代風にアレンジされた戦闘服――濃い緑を基調としつつも、その個人を示す淡い緑のラインが入っ

た羽織を身に着けている。
その少女は左耳に着けている通信機のスイッチを入れると、静かに呟いた。
「――〝星見〟より通達。敵が行動を起こした模様……総長殿、指示を願います」
◇　◇　◇
その時間は、奇しくも第一高校のプレゼンテーションが丁度始まった時間でもあった。
既に魔法科高校の制服ではなく、黒を基調としつつも金色のラインが入った戦闘服と羽織を身に纏っている悠元は、通信機の着信音に気付いて手で触れることなく通信機のスイッチを入れる。すると、聞こえてきたのは聞き覚えのある一人の少女の声だった。
『〝星見〟より通達。敵が行動を起こした模様……総長殿、指示を願います』
どうやら、敵が予定通り動いたようだ。
しかも、本来ならば移動の障害となる一般車両がほぼいない状態は彼らにとって僥倖ともいえた。更に、間の悪いことに呂剛虎を乗せた護送車が襲撃されたことは伝わっている。不幸中の幸いは、重傷者が出たものの死者が出なかったことぐらいかもしれない。そうなった理由は呂剛虎を追い払うために第四席〝劫炎〟を動かしたことだ。
「……〝草薙〟より〝天影〟、〝星見〟、〝劫炎〟、〝雷帝〟に通達。予定通り作戦の第一段階を実施せよ」
そう告げて通信機のスイッチを切ると、悠元は周囲に構うことなく屈んで床に手を置き、瞼を閉じる。
会場のホールを避ける形で全方位に薄く広がる想子の波――普通の魔法師では感じることのできないぐらい極めて短時間の発動だが、この魔法によって凡その位置を把握した悠元は魔法を発動させる。
「神霊喚起――『鳳凰』」
その言葉と共に、コンペ会場の遥か上空――高度約５０００メートルに顕現したのは、炎を纏った大型の鳥を象る独立情報体。それが

優雅に空を滞空している。
いくら天神魔法でも魔法の監視システムに引っ掛かってもおかしくはないが、それが引っ掛かることは一切ない。その理由は悠元の持っている固有魔法が原因だが、現時点で詳しい説明は割愛させてもらうこととする。
（予定通りなら無人の偵察機を飛ばすはずだが……来たな）
横浜の市街地に飛翔してきた偵察機の数は全部で１４機。せめてその３０倍は持って来いと某英雄王ばりの台詞を吐きたくなったが、掛けてやる慈悲など無いと言わんばかりに悠元が意識を集中させて指示を送る。
その指示を受けた『鳳凰』は、炎の矢を連想させる飛翔体を周囲に展開し、無人偵察機に向けて放つ。亜音速まで加速した飛翔体はまるで野鳥でも落とすかのごとく無人偵察機を貫き、超高熱まで熱せられて〝蒸発〟したのだった。
◇　◇　◇
放った無人偵察機が瞬く間に〝破壊〟されたことは横浜港に停泊している輸送艦――それに偽装した揚陸艦の艦橋で、オペレーターが動揺しつつも報告した。
「む、無人偵察機が全て破壊されました！」
「馬鹿な!?　いくら横浜の市街地が厳戒態勢とはいえ、国防軍の主力や対空砲はないと報告を受けている!!　高高度すら飛べる無人偵察機を破壊した正体は掴めたのか!?」
「破壊する直前に入った解析データでは、更に上空から飛んできた超高温の飛翔体によって破壊されたという予測結果が出ましたが……」
オペレーターの報告に驚愕していたのは艦長席に座る司令官だった。それほどの高高度から正確に狙撃できる魔法をこの国が得ていたという事実など、中華街はおろか〝先遣隊〟からは何も伝えられていなかった。この作戦が失敗に終わるのでは、という暗雲が漂い始めている中、司令官は強気な姿勢を口調に反映させて声を発した。
「仕方がない。予定は多少狂うが、機動部隊を上陸させろ！」
「しかし、あれは論文コンペ会場での段取りが完了しないことには

……」
「既に作戦は決行しているのだ！　この国の軍が動いていない今を置いて、好機など無い！　別部隊にも連絡を入れておけ！」
艦長とて、オペレーターの言い分も理解している。だが、既に賽が投げられた以上失敗することは許されない。この作戦は国の威信を賭けた作戦なのだ。出だしから躓いているのは否定できないが、この好機を生かさずして目的は達成できない。
最悪、コンペのほうを犠牲にしてでも本目標である魔法協会支部のメインデータバンクを狙うしかないと考えつつ、艦長は指示を飛ばした。
◇　◇　◇
（……まあ、その会話も全部筒抜けだということは言わぬが花というべきか）
先日の会話で『霊亀』を中華街のみに限定したと言っていたが、正確に言うと中華街に置いた『霊亀』を基点にして横浜全体に情報の網を敷いている。本来これほどの大掛かりな魔法陣は膨大な想子や精神消費を余儀なくされるが、そのブースターとして使用しているのは悠元の持つ『万華鏡（カレイドスコープ）』に他ならない。
揚陸艦の艦橋には既に式神を忍ばせており、会話は悠元の通信機を通す形で全て『神将会』のメンバーに筒抜けの状態である。
時刻は午後3時半を回った。
侵攻開始の狼煙となる爆発が山下埠頭の出入港管制ビルで発生し、その対応として警察省が駆り出される。内閣総理大臣の権限により、国防軍の招集命令が発動。横浜にほど近い東京南部に避難指示が発令し、一般市民の避難が開始された。
コンペ会場近くに1台のトレーラーが停まり、そこから対魔法師用装備を持った兵士がコンペ会場に突入してくる。エントランスホールは将輝がいるので問題はないと思われるが、こういった建物には必ず業者などが利用する裏口が存在している。
悠元は『天神の眼』で兵士の数を確認。どうやら正面側に多くの人数を割き、その隙に少数部隊がホールへと侵入する手筈と予測でき

る。兵士の位置を確認した悠元は「オーディン」を抜き放つと、裏側から来る兵士全てを照準に捉えた上で引き金を引く。
「――『オゾンバレット』発動」
そう呟きつつ悠元が魔法を発動させると、その魔法を受けた兵士が突然苦しみだして手に持っていたハイパワーライフルを床に落とした。そして間髪入れずに悠元は一気に詰め寄り、いつの間にか持っていた太刀で兵士たちの首と胴体を別っていた。太刀に付いた血を掃って〝消す〟と、悠元は「オーディン」を兵士の死体に向け、魔法で消し去った。
『オゾンバレット』は戦略級魔法『オゾンサークル』をよりピンポイントで発動させる対人戦闘用魔法の一つで、濃度の度合いで急性中毒や死に至らしめることまで可能なため、殺傷性ランクは事後評価型となる。今回は兵士の肺の中に直接魔法を打ち込んでオゾンを発生させ、兵士たちの足を止めた。
兵士や血痕を分解魔法で消し去ったのは、こういった事態に慣れていない魔法科高校の生徒に要らぬ精神的ショックを与えないためでもあった。
すると、エントランス側にいたはずの将輝がこちらに向かってきていた。将輝は悠元の服装に驚きを隠せずにいたが、そんなことは些事だと言わんばかりに悠元が将輝に話しかけた。
「一条、エントランス側はいいのか？」
「あ、ああ……そちらはプロの魔法師がいたから任せた。こっちは大丈夫なのか？」
「適当にあしらったが、まだ裏口から来るかもしれない……裏口側に大型バスが停まっている。一条はどうする？」
そのバスが魔法科高校の生徒を脱出させる手段だということは将輝も薄々気付いていた。そちらには一応〝保険〟を掛けているが、安心はできないだろう。将輝は少し考えた後、悠元に対してこう告げた。
「なら、俺がそっちを受け持つ。神楽坂は……その、どうするんだ？」
「正面の敵が裏に回られるのも面倒だから、適当に片付けておく」

「……分かった」
　将輝がそのまま裏口方面に走っていくのを見届けると、それと入れ替わりになる形でホールに続く扉が開き、達也たちが出てきた。達也たちの反応はといえば、多かれ少なかれ悠元の服装に驚きを隠せずにいた。
「悠元さん。それは戦闘服ですか？」
「まあな。正面の敵を追っ払うから、手を貸してくれるか？」
「お前一人でも何とか出来そうな気はするが……分かった、協力しよう」
　エントランスホール側は文字通り混戦の模様を呈していた。対魔法師用のハイパワーライフルを防御できるだけの防御魔法を持っていない魔法師がプロというのは些か問題があると思われるが……そんなことはさておき、この状況を打破するなら深雪の力を借りるのが早いが、それを待たずに飛び出したのはレオだった。
「う、撃て!!」
「ハッ、温いぜっ！　相転移甲冑（ファーズ・パンツァー）！」
　レオが得意とする硬化魔法を改良した彼専用の防御魔法に加えて、彼のＣＡＤに新しくインストールされた移動型想子ウォールによってハイパワーライフルの弾を弾き飛ばすようにして突き進む。
　さながら重戦車レベルの防御力に加えて自己加速術式を用いることで、高速で動く重装甲パワーファイターとなったレオからすれば、ライフル弾など豆鉄砲に近いレベルとなっていた。
　それを指し示すかのごとく、レオの攻撃で派手にぶっ飛んでいく兵士の姿を見て、対抗心を燃やすかのごとく飛び出したのはエリカであった。
「ちょっと、あたしも混ぜなさいよね！」
　エリカに関しても、持ち前の自己加速術式の精度が遥かに上がっており、身体能力強化のレベルに踏み込みつつある。彼女は自己加速だけでなく無意識的に動体視力強化まで行っており、高速で飛んでくる銃弾の雨を難なく掻い潜っていく。
　エリカの動きを見て他の兵士が狙い撃とうとするが、それに割り込

んで吹き飛ばしていくレオ。その彼を逆に狙おうとすれば、今度はフリーとなったエリカの容赦ない一撃が兵士を襲う。
喧嘩するほど仲が良いというレベルの成長を見て、彼らが自然と連携していることに深雪や達也も思わず目を丸くするほどだった。
「……レオとエリカ、凄く成長してるね」
「兄さんに加えて爺さんも手を貸したんだろうな。幹比古、敵を派手に吹き飛ばせ。あの二人ならちゃんと回避するだろう」
「えっ!?」
「……悠元、君も何気に容赦ないね」
そして、幹比古の放った『雷虎子(らいこじ)』――『雷童子』を更に改良した魔法で、広範囲に当たり所が悪ければ即死クラスの雷撃を起こす。無論、この魔法の提供元は悠元であるが。
「レオ!」
「おうよ!」
幹比古が容赦なく放った魔法をレオとエリカは想子の流れだけで察知し、綺麗に回避した。その一方、テロリストの兵士はエントランスにいた半数以上が気絶。それ以外はというと、レオとエリカによって息の根を絶たれていた。
「流石だぜ、幹比古」
「ナイスよ、ミキ」
「僕の名前は幹比古だ! ……ただ、これを成したのが二科生だと誰も信じてくれなさそうだね」
「それは確かにな」
「その筆頭であるお兄様がそれを仰いますか?」
幹比古の言いたいことも理解できなくはない。とはいえ、その代表格とも言うべき達也が言ったところで何の説得力も生み出していないことに深雪が問いかけると、達也は内心で溜息を吐きたくなるような心境だったのは間違いないだろう。

教えられない秘密は山ほど

そこから少し遡ること数十分前。

コンペ会場の駐車場には数台の大型バスが停まっており、その傍には数台の装甲車が停まっている。それらはすべて国防軍第１０１旅団・独立魔装大隊所有の特殊装甲車であり、運転席に座る陸軍の軍服を纏った男性は静かに呟いた。

「やれやれ、少佐殿も人使いが荒いね」

「今回ばかりは同意しておこう」

そう述べたのは独立魔装大隊の幹部メンバーである真田と柳の２人。「ムーバル・スーツ」のデモンストレーションを明日に控えているのに、まさか論文コンペ会場周辺の警備をすることになるとは予想外だったと２人揃って同じ意見だった。

だが、藤林から聞かされた情報からして冗談で済む範疇を遥かに超えていた。時計が１５時半を示したと同時に見えた黒煙と爆発音。この時点でただ事ではないと察してしまった。

「さて、忙しくなりそうだ……柳のスーツはいつでもいけるから、遠慮なくやってくれ」

「そういうところは仕事が早いな」

愚痴というよりも信頼から来る柳の言葉を聞いて、真田は苦笑しつつも兵器の準備に取り掛かる。柳は素早くムーバル・スーツに着替えると、向かってきている兵士らに向けて魔法を放っていくのであった。

流石に体術面で優れている柳といっても、〝彼ら〟のような動きや魔法運用など難しいのは明白なことだが、贅沢も言っていられない状況だ。真田はムーバル・スーツを装着した他の隊員も見つつ、自分もスーパーソニックランチャーを準備してミサイルなどの対応に備えた。

◇　◇　◇

悠元たちがホールに戻ると、先ほどの振動音で動揺を隠しきれないことに加え、困惑しているような状況だった。ともあれ、この場を収

めてもらうための適任者のもとに向かうと、鉢合わせする形で真由美も近づいてきた。
「あ、悠君たち……って、悠君。その恰好は……」
「今はお教えすることができませんし、優先順位が違います……中条先輩。いえ、中条生徒会長。あなたの魔法でこの場を収めてほしいです」
「わ、私がですか!?」
あずさは悠元からのお願いに驚き、達也たちはあずさの魔法のことなど知らないため、疑問を浮かべるような雰囲気を見せていた。それを見て疑問を投げかけたのは真由美だった。
「悠君、どうしてあーちゃんの魔法を知ってるの？」
「俺には個々の魔法が〝視える〟からです。中条先輩がここで魔法を使っても、口外しないことを約束します……七草先輩が」
「わ、私!? いや、まあ、それをお願いするつもりだったから吝かではないけれど……」
真由美の驚きで誤魔化したが、悠元の言葉には一切の誇張や嘘など含まれていないことを察していたのは、恐らく達也と深雪ぐらいかもしれない。
少し悩んだ後、あずさは胸元からペンダント型ＣＡＤを取り出し、情動干渉魔法『梓弓（あずさゆみ）』を発動させる。攻撃魔法ではなく、対象範囲の情動を平常な状態にリセットする魔法。
その魔法で会場が静まり返ったのを見て、現在の状況を真由美が説明した（あずさが悩んでいる間に悠元が真由美に避難方法を伝えた）。その言葉が終わるとともに、各校ごとに避難を始めていく。
「さて、俺らがデモ機を処分するので、会長たちは裏口から避難してください」
「悠君はどうするの？」
「俺にはやらなければならないことが山積みなんですよ。この格好自体は伊達や酔狂でしているわけでもありませんから」
相手がテロ紛いの行動をしているとはいえ、この先は〝戦争〟の領域に踏み込む。その為、この場に残せるのは最小限度の人数。正直な

話、ほのかや美月だけでなくレオやエリカ、幹比古にも退去してほしいぐらいだ。
　デモ機の解体となれば自分でも行けるが、達也と分担したほうが遥かに速い。すると、通信が入ったのでそちらに意識を向ける。
『総長殿、第六席と第七席の装備を届けに参りました。〝第十三会議室〟にてお待ちします』
「了解しました。雫に深雪、先に向かってくれ」
「分かった。それじゃほのか、気を付けて」
「う、うん。雫も気を付けてね」
「お兄様、一旦失礼します」
「分かった。安全になったとはいえ、気を抜かないようにな」
　手早く通信を済ませると、雫と深雪が先にホールを後にした。一分一秒でも無駄にしたくないと歩を進めようとしたところで、その動きに待ったをかけたのは真由美や合流した摩利であった。
「待って。悠君、どういうこと？　どうして北山さんと深雪さんが貴方の命令に従うような素振りを見せたの？」
　ほのかはともかく、達也に対して飛び火しなかったのはありがたいと思ったが、こういうところは父親によく似たものだと思う……などと言ったら、真由美本人は顔を赤くして怒りそうなものだと思いつつ、悠元は視線だけを真由美に向けて問いかけた。
「それは、先輩一個人としての質問ですか？　それとも、七草家代表代行としての問いかけですか？」
「……無論、後者のほうよ」
　こちらからの問いかけに対して少し考えてからの返答となったが、魔法師を守る立場である十師族からすれば当然の疑問なのかもしれない。だが、それに臆することなく悠元はハッキリと述べた。
「……七草先輩は、『神将会』の名をご存知ですか？」
「え？　ええ、十師族でも一部しか知らないけれど、『スターズ』のような対魔法師戦闘に特化した部隊だと……まさか」
「これ以上のことは申し上げられません。それは、彼女たちに関しても同じことです」

下手な干渉を許さない。それは雫や深雪、ひいては達也に対しても……という意味を含んでいる。それは即ち七草家がやっていることに対しての〝釘差し〟も含んでいるということ。
皇宮警察自体は警察省の管轄下にある。しかし、『神将会』は表向き皇宮警察本部の管轄ではあるが、ほぼ全ての監督権限は今上天皇が指名した家――――上泉家と神楽坂家にある。
そのため、干渉するためには皇族に許可を取らねばならず、世界的に見ても二千年以上続く国家の権威を犯すことは完全な〝禁じ手〟に他ならない。
「帰り道自体も安全とは言えませんので、先輩方は殿を務める形で東京方面に避難してください。あとは、ほのかと美月もそうした方がいいのだが……」
「だ、大丈夫です！」
「……私の力が役立てるかもしれませんので、残ります」
「そうか。なら幹比古、美月の守りは任せた。ほのかは……達也に任せていいか？」
「ぼ、僕がかい!?　……分かった。必ず守るよ」
「そうした方がいいだろうな」
一通りの役割分担決めた上で、デモ機の処分に取り掛かっていく悠元や達也たち。それを見送るように立ち尽くす真由美に、摩利に加えて合流した鈴音が彼女の様子を見ていた。そこで摩利は事情を知っていそうな真由美に尋ねた。
「真由美……『神将会』とは何なんだ？」
「……皇宮警察本部の中にある対魔法師特殊部隊――――その名称が『神将会』なの。けれど、本来の皇宮警察の指揮系統とは全く別で、構成メンバーは一切の情報が開示されていないわ」
「先程の悠元君の言葉からするに、そういうことなのでしょうね」
真由美が父親から聞いた話では、『神将会』の情報は国家重要機密に類するものであり、厳しい緘口令が敷かれている。その一部を開示したということは、真由美と摩利、鈴音にもその責務を負ってもらうということ。

そして、その事実を例え身内であっても開示できないことを意味する。
「しかも、あの台詞は七草家に対しての完全な釘差しね。あのタヌキオヤジってば、私の苦労を増やすようなことをするんじゃないわよ……」
「ともあれ、速やかに離れましょう。デモ機に関しては司波君たちに任せれば問題はないかと思います」
この場においては、鈴音の言葉が最も的確であった。いくら魔法科高校の生徒で荒事に耐えられるとはいえ、限度というものは存在する。達也のことを信頼しているかのような言葉に対して、疑問を呈したのは摩利だった。
「随分と信頼しているのだな？」
「セキュリティー面を担当していたのは司波君ですから。彼なら密かに自壊用のプログラムを仕込んでいても不思議ではないかと思います」
「それはもう高校生のレベルじゃないわよ」
実際のところはそんなプログラムなど仕込まれていないのだが、ある意味〝何でもアリ〟ともいえる達也の評価など、鈴音はおろか摩利や真由美にも付けられるようなものではなかった。
先に誘導したあずさの後を追うような形で、真由美たちもホールを後にした。
◇　◇　◇
デモ機を手早く〝処分〟した達也たちは、悠元の案内でとある部屋に案内された。すると、そこには色合いこそ異なるが、悠元に似たような恰好をしている雫と深雪がいた。
「雫に深雪、その恰好って……」
「悠元と同じってことは……そういえば、『神将会』って言ってたけど、そういうことなの？」
「ま、身内に警察の人間がいれば気付くよな。正解だ、エリカ」
「マジで……ああ、また兄貴やクソ親父に言えない案件が増えていくじゃないの……」

警察省に知り合いが多いエリカはその関連で『神将会』のことも知っており、そのメンバーが同級生にいるということを知って頭を抱えていた。これにはエリカとよく突っかかっているレオですら事の重大さを察したようで、苦笑が漏れていた。
「確か、皇宮警察の特殊部隊の名だと聞き及んでいたが……深雪は、いいのか？」
「無論です、お兄様。確かにつらい道かもしれませんが、悠元さんを支えると決めた以上、覚悟は既に決めています」
妹の頑固さは親譲りでもあり、兄譲りでもある。こうなった深雪を止める術など達也にはなく、ならば兄として……彼女のガーディアンとしての務めを果たすだけだと心に決めた。その上で悠元に視線を向けた。
「分かった……それで悠元、この部屋は一見会議室のようだが、随分と手の込んだセキュリティーが敷かれているな」
「この会議室は本来皇族や総理大臣クラスなどのＶＩＰ用の会議室。非常時のシェルター機能も併せ持ち、更には国防軍などへの管制塔的な役割も兼ねている。その為に関係者もここへ呼び出したわけだが……来たか」
悠元の言葉と共に姿を見せたのは、国防軍――野戦用の軍服を身に纏った風間と響子だった。その２人をここに呼んだ理由は、今後の方針確認のためでもあった。
「はじめまして。皇宮警察本部・特務隊『神将会』が長、神楽坂悠元と申します。以後お見知りおきを……尤も、国家機密保護法に基づく守秘義務を負っていただきますが」
「……国防陸軍少佐、風間玄信です。所属に関しては事情により控えさせて頂きたい」
悠元の格好だけでなく挨拶に戸惑いはしたが、培ってきた経験が風間の動揺を上手く隠し、挨拶に応じた。藤林が動揺していなかったのは前もって知らされていたからだと察しつつ、自分の部下の身内が『神将会』に所属していることもこの場で理解した。
「特尉、現在の情勢に鑑み、情報統制は解除されている」

風間の言葉で達也は風間に対して敬礼の姿勢で応じた。これには周囲の人間が驚きを見せるものの、同級生の中で動揺していなかったのは深雪と悠元だけであった。そんな反応を見守る暇もないため、風間は藤林に対して告げた。

「藤林。現在の状況を説明してくれ」

「はい。横浜市街地も含め、非魔法師は全員避難が完了。敵部隊はこのコンペ会場と横浜ベイヒルズタワーの二方面へ部隊を展開。先遣隊と思しき敵部隊に関しては、我が軍の精鋭と有志によって撃退し、魔法科高校の生徒や関係者たちは東京方面への避難を行っております」

補足説明になるが、橋梁などへの直接攻撃を防衛するために十師族当主である十文字和樹を筆頭に橋の防衛態勢が取られ、東京湾上には国防軍の防衛網が敷かれている。そこを抜かれれば東京が火の海になるという最悪の事態も起こりうる。

そして、ベイヒルズタワー方面には魔法協会支部の防衛に『神将会』を置き、更には悠元の身内に声をかけている。対道術・方術のエキスパートを重点的に配置した意味は実に単純で、陳祥山を確実に拘束するための陣を敷いているからだ。

「さて、特尉。現下の特殊な状況に鑑み、〝国籍不明〟の敵勢力の排除が幕僚会議にて決定した。本隊はその先駆けとして敵部隊の排除を行う。国防軍特務規則により、貴官にも出動を命じる。皆様方に対して、彼に対して国家機密保護法に基づく守秘義務を課していただくことになります。神楽坂殿、よろしいでしょうか？」

「構いません。『神将会』は既に横浜ベイヒルズタワーを拠点とする形で敵勢力の排除を開始しています。三矢家の協力員もおりますが、そこはご了承いただきたい」

この状況で十師族の力を借りないという選択肢はない。それに、悠元が述べた協力員はいずれも輝かしい功績を高校時代に残している世界レベルの魔法師。それを理解しているからこそ、風間はそのことに異を唱えなかった。

すると、深雪が達也の元に近づいた。達也もその意図を理解してそ

の場に片膝を付く。
そして、達也の額に深雪の唇が触れ、それが離れると――――部屋を覆い尽くすが如く溢れ出る白銀の想子が達也を起点に発生する。
その数秒がまるで数分にも感じられるほどの密度から解放されると、達也はいつの間にか立ち上がっていた。深雪に「征ってくる」を告げた上で、悠元と対面する。
「……これから待っているのは、間違いなく苦難の道だ。俺の助力は気休め程度にしかならんかもしれんが、そっちは任せたぞ」
「……ああ。そっちもな」
お互いに突き出した拳同士が触れる。
それは、お互いに知っているからこその言葉でもあり、約束でもある。
達也は姿を見せた真田の案内でその場を去ると、風間は悠元に再び視線を向けた。
「それで、神楽坂殿。彼らについてはどうするつもりでしょう?」
「このまま東京に戻ってもらった方が身のためなんですが……予想以上に仕上がっているので、ベイヒルズタワーに向かいたいと考えています。実は敵のトレーラーを1台鹵獲することに成功しましたので、移動にはそれを使用します」
そのトレーラーは、敵が会場近くに乗り捨てていたものだった。特に自爆用の術式もないため、そのまま移動用に使わせてもらうこととした。
肝心な問題はその運転手なわけだが、これに関しても簡単な解決法を見出した。
「――――成程。こちらも応援に向かおうと思っていたから、実に都合がいい。問題は肝心の防御だが……」
「そこは自分が対処しますので、先輩は運転に集中していただければ幸いです」
「分かった」
そう、克人を運転手として抜擢することだった。奇しくも大型トレーラー系統の運転経験があったので、今は緊急事態ということで頼

み込んだ。レオたちを連れていくことは克人も悩んだが、戦力は一人でも多いに越したことはないし、春の一件のこともあって承諾した。

片手間に大炎上

南方面へと走行する一台の大型車両――――言うまでもなく、克人が運転するトレーラーである。そして、その上に悠元が立っている。接地面を硬化魔法で固定するというよりも、相対位置自体を動ける範囲内とすることで荷台の上で動けなくなることを回避している。

そして、トレーラーを覆うようにほのかの光学系魔法が展開し、周囲の景色と同化している。すると、コンテナの中に乗っている幹比古から悠元に通信が入る。

『悠元、前方にかなりの数の反応がある。どうするんだい？』

恐らくは大亜連合の強襲部隊の総戦力に近いレベルと思われることは悠元も感じ取っていた。そのまま克人のいる運転席の無線に繋げて指示を出す。

「先輩、そのまま臆せず突っ切って下さい」

『魔法行使はするべきか？』

「大丈夫だとは思いますが、念のために前方展開だけ」

『了解した』

通信が切れると、克人が前方に『ファランクス』を展開した。それを見た悠元は遥か上空に待機させていた『鳳凰』を制御して急激に降下させる。そして、その勢いのままに強襲部隊へと襲い掛からせ、敵の情報強化や事象干渉を嘲笑うがごとく溶かし尽くしていく。

この星に備わった自然という強大なエネルギーの一端を支配下に置いて使役する――――天神喚起の力を『眼』で捉えた美月は思わず瞼を瞑り、隣にいた幹比古に抱き付いていた。

「きゃっ!?……って、あ、あの、ごめんなさい吉田君！」

「あ、う、ううん、気にしないでくれ……」

悠元の行為が図らずも吊り橋効果的なものを生み出し、レオたちの緊張を解すのに一役買った形となった。まあ、それを見たエリカが二人をからかったのは言うまでもないことだが。

◇　◇　◇

現地時間午後４時。横浜ベイヒルズタワー前の通りでは、既に正体

を隠すのを諦めたかのように機動兵器のみならず、化成体の古式魔法による攻撃が加わっている。だが、彼らは押すどころか逆に押されていた。

その要因の一つが、彼らの前に立っている一人の少年だった。彼の装備は赤黒い色を基調とし、鮮やかな赤のラインが入った戦闘服を身に纏っていて、その両手には真紅の装飾を施された太刀が握られている。

「どうした、大陸の――――大亜連合の腰抜けども。俺を超えないとベイヒルズタワーには行けねえぞ？」

相手はたった一人に対して化成体や機動兵器など見た目上の戦力差は歴然だった。だが、少年の両手に持つ二本の太刀は、その悉くを斬り伏せていた。銃撃による制圧を試みたところで、今度は少年の周囲を纏っている炎がそれらを〝蒸発〟させてしまう。

そちらがその気なら、と少年はゆっくりと歩を進める。

『舐めた真似を！』

その威圧に耐え切れず、一台の機動兵器が少年に近づき、腕に装備された斬撃用のチェーンソーを振り下ろす。だが、それを意に介することもなく少年――――宮本修司は左手に持った太刀から炎を発すると、そのチェーンソー目掛けて振り上げる。

その一合の直後、たった一振りのはずなのに幾重にも斬られたチェーンソーの姿を操縦手が見守るまでもなく、いつの間にか操縦席目掛けて突き出された炎の太刀で絶命した。

崩れ落ちる機動兵器。それを見て動揺が走る敵兵たち。修司はそれを見て、二本の太刀を重ねるように束ねると、まるで一本の光となって修司の手に握られていた。

「唸れ、『村正』。六道五輪（りくどうごりん）・都牟刈（つむかり）……大天象（だいてんしょう）」

その光の太刀を振るうと、敵兵は瞬く間に飲み込まれていき……光が消えると、そこに残っていたのは修司が振るった技による斬撃の後だけであった。修司が息を吐くと、光の太刀は元の二本の太刀に戻っていた。

「まったく、解放に至ったのは悠元のお蔭だが……此奴はとんだじゃ

じゃ馬だな」
　新学期に入ってからは悠元と頻繁に連絡を取りつつ、実家の宮本家で更なる研鑽を積んでいた。神将会の中では悠元の次に天刃霊装の修得へと至った修司だが、彼の武装である『村正』は火属性に特化した代物で、単純な物理攻撃力ではトップクラスに位置する。
　先程の技――――『六道五輪・都牟刈大天象』はその火力を一極集中させることで相手の事象干渉力や情報強化すら〝焼き尽くす〟技。とても人前では使えない切り札に、修司は自分が強くなったことを嬉しく思いつつも己をより一層律しようと思っていた。
　その要因は長である人間がこの技を用いても勝てるかどうか分からない……いや、負けるかもしれないと思ってしまうほど、あの時の想子制御は〝桁外れ〟であった。
　すると、通信機から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
『〝劫炎〟、聞こえるか？』
「この声は総長殿。如何されましたか？」
『そっちに向かってトレーラーが通過するけど、攻撃しないでくれ』
「え？　それってどういう……」
　その意味を尋ねる間もなく、近づいてきたトレーラーを見て修司は察してしまった。運転席に座っている人物も驚いたが、そのトレーラーの上に乗っかっている人物が自分の長だったからだ。
「……北部方向に侵攻軍の影なし、ということですか」
『そっちは「鳳凰」で片付けた。中華街のほうはどうなってる？』
「予定通り、揚陸艦から飛んできたミサイルを〝雷帝〟が方向転換した結果、中華街東門に直撃しました」
　どうせ揚陸艦からミサイル攻撃はあると睨んでいたため、予め市街地に極力被害を出さないようにと言ったところ、タワーへの被害を避ける形で逸らした結果、中華街の四つの門の一つである青龍門を破壊したとのこと。
　そもそも、陳祥山と周公瑾のやり取りは口約束なので、こうなったとしても特に問題はない。周公瑾からすれば敵を引き渡す要因となったかもしれない、と考えるだろうが……中華街に暮らしている人

間が周公瑾のような人間とは必ずしも限らない。
この辺はその当事者たちの問題なので、余計な諍いは避けるに限る。
『……分かった。敵兵は想定よりも早く退き始めているが、残存兵がゲリラ行為に走らないとも限らない。周辺の警戒をしつつ、予定ポイントに合流せよ』
「了解しました、長殿」
通信が切れた直後、修司は手に持っていた太刀をそれぞれ物陰に向けて放った。その太刀は物理的な壁を介することなく物陰から機を窺っていた兵士に突き刺さり、兵士は瞬く間に炎に包まれたのだった。
◇　◇　◇
悠元たち（というか悠元だけ）が北部侵攻軍を倒してしまったことで、国際会議場から北に避難している面々にとっては朗報だった。その反面、敵の殲滅を命じられた独立魔装大隊からすれば拍子抜けというほかなかったが。
達也もムーバル・スーツに着替え、悠元から渡された「バハムート」を持って敵を消し去っていた。敵影がいなくなったところで、柳が話しかけてきた。
「特尉、問題はないか？」
「はっ、問題ありません。情報ではもう少し多くの兵がいたようですが……彼が殲滅したようですね」
達也の『精霊の眼』で強大な力を持つ独立情報体の存在を感じていた。だがそれは悠元の魔法によって姿を見せず、瞬く間に敵兵を地獄の業火という名の攻撃で殲滅していく。
同い年でここまで達観していることもそうだが、あれだけ大規模の魔法行使を呼吸でもするかのようにしていく芸当は、流石の達也でも無理だと判断するほどだった。
駐車場に将輝の姿は見えなかったが、避難民の誘導をしているのか、あるいは……とはいえ、今の達也にはあまり影響を与えない事項だと判断してそれ以上の思考を止めた。

『神将会』か。少佐から聞いてはいたが、その一人に彼がいるとなれば……敵対しないのが賢明だな」
「それが妥当な判断かと。して、この後は？」
「避難民を十師族の管轄に任せた後、上陸部隊の後続を排除する。揚陸艦については、今すぐ破壊しないほうがいいという藤林の情報があった。敵の揚陸艦はヒドラジン燃料を積んでいるようだ」
　戦争に環境への配慮というのはおかしな話だが、それでも反論材料を残さないための判断となれば、今の達也に反論する余地はなかった。
「その対処は特尉に一任されることになるだろうが、まずは避難民の安全確保の完遂だ。頼むぞ」
「ハッ」
◇　◇　◇
　魔法科高校の生徒や研究者たちを乗せたバスは無事に多摩川を通過し、東京に入った。バスの守りは十文字家を主導とした警察に委ねられることとなり、任務を終えた形となった深雪と雫は通信を悠元につないだ。
「……こちらは無事に完了しました。あとは十文字家の方々に引き継がれます」
『了解した。〝氷絶〟、〝天震〟の両名はそのまま合流ポイントまで来てくれ』
「分かりました……雫、いけそう？」
「問題ない。散々練習してきたから」
　通信を切ると、深雪と雫は予め渡されていた腕輪型のＣＡＤを操作し、上空へと飛び上がって南方向へと飛び去っていく。その光景を見送るように見つめていた真由美は、一種の歯痒さの様な感情を抱いていた。
「……真由美」
「分かってるわ……二人のことについてもだし、悠君のことについても」
　十師族は魔法師のコミュニティを統括する立場で、超法規的な特権

を持っている。だが、それすらも超える立場にいるのが悠元であり、彼の部下的な立ち位置として深雪と雫がいる。真由美や摩利はその服装や『神将会』について問い質したが、それを遮ったのは深雪の一言だった。

――――申し訳ありませんが、神将会に関する事項は〝国家重要機密〟に類するものであり、私や雫にそれをお話しできる権限はございません。

以前、真由美は達也や深雪を『数字落ち（エクストラ）』の家系ではないかと疑っていた。

だが、今回のことで二人に対しての予測を「表向きには知られていない古式魔法の家系」ではないかと推察した。三矢家の使用人である矢車家のことも思考の中に含まれていたのだろう。

真由美の予想は強ち的外れでないとも言えるが、今回の出来事によって十師族ではないという彼らに対する裏付けの一つとなり、真由美はそれ以上の詮索をしなかった。

「適材適所と言われたら間違ってはいないけれど。それ以上に、私たちは〝民間人〟の域をどうしても超えられないジレンマもある……何のための十師族なのよ、って思いたくなっちゃうわ」

「それは……」

別に真由美も摩利も戦いを好き好んでいるわけではない。魔法師としての実力だけでなく、自ら生き残る術として魔法技術を磨いている。魔法師の家系として生まれてしまったが故に、非魔法系の可能性を全て捨てられた上で……今更その生まれを嘆きたいわけでもない。

今の真由美の気持ちを述べるとするならば、それは〝羨望〟という感情に等しかった。

「……ふふ、この点に関してはタヌキオヤジのことを笑えないなんて、私もまだまだね……何よ、摩利」

「いや、あれだけ先輩たちに噛み付いていたのに、今更自覚するのは遅いと思うんだが？」

「ふみゅう!?」

佳奈や美嘉を相手にしているときの真由美は負けず嫌いを前面に

押し出していた。それを理解していると思いきや、まさかの無自覚でやっていたという事実に摩利の口から溜息が漏れた。
その指摘を聞いて、驚きの表情とともに気の抜けるような叫びを上げた真由美であった。
すると、そこに追撃というか死体蹴りばりの言葉が鈴音から発せられた。
「仕方がありませんよ、摩利さん。真由美（このひと）の本性は天然の無自覚な小悪魔ですから。以前私が指摘しても『そんなことないわよ～』などと言ってはぐらかしていましたので」
「え!?　私そんなこと言ってたの!?」
「お望みでしたら、その時の録音したデータがありますから」
（いや……何でそんなものを持っているんだ？）
鈴音としては別に脅す目的などなく、そのデータ自体も別の用途で録音していた時に偶然残っていただけである。そんな事実とは裏腹に、現3年の中で最も敵に回してはいけない人物ではないか、と摩利は鈴音を内心で評価していた。
そこから少し離れたところでは、克人と別行動をとる形となった桐原が飛翔していく深雪と雫を見つめていた。春の一件で只者ではないと感じていたことが的中し、修羅場の経験からすれば自分など赤子同然なのだろう……そんな風に考えていると、後ろから啓と花音の声が聞こえてきた。
「花音、落ち着きなよ」
「どうしてよ！　向こうには達也君たちが残ったままなのよ！　そりゃあ、多少のトラブルなら乗り切れるでしょうけれど、彼はトラブルを引き寄せかねないのよ！」
花音の言い分は分からなくもない。会場方面に残っている面々に関しては、深雪が「彼らなら無事に避難しておりますので、ご心配なく」という言葉だけであった。尤も、ここにいる誰もが悠元も含めた面々がテロリストを排除しているなど夢にも思わないであろう。
だからと言って、達也に対する彼女の悪評を口に出すことはないであろう……桐原がそう思った直後、花音の言葉に口を挟んだのは紗耶

香であった。
「委員長。いくらなんでも司波君に対しての悪口を言っていいとは思えません。それは、一科生と二科生の軋轢を無くそうとした前委員長に対しての侮辱ではありませんか？」
「っ……けれど！」
「……壬生の言うとおりだ、千代田。連中の実力は俺がよく知っている。今の俺たちにできるのは、あいつらが無事に帰ってきてくれることを祈るぐらいだ……そうじゃねえのか？」
紗耶香に対して花音が反論しようとしたところで、桐原も紗耶香をフォローしつつ矛を収めるような意図を込めて告げた。これには啓も申し訳ないと言いたげな表情をしつつ、花音を窘めた。
「花音、今回ばかりは落ち着いたほうがいい。川を超えたとはいえ、ここも安全とは言えない……分かってるよね？」
「……ごめん。向こうで戦っているのを思うと、百家の人間として黙っていられなくなってしまう。でも、今は風紀委員長としての責務を果たさないといけないのも……分かってる」
自分自身の身勝手で周囲の人間を危険に晒すのは拙い。しかも、今の自分は風紀委員長であり、周りの暴走を抑える役割を担っている。紗耶香も桐原、そして啓の言葉を受けて、花音は悔しさを滲ませながらも自身に与えられた役割を全うするため、横浜の市街地に背を向けて歩き始めたのだった。
◇　◇　◇
横浜ベイヒルズタワーの前はまるで人がいないかのごとく静まり返っていた。作戦が予想を超えて既に頓挫しつつある状況から、最悪目的が達せられないことも覚悟の上で呂剛虎をはじめとした特殊部隊のメンバーを出迎えたのは、漆黒と紫の戦闘服と羽織を身に着けた男性――上泉家現当主にして『神将会』副長、上泉元継であった。
「初めましてかな、呂剛虎。先日は俺の妹や後輩が世話になったようだが……俺を『幻影刀（イリュージョン・ブレード）』のように評しているのなら、怪我で済まなくなることは忠告しておこう」
そう言って元継は野太刀に匹敵する長さの刀を片手で構えた。

武器の常識で言えば長さが増せば増すほど重さも比例する武器だが、それに反比例する事例は確かに存在する。尤も、そんなご丁寧な解説を敵にしてやる義理もなく、元継は太刀を構える。

元継から発せられる威圧に特殊部隊の兵士らが動揺するのを見た呂は、身に着けている「白虎甲（パイフウジア）」――古式魔法の呪法具を身に着けており、その防御力で元継に迫る。無論、元継もそれを察した上で、刀を握っていない左手を前に突き出す。

その結果、呂の突撃は元継の左手一本で止められていた。

「突撃は中々だが……『鉄壁』にやや劣るな。吹き飛べ」

そう呟いた後、元継は蹴りを繰り出す。この動きは呂も察していたようで、素早く飛び退いて元継の蹴りを躱していた。得意げな表情を見せる呂だが、躱された側の元継は冷静そのものであった。

「ふむ、1割にも満たない速さを躱すか……レオとエリカ、二人であの虎を倒せ。今のお前らなら行けるはずだ」

「マジか……って、議論している暇もねえか」

「ま、力試しにはいいんじゃない？　ヘマしたら〝連帯責任〟なんだからね」

「わーってるよ」

元継の言葉を聞いて、姿を見せたのはレオとエリカだった。二人の手にはそれぞれ武装型デバイスが握られており、二人のデバイスは一見すると漆黒に塗られた木刀のようなものだが、想子を流し込むことによって刀身が白銀色に染まる。

単なる見かけ倒しではないと呂は構えを取り、二人に向かって突撃する。ほかの兵士らが銃を構えて三人を狙い打とうとするが、それが叶うことなどなかった。

「――この程度の隠形すら見抜けぬか、戯け」

まるで先代当主の口癖が移ったかのごとく、今まで二人の後ろにいたはずの元継が兵士らの背後から野太刀――『龍爪（りゅうそう）』を振るい、瞬く間に地に伏せた。周囲の気配に目を配りつつ、元継は三人の戦いを見つめていた。

「ガアッ！」

「ぐ……マジモンの虎みてえなもんじゃねえかよ!!」
レオは呂の攻撃をガントレット型ＣＡＤで受け止め、太刀型デバイスを振り下ろすが、呂はそれをギリギリの速度で回避する。間髪入れずに飛んできた蹴りを想子ウォールで防ぐが、その勢いで少し後ずさりしてしまった。
そこにエリカがデバイスを振り下ろすが、呂は大きくバックステップして距離を取った。レオとエリカは背中合わせになる形で呂がいる方向を見つめていた。
「……どうする？」
「元継さんが言っていたことが正しければ、あたしらの方向すら狂わせられるわね……レオ、最低でも１秒はアイツを足止めして」
「……成程。分かった」
二人は事前に『鬼門遁甲』の情報を知らされていた。その対策法も不完全ではあるが練習してきた。完全なぶっつけ本番になるが、やらなければ死ぬだけだ……そう考えた二人は互いに頷き、レオが自己加速術式で呂に突撃する。
無論、呂はその動きを読んだ上で『鬼門遁甲』を発動させ、レオを側面から蹴り飛ばそうとした。だが、呂が蹴りを入れた直後に妙な感覚に囚われた。
「っ!?」
『鬼門遁甲』を使いながら『鋼気功』を使うのは高等技術の部類に入る。それこそ、全ての神経を集中させなければならないほど。だが、この時の呂は相手が十代の高校生だということに侮っていた……先日、十代の女に負けたことは、単に運が悪かっただけなのだと。
それはまるで、鋼鉄の塊でも蹴り飛ばしているかのような感覚に、呂は感じた痛覚で『鬼門遁甲』はおろか『鋼気功』まで解除してしまった。
レオが使ったのは『相転移炸裂弾（フェイズバースト）』――――術者に蓄積した衝撃を圧縮させて接触した相手に返すカウンター技。レオは相手が不意を突いて攻撃してくることを前提に自己加速術式を使い、その直後に『フェイズバースト』を発動状態にした。

九校戦前までのレオなら難しかったが、今のレオの魔法発動速度ならば問題なくこなせる。とはいえ、カウンター技なので博打要素も多いのだが、防御面に長けているレオにしか出来ない芸当……というのが、その魔法を教えた当人の述べた感想であった。

「新陰流が三の太刀――――麒麟顕正」

その隙を、エリカが見逃すはずなどない。限界まで加速させたエリカは手に持っていたデバイスのスイッチを押すと、刀身にエリカの想子色である橙色の想子が収束する。すれ違いざまに一閃したその一撃は呂の両手両足の『白虎甲』を破壊し、彼の肉体にまで到達していた。

新陰流剣武術表奥義四ノ型〝麒麟〟――――自身の身体能力を魔法で強化させ、その速力を以て敵が瞬く暇もなく斬り伏せる技。エリカはそこに千刃流の秘剣である『切陰』を合わせて使用することで、『白虎甲』を破壊して見せた。

十代半ばで千刃流の印可を得ている彼女は、短期間の集中鍛錬によって三の太刀〝顕正〟までをものにしていた。この才能だけでも彼女が千葉家の血を引いた〝天才〟とも言えなくはない……本人は確実に否定すること請け合いだが。

エリカが会得している剣術のみならず、千刃流はあくまでも魔法に沿って剣士が技を振るう――――魔法に術者が使われているようなものに過ぎない。

新陰流剣武術の創始者である信綱の子孫は、『剣は己の続きに在るものであり、剣に込めるものは己の魂と意志のみ。心なき剣は単なる暴虐の証なり』の言葉とともに、奥義を編み出した。即ち、新陰流剣武術の四大奥義は魔法を剣と同一のものと定義している。

そのため、魔法に使われるという認識を壊すために元継や剛三が関わったが、この辺の詳しい話は割愛させていただくこととする。

呂が立て直そうと踏ん張る暇もなく、いつの間にかデバイスを振りかざすレオの姿がいた。

「一の太刀、霊亀抜刀」

新陰流剣武術表奥義三ノ型〝霊亀〟――――太刀に込めた想子を極

めて狭い〝線〟で収束させることにより、『薄羽蜻蛉』と同水準以上の切れ味を可能とした技。

その言葉と共にレオが振り下ろした一撃で『白虎甲』の胸当てを破壊し、彼の肉体まで到達。呂剛虎が意識を手放す前に見たものは、砕け散っていく『白虎甲』の残骸と、自分を負かした二人の高校生の姿であった。

灼熱と極光のハロウィン

その頃、陳祥山は目的を果たすために魔法協会支部の前に来ていた。だが、ある異変に陳は嫌な予感を抱いていた。本来セキュリティーロックが掛かっているはずの扉が開いたままになっていたのだ。

(どういうことだ。自分の勘がこれ以上進んではいけないと言っている……)

メインデータバンクは目と鼻の先だというのに、これ以上歩を進めれば待っているのは〝破滅〟でしかないと軍人としての勘がそう告げていた。作戦失敗も考慮した上で撤退するしかないと考え……その少しの躊躇が陳を窮地に追いやった。

「なっ!?」

周辺の景色がまるでモノクロのように変化したことに陳は驚愕した。感覚からして結界魔法であり、強力な領域干渉によって魔法発動が出来なくなっている。

廊下の左側から近付いてくる足音に陳が視線を向けると、それは戦闘服を纏ってはいるが、今回の最重要ターゲットの一人である少女であった。

「司波深雪……!?」

「成程。私を知っているということは、最近お兄様や悠元さんを付け回していたのは貴方の差し金でしたか」

冷たい視線を浴びせられるが、陳は足が竦んでいることに気付いていなかった。更に反対側の廊下からもう一人の女性が近づいてくる。

「深雪、この人が陳祥山?」

「ええ、その通りよ雫」

「北山雫……一体どういうことだ?」

二人から感じられる力は、陳の想像を遥かに超えていた。とてもではないが、自分が相手に出来るレベルでは無い……すると、そこにダメ押しという形で魔法協会の中から一人の少年が姿を見せた。

「初めまして、陳祥山。皇宮警察・特務隊『神将会』、神楽坂悠元だ。先

日からコソコソ嗅ぎまわっていたことはとうに知っている。そうやって俺らの力を殺ごうとした罪は重い。いや……〝陛下〟の御心を酷く傷つけた。お前には死すら温い罰を与える……軍人としては、最も与えられたくない罰をな」

悠元から「オーディン」を突きつけられるが、陳は冷や汗が流れるだけで動けない。いや、指一本すら動かなくなっていた。

悠元が発動した魔法は、八卦結界『白牢陣(はくろうじん)』。この結界内では術者が認めた者以外の一切の行動の自由を奪い、許容範囲も術者によってコントロールできる。先程まで陳が喋れていたのは、悠元が意図的に喋ることだけ認めていたからだ。

結界魔法という部類は古式魔法に存在するが、媒体や印契などなしに結界魔法を行使できるのは、それだけでも世界屈指のレベルとなる。神楽坂家に移ってから結界魔法を本格的に学び始めた悠元からすれば、その認識など皆無に等しかった。

悠元が引き金を引くと、陳の意識は急激にブラックアウトし……結界を解除すると、陳はまるで糸が切れたかのごとくその場に沈んだ。

「……ふう。幹比古に美月、特に問題はなさそうか？」

悠元が陳祥山の意識の喪失を確認すると、魔法協会の奥を向いて声をかけた。すると、物陰に隠れていた幹比古と美月、それとほのかが姿を見せた。陳が三人の姿を捉えられなかったのは、ほのかの光学系魔法で光を屈折させて姿を見えなくさせていたためだ。

ここに連れてきたのは、陳祥山の『鬼門遁甲』を探ってもらうためのもの。悠元でも出来なくはないが、対古式魔法の経験値はあってしかるべきだという考えに基づくものだった。

「うん、今のところは敵意や害意は感じられない」

「はい。周囲にそういった兆候はありませんし、入り口前から感じたオーラも収まったようです」

「そうか。ほのかもお疲れ様」

「いえ、この程度でしたら大丈夫です」

達也が頑張っているのだから、自分も負けられない……そんな想いがほのかの原動力となっていることに深雪が笑みを零していた。す

ると、通信機から〝星見〟こと姫梨の声が聞こえる。
『悠元……コホン、総長殿。ヘリがタワー前に到着しました』
「了解した。あと、今回試しにやってはみたが、やっぱり慣れんな……今後は混同しないように名前呼びで行こう。他の面子もそれでいいな？」
『了解だよ、悠元。あー、今回の私の功績なんて中華街の門を壊したぐらいだよ』
『愚痴るな、由夢。中華街から出撃した連中は一条が片付けていたようだが、周公瑾と名乗る青年が逃げ込んだ連中を引き渡したそうだ』
元継が入り口前、修司と由夢が戦力の集中が予想される北側、姫梨が屋上から全体の戦況を把握し、それ以外の方面に関しては悠元の身内に任せた。
すると、その身内である佳奈と美嘉が姿を見せた。二人とも私服ではなく、魔法協会にあったプロテクター姿ではあったが、見たところ外傷なども見受けられなかった。
「やっほー……って、悠元。その恰好はどうしたのよ？　みゆっちにシズシズもっていたあっ!?」
「空気を読みなさい、というか父さんの話をちゃんと聞いていなかったからでしょう……ごめんね、悠元」
「いや、美嘉姉さんのそれは簡単に治らないって分かってたから別にいいけど」
「ひどいよっ!?」
美嘉と佳奈のやり取りで一気に毒気が抜けてしまい、これには悠元だけでなく他の人たちも苦笑を滲ませていた。それはともかくとして、悠元は佳奈と美嘉に対して告げた。
「姉さんたち、タワーの入り口前にヘリが到着したからそれに乗って離脱してくれ。元継兄さん以下の面々についても同乗して離脱するように」
「悠元はどうするの？」
「……ここから先は一介の魔法師では介入できない領域となる。それが例え十師族であっても足りない相手だ」

明確に告げるのは避けたが、戦略級魔法師が出てくるということを察するまでにそう時間はかからなかった。それを聞いて最初に口を開いたのは美嘉であった。
「……そっか。行こうか、佳奈姉」
「……ええ、そうね」
二人を先頭に幹比古、美月、ほのかも続いていく。そして、その場に残った悠元、深雪、雫の三人。すると、雫が悠元の左手を両手で包み込むように握っていた。同じように深雪も悠元の右手を握っていた。
「悠元、気を付けて」
「気を付けてください、悠元さん」
「……ああ。二人も気を付けて帰ってくれ」
二人の姿が見えなくなるまで、悠元は彼女らの後姿を見送った。その姿が完全に見えなくなったところで、悠元は真剣な表情を浮かべてタワーの屋上へと走っていくのであった。
この先の領域は……単なる殺し合いという言葉では片付けられない。

◇　◇　◇

タワーの屋上には、風間と藤林、真田に加えて特殊スーツ姿の人物が一人。とは言っても、悠元からすればそのスーツの人物とは知己だが、特殊な状況を鑑みた挨拶をする。
「皇宮警察・特務隊『神将会』、神楽坂悠元と申します。一応国防軍では〝上条達三特務少将〟でもあります。まあ、今後名乗ることは殆どありませんが」
「国防陸軍第101旅団・独立魔装大隊特務士官、大黒竜也特尉です。プライバシーのためにこの姿での挨拶をお許しください」
明らかに茶番ともいうべきお互いの自己紹介に、風間らは苦笑を零していた。すると、ここで思わず真田が口を開いた。
「やれやれ、君らは知己だというのに、そんな腹芸をされたら座布団が天から降ってきそうだよ」
「建前というか、場を弁える必要はあるということですよ。それで真

田大尉、お願いしていた例のものは持ってきていますか？」
「ああ。君が『コレ』の最終解除権限を持っているからね」
そう言って真田が指した先には、大きいアタッシュケースが置かれていた。その中に入っているのは、「サード・アイ・エクリプス」――――先日最終調整を終えたばかりの達也専用ＣＡＤである。
「本案件は既存の戦力だけで対応できる案件ではありません。よって、独立魔装大隊より『神将会』に、大黒特尉の『マテリアル・バースト』発動許可を願います」
達也のマテリアル・バーストには〝３つ〟の安全装置（セーフティー）が掛けられている。一つ目は達也の実家である四葉家当主の許可、二つ目は独立魔装大隊のＣＡＤ持ち出し許可、そして三つ目は『神将会』――――最終セーフティーの解除キーを持っている人間による許可。
今回の場合、「サード・アイ・エクリプス」の解除キーを持っているのは悠元だけである。これは、第１０１旅団単独で達也の戦略級魔法の制御を行うのは危険だと上泉家・神楽坂家で判断した結果であった。
悠元に預けられているのは、同じ戦略級魔法師としての判断に加え、神楽坂家当主代行としての権限でもある。そんな力の最終決定権を自分に委ねるのはどうなのか、と内心で愚痴る羽目になったのは言うまでもないが。
「本案件の重要性はこちらも既に認識しております。揚陸艦と〝大亜連合〟の対処は大黒特尉の『マテリアル・バースト』で、それ以外の不測の事態については、私のほうで対処いたします」
風間の言葉に対して悠元がそう返した後、片膝をついて懐からカードキーを差し込み、ケースの上に左手を添える。
「――――臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」
『パスワード、認証完了しました』
三重のロックを解除してゆっくりと開かれるケース。その中に入っていたのは、スナイパーライフルのような形状を持つＣＡＤである。悠元はそれを手に取ると、両手で達也に差し出した。達也はしっかりとした手つきで「サード・アイ・エクリプス」を受け取り、どこ

か不具合がないか確かめていた。そして、風間から達也に指令が下る。
「大黒特尉。『マテリアル・バースト』を以て敵揚陸艦を撃沈せよ」
「――了解しました」
達也が屋上の端に近い場所に立ち、「サード・アイ・エクリプス」を構える。衛星とのリンクによりスーツのモニターには揚陸艦の姿が映し出され、達也は『精霊の眼』で揚陸艦に存在する水滴を照準に捉えた。
「『マテリアル・バースト』、発動」
その言葉と共に引き金が引かれると、揚陸艦は激しい光の球に包まれ……その光が消失した後には、揚陸艦の姿はおろか残骸すら綺麗に残っていなかった。「サード・アイ・エクリプス」は所定の性能を発揮した形となり、これには悠元も一息吐いた。
これで終わるはずもなく、司令部より大亜連合が鎮海軍港に集結している情報が通達され、風間らは対馬要塞に向かうべく悠元に礼をした上でその場を後にした。屋上に悠元以外の存在がいないことを確認した上で、悠元は魔法を発動させる。
「……座標確認。『鏡の扉（ミラーゲート）』発動」
悠元の目前に白銀の長方形が現れ、臆することなくその中に飛び込むと……悠元の姿が綺麗に消え去り、白銀の長方形も瞬く間に消え去った。
◇　◇　◇
次に悠元が姿を見せたのは、佐渡島の森の中だった。
座標連結魔法『ミラーゲート』――固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』の能力を応用したもので、特定の2ヶ所の座標を一時的に〝同一座標〟とすることで長距離移動すら可能とした魔法。
とはいえ、悠元自身はこの魔法をあまり多用しない。理由は表沙汰に出来ないだけでなく、固有魔法ありきなので真似できる人間が皆無なためだ。
悠元は予めこの地点に結界を張ってキャンプの準備までしていた。新ソ連の侵攻時間までまだ余裕があるため、腹ごしらえするためだ。

腹が減っては戦はできぬ、と言うので。
日がすっかり落ち、流石に11月なので外は寒いため焚き火で暖を取っていたところ、通信機の着信音が鳴ったので悠元は意識をそちらに向けた。
「こちら神楽坂です」
『悠元君、私です。独立魔装大隊が対馬要塞に入りました。それと、6時間前にウラジオストクから艦隊が発進したそうです。現在中間線の手前まで来ていると報告を受けました』
聞こえてきたのは千姫の声だった。
どうやら、大亜連合の囮となる形で新ソ連が動いた形になっているようだ。そして、ウラジオストクには〝イグナイター〟イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがいる……悠元は改めて気を引き締めた。
「向こうには自分の権限で『マテリアル・バースト』の発動許可を出しました。まあ、やりすぎない程度であることを祈ります」
『分かりました……心配はしていませんが、気を付けてください』
千姫からの通信が切れると、悠元は丁寧に火の始末をした上で「オーディン」を取り出し、飛行魔法で高く飛び上がった。『天神の眼』で艦隊位置とベゾブラゾフの位置を確認した上で、艦隊の指揮を担っていると思しき艦に通信を繋げた上で、ロシア語で通告する。
「ウラジオストクより出航し、中間線に接近している所属不明の艦隊に告げる。直ちに所属を明らかにし、反転後退せよ。さすれば、追撃はしないと約束しよう」
大規模な海軍兵力の移動については、それが非戦闘目的であれば、領海内での移動であっても周辺国への通告、あるいは国際的に公表するのが慣例となっている。だが、今回のような通告なしで経済水域侵入を行えば、それはこの国に対しての戦闘目的という解釈を余儀なくされる。
このまま進めば、数分もしないうちに中間線を越えて経済水域内に侵入する。これでも穏便な警告をしたつもりだが、返ってきた言葉は明らかな挑発を含んだようなものであった。

『舐めるな！　我々には我々の矜持がある！　ここまで来て大人しく引き下がれば、我々に待つのは死のみだ！　よって、退却など有り得ぬ！』
　恐らく、新ソ連でも対外強硬派の連中が指揮していると思われるが……その言葉で、まるで旧ソ連の政治体制が再生したかのような印象を覚えてしまった。彼らにとって、この国に捕まることこそ恥だと考えているのかもしれない……なら、いいだろう。
　お前らが持っている希望的観測など叶えてやる義理はない、と
「オーディン」の機能を解放する。
「デバイスリミッター、全解除。構築式範囲――――佐渡を中心に半径３００キロに設定」
　悠元が「オーディン」を構えると、その前方に白銀の光の球が形成される。それと同時に、周囲の星空が収束して巨大化していく光と〝夜〟に塗りつぶされていく。その光は艦隊からでも十二分に確認できるほどの代物だった。
「な、何だあれは!?　あのような魔法が存在するのか!?　……〝イグナイター〟にすぐさま連絡を入れろ!!」
　その連絡を入れるまでもなく、すでに発動準備を整えていたベゾブラゾフも悠元の魔法を感知していた。だが、『トゥマーン・ボンバ』の起動式を読み込んで発動させようとした瞬間、注ぎ込んでいる魔法力が急激に吸われているような感覚に囚われていた。
（何だこれは……まさか、これが『殲滅の奇術師（ティーターニア）』の魔法だというのか……っ!?）
　すると、魔法行使の急激なシャットダウンを食らう形となり、ベゾブラゾフは思わずヘッドギアを投げ捨てて、椅子から飛び退いた。ベゾブラゾフの意識は辛うじて保たれており、魔法中断によるフィードバックの被害は最たるものではなかったが、彼は自身の眼に映っていた光景に驚きを露わにした。
　ベゾブラゾフの魔法を補助する新ソ連が誇るスーパーコンピューター。それが跡形もなく〝溶けていた〟。床の一部は、金属が液状化し抜け落ちていた。

「……一体、何が起きたというのだ……」
溶けた金属の塊と、床の焦げた臭いを感じるベゾブラゾフのその問いかけに答えるように、悠元の魔法は既に発動準備を整えていた。
『万華鏡（カレイドスコープ）』による完全規格外の演算領域をフルに利用し、周辺の想子と光子を爆発的なスピードで収束。圧縮想子に第四態の性質を付与することで、通常のプラズマ粒子砲よりも遥かに緩い物理法則の束縛を実現。
『流星群（ミーティア・ライン）』の光波収束術式を組み込むことで、効率的な収束エネルギーの攻撃方法を獲得し、『流星雪景色（ミーティア・スノーライト）』から得たデータにより広範囲を対象とした光波収束を可能とした。
密かに剛三の『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』の事象改変術式も含まれている（魔法自体は、剛三が元継の目を盗んで悠元に教えていた）ため、ベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』の発動をそのまま〝喰らった〟だけでなく、彼と接続していたコンピューターまで溶解したのはこの術式のせいである。
超光速で射出される高圧縮光子により面単位で光を１００パーセント透過するラインを生み出すだけでなく、射出された想子を他の想子に接触させることで、想子を急速圧縮・衝突させて爆発させるという凶悪な性質まで持ち合わせている。
魔法の発動速度は究極の分解魔法である『マテリアル・バースト』と同等クラスであり、まさしく対を成すであろう悠元だけの戦略級魔法。
――超光速素粒子収束魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』
本来魔法のチャージングだけで言うなら時間などいらないが、今回は牽制や警告だけでなく、対馬要塞にいる達也との魔法――『質量爆散（マテリアル・バースト）』との〝同時発動〟が目的。悠元の通信機は『八咫鏡』を経由して対馬要塞の司令室とリンクしている。
通信機から聞こえてきた声を聴き、悠元は神経を集中させる。
「『スターライトブレイカー』、発動」
『「マテリアル・バースト」、発動』
――異なる場所にいる二人の引き金は、同時に引かれた。

達也の『マテリアル・バースト』は鎮海軍港に集結していた大亜連合艦隊を軍港諸共〝消滅〟、悠元の『スターライトブレイカー』は所属不明――――新ソ連の艦隊を瞬く間に呑み込み、その余波はウラジオストク軍港まで〝破壊〟せしめた。

この日のことを、後世の歴史家はこう語った――――『灼熱と極光のハロウィン』と。

来訪者編

仕事を増やすな、と叫びたい

――――『灼熱と極光のハロウィン』

横浜における大亜連合特殊部隊を主軸とした侵攻軍との戦闘。そして、鎮海軍港に大亜連合艦隊が集結していたこととウラジオストクから出港した艦隊――――慣例破りの大規模動員の根拠として衛星画像データ開示を外務省が行った。

〝3年前の復讐戦〟という体での発表とまではいかなかったが、メディア関連はこぞって今回の大亜連合の動きに関して『沖縄防衛戦の報復ではないか？』と憶測混じりの論調が飛び交うほどだった。

国防軍で使用された兵器については、日本政府より『我が国に対しての侵略行為と認められる案件であったため、積極的自衛権の行使として〝戦略級魔法〟を用いた』と公式の声明を発表した。

無論、この事実について国内外から問い合わせが殺到したが、政府からは『魔法や魔法師の詳細については、国家重要機密に属するものであるために回答はできない』という一文を発しただけで、それ以上の言及を避けた。

中には「国家公認の戦略級魔法師として名を挙げるべきだ」という論調もあったが、何もかも魔法ありきという考え方は反魔法主義を勢いづかせかねない。そこに一石を投じたのはＦＬＴ――――「トーラス・シルバー・プロジェクト」による魔法医療技術の発表であった。

魔法治療も含めた医療技術の進歩は、いつの時代も重労働となる医療の現場からすれば歓迎ムードであった。一方、既得権益である病院幹部や医師会の役員は難色を示していたが、１１月１日に施行された医療関連法案により、国家事業として魔法医療技術の研究が進められることとなり、大人しく認めざるを得なかった。

同日、ＦＬＴが今回投入されたサイオンレーザー治療を非魔法師の患者に対して行った臨床試験の結果を公表。今までのレーザー治療と比較して完治率が２倍という結果に、トーラス・シルバーの名はＣ

ＡＤ技術だけでなく非魔法師に恩恵を与える功績を打ち立てた。
そこに加えて、各家電メーカーからのプレスという形で新型業務用家電「シルバー・ブライト」が発表された。基幹部品となる部分はＦＬＴが担い、外枠などの設計や製品組立を家電メーカーが担う分業制を採用。ＦＬＴが日本きってのＣＡＤメーカーとして地位を向上させた形となった。
西暦２０９５年１１月２日。本来であれば魔法科高校の生徒も授業があるのだが、先日の大亜連合侵攻（プラス新ソ連の艦隊による経済水域侵入）により数日の臨時休校となっていた。
非公認ではあるが、戦略級魔法師としての仕事を終えた悠元の次の仕事は……事後処理という名の面倒事であった。
「――――出征？」
「はい。表向きは講和条約を迫るための示威的行為、となります」
東京の神楽坂家の別邸にて、悠元はこの国で唯一の戦略級魔法師である澪を出迎えた。本来なら、付き添いとして来ていた洋史も来ているのかと思ったが、澪は思うところがあって洋史の同伴を強く断った。その代わりとして、悠元は雫と姫梨に同席してもらうこととした。
なお、深雪については週末に四葉本家へ赴くため、そちらに集中するように言い含めておいた。いくら『神将会』とはいえ、今すぐ政治的な案件に関わらせるつもりなどなかったからだ。
「暫くは東京を離れることになりそうで……悠元君と離れるのが嫌なのー！　なんでそんな他人行儀なのよー！」
「……とうとう化けの皮が剥がれたか」
「えらく冷静な対応だね。相手は十師族で戦略級魔法師なのに」
「あ、あはは……」
そんな風に言ってのけてしまう雫も大分神楽坂家の家風に染まってきたのかもしれないし、母親の強気な性格の影響かもしれないが……取り繕うのをやめた澪の様子を見て、姫梨も苦笑が漏れていた。
何せ、公式には自力で歩けない筈の澪が、車椅子から飛び降りて悠元に抱き付いているのだ。これを見て何かがあったと察しないほう

が無理、というものだろう。抱き付いて満足したのか、澪が大人しく車椅子に座ると、先ほどのような様子に戻っていた。
「ふう……それでですね」
「無理あり過ぎだろう。誰か、ハリセン持ってきて」
「やめて!? 折角成長してきた胸が縮んじゃう!?」
「悠元……」
「冗談だよ(ハリセンで頭叩いたら胸が縮むってどんな迷信なんだ、と言わざるを得ないが)」
真面目な話をするはずだったが、いつしか話が脱線している。雫の言葉を聞いて、悠元も仕方ないと話を戻すことになった。悠元が澪に対して敬語を使わないのは、神楽坂家当主代行として接しているだけでなく、九校戦の時は周りに五輪家の使用人たちが待機していたことに起因する。
いくら結界とはいえ、その時はまだ付け焼刃程度のレベルだったから、簡単な結界が限界であった。転生特典でその辺を超えられるとはいえ、根本的な理論を学ばないと応用すらできないのは困る……というのが、悠元の持論というかプライドに近いものだ。
「政府の発表を聞き、真っ先に心当たりとして浮かんだのは悠元君ぐらいだった。このことは父も勘付いているとは思うけれど、今の悠元君は十師族ではない上、その影響を受けることがないことも理解してる」
「成程。仮にそうであるとして、誰かに相談しますか?」
「流石に無理よ。私にとって……命の恩人を差し出したくないもの」
澪の〝恋する乙女〟のような様相を見て、反応したのは雫と姫梨であった。これは、どの道自分たちと同じようなことになるであろう、とお互いに顔を見合わせて無言で頷いた。
「ちなみに、立ち寄るのは神楽坂家だけですか?」
「一度屋敷には戻るけれど、洋史を連れて七草家と三矢家には挨拶させてもらうことになるかな。七草家は一応婚約の絡みもあるから」
「婚約……七草先輩絡み?」
「正確には〝候補〟ってだけだとそこの人に聞いた……彼らが進展し

ないせいで俺にとばっちりが来ているのは否定できないが」
「私、そこの人じゃないもん！」
　立ち寄る家の順序を格の順番にしたのは好意が持てると思うことはさておき、今日は魔法科高校も臨時休校なので、真由美はおそらく在宅しているだろう。澪には予め真由美が今回の案件に殆ど関わっていないことを説明してある。
　実を言うと、三矢家経由で悠元に対しても七草家からの招待状は来ていたが、その返信は保留にしていた。理由は単純明快で、四葉家への対抗意識でこちらを貶めたことは未だに忘れていないからだ。
　ホワイトデーの時に七草家を訪れはしたが、その後も本来非公式であった克人との試合から実家を追及した件に加え、神楽坂家への養子の件でも異論を唱えたのだ。いくら三矢家が四葉家との友好関係を持っているからとはいえ、当主のエゴイズムからくる嫌がらせを好意的に見れたら、それは一種の天才だと評価したくなる……いや、ドが付くほどのマゾヒストかもしれない。
　立場的には同じ元「三」の数字を冠する人間だが、昔の恋をいつまでも引き摺っている性質の悪い妻子持ちの気持ちなど、悠元には到底理解できなかった。その辺は転生前に付き合っていた彼女を身内に奪われる形となったが、結果的には自分がその事実を受けいれた経験が大きく影響しているのだろう。
　昔の恋を引き摺って振り向かせようとする人間の気持ちを、昔の恋を引き摺らずに身を引いた人間が理解しようとすること自体難しい、という根本的な問題もあったりするが。
「分かってますよ、澪さん……先日放たれた戦略級魔法の片割れ――――新ソ連に対しての魔法攻撃は自分が行ったものです。皇宮警察・特務隊『神将会』として、国難を齎すであろう外敵を排除したまでです」
「……え？　『神将会』？　はい？」
　悠元が言い放ったことに、澪は自身の処理能力が追い付かずに混乱していた。澪自身の予測が当たっていたことに加え、彼が『神将会』の人間であるという事実は彼女にとって衝撃的だったのだろう。
「悠元さん、五輪さんが混乱してますよ？」

「彼女だって国家公認の戦略級魔法師なんだがなあ……女性の戦略級魔法師って魔法以外ポンコツになる傾向でもあるのか？」
悠元がそう述べた理由は、同じ女性の戦略級魔法師であるアンジー・シリウスのことだった。数年前、剛三が〝道場破り〟と公言してＵＳＮＡの軍事基地に堂々と乗り込んだ時のことだ。
悠元は止む無く剛三を探しにビルの中を歩いていた。その当時は気配を偽る歩き方を会得していない頃だったため、軍人に捕捉されるのは致し方ないことだった。それだけならばまだよかったのかもしれないが、剛三が入っていった場所の先にあったのは、本来魔法練習用の秘密演習場だったのだ……それも『スターズ』専用の演習場にだ。
「――殺気!?」
それに気付いて慌てて仮面（魔法師での戦闘を想定して、身バレを防ぐためのもの）を被って床を踏み抜いて下の階に到達すると、魔法と思しきものによる衝撃波だったため、慌てて『ファランクス』で防御した。衝撃波が収まって踏み抜いてきた穴の先に見えるのは、綺麗な青空とＣＡＤを構えてこちらを見ている戦闘服姿の人物だった。
「何者ですか。速やかに投降しなさい！」
「……」
威力こそ抑えられていたが、間違いなく戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』であるという「天神の眼」の解析データを得た……そして、彼女はこちらに投降の意思がないと見るや、再び魔法の発動準備に入った。その起動式は――紛れもなく『ヘビィ・メタル・バースト』であった。
「いくら演習場とはいえ、対人戦闘に問答無用で戦略級魔法を放つ奴が……ここにいたか、このポンコツ魔法師が！」
定義破綻を起こさせるため、悠元が取った手段は――強烈な重力で全てを押し潰す天神魔法『劫地破鎚（ごうちはつい）』を発動させて『ヘビィ・メタル・バースト』の事象干渉力を喰らい、辛うじて残っていたビルの原型を全て押しつぶした。これによって足場を失った形のアンジー・シリウスは、地面に墜落して気絶する羽目となった。
閑話休題。

「それはないと思うけど、心当たりがあるの？」
「世界最強（笑）と名高いスターズの現総隊長、アンジー・シリウス。彼女は澪さんよりもポンコツぶりが酷いからな」
「会ったことがあるんですか？」
「数年前にな。出合頭に戦略級魔法撃たれたから、足場無くして気絶させた」
　悠元の言葉を信じるのなら、数年前の時点で世界最強クラスの魔法師――――戦略級魔法師を破ったという事実が存在することになる。戦略級魔法を撃たれても生き残っただけでも驚きなのに、その人物に勝ったという事実は澪を驚かせていた。
「あの、悠元君……どうやって渡航したんですか？」
「うちの爺さんが見識を広める目的で国外に連れ出したからな。勿論普通に国際便の飛行機を使った。この国の政府ごときで爺さんや母上は止められないよ」
　そもそも、魔法師の管理が厳しくなったのは、魔法という存在は国益と直結しうるからだという思想が、群発戦争を通して世界中に浸透した影響である。それより以前に、『護人』としての立場である面々に今上天皇以外の拘束力は意味を成さない。
　いくら親戚だからと言っても、その魔法力が十全に引き継がれるわけではない。血縁が魔法師の証左だと安直に考える人もいるだろうが、そんなことが起こりうるのだったら、世界中の殆どの人間が魔法師になっても不思議ではないと思う。
　話が逸れた。
　当時は三矢の姓を名乗っていなかったし、魔法師としての実績は証拠隠滅するか周囲の身内に被せていた。なので、国際便の手配は問題なかったし、剛三に至っては監視していた公安の捜査官を物陰で〝説得〟して黙らせていた。
　今だから話すが、剛三の大規模魔法行使が1回で済んだこと自体奇跡だと思う。そもそも、カーボンナノチューブに材質変化させた木刀を１００本以上分身させて降らせている時点で、それ自体戦略級魔法だろう。

彼に物を持たせたら、全てのものは凶器と化す……本来武器にならないであろう豆腐をはじめとする柔らかい物であってもだ。一例を挙げると、買ったばかりのハンバーガーを偶然遭遇したひったくりに投げつけた結果、ひったくりは全身複雑骨折となっていた。

砂を握って投げればショットガン同然、トマトを投げつけてのヘッドショットでテロリストの頭部破裂、大の大人でも制御できない闘牛を片手で抑え込み、釣竿で潜水艦を釣り上げる……これだけでも、剛三がやってのけたことの〝氷山の一角〟でしかないし、闘牛が癒し枠になるという現実である。

もっと驚いたのは、伝統あるイギリス王室やかのローマ法王ですら剛三に頭を下げたことである。達也以上に剛三が「なろう系主人公」やっているような気がすることには……考えるのを止めた悠元だった。

澪が帰るのを見送ると、悠元は一息吐いた上で手元にあるベルを鳴らす。

すると、姿を見せたのは本屋敷にいるはずの忠成であった。

「悠元様、お呼びでしょうか？」

「てっきり別の使用人が来ると思っていましたが……この手紙を七草家に届けてください。それと、車の準備をお願いします」

「分かりました」

忠成は悠元の意図を察しつつ、手紙を受け取ると速やかに部屋を去って行った。入れ違いとなる形で姿を見せた雫と姫梨が悠元に問いかけた。

「悠元、出掛けるの？」

「七草家にな。先輩も口は堅いが、相手はそれ以上の〝狸〟だ。それと……四葉家の件で探りを入れていた釘差しをしとかないといけなくなった」

「いつ気付いたのですか？」

「実は、あの家のボディーガードの一人に式神を忍ばせていたんだが、そこから得た情報だ」

厳密に言えば、七草家が雇っている名倉（なぐら）という人物が、四葉家に対

して探りを入れていることに気付いた。
　自分の場合は、三矢家が国防軍と関わりを持っていることから、仮に深く探られても肝心な部分を見られない限りは痛くならない。だが、四葉家が独立魔装大隊と接触している情報から、達也のことを掴んでくるのも時間の問題だろう。
「神楽坂家が四葉家のスポンサーの一角を担う以上、余計な諍いは御免被りたいが……深雪が七草家を凍らせたい、などと言っていた気持ちが少しは理解できる」
「今の深雪がそんなことしたら、綺麗な氷の柱ができそうだね」
「『神将会』において、潜在能力は悠元さんの次に位置しますからね……同伴はどうします？」
「相手が相手だから、探られる部分は浅いほうがいいだろうな。二人は留守番を頼む。七草家には俺一人でいい」
　そう言って悠元は私室に移動すると、少し着崩したような灰色のシャツに黒のスーツを身に纏う。この格好は神将会の公的な制服と言ってもいい。尤も、格式高い儀式となればネクタイまで身に着けるが、今回の訪問相手にそのような礼儀など不要と考えていた。
　なお、その恰好を見た二人に色々写真を撮られたのは言うまでもない。
「……深雪、ご機嫌だな」
「ふえっ!?　そ、そんなことは……あったりなかったりしますかもしれません」
　その写真は雫を通して深雪にも送られ、達也からの問いかけに対して意味不明な日本語の返答になるほどであった。

政に疎い者、娘に悩む者

七草家の屋敷――――その応接間にて、三人の人物が対談をしていた。そのうち二人は十師族・五輪家の長女である五輪澪、そして長男である五輪洋史。彼らを迎え入れたのは同じ十師族であり、この屋敷の主――――七草家現当主、七草弘一である。

彼は室内であるにも拘らずサングラスをしている。その事情に関しては、魔法師である人間なら知らぬものはいない事件の傷跡を隠すためのもの……だということは、公然の事実となっているためにそのことを咎める人間など存在しない。

「事情は既に伺っております。務めを果たされるのは大変なことだと思われますが、どうかご自愛ください」

「ありがとうございます、七草殿。できれば香澄ちゃんや泉美ちゃんにもご挨拶したかったのですが、生憎ここ最近のドタバタが多いものですので」

「娘らには、私のほうから伝えておきましょう」

澪と洋史が大陸方面への出征をすることは、当然弘一の耳にも入っている。国家公認の戦略級魔法師である前に十師族である以上、そのネットワークで既に把握していた。澪の言葉に対して弘一がそう述べたのは、最近距離を置きがちな娘らとの歩み寄りを図りたい、という父親としての思惑があるのかもしれない。

「高望みかもしれませんが、弟が三矢の嫡男殿のように好いた相手と連れ添っているのなら、私もより安心して任務に臨めるのですが」

「姉さん……それは今言うべきことではないでしょう」

澪がそう述べた理由には、真由美のことが念頭にあると勘付いている人間は、おそらく弘一だけであろう。

以前、澪と三矢家の三男が婚約を結ぶという話になったが、それは成らずに立ち消えとなった。それを好機と見た弘一は泉美との婚約を結ぶことに成功した。尤も、その話は弘一の失策によって婚約破棄となり、当事者の娘から冷たい目を向けられる羽目となった。

洋史は澪を窘めるが、それをどこ吹く風と言わんばかりに受け流す

姉の様子に、弟が折れる形となった。
澪は元治の結婚式に参列した（五輪家当主代理という形ではあるが）折、元治とその妻である穂波と対面している。魔法師では極めて珍しい〝親子二代の恋愛結婚〟に、魔法師社会全体が羨望の目を向けるほどだったのは言うまでもない。
それを見て、自分が好いている相手に振り向いてほしいと努力を積み重ねている。なお、長年の成長障害の影響で背丈が殆ど伸びないことに絶句したのは……彼女しか知らない秘密である。
すると、扉のノック音が聞こえて弘一が入室を促すと、そこには余所行き用のワンピースに身を包んだ真由美が姿を見せ、澪と洋史に挨拶をする。
「いらっしゃいませ、洋史さん。澪さんはお久しぶりですね」
「ええ。九校戦は直に見に行きましたが、ご挨拶できなくて申し訳ありません」
澪は真由美が猫を被っているということを見抜いていた。それは、自身もそうであるという自覚からくるものであり、恋のライバルになりうる可能性を秘めた相手。とはいえ、人生経験の差で巧みに隠し切っている澪の心情など、真由美に知る由もないのだが。
真由美が声を発する前に洋史が立ち上がり、テンプレートともいえるやり取りを交わしたのち、真由美と洋史はソファに座る。
澪らが今回訪問した目的を聴きつつ、真由美は思案した。
（にしても、何を聞きたいのかしら……もしかして、とは思うけれど）
澪が戦略級魔法師として海軍と同行し、大亜連合との講和条約締結の示威行動を起こすことは既に決定されているが、現時点では機密情報のために弘一から念を押すように言われ、真由美は言葉と頷きで同意を示した。
出征という言葉に表情こそ驚きをみせたものの、言葉に発しなかったのは〝彼〟のことが念頭にあったからだ。とはいえ、令嬢として失するような態度であったため、反射的に謝罪の言葉を口にして頭を下げた。
今回の一件は、日本側からすれば領土的野心など持ち合わせていな

い。未だ〝日帝憎し〟の思想の火種が燻っているところに爆弾なんて投げ入れれば、忽ち大陸が火の海と化すのは想像に難くない。
澪が出向くのは、国としての力の誇示と見れば理に適うが、まるで澪を東京から遠ざけたいようにも見えてくる……と考えていると、外部からノック音が聞こえてきた。
『失礼します、旦那様。お客様がお見えでございますが……』
「すまないが、今は別の客人を出迎えているため、少し待ってもらえるように伝えてくれるか？」
『それが、神楽坂家当主代行を名乗られておりまして。同席している五輪家の方々にもご挨拶をと……』
何故そのことを知っている、と弘一は突然の来客――それも、神楽坂家の人間という事実に思案していると、これを聞いた真由美が表情を変えていることに気付く。
「真由美。心当たりがあるようだな？」
「……恐らく、悠元君です」
「そうか……こちらに招くように伝えてくれ。澪殿に洋史殿もよろしいでしょうか？」
「ええ、構いません」
「はい……」
弘一の問いかけに対して澪はハッキリと答えたが、洋史はどこか嫉妬を見せるような口調が混じっていた。何せ、その当該人物は自分が気にかけている人物の血縁上の弟にあたるからだ。
使用人が弘一の言葉を聞いて少し経った後、その人物こと悠元が入ってきた。
「七草殿、突然の訪問となったことはお詫びいたします。ですが、私も思うところがあって訪問させていただいた次第です。空いているところに座っても宜しいでしょうか？」
「ええ……して、神楽坂殿。そのご用件とは一体何なのでしょうか？」
弘一としては、最も探りを入れたいであろう人物の一角がいきなり目の前に現れたのだ。とはいえ、ここには弘一だけでなく真由美もおり、五輪家の人間である澪と洋史もいる。なので、恐る恐るといった

感じに問いかけた弘一の言葉に、悠元はこう言葉を発した。
「簡単なことですよ。余計な探りを入れられてゴタゴタになるよりは、こちらからある程度の情報提供をすることで〝手打ち〟にするためです。まず、先月末に放たれた2つの戦略級魔法……その片割れを放ったのは自分です。このことはそちらにいる澪殿にも話しました」
悠元の言葉に周囲の人間は驚愕に包まれる。政府が発表した2発の〝戦略級魔法〟のうち、その片方を彼が使ったという事実。これはつまり、悠元の元実家である十師族としての三矢家の地位を自ずと押し上げる結果となる。それだけでなく、神楽坂家次期当主が戦略級魔法師という力の誇示を周囲に対して行ったにも等しい。
悠元が七草家当主である弘一に対してこの事実を公表したのは、今までの迷惑行為に対する〝返答〟そのものといってもいい。今年の正月に起きた十山家の叛意ともいえる誘拐未遂、そしてバレンタインの時の迷惑行為に入学式の介入、加えて神楽坂家入りの妨害。これらの出来事が〝この順番〟で起きたことも今回の釘差しに至った原因の一端である。
国防軍がらみだけなら、今まで三矢家に大きな顔をしてきた十山家のスタンドプレーの範疇で済んでいただろう。だが、バレンタインの一件で三矢の人間だと知られることになり、九島家からも今まで以上に目をつけられる結果となった。
全部が全部七草家が原因とまではいかないだろうが、弘一と烈の繋がりからその可能性を強く疑わざるを得ない。ならば、敵対するという意味がどういうことなのかを示すのが一番手っ取り早い。
このネタで強請ったり排除しようとするのならば、相応の態度を以て臨むだけだ。
「悠君……今のは、本当なの？」
「自分は神楽坂家当主代行というだけでなく、『神将会』総長としても此処に出向いています。秘密を知った側である真由美嬢や澪嬢だけでなく、七草殿と五輪殿にも相応のリスクを負ってもらう、ということです。ご理解いただけましたか？」
「え、ええ……（……本当に、年下なの？）」

今までの雰囲気がガラッと変わり、敵意を見え隠れさせるような様相の悠元に、真由美は年上であるのに自分が年下のような感覚が纏わり付いていた。それは自分の容姿からくる理由ではなく、実年齢という意味からして悠元が年上のように思えてならなかった。
「……神楽坂殿。先程『神将会』と名乗られたことは、本当のことなのか？」
「無論ですよ、七草殿。予め言っておきますが、十文字家を通して干渉できるとは思わないことです。ここまで明かした理由は、聡明な貴方なら気付くでしょうから口にしません。もし、今話したことを材料にして強請ったりなどした時は……滅んでもらうだけだ、と思ってください」
「っ……」
悠元が戦略級魔法師であることと『神将会』のことを知っているのは、身内以外ならば四葉家（真夜と深夜、達也と深雪）、独立魔装大隊の幹部クラス（風間、藤林、真田）に限定される。彼らと弘一と真由美、洋史と澪以外にその事実を知るものが出た場合、真っ先に疑わざるを得ないのは四人のうちの誰かとなる。
元実家の三矢家、母方の元実家である上泉家、現在の実家である神楽坂家は揃って家族に甘いが、秘密を厳守する義理堅さは悠元も信頼している。四葉家も徹底した秘密主義を持っているため、信頼を置いている。独立魔装大隊の幹部たちに関しても信頼している。だが、それ以外に関しては信用してもいいか疑問に残る部分が多いのだ。
「まあ、話せる部分はこれだけです。『神将会』のほかのメンバーや戦略級魔法の詳細を教えろというのは無理な相談だと思ってください」
「悠元君、それはどういうことなんだ？」
「本来なら、今話したことも国家重要機密に類するものであるということも理由の一つですが……深く探りを入れるのであれば、三矢家、四葉家、上泉家、神楽坂家を本気で敵に回す覚悟があると判断せざるを得ません」
悠元の言葉は、真由美に対しての釘差しも含まれている。
神将会の所属メンバー全員が神楽坂家の係累にあたる上、上泉家は

先代当主が四葉の先々代当主（先代当主とも仲がよかったらしい）と親友であったことと、四葉家のスポンサーをしている一角が神楽坂家にあたる。
「悠君、どうしてそこで四葉家が出てくるのかしら？」
「神楽坂家は四葉家の前身である元第四研のスポンサーですし、母上は四葉の現当主を実の娘のように思っていると聞き及んでいます。神楽坂の依頼ならば四葉も快く引き受けてくれるでしょう」
　芋蔓式というよりは、四葉という爆弾を起動させれば連鎖的に『護人』まで波及することになる、と言ってもいい。その危険の一端を七草家は別の形で経験しているのだから、これ以上四葉に対して探りを入れるのを止めろ、という遠回しの警告である。
「……何故、四葉を庇われるのですか？」
「生憎ですが、四葉のことを何も理解しようとしていない人に、答える義理は持ち合わせていません。危険だからと言って遠ざけたり排除するようなことをしているから、諸外国に付け込まれるんですよ……それこそ、〝3年前〟のように」
「もしかして、悠元君は沖縄にいたのかい？」
「ええ。七草殿と澪殿は父から聞いているでしょうが、長兄の元治殿と自分が沖縄にいて、大亜連合の侵攻に巻き込まれました。兄は相手の妨害を見事に排除し、自分も十師族に連なる身としてあの戦いに参戦したまでです」
　自身が国防軍の特務士官であることは伏せつつ、その時は微塵にも思っていなかった〝十師族としての責務〟という言葉を口にした。当時は12歳で三矢の名を名乗れなかった仕来りがあり、それに加えて一緒に行動していた達也のこともある。
　あの時は、ただ生き残ることだけを念頭に入れて殲滅していた。躊躇えば死ぬような状況で、相手にかけてやる情けなどない。
　深夜の存在は無論弘一も理解しているからこそ、達也と深雪が十師族という結論に至るのはそう遠くない。というか、33年前の事件当時の年齢を考えれば真夜と深雪の繋がりを推察できそうなものなのに、至っていないのは真夜への感情が歪になっているせいかもしれな

い。

弘一の問いかけに対して、悠元は普段でも滅多に見せない怒りを滲ませつつその問いかけを切り捨てるように返した。深雪の言い分が的を得ている……と、この時ばかりは内心で皮肉った悠元だった。

「そもそも、横浜で使用した魔法に関して言えば、その大半が最低でも戦術級相当の代物です。下手に話して関係者を軍事的に縛り付けることを自分は許容しません。ただ、その代わりと言っては何ですが……こちらを差し上げておきます」

悠元がそう言って懐から取り出したのは、数枚の紙の束。弘一がそれを手に取って目を通すと、紙を持っていた手が震えていることに真由美が気付く。彼を驚愕させるほどの内容は気にかかったが、それを口に出す前に弘一が悠元に問いかけた。

「この術式と資料を差し上げるとのことですが……よろしいのですか？」

「構いません。その程度の術式ならば神楽坂家の持つ秘密の一角にすらなりませんから。それに、大亜連合を動かして澪殿を東京から遠ざけたい連中がいる以上、神楽坂家や上泉家だけでも限界はありますし……こんな大事な時期に内ゲバなんてされたら、困ることのほうが多いので」

悠元が描いている計画は、今後渡来してくることになる「パラサイト」を念頭に置いている。原作だと同じ魔法使いの家系であっても協調姿勢が見えずにバラバラであった部分が多かったため、十文字家現当主を治療し、七草家当主に対しては対パラサイトに特化した拘束術式を渡した。

そして、資料に書かれているのはパラサイトに関する資料であり、その大本は全てイギリスから取り寄せた研究資料を翻訳したものだ。加えて、それが発生する時期を〝判断材料〟として明記してある。ようは、パラサイトに関する研究は認めるが、その対価として余計な諍いを起こすな、という忠告。

ひとまず自分ができる範囲での仕事はしたと判断して、悠元が静かに立ち上がったところで洋史が声を掛けてきた。

「悠元君。先程君が言った言葉だけれど、姉さんが東京にいられたら困る連中って一体誰なんだ？」
「洋史、その質問は……」
「構いませんよ、澪殿。……北と西の大国が動いたとなれば、次に動くのは……これ以上は何も言いません。それでは、失礼いたします」
そこまで親切に教えるわけにもいかず、悠元は言葉を切って軽くお辞儀をすると、応接間を去って行った。
残された四人は、彼の言葉の続きにあるものを理解していた。だが、東の大国はこの国にとって〝同盟国〟……その国が動く意味を考えるならば、その一端に悠元が含まれていることは明白だ。
しかし、かの国がそこまでするのかという疑問は……公の権力を捨てたが故に、政治的駆け引きに疎い彼らが出せる答えの範疇を超えていた。
余談だが、その日の夕食で悠元が七草家に来ていたことを真由美が口を滑らせ、それを聞いた泉美が凄みのある笑顔で弘一と真由美に問い詰めた出来事は……彼らと香澄、そして名倉だけの知る一幕であった（使用人らは空気を読んで、速やかにその場から退避していた）。
◇　◇　◇
後片付けに追われていたのは神楽坂家に限った話ではない。上泉家も無論だが、その縁を持つ東道家――現当主である青波は、吉田家を訪れていた。彼を応対したのは当主である幸比古で、出された茶を一口啜った上で青波が切り出した。
「先日は敵が酷い有様であった。聞けば、其方の子息も彼ら相手に奮闘したとのことだが」
「私も聞いたときは血の気が引きました。相手がテロリストとはいえ初めての人殺しになったので危惧はしていましたが……今日は魔法科高校が休みのため、門下生と訓練をしている最中です」
「成程。十半ばの歳で肝も据わっているとは、中々に面白いな」
青波は養子に迎えようとしている幹比古の事情について詳細に調べ上げていた。彼にそこまでの変化を齎したのは千葉家の娘も大いに関係しているであろうが、彼の親友である神楽坂悠元が変化の原点

であるだろうと推察していた。
「ところで、吉田殿。連絡を受けた件について真偽を問うわけではないが、間違いなくそう答えたのか？」
「はい。急ぐことでもないと私は述べましたが、閣下のお話を受けると快く返事をしました。どうやら、先日のことで思うところがあったのかもしれません」
それは幸比古だけでなく青波も同意見だった。元々上泉家と東道家の取決めとはいえ、一先ずは年末に本人の考えを聞いてみるという状態であったからだ。
だが、論文コンペの翌日に幹比古は幸比古のもとを訪れ、東道家への養子の件を受け入れると表明した。それを聞いた幸比古はすぐさま青波に連絡を入れ、今現在に至るという形だ。
「恐らくは三矢家の三男――神楽坂悠元に影響されたのだろう。だが、父親として其方は宜しいのか？」
「私のような苦しい思いをしたところで、息子らに遺恨が残るだけです。それに、幹比古が神楽坂家との繋がりを持ってくれた以上、高望みするのは精霊魔法を極めることだけにすべきだと思ったまでのことです」
幸比古が経験したことを実の子らに負わせるのは心苦しかった。現に二人の息子はお互いに切磋琢磨するような形で実力を高めあっている。だが、吉田家の家督が一つしかない以上、幹比古が大人しく身を引く選択をするのなら、止めることこそ家を滅ぼすことになりかねないと幸比古は判断した。
「それに、幹比古が別の家で神祇魔法を残せば、吉田の血脈は自ずと保たれることになります。しかし、閣下は宜しいのでしょうか？」
「……実は、今回の話を聞いた妻が子息に会いたいと強請ってきおった。娘も顔写真を見て惚れたそうだ」
今回の場合、本来なら幹比古が入り婿となるはずだったが、青波の妻が幹比古を東道家の養子にしたいという話になってしまった。そんな性格の一端は間違いなく剛三の妻……いや、千姫の姉譲りだと青波は思っている。

しかも、幹比古の顔写真を見た娘も幹比古に一目惚れし、彼に会おうとして吉田家の道場に入門しそうになった。だが、当の幹比古本人は伊勢家が養女として迎え入れる同じクラスの女子に惚れている。彼らを婚約させる段取りは既に水面下で進んでおり、幸比古にもその許可を既に取っている段階だ。

なお、それを聞いた娘は「その子とも会ってみたい。なんなら、私が愛人枠でもいいし」と大胆に発言して、海千山千の巧者である青波が卒倒しかけたことは、東道家だけの秘密である。

「東道家の魔法のこともあって第一高校には進学させなかったが、娘の機嫌を損ねるわけにもいかんのでな……三学期のはじめに転入させることとした。とはいえ、なまじ隠すのが下手なので、恐らく一科生での転入になるだろう」

「……うちには娘がいませんので、閣下の心情をご理解するのは難しいですが」

「気にするな。八雲のところで迂闊に言えることでもないからな」

吉田家が『九頭龍』の役目を担っていることを青波は当然知っている。だが、青波からすれば『九頭龍』の長を担う八雲は、好敵手ともいえる人物である。

３０代とも思えるあの外見で忘れがちだが、八雲は実年齢５０代――青波とは割と年齢が近い部類に入る。実を言うと、青波は一時期八雲の師に師事していたことがあり、八雲とはその頃からの付き合いである。

人の弱みを知るとからかわずにいられない性格だったため、青波からすれば弱みを見せたくない人物の筆頭が八雲になる。立場上弱音を吐くのが難しい青波の心情を察し、幸比古は苦笑を滲ませつつ青波の言いたいようにさせるべきだ、と判断したのだった。

伝染する常識外の系譜

南アメリカ連邦共和国。通称はＳＳＡもしくは南米連邦と呼称されるようになったこの国の歴史は浅い。

２年前――西暦２０９３年に地方政府による小規模のゲリラ戦が勃発し、前身となるブラジル政府が対応した折、他国の魔法師を巻き込んだ。それを知った人物が地方政府に乗り込んで『対話』をすることになり、１ヶ月もせずに各地方政府が降伏。大規模な軍事衝突にまで発展しなかったのは、ＵＳＮＡという強大な勢力を誰しもが無視できない現実を理解していたからだ。

ブラジリアにて開かれた講和会議で、ブラジル政府を主体とした連邦共和制が全会一致で可決。その後、選挙の結果によって旧ブラジル連邦共和国出身の南米連邦初代大統領ディアッカ・ブレスティーロが誕生した。

第三次大戦前に存在していた南米の国が合従し、大勢力となっているＵＳＮＡに対抗するための基盤が完成。大統領に就任したディアッカの初めての仕事は、この功績を成した人物に対しての恩賞だった。

とはいえ、他国の魔法師の力を借りたとなれば国際問題になりかねないことに加え、襲撃された魔法師は未成年ということもあり、彼に対しては勲章の授与だけに止めた。その代わり、もう一人の功労者である上泉剛三を南米連邦の英雄として盛大に歓待し、メディアでも大きく取り上げさせた。

西暦２０９５年１０月３１日の正午頃（日本時間では同日の深夜）。

南米連邦首都・ブラジリアにある大統領府の一室で、偉丈夫な金髪の男性が書類を相手に睨めっこの様な様相を呈していた。そろそろ執務を切り上げようとした男性――連邦共和国大統領ディアッカ・ブレスティーロの元に、秘書官が駆け込むようにして執務室に飛び込んできた。

「し、失礼します！　大統領閣下、緊急の報告が日本の大使館より入りました！」

「日本の？　……報告を聞くから、少し落ち着いてくれたまえ」
「は、はい……」
　秘書官の言葉を聞いて再び椅子に座るディアッカだが、急かす様なことはしなかった。ブラジル時代のゲリラ戦で巻き込まれた経験により、多少の事態でも落ち着いて行動できるようになっていた。そもそも、その後のごたごたが大変であったのは言うまでもないが。
　秘書官はディアッカの言葉を受け取り、息を整えたところで踵を正して報告を始めた。
「大亜連合と思しきテロ部隊が横浜へと侵攻しましたが、日本側の人的被害はほぼなかったとのこと。輸送艦に偽装した敵揚陸艦は国防軍の魔法師部隊によって撃沈したとのことです。そして……」
　大亜連合に対しての先制攻撃で、日本側が戦略級魔法を使用。鎮海軍港は〝消滅〟した。その攻撃で大亜連合の戦略級魔法師が死亡したという情報も流れてきているが、真偽は不明という報告も伝えられた。
　その情報に加えて、佐渡島に侵攻しようとしていた〝国籍不明〟の艦隊が別の戦略級魔法によって消え去ったという情報も齎された。
　ディアッカとしては、太平洋を挟んだ向こう側の出来事なので、それがすぐにこちらに対しての脅威となる可能性は極めて低いと感じていた。そうでなければこのような情報など直ぐに入手できるはずもない。
「そうか……大使館に情報を寄越した提供元は？」
「上泉家とのことです」
　その名を聞いて、ディアッカは少し思い耽った。この国が成る為の礎を作ってくれた人間によるこのお節介をどう捉えるかによって、この国の今後を左右しかねない……彼はそう感じていた。
　少しの沈黙の後、ディアッカはゆっくりと……そしてしっかりとした声を発した。
「その戦略級魔法の如何はともかくとして、地方に目を光らせておけ。反魔法主義の連中が息を吹き返すやもしれぬからな。経済政策の立案と予算編成を出来る限り急ぐように頼む」

「は、はい。それと、ＵＳＮＡからこちらに対して問い合わせがありましたが、如何なさいますか？」
秘書官からの言葉に気が早い、とディアッカは内心で呟いた。こちらとて日本の戦略級魔法師の存在など剛三や公的になっている五輪澪以外に知らない。剛三と共にいた彼ならば……という可能性も捨てきれないが、憶測で語る危険ほど怖いものはない。
（やれやれ、剛三殿と頻繁に連絡しているわけでもないというのに、北の連中は疑心暗鬼の塊だな。いや……世界の覇権を握りたい欲求でも再発したのか。現大統領の祖先が脱却した道を戻すなど、軋轢が生じるだけだというのに……）
ようやく一つとなった南米連邦でも問題がないわけではない。難民の問題は徐々に解決しつつあるが、経済問題などの喫緊的な課題が多い。
だが、そこに手を差し伸べてくれたのは日本や東南アジア同盟、インド・ペルシア連邦、アラブ同盟といった大国からの脅威を感じる者たち。表向きの同盟というよりは非魔法分野での経済協力の範疇だが、それでも成立したばかりの国にとってはありがたい話だった。
ＵＳＮＡとは軍事的な同盟の話も模索されているが、戦略級魔法師がいるとはいえ軍事バランス的に弱い現状で同盟を結べば、確実にＵＳＮＡに取り込まれる公算が大きい。『シンクロライナー・フュージョン』の魔法提供をしろ、などと無茶な要求をしてくることも可能性の一つして考えられる。
「にしても、ＵＳＮＡからか……大統領府か？　それとも国防総省（ペンタゴン）からか？　はたまたは『スターズ』直々にか？」
「いえ、それがＮＳＡのエドワード・クラークを名乗る人物からの問い合わせでして」
ＮＳＡ――北アメリカ合衆国国家科学局。ＵＳＮＡの政府機関の一つで、魔法技術や科学技術の研究を行っている機関――というのが、表向きに開示されている方便だということはディアッカも勘付いている。
そして、エドワード・クラークという人物は情報システムの専門家

ということも人伝に聞いたことがあった。加えて熱心な愛国主義者ということもだ。その人物が態々こちらに問い合わせてきた意図をディアッカは冷静に分析した。
「政府高官ならばともかく、素性がハッキリしない人間に話すものなど持ち合わせていないのだが……少し待つように言ってくれるか？
こちらも政務故に今すぐ手を離せないのでな」
「は、はい！」
もしかすると、その当該人物がこちらに入った日本の情報を〝傍受〟した可能性をディアッカは考慮した。もしそうだとすれば、エドワード・クラークという人物がＵＳＮＡの関係者とはいえ、彼を真っ先に安全だと判断するのは早計だろう。
ディアッカは手元にある通信端末を起動し、通信を繋げるように指示。
すると、その人物――――エドワード・クラークなる人間の姿がモニターに表示された。
『初めまして、ブレスティーロ大統領閣下。ＵＳＮＡ国家科学局のエドワード・クラークと申します。突然のご連絡をしてしまい、大変申し訳ありません』
「連邦共和国大統領、ディアッカ・ブレスティーロです。それでクラーク殿、秘書官から問い合わせの要件だと聞き及んでいますが、一体何をお聞きしたいのでしょう？」
謙った様な言い方をしているが、ディアッカの目にはエドワードが心の底から誠意を見せているようにはとても見えなかった。ともあれ、サッサと用件を済ませてほしいという思いを込めつつエドワードの言葉を促した。
『日本と大亜連合における戦闘のことです。こちらの調べでは恐らく戦略級魔法ではないかという推測を得ましたが、そちらでも何か掴んでいないかと思い、問い合わせした次第です』
「我々の情報収集能力はそちらに劣ってしまうことなどご存知でしょう。そもそも、貴方が政府機関の人間とはいえ、ＵＳＮＡ政府の許可は得ているのですか？」

『…ええ、無論ですとも』
ディアッカの言葉は、自国に対する自嘲とともにＵＳＮＡに対しての皮肉でもあった。魔法技術の発展具合から見ても、一日の長があるＵＳＮＡにはどうしても勝てないであろう。
エドワードからの答えに一瞬の間があったことをディアッカは見逃さなかった。とはいえ、それを問い詰めることもなく、ディアッカはエドワードの問い合わせの真意を見極めるように話を進めていく。
「我々も日本の大使館を通してではありますが、信頼できる筋より情報は得ております。大方、そちらが予測なされている範疇での話になるでしょう」
『閣下は戦略級魔法について心当たりがおありですか？』
「クラーク殿、私は政治家であって魔法師ではありません。なので、今回使われたであろう魔法の詮索については門外漢です。ましてや、その魔法師の心当たりなど皆無に等しいですからな」
これは別に事実の隠蔽ではなく、ディアッカの立場も含めた本心の言葉。戦略級魔法師なら剛三を知っているが、これは彼の仕業だとは到底思えなかった。
地方政府に対しての乗り込みも偶然直に見ていたが、彼は極力魔法を使わないことを流儀としている。その彼が持っているであろう戦略級魔法など見たことはないが……ディアッカの政治家としての勘がそう物語っていた。
そもそも、向こうの親切から顛末を知った側からすれば、恩を仇で売るような真似などディアッカの思考には一切含まれていなかった。
「それで、まだお聞きしたいことがおありでしょうか？」
『連邦共和国として、どう動かれるのでしょうか？』
「それは政府がやるべきことであり、一研究者がしていい質問ではありませんよね？　……午後からも予定が立て込んでおりますので、それでは……もしもし、大統領閣下。このような時間に大変恐縮ですが、実は先ほど――――」
強引に話を打ち切る形で通信を切ると、ディアッカはそのまま別の場所に通信を繋げた。政府機関の研究者と政府の人間とでは、そもそ

も会話を成立させるための前提条件が異なる。こればかりはエドワード・クラークの失策でもあった。
それ以上に、ディアッカ・ブレスティーロという政治家はまだ３５歳ながらも経験が豊富な人間。その要因となっていたのは、上泉剛三という存在に加えて彼が連れていた１人の少年との出会いだった。
彼らの案内役で一生分の経験をしたといっても過言ではないぐらいに、ディアッカの経験は濃密だった。尤も、それを言われて信じ切れる人間の数が少ないのは言うまでもないだろうが。
◇　◇　◇
ところ変わって、箱根の神楽坂家本屋敷。
大広間にて、上座に座って扇子を器用に指で回している千姫は、彼女の眼前にいる男性――――八雲から報告を受けていた。
「当主の予測通り、達也君の『マテリアル・バースト』、そして悠元君の『スターライトブレイカー』によって大亜連合と新ソ連の部隊は消滅。大亜連合に至っては戦略級魔法師が死亡したと判断できる内容に至りました」
「ご苦労様です……と言いたいところですが、諸外国の動きは？」
千姫は予め政府に対して、今回の一件は上泉家と神楽坂家の認可を受けた対応であるため、戦略級魔法の使用については〝国家重要機密〟に準ずるため非公表とする旨を今上天皇の承認を得た上で通告した。
これを受けて、政府は戦略級魔法の使用を明言はしたが、それはあくまでも大亜連合や国籍不明の勢力に対しての〝積極的自衛権の行使〟であることも国内外に向けて発信した。
公にされている『深淵（アビス）』以外の戦略級魔法の存在は、扱いを間違えれば危険を齎す諸刃の剣となることを重々承知している。天神魔法は扱いこそ古式魔法の範疇だが、最上位クラスとなれば戦略級と言っても過言ではないレベルに達するからだ。
つまり、神楽坂家現当主である千姫も国家非公認の戦略級魔法師同様の存在となる。
「ＵＳＮＡは早速政府に対して問い合わせをしているようですが……

達也君の魔法を『グレート・ボム』、悠元君のものに至っては『シャイニング・バスター』と仮称しているそうで」
「二人の魔法は現代魔法においての領域を超えてしまっていますからね。にしても、横浜の時は軍事協力すら申し出なかったのが〝同盟国〟とは……義兄様は何か言っておられましたか？」
いくら軍事的な同盟を結んでいるとはいえ、戦略級魔法は国家においての〝切り札〟。それを簡単に教えることなどできない。
そもそも、初動というか対処があまりにも手際が良すぎたがために、在日米軍が動くことなどないという結果に収まった。これをＵＳＮＡがどう見るかなど、向こうの勝手でしかない。
魔法協会は核兵器に対しての強い権限を持ち合わせているが、魔法師を統括するための組織的な権限を持ち合わせていない。文言上は協会に対する義務を謳っていても、それに対する法的根拠がない。あくまでも互助組織の領域を超えない程度の権限しか持ちえていないのだ。
新ソ連のウラジオストクの破壊は軍港部のみの破壊だけであり、市街地や民間の港湾施設の被害は一切出ていない。それにも拘らず、大使館経由で抗議が入ったらしい。ただ、その翌日には〝国籍不明〟の艦隊が新ソ連の部隊であることを明かすと、その抗議は完全になりを潜めたが。
「拙僧と話をした際は、特に目立ったことは言っていませんでしたが、怒りを滲ませておられました。ひとまず抑えてくれましたが、これで大亜連合側がさらに動けば、剛三殿の雷が間違いなく落ちますな……例の揚陸艦に関してですが、どうやらオーストラリアからの払下げだったようです」
達也の『マテリアル・バースト』で消滅した大亜連合の偽装揚陸艦のことだが、船籍データなどから三矢家の協力を得て情報の洗い出しを行ったところ、イギリス海軍の旧式艦を改造したものだということが判明した。
イギリスからオーストラリアに払い下げられた後、オーストラリアで輸送艦に偽装改造を受けて大亜連合に売り払われた形だ。〝鎖国

〝状態のあの国がどの面下げてのうのうとしているのか……千姫は愚痴りたくなるような心境だった。
「……旧ＥＵ。マクロードの阿呆も一枚噛んでいそうね。私に負けた腹いせで事を起こしたのかしら。コントラチェンコも義兄様に負けたことを兵士に叩き込めって話よ。もっと許せないのは再び〝正義の味方〟を僭称したげなあの国だけれど」
「当事者でない限り、その恐怖を実感するのは難しいですからな。尤も、そうなってからでは遅いことなど歴史が示している、と述べたくなります」
魔法師の管理で国外への移動が厳しくなかった頃、千姫は『護人』の素性を隠して頻繁に欧米を訪問していた。彼女はその過程で戦略級魔法師であるウィリアム・マクロードと面識を得ており、彼との力比べでは難なく勝利していた。
約３０年前の話なので、今となっては雲泥の差が生じるだろう。だが、千姫にとって彼との勝負など興味なし、と言わんばかりの様相を見せていた。
「脅威となる力を無視できない、という気持ちは理解できなくもないけれど……それで『スターズ』なんか持ち出したら、軍はおろかＵＳＮＡ政府上層部の首がまるでゲームの如く飛んで行くわ」
千姫がそう述べた理由の一つは次期当主である悠元の存在だ。彼はアンジー・シリウスの戦略級魔法を使用することができる――つまり、〝彼女〟の魔法の弱点や対抗策をいくらでも立てることができる上、彼の使う『ヘビィ・メタル・バースト』はその弱点を完全に潰した上位互換版の戦略級魔法。
これから起きうる事象が単に『スターズ』だけではないとしたら、最早ＵＳＮＡという国自体が巨大な病原体と言っても過言で無くなる公算が大きい。そして、そのアンジー・シリウスに関わる問題はこの国にも直結しうる。
「ＵＳＮＡといえば、かの九島将軍とは同い年と聞き及んでおりますが」
「……烈が余計なことをしてくれたのよ。魔法師としての才能は、間

違いなく健(けん)のほうが上だった。まあ、群発戦争のせいで表沙汰にはなっていないけれど、九島家にも御家騒動があったのよ……知っていた？」
「いえ、拙僧も初耳ですな」
烈の実弟である九島健(くどうけん)――――アメリカに渡って帰化し、ケン・クドウ・シールズと名乗ることになった人物のことは、国防軍に身を置くものなら一度は耳にする名前。
表向きは国外派遣という体だが、事実上の国外追放となった経緯の詳細を知っているのは、当事者以外では剛三と千姫だけであった。九島家で生み出された『仮装行列(パレード)』も含め、魔法師としての実力を持っていたが故に追放された……その孫娘が「スターズ」に所属しているのだから、なんという皮肉なのだろう。
「それを知っていたからこそ、三矢家を同じ目に遭わせるわけにはいかないと判断した、というわけですな？」
「ええ。健本人には国内に留まるように引き止めたのだけれど、やはり本人にとってもＵＳＮＡという現代魔法発祥の地に対する好奇心を抑えられなかったのよ……結果として、九島家は歪んでしまったわ」
才ある者を家の外に出してしまった結果、九島家が歪んでしまったのは言うまでもなく、その果てに生み出されたものは……剛三ですら怒りを通り越していた。だからこそ、個人的な付き合いは続けているものの、余計な手出しをしないことに決めていた。
「烈には『人の歪みをどうこう言っている暇があるのなら、己の歪みを正せ』と言ったのにね……八雲、神楽坂家当主として命令いたします。司波兄妹をそれとなく気に掛けておいてください。手出しの範囲はお任せいたします。それと、もし健の孫娘が関わってくるようなら、私自ら出ます」
千姫は、当主となっても魔法の研鑽自体は一切止めていない。自らの力の研鑽に終わりなどなく、彼女は『月読』の単独発動が出来るように鍛錬を積んでいた。その夢は次期当主に先を越されたが、女としての美しさを維持するために魔法の鍛錬は続けている。

長年の魔法力の制御訓練により、この国において……いや、世界最強クラスの魔法師の一角を彼女が担っている。その彼女が出るという意味を察しつつ、千姫の命を受けた八雲は姿勢を正した上で平伏し、命令受諾の意を礼で示したのだった。

分の悪すぎる賭け

――西暦２０９５年１１月６日。
九島光宣（くどうみのる）。九島烈の孫であり、九島家で生み出された魔法の全てを会得した天才。同年代の十師族において指折りの実力を持つことは、かつて世界最巧の魔法師と言われた烈も高く評価していた。
そんな彼は自室のベッドで大人しくタブレット型端末に目を通していた。端末にはＦＬＴの公式発表文が表示されており、それを見つめながら思案していた。
（この国から放たれた２発の戦略級魔法。一つは対馬方面から感じたけれど、もう一発の兆候が全く感じられなかった。恐らく、かなり高いレベルの想子制御を行っていた……凄いな）
思わず内心で賞賛の言葉が出るほどに、光宣の関心はその戦略級魔法に向けられていた。親戚に国防軍の人間がいるとはいえ、戦略級魔法自体が極めて厳しいセキュリティーを掛けられている以上、知ることは難しいだろう。
そもそも、それを知ったところで今の光宣に行使できるほどの力がない。いや、発動自体出来たとしても、一発限りの大技となることは光宣も承知していた。
すると、扉が開いて姿を見せたのは、光宣にとって親戚である響子だった。
「光宣君、今日は大丈夫なの？」
「はい。最近は大分安定しています」
「それはいいけれど、あまり無理をしないでね」
肉体的には特に異常がなく、医学的に見ても健康体である光宣だが、原因不明の病弱体質によって、１年のうち約４分の１はベッドで過ごすことを強いられている状況だ。才能はあるのに、それを十全に発揮できないことを響子は痛ましく思っていた。
長生きしてほしいと願う響子や烈に対し、光宣は優れた魔法師としての生を全うしたいという思いがある。なまじ才能があるが故に諦められない……すると、響子は光宣が見ていた端末の記事に目を見開

いた。
「ところで、それはサイオンレーザー治療の記事かしら？」
「あ、はい。……正直なところ、こういった魔法の使い方なんて僕は考えもしていなかったので。それもあの『トーラス・シルバー』が見出したとなれば、この状況を打破できるカギになるのかな、と」
「……そうね。そうなるといいわね」
響子はトーラス・シルバーである二人の人物を知っている。だが、その二人がこの国にとってなくてはならない存在であり、二人とも（元）十師族の戦略級魔法師という常識外れの素性を持っている。
彼らとは知り合いだが、この考案者はその片方であると響子は睨んでいる。とはいえ、九島家の先代・今代当主に対して彼の持っている感情は決して良くない。
彼――――三矢（現姓：神楽坂）悠元の実力は、現代魔法・古式魔法の両方に精通しており、上泉家と神楽坂家の血脈を受け継いだ三矢家においての〝天才〟。彼も光宣と似たような原因不明の病弱であったが、現在では健常者と変わらぬ状態でありつつ、魔法も十全に使うことができる。
彼を治した方法が分かれば、光宣もその方法で治せるのでは……という響子の思いを汲み取ったのかどうかまでは分からないが、光宣は苦笑を浮かべていた。
「響子姉さん、顔に出てるよ」
「え、ああ、ごめんなさい……」
光宣と響子は、家系的に言えば〝従姉弟〟の間柄にあたる。尤も、光宣の生まれた素性を知っている人間はごく僅かに限られている。響子も光宣の素性を知っているからこそ、姉と呼ぶことを受け入れていた。
だが、彼は知らない……いや、いずれ彼は誰から聞くこともなく、自らその答えに至るのかもしれない。彼の異常なまでの魔法センスは、最早理解の範疇を超えつつあると考えていたところで、光宣は端末に届いたメールに目を通していた。
「よかった、彼も無事だったのか……」

「悠元君から？」
「ええ。九校戦で一条の御曹司に勝つというだけでも凄いのに、現代魔法と古式魔法の複合術式は僕でも至っていない領域ですから、心配はしていなかったのですが……事後処理でメールが返せなかったと書いてます」
光宣と悠元はお互いに面識がある。悠元が「長野佑都」を名乗っている頃、烈を介する形でお互いに知り合った。
その時に感じた悠元の第一印象は、「まるで底が見えない」という抽象的な感想だった。それが光宣にとってどう解釈すればいいのか……今まで自分の体質以外で悩んできたことのない彼にとって、悠元との出会いが新鮮な体験だったのは間違いなかった。
「悠元君が十師族でなくなったのは、僕から見れば『当然の帰結』だと思いました。父は彼を引き込みたいようなことを言っていましたが、それを三矢殿が許すはずなどありません。ましてや、彼の祖父はあの英雄こと上泉殿です。いくら祖父と知己とはいえ、上泉殿の置かれた立場からすれば彼の存在は十師族に留めていい存在ではないと思いますから」
『最強』であらねばならない矜持と暴走を止めるための『相互監視』。師族会議において極めて矛盾した有様を決めたのは、他でもない光宣の祖父こと烈だ。
別に祖父のことを辱めるつもりなどないが、光宣自身ですら認めるほどの同年代最強の魔法師を十師族に留め置けば、近い将来に必ず遺恨を残すような争いになると思っていた。その彼が神楽坂家次期当主となったことは、彼の力が師族会議ですら制御できないと認めたようなものだと結論付けた。
「別に祖父や父を非難するつもりなんてありませんが……お蔭で、僕がフォローしなきゃいけない事態になったことをもう少し鑑みてほしいと思います」
夏の臨時師族会議の後に事の次第を烈から聞いたとき、光宣は深いため息と共に祖父を叱責した。元が出る杭を打たれる前に悠元を取り除いたことは、師族会議のルールに則れば正しい対応でしかないの

だと。
　その後で二人に代わって謝罪のメールを悠元に送ったところ、「謝罪は受け取っておくが、お前がそれ以上気に病む必要はないからな」と返ってきた。これ以上のことは本人たちの態度次第だと光宣も理解した。
　光宣としては、二人のフォローをするぐらいなら病気をこじらせて寝ていたほうがマシだ……とは口にしなかったが、思わず愚痴っぽく出た光宣の言葉を聞いた響子は苦笑いを浮かべるしかなかったのであった。
◇　◇　◇
　同日。四葉本家の応接室には、屋敷の主である真夜、彼女の呼び出しを受けた達也と深雪、そして事情説明という名目で風間も同席していた。出された紅茶に一口付けたところで、真夜が切り出した。
「さて、本日おいで頂きましたのは、先日の横浜事変に端を発する一連の軍事行動について、お知らせしたいことがありましたの」
「本官に、ですか？」
　本来、軍人である風間からすれば部外者……いや、達也の戦略級魔法の解除キーを担っている以上は関係者とも言えなくはないが、公の権力を捨てている以上は表立った軍事行動ができない十師族の一角を担う真夜からの「確定情報」に風間は疑問を投げかけた。
「国際魔法協会は、先日の２発の戦略級魔法に関して、憲章に抵触する『放射能汚染兵器』ではないという結論に達しました。これによって、協会に出されていた懲罰動議も却下されたようです」
「前者は確信を得ていましたが、後者は初耳です」
　放射能汚染兵器――大まかな括りを用いるのならば『核兵器』と述べるほうが分かりやすいであろう。兵器、という名称を用いる以上、当然魔法の術式も対象に含まれるが、達也と悠元の戦略級魔法はこれに一切抵触しない代物であることは風間も認識していた（悠元の『スターライトブレイカー』については、夏に訪れた時点で聞き及んでいた）。
「達也さんの魔法は私も姉さんから聞き及んでいましたけれど、悠元

君の魔法については……正直、私も研鑽が足りないと思い知らされました」
「と、言いますと？」
「神楽坂家から詳細を聞きましたが、どうやら私が教えた『流星群（ミーティア・ライン）』を戦略級魔法に昇華させたようです」
　この言葉には風間だけでなく、達也と深雪までも驚いていた。世界最強クラスの魔法師である真夜の魔法を突き詰めたのが、悠元が使用した戦略級魔法という衝撃的な事実。そもそも、いつ真夜と悠元が接触していたのか……と考えたところで、達也が問いかけた。
「叔母上。ひょっとしてですが、３月のベイヒルズタワーの一件の際に教えたのですか？」
「正解です、達也さん。まあ、結果として悪くないほうに転びましたから、教えた甲斐はあったというものです」
『悪くないほう』というのは、恐らく悠元が神楽坂家次期当主になったことだろう。自身の母親といい、彼に対しての感情がプラスの方向になっていることは許容するとしても、四葉家全体が一体どこに向かうのか……四葉本家から距離を置いている形の達也には、理解するのが難しかった。
　少し逸れた話を戻しつつ、真夜が再び口を開いた。
「鎮海軍港で消滅した敵艦隊のことですが、その中には『震天将軍』も含まれていて、戦死が確実視されています。『十三使徒』も『十二使徒』になったようです」
　大亜連合にいる国家公認の魔法師こと劉雲徳（りゅううんとく）。彼が達也の『マテリアル・バースト』によって戦死したという真夜の情報に、風間は目を見張るほどだった。そこから更に、真夜は五輪澪が国防海軍の艦隊に同行することも公表し、更なる情報を真夜が開示した。
「先日、国防海軍は最新鋭空母である３５０メートル級の『ずいかく型』を就役させました。今回の佐世保の艦隊にも同行する予定です」
「……そのような話、噂すら聞いたこともありませんが」
「無理もありません。どうやら、上泉家が主導となって種子島に秘密ドックを建設していたようです。尤も、この情報は上泉家先代当主か

ら聞き及んだものですが」
　同程度の規模を誇る空母となると、ＵＳＮＡの「エンタープライズ」が該当する。それだけの規模の資材やら人材を一体どうやって隠し切ったのか……そもそも、空母を製造するための膨大な資金をどこから……疑問が尽きないことばかりである。
　実際のところ、解決法はかなり単純なものだ。
　空母の大部分を占める鋼材だが、世界群発戦争で沈没した戦艦や潜水艦が数多くあり、それを悠元が『ミラーゲート』で片っ端から回収しきっていた。ここで剛三の世界巡業の旅が生きてくるのだが、剛三としてはそんな方法など思いつかなかったであろう（剛三だけが悠元の『ミラーゲート』の存在を知っていて、関係者には適当に誤魔化した）。関係国からすれば、周辺海域に艦船がいなかったのにサルベージされたかのごとく消え失せたため、一時期騒ぎになった（結局原因不明の〝神隠し〟で処理された）。
　材料の次は設計図だが、これはフランスから存在していた原子力空母の設計図を調達（剛三がフランス大統領に直接承諾を得ている）し、国防海軍での運用を見越した仕様に変更されている。武装面はライセンスを取ると面倒なことになるため、全部国産に切り替えられている（開発元は神楽坂家の系列企業が関わっている）。勿論、原子力は動力源に用いていないので、魔法協会に咎められることは一切ない。
　人材については、全員上泉家（プラス神楽坂家）の関係者を採用している。上泉家は大工だけでなく金属加工などの第二次産業も手広くやっており、艦船修理においては全国で８割のシェアを有している。第二次大戦前の戦闘機や艦船などの兵器製造に立ち会った者たちを密かに匿い、国力復活のための技術を守っていたというわけだ。
　そもそも、何故そんなものを作ったのかと言えば、国防陸軍と国防海軍のしょうもない縄張り争いを緩和させるための策である。
　今回の一件で陸軍が戦略級魔法という武器を手にした以上、海軍が躍起になって戦略級魔法の研究を再開させるかもしれない……３年前の時点で剛三もそう懸念していたため、急ピッチで空母建造に踏み切った形となる。本来５年以上かかる建造プロセスは魔法という暴

力で解決した形なので、表沙汰になど当然出来るはずがなかったというわけだ。
閑話休題。
ずいかく型空母の就役を知ったとき、真夜も思わず驚いたほどだ。
このタイミングで国防海軍が最新鋭の航空母艦を就役させるという方策は、この国が大亜連合との講和における〝本気度〟を如実に示している。政府や防衛省も公式の発表で空母の存在を認めている。
これには諸外国からの問い合わせが殺到したが、島国である以上は周囲からの危険を海で守られているとはいえ、大亜連合や新ソ連からの自衛を主眼に置いた防衛体制を強く主張した。それでもこの空母の存在を「軍国主義の再興である」と言いたげな主張が見られたが、先日の横浜事変の影響で封殺される形となった。
「ですが、そのお蔭で彼らの目線も逸らせていますので、結果からみれば問題はありませんが……念のため、暫くは接触を控えておきましょう。どうやら、七草家から探りを入れられているようですから」
「成程……なら、彼を経由して連絡を取れるようにしておきます」
あくまでも、達也の担当できる領分は対馬要塞での『マテリアル・バースト』で帰結している、という真夜の主張を風間が受け入れる形となり、風間はそのまま帰宅の途に就いた。
達也の様子からして、自分はここにいるべきではないと席を立とうとした深雪に、真夜は視線を深雪に向けつつ声を発した。
「あら？　深雪さん、どちらに行かれるのかしら？」
「お兄様は叔母様にお話があるようですから、私が居てはいけないかと思いまして」
「そんなことはないわ。達也さんも構わないかしら？」
「……ええ、構いません」
達也が何かを覚悟している……というのは、兄をよく見てきた深雪だからこそ理解していた。そもそも、達也は四葉本家においてガーディアン……使用人のような扱いに等しい。そもそも、彼の素性をある程度知っている者はともかくとして、更に深い部分となればごく限られた人物に絞られる。

そんな達也の思いを見透かしたのか、真夜は深雪の同席を許した。
達也も少し悩んだが、深雪の同席を認めたので、深雪は達也の隣に移動した。
「達也さんもお手柄だけれど、深雪さんも『神将会』として初めての実戦をこなし、陳祥山を捕えた功績はお見事です」
「ありがとうございます。ですが、彼を実際に捕えたのは悠元さんですから……叔母様は、四葉が神楽坂の傍系だということを知っていらしたのですか？」
「ええ、物心ついた時から知っていました」
四葉の家系のうち、四葉本家、黒羽、椎葉、静の四家が神楽坂の係累に属する。だが、天神魔法に関わる技術は四葉家を滅ぼしかねない剣に成り得ると東山元英が判断し、子孫には継承されなかった。
この意向には神楽坂家の先代・今代の当主が大きく関与している。
「来週から高校も再開されるでしょうが、達也さんはそのまま通って構いません」
「……よろしいのですか？」
「達也さんが抜けたら、深雪さんのガーディアンを務め上げられる人が居なくなってしまいます。悠元さんに放り投げるのはとても失礼なことですから」
『スターズ』が達也の使用した魔法――『マテリアル・バースト（USNAの仮称はグレート・ボム）』が質量エネルギー変換魔法だというところまで調べはついていた。だが、その一方で悠元の『スターライトブレイカー』が従来の物理法則を遥かに無視しているため、達也の魔法とは同一のものではない、という推論までしか出てきていない。
「それに、『スターズ』が動いている以上は、対抗できる術を引き離すほうが非効率というものです」
「アメリカが動いていると？」
「まだ調査を始めた段階ではありますが、『マテリアル・バースト』の種別とその被疑者の一人に達也さんが入っているということです」
とはいえ、被疑者として達也と深雪、悠元まで絞り込んでいるあたりは自称世界最強の魔法師部隊を名乗っているだけのことはある、と

真夜は二人に説明した。
「千姫さんにも言われたことですが、コンペの後で達也さんが居なくなれば、自ずと良からぬ噂が立つかもしれません。幸いにして、達也さんは表情を隠すのがお上手ですから、誤魔化すのは問題ないと判断しました」
　好きで表情を失ったわけではない、と真っ先に言いたかった達也だが、そこで自分自身が反論しようとしたことに思わず口を閉ざしてしまった。そんな変化を真夜は察しつつも、クスッと笑みを零した上で言葉を続ける。
「達也さんは気付いていたかしら？　先日の戦いには、〝イグナイター〟もどうやらちょっかいを掛けてきたようです」
「いえ、初耳です……ただ、悠元が対応したということだけは理解できます」
　達也が『マテリアル・バースト』を発動させる前、北東方向から魔法発動の兆候を達也は感じていた。だが、その場に恐らくいるであろう悠元に全てを任せ、任務を遂行することだけに集中した。
　ベゾブラゾフの魔法である『トゥマーン・ボンバ』はその詳細のデータを知らないが、実力はＵＳＮＡの先代『シリウス』と同等以上だと達也は推察していた。その彼が出張ってきても、悠元相手では最早分の悪すぎる賭けであろう。
　ただでさえ、現代魔法を〝欠陥魔法〟と言い切り、古式魔法を更に洗練させている彼のことだ。この世界に存在する戦略級魔法を全て使えたとしても、達也からすれば「まあ、悠元だからな」という一言に尽きる。
　疑似キャスト・ジャミングの件からすれば、自身の『マテリアル・バースト』に関しても達也の十八番のままにしたいのだろうと思う、と達也は結論付けていた。
　今回の一件だけで、五人の戦略級魔法師が動いた……それは即ち、多かれ少なかれ世界が動き始めた、という証左に他ならなかった。

唐突な交換留学の話

一難去ってまた一難、という言葉は実によく出来ている。とりわけ「力（ちから）」という代物は、多かれ少なかれ災いを招くものだ。

三国志で言うならば、皇帝という存在やその証である玉璽。この国の戦国時代でいうところの足利氏。宗教においての聖地や、王族・皇族という血族の権威。武士の力や当時では最先端であった火縄銃も力の一種であり、貨幣という存在による経済力もれっきとした力だ。

そして、魔法もその例外に漏れない力の一端である。

「……阿呆が」

悠元は、自室で端末のモニターを見つめていた。元々はテスト勉強の合間の息抜きだったのだが、不意に漏れたその一言の原因は『八咫鏡』で侵入したＵＳＮＡの大統領府――それも本来忍び込めないはずの大統領専用端末に残されていた、ダラス国立加速器研究所の『マイクロブラックホール生成・蒸発実験』の承認許可であった。

２年前、剛三と悠元がＵＳＮＡ軍の基地に無断侵入し、アンジー・シリウスを倒した一件で大統領府に呼ばれた際、剛三は大統領からこのことについて相談を受けていた。

「――マイクロブラックホール実験だと？　お主、正気でものを言っておるのか？　魔法の発展のために、計り知れぬリスクを負うつもりか？」

現大統領と剛三は群発戦争の折、何度も面識を持っていた。全面核戦争を回避するため、剛三は超法規的な連合軍に参加していたからだ（その当時は剛三の父親が留守を預かっていた）。

クレムリンに単独で乗り込んで首脳陣を竹刀２本で薙ぎ倒したり、宗教の対立によるローマ法王の暗殺を未然に防いだり、後は各国の王族の護衛を引き受けたこともあった。彼らからすれば、常識外とはいえ核の脅威から国を救った英雄。外国人に対して滅多なことでは贈られない勲章の数々は、一応剛三の私室の棚に飾られている。

そうやって飾ったのは亡き剛三の妻であり、片付けようとすると彼女のことを思い出して触れられないらしい。

「そこまで危険だと仰るのですか？」
「無論だ。これは、かの安倍晴明が遺した〝警告〟よ。お主らのような政治家には胡散臭いなどと思われるかもしれんがな」
何故分かっているのか、という疑問は当然だろう。だが、答えは実に簡単である。
魔法もとい『超能力』には当然〝禁術〟と呼ばれるものがあり、その中には意図的に次元の壁に穴を開け、魔法的エネルギーの情報体を引き込む術式も存在する。
妖（あやかし）――――後に「パラサイト」と呼ばれる霊子情報体の危険性は、当時陰陽道の権威であった安倍晴明ですら危ぶむもの。天神魔法にはブラックホールレベルの魔法も当然存在するが、〝重力〟を消費しないように苦心した、と神楽坂家に現存している手記で語られている。
天神魔法を編み出した片割れの当人がそう述べる以上、次元の壁を歪ませる禁術はこのまま秘匿するべき代物だという認識は悠元も同意見だった。
だが、その忠告をＵＳＮＡは破った……いや、破らざるを得なかった。その原因は達也の『マテリアル・バースト』と悠元の『スターライトブレイカー』に他ならないということも十分に理解している。
だからといって、何でもしていいわけではない。盗み見たスターズの調査報告によれば、被疑者の中に達也や深雪、そして悠元も含まれていた。
（そもそも、被疑者って何だよ……覇権を脅かすものは全て悪とでも言うつもりか？　そんな考え、前世紀の合衆国と何ら変わりないって愚痴りたくなるな）
まるで自分たちの行いこそ『正義』だと雄弁を振るう様に、悠元の口から思わずため息が漏れた。同盟国であってもそんな振る舞いをする方がどうかしている、と言いたくなるほどに。
だが、これで「パラサイト」がこの国に来る可能性は高まってしまったことになる。せめて1学年の三学期ぐらいは穏便に過ごさせろという悠元の望みは、向こうの過剰な被害妄想によって崩れ去ったので

あった。

◇　◇　◇

横浜での一件があった後、千秋は達也たちに謝罪していた。マインドコントロールを受けていたという医師の診断を正直に話し、陳謝していた。これには謝罪されるなどと思っていなかった達也たちは、苦笑しつつも千秋の謝罪を受け取っていた。

そんな事があった達也たちは現在、学生にとって避けれない関門（テスト）のための準備（復習）に追われていた。

「えっと……幹比古、ここはどうだったっけ？」

「そこはね……って、ここまで出来てるんなら、あともう一歩だよ」

「マジかよ。なんにせよ、ダンケだぜ」

「…くあー！　美月、ここが分かんないんだけど」

「ここはね……」

1学期と同様、雫の家に集まっての勉強会（今回は英美と入れ替わる形で姫梨が参加している）。レオは時折幹比古に聞いたりしつつ解き進めている。一方のエリカもレオに負けじと進めているが、詰まってしまうところは美月の助けを借りていた。定期試験というものが避けて通れない以上、致し方ないことではあるが。そんな和やかな雰囲気は、雫の一言で崩れることとなる。

「――留学？　ＵＳＮＡに？」

「うん。昨日まで口止めされていたから言えなかった」

雫がＵＳＮＡに留学するということ。実際のところ、神将会においては既に情報共有されており、その出所を探ったところ……ＵＳＮＡ政府が日本政府に今回の交換留学を持ち掛けたところまで判明している。

そもそも、何故雫なのかという疑問が残る。向こうの利益を考えるのならば、それこそ深雪や悠元を対象に選んだとしても不思議ではない。恐らくだが、向こうでは深雪が四葉家の人間ではないかという推測を前提に行動している点。それと、悠元に関しては上泉家に配慮した形なのだろうが、雫だって神楽坂家の傍系にあたる。そのリスクをＵＳＮＡが負うとは到底考えづらい。

「でも、留学なんてできましたっけ？」
「交換留学だからじゃないか、ってお父さんは言っていた。本当のところは……どうなの？」
「俺は便利な回答マシーンじゃないぞ、雫。まあ、恐らくは『ハロウィン』の一件で魔法先進国としてのプライドに火が付いたのかもな」
　ぼかした言い方をとったが、原因も経緯も全て調査済みである。ＵＳＮＡとは同盟国だが、西太平洋地域においての潜在的な競合国。とてもではないが、味方として数えるには危険だと判断していた。この辺の話は深雪から聞いた四葉本家での話から裏付けも取れている。雫はその事情も当然知っているが、機密情報も多いので知らないような振りをした。
「とはいえ、大丈夫なのかね……雫の代わりとして人の話もロクに聞かないで喧嘩吹っかけてくる戦略級魔法師（ポンコツ・シリウス）なんて来たら、奴さんの上司がストレスで倒れること請け合いだわ。ＵＳＮＡ首脳部のネジの去就が心配になるレベルだ」
「……悠元。それはもしかして、『スターズ』総隊長のアンジー・シリウスか？」
「正解。まあ、出会った時は天神魔法で足場消し飛ばして墜落させたよ。向こうは戦闘スーツ姿だったから、気絶だけで済んでたな。流石はＵＳＮＡ軍の技術力だわ」
「いや、それよりも世界最強クラスの戦略級魔法師相手に生き残ってる方がおかしいわよ」
　そもそも、アンジー・シリウス自体個人情報を隠すためのコードネームみたいなもので、そのままの名前を使って日本に来るとは誰も思わないであろう。悠元の述べたことに対して、彼が同年代でも世界最強クラスという事実に周囲が驚いていた……深雪が目を輝かせていたのは言うまでもないことだが。
「ま、それはそれとして、留学となるとテストの後になると思うが、いつからになる？」
「年明けすぐだって。期間は３ヶ月」
　ちなみにだが、アンジー・シリウスとの件は悠元が「長野佑都」と

名乗っていた時のことなので、秘匿するように言い含めておいた。とはいえ、負けず嫌いな彼女のことだから、こちらの正体を知れば勝負を吹っかけてくるのかもしれない。どちらにせよ、面倒な状況が続くことに内心で溜息を吐いた。

そして、2学期末考査の結果が張り出されたわけだが、その結果が1学期以上に波乱を呼んでいた。その結果がこれである。

1位　1―A　神楽坂悠元
2位　1―A　司波深雪
3位　1―A　北山雫
3位　1―A　六塚燈也
3位　1―A　伊勢姫梨
6位　1―A　光井ほのか
7位　1―E　吉田幹比古
11位　1―E　西城レオンハルト
13位　1―E　柴田美月
16位　1―E　千葉エリカ

本来二科生ならば有り得ないと言われるほどの好成績を4人が挙げていた。レオの順位が高いのは、魔法実技で点数を稼いだからである。

尚、達也に関しては魔法実技の関係で総合順位は100位丁度であった……それを聞いた面々から「狙ってやったのか」という疑問の視線を投げかけられて、達也は溜息でも出そうな表情を滲ませていた。深雪はというと、達也が上位100人に名を連ねたことでご機嫌だった。

言うまでもないことだが、1学期まで手を抜いていたのではないかという疑惑を持たれることとなり、教職員からの質問を受ける羽目となっていた。レオとエリカ、幹比古に美月の四人が生徒指導室にいる中、その外では達也たちが彼らを待っていた。

「自分たちで努力した結果を認められない、って愚かすぎやしないか？」

「言いたいことは分かるが……A組で何かあったのか？」

「『ズルをした』とか言ってたね」
「まあ、流石に達也らの悪口は言っていませんでしたが、彼らとしてもプライドってものがあるのでしょう……実に下らないものですが」
「と、燈也君……」
　教師陣が教えていた生徒ではなく、全く関与していない生徒が好成績を上げたことに対する僻みである、と燈也は臆さずに言い切った。これにはほのかが苦笑を浮かべていた。
「そもそもの話、家柄で見る目を変えている時点で、その人物の実力が知れるわ……っと、お疲れさん」
「お、待っててくれたんだ」
「何にせよ、ここだと目立つから場所を変えるか」
　達也の提案に全員が頷き、そのままアイネブリーゼに足を運ぶ形となった。注文した品が揃ったところで口火を切ったのはエリカだった。やはり教師から言われたことに対して我慢ならなかったのだろう。
「何よアイツら！　あたし達は真っ当に努力しただけだっていうのに、『1学期は手を抜いていたのか？』なんて決めつけるような前提で問い詰めてきたのよ！　おまけに『魔法力を上げた方法を教えろ』って！　厚かましいにもほどがあるから、思わず掴み掛りそうになったわよ」
　エリカとしては、悠元から教わった想子制御を広める気などなかったし、魔法力が上がったことを千葉家当主に問い詰められたが、神楽坂家の秘術に関わるから無理だ、と返しておいたことも口にした。
　その辺は幼馴染として長い付き合いになるので、悠元の異常性を理解していたからだ。
「それは……よく耐えましたね」
「エリカもその辺は理解していたからね。レオが怒らずにエリカを止めたことも大きかったけれど」
「あの状況じゃあ、下手に反抗しないほうがいいだろうと思っただけだよ」
「……アンタにしては珍しく理性的だから、掴み掛らなかっただけよ。

それに、美月が」
「何か言いたいのですか、エリカちゃん？」
凄みのある笑顔の美月に、エリカは思わず乾いた笑みを見せていた。これには深雪がクスッと笑みを零すほどだった。
そもそもの話、「魔法行使の速さ」だけを「魔法への慣れ」と見るだけでは成立しない、ということに気付いても可笑しくはない。だが、悲しい現実として制御訓練が魔法力を上げる方法として定着していない。
例えば、プロスポーツのアスリート――陸上選手を見ていれば分かるが、トラック競技であってもフィールド競技であっても重点的に使う筋肉だけでなく、全身をしっかり鍛え上げているからこそ輝かしいパフォーマンスを発揮する。これは、全身の筋肉が連動していることも大きく影響している。
これは魔法も同じで、全身の想子体を隈なく循環させることで想子体の強度と想子の生成速度・密度を上げていく。
この方法なら、とある人物の難問も解決するのでは？　という疑問が浮かぶだろう。だが、それができない理由は彼の学んだ魔法に原因があるのだが、ここでは割愛しておく。
「というか、達也君は何か言われたの？」
「いや、特に何も言われていないな。また転校の話を持ち出されたが、丁重に断っておいた」
今回も呼び出されたようだ（悠元と深雪、ほのかが丁度生徒会でいなかった時）が、そもそも達也に別の学校の話を持ち出して、来年度の九校戦のことを何も考えていない。学校としての利益ではなく、教師陣のプライドを優先しているあたり、校長や教頭には知らされていない話なのだろう。
そんなテストも終わって、今年のクリスマスは身内でやろうかと思っていたところに、悠元の端末にメールが届く。
「……ふむ。達也たち、クリスマスから年末年始は予定が空きそうか？」
「どうしたのですか、悠元」

「母上からのお誘いだ」
メールの内容は、神楽坂本家でクリスマスパーティーと年末年始の挨拶をするので、友人たちも招いてはどうかという千姫からの提案だった。古式魔法の大家が一神教の行事であるクリスマスを祝う……ということに、同じ古式魔法の家である幹比古が思わず首を傾げた。
「えっと、神楽坂家がクリスマスパーティーって……大丈夫なのかい？」
「神楽坂家は知らんが、上泉家も盛大にクリスマスパーティーやってるぞ。エリカと雫、ほのかは何度か参加してるから分かると思うが」
「そうね。剛三さんがサンタクロースに扮してプレゼント配ったりしてるし」
第三次大戦の英雄がサンタクロースに扮する時点で色々あるだろうが、本人は至って楽しそうにやっているため、誰も文句が言えない。何せ、雫の両親も最初にそれを見た時、苦笑しか出てこなかったほどだった。
◇　◇　◇
神楽坂家のクリスマスパーティーは、見るからに豪勢なものとなっていた。和を重んじつつも洋の装いを上手く取り入れるあたりは風水に長けている陰陽道系の十八番なのだろう。雫の壮行会も兼ねているこのパーティーには、達也たちだけでなく当主である千姫、彼女の愛弟子である修司と由夢も参加している。なお、燈也に関しては実家である六塚家から呼び出しを受けていたため、口惜しそうにしていた。
「え？　修司と由夢もアメリカに行くの？」
「ああ。由夢は二高の代表だが、俺は三高の代理ということらしい」
修司の口から言われたことに、エリカは思わず目を丸くしていた。知り合いが三人もＵＳＮＡに留学することも驚きだが、本来三高の生徒ではない修司がその代理として留学することに関して驚いていた。この辺は修司が「ま、親父に言われちゃ仕方ねえよ」と述べるに留まった。

「ねっ、どこに留学？」
「バークレーだよ、エリカっち」
「ボストンじゃないの？」
「東海岸は雰囲気がよくないらしくて」
　アメリカの現代魔法研究の中心はボストンにあるので、深雪がそう問いかけると雫が返した。この辺の事情は既に打ち合わせ済みだが、『神将会』のことは迂闊に話せる情報でもないために、その辺をぼかしながら話が進んでいく。現在進行形で反魔法主義がアメリカで暴れていて、その影響がこの国に及ばないように水面下で激しい攻防が繰り広げられていることなど、この楽しい雰囲気で言える話ではない。
「ああ、『人間主義者』が騒いでいるんだっけ。最近よくそのニュースを見るよね」
「魔女狩りの次は魔法師狩りって、歴史は繰り返すって言うが、ホント馬鹿げた話だよな」
　幹比古の言葉にレオが冷たい口調で吐き捨てる。
　非魔法師からすれば、魔法師という存在が恐怖に見えるのは分からなくもない。この動きの裏で糸を引いている人物は〝布石〟としてそんなことをしていることなど明らかだが、そのことを吐き捨てる気分にもならなかった。すると、達也がこう述べた。
「ここ最近の『魔法師狩り』は新白人主義と根が同じみたいだからな。安全を考えるのなら、東海岸にならなかったことは良かったんじゃないのか？」
「そうだな。西海岸でも危険がゼロとは言えないが、下手なことがあればＵＳＮＡのメンツが丸潰れになる」
「……確かにね」
　今回の案件は急に決まったこととはいえ、留学先で雫たちにトラブルがあれば上泉家と神楽坂家が真っ先に動くことになる……というか、既にトラブルがＵＳＮＡで発生していることを現時点で知っているのは、ここにいる中で言うなら悠元だけしかいない。
　何故言っていないのかと言えば、丁度クリスマスパーティーで顔を合わせるのだから、そこで『神将会』に情報を共有する方がいいと判

断したからだ。それ以外にも、神楽坂家としての仕事やＥＳＣＡＰＥＳ計画のプラン作成で時間が割かれていたことも大きな理由になるが。
「ただ、交換留学といえば、その相手が分からんのだがな……雫は聞いてるか？」
「ううん、何も。女の子とは聞いてるけど」
　この時点で情報を開示しない以上、代わりに来る人間が〝ＵＳＮＡ政府の関係者〟ということを示していると思う。当然未成年だから情報開示できないという理由もあるだろうが、性別と年齢以外何も渡さない時点でトラブルを持ち込むと宣言しているようなものだ。
「その相手の情報ならある程度知ってるが、聞きたいか？」
「ホント!?　悠元なら信頼できるけど……どんな子なの？」
「――――アンジェリーナ＝クドウ＝シールズ。年明けに雫と入れ替わりで留学してくる子だ」
　この情報が表に出なくても無理はない。何せ、悠元が『八咫鏡』を使って国防総省から引っ張り出してきた個人データだからだ。先日のマイクロブラックホール実験絡みで以前大統領の言葉を思い出したので、アンジェリーナ＝クドウ＝シールズことリーナの身辺を洗い出すことにした。
「クドウ……もしかして、九島将軍の？」
「年齢からして、恐らく彼の孫娘だろう。外国人とはいえ、十師族の係累みたいなものだからな……そりゃ情報が出てこなくても無理はないと思う」
　そして、実は第一高校に留学してくる人間がもう一人。
　実は、今代の『シリウス』について不可解な疑問があった。いくらアンジー・シリウス・アンジェリーナ＝クドウ＝シールズが優れた魔法師とはいえ、戦略級魔法の威力を制御し切っていたことに関しては謎という他なかった（彼女の『ヘビィ・メタル・バースト』ならビル一つ丸ごと消し飛ばしていた可能性が高かった）。その後で大統領に会い、リーナと双子の姉妹がいる話を聞いたことで、一つの可能性に辿り着いた。

それは、七草香澄と泉美が得意とする乗積魔法（マルチプリケイティブ・キャスト）の可能性。その技術を行使できるのはかなり限られており、それをリーナと彼女の双子の妹が行使していたとするなら、その時の疑問は腑に落ちる。

そうなると、リーナ以上に警戒せねばならない相手になるかもしれない、と悠元は内心で溜息を吐いたのだった。

年の瀬の会合

世間がクリスマスで賑わっている頃、九重寺には三人の人物が顔を合わせていた。

一人はこの寺の住職である九重八雲。二人目は偉丈夫で濃い髭が特徴的な男性。そして、三人目は尼の衣装を身に纏う女性であった。この三人は神楽坂家の諜報を担う『九頭龍』における幹部クラスにあたり、中央と西部、東部を管轄する中心人物。

「して、八雲。東部の白人どもが騒がしいのは真か？」

「真のことだ。それは『星見』でも予見した通りのことらしい」

偉丈夫――宮本家当主こと宮本宗司（みやもとそうし）が八雲にそう切り出すと、八雲は対等な言葉遣いで答えた。すると、尼姿の女性――矢車本家当主夫人こと矢車朔夜（やぐるまさくや）が徐に口を開いた。

「西が無事に済めば、今度は東ですか……何やら妖の臭いを感じてしまいますが、八雲は何かご存知でしょうか？」

「朔夜殿の懸念はほぼ当たっているらしいね。次期当主殿の調べによれば、彼らは科学の力で〝壁〟を歪ませたようだ」

八雲は悠元からその話を聞いた際、思わず自分の耳を疑った。現代魔法において対処方法が確立していない「パラサイト」の発生リスクをＵＳＮＡの大統領が知っていながら、先日の戦略級魔法を追求しようとした結果……その懸念が現実のものとなった。

そして、『九頭龍』に位置する古式魔法の家にも神楽坂家の前身となる安倍氏の警告がきちんと受け継がれている。これは、数百年という長い時を経て次元の壁が揺らぎかねない事態を予見していた、ということだ。

「……修司を留学させるのは、その対処をするためか？」

「その通り。修司君と由夢君、そして雫君を留学させるのは『神将会』の総長殿の意向による」

パラサイトを瀬戸際で対処するだけでなく、その先も見据えた対策を彼らに担ってもらうのが今回の目的。

スターズは神将会に対しても探りを入れてきているが、そもそも神

将会のパーソナルデータ自体が全て紙媒体での管理体制となっており、探られても何も痛くないダミーのパーソナルデータがネットワーク上に置かれている。
　周公瑾がこの状況下で動いても、先回りしてその企みを全て潰す。それでいて顧傑が動けば、反魔法主義にいいようにされているＵＳＮＡに格好の取引を持ち掛ける。スターズを有している彼らにとっても反魔法主義を野放しにするなど出来ないのだから。
　八雲も周公瑾の存在やその素性は粗方調べているが、それが全て四葉の復讐戦に繋がるとは思ってもいなかった。この辺は世捨て人の性なのかもしれないが。
「その代わりに来る面子の中には、九島将軍の孫娘たちがいる。どうやら、彼女らが今代の『シリウス』ではないかと睨んでいるが……彼を相手にして生き残れるかどうか」
「次期当主殿のお話は甥から聞いておりますが、それほどなのですか？」
「彼は『心刃』を発展させた技術――三代目当主殿が編み出した『天刃霊装』を会得した。ほかの神将会のメンバーも彼の教えによって次々と会得しているほどだ」
「成程……儂の子である上二人には到底話せぬな。間違いなく嫉妬するであろうからな」
　天神魔法だけでも素質を選ぶのに、過去にかつて存在した技術を現代で会得した悠元は、間違いなく神楽坂家の歴史に名を残す存在となっている。分家である宮本家当主の宗司は、八雲の言葉から起こりうることを予見しつつ、重たい口調で述べた。
　それはともかく、いくらＵＳＮＡ最強の魔法師を自負しているとはいえ、こちらの技量も見ずに喧嘩を吹っ掛ける姿勢は如何なものか……と宗司は言葉をつづける。
「八雲。その彼は正月の慶賀会に出るのか？」
「無論だよ。特に今回は神楽坂の次期当主お披露目として〝護廷十二家〟が揃い踏みとなる」
　神楽坂本家、分家の伊勢、高槻、宮本。九頭龍に属する矢車、鳴瀬、

四十九院、津久葉、安宿、吉田、九重。そして、神楽坂家の筆頭執事を務めている忠成の葉山家。これらを総称して〝護廷十二家〟と呼ばれる体制は、神楽坂家が築いて保ってきた国家守護のシステム。
「八雲殿は大丈夫なのですか？　お弟子さんが彼のご友人にいると聞いておりますが」
「今回は本山の特使、ということで既に話はつけている。袈裟姿なら彼も必要以上に追及してこないだろうからね」
千姫からは達也と深雪を表向き悠元の友人（内実は四葉家当主代理）として呼ぶことがすでに決まっている。このことについて七草家と九島家が神楽坂家に探りを入れ始めているが、その辺の対応も既に始めている。
普段は達也の前で袈裟姿など見せることはないが、これでも叡山の末寺であることに変わりはない。彼は古式魔法の使い手であると同時に住職だということは、分かっていても納得できないが。

◇　◇　◇

「――――箱根に？」
魔法科高校――――第一高校だけでなく第三高校も冬休みに入っていた。教師陣が公務員のため、学校には警備員ぐらいしかいない。だが、自主訓練という形で学校に来て訓練に励むものも少なくない。
そんな中、金沢魔法理学研究所の訓練室にて特訓を積んでいた愛梨、栞、沓子の三人。各々来年の九校戦でのリベンジを誓っての訓練の休憩中に、沓子が口にした一言に愛梨が聞き返した。
「うむ、そうらしいの。今朝母上から言われてしまっての」
「箱根って温泉街で賑わっているぐらいのイメージだけれど、それ以外は何も聞いてないの？」
「正装を準備するようにとしか……確か、神楽坂家の屋敷が箱根にあるとは聞いておるが」
沓子からすれば、いくら四十九院家が白川家の流れを汲む古式魔法の家系とはいっても、今は百家の本流に連なる家柄の側面が強い。そもそも、沓子自身が四十九院家の全てを知っているとは言い難いため、憶測混じりの結論しか出せない。

「神楽坂家……確か、三矢悠元が養子に入った家ね」
「愛梨、気になるの？」
「……そうね。叔父様たちは私に期待してるような素振りだったけれど」
（満更でもないように聞こえるのは、私の聞き間違い？）
実のところ、愛梨の母親はフランス人（結婚した際に帰化して日本人名を名乗っている）であり、古式魔法でも格式高い家柄に該当する（愛梨の異名は母親の出身に由来している）。もし悠元と愛梨が婚姻を結べば、一色家としても愛梨の母方の実家としても、強い繋がりを得る形となる。
彼に対して好意的な感情を持っている愛梨を見て、大人たちが進めている政略結婚自体が茶番にも思えてしまう栞であった。
「そしたら、何か土産を期待しておくわ」
「遊びに行くために赴くとは思えんがのう……余裕があれば、そうしておくかの」
◇　◇　◇
クリスマスパーティーが無事に終わったところで、神楽坂本家では正月の飾り付けに追われている。陰陽道系の家系は仏教系や神道系のものと異なり、そこまで大がかりのことをするわけではない。
とはいえ、神楽坂本家を移転させる際に建立された京都の神社（旧本家跡に建てられた神社）や箱根の神宮（霊山である富士山の力をコントロールするための神社）のこともあるので、一概に暇とも言えない。尤も、その辺の対応は分家筋の仕事のため、本家の人間がするべき仕事は来客の対応ぐらいしかないのだが。
悠元はその来客の応接として、とある人物と面会していた。
「貴方が姉の跡を継ぐ元三矢家の方ですか。中々に良い面構えをされておりますね」
「恐縮です」
悠元と面会しているのは、鳴瀬紅紗（なるせあずさ）――現当主である千姫の実妹で、雫の母方の祖母にあたる人物。容姿は千姫ほどではないが、それでも３０代ぐらいにしか見えない若さを保っている。なお、実年齢は

８１歳と本人が述べている。
「雫が好いた相手が十師族と聞いたときは驚きもしましたが……やはり、姉の面影がしっかり残っていますね」
「自分としては、もう少し男性らしくあってほしかったところですが、もう諦めていますよ」
「ふふっ、そうですか」
悠元は母親の詩歩に似たため、父親である元と似なかったことについては、ある意味で良かったと言えばいいのかもしれない（元も自分に似なくてよかった、と述べていたらしい）。
そして、悠元の隣には雫も同席している。雫からすれば北山家絡みの付き合いが優先的になってしまっており、母方の実家との付き合いはそれこそ記憶でギリギリ覚えているぐらいのものでしかないらしい。
「雫も大きくなりましたね。前に会ったときは物心付くかどうかの時でしたから、覚えていないかもしれませんが」
「辛うじてってぐらいかな。それで、どうしてお祖母ちゃんが神楽坂の本家に？」
「千姫姉さんのご指名です。本当は鳴瀬家当主が出るべきことなのですがね」
家督は既に紅紗の息子が担っている以上、本来の話でいえば彼が出てくるべきことなのは確かだ。そうならなかった理由は、千姫がそう指名したからだと話す。別に隔意を持っているわけではなく、年明けから起こるであろう騒動を最小限に止めるため、矢車家と鳴瀬家の当主には代理を立てさせる形で納得させた。
ちなみに、紅紗から「曾孫の顔は早く見たいので、お願いしますね」と言われたとき、雫の顔が赤くなっていたのは言うまでもない。
紅紗との会談を終えた二人は、そのまま『神将会』の面々が集う広間に姿を見せた。その場には既に他の五人も着席しており、悠元と雫も指定された席に腰を下ろした。
「さて、年明けから各々動くになるのは明白だが……結論から言えば――『パラサイト』がこの国に来る。東の連中の被害妄想が引き起

こしたとばっちりの尻拭いとも言えるが」
「やっぱり、ハロウィンの一件が原因なんでしょ？　あ、別に深雪ちゃんのお兄さんを責める気はないよ」
「気にしないで、由夢。にしても、面倒なことを起こす国は凍らせましょうか？」
　今の深雪が魔法力を全開で使った場合、間違いなく都市一つは氷結世界が作れるレベル。天神魔法の修得は初級レベルだが、それでも達也の妹だけあって物覚えはかなり早い。彼女の言ったことに対して元継が窘めた。
「それは流石に止めてほしいな。にしても、『マテリアル・バースト』や『スターライトブレイカー』であそこまで騒ぎ立てるとはな……これが通らなければ、世論を味方につけてでも達也君や悠元を国外から追い出すこともやってこないとも限らない」
　元継の懸念は強ち的外れとも言えない。原作においての結果があの『ディオーネー計画』だ。反魔法主義の方々に対しては申し訳ないかもしれないが、こちらとしても生存権が懸かっている問題を座視など出来ない。
　それが国外はおろか国内にいることも問題なのだが。
「まあ、向こうにも熱心な愛国者はいるからな。エドワード・クラークはその代表格だ」
「エドワード・クラーク？　一体何者だ？」
「奴は非魔法師で専門は情報分野の研究者だが……全世界の電子機器を傍受できるシステムを開発した張本人。その名称は『エシェロン』といい、そのバックドアシステムである『フリズスキャルヴ』でアメリカの覇権を握りたいと考えている野心家だ」
　そもそもの話、『パラサイト』の一件でＵＳＮＡが余計な妨害をしてきたことを内輪にしたせいで、後々のことに大きな影響を及ぼしている。いくら公権力を有さないとはいえ、繋がりが全くないというわけでもない筈なのにだ。
　同盟国内での不協和音は、世界戦争への緊張度を高めることを意味している。そのことぐらいはどの国であろうとも理解している筈な

のだ。
　その不文律を一方的に破ってきた形のＵＳＮＡが余計に拗れさせ、パラサイトに対して有効な攻撃手段を持っているとはいい難い状況で余計な火種を持ち込む……こうなると、ＵＳＮＡ自体が世界の火薬庫とも思えてくる。
「悠元、俺たちにそいつを探れと？」
「そこまでは注文しないつもりだ。最低でもＵＳＮＡ国内にいるパラサイトを排除してくれ。天刃霊装を使えばパラサイトのみ排除することも可能だからな。で、彼には俺らと同年代の息子――――レイモンド・クラークがいる。彼が『フリズスキャルヴ』の端末を持つ一人で、一種の演出家（エンターテイナー）と言ってもいい……そいつには気を付けておけ」
　幸いにも、この時点で全員が天刃霊装の修得に漕ぎ着けている。純粋な想子と霊子で構成された天刃霊装ならば、肉体を傷つけることなく霊体のみにダメージを与えることができる。
　エドワード・クラークとレイモンド・クラークの情報を開示した理由は、この中で接触の多くなる雫、修司、由夢に対してのアドバイスも含んでいる。現に、エドワード・クラークはフリズスキャルヴを使い、横浜事変で動いていた神将会に対しても探りを入れている。
　フリズスキャルヴの検索履歴が残るシステムの特性を使い、『八咫鏡』で顧傑の動向を探るついでにエドワード・クラークの動向も探っているというわけだ。場合によってはレイモンドについても探りを入れるべきだろうが。
「この国に来ることになる『シリウス』は、最悪俺一人で対処する。元継兄さんは十文字家に繋ぎを取って、早めの共同歩調を取るように言ってくれ」
「そうだな……師族会議の面倒な規則さえなければ、こんな回りくどい方法など使わずに済むのだが」
「悠元さんに元継さん。その、面倒な規則というのは？」
「十師族は互いの監視のために、非常事態を除いて師族会議を通さずに共謀・共調を禁じている。まあ、三矢家と四葉家の場合は〝手打ち〟だから規則には抵触しなかった訳だが」

お互いの秘密を知ったということから来る手打ちを禁じるルールはないし、元治の妻となった穂波の婚姻斡旋をしたのは上泉家。それに、ＦＬＴの株式についても〝司波〟深夜からの提案であるし、その保有権が神楽坂家に移った以上は師族会議のルールに一切抵触しない。

七草家に対してパラサイトの拘束術式供与をしたのは、この飴に対して如何なる動きを見せるか、という彼らへの試金石。七草家が国防軍の情報部と太いパイプを持っていることは当然知っている。

そもそも、国防という観点からして十師族が国防軍と関係を持たない訳にはいかない。それに反した流れの一端に独立魔装大隊という存在もあるわけだが。

「でも、どうやって『パラサイト』はこっちに来るって分かったの？」

「……余剰次元理論を用いたマイクロ・ブラックホール生成・消滅実験。爺さんですら警告したそれを連中がやりやがった」

「それは、どういうものなのでしょう？」

「理論自体の説明は色々面倒だから省くが、やっていることは古式魔法の〝禁術〟に等しい……といえば、察しは付くか？」

その言葉で悠元以外の面々……とりわけ現当主である元継の表情が強張った。『パラサイト』をこちら側の次元に引っ張ってきた原因が何なのかも悟ったようだと悠元は察した。

「……施設の破壊はしないのか？」

「それをしたところで、躍起になって研究所が複数建設されるのが目に見えている。もしくはこの国に対する圧力として使われるオチだろう。まあ、今は奴らに泳がせておけばいい……その代償を自称聡明な頭脳を持つＵＳＮＡの連中が気付いていればいいんだがな」

向こうの勝手な言い分でこちらを貶めるのだ。その代償が倍プッシュで済まないことを理解してもらわねば話にならない。現に、交換留学の裏側では『パラサイト』に寄生された脱走軍人の処分をアンジー・シリウスがしているようだが、それが逆効果を生んでいると気付いていないようだ。

どうやら、彼女の祖父は学んでいたはずの古式魔法関連の技術を孫

娘に教えなかったようだ。妙なところで律儀とも言えるかもしれない。
「この際ハッキリ言っておく。俺は今回十師族に手を貸したが、これで内ゲバなんてやってるようなら、最悪見捨てることも視野に入れる……まあ、友好的な間柄の家は温情で残してやるけど」
口が悪いかもしれないが、相手は国家単位の規模なのだ。そんな時に足並みが揃いませんでしたなんてことが露呈すれば、それこそ今後上手くいくとは限らない……いや、極めて難しいだろう。そもそも、師族会議が許可なしにお互いに協力することを禁じている時点でお察しだ。
確かに、達也の魔法は現代魔法において最強格なのは確かだ（威力が強すぎて迂闊に使えないというデメリットも存在するが）。だからといって、USNAがそれを西側への抑えに利用しようとせずに排除を決めた時点で、まるで〝21世紀版ハル・ノート〟のようである。
それを表立って言っていないのは評価に値するが、軍のコントロールを政府が出来ていないこと自体問題だと思う……魔法という存在のせいでそうなることは止む無きことかもしれない。

他人事であれば楽なこと

西暦２０９６年の正月。
神楽坂家に養子として入って初めての正月だが、基本的には上泉家と変わらない感じのスタートだった。なので、悠元にしてみればいつもの正月を過ごす感覚なのはありがたい話だった。
「とはいえ、明日は慶賀会か……また何か増えないといいんだが」
こういう時ほど当たりやすい自分の勘を今ばかりは恨めしく思ったりする。妙に運がいい時もあれば、それに付随する厄介ごとも増えたりする。一石二鳥というより一石四鳥になった挙句、虎がおまけで付いてくる感じだろう。
私服の悠元がそんなことを思いながら呟くと、襖の外から声が響いてきた。
『悠元様、御当主様がお呼びでございます』
「分かりました。すぐに出向きます」
翌日に慶賀会という新年の挨拶があることは予め聞かされている。響いてきた声に答えを返しつつ、襖一枚隔てた先にある寝床の方向を見やり、静かに息を吐いた。
何があったのかは……正直口に出したら負けだと思っているので、決して言わない。
呼び出された先は大広間ではなく、千姫の私室であった。その当人は炬燵に入って蜜柑を食しているというお気楽ぶり。傍から見れば、これが神楽坂家当主だと信じてもらえるほうが少ないだろう。
「あけましておめでとうございます、母上」
「あけおめー。ま、遠慮せずに入って」
緩い感じの口調だが、この人物にそれを窘めても意味がないことは分かっているため、目くじらを立てることはない。言われるがままに炬燵に入ると、千姫から蜜柑を差し出されたので受け取る。皮を剥いて食べつつ、呼び出しの内容について尋ねた。
「それで、今日は新年の挨拶ってだけではないんですよね？」
「明日の慶賀会では神楽坂の全ての家にお披露目もあるんだけれど、

婚約者がもう二人増えるよ」
「……」
予想してなかったわけではないが、婚約者に深雪、雫、姫梨の三人が決まってまだ4ヶ月足らず。このタイミングで増えるのはどうなのかという思いがある。
あまり触れていなかったが、夏休み明けからは平日を司波家で、休日は神楽坂家の別邸で過ごすという生活サイクルに変化している。不公平が生じないようにデート（表にできないので、他の知人を誘ったりしているが）などでフォローも入れていた。
「表沙汰には出来ないんだけれど、婚約申込みの案件は結構来ているからね。千葉家からも来ていたし」
「エリカとは恋愛感情なんて持てないですし、その姉だったら俺でも嫌ですよ。後々の蟠りなんて御免ですから」
「そこはちゃんと断ったよ。話を戻すけど、二人は『九頭龍』の家の出なので先んじて配慮が必要と判断したの。津久葉家と四十九院家……といえば、心当たりがあるかな？」
千葉家の方は予想していたが、その通りになったことは正直溜息を吐きたくなった。エリカ自身に女性としての魅力が無いと言えば嘘になるが、それが恋愛感情に発展するかどうかは当事者同士の問題だ。
今までの付き合いのせいで、彼女に関しては〝腐れ縁〟の領域から逸脱することはないだろうし、それが今後も覆ることはない。このことに関してはエリカも同意見である。
心当たりは無論あるが、そこまで好意的に接した覚えがない。津久葉家の方は姉の親友だが、強いて言うならバレンタインのチョコを贈られたのでお返しした程度。四十九院家の方はといえば、数年前に剛三の付き添いで知り合った子がいたというぐらいだ。
「無論ありますが、津久葉家といえば四葉の分家にあたります。その、大丈夫なのですか？」
「かの家には、達也君のことに関して中立でいてほしいとお願いしてあるよ。その交換条件が婚約者というわけだから」

千姫から話が出た時点で、この婚約自体〝決定事項〟なのだろう。この件に関しては、断る術を持っていないに等しい自分に拒否権なんてあるはずがない。諦めたように蜜柑を食べる悠元を見て、千姫はクスッと笑みを漏らした。
「にしても……七草家の当主に会って、対パラサイトの拘束術式を渡すだなんてね」
「鞭ばかりだと変に反発される恐れがありましたので……駄目でしたか？」
「現代魔法の範疇を超えていないので大丈夫でしょう。尤も、長年の恋心を割り切れたら苦労なんてしないけれどね……現当主夫人も可哀想よ」
春の一件で下手にやらかしている以上、これ以上の失態は毒でしかないと理解してくれるのならばありがたい。だが、そうならない可能性もあることを含みつつ、千姫は七草家当主夫人の身を案じた。
「ご存じなのですか？」
「私の息子――今の伊勢家当主と友人なのよ。悠君のバレンタインの一件についても、息子経由でお詫びの手紙が届いたわ」
悠元と泉美の婚約が成立出来たのは、そういう絡繰りがあったからと納得した。とはいえ、結局婚約が解消されてしまったことは現当主の失点としか言いようがないわけだが。
「悠君は、正直どうなの？」
「人となりとしては問題ないかと思いますよ。ただまあ、当人たちにその意思がなくとも、当主や前妻の子である長兄が妙なことを企むかもしれませんが」
真由美と泉美は、多少なりとも難はあるが嫌いでない。だが、現当主や次期当主の長兄が神楽坂家との繋がりを使って増長されても困る……それが正直な本音である。
ただでさえ、神楽坂家は四葉家のスポンサーを担っている以上、四葉の力を殺ごうとする動きは許容できない。今でも力を持ちすぎているなどと主張している烈に関しては、当人自身が強化措置に成功した側だからこその意見なのだろうが……潜在的な競合国であるＵＳ

ＮＡがいる以上、そんな〝悠長〟など聞いている暇はない。
「はぁ……話を変えるけど、修司と由夢、それに雫を向こうに送るのはパラサイトだけの対処が目的？」
「それもありますが、『神将会』としての覚悟を身に着けてもらうための指令を一つ送ります」
「成程ね。手厳しい総長さんだこと」
　国家の守護という目的を達成するためには、その手段に妥協や甘えは許されない。それが常人なら忌避されることもやらねばならない。悠元自身、この世界に来てからその現実を痛いほどに実感したからこそ、前世のような甘い平和観を持つことが危険だと理解している。
　三人には反魔法主義の中核に近いメンバーの抹殺を指令として送ることを決めている。「無頭龍」の一件では修司と由夢が経験している人殺し……その咎を雫にも負ってもらう。
「自称最強を名乗っているスターズが尻込みするぐらいなら、こちらで対応した方が良いでしょう。最終的にはこちらの戦略級魔法に関しての無断調査を永久的に止めさせられれば御の字です」
「それでも止まらない場合は？」
「経済的に破綻させることも考えましたが、世界恐慌の再来は御免なのでやりません……まあ、アメリカ発祥の現代魔法が〝欠陥魔法〟だと公表したら、世界クラスで大騒ぎになるかもしれませんが」
　教えを乞う姿勢を見せずに魔法技術を奪おうとする輩など、百害あって一利ないに等しい。まあ、『スターライトブレイカー』に使われている技術がＦＡＥ（Ｆｒｅｅ（フリー） Ａｆｔｅｒ（アフター） Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ（エグゼキューション））理論だと知ったら向こうは度肝を抜くだろうが、元々は日米共同研究だったものなので咎められる謂れなど無い。
「悠君は次々と現代の魔法技術水準を超えていくわね。こないだ使ったものは、多分ＦＡＥ理論から来るものかな？」
「ご明察です」
　魔法で改変された結果として生じる事象は、本来この世界には無いはずの事象であるが故に、改変直後は物理法則の束縛が緩い。それ故に正常な物理法則が作用するまでの短いタイムラグにおいては、通常

の事象改変に必要な干渉力がずっと小さな力で次の魔法を実行する事が出来る――――というのがＦＡＥ理論の基本概念だ。
この理論に関しては、沖縄での戦闘経験を重く受け止めた３年前から取り組んでいた。
原作においては「ブリオネイク」が該当するわけだが、１ｍｓ以下という人間では認識できない時間内に改変作業を完了させるとなれば、極めて限定された空間内で魔法に指向性を持たせるのが限界のラインだ。その意味で「ブリオネイク」を考え付いた人間は天才だろう。
ならば、その物理法則の束縛を緩くするための時間を延ばすにはどうすればよいか……悠元が考え付いた案は、球状に収束させた想子の膜で遮断し、内側の改変事象を外側に漏らさないことでＦＡＥ理論のタイムラグを延長する方法だった。その過程で生まれたのが『エアライド・バースト』である。
尤も、それよりも簡単な方法が想子制御によって可能となったため、その方策は一部の魔法に残るだけとなった。『スターライトブレイカー』はその方法によってＦＡＥ理論を証明することに成功した戦略級魔法というわけだ。
「とはいえ、喧嘩腰の相手に教える気なんて皆無なわけですが……向こうの大統領閣下は一体何をやっているのかと愚痴りたくもなります。文民統制の問題に敏感なのはこの国も同じですが」
「やっぱり、前世でもメディアとか野党議員とか煩かったの？」
「それはまあ、そうですね」
あまり政治的なことを語る気になんてなれないが、向き合わないと面倒なことになる。なので、神楽坂家次期当主としての正式なお披露目である明日は大事な日となるだろう。
元々三矢家の人間として生まれたはずなのに、どこか違うこの世界のせいでこの国の護りを担うことになってしまった。今更そのことに不満や不平を唱える気はないが、周辺国の人間はもう少し自制するという気概を見せてほしい……と思う悠元であった。
◇　◇　◇
時を同じくして、四葉本家の私室。真夜は便箋に目を通していた

が、それを葉山に手渡して窓の外を眺めていた。葉山が手早く手紙を燃やしつつ、真夜に問いかけた。
「いかがされますか？」
「そうね……まあ、よろしいんじゃないかしら。私でもスポンサーの方々の意向を無視はできないもの」
「とりわけ、今の神楽坂家には彼がおりますからな」
　手紙の内容に関しては、真夜からすれば一時的な損とも言えるが、今までとこれからの恩恵を考えれば安い代償に近い。それに、四葉の次期当主の件で揉めることが必至である以上、その足並みを崩してくれるだけでもありがたいことである……というのが真夜の出した結論だった。
「それに、神楽坂の次期当主の件も安泰とは言えないらしいわ。明日の慶賀会は、彼にとって大変な一日になるんじゃないかしら」
「正直なところ、達也殿と対等に渡り合える可能性を持つ彼が負けるとは思えませんが」
　神楽坂本家の当主や葉山の息子である忠成、当主の愛弟子たちも彼の次期当主就任を受け入れている。だが、分家の次期当主たちは未だ納得していない部分がある……という千姫の愚痴を真夜は聞いていた、というよりも聞かされていた。
　実の息子からその辺の事情を聞いている身として、葉山は率直な意見を述べる。すると、真夜も同意見だと言いたげながらも言葉をつづける。
「同感ね。それよりも、ＵＳＮＡの件については神楽坂家の指示を仰ぎつつ事を進めます。『パラサイト』に対して有効な攻撃手段や防御手段の情報管理に関しては、葉山さんにお任せいたします」
「畏まりました。して、達也殿にはお伝えしますか？」
「いえ、その辺は彼に対しての〝試し〟ということにいたしましょうか。姉さんからせっつかれたら、その時に対処することにします」
　真夜が脳裏に描いている絵。その絵を葉山は察しつつも、四葉に仕える者としてそれ以上の追及をすることはなく奥へと下がっていった。

神楽坂家慶賀会

――西暦２０９６年１月２日。

箱根にある神楽坂本家の大広間には、袴や着物姿となった達也たちが集まっていた。その辺の衣装は用意しなくてもよいと言われていたが、ここまでの手際の良さには流石の達也も感心するほどだった。

「お似合いですよ、達也さん」

「ありがとう、ほのか。とはいえ、ここまで準備が良いと反動が怖くなるな」

「それは分からなくもないわね。ていうか、あれだけの着物を持っているだなんて、神楽坂家はうちよりも金持ちだと思うわ」

神楽坂の衣裳部屋を見せてもらった際、一番驚いていたのはエリカであった。この中だと上泉家との関わりが一番あるだけに、所狭しと整えられた着物の数々に驚かざるを得なかったらしい。それには美月も苦笑を漏らしたほどだった。

「私からしたらエリカちゃんの家も金持ちだと思いますけど」

「いや、私よりも悠元や雫の家には勝てないわよ……って、そういえば深雪に雫、それに姫梨は？」

「まあ、あいつらは色々準備があるからな……しかし、正直複雑だ」

「複雑？　そりゃどうしてだ？」

美月とエリカの会話に反応しつつ述べた修司の言葉に、疑問を投げかけたのはレオだった。その疑問に答えるように修司が説明を始める。

「悠元が神楽坂家次期当主、そして『神将会』に関わる人間となったことはお前らも知ってるだろうが、それを快く思わない連中が身内にいてな……俺の二人の兄や、伊勢家と高槻家の次期当主たちだよ」

「それはどうしてだい？　悠元は九校戦で結果を示した以上、当然の帰結だと思うけれど」

幹比古の言い分も尤もである、と達也は少なからず理解した。名字が変わる前とはいえ、彼は公式の試合で一条家の御曹司である「クリムゾン・プリンス」を正面から破った。その意味で実力は十二分に証

明されたはずなのだ。
　その疑問に対して、答えを提示したのは修司の後ろからひょっこり姿を見せた着物姿の由夢だった。
「答えは至極単純なものだよ。実力も伴わない連中の嫉妬ってやつだから」
「嫉妬ですか？」
「俺らが現当主の愛弟子となったこともひと悶着あったが、それはいいとして……いくら神楽坂家と上泉家の血を継ぐものとはいえ、次期当主を現当主の直系である主家・分家からではなく、姉君の孫を引っ張ってきたことに憤慨しているらしい」
　彼らの言い分としては、現当主である千姫の直系から選ぶべきだという主張を無視された形での次期当主の選抜。その彼が元十師族だということも古式魔法の魔法使いとしてのプライドが許さなかったのだろう。
「修司と由夢は納得しているのかい？」
「納得せざるを得ない。というか……悠元の強さは最早世界の魔法師社会でもトップクラスに位置している存在だ。その恩恵を受けている以上、敵に回すほうが身を滅ぼしかねない」
「同感かな。ホント味方で助かったと思っちゃうぐらいだよ」
　ただでさえ天神魔法の『天照』と『月読』という究極魔法を会得しているだけでなく、世界最強格の〝夜の女王〟の魔法を戦略級魔法にクラスアップさせた実力は折り紙付き。加えて想子制御能力は世界の頂にいてもおかしくはない。
　彼の温情によって生かされているような感じだ、とは口にしないものの、それと同義の言葉を述べた二人に対して、周囲は苦笑を滲ませるしかなかった。
「というわけで、達也。深雪の制御は任せた」
「俺は深雪の保護者ではないんだがな……せめて母上ぐらい来てくれれば違うのだろうが」
　慶賀会では主家・分家の代表や次期当主だけでなく、現職の総理大臣をはじめとして政財界の大物まで参加する催し。その意味で達也

の願いが叶うことはないのだが、そう言ってしまったことに周囲から苦笑が続く形となった。
　すると、そこに神楽坂家の使用人が姿を見せた。
「失礼します。司波様に吉田様、お会いしたいという方がいらっしゃるのですが……」
「僕と達也に…こちらは構いませんが、達也はどうする？」
「……断るという理由がないだろうな」
　達也としては面倒事に関わりたくなかったが、深雪が将来神楽坂家に嫁ぐ意味で無視できる問題ではない。表立って言われていなかったが、恐らくは深雪が四葉家の代理として出向いているだろうと思い、その申し出を受けることにした。
　達也と幹比古は他の面々に断わってその場を後にすると、少し離れた客間に通された。そこには既に偉丈夫な容姿の男性が座っており、男性は立ち上がることなく二人に視線を向けた。
　達也はその出で立ちに驚きを見せたものの、黙ったままでは向こうのペースに呑まれる……そう判断しつつ、下座に座り頭を下げた。幹比古も達也に倣う形で頭を下げる形となった。だが、言葉を発したのは彼と知り合っている幹比古のほうだった。
「お久しぶりでございます、青波入道閣下。隣にいるのは学友の司波達也殿です」
「ほう……直答を許す」
「司波達也と申します。お目にかかれて光栄に存じます」
「東道青波である。四葉達也、貴殿のことは義父殿より存じていた」
　青波が発した言葉に、一番驚きを見せたのは幹比古だった。達也があの四葉家の人間だとするなら、自ずと深雪も四葉家の人間という意味であることを察したからだ。その驚きを青波は目線で感じ取りつつ、警戒を見せている達也に目線を向けた。
「心配はするな。私とて立場ある身故に、其方の素性を言い触らすことはせぬ。神楽坂家と同じく四葉家に関わりあるものとしてな」
「……分かりました、今はその言葉を信じたく思います。幹比古も、それでいいか？」

「あ、うん……それで、今回御呼びしたのは如何なる理由なのでしょうか？」
　後でその辺の事情を聞いておこうと思いつつ、幹比古は今回の要件を青波に尋ねた。すると、青波は一息吐いた後で真剣な表情を向けた。
「吉田幹比古、其方の決意は聞き及んだ。現状の不安定な情勢が落ち着き次第、話を進めようと考えておる。さしあたっては、娘が年明けから第一高校に通う故、仲良くしてやってほしい」
「……えっと、それはどういうことなのでしょうか？」
「娘が其方に惚れ込んだのだ。容姿は妻似なので問題はないのだがな……」
　話を終えた（当人にその話の内容が殆ど入ってこないような心情だったが）達也と幹比古が揃って大広間に戻る中、達也は幹比古に問いかけた。
「幹比古、大丈夫か？」
「正直、色々と驚くことが多すぎて頭に入ってこなかったよ……でも、逆に納得できたかな」
「何がだ？」
「あの悠元が達也を〝親友〟と接していることにかな」
「俺はそこまでの規格外ではないんだがな……」
　幹比古は悠元が三矢家の人間であることを知る前から関わってきた。その規格外さからして、対等に関わっている達也が四葉家の人間だという事実は、逆に納得できる材料になっていたと幹比古は述べた。
「いや、十分に凄いと思うけれどね……」
　達也と深雪が十師族に引けを取らない実力者なのは少々疑問だったが、二人が十師族であり元十師族となった悠元と親交が深いという理由もしっくり来る、というのが幹比古の感想だった。
「正直、あの四葉家ということは驚きもしたけど……僕は将来達也に指示を出す立場になると思うと、今から胃が痛くなりそうだよ」
「その言い方だと、俺が問題児のような言い方になるんだが？」

「いや、達也から色々恩恵を受けている立場だからね、僕は」
魔法師としての恩人を顎で使うという感覚など持ちたくない、という幹比古の言葉に対して、達也が返した言葉はこうなった。
「そんなことを言ったら、俺も悠元から恩恵を受けている側の人間なんだがな……深雪も変に暴走しないことを祈りたい気分だ」
「新年早々氷のホテルとかにならないよね？」
「……」
実は、大みそかにエリカが調子に乗って深雪をからかった結果、深雪の魔法が暴走して客間全体が氷のホテル状態となった。結局は悠元が諌めて事なきを得たが、それ以降はずっと深雪が悠元に甘えっぱなしだったことは言うまでもない。
慶賀会は挨拶の会というよりも食事会という趣。
羽織袴姿の悠元が広間に出向こうとしたところ、廊下の途中で同じような姿の複数の男性が立ち塞がっていた。その人物らは明らかに敵視や侮蔑といった表情を向けていることに内心で溜息を吐きたくなった。
「……どちら様でしょうか？」
「お前、宮本家の次期当主である兄上に向かって……！」
「抑えろ、一宗（かずむね）。俺は宮本修一郎（しゅういちろう）、宮本家の次期当主となる人物だ、〝三矢〟悠元」
修司と似た容姿のために関係者であることは想定していたが、分家の次期当主が何用なのかと聞きたくなった。だが、向こうが出した名字の時点で認めていないとすぐに察することができた。
「用件は一つだ。今すぐ神楽坂家の次期当主から降りるがいい。お前のような似非の魔法使いに神楽坂の名を継ぐ資格などない」
正直な話、説得力が皆無である。古式魔法の大家ならではのプライドは理解できるが、それなら現当主の愛弟子である修司が次期当主候補に選ばれる――その方がまだ納得できる。
神楽坂家の次期当主を決めたのは現当主の意向だし、三矢家は上泉家と神楽坂家の係累に位置する。それを無視して納得できないと攻め立てるのはおかしい話だ。

「それをお決めになったのはこの家の現当主殿ですから、直接異議を申し上げるべきです」
「だが、受け入れたのは事実だろう！　そうやって我々の魔法も盗んでいくつもりだろう!?」
　話にならない。そう判断した悠元は気配を偽って彼らの後ろへ移動し、そのまま大広間に抜けていこうとした。その際わざと気配を出したところ、修一郎は隠し持っていた小太刀を抜き放ち、振り向きざまに悠元へ振るう。
　だが、悠元はそれに対して右手の小指だけでその刃を受け止めた。
「……なっ!?」
「言葉でだめなら実力でか……下らない」
　そう冷ややかに呟いた後、修一郎の持っていた小太刀を奪って悠元が振るうと、数人の男性が瞬く間に一切何も着ていない姿へと変貌した。あんまり見つめていても面白くないため、移動魔法で廊下と外を区切る扉を開き、『エアライド・バースト』で庭に吹き飛ばした。
　絵面的に言えば最悪の様相で、語ることはおろか誰にも見せたくないと思った悠元は小太刀を外に放り投げ、扉を静かに閉じてその場を後にした。
「遅くなりました、母上」
「いえ、時間通りですが……大丈夫ですか？」
「お気遣いなく。こうなることは目に見えていましたから」
　血筋で証明できるとはいえ、こうなる可能性がなくもないと思っていた。千姫自身も分家に対して説明をし、分家の現当主らは悠元の実力を色眼鏡なしに評価しているとのこと。だが、次期当主たちはそうでなかった……妙なプライドに拘れば、待っているのは破滅だけだとなぜ理解できないのかと愚痴りたくなった。
　すると、その場に羽織や着物姿の達也たちも姿を見せた。その中には深雪、雫、姫梨も含まれていた。深雪の心配そうな表情からして、おそらく事情を聴き及んだものと推測できる。
「悠元さん、大丈夫でしたか？」
「大丈夫だよ、深雪。しかし、あそこまで露骨に来るとは思わなかった

がな」
　万が一殺傷事になれば、良くて廃嫡レベルの一件だ。そんなことはさておき、面々の表情がやや曇っていたことに気づいて問いかけた。
「で、そっちはそっちで何かあったのか？」
「ああ、俺絡みの一件でな」
「……あー、成程。大方青波入道絡みか」
　本来、年齢を考えるのならば敬語を使わねばならない相手だが、今の自分自身は神楽坂家の次期当主である。それに加えて千姫からの忠告もあったため、それに見合った対応をしなければならなかった。
　幹比古の表情を見るからに、そこから達也と深雪の素性もバレたものだと推察した。
「悠元、会ったことがあるのかい？」
「直接対面したのは一度だけだがな……間違っても言いふらすなよ？
　その時は最悪俺が手を下さなきゃいけなくなるんだから」
「こんなこと、身内相手でも言えるわけないって理解してるわよ」
　エリカにしてみれば、幹比古をからかうつもりで問い質したのかもしれない。ところが、いざ蓋を開けてみれば恐怖の存在とも言われる四葉家の係累が身近にいた。エリカの様子を見たレオが苦笑を滲ませるほどのインパクトだ。そのこと自体も驚きなのだが、それを達也が認めてしまったことにも驚いた。
「ていうか、達也は良かったのか？」
「幹比古は信頼しているが、エリカは妙なところで勘が鋭い。変に突っぱねてもどうにもならないと判断した。その辺の考え方は悠元から学んだことだ」
「お前の見本になるような生き方はしていないんだがな」
　妙に達観した生き方をしているのは否定しないが、その影響が達也にも伝播するとは想定外だった。加えて自分が神楽坂家の人間となったことも秘密の共有をするべきという判断に至ったらしい。
　夏休みが明けてからは雫や姫梨もそうだが、深雪と一緒にいる時間が自ずと多くなったため、変に隠すよりは信頼できる人間だけに明かして身動きを取りやすくする方向にシフトしたようだ。しかも、横浜

事変後に四葉本家で現当主からその辺の判断を任せると伝えられたらしい。
「本当にびっくりしましたけど……でも、だからといって諦めはしないつもりですから」
「……雫。ほのかってここまで図太い性格だったか？」
「達也さんのことも含めて、多分悠元のせいだと思う」
「流石私たちの主ですなあ」
なお、深雪からは「お兄様から珍しく相談されましたので、お母様からも許可は取ってあります」とのこと。当分は四葉家のことを隠すことは今まで通り変わらなくとも、変に壁を作って諍いとなるよりはマシだ、と判断したのだった。
余談だが、吹き飛ばした連中のなかには伊勢家と高槻家の次期当主もいたらしく、その連中は千姫の厳命により宗司のしごきプラス滝行となっていた。古式魔法の派閥だけでも面倒なのに、余計な火種は増やさないでほしい。

触れたくなくても寄ってくるもの

慶賀会の進行は滞りなく進んだ。その場に次期当主たちがいなかったことも大きいのかもしれない。だが、彼らの気持ちも理解できなくはないつもりだ。かつての自分を重ね合わせたとき、いきなりぽっと出の人間に立場を掻っ攫われるのは納得できないであろう。

「母上、折り入って相談があるのですが……力を示すのはいかがでしょう？」

「……それが一番誰しも納得できる方法でしょうね。彼らにも同席させましょうか」

いくら言葉で示したところで、いい感触は得られないであろう。千姫も悠元の提案に同意し、一同は中庭に移動する。神楽坂家の関係者や友人たちの前で披露するのは気が引けるが、どの道知られるのは時間の問題だ。そう割り切って悠元は『叢雲』を展開する。

「達也、あれって……魔法か？」

「古式魔法の類だとは思うが、幹比古は何か知ってるか？」

「……多分、神楽坂の秘術だと思う。詳しいことは僕も知らないけどね」

レオの問いかけに対して達也はそう答えつつ幹比古に聞いてみると、聞かれた側も推測を述べるにとどまった。神楽坂家の関係者は悠元のしていることを理解すると同時に驚愕していた。それは悠元に突っかかっていた次期当主たち（無論服は着ている状態だが）も同様であった。

そんな驚きを気にすることなく、悠元は『叢雲』を天に向かって突くように太刀を振り上げた。

「――来い、『鳳凰』」

その言葉と共に天から舞い降りてくる『鳳凰』が『叢雲』に吸収され、太刀から炎がまるで生き物のように悠元の周囲に展開し、悠元の瞳が紅に染まる。悠元が5メートルほど離れた円柱型の鉄柱に向かって『叢雲』を振るった瞬間、鉄柱が〝蒸発〟した。

「『鳳凰』を天刃霊装を介して、武装として使いましたね……」

「修司、いける？」
「行けねえことはないと思うが……天神喚起と天刃霊装の複合なんて、天刃霊装を編み出した三代目以来の快挙なんじゃないか？」
姫梨、由夢、修司は悠元の成したことを冷静に分析しつつ、神楽坂家において天刃霊装の開祖のみが成し遂げたことを彼が再現してしまったことに驚愕を禁じえなかった。修司が横目で宮本家の次期当主である兄を見たところ、まるで信じられないものでも見たような表情だったことに内心溜息を吐いた。
「この事実を以て悠元が神楽坂の次期当主になることは確定だな。兄貴らには悪いが」
「修司はどうなの？」
「俺にそんな甲斐性などない。剣を振るうならばまだしも、大人相手の腹芸など苦手な分野だからな」
神楽坂直系の正当性を説きたいという兄らの心情は理解できなくもない。だが、それを覆して余りある才覚を悠元が発揮した上、彼の次期当主を薦めたのは剛三と千姫の二人。名立たる彼らが認めている以上、撤回するには悠元との直接対決で認めてもらうほかない。
ただ、超然たる事実を目の当たりにしてまで彼らの正当性を認めてもらうことは極めて皆無に近い……修司は言葉に出さなかったものの、そう感じていた。
◇　◇　◇
天刃霊装のお披露目も済んで一段落と行きたかった悠元だが、自室に戻った悠元を待つように出迎えたのは着物姿の二人の女性。彼女らと面識のある悠元は一息吐いたうえで言葉を発した。
「招いたのは母上なのでしょうが……お久しぶりですね、夕歌さん。沓子は九校戦以来になるか」
「そうね、悠元君。直接の面識は二年ぶりになるかしら」
「お邪魔しておるぞ、悠元」
津久葉夕歌と四十九院沓子。かたや四葉の分家であり、もう片方は白川家のルーツを持つ古式魔法の大家。身内絡みで知り合った二人がここにいる意味は正月に千姫から聞いていたが、いざこうなると気

苦労が増えることに対してため息の数が増える。
　その様子を見た二人は各々笑みを漏らした。
「私も母様から聞いたときは驚いたけれど、納得した上でここにいるから」
「……そうですか。母上はどこまで話しています？」
「わしらが許嫁になることと、あとは先んじて婚約しておる三人のことも聞いておる」
　神楽坂家が四葉家のスポンサーである以上、四葉家から嫁を送り出すことは想定の範囲内である。とはいえ、四葉家系統の同世代である深雪と夕歌の二人を送り出して問題はないのかと思いたくなってくる。しかも、沓子も深雪と夕歌の素性は聞き及んだらしい。
「九校戦のこともあるから納得はできるが、愛梨や栞には到底言えぬというのがのう」
「俺としては、これで手打ちになってほしい感が満載なんだが。敬語が抜けてしまったな」
「今の時点で五人だものね。私は気にしないわよ……深雪さんあたりが気にするかもしれないけど」
　だが、まだ終わらないというのは嫌でも理解している。理解はしていても納得できないし、要らぬ恨みや妬みは御免被りたい。気が付けば夕歌に対しても敬語抜きで話していたが、これについては夕歌がそう答えた。
「一番の厄介な問題は一条家関連の問題になりそうだがな」
「あー……将輝のことじゃな」
「え？　あの『クリムゾン・プリンス』がどうかしたの？」
　単純に将輝と深雪の問題ならばそこまでではない。だが、茜が悠元に恋慕している問題が連結すると余計ややこしくなると踏んでいる。一条家の現当主も親馬鹿な側面があるだけに尚更だろう。
　七草家の場合はどうなのかといえば、あれはどちらかといえば家庭内での問題なのでそこまでの事態にはならないだろうと思いたい。
「将輝のやつ、深雪に恋慕していてな……アイツが奥手だからまだ助かっているが、変な時期に余計なことが起きそうな気がしてな」

〝原作〟では深雪が四葉家の人間だと公表したこと（メインは四葉家の次期当主に推薦したことと達也との婚約）で諍いが発生した。この世界では深雪が自身の婚約者序列第一位になっており、しかも『神将会』の第六席に就いている。

このことからして深雪が四葉家の次期当主に推薦される確率は極めて低いが、その関連の情報を公表した場合、深雪に対して婚約を申し込もうとする輩が出てくるだろう。大仰かもしれないが、九島家もその可能性の範疇に含んでいると思っていてもいいかもしれない。

「九校戦で将輝を下しておるし、神楽坂家の次期当主であるお主と深雪嬢が婚姻しても異論はないと思うがのう」

「俺が次期当主に選ばれた経緯自体特殊の範疇だからな。多少なりとも文句を言いたい輩は多いのさ」

「……そういうのを聞いてると、話を受けてよかったって思うわ」

なお、夕歌は前もって深雪と話し合い、お互いに悠元を支えあっていくことで合意したらしい。変な修羅場を起こされるのは御免だったのでありがたい話だと思う。

そもそも、魔法使いの家系は実力主義優先の政略結婚が主なので、恋愛結婚なんて望めるべくもない話。師族としての力の維持に多大なコストが掛かるのは致し方ないことだが、女性の側としても望むべくもない婚姻は嫌ということなのだろう。

優れた魔法使いになればなるほど容姿も整っているという世界の摂理には少し感謝したくなる。盛大に声を上げて喜ぶということはする気もないが。

「まあ、気の滅入る話は後にして……今年は今年で大変な一年になりそうだからな。沓子も他人事じゃ済まないだろうし。というか、惚れさせるようなことなんざしてなかったはずなんだが」

「わしも最初はムキになってしまっての。気が付いたらお主に惚れておった感じじゃ」

気が付いたら恋心になっていた、というのは実に乙女らしいと思う。正直な話、人の感性に対して深く言及するつもりはないが、前世での兄の気質が乗り移ったのではないかと疑いたくなってくる。

別に恨む気など更々ないが、そういったところは受け継いだ気もない。

◇　◇　◇

神楽坂家での行事も終わり、東京に戻ってきたところで改めて初詣に行くこととなった。神楽坂家自体神道系の趣も持ち合わせているが、本当のところは八雲が悠元や達也の友人と会いたいという希望であった。

その道中でとある少女の姿に達也が目線だけを向けていた。

「達也、面白いものでも見つけたのか？」

「いや、変わった服装だなと思ってな……」

達也自身、妹のファッションというか買い物に付き合っているお陰なのか、その辺の流行には敏感なのだろう。正直なところ、自分の場合はと言えばそこまで古いファッションとは思わなかったわけだが……その理由は、自分が転生した存在というのが大きい。

見た目は上半身だけ見れば正月っぽいのだが、スカートという時点で一体何を参考にしたらそうなるのか、という疑問視か出てこない。

「変わってるというか……あれは寧ろ浮くな」

「外人さんは君や達也君に興味津々のようだね」

「絶対に嫌な方向での興味だと思いますが」

「同感だな」

少し考えてみてほしい。自身がいきなり約７０年後の世界に飛ばされ、自身の感覚では約３０年前のファッションを見たときに〝少し懐かしい〟なんて言葉にしたら、間違いなく年齢を疑われるだろう。

なお、同様のファッションが前世における自分の母親の遺品の中にあったことはここだけの話にしてほしい。

「悠元さんはああいう子がお好みなのですか？」

「いや、流石に公の常識をはき違えている人間はちょっと……当たってるんだが？」

「当ててておりますので」

向こうは気付いていないようだが（そもそも襲われたときは仮面で顔を隠したので何とかなった）、アンジー・シリウスもといアンジェ

リーナ・クドウ・シールズがそれとなく接触してきたことにため息の一つでも吐きたくなる。魔法力自体は、悠元の想定する範囲なのも間違いはないと『天神の眼』で確認している。
その少女は去り際にわざと近付くような形で神社を去っていった。
そんなこともあったり、空港での茶番に近いような寸劇もあったりなど、慌ただしい冬休みも過ぎて三学期の初日。ある意味テンプレに近いような始まりであった。
「今日からこのクラスに入ることとなった留学生です。シールズさん、自己紹介を」
「はい。アンジェリーナ・クドウ・シールズといいます。みなさん、よろしくお願いします」
〝原作〟だと達也の視点になるため、この辺の知識など皆無である。単純にそれだけならば問題はないのだろうが、リーナの隣にいる銀髪の少女の姿に悠元は内心で妙な警戒を抱いた。
「妹のエクセリア・クドウ・シールズです。姉共々宜しくお願いします」
髪の色こそ違えど、顔つきからして一卵性の双子なのは間違いないだろう。魔法力の波長もほぼ同一のものに違いない。その際、彼女と目線が合った瞬間に向こうが微笑んだ時、妙な既視感を覚えたのだ。まるで以前出会ったことがあるかのような……そんな感じだった。
だが、少なくとも彼女と初対面のはずなのは断言できる。そうなると前世の可能性を疑わざるを得ないが、この世界でその存在を下手に明るみにすれば、最悪『パラサイト』扱いされてしまう。自分の場合はまだ穏便に済んだほうだと思うし、反省すべき点なのは分かっているので深くは突っ込まないでほしいと思う。
アンジェリーナ・クドウ・シールズもといリーナの席は雫の席が宛がわれ、そのひとつ前の席にエクセリア・クドウ・シールズもといセリアが座ることとなった。その直後の休み時間は、クラス中だけでなく他のクラスの生徒も教室の外から見ているほどの盛況ぶりだった。
「人気なことだな」
「まあ、見ているだけで絵になるというのは否定できませんからね」

「まるで他人事に言ってますよね、二人とも……」
ほのかのツッコミも御尤もだが、こちらから分かり切った爆弾に首を突っ込む自殺願望など持ち合わせていない。燈也の場合も既に婚約者がいる身という身上もあったりするが。
（それに、僕としては嫌な予感もしますからね）
（その嫌な予感が当たらなきゃいいんだがな）
小声で懸念を示した燈也に同意しておくが、残念ながらあの姉妹の存在自体が災いの元と言っても過言ではない。厳密に言ってしまえば『パラサイト』を手引きしたであろう黒幕の存在がもっと面倒だろう。
すると、深雪が目線を悠元に向けてきた。生徒会役員である以上は留学生の案内は避けられないということを考えつつ、悠元は燈也とほのかから別れて深雪のもとに移動することとなった。
そこまではいいのだが、クラスメイトが道を開けるように避けていったのは正直傷つくから止めてほしい。割と切実に。

力比べは必ず何かが犠牲になる

アンジェリーナ・クドウ・シールズことリーナ、そして双子の妹であるエクセリア・クドウ・シールズことセリア。二人の麗しい外見に加えて深雪も加われば自ずと絵になってしまう。その三人と行動するということは面倒な視線を向けられることにも繋がる。

そんなことは置いておき、留学生たちと達也らE組の面々と対面することになった。

「疲れてるみたいだね、悠元」

「単なる留学生ならともかく、女性としても皆目麗しいからな。他の男子連中が嫉妬の目を向けてくるわけよ」

「成程ねえ……当の本人には面倒事だものね」

別の用事があって達也たちと先に合流した悠元の表情を見た幹比古の言葉に対し、悠元がそう述べると事情の知るエリカが納得したように呟いた。現状複数の婚約者がいる身としては面倒というほかないわけだが。その上で悠元は幹比古の隣に座る女子生徒に目線を向けた。

「で、あんなに廊下が騒がしかったのは、二人だけでなく彼女がいたからか」

「あ、うん。どうやらそうみたいだね」

「はじめまして、東道佐那と申します。神楽坂さんのことは父から聞き及んでおります」

「そうか。俺のことは悠元でいいよ、東道さん」

「私も佐那で構いません」

隣のB組に転入してきた佐那。見た目は茶髪のショートボブでほんわかとした表情をしている。とはいえ古式魔法の大家である東道家の娘であり、しかも悠元からすれば母方の従姉にあたる。幹比古曰く強烈な初対面だった、と漏らすほどだった。

「あの時のミキは見てる分には面白かったわよ」

「僕の名前は幹比古だ！　そういう道を選んだ自覚はあるけれど、まだ完全にそうなった訳じゃないんだから」

「まあ、幹比古の場合はそうなるよな」
既に戸籍も神楽坂家に移っている悠元とは異なり、幹比古の場合は公的な手続きがまだの段階だ。それを言ってしまったら達也と深雪が四葉家の人間だということもまだ公になっていないことでもあるが、その話題は避けておくこととする。
そんな他愛のない話をしていると、入り口付近がざわつく。姿を見せた面々で大体の予測はつくわけだが。
「噂をすれば来たな」
「そのようだな」
リーナとセリア、それに深雪とほのか、燈也も加わって大分大所帯になってしまった。これで派閥を組んでいないと言われても否定してもらえない現実が待っているのは言うまでもないだろう。
流石に留学初日なので、お互いの自己紹介をするぐらいに止まった。その際にセリアが僅かに表情を険しくしていた。後で達也に確認したところ、彼もそう思っていたのは確かなようだ。
◇　◇　◇
佐那の転入もそれなりの騒ぎとなったが、一番の話題となったのはリーナとセリアの存在だろう。学園でも一番の美少女と言われる深雪と対等な存在が現れたのは、それだけでも絵になる。
しかも、金髪と蒼い目であるリーナとは対照的に長い銀髪をポニーテールにしており、似ているのは顔の輪郭と瞳の色ぐらいだ。これで金髪と同じ髪型だったら判別が極めて難しいと思う。
無論、容姿もさることながら魔法師としての実力でも注目を浴びることになったのは言うまでもない。午後の魔法実習では、深雪とリーナが向かい合って互角の勝負を繰り広げていた。
「悠元さん、加減をしろと吹き込んだのですか？」
「多少は、としか言ってない。何せ相手が相手だからな……おまけに、観覧している先輩方もいる以上、深雪が空気を読んでくれたみたいだ」
そもそも深雪は負けず嫌いな性格だ。その部分に関しては筋金入りだと悠元も理解している。とはいえ、現在の深雪は現代魔法に加え

て古式魔法や武術のブーストが掛かっている以上、同年代でもトップクラスの実力者。自由登校となっている3年生も見学しているため、現段階で出せる実力を明るみに出すのは拙いと考えている。
　それに、リーナとセリアの目的を考えれば深雪に対して余計な嫌疑が掛かるのは宜しくない。そのあたりのことは深雪にも予め言い含めているので大丈夫だと思う。その証拠に、深雪は絶妙な想子制御でギリギリになるように競い続けている。
「深雪の実力、相当上がっていますよね……自信なくしちゃいそうです」
「彼女の場合は地力も相当ですから。ほのかにしかできない強みを伸ばせばいいと思います。っと、お互いに終わったみたいですね」
　結果としては四対二。上手く誤魔化した上で勝ち越せた形となった。
　それで終わればいいのだが、留学生はリーナだけではない。セリアの魔法力はリーナ以上で、その証拠に魔法科高校の入学試験でやったものと同じ魔法力計測で１０５ｍｓという驚異的な記録を叩き出した。
　結果として、その試験で同等クラスの秒数を叩き出しているのが悠元しかいなかったため、セリアの相手を悠元が務める形となった。
「ユウト、よろしい？」
「いつでもどうぞ。カウントはセリアに任せる」
　魔法実習の内容は至ってシンプルで、二人が同時にＣＡＤを操作して双方の中間地点にある球をいかに素早く支配する。力量差が如実に出るため、この実習では悠元が負け無しで他を寄せ付けなかった。
　加えて深雪とほのかに姫梨、留学した雫だけでなく燈也も実力を伸ばし続けており（悠元が内密に想子制御を教えたため）、悠元も合わせた6人とクラスメイトでは魔法力にかなりの差が開いていた。
「スリー、ツー、ワン…ゴー！」
　セリアの合図で双方がパネル型インターフェイスに手を翳す。一瞬で勝負がつくかと思った面々は、その光景に目を見張った。
「えっ……!?」

「球が、微動だにしていないって……」
　本来勝負がつくはずのゲームで引き分けという結果。しかも、魔法科高校ではずば抜けた実力を有する悠元と留学生の片割れが互角の魔法力を有しているという事実に驚く一方、悠元は冷静に今の動きを分析していた。
（先日の計測結果から多少短めの発動速度で打ち込んだが、ほぼ同等に合わせてきた……〝シリウス〟の名は伊達ではないということか）
　干渉力や発動速度を若干早めにしたが、向こうもそれを読んだ上で合わせてきた。結果として勝負つかずになったのは納得できる結果ともいえよう。尤も、向こうとしては少し驚いたような仕草を見せていた。
「驚きました。まさか１００ｍｓ未満の発動速度についてこられるなんて」
「それを平気でやってのける君も大概だと思うがな」
「なら、遠慮せずにやってもいいですよね？」
　セリアの言葉に周囲がざわつく。一番困惑しているのはリーナであり、セリアの言葉の意味を一番理解できている身内だからこその反応だった。これには深雪が問いかけた。
「リーナ、大丈夫？」
「……セリアの本気はヤバいのよ。ワタシでも勝てないから」
　あの〝アンジー・シリウス〟がヤバいと言わしめるほどだから、その言葉は本当なのだろう。現にセリアの纏っている空気からしてその本気さが伝わってくる。だが、悠元にとっては不安というよりも一種の既視感を覚えていた。
　それは教室での初対面の際に感じていたものであり、心当たりがない悠元にとっては首をかしげる懸案事項である。
（またこの感覚か。一体、何なんだろうな……まあ、負けるのだけは嫌だし、ちょっとばかし裏技でも使うか）
　再びセリアの合図でパネルに手を翳して想子を流し込む。悠元は固有魔法『カレイドスコープ』を他人に気付かれないレベルで発動させ、制御力と発動速度を爆発的に速めて球の支配権を奪取。

結果として勝ちを収めたが、その代償としてＣＡＤがオーバーヒートしてしまうという結果になった。それは悠元だけでなくセリアの側でも起きていた。
「あれ、壊してしまったみたいです……すみません」
「いや、俺もムキになって壊してしまったからな……」
魔法科高校のＣＡＤ自体汎用性の代わりに速度が犠牲となっており、加えてお互いが流し込んだ想子量に耐え切れなかったと推察した。
この実習での出来事は達也たちとも共有することとなり、驚くどころか逆に納得される羽目となった。悠元と同様にＣＡＤを壊してしまったセリアに関しては、悠元と同じぐらいヤバい奴という認定を受けていた。
「ショックです……グスン」
「セリアの場合は自業自得よ」
「セリアです。姉が辛辣すぎて泣きそうです」
「あ、あはは……」
約一世紀前のお笑いネタを引っ張ってきたことはともかく、セリアの実力がそこまでのものと分かっただけでも収穫だろう。本来なら達也がリーナに〝シリウス〟の探りを入れたりするのだが、セリアのこともあって触れようとはしなった。
「それにしても、悠元さんがＣＡＤを壊したのはこれで二度目ですね」
「俺だって壊したくて壊したわけじゃないんだからな、深雪。何故に笑顔を浮かべるんだか……」
「……二人って恋人？」
リーナが悠元と深雪の親密そうな雰囲気を見て尋ねたことに、周囲の反応と言えば特に驚くようなことではなかった。既に周知とも言えるような様子にセリアが思わず反応した。
「あれ？　そこまで驚いていないんですか？」
「いや、だってなあ……」
「あんなものを見せられたら、あたしらでも納得しちゃうわよ。むしろ九校戦まで付き合ってなかったことのほうが驚きよ」

ここにいる面子の中では達也とレオに幹比古、ほのかとエリカが二人のやり取りを目撃している。加えて同じクラスメイト兼生徒会役員とはいえ、二人で行動するところを目撃されることが多い。九校戦後は更に親密となったことで涙を流した男子生徒も少なからずいたそうだ。
「タツヤはどうなの？」
「今更どうと聞かれてもな……深雪が認めた相手に兄として嫉妬するのは可笑しな話だろう。俺自身も知らない相手ではないからな」
「達也君がやけに素直ね」
まるで普段がひねくれている様な言い方をするな、と口にしようかと思ったところで普段の口数が少ない自分を否定してしまうような気がした。結局達也が反撃の糸口を見出すことはなく、この時ばかりはエリカの言いたい放題にされてしまったことに達也は納得がいかないような様子を垣間見せ、幹比古が苦笑を漏らしていた。

◇　◇　◇

交通事情が発達したこの世界において、寮という概念は存在しない。ＨＡＲ（ホームオートメーションロボット）の存在が一般家庭に普及していることに加え、日用品の買い出しがオンライン注文・個別配送で済ませられることも寮という存在を必要としなくなった。
リーナとセリアはそれぞれ一人暮らしではなく、少人数家族用のファミリータイプの間取りの部屋で生活している。その理由は二人と同居している人物たちの存在だった。
「……ターゲットの片割れはそこまでのものでしたか」
そう言葉を漏らしたのは、今回の作戦の補佐役を務めているシルヴィア・マーキュリー准尉。今日の実習での出来事をリーナとセリアから聞いた彼女は驚きを露にした。
「セリアが本気でやるといったときは冷や汗ものでしたよ」
「お姉ちゃん……持てる限界の８０ｍｓレベルで発動させたのですが、彼はそれ以上の速度で発動させたとみるべきでしょう」
「……それ、ＣＡＤが耐え切れないかと思います」
リーナの呆れた様な言葉にセリアは少し反省するような様子を見

せつつも冷静に悠元の魔法力を推察すると、同じ同居人であるミカエラ・ホンゴウが呟いた。事実、その発動速度帯では魔法科高校の実習用ＣＡＤに耐え切れないことも併せて伝えられた。
　それを聞いたシルヴィアの表情はと言えば冷や汗ものとしか言いようがなかった。
「はぁ……今のところは探りを入れられていませんか？」
「向こうから〝シリウス〟や〝ポラリス〟だと疑われてはいませんが……ただ、なまじ実力を見せてしまったせいで疑われない保証はないかと思います」
　セリアは冷静にそう述べたが、内心では別のことを考えていた。話が終わったところで自室に戻ると、考えに耽っていた。それは自身のターゲットである悠元のことについてではあるが、セリアは別の視点から彼のついての考察をしていた。
（どういうことなの？　元々彼の存在なんていなかったし…それを言ったら六塚燈也や東道佐那、伊勢姫梨だってそう……全ての人間がそうであるとは言えないけれど、彼は何者なの？）
　まるでこの世界のことをある程度知っているかのような考え方をしているセリア。だが、この事実を同僚はおろか家族にすら……ましてや双子の姉であるリーナにも話していない。理由は至極単純で、それを話したところで異端扱いされてしまうのが関の山だと分かり切っていたからだ。
　まだ少ない情報から導き出した結論は一つの可能性。だが、それを口にしたところでどうにもできない。寧ろ彼の協力が得られないと拙い未来が待っているだけに、慎重にならざるを得ないと判断するに至った。

悪戯に対して塩対応

司波家に帰った後、地下室で深雪の調整をしていたところに悠元がやってきた。深雪の格好はいつものように下着の上に一枚着ているだけの姿であり、正直割り切れている達也のことをある意味尊敬したくなったのは言うまでもない。

夏休みの後、なし崩し的というか親の定めた許婚の関係とはいえ、深雪の格好に慣れようと努力はしている。正直なところ、交友関係の干渉で兄妹関係にまで変化を及ぼすとは2年前の時点で思っていなかったことだ。

「達也、呼ばれたから来たんだが。深雪の調整は終わったみたいだな」

「一応はな」

ＣＡＤ調整はハード面での調整を加えない限り達也の領分であり、彼女のガーディアンとしての領分もある。悠元もその部分を理解しているからこそ、深雪の調整に関しては達也に丸投げしている様なものだが。

「一応、ね。ハード面はかなり余裕を持たせてオーバーホールしたんだが、それでも足りなかったか？」

「今のところは問題ない。今回の場合は俺の読み違えだな。深雪の成長速度を勘案できていなかった」

珍しい達也の発言に深雪が憂慮を見せる。だが無理もない話だ。今の深雪は現代魔法のみならず古式魔法の修得にも力を入れているため、本来想定していた魔法式の構築速度上限を超えてしまう可能性はあった。

尤も、それだけではないと達也は説明する。

「悠元と付き合い始めてからだが、深雪の想子制御が爆発的に効率化している。悠元の持つ想子に直接触れていることが大きな影響を及ぼしているのだろう」

「お兄様、そうやって冷静に分析されると逆に恥ずかしいのですが……」

「深雪、諦めろ。達也はこういう性分なのだから」

自分の興味のある分野になると周りが見えなくなる達也のことはさておき、優れた魔法師同士で婚姻を結ぶ意味合いがこのあたりで顕著に出ているのだろう。尤も、このことを迂闊に明るみに出せない……扱いを間違えれば誤解を招く恐れがあるからだ。
「それで、俺を呼んだ理由は何なんだ？」
「そうだったな。率直に聞きたいが、彼女――――リーナは〝アンジー・シリウス〟なのか？」
達也が本来なら彼女から直接聞き出そうと思っていた部分がここになって出てきた。以前悠元がアンジー・シリウスと対面していたという話をしていたことから、悠元に直接聞いたほうが早いという結論を出したのだろう。
このことについて隠す理由もないと判断し、悠元は答えを返した。
「それについては間違いない。彼女の想子の流れで一致したからな。ただ、セリアに関しても警戒したほうがいいと思う」
「それはどうしてですか？」
「以前彼女が俺に向かって発動した戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』。その想定威力がかなり限定的になっていたことだ」
戦略級魔法の扱いが極めて難しいことは使用者である悠元と達也が一番理解している。以前風間に見せたことのある悠元の『マテリアル・バースト』に関しても、厳重な結界術式で周辺への余波をゼロに抑えているぐらいにだ。
「『マテリアル・バースト』もそうだが、戦略級魔法の扱いは極めて難しい。それは達也も気付いていることだろう？」
「そうだな。悠元から教わった想子制御があるとはいえ、『マテリアル・バースト』に対しての制御は極めて繊細だ。ちなみにだが、それを制御なしで放っていたらどうなっていた？」
『スターライトブレイカー』が津波による被害をウラジオストク軍港以外の周辺地域に起こしていないのは、ＦＡＥ理論に基づく物理法則改変で範囲外の運動ベクトルをゼロに打ち消しているからこそ可能にしている技術。その技術の一部を『サード・アイ・エクリプス』に転用しているため、『マテリアル・バースト』も限定的な破壊に抑えら

れたという形だ。
　話を戻すが、発動した時の『ヘビィ・メタル・バースト』の術式では二人分の魔法式が展開されていた。リーナ自身にそこまでの技量がないとは言わないが、魔法科高校での実習なども加味した場合、間違いなくセリアが関わっていると推察した。
「あの時の威力を無秩序に放ったら間違いなく演習場丸ごと消し飛んでいた。ホント『ファランクス』の練習しといて助かったわ」
「『ファランクス』――移動型領域干渉は十文字家のお家芸なんだが……まあ、同時に13個の起動式を展開できるお前なら驚くことじゃないか」
「褒めてると解釈していいのか？　それはともかく、爺さんがUSNAの大統領にあれだけ釘を刺したというのに……いくら神楽坂家の次期当主とは言え、俺は責任を負えねえぞ」
　これに関しては無責任な発言ともとれるだろうが、実際のところは異なる。三矢家からの連絡を聞いた限りにおいて、USNAの政治家をある程度丸め込むことには成功している。
　先日の横浜事変において『イグナイター』ことイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが動いたことは向こうも把握していたが、不法侵入を試みようとしたロシア語を話す国籍不明の艦隊群への対処の際、ベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』の発動兆候データをホワイトハウスに送り付けた。無論国防総省（ペンタゴン）もこの事実を把握しているはずだ。
「それはどういう意味なのですか、悠元さん？」
「向こうの切り札ともいえる〝シリウス〟を送り付けた意味は理解できなくもないが、何でもかんでも制御したいと考えるやり方が気に食わん。別に差別なんぞしたくはないが、積極的に敵を作りたいとしか思えん」
　なのにも関わらず、スターズとしては交渉すらしようとせずに相手の切り札を封じようとするやり方を取った。このことを四葉家ははじめとして、三矢家と上泉家、神楽坂家は間違いなく快く思わないだろう。力に対する恐怖心は分からないでもないが、核兵器を自在に制

御しようとした旧合衆国の成れの果てが言えたセリフではないと思う。
「世界の警察になりたいのなら、いっそのことＵＳＮＡ丸ごと外敵のいない金星か火星にでも移住しちまえって思うわ……なんだよ、達也？」
「お前ならできそうな気がするからな」
「仮にできたとしても、絶対にやる気なんてないわ」
　現代魔法の最先端をひた走るという自負は理解できなくもない。そのプライドが同盟国に対して不必要な圧力を招くのは如何なものかと思う。力を持つがゆえに他者の力を恐れてしまう意味は察することができたとしても、結局のところは当人らの価値観で語っているだけの話だ。
「仮に二人の〝シリウス〟を投入したとなれば、間違いなく達也と俺が目的だな……尤も、どうやらそれだけじゃないんだが。というか、深雪。風邪を引くから早めに戻ったほうがいいぞ」
「悠元さんに温めてほしいといったら、嫌ですか？」
「……達也」
「その、なんというか、すまない」
　ここで達也が謝らなくてもいいとは思ったのだが、律義な性格に加えて深雪に対する強い情動の影響で変に苦労人気質となっているようだ。これには流石の自分も悪いことをしたのだと悠元は内心で溜息を吐いたのだった。
　自分としては深雪に対して好意的な感情を持っている。でなければ婚約の話を素直に受け入れたりはしないし、司波家での居候も受け入れたりはしていない。男としては冥利に尽きるわけだが、せめてＴＰＯぐらいは弁えてほしい……いや、これでもかなり大人しめなのは達也も同意見である。
「お前が謝ることじゃないし、俺にも責任の一端はあるからな」
「そうか……ちなみにだが、本気でやってセリアに勝てそうか？」
「どうだろうな。実習だけで手の内全てを見せてくれるなんざ思っちゃいないが」

元々の〝原作〟から乖離しているが、流れ自体は何らかの形を準えている。九校戦の時の『破城槌』がその最たる理由だろう。何らかのリスクを負うことは既に覚悟している以上、達也に対しての情報提供も含めて早めに対策を打つべきだと思う。

◇　◇　◇

悠元の放課後は軽運動部で体を動かすか、生徒会の仕事をするか。それに加えて図書館で調べ物をするかぐらいしかない。だが、二人の留学生の存在はそういった生活サイクルに変化を多少なりとも及ぼしてしまう。

悠元はいつものように竹刀を用いて片手で素振りの練習をしていると、物陰から盗み見している人間の気配に気づいたのか、素振りをしたまま背後に向かって言葉を投げかける。

「覗き見するぐらいなら堂々と見ろよ、セリア」

「うひゃっ!?　び、びっくりした……悠元、今のは魔法なんですか？」

音からして危うく転びそうになったことはさておき、音に関しての魔法は悠元にとって慣れ親しんだものに近いため、そこまで集中力を要する必要がない。なので、音を増幅してセリアの耳にピンポイントで届けることなど造作もない。

リーナと比べると日本語に関してはかなり流暢という点が気にかかる。だが、その可能性を疑うよりも疑わねばならないことがあるのも事実である。

「まあ、生まれつき音には敏感なんでな。ちょっと指向性を弄った位だよ」

「ちょっとって……というか、そんなことを言っていいのですか？」

「どうせ知られてることだからな」

音に関して過敏な感覚を有することは十師族で知られている以上、外国とはいえＵＳＮＡの情報網に引っかからないはずがないだろう。とりわけ詩奈（いもうと）の存在がある以上、それを下手に隠すデメリットと公表するデメリットを考えた場合、後者のほうが変に悩まずに済むというメリットを取った形だ。

それに、魔法実習で派手にやらかした以上はその程度のことなど些

事のレベルだと思っている。素振りが終わったので、セリアのほうを向いたうえで問いかけた。
「セリアは日本の武術に興味があったりするのか？」
「え？　まあ、ちょっとですね。小さい頃はよくお祖父様に可愛がってもらってましたから」
　先日のリーナの口ぶりからすると、セリアのこの回答は意外なものだった。別にリーナが嘘をついていたと断言するわけではないが、セリアにしてみればこの程度のことでバレないと判断しているのかもしれない。
「なんだ？　てっきり魔法のことでも聞かれるのかと思ったのか？」
「それは、まあ……流石に姉のように突っかかる気はありませんよ」
「その言葉を聞いたら、達也が不安になってきたな」
　今日は生徒会室に立ち寄っていたのだが、出る際に廊下を歩いていく達也とリーナの姿を見かけた。達也本人としては風紀委員としての仕事でリーナの案内を押し付けられたのだろうが。
　達也が早々後れを取るとは思わないが、相手はあの〝シリウス〟。開幕早々『ブリオネイク』ぐらいの心構えはあってしかるべきだ。尤も、その対抗策として『バスター・ミスト・ディスパージョン』の起動式を渡しているわけだが。
　大仰すぎるかもしれないが、下手に慢心して命を落とすよりはマシだと思っている。
（……ここで『仮装行列（パレード）』？）
　そんなことを考えていると、いつのまにか靴を脱いでいたセリアが一気に距離を詰めてきた。単純な加速術式ではなく、幻影――九島家の秘術である『仮装行列（パレード）』を用いた認識の錯覚を引き起こさせるもの。
　その程度のことなど以前九島家でやられたお遊びレベルだとすぐに判断し、悠元はノータイムで『八卦遁甲』を発動させて『パレード』の想子構造を分離。だが、いつのまにかセリアは道場の備品である竹刀を構え、悠元に切迫していた。
「――温い、と爺さんなら言うだろうな」

悠元は体を捻ってセリアの振り下ろした竹刀をかわしつつ、そこから魔法による身体能力強化――――想子を圧縮して骨や筋肉などを保護し、人間の持つフルパワーを引き出すための技巧を駆使し、手に持っていた竹刀でセリアの竹刀に向かって振りかざす。

その結果、セリアの竹刀の刃に相当する部分は鋭利な刃物で斬られたかのように畳へと落ちた。これに驚愕しているセリアに向かって、悠元は何も持っていないほうの手で彼女の脳天にチョップを振り下ろした。

「あ、あうあうあー……あ、あ、頭が……」

「何が姉のようなことはしないだ。魔法実習の時もそうだが、もう少し自分を省みろよ」

不幸中の幸いといえば、セリアが手にした竹刀はそろそろ買い替えようと思っていたものだったぐらいだろう。

考えてみれば彼女と赤の他人のはずなのに、気が付けば反射的にチョップをお見舞いしていた。もしかしたら、セリアを前世の自分の妹とどこか似通っているのだと無意識的に判断しているのかもしれない。

前世の妹は天才な癖に肝心なところではポンコツ気質で、よくからかってきたのでチョップをお見舞いすることが多かった。「痛みに愛を感じるよ」などと言われたときは本当に距離を置こうか悩んだのは……ここだけの話だし、生まれ変わった自分には関係のない話だと思いたい。

生まれ変わっても〝妹〟で苦労することが変わらなかったことは実に遺憾である。

道徳の概念は何処にあらんや

旧長野県にほど近い旧山梨県にある一つの村。そこから少し離れた開けた場所――――周囲はおおよそ陸上トラックが丸々収まるであろう広さ。雪が降りしきる純白の光景の中、一つの黒い点が存在する。その点の正体は濃い紺色を基調としたセーラー服を纏った一人の女性。

その女性に対して、突如鳴り響く発砲音と降り注ぐ銃弾の雨。その銃弾によって雪が舞い上がり、天然の煙幕を生み出す。その中に入らないようにして周囲に降り立ったのは十人のフル武装の兵士。その手には対魔法師用のハイパワーライフルとは言わないまでも十分な殺傷力を有するアサルトライフルを構えていた。

その一撃で勝負が決したとは思わないまでも警戒を緩めない兵士らに対し、煙幕の中から突如何かが飛び出して兵士の一人の喉元を正確に貫いた。それを見るまでもなく残った兵士らがアサルトライフルを撃ち込んでいく。

兵士らの銃撃を意に介することもなく、煙幕の中から飛び出していく何かによって兵士らの急所を的確に撃ち込んでいき、兵士らは何をされたのかも分からずに絶命していく。残った一人がナイフを持って突撃するも、ナイフを持っていた手を切り落とし、続けざまに放った〝魔法〟で兵士の心臓を貫いた。

そして、煙幕が収まったころにはその女性以外に立っている人間は存在しなかった。

「ふう……」

「お見事です、奥様」

その女性に対して声を掛けたのは一人の男性。彼が差し出したタオルを受け取りつつ、その男性に話しかけた。

「ありがとう、葉山さん。にしても、この格好ってどうなのかしら」

「それは奥様が何分お洒落に着こなせる衣服をお持ちではありませんので、こうなりました次第です」

「それって、私が子どもっぽいってことかしら？」

少しむくれ気味に話す女性だが、その女性こそ十師族・四葉家現当主にして「極東の魔王」
などと呼ばれることのある人物――――四葉真夜その人である。
真夜が何故この格好をしているのかといえば、魔法訓練をする際はできる限り動きやすい恰好かつお洒落に着こなせるものという注文を受けた葉山がチョイスした結果である。紺色が基調となっているので返り血自体目立たないし、そもそも彼女がへまを打つとは思えないからこその結果ともいえる。
実戦的な訓練を考えるのならばそれこそ『ムーバル・スーツ』のようなものが好ましいが、〝記録化された〟過去の経験からして意味をなさないと考えている。
「まあ、いいわ。それで例の連中が入り込んだの間違いなさそう？」
「こちらでも確認いたしました。その絡みで深夜殿の別荘に侵入を試みたそうですが、偶然来ていた千姫殿によって追い返されたそうです」
「存外運がない連中のようね。せめて達也さんのように出来なければ厳しいわ」
例の連中――――ＵＳＮＡの『スターズ』で起きた脱走兵の一部が日本に密入国したという事実。その彼らが深夜の別荘に忍び込もうとしたが、追い返されたということもあわせて葉山が報告すると、それを聞いた真夜は辛辣な評価を交えつつ返した。
達也の実力は葉山も知っているからこそ、『スターズ』と同列に語られてしまう彼の異質さを思いつつ少し苦笑を浮かべた。
「その後東京方面に逃れた模様ですが……七草家と十文字家にはお伝えいたしますか？」
「お伝えしてくれるかしら。国防軍の絡みであれこれやってくれたのは痛手ですが、こちらとしても突っぱねる理由はありませんので。ただ」
「ただ、何でございますか？」
「〝先生〟が動いているみたいなのよね」
真夜が先生と呼ぶ相手はただ一人。その人物が今回の騒動で何か

しら動いている情報を得た結果、何かしらの楔を達也か悠元、あるいは両方に打ち込むことも想定される。上泉家と神楽坂家の関係者とも繋がりがある以上、その彼も下手なことはしないだろうと思われるが油断はできない。

かといって他の十師族――――今回の場合は七草家と十文字家も邪険にはできない。国防軍のセクションの横槍のせいで痛手とはなったが、それを知った三矢家との情報コネクションを強化できる機会となっていたため、真夜は割り切った上で会話を続ける。

「ＵＳＮＡ方面の情報も欲しいので、三矢家とも密に連携をしたほうが良いかもしれません。葉山さん、そちらはお任せしてもよろしいかしら？」

「畏まりました。ところで、魔法の制御訓練はいかがでしたか？」

「悪くはないわ。ふふっ……四葉の柵がなかったら、彼に求婚していたかもしれないわね」

真夜は昔の事件で女性としての幸せを奪われた。だが、そこから端を発した世界に復讐するという目的よりも大事な目的ができた。その影響で魔法の訓練を再開した真夜の実力は世界最強の名に恥じないものとなりつつある。だが、今の実力でも勝てないだろうと真夜が思い浮かべる人物は二人存在する。

その片方に自分の双子の姉とその娘が恋慕していて、娘のほうは公表されていないが婚約関係となった。既成事実とも言える関係に至ったことまでは既に把握していて、これには思わず笑みを禁じえずにはいられなかった。

彼の存在は十師族はおろか、いずれこの国を起点として世界にその名を刻むことになると真夜は確信に近いものを感じていた。

「『流星群（ミーティア・ライン）』を更に研ぎ澄ませるだなんて、普通は考えてもみなかったことだけれど……私もまだまだ子どもなのかしらね。葉山さんはどう思うかしら？」

「強さは時として己を苦しめる武器です、とだけ申し上げておきます」

「そうね。でも、彼を苦しめる障害はきっとないに等しいんじゃないかしら」

◇　◇　◇

新年が明けて学校での変化に止まらず、学外でも一つの変化が起きていた。変化というよりは『事件』ともいうべきものだろう。その情報の一端が達也らに齎された。

「――――妙な連中、ですか？」

『ええ。恐らくは「デーモン」……いえ、「パラサイト」だと千姫さんが仰っていました』

深夜が生きている影響は今のところ限りなく最小限に止まっている。それはこの世界の利便性に加えて今まで療養生活の長かった深夜自身の行動力に起因するところが大きい。だが、今回の場合は深夜を狙い撃ちにされたような格好である。

悠元とセリアが竹刀で切り結んだ（というよりは一方的な突っかかりに近いが）日の夜、司波家のヴィジホンに掛かってきた電話を達也が取ると、画面に映ったのは深夜であった。深雪については自室で勉強していて、悠元は地下室に籠っていた。

『千姫さんの話では東京方面に逃走したようです。貴方達が直接狙われるとは思えませんが、気にかけておくのが良いでしょう。今回のことに関しては、十師族があてになるとは思えませんから』

「そうなると……悠元の力を借りることになりますが、母上はよろしいのですか？」

『達也。私はあくまでも現当主の親族であって、必要以上に贅沢を言える立場ではないのですよ』

達也の問いかけに対して深夜は苦笑を混ぜつつ答えを返した。

古式魔法に詳しくない達也でも『トーラス・シルバー』の絡みでパラサイトのことについての文献に目を通したことがある。その推測からすれば、知り合いで最も古式魔法に精通している悠元の協力は不可欠と考えている。加えて、固有の精神干渉系魔法に加えて古式魔法を学んでいる深雪が身内にいることは大きなアドバンテージといえるだろう。

『〝シリウス〟のこともあって大変となるでしょうが、私は事情があって手を貸すことができません。なので、無事を祈るぐらいしか出

来ません』
「母上は大丈夫なのですか？」
『それについてですが、神楽坂家に暫くお世話になることになりました』
　話の流れとは言え、神楽坂家が深夜の保護を申し出たことは非常にありがたかったと達也は内心で呟いた。正直なところ、今まで四葉の使用人のような扱いをされてきた母親の心変わりを受け入れつつも、どう接すればいいのかという思いもあってか深雪経由で話すことが多い。
　深夜との話を終えた後、地下室に向かった達也は悠元に「パラサイト」のことを尋ねることにした。
「――ということなんだが、詳しい話を知らないか？」
「そうだな。『パラサイト』の文献ぐらいは達也も目は通しているだろう？」
「ああ」
　超常的な寄生物（PARANOMALPARASITE）――妖魔、悪霊、ジン、デーモンなどといった〝妖〟を国際的に定義した存在で、人に寄生して人間以外の何かに作り変えてしまう存在をそう呼んでいる。そもそも、精霊魔法の時点で独立した情報体の存在が定義されていても、それを感知できない人間からすれば単なる未知の恐怖でしかない。
「伊豆方面に姿を見せて、そのまま真っすぐ東京方面に移動したことを考えれば……最近の怪奇現象も一筋縄じゃ行かなそうだな」
「そんな話は聞いていないんだが」
「話してなかったし、ごく一部の人間で動くようにしていたからな」
　この世界でも事件は起きていたが、不幸中の幸いとして死亡する前に何とか一命を取り留めている。その背景には悠元の知り合いが大きく関係しているわけだが、その辺をあまり触れることなく話を進めていく。
　現時点の規模だけで言えば神将会を動かす理由になっていない、というのが理由の一つ。そして、〝原作〟ではあまり触れられていなかった彼らを手引きした存在を明るみに出すことに注力しているこ

とも理由だ。
「七草と十文字が動いてくれるようだが、『パラサイト』の領分は特殊な眼がない限り完全に古式魔法の領分だ。加えてＵＳＮＡの横槍も想定される……その為に『バスター・ミスト・ディスパージョン』を渡してるからな」
「成程。だが、今後を考えるのならそれだけでは足りないだろう」
　達也が悠元に対して負けず嫌いな面があるのは理解している。それを見た悠元は苦笑しつつも達也に提案を持ち掛けた。
「なら、八雲先生にお願いでもしてみるか？　爺さん経由で話を通せば上手い落としどころを探ってくれるだろう」
「それはそれで魅力的だが……悠元、協力してくれるか？」
「俺は構わないが、達也はいいのか？」
　元々千姫や剛三経由で八雲に達也の手解きをさせるつもりでいた。古式魔法の秘密も外典の分野に止めれば問題はないという算段まで立てていたからだ。そこにきてまさか直接頼んできたことに驚きつつ、その理由について尋ねた。
「意地を張っていてもどうにもならない時はあるからな。癪に障らないと言えば嘘になるが、いざという時に深雪を守れないのでは話にならない……それが俺の理由だ」
「お前、一度職業病で病院に行ったほうがいいと思うぞ？」
　それは自身の身上故に解消できづらい問題だと分かっていても返してきた悠元に対し、最近は自分でもそう思いたくなってきたという心情を込めつつ、達也は言葉を続ける。
「それにだ。夢を叶えるためには俺自身も変わらないといけない……おかしかったか？」
「いんや、全然。俺も九校戦前までは別方面で変に意固地になってたからな」
「尤も、妹が時折過激なスキンシップをしていることは兄として悩ましいが」
「お兄様、それを態々私がいる前で仰いますか？」
　いつの間にか地下室に来ていた深雪へ聞こえるように言い放った

達也の言葉に、悠元はどこか似ている自分の妹を思い出して苦笑を漏らし、深雪は頬を少し膨らませてやや不満げの様子を垣間見せていた。

過激とは言っても……まあ、時折深雪が悠元の寝ているベッドにもぐりこんでくる回数が多くなったことぐらいだろう。流石に逆のパターンはない、というかそれをしてしまったらいよいよ本格的に歯止めが利かないし、ある程度の制御が利くとは言え深雪に『エレメンタル・サイト』のリソースを振り分けている達也に対してどのような影響を及ぼすか未知数のレベル。

「私としては、積極的にアピールしないと不安なんですから……特に母上が……」

「司波家というか、四葉家の道徳教育ってどうなってるんだ、達也?」

「俺に聞かないでくれ……」

只でさえ、四葉家関連だと婚約者扱いである深雪と夕歌に加え、深夜からも好意的（というよりも恋慕に近い）感情を向けられている。更に聞いたところによると、深夜のガーディアンをしている桜井水波も悠元に好意的な感情を持っているとのこと。

神楽坂家の次期当主になってなかったら、間違いなく四葉家側に引き込まれていたであろう陣容という他ない。そもそも、神楽坂家が四葉家のスポンサーという立場からして何らかのアプローチがあったことは想像に難くないと思う。

（最終的にどうなるんだろうって考えると……頭が痛くなりそうだ）

女性を惹きつけていた前世の兄もこんな感じで苦労していたのだと思うと、変に恨まなかったことをよかったと思うべきなのかどうか悩んでしまう悠元であった。

癖の強いものは治りづらい

司波家でのやり取りは話が若干脱線していたが、悠元は達也の提案を受け入れる形となった。九校戦前の練習で古式魔法を使えることは明かしていたし、幹比古のＣＡＤ調整を手伝っていたことからすれば、多少の技術はバレることも覚悟せねばならないと理解していたからだ。

「『パラサイト』を攻撃するためには情報次元の対象物を狙い撃ちにするほうが最も効率が良いだろうが、そちらの練習も並行しつつ俺が起動式を組む」

「悠元さんが起動式をですか？」

深雪に渡していた『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』は元々『インフェルノ』を弄った術式のため、悠元がどこまでの魔法改変技術を持っているかまでは知らない故の反応を見せた。

その一方、自身の魔法を使えることが分かっている達也は特に驚くようなそぶりを見せなかった。

「『パラサイト』自体、自分自身で想子を取り込む機能が備わっていない。元々そういう次元にいる故に必要がないからな」

「成程、だから生物などに憑依した結果が人の変質化に繋がるわけか」

『パラサイト』が活動するために必要なのは人間――それも、魔法演算領域を有する魔法師適性のある人間に限定される。襲撃された人間のいずれも魔法師だったという事実からして、この世界において想子を何らかの形で取り込み続けなければ『パラサイト』としての体を維持できない――という事実は、天神魔法の秘伝書や上泉家・神楽坂家の伝記に記されていた。

「『パラサイト』を直接封印する術式は俺のほうで組み立てるが、古式魔法の部類になるから深雪に教えるのが限界だろう。達也はそうだな……『エレメンタル・サイト』で霊子情報体と宿主の想子接続構造の情報を割り出して『分解』する術式なら無理なく行けると思うが、どうだ？」

「……やはり、お前は埒外の天才だな」

〝原作〟の知識は完全ではない以上、達也の得意分野を最大限生かせる上での魔法。相手が目視で追えない相手である以上、達也の『エレメンタル・サイト』はこれ以上ないほどの武器となる。
前者の場合はこの世界に留まり続けさせる魔法だが、後者の場合は精神体を〝殺害〟する魔法になるだろう。不幸中の幸いとして、達也に人殺しの経験があることと一部を除いた激しい情動が抑えられていることは、この魔法を使う上でのハードルを自然と下げている。
どの道、情報次元を〝視る〟ということを考えれば練習あるのみであるが。
「そしたら八雲先生に相談するか。爺さん経由なら快く受けてくれるだろう……そういえば達也、放課後にリーナから試されたみたいだが、大丈夫か？」
「お兄様、本当なのですか？」
「……ああ、本当だ。尤も、軽い試しのようなものだったが」
悠元の『天神の眼』は達也の『エレメンタル・サイト』よりも更に上位の機能を有しており、その中には視た対象の経験した記憶を遡及することもできることを予め説明されている。放課後のことを思い出しつつ達也は答えたが、特に困るようなものでもないと弁明するように述べた。
「そのことに触れたということは、悠元も何かあったのか？」
「セリアに竹刀で襲い掛かられたよ。まあ、咄嗟に竹刀で彼女の持ってた竹刀を斬ってしまったが」
その際に新陰流剣武術の一部を使う格好となったが、それで魔法のことがバレるとは考えにくい。とはいえ、魔法実習の絡みで自分に対する疑いが増したことは避けようのない事実だろう。
達也らには話さなかったが、一人で帰宅する際に人工衛星による監視の気配を感じたために、普段よりも強めの気配遮断と光波振動系魔法で姿を完全に偽って帰宅したほどだ。後者に関しては九校戦の時に日除け代わりとして使っていた障壁魔法といえば分かりやすいだろう。
「……悠元さんは大丈夫なのですか？」

「どのみち矛先が向くことは想定済みだ。というか、そのことも含めてＵＳＮＡの大統領に直接手紙を送りつけたんだが……日本に来た連中をほぼ全員病院送りにしないと分からないほどド低能なのかと愚痴りたくなってくる」
「待て。今ＵＳＮＡの大統領宛に送ったといったが、流石に嘘……ではないのだろうな」
「爺さん絡みで知り合っただけだよ。俺は微塵も会いたくなかったんだが」
　面倒事を抱えるぐらいならいっそのこと綺麗に『分解』したほうが早いわけだが、変な遺恨を残すのも面倒というジレンマを抱えている。数年前のことに関しても剛三自身は「政治に凝り固まった首脳など会いたくなんてないが、これも儂自身のけじめかの」とぼやいていた。
　その時点でマイクロブラックホール実験の危険性を通告していたにもかかわらず、結局歴史の流れは〝原作〟を辿りつつあった。そうなると、ＵＳＮＡ軍の上層部には自分が思う以上の強硬派なる派閥が出来ていてもおかしくはない。
「その『パラサイト』の宿主なんだが、現状は『スターズ』の兵士とのことだ。そうなるとアンジー・シリウスが出てこないということにはならんだろうな……現代魔法しかロクに使えないやつが事態を引っ掻き回してほしくないわ。むろん達也や一部の連中は除くが」
「悠元、それは遠回しに俺なら出来ると発破をかけているに等しいんだが？」
「お兄様なら出来ますよ」
　そう言われてしまっては奮起するしかない……と、達也は妹や親友からの発破に対して内心で溜息を吐きたいような心情を少し抱いたのであった。
　二人が地下室から出て行ったあと、悠元は画面を見つめながら考え事をしていた。
　それはセリア――――エクセリア＝クドウ＝シールズのことに関してだ。彼女のようなイレギュラーが生じる可能性は少なからずあっ

た。そもそも自身という存在がこうなった以上、どのようなイレギュラーが国内外で起きていたとしても不思議ではない。
その理由の一つが先日の〝イグナイター〟ことイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが出張ってきたことだ。いくら沖縄での一件があったとはいえ、そこまで警戒されていたことは想定の範囲内で済んでいた。この辺は剛三や千姫から聞き及んだことも含まれている。
旧ＥＵ国内に関しても、情報を探った限りにおいて非公式の戦略級魔法師がいる情報は掴んでいる。とはいえ、横浜事変での『質量爆散（マテリアル・バースト）』や『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』に関しては世界のあちこちでそれを調べようと躍起になっている様子が調べた情報から垣間見えた。
先日、元との電話の中でも日本の戦略級魔法を探るために留学生を派遣すべきというヨーロッパ方面の内部情報を聞いたことから、ＵＳＮＡの大規模調査はその第一弾とみていいのかもしれない。
◇　◇　◇
東京都心。その場所で最も高く聳え立つ構造物こそ東京スカイツリー。世界群発戦争で一度破壊されたものの、復興のシンボルという形で再建が成された高層建築物――その展望フロアの天井部分には一人の女性が立っていた。
目の部分を特殊なゴーグルで覆い、彼女の右手には補助スコープ付きの大型の弓のようなものが握られていた。普通の弓と異なる部分があるとすれば、弓なら本来あるはずの弦がないという点。
ゴーグルの耳には特殊なレシーバーが備わっており、そこから女性に対して連絡が入る。
『――標的がロストしたわ、姉さん』
「了解したわ。今のところは『スターズ』も動いていないかしら？」
『ええ。ただ、七草家の魔法師が被害に遭ったようね。死に至るような状態でないことは確認済みよ』
彼女――三矢詩鶴は自身を姉さんと呼んだ通話先の言葉を聞くと、大型の弓形状ＣＡＤを近くに置いていたアタッシュケースに仕舞い込んだ。元々今回の仕事はその標的を追い払うという段階までで、その標的の本格的な対処は別のセクションの話。出来なくはないわ

けだが、その辺は魔法師の家の柵が強く関係していた。
「佳奈がそう言うのなら大丈夫かしら。にしても、十師族の柵も面倒なものね」
『詩鶴姉さん……それは多分、父さんが一番感じてると思う』
「そうね」
詩鶴と連絡先の相手――――佳奈が『吸血鬼』の対処に駆り出されているのは、その最初の『吸血鬼』に遭遇した相手が二人に加えて美嘉の三姉妹だったことが起因している。
有無を言わせず襲い掛かってきた相手が人ならざるものだと佳奈が感じ取り、美嘉が習得したばかりの天神魔法で吹き飛ばし、更には詩鶴が追い打ちで怪我を負わせたが、何事もなかったかのように犯人が逃亡した。
この時点で魔性なるものだと判断したわけなのだが、三矢家は他の十師族のように守護する基盤を持たないために二人は七草家の手伝いという体で動いている。かといって、得られた情報すべてを七草家に渡すかどうかは現当主である元の匙加減なのは間違いない。
「現状を考えれば、まだ悠元に動いてもらうべきじゃないと思うの」
『……やっぱり、ＵＳＮＡ絡み？』
「憶測に過ぎないけれど、彼らの近くに『パラサイト』がいると思うわ」
現状仮説の段階を抜け切れないことでもあるが、「パラサイト」が何らかの形でＵＳＮＡの関係者に取り付いていて、そこから得られた情報を仲間で共有している可能性に触れた。
元々悪霊や妖魔にも一種の精神感応能力（テレパシー）があることからして、「パラサイト」がここまで巧妙に逃げ隠れ出来ているのはその能力を有している可能性があるだろう、という詩鶴の可能性の言及に対し、佳奈は一切否定しなかった。
『……父さんには、そう伝えるべきかな？』
「そうね。ただ、七草家に伝えるべきではないと思うの」
もし「パラサイト」を軍事的に利用などと考えた場合、そのことを触れずに隠すしかないと踏んでいる。天神魔法に触れている側だからこそ、詩鶴と佳奈はパラサイトの危険性という点で一致した。別件

でここにいない美嘉についても同意見を得られるだろう、と佳奈は詩鶴の言葉に頷いた。
「にしても、『一極徹甲狙撃（ディフェンス・ブレイカー）』で肩と膝を撃ち抜いたのに動けるだなんて……」
『姉さんのそれは全力だと対戦車ライフルと大差ないのにね』
「佳奈、それを言わないで」
詩鶴の得意とする『ディフェンス・ブレイカー』は三矢家が得意とする「スピードローダー」を併用した加速・移動・収束・発散系統の複合術式で、高密度に圧縮した想子の矢を情報次元に向けて放つ魔法。現実の次元で圧縮した分の距離に掛かる空気抵抗が全て矢の内部に注ぎ込む形で注入されて実物の矢よりも高密度の物体へと化すため、フルパワーだと対戦車ライフルと大差ない威力を誇る。無論、この術式を組み立てたのは悠元に他ならない。
対戦車ライフルを人に向けて撃てば問答無用で殺害しかねないため、今回は威力を抑えての攻撃となったが犯人はそれすらも治療しきって逃亡した。
ともあれ、負傷者を運ぶ仕事があるために詩鶴はアタッシュケースにゴーグルを放り込んで閉じると、そのまま何の躊躇いもなく展望フロアの天井から眼下に広がる都会の夜景に飛び込むようにして降りて行った。
◇　◇　◇
司波家に居候していても、悠元の置かれた立場が免除されるわけではない。それは神楽坂家に入ったことで変化が生じていた。『護人』の一角を担う以上、この国を脅かすものは何人たりとも許されないことだ。
悠元は達也や深雪との会話を終えた後、そのまま渋谷へと出向いた。流石に冬なのでコートを羽織っているが、一応動きやすい服装に加えてＣＡＤを持ち歩いている。ネオンが光り輝いている街中を歩いていると、そこで見知った人物に遭遇した。
「あれ、レオ？」
「お、悠元じゃねえか。こんな時間にどうしたんだ？」

「俺は仕事の一環だよ。レオの場合は……お祖父さんのようにふらついている感じか？」
何で、というレオの疑問を読み取ったのか、悠元は表情を変えることなくその答えを述べる。
「うちの爺さんが知り合いだったらしくてな。詳しいことは聞いてないが、訳ありの魔法師だったってこととよくふらついていたぐらいは知っているのさ」
この言葉に嘘は含まれていない。だが、〝原作〟の知識からしてドイツで開発された「城塞シリーズ（ブルク・フォルゲ）」――レオがその第三世代であることは知っている。この辺は〝転生〟の概念を知らなければ理解しようもないと思う。
悠元の説明を聞き、レオはそれで納得したような表情を向けていた。
「ただ、最近は物騒だからな。変にうろついているとヤバいから。いくらレオの実力が上がっていても、対処できないやつもいるだろう？」
「まあな……って、あれってエリカのお兄さんじゃねえのか？」
「おや、本当だ」
レオがふと視界の先に見つけたのは寿和と稲垣。二人に関してはレオも面識があるようで、警察官である彼らが気配を隠して捜査している様子。悠元は密かに気配遮断と認識変化の結界術式を張った上で、レオと一緒に近づいた。
「お二人とも、こんばんは」
「うお、っと神楽坂殿に君はこの前エリカを迎えに来ていた子じゃないか」
「そんなことしてたのか？」
「無理矢理呼び出されたんだよ……って、刑事さんたちは何故ここに？」
この場合、部外者であるレオを巻き込むのは不本意とも言うべきだろうが、魔法師であることとレオの徘徊癖を考えれば情報共有はするべきという判断に至った。稲垣は若干警戒するが、寿和は目線を悠元

に向けていた。
「……神楽坂殿。いや、この場合は悠元君と呼ばせてもらうか。君はいいのかい？」
「レオも発展途上とはいえ魔法師です。彼が巻き込まれない保障などありませんから」
「そうか。なら、場所を移すか」
　寿和が案内したのは路地裏の小さな酒場。寿和はマスターに一言掛けた上で小さなテーブルと椅子が置かれた部屋に案内される。無論、悠元は丁寧に音を遮断する結界を張った。稲垣は悠元の存在があるとはいえ、レオに対して若干の警戒をしていた。これにはレオと寿和が苦笑を漏らした。
「さて、君らはよく渋谷に来るのかい？」
「俺は偶々ってところっすね」
「二日に一度は来ています。尤も、細かいところは実家頼みになっていますが」
　最初はそこまで警戒していなかったが、その最初が自身の姉らを狙うという事実を聞いて三矢家は本格的に情報収集を行っている。悠元も深夜の巡回や探索を行っているが、敵が変に警戒しているのか、その動きから遠ざかるようにして被害が出ている。
「寿和さん。皇宮警察から警察省に送付された『通達』はご覧になりましたか？」
「ああ。確かにこちらが手詰まりである以上、協力は吝かじゃないんだが……」
　皇宮警察からの送付――――『神将会』を警視庁・警察省が全面的にバックアップするという通達。悠元が神楽坂家の次期当主であることは魔法使いの家ならば周知の事実で、何らかの関わりを持っているところまで理解した寿和がそう言葉を詰まらせた理由は実に簡単だ。
　ようは無駄な縄張り争い。縦割り社会構造の弊害でもあり、十師族が主な要因だった。
「七草家は独自に動いてこの事件を収束させるようだが……どうにかできると思うかい？」

「確かにどうにか出来るとは思いますが、あの当主が変な欲を持たないとも思えません」
悠元が以前七草家に渡したのはあくまでも〝拘束術式〟――――つまりは一時的な被害抑制でしかなく、根本的な原因を取り除くという結果に至るわけではない。〝封印〟や〝消滅〟となれば、それは本格的に古式魔法の領域に突入する。
臆せず言い切る悠元の言葉に稲垣がやや恐る恐るといった感じで問いかけた。
「悠元君。相手は仮にも十師族の当主なのに、そんなこと言っていいのかい？」
「これでも神楽坂家当主代行を兼ねていますから。正直言わせてもらうなら、内ゲバやってる場合じゃないだろうと苦言を呈したい気分です」
ＵＳＮＡのメンツが大量に投入されたことに加え、脱走兵の一報が本格的に伝わったことで軍関連の情報がかなり入ってきている。この辺は元から聞き及んだ部分と自身の情報精査から得た結果だ。
そんな中で妙なプライドを持ち続けることに一体何の意味があるのか。出遅れたくないという気持ちは理解できなくもないが、とりわけ七草家の場合は四葉家に対する妄執が些か強すぎると思う。
ここまで来ると、ストーカー行為として四葉家が七草家に抗議してもおかしくはない……などと考えてしまうのは自分だけなのだろうか、と悠元は内心で愚痴る。
「相手は一個人という単体で済むレベルではありません。なので、寿和さんと稲垣さんにも協力をお願いしたいと考えております。これは皇宮警察特務隊『神将会』第一席、神楽坂悠元からの〝要請〟です」
どうせＵＳＮＡがシラを切ることなど想定している。剛三の忠告よりも現代魔法の先進国としてのプライドを優先した以上、剛三が動くことは既定路線と言っていいだろう。それに、『仮装行列』の一件で千姫まで動くことは既に聞き及んでいる。
同席しているレオに関しても、彼専用のＣＡＤを構想しつつ夜の徘徊には気を付けるようくぎを刺すことにした。

癖を止めさせるというのはそう簡単じゃない話である。

彼（女）が言うと嘘に聞こえない

「悠元君、西城君の前でそれを言っていいのかい？」
「レオは横浜の一件で知っていることですから」
「まあ、悠元がすげえのは４月の時から理解してたからな」
レオは横浜事変で悠元が『神将会』の一員であることを知っている。時折失言をしたりすることはあるものの、義理堅さに関しては信頼できるレベルだと判断しているからだ。寿和との対話にレオがそうつぶやいたところで稲垣が悠元に尋ねた。
「それで、悠元君。十師族のほうに対しては？」
「まあ、今は好きにやらせていいと思います。うちの実家も一枚噛んでいますが、あくまでも協力の範疇ですし師族会議を通した案件ですから」
正直なところ、十師族が独立した捜査チームを組むことぐらい想定しなかったわけではない。ましてや今回は七草家の魔法師も被害に遭っていることからして、七草家が単独で動くのは想像に難くない話だ。
現状は三矢家も協力員として七草家との歩調を合わせているが、必要以上の情報は流さないように判断しているようだ。そこには七草家現当主の四葉に対する感情が大きく関与している。
「寿和さんのご実家にも話は通しました。その際にエリカを押し付けられるような格好になったようですが」
「あの親父は……君とエリカに恋愛感情なんてないと分かっていることだろうに」
「警部……」
神楽坂家単独で動けないこともないが、スターズの脱走に一枚噛んでいる可能性が最も高い存在を考えれば今ここで神楽坂家の規模を悟られるのは宜しくない。それに複数の捜査系統自体不便ではないが、横の連絡体制位は整えておくべきだと判断した。
これで神楽坂家・上泉家を主体とし、『神将会』を主軸とした警視庁・警察省の捜査チームに千葉家が加わる形となる（吉田家にも声を掛け

る算段でいる)。現状で三矢家を入れていないのは、今回が『パラサイト』絡みという点に加えて七草家と〝九島家〟にも大きく関係している。

なお、千葉家現当主は悠元の嫁にエリカを出すこと自体諦めていない様子で、これには寿和が大きく息を吐きつつぼやくような口調で呟いた。いくら魔法師同士の婚姻が政略結婚の面を含んでいるとはいえ、本人同士にその意思がない以上は破談しか考えられない台詞に、稲垣が珍しく寿和を気遣うような表情を見せた。

「何にせよ、変に飛び出されるよりはマシだと思っておきます。レオ、そろそろ行くか」

「お、おう」

稲垣でも両手を使わないと動かせなかった気密ロックのハンドルを片手で回し、悠元に続く形でレオも外に出た。

あまり人気の少ない公園に移動したところで、悠元はレオに向き直って言葉を発した。

「本当ならレオに首を突っ込んでほしくないんだが、状況が状況だから話しておく。先日の横浜とは規模も訳も違うからな」

今度の相手は現代魔法単独で太刀打ちできなくもないが、かなり厳しい相手になること。元継や剛三の鍛錬を通して強くなってはいるが、それはあくまでも現代魔法での範疇に過ぎない。悠元以外の近しい身内で対処可能とするなら、現状だと深雪と幹比古あたりに限定されてしまう。三矢家を頭数に入れなかったのはいくつかの懸念事項も想定されるからだ。

では、現代魔法だけだと対処できないのかと尋ねられると必ずしもそうではない。霊子自体に直接干渉できる魔法の数が極端に少ないだけで対処は可能だ。尤も、物理法則改変主体の現代魔法に『超能力』レベルの対処が極めて難しいことは言うまでもないが。

「何かオカルトじみてる気がするな。けど、お前に言われると急に現実味がでてきちまうが……それで、どうにかできるのか？」

「してもらわないと話にならんからな。それで、こいつを渡しておく。腕に着けるタイプのＣＡＤだ」

悠元がレオに放り投げたのは、一見すると単なる黒いリストバンド。レオは悠元に言われるままそれを腕に装着するが、今のところは大きな変化も起きていない。監視システムを欺くための結界術式を展開しつつレオに提案した。
「レオ、適当に得意な魔法を発動させてみろ」
「え、こいつがＣＡＤなのか？　……『装甲（パンツァー）』！」
レオの込めた想子に反応し、黒いリストバンドにレオの想子光が回路のような模様を描き出す。そして、瞬時にレオの衣服を含めた全身が硬化魔法で覆われた。レオは魔法の感触をひとしきり確かめた後に解除すると、リストバンドも元の真っ黒な状態へと戻った。
「すげえ……今まで使ってたやつより段違いだぜ」
「それは重畳。実をいうと、知り合いの魔工技師が試作した次世代型デバイスなんだが、俺が使うと足枷のレベルになりかねなかったからな。タダであげる代わりにテスターをしてほしいんだ」
レオに渡したデバイスは、厳密に言うなら世界のＣＡＤメーカーが躍起になって現在開発中の思考操作型ＣＡＤを更に発展させた「並列思考操作型ＣＡＤ」。簡単に言うなら、パソコンで言うところのＣＰＵ（中央演算装置）にあたる感応石を特殊な方法で精製しており、従来一つの魔法に一つしか対応できなかった魔法演算処理を並列・高速化することに成功した。
本来魔法発動時に露出してしまう起動式だが、これをリストバンド内部に仕込んだ特殊な回路に流すことで対抗魔法の挙動を遅らせる。リストバンドに走った光は特殊回路――仮想魔法領域が稼働しているサインみたいなものだ。仮想魔法領域の電子回路化という技術は表に出せない代物のため、設計と作製はＦＬＴで私的に使っている部屋に設備を搬入してもらい、そこで作ったものだ（司波家でやると色々目立ってしまうため）。
その大本は「ワルキューレ」と「オーディン」に搭載されており、世界でもトップクラスの軍事機密レベルに該当する。なので、リストバンドには登録者の想子パターン以外で起動した場合や無理に解析・分解しようとした場合、周囲に超高電圧（最低でも１００万ボルト）の

電流が流れる仕組みだ。
「……リスク高すぎないか？」
「高性能のＣＡＤは得てしてそういうものだよ、レオ」
「そう言われちまうと、絶対に失くさないようにしねえとな」
　プログラム自体は「ワルキューレ」と「オーディン」の基本プログラムから必要な機能だけを抜き取ったものなので、要は使いまわしに近い。使いまわしのプログラムで現状でも数世代先を行く達也の非凡さは流石『ミスター・シルバー』と言うべきなのかもしれない。
　そんなことを思っている悠元も大概おかしいのは言わずもがな、というべきだろう。
　なお、ＣＡＤ自体の耐久度テストは既にクリアしており、象クラスの負荷を１０万回以上与えても正常に稼働するレベルだ。素材自体は高密度のカーボンナノチューブを採用していて、それについては剣術の修行で『相転移装甲（フェイズシフト）』による失敗から生まれた大量の残骸――そこから拾い上げたものなのは、ここだけの話である。
「ちなみに、それも現状は試作型だから」
「……嘘じゃねえんだよな。殊更悠元が言うと現実にしか思えねえよ」
　残念ながら、事実である。
　正直継ぎ接ぎに近い代物なので、派手に使っても問題ないかどうかのテスターとしてレオを抜擢した。実はエリカに対して新型のＣＡＤを渡しているので、レオに渡すことで帳尻を合わせる形とした。
◇　◇　◇
　西暦２０９６年１月１５日、午前１時３０分。普段なら就寝しているリーナとセリアであったが、同居人のシルヴィアにたたき起こされた。軍人である二人からすればこの程度の緊急事態など茶飯事であり、すぐさま意識をクリアにした上でシルヴィアに尋ねた。
「何事ですか？」
「カノープス少佐からの緊急連絡です」
　連絡先の相手はベンジャミン・カノープス少佐――曲者揃いのスターズにおいては常識人級の良識と礼儀を弁えているほどの人物。

向こうも現地時間の違いを考慮して連絡をしてこなかった理由とすれば、彼の性格からして緊急性の高い連絡だということはすぐに理解できた。
　リーナが通信機に向かったのを見計らって、セリアはシルヴィアに問いかけた。
「この時間に報告となると、おそらく例の脱走者の件ですね」
「恐らくそうでしょうが、何か懸念事項があるのですか？」
「リーナがフォーマルハウト中尉を処分した後、調査で判明した残りの脱走者の痕跡が綺麗に消されていたことです。軍関係に詳しい誰かが手引きしたのは間違いないかと」
　スターズでも屈指の実力者であるアルフレッド・フォーマルハウト中尉の脱走の一件は、エリア５１演習場におけるアンジー・シリウスが何者かに敗れた一件以来の衝撃を与えた（後者に関しては戦略級魔法の発動テストのために目撃者が軍首脳部の一部とスターズのごく一部だったため、箝口令自体はスムーズに行われた）。
　その後、フォーマルハウト中尉だけでなく七名の魔法師が同時期に脱走していたことが判明し、更なる衝撃を与えていた。スターズで最下級とはいえ衛星級（サテライト）の魔法師も含まれており、リーナがカノープス少佐に託した任務はそれらの脱走者の追跡と処分であった。
「リーナが驚いていますが、只事ではないのでしょうね」
「やけに落ち着いているようにも見えますが」
「まさか。私の探知すら欺いたのですよ……匿った人間は、少なくともスターズの――――いえ、国防総省（ペンタゴン）でもトップクラスの情報収集能力を有した人間。例えば、一部で噂になっていた〝七賢人〟の可能性もあるかと」
　セリアの探知能力はスターズでもトップクラスに位置することをシルヴィアは知っている。それすらも欺き切ったということは、脱走した彼らが変質化した可能性だけでなくそれを匿った存在も世界トップクラスの情報収集能力を有している存在でないと成立しない。
　シルヴィアはセリアの言葉に対して何かしらの返答をする前に、通信を終えたリーナが真剣な表情を見せつつもどこか困惑を隠しきれ

ていなかった。
「リーナ、カノープス少佐からは何と？」
「それが……」
　カノープス少佐からの連絡では、脱走者がこの国に来ている事実に加え、この事態を重く見た参謀本部が追加のチームを派遣する決定を下した。リーナが現状請け負っている任務は第二位の優先順位となり、脱走者の追跡および処分を最優先任務と位置付けた。なお、日本政府に対してその説明は一切しないということも説明に付け加えられた。
　これに対してシルヴィアは黙って聞いていたが、セリアは最も気になることを問いかけた。
「で、お姉ちゃん。その情報先は誰なの？」
「それが、カノープス少佐も答えてはくれなくて……」
　リーナは無論だが、カノープス少佐ですらその情報提供先を知らないということにセリアは僅かに難しい表情を見せた。軍事関連のことについては表に出来ない情報提供者がいることも承知している。だが、ＵＳＮＡの魔法師部隊においてトップクラスのスターズであっても公表されないのは疑問に残る。
　これにはシルヴィアが気付いてセリアに問いかけた。
「気になるのですか？」
「少なくとも統合参謀本部は把握していると思われますが、その情報元を知らないというのは腑に落ちません」
　リーナが多少なりとも抜けていることは否定しないが、これでもスターズのトップである〝シリウス〟。情報の詳細が開示されないのは気に掛かる、とセリアは呟いた。更に、という形でセリアが口を開いた。
「来日する前、私は大統領閣下と面会しました。その中で閣下は『ミスター剛三の言うとおりになってしまった。私は彼に会わせる顔がない』と漏らしていました」
　ダラスでのマイクロブラックホール生成・蒸発実験についてはごく一部の人間にしか開示されていない。だが、セリアは身内である大統

領からその話を聞いて愕然とした。国家において重要機密情報であるがゆえにここで全てを話すことなどできないが、脱走者とダラスでの実験当日にいたスターズのメンバーが奇しくも一致していることも把握している。
「それは、どういうことなのです？」
「我々が禁忌を犯した立場、と閣下は仰りたかったのでしょう。尤も、この部分については推測の域を出ませんが……寧ろ、厄介事が増えた印象です」
「セリアが言うと急に現実味を帯びるから止めてほしいんだけれど」
軍人だからこそ守秘義務の枷は非常に多い。セリアの言葉に対してリーナが冷や汗をかくような表情で呟き、その言葉を聞いたセリアの反応はというと……こうなった。
「少しは危機感を持ちなさい、このバカ姉！　戦略級魔法のことだけでも大事（おおごと）なのに、脱走者がこの国に来ているって事実は色々ヤバいってことなんですよ!!」
「いったーい！　何でチョップするのよ!?」
魔法以外のこととなるとてんでポンコツになってしまう姉に対し、有無を言わせずチョップを頭上に下ろした上で今置かれた状況を改めて口に出していた。口調はやや荒げているが、小声で話しているあたりは流石軍人というべきなのかもしれない。
これにはシルヴィアがクスッと笑みを漏らした。
「その辺にするべきですよ、セリア。リーナが任務をこなす前に不貞腐れてしまいますから」
「シルヴィ……そうですね。２年前のように部屋に引き籠られるのは大変ですからね」
「シルヴィはどっちの味方なんですか!?」
戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』の制御実験の際、基地に侵入した謎の人物と対峙した。仮面を被っていたが、外見からするに同い年ぐらいの人間。リーナと〝同調〟していたセリアもその存在を把握していた。
リーナが彼に向かって『ヘビィ・メタル・バースト』を発動させよ

うとした瞬間、強制的な定義破綻とともに事象干渉力が〝喰われる〟感覚を覚えた。そして、気が付けばリーナの気絶により強制的にセリアも気絶させられてしまった。

その一件の後、セリアはすぐに割り切れた。だが、リーナは1週間ほど部屋から出る素振りを見せなかった。結果的にどうなったのかというと、セリアが強引に鍵を開けてリーナを説教する羽目になった。

「私が姉なのにー！」と叫んでいるリーナに対し、心の余裕があるセリアと比べた時……これではどちらが姉なのかと苦笑してしまうシルヴィアであった。

割を食うのはいつだって苦労人

旧神奈川県厚木市。三矢家の本屋敷――――当主の書斎にて、元と詩鶴、佳奈が向き合っていた。三人が顔を向き合わせつつテーブルに置かれた端末に目をやっていた。そこには先日詩鶴と佳奈が遭遇した不審人物に関するデータが記載されていた。

「……加減していたとはいえ、詩鶴の『一極徹甲狙撃（ディフェンス・ブレイカー）』を食らっても回復して動いたとはな。まるで御伽噺や創作物の〝化物〟というほかないな」

「殺してはいけない不文律がなければ心臓を破壊することも覚悟していましたが……何故なのですか？」

疑問を浮かべたのは詩鶴であった。相手の身体能力からして魔法というよりも『超能力』の類に差し掛かっていることは古式魔法を学んでいる詩鶴自身が一番理解していた。何の対策もなしに殺せば厄介な事態となることも無論想定しているが、この辺は指揮系統に近い人間に聞こうと考えた。

「『パラサイト』のこともそうだが、その宿主が厄介だ。得られた映像データを解析したところ、先日ＵＳＮＡで起きていた脱走騒ぎの当事者らしい」

「それって、確かスターズのだっけ？」

本来こういった情報は国家機密級なのだが、軍事関連の情報収集に長けている三矢家からすればそれほど難しくない方法でその情報を得ることに成功した。これには悠元から提供を受けた『精霊の鏡（カーヴァンクル）』の力も非常に大きい。

元はその辺の情報を今回の作戦に関わる人間にのみ教え、他家への情報提供はしない条件を自分の子らに徹底させている。この理由は七草家に起因している部分が大きい。

「そうだ。悠元からの連絡では当代の〝シリウス〟までこの国に来ているそうだ。流石にスターズ総出という一番最悪のシナリオは避けられたが」

「仮にそんなことになったら、お祖父様が嬉々として真剣の六刀流を

持ち出しかねませんよ」
「……都心が大規模停電してしまうかもね」
剛三が念を入れて忠告したというのに、それを守らなかったどころか魔法先進国のプライドやら戦略級魔法に関しての神経質など諸々の要素が複雑に絡み合い……結果として実験は決行されてしまった。
その一報を聞いた剛三の反応はというと、珍しく冷ややかに「先祖の爪の垢でも煎じて飲むべきだな、阿呆どもが」と吐き捨てたらしい。今回の脱走者の手引きをしていたのが剛三にとって因縁のある人物と関係しているかもしれない可能性が大きいからだ。
戦略級魔法に関してもそうだが、脱走者の件でスターズから追跡チームが追加派遣されることが決まっている。その情報は無論掴んでいるが、元が最初にその情報を知った際に抱いた気持ちは〝哀れ〟という感情であった。
「その悠元から追加連絡だが、今回の一件は『神将会』が動く。警察省および警視庁、そして千葉家と吉田家の合同チームだ。先んじて美嘉に動いてもらうこととなった」
「私たちは当面七草家との共同戦線という形は崩さず、ですね？」
「ああ。十文字家にも声を掛けることになるのは間違いないが、悠元は既に神楽坂の人間だ。あまり頼り切るのも宜しくない」
正直なところ、その気になれば悠元だけでも一瞬で片を付けることぐらいはできる……と元は推測している。だが、それでは意味がないということも理解している。単に『吸血鬼』――スターズの脱走者を何らかの形で処理することは間違いないだろうということも。
「連絡を受け取った際に悠元からそれとなく聞いたのだがな……何て言ったと思う？」
「うーん……ありきたりなところだと、ＵＳＮＡに賠償責任？」
「『それは追々考えておく』と言っていた。時折自分の息子とは思えぬほどの冷酷さを元治にも見習ってほしいとは思うが、贅沢が過ぎるのだろうな」
魔法という存在が世界において重要なファクターを占めている以上、時折苛烈にならねば生き残れない。世界の軍事関連の情報を収集

している三矢家からすれば、その緊張感がひしひしと伝わっていることは元が一番感じていた。現に横浜事変でも周辺国が様々な手段で探りを入れていたことも把握している。

戦略級魔法に関しては、同盟国である日本政府に『本当の目的』を明かさずに入国しているうえ、脱走者の件で無断に軍人を入国させる……この時点でＵＳＮＡが負うことになる責任はかなり重くなるだろう。

とりわけ悠元は非公式ながらこの国の戦略級魔法師。沖縄防衛戦の『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』と横浜事変での『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』は既に現代魔法の領域を超越した代物なだけに、周辺国の警戒も理解できなくはない。

だが彼には一貫した考えがある、と元は呟く。

「悠元は世界の支配者に〝なんて〟拘っていない、と呟いていた。結果として神楽坂家の次期当主とはなったが、色々悪目立ちした自分の浮ついた立場のために受け入れた、と話していた」

３年前の一件で四葉家に目を掛けられたことは、他の十師族でもそれとなく噂程度のレベルで広まっていた（無論元はそのことに関してやんわりと否定していた）。

彼が魔法や武術の研鑽を止めないのは、恐らくだが彼の前世での経験が大きいのだろう。それに加えて、悠元自身の魂が入れ替わってしまうまでの記憶を引き継いだことで生への執着が人一倍強い、と元はみている。

◇　◇　◇

翌日。メディア関連で『吸血鬼』のニュースが流れ、連続猟奇事件ということでお祭り騒ぎだった。それは無論、十代の若者が集まる形となる学校でも似たようなかたちだった。

普通だとありえないようなゴシップに飛び付いてしまうのは人の性なのだろうが、興味があることとそれに対して首を突っ込むのは別次元の話だ。対岸の火事に嬉々として突入していくのは一種の狂人ぐらいなものだろう。

現にその記事はオカルト面を強調した書き方が殆どで、エンターテイメント性を重視したような論調ばかりであった。いくら大衆の眼

を引き付けたいからと言っても限度は守られてしかるべきだ。
　自由だからと言って何をしても許されるわけではない。
「家の用事とか言ってたけど、どうしたのかな？」
「さてな」
　翌日、1年A組の教室。ほのかの言葉に短く返しつつ、内心では二人の席をちらりと見ていた。あの二人の素性はある程度調べたわけなのだが、このタイミングで学校を休めば今お祭り騒ぎになっている例の件と関係あるのでは……と邪推する輩がいても不思議ではない。
　そのことに関しては自分に対するブーメランを投げているようなものだが、否定はできない。
「今のところ死者は出てないみたいですけど……悠元はどこまで知ってます？」
「実はな、うちの姉らがその最初に襲われたらしい」
「えと、その吸血鬼さんって、死んでませんよね？」
　燈也の言葉に対して悠元が答えると、それを聞いたほのかの言葉に二人は苦笑していた。いくらなんでも姉達が魔法科高校時代に暴れたとはいえ、大学生の身分で正当防衛が成立していても殺しはしていない、と聞き及んでいる。
　だが、相手は行動不能の状態から回復してすぐに撤退したらしい。相手からすれば彼女らの魔法力を得ようと考えたのだろうが、武術を学んでいる姉らに対して殺気を剥き出しにしている時点で自殺願望を疑わずにはいられない。
　すると三人のもとに深雪が近づいてきて、その傍には姫梨も付いてきていた。
「何のお話をしていたのですか？」
「巷で噂になっている『吸血鬼』関連のことでな。ほのかはその犯人が死んでないのかと聞いてきたんだ」
「流石に死んでいたらオカルティック度が加速しますよ」
　ここにいる五人の内、詳細の情報を知っているのは悠元と深雪、姫梨の三人のみ。とはいえ、昨年春と秋のことからすれば『吸血鬼』が学校を襲撃しない可能性がゼロとは言えない。魔法科高校のセキュ

リティは高いが、埒外に耐えるほどのものではないことは承知済みだ。
　レオやエリカ、幹比古に手伝ってもらう形となっているが、ここに美月やほのかを入れるのは別の問題。同じ『神将会』である深雪や姫梨は言わずもがな、エリカの場合は千葉家への協力を取り付けた際に『不逞の娘だが、使えないことはないだろう』と千葉家の当主が言っていた。
　お互い線引きをしているのに余計な野暮はやめてほしい、というのが悠元とエリカの共通認識である。とりわけエリカからすれば、大晦日の時に『深雪に凍らされたくない』といってその当人から満面の笑みを向けられた経験が色濃く残っている。
「昨日の話だが、雫から連絡がきたな。寝巻とはいえ、流石にあの格好はどうなのかと一瞬焦ったが」
「聞いた私も流石に焦っちゃいましたよ。いくら電話の相手が悠元さんとはいっても限度が……」
　いくら連絡の相手が婚約者とはいえ、スケスケのネグリジェだけしか身に着けていないのはどうかと窘めつつ、雫と通話していた（雫は渋々ながらカーディガンを羽織っていた）。悠元の後で雫と話していたほのかの場合は音声だけでの通話だが、悠元はテレビ電話形式の連絡だったためにほのかは悠元の言葉に対して驚いた、と呟いた（ほのかの場合はその辺の愚痴を雫から聞かされたため、事情を把握していた）。
　流石に場所が場所なので言葉を選びつつ会話を進める。
「それはともかくとして、向こうでも『吸血鬼』の事件で騒ぎになってるみたいだな。西海岸ではなく中南部方面らしいが」
「ニュースじゃなくて知り合いの生徒から聞いたって言ってましたね」
　関連の情報は『神将会』全員で既に共有している。その知り合いの生徒なのだが、雫から聞いたその名――〝レイモンド・クラーク〟で緊張感がより一層増した形だ。ただ、雫と修司、由夢には必要以上のことを勘付かせないためにも一定以下の警戒に止めるよう伝えて

いる。
　その後、食堂での昼食でも『吸血鬼』に関する話題が尽きることはなかった。いくら魔法科高校の生徒と言えども……いや、この場合は生徒〝だからこそ〟とも言えるだろう。その際に美月が「人間主義」に関することを危惧するような言葉を呟いた意味も理解できる。
◇　◇　◇
　三学期の3年生となれば進学や就職の都合で自由登校になるのは珍しくなく、国策機関である魔法科高校も例外に含まれない。その3年生である二人――――克人と真由美は使用されていない空き教室で顔を合わせていた。
　双方共に十師族の直系であり、今回はそれぞれ十文字家と七草家を代表してのこと。尚、お互いに恋愛感情はないというか、そもそも入学時点から競い合うライバルのような関係に近いので、「密会」であっても「逢引」ではない。これは十師族の〝最強〟に由来する結果である。
「何で私たちがこんな所で、とは思うけれどね」
「それに関してはすまない。だが、これが今一番波風を立てない方法だと思ったからな」
「上泉家の一件もそうだけれど、ここにきて四葉家にまでちょっかいを掛けるだなんてね……お陰で四葉家とは冷戦状態。今ここで悠君に追及されたら間違いなく土下座ものよ」
　前者に関してはその一端に関わってしまった以上、悠元に対して強く出ることもできないと真由美は感じている。加えて悠元が戦略級魔法師ということを知っているからこそ、四葉家への横槍は野暮であると内心で父親への呪詛をちらつかせていた。そんな様子の真由美に克人が苦笑を漏らした。
「お前でも神楽坂には頭が上がらんか」
「当たり前よ。しかも、狸親父のせいで泉美ちゃんのことも大変になったんだから……」
「確か七草の妹の片割れだったか……何かあったのか？」
　真由美に双子の妹たちがいることは克人も聞き及んでいる。彼女

の口から出た名前に対し、克人が気になる素振りを見せつつも問いかけると、真由美は深い溜息をひとつ吐いた後で説明する。
「七草（ウチ）は元々泉美ちゃんが悠君と婚約を結んでいたのだけれど、悠君の高校入学前に破棄になったのよ。バレンタインの件もそうだけれど、一番の理由は十山家の見逃しね。それからというもの、事あるごとに泉美ちゃんの当たりがきつくて…あんの親父…」
「例の一件か……」
今まで大きく動くことのなかった上泉家が動き、下手をすれば師族が三つ潰されかける事態になっていたかもしれない一件。
この場合、十文字家当主代行の克人が一番割を食った形であった。何せ、当初は同じ〝十〟の名を冠する十山家を諌める方向性だったが、それに待ったをかけたのは七草家現当主。結果として上泉家から厳しい目を向けられる形となった。
「九校戦の時もそうだけれど、自分が悲しくなってくるわ」
「そういうことを目の前で言われると、時折自分が異性扱いされていないのでは、と勘繰ってしまうのだが」
「そんなことはないわよ。十文字君は私の知り合いの中でもトップクラスだと思ってるわ」
入試からのライバルだからこそ腹を割って話せる事実も、克人が真由美の知る異性の中でトップクラスという事実も偽りはない。とはいえ、その上には間違いなく悠元がいるのだろう、と克人は苦笑を禁じえなかった。

強化されると際立つ怪人の硬さ

七草家代表代理としてその場にいる真由美の正直な言葉に、十文字家代表代行である克人は苦笑を禁じえなかったところで、真由美に対して率直な言葉を返した。

「やはり、そういう対象には見れないか」

「別に十文字君が悪いわけじゃないけれど、入試からのライバルだもの。それにね……」

十師族が〝最強〟という存在証明のため、お互いに制約がありながらも切磋琢磨してきた。ただ、その二人にとってもさらに高い壁というものが存在しているのも事実。その一端は既に1年生の時に受けていた。言うまでもないことだろうが、悠元の姉である佳奈と美嘉によってだ。

「神楽坂の姉達――佳奈殿と美嘉殿だな」

「ホント、聞けば聞くほどデタラメに聞こえてしまうって末恐ろしく思っちゃったけどね。っと、そろそろ本題に入らないと……七草家当主、七草弘一の言葉をお伝えします。七草家は十文字家との共闘を望みます」

「いきなり『協調』ではなく『共闘』とはな。事態はそこまで切迫していると認識していいのか？」

克人は真由美の――七草家当主のメッセージを聞いた上でそう問いかけた。

関東地方において「表」の役割を担う十文字家は情報収集を七草家に依存している部分がかなり多い。これは十師族の監視体制故の側面もあったりするが、上泉家の一件も含めた絡みで十文字家は上泉家や三矢家との接触を行い、軍事関連も含めた情報提供を受けるという緩やかな協調関係を結んでいる。

克人が詳しく知らないのは、現当主の和樹が本格的に当主業務の復帰を果たしており、克人の立ち位置は魔法科高校を通じての折衝や当主の補助に止まっているからである。

「十文字君の父から何も聞いていないの？」

「暫く学業と魔法の訓練に専念しろ、と言われていたからな。今回の一件も父からの頼みを受けただけに過ぎん」
　忘れがちになるが克人と真由美はお互いに受験生の立場。ただ、推薦が決まっている克人に対して実の父親がそういい含めた。恐らく悠元の存在が一番影響しているのだろう、と克人は内心でそう推察していた。
　生徒会役員に関する不文律のために一般受験となる真由美からすれば、自分よりも自由に動ける立場の克人に対してそういい含めた十文字家当主の深慮がどこから来たものなのかは明らかである、と少し笑みを見せた。
「吸血鬼事件のことだけれど、どこまで把握している？」
「報道されている範囲内のことならな。それ以上となれば父に聞く必要があるかもしれんが」
「十文字家は一騎当千がモットーだものね。で、数だけは無駄に多い七草家の調べでは、被害者は報道されている数の約三倍少々。幸い命を落とすという事態にまでは至っていません」
　オカルト的な側面を持っているが、物語における吸血鬼と遭遇した場合、大抵は血をほぼ抜き取られてミイラのごとく干からびるのがお約束みたいなものだ。一方、真由美の言葉は瀬戸際で救命することに成功している、と言わんばかりの説明であった。
「被害地域は都心部にほぼ集中しているわ」
「……つまり、その中に七草の関係者も含まれているのか？」
「半分正解ね。父から聞いた話だと、最初に被害に遭ったのは悠君の姉たち――詩鶴さん、佳奈、美嘉の三人なのよ。そこから端を発して魔法大学の関係者や、調べていた七草（ウチ）の魔法師が被害に遭った形ね。あ、ちなみにだけれど詩鶴さんたちは無事よ」
　その『吸血鬼』は恐らく彼女らの異質的な力を狙おうとしたのだろう、と克人は真由美の説明を聞いた上でそう察した。だが、初手で難しいところを狙うとは正気の沙汰と思えない。ましてや、彼女らが仮に帰らぬ人となった場合、悠元が動くのは自明の理だ。
「あの三人を狙った『吸血鬼』が哀れに思えてしまうな。別に同情や憐

みなど持つ気もないが……今の話を聞く限りだと、魔法師だけが狙われているように聞こえたが」
「正解よ、十文字君。現状だと単独犯・複数犯の判別はつかないけれど、『吸血鬼』が魔法師を狙っているのは確実」
「ただ、七草家お抱えの魔法師を害するとなれば、一線級の魔法師か強化兵でもない限り無理だろう。上泉家や神楽坂家の可能性はほぼないだろうからな。となれば……」
国を守る『護人』の二家がこの騒動を起こす可能性を考えた場合、過去に悠元と国防軍の一件があったとはいえ、国の防衛体制を長期的に乱す可能性のある要素など招きたくないだろう。克人が至った可能性は外国人ではないか、という推測に真由美は躊躇いがちな口調と仕草を見せた。
「外国人というと、USNAから留学生の魔法師や魔法技術者が来ているけど……十文字君はその線を疑っているの？」
「あくまでも可能性の範疇だ。この学校にも留学生が来ているが、犯人ではないだろう。当面は放置しても問題はないと考える。ただ、ここまでの事態となっている以上は神楽坂や四葉にも協力を仰ぐべきだと思うが」
克人の尤もな提案に対して、真由美は顔を顰めた。
ただでさえ悠元の元実家である三矢家や上泉家とトラブルを起こしただけでなく、横浜事変後に悠元が七草家を訪問したことからして、神楽坂家と四葉家も七草家の態度に憂慮の姿勢を見せている。
そこに加えて四葉家絡みでトラブルを起こした父親に対し、真由美は実の父親に煩悩の数でも足りないような恨み辛みの数々を吐き捨てたくなるほどだった。
「私もそうは思うんだけれど、不文律（ルール）を破ったのはこちらの責である以上、父の方から頭を下げないと関係修復は難しいわ」
「弘一殿にその意思はなし、か。しかし、最近の四葉家からすれば珍しいかもしれんな」
３年前の沖縄防衛戦を転機として四葉家の態度は大きく変わっていた。今までの自主路線（悪く言えば唯我独尊的な独自路線）による

魔法力の強化から、監視体制の縄張りを持たない三矢家と関わり持つようになっていた。そのあたりから現当主である真夜の態度も幾分か柔らかくなっていた（七草家を除く）。
その時点で三矢家は長男以外の四人が優れた魔法師としての実績を挙げており、四葉のみならず他の十師族もその強さの根源を知ろうと探りを入れるほどだった。その起点となっていたのは間違いなく悠元の存在にある、と七草家や九島家、そして四葉家は把握していた。
中部・東海地方の監視体制を正式に担っている十師族の一角と対立路線を敷いたことに、克人は少なからず疑問に思っていた。
「私も詳しくは知らないんだけれど……四葉家の息が掛かった国防軍情報部の某セクションに、うちの親父がこっそり割り込みを掛けたらしいのよ。それがバレちゃったらしくて……」
「……なるほど」
それを聞くと真由美の苦労も幾分か察することができる、と克人は短い受け答えをするに止めた。短くない時間が経過した後、平静な様子を取り戻してから克人に話しかけた。
「それで、共闘の返答についてはいかがでしょうか？」
「父からは七草との交渉事について任されている。ここまで聞けば断る方が不義理というものだろう。弘一殿にも話を受けると伝えておいてくれ」
◇　◇　◇
奇跡的に死者が出ていないとはいえ、被害が出ていることに変わりない。東京スカイツリーの展望フロアの屋上にて、悠元は探知魔法で気配を探っていた。すると、妙な気配を渋谷方面から感知すると同時に通信端末の着信が鳴り響く。
「レオからのメールか……当たりを引いたか」
レオからのメールは位置情報公開の状態で送信された事から〝当たり〟を引いた、ということなのだろう。悠元は特注のサングラスを身に着けると、展望フロアの屋上から地上に向かって飛び降りていった。
余談かもしれないが、こんなことをしたら普通の人間は間違いなく

お陀仏なのでマネしない方が賢明である、と述べておく。
　メールを手早く送ったレオはというと、公園の更に奥深くへと踏み入れていた。正直なところ興味本位の側面は否定できないが、自身に対する本能の警告より善意が勝った形となった。公園を少し探索すると、ベンチでぐったりしている若い女性に近づく。確証はなかったが、レオの肌で感じ取った感覚からしてこの女性が「吸血鬼」ではない、という推測の結論で動いていた。
「おい、大丈夫か……っ!?」
　レオは女性の首筋に手を当てる。脈はかなり弱弱しく、すぐに救急車を呼ぶべきだろうと思い立ったところでレオは迫りくる気配に気付いて戦闘態勢をとった。
　横浜事変前に元継や剛三から新陰流剣武術を叩き込まれたレオの気配察知は〝原作〟よりも格段に向上していた。それこそ学校内での視線に対して人一倍敏感なぐらいに。加えて悠元から想子制御の技術を教わっていたことにより、一科生クラスの魔法発動速度を得ている。
　それらと先日悠元が渡したＣＡＤを組み合わせた結果――――レオが反射的に『装甲（パンツァー）』を纏って繰り出した右の拳は謎の不審者の伸縮警棒を圧し折るどころか、相手の腹部に直撃させ、その不審者は数メートル以上吹き飛ばされた。
　一方、レオの場合は拳に感じた手応えからして明確なダメージを与えられていない、と判断していた。その感覚は剛三や元継との手合わせだけでなく、横浜での戦闘経験も大きかった。
「（あの人らに比べたら多少の手応えはあったが……）多分カーボンアーマーあたりでも仕込んでるのか。厄介だな」
　それ以上に、その不審者の出で立ちはあからさまという一言に尽きる。黒いハットに目の部分だけがくり抜かれた白い仮面。体のラインを完全に隠しているコートと言い、レオの目の前にいる人型の不審者がとても人間とは思えないような感覚に囚われていた。
　すると、レオの脳裏に妙なノイズと共に〝声〟のようなものが響いてきた。

（……彼は……がします……？）
（別の何かが近づ……います。時間は……）
魔法という存在が体系化したとはいえ、その大本がオカルトの要素を含んでいることぐらいレオも理解していたが、少し前までの自分なら感じ取ることもなかっただろうな、と思いつつも気を引き締めた。
不審者――――『吸血鬼』と思しき怪人は構えを取った。まるで中国拳法のような構えから、起動式を発動することもなく超スピードでレオに迫っていた。ここでレオは先日悠元からの忠告を思い出していた。
『レオ、相手は吸血鬼と言っても直接血を吸うような昔ながらの古風な吸血鬼じゃない。相手に掴まれたら拙いと思ってくれ』
怪人の移動速度自体は確かに速いが、レオの身内にそれ以上の速力を発揮しうる同級生を思い出しつつ、レオは自身のＣＡＤに想子を流し込んで防御の体制を取る。怪人が振り下ろした手刀をレオは左腕で防御の体制を見せる。
怪人は繰り出した手刀を変化させてレオに掴み掛かろうとしたところで、レオは防御の体制から体を屈ませて相手の虚を突き、自己加速術式で逆に距離を詰めた。
「おらぁっ!!」
全身に硬化魔法を纏った状態のまま、怪人に接触した瞬間に『相転移炸裂弾（フェイズバースト）』を発動。カウンター技であるその魔法を一番難易度が高い状態から発動させたのはレオの成せる本能のお陰なのか……怪人はその余波で十数メートル以上吹き飛んでいくのが確認できた。
レオが一息吐いたところで、後ろから歩いてくる気配に気付いて振り向くと、そこにはサングラスをかけている悠元の姿があった。
「お、悠元じゃねえか」
「派手に吹き飛ばしたな、レオ……ま、いいか」
吹き飛んでいった怪人はというと、悠元は『天神の眼』で存在を既に捕捉している。先程のレオの一撃でカーボンアーマー越しとはいえかなりのダメージを負ったはずなのだが、強引に立て直してその場を去っていた。

この場合は追撃すべきなのだろうが、『吸血鬼』と遭遇したレオに加えて要救助者がいる以上、その役目は別方面の追跡者に任せることとした。
「って、追わなくていいのか？」
「今は追える状況じゃないからな。別方面の連中も動いているし、衰弱しきったそこの女性を救命するのが先だろう。そこはレオも我慢してもらうけど」
「いや、そこは俺でも手に負えるような奴じゃねえって理解はしてるよ」
レオ自身それなりに強くなったという自負はある。だが、今の一撃を用いても倒せなかった以上は自分の手に余ると判断した。それに、悠元がいるとはいえ自分が追撃するという選択は現実的ではないだろう、との考えに至った。
悠元としても目の前の要救助者を放置するのは拙いし、一度襲われたレオが彼らに目をつけられて再び襲われないという保障がない。原作からのレベルアップを勘案すれば、レオが彼らの目に留まる可能性もないわけではないからだ。
「しっかし、ありゃマジモンの化物みたいだったぜ。今まで聞こえたことのない〝声〟っつーか……どうしたんだ？」
「レオ、それは想子制御が大分染み付いてきたってことだよ」
レオと話しつつ『天神の眼』で追跡の行方を観測していたが、別方面の追跡者は途中で止まってしまっていた。どうやら想子探知のみで追跡していたようで、現状の〝アンジー・シリウス〟は気配や存在の察知能力を有していない可能性が高い。
自分が介入すれば手っ取り早く解決するかもしれない。だが、現状において脱走者の全容が見えない以上、下手に引き籠られるのは悪手になりかねない。「パラサイト」の思考ネットワークに介入するという手法はとれなくないが、乗っ取られる可能性に対する対策を立てないことには使えない手段。
レオが倒れなかったことでこの先の変化は未知数のものとなった以上、原作知識を〝参考資料〟としてしか使えない。そもそも、沖縄

の一件から介入してきた身としては今更な事かもしれない。逆に言えば、この一件でどこまでの修正力が働くかを見る目的もある。
レオに女性を頼むと、悠元はその護衛に入った。結果として懸念された襲撃はなかったが、今回の一件についてはもう少し自分のしたことに関して自覚した方がいい、と改めて気を引き締めたのだった。

片付けにも順序を決める

『見失ってしまいました。移動基地へ帰投します』

通信機から聞こえてきたアンジー・シリウスもといリーナの声を聴いたところで、移動基地で待機しつつリーナのサポートをしていたセリアは徐に通信機を外した。この追跡が失敗に終わったということよりも、リーナの追跡に対して妨害などをしてこなかったことを疑問に感じていた。

これには同じくサポートをしていたシルヴィアが問いかけた。

「どうかしましたか、セリア？」

「いえ……こちらの妨害をしなかったことがどうにも気に掛かりまして」

気にしすぎ、と言われればそうなのかもしれない。正直なところ、作戦を確実なものにするならばこの国の魔法師らの協力を得ることが一番手っ取り早い。だが、スターズひいてはＵＳＮＡというプライドが大きく邪魔をしている。

加えて、今回の留学に関して戦略級魔法の調査という目的を隠している以上、下手に協力してその目的が明るみになったら国家間どころか国際問題に発展しかねない。最悪安全保障の為に結ばれた同盟関係が空中分解する可能性もある。

「そのこともそうですが、相手が巧みに誘導してきた技量を鑑みるならば、以前の実力をそのまま鵜呑みにするのは危険でしょう。フォーマルハウト中尉の件は偶々うまくいったと考えるべきかと」

「……セリアは〝アレ〟を使うおつもりですか？」

シルヴィアが発した〝アレ〟というのは、マクシミリアン・デバイス社と国防総省が共同開発したセリア専用ＣＡＤのことを指す。ＦＬＴで開発された「フォース・シルバー」シリーズには劣るものの、世界三大ＣＡＤメーカーの一角を担うだけあって最先端の技術をふんだんに搭載している。

ただ、そのＣＡＤを使う条件としてアンジー・シリウスでも解決が困難であると認められた場合であり、その解除権限を保有しているの

は本国にいるリーナとセリアの上司だけ。
　現状の手応えを冷静に見るならば、リーナでも手に余るのは否定しようがない事実。楽観視など出来ない、というセリアの真剣な言葉にシルヴィアは頷く他なかった。
「最悪の場合はそうなります。正直なところ〝同調〟を用いても勝てる見込みが数パーセント上がる程度でしょう。あれの用途は元々戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』――『ブリオネイク』のためのものですから」
「……」
　〝アナザー・アンジー・シリウス〟――それがセリアに課せられた役目であり、一部の者からは〝真なるシリウス〟とも呼ばれている人物。そして、彼女にとってプライドというものは唾棄すべきものに等しい。リーナと同じ環境で育ちながらもどこか人並外れた感性をシルヴィアは静かに感じ取っていた。
◇　◇　◇
　レオが吸血鬼に襲撃された翌日。空き教室に呼び出される形となった悠元を待ち受けていたのは、それぞれ七草家と十文字家の代理も兼ねているであろう人物――真由美と克人の二人であった。助けた女性が七草家の関係者だということは昨晩の段階で掴んでいたため、その辺も兼ねての呼び出しということは容易に想像できた。
「七草先輩に十文字先輩。こんな場所で会談ということは、大方昨晩のことでもお聞きしたいのですか？」
「率直に言えばそうなる。神楽坂、昨晩は何をしていたのか尋ねても構わないか？」
「昨晩でしたら、都心部の警戒をしていたらそれらしき反応を掴み、急行したら被害者が一人倒れていました。レオも偶然その場に居合わせたらしいですが、特に負傷はしなかったようで」
　このことに関して隠す必要はないし、『神将会』が既に動いていることは日本魔法協会を通して師族二十八家および百家をはじめとした魔法使いの家に通達済みだ。レオに関しては最悪自分の祖父の誼で協力してもらったという名分で通すつもりのため、このことに嘘をつ

くような道理などなかった。
「悠君は、詩鶴さん達が襲われたから動いているの？」
「七草先輩。血縁関係があるとはいえ、家の括りで言えば既に別の家の人間です。それに、今回の一件は情で動けば相手の思うつぼです」
あの〝アンジー・シリウス〟ですら手古摺る相手に慢心など出来るはずがない。そもそも、世界最強と名高い魔法師部隊であるスターズは現代魔法という括りにおいてその名に恥じない強さを有している。
相手は「パラサイト」である以上、正直なことを言えば現代魔法中心の十師族が手に負える代物ではない、ということを自覚してほしくはある。
十師族にも九島家のように古式魔法の知識を有している存在も理解しているが、絶対ロクなことにならないことは以前訪問した際にハッキリしているため、今回のことに関して九島家はおろか独立魔装大隊を動かすことはしないと決めている。
「正直なところ、うちの姉ら以外でまともに動けていないのが実情ではありませんか？」
「それは……」
「……神楽坂。俺や七草では足手纏いにしかならない……そう言いたいのか？」
「完全にとは言いません。ですが、現代魔法において〝霊子（プシオン）〟に直接攻撃する術式は一般的な論理で言えばほぼ皆無です」
肉体への直接攻撃ならば克人や真由美でも可能。だが、精神への攻撃という領域は現代魔法において精神干渉系魔法しか存在しない。しかも、精神干渉ひいては有機物干渉自体が現代魔法においてタブーのような位置付けになっている。
軍事的な力として魔法という存在があるのに、相手に直接干渉するという方法を禁忌としているのは人道的な観点からすれば理解できなくもない。だが、「パラサイト」を相手にしている以上はそのタブーに拘り続ければ相手の専横を許し続ける結果にしかならない。
悠元だって七草家と十文字家が全くの無力である、と断ずるつもりはない。彼らのネットワーク網が非常に有用なのは間違いないが、古

式魔法の領域に関しては極めて難しいと言わざるを得ないだろう。
「〝霊子〟に直接攻撃って……もしかして、悠君は『パラサイト』の線を疑っているの？」
「ここ最近の襲撃については直接聞きましたが、詩鶴姉さんの『一極徹甲狙撃（ディフェンス・ブレイカー）』を二発も受けたにも拘らず、忽ち回復して逃げおおせたんです。この時点で一般的な人間でも魔法師でもないと判断できるかと」
　これは詩鶴の複合術式を組み上げた人間だからこその言葉であった。
　距離という概念を情報次元で圧縮するという手法自体世界でも類を見ない高等技術だが、この副次効果として相手の想子経路を破壊してしまう。圧縮した情報次元の情報を強制的に流し込む形となるため、通常の自然回復では魔法技能に支障が出かねないが、超能力レベルには効果が薄いことも確認済み。
　現代魔法でも踏み込めていない領域の話に、真由美はおろか克人も暫し黙り込んでしまった。数分ぐらい経ったかのような空気が流れたところで克人が尋ねた。
「古式魔法の領域だとするならば、九島家の力を借りるべきではないのか？」
「……十文字先輩。魔法科高校に来ている留学生はその九島家の縁者です。下手に首を突っ込まれて『九島家はＵＳＮＡと共謀した』などと謂れのない噂を流される可能性があります」
　九島家先代当主である烈とその弟である九島健の確執は表沙汰になっていない。それこそ当事者と神楽坂家当主の千姫、そして上泉家先代当主の剛三に悠元だけだ（悠元は長野佑都を名乗っていた時に剛三から聞き及んだ）。
　ましてや、リーナとセリアは本家を袂を分かったとはいえ健の孫娘――九島家の縁者ということは本人たちも肯定している。この要素は下手すれば大きな爆弾になりかねない。
　仮に九島家が出張ってくれば、魔法師として優秀な彼女らを取り込むことも想定される。だが、それはそれで国際問題に発展しうる可能

性を秘めている。単純に物事を解決するのならば彼女らの力を借りて対立姿勢を軟化させるべきだが、問題はＵＳＮＡの軍人側にもあるし、こちら側の連携にもある。

何が言いたいのかと言えば、今後の「パラサイト」関連について国内で足並みを揃えなければ、この先の事態が大荒れになる。だからこそ、悠元は『吸血鬼』の排除を最終的な目的にしているが、その前に片付けなければならない問題に手を付けることとしたわけだ。

「神楽坂家当主代行、ならびに『神将会』第一席として七草家と十文字家に依頼します。貴方方が有する情報ネットワーク全てを『神将会』に貸していただきたい。無論、七草家が有している国防軍の情報セクションもですが」

「……悠君。いえ、神楽坂家は先日の七草家の振る舞いに対して怒っているの？」

「怒る、という表現は違いますね。正確には〝呆れている〟ですかね」

正直なところ、四葉家に情報収集ツールとして『精霊の鏡（カーヴァンクル）』を渡している関係で、国防軍関連の情報セクションを失ったところで大した痛手になっていない。それなら、国防や世界の軍事関連情報を収集している三矢家に依頼する方が早いし信憑性も高い。

自身の姉らに対抗手段として頼りきりになっている状態で有効な手段を打てないと分かり切っているのに、それでも意固地になって調べようとするのは……四葉への対抗心というか、真夜を諦めきれない弘一の執念なのだろう。

「先輩方には学校や他の十師族――とりわけ九島家への釘差しをお願いしたいのです」

「その言い方だと、まるで九島家を敵視しているようにも聞こえるが？」

「先輩方にも話していませんでしたが、九校戦の時に九島閣下と会い、試しでありながらも殺気を向けられた身です。それで友好的な態度を取る方が極めて難しいと思いませんか？」

かつて世界最巧と謳われた烈と会談しただけでなく、殺気を向けられたという事実に二人は驚愕を隠せなかった。あの場は適当に流し

たが、彼の孫に対して何もしていないことに良い感情など持っていなかった。数年前に九島家の本屋敷を訪れた際も、その時は剛三の面子を潰さないように配慮したまでだ。
　その烈なのだが、どうやら関東地方に出向いている情報を得ている。ここで独立魔装大隊が動けばその一人である響子を頼るのは目に見えている。
「でも、悠君一人で全部対処する気なの？」
「そこまでは言いませんよ。ただ、レオが巻き込まれた以上はその周辺にも協力を頼むことになるかもしれないです。何せ、相手が相手ですからね。単なる人間相手なら先輩方にもお願いするかもしれませんが」
　その単なる人間というだけでも妨害が想定されるのは世界最強を自負する魔法師部隊。リーナだけならば問題ないが、その背後関係まで突き詰めていくと色々厄介事になってしまうのは間違いない。
　悠元の提案に関しては、一度持ち帰って検討するという答えが返ってきたので悠元もそれには同意した。ここで強引に突っぱねる理由などないからだ。真由美と克人の二人が空き教室から出て行って暫くしたのち、空き教室に入ってくる面々。真っ先に声を掛けてきたのはエリカだった。
「悠元、話は終わったの？」
「まあな。ただ、素直に協力してくれるかどうかは不明だが」
　十文字家は事前に上泉家経由で話を詰めているが、七草家に関しては最悪協力を得られない前提で話を進めるつもりでいた。この場に集まったのは一科生組の悠元と燈也、深雪と姫梨、ほのかに佐那。二科生組は達也とレオに幹比古、エリカと美月の１１人。
　奇しくも達也と深雪の素性を知っているからこそ、変な諍いは起きないという判断も含まれている。なお、佐那については実の父親である青波から聞き及んでいるとのこと。
「細かい話は場所を移してからになるが、神楽坂家代表代行として三矢家に四葉家と六塚家、そして千葉家と吉田家に今回の吸血鬼事件の解決協力を依頼する形となった。国防軍への説明もこちらから通し

た形で、達也に関わる制約は一時的に俺が管理することになったんだが……面倒だよ」
「似たような立場のお前がそれを言うのか……」
　達也の言い分も理解できなくはない。この中にいる面々で一番の実力者は間違いなく悠元だという事実は達也以外の面々も同意していた。なお、本人はその事実を一番否定したがっていたが、話が進まないと判断して反応するのを止めた。
「ま、『分子ディバイダー』持ちの魔法師連中が来ないだけまだ安心できなくはないが」
「それって先代〝シリウス〟の術式だったはずですが……成程、僕らの相手はスターズですか」
「正解だな、燈也。協力できれば御の字だが、奴らの目的の一つは〝灼熱と極光のハロウィン〟で放たれた二つの戦略級魔法を無力化すること。その意味だと間違いなく相容れん」
　悠元の言葉で、その片割れを彼が担っているという事実を肯定していることに気付き、驚くものも少なくない。達也に関してはお決まりのポーカーフェイスだが、深雪は少し心配そうな表情を悠元に向けていた。
　正直なところ、正月にあれだけ派手なことを見せた以上、戦略級魔法に関しても推測はできるだろうということで肯定の言葉を述べたのだが、やはりそれでも衝撃的な事実には変わりないようだ。
「規格外だとは思っちゃいたけど……この分だと達也君も似たようなものなの？」
「俺の場合は軍事的な柵が強いからな。詳しくは話せない」
「いや、詳しく聞きたくないし、それだけでも十分よ。あー、ドンドン話せない秘密が増えていく……いっそのこと、誰かの家に居候したいわ」
　エリカのぼやきに苦笑しつつ、ひとまず話を進めていくことにする。ここにいる面子は全員悠元から想子制御の手解きを受けており、レオに関しては昨晩吸血鬼の襲撃を受けた形だ。そのことについて悠元が全員に話した上で、幹比古が悠元に尋ねた。

「悠元。その吸血鬼が『パラサイト』だと疑っているのかい？」
「嫌疑のレベルではなく確信に近い。俺の長姉に渡した術式は副次効果で想子回路を破壊する効果もあってな。それを瞬時に直せるとしたら超能力レベルになることも検証した結果から証拠が得られた」
だが、憑依する前の彼らはあくまでも〝現代魔法〟の範疇において極めて優秀なレベル。それを超越している以上、彼らを軍人魔法師という括りで見るのは極めて危険だと判断した。
なお、『ディフェンス・ブレイカー』の被験者は他でもない悠元であり、自己修復術式のテストも兼ねたものだった。その後で詩鶴から説教されたのは言うまでもないが。

保安基準がバグっている

空き教室に集まった面々は、達也と悠元が非公式ながらも戦略級魔法師という事実に驚きの表情を見せていた。だが、このままでは話が進まないと判断してくれたのか、燈也が問いかけた。

「悠元。パラサイトが相手となれば恐らく現代魔法でも対処は難しいと思いますが」

「現時点ではな。俺の見立てが正しければ、俺と深雪、姫梨に佐那、幹比古と美月……それに燈也も可能ではないかと踏んでいるが、どうだ？」

「行けないことはないかと思いますが、実際に相対しないことには分かりませんよ？」

「それが普通の回答だよ」

燈也が自身の持つ精神干渉系の固有魔法『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』によって現代魔法の系統別発動速度に偏りが生じているのは、九校戦の段階で内密に聞き及んでいる。実際のところ、深雪も固有魔法『コキュートス』の影響で天神魔法の水属性魔法の修得スピードは悠元が修得した時と遜色ないほどだ。

神将会のメンバーである三人や古式魔法の大家である佐那はともかく、幹比古には上泉家の外典から精霊魔法を教え込んでいたり改良した起動式を提供しており、美月に関しては姫梨の教えを受けて天神魔法を学んでいる。

悠元が今言った面子に達也を含めなかったのは、パラサイトに対して有効な攻撃方法を会得していないからだ。

「で、だ。そろそろ想子制御の〝第二段階〟を進めようと思う」

「第二……段階？　この状況でですか？」

「この状況だからこそだよ。本当ならもう少し後の予定だった訳なんだが、全員の制御レベルが思った以上に伸びたからな」

達也や深雪はともかくとして、二科生メンバーの想子制御能力は格段に向上していた。本当ならば2年生に入った段階で進めるつもりだったが、なにかしらの不確定要素が紛れ込んでいる以上は悠長に構

えてなどいられない。
　それに、これから教えることは『パラサイト』に対しての有効手段でもある。尤も、制御関連の情報を徒に広めれば面倒事になりかねないため、箝口令は必須事項になってしまうが。
「今までは自身の体内を循環する想子制御に絞って教えていたが、今度は自分の周囲にある想子を制御する方法に踏み込む。何人かは俺の想子制御を実際に見ているが、有機物や無機物を問わずに干渉できないと吸血鬼は対処できない」
　この状況下で現代魔法のタブーだのなんだのという悠長な事など言っていられない。その考えは一番『護人』らしい考え方をしている、ということなど今の悠元にそこまで考える余裕などなかった。
　周囲の想子制御にまで踏み込む最大の理由はただ一つ。それは想子に霊子と遜色ない〝性質付与〟をする方法を身に着けてもらうためだ。
「精神を捻り出して霊子を制御する方法はなくもないが、そんなものは自爆技に等しいし古式魔法の秘術に触れてしまうからな」
「それは確かに。けど、どうやって身に着けてもらうんだい？」
「そうだな……一番手っ取り早い方法を取るか」
　そう言って悠元が取り出したのは数枚の短冊。そのいずれにも複雑な術式が描かれており、幹比古も一目見ただけでかなり高度な術式が組まれていることを見抜いた。その短冊を空中に放り投げると、悠元は手を上に翳した。
　すると、短冊は四方に飛んで行って空き教室に結界術式が展開される。悠元ぐらいの実力者ならば態々使う必要などないが、今回短冊を用いた理由は術式の維持だけでなく魔法科高校の魔法監視システムを欺くためのものだ。
「感覚を掴むには、霊子そのものの感覚をハッキリと認識する方が手っ取り早い。なので、しっかり気を持ってくれよ……『天照絢爛』発動」
　悠元の天神魔法――――『天照・五行相剋：天照絢爛』による力の波動が空き教室全体に及び、数秒後には何事もなかったかのような状態

に戻った。悠元以外の面々はというと、一部を除いて放心状態になっていた。
だが、その一部――――達也と深雪、それと姫梨は意識を保っており、今までハッキリ感じ取れなかった感覚に多少の戸惑いを見せていた。
「今の魔法は、九校戦のピラーズ・ブレイクで使用した魔法だな」
「正解。流石に細かいことは達也でも教えられない代物だが。今回は霊子の感覚を掴んでもらうために使用しただけだから、威力設定はゼロになってる」
霊子の感覚を掴むには、かなり膨大な霊子そのものを感じ取る必要がある。この経験は天神魔法を独学で学んでいた時に天神喚起の訓練で感じたことだ。その時は間違って『鳳凰』を喚起してしまい、膨大な情報量を『万華鏡(カレイドスコープ)』で凌ぎ切るという裏技でやり過ごしている。常人であったら間違いなく死に至ってもおかしくないだけに、自分が転生特典を持っている存在ということに一番感謝を覚えていたのは間違いない。
『天照』を使用した理由は、この教室内で属性魔法単体発動は拙いという判断からくるものだ。『月読』の場合は攻撃的な側面が強かったため、使用しないことに決めた。加えて、ここにいる面子全員が自分のように全属性の適性を有しているわけではないと思い、全属性魔法行使を行ってなおかつダメージをゼロに抑えられる『天照』を選択した次第だ。
「本来の方法なら精霊標などといった場所での修業が望ましいんだが、そこまでの余裕がないからな」
「だから『天照』を使用したのですか……つくづく規格外ですよ」
「いや、姫梨がそれを言ったらブーメランだからな?」
数分後、ようやく意識を取り戻したほかの面々。幹比古も流石に〝竜神〟以上の情報量に半ば放心状態だったらしく、少し情けないといった感じの表情を見せていた。だが、これでここにいる面子全員が霊子に対する感受性を著しく引き上げられる形となる。
「どうだ? 最初の方は霊子酔いを起こすこともあるから、無理に立たなくてもいいぞ」

「あ、はい。私は大丈夫ですけれど……エリカちゃんが……」
「み、ミキや悠元らってこんな感覚で生活していたわけ？」
「僕の名前は幹比古だ」
悠元の『天照絢爛』で一番ダメージを受けていたのはエリカであった。なお、レオは昨日の吸血鬼での経験が生きたらしく、佐那は古式魔法の大家というだけあって酔うことなどなかった。ほのかも元々光に対する感受性からか霊子酔いは見られなかった。
そして美月はと言えば、想子制御の訓練によって大分感受性の制御もできるようになり、こちらも霊子酔いは起こさなかった。燈也についても固有魔法が精神干渉系魔法のため、特に大きな影響は残っていないように見えた。
エリカの言葉に対し、いつもなら強めの口調で述べるのだが、先程の魔法の影響で些かテンションが低めに返していた幹比古であった。
「で、もう一点。先日五十里家に頼み込んでいたエリカ専用のＣＡＤが完成したから、今回の事件で遠慮なく使ってくれ」
「あたし専用？　って、これがそうなの？」
「〝疾風丸（ハヤテマル）〟――――〝大蛇丸（オロチマル）〟のダウンサイジング版だが、威力に関しては爺さんのお墨付きだ」
ＦＬＴの上条洸人――――厳密には悠元が設計を行い、それを基に五十里家の刻印型魔法陣をベースとした術式を内部に組み込んだもの。待機状態のＣＡＤは太刀の柄程度の大きさしかない。ようやく霊子酔いが収まったエリカがＣＡＤに想子を込めると、収納されていたパーツが展開して黒色の直方体状の打撃部分が展開する。
「ちなみにだが、知り合い曰く試作品の範疇だから」
「……これで試作品とか言われたら、世界の名立たるＣＡＤメーカーが泡を噴くんじゃないか、って思うわよ」
流石にそれはないだろう、と悠元は思う。原作でも完全思考操作型ＣＡＤを最初に使える範疇まで持っていったのはドイツのＣＡＤメーカーであるローゼン・マギクラフトだ。そのメーカーは今年の頭に完全思考操作型ＣＡＤを発表し、一時は話題となっていた。だが、大型ＣＡＤの範疇の為に一般的な代物ではなく、どちらかと言えば大

型機械を用いることの多い業種向けとなっていた。
　なお、完全思考操作型ＣＡＤは既に悠元が実用化している形だが、現状の使用者は悠元とレオ、そして先程渡されたデバイスを手にしているエリカの三人だけ。そのエリカだが、ＣＡＤを待機状態に戻した上で悠元に問いかけた。
「ねえ、悠元。これって見たところスイッチやトリガーがないから、想子を試しに流し込んだら起動したんだけれど……」
「ああ、完全思考操作型ＣＡＤの試作品だよ。ＦＬＴでもごく一部しか知らないことだから、黙っておいてくれ」
「……あたしって、悠元と関わったことが運の尽きだったのかしら」
　人を勝手に疫病神扱いするなと言いたくはあったが、今はその話題に触れるのも面倒だと感じてそれ以上の追及は止めた。ここで達也と深雪を見やると、達也は興味深そうにエリカのＣＡＤを見つめており、深雪に至っては目を輝かせていた。ある意味通常運転の司波兄妹（きょうだい）である。
「さて、細かいことは放課後にでもしておくよ。場所はそうだな……三矢家の本屋敷にしておこう」
「僕の家ぐらいなら問題はないと思うけれど、何かあるのかい？」
「要らぬ警戒をしたくないからな。そっちなら予め幾重にも結界術式が張られているし、問題はないと思うから」
　達也たちには伝えていないが、魔法科高校の魔法防御網に対して余計な干渉をしている連中がいることは既に把握していた。その元を辿ればスターズの下部組織である「スターダスト」であることも既に掴んでいる。三矢家の本屋敷を選んだ理由は単純明快で、神楽坂家の別邸はあくまでも必要最低限の生活を送れる程度の設備しかないためだ。この辺の設備投資は追々やっていくつもりだが、ＵＳＮＡの連中を追い返してからの話となる。
　幹比古の実家でも問題はないと思うが結界術式の準備が少々大変だし、九重寺では神楽坂家の詳細を知られる可能性がある。千葉家を選ばなかった理由は変に貸しを作りたくないという意味合いもある。実家である三矢家なら結界術式のことについても了解してくれると

思われるし、地下にある大規模の訓練場なら周りを気にせずに事を進められる。
　それでも、古式魔法の絡みから八雲に頼む必要はあるので、その辺は達也の体術訓練と並行して出来るようにお願いすることとした。
「一番面倒なのはＵＳＮＡの奴ら、軍事衛星を使ってまで俺を追跡調査してるからな。後々プライバシーの侵害で賠償してもらうつもりだが」
「あの、冗談ではないんですよね？」
「流石に冗談じゃ済まないわね……大丈夫なの？」
　戦略級魔法の問題とはいえ、新ソ連や大亜連合だけでなく旧ＥＵ諸国まで動いている状況を楽観視など出来るはずがない。その矛先を向けてほしくないというのならそれ相応の態度で接するのが常識だと思うのだが、ここに関しては俺がおかしいのだろうか？
　いくら俺でも『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を無秩序・無差別に放つことなどしない。無作為に敵など作りたくないし、新ソ連の一件に関しては完全の向こう側から喧嘩を売られた形。〝イグナイター〟が出張ってこなければ、ウラジオストクの軍港を破壊するという結果になっていなかったのだ。
　そもそも『スターライトブレイカー』自体、本来完成させる予定の戦略級魔法――――その基本形だということを知っているのは自分自身だけだ。
「そこは大丈夫だろう、エリカ。俺ですら本気で探さないと悠元を見つけるのは難しいからな」
「それは褒めてるように聞こえないんだが？　って、深雪も笑わないでくれ」
「ふふっ……すみません、悠元さん。でも、それだけ悠元さんがお強いってことですから」
　なお、エリカに渡した疾風丸は例に漏れず厳重なセキュリティーを有している。
　下手に分解や分析をしようとした場合、使用者や調整者を除く周囲１００メートルの範囲に対して地面方向に大型トラック１００台分

――約１１００トン分の重力が掛けられる。普通の人間なら間違いなく地面にめり込みながら肉塊へと化すレベルだ。そのことをエリカに伝えると、絶対に手放さないと述べていた。その時の表情が若干蒼褪めていたのは言うまでもないが。

少々単位がおかしいかもしれないが、この設定は剛三並みの耐久度を持つ魔法師を想定している。その時点でおかしいと言われても、それは上泉剛三という存在がバグっているということにしてほしい。割と切実に。

愚痴の一つや二つ

旧神奈川県厚木市にある三矢家の本屋敷。悠元と深雪からすれば約４ヶ月ぶりの訪問であり、それ以外の面子で訪れたことがあるのはエリカと幹比古ぐらいであった。流石に北山家の屋敷と比較すると規模は小さいが、それでも一流階級を彷彿とさせる屋敷には驚きを見せるものが少なからずいた。

「こりゃすげえな。悠元はここで暮らしてたのか」

「とはいっても、屋敷を使ってたのは小学校の前半ぐらいまでだ。それ以降は上泉家にお世話になることが多かったからな」

小学校の前半はそれこそ自分自身が転生する前の話なので、殆ど学校に通っていなかったことぐらいの記憶しかない。きっと歯痒さのようなものを感じていたに違いないと思う……流石にその心境まで汲み取ることまでは出来ないのだが。

とはいえ、既に別の家の人間となっている以上は礼儀を弁えつつ門を通ると、正面玄関前には三矢家の使用人である矢車仕郎が悠元たちを出迎えた。

「お久しぶりです、悠元様。この場合は神楽坂殿とお呼びすればよろしいでしょうか？」

「今回の訪問は公的なものではないのですが、お久しぶりです仕郎さん。父はいらっしゃいますか？」

「ええ、書斎にてお待ちしております。他の皆様もようこそいらっしゃいました。どうぞ、案内いたします」

本来は父親呼びすること自体おかしいことだとは思うが、達也と彼の父親の関係のように冷え切っているわけではなく、むしろ良好といってもいい。自分のしでかしたことで父に苦労を掛けていることに関しては「申し訳ない」という気持ちが強いのも事実だが。

書斎に通されることとなるが、流石に書斎の中に１１人は多すぎるため、悠元が代表として元と対面していた。

「今回はこちらの我儘を聞いていただき、感謝しています……って、何かしっくりこないのは自分だけなのでしょうか」

「ふふっ、その気持ちは分らんでもないな。さて、うちの地下訓練場を使いたいという件だが既に義父殿から聞き及んでいる。スターズのことも考えれば協力するのが筋だろう」
　ついこの前まで本当の親子関係だったのが血縁関係だけのものとなった。しかも、公的な場では神楽坂家当主代行である悠元の立場が上となっている。とはいえ、今までそうしてきた慣習がすぐに修正できるはずもないので、悠元の言葉に元も思わず笑みを零した。
「それは助かるよ。ところで、師族会議――――他の十師族からは何か注文を受けたの？」
「詩鶴や佳奈が協力員として出張っているので、今のところは何も言われていない。ただ、強さの根底を探ろうと七草家お抱えの魔法師を監視に付けているようだが」
「……ねえ、父さん。七草家って恋愛事が絡むとポンコツになるって遺伝でも持ってるの？」
　ただでさえ多方面で迷惑をかけているのなら、警戒を緩める方面に舵を切ればいいものを逆のベクトルに切ってしまっている。自分の想子制御を見ただけで盗んで修得できるなら是非やってほしいと思わなくもない。
　お前がそうぼやきたくなる気持ちもわかる、と元は苦笑を見せることで悠元からの質問の返事としていた。
「ところで悠元、ＵＳＮＡの件で何か監視でも付けられたのか？」
「おそらく『スターダスト』の連中が数人ほどかな。ついでにＵＳＮＡが所有している軍事衛星数基で俺の動きを監視していた。戦略級魔法無力化のためならあらゆる手段も辞さないという気概だけは褒めてやりたいけど」
　達也に関しては今のところ軍事衛星による監視まで付けられていない。そこについては『八咫鏡』で確認しているので間違いないだろう。
　力を危惧する意味合いは分からなくもないが、この小国において戦略級魔法の有無は国家としての存続に直結しかねない。力をつけると出る杭のごとく干渉するのはそれこそ〝内政干渉〟の領域に踏み

込んでいることを理解しているのならば話は別だ。
　幸い、ＵＳＮＡの大統領に送り付けた手紙が無事に届いたようで（『ミラーゲート』でホワイトハウスの大統領執務室のデスクに放ったので届かない道理はないが）、剛三に対して謝罪の言葉を述べたという連絡は既にもらっている。
「戦略級魔法という存在は今の世の中において〝核兵器〟に匹敵するからな。何人か余計な監視がいたので、こちらで対処しておいた」
「ありがとう父さん。正直なところ、『パラサイト』のことだけに対処したくてもスターズが鬱陶しいからどうしようか思ってた」
「ふむ……強制的に排除はしないのか？」
　元の問いかけは尤もである、と思う。それが単なる外国人の案件なら手打ちにするのも簡単なのだが、相手が軍人――――それも魔法師部隊であるスターズの一線級の実力者を含めた複数人の脱走者に加え、それを密かに手引きした人物の存在もある。
　ＵＳＮＡにいて尚且つこの国の力が削がれることを期待する人物は多いが、その中で魔法師だけを狙い撃ちにする『パラサイト』の性質を理解している人間となれば……対象はかなり絞られる。
　恐らくだが、手引きしたのは周公瑾……そして、〝七賢人〟の一角である顧傑。ここが最有力ではないかと踏んでいる。極めて技量の高い華僑（チャイニーズ）のネクロマンシーとなれば、間違いなく後者の可能性が高い。
「向こうの政治家――ＵＳＮＡの大統領に対して、『パラサイト』のことと新ソ連や大亜連合の関連情報を流したら『軍部を抑える』と爺さん経由で連絡があった。変にプライドの高い魔法先進国のお手並み拝見と行きたいけど……待っている悠長な暇はないと思ってる」
　時系列を変に狂わせたくないわけではなく、レオを助けた（それとパワーアップの手伝いをした）ことで本来の時系列自体意味をなさないことなど理解している。これ以上余計な増援など呼ばれたくないため、修司と由夢に雫を留学に出すことを決めた。
　秘密裏に処理すること自体簡単だが、敢えてスターズの連中にやらせることで『超能力』持ちの連中に現実を見せることが現時点での目

的だ。とりわけ現代魔法が主体の現役軍人魔法師が多数を占めている以上、その意味が理解できないはずなどない。
「……推測でも構わないから父さんに聞きたいんだが、この国の魔法監視システムでＵＳＮＡの連中の魔法発動の痕跡を辿ることは可能かな？」
「そうだな……恐らく出来ないことはないと思うが、どうしてそのことを？」
　加えての話だが、ここまでスターズが大っぴらに動いているのに〝原作〟では情報セクションの部分で引っ掛かっていなかったことに疑問を抱いていた。響子曰く古式魔法でも監視システムに引っ掛かると明記している以上、リーナの『仮装行列（パレード）』がこの国の魔法監視システムに引っ掛からない道理がない。仮にリーナ自身の位置が特定できなくとも、『パレード』による事象改変作用はセンサーに引っ掛かる筈なのだ。
　なお、自身の魔法については『万華鏡（カレイドスコープ）』という反則技によって使った痕跡すら消してしまうため……というか、想子制御訓練の産物として外部に想子が漏れないために発動兆候が直前まで察知されないため、結果として事象改変の痕跡ぐらいしか残らないと響子から言われたときは疑うことしかできなかったが。
「藤林さんから聞いた情報を自分なりに噛み砕いた結果だけど……国防軍か日本政府、もしくは七草家がＵＳＮＡの連中の動きを握り潰してる可能性がある。昨日のことは聞いてる？」
「いや、義父殿から聞かなければ知らなかったこととなれば、十文字家はともかく他の家も知らぬことだろう」
　あれほど内ゲバするなと釘を刺しておきながら、やっていることは内ゲバである。そこまで頭の回転が遅いはずなどないのだが、長年の恋が拗れに拗れたと考えれば辻褄が合うのかもしれないが……未練をスッパリ断ち切ることが出来た側としては呆れる他なかった。
　その拗れの結果としてこちらにまでとばっちりが飛んでくるのは勘弁願いたい。ましてや、こちらはその拗れた恋心の被害者側なのだから。彼とて四葉の情報を必死にかき集めているのだから、四葉家

先々代当主と親友関係だった剛三のことを熟知しているはずだ。なにせ、真夜と弘一の仲人をしたのは他でもない剛三なのだから。
「昨晩はそれらしき気配を感じたから任せてみたが……あの程度の存在をハッキリと認知できないと世界最強の名が泣くと思う」
「そう言い切ってしまうお前が本当の世界最強の魔法師かもしれんな」
「そんな称号に興味もメリットもないんだけれど」
捻くれているかもしれないが、そういう強さを誇張するものは時として余計な枷になってしまう。そもそも、他国の戦略級魔法を覚えるに至ったのは重力制御型熱核融合炉に至る道筋の為に〝参考程度〟で起動式を見ただけであり、新陰流剣武術や天神魔法だって自身が生き残るための術として身に着けたものだ。
現時点で頭一つ以上抜けていることは認めざるを得ないとしても、今代のシリウスとの初対面はある意味不意打ちで勝てたようなものだし、〝イグナイター〟ことベゾブラゾフだって剛三の戦略級魔法のお陰。その意味で運に助けられた部分があるのは否定できない事実である。
それも世界最強の要素だと言われてしまうのは何故だか腑に落ちない、というところまでが自身の思うところだ。
「興味もメリットもない、か……ははっ、成程な。その意味だと倒れる前までのお前と大差ないだろう」
「……そうなの？」
「ああ」
生まれ変わる前の三矢悠元は、烈の孫である光宣のように優れた魔法師として生きようとしていたわけではなく、魔法という力が使えなくとも真っ当な人生を送りたいという渇望を人一倍有していた。それが結果的に三矢の名を捨てることになっても構わないと元に漏らしていたらしい。
結局のところ、結果だけ見れば彼の願いを半分叶えてしまったと言えるかもしれない。真っ当な人生という概念から激しくかけ離れてしまったが。

「すまない、悠元。お前には黙っていたことだが、お前がそういう存在だということは詩奈と侍郎以外――――三矢と矢車の関係者は知っていたのだ」
「……まあ、九校戦の時に爺さんから問い詰められた時点で察しはついてたけど。咎めはしないのか？」
「今更咎められるわけなかろう。十山家のこともそうだが、お前が三矢家を十師族のトップクラスに引き上げたのだ。気苦労こそ増えてしまったが、元継と悠元が別の家に行くことで元治への継承路線も固まったからな」
　元が言うには、三矢家としての路線で考えるなら必要以上の力を持つことは逆に警戒されかねないとのことらしい。情報を手にするには相応の力がいることも理解しているが、そのつり合いは非常に難しいとのこと。
「それに、最初は警戒こそすれお前の行動を自由にしたのは私だからな。今更咎めるとするなら、まず私が当主の座を退かなければならない」
「今だから話しますけど、『ナインローダー』で九種の魔法を全待機状態のまま殺気を向けられたときは全力で逃げることも辞さないつもりでしたよ」
「ははっ……まあ、その時はお前という存在を掴み損ねていたからな。それぐらいの警戒は許してくれ」
　元の言い分はご尤もである。別に今更掘り返す話題ではないのだが、懐かしむように漏れ出た悠元の言葉に元は苦笑を含ませつつ返していた。
　その頃の自分は魔法という存在に四苦八苦していた（正確に言えば、転生特典のせいでほぼ無尽蔵に生み出された魔法）のせいで家のことなんてあまり深刻に考えていなかった。今世の血の繋がった父親に「好きにやれ」と言われたからそうしただけの話だ。
「十山家をどうにか出来たのは向こうの自爆に近いけど。それで、師族会議はどう動くつもりなのか聞きたいんだけれど」
「この前――――とはいっても４日前の話になるが、臨時の会議で今回

の事件については七草が音頭を取る形だ。三矢も情報と戦力の提供をするに至った。弘一殿からはお前をどうにか引き込めないかと打診されたが」
「……はあ」
師族会議では、今回の事件規模が都心に一極集中していることから七草家と十文字家が今回の担当となった。今回の事件に関わった面子を考えるのならば、三矢だけでなく国防軍にコネを持つ四葉にも関わらせるべきだが、そこは七草家が固辞した形だ。
気怠そうな返事をしてしまったのは単純であり、これまでに受けた被害に対して謝罪だけで済ませられると勘違いされていることに対して呆れのような感情を抱いたからだ。血縁関係はまだしも戸籍という法的根拠からして自分は既に三矢の人間ではない。それは当然理解しているはずなのに、厚かましいとは思わないのかと問いたくなってくる。
「別の追跡している連中に〝シリウス〟がいる意味を理解してるのかな……そういえば、九島家の先代当主も東京に来てるって聞いたけど、何か知ってる？」
「今回の一件は古式魔法方面からのアプローチも必要とのことでな。弘一殿が独自に打診していたようだ」
横浜事変後に渡した資料を鑑みて師族の中で古式魔法方面に詳しい九島家が抜擢された形だ。現当主に比べればフットワークが軽く、国防軍方面に顔が広いということも影響しているのだろう。元々暴走しないために渡したはずのものが要らぬ人物まで呼び寄せたことに溜息の一つでも吐きたくなった。
「私からも聞きたいんだが、神楽坂家はどう動く？」
「神楽坂というよりは神将会というべきかな。ただ、神将会が本格的に相手をするのはパラサイトじゃなくスターズになるけど」
「どういうことだ？」
簡単な話だが、事態を余計拗れさせるぐらいなら大人しく帰ってもらった方が良いという判断からくるものだった。原作だと事態が拗れに拗れて最終的に深雪の『コキュートス』でなんとかなった。達也

が『エレメンタル・サイト』を持っていたことも大きく影響している。向こうの想子追跡システムは確かに優秀だが、そのシステムでも悠元の存在を追跡できていない。
「『パラサイト』の全員の所在は既に把握している。昨日は今の〝シリウス〟の技量を測る目的もあったし、レオが連中に目を付けられて狙われないという保証がなかったから追わなかったけど」
「ならば、今回神将会が動く目的は『パラサイト』ではないと？」
「その目的もあるけれど、達也らには対スターズ――対魔法師戦闘を本格的に学んでもらうつもりだ。数名はテロリストとの戦闘経験があるけど、テロリストと現役軍人魔法師じゃ性質が違うからな」
パラサイトだけを区別して認識する魔法……ようは転生によって得たチート技能の産物のため、必要以上の言葉は言えなかった。元は悠元の強さの秘密を知る数少ない一人で、悠元の言葉に疑うどころか感嘆に近い表情を見せた。
別に殺しを強要するつもりはないが、万が一の時に〝正当防衛〟ぐらいできなければ拙い。剛三と元継がエリカとレオに戦闘技術を叩き込んだのはその側面が極めて強い。それに、向こうは達也と悠元の友人についても身辺調査位はしていると思われる。流石に人質という卑劣な手段を初手で取るとは考えにくいが……保険はあってしかるべきであると推察した。
「達也と俺を無力化したいがために態々今代の二人の〝シリウス〟まで寄越した連中だからこそ油断できない。政治家や財界の連中のほうがまだリアリストだと思うわ」
「つまり、手を引いた人物が他にいると？」
「でなけりゃ、スターズの追跡を振り切ってこの国に密入国なんてできないよ」
ちなみにだが、剛三との連絡の中で彼は顧傑の関与を強く疑っていた。何でもかんでも某特撮ヒーローのどこかの悪の組織のせいにするというわけではないが、世界屈指の魔法先進国であるＵＳＮＡの追跡を逃れた時点で関与を疑わない道理がない。

一足飛びで解決は難しい

元との話を終えて悠元が向かった先は本屋敷の地下にある大規模の訓練場。床から天井までの高さは１０メートル以上もある関係で移動用のエレベーターが備え付けられている。尤も、体力を鍛える意味で階段を使うことが多いために数える程度の使用回数しかないわけだが。

訓練場の扉を開くと達也らは動きやすい服装に着替えており、各々準備体操をこなしていた。

「お、もう始めてたのか」

「長くなると思ってある程度のコツだけは教えたのですが、駄目でしたか？」

「別に構わないよ。姫梨との付き合いは短いけど、信頼してるから」

別に褒め殺しを狙っての発言ではなく率直な感想を述べたのだが、これに対してエリカがニヤついていたので懐からチョークほどの大きさの金属棒を取り出してノーモーションから放ると、エリカはその殺気に反応して反射的ながら顔を逸らした。金属棒はというと、定率減速の魔法を掛けて途中で失速させ、そのまま音を立てて床に落ちた。

「って、危ないじゃないの!!」

「殺気を先行して走らせてみたが、流石だな。本気でやるんなら殺気を全て隠した上でやってたよ」

「はあ……冗談と思えないのが悠元らしいよね」

友人（あくゆう）を一体何だと思っているのかはさておき、準備は出来ているのでそのまま話を始めることとした。

「さて、おふざけは程々にしておくが……一応お前らの親には了解を取り付けている。暫く三矢家の本屋敷で泊りがけの合宿だ。足りないものは経費で落とすから遠慮なく言ってくれ。ＣＡＤ関連については高精度の調整機を使ってるから問題はないだろう」

「あー、だから最低限必要なものは持ってくるように言ったわけね」

三矢の本屋敷に来る前、各々一度家に戻った上である程度の荷物は

持ってくるように言い含めた。これにも他の目的はあったりするのだが、今は言うべき時ではないと判断して話を進める。
「昨晩なんだが、レオが吸血鬼と遭遇してな。特に怪我はなかったんだが……連中が魔法師を狙っている以上、付け狙われる可能性もなくはない。その連中が単なる魔法師だったらまだ楽と言えば楽なんだが……」
「アメリカ――スターズとしては、その『吸血鬼』を〝アンジー・シリウス〟が追跡して処分する腹積もりという訳か」
「正解だよ、達也。だが、逆効果だということを認識していない」
寧ろ自分の首を自分自身で締め上げているようなもの。『吸血鬼』の詳細データや潜伏先は既に把握しており、スターズの動きも既に把握している。普通のなろう系なら一挙に殲滅してしまえばいい訳だが、そう出来ないのは法という壁があるからである。同胞ならばともかく外国人の、それも同盟国の魔法師という面倒さが付きまとっている。
「逆効果って、増殖でもしちまうのか？」
「『パラサイト』は実体を持たない。つまり通常の目視で捉えるのは不可能。想子の感受性と霊子の感受性は比例するとなっているわけだが……ここが鈍い原因はＣＡＤありきの現代魔法が原因なんだ」
例えばの話、ファンタジーだと強力な武器や防具などの強力なものはそれを扱う当人の実力が伴って初めて使い物になりうる。ＣＡＤの場合はそういった制限がされておらず、精々制限があるとするなら起動式を含めた魔法演算処理の複雑さぐらいでしかない。この辺は様々なＣＡＤを弄った経験からくるものだ。
だが、ＣＡＤありきでは複雑な上位魔法を使用することなど出来ない。魔法の結果を複雑なものにするには発動プロセスそのものを複雑化させるだけでなく、その魔法を組み立てるために必要な演算能力を獲得する必要がある。
十文字家が魔法演算領域のオーバークロックという技術を獲得するに至ったのは、基本演算能力の底上げが難しいという結論に至ったからであろう。

「とことん現代魔法の欠点を突くような話をするけれど……悠元、僕らの霊子の感受性を引き上げたのは単純に『パラサイト』対策だけじゃないんだね？」
「ああ。学校で使った『天照』で大体の特性は掴めたんだが、一人だけどうしたものか悩んでる」
「一人だけ？　もしかしてなんですが……」
　燈也の言葉を皮切りにその該当者候補――――達也に視線が集まる。これには流石の達也本人も買いかぶり過ぎだろう、と言わんばかりの態度が見え隠れしていたが、このことについて嘘をつく道理がないと判断して悠元は話し始める。
「燈也は鋭いな。達也は夏休みの段階で第二段階にまで踏み込んでいたから、その更に先まで踏み込んでもらうつもりだよ」
　悠元が手を翳すと、先程投げて床に落ちていた金属製の棒が音を立てることなく一瞬で手元に戻ってきていた。しかも、それを掴んでいる悠元の手は一切の傷が付いていない。これは悠元のみが使える『ミラーゲート』は一切使っておらず、情報次元の情報改変のみで成立させた事象である。
　これには一同が驚きを隠せないが、そんなことを気にする暇もなく人差し指だけで棒を回していた。
「横浜での一件の前に魔法科高校のセキュリティーを破ろうとした輩もいたし、春のテロリスト襲撃もあったからな。その意味で防御が万全とは言い難いわけよ」
「確かにその通りなんですが……その、大丈夫なんですか？」
「このぐらいできないと爺さんから木刀の雨が降ってきていたからな」
　それこそ手裏剣一つで木刀の雨を凌げ、という無理難題をこなしたことがある。少なくとも新陰流剣武術の前身である新陰流はこういったことを想定などしていなかったと思う……多分。
　かつて経験した人外育成コースのことはさておき、達也以外の二科生メンバーに加えてほのかと燈也が第二段階の訓練を始めることとなった。そちらの監督については姫梨と佐那が担当してくれるとい

うことで任せることとした。
　それに、これから話す内容に関して達也と深雪以外の面々に明かすのは拙いと考えたからだ。
「――――『仮装行列（パレード）』？　確か九島家の秘術だと聞き及んでいるが」
「俺は過去に二度その秘術と対峙したことがある。一度目は『老師』こと九島烈、二度目は〝アンジー・シリウス〟と対面した時だ」
　前者は剛三と一緒に対面した際、後者は剛三に巻き込まれた時の話。後者の気配は単純な目視だと照準を外されることを予め知っていたので、躊躇うことなく広範囲攻撃の天神魔法を使用することで『パレード』を攻略した形だ。
「悠元さん。その『パレード』は幻術魔法の一種なのでしょうか？」
「現代魔法の括りだと対抗魔法の一種だな。本人に関するあらゆる情報のエイドスを複写・加工し、仮面・仮装のエイドスを魔法式に投射して本人の姿を変えるだけでなく、魔法の照準に対する干渉を行うことで本人への魔法照準を防止する魔法なんだが、『パレード』にはこの国の古式魔法の技術も内包している」
　原作知識で知っていたわけだが、実際に体感してその恐ろしさを実感する羽目となった。尤も、その『パレード』にも現代魔法ならではの欠点が生じる。それは魔法照準を外すためのエイドスに限界距離が生じるという点にある。
　加えて、魔法式が露出するという点はこの魔法にも適応されており、その気になれば『術式解散（グラム・ディスパージョン）』で対処可能という点が大きい。
「悠元、師匠がこのことに関与してくる可能性は？」
「ほぼ確実。何せ九重先生の先代が教えた魔法を改造して出来たのが『パレード』だからな。尤も、九重先生以上に母上が出張ってくることになりそうだが」
　「九頭龍」の絡みも無論あったりするが、大本となった忍術の『纏衣（まとい）の逃げ水』という幻術は天神魔法の『水遁流転（すいとんるてん）』から改造されたものらしい。
　その『水遁流転』という魔法なのだが、術者のエイドスを空気中に漂うエイドスに複写して存在を広範囲に点在させる魔法。簡単に言

えば、想子の感受性を著しく強制的に引き上げることで相手の情報処理をパンクさせるための精神干渉系魔法。
『パレード』と異なる点は魔法式の所在で、何と術者の足元にある。しかも魔法式のエイドスまで複写してしまうために、本当の魔法式が破壊されない限りは効果が持続する。天神魔法の技術の一部が使われた経緯についてだが、その当時の神楽坂家当主と本山の僧侶がお互いの技術を学びあうための交換条件として持ち出されたものらしい。
「本来なら九島家の秘術故に口外は出来ないんだが……明日、軍人に憑りついている吸血鬼の連中を一人〝隔離する〟。メンバーは俺と深雪に姫梨、達也はバックアップに回ってほしい」
「悠元は〝アンジー・シリウス〟が出張ってくると睨んでるわけだな。協力はしないのか？」
「そうしたいのは山々なんだが、現状だと難しいからな」
難しいと述べたが、正確にはミカエラ・ホンゴウと名乗っている女性にも『パラサイト』が憑りついていることが確認された。どうやって特定したのかと言えば、『パラサイト』の持つ特殊な性質を逆手に取った方法。
精神干渉系魔法『流星雪景色（ミーティア・スノーライト）』――この魔法は事件でパニックになってしまった人々の精神状態をリセットするだけでなく、超広範囲のサイオン・アクティブソナーを展開するための知覚魔法の役目も兼ね備えている。『万華鏡（カレイドスコープ）』と連携することで微弱な想子波や霊子波も感知が可能で、悠元は元々国防軍を含めた対策の一環で発動させた魔法だった。
その魔法で『パラサイト』が掴めないか探ってみたところ、見事に本来の人間では発しないはずの波長をキャッチすることに成功したわけだ。想定などしていなかった副産物には流石に苦笑せざるを得なかったが。
「隔離するということはアメリカに送り返すのですか？」
「そんな面倒なことはしない。だが、彼らには利用できる価値があるから、それを最大限に生かすだけだよ」
脱走者から『パラサイト』を切り離す算段はつけた。この術式を編

み出すために転生特典と天神魔法の知識をほぼフルに使ったのは言うまでもない……約１０００年以上も経った後に新たな魔法が出来るなど、創始者は考えもしなかったであろうが。
　そもそもの話、創始者は天神魔法自体を〝完成したもの〟と断定などしていないわけだが。その意味を正直に受け取るならば、『天照』と『月読』はまだ研鑽の余地があることを意味しているに他ならない。
「そうなると、レオや幹比古達の訓練はカモフラージュというわけか？」
「それも目的の一つだよ。いつでも俺らが近くにいて対処できる訳じゃないからな」
　別に「パラサイト」だけを念頭に入れているわけではない。
　特にレオとエリカは奇しくも旧ＥＵ――――ローゼン・マギクラフト絡みで因縁がある（無論二人はその事実など知らないが）。国外だけでなく国内も安全とは言い難く、勢力を広げるための手段として師族二十八家が狙ってこないとも限らない。千姫もその辺を理解してくれたからこそ、立場的に一番弱くなってしまう美月を伊勢家の養子に迎えることとした。
　ちなみにだが、隔離先は九重寺にすることを決めている。元々の家柄に加えて〝九〟の家と関わりを持っているので古式魔法にも造詣が深く、八雲もそのあたりの事情を理解しやすい点にある。
「とりあえず鍛錬を始めるか。達也、お前の眼だと精神の領域は視れないのか？」
「流石にな。その口調からするにお前は視れる様だが」
「あんまり気分のいいものじゃないけれどな。視れないものに怯えることと天秤に掛けられたらどう答えていいものか悩むが」
　生まれ変わる前の世界に比べれば、この世界での悠元の人生は順風満帆などと言えるものではない。実家の三矢家もそうだが、祖父である剛三に巻き込まれての世界一周旅行はその代表格といえよう。世界中には触れることすら禁じられているものが多くあり、精神が視えることでそれにも触れてしまうというか〝引き寄せられて〟いた。
　とりわけ墓地などの特定の感情に偏ってしまいがちな霊的スポッ

トでは顕著に発動し、それがきっかけで天神魔法を本気で修得するに至った（属性魔法はあらかた学んでいたが、精神干渉などの魔法はまだ先でよいと判断していた）。話していないが『天照』を修得したのが高校入学前の話だということから察してほしい。
「俺の眼は強力すぎてな。以前エジプトのピラミッドでファラオの霊に襲われたときは流石に肝を冷やしたわ」
「そんなことが……どう対処されたのですか？」
「少しアレンジした精神干渉系魔法でな。咄嗟に覚えたものだから、その魔法の理屈も分からん」
　厳密には壁画に刻まれていた当時の王家が残していた古代魔法。それをベースに編み出した精神干渉系魔法『陽光疾走（サンライズ・オーバードライブ）』で事なきを得た形だ。その際に想子制御のコツも偶然掴むことが出来たため、結果オーライと言えば間違っていない……その魔法発動の余波で他のファラオの墓まで除霊してしまったわけだが。
　こんな出来事も世界旅行の一端で起きたことだ。トラブルに巻き込まれるのは自分というよりも剛三のせいだと思いたかった。割と切実に。

強さは諸刃の剣

達也に課す目標。それを示すために悠元はポケットからＣＡＤを取り出してスイッチを起動する。すると、訓練場の一角が起動して射撃場へと変化したのだが、的の台座からは何も出てこないことに深雪が首を傾げた。

「悠元さん、何かは感じるのですが、肝心の的らしきものが見えないのですが？」

「普通の視覚ならな。達也は分かるか？」

「――――成程。パラサイト対策となればこうなるという訳か」

達也は『エレメンタル・サイト』で的の台座から上方向に視線を向けると、孤立情報体――――式神の一種らしきもの――――が標的として出現していた。このシステムを組み立てたのは誰なのかと悠元に疑問の眼差しを向けると、悠元は説明を始めた。

「基本設計は俺だが、出力術式のベースは上泉家や吉田家の協力を得てる。流石にパラサイトに限りなく似せるのは危険だと判断した結果だが」

悠元は手を翳し、情報次元の的の位置に想子を圧縮し霊子の性質を〝付与〟して炸裂。その余波で狙った的だけでなく周囲の的も消滅させることに成功した。深雪からすれば悠元が何かをしたという現象を霊子の波長で感じ取っていたようで、目をキラキラさせて悠元を見ていた。

「まあ、まずは情報次元の的に座標を重ねるところからかな。達也は元々アドバンテージがあるわけだし、そこにいくのがまず大事だろう」

「分かった。悠元が今やったように上手くいくかまでは分からんが……あと、深雪のフォローは任せた」

「既に抱き着かれてる状態でそれを言わないでほしい」

別に嫌というわけではないが、２学期以降は学校でも司波家でも大体一緒にいることが多い。３学期になってから（厳密にはリーナとセリアが転校してきてから）は一緒に寝てほしいと懇願されて根負けし

た（達也も深雪を窘めたが、泣き落としに屈した）。しかも、寝間着だけ着て下着を身に着けない状態もあったりするため、必要以上に手を出していないか不安に感じることもある。

仮に手を出さなくとも深雪から密着してくるため、軽いスキンシップどころでなくなっているのは否定しない。時折、朝起きた際に深雪が何も身に纏っていない状態となっていることもあり、対策術式を行使しているのは言うまでもない。『天神の眼』で情報の遡及は可能だが、一々気にしてストレスにしたくないということでしていない（神楽坂本家での出来事を考えると〝している〟前提で対策を講じている）。

そのことを達也に話したところ、妹の暴走ぶりに頭を悩ませつつも事情を聞かれることが多くなった。このことを成長と呼ぶべきなのかどうかは判断に悩むところであるが。本人曰く「これがもし俺に向いていたのだと思うと、嫁の貰い手が出てくれたことに感謝する」とのことらしい。

日に日に『誓約（オース）』ありの状態で制御の精度が増していることから、以前達也が述べていた推察も間違っていないのかもしれない。流石にこのことを公表する気にはならないが……自らの私生活を暴露するに等しい行為は流石に御免である。

「悠元さん……その、ダメですか？」

「ダメとは言わないが、深雪も制御の訓練だからな？」

「あっ……その、お手柔らかにお願いします」

訓練以外のことで別に何かするわけでもないというのに、そう畏まられるとかえって恐縮してしまうと思う。ともあれ、訓練ということで深雪も距離を置いてくれたので良かったと思うことにする。主に精神的な意味で。

「さて、物理次元を無視して情報次元に魔法を撃ち込む方法なんだが、これが思ったよりも精神を削るからな。他の連中より多少疲労が増えることは覚悟してくれ」

「それぐらいは覚悟の上だ」

「了解、それでこそ達也だな」

まずは基本となる想子弾の「遠当て」。そのやり方とイメージを達也に教える。全て教えても特に問題はないのだが、この先を教える際に引っ掛かる可能性があるため、まずは基本中の基本に止めた。元々『術式解体（グラム・デモリッション）』を使いこなしている達也からすれば、その情報だけでも大方の道筋は見えたようで悠元に尋ねた。

「難しいものかと思えば意外とシンプルなんだな」

「『遠当て』だけでも本来は高難度の技術だからな。想子の塊を目標に重ねるまでは今の達也なら難しくないだろう」

達也が持っている元々のスペックに加えて想子制御の度合いが一番進んでいる達也ならば遠当てを放つまでそう時間は掛からないだろう……と思っていたら、案の定一発で理の世界に遠当てを放つことに成功していた。

これには思わず目を丸くしてしまったのは言うまでもない。

「……出来たみたいだな」

「他人事のように言うな。どうする？　先に進めるか？」

「いや、今の感触を馴染ませておきたい」

そう言って達也は遠当ての訓練を再開する。行き詰まるまでは独力で試行錯誤するという意思を感じ取れた。別の言い方をすれば負けず嫌いとも言うのだろうが。それならば、と悠元は深雪に視線を向けた。

「深雪なんだが、天神魔法の訓練だな。属性魔法の練習もそうだが、精霊の制御訓練を本格的に進めるぞ」

「制御訓練と言いますと、九校戦の時に悠元さんがやっていたような訓練でしょうか？」

話を聞くに、幹比古に見つかった制御訓練の風景を深雪も見ていたようだ。とはいえ、そのことを隠してもメリットにならないので頷いて肯定する。通常ならば魔法は適性に応じてある程度特化するのが普通だが、天神魔法においては〝全属性〟の精霊制御が求められる。これは基本となる魔法陣が７つの属性の精霊を一定以上制御できていることが発動の前提条件となっているからだ。

「間違ってはいない。本来は精霊標などのスポットや触媒で訓練する

のが望ましいが、そう贅沢も言ってられないからな。なので……深雪、俺の手に手を重ねて集中してくれ」
「はい」
こういう時はしっかりしているというのに……愚痴なのか惚気なのか分からない文言はさておいて、悠元が右手の掌を上に向けた状態で差し出し、深雪は手を重ねる形で右手を置いて瞼を閉じた。
それを確認すると、悠元は精神を集中させて周囲に無数の精霊を発生させる。七属性の精霊の感覚を掴む訓練は深雪が悠元の婚約者となってから続けており、重ねた手から伝わる感覚を基に深雪は周囲に浮かぶ精霊を制御していく。
本来は精霊標や触媒を用いて精霊を発生させ、それを制御する――以前実験棟で幹比古がやっていたような練習方法に近い。悠元はそれを『万華鏡（カレイドスコープ）』という常識外れの固有魔法で精神の消費を限りなく抑えているため、深雪の精霊制御訓練はいつもこの方法を用いている。
そもそもの話、「ハルノブ」――――木彫り熊の前例はあるが、あれこそどういう経緯でああなったのかまでを説明できない。それに、古式魔法と現代魔法では制御方法も異なる部分があるため、触媒などを使わずに悠元が精霊の発生を担っているのは、深雪が危険な目に遭わないようにする思いがあった。
余談だが、その木彫り熊については千姫が興味を持ったらしく、置き場所に苦慮していた側の国防軍から買い取ったらしい。なので今は神楽坂の本屋敷に置かれているわけなのだが……自分が近くにいないとただの置物なのは変わらない事実である。
◇　◇　◇
脱走者を追跡する技術に関してはＵＳＮＡに一日の長がある――――それは紛れもない事実である。脱走者の一人と思しき追跡者の想子パターンを既に把握しているサポートを受けて、リーナは『パレード』を纏い仮面を付けた状態で追跡を再開していた。だが、その脱走者側はといえばリーナの動きが読めるような素振りを見せつつ追跡を掻い潜っていた。これにはサポートメンバーの一人であるセリア

が難しい表情を浮かべていた。
「……シルヴィア、これをどう見ますか？」
「疑いたくはありませんが、メンバーの中に〝内通者〟がいるとお考えですか？」
　それしか考えられない、とセリアは顔を縦に軽く振って肯定した。セリアの追跡能力を以てしても追い切れない怪人……せめて古式魔法でも学んでいればと内心で独り言ちるセリア。すると、レーダーに異常を知らせるアラームが鳴り響いた。シルヴィアが気を取り直して状況を知らせるように指示を発する。
「何があったのですか!?」
「報告します。追跡していた不審者のパターンが突如……消失しました」
「消失？　向こうがこちらの追跡に気付いたのですか？」
　ＵＳＮＡの想子追跡技術は世界でも屈指……いや、現段階では〝世界一〟と豪語しても遜色ない程のレベルである。そのセンサーが捉え切れなくなったという事実は、オペレーター席に座っていたセリアを立ち上がらせるのに十分過ぎた。そして、セリアは部屋の奥に置かれている黒のアタッシュケースを開き、中に入った装備――――スターズが対魔法師用に使う戦闘服に素早く着替える。そして、セリアは『パレード』を展開した。
　煌めく白銀の髪は透き通るような空色に。
　リーナと同じ蒼の瞳は自身の元々の髪色である白銀に。
　頬の線は鋭いものへと変化し、リーナの『パレード』を思い起こすかのような威圧感を生み出している。
　そして、自身用に調整されたＣＡＤをやや乱暴ながら掴むと、セリアは外に出て飛行魔法デバイスを起動。シルヴィアの制止する声にも耳を貸さず、セリアはリーナと同じ仮面を身に着けると夜の都心へと繰り出していった。
（分かってるの!?　相手は同じ軍人というだけでなく『パラサイト』のこともあるのよ!?　こんな時に余計な真似を…！）
　この時のセリアは自身が手掛けた技術を無効化されたというだけ

でなく、双子の姉が万が一の危機に瀕する可能性を真っ先に考慮した。
身内を信じていないわけではないが、脱走者に憑りついている正体をＵＳＮＡの側で知っている身として、このままの流れを維持して最終的にパラサイトをＵＳＮＡから遠ざけるのがセリアの目的であった。そうなればこの国で様々なトラブルに見舞われる確率が高くなるが、セリアにとっての家族を危険にさらす様な真似などできるはずがない。
セリアはこの出来事が脱走者によって引き起こされたものではない、と判断していた。確かに脱走者に憑りついている正体を考えるのならば情報共有などお手の物だ。だが、いくらパラサイトと言えども人の姿を保ち続ける以上は見た目という視覚的な情報をいつまでも偽り続けることなど出来ない。そうでなくとも、想子の波長データが変質化したとしても追跡できている以上は許容の範囲内で済んでいる。
そうなると、考えられる可能性はセリアの知っている情報から考えた結果……一人の同級生に行き着く。
（神楽坂悠元……私の勘が正しければ、彼は恐らく私と〝同じ〟のはず）
ＵＳＮＡの事前調査において、「灼熱と極光のハロウィン」における２発の戦略級魔法の最有力候補者と目されている人物。現代魔法と古式魔法の複合術式のみならず、現代魔法においても極めて高難度の制御技術を九校戦で披露していた元十師族の人間。
その情報のみならず、セリアは留学直前にＵＳＮＡの大統領と会談する機会を得た際、彼から忠告を受けた。
「――――一つだけ言っておくぞ、セリア。今回の任務に関して『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』が出てきた場合、素直に祖国に帰っても恥ではない。場合によっては私から発言しよう」
「アンタッチャブル……もしかして、四葉家のことでしょうか？」
元造をはじめとした面々が成した四葉の異名は世界の知るところであった。大統領の言葉を聞いたセリアの問いかけに対し、大統領は

首を横に振った。
「無論そのこともあるだろうが……私が最も危惧しているのは、ミスター剛三の孫が出てきた場合だ」
「かの英雄の孫、ですか。もしや、リーナを打ち倒したのは彼だと？」
「そうだ。その彼は神楽坂――――ミズ・チヒロの養子となったことをミスターから聞き及んだ」
　大統領は剛三だけでなく千姫とも個人的に面識がある。欧州方面への渡航の仲介役を引き受けたこともあり、剛三の義妹ということだけでなく神楽坂家の存在も聞き及んでいた。セリアからすれば十師族より更に上の存在がいてもおかしくはないと思っていたが、こういう形で聞き及んだ情報はセリアの知っている範囲外の話であった。
「数年前の話だが、私に対して魔法を一切使わずに組み伏せたのだ。その時の経験もあって、私は彼をアナザー・アンタッチャブル――――『触れ得ざる者』などと勝手に呼称していたのだがな。どこから聞き及んだのか、今では国防総省（ペンタゴン）もその異名を使っている」
　別に彼を悪く言うためにそう言ったわけではない、と大統領は独り言ちた。だが、それを静かに聞いていたセリアにとっては他人事で済まされる内容ではないと感じていた。何故ならば、彼女もまた〝戦略級魔法〟を使うことのできる魔法師なのだから。
　その彼にまつわる魔法方面の情報を集めた結果、そのどれもがＵＳＮＡで最先端と言われている魔法技術を嘲笑うかのようなレベル。少なくとも現代魔法では先進国のＵＳＮＡでも極めて難しいレベルの魔法を彼は難なく使用している。それが出来るとなれば……セリアが至った可能性は一つであった。
（分からないでやっているのなら、止めさせないと。分かってやっているのならば……私が殺す。〝ポラリス〟を持つ者として、見逃すことなど出来ない）
　〝アナザー・アンジー・シリウス〟と呼ばれることもあるが、スターズにおいてエクセリア＝クドウ＝シールズに与えられたコードネームは天の北極に最も近い輝星――――北極星の名である〝ポラリス〟。強さの序列で決められるコードネームの序列から離された理由は、

リーナのサポート役を担える人選という理由だけではなかった。
参謀本部が「彼女自身の魔法師としての才能はスターズそのものを崩壊させかねない〝諸刃の剣〟」と認識するほどに、他のメンバーとの魔法技術とは一線を画していた。国家公認の戦略級魔法師に認定すれば、それこそ国内外から余計なやっかみを受けることも想定されるほどに。なので、参謀本部が取った苦肉の策はアンジェリーナ＝クドウ＝シールズことアンジー・シリウスのサポート役として彼女の軍人の地位を確立することだった。
「セリア……それ程に相手が手強いということですか」
その彼女を動かしたほどの相手。シルヴィアはセリアによって空になったアタッシュケースを見つめたのち、踵を返してオペレーター席に座った。こうなれば、どの道衝突は避けられないということをシルヴィアも感じ取っていた。

人間離れと人外は得てして異なるもの

怪人は困惑していた。追ってきていた存在を感じないどころか、私／我々との意思疎通さえ途絶えた。これほどの高度な遮断を受けたことなど、自身／我々だけでなくこの体の持ち主であったチャールズ・サリバン軍曹の記憶情報でもないものであった。

その怪人の目の前には、一人の武装した少年が静かに佇んでいた。彼の手には銃らしきものが握られているが、それは拳銃ではなく銃型ＣＡＤだということもすぐに理解していた。

怪人と相対する少年は、漆黒の銃型ＣＡＤを構えてこう告げた。

「――――驚いたか、白仮面の怪人さん。これ以上の狼藉は見逃せない……お前らがこれ以上害を為すというのなら、その存在ごと滅する。例えそれがお前らの〝生存本能〟だとしてもだ」

自分（サリバン）がどういった存在なのかを、目の前にいる人物はハッキリと認識している。見た感じでは飛び道具らしきものも携帯しているように見えるが、それを使う意思などないということをサリバンは彼の眼から感じ取っていた。

しかも、彼の奥底が全く見えないことにサリバンは仮面の奥で冷や汗が流れた。かといって、むざむざと捕まるわけにもいかない……サリバンは少年の問いかけに答えた。

「我々が大人しくこの国から出れば、追跡はしないというのか？」

「国外の事に一々首なんぞ突っ込んでられないからな。そもそも、今回の事態を引き起こしたのは他でもないアメリカだ」

同盟国とはいえ、異次元の来訪者の危険性を指摘されておきながら自らの欲望で自らの首を絞めたのだ。自業自得ものの出来事にこの国が脅かされるのならば排除はするが、最終的にＵＳＮＡ自身が責任を負うべき事象。

現にその対処としてアンジー・シリウスを動かしたわけなのだが、物理的かつ現代魔法での対処など意味を成さないことも事前に通達しておいての結果に呆れる他ない。

「とはいえ、だ。いくらそちらの都合とはいえ、我が国の魔法師を襲っ

た罪が消えることなどない。何よりお前らにうろつかれると、余計な欲を覚える奴も出てくるのでな」
「――――っ!?（な、何が起きたと……意識が……）」
少年が放った魔法により、サリバンは急激に意識が遠くなるのを感じていた。他の私／我々にこの事実を伝える暇もなく、強化された肉体も指一本すら動かせない……今のサリバンが最期に見たものは、漆黒の戦闘服と白銀に染まった瞳を持つ少年の姿であった。
◇　◇　◇
「――――『霊魂霧散（スピリット・ディスパージョン）』の効果は上出来だな。対パラサイトとしてはぶっつけ本番だったわけだが……」
系統外・精神構造分解魔法『スピリット・ディスパージョン』――――想子構造体と接続している精神、即ち霊子構造体のみを破壊する魔法。パラサイトに対してどれほどの効果・負担になるか不明だったため、保険として『天神の眼』を使用した上で発動させた。
この方法だとパラサイトはおろか元々チャールズ・サリバンであった精神まで破壊してしまうのは既定路線だが、この対処法も今の悠元には備わっている。悠元は「オーディン」を仕舞って「ワルキューレ」を取り出し、倒れこんでいるサリバンに向けて魔法を発動させようとしたところで通信機から声が聞こえてきた。
『悠元、急速に接近してくる物体が一つ。……いかがします？』
「……姫梨、結界を解除して撤退しろ。深雪、達也にもそう伝えてくれ」
『悠元さんは、どうされるのですか？』
「決まってる。どの道バレるのが早いか遅いかの違いだけだ……俺が二人の〝シリウス〟を抑える」
その相対でこちらの情報が知れるということは、こちらもアンジー・シリウスの正体を知るということだ。とっくにその覚悟など決めている……指示を出したところで、所持していた情報端末に達也からの空メールが入った。内容が何も書いていないということは、達也とリーナが相対したことを意味する。
（しっかし、リーナは大丈夫なのかね。今の達也は戦うだけでも苦心

する相手だというのに）
　ただでさえ反則的な魔法――――『再成』と『分解』を持っているだけでなく、想子シールドの強度は自身を除けばトップクラス。仮想魔法演算領域という本来ハンデになる要素も想子制御技術の訓練によって一科生のレベルに踏み込んだだけでなく、「トライデント」の同時発動という高難度の攻撃方法まで獲得している。加えて未完成ながら「遠当て」まで修得している状態だ。
　達也を心配するよりもリーナが不安になってしまう……などと考えていると、上空から接近してくる存在に悠元は視線を向けた。既に結界魔法は解除しているため、向こう――――上空から飛んでくる人物も悠元の存在に気付いている。念のために言っておくが、気配の抑揚は一応戦闘中なので解除などしていない。
　上空から降り立った戦闘服を身に纏う蒼穹の髪と白銀の瞳を持つ少女。目の部分を仮面で覆っているが、それが『仮装行列（パレード）』によって姿を変えたセリアだということは直ぐに理解できていた。その彼女の視線は明らかに自身を捉えている……この時点でセリアが達也と同等レベルの存在だと判断していた。その彼女だが、降り立つと同時に拳銃を構えていた。
「神楽坂悠元、ですね？」
「仮にそうだと答えたとして、どうせ俺を抹殺することに変わりないんだろう？　スターズのナンバーゼロ――――〝セリア・ポラリス〟」
「!?」
　セリアが驚愕の表情を見せたことに、悠元は内心で溜息を吐きたくなるような心境だった。
　情報というものは敵だけでなく味方にも精通していなければならない。同盟国兼潜在敵国であるＵＳＮＡの情報網は粗方洗い出しており、スターズの構成メンバーなど既知の情報でしかない。リーナよりも幾分かは危機感を持っているようだが、この程度のことで動揺していては話にならない。
　尤も、自分の場合は前世の経験もあって多少のことで動じなくなっているのもあるかもしれないが。加えて言うなら新陰流剣武術の鍛

錬を乗り越えた結果なのかもしれない……一般的な魔法師を辞めたようなものなので思い返したくもないが。
「別に驚くことじゃないだろう。過去の偉人も情報の重要性を説いているのだからな……お前らが追いかけていた人物だが、既に仏となっている。何だったら確認しても構わないが」
「……確認させていただきます」
セリアは警戒しながらも横たわっているサリバンに近づき、彼の状態をチェックしていた。脈と心臓の鼓動がないことで死亡を確認したわけだが、セリアは立ち上がった上で悠元に拳銃を向けた。
「……どういう方法を用いたのですか？　外傷や内出血がない状態で相手を死なせる魔法……精神干渉系魔法を使えるのですか？」
「そこはご想像にお任せする。で、いつまでその物騒なものを構え続けるつもりなんだ？」
以前から既視感のような感覚だが、こうやって相対することでハッキリと感じ取っていた。その感覚が最も近いパターンを思い返すとするならば、前世の自分の妹から感じていたパターンに近い。
仮にこの感覚が本当だと仮定した場合、神様が約束を破ったということに他ならない（そもそも口約束みたいなものなので仕方がない部分もあるわけだが）。流石にそう都合よくぽっくりと亡くなるパターンなんてそうそうあるものじゃない……彼女が逸って事を起こさない限りは。
そんな推測はともかくとして、彼女から感じ取った感覚は「疑問」の一点に尽きると推察した。
「貴方は、貴方が倒した魔法師が普通ではないということを知っているのですか？」
「それは、彼がＵＳＮＡの軍人魔法師だからか？　それとも……彼が普通ならざるものに憑りつかれていたからか？　尤も、後者の場合は精神諸共消し飛ばしているから、その証明なんてできないわけだが」
いくら推察が正しかろうとも、相手が女性だろうとも……相手はリーナすら超える実力を持つであろう魔法師。そのことを差し引いても、この国の治安組織の公僕でもない相手という事実。ＵＳＮＡの

公権力が及ばない場所――――拳銃を突き付けた時点で立派な〝法律違反〟という現実は確定している。
「……その点には感謝しますが、貴方には同時に戦略級魔法に関する嫌疑が掛けられています。大人しく同行を――――」
「すると思うか、戯けが」
悠元の取った行動は、手に持っていた「ワルキューレ」で『円卓の剣（ラウンドブレード）』を発動して拳銃の情報強化術式を破壊、搭載された弾丸を『天照絢爛』で消し去った。強化術式の消失に気付いたセリアはそのまま拳銃の引き金を引くが、弾丸が出てくることなどなく空の状態の挙動を起こしたことに驚愕した。だが、セリアとて軍人魔法師である以上、彼女は素早く懐から何かを取り出し、悠元に向かって放った。
「貴方にこれが躱せますか――――『ダンシング・スター』!!」
合計３２本のダガー。無秩序に放られた刃がセリアの声を魔法の起動キーとして空中に一瞬固定された後、悠元に向けて飛翔する。『ダンシング・ブレイズ』よりも高度な移動系魔法であり、飛翔速度は亜音速にまで到達する。
（亜音速で飛ぶ刃――――武装一体型デバイスか。とはいえ遅いな）
普通の人間ならば即死は免れないだろう魔法だが……セリアは知らない。彼女の目の前にいる人物は、これ以上の雨を無傷で生き残った強者。音速かつ３桁以上の木刀――――厳密には『相転移装甲（フェイズシフト）』でカーボン化させた木刀の雨を乗り切ったという経験からすれば、セリアの『ダンシング・スター』など児戯に等しいものだった。
悠元が紙一重でそのダガーを躱していくことにセリアは冷や汗が止まらなかった。
（彼は本当に人間なの？　……って、そんなことを考えている場合じゃない！）
『ダンシング・スター』で気を取られている間の隙を突くべく、セリアはコンバットナイフを取り出す。展開するのは無論『分子ディバイダー』の仮想領域。そして、セリアは自身の偽装に回していた魔法力を全て位置情報の偽装に振り分け、自己加速術式で一気に切迫した。
先日の試しを考えればセリアの取った方法は決して間違いではな

い。セリアもこれで勝てると読んでいた。だが、『分子ディバイダー』で切りつけたはずの彼の姿は次の瞬間、霞となって消えた。
（『仮装行列（パレード）』!? いつの間に……えっ？）
彼も『パレード』が使えるという事実を逡巡する暇もなく、セリアは振り下ろしたコンバットナイフが持ち上がらない――――いや、彼女の全身がその状態のままで〝凍り付いていた〟。しかも、魔法を発動させようにも自身の想子が活性化しない。辛うじて首から上だけは動くために視線を動かすと、『ダンシング・スター』で放ったダガー型武装デバイスは全て悠元の足元に落ちていた。
「一時的に魔法行使を無力化させてもらった。まあ、永続的なものじゃないから精々数時間ぐらいしかもたないが……意識は飛ばさせてもらうぞ」
そう言って悠元が「ワルキューレ」で魔法を放った後、セリアの意識は急激にブラックアウトしてその場に倒れこんだ。
悠元が使ったのは『水遁流転（すいとんるてん）』を『パレード』――――いや、この場合は古式魔法である『纏衣の逃げ水』に近い形で発動させたもの。そして『水遁流転』が斬られた場合はそれをトリガーとして同じ天神魔法である『結氷凍界（けっぴょうとうかい）』を発動し、セリアの魔法発動を封じた。
『結氷凍界』は現代魔法の分類上で精神干渉系魔法に属し、相手の肉体活動や想子活性を封じる効果を持つ。今の悠元ならばほぼ永続に封じることも可能だが、この魔法は『誓約（オース）』と同じく術者と対象者に対して同レベルの制限が掛かってしまうデメリットを持つ。なので、効力を数時間に限定してデメリットを軽減している……魔法演算領域を制限したところで無限からの引き算という訳の分からないことになるので、実質ノーリスクという現実には内心で溜息を吐きたかった。
そして、彼女の意識を飛ばしたのは以前英美に使った想子干渉をベースとして編み出した魔法――――『夢世界（ドリーム・ワールド）』と一応呼称した精神干渉系魔法。結果だけ見ればセリアに対して不意を打つことは出来たわけだが、彼女相手に二度も使うわけにはいかない戦法だ。
周囲の気配を探るが、特にジャミング反応もなく他の妨害も認めら

れない。それを確認した上で悠元は「ワルキューレ」をサリバンの死体に向けた。そして、一つの魔法を放ってサリバンとセリアを担ぐと、悠元は何も持っていないかのような足取りで飛行術式を起動し、都心の夜空へと飛び上がった。

◇　◇　◇

悠元が指定した合流ポイントに降り立つと、そこは言うなれば〝一方的な状況〟になっていた。リーナが元の姿（流石に仮面は付けられたままだが）に戻っているところを見るに、達也と相当本気でやりあったのは間違いないだろう。何せ、リーナは平気そうな表情を浮かべているが、軽く息が上がっているのは間違いない。

達也とリーナは無論だが、撤退を指示したはずの姫梨と深雪もいて、更には二人ほど追加されていた。そのうちの一人――神楽坂家現当主である千姫が呑気に声を掛けてきた。

「悠君、そちらは大丈夫のようですね」

「ええ、まあ。母上が介入することは読めてましたが……九重先生もですか」

「やあ、久しぶりだね悠元君。まあ、僕の場合は個人的なものもあったりするからね。君の母君には助けられたよ」

そう言いのけてしまうもう一人の人物――八雲の言葉を聞きつつ達也に視線を向けると、達也は呆れたような印象を強く受けた。深雪に至っては苦笑を浮かべるほどだ。八雲の性格をよく知る者ならば、この程度で驚いていては付いていけないわけだが。そしてリーナはといえば、悠元が担いでいる人物の片割れがセリアだということに気付いて声を上げた。

「ユート……って、セリア!?　貴方が倒したの!?」

「ま、彼女が焦っていたから不意を突いたようなものだがな、リーナ。お前はお前で相当運が悪かったとしか言いようがない訳だが」

そう言って悠元はセリアをゆっくりと地面に降ろした。流石にアスファルトに直接は拙いので芝生の上に寝かせる形となったが。その上で悠元は八雲に視線を向けた。

「九重先生、俺が担いでいるこの人物を引き取ってくれませんか？

こちらだと色々面倒事が多いので」
「成程ね。その方が良さそうと見た……神楽坂殿、交渉はお任せしても？」
「構いませんよ、九重殿。こういったことは一括した方が良さそうですから」
「ちょっと、その人物は……」
リーナが悠元の担いでいる人物に気付いて声を掛けようとするが、それを聞く前に八雲が悠元からサリバンの身柄を預かり、そのまま綺麗に消え去っていた。リーナは真剣な表情を悠元に向けるのは無理からぬことだった。
「ユート、貴方は今何をしたのか分かっているの？」
「それは理解してるし、元凶の一端は既に〝取り除いた〟。言っておくが、無理に取り返しても実験以前のチャールズ・サリバン軍曹でしかないからな。新たな情報など引き出せないと思え」
セリアとの戦闘後、サリバンに使用した魔法は『天照：五行相生』――『天陽照覧（てんようしょうらん）』。達也の持つ『再成』の上位互換版で、最大数十年単位で必要な情報のみを遡及して対象の状態をその当時に即した状態で戻すことが可能。更には死後２４時間以内であれば一度だけ〝蘇生〟させることも可能である奇跡の魔法。
幸いマイクロブラックホール生成・蒸発実験の実施日時は入手済みだったので、憑依の直前の状態に遡って復元させた形となる。なので、そこから今に至るまでの情報など得られない。なお、これが十年単位の再成となれば本人の姿まで変化してしまうため、ある意味『領域強化（リインフォース）』並みにヤバい代物である。
そもそも、ＵＳＮＡでリーナが処分した相手だって元凶をしっかり取り除いたと判断せずに見逃している。向こうで出現した三体のパラサイトについては留学先にいる修司と由夢、雫から無事に対処できたことを既に聞き及んでいる。
「それとも……今ここで俺と達也、姫梨と深雪、それに母上の五人を倒してでも追跡するか？」
「セリアを倒されたことには怒ってるけど……ワタシだってそこまで

馬鹿じゃないわよ」
　そもそもの話、一時的に九重寺で預けられる形となるのは間違いないが、その後はどうなるかなど悠元にも不明である。春のブランシュや夏の無頭龍に関してはある程度聞き及んだが、闇に葬った事項を聞いて気分がいい筈もない、と判断して聞いていない。
　一方のリーナも、双子の妹を倒されたことに対する怒りはあるものの、自身よりも実力が上の相手をどうこうできるほどの余裕などなかった。

不思議な変化

私は確かに、一人の少年と対峙してその存在が消え去った。それは紛れもない事実として私の記憶情報に刻まれている。

そもそも、私という存在はこの世界に望んで来たわけではない。形なき世界から形ある世界に、一刹那だけ揺らいだ「壁」を通って引き寄せられた十二の存在の一つ。本来ならばこの世界に来た時のように強い霊子波動（プシオン）に引き寄せられるはずが、気が付けば人の形を取らない結晶に迷い込んでいた……意識があったときにはこの状態となっていたため、私にもその過程など分かる筈もなかった。

霊子に関しては満ちるほどに補給されているが……チャールズ・サリバンという人物に宿っていた時に感じていた〝同じ存在の波動〟は全く感じなくなっており、代わりに私を倒した少年との繋がりを感じていた。そもそも、この一人称自体この状態となってからのものだが、これはこれで悪くないと考えるようになってしまった。

今の私にできるのは、私が〝主〟と定めた少年の力となること。今は周囲に気配も多いため、その時が満ちるまで待つことしかできることはないだろう。

◇　◇　◇

状況的に不利という他ない中、リーナは素直に両手を挙げて降参の意を示していた。世界最強の魔法師がそんな態度を素直に示していいのかと思われるが、その理由はリーナの周囲に倒れている面々――――「スターダスト」のメンバーらが主な要因だった。

それを見た上で悠元はリーナに尋ねた。

「とりあえず……リーナ、これ以上の追跡は止めた方がいいことをお勧めする」

「何それ、どういうことよ？」

「ここ数日追跡していたのなら気付いているのだろう。吸血鬼――――スターズ絡（おまえら）みの追跡対象が逃げ切っていることにだ。まさか、追跡している当人がそれに気付いていないとは言わないよな？」

原作ならばリーナがサリバンを始末していた。だが、その事象を書

き換えた以上は未来にも当然影響してくる。悠元の発言に対してリーナは事実を突かれたような形となり、口惜しそうな様子を垣間見せていた。
「ワタシだって気付いていたわ……それでも、引けない理由はあるのよ」
「（〝シリウス〟の誇りか……）それで同盟国に被害が出ても何の感傷も抱かないとは、流石〝アンジー・シリウス〟と言うべきか」
「……何も聞かないの？」
リーナからすれば当然の疑問なのだろう。何か聞いてくるのかと思えば、悠元は質問するどころか忠告してきた立場だ。
正直なところ、悠元からすればリーナから必要な情報を得る必要などない。その気になればＵＳＮＡの大統領に直接連絡する手段を持ち得ているし、最悪の場合は直接ホワイトハウスに乗り込むこともできる。それに『八咫鏡』で国防総省（ペンタゴン）から情報を全て引き抜くこともできる以上、リーナから無理矢理情報を引き出すという余計な労力をかける必要もないというわけだ。
そもそも、リーナは知らないが悠元も一応軍人魔法師の端くれであるため、軍事機密に触れかねないようなことを聞いて面倒事に巻き込まれるのは御免である。
「軍人魔法師であるリーナに無理強いをしたところで何の得にもならない。それに、だ……いくらスターズとはいえ治外法権の及ばない場所での戦闘はこの国の刑法の対象内だ」
「それはユートたちも同じじゃない！」
そう反論するリーナだが、悠元と深雪、姫梨は「神将会」のメンバー。千姫は神楽坂家現当主であり、達也に関しては悠元が達也の管理権限を持っている関係で「神将会」の協力員という体裁をとっている。なので、リーナ以外の意識がある面々は超法規的措置の対象内にあるメンバーしかいない。
そのことを態々教えてやる義理もないため、悠元は芝生に寝かせていたセリアをお姫様抱っこの形で持ち上げた。
「……残念ながら違うな。てなわけで母上、この場をお任せしても？」

「それは構いませんが、悠君はどうするのですか？」
「ちょっと送り届けてきます。尤も、誰かいるとは思えませんが」
千姫の問いかけにそう短く答えると、飛行術式を展開して悠元は瞬時に上空へと高く舞い上がった。
『仮装行列（パレード）』絡みの交渉に関しては当人である千姫に任せるのが筋だし、達也と深雪のストッパーとして姫梨がいる以上はひどくなることなどないだろう。セリアを持ち上げたまま悠元は、そのまま目的地――リーナとセリアの生活拠点に出向いた（プライベートに関わるので同居人の調査は必要最低限にしている）。
当然だが、現在は追跡任務のために誰もいないことは明白。悠元は『八咫鏡』で家のロックを解除し、セリアをリビングのソファーにゆっくりと置いた。
（あの時の発言……隠しはしていたが、まるで俺を〝転生した存在〟だと睨んでいたな）
あの場で突拍子もない発言などなかったが、吸血鬼の正体を既に掴んでいなければ出てこない発言がいくつか見られた。その事実がスターズ内に広まっていないところを見るに、セリアは自身がそういった存在だということを隠しつつ過ごしているのは明白。
それに、１００ｍｓ――――人間の反射速度の限界を切る魔法発動速度は現在判明しているだけで悠元とセリアの二人しかいない。この時点でセリアが〝この世界において普通ではない〟ということを意味する。
『ダンシング・スター』もそうだが、達也ですら本気で探さないと見つけられない悠元の自然な隠形を見抜いていたことからして、彼女が現代魔法で説明不可能な能力を保持しているのは間違いないと踏んでいる。
（とはいえ、長居して変な嫌疑を持たれるのも面倒だからお暇しておくか）
今回はセリアに対しての警告も含んでいる。これで大人しく本国に帰ってくれればよいが、同盟国の未知の戦略級魔法を野放しにする（大亜連合や新ソ連に対する抑止力）という選択肢をＵＳＮＡ軍上層

部が選択してくれたらの話となる……シビリアンコントロールが効きづらい相手に言ったところで「暖簾に腕押し」となるだけかもしれないが。

悠元は『天照』で自分がいた痕跡を書き換え、何事もなかったかのようにその場を後にした。

◇　◇　◇

現状できる全ての対処を終えて悠元らが三矢家の本屋敷に戻ったのは日付が変わってからであった。パラサイト側からすれば仲間との交信が途絶えた上に消息が消えた形となる。これで一層警戒を強めるだろうが、今回の場合はそうしてくれたほうが余計な被害を生まずに済む利点がある。

そのまま三矢家の自室として使っていた部屋に戻ったところで一息吐くと、突然声が響いてきた。それは物理的なものではなく精神的な波長――〝念話〟と呼ばれるようなものに近かった。

『――聞こえますか？』

（……何で「その時不思議な事が起こった」が平気で起きてるんですかね。出所は……これかよ）

悠元がその声の波長を辿ると、懐に隠していた（もしもの時の触媒代わりにもなるため）オリハルコニウム製の魔法結晶（感応石と呼ぶには全くの別物となったため、便宜上そう呼んでいる）から聞こえていた。この結晶は今設計中の武装一体型デバイスに組み込むためのものだ。いくら『叢雲』があるとはいえ、それに頼り切らない方策の一環。この前エリカに渡していたものがそのプロトタイプとなる（そっちは流石にオリハルコニウムが使えないので高品質の感応石を使っているが）。

流石に黙ったままというのも申し訳ないと思い、悠元は同じような感覚で話しかけた。

『さて、俺はお前のような存在を生み出した覚えなど皆無だし、こんな現象自体初めてでな。お前は一体誰だ？』

『そうですね……チャールズ・サリバンと呼ばれていた人物に憑りついていた精神体、と呼称すべきなのでしょう』

まさかのパラサイト。しかも、あのサリバンに憑依していた精神体……なのだが、魔法結晶から感じる波長はサリバンと対峙していた時とは全く異なっていた。一人称に関してもパラサイトなら使うであろう「我々」という文言を使っていない。

あの時『霊魂霧散（スピリット・ディスパージョン）』は間違いなく定義破綻を起こすことなく発動した。その効力が弱かったのかと推察した悠元だが、精神体はそれを否定した。

『貴方の魔法は私を破壊せしめました。私に残っている記憶情報から考慮するに〝死んでいた〟と断言できます』

『なら、どうして生きているんだ？』

『恐らくですが……チャールズ・サリバンの精神を蘇生させた際、私の精神も蘇生されたものかと思われます』

『天陽照覧』自体の発動は先程のものが初めてとなる。なので、どのようなデメリットを生み出すのかということは全く知らなかった。加えてサリバンの状態復元日時をマイクロブラックホール実験の実施日にしていたのも大きいのだろう。

ここからは推測になるのだが、『天陽照覧』によって指定した時間が融合直前の状態となっていたため、結果として融合していた吸血鬼状態のサリバンが分離し、軍人魔法師であるサリバンとパラサイトの精神情報体になったという考察が現時点で最も納得のできる結論だ。そもそも、『天照』の正式発動自体がかなりハードルの高いもの。単独発動できていた安倍晴明が人外レベルだったという他ない。この考察自体ブーメランなのは言わないでほしい。

これだけならばパラサイトに乗っ取られるリスクも発生してくるが、ここでパラサイトが変質化したのだ。その要因として考えられるのは、悠元の持つ魔法関連の何かが大きく影響しているのは間違いない。現状で根本的な原因が何なのかは不明だが。

『貴方の心に触れ、私の中にあったはずの「本質」は大きく書き換わってしまいました。そして、気が付けばこの結晶の中にいたという顛末です』

『……俺に対して害を為す気はないんだな？』

『それは出来ません。貴方に対して私は一般的に言われる〝従属〟という形で従っています』
原作だとほのかの想いに影響されることはあったりするが、それと似た事象を知らず知らずのうちに起こしていたということになる。しかも、拘束術式などを使わずに支配下に置いているという有様。以前自分のことを〝黒幕〟扱いされたことを思い出しつつ、気を取り直して精神体に問いかけた。
『いくつか質問したいが、構わないか？』
『はい。今の私に答えられる範囲内であればいくらでもどうぞ』
まず、精神自体が変質化したためにパラサイト同士との波長感知や感覚共有などの能力は失われている。万が一そんなものが残っていたら、全て厳重に封印して富士山の地下深くに埋めるつもりだった。
その代わりとして魔法というよりは超能力に特化した能力を獲得している。彼女（？）を介する形で悠元もその超能力を使用することが出来る……最早何でもありな空気に、思わず涙が出そうである。
『私の存在を感知できるのは〝ご主人様〟だけです』
『俺にそんな趣味はないのだが？』
『大丈夫です。私は人間でいうところの女性に変質化していますので』
『……』
何をどうツッコミを入れるべきなのか悩むし、どこまで信用していいものか分からない……それが今の率直な感想である。ただ、自分が関わるとパラサイトまで〝変化〟させるという事象まで分かっただけ収穫としては非常に大きいのだろう。
なお、精神体という言い方をしていては混同するため、彼女（現状で判断できないが）に「アリス」という名前を与えることにした。更に話を聞いたところ、自分の前世で読んでいた漫画やアニメの知識を取り込んでいたようで、それらの能力も使えるらしい。ただ、それを使うには管理権限を持っている悠元の魔法演算領域を使わなければならない。
ようは漫画やアニメの世界で言うところの〝写し鏡の自分〟なの

かと尋ねると、アリスはその考えで概ね間違っていないと述べた。
『パラサイトで言うところの〝融合〟みたいなことはできるのか？』
『〝融合〟というよりは〝同調（シンクロ）〟ですね。以前マスターがやられていた独立情報体との精神同調みたいなものです』
『（そこまで読み取っているのかよ……）まあ、いっか。余計な説明をせずに済んだと思えば気が楽だ』
　そもそも、この世界に転生した際にパラサイトだと疑われたことからして、自分が異常な存在だということは多少自覚している。というか「自覚させられた」というのが正しいのだろう。面倒事が一個増えたと思えばまだ気は楽だが、このことは誰にも言えないだろう。下手をすれば要らぬ欲を生み出しかねない……それこそ七草家や九島家には間違いなく漏らせない内容だ。
『アリスとしては、他のパラサイトについてどう思っている？』
『そうですね……今となっては特に同情もありません。マスターが消滅させたとしても、それが彼らの定めという他ないかと』
　ご主人様呼びには流石に抵抗がある。とはいえ、他の呼び方を考えた際に万が一のことも考慮して「マスター」という呼称を選んだ。アリスとしてはパラサイトとしての繋がりが無くなった影響でそこまでの感慨などは持っていないようだ。この場合は少しでもそういうのが残っていたりすると厄介だったので良かったと思うことにした。
　悠元が成したこの現象が後の魔法師の勢力図を大きく書き換えることになるのは……この時の悠元も薄々感じていたのだった。

魔法と文民統制のバランス

翌日、起床して朝の制御訓練や朝食を済ませたところで仕郎から呼び出しがかかった。悠元が本屋敷の書斎に出向くと、そこには元と千姫がいた。

「おはようございます、父さんに母上」

「ああ、おはよう。丁度これから顛末について話すところだから、お前も座ってくれ」

「分かりました」

本来なら自分の立場は神楽坂家の人間だが、公的な場所でもない限りは謙られると困ってしまう。そのあたりを察しつつ元はそう述べ、千姫も元の発言を特に咎めなどしなかった。悠元が千姫の隣に座ると、千姫が話し始めた。

「まず、向こうの〝シリウス〟に関する魔法技術ですが、アンジー・シリウスと約定を結びました。彼女のサポートを担っているセリア・ポラリスにも今頃伝わっていることでしょう……ただ、その時の勝負が大変なものでしたが」

ただでその約定を結ぶのはフェアではないと感じた千姫の提案で深雪とリーナの対決方式にしたのだが、達也が『誓約（オース）』の制約を弱める行為をしたせいでその制御能力が格段に跳ね上がったらしい。

原作でも元々かなり高い想子保有量を有していることに加え、想子制御能力は制限ありの状態でも飛躍的に改善されている。更には魔法演算速度も軒並み伸びていることに加えて悠元から天神魔法を教わっている。

リーナは持ち前の戦闘能力を十全に発揮していたが、深雪も新陰流剣武術を学んでいる影響で体術面では互角以上の展開に持ち込んでいた。そして肝心の魔法対決は……リーナの高プラズマエネルギーを発生させる領域魔法『ムスペルスヘイム』に対して深雪は悠元が密かに渡していた魔法――古式複合・領域干渉魔法『零点銀世界（ゼロ・ニブルヘイム）』を発動させたのだ。

『ゼロ・ニブルヘイム』は不純物をすべて取り除いた基本（カーディナル）コードか

ら書き起こした零加速領域（ゼロ・アクセラレーションフィールド）を術者の指定した範囲内で発生させ、指定されたフィールド内の分子運動のみならず、情報次元における事象改変の運動すら〝凍結〟させてしまう効果を持つ。加えて、魔法式の過程で天神魔法の『結氷凍界』の一部が使われているため、精神レベルの凍結すら可能としている。この魔法を作る過程で深雪から『コキュートス』の情報提供を受けており、この魔法はいわば『コキュートス』に限りなく近い感覚で発動できる魔法となっている。

「その様子だと、達也が止めたのですか？」

「ええ。あのままだとアンジー・シリウスが精神ごと凍結されかねませんでしたので。にしても、的確な対処でしたが……悠君はそのことを？」

「一応は教えました」

ただ、現状の『ゼロ・ニブルヘイム』は魔法式の隠蔽処理を行っていないため、達也の『術式解散（グラム・ディスパージョン）』でも対処可能なレベル。もしもの時を考えて達也に教えていたのが功を奏した形だ。なお、達也に『ゼロ・ニブルヘイム』の起動式を見せたところ、自身の妹が随分と我儘を言ったものだと呆れ顔だったのは言うまでもない。

その後、リーナについては『仮装行列（パレード）』に関する誓約を結ぶに止めたらしい。千姫としても今のＵＳＮＡの情報はその気になればいくらでも手に入るからだ。すると、千姫が不思議そうな表情をしつつ悠元を見やっていた。いや、この場合は悠元の隠し持っている魔法結晶から感じる力に気付いた形だ。

「そういえば……悠君から不思議な波動を感じますが、何かあったのですか？」

「……信じられないかもしれませんが、一応話しておきます」

隠しきれないと判断して魔法結晶に宿ったアリスの存在のことと発生過程を話すと、元は苦笑を浮かべていて、千姫は扇子を開いて口元を隠すようにしつつ笑みを零していた。千姫の反応を見るに、過去にも似たような事象があったのだろうと思いつつ話を続ける。

「自分でもさっぱりな部分が多すぎますが……上泉家に伝わっている天神魔法は、融合した当人だけでなく憑依していたパラサイトまで蘇

らせることまでは確定事項と言えるでしょう」
「初代様の遺していた文献の通りですか……悠君としては、信用できそう？」
「従属関係の契約術式があるのは間違いないですから、それはこれから見極める案件です」
　信じきるのは難しい話だが、どうせＵＳＮＡの手に負えないのならばこちらの力として取り込むのも選択肢で言えば〝あり〟なのだろう。その意味で烈の原作での動きを踏襲しているのかもしれない。
　ただ、そうなると同じように変質化させた際の契約がややこしいことになりそうである。なので、アリスはこのまま手元に置きつつ、それ以外のパラサイトが同じ方法で分離した場合はそれらの契約破棄も視野に入れるべきだろうと思う。
　誰かに使わせるとなると、口止めの意味も込めてそこに居合わせたメンバーになりそうな気もするが。
「お前がこの世界に来てからというものの、お前は世界を驚かせるレベルの偉業を成していくな」
「俺はどっかの起業家や大統領にまでなった旧合衆国の不動産王じゃないから、名誉なんて面倒事しか生みませんよ……トーラス・シルバーのことだって、俺の身分は〝外部協力者兼次席株主の関係者〟なわけですし」
　今日は日曜で、明日はＣＡＤ調整用測定器の納入にマクシミリアン・デバイスの関係者が同行するらしい。その同行者リストの中にあったセールス・エンジニアの〝本郷未亜（ほんごうみあ）〟という人物――本名：ミカエラ・ホンゴウ。そう、あのマイクロブラックホール生成・蒸発実験の際に立ち会っていたメンバーに含まれており、この国にいる８体のパラサイトの一角が憑依した存在。更に付け加えるなら、この先の展開においてキーとなりうる存在。
「そういえば、俺のことを知ってる父さんと母上には話すけど……エクセリア＝クドウ＝シールズがもしかすると俺と同じ存在かもしれません」
「……それは本当か？」

「俺をそういう存在だと断定するような発言がありましたから。それと、魔法科高校での魔法実習の際に人間の反応速度を超えた魔法発動速度を叩き出していました。現状は状況証拠しかありませんが……あと、達也ですら本気を出さないと見つけられない俺の偽った気配を〝存在〟で見抜いていたので」

あの時はそこまで気にしていなかったが、『天神の眼（オシリス・サイト）』や『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』のような〝視られる〟という感覚はあった。普段だと単に気配を偽っているだけなので、その気になれば見つけられるのは言うまでもないが……その状態の自分を〝存在〟で見通されていたのは間違いないだろう。

ここまでの状況証拠が出ている以上、エクセリア＝クドウ＝シールズは〝転生者〟の可能性が極めて高い。それもこの世界――〝魔法科高校の劣等生〟の原作知識を持っている類の人間だということは言うまでもない……現状は正誤の添削をしていないので、何を言っても推測の域を出ない話である。

「まあ、現状は可能性が高いだけで確定という訳ではないですが。パラサイトのことを認識しているような素振りがありましたので、一応気に留めてくれると助かります」

「そうか……もしそうだとして、悠元はどうする？」

「どうにか出来る相手じゃないと思います。現状でも結構面倒な相手ですし」

今代の〝シリウス〟の枠組みはおろか、スターズそのものの枠組みに暫定的ながら組み込まれた存在。この時点でＵＳＮＡの国防参謀本部がセリアという存在に対して畏怖の感情を抱いている可能性が高い。寧ろ国防総省（ペンタゴン）ですらも手に余った存在なのかもしれない。何せ、セリアの軍人採用過程でかなり難航したと思しき会議資料が見つかったからだ。

そして、彼女は十師族の一角である九島家の縁者。正確には先代当主の弟こと九島健の孫娘。このことを九島家の現当主が利用しないはずがないと考えている。

「悠君でも手に余る相手だと？」

「彼女との対決は不意を打ったからこそ勝てたようなものです。お互いに制限なしで戦えば都心が焼け野原で済まなくなるかと思います」
今の悠元の想子保有量は、最大出力の『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を同時に１００発以上撃ち込んでも少し疲れた程度で済むレベルに達している。一方、あの時のセリアは『ダンシング・スター』と『仮装行列（パレード）』、それと『分子ディバイダー』という高難度の魔法を瞬時に展開していた。それだけでもリーナ以上の魔法演算能力と想子保有量を有している。双方がまともにぶつかれば……その被害はかなりのものとなるだろう。
その意味で核兵器以上の存在となっていることには内心で溜息を吐きたくなったが。
「そういえば、明日魔法科高校の機材搬入にはマクシミリアン・デバイスの社員も数名同行するそうですが……全員ＵＳＮＡの軍関係者です。こんなんで誤魔化しが効くと思っているのでしょうか」
「剛三殿から聞き及んだが、大統領には既に？」
「直筆の手紙を〝直接〟送りつけました。魔法師というシビリアンコントロールが掛けづらい相手ですから、大統領閣下も苦労されているとは思いますよ」
軍内部を調査したところ、この国の戦略級魔法やパラサイトに関するいくつかの出所不明の情報が存在していた。ＵＳＮＡ軍では調べ切れていなかったが、その出所を『天神の眼』で遡ったところ、〝三人〟の可能性が浮上した。
一人はＮＳＡ（ＵＳＮＡ国家科学局）のエドワード・クラーク。二人目は〝七賢人〟の一角である顧傑。そして……最後の一人はエドワードの息子であるレイモンド・クラーク。そのいずれもが『フリズスキャルヴ』の使用権限を持つ人物たちだ。こちらでも『八咫鏡』で『フリズスキャルヴ』をハッキングして使用履歴を全て抜き取っているため、大方の出所も既に掴んでいる。
敵が情報で欺こうとするなら、こちらも情報で対抗するだけの話だ。
「愛国心が強いのは感心に値するとは思うけれど……それで割を食う

のは他の同盟国だ。この国が力を持たなければ新ソ連や大亜連合がつけあがることを何故理解できないのかと思うよ。核兵器を自在に制御しようとした国の後継国家だからなのかは知らないけど」

悠元の『天鏡雲散（ミラー・ディスパージョン）』『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』

達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』と剛三の『終焉雷光龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』

そして、国家公認戦略級魔法師である澪の『深淵（アビス）』とカウントすればこの国だけで5つの戦略級魔法（悠元が使える他国の戦略級魔法はこの場合カウントしない）を保有している現実。しかも、『深淵』以外はそのどれもが性質の悪い戦略級魔法で、その気になれば地球の全地点を照準することが可能。この事実を聞けば、恐れてしまう意味も理解できなくはない。

ちなみにだが、悠元は『スターライトブレイカー』を更に効率化させた術式を設計中で、これが完成すれば対人戦闘から広域戦闘までの汎用化が可能となる。そのことを現状知っているのは達也だけで、聞かされた側の反応として「埒外の天才という他ないな」と返ってきた。甚だ遺憾である。

話を戻すが、現代魔法の先進国としてのプライドと世界最強を自負しているスターズのプライド……その捨てきれないプライドのせいでこの国が割を食っている事実は本当だし、いくら戦略級魔法を無力化したいからって大統領の「友人」を襲撃した事実も本当のこと。そもそも、第二次大戦後に法を押し付けた側が法を破るという自分勝手さには呆れて物も言えない。

旧合衆国とＵＳＮＡは違うと異論を唱える者も出てくるだろうが、自分勝手な理屈で他国を脅かしている時点で〝同じ穴の狢〟でしかない。

結局のところ、お互いの理屈でぶつかり合っているのは事実だが、力を持てばパワーバランスの調整という大義名分を掲げて干渉してくる時点で法治国家の看板を即刻降ろすべきだ、と思ってしまうのは自分だけなのだろうかと自問したくなっていた。

現代魔法の発祥が旧合衆国――ＵＳＮＡなのは事実だが、それを盾にして〝世界の管理者〟を自称していることに内心呆れていたせ

いか思わずタメ口になっていたことに対し、元と千姫は揃って苦笑を浮かべた。
「それだけ悠君の魔法は世界を揺るがすということですよ」
「とは言われましても、世界の治安を脅かすつもりなんて皆無に近いのですが」
そもそも、横浜の件だって火種を先に蒔いたのは新ソ連であり、こちらの最後通告を無視した上での対処。加えて〝イグナイター〟に『トゥマーン・ボンバ』まで使われた身としては、今すぐ新ソ連に損害賠償を支払わせたいぐらいだった。
勝手に恐れて、その上勝手な都合で軍人魔法師を送り込んでくる……これを好意的に解釈できるとしたら、一体頭のネジが何本飛ぶぐらいの狂いっぷりが必要なのだろうかと思う。世界は身勝手国家の都合の良い様に出来てなどいないと一体いつになったら理解できるのだろう。
そんなんだから原作でも「ディオーネー計画」をでっちあげて達也を宇宙へと飛ばそうと考えたのだろうが、下手に深雪という一種の制御装置から離れた戦略級魔法師がどういった行動を起こすか……考えるだけでもロクな未来などなさそうである。
その気になれば『マテリアル・バースト』の衝撃波で木星を公転軌道上から離脱させて地球にぶつけることも可能だろうと思う。正気の沙汰じゃない神業の領域だろうが、達也ならやりかねないと思ってしまうのは自分だけなのだろうか。
「そういえば、USNA側の反応はどうなりましたか？」
「上泉殿――義兄様から聞いた話では軍部を抑えるように大統領が命令を下したそうですが……軍の上層部はプライドが高い様で、どちらの任務も続行されるようですね」
「……スターズどころか、USNAはそのくだらないプライドという〝泥船〟と共に沈むつもりですか？」
戦略級魔法の術者の特定及び無効化。そしてパラサイトの追跡任務。そのどちらも任務は続行されると千姫は剛三から聞き及んだ。ある意味人間を辞めた側の自分が言うのも変だが、人としての正気を

疑わざるを得ない選択だろう。
　話し合いが一区切りついたところで悠元は先に退出した。それを見届けた後、千姫は元に向き直って話を続けた。
「元殿、『護人』――――神楽坂家と上泉家は今回の件に関してＵＳＮＡの力を当てにしない方針で変わりありません。無論、それは師族会議も含まれる形です」
「当然でしょうな。私の娘も上泉家の古式魔法を会得しているとはいえ、相手が相手ですから」
　十師族の一角に対して厳しい言葉なのは間違いないが、元もその認識に違いはなかった。
　相手が精神の領域にいる以上、現代魔法で対抗するとなれば精神干渉系魔法の類になってしまう。それを理解しているからこそ、元は悠元の提案を受け入れて本屋敷の地下にある設備の使用許可を与えていた。
　千姫の言葉に対し、元は険しい表情を見せつつも言い訳や否定などは一切しなかった。
「悠君は機を見た上で一網打尽にするようですが……先程の言葉が事実ならば、エクセリア＝クドウ＝シールズが悠君の障害になりうるかもしれませんね」
「魔法科高校でのことは私も聞き及んでいますが、現状において対処可能なのが彼しかいないのも事実なのでしょう」
　前世での悠元に起きたことを知っているのは元と……剛三と千姫の三人だけ。普通ならあり得ないであろう経験を彼がしていることに驚いたのは言うまでもない。そもそも魔法師が恋愛結婚など極めて難しいため、その経験など皆無に等しい。剛三と千姫も伴侶を亡くしているが、半ば政略結婚の形だった。
　あの〝アンジー・シリウス〟よりも上の実力者を抑えるとなれば、間違いなく悠元以外は対処するのが難しい。達也でも可能かもしれないが、その場合は『分解』や『再成』という異質な力までバレる恐れがあり、その後のデメリットが大きくなる。
「彼女が好意的ならば、ＵＳＮＡとの取引でこちらに引き込むのもあ

りなのですが」
「また悠元が溜息を吐く材料が増えるだけかと思われますが……」
ちなみにだが、元は千姫から悠元の婚約者候補が五人いることを既に聞かされていた。四葉家（深雪・夕歌）と北山家（雫）、伊勢家（姫梨）に四十九院家（沓子）……神楽坂の係累であるとはいえ、十師族と百家からも嫁を迎えることになるのは流石の元も苦笑を禁じえなかった。
現行の民法では複数の妻を持つこと自体禁じられているが、そのあたりの問題は神将会に所属することで解決済みだと千姫は説明する。
神将会の役目は極めて技量の高い魔法師部隊というだけでなく、その後継者育成も含まれている。世界的に優れた魔法師を生み出すので苦心している以上、戦略級魔法師クラスの遺伝を継がせることが最も効率的な方法とされている。
そのため、民法上の縛りも神将会の面々には適応されない超法規的措置が取られている。流石に近親等での婚姻などといった医学的な問題――魔法師の力を損なうような禁忌に触れる事項はアウトであるが。
「内密ではありますが、五輪家からも澪さんを悠君の婚約者にと打診されていますから。現状は沈黙を保っていますが、一条家と七草家も機に乗じてしてくるのかもしれませんね」
「ありえなくはないでしょうな」
五輪家の長女もそうだが、一条家の長女や七草家の三女も悠元に対して好意的な感情を持っている。加えて、七草家の長女が悠元に対して積極的なスキンシップをしていることも人伝に聞いている。
千姫が悠元の婚約者に関しての推測を述べると、元もその言葉に軽く頷いて肯定した。婚前交渉もとい既成事実についても聞き及んでいるが、これに関しては元も似たような経験があったために否定する材料がなかった。
「この間の正月も三人を相手にして平然としておりました。この分だとまだまだいけるかもしれませんね。寧ろ婚約者たちが大変ですよ」
「……はあ（やはり、血は争えんということか……すまないが頑張って

くれ、悠元）」

誰にも言えない秘密だが、元もそれなりに性欲が強い……結果として、今代の三矢家は七人の子宝に恵まれた経緯がある。その意味で彼は自分の息子なのだろう、と元は悠元に対しての謝罪も含むかのような溜息を一つ吐いたのだった。

英雄と戦略級魔法の天秤

ＵＳＮＡこと北アメリカ合衆国の首都、ワシントンＤ．Ｃ．にある大統領官邸――――ホワイトハウスの大統領執務室。部屋の四方にはＳＰが見張る厳重な警備体制の中、ソファーに向かい合う形で座っているのはＵＳＮＡ大統領と……一人の女性であった。

「例の逃走者絡みで多忙の中、本当に申し訳ないバランス大佐」

「いえ、閣下直々のお呼び出しとなれば断る理由などありませんので」

その女性――――ヴァージニア・バランス大佐は３０歳代後半だが、それをあまり感じさせない颯爽とした〝お姉さん〟。世界群発戦争の影響で人口が激減したとはいえ、未だに男性優位の気質が残っている政治家や軍人の中で女性官僚の存在は珍しい。

だが、彼女を珍妙な眼で見ることなどできはしない。それは彼女の役職――――ＵＳＮＡ統合参謀本部情報部内部監察局第一副局長。制服組・私服組問わず軍の不法行為に目を光らせる内部監察局のナンバー・ツー。

大統領が彼女を呼んだのは、彼女の上司である局長に余計な負担を掛けないことに加えて大統領自身がバランス大佐の父親と知己であることに起因している。更に付け加えるならば、この後の対処を的確に行える人選として〝適切〟だと考えたからだ。

「バランス大佐。ここだから話すが、私は２年前の時点でマイクロブラックホール生成・消滅実験の危険性を示唆されていた。このことはセリアもといポラリス中佐にも伝えている」

「……一体何方がその可能性を？」

バランス大佐は大統領の言葉に驚く素振りを見せなかったが、内心は驚きを隠せなかった。あの実験自体未知数の不安要素が多く、過去にも何度か実験の最終許可にまで至ったものの、結局は実施されずに頓挫したままであった。

「ミスター剛三だ。あの人から釘を刺されたときは半分与太話かと思っていたのは否定しない……だが、忠告を破った結果がこれとは、正直自分を殴りたくなったよ」

最終的に実験の許可を出したのは大佐の目の前にいる大統領だが、当時の世論や軍に対するシビリアンコントロールを考えれば止むを得ないと判断してのこと。だが、それは最終的に彼の知己であり先の戦争の英雄たる人物の忠告を無視した。

そのツケがこういう形になったのは「自業自得」という他ないと大統領はそう言いたげながらも言葉を飲み込んだ。

「そのミスター剛三から手紙が届いた。内容は……〝我が国の護りである戦略級魔法を脅かすような行動は直ちに慎め〟とな。加えて、彼の孫からも同様の手紙が届けられた」

「その口ぶりからするに、そのお孫さんとは面識がおありなのでしょうか？」

「ああ。2年前のアンジー・シリウスの件だが、その孫が彼女を倒した張本人だ……彼の今の名は神楽坂悠元。私が尊敬と畏怖を込めて『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』と呼んでいる人物だ」

大統領が悠元の名を口にしたのは、彼が魔法を使わずに自身を組み伏せたことだけではなく、アンジー・シリウスですら手に負えない相手である以上はこちらから刺激するような行動を慎むべきだという意図を込めてのこと。

神楽坂悠元のことは大佐も存じていて（パーソナルデータや調査結果の資料ではあるが）、今回のスターズを含めた日本への軍派遣の際、戦略級魔法師に関する被疑者調査の中で最も可能性の高い人物としてリストアップされていた。

しかも、間の悪いことに大佐が大統領から呼び出しを受ける直前に大事な報告を受けてしまった。それも、その彼のことに関してだ。

「閣下。その神楽坂悠元の事なのですが……ポラリス中佐が交戦し、彼に敗れたそうです」

「……最悪だな」

大統領がそう零したのは色々な事情がある。自身の孫娘と恩人の孫が対立してしまったこともそうだが、先程言い放った言葉が意味を成さなくなったことも大きい。

正直なところ、剛三の魔法によってホワイトハウスが更地になって

いないだけ彼がまだ有情である、と出来れば楽観視したいのだが……そうも言ってられなくなったと内心で独り言ちる。
「許可してしまった私が言うのもなんだが、この状況は決して好ましくない。〝イグナイター〟が一旦モスクワに戻ったという未確認情報のこともあるが……バランス大佐、私の代理人――――ＵＳＮＡ政府の特使として日本に行ってほしい」
「閣下、本官は政治家ではなく軍人なのですが」
「無論分かっている。だが、シリウス少佐やポラリス中佐を抑えられる人選となればかなり少ないことぐらい大佐が一番理解しているだろう」
　正直なところ、軍人に政治家紛いのことをさせるというのは〝お門違い〟だろう。だが、今回のウェイトは主に戦略級魔法と例の逃走者という要素があることに加え、その対処で派遣した軍関係者を確実に制御できる人選でなければならない。
　無論、同盟国間の国際問題となれば大統領自身が出向くべき件なのは間違いないが、現状の国内も安定しているとは言い難い。逃走者の件のみならず、東海岸を中心に起きている反魔法主義の運動も抑え込まなければならない。
　なので、リーナとセリアにとっては上司となり、尚且つ内部監察局の人間となれば大統領にとって実に都合のよい人選となる。
「国防総省（ペンタゴン）の連中は『グレート・ボム』や『シャイニング・バスター』のことで躍起になっているようだが……私はそれよりもミスター剛三の魔法が一番恐ろしい」
「と、仰いますと？」
「昔話だが……当時の私は、魔法こそ使えないが軍人だったのは大佐も承知しているだろう」
　大統領は世界群発戦争の際、軍人として戦い……そして生き延びた。新ソ連との戦闘では最前線に送り出される形となったが、その際に彼は剛三の戦略級魔法を目の当たりにしていた。剛三の放った魔法――――戦略級魔法『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』（剛三は戦略級魔法の有無については伏せていた）を目撃した時、当時の彼の心には剛三に対する畏怖

のようなものが芽生えたと口にした。
「『我が国に害を為さぬ限り、この力を貴国に揮うことはない』……正直なところ、私が今こうして生きていること自体ミスターに命の手綱を握られているようなものだ。仮に核シェルターに避難しようと、彼の魔法の前では意味を成さぬであろう」
　この世界において上泉剛三の名を知らぬものはいないに等しい。その彼の力は各国でも警戒対象のレベルに入るが、拘束することなど出来ない。何故ならば、魔法抜きでも達人クラスの武芸者であり、その彼を師と尊敬している者は世界各地に数多く存在する。
　剛三を拘束するということは、世界各地の有力者全てを敵に回すということ。国際魔法協会にも彼のシンパはかなりいるため、剛三を止められる勢力は殆どいない……身内を除けばの話になるが、そのことは大統領とて知らない事実。
「話を戻すが、ただでさえ東海岸の反魔法主義が活発になっている状況で私がこの国を離れるわけにもいくまい。例の逃走者の仲間が潜伏している可能性を考えれば……なので、君を呼んだというわけだよ、大佐」
「本官がその仲間だとは疑われないのですか？」
「大佐に関しては問題ないだろう……私はそう判断させてもらった」
　大統領の言葉の裏にはバランス大佐に対する信頼もある。一応マイクロブラックホール生成・消滅実験当日のアリバイや逃走者らとの接触がなかったかどうかの事前調査は済ませており、メディカルチェック自体もパスしている。
　１００パーセント信用できるという訳ではないが、限りなく可能性が低いという賭けに近い状態。それでも大統領は大佐に今回の事態の収束を頼むこととした。
「それと、『ブリオネイク』および『レーヴァテイン』の使用許可を私の名で出しておく。それで逃走者に対処できるとは思えぬが……罷り間違っても彼やその関係者に対して使用することは禁じる」
「……分かりました」
　大統領の言葉からするに「神楽坂悠元に対しての攻撃はするな」と

いう忠告を含んだもの。先日の戦略級魔法の件では最重要人物とされているだけに、その人物がもし戦略級魔法を有しているとすればＵＳＮＡにとっての脅威となるのは明白。
それを差し引いてでもこの国が負うべき代償のほうが大きくなるという意味を含めた言葉に、バランス大佐はただ頷くことしかできなかった。
◇　◇　◇
海の向こうではそんなことになっていると露知らず、慌ただしい週末が過ぎて月曜日となった。現時点で襲撃されることを想定しているのは悠元と……この間の可能性を考えればセリアぐらいだろう。
とはいえ、彼らからすればチャールズ・サリバンと融合していた存在を失った（厳密にはアリスという存在に変質化した）以上、慎重に事を運ぶだろうとは思われるが……そんなことを考えていると、丁度廊下でセリアと出くわす形となった。
あの一件から久々に出くわすとはいえ、セリアの表情は友好的とは言い難いものだった。
「……悠元、恨みますよ」
「なぜ恨まれるのか理解できないんだが？　そもそも、セリアとは魔法実習以外で負かした覚えなどないんだが」
「う、そ、それは……」
悠元は知らぬ存ぜぬといった表情をしているが、セリアからすれば既に正体がバレている前提で物事を考えていた。とはいえ、「エクセリア＝クドウ＝シールズとセリア・ポラリスが同一人物」という事実は軍事機密に抵触するため、下手なことを言って第三者に聞かれるのは非常に拙いこともセリアは理解している。
恨まれるとすればこの前の出来事だが、こちら側とて大人しく殺される筋合いなどない。戦略級魔法が生み出されること自体を〝世界の脅威〟として勝手な論理（ロジック）を振り回すステイツに世界の調和を考える頭脳は備わっているのかと問い返したい。
「負けず嫌いは結構だし、俺も再戦は吝かではない。だが、俺自身の生殺与奪に関わるとなれば話は別だ……と、どうやらここで押し問答を

繰り広げても意味はなさそうだ」
「ええ、そうみたいですね……悠元はどうされるつもりですか？」
　ここで「魔」の気配を感じ取った悠元の言葉にセリアも頷いた。恐らくは魔法科高校の防御術式に引っ掛かる形で反応したのだろう。すると、セリアが悠元に問いかけた。
「仮定の話になるが、今のお前が連中の引き渡しを求める権利はないからな」
「貴方にはあるというのですか？」
「この国に来た以上、お前らの国の法は特定の場所以外通用しないってことぐらい理解してると思うが……俺にはそれがあるとだけ答えておく」
　悠元はセリアの答えを聞くこともなく振り返ってその場から走り去った。曲がり角を過ぎたあたりで悠元は通信機を取り出し、深雪に繋げる。
「深雪、先程の反応は掴めたか？」
『はい。お兄様も感じ取ったようですが……まさか、先日の件と関係が？』
　深雪からすれば先日のサリバンの件で感覚を知っていたから分かっていたが、よもや達也も霊子波を感じ取れるぐらいに成長していることを考えれば、かなり大きな進歩と言えるかもしれない。
　今はそう喜んでいられるような場合ではないが。
「非常事態と考えていい。構成は……達也と深雪が前面に出て、レオ達にはバックアップを頼んでほしい」
『悠元さんはどうされるおつもりですか？』
「この状況で連中が余計な横槍を入れないとも限らない。俺が学校周辺の警戒網を敷き、姫梨と佐那にも手伝ってもらう」
　相手の気配検知は現状〝1体〟ということは確認済み。だが、既に仲間を1体失っている以上は無茶を犯してでも防御術式を破ってくるかもしれない。そうなると現状の面子で対応できるのはかなり限定されてしまう。なので、古式魔法に精通している悠元と姫梨、佐那で対応する。

幹比古をパックアップに残したのは、達也と深雪のフォローを考えれば妥当な人選だと考えたからだ。それに、悠元の持つ『霊魂霧散（スピリット・ディスパージョン）』は現行の現代魔法からすればかなり突出した対抗術式のため、人前でおいそれと使えない代物。克人や真由美はともかくとして、リーナやセリアには見せられないものだからだ。

一方、ＣＡＤの調整も兼ねて実験棟にいた燈也も「魔」の気配を感じ取っており、しかも間の悪いことに実験棟近くに停まっているトレーラーから感じ取ったのを燈也は見逃さなかった。

（この気配は……六人いますが、そのうちの一人は〝冷たい気配〟……もしかして、これが〝パラサイト〟でしょうか？）

いくら十師族とはいえ、魔法師ではなく魔物を相手にするなど初めてのこと。六塚家で極めて特殊な能力を持つ燈也は自身の技能から人間の存在を探ったところ、トレーラーの近くにいるであろうマクシミリアン・デバイスの社員のうちの一人から人間のものとは思えない気配を感じ取った。

魔法科高校に態々入ってくること自体〝自殺行為〟に近い筈だというのに……そこで燈也は頭を横に振って長考の姿勢を崩した。もしかすると、そのパラサイトは仲間を増やすべく魔法科高校に潜入した可能性もある。

そうなれば、霊子波を感じ取れない魔法師が餌食になる可能性もある。燈也は調整を終えたばかりのＣＡＤを手にすると、そのまま冷たい気配のするほうへと足を向けた。

変わる流れ、変わらぬ流れ

燈也は物陰からトレーラーの様子を窺っていた。すると、六人のマクシミリアン・デバイスの社員――その一人に近づいて声を掛ける人物がいた。

それがリーナだということにさほど時間は掛からなかった。というか、同じクラスメイトである上に何かと話題の尽きない彼女は一応警戒しているようだが……その女性が危険の高い人物だということに燈也は内心で溜息を吐いた。

(彼女がパラサイトと融合していることに気付いていないのでしょうか……まあ、無理もありませんね)

燈也も自分自身のことを十全に理解しているとは言い難い。何せ、燈也のその能力も固有魔法も自身の危機的状況から火事場の馬鹿力みたいな引き出し方で会得した力だ。だが、そのお陰で自分自身の周囲に対する警戒も出来るという訳だが。

すると、燈也の視線の先で二人に割り込んだのは先行する形となったエリカ。間髪入れずに放たれたのが幹比古の結界術式だということに左程時間は掛からなかった。遅れる形でレオ、幹比古、美月もその場に姿を見せた。エリカの目にも止まらぬ刃はその女性――リーナが「ミア」と呼んだ女性の胸を貫いていた。

リーナはどうやら通信機で知り合いと連絡しているようで、その内容は聞き取れないが……彼女の言葉からするに、彼女が吸血鬼の正体であることは間違いない様だ。

(容赦ありませんね……いや、これでも死んでいるとは思えませんが)

「燈也、状況は?」

「達也に深雪ですか。まあ、見ての通りだと言うしかありませんね」

燈也の表情は楽観視出来る状況ではない、とでも言いたげだった。これには視えている達也が一番理解できていた。深雪は達也ほどでないにしろ、ミカエラから感じられる霊子波に揺らぎがないことを感じ取っていた。

それを指し示すかのように、エリカが確かに貫いたはずの胸の傷が

瞬時に塞がっていたのだった。
「悠元はいないようですが……」
「悠元さんは吸血鬼の仲間を警戒しております。なので、私たちだけで対処しなければいけない形です」
「そうですか……達也に深雪、僕がこれからすることはお二人の秘密にしてくださいね」
「……ああ、分かった。深雪、動きを封じてくれるか？」
「畏まりました、お兄様」
何をするのかは不明だが、燈也の言葉を信じる価値はある。達也が頷いたのを見て、深雪はＣＡＤを操作して照準をミカエラに向けた。
「――『零点銀世界（ゼロ・ニブルヘイム）』、発動」
深雪の放った『ゼロ・ニブルヘイム』はミカエラを起点として２メートルほどの氷柱が形成された。それを確認すると、燈也はＣＡＤを操作して魔法を放つ。その魔法は燈也のみが使用することのできる〝姿無き凍る炎〟。
「ナイスです、深雪――『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』」
精神干渉系魔法『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』――燈也のみが使うことのできる固有魔法であり、その効果は想子を導火線として精神体を燃やしたり凍らせたりすることが出来る――精神に対する〝熱量操作〟を起こす魔法。
４年前の佐渡侵攻では〝外傷のない死体〟が数多くあり、それを成したのは他でもない燈也である。そのお陰で佐渡侵攻の真犯人たる存在の特定に結びついたのは言うまでもないことだが。
燈也は融合している女性の本来の精神を凍らせ、憑りついているパラサイトを燃やす。いわば精神干渉系の『氷炎地獄（インフェルノ）』とも言うべき魔法に、達也は燈也の述べた理由も自ずと察しがついた。とはいえ、約束を結んだ以上は追及することなど御法度なので何も言わずにいた。
「上手く出来ている自信はありませんが……合流しましょうか？」
「……二人とも、防御を！」
達也の言葉で燈也と深雪は想子シールドを展開した。すると、まばゆい光と共に氷柱が砕け散り、ミカエラはその場に倒れこんだ。だ

が、肝心の「魔」の存在は気配すら感じなくなっていた。
達也は三人の中で一番気配を感じ取れる深雪に尋ねるが、深雪は首を横に振りつつ達也の問いに答えた。
「……深雪、どうだ？」
「分かりません。逃げられたのかもしれません……」
深雪で感じ取れないとなれば、かなり高度な隠蔽を会得しているのか、それとも……ともかく、今ここで出せる結論ではないと達也は判断した。
「やはり、パラサイトに対する戦闘経験が圧倒的に足りませんね」
「燈也と深雪は悪くない。寧ろ適切な対応だったと思う」
学校の周辺は悠元と姫梨、佐那が警戒している。その手練れを掻い潜れるとはとても難しいだろう。それこそ、彼らが意図的に泳がせたり見逃したりしなければ、の話だが。それに、達也からすれば深雪の本来の力を隠すだけでなく、燈也の事情も黙ることにつながる。
「まあ、今回のことはお互い胸の内にしまっておこう。〝十師族〟も大変だからな」
「……ああ、成程。そういうことですか……姉の気持ちを考えると複雑ですよ」
燈也の姉――――六塚家当主こと六塚温子が憧れというか真夜の熱狂的なファンなのは事前に聞き及んでいた。達也の言いたいことを自ずと察してしまった燈也の苦笑交じりの言葉に、それを見た深雪は思わず苦笑を漏らしたほどだった。
◇　◇　◇
パラサイトが消失した――――この事実は周辺の警戒をしていた佐那も驚いていたが、姫梨は溜息を吐きつつ近くにいた悠元を見やっていた。美月の『水晶眼』すら欺いたとなれば、４年前に〝不可視の戦略級魔法〟を使った悠元以外有り得ないと判断していた。
「――――手助けしたのですか？」
「すぐに排除できなくはないが、変に警戒されて自爆特攻なんてされたら困るからな」
想定していた以上に深雪の『ゼロ・ニブルヘイム』と燈也の『ニブ

ルヘイム・フレア』が対パラサイトにおいて強力な対抗魔法となっていたことは置いておき、リーナはともかくセリアまで介入して事態を引っ掻き回されるのは御免だった。
　なので、悠元は姫梨と佐那を吸血鬼の仲間を近寄らせない名目で達也らと別行動をとらせた。無論、この名目も大事な目的なので嘘は何一つ言っていない。すると、周囲の脅威が去ったと判断して佐那が戻ってきた。
「戻りました……悠元さん、あのパラサイトを助けたのですか？」
「お前らは揃って勘がいいな……まあ、上手く誘導したから見つかる可能性は極めて低いが、深雪あたりから色々追及はされそうだよ」
　弱ったパラサイトは上手い具合に「ピクシー」へと乗り移った。原作の準拠と改変が入り混じった状態だが、現時点の状況だけで見れば他のパラサイトから切り離すことに成功したとも言えよう。
　だが、セリアが何もしないとは限らないため、実験棟自体にも特殊な結界術式を施している。『万華鏡（カレイドスコープ）』をベースにした結界術式のため、かなり繊細なレベルで想子や霊子を感じ取れる人間でないと発見は出来ないだろう。
「さて、そろそろ事態の収束ということで動きますか」
　悠元はそう述べると、重力制御術式を用いて実験棟の近くに停まっているトレーラーの上を中継点としつつ地面に降り立った。周囲の状況はといえば、氷柱の爆発で戸惑っている面々が多い。そこには無論リーナも含まれる。
　そのことをあまり気にするまでもなく、悠元はミカエラを肩に担いだ。すると、そこに姿を見せたのはセリアだった。
「悠元、ミアをどうする気なの？」
「どうするって……彼女はこの混乱を齎した〝被疑者〟だ。それとも何か？　お前にはそうするだけの権限がＵＳＮＡ政府から与えられているのか？」
「っ……それは……」
「それに、魔法監視システムの録画を切っているとはいえ、この状況を放置すれば野次馬が殺到しかねない。そうなれば余計に混乱するだ

けだ」
いくら外側からの眼を誤魔化しているとはいえ、第三者がこの状況を見れば直に噂が広まってしまう。ここでセリアがミカエラの身柄保護を主張したところで、国策機関である魔法科高校で最も優先されるべきはこの国の法律。
魔法科高校では〝エクセリア＝クドウ＝シールズ〟であることに加え、達也らがいる前でスターズのナンバー・ゼロ〝セリア・ポラリス〟を明かすことはＵＳＮＡの軍事機密を明るみにする最大のデメリットが生じる。こればかりはＵＳＮＡ軍上層部や政府が許容しないだろう。
その反面、悠元の場合は神楽坂家当主代行兼「神将会」第一席という事実を達也たちに明かしている。リーナとセリアにバレるデメリットは生じるが、それも一つの取引材料として見込むこともできる。
「というわけで……達也に深雪、それと燈也もそこにいるんだろう？」
「流石だな。今回は特に出番もなかったが」
「何事も平和に終わるのが一番だよ。てなわけで深雪に燈也、午後から授業を休むので事情を説明しておいてくれ」
「……分かりました、悠元さん。でも、罷り間違ってその女性を惚れさせないでくださいね？」
この状況でそんなことを言いのけてしまう深雪に対し、先程までの緊張感がすっかり消え失せていた。その言葉を聞いた達也はというと、深い溜息でも出そうなほどに疲れたような表情を浮かべていたのだった。せめてもの救いは、深雪が嫉妬で魔法を暴走させて魔法科高校が氷の城にならなかったことぐらいかもしれない。
◇　◇　◇
結論から言えば、この一件は大きな尾を引く形となった。無理もないことだが、人ならざる者（パラサイト）の侵入を許す形となったためだ。細かい事情を知らぬ身からすれば〝傍迷惑〟という他ないものだが、魔法科高校――その母体である国立魔法大学としては政府に厳重な抗議と申し立てを行うに至った。

国内外での因果関係は現状伏せられたままであることに加え、政府としても同盟国であるＵＳＮＡを下手に刺激したくない思惑が見え隠れしていると思われる。
加えて、魔法科高校側の対応は至って事務的なものとなり、被疑者となってしまったミカエラ・ホンゴウは上泉家系列の病院――――精神治療専門の病院へと移送される形となった。本人の記憶はパラサイトと融合していた関係でかなり混濁しており、パラサイトからの支配からは脱したものの暫くは治療と経過観察が必要と判断された――――というのが師族会議や外部への説明である。
悠元が引き渡す前に『天陽照覧』でミカエラの精神を治療しているが、アリスの前例もあるためにかなり慎重に対象の時間を選び取った。前の一件の際はパラサイトを一度消し去った上で発動したが、今回は分離した状態でミカエラだけを対象に選んでいる。
この違いがどういった影響を及ぼすかは現時点で不明という他ないのだが。
そのミカエラ・ホンゴウのことなのだが、悠元が一連の事情を話したところ……燈也にお礼を言いたいと申し出てきた。その際に頬を赤く染めているのを見て、恋愛的感情にまで影響を及ぼしている可能性を感じ取った。
事情を聞くに、心の奥底に深く沈んでいたミカエラの心を引き上げてくれた少年の姿を見た、とミカエラは述べた。しかも、その特徴が燈也のそれと全て合致していたのだ。魔法が不可能を可能にするための力とはいえ、人を惚れさせるあたりは流石十師族の直系だと内心で呟いた……それを自分が言えた台詞ではないが。
エリカ達はやや不完全燃焼といった感じだが、パラサイトを相手にするにはまだ不十分であることぐらい理解していた。なので、三矢家での訓練はそのまま続行される形となった。達也は九重寺に通いつつ「遠当て」の練習に励んでいた。燈也の『ニブルヘイム・フレア』を〝視た〟ことで何かを掴んだらしく、八雲も達也の上達ぶりには感心していた。
ただ、八雲曰く「それでも剣術に関しては悠元君が数段も上になる

だろうけれどね」とのことだった。一応数年は剛三のもとで修行を積んだ身なので、それを簡単に越されるのは心に来るものがあると思う。

「――――仕方ない」

本来は殺す意図などなかったが、パラサイトの行動・憑依パターンを見たいという千姫の要望でほぼすべてのパラサイトが憑りついた宿主を殺した。パラサイトが憑依した相手に『極凍雲散霧消（フリーズミスト・ディスパージョン）』という試作中の魔法を使用し、相手が自爆行為に至らせないようにした。

『フリーズミスト・ディスパージョン』は本来分解で生じる熱量を全てベクトル反転でマイナス化させ、原子単位で全凍結させるという現代魔法の範疇を超えた原子凍結分解魔法。これが精神体に与える影響は全くの不明だが、その魔法はアリス曰く「マスターの影響で多少のダメージを与えることには成功している模様です」とのこと。

なお、ピクシーに憑依したパラサイトについてはそのまま放置している。現時点で今後の脅威となる可能性は極めて低いと考えているが……それが変わった場合はその時に対応するしかないだろう。

◇　◇　◇

その影響は日本側だけでなくＵＳＮＡ側でも起きていた。大使館はアンジー・シリウスを呼び出して証人喚問をしようかと考えていた矢先、一人の女性――――ヴァージニア・バランス大佐がそれに待ったをかける形となった。

リーナは暗い面持ちとやや重い足取りで大使館の門を潜ると、そんな様子のリーナにバランス大佐が声を掛けた。

「気の進まない様子だな、少佐」

「え……た、大佐殿⁉　失礼いたしました!!」

「気にするな、という方が無理か。さて、いくら大使館内とはいえ立ち話も宜しくないので中に入ろう」

内部監察局のナンバー・ツーであるバランス大佐がここにいることなど想定していなかったため、リーナは慌ててその場に直立して敬礼した。その様子に対して少し笑みを見せつつ大佐はリーナに大使館の中へと入るよう促した。

なお、大使館がセリアを呼ばなかった理由は単純明快で、軍上層部のみならず政府高官の間でもセリアの存在は取扱危険物と同等の扱いにされている。もしリーナと一緒に呼んだ場合、セリアが怒りのあまり大使館ごとなくなる可能性があったためだ。

大げさに聞こえるかもしれないが、非魔法師からすれば魔法師の存在自体が怖いものであり、意思のある兵器のようなものと言っても過言ではない。

政と軍の温度差、脚色された機密

リーナからすれば、大使館に呼ばれたこと自体不服に近いものがあった。そこに姿を見せたバランス大佐の案内で通された応接室のソファーに大佐が先に座った。軍人としての上下関係からか、リーナはソファーに座らず直立していた。

「少佐、座るといい」

「は、はい。失礼します」

少し落ち着かないリーナの様子に、バランスは彼女の気持ちも理解できなくはない、と内心で呟いた。

この国の戦略級魔法である『グレート・ボム』と『シャイニング・バスター』なる魔法についてはＵＳＮＡの覇権を揺るがす最大限の脅威として認定していた。そのことだけでも重要な任務だが、逃走者を逃すどころか派遣メンバーの中にパラサイト〝感染者〟が紛れ込んでいただけでも大事だ。

現に大使館の連中はリーナの責任を問おうとしていたが、バランスはそのことを一切の不問に付すつもりでいた。ただでさえ現代魔法の権威であるＵＳＮＡで対処できる範疇を超えてしまっただけでなく、下手をすれば世界中から非難の目を向けられる可能性が浮上したためだ。

「さて、少佐は先日のことについての呼び出しだと覚悟しているようだが……その件については私の一存で不問に付す。このことは大統領閣下もご了承なされている」

「だ、大統領閣下がですか!? す、すみません……」

「謝る必要はない、少佐。今回の私の来日は大統領閣下の意向を受けてのものだ」

リーナの驚きに対して窘めつつ、そう切り出した上でバランスは今回の来日の目的を説明する。ＵＳＮＡ政府の全面的な意向を受けての特使の派遣――その矢面に立ったのがバランスという説明をすると、リーナは驚きを隠せずにいた。

「少佐。何か聞きたいのであれば、遠慮せずに質問してくれ」

「では、失礼ながら……そういうのは本来官僚が派遣されるべきだと思われますが」
「本来の筋であるならば、少佐の意見が真っ当だろう。だが、向こうの情勢が芳しくないことぐらい少佐も理解しているはずだ」
ＵＳＮＡにおいて大規模な「無頭龍（ノー・ヘッド・ドラゴン）」や「ブランシュ」の検挙活動を行ったが、東海岸での反魔法主義の運動は加熱している。そのあたりの調査は難航しているのが実情だが、バランスはそこに対してあまり触れることなく説明を続ける。
「その事情を鑑みれば、少佐やポラリス中佐をこの国に長居させることはマイナスになりかねない。よって、閣下はこの事態を早急に収束させる選択を取る形とした。『ブリオネイク』と『レーヴァテイン』も持ってきている」
「まさか、それを以て戦略級魔法師の候補を無力化せよと？」
「……大統領閣下は禁じていたが、それは表向きの話だろう（いくら軍人魔法師とはいえ、孫娘が可愛いのだろうな）」
そんなことを白昼堂々やってしまえば、スターズだけでなくＵＳＮＡ全体の非難へとつながる。ただ正体の掴めないパラサイトを葬るにしても、その二機を用いたとして対処できるか疑わしい。ただ、バランスは大統領がその二機の許可を出した理由を自然と理解していた。
何せ、『ブリオネイク』と『レーヴァテイン』はあくまでも現代魔法の範疇の中での武装でしかないのだから。
「大佐の口ぶりからするに、それが目的ではないと仰るのですか？」
「あくまでも大統領閣下の意向はな。だが、国防総省（ペンタゴン）や軍上層部は少なからず〝シリウス〟と〝ポラリス〟の名に恥じぬ結果を求めている。この状況からするに……閣下には心を痛めてもらう他ないだろう」
現に、戦略級魔法師捜索任務は最高レベルにまで引き上げられている。大統領の特使として来日したバランスにも「戦略級魔法師の捜索及び現地駐在武官に対する不法行為監査」の任務が与えられていた。国防の論理を理解できなくはないのだが、大統領の話を聞く限りにお

いてＵＳＮＡが置かれている状況は極めて厳しいものだと彼女は理解していた。
　大統領から直々に使用を禁じられてはいるが、軍部の連中を納得させうるだけの判断材料は必要――――その意味で大佐が一番胃を痛める中間管理職ポジションに収まってしまったことを内心で呪った。
　そのことを察したのか、リーナは苦笑を禁じえなかった。
「も、申し訳ありません大佐。私やセリアの為に……」
「いや、構わない。しかし、報告で聞いたが……ユート・カグラザカなる人物は末恐ろしいな」
「人工衛星にすらほとんど映らない、という報告を聞いたときは幽霊の類を疑いました」
「それが普通の反応だよ、少佐」
　ＵＳＮＡが誇る最新鋭の軍事衛星を用いても発見することすら困難のレベル。彼が意図的に気配を見せている時ぐらいしか捉えられない……もはやニンジャのレベルに等しいという考えを含んだリーナの言葉にバランスも頷かざるを得なかった。
　加えて、ポラリス中佐――――セリアを戦闘続行不可能の状態にした技量は〝世界最強〟の名を冠するに相応しいレベルだと判断していた。
「その彼にセリアの『レーヴァテイン』で対抗したとして……妹には申し訳ありませんが、勝てる見込みがありません」
「負けず嫌いの彼女ならば一矢報いるだろうが、それはタツヤ・シバに負けた少佐も同じ気持ちなのではないか？」
「それは当然ですけれど……」
　リーナがハッキリと答えなかったのには理由がある。
　先日の達也との戦闘において、彼の想子防盾（サイオンシールド）はスターズ屈指の実力であるリーナですら破れなかった。何せ、リーナが放った投擲榴散弾（とうてきりゅうさんだん）に対して、彼は特別なことを一切せずにシールド一枚で自身への被害を防ぎ切ったのだ。それ程の防御力など、リーナが聞いている限りでは十文字家の『ファランクス』に匹敵するのでは、とも思ったほどだ。

ただでさえ彼の魔法には不明瞭な点が多すぎるというのに、物理攻撃すら無力化する彼の防御能力に『ブリオネイク』を用いて勝てるのかどうかと言われると、リーナにも明確な答えは出せなかった。
リーナの言葉に思春期特有の感情が多少なりとも含まれていることにバランスは気付くものの、任務を遂行する上で従順過ぎるリーナには逆上させかねないだろうと判断して追及を避けた。
「……準備が整い次第、『質量・エネルギー変換魔法』および『シャイニング・バスター』の術式もしくは使用者の確保を最優先任務として実施する。ポラリス中佐には貴官から伝えてくれ」
「了解（イエス・マム）。ちなみにですが、マーキュリー准尉についてはどうなるのでしょうか？」
「本来の筋ならば本国に帰還させるのが正論だが、感染の有無について向こうで判断できない以上はこの国に止まらせることがまだ妥当だと上層部は判断したようだ」
言い換えるならば、この国の国力や派遣した面々が多少犠牲になろうとも構いはしないという判断。これにはバランス大佐が内心で軍上層部の考えを酷く呪った。この国がいくら潜在的な敵対国と言えども、ＵＳＮＡと同盟国なのは事実。ただでさえ先日の魔法科高校における一件でもＵＳＮＡ政府と大使館が抗議を受けてしまった。その苛立ちをリーナにぶつけようとしていたのは言うまでもないが。
下手すれば感染している可能性は捨てきれないものの、もしもの時を考えればリーナとセリアが抑止力になると見越しての判断だろう、とバランスは推察した。
◇　◇　◇
――西暦２０９６年２月上旬。
その凶報ともいうべき情報は海の向こうから届けられた。まるで日本が朝になることを見込んだ上での情報の流し方には違和感しかないだろう。
「これは……悠元さんが教えてくれた情報ですよね？」
「大分脚色しているのは言うまでもないがな」
マイクロブラックホール生成実験を行ったことと、それに付随して

パラサイトをこの世界に招いてしまったこと、それに憑りつかれた魔法師が被害を及ぼしていることは紛れもない事実。ただ、軍内部からの告発とされるニュースでは大分脚色が混じっており、最終的に魔法自体が国力に直結する今の情勢は決して宜しくないという反魔法主義への意識誘導で締めくくられていた。

これだけの機密を手に入れられる人物となればかなり限定されるのは間違いない。何せ、悠元ですら『八咫鏡（ヤタノカガミ）』を用いて情報を得ているのだから、世界最高レベルのセキュリティーを軽々抜くことのできるツールを持っている人間であるのは明白だろう。

「リーナやセリアには聞いてみる必要があるかもしれないが……USNAの連中ももう少し踏ん張ってほしいと思うわ。ま、非魔法師が人口の大半を占める以上は避け得れないが」

「辛辣だな、悠元」

「現代魔法の最先進国を謳っているということは相応の責任が伴う、というだけの話だよ」

政治家が人口の大半を占める非魔法師の世論に配慮しなければならない理屈は分かる。だが、それで魔法師を追い出すような風潮を作れば核兵器の拡張競争に逆戻りしかねない。非魔法師でも使える対魔法師兵器が出てくれば違うのかもしれないが、それはそれで新たな火種となりかねない。

結局のところ、力というものは相応の責任と義務が生じてしまう。とりわけ魔法と軍事が関わっている以上は尚更だろう……魔法の体系化以前から民事と軍事が表裏一体の性質を持っている以上は切っても切り離せない問題だが。

「……達也。深雪には『神将会』絡みで話していることだが、春先からの一連の事件は四葉絡みだ。正確には二人の祖父である四葉家先々代当主とうちの爺さん絡みだが」

「叔母上絡みの？　そうなると、連中の黒幕はあの事件の残党ということか？」

「まあ、広義上はそうなる。黒幕の弟子で実行犯である人物の名は周公瑾（しゅうこうきん）――三国志の著名人を連想させる名だが、彼の本名らしい。

今回の逃走者の手引きをしているのも彼が一枚噛んでいる」
　達也と深雪はその事件の詳細を知らないに等しい。四葉の現当主が人としての幸せを奪われただけでなく、七草家の現当主の心にも深い傷跡を残した事件が原因で起きたことなのだから無理もない話だろう。
　自分の場合はと言えば、剛三が当時の状況をいつか懺悔するときのために事細かく書き記していた手記を見つけてしまった。それを読んだからこそ、額縁の裏に隠されていた手紙の存在に気付いたわけだが。
「名前だけでも厄介そうな人物のようだが、排除はしないのか？」
「現状はな。ＵＳＮＡ絡みでごたごたしてるのにそんなことをしたら事態が更に逼迫する。とりわけそいつの上にあたる黒幕は『七賢人』の一角だからな」
　ＵＳＮＡに留学している修司と由夢、そして雫には反魔法主義――――「人間主義」の資金源を断つように指示を出している。あまりにも過激な組織の場合は上層部を〝抹殺〟することも指示の中に含めている。
　その文言を入れている理由は簡単で、対魔法師部隊である以上対人戦闘が避け得れないものだからだ。場合によっては国防軍の施設に踏み込んで軍人魔法師と戦闘することも視野に入れている。これは周公瑾が国防軍ともパイプを持っていることが一番の理由だ。
『七賢人』……もしかして、以前話されたエドワード・クラークやレイモンド・クラークなる人物が関係しているのですか？」
「正解。ＵＳＮＡの連中は一切掴んでいない情報だが、全世界傍受システム『エシェロン』のバックドアシステムを使うことの出来る七人のオペレーター。その一角に母上も入っていたが、俺が端末を消し飛ばした」
「お前のことだから逆に利用しそうな気もするが」
「あのな、達也……あの端末の接続先――――『フリズスキャルヴ』はオペレーターの検索履歴が全て残る曰く付きなんだ。相手にこちらの動向を掴ませる義理はないからそうした」

こちらの情報を相手に流す義理はない。だからこそ『フリズスキャルヴ』の端末を躊躇いもなく消し飛ばした。真夜の持つ端末については言及しなかったが、達也のことだから薄々勘付いている可能性は高いだろう。
「なぜそこまで知っているのかと言えば、独自の情報網から得た結果だよ。流石にその詳細は達也でも明かせないが」
「そうか」
「追及はしないのな」
「俺も下手に火の粉は被りたくないからな。深雪に危険が及ぶのならば話は別だが……お前ならその辺の線引きは心得ているだろうから、特に気にしてはいないが」
達也の性分とガーディアンの役目としては妥当な言い分だが、彼の主人公気質からしてトラブルが舞い込んでくるのは〝予測可能回避不可能〟の状態に近い。
平和や平穏を望むのは誰だって同じだが、欲の強さからそれを壊そうとしている輩が出てくるのも人間の摂理。それをどこまで妥協できるのか……度を越えれば争いになるのは無理からぬことだ。
「本音を言えば深雪に無理してほしくはないが、誰かに似て頑固だからな」
「達也、思いっきりブーメランになってるから」
「もう、お兄様ってば。私はそこまで頑固ではありませんよ」
達也も達也なら、深雪も深雪……という言葉を投げかければ間違いなく自分にも帰ってくることが目に見えているため、当たり障りのない言葉で濁す他なかった。

お互いの腹の探り合い

今朝のスキャンダルにも近いニュースを耳にしてからの登校。とりわけ当事者側に近いリーナからすれば頭が痛くなる思いしかしないものであった。

かといって１００パーセント実戦要員であるリーナには学校を休む選択肢などなく――――更にバランス大佐から普段通りの生活を心がけるように言われてしまった以上、重くなっている足取りを見やってセリアが気遣うように声を掛けた。

「お姉ちゃん、大丈夫なの？」

「……仕方ないじゃない。大佐にああ言われた以上はそうするしかないもの」

あのようなニュースがあって学校を休むことになれば要らぬ疑いを持たれるのも事実。セリアの問いかけに笑顔を作りつつ返しながら「第一高校前」の改札を抜けた。

「おはよう、リーナにセリア」

二人の前に突如現れた人影――――達也の姿に、先程の様子も全て投げ出して逃走しようと試みた。だが、その作戦は失敗に終わってしまった。

「達也の姿を見て逃げ出すとか、失礼にもほどがあると思うんだが？」

「あ、アハハ……」

逃げ道を防ぐ形で悠元と深雪が待ち構えており、これにはリーナのみならずセリアも苦笑を禁じえずにはいられなかった。とはいえ、二人に対して詰問する気などないため、悠元が話を切り出した。

「ま、別に問い詰める訳じゃないから歩きながらでも話そう。聞きたいことは……言わずとも理解してるのでは？」

「……今朝のニュースのことですね。後半部分はでっちあげしかありませんが」

リーナだと感情的な発言が出ることを危惧してか、悠元の問いかけにセリアが答えた。魔法師排斥への世論操作を目的とするならば、真実に嘘を織り込むことも想定の範囲内だろう。

「世論操作が目的か。にしても、そういった情報は機密に触れると思うのだが」
「……『七賢人』よ、多分」
　達也の質問にはリーナが答えを返した。彼ら――――『フリズスキャルヴ』のアクセス権を持つ七人のオペレーター（千姫の持っていた端末を壊した以上は六人と述べるべきかもしれないが）の詳細についてはリーナは知らないようなそぶりを見せた。もしセリアがこちらの睨んだ通りなら……彼女はその詳細を知っていてもおかしくはない。
（リーナはああ言っていますが……悠元さんの説明と矛盾していますね）
（軍と言えども国防総省の管轄下だ。政府や国防総省（ペンタゴン）の情報全てが流れるとは思えないからな。その意味でリーナの言葉も嘘じゃない）
　いくら軍人と言えども国家情報全てがそのまま降りてくることなどない。ましてや、戦闘魔法師部隊であるスターズに不必要と判断された情報を流して任務遂行に支障を来たす必要はない。
　イデオロギーや狂信とは無縁の組織とリーナは述べたが、スターズは「七賢人」の全容を掴んでいない。ＵＳＮＡ政府は恐らくエドワード・クラークがその主要人物ということまでは掴んでいるのだろうし、七人のオペレーターにも当たりを付けている可能性がある。
　尤も、その辺を聞くのにうってつけの相手がいるのは幸いという他ないが。
　すると、セリアが気になって悠元に話しかけてきた。
「悠元は、何も聞かないのですか？」
「聞いたところで何か変わるわけでもないし、今アメリカで起こっていることを解決するのはアメリカの問題だ。違うか？」
　冷たい言い方だが、この国が関与するようなことがあれば〝内政干渉〟の口実を与えかねない。修司と由夢、雫の三人がやっていることはどうなのかという疑問はあるのだろうが、人間主義の勢いを削ぐには正当な手段を選んでいられない。
　だが、これでも顧傑の手足を封じるだけに止めている。その理由は焦らせてこの国への渡航を早めるのを防ぐためだ。万が一の場合は

『フリズスキャルヴ』を逆探知して顧傑の端末を破壊することも視野に入れている。
「……冷たい言い方ですね」
「現実問題と内政干渉の天秤だよ。尤も、こういう言い方は誰かさんの口癖が移ったのかもな」
「悠元さん、それは何方のことを指しているのですか？」
「さて、誰でしょうね？」
（な、何ですかこの空気……兄に対しての感情が他人に向けられると、こうなるということですか）
何気ない会話だが、お互い気の知れた相手だからこその会話であり、気が付けば二人を中心にほんわかとしている雰囲気を見て、セリアが思わずたじろいでいた。それは二人の仲の良さに対してというよりも、本来ならありえない感情の向け方に対してだが。

◇　◇　◇

――昼休み。悠元は一人屋上にいた。
いつもなら一緒にいる深雪や姫梨は傍にいない。それは悠元自身にとって確認すべき事項だと判断したための単独行動。すると、屋上の扉が開いて姿を見せたのはセリアであった。
「悠元……私だけ呼び出しとは、先日の件に対する追及ですか？」
「追及、と言えば間違ってはいないが……率直に聞く。お前は〝転生者〟だな？」
「っ……どうして、そう思われたのですか？」
セリアの一瞬の躊躇いがその答えを指し示しつつ、敢えて問い返したセリアの態度はあまり褒められたものではないが、その辺を妥協しながらも悠元は根拠を述べ始めた。
「先日の一件。まるで俺が〝この世界でイレギュラーな存在〟だということを認識していたことに加え、達也ですら本気でないと見つけられない俺の気配を認識していた」
彼女にあるかはわからないが、転生特典が認識できる存在の可視化だとするなら、ある程度の辻褄は合う。尤も、自分の場合は三つの特典を受け取っている以上、彼女に隠し玉がない保証などないが。

彼女に多少なりとも原作知識があるなら、自分の存在がイレギュラーだということぐらい察しているはずだ。何せ、深雪の感情の向け方が変化していることに違和感を覚えても無理はないだろう。
「それは、貴方が意図的に解除していたのではありませんか？」
「それはないな。普通の人間なら意識的にすることを俺は無意識的にしている。……とまあ、それはおいといて、一番の理由がチャールズ・サリバン軍曹に憑りついていた『パラサイト』を認識していたことだ」
ミカエラ・ホンゴウのこともあって話せなかったのは無理もないことだが、それを差し引いても「パラサイト」の存在を話せなかったのは、自らがその可能性に触れることを危惧してのものだ。
こればかりは自分自身も転生の数ヶ月後に元から問い詰められた経験があるのでよく理解している。尤も、こちらに三矢家を継ぐ気などないことは早々に表明したため、比較的穏便に事が済んだのは言うまでもない。
その代償として三矢家がおかしいレベルに振り切れてしまったが……俺はただ十山家の言いなりになって苦心していた元を助けようとしただけで、他の意図など一切含まれていない。
「……参りました」
「案外、白旗を早く上げるんだな」
「今の貴方に勝てる要素なんてありませんから……」
セリアのその言葉の後、彼女は自分が〝転生者〟だということを白状した。それは即ち自分が同じ存在だということを明かすことになるわけだが、この世界に来て初めての邂逅ということで、セリアはどこかホッとしたような表情を見せていた。
そして、セリアは自らの出生を明かしたわけなのだが……これが自分にとって一番該当する人物だということに頭を抱えてしまった。
「というわけなのですが……悠元？」
「何でお前まで亡くなってるんだよ……兄貴がかわいそうだわ（神様、マジで恨むぞ……）」
「は、え、ええ？　もしかして、お兄ちゃん？」
声質は異なるが、イントネーションからしてセリアが前世の妹だと

いうことに本気で頭を抱えたくなった。前世においては原作の深雪レベルのブラコンを発揮していた彼女……すると、セリアはこちらの転生に気付いたのか、涙を流していた。
「よ、よかった……お兄ちゃん、元気でやってるんだね……あの深雪さんをたらしこんだ才能は兄さん譲りだけれど」
「失敬な。あの兄貴ほどじゃねえよ」
事情を聞いたところ……自分が亡くなった5年後、飛行機事故に巻き込まれたらしい。原因は原因不明のダウンバーストによるものだったそうだ。自分が万が一と思って遺していた手紙は読んでいたらしく、自分の分までしっかり生きると決めた矢先のことだったらしい。
その影響でブラコンのレベルも多少は改善されていたようだ……現状の推測でしかないが。
「そんで、生まれ変わったらリーナの双子の妹ってだけでも大変なのに、大統領の孫娘というオマケつき。……おかげで祖父にも目を付けられて、気が付いたらリーナのお守りみたいなことをしてたの」
「スターズでも持て余すあたりは流石にお前らしいと思うな」
「やめて。既に世界最強になってるお兄ちゃんに言われると空しくなるから」
考えてみれば、こうやって何もしがらみを考えずに話せるのは元、剛三、元継、千姫に続いて5人目。セリアの〝世界最強〟という言葉には流石に納得がいかないのだが。
「世界最強ねえ……そんなプライドを抱え込むぐらいなら、欲しい奴にくれてやりたい」
「あはは……強さや名誉を求めないあたりは変わってないね」
「そういうものがどういった結果を出すのかは、兄貴の件で分かってることだからな」
カリスマに溢れた兄と天才の妹。その間にいる俺に目を付けようとする連中はかなり多かった。だからこそ、前世の俺は人との関わりを必要最小限にしようと生きていた。その影響からか、他人から気配を読まれないような歩き方や気配の偽り方を率先して修得していた。

言い忘れていたことだが、屋上には遮音と認識阻害の結界術式を張っている。流石に男女二人が屋上にいるとなれば要らぬ誤解を招きかねないと判断したからだ。
「でも、九校戦であの『クリムゾン・プリンス』を2種目で破って優勝してたよね」
「見てたのか……あの時は十師族としての強さを見せろ、と父に言い含められてたからな」
ケーブルテレビなら海外でも視聴可能なので、恐らくは興味本位で見ていたのだろうが……その辺の娯楽をスターズでも許容しているあたり、潜在的な敵対国家の情報収集は欠かしていない証拠だろう。
「それを実行して一条の御曹司に『爆裂』を使わせないあたり……前世では手加減してた？」
「阿呆が。転生前の俺はお前のような明晰さも兄貴のようなカリスマも持ってなかったんだぞ」
あくまでも自分の強さは元々の資質に加えて転生でのブーストが掛かった形なので反則技に近い。その辺を含めたような発言をしたところ、セリアは苦笑を滲ませていた。納得がいかない、と思いつつも悠元は一つの提案を持ち掛けた。
「まあ、それはいいとして……『パラサイト』に関しての対抗手段――『ルナ・ストライク』クラスの精神干渉系魔法をスターズが持ち得ていない以上、最後の詰めはこちらが受け持つ。そして、もう一つのお前らの任務――戦略級魔法師に関してのことだが、どうせ俺や達也に仕掛ける気なんだろう？」
「そうなんだけれど……お兄ちゃんの正体を知った以上、下手を打って〝お兄様〟に消されたくないよ」
セリアの心情は分からなくもない。沖縄の一件だって下手に深雪を泣かせたり傷つけるようなことはしないように立ち回ったのだが……結果として、深雪に泣きつかれた挙句に恋慕の対象として見られる形となった。仮に俺とセリアが戦った場合、深雪がセリアに攻撃的な態度を見せても不思議ではない。その場合はこちらでフォローしなければならないと考えると……気が重くなる話だ。

「どうせ『ブリオネイク』やお前のＣＡＤ――『レーヴァテイン』まで持ち出した以上、国防総省（ペンタゴン）や参謀本部の連中は結果を求めているだろう。物理的に無傷で済ませられる方法はあるから、その茶番に付き合ってやるよ」
「……今となっては、お兄ちゃんが一番恐ろしいかもしれない」
「酷い言い草だな、おい」
国家機密レベルの代物の正体を既に掴んでいるような悠元の言葉に、セリアは敵に回すよりも降参して言いなりになる方が安上がりだと言いたげな発言が出た。これには流石の悠元もジト目を向けつつ辛辣な言葉を投げかけるほどだった。
ちなみにだが、今回話した内容はお互いの胸の内にしまうことで合意した。

方向性が変わっても気質は変わらぬもの

予測はしていたが、実際に相対すると混乱してしまうのはよくあること……だと思う。セリアの〝中身〟が前世の妹というだけあって、一層慎重になっていたのは言うまでもない。

「それでさ、お兄ちゃんは何であんな手紙を残してたの？　普通に健康なら問題ないと思うのに」

「あのなぁ……俺が一人暮らしを始めたら、近くの高校に通う口実で強引に居候してきたやつがそれを言うか？」

妹がやっていたことを今世の自分が司波家でやっていることのため、前世でのことを掘り起こす気などなかった。だが、セリアから尋ねられた以上は答えるのがいいと思ったため、正直な感想を述べるに至った。

「俺自身、いつどうなるかなんて分かったものじゃないからな。使わずに済めばよかった保険みたいなものだった……結果として出番があったわけなんだが」

ただでさえ世話焼きかつブラコンの気が強い妹。彼女が俺自身の死という現実に向き合った場合……予測できる一番の可能性は自ら命を絶つという選択肢だった。正直なところ、いくら平和で魔法などない世界であってもリスクというものは付きまとう。それこそ、自分で気を付けていても出合い頭に車と衝突する可能性だって無きにしも非ずなのだ。

「何か上手く流されたような気がするけど……そういえば、こないだのパラサイトってどうなったの？」

「流れ通りに潜り込ませたが、どうなるかは分からん。何せ、九島家の先代当主が関東に来ているようだからな。その意味でお前も無関係とはいえないだろう」

「ううっ、それはそうなんだけれどね……」

原作では独立魔装大隊を動かしているが、今回は一切動くことがないよう風間には言い含めている。ここで独立魔装大隊とスターズが正面衝突なんかしたら、間違いなく国際問題である……いや、既に達

也と自分にちょっかいを出している時点でそうなっているようなものだが、これが表面化すると国防軍の規則に色々触れかねない問題なのは間違いないだろう。
「ていうか、私だって気付いていたんならもう少し優しくしてほしかったけど？」
「膨れるな。あの時点で確証がなかった上、俺だってこの事情を下手に明かせないんだよ」
〝転生〟という事象自体、この世界で見ればイレギュラーの類に属するだろう。四葉に復讐しようとする連中がそれをにおわせる様な術式を使ってはいるが……それに、自分とセリアでは転生したタイミングが違うため、この話題には結構神経を尖らせる必要がある（セリアは物心つく前あたりかららしい）。
「てか、お前も色々やらかしてるのは調べがついてるからな。基礎単一系の移動魔法でビル一個を数百メートル垂直上昇させるとか……」
「いや、その程度ならお兄ちゃんもそれぐらいできるよね」
「うーん……できないこともないが、やる意味がないからな」
セリアの行動原理が大概リーナ絡みになっているというのは……言わぬが花というやつなのだろう。
彼女のスターズ入隊に関しての資料はすべて目を通したが、当時の面接官が相当苦悩したのは目に見えていた。いくら世界最強を自負するとはいえ、ＵＳＮＡ軍の魔法師部隊であるスターズにも杓子定規というものは存在している。
なにせ、試験官が記入する備考欄に「スターズで扱える範疇を超えているため、政府に要相談」と力強い筆圧で殴り書きされていたぐらいだ。一体何をやらかしたのか掘り下げた結果……セリアは単独で『ムスペルスヘイム』を発動させて、的はおろか試験会場が半壊したという事実が出てきた。いくら力を見せるためとはいえ、そこは自重しろよと内心でツッコミを入れた。
それでも政府お抱えの専属魔法師にならなかったのは……セリアの姉であるリーナも似たような目で見られていたからに他ならない。魔法以外はポンコツなリーナとはいえ、流石に試験の時点で戦略級魔

法を使うことはなかったが、成績としては非常に優秀だった。なので、試験官たちからセリアと同じ警戒をしながら見られていたのだろう……リーナからすれば傍迷惑な話である。
「で、セリアが知ってるなら聞きたいんだが……お前の祖父である九島健はどういう人物なんだ？」
「そうだね……孫が可愛いお祖父ちゃんって感じだね。ただ、時折日本が恋しくなる時があるみたいだよ」
「……生きてるのか？」
「ロッキー山脈の奥地で世俗とは隔離した生活をしてるよ。通信手段なんてお祖父ちゃんが飼っている鷹が運んでくる手紙ぐらいだし」
ここでも原作との変更点が生じている。烈の弟である健が生きており、しかもセリアが言うには２０歳代の若々しい体を維持するために魔法や武術の研鑽を辞めていないらしい。なお、実年齢は８４歳で奇しくも千姫と同い年とのこと。
そんな彼をＵＳＮＡ政府や軍が放置している……いや、触れたくても触れられないのかもしれない。何せ、あの世界最巧とまで謳われた「トリック・スター」の実弟。恐らくはリーナやセリアのスターズ入隊も彼が一枚噛んでいる可能性が高いだろう。
悠元が知らなかったのは、健がそういった通信手段を一切使っていなかったためでもあった。アナログな伝達手段に加えて、普通の人間でも行きにくい場所で生活している以上は仕方がないことなのかもしれないが。
「私とリーナにスターズのスカウトが来たとき、どこからか聞きつけてスカウトをぼこぼこにしちゃってたし……どんな話し合いがあってお祖父ちゃんを納得させたのかは怖くて聞いてないけど」
「うちの爺さんみたいなものだな……」
「そういえばお兄ちゃん、最近、リーナが頻りにお兄様――――達也のことを聞きに来るんだけど……何かあったの？」
「うーん、あの二人となると当事者間の問題だから触れたくはないんだが……それとなく聞いてはみるわ」
そう言った後、悠元は屋上のフェンスを飛び越えていった。それを

見たセリアは、いくら魔法がある世界とはいえ自分からトラブルを避けようとしている方向性に苦笑を禁じえなかった。

◇　◇　◇

２月――――この国ではバレンタインというイベントが定着している。本来宗教色が強い筈のバレンタインから逸脱しているのはこの国だけだろうと思う。学校から帰ってきたセリアがまず見たものは、エプロン姿のリーナとシルヴィアだった。

「ほら、根気よくですよ。焦ってやろうとしないでください」

「わ、わかってるわよ！」

セリアからすれば、料理すらロクに出来ないリーナがチョコ作りをしている……今見ているこの光景が夢なのではないかと思っていたが、それはセリアの背後から掛けられた言葉で現実だと思い知る羽目になった。

「おかえり、と言っておこう中佐」

「バランス大佐……その、大佐がここにいる理由は察しますが、あの光景は一体何なのでしょうか？」

「聡明なのは流石だな。私も止めようとしたのだが……リーナの言葉にシルヴィアの火がついてしまってな。流石の私も降参せざるを得なかった」

「……えと、その、本当に何があったのです？」

セリアからすれば心当たりはなくもないのだが、リーナがここまで入れ込む相手などいたのかと疑問を浮かべていた。正直な話、ミドルスクールの時にリーナが同性からチョコレートをもらうことはあっても、異性に対してチョコレートを渡すなどということはなかった……それが仮に市販品であってもだ。

それがこの留学で火が付いたということなのだが……セリアが思い当たる最大の可能性をバランスは口にした。

「その……魔法科高校の同級生にリーナが勝負を挑んだらしくてな。しかも、魔法ではなく体術での勝負らしい」

「体術ですか？　マーシャル・マジック・アーツ部の部員あたりにでも挑んだのですか？」

「いや、少佐の口ぶりからするに風紀委員と思われるが……私もこれ以上踏み込むのは宜しくないと判断した。なので中佐、君から聞いてみてくれるか？」
「はぁ……あまり期待はしないでください」
バランス自身、その人物の可能性に気付いているのかもしれないし、軍人としての任務に支障が出るようなら看過など出来ないが、リーナは戦略級魔法師の無力化任務には前向きの姿勢を見せている。その相手がリーナにとって大切な存在となりつつあることにセリアは内心で溜息を吐きたくなった。
◇　◇　◇
生徒会副会長なのに、仕事がない。いや、仕事はいくらでもあるわけなのだが、生徒会長であるあずさから「悠元君はこちらの手が本気で回らなくなったらお願いします」と釘を刺されている。これは恐らく来年度の動きを見越しての言葉なのだろうが。
軽運動部での活動も卒業式の準備やら三矢家での訓練もあってお休みしているため、そのまま三矢家の本屋敷に帰ってきた悠元がまず目にしたものは、とある部屋の扉の前で立っている詩奈と侍郎であった。
「二人とも、一体何をしているんだ？」
「あ、悠元さん。おかえりなさい」
「おかえりなさい、お兄様」
「ああ、ただいま。それで……この部屋は確か、男子連中が寝泊まりしてる部屋だよな？」
二人からの挨拶を返しつつ、悠元は二人がここにいる理由を尋ねると、それに答えたのは侍郎だった。
「えっと、実は深雪さんが達也さんに尋ねたいことがあると言って入っていったようで……偶々聞いていた詩奈が聞いたので、俺は何も聞いてないんですが」
「……（まさかね……）」
最近聞き及んだ話題の可能性もあるが、リーナ絡みとなれば流石に無視できないと思いつつ扉を開けた。すると、腕を組んで立っている

深雪とベッドに座っている達也の構図が目に入った。二人も物音に気付いて悠元らの方へ視線を向けていた。
「悠元……」
「悠元さん、お兄様ったら不謹慎だと思いませんか!?」
「深雪、事情を説明してくれないとどう反応したものか分からないんだが？」
　正直な話、いきなり詰め寄られても困る。悠元の正直な反応に流石の深雪も頬を赤らめていて、自分の迂闊さを恥じていたようだ。一方の達也はというと、深雪からの追及が一時的にでも止んだことに一息吐くような様子を見せた。
「それで、達也。もしかしてなんだが……リーナ絡みだったりするか？」
「……やっぱりお前は埒外だな」
「阿呆か。セリアから気になることを尋ねられたから、もしかしてかなと思っただけだ」
　達也が言うには、数日前に風紀委員の巡回をしていてマーシャル・マジック・アーツ部に立ち寄った際、偶々見学していたリーナと立ち会うことになった。無論達也としては固辞したかったわけなのだが、リーナは敢えて虎の尾を踏みぬくようなことを言ったらしい。
「俺自身のことをどう言われようとも構わなかったが、深雪のことを引き合いに出されたからには受けて立つ他なかった。そこまではよかったのだが……」
　お互いに捻挫以上の負傷を禁止とした試合形式での対決。リーナの希望で制服での試合となったわけなのだが、ここで達也の持っているラノベ主人公気質が発動した。
　リーナが『仮装行列（パレード）』を使って達也を誤魔化そうとし、それに対抗して達也が『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』でリーナの本体を見破って抑え込もうとしたのだが……周囲の観衆のこともあってある程度力を抑えていたせいで、本当ならリーナの肩を掴むはずがリーナの胸を鷲掴みにしたらしい。
　これにはリーナが顔を真っ赤にした後、達也の手を振り払って逃げ

出したらしい。試合は言うまでもなく無効試合となった。
「悠元さん。セリアから何を尋ねられたのですか？」
「リーナから達也のことについて聞かれてるらしい。恐らくはその一件が大きく影響しているかもしれないが……先日の逃げ方はある意味納得できるかな」
その翌日の朝にマイクロブラックホール実験のことがあったので、彼女の逃げ方もある意味納得できるものであった。なお、その件で達也は「ラノベ主人公気質の持ち主」などと噂されるようになっていた……間違っていないので反応に困るのは否定しない。
「どこまで聞いているのかは知らないし、セリアでもリーナと同レベルの情報しかないはずなんだがな」
「ちなみにだが、俺のことを探るような感じなのか？」
「さあ、そこまでは聞いちゃいないが……深いところまで探るような感じではなかったかな」
この場には三人だけでなく詩奈と侍郎がいる以上、達也と深雪に関する情報は極力抑えている。以前訪問した際も深雪が四葉の直系だということは二人にも知らせていない。達也や深雪も二人の存在を片隅に置きつつ話しているわけだが、詩奈と侍郎は特に喋ることもなく黙って聞いていた。
セリアの言葉のニュアンスからするに、達也の魔法についてや強さの秘密を探ろうという感じではなく、先日の一件――この場合はマーシャル・マジック・アーツ部での一件で達也の様子を探ろうとしているのかもしれない。
魔法というよりは恋愛事情絡みに近いのかもしれないが、自分の存在が色々な方向で影響を及ぼしていることに改めて実感させられる羽目となったのは言うまでもない。

バレンタイン前日

バレンタインというイベントは、男性だけでなく女性にとって一大イベントも言える。なので各々が気合を入れている様は言わずとも伝わってきてしまう。普通の話題ならそれぐらいで終わるようなものだが、悠元からすれば他人事で流せる範疇を超えている。何故ならば、奇しくもその日が悠元の誕生日だからだ。

今年は訓練の関係で女性陣が三矢家の厨房に籠る形となった。その一方で男性陣はというと、特にやるべきこともないので魔法の訓練をすることに集中していた。

「まあ、厨房がああなるのは既定路線だし、仕郎さんがいるから滅多なことにはならんと思うが……俺は別の意味で憂鬱になりそうだ」

「あー、悠元の場合はそうなるよね」

「そう言う幹比古も道場の門下生から結構もらってたけどな」

誕生日を迎えること自体が億劫という訳ではない。自分にとっては特別な日だし、誰かに祝福されることは喜ばしいことだ。では、何が問題なのかと言えば……誕生日プレゼントの大半がチョコレートとなってしまうことだ。別にチョコレートは何も悪くないわけだが。

大半の家は自分の誕生日のことなど知らないが、十師族クラスとなれば話は別だ。三矢の人間として祝われることなく神楽坂家の人間となったので、他の十師族から婚姻話を持ち出される可能性はかなり減ったわけだが……それも見通しの甘い目測だということは言わないでほしいと思う。

「バレンタインか」

「おや、達也もチョコをもらったことが……深雪か」

「一応『義理』と念は押しているがな。その分、悠元に対しての代物はまるで料理というよりは儀式に近い印象を感じてしまったが」

その深雪からは「今年は腕によりをかけて作りますので、期待してくださいね」と予め言われている。深雪の料理の腕は信頼できるので特に不安はない……それ以外に何かしらの動きをしそうなことを除けばの話だが。

「深雪にほのか、美月に佐那、姫梨は分かるが……一番意外なのはエリカだな」
「そうだな。その対象も意外という他ないんだが」
「？　いやいや、悠元に達也。揃って俺を見るなっての」
そう、他人の色恋沙汰には敏感なエリカがチョコ作りに勤しんでいる。しかも、その様子をこっそり覗いた感じでは剣術に取り組んでいる時のような真剣さだった。で、その本命を渡そうとしている相手は……どうやらレオのようだ。
当人は表向き否定しているが、魔法の訓練では暇さえあればお互いに協力しあったりしている。横浜でのやり取りや連携を見るに、お互い口では喧嘩しても信頼しているのが見て取れた。エリカの素性を知る身としては、レオに惹かれるのも無理はないといったところだろう。
「ま、最近のエリカはどこか余所余所しくて張り合いがないって言うのは否定しねえが……どうしたよ？」
「聞きました、燈也さん？　この人、相当の朴念仁ですよ」
「ええ、全くです。達也さんはどう思います？」
「俺に振らないでくれ……」
エリカと出会ったのは今から5年前――――最初の出会いは吉田家でのことだった。縁側で一人座っているエリカを俺と幹比古が見つけた。当時の幹比古は自分の実力を疑わない性格で、そんな彼がエリカに話しかけたのは、単に興味本位の側面が強かった。
そこからお互いに口喧嘩が始まり、幹比古が自分の名前を言ったことでエリカが言い返した。
――――じゃあ、アンタのことはミキって呼んであげる。
――――僕の名前は幹比古だ！
これが、お互いにとっての決まり文句みたいなものになっていた。そこから俺も巻き込まれる形になった。俺の場合は幹比古のように短縮されても文句はなかったわけなのだが、エリカは何故か悠元と呼んでいた。理由はというと「アンタはね……何故かミキのように呼んじゃいけないって気がするの」とのことだった……その時の自分はす

ごく納得できなかったが。
「人の恋路は各々の事情だから深くは踏み込まないが……」
踏み込まない、というよりは自分のことで手一杯になる可能性が高いため、変に首を突っ込む気にもならなかった。エリカのように他人の恋路が人一倍気になるような性分でもないというのもあったりするが。
◇　◇　◇
外交という仕事は、かつての時代であれば砲艦外交か密室（秘密）外交と相場が決まっていた。三度の世界大戦を経て、外交の基本は大同盟を前提とした会議・セレモニー型の外交が主流となっていったが、昔のスタイルが丸ごと消えたわけでもない。そして、その仕事は基本的に外交官――官僚の領分が非常に大きい。
３年前の沖縄での一件後、穏便な解決に尽力していた外務省の面子を潰すがごとく行われた横浜事変。その一件絡みで使われた戦略級魔法を巡っての水面下の攻防は激しさを増している。
「だからといって、外交に首を突っ込む気にはなれませんけれどね」
「悠元君からすればそうなるわよね。でも、無関係とは言えないわよ？」
「分かっちゃいますよ、それぐらいは」
訓練が一区切りしたぐらいで響子が三矢家の屋敷を訪ねてきたので、悠元と達也、それと深雪が応対した。別に悠元一人でも応対すべきかと思ったのだが、達也に渡すものがあるようで同席を許可した。深雪に関しては有らぬ疑いを持たれるのを回避するためだ。
響子から聞かされた音声データ――外務省とＵＳＮＡの外交官の盗聴音声を聞き終えたところで、悠元から出た言葉に響子は苦笑をしつつも率直な言葉を返した。確かにあの一件絡みで『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を使ったことは否定しないが、そもそも新ソ連（むこう）の身勝手な理屈でこの国を脅かそうとしたのだ。いくら戦争がそういうものだからといって何をしても良いわけではない。
「俺の『スターライトブレイカー』はそもそも未完成の段階で使ったものです。しかも使われている技術が機密のオンパレード過ぎて明か

すことすらできませんし」
「……艦隊を消滅させて、ウラジオストクの軍港だけをピンポイントで破壊した魔法なのに？」
　あれで未完成と言われて首を傾げている響子。達也と深雪もそれに関しては同意見のようであった。そもそも、『スターライトブレイカー』は以前防衛大学校のデモンストレーション後に木彫りの熊を飛ばした際に使用した質量物超長距離射出魔法をベースに組み上げた魔法だが、横浜事変の時点では収束と分散の効率を詰め切らずに使用していた。それに加えてベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』による妨害があったため、威力の増幅でウラジオストクの軍港部まで破壊してしまった。当初の予定では艦隊だけを消滅させるだけに止めるつもりだった。
「後者に関しては自分も計算外ですよ」
　悠元が目指す戦略級魔法――五感の識別に関係なく、情報次元に存在する情報そのものを破壊する魔法。理論上では同じ戦略級魔法クラスの起動式・魔法式をも破壊可能とする魔法。それならば『天照』や『月読』で事足りるのでは？　との疑問が浮かぶだろうが、現状の『天照』と『月読』では単独発動の条件がかなり厳しい。それに加えて下手に弄れる代物でもないため、別のアプローチから組み上げることでその問題を解決しようと試みている最中だ。
「それはともかくとして……大亜連合とＵＳＮＡ、それとオーストラリアもといイギリスが一枚噛んでいたのは溜息しか出ませんが」
「前者の方は察しがつきますが、オーストラリアとイギリスは何の関係があるのですか？」
「ああ、それは達也君が破壊した輸送船の絡みよ。あの船、ご丁寧に国籍を偽っていたから。外務省もその件に関しては大慌てのようね」
　表向きは黙秘を貫いているが、停泊時の船籍証明は間違いなくオーストラリアが公的に発行したものだということは調べがついている。大亜連合とＵＳＮＡの密約についても同様で、この件については政府間での交渉事なので放り投げる形となったわけだが。
「意図的に艦隊の出港を遅らせた……結果としてはＵＳＮＡ軍太平洋

方面部隊が何も出来ずに終わった形となったわけだけど。ずいかく型空母についても執拗に聞いてきてるわ……まあ、一番の興味は二つの戦略級魔法についてでしょうけど」
　力を必要以上に持つことは周囲に対しての警戒や恐怖を強める。魔法が体系化して軍事力と密接にかかわっている以上、戦略級魔法はその最たるものだろう。その認識自体は間違っていないと思うが、ならばこそ力を削ぐことがＵＳＮＡにとって不利益を被るという計算に繋がったことが不服という他ない。
「さて、あまり長居していると要らぬ疑いを持たれそうだから失礼するわね。あと、達也君と悠元君に、はい」
　そう言って響子は達也と悠元にラッピングされた箱を手渡す。この時期のプレゼントとなれば自ずと予想が付くだけに、思わず苦笑が漏れてしまった。見送りは悠元がする形となったわけだが、その際に響子が悪戯めいた笑みを見せつつ尋ねた。
「やっぱり、義理じゃご不満だったかしら？」
「そういう訳で苦笑したわけじゃないですよ。そういう感情は達也にでも向けてください」
「ふふっ……それじゃ、失礼するわね」
　なお、響子を見送った後にその様子を柱の陰から見ていた深雪に問い詰められ、そんな二人の様子を見ていた達也は人知れず溜息が漏れた。

◇　◇　◇

　普段は生徒会としての仕事を割り当てられることなどない悠元だったが、バレンタイン前日である２月１３日。この日だけは少し様子が違っていた。普段なら勤勉なほのかがいないことに加えて、臨時の生徒会役員として仕事をしているリーナも生徒会室にいなかった。
　留学生の二人――――リーナとセリアには色んな部活動から声が掛けられていて、中には余計な欲を見え隠れさせている部活動もあったため、最終的な判断として臨時の生徒会役員に置くことで決着を見た。
　仕事の効率化やそれに合わせたデータベースのシステム改良は悠

元が裏技めいた方法――――とはいっても、システムの根幹であるデータベースのハードウェアを最先端レベルにまで改造しただけで、プログラム部分は達也も一枚噛んでいる（達也には深雪の負担を軽くする目的ということで協力を頼んでいる）。
　その影響で生徒会の仕事は約3割の作業時間削減が出来た。その反動と来年度からの人選の影響で悠元が割を食う形となった。
「てなわけで、俺が駆り出されたわけだが……簡単なチェックぐらいしかさせてくれないって悲しいわ」
「会長達も悠元さんの有能さは理解されていますから、仕方のないことかと」
「この場合は悠元の自業自得と言うべきだろうな」
　駅へと向かう帰り道、悠元と達也、深雪の三人は生徒会室での出来事に加えて先に帰ったほのかのことについての話題となった。彼女が気合を入れるとなれば仕方のないことでもあるわけだが。
「二人して……しかも、達也に至ってはあんな頼みごとをするとはな」
「悠元なら問題ないと踏んだだけで、特に他意はないんだがな」
　普段なら面倒だとあまり言わない悠元がそう言った理由は一つ。達也がほのかから貰うチョコレートに対しての贈り物についてだ。市販されているものでもいいとは考えたが、達也は身内の実績からして悠元に頼めばいいと判断した結果のものだった。
「ひょっとして、アレの事でしょうか。悠元さんはそういったものも作れるのですか？」
「ある程度のものしか作れないけどな。流石に下手の横好きでしかないよ」
「あのー、お三方。この場には私もいるんですけれど……」
　その三人の会話に割り込むような形で声を掛けたのはセリアだった。見るからに仲の良いカップルとその友人（彼女の兄）という状況にとてもではないが邪魔をしたくない雰囲気を覚えてしまっていたため、今まで黙っていた。
「あー、悪い。セリアはこういうのに慣れてなかったな」
「うぐっ……そ、そんなことはともかく、ほのかの様子が落ち着かな

かったのは理解できましたけど、お姉ちゃんに関しては予想外です」
「……セリアから見て、リーナはどう見えた？」
悠元の前世も含めた言葉にセリアはたじろぐが、気を取り直しつつ率直な意見を述べた。双子の妹であるセリアの言葉に引っ掛かりを覚えたのか、達也が尋ねた。
「そうですね……ここ最近は達也のことをずっと見ているような雰囲気ですね」
「それは視線でも感じていたが、敵意なのか分からない複雑な様子を感じ取った」
軍人としての明確な殺意や敵意に加え、達也との関わりで芽生えた感情が複雑に絡み合い、結果としてリーナが達也に対して抱いている感情が、当のリーナ自身にも理解できていないという状況に陥っているようだ。それでもやけっぱちな行動に出ていない辺りは流石〝シリウス〟であると褒めたくなるような印象を受けた。
「……達也。お姉ちゃんのことは色々あるでしょうが、嫌いにならないでほしいと思います。で、悠元にですが……1日早くのプレゼントです」
お互いどういう状況であるのかを知っているからこそ、セリアは達也に対して率直な言葉を述べた。それを言い終えてからセリアは鞄からラッピングされた袋を悠元に手渡した。そして、悠元の耳元に近付くと小さな声でこう述べた。
「私、本気でお兄ちゃんのお嫁さんを狙っちゃうから……覚悟してね」
言いたいことを言ってにこやかに手を振りながら去っていくセリア。それを見送っていた悠元だったが、唐突に感じる左脇腹の痛みで視線を向けると、笑顔で抓っている深雪の姿があった。これには達也も「やれやれ」と言った感じで疲れたような表情を見せていたのであった。

バレンタイン当日①

前世は前世、今世は今世……そう割り切って生きていくことを決意したはずだった。しかし、運命の女神という存在がいるのだとしたら、その神様はなんて悪戯好きなのだろうと思わずにはいられなかった。

生まれ変わったのは私だけではなかったという事実。そして、私が目星を付けていた人物――――神楽坂悠元がその当該人物であり、私にとっては前世の次兄であるという事実をつい先日知った。

「で、こんな豪華な包みのチョコを学校に持っていくの、お姉ちゃん？」

「うぐっ……」

双子の姉であるリーナにも勝っている私だが、魔法科高校に留学生として来て、まさか対等どころか私以上の実力を持っている人物が出てくることは夢にも思わなかった。魔法実習の後でその人物が司波深雪と恋仲になっている雰囲気を見た際、心なしか嫉妬やヤキモチのような感情を抱いていた。

軍人としても来ている以上は最重要被疑者の素性を調べないといけない。正直なところ、気が付けば意識を逸らされてしまうので追いかけるのはいつも一苦労である。道場で試しも兼ねた襲撃はあっさりといなされ、悠元にチョップを食らう羽目となった。

「そ、そういうセリアはどうなのよ？　ワタシが作った後で一人キッチンに籠っていたじゃない」

「私はもう相手に手渡しているので、特に気にする必要はないからね」

「え、もう渡したの!?　誰なのよ!?」

その際、悠元の姿が前世の次兄の姿とダブって見えたのだ。正直なところ、生まれ変わっても前世の恋心は消えずじまいなのかと内心で独り言ちた。前世に何があったのかは……私だけの秘密。

その後も暇さえあれば悠元を調べていたわけだが、どうしてもチョップを食らった一件からか次兄の姿がちらついてしまう。今だから言える推測だが、その時点で悠元に対して警戒する以上に異性と

して興味を抱いていたのかもしれない。それを振り切る目的も合わせてチャールズ・サリバン軍曹がいた現場に居合わせた悠元を拘束すべく脅しをかけたが、彼はこちらの攻撃手段を悉く無力化した上に気絶させられた。

この時点で、私が彼に勝てる手段はかなり限定されてしまう形となった。

「それは乙女の秘密だよ、お姉ちゃん。それより、もう少し控えめな包装にしようよ。流石に金メッキはないと思うな」

「シ、シルヴィに続いてセリアまで……何がいけないって言うのよ……」

その後、悠元から転生者の可能性を突き付けられ、私は素直に白状した。だって、ベン（ベンジャミン・カノープス少佐）ですら躱しきれない『ダンシング・スター』を無力化するっていうだけでも凄いのに、彼に何かあれば深雪に加えて達也までセットで付いてくる。いくら私が強くても、文字通りの無敵超人である〝お兄様〟とその妹を敵に回すのは正直御免被る話だ。

結果として、悠元が前世の次兄が転生した人物だと知ることになり、今まで悩んでいた部分が吹っ切れた形となった。悠元にチョコを渡したのはその形の一つともいえる。

閑話休題。

「女の子らしいセンスで選ぼうよ。余っている包装があるから分けてあげるけど……でも、どうして達也に渡そうなんて思ったの？」

「な、ななんでタツヤにあげにゃきゃいけないのよ!?」

セリアの問いかけにリーナは言葉を噛んだ。手作りの時点で誰にあげるか分かり切った話だが、今までロクに料理すらしなかったリーナがシルヴィアの手伝いの甲斐もあって無事完成した代物の時点で入れ込みようが半端ない。単にチョコレートを手渡すのならば市販品でも十分なのに、逆にそうしなかった時点でリーナの想いというのは単なる友人関係に止まらないという意味の裏返しでもある。

「動揺してるってことは肯定と捉えるよ。先日の一件は聞いたけど、それのお詫び？」

「……それもあるけれど、ワタシは今までセリア以外負けたことがなかった」
「まあ、そうだね」
セリアと切磋琢磨し、スターズの総隊長に相応しい実力を身に着けたリーナ。その彼女ですら勝てなかった相手がこの国にいる。その中の一人に悠元も含まれているが、リーナが知っている限りにおいてハッキリと実力を認識できた相手となると……直接対決した達也と深雪の二人だけだ。
流石に双子の姉が同性愛に目覚めていたら本気で縁を切ろうか考えるところだったが、加えて達也のラッキースケベのこともあって選択肢は自ずと一つに絞られた。
今まで異性との出会いがなかったわけではないが、魔法師としての実力に加えて祖父――――現大統領と九島健の存在が二人に対して近づいてくる異性を無意識的に遠ざけていた。前者はともかく、後者に至っては孫煩悩という他なかった。
「何て言えばいいのか……タツヤの顔見るたび、体が熱くなるの。まるで自分が自分じゃいられなくなる感じで……セリア？　聞いてるの？」
「アー、ウン、キイテルヨ」
加えて、前世の影響からかセリアは端末で日本語版の女性向け恋愛漫画を読むことが多く、セリアと一番接する機会の多いリーナも自然とその影響を受けて読むことが多くなった。それと今までの異性関係が合わさって原作にはない恋愛の価値観が生まれていたのだろう。（リーナの日本語関連についてはセリアと健が教えていたため、日常会話も難なくこなせるレベルである）
いつからはともかくとして、リーナは達也に恋愛感情を抱いている……そのことは間違いないかもしれない。恋愛感情だけでなく別の要素も含まれていそうな雰囲気に、セリアは聞き流す感じでリーナの言葉を聞いていた。まるで自分が悠元に向けている感情を見させられているような気がしたため……というのはセリアの心の声である。
「リーナ、分かってはいると思うけれど」

「言われなくても承知の上よ。そこだけはちゃんと割り切るつもりだから」
ただ、達也は戦略級魔法の使い手の可能性が悠元に次いで高いと注視されている人物。しかも、バランス大佐から彼に対しての襲撃作戦が計画されている。ただ、彼の能力を知る側であるセリアからすればその作戦自体が破綻前提という他ない。それが分かっていても言えないのはセリアに要らぬ嫌疑が掛かりかねないからでもある。
バランス大佐が大統領から託された「ブリオネイク」を使用したとして、少なからず悠元の影響を受けている達也に通用するか否か……二重の意味で〝堕とされる〟ことになるのかもしれない。
それはともかく、軍人として割り切ってはいても、内心穏やかとは言えない……そんな心境のリーナにセリアは内心で苦笑してしまったのだった。
◇　◇　◇
バレンタインで浮足立っているのは別に一部だけではなかった。想いを伝えようと張り切る女子はこの世の中に大勢いる。それが時として行き過ぎた場合、第三者から見た風景は料理という代物から大きく逸脱することとなる。
「……」
「泉美？　こんなところで何を……って、この匂いは……」
場所は七草家の本屋敷。香澄は台所の前で溜息を吐きそうな表情をしている泉美に気付いて声を掛けたのだが、その続きを言う前に台所から漂ってくる匂いでその原因を瞬時に悟ってしまった。泉美は香澄の接近に気付きつつ小声で呟いた。
「香澄ちゃん、お姉さまったらまたあのチョコを作っていますよ……悠元お兄様から苦い感想しか出てこなかったアレを」
「普通に作ろうと思えば作れるはずだけどね。悠元兄に親を殺されたわけでもないのに」
台所に立っているのは真由美であり、その光景を二人が目撃するのは〝二度目〟だ。しかも、今年は昨年よりも苦みの強い材料がちらほら見え隠れしている。台所に立っている自分たちの姉は明日のイベ

ントで一体何人の男性を地獄に叩き落すつもりなのだろうか、と物騒な発想にしか至らなかった。
なぜかと言えば、真由美から発せられる含み笑いは楽しそうな雰囲気を通り越して何かを企んでいそうな様相にしか見えない（なお、香澄は市販品で済ませ、泉美は既に手作りのチョコを作り終えて発送しているので、別に台所が使えなくても問題はない）。
「もし、アレをまた悠元お兄様に食べさせようものなら……その時はお姉さまを許しません。ついでに台所の使用許可を出したお父様も」
「いや、前者はまだ分かるとしてもお父様は関係ないんじゃあ……」
泉美がここまで恋焦がれる相手――悠元（その当時は長野佑都と名乗っていた）との出会いは5年前に七草家で開いたパーティーだ。初対面の相手であるにもかかわらず、公的な場ならいつもは大人しい泉美が悠元に対して話しかけていた。香澄もはじめは泉美の趣味（ロマン）が暴走してるのかなと思って聞いていたのだが、泉美の表情が明らかに悠元を恋慕するような状態だった。これは双子という繋がりで香澄が真っ先に気付いた形だ。
その後、泉美を止める意味で香澄が駆り出される形となり、悠元と仲良くなったのはその時だ。その際に泉美から『私の初恋の相手を奪ったら、いくら香澄ちゃんでも許しませんよ？』という意味合いを含んだ視線を向けられ、香澄はその気などないと説得するのに必死だった。
「お父様もお父様です。折角お兄様と結ばれることに喜んでいた私を散々コケにして……お姉さまが〝狸親父〟と言いたくなる気持ちがよく分かります」
「あー……とりあえず、試食の餌食になる前に戻ろう、ね？（ごめん、お母様。こうなった泉美を止めるのはボクでも無理だよ）」
悠元を狙おうとした十山家の一件といい、悠元の素性を調べたことといい、父が時折何を考えているのか分からなくなる……と香澄は思った。それについて母に尋ねたところ、昔の恋が諦めきれない縺れだと聞かされた。それを聞いた香澄の感想はというと「この家は恋愛事となると方向性がおかしくなるのでは？」という疑問が浮かんでし

まうのであった。
蛇足だが、そんな二人を真由美は『マルチスコープ』でしっかり捕捉していた。この後に何が起きたのかは……当事者と神のみぞが知る。
◇　◇　◇
バレンタイン当日。達也と深雪は九重寺へ向かうため、早朝に屋敷を出た。その際に深雪から「チョコは帰ってきてからお渡ししますから。それと…誕生日プレゼントは期待してくださいね」と満面の笑みで言われてしまった。それを見たエリカから色々弄られる羽目になったのは言うまでもないが。
「悠元は人気あるし、帰るときにはチョコがいっぱいになりそうね」
「やめてくれ。ただでさえ小学や中学の時から机の上が埋まってて男子に嫉妬の目を向けられたのに」
病弱だったせいで小学校の出席はよくなかったが、人当たり自体はよかったようで女子からのチョコは少なくなかった。学年が上がるごとに増えていったのには流石に納得いかなかったが。中学に上がれば流石に減るだろうと見込んでいたのだが、逆に増えていた。その内訳には剛三に連れまわされて各地の魔法師の家に挨拶回りした部分が大きく影響している。
「希望的観測だが、せめて1個でも減ってくれればありがたいよ」
「それは早々に打ち砕かれそうな気もするけれど」
「そのままそっくり返してやるよ、幹比古」
現時点で響子から義理チョコを、セリアから本命チョコを手渡された。叶いはしないフラグを口に出したのは、悠元にとってはせめてもの抵抗なのかもしれない。
なお、朝の時点で幹比古は美月と佐那から渡されており、レオはエリカから押し付けられる形でもらっていた。その際のエリカはまるで漫画やアニメに出てくるツンデレ系女子のテンプレ台詞のオンパレードだった。それを下手に弄ればやり返されるだけなので黙ることにしたが。
達也たちは九重寺からそのまま第一高校に行くと思われるので、時

間は少し早いがそのまま学校へ向かうこととした。教室に着いて悠元がまず目撃したものは、自分が座る席にいくつか置かれているチョコレートであった。
「目立つことをしている自覚はあるが、惚れさせるようなことはしてないと思うんだがな。腹いせも込めて九校戦で『クリムゾン・プリンス』をボコったぐらいだし」
「腹いせって……まあ、僕も人のことは言えませんが」
いくら生徒会役員といえど、必要以上の干渉は基本的にしていない。それが最終的に自分や身内に被害を与えるようならば干渉する、というスタンスは入学時から変わっていない。流石に前世の兄のようなカリスマは持っていないと言えど、その当時は十師族の直系であったからこそ目聡い連中を避けるべく行動していた。
チョコレートをいくつか確認したところ、現時点では全て二科生の同級生の女子のようだ。朝早くなら一科生の数も少ないので理に適っているが、名前表示もない悠元の席を知っているあたり何度か観察しに来ていたのだと思うと……この世界の女子（主に魔法師資質のある女子）は肉食系の気質が濃厚だろう。
「紙袋はいくつか持参してはいるが、流石にすべて埋まるとは思いたくない」
「悠元、君が言うと全部フラグになりますよ？」
「言ってることすべてが成立したら、まるで神様みたいじゃないか……」
「出歩いたら嫌な予感がするから大人しくしよう」という悠元の考えとは裏腹に、次々とやってくる女子からチョコレートを貰う羽目となっていた。無論、燈也も人のことは言えず……深雪が教室に入ってくる頃には、二人とも既に紙袋一つが埋まっていた。
「燈也さんもそうですが、悠元さんたらおモテになりますね」
「笑顔で言うと別の意味に聞こえるんですが？　深雪さん」
なお、教室にはいないほのかだが、今頃は実験棟の裏で達也にチョコレートを手渡しているのだろう。ちらりと二人の様子を『天神の眼（オシリス・サイト）』で確認したところ、ほのかからかなりの量の想子が漏れ出

ていた。好きな人を前にして感情が昂っている形なのだが……これには流石の達也もほのかの両肩を掴んで落ち着くように説得しているようだ。この方法は逆にほのかを興奮させるだけなのでは、と思っていたらほのかが気絶してしまったようだ。

（……悠元さん。お兄様は、その……）

（言わないで……俺でも対処出来ないんだよ）

達也自身、深雪以外のことに激しい感情を向けられないことは自覚している。だが、自分自身の恋愛事になると原作以上に疎くなっているような感じがみられた。リーナのことについては以前尋ねたのだが、リーナに対して何かしらの強い感情を抱いているのは間違いないかもしれない。

訓練などを経て会得した深雪との精神感応（テレパシー）――〝念話〟とも言うべき力で話しかけた深雪（想子制御の訓練により『誓約（オース）』で繋がっている達也の様子が感じ取れるようになったとのこと）の言葉に、悠元は何も言えなくなっていた。

バレンタイン当日②

「達也。光井さんを落ち着かせようとしたのは分かるけれど、そこはもう少し慎重になるべきだったと思うよ？」
「そうだな……こればかりは俺の責任だろうな」
ほのかは達也が素早く抱きかかえたので制服が汚れる様なことはなく、結局達也がほのかを保健室まで運ぶ形となった……しかも、お姫様抱っこでだ。
教室に戻った際にお返しを渡しそびれたことに達也は気付くものの、放課後あたりに朝の埋め合わせもしようと考えながら教室に戻ると、達也を待っていたのは仲の良いクラスメイト達の追及であった。
それを聞いた幹比古の感想に、達也はその通りであると反論する気も起きなかった。これにはエリカが意外そうな表情を達也に向けていた。
「恋愛事に鈍そうな達也君が反省するなんて……明日は大雪の予報とか出てない？　それとも熱でもあるの？」
「大袈裟にも程があるだろうに、エリカ」
こればかりは恋愛事に関して疎いだけでなく、深雪のガーディアンとしての性分から自分自身のことは完全に二の次となっていることが大きく影響している。その事情に触れてしまうと達也自身の出自まで明かすことになりかねないため、それ以上の言葉は達也の口から出ることはなかった。
◇　◇　◇
ほのかは気絶してしまったことに対するショックというか、保健室の先生から事情（主に達也がほのかを抱きかかえてきたこと）を聞かされ、教室に戻ってそのまま机に突っ伏していた。耳が真っ赤に染まっていることからして恥ずかしさと申し訳なさが同居した形となっていることに、その様子を見に来ていた悠元と深雪からは苦笑が漏れた。
「ほのか、大丈夫よ。お兄様は親切心でほのかを保健室に運んだのだから、気に病むことではないわ」

「ほ、本当に？　私、嫌われたりしてないよね？」
「そこまで不安に思うのなら、昼休み辺りにでも謝りに行けばいい。ま、朴念仁の達也だから普通に許しそうな気もするが」
少し前までは「お前が言うな」と言われそうなものだが、今の悠元は深雪と付き合っている。なので、その言葉には周囲の面々も苦笑を禁じえなかったようだ。
ふと、『天神の眼（オシリス・サイト）』でロボ研ガレージの方向に意識を向けたところ、ピクシーがいると思しき場所の想子が活性化していることに気付く。とはいえ、監視システムにギリギリ引っ掛からない程度のもののようで、特に気付く者もいないようだ。
この世界の教育システムは高等学校の段階から分野ごとの教育課程に分岐しており、とりわけ魔法科高校のカリキュラムは殆ど鮨詰め状態だ。その影響からか魔法科高校の生徒は勤勉で、二科生よりも一科生にその傾向が強い（向上心よりも取り残される恐怖心からくるものが強いのだろうが）。
そんな生徒らでも魔法競技とは別に設けられた一般教育課程の体育の時間は空気が緩みがちだ。とりわけ２月１４日というイベントがある日は。
「気持ちは分らんでもないが、もう少し気を引き締められないものかね……いいところを見せたいという男子の気概は買ってやりたいが」
「仕方がないかと思いますよ。既に婚約者がいる僕らと彼らでは立場も違いますし」
男子としては女子に良いところを見せたいというプライド……そのこと自体を悪く言うつもりなどないが、それで調子に乗って怪我をしてしまうようでは本末転倒である。とりわけ悠元と燈也に関しては出自の関係で自ずと目立ってしまうため、堅実かつ安全を確保した動きを見せている。
加えて、二人ともフィジカル面はずば抜けているため、否応なく女子の注目の的にされてしまう。それが結果的に他の男子からの羨望やら嫉妬の視線を向けられることにも繋がるため、悠元と燈也からしたら「有難迷惑」という他なかった。

「加えて、悠元の場合は誕生日もありますからね」
「姉や妹にはチョコでいいよと押し通したけどな。妹の場合は俺のような相手を恋人にしたいとか言っていたが……兄や姉らも含めて溜息しか出なかった」
その妹こと詩奈だが、元々第三研での訓練を積んでいた影響で新陰流剣武術の訓練でもメキメキ実力を上げている。三矢家での本屋敷では、空いた時間を利用して詩奈と侍郎の稽古も受け持っているが、いくら身内とはいえ身贔屓は一切しない方針は剛三と同様だ。
「身近にチートじみた完璧な兄がいるのなら無理はない話かと」
「……チートじみているのは認めるが、完璧というのは過剰表現だろうに」
こちらとしても新陰流剣武術が鈍らない様に日頃から訓練は積んでいるが、対人の稽古は正直ありがたかった。師範代だというのに結果として深雪も含めた三人の面倒を見ている形ではあるが。そのついでにエリカやレオ、そして達也の面倒も見ている形なのはどうなのか、と苦言を漏らしたいが。
こんな会話が制服に着替え終えた男子二人で繰り広げられている裏で、女子らがバレンタインの会話プラス自分らのスタイルに関する話に触れていた、などとは知る由もないが。興味がないと言えば嘘になるが、必要以上に反応するのも失礼だと思う。
◇　◇　◇
九校戦に出ていた女子（個別ではなく一つにまとめての形だが）からもチョコを貰い、気が付けばチョコいっぱいの紙袋が２つほどになっていた。それが昼休みの段階でというのが正直溜息しか出ない。そんな中、セリアから屋上に呼び出しを受けて向かうと、セリアの他にリーナがいた。
「ごめんなさい、悠元。うちのお姉ちゃんがどうしてもヘタレだから」
「ちょっと、セリア!?」
「あー、詳しい事情は敢えて聞かないが……達也との仲介でもしろってか？」
流石に監視システムが充実している魔法科高校で軍人としての行

動を起こすとはとても思えないのと、セリアからリーナのことについて相談したいという連絡に加えて、先日司波兄妹から聞き及んだ事情もあると思い、一人で屋上に来た。

その際、深雪から疑いの目を向けられたのは言うまでもないが。

「ユ、ユートまで……そんなに分かりやすい？」

「上手く誤魔化せてる方だが、分かる人には分かると思うぞ。まあ、今日は達也の場合だと風紀委員の巡回当番になるだろうから、その後に渡す方向でいいんじゃないのか？」

散々朴念仁と言われてきた自分だが、これでも他人の恋愛事情には鋭い方だ。その辺は人付き合いに加えて兄二人（元治と元継）の恋愛事情を目の当たりにしてきた影響が強いのだが。そんな自分からしたら最近のリーナの様子は分かりやすい方だろう。ただ、他のクラスメイトは空気を読んでなのか無理に聞こうとはしなかったようだ。

風紀委員の先輩方は用事（大体バレンタイン絡みでチョコを受け取ることになる）があるため、今日の当番は1年の風紀委員である達也と森崎に白羽の矢が立つことになるだろう。

「そうね、それがいいわよね……何も期待しないの？」

「見返りをリーナに求めたら、余計なところに首を突っ込みかねないからな。どうせリーナのことだから、本命を作るのに夢中で義理の分を考えてなかったのだろうが」

「うぐぅ……勘の鋭さはセリアと似ているわね、ユート」

元々セリアから貰ってしまったことに加えて、ただでさえ沢山のチョコを既に受け取っている身としては、一個でも少なくなればいいと思っている。その目標を達成するためには、リーナにチョコを見返りとして要求することなど論外だ。

「ただでさえ、男子連中の嫉妬に加えて深雪からもやきもちを焼かれてるからな。そのフォローを考えるので一杯のところにダイナマイト投下なんて御免被るわ」

それに、この後で深雪のフォローという大仕事が待っているだけに、余計な火種を持ち込まれるのは正直避けたいという本音がある。その代償で一体何を支払わされるのかは分からないが。

◇　◇　◇

バレンタインの浮ついた雰囲気は放課後になると一層加速していた。学校のあちこちでそういった風景が見られる中、悠元は先に校舎を出ていた。今日は生徒会の仕事もないため、悠元の両隣には深雪と姫梨がいる。普段ならここに達也とリーナも一緒にいるわけなのだが、その当事者らはここにいない。

「あの二人は上手くいってるのかな。ほのかのフォローに関しては上手くいってたようだけれど」

「そこはお兄様ですから。ですが、リーナは……悠元さん、お昼に何か話していたのですか？」

「脇腹を抓らないでくれ。リーナから先日の件も含めて達也と話す機会が欲しいとお願いされただけだよ」

そのことに間違いは決してない。ただ、現在の達也は深雪以外に激しい情動を持てない……自分と関わったことでその対象も次第に緩んできている兆しはあるようだが。満面の笑顔を浮かべる深雪に対して、悠元は指摘しつつも窘め、姫梨に至っては苦笑を滲ませていた。

「それにしても、どうして今日はこのような形にしたのですか？」

「浮ついてる奴らに仕事しろと言っても無理だろう？　俺の場合は逆にいてもいなくても問題はないが……二人に声を掛けたのはある意味被害を減らすためだ」

「被害、ですか？」

悠元が使った言葉に深雪が首を傾げる。バレンタインで悠元が他の男子から嫉妬の視線を向けられること自体被害と言えなくもないが、悠元が遠い目をしながら言い放ったことからして、それは違うような気がしたからだ。

「七草先輩だよ。昨年あんなチョコを贈られた身としては、今年の分は受け取り拒否したい気分だ」

別に苦いチョコが食べられないわけではない。だが、まるで日頃の恨みを形にしたかのような苦さのチョコなんて受け取りたくない。彼女のファンならば喜び勇んで食べるのかもしれないが、その後どうなるかの保証は一切できない。

「悠元さんが言っていたアレの事ですか……」
「え？　クリーチャーでも贈られたんです？」
「それはもはや錬成や錬金術の類になるから。外見はしっかりしているわけだが、味は苦みしかないチョコだった」
　この世界なら料理をしていたはずが錬金術をしていた……というのは流石にないと信じたいが、自分が追及すると現実になりそうで怖いため、決して声に出すことはしない。それはともかく、普通に作ればまともな味になる腕前のはずなのに、そうしようとしないのは彼女なりのストレス解消法なのか、それとも親への細やかな反抗なのか……両方の線もあるだけに断言はできないが。
「服部先輩には申し訳ないが、俺だって命は惜しいからな」
「…七草先輩なら『マルチスコープ』で見つけて追いかけてきそうなものですが」
「そこは上手く誤魔化すつもりだよ」
　たかがチョコ、されどチョコなのだろうが、自分の誕生日に苦い思い出を残されるのは御免被りたいのである。
◇　◇　◇
　本来なら服部のほかに達也も真由美のチョコの犠牲に遭うところだったが、本来達也が担当するルートを森崎が巡回することになったため、運よく回避することに成功していた。放課後の巡回も終えて達也が風紀委員会室を出たところでリーナが待っていた。これには達也も少し意外そうな表情をリーナに向けていた。
「あ……お疲れ様、タツヤ」
「リーナか。生徒会の仕事は休みと深雪から聞いていたんだが、誰かに用事でもあるのか？」
「え、ええ……タツヤ、少し付き合ってくれないかしら？」
　まさかのお誘いに達也も少し考え込むが、流石に力比べは二度もやっている上、魔法科高校の敷地内で戦おうという意図はないと判断し、達也はその提案を呑んだ。
　リーナが先導する形で付いて行った先は、今朝方ほのかからチョコを渡された場所――ロボ研のガレージ横であった。リーナは懐か

ら包みを取り出すと、達也に差し出した。
「その、味はちゃんと保証するから、ありがたくもらっておきなさい」
「……見るからに手作りだが、先日の詫びか？　それなら俺が謝るべきなのだが」
達也としては少々……いや、かなり意外と言うべきだった。
何せ、リーナとは風紀委員としての仕事で校内を案内した時の力比べもあるし、「パラサイト」絡みの件で対峙したこともあり、加えてマーシャル・マジック・アーツ部でのハプニングもある。
正直なところ、悪い方の印象はあってもいい印象の方はないだけに、達也の言い分は至極真っ当なものだった。
「いずれにしても、元々はワタシが吹っ掛けたことじゃない。だから、その……あー、もう、何だっていいでしょ！　ちゃんと食べなかったら承知しないんだからね！」
そう言い残して足早に去っていくリーナ。達也の手にはしっかりとリーナのチョコが握られているが、彼の中には疑問ばかりが積み重なっていくのであった。
「……深雪の事といい、難しいものだな」
その時はリーナに意識が向いていたため、達也は気付いていなかった。その直ぐ傍――――とはいってもロボ研のガレージの壁を挟む形ではあるが、ほのかの波長を受けて変質化しつつあったピクシーの中のパラサイトに対してリーナの感情が込められた強い想子の波動が流れ込んでいた。
――――本来起こりえないはずの変化が、その機械人形に起こった。

結局こうなるバレンタイン

あたしはずっと、認められることなどなかった。親父のことはさておいても、母のことは信頼している。何故かと言われると、ここまであたしが腐らずにいられたのは母のおかげもあるだろう。

そして、二人の幼馴染というか腐れ縁がいたことも大きい。幹比古――ミキは何かと弄りがいがあるのでついついからかってしまうことがある。一方、悠元の場合はというと……出会ったときに直感で悟っていた。彼と関わることはあっても、深入りすると自分の大切な何かを失ってしまいそうな気がした。

尤も、そんな直感は現代魔法の常識の否定という形で味わってしまうことになるわけだけれど。

出会ったときは上泉殿の親族の子として紹介されたわけだが、その時点で彼は新陰流剣武術の奥伝にまで踏み込んでいた。聞けば武術を習い始めてたった2年、しかもあたしより年下の子がだ。

その時点で只者ではないと認識していたわけだが、あたしの家である千葉家に武術指導という形で招かれた上泉殿の付き人として同行していて、その際上泉殿から「潜在能力はわしよりも遥かに上ぞ。今ならお主の子らも倒せるじゃろうて」と鼻高々に言っていたのとは裏腹に、元継さんと悠元はそろって盛大な溜息を吐いた。

それを見ていたあたしは、思わず笑みが漏れてしまったほどだった。

上泉殿の発言がきっかけで対決することとなった悠元と次兄様の対決。ここで次兄様は本来なら手合わせで使うことのない『圧斬り』を発動させ、悠元に肉薄する。だが、その展開は予想済みと言わんばかりに悠元はそれをなんと白刃取りの要領で抑え込み、両手に収束させた想子で『圧斬り』を破壊した。

対人戦闘用の魔法に対して直接破壊する芸当に周囲が驚く暇もなく、悠元は一気に距離を詰めて兄様に肉薄する。すると、兄様は本来和兄が得意とする『疾風迅雷』の応用で身体を強制的に動かし、悠元の死角に回り込んだ。

本来なら知覚できない死角からの攻撃。だが、それに対して悠元はほぼ反射的に身体を前のめりに倒し、床に身体が付くギリギリで両手を床に置くと、ハンドスプリングの要領で後ろに飛ぶように両腕を動かす。そして、彼は足に干渉装甲のようなものを発動させ、次兄様に繰り出した。

その結果、何が起きたのかというと……次兄様は吹き飛ばされ、道場の壁がきれいに吹き飛んだのだ。更には家の塀まで貫通したところで次兄様は気絶してしまった。次兄様は悠元が診てくれたおかげで大事には至らなかったが、数日の休養を要する結果となった。

そのときのあたしは、次兄様を吹き飛ばした悠元に対して怒りの感情を向けるよりも先に武術家としての実力に目を奪われていた。魔法の通りに動かざるをえない千刃流とは異なり、彼の使う新陰流剣武術は魔法を自らの手足として自在に使いこなしていた。

それに、免許皆伝の目録を持っている次兄様が敗れる相手となれば、あたしが到底敵う相手ではない。まあ、そのことが渡辺（あのひと）に対して強く出てしまう一因になっているのは否定しないけど。

千刃流での道場の一件後、うちの親父は悠元に目をつけてあたしを婚約者にしようと模索しているようだが、ただでさえ十師族クラスの実力者を千葉（うち）家が掻っ攫うような真似をすれば、変なところから要らぬやっかみを受けかねない。

それに、悠元はあたしの母を救ってくれた恩人であるだけに、余計な真似は出来ない。ただ、あたしの母――アンナ＝ローゼン＝鹿取が悠元に対して恋愛感情を見え隠れさせていることには思わず「歳を考えてよ……」と呟いたところでこめかみグリグリをされたことは今でも覚えている……見た目だけで比べるとあたしの姉と言われても違和感はないが。

母は愛人故に千葉の姓を名乗っていない（親父はさせたがっていたが、母が固辞した）が、あたしの場合は悠元との婚約も見越して千葉の姓を名乗ることになってしまった。ただ、千葉家のコネは最大限活用させてもらおうと思う。

高校では達也君や美月、深雪やほのかに雫といった友達にも恵まれ

た一方、悠元が十師族直系という事実も知る羽目になった。悠元のことに関しては入学前に三矢家から届けられた手紙の事実が自分にも知らされたので、トラブルの時に悠元が介入した際は特段驚くこともなかった。

ただ、達也君の妹が悠元に対して満面の笑顔で抱き着いたときは、驚きと共に一種の安堵を覚えていた。下手に悠元に恋慕して取り合いになってしまう可能性を考えた場合、あたしじゃどう足掻いても深雪に勝ち目などない。昨年末に深雪をからかって氷のホテルになったときは流石の自分も落ち度であったと認めざるを得ないけど。

そして、アイツ……初対面の時はあたしのことを「コイツ」呼ばわりしてきたのには腹が立ったけど、千葉の娘という色眼鏡無しに見てきた男子はレオが初めてかもしれない。

千葉の姓を名乗る前から道場の男どもはあたしをどこか特別扱いするように見ていたし、こんな性格だから同級生の男子どもより女子からの人気が高かった。正直なところ、あの女みたいなことになっているのには納得しかねるけど。

達也君らから千葉家のことについて聞いたようだが、それでもレオは接し方を変えようとはしなかった。あたしからすれば気兼ねなく口喧嘩できる相手……最初は本当にそれだけだったはずなのにね。

切っ掛けは多分、深雪や雫に影響されたのかもしれない。レオと新陰流剣武術の道場で鍛錬するときにハプニングもあった訳なのだが、そこであたしが女性という認識を改めて持つに至った。悠元に色々悪口は言ったりするが、それを聞いて深雪や雫らが何も言わないのは理解しているということなのだろう。

結局、バレンタインのチョコは強引に押し付けて「全部食べなきゃ許さないんだからね」と言った後で、一人恥ずかしさのあまりカフェテリアのテーブルで突っ伏した。道中で巻き込んださーやから「まあ、エリカにしたら頑張ったほうだと思うわよ」とフォローが入った訳なのだが、どこかしら余裕がありそうなその言葉にあたしは何も言い返せなかったのだった。

◇　◇　◇

悠元らが三矢家に戻ると使用人が慌ただしく動いていたため、邪魔をする理由もないと判断して各々自室に戻った。私服に素早く着替えると、机の上に置かれた端末を立ち上げる。ウィンドウに表示されたのは英語だけでなくロシア語やドイツ語などの文章。『言語理解』のお陰で読めるのは非常にありがたいわけだが、その内容には溜息が思わず漏れた。

（ドイツはローゼン・マギクラフトの日本支部新社長がローゼンの関係者……エリカとレオの線もあるだろうが、最大の理由は『トーラス・シルバー』を探れ、だろうな）

エリカの母親はローゼンの血筋を引いているため、自ずとエリカにもその影響が及ぶ。しかも、彼女からすれば祖父にあたる人物がなまじ優秀だったため、ローゼン家としての相続の権利も残ったままだということは調査済み。

『癒しの風（フローラル・ウィンド）』の臨床実験も兼ねてエリカの母親を治療したわけなのだが、それ以降は会うごとに熱い眼差しを向けてくることが多かった。それを見たエリカが「歳を考えてよ…」と呟いてこめかみ（トール・ハンマー）グリグリを食らっていたわけだが。

彼女のことを治療せずにスルーしてしまうことも考えたが、剛三に加えて穂波と深夜を既に治療している以上、無視というのは流石にできなかったし、エリカが腐らずにいてほしいという腐れ縁としての願いもあった。

魔法の効果を見るだけという打算的なものでしかなかったはずなのに、それで異性を惚れさせるというのは副産物として大袈裟だと思う……多分。

エリカの母親は千葉家の現当主と結婚せず、今は上泉家の本屋敷で先代当主こと剛三の世話係を任されている。なお、剛三曰く「当主を引退した以上、わしが女を抱くのは筋違いじゃろうて」と言い、現当主である元継には千里以外にも妻を持つよう言っているらしい……がんばれ、兄さん。

ただ、エリカの母親が元継とくっつく可能性は低いと思う。戸籍などの法的問題もあるだろうが、最大の理由は元継の恋愛に対する感覚

が鈍いのだ。なにせ、物理的な最終手段を用いることで千里と結ばれたことからして察してほしい。
（現状で完全思考操作型ＣＡＤを持っているのは俺とレオ、それとエリカの三人だけ……達也にも与えるべきか悩むところだが）
その辺を仄めかす様な事も含めて尋ねたが、達也はやんわりと固辞した。こちらで対応できない問題はないだろうが、まずは達也なりのアプローチを試みたいということだと悟り、必要以上に押し付けることはしなかった。
ドイツ語はローゼン絡みだが、ロシア語はベゾブラゾフの動向、英語はイギリスとＵＳＮＡの動向を見るためのもの。当然、その中にはエドワード・クラークと顧傑の『フリズスキャルヴ』での動きも欠かさずに見ている。正直に言って『八咫鏡』自体オーバースペックの魔法であり、残すにしても細心の注意を払う必要があるのは間違いないだろう。
すると、ノックの音がしたので端末を閉じると、扉が開いて詩奈が姿を見せた。
「お兄様、夕食の用意ができましたよ」
「そうか。じゃあ行こうか」
「はい！」
食堂に移動すると、ある程度予測していたことだが誕生日の会場へと化していた。既に三矢家の人間でないとはいえ、盛大に祝ってくれたことには感謝を禁じえない。高校入学前は周囲への目もあるためにささやかなお祝いというかプレゼントだけで済ませることが多かった。流石に誕生日ケーキも恥ずかしかったりする（転生の影響で精神年齢だけ２０年以上食ってしまっているため）が、そんなことを表立って言うわけにもいかなかった。
今年は大部分の家族に加えて達也たちからもプレゼントを貰うことになった訳なのだが、その中で一番驚きだったのは達也からのプレゼントだった。
「……テーマパークのフリーパス？」
「知り合いから貰ったんだが、使い道がなくてな。お前なら有効に

使ってくれると思ってな」
目線で「察してくれ」と言わんばかりの目線を送られたので、恐らくは牛山主任だろう。しかもペアで使えるもののようで、深雪が期待の眼差しを向けていて、その光景を見た姫梨は苦笑を浮かべていた。他の面々は日常的に使えるものがメインだった。姉と妹から例年通りチョコを贈られたのは余談だが。
誕生日パーティーも無事終わり、風呂でのハプニングもなく無事に今日という一日が終わる……そう思っていた時が俺にもあった。部屋に戻ってきた俺を待ち構えるように立っていたのは、両手を自らの腰あたりで組むようにしている深雪だった。
「……明日も普通に学校なんだが、何をしてるのですか深雪さん」
「悠元さんにバレンタインのプレゼントをと思いまして」
深雪の文面だけ見ればサプライズにも聞こえるだろう。だが、その当事者の格好はスケスケのネグリジェという有様。辛うじて大事な部分は見えないが、激しく動くと見えてしまうのは言うに及ばず。
ちなみにだが、姫梨からのバレンタインは前日に受け取っており、今日に関しては学校のこともあるので穏便に済んでいる。
「（達也を呼んでも意味はないか……）で、そのプレゼントは？」
「まずは、こちらです」
深雪が差し出したのはラッピングされた箱。その中身を見ようかと思う前に深雪が抱き着いてきた。１５歳とは思えぬ色気と柔らかさが伝わってきており、気を抜くと深雪をそのまま押し倒してしまいそうになっていた。
いくらそういう関係を持ったとはいえ、学校生活に支障が出るようなことがないよう細心の注意は払っているわけだが、深雪のスキンシップが更に加速しているのは間違いないだろう。今の格好がその最たるものだと思う。
「悠元さん、誕生日プレゼントとして私を貰ってください」
「もう少し自分自身を大事にしような……けど、今更取り消しは無しだからな？」
「あっ……今日は余すところなく食べられちゃうんですね」

魅力溢れる好きな女性が誘惑してきている以上、断れる勇気がある奴は本当の漢だと褒めたいと思う。それに、深雪と付き合い始めてからというもの、彼女がどんどん女性としての魅力を増しているのは間違いない。

正直な話、深雪のお願いで下着のお店に行ったときは生きた心地がしなかった。深雪だけでなく雫や姫梨でも同様のことがあり、しばらく何もしたくないとごねたくなったこともあった。

複数の女性と関係を持つ代償と言えばそうなのだが、周りの視線を受け流すのもそう楽なことではない。特に深雪は周囲の視線を集めてしまうほどの魅力を持っているだけにだ。

それでも、最後の一線だけは必ず死守する――そう決めた上で深雪を押し倒した。この後、何があったのかは……流石に口に出せないので勘弁してほしい。強いて言うならば、翌朝の深雪の機嫌がすこぶる良かった、と述べておく。

有機物よりも無機物に驚く

翌朝の三矢家。悠元は地下訓練場にていつも通り魔法力制御の訓練に勤しんでいると、耳に付けていた通信機に連絡が入る。その連絡の主は元であった。

『悠元。訓練の途中で済まないが、一度書斎に来てくれるか？』

「……分かった。流石に数分ぐらいは欲しいけど」

『それぐらいは分かっているさ』

普段なら訓練を切り上げさせるようなことなどしない元が態々連絡を寄越した理由――――少なくとも考えられる可能性は三つあるが、まずは話を聞くべきだと考えて魔法で身なりを綺麗にした上で書斎に向かった。

ノックをした上で書斎に入ると、部屋の中には元のみであった。普段なら使用人である仕郎も傍に控えているのだが、どうやらこれから話す内容は矢車家にも聞かせたくないことだと判断しつつ、部屋の中へと進む。

「すまないな、大事な時だというのは分かっているのだが、こればかりは悠元に伝えるべきだと思ったからな」

「通信でも万全とは言えませんから妥当な判断かと。して、何があったのですか？」

「それなのだがな……聞いた自分ですらも理解の範疇を超えてしまった」

「？」

魔法という見えない力を使役する立場。そのトップクラスかつ異質な経験をしている元ですらも理解出来ていないという言葉に悠元は首を傾げた。その反応は尤もだ、と思いつつ元はお互い落ち着いて話すためにソファーへ腰かけることとなった。

「第一高校から連絡があった。本来のメンテナンス時間よりも早く３Ｈ・タイプＰ９４がサスペンド状態から復帰したらしい。それが午前５時のことだ」

最初は外部から何らかの干渉を受けてのものだと考え、外部プログ

ラムからのシャットダウンを試みたらしいが、Ｐ９４はその間もプログラムの干渉を受け付けなかった。Ｐ９４――「ピクシー」は魔法科高校の生徒のデータベースにアクセスしていたため、データベースとの無線通信を切ることでようやくサスペンド状態へと戻った。
　ここまでのことならば原作の範疇で済むわけなのだが、問題は元が放った言葉であった。
「第一高校の廿楽先生が調べてくれた範囲での話になるが、どうやら本来Ｐ９４にはない機構が追加されていたらしい。具体的には、ピクシーのフレームそのものが変化したとのことだ」
「……え？」
　現状で判明している部分の話になるが、ピクシーの基礎フレーム自体が大幅に作り替えられており、その部分に関して同型のマニュアルで対処不可能とのことらしい。不幸中の幸いなのはフレーム自体が複雑化していても稼働に必要なプログラム自体は変わっておらず、ピクシーに元々備わっている機構も機能しているという点だ。
　「パラサイト」が有機物に干渉して大脳の脳細胞を組み替えてしまう現象は確認済みだが、無機物に関しての能力は一切備わっていないし、そもそもピクシーに関しては自分の手など一切入っていない代物。原作対策としてピクシーなどの３Ｈ関連の知識も学んでいるが、これには首を傾げるばかりだった。
「流石に話だけだと対処できなさそうだよ……とりあえず、実際に見てみないと判断は下せなさそうだ」
「その点に関しては任せようと思う。少なくとも、ハードウェア関連でお前の右に出るのは世界でも数えるぐらいだろうからな」
　可能性があるとするならば、セリアがリーナに何らかの干渉を及ぼして、その自覚がないリーナによって変質化した……これが現状における最有力の可能性である。自分が張った結界魔法がピクシーの変質化を促した可能性もあるだろうが、現状は机上の空論を出ない推測でしかない。
「悠元に聞きたいが……もしかして、高校で出た先日のパラサイト絡みか？」

「『アリス』のこともあってね……幸い、ＵＳＮＡとこの国にしか出ていないから、まだ対処は出来る範疇だと判断した。けど、さっき聞いた変化なんて現代魔法の範疇を超えてしまってるよ」
　ピクシーの中に眠るパラサイトが自我に目覚めるというのは既定路線として残したが、本来ほのかの想子が二度影響する形だったところにリーナという存在が介入した。それに加えてセリア対策ということで張った結界魔法。二つのイレギュラーの結果、普通では起こりえない無機物の物理的構造変化まで起きていることに頭を抱えたくなった。
◇　◇　◇
　案の定というべきなのか、その噂は第一高校の中でも瞬く間に広がった。何かと話題好きな魔法科高校の生徒の好奇心によるものといえば、ある意味仕方のないことだが。そして、悠元も引っ張り出される羽目となった。達也に関しては別の同級生に引っ張り出される形となったらしい。
「五十里先輩、状況はどんな感じです？」
「悠元君。そうだね……僕らも甘楽先生から話を聞いたけど、ハッキリとした結論は出せないって言ってたね」
　３Ｈ（Ｈｕｍａｎｏｉｄ　Ｈｏｍｅ　Ｈｅｌｐｅｒ：人型お手伝いロボット）が魔法の力を行使した。傍から見れば、魔法科高校の生徒でなくとも恐怖に感じることだろう。
　単にヒューマノイド型のロボットが笑ったとなればそこまでおかしくはない……というか、魔法関連の技術者は非魔法系技術である純粋機械技術に疎い傾向がある。ＣＡＤという技術を使っているのにもかかわらず、というツッコミは野暮かもしれないが。
「Ｐ９４のボディ――――電子頭脳から想子の放出が観測されたそうだ。その直後に骨格フレームのエラー音が発生したけど、それも一瞬だったと先生は述べていた」
　そのエラー音は元の言っていた基礎フレームの変化なのだろう。正直なところ、一体何がどうしてこうなったのかを解析する必要はある。もし転生者という要素がパラサイトに対して変化を及ぼすとい

うのなら、『アリス』も含めた未知数の産物にも説明がつくかもしれない。
　現在、ピクシーはコマンドに従ってサスペンド状態を維持しているのは間違いないと五十里が述べると、ここにいるメンバーの中で詳しいレベルに入る達也がピクシーの電子頭脳を調べることになったわけだが、その達也は悠元に視線を向けた。
「悠元、手伝ってくれるか？　ここにいる中だと古式魔法に最も精通しているのはお前だからな」
「まあ、吝かじゃないけど……他にも何人か呼んでおいた方がいいな」
　その間にあずさがメンテナンスルームの使用許可を取ってくれたようで、自ずと授業をサボる形となってしまうことには……正直なところ、ラッキーと思うべきか悩んでしまったのだった。
　通常のＣＡＤ調整を行う部屋（フィッティングルームと呼ばれている）とは対照的に、ＣＡＤの詳細な調整や簡易改造を行うのが主目的であるメンテナンスルームはあまり人の出入りがない。
　その部屋には達也ら二科生メンバーと悠元と燈也、佐那と姫梨に加えてあずさと啓がおり、花音は深雪らにならう形で購買に走っており、余計なギャラリーは服部が締め出している。昼休みに引っ張り出された達也と悠元はホットサンドを齧りつつ五十里の説明を聞いていた。
　――――２月１５日、午前５時。
　本来、午前７時に起動するはずの自己診断プログラムが２時間早く起動したのは、重要プログラムの更新作業が入っていたためにオペレーター側が予め設定していた。その更新作業自体は何の問題もなく終了したわけなのだが、ピクシーは校内のデータベースと交信を始めた。
　これをサーバー側はマルウェアの感染を疑い、全システムの強制停止コマンドを送ったのだが、ピクシー側はこれらのコマンドを受け付けなかった。最終的には校内データベースへのアクセスを遮断することでピクシーはサスペンド状態に戻った。
　異常稼働の間、ずっとピクシーが笑みを浮かべていたことと、異常

稼働の直後にごく短時間ではあるが淡い光を纏ったことを監視カメラが記録していた――――

「何かを待っている……待ち遠しそうな表情だったよ」

五十里の説明を聞きつつ、悠元はプライベートでしか使わない折りたたみ型端末を叩いてピクシーの全プログラムを虱潰しに見ていく。

傍から見れば文字の羅列ばかりで何をしているのか分からないが、この端末には魔法技術が使われていて『万華鏡（カレイドスコープ）』と直結することでスーパーコンピューターと遜色ない処理能力を発揮する。魔法の訓練ではどうしても表沙汰に出来ない固有魔法の訓練法として独自に編み出した方法であり、その意味でハードウェアの技術を学んでいて助かった。

達也は悠元の作業が一段落したところで声を掛けた。

「悠元、どうだ？」

「……これから言うことは冗談に聞こえるかもしれないが、本当のことだと認識してほしい」

悠元がそう言うからには余程のことだろう。というか、神楽坂悠元という人物の特異性を知る者からすれば、その彼が言うことに嘘が混じっているなど考えづらい……代表する形で達也が続きを促したので、悠元が説明を始める。

「まずピクシーの基礎骨格フレームなんだが、プログラム自体は殆ど変わっていないのにもかかわらず、ピクシーが本来持っているフレームから大幅に変化している。これに最も近いレベルのフレームとなると……ＦＬＴで現在開発中の次世代型人工骨格フレームにあたるかもしれない」

「えっ……!?」

ピクシーの中にパラサイトがいることは『天神の眼（オシリス・サイト）』で確認済みだし、それが本能的な作用を以て達也たちを襲う可能性は限りなく低いということはアリスの助言で確認している。

なので骨格フレームの変化を調べたわけなのだが、その技術は悠元も基本設計に関わっているＦＬＴで現在開発中の医療用人工骨格フレームに限りなく近い。こうなると、セリア対策で張った結界魔法経

由で自分の情報を読み取った可能性が高い、と思いつつ話を進める。
「まあ、それはともかく……プログラム自体も特に噛み合わせのエラーが起こるような原因は見られなかった。あとは電子頭脳を起動させて〝視て〟みないことにはどうにも言えないだろう」
「分かった……悠元も大変だな」
それが深雪のことも含めてというのは、ここにいる悠元と達也にしか通じないことだと理解しつつ、達也は管理者権限を示すカードを胸ポケットのあたりに付けて、ピクシーの起動を進めた。論文コンペの時に何度も面識を持っているとはいえ、達也にピクシーの権限は持ち合わせていない。そうしてピクシーがアドミニストレーター権限を確認するといったあたりから、その挙動に齟齬が生じ始めた。
具体的には、達也の胸ポケットではなく達也の顔に視線が向けられていた。そして、小さな声がピクシーから聞こえてきた。
――〝ミツケタ〟
腰かけていた台座から降り立つと、ピクシーは軽やかな挙動で達也に飛び付いた。そして丁度購買から帰ってきた花音たちもその光景を目の当たりにすることになった。
「達也……すまない、お前もストレスを抱えていたんだな。言ってくれたら配慮したのに……」
「お兄様、そのようなご趣味が……いえ、私は気にいたしませんから」
「悠元に深雪、二人ともやめてくれ……」
率先して言い放った悠元と深雪の連係プレイに、達也が溜息でも出そうな様子で二人を窘めた。この二人は特に言葉を交わさずとも息の合った行動を見せるし、深雪が新陰流剣武術の弟子となったことでその練度も大幅に向上している。
その騒ぎはあずさのとりなしで沈黙することになり、ピクシーは達也の指示で台座に座った。こればかりはアドミニストレーター権限によるものというより達也による影響が大きいわけだが。
ピクシーの内部を美月が視る形となったわけなのだが、本来ほのかの思念波を写し取るだけだったはずが……美月は首を傾げていた。
「これは……ほのかさんの思念を写し取ったのは分かりましたが、他

にも写し取った人がいるみたいで……すみません、達也さん。これ以上は私にもわかりません」
「いや、現時点でそこまで分かっているのなら上出来だろう」
達也の台詞が的確だと思いつつ、悠元も改めて『オシリス・サイト』でピクシーに憑りついているパラサイトを読み取る。ほのかの思念波の他に写し取ったものは……どうやら、リーナの思念波まで写し取っているのが確認できた。
『――その疑問もご尤も、かと思われます』
二人の思念波を写し取ったまでは説明可能だろうが、それならば人工骨格フレームの変化については現状で説明不能に近い。その心境を読み取ったかのように、ピクシーが〝言葉〟を発したのだった。
ただ、原作と異なる点があるとするならば、ピクシーに多少なりとも思慮深さが混じったかのような口調だったことには多少驚きを隠せなかったのだった。

事案の処理は楽じゃない

Ｐ９４に憑りついたパラサイト。今後はピクシーと呼称することになる存在との邂逅。これには生徒の大半が驚いているが、一部の面々――古式魔法に詳しい姫梨と佐那、そして悠元は驚く素振りを見せなかった。それに気付いたのか、ピクシーは視線を悠元に向けていた。

『――驚かれないのですね』

「内心驚きはしてるけどな。今の様子を見る限り、達也の命令なら何の制約もないように見えたし」

そもそもの話、ピクシーに関しては原作知識で存在を認識しているため、論文コンペに関してはピクシーに存在を悟られないよう気配を偽っていた。本来なら達也との会話に集中するはずが、こちら側にも話題を振ってくるあたりはほのかの思念波だけを拾った場合と異なっている。

だが、姫梨や佐那も驚きはしていなかったのに何故なのか……という疑問はピクシーが先んじる形で答えた。

『光井ほのかの思念波を受け取った際、その中には貴方に対する感謝の念も含まれていました。ガレージ周辺に張った結界術式は見事という他ありません』

「ああ、成程ね……無機物干渉も含めて疑問は多くあるけど」

ほのかと達也を上手く引き合わせるようにセッティングしたのは間違いなく悠元だが、ほのかの一途な思念の中に上手く紛れ込むというのは……奇跡の所業と評することしかできないだろう。

憶測にはなるが、人工骨格フレームの改変は悠元という存在を通して実現できた、という結論しか出てこない。加えて、結界術式自体が物理法則の改変難度を下げる役割を果たした。セリアに気付かれないために強度自体はかなり高めとしていたが、それが『ブリオネイク』の結界容器と同じ働きを果たしていた。

ピクシーの一言で達也たちの視線が悠元に向けられたということもあり、観念したような口調で話す。

「……薄々気付いているかもしれないが、この前学校を襲撃したパラサイトと同一だ」
「そんな気はしていたが、どうして消滅させなかった？」
今までその方法が通用しなかったが、今後もそれが通用するとは限らない。何せ、今後のことも考えるとパラサイトを増やす方法がある程度確立されているのは間違いないと踏んでいい。その最たるものが〝パラサイドール〟だ。
「仮に消滅させて、他の仲間が躍起になってパラサイトを無秩序に増やされたら堪らなかったからな。少なくとも、ここにいるピクシー……と呼称すればいいか？」
『ええ、元からそのようにお願いするつもりでした』
正直なところ、パラサイトを兵器として利用する方法は理に適っていない。現行の術式では不確実性の要素で制御や拘束術式が破損しうる可能性を含んだ状態で運用しなければならない。いくらサイキックが強力とはいえ、万が一その力が味方に向かえばどうなるかぐらい分かっているはずだ。
兵器に一番求められるのは「いかに自軍の安全を確保するか」だろう。核兵器に厳重なセキュリティーを掛けているのは、それが敵に渡った時のリスクが極めて高いということを認識しているからだ。
十全の安全も確保できない博打要素に賭ける前提の兵器なんて、正直に言えばお断りである。それを言ってしまえば『アリス』のことも似たようなものになってしまうが。
「俺が判断する限りだと、ピクシーがパラサイトの生存本能に従って何か害を為すようには見えない。姫梨と佐那の判断はどうだ？」
「そうですね……私も悠元さんと同じ意見です」
「同意見です。ピクシー、貴女は私たちに害を為すつもりはある？」
『いいえ、それは一切ありません』
ほのかとリーナ――――二人の思念波を受け取ったことで、達也に尽くしたいという気持ちが強く反映されているものの、ほのかの慎重さとリーナの積極さが上手くいいとこどりでミックスした形となっているのが確認できた。

人工骨格フレームの変化はリーナの〝アンジー・シリウス〟としての運動能力が反映された結果なのだろう。それでいて元々内蔵されている燃料電池だけで事足りてしまうのはもはやチートレベルでしかない。

達也とピクシーの問答の中で達也に対する熱い感情を吐露している傍で、恥ずかしさのあまり叫ぼうにも取り押さえられているほのかの姿があったのは言うまでもないが。結局、ほのかの心が先に折れてしまって叫ぶことすら叶わなかった。

「色々驚きはあるけれど……悠元君、どうするんだい？」

「そうですね……」

ここにいる面子の中で最も家格の高い立場にいる悠元。ピクシーの安全は確保できたとしても、目先の問題は今夜実施される予定の〝襲撃〟だ。

悠元は事前にセリアから情報を貰っているが、下手な勘繰りを避けるために達也へ忠告はしている。以前のチャールズ・サリバン軍曹のこともあってか、達也もその忠告は素直に聞いていた。

「ピクシーは学校に所有権がありますから、一介の学生に手を出せる範疇じゃありません。なので……俺が母上に話を通すので、ピクシーの件はこれで一旦しまいにしてください。ちょっとした〝学校の七不思議〟ということで片付けましょう」

「その筆頭がそれを言っていいの？」

実際のところ、ピクシーの件については予め千姫に話を付けており、ピクシーの現在の所有権は達也に移っている。ようは達也が大本の管理者権限を有していて、魔法科高校にその権限の一部が貸与されている形へと既に変わっている。

達也が卒業後は新たな３Ｈを配備することも既に決まっていて、その資金はというと「トーラス・シルバー」としての儲けの一部を使っている。尤も、その穴埋めという形で四葉家から謝礼金が支払われたのはここだけの話だが。

エリカの言葉に納得いかなかったが、話が進まないと判断して無視することにした。

◇　◇　◇

ピクシーの一件が〝一応〟一区切りついた形となり、悠元は司波家のリビングで一人端末を叩いていた。

ここにいない達也と深雪はといえば、深雪の稽古事の送迎に達也が同席している形だ。悠元も最初は同行してほしいとお願いされたが、ピクシー絡みで早急に片付けなければならないことがある、と述べると深雪は渋々ながらも引き下がってくれた。

その件も確かにあるのだが、久々の一人きりになった状態を作り出したのはセリアと以前語っていた〝茶番〟にも大きく関係している。その空気を呼んだかの如くリビングの着信音が鳴ったので悠元がパネルを操作すると、映し出されたのはセリアの姿だった。

「意外にも早かったな。もう少し掛かるものかと思ったけど」

『まあ、元々「ブリオネイク」を使うとなったら私のフォローは要らないからね。大佐殿の目を欺くのは骨が折れたけど……でも、本気でやるの？』

セリアの表情はいかにも「悠元を敵にした場合、達也と深雪から敵対の姿勢を向けられないか」という一点に尽きていた。まあ、ほぼ半自動で蘇ってしまう無敵超人の原作主人公なんて、敵にするよりこちらが妥協して味方になる方が労力を使わずに済む点は同意する。尤も、自分の場合はその影響で深雪を婚約者に迎える羽目となったが。

「本気でやらんとバランス大佐から疑いを持たれかねんだろうが。しっかし、前日にバレンタインがあってのこれだからな……深雪の機嫌を直すことの方が労力を使いそうだ」

『……お兄ちゃんって、もしかして絶が付いちゃうアレ？』

「それ以上言うと、『レーヴァテイン』を推進力にした太平洋横断ツアーもしくは世界一周旅行へ強制ご招待するからな？」

「レーヴァテイン」のスペックは予め国防総省から引っこ抜いてきたが、「ブリオネイク」のスペックを遥かに逸脱している専用機仕様の魔法兵器という他ない。それがセリアにしか使えないということは、ＵＳＮＡでもセリアを極力怒らせない様に苦慮しているのが読み取れてしまう。

今回の通信はセリアが持つ転生特典に依存した能力で行われているため、『フリズスキャルヴ』でも読み取り不可能という有様。何せ、情報次元を通信回線として利用する方法など現代の魔法技術では確立していない。
『そ、それは勘弁……でも、否定はしないんだね』
「俺も男子だということは自覚してるつもりだからな」
『これは、私も倒された後にお持ち帰りされる流れ？』
「現状曰く付きすぎるお前に手を出すメリットが皆無だ。なので却下」
『うー……お兄ちゃんのイケズ』
一応これから本気の命のやり取りをするはずなのに、とてもそんな雰囲気に見えないというのは否定できない事実だろう。だが、その点に関してはお互いに納得した上で話を進める。でないと、色々ややこしいことになってしまうからだ。
「お前が納得したとしても、お前の二人の祖父――ＵＳＮＡの大統領閣下と九島将軍閣下というハードルがあるからな。前者は乗り気だったが、万が一後者が日本に戻ってきたら事態がややこしくなるわ」
『あー、それがあるよね、うん。九島閣下の弟というだけでも巻き込まれるのは必至かぁ……もう、なんで私はこんなことになってるのかなあ!?』
こればかりはこちら側も叫びたい気分だ。
九島健の情報については剛三から聞き及んだが、強化措置を受けた烈とは違って〝先天的〟の強大な魔法力を備えていたことは確認済みだ。このことは当然烈も知っている筈だが、息子・現当主である九島真言には恐らく伝わっていない可能性が高い。
リーナやセリアの名字に〝クドウ〟が名残として存在しているのも頷ける話だし、二人揃ってスターズに入隊したのも納得できる話だ。ただ、疑問に思うのは九島健が爺馬鹿であっても、そこまで若い姿を維持しようなどとは思わないはずだ。この疑問は追々にすることとして、話を詰めることにした。

「一対一（タイマン）に持ち込むのは屋上での打ち合わせ通りだが、大佐殿のことだから『スターダスト』も投入してくるのは目に見えてる。で、達也なんだが……原作と違って『ブリオネイク』は通用しない」
『や、やっぱり……投擲榴散弾の件はリーナから聞いたけど……』
想子防盾（サイオンシールド）の強度は訓練を始めた昨年夏より大分強化されており、その強度計測係みたいなことをしているエリカ曰く「達也君のコレ、下手するとＣＡＤが分解されそうで怖いのよね」と述べていた。言われた側の反応はと言えば、納得がいかなそうな雰囲気を滲ませていたが。
どうやら、達也は無意識的に仮想魔法演算領域を『分解』や『再成』の魔法演算領域と直結させて足りない出力を補っているのが確認出来た。つまり、相手の攻撃を分解しつつサイオンシールドを常に万全の状態で構築し続けている形だ。やっていることがある意味『ファランクス』の上位互換版という有様に「流石、お兄様」と褒める言葉しか出てこなかったが。
そんな達也の魔法強度だが、計算の結果……『ブリオネイク』を真正面から受け止めるのが可能、という結果が出た。あくまでも計算結果なので実際の結果は異なるかもしれないが、こんな無敵超人をどうやったら倒せるのか教えてほしいと思う。
『あ、そういえば国防軍絡みは大丈夫なの？』
「こっちの事情は問題ない。父も動かしたし……ただ、七草家と九島閣下が水面下で動いているのは間違いない。原因はこちらにあるから、こっちでケリを付ける」
本来ならエリカの兄である修次が達也の護衛と監視に入っていたが、今の達也にとっては〝足手纏い〟の部類になりかねない。なので、元を通じて国防軍に達也への横槍を防ぐよう要請した。元も達也のことは理解している立場なので、すんなり話が通ってくれたことには感謝している。
それでも万が一を考えて元継に掛け合い、修次を一時的に上泉家――――新陰流剣武術の訓練に参加させている。彼ほどの実力者を国防軍が放置するとは考えにくかったからだ。

ただ、その絡みで七草家が国防軍のセクションを使って達也に探りを入れていて、今夜の襲撃もどうやら〝見逃す〟つもりで動いている。現に、司波家周辺でも七草家お抱えの魔法師がうろついていることなど知っている。

しかも、その情報が流れている先に間違いなく九島烈がいることも掴んでいる。

『……達也(おにいさま)のこともそうだけれど、お兄ちゃんも狙ってるよね。てか、調べた情報だとあの小悪魔先輩の妹さんと婚約してたんでしょ？』

「俺が殆ど与り知らぬところでな」

泉美との婚約は元々親であった元の範疇であり、当事者である悠元がそれを知ったのは婚約解消後だった。

理由はいくつか存在するが、そのうちの一つが当時三矢の姓を名乗っていなかったことに起因する。十師族直系の娘を古式魔法の大家の親戚筋に嫁がせる、というのは魔法使いの風聞的にも反発することは目に見えていたため、婚約の発表自体は悠元が魔法科高校に入学して三矢の姓を名乗ってから、という段取りが既に組まれていた。

魔法師が早婚を望まれている以上、悠元としても知らぬ相手ではなかったから父の留飲を下げる意味でも受け入れるつもりであった。尤も、それを向こうからぶち壊した形になってしまったが。

「四葉とのこともあって結果的に功を奏した形になったわけだな。ただ、七草家に関してはどうなるか分かったものじゃないが」

『それを言ったら、うちなんて烈の伯祖父(おおおじ)さんがそうするとは思えないけど、現当主が私やリーナの存在を耳にしたら……』

これから戦うことよりも、その先に待ち受けているものに対してお互いに溜息しか出なかったのは……生まれた国は違えども、同じ十師族の血を引く者としての〝宿業〟のようにも思えてしまったから、かもしれない。

物騒な茶番

その頃、達也と深雪は自家用の自動運転車（名義上は達也の父親だが、購入資金はトーラス・シルバーの報酬から購入している）に乗っていた。コミューターがあるにもかかわらず、と思うかもしれないが、その理由は深雪の保安対策と箔付けに重きが置かれている。

「しかし、悠元さんがパラサイトをただ排除する方向にもっていかなかったことには驚きです」

「一度目の当たりにした力を欲する輩は多いから、恐らくその対策だろう。少なくとも、悠元がパラサイトの力を欲した上での行動とは思えないが」

達也は、悠元が自身の戦略級魔法である『質量爆散（マテリアル・バースト）』を使用できることは知っているが、彼自身の口から「俺はあくまでも参考程度に学んだだけだし、下手に乱発して達也の身動きを狭くしたくないからな……というか、実戦で使う気にもならん」と聞き及んでいる。それが嘘とは思えないし、彼が使える『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』は発動速度だけで言えば『マテリアル・バースト』と同レベルだろうと推察している。

世界屈指の戦略級魔法師が態々パラサイトの持つ超能力（サイキック）に興味を持った可能性は否定できないが、寧ろ彼がパラサイトを支配していても不思議ではない……そう思ってしまったことに達也は苦笑のような表情を滲ませた。

「……どうかしたか、深雪？」

「いえ、その、お兄様が苦笑されていましたので」

「何、悠元ならパラサイトに支配されるどころか逆に使役しそうな気がするからな」

実際のところ、悠元は既にチャールズ・サリバン軍曹から分離したパラサイト――「アリス」を使役している形になっている。現状ではそのことを知らないため、達也の冗談めいた推察に深雪も笑みを漏らした。

「ふふっ、悠元さんならやってのけてしまうかもしれませんね。ところでお兄様、ピクシーはどうなさるおつもりですか？」

そこで深雪が否定しないということは彼女も大分〝染まってきた〟のかもしれない。その変化が本人たちにとって良かったかどうかまでは結論付けることなど出来ないが。

そのことはおいておき、深雪は一番気になっている事象を達也に尋ねた。

「そのことは悠元とも話したが、俺が卒業するまで学校に置いておくのが一番だと判断した。美月や姫梨、佐那に加えて悠元のお墨付きは得られているが……この騒ぎでピクシーを学校から引き離して、七草家や九島家が動くのは拙い」

「それは、悠元さんが一番懸念されていたことですね？」

七草家だけならまだしも、九島家――先代当主である烈が都心にいる以上、下手にピクシーを学校から動かすのは彼の目に留まりかねない。烈が孫娘にあたる響子の力を当てにすることも含まれており、独立魔装大隊の力を当てにしなかったのはその部分が大きく関係している。

加えて、響子が三矢家を訪れたことも烈の耳に入っている前提で、悠元はピクシーを学校の敷地内に留め置くことを推奨した。

「ピクシーの仲間が奪われた仲間を取り戻そうと動く可能性もある以上、目の届く範囲に置いておくのが最良の判断だと結論付けた。パラサイト関連については門外漢の部分も多いから、全面的に悠元の判断を仰ぐことになるな」

達也自身のパラサイト対策が完成していない以上、その対策が可能な面々――特に悠元が請け負う形となる。

そんな話をしつつ、二人を乗せた自動運転車は目的地へと進んでいくのであった。

◇　◇　◇

達也と深雪が自動運転車で目的地に到着したのとほぼ同時刻、悠元は『鏡の扉（ミラーゲート）』で直接上泉家所有の大規模訓練場――表向きは奥多摩にある国防軍の魔法訓練場――に移動した。

この場所なら万が一の言い訳も楽にできるということで予め剛三の許可も得ていて、セリアにもこの場所での戦闘を伝えている。尤

も、セリアはまだ到着しておらず、その代わりに見知らぬ気配を周辺の森から複数感じ取っている。
（3日前に伝えておいたはいいが……いくら同盟国とはいえ、他国の軍人を勝手に入れるんじゃねえよ）
その台詞は自分にも言えるため、内心で留め置く形とした。
スターダストの動きだが、どうやら悠元が無意識的に気配を偽っているために認識できてない節が見られた。自身の隠形をセリアがあっさり見破ったのは彼女特有の能力によるものが大きいようで、どこかしら安心できたのは事実であった。
「ただ、隠密をするんなら自身の気配位偽れるようになるんだな」
悠元が左手を挙げ、そして振り下ろすと――複数個所で何かを押しつぶしたかのような音が響き、地面の振動が悠元の足元にまで伝わってくる。そして、悠元が左手を握って開くような動作をすると、悠元からみて森林の境界線にあたる木に複数の人物が気絶した状態で頑丈なロープで拘束されていた。
何をしたのかと言えば、『ファランクス』でスターダストの連中を全員叩き潰して意識をブラックアウトさせ、天神魔法の金属性魔法で彼らの装備から金属製のロープを創り出して木に括り付けた。移動自体は『ミラーゲート』で行っており、この時に備えて色々訓練してきた。
最初の『ミラーゲート』はバレていないのかという疑問はあるだろうが、この魔法の大本である『万華鏡（カレイドスコープ）』は〝使用者当人以外認識できない〟という特性を備えている。
2年前に使った戦略級魔法『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』は想子に光の属性を付与・収束しているため、基地の司令室からその光を実際に見ることは出来たが、展開したプリズム部分は『カレイドスコープ』の性質に依存しているため、軌道上からの魔法監視システムでは認識されなかった。
〝不可視の戦略級魔法〟――その魔法を放った存在が〝奇術師（イリュージョニスト）〟の名を冠しているのは当然の流れである。
そして、悠元がスターダストの連中に憐みにも近い表情をしたとこ

ろで空中に気配を感じ取ったので視線を向けると、右手に大きな鞄を持ったセリア――〝ポラリス〟の格好で姿を見せていた。
「あっけないものだな……来たか」
「はあ、やっと着いた。って、もうスターダストの連中が片付いてるし……本当にやるの？」
「先に述べたが、何も消耗してなかったらバランス大佐に疑われかねないだろうが。言っておくが……いくら前世の誼があるとはいえ、今回ばかりは本気だからな」
　前世の妹に対して恨みなどない。だが、今の自分はこの国を護る「護人」の次代を担う者。加えて、先日のチャールズ・サリバンの一件もある。その件のお返しも含めて、セリアには「レーヴァテイン」で戦ってもらわねば話にならない。
　悠元は手を合わせると、彼を中心に発生する蒼白の雷。その雷は一本の太刀を形作り、悠元は徐にそれを手に取ると雷が晴れ、その衝撃波が周囲に吹き荒れる。
「……なにそれ。お兄ちゃん、死神にでもなったの？」
「言っとくが、これ以上の進化は現状できないからな。お前の『レーヴァテイン』を相手にするとなったら、従来の武装一体型ＣＡＤだと出力が足りないんだよ」
「さっすが、お兄ちゃんは分かってるね」
　セリアが鞄から取り出したのは一本の大剣。ＣＡＤのような機械的なフォルムではなく、ファンタジー小説で出てきそうな真剣にほど近い。唯一特徴的な点としては、本来刃先となっている部分がわざと潰されているような形になっていた。
　彼女が想子を込めると、刃先の部分が展開して炎の属性が込められた高密度の想子の刃が姿を見せる。
「私がこの世界に来るときに貰った特典――『全ての事象を認識する』力。これはＦＡＥ理論に基づいて私自身で手掛けた魔法兵器『レーヴァテイン』。お兄ちゃんは、これを超えられるかな？」
「……〝全て〟ねえ。なら、俺の全てを認識して見せろ、セリア・ポラリス」

悠元は自身の握った太刀――――「叢雲」に四霊の一つである『鳳凰』を纏わせた。
――――もう一度言っておくが、別に恨みなどない。あの時は家族への情があって超えることを諦めた〝壁〟。この世界で生き抜くために、今こそ超えさせてもらう。
決意と共に、悠元は「叢雲」を強く握りしめて一歩を踏み出す。
その次の瞬間、二人の持つ武器が激しくぶつかり合い、凄まじい衝撃波が周囲にも波及する。本来、この世界において突出した力……二人の戦略級魔法師が剣を交える。
神楽坂悠元とエクセリア＝クドウ＝シールズ――――前世でもすることのなかった〝兄妹喧嘩〟が幕を開けた。
「ホント、デタラメだな！」
「それを、お兄ちゃんが言えたことかなっ！」
本来、大剣という部類は小回りの部分で太刀に劣ってしまう。だが、この『レーヴァテイン』は想子を流す機構を除いて限りなく軽量化されており、加えて想子の刃は使用者のセリアの意思に従って伸縮自在となっている。
それなら騎士剣サイズが理に適っているのだが、それではセリアの持つ想子の圧力に耐えられなかったのだ。こればかりはこの世界の技術力に依存してしまうために致し方のないことだった。
加えて、セリアの振るう「レーヴァテイン」には炎の属性が付与されている。この部分は恐らく古式魔法――――彼女の祖父が大きく関係しているのは間違いないだろう。
その炎の温度は概算で摂氏６５００度。太陽の表面レベルの温度に達しており、従来の概念から考えれば、その熱波で周囲の森林は瞬く間に炭化するであろう。だが、そうならないようになっているのはＦＡＥ理論に基づく物理改変能力の限定化だ。
「人工太陽になりかねないような兵器を振り回しているお前に言われたくないわ！」
「既に人間の限界を超えているお兄ちゃんが、それ言う!?」
「そのままそっくり返すわ！」

刃先が接触した瞬間にのみその温度改変が生じるようになっており、従来の兵器やＣＡＤではまるでバターを切るがごとく切断されるであろう。
ＦＡＥ理論に基づく結界容器の技術は「ブリオネイク」で完成したが、「レーヴァテイン」はその技術を搭載することが出来なかった。その証拠として、「ブリオネイク」の形状は原作のものから一片たりとも変化していなかったのだ。
ならば「レーヴァテイン」の結界技術はどう搭載しているのか……答えはその技術の原理をセリアの力で実現可能としたのだ。転生特典という理外の力で実現させた云わば〝力業〟の所業。
「大体なあ、前世のお前はいっつも俺に構ってばかりで他の男に見向きもしなかった！」
「お兄ちゃんが大好きになっちゃったんだから仕方がないもん！」
「可愛く言っても許されんからな!?」
自身の「叢雲」も下手すれば理外の部類に入るだろうが、一応天神魔法で実現していた〝前例〟がちゃんと存在する以上、セリアほどぶっ飛んでいるわけでもない……と思う。ただ、過去数百年から千年レベルで実現できていなかったことを考えると、魔法力そのものを鍛えるという発想がなかったのかと疑わざるを得ない。
気が付けば、今世の自分らも忘れて前世の時の口調で口喧嘩しながら戦っていた。前世の妹に今まで言ったことのないような口調で叫ぶあたり、自分もストレスや文句はあったのだなと実感していた。
そうして戦い始めてから十数分が経過した。
「もう、お兄ちゃんのバカァ!!」
セリアの言葉と共に唐竹割りの要領で振り下ろされた「レーヴァテイン」。だが、その様子がおかしい。明らかに彼女の想子出力が桁外れに上がっており、結界が解けて周囲に太陽クラスの熱波が漏れつつある。しかも「レーヴァテイン」本体にヒビは見られないが、時折軋みのような音が聞こえていた。
魔法兵器「レーヴァテイン」は長時間の戦闘を前提としていない。そもそもの話、悠元ですらＣＡＤが枷となるレベルなのだから、セリ

アも同様の現象が起きていても不思議ではない。戦略級魔法師が扱うＣＡＤは自ずと軍事機密レベルの代物になってしまうし、魔法の連続発動に耐えられるよう設計されていても、常時魔法発動という前提で設計されてはいない。

（って、あのバカ!!　このままだと『レーヴァテイン』の結界部が解けて奥多摩が大規模の森林火災――――最悪メルトダウンになるだろうが!!）

だが、いくら魔法兵器でもこの世界の理に縛られてしまう。その代物に理外の力を高出力かつ長時間注ぎこめばどうなるか……結論は言うまでもないだろう。そもそも、口喧嘩じみた言葉で彼女の集中力を削いだ責任がある以上、こればかりは自分で解決すべき事項である。

悠元は一息吐き、「叢雲」を抜刀術でもするかのごとく構えた。

新陰流剣武術における剣術の四大奥義――――その極みにある太刀の一つ。極限まで太刀に想子を収束させ、全てを斬り、跡形もなく断つ。〝鳳凰〟の名を冠する終の太刀。

新陰流が剣聖四大奥義、北段・終の太刀――――鳳凰烈破

悠元の振るった「叢雲」は「レーヴァテイン」とぶつかり、一瞬激しい光を発した。その光が収まると、セリアの握っていた「レーヴァテイン」は込められていた想子と霧散するかの如く粉々になり、辛うじて柄の部分だけ残る形となった。

悠元は一息吐いた後で「叢雲」を解除すると、セリアの脳天めがけて拳骨を落とした。その痛みのあまりセリアの『仮装行列』は解除され、彼女が身に着けていた仮面も外れて地面に落ちた。

彼女は涙目で両手で頭を抱えるように蹲っていた。

「ふゅみゅう!?　にゃ、にゃにするのおにいひゃん……い、痛い……」

「この大馬鹿野郎！『レーヴァテイン』のスペックをもう少し考えて魔法力を注ぎ込め！　危うく奥多摩がメルトダウンするところだったんだぞ!!」

以前、達也が自分のことを〝埒外の天才〟などと評したことに度々不満を漏らしたが、セリアというスターズですら制御できないと判断

された存在を止めたことによってそれが一番しっくりきてしまったことに……内心で盛大な溜息を吐きたくなった。

というか、敵を欺くための茶番がこんな結末でよかったのだろうか、と誰かに話を投げたくなったのは言うまでもない。

燃料にダイナマイトをぶち込んだ結果がコレです

危うく〝茶番〟が大規模災害レベルになる寸前で止めることに成功した。こうなった責任は自分にもあるため、一息吐いた上で「ワルキューレ」を取り出すと、セリアの持っている柄だけとなった「レーヴァテイン」に向かって『再成』を発動させる。

瞬時に元通りとなった「レーヴァテイン」で何をしたのかを察したセリアが次にとった行動は……綺麗な土下座であった。

「ごめんなしゃい、お兄ちゃん……だから殺さないで」

「……とりあえず、頭を上げろ。面と向かって話が出来ないだろうに」

世界最強の魔法師と自称する〝アンジー・シリウス〟すら超える魔法師の綺麗な土下座。自分だってそうするように強要したわけではないし、謝罪も頼んだ覚えなどない。だが、セリアがそうした理由はと考えると……恐らく先程の『再成』を見て『分解』も使えると推察したのだろう。

その予測は間違っていないが、いくらなんでも無秩序に邪魔者を消し飛ばすつもりなんてない。なので、とっとと頭を上げるように述べた。

「ほ、ホントに殺さないよね？」

「当り前だ。リーナが怒って……というか、九島健が怒りのあまり日本に乗り込んできかねない」

「あー……お祖父ちゃんならやりかねないかも」

向こうの被害妄想で面倒事にするのは納得いかないが、セリアに危害を加えて状況が混沌となる方がもっと困る。それで一番得するのは顧傑や周公瑾といったこの国の力が下がることを望む連中だ。

ひとまずスターダストの連中を適当に〝飛ばした〟上で訓練場の近くにある休憩所で一休みしつつ話し合うことにした。無論、遮音の結界魔法は展開した上で。

「お前に悪口を言って『レーヴァテイン』を崩壊寸前にしたのは俺にも責任の一端がある。それで俺や達也への圧力を掛けるのはお門違いだが」

「それなんだけれど、私は調査を止めて日本にＦＡＥ理論の共同研究再開を持ち掛けるべきって大統領に具申したんだよね」
　セリアが言うには、マイクロブラックホール実験の最終許可前に大統領と面談する機会があり、大統領自身からもそのことを相談された際にセリアはその提案を持ち掛けたという。それと引き換えにして二つの戦略級魔法がＵＳＮＡに向けられないよう外交努力すべきと主張したのだが、議会や軍上層部は日本が力を付けることに危機感が向き過ぎていた。
「ハロウィンの一件は調べていたけど、津波の二次被害が無くなった『マテリアル・バースト』なんて完全に味方の安全を保障できたと同義だもの……達也のＣＡＤ――『サード・アイ』を手掛けたのってお兄ちゃん？」
「まあな。厳密にはそれを更にバージョンアップさせた代物で、物理改変による衝撃波の指向性を逃がして津波をゼロに抑えてる」
　セリア（このいもうと）のことだから、達也と自分が「トーラス・シルバー」ということも察しは付いているのだろう。それに、ＵＳＮＡ内部に一人でも多くの味方を作ることでエドワード・クラークの動きを少しでも把握しておきたいという目論みもある。
　すると、悠元の持っている通信用端末に連絡が入る。その連絡先はというと……達也であった。時間からするに深雪の稽古事から１時間程度経ったぐらいで、夕食は司波家で済ませているので時間つぶしをしている頃合いのはずだ。
「どうした達也。アクション映画みたく店にお前を狙う連中でも乱入して銃撃戦にでもなったのか？」
『いや、そこまでの物騒なことになってないが……少し厄介事になってな。ともかく来てくれるか？』
「分かった。出来るだけ急ぐわ」
『頼む』
　あの達也が〝厄介〟と零す事案というのには少し引っ掛かるが、面倒事の事後処理をするのならば自分が適任と考えて通話を切った。すると、こちらの様子を窺うようにしているセリアがいた。仮面も付

けており、『仮装行列（パレード）』を展開していて「レーヴァテイン」も鞄の中に仕舞っていた。
　明らかに付いて来る気満々の様子に、悠元は呆れたような表情を見せた。
「……楽しそうだな、セリア。お前の身内も関係しているというのに」
「いやー、お兄ちゃんが魔改造したお兄様が何をしでかしたのかあびゅっ!?」
「何が魔改造だ、何が」
　セリアにツッコミを入れつつ外に出た悠元は続いて出てきたセリアを肩に担いだ。「えっ!?」という言葉と共に彼女は驚きを隠せないが、その言葉の続きを言う前に悠元がそのまま駆け出した。
「いくぞ、セリア。鞄を手放すなよ!!」
「ふ、ふにゃあああ!?」
　悠元は身体強化を掛けた状態で本来使うことのない速さの自己加速術式を発動。その速度は時速１０００キロ――――旅客機と同等レベルの速さへ急加速する。それと同時に衝撃波などの副次効果を打ち消すエネルギー移動の術式を用いる。
　結論として達也がいるであろう場所への急行は楽に済むし、『鏡の扉（ミラーゲート）』を使わずに済んだ。ただ、本人は無事でもセリアは辛うじて「レーヴァテイン」が入った鞄を手放さないようにするのが精一杯で、高速移動による影響で泣きそうな表情になっていた。
「よう、達也。後処理の手伝いに来たぞ」
「ああ。それで、お前の肩に担いでいるのは……セリアか」
「お、おろしてぇ……」
　視覚だけで見れば、まるで瞬間移動のレベルでやってきた悠元。その肩に担いでいるセリアの姿を見て「悠元に負けたんだな」と察してしまった達也と、先程の高速移動が若干トラウマになりつつあるセリアであった。ともかく、セリアをその場にゆっくり下ろした上で悠元は素早く結界術式を張り、状況を達也から聞くことにした。
「ワゴン車の近くにいるのはスターダストの連中か。まあ、それはいいんだが……他に襲撃者はいなかったのか？」

「いや、リーナに襲われた。あの武器――『ブリオネイク』には流石の俺も肝を冷やしたが」
「それで平気なのはどうかと思うんですが……その、お姉ちゃんは？」
スターダストの連中がいることは確認できたが、肝心のリーナの姿はどこにもなかった。ただ、リーナと達也が戦った痕跡は各所に地面の焦げた跡があることからして間違いないし、「天神の眼（オシリス・サイト）」でも戦闘の形跡が確認できた。
では、リーナは一体どこに行ったというのか。達也の表情からするにリーナを『分解』してはいない様にも見えたので、別の可能性を考える前に達也が述べた。
「それなんだが……悠元、以前お前から渡された術式をリーナの『ヘビィ・メタル・バースト』に使った結果……『ブリオネイク』を推進力にする形でリーナが目にも止まらぬ速度で飛んで行った」
「……え？」
「……ええ？」
確か、原作では「ブリオネイク」の魔法発射口に「シルバー・ホーン」を突っ込んで、『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』で結界容器内の金属粉を分解した。それによって生じたガスの噴射でリーナが飛んで行った、というのは記憶に残っている。
達也が言っていることをそのまま解釈した場合、達也に渡した『爆裂雲散霧消（バスター・ミスト・ディスパージョン）』を『ヘビィ・メタル・バースト』に使用した、ということになる。
『術式解散（グラム・ディスパージョン）』を使う選択肢もなくはないが、指向性を外したプラズマが拡散して被害が広範囲に広がってしまう。なので、達也は指向性を持った状態を利用して『バスター・ミスト・ディスパージョン』でプラズマそのものを急速燃焼・爆発させた形だ。
魔法式は魔法式に作用できないが、魔法式によって改変された超高温のプラズマ状態の原子集合体を『分解』するとなれば話は別だ。少し前に核融合の緊急停止システムについての話を達也としていたので、恐らくそこからヒントを得たのかもしれない。
簡単に言えば、達也が円柱状の空気砲内部にある空気を爆発させ

た。結果としてその両端にその余波が及ぶわけなのだが、その端っこが「ブリオネイク」の発射口……しっかり握っていたリーナがプラズマ爆発の推進力で原作よりも吹き飛んだ形だ。
　達也に対して被害がゼロだったのは、達也が『バスター・ミスト・ディスパージョン』を放った直後に想子防盾（サイオンシールド）を展開して余波を防いだのだろう。彼のシールドは『分解』と『再成』が付与されている形なので、指向性を外したプラズマや多少の衝撃波程度なら完全に防いでしまう。
「達也ならそこまでせんでも事足りただろうに。何かあったのか？」
「……そうだな。リーナは明らかに軍人に向いていない。そのことを分からせたかったのかもしれない」
　他人にはあまり関心を向けない達也がリーナに関心を持っている……もしかすると、という懸念はあるが、今はそのことを置いておくことにする。今一番やるべきことはリーナの捜索ただ一つ。
「セリア、リーナはＧＰＳとかの発信端末を持っているよな？」
「あ、うん。それがないと作戦に支障が出るし……端末はまだ生きてるみたい。だけど、ここって……海？」
　この状況というか、達也に正体がバレているのは既定路線と言わんばかりにセリアはそのことを無視して端末を操作する。セリアがその情報を二人に見せた。リーナが飛ばされた場所はここから南――――相模湾の沖合約３キロ地点。それを見た悠元の動きは速かった。
「――――これから起こることは何も見なかったことにしてくれ」
　二人の頷きを見た後、悠元は『ミラーゲート』でリーナのいる座標を直結させ、リーナを無事引き上げることに成功。「ブリオネイク」についても無事に回収することができた。
　リーナは少し水を飲んでしまっていたため、人工呼吸をすることになったのだが……ここで動いたのは達也だった。
　曰く「こうなったのには俺の責任が大きいし、リーナを素早く回収できたのはお前らの功績だからな」とのことで、何もしないままなのは達也自身のプライドが許さなかったのだろう。その言葉を聞いて人命救助の対応は達也に投げることとした。

なお、セリアからは「これでお姉ちゃんをいじるネタが増えたよ」との呟きを聞いたが、それは聞かなかったことにした。
スターダストについてはそのままＵＳＮＡ側に任せ、リーナはセリアに任せる……というのも力仕事になるため、悠元が同行することとなった。このままスターダストの連中を放置してたら七草家の連中が回収するかもしれないが、その時はその時だろう。なお、達也は元々深雪の稽古に同行しているため、そちらを優先するべきという悠元の言葉に納得せざるを得なかった。
リーナを担ぐ役割は力仕事のために悠元が担うのだが、その際に達也から「余計なことはするなよ？」と釘を刺された。罷り間違ってもラッキースケベをごく自然と発動させる達也じゃないんだから、とは思ったが……その文言が深雪のためだけとは思えなかった。
セリアの案内で住居の中に案内された悠元はリーナをソファーに寝かせると、セリアに向き直った。
「セリア。今日は流石に日も遅いから諦めるが、後日バランス大佐と話し合いたい。お前の方からアポイントメントを頼めるか？」
「話し合いというか、今回も含めてＵＳＮＡ（こちら）側の過失だものね……ちなみにだけど、衛星の監視も気づいていてた？」
「俺だけじゃなく達也も気付いていると思うぞ」
人工衛星による監視については、気付いているレベルではなく裏付けとして録画データまで複製済みだ。仮に大本の録画データを消したとしても衛星の稼働データまで消さなければならないし、更には中継基地との通信データも含まれる。その３つを証拠として提示された場合、何もしていませんでしたと嘘を通すのは限りなく無理に近い。
これもパラサイトのせいにし始めたら、それこそＵＳＮＡ自体が〝蔓延〟していると断じるレベルになってしまう。
「や、やっぱり……私はまだしも、リーナは〝シリウス〟の名がある以上動くのを止めないと思う」
「そんなことは百も承知だ。さて、ここいらでお暇するよ」
一応達也に「深雪にはピクシー絡みの件で外出していると言い含め

てくれ」とは言っておいているので、多少遅くなってもいいようにはしている。いくらセリアの中身が前世の知り合いとはいえ、外面上は別の家の人間であり、別々の国の人間。おまけに軍人魔法師という肩書も加わる。
「えー、別にいてもいいのに」
「余計な説明で心労を重ねたくないからな」
それに、パラサイト関連がまだ一区切りしたとは言えない以上、油断はまだできない。その意味でセリアにもう一働きしてもらわねばならないのだから。
◇　◇　◇
悠元は一人で帰りつつ、懐に忍ばせているアリスに思念を通して問いかける。こういう時ほど周りに気を使わなくてもいいというのは非常にありがたいと思う。
『アリス。お前が覚えている範囲内で構わないが、パラサイトは自己保存と増殖を一番に考えて行動する――その認識に違いはないか？』
『はい、その通りです。ただ、今の私はその欲求を一番下に置いておりますが』
パラサイトとしての機能は一部残っているが、それはあくまでも緊急時のバックアップ機能として改変されているようだ。そう意図したつもりなど皆無なのだが、こちらで最適化などの手間が省けるのは幸いという他ないだろう。
ただ、超能力関連は現代魔法の範疇を超えた領域の為に明かせない部分が多すぎるのも事実だし、使ったとしても裏の仕事にしか使えないだろう。
『〝分離した〟連中がそろそろ新たな宿主を得るのも時間の問題だからな』
『マスターは、ピクシーが他のパラサイトに狙われるとお考えなのですね？』
『アリスも含めての話になるがな。いくらお互いの繋がりが消えたとはいえ、元は同じ……ただな、俺が本気で気配を偽らないと逃げ出す

んだよな』
普通に考えれば魔法の才能が高い魔法師を狙ってくるはずなのだが、パラサイトの追跡の際に気配をわざと外した状態で追跡したところ、パラサイトが憑りついた連中は逆に逃走していた。その時点ではチャールズ・サリバン軍曹のパラサイト（今のアリス）を殺していなかったが、その理由をアリスが記憶の範囲内で答えてくれた。
『我々――――かつての私にも危機管理という認識はありました。マスターを狙ったところで逆に取り込まれてしまう……その危惧があったようです』
『……つまりはアレか？　仮に俺がパラサイトを取り込んでも俺自身の単純なパワーアップにしかならないということか？』
『はい。今となって分かりますが、マスターの持つ固有魔法が強力すぎるが故に支配できないかと』
悠元の自己修復術式は固有魔法の一つである『領域強化（リインフォース）』に基づくものであり、加えてもう一つの固有魔法である『万華鏡（カレイドスコープ）』と接続している。
いくらパラサイトといえども、重力の壁を越えて向こう側の力を無尽蔵に引き出す能力がないため、圧倒的な自己修復能力を持つ悠元相手では分が悪いというアリスの分析を聞き、内心で盛大な溜息を吐いた悠元であった。

苦労人の系譜は本質なのか

セリアと別れた後は何事もなく三矢家の屋敷に帰宅した。
そこまではよかったのだが、悠元の部屋の前には笑顔を浮かべた深雪の姿があった。その表情からするに何か察していたのだろう。
「おかえりなさいませ、悠元さん」
「ああ、ただいま……着替えるから、少し待っていてくれるか？」
いくら婚約の関係に加えてその先まで踏んでいるとはいえ、その辺りの節度は流石に弁えてほしいというのは既に伝えている。深雪もその節度は理解しているので、静かに頷いて了承の意を示した。
手早く着替えて戦闘服を魔法で整え、クローゼットの中に押し込んだ上で声を発すると、深雪は静かに部屋の中に入ってきた。そして、開口一番にこう尋ねてきた。
「それで、悠元さんはセリアさんと逢引きでもされていたのですか？」
「そういう関係は持った覚えなど微塵もないんだが？」
例え前世の関係者でも、今のセリアはＵＳＮＡ軍の軍人魔法師。おいそれと他国の人間に手など出せるはずもないことは深雪とて理解しているはずだ。それでも深雪がそう言い放ったということは、恐らくバレンタイン前日の件が大きく関与しているのだろう。
悠元の言葉を聞いた上で、深雪はクスッと笑みを零してから呟いた。
「冗談ですよ。今のセリアは大変な立場というのも理解しておりますので。それで悠元さん、先程実家から連絡があったのですが……」
セリアも悠元の妻となるのを受け入れるような発言はともかくとして、深雪は四葉家専用の暗号メールで実家――――恐らくは現当主である真夜からの連絡を悠元に伝える。
「公海上にいたＵＳＮＡ軍の小型艦船を捕捉し行動不能にした、とのことです。その中にはヴァージニア・バランス大佐なる人物も乗船していたらしく、その後の対応は三矢家経由で国防海軍に連絡したとのことらしいのですが」
時間のタイミングを考えるに、恐らく神楽坂家か上泉家経由で四葉

家に裏工作を依頼したのだろう。深雪にメールを送ったのは、達也に連絡すると関係のない深雪を巻き込みたくないという情が働くと判断し、内密に送ったものだと思われる。
　元々セリアの一件を片付けるために上泉家の協力は貰っていたので不満はないが、四葉家の裏工作部隊――――いや、〝黒羽〟は非常に優秀であると言わざるを得ない。
「達也にそのことは？」
「いえ、お兄様は調べ物があると言って早々に部屋へと行かれましたので……悠元さんは何かご存じですか？」
　「エレメンタル・サイト」で非常に効率的な護衛が出来るとはいえ、その辺の対応をこちらに投げてくるあたりは信用されている……のかどうかは判断しかねるが。その達也の調べ物というのは恐らく「ブリオネイク」に使われたＦＡＥ理論の可能性が一番高い。魔法技術となればトーラス・シルバーの一角を担う達也でも興味のそそる話だと思う。
「凡その推測は出来るが、多分リーナとの対決がいい刺激になったんじゃないかな。深雪はどう思う？」
「そうですね……リーナの存在がお兄様を優しくしているのかもしれませんね。勿論、ほのかの存在もあるかもしれませんが」
　こうやって呑気に話しているが、ＵＳＮＡの一件は後片付けの段階に達しているとして残るはパラサイトの問題だ。彼らはあと数日で新たな肉体を得て活動を始める以上、その対応次第で今後の動き方も変わってしまうのは間違いない。
「さて……ＵＳＮＡ絡みの後片付けは残っているが、緊急の危険を取り除く必要があるな」
「パラサイト、ですね？」
「ピクシーについては問題ないとみていい。学内に留め置くことは達也も了承してくれた。残るパラサイトの対策だが……」
　正直なところ、噂が元にまで届いている以上は他の十師族の耳に入っていてもおかしくはない。四葉家側は何とか抑えてくれる方向で話は纏まったが、七草家と九島家が厄介という他ない。特に前者は

こちら側の要望である国防軍の情報セクションの貸与を蹴り飛ばしたのだ。
　そのこと自体元々依頼に近いので強制力はないし、書面での契約ではないためペナルティも存在しない。だが、パラサイトを兵器として利用することは決して許すつもりなどない。これは「護人」としての定め――――人に悪しき欲を齎すものを討ち払う宿命があるためだ。
　そうして話していると、悠元の情報端末に暗号メールが届く。解析用の専用端末を接続してそのメールを開封すると、差出人は千姫からであった。深雪は見ていいのかと思っていたが、深雪も神楽坂家の係累である以上は問題ないと判断して許可した。
「……悠元さん、これって」
「ついに動いたという訳か」
　内容は『七賢人』――――「フリズスキャルヴ」を使うことのできるオペレーターの一人、レイモンド・クラークからのビデオメッセージが司波家の情報端末に送られていたらしい（長いこと不在にするため、システムの監視自体を『九頭龍』が担っている）。それも2つらしく、そのうちの一つが悠元を名指ししたものらしい。もう一つは言うまでもなく達也宛てであった。
　添付ファイルも特に細工などされていない動画ファイルのようで、悠元はそのままファイルを開くと画面に表示されたのは金髪碧眼、アングロサクソン的な少年の胸像であった。
『ハロー。突然だけれど、君がこれを見ている前提で話をさせてもらうよ、ユート・カグラザカ』
　話している言語は日本語だが、どうにも母国語が抜け切れていない印象が拭えない。まあ、そんな細かい話は置いておくことにするが。
『僕はレイモンド・セイジ・クラーク。「七賢人」の一人だ……とはいっても〝殲滅の奇術師（ティアーニア）〟と呼ばれる君のことだから、僕の素性など既に知っていると思うけれどね。ティア――――シズクからも君のことは少しばかり聞いてるよ』
　雫も神将会の一人である以上、必要以上の情報が洩れているとは考えにくい。だが、レイモンドはこちらが彼の素性を知っている前提で

話しかけてきた。恐らくだが、国防軍関連絡みの動きを「フリズスキャルヴ」で調べ上げたのだろうと思われる。後でデータログを見てみる必要はあるかもしれないが。

『本当なら君に直接届けたかったんだけど、君の所在は「フリズスキャルヴ」でもつかめなくてね。居候しているという家に届ければ見てくれると思ったまでの事……とまあ、そんなことはともかくとして、本題に入ろう』

世界屈指の情報検索システムを以てしても掴めない、と言われたときは思わず仏頂面になってしまったようで、それを見た深雪が苦笑を滲ませていた。

説明は省くが、「エシェロン」と「フリズスキャルヴ」についての説明がレイモンドから齎されたが、原作知識でそれを知っている側からすれば〝おさらい〟のようなものだということは表情に出さなかった。

『ジード・セイジ・ヘイグ――――顧傑と呼ばれる人物のことは、君もよく知っているはずだ。その彼がパラサイトを日本に送り込んだ……理由は僕が言わずとも理解してくれるだろうけれど、「ブランシュ」や「無頭龍」で失った日本の拠点作りだね』

上泉家と四葉家にとって因縁の敵となりつつある顧傑。今となってはそこに三矢家と神楽坂家も加わる形となっている。正確には顧傑の指示で周公瑾がパラサイトを匿っているようなものだ。

そもそも、ブランシュは学校の襲撃で逆鱗に触れた形だし、無頭龍も間接的に第一高校の生徒を襲おうとした。それを指示した黒幕である顧傑に百害あって一利なし。

『彼の行いは流石に僕でも見逃せなくてね。そこで、数日中に新たな宿主を得て活動するパラサイトに情報を与えることとした。「君らの探し物は第一高校にある」とね』

どうやら、レイモンドはピクシーを餌に他のパラサイトを誘導するように情報を流す、ということを提案していた。いや、この場合は既に実行されていると考えた方がいいだろう。恐らくだが、他のパラサイトを狙っている面々にも何らかの形で情報提供されている。

『怒られても文句は言えないと思う。けれども、この事態が長期化すること自体、僕も君も望んではいないはずだ。できることなら短期間で決着を付けたいだろうからね』

レイモンドのやっていることはある意味愉快犯のそれに近い。一種の演出家（エンターテイナー）とも言えるだろうが、その一方で彼の案は上手く使えば早急な解決が望める画期的な案とも言えよう。

彼の思う通りに動かされるのは一番癪に障るが、この借りはいずれ返すと心に誓った。

『日付はそちらの日時で2月19日の夜。第一高校裏手の野外演習場に活動中の全パラサイトを集結させる。君とそのお仲間にはパラサイトを殲滅してもらいたい。期待しているよ、ユート・カグラザカ――〈殲滅神（エクスキューショナー）〉』

軽々しく言ってくれる、と悠元は内心で吐き捨てた。だが、幸いにしてパラサイトの対策を練る方策も思いついたし、その時間も貰えるというありがたさ。だが、これをきっかけに恩着せがましく言うようならばお門違いだと断ずるまで。

しかも、メッセージの最後に言い放った言葉が一番気に食わなかった。

「……覚えとけよ、レイモンド・クラーク。次に会った時は容赦しないからな」

小声でそう呟いた悠元の言葉は……幸か不幸か、深雪の耳に届くことはなかった。

◇　◇　◇

USNA首都――ワシントンD．C．の首相官邸ことホワイトハウスの大統領執務室に一人の来訪者が舞い込んだ。

本来、国家元首たる大統領をアポなしで尋ねるなどそうそう出来ることではない。それこそ、国家に多大なる功績を齎した〝英雄〟たる存在であっても社会のマナーやルールには一応従う必要がある。

だが、この国においてそれすらも飛び越えた存在――元々は日本出身の魔法師。現在は永住権を取得した上でこの国で暮らしている人物の来訪に大統領は目を丸くしていた。

「これは驚いたな……連絡をくれれば、私自ら出向くというのに」
「お前がそう軽々しく首都を空けるなどと言うものじゃない。ただでさえ反魔法主義の運動が収まっていないのだから尚更だ」
その人物の名は九島健（くどうけん）。九島烈の弟にして元国防軍の軍人魔法師で、現在はロッキー山脈の麓で長閑に生活を送っている。あまり人が立ち入らないような場所で生活しているため、連絡は手紙というアナログな手段のみという有様。そして、その彼は今もなお２０歳代を保つかのような風貌を持ち合わせていた。
身内以外で滅多に家を離れることのない彼がここに来た意味――――大統領は言わずとも理解しつつ、傍にいた秘書官に茶を出すよう指示を飛ばした。それを見つつ健はソファーに腰掛けると、大統領は執務用のデスクを離れて健と向き合うようにソファーへと移動した。
「さて、俺がここに来た理由だが……言うまでもなく今騒ぎとなっている吸血鬼――――『パラサイト』についてだ。聞けば、リーナとセリアもその騒ぎを解決すべく動いているようだが……結論から言おう。対抗策を得ない限り、そんなのは『無駄』でしかない」
健は元々九島家にいた故、パラサイトの性質について凡その見当は付けていた。ここまで騒動が長期化した以上、現代魔法での対処はごく一部の魔法を除けば無理という結論を出していた。
「……『ブリオネイク』や『レーヴァテイン』を用いたとしてもか？」
「あれは現代魔法における戦略級魔法を制御するためのもので、パラサイトのような霊的存在に対して有効な攻撃手段ではない。スターズもそうだが、国防総省（ペンタゴン）があの国を潜在的に仮想敵国として認識しているからこその〝怠慢〟でしかない」
敵に付け入る隙を与える意味では沈黙も正解なのだろうが、潜在的敵対国であるという理由だけで情報提供をしなかった政府機関に対して健は辛辣な言葉を吐き捨てた。加えて、健が独自に持っている情報ネットワークによれば、ＵＳＮＡにいたパラサイト全てが日本に渡航した事実を知っていた。
孫娘の二人も心配なのはそうだが、健にとっては生まれ故郷でもある国の事など無視できない。例え、国を出た原因が自身にとって良く

ない出来事であったとしても。
「そう分かっているのならば、何故今まで手紙の一つも寄越さなかったのだ？」
「先日、あの国にいる幼馴染から手紙が届いてな。そこには今回の一件の流れが全て記されていた……神楽坂千姫の名も姿も、お前はよく知っているであろう？」
――神楽坂千姫。神楽坂家第１０７代当主にして「護人」の一角を担う人物。その実力は世界群発戦争の時点でも上泉剛三と肩を並べるほどの魔法師であり、約３０年前を最後に表の舞台から一度身を引いた。
彼女のことは大統領も数度ほど面識があり、彼女の手紙によって健がここに来たということは……大方彼女の関係者である神楽坂悠元が大きく関係しているのだろう。
「無関係を貫こうかとも思ったのだが、千姫が養子にした人物と孫娘が殺し合いをしたとなれば無視するわけにもいくまい……同じ祖父として、お前はどう落とし前を付けるつもりだ？」
「……ケンは、どうするつもりなのだ？」
そもそも、現代魔法の先進国としてのプライドと世界の覇権を握りたい大国として、新たな戦略級魔法を生み出した同盟国の出る杭を叩こうとしたのが事の発端。
ここで大統領を辞任する方針を口にすれば、それは間違いなく〝逃げ〟であると健から咎められるのは目に見えている。仮にそうしても、反魔法主義が野党に食い込んでＵＳＮＡ全体に自然主義を蔓延させかねないことは目に見えている。
そうなれば魔法研究はおろか、世界の覇権を握ることなど夢のまた夢。新ソ連や旧ＥＵだけでなく、大亜連合にも後塵を拝する形となってしまう。その未来だけは絶対に避けなければならない。
質問を質問で返すなど失礼なことだが、大統領としては国家元首である前に一人の身内として同じ孫娘を持つ祖父としての意見を聞くこととした。
「あの国は、大亜連合や新ソ連という大国を近隣に持ちつつ国家主権

を保っている。そんなことは当たり前の事実だな。戦略級魔法で必要以上に騒ぎ立てた連中の処分は任せるが、俺はあの国に残してきた〝宿題〟を片付けなければならん」
それは俺自身の宿題故に今は関係ないか、と付け加えた上で健は言葉をつづけた。
「今回の一件でリーナとセリア――――〝シリウス〟と〝ポラリス〟が敗れた事実はショックだったが、彼女すら上回る実力者があの国に出てきてくれたのだ。流石にリーナを今すぐ軍から離すのはリスクが高すぎるが、スターズはおろかこの国ですら制御しきれないセリアを手放すなら、向こうも納得してくれるだろう」
健の考えはというと、幼いころから非常識な実力を持っていたセリアに正しい心と魔法力の制御を身に着けるよう教えていたのだが、それがかえって彼女の実力に拍車を掛け、結果としてＵＳＮＡでも核兵器以上に扱いが難しい存在へと化してしまった。
元々、自身の身内が九島の魔法を必要以上に広めないようにするため……リーナやセリアが魔法を暴走させた際の抑止力として鍛え続けていたわけなのだが、ほぼ全盛期に近い健ですらリーナは抑えられてもセリアは抑えられなくなっていた。
千姫の養子が彼女と殺し合ったことには複雑な感情を抱いたが、セリアを倒せるだけの実力を持つという幼馴染の言葉は信用に足ると考え、信じてみることにした。
「まさか……セリアを彼女のもとに送るというのか？」
「ただでさえリーナが総隊長であることに不満を持つ魔法師も少なくない。そこに加えてセリアが軍でも特殊な扱いを受けていることも大きく影響している……ここがお前の腹の括り時だ。少しでも対応を間違えれば、剛三と千姫が直接ＵＳＮＡに飛んでくるぞ？」
スターズ内部の事情に関しては、健自身「九島将軍」と呼ばれているために国防総省やＵＳＮＡ軍にもシンパがいることから、情報源には事欠かない。そこからも孫娘に対する僻みや妬みは少なからず聞き及んでいる。
代替わりして数年の〝シリウス〟を今すぐ放出することは、この国

の戦略級魔法師の数を減らすだけでなく最大級の戦力を喪うことにもなりかねない。だが、元々採用の段階で扱いに困っていてスターズの内部でもその序列に加わっていない〝ポラリス〟ならば、まだ損失に伴うデメリットは安く済むと健は考えた。

セリアの魔法師としての実力を喪うのも大きなデメリットだが、ＵＳＮＡ自体ですら制御するのに四苦八苦するような存在で自国に多大な損害を出すことになるよりは遥かにマシだろう、と。

「ケンはいいのか？　お前もセリアのことは可愛がっていただろうに」

「……そのセリアから手紙が届いた。今の任務が終わり次第、スターズを除隊したいという旨が記されていてな」

その手紙には「神楽坂悠元に嫁ぎたいのでＵＳＮＡには帰らない」ということも記されていた。本来ならば健が飛んで行って首根っこを掴んででもＵＳＮＡに帰らせるのが筋。だが、奇しくも自身が考えていた対応に沿うようなセリア本人の意向ならば、呑む以外の選択肢など健には存在しなかった。

これも親離れが少し早かっただけの事か……と健は手紙を読んだときに涙したのは、健自身しか知らないことであった。

「普通ならば認められない可能性が高いだろうが、状況が状況だ……セリアの除隊と国籍変更の手続きを進めるよう話は通しておくし、息子らには俺から説得する」

そもそもの話、リーナとセリアのスターズ入隊に最も反対したのは健であった。だが、新たな〝シリウス〟を早急に見つけたいという軍上層部の懇願により条件付きで認めた経緯がある。

その条件とは、彼女たちがスターズの除隊をしたいという意思があれば健や二人の両親の同意でそれが可能とすること。これは、彼女たちの青春を奪ってしまう以上は相応のリスクを軍上層部やペンタゴンに負わせるという意味合いが強い。

「ただ、セリアが担っていたフォロー役がいなくなるのはまずい。確か、今の任務でフォローしているのはシルヴィア・マーキュリー准尉だったか。彼女を昇進させてリーナのフォロー役を頼もう」

「それが妥当な案だな」
そして、この話し合いでシルヴィアの気苦労がさらに増えることになったということは、当のシルヴィア本人は辞令が出るまで与り知らぬことだった。

逃げるのならば倒すまで

――2月17日。

バランス大佐は疲れ切っていた。作戦で敵に難なく作戦本部への侵入を許し、敢無く拉致されて漂流させられているところをこの国の海軍に助けられてしまったのだ。

だが、それは今回の作戦で協力している在日米軍などの協力員も同様であり、本来の作戦（作戦の立案自体はＵＳＮＡ軍上層部の決定によるもので、バランス大佐はほぼノータッチに近かった）に参加するはずのない彼女を引っ張り出した時点で責任の擦り付けなど論外という他なかった。よって、バランス大佐に対する作戦失敗を咎める声は皆無に等しかった。

そんな失態があったとはいえ、ＵＳＮＡ大統領の特使も兼ねている以上は気落ちしていても仕方がない。そう奮い立たせているバランス大佐は大使館の一室――臨時に宛がわれた執務室にいた。

（セリアからの申し出……よもや、あの人物からコンタクトを受ける形になるとはな）

襲撃作戦の翌日にセリアからの連絡を受けたバランス大佐は思わず耳を疑ったが、こちらの都合を伝えるとこの日の会談を申し出てきた。よもや戦略級魔法師と目される疑いが最も強い人物――神楽坂悠元からの会談要請。

こちらの都合と先日の襲撃作戦からすれば良い印象など皆無に近い。それでも武力行使という報復を取らずに理知的な話し合いを申し出た以上、一方的に仕掛けた側であるＵＳＮＡは受け入れざるを得ない。

そう思案していたところに、扉の外から聞こえるノック音と秘書官からの声で意識を思考の海から引き上げさせ、入室を促す。秘書官に連れられる形で姿を見せたのは、スーツを身に纏った人物こと神楽坂悠元その人であった。

「――お久しぶりですね、ヴァージニア・バランス中佐殿。いえ、今は昇進されて大佐でしたか。２年ぶりぐらいになりますね」

「ええ……彼女から話を聞いた際はとても驚きましたが」
剛三が基地に無断侵入して追跡した際、リーナと遭遇して打ち負かした一件だが……その際、基地の司令室にて指揮監督をしていたのがバランス大佐（当時は中佐）であった。アクシデントの片付け自体は箝口令のみでお咎めなしとなったが、バランス大佐経由で大統領に話が伝わってホワイトハウスでの会談になってしまった。
その当時でもかなりの要職にいたバランス大佐だが、世界最強を自負しているスターズの〝シリウス〟が負けたという事実を隠す意味も含めて昇進し、内部監察局副局長となった。その意味で目の前にいる悠元はバランスにとっても他人事ではない人物なのだ。
「あの時は家の仕来りで本当の名字を名乗れませんでしたが……長野佑都あらため神楽坂悠元と申します。話はセリア――――エクセリア＝クドウ＝シールズ嬢より聞き及んでいるのも含めて色々ご存じでしょうが」
お互いにソファーに座っての会談で、悠元は改めて自己紹介した。
元十師族・三矢家の人間で神楽坂家次期当主兼当主代行。そして、ＵＳＮＡの調査では先日起きた横浜事変――――通称『灼熱と極光のハロウィン』において使われた２つの戦略級魔法の片割れを使ったと目される最重要被疑者。
その彼がセリアを経由する形ではあるが、態々会談を申し出てきた理由を推察しつつバランス大佐が口を開いた。
「さて、会談の申し入れは聞いていたが、それ以上のことは何も聞かされていない。そちらの要件は一体何なのか、それをお尋ねしたい」
普段ならば年下の相手に畏まった言葉など使わないが、相手があの〝ポラリス〟を破った相手となれば話は別だ。下手に機嫌を損ねて魔法で大使館を吹き飛ばされる可能性もなくはない。
その辺を察したのか、悠元は笑みを漏らしつつも話し始める。
「ご心配なく大佐殿。別に、私は貴女に報復を仕掛けようという意思はありません。今の時点で貴女が直接私に危害を加えようとした訳でもありませんから。ただまあ、この作戦を立案したであろう軍上層部や国防総省（ペンタゴン）の連中を許す気になどなりませんが」

悠元は事前の調査でバランス大佐の置かれている立場を把握している。ＵＳＮＡ軍情報部内部監察局においてナンバー２の実力者にして、ＵＳＮＡ大統領の特使の任を帯びて来日した人物。

「ブリオネイク」や「レーヴァテイン」を託された時点で彼女が今回の作戦の調整役となることは想像に難くなく、まだ話を聞いてくれる部類の人間に罰を与えようなどとは微塵も考えていなかった。

「私がここに来た理由は二つ。一つは貴方方が行っている戦略級魔法師の無力化――殺害も含めた〝不法行為〟の即時中止を要求します。『灼熱と極光のハロウィン』で使用された戦略級魔法の片割れを担った身として、その振る舞いは到底看過できません」

「……っ!? 今、何と……」

「言葉の通りの意味ですが？　もし今の言葉で私を殺そうとするなら、それはＵＳＮＡの〝世論〟と判断させていただくことになりますが、その覚悟が貴女におありですか？」

民主主義国家の国家元首は選挙によって選出される。統治システムが余程偏ってなければ、国家元首はその国の国民の意思表示によって決定される仕組み。つまり、国の統治者は〝世論〟によって選ばれている形だ。

バランス大佐は大統領より一定の権限を付託されている以上、その権限を使って悠元を拘束することは事実上可能だ。しかし、戦略級魔法の使い手の片割れが元十師族に加えて神楽坂家の当主代行。加えて上泉家の血族ということからすれば、その権限を使うことなど不可能に近い。

仮に、今ここで任務を達成しようとすれば上泉家、神楽坂家に加えて三矢家……更にはあの〝四葉家〟まで動くことが想定される。調査の中で彼は四葉に気に入られているという噂話があり、これを単なる噂として片付けるのは上泉剛三と四葉家の関連性からして無理に近かった。約３０年前――彼らによる無双劇以上の被害が出る可能性が極めて高くなることを意味する。

「無論、ただ大人しく捕まるつもりもありません。その時は大使館諸共消えることは覚悟してください。貴女位の立場なら、戦略級魔法師

クラスの実力ぐらい周知の事実でしょう」
「……ちなみにですが、どちらの魔法なのですか？」
「日本海側――――新ソ連の連中の対処ですね。尤も、その際に向こうの戦略級魔法師であるベゾブラゾフが『トゥマーン・ボンバ』を使用して私を殺そうと目論んだようですが、綺麗に返り討ちの格好となったようです」
　ベゾブラゾフ関連の情報は既にＵＳＮＡの諜報機関へ引き渡されており、無論バランス大佐とて周知の事実。なので、この程度の情報開示であれば問題ないと踏んだ。実質的に３国間での戦闘行為となり、二大国の攻撃を跳ね除けた形。言い換えるのならば、この国にいる在日米軍の対応の遅さを辛辣に言い放ったようなものに等しい。
　だからといって、悠元自身〝世界最強〟を自負することはない。そういう肩書に目が眩んで近寄ってくる面倒事など百害あって一利なしだ。自分自身が強くなると決めたのは自分と大切なものを守るためであり、安寧を脅かさないのであれば見逃すことも吝かではない。
　それに、バランス大佐に自分が戦略級魔法師であることを明かした理由はもう一つ。戦略級魔法師という存在を誰よりも身近に知っており、尚且つ軍上層部においてかなりの発言力を有する人間の中でまともな判断力を併せ持っていると理解していることに加え、ＵＳＮＡ大統領の特使という事情からすれば自身のこともある程度は聞き及んでいると推察したためだ。
「……正直、分かりかねます。貴方方とて戦略級魔法のことは隠しておきたいはず。何故私にその事実を明かすのですか？」
「新たな戦略級魔法一つで目くじらを立ててここまでの騒ぎを引き起こしたのです……出る杭を打とうとする姿勢は大亜連合や新ソ連と何ら変わりない。幸いにして現大統領とは親交がありまして、その誼で教えたまでの事ですよ」
　バランス大佐は正直、内心で冷や汗をかいていた。
　この国の正式な戦略級魔法である『深淵（アビス）』以外に新たな戦略級魔法が生まれたことは世界を震撼させた。それも、大国ではなくＵＳＮＡにとっての同盟国の日本がだ。一時期共同研究をしていた実績は

残っているが、それでもステイツに比べれば魔法技術のレベルは劣るという国防総省（ペンタゴン）の報告をあっさりと覆したのだ。
そもそもの話、この国には「トーラス・シルバー」という存在がいる以上、世界に名立たる魔法技術力を有しているのは間違いないが、現代魔法の先進国としてのプライドがそれを認められなかったのだろう。
幸い、目の前にいる人物は戦略級魔法を無闇に使わないという宣言をしている。だからといって、これを好機と考えて彼を拘束した場合……上泉剛三と神楽坂千姫が出てくる可能性が極めて高い、と大統領から忠告を受けていた。その二人は戦略級魔法師クラスの実力者であり、世界を救ったかの〝英雄〟を引っ張り出すような事態になれば、ＵＳＮＡは間違いなく国家としての評価を著しく落とすことになる。
二人の評価は〝核兵器（アン）よりも表に引き出（タッチャ）してはならぬ存在（ブル）〟であり、世界にとっての禁断（パンドラ）の箱同然の扱い。その彼らが認めている存在として悠元がいる……つまりは〝そういう存在〟だということをこの場で自覚せねばならない。
「二つ目の要求ですが、今後この国に不法侵入したＵＳＮＡの関係者についての扱いは、この国の法秩序に則って処理させていただきます」
「それを、素直に呑めと？」
「その代わりと言っては何ですが、大佐殿がこちらの要求に対して素直に手配していただければ、今後大佐殿や大統領閣下にお力添えすることも吝かではありません。何でしたら、先日使われた戦略級魔法をＵＳＮＡの本土に向かって放たない、とこの場で約束しても構いませんが？」
簡単に言ってくれる、と内心で愚痴りたくはあったが、不幸中の幸いにしてバランス大佐は特使としての権限で了承することは可能。それに、戦略級魔法の片方を自国に向けて放たないという確約がもらえるのと個人的なコネクションは非常に魅力的な提案。
悠元からすれば、別に『スターライトブレイカー』をＵＳＮＡに向

ける必要性など皆無だし、万が一の場合は自分が修得している他の戦略級魔法を使用することも念頭に置くことが出来る。ただ、ダブルスタンダードやら屁理屈を述べるのが茶飯事のようなお国柄のために〝本土〟と限定する形を取った。達也としても深雪に害が及ばないと確約さえ取れれば賛同するのは目に見えている。

それと、バランス大佐は気付いていないようだが、この要求には後の顧傑が来日した際の対処も含まれている。少なくとも、レイモンド・クラークは気付いているような素振りを見せていたが、エドワード・クラークについては不透明という他ない。

お互いにとって決して悪くはない提案……その魅力に負ける形で、バランス大佐は契約書にサインをすることとなった。

◇　◇　◇

――西暦２０９６年２月１９日。

ピクシーの件は事前に神楽坂家を通して四葉家にも伝わっているため、ピクシーを買い取るという動きにまでは至っていなかった。これで何かしらの動きに出た場合はこちらも動かざるを得なくなり、ある意味ホッとしたような心境なのは間違いない。

レイモンドが指定した日――今回は達也らを先行させる形で演習場に向かわせた。その理由を悠元の傍にいる姫梨と佐那が尋ねる前にとある人物が一人やってきた。

「……成程、彼女がここにいたら間違いなく尋ねられますからね」

「それで納得されるのもどうかとは思うが……時間通りだな、セリア」

一応フル装備のセリア（無論『仮装行列（パレード）』を展開して仮面まで付けている状態だが）が飛行魔法を解除して降り立ち、悠元らのもとに歩み寄る。敵意がないことを示すかの如く両手を上げていた。

「連絡は私らの元にも来ていました。それでリーナですが……意固地になってパラサイトを殲滅するつもりのようで」

「現代魔法だと『ルナ・ストライク』以外でほぼ対処が不可能なはずですが……止めなかったのですか、セリアさん？」

「お恥ずかしながら、身内は生真面目すぎまして……」

その言い方だと自分は真面目ではない、と軍人らしからぬ言葉を口

にしたセリア。だが、彼女自身が軍人となったのはリーナの存在が大いに関係しているのだろう。その代わりに軍上層部が胃薬を手放せなくなるジレンマを抱えることになったのはご愁傷さまだが。
「おにい……コホン、悠元は動かれないのですか？」
「俺が下手に近付くとパラサイトが逃げるから、近付くのは最後の瞬間だけだ。事前に特殊な結界術式を張り巡らせたが……」
第一演習場に天神魔法をベースとした大規模結界術式を展開しているが、演習場内には達也たち以外だと九島家を含む国防陸軍第一師団の遊撃歩兵小隊――通称「抜刀隊」、七草家を含む防諜第三課の部隊、そしてリーナのバックアップを担うＵＳＮＡ軍の部隊が侵入していることを既に掴んでいる。それとパラサイトを加えれば５つのグループが対峙していることになる。
「閣下は一体どこでパラサイトの有用性を掴んだのか……ピクシーの実力など一切表に出してないはずなんだが」
原作ならば、ピクシーが青山霊園に連れ出された際に発した超能力（サイコキネシス）を響子経由で知ることでパラサイトの回収を目論んだ。一応制御の安全性をテストするために軽い念動力ぐらいのテストは学内で実施したが、その痕跡は綺麗に〝書き換えた〟。
仮に、自分が動いているということからピクシーひいてはパラサイトの有用性を見出した、のだと仮定すれば一応の辻褄は合うのだが……ロクに制御できるかも怪しい代物に手を出す時点で彼も〝焦り〟を隠せないのかもしれない。すると、悠元らに近付くもう一人の来訪者――四葉の意向を受けてきた人物の気配を感じ取り、悠元は言葉を発する。
「で、影から見てないで姿を見せたらどうだ――亜夜子ちゃん」
「ふふ、流石は悠元さん。それで、そちらの方はＵＳＮＡの方ですよね？」
姿を見せたのは四葉家の分家の一つ、黒羽家の長女である亜夜子。この夜中に黒いワンピースはある意味堂々とした出で立ちなのかもしれない。姫梨や佐那、それにセリアも特に驚くようなそぶりは見せなかったが、亜夜子の方はセリアを見て首を傾げる始末だった。

「まあ、彼女については今回の一件にこれ以上関わらないと確約は貰ってるからな。亜夜子がここに来たのは幹比古が封印したパラサイトの回収か」
「はい。此度は御当主様からの指示でもありますので」
現状、幹比古が2体のパラサイトの封印に成功し、その一方でリーナが達也の制止を無視して宿主を殺している。
四葉が回収してくれるなら、場合によっては神楽坂家で接収することも可能なので反対はしない。問題があるとすれば、そのもう一方を九島家か七草家で回収することになるわけだが……ここで、悠元は佐那に視線を向けた。
「なら、出来るだけ急いだほうがいい。そちらも手勢はいるだろうが……姫梨と佐那、亜夜子ちゃんのフォローを頼めるか？」
「道中に奪われる危険性も考慮して、ってことですね？」
「奴らならそれぐらい何食わぬ顔でやりかねんからな」
一方的に蹂躙することは可能だが、それでは意味がない。自分たちがいかに危険なことをしているのかという自覚を持ってもらわねば話にならない。九島家や七草家を潰さない理由の一つは「新秩序（ニューオーダー）」の流れを断ち切るための防波堤になってもらうためだ。
姫梨と佐那が亜夜子の後に続く形で去った後、その場に残ったのは悠元とセリアの二人だけ。そうした理由はセリアにも後片付けを手伝ってもらうに他ならない。
「さて、残る宿主はと……いくらスターズのプライドがあるとはいえ、自分がどうにもならない敵がいることへの自覚はないのか？　その原因の片棒を担いでいるセリアさんや」
「うぐぅ」
ぐうの音しか出てこないのは無理ないだろう。人間の性格の半分は環境によって形成されるとなれば、リーナに最も近い身内であるセリアの所業が彼女にどのようなフィードバックを与えるかなど明白。
何かしらの反論があるとは思ったが、どうやらセリアも思い当たる節があるようだ。
「えと、そのことはともかく……8体のパラサイトが融合したね」

「それは把握済みだ。さて、最後の美味しいところを奪うのは癪だが、やりますか」
本来なら達也の「眼」の情報を基に深雪が『コキュートス』を使用するわけだが、そんな危なっかしい真似をしないために態々結界術式を使っているのだから。
悠元が右手に持った「オーディン」を前方に構え、「天神の眼（オシリス・サイト）」でパラサイトの融合体を捉えたと同時に意識を集中させる。そして「オーディン」から大量の起動式が流し込まれ、魔法の発動準備が整う。
――自身の持つ固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』。
転生した当初は知覚魔法の一種として、そこから『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』や『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』という戦略級魔法も編み出された。使用者である悠元自身の魔法演算領域すらも無限化してしまうこの魔法の真の本質は〝概念干渉〟――情報次元（エイドス）における存在（イデア）そのものの定義を全て捻じ曲げる神の如き所業を為す魔法。
「万華鏡（カレイドスコープ）――天界爆裂（アカシック・ノヴァ）、発動」
似たような性質を持つ『天照絢爛』でも常識の範疇内に止まっているのに対し、対象物の存在を使用者の望むままに書き換える神業の魔法『アカシック・ノヴァ』に実質的な制限はない。
第一演習場に張り巡らされた結界が連動する形で光り輝き、時間にしてほんの一瞬――カメラのフラッシュよりも遥かに短い時間の瞬きが止むと、そこに存在していたはずのパラサイトの融合体は綺麗に消え去った。
「さて、これでようやくパラサイト絡みも終わりか……なして土下座してるんだ？」
「お兄ちゃんに一生逆らいませんのポーズ」
「俺は魔王か」
流石に何度も殺害と蘇生を延々と繰り返して相手の心を木っ端微塵にするほどの技量はない。そこまで到達したら最早神の領域と断ずる他なく、セリアの土下座を見た悠元は盛大な溜息を吐いた。
なお、強制的に立たせるために悠元のチョップがセリアの脳天を直撃したのはここだけの話。

耐性は別物なりけり

パラサイトとの戦いは悠元の魔法によって決着を見た。

無論、予め演習場に結界が張ってあることも最後の締めは悠元が負うことも……達也は既に知らされていた。最悪の場合は深雪の『コキュートス』を使わねばならないことも覚悟していたが、あの場にはリーナもいたので余計な勘繰りを持たれずに済んだと内心で安堵していた。

物事に確実性などないということは達也とて承知している。だが、一瞬の瞬きの後にパラサイトの融合体が綺麗に消え去った。自身ですら対処が極めて難しい相手を難なく倒せるだけでも世界屈指の魔法師という肩書に過分などないだろう。

(……流石、とは本人の前で言わない方がいいだろうな)

「お兄様、いかがしましたか?」

「いや、何でもない」

悠元は演習場の痕跡を消す作業があると言ってあの場に残っており、達也らはピクシーをガレージに戻した後、帰路に就いていた。達也は横浜ベイヒルズタワーでの顛末も聞き及んでいるため、事後処理を任せることについては異存などなかった。

深雪から何かを尋ねられるほどにそこまで深刻そうな表情を浮かべていたことに内心で苦笑し、安堵したような表情を作って妹に向けていた。深雪としても、兄が大したことでもないと言った以上は深く追及するつもりもなく、別の話題を持ち上げた。

「にしても、お兄様がリーナにあのようなことを自発的に言うとは思いもしませんでした」

パラサイトの融合体が消えた後、達也はリーナに対してリーナの正体が〝アンジー・シリウス〟であることを隠すことに加え、もしリーナが自発的に軍を辞めたいと思った時は力になる、と言い放った。

余程のことがなければ他人にはあまり関心を寄せることのない達也の自発的な勧誘にも近い言葉。しかも、真剣な口調ではなく柔らかな口調を用いての説得だったのが深雪にとって新鮮に映ったようだ。

「一種の憐み、なのかもしれないな。こんな感情を持つのは変かな、深雪」
「いいえ、それもお兄様らしいと思います」
どこからそんな結論が出るのか、と聞きたくはあったが達也は言葉を飲み込むように黙った。確かにガーディアンらしからぬ言動や感情が芽生えつつあるが、特にほのかやリーナと関わり始めてからは異性に対する感情もそれとなく読み取るように心がけている。
それでも目の前にいる妹からすれば「足りません」と断言されてしまったが。
◇　◇　◇
その頃、悠元は第一演習場内に足を踏み入れていた。周囲に気配も存在もないことは探知済みで、悠元以外に誰もいない。神楽坂家当主代行である以上は本来の筋なら姫梨か佐那、もしくは深雪がいるべきなのだが……こればかりは下手に明るみに出せない事情がある。その理由はパラサイトの融合体がいたと思しき場所の真下にある。
悠元が張った結界術式は無意識的にパラサイトの行動を定義付けるよう組まれており、パラサイトの融合体が出現した場所も意図的に引き寄せた結果である。そこまでした理由は悠元が魔法でその場所の土を2メートルほど掘り起こして出てきたもの――――小型のジュラルミン製アタッシュケースの中身に大きく関係している。
ケースを開けると、そこに収められていたのは四方1センチ程度のサイコロ状の結晶。それが8つ――――これらは全て悠元が創り出した魔法結晶で、これらには全てパラサイトが封印されている。
悠元がアリスを生み出した過程で発生した契約術式と封印術式が予め組み込まれており、これに封印された時点でパラサイトとしての性質が大幅に変化する形となっている。
『…マスターは優しいのですね』
「どうだかな。結局は利用するようなものだし」
今後はアリスも含めた彼らの存在を守護霊（サーヴァント）と呼称することになるが、悠元自身としては複数運用するつもりなどなかった。結晶の契約術式自体かなりの厳重なセキュリティを持っているが、結晶をそのま

ま使うよりもＣＡＤに搭載して隠れ蓑にしてしまった方がいいと考えている。
　アリスの言葉にそう返しつつ、悠元はケースの蓋を閉じて掘り起こした土に『再成』を用いて痕跡を消した。
「パラサイトとの戦いはこれで終わりと思えない。向こうの連中がこれを戒めと思ってくれれば幸いだが……」
　自分の知る原作では、パラサイトを呼び寄せたのは日本人のスパイということでっち上げられて、その上で二度目の実験を軍の独断で強行することとなる。そうならないように大統領宛の手紙でダラスの研究所を政府の直轄下に置くべきと進言しておいた。
　神楽坂家当主代行という立場に置かれても、政治関連の出来事はあらゆるバランスが求められるが故に手など出したくはない。そういうのは官僚や政治家の領分なので、彼らにはしっかり職務を全うしてほしいものだ。
『……何があろうと、私はマスターの忠実な僕。そしてマスターの剣となりましょう』
　そんな考えを読み取ったのか、アリスが投げかけた言葉に対して悠元は一息吐いたのち『鏡の扉（ミラーゲート）』で演習場を後にしたのであった。
◇　◇　◇
　風に乗って聞こえてくる楽しげなざわめき。第一高校は喜びの声で満たされていた。
　その中には泣き声も聞こえてくるが、それは決して不幸なことがあったわけではない。各々色んな思い出の大小こそあれど、慣れ親しんだ学び舎を離れる。
　そう、今日は第一高校の卒業式である。
　卒業式が終わった後、二つの小体育館を使ってのパーティーが開かれる（こんな時まで一科生と二科生を分けるのは嫌らしい気もするが、卒業生当人たちからすれば気が楽なのだろう）ため、生徒会役員は準備も含めてパーティーの運営に駆り出されている。流石に生徒会役員だけでは手に負えないということで部活連や風紀委員の有志も手伝いに駆り出されており、その中には達也も含まれていた（達也

が手伝うか否かについては、深雪とリーナによる水面下の攻防があった事など知る由もないが)。
流石に一科生と二科生を隔ててきた物差しに疑問を投げかける存在が出しゃばっても良くはないだろう、という達也の想いとは裏腹に、卒業生は達也に対して積極的に話しかけていた。この辺の事情には悠元の姉たちがしてきたことの影響も大きいのは言うまでもないが。
そして、彼女――平河小春(ひらかわこはる)もその一人であった。
「あ、司波君。大変そうだね」
「平河先輩。ええ、まあ、そうですね」
小春からすれば昨年の九校戦で同じエンジニアとして関わった程度で、その実力には小春ですら羨望や嫉妬やらが入り混じった複雑な心境を持った。
その後、論文コンペで彼に代役をお願いしたこともそうだが、その絡みで妹の千秋(ちあき)が迷惑を掛けてしまったのは偽りのない事実。彼と妹の確執が無くなったとはいえ、原因の一端を作ってしまった自分が声を掛けていいのかと迷ったが、同じ卒業生で九校戦のペアだった小早川景子から背中を押され、達也に話しかけた。
「その、千秋のことは本当にごめんなさい。私が司波君を無理に代役として推薦しなければあんなことには……」
「自分は気にしていませんし、平河先輩の責任ではありませんよ。それに、自分にとってもいい経験になりましたから」
過ぎてしまったことではあるし、一々掘り返す必要などないと達也は判断していた。それに、千秋から「司波君には負けないから、覚悟してよね」とライバル宣言のような言葉を言われたが、その時の表情が頬を赤く染めており、これは本当にライバル宣言なのかと疑わざるを得なかった。なお、それを目撃していたエリカに尋ねる形となり、彼女曰く「達也君は乙女心を勉強すべきね」と言われてしまったことには未だに疑問を呈していた。
「平河先輩、魔法大学への進学が決まったそうですね。おめでとうございます」

「あ、ありがとう……流石に司波君のレベルに追いつけるかは分からないけれど、景子や千秋の言葉を聞いて頑張ってみようって思ったから」

その話を続けても折角の雰囲気を壊してしまうだけなので達也は、強引に話題を変えることにした。小春は論文コンペメンバーの辞退後、千秋のこともあって魔法大学への進学予定を止めるべきか悩んでいた。だが、そこに喝を入れたのは景子であり、更に千秋の懸命な説得に加えて彼女と仲の良い人物――美嘉も説得した。

達也から感謝の言葉を貰った小春は手をもじもじさせつつも嬉しさを滲ませていた。傍から見れば気になる異性に対して照れくさそうな様子なのだが、達也にしてみると「なぜ恥ずかしそうな様子なんだ？」という受け取り方になってしまう。それを見て何故だかイライラしているような仕草を見せている金髪の美少女――リーナの姿に悠元は溜息を吐いた。

「リーナ、やきもちはみっともないと思うんだが？」

「にゃ、にゃにによ!?……」

「自爆したね、お姉ちゃん」

リーナがそうなってもおかしくないほどに今の達也の様子を見れば「人たらし」という言葉しか出てこないであろう。尚、本人にその自覚など皆無なのだが。悠元の言葉を聞いて噛んでしまったリーナを見て、辛辣な言葉を投げかけるのはご機嫌なセリアであった。

パラサイト討伐後、ＵＳＮＡ大統領と九島健の連名で神楽坂家に一通の手紙が届けられた。

内容はセリアをＵＳＮＡ軍から除隊させ、更にはＵＳＮＡ国籍から日本国籍に移す旨が記されていた。問題はこれだけだと九島家の係累になる可能性もあったわけだが、手紙を読んだ千姫は一計を案じた。それは彼女の預かり先を『九頭龍』の一角を担う九重家――つまりは八雲の養子に迎えるというもの。九重寺自体世襲制ではないが、忍術使いとしての九重家を確立するという意味でも必要だと判断し、八雲も千姫の提案には異論を唱えなかった。

そして、千姫から悠元にセリアを〝６人目〟として迎えるという言

葉を聞いた際、悠元からは盛大な溜息が出た。これ以降、セリアは前世での口調を学校内でも出すようになったが、特に混乱などは起きなかった。せいぜい非公式のファンクラブができたことぐらいだが。更に、来年度からは正式に第一高校の生徒として通うことになるのは決定事項だ。

「ステージライブのこともあるし、あまり突っ込む気はしないが……溜め込んでもロクなことはないぞ？」

「それもそうね……ユート、この暴走機関車の妹を宜しくしてやって頂戴」

「お姉ちゃん？　それは人のことを言えないんじゃないかな？」

リーナにはセリアとの婚約に際して悠元が戦略級魔法師である秘密を共有させている。リーナからすれば、幼い頃からやること成すこと全てが末恐ろしいという双子の妹を抑えてくれる存在が出ただけでも感激物で、悠元が戦略級魔法師だという事実はすんなり受け入れられた。尤も、セリアからすればリーナも同じ穴の狢だという事実はかなり棚上げされる形となってしまったが。

ステージライブについては、リーナが臨時の生徒会役員ということで当日の余興を担当させることになったのだが、本来卒業生や在校生から希望を募る当初の予測をリーナが盛大に勘違いし、自らバンドメンバーを集めた挙句にリーナがボーカルとして立つことになった。そこまでやってしまった以上は後にも引くことが出来ない、と判断してそのまま決行させることにした。

そのライブでは、セリアに対する鬱憤を晴らすがごとくプロ顔負けの歌声と演奏を披露し、会場を沸かせた。それに負けじとセリアが飛び入りで入ってリーナとのデュエットまで披露した。

「……楽しいことに首を突っ込むのは変わらずか」

それを見た悠元の呟きは、誰にも聞かれることなく小体育館の歓声に掻き消されるがごとく溶けていったのであった。なお、そのあたりのくだりを深雪が達也に暴露してリーナが顔を真っ赤にしたのはここだけの話である。

◇　◇　◇

リーナの姿を見たのは卒業式が最後であった。セリア曰く「今は帰国準備で忙しいのだけれど、正直あんな量のお土産をどうするのよ……」と疲れたような表情で述べていたことには同情を禁じえなかった。

卒業生の進路先はというと、真由美と克人、鈴音と亜実が魔法大学に進学。摩利は防衛大学校への進学と原作と殆ど変わらぬ形となった。後者に関しては言うまでもないことなので言及はしない。

三学期も終わり、この一年は何かしらと騒がしい一年だった。厳密に言ってしまえば、昨年の正月から喧騒の連続だったと言っても過言ではない。

学期末考査の結果は魔法実技・魔法理論共に一位。

文句の付けようもない結果なのだが、「悠元だから」と言われるのは納得がいかなかった。お前らは人のことを何だと思っているのかと問いたくなったが、余計に人外扱いされそうだったので追及を諦めた。

何にせよ、マイナス面を考えても十分すぎる結果を得られたと思いつつ、友人（一部の人間にしてみれば表現が変わるが）の帰りを待つべく東京湾海上国際空港に来ていた。

あと小1時間で雫らを乗せた飛行機が到着する予定となっている。

すると、達也がロビーの人混みの中に見覚えのある金髪が目に入り、立ち上がると「知り合いを見かけたから、少し外す」と短く言って立ち去る。彼女とは切磋琢磨できるライバルである深雪も達也の後を追うように付いて行った。ほのかも付いていこうとしたが、こればかりは無粋だとエリカが止めたようだ。

「俺も少し挨拶してくるわ」

同じA組で、同じ生徒会役員として関わり……将来的には義理の姉弟となることが確定している間柄。悠元が近付いている間にも会話は進んでおり、リーナも悠元の姿を見つけて声を掛けてきた。

「あら、ユート。まあ、アナタとは色々あったけれど……セリアのこと、お願いするわね」

「言われるまでもないが、分かったよ。まあ、また会えそうな気はする

が」
「タツヤやミユキもそうだけれど、ユートに言われると一気に現実味が増すわ」
リーナ（ブルータス）よ、お前もか。
そして、リーナはそのまま去ろうとしたのだが……何かを思い出したように達也の元へ近寄り、そして達也の頬に不意打ちの形でキスをした。
「これは再会できるようにのおまじない。タツヤ、それまで精々乙女心を理解できるように、ね」
そう小声で告げていくと、リーナは走ってその場を後にした。
原作にはなかった変化でリーナが達也に恋をした……達也としては叩きのめしただけのはずが、それが却ってリーナの乙女心に火を灯した形となったのかもしれない。不意打ちのキスを受けた達也の反応はというと……まるで石像の如く反応が皆無の状態であった。
「あの、悠元さん……呼びかけてもお兄様の反応がありませんが」
「（知識と耐性は別物かよ……）引っ張ってでもこの場を離れるぞ。見世物にされかねない」
自ら動く分には躊躇いなどないのに、相手から積極的な行動を取られると対処できなくなるようだ。大分恋愛に対しての感情が芽生えてきたことは嬉しいことなのだろうが、もう少し耐性を持ってほしいと思うのは贅沢が過ぎるのだろうか。
結局、達也の意識が再起動したのは雫が到着する１０分前で、その顛末を聞いたほのかがやきもちを焼いていたのは言うまでもない展開であり、帰国した雫がほのかから捲し立てられる様にそのことを聞く羽目になってしまった。
「……ほのかもそうだけど、悠元も大変だったみたいだね」
「お疲れのところすまないな、雫」
「ううん、大丈夫。レイから色々伝言も預かってる」
「……やっぱ、海に沈めないとダメかな」
「それは止めた方がいいと思う」
雫からすれば、悠元ならレイモンドどころかＵＳＮＡそのものを沈

めかねないと思い、流石に窘めた。それは同じ便で帰国した修司や由夢も同意見であった。

流石に雫らの話が全て明かされることはなかった。残りは「北方潮」――――彼女の家で行われる帰国祝いを主としたパーティーで明かされることだろう。

その前に、雫は夏休みと同様に別荘へ招待したいと提案してきた。特に断る理由もないので了承した。今回は夏休みの時のメンバーに加えて姫梨と修司に由夢、佐那にセリアも加わってかなりの大所帯となっている。これはこれで楽しいひと時になりそうだが、また何かありそうな予感を薄らと感じていた悠元であった。

星を呼ぶ少女編
少し早い春休み

――西暦２０９６年３月１７日。

通常のカリキュラムであれば、卒業生である３年はともかく１・２年の生徒は本来授業があるのだが、本来の予定を繰り上げて春休みに突入していた（その反動で過密とも思える授業スケジュールを食らったことは言うまでもないが）。

その理由は、来年度から新設されることになる魔法工学科（通称：魔工科）が最大の理由だ。多かれ少なかれ達也という存在によって生み出された数々の功績は教職員でも無視できるものではなくなっていた。だが、かといって一科生と二科生の評価基準そのものを捻じ曲げてしまっては今までの教育方針に対する誇りが許さなかったのだろう。

悩んだ末の苦肉の策として魔法工学科を新設することで、魔法実技よりも魔法技術に長けた魔法師を育成する方針を並行して行う形に決着させたようだ。

「……悠元、それって来年度からのカリキュラム？」

「おはよう、雫。まだ寝ていてもいいんだぞ？」

「流石に二度寝もできないかな」

留学中は『鏡の扉（ミラーゲート）』があるとはいえ、一応軍事機密の魔法に属する以上おいそれと使えない制約があるため、連絡位に止めていた。雫が帰ってきて最初にお願いしたことは、北山邸に悠元を招くことだった（この辺は他の婚約者である深雪や姫梨も察した上で納得していた）。

使用人たちからすると悠元のことは〝雫の夫〟扱いであり、その辺りのことは雫の父親である潮から聞き及んでいるのだろう。少し話を聞いてはみたが、潮だけでなく紅音も関わっていると聞いたときに雫の顔が赤くなっていたのは言うまでもない。

「私が留学中は深雪や姫梨、それに夕歌さんもだっけ」

「電話中の雫の格好もかなり際どかった印象しかないんだが……当

たってるぞ」
「当ててるから。こんなに成長したのは悠元のせいだし」
流石に見境ない行動は彼女たちの体調を考えて慎んでいる。だが、それを消極的な行動と思っているのかは知らないが、積極的なスキンシップが目立つようになってきた。それでも公の場ではまだ良心的な範疇に収まっているのが本当にありがたいと思う。
魔法師としての成長もそうだが、女性としての成長が本当に著しい。特に雫はその傾向が顕著に出ている。魔法演算領域の封印を解いた反動なのかもしれない……ただ、身長があまり伸びていないことはやや不満げだったが。
正月以降、沓子とは連絡を取る程度だったが、夕歌の場合は司波家や三矢家に顔を出すことが多くあった。高校時代に詩鶴と親友関係にあった事は周知の事実なので、それに託けた形で訪問することが多かった。
婚約関係になって手を出す様に誘惑してきたこともそうだが、やきもちを焼きそうな深雪を上手く説得した手腕は褒められるべきなのかもしれない。一つだけ言わせてもらうとするなら、上手く丸め込まれてることには遺憾の意を述べたくなってしまうが。
「ま、雫の場合は留学で約3ヶ月近くだからな。気持ちは理解できなくもないが……また体を痛めるぞ？」
「……そうだね。悠元は無尽蔵の狼だし」
「真っ先に誘ってきたのは雫だろうに……」
少なくとも誰かを狂わすレベルにまで至らせていないはずなのだが、それでも少し気を抜くと大惨事レベルになりそうな気がするので常に力加減はしている。男子にとって女子の魅力的なお誘いを無碍にできない気持ちはあるが、それを堪えた上で端末の画面に視線を落とす。
魔法工学科は現行のE組――――2年E組の1クラスが割り当てられる。それに伴って生徒の希望で二科生のみならず一科生からも希望が募られた。その結果、身内の友人関連からは達也と美月、燈也と佐那が魔工科に転科することになる。そして、一科生の抜けた穴に幹

比古、レオ、そしてエリカも一科生入りを果たす。
「節操なしにアプローチを掛けてるつもりなんてないんだがな」
「悠元の場合は無意識的に引き寄せてるけど」
「俺はブラックホールの類か？」
　魔法科高校では下手なことにならないよう努めているし、一線を引いた上で接していることが多い。婚約者の件だって確かに自分の責任もあるのだろうが、社交辞令の範疇を超えないようにしてきたことは事実だ。無論、雫も悠元の気苦労は一応理解しつつも辛辣な言葉を言い放った。
「それよりも性質が悪いかな。ホントジゴロなんだから」
「……」
　宇宙で起こりうる未体験の現象よりも性質が悪い、というのはなんだか納得したくない心境にさせられてしまう感想しか出てこなかったのであった。正直、この一年で何回その言葉を言われたことか……と内心で深い溜息を吐いた。
◇　◇　◇
　北山邸に来ていても基本的な生活サイクルは変わらない。雫との魔法訓練も二学期に入ってから軽運動部での武術訓練と並行して行ってきた。
　学術的な因果関係は認められていないものの、身体能力と魔法師としての実戦能力は密接にリンクしている。軍人魔法師ならば高い身体能力が求められているのは自明の理だが、魔法の基礎訓練に体を鍛える項目は、現代魔法の観点で言えばあまり整っていないのが現状である。
「よし、今日はここまでだな。お疲れさん」
「ありがと。ホント涼しい顔してるのが悔しい」
「これでも武術や魔法は雫の先輩だからな。みっともないところは見せられないさ」
　天神魔法の訓練は表沙汰に出来ないので神楽坂家の本家か別邸、時折九重寺でこなしている。最近知ったことだが、週末には燈也も八雲の武術指導を受けている。八雲曰く「あの体格で力の使いこなし方を

分かり切っているのは非常に珍しくてね」とのことで、元々武術の才能があったのかもしれない。人は見かけによらないのだろう。

話を戻すが、なので想子の制御訓練か基礎単一系による息継ぎの効率化訓練に止めている。この前、魔法を使ったエアホッケー（マレットには一切手を触れず、魔法のみでパックを打ち返すという遠隔操作訓練）では、熱中する面子が多かった。なお、勝ち抜いたのは自分と達也であり、加減していたとはいえ完全な千日手状態となって引き分けで手を打った。

パラサイトの一件については、日本政府とＵＳＮＡ政府で〝手打ち〟にすることが決まった。元々ＵＳＮＡが勝手に暴走した挙句の身内の恥なため、これ以上の失点はおろか借りを作りたくないとするＵＳＮＡ側に対し、横浜事変も含めて外交上の失点を取り返したい官僚が多い日本側。双方の言葉による〝殴り合い〟はまだ穏便な方だった。

だが、戦略級魔法に関してはかなり激しいやり取りがあった。何せ、本来官僚同士の話し合いの場に剛三と千姫が揃って出向くという異例の事態となったらしい。これにはＵＳＮＡ側にいたバランス大佐も面食らったらしい、とセリアから聞き及んだ。

これ以上の戦略級魔法の誕生はステイツとて看過できない思惑もあったのだろうが、この国自体軍の規模や国土から考えれば〝小国〟の類になる。加えて停戦状態となっている大亜連合もそうだが、佐渡侵攻や横浜事変では新ソ連も動いている。そこに付け加えられたのはオーストラリア――その裏で糸を引いているイギリスの存在もある、と千姫は以前話していた。

旧ＥＵというか、欧州は人種・宗教・言葉などの要素が複雑怪奇すぎる上、過去に三度あった世界大戦のうち二度は確実にあの地域の軍事衝突が発端となっている。第二次大戦後に欧州連合という経済圏を確立して旧合衆国や旧ロシアをはじめとした大国に対抗しようとしたが……結局は東西に分裂してしまった。

戦略級魔法という傘によってある意味難を逃れた形だが、それでも世界の覇権を握りたいという欲が消えた、というのは考えづらい。

「それにしたって、勉強もこなして運動も出来て……出来ないことってあるの？」
「興味のないことなんて殆どできないがな」
話を戻すが、今の自分の立場はこれでも弁えているつもりだ。「賠償させる」とは言ったが、その具体的な話はまだ持ち出していない。流石に今後のことを考えると一々突っ込むべきではないのだろうが、何も提示されないことを〝甘え〟られても困る。
こうやって思うと、最近は魔法の事よりも政治のことを考えている気がする。いや、魔法が軍事と結びついている以上は仕方がないことだろうし、神楽坂家は政財界に影響力を及ぼしている。
現に、自分も『九頭龍』や『星見』を指揮するにあたって様々な情報に触れている。独自の情報網で顧傑と周公瑾のやり取りも手に入れてはいるが……こればかりは流石に剛三の耳に入れていない。聞けば最後、周公瑾が塵と化すことは既定路線だろう。
魔法で身なりを綺麗に整え、雫と朝食を済ませた後は春休みの予定を確認していた。その中には夏休みに行った聟島の別荘に案内することも含まれていた。
「時期的に海水浴も出来なくはないか。ああ、だから熱心に水着のカタログを見ていたのか」
「うん、夏に着たのだとサイズが合わないから……悠元のえっち」
「いや、今は何もしてないんだが」
雫の言葉はさておき、水着に関しては男性よりも女性が殊更敏感なのだろう。流石にブーメランパンツのような恰好はしないが。なお、水着の買い物自体は店先に行くこともあれば、オンライン（正確にはARディスプレイ）でサイズやデザインをリアルタイムで合わせつつやるタイプもあったりする。
この前、深雪がARディスプレイを前にして水着を熱心に選んでいたが、その選択履歴を見た上で「人前に晒すものだから、もう少し控えめにしてくれ」と言っておいた。どういったものなのかは……想像するだけで色々と妄想しそうなので言わないでおくことにする。
「今回はセリアも一緒に来るんでしょ？」

「まあな。燈也は先輩の卒業旅行に引っ張られる形だが」
燈也は亜実の誘いで卒業旅行についていくこととなった。元々は真由美と摩利のみだったらしいが、真由美が巻き込んだらしい。なお、克人については実家の手伝いもあって旅行には参加しなかったらしい。
セリアに関してだが、任務のために借りていた家を引き払って神楽坂家の別邸に住むこととなった。戸籍も既に変わっていて九重家の人間となったが、表向きは〝エクセリア・シールズ〟で通すとのこと。この辺は将来的に籍がまた変わるためだと千姫が述べていた。
「どうしたの？」
「春休みぐらい穏便に過ごせたらいいな、と」
「……フラグ？」
原作主人公の達也ならいざ知らず、俺にそんなフラグ建築能力なんてない。国内外にいる連中が俺を注視しているようだが、敵対さえしなければ関わる気なんて更々ないのだ。向こうが勝手に騒いだり怖がったりしてちょっかいを掛けるのは……理解はしてやるが、同情なんてする気などない。
それを少しでも理解してくれる人が欲しい、と心なしか思ったのであった。
◇　◇　◇
そんな悠元の細やかな願いをぶち壊す流れが……起きてしまっていた。その一端を食らって飛行機の座席の中で仏頂面を浮かべる金髪の少女――〝アンジー・シリウス〟ことアンジェリーナ＝クドウ＝シールズは、飛行機に乗る前の出来事を思い返していた。
事の発端はリーナが空港に到着すると、出迎えとして来ていた先に帰国していたシルヴィア・マーキュリー大尉（リーナの階級が少佐であることと、先日の任務による失態を隠すための昇進）から参謀本部よりホノルルに飛んで欲しいという少ない情報と荷物を渡され、そのまま軍としての任務に就けられたことだ。
「シルヴィのバカ……」
日本での任務はリーナにとって色々な影響を与えた。

今まで軍の命令に従うことに疑問など持ってはおらず、軍の命令系統から外れている双子の妹の存在を守るという意味でも必死に戦ってきた。それはパラサイト抹殺任務や戦略級魔法の無力化任務でも同様で、自分は一切の手抜きや手加減などしなかった。

だが、それを軽々と上回った達也と深雪。そして、妹すら圧倒せしめた非公式の戦略級魔法師――――かつて自身を倒した神楽坂悠元の存在。達也はリーナが軍人に向いていないと言い、もし軍を抜けるならば手伝うとも言ってくれた。

今までリーナを相手にそんなことを言う人間などいなかった。何故なのかと悠元に問いただした際、彼は「詳しいことは言えないが……ある意味『同類』だと思ったのだろうな。かくいう俺も似たようなものだが」と答えていた。

聞けば、悠元も元々の実家である三矢家を救うため、国防軍の特務士官になったことをリーナに明かした。戦略級魔法師であることを認めた以上は一つや二つぐらい増えても大したことじゃない、と笑い飛ばしていたが……リーナからすれば、戦略級魔法師〝アンジー・シリウス〟を明るみに出される可能性があるだけに、悠元のことは余計に言えなくなってしまった。

それに、軍でも浮いていた双子の妹を引き取ってくれた相手。将来はリーナにとって義弟（おとうと）になりうる存在……いや、彼女からすれば義兄（あに）に近いような存在かもしれない。

その人物を売るような真似をしたら、確実に双子（エクセリア）の妹の怒りを買いかねない。

（ホノルルってことは極東方面か太平洋方面……せめて、新ソ連絡みであることを祈りたいものです）

流石にパラサイトと戦略級魔法師の件が一定の決着を見た以上、その後片付けでとんぼ返りは止めてほしい……そんなことを思いながら、リーナの乗せた民間機は一路ホノルルへと飛翔するのであった。

一度殴らないと恋に目覚めない理論

北山邸で雫との会話を終えて司波家に帰宅した悠元。それを待っていたのはエプロン姿の深雪であった。いくら家の中とは言っても服装の露出がやや高めになっているが、それでも〝裸エプロン〟をしないだけマシだと割り切っていた（一度やろうとしたところを必死に止めた）。

「おかえりなさい、悠元さん」

「ただいま、深雪。達也は……またＦＬＴか？」

「ええ、夕食までには戻ると言っていました。そういえばセリアからメールが来まして、後で連絡してほしいと」

リーナとの対決が契機となったのか、達也は独自の魔法開発に取り組んでいた。その実験のために使うデバイスの設計図を見せてもらったが、設計・開発自体は悠元の手を極力借りないと言っていた。とはいえ、極秘裏に牛山からデバイス設計のアドバイスを求められているため、間接的に関わっているのは言うまでもない。

ＦＡＥ（Ｆｒｅｅ（フリー）　Ａｆｔｅｒ（アフター）　Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ（エグゼキューション））理論に基づく魔法開発――日米共同研究の後、ステイツでの独自研究によって「ブリオネイク」という完成形を確立させた理論を応用した魔法。正直な話、その解決法を独自に導き出して『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を編み出した悠元からすれば〝通過点〟の部類となってしまうが。

「セリアからか……わかった。というか、連絡先は教えている筈なんだが」

「私も気になって聞いたのですが、『悠元に直接連絡して空気を壊したくないし』と仰っておりました」

変に空気を読むあたりは前世の天才ぶりの一端なのだろう。ともあれ、深雪に着替えてくる旨を伝えてそのまま自室に入ると、置かれていたノートパソコン（厳密にはそのタイプの高性能端末）を起動させて通信を入れると、表示されたのはセリアだった。

『ハロー、お兄ちゃん。連絡入れてくれたってことは司波家にいるんだよね？』

「先程戻ってきたばかりだけどな。別に俺の端末へ連絡を入れても良かったのだが」
『いやー、雫ちゃんの機嫌を損ねたくないからね。一応外様みたいなものだし』
パラサイトや戦略級魔法の件では悠元以外の面々と直接対決していないにしろ、〝セリア・ポラリス〟のことは達也と深雪にまで知られている。その意味で深雪のご機嫌取りも兼ねた行動だったようで、これには悠元も苦笑を禁じえなかった。
「言い分は受け取るが……それで、何か用事でもあったのか？」
『えっとね……リーナからやたら長文のメールが届いてね。半分以上愚痴で埋まっているから何事かって見ていったら、アルバカーキに到着してすぐにホノルルへ飛ぶように言われたらしくて』
「……それ、絶対軍の命令絡みだろ」
これだけでも下手に連絡をしなかった理由が理解できた。というか、情報検閲が絶対引っ掛かりそうなものだが、普通に届いたということは軍のフィルターを辛うじて突破できたのだろう。若しくはセリアがリーナの持っている端末に細工でもしたのかもしれない。
しかし、リーナが〝アンジー・シリウス〟として求められるような諸外国の動きは見られない。新ソ連も『ハロウィン』の一件で大分ガス抜きが出来たようだし、それにプラスしてウラジオストクの魔法拠点が使い物にならなくなった。大亜連合にも軍事的に大きな動きは見られない。そうなると……嫌な可能性が脳裏に過った。
セリアと連絡を取りつつ、手元のコンソールに触れて別のモニターを起動して情報検索を始める。
「太平洋方面にとんぼ返りの恰好か……だが、東南アジア方面やオーストラリア方面にも大きな動きは見られない……なあ、セリア」
『どうしたの、お兄ちゃん？』
「リーナのそのメールだが……十中八九、国防海軍絡みの可能性が高い」
『ええ……って、劇場版じゃん!?　って、ゴメン』
悠元の画面には『八咫鏡（ヤタノカガミ）』を通して得た全世界の潜水艦分布マップ

が表示されている。
一個人が全世界の軍を把握できる能力――――風間がそれを最もよく知る人物であり、沖縄侵攻や佐渡侵攻、横浜事変でも悠元の情報がなければ死傷者がさらに増えていた可能性もあった。なので、彼は絶対に敵対しないと心に決めている。
悠元の言葉を聞いたセリアが口にした部分の知識は一応あるにはある。なので、その予防線として戦闘空母である「ずいかく」を建造・就役させた。だが……歴史の修正点というべきか、あるいは人の欲と言うべきなのかは不明だが、小笠原諸島方面に大亜連合の潜水艦が一隻。それと、同海域にＵＳＮＡの潜水艦「ニューメキシコ」も近付いている。
更に軍関連のデータベースを探ったところ、国防海軍による小笠原方面の動きが少し活発になっているのが確認できた。更に付け加えれば、大規模の魔法行使を行った形跡が小笠原諸島方面から感じられたのは間違いない。
「周りに誰もいないから問題はない。だが、人が苦労して『ずいかく』級空母の就役にまで踏み切ったのに、強欲にも程があるだろうが」
『やっぱりお兄ちゃんが関わってたんだね……』
「まあ、雫絡みでその方面に出向くからいいが、問題はスターズだ」
いくら現代魔法の先進国とは言え、やっていることは旧合衆国がかつて掲げた「世界の警察」理論に基づくもの。日本政府や国防軍、あるいは師族会議に申し入れしているのならば一応の筋は通る。先日の〝失点〟を鑑みれば一報でも入れればまだ違うのだろうが。
個人的にコンタクトを取れる軍関係者の一人であるバランス大佐は特使の関係で日本にまだ滞在している。彼女を通して日本政府に伝達すればいいのだろうが、辛酸を味わう形となった軍上層部は意固地になっているのかもしれない。
「場合によってはスターズと対決しなければならんが……仕方ない。セリア用の専用ＣＡＤを急ピッチで仕上げるか」
『そんなのを作ってたの？』
「試作品かつ〝特注品〟すぎて司波家では調整できないんでな。後で

主任には連絡を入れておかないと……」
　達也たちの現在の魔法力ならば問題はないだろうが、念には念を入れておく。四葉家と風間に達也の『マテリアル・バースト』解禁要請を、千姫と剛三に『スターライトブレイカー』の使用解禁を要請する。
　それと、スターズを抜けたことで「レーヴァテイン」がなくなったセリアの専用ＣＡＤを仕上げることにした。元々はコスト完全度外視の耐久度を誇るＦＡＥ理論兵器の試作品だが、それが幸いにも「レーヴァテイン」に近い仕組みだったので流用することにしたのだ。
　尤も、「レーヴァテイン」とは異なり形状自体は弓をモチーフとしている代物で、詩鶴に渡そうと作っていたＣＡＤだったのはここだけの話。名前はさしずめ「アルテミス」といったところだ。
『お兄ちゃんって、この世界の支配者でも目指すの？』
「誰がそんな面倒なことをするか」
『デスヨネー』
　なお、元同僚のスターズ隊員も含めた面々と対立することについてだが、セリア曰く「一部を除いて奇人と変人しかいない連中に掛ける情けはないよ」とのことらしい。せめて身内であるリーナにぐらいは加減位してやれと言ったのだが、「軍をスッパリ辞めてお兄様にアタック掛けないヘタレは一度殴らないと目覚めない」と返してきた。
　達也も達也だが、戦略級魔法師は恋に対して奥手になる傾向があるのだろうか。その一端である自分が言うと変な説得力を持ってしまうのは納得がいかないが。
◇　◇　◇
――西暦２０９６年３月１８日。
　夏の時は気候が安定していたのでクルーザーだったが、今回は他の島への移動も考慮してＶＴＯＬ機での移動となる。姫梨を含む神将会の他のメンバーには一応声掛けをしたが、元継以外は各々次期当主を説得する意味で実家に帰ったらしく、元継は侍郎と詩奈の面倒を見るために三矢家へ出向いているらしい。
「悠元はこんな時でもデバイスの調整だなんて、熱心ね」
「茶化すな、エリカ。使わないに越したことはないが、あんなことが

あった後だからな」
　端末とケーブルで繋がっている先には弓型ＣＡＤ「アルテミス」が接続されている。セリアと連絡した翌日に急遽ＦＬＴへ出向いてセリアの使う魔法のインストールを手早く済ませ、機内に持ち込んで調整を行っている最中であった。こんな作業をしているものだから、何かあると勘付いている連中が多いのはありがたいと思うべきか。それとも、困ってしまうと思うべきなのか。
　調整は『万華鏡（カレイドスコープ）』を併用する裏技を用いて短時間で終わらせた。聟島に着くと、各々水着に着替えて海で泳ぐことにした。そこにエリカがスイカをこっそり持参しており、主に二科生のメンバーと佐那、それとセリアでスイカ割りを始めた。聞けば、千葉家の訓練のお楽しみとして恒例行事でやっているとのこと。基本的に率先して泳がないタイプの達也や悠元は別荘のテラスでのんびりしつつ、北山家特製のトロピカルジュースを口にしていた。
「その、悠元さん。私の水着はどうでしょうか？」
「よく似合ってるよ。まあ、深雪なら何でも着こなしそうな気もするが」
　深雪のものはフリルが付いたタイプのセパレートで、非常によく似合っていると思う。流石に美月やほのかほどではないが、リーナやセリアと同等以上のプロポーションへと成長しているのは間違いないだろう。元々の魅力に加えて女性らしい体つきになっている。悠元の言葉に深雪は嬉しさで頬を赤く染めていて、もし獣の耳があればピコピコと激しく動きそうな喜びようだ。
　すると、二科生とセリアのスイカ割りを見ていたほのかと雫が三人の座るテーブルに座った。
　ほのかはフリル付きとはいえ、前回よりも胸元を強調したタイプのセパレートとはだいぶ思い切った形だろう。大分成長――――具体的にはエリカよりも胸が大きくなり、メリハリの付いたプロポーションとなった雫はワンピース形ではなくセパレートタイプの紫色主体の水着を選んだ。ちなみにだが、美月は佐那とエリカの企みもあってシンプルだがビキニタイプの水着を選んでいて、エリカと佐那はシンプ

ルなセパレートの水着を選んでいた。
美月、ほのか、深雪、セリア、佐那、雫、エリカ……何の順番かは察してほしい限りだ。
「雫、一気に成長したよね」
「そうね。一気に女性らしくなって……悠元さんあってこそでしょうけど」
「ん。そのお陰で何度も新調する羽目になった。お母さんに根掘り葉掘り聞かれたし」
「やれやれ……」
雫もそうだが、深雪の成長の裏側に何があったのかを達也は聞き及んでいる。
実際のところ、夏休みに神楽坂家を訪れて以降は深雪が悠元の部屋で寝ることがかなり多くなった（実を言うと、悠元が居候し始めてから時折添い寝してほしいと深雪が頼み込み、結局深雪のほうが耐えきれずに自室へ戻ることがあった）。
深雪の体調を気遣うならば悠元の取った行動は適切だが、そもそも深雪の側から仕掛けているようなもの。加えて雫や姫梨、最近では夕歌も彼と関わっている。それでいて良く正気を保てるものだ、と同じ男として悠元をある意味褒めたくなった。
「これは美味しいな」
「黒沢さんの特製だからね。悠元なら完璧に真似出来るかもしれないけれど」
「魔法ならいざ知らず、料理はそう簡単にいかないだろうに。そういや、スイカ割りのほうはいいのか？」
「あ、そうそう。セリアさんがスイカを綺麗に〝斬って〟たんですよ」
本来はスイカ〝割り〟のはずなのだが、何をしたのかは予想が付く。大方原作アニメでエリカがやったことを応用したのだろう……無駄に洗練された無駄な使い方という言葉が一番しっくりくると思う。セリアのやったことは『聴覚強化』で聞き取っていて、感心するように声を上げたレオとエリカの様子が掴みとれた。ほのかの言葉を聞いて達也と深雪も察していたようだ。

「悠元に達也さん、深雪も来てくれてありがとう」
「唐突になんだよ」
「そうよ、雫」
「二人の言う通りだな。それに、春休みにこうやってのんびり楽しく過ごせるんだ。感謝こそすれ迷惑と思ってないさ」
雫としては、達也と深雪の事情を理解している上での言葉。だが、それを気に病む必要はないと悠元も含めて雫に返した。それを聞いた彼女は「良かった」とでも言いたげに柔らかな笑みを見せた。
だが、そんなバカンス気分を一瞬にして吹き飛ばす音———飛行艇のエンジン音に、真っ先に悠元が気付いて視線を西方向の上空に向けた。
「悠元さん？」
「……悠元の予想通り、ということか」
「間違っていてほしかったがな」
この島に近付いてくるのは国防陸軍の水陸両用飛行艇。テラスにいた悠元らだけでなく、スイカを食べている面々もその存在に気付いた。こうなると、国防陸軍において位の高い自分が対応すべきと考え、飛行艇が着底した桟橋に向かって一気に跳躍した。飛行艇からは一人の陸軍兵士が降り立つ。その兵士はこちらを考慮してなのか独立魔装大隊の隊員で、悠元に気付いて敬礼をした。悠元もそれに倣って敬礼をする。
「これは特務少将閣下。休暇中のご訪問をお許しください」
「こちらこそ、このような恰好での対応になって済まない。それで、用件は？」
「少佐殿からの手紙です。一つは大黒特尉に渡してください……出頭命令とのことです」
「了解した。速やかに対応するので、少し待っていてもらえるか？」
「はっ」
悠元が手紙を受け取って別荘に戻ると、出頭を想定してなのか達也は水着でなく動きやすい服装に着替えていた。悠元は達也に未開封の手紙を渡した後、自身に届けられた手紙に目を通す。

（……「サード・アイ・エクリプス」の使用許可の解除申請か。出頭命令でないのは、風間少佐なりの気遣いと言うべきか）

自分がその場にいない際の解除手順は確かに存在しているが、セキュリティ上の問題もあるので風間にしか知らせていない。というか、生体解除キーとして登録されているのは悠元と風間の二人だけで、仮に上司が風間に解除を求めたとしても悠元が行う解除コードの送信がなければ「サード・アイ・エクリプス」は使えない。

達也は手紙の内容を確認すると、深雪に封印の解除をお願いした。手紙には『マテリアル・バースト』を使用可能とした状態で出頭するようにとの要請があったためで、彼らの身内である真夜と深夜も同意している。達也の持つ戦略級魔法を使わねばならない事態というのは、それだけの危機が迫っているということぐらい深雪も理解できる。

そして、深雪の唇が達也の額に触れ――――達也の持つ膨大な想子が部屋に吹き荒れたのだった。

◇　◇　◇

茨城にある国防陸軍の百里基地。達也はあまり袖の通さぬ軍服で風間と真田のいる執務室に入った。達也の敬礼を終えたところで楽にするよう風間は声を掛けつつ、本題に入る。部屋が暗くなり、部屋の横にある大型モニターには太陽系の天体図が表示されている。

「早速だが……地球と火星の公転軌道のほぼ中間宙域、小惑星の不自然な軌道変更が観測された」

「不自然な、でありますか？」

その言葉を使うということは、他の小惑星を含めた物理的な衝突によるものではない、と内心で推測しつつ風間や真田の説明を聞き続ける。

「当該小惑星２０９５ＧＥ９――――コードネーム〝ジーク〟が地球に落下してくる確率は、特務参謀の計算結果ではほぼ１００パーセント。九州地方で空中爆発を起こす確率は８０パーセント以上とのことです」

「ほぼ確実に日本へ落ちてくる、ということですね」

真田の言う特務参謀のことだが、十中八九悠元以外に思いつく人間が存在しなかった。小惑星による被害予測は現在でも難しいが、彼が言うと妙な説得力が生まれている……と思う。この状況ならば確かに『マテリアル・バースト』を使うのが一番の最善策というのも理解できるし、粉々にした破片程度ならば大気圏での摩擦熱で燃え尽きる算段も付く。

そして、風間は達也に命を下す。

「――――大黒特尉に命じる。『マテリアル・バースト』を以て〝ジーク〟を破壊せよ」

少女との邂逅

――西暦２０９６年３月１９日。

小笠原諸島、父島。

七草真由美は端末の着信音を聞いて手を伸ばし、手に取りつつ寝起きの状態で端末を操作した。

流石の父親でも卒業旅行に野暮を突っ込むような真似はしないだろうし、大方妹辺りからお土産のメールでも送ってきたのかと思っていたが、それが暗号メールだと分かった瞬間に意識が一気に覚醒した。

「何かしら……って、これは暗号メール!?」

真由美はベッドから起き上がり、サーバーでブラックコーヒーを淹れて折りたたみ型端末を起動した。自分の持つ端末と接続して解凍プログラムで届いた暗号メールを解析したところ、衝撃的な内容に驚きつつ同じ部屋で寝ていた摩利を起こした。

「真由美、流石に早くないか……？」

「とっくに朝よ。これを見て」

摩利は渡されたブラックコーヒーを口にすると、苦さで一気に意識がハッキリさせられたが、真由美の端末に表示されたメールの内容を見て真剣な表情を見せた。

「これは……亜実と燈也君にも事情を話した方がいいな」

「そうね」

差出人は真由美の身内の恩師。その内容は――南盾島にある国防海軍の魔法研究所で酷い扱いを受けている調整体の少女を脱走させるので、東京に連れ帰ってほしいというお願いであった。

単なる卒業旅行が大変なことになった、というのは心の中で思っていても口には出さなかった。

◇　◇　◇

達也が〝ジーク〟の対応に追われることとなった翌日。達也以外の面々は南盾島（みなみたてじま）――国防海軍の基地がある島だが、補給基地の余剰能力を使った大型ショッピングモールがあり、のんびり羽を伸ばす

意味で来ていた。深雪は達也がいないことを残念がっていたが、その達也から「俺の分まで思い切り羽を伸ばしてくるといい」と言われてしまっては何も言い返せなかったようだ。
男子三人の女子七人という形だが、空港とモールを移動するコミューターは五人まで。なので、セリアと佐那が率先して男子と同乗する形となった。その意図に気付いて深雪と雫はジト目を浮かべていたが。
「話には聞いていたけれど、立派ね」
「ま、今日は女子のショッピングに付き合う形となりそうだが……レオと幹比古はのんびりしてていいぞ」
「僕はのんびりできるかもしれないけど、レオはエリカが逃がさないんじゃないかな」
「勘弁してくれよ……てか、幹比古の場合は佐那がいるじゃねえか」
「そこまで振り回すつもりはありませんから大丈夫ですよ」
場合によっては、という文言が付きそうな佐那の言葉はさておき、エリカのことだから有無を言わさずに付き合わせる可能性が高いだろう。
本人たちは隠しているようだが、この前のホワイトデーの時、放課後の教室でレオがエリカにお返しを渡して去ろうとしたところ、エリカがレオの眼を瞑らせてキスをしていたのだ。何故知っているのかと言えば、生徒会の仕事で偶々教室の横を通ったときに目撃しただけだ。
なお、それを見た後に隠形を全力で展開して去ったので、二人には何も追及されていないし、それをネタにしてからかうつもりなど今のところはない。
「それにしても、さくばんはおたのしみだったね」
「お前がそれを言うか……」
昨夜は深雪と雫、セリアに捕まって一緒に寝る羽目となった。流石に今日のこともあったので穏便となるように済ませたが……最後の一線を越えてないだけまだ大丈夫と思っていいのかは疑問だが。
よもや当事者側から出てくるとは思わず、冷静にツッコミを入れる

羽目となった。
一番最初に起きたところで黒沢女史と出くわしたが、彼女は笑顔を浮かべたまま事情を察しつつ着替えを用意してくれた。理解してくれることをありがたいと思うべきかは少し迷ってしまったが、心の中で納得させつつ着替えたのは記憶に新しい。
「とりあえず、昨日のうちにお勧めスポットは粗方抑えてるから、端末の送信が必要なら言ってくれ……どうした？」
「そういう気遣いが自然と出来るからモテるんだよ、お兄ちゃん」
「人付き合いのせいで無駄に染み付いただけだよ」
長野佑都として過ごした約８年の月日は決して無駄ではないと言える。それに付随した面倒事に関わったことも多くあったが、大体は魔法界の裏側――――剛三という存在によって見えてしまった部分と向き合うことが多かった。
国内で言えば国防軍や十師族を始めとした魔法使いとの関わり。海外で言えば魔法協会絡みや戦略級魔法師との出会いもある。明るみには出していないが、『十三使徒』のうち半数以上と直接面識がある。大亜連合にいた劉雲徳もその一人で、彼には孫娘がいた。直接面会した際に「ここまで理知的ならば孫娘の婿に欲しい」と言われたときは本気で断りたいと思ったほどだ。
尤も、その話は当人が死亡したので完全に立ち消えた形となった。
余談かもしれないが、セリアの悠元に対する呼び方は泉美や茜という前例があるため、そういった感じで呼ぶからと達也たちに説明して納得させた。仮に結婚したところで呼び方が変わるかどうかは不明瞭のままだが。
女性陣だけでショッピングに向かった（荒事になればエリカとセリアあたりが率先して動くだろう）ので、悠元とレオ、幹比古は護衛みたいなことをしつつ、適当にぶらついていた。ドリンクバーで一息入れているところを女性陣に見つかって、結局奢る羽目になった。
最初は悠元が全員分払おうとしたが、エリカはレオに払わせ、佐那と美月については幹比古が空気を読んで支払っていた。
「軍関係施設とはいえ、観光向けとしては立派だね」

「離島となると、内地のように娯楽が多い訳でもないからな」
通信網の発達があっても、物流の点で陸路が使えない制約は大きい。それに、端末があってもアプリケーションのゲームとなると魔法関連のシミュレーションがかなり多い。その意味で娯楽にも乏しい穴埋めとしてショッピングモールが未だに根強く残っているのだろう。買い物が一段落したところでモールの外縁部で一息ついた。金網のフェンスと海を隔てた先はこの島の国防海軍の魔法研究施設――南方諸島工廠（なんぽうしょとうこうしょう）が見えている。
「海軍の施設……お兄ちゃんは何か知らないの？」
「この辺りは基本的に『深淵（アビス）』と異なり、主に質量体移動を主とした魔法研究がされているそうだ。国防陸軍兵器開発部に籍を置いていた時、少なからず聞き及んだ程度だが」
自分は基本的に脅威と断定しなければ深入りするつもりなどない。南方諸島工廠についても、兵器開発部にいた時はそこまでの大規模な魔法実験は行われていなかった。とはいえ、陸軍の功績に焦りを感じることを見越して「ずいかく」の投入を打診し、剛三の許可を得て就役させた。
だが、大規模魔法――戦略級魔法クラスの発動痕跡がこの先から感じられる以上、見過ごせるレベルではなくなりつつあるのだろう。それは悠元のみならずセリアも感じていた。
「……人間の欲ってホント醜く思っちゃうよね。前世はさして思ってなかったけど……生まれ変わって初めて気付くなんて、ちょっとした皮肉かもしれないね」
「そうか……っと、どうやら昼食のようだから、行こうか」
「そうだね」
運命の歯車は回り始めていた。一人の少女との出会いがすぐそこまで迫っていることは……悠元は無論のこと、セリアも強く感じていたのだった。
◇　◇　◇
事前に調べていたモールのレストランで昼食を済ませ、食後のドリンクやコーヒーを飲みながら来年度の話に花を咲かせていたが、悠元

とレオは揃って妙な雰囲気を感じ取っていた。
悠元は軽く気配を探ったが、この近辺だけでも十人足らずとはとても穏やかな雰囲気とは思えない。確実に厄介事なのは間違いないだろう。
「悠元……妙じゃねえか？」
「変に殺気立ってるというか、あちこちに憲兵がいるな。っと、一応気付かない振りをしとけ。変に目を付けられたくないからな」
「そうね……ヤバそうなことみたいだし、早めに切り上げた方がいいと思う」
本来はもう少し滞在する予定だったが、この状況が悪化する前に別荘へ帰る方がいいと判断し、他の面々も同意した。あくまでも、捜索隊らしき憲兵の存在には気付かないフリをしつつ。
空港に到着すると、乗ってきた北山家のＶＴＯＬ機のタラップが開いた状態だった。だが、機内に敵意は感じられない。操縦席側に一人、そして機体の尾翼下部に一人いるのは間違いない。
話し声からするに、北山家の自家用機パイロットである伊達がハッチを開けたままにしていたのが原因のようだ。
（……乗り込んでしまってるな。まあ、いいか）
気付いていないフリをしつつ、一番最後に乗り込んでハッチを閉じようとしたところで近付いてくるジープタイプの走行音。そこから降り立ったのは二人の海兵だが、悠元からすれば一応顔見知りにあたる人間であった。
「機内を検める！　その自家用機……ご、剛三殿の!?」
「何ですか？　出発しようとしたところで随分と高圧的ですね。一体何があったのですか？」
「いえ、その……実は、病院から脱走したと思しき患者を……」
千葉道場――――エリカの実家の門下生だということは間違いなかった。二人も悠元の姿を見て緊張しているが、半分は剛三の影響が色濃く残っているのだろう。残り半分が自分のせいだということは否応にも自覚しているが。
「ハッキリしない物言いですね。とはいえ、その患者と思しき姿は〝

目に見える範囲〟で確認できていません。速やかにお引き取りください」
「し、しかし、一応見せていただくだけでも」
「自分の言うことが――――〝神楽坂〟の言葉を信用ならないと？　であるのならば、今すぐ首相に抗議させていただくことになりますが……」
「し、失礼しました！」
確認できていない、という事実に関して別に嘘は言っていない。こちらの威圧も込めた視線に海兵の一人が頭を下げて謝罪しつつ、ジープに乗ってその場を離れていった。ハッチを閉じて席に座ると、ＶＴＯＬ機は一路聟島に向けて飛び立ったのであった。安定状態になったところで、エリカが立ち上がって悠元に話しかけてきた。
「いやー、うちの道場の連中が迷惑かけたわね。それにしても、滅多に権力を振り回さない悠元が珍しいわね」
「あの子が憲兵たちの探し物なのは間違いなかった。別に嘘は言っていないからな」
「それは確かに……出てきなさい。別に貴女に危害は加えないから、大丈夫よ」
エリカはそれを聞きつつ、機内後方にある扉の前に立った。彼女の言葉に応じて扉が開くと、見た目には小学生中学年程度と思しき少女がいた。髪は無造作に伸ばされ、前髪で目が隠れ気味になっていた。
ひとまず、その少女を座席に座らせると、悠元はペンダントを少女に渡した。
「これは……何ですか？」
「それを身に着けてほしい。君に危害を加えるものじゃないことは保証するよ。えっと……そういえば、名前を聞いてなかったね」
「『わたつみシリーズ』製造ナンバー２２、個体名：九亜（ここあ）……です」
少女――――九亜の言葉に、悠元らは驚愕に包まれた。彼女は調整体だということは間違いなく、レオも表情を険しくしていた。
真っ先に悠元が冷静さを取り戻し、九亜がペンダントを身に着けた

ところで持ち込んでいた折りたたみ型端末を起動させると、端末のコンソールに想子を流し込む。すると、ペンダントも悠元の白銀の想子光に光り輝き、九亜はゆっくり目を閉じてリラックスしたような表情を浮かべていた。彼が何をしているのか勘付いたセリアは悠元に問いかけた。

「……お兄ちゃん、彼女の様子は？」

「魔法実験の影響か、かなりギリギリの状態だな。自我消失状態に近い波長が見られる」

端末に積まれた魔法師の波長測定システムは、三矢家と四葉家で得られた膨大な魔法師の想子計測データをベースとしたもの。第四研の無茶な人体実験によって、波長パターンから魔法師の状態を事細かく割り出せるまでになった。これを応用すれば非魔法師の病気の早期発見や治療にも繋がる。悠元が『領域強化（リインフォース）』や『癒しの風（フローラル・ウィンド）』という規格外の魔法を使っていく過程でそれに気付き、三矢家と四葉家からデータ提供を受けて完成した。

九亜の精神状態は見るからに消耗しきっていた。その原因は大規模魔法に伴う強制的な精神リンクによるもの――以前、剛三からそんな実験があったということは少しだけ聞いたことがあった。

「そんな……」

「どうにかできそう？」

「一番いいのは魔法の行使を暫く控えることだな。にしても、この消費度合い……かなり大規模の魔法行使でないとこうはならないはずだ」

言葉を濁したが、間違いなくあの研究所で実験しているのは〝戦略級魔法〟。彼女の起動式読込履歴から全体の起動式を読み取ったところで〝転生特典〟による魔法式が構築された。

海軍が実験しているのは、戦略級魔法『ミーティアライト・フォール』……大型質量体を特定の地点へ引き寄せる狂気の戦略級魔法。

「とてもじゃないが、想定される演算規模を考えると彼女一人で行使できたとは思えない。恐らく複数人による精神リンクを用いてのものだろうな」

「そんなことってあるの？」
「ある。ＣＡＤの中には術者が受動的に魔法を組み立てるケースもあるからな」
　複数人の魔法師による強制的な精神リンクは魔法師に多大なる負担が掛かり、最悪心神喪失状態に陥るという結果が出たため、第三次大戦中に護人が主体となって研究が封印された。魔法師を単なる〝道具〟としてしまう研究は彼らとしても看過できなかったのだ。
　その封を解いた……恐らくは二発の戦略級魔法によるもの。『スターライトブレイカー』はともかく『マテリアル・バースト』は国防陸軍が主体となった作戦で用いられたため、書面上は『マテリアル・バースト』が陸軍の戦略級魔法となっている。
　とても正気の沙汰とは言えない事実……その原因を作ってしまった側となった悠元は、自分の力の影響がこんな形で返ってくることに対して少し悲しげな表情を見せたのだった。

論外がいると霞んでしまう天才

悠元らを乗せたＶＴＯＬ機が聟島に到着すると、ヘリポートの端に人がいた。それが達也だとすぐに分かり、どうやら国防陸軍の要件は無事済んだとみていいだろう。

深雪が降りると、達也のもとに駆け寄っていった。

「お兄様！」

「おかえり、深雪。帰ってくるのが予定より早かったみたいだが……あの子は？」

その達也の視線の先には、ほのかの助けを借りる形でゆっくり降りた九亜の姿があった。ともあれ、リビングに集まった一同と九亜。彼女は出されたジュースを飲み干し、クッキーを手に取ると匂いを嗅いでいた。その様子からするに、人間らしい生活を送っていないことがわかる。

達也は彼女の様子を注意深く見ているのだが、彼の人となりを知らぬ人からすれば〝睨んでいる〟ようにも見えてしまう。事実、九亜もそう受け取ってしまったようで、怯えるように隣のエリカに抱き着いていた。

「達也。九亜ちゃんを怯えさせてどうするの……」

「いや、そんなつもりはないんだが……深雪も笑わないでくれ」

「ふふっ……まあ、お兄様ですから」

その魔法の言葉で片付けつつ、悠元たちは九亜にいくつかの質問を投げかけた。

まず、彼女の年齢は１４歳とのことだが、五輪澪（いつわみお）のような成長障害を来たしている。この現象は肉体が不十分な調律を取れていない状態で大規模な魔法演算を行い続けるとみられる現象に近いだろう。

大きな機械――――大型のＣＡＤに九亜自身を含めて九人が入っていた。つまり、彼女らの魔法演算領域を依り代として戦略級魔法の魔法実験をしていたと推測される。

彼女は盛永（もりなが）という研究員に「逃げなさい」と諭され、その言葉を鵜呑みに研究所を抜け出した。その理由として「貴女が貴女のままでい

られなくなる前に――――」という文言を聞いて、エリカが悠元に問いかけた。
「自我が消える……悠元、そんなことってあるの？」
「……その現象に至る方法はある。だが、それは上泉家と神楽坂家で封印したはずだ……昔、複数人の強制精神リンクによる大規模魔法演算の実験があったことは爺さんから少しだけ聞いた覚えがある」
過去を学ぶという意味で剛三との旅をしているときに暇つぶし代わりとして聞いた話や、彼絡みで出会ったＶＩＰクラスの方々からの世界群発戦争の話の中で出てきた話。その中には数々の人知れぬ魔法実験があり、卓越した実力を有する剛三もその実験に参加したことがある。
なお、当人が直接関わった実験は文字通り〝灰塵と帰す〟ことになったようだ。
「それじゃあ、魔法師は単なる道具（パーツ）扱いじゃないか」
悠元の推測と幹比古の言葉を聞いて、達也が険しい表情を見せた。
魔法師の自我消失現象――――魔法演算にいくら波長が似ている人間を使ったとしても、演算した結果を合わせる際にすり合わせをしなければならない。ＣＡＤの精神リンクで演算結果を〝一つ〟にする方法自体は確かにあるが、それを人間同士でやれば確実に誰かの自我が犠牲となる。
魔法師を単なる〝道具〟とするだけの非人道的な実験のため、厳重に封印された……その研究を復活させたこと自体、当に見過ごせるレベルを超えてしまっている。
「機内で診断してみたが、九亜ちゃんの状態は完全自我消失の一歩手前だった。あと一回でも演算してたら〝人形〟になっていただろうな」
「……冗談、なんて言えないよね」
「当たり前だ」
すると、九亜は悲しげな表情をしつつ、エリカの服を掴みつつ視線を向けた。その表情が助けを求めるものなのは違いなかった。
「お願い。助けて……」

「大丈夫。ここで放り出す真似はしないから」
「ううん……わたし〝たち〟を、助けて、ください」
それは、九亜以外の「わたつみシリーズ」を研究所から脱走させ、然るべきところに保護してほしいというもの。すると、今まで大人しくしていたセリアが九亜に柔らかな表情をしつつ九亜に問いかけた。
「九亜ちゃんの願いを叶えてあげるのは吝かじゃないけど……九亜ちゃんは、私たちの前に誰かを頼るように盛永さんから言われてなかった？」
「……七草真由美さんに、助けてもらいなさいって、言ってました」
何故ここで、とは思うが……確か、小笠原諸島方面へ卒業旅行に来ている筈だ。燈也からも「もしかしたら、ばったり会うかもしれませんね」とは言われていたが、九亜のお陰で会うことになりそうだ。
「そういや、空港に帰ってきたとき、同型のティルトローター機が停まっていたな」
「へー、意外と覚えてたじゃない」
「意外は余計だっつーの」
レオとエリカのやりとりを聞き、悠元は端末を取り出して真由美にメールを送った。一応暗号化はしたので、国防海軍に傍受される可能性は低いだろう。原作なら達也たちだけで行っていたが、相手は国防海軍に加えて〝スターズ〟も出てくることは想像に難くない。問題は今までにあったような『プラスワン』の要素が介在するかどうかだ。
「研究所から調整体を脱走させるとなると、海軍と事を構えることになる……」
「いや、この場合は〝人道的観点からの保護〟だよ、達也。ようは、海軍と事を構えてもいい大義名分があればいい」
「理には適ってるけど……『神将会』を動かすの？」
「四人の招集は出来るだろうが、海軍に動きを悟られたくない。それに、こうなれば躊躇ってなどいられない」
折りたたみ型端末を操作し、別荘の大型モニターと接続する。そして、モニターに表示されたのは神楽坂家――千姫と、上泉家――剛三と元継であった。悠元は九亜を偶然保護したことに加え、以前剛

三が話していた魔法実験が行われていることを報告。剛三は既に上泉家の家督を元継に譲っているが、今回の話は第三次大戦に大きくかかわる話のために元継経由で参加するように要請した。
「――以上が今回の経緯と推察です」
『……兼丸(かねまる)の小僧め。戦略級魔法の本質を理解しておらぬどころか、そのために魔法師を平気で使い潰す真似をするとは』
「剛三殿、その方は一体？」
『南方諸島工廠の所長だ。かつて儂も研究所に出入りしていたことがあってな。今も魔法実験の指揮を続けているとは門下生から聞いていたが……』
確か彼は老齢なのだろうが、剛三からすれば小僧扱いしたとしても何ら問題はないということなのだろう。剛三の言葉を聞き、元継は一息吐いた上で悠元に問いかけた。
『悠元。今回は神将会を動かさないのか？』
「パラサイトの時とは訳が違いますし、それに……幸い、予定の協力者も並の軍人相手なら平気でぶっ飛ばしますから」
『そうだな。へまを打つようなら総本山で〝刃渡り〟でもさせるが』
「……兄さんも大分爺さんよりの考え方になってきたね」
元継が言った単語――〝刃渡り〟だが、これは素足の状態で魔法を駆使して本物の日本刀の刃の上を歩くという鍛錬。体のバランス感覚だけでなく片時も魔法制御を手放せない。少しでも気を抜けば入念に研がれた刃で足がザックリ行く。
流石に日本刀でのそれは総本山でも上級者にしかやらせない。それ以下だと無駄に研がれた木刀を用いることになる。木刀でも切れるときは切れるのでヤバい。
『分かりました。神楽坂家当主として悠君にお願いします。「わたつみシリーズ」八人および盛永明子の人道的保護、それが済み次第南方諸島工廠を〝解体〟してください。彼女以外の研究員や憲兵、それと国防海軍兵士の生死につきましては……お任せします』
「了解です。ちなみに、万が一第三勢力なる存在が確認された場合は？」

『そちらも悠君の判断に任せます。セリアちゃん、今回は悠君のサポートをお願いしますね』
「はい。サポートは私の領分ですので、しっかり努めます」
　この場に戦略級魔法師が三人いるという有様（リーナに魔法で勝った形の深雪も含めれば四人）だが、セリアは基本的にバックアップを担うことになる。悠元と達也が先発隊で、レオとエリカ、そしてセリアが救助した少女の護衛、バックアップに雫と幹比古、佐那と深雪……という形での行動を想定している。
　相手が相手なだけに、戦力的なアドバンテージを持っているセリアを控えさせる理由はない。ほのかと美月は流石に前線向きの魔法師ではないので、今回は作戦から外した形だ。
『魔法協会にはこちらから話を付けておく。達也君、俺の元実家経由で真田大尉に話は付けている。装備提供に関しては彼を頼るといいだろう』
「助かります」
　通信を終えた後、悠元はエリカとレオに話しかけた。今回のこともそうだが、今後も見据えた大事なことなだけに万全を期すつもりだ。
「レオとエリカ、お前らに渡してるＣＡＤを少し預からせてほしい。1時間も掛からないことは約束する」
「そりゃ構わんが……何かするのか？」
「細かい調整に加えて、知り合いに頼まれてロック状態の機能を解禁するから」
「完全思考操作型ってだけで十分世界クラスなのに、まだ内蔵されてるって……」
　エリカの言いたいことも尤もだろう。だが、出来ることなら早い方がいい。悠元がこれからやろうとしていることは、レオに渡したリストバンド型ＣＡＤ「ジークフリート」とエリカの「疾風丸（ハヤテマル）」に先日手に入れた魔法結晶を組み込むための作業だ。
　例の結晶だが、こちらで指定するのではなく守護霊（サーヴァント）の波長が適合した人間でなければならないという代物で、現状ではレオとエリカに先行する形だが、達也と深雪、それと雫や幹比古も対象に含まれている。

しかも、実際にＣＡＤを通して〝接続〟することで結晶に内蔵された人格が表面化する仕組みらしい。サーヴァントとの会話は基本的に念話なので、本人以外認識できないというのも確認済みだ。
それに合わせて、二機に搭載した「疑似魔法演算領域回路」を解禁する。本来魔法演算自体を使用者の演算領域で処理して魔法を放つことになるわけだが、その演算補助をＣＡＤで補おうというもの。セキュリティ上は使用者本人の想子を流し込まないと動かないようになっており、サーヴァントが勝手に使用することはない。
作業自体は感応石と魔法結晶を入れ替え、演算回路のロックを外して仮起動状態でプログラムの挙動に問題ないか確認をするだけのもの。悠元が宣言した通り、１時間足らずで作業を終えたのだった。
◇　◇　◇
調整を終え、達也やレオ、幹比古と別荘の浴場で汗を流してから食堂に足を運ぶと、女性陣が協力して夕食の準備をしていた。これには幹比古が不思議そうな表情をしていた。
「あれ、早かったかな？」
「いえ、大丈夫ですよ」
「黒沢さんが見当たらないが、九亜ちゃん絡みか？」
「流石、悠元だね」
他愛のない会話をしていると、ちゃんとした衣服にそでを通し、身なりも綺麗に整えられた九亜が入ってきた。目を覆っていた前髪も綺麗に切り揃えられ、今まで感じたことのない視界のせいか少し恥ずかしそうな表情を浮かべていた。
身なりに手を加えるだけで綺麗に整えられるのはまるで魔法みたいなものだが。
「そういえば、さっき七草先輩からメールが届いた。明日の昼にこちらを訪れて、九亜ちゃんを東京に連れていくことになった」
「それはいいんだけれど、大丈夫？」
セリアが懸念したのは、恐らく国防海軍の要請を受けた国防空軍が周辺空域に網を張る可能性だろう。だが、その辺りに関しても問題はないと悠元は述べる。

「あれでも七草先輩は世界屈指の精密射撃能力者だ。十師族の直系が二人も乗っている飛行機を撃墜なんかしたら、七草家の現当主は嬉々として国防軍への圧力を強めるだろう」
「その言い方だと、先輩の父親は先輩のことを冷たく見ているようにしか聞こえないけど」
「親としての情がない訳ではないと思うが、理があれば情を切り捨てることも躊躇わないと思う。まあ、俺はあの人の身内じゃないから全部推測になるが」
　それに、この辺の対策は既に元実家である三矢家と独立魔装大隊と相談している。風間は陸軍所属の軍人魔法師だが、沖縄の空挺魔法師部隊の教導を任されるほどに空軍との繋がりを持っている。最悪の場合は剛三が嬉々として「六爪」を振るうだろう……死屍累々となっても、それは自業自得だが。
「ほのかと美月は先輩たちと同席して先に帰った方がいい。まあ、他の面子は残ってくれると助かるが」
　達也と深雪、レオとエリカ、セリアは言わずもがな、雫は北山家所有のクルーザーやＶＴＯＬ機を使うので、その監督責任者として。佐那については東道家のことも込みで残ってもらう。
「あたしが大人しく帰るタマだと思う？」
「思わんな……この場でしか言わないが、スターズの連中が南盾島の研究施設を襲撃する予定らしい。やっていいことと悪いことの区別位つけろと言ってやりたいわ」
　先日、南盾島の沖合で大亜連合所属の潜水艦が撃沈するという〝トラブル〟があった。その魔法発動痕跡を探ったところ、『分子ディバイダー』による斬撃だと判明。間違いなくスターズの仕業である。
　世界の脅威となりかねない戦略級魔法を排除する姿勢だけは買ってやりたいが、国内ならばともかく国外の――しかも同盟国の軍事拠点を襲撃することにＵＳＮＡ軍の参謀本部は何の感傷も抱いていない。
　原作だとＵＳＮＡ軍が廃棄した軍事衛星「セブンスプレイグ」が地球に落下する羽目となった。魔法実験の対象に選んだ側もそうだが、

干渉しようとした側にも〝痛み分け〟の恰好となった形だ。
「悠元が言うと冗談で済む話じゃなさそうだな。そうなると……リーナも出てくるのか？」
「可能性は高いだろうな。その場合はセリアが対応するらしいが」
「心配しないで達也お兄ちゃん。いくら身内でも今の私はこの国の魔法師だから、躊躇ったりはしないよ」
「……信用はするが、お兄ちゃん呼びは止めてくれ」
　深雪が悠元と婚約関係にある以上、同じ立場となるセリアからすれば達也が義理の兄になる。それは理解するが、同い年の少女に兄呼ばわりは流石に止めてほしいと思いながら呟いた達也の言葉に、周囲からは苦笑も含んだような笑みが漏れたのだった。

まるで人間砲弾がごとく

おいしい夕食に舌鼓を打った悠元たち。黒沢女史は異国人であるセリアの口に合うか少し心配だったようだが、セリアの中身は日本人なので味覚は問題ないだろう。祖父である九島健の家に遊びに行っては和食をせがむあたり、ステイツの食生活は〝濃い〟のかもしれないが。

夕食後、悠元は一人桟橋の端に座り、海の向こうを見るように座っていた。すると、桟橋の木が軋む音で来訪者の存在を感じて視線を向けると、そこにいたのはセリアだった。

「お兄ちゃん。まだ3月なんだし、あまり長居してると風邪ひいちゃうよ？」

「ちょっと風に当たりたくなっただけだ」

セリアは悠元の隣に座り、のんびり夜空を見ていた。こうやって二人で夜を過ごすだなんて、少なくとも前世では考えられなかったことだ。そこでふと悠元はセリアに尋ねた。

「そういえば、セリアが転生してから聞いてみたくはあったが……他にそういう存在を見たことはあるか？」

「ううん、今のところは。これで原作の登場人物に転生していたら分からないけど」

セリアが自我を意識したのは物心ついた頃（４歳頃らしい）で、隣に幼いリーナの存在がいたことで自分の運命を悟ってしまった。

それもそうだ。リーナがこのままいけばＵＳＮＡ軍にスカウトされてスターズ――〝シリウス〟の名を継ぐのは間違いなく、あの〝お兄様〟と戦うことになる。原作通りなら殺されはしないだろうが、下手な真似をして消されるのは何としても回避したい思いでいっぱいだったらしい。

「母方の祖父が九島将軍、父方の祖父が大統領、父親が政府高官ね……リーナの正義感が形成された要因がよくわかるな」

「あはは……そういえば、お兄ちゃんの父方のお祖父ちゃんってどんな人なの？」

「俺もよく知らないんだよな。今は沖縄で余生を送ってるらしいが」
姿を見たことがないのでてっきり亡くなっているのかと思ったのだが、沖縄侵攻の後で三矢家に送られた手紙でその生存を知ることとなった。彼の名前は三矢舞元（みつやまいと）といい、第三研における最初の魔法師――三矢家初代当主である。
「沖縄にはどこかのタイミングで訪れることになるから、その時にでも会ってみるつもりだ」
「……うちらもそうだけれど、普通の身内っていないね」
「魔法師の家系にそれを求めるのは酷だろう」
初代当主である舞元は世界群発戦争によって最愛の妻を亡くした。だからこそ、元と詩歩の結婚には大いに喜びつつも、戦による被害を少なくするための方策として兵器ブローカーの道へと進むことで世界の軍事関連の情報をいち早くキャッチし、ひいては三矢の家を守るための力としていった。それが十山家によって要らぬ圧力を生んだことは彼にとって後悔の念を生んでいたが、そのお詫びを兼ねる意味で元に家督と己が築いた兵器ブローカーの情報網を全て渡すと、妻の生まれ故郷である沖縄にこじんまりとした一軒家を建ててのんびり余生を過ごしている。
ただ、連絡をした元曰く「画面に映っていた姿もそうだが、雰囲気が引退した時よりも若返っている気がする」とのこと。年齢は９０歳と高齢のようだが、見た感じ剛三よりも若く見えた……嘘を言っているとは到底思えないだろう。
「どっかの人斬り主人公の師匠みたいなノリは九重先生と爺さんで散々学んだからな。今更増えたところで驚きもしないが……セリア。ＵＳＮＡの連中の潜水艦は最悪航行不能に止めてくれ」
「……ＵＳＮＡにいくら吹っ掛けるの？」
「人質はあくまでもついでだ。一番吹っ掛ける対象がデカい代物は〝空の上〟にあるからな」
いくら安定軌道にあったとしても、時が経てば地球に落ちてくることは避けられない。大抵の人工衛星ならば放置しても問題ないようになっているが、それにも例外というのが存在する。その問題を放置

した相手にどうこう言われる筋合いはない。スターズの介入に関しては、先のパラサイトや戦略級魔法の一件を手打ちにしといての有様に溜息しか出てこない。
「セリア。ステイツの参謀本部は魔法先進国と世界最強のプライドがないと生きられない特殊な生き物しかいないのか？」
「それね……私の採用の時もそんなことを散々しつこく質問されたよ。『リーナに手を出したら数ヶ月病院送りになるようにする』って言ったら黙ったけど」
　軍事兵器の解体相場は不明だが、原子力発電所の解体費用が数千億円クラスにも及ぶので、６０トンの劣化ウラン弾が搭載された３０発の大規模対地ミサイル「ヘイル・オブ・ファイア」を抱えるセブンス・プレイグの解体費用は少なくとも数兆クラスになるだろう。
「セリアには言っておくが、連中の考え方ならセブンス・プレイグが敗れた時の対抗策を何も講じていないとは思えなかった。だから念入りに調べたんだが……セブンス・プレイグが万が一機能しなかったときのバックアップシステムとして戦略軍事衛星が存在する。その名前は『アルカトラズ』」
「判明した時に分解しなかったの？」
「その衛星がある場所が問題なんだ。何せ、月の衛星軌道上にあるだけでなく、何かあれば１２０トンにも及ぶ戦略級核ミサイルを発射するようプログラムされている……それもＵＳＮＡ以外の世界主要都市に」
　しかも、アルカトラズを先に分解しようとすればセブンス・プレイグの「ヘイル・オブ・ファイア」のみならず、地上にある核ミサイルが起動して勝手に発射される。逆もまた然り。このような物騒なシステムが平気で認められて搭載されたのか……世界群発戦争で世界の覇権を確実にしたいという思惑がこのような悪魔のシステムを生み出したのだろう。ＵＳＮＡがセブンス・プレイグを解体せずに廃棄した理由は恐らくアルカトラズが大きく影響していると思われる。
「セブンス・プレイグが何らかの要因で衛星軌道から外れた場合、セブンス・プレイグのシステムが強制的に核ミサイルとのリンクを外す。

セブンス・プレイグの代わりを担う形でアルカトラズが月から離れ、衛星軌道に到達するまで核ミサイルとの連動装置が一時的に解除される。狙うとしたらそこしかない」
「あのさ……これ、数十兆円規模で要求しても罰は当たらないと思うよ？」
「ま、その辺は母上にお任せするよ」
連動システムが外れるのは、セブンス・プレイグやアルカトラズが落下の際に誤作動を起こして核ミサイルが勝手に発射されるようなことになれば、間違いなく国際魔法協会の〝懲罰〟を免れない……そのための保険である。
ＵＳＮＡが放置した問題を片付ける……一生贅沢して遊んで暮らせるだけの金額を要求しても罰は当たらない、というセリアの言葉に対して悠元は苦笑を禁じえなかったのだった。

◇　◇　◇

――西暦２０９６年３月２０日。
国防陸軍・霞ヶ浦基地。第１０１（イチマルイチ）旅団・独立魔装大隊の駐屯地であり、達也がここを訪れたのは九亜の仲間を救うための装備を真田から受領するためだった。
「コバート・ムーバル・スーツの準備、感謝しています真田大尉」
「いえいえ……事情は少し聞いています。実戦データを取る意味でもこの程度は痛手になりませんから」
コバート・ムーバル・スーツは新型ムーバル・スーツの試作として造られたタイプの一つで、最大の特徴はスーツを覆うフード付きのマントで、魔法で使用者を包み込んで流線形の形状へと変化する。高高度からの高速落下による作戦領域への電撃戦を想定したものだが、その反面通常視界の領域が狭まるために達也のような視覚領域を見られる人間でないとまともに扱えない代物だ。
そのために一時開発が凍結されたのだが、悠元がどうせならと達也専用の戦闘用スーツとしてかなりのチューンを施した。横浜事変での達也の戦闘データも加わって、達也以外にはまともに扱えない代物となった。

「そのスーツは上条特尉が念入りにチューンしていましたので、大黒特尉なら問題なく扱えるでしょう。魔法協会への連絡は既に？」
「そちらは上泉家と神楽坂家から連絡がいっているでしょう。どう行動するかは……彼ら次第と言ったところですが」
悠元経由で上泉家と神楽坂家が動いている以上、師族会議が動かないという選択肢はない。〝規則を無視した魔法師の人道的保護〟を謳っている以上、何らかの関与をしてくることは間違いないが……いや、自分が動いている以上は間接的に四葉家が動いていることになるし、悠元の存在は三矢家も動いているという形になる。九亜が真由美を頼るよう言われたことからして七草家も遅れまいとして動くことだろう。
そうなると、師族会議の代表として誰かが小笠原諸島に派遣されるだろうが……それなりに実績があるのは克人になるだろう。
「国防軍の規則では、非常時を除き18歳未満の軍役を禁じている……その規則を海軍が堂々と破っているわけですから」
「自分は16歳なのですが」
「それはそれ、これはこれということです。そうだ、特尉。これを持っていきなさい」
真田が差し出したのは2つのカートリッジ型ストレージ。それらに入っている魔法は達也が組み立てた魔法である『大深度雲散霧消（ディープ・ミスト・ディスパージョン）』と『ベータ・トライデント』の起動式が入ったストレージであった。
「これは……『ディープ』と『ベータ』のストレージですか。しかし、『ディープ』はともかく『ベータ』は戦闘に耐えられるようなものではありませんが……」
そう達也が呟いた理由は単純で、『ベータ・トライデント』は起動式読込から演算・展開にまで当初は10秒、悠元との訓練を通して5秒にまで短縮したが、魔法演算領域にかなりの負荷が掛かるため、使用後は10秒ほどのクールタイムを置かねばならず、とても実戦向きの魔法とは言える代物ではなかった。
だが、その解決はしたとでも言わんばかりに真田は笑みを零した。

「実は、こちらのストレージは同一のものですが『ベータ・トライデント』ではありません。上条特尉が独自に組み立てていた『ホーリー・トライデント』という魔法が入っているのですが……原理を聞いても自分にはサッパリでした」

『ベータ・トライデント』は原子分解式（物質を原子に分解）・ハドロン分解式（原子核を陽子と中性子に分解）・ベータ崩壊式（中性子から電子と反電子ニュートリノを分離）の三段階分解によって大部分がプラズマ分解され、放射性同位体は安定的な元素に組み変わって毒性が除去される。だが、段階が独立した構築式のために特化型ストレージを丸ごと占有するレベルになってしまい、読込と構築に時間がかかる。

悠元は3つの起動式に対して〝4つ目の起動式〟――――3つの起動式に共通している分解の起動式自体を統一化して基礎分解式を構築し、3つの分解式をスリム化することで読込のタイムラグを大幅削減することに成功。以前魔法幾何学で独自に研究していた系統の異なる魔法連結システムを応用して、3つの段階的分解を連動させることで本来使用者がやらなければならない魔法式への演算処理を自動化することに成功した。名称は『ホーリー・トライデント』……その魔法の副次効果として、上空に大規模なオーロラが発生することからその名を付けた、と真田が述べた。

「こちらのデータも取っていただければ。コバートの〝貸出料〟とでも思ってください」

「彼には頭が上がらなくなりそうですが……分かりました」

「では、特尉。ご武運を祈ります」

敬礼を交わす真田と達也。ご武運という言葉を使ったが、真田の目の前にいる達也（かれ）は道理すらも平気で蹴り飛ばす実力の持ち主。その彼ですら「頭が上がらなくなる」と言わしめた悠元という存在は……世界において〝敵に回してはいけない〟のだろう、と達也と真田は同じ考えに至り、お互いに笑みを零してしまったのだった。

◇　◇　◇

その噂された側の悠元だが、非常に苛立っていた。

変な噂を流されても最終的に自分への害がなければ怒ることのない彼がだ。セリアは前世での彼の〝怒り〟を思い出し、目の前に映る拘束された国防海軍の兵士を哀れむような目で見ていた。しかも、悠元の後ろでは深雪が冷ややかな目で彼らを見ていた。彼女が一息吐いただけで周囲を凍り付かせそうな雰囲気に、戦闘に参加したレオやエリカ、それと幹比古は苦笑を滲ませていた。

「貴様ら、このような真似をしてタダで済むと――」

「それはこっちの台詞ですよ、飯田中尉。身に覚えのない容疑で私有地に侵入しようなどと……海軍の規律は相当腐っているようだ」

達也が国防陸軍の飛行艇で霞ヶ浦基地へ向かった約３０分後――――到着予定のない飛行艇と上陸艇が桟橋に到着し、数人の兵士が銃を向けていた。彼らは〝海軍の病院から脱走した患者の引き渡し〟を求めたが、九亜は研究所から脱走した身であり、彼らの求めている人間ではない。なのでそのような人物などいないと言い切ったところで戦闘に突入した。

「なっ!? 何だあのシールドは!?」

「バカな!? あのような防御魔法など……『ファランクス』に匹敵するぞ!?」

（ねえ、レオ……あいつらバカよね）

（そう言ってやるな……ま、この状況なら悠元に感謝しかねえけどよ）

流石に十文字家の固有魔法である『ファランクス』ほどではない……エリカは小声でレオに呟きつつ、彼の言葉を聞き終えたところで懐から「疾風丸」を抜き出し、想子を流し込んで刀身部分を展開する。レオもリストバンドに想子を流し込むと、「ジークフリート」が展開して彼の左手に籠手型――――外見は彼の祖父から譲り受けたＣＡＤだが、中身は全くの別物――――の形状へと変化した。

エリカがシールドを解いて一歩を踏み込むと、瞬時に兵士への眼前へ到達して「疾風丸」を横薙ぎに振るって兵士を一人海に叩き落とす。それを見た他の兵士がエリカに視線を向けるその隙をレオは逃さなかった。

「余所見していいのかよ！ 『ドラグーン・ブレス』!!」

レオが放ったのは、特定領域下の空気を収束・固定化することで空気そのものを打撃として使う魔法『ドラグーン・ブレス』。一科生になることが決まっている彼の演算能力は特に自身が得意とする収束系の硬化魔法において顕著で、下手すれば２００ｍｓすら切ることも可能になった。加えて、悠元の提供した完全思考操作型ＣＡＤによって広範囲の空気を固定化することが出来るようになったため、下手に剣を振るえない状況下でも使える〝必殺技〟へとなった。予め最大範囲を設定しておけば、後はレオの得意とする収束系の魔法制御が生きるし、基本的にレオの身体の動きを介する形で発動するため、遠隔操作も必要ない。

そのレオの攻撃で次々と吹き飛んでいく兵士を見れば、エリカもますます張り切る形となり……その二人を後方支援するつもりだった幹比古曰く「あの二人が楽しそうだったから、万が一の時の保険は掛けてたけど……」とか言いつつ『竜神』の喚起準備をしていた辺りは彼も容赦なくなってきている証拠だ。

桟橋に上陸したのとは別方向にも兵士が降り立ったが、彼らは銃を向けるまでもなく意識を瞬時に手放した。

その倒れた彼らの先にいたのは、一対の鉄扇を持つ佐那であった。

「この程度ですか。幹比古なら、私の術ぐらい簡単に看破いたしますのに……とても、悲しいことです」

彼女の持つ鉄扇には東道家に伝わる古来の術式が刻まれており、そこに想子を流し込むことで魔法を発動させる。だが、その鉄扇は魔法制御自体を考慮しておらず、使用者がその辺りを完全に補わなければならないピーキーな仕様なのだが……佐那の資質は東道家において極まっていた。そうなった要因は紛れもなく悠元の存在だろう。

「佐那、大丈夫ですか？」

「深雪。ええ、問題ないです……全く、旦那様のお手を煩わせるなどとは不快です」

「……佐那は大変そうね」

「それを深雪が言いますか……」

本来ならば、東道家と四葉家――スポンサーと十師族の関係だ

が、深雪が神楽坂家の当主夫人になることで同等の立場に置かれる。政略結婚かと思えば、その実は恋愛結婚になりつつあるが。実を言うと、佐那も幹比古に〝捧げた〟形――別荘で美月を焚き付け、二人掛かりで幹比古を襲った形ではあるが――なので、深雪の気持ちはよく理解している。

「そういえば、深雪は悠元のことを〝さん〟付けしてるみたいだけれど……別に呼び捨てにしても怒らないとは思いますよ」

「呼び方を変えると、今まで以上に悠元さんへの依存が高まりそうで……」

（一緒に寝たり、それ以上もしている関係の上って……ダメね、想像できない）

悠元と深雪の間に何があったのかは知っているし、佐那が転校する前のことは青波から聞き及んでいる。

その青波曰く「彼に一人の妻と言うのは妻を壊しかねない。まるで〝龍〟でも内に飼い込んでいるような気がしてな……千姫はよく英断したものだ」と褒めるように言い放っていた。あの父親が褒めるということ自体天変地異の前触れではないか、と思っていたが……悠元に直接出会った際、父親の言い分は正しかったと納得した。

彼は婚約者が六人となったことに溜息を吐いていたが、彼の婚約者となった女性は同性の目から見ても〝綺麗〟になっていた。見た目の変化自体は急激ではなかったが、数ヶ月後には雫の胸の大きさがエリカを超えたことに気付き、当のエリカ本人はひどく落ち込んでいた。その余波がレオに向いてしまったのは言うまでもないが。

「悠元。終わりましたか？」

「ああ……ともかく、縛り上げておいてくれ」

そして、拘束された兵士は一か所に集められ、彼らの乗ってきた飛行艇と上陸艇は悠元の術式で完全にステルス化している。達也が帰ってきたときのことも考えて、それらは別荘の裏に繋いでおいた。

「お前らの行動は神楽坂家だけじゃなく、東道家や千葉家、ひいては三矢家と上泉家に喧嘩を売った形だ。国防海軍は魔法使いをどう言った目で見ているのか……よく分かったよ。噂で聞いた南盾島にいる

魔法師の扱いも嘘ではなさそうだ」
悠元は手に持った「オーディン」を部隊の最高責任者である飯田の額に向けた。
その飯田の表情は悠元から発せられる殺意によって盛大な冷や汗が流れていた。少し脅せば目的の少女は簡単に手に入るだろう……そんな目論見など、この場にいる面子の情報を少しでも精査していれば止めるべきだと判断したのだろうが、もう過ぎてしまったことに関して「遅い」と酷評するほかないだろう。
後半部分の言葉については九亜の状態を見た上での感想みたいなものだが、彼らに教えてやる義理などない。
「アンタらは眠っててもらう。なに、起きた頃には全て終わってるだろうから……な」
悠元が「オーディン」の引き金を引いた瞬間、飯田の意識は遥か彼方に吹き飛ばされた。そこには完全に気絶した部隊の兵士がおり、悠元はもう一つの魔法を発動させると兵士から光が発せられ――――ほんの一瞬の瞬(またた)きの後に消えたのだった。だが、それは達也のような『分解』ではないと深雪は察しつつ悠元に尋ねた。
「悠元さん、今のは……お兄様のようなことをしたのではないと思いますが」
「そうだな……簡単に言えば、彼らを飛ばしてやっただけだ」
悠元が使ったのは亜夜子が得意とする『疑似瞬間移動』を応用し、かつて木彫り熊を富士演習場まで飛ばした質量体超長距離移動魔法『無敵砲弾(インビンシブル・カノン)』。これは対象物自体を一切傷つけることなく長距離移動を可能とした魔法だが、問題はこれが叩き出す速度にあった。なんと時速２５００キロメートル――――マッハ２にまで加速してしまうのだ。対象物の周囲に魔力障壁の膜を張るので速度による空気抵抗の被害はゼロなのだが、これを起きている状態の人間にやったら少なくともトラウマレベルの恐怖を刻み付けることになる。
『鏡の扉(ミラーゲート)』を使う方法もあったのだが、これを人前でやるわけにはいかないので今回は彼らへの罰も兼ねて使った。それと同時に別荘の裏にある上陸艇一隻は『ミラーゲート』で飛ばしたが、飛行艇ともう

一隻の上陸艇はわざと残しておいた。ついでに飛行艇の認識コードも書き換えたため、外見は国防海軍の飛行艇でもデータ上は神楽坂家所有の国防軍カラーの飛行艇になってしまったというわけだ。
「空の足も手に入れたし、一石二鳥だな……何故黙る」
「やっぱ、アンタって世界の黒幕ね」
「よし分かった。春といえばあれだな、紅白饅頭」
エリカの不用意な一言で、女性陣が悲しみに暮れることになる悪夢が展開されるのは……そう遠くない未来になった瞬間である。

わたつみ救出作戦決行

海軍の部隊による襲撃は直ぐに千姫と元継に伝えた。すると、元継の後ろのほうから『孫を殺そうとしたとは……お仕置きじゃのうっ!?』という剛三の怒りの後に悲鳴のような呻きが聞こえた。

元継が言うには、暴走しようとした剛三を千里が木刀で鎮圧したらしい。最悪海軍基地のいくつかが地図上から消えていたかもしれない……いくら頑丈とはいえ、良い子は決して真似してほしくないことだ。絶対に。

部隊の連中は揃って霞ヶ浦基地に飛ばしてやった。今頃は独立魔装大隊による手厚い歓迎を受けている頃だろう。連中を拘束した手柄は風間に負わせる形とした……当の本人は深い溜息を吐いていたが。

海軍の兵士を陸軍が拘束したとなれば問題が起きそうだが、「陸軍の基地に不法侵入した輩が実は国防海軍だったとは知らなかった」と陸と海の仲の悪さを突けばいくらでも誤魔化し様はある。

なお、認識コードを弄った海軍の飛行艇については「神楽坂家所有になるなら問題はない」と判断してそれ以上の追及は飛んでこなかった。後日、詫びも兼ねて手土産ぐらいは持っていこうと思う。

達也が別荘に戻ってくる少し前、真由美と摩利、そして燈也と亜実がやってきた。痕跡は綺麗に消していたが、何かしらあったというのは雰囲気で感じ取っていた。

「久しぶりですね、七草先輩。そちらも巻き込まれたようで」

「ええ。あのタヌキオヤジは嬉々として動きそうだけれど……はじめまして、九亜ちゃん。七草真由美といいます」

真由美は自己紹介しつつ、先日助けに行けなかったことを詫びた。だが、九亜は首を横に振って彼女が気に病む必要はない、という意思を示した。少し話したところで達也が姿を見せ、真由美たちに軽くお辞儀をして会話を途切れさせない様に務めた。

「兄の恩師の盛永先生が海軍の魔法実験に参加されていてね。九亜ちゃん達の扱いの酷さに助けを求めてきたの……悠君、光井さんと柴

田さんを同乗させればいいのね？」
「ええ、お願いします。もし変な連中が絡んできたら遠慮なく〝上泉家の依頼で秘密裏に要人を羽田まで送り届けている〟と説明してください。それ以上は……先輩に任せます」
荒事に対応できるかつ事後処理が比較的簡単に済むとなれば、九亜を乗せた飛行機への妨害は真由美が対処すべき問題となるであろう。摩利と燈也、亜実もその意図を理解したようで、特に尋ねることはしなかった。
最悪軍人を殺すことにもなるかもしれないが、その責任問題については上泉家で負うことも既に決着しているため、七草家にとっては〝借り〟になるかもしれないだろう。真由美自身、昨年のこともあって悠元のお願いには断る勇気もなかった。
「そんなことをするってことは……まあ、わかったわ。でも、あまり無茶はしないで頂戴ね」
「それは向こうの出方次第です」
真由美らとほのかや美月を乗せた飛行機が飛び立ったのを確認すると、桟橋にはクルーザーが準備されていた。流石に飛行艇や上陸艇を使うというのは拙いと思ったからだ。
「しっかし、とんだ春休みになっちまったな」
「全くよね」
「頼むから、暴走はしないでくれよ」
クルーザーについては操縦経験のある悠元（沖縄での出来事を達也が少し話したため、なし崩し的に決まった）が操縦桿を握ることになり、予め神将会で使っている戦闘服に着替えた上で操縦席に座っていた。
「済まないな、悠元」
「別に構わないさ。とりあえず――――端末を出してくれ」
悠元の持つ端末から達也の端末に南方諸島工廠のデータが表示された。そこには盛永がいると思しきデータと大型ＣＡＤの置かれた実験室へ至るまでの詳細なデータが表示されている。これだけのことを朝飯前にやってのける彼を敵に回した側は「愚か」なのだろう、と

達也は内心で呟いた。
「あと、レオとエリカ用にちょっと改造した憲兵の制服を積み込んでおいた。想子を流せば本人たちの認識を逸らしてしまう単純なものだが」
「あっさりとやってのけるのはどうかと思うが……予定通り、俺は九亜の言っていた盛永さんを救出する」
「俺のほうは監視カメラを予め無力化してから合流する。ま、その辺のことは葉山さんから聞いているんだろう？」
どうせ研究施設を消滅させる以上は〝一時凌ぎ〟のようなものだが、相手から侵入者の情報を奪ってしまえばどうということはない。ここでふと、達也は操縦席に置かれた悠元の私物であろう折りたたみ型端末に視線が向いた。
そこには国防軍はおろか世界各地の軍艦や潜水艦の現在位置などが表示されていた。
「悠元……それは」
「ああ――俺の固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』の一端である知覚魔法『八咫鏡（ヤタノカガミ）』を内蔵した個人端末だ。これで世界各地にある軍の動きを観察している。このシステムを知っているのは俺とお前だけだよ……流石に風間少佐にも言えないことだが」
普通なら掴むことのできない世界中の軍事的な行動を完全に掌握する魔法――その存在が世界に出るだけでも、この魔法を巡って争いになりかねないことは達也も瞬時に理解した。
「黙っておくことにするさ。お前の非凡さは今に始まった事ではないが」
「それを達也（おまえ）が言うか？　まあ、いいけど」
そんな話題を出した後、本題――スターズが南盾島の南方諸島工廠を襲撃するのは間違いなく、昨日の夕方に潜水艦「ニューメキシコ」へ戦闘機が着陸した事実を達也に明かした。その戦闘機の継続飛行距離を鑑みるに、一番近いのはグアムからだろう。
「グアムからか……だが、オーストラリア方面から追加戦力を派遣したとは思えないな」

「連中が研究所の魔法が戦略級魔法だということは間違いなくキャッチしているだろう。だが、アメリカにおいて表向きに動かせる戦略級魔法師は一人しかいない」
「リーナか」
南盾島の民間人は深夜遅くにならないと退去しない。だが、スターズの連中の形振り構わぬやり方は先日の事件で経験済みだ。
すると、二人の元にレオとエリカがやってきた。
「どうした、二人とも？」
「ねえ、悠元……あたしらのデバイスに一体何を組み込んだの？」
「成程、無事に契約は結べたみたいだな」
「まあな。正直、困惑しちまってる部分は多いが」
何のことかと首を傾げる達也であったが、悠元の言葉を聞いたレオが苦笑交じりに呟いた。
レオが契約を結んだ相手はＣＡＤと同じ名を持つ男性で『ジークフリート』、エリカの場合は『モードレット』という名の女性と契約を結んだとのこと。
「達也に分かるように説明すると、ひょんなことで変質化したパラサイトを従属させることになってな。それと同じ原理が出来ないか試したら成功した代物を組み込んだ。本質そのものはパラサイトと呼べなくなってしまったから、定義的に守護霊（サーヴァント）と呼んでいる。俺の場合は『アリス』と呼称しているが」
「成程、害が無くなった上に戦力として組み込むことにしたわけか」
「あまり表には出せないけどな。ま、達也もその対象に含まれているから……今回の一件が無事終わったらになるが」
サーヴァントとの同調（シンクロ）はまだ試していないが、それだけでも膨大な恩恵を受けることは想像に難くない。とはいえ、緻密な想子制御が求められてしまうので、相応の実力がなければ単なる足かせにしかならないが。先日敵対した存在を使役するという感覚は流石に現代魔法では考えにくい代物なので、達也の溜息を吐きたそうな表情には苦笑を禁じえなかった。
無事に南盾島へ到着し、エリカとレオに憲兵の制服に仕込んだ魔法

についての説明をしていると、コバート・ムーバル・スーツに着替えた達也の姿にレオとエリカは目を見開く。正直何で悪役のような仮面なのかと思うが、諸外国からは「デーモン・ライト」などと呼ばれて恐れられるだけに、それをうまく取り込もうという思惑なのだろう。

「達也君、それは何？」

「ちょっとした秘密兵器だ」

レオとエリカの端末に南方諸島工廠の場所を送信し、最終確認を終えて達也が飛行デバイスで先に飛び立つ。そして、悠元は二人の肩を掴んだ。

「じゃあ、二人とも――――心を強く持ってくれ」

「え、一体」

エリカが言い終える前に悠元は『疑似瞬間移動』で二人を研究所の敷地内に飛ばし、悠元は魔法の到着地点へ『鏡の扉（ミラーゲート）』で転移した。二人を先行して飛ばしたのは目晦ましという思惑もあったが、実験中なのか敷地の外には人影が確認できなかった。

「ちょっと、悠元！　こうするなら初めから言ってよね！」

「相手が軍である以上、正攻法なんて無理な話だ。エリカから分かってるだろう？」

「う……まあいいわ」

納得がいかなそうな表情だが、今は九亜の仲間を助けるのが先決。達也は建物の屋上を飛んでいくように盛永のいる場所へと向かった。悠元は魔法を唱えると、展開した魔法式が地面に吸い込まれて消えていったように見えた。

「これでしばらくは時間が稼げる……この膨大な想子は……」

明らかに尋常ではない想子の流れを南東方向から感じ取った。そして次の瞬間、青白いプラズマと水蒸気による雲が島の南東側――――海軍基地の防衛陣地から発せられたものだとすぐに気付いた。この規模だと間違いなく戦略級魔法クラス……その魔法を放てる人間となれば、すぐに心当たりが浮かぶ。

「……いくら目的が目的とは言え、同盟国の基地に『ヘビィ・メタル・

バースト』を使うとか、ＵＳＮＡ（ステイツ）の軍人どもは馬鹿しかいないのか？」
「……今の想子の感じ、間違いなくリーナよね。スターズも来ているって……まさか、目的は九亜の仲間を？」
「だとしたら、ここで悠長に構えてられねえな。悠元、頼むぜ」
「ああ」
　悠元は持っていた仮面を身に着けると、二人を先導する形で敷地内を駆けていく。いくらかつて留学生としての誼があるとはいえ、今の立場は神将会の第一席にして護人の依頼を受けた身。九亜らの仲間がいると思われる場所の途中には兵士がいるが、悠元は『オゾンバレット』で兵士らを瞬く間に打ち倒していく。エリカは何か言いたげであったが、帰り道に襲われない保証などないことは彼女とて理解しているため、グッと逸る気持ちを抑えた。
　達也よりも先に実験棟へと侵入した悠元らが見た光景は、エラー音が鳴り響く司令室の光景であった。
　まるで責任の押し付け合いと化した連中を放っておき、空いていたコンソールを操作して現在の状況を確認していく。
（セブンス・プレイグが２４時間以内に落下……落下予測地点は小笠原諸島……というか、この起動式自体〝欠陥品〟じゃないか！　単純にベクトル調整だけして軌道離脱なんて不可能だろうが！）
　この魔法――――『ミーティアライト・フォール』には致命的な問題が存在した。というか現代魔法そのものにも言えるのだが、現代魔法は魔法式を基準点とした物理法則改変を行うという根本的理論――――魔法式の発動基点と作用点が離れれば離れるほど、必要となる演算規模と想子量が跳ね上がる仕組み――――となっている。
　地球の衛星軌道で安定状態となるためには、地球への重力と引力のバランス、そして地球の自転スピードと同調しなければならないという最低でも３つの要素が関わっている。だが、『ミーティアライト・フォール』は軌道を変更するという作用しか持たず、しかも引力操作や対象物の速度変化という記述が一切含まれていない。
　ここにいる連中はその事実に加えて「わたつみシリーズ」の彼女らの想子回復を怠った。これでは『ミーティアライト・フォール』が失

敗しても何ら不思議ではない、と断言できる。
　すると、少し遅れる形で達也が盛永を連れて司令室に入ってきた。盛永は中央のコンソールにいる男性――――兼丸に詰め寄るが、彼は「私は悪くない」と某親善大使のような言葉を吐いた。しまいにはリーナの『ヘビィ・メタル・バースト』に責任転嫁していたのだが、簡単に狂うようでは戦略級魔法として失敗作という他ない。
「何か得られたか？」
「セブンス・プレイグが２４時間以内に落ちてくるという事実だけ。軌道予測は……電磁波障害が酷いこの状況だと当てに出来ん」
「……分かった」
　それを聞いた達也は司令室と実験室を隔てるガラスを『分解』して、そこから実験室に降り立った。レオとエリカ、そして悠元もそれに続いて飛び降りた。実験室に入ってきた兵士は達也お得意の『分解』で瞬く間に制圧。その間に悠元がコンソールでＣＡＤのハッチを開かせ、中に収容されていた九亜の仲間が出てくる。達也はその一人――――四亜（しあ）と呼ばれた少女に軽い想子を浴びせると、彼女は目を覚ました。普通なら怖がるだろうが、外の世界を知らない彼女にとっては悪魔であっても恐怖の対象とはならなかったようだ。
「あなたは……」
「九亜に頼まれた。君たちを救ってほしいと」
「……出来るの？」
「君らが、それを望むのならな」
　それを聞いた四亜は達也に抱き着き、助けてほしいと懇願した。そうやって平気で甘い言葉を吐く辺りは原作主人公（さすがおにいさま）と言うべきなのだろう。達也はその上で悠元やレオ、エリカに向き直った。
「三人とも、彼女たちを安全な場所に連れてやってくれ。俺はここの後片付けをしていく」
「分かった。無茶はするなよ」
　四亜たちも悠元らが達也の仲間であることを悟り、悠元が先頭を、殿をエリカとレオが務める形で四亜たちを連れだした。
　四亜は達也を残した理由が気になって悠元に尋ねた。

「お兄さん。あの人は何をする気なの？」
「簡単に言えば、今後君らのような存在を生まないために必要な〝後片付け〟だよ」
リーナの『ヘビィ・メタル・バースト』でセブンス・プレイグの落下軌道情報が掴めなかったのは痛手だが、最悪彼女の助力を仰いででもセブンス・プレイグを無害化しなければならない。責任の所在を問われそうな気もするが、そもそもＵＳＮＡがきちんと処分していればこんな事態にならずに済んだ話だ。アルカトラズという史上最悪の核兵器システムを解体しなかった時点で彼らの罪は重いだろう。
そんな扱いの困るものを放置するぐらいなら最初から作るな、と。

夜空に浮かぶ妹の幽霊

その頃、北山邸で大型の端末に座っている幹比古と佐那、それを見つめているセリアと深雪であったが、ここでセリアの脳裏にリーナが『ヘビィ・メタル・バースト』を南盾島のロケットランチャーに向けて放つ映像が流れ込む、その直後に電磁波障害が発生して端末の音声にノイズが生じた。

「……リーナが来てる」

「それは、本当なのですかセリア？」

「今『ヘビィ・メタル・バースト』をロケットランチャーに向けて放った映像がね……」

「南盾島の南東――海軍の防衛陣地が炎上しているようです」

電磁波の影響によって映像がブレているが、セリアの言葉を裏付ける状態が映し出されていた。すると、深雪が端末から聞こえてきた単語が気になり、声を上げた。

「今、所属不明の潜水艦という言葉が聞こえませんでしたか？」

「僕にもそう聞こえました」

幹比古が備え付けられたレシーバーで正確な音声を拾おうと試みる。そこからは民間人の避難警報が発令したという情報も付け加えられた。これを聞いて憤っていたのはセリアであった。

いくら戦略級魔法の無力化を目的にしているとはいえ、国内ならばともかく国外――しかも同盟国の軍事施設を破壊するという軍事行動自体〝内政干渉〟の領域に踏み込んでしまっている。

スターズ総隊長には連邦軍刑法特別条項に基づく権限を有していて、その中には国外における行動規定も確かに存在する。だが、同盟国内でそれを行う場合は対象国の政府に許可を得なければならない。非常事態に属する事項ならば事後承諾も確かに可能だが、戦略級魔法を取り除くという理由はそれに該当しない。

「あのバカリーナ！　南盾島の民間人が退去しきっていない状態で作戦を決行するとか正気の沙汰じゃないわ！　恐らくベンもいるはずでしょうけど……雫。この状況なら国防軍の飛行艇が速いから、伊達

さんにお願いして私らを南盾島まで送ってほしい」
「私らって……うん、分かった」
セリアの言葉に雫は疑問に思ったが、近くにいた深雪の表情を見て察したのか、頷いてその場を離れた。そして、セリアは近くに置かれた「アルテミス」を手に取った。
リーナがちゃんと民間人の退去を確認していれば、ここまで気に病むことなどなかったが……今のセリアはれっきとした日本国籍の人間。いくら双子の姉相手とは言え、彼女がこれからやろうとしていることを考えた場合、黙って見過ごせるレベルをとうに過ぎてしまった。
『分子ディバイダー』のことを考えると知己もいるのだろうが、リーナに軍人として律してもらうために民間人の存在を無視する形としたのなら一応の筋は通る。
「ごめんね、深雪。勝手に話を進めてしまって」
「いえ……ありがとう、セリア」
「そんな深刻そうな表情をしてたら、連れて行かない理由がないでしょう？」
達也のこともそうだが、悠元のこともあって深刻そうな表情を見せた深雪をここに残しても、理由を付けて無理矢理付いてきそうだとセリアは判断した。それに、彼女の力は十二分なほどに戦力としても数えられる……達也から小言は貰うかもしれないが、その時は深雪から諌めるようにお願いをしようと結論付けた。
（お兄ちゃんとお兄様がいてしくじる可能性は限りなく低いけれど……国防総省（ペンタゴン）の連中に一泡吹かせてやるわ）
セリア自身、規格外のことをやってきた自覚はある。それを必要以上に畏れた挙句、結局スターズの序列から外したのも軋轢を生まないための配慮だということは理解できなくはない。だが、それが結局〝特別扱い〟と認識されることもあり、参謀本部の連中がご機嫌取りも兼ねたセリアに与えた階級も結局は逆効果でしかなかった。
加えて、リーナもそうだが自分のことをいやらしい目で見ていた連中も少なくはなく、手を出そうとしたロクデナシ共を返り討ちにした

ことは……3桁に到達した時点で数えるのを止めた。
余談だが、九島健が孫娘の要望を叶えたのは、彼女の戦略級魔法師としての資質がＵＳＮＡでも制御できないと判断したからだが、それに加えて自身の兄に対する意趣返しも含まれている……世の中、知らなくても良いこともある。
◇　◇　◇
四亜や数人の研究員を先導する形で敷地内を進んでいた悠元らだったが、あと少しで基地と空港を繋ぐ橋に到達するといったところで、悠元は足を止めた。本来ある筈の橋が綺麗に斬り落されていて、その手前には国防軍のスーツではない二人組が立っていた。
すると、スーツを着た片割れの男性が四亜たちに気付く。
「おんやぁ……隊長、あの子らは……」
「恐らく、例の戦略級魔法のオペレーターたちだろう。だが……」
無論、この程度の会話でも悠元にはしっかり聞こえている。恐らくはスターズ――しかも、片方は刀のようなデバイスを腰に携えている。もう片方はナイフを持っているようだが、まるで人殺しを楽しむかのような様子が言葉の随所に見られた。
「レオ、エリカ。彼女らを頼む」
悠元はそう言って『疑似瞬間移動』を発動させてクルーザーの近くにまで一気に飛ばした。連中はまるで手品でも使ったかの如く悠元以外の面々が消えたことに驚くが、周囲一帯が結界術式に覆われたことをスラスト・スーツ――スターズで正式採用されている魔法戦闘用スーツ――を纏った二人も認識したようだ。
「ユート・カグラザカ……」
「アイツが……隊長、やっちまってもいいんですよね？」
「……そうするしか突破口がないようだからな」
二人はこの結界を破る方法が悠元を倒す以外にないと察したようで、悠元は「ワルキューレ」を取り出しつつ「叢雲」を展開する。
サイコパス思想の男性兵士――ラルフ・アルゴルは自己加速術式で悠元に切迫する。スターズでもいかれた思考の持ち主だが、二等星級に相応しい実力を備えている。だが、常識という概念を置き去りに

した存在と相対し続けてきた悠元からすれば、彼の自己加速術式ですら『ハエが停まるレベル』になってしまう。
「叢雲」を逆手に持ち替えて柄尻で彼の腹部を強打させ、「ワルキューレ」で移動魔法――「ライトニングオーダー」によって同系統の魔法を連結させることで魔法同士の合成を生み出し、破格的な威力を叩き出す技術を用いてアルゴルを吹き飛ばす。
「ゲホッ、ガハッ……スラスト・スーツを着ていてこの威力……こうでなくっちゃよお!!」
無駄にタフネスなのは確かなようで、そうでなければ第一隊所属の恒星級隊員という地位にいるはずもないだろう。この問題児を抑えているもう一人の人物には内心で称賛したいところだが、そんな悠長な暇など今はない。
アルゴルは直線的な動きで再び切迫しようとしている。これには思わずもう一人の人物――アルゴルの上司であるベンジャミン・カノープスが制止の言葉を上げたほどだ。
「……スターズは分を弁える、という言葉を知らんのか。恥を知れ」
悠元は「叢雲」を構えると、力強く一歩を踏み出す。その踏み込みはコンクリート製の地面に亀裂を生じさせるほどの力。地の力を集め、己が体を通して剣(つるぎ)の刃先に込める。
剣聖四大奥義、南段(なんだん)・終の太刀――霊亀烈破(れいきれはー)
〝鳳凰〟が太刀に苛烈な攻撃力を与えるのとは対照的に、〝霊亀〟の本質はいかなる防御ですら断つことに特化した奥義。態々奥義まで使った理由は、この光景を見たカノープスにこちらが〝本気〟であることを示すための一撃。
今の「叢雲」は〝幻想状態〟のために殺してはいないが、斬られた相手の肉体は実際に損傷したと錯覚するため、強烈な痛みとそれに伴う精神力の摩耗を引き起こす。アルゴルは痛みよりも先に精神の摩耗で気を失って地に伏せた。
「……さて、ベンジャミン・カノープス少佐殿。貴方は関与していなくても先日の件に続いてスターズが我が国に干渉してきた……その落とし前はどうつけるつもりだ？」

「っ!?……（これが、総隊長ですらも恐れ、〝ポラリス〟をも退けた当代において世界最高峰の魔法師……）」
滅多に発することのない殺気を込めた悠元の言葉に、カノープスは自分が震えていることに驚きを禁じ得なかった。
調査結果が元十師族で戦略級魔法の被疑者という情報以外全くの白紙、リーナからの報告でも目を疑うようなものばかりで、セリアを倒したという報告を受けても現実味が全くなかった。
ＵＳＮＡが誇る最新鋭の監視システムを備えた軍事衛星ですら欺く魔法師。その存在を目の当たりにして、今まで聞き及んだ話が全て事実であったと認識するに至った。
「こちらの要求は一つだけ。彼女たちの殺害や研究所の破壊は止めて直ちに軍を退け。今退けぬというなら、後日お宅らの最高司令官に直訴させてもらうつもりなので……覚悟しておけ」
「……今退けば、追撃はしないということか？」
元々、今回の作戦はカノープスらが失敗することも想定したうえでの作戦プランが練られている。カノープスは目の前にいる少年がその選択肢を選ばせてくれるだけ〝温情〟はあると判断した。
「ああ、俺はスターズに対してこれ以上の介入はしない……俺の仲間や彼女らを追撃して殺そうとしたりしたら、その時は容赦なく斬らせてもらうが」
悠元はそう言って結界を解除した。カノープスは気絶したアルゴルを抱えると、飛行デバイスで飛び上がって南東方向へ撤退していった。彼が理知的ならばこれ以上の介入は控えるはずだ……だが、それを平気で破る奴が北西方向の上空に姿を見せた。
（リーナ……『ヘビィ・メタル・バースト』で研究所ごと……いや、島ごと吹き飛ばすつもりか！）
だが、悠元に焦りはなかった。少し離れたところに達也の姿を確認しているし、それにセリアの気配が感じられる。
リーナは装甲車に照準を付け、『ヘビィ・メタル・バースト』を発動させる。だが、それを食い止めたのは悠元でも達也でもなかった。装甲車を起点としてプラズマ状態となったところで、プラズマが〝凍結

“したのだ。この事態に一番困惑していたのはリーナであった。
「えっ――――定義破綻で『ヘビィ・メタル・バースト』が強制終了!?」
それを成した人物――――セリアは「アルテミス」を片手に小高い丘に立っていた。別荘は雫と佐那に任せて国防軍の飛行艇を使って急行、深雪や幹比古と同行していたのだが先んじて島に降り立った。
セリアが使用したのは『リバース・ヘビィ・メタル・バースト』――――戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』のセーフティーとしてセリアが独自に編み出したもので、発動初期のプラズマ状態から一気に固体化させることで『ヘビィ・メタル・バースト』に必要なプラズマ状態の定義を破壊する魔法。
この魔法自体、セリアがリーナの魔法領域と同調（シンクロ）して制御する関係で殆ど使っておらず、『ヘビィ・メタル・バースト』の開発者ですらその対抗魔法の存在など知る筈もない。
リーナは気を取り直して研究所の建物を破壊しようとするが、研究所から立ち上がる煙……その煙が晴れると、建物自体綺麗に消え去っていた。目的である建物の破壊が目の前で起きてしまった以上、任務成功ということで帰還しようとしたリーナに声が響く。
「――――何大人しく帰ろうとしているの、お姉ちゃん？」
自分を姉と呼ぶ人物の声。この声をリーナが忘れるはずなどない。自身の片割れとも言える双子の妹の声……恐る恐る振り向いたリーナの視線の先には、満面の笑顔を浮かべた双子の妹の姿があった。
「キャー!? ゆ、ゆゆ、幽霊ー!? って、痛い痛い!!」
「……」
悠元から渡された飛行デバイスで空を飛んでいるだけだし、そもそも平気で飛行しているリーナに言われたくない……後でお仕置きすることも思いつつ、セリアはリーナの肩を本気で掴んだのだった。
スラスト・スーツを着ているはずなのに、その痛みでリーナの『仮装行列（パレード）』が解除されたのはここだけの話。
◇　◇　◇
南東側の『ヘビィ・メタル・バースト』による火災を深雪があっさりと鎮火させ、更には近くにいた上陸艇と潜水艦「ニューメキシコ」に

対して『零点銀世界（ゼロ・ニブルヘイム）』を発動。『誓約（オース）』を一時的に解除している深雪の魔法力制御によって、艦隊の周囲のみならず海底まで凍り付いていた。
（深雪、聞こえるか？）
（悠元さん。どうかされましたか？）
（達也もそうだが、セリアに加えてリーナも来る。心配はないと思うが、攻撃はしないでほしい……俺はこのまま別件を片付けるから、達也のことは任せた）
（はい……お気をつけて）
深雪自身、悠元が何をやろうとしているのかは分からないが、大変なことをしようとしているのは察していた。本当ならば婚約者として力になりたいが、今は自分のすべきことがある。それに、凍結して拘束している潜水艦らの対処もあるので、深雪がここに残るのは止むを得ないという判断である。
悠元との念話を終えたところで達也が深雪と幹比古のいる場所に降り立ち、続けてリーナとセリアが降り立った。蛇足だが、セリアはスカート姿だがスパッツを履いていたので飛行デバイスを使うことに躊躇いはなかった。
達也からＵＳＮＡの廃棄軍事衛星セブンス・プレイグが地球に落下してくること、それが２４時間以内にこの一帯へと落下してくること。それを止めるためには達也の持つ魔法なら可能という点。
「最新の軌道予測データは悠元から貰ったが、万全を期すために高高度からセブンス・プレイグを無力化する。リーナにはそこまで俺を飛ばしてほしい」
「成程ね。お姉ちゃん、達也を高度１４０キロまで飛ばしてってことだよ」
「１４０キロ!?　殆ど宇宙じゃない!!」
驚愕するリーナだが、セリアは有無を言わせぬ表情をリーナに向けた。これには身内であるリーナもたじろぐほどだった。
「その理由はね……どっかの誰かさんがロクに考えもせず『ヘビィ・メタル・バースト』をぶっ放したせいよ。この際責任追及は二の次。達

也に迷惑を掛けたんだから、お姉ちゃんも協力するのが筋でしょう」
「悪かったわね……ワタシが責任を持って送り届けるわ」
リーナがＣＡＤを構え、セリアがその制御補助を担う形で展開した巨大な仮想領域の柱――――目標高度まで達也を送り届けるための移動魔法。達也の準備が確認出来たところで、リーナのカウントが始まる。
「スリー、ツー、ワン……ゴー!!」
魔法が発動する瞬間に達也の着ているコバート・ムーバル・スーツのマント部分が変形して流線形となり、まるで電磁加速でもするかのごとく射出される。天高く飛んでいく達也の姿を深雪は彼との繋がりで確認した。
達也の無力化する手段――――『ホーリー・トライデント』であれば問題はないが、万が一の保険を考慮して深雪に達也の帰還の補助を担ってもらうことにした。達也からも深雪に無事帰還できるようフォローしてほしいと頼まれた。
今はその役割に徹すると決めた以上、深雪は空の向こうにいる兄をしっかりと見つめていた。

大金という名の端金

達也がセブンス・プレイグを無力化するために高高度まで上がっている頃、悠元は高度４００キロ――既に宇宙と呼ばれる領域に立っていた。宇宙服もなしに宇宙空間を漂えば死ぬのは分かっていたので、悠元の周囲を白銀のオーラのようなもので包み込まれている。

ここまで上がってこなければいけない理由はただ一つ。悠元が「天神の眼（オシリス・サイト）」でかなり距離のある対象物――ＵＳＮＡ軍が開発した人類史上最悪の戦略軍事衛星「アルカトラズ」を捉えた。

そして、悠元は一息吐くと……「ワルキューレ」と「オーディン」の両方を構えた。

「……起動式、ロード」

セブンス・プレイグならまだしも、アルカトラズは事実上システムが生きている軍事衛星。単にアルカトラズを分解しただけでは、非常時のシステムが稼働して地球にある核ミサイルが発射されかねない。なので、核ミサイルの発射連動装置を無力化した上で即時にアルカトラズを無力化しなければならない。

アルカトラズの暗号通信を無効化する第一段階、通信機能そのものを無力化する第二段階、各種兵装の無力化が第三段階、そこまでやって最終段階のアルカトラズを消滅させるプロセスに至る。

「情報強化分解式、量子遮断式、電子分解式、組成変換式……構築完了。『月読（ツクヨミ）』……発動準備完了」

そして、悠元は「オシリス・サイト」で魔法をブーストさせ、発動準備が整う。後は……悠元が達也の魔法――『ホーリー・トライデント』の発動を感じ取った瞬間、「ワルキューレ」と「オーディン」のトリガーを同時に引いた。

「『金剛斧槍（ダイアモンド・ハルバード）』、『月影観鸞（げつえいかんらん）』――発動」

前者の魔法『ダイアモンド・ハルバード』は、対象物の電子部品全てを疑似的に絶縁体とすることで電子回路そのものを巨大な絶縁体と変化させる収束系魔法。後者の魔法は『月読・五行相剋・月影観鸞』――本来物理法則に伴う状態変化プロセスやエネルギー変化を無

視して素粒子単位に分解・無害化する究極の魔法。
　その魔法を放たれたアルカトラズは瞬く間に大量の粒子となり、その一部が悠元に向かって降り注いだ。だが、周囲を纏うオーラのお陰で特に流されることもなく無事にやり過ごせた。
「さて……仕事も無事済んだことだし、帰るとしましょうかね」
　そう言って、悠元は『鏡の扉（ミラーゲート）』を発動してその場から消えるようにして去っていった……彼がいた場所には、光り輝く星と真っ暗な空間のみが只広がるばかりであった。
◇　◇　◇
　悠元は高度３０キロあたりに転移し、そのまま南盾島に降りてきた。気配を見るに、達也は深雪のフォローで無事地上に帰還できたようだ。ただ、悠元は自分の落下スピードを考慮していなかった。
　というか、高高度から降りるということなど祖父の鍛錬からしたらまだ温いという変な価値観のせいもあったし、『相転移装甲（フェイズシフト）』を修得している以上、落下ダメージはゼロになってしまうという事実がある。
　複数の要因が積み重なった結果、超高速で南盾島に落下することになり、衝撃波が発生したのち土煙が周囲に舞う。
「!?」
「な、何かが落ちてきた!?」
　それは達也らにも驚愕を与え、思わず身構えてしまうのは決しておかしくはない。だが、達也はその落ちてきた物体の正体にいち早く気付き、声を上げた。
「いや、あれは大丈夫だろう」
「お兄様、それは一体――――」
「やれやれ、最後の最後で減速し忘れとか鍛錬が足りなかったな」
　土煙が晴れると、そこに立っていたのは悠元であった。先程の落下を何事もなかったかのように達也らのもとへと近づいていく。これには深雪が笑顔を浮かべて、悠元に駆け寄って抱き着いた。
「悠元さん、おかえりなさいませ」
「……ただいま、深雪。リーナも世話になったな……気絶してるけど」
「あ、おかえりお兄ちゃん」

「僕は止めたんだけどね……」
簡単に何があったのかというと、セリアがリーナに対して肉体言語(おはなし)したというだけだ。彼女のヘッドロックによってリーナは完全に気絶していた。心なしか白い靄のようなものが見える様な気がしたので、霊子の性質を付与した想子の塊をぶつけて強制的に肉体へと戻した。
「ま、何にせよこれで一件落着(ミッション・コンプリート)かな……やるべき後片付けは大人たちに放り投げる気満々だが」
「身も蓋もないが、そうだな。後のことは俺らが出るべきことではないな」
なお、深雪が凍結させて拘束した潜水艦と上陸艇については、そのまま本国に返すこととした。セリアは残念がっていたが、その引き換えというか人質という形でリーナが一時的に神楽坂家の管理下に置かれることとなった。
数日ほど東京の神楽坂家別邸で過ごした後、民間機で一路アルバカーキへと帰ることとなった。その間に達也とデートをすることになったわけだが、彼のお願いもあって悠元と深雪も付き合わされる形となった。俗に言うダブルデートの恰好だ。
リーナに引っ張られる達也も満更ではなさそうな様子を浮かべていた辺り、人間としての幸せを僅かずつではあるが理解し始めたのだろう。それを見た深雪が「ほのかが嫉妬しそうですね」と零したことには苦笑を禁じえなかった。
◇　◇　◇
四亜たちはクルーザーだと限界があるために神楽坂家所有の飛行艇で東京湾上国際空港を経由して横浜の日本魔法協会に送られ、先に到着していた九亜と対面を果たした。
彼女たちの身柄をどうするかで師族会議――――厳密には七草家が口を出してきたが、今回の救出作戦の音頭を取った神楽坂家で引き取ることが決まり、受け入れ準備が整うまでは北山家で面倒を見ることが決まった。
「ほい、達也。受け取ってくれ」

「……何だ、この額の報酬は。シルバー絡みでも見たことがないぞ」
海軍がセブンス・プレイグを対象に選んで行った実験で国防海軍への責任追及も考慮されたが、南方諸島工廠が消滅して南盾島基地が機能不全となり、加えて勝手に魔法実験の封印を解いたことで護人の面子を潰したため、南盾島は神楽坂家が接収することで事態の解決を図った。将来的には自分が管理することになる、と聞いたときは深い溜息を吐いた。
盛永などまだ善良な部類の研究員は再就職が決まり、兼丸などについては……面倒なので聞くのを止めた。どうせロクな未来になっていないのは確実なので、気に病むことを聞くぐらいなら、聞かない方がマシだ。
そもそも、セブンス・プレイグが安定軌道から離脱して地球に落下したのが〝半年早まった〟という軌道計算結果からの事実が判明。しかも、ＵＳＮＡ側はそれを知りながら全世界に対して警告義務を怠ったのだ。
この事実を悠元がＵＳＮＡ大統領に直接問いただすと、政府高官と国防総省（ペンタゴン）、ＵＳＮＡ軍参謀本部、航空宇宙局の上層部がそのことを知りえていて隠蔽したことが判明。
この事実を公表すればＵＳＮＡの信用は間違いなく地面に減り込むレベルになるため、大統領はリーナのＵＳＮＡへの帰還も含めて穏便に解決するための賠償を支払うと明言したのだ。ＵＳＮＡ政府との交渉事に関しては、自分自身の後片付けもあったので千姫に報告した上で全て委任する形としたわけだが。
「交渉の結果、長年放置していたセブンス・プレイグも含めた核兵器搭載戦略軍事衛星の〝解体費用〟でかなりふんだくったからな。事情を聞いた母上も相当お怒りだったし」
「成程……だからと言って、俺個人宛に1兆円はないと思うのだが」
トーラス・シルバーでかなりの収入を得ている達也ですら、1兆円という金額には驚きを禁じ得なかった。だが、全体を通してＵＳＮＡ政府が神楽坂家に支払った金額は――――総額にして３０兆円。悠元にも事件解決の報酬として一割の３兆円が支払われている。

ＵＳＮＡ政府がそれだけ支払った理由は単純明快で、特にアルカトラズの存在を明るみに出されたら世界から非難轟々となるだけでなく、旧ＥＵが息を吹き返したり、新ソ連や大亜連合が勢いづく可能性が極めて高いからだ。

そして、これは政府内部にいる反魔法主義の連中にとっても死活問題であり、核兵器の防衛手段として魔法の有用性がさらに強調されれば、反魔法主義に対する風当たりは一気に向かい風となって襲い来る。なので、金銭的な解決が可能ならば早急に動くべきだ……と政府に働きかけたことも大きく影響している。

セブンス・プレイグが落下して第四次大戦に発展すれば、支払った３０兆円ですらその一部になりかねない。世界群発戦争で負った傷はＵＳＮＡでも小さくなく、その損失額と今回の賠償額を比較した場合、どちらが安く済むかなど自明の理。

ただ、反魔法主義の連中は気付いていないのだろうが、今回の動きも巧妙な罠の一つ。突発的な動きに冷静な対応ができるのはごく一部の聡明な頭脳の持ち主ぐらいだろう。

「それはそれとして、リーナのことはよかったのか？」

「そうだな……好意を向けてくれることは分かっているつもりだが、急ぐ必要はないと思ってる」

達也が婚約者募集を始めれば、ＵＳＮＡ側が食いついてリーナを送り込むことは容易に想像がつく。悠元の場合は既にセリアがいる以上、彼女らに上手く繋ぎを取って情報を引き出そうと躍起になるかもしれない……それを九島健が許すかどうかだろうが。

なお、作戦が終わった夜に雫の寝室へ連れ込まれ、深雪と雫、そしてセリアに抱き着かれて眠る羽目となってしまった。何事もなかったと言えば嘘になるが、強いて言うなら「夜間戦闘」が繰り広げられていた。

魅力ある女性に迫られて、しかも主導権を渡された以上何もしない選択肢があろうか。いや、ない。念のためにと防音の結界を張っていたのは、せめて周囲に迷惑を掛けない様にと限りある理性が働いた結果かもしれない。

「悠元を見ていると、いろいろ学ぶところは多いと実感するな」
「いや、それでいいのか？　無論、深雪のことも含めて」
「身内にしっかりとした恋愛を語れる人がいないからな……」
　そのあたりは四葉家故の根深い問題にもなってしまうため、達也が恋愛に対して耐性がなくても致し方がないと思う。特定のこと以外に激しい情動が持てないとは言っても、全く反応しないという訳ではないのだから。
　だからと言って、自分自身がとても参考になるとはとても思えない。自分とて恋愛事に手慣れている訳ではない。少なくとも、魔法師としての能力を見るのはそれに相応しい場であることを前提としている。剛三の付き添いの時もその人となりを見るように心掛けている。
　それが却って好意を持たれている要因なのかもしれない、と思うと溜息が思わず漏れた。
「何にせよ、それは達也の正当な報酬だ。俺も3兆という訳の分からない大金を受け取る羽目になったから、そこは諦めてくれ。深雪の誕生日プレゼント代にはなるだろう」
「……限度というものはあると思うがな」
　悠元の言葉がお茶目も含んだものというのは達也も察しており、そこまで強くは返さなかった。元々九亜のお願いを聞いて、調整体と戦略級魔法『ミーティアライト・フォール』の存在を無視できなかった。色々思うところはあるが、降って湧いたような報酬を渋々受け取ることになった達也であった。
◇　◇　◇
――――3月24日。
　悠元はＦＬＴの開発第三課の魔法実験室に出向いていた。
「トーラス・シルバー」が打ち立てた功績に加えて株主（主に深夜）の意向が加わった結果、第三課専用の魔法実験棟を持つに至った。達也や深雪にとっての一応義母となる小百合は面白くなさそうな表情を浮かべていたが、彼らの本当の母親である深夜の意向に逆らえる人間はいないに等しい。

シルバー・ブロッサムシリーズの第2世代型も発売まで秒読みとなったこの時期に悠元が態々出向いた……いや、この場合は呼び出された形だが、その理由を牛山が説明した。
「実は、御曹司からデバイス設計を頼まれまして。こればかりは若大将の力を借りたくないと言っていたのですが、自分でも難しい部分がありましてね。お恥ずかしながら、相談したいと思いまして」
牛山に見せてもらった設計図には、銃剣というよりは打撃板のようなアタッチメントと言うべきだろう。達也はこれを「トライデント」の先端に取り付けることで魔法の補助具として用いるようだが、現状はまだ煮詰め切れていないと牛山の補足説明を聞きつつ、悠元は一つの結論に至った。
(……達也の魔法の性質上、これは『バリオン・ランス』の試作品といったところか)
ＦＡＥ理論を用いた達也の新たな対人戦闘用魔法。原子核を分解し、中性子のみを取り出して射出する中性子砲。そしてＦＡＥ理論に基づいて『再成』で使用した原子核を戻す。これで攻撃した事実しか残らないという完全犯罪級の魔法と化す。
「この設計図ですと、アタッチメントに組み込んだ起動式を読み込んだ際のフィードバックが凄まじいことになりますね……(いくら無茶が利くとは言え、もう少し自分を労われよ)」
複数の起動式を一編に読み込んで処理・展開する技術は『円卓の剣(ラウンド・ブレード)』を使っている自分が良く分かっていることだが、別に最大８種類の読込程度なら教えるのに問題はないと判断している。
達也の持つ『フラッシュ・キャスト』の技術でも『バリオン・ランス』を即時展開・発動するのは完全に力技の領域になる。この魔法を作る目的は……恐らく『ファランクス』を破るための達也なりの負けず嫌いなのかもしれない。
自分の場合ならどうするかというと、「ライトニング・オーダー」と別系統連結魔法陣――――「コネクトサークル・キャスト」と自分は名付けているが、この二つの技術と『ミラーゲート』における同一座標固定、『スターライトブレイカー』のＦＡＥ理論を用いて相手の座標に

直接中性子の塊を炸裂させ、瞬時に無害化する。相手が『ファランクス』を用いたとしても、その内側にまで多重干渉を掛ければ使用者自身に多大な負担が掛かりかねないので、基本的には無防備状態となる。

これも自分以外の人間がやれるレベルでないことは十分承知の上だ。それに、中性子砲を使うぐらいなら『天界爆裂（アカシック・ノヴァ）』で吹き飛ばした方が一番手っ取り早い。

「わかりました。達也の『トライデント』に適合するようなアタッチメントをこちらでも見繕っておきますが、くれぐれも内密にお願いします」

「分かってますぜ、主任」

「だから、主任は貴方でしょうに」

いつものようなやり取りを交わしてから悠元は帰宅の途に就いた。帰りのコミューターで達也からのメールを確認すると、何やら司波家が慌ただしいことになっているとのことで、やむなく寄り道をすることにしたのだった。

何があったのか、というのは恐らく〝彼女〟なのだろうと思いながら。

別の意味での慌ただしさ

「ただいま……って、達也が出迎えとは珍しいな」
悠元が司波家に帰ってきたところ、その出迎えをしたのは達也であった。いつもならば深雪が率先して出迎えてきて、寂しいときには抱き着いてきたりもする彼女ですら手放せない相手がいる、という裏返しでもある。
「まあ、否定はしない。実は本家から客というか居候が増えることになってな」
「だから、あんなメールの内容になったわけか」
達也から送信されたメールには黒羽家の人間――――恐らくは文弥と亜夜子のことだが、彼らと同行してきた人物の事にも触れていて、春からは深雪のガーディアンとして達也から引き継ぎを受けるべく司波家に居候することになるとのこと。
流石にガーディアンの資質があるとはいえ、原作だと一人で出向いていたのに……いや、下手をすると身辺調査をしている物好きに勘付かれないための対策なのかもしれない。
そのメールを証明するかのように、玄関に並べられた靴には達也や深雪のものとは異なるものが置かれていた。
「けど……リビングから漏れている殺気にも似たような雰囲気はどういうことだ？」
「……すまないが、俺にも分からない。深雪が水波（みなみ）を見た途端、ああなってしまってな」
ともあれ、達也と話しているだけでは状況が掴めないと判断してリビングに入ると、にこやかな表情をしているが殺気が見え隠れしている深雪と、それを見て冷や汗を流している文弥と亜夜子、そしてワンピースを着ている少女――――彼女が達也の言っていた水波なのだろう。すると、四人の視線が悠元に向けられた。
深雪は笑顔を見せ、文弥と亜夜子は軽くお辞儀をし、そして水波は……頬を赤くして俯いていた。少なくとも水波とは面識を持ったことなど一度たりともなかったはずなのにだ。

「ただいま……まあ、とりあえず詳しい事情を聞こうか。つーか、俺も居候の立場なんだがな」

事のきっかけはピクシーを達也が事実上買い取った件だ。それを口実として家事手伝いという形で桜井水波（さくらいみなみ）――――悠元の兄である元治の妻として嫁いだ穂波（ほなみ）の血縁上の姪で、彼女も調整体魔法師である。

真夜からの手紙の中には、深夜が神楽坂本家で過ごす（千姫が当主の世話人として深夜を雇い入れたようで、真夜も承諾済み）にあたり、彼女のガーディアンをしている水波を深雪の新たなガーディアンとして就けること。その前任者となる達也には、来年正月までにガーディアンとしての技術を教え込むこと。

手紙から滲み出る真夜の思惑として、恐らく四葉の次期当主として達也を一応〝当主候補〟として担ぎ上げることで、次期当主候補四人の承諾を得る形にしたいのだろう。奇しくも深雪を含めた四人は達也の実力を知っているだけに、その思惑に乗っかることは容易に想定される。

そうなると、問題になるのは司波家の家事を一手に担ってきた深雪との折り合いだろう。今まで達也や悠元の世話をしたいという彼女の健気さに根負けしていたが、水波という存在が現れたことでその領分をある程度奪われる形となる。

尤も、今の深雪の様子からすればそれだけではないということも理解はするが。

先程の様子を達也経由で水波から聞き出したところ、九校戦の試合をモニターで観戦していたようで、ピラーズ・ブレイクで悠元の姿を見た瞬間に惚れてしまったらしい。一目惚れという類は知っているが、その対象に自分がなってしまうのは想定外という他なかった。

「家事の折り合いは深雪と水波ちゃんでお互い納得がいくように話し合え。それができないと……」

「できないと、どうなるのですか？」

「俺お手製の春の新作ケーキを二人に試食してもらう」

「あー……悠元さんのお菓子は女性にとって戦略級魔法ですから

……」
「亜夜子も道連れ決定な」
　自分の菓子作りに対する評価に納得はしていないが、それで沈黙させられるのなら自分への被害など安いものだ……と正直諦めた。亜夜子の言葉に悠元がそう言い放つと、亜夜子が「やってしまいました」と言わんばかりの表情を垣間見せていた。
　これには達也や文弥も笑みを零してしまうほどだった。
「というか、ある意味沖縄絡みの面子がこうして揃うとか……そういや、二人は第四高校に入学が決まったんだったな。おめでとう」
「ありがとうございます、悠元さん」
「つい先日の事ですのに、お耳に入るのが早いんですね」
　神楽坂家は四葉家のスポンサーでもあるため、四葉家絡みの情報は逐一集めている。時折葉山が神楽坂家を訪れては息子の忠成と話したりしていて、時折直接話すこともあったりする。その際に「どうか達也様とは良き友人関係であることを祈ります」と言われたが、将来的には義理とはいえ家族関係になる。
　俺の存在が間接的に三矢と四葉を繋げることになるのは、転生した当初は思いもしなかったことだろう。自分のせいではあるが、間接的には剛三（じいさん）のせいでもあるわけだが。
「対外的には赤の他人同士だが、俺の場合はどうせ七草の狸が掴んでいることだろうし、普通に挨拶に行くつもりだから」
「……同年代でも七草家当主をそんなふうに言えるのは、七草先輩とお前ぐらいだろうな」
　別に国防軍の情報セクションを貸してくれなかった恨みは微塵もない。十師族における四葉家の突出を阻止する動きに出るのなら、自らの価値を高める方向に足を向けるべきだと思う。師族会議における秩序を守るという意味では理に適っていることだが、それでは国内外の災厄に対処できなくなるのは自明の理。
　悠元の実家である三矢家も例外ではないが、元継と悠元が家を出ていて元治が次期当主としての引継ぎを着々と進めており、妻も迎えた立場。才能のある悠元の姉達も家を離れることは決まっており、悠元

は内密に佳奈へＦＬＴへの斡旋を進めたところ、魔法大学卒業後はＣＡＤ開発第三課への配属をするように深夜と話を纏めている。
美嘉はというと、こちらも縁談がいくつか舞い込んでいるわけだが……これば本人の意思で決めさせたいと聞き及んでいるので反対はしなかった。ただ、詩奈の相手は侍郎以外に認めるつもりなどないが。

◇　◇　◇

――西暦２０９６年３月２５日。
この日は深雪の誕生日。どこか出かけたいという深雪の要望を聞き、悠元はどこに行こうとかと思案した結果……その場所は二人にとって因縁の場所とも言えるかもしれないところであった。
「深雪はよかったのか？　昨年のことは〝聞き及んでいる〟けれど」
「はい。それに、悠元さんと周りの目を気にせずにデートが出来ますから」
深雪が好んで身に着けている雪の結晶をモチーフとした髪飾り。これが悠元の作ったものだと判明したのは、横浜事変後に四葉本家へと呼ばれた際、達也が真夜に『流星群（ミーティア・ライン）』のことに関して尋ねたことが切っ掛けだった。
真夜との会談後、深雪に悠元が真夜から『ミーティア・ライン』を教わった際の事情を詰め寄られ、達也は真夜に許可を取った上で深雪に事の詳細を教えた。その時に髪飾りの製作者も教えたようで、深雪は大層ご機嫌だったわけだが……司波家に帰ってきた際、悠元にその事情を問い詰めていた。
隠していたお詫びとして、悠元は深雪の髪飾りに特殊な術式を施した。それは深雪の魅力を無駄に放出させないような認識阻害の一種で、雪の結晶部分は元々水晶の材質で出来ているために術式の刻印自体は直ぐに終わるし、周囲の想子を集めて常時発動するために本人の消費はほぼゼロに抑えられている。
あと、身に着けている深雪本人の意思でオンオフの切り替えができるので、外に出かける際は非常に重宝しており、周りの目を気にすることなく買い物やデートに行けるようになったことを本人はとても

喜んでいた。
「……あの時、悠元さんが来ているのなら、会いに来てくれても良かったですのに」
「いや、実は近くにいたんだよな……完全に偶然だったが」
悠元が昼食を食べようとタワー内のレストランを訪れた際、周囲の視線が一組の男女に注がれているのを目撃して『万華鏡（カレイドスコープ）』で覗いたところ、達也と深雪が近くのテーブルにいたことが判明した。この時は周囲の好奇な目線もあったので気配を偽っているという事実を達也に勘付かれなかったわけだが。
「それでしたら、今度はお兄様の代わりに……でも、悠元さんが気配を出したら、女性の方々が……」
「俺の存在だけで誘蛾灯よりも酷いとか洒落になってないんですが、深雪さんや」
優れた魔法師は優れた容姿を持つ。そのこと自体は悪くないし、母譲りの風貌はありがたいと思っている。現に、髪飾りの効力が出ているとはいえ、少なからず男性の目線がこちらに向いているのは深雪の隣にいる悠元自身も感じている。
それを深雪も感じているのか、悠元の腕に自身の腕を絡ませていた。
「あの時は、自分に出来ることを……って頑張りました。ですから、今日ぐらいは……沢山甘えますから」
「そうか……」
司波家ではいつも甘えているような気もするが、茶々を入れる場面でもないと悠元は深雪の行動に対して拒否はしなかった。
深雪が気に入って達也からプレゼントされた髪飾りを扱っていたお店に立ち寄って、その時の話を店主がして深雪が表情を輝かせていたり、一年前に立ち寄った店では深雪が認識阻害を解除して好奇の目線が大量に向けられたり、そこに偶然立ち合っていた芸能プロダクションと思しき人間を一睨み程度の殺気だけで気絶させたり……最後の項目については、自分への敵意も見え隠れしていたので殺気を飛ばしただけだ。

そうしてすっかり夜も更けたところで、二人が向かった先はよく利用している喫茶店「アイネブリーゼ」であった。いつもならばまだ営業している時間なのだが、扉には『ＣＬＯＳＥ』の札が掛かっていて店の中は真っ暗だ。

疑問を浮かべる深雪が悠元に導かれる形で中に入ると、突然店内が明るくなってクラッカーの音と共に紙テープが宙に舞う。その一部が深雪に掛かってキョトンとしている彼女の視線の先には、彼女の兄やその友人、自身のクラスメイトの姿もあった。

「ハッピーバースデー、深雪」

「あ、ありがとうございます、お兄様……いつの間に、こんな準備を」

「いやー、隠すのは結構大変だったけどな」

面々――――レオやエリカ、幹比古に美月に加え、雫やほのかと燈也、姫梨に佐那とセリア。そして水波と……明後日には帰国する予定のリーナまで深雪の誕生日パーティーに参加していた。

達也の言葉に深雪が悠元のほうを見やると、悠元は頭を掻くような素振りをしつつ苦笑交じりに応えていた。

「そうね。お姉ちゃんが思わず口を割るんじゃないかって」

「ちょ、ちょっとセリア!?　いくらワタシでもそこまで抜けてないわよ!?」

流石にセリアの言い放った可能性は低いだろうが、深雪とリーナはお互いのプライベートアドレスを知っているため、そこから漏れる可能性も少なからずあったのは否定できない。軍人としての資質も戦闘以外ポンコツクラスなのは死体蹴りのレベルになるので口を噤むが。

「こらこら、今日は深雪の誕生祝なんだから、姉妹喧嘩もその辺にしてくれ……深雪？」

「……ありがとうございます、悠元さんに皆さん」

そう言った深雪は思わず涙を零していた。悲しみというより嬉し泣きだと誰の目から見ても明らかだが、これにはエリカがニヤついた表情で悠元をからかい始めた。

「あー、悠元ってば深雪を泣かしてやんの」

「黙れエリカ……そうそう、そういえばホワイトデーの放課後にレオとキスしてたんだっけ」
「なっ!?」
「ちょ、ちょっと悠元!?　何で知ってんのよ!?」
「偶然見かけたんだが、触らぬ神に何とやらというし、黙って帰ったからな」
　エリカのからかいに対して悠元が放った一言により、レオが狼狽えることになり、エリカに至っては耳まで真っ赤になるほどの恥ずかしさを滲ませていた。転んでもただで起きない悠元の仕返しに、周囲の人々は冷や汗を流したり、中には苦笑を禁じえなかった者までいた。
　その言葉に深雪は涙を拭いつつ、エリカに満面の笑みを向けた。
「あら、エリカも恋人が出来たのね。良かったら、デートの指南でもしてあげましょうか？」
「降参……あたしでも、ブラコン二人には勝てないわ」
「同感だぜ……」
　そう言い放ったエリカとレオの言葉に、悠元と深雪が二人に色々吹き込んだことを知るのは……誕生日パーティーに出ていた面々とアイネブリーゼのマスターのみが知ることとなったのは言うまでもない。
　パーティーは大盛況に終わったが、月が変われば新年度になる。２年生となる彼ら（無論リーナは除くが）を待っているのは、少なくとも平穏という言葉が限りなく遠くなることだというのは明らかであった。

七聖抜刀編

切っ掛けは夢の声

春休み。魔法科高校の生徒からすれば、新年度に向けて気持ちを新たに切り替える時期。そんな時期の最中、ちょっとした出来事がとある少女をきっかけに起ころうとしていた。

金沢にある魔法科大学附属第三高等学校――通称は三高と呼ばれる高校に通う一人の女子生徒こと四十九院沓子（つくしいんとうこ）は悩みを抱えていた。それは最近「クリムゾン・プリンス」が抱えているような〝恋煩い〟というものではなく、どちらかと言えば家庭の事情に関わる問題とも言える。

「はぁ……厄介じゃのう」

それは魔法に関すること……といえば、確かに間違ってはいない。先日執り行われた『水鏡（みかがみ）の儀式』――四十九院家に伝わる魔法技能の力試し。当代でも四十九院の中でも随一の実力を沓子は発揮した。

その日以降、何かを呼ぶ声が沓子の脳裏に響いてきた。

とはいえ、それが日常生活の中で聞こえることはなく、沓子の夢の中でしか聞こえない。

『――聞こえ、ますか？　私は、貴女を――』

世迷言と切り捨てるのは簡単だが、魔法という力を行使している以上、他人事と切って捨てるのは間違っている気がした。なので、沓子が最初に相談した相手は自分の母親であり、四十九院家当主である四十九院水奈子（つくしいんみなこ）だった。

「夢にしか出てこない、人ならざるものの〝声〟……少なくとも、悪霊の類とは思えないでしょう」

「わしもそう思うのじゃが、母上には心当たりがないかのう？」

沓子の聞こえた声が日常生活に支障を来たさない範囲内である以上、少なくとも相手は沓子を害する目的で呼びかけているとは思えない。その声が聞こえた時期が『水鏡の儀式』からという事実に水奈子は少し考え込んだ。

「（儀式で沓子が呼び出した〝水龍〟はそこまでの演算規模を有するものではない……でも、もしそれ以上の存在が沓子を見定めたとするならば……）沓子。少し、時間を貰えますか？」
「それは構わぬが、母上にはどうにも出来ぬのか？」
「……これは私の勘ですが、これは白川の流れを汲む四十九院でも手に余る問題なのかもしれません」
水奈子は才覚を発揮し、当時２２歳という若さで四十九院家の当主となった。何かを見通すかのような彼女の勘の鋭さは、娘である沓子に受け継がれている。その彼女ですら手に余ると断言したのは、この問題の本質を指し示しているようなもの……というのは、沓子が一番よく理解していたのだった。
◇　◇　◇
神楽坂家の本屋敷にて、千姫は自室でなく大広間に一人正座していた。目を瞑り、まるで何かを感じ取るかのように意識を沈み込ませていたが、一息吐いてから瞼を開けてその場から立ち上がろうとしたが、足の痺れからかその場に倒れ込んでしまった。
「あ、足が……やはり歳は取りたくないものです」
「何をしていらっしゃるのですか、奥様。半日も正座していればそうなりますよ」
千姫の言葉に忠教が溜息を吐きつつ窘めた。千姫は別に断食をしているわけではなく、忠教が静かに食事を置くと目を瞑ったまま正座を崩さずに手と口だけを動かして食事を摂っていた。
そこまでして千姫が意識を集中させていた理由を忠教が問いかける前に自ら口にし始めた。
「近頃、精霊たちの動きが活発になってきていてね。少なくとも、悠君の『鳳凰』はその切っ掛けの一つなのでしょう。それと……彼の使役している人ならざるもの」
「確か守護霊（サーヴァント）でしたか。あの事件の後、若様が『アリス』の力をお見せになりましたが……」
パラサイト事件が一段落した後、悠元は千姫と忠教、そして神楽坂の直系分家である伊勢・宮本・高槻家現当主の前で『アリス』の力を

行使した。『アリス』は空想上の能力を現代に具現化する常識外れの力を発揮し、当主たちの度肝を抜いた。
「少なくとも、サーヴァントを使ってあんな芸当が出来るのは悠君だからでしょうけれど……このところ、北のほうで何かが活性化しているのは視えたの。ただ、距離が遠いから掴むには至らなかったけど」
「奥様ですら掴めないとは……」
千姫はこう見えて神楽坂でも屈指の実力者。実年齢を半世紀以上も無視した肉体年齢を維持していることからして、それだけでも魔法を極めている実力者という証左とも言える。その彼女ですら理解できないとなれば、この問題は只事で済む問題でなくなりつつある。
「ところで、忠教さんは何か要件でもあったの？」
「はい。四十九院家の御当主が奥様にご相談したい事があると……いかがいたしましょう？」
先月のパラサイト事件後、妖が出る様な気配は『星見』の天文占術でも認められない以上、悪しきものの仕業とは思えない。百家でありながら白川氏の流れを汲む精霊魔法の使い手の一族から助けを求められた以上、古式魔法の頂点に立つ人間として看過は出来ない。
それに、千姫は自分が探ろうとした何かが四十九院家に何らかの影響を及ぼしているのでは……そう推測した。その上で、千姫はこの事態を解決できるであろう人間の名を忠教に告げた。
「忠教さん、悠君に連絡を。彼なら友人兼婚約者の困りごとに手を貸さない理由なんてないでしょうから」

◇　◇　◇

――3月26日。
深雪の誕生日の翌日。いつものように早起きしたわけだが、今日は司波家の地下室ではなく九重寺（きゅうちょうじ）に出向いていた。その目的は本人の体術の訓練も兼ねた寺の門下生の〝武術指導〟であった。無論、八雲による挨拶も兼ねた飛び道具による歓迎を受けたのには納得がいかなかったが。
「脇が甘い。力が入り過ぎてぎこちなくなってるぞ！　次、来い！」
相手の武器の有無に関係なく、一瞬の隙を見逃さずに門下生を次々

と投げ飛ばしていく。無論、石畳には気を付けつつ土の上に放り投げている。ここの住職からは「遠慮なく投げ飛ばしていいよ。石畳程度で怪我する柔な肉体は持っていないから」とのことだが、向こう側で八雲と戦っている達也と同列に語ったら彼らが可哀想だと思う。
「相手を掴むなら、気配をしっかりと消す！　殺気が見え見えだぞ!!」
　そもそもの話、無意識的に気配を消す上に八雲並の気配を誤魔化す術を獲得している悠元からすれば、ほんの少しの気配でも〝ある〟ことに変わりがないレベルと化している。そうなった理由は気配察知に関してのスペシャリスト――――悠元にとって師である剛三の影響が最も強い。
　そうして悠元が約３０人ほどの門下生を地に伏せたところで、にこやかに歩み寄ってくる八雲の姿があった。
「やあ、悠元君。門下生の出来はどうかな？」
「そこそこに出来るとは思いますよ……まあ、貴方ほどじゃあないです、がっ!!」
　悠元は一息吐いてから右の裏拳で自身の背後に向けて撃ち込んだ。だが、それは空中に浮かぶ防御術式によって阻まれ、何もない空間が歪んで八雲が姿を見せた。
「ほう、僕の『纏衣（まとい）』を見破っていたとはねえ。って、おおっと!!」
　続けて放たれた悠元の左の正拳。この距離なら八雲は普通に躱せるだろうが、彼の〝技〟に気付いた八雲は慌てて自己加速術式で距離を取った。躱された側の悠元はと言えば、至って冷静であった。この程度の駆け引きなら八雲ぐらいの実力者だと躱されるのは分かり切っていたからだ。
　どの時点で八雲が『纏衣の逃げ水』と呼ばれる認識阻害の術式を使ったかは遡れば分かる話だが、少なくとも八雲が悠元に話しかけてきた時点で発動させていたのは分かる。だが、元々聴覚に関して過敏とも言える知覚力を有する悠元は魔法訓練によって音波を知覚する術を手にしている。その音波の〝線〟を辿れば、本人がどこにいるのか手に取るようにわかる。いくら情報次元（エイドス）の存在（イデア）を偽ろうが、本人が発した音を偽るのは高等技術の類に入る。

「成程。試しに殺気なしで『白虎雷神掌(びゃっこらいじんしょう)』を試したのですが、それを察知して躱すあたりは流石達也の師匠ですね」
「僕を殴るために新陰流の奥義まで持ち出されるとは……殺気も出さない長射程の打撃技とは、高く評価してくれていると思っていいのかな」
「勿論ですよ。ただまあ……達也からしたら不服でしょうが」
その達也だが、八雲に気付かれない様に背後に近付き、手刀を繰り出した。ただ、彼の経験上殺気をコートのように纏ってしまっているため、八雲からすれば分かり切っている話。彼は達也の腕を掴むとそのまま投げようと試みるが、達也とて黙って投げられるわけでもなく、体を捻ることで八雲に蹴りを浴びせようとする……が、八雲は防御術式で攻撃を受け流した。
そのまま第2ラウンドに入ってしまった彼らの戦いを見ようと、先程まで悠元と立ち会っていた門下生も彼らの戦いを見つめていた。
「……おう、達也が宙高く舞ってる」
尤も、この戦い自体彼らの糧となるかどうかは全くの不明だが、それも含めての八雲なりの課題の出し方なのだろう。二人の戦いというか、八雲の可愛がりは達也をボコボコにして終わるのであった。

◇　◇　◇

司波家に水波が来てから、家事当番については深雪と水波の分担で何とか決着させた。その裏で悠元が作ったケーキの被害を双方受けることになったのは言うまでもないが……朝食を終えた後、深雪と水波が洗い物などでリビングを離れたところで司波家の電話が鳴った。その連絡先は普通なら珍しい相手――神楽坂家の本家から掛かってくるという事実に、悠元は単なる世間話で終わるとは到底思えない予感を覚えつつ、通話のボタンを押した。
『悠君おはよう。達也君もおはよう』
「おはようございます、千姫さん」
「おはようございます、母上。それで、どのような用件でしょうか？」
普段なら悠元の持つ通信端末に直接連絡を取ってくる千姫が態々司波家の電話に掛けてきた……この時点で、悠元のみならず達也にも

用件があると思われる。それを察したことに気付いたのか、千姫は閉じた扇子を右手でクルクルさせながら話し始めた。
『実は、先般より北のほうで妙な気配を感じていまして。そうしたら、ちょうどよく四十九院家から妙な出来事が起きていると連絡を受けたのです』
「北……新ソ連とかが絡んでいるわけではないんですよね？」
『ええ。「星見」でもそれは認められませんでした。今回、悠君だけでなく達也君にもその手伝いをお願いしたいのです』
　神楽坂と四葉の関係を知る以上、達也としては断る理由がない。恐らくは「パラサイト」との戦いの経験からの抜擢、と考えるのが妥当だろうと達也は推察した。だが、四十九院家絡みとなると古式魔法の性質が強い。どちらかと言えば現代魔法に強い達也が悠元の助けになるかどうかは不透明という他なかった。
「それは構いませんが、俺は悠元と違って、古式魔法にそこまで得手があるわけではありません」
『それは分かっています。ですが、貴方が行くことで何かが得られるのは間違いない……私の魔法師としての勘が、そう言っています。真夜ちゃんと深夜ちゃんには昨晩の時点で話を付けていますし、深雪さんの護衛が必要ならば人手を出しますので』
「分かりました……微力を尽くします」
　詳しい事情は四十九院家で直接聞け、ということなのだろう。確かに「フリズスキャルヴ」のことを考えれば妥当な判断とも言える。千姫との通話を終えた後、リビングの外から様子を窺っていた深雪と水波が事情を尋ねてきたので、悠元と達也は事情を説明した。
「そうですか……私も行きます」
「深雪、しかし……」
「これでも古式魔法の腕前はお兄様以上ですよ？　それに、私は悠元さんの婚約者ですから」
　案の定と言うべきか、深雪の言葉に達也は断れないと判断してしまったようだ。そうなると、深雪のガーディアン見習いである水波も同行しない理由がない。そうすると、水波のことを彼のクラスメイト

たちにどう説明したものか悩ましい。
　仲の良いクラスメイトたちは達也と深雪の〝本当の家名〟を知っている。だからこそ、水波の存在を彼らの親戚として扱った場合、変なところでボロが出ないか危惧される。
「悠元、水波はどうしたらいいと思う？」
「うーん……二人の親戚とするより、俺の義理の姪として話を通そう。迂闊に『四葉の関係者』と話されても大変だし」
「成程。穂波さんのことを鑑みれば都合がいいだろう……水波もそれで構わないか？」
「は、はい！　その、悠元兄様がよければ、ですが……」
　元治と穂波が婚約する際、穂波に関する情報は上泉家によって巧妙な経歴情報（カバーストーリー）が構築されている。元々上泉の分家に桜井家がかつて存在し、その傍系の末裔ということで穂波が名を連ねた形だ。その彼女を渡辺家に養女として迎えさせ、元治と婚約した。その穂波に実は姪っ子がおり、それが水波という形にもっていくことは上泉家も承知済みだろう。でなければ司波家での居候を認めなかったはずだ。
「最悪は母上の都合で深雪に護衛を探していたら二人と仲良くしていた水波を見つけた、とでも言えばいいだろう。水波の件は母上も承知していることだからな」
「嘘は言っていないから臆する必要もない、というわけですか。悪知恵にも近いですが」
「そうでなければ魔法使いなんて出来ないと思うよ。とりわけ、上の世界なんて魑魅魍魎が可愛いレベルだからな」
　悠元の述べた言葉は剛三と国内外を巡ったからこそ言える事実であり、魔法という力は軍事や政治、経済と絡み合って一種の利権を生み出す。十師族だって権力こそ表向きに放棄しているが、魔法師としての権威と国防軍や治安維持組織との繋がりを有している。剛三という英雄の力は、戦後３０年経った今でも健在のようだ……という事実をまざまざとみる羽目となったが。
「そんな魔法界の現実はともかく、何人か協力者はいたほうがいいな……姫梨と雫は確定として、あの五人は邪魔したくないし……一応打

診だけしてみるか」
　雫を連れて行くとすれば、ほのかは留守にするより達也の傍にいた方がいいと判断。セリアに関しては付いていくと言いそうだし、リーナよりも古式魔法の得手があると分かったので許可。
　そして、悠元が述べた五人というのはレオとエリカ、幹比古と美月と佐那のことだ。この春休みで距離が縮まったため、デートでもしたい連中の邪魔をして地獄に落ちるのは流石に勘弁だからだ。とはいえ、幹比古はともかくとしてエリカあたりは「なんで誘わなかったのよ」と言いそうな気がしたので、強制はしないが同行するかどうかのメールを送ることにした。
　そして燈也に関してだが、春から別々の学校に通うこととなる彼女との幸せな時間を邪魔してはいけないと思って声は掛けない方針とした。
「って、エリカからのメールが返ってきた……レオも無理矢理引っ張っていくってさ」
「レオ君はエリカの尻に敷かれてますね」
「さて、どうだろうな……連携の相性は最高値なんだろうが」
　事あるごとに痴話喧嘩というか最近は「夫婦喧嘩」と呼ばれるようになった風物詩からして、エリカとしてはレオにリードしてほしいという気が見え隠れしているような気もする。本人に尋ねたら絶対に否定すること請け合いなのは間違いなく、それを想像した深雪から笑みが零れたのだった。

千尋の谷に突き落として隕石を降らせる

――――3月27日。

集合場所となった東京駅にはちょっとした団体旅行とも言えるレベルの人数が集まってしまった。依頼人もとい発起人みたいな形の悠元と達也、深雪と水波に加えて悠元が声を掛けた面子が集まってしまったからだ。

「別に強制はしなかったんだがな」

「何言ってるのよ。あたしと悠元の仲じゃない」

「ま、そういうこった」

レオとエリカ――――エリカに引っ張られる形でレオが付いてきた形だが、エリカは「疾風丸」に「ミズチ丸」――――「オロチ丸」のダウンサイジングバージョンを持ち込み、レオは「ジークフリート」だけでなく悠元が遊び程度に組んでいた単一魔法思考操作型のナックルダスターを持参していた。

ナックルダスターは『相転移装甲（フェイズシフト）』を即興で展開するための護身用を目的とした代物だが、悠元の場合は記憶領域から魔法式を引っ張った方が早いために無用の長物となったものをレオにあげた形だ。

二人とも悠元が関わる時点で戦闘になると見込んでいるようで、人を疫病神扱いするなと言ってやりたくなったが口を噤んだ。

「美月に佐那もそうだが、幹比古もついて来るとは思わなかった」

「そうだね。でも、将来吉田の家を離れることになるし、もう一つの神祇魔法に触れる機会なんてそうそうあるものじゃないから」

幹比古としては、将来東道家に入ることとなる以上は強くなって損はないと思っているし、それに今まで自分が学んできたものとは似て異なる精霊魔法を目にする機会はそうそうないと思っている。

いざとなれば悠元から学ぶことは可能だが、親友である彼に頼り切りも良くないと思っているようだ。

「しかし、パラサイトの一件が落ち着いて、妖の気配ではないと……セリアはどう思う？」

「うーん……お兄ちゃんが使ってる力に関係ありそうな気もするけれ

ど、四十九院家へ最後に行ったのはいつ？」
「3年前が一応最後だな。その後は十師族関連やら海外渡航やらで忙しくなったし」
　雫とセリアの問いかけに悠元はそう答えた。その時点で天刃霊装はおろか天神魔法の習得も完全ではなかったし、パラサイトのような人に害を為す霊の存在は少なくとも確認できなかったのは確かだ。
　しかし、司波家の三人プラス悠元、二科生メンバーの四人、一科生メンバーの五人――――合計１２人となったのは想定外だった。
「十師族関連って……何かあったんですか？」
「そうだな……トラブルのあったところを列挙すると、五輪家では国家公認の戦略級魔法師と婚約させようとしたり、七草家が十山家による俺の誘拐未遂を黙認したり、九島家では現当主が俺の婚約者に藤林家の女性を宛がおうとしたりかな」
　十山家関連で十文字家が含まれていないのは、七草家からの要請で已む無く従っていた側面があるためだ。九島家の一件は剛三が現当主の胸ぐらを掴んで恫喝したため、完全に立ち消えとなったことを知るのは当事者とそれに近い関係者ぐらいだろう……藤林家の女性こと響子がその事実を全く知ることなく立ち消えた話なので無理もないが。
「ああ、あと一条の妹に告白されてやんわりと断った際、『ロリコン呼ばわりしたヘタレ野郎』と『それに追随してきた命知らず』の件もあったか」
「あの、今凄い当て字をしたような雰囲気を感じたのですが……」
　時期的には真紅郎が基本コードを発見したことでその存在を認められたことによる祝賀会と、当時は復興作業で時間の取れなかった将輝を表彰する目的で開かれたパーティーでのこと。同時期に七草家のパーティーにもお誘いを受けていたのだが、剛三は代役を立てた上で一条家側のパーティーに参加し、悠元も付き添いということで同席することとなった。
　十師族の当主と話をすることがあっても、その直系となる子や孫とは面識を持たないことが多く、燈也の存在を知らなかったのはこのあ

たりが影響している。
　話の続きは長距離移動用のリニア列車ですることになり、悠元は達也と深雪、水波と同席する形となった。
「それで悠元、今回の一件に関してレオやエリカ達の助力を仰いだ理由を聞かせてもらえるか？」
「まず、百家でもそれなりに実力のある四十九院家のことはいくらか承知している。無論、霊的な存在に対してもある程度の対抗策や備えをしているのは間違いないが、その四十九院家が神楽坂家に助けを求めたとなると……間違いなく、小火（ぼや）程度のトラブルとは思えなかった」
　四十九院家現当主とは何度かあった事があるし、その実力も剛三から聞き及んでいる。若くして当主になったことからすれば、古式魔法の使い手として一線級の実力者なのは間違いないだろう。
　その彼女が助けを借りたいとするならば、先日のパラサイト事件で霊的な対処を成し遂げた人間の力を借りたいと思うのは自然な流れとも言える。
「詳しい話は四十九院家に出向いて聞かなければならないが、対象の規模も実力も不明な以上は何が起きるか分からない。今度の相手はパラサイトのような妖ではない……ということを安心材料と取るべきかは悩むが」
「現段階では、その対象が中立なのか友好的なのかも不明ということか……」
「そう。だから対パラサイトとの戦闘経験を持つ面子を中心とした場合、彼らの力はあるに越したことはないと踏んだ」
　千姫ですら距離が遠すぎて掴みきれなかった相手。彼女からの情報では、北陸方面からその力を感じたが、少なくとも悪意のような負の感情を持つものではないと感じたらしい。
　四十九院家側は細かい事情を話そうとしたが、それは神楽坂家側で止めたらしい。それはつまるところ、霊的な存在であるとともに師族会議――――特に九島家には知られたくない内容も含んでいると千姫が察した上で止めたようだ。

「それと、今回の一件はあくまでも古式魔法絡みでの依頼になるので、師族会議には一切話を通さないことになっているのだが……少なくとも一条家には事情を説明しないといけない」
「それは、何故なのですか？」
「簡単な話をすれば、魔法監視システムによる不当な拘束を避けるための〝申請〟だ。今回は『神将会』を動かさない以上、正当な手続きをしなきゃいけない」
　この世界における魔法師は、非常時を除いて魔法の使用に関する法的拘束力が極めて高い。悠元の場合は神楽坂家当主代行という権力を有しているが、それ以外の面々はあくまでも魔法科高校の生徒という身分で生活している形だ。
　それにも抜け穴が存在しており、今回は神楽坂家の依頼に基づく魔法使用許可を一条家に申請しなければならない。なので、四十九院へ出向く前に一条の屋敷を訪ねる必要があるという訳だ。
「一条家の現当主には予め申請についての申し送りをしている。屋敷を訪ねるのは俺一人で行くつもりだ……深雪、達也たちと一緒に四十九院家へ先に向かってほしい」
「……分かりました」
　単独で出向くと言い放った悠元が念頭に置いたのは将輝の存在だ。彼が深雪に恋愛感情を抱いているのは知っているからこそ、好き好んで深雪を会わせる気になどならなかった。特に春休みという季節のため、本屋敷か三高にいるのは間違いないだろう。
　自分自身の我儘とはいえ、将輝の為に深雪を引き合わせる気などない。独占欲と言われてしまっては否定できないことだが。
「それは構わないが、四十九院家には誰が説明するんだ？」
「そこは姫梨に任せる。彼女の家――伊勢家が四十九院家と繋がりを持っているから、問題はないだろう」
　悠元が姫梨の同行を最初に決めたのは、神将会のみならず四十九院との関わりで道案内が出来る、という点にあった。雫の場合はほのかが同行した時のフォローを考慮してのものだが。
「それはともかく……水波は大丈夫か？」

「え、は、はひっ！　その、お話は色々伺っていたのですが……」
「無理もないだろうな。流石の俺でも現実味がないと思ったほどだ」
「俺を見ながらそれを言うか」
　現代魔法中心である十師族からすれば、古式魔法の部類はある意味未知の世界になってしまうのだろう。なので、水波の狼狽え様も理解できなくはない。
　リニア列車は遅れもなく（寧ろ新幹線よりも速く、そのために余裕を持った時刻設定がなされている）定刻通りに金沢へと到着。達也らはコミューターで一路四十九院家の実家がある白山本宮（しらやまほんぐう）・加賀一之宮（かがいちのみや）――白山水鏡神社（しらやますいきょうじんじゃ）へと向かう。そして彼らと別れた悠元が向かう先は、十師族の一角にして東北・北陸・山陰地方の日本海側防衛を担う一条家。その本屋敷を訪れるのは長野佑都として参加したパーティー以来だが、あまりいい思い出があったとは言えない。
　一条家の大きな正門――その一角に備え付けられた来客用のインターホンを押すと、応対に出たのは使用人ではなく将輝本人であった。その彼はというと、悠元の姿を見て驚く素振りを見せていた。
『どちらさまでしょう……なっ!?　三矢じゃなかった、神楽坂がどうしてここに？』
「今回は一条家の御当主に会う約束を取り付けていたんだが……聞いていないのか？」
『いや、来客があるから、礼を失することがないようにとは聞いていたが……少し待ってくれるか？』
　恐らくだが、現当主である剛毅は将輝に必要最低限の情報だけを与えて、そこから先は自分で考えるように仕向けているのだろう。とはいえ、来客者の名前ぐらいは言ってもいいのではないかと思うが、剛毅なりのスパルタ教育なのかもしれない。
　考えてみれば、確かに将輝の実力が一級品というのは間違っていない。それと比較すると……自分の場合は剛三があちこちに連れ出して社交性を強引にでも磨かされたことからして、やり方はともかく社交界での振る舞いを学んだことは大きいのだろう。それに伴って好

意を持たれている人間の数が増えたのは癪だが。
　将輝が確認すると言ってモニターが切れてから数分後、正門が開いて敷地に入る悠元を出迎えたのは将輝ではなく剛毅であった。
「これは一条殿。直接お会いするのは九校戦以来となりますね……将輝はどうしました？」
「あ奴は部屋に居るよう言い含めた。神楽坂殿が来訪した程度で狼狽える様子は直に見ていたのでな。ともあれ、中へ案内しよう」
「それでは、失礼いたします」
　どうやら剛毅は将輝を一条家の次期当主として鍛えているようで、先程の来客対応もその一環だという言葉に苦笑を禁じえなかった。あくまでも一条の問題なので首を突っ込む気など更々ないが。
　普通ならば書斎なのだが、剛毅は悠元を座敷に招いた。少しすると、剛毅の妻である美登里が茶菓子を置いて、にこやかな表情をしたまま退室した。剛毅に勧められるがまま茶菓子に一口手を付けたところを見計らって剛毅が口を開いた。
「神楽坂殿から当監視地域における魔法使用許可申請の話が来たことだが、正直に驚いている。もしや、新ソ連の？」
「それでしたら、『違う』とだけお答えしておきます。『ハロウィン』の一件以降、向こうの国家公認戦略級魔法師であるベゾブラゾフが極東地域に出張るのは難しくなりましたから」
　ウラジオストクにあるベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』の補助を担うスーパーコンピューターが〝溶解〟しただけでなく、ウラジオストク軍港そのものが破壊されたために軍事行動と連動した戦略級魔法の使用が難しくなったためだ。不凍港であるウラジオストクが軍事行動に使えないとなれば、極東地域における冬季の軍事行動は著しく制限される形となる。移動式ＣＡＤを使う可能性もあるが、ベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』の発動兆候データは日本とＵＳＮＡが既に把握しており、二国内で万が一使用すればすぐに判明してしまう。場合によっては新ソ連を『敵対国』とみなして非難することも可能となった。
　そもそも、悠元の戦略級魔法のセーフティーロックを担っているの

は剛三と千姫のため、その使用の如何は護人である二家に委ねられている。非常事態時における超法規的措置の最たるものが戦略級魔法であるため、そこに一条家の使用許可など取る必要もないし、悠元は一条家の人間ではないので慮る必要はない。
「今回の一件は神楽坂家当主からのご依頼ですが、あくまでも内密なものです。今回の申請は要らぬ誤解を避けるためのものとお考え下さい」
「……その内容に関してだが、我が一条の助けは必要ない、と？」
「寧ろ足枷にしかなりえません。現当主から自分に話が来た時点で、現代魔法（じゅっしぞく）の範疇で対応できる範囲をとうに超えている……ということです」
一条家の援軍は不要、と悠元はしっかりとした口調でそう述べた。
何せ、将輝が横浜事変で大陸の魔法師と戦って優勢に持ち込んだことは聞き及んでいるが、古式魔法の魔法使い相手と人ならざるもの相手では〝次元〟が違う話になってしまう。パラサイト事件でも世界最強を謳っているスターズですらパラサイトの根本的な対処が出来なかった以上、現代魔法ならばともかく古式魔法の知識が足りない一条の人間が出てきても〝足手纏い〟になるのが目に見えている。
剛毅からすれば、悠元が九校戦で現代魔法と古式魔法の複合術式という世界でも類稀なる才覚を発揮した以上、彼の発言には説得力があると感じていた。なので、彼に対して食い下がろうという気など最初からなかった。悠元は残っていた茶菓子を綺麗に食べ終えると、静かに立ち上がった。
「茶菓子、とても美味しかったですとお伝えください」
「ああ……神楽坂殿にこういうのは失礼だろうが、武運を祈る」
送り迎えは不要、とでも言いたげな雰囲気を纏いつつ、出してくれた茶菓子に対して率直な感想を述べると、そのまま座敷を後にした。剛毅は悠元に対して一言掛けるだけになってしまい、悠元の姿が見えなくなったところで一息吐いた。
「あれが……将輝と同年代の少年、とでも言うのか？」
先日の臨時師族会議では、南盾島の一件もそうだが東京都心を中心

に起きたパラサイト事件やスターズの介入についての報告を聞く機会があった。その事件には悠元が多大な功績を上げた、と十文字家や七草家、三矢家から報告が上がった。それだけのことをすれば当然烈の耳にも入る形となり、九島家や七草家は危機感を募らせるようになった。

だが、一条家からすれば一種の期待感を持つようになった。『灼熱と極光のハロウィン』において侵攻しようとした新ソ連の艦隊を消滅させた新型の戦略級魔法によって、結果的に3年前の佐渡侵攻の再来を阻止することが出来た。大亜連合に撃ち込まれた戦略級魔法も含めて詳しい情報は十師族にすら開示されていないが、その片方が悠元によって引き起こされたものではないか……と剛毅は推測した。

三矢家に聞いたところで悠元の情報が開示されるとは到底思えないが、彼は一条家の秘術である『爆裂』を完全に封じ込めた実績がある。

以前、剛毅の娘である茜が悠元に求婚した際、それを見ていた息子が失言を零して彼に関節技で気絶させられたことと直接的な関係はないが……昨年の新人戦モノリス・コードにて将輝が感情的にやってしまったオーバーアタックに対して、悠元は慌てることなく理知的に魔法を制御していた。それだけに、彼を本気にさせた代償は計り知れなくなると剛毅は内心で結論付けたのだった。

傍迷惑な歓迎

剛毅との会談を終えた悠元は最寄りのコミューターに乗り、寄り道することなく目的地である白山水鏡神社へ到着した。霊峰「白山」の麓に本殿を構えており、全国各地に鎮座する白山神社の総本山として名高い。

かの源頼朝が寄進し、源義経が参拝したという事実だけでも格式の高さを窺わせるものだ。一時は加賀一向一揆によって勢力を落としたものの、前田利家によって復興した……というのが、自分の知る前世の知識である。何故知っているのかと言えば、長期休みを利用して一度足を運んだことがあるからだ。別に何かに縋るためではなく、どちらかと言えば身内の縁結びというか長き縁となるようお祈りした形というべきだろう。

だが、この世界においてはその経緯が変わっていた。なんと長尾景虎――――後の上杉謙信が上洛の折に寄進したという記録が残っており、彼所縁の代物がいくつか収められているらしい。

かの毘沙門天を信仰する人物にしては意外な行動と言うべきだが、毘沙門天は七福神にして仏教の守護神として知られる存在なので、その縁で寄進しても不思議ではない。景虎の行動で越中（旧富山県）や能登（旧石川県）を治めていた勢力が警戒して、結果的に東への侵攻を押し止めた。これによって、上杉家や長尾家は南の甲斐武田家や関東地方、それと東北地方に集中できる形となった。

加えて、本来の歴史ならば一向門徒と戦って衆徒がほぼ全滅したが、こちらの歴史では白山の噴火で一向宗の門徒も含めた一向一揆勢がほぼ全滅するという形になっていた。元を辿れば同じ天台宗の末寺だというのに、対立する形となったのは悲しいことだが。

なお、この後加賀国は越前朝倉家によって瞬く間に制圧されたが、噴火による爪痕が想定よりも根深く、復興で多大な労力を費やしたところを織田家が呑み込んでいった。

閑話休題。

本殿に至るまでの長い階段をゆっくりと上る悠元であったが、階段

に足を踏み入れた時から何者かの視線を感じていた。それが敵意を含むものではなかったので無視するようにしつつ歩を進めていた。
そして、階段を上り切ったところで物陰から飛び出してくる左右二つの影。気配の消し方は恐らく精霊魔法に基づくものなのは分かり切っており、悠元は両手を横にあげ……その気配が切迫した瞬間に手を素早く動かしてその影を掴むと、そのまま真上に放り投げた。
男性二人の短い悲鳴が聞こえたが、それを介することもなく落ちてきた一人目に対して捻りを加えた左の掌打を腹部に撃ち込み、もう一人に対してはその場で素早く回転して右足による飛び蹴りを脇腹に撃ち込んだ。
「（力試し……いや、〝悪戯〟かな）……ふっ!!」
「きゃっ!?」
その隙を見計らうように飛んでくる精霊魔法――――水の塊を飛ばして相手にぶつける水属性の『麗水砲（れいすいほう）』に対し、悠元は右手を翳して『麗水砲』を押し止めると、意識を集中させて魔法の支配権を奪取し、『麗水砲』を飛んできた方――――本殿の方向に勢いよく投げ返した。すると、その魔法が着弾したようで、女性の悲鳴が上がった。
悠元は呆れた表情を見せつつ、先程の魔法が放たれた先にいる巫女服を纏った女性――――『麗水砲』で水浸しになったことにより、巫女服が体に張り付く形で女性のボディラインが確認でき、上半身に至っては透けて肌色が見えている部分もある――――に近寄って声を掛けた。
「さて、何でこんなことをしたのか説明してもらおうか、沓子？」
「う、うう……だからわしは反対したというのに……」
悠元は魔法で手早く沓子の服を乾かして、彼女の手を取って立ち上がらせた。一方の沓子はというと、悠元の姿を見て恥ずかしそうな様子を見せていた。
「何故恥ずかしがる」
「婚約者の前でみっともないところを見せたんじゃから……って、言わせるでない！」
「いや、勝手に自爆しただけだろ」

「うぐぅ……」
ともあれ、沓子の案内で悠元は神社の敷地内を歩いていく。普段ならば参拝客がいてもおかしくはないが、どうやら人払いの術式を用いていたようだ。でなければ、先程の襲撃ができなくなるので納得できる話だ。
襲撃とはいったが、どちらかと言えば試しに近かった印象が強い。沓子が言うには、悠元の実力を見るために神社の修行者（天台宗の末寺だった名残で、九重寺のような僧兵にも近い）を宛がうべきという四十九院家の親族たちが目論んだことで、現当主である水奈子が沓子の同席というか監視付きで認めさせた。
「3年前に爺さん抜きでボコった記憶が抜けたのか、あいつらは」
「確か、『裏蓮華（うられんげ）』と言うたかの……手足複雑骨折は正直やりすぎだと思ったんじゃが」
沓子と仲良くしていることを気に入らなかった沓子の従兄弟筋から勝負を挑まれ、精霊魔法を無力化した（その時点で天神魔法をある程度習得していたので、強力な事象改変による技巧を用いた）上で、事象改変力を完全に制限なしで相手を打ち上げて、直上から超高速移動による打撃と蹴撃で相手を粉砕する『裏蓮華』で相手を戦闘不能にした。
対戦相手の手足に限定して技を放ったので、致命的なダメージは与えていないし魔法治療で治せる範疇のレベルに止めている。
「這い蹲って勝負続行を望んだときはゾンビの類かと思ったほどだよ。軽い脳震盪を起こして気絶させたが。そういえば、正月に神楽坂家を訪れた後、愛梨や栞に何か聞かれなかったのか？」
「その辺は適当に誤魔化したからの。とりわけ深雪嬢や達也殿のことなど誰にも言えぬからの」
あくまでも婚約者としての挨拶は済ませたが、物理的な距離があるためにお互い連絡を取る程度でそれ以上のことはしていないのが現状だ。それでも愛梨からは「何かいいことでもあったの？」と問い詰められたが、いつもの飄々とした表情で誤魔化したらしい。
沓子としては、自身の婚約から深雪の出自がバレるのは拙いと考え

て隠すことにしたわけだが、それでも栞からは「何か隠してるよね」と言われてしまった。ただ、栞自身もこれ以上触れるのは危険だと判断して追及はしなかったことも付け加えられた。
「達也殿や深雪嬢、友人たちは客間に通して居る。ただ、悠元には申し訳ないのじゃが……」
「まあ、想像はつくから別にいいよ。案内してくれ」
四十九院家の都合とはいえ、元十師族・現護人の人間――それも『九頭龍』の一角が神楽坂家次期当主を襲撃したのだ。現当主からその辺の事情を聞かなければ到底納得できる話ではない。正月のことといい、自分の置かれている立場の変化は七草家にも通ずるものがあるな、と内心で思った悠元だった。

◇　◇　◇

神社の本殿の奥――その大広間にて、悠元は正座で四十九院家現当主こと四十九院水奈子と相対していた。水奈子は上座でなく悠元と同じ座にて相対した上で、神妙な面持ちを浮かべつつ深々と頭を下げていた。
「神楽坂殿。此度の戯れ、真にお許しください」
「……頭をお上げください、水奈子殿。私は血筋の縁で神楽坂に名を連ねた者故、周囲の多少の反発は覚悟しておりました。このことで水奈子殿の愛娘との婚約を解消することは致しませんので、ご安心ください」
こうして相対する度に大の大人らが平身低頭するのを見せられると、つくづく神楽坂の名の重さを実感する羽目になる。婚約のことは一応口に出したが、その取り決めをしている千姫からしてもこれぐらいのことは想定した上で決めているだろう。
なお、現状で六人という人数は千姫曰く「まだ少ない」らしい。正直なところ、あの夜のことは軽くしか見ていない上、千姫が録画した映像については怖くて見ていない。それを見て正気を保てるかどうかというより、まるで別人の何かを見ていると現実逃避するのが目に見えていたからだ。
水奈子が頭を上げた上で、悠元は一つ咳払いをした上で尋ねた。

「それで、一体何があったのかをお教え願えませんか？　母上からは四十九院家が神楽坂家に助けを求めたということしか聞いていませんので」
「分かりました。事の次第をお話いたします」
　水奈子の話では、先月――――２月１９日の夜にまで遡る。
　四十九院家に伝わる儀式「水鏡（みかがみ）の儀式」は、水の属性に秀でた精霊魔法使いである四十九院家が白川氏の頃より伝わる神器「霊水鏡（れいすいきょう）」を用いて大規模情報独立体と〝対話〟する儀式。
　召喚や喚起などといった精霊を従わせるためのものではなく、あくまでも精霊と〝言葉〟――――言語というよりは精霊との共鳴で彼らの情報を引き出す――――を交わすことを目的としたもの。古くから朝廷の神事を担っていた彼らが求めたのは〝将来の危機の予知〟であり、前以て危険を察することで皇族への危機を回避することに傾倒した結果、四十九院家には一種の予知能力のようなものが備わった。
　とはいえ、その主たる役目は神楽坂家の天文占術に譲る形となり、儀式自体も一族の力を衰えさせないための試しの要素が少なからず加わった。結果として、「水鏡の儀式」は四十九院家にとって次世代を担う人間を選ぶための儀式となった。
「沓子は当代において申し分ない結果を挙げました。ですが、その日以降……彼女の夢に『声』が聞こえるようになったらしいのです」
「……声、ですか……」
　その日は奇しくも第一高校の第一演習場でパラサイトをおびき寄せ、融合したパラサイトを〝封印〟した日。どちらも人ならざるものの存在を介した出来事なのは間違いなく、パラサイトに関わる何かがトリガーとなって、沓子の夢に「声」が聞こえてくるようになった可能性がある。
　「声」による影響が日常生活に及ぼすレベルではないとすれば、その何者かは沓子に対して害を為す意思はない可能性が割と高い。
「ちなみにですが、沓子は何と対話したのでしょうか？」
「〝水龍〟――――四十九院家において、極めて高位の存在と位置付けられている精霊です。神楽坂殿が九校戦で喚起された光の龍や〝竜

神〟には劣ってしまいますが」
少なくとも〝水龍〟がその声の存在ではない……悠元は己の直感でそう考えた。だが、千姫曰くパラサイトのような悪意や妖の類ではないとするなら……現時点での情報だけでは手詰まりに近い。
正直危険が伴う博打になるだろうが、時間も有限である以上は躊躇っていられない。悠元は一息吐いた上で水奈子に真剣な表情を向けた。
「水奈子殿、お願いがあります。『霊水鏡』を使わせてください」
「それは構いませんが……鏡を起動させるための霊力は本来、一年を掛けなければなりません」
「それでしたら、手はありますのでご安心を」
「霊水鏡」の起動には本来複数の霊力に長けた術者が必要とされており、更には鏡の場を水の精霊で満たさなければならない。なので、雪による積雪で十分なほどの水の霊気が蓄積している2月に儀式を行うのが通例だ。
だが、悠元は以前四十九院家を訪問した際に「水鏡の儀式」を見たことがあり（本来は部外者が見ることなど許されないが、剛三の口利きで実現した）、「霊水鏡」の起動に必要な霊力供給の算段はつけている。
「それで、沓子を救えるのでしょうか？」
「現状は何とも……ですが、切っ掛けが『水鏡の儀式』となれば、そこに活路を見出す他ないと考えたまでです」
「そうですか……神楽坂殿。娘をどうか宜しくお願いいたします」
水奈子の言葉は、まるで沓子のことを〝末永く〟宜しくお願いするという意味合いも含んでいるような気がしてならなかった。とはいえ、返答しないわけにもいかないので、悠元は静かに頭を下げる形となった。
◇　◇　◇
水奈子との会談を終えて客間に通された悠元は、達也らに今回の事態を説明すると共に、解決の鍵となる神器「霊水鏡」を起動させる旨を伝えた。これに対して真っ先に反応したのは古式魔法をよく知る

面々であった。
「神器を起動させるって……そんなことができるのかい？」
「必要なのは霊気――水の精霊もとい霊子（プシオン）によって場を活性化させる必要がある。その為の手段は問題ない」
龍脈を通して霊子を一気に活性化させ、「霊水鏡」によって情報次元を物理次元と〝接続〟する。そのための結界術式は以前に教室で使ったものを流用することで解決できると見込んでいる。霊子を活性化させるトリガーは『天照絢爛（てんしょうけんらん）』を使うことで起動のための要件を満たすだろう。
「俺は以前に『水鏡の儀式』を見たことがあるから言えることだが、一時的に物理次元と情報次元を接続する以上、物理的な攻撃はほぼ無効化されると思ってくれていい」
「悠元、現代魔法は通用するのか？」
「ああ、それは問題ない。だが、沓子の声が聞こえた時期がパラサイトを退治した日と近しい以上、霊的な存在が干渉してくる可能性も考慮しないといけない」
妖が出てこないという話はあくまでも次元の壁を越えて出現しないという可能性。表裏の次元を同じ平面上に繋げる以上、鬼や悪魔が出てきても不思議ではないと考えている。場合によっては「アリス」を人前で使うことも躊躇うつもりはない。
悠元は立ち上がって自前のスーツケースの奥底から二つのデバイスを手に取ると、達也と幹比古に声を掛けつつ放り投げた。
「達也に幹比古、受け取ってくれ」
「これは……」
「おっと……悠元、これはＣＡＤかい？」
「まあ、そんなところかな」
悠元が二人に手渡したのは、例の魔法結晶を組み込んだリストバンドタイプのＣＡＤ。この状況を予測していなかったわけではないが、一応パラサイト絡みも想定して持ってきたのが功を奏したようだ。とはいえ、起動自体ぶっつけ本番となるのは否定できないが。
霊的な存在に有効な攻撃手段――天刃霊装を持っている雫と姫

梨にはほのかのフォローをして貰い、幹比古と佐那が美月やレオ、エリカのフォローを担ってもらう。「遠当て」もとい徹甲想子弾（てっこうサイオン）を修得した達也と水波のフォローは深雪が担当し、悠元は沓子の護衛に就く。

出てくるのは果たして何者か……パラサイトという存在と遭遇したとはいえ、現代の世界であのようなことを経験するとは、この時の彼らからすれば予想など出来るはずもなかったのであった。

人間を辞める覚悟とは

四十九院家の「水鏡の儀式」は、神器「霊水鏡」の霊力を満たすために龍脈の力が集う結節点――特異点（とくいてん）に儀式のための祭壇がある。その場所はというと、霊峰「白山」の最高峰である御前峰（ごぜんがみね）の山頂にある奥宮。神器「霊水鏡」は安全上の理由で本宮の倉庫に保管されているが、儀式のときにだけ奥宮に持ち出される。

普通なら儀式ということで全員神事用の服装なのだが、今回は荒事も想定しているために沓子以外は私服姿で立ち会う形となっている。

「正直言って、悠元に掛かれば何でもありね……」

「この時期に山登りは酷すぎるだろう」

「あはは、何でもありじゃの」

移動自体は秘匿を条件として悠元が『鏡の扉（ミラーゲート）』で移動時間を短縮した。これには思わずエリカが言葉を漏らしたが、悠元の返した言葉に納得していた。その一方、沓子は苦笑を滲ませていた。

「さて、時間が惜しいからとっとと準備するか」

「ふと思ったけど、どうしてそこまで急くの？」

「そうだな……簡単に言えば、沓子が無事でいられる保証がないからだ」

今が実質無害であっても、今後沓子の夢以外に「声」が聞こえないという保証などない。なので「霊水鏡」を起動させて、沓子に呼び掛けた相手を呼び出してみる他ない。今後害を為す可能性がある場合、あらゆる手段を用いてでも排除する必要がある。

「それと、俺らを付け回している連中――大方七草家が雇っている魔法師なんだろうが、彼らに余計な情報を掴ませたくない」

「確かに、東京駅から妙な視線は感じていた。だが、本当に何もしなくていいのか？」

「余計な諍いは御免だろう？　あと、彼らを通して九島烈に余計な情報は渡したくない」

悠元が烈を敬称も付けずに呼んだことは驚く人もいたが、今はそのことを一々問いかける暇などないことは誰であっても理解できる話

だ。悠元は奥宮の四方に以前使用した結界術式の札を張って中央に立った。
そして、「ワルキューレ」を手に取ると天井に向けて構えた。
「沓子、準備はいいか？」
「いつでも構わぬぞ」
沓子の言葉を聞き終えた瞬間に『天照絢爛』を発動させ、祭壇の間に水の精霊が充満する。これには「水晶眼」を持つ美月や姫梨、そして精霊魔法を使う幹比古が異常なほどの霊気の高まりを真っ先に感じていた。そして、精霊の力により「霊水鏡」の鏡面が青く光り輝いていた。沓子が「霊水鏡」に対して祈りを捧げる様に瞼を閉じると、鏡が異常なほどに光り輝いて祭壇の間に光が満ちた。
流石に某大佐のように目潰しを食らうことはなかったが、光が収まると祭壇とは異なる武家屋敷のような佇まいの部屋に飛ばされた。そして、悠元の傍には沓子しかいなかった。
「沓子、目を覚ませ」
「う、うーむ……って、ここはどこじゃ？」
「魔法の力が使えるから、どこかの次元だとは思うんだが……」
縁側に出ると、外は夜だが月が紅く光っている。それは月食のように淡く光っているのではなく、満月の時のような強い光が照らしている。この時点で通常の物理次元でないのは確かだが、「天神の眼」を発動させると通常の情報次元を視る以上に負荷が掛かる。物理次元と接続した影響かと考えたが、以前「水鏡の儀式」でこっそり発動させた時よりもその負荷が明らかに違っていた。
念のために情報端末を取り出してみるが、強力な通信阻害が掛かっているために連絡が取れない。多少無理をすればいけなくもないが、この先に何があるか分からない以上は下手に力を消耗しない方がいいと判断して端末をポケットに仕舞い込んだ。
「もしかしたらだが、沓子を呼んでいた声の主の仕業かもしれん……どうだ、声は聞こえるか？」
「今のところは……」
悠元の問いかけに沓子が何かを答えようとしたところで「声」が聞

こえてきた。それは沓子のみならず、悠元にも聞こえてきた。
――我が主の資格を得し者、これより試しを始めるものとする。
その言葉と共に、周囲の空間が歪み――気が付けば広大な草原が広がっていた。そして、目の前に巻き上がる土煙。その正体を見ようと目を凝らすと、多数の人影がこちらに迫っていた。その中には馬に乗った武士やら仏僧の姿も確認できる。それを見た悠元は溜息を一つ吐いて呟いた。
「……傍迷惑な」
「いやいやいや、どうして落ち着いておるんじゃ!? このままじゃと、わしらが蹂躙されるだけじゃぞ!?」
慌てている沓子に対し、悠元は冷静だった。この辺は剛三のスパルタ教育の賜物なのかもしれない……悠元は「叢雲」を展開して構え、霊子の性質を付与した想子を刃に圧縮した。
「有象無象を吹き飛ばせ――天牙一閃(てんがいっせん)」
高密度に圧縮した想子を一気に開放した刃で相手を薙ぎ払う技――前世で読んでいた漫画の技を基に編み出した天牙一閃を謎の軍勢に向けて放つ。軍勢は光の奔流に巻き込まれ……光が通り過ぎた後には軍勢の姿が一つも確認できなかったので悠元は「叢雲」を解除した。これには沓子が苦笑を浮かべていた。
「あはは……もしかして、それが天刃霊装というものかの?」
「正解……っと、どうやら一つ目はクリアできたようだな」
再び空間が歪むと、今度は城の前に立っていた。大抵の人ならば大阪城(おおさかじょう)や姫路城(ひめじじょう)のような城を想起するだろう。だが、その城は天守の部分が普通の城とは異なり、七重の塔となっている。この時点でその城の正体が焼失したかつての織田信長(おだのぶなが)の居城――安土城(あづちじょう)なのは見るに明らかであった。
「……悠元。すごく嫌な予感がするのじゃが」
「それは誰しもが思っていることだから……って、一角が吹き飛んだな」
すると、何もしていないのに本丸の壁の一部が吹き飛んだ。この世界は通常の物理法則が働いていないのか、吹き飛んだ箇所は瞬く間に

修復されて傷一つない状態に戻っていた。少なくとも、この世界に迷い込んだ誰かが本丸の中で戦っている可能性が高いだろう。
いくら試しとはいえ、この状況に巻き込まれた側としては正攻法で突破するつもりなど更々ない。なので、悠元が取った方法はというと……沓子を右肩に担いだ。
「ごめん、沓子。この埋め合わせはするから」
「え、な、何をする気じゃ」
悠元は「叢雲」を左手に持ち、『疑似瞬間移動』を発動。沓子が言い切る前に本丸の壁へと突撃する。そして激突する瞬間に己の持ちうる最高速の斬撃で壁を破壊し、一気に城内へと踏み込んだ。城内へ入った悠元と沓子が目にしたものは、まるで操り人形のような武士と戦っている知り合い――――率先して戦っているレオとエリカ、美月を守るように戦う幹比古の姿があった。
「悠元！　それに、沓子ちゃんじゃない」
「とりあえず助太刀する。沓子も行けるな？」
「まったく……デート一回じゃぞ」
不満げながらも頬を赤く染めている沓子は精霊魔法を発動し、水の縄で相手を押さえつける『水飯綱（みないづな）』で武士らの動きを封じる。それを好機と見たのか、エリカは千刃流の裏の秘剣『切陰』で斬り伏せ、レオは『ドラグーン・ブレス』で相手を打ち倒した。幹比古が残りの連中を『雷獅子』で吹き飛ばして脅威が去ったところで、お互いにここまでの事情を説明した。
レオやエリカ達は草原に飛ばされ、いきなり襲い掛かってきた謎の軍勢を追い払ったらいきなり城内へ飛ばされたらしい。
「目が覚めたら、あたしらは四人しかいなかったの。そっちは二人だけだったみたいだけど……悠元がいるなら問題ないわね」
「となると、残る半分はどこかにいるようだが、この世界だと現実の物理法則自体通用しないからな。見当もつかん」
「そうだね。僕たちの魔法が使えるのは幸いだけど……柴田さんの眼で見たところ、向こうに次の階層へ続く階段があるみたいなんだ」
ここの広さを考えると、城の外見から推測される広さの3倍以上は

ある。達也らの行方も気がかりだが、手掛かりがない以上は先に進む他ない。しかし、現代世界でファンタジー要素満載の経験など、よくよく考えてみればオカルトにも近い。階段を上った六人が目の当たりにしたものは……見渡す限りの森林であった。
「え、えっと……」
「何と言うか、最早何でもアリだなこりゃ」
「あたしやミキは悠元の存在で慣れてるけどね」
「僕の名前は幹比古だ」
「……人を超常現象扱いするな」
ただ、森林と言っても石畳の道案内があるあたりは親切なのだろう……と悠元が一歩を踏み出そうとしたとき、森の奥から飛んでくる飛翔物に気付いて「叢雲」で打ち払うと、地面に落ちたのは苦無と言うより現代風の投擲用ナイフだった。しかも、それはスターズで採用されているタイプの武装一体型ＣＡＤ。ここは日本のはずなのに、何でこんなものが飛んでくるのか……と悠元が視線を向けると、土下座している一人の少女の姿があった。
「何やってるんだ、セリア」
「許してお兄ちゃん」
彼女から事情を聞くと、単独で飛ばされたセリアは軍勢を「アルテミス」で吹き飛ばしたら空間が歪んでここにいたようで、先程まで忍者のような存在と戦っていて、悠元らの存在もそれだと勘違いして投げたものの、すぐにそれが間違いだと気付いて土下座に至ったということらしい。
彼女の想子パターンからして偽物ではないと判断し、そのまま合流することにした。森林の中を警戒しつつ歩いているのだが、殺気はおろか人の気配すら感じられない。
「おかしい……私なんて結構な数の忍者と遭遇したのに……」
「（セリアよりも強い何かに引き寄せられた、と考えるのが妥当だが……）あっという間に次の階段か」
この先が地獄の門とか言われても何ら驚く要素がないと思いながら次の階段を上った先はというと……今度は西洋風の城の内部。広

さと装飾、そして眼前にある煌びやかな玉座からするに王の謁見の間なのだろう。その奥には上に続く階段が確認できた。
　戦国風の城の中に西洋の城の内装と言うのは異質そのものだが……そして、気が付くとその王座の前には一人の女性が立っていた。煌びやかな金髪を纏め、彼女の手には騎士剣が握られている。その剣から発せられる神々しい力は正しく人ならざる力そのもの。そして、その少女はゆっくりと口を開いた。
「――――成程。『王殺し』に『龍殺し』……それと『神格に至りし剣』の持ち主とは。私も存外恵まれたものですね」
「気を付けてください！　あの人の持つ剣は、常軌を逸しています！」
「あの女性の姿……まさか、彼女が持っている剣は約束された勝利の剣（エクスカリバー）!?」
「知ってるの、セリア!?」
　この状況で神造兵器とか冗談で済む話ではない。セリアの言葉が正しければ、目の前にいる少女の名はアーサー王が女性化した姿なのだろう。そこまで詳しくないが、聖剣において最高峰の代物なのは間違いない。
　この世の理すら斬り伏せる理外の存在。通常兵器はおろか、恐らく武装一体型ＣＡＤでも太刀打ちできるか正直分からない。だが……目の前の王を見てレオとエリカ、幹比古と美月、そしてセリアが目を見合わせて頷くと、二人の前に立った。
「悠元、先に行け！」
「ここはあたしらがきっちり片付ける！　悠元に沓子ちゃん、しっかりやんなさいよ！」
　何の勝算もなしに立ったとは思えない……レオとエリカの自信に満ちた言葉を聞いて、悠元は沓子を抱きかかえて自己加速術式で少女の横を一気に駆け抜けた。その光景を少女は目もくれることなく、視線をレオとエリカに向けていた。
（この状況だと、流石に「レーヴァテイン」があっても「エクスカリバー」には太刀打ちできない。せめて援護だけでも……これって、二人のＣＡＤに霊力が収束しているの？）

幹比古は美月の守りに就き、セリアは二人の援護をしようとも考えたが……セリアは二人が持っているデバイスの異常な霊力の高まりに気付いた。それには少女も気付いたようで、笑みを見せていた。
「よろしいのですか？　貴方方がそれを抜けば、最悪人のままでいられなくなります。それでも――――」
それは紛れもない少女の忠告。人であった彼女なりの親切。この期に及んでなのは虫のいい話だろう。だが、それをレオとエリカは一蹴した。
「んなこと、百も承知だ。元々人間のままでいられるかどうかも分かんねえ……けど、ダチと約束した以上は守るって決めたんだ！　誰にも文句は言わせねえ！」
祖父から聞いた話。そして、その血を受け継ぐ俺の遺伝子が理性に対して牙をむくかもしれない。だが、今は送り出した友との約束を果たすため……そして、こんな自分と向き合ってくれている大切な人を悲しませないために。
そして、パラサイト事件での戦闘経験が自分自身に強さへの渇望を与えた。
極めつけに、全貌も見えないこの世界へ飛ばされるという経験で、俺は明確に「力」を欲した。せめて目の前の誰かを傷つけずに守り切れる力を。
「あたしはね、こう言っちゃなんだけど、悠元に勝ちたいってずっと思ってた……でも、今は違う。勝てないのならば、せめて幼馴染の背中を守ってやれる剣士になってやるって決めたのよ！」
魔法師としても剣士としても数段先を行く幼馴染。そんな彼に羨望を抱いたのは言うまでもない。だが、どうあっても届くことのない高い壁に一度は挫折しかけた。だが、彼はその高みへの道筋を見出してくれた。
私は決めた。せめて幼馴染の足を引っ張らないぐらいの実力が欲しい、と。
そして、自身よりも一歩先を行っている恋人に負けたくないという負けず嫌いの性格が、私に「力」を欲する結果となった。

二人のその決意に呼応するかの如く、「ジークフリート」と「疾風丸」を起点として彼らの想子光と同色の光の嵐が巻き起こる。

かの剣士はかつてこう言った。

――――剣と力は己が続きに在るもの。あくまでも剣士が振るうのは己の「魂」と「意志」。

その魂と意志を刃の形としたのが新陰流剣武術の秘術である「心刃（このは）」であり、その極致にあるのが想子と霊子を実像化する護人の秘術「天刃霊装（てんじんれいそう）」。だが、その「天刃霊装」には更に段階があり、武装を実像化させる始解（しかい）……そして、その実像化した武装の心を承伏させることで発現する七聖抜刀（しちせいばっとう）。

本来ならば「心刃」を習得するだけでも最低２０年、天刃霊装の始解を会得するならば更に２０年を必要とする……と言われるほどに、その技術の難易度が極めて高いことが窺える。天刃霊装を編み出した神楽坂家（安倍家）三代目当主でも、修得した当時は５０歳目前であったと手記に書かれていたほどだ。

だが、悠元から教わった技術と貰い受けたＣＡＤ、濃密とも言える新陰流剣武術の鍛錬が二人に天刃霊装への道を指し示した。己の魂そのものを研鑽することなど、現代魔法を使うことの多い魔法師にとっては未知の経験なのだろう。魔法科高校に通うだけでは得られなかった力……それが各々の中へ確かに受け継がれた。

『レオンハルト、呼ぶがいい。我が剣の名を』

『叫びな、エリカ。オレの剣の名を！』

魔法結晶の守護霊（サーヴァント）――「ジークフリート」と「モードレット」の力を借りる形ではあるが、レオとエリカは己の脳裏に聞こえてきた天刃霊装の真名を叫ぶ。

「俺は強くなれる。いや、強くなってみせる……唸れ、幻想大剣（バルム）・天魔失墜（ンク）!!」

「エクスカリバーだか何だか知らないけど、あたしらはアンタをぶっ飛ばして悠元たちに追いつく。来なさい、燦然（クラ）と輝く王剣（レント）!!」

その嵐が吹き飛ぶように収まると、レオの手には漆黒を基調とした大剣――「バルムンク」が握られ、エリカの手には白銀の騎士剣の

武装――――「クラレント」が握られている。だが、そのいずれもが女性の持つ「エクスカリバー」とは異なり、現代の銃器のような機構を備えていると思しき武装。その使い方は彼らの脳裏に刻み込まれ、まるで自らの手足のように馴染んでいる。そして、自らの魔法もその武装に使えることが理解できた。

女性は微かに笑みを零しつつ、突き立てていた「エクスカリバー」を床から引き抜くと、その刃をレオらに向ける形で眼前に構えた。

「若いですね……ですが、覚悟もある。よろしい、我が騎士王の名に挑むその心意気に応じ、お相手をいたしましょう」

エクスカリバーから発せられる力の波動はレオらにも伝ってくる。だが、レオとエリカは怯むことなどなく、寧ろ剣を握る手に力が入る。こんな経験など、恐らく一生掛かっても出来ないであろう。彼らの中には、約束を守るということに加えて剣士としての矜持が少なからずあったのかもしれない。

「後ろは任せたぜ、三人とも！」

「ミキ、後ろはしっかりね！」

「あ、う、うん……それと、僕の名前は幹比古だ」

二人がＣＡＤとは異なる武装を手にしたことに驚きつつも、幹比古はいつもの口調と共に気を引き締めた。その時、幹比古は気付いていなかった……悠元に渡されたＣＡＤが微かな光を放ったことに。

朱に交われば赤くなる

自らを「騎士王」と名乗った少女。そしてＣＡＤはおろか現在の物理法則を完全に無視した武装を手にしたレオとエリカ。その光景を緊張した面持ちで見つめる幹比古やセリア、そして美月。ここで美月が眼鏡を外して少女を見た瞬間、膨大な量の精霊が彼女を纏っていることに気付く。

「吉田君。あの子の周囲に膨大な量の精霊が」

「うん、どうやらそうみたいだね（セリアが口にしていた武器の名前を疑ったわけじゃないけど、あれだけの精霊を制御しきるなんて芸当は最早人間業じゃない）」

幹比古がセリアのことを呼び捨てにしているのは交換条件を提示されたからで、それが受け入れられない場合はエリカと同じように「ミキ」と呼ぶと宣言されたからだ。

〝竜神〟による膨大な量の演算情報や、達也のＣＡＤによってほぼフル稼働状態での魔法演算を経験し、更には悠元の想子制御訓練を積んできた幹比古からしても、視線の先に映る少女は「エクスカリバー」を介する形で精霊を御しきっている。

美月と幹比古のやりとりをセリアは微笑ましく見ていたところで、剣を構えている三人の姿が消えて戦闘が開始された。

「ほう、やりますね」

「……アンタのその物言い、なーんかうちのバカ兄貴みたいで癪に障るわね!!」

今まで太刀を中心に握ってきたエリカからすれば、両刃の騎士剣を振るうなど未知の領域のはず。だが、「クラレント」は今まで使ってきたデバイスと同等……いや、それ以上なのかもしれないとエリカは感じていた。何せ、エリカが積み上げてきた千刃流の技をほぼ十全に生かすことが出来ると感覚で理解していた。

尤も、いくら身内に警察官がいるとはいえ銃器を扱ったことのないエリカからすれば、「クラレント」に搭載された銃形態――――刃が縦に分割することで中央に内蔵されたショットガンタイプの銃口が展開

される仕組みで、柄に相当する部分の持ち手にあるトリガーを用いて攻撃する――――をまともに使えるかは内心怪しかったが、それですらも知識としてインプットされたことには苦笑を禁じえなかった。
最も得意とする自己加速術式――――悠元の想子制御技術によって昇華した「アクセル・ブースト」と呼ばれる身体能力強化術式を用いて切迫するが、騎士王はまるで剣の軌道が分かっているかのようにエリカの「クラレント」と切り結ぶ。
ここに、レオが「バルムンク」を「エクスカリバー」めがけて振り下ろす。騎士王は2つの剣によって足が接地している地面に亀裂が走るが、2つの天刃霊装を受け止めつつもパワー負けしていない。これには幹比古が驚いていた。
「二人の攻撃を受け止めただって……セリア、君が言っていた『エクスカリバー』ってどういうものなんだい？」
「あれは神造兵器。簡単に言えば神が造ったとされる神剣の中の神剣だよ。あんなのが現実の世界にあったら、世界中の連中がこぞって奪いに来るだろうね」
尤も、「エクスカリバー」自体持ち主を選んでしまう代物のために大半の人間が選ばれることなどないだろう。もしその剣が達也を選んだとなったら、魔王に神剣という珍妙な光景が出来てしまうわけだが。
レオとエリカ、騎士王が一度距離を取るとレオとエリカは身体強化術式で騎士王に切迫する。だが、騎士王は必要最低限の動きで二人の猛攻を凌いでいた。まるで、何かを待っているかのような雰囲気を感じ取ったセリアが、騎士王の動きが変わったことに真っ先に気付いて幹比古に声を掛けた。
「ミキちゃん、攻撃が来るよ！」
「分かってる！　それと、僕の名前は幹比古だ！」
騎士王が「エクスカリバー」を構えると、周囲の精霊がそれに呼応して黄金のオーラを発する。それはまるで、黄金色に実った麦畑を思い起こさせるかのような情景を連想させるが、彼女の握る「エクスカリバー」の異常な霊力の高まりにセリアはわざと幹比古をあだ名で読

んで警戒を強めさせた。
騎士王が「エクスカリバー」に込められた霊力を解放した刹那、光の斬撃が部屋全体を襲う。天刃霊装を持つレオとエリカは何とか身体強化で躱し切れている。騎士王にも矜持のようなものがあるのか、距離を取っている幹比古や美月、セリアには一切攻撃しなかった。
だが、騎士王の激しい攻撃は天井にも及び、とうとう「エクスカリバー」の攻撃に耐えきれずに天井が崩壊してしまう。瓦礫を吹き飛ばす最も早い方法は移動魔法を使うことだが、それではレオとエリカにダメージが及ぶ可能性がある。
（どうすればいい……僕の実力だと柴田さんとセリアを守るので精一杯……いや、そもそも凌ぎ切れるかどうかも）
すると、その時幹比古の手首に付けていたもの――悠元から貰ったリストバンド型のＣＡＤから光が発せられた。それと同時に、幹比古の脳裏に声が響く。
『――問おう。お前は力が欲しいか？』
『……もしかして、レオやエリカの力と同じようなものかい？』
『概ね間違いはない。だが、今はそんな問答などしている場合ではないだろう？　改めて問う。お前は、力を望むか？』
その声に驚きはしたが、幹比古も悠元という論外の存在の影響を受け続けてきたためか、そこまで動揺はしていなかった。それを確認したかのように、若い男性の声は言葉を続けた。
かつての自分なら、間違いなく嬉々として力を欲した。だが、その驕りが自らを苦しめたことは幹比古自身が一番よく理解している。悠元との再会もそうだが、達也との出会いによって力を研鑽するようになったことは、幹比古にとって一番のプラスとなったことは確かだ。
過ぎた力は己を滅ぼしてしまう。だが、力を振るうのに最も必要なのは己の意志に他ならない。「エクスカリバー」の剣を持つ騎士王によって仲間が危機的状況にある今、幹比古の選び道は一つであった。
『――僕が望むのは、僕の大切なものを守り切る力だ。その過程で相手を傷つけることがあるかもしれない。けど、何かしたいときに何

も出来ずに後悔なんて絶対にしたくない』
『……聞き遂げた。我が名は諸葛孔明（しょかつこうめい）、これより汝の力となろう。叫べ、我が魂の剣を』
　三国志において名の知られた天才軍師の一角。それに驚きはするものの、幹比古は表情を引き締めた上でリストバントＣＡＤを身に着けた左手を前方に翳した。
「――来い、『天鳳扇（てんほうせん）』！」
　次の瞬間、幹比古の手には自身が所持している古式魔法用の鉄扇より一回り大きい代物が握られていた。扇面には古式魔法のものより複雑な術式の魔法陣が刻まれており、通常のものより厚い扇面の間には機械的な機構が備わっている。
　幹比古はこの状況で最も適した魔法を「天鳳扇」に込めると、緑に輝く光が「天鳳扇」の扇面に刻まれた魔法陣に流れ込んでいく。
「みんなを守れ――『天嵐（あまあらし）』！」
　吉田家に伝わる精霊魔法――本来は龍脈の把握や時間を掛ける形でないと発動できない風属性の『天嵐』を発動。幹比古だけでなく、美月やセリア、そしてレオとエリカの周囲に球状の風の障壁を展開して瓦礫を弾き飛ばしていく。
　天井の崩落が収まったところで『天嵐』を解除した幹比古は「天鳳扇」を思わず見つめていた。
「……常識を破壊されるのは悠元で慣れっこのつもりだったけど、僕もまだまだだな」
『……あまり毒されるのもどうかと思うぞ』
　幹比古の口から零れ出るように呟かれた言葉に対し、諸葛孔明はまるで溜息でも出てきそうな口調で幹比古を窘めたのであった。
◇　◇　◇
　時を同じくして、達也と深雪、雫と姫梨は城の城下町らしき場所を歩いていた。ほのかもそうだが、悠元らの手掛かりが掴めないのは想定外だった。そもそも、達也が「精霊の眼（エレメンタル・サイト）」で見ようとしたとき、本来情報次元を視る時よりも明らかに膨大な負荷がかかってしまうのをすぐに理解して発動をキャンセルした。

それは深雪に対する監視のリソースにも影響を与えているのが深雪にも感じ取れたため、負荷軽減のために『誓約(オース)』の解除をしている。
「お兄様、どうして魔法の使用を限定されているのですか？」
「どうやらこの世界は、物理次元でも情報次元でもない摂理が働いているみたいだ。先程の戦闘でも『雲散霧消(ミスト・ディスパージョン)』を使用したが、建物などの構造物が照準を外されてしまっていた」
この現象は達也がリーナと対決した時に『仮装行列(パレード)』による魔法照準を外された経験や、体術の鍛錬で八雲の幻術を見ていた時に酷似している。あれらはあくまでも一個人という限られた範囲でしかなかったが、この世界では構造物全体にその性質が適応されている。そのため、壁を乗り越えていくことは出来ても壁を『分解』するという手法が取れない。
「手掛かりがあるとすれば、あの城のようだが……あれは、安土城(あづちじょう)か？」
「現実世界にはない城があるとするなら、今回の一件は悠元の言う通り、小火程度ではありませんね」
「まあ、今の状況からして普通じゃないわけだし」
「そうね、雫……っ！　来ます！」
達也らの眼前――――地面に展開する真紅の魔法陣。そこから生えてくるように出現する漆黒の甲冑を纏った武士。彼らの手に持っている刀や槍は見るからに真剣そのものという他なく、彼らの表情は仮面のようなもので覆われていて表情は伺えないが、目が不気味に赤く輝いている。
「この状況だと、躊躇っていられないね。来て、『グラーフアイゼン』」
「そうですね……唸れ、『クラールヴィント』」
「凍てつきなさい、『宵時雨(よいしぐれ)』」
雫の天刃霊装――――機械仕掛けの鎚である「グラーフアイゼン」、姫梨の天刃霊装――――十字槍の基本形状を持つ「クラールヴィント」、そして深雪の天刃霊装――――マグナムタイプの二連装の銃口を備えた二刀流の小太刀型武装「宵時雨」。

雫が念じると、目の前にいくつもの鉄球が実像化し、その鉄球を雫は「グラーフファイゼン」の打撃面で打ち飛ばしていく。その鉄球には「グラーフファイゼン」を通して雫の『共振破壊』が付与されており、武士の甲冑をまるで紙屑が如く砕いていく。

それでも食らいついてこようとする武士に対し、姫梨は「クラールヴィント」に風を纏わせ、刃先が分割することで内蔵されている銃口が展開。風の天神魔法を纏った超高速の砲弾が武士を貫く。

そして、深雪は自己加速術式と飛行術式を用いて宙高く舞い上がると、「宵時雨」から自らが得意とする水属性――氷結魔法の魔法弾で武士を急速冷凍し、懐に飛び込み小太刀の刃で武士の甲冑を斬り裂いていく。

これでは守られている側だな、と達也は内心で呟きつつ「トライデント」を構えて『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』で動けなくなっている武士たちを分解していく。武士の存在が確認できなくなったところで三人が天刃霊装を解除すると、深雪は達也の元に駆け寄った。

「お兄様、お怪我はありませんか？」

「ああ、深雪たちのお陰で無傷だよ。正直に言えば、女性に守られているというのは男としてどうかとは思うが」

「言いたいことは分かりますけど……ひとまず、城の中に向かいましょう」

「だね」

四人が城の本殿の入り口に踏み込むと、何かの波長を感じとった。明らかに想子によるものではなく、どちらかといえば霊子に近い波長なのは直ぐに理解できた。すると、深雪が達也の手首に付けているＣＡＤが淡く輝いていることに気付いて声を上げた。

「お兄様、身に着けていらっしゃるＣＡＤが……」

「これは……（何かと〝共鳴〟しているのか？……この映像は、レオとエリカか？）」

ＣＡＤに組み込まれたものが元々パラサイトだった存在なので、何かしらの共鳴現象を引き起こしているのだろう……と、達也は結論付けた。すると、達也の脳裏にレオとエリカがＣＡＤと異なる武装――

―深雪らの天刃霊装のような武器を持って女性と相対している映像が流れてきた。
「……どうやら、レオとエリカたちも城の中にいるようだ。俺たちも――」
達也がレオ達と合流しようと提案しかけた瞬間、周囲の空間から〝色〟が消えて……まるで「エレメンタル・サイト」で情報次元を視ている時のような光景が広がっていた。その光景に驚きを見せている達也の目の前に光の球のような存在が姿を見せた。
「何者だ。これだけのことが出来る以上、只者ではないのだろう？」
『――そうですね。私は言うなれば、１０年前に貴方が喪ったもの……それを受け継いだと言うべき存在でしょう』
まるであやふやな言い方をしている女性のような声。だが、達也以外の時間を止めることからして超常的な力の持ち主なのは理解できていた。どことなく〝聖女〟のような印象が感じられる……憶測でしかない以上、その詮索を差し控えた上で達也は問いかけた。
「それで、何故俺以外の時間を止めた」
『貴方と話したかった、というのもありますが……貴方は「力」を欲した。その想いに私が目覚めただけの事です。心当たりがおありなのでしょう？』
「……そうだな。それは否定できない事実だ」
生まれつき魔法演算領域を『分解』と『再成』に占拠されているがために普通の魔法が使えず、仮想魔法演算領域を植え付ける際に殆どの激しい情動を司る部分が奪われた。深雪に対する激しい情動だけが残され、深雪を守るための存在でもあり、深雪が俺の枷となってしまった。
このままガーディアンとしての人生を送ることも仕方がないと思っていた俺は、悠元と出会ったことでその価値観に疑問を投げかけた。本人は「そんなことなどしていない」と言うだろうが、深雪から「友人になりたい」と聞いたときはその提案を受け入れてもいいような気がした。
魔法師としては、間違いなく世界最強の名に恥じない実力を持つ悠

元。その悠元と手合わせや鍛錬をしていくうちに、同じ男として負けたくない感情が芽生えていた。心の大半を書き換えられた俺に感情が芽生えるなど……とは思ったが、そんな非常識なことをやってのけるのが俺の親友でもあった。
「俺は、ガーディアンとして深雪を守る役目を背負った。叔母上が何を考えているのか大体察しはつくが……それはこの際置いておく。自分の役目を全うするためではなく、俺は悠元に並びたい。彼が俺を親友と認めてくれたからこそ、それに恥じない人間となりたい」
だから、力が欲しい。妹だけではなく、自分にとっての親友やクラスメイトも含め……そして、こんな自分を心から好いてくれている人たちの為に。この世界から脱するための力を。
達也の言葉を聞き、光の球は姿を変え――――煌びやかな金色の髪を靡かせる武装した女性は、達也の前に立って両手を達也の頬に添えると、自らの額を達也の額に当てた。
――――その願いを聞き届けましょう。我が超常なる力――――『交差する機械仕掛けの運命（クロス・エクセリオン）』
眩い光が収まると、達也は〝色〟の戻った空間に戻ってきていた。先程ＣＡＤから放っていた光も収まっていたが、達也は自身の中に力が芽生えたことをハッキリと感じ取っていた。達也が意識を集中させると、彼の両手に「トライデント」とは異なる重厚なオートマチックタイプの銃が握られていた。
これには周囲の人間が驚きを見せているが、深雪は笑みを見せていた。
「流石お兄様。とうとう天刃霊装を会得されたのですね」
「悠元や深雪のように自分の努力で至ったものではないがな。だが、悪い気はしない」
達也は手に握った武装――――右手の「クロス・エクセリオン」を構えて引き金を引くと、奥から迫ってきた武士が瞬く間に分解された。達也は武士に対して『ミスト・ディスパージョン』を使ったが、「トライデント」を介した時よりも霊的な存在を捉えやすくなっていることに内心驚いていた。続けて引き金を引いていくが、武士は何の抵抗も

出来ずに消え去っていく。
（どうやら、俺が徹甲想子弾でやっている処理を自動的にしてくれているようだが……怠けない様に気を引き締めないとな）
　元々図に乗るような性格ではないが、この力に溺れない様に自らをより律する必要がある……達也は武士の気配が消えたのを確認して「クロス・エクセリオン」を解除すると、「トライデント」を再び手に取った。一行はそのまま最奥の階段を駆け上がり、上層へと急いだ。
◇　◇　◇
　悪戯心と言うか、常軌を逸しているような出来事ばかり起きている。〝試し〟と口にしていたが、一体誰の試しなのかも分からない。資格と言ってもさっぱりだし、そもそも沓子がその対象ならば今までの「水鏡の儀式」で引っ掛からなかったのが気に掛かる。
「悠元、一体どこまで続くのじゃ？」
「さてね。それはこの次元を構築した奴の気分次第だ」
　階段を上がった先に広がるのは長い木板の床。自然の常識から逸脱した木の板に目をくれている暇もなく、罠を警戒しつつ感覚で大体５００メートルぐらい進んだ二人の前には障子の襖が一つ。特に鍵が掛かっているわけでもないが、悠元は「叢雲」を展開して襖をまるでバターでも切るかの如くバラバラにした。入っていきなり罠でした、なんて意地の悪い仕掛けも想定したからこその行動だが、その先に広がる光景に悠元と沓子は目を疑った。
「……どうなってるんだ？」
「わしが聞きたいぐらいじゃ」
　悠元と沓子の目の前では、燃え盛る寺の前で刃を交わす二人の人物の存在があった。一人は黒を基調とした軍服とマントを纏った少女で、刀を振り回しつつ宙に火縄銃を実像化させて相対する相手に向けて銃弾の雨を浴びせている。もう一人の人物はフードで頭部が隠れているが、手に持った槍で少女を貫こうと狙っている。しかも、少女の放った銃弾を躱していないのに弾そのものが〝避けている〟という有様。ここで悠元は少女のほうの家紋を見て心当たりがあった。
（あれは織田家の家紋？　となると、本能寺？　いや……光秀があん

な恰好をするとは思えんが……）
　ここで、悠元と沓子は何かが振動していることに気付く。最初は目の前の戦闘による衝撃波かと思ったが、それにしては明らかに威力とかけ離れた振動。それが更に増して大地震のような様相となり、戦闘をしていた二人も手を止めて振動に慌てていた。すると、少女が悠元らに気付いて声を上げた。
「お、お主等！　これが何なのか知らぬか!?」
「知るわけないでしょう。俺らだって今しがた来たばかりですし……沓子、悪いが捕まってろ」
「ふえっ!?」
　沓子が悠元に抱きかかえられた直後、床に巨大な亀裂が入って崩れていく。本来助ける義理はないのだが、目覚めが悪いと感じて「ワルキューレ」で『ファランクス』を発動させて自分を含めた四人を崩落による影響から防いだ。床のみならず、燃えていた寺から飛んでくる火がその直下にも燃え広がる。その直下――悠元が通り過ぎた王の間なのは間違いなく、まるで崩壊寸前の王国の様相を呈していた。『ファランクス』を解除したところで悠元は沓子を下ろすと、「叢雲」を素早く展開して近寄ってくる敵意――「エクスカリバー」を振り回す少女の剣を受け止めていた。
「いきなりなご挨拶だな」
「流石ですね。ですが――」
「悠元、そこを退いて！」
　悠元が近くにいた沓子を担いで素早く飛び退くと、「クラレント」で切迫するエリカ。その後方からレオが「バルムンク」を銃撃モードに切り替えて砲弾を放つ。エリカはレオの射線へ誘導するように弾き飛ばすが、少女は「エクスカリバー」で砲弾を斬り裂いた。状況からするに、上層の床（この空間の天井ともいえるが）を破壊したのは少女の「エクスカリバー」なのは間違いない。よく落ちてくる瓦礫から生き残れたと思ったが、その理由は幹比古にあった。
　天井が崩落するその瞬間、幹比古が天刃霊装「天鳳扇（てんほうせん）」を発現して風属性の精霊魔法『天嵐（あまあらし）』で自身を含む五人を守り切った。これには

幹比古自身も驚きを隠しきれなかった。そもそも、天刃霊装自体最後に発現したのが９００年以上前なので仕方のないことだが。
　レオとエリカが騎士王と戦闘している状況で呑気な事など言えないが、悠元は先程上層で戦っていた二人に向き直った。
「先に行ったのに、結局はとんぼ返りとなったわけだが……そこの二人に聞きたい。お前らが沓子を呼んだ声の正体か」
「うむ。ワシは第六天魔王、織田信長じゃ！」
「ご明察です。毘沙門天の加護を受けし者、長尾景虎といいます」
　上杉謙信の女性説がある以上は後者も何となく受け入れることが出来る。だが、目の前にいる前者が織田信長の名を名乗ったことに頭が痛くなりそうだった。
　事情を聞いたところ、最初は信長（と自称する少女）が沓子を呼び寄せようとしたのだが、そこに乱入した形となった景虎によって心象次元（しんしょうじげん）――――俗に言う〝心象結界〟自体が歪んだ結果、レオ達と戦っている「エクスカリバー」を持った少女ことアルトリア・ペンドラゴンが実像化してしまった。つまるところ、こいつらが今回の一件をややこしくした要因といっても過言ではない。
「アイツらも天刃霊装を会得して相当強いのに、それですら決めきれないとか……お前らを斬れば消えるか？」
「その、実は……」
「それはやめてくれ！　ワシらを斬っても消える保証などないんじゃ！」
「は？　どういうことだ？」
　信長が言うには、アルトリア自体想定外（イレギュラー）の存在の為に心象次元の制御から外れてしまっている。このまま心象次元を解除してもアルトリアと「エクスカリバー」が情報次元に残る形となり、最悪物理次元と物質次元を接続する「楔」になりかねない。つまり、ここで倒さなければパラサイトが現実世界に溢れ出るということになる。
「……貸し一つだ。利子は高くつくから覚悟しとけ」
　悠元は息を吐いて、その場から瞬時に消えたかと思うと「叢雲」で騎士王の「エクスカリバー」と切り結んでいた。一度距離を取ったと

ころで騎士王はまるで楽しそうな表情を垣間見せていた。
「彼らも決して弱くはない……あそこまで鍛え上げたのは、貴方がいたからのようですね……赤髪の彼女が言っていた名は、悠元でしたか」
「……正直なところ、こんなにも早く使う羽目になろうとは思わなかった。だが、お前を倒さないと俺らの世界がヤバいことになると分かった以上、躊躇いも手加減もしない」
悠元がそう口にした直後、悠元の周囲から膨大な量の霊気が巻き起こる。これにはレオとエリカも攻撃の手を止めるほどであった。白銀に光り輝く霊気が「叢雲」に注がれ、まるで光の太刀のような姿へと変化していく。そして、「叢雲」の霊気が満ちたことを感じた悠元は、静かにその名を呼ぶ。
「――――祝え。そして冥土の土産に持っていけ、騎士王アルトリア・ペンドラゴン。お前が此奴の初お披露目となることを。天元を抜き放て、『天叢雲(アメノムラクモ)』」
一瞬にして部屋全体に満ちる光。まるでカメラのフラッシュのように一瞬の光が収まると、悠元の手に握られていたのは銃の機構の一部を取り入れたような機械仕掛けの太刀。白銀に煌めく刃はエクスカリバーと同じように神々しく光り輝いている。悠元の天刃霊装、その七聖抜刀形態である『天叢雲』。
「さあ、死合おうか騎士王……尤も、勝つのは俺だ」
「……その言葉、そっくり返して差し上げましょう!」
悠元とアルトリアが力強く一歩を踏み出した瞬間、互いの刃がぶつかって激しい衝撃波が巻き起こる。今ここに、規格外(イレギュラー)同士の戦いが幕を開けた。

その時、僅か1分

悠元とアルトリアの戦い。それは最早人という次元の戦いではなく、普通の人から見れば衝突音と剣劇――金属がぶつかる音、それに伴う衝撃波しか見えない。アルトリアの振るう「エクスカリバー」はとても女性の腕力から想定できない威力を有するが、それに追随している悠元も「天叢雲」で互角の戦いをしている。

「……凄いわね」

「ああ……」

今までアルトリアと2対1で戦っていたレオとエリカですら、今の悠元の戦いには見ていることしかできなかった。だが、レオもエリカも天刃霊装を解除せずに警戒はしたまま。それは、悠元がアルトリアへ歩み寄る前にレオとエリカを見やった目が物語っていた。

確かに彼は〝死合う〟と口にしたが、正々堂々の勝負をするとは一言も発していなかった。この状況を脱するには、レオとエリカを含めた協力が必要だと算段を弾いた上でアルトリアとの勝負に挑んでいた。

明らかにエリカの身体強化術式よりも精度の高い速力で切迫する。レオとエリカの二人掛かりで戦っていた時よりアルトリアも剣を振るう速度が増している。人智を超えた先の戦いとは……多分こういうことを言うのではないのかと思ってしまったエリカであった。

その衝撃波は空間全体に連続して発生しており、イメージするならば九校戦の新人戦女子スピード・シューティングで雫が使った『アクティブ・エアーマイン』のように豪快な波動が響き渡るような印象に近かった。

「……『アリス』、いくぞ」

『心得ました、我が主』

悠元は小声で「アリス」に対して呟くと、悠元と「アリス」の同調（シンクロ）が発動して悠元の瞳が金色に輝く。悠元の記憶が持ちうる想像上の能力の一端――人間が持ちうる力のリミッターを解除し、使用時間を敢えて限定することで数十倍の身体強化を可能とする『一刀修羅（いっとうしゅら）』。

本来1分に限定する使用時間を延ばすこと自体使用者にも多大な負担を強いるが、それを『再成』で補うことによりほぼ無制限で使用可能となった。

アルトリアは袈裟斬りを繰り出すが、それをすり抜けるがごとく悠元がすれ違い様に振るうと、彼女を身に着けていたマントが床に落ちた。レオやエリカですら傷一つ負わなかった彼女の装飾品を落としたことに、アルトリアは笑みを零した。

「強い。実に強い。これは――っ!?」

「いつまで王様気分のつもりだ、お前は」

その暇を逃すつもりなどなく、悠元は新陰流剣武術の奥義である『霊亀烈破』を放った。間一髪躱すものの、彼女の右肘から先の袖が完全に斬られる形となった。これにはアルトリアも驚愕しつつ、斬られた袖を床に落として「エクスカリバー」を握った。

城の本丸の壁が一瞬で治ったことを思い出しつつ、悠元は「天叢雲」を構え直した。

(心象次元の制御から外れている以上、装飾品の再構築や修復が出来ない。アルトリアはあくまでも「エクスカリバー」の力を振るうための道具(パーツ)でしかないという訳か)

だが、そのことに感傷など抱くつもりもなく、悠元は力強く一歩を踏み出してアルトリアに再び切迫する。アルトリアも悠元の存在に気付いて剣を振り下ろすが、剣が到達した瞬間に悠元の姿が霞となって消えた。

姿を探す前にアルトリアが脇腹に痛みが走り、咄嗟に「エクスカリバー」を突き刺して堪えた。その悠元はというと、横を通り過ぎたはずが目の前に立っていた。

「何故、それ程の強さを持っていながら……貴方は王となろうとしないのですか?」

「興味がないからだ。過ぎた力で統べても、結局は自滅するだけだ」

世界最強という称号に興味はないし、世界統一なんてする気もない。相手が礼を以て接するのならば礼儀正しく対応するし、敵意を以て襲ってくるのならば完膚なきまでに叩きのめす。自分の魔法が世

界のバランスを壊してしまうと理解しているからこそ、必要以上の干渉はしない。それが、他でもない俺――――神楽坂悠元の決めた道である。
「ならば……貴殿が目指すその道、押し通してみせよ!!」
アルトリアは床から「エクスカリバー」を引き抜き、頭上に構えた。持てる力の全てを用いての「エクスカリバー」による光の斬撃。食らえばひとたまりもないだろう……悠元は一息吐いた後で、「天叢雲」を構えて霊気を収束させる。
「レオ、エリカ。いけるか？」
「おうよ」
「寧ろ、ここで踏ん張らないとあたしらの世界がピンチなんだもの。やってやるわ！」
レオは「バルムンク」を、エリカは「クラレント」に自らの魔法の力を収束させる。なお、沓子らは幹比古の張る結界の後ろに移動している。
「さあ、受けてみよ。エクス、カリバァァァァッ!!」
アルトリアの全力を以て放たれた光の奔流。それをレオとエリカが各々の天刃霊装で迎撃する。
「いくぞ、『幻想大剣・天魔失墜（バルムンク）』!!」
「いくわよ、『我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）』!!」
ほぼ同時に放たれた光の奔流でも、「エクスカリバー」がやや優勢。だが、悠元はまだ動かない。何故ならば、ここに頼もしい援軍が駆け付けたからだ。
「エクスカリバー」の光の奔流が突然消えた。これにアルトリアが驚く暇もなく、飛来する鉄と風、氷の銃弾の嵐が降り注ぐとともに、「エクスカリバー」の攻撃が無くなったことで押し止められていたレオとエリカの攻撃がアルトリアを襲う。彼女はエクスカリバーを盾にするように攻撃を凌ごうとするが、身体総てをカバーできるわけでもなく、攻撃の余波によって多くの切り傷を負う。
光の奔流が途切れたことで安堵したアルトリア。だが、ここで一人の人間の存在を一瞬でも忘れてしまったことが彼女に隙を生んだ。

「――――っ!?」
「終わりだ、騎士王」
――――新陰流剣武術が一之太刀（ひとつのたち）、夢想覇斬（むそうはざん）
新陰流剣武術において唯一無二の一撃必殺に主眼を置いた奥義。かの剣聖こと塚原卜伝（つかはらぼくでん）の奥義「一之太刀」は、新陰流剣武術において型が無き奥義として形成された。
剣の形は変幻自在。故に各々の真に極めた一撃必殺の技こそが「一之太刀」。悠元は自らの技に無から有を生み出す意味を込めてその名を付けた。そして、「アリス」との同調で発動している『一刀修羅』を斬撃の刹那に収束させて数千倍の威力を叩き出す『一刀羅刹（いっとうらせつ）』に収束。誰にも止められること無き刹那の刃は、神に造られた剣を斬り、それを握ったアルトリアの体に斬撃を届かせるに至った。
斬られた「エクスカリバー」の刃は床に突き刺さり、刃を断たれた剣を持ったまま地に倒れたアルトリアを悠元は静かに見守っていた。彼女は薄れゆく視界の中、悠元の姿だけはハッキリと捉えていた。
「お見事でした。我が剣を斬るという所業……これほど満足したのは、何時ぶりでしょう……」
それは剣を引き抜いて王に選ばれたときなのか、心ある多くの部下を得た時か……それは、彼女の記憶を遡ってもハッキリしなかった。
彼女自身、勝つこともあれば負けることもあった。だが、「エクスカリバー」を斬った者など今までに誰もいなかった。神が造りし勝利を約束された剣を破るなど、最早神業以外の何物でもない。それを、目の前にいる少年が成し遂げた。
「最期に……貴方の、名を……」
「神楽坂悠元。お前のことは忘れない、騎士王アルトリア・ペンドラゴン」
アルトリアが瞼を閉じた瞬間、黄金の光がその空間を瞬く間に満たしていた。その中で……消えていく彼女は、充足感に満ち足りたような表情をしていた……そんな気がしたのだった。
それと、悠元の脳裏に一つの言葉が聞こえた。それは、間違いなく空耳などではない感謝の言葉であった。

――ありがとう。
何故、感謝の言葉を投げかけられたのかは正直分からない。結局はこちらの都合で倒したことに変わりはない。
もしかしたら、彼女は消滅の間際に自身の役目と自身の存在がこの世界によくない結果を齎すと悟ったのかもしれない。その意味も含んだ感謝の言葉……だったのかもしれない。
◇　◇　◇
凡そ数秒……数分にも感じられたほどの黄金の光。それが収まると、悠元らは「水鏡の儀式」の場所――奥宮に戻ってきていた。すると、ほのかが達也に抱き付いていて、佐那が幹比古に声を掛けていた。
「達也さん、大丈夫ですか!?」
「あ、ああ。平気だから、ほのかも落ち着いてくれ」
「幹比古、怪我はしていませんか？」
「う、うん。できれば離れてくれると助かるんだけど」
どうやら、ほのかと佐那、そして水波は鏡の先――心象次元に入ることなく奥宮に残ったままとなり、慌てふためくほのかを佐那が宥めつつこちらの帰還を待ってくれていたようだ。そして、経過時間はというと……佐那の体感で1分ぐらいであったらしい。「霊水鏡」は儀式の役目を終えたのか、すっかり光が消えていた。
「あれだけのことしてたった1分って……夢だったって思いたいけど」
そう呟きつつエリカは「クラレント」を展開した。この武装で今までの出来事が夢ではないと現実を見せられる羽目となったのは言うまでもないが。すると、佐那が驚きの声を上げた。
「エリカ、天刃霊装を会得したのですか!?」
「あー、うん。裏技みたいなもんだから、悠元のようなものとは言い難いけど。コイツやミキもそうね」
「僕の名前は幹比古だ。にしても、あの光の奔流を消したのは達也なのかい？」
「事実としてはそうなるな。ただ……」

アルトリアの光の奔流を消したのは達也が「クロス・エクセリオン」を介して『術式解散（グラム・ディスパージョン）』を放った結果らしい……それだけでも十分に神業だと思う。いや、魔王染みた所業というのが正しいのかもしれない。

達也を皮切りに、周囲の人々の視線が悠元に注がれる。これには流石の悠元も苦笑を滲ませていた。達也らが天刃霊装を会得する切っ掛けを作ったのは紛れもなく自分自身なので否定など出来ないが。ちなみにだが、深雪は目を輝かせていた。

「それ以上は言わないでくれ。やったら出来たというのが正しいし……ん？」

すると、悠元は自分のポケットに何かが入っていることに気付くと、手を入れて取り出した。それはサイコロ状の結晶が2つ……しかも、この結晶から感じられる力が「アリス」と似ていることからして、守護霊（サーヴァント）絡みなのは間違いない。恐らく織田信長と長尾景虎の可能性が最も高い。

原作のこともあるのに、面倒事はこれ以上増えないでほしい……と内心で呟いた悠元であった。

◇　◇　◇

事態は無事解決を見た形となった。沓子のことについては暫く経過観察だが、世界の危機を救う羽目になるというファンタジー要素はこれっきりにしてほしいと思う。水奈子に事態の解決と「霊水鏡」を返却し、詳しい内容を全て話しておいた。ただ、2つの魔法結晶については四十九院家で扱い切れる範疇を超えているために神楽坂家というか悠元が預かることとなった。

「ねえ、悠元……」

「諦めろ。こうなった以上はどうにもならん」

幹比古の問いかけに対してぶっきらぼうな口調で答えた悠元。何が起きているのかというと、四十九院家の露天風呂に男女問わずメンバー全員がいるためだ。流石に女性は湯着なのだが、男子にしてみれば目の毒になってしまうようで、幹比古が落ち着かないのはそのためであった。流石に滑りやすい場所で目隠しはできないので、悠元に関

しては気配の察知で移動する関係で瞼を閉じている。
発起人は沓子で、沓子が女性陣に色々吹き込んだ結果こうなってしまった。レオも女性陣には多少反応していたが、エリカが強引に引き離した形となった。達也はというと、ほのかが恥ずかしながらも背中を流していた。彼女の胸の大きさだと普通に当たってしまうのはお約束みたいなものだが。
「達観してるけど、何かあったのかい？」
「実家だと高度なＣＡＤの調整の関係で下着姿になるんだが、妹がな……相手を選べよと思うわ」
姉の佳奈と美嘉は下着姿（それでも勝負下着のような派手な奴が多かった）なのは百歩譲って許していたが、詩奈の場合は時折服の下に何も着ないで来て、オールキャストオフ状態で調整機のベッドに乗ることがあった。頼むからそういうことをする相手はちゃんと選んでくれと説得してようやく下着姿での計測に落ち着いた。
これで血が繋がってなかったらと思うと……思わずゾッとする出来事なのは間違いなかった。ある意味原作における達也の気持ちがわかるような気がした。
「それにしても、幹比古も天刃霊装を会得するとはな……」
「あまりおいそれとは使えないし、悠元みたいな正規の方法じゃないからね」
「正規の方法を使ったら、ある意味人間を辞めることになるがな」
悠元と幹比古の近くには、二人の関係者――深雪と雫に姫梨、佐那と美月に沓子がいた。ガールズトークに花を咲かせており、邪魔をする気にはならなかった。岩陰に隠れる形でレオとエリカが何やら話し込んでいるが、今回は『聴覚強化』で聞くのは止めておくことにした。
天刃霊装を会得する正規の方法は本来長い時間（概算した結果は最低でも１０年以上）を掛けなければならないため、現身（うつしみ）を物理次元に呼び寄せる魔導具（剛三との世界旅行でファラオの霊を除霊した時に見つけたもので、悠元以外が触ろうとすると気絶する代物）で短期集中訓練するという裏技めいた方法。そのお陰で『神将会』全員が七聖

抜刀まで持っていけたのは大きい。
だが、達也らが会得した天刃霊装は守護霊を介することで発現に成功した。守護霊の大本となったパラサイトの潜在能力の高さは恐るべきものだろう。本来は「心刃（このは）」を経由する形で会得しなければいけないだけに、その技術を会得した場合だと七聖抜刀まであっという間かもしれない。
尤も、自分の場合は「アリス」との契約前に七聖抜刀まで至っており、今回は彼女の力を想像上の能力の制御と処理を任せた形だ。
「一言だけ言えるのなら、もう少し穏便に過ごさせてほしいわ」
「それは同感かな」
とはいえ、力というものは多かれ少なかれ災いを呼び寄せてしまう。そもそも、達也という某掃除機メーカーも驚きなトラブル吸引力の高さと安定さを持つ原作主人公がいる以上、無縁などとは楽観視など出来ないだろう。

ダブルセブン編
女性との難は続くようです

西暦２０９６年４月５日、木曜日。国立魔法大学付属第一高校の始業式前日、入学式の３日前。

悠元は司波家でなく、四葉本家の屋敷――――それも、一族の人間でも出入りが厳しく制限されている当主の私室に通されていた。今頃達也は深雪に魔工科の制服を着てほしいとせがまれているのだろう、と思いながら視線の先にいるこの部屋の主こと真夜の言葉を待った。

「いきなりで大変だったでしょう、悠元君。水波さんたら、悠元君の名前を出しただけで頬を赤く染めていたのですから」

「自分はそこまで大変じゃなかったですよ。寧ろ、家事分担で深雪と揉め掛けましたが、自分が折衝案を出して落ち着きました」

掃除や洗濯、食事などの後片付けは水波が引き継いだのだが、食事やお茶の支度、更には身支度の部分となると深雪も頑なに譲れない部分があった。水波としても家政婦としての側面がある以上譲れないところがあった。

尤も、図らずして原因の一端を担っている側の人間としては、穏便に済ませてくれと妥協案を出して納得させることに成功した。

「にしても、今年は七宝家のご子息に七草家の双子……そして、十文字家の秘蔵っ子とは、中々に面白いことですね」

最初、千姫から入試の情報を貰った時は本当に驚きしかなかった(個人情報云々に関わることは目を瞑っているが)。首都防衛を担う十文字家の家風からして隠し子という雰囲気は見られなかったからだ。悠元自身十文字家の人間と面識を持っているが、克人の弟や妹はそこそこ歳が離れているため、自分が卒業した後に入学となるのは間違いなかった。

今回、悠元が連絡ではなく四葉家を直接訪れているのは、今後のことも含めた打ち合わせもあるのだが……真夜の発言に悠元は頷きつつ自身の言葉を述べた。

「こちらでも〝彼女〟の身元を調べてみましたが、遺伝的に十文字の人間だということは間違いないです。どうやら、うちの爺さんが関与したようで」
「あら、剛三さんがですか？」
色々調べた結果、十文字家の現当主である十文字和樹には妹がおり、その人物も『ファランクス』の扱いにはかなり長けていたが、魔法力の低下（恐らくは魔法演算領域のオーバーヒートによる魔法技能の喪失）で使用できなくなったらしい。そして、和樹の妹の娘も『ファランクス』を使えるという事実が判明した形だ。
これが何故最近になって判明したのかというと、彼女の両親の職業が大きく影響している。何と、彼女の両親は海軍の軍人であり、先日の南盾島での戦闘で殺された……スターズによるものなのは間違いない。
和樹はその一報を克人経由で聞いて慌てて調べた。そして、自分の身内の娘をそのまま十文字家の養女として引き取ることになり、彼女に十文字の名を与えた。精神的なショックから立ち直らせるため、そのフォローを上泉家が担った形だ。
自分の危機に迫る範疇なら調べるが、それ以外の情報収集を怠った結果なのかもしれない。そのことはともかく、結果的に克人と真由美が抜けた穴を埋める形となった。一高に通うことになる師族は三矢（悠元）、四葉（達也、深雪）、六塚（燈也）、七草（香澄、泉美）、七宝（琢磨）、九島（セリア）、そして十文字……幸いにして、十文字の女子は克人のように物静かだと聞いている。
「十文字理璃（じゅうもんじりり）、旧姓蘇我（そが）……今年度の新入生総代にして、蘇我大将閣下の親族とのことです。爺さんが取り成したのは戦友としての誼もあるのでしょう」
悠元自身も国防陸軍上の階級では特務少将の地位にあるため、内密に行われた昇進の辞令交付で蘇我と会話する機会があった。蘇我は国防陸軍における総司令官だが、制服組でありながらも新陰流剣武術の門を叩いたことのある人物であり、悠元の素性を知る数少ない人物の一人。

その折、「できることなら彼女と誼を持たせたいが、間違いなく剛三殿に叱られるな」と呟いていたのを覚えている。約半年でその言葉が現実となることには苦笑を禁じえなかった。
「それはともかく、本題に入りたいのですが……」
「そういたしましょうか。千姫さんには予め相談していますが、『悠君に判断を委ねる』と言われてしまいまして……来年の慶賀会にて、達也を四葉の次期当主候補として推挙しようと考えております。是非、神楽坂家当主として意見を聞きたいのです」
現当主である千姫が判断を下さなかった……これほど重要な内容を放り投げられることに悠元は溜息を吐きたかった。だが、これも将来の予行練習と考えればいいと思いつつ、一息吐いた上で話し始めた。
「十師族としてのルールに則るならば、達也が次期当主候補になることは問題ないと考えます。深雪に加えて文弥や亜夜子ちゃんから話を聞きましたが、同世代の四葉家次期当主候補は達也が次期当主候補となることに異論はない様ですから」
四葉の魔法師は普通の魔法師ではない、という意味合いを貫くならば達也が四葉の次期当主候補となるのも問題はない筈だ。とりわけ達也の持つ戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』の力は沖縄や横浜事変の時に立証済み。
達也への継承に問題があるとするならば、分家の現当主らが達也を恐れたり隔離しようとしていることだろう。一時期は達也を殺そうとしたらしいが……今そんなことを画策すれば、間違いなく剛三や千姫が黙っていないし、深夜が表立って動くことになってしまう。
「結果的に四葉家が十師族で浮いた存在になりますが、その辺の対処は問題ないかと思います。それと、神楽坂家としての対応ですが……最終的に不利益が生じると判断した場合のみ対処します、としか今は言えませんね」
達也が四葉家次期当主に指名され、その後押しを深雪を含めた次期当主候補たちがする以上、彼らの親でもある分家の当主達に無視という選択はできない。だが、何らかの妨害をすることは目に見えている

……つまるところ、達也の後押しをしてほしいという目論みもあるのだろう。そこから考えれば、神楽坂家次期当主指名を早めた理由も自ずと理解できる話だ。

仮に、四葉の分家当主からスポンサー命令として達也を次期当主候補から降ろせと言い放った場合、死んだ方がマシとも言えるお仕置きを課すつもりだ。四葉の分家の一つである黒羽家当主の貢とは面識を持つが、礼を以て接するかどうかは内容次第という他ないだろう。

「随分と前向きに捉えてくれているようですが、他のスポンサーの方々――――東道閣下もそのように？」

「ええ。達也の持つ戦略級魔法は扱い方を間違えると大惨事の領域を超えかねませんので……下手に俗世から隔離なんてしたら『私は危険な魔法を持っています』と自ら宣伝するようなものです」

達也を排除しようとしたり隔離したりしては連中の思う壺になりかねない。大亜連合のみならず、ＵＳＮＡや新ソ連、イギリスに加えてドイツまで巻き込んでいる以上、ここで原作主人公を外すのは明らかに不利となる。それに加えて、自分自身が更に矢面へと引っ張り出される形となるだろう。

そうなったら、企てた奴ら全員の〝黒い部分〟を漏れなく世界中に拡散させる腹積もりなのは言うまでもないが。この辺も含めた達也に関する対応は青波との会談（４月にはいってすぐに都内の料亭で行われ、青波から幹比古と佐那の後押しも頼まれている）で確定済みだ。

「それは確かに……あら、そろそろお時間のようですね」

「どうやらそうみたいですね。頻繁に来れる場所ではありませんが、時間があればまた来ます」

「ええ、いつでもお待ちしておりますわ」

今日の夜に北山邸で雫の帰国祝いと進級祝いを兼ねたパーティーがあるため、悠元は当初『鏡の扉（ミラーゲート）』で帰るつもりだった。だが、真夜が四葉家で車を出すように手配したらしく、その提案を快く呑むことにした。

時間は問題ないのかという疑問だが、悠元は前日に四葉本家の屋敷へ到着して一晩を過ごした。その際に真夜からせがまれて一緒に寝

る羽目となった。ただ寝ただけでそれ以上のことはしていない。今回はハッキリと断言できる。四葉の当主である以前に未婚の女性と寝るというのは色々な問題を起こしそうだが、この辺は葉山が漏れなく処理してくれる手筈となっている。

話が若干脱線したが、会談をしているのが朝食を終えた後。ここから車での移動なら遅くとも夕方までに司波家へ一旦戻れる形となる。悠元は真夜に対して会釈をした後、葉山の案内で真夜の私室を後にしたのであった。

◇　◇　◇

春休みに起きた２つのトラブルを乗り越え、無事に進級を果たした。原作関連のトラブルはまだしも、先日のような心象次元での戦闘は金輪際勘弁願いたい。まだ自分で対処できる範疇ならばまだしも、あれが実像化した神造武器だった場合、いくらチートじみた能力を持つ自分でも打ち破れるか疑わしい部分があったからだ。

沓子が聞こえていた声は完全に消えたことが確認され、２つの魔法結晶は暫くお蔵入りとなるのが確定した。そもそも、天刃霊装自体表立って使えない代物なのは間違いなく、表立って使う為の理由付けは千姫や剛三に投げる形とした。

水波に関しては、達也と深雪への呼び方は「達也兄さま」「深雪姉さま」という原作通りの呼び方で決着を見た。表向きは神楽坂家から派遣された家事手伝いで、実情は深雪のガーディアン。

穂波を渡辺家の養女とする際、達也や深雪と親交があった縁で水波を知っているという体になった。穂波を助けたことで水波の経歴まで偽装できる一石二鳥の儲けものになってしまった形だ。とはいえ、暫くは達也からガーディアンとしての仕事や心構えをみっちり叩き込まれるのは既定路線である。

悠元の血縁上の兄である元治と結婚している穂波が水波の叔母（厳密に言うと姉のようなものだが）にあたるため、その繋がりから経歴情報（カバーストーリー）が描かれている。なので、水波の悠元に対する呼び方が「悠元兄様」となってしまうことは妥協した。

最初聞いたときは耳を疑ったが、水波が自分に好意を持っていると

いう事実に直面することで頭を悩ます事態になったのは間違いない。深雪のことを考えれば引き込むほうがいいのだろうが、この先のことを考えると2桁になりそうな婚約者を全てフォローするとか正気の沙汰ではない。

幸いにして、非公式だが現婚約者となっている面々がお互いに気を使ってくれることで上手く取り持っているのが実情だ。その反動で婚約者の面々に甘えられることが結構多くなった。深雪がその最たる例だと思う……彼女の場合は実の母親のこともあるので尚更だろう。

夕方よりも早い時間に戻った悠元は、深雪ではなく支度を終えた達也と鉢合わせした後、しっかりとしたスーツ姿に身なりを整えた。ドレス姿に着替えた深雪は女性としての色気だけでなく、母親譲りの妖艶さも垣間見えつつあり、内心でドキッとしたのは言うまでもない。その深雪から色々聞かれてしまい、それを見た達也が溜息を吐いたのがお決まりのパターンとなりつつあった。その光景を見た水波はというと、思わず苦笑を見せていた。

◇　◇　◇

雫のＵＳＮＡ（アメリカ）からの帰国祝いと進級祝いが始業式前日となったのは、彼女の家柄が大きく影響している。国立魔法大学附属第一高校の優等生にして将来有望な魔法師という肩書の前に、大実業家の社長令嬢という顔を持っている。魔法師としての責任は個人に付随するが、社長令嬢としての責任は、家族はおろか従業員と株主と取引先にまで及ぶ。

以前……雫と上泉家で出会った直後位の余談だが、ホクサングループの保有している株式を興味本位で調べたことはある。その際、神坂（かみさか）グループ――実態は神楽坂家系列の財閥で、取り扱っている分野は多岐に上る――がかなりの割合の株式を取得している事実に気付いた。

この時に神楽坂家の存在を知ったが、東道家のようなスポンサー的存在だと推測してそれ以上の調査を止めたことがあった。よもや神楽坂家が上泉家と同格の陰陽道系古式魔法の大家ということもそう

だが、その次期当主に選ばれるとはその時の自分でも微塵に思ってさえいなかった。
話を戻すが、原作だけでも雫の肩書は十二分に凄い訳だが、そこに加えて神楽坂家現当主の妹の孫娘――――鳴瀬家の血を引き、『神将会』第七席だけでなく神楽坂家次期当主の婚約序列に名を連ねている。
婚約となっているが、既成事実を持ってしまった以上は実質的に婚姻のための正式な理由付けにしかなっていない……と思うのは自分だけなのだろうか。
いくら名目が「ホームパーティー」とはいえ、経済界の大立て者・北方潮（きたかたうしお）――――「北方潮」は雫の父親である北山潮が使うビジネスネーム――――が催すパーティーだ。雫の家族（父方の祖母、父母、弟）に加えて父親の弟や姉妹が五人いて、雫からすれば従兄弟にあたる面々が家族を連れていたり、未婚者もフィアンセや近日婚約予定のお相手を連れてきていたりしている。雫の従兄弟の殆どが年上なのは雫の父親が晩婚だった影響が大きい。
結果として、内輪のパーティーでありながらも大人数となってしまっている。この辺は悠元も以前長野佑都として参加していたことがある縁でよく知っている事情だ。
「潮（うしお）くんのお家は前世紀から続く実業家の家柄だから。蔑ろにできないしがらみも大きいのよ」
そう話すのは雫の母親である北山夫人、かつて振動系魔法で名を馳せたA級魔法師北山紅音（べにお）、旧姓鳴瀬紅音――――神楽坂千姫の姪にあたる人物。原作だと達也が捕まっていたが、雫との縁で何かと顔を覚えられたためか、悠元が捕まる形となった。
初対面の時や北山家でのパーティーに参加した時は、何かと警戒されて原作の達也のように追及されたこともあった。そのお詫びの気持ちを込めてお手製の菓子を添えた礼状を北山家に贈ったのだが、返信代わりとして掛かってきた雫からの連絡では「両親がいちゃつき過ぎて、弟か妹が増えそうな感じになってる」という言葉と共に、それ以降の紅音の態度も大分柔らかくなったらしい。
言っておくが、一般家庭で買えるごく普通の材料でごく普通の作り

方をしたクッキーに毒となりそうなものは当然として隠し味なんてものは一切入れていない。味見をしてもらった詩奈も喜んでいたので問題はないと判断した代物なのにだ。
「そもそも、今日のパーティーが内輪向けなのに、関係ない人まで呼び込むのは……そこが潮さんの人の好さからくるものなのでしょうが、と仰りたいのですか？」
「流石、雫を女にしただけのことはあるわね。にしても、あの時の冗談が本当になってしまったのには驚いたわ」
　あの時は冗談めいていた紅音の言葉には、流石にそこまでのことはないだろうと思いつつも雫の視線が熱っぽいようなものを帯びていたのは間違いなかった。ただ、雫自身もその当時は明確な恋愛感情を持っていたわけではなく、どちらかといえば漠然としたものだったのは間違いないだろう。
　これでもし魔法科高校の入学以前に明確な恋愛感情を持っていた場合、春から深雪に襲われていた可能性もあっただろう。自分の婚約者を悪く言うつもりはないが、節度と一線だけは弁えてほしいと思う。
　その深雪はというと、水波や達也も含めてほのかの許に行かせた。なお、時折鋭い視線を感じるわけだが、いくらなんでも既婚者に手を出す様な鬼畜の所業をするつもりなど微塵もない。

問い問われて返す先には面倒事

紅音の話題は雫とほのかの話題に移っていた。雫は無論だが、家族付き合いの関係でほのかに対しても娘のように思っているのは間違いない。そこには彼女自身の事情も含んでいるのは間違いないが。

「最初は悠元君にほのかちゃんが惹かれると思っていたけれど、貴方がどこか一線を引いていたのは気付いていたわ」

「彼女の事情というのもありますが、依存され過ぎるのは時として〝枷〟になりかねませんから。それに、自分自身のことは自ずと理解しているつもりです」

表向きは尤もらしい理由を述べたが、実際のところはほのかに惚れられると原作におけるいくつかの出来事に巻き込まれかねないと理解していたからこそだ。いくら自分でもピクシーに抱きつかれる未来は何としても避けたかったし、それと七宝家の長男のこともあって達也に押し付けられないかいろいろ工夫していた。

それと、ほのか曰く「流石に雫の初恋を邪魔したくないから」と少なからず好意があった事は聞き及んだが、今は達也に好意を持っていることも確認している。自分としては、「友人」としてほのかの恋路は応援したいと思っているし、雫はおろか深雪も友人の恋路を応援したいと思っている。

「成程ね。貴方の家柄なら引き込めそうなものなのに」

「強制しても意味はありませんよ。あくまでも友好的な間柄でなければ本当の協力は得られませんので。それは紅音さんが一番ご存じかと思います」

「そうね……これればかりは貴方の言う通りかもしれないわね」

こちらばかり手札を隠し続けるのは不公平（アンフェア）だと分かっているからこそ、ある程度の情報開示は〝必要経費〟だと割り切っている。すると、紅音はほのかの惚れている相手こと達也について尋ねてきた。

「その彼女が惚れている彼……司波達也君のことだけれど、彼は何者なの？」

「何者、という聞き方だと要領を得ませんが……その言い方ですと、ま

るで正体不明の不審人物を尋ねるような言い方ですよ？」
　恐らく、紅音は娘同然であるほのかが惚れている相手のことを雫からある程度は聞き及んでいるし、雫が九校戦に出場した絡みでその名を聞き及んでいるのは間違いない。
　加えて、個人的にも彼の素性を調べようとしたのだろうが、司波達也のＰＤ（パーソナルデータ）は本当に綺麗な情報しか掲載されていない。少なくとも、ＦＬＴの開発本部長こと司波龍郎の息子という情報は記載されている。
「北山の……『企業連合』の情報網を用いてもＰＤが出てこないなんて普通じゃないわ。あの子から聞いた話でも、普通の高校生の領域を超えてしまっている」
「それを言われてしまうと、自分にも該当しかねない話なのですが……紅音さんは達也の何を知りたいのですか？」
　この世界に転生してからというものの、国防陸軍兵器開発部から第１０１旅団独立魔装大隊・特務参謀としての上条達三、ＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課所属の魔工技師としての上条洸人、高校前に名乗っていた長野佑都という名は神楽坂家においてのビジネスネーム「神坂佑都」へと変化した。
　こうやって列挙するだけでも、自分のしていることが達也以上という有様に溜息の一つでも吐きたくなった。言い訳がましいが、あくまでも元の言葉を聞いて好き勝手にやった結果なので今更否定などしない。
　加えて、魔法使いの家柄は十師族から護人へと変化したことからすれば、達也の隠し事なんて可愛いレベルなのかもしれない。
「そうね……貴方はどこまで達也君のことを知っているの？」
「〝ほぼ全部〟ですよ。とはいえ、軽率にお話しできる領域を超えてしまっていますので、聞かれたとしてもお答えできる範疇にないものばかりです。ただ……」
「何かしら？」
「紅音さんのご実家である鳴瀬家も決して無関係ではない……とだけお答えしておきます」

紅音の母親が千姫の妹であり、千姫の叔父が四葉家現当主の祖父にあたる。その関係性を匂わせる答えぐらいが限界だろう。達也の魔法も素性も明るみに出せないのは、彼の出自が大きく影響してしまっているためだ。

悠元の言葉に紅音は食い下がりたかったが、相手は戸籍上の従姉弟の関係。加えて今日のパーティーには神楽坂家当主代理として出席している以上、主催者夫人(ホステス)が客(ゲスト)の機嫌を損ねるのは言語道断。ましてや神楽坂家の人間に牙をむくこと自体自殺行為になりかねない。紅音とて愛している夫の為に踏みとどまるしかなかった。

その心情を察したかのように、主催者である潮が近付いて紅音の肩に手を置いた。

「紅音、君の負けのようだね。悠元君もすまなかった」

「いえ、ほのかのことを案じる気持ちは理解しておりますから。先程の質問ですが、そう遠くない未来にお答えできるように致します。私は一旦御前を失礼させていただきます」

深々と頭を下げる潮に対し、悠元も深く頭を下げた上で達也らがいる場所へと去っていく。しかし、達也であれほどの反応が出るというのに、自分の場合はそれ以上の得体が知れない存在ということは向こうだって理解している筈だ。ただ、何かしら信頼されていなければ九校戦前の上泉家の合宿を許可するということにはならないだろう。それとなく尋ねたところ、こう返ってきた。

「悠元さんの場合は幸せを根こそぎ持っていきますから」

「深雪さんや、俺は人の幸せを奪うほど強欲じゃねえよ」

「寧ろアレだね。一昔前の時代劇で悪人を懲らしめるお侍さんみたいな」

どっかのご隠居や白い馬に乗って容赦なく懲らしめる暴れん坊みたいな言い方をされたのが何となく癪に障る。別に怒りはしないが、もう少し言い方というものを考えてほしいと思う。すると、達也たちの中に混じって雫の弟である北山航(きたやまわたる)の姿があり、航は悠元に対してお辞儀をした。

「お久しぶりです、悠元さん」

「久しぶりだね、航君。さっき達也に何か聞いていたようだが、魔工技師に関することかな？」
「えと、はい。お恥ずかしながら……」
　雫と知り合った関係で航とも知り合っており、その際に魔工技師への道について尋ねられたことがある。魔工技師自体は魔法技能が使える技術者であり、魔法工学技術者という括りに広げれば非魔法師であっても魔法技術に関わる形となる。そもそも現代魔法自体科学的なアプローチも含んでいて、その最たるデバイスであるＣＡＤは工業的な要素が含まれる。その辺のことをどうやら達也に聞いたようだが、恐らく人が悪い言い方をしたのだろうと思われる。
「航君は今年で小学６年生だったか」
「あ、はい。って、よく覚えているんですね」
「ま、将来の身内みたいなものだからね……（よく視たら、魔法演算領域にロックが掛かっている？　恐らく鳴瀬家の……母上も一枚噛んでいそうだな）」
　あまり意識していなかったが、「天神の眼（オシリス・サイト）」で航の内部を覗いたところ、魔法演算領域そのものに封印が掛けられていることに気付く。以前雫を視た時は良く分からなかったが、神楽坂家の結界術式を読み取ったことでその術式構成も読めるようになった。単に魔法技能を封じるだけでなく、これがもし完全解除された際の状態を見るに、封印そのものは妥当だと判断できる。
　なぜなら、航を構成している想子体の状態が何故か九島光宣のものとほぼ一致したからだ。考え込んでいる悠元を見て雫が小声で話しかけた。
「悠元、航に何かあるの？」
「雫……どうやらある意味雫と〝同じ〟らしい。しかも、下手に触れられない分性質が悪い」
「つまり、航も魔法が使えるってこと？」
　概ね間違ってはいないが、魔法を使えば必要以上に想子が暴走して想子体を傷つけ、本人の体調が崩れてしまう。下手に解除すれば、それこそ光宣の二の舞になってしまうだろう。

だが、これは逆に言えば不幸中の幸いとも言えた。実は、魔法が使えない状態でも想子の制御は出来る。魔法演算領域を使うのはあくまでも魔法を展開するときに使うもので、体内の想子自体を制御するのに必要なのは想子の流れのイメージを自身の概念として固定化させること。それがしっかりできていないと必要以上の想子を魔法演算領域に流し込むこととなり、下手すれば演算領域のオーバーヒートを起こして魔法技能が二度と使用できなくなる。

ぶっちゃけて言うと、想子を塊として飛ばす――『術式解体（グラム・デモリッション）』ぐらいなら魔法演算領域を経由せずに行使できたりすることは自身の鍛錬で証明済みだ。更に言えば、現代魔法における『グラム・デモリッション』は想子の出力と収束イメージが明確に規定されていないために求められる想子消費量が極めて高くなっている。その辺の定義を達也に説明して完成された『グラム・デモリッション』を使ってもらった際、彼から「『グラム・デモリッション』自体を効率化するという発想は正直無かったな。お前は埒外の天才だよ」と言われてしまった。解せなかった。

悠元と雫が話し込んでいるのを見て、航は首を傾げつつも笑みを零していた。どうやら二人の仲の良さを見て安心しているようだった。なお、深雪はパーティーなので表向きは微笑んでいるが、内面は雫に嫉妬していた。その内面が達也にも伝わってきており、溜息が出そうではあったが鋼のメンタルで堪えることに成功しつつ、悠元と雫に話しかけた。

「悠元に雫。深刻な相談事か？」

「現状は深刻というほどじゃないけど……航君。新陰流剣武術に興味はないか？」

「その武術は確か、以前お会いした剛三さんの武術でしたか」

「大体あってる。本来は推薦状が必要なんだが、俺が書くよ。これでも新陰流の師範だからね」

悠元が航に新陰流剣武術を勧めたのは簡単で、彼自身想子体の制御が出来れば魔法演算領域の封印を解いても問題ないと判断したからだ。

新陰流剣武術は体内の気を循環させる技術――――正確には、想子体そのものに負荷を掛けずして想子の流れを高速化させるという技術が存在し、その技術の極致が『相転移装甲（フェイズシフト）』である。

具体的にどうしているのかというと、精神体を想子体と接続して精神力（古式魔法では霊力とも言われたりする）の大本となる霊子（プシオン）と想子を疑似的に結合、想子体そのものの強度を上げることで想子の高速運動による想子体の破壊を防ぐと同時に高密度の想子を内部に止める。

これを繰り返し実施することで精神体と想子体そのものの強化が出来ていくという仕組みで、バランスを崩さないために肉体そのものの強化も並行して行うのが新陰流剣武術における鍛錬法だ。

なお、この仕組みを理解した上で行使しているのは悠元に加え、彼の教えを受けた元継だけである。その仕組みを起動式に変換して試作したナックルダスター型ＣＡＤをレオが使っているのは、レオが硬化魔法を得意とすることに加えて精神力に対する感覚を掴んでもらうという目論みがあるためだ。

ちなみにだが、剛三はそれを己の感覚だけで掴み切って行使している。天才肌が故にその感覚を他人に教えるとなれば〝実力行使〟という手段となっていることは言うまでもない。

悠元の新陰流剣武術の目録は、進級を理由に師範代から師範に格上げされた。総師範にしたがっていた剛三を抑えるため、元継が妥協案として高校在学中の悠元に師範の位を与えることで納得させた形だ。十代で師範というのは常軌を逸しているだろうが、少なくとも剛三が武術の絡みで手抜きをすることなど一切ないのは悠元のみならず雫も知っている。ちなみにだが、悠元の実力を聞いて目を輝かせている深雪を達也が落ち着かせているのは言うまでもない。

新陰流剣武術は軍関係者か警察・消防などの治安組織関係者かつ中段以上の目録を与えられている者の推薦状がないと入門を許されない。悠元の場合は元の推薦状で入門を許されたが、その際に剛三の襲撃を受けたことで彼に気に入られて５年にも及ぶスパルタ訓練が行われた。

そのせいで前世の平和主義思想はミキサーにぶち込んだ挙句念入りに磨り潰されて、原形など見る影もなくなってしまったが。

「ただ、ちゃんと両親を説得すること。生半可な気持ちだと何も身につかない……覚悟はあるか？」

「はい。悠元さんみたいな立派な男になりたいですから」

立派ねえ……人が悪く、女性に対して礼を以て応待したらジゴロしてると言われる自分が？　これが立派だというなら、一番礼節が足りている克人は一種の聖人君子になってしまう。寧ろあれは守護神的な存在になっても違和感はないだろう……本人に言ったら間違いなく動揺するのが目に見えているので言うつもりはないが。航は両親に話があると言ってその場を離れた。行動力に関して言えば雫に負けず劣らずかもしれない。

それと入れ替わるようにやってきた一組の男女――――つくづく達也のトラブルを引き込む体質は最早〝神憑(かみがか)り〟とでも言うべきなのだろう。男性――――二十代半ばの男性で雫の従兄なのは間違いない。悠元も何度か面識があり、向こうも悠元の素性は「雫の親友」として認識している（婚約自体は雫本人と両親、父方の祖母だけが知っており、航には知らされていない）ので、その範疇で挨拶を交わした。

「久しぶりだね、悠元君」

「ええ、お久しぶりです。ところで、お隣にいる方は何方でしょうか？　以前はお見掛けしなかったものですから」

「実は年内に結婚するんだよ、彼女と」

それはおめでとうございます、と返しておいた。雫も社交辞令的な口調で返す。すると、青年のほうはバツが悪そうにしつつも婚約指輪(エンゲージリング)はまだ受け取っていないと返していた。

余談だが、千姫から婚約のことを聞いた後で深雪、雫、姫梨の三人にはこっそり渡した。指輪だけで数百万円という金の掛け方はどうかと思うが、トーラス・シルバーの報酬に加えて先日の莫大な大金のことを考えると小銭程度の出費のレベルなのは言うまでもない。夕歌と沓子、セリアにも渡しているのは察してほしいが敢えて言っておくこととする。

それは置いといて、雫の従兄が紹介するのかと思えば婚約者と紹介された彼女の側から自己紹介をしてきた。
「はじめまして、雫さんに悠元さん。小和村真紀（さわむらまき）と申します。宜しくお見知りおきください」
当然というか、原作を知る側としては「やはり出てくるのか」という印象が強かった。雫の家の事情を考えるのならば、芸能関係者と繋がりがあっても何ら不思議ではない。七宝琢磨と共闘して「新秩序（ニュー・オーダー）」を構築しようと目論む者……表の顔は国内でも有数の実力を持つ女優で、テレビドラマだけでなく映画でもその演技力の高さは各種メディアで絶賛されていた。すると、この中で芸能関係に詳しいほのかが声を上げた。
「あの、もしかして『真夏の流氷』でパン・パシフィック・シネマ賞の主演女優部門にノミネートされたあの小和村真紀さんですか？」
「あら、あの映画を観てくださったの？」
ほのかの問いかけに対して、真紀は上品な笑みを浮かべたまま答えた。その表情には少し得意げな表情が混じっていたのを悠元は今までの経験から見逃さなかった。この食いつきを見て、真紀はほのかを〝引き込める〟と判断したのだろうが……当の本人は達也に惚れているというところまで掴み切れていない辺り、魔法科高校にそれほどの情報網はないのだろう。
「やっぱり！　あの作品は映画館で拝見しました。とても素敵でした！」
「フフッ、ありがとうございます」
実を言うと、夏休みの時に雫から「ほのかから達也さんとデートに行きたいけれど、二人きりは緊張するから助けてくれって。私はちょっと忙しいから、深雪に頼みたい」と頼まれたことがあり、形式上のダブルデートと言うことになった。
その際、ほのかがお勧めする映画ということで「真夏の流氷」を鑑賞した。深雪からも「お兄様。ご自分から踏み出して知るということが大切だと仰ったのはお兄様ではありませんか？」と凄みのある笑顔で言われ、なし崩し的に決まった経緯がある。

達也としても、芸能関係の知識を知ることで対策を立てやすくなる……というガーディアン的な思考が働いていたのは言うまでもない。ガーディアンという職業病（ワーカーホリック）で一度病院に行くべきだと冗談めいた言葉を言いたくなったのはここだけの話。

すると、真紀は達也と深雪に歩み寄って話し始めた。その会話の内容を『聴覚強化』で聞きつつ、雫の隣に立って彼女の従兄との会話をした。元々物静かな方の雫なので、従兄の会話――――ある意味惚気のような言葉に耳を傾けていたが、どこか良いように利用されている感が否めなかった。人の恋路をどうこうする気概はないので邪魔をする気などないが。

一方、達也と深雪のほうは真紀の女優としての演技を褒めつつも、彼女の誘いに対しては「お誘いは大変魅力的ですが、気持ちだけ受け取っておきます」と断って食べ物の置かれたテーブルに向かっていった。二人に続く形で水波やほのかもその場を離れた。雫の従兄もそれを見計らって真紀のもとに戻っていったが、雫は小声で呟いた。

「ねえ、悠元。あれって小和村さんのいいように〝利用〟されてるってことだよね？」

「……魔性の女だな、あれは。しかも、達也と深雪を狙って声を掛けたってことは……知らないことは確定だな」

「知ってたら逆に声を掛けないと思う。ほのかにも気を付けるように言っておく」

「そうしてくれ。俺はお姫様（みゆき）のご機嫌取りで忙しくなるからな」

お互いに社交の場を何度も経験しているからこそのやり取りだが、とても高校生がする会話ではないかもしれない。そんなことを思いつつ、悠元と雫は達也らのいるテーブルに歩みを進めたのだった。

帰って、どうぞ

時を同じくして、東京に本拠を構える十文字家の本屋敷。タンクトップ姿が実に似合ってしまう克人は、向こうから歩いてくるワンピース姿の少女――――長い紺碧の髪を後ろで結っていて、アメジストを思い起こさせるような紫電の瞳を持つ少女こと理璃が目に入り、声を掛けた。

「理璃、こんな時間に出歩くとは珍しいな」

「あ、克人兄さん。兄さんはその、訓練ですか？」

「ああ。理璃、そんなに余所余所しくしないでくれ。そうされてしまうと俺も流石に傷つくのでな」

「ご、ごめんなさい」

家族になって数日であると共に、彼女は先日の南盾島での戦闘で両親を失っていた。自分も師族会議の代理人として南盾島に出向いていたが、自分が出る幕は無かった。細かい事情を知ったのは基地を襲った連中が早急に退避してしまった後だった。

克人自身に責任が生じるわけではないが、それでも克人は理璃に対して謝罪した。だが、理璃は克人が謝る義理などない、とやんわりと返した。その謝罪の代わりとしてお互いに家族として受け入れることを交わしたのだ。

理璃自身、両親を殺されたことに恨みがなかったとは言えない。だが、彼女の母親は日頃から「人を恨むのではなく、人を救える人間になりなさい。『ファランクス』はそのための魔法なのですから」と諭していた。その母親の遺志を継ぐために、理璃は和樹の提案を呑んで十文字家に養女として引き取られた。

克人の弟や妹たちも姉となる人物の登場に困惑したが、そこは長男として克人がしっかりと言い聞かせたお陰で大きな混乱にはならなかった。ただ、和樹からは「父親の威厳が霞んでしまうな」と愚痴っぽいことを言われてしまったことには流石の克人自身も戸惑ったのは言うまでもない。

ただ、今まで十師族と自覚せずに過ごしてきた理璃だからこそ、未

だに慣れないという気持ちは流石の克人でも理解するのが難しかった。
「理璃も3日後は入学式だが、今年度は七草に加えて七宝も同学年となる。くれぐれも気を付けてほしい」
「入学してから七草さんをライバル視していた兄さんがそれを言いますか？」
「一体誰から……父上か」
あの時は自分も短慮だった、と言う他なかった。十文字家の秘術である『ファランクス』を習得したことで、それを破る人間など出るはずがないと高をくくっていたのかもしれない。尤も、それを破ったのは同じ十師族である三矢の人間だった。
その事情を知らない理璃が何故知っているのか、と問いかける前に克人は父親の存在が脳裏に浮かんだ。その答えが正しいと言わんばかりに理璃は笑みを零した。
「ご心配なく。兄さんのことは決して言いふらしたりしませんから。ただ、一つ聞かせてください」
「何だ？」
「七草家の双子と七宝家の長男ですが、どう向き合うべきなのでしょう？」
理璃の言葉に克人は腕を組み、瞼を閉じて考え込んだ。
それはつまり、同じ師族二十八家として同級生となる七草の双子や七宝の長男とどう付き合えばいいのか、という彼女なりの悩みであった。最初から師族としての教育を受けているならまだしも、彼女は十師族の直系として日が浅い。
克人の中で色々思慮した結果、かつての自分がそうであったように同じ師族を頼ることとした。彼は既に十師族ではないが、その上に立つ立場からすれば強さの見せ方を教えてくれるだろう、という克人なりの考えがあった。
腕組みを解いて瞼を開けると、克人は理璃と目線を合わせる様な格好で話し始めた。
「俺の場合になるが、入学した当初は七草や渡辺と力比べをしたりし

たが、三矢には一度も勝てなかった」
「三矢……噂に聞いた卒業生の三姉妹のことですか？」
「それもあるが、彼女らの弟で今は神楽坂の姓を名乗っている彼――――神楽坂悠元がお前の一つ上の先輩にあたる。俺が昨年の春に挑んで負けた相手であり、九校戦では一条を完膚なきまでに圧倒した人物だ」
「それなら九校戦の中継で見ていました。あの『クリムゾン・プリンス』が倒せなかった相手だけあって、夏休み明けは友達との会話でも持ちきりでしたから」
　九校戦の中継で彼を見たことがある、と理璃は当時の様子を思い返していた。昨年の九校戦――――新人戦男子アイス・ピラーズ・ブレイクにおいて、三高の「クリムゾン・プリンス」こと一条将輝の『爆裂』による瞬殺は非常にインパクトがあった。だが、同じ十師族でも一高の三矢悠元が使った魔法技術の高さは、理璃ですら度肝を抜かれてしまった。
　対戦相手の攻撃を受けても全く微動だにしない綺麗な氷柱を保つ防御技術だけでも世界屈指なのに、相手の防御を易々と破っていく攻撃魔法は十師族の求める〝最強〟に恥じないものと言えた。新人戦モノリス・コードでは、将輝の魔法を無力化するだけでなく明らかにオーバーアタックと思しき空気弾から味方を守り切った。
　理璃が通っていた中学校でも、夏休み明けは九校戦の話題で持ちきりだった。色んな選手の活躍で見応えがあったが、特に三矢悠元の活躍はその中で頭一つ以上抜けていた。
「十師族としての心構えは彼から聞くといいだろう。彼は既に十師族ではないが、俺の知る限りにおいて当代最強の名を冠しても不思議ではない人物だ」
「兄さんがそこまで……分かりました。七草家の二人や七宝家の長男とはまず顔を合わせてから身の振り方を考えてみます」
「それでいい。いくら十師族とはいえ、俺と七草や渡辺のようになる必要などないからな」
　最強を自負する十師族だが、克人には克人なりのやり方があり、理

璃には理璃なりのやり方がある。人前で十師族の力を誇示する……最強を目指すための証明方法は何も魔法で相手を倒すだけではない、と克人は優しく諭した。以前の代表代行をしていた時の自分なら、間違いなく厳しい言葉を投げかけていただろう……そう思ったことに内心で苦笑を滲ませた克人であった。

「あと、アドバイスを貰ってこんなことを言うのは失礼かもしれませんが……克人兄さん、もう少し目力を緩めないと相手から睨まれていると思われてしまいますよ」

「む、すまん……」

弟や妹からは今まで強く言われることはなかったが、新たな妹である理璃の忠告に克人は謝罪の言葉を口にした。以前、真由美からも「十文字君、真剣な時にそんな顔をされると女の子が怖がっちゃうわよ」と言われたことがあり、父親の代わりに十文字家代表代行という重責を背負っていた影響で〝怖い〟と思われたことに少しショックを受けていた克人であった。

◇　◇　◇

北山家のパーティーから戻ってきた悠元は、シャワーを浴びて寝間着に着替えるとデスクに座って端末を起動した。情報収集は日課のようなものであり、魔法関連のみならず、経済や政治などの非魔法師的な分野にも及ぶ。

その気になれば成層圏プラットホームの魔法監視システムもハッキングできるが、あくまでも情報を写し取るだけで主導権を奪う気などない。その関連の情報で七宝琢磨が小和村真紀の自宅を訪れた、という情報履歴を見つけた。

（……こちらから入れ知恵をして銀幕デビューさせたというのに、むしろ悪化してるっぽいな。分かってるのか、こいつらは……）

琢磨は男性俳優としての地位を固めており、そこから能力が足りず魔法師になれない人間を引き込んでいるようだ。真紀も自分のお眼鏡に適った魔法師になれない人間を引き込んでいるのも確認している。

ただ、琢磨の七草嫌いはより加速しているようで、琢磨自身が人の

縁という力を持ったことによって天狗となっている可能性が高い。十師族自体数字の枠など存在しないのに、七草家ばかりしか見えていないのは流石に狭量すぎるだろう。

というか、彼らの「新秩序（ニュー・オーダー）」は下手すれば現在の護人・導師・十師族による魔法界の統治システムを否定するものと見られる。最悪七宝家が師族二十八家から除名され、それなりの規模を持つ小和村家も財界から追放される可能性があるだけに、その危険性を認識しているのかと問いかけたくなる。

（で、名古屋では人間主義者がメディアと面会ね……該当者の通話記録では、大物の野党議員まで……って、この人は後々出てくるから後回しだな）

ＵＳＮＡでの人間主義運動は下火となった。その大きな要因はセブンス・プレイグ落下阻止に伴う賠償金の支払いを巡って、彼らが積極的に動いたからだ。

核兵器は放射能による汚染も含めて極めて危険な兵器――――この認識を再燃させないために彼らは慌てた。だが、その認識は何も間違ってはいないし、その抑止力として魔法がある。とりわけその先進国であるＵＳＮＡ政府……現政権を担う与党からすれば、時代に逆行するような人間主義を放置など出来ない。

スターズによって人間主義の組織は粗方潰された。加えてネット上で流出した人間主義の信者による非人道的な犯罪行為が衆目に晒され、彼らを見る目は「ブランシュ」の時のように一気に反転した……ネットに流出させたのは、他でもない悠元の仕業である。

結局は身から出た錆なので「自業自得」と評することしかできないが、起死回生というか顧傑の指示でこの国のメディアに工作を仕掛けていることは既に掴んでいる。この時点で周公瑾の関与も全て証拠として出揃っているが、彼にはまだ退場してもらうつもりなどなかった。

何せ、周公瑾は顧傑を釣りだすための〝餌〟になってもらう予定だからだ。

「……まったく、こいつらのせいで学生らしい生活が送れやしない」

恨み辛みも大概にしろ、とぼやきたくなったのは言うまでもない。ともあれ、目下の問題であった新入生総代とのトラブルは避けられそうで一安心と思うことにした。だが、新3年生の間で話し合われた三組織の人員配置を真っ先に聞かされた時、溜息が出そうになって何とか堪えたのはここだけの話。

◇　◇　◇

西暦２０９６年４月６日。新２・３年生からすれば新年度の初日となる。一科生の悠元と深雪、そして魔工科――その制服は、一科生の制服を飾る八枚花弁と同じ大きさであり、八枚の歯車を図案化したエンブレムが左胸のポケットと両袖の付け根に刺繍されている――の制服を着ている達也が三人で登校する。

「しかし、かれこれもう1年か……懐かしいな。昨年の今頃は防衛大で暴れたのが遠い昔のように思えるわ」

「そのデモンストレーションを真田大尉に見せてもらったが、俺でもあのような動きは無理だぞ」

「それは仕方ないだろう。俺とお前じゃ得意分野が違うんだから」

人間は誰しも得手不得手がある。達也の場合、戦車の部品を『分解』したり兵士を『分解』で穿つでもしないと悠元が成した惨状と釣り合わなくなる。そもそも、未来ある若者にそこまでの現実を見せるのは逆に精神を折るのではないかという懸念もあるだろうが、その原因は悠元が学んできた鍛錬という名の地獄に由来していた。

「そもそも、入学式の時は念入りに3ヶ月先の依頼まで片付けたのに、上司は上司で実戦テストの監督とか嘘まで吐きやがったからな。それでキレてあのような惨状が生まれたという訳だ。ついでに数ヶ月間少佐とは連絡を取らなかったが」

「成程……お兄様、どう思われますか？」

「こればかりは自業自得だろうな……こんな往来で話すことでもないのだが」

悠元は入学式の時期に緊急の要件が差し込まれるのを防ぐため、予め数ヶ月先の分まで国防陸軍の仕事を片付けていた。だが、それに水を差す形で防衛大学校のデモンストレーション戦闘へ参加させられ

た。
　人生で一度きりの入学式をふいにされた以上、悠元の癇癪の煽りを受けた風間に同情など出来ないな、と達也は思ってしまった。登校中に話す話題ではないが、悠元のことだからその対策も片手間にしているのだろう……と推察した。
「そういえば、昨年は答辞の代わりを深雪が務めたんだっけか……割とギリギリな内容だったが、大丈夫だったか？」
「はい。寧ろ、悠元さんが私と同じことを考えていることにとても親近感が湧きました」
　過ぎてしまったことなので今更だが、もし答辞を読むことになった際は一科生の優越感と二科生の劣等感に疑問を投げかけるつもりだった。魔法科高校の高等教育システムに疑問を投げかける様な暴挙だが、過去に美嘉を退学させようとした輩に掛けてやる情けなど持ち合わせてなどいない。
　なお、その辺の鬱憤は生徒会長選挙で吐き出せたので良しとした。
「そっか。ちなみにだが、達也が答辞を読むように責めたりは？」
「されたな。そこは何とか抑えてもらったが」
「もう、お兄様！」
　正直なところ、この世界に転生して司波兄妹とこのように話すことなど最初は考えもしなかった。せめて達也や深雪の機嫌を損ねない様に立ち回ろうと思ったぐらいだ。そこから達也と深雪の友人になろうと立ち回った結果……気が付いたら、世界最強を名乗っても過分ではない評価に行き着いていた。
　言っておくが、絶対に世界最強を名乗る気などない。戦いなんて避けるに限るが、降り掛かる火の粉を払うために力は必要となる。その為の魔法であり、その為の技巧でもある。
　すると、どこからか視線を感じるので目線は合わせずに気配のみを探る。剛三との鍛錬で人を纏う気配（オーラ）から人間を識別するという無茶苦茶な内容だったが、それによって「天神の眼（オシリス・サイト）」を経由せずとも大体の人間の存在は把握できるようになった。加えて、悠元が一度見たことのある人物なら識別も可能となった。

そんなことはともかく、その気配を感じた時に悠元は眉を僅かに顰めた。何故ならば、恐らく魔法科高校の制服を着ているのだろうが、間違いなく七宝家の長男――七宝琢磨だろう。『万華鏡(カレイドスコープ)』で一応確認すると、紛れもなく制服を着ている琢磨が物陰から悠元らを見ていた。

先程の会話は悠元の『聴覚強化』を応用した遮音フィールドで聞こえていないだろうが、何故新入生総代でもない彼がこんな場所にいるのか……ほんの一瞬だけ殺気を琢磨に向けて飛ばすと、どこからか飛んできた殺気に琢磨は周囲を見回した後、慌てるような素振りでその場から離れていった。

「悠元さん、どうかされましたか?」

「いやなに、季節外れの蚊がいたようでな。思わず鋭い殺気を飛ばしてしまったわ」

「悠元なら殺気だけで猛獣相手でも殺せるだろうな」

「達也。それはもう超能力の範疇だから」

勘が鋭い深雪は悠元が殺気を飛ばしたことに気付きはしたが、悠元の言葉を聞いてそれ以上の追及を止めた。その代わりに放たれた達也の悪い冗談に対して、悠元は疲れたような表情を見せつつため息混じりに呟いたのだった。

そして、「オハヨー」と背後から聞こえてくる挨拶を皮切りに、見知ったメンバーが次々と合流するのであった。

珍しいものには目を向けたがる

エリカを皮切りにレオ、ほのか、雫、燈也、佐那、美月、幹比古、姫梨、そしてセリアが合流してきた。下校時に一緒になるのは珍しくないが、登校時に一緒になるのは久しぶりだ。特に雫は留学前の昨年末以来の話になる。

顔ぶれは同じでも、彼らが身に着けている制服は異なっている。美月と佐那、燈也のブレザーには達也と同じ八枚歯のギアを意匠化した刺繍――魔法工学科のエンブレムがついていて、レオとエリカ、幹比古の胸には八枚花弁をかたどった一高の紋章のエンブレムがつけられている。

「幹比古、一科生の制服の着心地はどうだ？」

「からかわないでよ、達也。まあ、僕よりもレオやエリカのほうが着慣れてないだろうけど」

「それを言うなよ、幹比古。ま、昨年のトラブルもあったからな。そっちの立場になるって実感がどうにも慣れねえんだ」

「……不服だけど、あたしも同感ね。あれだけ優秀と声高に叫んでた連中と机を並べるって怖気が走りそうだわ」

達也の意地の悪い言葉に幹比古は苦笑しつつも満更ではなさそうな表情を見せていた。その上で幹比古は同じく一科生に転籍となったレオとエリカに話題を振ると、二人は揃って疲れたような表情を登校時から見せていた。

その理由はだれしも納得がいくものだった。昨年の入学式の翌日に一科生と二科生が揉めるトラブルが起きた（この場合は一科生側が起こしたと言うべきなのかもしれない）際、最前線に立っていた二人だからこそ「あんな連中と一緒くたにされたくない」という気持ちがあるのだろう。

「連中のプライドなんて紙切れみたいなものだがな。吹けば簡単に飛んでいくようなものだ……実力を見せれば嫌でも黙るだろうさ。そうでなければ単なる愚か者だが」

「そんなことを言えるのは悠元ぐらいかと思いますよ。複数工程を要

する魔法で人間の限界速度を切るなんて人間業じゃありませんし」
昨年度――――初めての魔法の授業では、ＣＡＤを使った全５工程の物体往復の魔法術式を１０００ｍｓ以内で完成させるという課題を与えられた。周囲の目線が鬱陶しかったため、ＣＡＤが耐えきれる限界の想子を流し込んだ。ただ、ＣＡＤに内蔵されている術式の記述ではあまりにも遅すぎたため、ＣＡＤに内蔵された起動式を介せずに「ライトニング・オーダー」で魔法式を展開して魔法を発動、その結果として９４ｍｓで魔法を行使して見せた。
これにはクラスメイトのみならず教官まで度肝を抜いていた。
「少しやり過ぎたことは反省するが、一科生としての誇りがあるんなら二科生の数倍以上は努力しろって言いたい」
「あー……お兄ちゃん、それは流石に酷すぎるんじゃないかな？」
「そうか？　一科生は二科生と違って〝教官がいる〟というアドバンテージを貰ってるんだぞ？　それで二科生に負けてるようなら努力が足りてない証拠だよ」
悠元の言葉にセリアが冷や汗を掻きつつも窘めたが、続けて放たれた言葉にセリアも納得せざるを得なかった。
自助努力が基本となる二科生と異なり、一科生は教官に見てもらえるというアドバンテージを得ている。それを生かし切れていないようでは、魔法科高校を卒業しても立派な魔法師には到底なれないだろう。
まあ、元二科生組となる達也らは一般的な二科生の範疇に収まらないことに加え、原作なら二科生のままだったレオとエリカは悠元の影響で一科生クラスの実力を得ることに成功した。美月もこれまで直接の戦闘はしていないが、自衛のための魔法習得は既にしている。
達也たちを一般的な二科生として語るつもりはないが、魔法理論などの勉学面に関しては彼ら自身の努力の結果だ。それを認められないようでは『己を律する』ことを唱えた魔法師が草葉の陰で泣き崩れるだろう。
「いつにも増して毒を吐くね。何かあったの？」
「強いて言うなら、要らぬ因縁をつけてきそうな輩の存在かな」

「そうなりますと……七草家のですか？　それとも七宝家ですか？」
「主に後者の存在」
今年は七草、七宝、そして十文字という三つの師族の関係者（正確には水波を含めれば四つ）が入学してくる。先程の視線は悠元と深雪に向けられたため、殺気で追い返した。前者の場合は昨年度の新入生総代であることが要因だろうが、後者の場合は次席入学なので深雪に視線を向けるのはよほど強い理由でもなければ難しい。
となれば、真紀が達也と深雪は七草家――この場合、真由美と深い関係にあるという嘘を琢磨に吹き込んだ可能性が高い。琢磨は七草と聞くと敵愾心に近い対抗心を抱くため、真紀の嘘を織り交ぜた言葉に気付かないのだろう。
「何か、七草先輩と関係が深いという風に教え込まれたような視線だった。尤も、俺は個人的な誼を持っていても七草家とは因縁持ちなんだが……ほのか、気を付けておけよ」
「え、私ですか？」
「まあ、ほのかの性格と胸ならお近づきになろうとする男子は多いと思う」
「雫!!」
真由美、香澄と泉美とは友好的な関係を築いているが、俺自身が対象となった十山家の誘拐未遂を七草家が見逃したこと自体忘れるはずなどない。一応手打ちになったとはいえ、七草家が隙あらば四葉の力を弱体しようと目論んでいることなど知っているし、周公瑾によって今現在行われているメディア工作を把握していることも掴んでいる。
話を戻すが、仮に自分が捕まっていたら三矢家だけでなく上泉、神楽坂の護人の両家に加え、あの場にいた関係者筋で千葉家や藤林家、果ては同じ十師族の四葉家だけでなく五輪家や一条家、終いには九島家まで波及していただろう。その状態になってしまえば、いくら十文字家や九島烈でも七草家を庇い切れなくなり、最悪のパターンとして御家の取り潰しよりも惨い結果になったかもしれない。
上泉家では、基本的に正月の時期は他の流派の人間を招き入れたり

しない。恐らくだが、神楽坂の天文占術による連絡が上泉家に届けられ、その情報を基に千刃流や独立魔装大隊の人間を招いたのだろうと推測される。とはいえ、過剰戦力とも言える面子を揃えた時点で剛三の怒りも納得できる……孫が可愛く見える爺馬鹿なのは否定できない事実でもあるわけだが。

あれだけ痛い目を見た上で詩奈を唆した場合、元継以下五人の兄弟姉妹を中心として国防軍の連中を叩きのめすことは既に決定事項である。尤も、お姫様を助ける王子様の役割は侍郎に担ってもらう腹積もりだ。

「今年度から俺は部活連の副会頭なので頻繁に顔を出せるわけじゃないからな。てなわけで達也、そっちのフォローは任せた」

「……分かった」

今年度からは達也が風紀委員から生徒会副会長となり、悠元は部活連副会頭となることがあずさ、花音、服部の三者で決められた。更には雫が部活連推薦枠で、幹比古が生徒会推薦枠で風紀委員に選ばれた。

そこに含まれた意図として、昨年行われた生徒会長選挙の結果からすれば、このまま生徒会に二人を置けば学校内で対立派閥が出来る。かつての傷害沙汰となった生徒会長選挙を危惧したのだろう。尤も、悠元と深雪にそんな派閥意識などないわけだが、服部は克人からの助言を受けて生徒会から悠元を引き抜いた。

そうなると、今まで深雪のフォローをしていた悠元の代わりを達也が担わなければならない。次善策として、あずさが悠元のＩＤカードによる認証システムの登録は外さずにそのままとすることで決着を見た。つまるところ、部活連副会頭兼生徒会の協力員的なポジションに収まった形だ。

なお、生徒会の臨時役員をしていたセリアはそのまま生徒会書記となり、レオとエリカは副会頭補佐役として悠元が抜擢した。元々トップで決めていたことを本人の事前承諾なしで決めたことなので、多少の無茶は押し通させた。服部も元二科生である二人を入れるという意味は昨年摩利が言っていた台詞にも繋がるため、渋々認めることと

なった。
その際はレオとエリカが嫌そうな表情を表向き見せつつも内心では嫌がっていないことに気付いていたが、黙っておくこととした。なお、補佐役の推薦人は燈也も関わっていたりする。

◇　◇　◇

魔法工学科の教室はE組なため、昨年度はよくE組に顔を出していた悠元からすればそこまでの苦労を感じはしなかった。クラス分けは悠元と深雪、姫梨に雫とほのかがA組となり、セリアと幹比古、レオとエリカがB組となった。昨年度まで二科生だった側のレオやエリカからすれば、周囲の視線を鬱陶しく感じるのも無理はなかった。二人が一緒のクラスという事実を嫌がるよりもそっちに意識が向くのは仕方のないことだ。
「あたしらは客寄せパンダじゃないって言うのに……」
「物珍しさには誰だって目を向けてしまうだろう」
「そりゃそうだけどよ……」
五十音順の関係で悠元と雫の席が隣同士となるため、その場所を起点として人が集まるのは無理からぬことだ。エリカの言葉に悠元が窘めるが、レオは納得がいかなそうな口調で呟いた。あまり前例のない二科生から一科生への転籍だが、学年末試験では二科生ながら上位に食い込んだ三人に注目が集まってしまうのは無理もないだろう。特にエリカは千葉家の人間としての評価を上げる形となっただけにだ。
ちなみに、1年3学期の学年末試験（魔法実技・魔法理論の合計点）の結果はこうなった。

1位　1―A　神楽坂悠元
2位　1―A　司波深雪
3位　1―A　エクセリア＝クドウ＝シールズ
4位　1―A　六塚燈也
5位　1―A　伊勢姫梨
6位　1―A　光井ほのか
7位　1―E　吉田幹比古

８位　１―Ｅ　西城レオンハルト
９位　１―Ａ　アンジェリーナ＝クドウ＝シールズ
１１位　１―Ｅ　柴田美月
１２位　１―Ｅ　千葉エリカ
１００位　１―Ｅ　司波達也

留学の関係で雫はいないが、友人グループで固まった形だ。なお、順位自体はこうなっているが、合計点数の差は上位１２名で比較すると十数点差のレベルになっている。リーナとエリカの順位が思ったよりも低いのは、魔法理論の筆記テストで成績が振るわなかったせいである。達也が２回連続で１００位を取ったことで「本当に狙ってやってるのでは？」と疑われて当人が溜息を吐きたそうにしていた。

「にしても、美月はともかくとして燈也と佐那が魔工科に行くなんてね」

「燈也は元々魔工技師志望のようだし、佐那も興味があったと言っていたからな」

エリカは一科生の優秀な生徒が魔工科に転籍する、という事実に驚きを見せていた。それが自身の友人から出たとなれば尚更だろう。だが、魔法工学を専門で学べるとなればその機会を逃せないと考えるのはごく自然の流れとも言える。

何も魔法科高校に入ったからと言って、その全てが実戦可能な魔法師となるべく進学するわけではない。魔法大学と防衛大学校から国防軍関連に進んだ割合は昨年度の卒業生で合算すると約５５パーセント。一部の連中はこぞって軍との癒着を煽りたがるが、魔法と軍事の結びつきが強いのは現代魔法の出発点が「核兵器の抑止」にあるためだ。

そのことを忘れて人権だ何だと言うのはそれこそお門違いの話になってしまうし、魔法大学も魔法科高校も国策機関の学校であり、魔法科高校の入学志願は余程の事情がない限り本人の意思に基づいた選択だ。その証拠として、古式魔法使いの人間が魔法科高校に必ずしも通っているわけでないことは佐那の存在で証明済みだ。

「まあ、達也からしたら見知った顔がいるのは嬉しいと思うけれど

……深雪さんとしてはどう思っているんだい？」
「そうですね……お兄様は然程気にしませんでしょうが、美月や佐那、燈也君がいることは決して悪くないと思っています」
魔法科高校に入ったことは達也にとっても決して悪くなかった、と深雪は幹比古の問いかけにハッキリと答えた。すると予鈴が鳴り響いたので、各々のクラスや席に移動するのであった。
◇　◇　◇
一時限目は履修登録だったが、二時限目からは通常のカリキュラムによる授業が開始された。一般的な高等教育よりも過密な魔法科高校のカリキュラムを考えれば、登校初日からの授業は想定していた。
魔法工学科の教官は国立魔法大学から派遣されたジェニファー・スミス先生――――１８年前に帰化したＵＳＮＡ出身の女性教員で、悠元が魔法大学に在学している佳奈や美嘉に聞いたところ、彼女らが在籍している研究室の担当副教官と聞き及んだ。
偶々ジェニファーと廊下で出会った際、どうやら佳奈や美嘉から話を聞き及んでいたようで、興味津々といった表情を向けられたことには苦笑しか出てこなかった。その時に深雪と雫が不機嫌そうな表情を見え隠れさせていたのは言うまでもないが。
時間は昼休み、悠元は生徒会室に来ていた。
２０９６年度第一高校新体制の顔合わせといえば聞こえはいいが、本来ならいてもいいはずの部活連会頭こと服部刑部少丞範蔵（はっとりぎょうぶしょうじょうはんぞう）会頭はここにいない。生徒会・風紀委員会・部活連が揃っての新体制発足だというのにだ。
その原因は服部と達也の確執……というか、服部が一方的に達也を認められない癇癪を起こしているだけで、そこには前会長である真由美も大きく影響している。好きならばハッキリと気持ちを伝えるべきなのだろうが、魔法使いの家柄という問題が服部を足踏みさせる原因であった。
悠元からしたらしょうもないレベルの事情の為、副会頭である彼に白羽の矢が立つのは自然の流れとも言えよう。
生徒会長のあずさを筆頭に、五十里、花音、ほのか、雫、セリア、達

也、深雪、幹比古、悠元の１０人で昼食会となった。流石に大人数となったが、以前リーナとセリアがいた時に会議用テーブルを新調することとなり、そのお陰で１０人でも余裕をもって座ることが出来ていた。そんな余裕があっても花音が五十里に引っ付くような形で座っている。ほのかも出来ればそうしたいが、深雪や雫、それにセリアが悠元と適切な距離を取っているためか踏ん切りがつかない様子であった。

昼食自体は和やかに進み、食後のティータイムは３Ｈ―Ｐ９４もといピクシーによって各々の好みに合わせてコーヒーカップやティーカップが配られる。ピクシーは達也が管理者権限および所有者権限を有しているためと、ピクシー本人の〝希望〟によって今日から達也が生徒会室で使用することになった。

ランチタイムも最初の内は新設された魔法工学科の話題が中心だったが、昼休み半ばに差し掛かると間近に控えた入学式の話題に移っていた。

「今日の放課後もリハーサルなんですか？」

「いや、今日はリハーサルというより打ち合わせだな。答辞のリハーサルは春休み中と式直前の２回だけだよ。それも段取りの練習がメインで、実際に読み上げたりはしないが……尤も、昨年の場合は空気を読まない大人たちの余計な都合で深雪にほぼぶっつけ本番を任せる形となったわけだが」

そう切り出したのは幹比古であった。だが、それには昨年の新入生総代である悠元が答えた。

彼の文言の中には防衛大学校のデモンストレーション戦闘を遠回しに言い含めており、これには周囲の人間が冷や汗を流す羽目となった。

「悠元、毒舌が漏れてる」

「分かっちゃいるけど事実だからな。深雪には本当にすまないと思ってる」

「いえ、悠元さんが悪い訳ではないというのは理解していますから」

「悠元君も大概だけど、ぶっつけ本番をこなした司波さんも凄いわね」

雫と悠元、深雪のやり取りを聞いて感心するように呟いたのは花音であった。普通ならどこかしらで言葉を噛んだとしても不思議ではない、と言いたげなニュアンスを含んでいたことに気付いたのは、花音の言葉を聞いて机に突っ伏しているあずさの姿が目に入ったからだ。

「いいですよ、どうせ私なんて酷かったですよ……」

「……何かあったんですか？」

「あー、本人の名誉の為にコメントは差し控えたいんだけど、いいかな？」

一昨年の新入生総代があずさだったのは知っている。恐らく、新入生の答辞で緊張して噛みまくったのだろうと察しがついたので、生徒会長の名誉の為にこれ以上の追及は止めてほしい、という五十里の提案を素直に受け入れた。花音は自分の発言が失言も含んでいたことに気付いてあずさを懸命にフォローしていた。近くに五十里がいるので更に墓穴を掘ることはないと思いたい。

「ま、新入生代表というのはどうしても緊張してしまいますからね。昨年度の答辞をしっかり読み上げた人間がおかしいというわけでもないですが」

「もう、悠元さん。私だっていきなり答辞の代理に抜擢されて緊張していたのですよ」

悠元の隣に座る深雪が、彼の膝に両手を重ねる形で置いて悠元の顔を覗き込むような形で近寄ってきたので、悠元は深雪の頭をポンポンと軽く撫でる様な仕草をすると、周りの目があるということを目線で訴えかける。それに気付いた深雪は頬を赤くしつつ自分の席に座りなおしたが、これには花音やセリアがニヤついた表情を浮かべていた。

穏便に進むのが一番平和的

深雪が少し落ち着いたところで、幹比古がわざとらしく咳払いをしたことで少し混沌とした雰囲気が和らいだ。そのタイミングを見計らうような形で悠元は話題を入学式に関わるもう一つのこと――今年度の新入生総代である生徒の話題に切り替えた。

「そういえば、俺は今年度の新入生総代に会った事がないのですが」

「達也もなのか。実は俺もなんだよな」

悠元の知識では、入学式の新入生に関わる部分は学校側が主導することぐらい既に知っている。一昨年のあずさを除けば、ここ数年の新入生総代は全て十師族であり、今年度は七草や七宝ではなく十文字家の人間。学校側としても、十師族関係者の扱いに関して慎重を期す形となってしまうのは無理からぬことだ。

「え？　司波君はともかくとして、悠元君は元十師族なのに会った事がないの？」

「聞いた限りの話だと、春休み中に十文字家の養女として迎えられたようですから、自分も面識はないんですよ。無論、十文字家の血筋は間違いなく引いているようですが」

今年度の新入生総代となった彼女は元々魔法科高校に入学するために試験は受けていた。合格も決まったところに両親の突然の死が重なり、紆余曲折あって十文字家に引き取られる形となった。その影響で入学式の紙媒体のパンフレットが急遽差し替えとなったことで一部の業務が忙しくなり、悠元も駆り出された形となった。

花音と悠元のやり取りを聞きつつ、五十里は思い出したように尋ねた。

「確か、旧姓は蘇我だったかな……もしかしてだけど、国防陸軍の蘇我大将の関係者なのかい？」

「親族らしいです。その辺は蘇我大将ご本人から確認していますので、間違いないと思います」

「国防陸軍の総司令官と面識があるって……しれっと凄い人脈を築いてるわね、悠元君って」

「元々の実家である三矢家自体国防軍と繋がりがありますので、その縁で知り合っただけですよ」
厳密に言えば悠元が国防陸軍の特務士官だからこそ知り合ったわけだが、広義的には間違ってもいないし、詳細は国家機密事項に触れることとなるのでこれ以上は言えない。花音が冷や汗を掻きつつも零した言葉に対し、悠元は簡潔に述べて必要以上の追及を避けた。
昨晩、寝る前に克人から珍しくメールが届いた。その内容は入学することになる妹の理璃を宜しく頼む、という文言であった。十師族の直系となって日が浅い彼女に強さの在り方を教えてやってほしいという意図も含んでのものだったので、特に断る理由もなく了承した。十師族として過ごした期間が数ヶ月の自分にどこまでの説得力を有せるかは微妙という他ないが。
理璃は奇しくも「十師族」と「国防陸軍の関係者」という二面性を併せ持った存在。恐らく、横浜事変編での展開を大きく書き換えたせいで達也の存在から魔法科高校と軍の癒着を証明できなくなったことによる〝修正点〟と思われる。
だが、七草家がこのままメディア工作に手を加えた場合、最悪七草家と十文字家が決裂する可能性もある。只でさえ十山家の誘拐未遂事件で二家の間に不協和音が生じたが、パラサイト事件の連携で何とか持ち直した状態だけに、互いに衝突するような事項は国内の混乱を避けるためにも回避すべきことだ。
「……壊れた機械よろしく、破壊すれば直るかな」
「悠元さん、今物騒なことを言いませんでした!?」
悠元の漏れ出た発言に対してほのかが鋭いツッコミのような返しをしたことに、生徒会室の空気は何とも表現しがたい雰囲気に包まれ、これには悠元も失言であったとテーブルに頭を付けて謝罪をしたのであった。
なお、その後に達也から「お前が失言を認めて謝罪するとは、明日は雪でも降ってくるのかもしれないな」と悪い冗談を言われたが、流石に天変地異なんて起こす気もないと返した。天神魔法で季節外れの雪でも降らしてやろうかとも思ったが、要らぬ被害を貰いたくない

ので止めておいた。
「放課後に紹介しますね。十文字先輩と違って、優しそうな子でしたよ」
「あはは……それは十文字先輩が可哀想だと思うよ」
無理もないな、と達也は内心で思っていた。克人の巌のような体格もそうだが、彼の高校生離れした風格は十師族として申し分などないと言える。尤も、小動物のような性格のあずさからすれば、克人が怖く見えてしまっても仕方がないのだろう。
五十里のフォローも兼ねた言葉にあずさがオロオロとしてしまい、周囲の取り成しもあって放課後にボロが出ないようにすることで決着した。

◇　◇　◇

放課後の新入生総代との顔合わせは生徒会役員である六人――――あずさ、達也、深雪、五十里、セリア、ほのかのはずだったのだが、なし崩し的に悠元も巻き込まれた。理由は元十師族の人間ということでもしもの時の抑止力を買われたものだった。
これが琢磨ならまだしも、あずさが好印象を抱いている部類の人間なら早々騒ぎが起きるということはないだろうと思うのだが、服部の頼みもあって渋々納得する形となった。
「紹介します。今年の新入生総代を務めてくれる十文字理璃（じゅうもんじりり）さんです」
「はじめまして、十文字理璃と申します。至らぬ身ですが、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします」
その丁寧な仕草に加えてハッキリとした言葉遣いは深雪に負けずとも劣らずの様相を見せていた。十文字の名を名乗って日が浅いというのに、これだけの丁寧な振る舞いが出来るのは元々の家が国防軍の軍人家系だった名残からか、しっかりとした礼儀作法を学んでいた証左とも言える。
第一印象は生真面目な印象だったが、ほのかのあたりから彼女の別の一面が垣間見え始めた。
「あの光井先輩ですか!?　新人戦のバトル・ボード決勝で四十九院選

手と激戦を繰り広げたのは、本当に見応えがありました」
「あ、ありがとう。もしかして、九校戦フリークなのかな？」
「まあ、友達からはそう言われたこともあります」
　厳のような克人に対し、年相応の表情を見せる理璃。十文字家のイメージが大分変わってくるな……と思いつつ、セリア、五十里と続いたところで達也の番となった。
「生徒会副会長、司波達也だ」
「はじめまして、十文字理璃です。達也先輩のことは兄さんから聞き及んでいます。そういえば、昨年の新人戦モノリス・コードで吉田先輩や三矢先輩と組んでアタッカーを務めてたのはよく覚えています……って、名前で呼んでしまってすみません」
「気にしないでくれ。名字だと妹と被ってしまうから、名前で呼んでくれても構わない」
「わかりました。ところで……その紋章が魔法工学科のエンブレムですか？」
　理璃が達也に対して褒める様な文言を交えつつ話していることに、深雪からすればすごくご機嫌であった。魔法工学科のことについても興味津々で聞いていて、克人から達也の真っ当な評価を聞いているためか、見下すような様子は見られなかった。
　そして、深雪との会話でも理璃の九校戦フリークは止まらなかった。
「生徒会副会長、司波深雪です。兄と名字が同じなので、私のことは名前で呼んでいただいても構いません」
「はじめまして、十文字理璃といいます。宜しくお願いします、深雪先輩。ピラーズ・ブレイクの『氷炎地獄（インフェルノ）』もそうですが、ミラージ・バットで当時発表されたばかりの飛行術式を使いこなしていたのは素晴らしかったです」
「ふふ、ありがとう理璃さん」
　世辞も込められているのだろうが、この辺は十師族としての風格よりも理璃の少女らしさが勝った形なのだろう。そして、既に自己紹介済みのあずさ以外の生徒会役員を一通り紹介し終えたところで、理璃

が悠元に気付いた。
「あの、もしかして貴方が……」
「今はもう生徒会役員じゃないけど、自己紹介させてもらうよ。昨年度の新入生総代、部活連副会頭の神楽坂悠元だ。元十師族・三矢家のほうが世間的に知られてるだろうけど。呼び方は理璃ちゃんの好きにしてくれて構わない」
「えと、はじめまして、十文字理璃です。貴方のことは兄さんから聞いております。一高はおろか当代最強の名を冠してもおかしくはない実力者だと」
克人（あのひと）は一体彼女に何を吹き込んだのだ、と問いかけたい。
自分自身の実力は少なからず把握しているが、当代最強というのは誇張表現になる……と思いたい。そもそも、最強格と言われる他の魔法師との戦闘経験なんて、強いて言うならセリアとリーナ、あとはラルフぐらいしかいない。ベゾブラゾフの場合は彼の戦略級魔法を自身の魔法が勝手に『喰った』ため、対決したとは到底言えない。国外の魔法師の一角と手合わせしただけで最強なんざ名乗れやしない……というのが悠元の持論であった。
「やたら持ち上げられている気もするが……何はともあれ、よろしくな理璃ちゃん。って、ちゃん付けはダメだったか？」
「いえ、大丈夫ですよ。宜しくお願いします、神楽坂先輩」
もし新入生総代が琢磨だった場合、変な緊張感を齎していたと思うと……理璃が総代で本当に良かったと言うべきなのかもしれない。それに、十師族としての自覚が完全に芽生えていないため、友好的に話が進んだのは正直ありがたいと思う。
九校戦絡みで興奮してしまう一面は見られたが、十師族らしさというよりは新入生らしい振る舞いのお陰で生徒会のメンバーも好印象を抱いた形となり、和んだ雰囲気で顔合わせは無事に済んだのだった。

◇　◇　◇

新入生総代こと理璃との顔合わせを終え、悠元は用事があると言って達也や深雪と別のルートを通っていた。その行き先はというと―

――九重寺であった。駆け上がることなく階段をゆっくり上っていく悠元だったが、上り切ったところで幻術の発動兆候を即座に感じた。

（これは幻術――――気配は5か所。だが、そのいずれにも九重先生はいない。飛んでくる物体にも物理的および魔法的殺傷力は無い……これは、6個目。だとすると――――これが手っ取り早いか！）

感じられる気配は5か所。「天神の眼（オシリス・サイト）」でも全ての気配が存在するように視えている。すると、その5か所から同時に放たれる飛翔体もとい飛び道具を読み取り、物理的・魔法的な殺傷力はない幻術と判断。悠元は〝6個目〟の殺気が僅かに籠った飛び道具を見つけ、これを仕掛けた人間の行動予測を加味した上で金属性の天神魔法――――任意の地点を起点とした範囲内の粒子構成体を分散・拡散させる効果を付与した雷撃を放つ『迅雷電散（じんらいでんさん）』――――を、今回は使用者である悠元自身を起点とし、対象を幻術および運動エネルギーの分散に限定して発動した。

すると、存在として視えていた飛び道具や気配が霞となって消えていく。殺気を微かに感じた本物の飛び道具――――刃引きを一切していない手裏剣が威力を失って目の前の地面に突き刺さり、悠元の真正面が歪んで防御術式を展開する八雲が姿を見せたのだった。

「いやー、達也君相手に練習していたお遊びを簡単に破るとはね。流石は神楽坂家の次期当主殿だ。今回のはかなり念入りに誤魔化せたと自負していたんだが」

「俺を達也に仕掛けるお遊（ネタ）びの練習台にしないでください」

八雲が使用したのは、使用者の気配を写し取った分身を生み出すことで使用者自身の位置を捕捉できにくくする古式魔法の忍術『火影（ほかげ）』。それを『纏衣の逃げ水』と組み合わせることで自身からの攻撃を隠した。その証拠に、地面に分かりづらく触媒用の水晶と木製のお札が埋め込まれている。

これが達也の場合、「エレメンタル・サイト」でも騙される確率はかなり高いと思う。自分の場合はほんの僅かな殺気を掴めたからこそ、意地の悪いことを平気でする八雲がこちらで感じ取れた5か所のい

ずれにもいないと判断して天神魔法を使用した次第だ。
恐らくだが、本来の流れだと達也が本物の飛び道具をすんでで躱したところに間髪入れず懐へ飛び込み、体術で達也をねじ伏せる魂胆なのだろう……と問いかけると、八雲は全て見破られたことに乾いた笑みを見せていた。なお、八雲曰く「これでも達也君を騙し切れる確率は7割ぐらいだろうね」とのこと。
仮に八雲が突っ込んできた場合、金属性の天神魔法『雷電』を発動させて打撃を逸らした上で、重力制御術式を「ライトニング・オーダー」による多重合成で対象物に対して最大マッハ9まで反復ベクトル加速・急速落下させる『表蓮華(おもてれんげ)・九重塔(ここのえのとう)』を試しに使うつもりだった。間違いなく人間相手に使う代物ではないだろうが、剛三から「あのエロ坊主にはそれぐらいしても怪我ぐらいで済むであろう」と言われている。
普通の人間相手に使えば、間違いなく肉片すら残らないであろう魔法なのは自分でも自覚はしている。『相転移装甲(フェイズシフト)』の鍛錬で『表蓮華・九重塔』を受けてもピンピンしている剛三がおかしいのは今に始まった事ではない……もしかしたら、達也よりも攻略法が見出せない最強の裏ボスと断言しても過言ではないと思う。
余談だが、もし八雲が接近戦を挑んだ場合の対処を口頭で伝えると、八雲は盛大な冷や汗を流しつつ「僕の勘が『近付いたら死ぬ』と察したのは間違いじゃなかったか」と零していた。爺さんは八雲に一体何の恨みがあるのか、と思わず言いたくなったが……恐らく剛三の妻が存命の時に八雲がからかったのかもしれない。その辺は昔話を聞くときにでもとっておこうと思った。
そんなやり取りの後、悠元は八雲の案内で庫裏の縁側に通された。今回悠元が八雲のところを訪れたのは、人間主義者も含めた今後のことに関わる情報を確認するためだ。八雲の弟子が運んできた茶を一口啜ると、悠元は八雲に問いかけた。
「事前にお送りした暗号データに関してですが、やはり横浜経由ですか？」
「間違いなかったよ。名古屋にいたＵＳＮＡの人間主義者らは横浜の

中華街――――周公瑾の手引きによるものだと判明した。にしても、大陸の古式魔法である僵尸術（きょうしじゅつ）による遠距離通信技術とは……剛三殿の敵は末恐ろしいね」

悠元は今後を見据えて「フリズスキャルヴ」でも解読不能な『五芒星（ペンタゴン）』による超高圧縮暗号データ通信技術を『九頭龍』に提供した（神楽坂家に存在したフリズスキャルヴの端末を分解する際、『八咫鏡』を用いて端末から核となる「エシェロン」の通信傍受システムを捕捉してそのままそっくりコピーしているため、『ペンタゴン』の暗号強度も計測済み）。それと同時に現在国内で起きている状況の調査を八雲経由でお願いしていた。加えて、敵の黒幕である顧傑と周公瑾が僵尸術を用いての遠距離通信をしていることも既に掴んでいる。

別にリアルタイムで引き出す必要はなく、監視している『霊亀』の履歴から周公瑾関連の情報を抜き出すだけで済む。彼らは気付いていないが、監視カメラが常時稼働している状態の部屋で密談しているようなものだ。

にしても、ＵＳＮＡ（アメリカ）が有する世界屈指の通信傍受システムを以てしても破れない『ペンタゴン』――――ＵＳＮＡの国防総省の通称と同一なのは些か皮肉めいているかもしれない。

「加えて、神楽坂家にもあった『フリズスキャルヴ』も有していますからね。彼が国内に入った時点で爺さんが動きますから……問題はＵＳＮＡ（アメリカ）がまた出張ってくる可能性があるので、彼らが動く前にケリを付けます」

「その方法は……今は聞かないでおくよ」

現状は顧傑が日本に乗り込んでくる可能性が『ある』というだけで、確定事項ではない。だが、顧傑は四葉だけでなく周公瑾経由で自分にも牙を向けたのは春の一件で認識している。一応四葉とは遠い親戚関係なのに違いはないが、勝手な都合で一緒くたにされるのは御免被る。

だが、自分の祖父と同様に〝敵〟だと認識した以上、この世に魂の一片たりとも残すことなく消滅させると決めた。とりわけ顧傑は大陸出身の僵尸術使い（ネクロマンシー）。原作における周公瑾の例からしても、それこそ

自身の魂を傀儡と化してでも復讐を成し遂げようとするかもしれない。
なので、害を為す悪霊など祓うに限る、ということだ。
「それはひとまず置いておきますが……もう一つのほうは調べが付きましたか？」
「そちらは割と簡単だったよ。神楽坂家の詳細はそれこそ魔法師社会や政財界でも一部しか知らない。大概は上泉家に並ぶ古式魔法の大家と認識されている形だからね」
それは、神楽坂悠元としての認知度に関わる話だ。そもそも九校戦の時点では十師族・三矢家の姓を名乗って出場していたため、非魔法師からすれば三矢の人間――――三矢悠元として見られている認識が根強い。
九校戦後に神楽坂の姓を名乗るようになったが、魔法科高校には「上泉家と同格の陰陽道系古式魔法の大家」という説明で通している。神楽坂の詳細を知る人間となれば、上泉家や皇族を除けば政治家でも総理大臣クラスとなり、財界でも一握りの財閥のトップや関係者しか知りえない。魔法界でも導師・師族二十八家・百家の当主クラスに限定される。
つまるところ、達也たちはその例外中の例外として知る形となったわけだ。
「尤も、君の場合は剛三殿の実孫だ。神楽坂の名を使おうとも、上泉の名を出そうとも、どちらにしても決して偽りではない事実だからね……ひょっとしてだけれど、今行われている周公瑾主導のメディア工作に特大の罠を仕掛けるつもりかい？」
「ええ。連中がこの国の力を損なおうと画策しているのなら、頭に乗ったメディアも含めて叩きのめす策です」
単にやり返すだけでは意味がない。今後も含めて国内の反魔法勢力に本気で〝自由の代償〟を支払ってもらう必要がある。それも『倍返し』以上にしてやる腹積もりだ。その為に必要な資金も十二分にあるのだから、何ら問題はない。尤も、メディア工作の罠を仕掛ける役は『九頭龍』に担ってもらうため、それを察した八雲は頭を掻くよう

な仕草を見せたのだった。

相手を出し抜く同族嫌悪の一例

夕食後のリビング。取り決めた役割分担の通りに洗い物を水波に任せ、深雪はコーヒーを達也と悠元の手元に置き、自分のカップをサイドテーブルに置いて悠元の隣に座った。話題は今日の放課後に出会った理璃も含めた新入生のことについてだ。

「十文字先輩からですか？」

「ああ。明確な強さを見せている以上、燈也よりも適任と考えたのだろう。ただ、正式に三矢を名乗ったのは高校入学から九校戦までの4ヶ月少々の俺に十師族の力の在り方を教えられるか微妙だがな」

克人からのメールに関しては、今後達也と深雪にもそれとなく協力してもらう可能性があるので内容を開示することにした。このことは事前に克人本人からも了解を得ている。一応友人の力を借りることがある、とだけ書いておいたが、場合によっては燈也の力を借りることも想定しているので嘘はついていない。

「二人も昨年の九校戦に出ているからこそ理解できるだろうが、〝最強〟の名に恥じない働きが求められる。単純な力押し程度なら、それこそ千代田先輩のような戦法で十分だからな」

だからこそ、昨年の新人戦男子ピラーズ・ブレイクでは決勝リーグ以外で硬化魔法による完全防御を見せた上で相手の防御を貫通させる攻撃魔法を披露した。それも、試合会場を一切傷つけることなく氷柱だけを破壊するという芸当を披露した形だ。新人戦モノリス・コードでも相手の目を欺いたり、相手の魔法を無力化しつつ持久戦に持ち込んだり、更には崩落した廃ビルから無傷で生還した。

いかに相手のペースを速攻で崩して自分に流れを引き寄せることが出来るか。そして、自分側の被害を限りなく抑えつつ、必要な魔法を即座に選択して展開する。九校戦のようにルールが存在するならば、そのルールの範疇を超えない範囲で工夫する――――それが出来てこそ〝最強〟の証明となるだろう、というのが悠元なりの持論であった。

「悠元は七宝家の長男を警戒しているのか？　確かにお前と深雪に視

線を向けていたようだが……確か、彼は俳優業もしている筈だな」
「魔法科高校への入学で一旦休業するようだけどな。師補十八家の次期当主であり、来年には師族会議が控えている。十師族選出への点数稼ぎを目論んでも何ら不思議じゃない……ん、今日は少し苦めだな」
「すみません、悠元さん。お砂糖が足りませんでしたか？」
「いや、偶にはこういうのも悪くないよ」
少しばかり甘みが足りなかったミルク入りのコーヒーも悪くはないと思いつつ、悲しそうな表情を浮かべた深雪の頭を撫でて落ち着かせると、右手でカップを持って一口飲んだ上で話を続ける。
「七草家の双子のことは面識があるし、十文字家の理璃ちゃんも問題はないと思う。七宝家の現当主とは面識があるが……今朝登校しているときにも触れたが、七草先輩との関係から唆している奴がいるのは間違いない」
「他でもない悠元のことだ。凡その見当もついているのだろう？」
「……北山邸のパーティーで出会った小和村真紀。彼女こそ七宝琢磨を唆してる可能性が最も高い人物だ」
真紀は昨年の九校戦に関係するメディア工作絡みで知り、彼女は芸能界デビューした琢磨に一早く目を付けていた。その段階で「新秩序（ニュー・オーダー）」の構築を目論んでいたと考えられる。
彼女の父親はメディア関連企業グループのカルチャー・コミュニケーション・ネットワーク（通称：カル・ネット）の社長を務めているため、家の力を使って上手く取り入っていこうと考えての行動なのだろう。
「何せ、雫も彼女の従兄が〝利用〟されていると呟いたほどだ」
「そうだったのですか……では、ほのかに忠告なされたのは七宝君絡みということでしょうか？」
「聡いな深雪。七宝琢磨は魔法科高校内で自らの同志を集めて『新秩序（ニュー・オーダー）』なるものを作ろうとしている……七草家に敵愾心を抱いておきながら、やってることは七草家と変わりない内ゲバというのは何とも滑稽なことだと思うわ」
この場合、最もふさわしい言葉を挙げるとするなら『同じ穴の狢（むじな）』な

のかもしれない。
昨年の大亜連合との戦闘や新ソ連からの佐渡侵攻未遂、そして今年に入ってからのＵＳＮＡ軍絡みの事件が３つ（戦略級魔法無力化未遂、パラサイト事件、セブンス・プレイグ落下事件）。
それらを経験しておいて師族会議で今後の統一方針を出すのかと思えば、またもや七草家の四葉下ろし。流石にお笑いネタでも天丼の範疇を超えてるような状況に対して、弘一に意見できる立場の烈は動こうともしていない。
これでは、横浜事変後に態々釘差しをしに行った意味がないに等しい。どうせ手が出せないと高を括られている可能性もある。
（もはや四葉（アンタッチャブル）家という名の中毒症状でも抱えてるんじゃないか、これは……とはいえ、長男も長男だからな……）
原作を覚えている限りだと、確か若手会議の際に深雪を矢面に立たせようとしたのが七草家現当主の長男だった。仮にもしそんなことをするつもりなら、本気で一発ぶん殴った上で「誰かに頼むぐらいなら自分でやれ」と言い放つだろう……惚れた弱みなのは否定できないが。
弘一の長男がこの分だと、同じ母親から生まれた次男もあまり期待できない可能性が高い。そうなると、最悪七草家の中で秀でた能力を有する真由美が次期当主に担ぎ上げられる可能性が一気に浮上するだろう。二木（ふたつぎ）家、四葉家、そして六塚（むつづか）家現当主は女性なので、それらに倣う形での当主就任は十分可能性がある。
「悠元さん？」
「ん？　ああ、ちょっとした考え事だよ。七草先輩に近しいと思われている達也と深雪が生徒会にいる以上、七宝が生徒会に入ることはないだろうが、一応警戒はしてほしい」
「分かった。そうなると、悠元がいる部活連も対象外になると思うが」
「どうだろうな。その辺りをどう唆しているかにもよるが」
こうなると、七草家に対して今までのレベルすら生温いと言わせるような〝脅し〟も選択肢に入れた上で行動した方がいいだろう。そのためには自分の持つ人脈を活用し、七草家に決して「ノー」とは言

わせない状況を構築する必要がある。場合によっては、破棄された泉美との婚約を条件付きで復活させる選択肢も入れる必要がある。
尤も、その条件を設定するために元々の条件を確認する必要も出てくるため、数日は司波家に帰れないことも想定した上で行動しなければならない。深雪をはじめとした面々には迷惑を掛けてしまうが、その穴埋めはしっかりするつもりだ。
「散々言ってきたが、俺自身七宝琢磨の為人(ひととなり)を詳しくは知らない。ただ、七宝家は七草家への対抗心からか十師族への執着が強い師補十八家のひとつとして知られている」
この辺は各々の数字(ナンバー)――魔法の研究テーマによるものが大きいだろう。三矢家と同じ〝三〟の数字を冠する三日月(みかづき)家は三矢家との協力・連携によって師補十八家のひとつとしての責務を果たしており、十師族への執着は極めて薄い。
悠元の存在でそれが一層加速しており、七宝家のように同じ数字を持つ家同士で諍いを起こすよりも、協力して魔法技術を研鑽することに方向性を固めた形だ。三矢家で確立した「ラウンド・オーダー」や「ライトニング・オーダー」は三日月家の協力があってこそ完成したと言っても過言ではない。
「俺らの年頃というのは向上心というか野心が強いからな。達也にもそれぐらいはあるんじゃないか?」
「俺の場合は人並程度のものでしかないがな。悠元は縁がなさそうに見えるが」
「野心とまではいかないが、人並に負けず嫌いな部分があるのは否定できん。って、何で笑うかな、深雪さんや」
「ふふっ、すみません。悠元さんはどこか達観した部分がありますので、そういった部分があるとは意外でしたから」
酷い言い草だな、と心の中で吐き捨てつつ悠元は一息吐いた上で会話を続ける。
大抵の人間ならば、誰かに認めてもらいたくなるという自己顕示欲がある。とりわけ子どもに至ってはその欲求が人一倍強くなる。七宝家現当主はかなり理知的で七草家に対してもまともな評価をして

おり、その上で着実に点数を重ねていくタイプなのは間違いない。来年には十師族選出会議があるが、急いて七宝の足場を揺らがせる様子は見られない。

だが、琢磨はその逆だ。唆されている自覚がないのも問題だが、七草の単語を聞いただけで視野が狭まるのは……ある意味四葉に拘っている弘一と同族に思えてしまうのは俺だけなのだろうか。

「七宝は自分が十師族に相応しい力を持っていると思っているようだが……何も分かっちゃいない奴に十師族なんて務まらない」

しがらみの多い〝最強〟の名を持つ十の師族……元々の実家のことを言うようでいい気はしないが、元十師族の悠元からすればそんなものにどれだけの魅力的な価値があるのか、と冷ややかな評価を下していた。

強さを見せろと言う義務と、強くなり過ぎれば足を引っ張られる有様。表向きの権力を持たないが、政財界や国防軍、各治安維持組織との繋がりにおいて多大な影響力を有する組織……本当に矛盾だらけのシステムという他ない。

悠元が神楽坂家次期当主に選ばれた際、臨時師族会議が開かれて自分の処遇についての議論となった。会議の発起人は九島烈……この時点で、いくら剛三の戦友とはいえ彼に対して友好的に接する気は失せてしまった。

とはいえ、彼の孫からお詫びのメールが届けられたため、九島家への対応は是々非々の中立の立場を取ると自分の中で決着させた。

「いつになく辛辣な評価だな、悠元。だが、お前は叔母上すら認める最強格の魔法師……なればこそ言える台詞なのだろうな」

「達也……いくら四葉の関係者を名乗ってないからって、自分らのことを棚に上げるな」

「そうか？　これでも真っ当に評価したつもりだがな」

「そうですね。私でも悠元さんに勝てませんから」

一体どの部分での勝負となるのか……というのは、これ以上聞いたら辛うじて残っている人間らしさが消えそうなので押し黙ることにした悠元だった。

それはともかくとして、琢磨からすればここにいる三人は学業的にも実績的にも申し分ない。七草家ほどの情報収集能力は持ち合わせていないだろうが、恐らく琢磨はそのことで敵愾心を抱いているのだろう。

ただ、達也が得意とする魔法工学の分野は、七宝家が得意とするＣＡＤを用いない群体制御魔法『ミリオン・エッジ』からして軽視される方向にある。別にそのことに関して目くじらを立てるつもりはないが、変なところから横槍を入れられる可能性もある。もしくは達也を二科生（ウィード）として見下すかもしれない。

なので雫には申し訳ないが、ほのかと出来るだけ一緒に行動してもらうようにお願いをする。元々小・中学校が同じ幼馴染なので、別に一緒に行動しても問題はない。達也はその気になれば単独で圧倒できるし、深雪に関しては……琢磨が下手なことを口走って次の日に琢磨の氷像が出来たとしても責任は持てない。

◇　◇　◇

西暦２０９６年４月８日。国立魔法大学付属第一高校入学式当日の朝。

不埒な視線（主に七宝）は無論のこと、流石に昨年のような待ち伏せ（三矢の本屋敷を出た途端に真田からスーパーソニックランチャーを突き付けられたときは生きた心地がしなかった）がないことに安堵していた。完全にやっていることが銃刀法違反なのは誰しもが思うことだろうが、朝早くに実家や近所に迷惑を掛けないために渋々同行せざるを得なかった。

早起きして司波家の地下室で念入りに気配を探っていた際に、妙な気配を感じたと言って達也が飛び込んできた。そのことには謝罪しつつも、事情を説明すると達也も納得してくれた。ただ、事情を聞き終えた時の達也から「普通に迎えを寄越さない辺りは大尉らしい」と呟いていた。

常識って一体何だろうと問わずにはいられなかった。

「しかし、水波ちゃんもいいのか？」

「構わない。寧ろ昨年は俺が時間を持て余したからな」

第一高校に到着したのは入学式開会の2時間前。こんな時間に登校したのは、言うまでもなく入学式の準備の為だ。生徒会役員である達也と深雪は言うまでもないが、生徒会の手伝いとして有志も駆り出されることになる。悠元はその有志という形で参加しており、水波に関しては本来部外者だが、達也が昨年の経験から強引に連れてきた。

講堂の準備室には既に五十里とほのかがいて、お互いに挨拶を交わす。

「おはようございます、達也さん。悠元さんに深雪もおはようっ」

「おはよう、司波君に悠元君。時間通りだね」

深雪とほのかが挨拶を交わしている横で、達也と悠元も五十里に挨拶をする。

「おはようございます。早いですね、五十里先輩」

「僕の性分でね。早めに出ないと落ち着かないんだよ」

「おはようございます。まあ、早く来るに越したことはありませんからね」

この辺は婚約者である花音の絡みも含めた発言なのだろう。その彼女がここにいないということは、今頃講堂で座席のチェックをしていると思われる。軽く会話を交わしたところで、五十里が深雪の後ろにいる水波へ目を向けた。

「ところであの子は？　新入生だよね？」

「ええ。水波」

「はい、悠元兄様」

原作だと達也の役目なのだが、その役目を自身が担うことに内心で苦笑しつつも水波を呼ぶと、水波は少し嬉しそうな表情を垣間見せつつ三人のもとに寄った。すると、五十里が自身の記憶を思い起こす様にしながら悠元に尋ねた。

「もしかして、以前言っていた妹さんかい？」

「いえ、彼女は元治兄さんの奥さんの親族でして、簡潔に述べるなら義理の従妹です。水波、彼が五十里先輩だ」

「はじめまして、五十里先輩。桜井水波と言います。悠元兄様や達也兄さま、深雪姉さまがいつもお世話になっております」

悠元、達也と深雪の敬称の呼び方が若干異なっていることをしっかり伝える様な口調で、五十里も三矢家絡みの関係者という認識を抱いたようだ。
「よろしく、桜井さん。それにしても、彼女は司波君たちとも知り合いなのかい？」
「水波の叔母にあたる方が二人と家族同然のご近所付き合いをしていて、その縁で水波とも知り合っていたらしいです。自分もそのことを知ったのは最近の事ですが」
ガーディアンを〝家族同然の近所付き合い〟と表現するのは如何な事と思うが、司波家の家事や身支度などをフォローしていたことは事実であり、親密な関係を持っていたことは間違いない。その意味で家族同然という言葉に嘘は含まれていない。物は言いよう、とはよく言ったものだと思う。
五十里も悠元の言葉に納得したようで、それ以上の追及が来ることはなかった。
ただ、達也から「お前の頭脳は一体何で出来ているんだ」とでも言いたげな視線が飛んできたが、瞬間記憶能力を持つお前が言うな、と返したくなったところであずさ、花音、セリア、そして新入生総代の理璃が入ってきた。その中でもセリアは水波に興味津々の表情をしつつ、彼女に対して積極的に話しかけていた。

人がいいのと人が悪いのと

あずさ達が準備室に到着した時、あずさは自分の持っている端末の時計機能が狂ったのかと思ったが、そこは深雪のフォローもあって特に混乱が起きることはなかった。

「おはようございます、神楽坂先輩。今日は入学式のお手伝いでしょうか？」

「おはよう、理璃ちゃん。その認識で間違ってはないよ」

いくら後輩とはいえ一応十師族の直系に対してちゃん付けはどうかとも思うが、理璃本人が「いい」と言っている以上は特に修正する必要もないな、と判断して心の片隅に追いやった。ただ、リハーサルや打ち合わせ中は水波が表面上冷静を装っているが、実際には部外者ということで内心ソワソワするような雰囲気が見られた。だが、これもガーディアンとしての訓練を含めて達也が連れてきたので、それに対して口を出す気はない。

「そしたら中条先輩、開会３０分前までに所定の位置へ向かいますので」

「はい。宜しくお願いしますね、神楽坂君」

あずさにそう一言告げて、悠元は準備室を出て講堂の外に出た。開会まであと1時間程度であり、周囲には新入生らしき姿もちらほら見かけている。ただ、制服の花弁のエンブレムによる有無――つまるところ、一科生と二科生に分かれて各々の集団が自ずと出来ていることには内心で溜息を吐きたかった。

そんなところに態々首を突っ込む義理はない、と判断して敷地を歩いていると、風紀委員の腕章を付けている雫と幹比古に遭遇した。

「あ、悠元。おはよう」

「雫、それと幹比古もおはよう。二人は巡回か」

「おはよう、悠元。それもあるけど、メインは新入生の誘導だね。悠元は……何の役割でいるんだい？　確か、部活連は特に役割がなかったはずだけど」

「来賓の誘導役を深雪とやることになっている。その顔触れも色々面

倒だが」
　事前に入学式の来賓についての情報を貰っているが、国策機関ということで国会議員が参加するのは予測の範囲内。ローゼン・マギクラフト日本支社・支社長に就任したエルンスト・ローゼンも既定路線。
　現職の内閣総理大臣も参加するのは一応予測していたし、その他の政財界の著名人もまだ理解できなくはない訳だが……問題は魔法界と国防軍からの参加者一覧にあった。
　周りの目もあるので、悠元は小声で話す。
「上泉家から当主代理で爺さんこと上泉剛三、七宝家からは現当主が出席……そして、国防陸軍総司令官こと蘇我大将も出席する」
「ええっ……!?」
「お父さんから少し聞いてたけど、改めて聞くと凄い顔ぶれだね。悠元のお母さんが出てこないのは意外だけれど」
「神楽坂は四葉と別のベクトルで畏怖の対象みたいなものだし、その詳細はこの国の一握りしか知りえないからな」
　十文字家は理由を知っているのでともかくとして、七草家は現当主が出席しないのは気に掛かったが……いや、その原因を悠元は把握していた。
　正確に言えば、来賓のリストを貰った際に七草弘一の名がなかったので何か事情を知らないか、とチャットアプリでそれとなく香澄に尋ねたのだ（泉美に尋ねても良かったのだが、冷静に聞ける相手となれば香澄のほうがまだいいと判断した）。
　すると、香澄から返ってきた返答はある意味納得がいくものであった。
『あー……実はね、お父様が入学式に出席する予定だと言ったら泉美が癇癪を起しちゃって、「お父様は絶対に入学式に来ないでください。来たら二度と口を利きません」と夕食の時に強い口調で言い放っちゃったもんだから』
　とはいえ、新入生総代の関係で十文字家の代表が来る以上は七草家の関係者を出さないと恥をかくことになりかねない。なので、夕食に同席していた真由美が弘一の代理として出席することで何とか決着

した形だ。
　十師族においてトップクラスの発言力を持つ七草家の当主でも実の娘から「口を利かない」だなんて宣告されることには耐えられなかったのだろう。そうやって聞く分には彼も人の親なのだと思ってしまうのだった。
　閑話休題。
「ま、何にせよ直接会うことはないと思うが、頭の片隅にでも入れておくといい」
「うん。それじゃ、またね」
「悠元も無理はしないでくれよ」
　雫と幹比古が離れていくのを確認してから悠元は歩き出した。前庭にも新入生らしき人物が数名ほどいるのは確認したが、見知った顔はいないようだ。
　すると、悠元から見て前方からピシッとスーツを着こなしている人物――――昨年度の卒業生であり、前部活連会頭を務めていた十文字克人（かつと）が歩いてきた。向こうも割と早い段階で悠元の存在を視認していたようで、それを察しつつ悠元も克人に向けて歩みを進めた。
　お互いの距離が約1メートルとなったあたりでお互いに足を止め、悠元が先んじてお辞儀をしつつ挨拶をした。触れてはいなかったが、春休みに臨時師族会議（内容は九亜たちの保護に関しての事情説明）で顔を合わせた時以来となる。
「お久しぶりです、十文字先輩。春休みにお会いして以来ですね」
「久しぶりだな、神楽坂。部活連への移籍もそうだが、理璃のことに関してお前に放り投げる形となってしまったことは本当に済まない」
「その思惑も自ずと理解しておりましたし、先輩として後輩の面倒を見るぐらいならそこまでのことではないです。なので先輩が気に病む必要は一切ありません」
「そうか……ただ、直接会って自分の口でお前に伝えるべきだと思った。それは理解してほしい」
　話を聞くに、十文字家当主は忙しいために出ることが出来ず、克人が代理として出席することになったと説明した。この辺りの律儀さ

は克人らしいと思いつつ、その謝罪の言葉を甘んじて受け取ることにした。その上で悠元は克人に問いかけた。
「それにしても、十文字先輩は何故こちらにいらっしゃるのですか？」
「お前への謝罪も理由の一つだが、七草に頼まれての付き添いもあってな」
真由美に頼まれての付き添い、という言葉に悠元は首を傾げた。真由美が七草家当主代理で出席するのは知っているが、その付き添いとして十文字家当主代理の克人が出張ってくる理由が見当たらない。
もしかしたら婚約の関係かとも思ったが、現状において真由美の婚約者候補である五輪家長男との正式な婚約解消はまだ起きていない。
訳が分からないという表情を浮かべている悠元に対し、克人が説明を入れた。
「七草は妹たちの手綱をコントロールするので精一杯らしくてな。なので、万が一の時は七草の来賓としての代理を兼任するよう頼まれてしまったという訳だ」
「なんてちぐはぐな……それだったら、当主夫人か先輩の上の兄でも出てくれれば……いえ、察しがついたのでそれ以上は何も聞きません」
普通、七草家の代理をするならば七草家の人間か現当主と所縁のある人間を代理にすべきであり、その意味で真由美が抜擢された。
だが、真由美は香澄と泉美が好奇心から暴走して迷惑を掛けないか不安な部分があり、誰かに来賓の代理を頼もうとしたところで身内があてにならないと判断して、七草家と関係があって来賓にいても違和感がない人物として克人に頼み込んだのだろう。
現当主の秘書（ボディーガード）は論外だし、弘一の後妻である現当主夫人は多忙で家におらず、前妻の子である兄たちが出るには七草としての実績と威厳が足りない……七草家の将来がほんの少し心配に思えてならなかった。
真由美が心配するのは、妹たちがやってきたことに対するものなのは言うまでもないし、その原因の一端に自分がいることも事実で、悩みの種は尽きないようだ。
「十文字先輩は一時期代表代行をやっていましたから、その経験を買

われての代理出席ということですか……納得はしました」
「そういえば、神楽坂は部活連副会頭と服部から聞いたが、今日は有志としての手伝いか？」
「ええ、自分の役割は来賓の誘導と彼らの話し相手です。そろそろ開場まで時間も迫っていますし、控室までご案内いたします」
「ああ、宜しく頼む」
　妙なところで原作から変化した流れが出来ていることに複雑な気持ちを抱きつつ、今日の仕事である来賓の誘導という形で克人を控室に案内するのであった。

◇　◇　◇

　妙な変化、という部分ではこちらにも当てはまるといえた。尤も、原作主人公の達也からすればその変化を感じることなど出来ないので、どこがどう変化したなどと聞かれても答えようがない質問である。
　達也はまだ講堂に入っていない新入生の誘導ということで敷地内を巡回していた。昨年の入学式では真由美がその役割を担っていたと聞き、どことなく親近感を覚えていたからなのか……レディスーツ姿の真由美と遭遇した。
「久しぶりね達也君。とは言っても、約3週間ぐらいだけれど」
「いえ、おはようございます七草先輩」
　直接顔を合わせるのは九亜の件以来だが、それほど長い時間話していたわけではない。そもそも、真由美自身の事情もあって長い会話となると昨年の九校戦で真由美のサブエンジニアを務めた時ぐらいかもしれない。真由美と仲が良い男子となると、達也の脳裏には一人の親友の姿が思い浮かんだ。無論服部ではないことなど誰にでもわかる話だが。
「あーちゃんから生徒会に入ったって聞いたわ。悠君が部活連副会頭なのは十文字君の差し金なんでしょうけど」
「概ね間違ってはいないと聞いています」
　それにしても、と達也は思う。既に大学生なのだから魔法科高校の制服でないことは当たり前の話だが、着こなしている衣服や装飾品、

薄化粧が彼女に調和の取れた美しさを纏わせていた。ファッションやメイクは人を変身させる〝魔法〟という言葉があるが、身内である妹のファッションを目の当たりにしてきた達也でも、真由美が大人びたような変化には驚きのような感情を覚えた。きっと、それ以上に真由美自身が一階梯大人になったことが大きいのかもしれない。

そんな風に考えていた達也に対し、真由美が言葉を投げかけた。

「達也君、変わったわね」

「そうでしょうか。ああ、制服は確かに変わりましたが……」

虚を突かれた形の達也は、真由美の「変わった」という言葉が二科生の制服から魔法工学科の制服に変わったということなのかと思った。だが、真由美はクスッと笑みを零した。

「それもあるでしょうけれど、昨年の入学式で初めて出会った達也君と今の達也君は全然違う顔をしてるもの。ハッキリ言うと、去年よりずっと自由な顔をしてる。きっと、悠君がいい刺激になったんじゃない？」

真由美の指摘に対し、達也は反論しなかったのではなくできなかった。

それは彼が自分では気付いていなかった事実。自覚していなかった真実。

九校戦の新人戦モノリス・コード代理出場の折、克人に「二科生の立場に甘えるな」と言い放たれたこともそうだが、自身の中で割り切っていたつもりでも、実際のところは人並に劣等感に縛られていた自分がいたこと。

その壁を乗り越えるどころか『分解』してしまったのは、自分を親友と呼んでくれた埒外の天才という事実。せめて彼には負けたくないと改めて思うようになってから、劣等感の事など頭の中からすっかり消え去っていた。

「降参です。自分のことは良く分からないものですね」

達也は潔く白旗を揚げた。それは口先だけでなく先人の教えも含んだ上での敗北宣言だった。それを聞いて得意げに胸を反らしている真由美の姿が目に入った途端、達也の人が悪い性格からか反攻の意

思が芽生えた。
「見違えたといえば、先輩も大分変わりましたね」
「えっ、そうかしら？」
「ええ。すっかり大学生としての風格が備わっていて、とても驚きました」
「そ、そうかな？　まだ入学式（国立魔法大学の入学式は４月６日）を済ませたばかりなんだけれど」
　達也の性格を詳しく知っている人間からすれば、真由美に対して手玉に取るような言い方をしていることに気付くだろう。だが、それを知っている側なのに褒められていることで気分が舞い上がっている今の真由美には、そこまでの注意を向けるだけのリソースは残っていなかった。そして、人が悪い達也の〝口撃（こうげき）〟は続く。
「まるで別人のように大人びていて、思わずかける言葉が浮かばなかったほどです」
「そっかそっか……って、ん？　……達也君、それってどういう意味？」
　とはいえ、あまり引き延ばして要らぬやっかみを買いたくないと達也は判断し、わざとらしく発言したところで真由美は気付いてしまった。
「それ、と仰いますと？」
「別人のように大人びたって……それって、私が子どもっぽいってこと？」
「気のせいです」
　もしここに悠元がいたら、真由美を褒めるだけ褒めまくって、彼が作った菓子類でいつぞやの時に見せた『表蓮華』のように急転直下のレベルで落とすのが目に見えるようだった。
　尤も、自分の妹からジゴロと言われてしまう彼だけの芸当なので到底真似など出来ないだろう。
「俺は先輩のことを童顔だとか幼児体型などと思ったことは一度もありませんので」
「童顔……幼児体型……」

達也の言葉を聞いて、勝手にショックを受ける形となった真由美は落ち込んだ。すると、その場面に居合わせる形で達也からすれば見慣れない顔――――いや、新入生のデータベースで見たことのあるショートカットの小柄な少女が真由美の姿を見つけて近寄ってきた。
「あ、お姉ちゃん！　こんなところに……って、どういう状況？」
「香澄（かすみ）ちゃん、聞いて！　達也君たら、私のことを童顔だとか幼児体型とか……」
「え、ええっ……って、司波達也先輩ですか？」
「ああ、自分はそうだが……君が先輩の妹の」
「はい、七草香澄と言います。宜しくお願いします、司波先輩」
活発そうな容姿に対して、最低限の礼儀が出来ているのは達也の中で評価が高かった。ただ、真由美が泣きつくような感じで香澄にしがみついているのを何とかする方が先と考えて助け舟を出すことにした。
「名字呼びだと先輩や君の妹と混同するから、名前で呼ばせてもらっていいか？　香澄、実は――――」
達也はこうなった事情を簡潔に香澄（とぐずっている真由美）へ説明した。すると、香澄は呆れたような表情を真由美に向けていた。達也からすれば、その表情がどことなく悠元を思い起こさせるような雰囲気を感じたのだった。
この状況だとどちらが姉なのかと聞かれても不思議ではない……と思ってしまったことに苦笑のような感情を滲ませたのだった。
「お姉ちゃんさあ、勝手に罪を捏造するのは良くないと思うよ。司波先輩、うちの姉がご迷惑をお掛けいたしました」
「いや、こちらも気にしていない。先輩のこういった言動や行動は目の当たりにしていたからな」
「やっぱり……悠元兄（にい）の言う通りだったよ」
この様子だと、真由美の暴走に対して反面教師という形で香澄の性格が形成された可能性が一番高いと思わざるを得ないだろう。香澄が小声で述べた後半の言葉は誰にも聞こえることはなかった。すると、香澄は本来の用件を思い出したように真由美へ尋ねた。

「って、そうだ。お姉ちゃん、泉美(いずみ)の姿を見かけなかった？」
「え？　一緒に学内を回ってくるって別れたはずじゃなかった？」
「それがね、半分ぐらい回ったあたりで『これは、お兄様の気配がします！』とか言って目にも止まらぬ速度でどっか行っちゃって……少なくとも学校の敷地内にいるとは思うんだけれど」
「……」
　香澄と真由美のやり取りを聞いて、達也は自身(みゆき)の妹がブラコンを必要以上に拗らせたらそうなっていたのでは……と何故か思ってしまったが、今はその必要などないと判断して頭の中からその思考を振り払って真由美に問いかけた。
「先輩、その彼女は連絡用の端末を持っていないのですか？」
「あ、そのことを忘れてた」
「え、あ、そうね。待ってて、今連絡を――――」
　達也の問いかけを聞いてその発想に至らなかったことを香澄は恥ずかしがり、真由美は懐から通信端末を取り出して泉美と呼んだ少女に掛けようとしたところ、ここで達也の通信端末の着信音が鳴る。その設定で誰からの連絡なのかを察した達也が通話ボタンを押すと、聞こえてきたのは自分の親友の声であった。
『達也、取込み中だったか？』
「悠元か。実は七草家の新入生が一人敷地内のどこかに迷い込んだらしいのだが」
『あー、なら話が早いわ。泉美ちゃんなら……俺に抱き着いて離れないんだ。香澄ちゃんが近くにいたら来賓の控室がある校舎に連れてきてほしい』
「……分かった」
　親友こと悠元との通話を終えた達也は真由美と香澄からの視線に気付いた。
　達也と悠元の会話は真由美と香澄の耳にも入っていたようで、香澄に至っては疲れたような表情をしていた。ともあれ、真由美は来賓の控室を知っているので、達也に「香澄ちゃんは私が案内するから」とお辞儀をしてから香澄を引き連れる形でその場を後にした。

香澄もそうだが、泉美のことも生徒データベースの閲覧で顔を覚えており、七草家の人間は見た目が御淑やかな容姿ほど苛烈な性格になるのか――――と達也がそう思ってしまうのも無理からぬことであった。

一番優先されるは感情論

時間は達也が真由美と再会する前に遡る。

悠元は七草家当主代理である真由美の代わりとして出席した克人を来賓の控室に案内した後、控室の外にいた。開場までまだ時間はあるが、来賓の誘導を考えるとこのまま控室の外で待機するのがいいと判断して壁に凭れ掛かっていた。

すると気配を感じたので視線を向けると、同じく来賓の誘導を担当する深雪が近寄ってきた。

「深雪、早かったな。リハーサルはもう終わったのか？」

「はい。特に問題はありませんでしたから」

「そっか。しかし、分かっちゃいたとはいえあの方が出席するとはね」

悠元がそう述べた対象は新入生総代である理璃の親族――蘇我大将のことだ。最近、メディアは魔法科高校と軍の癒着についての記事をこぞって掲載している。その裏にいるスポンサーのことも把握してはいるが……今回の入学式に関して魔法科高校に問い合わせが殺到していたことも無論把握している。

深雪も悠元を補佐する立場として魔法に関わる記事はなるべく目を通しているが、憤りを隠せずに魔法が漏れ出てしまったことは結構多かった。

「それはひとまず置いておくが、深雪は良かったのか？」

この問いかけは深雪に対してのものであり、政治家や軍人と面識を持つのは大丈夫なのかという心配からくるものだった。現状聞き及んでいる四葉家の事情からしても、深雪が態々誼を結ぶ必要はない。最悪こちらからのツテを使うことも問題はないと思っていたほどだ。

悠元の問いかけを聞き終えた上で深雪が静かな口調で答えた。

「ご心配なく。私もいつまで逃げてはならない……そう思いましたから」

「別に逃げではないと思うのだが……ん？」

「悠元さん、どうかされたの――」

十師族は各々が政治家や国防軍をはじめとした治安維持組織、民間

企業などとの伝手を持っている。とりわけ四葉家の人間である深雪が無理をする必要は全くない訳だが……と思っていたところで好意の視線を感じ取った悠元が目線をその方向へ向ける。
深雪も悠元の動きに反応して同じ方向に視線を向けると、そこにはストレートの黒髪を眉の高さと肩の高さで切り揃えていて、キラキラとした視線を二人――――というか、主に悠元へと向けている女子生徒の姿があった。
悠元が声を発しようとしたところで、その生徒こと七草泉美（さえぐさいずみ）は悠元に抱き着いたのだった。
「悠元お兄様！　お久しぶりです!!」
「うわっと……って、泉美ちゃん!?」
「あー、お兄様の匂い……」
悠元の言葉がまるで聞こえていないかのように、泉美は抱き着いている感触を懐かしむように力を込めている。悠元の隣にいる深雪にはまるで目もくれていない様な状態に、深雪は満面の笑顔を浮かべていた。
「おモテになりますね、悠元さん」
「深雪さんや、笑顔が怖いです。仕方ない……」
克人から真由美がいることは聞いているので、最初は真由美に連絡を取ろうかと考えた。だが、前生徒会長ということもあって立て込んでいると思い、まずは新入生の誘導をしている達也に連絡を取ることとした。何かしらを引き寄せる達也ならば何か知っている……という憶測は見事に的中した。
近くに真由美と香澄がいるようで、生徒会役員の経験がある真由美が控室の場所を知っている関係から香澄と一緒に来るらしい。
「今のはお兄様に連絡を入れたのですか？」
「正解。新入生の誘導をやってるから、泉美ちゃんともう一人――――七草香澄を見かけていないかと尋ねたんだが、どうやら七草先輩絡みで遭遇していたらしい」
さて、深雪に事情を説明したはいいが、抱き着いたまま少女趣味（ロマン）を暴走させている泉美を説得することにした。最悪廊下だけでなく学

校全体が氷漬けになりかねないためだ。悠元は一息吐いた上で泉美の頭に手を置いた。
「えっ……」
「いい加減落ち着いてくれ。再会の喜びは理解するが、淑女として先輩後輩の区別は付けてほしいからな」
「あ、も、申し訳ありませんお兄様。ところで、そちらの綺麗な方は……」
泉美も自分の振る舞いは七草の人間としてらしからぬことだと自覚してくれたようで、悠元から離れて両手を前方で重ねるようにしつつ深くお辞儀をして謝罪した。泉美はここで深雪の存在に気付いたが、悠元が紹介する前に深雪が自ら紹介した。
「はじめまして、泉美さん。生徒会副会長、司波深雪と言います」
「はじめまして、七草泉美と言います。その、深雪先輩と呼んでよろしいでしょうか？」
「ええ、構いませんよ」
原作だと深雪の魅力に絆される形で「お姉さま」騒動を引き起こすのだが、ここではそうならなかった。寧ろ、お互いに笑顔を浮かべて牽制し合っている……まるで、彼女らの背後に龍虎の姿が垣間見える様な状態と言っても過言ではない。
深雪は泉美が悠元と婚約を結んでいたことを知っており、公表されていないが深雪自身は悠元の婚約者序列第一位にいる。泉美はその事情など無論知らないが、乙女の勘からか深雪を「好敵手（ライバル）」だとどこか認識しているような節が見られた。
「実は九校戦でお姉さまの応援もしていたのですが、ピラーズ・ブレイクとミラージ・バットの振る舞いはまるで絵画のような美しさでした」
「ありがとう、泉美さん」
多少なりとも深雪の魅力には触れているようだが、髪飾りに施した魅力を抑える術式のお陰もあって、そこまでのことにはならずに済んだ。だが、悠元としては一つ確認せねばならないことがあった。
「二人で話してるところ悪いが……泉美ちゃん、ここにくるまでに自

己加速術式使っただろ？」
「え……えと、その……」
　これでも気配の察知には自信がある。深雪と話していて注意力が広範囲に向いていなかったことも影響しているだろうが、それでも直前まで察知させなかったとなればかなり高速移動している筈だ。
「天神の眼（オシリス・サイト）」で確認したところ、泉美の残留想子の跡が校舎外からここまで続いていることに気付いた。
　その上で尋ねたところ、泉美は自分のやったことに気付いて顔を俯かせていた。
「学内では非常事態を含めた緊急時以外の魔法使用を禁じている。今回は入学式の関係で誰もいなかったが、下手すれば誰かと衝突して怪我をさせかねなかった……それはきちんと認識すること。いいか？」
「はい。申し訳ありません、悠元お兄様」
　いくら十師族といえども……いや、十師族は上に立つ立場だからこそ、魔法師の模範とならねばならない。その人間が率先して法を破る行為など御法度でしかないのだ。後で達也にお願いしてピクシーのシステム権限で魔法使用履歴を消去して貰うことも考えていたところで、泉美が来た方向から香澄と真由美が歩いてきた。
「泉美、こんなところにいた！」
「香澄ちゃん!?　それに、お姉さまも」
「大体予測はしていたけれど……悠君、それに深雪さんもお久しぶり。今回はごめんなさいね」
「いえ、お気遣いなく」
　色々話はしたいが、入学式の開場・開会が迫っているために真由美は悠元と深雪にお辞儀をした上で香澄と泉美を連れて行った。その姿が見えなくなったところで悠元は溜息を吐いた。
「はぁ……大丈夫かな、これからの学校生活」
「大丈夫ですよ、悠元さん」
　別に何かに縋りたいという気持ちは今のところないが、自分が築いてきた縁が変なところで大きな変化を起こしているということに心なしかため息が漏れたのだった。

なお、その頃の達也は隅守賢人(すみすけんと)が迷っているところに遭遇して手助けをしていたようで、隅守もといケントから達也に向けて尊敬の眼差し(主に九校戦でのエンジニアとしての活躍からくるもの)が注がれ、達也は少し持て余す様な感じになったのは言うまでもない。

◇　◇　◇

七草香澄は活発な性格――――というのは、自己評価というよりも他者からの評価に基づくものだが、少なくとも隣に座る泉美よりは積極的に動くことが多い。そのことで真由美から説教を受けることもあったりするわけだが、とある人物が絡んでしまうと立場がガラリと変わってしまう。

「まったく、心配かけさせないでよ。ボクだって好き好んでフォローしているわけじゃないんだよ?」

「それを香澄ちゃんが言いますか?　といいますか、他人の前でその一人称は」

「はいはい、分かってるから」

二人は講堂の入り口で真由美と別れ、最前列に近い席に座っている。入試の成績でも上位に食い込んでいる彼女らならば別段最前列に座っても咎める人間などいないのだが、講堂に入って暫く進んだところで香澄が自分らに向けられた視線に気付いた。

ジロジロ見るのはマナーに反するため、その視線をそれとなく探った先にいたのは一人の男子。その人物は以前ゴシップ誌やファッション雑誌の写真で見たことのある人物――――七宝琢磨だとすぐに気付いた。

同じ「七」の数字を冠する家であり、師族二十八家の人間。とはいえ、こんな場所で騒ぎを起こせば十師族の名折れと判断して、その視線を感じなかったことにしつつ最前列にほど近くて琢磨の視線を切れる席を選んだ。

「ところでさ、泉美。見られてたことに気付いた?」

「ええ。あれは確か、七宝家の長男でしたか……どこかしら敵愾心のようなものを感じましたが、何かあったのですか?」

「ううん、気付いてたんならいいよ」

真由美とは違い、香澄と泉美は社交界にそこまで詳しくない。この辺は弘一の教育方針に基づくもので、高校に入学してから社交界との関わりを持つようにしていたため、七宝家の現当主とは面識がない。

ただ、琢磨が俳優として銀幕デビューを果たしていたことから存在はきちんと認識していた。芸能人としても一定の成功を収めている人間が何故自分らに敵愾心を向けるのか……可能性があるとするならば、同じ「七」の数字を冠するが故のしがらみなのだろう、と推測した。

「そういえば、ボク……私は司波達也先輩と会ったんだけど……お姉ちゃんには苦労してそうな雰囲気だったね」

「一番苦労しているのは〝お兄様〟かと思いますけど……あの姉は……」

「はいはい、落ち着こうね」

少なくとも香澄と泉美、真由美の仲は決して悪くない。真由美が五輪家の長男と婚約を結んではいるが、その進捗は思わしくないと知っている。その反動からか、真由美が悠元に対して積極的にスキンシップを取っているのも知っている（泉美が名倉に調べさせたらしい）。

一番先に目を付けたのは自分なのに、とでも言いたげな泉美からすれば、真由美の行動は横槍を入れているようにも見えてしまう。周囲に大勢の人間がいる以上、ここは抑えるように窘めていることに内心で愚痴の一つでも零したくなった香澄であった。

◇　◇　◇

入学式は滞りなく予定通りに終了した。理璃の答辞も問題なく終わった。去年のように人を釘付けにすることはなく、一昨年のように在校生ばかりか新入生までハラハラするような事態にもならなかった。悠元は美嘉から一昨年の事情を聞いているため、あずさが花音の言葉を聞いて落ち込んだ時の理由をそれとなく察していた。

その後は恒例の生徒会勧誘であった。昨年の場合は本来答辞を読むはずだった悠元が欠席することとなり、代理として読み上げた深雪を真由美が勧誘しようとした。すると、深雪から無意識的に放たれる魅力に負けてしまったのか、周囲の人間は空気を読まずに彼女に対し

て話しかけたのだ。その時は真由美の機転で事なきを得た……というのは雫とほのかから聞いた話だ。
新入生総代＝主席入学者に声を掛けるのは入学式が終わった後で行うことが不文律となっている。入学式が終わるまで魔法科高校の生徒ではない（式を以て入学を許可する）という形式主義的なものも混じっているが、今までそれで何かしらの不都合が出たということはない。
ここ数年で言うと、生徒会勧誘を断ったのは美嘉ぐらいだ。その時の理由だが、「ただ生徒会に入っただけでは何も変えられないので」と述べていたらしいが、本当のところは当時の生徒会役員だった中に自身の姉が二人いたためだ。そこに加われば三矢が牛耳っているなどと宣う人間がいないとも限らなかったため、美嘉は一応丁重に断りを入れていた。
「私にどこまで務まるかは分かりませんが、宜しくお願いします」
「あ、ありがとう十文字さん。ふう、良かったぁ……」
琢磨ならばいざ知らず、理璃としては断るような理由などなかった。理璃の言葉を聞いて思わず安堵したような表情と言葉が出たことに、これには五十里だけでなく理璃も苦笑いを浮かべていた。
「えっと……五十里先輩、兄が中条先輩に粗相でもやらかしたのでしょうか？」
「いや、そういうわけじゃないよ。ただ、十文字先輩はあの身なりと顔つきだから……分かってくれるかな？」
五十里の説明であずさが何故克人に怯えているのかというのは理解できた。ただ、その煽りを受ける側の理璃としてはたまったものではない。これから約半年は同じ生徒会役員として活動する以上、理璃としてはあずさとも友好的な関係を築きたいと思っていた。
「ええ。それと中条先輩、あまり兄を怖がらないでください。確かに身なりは高校生離れしていますが、内面はかなり繊細です。怯える態度を見るだけでも傷ついてしまいますから」
「あ、は、はい!!」
尤も、今後仮に会うとしても克人が出向く時ぐらいになるだろうと

は思いつつ、ペコペコしているあずさを理璃と五十里が宥める形になったのだった。

未熟な人間としての勘

あずさと五十里の3年生コンビが理璃の勧誘にあっさりと成功したころ、残りの生徒会役員である達也、深雪、ほのか、セリアの2年生カルテットに加えて悠元も各々の仕事に当たっていた。

ほのかとセリアは入学式の片付けで、来賓の出欠チェックや祝辞の整理、業者との写真データの受け渡しと多岐に渡るため、ほのか一人でカバーしきれていない部分をセリアが上手くフォローしている。

達也は式の手伝いに駆り出された2年生の指揮監督。二科生だった昨年度とは異なり、魔工科生となった達也に対して文句を言う生徒は誰一人として存在しなかった。今は同級生から腕章やヘッドセットなどを受け取っている。

そして、深雪と悠元の場合はというと。

「しかし、神楽坂君のスピーチはぜひ聞いてみたかったものだよ」

「総理、それは好意的に解釈してもよろしいのでしょうか？」

こんな大人たちに囲まれて愛想笑いを浮かべていた。悠元と言葉を交わしているのは現職の国家元首こと内閣総理大臣であり、傍には秘書とＳＰも控えている。彼らも〝神楽坂〟の名を理解している側であり、神楽坂の名を名乗っている悠元はその次期当主。なので、総理だけでなく悠元にも遠慮しているような状況であった。

「それは勿論だよ。このようなご時世でなければ、ゆっくりと茶を飲みつつ会話を楽しみたいものだが」

「そうですね。このご時世というのは私も納得がいかないことばかりですが」

明言こそ避けたが、総理の発言の真意は人間主義者に対するものであった。とはいえ、人間主義者は野党だけでなく与党側の人間にも一定のシンパがおり、メディアによる反魔法主義キャンペーンが後を絶たず、総理自身も苦慮しているのだと理解はした。悠元はこっそり遮音フィールドを展開すると、総理に小声で報告めいた言葉を発した。

「総理、ここ最近のメディア工作は大陸の関係者によるものです。加えて野党議員も数人ほど多額の献金を受けております」

「大陸……大亜連合ということか？」
「我が物顔で治外法権を振るっている横浜の中華街の連中です。加えて、その大本は『無頭龍』や『ブランシュ』とも無関係ではない者――――ＵＳＮＡでは『七賢人』と噂されている人物らの一人です」
悠元の説明に総理は渋い表情を浮かべた。政府としては非公式に大亜連合から亡命した人間を匿う意味で中華街の治外法権を黙認している。その中華街にいる何者かがこの国の反魔法主義を煽っているという事実を聞き、何かしらの手を打とうにも今の世論では難しい。下手なことをすれば内閣総辞職になりかねない。
「神楽坂殿から今の話を聞いた以上、政府としても看過は出来ない。だが、世論をどうにかしない限り動こうにも動けないのだ」
次の選挙が近い（数ヶ月先にはなるが）こともあってか、踏ん切りがつかないという総理の気持ちは理解できなくもない。とりわけ国会議員は国民の投票――――〝世論〟に大きく影響してくる。近頃の反魔法主義という与党にとって逆風になりかねない要素もあり、悠元の話を全面的に受け取れないのだ。
悠元も今すぐに対処しろなどとは言うつもりなどない。だが、スピーディーに解決できなければ反魔法主義の勢力が世論を埋め尽くしかねない。今日に関しては、総理に対処する意思が見えれば十分及第点になると判断した。
「……総理にその意思がおありというのは助かりました。後日改めてお話いたしましょう」
「うむ。では、失礼させてもらうよ」
総理を皮切りに、秘書とＳＰも悠元にお辞儀をして去っていく。自分が十師族の直系であれば総理大臣と話すのは憚られてしまうだけに良かったと思っている。彼らを見届けた後で悠元は深雪に愛想よく話を続けている人物に近寄って声を掛けた。
「お久しぶりです、上野（こうずけ）先生」
「おお、これは三矢殿。いえ、神楽坂殿でしたな。お久しぶりです」
「いえいえ、市井の認識だとその印象なのは致し方ないことです。お忙しい中、態々ご出席頂いたことに感謝を禁じえません」

悠元は滅多に存在感を露わにしない。それこそ、相手に対して自分の意見を通す時ぐらいしかないほどだ。だが、今の悠元はその存在感を敢えて示している。自分の恋人もとい婚約者に対して、精神的であっても欲を孕んだ目線など悠元相手に誤魔化せるものではない。

自分から騒ぎを持ち込もうとは思わない悠元がそうしたということは、深雪に対しての色目を許容しないというものだった。目の前にいる国会議員が一時期国立魔法大学の学外監事（がくがいかんじ）を務めたこともあり、魔法師に好意的（あくまでも政治的な利になると踏んでのものだが）な政治家だということも認識している上で。

一方、上野は早くも逃げ腰であった。

ただでさえ悠元は十師族の一角を担う三矢家の血族。それに加えて彼の母方の祖父はあの上泉剛三であり、神楽坂家の次期当主だという情報は上野も知っている。それ以上に、上野自身よりも権力を持つ与党の総裁――内閣総理大臣が彼に対して畏まった態度を見た時、神楽坂家の噂は決して与太話の類ではないと察したのだ。

「それは別として、先程は少しばかり驚かせて申し訳ございません。そちらにいらっしゃる司波深雪さんは私の恋人ですので、つい存在感で威圧してしまいました」

「成程、そうでしたか。もう少し踏み込んでいれば地獄に落ちるところでしたな。おっと、もうこんなお時間ですか。では、失礼いたします」

上野は先程威圧のようなものを感じた。それが悠元から発せられたものだということに冷や汗が止まらなかった。加えて、彼の言い放った言葉で先程話していた深雪が頬を赤く染めているのを見て、この二人が本当に恋人関係であるのだと理解するのにそう時間は掛からなかった。上野は悠元と深雪に頭を下げるとこの場を去っていった。

悠元は一息吐いたところで深雪に向き直った。

「やれやれ、自分もまだまだ子どもだな。深雪、悪かった」

「あ、いえ、大丈夫です悠元さん。それにしても恋人だなんて」

「実際のところ、間違ったことは言ってないだろ」

昨年度の春から一緒に行動していることが多いため、恋人関係にあるという噂が現実となったところで何ら問題はないし、そもそも恋人というより婚約者の間柄である。ここで公言したとしても何ら問題はないと判断した形だ。

ただ、唯一の誤算があるとするのならば……その会話に聞き耳を立てていた小悪魔先輩（さえぐさまゆみ）がショックを受けたような表情を浮かべつつ、悠元に詰め寄ったことだろう。

「ちょっと、悠君。今の発言はどういうことなの？　お姉ちゃんは何も聞いてないわよ!?」

「何がって……曲がりなりにも事実でしかありませんよ。そもそも、俺が誰と付き合おうと先輩には関係ありませんよね？」

「そ、それは、そうだけど……いや、分からなくもないけれど……」

真由美が困惑している理由は、悠元と深雪の家格が釣り合うかどうかなのだろう。

自分の婚約者選定を上泉家（剛三）と神楽坂家（千姫）が担っていると知っているのは当主クラスの話。十師族の時ならばいざ知らず、上泉家と神楽坂家は家の格に出来るだけ拘らない方向で婚姻を決めている。可能であれば恋愛結婚も吝かではない、という感じは千姫から聞き及んでいる。

司波家としての深雪ならば、九校戦での輝かしい実績がある以上は相応の実力を有すると評価されるが、魔法師としての家の格は下位に位置してしまう。将輝が煮え切らずに告白できなかったのは一条家の御曹司と無名に等しい司波家の娘では周囲からの反発が凄まじいことになるためだ。

その点、自分の場合は三矢の姓であっても魔法科高校における姉らの功罪によってその辺を口煩く言われないし、基本的に家督を継がない三男ならば実力重視で選んでも問題は殆ど生じないだろう。更に、一科生同士であると同時に、昨年度は同じ生徒会役員だったので一緒に行動しても突っかかる人間は存在しなかった。

現時点で四葉家、渡辺家、上泉家、そして神楽坂家と誼を結ぶことに成功している元からすれば、これ以上の結果を望むのは贅沢が過ぎ

る……という呟きを聞いたことで確証に近い推測へと至った。
「ともあれ七草殿に十文字殿、本日はご出席いただき、誠にありがとうございます。お帰りはあちらからになりますので、気を付けてお帰りください」
「えっ――――って、十文字君!?」
「七草、お前の妹たちがお前を探していた。これ以上長居すれば、職員の方々の邪魔になってしまうぞ」
「……分かったわ。言っとくけど、私は納得したわけじゃないんだからね！」
何故だか真由美がツンデレキャラのような立ち位置になりつつあることは置いといて、いつの間にか真由美の背後にいた克人の言葉で渋々引き下がっていった。まるでゲリラ豪雨だな、と思ったところで右腕に柔らかい感触を感じるので見てみると、深雪が悠元の腕にしがみつくような形で寄り添っていた。
「深雪さんや……」
「当ててますから」
そんな短いやり取りで大体のことを察せるようになった辺り、この1年は本当に濃密な時間を過ごしてきたのだな、と思ってしまったのだった。

◇　◇　◇

入学式を終えた悠元は、先に帰ることになった達也たちと別れて部活連執行部の本部に来ていた。とはいえ、部屋の中にいたのは会頭である服部と執行部メンバーである桐原だけであった。
「お疲れ様です、服部会頭に桐原先輩」
「おう、神楽坂か。服部、丁度良かったじゃねえか」
「……そうだな」
以前の部活連は各クラブから必要に応じて人数を割り当てる方式だったが、服部が会頭となってからは男女２０名の４交代ローテーションによる本部常駐を含めた常任制となり、生徒会や風紀委員会を超える最大規模の組織となった。
ただ、昨年度に取り決められた幹部クラスのＣＡＤ携行許可の関係

で、執行部の幹部クラスは会頭である服部に任命権が存在するため、副会頭に加えてその補佐を担う人間となると、最低四名から最大八名ほどがその対象となる。更には、生徒会におけるＣＡＤ携行許可との公平性を期すため、今年度から生徒会長選挙と同様に部活連会頭選挙も実施される形となる。

悠元の挨拶に手を軽く上げつつ答えると、タイミングがいいとばかりに服部へ話しかける。服部も納得しつつ悠元に視線を向けた。

「実はな、今年度から生徒会と同じく幹部候補生を育て上げる方針で行くこととした」

「理由はリーダーシップを取れる人間の育成ですか？」

「有体に言えばそうなる。それで、新入生次席である七宝を勧誘したところ、彼も快く引き受けてくれた。聞けば、部活を頑張って力を付けたいとのことらしい」

その言葉を聞いたところで悠元は考え込んだ。

達也と深雪が真由美と深い関係にあると唆されているのに、もっと話題に上りそうな自分がその対象に見られていないのか、と怪しんだ。真由美が積極的にスキンシップを取ってきた場所は基本的に生徒会室かあまり周囲の目がないところぐらいで、一度一緒に下校したことがあるぐらいだ。後は、強いて言うなら登校中に一度声を掛けながら走ってきたことぐらいだろう。

それと、服部も昨年度の前半まで生徒会副会長をしていて、真由美に惚れていた人物の一人。彼がいることぐらいは琢磨も流石に許容したのでは……と、そこまで考えたところで服部が問いかけてきた。

「今考えている交代メンバーだが……七宝の教育係には誰を入れるべきだと思う？」

「２年の十三束（とみつか）でいいと思います。新入部員勧誘週間のことも考えれば、彼が一番適任かと」

「神楽坂は立候補しないのか？」

「そりが合いませんので」

現時点でローテーションはほぼ決まっており、悠元の当番時はレオ（山岳部）やエリカ（剣道部）、新たに執行部メンバーとなった英美（狩

猟部）や燈也（山岳部）と一緒になる。悠元が珍しく拒否の姿勢を見せたのは、身内組のローテーションから外れることで心労を重ねたくないことに加え、使う魔法の関係とはいえ魔法工学を軽視するような輩とは相容れないという気持ちからくるものだ。

それに、万が一琢磨が『ミリオン・エッジ』を使用しても止めることのできる人間という意味で十三束は適任である。彼の特性――『接触型術式解体（グラム・デモリッション）』は『ミリオン・エッジ』にとって〝天敵〟とも言える相性が最悪の代物だからだ。

「そりが合わん……か。一応同じ師族の人間なのにか？」

「七宝家が得意とする魔法『ミリオン・エッジ』は例外的にＣＡＤを使いません。なので、魔法工学を軽視する傾向にあります……これ以上言うと誹謗中傷にもつながるようなことを言いかねませんので、先程の言葉で察してくれると助かります」

「あ、ああ……では、お前の助言を取り入れて十三束に頼んでおく」

我儘と言えばそうかもしれないだろう。ただ、七草の存在で瞬間湯沸かし機のようにカッとなって敵愾心を向ける様な人間の近くにいて責任問題となるのは御免被るというだけの話。それが回りまわって矢面に立たされた時は覚悟を決めるしかないだろう。

それに、七宝だけにリソースを割くのは得策ではない。反魔法主義に対するカウンターを成功させるためにも、今は七宝絡みの問題を後回しにするつもりだ。悪く言えば見て見ぬふりをしているも同然なのは自覚している。

悠元が部屋を出ていくのを見送ると、桐原は真剣な面持ちをしつつ服部を見やった。

「失敗だったな、服部。ま、神楽坂がそれとなく嫌がった理由は何となく理由もつくってもんだ」

「どういうことだ？」

「……服部。七宝がお前に言った理由を全部口にしなかっただろう」

実を言うと、服部は悠元を琢磨の教育係にしようと考えていた。だが、悠元の側からそれを固辞した形となった。悠元本人の承諾なしで彼の部活連入りを決めたため、こればかりは無理強いも出来なかっ

た。
　桐原は服部と琢磨の面談――――服部が琢磨を勧誘した際、見届けという形で部屋に居た。その際、琢磨はこう言っていたのだ。
「部活を頑張って力を付けたい。十師族に負けないぐらいの魔法師になりたい――――確かに向上心があるのはいいことだと思うぜ。リーダーシップを取ろうと前向きになっているのもな」
「それのどこが問題があるというんだ？」
「別に難しい話じゃねえが……一つ言えるとするなら、アイツは近いうちに絶対揉め事を起こすぞ」
　桐原は確信めいたような言葉を口にした。桐原の家はそれこそ百家ですらないが、魔法師を目指す人間として十師族や師補十八家のことは少なからず知っている。そして、七宝家が師補十八家の一つであることも承知している。
　その七宝家の人間が十師族とは別の秩序を作る――――そんな風にも聞き取れてしまったのだ。服部に包み隠さず言ったところで「何を言っているんだ」と返してくるのは目に見えていたため、桐原もその部分をぼかす様に呟いた。
「桐原……正気で言っているのか？」
「真面目な話の時に大袈裟な嘘なんざ言えねえよ。何と言うか……一年前の俺を見ているような危うさを感じちまったのさ。神楽坂も多分七宝を見てそう感じたのかもしれねえ」
　そして琢磨を見た際、まるで一年前に紗耶香とトラブルを起こした自分自身を見ているような既視感を覚えたからこそ、桐原はそう呟いた。
「十三束も十分強いだろうが、場合によっては神楽坂を頼らないとダメだろう……ま、未熟な剣術家としてのしょうもない勘みたいなものだ。起きさえしなければそれでいいだろ？」
「そうか……そうだな……」
　もし、服部が琢磨を勧誘していた時に悠元が立ち会っていたらどうなっていたか……明日は部活連全体の顔合わせがある以上、変な揉め事は起きてほしくないと願う服部であった。

祖父世代のしわ寄せ

校門から「第一高校前」駅までの通学路の途中、一つ角を曲がったところに行きつけの喫茶店「アイネブリーゼ」はある。部活連での話を終えた悠元は、達也、深雪、水波、ほのか、雫、幹比古に加えてセリアと一緒に、この店でコーヒー片手の雑談に興じていた。

話題は無論入学式というか新入生絡みとなるのは無理からぬことだった。

「それで、十文字さんが生徒会役員に入ったの？」

「うん。見るからにしっかりしてそうだし、やる気もあるように見られたから」

雫の問いかけに対してほのかがそう答えたが、時折周りが見えなくなってドジをしてしまうほのかがそれを言ったら自爆ではないか、と雫は心の中で呟いたが、ここで言うのもどうかと思って追及を止めた。

そのやり取りを聞きつつ、悠元が思い出す様に呟いた。

「入ったといえば、七宝が部活連執行部に入った。服部会頭の話だと、将来の幹部候補として鍛え上げるつもりらしい。その辺は生徒会の勧誘方針に倣ったものらしいが」

「……服部会頭って七草先輩に惚れてた人でしょ？　大丈夫なの？」

「七宝とて入学早々先輩に対して諍いを起こそうとは思わないはずだが……一応気を付けてはおく」

セリアの問いかけにそう答えたが、七草の人間が絡んだ際に先輩だろうが噛みつきかねない可能性は捨てきれない。そのやり取りを聞いて幹比古が不思議そうにしつつ悠元に尋ねた。

「えっと……悠元、彼はそこまで危ういと思っているのかい？」

「七草家の人間が絡まなければ割とまともな分類だろうとは思う。だが、同学年にその七草の人間がいる以上、諍いを起こす可能性はゼロじゃない」

幸いにして香澄と親交があるため、彼女には琢磨に対して挑発しないよう言い含めておいた。これで琢磨が更に憤ってくるようならば、

最悪七宝家に対して直接抗議を入れなければならなくなる。
もしかしたらだが、自分と七草家に関わるいくつかのトラブルを琢磨が一番喜んだ挙句、更に増長した可能性もある。十三束の出番を奪いかねないが、場合によっては自分の不始末を片付ける意味でも矢面に立つ必要が出てくるだろう。
「あー、そういえば達也たちと合流する前にカウンセリング室へ立ち寄ったが、その際に小野先生から相談事を持ち込まれたわ」
「小野先生が……何の相談だ？」
「風紀委員の職員室推薦枠について」
大体月に1回程度の定期的なカウンセリングは続いているが、横浜事変以降はカウンセラー（実際は公安の秘密捜査官）の遥に加えて保険医の安宿怜美（あすかさとみ）からのカウンセリングを受けることになった。尤も、後者が担当した場合はカウンセリングというよりただのお茶会も兼ねた雑談しかしていないが。
達也の問いかけに対して簡潔に述べた後、悠元は言葉を続けた。
「昨年はその絡みで問題もあったわけだし、教職員からの推薦に対して実効性が疑われているのも事実。なので、一応香澄ちゃんはどうかと提案はしておいた。だが、強制はしないでほしいと言い含めている」
問題というのは論文コンペで産業スパイの行動をしていた昨年の3年生――――関本勲のことだ。彼が職員室推薦枠の風紀委員だったこともあって、教職員の選定基準に疑いを持たれる形となったわけだ。
それはともかく、香澄がこのまま風紀委員に入れば泉美の扱いをどうするかが重要になる。悠元がいる部活連に入れれば確実に琢磨と衝突しかねない。そうなると……悠元は達也と深雪、セリアに視線を向けた。
「達也、深雪、それにセリア。香澄ちゃんが風紀委員に入ったら泉美ちゃんを生徒会に引き込んでほしい。彼女の性格を考えると部活連には向かないからな」
「分かった」

「分かりました。中条会長にも話を通しておきます」
「了解。まあ、火種を身内に抱え込みたくないって気持ちは理解するよ」
　琢磨を部活連執行部に引き込んだ時点で火種を抱え込んだようなものだが、これ以上の被害を避ける意味でも泉美は生徒会役員に入れた方がいいだろう。この辺はこちらからあずさと五十里にほのか、そして泉美にメールを送って説得するつもりなので、そこに関しては揉めることなく決まるだろう。
「でも、やる気はあるのかな？」
「少なくとも、深雪に対して尊敬のような眼差しを向けていたから、脈はあるんじゃないのかなとは思う」
　悠元がトイレで手を洗っていると、幹比古が入ってきた。特に示し合わせていたわけではないので偶然なのだが、軽く受け答えをして行こうとしたところで幹比古に呼び止められた。
「悠元」
「どうした？　ここでないと話しにくいことか？」
「まあ、そうだね」
　とはいえ、トイレの中で長時間話し込むと衛生的にも宜しくないため、手短になるように促すと幹比古が話し始めた。
「悠元、今日の式にローゼン日本支社長が来てたのは知ってるよね？」
「知ってる。というか、熱烈に勧誘までされたよ……断ったけど」
　来賓の誘導は彼らとの話し相手も含まれてしまうため、総理大臣だけでなく各界の要人は大体剛三経由で知り合っている。ローゼン・マギクラフトの前社長であるバスティアン・ローゼンも剛三経由で知り合った一人だが、今回来日したエルンスト・ローゼンとは一切面識がない。
　その人間が来日した理由は大きく分けるとすれば四つ。
　真っ当な理由だとするなら日本市場のシェア拡大。そうでない理由とするなら、「トーラス・シルバー」の引き抜き、バスティアンに関わる遺産相続の交渉、そして……現状では明るみになっていないが、レオに関わることの三つ。

「断ったって……けれど、悠元からしたらそうなっちゃうか」
「スカウトを受けたら間違いなくドイツに飛ばされるのは明白だからな。そうでなくとも、ローゼン絡みは他人事じゃないし」
しかも、悠元はあろうことか、本来他人の家のことなのにローゼン家の遺産相続の権利書をバスティアンから渡されてしまった。
どうしてそうなったのかと言えば、バスティアンが自身の持つ莫大な遺産でローゼン家を破滅させないためと、以前バスティアンは剛三の助けでローゼン・マギクラフトの危機を乗り越えた功績の対価ということらしい。しかも、剛三が固辞したためにスライドしてしまったということだ。
一番の問題は、その分与率が遺産全体から見て約3分の1にまで達するということも含めて厄介な問題なのだ。
話を戻すが、エルンストがそのことについて触れてくることはなかったが、九校戦における悠元のエンジニアとしての腕を見込んでローゼン・マギクラフトで働かないかとスカウトしてきたのだ。尤も、悠元は既にＦＬＴで働いている魔工技師であるため、丁重にお断りしておいた。
「それで、幹比古としては達也にも伝えてほしいのか？」
「そうだね。エリカのこともあるし」
「……幹比古に言っておくが、ローゼンが出てくるとならばエリカだけじゃなくレオも絡んでくる可能性がある。その対処は全部こちらでやるつもりだから」
レオの祖父こと調整体魔法師ブルグ・フォルケの第一形式（エアステ・アルト）のゲオルグ・オストブルグ、エリカの祖父ことルーカス・ローゼン、そして悠元の祖父である上泉剛三。この三名は仲の良い親友関係を築いていた。なお、当時のルーカスの年齢は１４歳という若さであった事実を述べておく（剛三からすれば、友人となることに年齢は関係ないというスタンスであった）。
悠元は世界旅行の途中で昔話を聞かされることが多かった。ゲオルグの亡命の話を聞いたのは丁度アメリカを徒歩（とは言っても、魔法訓練の一環なので時速２００キロ以上で走っている形だが）での横

断をしていた時だ。
剛三が武者修行の一環でドイツを訪れていた際、ルーカスからゲオルグの亡命を手伝ってほしいと頼まれた。とはいえ、そのまま二人に同行すれば足取りを掴まれる可能性があったため、一計を案じた。
剛三は何とシベリア鉄道でウラジオストクまで移動した後、そこから（剛三本人曰く）徒歩でオホーツク海、カムチャツカ半島、ベーリング海、アラスカ地方と経由してサンフランシスコまで移動した後、上泉家の伝手で偽名での航空券と日本国籍まで丁重に用意した上、反政府テロリストをおびき寄せての交戦を利用して追っ手を完全に攪乱してゲオルグを日本に亡命させた。更に、ルーカスが日本人女性と駆け落ちして日本に逃亡する際にも剛三が力を貸している。当然ローゼン家では非難轟々だったが、剛三を相手にしてローゼン家を潰すような真似は避けるべきだと考え、ルーカスの話題はこれ以降出てくることがなかった。
やっていることが既に人間の領域を超えているが、これを平気で実行してしまうのが上泉剛三という存在である。彼に喧嘩を売った顧傑は自殺願望でも持っているのか、と疑問を呈したのは言うまでもない。
閑話休題。
「エリカだけじゃなくてレオも……分かった。悠元に任せるよ」
「ま、祖父方の連中の尻拭いみたいなものだが、こればかりは仕方ないと諦めてるからな」
この件に関して達也や深雪を巻き込むつもりはない。元はと言えば身内が関与している上に自分もその一端に関わってしまっている。とはいえ、エルンストの狙いに『トーラス・シルバー』がある以上は達也に話を通すぐらいなら問題はないだろう。
強引に誘拐という手段を取った場合は、大使館を通さずドイツ政府に直接抗議することも含めてあらゆる選択を辞さないつもりだ。
◇　◇　◇
達也には、エルンストの狙いの一つに『トーラス・シルバー』をローゼン・マギクラフトに引き込む狙いがあるということを伝え、達也経

由でＣＡＤ開発第三課に知らされる形となった。
早速ローゼン・マギクラフトは関連企業を使ってＦＬＴに探りを入れているのがすぐに分かったが、『トーラス・シルバー』の根幹となる情報は全てＦＬＴ外――――神楽坂家の本屋敷で管理されている。かなりの資金が動いているのも確認できたが、その気になれば兆単位の金を動かせる神楽坂家に喧嘩を売りたいのか、と疑問を投じたい気分だ。
（飛行デバイスで危機感を持ったというのも理解できなくはない。マクシミリアンもその線で探りを入れてきていたからな……その代償は既に頂いたも同然だが）
彼らは知らないが、悠元は『八咫鏡』でマクシミリアン・デバイスとローゼン・マギクラフトの機密情報全てを引っこ抜いていた。別に公表や盗用する気はなく、あくまでも参考資料程度のもの。『ワルキューレ』や『オーディン』で何世代も先を進んだデバイス設計をしている側の人間からすれば、それらの情報は復習みたいなものになってしまう。
閑話休題。
香澄は職員室推薦枠で風紀委員となり、泉美は生徒会会計として就任する形となった。深雪は水波も生徒会に入れたがっていたが、それは流石に水波が可哀想だろうということで達也が止めた。その代わり、水波は自ら山岳部を選択していた。
部活連での琢磨との顔合わせ自体は特にトラブルが起きることもなく無事に終わった。我が強い琢磨の様子を見て、顔合わせが終わった後にエリカが「あれはトラブルを起こしかねないわね」とポツリと零していたのを聞いたのは、本人を除けば悠元とレオだけであった。
新入部員勧誘週間。昨年は生徒会役員として部活同士のトラブル（プラス『エガリテ』の妨害もあった）に対応していたが、今年度は部活連の執行委員として対処に当たっていた。とはいえ、生徒会や風紀委員会よりも多い部活連の執行委員全員が見回るわけではなく、五人一組のローテーションで回す形となる。
悠元は軽運動部の部長だが、新入部員自体募集する予定などなかっ

た。元々軽運動部を設立したのは深雪の武術鍛錬の一環であり、教える技巧の中には秘密も多いために見知らぬ人間を入れるつもりなどない。

今年度の初めにセリアと佐那が入ったことで実質的にはそこそこの規模となった。

話を勧誘週間に戻すが、何もしないよりはマシと考えて勧誘週間2日目（悠元の部活連巡回担当は4日目に割り当てられている）に軽めの演目を組むこととした。初日にしなかったのは演目で扱う道具の準備（元々第2小体育館の割り当て自体は一応入っていたが、何もしない場合は拳法部と剣道部で半分ずつ割り当てるつもりだった）もあってのことだ。エリカはやや不満げだったが、おいそれと秘剣に分類される剣技（主に天刃霊装）を披露できるはずもないことを伝えると渋々納得した。

悠元とエリカによる魔法を駆使した太刀（刃引きされたものを使用している）での試し斬り。折角だからと体重移動による落下速度をそのまま移動速度に転換するベクトル変換魔法『天縮』を用いてすれ違い様に抜刀し、納刀する技――新陰流剣武術・剣聖四大奥義が一つ、『西段・二の太刀・麒麟招来』を使用。この技を以て竹入畳表を綺麗に両断すると、周囲からは歓声が上がった。

エリカも千刃流の『山津波』を自己流にアレンジした剣技――物体に接触する瞬間、『天縮』によって太刀に慣性エネルギーを収束させることで最大１００トンの慣性質量を叩き出す『泰山衝』で竹入畳表を縦に両断した。

その後は、悠元とエリカで5分程度魔法を用いた軽い手合わせを行っただけでなく、剣道部に所属している3年の壬生紗耶香が折角だから、と竹刀を用いて剣道部と手合わせする（悠元とエリカは魔法は無論の事、防具なしという条件付き）羽目になった。尤も、悠元もエリカも無敗で終わっていた……各々新陰流剣武術の師範クラスと千刃流の印可クラスである以上、高校生が相手するには防具なしでもハンデになり得なかったようだ。

紗耶香から感謝の言葉を言われた後、以前紗耶香に話した内容を聞

いたエリカが思い出したように呟いた。悠元が長野佑都と名乗っていて出場した剣道大会を偶々エリカも見に行っており（道場にいると父親や姉からの小言が面倒だったので、修次に同行する形で足を運んでいた）、長野という名字と中学生離れした剣筋ですぐに分かったらしい。

「中学1年の時点で新陰流師範代の悠元が剣道の試合に出たら、そりゃ全中の個人戦で優勝するわよね……二度と出たくないって気持ちは少なくとも理解できちゃうわ」

「あの後、エリカに散々手合わせをせがまれたっけか」

「よっ、二人ともおつかれだな」

軽運動部の演目を終えると、レオが悠元とエリカにスポーツドリンクとタオルを手渡した。レオも今日は山岳部の手伝いがないらしく（山岳部自体積極的に勧誘はしていないが、美嘉が入り浸っていたこともあってか噂を聞きつけて入部する人が少なくない）、軽運動部の手伝いをしていた。

軽運動部の後は剣道部が演目を始めており、再来週全国大会クラスの強豪校との練習試合があるからか、演目とはいえその剣筋はかなり気合の入ったものとなっていた。

「お、珍しく気が利くじゃない」

「ありがたくいただくよ、レオ」

「おうよ。ていうか、珍しくは余計だっつうの」

スポーツドリンクで喉を潤しつつ、剣道部の演武に見入っている新入生の様子を観察していると、エリカが声を掛けてきた。

「ところでさ、悠元。軽運動部の設立の経緯はあたしも知ってるけど、態々演目を入れる必要もないわよね？」

「それは間違ってないが、一応部活動割当金の予算執行とかの関係がある以上、これぐらいはやらないといけなかったんだ」

自分が部活連副会頭である以上、その所属している部活が一体何をしているのかという疑問を見せることで解決させるためのものだ。それと、備品購入以外に使う予定のない割当金のこともあって、活動はしていますというアピール目的で今回の演目を組んだと二人に説

明した。
「それはいいけど、新入部員の受け入れは基本しないのよね？」
「出来るはずがない。まあ、既に入部扱いになっている人間の推薦なら了承するつもりだ……水波ちゃんが入部届を持ってきてはいたが」
「マジかよ。ま、部長の決めることだし、俺らが異論を言える立場でもねえか」
　軽運動部の詳細にも新入部員の受付は原則的にしないと明記している。軽運動部の名簿に入っている深雪、ほのか、雫、幹比古、レオ、エリカ、美月、姫梨のいずれかの推薦があれば受理するつもりだ。
　なお、達也は八雲の試しで勝てていないために軽運動部へ入部はしていない。深雪の推薦があれば無条件で受け入れるつもりだが、この辺は達也なりの我儘であると深雪から聞き及んでいた。達也の言い分では、八雲にきちんと勝ててからでないと悠元に勝てないから、ということらしい。
　ここで悠元はふと遠くから喧騒のような声が聞こえてきたことに気付き、瞼を閉じて『聴覚強化』でその元を探る。その上で傍に置いていた通信機を手に取り、部活連本部室へと連絡をする。
「（……会話の内容を聞く限り、場所はロボ研のガレージ前。諍いはロボ研とバイク部のようだな）――――神楽坂です。ロボ研のガレージ前でロボ研とバイク部によるトラブルが起きたので、早急に対処をお願いします」
　連絡の相手が服部だったので、必要な事項を伝えた上で通信を切るとそのまま床に置いて一息吐いた。それを見たレオが悠元に問いかけた。
「トラブルなんだろ？　悠元が行かなくていいのか？」
「部活連本部に服部会頭と桐原先輩がいるし、それに生徒会から達也と理璃ちゃんも詰めているんだ。ここで俺が出張って船頭を多くするような真似は状況を混乱させるだけだ」
「あー、達也君だけでも事足りるのに、その面子なら確かに出張る必要なんてないわね」
　ただ、結果として風紀委員である香澄と部活連執行委員である琢磨

が一触即発寸前の状態になってしまった。その場は十三束が何とか止めたことで事なきを得た、と達也や理璃から聞いたときは深い溜息しか出なかったのであった。

また一つ減る宿題

悠元は一人、自室で折り畳み型端末のキーボードを叩きつつ、香澄と琢磨のトラブルについて思い返していた。

ロボ研とバイク部の喧騒に巻き込まれたのはケントという新入生だったと達也から聞き及んだ。達也の自己評価はともかくとして、彼を慕う人間が着々と増えていることは流石お兄様であると褒めたくなってくる。

しかし、昨年は真由美と摩利、克人がそれぞれ三組織のトップをしていた時に起こらなかった現象がなぜ起きてしまったのか……原作ならばともかく、今の香澄は理知的な行動を心がけている筈だ。

ダメもとで琢磨とのやり取りで何があったのかをチャットアプリで聞きだしたところ、事細かく教えてくれた。

「ボクが行った時には、生徒会の達也先輩や理璃ちゃん、部活連の十三束先輩と七宝がいました」

まず達也と理璃から話を聞き、生徒会においてその喧騒について不問にするという内容を聞いた上で十三束に判断を仰ごうとしたらしい。現状の琢磨は執行委員の見習い扱いでしかないため、香澄の取った行動は理に適っていた。

「ボクは風紀委員として諍いを止めようとしました。ただ、我が物顔は出来ないので先に仲裁に入っていた十三束先輩に聞こうと思ったんです。そしたら、七宝が一方的に『ここは部活連の管轄だから出ていけ』と言ってきて」

香澄の論理（ロジック）自体は間違っていない。本来生徒の諍いは風紀委員の管轄だが、新入生も含めて６００名弱（部活動関連だともう少し対象人数は絞られるが）の大人数をたった九人でカバーなど出来ない。ましてや勧誘週間中はＣＡＤの携行許可が緩むため、それを取り押さえる意味の補助として生徒会や部活連がいる。

そのことは香澄自身も理解していたので、琢磨を横切って十三束のほうへと向かおうとしたところ、琢磨が掴みかかろうとしたのでサッと躱したのだ。

「ボクは『私は十三束先輩に確認したいんだけど？』と言ったら、向こうは頑なに『七草が出る幕なんてないんだよ。喧嘩売ってんのか？』と言ってきてしまって……ついボクもカッとなったことは否定しません」

いや、どうみても喧嘩売ってるのは七宝（おまえ）だよな……それはともかく、香澄が反省の色を示している以上、これ以上の追及はしなくていいだろう。ただ、香澄には琢磨が七草家に対して敵愾心を持っているので注意してほしいと伝えた。

念のため、現場に駆け付けた達也と深雪にも確認したが、香澄の述べたことと食い違いは見られなかった。

あと、七宝家現当主についても何か知らないかと聞かれたので、堅実な立ち回りで利を得るタイプであり、琢磨のように形振りかまわず喧嘩を売るようなタイプではない、と返しつつ「詳しいことは真由美（文面上では七草先輩）に聞いた方が早い」と付け加えておいた。

そもそも、当主が短気な性格だと十師族に選ばれるはずもない訳だが。

（……裏付けは取れた。条件も粗方は揃った。残るは……）

端末のモニターには魔法実験で使用する大型実験機の設計図が表示されている。魔法科高校の実験機材や魔法実習で使用するＣＡＤはその殆どをＦＬＴが担っていて、その設計や改良の仕事も時折悠元に回されてくる。

だが、今表示されているのは魔法工学科のカリキュラムに存在しないもの――魔法による核融合発電実験装置の設計図だ。これよりも更に小さいサイズでの実験は既にＦＬＴで成功しており、今度はこれよりも大型化して装置の耐久度が問題ないかを事細かく精査している途中だ。

反魔法主義――人間主義者によるネガティブキャンペーンは進んでおり、その動向を七草家のみならず十文字家も調べている節が見られた。

そもそも、人間主義というのは魔法を異端（不自然な力）扱いし、天（もしくは神）に与えられた力（自然の力）のみで生きていくべきとし

た宗教的側面を備えた主義・主張であるわけだが、それを言ったら現代魔法以前の人為的ではなく自然的に発生した力――古式魔法や魔法古代文明、そして超能力すら否定しかねない主張は矛盾そのものだ。この辺は「ブランシュ」のように自分らの都合の良いように解釈しているのだろう。

というか、説明の段階で既に矛盾が生じる（そもそも体系化された魔法の定義は、自然の物理法則を改変する「技術」という時点で論理が破綻している。自然の力だけで生きていくのだとすれば、魔法とそれなりに関係のある科学ですらも不自然な力という論理になってしまう。

かつて存在したと言われる神業を成し遂げた人物を肯定しておいて魔法を認めないというのは支離滅裂でしかない。

何故、七草家が周公瑾の主導しているメディア工作を利用して四葉家の価値を落とそうとするのか理解に苦しむ。とりわけ七草家の現当主は外国勢力によって手痛い傷を負った側の人間のはずなのにだ。

そんなことをするぐらいなら七草の価値を上げる方が変な恨みを買わずに済むと思う。実際のところ、三矢家はその方法で十師族のトップクラスに位置する発言力を得ることに成功した。その発端を生み出した人間が言うべき台詞ではないかもしれないが。

第三研の『多種類多重魔法制御』と第七研の『群体制御』という二つの技術を得て大成している以上、七草の実力は本物である。その裏で七宝家――正確には琢磨のように七草家を快く思わない人間もいたりするが、現当主が四葉家に対してやっていることは稚拙という他ない。

四葉が原作通りあのまま進んでいれば、間違いなく十師族の中で突出することになる。だが、その危険性が少なくなりつつある以上、七草家のやっていることは十師族を分解させかねない行為でしかない。

七草家の四葉への執着が、某拳法漫画に出てくる天才を妬む阿呆のように聞こえてしまうのは……自分の気のせいだと思いたい。

（少なくとも、七草は周公瑾がメディア工作をしていることに気付いている可能性は高い。そのことは周公瑾の側も把握しているとみて

いい。残るは……現段階で〝繋がり〟があるか否か）
　原作において明確な繋がりを持つのはこの一連の騒動後の話だ。しかし、この世界でその通りになっているとは必ずしも限らない。最後の懸念事項次第で七草家への対応総てが決定することになる。
　悠元は折りたたみ型端末の電源を落として手元にあった情報端末を左手で掴むと、そのまま部屋を出てリビングに向かった。リビングの電話から悠元が通話を掛けた相手――それは三矢家の現当主であり、悠元の父親である三矢元であった。
「お久しぶりです、父さん」
『悠元か、久しぶりだな。しかし、態々一般回線を使うということは何かあるのか？』
「まあ、色々ありまして……急な話ですが、明日は大丈夫でしょうか？」
　悠元はそう述べてから手に持っている情報端末からデータを送信し、元もその場所を確認した。こんな形を取ったのには表向き仲の良い親子が連絡を取っているという体を演じるためだ。簡潔に述べるなら、どうせ聞いているであろう連中を欺くためとも言える。
『明日か……すまない。急な用事が入ったようで、二人きりでの面会は難しそうだ。特に今月はかなり忙しいのでな』
「それは仕方ないですね。ゴールデンウィーク辺りにでも都合を付けます」
『そうしてくれると助かる』
　通話の中で元が断ることは既に〝取り決められていた〟ので、何ら問題はない。そして、元のお陰で予定通りに事を進められる形となった。何せ、彼は親子〝だけ〟での面会は難しい、としか述べていないのだから。
　その後は、学校生活での他愛ない話をして通話を終えたところで、悠元は手に持っている端末に『八咫鏡』を発動させて司波家周辺にいる人間を探る。
（七草家関連の人間が数人か……何にせよ、しっかり段階を踏んでいかないと始まらない話だな）

いくら「世論」という標的が存在しない相手とはいえ、十師族同士で相打ちなんてしたらそれこそ周公瑾や顧傑だけでなく、終いにはＵＳＮＡをはじめとした欧米諸国がほくそ笑むだけなのだと理解しろ、と愚痴の一つも零したくなったのは言うまでもない。

◇　◇　◇

西暦２０９６年４月１４日。悠元は都内某所にある高級料亭の一室にいた。この店は神楽坂の息が掛かった店であり、数多くの著名人や政治家がお忍びで通うほどの人気を博している。公的な場なのでスーツ姿となっているわけだが、するとそこに通されたのは昨日話したばかりの元であった。

「おや、悠元。一番乗りかと思ったのだが、早いな。いや、この場は神楽坂殿でしたか」

「まだ身内しかいないので問題はないよ、父さん」

元は悠元の隣に座り、一息吐いてから悠元に向き直った。

「内容は全て目を通した。だが、本気なのか？」

「でなければあんな内容の文章は送らない。ようやく盤面が整ったからこそ出来る訳だけど――いらっしゃったみたいだな」

「遅れて申し訳ない、神楽坂殿。それと、三矢殿は初めましてになりますな」

「これは総理自らとは。十師族・三矢家が当主、三矢元と申します」

悠元がここに呼んだのは総理大臣と元の二人。本来権力を捨てた十師族が政治家と会うのはあまり好ましいことではない。だが、悠元がこれからやろうとしていることには、この二人の協力がどうしても外せない。一先ず、出された料理が冷めないうちに食していくこととなる。流石に悠元は未成年なので、酒ではなくお茶にしてもらっている。

他愛のない話をひとしきりしたところで、総理から切り出した。

「さて、神楽坂殿。秘書から受け取った手紙は全て読ませていただいたが、あの内容で動いても問題はないと思ってよいのですね？」

通信では盗聴されていてもおかしくはない。それは前世において相手のやりようを熟知していたからに他ならない。なので、文面にし

た上で総理だけが読めるよう差配をした。そこに記載した内容は彼だからこそ出来る仕事を任せるためだ。野党の躍進を許せば、それこそ魔法科高校と軍の癒着を騒ぎ立てることなど容易に想像がつく。
「ええ。この部分に関しては総理の領分でもあります故、そこはきちんとお願いします。父さん――――コホン、三矢殿には臨時師族会議で全会一致の同意を得る形にしてほしいのです。こちらからは既に一条、二木、四葉、五輪、六塚、八代の了承は取り付けておりますので、残る七草と九島、十文字の説得をお願いします。場合によっては私も神楽坂の人間として出席いたしますので」
「分かりました、神楽坂殿」
会食自体は2時間少々で終わり、各々帰路に就いた。
七草家は世論そのものを分割して力を削ごうとしているようだが、一時的な小康状態にしか成り得ない。そもそも、調べはついているだけでその火消しにまで手が回るかといえば極めて難しい。幸いにして、人間主義の勢力を削ぐ方法はＵＳＮＡでの実験で立証済み。
司波家に帰宅すると、見たことのある靴に気付きつつリビングに向かう。すると、悠元が想像した通りの人物――――文弥と亜夜子がいた。
「おや、文弥に亜夜子ちゃんか」
「お久しぶりです、悠元さん」
「お邪魔しています」
文弥と亜夜子に挨拶を交わすと、深雪が近付いて風呂の準備が出来ていると伝えてきたので、そのまま風呂に入って動きやすい服に着替えてからリビングに戻ってきた。文弥と亜夜子はいつでも寝れるような格好となっており、どうやら今日は泊まっていくらしい。客間は水波が整えていたようで、そこに関しては特に異論などなかった。
「悠元さん。達也兄さんと深雪姉さんには伝えたのですが、どうやらＵＳＮＡの人間主義者が入り込んでいるようです」
「どうやらそうみたいだな。しかも、反魔法主義のメディア工作には七草弘一と九島烈が絡んでいるんだろう？」
「ええ、その通りです」

正確に述べるならば、七草弘一のメディア工作に対して九島烈は反対しなかっただけで、言い換えれば黙認するということにほかならない。十師族の為と言えば聞こえはいいが、間違いなく十文字家としては小火と言えども許容できないであろう。近い時期に何らかの形で抗議することは間違いないとみている。

「魔法科高校と軍の癒着とか馬鹿馬鹿しいと言いたいがな。彼らの論理自体破綻しているに等しい。昨年度の国立魔法大学卒業生は横浜の件もそうだが、3年前の沖縄と佐渡侵攻以前に魔法科高校を卒業しているというのに」

一例を挙げるとするなら、メディアや野党議員の一部は昨年度の国立魔法大学と防衛大学校の卒業生における軍関連への就職割合から軍との癒着を示している。だが、魔法大学付属高校は全国に九つあるのに、それら全ての卒業生に占める魔法大学および防衛大学校の進学割合を提示しないのは何故なのか。

魔法科高校の1学年単位の全体人数は１２００人。途中で魔法技能の消失によるドロップアウトを差し引いても１０００人から１１００人はいるとして、九つの魔法科高校から国立魔法大学に入る人間を大体７００人から８００人と仮定、その半数が軍関係に進むとなると３５０人から４００人程度になる。

つまるところ、魔法科高校から軍関係に進んでいる人間をざっと計算しても魔法科高校の卒業生の約3分の1以下、第一高校の卒業生に限定しても平均して約４０人から５０人程度が目安。そこに防衛大学校の卒業生を加えたとしても、下手すると７０人を切る計算――第一高校で言えば、一学年単位あたり8クラス中ほぼ3クラスが軍関係に就職している形になる。

防衛大学校は軍関連へ進むことを前提にしたカリキュラムであるからして大半が国防軍への配属になるのは自然の流れであるが、国立魔法大学から国防軍およびその関係機関へ就職するのは本人たちの自由意思によるものだ。

この国の法律では非常時――緊急事態の場合を除いて１８歳未満の軍役を禁じていることぐらい読めば理解できる話だというのに。

そもそも、昨年度の国立魔法大学卒業生と第一高校卒業生を一緒くたに比較など出来るはずがない。より正確なデータを出すのならば、国立魔法大学の卒業生が魔法科高校から卒業した当時の進学先データを引き合いに出さなければならない。

昨年度の国立魔法大学卒業生は沖縄防衛戦や佐渡侵攻、横浜事変が起こる前に魔法科高校を卒業しており、昨年度の魔法科高校卒業生はそれらが起きた後に卒業した。この時点で国内・国際情勢の条件が違うのに、その前提を隠した上で騒ぎ立てている時点で底が知れたようなものなのかもしれない。

「極端な話、魔法科高校に入学したほぼ全員がエスカレーター式で軍関連の職に就いているなら筋は通るんだが……達也、反魔法主義の連中諸共本気で泣かす一計を仕掛けるから協力してくれ」

「誰か消すのか？」

「そこまで極端にいかねえよ。ＦＬＴで以前やった実験の装置を第一高校に運び入れるよう手配するから、生徒会や風紀委員を説得してほしい。学校外の説得は全部こちらで受け持つ」

以前やった実験、という文言で達也も何をするのかは察したようで、何も知らない深雪や水波、文弥や亜夜子は揃って首を傾げていた。どの道最低でも深雪には協力してもらうため、悠元は宣言するように言い放った。

「常駐型重力制御魔法式継続熱核融合炉の実験――ＦＬＴの実験では既に安定化に成功した装置の簡易版だが、安全性のマージンは十分確保している。どの道、深雪にも手伝ってもらうことになるから、頼むぞ」

将来の「ディオーネー計画」に対する反攻策（カウンタープラン）――「ＥＳＣＡＰＥＳ計画」の第一歩となる常駐型重力制御魔法式継続熱核融合実験のお披露目。これを単なる一過性の話題ではなく、現状のエネルギー分野に投下する盛大な〝隕石〟として叩き落とす。そして、これはいわば〝踏み絵〟ということに気付いたのは……発案した本人以外で言えば達也ぐらいであった。

しかも、悠元の述べた言葉をそのまま受け取るとするならば、飛行

魔法を含めて加重系魔法三大難問とまで言われた難題をまた一つ「トーラス・シルバー」が解決したに他ならない、ということも。

驚きは猫被りに勝る

「……これは。成程……」

西暦２０９６年４月１５日。

九島烈の消極的な賛同を得られた七草弘一に１本の暗号メールが送られてきた。最初は自分のボディーガードを務める名倉から送られたものだと推察したが、自前の暗号解読システムで内容を確認したところ、弘一は戦慄が走るような感覚に囚われていた。

その相手は弘一……いや、七草家にとっても浅からぬ因縁を持つ相手であり、四葉家の在り方を少なからず変えた人物。メールに七草家しか知らない独自の暗号通信システムを用いたことからして、七草の持ちうる技術すら超えるものを神楽坂家は保持しているのでは……と思慮しつつも、メールの内容を事細かく精査していく。

彼の存在自体が十師族にいたころから突出しており、十師族の秩序を重んじるという理由で十師族の直系という立場を離れた人物。その彼が訪れる内容は弘一であっても無視できる領域を超えていた。それに、彼は神楽坂家ならびに三矢家の当主代理として赴くとある。

護人と十師族の両方の血を引く人間にして油断のならない相手。しかも、彼は国家において非公式の戦略級魔法師。だが、ここで断るほど七草家当主は狭量ということではない。弘一はメールを読み終えて暫し考えた後、一つの答えを出したのであった。

◇　◇　◇

その日の夜。七草邸の車寄せに黒塗りの乗用車が止まった。後部座席から自らドアを開けて降りてきたのは、神楽坂・三矢の当主代理――スーツにネクタイ姿の悠元であった。流石に克人ほどの容姿は持ち合わせていないが、剛三との旅行や社交界で鍛えられた存在感は歳不相応の老獪さを兼ね備えつつあった。これには出迎えた真由美も思わず背筋が張り詰めたような感覚に囚われたほどだった。

「１週間ぶりですね、七草先輩」

「ええ……悠君って本当に１６歳なの？」

「それは間違いないと思いますよ。あと、公的な場ではないので目を

瞑りますが、下手すると誹謗中傷になりますよ」
断言ではなく推察のようなニュアンスの言葉になったのは、自身が転生者ということも含めてのものだが、そんな事情など知らない真由美からは特に追及が飛ぶようなこともなかった。彼女は悠元が述べた後半部分の忠告で軽く謝罪していた。そして、真由美の先導という形で悠元は七草家の敷居を跨いだ。
「それにしても、悠君が三矢家の当主代理も兼ねて来るなんてちょっと予想外よ……うちの父がまた粗相でもやらかしたの？」
「単純に都合が良かったというだけもありますし、現当主の息子なので別に問題はないかと……ちなみにですが、泉美ちゃんには？」
「伝えたら話し合いどころじゃなくなるでしょうから、父に私と数人の使用人だけが知っている形になるわね」
その言い分はご尤も、と納得したところで当主のいる応接室に通された。
部屋の中には既にこの家の当主である七草弘一がいた。これから始まる応酬を踏まえ、悠元は改めて気を引き締めつつ挨拶をした。
「こんばんは、七草殿。此度は急な会談の申し出を受けていただき、感謝に堪えません」
「お久しぶりです、神楽坂殿。先んじて送られた申し出の内容は我が七草家としても無視できる内容ではありませんので」
「そうですか……これから話す内容は魔法師社会にとっても重要なこと故、真由美嬢にも聞いてほしいと考えておりますが、如何でしょう？」
えっ、と思わず声に出そうになったところで真由美は口を押える様な素振りで慌てて堪えた。彼女の想定では悠元と弘一が直接会談するものと思っていた。それは、表情を僅かに厳しくした弘一も同様なのだろう。だが、悠元はその前提を最初から壊すつもりだった。
「理由は至って単純です。昨今の反魔法師主義――人間主義を語る連中がメディアを使って煽っている運動。その一端を七草家が担っている以上、身内に衝動的な行動を起こされて足並みを崩される方が七草殿としても困るでしょう？」

「っ!?」
「……そうですね。真由美、座りなさい」
悠元が投下した衝撃的な発言で真由美は驚いた後で厳しい視線を父親の弘一に向けていた。だが、それも意に介せずといった感じで弘一は口元に笑みを浮かべつつ、真由美に着席を促した。彼女も渋々言われるままに着席した。この辺は実の娘に〝狸〟と言わしめるだけの図太さを持ち合わせている、と内心で感想を述べたところで弘一が悠元に賞賛の言葉を投げかけた。
「しかし、良く調べられましたね。流石は三矢の――いや、神楽坂の情報網と言ったところでしょうか」
「その辺の推測はご自由にどうぞ、とお答えしておきます。尤も、その関連も含めて昨晩(さくばん)は女優の小和村真紀さんとお会いになられていたのでしょう？　……彼女がメディア関連のみならず、直接的な力として魔法師を欲している事実を貴方は黙認した――違いますか？」
「……そこまで調べがついているとは、お見逸れいたしました」
メディア関連のみならず、小和村真紀のことまでほぼ掴んでいる……と弘一は悠元の情報収集力が七草の持つ情報網を遥かに凌駕していることも含めてそう推察した。何せ、昨晩彼女と会談したことは掴まれてもおかしくないだろうが、その内容は弘一と真紀にしか知りえないことのはずだからだ。
「悠君？　それってどういうことなの？」
「――『新秩序(ニュー・オーダー)』。師族二十八家を中核とする従来の統治システムに代わる第二の魔法師勢力を作ろうとする動き。それを積極的にやっている人間の一人が小和村真紀ということです」
その動きについて予め護人の二家で話し合った結果、国力を分断するような動きは看過できない、という結論に至った。だが、早急に潰すのではなく「新秩序(ニュー・オーダー)」そのものを立ち行かなくさせる方針で合致した。その為に、真紀の地盤を完全に奪うことも含めて策を講じることとした。
「そちらについては神楽坂家で受け持ちますので、話を戻しましょうか。七草殿、今回の会談を申し込んだ理由は先んじてお送りした書状

の内容の通りですが……世論を分割させるように仕向けたのは、合従されて大火になるのを防ぐためですね？」
「ええ、その通りです。世論という存在は無視できないにせよ、それを仕返すにも相手がいない。だが、手をこまねいていては我々魔法師にとって無視できない傷を負うことになりますので……その表情を見るに、神楽坂殿はどうやら世論の仕組みをよく御存知のようだ」
　確かにこの部分は弘一の説明した通りだ。
　世論を作り、騙り、盛り上げることをメディアが煽っても、世論の責任の所在はメディアにないという矛盾。結局はこの国に住む国民が情報を得てどう判断するかでしかない。この辺が俗に言う情報リテラシーということだが、反魔法師主義の記事ばかり目立つような状況は一種の〝情報統制〟に近い有様。しかも、魔法科高校を運営する立場の政府も積極的に関与できていない稚拙さ。
　とはいえ、十師族に政治家への圧力などは御法度……だが、この場においては悠元にその縛りなどもはや存在しない。
「誉め言葉と受け取っておきます。七草殿、確か反魔法主義の論調には魔法科高校と軍の癒着を仄めかす様なものがありましたよね？」
「ええ、現在、その主張が勢い付いていますが……それを利用なされるおつもりですか？」
「実は、ＦＬＴの次席株主である父――――三矢殿から聞いた話ですが、ＦＬＴが魔法科高校に実験装置の提供を行いたいという申し出があったそうで、どうやら常駐型重力制御魔法式熱核融合炉らしいと聞きました。そのデモンストレーション実験を実施する方向で話が進んでいるようです」
　この辺は半分ぐらい建前が紛れ込んでいる。表向きは将来の魔法技術発展に貢献できる魔法工学技術者の育成を見据え、魔法工学科に実験装置の提供を行うというものだが、核融合反応装置以外にも魔法工学関連の実験装置が運び込まれるため、決して嘘は言っていない。七草家を訪れる前に校長の百山や教頭の八百坂にも話はつけているため、原作よりも準備期間に多少の余裕は出来る形となる。
「七草殿であれば、民権党（みんけんとう）の議員……国防軍に批判的な神田（かんだ）議員あた

りでしょうか。彼に加えてメディア関係者と繋ぎを取っていただきたい。百山校長は今月の２５日より出張で不在になるため、その日に訪問するよう仕向けていただきたいのです」
「ちょ、ちょっと悠君!?　魔法科高校にメディア関係者を入れるの!?」
「大丈夫ですよ、先輩。生徒の魔法技能を失わせないよう、その日のカリキュラムは学校側にも協力してもらいますから……尤も、矢面には自分が立ちますので」
　彼らが人権を謳うのであれば、こちらも人権を謳うだけ。だが、それだけでは反撃に足りないということなど悠元も熟知している。ならば、メディアにとって世論よりも一番気にしなければならない相手からの突き上げが来た場合、その論調をいつまでも続けられるのか……答えは否だ。
「三矢殿に対して近日中に臨時師族会議の開催をお願いしました。既に七草、九島、十文字以外の師族には話を通した案件です……それと、魔法科高校のデモンストレーション後に『おことば』を賜ることも既にお願いいたしました」
「……それって、まさか今上陛下の!?」
　確かに、この国の皇族に実質的な権力は持ち合わせていない。あくまでも象徴たる存在だが、長きに渡って続く世界で唯一無二の皇家の存在は誰しも無視できるような存在ではない。畏れ多くはあるが、今上天皇におことばを賜ることで昨今の反魔法師主義に特大の楔を打ち込むこととした。魔法の有無はあれども、この国に生まれた者は等しくこの国の民であると。
「権力はなくとも、この国の象徴である陛下は国民の支柱たる存在でもあらせられます。陛下をはじめとした皇族の守護として護人がいる以上、魔法師は軍のみならずこの国の存続に必要不可欠な存在となりえている――それすらも否定するのならば、国を害する〝叛逆の徒〟として討つに能わず……その為の一手です」
　原作では十師族としての範疇で対処していたが、それだけでは足りないと判断した。魔法師社会だけで完結させず、政治・経済の両面に加えて皇族にもこの問題に一石を投じさせる。これでも人権の保護

を謳うのならば、まずは自分たちがそれを遵守しているのかと問いかけなおすところから始めてもらう。
　七草弘一が世論というテーブルの色を丁寧に染め直しているとするなら、自分の場合はテーブルごと染料の入った水槽に沈める様なものだ。弘一もそのことに気付いたのか、口元に少し笑みを浮かべていた。
「……成程。神楽坂殿は大胆かつ奇策の一手を打つ御積もりですね」
「理解していただいて何よりです。それと、デモンストレーション後はメディアに対して大規模の資金工作――――最低でも十数兆円規模の買収工作を仕掛ける算段になっております。もし、七草殿がこの事実を黙認していただけるのならば、『以前結んだ契約』を条件付きで復活させることもこの場でお約束いたします」
　いくら周公瑾でも国家予算規模の資金を捻り出すことなど出来ない。一方、神楽坂家にはＵＳＮＡから得た賠償金に加えて、裏取引や人間主義の組織を潰すことで得た活動資金も投入する。味方する論調を書いていた相手からの金で敵に回るというのは皮肉が利きすぎていると思うだろうが、この国を護るために出来る手段全てを辞さない覚悟など、とうに出来ている。
　そして、悠元が述べた〝契約〟という文言でその内容を察した弘一はサングラスを弄った上で問いかけた。
「それは、こちらにとっても悪くはない話となります。その話は上泉家も了承されていると受け取っても？」
「ええ。契約に関する条件は上泉家と神楽坂家が厳格に定めたことを遵守していただきますが、〝とある人物〟ともし関わりがある場合は直ちに縁を切ること。そうでなければ繋がりを持たないこと。更に、その者の対処に七草家が関わらないこと。これだけは最低限守っていただかなければならない条件だと思ってください」
　具体的な人物の名を述べるのは避けたが、今の発言で弘一も誰を指し示しているのかは理解したはずだ。今のところは周辺を少しずつ削り取るように外堀を埋めているが、その打開策として七草家に深く接触してくる可能性がある。そして、それこそが彼の仕掛ける十師族

同士の「離間の策」に他ならない。
七草弘一と周公瑾ひいては顧傑を引き離す――――そのために、神楽坂家と縁を結べる利を与える程度ならば安いものと結論付けた。尤も、縁を結ぶための代償は有無を言わせず支払ってもらうつもりだが。

◇　◇　◇

「ふう……」
「お疲れ様です、若様。感触は如何でしたか？」
「悪くはなかったが、流石十師族の一角を担うだけはあると思ったよ」
弘一との会談を終え、座席に深く座った悠元を運転席に座る葉山忠成が労った。その言葉を受け取りつつ、悠元は窓の外を見やるようにしながら答えた。
剛三との関わりで面識を持つことはあっても、そこまで緊張した状況で話すのは今回が初めてだろう。尤も、自分の隣に座っていた真由美は七草の令嬢という猫被りが時折剥がれていたわけだが。
「自分の気苦労と引き換えに七草は何とか引き込めそうだが……十文字家は独自に調べているようだし、先輩の性格からしても動かないという選択はないだろうな」
「……干渉なさいますか？」
昨今の反魔法主義に関しての実情を知ってもらう意味でも真由美に同席させることで感傷的な行動を避けさせる狙いがあった。ただ、今頃は真由美が弘一に抗議めいた問いかけをしている頃だろう。それぐらいは簡単にあしらうだろうと思われるので、干渉する気などなかった。忠成の問いかけに対して、悠元は首を横に振った。
「いや、問題ない。十文字先輩が動こうが動くまいが臨時師族会議の開催は決まっていることだ。残るは……師族の在り方を教えてやらないといけない奴らがいることか」
自分自身とて高言出来るほどに十師族として活動していない。だが、魔法師社会の頂点に立つということは、即ち魔法師の在り方の模範とならねば意味がない。別に競争心を煽って互いに切磋琢磨させる手法も決して悪くはないが、かつて服部が言っていた高名の魔法師

の言葉を思い出す。
――魔法師は事象をあるがままに、冷静に、論理的に認識できなければならない。そして、自らを厳しく律することが求められていること――
非常に為になる言葉だが、この世界では何と今は亡き剛三の妻が遺した言葉である。しかも、新陰流剣武術ではこれに近い言葉が存在したが、彼女によって分かりやすく述べられたこの教えを第一とするようになった……それでいてスパルタ訓練をやってしまって乗り越えた人間相手に通用するかは不明だが。
そして、悠元が司波家へ帰った後に判明したことだが、香澄からのメッセージで『悠元兄、ボクは泉美にどう接したらいいんだろう……』という文言の後、何があったのかが詳細に綴られていた。泉美が悠元の匂いに反応したらしく、弘一に凄みのある笑顔で問い詰めたらしい……嗅覚で恋慕する人間の来訪を判断できるって、もう人間辞めてないか？　と思ってしまった悠元であった。
〝兵器〟として造られた人間の末裔が〝人間を辞める〟というのは些か捻くれているとは思うけど。

見方が変われば感じ方も変わる

十文字邸の自室にて、理璃は勉学が一度落ち着いたところでタブレット型情報端末を手に取っていた。目につくのは反魔法主義に関わるもの――――論調自体は魔法師を利用する国防軍を非難するものと魔法師が依怙贔屓されていることを非難するもの――――と両極端なものとなっているが、実際には魔法師と軍の繋がりを非難するばかりであった。

だが、理璃の着目点はそこに存在しなかった。

(……確かに国防軍が魔法師を重用するという非難は少なくなかったはず。でも、ここにきて増えてきている……噂になっている人間主義者の仕業だとするなら辻褄は合うけれど、恐らく私も無関係ではない筈)

理璃自身、十師族の一角を担う十文字家の娘となったことは勿論だが、血縁関係に国防陸軍の関係者がおり、亡くなった両親も国防海軍の軍人であった。人間主義者が人権を謳っているのは一応理解するとしても、理璃はその考えに到底納得できなかった。

(十文字家に引き取られる際、今のお父様はどちらの姓を選んでも構わないと言ってくれた。だからこそ、私は十文字の娘であることを選んだ。これ以上ご迷惑をお掛けしないためにも)

理璃の持つ『ファランクス』は十文字家の秘術である対抗多重障壁魔法。本来魔法演算領域のオーバークロックという十文字家のみが持つ技術を伴って初めて十全の力を発揮するが、理璃は克人以上に魔法演算領域の演算許容範囲が広いため、オーバークロックなしで全力の『ファランクス』を展開できる。

更に言えば、理璃の魔法演算領域の一部は自己強化・対抗魔法に特化した演算領域を有しており、『ファランクス』に必要な断続的展開に最も適した力を有している。そのことを実の母親から指摘され、理璃は出来る限り『ファランクス』を使わない様にして来たのだ。

話を戻すが、魔法師と国防軍の関係を「癒着」や「人権を無視している」などという論調は昨今の国際情勢を完全に無視したものだ。理

璃がニュースを見つつ考え込んでいるところで、ノックの音がしたので振り向くと、扉の向こうから使用人の声が聞こえてきた。
『理璃お嬢様、旦那様が書斎でお待ちです』
現在の父親である和樹からの呼び出しに、理璃は一瞬考えこむも結論が出ないと判断して返事を扉に投げかけるように言い放った。
「わかりました。支度は自分で致しますので」
素早く寝間着から来客が来てもいいようなフォーマルな服装に着替える（この辺の礼儀作法は、元々軍人家系で育ったために自分で出来ることはしていたため）と、理璃は書斎に赴いた。書斎には和樹以外に克人もいた。
尤も、克人はトレーニング用の恰好ではなく一応袖の付いたシャツを着ているのだが、筋骨隆々な克人が着ると体に張り付いてしまうような状態になっていた（本人曰くお気に入りのもので偶に着ている）。
「失礼いたします、お父様。お兄様もいらっしゃったのですか」
「ああ」
理璃は二人に挨拶をして克人に声を掛けると、彼は短く答えを返して軽く頷いた。それを聞き終えたところで和樹が理璃に言葉を掛けた。
「すまないな、勉強中だっただろうに呼びだしてしまって」
「いえ、丁度息抜き中でしたので。それで、如何様の要件でしょうか？」
「――――昨今の反魔法師主義の論調は二人も知っていると思われるが、その片方にどうやら七草家もとい七草弘一殿が関わっていると思われる」
その内容は理璃だけでなく克人も少なからず驚きを隠せずにいた。それでも克人のほうがまだ驚かなかったのは一時期十文字家の代表代行をしていた影響もあるのだろう。理璃は、机にバンっと両手を叩きつけつつ和樹に詰め寄った。
「本当なのですか!?　あの家は私の同級生である香澄ちゃんと泉美ちゃんが在籍しているのですよ!!　とても正気の沙汰ではありません!!」

「……本当のことだ。理璃、少し落ち着いてくれ」
「でも……すみませんでした」
　和樹の言い放った事実に疑問を投げかけるも、十文字家の人間として相応しくない振る舞いだと自分の中で反省した上で謝罪の言葉を口にした。これには和樹が苦笑を浮かべてしまった。
「カッとなるところとすぐに自分の態度を省みて謝る癖は母親譲りだな……話を戻すが、七草家の現当主はそれが利益となると睨んでのものようだ。この場合、七草殿の娘たちも被害者の立場となる」
「だからといって、そう易々と巻き込んでいいものではない筈……父上。俺を呼んだのは七草を通して七草殿に真意を確認してほしいということか？」
　克人は今までの経験を踏まえてそう問いかけた。克人と真由美は同学年であり、同じ第一高校の出身でもある上にかなりの面識がある。それを踏まえての問いかけに、和樹は首を縦に振った。
　だが、話し始めた直後位に届いたメールを読んだところで和樹は述べようとした内容を変更した。
「ああ。だが、いくら七草殿とはいえ手の内の全てを明かすとは限らない――――待て。どうやら、臨時師族会議を2日後に開くとのことだ。恐らく、先程述べた七草家のことに関してだろう。発起人は……三矢殿と四葉殿とのことらしい」
「三矢と四葉が……？」
「三矢夫人の父はかの英雄こと上泉殿だ。彼は四葉の先々代当主と親友関係であり、現当主の四葉殿も娘のように可愛がっていたと聞いている。その縁で両家が知り合っていてもおかしくはない」
　四葉の怖さは理璃も聞き及んでいたが、滅多に他の師族と歩調を合わせなかった筈の四葉が三矢と歩調を合わせる形で今回の臨時師族会議の発起人となったことに疑問を呈していた。それを察した和樹が三矢と四葉の繋がりをなるべく簡潔に説明した。そこまで説明したところで和樹は克人に視線を向けた。
「克人、先程の件は臨時師族会議で私のほうから聞き出してみよう。もし、真由美嬢から相談されたときはお前の判断に任せることとす

る」
「分かりました。七草殿の真意を探るのは父上にお任せします」
「理璃のほうは、そうだな……最近、学校で何か気になったことでもあるか？」
「実は、七宝家の長男が――――」
　理璃は和樹に琢磨が交戦的な態度を取っていることに加え、新入部員勧誘週間中に香澄とトラブルを起こして私闘になりかけた一件を口にした。これを聞いた和樹は手で顎を支える様な仕草をしつつ考え込んだのち、その姿勢を解いた上で理璃に尋ねた。
「七宝殿は堅実なお方だ。その長男が七宝殿と正反対の動きをしているか……（本来ならば七宝殿が咎めなければならないが、思春期故の反抗期なのかもしれないな。もしくは自己顕示の為か……）理璃、彼が今のところ目の敵にしているのは七草家の人間だけか？」
「それなのですが、達也先輩に話を聞いたところ、深雪先輩や神楽坂先輩も睨まれたようで……私も何故か睨まれてしまいました」
「そうか。それにしても、司波と神楽坂か……」
　理璃がそのことを知っているのは単純で、生徒会役員の仕事を覚える一環で深雪と行動することが多いのだが、時折琢磨から睨まれるような視線を感じたのだ。だが、理璃が視線を向けると琢磨はそそくさと去っていくのが確認できた。思春期特有のものかと思ったのだが、達也に何か心当たりはないかと尋ねた結果、理璃が述べた内容が返ってきたという形だ。
　彼女の言葉を聞き、考え込んだのは克人であった。その二人――――特に神楽坂は元十師族の人間である前に昨年度の新入生総代なので睨まれる理由も察しはつく。だが、深雪には関しては克人も量りかねていた。以前達也に「お前は十師族なのか？」と尋ねて直ぐに否定されたので、克人は深雪も含めて必要以上の詮索をしなかった。
「……確か、司波深雪くんと言ったか。彼女は確か昨年度の新入生次席だった筈。九校戦の輝かしい成績も含めれば、七宝くんが同じ立場であった彼女を羨んでも不思議ではないが……克人はどう思う？」
「司波妹に関しては、司波共々並の魔法師の実力ではないと認識して

います。七草に加えて司波と神楽坂が本選ミラージ・バットの出場に推薦したほどと言えば、察するに余りあるかと」
尤も、実力以上に飛行魔法の披露で会場全体の話題を掻っ攫っていた訳だが。そのことは一先ず置いておくとして、深雪の魔法師としての実力を考えるならば、十師族の直系クラスに相当するのは間違いないと克人はみている。
口に出さなかったが、昨年春の「ブランシュ」制圧作戦において最前線に立っていたことを考慮するならば、彼女は間違いなく対人戦闘経験がある人間だと察しはついていた。そのことを七宝家が把握しているとは考えづらいが、一応頭の片隅に置いておく必要はあると克人は感じた。
「ともあれ、理璃は暫く七宝くんと距離を置くようにした方がいいだろう。いくら彼でも無闇に喧嘩を売る真似はしないと思われるが……態々危険に身を晒す必要はない」
「分かりました、お父様。香澄ちゃんと泉美ちゃんにもお伝えすべきでしょうか？」
「一応はそれとなく伝えてほしい」
理璃と泉美が同じ生徒会役員であることは和樹も理璃から聞いていたため、その接点で伝えれば特にトラブルは起きないと踏んだ（なお、1学年のクラスは理璃と水波がA組、琢磨がB組、泉美がC組、香澄がD組）。
和樹としても「七」の数字を持つ家同士の諍いに介入するのは避けたいと考えていた。その最大の理由は十文字家からすれば同じ数字を冠する十山家（国防軍では遠山家と名乗っている）との関係もあったからだ。
「それは、七草と七宝の諍いに介入しないようにするためでしょうか？」
「ああ、その通りだ。七草殿も七宝殿もお互いに刃を向けるつもりはないだろう。少なくとも子どもの喧嘩レベルだと現段階では捉えているかもしれない」
あの家が国防軍としての力を使って三矢家に我が物顔をしていた

ことは知っていた。だが、8年前あたりを境として急速に力を伸ばし始めていた三矢家は独自に国防軍との繋がりを得た。その原因が現当主の三男にあると見た十山家は国防軍を動かして誘拐（十山家の言い分では「教育」であった）を目論んだ。
「父上。彼らの実力は少なからず聞き及んでいますが、魔法を使えば喧嘩というレベルを超えてしまいます」
「無論分かっている。だが、あの学校には神楽坂殿がいる。十山家の件で多大な迷惑を掛けている以上、彼を通じて上泉殿や三矢殿を刺激するような真似は避けたい……わかるな、克人」
その動きを事前に掴んでいたが、七草家から三矢家への連絡を差し止めるように圧力を掛けられた。だが、その時代表代行をしていた克人はせめてもの抵抗ということで影響力のある警察省を通じて千葉家の長男に〝心ある者の情報提供〟という形でリークしていた。
十山家の襲撃は三矢家の三男こと悠元の母方の実家である上泉家も掴んでおり、千刃流のみならず第１０１旅団・独立魔装大隊の大半のメンバーを呼んで武術教練という形で呼び寄せ……結果として、１５０名にも及ぶ襲撃部隊は難なく撃退されたのだ。
その代償は十山家のみならず、見過ごした七草家と十文字家にも及んだ。ただ、結果的に四葉の力が強まったことは七草家からすれば面白くないように見られたが、十文字家からすれば四葉家が正式に監視体制を担ってくれれば、十文字家は関東・伊豆半島方面に集中できるというメリットがあったのですんなり受け入れた経緯がある。
つまるところ、克人のリークのお陰で十文字家としては大した損害を受けていない形だ。ただ……昨年の防衛大学校のデモンストレーション戦闘で十山家が介入して悠元を引っ張り出したことで十文字家も少なくないペナルティを支払っている。
「お父様、そのことは亡くなった父から少しばかり聞いていましたが、本当の事なのですね？」
「……ああ。十山家の言い分では『三矢家三男の教育』と言っていたが……彼らの予測では動かないとみていた上泉殿が積極的に動いた時点で負けが確定したようなものだ」

状況だけ見れば、師補十八家の十山家が十師族の三矢家に対して干渉し、彼らの力を削ごうとした形だ。悠元が三矢家から離れたことでその目的は達せられる形となったが、悠元が神楽坂家の次期当主となったことで十師族における三矢家の立場は高まり、十山家の地位と評判は師補十八家の中でも最底辺にまで落ちていた。

このことに関して、同じ「十」の文字を冠する十文字家は『十山家に関する事項に今後は関わらない』という上泉家との約定を受けて、一切手を差し伸べるつもりなどなかった。

「理璃にも話しておくが、神楽坂家は我ら十師族の更に上の立場――上泉家と並んで『護人（さきもり）』と呼ばれる一族の家柄。2年にいる神楽坂悠元殿は神楽坂家の次期当主にして既に現当主とほぼ同等の権限を与えられている」

「護人……皇族の守護を担う一族だと伯父に伺いましたが」

「実際はその通りだ。我ら十文字家も首都防衛を睨んでの魔法技能を有しているが、彼らは更に上の実力を有している。くれぐれも彼を怒らせるようなことは慎んでくれ」

「心得ました、お父様」

和樹は克人から悠元が『ファランクス』を破ったことを知っている。ならばこそ、彼と対峙すること自体意味を成さなくなると考え、理璃に警告を含んだ忠告を述べたのだった。

一体誰を誘惑しているのか

国立魔法大学は国防陸軍旧練馬基地跡に建てられている。朝霞(あさか)基地の拡張に伴って練馬基地を吸収統合した際に空いた土地の有効活用として作られている。実際のところは国立魔法大学建設計画が持ち上がったために基地の吸収統合を急いだ経緯がある。

余談だが、練馬基地を解体する際に激しい稲光や轟音が鳴り響いたという都市伝説が存在したのは……本当の話なのかどうかは不明である。

成立の過程による影響を受けてのものか、あるいは第三次大戦による魔法の有用性を認識したからなのか……その両方が強く影響して、魔法大学卒業生の約四割が軍及びその関係機関に進路を取っている。これを偏っていると論ずる人間は当然いるが、昨今における魔法師の社会的需要からすれば不自然な事ではない。

とはいえ、魔法大学そのものが軍事的な風紀を有しているかと言えば、決してそんなことはない。服装に関しては余程派手でなければ咎められることはなく(精々学生同士の忠告に止まる程度のもの)、魔法科高校より自由であると言えるだろう。

カフェでは、座席に結構な数のカップルがいる中で女性二人が向かい合わせに座っていた。

「……周りはカップルばっか」

「……気持ちは分かるけど、言葉に出すのは止めなさい」

Tシャツに前開きのタイプのパーカーを羽織り、デニムを履きこなしていて気怠そうな雰囲気を纏わせているのは三矢家三女にして魔法大学2年の三矢美嘉(みつやみか)。

その向かい側には、ワイシャツに細かい編目のカーディガンを纏い、落ち着いた色のフレアスカートを着こなす三矢家次女にして魔法大学3年の三矢佳奈(みつやかな)が美嘉を窘めつつ端末に視線を落としていた。

美嘉がのぞき込むと、そこには反魔法主義の記事が並んでいた。

「最近この手のものばかりだよね。昨年のアレをもう忘れたのかって言いたくなるけど」

「仕方がないわよ。私達のように全員が強い訳ではないから」
美嘉が述べた〝アレ〟とは横浜事変のことだ。美嘉も佳奈も義勇軍として大亜連合の襲撃を撃退した。加えて先日のパラサイト事件も含めれば、国内外を取り巻く情勢は予断を許さない。そんな中で魔法師の人権保護を謳っている連中の闊歩を指し示すかのように反魔法主義の記事が目立つようになった。美嘉は佳奈の端末を見ながらポツリと零した。
「……これはアレだね。どっかの意地の悪い狸が煽ってるんじゃないかな」
「根拠は？」
「私の勘。ついでに言うなら、記事を見ている限りだと反対派の中で分断しているようにも見えるけど」
普通なら曖昧な予測は危険だろうが、佳奈は美嘉の勘の鋭さを信頼している。美嘉の魔法科高校時代――――風紀委員をしていた時、一科生による二科生へのいじめを直感で察しては制圧していた。最早やっていることが神業のレベルだが、美嘉自身も自分の勘が外れたことなど殆どないと自覚している。
とはいえ、気付いたところで十師族の直系である自分らには対処できる範囲を超えてしまっているため、下手に手を出せないことは美嘉も自覚していた。
「ただ、私がどうこう出来るってレベルじゃないんだよね……父さんに相談してみる？」
「……そのほうがいいわね。って、あら？」
美嘉の発言を受けて佳奈も同意の言葉を述べたところで、佳奈はこちらに向けている視線に気付いた。佳奈がその方向に視線を向けると、今年大学に入学したばかりの克人と真由美が揃って来たのだ。これには美嘉がニヤつきつつ真由美に話しかけた。
「おやおや、まゆみん（美嘉が名付けた真由美のあだ名）はかっちゃん（克人のあだ名）とデートですか。見せつけてくれますなあ」
「美嘉さん!?　冗談でもそういうことは言わないでください！」
「十文字君も大変だね。美嘉、席を空けてあげて」

「すみません、失礼します」
美嘉と真由美の喧騒をよそに、佳奈は美嘉に席を空けるよう言いつつ克人を労った。克人は丁重に断った上で美嘉が空けた席に座り、真由美がその隣に座る。そして、真由美をからかいつつも二人の為に席を空けた美嘉は佳奈の隣に座りなおした。
一見すると一組の男女に二人の女性が詰問するような状態だが、この四人は魔法師社会における秩序の中心にいる十師族に連なる人間。佳奈が遮音フィールドを張った（魔法大学内では使用を許可されている魔法に関して定められており、遮音フィールドもその一つである）ところで、佳奈が問いかけた。
「それで、二人はどうしたの？　昨今の反魔法主義の記事に関すること？　それとも……その一端に七草家が関わってること？」
佳奈の問いかけは先程の美嘉が述べた勘も含んだものだが、真由美がビクッと僅かに反応したことに加え、佳奈の「精霊の眼（エレメンタル・サイト）」で真由美の体内の想子に揺らぎを感じたため、間違いはないと判断した。すると、真由美をフォローするように克人が佳奈に問いかけた。
「佳奈殿、先程七草と話したのですが……どうやら、七草殿が今回の反魔法主義キャンペーンに関わっているとのことで」
「（美嘉が勘付いた通り、か……）それで、私らに何か相談があるのよね？」
「ええ。近日中に臨時師族会議が開かれるとのことで、父から聞いた話では三矢殿と四葉殿が発起人となっているようです。なので、何かご存じではないかと伺った次第です」
克人の言葉を聞いて佳奈は考え込んだ。近頃の情勢を考えれば、何かしらの動きで魔法科高校及び魔法大学に人間主義者のシンパとなる人間――例えば、魔法師の人権保護を唱える野党の国会議員がアポなしで訪れ、魔法科高校や魔法大学のカリキュラムを軍事的なカリキュラムが多いとでっちあげることも予想がつく。
そのことは一先ず置いた上で佳奈が答えを返した。
「残念だけれど、私も美嘉も父からは何も聞かされていない。けど……」

「何か心当たりが？」
「この間、悠元と電話で話したって言った翌日、身なりを整えて要人と会うからと言い残して出掛けたのは覚えてる。多分、悠元がこの件に関わってる可能性が高い……真由美、今月のどこかで悠元が七草家を訪れてるんじゃない？」
「あ、はい。実は昨晩悠君が七草家に来まして、その時は神楽坂家と三矢家の当主代理として訪れていました」
　真由美の述べた言葉には佳奈のみならず、美嘉や克人まで驚いていた。どうやら、悠元が七草家を訪れていたことは聞かされていたが、その部分に関しては真由美も伝え忘れていたのだろう。
「七草、先程のことは俺も初耳なのだが？」
「ごめんなさい、十文字君。只でさえうちの父が反魔法主義の世論を煽っていたなんて驚きだったから」
「そりゃそうだよね……佳奈姉、こうなると父さんよりも悠元に連絡を取るべきじゃない？」
　美嘉の言い放った発言に、佳奈は頷いて端末を取り出すとメールを素早く打ち込んで送信した。すると、1分もしないうちにメールが返信されてきた。
「悠元から返信が来た。この場所で会うって言ってる」
「どれどれ……って、この前友達と話してた話題の高級レストランだよ、ここ」
　悠元が会談の場所に指定したのは、都内の高層ビルの一角にある高級レストラン。かなりの人気で1年先まで予約で埋まっているほどだ。となると、それなりのドレスコードが要求されることは想像に難くない。彼ら四人の取った行動――具体的に言えば、克人以外の女性陣の動きは素早かった。
「まゆみん、この後の講義は家の事情で休む方向で」
「あ、は、はい!?　即決ですか!?」
「今持ってるドレスが合うかどうかの保証なんてないでしょうに。なので、今から七草家に行くよ！　あ、騒がしくしてゴメン、かっちゃん」

「いえ……では、自分も支度があるので失礼します。この場の支払いはしておきますので」
「ちょっと十文字君!?」
美嘉と佳奈に拘束される形となった真由美を横目に、克人は伝票を持ってその場を後にした。
女性というものは準備が大変なのだ……と、常識の範疇で知っているからこその行動だが、そういった気の利く行動を取っても高校生離れした身なりのせいで女性に怖がられてしまっている克人であった。そこに加えて十師族の直系という事実もあり、更には真由美の〝お相手〟ではないかという噂もあるため、中々お近づきになろうとする女性が少ないのが実情であった。
◇　◇　◇
都内某所の有名レストラン。悠元は以前、「九頭龍」の一角を担う安宿怜美と会談した際に使った場所。神楽坂の名を出すとあっさり会談用の席が予約できてしまったことには驚きだが、一々驚いてもキリがないと諦めた（元々会談用の席は予め空けられていて、それこそ政治家でも国務大臣クラスの人間しか出入りを許されない）。スーツ姿に身を纏い、先んじて席に座りつつ端末を見ていたところ、ウェイターが悠元に近付いて一礼した。
「失礼いたします、神楽坂殿。三矢美嘉様と三矢佳奈様、七草真由美様に十文字克人様がお見えです」
「では、こちらの席にご案内をお願いします。全員が席につき次第、料理を運んでいただけますか？」
「畏まりました」
今回は佳奈から申し出による個人的な会談とのことだが、各々の当主が当人の様子からこの会談のことを聞き出している可能性がある。なので、三矢と七草、十文字の当主代理という体で話を進める必要があるだろう。
ウェイターが下がって暫くした後、ピシッとしたスーツ姿の克人は予想していたが、ドレスにメイクを決め込んでいる自分の姉らに加えて真由美の姿を見た時、どう表現したらいいか分からなくなった悠元

であった。
　と言うのも、佳奈と美嘉に関してはそれほど派手という印象は受けなかったが、真由美に関しては真紅を基調としたドレスで胸元が見えるぐらいに開けられている。本人のスタイルの良さもあってか、谷間がくっきり見えてしまうほどであった。
「十文字先輩に佳奈姉さんと美嘉姉さん、七草先輩もよく来てくださいました。で、さっそく質問なんですが……七草先輩、何ですかそのドレスは。誰か誘惑でもするつもりですか？」
「えっと、これはね……美嘉さんが選んだから……」
「何言ってるの。まゆみんったら、悠元に会えるからってウッキウキで選んだくせに」
「ちょっと、美嘉さん!?」
　大方、美嘉が真由美を焚き付けた結果なのは一目瞭然という他なかった。それでも、一応尋ねた結果がコレである。そんな騒がしいやり取りを聞きつつも克人と佳奈に視線を向けた。
「それで、佳奈姉さんに十文字先輩。自分に質問があるということでしたが……昨今の情勢と昨晩、俺が七草家を訪れた一件ですか？」
「うん、その認識で合ってる」
「大方の事情は七草から聞き及んだが、七草殿も神楽坂も何かを隠している風に思えたからな。出来れば話してほしいが……可能か？」
「可能な範囲であればお答えします。その前に、まずは料理のほうを頂きましょうか」
　無論お酒はないわけだが、出される料理に舌鼓を打ち、食後のティータイムとなったところで悠元が話を切り出した。
「さて、まず俺が先日七草家を訪れた理由ですが、独自の情報網で七草家が反魔法主義の一部を煽って世論の合従を防いでいた事実を知りました。なので、それを止めるというよりも煽った責任を七草殿に求めた形です」
「？　悠君、それは結果的に止めるということではないの？」
「世論というのは、言うなれば早い者勝ちです。しかも、反魔法主義の火種は1年以上前から存在していました。例えば、昨年春の横浜ベイ

ヒルズタワーで起きた一件もその一端に過ぎません」
　噂を広げるのは容易く、消すのは難しい。しかも、魔法という一部の人間しか持ちえない見えざる力を恐れてしまうのは無理からぬこと。七草弘一なら自慢げに話すだろうが、この場において立場が最も上となる自分自身でもそこまでするつもりはない。あくまでも年齢に準ずる話し方をするまでだ……基本的には、の話だが。
「一度焚き付けると、下手に消そうとすればかえって火傷を負いかねない。完全に燻ぶらせたところで消すのが理想的ですが……元々メディアを焚き付けているのが大陸系の人間ですからね」
「大陸系……神楽坂、それは大亜連合絡みか？」
「ある意味間違ってはいないでしょう。敵はこの国と大亜連合の弱体化を狙っています。その為に自ら表に出ず、メディアを通して世論を煽っているのです」
　正確には周公瑾と、彼の師であり真の黒幕である顧傑。日本を弱体化させて四葉を表舞台に引き摺り出す魂胆なのだろう。そして、袂を分かったとはいえ四葉に同胞を滅ぼされた復讐を達成するために……ここまでくると、〝老害〟の類になってしまうことに溜息を吐きたくなる。
「……この国は分かるけど、大亜連合も？」
「敵は、広義的に言えば愛国心を持たない大亜連合のスパイのようなものです。ブランシュ、九校戦でちょっかいを出してきた無頭龍、横浜事変における陳祥山と呂剛虎、そしてパラサイトに今回のメディア工作。これらすべてに何らかの形で関わっていますからね」
　共倒れまではいかないだろうが、互いに世論を焚き付けて国力を擦り減らさせる。その為の潤沢な資金源を持っていた組織が「ブランシュ」や「無頭龍」であった。尤も、その二つは反魔法主義を謳う〝国際テロリスト〟として摘発あるいは殲滅されたわけだが。
「悠元、そんな奴が執拗に狙う理由ってさ……まさかだけど、四葉の復讐劇が関係してる？」
「概ね間違ってはいないかな。ただ、この先は爺さんが出張る領分だから詳しく言えない」

「剛三殿が、か……分かった。このことは胸の内に止めておこう」
「そうしていただけると助かります」
　それに、剛三が自ら「親友が安心して眠りに就けるためにも、ここは儂が引導を渡す。こればかりは悠元にも譲らんぞ」と言ったので、そこに関しては放り投げるつもりだ。そもそも、未知の術すら一発で看破する爺さんを倒せる方法があるなら是非教授願いたいものだ。
　第三次大戦中は、超遠距離――数キロ先から放たれたスナイパーライフルの銃弾ですら察知して指二本で掴んでしまうだけでなく、本来なら対戦車用に使うはずのミサイルすら指一本で受け止めたらしい。指一本で事が済むとか核ミサイルクラスの便利さである。
　閑話休題。
「それで、七草殿がその行動を起こした理由ですが……ハッキリ言いましょう。別れた恋人が忘れられないストーカーじみた行動であると」
「え、ええ？　何それ？」
「具体的に言えば、七草弘一のかつての婚約者……四葉家現当主こと四葉真夜に自分の力――『七草の力』を認めさせることです。その為ならば、メディア工作で反魔法主義を煽ることも厭わない性格です」
「……まゆみん、大丈夫？」
「……泣きたくなってきました」
　実の娘ですら知らなかった七草家現当主の原動力。十師族が各々最強を証明するために様々な分野で影響力を発揮しているが、特定の師族の力を落として自らの地位を上げるという弘一の行動原理に、流石の真由美も頭の中が混乱していた。克人も正直困惑しつつ悠元に尋ねた。
「……俺も正直混乱している。だが、本当なのか？」
「事実ですよ。そうですね……パラサイト事件の時、四葉の息が掛かった国防軍の情報セクションを七草家が乗っ取ったことがありましたね。その辺は御存じでしたか？」
「ああ。そのことは七草から聞いている」

別に情報セクション自体乗っ取ったところで四葉家としては何ら痛手とはなっていないし、いざとなれば三矢家から軍事関連の情報を貰えば済む話でしかない。それに、あまり国防軍と密接に関われば今度は国防軍が四葉を利用しようと目論む輩が出てこないとも限らなかったため、七草家による乗っ取りは四葉家にとって「渡りに船」でしかなかったのだ。

「後は……昨年の正月に俺が誘拐されかけた十山家の一件。七草家が十文字家を差し止めたのは、沖縄防衛戦後に三矢と四葉の接近を危ぶんだ七草家現当主の一存です。七草先輩は何か聞いておりませんか？」

「え？　……そういえば、私が尋ねた時に父はそのことを認めていたわ。はぁ……あのタヌキオヤジはあちこちに敵を作り過ぎなのよ」

しかも、一番性質が悪いのは〝十師族のバランスを取る〟という大義名分を九島烈が黙認しているという事実だ。原作だと名倉を介して周公瑾と手を結んだことで危うく十師族の座を下ろされるところだったが、九島家も周公瑾と手を結んで更に大事となったお陰で間一髪十師族からの離脱を免れたという悪運を発揮した。

この世界で同じ轍を踏ませるつもりはないが、責任はしっかり取ってもらう。十師族の名に恥じない七草家の人間として責任を完遂するまで……逃げるような真似は絶対に許さない。

悠元が言い放った事実に、悠元以外の人間は困惑を隠せなかった。何せ、四葉を陥れたいがため……四葉家現当主の四葉真夜に認めさせたいという子供じみた理由など想像すらできなかったのだろう。とりわけ、その娘である真由美が本気で頭を抱えていたほどだ。

「とりあえず、父の妄言は置いておくけれど……具体的にはどう責任を取ってもらうつもりなの？」

「先輩はあの場にいたから聞いている話ですが、魔法科高校に魔法師の人権保護を謳う野党議員をアポなしで視察に来させるように仕向けさせます。メディア関係者も含めることで彼らの選挙前のアピールもとい粗探しのために。七草殿がある意味焚き付けたのですから、それぐらいはしてもらわないと割に合いません」

少なくとも社交界において幅広く面識を持っていて、今現在支援や献金という形で反魔法主義と繋がりを持っている七草家ならばできる仕事である。その国会議員と反魔法主義を積極的に報道しているメディア関係者を引き込んでもらうまでが七草家の仕事となる。

「無論、学校側には既に話を通しており、その日の授業にも細工しますが……丁度いいかもしれないですね。佳奈姉さんと美嘉姉さん、二人は確かスミス先生と面識があるよね？」

「うん、昨年はゼミの担当副教官だったから」

「もしかしてだけど……なんか凄いことでもやるつもり？」

「間違ってはいないかな。今ここで明かせる内容じゃないけど……少なくとも、非魔法師であっても無視できないことになるのは間違いない」

そして、当日行う予定のデモンストレーションに香澄と泉美も参加してもらうかは本人の意思次第だが、ここら辺の実質的な主導権は三矢家と四葉家、上泉家の領分となる。臨時師族会議ではそのデモンストレーションについても軽く触れるが、その際にリーダーシップを取ってもらうのは生徒会長のあずさであり、その補佐に啓が入る形とする。

使用予定の魔法展開に佳奈と美嘉が入ればかなり安全マージンを稼げるし、三矢家が主導したという面目は立つ形だ。表向きの理由も「国立魔法大学と第一高校による合同魔法実験」で通せば問題はない。

それに、佳奈と美嘉の存在感は否応でも目立つため、香澄と泉美でも既に実績を挙げている二人相手では霞んでしまうだろう……申し訳ないが、そこは七草家に対する代償として呑んでもらう他ない。

皮肉にも第一高校の『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』の名を利用するということは自分でも納得がいっていないが、使えるものは何でも使わなければ対抗できないので、そこに関しては諦めた。

そして……それで終わる筈がないのが悠元の企みである。

「魔法科高校でのデモンストレーションを映像に記録し、各種メディアに対して大々的に報道してもらうよう働きかけます。この辺は実験に参加するメンバーにも確認は取ります」

「ふむ……だが、反魔法主義のメディアは取り上げないのではないのか？」
「そこに関しては別に構いませんよ。あくまでも魔法科高校に関するネタを提供しただけであって、強制はしないつもりですから」
この国の憲法で言論の自由を保障している以上、下手な圧力は「言論統制」だと非難するに決まっているのは既定路線。なので、自発的な記事の掲載やニュースとして取り上げてもらうように〝お願い〟するだけだ。
尤も、その行為こそがジャーナリストとしての立場を失うかどうかという踏み絵になるのだと彼らが認識できるかどうか……聡明な頭脳を持つならば、瀬戸際ぐらい弁えて当然だろうという警告でもある。
「ねえ、悠君。父と会談した時にメディアの買収工作を仕掛けると言ってたけど、それも関係しているの？」
「その辺の詳細はお答えできませんが、上手く行けばマスメディアから敵を芋蔓式に引き摺り出して潰すことも可能でしょう」
メディア買収工作はそれ自体も目的の一つだが、こちらが狙っているのは周公瑾を介して動いている金の出所だ。『神将会』を動かすことでＵＳＮＡ関連の人間主義団体や原理的平和主義団体の資金源を潰しても動いているこの国への大金。いくら周公瑾でも大金をいつも持ち歩くなど出来るはずがない。ましてや、大金を動かすとなればこの世界の銀行は電子情報という媒体をどうしても通さざるを得ない……僵尸術を介して通信は出来ていたとしても、金の動きを死体のように操るという芸当は事実上不可能である。
常識外れた買収額を積み込んでメディアを買収し、周公瑾がメディアに投入した資金を回収不能にさせる。そうなれば、彼を介して資金提供していた相手は何とか回収しようと躍起になるはずだ……分かりやすい例を挙げれば「無頭龍」の一例がそれを如実に語っている。
別に躍起にならなくても、何らかのアクションを起こす可能性は高い。それこそ周公瑾に対して問い合わせをすることぐらいはするだろう。何もしなかったとしても、勝手に自滅するだけなのでどう転ん

でも問題はない。
「臨時師族会議では、その辺のこと含めた話をするつもりです。ただし、デモンストレーション関連以降は全て三矢家と四葉家、上泉家、神楽坂家で受け持つ形となります」
「……魔法科高校へ国会議員やメディアの誘導はしてもらうが、七草殿にはそこまでしか関わらせない、ということか？」
「その通りです。昨今の記事でも多かれ少なかれ生徒が傷を負わない保証などない。魔法師全員がそういった世論に対して強い訳でもありませんから……その辺のケアは七草家に補償してもらいます。無論、拒否なんてさせないように現当主夫人へお願いしてありますので」
　魔法技能というのは些細な心の傷でも喪失することが珍しくない。七草家とその周辺さえ守れれば、彼としては七草家の利を守る意味でも十師族らしい行動なのかもしれない。だが、一度煽ったからには最後まで責を負ってもらうのが筋である。
「ところで悠君、どうしてそこで四葉家が関わってくるのかしら？」
「実は、四葉家が名古屋でＵＳＮＡの人間主義者と反魔法主義のメディア関係者の会合を察知し、四葉の魔法師が全員拘束したことで今回の事態を掴んだ経緯がありまして。その情報共有の為に四葉家とも連携を取っているのです」
　この辺のことは校長の百山にも話を通しており、デモンストレーション後に七草家へ国立魔法大学の学長・第一高校の校長・魔法協会の会長の連名で正式な抗議文を出すことが決まっている……これを黙認した九島烈には剛三が直接出向くという形となった。
「佳奈姉、私は異議なし」
「分かった……悠元。私は三矢家の当主代理として、三矢家は七草家に抗議文は出さないことにします」
「こちらも了解した。近日中に臨時師族会議がある故、十文字家としても個別に七草家へ抗議はしないこととする。七草もそれで構わないか？」
「え、ええ……本当に父がご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

ただ、彼らにもこの場で伝えないことではあるが、この作戦の肝となる買収工作対象のメディアは国内だけではないことにある。国外――ＵＳＮＡや欧州、オーストラリアの主要な反魔法主義メディアのいくつかを大々的に買収し、反魔法主義の矛盾点を暴くと共に「トーラス・シルバー」の功績をまた一つ世界中に宣伝する。

それは、「常駐型重力制御魔法式継続熱核融合発電」の実現可能性の論文。エネルギー分野のみならず多方面の分野にとって決して無視できない特大級の一石を投じる。

執筆者に関しては「トーラス・シルバー」ではなく「ＦＬＴ（フォア・リーブス・テクノロジー）」の名前で発表するが、論文の文面自体には「トーラス・シルバーによって実現の可能性を見出した」と記している。

そもそも、トーラス・シルバーの名を出した時にその名前が魔工技師の名前だとＦＬＴは〝認めていない〟。その裏付けの為に、悠元は総理大臣に対してそれを保障するための一手をお願いした。悪く言えば共犯者みたいなものだが、この際贅沢など言っていられない。総理とてこの国の利益を深く考えており、「トーラス・シルバー」の功績による利益は計り知れないことも認めていた。

「それにしても……こうやって聞いてると、悠元も別の家の人間なんだなって思っちゃうよ」

「美嘉姉さん、ここで手をこまねいているとこの国を弱体化させたい連中の思う壺だからだよ」

「……悠元、さっきの話はどこまで父さんに伝えていいの？」

「七草家の四葉に対する執着の本質以外はそのまま伝えていい」

このことを明るみに出したら、間違いなく四葉が七草を嫌うというか「手が滑った」とか言って滅ぼされても困る。最初から話さなければ良かったのだろうが、幸いここには四葉以外の十師族しかいないし、全員口が堅いので信頼できる人間だと思っている。当事者に一番近い真由美からすれば話したくないというか聞きだしたくもない事だろうが。

真由美も「四葉に喧嘩を売るのは正気じゃないけれど、タヌキオヤ

ジならやりかねないと思ってしまうあたり、私も大分毒されてるのかもね……」と零すほどだった。それを聞いた克人や佳奈、美嘉も同意見で一致し、七草の四葉に対する執着は五人の秘密共有で決着した。

デモンストレーションに関する正式な依頼は後日送ることも伝えた後、食事会も兼ねた会談はお開きとなったのだった。

あくまで兄妹間の問題

世間では魔法師に対する風当たりが強くなっていたが、魔法科高校の中ではまだ平穏であった。学校というものは、治外法権とまではいかなくとも一種の自治領域であり、一高の校内はまだ平穏であるわけだが……これが嵐の前の静けさだと気付いた人間はどれほど存在するだろう。

悠元が司波家に帰ってきたところで千姫から連絡があった。どうやら悠元が克人や真由美らと会談していたことは聞き及んでいたらしく、悠元は彼らとの会談の内容をそのまま千姫に伝えた。七草の四葉に対する執着の原動力に関することは秘密としたことも含めて。

『成程、分かりました。悠君ばかりに働かせては頭と体が鈍ってしまいますから、臨時師族会議の件は現当主たる私が請け負いましょう。私からすれば、子供をあやす様なものですから』

実年齢を考えれば親子レベルの会話だが、見かけ上で言うなら小娘に圧倒される大人たちの図がありありと目に浮かぶ。いくら策を弄することに長けた弘一でも千姫の持つ力――――あらゆる事象を〝盤面〟として俯瞰することで未来の流れを予測する「六道眼（りくどうがん）」の前では児戯に等しいだろう。

なお、「六道眼」の内容は神楽坂の当主にしか伝えられておらず、自分の持つ「天神の眼（オシリス・サイト）」はその上位互換であると千姫が断言したことに内心で深い溜息を吐いた。そもそも、その眼を発現できるのは十数代に一人のレベルらしい。

話を戻すが、千姫との連絡には亜夜子が同席していた。四葉と神楽坂の関係性を考えれば、スポンサーの依頼を受けて黒羽が動いていたとしても不思議ではない。

『先日はありがとうございました。とても有意義なお泊り会が出来ました』

「どう致しまして……なんだ、悠元？」

「いや、別に？　……亜夜子ちゃん、達也って四葉本家でもこんな感じなの？」

『ええ……あまり達也さんの悪口を言いたくはありませんが、こういうところはもう少し進歩していただきたいと常々思っております』
その言葉で亜夜子が達也に尊敬レベル以上の感情を抱いていると読み取れたが、達也からすればそのことなど二の次なのだろう。先日のお泊り会では文弥や亜夜子と深雪の会話に混ざることとなり、達也に関する話で盛り上がった。とはいえ、悠元の場合は四葉本家における達也の行動を知らないので、ただ聞き手に徹していたのは言うまでもない。
亜夜子の言葉に達也は心外だな、とでも言いたげだったが、自分の後ろにいる妹から無言のプレッシャーを感じて何も言えなかった。
『それについてはまたの機会ということで……今日は大事な用件がありますから』
「聞かせてくれ」
（逃げたな……）
ある意味逃げた形だが、リーナとほのかの件がある以上はどのみち逃げられないことぐらい達也も認識しているのだろう。今はそのことで時間を費やす暇などないため、達也が話を進めたことには感謝しつつ亜夜子の言葉を待った。
『先日お話しした件についてですが、４月２５日、来週水曜日に国会議員が第一高校に視察で訪れるそうです』
「民権党の神田議員かい？」
『そうです。良くお分かりですね』
「最近のニュースを見ていれば、自ずとそうなるだろう……悠元、これもお前の計画の一端か？」
「まあ、正解。七草家が焚き付けているが、標的としてはこれ以上ない程の鉄砲玉（スケープゴート）だろ？」
確かに、と達也は納得していた。神田議員は国防軍に対して極端に批判的な人権派として知られる若手政治家（若手とは言っても、政治の世界における経験年数によるもの）で、今週に入ってテレビなどといった各種メディアへの露出が急に増えている。
彼の論調は、一見、魔法師の人権保護を謳って魔法師の味方をして

いるように見える。だが実際は、魔法師を国防軍から排除しようとしていることは、少し注意深い人間ならばすぐに分かることである。
神田議員を焚き付けているのが七草家というのは、先日の文弥らから聞いた話にも合致する部分があるため、達也としては特に追及するつもりなどなかった。
「寧ろ、引っ掛かっているのが滑稽だわ。で、神田議員だけではないだろう？」
『ええ。いつもの取り巻きの記者を連れて押しかけるそうですよ』
「押しかけるか……何かするという報告は受けていないか？」
この取り巻きの記者の中には黒羽や神楽坂の息が掛かったメディアの記者も紛れている。なので、神田議員の動向など完全に筒抜けも同然であった。亜夜子の情報を聞き終えたところで達也は呟くように問いかけた。
『いえ、特には』
「では、それほど大きな仕掛けは用意してはいなさそうだな」
『……どこをどう解釈したら、そんな結論になるのですか？』
「何かしら大掛かりな舞台を用意しているのであれば、亜夜子に掴めないはずなどないからな」
この場には達也と深雪、そして悠元。モニターには亜夜子と千姫がいる。
達也がサラッと言いのけたことに対して悠元は若干呆れたような表情を浮かべ、深雪に至っては顔の半分を隠す様に手を当てて「やれやれ」といいたくなるような表情を見せていた。千姫に至っては手に持っている扇子を広げて口元を隠しているが、間違いなく笑みを浮かべているのが目元の動きで察することが出来た。
『……お褒めの言葉と受け取っておきます』
「褒めているのだからそれでいい」
亜夜子も達也の殺し文句に近い言葉で冷静さを欠いてしまっているようで、本格的に絶句している。これでいて達也が亜夜子からの感情に気付いていなかったら問題大アリだと思う。
何はともあれ、助け舟を出す意味で悠元が口を開いた。

「こういうタイプの野党議員なんて所詮口煩いだけのスピーカーなんだがな……情報提供については感謝するよ、亜夜子ちゃん。達也のことに関しては……後ろにいる方に任せてほしい」
『え？　ああ……そのほうが宜しいでしょうね』
どうせ、こういうタイプの人間はちょっとしたことでも『これはおかしい』と騒ぎ立て、ジャーナリストはその数十倍に水増しして誇張表現するという手法は前世でも散々目にしてきたことだ。平和を唱えながらも、その理想の為に手段を選ばない類の人間など世の中には少なからず存在していることからして別段おかしくもないことだ。
ペンは剣よりも強しとか宣（のたま）っているが、そもそも〝言論の自由〟は保障されていても〝報道の自由〟という文言はこの国の憲法に存在すらしていない。
何を言っても許されるのならば、世論の知りたい情報を暴くのがジャーナリストとしての使命だと言っても全て許されるのかといえば、答えは否だ。隠すことでこの国にとっての利益となる事象――〝国家機密〟をはじめとした秘密事が存在することで国家や社会の信頼を得ていることだってある。この世界においてその最たるものは戦略級魔法に他ならないのだ。
一番いい例はスターズのアンジー・シリウス――リーナだ。彼女は１２歳でＵＳＮＡ軍に入隊しており、これはＵＳＮＡ軍の軍規に違反している。だが、世界最強の魔法師部隊としての面目を保つ意味で彼女の素性は一部の人間にしか公開されていない。その意味で達也の存在も迂闊に明かせない秘密であり、国家公認の戦略級魔法師として認定しないのは彼の持つ素性――四葉の係累という秘密が大きくかかわることになる。
これを公表した場合、下手すると軍事的衝突を起こしかねないことは原作における諸外国からの干渉で既に判明していることだし、そうでなくともＵＳＮＡが絡んできた時点で達也を警戒していることなど分かり切った話だ。
『大きなことは考えていらっしゃらないでしょうが、大方いつものパフォーマンスかと思われます』

「連絡してくれてありがとう」
『達也さんもそうですが、悠元さんのお手並み、楽しみに拝見させてもらいますわ』
「まあ、あまり期待しないでくれ。精々水面に一石を投じる程度のものだよ」
悠元はそう述べたが、達也は「無頭龍」関連で悠元がやった事を葉山から聞いた際、かなり大掛かりの策を使って彼らの拠点や関連組織を根こそぎ潰したという事実を聞いて冷や汗を流してしまうような感覚に囚われた。何せ、報告した側の葉山も珍しく苦笑を見せるような有様だった。
具体的に述べるならば、まだ三矢の姓を名乗っていた時に実家の三矢家と上泉家が動いているのを知った上で九校戦を対象としたギャンブルの掛け金全てを数千万通りという常識外れのルートを経由して根こそぎ強奪したのだ（悠元自身の足取りを掴まれないために剛三名義の口座を使用している）。それが回収できなかったことで憤った掛け元に「無頭龍」の関連組織を潰してもらう代わりに掛け金を全額返金する裏取引を持ち掛けることで「無頭龍」の拠点や関連組織を彼らに襲撃させたのだ。
本来なら持ち掛ける側に利益享受を前以て考慮するのが普通の考え方。だが、悠元自身が稼いでいるために破格的な取引を持ち掛けることが可能となった、ということだ。
閑話休題。
悠元の投じる一石が小石レベルでなく、先日達也が破壊した小惑星レベルでもおかしくはない……と達也は考えたが、亜夜子のほうから連絡が切れたところでその考えを中断せざるを得なくなった。
最大の理由は……達也の背後で満面の笑みを見せている深雪の存在故であった。
「もしもし、深雪さん？　少し落ち着いてはいかがですか？」
「お兄様、私はいつも以上に落ち着いておりますよ？　さて、そこにお座りくださいお兄様。少し……お話いたしましょうか？」
「悠元……って、いつの間に……」

深雪に対して落ち着くように宥めたが、今の深雪を止める方法は存在しなかった。最大の抑止力となるであろう悠元はいつの間にか忽然とリビングから姿を消しており、深雪の凄みのある笑顔に言われるがまま、達也はソファーに座った。

その様子を陰で見ていた悠元は、背後にいた水波から尋ねられた。

「あの、悠元兄様。お二人を止めなくてよろしいのでしょうか？」

「水波か。今回は亜夜子ちゃんの気持ちに鈍感な達也に深雪が説教するだけだ。兄妹間の問題だから、下手に手を出せば火傷するだけじゃ済まないよ。てなわけで、風呂に入ってくるから着替えの準備は頼む」

「あ、はい」

結局、深雪による説教にも似たお小言を３０分も受けることになった達也であった。終わった後で達也からは恨めしそうな表情を向けられたが、亜夜子の様子を見て察しない方が悪い、と言うとその通りだなと言わんばかりの表情を見せたのだった。

◇　◇　◇

明くる４月１７日、火曜日。達也は始業前にあずさと五十里を呼び出した。本題は言うまでもないが、国防軍に批判的な国会議員が来週水曜日に第一高校へ視察に来るというものだった。なお、この場には彼らのみならず花音（彼女は五十里にくっついてきただけ）と悠元もいる。

「えっ、それって一大事じゃないですか！」

「……そんなに慌てるようなことかなぁ？」

魔法科高校が国策機関ということで、国民の投票によって選ばれた国会議員が視察に来るということ自体は特に問題ではない。一番問題なのは、それに関して正規の手続きやアポイントメントを通さずに来校するつもりなのだ。

あずさは椅子から立ち上がって動転したような声を上げた。一方、花音は「そこまで大袈裟に反応することかな」と疑問を呈していた。それを窘めたのは彼女の婚約者である五十里であった。

「いや、これは由々しき事態だよ。神田議員の主張は一見魔法師の権

利を擁護しているように見える。だけど、軍が魔法師を取り込むことを一方的に悪だと断じる彼の論法は、裏側から見れば魔法師が軍と関わることを妨げる意図を隠しているんだ」
「それはあたしにも何となく理解できるけれど。でも、神田が今回ターゲットにしようとしているのは軍と学校でしょう？　あたしたちじゃなくて」
　花音としては、五十里が自分ではなくあずさと達也の肩を持ったことが気に入らなかったのか、やや不満げな顔を向けて言い返した。すると、ここで口を挟んできたのは悠元であった。
「千代田先輩、俺らはその学校に通っている生徒です。神田議員のような人間……いや、彼以上の軍に批判的な議員が実権を握れば、魔法科高校から防衛大学校へ進学することも、魔法大学から軍及び関係機関への進路へ進むことも……もっと悪く言えば、国防に関する思想を抱かせることすら封じかねません」
「……思想統制ってこと？」
「その程度なんて生易しいですよ。彼らのような原理的平和主義（げんりてきへいわしゅぎ）の連中に正しい論理なんて必要なんてないのですから」
　平和を語っておきながら、その実では暴力を振るうことすら厭わない。目的の為ならば如何なる手段をも辞さない。周辺国家の情勢などお構いなしに力無き平和を声高らかに叫び続ける。正直なところ、彼らの行動理念だけ切り抜けば、やっていることは国家の利益を損なおうとするテロリストと大差ないであろう。
「彼らはこの国に向けられる脅威や防衛などの議論すら封じる。必要とあらば暴力や人殺しも躊躇わないし厭わない。人権の保護を謳いながら職業選択の自由すら奪おうとしている連中を『大したことなどない』と一言で片付けられますか？」
　冷ややかな目をしつつ述べられた悠元の言葉に花音は鼻白んだほどで、五十里もこれには真剣な表情を浮かべていた。あずさも悠元の様子を見てビビるような面持ちだった。達也に至っては表情を変えなかったが。
　それを察したのか、悠元はパンッと両手を叩いた上で神妙な雰囲気

を打ち消す様に話し始めた。
「まあ、そんな重い話はさておいて、重要なのは野党議員への対応だ……達也、それ絡みで中条会長と五十里先輩を呼んだのだろう？」
「ああ。神田議員の来校に合わせて、少し派手なデモンストレーションを行いたいと思います」
悠元の言葉に反応する形で達也は深雪に目配せをすると、深雪は電子黒板をあずさと五十里に渡した。
視察に来る連中は、魔法科高校が軍事教育の場と化しており、学校が生徒に軍属を強制しているとアピールしたいわけだ。ならば、軍事目的以外で魔法の有効性がアピールできればいい……普通ならここまでだろうが、達也は悠元に視線を向けると、悠元が話し始めた。
「達也が渡した内容に補足する形ですが、実はＦＬＴから魔法科高校に打診がありました。魔法工学科の設立に伴い、将来魔法工学の技術発展に寄与するための人材育成の一環として、その実験に関わる機材を提供する流れとなりました」
「えっ……ええっ!?」
「ＦＬＴが実験機材の提供を……でも、これって」
あずさと五十里が驚くのも無理はない。何せ、電子黒板に書かれている内容は飛行魔法も含めて加重系魔法三大難問と言われた課題の一つ――――常駐型重力制御魔法式核融合炉の実験をデモンストレーションとして実行するということだ。
「可能なのかい？」
「計算上では問題なく行けます。ただ、今回の実験装置は最長でも１０分の稼働が限界で、３０分のインターバルを置く必要があると聞きました」
「あの、１０分というだけでも十分凄いですよ」
そもそも、今回提供する実験装置は初期の試作機という位置付けで設計されたもので、核融合反応に必要な各魔法における事象干渉力を計測するためのもの。悠元は誰かから聞いたという体を取っているが、核融合炉の設計をしているのは他でもない悠元であると知っているのは、本人を除けば達也と深雪ぐらいしかいない。

「常駐型重力制御魔法式継続核融合炉……『恒星炉』ですか。市原先輩の考案した断続型の核融合炉とは対照的なコンセプトです」
　昨年秋の論文コンペで発表された核融合炉よりも単位時間あたりのエネルギー量はけた違いに大きくなる。この『恒星炉』が実現できれば、昼夜関係なく、気象条件の影響を受けることなくエネルギー供給が可能となる。工場も電力供給に神経を使う必要がなくなり、寒冷化の再来にも備えることが出来る……と、あずさが呟き終えたところで視線を達也に向けた。
「これが司波くん本来のプランですか？」
「独自のアイデアでもありませんが、確かに俺の目指しているものです……いえ、正確に言えば俺たちといえばいいでしょう。必要となる魔法スキルが高すぎて実用化には程遠いですが、短時間であれば我が校の生徒で実験炉を動かすことが可能です」
「俺たち……ひょっとして、神楽坂くんも？」
「ご明察です」
　運び込む予定の実験装置なら短時間の稼働しかできない。そのことは達也も理解しているからこそ、この場での言い訳はどうとでもなってしまう。しかし、本来の目的を隠してまでもサラッと言いのける辺りは流石お兄様と褒める以外の言葉がなかった。
「そうだ。それに付随してなのですが、国立魔法大学で魔法による核融合炉研究をしているゼミ生にうちの姉がいまして、勝手ながら姉達にも協力をお願いしました」
「それって、佳奈先輩に美嘉先輩ですか？」
「ええ。佳奈姉さんは加重系基本コード（カーディナル）の第一人者ですし、美嘉姉さんは光波振動系を最も得意としていますので、補佐役としては最適かと思います」
　この辺は予め達也にも説明しているが、佳奈と美嘉は実験の補助としてデモンストレーション実験に参加することとなった。魔工科の教官であるジェニファーと親交が深く、悠元の影響を強く受けている二人の補助は達也にとっても僥倖といえた。そうすれば、達也だけでなく五十里もあずさの補助に回ることが出来るからだ。

「分かりました。私は司波くんの計画に協力します」
「僕も賛成だよ。『恒星炉』の公開実験は、神田議員対策というだけじゃなく、魔法技術者として是非とも関わりたいと思っていたからね」
あずさに続く形ではあるが、五十里も賛成の意を示した。

少しずつ変わり始める歯車

実験機器も含めた魔法工学の機材搬入は昼休みに行われた。本来は魔法工学科の担当教官であるジェニファーが立ち会うのが筋だろうが、今回は甘楽が主導となって悠元もその手伝いとして駆り出されていた。ジェニファーは達也が提出した魔法使用リストも含めた課外活動の申請を精査している最中であったからだ。

「助かりますよ、神楽坂君。しかし、まさかＦＬＴから『恒星炉』の実験装置を貰えるとは予想外でした」

核融合の実用化研究自体は自然エネルギーを主体とする現在においても進められているが、加重系において難問とされる課題が山積していた。だが、その突破口の一つは達也が完成させた飛行魔法――常駐型重力制御魔法でもあった（体面的には「トーラス・シルバー」による発表ではあるが）。

「甘楽先生、嬉しそうですね」

「君のお姉さん達も各々優れた魔法師ですが、私の講義を態々受けてくれていましたから。無論、君も含んだ発言ですよ。色々度肝は抜かされていますが」

以前、甘楽が出した多工程魔法術式の魔法陣を課題として出された際、悠元は僅か１メートルで最大１００工程展開を可能とする魔法陣を書き上げた。こんな魔法陣を書き上げた理由だが、悠元としては「できたからやった」だけであり、その非常識さには甘楽も苦笑するほかなかった。

「少し小耳に挟みましたが、面白そうなことをするようですね？」

「それに関しては部外秘でお願いします」

「ええ。何を意味するのかは察しがつきますが」

元々国立魔法大学で半分煙たがられていた甘楽だからこそ、達也と悠元が組んで何かをしようとしているのは薄々勘付いていた。その内容は自分がもし関われたら詳しく聞こうと思い、悠元に対して深く追及しないことに決めた。

すると、一人の女性――悠元からすれば、以前会った事のある人

物が近寄ってきた。女性は手に持っていた端末を甘楽に差し出した。
「すみませんが、機材搬入のチェックとサインをお願いします」
「分かりました……こちらは問題ありません」
「あ、ありがとうございます。神楽坂さん、お久しぶりです」
「久しぶりですね、ミカエラさん」
彼女こそ、パラサイト事件で第一高校に来た際、達也らと対峙したミカエラ・ホンゴウその人である。
その後の経過観察で彼女にパラサイトの痕跡は残っていないが、チャールズ・サリバン軍曹の時とは異なって『天陽照覧（てんようしょうらん）』による再成はしていない。その影響で彼女の持つ魔法演算領域が拡張されており、以前よりも強力な魔法を使える魔法師に成長してしまった。
この事実をＵＳＮＡに知られるわけにはいかないため、マクシミリアン・デバイスで働いていた実績を生かしてＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課に引き抜いたのだ。現在は主任である牛山のもとで働いていて、近いうちに空席となっている副主任の椅子は彼女となることが決まっているようなものらしい。
「調子はどうです？」
「えっと、大変ですけど頑張ってます。あと、これを燈也君に……」
「……分かった。ちゃんと渡しておくよ」
「ありがとうございます。では、失礼します」
そして、魔法科高校が春休みに入った際、退院祝いに来た燈也にお礼を言ってそのまま告白したらしい……しかも、亜実が隣にいるときに。あわや修羅場かと思いきや、亜実がミカエラを抱きしめたのだ。更に、亜実の重婚を認める様な発言に燈也が若干引いたのだった。
その辺の話題はまた今度述べることとし、去っていくミカエラを見送りつつ渡されたメモをポケットに仕舞い込んだのだった（そのメモは教室に戻った際に燈也へ渡した）。
機材搬入の手伝いが終わったところで達也からメールが届き、課外活動を教官が監督するという条件付きで認められることになり、その担当は甘楽となったのだった。
◇　◇　◇

放課後、今回の課外活動を担うことになる生徒会メンバーに加え、課外活動の監督である廿楽教諭、今回の実験に際する外部対応者として部活連副会頭の悠元、更に二人の協力者が姿を見せた。
「失礼します」
「やっほー、廿楽先生もおひさ！」
（……お兄ちゃん、三矢家がバケモノじみてない？）
悠元の姉である三矢佳奈、美嘉姉妹。これには流石のセリアも彼女らの気配を見て何かを勘付いたようで悠元に耳打ちをした。というか、リーナの件も含めてお前が言うな、と小声で返しておいた。そんなやり取りがあったことはともかく、今回の実験に関しての第一声を廿楽が発した。
「実験の手順は拝見しました。面白いアプローチだと思います。彼女たちにも見てもらいましたが、安全性は十分確保できると断言してくれましたよ」
そう言いながら廿楽が佳奈と美嘉に視線を向けると、二人は目礼で返した。廿楽は高校生の時点で非凡だった彼女らが大学の研究でも並外れた功績をジェニファーから聞かされたためだ。
「それで、担当する魔法は如何しますか？」
今回の実験で使用するのは重力制御、クーロン力制御、ガンマ線（ガンマ・レイ）フィルター、中性子（ニュートロン）バリア、そして第四態相転移（フォースフェイズシフト）の５つ……本来はその予定だった。だが、佳奈と美嘉の協力を得られたことでもう一つ術式を追加することとした。それは、三矢家の秘術となった『エアライド・バースト』に使用されている定率制御（フラットドライブ）フィルターと呼ばれるものだ。
この定率制御フィルターというものは、本来であれば領域内と領域外の温度差および気圧差によって生じるエネルギー移動および分子移動を遮断するためのバリアであり、『エアライド・バースト』で精製可能な球体内の温度を自在に変化することが出来るのはその技術があってこそだ。ただ、この演算処理自体がかなり膨大となるため、三矢家の人間――より正確には、悠元の想子制御を教わった人間でないとまともに使用すらできない代物だ。

今回の実験では万全を期す形でこのフィルターを用いることとし、達也にもその術式は伝えている。それを聞いた達也曰く「そんな術式をポンポン生み出せる悠元がおかしい」と言われた。甚だ心外である。

さて、原作とは違って生徒会に理璃とセリアがいる以上、術式を使う人選も大分余裕が出来ている。とはいえ、実験装置の操作や準備も考えると割とギリギリなのかもしれない。

「まずはガンマ線フィルターだが、ほのかに頼みたい」

「わ、私ですか!?」

「ああ。電磁波操作に関しては一番得手があると思っている。頼めるか？」

「分かりました、頑張ります！」

ほのかは他でもない達也の頼みだからこそ、一層奮起していた。そうでなくとも、光波振動系統となれば適任といえるだろう。そして、達也は次にセリアへ視線を向けた。

「クーロン力制御は五十里先輩にお願いしようとも思いましたが、中条会長の補佐をお願いしたいと思います。なので……セリア、頼めるか？」

「了解。クーロン力制御でお姉ちゃんの魔法を抑えたりとか散々やってたからね」

「分かったよ、司波君」

その根拠として挙げられるのは先日の『リバース・ヘビィ・メタル・バースト』だろう。達也もリーナとの戦闘で『ヘビィ・メタル・バースト』の威力を間近に感じたからこそ、彼女の双子の妹であるセリアなら問題はないと踏んだ。

五十里もあずさの性格を考えるとその方がいいという結論に至り、異論は出さなかった。

「中性子バリアは……理璃に頼みたいと思う」

「分かりました、達也先輩」

十文字家の『ファランクス』には恐らく中性子バリアも含まれていると睨んでのものだが、理璃が即答したことで間違いはなかったと判

断した。
　そして、次の重力制御についてだが、達也が言葉を発する前に佳奈が声を発した。
「達也君。ちょっといいかな？」
「はい、何でしょうか？」
「重力制御は深雪ちゃんが担当するんだよね？　なら、ちょっと見てほしいものがあるの」
　そう言って佳奈は手提げカバンからタブレット型端末を取り出して数秒操作すると、達也にそれを差し出した。達也がそれを見たところ、驚きのような表情を見せていた。気になって悠元も覗き込んだところ、思わず唸る様な声を上げた。
「……佳奈姉さん、こりゃまた凄いな」
「悠元から褒められたのは嬉しい」
　何と、佳奈はトーラス・シルバーが発表した飛行魔法――――重力制御術式を核融合専用の術式に独力で改造していたのだ。悠元は核融合反応容器に一定の精査が出来たところで取り組むつもりだったが、その手間が一切省けたことになる。とはいえ、もう少し煮詰めれば更に負荷自体は小さくなると今まで組んできた魔法からくる勘みたいなものが働いていた。
「達也、どうする？　従来の重力制御でも問題はないと思うが」
「使わない手はないだろうな……佳奈さん、この起動式データを頂いてもよろしいですか？」
「いいよ。今回の実験は積極的に協力してほしいと頼まれたから」
　結果的に、佳奈の組んだ重力制御術式を深雪が使うことで決着し、その調整も兼ねて佳奈が補佐と設備の操作に入るため、美嘉が定率制御フィルターを担当することとなった。
　そうなると、残るは第四態相転移（フォースフェイズシフト）を誰が担当するか、ということになる。悠元は元々〝当日のトラブル対応〟のため、実験の魔法担当には据えられない。
　すると、手を上げたのは泉美であった。
「あの、よろしければ私たちが担当させていただきたいのですが」

「私たち、というのは泉美と香澄の二人で、ということかい？」
「はい。私一人では力量不足かもしれませんが、香澄ちゃんと二人でなら、きっとお役に立てると思います」
　本来、二人で一つの術式を合わせるというのは高度かつ複雑なプロセスを必要とする。そのことを理解しているからこそ、生徒会室にいるメンバーの半数以上は戸惑った表情を浮かべた。表情を変えなかったのは、甘楽、達也、悠元にセリアの四人だけであった。これには泉美も身構えるほどだったが、そんな雰囲気を壊したのはセリアだった。
「はいはい泉美ちゃん、そう身構えないの。私も双子の姉がいて貴方達と同じことが出来るから理解できるんだよね」
「そ、そうなんですか!?　……すみません、身構えてしまって」
　いくら自然的に生まれた双子でも、そんなことが出来るのはシールズ姉妹と七草の双子ぐらいだろう。とはいえ、セリアのお陰で泉美の緊張もうまく解れたようで、訝しんでいたメンバーも表情を緩ませていた。
　セリアは達也に進行の意図も含めたウィンクをすると、苦笑にも似た笑みを見せつつ話を進めることとした。
「甘楽先生、光井さんとシールズさん、七草さんは実験の詳細を知りません。確認の意味でも説明しておきたいのですが」
　そう言って、達也は改めて今回の実験についての説明を行う。あずさ、五十里、深雪、そして悠元からすれば既に知っている内容だが、退屈そうにしているものは誰一人としていなかった。
「恒星炉のシステムは、技術的に見ればまだまだ未成熟な部分ばかりです。しかし、このメンバーが協力し合ってチームとして機能したなら、加重系魔法三大難問の一つと言われているこの実験を成功することが出来ると、俺はそう確信しています」
　最後にそう締めくくり、達也と悠元の「恒星炉」は第一歩を踏み出したのだった。
◇　◇　◇
　悠元は対外的な対応を全面的に任されたが、準備期間中は実験機材

の調整に追われた。とはいえ、今回使う実験装置は自分が一から手掛けた試作機であり、今回の提供に合わせて部品類は全て新品に交換している。いや、正確には『再成』で新品の状態に戻しただけという反則じみた方法だが。

予め使用魔法とその担当者の分担に基づく起動式調整は済んでおり、中性子バリアの起動式を理璃の想子波に最適化する作業を行っている。一見すると高速スクロールする画面が流れており、悠元が素早くキーボードを叩いているようにしか見えない。

「悠元、差し入れだ」

「お、済まないな。サンキュ」

すると、珍しく達也がコーヒーを差し出したので、悠元が受け取って口にする。悠元が一口飲んだところで達也が問いかけた。

「済まないな。ハードウェア部分に関わるとなると俺でも中々手が出せないからな」

「その辺はお互いの得意な領分の分担だから、気にするな」

学内的に言えば、達也はＣＡＤ調整や起動式調整で卓越した技術を発揮したエンジニアであり、実力的には二科生ながら一年間風紀委員を務めあげた実績がある。なので、こういった実験装置のプログラミングは学校外でないと色々バレる危険性があるため、その殆どを悠元が担当していた。

「それに、どこかで術式の精査はしないといけなかったからな。渡りに船みたいなものだよ」

本来の準備期間よりも3日ほど伸びた形だが、それでも対外秘の為に生徒会役員と有志の生徒、そして佳奈と美嘉に限定されていた。なお、二人はゼミの担当教官に相談して課外活動扱いで許可を貰ったとのこと。「魔法式核融合実験の基礎研究実験」という建前を添えてのものだが、実際にやろうとしていることは間違っていない。

有志の生徒は基本的に魔工科からとなり、達也と何らかの繋がりがある人に限定された。千秋と十三束は自発的に協力を申し出て、美月も協力している。達也を崇拝に近い尊敬をしているケントも加わっている。なお、こういったことに不得手なレオは力仕事（主に機材搬

出）担当、幹比古とエリカ、雫は時折差し入れをしに来ていた。
とはいえ、機材調整の殆どを事前に終えていたために準備自体にそこまで時間は掛からず、更に核融合に必要な重水と軽水は悠元の実家である神楽坂家のコネで提供してもらった。「とりあえず各々1トンぐらいあれば十分よね？」と千姫があっさり言いのけたことには流石の悠元も引き攣った笑みを見せていた。
臨時師族会議に関しては、七草家による反魔法主義への世論工作の事情説明をした後、横浜の魔法協会に足を運んでいた千姫が登場して今回の策の一部を説明。将来の大亜連合による侵攻だけでなく、新ソ連やオーストラリア、USNA方面を含めた軍事行動に対して反魔法主義の世論を叩き潰すため、十師族による全会一致で可決。以後の対応を三矢家と四葉家、上泉家と神楽坂家の四家（関東地方に関係するため、名目上は七草家と十文字家も含む）で行うことも決定した。
つまり、名は七草と十文字は貰うが、実は三矢と四葉、上泉と神楽坂が貰っていくこととなる。何をもってしての利なのかと訝しむ人間はいるだろうが、現時点で気付けた人は新世界の神と呼ばれるほどの存在になれるかもしれない。

名は其方に、実は此方に

４月１７日、午後３時。

三矢家と四葉家、そして神楽坂家の連名による臨時師族会議が開催されようとしていた。各当主がオンラインによる参加だが、発起人となった神楽坂家現当主こと神楽坂千姫（かぐらざかちひろ）は横浜の日本魔法協会支部から参加していた。流石に横浜で単衣は身に付けられないためにレディスーツを身に纏っているが、着こなしだけでなく彼女自身から発せられるオーラも相まって、やり手の女社長のような雰囲気を纏わせていた。

各当主のほとんどが真剣な面持ちを浮かべている中、参加者の中で年長者が議長役として音頭を取るという不文律で本来ならば九島（くどう）家当主こと九島真言（くどうまこと）が声を発するべきなのだが、この場には十師族ではないにせよ更に年上の存在がいるために躊躇っていた。それを察してしまったのか、千姫が端を発するように呟き始めた。

「まずは急な申し出にも拘らず、各々貴重な時間を取っていただいたことには感謝している。元々の発起人は息子であり次期当主の悠元じゃが、事のあらましは全て聞いておる。さて、七草。此度のことについて詳細を尋ねたい。隠し事は一切許さぬから、そのつもりでな？」

『その辺りは重々承知しております。書面では既にお送りいたしましたが、この場をもって説明させていただきます。反魔法主義――――いえ、この場合は人間主義と述べた方が正確でしょう。その主義を掲げる彼らによって魔法師を否定する論調が活発化しており、昨年の暮れ辺りからＵＳＮＡで起きていた魔法師狩りと呼ばれる魔法師排除運動の影響は否定できません』

千姫の言葉を受ける形で弘一が昨今の反魔法主義――――正確には人間主義者による魔法師を否定する論調がこの国で活発化し始めたことから話し始めた。すると、九州地方を守護・監視している八代（やつしろ）家の当主こと八代雷蔵（やつしろらいぞう）、東海・中部地方を守護・監視している四葉（よつば）家当主こと四葉真夜（よつばまや）が付随する形で声を発した。

『そちらと直接関係があるかは不明ですが、博多や長崎、佐世保でも同じような現象はみられているようです』
『私どものほうでは名古屋でＵＳＮＡの人間主義者が動かれていたようです。善良な市民を装って世論を盛り上げるつもりのようでしたが、対処は迅速に行いましたので関東ほどの小火にはなっておりません』
『九州や名古屋でもですか。それは初耳でした』
対馬――ひいては大亜連合にほど近い博多は無論の事、東シナ海を挟んで大陸と向き合っている長崎と佐世保での動きは八代家も監視体制を強めていた。そして、思わぬ形で四葉家からも人間主義者の情報が出たことも各当主が関心を寄せる形となった。
東のみならず西でも似たような動きがあることに弘一は少し驚くようなそぶりを見せつつ説明を続けた。
『話を戻しますが、この運動を一度は……いえ、一時でも収束させる必要があります。そしてこの非論理的な論調を抑え込むとなれば、方法は二つ。一つは言論弾圧ですが、これは言うべくもないでしょう。そして二つ目は……論調そのものを燃え尽きさせること』
弘一の前者の方法は完全に論外、ということは各当主も納得していた。ここで疑問を呈する形で三矢（みつや）家当主である三矢元（みつやげん）が弘一に問い質す様な口調で声を発した。
『七草殿。そのやり方はただ人間主義者を増長させるだけではないのか？　マスコミを煽り、反魔法主義の論調を加速させるだけのようにしか思えないのだが、その辺については如何なされるおつもりだ？』
『ええ、三矢殿のご指摘の通りです。私もその懸念を第一に考えた上で、対策は取っておりました』
魔法という力が権力の一端になってしまっているため、十師族自体政治の世界と距離をある程度置いていることもあってか、弘一の説明では納得しかねる様相を見せた当主もいた。
無理もないな、と千姫は内心で独り言ちた上で弘一に問いかけた。
「あまり饒舌に語るのは敵を作りかねぬぞ、と釘を刺したいが、今は置いておこうかの。して、七草よ。そこまではいいとしてその後はどう

するつもりだったのじゃ？　よもや……息子が危惧していた〝かの者〟とコンタクトを取るつもりだったのであろう？」
『……彼のその後の提案がなければ、そうしていた可能性は極めて高かったでしょう』
　分断するまでは良かった。だが、その世論を縮小させるのではなく完全に沈黙させるまでのプロセスを弘一が考えていないはずなどない事は千姫も見抜いていた。とはいえ、七草家だけではそれに至る道筋など到底不可能という事実は千姫の計算でも覆せなかった。
　千姫の冷ややかな視線と共に放たれた鋭い指摘に対し、弘一は嘘など言えないと覚悟した上で正直に吐露した。これには北陸・山陰地方を守護・監視している一条家当主、一条剛毅が千姫に尋ねた。
『神楽坂殿。〝かの者〟とは一体何者なのですか？　差し支えなければ教えていただきたい。もしかすれば、今後の十師族の敵とも成りうるかもしれませぬので』
「……まあ、よいじゃろう。義兄上からもそろそろ話すべきである頃合いだと伺っておるからのう。とりわけ、その者の存在は四葉と七草にとっては無視できぬ因縁の相手絡みとも言えよう」
　四葉と七草にとって無視できない因縁の相手――その言葉で十師族の全当主が一体何を指しているのかなど、『当事者』である真夜と弘一にも理解したような表情をしているのを見やった上で千姫は手に持った扇子を広げ、それで仰ぎつつ話し始めた。
「お主等の世代――ここにおる者だと一条に六塚、八代は先代から聞いておるかもしれぬが、３２年前の四葉による崑崙方院を含めた大漢への復讐劇……その生き残りの弟子が首謀者の一人よ。しかも、驚くでないぞ？　そやつは昨年の春から今年の冬にかけて起きていた事件すべてに関わっておる。南盾島の件も含めてな」
『な、何と……!?』
「こちらの調べでは大亜連合の潜水艦が小笠原諸島方面にいたことも確認しておる……国防海軍の怠慢のせいで妾もここ最近は忙殺されてしまったわ」
　パラサイト事件でＵＳＮＡは日本に対する警戒を強められたため、

本来なら軍事的刺激を避けるためにスターズ自体が出張るようなことは愚策でしかない。だが、当該海域でＵＳＮＡ軍が大亜連合の潜水艦を沈めたことは確認しており、スターズのメンバーが南盾島に来ていたことはリーナの絡みで無論把握している。

何故大亜連合の潜水艦があのような場所にいたのか……そこから調べた結果、スターズを動かすように仕向けたのが顧傑と周公瑾によるものだとすぐに判明した形だ。

千姫の述べた事実には四国地方を監視する五輪（いつわ）家当主こと五輪（いつわ）勇海（いさみ）が思わず反応したほどであった。

「そやつの足取りは掴み切れておらぬが、かの師と思しき黒幕の名は判明した。名はジード・ヘイグ。顧傑とも名乗っており、崑崙方院の生き残り。ＵＳＮＡで噂されておる『七賢人』の一人ということじゃ……かくいう妾もかつて『七賢人』の一人であったが、そやつも含めた他の六人の賢人とは面識を持たぬ」

『……その「七賢人」とは、いったいどういうものなのですか？』

「選定条件は知らぬが、どこかの物好きから一方的に『賢者（セイジ）』などと勝手に選定されただけよ。選んだ輩は姿も見せずに変声機まで使う徹底ぶりを見て、傍迷惑にもほどがあると言って称号を突き返してやったがの」

周公瑾の足取り自体は把握しているが、下手に監視を強めれば地下へ潜伏されかねないためにあえて泳がせているような状況だ。尤も、千姫が後半で述べた事実が衝撃的だったようで、各当主の関心もそちらに向けることに成功した。

阪神・中国地方を監視・守護している二木（ふたつぎ）家当主、二木舞衣（ふたつぎまい）からの質問に対して千姫はやや気怠そうな雰囲気を纏わせながら答えたが、『七賢人』の実態が「エシェロンⅢ」のバックドアシステムである「フリズスキャルヴ」のオペレーターという事実は、下手すれば二国間の国際問題へと発展しかねない案件なため、その辺を誤魔化した形とした。

そして、千姫は「フリズスキャルヴ」の端末を四葉家が所持しているのを知っているからこそ、余計な追及が飛ばない様に仕向けたの

だ。これには真夜も千姫に感謝するような視線を送っていた。
「七草よ。先日訪問したであろう息子が述べた契約も含めてじゃが、此度の反魔法主義への反攻の名は其方と十文字に譲るつもりじゃ」
『その提案に異存はありませんが、どのようなお考えなのかをお聞かせ願えませんか？』
「なに、単純な事じゃよ……子どもの喧嘩に対して、父親としてしっかりと責任を取れと言うておる。いくら七草が被害者とはいえ、七草の今までの行いも一方から見れば『掻っ攫う』に等しいからの」
魔法科高校で行う予定のデモンストレーション実験については、現時点で神楽坂家、上泉家、三矢家、そして四葉家だけが把握している状況だ。そして、千姫はその主導権を表向きだけでも七草家と十文字家が行っている（生徒会役員に両家の人間がいるため、名分は立つ）ということにすれば、七宝家の長男が功績を妬んで噛みついてくることも想定している。
とはいえ、魔法科高校には千姫の身内である悠元に加え、真夜の身内である達也と深雪がいる。万が一七宝家の得意魔法である『ミリオン・エッジ』を使用したとしても安全確保も踏まえた対処は出来ると判断してのもの。
現在の七宝家当主は七草家に対して堅実な評価を下している。だが、七宝家長男のように考える人間は、実際にはもっと多いかもしれないだろう。それこそ、彼自体が氷山の一角であっても何ら不思議ではない。
つまるところ、千姫がそうした最大の理由は弘一に対して「自身も含めた七草家の過去と向き合え」と忠告した形だ。それが出来ないというのであれば、先日の契約もなかったことにするという意図も含めてのものに、弘一は真剣な表情を浮かべつつ目線を少し下に向けるような仕草を見せた。
これにフォローするわけではなかったが、七草家と共に関東・伊豆半島を守護・監視している十文字家当主、十文字和樹は千姫に尋ねた。
『神楽坂殿。確かに今年度は娘が新入生総代として入学しておりますが、とりわけ何かしたわけではありませぬ。精々独自で反魔法主義に

関して調査をしていただけでしかありませぬが』
「なに、ご長男の誠実さは息子から聞いておるからの。それに少しばかり報いたかっただけじゃ。それと、蘇我大将とは個人的な誼もあってのこと。妾に感謝するならば其方の息子と娘にしてやると良かろう」
『分かりました。重ね重ね、感謝いたします』
「七草もよいな？　其方の名は保障するが、その後の対応は妾も含めて護人の領分と心得よ。このことは総理や陛下、義兄上も了承されたことじゃ」
『……心得ました』
恭しく頭を下げている弘一の様子を見て、これでは私が一方的に悪者扱いではないか……とは口に出さなかったが、千姫は仰いでいた扇子をパチンっとわざとらしく閉じると、モニターに映る十師族の各当主に向けて扇子を突き出すように構えた。
「昨今の情勢は最早予断を許さぬ。過去の因縁を断つ意味でも、人間主義などという妄言に付き合う暇など我らには持ち合わせておらぬ。七草のメディア工作については黙認することといたそう……尤も、この様子では採決など必要なさそうじゃがな。のう、四葉殿に三矢殿？」
『四葉は今回の発起人ですので、異存はありません』
『右に同じく、三矢家も異存ありません』
四葉と三矢を皮切りとして、一条、二木、五輪、六塚、八代に九島も了承し、当事者側となる七草と十文字も千姫の提案に了承して臨時師族会議は全会一致の形で終了したのだった。

◇　◇　◇

神田議員とマスコミの視察に対するデモンストレーションの準備は順調に進んでいた。賛成はしたものの、いざ加重系魔法三大難問の一つに挑む実験となれば緊張はしていたが、ほぼ悠元による実験設備の調整によって魔法発動連携の練習自体もスムーズに行えていた。更には、佳奈と美嘉による助けもあって特に問題が起きることもなかった。

そもそも、今回は論文コンペのように本格的な実験装置など必要なく、その仕組み自体を見せるだけのものだ。それに、必要な魔法やそれに伴う改変強度の計算は予め測定済みだ。

そして４月２４日、火曜日。本番前日の放課後、放射線実験室にて最終リハーサルが行われていた。耐圧性の高い透明な高強度耐熱樹脂で作られた球状の水槽に重水と軽水を同じ比率で混ぜ合わせた混合水を注水する。なお、今日は大学の都合で佳奈と美嘉がいないため、悠元が代わりに定率制御（フラットドライブ）フィルターの展開を担っている。

「じゃあ、はじめよう。深雪」

「はい」

達也の合図で深雪が重力制御を発動する。続いて、香澄と泉美が第四態相転移（フォースフェイズシフト）を、ほのかと理璃がそれぞれガンマ線フィルターと中性子バリアを展開するのを申告のみならず自らの「眼」で確認しつつ、ステップに至ったところで深雪に再び呼びかける。

「焦点を固定しました」

「セリア」

「電磁的斥力中和、スタート」

セリアの魔法を確認した上で悠元が定率制御フィルターを展開する。最後の安全弁が解除され、機器に陣取るメンバーからチェックの声が飛び交う。その声を聴きながら、達也は悠元に視線を向けていた。

（大気中の内外を隔離しつつ、他の魔法に一切干渉しない魔法……本人は精査が足りないと述べていたが、この魔法一つで世界の常識が間違いなく変わるだろうな）

彼からすれば〝まだまだ〟なのだろうが、他の魔法の干渉力を受けない魔法など、現代魔法からすれば未知の領域となってしまう。これを内包した魔法を三矢家が秘術扱いにしているのも納得がいく話だ。しかも、この魔法によって核融合反応による温度上昇の影響を外部に漏らすことなく稼働できるという夢のような話が一気に現実を帯びてきた。

とはいえ、今はまだ核融合発電への実用化にはまだクリアせねばな

らないハードルが存在するのも事実。反応によって光り輝く水槽に目を移しつつ、己の夢への第一歩を冷静に見据えていたのだった。
　最終リハーサルは無事に終了した。これが単なる実験であれば満足のいく結果が出たと終わるところだが、本番は明日に迫っている。悠元は一息吐いたところで達也に近付いた。
「達也、問題はなかったか？」
「寧ろ上出来すぎる結果とも言えるな。……あの魔法はいつ考えたんだ？」
「あれか……確か、爺さんの無茶ぶり世界紀行で思いついたんだよ」
　それは、剛三がエベレスト登山を登山装備と酸素ボンベなしで山越えするという無茶ぶりを聞いた際、長時間自身の周囲の大気を持続させる魔法で越えられないかという思い付きから転生特典がフル回転して出来上がった魔法。日本に帰ってきてその魔法をあれこれ実験した結果、魔法に干渉しない魔法という特性まで持っていることが判明した。
　そのデータを頑張って解析して、試行錯誤の末に一応完成したのが『定率制御フィルター』ということだ。とはいえ、この事実全ては言えないために剛三との旅行中に死に物狂いであれこれやってたら出来た、ということにした。広義的には間違っていないと思うので問題はないだろう。
「悠元の非常識さは祖父譲りという訳か」
「ああ。爺さんに掛かればモーセの海割りなんて児戯に等しくなるからな」
　そんな非常識な親友を持っていた自分らの祖父も大概だな、とは流石の達也も思わなかったが（そもそも生まれる前に亡くなっているので、先代当主からの話でしか知らない）、戸締りについてはあずさと五十里がやってくれるということなので、達也らは実験室を後にした。悠元はこっそり札を取り出して床に放ると、札はまるで床に溶け込むように消えた。
　達也と悠元の後に深雪とほのかにセリアが、その後に泉美と香澄、そして理璃と続く形で連鎖した。生徒会室に入ると留守番を頼まれ

ていた雫が声を上げた。彼女は風紀委員であって生徒会役員ではないが、基本的に留守番を頼んでいたのだ。
「お疲れ様、雫」
「特になんもなかったよ」
「そうか……雫」
「分かってる」
　婚約者以前に仲の良い友人でもある悠元の目配せと言葉で雫は察すると、ほのかの鞄からラッピングされたプレゼントを取り出してほのかに持たせ、達也と向かい合う形で立たせた。ほのかの表情は今にも顔から火が出そうなぐらい真っ赤だったが、勇気を振り絞るようにギュッと目を瞑って、達也に小箱を差し出した。
「あ、あの、これ、達也さんの誕生日プレゼントです！　一生懸命選びましたので、どうか受け取ってください！」
「もちろん受け取らせてもらうよ」
　達也も自分のできる限りにおいての笑みを見せていた。受け取った瞬間にシャッター音を聞き取ったのでその方向に視線を向けると、端末を持っていた悠元と隣で微笑ましく見ている深雪の姿があった。
「一つ聞くが、何で撮ったんだ？」
「別に疚しい事じゃないよ。敢えて言うなら、達也の青春の一ページを彩るためのものだ」
「……せめてバラまくとかは止めてくれよ」
　気が付けば、プレゼント渡した側のほのかが悠元にさっきの写真データをせがんでいたため、この辺は深雪からのお願いもあるのだろう。これには流石の達也もデータを消せとは言えなかった。なので、せめて不特定多数への配布だけは勘弁してほしいと言うことしかできなかった。
　すると、雫が思い出したように声を上げた。
「そうだ、達也さん。今度の日曜日空いてる？　達也さんの誕生日パーティーをやりたいんだけど、いいかな？」
「時間は？」
「１８時からにするつもり」

『神将会』の絡みで雫もトーラス・シルバーのことを知っているため、ＦＬＴ開発第三課で完全思考操作型ＣＡＤの開発会議の予定を踏まえた上で時間設定をしてくれたのだろう。達也雫の提案を了承し、ここにはいない水波には後で確認すると伝えた。

雫の用件が済んだのを見計らってセリアが達也に近付いてきた。彼女は徐にラッピングされた箱を達也に差し出した。

「達也、これはお姉ちゃんから達也にって。誕生日プレゼントだよ」

「リーナが？　というか、誕生日の事など教えていなかったはずだが……まあいい。申し訳ないが、リーナに宜しくと伝えておいてくれ」

「了解」

（セリア先輩の姉って…）

（留学生で来ていたアンジェリーナ＝シールズさんですね）

恐らくは先日の事件でパーソナルデータを調べ上げたことから誕生日のことも気が付いたのだろう（明らかに軍事目的で調査した個人情報の私的利用だが、見なかったことにしておいた）。深雪から特にリーナが達也のことについて聞き出そうとはしていなかったので少し疑問に感じていた。ともあれ、プレゼントを貰ったことに関しては感謝しておいた。

セリアがここで渡さなかったのは、パーティーの際に渡すということも察していたためか、達也も特に追及はしなかった。香澄は小声で呟き、それに対して泉美も小声で香澄に簡単な説明をした。

「そうそう、物騒なものが付いていないか確認はしてあるから」

「一応、後学の為に聞いておくが……何かあったのか？」

「以前、お祖父ちゃんからのプレゼントの中に盗聴器が仕込まれていてね。速攻で取り出して至近距離で黒板をひっかく音をリピート再生しまくったよ……お祖父ちゃん自身が仕込んだ訳じゃないのはすぐに分かったけど」

恐らく悪い虫が寄り付かないかの意味も込めてのものだろうが、傍迷惑だと零したセリアの衝撃発言に、達也はセリアに対して何かしらのシンパシーを感じてしまうのだった。なお、セリアが名前を省いてお祖父ちゃんと呼ぶのは健に対してであり、もう片方の祖父である大

統領については、名前を付けて祖父呼びをするか大統領閣下と呼ぶことしかない。

尤も、彼女の発言で周囲の人々が冷や汗を流していたのは言うまでもない。

マイナス面も生じる誕生日

４月２４日……今日は言うまでもなく達也の誕生日である。昨年のこともあって今回は深雪が達也を引き留める係となっていた。その代わり、豪華な夕食担当は水波だけに頼むのも大変なため、数日前から合間を見て仕込んでおいた。達也自身も〝人並み〟に料理が出来るため、司波家で暮らす人は自炊に困らない点が大きいだろう。

「す、凄いですね悠元兄様。十師族の方は料理が出来ないと勝手に思っていましたので」

「普通は興味がないと学ばないだろうが、俺の場合は上泉家で過ごしていた期間が長かったから、門下生の食事の支度とか手伝っていたんでな」

上泉家は武術の性格上、門下生は男性が多くなる。その為か食事当番は人手不足となるために門下生も手伝うことが頻繁にある。その過程で料理が上手になり、加えてその感覚を鈍らせないために父の執事をしている仕郎に教えを請うことが多かっただけだ。

久々に司波家で腕を振るったせいか、少しばかり調子に乗ってしまった部分は否定できない。ケーキに関しても、久々に熱が入ったせいでクリームのデコレーションもそれこそ高級菓子店で見る様な感じになってしまった。

今更言うことではないが、達也に対して親友を超えた関係など求めてなどいない。俺にそんな趣味は一切ないと述べておくこととする。

「さて、後は達也と深雪の帰宅を待つだけだな」

「はい……なんか、今までの自信を失くしそうです」

「やめて。逆に俺が惨めになるから」

そして、深雪が帰ってきて所定の位置に就き、私服に着替えた達也が入ってきたところでクラッカーを鳴らして出迎える。

「お誕生日おめでとうございます!!」

「……成程。悠元が先に帰ったのはこのためだったか」

どうやら、深雪がやたら時間を気にしているような素振りをしていたらしく、最初は悠元と喧嘩でもしたのかと思ったが、あれだけ悠元

にベッタリな深雪を悠元が邪険にする理由が思い浮かばなかった、と達也は後で呟いていた。
　仮に二人が喧嘩するとなれば、深雪の機嫌が悪くなって極寒のブリザードが吹き荒れることは想像に難くない。実際のところ、沖縄の後から高校入学までは年に数回ほど氷河期（ストレスフル）の状態へ陥っていたことがあった。その原因は悠元への恋慕によるものだが、この辺は悠元が国防軍との関わりから達也と深雪の素性を探られることを回避してのもの……と何度も説明する羽目になったらしい。
「準備の半分は水波ちゃんが担当していたから出来ただけだよ。ま、料理が冷めないうちに頂いてくれ」
「そうだな。そうさせてもらうよ」
　料理を食べながら雑談に興じつつ、ケーキが出てきて１７本の蝋燭に火を灯し、達也が消したところで深雪と水波が誕生日の歌を歌ったのだが、ここで悠元が黙ったことに達也は疑問に感じたものの、彼特有の体質に気付いたのでそのことを追及はしなかった。
　ただ、ケーキを食し始めたことで女性陣の機嫌が落ち込んでいくのを見た達也は悠元に呆れたような表情を向けていた。
「また、のようだな」
「みたいだな。別に何か仕込んだ訳でもないというのに……レシピ通りにしか作っていないぞ、俺は」
　そんな一幕もあったが、ケーキを食べ終えた深雪が頬を膨らませつつ悠元にしがみつくレベルで抱き着いていた。これには水波が半分羨ましそうにしていたが、逃げるように片付けへと向かって行った。
　ともあれ、明日の本番にあたって英気を養えたことは事実だろう。
　悠元は風呂に入ってから自室に戻ると、端末に通信の着信を知らせるアラームが鳴っていることに気付く。悠元はデスクに座って素早く端末を起動させると、画面には楽そうな恰好をしている千姫が座っていた……彼女の手にワイングラスを持っていることは半分スルーという形にした。注意をしたところで言う通りにするとは今の状況からして考えにくかったからだ。
『悠君、こんばんはー。ごめんねー、ちょっと東京まで行って客人と会

談してたものだから』
「成程、飲み直しみたいなものですね。……一体何方と？」
　千姫の場合、悠元に態と尋ねさせたい意図があって相手を隠したわけではない。彼女の立場上、わざわざ相手の身分を隠す理由は自身と同等以上の相手でなければ存在しえないのだ。
『無論、今上陛下と直接。悠君のほうで「おことば」に関するお願いをしたでしょ？　それについて異存はないかということを含めてお話しさせていただきました』
「少し性急過ぎましたか？」
『いえいえ、寧ろ昨年の情勢を鑑みれば遅すぎるぐらいでしょう。加えて今年初めにＵＳＮＡのちょっかいもありましたので、ここは陛下直々に腰を上げていただかなければならないと宮内庁に発破をかけただけです』
　彼女の場合、発破というよりも存在感だけで威圧というレベルになってしまう。そのことはさておくとしても、千姫が酒を飲みつつ通信してきた理由はそれだけじゃないと踏んでいた。千姫も悠元の表情を見て勘付いたのか、その理由を話し始めた。
『反魔法主義というか、魔法師排斥を謳っている議員が一定数いることは悠君も知ってるだろうけれど、悠君には「無頭龍」のときにやったことの手腕を生かして、彼らの支持を奪ってほしいの』
「別にやろうと思えばすぐに出来ますが、どの程度まで削りますか？」
　そういった勢力の全排除は可能だが、ごく少数を反魔法主義のはけ口として残すことで一定のガス抜きの役目を担ってもらうつもりでいた。
　それに、あまり削り過ぎれば今度は国防軍の好戦的な勢力が増長しかねない。あくまでもこの国の方針は〝積極的自衛権を含めた防衛思想〟であり、積極的侵攻など以ての外。悠元の問いかけに対し、千姫は酒を嗜んでいるとは思えぬほどのハッキリとした口調で答えた。
『そうですね。現在勢い付いている民権党が分解するレベルまで行きましょうか』
「……上野（こうずけ）議員を含めた複数の与党議員にリークも含めて連絡を取っ

ておきます。選挙が近いこともありますので、彼らなら快く引き受けてくれるでしょう」
　そのタイミングは明日のデモンストレーション後に行う形でセッティングするつもりだ。元々反魔法主義の勢いを失速させるために仕掛け自体は構築していたが、千姫からの命令という名分を得られたのは僥倖であった。
　民権党が前世の野党議員に関する疑惑を上回るレベルでヤバい事実がボロボロ出た時は驚きしかなかった。半数以上が大陸系の息が掛かった献金を受けているだけでも驚きなのに、魔法師排斥において過激派の部類に含まれる議員なんて、大亜連合政府から献金を受けていたのだ（帳簿上はこの国の人間だが、ルートを探ると大亜連合政府の関係者に行き着いた）。
　これを知っているのは不明だ（少なくともその推測はしているかもしれない）が、選挙で議席を確保されないよう野党の最大勢力を空中分解させる意図を含めた千姫の提案に悠元は頷かざるを得なかった。
　この国の法律を守らなかった故の自業自得な事なので、別に可哀想などとは思わない。敢えて〝ご愁傷様でした〟とだけ言っておこうと思う。
「総理には父も含めた会談で改めて協力は取り付けられました。それで母上、臨時師族会議はどうなりましたか？」
『名は七草と十文字に、実は三矢と四葉が取ることが全会一致で可決しました。そういえば、私が周公瑾や顧傑絡みの話をしたら九島の小童（こわっぱ）は終始苦虫を噛み潰し続ける様な状態でしたが、何か心当たりでもあるのでしょうか。悠君はどう思う？』
「只でさえ九島家は古式魔法使いから魔法技術のみを抽出したことだけでも因縁がありますし、その頂点の一角である母上は最たる存在ですから」
　原作では九島家と周公瑾の関わりは『パラサイドール』が一定の完成をみた後でのものだった。とはいえ、「フリズスキャルヴ」を有する顧傑のことだからその辺の情報など筒抜けに等しい。
　厳格な情報を管理をしている十師族に順列を付けるとすれば、三矢

と四葉、そして七草に九島と続く形になる。九島家現当主の様子は少し気に掛かるが、少なからずパラサイトの制御に大陸系の術式を用いているのだろう。尤も、そのパラサイトを別の術式で変質化させて使役している自分が言えた義理ではないが。

悠元の指摘も含んだ答えに対し、千姫はワインを一口付けてから声を発した。

『自業自得だというのに、九島のアホンダラは何も理解していない。そうそう、明日の件で思い出しました。悠君は敢えて三矢の姓で対応するそうですね？』

「この辺は、世間の認知度からすればその方が良いと判断したまでです。魔法実験の様子は学校と当人たちの許可が取れたので、映像データとしてメディアに提供します」

今回の実験では達也と深雪も関わることになるため、裏では四葉家当主こと真夜に加えて二人の母親である深夜からも許可を取り付けた。名古屋で文弥と亜夜子が捕まえた人間主義者を起点として反魔法主義を抑え込む功績を四葉にも分け与える。

最後の美味しいところを七草から掻っ攫うようなものだが、二人を七草家当主の意識から逸らさせる意図も含めてのものだ。それに、香澄と泉美もその実験に参加する中核メンバーの側なので、一応の面目は立つ。

『神田議員とメディアに対する受け答えは悠君に一任します。明日は大変でしょうが、健闘を祈ります』

「ありがとうございます。それでは、おやすみなさいませ」

酒が回っている筈なのに、それに振り回されることなく受け答えが出来ていた部分は流石護人の当主を担うだけのことはある、と率直な感想を抱きつつ通信を切った。通話を終えて通信用のインカムをデスクに置いたところで悠元は扉の外にいる人の気配を感じた。

少し警戒するように扉を少し開けると、そこにいたのは達也であった。

「なんだ、達也か。てっきり深雪が雰囲気に酔っぱらって屯っているのかと思ったよ」

「誰かと話しているのは聞こえたからな。尤も、悠元が言ったことも間違ってはいないが」
　達也が言うには、誕生パーティーの後でドレスアップした深雪がちょっとした二人でのお祝いをしたまでは良かったのだが、深雪がそのまま悠元の部屋に行こうとしたところまでは気になって同行すると、悠元が誰かと会話しているのが聞こえたので深雪を説得して部屋に返させたらしい。
「……成程。っと、そういえば誕生日プレゼントを渡すのを忘れていたな」
「いや、そこまで気を使わなくてもいいのだが。俺としては料理とケーキだけでも満足している」
「疚しい気持ちはないが、居候している身としては自分が納得しないだけだよ……って、そういやアレがあったか」
　悠元はそう言ってデスクから何かを取り出すと、達也に手渡した。それは達也の持つ「トライデント」用のカートリッジ型ストレージだが、ストレージ自体白銀に装飾されたものであった。
「このカートリッジは？」
「大本は俺の使っている『ワルキューレ』から流用したものだが、達也が普段使うことの多い魔法の起動式が全て入っている。最近習得した想子徹甲弾（サイオンてっこうだん）も起動式化して組み込んでいるから、一応誕生日祝いとして受け取ってほしい」
　達也の場合だと「フラッシュ・キャスト」を使って魔法を発動することもあるが、それを人前で使えない時を想定した特殊ストレージで、最大1万種類の起動式を保存することが出来る。本来は古式魔法の秘術にもかかわる部分も含むが、天神魔法の部分には抵触しないので問題ないと判断した。
「……ここまで来ると、貰い物が〝借り〟になってきそうだな」
「プレゼントに貸し借りの損得勘定なんて持ち込むつもりもねえよ、俺は」
「分かっている。ありがとう、悠元。大事に使わせてもらうよ」
　達也はそう言って自室に戻っていったのを見届けてから、悠元も自

室に戻った。ともあれ、明日はいよいよ本番なので、寝不足は大敵となる。そう思って悠元は部屋の電気を消すとベッドに入って眠りに就いたのだった。

余談だが、ほのかが達也に贈ったのは雫の協力で見繕ったアンティークの懐中時計で、ほのかの３Ｄ写真が内側に貼り付けられていた（ほのか本人には黙って雫と共謀して仕込んでおり、写真データは深雪が提供した）。

リーナからのプレゼントは万年筆だったらしく、セリアからは「シルヴィも苦心したでしょうね」と零したのを覚えている。シルヴィアの協力がなかったら一体何が贈られていたのか……ブラックホールよりも闇を見そうだったので考えるのを止めた。

「……深雪さんや」

「……悠元さんが悪いんです」

なお、夜中に一度目が覚めてトイレから戻ってくると、自分のベッドで寝ている深雪の姿があり、大人しく一緒に寝る羽目となった。ケーキのせいもあると思うが、ある意味理不尽な言葉にため息が漏れたのは言うまでもない。

捻じ曲がる執念

４月２４日の深夜。この日も七宝琢磨（しっぽうたくま）は共に「新秩序（ニュー・オーダー）」を目指す同盟者、小和村真紀（さわむらまき）との密談を終えて帰宅した。

（こんな時間か……真紀との会合で遅くなってしまったな）

時刻は既に２３時を回っていた。家の者（使用人を含む）には迷惑を掛けないよう、夕食は外で済ませてきたし、今日は帰宅が遅くなると予め連絡は入れているので、住み込みの使用人の大半は既に就寝しているだろう。彼らを起こさないよう、琢磨はチャイムと連動していない勝手口から家に入った。

「琢磨さん。先生が書斎でお待ちです」

だが、靴を脱いだ途端、待ち構えていた彼よりも少し年上の男性――琢磨の父の助手をしている青年から声を掛けられた。先生とは七宝家当主、七宝拓巳（しっぽうたくみ）のことであり、青年は父親から言いつけられて琢磨の帰りを待ち構えていたのだろう。

琢磨自身「面倒だ」とは思ったが、無視するわけにもいかない。琢磨は「分かった」と告げて、書斎に向かった。

七宝家の表向きの家業は投資顧問業で、主に天候デリバティブ（気象に関する取引を行う金融業のこと）を専門としている。

農業のプラント化によって食糧ビジネス面での需要は減ったが、先進国において太陽光由来の自然エネルギーが電力供給の主流を占めるにあたり、気象予測――とりわけ日照時間予測は企業収益計画において重要なファクターとなっている。七宝拓巳が「先生」と呼ばれているのも、国内の年次気象予測における第一人者だと認められているからだ。

しかし、今琢磨が向き合っているのは師補十八家当主、十師族に匹敵する魔法技能を有する魔法師としての七宝拓巳であった。

「掛けなさい」

書斎に入るなり掛けられた拓巳の言葉に、琢磨は応接セットのソファに腰を下ろす。それを見た拓巳もデスクの前から立ち上がると、琢磨と向かい合う形で座った。

「琢磨、高校はどうだ。楽しんでいるか」
　こんな時間に呼びつけておいて世間話か、とも感じ取れるが、琢磨とてこれが本題に入る前置きだと理解できないはずがなかった。だが、そんな理性よりも感情が勝る形となった。
「親父、何度も言っている筈だ。俺にとって高校は楽しむ場所じゃない」
「強情だな、お前は。そう肩肘を張ることもあるまい」
「親父のほうこそなんで暢気なんだ！」
　力の抜けたような拓巳の態度に琢磨は苛立ちを爆発させた。その苛立ちの原因は何度も聞いている以上拓巳も当然理解しているが、息子は父親の意見を聞き入れることがないぐらいに意固地となっている。
「次の十師族選定まで一年を切っているんだぞ！　折角の好機だというのに、このままだと風見鶏の七草に十師族の地位を掻っ攫われて、七宝は七草（あいつら）の下風に甘んじることになってしまう！」
　琢磨が言い放った「折角の好機」というのは、昨年の春に開催された臨時師族会議にて判明した十山家と国防陸軍による三矢家三男の誘拐未遂事件によって七草家と十文字家が上泉家の不興を買ったことだ。その事実は師補十八家にも通知され、拓巳は次期当主としての自覚を持ってもらう意味でも琢磨に伝えたが、琢磨はそれを「七草の地位が弱まった」と喜んでいたのだ。
　三矢家当主からの恩情で厳罰を辛うじて免れたのは確かだが、関東地方における影響力が多少揺らいだ程度であり、十師族において最も社交的な活動をしている七草家が次の十師族の椅子も堅いことは拓巳も承知している事実だ。
「十師族の選定会議は二十八家から十家を選び出すものだ」
　拓巳の予測では、現状に大きな失点がなければ、三矢家、四葉家、七草家の再選は確実だろうとみている。
　三矢家は男子二人が護人の当主ならびに次期当主であり、神楽坂家の次期当主はこの国でも最強格に位置する魔法師。それを輩出した三矢家の実績は疑うべくもない。四葉家については当代最強の魔法

師である四葉真夜が健在である上、正式に十師族の守護・監視体制を担っている。先日の臨時師族会議の結果は聞き及んでいるが、四葉に対する畏怖の念も含めれば敵に回すこと自体は避けるべきことだろう。

「七草家にばかり拘っていても意味がないということは、琢磨、お前にだって分かっている筈だ」

彼がこの話を息子にするのは、今日に始まった事ではない。今の十師族の数字が綺麗に並んでいること自体珍しい事であり、過去には同じ数字を持つ師族が同じ十師族だった例も存在する。

だが、琢磨がその言葉に頷いたためしは一度もなかった。

「意味はある。『三枝』が『三』を裏切り、『七』の研究結果を盗み取った結果『七草』になって十師族の地位を奪ったことは事実だろう！」

「……『七草』が『三枝』だったのは十師族の秩序が確立する前の話だ。老師が十師族体制を提唱された時点で彼らは『七草』であり、二十八家の中で頭一つ抜きん出た能力を持っていたからこそ十師族のひとつに選ばれたのだ」

「その抜きん出た能力は第三研と第七研の研究結果をつまみ食いした結果じゃないか！」

七草は第三研の『多種類多重魔法制御』の最終実験体となりながらも第三研を抜け出し、第七研の『群体制御』が完成直前の段階から関わっただけで、我が物顔で利用している……そう述べた上で琢磨は叫ぶように言い放った。

「俺たち七宝だけじゃない、三矢も三日月も七夕も七瀬も七草にまとめて虚仮にされているんだぞ！　それなのに何故親父は平気なんだ!?」

仮に琢磨の言うことが事実だとするのならば、一時期風の噂となっていた三矢家三男と七草家三女の婚約話なんて噂は存在しえないだろう。その出所自体恐らくは七草家と拓巳は睨んでいた。尤も、昨年春の臨時師族会議以降にその噂はピタリと止まったことからすると、婚約が破棄された可能性が高いところまで読み切った。

拓巳は一息吐くと、拓巳に対して真剣な表情で問いかけた。

「琢磨……それを本気で言っているのか？」
「っ!?　あ、当たり前だ!!」
「少なくとも、三矢は仮にそうされていたとしても、第三研の『多種類多重魔法制御』を独自の路線で磨き続け、今では七草と並ぶ十師族の発言力を得ている。いや……魔法技術においては七草以上と言っても過言ではないのだ。それに、七草家の魔法師も我々と同じ実験体だったんだぞ」
　拓巳の言葉の裏付けと言えるのは九校戦における三矢の功績。現当主の次男、長女、次女、三女に続いて三男も昨年の九校戦において優秀な成績を挙げた。とりわけ「クリムゾン・プリンス」とも謳われた一条家の長男を完璧に抑え込んだ上での勝利は、十師族のみならず国防軍とて無視できない存在であると言えよう。
　拓巳の最後の言葉に琢磨は絶句するものの、何とか言い返そうと言葉を紡いだ。
「……裏切り、出し抜くことが賞賛されることだと言うのか？」
「現に、お前も十師族を出し抜こうとしているではないか」
「それは……」
　自分のしていることが見抜かれているような拓巳の指摘に、琢磨は言葉を詰まらせた。悔しそうな表情で黙り込む息子を見つつ、拓巳は小さく息を吐いた。このやり取り自体既に何度も繰り返しており、ここ最近は特に酷くなっている傾向が見られた。それでも言い争わずにいられないのは、親子としての縁や絆が断ち切れていない裏返しとも言えるだろう。
「まあいい。今日は別の話があってお前を呼んだ」
　「こんな真夜中に」とは思ったが、そもそも家の者には遅くなるとは伝えたものの、具体的な時間は一切伝えていなかった。こればかりは琢磨自身がやってしまったことなので、反論も出来ないことだ。琢磨は「すまん」と口にしたが、拓巳はその言葉を琢磨の母親に向けるべき言葉と受け取り、後で謝っておくように諭した上で本題に入った。
「琢磨、明日は学校を休め」
「親父？　いきなり何を言い出すんだ？」

拓巳のあまりにも突拍子もない言葉に琢磨は不審を覚えた。明日、一高で一体何があるのだという琢磨の疑問に答えるべく、拓巳は勿体ぶることなく説明した。
「明日、野党の神田議員が第一高校へ視察に訪れる」
「野党の神田議員って、最近よく目にする人権主義者で反魔法主義者の神田か？」
「ああ、そうだ。取り巻きのマスコミも連れてな」
「何の為に」
琢磨は態々訊ねたが、最近マスコミを賑わせている神田議員の言動を考えれば、第一高校を訪れて何をしたいのかという理由は察しが付く。なので、問いかけは確認以上の意味を持たないと言えよう。そして、拓巳の回答も琢磨が予測した通りの答えであった。
「彼が主張している軍と魔法科高校の癒着――――ひいては、魔法を強制されている少年たちの人権を守るパフォーマンスがしたいのだろう。お前が何を言いたいのか察しは付くが、相手は国会議員だ。揉め事を起こすのは拙い」
「親父。いくら気にくわない相手だからと言って、後先考えずに喧嘩を売ったりしない。俺はそこまでガキじゃない」
拓巳の言葉に対して、琢磨は先程のものとは別の意味でムッとした顔になっていた。父親に喧嘩っ早い人間と見られるのは心外だ、とでも言いたげながらも言葉を選びつつ拓巳に言い放った。
「例え、相手のほうから喧嘩を売ってきても、か？」
「……っ、当たり前だ。そう易々と挑発に乗るものか」
実際のところ、学校で香澄と私闘未遂になったことを思い出し、それを呑み込んだ上で琢磨はやや歯切れが悪い感じで返した。その言葉を信用したのか、拓巳はソファの背もたれに大きく身を預けつつ、念を押す様に琢磨へ呟いた。
「ならば良い。そこまで言い切った以上、自分の言葉に責任を持て」
「分かっている！　話はそれだけか」
ただ念を押した言葉なのに、これで反発するようでは……琢磨が本当に約束を守る気があるのか、と疑わしくなると思うのは決して拓巳

だけではないだろう。だが、琢磨本人がそう言い切った以上、拓巳は次の説明を述べるのに必要な条件は整ったと判断した上で琢磨に告げた。
「なお、この件は七草家と十文字家が受け持つ。くれぐれも余計な手出しをするな」
「七草が!?」
きちんと二家によるもの、と説明したはずだが、琢磨は七草に対して過剰に反応してしまっている。そのことは気に掛かるが、拓巳はそのまま説明を続けた。
「自分の言葉に責任を持て。七宝家はこの件に一切関与しない……いいな?」
「――分かったよ!」
だが、先程拓巳によって言質を取られている以上、先程の発言を翻すことなど出来ない。琢磨に出来るのは、そう返すだけでしかなかった。

◇　◇　◇

(――来たか)
それは大抵の一高生からすれば予期せぬ来訪者であり、恐らくは第一高校の関係者にとって招かれざる客と言っても差し支えない存在。
物々しい黒塗りの乗用車三台で押し掛けた十人前後の男女。民権党の神田議員と彼の秘書、神田の護衛であるボディーガード、そして彼の取り巻きジャーナリストの面々。彼らは四時限目、午後最初の授業の初めに訪れて、いきなり校長との面会を求めた。何のアポイントメントもなしに、だ。
本来なら丁重に断ってお帰りいただくところだが、国会議員バッジを持っているからこそこんな無茶も押し通ってしまう。この辺は前世紀と何ら変わっていないわけだが……悠元はその様子を扉の向こうで見つつタイミングを見計らっていた。
扉の向こう側の光景――校長室では、マナーを無視して面会を強要する神田に対し、教頭の八百坂は苦い顔で出迎えた。念のために隠形をフル活用しているため、他の生徒からも悠元の姿は視覚でも認識

できない。
「神田先生。先程も申し上げましたが、本日、校長の百山は京都出張で留守にしております」
「ほう。この神田に、子供の使い宜しく出直せと言われるのか」
八百坂と神田はともに同年代の人間だが、片方――――神田は居丈高に構え、もう一方は額に汗を滲ませている。この様子を見て、二人が同年代だと思う人間はいったいどれほどの数が存在するのだろうか。
というか、いくら選挙で選出されたとはいえ、このような振る舞いは人としての礼儀（マナー）から見てどう映るのだろうか。
「子供の使いとは滅相もありません」
「では、教頭先生でも結構です。御校の授業を見学させていただきたいのだが」
「私の一存では承伏いたしかねます。それはやはり、校長に仰っていただかなくては」
先程八百坂が述べた通り、校長の百山は京都に出張している。いや、その事実を知っているからこそ神田はこの日の来訪を選んだのだ。それ自体が俺の立てた策であるということも知らずに。
百山は第一高校の校長となって今年で十一年目。魔法師の高等教育カリキュラムの確立に貢献した人物であり、第一高校の一科生と二科生のシステムを作り上げた発案者その人である。それはともかく、魔法師のみならずあらゆる方面とコネクションを持つ百山と正面切っての論争が無理だと判断した神田の行動は流石だろう。悪い言い方をすれば〝臆病者〟や〝意気地なし〟と呼べるのだろうが。
百山がいない時を狙ってパフォーマンスを成功させたい神田と、校長の留守を盾にマスコミの取材を拒否したい八百坂。ともあれ、このままだと神田が痺れを切らして国会議員としての権限で押し切ることは目に見えていたため、隠形を解除した上で扉をノックし、「失礼します」と短く述べた上で校長室の中へと入った。
悠元の姿には、八百坂のみならず神田や彼の関係者も悠元に視線を向けていた。悠元のことは九校戦においてかなり話題に上っており、その意味で知らぬ人間などいないのだ。

「か、オホン……み、三矢君？　今は授業中ではなかったのかね？」
「今は実習実技の時間なのですが、先程百山校長から連絡がありまして、〝校長代理〟として来客対応を任された次第です……初めまして神田先生、三矢悠元と申します」
「あ、ああ。既にご存知でしょうが、民権党の神田といいます。君のことは九校戦で存じあげていますよ」
八百坂は危うく悠元の現在の姓で呼びそうになったが、先日の打ち合わせをはっと思い出したことで何とか堪えることに成功した。
一方の神田は冷汗が止まらないような状態だ。十師族の一角にして、九校戦による魔法師としての功績は極めて著しく、そして三矢家は国防軍と深い繋がりを有している。その標的の一角がこの場に姿を見せたのだ。
なお、悠元が名乗った肩書きの〝校長代理〟は百山との打ち合わせで了承してもらっている。百山としても、過去の上泉家も巻き込んだ美嘉の退学未遂事件が大きく尾を引いており、悠元の現在の実家である神楽坂家にも喧嘩など売りたくはないと了承したのだ。
「それで神田先生、こちらに何ら連絡もせず如何様のことでしょうか。それに、マスメディアの関係者を何の断りもなく引き連れて来るとは……百山校長よりの伝言です。『神田先生に良心の呵責がおありならば、日を改めていただきたい』と」
彼らの視線に臆することなく、悠元はまるで冷め切ったような視線で彼ら――とりわけ神田に向けて言い放った。この場には百山の姿も影もない筈なのに、神田とその取り巻きの眼には、悠元の背後に悠然と立っている百山の姿がありありと見えるようであった。

『恒星炉』実証実験

第一高校の校長室にて、この中で一番の年下（転生前を含めると若いジャーナリストぐらいなら年下扱いになるであろう）である悠元の圧倒的な存在感と共に放たれた言葉に、誰しもが反論を躊躇う様な雰囲気の中、神田が口を開いた。

「百山校長の言葉は真摯に受け止めますが、私にも思うところがありまして」

「ほう、何でしょうか？」

（この少年、いくら十師族とはいえここまで老獪な雰囲気を纏えるものなのか？　まるで政治家の大御所クラスと会談した時のような緊張感……これも魔法だと言うのか？）

言い方や声質は年相応の少年そのものだが、彼から放たれている存在感は歳不相応とも思えるものに、神田の口調も自然とそれに即したものとなっていた。それに、メディア相手でも物怖じしないというあたり、何か魔法でも使っているのでは……と神田は推測したが、実際には間違っている。

何せ、悠元の存在感も話し方もとある人物のスパルタ教育によって培われたものである、ということぐらい神田も冷静であればすぐに気付けたかもしれない。

「最近、魔法科高校のカリキュラムに関して、不穏な噂が流れております。魔法科高校九校は、生徒を軍人に洗脳しているのではないかと」

「長い目で見れば、魔法科高校から魔法大学か防衛大を通って軍及び関係機関の進路に進む者の割合が多いのはデータとして示されていますが、それはあくまでも当人たちの自由意思によるものです。それを〝洗脳〟などと宣うということは、神田先生は学術的に根拠が示された証拠をお持ちなのですか？」

「い、いえ、それは……ですから、魔法科高校が国防軍の出先機関などというイメージを払拭するためにも、ぜひ授業を見学させていただきたい」

そもそも、洗脳という行為は魔法師の能力を低下させかねない行為

だということは医学的に立証されている。言論や思想の面で「ブランシュ」のように洗脳させていく例は存在しているが、あれはその殆どが二科生だったことに加えてアンティナイトの存在が大きいからこそ成り立っていた。
　神田の秘書やボディーガード、取り巻きに関しては存在感で完全に黙らせていた。というか、存在感をこの部屋を覆う程度で展開しているだけだというのに、この体たらくとは情けない。とりわけジャーナリストは〝第三の権力〟を自称しているというのにだ。
　そして、神田に対しては辛うじて話せるレベルで威圧感を放っている。
「魔法技能は極めて緻密かつ繊細な制御が求められます。その実習に部外者を安易に入れることは出来ません」
「ご迷惑はお掛けしません」
　神田はそう言っているが、取り巻きの記者が勝手な行動をして生徒の心身を傷つける様な真似をする可能性が高い。ただでさえ、ここに来ている記者――――黒羽家や神楽坂家の息が掛かった者以外の大半は反魔法主義が色濃いメディアだからだ。
「……いいでしょう。教頭先生、五時限目の見学であれば問題はないかと思われますが？」
「五時限目……そうですな。ただ、実習はありませんが、魔法大学と共同で課外実験が校庭にて行われることになっております」
　八百坂も今の悠元が百山の代わりにここにいることを理解した上で、百山と接するように悠元からの問いかけに受け答えしていた。だが、これには神田が食いついてきた。当初の予定では魔法科高校の授業の見学をして、盛大に軍との癒着をアピールするパフォーマンスをするつもりであったからだ。
「そんな、せめて四時限目の途中からでも」
「先程も仰った通り、魔法の使用は精神に大きな負担となります。まさか、魔法師の人権保護を高らかに仰られている神田先生が、未来ある若者の可能性を摘み取る様な真似などされたくないでしょう？」
「……分かりました。では、せめてその課外実験だけでも見学させて

いただきたい」
　そうピシャリと言い切った上で、悠元は懐から端末を取り出して内容を確認した後、神田らに向き直った。
「実験の見学の許可が下りました。但し、こちらの提示する条件を必ず守っていただかなければ、即刻退出していただくことになりますので予めご了承ください」
　悠元の言葉を聞いて不満げな様子を見せる記者もいたが、そんなことなどお構いなしに悠元は説明を続ける。
「一つは、指定されたエリア以外からの見学を禁じます。この後いらっしゃるスミス先生が案内いたしますので、そこからの見学となることはご了承ください」
「何故ですか？」
「本来ならば、生徒の安全面を第一に考えるなら、あなた方のような来訪者など以ての外なのです。態々見学できる場所を提供しただけ『学校がまだ譲歩している』証拠ですよ」
　悠元の言葉で記者らが騒ぎ立てて、ボディーガードも警戒を強めるが、この程度の事など想定の範囲内だと言わんばかりに説明を続ける。
「もう一つですが、当校の生徒に対する一切の取材を禁じます。代わりに私が全てお答えしますし、今回の実験内容も把握しておりますので、受け答えする分には問題ないかと思われますが」
「そんな横暴が許されるのですか!?」
「何をどう勘違いしているのか分かりませんが、貴方方がここにいられるのは神田先生あってのことです。本来ならば、学校側が即刻追い出す対応を取ってもおかしくなかったのですから」
「君は報道の自由というものを知らないのか!?」
　はて、この国の憲法に言論と思想・信条の自由は確かに保障されているが、それは何もジャーナリストの特権ではないし、そもそも世論の代表者を標榜している彼らは誰しも〝責任〟を取ろうとしていないことが問題だ。国営放送を除いていち民間企業あるいは一個人でしかないジャーナリストは、何をしても許されると本気で思っている

のだろうか。
　というか、根本的な問題として〝報道の自由〟なんてものは憲法で保障などされていないし、自由を得るからには相応の対価が求められる。煽るだけ煽って後は知らぬ顔……前世でも良くあったこと。しかも、そういった心ない記者のせいでまともな記者まで一緒くたに見られてしまうのも問題だ。
「事前の約束なしで乗り込んで来ておいて、正当な取材が出来るという甘い考えが本気で通用されると？　そちらが無礼を重ねておいての態度であるにも関わらず、こちらとしては最大限の礼儀をもって応えています。それでいて横暴などと仰るのならば今すぐ出て行って頂きます……神田先生も、それで宜しいでしょうか？」
「あ、ああ……」
　悠元の有無を言わせぬ言葉に、神田とその取り巻きは押し黙る他なかった。悠元はそれを見た上で神田に確認の意味も含めた視線を送りつつ問いかけ、威勢を取り戻しつつある神田も頷かざるを得なかった。
　丁度話を終えたところでジェニファーが来たため、彼女の先導で校長室を後にしたのだった。
◇　◇　◇
　後ろでは取り巻き記者の一人が神田に話しかけていたが、その会話の内容など悠元からすれば筒抜けに等しかった。流石におかしいと気付いていても不思議ではないが、放射線実験室に入った際に非友好的な視線を向けられたことには流石に戸惑っただろう。
　だが、これが当然の反応なのだと理解すべきなのだ。
　それに対して助け舟を出すわけではないが、廿楽が悠元に話しかけた。
「三矢君、彼らが君からの連絡にあった見学者ですか？」
「ええ、廿楽先生」
「それでは、あちらのほうへ案内してあげてください」
　廿楽が視線を動かした先には丁度空きスペースがあり、実験装置を見渡せるだけの視界が確保されている。悠元もそれに頷くと、神田ら

をそちらへと移動させた。神田は学生の様子が気になって悠元に尋ねた。
「あれは、何をしているのですか？」
「先程少し触れましたが、今回は魔法大学の有志からの申し出で実施にすることになった魔法実験です」
「魔法実験と言うと、やはり先日の『灼熱と極光のハロウィン』のような敵艦隊を一瞬で殲滅させるような実験ですか？」
ここで割って入ってきたのは取り巻き記者の一人だ。明らかに嫌らしい笑みを浮かべているが、そんな表情に一々反応することもなく淡々と答えた。
「その質問は工業高校の生徒に『核兵器の実験でもしているのですか？』と尋ねるに等しい行為です。ここで作業をしている彼らは魔法の平和的利用の為に日夜努力している生徒たちであり、先程の質問は礼を失するに余りあります」
魔法はゲームのようにボタン一つですぐに発動できるようになっていない。基礎単一工程の魔法ですらアルファベット換算で最低五桁の演算を必要とする。イメージとして描くのは簡単だが、物理法則を改変するという自然の摂理に反することで特定の事象を成立させるには膨大な量の情報演算をしなければならない。
記者自身が自らの素性を名乗らないことは既定路線だし、こちらは身元を明かしているのに自己保身のために明かそうとすらしない。そもそも、今回の反魔法主義のメディアを調べる際に社内データベースをハッキングして素性を全て調べ上げている。なので、顔を見ただけでどこの会社の記者なのかをすぐに判別できる。
すると、どうやら準備が出来たようで、実験室の壁のシャッターが開いていき、外の光が室内に差し込んでくる。
「では、行きましょうか」
「三矢殿。その、今回の実験は一体どのようなものでしょうか？」
「――――現代魔法における加重系魔法三大難問、その一つに挑む実験です」
悠元につられる形で神田も移動を開始した。記者はどうにか粗探

しを目論んでいるようだが、これからやる実験を見てからの質問など……悠元からすれば予測するまでもない事であった。

◇　◇　◇

校庭には実験装置を遠くから見ている生徒がかなり多かった。その中で見慣れない人間たち――――神田らの存在は生徒から見ても異質なものと認識されているようで、中には非友好的な視線を向ける人間も少なくない。

とりわけ神田はここ最近のメディア露出が多いためか、彼の姿を見て気が付かない生徒は少なくないが、近くに悠元がいるためか直接的な行動に出るようなことは抑えられている形だ。尤も、生徒らの最大の興味はこれから始まる実験に注がれている。

「実験開始」

拡声器を持った達也の合図で深雪が重力制御を発動すると、球体上の水槽に張り付く形で重水と軽水の混合水が中心部に球状の空洞を形成している。その次に発動するのは香澄と泉美の第四態相転移（フォースフェイズシフト）で、空洞部の水面から重水素プラズマと水素プラズマ、酸素プラズマが発生する。

「中性子バリア、ガンマ線フィルター」

理璃の中性子バリアとほのかのガンマ線フィルター。どちらも核兵器の毒性を無害化するために開発された核抑止のための魔法であり、この二つの魔法はワンセットとして機能することが多い。良く知られた魔法だが、それを卓越したレベルで展開する二人の能力は確かなものである。

「重力制御」

空洞部の重力を中央に反転させることで、空洞の中心部に重力場を発生させるとともに、物質相互間の重力が増幅される。

重力魔法による核融合反応が加重系魔法三大難問となっているのは、時々刻々と変化する水槽の質量に合わせて魔法の出力を常に変化させ続けなければならない多変数化の処理が極めて難しいとされているためだ。

この実験装置では、金属環に１０個の照準補助装置が取り付けられ

ており、それらを3台の並列処理型ＣＡＤを経由する形で深雪のＣＡＤに送られる。本来複数のＣＡＤを挟むのは想子の干渉に不可能とされているが、想子のみを閉じ込める特殊な電子回路によって深雪はただ二段階目の重力制御を持続するだけで良く、複雑な計算自体はＣＡＤが全て処理している。

「クーロン力制御、定率制御（フラットドライブ）フィルター」

セリアのクーロン力制御で高重力制御下の電磁的斥力は約１００万分の1にまで低減。更に美嘉の定率制御フィルターによって容器の内外の温度変化をシャットダウン。核融合反応に必要なエネルギーが小さくなったことによって核融合反応が発生し、空洞部の中央を起点として眩い光を放つ。容器自体の温度は一切変化していないが、魔法の持続時間を考えると3分が一応の目安。

核融合反応が起きてから3分が経過したところで、達也は手に持っていた拡声器を通して合図を送った。

「実験終了」

先程の展開とは逆の手順で解除されていくが、定率制御フィルターと中性子バリアは容器保護と放射性物質の残留を考慮して展開したままだ。容器内の大気成分分析で放射性物質の検出が見られないとケントから報告が上がり、水槽に容器内を冷やすための注水が開始される。水槽の中に一定量の水が注がれた段階で残る二つの魔法も解除された。

そして、五十里と佳奈に加えて達也を含めた実験メンバーからの後押しという名の目線を感じ、半ば最後の締めを押し付けられた形となったあずさが一つ深呼吸をしてからマイクに自らの声を乗せた。

「常駐型重力制御魔法を中核技術とする継続熱核融合実験は所定の目標を達成しました。『恒星炉』実験は成功です」

その言葉に校庭にいた生徒のみならず、校舎の中から見ていた生徒からも歓喜の声が上がった。それはまるで、暴力的とも言える様な熱狂的な歓声であり、魔法の平和的利用へ繋がる魔法の可能性と未来を称えるかのような雄たけびにも聞こえる様なものだった。

◇　◇　◇

その歓声に対して硬直していた神田とその取り巻き記者は、実験装置の片付けと見学していた生徒が校舎に戻っていくのを見たところで現実に引き戻され、悠元に尋ねた。
「あれは、一体どういう内容の実験だったのでしょうか？」
「プラズマ化させた重水素と水素を衝突させ、その衝突によってヘリウムを生成する際に生じる質量差をエネルギーとして利用するものです。核融合の原理自体は御存知の筈でしょう」
太陽が熱を発する原理は重水素による核融合反応によるもので、だからこそ『恒星炉』という名称を持っている。核融合の基本概念はアインシュタインが提唱した質量エネルギーの方程式である。しかも、その理論を体現した魔法が既に存在しているのだから驚きという他ない。
「核融合の実用化は断念されたはずですが」
「実用化はされていなくとも、研究は続けられております。太陽光エネルギーシステムが主流となった現在においては、資金的な問題で大型実験装置による実験はされていませんが、魔法学以外でも研究は続いています」
魔法による核融合の研究もその一環であり、電磁気制御による核融合は制御が複雑すぎるため、重力制御魔法による核融合が研究されてきた。今回の実験もその可能性を見出すためのものだ。悠元の説明には、甘楽が感心したように聞き入っていた。
「核融合の研究とは、魔法による核融合爆発の実現を目指すのですか!?」
「例えば『灼熱と極光のハロウィン』で使用されたような？」
よくもまあ、意地の悪い質問を平気と投げられるな、と内心で質問をぶつけてきた記者に毒づきたくなってくる。しかも、彼らは知らない。その二発の戦略級魔法を放った人間がどちらもこの学校に在籍している事実に。
しかも、片方は同じアインシュタイン方程式を用いてはいるが核融合爆発ではないし、もう一方は核融合すら使っていない戦略級魔法。詳細を明かせないのは軍事機密故に仕方ないだろうが、憶測でしかも

のを語れないのか……と内心で独り言ちる。
その質問に近くで聞いていた甘楽が声を上げようとしたが、悠元はそれを目で制止しつつ記者に答えを返した。
「――――笑えない冗談ですね。もし仮に核融合爆発を起こさせるとしたら、例え実験であってもこんな都心で出来るような代物ではありません。例えば核分裂反応の話になりますが、過去の歴史における原爆や水爆の実験は周囲への被害を最大限に考慮して実施していることぐらい貴方方とて承知の話でしょう」
達也の戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』は水滴単位でタンカークラスの船を丸々呑み込んだのだ。対象の質量をキログラム単位になんてしたら、下手すれば地球すら吹き飛ばしかねないほどの威力を出してしまう。
質量・エネルギー変換の原理を用いる核融合爆発実験は危険を伴ってしまうため、放射線管理に加えて周囲への人的・物的被害が生じない地下深くか深海クラスの海中でないと実験の安全マージンが保障できない。
「それに、核融合反応を起こす魔法は十三使徒であるミゲル・ディアスの戦略級魔法『シンクロライナー・フュージョン』以外確認できていませんし、術式の再現に誰一人として成功できておりません。そもそもの話、単純に爆発を起こすだけならば複数の術式を用いる必要なんてありません。いくら優秀な高校生とはいえ、そんなことが可能と本気でお考えなのですか？　もし、今回の実験を『水爆実験』などと謳うようならば、平和的社会貢献の精神を以て実験を行った彼らに対する誹謗中傷と受け取らせていただきます」
術式の再現、という意味ではある意味悠元でも出来ていない。何せ、『シンクロライナー・フュージョン』自体に重要な秘密を抱えているためだが、それを態々口にすることではないと判断しつつ「冗談でも軽々しく魔法を兵器と結びつけようとするな」という意味も込めて言い放った。
記者たちはどうしても魔法と兵器を結び付けたがっているようだが……そこで、神田は方向性を変えて攻めてみることとした。

「これは知人から聞いた話なのですが、三矢殿は3年前の沖縄防衛戦に自ら義勇兵として参戦されていたと聞き及びました。それこそ、軍に強制されての事ではありませんか？」

「何故そのことを」と思ったが、彼の行動を黙認している人物から諭されたとすれば筋は通る。伝えた本人からすれば、神田に対してあくまでも手荒な真似はするなという釘差しも含めてのもののようだが……神田の発言に対して真実なのかと問い質してくる記者たち。

だが、悠元からすれば却ってありがたかった展開に違いなかった。

「その知人とやらには非常に興味がありますが……確かに、私は義勇兵として沖縄防衛戦で戦いました。ですが、私自身が義勇兵として参戦しようと決めたのは私自身の意思で決めたことで、軍の意思や家の都合は一切関係ございません」

「ですが、貴方の知らない間にそういう風に誘導されていた可能性も――」

黙れ、と言わんばかりに鋭い眼光を向けた。これには問いかけしようとした記者だけでなく神田も押し黙った。

当時は三矢の姓を名乗っていないが、内面的には三矢の人間だったことは間違いない。だが、あの時は完全な非常事態と認定できる状況だった。大亜連合の艦隊や潜水艦、そして上陸してくる兵士に基地内の反乱兵がいたという情報は沖縄防衛戦後に開示された報告書で記載されていた。無論、そのことを知らない筈がないのだ。

敵の侵攻という非常事態時に誘導もへったくれもありはしない。国防軍の規則の特例に基づく特務士官としての参戦であり、達也の扱いに関しては〝現地にいた義勇兵〟ということで報告書に書かれている（本名は記載できないため、その際に〝大黒竜也〟という名が使われた）。

あの状況で俺が参戦を決めたのは、置かれた状況からして自分が出なければ不利な状況を覆せなくなると踏んだからであり……近くにいた達也や深雪を含めた面々を守り抜くと決めたからこそだ。

それを「軍に誘導された」と断ぜられるのは以ての外、としか言いようがない。

「無責任な憶測の押しつけはお止めいただきたい。実際に戦場にすら出たことのない貴方に当時の私の心情が推し量れると？　神田先生の取り巻きの方々は非常に優秀ですね？」
「あ、いえ、その……」
「では、それほど優秀な貴方方にお聞きしますが、ここ４年で沖縄、佐渡、横浜と国外の勢力からこの国を守った戦いには何が決定的な要素として働いたと思いますか？」
　反撃として放たれたこの悠元の問いかけに、神田とその取り巻き記者は押し黙ってしまった。何故ならば、この答えこそ悠元に言わせるべきだということにだ。無論、その程度の事など悠元も把握している。ならばこそ、彼らの望む答えなんて与えないと言わんばかりに悠元はその答えを述べた。
「実に単純な事ですよ。国を護ろうとする心――――この場合は愛国心と申しましょうか。魔法の有無に関係なく、自身が生まれ育った国を守ろうとする心がある者たち。自己評価をするようで癪ではありますが、自分を含めた彼らが死力を尽くして奮闘したお陰で、この国は平和を保っているのです」

現実を見ていない者たちの哀れさ

神田議員と取り巻き記者はきっと、軍にそう教育されたからだとか、魔法師だからとか言わせたかったのは目に見えていた。だが、非常事態を除いて未成年を軍役へ強制徴用することを禁じている法がある以上、大半の国防軍の軍人はこの国の憲法に定められた〝職業選択の自由〟の権利を行使した上でその道を進んだに過ぎない。

彼らにそうさせたとする理由はいくつか存在するだろうが、その根底に存在するものは間違いなくこの意思に他ならないと悠元は考えている。

「実に単純な事ですよ。国を護ろうとする心――この場合は愛国心と申しましょうか。魔法の有無に関係なく、自身が生まれ育った国を守ろうとする心を強く持つ者たち。自己評価をするようで癪ではありますが、自分を含めた彼らが死力を尽くして奮闘したお陰で、この国は平和を保っているのです」

それは、沖縄防衛戦における自分と達也もそうだが、佐渡では「クリムゾン・プリンス」をはじめとした一条家、横浜では自身を含めた『神将会』による働きで国外勢力を排除することに成功した。

だが、その陰で死力を尽くして奮闘していた人々がいたからこその結果である。この国を本気で守ろうとする心がなければ、きっと成し得なかったことだろう。この国を売ろうなどという腐り切った心を持っている人間がいるのも事実ではあるが、彼らに比べれば愛国心を有している人間のほうが多いだろうと思う。

「魔法師は軍人としての適性が一般の人よりも高い事に加え、国を守りたいという意思の強さは卒業生の進路にも強く影響しています。昨年度の魔法大学の卒業生の約４５パーセントが国防軍関係の進路に進んだのもその意思を物語っているでしょう」

「それは、世間の風潮や軍が強制しているからではないのですか？」

「軍関係を嫌って魔法技術者として進む人もおりますし、軍以外にも警察、消防や医療、災害救助などといった道に進む人もいます。今日の実験は自分たちが目指している未来の為に行ったことです」

いくら軍関係に行ったからと言って、その全てが軍人魔法師になるわけではない。魔法技能が足りず一般兵士という形で軍に入る人もいれば、魔法技術を生かそうと後方支援などの非戦闘分野に進む人間もいる。

警察の一例としては、エリカの兄である寿和や千刃流の門下生である稲垣が該当する。尤も、彼らの場合は特定の部署に配属されずに全国各地を飛び回る便利屋扱いだが。

消防に関しては、難所での人命救助や救急救命の部分で被害を軽減する魔法の需要が大きいし、前世で言うところの自衛隊や海上保安庁が担っていた大規模災害などによる救助・救援を専門に行う部隊――――第三次大戦後に設立された『克災救難隊』に進む魔法師も少なくない。

医療については、昨年秋に発表した魔法技術を用いた新型の医療技術に伴って、魔法大学からその方向に進む医療従事の魔法師も出始めている。

その意味で師族二十八家や百家の当主らも軍人魔法師の軛から外れた存在と言えるだろう。彼らが本格的に軍と関われば、間違いなく国防の中心を担ってしまうだけの実力を有するだけに、独立魔装大隊などという十師族に頼らない実験部隊が出来たのも道理だろう。

ただ、この国に存在する戦略級魔法のほぼ全てが十師族に深く関わっているという点からすれば、十師族なしにこの国の独立が保てなくなる現状を誰しもが深く受け止めなければならない……最悪、魔法師排斥を唱える連中が『売国奴』とレッテルを張られることにも成りかねないということも含めて。

「そもそもの話、魔法科高校は〝魔法技能師〟を育成するための高等教育機関であり、ここで得た経験と知識を以て社会にどう貢献してくかの判断は本人たちの意思に委ねられています。大体、パーセントの高さだけで比較すること自体おかしいのですよ」

「どういう意味ですか？　昨年度の第一高校卒業生の約６５パーセントが魔法大学に進学しているではありませんか」

「魔法科高校は全国に九校存在しており、１学年当たりの定員数は１

２００人。第一高校はその内の2割にも届きませんし、第一高校から魔法大学への進学者は魔法科高校全体でみれば1割前後を占める程度です。そして一番重要な事ですが、昨年の魔法科高校卒業生と魔法大学卒業生を何故同列に扱えるのですか？　そんな言い方はどちらの卒業生のみならず、在校生や教職員にも失礼極まりない言動です。即刻取り消していただきたい」

魔法の有無に関わらず、高校と大学の役割ぐらい彼らとて分からないはずがない。彼らの言い分を鵜呑みにするとなると、まるで魔法科高校と魔法大学が同じ教育しか受けていない様な言い方にも捉えることが出来てしまう。これは生徒のみならず双方の教職員、ひいては魔法大学の学長ならびに魔法科高校の校長らに対する侮辱にも等しい。

「ですが、魔法大学から軍及び関係機関に進んだ卒業生は約４５パーセントもいるではないですか！」

「……ならば、軍人魔法師として志望されたのは、その内訳のどれほどを占めているのかご存知の筈。無責任にもその全てなどと仰るわけではありませんよね？」

魔法科高校に進むことが出来なくとも、特筆すべき実績を挙げて魔法大学に進んで軍関係に進んだ魔法技能保有者もいたりする。そもそも、初めから軍人を志すのならば防衛大学校に進学した方が早く、そこから溢れた受け皿として魔法大学に進学しているケースもあるのだ。

彼らが主張したいのは、その４５パーセント全てが軍人魔法師志望というシナリオだが、実際にはそこまで都合よく出来ていない。だからこそ、パーセントの高さだけをピックアップして国民の目を欺こうとする意識誘導を意図的に行っている。

大体、魔法科高校の教職員人事を担っているのは魔法大学だし、中立派の百山校長が軍事色の強い教職員人事など絶対に受け入れないであろう。軍が強制しているというのであれば、それこそ廿楽やジェニファーのように大学から爪弾きに遭ったような人選など絶対にありえないのだ。

もし軍事色を入れるとするならば、格好の的になるのは担当教官のいない二科生だろう。だが、そうなっていない事実を考慮するならば、彼らの論理は最初から破綻しているに等しい。どうせならば「見えない力が怖いから」と正直に吐露してくれればまだ対処しやすいだろうが、魔法の使用自体にも厳しい制限が掛かっている現状を彼らは理解しているのだろうか。

「……魔法を政府で管理すべきという声もありますが」

「必要ありません。既に十師族という秩序に置かれていることに加え、法体制の面ではライセンス制度や殺傷性ランク、魔法の使用制限や魔法監視システムなどといった体制や法律が既に存在しています。これ以上厳しくするというのなら……それこそ、税金で魔法師を養うことになりますよ」

「はっ!?」

記者たちが何とか食い下がろうとするが、何も分かっちゃいない。

魔法は確かに体系化された技術だが、それには行使する魔法師の存在が必要不可欠である。この前提が崩れない以上、魔法の管理は魔法師――――魔法因子保有者の管理と直結することになる。現在でも諸外国への渡航禁止を含めて厳しい管理を強いられている因子保有者を更に法で拘束するとなれば、その見返りとなる法の保護も手厚くせねばならない。

仮に政府が魔法を管理することになれば、態々権威を捨てた十師族に最低でも〝名目上の権威〟を与えねばならなくなる。権威を与えずに政府が強制なんてしようものならば、魔法という返す刃をもって政府が滅びかねない。

過去に四葉が起こした復讐劇なんてその最たる例で、数十人の魔法師で一つの国を滅ぼしたようなものだ。それが師族二十八家を筆頭にクーデターなんて起こされようなものなら、一日も掛からずにこの国は瞬く間に魔法師の支配する国家へと早変わりする。

第一、十師族体制の目的は国家権力の横暴に対抗して魔法師の人権を守るという存在意義がある以上、政府による魔法管理など真っ向から対立しかねない話だ。

権威という一つの前例を与えれば、少数の魔法師が大多数の非魔法師を支配するシステムになりかねない。だからこそ、それを防ぐために護人の存在があり、護人の二家が権威を捨てないことで、十師族以下の魔法使いの家へ権威が波及しない様に防ぐ役割も兼ねている。

目に見えない力に怯えるという意味は理解できるし、彼らの言い分も理解できなくはない。

だが、この世界において魔法師無き世界が実現できるとするならば、その時に待ち受けているのは核兵器による地球滅亡のカウントダウンか、宇宙に脱出した魔法師が〝新たな人類〟として自称し、非魔法師を〝旧人類〟と称して滅ぼす未来。

現に、そういった思想を掲げて活動している魔法結社がＵＳＮＡにあることで、『そういった未来』もあるという可能性を秘めてしまっている……どこぞのロボットアニメかＳＦアニメの話かよ、と内心で吐き捨てたほどだ。そして、そんな世界に生まれ変わってしまったことで実感を得てしまった。

――これが文字の羅列（しょうせつ）や描写（マンガ）、映像（アニメ）ではない『現実』であるのだと。

「……敢えて言わせていただきますが、先程からの貴方方の論理で語れば、軍人を志した非魔法師は全て物理的な殺戮兵器になると言っているようなものです。この国の未来ある若者に対してあまりにも無礼極まりない決めつけであり、そんな下らない思想など押し付けないでいただきたい。貴方方はもう少し世界の現実を知るべきだ」

そもそも、人口の多数を占める非魔法師の代表である政府に魔法師が管理される関係性を果たして魔法師社会が許容できるのか、という問題にも繋がる。政府は国民の信を受けて代表となった国会議員の多数決による力関係によって形成される公的な権力だが、その権力如きで実行力の伴う魔法師社会を押さえつけられる訳がない。

更に押さえつけるような真似をすれば、それこそ亡命という形で諸外国に魔法師が逃げる可能性だってある。そうなれば、この国の力が弱まることを歓迎する勢力の思う壺である。

だったら、初めからある程度の影響力は仕方ないと割り切り、非魔

法師の人々の利となる部分は守ってもらうように折衝する――――その役割を国会議員が中心となって担う。つまるところ、この世界の国会議員や官僚は〝外れくじ〟にほど近い立ち位置とも言えよう。その代わりに高い収入と豊かな生活を得られるのがメリットと割り切れるかどうかは……その道を目指した者たちのメンタルの強さに期待するほかない。

「いい加減にしろ！」

「そうだ、十師族とはいえ言っていいことと悪いことがあるだろう！」

悠元の発言に対し、記者たちが「横暴だ」と言わんばかりに悠元を責め立てた。これは拙いと神田が声を発する前に、悠元は鋭い視線と共に冷え切った――――いや、この場合は『凍える』ような声質で言い放った。

「成程――――貴方方の本音は、魔法師をこの国の国民ではなく『兵器』だと断じ、故に人権など必要なし、と。軍から魔法師を解放して保護するなどという名分も、所詮は貴方方の都合の良い『戯言』であったということですか。魔法科高校と魔法大学の卒業生を同列に扱われる意味が良く理解できました……確かに『兵器』なら同列に扱っても何ら問題は生じないでしょうからね」

神田は冷や汗を流していた。そして、それは取り巻きの記者たちにも同様であった。魔法師の人権保護を高らかに掲げるつもりが、逆に魔法師排斥主義を掲げている者という位置付けにされてしまった形だ。これが一番大事なことだが、ここにいる悠元は第一高校の校長代理としていることを彼らは頭の片隅に追いやってしまっていた。

見かけに騙されて人の話をきちんと聞いていないからそうなる、と態々忠告してやる義理など持ち合わせていないため、彼らの言い訳を待つことなく悠元はきっぱりと言い放った。

「貴方方の発言と思想は、一言一句違うことなく三矢家当主も含めて十師族の各当主と日本魔法協会にお伝えさせていただくと共に、所属する報道機関に対して厳重な抗議を行わせていただきます。そして、お忘れでしょうが今日の私は第一高校の校長代理でもあります。百山校長が出張より戻られ次第、ここでのやり取りも全て過分なく報告

させていただきます。無論、魔法科高校を付属学校としている国立魔法大学の学長にもですが」
　ここはハッキリと述べておくことでこちらが本気だという姿勢を見せることにする。彼らが素性を名乗らなくとも、どの報道機関のどの記者なのかまで既に把握している。尤も、抗議に対する回答文を作っている間にメディアの買収工作が一気に進むこととなるため、彼らの悠長な延命などさせるつもりもない。
　原作だと甘楽が自らのコネを駆使して対応していたが、今回は師族会議と日本魔法協会、第一高校に加えて魔法大学、更にその延長上で防衛大学校と政財界にも抗議声明を出してもらう。その止めという形で今上天皇による「おことば」を賜り、それを全国に生中継する――――これが第二段階目の大まかな内容だ。
　まるで谷底に落とした挙句ダイナマイトを投下するようなものだが、ここから更に民権党の解体工作の一環で主要野党と大陸系献金のリーク情報をこの国全体にばら撒きつつ、与党議員数人に国会で議論してもらう。こうなれば選挙を先延ばしにせざるを得なくなるだけでなく、野党の勢力はかなり力を落とすことになる。まあ、与党の連中にもそう言った献金を受け取っている議員がいるため、彼らも追及の的になってしまうので、この場合は「痛み分け」の恰好となるだろう。
「え、いや、それは……」
「何か不都合がおありですか？　よもや、神田先生も彼らと同じお考えであると仰りますか？」
「と、とんでもありません！　今日の実験は非常に有意義なものでした。社会の繁栄に貢献される姿勢はとても素晴らしいものです」
「そうですか」
　ここで神田にまで『魔法師排斥主義者』というレッテルを本格的に貼られれば、党の中でも積極的に魔法師排斥を唱える議員と同じ派閥にいる人間と見られるだけでなく、最悪十師族を含めた魔法師社会全てを敵に回すこととなる。そうなれば、次の選挙で落選どころの話で済まなくなるのは目に見えている。

神田が何とか苦し紛れに出た褒め言葉を言い終えたところで、悠元は懐からデバイスを取り出して彼らに見えるように掲げた。
「神田先生、先程の発言は今回の実験に関わったメンバーにお聞かせしても宜しいでしょうか？　彼らにとっても先生の言葉は励みとなるでしょうから」
「え、ええ……構いません。生徒たちの励みになるなら何よりです」
神田が悠元に軽くお辞儀をして「見送りは不要です」と述べた上で去っていき、秘書やボディーガード、取り巻きの記者たちが続く形でその場から去っていく。ある程度距離が離れたところで悠元は『万華鏡（カレイドスコープ）』で神田の位置を捕捉し、『聴覚強化』を使って彼の耳に直接話しかけた。
「神田先生。ああ、すみません。この声は神田先生にしか聞こえませんので悪しからず……これから言うことは独り言だと思って聞いてください」
急に立ち止まった神田の姿に周囲は動揺するが、神田は「先程の動揺がまだ出ている」となんとか宥め、入り口まで歩いていくのを確認した上で話し続けた。
「言い忘れていた大事なことを一つお伝えしておきますが、先程のことに関しては上泉家と神楽坂家にも報告させていただきます。私の母方の祖父は上泉剛三であり、祖父の義妹が神楽坂家当主であり、今の私の母親でもあります。民権党の古株の方なら、護人という言葉を聞けば教えていただけるかと思われます……独り言は以上です。お気を付けてお帰りくださいませ」
『聴覚強化』は切ったが『カレイドスコープ』で神田の様子を見たところ、剛三の名を出した時点で冷や汗を流していた。三矢家と上泉家の結婚自体は身内でやっていたため、魔法師社会ならばともかく非魔法師社会において三矢家と上泉家の関係性はあまり表沙汰になっていない。
剛三の持っている功績自体が魔法師としてのものに加えて武芸の達人としてのものもあり、それら全てが非常識すぎて〝二十一世紀の魔王（ルーオル）〟とか〝ウェブ辞典（サイクロペディア）のパロディサイトを完全敗北させた男〟な

どという呼び名もあるほどだ。そして、そんな人間に育てられたらどうなってしまうか……自分は転生というチートでそれに耐えきった特異点なので、一例にはできないだろう。というか、してほしくもない。

そんなことを考えていると、神田議員やその取り巻きを乗せた黒塗りの乗用車が学校から去っていった。それを確認したところで『カレイドスコープ』を解除すると一息吐き、校舎へと歩を進めるのであった。

◇　◇　◇

悠元は校舎に戻ったが、直接教室に戻らずに〝あるもの〟を回収するため、放射線実験室の前に来ていた。悠元が左手を翳すと、床から生えてくるような感じで1枚の札が出てきて悠元の手に収まった。

札には精霊魔法のような術式ではなく、どちらかと言えば西洋魔術のような紋様が刻まれている。その札は使用者が指定した範囲にいる対象物の記憶情報を読み取るための記憶情報読込保存魔法『記憶時計（メモリー・クロック）』――国防陸軍の仕事でレリックの保存機能を解析した際に転生特典で会得した魔法が刻まれている。

横浜事変のきっかけの一つとも言えるレリックに元々入っている保存機能よりもバージョンアップしている代物なため、迂闊に出すわけにもいかなかった。なので、何重にも構築された隠蔽術式と暗号化記述によって厳重なセキュリティを構築している。

悠元が想子を流し込むと、札の紋様が光り輝いて記憶された情報が悠元に流れ込む。神田議員とその関係者に加えて取り巻きの記者に関する情報となると膨大な量となるため、普通ならば脳にかなりの負荷がかかってしまう。軽々しく使えないのはこの情報の読み取りがあるためだが、悠元と達也ならば問題ないという現実がある。

（……こちらから諭したとはいえ、神田議員に沖縄防衛戦の情報を与えたのはやはり七草弘一か。借りだなんて思いたくはないが、ただで転ばない辺りは〝狸〟だよ、アンタは）

しかも、当日の動きを見透かしたように「三矢悠元」で伝えていた辺りは流石である。面と向かって褒める気にはならないが。

だが、いくら七草家と言えどもこの先のメディア関連の対処に関与することは許さない。それよりも、七草家にはどうしても対処してもらう事項が発生しうるのが目に見えているからだ。今日、琢磨については学校を休んでいた。表向きは家の用事ということらしいが、恐らく七宝家現当主が琢磨にそう言いつけて休ませたのだろう。だが、学校であれだけの実験をかなりの生徒が目撃している以上、そのメンバーの一角である香澄と泉美が目立たないはずがないからだ。

すると、気配を感じて札を懐に仕舞い込んだところで実験室の扉が開き、五十里が姿を見せた。実験メンバーは丁度後片付けをしている時間帯だったので、彼がいても不思議ではなかった。

「お、悠元君。丁度いいところにいたね」

「？　何かありましたか？」

「実は、今回の記念撮影をするって時に一番の功労者を省くのは拙いと思ってね。丁度呼びに行こうと思ってたんだ」

「一番の功労者って……まあ、いいですよ」

どうやら、五十里は一度実験室を出て連絡を取ろうとしていたようで、彼の右手には通信用デバイスが握られていた。こちらとしては姉達も巻き込んで利用した側だというのに、それを功労者扱いされるのは何だか面映ゆい感じがした。とはいえ、今回の実験に関して撮影許可を貰っている以上、甘んじてその代償を受けることにした。

部屋の中では既に記念撮影の準備が整っており、何故かあずさが中央のあたりで正座して座っていた。

「……何で正座してるんですか？」

「えっと、その、佳奈さんと美嘉さんが……」

「生徒会長だから一番目立つところにいるべき」

「右に同じく」

ここには三代前の生徒会長である佳奈、先々代生徒会長の美嘉もいる以上、あずさも逆らえなかったのだろう。それに、生徒会長が隅っこにいるのは第一高校の生徒会長としては問題があるということでこうなったそうだ。

なお、佳奈と美嘉については、あずさが逃げ出さない様にその両端

をがっちりと固めていた。カメラの場所から見て左側――――佳奈の隣にほのかと理璃が、その反対側はというと、美嘉の隣にセリアと香澄が座る形となる。

佳奈とほのかの後ろには五十里と達也が立ったのだが、問題は美嘉とセリアの後方に悠元が立つわけだが、その両端を深雪と泉美が固めていた。こうなるだろうな、とは思いもしたが、一応この写真データもメディアに〝取材データ〟として送信することとなる。

これが世の中に出た時の反応は色々な化学反応を起こすことになるだろう……いい意味でも、悪い意味でも、今回の一件を機として神楽坂悠元の名は国内外に認知される。

そんなことを思いつつ、記念撮影自体は割と緩い雰囲気で終わったのだった。

金という名の力業

実験メンバーの記念撮影が終わった後、彼らの後ろ姿が見えなくなった後でジェニファーは廿楽に話しかけた。
「しかし、神楽坂君が元十師族というのは彼の姉から聞いておりましたが……彼は本当に高校生なのですか？」
「確かに、彼は非凡という枠組みすら超えているでしょうから」
廿楽は以前というか昨年、論文コンペで却下した悠元の論文を実際に目の当たりにした。題材こそ過激であったが、昨今の国際情勢も踏まえた上での魔法の重要性を訴えるだけなく、魔法兵器としての魔法師の徴用を危ぶむ論調も加わっていた。それは、下手すれば自身の元実家にも警鐘を鳴らす様な内容であった。
そして、今日は校長代理として国会議員や取り巻きの記者に対して臆するどころか圧倒した存在感かつ正論で黙らせてしまった。同年代であそこまでの貫録を見せられる人間はそういないであろう……そう思いつつ、廿楽はポケットから一枚の紙を取り出した。
「……それは？」
「神楽坂君が魔法幾何学の課題で書いていた〝失敗作〟だそうです。この大きさでも２６工程の振動系魔法を行使できる形ですが……折角だからということで、貰ったものです」
「２６工程で失敗作とは……」
紙の大きさは精々５センチ四方。魔法陣自体は約３センチ程度しかないのに、これだけで２６工程を行使できるとなれば、消費される想子量はかなり低減される。複雑な工程数を要求される魔法ほど魔法陣の記述数も増えるため、魔法陣自体も大型化するのが常識。その常識の摂理を彼は破壊し続けていることにジェニファーは思い出しながら呟いた。
「そういえば、昨年のゼミで彼の姉たちが私の担当生徒だったのですが、彼女らの常識は最早私たちの知る現代魔法で計れないでしょう」
「私の教え子でもありましたが、彼女らは常々こう言っていました。『弟が諦めなかったからこそ、私達も諦めることを止めた』とね……魔

法の体系化が１００年を迎えるのではなく、まだ１００年しか経とうとしていない、と思うべきかもしれません」
　学問や哲学といった分野も数百年や千年以上の時を経て洗練されていった。それから比べれば、現代魔法はまだまだ研鑽が可能な技術である……と甘楽は魔法陣を見ながらそう思いつつあった。
「これは私なりの勘みたいなものですが、彼はきっと我々の想像すらも飛び越えていくことでしょう。この世界の誰もが彼を意識せずにはいられなくなる……そんな気すらさせてしまう生徒など、この先会うことは決してないでしょうな」
「……そうかも、しれませんね」
　個人的な合理的主義を主体として行動している甘楽からすれば、「勘」という要素などは本来用いるべきではないものと思っている。だが、その彼にそう言わせてしまう悠元の存在は、この世界において最早見逃せない存在となりつつある、とジェニファーは実験メンバーが去っていった先を見つめていた。

◇　◇　◇

　今回の実験メンバーが生徒会室に集まったところで、悠元は一つの提案を切り出した。それは、実験の成功を祝っての細やかなパーティーみたいなものだった。その場所は無論、達也らの行きつけである喫茶店「アイネブリーゼ」で行われた。
「では、あーちゃん。音頭は任せたよ」
「ちょ、ちょっと佳奈先輩！　だからあーちゃんは……」
「ダメ？」
「うぐっ……もう、いいです」
　現生徒会長であるあずさでも、先輩兼恩師とも言える佳奈を前にあだ名呼びを認める形となったことには周囲から苦笑にも近い笑みが漏れた。
「コホン。それでは、実験の成功を祝って……乾杯！」
　ささやかなパーティーというか、ちょっと豪勢なお茶会のような形となった。メンバーの大半が女性なため、自ずと男性陣と女性陣で固まる形となったわけだが、ここで端末を見ていた達也が「おや？」と

いう表情を浮かべた。
「凄い量の記事だな……魔法科高校での『恒星炉』実験と、各方面の魔法師排斥報道に対する抗議声明に加えて天皇陛下の『おことば』、そして神坂グループによる国内マスメディアの大規模買収とは」
「うーん、これは一気に何かが動いたって感じだよね。神楽坂君はどう思う？」
「さあ、こればかりは何者かの陰謀なのでしょうが……お、ＵＳＮＡで魔法師排斥の大勢力を誇っていたメディアの買収報道か。総額２００億ステイツドル…円換算で約２５兆円とは」
悠元はそう言いのけたが、達也はここまでの絵を描いた人間が悠元だということを察していた。まさか、国内のみならず国外にまで工作して魔法師排斥の芽を潰す目論見だとは思いもしなかった。若くして魔法のみならず、政治や経済に精通している手腕……敵に回せば最も手強く、味方にすればこれほど心強い人間はいないだろう。
達也としては、大手の報道記者に対してはその動きを予測してカウンターの世論操作を仕掛けることも考えていた。だが、悠元はその土台から根本的に変革することで神楽坂家の影響力を強めるだけでなく、魔法師排斥に繋がる流れを止めたのだ。
莫大な資金力がなければ成立しえない力技だが、それを平気で出来る彼は正しく十師族の枠組みを超えた存在であると思ったのだった。
この後、一番の功労者ということで悠元の両端に深雪と泉美が座り、互いに笑顔で睨み合うという構図に、悠元は周囲の人間から微笑ましさと苦笑が入り混じったような視線を浴びることになったのだった。

◇　◇　◇

細やかなパーティーを終え、司波家に戻って夕食を終えて寛ぎ始めたところで達也は改めて悠元に尋ねた。
「悠元。あの時に出てきた記事はお前の策の一環か？」
「正解。どうせ大手の報道機関が白紙記事にするか偏向報道するのは目に見えていた。あそこで声を上げていた連中の素性は全て頭の中に入っていたから、その報道機関を中心に買収工作を一気に仕掛ける

よう仕向けた。報道機関の本社ビルがある場所は大半が神楽坂の不動産扱いだから、株式の買収と賃貸料の値上げを天秤に掛けさせた形だ」

そんな裏技めいたことが可能だったのは、第三次大戦の影響が根強い。東京も空襲を受けた影響であちこちに所有者不明の土地が出来てしまい、それを都市再開発の委託管理という形で神楽坂家が接収したのだ。

この国が復興していくにつれて各企業のビルが立ち並ぶようになり、土地の賃貸料で神楽坂家はかなり潤っている。これは余談だが、十師族が所有している企業の土地も神楽坂家所有の者が多く、ＦＬＴの敷地も神楽坂家の所有になっているほどだ。

「ＵＳＮＡだけでなく、欧州や主要国の反魔法主義メディア買収もその一環……まあ、海外に土地は持ってないらしいが、その辺は母上や爺さんのコネに加えて俺自身のコネもフル活用した。使った総額だが、現時点で実質４０兆円は下らないだろう」

「よくそんな大金を動かせたな」

「まあな……その大半を占めるのは『ブランシュ』や『無頭龍』を始めとした反魔法主義結社を潰して出てきた隠し財産や隠し口座だけれど」

剛三との世界横断旅行で、以前功績の殆どを剛三に被せたことは話したが、その実である報酬は全て受け取る羽目となった。

その中には剛三が「進路上の邪魔」と言って叩き潰した反魔法主義の魔法結社まで含まれていた。それが当該国の政府に認められていようがいまいが、剛三あるいは悠元に手を出そうとした時点で剛三は潰すと決め、そして完膚なきまでに叩き潰していた。

その考えの根底にあるのは四葉真夜の誘拐事件なのだろう。その復讐劇に参加していたからこそ、彼の身内を害しようとする輩への怒りは人一倍強いのかもしれない。手を出そうとした相手に関してだが……舐めて掛かった罰としか言いようがない。ご愁傷様である。

結果として、その旅行だけでも潰した反魔法主義の結社や組織の数は１００以上（というか、面倒になって数えるのを止めた）。押収した

隠し財産や隠し口座を含めると、概算で５００兆円を超えてしまったのだ（本来なら各国の国庫に納めるべきなのだが剛三が押し通し、物自体は全て『鏡の扉（ミラーゲート）』で上泉家の隠し倉庫に放り込んだ）。とても個人で管理できるレベルを超えてしまったため、剛三に財産管理自体を依頼した形だ。現在は悠元が神楽坂家の人間となったことで財産管理は『悠元の個人資産』という形で千姫の手に委ねられている。

「悠元さんって、実は個人でも大金持ちなのですか？」

「図らずもそうなった、というのが正しいかな。大体は爺さんの逆鱗に触れた連中が復讐劇を戯言だと思って舐めて掛かった代償だが」

「お前の祖父は本当に人間なのか？」

「俺にも分からん。腹が減った余り妖を喰った、と言っても嘘に聞こえなくなりそうだ」

　某アクション漫画宜しく丸太を投げてそれに飛び乗り、それだけで日本からアメリカ本土まで一度も着水することなく本土に到達した時点でもおかしいというのにだ。何故知っているのかと言えば、旅行の初めにそれの練習をさせられたためだ。結果として『無敵砲弾（インビンシブル・カノン）』なんて魔法も出来てしまったわけだが。

　悠元の言葉には、流石の水波まで苦笑を滲ませるほどだった。

「ま、そんな個人の事情はさておくとして……仕込みはとうに済ませた。ただ、色々忙しくなるのは確実だがな」

　別にフラグめいたことを言ったわけではなく、自分も関わっているからこその発言であるが、これで周公瑾のメディア工作も完全に頓挫することとなるだろう。

　ここでふと思ったことだが、原作における顧傑と周公瑾の最期に明確な違いが存在している。それは、周公瑾の精神が光宣を乗っ取ろうとする描写はあっても、顧傑にそれが無かったことだ。周公瑾に関しては、最初は僵尸術によるものかと思ったが、それならば周公瑾の師である顧傑が使えない道理が不明である。

　だが、この矛盾を解決してしまう一つの存在がある。それは「パラサイト」だ。仮に周公瑾がパラサイトであれば、他の人間への肉体を乗っ取る技術を会得していても不思議ではなく、肉体を失った別のパ

ラサイトに新たな宿主を与えることも可能となる。
そして、「パラサイドール」のことを鑑み、光宣が周公瑾を制御下に置いた事実から推測すれば……その可能性は極めて高い。尤も、昨年春に周公瑾の監視を捕捉した際、パラサイト憑依者に見られるプシオンの波長を感じなかったところを見るに、恐らく対抗魔法でパラサイトが本来持っていた性質が変質化し、サイキックまでは有することが出来なかったのだろう。
顧傑とは明確な師弟関係とは言い難く、どこか憐れむような感情を向けていたのは引っ掛かった。自分の師に「亡霊」などと言えてしまう様な性格など自分には持ち合わせていないが、そう言わせてしまう彼は恐らく……人の一生では収まりきらないかなり長い時間を渡り歩いてきたのかもしれない。
長生きするのは勝手だが、要らぬ迷惑を押し付けないでほしいものだと思う。
閑話休題。
メディア工作の一環としてＦＬＴが発表する『常駐型重力制御魔法式継続熱核融合発電』の実現可能性の論文。尤も、小規模の発電実験までは既に成功しているが、ここから先は大規模の実験施設が必要になる……と考えた際に候補として出てきたのは南盾島である。
幸い、島北西部の研究所跡地は達也の『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』によって更地となっているため、建て直し自体はそこまで難しくない。防衛陣地自体は更に改造して国防軍でも逆に引いてしまう様な兵器群を配備するつもりだ。それこそ、国外からの攻撃を想定した装備――――悠元が独自開発して実現させた対極超音速ミサイル迎撃装置『イージス・クレイモア』も含めて。
『イージス・クレイモア』は直径約1メートル程度の鉄球内部に金属片と特殊爆薬を組み込んでおり、爆発半径３００メートルに約1センチ程度の金属片が最大速度マッハ6まで加速した状態でばら撒かれる。この鉄球を同時に約１００発発射・爆発することで超音速で飛翔する金属片のフィールドを展開し、通過したミサイルを破壊するというシステムだ。

爆発半径がその程度で済むのは、『イージス・クレイモア』の制御システムに魔法を使用するためだ。とはいえ、南盾島の防衛陣地に対して物理障壁の術式を使うだけなので、想子の消費自体はかなり抑えられる。

使わずに済めばいいが、相手がそれを許してくれるかは未知数のレベル。だからこそ、未だ見ぬ危機に対して備えは万全に整えておくつもりだ。国防軍が政府の論理に従ってしまう以上、最終的に頼れるのは自分自身の力だと誰よりも実感しているからこそ。

◇　◇　◇

諸外国の反魔法主義のメディア買収は大々的に報じられた。何せ、日本の神坂グループによる業界大手クラスの買収劇となれば、一体何事かと訝しむ者は多い。それは無論、当事者の一つであるＵＳＮＡでも同じであった。

財界ですら二の足を踏むような相手を買収し、更には即日上層部を大々的に刷新して取り扱うニュースも魔法師を擁護する記事が一気に増えた。スポンサー側も困惑を隠しきれないが、一番困惑したのは他でもない政界。その中心とも言える大統領官邸（ホワイトハウス）の大統領執務室にて、リーナとバランス大佐が大統領の呼び出しを受けていた。

「バランス大佐にシリウス少佐、急な呼び出しについては済まない」

「いえ、大方の事情は聞き及んでおります。それで、本官とシリウス少佐を呼んだ理由をお聞かせください」

「うむ。これが3時間前――日本の魔法科高校で行われた実験の映像だ」

大統領が手元のスイッチを入れると、モニターには魔法科高校で行われた魔法実験の様子が映し出されている。安全性を考慮してからなのか、遠目の撮影であったが……リーナはその中に顔見知りがいることに気付いた。

その様子を見たバランス大佐がリーナに尋ねた。

「少佐、分かったのか？」

「……ええ。先日私が留学した第一高校の友人たちが数人ほど。それと……セリアも加わっています」

「やはりか……私もそうではないかと思ったが……」
魔法の実験――『重力制御魔法式核融合反応』自体も驚きだが、その一端に元スターズの人間が関与しているという事実だ。確かにセリアの技量ならば電磁気系統の魔法を得意としているため、実験に参加していてもおかしくはない。
それ以上に、達也や深雪の信頼を勝ち得ている事実にも驚きを隠せなかったのだ。
「それで、この実験を受けてＵＳＮＡ政府は何と？」
「何も出来ない……いや、『何も出来なくなってしまった』というのが正しいな。先程、買収されたメディアが日本のＦＬＴで発表された論文についてのニュースを取り上げていた。先程の魔法科高校の実験を踏まえてのもので、国防総省（ペンタゴン）が精査した結果、『重力制御魔法式核融合発電』の実現可能性が現実的なラインに乗りつつあると報告を受けたのだ」
「……それは、本当なのですか？」
重力制御魔法式核融合発電――『恒星炉』の実現の可能性。これが実現すれば、現状のエネルギー産業分野だけでなく、多分野において大きな影響を与えることは必至だろう。それも、国外の力を一切借りることなく日本単独でその道を見出したという事実に政府内は混乱を極めている、と大統領は疲れきったような表情で呟いた。
「メディア買収工作は、我々の先日の非礼に対する答えなのかもしれぬ。バランス大佐にお願いしたいのは、軍上層が逸ってかの国に圧力を掛けない様、入念に釘を刺してほしい。とりわけウォーカー大佐は中々に野心家だと聞き及んでいるのでな」
「了解しました……かの国の戦略級魔法についても？」
「同様だ。下手に喧嘩を売って剛三殿に殺されたくないのでね」
バランス大佐が先に退出した後、大統領は一息吐いてからリーナと向き合った。それは大統領としてのものではなく、一人の身内としての表情であった。
「リーナ……どうやら、留学はお前にとっても少なからず影響を与えたようだな」

「大統領……いえ、お祖父様。私にはまだ、分からないことが多すぎます」
それは、自身が軍に入って本当は何がしたかったのか……それが分からなくなったからだ。双子の妹と袂を分かち、南盾島では彼女に対して敗北を喫した。人質としてセリアと話す機会はあったが、その表情は軍にいた時よりも明るかったのが印象的だった。
どうして、そんな風に笑っていられるのか……軍の事ばかりしか知らないリーナからすれば、セリアのすることや趣味に触れることで少しは見識を広げたつもりでいた。
「当面はシリウスの力を必要とするだろう。新ソ連のこともある故な……だが、お前がその役目を返上したいと願うのなら、私はいつでも受け入れよう。きっと、セリアもリーナが本当に望んでいるものの為に動いてほしいと思っている筈だ」
「……」
だが、結局は妹のことを何も理解できていなかった。どうして、簡単に祖国を捨てることが出来たのか……いや、理由などとうに分かっていた。彼女は本当に望んだもののために祖国を離れ、愛する者と一緒にいることを望んだ。そのためならば、例え国を離れることになっても後悔はしないと心に決めていたのだろう。
「私には……やっぱり、まだ分かりません。ですが、心のどこかで引っ掛かりを覚えているのも事実です。この答えは、自分でしっかり決めさせてください」
「……そうか。リーナがそう決めたのなら、私から言えることはない。頑張りなさい！」
「イエス、サー！」
大統領の激励も含んだ言葉に、リーナはその場に立ちあがって敬礼をした。だが、その表情は軍人としてのリーナではなく、一人の女性としてのものであった。

理解はするが、同情はしない

実際のところ、メディア買収工作自体は魔法科高校での実験を待つことなく実行に移された。正午を切った時点で神坂グループが声明を発表し、主要メディアの株式公開買い付け（Ｔａｋｅ　Ｏｖｅｒ　Ｂｉｄ、通称：ＴＯＢ）を宣言したのだ。買い付け対象のメディア関連企業は全部で５０社以上、総額４０兆円を超える突然の発表に政財界が動揺に包まれた。

更には、ＵＳＮＡやイギリス、オーストラリア、インド・ペルシア連邦の大手メディア迄買収する計画まで明かされ、表向きの内容は「魔法師に対する偏見的な意見を排除し、全面核戦争という最悪の悲劇を回避すべく、魔法師社会の積極的な情報発信を目的としたメディア基盤の獲得」となっている。

当該企業の上層部は戦々恐々だったが、株式買付にあたっての条件で無利子の融資を受け入れられるという破格の飴と、賃貸料の値上げという鞭を比べたところで拒否できる理由など存在しなかった。

野党議員の魔法科高校への事前相談なしによる訪問に対する抗議文は、魔法科高校：第一高校校長・魔法大学学長・魔法協会会長・防衛大学学長の連名を以て神田議員と取り巻き記者の各報道機関、そして七草家に送られる形となった。

国防軍が魔法科高校を洗脳しているという〝謂れ無き風評被害〟は、未来を志す若者の道を妨げて彼らの選択肢を狭めると共に、昨今の国際情勢を鑑み、国益を害する意図を誘発させる行為はこの国の存亡を揺るがしかねない所業であり、断固として抗議の意思を示す形となった。

加えて、魔法科高校に実験機材を提供したＦＬＴから『常駐型重力制御魔法式継続熱核融合発電』に関する論文が公式サイトにて日本語や英語を始めとした２０か国語による翻訳版も添えて公開された。翻訳作業自体は全て悠元が担当しており、『言語理解』というチートで乗り切った形だ。

そして、今上天皇よりの「おことば」がテレビやネットといった国

内の映像媒体全てで放送され、昨今の魔法師排斥の流れに対して異を唱えると共に、この国に生まれ育ったものは等しくこの国の国民であり、魔法の有無を差別にしてはならないと言及。核兵器を持たずして独立した国家を保てている理由に魔法という存在を口にされた。

これは非魔法師に対するものだけではなく、魔法師に対してのものでもある。魔法を力として認めるが、あくまでも守るためだけの力であり、〝心ある〟同胞を傷つける力にしてはならないと。

第一高校での一科生の優越感と二科生の劣等感は、ある意味でこの世界における魔法師と非魔法師の縮図なのだろう。

国会自体は大亜連合絡みの献金問題で紛糾することとなり、民権党が党としての大方針を巡って諍いを起こしてしまい、結果的に複数の党へと分裂してしまった。民権党以外の野党にも影響が及び、与党側の親大亜連合派も献金問題でメディアに取り上げられることとなった。

スキャンダルクラスのネタとなれば、「魔法師排斥の記事なんて書いてる場合じゃねえ！」と言わんばかりに買収されなかったメディアもそちらへ一気に傾倒していき、最終的には魔法師排斥関連記事が１００本の記事の中で１本が乗るか否かの頻度へと落ちた。

何にせよ、この間引きで外国勢力に影響を受けずこの国の国益を真剣に考える議員が残ってくれたことは上々だろう。

「悠元、お父さんから聞きたいことがあるって」

「まあ、そうなるだろうなとは思った」

雫経由で潮からの問い合わせがあり、今回のメディア買収工作は魔法師の人権を本当に守る意味での〝本気〟を見せつける必要があったということを説明。神楽坂家と上泉家が中心に行っているため、対象の企業に関して反魔法主義に繋がらなければ他社との契約を保持する姿勢であることを伝えると、向こうも納得してくれていた。どの道、達也の誕生日パーティーで北山家を訪れることになるため、詳しい事情説明はそこですることになった。

翌日――４月２６日。魔法師排斥の記事は一気に鳴りを潜め、先日の魔法実験に関する肯定的な論調や好意的な記事が一気に増えた。

これを見て励みに思う生徒の姿を見ていると、その労力を割いた側としては一応冥利に尽きると思った。
　エルンスト・ローゼンのテレビインタビューの映像にレオが興味を示すものの、幹比古とエリカはだんまりであった。二人の事情をよく知る幼馴染だからこそ、敢えて触れないのも優しさだろうが……その様子だと『何か知っている』と白状しているようなものだ。
「エリカ、幹比古。今日の放課後は道場に来い。拒否権は認めんからな」
「……はい？」
「ええっ……？」
　そんなに不貞腐れているぐらいなら、根性諸共叩き直す……この辺は剛三の受け売りで、良くも悪くも彼の影響を受けていると内心で独り言ちる。どうせ今日は非番のため、生徒会役員である達也や深雪をただ待つだけでも暇だったし、幹比古の風紀委員の巡回当番にも該当していないと把握してのものだ。
　ただ、これは『ダブルセブン編』……理璃というプラスワンの要素は働いているが、予測通りというか予定調和の通りに琢磨が動いてしまったのだった。
「はい、今日はここまで」
「う、うえぇ……」
「ここまでやるんだね……」
　鍛錬が終わり、悠元は平然と立っているが、エリカと幹比古は疲れのあまり畳の上で上半身だけ起こしていた。やったことは新陰流剣武術の基礎中の基礎――体力作りの一環で自身の想子体を活性状態にしたまま走り続ける。ただし、足が接地する瞬間にその活性化を切る――つまり、活性化のオンオフを断続的に繰り返すことで想子制御の精度を測るためのものだ。新陰流剣武術の初伝はこの断続活性化を最低でも３０分は持続させることが要求される。
　これには理由があり、新陰流剣武術における奥義の大半が想子を特定の個所に収束させるだけでなく、その収束自体の瞬発力まで求められるためだ。このオンオフ自体を自在に出来るようになれば、必要な

個所に必要最低限の想子を収束させることも可能となる。現状だとエリカと幹比古の体外に自身の想子が漏れ出ているため、最終的には一切漏らすことなく断続活性化が出来るようにならなければならない。

　すると通信機からの着信音に気付き、懐に固定していた通信機を取り出して耳につけると、聞こえてきたのは深雪の声であった。

『悠元さん、今はどちらに？』

「軽運動部の道場だよ。それでどうした？」

『それが、実は……』

　深雪の話では、琢磨と香澄がＣＡＤを構えて私闘を始めようとしたところで雫と森崎が割って入り、森崎の位置に入らないように雫が領域干渉で二人の魔法発動を抑え込んだ。二人からすれば十師族でもない雫が強力な領域干渉を張ったことに驚くが……雫の有無を言わさぬ言動に対し、琢磨は反抗して強引に魔法を発動させようとしたため、森崎が止むなく気絶させたとのこと。今は風紀委員会本部で琢磨と香澄が事情聴取を受けているところらしい。

「事情は分かった。だが、どうして俺に？」

『それなのですが、この状況だと理璃ちゃんよりも悠元さんが適任であると思いまして』

「……分かった。すぐに着替えて生徒会室に向かう」

　流石に十師族としての振る舞いにとやかく言うつもりはないが、その喧騒を止めるとなれば同等以上の実力者が必要となる――――流石に同学年の諍いというか下手すると琢磨が退学になりかねないため、理璃には荷が重すぎるだろう。通信を切ると、ようやく立ち上がった幹比古とエリカが興味津々そうに見ていた。

「エリカ、言っとくけど藪蛇にはなるなよ？」

「流石にあたしでも師族の喧嘩に首は突っ込みたくないわよ。ねえ、ミキ？」

「同感かな。それに、僕の名前は幹比古だって」

　ともあれ、素早く制服に着替えて道場の戸締りをすると、体術でも使用頻度の高い跳躍術式で校舎の屋上を飛び越え、一路生徒会室に向

かった……流石に校舎内で自己加速術式は使わなかったが、生徒会室に入ると丁度模擬戦の許可証をあずさから受け取った達也がいた。深雪や泉美がここにいないのは、恐らく風紀委員会本部にいるとみられた。
「悠元か。それに、エリカと幹比古も」
「あー、閉門まで時間はないだろうし、そっちを優先させてくれ。いくら俺でも基本的に部外者の立場だからな」
　悠元の言葉に達也は頷くと、そのまま風紀委員会本部へと続く直通階段を降りて行った。悠元の言い放った発言は別に責任逃れということではなく、既に会頭である服部が動いている以上、副会頭とはいえ口を出せる状況にないからだ。すると、理璃が悠元に近付いて頭を下げていた。
「ごめんなさい、神楽坂先輩。本当なら私が止めるべきだったのですが……」
　実は理璃も琢磨と香澄の近くにいたのだが、『ファランクス』自体迂闊に見せられるものではないため、戸惑っていたところを雫と森崎が介入して事なきを得たと説明してくれた。これには悠元も首を横に振った。流石に十師族となってから日も浅いためと、理璃に克人と同じ動きは求められないと理解していたためだ。
「理璃ちゃんが悪い訳じゃない。そもそも、必要な時に適切な魔法を選択するということはまだ習い切れてないんだろ？　それに関しては経験を積むしかないからな」
「口を挟むようだけど同感ね。あ、あたしは千葉エリカ。こっちは吉田幹比古で、通称ミキ」
「勝手に通称にしないでくれ。コホン……吉田幹比古という。宜しく、十文字さん」
「生徒会会計の十文字理璃です。千葉さんと吉田さんのことは兄から色々と聞いております」
　そんなこんなで理璃、エリカ、幹比古の自己紹介が終わったところで、あずさが声を掛けてきた。どうやら、彼女と理璃は留守番という形でここに残るようだ。

「あの、神楽坂君。早く追いかけないと模擬戦が始まりますよ？」
「……そうですね。では、部外者ではありますが、留守番をお願いします」
　どこの演習室とは聞かなかったが、想子の流れで模擬戦をやっている場所の見当がつくため、その流れを見た上で悠元は迷うことなく歩いていく。すると、エリカが問いかけてきた。
「ねえ、あたしの家は百家だから師族二十八家のことは良く分からないけど、今年の一年って強いの？」
「そうでなかったら、成績上位を占めるだなんてことにはなってないよ」
「確か、十文字さんに七宝君、七草さんの二人の順だったっけ」
　今年度の場合、他の優秀な成績を収めている生徒よりも頭一つ以上抜けている形だ。尤も、昨年度の場合は悠元と深雪、燈也という十師族関係者のせいで頭一つという表現で済まないことになってしまった。別の意味で達也も教職員の興味を買ったのは事実である。
　第二演習室に入ると、達也が模擬戦をする香澄と泉美、琢磨にルール説明をしているところで、ドアの開閉音で視線が向けられるが、「今は模擬戦に集中しろ」という視線を送って意識を逸らさせた。
　昨年、達也と服部、そして悠元と克人が模擬戦を行った第三演習室と異なり、縦に長い空間――――魔法による制限エリアかつ異性間の模擬戦で採用されるノータッチルールのためだ。立会人は深雪、審判は達也が務めているわけだが、達也がルール違反の場合は止めるという言葉に「やれるものならやってみろ」と言わんばかりの表情を見せていた。
「……アイツ、達也君を舐めてんじゃない？」
「仕方がないよ。達也の実力はそう簡単に推し量れるものじゃないから」
　魔法科高校の基準に照らし合わせれば、入学当初は二科生レベルだが魔法理論は既に超高校生級の領域にいる。そして、常識外れた二つの固有魔法に加えて戦略級魔法もあり、加えて魔法の無効化に関しては十八番。エリカの言い分も理解はするが、達也の真の実力はそう簡

単に拝めやしない、と幹比古が呟いた。
悠元に関しては、どちらにも視界を移動させずに目を瞑っていた。これには、いつの間にか隣にいた雫が話しかけた。
「……何か考え事？」
「いや、考え事というよりも、この模擬戦の結果が見えてしまったからな。余計なことは口走りたくないだけだよ」
琢磨の足元にあるのは間違いなく『ミリオン・エッジ』の発動媒体。その術式自体は〝視たことがある〟のだが、大きく分けると紙媒体を剃刀のような刃と化す状態改変術式と群体制御の術式の二つで構成されている。
しかも、琢磨本人は気付いていないだろうが、一定空間内――密室状態での『ミリオン・エッジ』は殺傷性ランクが〝上がる〟のだ。何故かと言えば、『ミリオン・エッジ』を最大限に生かす方法があるとするなら、それは銃器や刀剣類、更にはＣＡＤが持ち込めない密室上で特定のターゲットに致命傷を負わせる暗殺の用途が一番理に適っているためだ。
いくら家の誇りを賭けた戦いとはいえ、相手を殺傷してしまう可能性のある魔法を持ち込んだ時点で達也を舐めて掛かっているも同然だ。最悪、反則負けでも相手を貶めれば気が済むつもりなのだろうが……そんなことで最強なんて誇られる方が甚だ迷惑でしかない。
そんなことを考えていると、達也の合図で両側から魔法が飛び交っている。流石に序盤から相手を殺傷しかねない魔法は飛んできていないが。悠元は腕を組んで壁際に寄り掛かると、雫が右隣に立ち、そしていつの間にかいた深雪が左隣に寄って問いかけてきた。
「悠元さん、どちらが勝つと思われますか？」
「……良くて七宝の反則負け。悪くて双方の反則負け。それが結論かな」
「どちらかが勝つ、なんてことはないの？」
「ないだろうな。これで琢磨の相手が深雪か雫、セリアだったら結果は違ってくるが」
深雪の場合は『ゼロ・ニブルヘイム』、雫は『フォノンティアーズ』

か『サラウンド・エアーマイン』、セリアは『ムスペルスヘイム』――――いずれも『ミリオン・エッジ』を完封できる魔法を持っている。尤も、三人の場合は領域干渉で琢磨の魔法発動を封じれるため、態々大技を使う必要もない。

すると、雫の隣に移動したセリアが尋ねてきた。

「でもさ、お兄ちゃん。七宝が『ミリオン・エッジ』を持ってきた時点で相手の尊厳どころか女子の柔肌まで傷つけるつもりってどうよ？」

「そう言ってやるな。七草家は元々『三枝（さえぐさ）』だが、『多種類多重魔法制御』だけに拘らず『群体制御』にまで関わって今の地位を得た。その努力を『七』の家からすれば『掻っ攫った』と捉えても仕方がない」

その経験は悠元が一番感じていたことだ。

今年の正月に神楽坂分家の次期当主らから言われた言葉がそれを物語っている。別に神楽坂の血を引いていないわけでもなく、現当主の姉の孫という確かな血筋を持っているのにもかかわらず、十師族の人間ということで家の乗っ取りを警戒されて刃を向けられた。

自分でもこれだけの敵意を向けられたのだから、七草家はその数十倍の敵意を向けられたのかもしれない。それに対して深く知ろうなどというつもりはないが。

「悠元も、そういうことがあったの？」

「今年の正月にな。尤も、その後で分家の現当主達が深く土下座をしてきたから許したよ。次期当主らの廃嫡も含めて厳しく教育するとさ……そこは俺の領分じゃないから、そちらの気のすむまでやってくれとしか言えなかったが」

自分はともかく、千姫が次期当主らに対して「妾の決めた後継者が不服と言うのならば、彼よりも優れた技量を見せてみるがよかろう。今この場でな」と言い放ち、結果として彼らが逃げるように去っていったのは哀れという他なかった。その後、修司や由夢からも謝罪を受ける形となった。二人が千姫の愛弟子に指名されたときもひと悶着あったらしく、その際も千姫から同じことを言っていたらしい。

なお、千姫曰く「あ奴らを次期当主に指名する可能性は、ビッグバ

ンが起きてもう一つの宇宙が誕生する確率かのう」と言っていた。ほぼゼロじゃねえか……とは口に出さなかったが。

振り向きざまに左ストレート

琢磨としては、立会人と審判――――深雪と達也が七草家と深い関係にある――――と真紀に仄めかされていたためか、ハンディキャップ戦というかイカサマ戦のように思っていた。

そして、琢磨からすれば雫とほのかは七宝家があるべき地位を取り戻すために是非とも味方につけたい人材であった。ここで強さを見せつければ口説き落としやすくなる、とそう思っていた。まあ、琢磨のメンタリティが年相応な考え方であり、達也や悠元のように達観しているのが年に似合わないのが普通なのだ。

そのことを認識したセリアの口から出た言葉は、名前こそ控えたものの琢磨に対しての非難であった。

「……何も分かってない。何も知ろうとしないなんて馬鹿なのかな？

情報源を一つに頼り切るなんて、結果として狭量になるのに」

「そう言ってやるなよ、セリア。野心と言うのは、時として人の視野を狭めかねない諸刃の剣なんだから」

一方で、香澄と泉美からすれば迷惑という他ないだろう。元々無欲に近い思考の持ち主だが、泉美に関しては悠元という存在と出会ったことで一種の欲が出ていた。とはいっても、自分の領分が汚されない限りは琢磨がどのような行動を取っても看過するつもりなのは間違いなかった。事実、勧誘週間でのトラブル後は琢磨と鉢合わせしない様に心掛けていたようだ。

彼女らは琢磨とのトラブルも「これで終わりにしたい」という思いが見て取れた。

いくら十師族や師補十八家とはいえ、魔法科高校への入学にその専用の枠など設けられていない。入試自体も他の同学年の生徒と同じ内容が課されているのは悠元が一番よく理解している。

そして、その魔法科高校の入試で上位に入るということは、稀少かつ優秀な魔法技能と知識を有しているからに他ならない。琢磨は圧縮した空気弾を放つ『エア・ブリット』で攻撃していたが、泉美の領域干渉に阻まれていた。だが、魔法はキャンセルされても物理法則改

変によって生じた結果はある程度持続することを見抜き、それを以て攻撃を仕掛けて二人の連携を崩そうとするが、香澄と泉美がお互いにカバーしあって危機を脱した。

すると、二人の想子の流れが変わったことに気付く。そして、放たれる魔法は気体制御魔法――――空気中に含まれる窒素の密度を引き上げ、空気の塊を移動させる収束・移動系複合魔法『窒息乱流（ナイトロゲン・ストーム）』。香澄と泉美の乗積魔法（マルチプリケイティブ・キャスト）によるものだ。

複数人による一つの儀式で、単独では不可能な大規模魔法、高難度魔法を展開する技術は確かに存在する。古式魔法では例こそ少ないものの、伝承されている術法として確立していたり存在するのは間違いない。何せ、天神魔法の『天照（アマテラス）』と『月読（ツクヨミ）』の正式発動に要する各属性魔法発動――――正式名称を陰陽五行七天陣（いんようごぎょうしちてんじん）と呼ぶ魔法陣がその最たるものだ。その魔法陣は複数人による儀式魔法として確立した天神魔法の技術であり、古来は二つの究極魔法と切り離す意図を持たせるため、皇族の吉兆を占うための〝天文占術〟として伝えられていた。

話を戻すが、本来複数人で同一の魔法を同一座標に行使した場合、一番干渉力の高い人間の魔法が行使されてしまい、他の人の魔法干渉力だけが残ってしまう。一番分かりやすい例は九校戦に行く途中で遭遇した自爆攻撃の際、複数人が魔法を放って車を止めようとした結果、相互に干渉しあって魔法の効果が発揮しなかった現象だろう。

だが、香澄と泉美は同一の魔法に対して魔法構築に関する制御と干渉力に関する制御を分担することで、二人の魔法力を一つに合わせることが出来る。これは、彼女らが同じ遺伝子のみならず魔法演算領域の特性まで同一のものを備えているからこそ可能としている技術。事実、この試合を見ているセリアもリーナとの協調で戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』の威力を完全制御するほどの離れ業をやってのけていた。

とはいえ、『窒息乱流（ナイトロゲン・ストーム）』の制御が甘いのは彼女たちの研鑽不足によるものだろう。

（気体流動の制御が緩すぎないか？　……いや、『エアライド・バース

ト』前提の考え方はダメだな）

三矢家の秘術扱いとなった『エアライド・バースト』はその性質上、設定する変数領域がかなり多岐に渡る。気体密度や想子球内の設定温度、定率制御（フラットドライブ）フィルターや圧縮空気を包む想子（サイオン）バリアの制御に加えて球体自体の運動エネルギーや炸裂させる座標と時間、距離の演算まで必要となるため、普段は殆どの変数を定数化させて使用することが多いが、悠元の場合はそのほぼ全てを変数化させて使用している。

その最たる理由は、状況に応じて使用することが前提の魔法を定数化すれば、そのパターンが使えなかったときの対処に困ってしまうと考えた。それと、桁外れの処理能力を誇る魔法演算領域を錆びさせないためには、これぐらいの演算処理を許容範囲内にしないといけなかったからだ。

そして、彼女らの魔法に対して咄嗟に全方位型の気密シールドを展開していた琢磨が片膝をつき、足元にあった本のハードカバーを閉じる。直後、勢いよくハードカバーを開くことで全７２０ページ・３６０枚にも及ぶ紙は４ミリ四方の正方形の紙片になって宙に舞う。その数は総数にして１０３万６８００片。一見ただの紙吹雪にも見えるだろうが、その全てが方形の薄い刃へと化して、二人へと襲い掛かる。これが七宝家の得意とする群体制御による刃の群雲――『ミリオン・エッジ』である。

香澄と泉美も無論、『ミリオン・エッジ』を防ごうと『熱乱流（ヒート・ストーム）』のアレンジ魔法で焼き尽くそうと試みる。

この状況においては、どちらも相手にかなりのダメージを与えかねないのは明白だろう。

「そこまでだ！」

無論、審判である達也も同様の判定を下しつつ、『シルバー・ホーン』を取り出して『術式解散（グラム・ディスパージョン）』で三つの魔法を即座に解除した。バラバラに砕け散る魔法式と、その破片をまき散らす想子の奔流に巻き込まれない様、悠元が物理障壁と想子障壁（サイオンウォール）を同時展開して余波を完全に抑えこんだ。

攻撃性魔法が突如消えたことで何が起きたのかを理解できていな

い1年生組に対し、達也の同級生や上級生組は納得したような表情を浮かべていた。十三束も驚きはしたものの、達也が何をしたのかは理解できたようであった。
「この試合は双方失格とする」
　達也のこの言葉で、思考が凍結（フリーズ）していた1年生組がようやく復活し、最初に声を上げたのは香澄であった。ただ、原作とは違って達也の実力を見ているためか、興奮しつつも抑えるように声を上げた。
「司波先輩、その裁定の理由を聞かせてください」
「最初にも伝えたことだが、致死性の攻撃あるいは治癒不能な怪我を負わせる攻撃は禁止、危険だと判断した場合は強制的に試合を中止させると。それは分かっているな？」
「……はい。冷静になって考えてみれば、少々やり過ぎたと思っています。反則負けという結果も甘んじて受けるつもりです」
「香澄ちゃん……」
　いくら非公式の試合とはいえ、乗積魔法（マルチプリケイティブ・キャスト）まで使って勝ったとしても、それは香澄の考えていた強さの示し方とは程遠いと感じていた。その考え方の根底にあったのは、この試合を見ていた悠元が九校戦で見せた魔法の数々である。
　香澄も同じ魔法師として悠元に憧れる一人であり、アイス・ピラーズ・ブレイクとモノリス・コードにおいて相手を寄せ付けずに圧巻の強さを見せたが、それは九校戦でのルールに基づいて威力を完全に制御しきった上での強さであると感じていたし、同席していた元継や千里からも悠元の強さを教わった。
　勝手に試合を止められたことよりも、憧れの人がいる前で失態を犯すところだった事実に対して香澄は反省していた。これには泉美も異論を唱えられないと判断していた。
　だが、達也の裁定に納得がいかない琢磨は食って掛かったのだ。
「反則負けってどういうことですか!?　あそこで勝負を止めていなければ、間違いなく『ミリオン・エッジ』は七草に届いていました！」
「つまるところ、俺が手を出さなければ高温に熱せられた百万以上の刃が高校1年生の女の子の柔肌を蹂躙していた、と主張したいのか

？」
　達也から発せられた予測の結果論に対し、複数人から控えめに噴き出す声が聞こえた。これには琢磨の顔に血が上り、誰の目から見ても激昂に近い怒りを感じているのは間違いないだろう。
「ならば七宝、お前の反則負けだ。『ミリオン・エッジ』をまともに浴びせればどうなるかぐらい、理解できないとは言わせない」
　『ミリオン・エッジ』は総計１００万以上の刃が襲い掛かる。良くて全身切り傷になるのは間違いないし、最悪致命傷を与える可能性もある。仮に致命傷を避けられたとしても、下手すると魔法技能を喪う可能性もあったのだ。
　いくら家の誇りのためとはいえ、七草に敵愾心を抱いている琢磨が七草家の人間に対して手加減が可能かと問われた場合、自分でも『ミリオン・エッジ』を使用した時点で試合続行不可能という判断を下しただろう。
「過剰攻撃が許されるのは殺し合いだけだ。ルールのある試合で許されることじゃない」
「ではっ、『ミリオン・エッジ』を使用した時点で、俺の反則負けだと最初に決まっていたということじゃないですか！」
「攻撃力をコントロールできない限り、失格となる」
「そんなの無茶苦茶だ！」
　それに、『ミリオン・エッジ』はそもそも一条家の『爆裂』と同じく殺傷性ランクが規定されている魔法なのだ。加えて密室という条件まで加わるとランクがＡに格上げされる代物。いくら群体制御に長けている七宝家の人間でも、１００万以上の物体を数ミリ単位で相手に切り傷を負わせない方法はかなりの高等技術となる。
　いや、『ミリオン・エッジ』の攻撃力を犠牲にしてまでも相手を抑える方法は存在するが、香澄と泉美の『窒息乱流（ナイトロゲン・ストーム）』に対抗する形で『ミリオン・エッジ』なんて使用すれば、気流の物理改変による風速の上昇で紙片にも速度が加算され、超高速で襲い掛かる大量の紙片の刃に攻撃力が無かったなんて詭弁は通用しない。
「じゃあ、俺は戦う前から切り札を封じられていたも同然じゃないで

すか！」
「試合である以上、同等の条件を双方に課している。七草姉妹にも殺傷性の高い魔法の使用は禁じている」
「あいつらは殺傷性の高い魔法なんて持っていなかったじゃないか！」
　何を言っているのか、と本当に思う。香澄と泉美の『窒息乱流（ナイトロゲン・ストーム）』は、威力制限を全て外して発動させた場合だと広範囲の人間や動物を窒息死させることが可能となる。彼女らの今の制御能力では、長時間の行使は最悪低酸素症に陥っていたからこそ、達也はあの時点での試合中止を決断して『術式解散（グラム・ディスパージョン）』を使用したのだ。
　それに、『熱乱流（ヒート・ストーム）』も発動座標を琢磨に向けていたら、間違いなく死ぬ可能性があった。この事実を見ずに自分の『ミリオン・エッジ』だけが槍玉に挙げられている、などと良く言えたものだと思う。
　達也と琢磨の言い合いは長引きそうだったため、悠元は香澄と泉美に近寄った。
「お疲れ様、と労いたいところだが……今回のことは自分たちも反省すべきだということは分かっているな？」
「う、うん……」
「はい、分かっております」
　ならいい、と短く答えた上で悠元は二人の頭に手を置いた。香澄は恥ずかしそうにしているが、泉美はくすぐったそうな表情を浮かべていた。普通なら香澄のほうが真っ当な反応だろう。
「閉門も近いから、今日はこのまま帰っていい。今回のことは模擬戦を以て不問にするのは決定事項だからな。それと、今日の結果が不満だというなら俺が代わりに相手してやる」
「えっ、お兄様に手取り足取り手解きしてあいたっ!?」
「余計なこと考えないの……ゴメン、悠元兄。こんな自重しない妹で」
「……まあ、もう慣れた」
　本当なら真由美がいたら拳骨が落ちるのだろうが、香澄が双子の姉として泉美にチョップを食らわせた上で悠元に謝罪した。制服へ着替えるために演習室を後にした二人を見送ったところで達也と琢磨

のほうを見やると、琢磨が叫ぶように達也へ言い放った。
「雑草（ウィード）のアンタに言われたくない！」
その言葉で深雪の冷ややかな目線が琢磨に向けられる。このまま二人の押し問答を続けさせれば、間違いなく十三束が止めに掛かるだろう。その展開も悪くはないが、元々は自分のしたことも彼に対して影響を与えている立場だ。
そう思いながら、悠元は抜き足――――古流の武術の技巧の一つで、特殊な呼吸法と歩法によって相手に自身の存在を認識させなくする――――で琢磨の背後を取り、彼の右肩に右手を置いた。それを振り払おうとしつつ振り向いてきた琢磨に対し、悠元は躊躇うことなく左拳を琢磨の右頬目がけて振るった。
激しい打撃の音と琢磨が床に倒れる音が立て続けに起こり、自分から積極的に力を振るうことなどない悠元がその行動を取ったことに、一同が目を丸くしていた。これには深雪の怒りもすっかり霧散していた。
「さっきから聞いていれば……七宝、お前は一体何様のつもりだ？」
「か、神楽坂副会頭？」
「どうせお前の事だから、審判である達也は師族二十八家じゃないから止められるはずがない、なんて思ってたんだろうが……生憎、達也はお前の思っている一般的な二科生と違う。それは俺が一番よく知っている」
それは確かに、とエリカや幹比古、雫やほのかに加えて深雪も頷いていた。大体、達也に止められない試合なんてそれこそ指で数えられるレベルになるだろう。そして、達也と深雪を七草家と関係の深い人間だと決めつけたこともそうだが、介入しようと思った決め手は桐原からのメールで知った琢磨の部活連執行部入りの理由であった。
「七宝、『ミリオン・エッジ』の準備に掛かる時間はどれぐらい必要だ？」
「え？　あ、えっと……一日あればいけますが……」
「なら、明後日に模擬戦を組むよう服部会頭に話を通しておく。『ミリオン・エッジ』を制御しきっていた証明がしたいというのなら、元十

師族の人間である俺が相手になってやる」
「十師族に負けないぐらい強くなりたい」という心意気は買ってもいいとは思うが、その意味を本当に理解しているのかと問いたくなる。そして、彼を増長させた原因の一端に自分がいる以上、そのけじめをつける意味でも自分が表に立つべきだと考えた。十三束には悪いと思いつつも、『相転移装甲（フェイズシフト）』以外に色々試してみたい魔法もあるし、それに……漸く形となった例の魔法を達也と深雪に見せたいと思っている。
（元十師族……確かに間違っていないが、七宝は大変だな）
そして、達也は冷静に状況を見つめていた。
悠元が十師族でなくなったことは師族二十八家や百家の一部に伝わっているが、神楽坂家の詳細を知るのはその更に一握りのレベルである。寧ろ、十師族で制御できない存在となったからこそ、彼は神楽坂家に送られることとなったことなど琢磨は知らない。
すると、悠元は服部に話を通しに行くと告げて、演習室を後にした。琢磨もほのかの呼びかけで慌てて立ち上がると、軽く礼をして演習室を去っていった。
「お兄様……大丈夫でしょうか？」
達也にそう問いかけてきたのは他ならぬ深雪であった。確かに普段の彼ならばあそこまで怒りを露わにすることはないだろうし、司波家ではそういうこともなく、精々昨年の生徒会長選挙で全校生徒に向けて説教をしたぐらいだろう。
「一応、後で聞いてみよう。深雪もそれで構わないか？」
「は、はい……」
目の前にいる妹もそうだが、彼も自分自身に関することについてはあまり話そうとしない。その意味で似たもの同士というか「似た者夫婦」という称号がついてもおかしくはないだろう。ともあれ、細かい事情は司波家に戻ってから聞くことで合意して演習室を後にしたのだった。

模擬戦の申し出と会頭の威厳

服部は正直、琢磨についての扱いをどうしたものか悩んでいた。彼が師補十八家の一つである七宝家の人間という事実を抜きにしても、彼の実力は磨けば光るものがあると思っていた。だからこそ、多少の性格の難は受け入れるべきだと考えていた。

そして、服部にとって最も起きてほしくないパターンの一つと向き合っていた。

「……模擬戦だと？　お前と七宝でか？」

「ええ。ですが、独断で決められる範疇ではありませんので、会頭に模擬戦の申請を願いたく、こうして出向きました」

悠元が部活連本部に出向いてきたことで琢磨絡みだと覚悟していたが、よもや悠元の口から琢磨との模擬戦の申請が出るとは思いもしなかった。

悠元は「文句があるならかかってこい」と以前公言していたが、彼の実力に真っ向から挑もうとする人間はいなかった。定期考査で文句なしの学年主席を維持しているだけでなく、彼の身内である佳奈と美嘉の〝不敗神話〟もあって、昨年度の悠元に申し込まれた公式の模擬戦は『ゼロ』であった（克人との模擬戦は達也と服部の模擬戦と同様に公表できないため、公式記録には存在しない扱いとされている）。

「元々、七宝が退学寸前になったところを止めるための模擬戦だったはずです。しかし、達也の審判に七宝が不服を申し立てたのです。おまけに禁止用語まで使ったため、反射的に殴って黙らせました」

「……意外だな」

「そうですか？　本人が頭に血が上った状況で審判の判断に従えない以上、物理的行使が一番手っ取り早いと判断したまでです」

琢磨が一番不平を漏らしていたのは『ミリオン・エッジ』の攻撃力を制御できていたか否か。達也の言葉を聞こうとすらしない状態の彼に何を言ったところで無駄であると判断した。魔法による鎮静化も考えたが、有機物干渉は割と厳しいために物理的な衝撃を与えて黙らせる選択を取った。

そこに対しての自分の判断は恐らく間違っていないと思っている。服部から必要以上の追及が飛んでこなかったところを見るに、服部も琢磨に対して厳しく当たるべきだと考えているという裏返しなのかもしれない。

「連戦を言い訳にしてほしくないため、明後日の模擬戦で話は通しました。確か、第三演習室が午後なら空いている筈です」

「……分かった。中条会長に模擬戦の申請をしてくる。だが、本当にいいのか？」

服部が危惧しているのは、悠元と琢磨の実力差だ。

悠元は昨年春の模擬戦で克人と戦い、『ファランクス』を破った上で勝利している。間違いなく一高の中でもトップクラスの実力を有する悠元に琢磨が太刀打ちできる可能性は、限りなく低いと服部は睨んでいた。

「構いません。十師族に負けないという気概はいいですが……ルールを超えて相手を殺しかねない魔法を使ってまで得た勝利が最強の証明――と勘違いされては困りますから」

「すまない、迷惑を掛けてしまうな」

「謝らないでください、服部会頭。……今の感じ、十文字先輩に似てましたよ」

「そ、そうか？　言っておくが、真似しているつもりはないぞ？」

「分かっていますよ、それぐらいは」

服部としては微妙な気分だったが、悠元としては会頭としての威厳がしっかり出ている、という意味も込めての誉め言葉であった。

◇　◇　◇

演習室の鍵を閉めたほのかが生徒会室に戻ってきて、達也らもそろそろ帰ろうかと思ったところでドアチャイムが鳴った。この時点で誰が生徒会室を訪れるのかなど、達也には予測の範疇でしかなかった。

「どうぞ」

「失礼する」

服部が生徒会室を訪れ、苦々しい表情であずさの前に歩いて行っ

た。その様子にあずさが珍しく怯えなかったのが意外だな、と達也はそう感じていた。
「中条、実に言い難いというか、みっともない話なんだが……」
「服部君、どうしたんですか？」
事情が呑み込めていないあずさには、服部の言葉にそう返すことしかできなかった。
「すまない。また、試合の認可を貰いたい」
「またですか!? 今度は一体誰です？」
ここで言い訳しないのは、真面目な服部の為人所以だろう。あずさからすれば、半分予測が出来ている形だが、認可を出す側としてしっかりと尋ねた。それに対する服部の言葉を聞いて、あずさは驚いてしまった。
「神楽坂と七宝だ」
「えっ……えっと、本当ですか？」
「ああ……神楽坂からの要望でな」
あずさも昨年、悠元と克人の模擬戦を目撃しているだけでなく、九校戦のモノリス・コードの手伝いをしていたため、悠元の非凡さは魔法師としても一線を画していたのは間違いないと思っている。
だが、彼は好戦的な性格ではなく、どちらかといえば保守的な気質の持ち主。それは生徒会役員として一緒に仕事をした経験から感じたことだ。
「本来ならば、七草とのこともきつく叱って反省を促すべきなんだろうが……個人的なことを述べてしまうが、あの才能を埋もれさすのは惜しいと考えた」
「だったら、服部君か沢木君でも良かったような気もしますが」
「いや、中条。七草との模擬戦がああなってしまった以上、同じ立場だった人間に委ねる他ないだろう」
琢磨が「師族二十八家の誇りを賭けた戦い」と公言していた以上、それに連なる人間が収拾をつけねばならないと服部も感じていた。だからこそ、元十師族の人間である悠元がそれを買って出たのだろうと推察した。

「それでなんだが、明後日の放課後に第三演習室を2時間入れてほしい」
「2時間ですか？　……確かに空いていますね。じゃあ、許可証を発行しておきますので」
「すまない。迷惑を掛ける……って、どうした？」
「服部君、会頭としての威厳がちゃんと出てると思うよ」
「……そうか？」
　先程悠元に言われたことに加え、克人に比べれば力量不足であると思っている服部には、あずさの言葉が少し懐疑的に聞こえてしまったのだった。

◇　◇　◇

　悠元はいつもならば誰かを待って帰るのが常だが、今日はそういう気分ではなかった。少し短慮だった部分があったのは否定しないが、琢磨が審判役であった達也の判断に悉く反論したのだ。親友としては、達也を見下す様に見ていた彼の態度が気に食わなかった。
　達也の異質性を認識している同級生や先輩はともかく、1年生には気付けない部分なのだろう。だが、昨年の九校戦において新人戦モノリス・コードの代役に抜擢され、最終的に優勝メンバーの一人となっていることは周知の事実である。
　あの時の琢磨は、家の誇りを気にするあまり、他の人間を家柄で判断してしまっていた。ただ、琢磨が知らない事実として一つ挙げるとするなら、達也は四葉家現当主の身内にして今一番次期当主に挙げられる可能性の高い人物なのだ。
　四葉家の情報隠蔽能力は本当に凄いと言わざるを得ない。自分もチート染みた情報収集能力や四葉と縁が深い祖父がいなければ厳しかったことだろう……琢磨は知らず知らずのうちに四葉家へ喧嘩を売っているようなものだ。
　あの状況だと下手すれば深雪の堪忍袋の緒が切れてどうなっていたか分かったものではない。だからこそ、琢磨のヒートアップした状態に対して冷水を浴びせるような形を取った。物理的に冷水を掛ける方法も存在するが、風邪を引かれても困るために鉄拳制裁とした。

そんなことを思いながら歩いていると、正門を出たところで声を掛けられた。悠元が振り向くと、そこには姫梨が佇んでいた。
「悠元さん」
「……姫梨か。今日は先に帰ったものかと思ってたが」
「少し妙な予感がしましたので、正門で待っていたんです。駅までご一緒してもいいですか？」
妙な予感――――恐らくは姫梨の持つ特質なのだろうと納得しつつ、姫梨の提案に断る理由もないので同行を許した。少しの間、沈黙を保ちつつ歩いていたが、その静寂に降参する形で悠元が声を発した。
「何も聞かないんだな？」
「悠元さんの話を聞いたところで、私にとっては事実確認でしかありませんので。……七宝と模擬戦をするの？」
「正解だ。というか、普通にしゃべれるのなら別に丁寧な言葉を使わなくてもいいのに」
「すみません。お祖母様の愛弟子という立場だと、周りが煩いもので」
それは確かに、と悠元は正月の光景を思い出しつつ納得していた。姫梨が悠元に嫁ぐ関係で伊勢家の人間――――姫梨の両親や妹と面会したが、かなり好意的だった。とりわけ姫梨の妹からは「恋愛なんて興味ないって公言してた姉ちゃんに婚約者が……やったね、姉ちゃん」と言われる始末だった。
彼女の「やったね」という単語に二重の意味が含まれているのは言うまでもなく、姫梨が顔を真っ赤にしながら渾身のこめかみグリグリ（トールハンマー）が炸裂していたのは言うまでもない。
「まあ、無理もないか。現当主の愛弟子とならば覚えも良くなるだろうし、修司と由夢の悪口をいう訳じゃないが、あいつらに腹芸は厳しいからな」
「む、私が腹黒いとでも？」
「大丈夫。少なくともどこかの狸の娘よりは遥かにマシだから」
姫梨の家もとい神楽坂の筆頭主家である伊勢家は、天文占術を駆使する『星見』を司る関係もあって、未来予知――――先を見通す力に優れている。その力を律する意味でも丁寧な言葉遣いを心がけている

のだろう。姫梨もこうして話す分には年相応の少女であるのは間違いない。
「今度、埋め合わせしてもらうけど……悠元はどう戦うつもりなのです？」
「七宝（アイツ）が証明したいのは『ミリオン・エッジ』の攻撃力を制御しきれていたかどうかだが……あの程度の群体制御魔法で天狗になっていたら、少し上の年代の十師族直系にはずっと勝てないだろう。それを教えてやらないといけない」
佳奈の『グラビティ・ブリット』――加重系マイナスコードをベースとした重力ベクトルを使用者に対して外向きに掛けることで事象改変結果すらも相手に返す魔法――や美嘉の『ブリッツ・ロード』、真由美の『魔弾の射手』『ドライ・ブリザード』に克人の『ファランクス』。彼らの代名詞でもある魔法だが、そのいずれもが『ミリオン・エッジ』を攻略可能としている。『ブリッツ・ロード』については、以前の説明では走行術式という定義にしていたが、厳密には対象物を超音速で射出する超電磁砲（レールガン）――れっきとした攻撃魔法である。
悠元から見て少し上の世代でもこれだというのに、同級生とするならば達也と深雪は無論の事、燈也や将輝も含まれるだろう。言っておくが、自分のことを決して棚に上げたわけではないということを述べておく。
「約１００万の紙片を『あの程度』と言えるのは悠元ぐらいかな」
「そうか？　まあ、俺の場合は魔法や武術を習った相手が人間のカテゴリから外れ過ぎた存在だからな」
「あの人は……まあ、そうですね」
尤も、原作では十三束が自身の特性を生かして勝利を収めている。似たような方法を取れなくもないが、少し趣向を凝らすつもりだ。
琢磨に対しての事前工作で、真紀には「高校生以下の男子に手を出せばスキャンダルになる」という忠告は出している。無論、自分が出したということは真紀も知らないだろう。なので、何かしらのトラブルになるのは限りなく低いと思われる。
『無頭龍（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の残党が真紀を襲撃する可能性もあったが、昨年の一

斉摘発の際に構成員の洗い出しは全て済ませており、ロバート＝孫（スン）も既に処理している。今回のメディア買収の際、大亜連合の工作部隊と思しき人間も全て拘束済みで、今頃は九重寺の地下で尋問が行われていることだろう。
「それで、勝機はあるの？」
「なければ挑むつもりもない。というか、これでも〝第一席〟である以上は下手な試合なんて出来ない」
変に拘る気はないが、十師族――ひいては師族二十八家の一角に身を置いていた人間として、少し本気でお灸を据える必要がある。だからこそ、あの場にいた中で明確な十師族関係者として琢磨との模擬戦を希望した。
それに、『神将会』の第一席・総長という座に就いている以上、国内を乱すことに繋がる動きは看過できない。それが例え十師族に代わる『新秩序（ニュー・オーダー）』の構築であっても。

◇　◇　◇

司波家に帰ったところで待っていたのは達也らによる事情聴取――という言い方は少々大袈裟だが、模擬戦の時の実力行使について尋ねられた。確かに、自分から実力を行使して相手を抑え込む行動を取ったのは、目に見える範囲内であれば初めてなのだろう。
「七宝のあの様子じゃ、達也の言い分に対して文句を言い続けることは想定していた。十三束もどうしたものか悩んでいたから、一応部活連の身内として叱るべきだと考えた……というので納得できないか？」
「そういえばそうだったな」
お世辞にも服部とは仲が良いとまではいかないものの、昨年の達也と服部のことからすればまだ友好的な部類に入る。三組織の人員入れ替え自体はそれほど珍しくもないが、割と生徒会室に入ることの多い悠元が部活連副会頭という事実を達也は改めて実感していた。
「とはいえ、明後日の模擬戦で『ワルキューレ』や『オーディン』まで使うつもりか？」
「それは使わないし、そもそも使えない。だから別個で調整している

銃形状のＣＡＤを使う。達也にはＣＡＤの調整を頼みたいんだが」
「あのデバイスか……分かった」
『ワルキューレ』や『オーディン』は既存のＣＡＤから数世代先を行く性能を有しており、度重なるオーバーホールで軍事機密レベルのデバイスに仕上がっている。それで勝ったとしても相手は「ＣＡＤのお陰で勝った」などと言って納得しないであろう。
なので、今回はその二つからかなりダウングレードさせてはいるが、悠元の魔法展開速度を阻害しないためのハードウェア構成に特化した２丁銃のＣＡＤを組み上げている最中だ。それでも現在達也が使っている『トライデント』よりもスペックは上がってしまうが。
達也はそこまで気にしていなかったが、深雪は心配そうな表情をしていた。悠元はそれに気付いて苦笑を零した。
「深雪、これでも昨年の新人戦モノリス・コードは無傷で優勝まで行っているんだぞ？　もう少し信用してくれてもいいとは思うんだが」
「あ、えっと、その……分かってはいるのですが」
深雪も理解はしているのだが、実際にその場を見たわけでもなく、モニター越しに見ていただけだ。考えてみれば、深雪の前で一度銃弾を受けるという経験をしている以上、彼女の杞憂も理解できなくはない、と深雪の頭に手を置いて撫でた。
「大丈夫だから。心配してくれる気持ちは受け取っておくよ」
「あっ……はい。七宝君を瞬殺してくださいね」
「いや、殺しじゃなくて模擬戦だからな」
達也は思う。深雪の思考に所々殺意が漏れるのは身内が絡むことぐらいだが、悠元の場合だとそれが顕著に出ている、と。深雪としては、悠元の手を煩わせるぐらいなら自分が手を下すつもりなのだろう。
そこまでは悠元も望んでいないし、達也としても望んでいない。
後ろから羨望の視線を感じて振り向くと、頬を赤らめている水波がそそくさとキッチンに向かって行った。自分の母親のことといい、彼に関わったことで四葉家が〝人間〟らしくなっていることに、達也は思わず笑みを零した。

理論を用いて証明する強さの一端

４月２７日、金曜日。

水波のメール（それと香澄からの連絡）で琢磨は欠席していた。恐らくは『ミリオン・エッジ』の準備を鑑みてのものだろう。連日の戦闘にしなかったとはいえ、明日の模擬戦までに調子を戻してもらわねば困るというものだ。

その日の放課後、悠元は部活連本部で服部と桐原、琢磨の教育係である十三束の三人と会っていた。今回の模擬戦が元々部活連と風紀委員会のメンバーによる模擬戦が原因となっているため、仲裁した生徒会の立ち合いと言うことで審判を務めていた達也が部活連本部室に来ていた。

議題は無論、昨日申請が通った悠元と琢磨の模擬戦についての打ち合わせである。必要な人員が揃ったところで、服部が悠元に問いかけた。

「それで神楽坂、具体的なルールに関してはどのように考えている？」

「自分に対するルールは従来の模擬戦で使われているもので構いませんが、七宝に関してはそのルールを変更していただきたいのです」

「具体的にはどうしてほしいんだ？」

「七宝に対する模擬戦のハンデを一切なし――殺傷事も厭わない状態にして構いません」

どうあっても文句を言うのであれば、いっそのこと琢磨に対するハンデなど排除してもらった方がいい。十全の状態で使える『ミリオン・エッジ』で敗れたのならば、いくら琢磨とて言い訳など出来ないであろう。

この悠元の申し出に対し、驚きの声を上げたのは十三束であった。

「しょ、正気かい!?　彼の『ミリオン・エッジ』なら僕が相手になった方が……」

「十三束の申し出はありがたいんだが……元を正せば七草と七宝の誇りを賭けた戦い、と称して殺傷しかねない魔法を使い、達也が止めた戦いに文句を言ったんだ。ならば、元十師族として強さの在り方を示

さなければ話にならない」
　確かに、琢磨の『ミリオン・エッジ』に対して十三束の持つ『接触型（せっしょくがた）術式解体（グラム・デモリッション）』はこの上なく相性がいいことは間違いないだろう。だが、元々師族二十八家同士の争いである以上、元とはいえ師族二十八家の人間が場を収めるべきだと考えている。
　それに、勝算が無かったらこんな話など受けてもいないだろうし、そのまま十三束に投げていただろう。そうしなかった理由は……対群体制御を見据えた新型魔法が先日完成したからだ。琢磨には悪いが、その魔法の実験台となってもらうつもりだ。
「まあ、口で言ったところで証明にもならないでしょうから……これを見せた方が早いでしょう」
　そう言って、悠元は懐から端末を取り出して本部室のモニターにアクセスする。そして、端末から送信された映像ファイルが再生され、一同の視線はそちらに映る。動画ファイルの時間は大体5分程度で、その映像を見終わった一同は完全に沈黙していた。その静寂を破ったのは達也であった。
「悠元……いつ七草先輩と模擬戦を？」
「この間の日曜に、三矢家の地下で軽くデモンストレーションをしてもらった。先輩には全力で『魔弾の射手』と『ドライ・ブリザード』を展開して、結果がアレという訳だ」
　そう、映像に映し出されたのは悠元と真由美の戦闘――――いや、正確には悠元から攻撃はせず、真由美が一方的に攻撃を加えるだけのもの。確かに『群体制御』を使いこなしている七草家の人間、それも世界最高峰の精密狙撃能力者である真由美を相手に無傷で乗り切ったとなれば、ここにいる人間の誰もが認めざるを得ない。
「服部、これはもう認めざるを得ないんじゃねえのか？」
「分かっている……神楽坂。お前の要望通り、今回の模擬戦は七宝に対するルールをすべて排除した状態とする。但し、万が一を考えて桐原と十三束が見届けを行う」
「ありがとうございます」
　結果として、審判を服部が務めることとなり、見届け人として部活

連から桐原と十三束が、風紀委員会から雫と幹比古、生徒会からも達也が万が一の場合に備える形となった。話し合いも終わって悠元も部活連本部室を出たところ、達也が悠元を待っていたかのように佇んでいた。
「悠元、少しいいか？」
「ああ。てか、別に帰りでもいいような気はするが……お前の知的好奇心所以か？」
「そんなところにしてくれると助かる」
どの道生徒会室に用事もあったので、悠元と達也は歩きながら話すことにした。そして、話題を振ったのは達也のほうからであった。
「七草先輩とのデモンストレーション戦闘で見せていた魔法だが……あれは単純な防御魔法というわけではないのだろう？」
悠元と真由美のデモンストレーション戦闘を見ていた時、達也は真由美の放った『ドライ・ブリザード』の弾丸が悠元の周囲に到達した段階で何かに溶け込むようにして消えていくのが見て取れた。だが、かなり高度な隠蔽によって、まるで何もない空間に吸い込まれていくような印象を強く感じた。
「……あれはＦＡＥ理論――というよりも、『ＰＦＥ理論』に基づいて組まれた魔法と言うべきかな」
「何なんだ、その理論は。耳にした覚えなどないが」
「知らなくても無理ないよ。だって、世界で知っているのは俺だけだから」
ファンタジー世界の魔法は、物理法則を改変するだけでなくその結果で引き起こされた事象が継続されるパターンが存在する。その場合、魔力の源である魔素（作品によっては『マナ』や『エレメント』などという言い方を用いることがある）を消費することで事象改変を維持している形だ。尤も、その場合は消費した魔素を生成あるいは変換するシステムがあって初めて成立する。
この世界の場合だと、その役割をサイオンが担っている。だが、サイオンの性質については、実を言うと学術的に分かっていない事項がかなり多いのだ。

超心理現象の次元に属する非物質粒子で、認識や思考結果を記録する情報素子。現代魔法の理論的基盤であるエイドス、現代魔法の根幹を支える技術である起動式や魔法式はサイオンで構築された情報体である――というのは、現代魔法を使う人間であれば誰しもが学ぶことだ。

だが、消費したサイオンの行方はどうなるのかや、術者が消費したサイオンがどのように回復するかなどのメカニズムは表向き明るみになっていない。魔法使用後に残る残留サイオン――情報次元（イデア）に存在するエイドスの時間的連続性を保とうとする修復力によるせめぎ合いで生じる魔法式の残骸のようなもの――によって、事象改変の痕跡を辿る方法は存在するが、サイオンそのものの動きをすべて把握しているわけではないのだ。

サイオン自体に強力な復元力が備わっているのは以前にも話したと思う。実は、エイドスとサイオンの復元力はそれぞれ異なる性質のベクトルが働いている。

仮に同じ性質のベクトルで復元力が作用すれば、魔法式として構築されたサイオンは霧散して痕跡が残らなくなる。だが、そうなっていないのはサイオンに働く事象改変力と復元力のバランスが魔法を放った術者本人の魔法力に依存しているためだ。

加えて、想子制御が成っていないと全ての想子に対して均一化した事象改変力が掛からず、一部の偏ったサイオンの事象改変力がエイドスの復元力に勝ってしまい、本来霧散して情報次元に残らない筈のサイオンが魔法発動の痕跡として残留してしまう現象が起こるのだ。

尤も、態々そうなるような記述が巧妙に仕込まれている現代魔法の基礎システム自体にも問題はあるのだが、今は割愛させてもらう。

ここで考えたのは、もしサイオンの復元力をエイドスの復元力と直接接触させることで一時的に相殺させることが出来れば、物理法則作用の束縛を一気に緩めることが可能になるのでは、というものだ。そして、これこそがＦＡＥ理論を更に一歩押し進めた悠元が独自に考えた理論――Ｐｓｙｏｎ（サイオン） Ｆｒｅｅ（フリー） Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ（エグゼキューション）、通称ＰＦＥ理論と名付けた。

サイオン自体にエイドスの復元力と同等の反復元力を持たせ、イデアに撃ち込むことで物理法則を完全に無視した領域が生じる。アプローチの方法こそ違えど、このプロセス自体を実現しているのが天神魔法に他ならない。

話を戻すが、ＦＡＥ理論だと改変作用のタイムラグが１ミリ秒以下というものだが、ＰＦＥ理論を用いた場合のタイムラグは何と１分以下の猶予が生まれる。タイムラグを起こす時間に比例して消費サイオン量が増すデメリットを抱えているが、ここについては使用者以外――周囲からサイオンを集めることでこの問題を一挙に解決した。

ただ、現代魔法はおろか、古式魔法からも周囲のサイオンを活用する記述が省かれている。その記述が残っていたのは何と古代魔法であった。高山型古代文明の魔法に関しては、その技巧を伝える術が失われてしまったために伝わることが無かったのだろう。

この理論の発想を思いついたのは昨年春――達也が『疑似キャスト・ジャミング』を使った時のことだ。この時点で天神魔法を習得していたが、天神魔法の物理法則改変プロセスを秘匿しつつ別のアプローチでＦＡＥ理論よりも楽な魔法の定義付与が出来ないか模索していた。

達也の『疑似キャスト・ジャミング』を説明したことで、サイオンの復元力を何らかの方法で反転させてエイドスの復元力を一時的に打ち消す方法を考え付いた。魔法式に関しては、相も変わらず自重しない転生特典で生成できてしまったので、こればかりは自分の成果とは言えなかった。

そして、ＰＦＥ理論の極致が昨年秋に使われた悠元の戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』である。

「達也が昨年春、桐原先輩相手に使ったものをヒントにして完成した技術の一つ、と言えばいいかな。まあ、魔法無効化技術じゃないけど」

「『円卓の剣（ラウンド・ブレード）』とはまた別、ということか」

「そういうこと。あと一つ言えることがあるとするなら……達也にとっては関係のある人物の魔法を魔改造したものになる」

真由美相手に使った魔法は、達也にとっては身内とも言える人間―

――十師族において当代最強と名高い人物の魔法をベースに組み上げたもの。達也は見ていた映像から推察した上で悠元に対して若干呆れも含むような表情を向けていた。
「成程、凡そ理解はした。あの人がそのことを知ったら、喜び勇みそうだな」
「あの人に関しては良く分からんのよ。横浜の時も何故か膝枕を受ける羽目になったし」
「……まあ、頑張れ」
「他人事みたいに言うんじゃねえよ、達也」
あの人――――それが他でもない四葉真夜であるということを察しつつ、達也は半分他人事のような意図も込めて悠元に言い放ち、お前も無関係じゃないんだぞと言わんばかりに悠元が反論したのだった。

◇　◇　◇

夕食後、自室に戻った悠元は端末から映像通話（ヴィジホン）を起動させ、通話のためのレシーバーを起動させる。そして、端末のモニターに映ったのは師補十八家の一角にして七宝家当主、七宝拓巳であった。
「夜分遅く失礼いたします、七宝殿。護人・神楽坂家次期当主、神楽坂悠元です」
『これは神楽坂殿。して、一体何用でしょうか。もしや、息子の事でしょうか？』
「ええ。恐らくその辺の事情をご存じないかと思いまして、ご連絡を差し上げたまでの事です」
別に、琢磨の精神を揺さぶるために連絡したわけではない。今回の一件が『七』の数字（ナンバー）を冠する家同士の諍いであり、琢磨自身が『家の誇り』を賭けた模擬戦であったことはその家の当主に伝えるべきだと判断した。
それならば七草家にも伝えるべきであろうが、あの家は独自に情報網を有しているし、香澄と泉美のことを考えれば何らかの伝手はあると思うので、伝える義理もない。
琢磨に関する一連の事情を説明すると、拓巳は頭を抱えそうな表情を見せていた。

『そうですか……それで、ただお伝えしたいという訳でもないでしょう？』
「実は明日、彼と模擬戦をすることとなっています。なので、事情の追及やご説教はそれが終わってからにしてほしいのです。こちらとしても、精神を折られたからという言い訳をされたくありませんので」
『……あの、馬鹿息子が』
拓巳がそう吐き捨てたのは、琢磨が相手にしようとしている人物――悠元はあの『クリムゾン・プリンス』すら上回る実力の持ち主という事実。その実力の一端は昨年の九校戦で証明されている。
昨年夏に通達された内容は拓巳としても驚くべきものであり、現代魔法の最強格に位置する十師族から古式魔法の大家である上泉家当主及び神楽坂家次期当主に引き抜かれるという事実は、拓巳のみならず師族二十八家の殆どを驚愕に陥れた。
そして、上泉家はもとより神楽坂家の存在を少なからず知っており、二家の当主の実力は十師族を超えるとまで聞き及んでいる。下手をすれば同年代の十師族の直系に喧嘩を売るよりも拙い状況となった形だ。
『分かりました。……息子の我儘に付き合わせてしまい、大変申し訳ありません』
「いえ、お構いなく。こちらとしても、そのような形となってしまったのは残念に思います」
拓巳は知らないだろうが、琢磨が噛みついた相手はあの『四葉』に関わる人間。下手をすると最悪の事態になっていたかもしれないことを考えると、最悪よりもマシな最低のラインに収まった形だろう。
それに、琢磨には悪いと思うが、十師族となって日が浅い理璃に模擬戦を見てもらうつもりだった。十師族に求められる強さの意味を教えるためにも。

意外と単純なもの

４月２８日土曜日、午後３時。

服部に先導される形で悠元と琢磨が第三演習室に入ってきた。

見るからに、琢磨に肉体的及び身体的疲労は見られない。昨晩、拓巳と話した約束がきちんと履行されていて一安心、といったところであった。ただ、ルールについての説明を服部から受けた際、琢磨は喜ぶどころか不快を覚えるような表情を浮かべていた。

審判には服部が、立会人として部活連から十三束と竹刀を持参している桐原、風紀委員会から幹比古と雫、生徒会からは達也と深雪が来ていた。ここまでは万が一の際に制止する役目の人たちだ。

ただ、それ以外にも観戦者として沢木、理璃と泉美、セリアに姫梨まで加わっていた。

（ルールを聞いた後に睨まれたが、そもそもお前の我儘で組まれた模擬戦だろうに）

元々琢磨の『ミリオン・エッジ』の制御が成っていないということで反則負けを食らい、それに抗議したために組まれた模擬戦なのだ。元を返せば、一歩間違えれば退学も止むを得なかった状況ということを本人も認識すべきなのだ。

まあ、プライドに凝り固まった人間にあれこれ言ったところで聞く耳を持たないのは明白なため、一番手っ取り早いのは実力で叩きのめす形になってしまう。

すると、十三束が達也に話しかけた。

「司波君、この勝負……どう見る？」

「そうだな……なるようにしかならないだろう」

「だよね」

達也と十三束は、昨日の打ち合わせで悠元の映像を見ている。あの魔法を使えば『ミリオン・エッジ』は確実に完封できるだろう。その上で十三束は独り言でも呟くかのように声を発した。そして、それに続くかのように沢木が説明した。

「実は、新入生勧誘週間の時にマーシャル・マジック・アーツ部のデモ

ンストレーションで手合わせすることがあってね。ものの見事に完封されたよ」
「『レンジ・ゼロ』の異名でも知られる十三束の魔法全てを圧倒したからな。僕も手合わせさせてもらったが、やはり新陰流剣武術の使い手は一味違ったよ」
「成程……（まあ、師匠でも『まともにやり合いたくない』と断言したほどだからな）」
　達也ですら勝てていない八雲ですら避けたがっている相手に挑む勇気は認めるが、十代にして武術の達人クラスにいる悠元とまともに戦える高校生など、指で数えた方が早いぐらいだろう。達也も悠元に負けたくはないと思っているが、まずは八雲を倒すことを目標としているほどに悠元の実力は飛びぬけている。
　悠元の体術と剣術は達人クラス、精霊魔法や忍術まで使える上に、彼の魔法はこの世界における現代魔法の杓子定規では計測不能の領域に達している。おまけに『天神の眼（オシリス・サイト）』まで使えるとなれば、琢磨の勝率は限りなくゼロに等しいだろう。
　すると、昨日の打ち合わせのことについて詳しい事情を知らない深雪が達也に尋ねた。
「お兄様。本当に大丈夫なのですか？」
「ああ。その部分については俺だけじゃなく、服部会頭や桐原先輩、十三束も保証できるだろう」
「ええ。僕の時は別の方法で完封されましたが、彼は間違いなく……強いです」
　『ミリオン・エッジ』はおろか、琢磨の使用する魔法全てに制限が掛からない状態での特別ルール。一方、悠元にだけ一般的な模擬戦のルールが適用される形となっている。これを快く思っていないのは琢磨であった。
（『ミリオン・エッジ』は七宝家の切り札だぞ。それを取るに足らないものと思っているのか？　その考えを改めさせてやる！）
　琢磨は野外演習用のツナギ姿だが、手首のＣＡＤに加えて『ミリオン・エッジ』の媒体となる「本」が握られている。

悠元のほうは上着を脱いだだけで後は制服の状態。悠元が身に着けているホルスターには真新しい2丁銃のＣＡＤが収められており、両手首には黒を基調としたブレスレットのようなものを身に着けている。そのブレスレット自体にはボタンがなく、一見すると単なるアクセサリーに見えるが、それがＣＡＤだと知っているのは悠元以外だと達也しか知りえない。

服部が両者の前に立ち、模擬戦に関してのルールを説明する。これは最終確認というよりも形式（セレモニー）的なものとも言えるが。

服部が二人の前から離れ、手を挙げる。双方の間には想子波とは別の非物質的な波動がぶつかり合っているのを、そこにいる全員が感じ取っていた。

琢磨が発動媒体の本に右手を掛けるが、悠元は僅かに腰を落として構える。

「始め！」

服部の試合開始を告げる声が、その静寂を破った。

先に動いたのは琢磨で、右手で「本」を数ページ破りぬく――――琢磨が掴んだ瞬間に紙片と化した約八万の刃を、悠元の手足目がけて飛ばす。一度に百万の紙片を飛ばすのではなく、少数の刃を細かくコントロールする方法を選択した。

（まずは、副会頭の動きを封じる！）

四方からやってくる紙片の帯はさながら蛇のような動きで悠元の手足に絡みつこうとしている。無論、悠元からすれば簡単に防御できる代物だが……悠元は一息吐いて集中すると、両手首のＣＡＤを起動させる。すると、悠元の白銀の想子がブレスレットに刻まれている紋様を浮かび上がらせる。そして、悠元はその場で飛び上がった。

（この状況で飛び上がっても、『ミリオン・エッジ』の餌食になるだけ――――え？）

空中に逃げれば、それこそ『ミリオン・エッジ』の得意領域になる――――そう考えていた琢磨は自分の視界に映っていた光景を疑った。

何と、飛び上がった悠元は腕を狙っていた紙片の帯を素手で殴り、足を狙っていた紙片の帯にぶつけたのだ。しかも、殴られた瞬間に紙

片の帯のコントロールがキャンセルされ、ぶつけられた側の紙片の帯もコントロールを失って只の紙吹雪へと化した。
そして、何事もなかったかのように悠元がその場に着地したのだ。彼の両手は直接『ミリオン・エッジ』を殴ったにも関わらず、一切傷を負っていない。
一体何が起きたのかなど、殆どの人間は理解できないだろう。その中で、セリアは自身の能力――転生特典で悠元がやったことを瞬時に理解した。
「あんな方法で『ミリオン・エッジ』を無効化するなんて、とんでもないことするね……」
「セリアは分かったの？」
「一応ね」
悠元がやったことは、物理障壁と情報強化、そして高密度の想子（サイオン）障壁（ウォール）を紙片の帯に転写して、桁外れの事象干渉力で琢磨の『ミリオン・エッジ』のコントロールを奪い去って無効化した。十文字家の『ファランクス』の技術には三矢家の『多種類多重魔法制御』によるものも含まれているため、その気になれば三矢家の人間も『ファランクス』は使用できる。
しかも、魔法式を転写する技術はベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』に使われている『チェイン・キャスト』の技術を悠元が改良したもの。魔法式を転写した物体を介する形で接触した別の対象にも魔法式を転写させ、座標の異なる物体に同じ魔法の効果を与える技術――悠元はこれを『スキャニング・キャスト』と名付けた。
『ミリオン・エッジ』をあっさりと無効化した悠元の姿に琢磨も驚きはしたが、気持ちを切り替えて表情を引き締めた。
（『ミリオン・エッジ』を叩き落としただと……いや、正面から攻めただけでは通用しないというだけだ！）
それは、一昨日の模擬戦でも経験していたことだ。琢磨は再び「本」に右手を掛けようとした――のではなく、手首のＣＡＤを操作して数発の『エア・ブリット』を放った。
（……足に想子の活性化。多分自己加速術式で側面か背後に回り、『ミ

リオン・エッジ』で攻撃を仕掛ける気だな）
『エア・ブリット』を放った直後、琢磨は自己加速術式で右側面に回り込むのが彼から漏れ出ているサイオンで確認した。それならば……悠元は敢えて飛んでくる『エア・ブリット』に向かって突撃を掛ける。
「なっ!? 敢えて突っ込むだと!?」
驚きを見せている桐原だが、この程度で驚かれては困る。
悠元は身体能力強化術式――肉体・想子体・精神体を想子で直結させ、人体のリミッターを意図的に解除することで人間離れした動きを可能とする魔法――を掛けた上で、『エア・ブリット』に対して自らの武術の技を繰り出した。
「――新陰流が武闘奥義、『青龍嵐脚（せいりゅうらんきゃく）』」
悠元は何と、奥義の一つである『青龍嵐脚』――高密度に圧縮したサイオンを脚部に収束させ、全ての事象を蹴り飛ばす技――で『エア・ブリット』を全て蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた空気の塊は、まるで吸い込まれるかの如く琢磨に飛んでいく。
「なっ……があっ!?」
琢磨の腹部に対して打撃を与える程度の衝撃が襲い掛かる。単発なら軽い打撲になる程度の威力だが、それが立て続けに重なれば意識を刈り取ってしまうレベルになる。床に転がされる形となった琢磨は悠元の姿を探した。
悠元は琢磨を見下したりはしていない。ただ冷静に、「それで終わりか？」と言わんばかりの視線を向けていた。だが、琢磨にとってはそれが闘争心を駆り立てる結果となり、再び『ミリオン・エッジ』を発動させる。
「やれやれ……じゃあ、少しばかり本気で行くか」
誰かに聞かせるわけでもなく、そう静かに呟いて両手首のＣＡＤを起動する。琢磨の『ミリオン・エッジ』が悠元に到達しようとしたその瞬間、紙片の帯がまるで見えないワームホールに消えていくが如く、約６万の刃の帯は綺麗に消え去った。
「なっ……!? 『ミリオン・エッジ』が、消えた……!?」

消えた、という表現は間違っていないが、厳密に述べるならば紙片の帯を消し去ったというのが一番妥当な表現だ。しかも、悠元が今使っている魔法は特殊過ぎて視覚的に認識できない特性を備えている。

そんな魔法が存在するのかと思うが、電磁波には可視線と言われる限られた範囲の波長帯というものが存在しており、普通の人間の目ではその範囲のものしか見ることが出来ない。悠元はその性質を利用して、サイオン自体に電波の波長を情報として付与することで魔法をステルス化しているのだ。

非魔法師からすれば『見えざる力』である魔法を体験する格好である琢磨に対し、悠元はホルスターに収められた銃形状ＣＡＤ――――『ヴァルファーレ』と名付けたデバイスを抜き、前に掲げた。

「七宝家の切り札を見せてくれたお礼だ。強さを示すというのは、どういうものか見せてやる……これが俺の新たな魔法、『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』だ」

悠元がそう呟いた直後、高密度の光――――光子と想子による光が入り混じって悠元の周囲を漂うように展開している。その光の中には精霊も含まれており、得手のある幹比古や天神魔法を習っている深雪と雫も反応した。

大戦中に研究されていた戦略級魔法『ミーティアライト・フォール』。その本来の役目は地球に飛来する小惑星の飛来を避け、世界を守るための戦略級魔法であった。それが捻じ曲げられてあのような魔法に成り下がってしまったのだ。

本来の理念を具現化するという意味も込めて、悠元は表沙汰になっていない戦略級魔法の名を自身の新たな魔法の名として名付けた。

『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』――――四葉真夜の得意魔法である『流星群（ミーティア・ライン）』をベースとし、天神魔法の技巧を加えることで光を偏重させるのではなく光そのものを精霊で介することによって発光の事象改変を起こし、使用者のサイオンを通して『相転移装甲（フェイズシフト）』を用いることにより、散らばる光子を秩序化させてフィールドを形成する魔法。

光を偏重させるプロセスが不要となったため、「夜」の代名詞で知ら

れる『流星群（ミーティア・ライン）』の亜種魔法だとは殆どの人間が気付かないであろう。尤も、身内である達也には前以て話しているし、深雪に至っては驚きの表情からして気付いただろう。

これを攻撃に使うことは可能だが、この魔法の殺傷力は余裕でAランクを超えかねないため、今回は防御魔法として使用した。そして、悠元は『ヴァルファーレ』を足元――――正確には、足元に散らばった最初の『ミリオン・エッジ』に使われた約8万の紙片に対して、魔法を撃ち込んだ。

すると、魔法の効力を失った筈の紙片が宙に浮かび上がり、まるで鎖の如く琢磨の周囲を取り囲んだ。これはまるで『群体制御』のようだと察した琢磨は叫ぶように声を上げた。

「ば、馬鹿な!? 『群体制御』は第七研の――――」

「……俺の実家の本分は確かに第三研の『多種類多重魔法制御』だ。だが、俺は古式魔法も修めている身なのでな」

天神魔法であれば、それこそ数多の精霊を制御下に置かなければならない。その意味で『七』の家が得意とする『群体制御』を自ずと学んでいた形となったわけだ。そもそも、現代魔法が体系化する前から古式魔法は存在しており、各々の魔法技能師開発研究所で研究されていた内容は、古式魔法にも通ずる部分が多い。

現代魔法をメインとしている師族二十八家からすれば、古式魔法関連の知識が多少疎くても仕方がない事だろう。だが、三矢家は古式魔法の家柄である矢車家と親交が深いため、悠元も古式魔法の基礎知識を早い段階で学んでいた。そして上泉家や神楽坂家で古式魔法を修得し、現代魔法と古式魔法の複合術式を確立した。

「『ミリオン・エッジ』とは異なるが……こういう使い方も出来るということを見せてやる――――これで終いだ（チェック・メイト）」

悠元が左手に持った『ヴァルファーレ』の引き金を引くと、鎖状の紙片の帯が強烈な光を放つ。ほんの一瞬ではあったが、その光が収まると琢磨は意識を失って倒れ込んだ。そして、悠元は展開していた紙片の鎖を部屋の片隅に纏めた。何が起きたのかと困惑していたが、服部は我に返って、試合終了の声を発した。

「――――そこまで！　勝者、神楽坂！」
服部の言葉で桐原と十三束が琢磨に近寄るが、特に外傷は見受けられなかった。その確認を聞いて、服部も悠元がルールを遵守して琢磨を倒したのだと理解した。琢磨が演習室の壁に移動されていく様子を悠元が見つめていると、悠元の上着を持った深雪が近寄ってきた。
「お疲れ様です、悠元さん」
「ありがとう、深雪。上着もわざわざ持ってきてくれて助かる」
「いえ、お気遣いなく」
『ヴァルファーレ』をホルスターに仕舞い、上着を着て身なりを整える。すると、理璃が近寄ってきた。何かと思ったのだが、理璃は頭を深く下げた。
「その、ありがとうございました」
「理璃ちゃん……いや、前にも言ったと思うが、別に責任を強く感じなくてもいい。十文字先輩と同じようにしろ、だなんて言えるわけでもないからな。きっと先輩からも同じことを言われたんじゃないか？」
「……はい。それは分かっているのですが……」
理璃は十師族の一人となって日が浅い。だが、責任感の強さは克人に通ずるものを有している。だからこそ、香澄と琢磨の諍いを止められなかった自分を責めてしまうのだろう。
言葉でどうこう言っても、納得するのは難しいかもしれない。だから、この場は自分が立つべきなのだろう。
「だったら、元十師族ではあるが昨年度の新入生総代として、今年度の新入生総代――――理璃ちゃんに模擬戦を申し込む。受けてくれるか？」
「はい！　ルールは従来の模擬戦でお願いします！」
「……成程、だから2時間も取るように言ったわけか、神楽坂」
「ええ、その通りです。会頭」
原作では十三束と達也の戦い。だが、今回の場合は同じ新入生総代にして十師族直系の人間の戦い。服部は悠元の意図を理解したようで、溜息を吐いた上で達也に視線を向けた。
「司波。七宝はこちらで受け持つから、この場の審判を任せたいが

……大丈夫か？」
「ええ、構いません」
先日のことを考えれば達也がこの上なく適任であり、達也も自分の得意分野を理解しているからこそ、その申し出を引き受けた。深雪も悠元から離れて見守る形となった。
桐原が七宝を担ぎ、服部と十三束が第三演習室から出て行くのを見送ると、二人は数メートルの距離を置いて向かい合う。
神楽坂悠元と十文字理璃……奇しくも南盾島の関係者である二人が、ここに相対する。

風紀は何処に

悠元と理璃の試合だが、結果を述べると悠元の『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』で理璃の『ファランクス』を破壊し、悠元の勝利が決まった。その後、風紀委員会本部を借りる形で悠元と理璃が向かい合った。

「まあ、十師族としては数ヶ月程度しか名乗っていなかったが……少なくとも言えることは一つかな」

「それは、なんですか？」

「中途半端は相手だけでなく、自分すら傷つける。それをよく理解しているからこそ、俺は武術でも魔法の訓練でも一切妥協しなかった。その結果としてこの強さに至ったという訳だよ」

これは剛三の受け売りの部分も含んでいるが、ここまで強くなった自分でも一番感じたことだ。その上で、努力することを止めない人間こそが一番負けない人間になりうることも諭した。

「ありがとうございました、神楽坂先輩。少しずつではありますが、学んでいきたいと思います」

理璃がお礼を言って生徒会室に戻っていくのを見届けた……までは良かったのだが、入れ替わりに雫が入ってきた。

少し焦ったような表情に首を傾げそうになったが、開いている扉の方から冷気が漏れていることに気付き、視線を向けると頬を膨らませている深雪の姿があった。

「雫、どうした？……あー、事情は察した」

「委員長を呼んで戸締りするから、深雪をお願い」

「了解した」

雫の横を通り過ぎ、深雪のもとに近寄ると……深雪は悠元の左腕に抱き着くような形で寄り添ってきた。

これは大分ご機嫌斜めだな、と思いつつも深雪に話しかけた。

「あのですね、深雪さん。理璃ちゃんに恋愛感情は持ってないから」

「……分かってます。でも、悠元さんのジゴロは油断ならないんです」

実を言うと、明日の達也の誕生日パーティーの準備で悠元は北山邸に泊まることとなっている。ＦＬＴでの会議に関しては『上条洸人』

としての参加になるため、折りたたみ型のオンライン端末を持ち込む予定であった。
　すると、ここで助け舟を出したのは雫であった。
「なんだったら、深雪も泊まりに来る？　もう少し増えても大丈夫だし」
「……お兄様を説得してきます」
　そう言って、深雪は悠元から離れると一目散に生徒会室へと向かった。そして、1分も経たない内に急いで戻ってきた。経過時間を考えると、達也が已む無く許可を出したことは明白であった。
「……根こそぎ取られそうな気しかしなくなってくるわ」
「それは冗談で言ってる？」
「気持ちの問題なんだよ。そこは察してほしい」
　昨年夏の神楽坂家での試しが行われた翌日、もしものことがあっては困るので事情を把握するために『天神の眼（オシリス・サイト）』で前日の夜のことを遡及した。
　すると、使われたお香の効力で大事になるのは避けられていたものの、見るに激しい光景が記憶に焼き付けられる羽目となった。前世で大学の友達から無理矢理渡されたそういう系統の映像作品よりも激しい光景であったのは間違いないだろう。
　ちなみにだが、深雪と雫、そしてその場にいた姫梨も完全に腰が抜けてしまっていたらしく、顔合わせが朝食後となったのもそのせいである。
　独占欲が自分が想定していたものよりも強いのでは……と自分を疑ってしまうほどだった。
　何はともあれ、深雪も加わったことで今後に関わる話がしやすくなったのはありがたいと思うことにしよう。
◇　◇　◇
　達也からは「すまない…」とでも言いたげな表情を向けられたことに対して、これも自分がやってきたことの結果なので受け入れている、と返した。学校からある程度離れたところで北山家の迎えの車に乗り込み、三人は潮から歓迎される形となった。

深雪の服関連は北山家へ行く途中で調達することになり、その際に試着室へ連れ込まれることとなった。いくら婚約者の前とはいえ、いくら試着室でも一応公衆の面前なので抑えてほしいと思う。店員を満面の笑顔で説得したことは褒めていいのか分からないが。

夕食と入浴（雫と深雪に押し切られて一緒に入る羽目となった）を終え、雫の部屋でいつでも寝れる状態になったところで雫が尋ねた。

「それで、悠元。かなりの仕込みをしていたけれど、どういう意図があるの？」

雫は、悠元が今回の一連の流れを仕込んだということを予め聞いていた。琢磨が七草家の人間に対して暴走する可能性もあったため、もしもの時の抑止力として雫に頼んでいた。深雪にも『神将会』に連なる人間として事情は説明している。

「なあ、雫に深雪。今の魔法師社会で確実に足りないのはなんだと思う？」

「足りないもの、ですか？」

「……情報の発信力かな」

「そう、それ」

影響力こそ大きいが、この世界の人口比で行けば魔法師は間違いなく少数派（マイノリティ）の部類に属する。政治や経済、軍事といった部分に接しているが、魔法使いの性質に見られる秘密主義や内向的な性格もあって、何を考えているのか分からないと思われていることも少なくない。加えて、十師族を含めた師族二十八家の体制上、下手に舐めた態度は権力を持つ非魔法師が余計に付け上がらせることへと繋がる。

ロンドンに本部を置く国際魔法協会であっても、全ての魔法師を常時管理できるシステムになっていない。魔法協会はあくまでも核兵器に対する抑止を目的としたものでしかないからだ。この国だと魔法師ライセンスに基づく協会所属の管理体制は法律として定められているが、そこに強制力というものは存在していない。日本魔法協会が強制力を行使できるのは、あくまでも核兵器（正確には放射能汚染の危険性が極めて高い兵器）に対する抑止という前提が無ければ成立しない。

悠元が神楽坂家や自身のコネを使ってメディアを買収したのは、何も真紀や琢磨のように魔法を大道芸で使おうなどいう〝浅ましい魂胆〟で決めたことではない。
民間企業であるメディアには必ずと言っていい程株主――――スポンサーが介在しており、時として彼らの意向が報道姿勢にも影響されることが多い。前世における与党と野党の報道の在り方からしても、それがかなり顕著であった。
政治的な話は面倒なので脇に置いておくが、魔法に関する知識はスポーツや芸術のような身近なものでないため、積極的な情報発信ができる場所の確保は必要不可欠であった。本来ならばそれを師族会議や魔法協会が自らやるべきことなのだが、何につけても後出しジャンケンの有様には剛三や千姫も呆れるほどだった。
『沈黙は金、雄弁は銀』という言葉もあるが、それが通じるのは時と場合によりけりだからな。とりわけ師族会議の上の連中はプライドの衝突で即決が出来やしない……十師族の現当主全員と面識があるからこそ言えることかもしれんが」
「……そうですね。そうなのかもしれません」
「別に全員がそうであるとは言ってないよ。ただ、七草と九島はその辺が顕著だからな」
物は言いようだが、この世界における魔法は人間による〝技術〟である。無論、そういう風にしてしまったのは旧合衆国で核兵器を用いようとしたテロリストを抑えた警察官が超能力を有していたことからくるものだが。
「秘密主義も必要だが、必要な情報を迅速に伝えるためのツールは必要不可欠だ。だからこそ、母上に相談して大々的なメディア買収に踏み切った。尤も、母上自身も大亜連合の動きを把握していたようでな。もしもの時は十文字家を焚き付けて警察省や公安で強制捜査も辞さないつもりだったらしい」
そもそも、得意分野の違いはあれどメディア対策のほぼすべてを七草家に任せていたのは、あまりにも危険すぎるものであった。
その辺は師族会議における共闘や共謀の禁止に繋がるとはいえ、そ

れをあまりにも厳格に運用した結果が原作の師族会議における九島家の十師族降格騒動に繋がった。ひいては光宣を必要以上に追い詰めた形なので、彼が捻くれた原因は十師族を含めた師族会議そのものと言っても過言ではないだろう。
「そんなにヤバかったの？」
「大亜連合のスパイというか、特殊工作部隊が入り込んでいたらしい。処理自体は『九頭龍』お抱えの特殊部隊が担当したらしいので、俺は関与してないんだがな」
その特殊部隊なのだが、これにはちょっとしたカラクリが存在している。
実は、先日のパラサイト事件でこの国に逃げ込んだ元々の宿主――元ＵＳＮＡ軍の軍人魔法師がその部隊に組み込まれているのだ。無論、悠元と相対したチャールズ・サリバン元軍曹も含まれている。彼らの強化措置については『天陽照覧』での蘇生の際に治療を施している。
ＵＳＮＡ政府は彼らを既に死亡扱いとしている（誰もパラサイトによる責任を取りたくないという思惑があった）ため、この国でひっそりと暮らす以外に生きる術を失った彼らを八雲が身元保証人として請け負っている。
とはいえ、前線で戦う以外にも戦闘訓練の教導などと言った後方支援に回った人もそれなりにいて、八雲曰く「軍の規律が厳しすぎて、ここでの自由さはまるで『天国だ』と揃って言っていたよ」とのことらしい。
「……大亜連合は、また攻めてくると？」
「現状結ばれているのは休戦条約だからな。明らかに再侵攻の意図が見え見えだ……尤も、その時は大人しく終戦条約を結ぶか、或いは国が亡ぶかの二択を迫るつもりだ」
ただ、後者の選択肢に関しては『どうにもならない時の最終手段』の意味合いが強い上に新ソ連の躍進を許しかねず、最悪東シナ海・対馬海峡・日本海を挟む形で新ソ連と国境を接しかねない危険性を孕んでいる。

国防軍の対大亜連合強硬派は『灼熱と極光のハロウィン』で用いられた戦略級魔法を頼みの綱としているようだが、ここに関しては予め蘇我大将に話を通している。あくまでも戦略級魔法は〝抑止〟のために用いられるべきであり、積極的に使用すれば新ソ連だけでなく欧米方面の警戒や干渉を受けることになりかねない、と釘を刺している。

ただ、原作からの流れは未だに続いているような節が見られる。おまけに国内外における魔法師排斥の活動をほぼ壊滅に近い状態にまで追い込んだことを『追い風』だと勘違いしているようだ。

「さて……雫さんや。風紀委員が風紀を乱すのは如何な事かと思うが？」

「学校外だからセーフ」

「アウトだよ!? てか、深雪さんも何故にそうなる!?」

「ダメ、ですか？」

「……」

何が起きたのかを簡単に説明すると、雫が身につけていたものを全て脱ぎ、それに触発された深雪も同じ状態になっていた。

色に溺れたくはない訳だが、これでも学校ではきちんとしてくれているからこそ、まだありがたいと思う……いや、その反動でこうなっているのならば、責任を取らねばならないということなのだろう。

「俺の責任なのは自覚してるが……覚悟しろよ？」

この後、二人に対してどういう行動を取ったのかというと……二人の姿勢を受け入れたということで納得してほしい。その代償として、深雪と雫の腰が抜けて数時間は動けなくなっていたことも含めて。

◇　◇　◇

琢磨に関しては、一応の解決を見たということになる。拓巳からは謝罪を受ける形となったが、今回はあくまでも〝学生間の問題〟ということで元々のトラブル相手であった七草家とも決着させた。

雫の部屋で一夜を過ごした悠元はいつもの時間に目が覚め、シャワーを浴びてから動きやすい恰好でのんびりしていたところ、上条洸人用のアカウントに着信が入る。レシーバーを付けて起動させると、

画面には達也の姿があった。
「お、達也か。会議の時間はまだ先だと思うんだが、こんな朝早くにＦＬＴにいるのか？」
『少しやることがあったからな。それで……深雪は？』
「流石にまだ寝てるよ……正直なところさ、こうなったのは想定の範疇を越えてた」
　原作での流れを知っていたからこそ、深雪に対する干渉はあくまでも兄妹間の問題にお節介を焼く程度で済ませていた。だが、初対面で惚れられていたことは正直想定の範疇を越えていたのだ。
　その遠因を作ったのは、言うまでもなく自分の祖父こと剛三である。
「いやさ、当時から深雪って結構大人びた思考をしてたじゃない？その辺はそういう教育のせいもあるだろうけど。それからすれば、当時の俺は結構ガキなところもあったし、深雪の興味を持たれるようなことをしてるつもりはなかったんだけどな」
『……悠元。それはギャグで言っているのか？』
「至って本気だっつーの」
　今更言うことじゃないかもしれないが、原作における達也と深雪の関係性は少なからず知っていたからこそ、あくまでも友人に徹するつもりでいた。しかも、元々問題であった二人の関係性がこの世界では解消しきっている点がある。もし自分が介入しなければ、達也と深雪が結ばれていた可能性はあっただろう。
「大体、二人と知り合ったのはうちの爺さんの差し金だしな……そういや今更な話だが、昨年春の服部会頭との模擬戦があった夜、何があったんだ？」
　深雪が自分の婚約者となってからは、達也からも深雪の恋愛感情のことは聞いていたが、沖縄からのことを考えるとあの夜に達也が椅子から転げ落ちる様な被害を受けることがない筈だ。
　達也は少し考えた後、ゆっくりと話し始めた。
『実はな、深雪から「私には異性の魅力がないのでしょうか？」と問い詰められてな。そこから俺が七草先輩や渡辺先輩と話していたとこ

ろから勘違いしたようで……深雪から対人戦闘用の拘束術式の被害を受けた』
「……で、俺が空気を読んで出て行ったところを更に勘違いされたってオチか？」
『そうなるな』
　あの時の自分には異性に対する遠慮というものがあったため、深雪がそう勘違いしてもおかしくはないだろう。その上で達也は説明を続けた。
『いくら深雪に対する情動があるとはいえ、兄妹でのライン越えは倫理的にアウトだからな。俺としては、４月の時点でお前と深雪が付き合っているという噂が流れて、そこから約４ヶ月で「やっと付き合い始めたか」という感覚だった』
「九校戦で父に諭されたからな。恋人としてのデートとか、婚約者の顔合わせの前に一線を越えたのは……驚きを通り越して何も言えなかった」
『意外だな。お前だったら色々言いそうなものだが』
「……俺も健全な男子だった結果、暴走したってオチだ」
　昨年夏から複数人の女性と関係を持っている――――字面だけ見れば、スキャンダル待ったなしの有様だ。色に溺れたくないとは言ったものの、好きな相手に迫られて性欲を抑えきれる自信は……恋愛感情を自覚してから本当に歯止めがかかっていない。
　それでも、高校を中退させたくないという思いは強いし、女性陣も納得している話だ。跡継ぎに関しては……今考えることではないため、最後の一線だけはしっかりと弁えているし、公的な場所では控えるように言い含めている。
「その意味じゃ、達也も他人事じゃ済まないと思うぞ」
『……頼むから、ほのかやリーナを焚き付ける様な真似は慎んでくれ』
「俺は流石にしないし、下手な知識を入れたら何をしでかすか分からん」
　達也が名を挙げた二人はスタイル自体良いし、セリアから聞く限りではリーナの達也に対する恋愛感情は「かなりヤバい」とのことらし

い。これで変に偏った性的な知識を身につけようものなら、本当に大変なこととなるだろう。ほのかの依存癖は言うまでもないが。
悠元がそう断言したのは、達也に恋慕している他の人々が焦って大変なことをしでかさない保障もないからだ。なので、深雪と雫にも恋人としての常識の範疇で対応するように言い含めている。
「達也の場合、ほのかとリーナ、亜夜子ちゃんに市原先輩、平河先輩にその妹も含まれるな」
『……大人になったら、酒を酌み交わそう』
「だな……」
達也には言わなかったが、今朝早くに千姫から送られたメールにて〝七人目〟が追加されることに決まった。だが、このことは来年正月まで隠すつもりらしい。その理由は彼女がかつて婚約を結んでいた相手――――他でもない泉美だからだ。七草家にも婚約の復活自体はまだ伝えていない。
それはそれで、また一波乱起きそうな気がすると思わずにはいられなかったのだった。

適度な休息は大事

悠元と琢磨の模擬戦。結果は琢磨が完敗を喫した形となった。

琢磨としては一切手を抜くどころか、ルール上では使用すら難しかった［ミリオン・エッジ］の制限が解除された状態での敗北。しかも、相手は［ミリオン・エッジ］が解除された数多の紙片を操って琢磨を無力化せしめた。

相手に譲歩してもらっておきながら敗北を喫した事実は琢磨にとって衝撃だったが、琢磨にとっての苦難は家に戻ってきてからが本番だった。

「琢磨さん、先生がお待ちです」

「……分かった」

今日は真紀との会談はないため、そのまま帰宅した琢磨を父親の助手が待っていた。先日の時とは打って変わって真剣な表情を垣間見せていたせいか、琢磨は父親が何故呼び出したのかを自ずと察していた。とはいえ、今の自分に断る理由もないと判断して伝言を受け取り、書斎に足を向けた。

琢磨は自分の父親の為人を良く知っている。琢磨が真紀と［新秩序（ニュー・オーダー）］の画策をしている部分についてもそれとなく掴んでいたが、琢磨に深く追及しなかったのは見逃されていた部分が大きかった、と今にしてそう思っていた。

そして、琢磨が書斎に足を踏み入れた瞬間、この前とは明らかに違う雰囲気が書斎を満たしているのが肌で感じ取れ、これまで幾度となく父親と衝突してきた琢磨でさえも知らない師補十八家・七宝家当主こと七宝拓巳の姿がそこにあった。

「琢磨、掛けなさい」

ここまでは先日の時と変わりないように見えるが、言葉の一つ一つに圧を感じて琢磨は言われるがまま応接ソファに腰を下ろした。それを見た上で拓巳が琢磨と向かい合う様な形でソファに座った。

「さて、琢磨。私が今〝怒っている〟というのは言わずとも感じているだろう。何故だと思う？」

「……それは」
第一高校に国会議員が来訪するため、琢磨に学校を休むよう言い付かった時、琢磨は『いくら気にくわない相手だからと言って、後先考えずに喧嘩を売ったりしない。俺はそこまでガキじゃない』と拓巳に公言した。その日は拓巳の言い付け通り学校を休んだため、来訪した国会議員やメディアと揉めごとを起こすことは避けられた。
だが、琢磨はその言いつけをあっさりと破った。自分が恨めしく思っている七草家の人間に対し、功績を立てたことが腹立たしくて挑発した。
「[恒星炉]実験の授業の折、お前は『たとえ気に食わない相手でも、後先考えずに喧嘩を売らない』と述べていた。だが、その翌日に七草家の人間に喧嘩を売るどころか、相手を攻撃する魔法まで使おうとして危うく停学どころか退学にまで及ぶ話だったそうではないか。何故そんな事態を引き起こした。答えろ、琢磨」
「それは……七草が……」
「私は、お前を自分の発言に責任を持てないような人間に育てた覚えはない。ここまで来て物の一つ覚えのようにしか〝七草が悪い〟としか言えないのか」
父親との約束を軽んじただけでなく、その結果として琢磨自身の進退に関わる問題にまで発展したこと。そして、そのことを拓巳は悠元から事情を聞かされるまで知らなかったこと。
なお、拓巳は悠元からの説明の中に〝秘密事項〟として『今回の一件は下手すると四葉家の怒りを買うところでした。このことは息子さんは無論のこと、誰にも話してはなりません』と聞き及んでいる。それがどういう事情なのかはさておくとしても、国家一つ潰した四葉家の怒りなど買おうものなら七宝家が潰されてもおかしくはないと判断し、拓巳は自らの内に秘めた。
「今回のお前に関する事情は全て神楽坂殿から聞いた。お前の我儘で今日模擬戦をすることもな……その様子からするに、完敗したのだろう？」
「……ああ。[ミリオン・エッジ]の使用制限がない状態での戦闘だっ

たのに、副会頭に傷を付けるどころか［ミリオン・エッジ］の紙片をあっさりと制御していた」
拓巳の説教に琢磨は降参の意を含めながら悔しさを滲ませていた。だが、今日の琢磨の相手は一条家の［クリムゾン・プリンス］すら完膚なきまでに打ち負かした人物。それも、七草家がかつていた第三研出身である三矢の血筋を引く魔法師。
「琢磨、彼と戦ってどう思った？」
「……何も通じなかった。策を弄しても、真正面から簡単に叩き潰され、覆され、蹂躙された。［クリムゾン・プリンス］が彼に勝てなかったのも分かる気がした」
彼――――神楽坂悠元に油断や慢心は無い。相手の手段や方法に応じた魔法を適切に選択し、更には周囲への被害を考慮して広範囲に効果を及ぼす魔法は一切使用されなかった。その前の七草姉妹との模擬戦では周囲への被害を考えずに魔法を行使していた事実と比べると、魔法を巧く使う点において琢磨は悠元に完敗を喫した。
「そうか……神楽坂殿からは『頭を冷やさせるために一発殴ってしまいました』と謝罪されたが、私のほうから謝らせてもらった。これでお前が言い訳を続けるようならばこの場で一発殴っていた」
「あ、あはは……」
琢磨の気性の粗さを暴力的に止めたことはともかく、拓巳としては父親の代わりに殴ってでも止めてくれたことに関して、悠元に七宝家として謝罪した。拓巳の冗談とは思えない言葉に対し、琢磨は苦笑を漏らすことしかできなかったのだった。
◇　◇　◇
師族二十八家の本屋敷に訓練のためのスペースを設けている師族は、実は意外と少ない。何せ、十師族に限定しても三矢家が最大規模を誇っており、これ以上となると旧第四研を抱える四葉家ぐらいであろう。
その次に大きい訓練スペースを有しているのは、首都防衛の要としての役割を目的とした魔法を有する十文字家――――地下の訓練場で、黒のシャツにスパッツを身に着けてバーベルを使ったトレーニング

に勤しんでいた。
「ふう……」
　見た目こそ女性らしい体つきだが、理璃が蘇我の姓を名乗っていた時から筋力トレーニングは続けている。診断した医師からの説明では、理璃の筋肉は量ではなく異常なまでの密度を有しており、蓄積できる想子も桁外れに大きいとのことだった。
　理璃が一息を入れていると、スポーツドリンクが差し出されたことに気付いて理璃は視線を上に向けた。そこにはトレーニングウェア姿の克人がいた。
「あ、ありがとうございます、克人兄さん」
「気にするな。しかし……２００キロのバーベルをベンチプレスするとはな」
　２００キロのベンチプレスは、それこそ筋トレを長い事続けている高体重の男子でないと出来ないレベルだ。克人でもまだ手を出せていない領域をこなしている理璃は、間違いなく常人のカテゴライズから逸脱しているだろう。
「兄さんでも難しいのですか？」
「この間１８０キロが安定するようになったからな」
　体格が高校生離れしていても、まだまだ研鑽を積まねばならないと克人が強く感じたのは様々な要因があるが、その一端に理璃がいるのは間違いない。何せ、彼女の『ファランクス』の精度はまだ粗削りの部分があるが、それでも十文字家においては歴代最強となりうる可能性を秘めている。
「そういえば七草から聞いたが、この間神楽坂と模擬戦をしたそうだな？」
「はい。あんなあっさりと『ファランクス』を破られるだなんて……昨年、兄さんが破られた時とは異なる魔法でした」
「……そうか」
　悠元の元実家である三矢家は『多種類多重魔法制御』を得意とし、十文字家の『ファランクス』にもその技術が使われている。次々とあらゆる魔法を生み出している悠元は、間違いなくこの国において最強の

名を冠しても不思議ではないだろう。
「しかも、『ファランクス』の亜種魔法まで披露していましたから」
「何？　三矢の人間もやろうと思えばできなくもないだろうが……本当か？」
「ええ」
　悠元と理璃の模擬戦は、何も瞬殺で終わらせたわけではない。理璃は『ファランクス』の多重展開で悠元を吹き飛ばそうと目論んだ。だが、悠元は何と多重障壁をぶつけ合って理璃の『ファランクス』を破壊したのだ。
　悠元が編み出した魔法は、対抗魔法用の『キャスト・サイレント』を組み込んだ想子障壁・情報強化・領域干渉に加えて、定率制御（フラットドライブ）フィルターの大本となった零加速結界障壁（ゼロ・アクセラレーション・ウォール）が含まれた多重結界障壁魔法『ミラーフォース』。
「尤も、流石に魔法の詳細を尋ねるのはタブーですから、詳しくは聞きませんでした。その代わり、私の『ファランクス』に関してアドバイスをいくつか貰いました」
「成程。理璃は、神楽坂をどう感じた？」
　克人からすれば、昨年度の新入生総代にして元十師族の人間。九校戦では三高の『クリムゾン・プリンス』を完封し、横浜事変では古式魔法で侵攻してきた敵兵を難なく焼き尽くした。その実力を目の当たりにしてきたからこそ、同じように実力を肌で感じた理璃に尋ねた。
「先輩は、間違いなく十師族直系の中で最強に相応しい実力を兼ね備えています。私との戦闘もそうでしたが、七宝君との戦闘では相手の魔法を利用して追い詰めるという手法を披露していました。正直、私でも難しいことを難なくこなした先輩を同じ魔法師として尊敬します」
　恋愛感情としてのものというよりは、同じ魔法師としての尊敬の念に近い。それを口に出した理璃に対して、克人は何も言わずに少し考えた後、自身のトレーニングへと戻っていったのだった。それを見た理璃は克人が何を考えたのか……それを何となく察して微笑んだの

だった。

◇　◇　◇

横浜・中華街の一角にある中華料理店。その奥にある薄暗い部屋で、モニターを見つめる周公瑾は神妙な表情を浮かべていた。モニターには魔法師排斥のメディア工作の進捗状況がデータで表示されているが、『恒星炉』実験以降は一気に下降した挙句、主だった魔法師排斥寄りのメディアが軒並み買収によって方針転換を余儀なくされた。

その結果、魔法師排斥の流れは完全に下火へとなってしまっていた。

「神坂グループ――――いえ、神楽坂家ですか。よもや、ここまで動いて来るとは……」

国内のみならず国外の主要メディアまでも買収し、その総額は５０兆円超――――国家予算クラスの金額を投じて人間主義の勢いを大幅に削いだ。更には、メディア内部にいた大亜連合の特殊工作部隊まで排除した。周に対して、師である顧傑だけでなく大亜連合側からの問い合わせも含めてかなりの数となっており、いくら裏工作に長けている彼でも疲労の色は隠せなかった。

「政治や経済だけでなく、メディアの力学や性質までも熟知している。これが『護人』の一角を担う彼らの……もしや、彼の仕業なのでしょうか？」

周の予測では、神楽坂家が何らかの手を打ってくることは予測していたが、ここまで大規模な手を打ってくることは想定を超えていた。もし、これが昨年春に自身を捕捉した〝彼〟が絵を描いているのだとすれば、一応の辻褄は合う。だが、十代半ばの人間にここまでの神算鬼謀が可能なのか、と周は疑いを持っていたことも事実であった。

彼は知る筈もない。神楽坂悠元の持つ最大の秘密――――彼が〝転生者〟だという事実は、ごく一部の人間にしか知りえないことなのだから。

「昨年の春以降、こちらを警戒してくることも想定していましたが、相手は大師（マスター）に意識が向いている。そして、私を監視している素振りは一

切見られない……分かりませんね」
　周は判断しかねていた。これで何らかの監視を受けているのだとすれば、これでも視線に敏感な周自身も勘付くはずだと。昨年のブランシュの件で監視を受けることも警戒していたが、その素振りが見られないことに判断材料が不足していた。
「……当分は、大師（マスター）のお小言とご機嫌取りをせねばならないでしょうね」
　周は当初、もし〝彼〟が動いているのならば、その周辺を切り離す策を考えてはいた。だが、彼の周囲に対する離間の計を仕掛ける場合、相手次第では逆鱗に触れかねないリスクを背負う必要がある。これで十師族の一角を担い、彼に対して好意的な印象があるという四葉家を動かすようなことになれば、いくら周でも無事に済む保証がない。
　暫くは憤る師を宥める役割を背負ってしまったことに、周はデスクに凭れ掛かるように深く座り込んだのだった。
◇　◇　◇
『ご苦労様です、悠君。一先ずは懸案の一つが片付きましたね』
「いくつかの懸案の一つでしかありませんが……当分は平穏な学生生活を送れそうです」
　悠元は自室で千姫からの電話を受けていて、『恒星炉』実験を含めての報告を行っていた。魔法師排斥の運動は一旦下火となったが、それでも魔法師に対する偏見の目は一朝一夕で変わる様なものではないため、ここら辺は根気よく取り除いていくしかない。
　ただ、この動きを勝手に解釈する輩が出てくる可能性がある。
『婚約者たちと熱い夜を送っている悠君からしたら、平穏は遠いと思いますけど』
「それは言わないでください……」
『ふふ、そういえば七宝家当主から謝罪を受けました。悠君の手を煩わせたことは誠に申し訳ないと』
「正直、元十師族の人間の言うことを聞くかどうかは不明瞭でしたけれど」

悠元に対しても謝罪をしていたことからすれば、悠元個人としては礼儀が成っているのでどこかの狸よりも良い印象を持てる。今悠元が進めている計画には拓巳の家業も大きく影響を受けることになるため、個人的な誼を持つことについては千姫も了解していた。

「……ところで、『元老院（げんろういん）』の方々から何かありましたか？」

ここでの『元老院』というのは、明治時代初期に帝国議会開設前に存在した立法機関ではなく、その後継機関でもなければ憲法外機関の『元老』とも関係がない。

四葉家のスポンサーとなり、凶悪犯罪を犯したり目論んだりする魔法師を捕らえ、処分させてきた秘密組織。ほぼ魔法力のみで十師族の座へ這い上がってきた四葉家が唯一伺いを立てるこの組織の存在は自分でも知らなかった。流石に十師族とはいえ、横の繋がりは十師族のルールに反してしまうので仕方がない事もである。

『彼らは悠君の動向が気になるようですね。いずれ世界をも巻き込んでいくのではないかと』

「……馬鹿馬鹿しい、ですね。世界を統べる気なんて毛頭ありませんよ、俺は」

多少の警戒は止むを得ないとしても、単なる抑止力に押し止めるつもりならば『元老院』のメンバー全員の素性を全て調べ上げた上で社会的な抹殺を行う覚悟はとうに持っている。

ちなみに『元老院』のメンバー構成に関してだが、全て古式魔法の大家で構成されている。まだ人間らしい彼らが十師族の一角に〝兵器〟の在り方を押し付けているのは問題大アリだろう。神楽坂家と上泉家は『元老院』に含まれるが、四葉家の扱いに関して他のメンバーと度々衝突しているということは千姫から聞き及んでいる。

こちらから積極的に敵対したいという考えは持ち合わせていないが、相手が必要以上に枷を嵌めようとするのならば、返す刃で叩きのめすだけだ。『元老院』の警戒を抱く気持ちも理解できなくはないが、面倒は御免被る。

『悠君ならそう言うのでは、と釘は刺しておきました。……年は取りたくないものですね』

「その若さを保っている母上の言葉じゃありませんよ」
年の功とはよく言ったものだが、あまり度が過ぎれば行き過ぎた保守になってしまう。『元老院』の中では年長組となる剛三と千姫だからこそ、四葉への行き過ぎた干渉は彼らを追いやってしまうだけだと一番理解していた。
千姫に対してツッコミを入れるような形で放たれた悠元の言葉に、千姫は思わずクスッと笑みを零した。
『そうそう、義兄様(にいさま)が烈と会談したそうですが……回収(よこどり)したパラサイトについては沈黙を貫いたようです。「決して善良な人々に害を為すような真似はしない」と話してはおりましたが』
「……何か懸念事項が？」
剛三と烈の会談は、剛三から奈良の九島家本屋敷に出向いて話したらしい。元々京都方面の偵察のついでで実現したものだが、烈はUSNA絡みのパラサイトについては秘匿するようなそぶりを見せた、と千姫は剛三から聞き及んでいた。
いくら昔からの顔なじみとはいえ、全面的に信頼できる要素がない……とでも言わんばかりの千姫の様子に悠元が尋ねた。
『彼の孫の事です。悠君なら、彼のこともどうにか出来ますか？』
「やろうと思えばできなくもないですが……爺さんからもストップが本格的に掛かりましたからね」
烈の孫である九島光宣(くどうみのる)とは個人的な誼を有しているが、彼は優秀な魔法師であるにも拘らず、一年の約四分の一をベッドの上で過ごすという病弱的な体質を抱えている。ただ、医学的な観点からいえば光宣は至って健康である、というのが彼を診断した医者の見解だ。
彼のその体質の原因は想子体のアンバランス――いや、厳密には想子体を流れている想子を光宣自身が制御しきれていない。しかも、光宣自身がそれをしようとしても、本来備わっている筈の想子体のリミッターが存在していないのだ。
いくら精神が想子体のリミッターを発動させようとしても、元々ないものを発動させようとしているため、結果的には意味がない。寧ろ想子体を逆に活性化させてしまうため、余計に体調を崩してしまう。

雫の弟である航も魔法演算領域に封印が掛けられている理由は、光宣と同じ状態になることを危惧してのものだが、航の場合は想子体と肉体のバランスが取れていないだけであり、想子体の制御技術と肉体の成長が進めば、そう遠くない未来に魔法演算領域の封印は解除できると見込んでいる。

『あら……多分、藤林家のお嬢さんを利用するのを防ぐためでしょうね』

「恐らくは」

光宣を治療できないこともないし、想子体に関する事象は澪の治療で把握できている。ただ、間違いなく九島家の現当主は婚姻などを駆使して誼を結ぼうとしてくるだろう。しかし、剛三が強権を用いて九島家からパラサイトを回収しなかったのは意外だった。これについては千姫から補足説明が入った。

『……妖魔を用いる兵器の存在は明らかに危険です。ただ、現時点で九島家を潰せば、「伝統派」が勢い付くことになるでしょう。それに』

「それに？」

『神楽坂家の伝統の儀である「月夜見（つきよみ）の儀」が近い以上、機が熟すのを待つ方が良いと判断しました』

神楽坂家の力試しの儀式である『月夜見の儀』が控えているため、九島家がパラサイトを用いた兵器を何らかの形で表舞台に引っ張った時を狙い撃つのが良い、という判断を聞き、悠元もそれに異論を唱えるつもりはなかった。

しかも、今年の正月からずっと動きっぱなしだったため、神楽坂家全体としても一旦体制を整える時間が必要になった側面もある。ここいらで少しの休息を入れても問題はない筈だ。

『それでは、おやすみなさい』

「はい。母上もおやすみなさい」

通信を切ると、悠元はベッドに潜り込んで瞼を閉じた。

考えるべきことは多いが、それでも一つずつ丁寧に片を付けねばならない……と思いつつ、襲い来る睡魔に身を委ねたのだった。

スティープルチェース編

宿題と課題の板挟み

西暦２０９６年６月、国際実業界に一つの訃報が流れた。

市場規模こそ小さいものの、軍事上の理由からどの国家も無視できない魔法工学製品。その魔工メーカーの一角を担うローゼン・マギクラフトの前社長、バスティアン・ローゼンが息を引き取った。享年９６歳。老衰死であった。

この訃報が流れる数日前、悠元は剛三からの呼び出しを受けて群馬の上泉本家に出向いていた。千里が運んできた茶と茶菓子を頂きつつ、剛三からの言葉を待った。

「すまんな、悠元。九校戦の準備期間に入っている頃だとは思うが」

「いや、そこに関しては問題ないよ」

昨年のエンジニア不足のことも鑑みて、その対策の一環というか魔法工学科に担当副教官（普通科高校で言うところの副担任）が配属されることとなったのだが、その人物は何と佳奈であった。

彼女自身、魔法科高校時代に加重系マイナスコードの論文を発表し、既に一介の大学生というレベルを超えてしまっている。それに加えて、佳奈自身は魔工技師を志していることもあり、大学側が異例の〝博士号〟まで出そうとする始末。

つまるところ、佳奈の大学における活動は専ら研究活動だけ――研究生同然の扱いを受けていた。それではいい刺激にならない、と考えた佳奈は親を通して大学と折衝し、表向きは〝教育実習生〟として第一高校に出向くこととなった。

早速、佳奈はジェニファーを説得して千秋とケント、美月にＣＡＤ調整のノウハウを叩き込み始めている（表向きは魔法工学の専門授業で、ジェニファーも佳奈の実力を知っているからこそ任せている）。それを受講する形で十三束や佐那、燈也だけでなく達也も時折参加しているらしい。

そして、変わったことといえばもう一つ。

理璃が彼女の親族である蘇我大将から暗号メールのようなものを受け取ったらしく、十文字家でも解析できなかったということで相談された。
その内容を解読した結果、国防軍が九校戦の競技内容に干渉して、スピード・シューティングとバトル・ボード、クラウド・ボールを外し、ロアー・アンド・ガンナーとシールド・ダウン、そしてスティープルチェース・クロスカントリーが追加されたとのことだ。
この情報はすぐさまあずさや五十里に伝えた上で、九校戦運営本部からの公式通達があるまでメンバーを仮組にすることで決着していた。
「悠元、以前ドイツに行ったことは覚えているな？」
「いや、忘れられるわけないでしょう。アポなしでバスティアン・ローゼンを訪れて、『ルーカス・ローゼンの名誉回復を要求する』だなんて威圧を掛けてたなんて」
字面だとかなり穏便な書き方だろうが、実際には裏手から隠形を展開して忍び込み、バスティアンの私室に潜り込んだのだ。当然、向こうとしては剛三と悠元の姿に慌てふためいたのは言うまでもない。ローゼン・マギクラフトの前社長に会える、と聞いて剛三を止めなかった自分にも一定の責任はあるかもしれないが。
他のローゼンの人間の手前、バスティアンは公言こそ避けたがルーカスの名誉回復については概ね同意した。その際、バスティアンはこう提案してきたのだ。
「――剛三殿。息子の親友にこんなことを頼むのは忍びないが……もしもの時は、ローゼンをお願いしたい」
つまるところ、バスティアンは今のローゼンの後継者たちが功を焦り、場合によってはルーカスやゲオルグの関係者に手を出すことを危惧していた。無論、タダでとは言わず……バスティアンは一筆を認めた。
そこに書かれていたのは、バスティアンが亡くなった後の遺産に関すること。ローゼン家の資産全体の内、約３分の１を剛三に引き渡すというものだった。だが、剛三はその権利を悠元に押し付けた上でこ

う言い放った。
「わしが出る幕などないな。きっと、その役目は隣にいるわしの孫の役目よ」
（お前ら、自分でやれよ……）
　良く言えば当事者間での問題、悪く言えば祖父世代の後片付け。その役割を負う羽目となったことに、悠元は内心でバスティアンと剛三に対して辛辣な言葉を吐き捨てたのだった。
　閑話休題。
「……お年を考えれば、もう危ないと？」
「内密にバスティアンの遺産相続を担当している弁護士から連絡を貰った。もって数日が山だとな。ここで問題になるのは、お前に渡したバスティアン・ローゼンの遺産相続と……ルーカスの娘に対する相続権だな」
　原作と異なり、エリカの母親であるアンナ・ローゼン＝鹿取が生存している以上、彼女に関する相続権も生きたままの状態である。日本に駆け落ちしてきたルーカスのことをローゼン家では汚点だの背信者だの罵っているが、その片棒を担いでいるのは悠元の目の前にいる人物である。
　ただ、ローゼン家に剛三を非難する勇気は持ち得ていなかった。
　剛三は約５０年前、ローゼン・マギクラフト本社が危うく反魔法主義のテロリストに襲撃されたところをたった一人で制圧し、人質にされていたバスティアンとルーカスを救出した。ローゼン家にとって剛三は恩人でもあり、英雄でもある。
　加えて、ドイツ政府と強いコネクションを有しているだけでなく、ルーカスの亡命に際してドイツ政府を宥めたのは剛三の口添えがあってこそであった。そのお陰で社交界でも肩身が狭い思いをすることなどなかった。
「アンナからは遺産相続権破棄の書類を受け取り、ローゼン・マギクラフト日本支社に送り付けた。ただ、お前の持っている相続権はこれから起こりうることを考えれば破棄できぬ」
「だろうね。下手をすればエリカも巻き込まれない保障がない……何

で、こんな時に面倒事が二つ重なるのか」
九校戦の国防軍対大亜連合強硬派による介入。そしてローゼン家絡みの一件。前者に関しては九島家の周辺の動きが慌ただしかったため、剛三の伝手を借りて式神を潜り込ませた。ただ、この情報に関してはまだ達也に伝えていない。
「先日の魔法師排斥運動が静まったから好機と見たのだろうけれど……大亜連合と終戦に持ち込んだところで、彼らが味方になってくれるかどうかは別問題だと思う」
ただでさえ、大亜連合がある場所は旧共和国――この国とはいくつもの因縁を抱えている間柄だ。あらゆる部分で影響を受けているが、根底にあるのは〝民族としての矜持〟を持つ以上、友好的な関係を築くのは難しいだろう。
沖縄と横浜の戦闘がそれを物語っているだけに尚更だ。
「加えて、新ソ連のこともあるからのう。連中が手を組まない可能性もあるわけだしな」
「そういうこと。ベゾブラゾフは一旦モスクワに戻ってくれたが、例の列車型ＣＡＤのこともある以上油断はできない……最悪、改良した『トゥマーン・ボンバ』をモスクワ上空に放つことも考えるつもりだ」
戦略級魔法といえども、それ自体が完璧に完成されているわけではない。それの発動にはどうしてもＣＡＤの演算能力ありきの部分が大きい。悠元が言い放ったことに関しては、さしもの剛三でも苦笑を滲ませた。
「敵の敵は味方」という論理が働くかは不明だが、大亜連合と新ソ連が手を組む可能性だって無きにしも非ずと考えて行動すべきだろう。新ソ連の思惑からすれば、日本と大亜連合が疲弊したところで漁夫の利を得るのが一番理想的な流れと見るべきかもしれない。
「ＵＳＮＡの件もそうだけど、欧米を主体としてプライドと偏見が人の形を成しているとしか思えない。爺さんもそういう経験はあったりするの？」
「あったの。世界群発戦争の折、儂や千姫に向けて罵詈雑言を飛ばす輩はおったが、軒並み早死にしおったよ」

剛三曰く、そういう連中を無駄に煽てて戦場の最前線に向かわせたらしい。平然とあくどいことをやっていることには驚きを禁じ得なかった。

それはともかく、現状においてレオがゲオルグ＝オストブルグの孫だという事実はローゼン家に知られていない。原作だと昨年の新人戦モノリス・コードに出場したはずのレオの代わりとして自分が健在だったため、表舞台に出ることはなかったからだ。

だが、ゲオルグが日本に亡命したという事実からすれば探りは入れているのかもしれない。

「…爺さんとしては、ローゼン家への対応をどう考えているのか参考程度に聞きたい」

「そうじゃの……実は、ルーカスから『実家が子や孫に手を出すようなら、せめてローゼン・マギクラフトを潰れさせない様に対処してくれ』と言われた」

ルーカス自身はローゼンとの縁切りを考えていたが、父親であるバスティアンの一存で差し止められた。それは、別にローゼンの人間として彼の子孫を招く意図はなく、ルーカスの死を以てその不名誉を取り消すつもりだったとバスティアンの口から聞かされていた。だが、その機を逃してしまったためにルーカスのローゼン家における風評は未だに悪い、という訳だ。

ローゼン家に制裁はしても、ローゼン・マギクラフトで働く従業員や魔工技師を路頭に迷わせるようなことはしないでほしい……その願いを聞いた悠元はお茶を一口啜った上で呟く。

「ルーカス・ローゼンの孫娘のエリカ、ゲオルグ・オストブルグの孫であるレオ、そして上泉剛三（じいさん）の孫である悠元（じぶん）……世界は狭いな」

「その辺りは全くの偶然じゃがな」

確かにそうなのだろうが、自分を転生させたあの女神はこの辺も織り込んで三矢家を改変したのかもしれない。全く以て、何故そうしたかなどは尋ねる気にもならなかった。だが、せめてルーカス・ローゼンの願いだけは叶えてやろうと思う。自分としてもローゼン・マギクラフトに潰れてもらっては困るし、そこで働く人々を困らせるつもり

はないからだ。
「ローゼンの件だけなら元継兄さんを通せば済むだろうけど、それだけじゃないんだろ？」
「千姫が話しておるだろうが、先月の初めに九島家へ出向いた。まあ、伝統派の調査も含めてのついでじゃが」
剛三はその際、烈と光宣の二人に出会った（厳密には、烈と会談した後に光宣の私室を見舞った）。剛三はパラサイト事件で内密に回収したパラサイトを引き渡す様に要求した。だが、烈はその要請を断ったのだ。お互いに先代当主という立場上、剛三自身の発言に対する拘束力はない。だが、護人の一族である上泉家の要請に対して拒否の姿勢を見せたのだ。
「儂の発言に拘束力がないのは仕方がないし、烈の頑固さは今に始まった事ではないからの。そもそも、引き渡しの要求はあくまでも〝要請〟でしかない。あやつめ……孫のことで何百回も後悔しとるぐらいならば、光宣の気持ちを汲み取ってやれと言いたいわ」
烈がパラサイトに拘ったのは、恐らく『ピクシー』が切っ掛けなのだろう、と剛三は推測した。同じようなことが出来れば、光宣を戦場に送り出す様な事は避けられるであろうと……だが、剛三は渋い表情を見せていた。
「悠元なら分かっておるだろうが、パラサイトを完全制御する術は九島家に存在しておらん。『九』の連中はパラサイトの持つ性質――妖（あやかし）の本質を経験しておらぬ」
「……まあ、理解はできる」
『アリス』のことについては千姫経由で聞き及んでいる剛三だが、パラサイトを守護霊（サーヴァント）として契約・使役する術式は現代魔法にも古式魔法にも存在していない。それを唯一使いこなしている悠元の存在を知れば、旧第九研の連中はこぞって悠元を調べようと目論むだろう。それに繋がる危険性を考慮して、光宣の治療をしないように言い含めたのだ。
上泉家や神楽坂家では、いずれ来る妖の再来を想定した討伐訓練を定期的に行っている。とは言っても、弱めの妖を生み出す触媒を使っ

てのもののため、先日のパラサイト事件のような事象など普通は起こりえない。
「連中は黙っているが、ガイノイドの研究を続けておる。それをパラサイトと融合させた兵器の開発……中世の一向宗でも躊躇う様なことを平気でやることは言語道断だが、それを九校戦でやる気なのだろうな……烈の阿呆め」
少なくとも、その情報を顧傑は『フリズスキャルヴ』で掴み、彼の指示を受けた周公瑾が動くことになる。とはいえ、中華街全体を監視している状態にしているため、周個人に向ける警戒網をかなり薄くしている。
そのお陰もあってか、周公瑾の警戒心を薄れさせることには一応成功している。
「俺の予測だと、響子さん経由で達也の耳に入ることは間違いないと睨んでる。外れてくれれば御の字だけれど」
「お主が言うと妙に信憑性が増すの。そうなると、風間の部隊……佐伯にとっては烈の影響力を追い出せるチャンスか。何も十師族を目くじらにする必要はないと思うがの」
大体、この国にいる四人の戦略級魔法師全員が十師族と関わりを有している。この状態を良くないと思っていても、十師族抜きでどうやって国防を成すつもりなのかは疑問だ。自分も原作全ての流れを把握しているわけではないが、もしかすると戦略級魔法師を管理しようと画策しての動きなのかもしれない。
「俺の場合、俺自身の戦略級魔法は今のところ母上と爺さんが管理しているが……政府や国防軍に戦略級魔法の解除キーを預ける気なんてない。文民統制（シビリアン・コントロール）は理解しているけど」
「悠元はいくつもの戦略級魔法を抱えておるからの。寧ろ政府や軍で制御する方が危ないと儂も思うほどだ」
この世界に存在する『十二使徒』の戦略級魔法に加え、達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』まで使用可能としている桁外れの演算能力と想子保有量は、剛三と言えども舌を巻くほどであった。悠元が正式に神楽坂家を継いだ折に、現在千姫と剛三が持つ戦略級魔法の解除許可を悠元に

返すつもりらしい。
本来は、核兵器に代わる抑止力としての役割を持つのが戦略級魔法に与えられた役割だった。だが、その力を侵略の道具として用いる輩がいるのも事実。
「九校戦で直接的に関わる部分は対処する。だが、それ以外の折衝は……爺さんにお願いしてもいいか？」
「……儂が国防軍を抑える方向で行くと言うのか？」
「俺が全部関わる気になんてなれないからな」
自分は全知全能の神ではない。そのことを誰よりも理解しているからこそ、出来る範囲内でのことは対処するが、それ以外の部分については適任者に任せるのが筋だと判断した。それに、千姫から話を聞いている限りでは『元老院』もパラサイトを用いた兵器に対して憂慮の姿勢を見せた、とのことだ。
「九校戦のこともある。自分も選手として出ることになるから」
「それもそうだったな。しかし、一条の息子も体面をずいぶんと気にするものよな」
「……自分のことを言うようでいい気はしないが、ヘタレだからな」
剛三が将輝の話題を持ち出したのは、恐らく九校戦という単語を聞いたからだろう。
十師族の一角である一条家の長男が魔法師社会では無名に等しい司波家の長女に恋をしている、という風聞は大きな波紋を呼ぶことになる。深雪に告白した時点で三矢の家を離れることがほぼ確定していた自分とは置かれている状況が違うのは理解するが、ある意味達也が抑止力として働いたせいなのかもしれない。
「そもそも、深雪ちゃんの初恋の相手が悠元である以上、出来レースみたいなものじゃがのう」
「その絡みで吉祥寺（ジョージ）から将輝の宣戦布告を受け取ったこともあったかな。尤も、『天照（アマテラス）』で『爆裂（ばくれつ）』を定義破綻させてフルボッコにしたけれど」
「加えてモノリス・コードの過剰攻撃（オーバーアタック）も考えれば……悠元、深雪ちゃんは真夜や深夜に似て独占欲が強いぞ」

「それはもう味わってるから」
深雪が自分の婚約者となってからは、恋人関係だけでなく一種の主従関係のようなものも発生している。二人きりの時だとそれが顕著に出ており、この前の深雪の誕生日に値の張るスカーフをプレゼントしたところ、それを見た深雪から「これを巻けば、私は悠元さんの所有物(モノ)だと示せるのですね」と言われた際は言葉を完全に失ったほどだ。
念のために達也へ問い合わせたところ、深雪の依存度合いは結構強いらしいということが判明した。「多分、ほのかの方がまだ御淑やかなんじゃないか」と言い切っていたことに、どう返していいか本気で悩んでしまった。
罷り間違って首輪なんて贈りでもしたら、躊躇いなく身に着けそうだと思ったほどだ。それを察した達也が自分の肩に手を置きつつ、「すまない」と謝られてしまったのは言うまでもない。

気が付けばオーバーラン

旧奈良県・生駒にある九島家の本屋敷。その一室で情報端末を見ている一人の少年がいた。

彼の名前は九島光宣（くどうみのる）。九島烈（れつ）の孫にして、九島真言（まこと）の末息子にあたる。本来ならば第二高校の1年生である彼は学校に行っている時間だが、今日は休んでいる。いや、正確には今日も、と言うべきなのだろう。

（最近、お祖父様の様子がおかしい……いや、その前からも兆候はあった）

自身の事で烈が憐れんだり思い悩む様子をしていたのは、烈自身が言葉に出さなくとも薄々は感じ取っていた。この部屋へ頻繁に見舞いに来るのは彼以外に従姉である響子ぐらいだ。それと、見舞いにはこれなくとも端末で会話することの多い人物がいた。

（でも、彼に迷惑は掛けられない……ただでさえ、お祖父様の件で心証を悪くしているだけに）

その人物の名は神楽坂悠元。小学生中学年頃まで光宣以上に病弱の状態だったが、そこを境として健常者と変わらぬ身体を手に入れ、魔法においても現代魔法と古式魔法の複合術式という世界で類を見ない技術を持つ少年。

彼が『長野佑都』と名乗っていた時の出会いは、光宣もハッキリと覚えていた。同年代でありながらも自分以上の魔法力を備えていて、まともに学校にも通えていなかった光宣にとっては数少ない友人となった。

その後はお互いにプライベートナンバーとアドレスを交換し、度々連絡を取り合う仲になっていた。そのお陰からか、光宣自身寂しいという気持ちは抱かなかった。

だが、彼が十師族という鎖を引き千切りかねない実力――――実戦経験のある一条家の『クリムゾン・プリンス』を難なく破った実績は、光宣ですら驚愕させた。その後、彼が三矢家ではなく護人・神楽坂家の人間になったことを烈から聞かされた。

烈は「あの実力を野放しに出来ないのは理解できているつもりだ。だが、それなら一言ぐらい言ってくれれば違うだろうに」と、光宣の前で漏らした。光宣の推察では、烈は悠元を何らかの形で師族二十八家に留め置こうとしたのだろう。

それに対して光宣はハッキリと告げた。

――お祖父様、彼は最強たる力を示したのです。九島家のために彼を留め置こうなどとは考えてはいけません。

悠元の魔法技術の根幹には上泉家に伝わる魔法技術も含まれている。その彼を留め置こうとするならば、三矢家の反発や懸念は尤もであると考えた。そして、かつて病弱だった悠元が健常者と変わらない状態へと変化した秘密。それが光宣自身の改善に繋がる可能性があったとしても、彼を下手に十師族の枠組みに圧し止める様な事をすれば……それで被害を受けるのは他の師族である。

それはさておくとしても、2月に東京から帰ってきた烈の見舞いに来る回数は減っていた。その時期に東京方面で起きたことは『吸血鬼事件』と騒がれたことぐらいしか知らない。とはいえ、光宣が相談できる相手も限られている……悩んだ末に、光宣は彼に相談することを決めた。

◇　◇　◇

西暦２０９６年6月２５日、月曜日。

普通の学生ならば学校に通っていてもおかしくはない日の夜、ライディングスーツに身を包んで木の上から双眼鏡を覗き込むのは……神楽坂悠元その人であった。そして、彼だけでなく、同じような装備に身を包んだ若い男性――神楽坂家の筆頭主家である伊勢家の当主こと伊勢佑作が木の下に立っていた。

「若様。どうですか？」

「――いますね。あれが〝P兵器〟……いえ、名付けるなら『パラサイドール』といったところでしょうか」

悠元が双眼鏡を覗き込んでいる先にあるのは旧魔法師開発第九研究所――現在は『第九種魔法開発研究所』と名を変えた民間研究所である。

特殊な魔法加工を施した双眼鏡で『天神の眼（オシリス・サイト）』を発動させ、『パラサイドール』の仕組みそのものを写し取り、佑作は人払いの結界魔法を展開していた。無論、天神魔法であるために現代魔法レベルの知覚系魔法では感知されない代物だ。

双眼鏡を覗き終えたところで、悠元は一息吐いた。安全を考慮して研究所から数キロメートル離れているとはいえ、『天神の眼（オシリス・サイト）』に気付かれない保証が無かったからだ。ゆっくりと物音を極力立てない様に地面へ着地すると、佑作も結界術式を解除した。

「しかし、佑作さんが態々手伝ってくれるとは思いもしませんでした」

「正月のことは私も良く言い聞かせるべきでしたから。次期当主様の手伝いは奥様のご指示にもありますので」

正月のお披露目の際、佑作の長男もあの中に含まれていた。尤も、宮本家や高槻家の男子のように（修司は無論除くが）高圧的な態度というよりはやむなくといった感じで加わっていて、それを気付かずにまとめて吹き飛ばしてしまった。

ただ、佑作としては『星見』を司る一族として、謙虚に務めるべきという良い経験になったと述べた上で悠元に謝罪した経緯がある。

「それで、いかがいたしますか？」

「……当分は生駒の周辺に人を置くぐらいでいいでしょう。九島家の屋敷や研究所からは距離を置くべきかと。あと、大陸系の術式を見破れる人間が望ましいかと」

「畏まりました」

悠元がこの場所を訪れたのは『パラサイドール』の進捗を見るための偵察であった。その気になれば東京から俯瞰することも可能だが、古式魔法を取り入れている『九』の人間相手にどこまで通用するか分からなかった以上、こちらの手の内を明かす気にもならなかった。佑作がその場から姿を消したのを確認すると、悠元は『鏡の扉（ミラーゲート）』で直接司波家の自室に帰宅したのだった。

◇　◇　◇

6月最後の週。定期試験を間近に控えた放課後、悠元は燈也と一緒に学校裏の演習林を走っていた。ここの演習林は魔法の訓練のみな

らず、軍人や警察官、レスキュー隊員といった肉体的労働が伴う職業への進路を希望する生徒のニーズに応えるための施設だ。計算された起伏や木々の密度、池や砂地、水路や走路だけでなく様々な器具や機械まで設置されており、前世で言うところの肉体の限界に挑戦するような番組企画レベルとまではいかないものの、それなりに充実している。

悠元は新陰流剣武術での鍛錬、燈也は富士山をランニング感覚で走ってしまう規格外の体力で汗一つ掻くことなく、まるでジョギングでもしているかのように走っていた。

「スティープルチェース・クロスカントリーの話は聞きましたが、運営委員会の正気を疑いますよ。とても九校戦の競技じゃありませんから」

「そうだよな。魅せるための競技というよりも軍人魔法師ですらやるかどうかを躊躇うレベルのものだからな」

スティープルチェース・クロスカントリーは各国の陸軍で山岳・森林訓練に用いられる軍事訓練の一つ。物理的な自然物や人工物による障碍物だけでなく、自動銃座や魔法による妨害も含まれている。流石に競技として採用した以上、高校生レベルで実弾を使うような真似はしないと信じたいが、『パラサイドール』のことを考えると気が重くなるというものだ。

「今年の運営委員会は国防軍が横槍を入れたらしい」

「……いくら横浜のことがあるとはいえ、今年の春のことを忘れたのでしょうか？」

「どうしても戦いたい連中というのは一定数いるんだよ」

国防軍の対大亜連合強硬派の言い分は、完全なる平和を求めるために大亜連合との戦争を終結させる、というもの。だが、そうして下手に力を見せたところで、それが自国に向けられることを恐れる輩が出てこないとも限らない。達也の力を恐れたイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフやエドワード・クラーク、日本が力を伸ばすことを危惧したウィリアム・マクロードがその一例だ。

強硬派としては『灼熱と極光のハロウィン』で用いられた戦略級魔

法を頼みとするに違いないだろうが、軍上層部はおろか政府だけでなく護人も首を縦には振らないだろう。
「仮に大亜連合と終戦に持ち込んだとして、その彼らがこの国の魔法技術を狙って再侵攻するという可能性だってある以上、下手に終戦へ持ち込めない。それに新ソ連のこともある」
「成程……それは無視できませんね」
　燈也は過去に佐渡侵攻を目論んだ新ソ連の兵士を殺したことがある。本人はあくまでも観光のために訪れていたわけだが、まさか戦闘に巻き込まれるとは想定外だったのだろう。自分も沖縄防衛戦に参加していた側の人間だが、もし原作知識が無ければ燈也と同じ気持ちを抱いていたかもしれない。
　会話をしながら入り組んだ森林を駆け抜けていく二人。これはスティープルチェース・クロスカントリー対策の一環で超高速での移動状態を維持したまま森林の道無き道を走破する訓練。やっていることが軍人というよりも忍びに近い感覚を抱いたのは言うまでもない。
　二人がスタート地点に設定された場所に戻ってくると、そこには山岳部の大半の生徒が死屍累々……というのは言い過ぎだろうが、大半の男子生徒が地面に横たわっていた。すると、一人の女子部員もとい水波がタオルを持って駆け寄ってきた。
「悠元兄様に燈也さん、お疲れ様です」
「ああ、ありがとう水波」
「すみません」
　そこまで汗は掻いていないが、二人はタオルを受け取って僅かに出ていた汗をぬぐった。すると、数少ない平気な人間の一人であるレオが話しかけてきた。
「よっ、二人とも。もう１０キロも走ってきたのか？」
「魔法を使いつつの高速移動を維持した状態で森林走破だからな……気付いたら２００キロを走破してた」
「それに気付いて慌てて戻ってきた次第ですけど……彼らの体力が尽きてません？」
　レオと地面に横たわっている１・２年生の男子部員、木陰で休んで

いる女子部員に加えて水波は通常のトレーニングメニューをこなしていた。そもそもの話、四葉のガーディアンである水波や肉体的なスペックに加えて一科生となったレオとそれ以外の面々の実力差が開いているのは言うまでもない。一科生になっても変わらない態度のレオに山岳部の部員も「まあ、レオだからな」という理由で納得していたようだ。

燈也が憐れむような視線で見たところに、野外演習服姿の達也が姿を見せた。

「おや、達也か。また例の早退でここに来たのか？」

「ああ。悠元がここにいるのは珍しい気もするが」

「まあ、何と言うか……うちの姉貴絡みだよ」

達也の事務処理能力は生徒会でも持て余し気味の有様である。ただ、達也に任せっきりではいざという時の対応や後進の生徒会役員が仕事を覚えないだろう、という危惧があずさや五十里の中にあった。現に風紀委員会では事務仕事の半分以上を幹比古が担っていることから察してほしい……この辺は花音の気質にも問題はあるだろうが。

そこで、達也が担う仕事をある程度限定させ、〝早退推奨〟を薦めたことで達也はかなりの空き時間が出来ることになった。泉美は最初不満げだったが、自分がその辺の事情を説明すると納得してくれた。理璃に関しては克人から聞いていた話で納得しており、セリアに関しては言わずもがなであった。

悠元の場合、軽運動部の活動もしてはいるが、あくまでも深雪に新陰流剣武術を教える関係でのこと。それ以外の時間は他のクラブに足を運ぶことがある。この辺は部活連の執行委員として活動しているかの確認も兼ねたものだが。

特に山岳部の場合は美嘉が頻繁に出入りしていたこともあり、勝手に〝名誉部員〟扱いとなっていた。達也の場合は、彼らのＣＡＤ調整も行っているのもあってか同じく名誉部員扱いとなっている。

すると、林の奥から山岳部の部長である県謙四郎（あがたけんしろう）が姿を見せた。

「神楽坂に六塚は戻ってきたか。それと、司波も来ていたのか」

「お世話になります、県（あがた）部長」

「おう、ゆっくりしていけ。ついでに連中をしごいてやってくれや」
　県の言葉にピクリと反応する者は多数だが、立ち上がって逃げ出すことのできる者はいなかった。何せ、達也が来る前に悠元と燈也によるしごきでかなり体力を持ってかれたためだ。
「……見たところ、悠元と燈也がしごいたようですが」
「なに、見た感じ準備運動程度だと判断した。林間走１０キロ程度でへばるなんてだらしがないぞ！　西城を見てみろ、お前らと同じだけ走り込んでピンピンしてるんだぞ！」
「……部長、レオと一緒にせんでください」
　県の言葉に対して反論したのは２年生の部員だが、確かにそのとおりである、と軽く頷いた。それでも、へばり続けるわけにはいかずと２年生の男子は起き上がったが、１年生はへばったままであった。そこで県は水波を呼ぶと、水波は近くにあった薬缶（やかん）を手にして横たわっている１年生の男子部員に向けて容赦なく熱湯を掛けたのだ。
「わーお……そこそこ派手にやるな」
「そこそこって……悠元も経験があるのですか？」
「新陰流剣武術でも似たようなことがあってな。あっちの場合は過冷却した水を容赦なく掛けられる……まあ、俺は何とか逃れられたけど」
　しかも、薬缶ではなくバケツレベルの放水を受けるのだ。冷たいを通り越して痛いレベルの水だということは想像に難くなく、一歩間違えれば凍傷すら負いかねない。上泉家はそのケアも簡単に出来るため、特に問題になることはなかった。自分の場合は何とかその被害を避けることに成功したわけだが。
　別に真似をしろなんて言うつもりはないし、掛けている熱湯は精々４５度前後ぐらいのものだ。水を掛けないのは、その心地よさで寝てしまう人間がいたからしい。レオと達也がトレーニングに向かった後、再び走っていく部員を見届ける悠元に対し、燈也が尋ねた。
「にしても、桜井さんが山岳部に入るとは意外でしたね」
「それはそう思う」
　悠元や達也とは異なり、水波は山岳部の正式な部員だ。料理部も掛

け持ちしており、その理由の半分は自分の主人である深雪と帰りの時間を合わせるためだ。残り半分の理由は、自分を鍛えたいというものと……その目標として悠元の存在があった。
「俺を目標にしてるっぽいが……水波にあのスパルタの地獄を味わわせるのは流石に躊躇うわ」
ガーディアンともなれば実際に人を殺す訓練もやっているだろうが、あれはもう人の生死に対する耐性というよりもほぼゼロの殺気と不条理な暴力の嵐に対してどう立ち向かうかの代物だ。なので、自分と同じ訓練は流石に課せないと判断した。
余談だが、以前穂波に施した時と同じように、深雪に協力してもらう形で水波に『領域強化（リインフォース）』を使用して、調整体の短い寿命や魔法演算領域、保有想子量や肉体とのバランスを改善している（四葉家に対しては当主の真夜から許可は貰っている）。この辺は穂波に対して行った時の感覚が非常に生きた形となった。
その副作用と言うべきかどうかは疑問だが、水波のスタイルが深雪に若干劣るぐらいのレベルにまで成長していたのだ。恐らく、想子体や精神を強化したバランスを取るための肉体改変による調整が働いたわけだが、これには深雪からジト目を向けられる羽目となった。
深雪の機嫌を直すために色々せがまれてしまったのは言うまでもない。具体的な内容はと言うと、一緒に風呂に入ることとなったり、一緒に寝ることぐらい……最近司波家でやってることとあまり変わりない気はするが、そこに何も身に着けていない状態が加われば どうなるかは察してほしい。それでも、最後の一線だけは抑えてもらうように何とか説得した。

ヤバいわよ（競技的な意味で）

理璃が蘇我大将から暗号メールを貰ったのが６月中旬。６月の初めから九校戦の準備を進めていたあずさにとっては驚くものだったが、何とか気を取り直してメンバー選定はほぼ形となっていた。

前人未到の４連覇が掛かっている以上、空回りしない様に五十里もフォローしているわけだが、その様子を時折勘違いしてしまう花音を諌めるので労力を使っていた生徒会メンバーであった。

第一高校でそんな騒ぎとなっている中、箱根の神楽坂本家では現当主の千姫と向き合う形で一組の男女――――第九高校２年の宮本修司と第二高校２年の高槻由夢が正座をしつつ頭を下げていた。

二人からすれば、突然の呼び出しに驚くのも無理はない話だ。千姫とて彼らの学業を妨げない様に配慮しているため、本来ならば急に呼び出すことは避けたかった。だが、態々呼ばなければならない理由があるからこそ、二人の通う学校に断りを入れた上で呼びだした。

「頭を上げてください、二人とも……由夢、修司とはどうですか？」

「まー、いつも通りです。もう少し悠元のようにがっついてくれたらあびゅっ!?」

「阿呆。俺と悠元じゃ置かれている立場が違い過ぎるだろ」

遠距離恋愛の状態なので、それこそ顔を合わせるのは神楽坂本家か『神将会』の会合ぐらいである。いつでも構わないと言い放った由夢に拳骨を落とした上で修司は冷静に呟いた。

「俺はお祖母様の愛弟子であり、悠元はお祖母様の養子で神楽坂家次期当主。求められているものが違う以上、同じ括りに出来るか……っと、申し訳ありません」

「いえいえ、いいのですよ。ここには身内しかおりませんから」

この大広間には、千姫と修司、由夢しかおらず、残りの使用人は持ち場についているし、精々いると言えば『九頭龍』の護衛が数人程度。筆頭執事である忠成は広間の外で待機している。

身近に護衛を置かないのは、千姫が万が一の襲撃を迎撃する際に却って邪魔となってしまうからだ。

修司の謝罪を窘めつつ、千姫は手に持っている扇子を広げて仰ぎ始めた。
「修司に由夢、悠君と伊勢家から報告がありました」
「悠元は分かるけど、伊勢家？　姫梨じゃなくて？」
「はい。先日、奈良に出向いて第九種魔法開発研究所を偵察したそうです」
「旧第九研……九島家の時点で嫌な予感がするのですが、お祖母様」
パラサイトのことは、修司と由夢も現地――ＵＳＮＡに留学した際、雫と協力して対処した経験がある。日本で起きていたパラサイト事件の顛末は『神将会』で情報共有されているが、その中には四葉家と九島家が封印されたパラサイトを分け合って持ち去ったことも含まれている。
四葉家のパラサイトについては神楽坂家から霊的な封印・制御術式の提供を行い、精神構造・魔法演算領域の研究に用いるという条件付きで保有を認めた。四葉家自体強固な結界を有しているため、外部と遮断しやすく秘匿するには問題ないと判断した結果だ。
「その予感は正しいですよ、修司。連中はどうやら、『パラサイドール』なるものを作り出したようで」
「『パラサイドール』……パラサイトを用いた兵器、ということですか？」
「ええ。しかも、今年の九校戦でそれをテストするようなのです」
「運営委員会は正気ですか？　そもそも、パラサイトの性質を理解していれば、あのようなものを兵器に転用なんて正気の沙汰じゃないと思います」
思わず耳を疑いたくなったのは、修司だけでなく由夢も同様であった。ＵＳＮＡで消滅させた６体のパラサイト（調査の結果、ダラスとは別の場所にある研究所で発生させたマイクロブラックホールによるものだと判明した）の性質は、並外れた力を有する彼らの敵ではなかったにせよ、普通の現代魔法師からすれば十二分に脅威的なものであった。
それを兵器に転用して使おうとすること自体、とてもではないが正

気を疑う所業だと思うほどだ。
「といいますか、九校戦の競技に『パラサイドール』なんて使えるものはないはずでは？」
「今年の九校戦は国防軍の対大亜連合強硬派が捻じ込んで、一部の競技を変更しました。新たに入った競技の中にスティープルチェース・クロスカントリーがあります。恐らくはその競技に『パラサイドール』を投入するつもりでしょう」
「スティープルチェース・クロスカントリー……？」
「陸軍の山岳・森林訓練に使われる軍事訓練の一つだ。ただ……下手すればドロップアウトが出かねない訓練を競技に採用するとか、魔法協会は抗議しなかったのですか？」
　修司が魔法協会という言葉を使ったのは、上泉家と神楽坂家はその状況を鑑みた上で国防軍を抑え込むと判断したからだ。九校戦は日本魔法協会も関与しているため、師族会議も含めての対応を尋ねた。
「形として抗議文は送ったようですが、運営委員会は会場提供を受けている国防軍の側に舵を切ったようです……少し時期は早いかもしれませんが、これも時の流れなのでしょうね」
「お祖母様？」
「修司さんに由夢さん。お二人には東京の別邸で暮らしていただきます」
「……はい？」
　一体何がどうなっているのか……という風に疑問を浮かべる修司に対し、恋人と暮らせることにウキウキしている由夢。そして、開いてた扇子を閉じた上で千姫はこう告げた。
「そして、既に関係者へ話をつけていますが、お二人には第一高校へ転入していただきます」
　いくつかの思惑が存在するが、そのことを敢えて述べることなく千姫は二人に転校を命じたのであった。これが結果的に功を奏することとなったのは、この時は誰も気付いていなかった。
◇　◇　◇
　西暦２０９６年７月２日。九校戦の運営委員会から魔法科高校九

校に通達された内容。
一部の競技――『スピード・シューティング』『バトル・ボード』『クラウド・ボール』が入れ替え対象となり、『ロアー・アンド・ガンナー』『シールド・ダウン』『スティープルチェース・クロスカントリー』が追加。
更に『スティープルチェース・クロスカントリー』以外の競技と掛け持ちは禁止され、『ロアー・アンド・ガンナー』『シールド・ダウン』『アイス・ピラーズ・ブレイク』はソロとペアでの出場となる。
「うちは十文字さんのお陰でそこまで混乱にはなってないけど、掛け持ち競技が限定されるのは痛いね」
「そうですね……」
二人がそう零した理由は悠元と深雪にあった。彼らは二種目ともに優勝しており、総合優勝を狙うには本戦二種目を確実に取れる要員だからだ。
とはいえ、ここで愚痴を言っていても仕方がない、と思ったところでノック音が鳴り、あずさが入室を促すと服部と悠元が入ってきた。
「中条。メールは見たが、開催要項に変更があったのは本当か？」
「あ、はい。それが……」
あずさは服部に一連の事情を説明した後、服部は少し考え込んでから悠元に視線を向けた。
「神楽坂。２年で有力なメンバー選定はお前に一任しても構わないか？」
「ええ。３年生については会頭にお任せします」
短いやり取りだが、大まかなメンバー選定は事前に仮組しているため、後は掛け持ちできなくなった競技の穴埋めと新規に追加された競技のメンバー選出を行うことで決着したことを確認すると、服部は生徒会室を後にした。その場に残った悠元はワークステーションに座るとキーボードを叩き始めた。その様子を興味深そうに達也や深雪、泉美とセリアも見ていた。
「お前ら……ま、いいか。俺と深雪はピラーズ・ブレイクのソロで行くつもりだが、異存はないか？」

「はい、大丈夫です悠元さん」
「悠元がそっちで行くということは……『クリムゾン・プリンス』対策か？」
「まあね」
　そもそも、一条家の『爆裂』を使える競技となればアイス・ピラーズ・ブレイク以外にないし、モノリス・コードで『カーディナル・ジョージ』と組んで点数稼ぎという算段も考えられなくはないが、魔法を見せつけるという意味ではモノリス・コードだとインパクトに欠けてしまう。
　今回の大会ルールを考えるならば、いくら『カーディナル・ジョージ』でも『クリムゾン・プリンス』と組んで圧倒するだけでは総合優勝には届かないだろう。
「ロアー・アンド・ガンナーだが……ソロは燈也と……セリアに行ってもらうか」
「え、私？　かなりヤバいけどいいの？」
　セリアがヤバいと発言したのは、ロアー・アンド・ガンナーの競技そのものの由来に起因する。
　ロアー・アンド・ガンナーとは漕ぎ手（ロアー）と射手（ガンナー）がペアとなり、無動力のボートを動かして水路内を走破しつつ、水路脇や水路内の的を狙撃する競技。水路の走破タイムと命中した的の数で競うものだが、これは元々ＵＳＮＡの海兵隊が上陸訓練の一環で行っていたものだ。
　セリアから内密に聞いていたが、スターズではこれよりも更にレベルの高い上陸訓練を課されるため、それをこなした経験のあるセリアがロアー・アンド・ガンナーに出ればほぼ優勝のラインに乗せられることとなる。
「セリアでどうこう言うぐらいなら、『クリムゾン・プリンス』と『カーディナル・ジョージ』だって反則の極みだろう。というわけで、決定な」
「ま、いいけどね。ただ、中継を見たリーナから何て言われるか……」
　男子ソロを燈也に据えたのは、恐らく三高から『カーディナル・ジョージ』が出てくることが想定されるためだ。それに、燈也自身バ

イアスロン部でも時折練習に混じっており、ソロでボードを制御しつつ的に命中させる技術は高いと雫やほのかが述べていたからだ。
　ロアー・アンド・ガンナーの女子ペアは片方を英美に担当してもらうつもりだ。もう片方は3年生でボート部の国東久美子（くにさきくみこ）がいるので、あとは英美の射撃術式を見繕うぐらいで問題はないだろう。男子ペアは森崎と五十嵐を考えている。昨年の新人戦モノリス・コードのことを考えれば、彼らを組ませるのならば問題はないと判断した。
「問題はシールド・ダウンだな。女子だと壬生先輩とエリカは確定として……男子は悩むな」
　男子の名立たる実力者で行くと、3年生の沢木や桐原、2年生なら十三束とレオが候補に入る。服部に関してはモノリス・コードに据える関係上、シールド・ダウンの候補からは外れる形となる。ただ、十三束の特性を考えるならば、シールド・ダウンのペアとして桐原が入るのが望ましい。そうなると、折角の実力者であるレオを余らせるのは不本意……と、悠元はとある案を思いついた。それに気付いた達也が尋ねた。
「悠元、何を考えたんだ？」
「いや、どうせだったらレオにピラーズ・ブレイクの男子ペアに入ってもらう方がいいかな、と思ったから」
　遠隔操作系はレオ本人曰く苦手だが、その辺の制御も最近はできるようになりつつある。モノリス・コードという方向性も考えなくはないが、直接攻撃系の戦闘方法が多いレオにとっては少し厳しいだろう。
　それに、遠距離攻撃が可能な『ドラグーン・ブレス』を有している上にレオの硬化魔法のバリエーションを増やせれば、彼の祖父に名付けられていた『城塞（ブルク・フォルゲ）』の名に恥じぬ活躍を見せられるだろう。レオ本人に付随する問題は発生するだろうが、場合によっては『神将会』やドイツ政府を動かしてでも事態の収束を計るつもりだ。
　攻撃の役割を担うことになるペアの相手をどうするかが鍵となるが……ここは保留としておく。
「確かにレオの防御力をピラーに反映できれば強いだろうが……どう

するつもりだ？」
「そこは練習で感覚を掴んでもらうさ。加減をする気もないけど」
◇　◇　◇
達也たちは行きつけの喫茶店「アイネブリーゼ」に集まっていた。2年生の一科生（悠元、深雪、雫、ほのか、姫梨、セリア、レオ、エリカ、幹比古）と魔工科生（達也、美月、燈也、佐那）に加えて、1年生の水波も加わっていた。泉美も加わりたそうにしていたが、そこは香澄が諌めたようだ。
殆どが2年生なので水波としては居心地が悪そうにしていた。それでも、先に帰るという選択肢はないようだが。
少し落ち着いてから幹比古が切り出す形で会話が始まった。
「そういえば達也、九校戦の競技が変わったって本当かい？」
「ああ。スピード・シューティングとバトル・ボード、クラウド・ボールが外れてロアー・アンド・ガンナーとシールド・ダウン、スティープルチェース・クロスカントリーが追加された」
達也はその上で追加された3つの種目に関しての説明をする。その中でもスティープルチェース・クロスカントリーは異質である、と達也は念を押す様に説明したところでエリカが口を開いた。
「……ねえ、悠元は部活連の副会頭でしょ。もうメンバーの選定は決めてるの？」
「大体はな。今の段階では3年生の選出をしている服部会頭とのすり合わせが必要だが……燈也とセリアにはロアー・アンド・ガンナーのソロに出てもらいたいと思っている」
「まあ、理には適っていますけど……セリアが女子ソロですか」
燈也もパラサイト事件や南盾島の件に少しは関わっているため、リーナの事からしてセリアの素性にも気付いているのだろう。その疑問に答えるようにセリアが口を開いた。
「ま、向こうでやってた鍛練よりはイージーだと思ってるかな」
「……セリアはバイアスロン部の上級コースでパーフェクトを叩き出してるから、嘘はついてないね」
セリアの言葉に補足する形で述べられた雫の言葉に、一同は様々な

反応を見せていた。とりわけ素性を知る側である達也からすれば、一つの安心材料と言うべきなのかは躊躇われた。そんな状況を横目で見つつ、悠元は説明を続ける。
「ほのかと姫梨はミラージ・バット、幹比古はモノリス・コード、深雪と雫や俺はピラーズ・ブレイクになるわけだが……今考えている案は、シールド・ダウンにエリカを、ピラーズ・ブレイクのペアにレオを入れようと思ってる」
「へ？　こいつがピラーズ・ブレイクに？」
「こいつって言うんじゃねえよ。でもよ、俺は操作系が結構苦手なんだが」
「そこはちゃんと考えてあるから、問題はない……ん？　メール？」
　すると、悠元の端末にメールが届き、素早く操作して中身を確認する。すると、それを見た悠元の表情が険しいものとなっていることに深雪が尋ねた。
「悠元さん？　何かトラブルでもあったのですか？」
「……ここにいる連中の殆どが知っている人間が二人、明日転校してくる」
「殆どと言うと……まさか、神楽坂家で会った二人の事か？」
　差出人は千姫からであり、内容は宮本修司と高槻由夢の二人を神楽坂家の別邸に住まわせるというもの。そして、それに合わせる形で第一高校に転入する旨も記載されていた。これを喜ぶべきなのかはものすごく疑問に残るところだ。
「その解釈で間違ってはないよ。しかし、この時期に転校とは……多分、二人の家の後継者問題もあるんだろうな」
　今年の正月、悠元を襲撃した主犯格とも言える宮本家と高槻家の男子たち。その件を重く受け止めた現当主らは、生まれ順に拘らない後継者選びへとシフトしつつあった。それで分家の次期当主らが逆上して悠元へ危害を加える可能性もあるだけに、悠元としては穏便に済ませるようお願いした。
　修司と由夢、それと姫梨が愛弟子となる際に『各々の家の次期当主候補に選ばない』という口約束が組まれていたわけだが、能力的なこ

とを考えれば各々の家で筆頭格となってしまうのは言うに及ばず。将来の御家騒動を避けるべく、千姫が一計を案じた形だろう。
「うぇー、考えたくもないわね」
「右に同じくだがな。聞けば二人は許婚の関係らしいから、母上が神楽坂の分家として独立させる気なんじゃないかとは思うが」
現代魔法の家と異なり、分家制度が未だに残っている古式魔法の家は多い。上泉家でも嫁いだ家の数で言えば両手で収まるレベルになっている。神楽坂家でも上泉家、鳴瀬家、高槻家、宮本家、伊勢家との繋がりを有している。
修司と由夢は悠元の影響を受けてかなりの強さを有しているため、悠元が三矢家から神楽坂家へ移ったのと同じように、二人を関東地方に呼び寄せた上で新たな家を興させる気なのだろうと推測される。
この話のお陰で、この場で九校戦の競技が軍事訓練寄りになったという話題に向けられることは無くなったので、それはそれで良かったと思うことにした。

初夏の紅葉模様

悠元が司波家の自室に戻り、私服に着替えたところで端末の着信音が鳴った。この着信音に設定した相手からの映像電話（ヴィージホン）の連絡は久しぶりだと思いつつ、レシーバーを耳につけて通話を繋げた。

すると、表示された相手は悠元からすれば知己とも言える人物であり、燈也が目の敵にしている人物こと第三高校2年の吉祥寺真紅郎（きちじょうじしんくろう）であった。彼の恰好を見るに高校の制服の上着を脱いでいる状態だった。

「久しぶりだな、カーディナル・ジョージ。直接の連絡は年末以来か」

『そうなるね。それと、態々そう呼ばなくてもジョージで構わないよ』

「一応礼儀みたいなものだが、わかったよジョージ。見たところ制服姿のようだが、そこまで急を要する用件だったか？」

『あー、実は今一条家にいてね。将輝は誤解を解くために傍を離れてるよ』

真紅郎が言うには、将輝と今回の九校戦の競技変更について話し合っていたわけなのだが、当の将輝本人は想い人である深雪のことに思考が割かれ気味で、とても話し合いになっていなかった。

そこに飲み物を持ってきた茜が将輝の言葉の一部を勘違いして受け取ってしまい（将輝と真紅郎がペアでダンスを踊るという風に勘違いしたらしい）、出て行った茜の誤解を解きに将輝が慌てて追いかけた次第だ。

「なあ、ジョージ。ふと思ったことなんだが」

『何だい、悠元？』

「俺の予測だと、将輝がそのままノックもせずに茜ちゃんの自室へ入る羽目になって、一発ビンタを貰うんじゃないかと思うんだが」

『……あり得なくもないね』

突発的なことが起きると自重という言葉が飛んでいく将輝の行動原理は、悠元と真紅郎の双方が良く知っており悠元の推測は強ち間違っていない、と思ってしまった真紅郎だった。

「それは置いとくが、何か聞きたい事でも？」

『そうだね。そっちも九校戦の競技変更は聞いてると思うけど、悠元はどう思うか聞きたくてね』
「国防軍の介入があったのは間違いないだろうな。元々九校戦は国防軍の演習場の一部を借りて行う以上、何らかの干渉を行う分には簡単だろう」
魔法に対する恐怖を和らげる目的も含んでいるからこそ、より実戦的な競技へ入れ替えられたことは二校のみならず、他の魔法科高校でも同様の印象を抱いていることは想像に難くない。元々富士演習場の一部の施設が九校戦に貸し出される形となるため、国防軍の介入自体は意外にも簡単である。
「とはいえ、日本魔法協会は今春の一件があるから、軍事的な競技は避けたいと考えるはずだ。ジョージ、将輝に言って一条家で調べてもらえるか？」
『……そこまでする必要があるのかい？』
「スティープルチェース・クロスカントリー。あれは正直に言って高校生でやっていい競技じゃないし、魔法の創意工夫という意味合いでは九校戦の意義に反している」
そもそも、ロアー・アンド・ガンナーはともかくとして、シールド・ダウンはモノリス・コードをより限定した魔法戦闘競技でしかない。ある意味被っている競技を態々入れる意味合いが正直理解できない。この辺は昨年の本戦モノリス・コードに出ていた克人の姿が脳裏を過った結果でもあるが。
スティープルチェース・クロスカントリーについては、演習林という場所の観点からしてモノリス・コード以上に視認性が悪く、魔法を魅せるという点に関して言えば最も適さない競技である。大体、そんな競技を入れるぐらいなら魔法の使用を前提としたアスレチックフィールド競技でも入れた方がまだ見栄えがあると思う。
調べること自体はこちらでも出来るが、佐渡侵攻で当時指揮官をしていた酒井大佐は対大亜連合強硬派に属している。その意味で一条家の伝手を頼るのが一番手っ取り早いし、今回のことに関わっていなくとも同じ派閥の情報ぐらいは手に入れられるだろうと踏んだ。

調査の結果については九校戦の懇親会で顔を合わせるため、そこで情報を交わすことで合意して通信を切った。

なお、その後に真紅郎から届いたメールでは、左頬に紅葉を作っていた将輝の姿を見て、思わず笑ってしまったらしい。事情はこちらが話した通りの展開になったらしく、笑いを禁じえなかったのであった。

◇　◇　◇

魔法科高校の殆どを困惑と混乱の渦に巻き込んだ九校戦競技変更の通達から一夜明けた7月3日、火曜日の朝。旧茨城県土浦に置かれた国防陸軍第101旅団の司令室にて、旅団長である佐伯広海少将が、独立魔装大隊・大隊長である風間玄信少佐を呼び出していた。

この二人の付き合いは大越戦争――大亜連合がベトナムへの侵攻を目論んだ戦いで、結局はUSNAと新ソ連の介入で失敗に終わった――の頃にまで遡り、当時ゲリラ戦に参加することとなった風間を支援したのが情報参謀を務めていた佐伯であった。

その後、4年前の沖縄防衛戦を切っ掛けとして佐伯のプランを採用する形で第101旅団が設立されて初代司令官に任命されると、尉官として冷遇されていた風間を呼び寄せて少佐に昇格させ、独立魔装大隊の大隊長に任命した。

交流の時間こそ短いものの、二人は互いに本音で語り合える間柄となった。独立魔装大隊は新たな魔法装備や魔法戦術の実験部隊的な側面を持ち、第101旅団は十師族に頼らない魔法戦力の確立を目的とし、風間はその要である。

内容は無論の事、国防軍としても無関係ではない九校戦のことだ。

「風間少佐、今年の全国魔法科高校親善魔法競技大会――九校戦の競技内容が変更になった話は御存知ですか？」

「昨日の時点で既に把握しております」

何せ、風間としては部下である大黒竜也特尉――達也に加えて、第101旅団の特務参謀を務めている上条達三特尉――悠元が間違いなく九校戦に参加するだろうとみている。

流石に達也のほうは選手として出ることはないかもしれないが、彼

の妹が出る以上はエンジニア及びそのバックアップを担うことになる。
　風間としては、戦闘にあまり関係のない魔法競技に疎いと思っていた佐伯が興味を示していたのが意外であったが、そのことは口に出さずに佐伯の言葉を待った。すると、佐伯がボタンを押して壁から椅子が出て風間の背後に移動した。長話になると踏んでのもののため、風間はそれに従う形で椅子を展開して腰を下ろした。
「それで少佐、変更された競技をどう思われましたか？」
「紛れもなく、軍事訓練のメニューでしかないかと」
「……言い切ってしまうのもどうかと思いますが、私も概ね同意です」
　急な競技変更自体、昨年秋の横浜事変を鑑みて魔法師の有用性を再認識した国防軍が干渉したと見るのが自然な流れである、と佐伯や風間は一致した認識を抱いていた。
「魔法協会は国防軍のこの要請に対し、形ばかりの抵抗しかしませんでした」
「〝あの方〟は抵抗されなかったのですか？」
「九島閣下は反対されませんでした」
　風間としては、スティープルチェース・クロスカントリーの内容から見るに反対しそうな九島烈が黙認――――半ば容認の姿勢を取ったことに疑問を感じたが、佐伯の言葉で意識を戻す形となった。
「少佐、国防陸軍総司令部より我が旅団に対し、今回の九校戦に協力するようにとの要請が下りました」
「命令ではなく要請ですか」
　問題としてはそこではなく、いくら前年度の九校戦で警備に当たっていた（プラス達也の監視役を担っていた）とはいえ、真っ先に第１０１旅団へ話を持ってきた意図を考えなければならない。そこに付け加える形で佐伯が述べた。
「しかも、蘇我大将閣下直々のお達しです。私としては断る理由はありませんが……どう見ますか？」
「彼が親族を危ぶんでのもの、と解釈は出来るかもしれませんが……

それだけではないように思えます」
「私もそう考えています」
　いくら陸軍の総司令官である蘇我大将とはいえ、身内を護衛させたいがために態々第１０１旅団を選んだという訳ではない。魔法競技大会という性質上、魔法に精通している部隊を有している大隊が協力するのは道理として、これは恐らく魔法協会と佐伯の双方に対しての釘差し……悪く言えば嫌がらせみたいなものだ。
「春の一件もあって、魔法協会が国防軍に対して発言力を強めていることが軍上層部も気に入らないようですね」
「ようやくでありますか」
　表面上は佐伯の愚痴にも聞こえる台詞だが、風間はそれが「軍上層部も十師族に依存する危険性を感じ始めた」という風にも受け取れる。その証拠に、佐伯が満足げな表情を風間に対して向けていた。
　ただ、戦略級魔法に関しては十師族の関係者に頼らざるを得ない、という現実は変わっていないが。
「私はこの打診を受諾しますが、少佐の大隊には待機を命じます」
「――了解しました。別命があるまでは待機いたしますが、質問しても宜しいでしょうか？」
「ええ、構いません」
「では……待機の明確な理由をお尋ねしたいのですが、お答えいただけますか？　流石に隊員たちの士気にも関わる話でありますので」
　最初は出動命令かと身構えていたのだが、佐伯は独立魔装大隊に待機を命じた。そのことに異を唱える気はないが、せめて理由を明確にしないことには、自分はともかくとして大隊の構成員の士気にも関わると判断した。
　その風間の問いに、佐伯は少し考える素振りを見せてから話し始めた。
「先程の話の続きになりますが、九島閣下は反対するどころか積極的な姿勢を見せたようです。特にスティープルチェース・クロスカントリーに強い関心を見せたようで、代表参加方式から全員参加方式への変更とコース設定を長く広くと要望したとのことです」

「意外の念を禁じ得ません」
烈は元々、若い魔法師が軍事の犠牲になってほしくない、という本音を風間は知っている。一方、スティープルチェース・クロスカントリーはコースが長ければ長くなるほど完走率がかなり下がるだけでなく、魔法師としての人生を失うリスクも高くなる。
烈の心変わりを疑いたくなるような行動だが、長い事魔法師社会に影響を与えてきたかの人物がそんな急に変わるとは、風間には思えなかった。
「では、九島閣下の行動には裏があるとお考えなのですね？　そして……藤林少尉も無関係ではないと」
「あの方がそう簡単に宗旨替えを起こすはずがないと思っております。そして、少佐にとっては良くない知らせかもしれませんが、藤林家も九島家に同調する形で何かをしようとしております。少佐は藤林少尉の動向に注意を怠らないでください」
「了解しました」
決して響子の人格を疑っているわけではない。だが、彼女の実家が関わっている以上、風間の部隊が待機を命じられるのは当然の流れであった。それに関して異を唱えることは一切なかった。
司令室を出た後、風間の思考は副官である女性士官の事よりも二人の特尉――悠元と達也のことに注意を向けていた。彼らは特務士官である上、とりわけ悠元は軍人魔法師としての戦闘禁止を条件とした特務士官である。
彼らが舞台となる九校戦に出る可能性が高い以上、このことを伝えておかなくていいのだろうか、と考えた。佐伯が「大黒特尉」や「上条特尉」の話を持ち出さなかったところを見るに、彼らに明かすべきではないのだろう。
（だが……達也はともかくとして、悠元は動いているのかもしれない）
悠元は、第１０１旅団特務参謀という立場だけでなく神楽坂家次期当主という立場にあり、昨年の春に情報部――十山家（国防軍上では〝遠山〟という名字で登録されている）からの要請もあって佐伯の命令権で悠元に出動命令を下した一件が未だに尾を引いている。

加えて、パラサイト事件ではその先鋒として悠元が参加しており、彼の一存で独立魔装大隊への協力を取りやめた経緯があることを風間は悠元から聞き及んだ。その理由は響子経由で九島烈にパラサイトの存在を知られたくない、というものだった（彼がパラサイト事件の時、関東にいた事実は風間でも知らなかった）。

（まさか、九島閣下は先日のパラサイト事件で何かを得て、九校戦でそれを試そうとされているのか？）

その九島烈が積極的に九校戦の新種目へ干渉した……そこまで考えた上で、風間の中には一つの嫌な予感が過っていた。それは、パラサイト事件に関係した何かなのではないか、という最悪の可能性に触れるものだ。

だが、現状では可能性という域を出ず、風間の部隊は響子のこともあって待機を命じられている。風間は彼らに連絡する義理自体はないものの、そういったところでの積み重ねで信頼関係を失うのは避けたかった。

それだけでなく、悠元と達也が最悪の可能性に対処する場合、引き起こされるであろう大惨事（カタストロフィ）を想像するのであれば、彼らに連絡を入れないことの方が拙い……と、そう考えざるを得なかった。

（仮にそうだったとするならば、悠元と達也は間違いなく対処に動くこととなる。九島閣下もそれを想定して動かれているとするなら……いや、それ以上は自分の及ぶ範疇ではないな）

風間が考えたこと――――烈の行動の対処にあの二人を保険として使うこと自体は理に適った行動とも言えるが、達也はまだしも悠元は快く思わないであろう。昨年夏の師族会議に関わる話は悠元から聞き及んでいるが、その時の印象が残っているとすれば九島家の行く末が心配になり、自身の部下である響子の実家もその影響を受けることになるだろう。

だが、自身が関われるのはあくまでも国防軍の範疇に携わる部分だけ……そのことを風間は再確認するように思案した。

単純に出来ていたら苦労なんて負わない

理璃からの情報提供もあって、生徒会や部活連ではそこまで大きな騒ぎとならずに済んだ訳だが、これが当初その競技に出れる予定の生徒となれば話は変わってしまう。九校戦に向けた練習自体は公式サイトでの発表を待ってから行う予定であったのが救いと、それに加えて追加された3つの種目に詳しい人間がいたのは不幸中の幸いとも言えよう。

その負担が圧し掛かったのは悠元とセリア……奇しくも前世では兄妹であった二人であった。同じ一高の生徒に対するルールの資料作成のため、東京にある神楽坂家の別邸で作業を進めていた中、セリアが悠元に問いかけた。

「それで、お兄ちゃんは何でシールド・ダウンの細かいルールを知ってるの？」

「新陰流剣武術では似たような鍛錬をすることがあったからな」

硬化系魔法の精度を上げる訓練の一環で、手に持ったもので対象を破壊する訓練を行っていたからだ。一例としては、泥だけで出来た球で金属の壁を貫通させるという物理法則的に無理な課題を出されたことがある。

手に持っている盾で相手の持っている刃物を破壊することもあり、その訓練にはシールド・ダウンのルールの殆どが組み込まれている。あとは、異性間でどうしても手合わせする場合の配慮として行われている経緯がある。

「ロアー・アンド・ガンナーも細かいルールは読み込めたが、やっぱりスティープルチェースは高校生がやるべき代物じゃない」

「スターズでもやることすら躊躇うし、もう少し距離は据え置くものというのに……全長4キロはやりすぎだと思う」

いくつかのルールに関しての疑問は既に運営委員会へ送信しており、その結果次第で今後の行動が決まることになる。悠元は一息吐いた上でセリアに話し始めた。

「セリア。今回の件は正直腹が立っている」

「……いや、そりゃ腹が立つと私も思うよ。だって、投げやりに近いもの」
元々は九島家の企みに関して、烈は達也ありきの実験計画を立てていた。深雪が九校戦に出る以上、競技に伴うもの以外の危険を達也が看過できるとは思わないからこその軌道修正だが、ハッキリ言って気に食わない。
しかも、今回の場合は悠元も抑止力として考えている可能性が高い。このことに関しての判断情報は彼の孫である光宣から齎された
「最近の烈の様子」に関する相談で表面化した形だ。
「先日偵察をしたが、その時点では暴走に繋がる様相は見られないものの、絶対という保証なんてできない」
九島烈はピクシーにパラサイトが憑りついているという事象は認識できている。だが、その詳しい経緯は彼ですら知らない。烈は何らかの忠誠術式がピクシーに働いていると推察してパラサイドールに制御術式を仕込んだのだろうが、ピクシーとパラサイドールの出発点は違えども決定的に異なる点がある。
それは、ピクシーにはパラサイドールに存在しない〝想念による自我〟を有している点にあり、ピクシーの忠誠心も自我を写し取った対象であるほのか――――エレメントの一族が持ちうる依存体質が想念に含まれた結果だということ。
「『フリズスキャルヴ』の検索履歴から顧傑がパラサイドールのことを察したのは気付いた。近いうちに周公瑾が動くこととなるな」
「……彼を殺さないのは、何かあったりするの？」
「顧傑のこともあるが、もう一つは大亜連合の動きだ」
対外的な強硬派はなにもこの国だけに限った話ではない。原作で達也を宇宙に追い出そうと画策したエドワード・クラークもそうだ（断言はできないが、何らかの形でＵＳＮＡの伝手を使って達也を殺そうと目論んだ可能性はある）が、大亜連合にも一定数の強硬派が存在する。だからこそ、原作だと西果新島（さいかしんとう）（現時点では建設中）での事件も起こった。
尤も、現時点では『灼熱と極光のハロウィン』で使われた戦略級魔

法による報復を恐れてか、大々的な軍事行動は起こしていない。これが顧傑による発破をかけられた場合はまた状況が変わってくるだろう。
「七草家と周公瑾を切り離したことで、腹心である名倉が死ぬ確率は大幅に減ったが……油断は出来んな」
「どうして？」
「ちょっと調べては見たんたが……名倉が個人的に関わっていた仕事の中に周公瑾との接触があったのを確認した」
　元々の流れでは、弘一が名倉を経由して周公瑾から情報を聞いて九島家の動きを把握していたわけだが、そもそも名倉が周公瑾と何らかの関わりを持っていなければ、周公瑾がその筋の交渉ルートを見出そうとは思わなかっただろう。他に伝手を持っている国防軍経由では、確実に四葉家の知ることとなるのは自明の理である。
　名倉――――元の名は『七倉（ななくら）』。彼は〝数字落ち（エクストラ）〟の一人で、国防陸軍において制服組のキャリアを持ちつつも『殺し屋』のような任務に就くことが多かった。具体的には、重大な罪を犯した軍人や軍人魔法師、不法に入国した犯罪者を人知れず暗殺する役割を担っていた、と自分の調査で判明した。
　彼が手に掛けた対象の中には大亜連合の関係者も含まれており、周公瑾とはその際に面識を持った可能性が極めて高いだろうと睨んでいる。
「……お兄ちゃんは、名倉さんが自身の因縁を断つために暇（いとま）を貰ってまで周公瑾と接触する可能性を考えているの？」
「有り得ない話じゃない、とは思ってる。七草弘一と約定は取り付けたが、彼が含まれるかは微妙なラインだ」
　物事は言いよう、とはよくできた言葉である。仮に積極的な接触を命じなくとも、名倉が偶然立ち寄った店で周公瑾から接触して情報提供をしてくる可能性がある。弘一に聞かれたところで、名倉ならば適当な名を出した上で誤魔化すかもしれない。
　名倉が掴んだ情報全てを弘一に開示しない時点で、とても雇用主とその腹心で成立し得るような関係性に見えない。もしかしたら、名倉

は七草家に対して何らかの〝因縁〟を有しているのかもしれない。それこそ、春の一件で起きた七宝家の七草家に対する執念（厳密に言えば琢磨個人が真紀に吹き込まれただけなのだが）のような何かが。（……この辺は爺さんや元継兄さんに相談してみるか。流石に母上を動かすのは地理的な意味で拙いことになる）

神楽坂家は元々皇族の守護を担うという本分を果たすべく、京の都の北西部に存在していた本家を痕跡一つすら残すことなく箱根へと居を移した。古くは平安時代から影となりて国の護りを見守り続けてきており、数多の権力者を記し続け……時には表側の人間を唆して葬り去った。

その彼らの本分は陰陽道系古式魔法の大家であり、京都を中心とした畿内一帯の魔法使いを統括してきた西の護人の役割を数世紀にわたって執り行った。江戸時代末期に神楽坂家が京都を去った後、西側の古式魔法の統括という後釜を巡って一時的に争いは起こったが、九州にあった護人の一角が治めたことで一旦秩序は回復した。

だが、九州にあった護人の一角は滅びたのだ。その原因は……御家騒動に端を発した内紛。その結果、一族が二つに分かれて全滅した。この事実があったからこそ、残った護人である上泉家と神楽坂家は、御家騒動の動きに対して目を光らせている。

実際のところ、自分が転生した後の様子を見た元が内密に剛三へ相談しており、上泉家行きの打診をしたのは元治との家督争いを避けるためだったと昨年の夏に判明した。尤も、自分から早々に家督継承の拒否を示したことで御家騒動の回避に成功しただけでなく、元治とも良好な関係を築くことが出来た。

話を戻すが、神楽坂家は陰陽道の技術をより高めるためにあらゆる技術の修得をしており（この辺は上泉家と同じ気質を持つ）、その中には現代魔法も当然技術の一つとして取り込んでいる。

昔ながらの触媒や呪符、杖などといった魔道具自体の研鑽も含めて、やっていること自体は「伝統派」に近い気質を持ちうるが、伊勢神宮や出雲大社、太宰府天満宮などの守護を担っていることもあってか、伝統的な古式魔法使いからは割と好意的、或いは尊敬に近い崇拝

を抱かれている。
奈良にある高鴨神社(たかがもじんじゃ)、京都にある八坂神社(やさかじんじゃ)は現在神楽坂の分家が管理をしているが、それでも神楽坂が畿内でかつての勢力を誇っていた時よりも古式魔法の対立構図は複雑怪奇の様相を呈している。
この辺が古式魔法と現代魔法における対立構図の一端を担っているのは言うまでもないため、護人の現当主である千姫を畿内に行かせるのは要らぬ火種を生む可能性がある。それを言ったら次期当主である自分も人のことは言えないだろうが。
「こういう面倒事が結果として俺や達也にぶん投げられるわけだが……ドイツ絡みもあるから油断は出来ん」
「ドイツって……レオとエリカだっけ？」
「ああ。しかも、俺の爺さんだけじゃなくお前の祖父――九島健も関わっている」
「にゃんですと？……噛んじゃった」
変なところで言葉を噛んでしまったあたりはリーナとそっくりなのはさておき、ルーカスがドイツを出て一時的にアメリカに身を寄せることとなった際、既に日本を追い出されていた健がルーカスをシールズ家の養子として迎え入れたのだ。その原因はルーカスが一族の決めた婚約者を不服としたところにある。
別にその婚約者の容姿が気に食わなかったわけではなく、婚約者の弱みに付け込んでの婚約という事実にルーカスが気付き、時期尚早であったゲオルグの脱走計画を早めたことも婚約の件が原因だ。
日本への駆け落ちという件も、有能であったルーカスを連れ戻そうとしたローゼン家の追跡を逃れるためであり、当時付き合っていた女性――エリカからすれば母方の祖母にあたる人物が健や千姫と個人的な誼を持っていたこともスムーズに事が進んだ理由であった。
「そういえば、お祖父ちゃんの持っている写真の中にエリカと同じ髪の色の男性がいたかな。多分それかも……で、そっちはどうするの？」
レオとエリカは九校戦の本戦メンバーでしょ？」
「パラサイドール関連は『神将会』で受け持つが、ローゼン関連は祖父世代の尻拭いということで俺とお前も関わるべきだろうな。面倒極

まりないが」
「それは口にしないで、お兄ちゃん……十二分に察してるから」
　奇しくも四人の孫世代が同じ学校に通うという奇跡の所業とドイツ絡みの面倒事に対し、悠元とセリアは揃って深い溜息を吐いたのだった。なまじセリアからすれば九島家という自身の親族絡みもあるだけに尚更なのかもしれない。
「……セリアに話してはおくが、今回の一件に関してローゼン家からの請求はしない。既に貰っているも同然の権利があるからな」
「何を貰ったの？」
「バスティアン・ローゼンの遺産。全遺産の約３分の１という相続権を爺さんから押し付けられた」
「……普通に考えたら、交渉しに来るんじゃない？」
　それもそうなのだが、自分の場合は話がかなりややこしいことになっている。
　まず、バスティアン・ローゼンが存命の時点で出会った時は『長野佑都（ながのゆうと）』を名乗っていた時であり、将来のこと（悠元が三矢の姓を本格的に名乗ること）も考慮して相続上の名義は剛三の名になっている。
　ドイツ絡みの一件については既にローゼン家から問い合わせが来ているらしいが、剛三はその一切を無視している。理由を現当主である元継から聞いた限りでは、ルーカス・ローゼンの名誉回復が先決であり、それが成されなければ相続権交渉に応じる気はない……というのが剛三の言い分である。
　しかも、剛三はローゼン家の交渉人に対して「相続の受取人は儂の孫だ。知りたければ勝手に調べるといい」と言い放ってはいるが……パーソナルデータ上では上泉家と三矢家の繋がりを悟られないようになっている。紙媒体による戸籍での確認は取れるが、電子媒体に記載しないのは上泉家が護人の一角を担っているのが最大の理由である。
「表面上、三矢家と母方の実家の繋がりは断たれている形だ。その当時は四葉絡みのこともあったからな……なので、俺に行き着くとする

なら、それこそ『フリズスキャルヴ』で調べないと無理だろう」
「エルンストからしたら、完全に八方手塞がりってことね。レオとエリカの件を片付けようとしたらお兄ちゃんが出てくるような形になるわけだし」
　正直言って、危機感を抱くのは勝手だがレオやエリカを誘拐するとなれば話は別だ。ただ、自分が動くとなれば深雪も動くだろう。その一方、達也がどういった行動を起こすかはまだ分からないといったところだ。
　周公瑾をどこまで追いつめるかの判断は千姫に丸投げしたため、後はなるようにしかならないだろう。
「そんな大金なんて正直要らんが……事が済んだ後でレオとエリカに〝ご祝儀〟代わりで半分ぐらい譲渡するつもりだ」
「バスティアン・ローゼンの遺産の総額は知らないけど、軽く見積もっても兆単位のご祝儀なんて普通じゃないと思うな。で、残り半分はどうするの？」
「『恒星炉』とサブシステムである太陽光発電の建設費に全部突っ込む。用途に関して何かしら言われたわけじゃないからな」
　太陽光発電と悠元は述べたが、厳密には宇宙空間に太陽光発電システムを組むという計画。これは前世の空想上にあったシステムを疑似的に再現しようとする試みである。ただ、『恒星炉』もそうだが、既存のエネルギー供給システムを壊すつもりはなく、寧ろ積極的に活用する方策の一環として太陽光発電システムの抜本的な改良をするつもりであった。
　余力を〝無駄〟として切り捨てる考え方ではなく、ただでさえ災害の多い日本の事情を鑑みれば、エネルギー供給能力は十二分に確保しても問題はない。発電能力に余力を持たせることで設備の寿命を延ばす――――その一つが定率制御（フラットドライブ）フィルターを発電機や配管に実装する装置の開発だ。
　装置自体は一応完成しており、その実験稼働ということで神楽坂家が所有する太陽光発電システムで試験を行っているが、余分な熱が外部へ漏れなくなったことでほぼ１００パーセントの熱交換を実現し

た。あとは発電機の摩擦などによるロス部分まで減らせれば、太陽光発電のエネルギー効率は極めて高い水準までもっていけることになる。

宇宙空間であれば大気による太陽光の減衰をほぼ気にすることが無くなる。基本的なメンテナンスなどの問題も魔法による方法で解決できると踏んだ。

ただ、この設備に関しては世界に対して教える気にもならない。その理由は、この技術が世界に広まれば何らかの形でそのエネルギーを享受できない地域が発生してしまうことに加え、安定した供給を行うためには赤道直下から南北プラス３０度に発電受信機を置かなければならない。

そうなると、東南アジアやＳＳＡ（南アメリカ共和国連邦）はまだいいとしても、世界群発戦争によるエネルギー資源の奪い合いによって無政府状態であるアフリカがまた戦火に晒される危険性がある。

下手をすれば第四次世界大戦にもなりうる可能性を秘めているため、このことは前世の身内であるセリアにも話せないと判断した形であった。

表側の依存、裏側の人任せ

神楽坂家別邸での九校戦に向けた資料作りはトラブルもなく無事に終わった。夕食の為に食堂へ降りてきたところで悠元とセリアはとある男女――修司と由夢の二人と鉢合わせする形になった。

「修司に由夢か。久しぶりだな。話は母上から聞いていたが、実際に会うのは正月の慶賀会以来か」

「そうなるな。で、そっちのお嬢さんが例の……」

「エクセリア・シールズです。お兄ちゃんの婚約者ともいいますかあべしっ!?」

「……なんだか、仲良く出来そうだね」

何かを思い出したように照れながら自己紹介するセリアに対し、「少しは真面目にやれ」と言わんばかりに悠元のチョップがセリアの脳天に直撃して、彼女は涙目で頭を押さえる。その光景に既視感を覚えた修司は頭を抱え、由夢はジト目をしつつセリアに親近感を覚えていた。

修司と由夢もセリアに自己紹介をした後、互いに夕食を取りつつも会話に花を咲かせていた。その後、食後のお茶となったところで悠元が問いかけた。

「それで、母上からは神楽坂家の試しの儀も込めての事だと話してはいたが……お前らの実家の事情も含んでいると睨んでいるが、どうだ？」

「……それはあるかもね」

由夢が言うには、今年の正月にあった慶賀会で見せた悠元の天刃霊装が起因している、とのことらしい。天刃霊装の技術は神楽坂家３代目当主が成した功績だが、その強さを危ぶんで封印された代物。それに限りなく近い代物――新陰流剣武術における『心刃（このは）』のレベルならば問題ないと踏んで、天刃霊装の修得に至る方法は上泉家と神楽坂家で分割された。

「高槻家というか、出雲大社に伝わる口伝の中で天刃霊装を仄めかすものはあったかな……それを私が持つなんて思ってもみなかったけ

ど」
　そう言って、由夢は目の前で天刃霊装を展開する。その形状は柄の両端に騎士剣の両刃を備えた武器――両剣（ダブルセイバー）と呼称される武器で、由夢の天刃霊装『雷切（らいきり）』である。流石に食堂のテーブルを斬るわけにもいかないため、感触を少し確かめてから展開を解除した。
「春休みに事情説明で実家に戻ったところまでは良かったんだけれど、うちのバカ兄貴が悠元の天刃霊装を見たせいで無茶をしそうだったから、私が『雷切』で叩きのめしたの。そしたら、うちの親族が私を次期当主にしようと動いたのよ。これにはうちの父さんが本気で怒っちゃって」
「……俺も似たようなものだな。流石に親父が一喝と共に鉄拳制裁をしたが」
「大変だね……私は人のことを全く言えないけど」
　家としての力を落としたくないどころか、折角のチャンスだとみたのだろう。高槻家のみならず、宮本家でも起こり得ていたことにはセリアが同情を仄めかすような言葉を述べた。正直に言うなら、筆頭主家である伊勢家が割と穏便に済んだのが奇跡だろう。
「俺が天刃霊装を教えたのは、あくまでもパラサイトを中心とした妖に対処するための手段を持つためなんだがな……ああ、言っておくけどセリア、お前も修得してもらうから」
「それって、失敗すると仮面とか被っちゃう感じ？」
「どこの創作物の話だよ。安全マージンは完全に確保してるから問題ない」
　セリアは将来の身内になることもそうだが、単独で霊子構造体の対処法を学んでもらう方がいいと判断した。その意味で一番手っ取り早いのは天刃霊装の修得になる。この辺りのことについては事前に千姫から許可を貰っている。
　その辺の話をこれ以上したところで心労が嵩みそうだった為、九校戦に話題を切り替えることとした。こちらはこちらで問題を抱えているわけだが、喫緊の課題になりかねないものを見過ごすという判断は取れないと見た形だ。

「九校戦の競技変更はもう既に知っていることだろうが、国防軍関連の事情調査を一条家に頼んでおいた」
「一条にか？　悠元の実家じゃなくて？」
「追加された競技の性質上、軍事訓練の色が強いからな。４年前の佐渡防衛戦の際、国防軍の指揮官をしていた酒井（さかい）大佐はそのまま新ソ連への逆侵攻を主張したそうだ。結局は一条家当主と折り合いが合わずに立ち消えとなったが」
　この辺の事情は全て剛三から聞き及んだものと国防軍の書庫にある持出禁止の戦闘報告書で確認している。無論、三矢家にも国防軍関連の情報提供は頼んでいるが、その情報が下りてきているであろう独立魔装大隊や第１０１旅団からの音沙汰はない。
　いや、むしろこれが正常なのだろうと割り切っていたし、独立魔装大隊にいる響子の母親は九島真言の妹である以上、藤林家が九島家に近い立場と見られていてもおかしくはない。既に何らかの監視の目が向けられていても、軍としては当然の対応となるであろう。
「その酒井大佐は確か、対大亜連合強硬派だったか？」
「知ってるのか？」
「親父の旧友や道場の門下生に海軍や陸軍の現役軍人もいてな。彼らが来た時に少しばかり聞いただけだ」
　修司の実家である宮本家は剣術の道場を営んでおり、輩出した門下生の中には現役軍人が多い。まさか九州で酒井大佐の名が出るとは想定もしていなかったが、佐渡侵攻のことを鑑みれば彼の名が出ても不思議ではないだろう。
　尤も、あの戦いで一番目立ったのは他でもない一条家の現当主こと一条剛毅、その長男である『クリムゾン・プリンス』こと一条将輝ではあるが。
「ねえ、悠元。九校戦のメンバーはもう決まった感じ？」
「由夢、お前なあ……」
「いや、急な競技変更もあって、再選出のすり合わせをやってる最中だし、ルールを読み込んだ上での資料作成をセリアに手伝ってもらってた」

「いやー、いくら元スターズだからっていいのかなって思うけれどね」
セリアは自分が元スターズの軍人だということをあっさりと言い放ったが、悠元の立場をある程度聞き及んでいる上に婚約者序列第六位の立場にある。修司と由夢の実力を認識したからこそ、隠すのは無駄だと判断したわけだが……修司と由夢の反応は納得がいったような面持ちだった。
「なるほど、アンジー・シリウスのことは聞いていたが……セリアはいいのか？」
「もう軍人じゃないからね。隠さなきゃいけない秘密はあるけど、知らないことの方が多いし……それにお兄ちゃんの婚約者ですから」
「あっさり言っちゃうんだ……って、お兄ちゃん？」
「こいつの呼び方はもう諦めてるからスルーしてやってくれ」
なお、セリアと由夢が性格面で似ているのもあって意気投合したのは言うまでもなく、悠元と修司は揃って溜息を吐いたのだった。

◇　◇　◇

この時期の転校生は基本的に珍しいだろう。これに関しては魔法科高校という場所でなくとも興味本位で覗こうとする輩は多い。珍しいものを見たがるのは致し方のない事でもあるが。
修司と由夢は2年D組になったのだが、当たり障りのない挨拶をした修司とは対照的に、由夢は開口一番に修司の婚約者であることを明かした。その直後、修司の拳骨が落ちたのは言うまでもない。
昨年の九校戦においては、修司が本戦男子クラウド・ボールで優勝、由夢が新人戦女子クラウド・ボールで優勝という実績を挙げている。すると、放課後の部活連本部で作業中に服部から提案があった。
「――転校してきた二人を九校戦に出場ですか？」
「ああ。昨年の九校戦で宮本は桐原を破っているし、高槻は一色を破った実力者だ。出場させないという選択肢はないだろう」
「確かにそうなんですが……」
ここで悠元が懸念したのは選出メンバーに関してのことだ。
各部活動での実績や活動報告、各部の部長からのヒアリングを含めた総合的な判断に基づいてはいるものの、服部との折衝の結果、現状

においての本戦出場メンバーの大半が現2年生を占めている。
まず、ロアー・アンド・ガンナーは男子ソロが燈也、男子ペアに森崎と五十嵐。女子ソロにセリアが入り、女子ペアは英美と国東が現時点でのメンバーだ。
アイス・ピラーズ・ブレイクは男子ソロが悠元、男子ペアの片方がレオで確定していて、女子ソロは深雪、女子ペアは花音と雫が入っている。この時点で3年生が二人しか出ていない。
シールド・ダウンは男子ソロが沢木、男子ペアは桐原と十三束。女子ソロはエリカ、女子ペアは紗耶香と千倉朝子(ちくらともこ)が組む形だ。当初は実際に刃を交えたことがあるエリカと紗耶香で組ませる案もあったが、千刃流の印可を持つ人間と中学時代の剣道大会で全国準優勝にまでなった腕前を考慮した場合、反則レベルと化してしまうためでもあった。
男子モノリス・コードは服部、三七上(みなかみ)ケリー、幹比古の三人が出ることになり、女子ミラージ・バットはほのか、スバル、そして姫梨の三人。
「修司をレオと組ませてピラーズ・ブレイクのペアに出しますか。ただ、由夢の場合はどうしましょうか……どうかしましたか、会頭?」
「いや、名前で呼んでいることからして知り合いなのか?」
「知り合ったのは昨年の九校戦からですが、今の実家では縁が深い間柄なもので」
由夢の得意属性である金属性を鑑みるならば、シールド・ダウンかアイス・ピラーズ・ブレイクが適している。ただ、これ以上3年生の本戦メンバーを削るのはどうかという思いもあった。
生徒会長であるあずさがエンジニアとして参加する以上、風紀委員長である花音を外す選択肢はない。かといって3年のメンバーを外すのもどうかと思案する悠元に対し、服部は真剣な表情で尋ねた。
「神楽坂。この際3年生のことは抜きにして、高槻はどの競技に入れるべきだと考えている?」
「会頭……なら、女子ペアを千葉エリカと壬生紗耶香の二人で、高槻由夢を女子ソロで入れて下さい」

「分かった。ただ、シールド・ダウンは練習相手も必要だから、千倉には俺から話をつけておく」
「お願いします」
　由夢の気質を考えるなら、ソロでやってもらった方がいい成績を残せるだろうという判断からくるものだった。女子ペアのメンバーは反則的な結果となったが、互いに気の知れた相手同士ならば、間の取り方も問題ないであろう。
　ただ、主戦力の殆どを2年生に依存するのは将来的に大変だろうと思う。作戦スタッフはそれこそ2年生と3年生――その中には自分も選手兼務という形で入っている。これは、昨年の新人戦統括を務めていた経験からくるものであった。
　そこに関しては問題ないが、今回選出されたエンジニアはあずさ、五十里、達也に加えて美月、千秋と佐那、そして1年生ながら完全マニュアル調整の領域まで届いたケントが選ばれたのだ。その功績は言うまでもなく佳奈が徹底的に鍛え上げたからに他ならない。この辺は新陰流剣武術での手を抜かない方針が反映された形なのだろうと思う。
　加えて、新人戦では悠元と燈也がサブエンジニアとして参加することになり、泉美の熱烈な要望で悠元が彼女の担当をすることとなった。それを聞いた水波がやや不満げな表情を浮かべていたため、悠元は水波に対して専用の術式を渡すことで折り合いをつけた。
　とまあ、表のことに関して現時点で言えるのはここまでぐらいだろう。
　服部との話し合いを終えて部活連本部を出たところ、悠元を待っていたかのように立っている人物が二人いた。それは言うまでもなく達也と深雪であり、良く見ると……その後ろから丁度早歩きで来た水波の姿が見えた。
「おや、二人……と水波もか。待たせたみたいですまない」
「いや、丁度来たばかりだからな」
「すみません、お待たせして……って、悠元兄様も終わったのですか？」

「ああ。じゃあ帰ろうか」
「そうですね」
基本的に悠元の隣を深雪が歩き、その隣に達也がいて、深雪から見て悠元を挟む形で水波が歩いている。特にトラブルが起きることなく、司波家に帰っていつも通りに深雪と水波が家事に勤しむ中、達也が悠元に相談事を持ち掛けた。
「――差出人不明のメール？」
「ああ、昨晩届いてな。葉山さんには一応送信しているが……」
達也はセキュリティーチェックを済ませた状態の文字データをモニターに表示させた。九校戦の急な競技変更が国防軍によるものと、九島家がこれに乗じて秘密裏に開発した兵器の性能実験を行おうとしていること。
差出人を隠蔽して送信することが出来る人間と、九島家の内情に詳しい人間という素性。加えて、このメールの送り先を司波家――達也に宛てたという事実からすれば、浮かぶ人間は一人しか存在しえない。
「今朝、師匠に相談はしたんだが……〝P兵器〟という符号しか分からなかったそうだ。なので、師匠の手筈で奈良に行こうと考えているわけだが」
「旧第九研か……」
困った、と悠元は内心で呟いた。考えてみれば、パラサイト事件で封印した二体のパラサイトを四葉家と九島家が持ち去ったことを達也らは知らないのだ。となれば、〝P兵器〟もとい『パラサイドール』のことに行き着くのは難しくても無理はないだろう。
悠元が旧第九研に偵察へ行ったことは、達也と深雪、水波には隠しているが、四葉家もとい真夜にはその調査内容を開示している。その理由としては、周公瑾に対する追い込みへの協力をしてもらうための対価でもある。
そうした理由の一つは、九校戦の準備期間に入ると作戦スタッフメンバーである悠元はほぼ学校に通い詰める形となるためだ。なので、達也らが奈良に行くとしても同行できないのだ。

「達也と違って、俺は作戦スタッフ兼部活連副会頭である以上、九校戦の準備期間は休みの日を除いて登校することになるからな……無理はするなよ？　無事に帰ってくるのが一番の土産なんだから」
「分かっている。師匠の事だから、何かしらの土産は持って帰ってくることになるだろうが」
　その土産が物騒なものでないことを切実に祈りたいが、こういう時ほど悪い予感が当たるので困ったものだと思う。あと、帰りが遅くなる関係で深雪にかまってやれる時間が減ることを考えた場合、どこかしらで時間を作ってフォローしなければならないということも考えなければならない。
　結局のところ、何かしらで忙しくなるのは決定事項という有様に猫の手でも借りたいような気分を抱いたのであった。

些細な癇癪と三つ目の厄介事

競技変更のショックから数日で選出メンバーの陣容がほぼ固まった。この辺は理璃からの情報提供が一番大きいだろうが。

7月7日。土曜日のこの日、新代表による練習が始まっていた。3日後には1学期末考査が控えているこの状況で、というのもあるだろうが、選手としては新競技に慣れておきたいという思惑があるからだ。

まずはシールド・ダウンのソロ同士での戦いということでエリカと由夢が戦うことになったわけだが……もともと高い自己加速能力を悠元の教えでさらに強化されたエリカ。対するは雷光の如き速力を天神魔法で付与することに長けている由夢。一体どうなったのかといえば、開始直後から盾同士の衝撃波しか見えないような有様へと化していた。

これを見た服部が「これが高校生同士の試合なのか？」と呟いたのは、正しく誰もが抱くであろう感想だと思う。

「あー！　もうちょっとで行けたのに！」

「いやー、あそこでギアを上げないとエリカっちに吹っ飛ばされてたよ」

結果としては、由夢がエリカをリング外に弾き飛ばして試合終了。ただ、由夢からすれば〝紙一重〟のレベルだったようで、下手すれば負けていたというのは世辞抜きの感想である。なお、それを見ていた紗耶香と千倉が揃って冷や汗を流したのは言うまでもない。

男子の方はと言うと、沢木・レオのペアと桐原・十三束ペアが対戦していた。レオはアイス・ピラーズ・ブレイクのペアに選出されているが、今日は女子の練習割り当てになっているために達也がお願いをした形である。

（レオが承諾していなければ悠元も考えたんだが……流石に深雪を不機嫌にさせるわけにもいかないからな）

悠元の持つ『相転移装甲（フェイズシフト）』は硬化魔法系統において最上級クラスの防御力を有しており、シールド・ダウンでは無敵と化す。しかも、先

日の理璃との戦闘で見せた『ミラーフォース』のことも考えると……勝ち目を見出すことが困難とも言えるだろう。
なお、その悠元はここにおらず、女子アイス・ピラーズ・ブレイクの練習のために一高専用の練習施設にいた。彼に頭を撫でられている深雪はというと、頬を軽く膨らませつつも紅く染めていた。
「……何なんですか、あの防御術式は」
「そりゃ、深雪なら『氷炎地獄（インフェルノ）』を使ってくるのが分かっていたから……そう拗ねないの」
「拗ねてません。納得がいかないだけです」
（それって拗ねてるってことよね？）
二人の会話に対して、聞いていた花音が内心でツッコミを入れた。
最初は深雪と花音・雫のペアで対戦したわけなのだが、ペアによる魔法展開領域の干渉という問題によって深雪が立て続けに5連勝もしていた。これでは深雪の練習にならないだろうと思っていたところで、ロアー・アンド・ガンナーの調整を終えて顔を見せた悠元に白羽の矢が立った。
奇しくも昨年の新人戦アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝した二人。しかも、学校内では知らぬ人がいないと言われるまでの恋人同士。これには新人戦アイス・ピラーズ・ブレイクに出場する泉美も見学しつつ興奮していた。
深雪は昨年の悠元のパターンを思い出しつつ、『氷炎地獄（インフェルノ）』で悠元サイドの氷柱を一気に溶かす作戦を取った。一方の悠元は、『ミラーフォース』を氷柱を覆うような形で展開。氷柱と周囲の空気を隔離する障壁魔法を見た深雪は直ぐに圧縮空気を使う魔法へと切り替えるが、『ファランクス』以上の防御力を有する『ミラーフォース』の守りを突破できなかった。
これでは『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』を使ったとしても勝ち目がないと思っていたところに、悠元が『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』で深雪サイドの氷柱を全て砕いた。
悠元の完勝になったわけだが、この結果に対して深雪が拗ねるようにしつつ悠元に抱き着く形となった。そして、今に至るという訳だ。

「私はお兄様や悠元さんのように新しい魔法を生み出せません」
「いや、それが普通だからな……雫、どうにかならない？」
「こればかりは悠元の責任。ファイト」
「すっごい投げやり感満載だな、オイ」
なお、泉美に関しては「流石悠元お兄様。これは『クリムゾン・プリンス』相手でも勝てますね」などと述べていた。自分が行動する度に彼女の中の自分に対する評価が天井知らずになっているのは……どうにかなってほしい、と願うことしかできないだろう。
「いやー、昨年の言葉通りになるとは思ってもみなかったけれどね」
「千代田先輩……そうだ、先輩。実は振動系の魔法で試作した奴があるのですが、試してみます？」
そう言って悠元は近くに置いていた自分用の端末を操作し、その起動式を花音に見せた。花音だけでなく、深雪や雫、泉美もその起動式を見ることとなり、花音が思わず悠元に問いかけた。
「これ、うちの家の『地雷原（じらいげん）』のバリエーションってところ？」
「『地雷原』というよりは『共鳴破壊』と言うべき代物ですが、元々のベースは『地雷原』の系列に近いです。どうします？」
「まあ、本番まで試せるものは試しておきたいし、啓から悠元君の魔法に関して聞いてるから」
そして、深雪と花音・雫の6戦目となる模擬戦が開始。流石に6回目となるとお互いの手の内というよりは心理戦の様相を呈した。結果だけ見れば深雪がまた勝利を収めた形ではあるが、その内容はペア側からすれば劇的に改善されていた。
「深雪先輩が残り2本まで追いつめられるなんて……」
「あんな小さな魔法展開領域で『地雷原』以上って凄いわね。雫の『フォノンティアーズ』も凄いし」
「悠元や達也さんでないと調整できませんが。でも……」
花音と雫が見つめる先では、深雪が不機嫌を隠そうとせずに悠元へ抱き着いていた。似たような光景を昨年の九校戦で見ている雫としては羨ましくもあったが、ここは我慢することとした。
「悠元さん、私に新しい魔法をください」

「……分かった。あと、時間が空いたら一緒に買い物にでも行こうか」
「約束ですよ？」
　悠元から満足した答えを聞けたのか、深雪は抱き着くのをやめたが悠元の傍から離れずにいた。その光景を見て、花音は以前焚き付けた側として思わず笑みを零したのだった。すると、休憩ということで雫が悠元の隣に移動していた。
「ところで悠元、今年はどの魔法を使うの？」
「そうだな……正直なところ、迷ってる」
「迷っているのですか？」
　深雪が模擬戦の相手だったからこそ『ミラーフォース』と『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』を使用したわけだが、昨年の場合とは置かれた状況が異なる。特に今年はかつての十師族としての自分ではなく、護人としての自分の魔法を見せなければならないだろう。
「相手の度肝を抜かせるだけなら、それこそ『インビジブル・ブリット』が一番効果的だろうが、正直二番煎じになるだけだし……」
　そう零した理由は単純で、ロアー・アンド・ガンナーで『インビジブル・ブリット』をベースとした複数の術式を英美、燈也、そしてセリアに提供することで達也と合意したからだ。英美のものは散弾式のものだが、燈也とセリアに関しては本人たちの魔法資質に合わせたチューンを施している。なので、自分が『インビジブル・ブリット』を使う理由にならないのだ。
「それに、ピラーズ・ブレイクに出てくることが想定されるのは将輝だし……〝アレ〟にするかな」
　悠元はＣＡＤを操作して氷柱を瞬時に生成し、思いついた魔法を相手サイドが想定される氷柱間掛けて撃ち込むと、１２本の氷柱のほぼ中央に出現した魔法式――それが瞬く間に相手サイドを覆いつくす形で複写展開され、氷柱は瞬時に気化して膨大な量の水蒸気が空中に舞った。
　氷柱を試合開始前の状態にまで瞬時に戻してしまう現象もそうだが、相手サイド側の氷柱全てを同時に気化させた魔法。花音は開いた口がふさがらず、雫は興味津々といった感じを見せていて、深雪はま

るで自分の事のように嬉しそうだった。
なお、泉美に関しては同じような現象が起きていたので説明を省く。
「よし、ぶっつけ本番だったが問題はないか」
「……ねえ、悠元君。魔法式を複写展開する魔法技術って聞いたことがないんだけど？」
「さっきの魔法――『天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）』のことですか？」
原作だと『トゥマーン・ボンバ』の基幹技術である『チェイン・キャスト』を一条家の秘術である『爆裂』と組み合わせたのが、将輝が使うことになる戦略級魔法『海爆（オーシャン・ブラスト）』。
だが、元が『爆裂』である以上は液体が存在する場所でないと強力な力を発揮することが出来ないし、『チェイン・キャスト』自体もかなり粗がある。何せ、ベゾブラゾフが大型コンピューターという補助を受けないと十全の力を発揮できない制約を抱えている時点で、悠元からすれば〝欠陥技術〟と述べる他ない。
そこで、悠元が琢磨との模擬戦で使用した『スキャニング・キャスト』のデータを基に、より実戦的に仕上げた新型『チェイン・キャスト』を開発。悠元はこの技術に『リンケージ・キャスト』という名を与えた。
『チェイン・キャスト』は魔法式に魔法式を構築する機能が組み込まれており、魔法式の複製は発動対象であるエイドス上で行われる。一つの魔法式を起点として投射座標と発動時点を変化させながら自動複製し連鎖的に展開される技術だが、これでは最初の魔法式を破られた際に大きな隙を生むこととなる。
『リンケージ・キャスト』は魔法式自体に複写展開する機構を持たせるのではなく、魔法式の周囲に展開する環状魔法式（かんじょうまほうしき）が接続している大本の魔法式の演算に必要な変数を自動的に入力し、魔法の発動速度を制御することで連鎖発動や同時発動が使用者の任意で変更可能とした。環状魔法式に『スキャニング・キャスト』をベースとした複写展開機構を持たせることで、大本の魔法式に対する演算処理を大幅に減らすことに成功した形だ。

さらに、使用者が指定した座標に投射される魔法式に対し、それを破壊するための手段は存在しないに等しい。この部分に用いられている技術は天神魔法の『水遁流転（すいとんるてん）』で、出現する一つ目の魔法式はあくまでも発動照準座標を固定するための〝マーカー〟でしかない。

加えて、一つ目の魔法式から一気に展開した際、隠蔽の意味も含めて複数展開された魔法式の中に大本の魔法式が紛れ込んでしまうためだ。一つ目の魔法式が出てから広範囲に展開する速度は約１００億分の１秒――それを認識できるとなれば、もはや人間業でなくなる始末だ。

尤も、現行水準におけるＣＡＤの処理精度を鑑みた場合、この技術を使えるのは悠元だけしかいないという代物なのは言うまでもない。

そして、『リンケージ・キャスト』と組み合わせた魔法は一条家の『爆裂』を更に改良した相転移昇華魔法『昇環（しょうかん）』――固体状の物質に多方面からの振動波を起こし、振動波の合成によって生じる急激な加熱で直接気体へと変換する魔法。この魔法は固体だけでなく液体にも使用が可能で、だからこそ分類上は「相転移昇華魔法」としている。

『爆裂』のように液体を必須としないため、名称は敢えて『天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）』と名付けた。なお、今のは仮組なのでそれ程の威力を出さない様に変数を設定したが、その気になれば新ソ連の全領土の地下にある永久凍土を一瞬にして気化させることが出来る。

つまるところ、この魔法も戦略級魔法ではあるが、今のところは最大威力で使う予定などない。国外の連中がこちらの排除を考えて行動してくるようならば、それに対して使うことも念頭に入れるつもりではある。

「さっきの魔法に使われている魔法技術自体は以前から考えてはいたものです。ただ、要求される演算規模が大きいため、現状は自分にしか使えません」

「……お姉さんの規格外さはあたしも味わっていたけど、悠元君も大概よね」

「誉め言葉と受け取っておきますよ。千代田先輩に雫、二人の練習はどうします？　何でしたら自分がコーチングをしますが」

「じゃあ、お願いしてもいい？」
この後、花音と雫の魔法の息を合わせるために悠元がそのコーチングを担当することになったのだが、それを見た深雪と泉美にもコーチングを頼まれ、二つ返事で引き受ける形となった。
結果的には達也の負担を軽くすることにもなるし、自分の魔法練習にもなると判断してこれ以上の疑問を抱くのは止めた悠元であった。ただ、悠元が放った『天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）』を見た達也からは質問が飛んできたのは言うまでもない。
「魔法式で魔法式を複製とはな……可能ではあるだろうが、負担が大きくないか？」
「さっき思いついてからの仮組でしかないからな。精査が必要なのは理解してるよ……尤も、その技術の大本は『ハロウィン』の一件で知ったからこそだけれど」
悠元がベゾブラゾフと対決（直接顔を合わせたわけではないが）したことと、彼の戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を悠元の戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』で圧倒したことは達也も横浜事変の後で聞いており、先程の魔法はその魔法に使われている技術であると達也は察した。
本来なら大型のＣＡＤによる演算が必要であると達也も推察はしたが、その必要を省いてしまった悠元の規格外さは、この世界にいる国家公認戦略級魔法師『十三使徒（厳密には十二使徒）』すら超えている……と推察するほかなかった。
「それと……深雪がまた我儘を言ったみたいだな」
「別にいいさ。自分にも責任があるのは事実だし、深雪が昨年の決勝で使った『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』は急拵えの代物だったのは否めない」
昨年も深雪からのお願いを受けたが、当時は新人戦統括役だった忙しさもあって、渡していた魔法――――『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』の威力を『氷炎地獄（インフェルノ）』から極度に離れない程度で設定していた。それに、深雪が最も得意とする振動減速系：極度凍結魔法を軸とした魔法のアイデアはいくつか浮かんでおり、そのいくつかを深雪に提供するつもりでいた。

なので、深雪からのお願いは『渡りに船』程度のお願いでしかなかったという訳だ。
「俺の目から見ても完成度が高かった起動式だというのに、それを急拵えなどと言えるのはお前ぐらいだろうな」
「事実なのは確かだからな」
こちらとしても、九校戦自体の準備は早めに済ませるつもりでいた。その理由は九校戦に起こりうる二つの事項を早急に片付けるためでもある。そして、九校戦後にとある建造物の完成記念パーティーが開かれ、そこに関する動きも関係している。
その建造物の名称は東京オフショアタワー。東京タワーや東京スカイツリーが担ってきた広域情報発信に加え、新世代の電波規格に対応すべく東京湾に建造された高さ２０００メートルクラスという超高層建築物（ハイパービルディング）。地上３６０階と地下３６階からなり、現行における最先端の耐震技術を採用することにより、既存の建造物を遥かに超える高層建築を可能とした代物。
耐震技術についてはＦＬＴから提供したジャイロドライブシャフトや油圧式ダンパーなどが採用され、特にシャフト部分の設計は悠元が前世での科学技術の記憶をベースに組み上げている。
更に、魔法師優遇を掲げる過激派集団がそのタワーに潜入してテロを目論もうとする情報（現時点では噂レベルでしかない）が入り込んでおり、原作では存在しない大きな『プラスワン』の要素に、悠元は内心で溜息を吐いたのであった。

騒ぎを最小限の労力で収める手腕

箱根、神楽坂家の本屋敷。その一角にある私室で一人端末と睨めっこしているのは、現当主である千姫その人である。『星見』や『九頭龍』からの情報の整理や当主としての仕事に加え、表の仕事である神坂グループの会長職として各分野に目を光らせている。

すると、千姫の端末に連絡が入り、通話のボタンを押すとモニターに表示されたのは『九頭龍』の長――――八雲の姿であった。

『奥様、夜分遅くに失礼いたします』

「おや、このような形での連絡は珍しいですね、八雲さん。如何なさいましたか？」

『実は、奥様に許可を頂きたく思いまして』

八雲は『九頭龍』の性質上、表向きになってはいないが超法規的な権限をいくつか保有している。その八雲が態々連絡をしてきた上に許可を願った。これには千姫が近くに置いていた扇子を広げて仰ぎ始めた。

「貴方が態々となりますと……『本山』へ問い合わせでしょうか？　そうなると、九島家絡みですね？」

『お察しの通りでございます。達也君や深雪君からの追及は〝P兵器〟と躱せましたが、拙僧も独自に調べてみる必要が出てきまして』

八雲が調べること自体に不満は一切ない。寧ろ、将来の危険を考慮して調べたいという意向は千姫としても歓迎すべきことである。なので、その許可については異存など無い、という意図を含めて千姫は声を発した。

「構いませんよ。今の叡山（えいざん）の和尚（かしょう）は私の教え子でもありますので、彼も快く応じてくれるでしょう」

陰陽道系の神楽坂家と宗教系統の絡みは神楽坂家が長年京都に本拠を置いていた頃からの付き合いであり、高僧の修行場ということで富士の山麓を訪れる際にその世話を担うことがある。上泉家と同様に数多の古式魔法を保有しており、千姫も高僧に対して教導を行うこともあるため、彼女の弟子は少なくないのだ。

先代の〝九重〟を名乗っていた八雲の師匠も千姫の父親が一時期教えていたこともあり、八雲が『九頭龍』の長を務めているのはその縁もあったりする。
『助かります。来週末あたりに達也君を連れて行こうかと思っています……悠元君は動かないようですが』
「彼は学業に加えて部活連の副会頭――今の服部君の後釜として最有力ですから、学業以外に意識を割けないのですよ。加えてドイツのこともありますから」
『少しばかり聞いておりますが、エルンスト・ローゼンのことですな。そちらは手を出さなくてよろしいので？』
九校戦に出場するメンバーのことは千姫や八雲も既に把握しており、レオとエリカが本戦メンバーとして出場することとなっている。ここで問題となるのは、エルンスト・ローゼンがレオに気付いて早まった行動を起こさないかという懸念であったが……これについては千姫が八雲の疑問に答える形で言い放った。
「問題ありませんよ、八雲さん。レオ君を万が一誘拐するようなことがあれば、最悪お義兄様がドイツに直接飛びかねませんから……悠君とセリアさんなら、問題はないと思いますけど」
『国際問題になりそうな案件と言うのが何とも……』
「それに、悠君はバスティアン・ローゼンの遺産分割対象に含まれています。今のところは追加要求する予定などないそうですが、神楽坂家としては万が一襲撃が起きた際、ドイツ政府に対して抗議を入れることとします」
千姫としては、ドイツ大使館に抗議したところでどうせ無視されるのが分かり切っていた。日本政府経由で一応ドイツ大使館宛てに抗議はしておくが、ドイツ政府に対してローゼン家――魔法師の管理責任を問うつもりだ。
「なので、八雲さんは『パラサイドール』に集中してください。対処は……達也君は少なくとも深雪さん絡みで動くでしょうから、そのバックアップをお義兄様にお願いするつもりです」
『剛三殿をバックアップにですか』

「どうせ国防軍を唆す輩がいるのは分かり切っていますし、第１０１旅団は九校戦の補助を担当してもらいます。藤林少尉の関係で独立魔装大隊は動けないでしょうが……私個人のお願いならば佐伯少将や風間少佐も引き受けてくれるでしょう」

千姫は、風間ひいては佐伯にも達也が動く際の〝責任〟を負ってもらうつもりでいた。

独立魔装大隊がいくら十師族に頼らない魔法師部隊という目的があろうとも、「十師族に頼らない」ということと「十師族と対立する」のでは別次元の話になる。十師族が魔法師としての力を有する民間組織と言えども、国防軍の本来の目的である『国家を脅かすあらゆる外敵を退け、国家を守る』対象から排除してはならない、と千姫は考えている。

「達也君に対しては悠君に裁量を委ねていますから、彼が倒れない様に引き留めてくれると信じています……しかし、九島は些か深慮が足りませんね」

『九島の現当主は先代当主の力を羨んでおりますからな』

「せめて健が当主なら……我儘を言っていても始まりませんね。では、『追加調査』をお願いしますね、八雲さん」

『畏まりました、奥様』

八雲が達也を連れて行くのは問題ないが、達也一人で全てを調べるのは難しいだろう。パラサイドール関連のことは悠元が既に調査しているが、その後の伊勢家からの報告で周公瑾が九島家を訪れたことが判明した。顧傑が『フリズスキャルヴ』でパラサイドールの情報を掴み、それを暴走させるための手駒を周公瑾に送り込ませる魂胆なのは言うまでもない。

八雲や達也とは別口の調査部隊を動かすべく千姫は八雲との連絡を終えると、すぐさま別の相手に対して連絡を取り始めたのだった。

◇　◇　◇

７月８日、日曜日。達也がＦＬＴのＣＡＤ開発第三課に出かけて行った。その目的は完全思考操作型ＣＡＤに向けてのテストが大詰めとなっているため、『シルバー』である達也が出向いている。一方、

『トーラス』である悠元は司波家の自室でレシーバーを付けつつワークステーションのキーボードを叩いており、モニターにはＦＬＴから送られてくるＣＡＤのテストデータが表示されている。

単一の無系統魔法の起動式を出力するというシンプルな機構であり、ハード面での精査はほぼ済んでいると言ってもいい。残るは無系統魔法の起動式によるハードウェアの最終調整を残すばかりであるが、悠元は表向きＦＬＴの社員ではないために司波家でリモートワークをすることが多い。

（大方順調だな。想子消費も発動速度も問題は無し、と）

完全思考操作型ＣＡＤはローゼン・マギクラフトが世界初（悠元の『ワルキューレ』と『オーディン』を除けば）だが、専用の端末を携帯するには大型なため、その点で不便な部分があった。

一方、ＦＬＴが発表しようとしている代物は専用のペアリングソフトをインストールする手間はあるものの、最近５年間で販売されているＣＡＤの約９割以上をカバーリングすることに成功している。

（しかし、原作で完全思考操作型ＣＡＤに取り組むのは分かっていたが、まさか昨年のことを持ち出されるとはな……）

それは、昨年の九校戦で真由美に頼まれて急拵えで組み上げたスピード・シューティング用の小銃型ＣＡＤのことだ。あれは真由美の『魔弾の射手』だけに特化させたアーキテクチャやハード面の改造を施しており、使用後は『分解』で消し去っている。だが、達也は完全思考操作型ＣＡＤの設計にあたり、そのＣＡＤの設計図を見せてほしいと要求してきたのだ。なので、記憶から『情報編纂（メモリーライズ）』でその設計図だけコピーして渡している。元々自分の手が入ったハードウェアから流用しているため、若干遠回りにはなるが魔法の発動速度自体に大きなロスが生じることはほぼないに等しい。これに関して「流石主任ですな」と牛山から言われたことにはキチンと反論しておいた。

達也はそれでいて『バリオン・ランス』のためのアタッチメントまで開発していて、更には「ＥＳＣＡＰＥＳ計画」の核となる『恒星炉』のこともある。完全思考操作型ＣＡＤが完成すればまずは一段落できると考えつつ、悠元は作業を進めていくのであった。

昼食を済ませた後、深雪と約束をしていた買い物へ行くこととなった。
というのも、最終テストで想定されていたバグなどは一切発生せずに無事完成したため、その時間が丸々空いた格好となったからである。悠元がリビングに降りてくると、ソファーで不機嫌となっている深雪に対して悠元は軽く息を吐いた。
九校戦の準備が始まってからというものの、深雪は生徒会役員として、悠元は部活連副会頭として忙しなく動いている。とりわけ悠元は全競技の作戦指示や選手とエンジニアの擦り合わせ、更には自身も新人戦のエンジニアとして参加するためにミーティングをしたりするため、帰りが遅くなることが多く、深雪が先に眠っていることが多かった。一応公的な場では積極的なスキンシップを取らないようにしている（歯止めが利かなくなることを危惧してのもの）ため、多少なりとも深雪のストレスが蓄積された結果なのは言うまでもない。
「深雪、午後から買い物に行くか？　どのみち約束していたことだし……まあ、無理にとは」
「行きます！　今すぐ着替えてきますね！」
少々気が早すぎるのでは……と、リビングを早足で去っていく深雪とすれ違う形で帰ってきた達也は、深雪のいつになく明るい表情を疑問に思いつつ悠元に問いかけた。
「ただいま……悠元、深雪に何があったんだ？　いつになく明るかったが」
「最近構ってくれなかったから不機嫌だったようでな。午後から買い物に行くことになった」
「そうか。水波はどうする？」
達也の判断としては、深雪の隣に悠元がいるのならばガーディアンである自分がいなくても問題はないし、仮に自分が付いていったら『兄同伴のデート』という風に見られかねないと判断して、付いていこうとは考えていなかった。
その上で水波に尋ねると、水波は『家事がありますので……』と丁寧に断っていた。悠元への好意を見え隠れさせていることは気付い

ているし、悠元自身も水波の好意に気付いている。悠元曰く「自分の気持ちは伝えたけど、それを聞いた水波ちゃんが気絶しちゃってな」ということで、水波自身の気持ちの整理だけという状態になっていた。

実際のところ、水波からすれば悠元に対して一般的な恋人以上のスキンシップをしている自分の主人こと深雪のこともあり、自分の気持ちを明かしていいのかという心の葛藤が生まれていた。前の主人である深夜からも「いざとなったら誘惑して悠元君に抱かれなさい」という突拍子もない言葉を聞いて、顔を真っ赤にして倒れた経験がある。

恋愛に関しては純粋かつ初心な水波の様子に、達也はこれが普通の恋愛感情なのだろうな……と考えたのだった。

今回は渋谷副都心に最近できたばかりのファッションビルでの買い物となった。色々着飾っている深雪に対し、元の容姿がいいせいもあって何を着ても似合ってしまうので、月並みの感想しか言えないのはお決まりみたいなものだが。

このビルは共同の商売をしているという形を取っているためにテナントごとの仕切りがない。なので、パーティードレス売り場のすぐ隣が下着売り場というフロア区切りが存在してしまう。とはいえ、今回は深雪の買い物に付き合うと割り切って行動していたわけだが……カジュアル服の試着室が丁度空いておらず、深雪の要望を見た店員が欲目を使ったのか、同じフロアの試着室に案内したのだ。

（……これって、本来達也が経験するはずのものだったイベントだよな）

その空いていた試着室というのが、水着売り場の試着室であった。流石にこんな場所で男性が一人立っているのは要らぬ誤解を招くと思い、深雪に試着が終わったら連絡をするように言い含めた。深雪もこちらの事情を瞬時に把握して納得してくれたので、売り場を出て通路に出ようとしたところで学校の後輩である〝二人〟と出くわした。

「あれ、悠元兄!?　ここ、水着売り場なんだけど……って、結構な荷物だね」

「悠元お兄様！　もしかして、深雪先輩もいらっしゃるんですか!?」
七草香澄と泉美の姉妹。香澄は悠元の手に持っている荷物の多さとそれを平気で持っている悠元の力強さに感心し、泉美は目をキラキラと輝かせていた。
ちなみにだが、悠元と深雪の噂もとい恋人同士（厳密には婚約者だが）ということは真由美から聞かされてはいたが、泉美はその事実を受け入れた上で悠元に相変わらず好意を抱いている。彼女曰く「お兄様は私一人で御するなど畏れ多い存在です。寧ろ、女性が複数いてもおかしくないぐらいです」とのことらしく、これには聞いていた香澄も呆れるような表情を浮かべたらしい。
その理由を聞かされた悠元も呆れるぐらいで、深雪に至っては冷や汗を流しつつ苦笑を浮かべていた。
「香澄に泉美。って、二人がここにいるということは……」
「ちょっと、何を騒いで――――」
そう、この二人が護衛も連れずに歩いているとなれば、当然いるであろう存在――――試着室の一角のカーテンが開いて水着姿の真由美が二人を注意しようとした。だが、そこに悠元の姿があったことで顔を真っ赤にしていたのだ。どう取り繕っても言い訳にしかならないと判断して、悠元はこうハッキリと述べた。
「七草先輩。非常にお似合いですが、速やかに試着室の中へ。私以外の男性が見てしまうかもしれませんので」
「は、え、ええ……分かったわ……っー!!」
「流石悠元兄、お姉ちゃんの扱いを心得ているね」
「ええ。あれこそお兄様が成せる業ですわね」
悠元の力強い言葉に言われるがままカーテンを閉めた真由美。その直後、明らかに声量を殺してはいるが、声にもならない叫びが真由美のいる試着室から漏れ出ていた。そして、香澄と泉美からは賞賛にも等しいような言葉が投げかけられたのであった。
確かに真由美の水着姿は魅力的なのはいうまでもないし、小柄ながらスタイルがいい。それは客観的な事実でなくとも間違いはない。ただ、自分の場合は婚約者のこともあるため、真由美に対してそこま

で好意的に見れない。無論原作知識のことも含まれていたりはするだろうが、一番の理由は彼女の実家関連が大きいのだろう。

現当主である弘一と真由美が別の人間だということはきちんと認識しているし、だからこそ泉美との婚約も条件付きで復活を認めた経緯がある。この辺は理屈というよりも感情論によるものなのだろうと思う。

論外が加わるとバグが発生します

「騒ぎにはなりませんでしたが、一体何事かと思いましたよ」
「返す言葉もないです……」
　真由美が試着室で声にならない叫びを上げているとき、丁度着替えを終えた深雪（試着を終えて、悠元が出ようとしているときには着替え始めていたため）が悠元に加えて香澄と泉美と遭遇し、試着室にいる人物の存在とそのフロアが水着売り場だったことから察した形だ。
　ともあれ、何かしらの迷惑を掛けた形ではあるので、お互い喫茶店に入ろうと話の流れで決まったのだった。
「もとはといえば、私がハッキリとお断りしなかったのが悪かったのですから、先輩は悪くありませんよ」
「ううん、それを言ったら私も同じよ。別に、裸を見られたわけでもないのに動揺したのは、私のほうだし。その、悠君、ごめんなさいね」
　真由美は必死に取り繕う姿勢を見せていたが、先程悠元に水着姿を見られたことの動揺がまだ残っているのであろう。この話を続けても鼬ごっこになると判断してなのか、泉美が機転を利かせて二人に尋ねた。
「そういえば、お二人はこの後どうされるんですか？」
「もう少しお洋服を見たら帰るつもりよ。……よければ、泉美ちゃんもご一緒しますか？」
「えっと……お気持ちは嬉しいのですが、この場はお断りいたします」
　まさか深雪から意外な提案が飛んできたことに驚く泉美だが、二人の事情を知っているからこそ、恋人でもない自分が割って入るのは淑女として空気が読めていないと判断し、丁重に断った。これには香澄が驚くような表情を浮かべていた。
「泉美、何か悪いものでも食べた？　それとも、熱でもあるの？」
「どういう意味ですか、香澄ちゃん」
「いや、あれだけ悠元兄にベッタリしたがる泉美らしからぬ台詞だと思ったから」
「香澄ちゃん。どう見てもお二人はデート中なんですから、お邪魔す

るのは礼を失することになりますよ」
今まで悠元を見かけると抱き着いてきた泉美ではあったが、流石に人目の付きやすい場所では積極的なスキンシップを極力避けている。それに、泉美の目の前にいる二人の邪魔はしたくないと思っている。双方共に泉美からすれば尊敬の念を抱いている人物なだけに。
泉美の言葉に香澄は納得したような表情を向けていたが、一方で顔を赤らめている真由美の姿があった。これだけ見ていると、七草家の教育方針（弘一の溺愛具合）がハッキリと見て取れるであろう。
「デ、デデ、デートって……」
「まあ、第三者から見ればそうなりますね」
「……悠君、いつ深雪さんに告白したの？」
「九校戦最終日の夜、祝賀会の時ですね。あの時は先輩から追及されましたが……その時点で家を出る算段が付いていたからこそ、躊躇うことなく告白しました」
あの時点ではまだ十師族の人間であった。だが、家督や家業は継がないと元に宣言していた。加えて、元からは恋愛に関して口煩く言わない、と諭してもらったお陰もある。それに、元治と穂波の結婚によって家督継承の路線が固まったこともあり、変に家格を求める必要がなくなった。
深雪の場合は四葉の名を秘匿しているため、魔法的な実績は無名に等しい家格である司波家の人間。三矢の気質からしても、優秀な人間との婚姻は問題ないと判断した形だ。
「お姉ちゃん……」
「お姉さま……」
「二人して何なの、その表情は？　まるで私が〝泥棒猫〟みたいに見られているような気がするのだけれど？」
「いや、お姉ちゃん。実際にその通りだと思うけれど」
「うぐ……」
九校戦の時はいつも以上に真由美からスキンシップを受けており、深雪と一緒に寝ることになった回数は精々片手で収まるぐらいだったが、司波家でも一緒に寝ることになったのは九校戦が大きな要因の

一つであろう、と思っている。
悠元の言葉を聞いた香澄と泉美は揃ってジト目を真由美に向け、真由美が思ったことを口にすると、そこから帰ってきた香澄の正論に真由美は言葉を詰まらせた。どうやら、ここにはいない誰かから同じような台詞を言われたのだろう。
「ゴメン、悠元兄。節操のない姉と妹が迷惑を掛けて」
「いや、香澄が謝る必要はないと思うんだが？」
「そうですよ。香澄ちゃん、私はこれでもお姉さまより節操は持ち合わせております」
「ちょっと、二人とも!?」
常識的な対応を取っている香澄と真由美よりは節操を持ち合わせていると自負する泉美、そして二人の言葉に顔を赤らめて狼狽えている真由美。これを見ていると、三人が三つ子の姉妹だと言われても納得できそうな気がした。
とはいえ、これ以上三人の邪魔をするのも良くないと判断し、近くに置いてあった伝票を手に取って立ち上がり、深雪も悠元に続く形で立ち上がった。
「さて、お支払いは済ませておくので、ここで失礼します」
「え？　いや、支払いなら……」
「ご迷惑をお掛けしたお詫びだと思って受け取ってください」
ちなみに、この会話に混ざろうとせず微笑ましそうな表情を浮かべていた深雪はというと、二人きりになったところで悠元の腕にしがみつくような形で抱き着いていた。
「もう、悠元さんは罪作りなお人ですね。先輩にまで好意を持たれているとか」
「意図してやったつもりは微塵もないんだがな……とりわけ先輩に関しては」
泉美に声を掛けたのは泉美の好意に気付いてのものだということであり、泉美が断ることも想定した上での問いかけだったようで、分かってやっているあたりは悪女のような感じを覚えずにはいられなかった。

「人付き合いだって、魔法のことは基本的に抜きで話してるだけなんだがな……どうしたんだ、深雪？」
「ふふっ……そうやって色眼鏡で見ないからこそ、私も惚れたんですよ」
「……さいですか」
これ以上会話を広げると周囲に対して惚気を振りまくのが分かっているからこそ、悠元は短く答えるだけに止めた。そして、悠元の反応を悟っているからこそ、深雪は悠元の腕に抱き着く力を少し強めるのであった。

◇　◇　◇

新競技であるロアー・アンド・ガンナーとシールド・ダウンについては、選手が慣れてきたのもあってか、練習試合も大分こなせてきた印象が強い（印象というのは、悠元自身の練習もあって、全ての競技のコーチングが出来ていないからである）。
ただ、スティープルチェース・クロスカントリーについては事前情報だけだとどんなトラップが用意されているか分からないが、少なくとも『パラサイドール』関連だけが分かる有様。しかも、そのトラップを他の選手には到底言えないため、秘匿するほかないのが現状である。
7月21日、土曜日。今日も選手たちが練習に勤しむ中に達也と深雪、そして水波はいなかった。彼らは八雲と一緒に奈良へと向かっているのだが、その目的はおろか行き先も教えられない始末。
なので、今日は珍しく司波家に一人留守番となる形だが……この状況は悠元にとってありがたかったのは言うまでもない。
「悠元、今日は珍しくシールド・ダウンの練習相手なのね」
「エリカか。何、練習のローテーションはほぼ固まっているからな。それに、深雪は休みだから」
悠元が司波家に居候している事実は未だに明かされておらず、表向きは達也や深雪と同じ方面から通っているとだけしか説明していない。この事実を知っている人間はかなり限定されており、四葉家や三矢家の関係者を除くと雫ぐらいしかいない。

七草家の現当主は把握していると推測されるが、今の悠元は既に十師族の人間でないため、このことから三矢と四葉の共闘を追及することはほぼ出来なくなっている。加えて、昨年正月の一件の事からして上泉家と神楽坂家の逆鱗に触れるような行動は慎むだろう。
「達也君たちは裏で何かやってそうな気がするけどね。悠元は知ってるの？」
「さあ？　いくら俺でも達也らの行動を全て把握しているわけじゃないからな」
今頃はリニア列車で奈良に向かっている最中だろう（この辺りのことは八雲から連絡を受けている）が、その目的を明るみにすることも出来ない。とりわけパラサイト絡みとなればエリカらも関わったことからしてすぐに気付くだろうが、その時はその時と考えることしかできないだろう。
千姫からは達也らへの情報提供も含めて〝黒羽〟を動かしたと連絡を受けており、どう転んでも一定の成果を上げられるのは間違いないだろうと踏んだ。
「レオは大分慣れてきたな」
「悠元のお陰というのが大きいけどな。俺一人だと苦戦していただろうし」
「そのレオの防御を軽々抜いていく悠元が規格外すぎるんだが……」
「こればかりは自分の魔法だからこそという他ないけどな」
男子アイス・ピラーズ・ブレイクのペア練習も順調に進んでおり、防御面ではレオの魔法精度もかなり向上していた。今はペア同士の練習ということで男女ペアで模擬戦を繰り返している形だ。
偶に悠元と深雪がペアを組んで模擬戦の相手をしたりするが、雫から「二人が組んだら反則どころか論外」とまで言われてしまった。解せぬ。
「悠元君、もう一戦頼めるかい？」
「いいですよ、沢木先輩」
「……悠元に触発されたのか分からないけど、沢木先輩の動きがバグりだしてるのは私の気のせい？」

「由夢ちゃん……それは言わない方がいいかと」
実は、悠元がちょっとした実験も兼ねて改良型の自己加速術式を沢木に提供したところ、その術式が思いのほか馴染んだらしく、今では呼吸をするのと同じぐらいのレベルで使いこなしている。
その証拠に、ソロ練習ということで始まった沢木と悠元が戦っているリングは……まるで無人のようにも見えてしまうほどであった。それを見た由夢の台詞に対し、美月は苦笑を滲ませつつも由夢を窘めた。
「悠元の非常識さは今に始まった事じゃないけれど、本当に驚きしか出てこないね。ローゼン・マギクラフトの日本支社長にスカウトされたのも分かる気がするよ」
「……そうね。いち民間企業に悠元が制御できるか疑わしいけれど」
幹比古の台詞を認めつつも、エリカはそう零したが……本心で言えば、悠元をローゼン・マギクラフトが制御できるはずなどないだろう、と考えている。何せ、世界最強の魔法師を自称するスターズの総隊長ことアンジー・シリウスに勝ったことのある魔法師なのだ。
寧ろ、返す刃の如く大きな損害を出してしまうのでは……と思ってしまうあたり、エリカも大分幼馴染に毒されていると思ってしまったのは言うに及ばず。
「多分……いや、絶対に無理だね」
「雫……言い切ってしまうんですね」
「ほのか共々、散々経験してるから」
中学時代の2年間を同じクラスで過ごしてきた雫からすれば、誰かの下で働くというイメージが湧いてこない……そんな意味を込めた台詞を聞いた一同からは冷や汗が流れていた。
◇　◇　◇
居候とはいえ、司波家の鍵を渡されている（深雪から押し付けられる形であり、達也に確認したら「諦めてくれ」と返ってきた）悠元がリビングに入ると、テーブルにはメモ書きが置かれていた。筆跡からしてそのメモを書いたのが深雪だとすぐに理解した。
「気にしなくてもいい、とは言い含めたんだが……深雪からしたら、そ

うもいかないか」
　調査とはいえ久々の遠出になるので、気合の入った弁当を作っていたのは横目で見ていた。すると、深雪から「悠元さんには帰ってきてから美味しいものを作りますから」と言われたが……彼女の機嫌を損ねる必要もないため、頷く以外の選択肢などなかった。
　加えて、冷蔵庫には夕食分が入っているので、それを温めて食べてほしいと書かれていた。ともあれ、学校でシャワーを浴びてきたとはいえ、ただ汗を流すだけのものなので改めてシャワーを浴びてからリビングに戻ってきたところで丁度ヴィジホンの着信が鳴ったので、悠元がパネルを操作するとモニターに表示されたのは八雲であった。
『やあ、悠元君。いや、この場合は〝若殿〟と呼ぶべきかな？』
「普段通りで構いませんよ、九重先生。にしても、達也らとは別行動ですか？」
『そうなるね。特に僕の顔は「九」の家に覚えられてしまっているからね』
　先代の九重であった人物の有名税もあるだろうが、八雲自身の魔法師界における知名度も大きいだろう。何せかの『果心居士（かしんこじ）』の再来という二つ名を有するほどに、八雲の実力はこの国の古式魔法使いの中で指折りの実力者である。
「となると、九重先生は『本山』を尋ねられたのですね」
『いやはや、悠元君には筒抜けだね。この辺の情報は秘術にも触れるから、戻ってきたら教えてあげるよ』
「……そのついでに達也への試しのテストは止めてください」
　言ったところでそれが叶うかどうかは不明だが、ため息交じりに呟いた悠元の言葉に対して、八雲は意味ありげな笑みを浮かべていた。次はどうせ全方向からの幻術でもやってくる……というのは口に出さなかったが。すると、八雲が悠元に問いかけてきた。
『悠元君としては、パラサイドールをどう見ているのかな？』
「……『ピクシー』とは異なり、パラサイドール自体に明確な忠誠が存在しない以上、仕込まれた術式自体が〝絶対〟に解けない保障がありませんので。幸い、スティープルチェースのコースはモノリス・コー

ド以上の機密性を持ってしまっているので、それに託けて片を付けるつもりです」
『……君の持つ「アリス」のことも考えれば、できなくはないかもね』
『アリス』――――守護霊(サーヴァント)のことは八雲にも伝えたが、その根幹を成す制御術式と契約術式は八雲ですら悠元から聞き出すのを躊躇った。理由としては「人の口に戸は立てられないからね」と隠蔽すべき事実として認識したからに他ならない。それ以上に、八雲自身も狙われない保障が無くなるためでもあった。
「これ以上は無秩序に増やすつもりなんてありませんよ。『アリス』のことも偶然の産物でしかありませんし……一応は封印を前提に動きますが、回収はお任せしても宜しいですか?」
『構わないよ。僕も九校戦へ行くことになるからね』
パラサイドールの再封印を施すのは既定路線だが、それを引っ張ってゴールしたら面倒事が増えかねない。なので回収自体は八雲に任せたいという旨を伝えると、八雲も九校戦に出向くということからして、今回の一件はある程度聞き及んでいるのだろうと推測した。
『にしても、残念だったね悠元君。惜しむらくは二人とも悠元君に惚れていて、深雪君は君の直弟子にして婚約者という点かな』
「……今ここで『楼炎雀火(ろうえんじゃっか)』を発動させますよ?」
『おおっと、藪蛇だったね。それじゃ、この続きは後日ということで』
八雲の挑発に対して悠元が呟いた天神魔法――――火属性の最上級魔法である『楼炎雀火(ろうえんじゃっか)』――――の名を聞いた瞬間、これは藪蛇であったと八雲は察して通信を切った。悠元のほうもパネルを操作して通話を終えると、一つ深い溜息を吐いた。
「分かっちゃいたが、深雪に惚れた弱みなんだろうな……少し早いけど、夕食にするか」
奈良にいる面々の手助けをしてやってもいいとは思うし、千姫からも特に止められてはいない。一応〝保険〟は掛けてあるし、もしもの時は彼らの守護霊(サーヴァント)もいるので、最悪の事態は避けられるだろう……そう信じつつキッチンへと足を進めたのであった。

弟子、空を飛ぶ

翌日、帰ってきた達也らを出迎えることになったわけなのだが、深雪の表情が曇っているのに気付いた悠元が声を掛けた。すると、深雪は必要なことを言わずに悠元へ抱き着いたのだった。
「おかえり……って、深雪はどうしたんだ？」
「……悠元さん」
「えっと、その、悠元兄様」
水波からの説明によると、Ｐ兵器もといパラサイドールのデータ提供を貢と亜夜子から受けたことで、自分の無力さに苛まれていた。この点は達也もフォローはしたのだが、それでも機嫌を直せずにいたらしい。
それを聞いた上で、悠元は深雪の頭を撫でつつ諭した。
「とりあえず、玄関に立ったままは宜しくないから、荷物を置いて来るといい。話は後で必ず聞くからさ」
「……分かりました」
深雪は名残惜しそうに悠元から離れると、荷物を持ったまま自室へと向かって行った。水波もそれに続く形となったのだが、達也が動こうとしなかったことに気付いた。
「どうした、達也？　二人に聞かれたくないことか？」
「いや……コーヒーを淹れていたのか？」
「気分転換に淹れようとしたら丁度帰ってきたってだけだよ」
コーヒーの香ばしい匂いが玄関にまで漂ってきたので、それで気付いたのだろうが……もしかしたら、深雪の不機嫌の一端にもなっているのかもしれない。そう思うと内心で溜息が漏れそうだった。
「準備はしておくから、達也も荷物を置いて来るといい」
「そうだな。そうさせてもらうよ」
達也らがリビングに揃ったところでコーヒーを差し出したのだが、深雪は悠元の腕にしがみつくような感じで身を寄せていた。こればかりは甘んじて受けつつも話を始めることとした。達也はデータカードを悠元に差し出した。

「まずは悠元、これを渡しておく」
「データカードか……これの内容は本家に？」
「コピーはしてあるから、この後送る」
　悠元はリビングに持ち込んでいた自分の折りたたみ型端末にデータカードを接続し、全てのデータをコピーした上でカードを達也に返した。所有権が達也にある上、もしもの時は簡単に『分解』できるという事情を踏まえての行動なので、達也から反論が出ることもなくカードを素直に受け取った。
　端末でデータに素早く目を通していく。前回の調査と比較した場合、新たに追加されたのは大亜連合から亡命した方術士のデータである。伊勢家からの報告を考えれば、間違いなく周公瑾によって手引きされた亡命者なのは間違いないだろう。
「国防軍の過激派が競技を変更し、それに乗じて九島家がパラサイドールの性能実験を目論み、さらに上乗せされる形で第三者の企みが加わった……面倒が重なるな」
「……悠元。どうしてパラサイドールの名称を知っているんだ？」
「達也らには黙っていたが、内密に伊勢家を動かして調査と監視をさせていた。後、黒羽家が動いたのは母上の指示によるものだ。何か聞いていたりする？」
「そういえば、叔父様は『追加調査』と仰っておりました」
　原作では、パラサイドールに至るまでの経緯をほぼ知ることなくその対処を達也に押し付けていた。だからこそ、達也はいつ動くか分からないパラサイドールに対して神経質になっていて、深雪に心配される事態になっていた。
「というか、〝P兵器〟というあからさまなネーミングからして想像が付くとは思ってたんだが……」
「流石にピクシーや俺と悠元の持つ守護霊（サーヴァント）の事例は例外中の例外だとは思っていたんだ。九島家は何時パラサイトを手に入れていたんだ？」
「パラサイト事件で幹比古が封印したものを持ち去ったとみられる。こればかりは俺も責任があるな」

「いや、悠元を責めるつもりはない。だが、納得がいった形だな」
パラサイトの引き渡しは剛三が動く形となったが、九島家はそれを拒否した。その上でパラサイドールの開発を続けている……この事実が師族会議に漏れた場合、九島家は十師族から追い出されるというリスクを背負っていることに九島烈は気付いている筈なのだ。
流石に孫を戦場に送りたくないという祖父としての気持ちは理解できなくもないが、当の光宣本人は優れた魔法師として活躍したいという願望を抱いている。この気持ちのズレが捻じ曲がった結果、原作の光宣があのような行動に至ってしまった。
それを剛三も気付いているからこそ、「孫ときちんと向き合え」と散々釘を刺している。言うなれば豆腐に剣山張りの釘が刺さっている形だな、と剛三が以前ぼやいていたのを耳にしたことからして、相当の回数に渡って言い放ったことは事実だろう。
「九島烈はかつて真夜さんと深夜さんの教師をしていたことからすれば、達也と深雪のことも当然気付いている筈だ。そして、今回の事態を俺と達也に対処させるつもりなのだろう……対処というよりは実験対象と言うべきなのかもしれんが」
「だから、男子のスティープルチェース・クロスカントリーの作戦は悠元と修司、燈也以外の面々を集める形にしたのか」
パラサイトを直接対処できる三人が最先行し、残りの男子が集団でゴールを目指す。ただ、それだけではパラサイトを対処できたとしても競技としては面白くない、と踏んだ悠元は一つの悪だくみを考えていた。
「悠元、何か考えているのか？」
「パラサイドール対策は問題ないが、優勝争いしてくるであろう三高の連中をルールの範囲内で嵌められる方法を思いついたが……今は言わないでおく」
別にバレるという可能性を考慮してのものではなく、あくまでも主眼はパラサイドール対策がメインなので、そのオマケみたいなものだ。
スティープルチェース・クロスカントリーではモノリス・コード同

様に相手選手への直接の妨害を禁じられている。だが、トラップを突破しようとした結果として相手選手への妨害になってしまった場合は禁止行為になっていない。流石にトラップそのものを相手選手目がけて飛ばすのは禁止になってしまうが。

そこまで話した上で隣に寄り添っている深雪に声を掛けた。

「深雪。九校戦というか、将来も見据えた魔法を3つ提供する。ただ、その内の一つは威力調整しないと確実に戦略級魔法クラスの威力を出すから、かなり制限していることは了承してほしい」

「3つも……そのうちの一つは戦略級魔法ですか。私に扱えるのでしょうか？」

深雪自身にあまり自覚は無いだろうが、原作のスペックと達也のことを考えれば、深雪も戦略級魔法を使えるだけの資質は持ち合わせている。そこに新陰流剣武術の体術や天神魔法、悠元の想子制御が加わったことで大型ＣＡＤの制御なしで戦略級魔法クラスの行使を可能としている。

流石に九校戦でそんな威力は必要としないため、かなり威力制限を掛けた状態で術式提供することになるわけだが。

「それに関しては、達也に確認している」

「俺としては、深雪にそこまでの魔法を持たせるのはどうかと思ったが……パラサイドールのことを考えれば、その対抗手段を持つ深雪を守るためには、深雪自身のレベルアップも必要だと感じた。師匠は内心で喜んでいそうだが……」

その点は達也にも言い含めている。提供する術式は全て九校戦のみを想定したものではなく、この先の流れ――特に周公瑾や顧傑との絡みを鑑みれば、いくつかの術式提供を前倒しで行うのが良いと判断した形だ。

ガーディアンよりも強い護衛対象……深雪の実力が今の達也に迫りつつあるという事実に、八雲の面白そうな笑みが浮かんだらしく、達也の口からため息が漏れそうな雰囲気が出ていた。

「一つ目は『凍刃爛舞（シヴァレイド・エッジ）』。旧第七研の『群体制御』をベースに深雪が得意とする極度凍結系魔法を組み込んだ代物だ」

「……あの、それは大丈夫なのですか？」
「問題ない。最悪はこの間の七宝との模擬戦で『群体制御』のコツを掴んだ、とでも言えばいいし」
　ナノメートルレベルの紙吹雪状の薄い氷を超音速で飛ばす魔法。言うなれば七宝家の『ミリオン・エッジ』を更に実戦仕様へと仕上げた代物だ。この魔法の最大の利点は形成する氷の形状を自在に変化させられるので、細い針や球体、遊びで金平糖の形状にも変化できるように起動式を組み上げている。普通なら温度を上げることで氷柱を破壊するというアイス・ピラーズ・ブレイクのセオリーを根本から打ち破るための一手とも言える。
　深雪は勘付いているのだろうが、この魔法は七草家の『魔弾の射手』から大幅に改造した代物である。今は三矢の家の人間ではないし、いくらでも言いようはあるためにこちらの知った事ではない。
「二つ目はより実戦的に仕上げた『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』。多分雫から俺が上泉家でやってたことを聞いてると思うが、敵のフィールド内に高温フィールドと低温フィールドを織り交ぜることで対象物に急激な温度変化を起こさせて破壊する。無論、昨年のような使い方で防御することも可能だよ」
「確か、1メートル間隔で６４面の『インフェルノ』を展開していたことですか……凄すぎますよ、悠元さん」
「これでも独自で想子制御の鍛錬法を編み出して、沖縄の反省から魔法の練習に力を入れてた結果だから」
　腕越しに感じる深雪の感触に内心でドキッとしつつも、魔法の説明を続けていく。
「最後の魔法が『氷結六花（ダイアモンド・ダスト）』……これが先程言った戦略級魔法クラスの威力を叩き出すことができる超広範囲領域の分子凍結魔法になる。『零点銀世界（ゼロ・ニブルヘイム）』も威力制限を取っ払えば戦略級魔法になってしまうわけだが」
　この魔法なのだが、恋愛感情が分からずにいた悠元が感情の復元やら凍結やらを色々試行錯誤していた際に偶然生まれてしまった〝とんでもない魔法〟の一つ。

説明では分子凍結魔法という分類にしているが、深雪の持つ『コキュートス』とリンクすることで超広範囲に精神凍結を起こさせることが可能である。ただ、心優しい深雪がそこまでやると心を痛めてしまうため、達也と相談した上で威力制限を付けた状態で対物戦闘を前提とした使用法に止めた。

そして、この魔法は……奇しくもベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を止めることが出来る対抗魔法の性質も持ち合わせている。

「パラサイドールがどう動くかなんて分からんが……サイキック相手は達也でも手古摺る可能性がある以上、油断は出来んな。場合によっては天刃霊装を使ってでも止めろ。一応許可は取り付けているし、スティープルチェースだったのが不幸中の幸いだな」

こんな競技を捻じ込む時点で国防軍の強硬派は九校戦の本質を理解していない。国を守るという意味で実戦レベルの魔法師の存在は貴重、という事実は理解できなくもないが、魔法に対する恐怖を和らげる側面を持ち合わせている九校戦に実戦的な競技を持ち込む時点で、彼らは魔法師を将来の戦力としてしか見ていないと思われる。

「それ以外でパラサイドールが動く可能性はあるのか？」

「昨年、独立魔装大隊や千葉家で対処してもらった『ジェネレーター』と違って、パラサイトは完全にコントロールできる代物じゃない。ピクシーや守護霊（サーヴァント）という例外はあるがな」

達也から実際に視たパラサイドールの術式の内容を聞いた上で、下手に動かせばパラサイドールが暴走して九校戦の継続が不能になるという危険性については触れたが、そこについては対策もしていると悠元は述べた。

「そういえば、昨年うちの姉さんたちが使った〝魔法科教育研修〟の名目で七草先輩と十文字先輩が来るらしい。あと、五十嵐先輩と平河先輩もだったか」

「4連覇が掛かっている以上、先輩方が来てくれるのは助かるが……どうした、深雪？」

「いえ、お兄様もおモテになりますね」

「……」
目の前で悠元に甘えている深雪の言葉に、達也は二の句が告げずにいた。昨年の夏までは深雪を諭す立場だった筈なのに、いつしか妹から恋愛の指南を受ける羽目となったことについて、達也は人間としての成長を一気に追い越されたような気分を感じたのだった。

◇　◇　◇

達也らが旧第九研の調査から帰ってきた翌週の日曜日。九重寺の庫裏の縁側で一人出された茶菓子や緑茶に舌鼓を打っていると、この寺の住職である八雲が塀を飛び越える形で顔をだした。
「いやー、すまないね悠元君。弟子への指示をしていたら遅れたよ」
「いえ……上段者の気配も感じますが、達也への総掛かりですか？」
「正解。それに、今日は君のお兄さんにも手伝ってもらっているよ」
「元継兄さんですか。達也相手に大人げないような気もしますが」
時間としては早朝。今日は達也が体術の鍛錬で訪れる日になっているわけだが、今日は鍛錬で汗を流していた元継にも声を掛けて達也の相手をさせる形にした、と八雲は説明した。
次期総師範筆頭候補かつ上泉家現当主である元継だと、悠元も正直全力を出さないと命の危険を感じるほどにヤバいと思うほどの実力を有している。尤も、現総師範である剛三と比べると些か劣ってしまうが。
ともあれ、八雲から先週のことについての調査結果を受けることとなった。
「悠元君も達也君から聞いていると思うけど、九島家に招かれた大亜連合の亡命者はどれも人形を使役する術――――パラサイドールに対する工作を目論んだ輩の仕業だね」
「それの手引きをしていたのが周公瑾……その黒幕はこちらの情報を知る術が存在する、と見るべきでしょうね。黒羽家でも苦労したほどの情報隠蔽をあっさりと抜くのですから」
顧傑が『七賢人』――――フリズスキャルヴのオペレーターの一人である以上、九島家がいくら隠そうとも電子情報のオンラインシステムネットワークに存在する以上は隠し通せない。それはともかくとし

て、今大事なのはパラサイドールに関することだ。
「その絡みで『本山』に出向いて、その道の専門家に聞いてみたよ。護法童子の使役術ぐらいは悠元君も知っているだろうし、君もその発展形を使っているから詳しくは言わないけれどね」
『アリス』とは制御術式と契約術式の二重の繋がりによって極めて高い制御を成し得ている。加えて、『アリス』自身の持つ悠元に対する自発的な忠誠心が制御の精度に大きく影響している。
密教における人形の使役術は、制御だけでなく術者が規定した以外の行動を取った際の拘束、更には封印まで含めて一つの使役術として形を成している。パラサイドールに使われた術式も安全装置が組み込まれていないと兵器としては〝落第もの〟だろう。
「以前ピクシーから聞いた際、パラサイトは憑りついた人物の想念に影響を受ける、と言っていました。達也から聞いた限りでは、確認できたパラサイドールが16体……彼らはパラサイトを培養することに成功している可能性があるかと」
「……それが万が一、世の中に知れると拙いだろうね」
密教の使役術でも精々独立した霊子情報体を用いるのが限界だが、『九』の数字を冠する家は古式魔法使いの技術をただ只管に吸い出して己の力としてきた。そのせいで『伝統派』との争いの火種まで抱えてしまっている始末。
その辺りでパラサイトを制御できると踏んだのだろうが、世界各地で様々な呼び名を持っているパラサイトを完全に制御できたという事例は未だかつて存在していない。というか、下手すれば大昔に何らかの要因で出てきたパラサイトが誰かに憑りついて生存している可能性もなくはない。
流石にそこまで掘り起こす気にはならないし、彼らが自発的に害を為さないと決めているのならば、無闇に首を突っ込む気にもならない。「触らぬ神に祟りなし」である。
「まあ、それはいいとして……お弟子さんが宙に舞ってますけど、いいのですか？」
「深雪君に触発されて、達也君も強くなろうと奮起しているみたいだ

ね」
「評価するところはそこですか」
自分の弟子が空中を舞うような格好で吹き飛ばされていることよりも、深雪が新陰流剣武術を学び始めた影響で達也も鍛錬により一層力を入れるような形となり、八雲が達也の成長を師として喜んでいることに対して悠元はジト目を八雲に対して向けたのだった。

何事もないという違和感

「お疲れ様、元継兄さんに達也」
「来ていたのか、悠元」
八雲と話し終えた後、一応様子を見に来た悠元が目にしたのは地面に横たわる寺の門下生に加え、仰向けで大きく息をしている達也と腕で汗を拭う元継の姿であった。元継は悠元の姿を見て挨拶を交わした。それに答えつつ、悠元は達也に問いかけた。
「まあね。で……感想は？」
「はあっ……お前もそうだが、元継さんも異常だと思う。師匠以上だろうな」
「兄さんは爺さんの直弟子だからな」
本来、ある程度の技巧が修得して初めて剛三の弟子となる。そのため、正規の方法で弟子となった元継と異なり、剛三が直に気に入ったということで教わっていた悠元の立ち位置は師範の御付きという形だった。習い始めたのが病み上がりから少し経った頃なので、いきなりハードワークは厳しいという周囲の声を反映してのものである。
ただ、木刀を躱したことで剛三から課されることになる訓練ペースがおかしくなったのは言うまでもない。
「事実はそうだが、武術の資質は悠元がずば抜けていたからな。魔法の資質でも爺さんを越えちまっているが」
「だからって上泉の家を継ぐ気なんて毛頭なかったけど。だからこそ、元継兄さんが強くなることに手を貸したわけだし」
上泉家に通い始めた時、元継に恋慕している千里の存在を知って、彼女に想子制御やら魔法力の訓練を吹き込んだ。その頃には侍郎の魔改造も済ませており、二人の変化を知った元継が悠元に魔法力の訓練を教わった形だ。
その時点では、あくまでも達也に殺されない対策の一環として体術や剣術、魔法を極めることに集中していた。沖縄防衛戦後は魔法を重視して覚えるようになり、気が付けば上泉家に眠っている全ての魔法を会得するに至った。

「ま、結果としては元治の兄貴に三矢を継がせる道筋が出来たから、俺も異存はない。寧ろ頭が上がらなくなりそうだ」
「やめて。俺の胃がストレスでやられて血を吐きかねないから」
いくら強くなろうが、行動理念に影響されない程度の前世の価値観自体は未だに残っている。目立っていることは承知の上だが、出来れば慎ましく生きたいという悠元の願いを込めた言葉に元継はクスッと笑みを零した。
「そういえば、悠元の恋人は達也君の妹だったな。達也君としては、うちの弟はどう思っている？」
「申し分ないぐらいかと。寧ろ、うちの妹が迷惑を掛けているようなものですよ。もう少し自重や慎みを覚えてほしいとは思います」
「……悠元。最近の女性は肉食系女子が多いのか？」
「俺が聞きたいよ、そんなこと……」
昨晩、亜夜子とのやり取りで不機嫌となった深雪が悠元に抱き着いてきた。それも下着すら付けない状態で。結果として何が起きたのかは言うまでもないだろう。それでも学業に支障が出ないよう心掛けている。
どうやら元継も似たような状況のようで、それを聞いた悠元の言葉はというと……どうしてこうなった、と内心で述べることしかできなかったのであった。
◇　◇　◇
今年は昨年のように『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』のような裏組織が出張っている可能性はないが、国防軍と九島家、周公瑾……そこに付け加えてローゼン・マギクラフト絡みという始末。
エリカやレオから直接相談されてはいないが、悠元も当事者側の一人であり、ローゼン家の遺産相続にも首を突っ込んでいる立場だ。だからといって無条件で遺産相続を放棄するつもりなど毛頭もないが。
今年の九校戦は８月３日に前夜祭パーティーが行われ、５日に開幕して１５日に閉幕というスケジュールで行われる。本戦選手が男女各１２名、新人戦男女各９名、技術スタッフ８名、作戦スタッフ４名の計５４名。重複出場はないものの、結果的には人数が増えた形だ。

昨年は技術スタッフ全員が作業者に乗り込んでいたが、今年は技術スタッフの内４名がバスでの移動となった。あずさ、五十里、達也、そして美月がその対象となり、どんな力が働いたのかは言うまでもないだろう。尚、美月をバスに乗せたのは佐那の差し金だったりもする。

「技術スタッフが忙しいのは知ってるけど、何で３Ｈを連れて行くのかな？」

そう零したのは香澄である。九校戦の技術スタッフの忙しさは香澄自身も把握しており、今回の技術スタッフの中に１年の女子生徒が含まれていて、香澄とクラスが同じということもあって理解していた。

確かに必要な人員を増やすよりは手ごろで確実なのも理解している。それでも香澄の目からすれば『不思議』に思えてしまうのだろう。そんな様子の香澄に対し、泉美が窘めるように声を掛けた。

「香澄ちゃん。深雪先輩も仰っていたではありませんか」

「いや、別に文句とかじゃないんだけどさ……何かモヤモヤするんだよね」

香澄は達也からロアー・アンド・ガンナーの手解きやアドバイスを貰っていた。いつもは家の事情などで一歩引いた扱いを受けてきた香澄からすれば新鮮なことで、悠元以外にそういうふうな扱いを受けたことから、妙な気持ちを抱いていた。

その気持ちを見透かしたかのような言葉が、香澄の背後から聞こえてきた。

「香澄、ピクシーに嫉妬してるの？」

「いや、そんなわけじゃ……って、北山先輩!?　す、すみません！」

「？　別に謝らなくてもいいのに。もうみんな乗ってるから、急いだほうがいいよ」

雫の言葉に対してつい反射的にタメ口を使ったことに対する謝罪を聞き、雫は咎めることなく二人にバスへ乗り込むように告げた。香澄と泉美は周囲の人影がいないことに気付いて雫に頭を下げた後、バスに乗り込んでいく。

それを見ていた雫は一言呟いた。

「ま、分からなくもないよね。私も分かってないし」
雫は悠元やほのかからピクシーの詳細を聞いたが、ＵＳＮＡへの留学中に起きたことなので現実味が感じられなかった。だが、悠元を通して霊子に対する感受性を磨いたことで、ピクシーに憑りついたパラサイトの存在だけでなく、それに焼き付いたのがほのかの達也に対する想念だとすぐに理解した。
そんな雫の呟きは誰にも聞かれることなく、彼女も二人を追うような形でバスに乗り込んだのだった。
◇　◇　◇
道中のトラブルは無論の事、バスの中に不穏な空気が流れることもなく無事に到着した。部屋へ設備を運び入れる作業も滞りなく完了した。ここまで何事もないというのが少々不気味な感じだが、これが本来の九校戦の流れなのだろうと思うと、妙な安心感を覚えていた。
「何を微笑んでいるんだ、深雪？」
「だって、昨年は借り物みたいな恰好でしたから」
「そうさせたのは深雪だろうに……」
前夜祭のパーティーが開かれ、達也の制服姿に深雪が微笑んでいる。昨年はある意味〝借りた〟格好だからこそ、ちゃんとした評価をされての晴れ姿に微笑んでいるのだろう。水波からしたら「何を言っているのだろう」と思われそうなものだが。
「でも、本当によくお似合いですよ！」
「私もそう思う」
「確かに。どこか借りた装いって感じだったのは覚えてるよ」
「そーだねー」
ほのかや雫だけでなく、スバルや英美も同意していた。そして、原作ではこの場にいなかった女子からも同意の声が飛んできた。
「ホント、ホント。昨年の達也君はどことなくぎこちなかったからね」
「……今更だが、昨年のあの格好は様になってたと思うぞ、エリカ」
「それを今言う？　まあ、達也君らしいけどね」
エリカは昨年、家の手伝いという形で九校戦の給仕スタッフをしていた。それが今年は一科生になった上で代表選手に抜擢されたのだ。

当然、千葉家当主としては鼻が高いのだろうが、当のエリカからすれば今までロクに父親面すらしてこなかった輩に褒められたくもない、と思っているのは確かだろう。
「それで、悠元はアイツやミキを出汁にして逃げてきたって感じ？」
「そんな甲斐性はない。というか、むしろ向こうから気を使われた感じだ」
悠元も最初は先輩の男子から絡まれるのを覚悟していたわけだが、桐原から「お前はとっとと彼女のところに行ってやれ」と背中を押される形で達也らと一緒にいた。
その最たる原因というのが悠元の隣にいる深雪なのだろう、とそこにいる面々の誰もが言わずとも気付いていることなので、余計なことを言わない様に気を使った形だ。なお、深雪の機嫌がすこぶる良いというのは述べるまでもない事だが。
まあ、レオと幹比古も一応彼女持ちだが、ある意味奥手なので公ではあまり見ないことが多い。
ここで会場の周囲を見渡すと、同じ学校だけでなく他校の女子から好意的な視線を向けられている男子がいた。向こうもこちらに気付いたようで、三高の女子を引き連れるような形で歩いてきた人物、一条将輝（いちじょうまさき）が隣に吉祥寺真紅郎（きちじょうじしんくろう）を連れる形で近寄ってきた。
悠元も達也の隣に立つ形で立っていたわけなのだが、将輝が最初に挨拶した相手は――深雪であった。
「お久しぶりです、司波さん」
「――ええ。お久しぶりです、一条さん」
緊張で笑みが強張っている将輝と愛想笑いを浮かべている深雪。無論、将輝が深雪に対して好意を抱いていることは当然知っている。悠元もこれには流石にムッと来たが、表情に出すことなく真紅郎に話しかけた。
「直接会うのは昨年の論文コンペ以来だな、ジョージ」
「そうなるね、悠元。司波達也君もお久しぶりです」
「ああ。にしても、悠元と吉祥寺は知り合いなのか？」
「ええ、まあ。僕の恥ずかしい記憶でもありますが……」

それが悠元と将輝の初対面の時に関わる話だということは事前に悠元から聞いていたため、そのことに関して深く掘り下げるのは失礼だろうと判断して達也はそれ以上の追及を避けた。そして、どう話を続けようか迷っている将輝に対して悠元から話しかけた。
「そういえば、横浜では大活躍だったみたいだな将輝。『クリムゾン・プリンス』の面目躍如といったところか」
「神楽坂……それは止めてくれないか？」
「事実を言ったまでだよ」
それは確かに、と真紅郎だけでなく達也や深雪も納得していた。仰々しいのが嫌いという将輝の性格を知っているからこその発言に、将輝は諦めたように息を一つ吐いた上で悠元と達也に視線を向けた。
「ところで、神楽坂に司波……っと、この呼び方で構わないか？」
「無論だ。それで一条、何か聞きたい事でも？」
「今年の九校戦、何か変じゃないか？」
将輝が声のトーンを低めて問いかけたことは、周りに聞かれたくない事情も含んでのものだと察しつつ、達也が口火を切るような形で答えを返した。
「変だ、と言われるとどうにも要領を得ないな。競技変更についてか？」
達也は今回の九校戦の背景を知っているが、それを口に出すことは出来ない。ましてや、国防軍だけならまだしも九島家に加えて別方面のこともある。ただ、達也はローゼン家絡みの案件に関して何も関与していない。
「いや、競技変更はまだ理解できる範疇だ」
「九校戦の運営要領も、競技変更を含んでのものだということは分かりますし、昨今の事情を考えれば当然の流れかもしれません」
ここで気になったのは、春に起きていた魔法師排斥運動――厳密に言えば、昨年末あたりからＵＳＮＡ東海岸で発生していた人間主義者による活動を考慮していないことにある。
目立った動きがあったのは横浜、名古屋、九州……更に情報を集めたところ、北海道や沖縄、大阪を含めた全国の主要都市にその兆候が

あったことだ。そのどれもが『ブランシュ』や『エガリテ』の拠点跡地を用いたものだという事実を知り、その情報を千姫や剛三に伝えている。

師族会議を通さなかったのは、顧傑に余計な情報を与えないためでもあった。そのため、将輝が知らなくとも無理はない筈だが、春の臨時師族会議で魔法師排斥運動に関する議題を挙げている以上、剛毅から少なからず聞いている筈なのだ。

「春のことを考えると些か性急過ぎる気がすると俺は思う……ま、そんなことはいいとして、二人の目から見て一番おかしいと思うのはスティープルチェース・クロスカントリーだろう？」

「ああ、その通りだ。競技名が付いているのがおかしいぐらいで、全長4キロは現役部隊でも滅多にやらない大規模演習を想定したメニューだ。神楽坂なら分かるだろう？」

「まあな」

「しかも魔法師とはいえ高校生の、それも疲労が残る九校戦の最終日に行うなんてリスクが高すぎます」

悠元が元三矢の人間だからこそ軍人魔法師との関わりが深いことは将輝も知っているし、それを踏まえた上での台詞に悠元も頷いた。

二人は表の情報だけでここまで辿り着いているのは間違いない。それに加えて真紅郎経由で一条家に今回の競技変更に関する調査を頼んだから、という事情からくる影響も多少は含んでいるのだろう。

「そういえば、一条家に頼んだ調査は無事に終わったのか？」

「あ、ああ……後で時間を貰えるか？　流石にこの場で話せるものじゃないからな」

「分かった」

一通りの話を終えて将輝が立ち去ろうとしたとき、何かを思い出したように悠元へ振り向いた。その目つきが真剣なものだということは直ぐに気が付いたので、大方宣戦布告でもしたいのだろうと読んだ。

「神楽坂。今年は負けない」

「言ってくれるじゃないか、一条。昨年の二の舞にしてやるから覚悟

しておけ」
　将輝は言葉を詰まらせたが、これ以上は墓穴を掘りかねないと判断してその場を去っていく。これには真紅郎も苦笑を浮かべつつ去っていった。
　すると、入れ替わるような形で挨拶してきたのは三高２年の一色愛梨であった。それに付いてきた形で同じ２年の十七夜栞と四十九院沓子も顔を見せに来た。
「お久しぶりですね、悠元さん」
「愛梨に栞、沓子も。さっきまで深雪らと話していたが、いいのか？」
「話は済んだから。十師族でなくなったのは驚きだったけど」
　確かに、十師族から古式魔法の大家に名字が変わるというのは、普通ならば考えられないことなのかもしれない。栞も元々の家が『数字』を剥奪されたために十七夜家へ養子として引き取られた経緯があり、その辺を思い浮かべたのだろう。
「ま、俺の場合は自発的に家を出た形だからな。細かい事情は話せないが」
「なるほどの。とはいえ、お主が相手となると『プリンス』が惨めに思えて来るの」
　沓子は神楽坂家次期当主の婚約者序列第四位に位置しており、悠元の本当の実力を理解している一人。だからこそ、悠元と将輝の結果は見ずとも理解できてしまっていた。とはいえ、周囲の目もあるため、声のトーンは低めにしていた。
「ま、直接対決するわけでもないけど、健闘は祈っておくよ。こちらも４連覇が掛かっている手前、素直に応援は出来ないが」
「……ええ、それだけでも十分です」
　愛梨らも軽くお辞儀をして去っていったわけなのだが、悠元は背中を抓っている人物に対して声を掛けた。その人物とは言うまでもなく深雪のことである。
「深雪さん、痛いです」
「悠元さんは罪作りなジゴロです……」
「それは分かる」

「雫さんもですか……」
なお、部屋割りは達也と五十里、深雪と花音、そして悠元と燈也の組み合わせになっていた。だが、花音と深雪が示し合わせた結果、五十里と花音、悠元と深雪が同室になってしまったのだ。達也と同室になった燈也はというと、達也の溜息を吐きたそうな表情を見て粗方の事情を察した。
表向きは婚前の男女が同室なのはどうか……という悠元と達也の疑問は、見事なまでに粉砕されたのは言うまでもなかった。

そんな役割は柄じゃない

一つの来訪が終わると、次の来訪が訪れる……というのは、物語なら想像できなくもない事だ。何が起きたのかといえば、雫の従兄である四高の鳴瀬晴海（なるせはるみ）が挨拶をしに来たのだ。ほのかだけでなく悠元もその人物とは顔見知りであり、晴海は悠元の顔を見た時に驚きを露わにしていた。

「お久しぶりですね、晴海さん」

「ああ。あの時の少年がまさか十師族の人間だったことも驚いたけど……実は、うちの後輩が司波達也君や悠元君に興味を持っているらしくてね」

黒羽家の姉弟との邂逅。本来なら深雪を介する形だが、雫は晴海と面識を持っている悠元ならばスムーズに話せると判断してのものだった。それについては問題ないし、現状は晴海と義理の従兄弟の関係にあるため、無視など出来るはずがなかった。

雫には深雪に達也への伝言を頼みつつ、先に黒羽姉弟との邂逅を済ませることにした。今年の春から細やかに流れていた噂――黒羽は〝四葉〟の一族ではないか、という噂を補強する意味でも元とはいえ十師族の人間が対応しても問題はないだろう。

なので、自分からすれば初対面を装う必要はないと判断して声を発した。

「久しぶりだな、亜夜子に文弥。四高に入学していたこともそうだが、代表選手に選ばれていたとは驚きだよ」

「あ、はい！　悠元さんもお久しぶりです！」

「もう、文弥ったら……悠元さんもごめんなさい。態々押し掛けるような真似をしてしまって」

「懇親会なんだし、別に謝られることじゃないと思うが……っと、来たか達也」

そして、悠元を介する形で達也と深雪、亜夜子と文弥が邂逅する形とした。周囲から見れば、やはりあの噂は本当なのかと疑わざるを得ないだろう。父親の貢としてはあまり目立たせるのを好まないだろ

うが、却って堂々としていれば案外隠し通せることだってあるし、物は言いようなのだ。
「しかし、俺は一高の生徒であって直接の先輩ではないんだが」
「ですが、魔法師として先輩なのは間違いないと思っております。お二人のエンジニアとしての技術に感服いたしましたの」
昨年の場合は達也がメイン、悠元がサブという形で立ち回っていた。悠元の場合は代表選手としてアイス・ピラーズ・ブレイクとモノリス・コードに出場していたため、持ちまわり自体は達也と比べると少ない方だ。
実際のところ、二人が使っているＣＡＤに関しても達也の頼みで設計している。市販のものよりもかなり高スペックの代物であることに加え、達也から聞き及んだ二人の魔法特性に合わせたハードチューニングを施していることもあって、評価はかなり高い。
亜夜子の言葉はその辺に対する感謝を含んでのものだと察しつつ、社交辞令的な言葉を交わした。
「九校戦中は無理だが、その後なら構わないよ。悠元もそれでいいか？」
「それ以外にないでしょうに。二人とも、健闘を祈っているよ」
「はい、ありがとうございます」
二人と晴海が四高の集団に戻っていくのを見ていると、先程まで食事に夢中だったセリアが話しかけてきた。深雪ら一高生と愛梨ら三高生との会話をしているときは声を掛けられて愛想よくしていたが、自分の前だと態度を崩すのはどうかと思った。
「さっきのって、黒羽亜夜子と黒羽文弥だよね……あの歳であの胸は反則じゃないかな」
「お前はのっけから何を言ってるんだ……」
亜夜子は達也に恋慕している……という事実はセリアにも伝えていて、それを聞いたセリアの反応は「あー、何となくそうなんじゃないかなって思うよ」と返ってきたことからして、彼女が達也に尊敬以上の感情を抱いているのはほぼ間違いないだろう。
明らかにセクハラ紛いの発言を窘めつつ、セリアのほうを向いた。

「この後は来賓の挨拶になるが……まあ、セリアの知り合いは出てこないだろうな」
「いや、出てきたら大問題だからね？」
確かにその通りだろう。セリアが面識のある知り合いとなれば、在日ＵＳＮＡ（アメリカ）大使とかヴァージニア・バランス大佐、果てはＵＳＮＡの大統領とか要人クラスばかりになってしまう。
正直、今年の騒動を考えるならば誰かかしら挨拶に来てはいい筈だとは思っている。そんな中、来賓の一人であるエルンスト・ローゼンが壇上で挨拶をした際、こちら側に視線が向いたことに気付く。
厳密に言えば、エリカとレオの二人にだ。視線に気付いたレオは首を傾げていたが、エリカは僅かに表情を曇らせていた。このあたりは原作になかった展開だからこそ、悠元は若干申し訳なさそうな表情を見せていた。
そして、こちらの予想通りと言うべきか……九島烈は来賓の挨拶に欠席したのであった。
◇　◇　◇
懇親会が終わった後、動きやすい服装――とは言っても、トレーニングウェアにＣＡＤは携帯した上での恰好に着替えた。図らずも同室となった深雪には将輝と情報交換をしてくると言い含め、部屋を後にした。
待ち合わせの場所としたのは、ホテルの正面玄関前辺り。将輝は三高の制服のままで悠元を待っていた。
「神楽坂。その恰好は走りに行くのか？」
「ま、そんなところかな。場所を変えようか」
「ああ」
流石に色々と目立ってしまうのは承知していたため、人影の少ないベンチに移動したところで目的である調査結果について聞き出すこととした。
「それで将輝、ジョージ経由で頼んでいた件についてはどうだった？」
「……ここまできな臭いとは思わなかった。今回の競技変更には大亜連合強硬派が噛んでいるとのことだ」

楽観視したくなるのは分からなくもない。だが、明らかに軍事色の強い競技を持ち込んだ時点で対外強硬派が絡んでいるのは想像に難くない話だ。将輝は一条家の長男であっても次期当主という明確な立場にいるわけではないため、そういった裏事情には疎いのだろう。
「大亜連合強硬派か……確か、酒井大佐あたりが有名だったが」
「その酒井大佐が中心となって、俺たち魔法科高生が大学を経由せずに直接軍に志願することを望んでいるらしい」
「……いや、現実味がなさすぎるだろ」
この国の教育システム上、私立の中学や魔法教育の塾を除けば義務教育の範疇で魔法に関する教育は行われていない。ましてや、師族会議や百家をはじめとした魔法師の一族を除けば、魔法科高校の生徒は魔法教育に関して初等教育のレベルでしかないのだ。
それをいきなり軍に引き抜けというのは、明らかに魔法科高生のレベルを過信しすぎているとしか思えない。ただ徒に将来の有望な魔法師を使い潰すだけでしかないと思う。将来を見据えたやり方の一環だとしても、彼らは九校戦に込められた意味を理解していないに等しい。
九島烈は魔法師が単なる兵器となることは容認せずとも、魔法師が軍人になることは否定していない。故に即戦力を欲した酒井大佐との意見の衝突は起こらない。軍事色の強い競技を容認したのも、魔法科高校の生徒に闘争本能と破壊衝動への解放を刷り込もうとしているのだろう。
「しかし、良く調べられたな。将輝の父親絡みの伝手か？」
「あ、ああ……酒井大佐は親父の昔の知り合いなんだ」
沖縄防衛戦に関する報告書は開示されているものの、新ソ連の佐渡侵攻に関する報告書は一部（一条家が主体となって新ソ連の部隊を撃退したこと）を除けば極秘文書扱いになっている。燈也が未だにバレていないのはこの部分の秘匿が大きく影響しているからだ。
「け、けれど、一条家が関与してるわけじゃないからな！」
「落ち着けよ、将輝。俺がいつ一条家の関与を疑った？　調査を頼んだのだって、酒井大佐が当時佐渡方面の最高指揮官をしていたと他の

軍人魔法師から聞いたことがあったから、もしかしたらという可能性も込めて頼んだだけだ」
「あ……す、すまない」
　そもそも、新ソ連への逆侵攻に関して酒井大佐と将輝の父親である一条剛毅（いちじょうごうき）が激しく対立し、喧嘩別れになったという事実は報告書に記載されていた。なので、一条家が心変わりでもしない限りは強硬派に手を貸すなど考えられなかった。
　その対立の遠因に沖縄防衛戦で使われた〝2発の戦略級魔法〟――達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』と悠元の『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』が大きく影響しているのだろう。
「出発する前日に親父と話したが、『反乱などと言うバカげたことを考えているとは思えないが』とは零していたが、可能性があるというだけで確定ではない……調べられたのはこれぐらいだった」
「いや、十分すぎるよ。まあ、このこととピラーズ・ブレイクソロでの対決は別物だがな」
「……当たり前だ。今度こそ、お前を倒して司波さんを振り向かせて見せる」
　そう言って立ち去っていく将輝。言い方がまるで悪者からお姫様を助け出す勇者のような言い分にも聞こえてしまう。達也が魔王だとする（昨年の論文コンペ準備の際、ＲＰＧのキャラに例えた話が出たことから）なら、自分は……魔王を強化する黒幕ポジションになってしまうのだろうか、と思ったところでその思考を掻き消す様に頭を振った。
「勇者も魔王も、黒幕も神様も俺の柄じゃないわ……精々主人公の悪友ポジションが落としどころだろうに」
　そう零した悠元は、ベンチに掛けていた上着を羽織ると闇の中へと姿を消していく。
◇　◇　◇
　スティープルチェース・クロスカントリーの舞台となる演習林コースの警備はかなり厳重であった。各種センサーに加えてＣＡＤを装備した魔法師の警備員が不審者がいないかどうかを見張っている。

この厳しさは昨年の『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』による狼藉が大きく影響しているのだろうが、原作と違って『ジェネレーター』は暴れていないし、『電子金蚕（でんしきんさん）』による被害もゼロに抑えられた。強いて挙げるとするならば、新人戦モノリス・コードで大会委員による『破城鎚（はじょうつい）』を二発撃ち込まれたことが大きな原因だろう。

ただ、センサーや警備員は悠元の姿を視認できないし、感知も出来ない。念のために天神魔法『水遁流転（すいとんるてん）』を使用しているが、魔法すら感知しないことには流石の悠元も呆れていた。

（コースを見る限り、トラップは既に仕掛けられているようだが……パラサイドールの姿は無いか。流石にこの時点で配置する理由もないわけだし）

ある意味〝虎の子〟であるパラサイドールを極力感知されずに配置するとなれば、それこそスティープルチェース・クロスカントリーの前日に配置するのが一番理に適っている。千姫からは破壊や消滅をさせずに封印を優先してほしいという注文があり、下手に失格となるよりはマシと判断した。

すると、僅かな揺らぎを感じた方向に向かって歩くと、木の陰から一人の人物――――八雲が姿を見せた。周りに人影がいないとも限らないため、声は小さく抑えてではあるが。

「おや、さすがは悠元君だね。僕の腕も錆びついてきたかな？」

「今のはわざとでしょう？　……パラサイドールの陰はありませんね」

「まあ、この地形ならどこに配置しても大差ないだろうからね……どうやら、センサー外に人影が三人いるようだ」

八雲の言葉を聞いて悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』をセンサーの範囲外に向ける。すると、彼が言った通りに三人の人影が確認できた。しかも、その三人は悠元の知り合いであるという事実。

「この分だと、彼らも探りに来たと考えるのが妥当かな？」

「でしょうね」

八雲の提案染みた言葉に悠元も同意してセンサー外へ抜け、その三人の背後から近づいた。なお、正面から登場しなかったのは八雲の悪

戯心からくるものであった。八雲は姿を忍ばせたまま近寄ろうとしなかったので、悠元は諦めたように声を掛けた。
「達也、文弥に亜夜子ちゃん。これ以上の立ち入りは正直お勧めしないよ？」
「悠元さん……!?」
「悠元、お前も来ていたのか……というか、師匠みたいな登場をしないでくれ」
　悠元の登場に、文弥や亜夜子は無論の事、達也ですらも驚いていた。それはともかく、悠元は今大事なことを彼らに伝えるように呟いた。
「それは許してくれ。代わりと言っては何だが、あの中の様子を探ってきたから」
「何か分かったのか？」
「分かったことといえば、コースの中には通常の障碍物が配置されただけの状態だということと、パラサイドールをあの中のどこに配置しても条件は大差ないということぐらいだよ」
　悠元から齎された偵察報告に、文弥はセンサーすら騙し切った悠元の隠形に興味を持っており、亜夜子に関しては元とはいえ同じ十師族の人間に自分の得意分野で上回られたことに黙っていた。
　これを察したのか、悠元は亜夜子の頭をポンポンッと軽く触れる程度に叩いた。
「亜夜子ちゃんもそうしょげないの。俺の場合は上泉家の秘術も学んでいたからこそできた芸当だよ」
「あ……全く、敵いませんね。だからこそ深雪姉様も〝墜ちた〟のでしょうし」
「墜ちたって……ともかく、スティープルチェースまで事態が動くことはないだろう。それに、どう転んだとて俺たちが背負える責任の話じゃない」
　対処することになろうとも、その後の責任は大人達の暗闘によって齎される。それに、あの九島烈が関わっている以上、何が何でもパラサイドールの性能実験を成功させたいはずだ。そうなると、事前の排除は到底難しいだろう。

それに、悠元も今回に関しては九校戦のこともあって事前の排除を禁じられているため、対処できるのは競技中だけという縛りがある。その理由は〝現行犯〟で取り押さえたいという目論みがあるのだろう。

「……そうだな。それに、早く帰らないと深雪が心配するからな」

「そういうこと。あまりこっちに気を配り過ぎると、深雪が俺らを凍らせてでも止めに入るだろうな」

「冗談で済まなくなるから止めてくれ」

深雪の魔法の威力は達也だけでなく亜夜子や文弥も味わったことがあるようで、二人もブルッと若干身を震わせるような仕草を見せた。九校戦のこともあるため、悠元が先導する形でホテルへと戻った。

なお、八雲のことについては上手く誤魔化せたようで、達也からも追及されることは無かった。

◇　◇　◇

言ったことがある意味フラグ回収される……とは思っていても、現実にはそう簡単に行くはずもない。

何が起きたのかといえば、部屋に戻った悠元は眠っていると思しき深雪の姿を見て安心しきったのか、ひと汗を流そうとシャワーを浴びつつ考え事をしていた時だった。

(原作では達也の行動論理を鑑みて16体のパラサイドールを女子のスティープルチェースのみに投入していた。だが、自分がいる以上は少なくとも分散する可能性が高い)

いや、今までの『プラスワン』の前例からしてあれからパラサイドールが増えないという保証もない。もしかすれば、こちらが知らない『超能力』を有するパラサイドールが出てきたとしても不思議ではない。最悪、双方に16体ずつ――最低でも32体のパラサイドールがいても不思議ではないと結論付けた。

(文弥や亜夜子ちゃんも含めて、達也にスティープルチェースまで動くのは抑えるように言い含められた)

選手である文弥や亜夜子はともかくとして、作戦スタッフも兼務し

ている技術スタッフの達也に掛かる労力はかなり半端ないことになる。これは選手兼作戦・技術スタッフとなっている悠元以上の負担だという事実も認識しての忠告だった。
事実、昨年の新人戦メンバーを統括する立場だった悠元もメンバー間の雰囲気を何とか崩壊させないようにするので苦心した覚えがあり、それと同等以上の労力を背負っている達也が無理に九島家や国防軍の案件に関わる余裕など本来は無い筈なのだ。
だが、それを知ってか知らずか……パラサイドールの案件に関わらせようと目論む者たちのことを悠元は許す気にもならなかった。
（魔法師を単なる兵器にしたくはない……その気概だけは買ってやりたいが……ん？）
すると、ここで悠元は浴室の外――――脱衣所に気配を感じていた。このホテルは基本的にオートロックなので、この部屋に入れるのは悠元と深雪、それとマスターキーをもっているあずさだけしかいない。
だが、現状であずさがこの部屋を訪れる理由は無いに等しい。となると……悠元が気配を本格的に探る前に、脱衣所への扉が開き……髪を結ってバスタオルを巻いた姿の深雪が少し恥ずかしそうにしながら浴室に入ってきた。
これには、さすがの悠元も反射的にタオルを腰に巻いたので、下半身を見られるという事態は何とか避けられた。
「なにしてんのですか、深雪さんや」
「その……一緒に入りませんか？」
ホテルの個室とはいえ、浴槽はちゃんと備え付けられている。というか、ビジネスホテルでよくある様な浴室とトイレが一体になっているタイプではなく、ちゃんと別々になっている仕様である。
聞けば、舞い上がってそのまま眠ったまでは良かったのだが、興奮で逆に汗を掻いてしまったのでひと汗流そうとしたところに悠元がいたということらしい。ひとまず、お互い背中合わせで入浴することで納得させた。
「……ま、いいけどね。流石に競技もあるから下手なスキンシップは出来ないけど」

「触ってくれないのですか？」
「少しは我慢してください」
軽い話し合いの結果、寝るときに抱き着くぐらいは許容するということで決着した。原作だと兄妹ということで歯止めが掛かっていた分、その対象が自分に向いたことで箍が外れた形なのだろう。
翌朝、目が覚めると深雪の胸に顔を押し付けられるような形で抱き着かれていたのは……自分のせいではないと思う。多分。

誰しも最初から排除なんて望まない

現場を見に行った達也らにとっては結果的に無駄足となった夜。とあるドラマ映画の刑事の名台詞にある通り、事件は現場で起こっている。だが、事件は現場から遠い場所で準備されていることが多い。

国防陸軍の最高司令官である蘇我大将は、都内の会員制クラブに足を運んでいた。彼は一人の護衛と一人の秘書官、たった二人の護衛を連れてくるというお忍びぶりであるが、その理由はこれから会うことになる人物にあった。

個室に入った蘇我らを出迎えたのは、神楽坂家の筆頭執事である葉山忠成(はやまただなり)だ。

「お忙しい中、ようこそお越しくださいました、閣下」

「いえ、こちらこそお招きいただいたことに感謝いたします」

そして、その背後には神楽坂家現当主、神楽坂千姫が控えていた。彼女に対して蘇我は深々と頭を下げた。国防陸軍の総司令官である蘇我はその職務に就くにあたり、護人――――神楽坂家の詳細について聞き及んでいる。

国防軍関連は本来なら上泉家の領分だが、現当主である元継と先代当主である剛三は別件の為に手が回らない。なので、義兄である剛三の頼みで千姫が直接出向く形となった。

「先日は第１０１旅団関連で手を回していただき、ここに出向けなかった上泉家当主に代わりお礼を申し上げます」

「いえ……ただ、対大亜連合強硬派が九校戦の趣旨を捻じ曲げるような行為を許してしまい、力不足を感じております」

「閣下は陸軍を束ねる立場故、定期的なガス抜きが必要だということぐらい承知しております。これは我が義兄である剛三殿もご承知のことです」

九校戦は単に魔法科高校同士のレベルアップや競争本能を向上させるためだけではなく、非魔法師の魔法に対する偏見を少しでも無くすためにスポーツ要素を取り入れた形として実施されている。

昨年の横浜事変があったとはいえ、強硬派のやり方はあまりにも稚

拙であると蘇我は謝罪の言葉を口にした。だが、千姫はそれを一々咎めることはしないと敢えて口に出した。
「それで神楽坂殿。此度はどのようなご用件でしょうか？」
「実は、その強硬派を唆した人物がいるようですので、閣下のお耳に入れてほしいと思い、此度の席を設けさせていただきました」
千姫は悠元から、対大亜連合強硬派がどうしてこのタイミングで九校戦に口出しをしたのか、という疑問を聞かされていた。
横浜事変の後はＵＳＮＡ東海岸での人間主義者による反魔法主義の運動を受けて鎮静化していた部分に加え、大亜連合との休戦を巡っての暗闘もあったのだろうが、それならば態々九校戦を利用せずとも既存の魔法競技リーグにＵＳＮＡから倣う形で取り入れた方が早い筈なのだ。これに関しては千姫も同意見だった。
それに、いくら春の魔法師排斥運動が沈静化したとはいえ、非魔法師の魔法に対する偏見は根強いのも事実である。この情勢を国防軍の軍人である彼らが読めないはずなどないのだ。
とりわけ、スティープルチェース・クロスカントリーを高校生の競技で取り入れるという無茶をしている。対立しているとはいえ将来の国防を担うであろう貴重な人材を使い潰す様な競技の採用を酒井大佐が許容したことも疑問に残るのだ。
となれば、残る可能性は一つ――――国防軍に関与できる第三者が対大亜連合強硬派に九校戦の競技変更をさせるように唆したということ。この国と大亜連合が争って疲弊することを望む者たち。その可能性を千姫は蘇我に話し始めた。
「横浜の中華街（ちゅうかがい）、そこにいる周公瑾（チョウゴンジン）――――日本の呼び名では周公瑾（しゅうこうきん）と名乗る者が彼らを唆したようなのです」
「何と……その名は大亜連合からの亡命ブローカーとして度々耳にします。とはいっても、私を含めた上層部のごく一部に限られますが」
横浜事変では陳祥山（チェンシェンザン）や呂剛虎（ルウガンフウ）をはじめとした大亜連合特殊部隊の密入国を手引きし、将輝に襲撃部隊を何食わぬ顔で引き渡した人物。大亜連合の味方かと思えば、それをあっさりと覆す様な引き際は蘇我も耳にしており、彼が一体どちらの味方なのかすらも測りかねてい

た。
　千姫は笑みを零しつつも、懐からデータカードを取り出してテーブルの上を滑らせるように蘇我へ差し出した。
「その証拠といたしまして、こちらのデータを差し上げます。可能であればオフラインの端末で閲覧するようお願いいたします」
「成程、軍方面の傍受も長けている相手という訳ですか。情報提供とご忠告に感謝いたします」
　流石に直接エシェロンⅢやフリズスキャルヴ、それを利用している顧傑のことは口に出せなかったが、国防軍側にも傍受の危険性を今一度認識してもらう意味でオフラインでの閲覧を推奨した。
　蘇我としては、相手が世界群発戦争の英雄の一角であるだけでなく、今の国防軍の危うさを真正面から投げかけられたようなものだ。これには流石の蘇我でも反論できる材料はないに等しいだろう。
「神楽坂殿、態々ここまでしていただけるということは、私どもに何か見返りをお求めなのでしょうか？」
「今すぐに、とは申しませんが……大将閣下には、今上陛下の『おことば』に込められた意味を余すところなく国防軍全体に広めていただきたいのです。無論、私からも防衛大臣へ直接働き掛けを致します」
「ふむ……その真意はお聞かせいただけるのでしょうか？」
　この国家を守る立場である以上は文民統制（シビリアンコントロール）が前提となるが、国家の象徴たる天皇陛下の「おことば」自体無視できるものではない。
　春に発表された内容――――その真意も蘇我は薄々と勘付いていた。何せ、身内には十文字家の養女となった少女の存在もあり、蘇我も彼女を実の娘のように可愛がっている。魔法師に関わることとなれば、軍人としても尚更である。
「この国は周辺国からすれば小国です。いくら魔法の力があるとはいえ、国民全体から見れば少数派の魔法師社会を非魔法師が『平和の敵』と見做すことも考えられるでしょう。そうなれば、我々は周りから見れば手頃な〝餌〟になりかねません」
「大亜連合、新ソ連……ＵＳＮＡ（ステイツ）も含むと？」
「それと、国際魔法協会の本部があるイギリスもです。いくら連邦制

が崩壊したとはいえ、オーストラリアの魔法師はイギリスの色を強く受けておりますので」
　現代魔法を軍事力にしようとした発端は旧アメリカ合衆国――――そこから全世界に魔法の技術が伝わり、全面的な熱核兵器戦争は回避できた。だが、その代償として非魔法師からすれば〝見えざる力〟である魔法の力を悪用して犯罪に走る者も出始め、それが結果的に魔法への恐怖として根付いてしまった。
　非魔法師による人の業が、結果的に非魔法師を苦しめる結果となった。国を守る力として生み出した結果、その力を手にしたことで恐れが生じた。これは魔法のみならず、古今東西におけるあらゆる技術革新で起こり得ていたことの繰り返しである。
　千姫はその現実を知っているからこそ、神坂グループに関しては非魔法師を積極的に採用し、魔法技術関連では実戦レベルに満たない魔法師を積極的に囲い込んでいる。
　現代魔法の発展によって失われた古の魔法技術を復活させ続けている次期当主の存在は、現時点で実戦レベルに満たない魔法師に対する希望にもなりうるであろう。その一端を国防軍も享受しているわけだが、戦略級魔法に関してのトリガーは決して渡さないと決めている。
「……まるで、第二次大戦時の我が国に対する警戒心の様相ですな。分かりました。陸軍のみならず、空軍や海軍にも通ずる話である様ですので、直ちに防衛大臣へ具申いたします」
「助かります。そのついでではありますが、国防軍に対するイメージ改善の一手を打ちたく、蘇我大将にお願いしたいことがございます」
　千姫は、徒に戦火を齎す者の存在を決して許さない。次期当主である悠元もその点に関しては非常に似通っており、九校戦での試合を見て彼を神楽坂家に引き込もうと決心した。別にこの国が世界のリーダーへのし上がりたいわけではなく、友好的な関係を作れる相手がいるのならば、それに越したことはない。
　千姫と蘇我の会談は、結果的に４時間にも及ぶ熱の入ったものとなった。

◇　◇　◇

熱の入ったもの、という点ではこちらも負けてはいないだろう。

全国魔法科高校親善魔法競技大会――――九校戦の開幕が翌日に迫っている中、ホテルの中庭にてレオがトレーニングに励んでいた。余計な邪魔が入らない様に人除けの結界を悠元が展開している訳だが、先程までランニングでコンディションを整えていた幹比古が偶然その場所を見つけて遭遇した。

使っている結界術式自体が精霊魔法の人除けで使うものと似通っていたことに加え、幹比古自身がレベルアップしていた影響もあってすぐに分かった次第だ。

「悠元、って……お邪魔したかな？」

「幹比古か。人除けの結界を張ってたんだが……俺も腕が鈍ったかな？」

「いや、僕は偶然感覚で理解しただけだよ。それで……あれは、座標感覚を掴む訓練かい？」

悠元と幹比古の眼前では、レオから数メートル離れた場所――――等間隔で地面に突き立てられた約1メートル程度の細長い12本の鉄製の棒――――に向かって得意魔法である『装甲（パンツァー）』を連続行使している。

距離の感覚を掴むのは、この部分は完全に距離感を把握するということ。基本的に近接戦闘や自身を起点とした魔法が得意なレオにとって苦手分野とも言える。

「鉄棒にCADとちょっとした代物を取り付けてな。その実験も兼ねてるのさ」

「どんなものなんだい？」

「想子（サイオン）電気変換器」

「……悠元は世界を引っ繰り返すつもりかい？」

サイオンの発生過程やその回復に関する人体のシステムはいくら達也の『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』でも見通せていない。だが、睡眠によって魔法師の使用したサイオンが回復するメカニズムだとするならば筋は通る。

その睡眠に生じる脳の波長を疑似的に発生させて周囲からサイオンを取り込む装置と単一の魔法式をインストールしたＣＡＤを鉄棒に取り付け、疑似的に氷柱型の想子構造体を再現している。
「出力の関係上、単一の魔法にしか使えない代物だよ。防犯用に想子障壁（ウォール）を入れるのがいいところだろうな。言っておくが、この技術を軍事面に利用させる気はない」
「……下手をすれば、非魔法師でも魔法が使えるってことだから？」
「それもある」
第三研における研究テーマの『多種類多重魔法制御』には、一人の魔法師が複数の魔法を行使するプロセスの段階で大きく分けて二種類の方法が取られた。
一つは三矢家が得意とする方法――『ナインローダー』や『ライトニング・オーダー』などにおいて、一人の魔法師が自身の魔法演算領域を分割・並列処理することで複数の魔法を行使する方法。
もう一つは、本人以外の複数の魔法師が魔法を行使するように〝同調〟する方法。この方法の場合、自身の魔法演算領域に掛ける負担は少なく済むという利点が生じるが、れっきとした精神干渉系魔法――有機物干渉魔法の類に属するため、研究が途中で打ち切られた。
ここで第三研に関する話を持ち出したのは至って簡単な理由で、想子発生器の変換プロセスに用いているのは中止された同調の研究結果から生み出したものであるからだ。悠元自身、第三研に通っている際にその研究の存在を知り、内密にそのデータを閲覧した。
そこには、現代魔法で聞いたことのない器官が別の名称を用いて記載されていた。その名称――「連結する核（リンカーコア）」という名は前世で知っていたアニメの魔法用語の一つだが、まさかこの世界で聞くことになろうとは思わなかった。
「これの開発経緯自体、迂闊に明るみに出せないからな。母上には予め伝えたが、まさか完成するとは思えなかった代物だし」
「それを完成させただけでも驚きしかないんだけど……」
そもそもの話、現代魔法の発動プロセスにおいて起動式を読み込んだ際、精神の意識領域から無意識領域に存在する魔法演算領域への経

路が原作だと記述が存在しないのだ。
魔法演算領域への送信処理を起動式の側でフォローしていたとしても、魔法を発動させるためのロスはどうしても存在する。間違って大脳の意識領域に流れ込めば、脳が処理能力に耐えきれずに自壊してしまう可能性が高い。だが、現代魔法や古式魔法の使い手にはそういった様相が見られない。
『ゲート』――――意識領域の最下層と無意識領域の最上層の狭間に存在するもので、構築された魔法式はここから情報次元（イデア）に投射される――の存在は無論知っているが、仮にこの『ゲート』が意識と無意識を繋ぐ役割を果たしていたとして、今度は別の矛盾が生じる形となる。
それは、仮に『ゲート』を通過した直後の魔法式を破壊する精神干渉系魔法『ゲートキーパー』を使用した場合、起動式を読み込んで魔法を構築することすらできなくなる可能性がある、という問題だ。
その魔法を原作で食らったジャスミン・ジャクソンは魔法の構築を認識していたが、魔法の発動に失敗した。そうなると、起動式を読み込んだ想子信号は『ゲート』と異なる経路で魔法演算領域へ送り込まれている、ということになる。
魔法式と起動式を異なるものだと位置付けることは出来るが、その二つは構築前後という違いがあっても想子で構成された情報体であることに変わりない。特定の魔法式を無効化する『術式解散（グラム・ディスパージョン）』はともかくとして、『術式解体（グラム・デモリッション）』で出来たことが全ての魔法式を破壊する『ゲートキーパー』に出来ないという証明が難しくなる。

ならば、魔法演算領域とは別の魔法師にしか存在しない〝何か〟が起動式の想子信号を精神の意識領域から無意識領域に送り込んでいるのだとすれば辻褄は合う。転生してから保有想子量や魔法力を向上させるために色々と実験を繰り返し、『天神の眼（オシリス・サイト）』でサイオンの流れを把握した際に見つけた霊子（プシオン）のみによる情報構成器官。
周囲の想子を取り込んで自身の想子へ変換する機能と魔法を展開する際に想子を放出する。更には人体を保護するエイドス・スキンを

常時発動するための役割も備えた器官――それがこの世界の『リンカーコア』と呼ばれる代物。これを核として各々の武器を事象・具現化する技術が『心刃(このは)』、そして『天刃霊装(てんじんれいそう)』である。
「元々、あの装置の用途は魔法の可視化を目的としたものだからな。とは言っても、より立体的なホログラムの投射装置とか、かなり限定的な用途に絞り込むつもりだ」
「つまるところ、安全を目的とした魔法装置ってことかな？」
「そういうこと」
そして、これは自分以外誰も知らない秘密なのだが……現代魔法や古式魔法には意図的に『ゲート』を経由してイデアに魔法を投射する記述が使われている。この方法だと『ゲート』が封じられた際に魔法が使えなくなるだけでなく、物理法則改変に伴う消費想子量が多くなる事実も発覚。
常にイデアに対して露出させなければならない『ゲート』――言うなれば、自らの精神を常時オープンの状態にしているに等しい行為。そうならない様に人体をエイドス・スキンで保護する機構も元来備わっているが、精神のセキュリティが甘い状態で魔法を運用するなど「愚の骨頂」と言わずして何と呼べばいいだろう。
自分が使用している魔法、改造・調整した魔法については『リンカーコア』を経由してイデアへ投射する記述を巧妙に隠蔽した上で書き換えている。自分が手を加えた魔法の大半がかなりの威力を誇っているのと反比例して想子消費が格段に減っているのは、『ゲート』を一切経由しない現代魔法であるからだ。
「空港とかの発着陸で指向性を持たせたサイオンによるレーザー誘導が可能になれば、天候状況に左右されない自動着陸システムも夢じゃなくなる。尤も、何が起きるか分からない以上は人の手を借りることは必要だろうがな」
魔法はあくまでも〝技術〟であり、〝技巧〟でもある。それを軍事転用できない様にプロテクトは予め組み込み、完全にブラックボックス化させる。それでも転用を目論む輩が出てきた場合は、自らの手で消し去った上で社会的な完全抹殺を図る。

魔法を魔法師のみならず非魔法師もその恩恵を受けることのできるものにしていくことで、魔法の有無に関わらず人類の共存を図る――

――それが、俺の目指している未来の一つなのだから。

油断はせずに行こう

四葉本家。当主の私室にて考え事をしているのは四葉家現当主である四葉真夜（よつばまや）。その様子を筆頭執事の葉山忠教（はやまただのり）がハーブティーを注いで真夜の目の前に置くと、静寂を破るように声を掛けた。

「よろしいのですか？」

「千姫さんからの要請（オーダー）のことは、『あの方々』からの要望と一致します。ですので、何ら問題は起こらないでしょう」

真夜が口にしたその対象――――神楽坂家を含めた四葉のスポンサーである方々の意向は奇しくも一致したからこそ、その決定に真夜が口を挟むことは無かった。ただ、この問題に達也を動かそうとすることに関してはあまり気乗りしなかった。

葉山もそれを薄々と感じてはいるものの、彼の指摘を待つことなく真夜がハーブティーを一口付けてから話し始める。

「それにしても、因縁は付き纏うものとはよくいったものですが」

「奥様……」

「大丈夫よ、葉山さん。達也だけでなく悠元君も無関係とは言えない以上、間違いなく動くことになります……私だけ座して待つことは許されないでしょう」

それは、周公瑾の裏にいるであろう人物――――ジード・ヘイグ。またの名を顧傑。３２年前に起きた真夜の誘拐事件、四葉と剛三の復讐劇を逆恨みする人物。正直なところ、真夜からすれば理解不能という感想が根強かった。

「そもそも、復讐しようとした相手を滅ぼしてくれたことに感謝する謂れはあっても、恨まれるのは到底理解できないわね。葉山さんはどう思うかしら？」

「そうですな……確かに復讐に費やす労力が必要で無くなったと思えばプラスになるでしょうが、恨みという感情のやり場を向ける相手がいなくなったがために四葉家や上泉家を恨んでいるものと思われます」

「成程ね。そう言われると納得できる気もします」

真夜もかつては世界に対して復讐を考えていたことがあった。その考えを止めるきっかけとなったのは、間違いなく自分の身内とその親友の存在が大きい。この部分に関しては、自分が受けた被害を〝経験〟へ変換されてしまったことによる達観もあるのだろう。

なので、あっさりと復讐を思い止まった真夜からすれば、未だに復讐心を抱く顧傑の心情が理解できないのも無理はない、と葉山はその辺の心情も含めつつ諭したのだった。

「ただ、顧傑も哀れですね。全盛期の力を取り戻した剛三殿に、彼以上の力を有する悠元君。そして達也と深雪さんを相手にしなければなりませんから」

「加えるならば、上泉家の現当主である元継殿にその奥方、達也殿のご友人がたに三矢殿の三姉妹も世界屈指の魔法師。彼は自爆特攻でもする気なのやもしれません」

「本当にそんなことになったら、最早憐れむ気すら起きないわね」

真夜の知る達也の周囲の人間でも錚々たる陣容なのだ。これに加えて十文字家の長男や一条家の長男まで加われば、顧傑が逃げ切れる保障はほぼ皆無といっても過言ではないだろう。

「僭越ながら話を九校戦に戻しますが、佐伯閣下は御助力していただけるでしょうか？」

「大丈夫よ。止めることが出来ないのだから、結局は手を貸すしかない。悠元君ぐらいにしか止められないあの子をおろそかに扱う度胸が国防軍にあるとは到底思えないわ」

そんな度胸は今の私にだってないのだから……とは口に出さなかったが、その台詞を含んだような真夜の言葉が葉山の耳に確かに聞こえたような気がした。

◇　◇　◇

前日も特に変わったことが起きることなどなく、２０９６年度の九校戦が開幕した。今年は実施する競技種目だけでなく、各競技の運営要領も変更されている。

まず、アイス・ピラーズ・ブレイクとシールド・ダウンは９名（ペアは９組）を３つのグループリーグに分けて総当たり形式の予選を行

い、各グループ1位が総当たり形式の決勝リーグで順位を決定するという方式となっている。アイス・ピラーズ・ブレイクの場合は出場人数が各校1名もしくは一組という制限が加わったため、予選の形式が変わったぐらいの感覚だろう。

ミラージ・バットは各校からの出場者が27名のため、組み分けが4名の三組と5名の三組に分けられる。完全抽選方式の為、同じ学校の選手が同じ組に入ることも想定される。あと、昨年では話題となった飛行魔法についてだが、回数制限こそないものの1回あたりの連続飛行時間が1分に制限された。つまり、1分以内に着地しなければならないという訳だ。

モノリス・コードは昨年までの変則予選リーグ・決勝トーナメント方式から丸二日を掛けた総当たり形式のリーグ戦に変更された。なので、本戦モノリス・コードに出場する選手がスティープルチェース・クロスカントリーに出場する場合、かなりの負担を強いられる可能性が一番高い。

このため、悠元は事前に服部へ本戦モノリス・コードに出場する服部と3年の三七上(みなかみ)ケリー、そして幹比古の三人についてはスティープルチェース・クロスカントリーへの出場をしない方針で打診した。

スティープルチェース・クロスカントリーの主力である悠元と燈也、修司は本戦前半組なため、疲労回復の時間が取れるということ。そして、本戦の得点を稼ぎ切ってスティープルチェース・クロスカントリーの有無に関わらず総合優勝を狙いに行くという両方の魂胆を聞いて、服部も渋々ながら了承した。

1日目はアイス・ピラーズ・ブレイク・ペアの男女予選とロアー・アンド・ガンナー・ペアが行われる。ロアー・アンド・ガンナーは各校一名（一組）が的の命中率によって調整したタイムによって競われる。

「出場する種目の時間が被っていたら、五十里先輩にご迷惑をお掛けするところでした」

「どうやらその心配は無くなったみたいだね」

達也は、アイス・ピラーズ・ブレイク・ペアで雫のＣＡＤを、ロアー・

アンド・ガンナー・ペアで英美のＣＡＤを担当している。ペアならば四人纏めて調整を担当した方が手っ取り早いのだが、この辺は個々の選手による要望が大きい。
　念のために悠元がサブエンジニアとして補佐に入っているが、作戦スタッフリーダー（昨年の新人戦統括役を担ったことから、作戦スタッフの満場一致で決まった）として本部テントからあまり動くことが出来ない。
　それでも、男子アイス・ピラーズ・ブレイク・ペアとして出場する修司とレオのＣＡＤ調整を１時間で終わらせていた。元々練習から使っていた魔法から変更する必要もないため、大会用のＣＡＤに最終調整を施す程度で済んでいる。
「五十里先輩、千代田先輩から何か要望はありましたか？」
「いや、寧ろ『ありがとう』って感謝の言葉を伝えるように言われたよ。聞けば、花音に術式提供もしてくれたようだけど」
「千代田先輩なら使えると判断してのものですから」
　予定されているピラーズ・ブレイク・ペアの予選リーグならば三高と当たらないため、防御面を担当するレオと雫が攻撃に回る必要などない。圧勝で勝ち上れるだろう。
　ただ、決勝リーグでは『カーディナル・ジョージ』が策を弄するだろうが、修司の魔法は相手が防御術式や情報強化を使えば使うほど威力が増す代物で、加えてレオの新魔法もある。雫の場合は完成した『フォノン・ティアーズ』を隠し玉として忍ばせる予定の為、特に心配はしていない。
　そもそも、ピラーズ・ブレイクとロアガン（選手たちはロアー・アンド・ガンナーを短縮してそう呼んでいる）に関して言えば、技術スタッフが本番中に出来ることは少ない。ペアなので技術スタッフが一人でもいればいい訳だが、達也としては昨年のことを考慮した場合、万が一のことは起きてほしくないという忸怩たる思いがあるのだろう。
「では、ロアガンのコースに行ってきます」
「ああ、気を付けてな」

「頑張ってね。司波君なら問題ないと思うけれどね……それで悠元君、リーダーとして作戦はどうするのかな？」
本部テントを出て行く達也を笑顔で見送った二人。すると、五十里が悠元のほうを見やりつつ話しかけてきた。
「まあ、事前の打ち合わせ通りで一先ず様子見ですね。今日のペアの結果を見た上で微調整は必要かもしれませんが、明日のピラーズ・ブレイクとロアガンのソロに関してはほぼ作戦通りでいいでしょう……本来は3年が音頭を取るべきだと思うのですが」
来年のことを見据えた動きと考えれば辻褄は合うだろうが……流石に技術スタッフを兼務している五十里に押し付けられる仕事ではないし、部活連会頭である服部も昨年の実績を鑑みれば精神的に強い悠元が担うべきだと推薦したため、已む無く引き受けた節がある。
それは置いといて、明日は自分も選手として出場することになるため、作戦自体に変更点は無い。水上競技を得意とする七高がロアガンで走行スピードを重視するのも想定済み。ならば、走行タイムと命中率を完全に両立すれば総合優勝への道は一気に開けてくる。
「悠元君や達也君のようなメンタルの持ち主は高校生のレベルだと殆どいないからね。服部君もその辺を加味して推薦したんだと思うよ」
「分かってますよ……その辺は流石に自覚ぐらいしてますし」
流石に『ミラーフォース』は使ったとしても決勝リーグぐらいで、『天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）』は将輝の対戦で使用すると決めている。そうなると……予選リーグでは趣向を凝らした魔法をいくつか使うつもりであり、『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』も予選から使用していく。
流石に昨年将輝との対戦で使った『天照絢爛（てんしょうけんらん）』は無論のこと、『月影観鸞（げつえいかんらん）』は条件を課したとしても使用できないだろうことは理解している。
そうやって五十里と話していると、女子ロアー・アンド・ガンナー・ペアの第一走者である英美・国東ペアがスタートランプと共に勢いよく走りだした。
ボート部である国東に対し、無動力ボートの魔法操舵技術を卒業生である美嘉が直々に教えていた。加えて、同じ卒業生である佳奈と真

由美が英美に射撃技術を徹底的に教え込んでいた。
推定時速１２０キロを超えるボートは、ほぼ速度を落とすことなく綺麗なコース取りを行い、英美は達也から提供された『散弾型インビジブル・ブリット』で出現した的を的確に破壊していく。走行タイム・的の命中率共に1位をマークし、女子ロアー・アンド・ガンナー・ペアで堂々の1位を記録した。
◇　◇　◇
森崎・鷹輔の男子ロアー・アンド・ガンナー・ペアは2位、アイス・ピラーズ・ブレイク・ペアは男子の修司・レオのペアと、女子の花音・雫のペアが1位で予選リーグを通過した。ほぼ上々の滑り出しといっても過言ではないだろう。一日目の反省会としては、特に言うことなどない中身だろう。
「明日はピラーズ・ブレイクとロアガンのソロか……神楽坂、大丈夫か？」
「ええ、選手たちも特に問題はないでしょう。無論、自分もですが」
明日は出場選手全員が2年生メンバー。しかも、全員が十師族関係者（深雪は未だに秘匿されているが）という陣容。過信はしていないが、下手なことをしない限りは問題ないと踏んでいる。服部も練習を見に行っている限りでは大丈夫だと分かってはいるが、それでも不安はどうしても付き纏ってしまう。
現在の得点は一高と七高が１００点で同点一位、続いて三高が６０点という結果。水上競技なので海の七高の異名は伊達ではないという証明だろう。尤も、今回の選出メンバーだけで言えば原作のような序盤の苦戦など起こり得ないわけだが。
「技術スタッフ全体のレベルアップもしているので、十二分にいい結果は残せるとみています……楽観視や世辞抜きでの言葉ですが」
「昨年もそうだけれど、悠元君って結構容赦ないよね」
「そうですか？　他校も相応の努力をしている以上、気が抜けないのは当たり前ですよ」
それは確かに、と服部も内心で納得していた。昨年は摩利の負傷で危うく3連覇を逃しかけたという前例がある以上、アクシデントが起

きない保証など無い。その為に気が抜けないのは事実だろう。
「――――とまあ、そんな感じで今日の反省会は終わったというわけだ」
「流石に初日だからね」
悠元の部屋に深雪が泊まっていることは公然の秘密。なので、悠元の部屋は無論の事、達也の部屋も溜まり場にするのは憚られる形となった。だからといって、ロビーやカフェで長時間屯っているのは周囲から冷ややかな目で見られかねない。
なので、達也らが溜まり場に選んだのはＣＡＤ調整用の作業車の脇であった。
「しかし、九校戦なのにキャンプみたいな感じがするのは否めないな」
「他校の生徒からも注目を集めていたからね」
呟くように述べた修司の言葉に対し、由夢は率直な感想を述べていた。何せ、使っている椅子とテーブルはキャンプ用のものを使っており、頭上にはキャンピングカーのルーフから延ばしたオーニングテントが掛かっている。
実を言うと、一高の技術スタッフが使っている作業車はキャブコンバージョンと呼ばれるキャンピングカーを流用したタイプだからだ。昨年の単なる小型ワゴンタイプと比べれば充実を飛び越えて贅沢ともいえるアップグレードぶりであり、他校の生徒は一高の作業車を見て目を丸くしていたほどだ。
この変容にはいくつかの要素が絡んでいる。
まず、昨年の作業スタッフの居住性改善を要求したのは他でもない深雪であった。加えて、昨年サブエンジニアとして参加していた悠元も各自でＣＡＤ調整が出来る選手の環境を整えたいという思惑があった。
更に、春休みの一件で桁外れの報酬を受け取る羽目になった達也が深雪の暴挙を取り成すために雫へ相談し、北山家も絡んで一高へ〝寄贈〟という形でキャンピングカーをベースとした作業車を購入することとなった。
最初は深雪の敬愛する兄が狭苦しい環境で作業することが許せなかった訳だが、そこに加えて悠元と達也の事情も相まってそんな暴挙

があっさりと実現してしまったという訳だ。
「コーヒーをどうぞ」
「ああ、ありがとう」
この作業車に関する給仕は全てピクシーが取り仕切っている。元々オートメーションは３Ｈの役目でもあるし、そこに加えてほのかの想念を写し取ったパラサイトが憑りついている結果、本職のメイドと遜色ない給仕ぶりを発揮していた。なお、メイドの在り方をセリアがこっそり教え込んでいたというのもあるわけだが。
これには深雪と水波がやや不満げではあった。自分の領分を取られた気分なのだろうが、あくまでも九校戦中は仕方がないだろう……と思いつつ、ピクシーが淹れてくれたコーヒーを一口啜る。
「あっ、どうも」
そして、ピクシーからコーヒーを受け取ったのはケントである。彼は自ら達也の助手に立候補して、その立場を実力で勝ち取っていた。なお、作業スタッフである燈也と佐那、それと美月に加えて幹比古はこの場にいなかった。その代わり、セリアと修司、由夢がこの場にいるわけだが。
「エリカっちは何か用事があるとか言ってたね」
そう零したのは由夢だった。今回はエリカと由夢が同室なので、由夢がここに来ようとした際に誘ったところ、エリカは用事があると言って断ったのだ。その表情から見て面倒事だと由夢は察したが、それ以上のことは聞かないように努めた。
ここにいるのは基本的に達也と深雪が直接、間接的に声を掛けたメンバーだけ――達也、深雪、悠元、ほのか、雫、修司、由夢、セリア、水波、ケントの１０人。そして、人数には数えられないがピクシーが給仕をしている。
「レオは来るといっていたが……」
そう述べたのはレオと同室の修司であった。なお、由夢も深雪のことを聞いてレオに懇願しようとしたところ、修司が拳骨を食らわせて断ったことはここだけの話である。
「あの、西城先輩ならここに来る途中でお見掛けしましたよ。確か、

ローゼン日本支社長のエルンスト・ローゼンでした」
　ここで情報提供してきたのは達也の正面に座っているケントであった。彼は夕方まで作業をしており、ティータイムの前に一度自室でシャワーを浴びてから戻る途中に遭遇した、と述べた。
「西城先輩、迷惑そうな表情を浮かべていたような気がしました」
「俺が何だって？」
　噂をすれば……というタイミングで現れたレオ。別にケントが陰口を叩くために声を発したわけではないわけだが、この場合は間が悪かっただろう。なので、修司が助け舟を出した。
「おう、レオ。お前が遅かったからな。何でもエルンスト・ローゼンに声を掛けられていたらしいと聞いたが」
「あ、ああ……まあな」
　まるで、そのことについて触れてほしくなさそうな雰囲気を見せたレオ。いつもならばそこまで深刻そうな印象を見せない彼がエルンスト・ローゼンと出会ったことで何かしらあった、と勘の鋭い連中は即座に見抜いていた。
　すると、セリアが悠元に近付いて小声で尋ねた。
（お兄ちゃん、今日男子のピラーズ・ブレイクを見てたんだけれど、偶然エルンスト・ローゼンがどこかに電話してるのを見たんだよ。唇の動きからして、レオを〝引き込む〟とか、〝最悪は誘拐〟とか物騒なことを言ってたと思う）
　男子ピラーズ・ブレイク・ペアでは、レオに渡した領域型反射防御魔法『鏡面装甲（シュピーゲル・パンツァー）』で相手の攻撃を全て防ぎ切り、修司の天神魔法で相手の情報強化を食らう形で氷柱を全て破壊した。その際、エルンスト・ローゼンが観戦しており、セリアが読唇術で読み取った範囲ではそのように見えたとのことだ。
　達也も物々しい雰囲気を払拭するため、レオに席を勧めた。悠元もこの場ではレオへの追及をしないと決め、お茶会を楽しむこととしたのだった。

カートレースにＦ１レベルを持ち込む暴挙

お茶会もお開きになり、悠元は周囲に人がいないことを確認した上で、通信機で連絡を取る。数回のコール音の後、連絡が繋がったのを確認した悠元は声を発した。

「――夜分遅くに失礼します、小野先生」

『神楽坂君⁉　……また面倒事なの？』

「それを小野先生が仰いますか？　公安の絡みでエルンスト・ローゼンをマークしている貴女が」

『⁉　……何で知っているの、と聞いても教えてはくれないのでしょうね』

この辺は原作知識にも係ってくる話だが、公安がエルンスト・ローゼンやレオの身辺調査をしていることは把握しているし、バスティアン・ローゼンの遺産問題もある程度は把握している。ただ一点……悠元がバスティアン・ローゼンの遺産相続対象になっている点だけは公安でも把握しきれていないことを悠元は知っている。

「『神将会』絡み、そして爺さん絡みだと言っておきます。……どうやら、相手はレオを誘拐してでも事を進める気のようですね」

『その通りよ。新型の調整体が１６体と製品化すらされていない最新の魔法装備まで持ち出してくるみたい』

「１６体……」

確か、記憶だとファールブルグ姉妹の２体だけだったはずだが、遥から聞いた数はその８倍。加えてローゼン・マギクラフトでは製品化すらされていない最新の魔法装備付き。明らかにレオ一人で相手に出来るのか不安に思えてくる。

この場合、レオが……というよりも相手の話になる。何せ、パラサイト事件ではカーボンコートを着込んだパラサイト（相手をしたのがパラサイトに憑りつかれたミア）相手に善戦し、魔法力も一科生のレベルにまで上がっている。

間違いなく全盛期のゲオルグすら超えている、という剛三の評価をそのまま鵜呑みにするならば、レオが不覚を取る確率は低いだろう。

だが、油断は禁物だ。加えて、ここは国防軍の敷地内である以上、公安の人間である遥が表に出るのは拙い。
「……小野先生、貴女も含めて公安は一切手を出さないでください」
『まさか、神楽坂君が動くと言うの？』
「爺さんがローゼンの一件に関わっている以上……いえ、バスティアン・ローゼンの遺産関連で俺も関係している以上、関与しない理由はないですから」
『え、え？』
遥は困惑を隠せないが、現時点で言える事実はこれぐらいだろう。悠元はいくつかのことを遥かに言い含めてから通信を切った。そして、その場で一つ息を吐いた。
「パラサイドールが最低１６体にドイツから新型調整体が１６体……魔法装備を全部分捕ってでもしないと割に合わんわ」
相手から何かしら言われるかもしれないが、レオは既にこの国の魔法師なのだ。それを向こうの勝手な都合で連れ去ろうというのならば、それに見合ったペナルティを支払ってもらうだけの話だ。あまり遅いと深雪が心配して連絡してきそうなため、悠元は足早に自分の部屋へと戻ったのだった。

◇　◇　◇

８月６日、大会２日目の未明。
この時期の夜明けは早いが、時間は真っ暗な空に青みが混ざり始めた頃。深雪は脇で愛しい恋人である悠元の寝顔を見つめていた。
自分の兄もそうだが、彼も眠りに関してはかなり深い。ただ、起きると決めた時間には必ず目を覚まして行動を開始する。殺意のみならず、敵意や害意といった類を感じた際には即座に起きる。例え悪意が無くても、一定以上の距離に近付けば目を覚ます。
そうしない時は、彼がそう決めて眠りに就いていない時ぐらいでしかなく、目を覚ます距離はその時々でまちまちだ。尤も、最近は一緒に眠っている影響からか、深雪が相手ならば至近距離であっても眠っていることが多い。
（……昨年は、私が押し掛けて一緒に眠っていましたっけ）

深雪は知りたかった。
昨年の場合は、まだ深雪が恋愛感情を自覚する前後辺りであり、婚約者となってからは一緒にいる時間を大切にしようと心掛けてきた。
だが、大体の場合は自分から押し掛けることが大半で、そのことを悠元は一切断ったりしない。流石に公的な場での振る舞いに関して忠告されたりはしたが、それは深雪が淑女としての振る舞いを忘れてほしくないという気遣いだと理解はしている。
できれば甘えてほしいと思う反面、今まで甘えさせるということを知らなかった深雪からすれば、それは未知の領域とも言えた。
(私は、本当に悠元さんにどこまで許されているのだろう……)
不意に深雪は寒気を覚えた。真夏とはいえ、富士演習場の地形的に夜間は冷える気候で、着ているのは真夏用の寝間着。体が冷えてもおかしくはない。
だが、ここで深雪の思考はおかしい方向に傾き始めた。深雪は徐に悠元の額に手を当てたのだ。一昨晩にあのような抱き着きをしたせいで起きた時の深雪は顔を真っ赤にして俯くほどだった。そして、昨晩から今朝にかけては別のベッドで眠っていたのだが、悠元が気になって何度も起きてしまい、寝不足気味の深雪の思考が理性を融かしていく。
(悠元さんは……冷たい)
別に悠元の体調が悪い訳ではなく、無駄な代謝を抑えるために基礎体温をコントロールしているだけなのだが、理性の箍が外れかけている深雪からすれば「温めないと」という思考が最優先となっていた。
深雪は布団をめくり、その中へと潜り込む。そして、肌を温めようと布団の中で寝間着を脱ぐと、そのまま悠元を抱きしめたのだった。彼の身体から感じる温もりに心地よさを感じて、深雪は自分でも気が付かない内に夢の世界へと旅立った。
規則正しい深雪の寝息が聞こえ始めたところで、悠元は目を覚ました。
実を言うと、深雪が覗き込んでいるときから意識はあり、目を閉じていても『天神の眼(オシリス・サイト)』が無意識的に深雪の存在を認識しており、磨か

れた気配察知能力でも深雪を察知していた。
　正直なところ、ここが九校戦の宿泊ホテルでなかったら、そのまま起きて深雪に欲情していたかもしれない。それでも何とか踏みとどまれたのは、今日が自分と深雪の出場する種目であることに加え、婚約の事実は四葉家の次期当主が決まるまで公表できないという問題がある。
　それに、深雪は恋人である前に大切な友人の一人でもあるため、下手に無茶はさせられない。仮に彼女自身が望んだとしても、自分の中でそれを許せなくなる。
（……朝までまだ時間はあるから、ゆっくりおやすみ）
　幸いにしてひと眠りするぐらいの時間はあるので、競技に支障が出ることは無いだろう。悠元は深雪の手を避けると、彼女の頭を撫でてからゆっくりと立ち上がり、早朝の空気を吸いに部屋を出たのであった。
　なお、日が昇ったころに深雪は目を覚ましたのだが、いつになく恥ずかしそうな表情で悠元を見つめていた。冷えた体を温めてくれようとしたことは深雪なりの親切だと思って頭を撫でると、深雪はすっかり機嫌を取り戻していた。
◇　◇　◇
　大会２日目はピラーズ・ブレイク・ソロ予選とロアガンのソロが行われる。北アメリカ合衆国（ＵＳＮＡ）の首都ワシントンにある大統領官邸（ホワイトハウス）。約１４時間の時差があるため、競技開始予定の時刻は丁度夕食の時間となる。
　スターズ総隊長ことアンジー・シリウス少佐もといリーナは、先月の時点でセリアから今年の九校戦に出場することを聞かされ、最初はセリアに連絡を取って問い詰めた。セリアは既にスターズを脱退しているが、彼女から機密が漏れる可能性は極めて低い。この部分については大統領が確約している。
「その、本当に大丈夫なのでしょうか？」
「はは……リーナの懸念も理解はするが、今回は身辺警護を態々お願いしているだけだよ」

ＵＳＮＡ国内における反魔法主義者の魔法師排斥運動は鳴りを潜めたが、未だに反魔法主義の魔法結社は根強く残っており、政府の野党のみならず与党の一部にも根が残っている状態。なので、大統領は自らの権限で『アンジー・シリウス少佐』に身辺警護を依頼した。

これには孫娘とのスキンシップを取りたいという思いもあるが、一番の理由はスターズ内部に存在する組織内の軋轢を一時的にでも和らげる狙いがある。

大統領執務室の大型モニターには九校戦の放送が流されており、リーナもアンジー・シリウスとして身に着ける仮面や『仮装行列（バレード）』をしない状態でその場にいる。そして、二人の世話役としてシルヴィア・マーキュリー大尉（リーナのフォロー役に伴う形で准尉から昇進した）が大統領にコーヒーを、リーナに紅茶を差し出した。

「閣下にリーナ、どうぞ」

「おお、世話をかけてすまないねマーキュリー大尉。リーナは最近も暴れていると聞いているが」

「ええ。この間は訓練用の的が全壊しまして」

「うぐ……セ、セリアよりはマシだから！」

元々、暴走しがちなリーナのストッパーを魔法の側面でも抑えていたセリアの力。シルヴィアはこの立場になることで、改めてリーナの規格外さとセリアの苦労を目の当たりにした。いくら必要経費とはいえ、限度というものは存在する。そのことを理解してほしいという思いを込めたシルヴィアの報告に対し、リーナは頬を赤らめつつ反論した。

「何を言っているのですか、リーナ。確かに被害額だけで言えばセリアに軍配が上がりますが、セリアがああいった行動を取ったのは、全てリーナやセリア自身を守るためだったかと」

「……ううっ」

セリアの場合、自身やリーナに対して色目や欲目を抱いている連中を見つけてはビルで押しつぶそうとしたり、若しくは『レーヴァテイン』の実験材料に使おうとしたり……果ては『ブリオネイク』の調整実験で標的にしたりと事欠かない。

リーナと違うのは、その行き過ぎた対処の結果として他のスターズの女性隊員から割と好感を持たれている、という点にある。そう言った曰く付きの輩は他の女性隊員からも不評を買ってはいるが、権力の関係で逆らえずにいた。そういう連中を懲らしめたセリアに対し、年下でありながらも勇敢な女性兵士として結構評価は高めである。
「って、そろそろセリアの言っていた競技……ロアー・アンド・ガンナーと言ってたわね」
「（逃げましたね……）ええ。この競技は確か、我が国の海兵隊が行っていた上陸訓練をベースにしたものと聞いています」
「……セリアなら、圧勝するのではないのかね？」
大統領の懸念は尤もである。スターズにおける上陸訓練は、海兵隊のものよりもかなり厳しい条件を課されることが多い。それすらも軽くパスしてしまったことがあるセリアからすれば、本当にお遊びのレベルになってしまうだろう。
この懸念はシルヴィアやリーナも同意見であった。
スタート位置には流線形の無動力ボートに乗ったウェットスーツ姿のセリアが銃形状のＣＡＤを手にしていた。このＣＡＤを設計したのは悠元であるが、その事実を知る人間はＵＳＮＡの関係者にはいなかった。
スタートランプが次々と灯り、全て点灯した瞬間にセリアは魔法を発動させ、無動力ボートは勢いよく走りだした。その初速を見た瞬間、リーナが目を見開いた。
「……え？　今、いつスタートしたの？」
「すみません、リーナ。私にも見えませんでした」
モニターに映る限りでは、セリアがまるで消えたように姿を消したのだ。コース自体はバトル・ボードのものをある程度流用しているため、本来想定される平均速度は時速約６０キロメートル程度。だが、今見た感じではその倍以上の速度を叩き出している。そうこうしている間にセリアが１周目を走り切り、そのスピードを維持したまま２周目に突入する。
２周目から出現するロアガンの的に対し、セリアは用意していたＣ

ＡＤを構えて引き金を引く。こういったタイプのＣＡＤには照準補助装置が組み込まれているが、あらゆる事象を認識することが出来るセリアからすれば、補助装置自体〝気休め〟でしかない。
　更に、達也から提供された『散弾型インビジブル・ブリット』に悠元が手を加え、『ブリオネイク』の制御術式を更に小型化することでセリア専用の術式である『電磁拡散弾（ライトニング・ショットガン）』で的を破壊していた。
　その魔法を見た瞬間、リーナは盛大に頭を抱えていた。威力こそ違えど、コンセプト自体は『ブリオネイク』を模した魔法なのは間違いなかったからだ。
「リーナ？　どうかしたのですか？」
「……セリアが使ったあの魔法、コンセプト自体は『ブリオネイク』と同一のものかと」
　リーナの戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』はセリアも使用できる。だからこそ、リーナの魔法を制御したり『リバース・ヘビィ・メタル・バースト』という対抗魔法も使うことが出来る。セリア自身は戦略級魔法を使う気などないが、威力こそ違えど『ブリオネイク』を更に改良したと知れば、セリアをＵＳＮＡに引き戻させる可能性が出てくる。
「リーナだからこそ分かったという訳か……国防長官には私から言い含めておく。そもそも、引き戻して彼女だけでなく健の機嫌まで損ねたら、いくら私でも庇い切れないだろう」
「それは僭越ながら、私も同意見です」
「閣下にリーナ、二人してですか……」
　大統領とリーナの一致した意見に対し、シルヴィアは呆れたというよりも納得せざるを得なかった、という心境だった。
　シルヴィアが戦略級魔法師捜索の件でリーナのサポート役に任命された際、セリアに関することも聞き及んでいる。功績だけでなくやらかした部分も含めてのものだが、後半部分に関してはセリア自身やリーナが明らかに不利益を被る場合にしか動いていないため、魔法の訓練で頻繁に物を壊してしまうリーナとは違ってまだ親切に応対できると踏んでいた。

圧倒的な走破タイムと的を全て破壊するパーフェクトの命中率。セリアの麗しい容姿も相まって、観客は白銀の天使に見とれていた。尤も、彼女からすればそんな評価など別に望んでもない……と、モニターに映る様子を見ながら、リーナはそう内心で呟いたのだった。

気が付いたら過ぎた親切心

大会2日目も一高は順調に進めていく。
ピラーズ・ブレイクの男子ソロ予選。ここは視聴率のことを勘案してなのか、将輝と悠元は別リーグに分けられた。悠元の予選の相手は四高と七高で、特に警戒する相手はいない。昨年と同じく硬化魔法のマルチキャストで完璧に防御し、相手の防御の上から『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』で貫通攻撃を行って完勝した。文句なしの予選1位で決勝リーグにコマを進める。
ピラーズ・ブレイクの女子ソロ予選は深雪が『超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）』で2戦とも完勝。こちらも予選を1位で通過して決勝リーグへ進出した。予め渡していた残り二つの魔法は決勝リーグで使うつもりのようだ。
ロアー・アンド・ガンナーの女子ソロは第一走者となったセリアが常識外れの成績を出したことで、他校の走者にも少なからず動揺を与えた結果、2位以下が乱戦模様となった。それでも三高が2位、七高が3位となった。
そして、男子のロアガンのソロで一番ショックを受けていた人物は……他でもない三高の吉祥寺真紅郎であった。
「吉祥寺、そんなに落ち込まなくてもいいじゃないか」
「そうよ。2位でも立派だと思うわ」
一高がここまで本戦ロアガンの3種で1位を取って２００点。七高が１４０点で、三高が１００点と他の二校を大きく引き離している。出だしで躓いたわけではなく、水上競技に強い七高を抑えて一高がトップに立っていることよりも、真紅郎が落ち込んでいる理由は、勝ちを拾った形となったことだった。
「まさか、一高と七高がほぼ同じ結果に至っていた……しかも、僕の『インビジブル・ブリット』に多彩のアレンジを加えてくるなんて」
これは悠元と達也が考えた策の一つであった。真紅郎の『インビジブル・ブリット』に多彩のアレンジを加えることで、適正競技であるロアガンを1位独占する。
奇しくも男子の第一走者となった燈也が驚異的なボートスピード

と精密射撃でトップの成績を叩き出し、第二走者以降に動揺を与えた。この影響で七高は必死に追いつこうと射撃に振った結果スピードが落ちる形となり、三高の代表であった真紅郎が精密射撃の差で辛うじて2位になった。

結果論ではあるが、真紅郎が2位となったのは奇しくも燈也のお陰ということに悔しがっていた。これには流石の将輝もどう言葉を掛けていいか分からずにいた。

燈也には昨年亜実が使用していた『水中遊泳（アクア・ドルフィン）』を用い、『拡散型インビジブル・ブリット』で的を全て命中させていた。真夏という環境で熱を持つことになる的を捕捉するなど、熱量操作を得意分野とする燈也からすれば目を瞑っても出来る所業であった。

今日も夜のお茶会があるわけだが、今日を含めて達也は忙しくなっていた。明日はシールド・ダウンの男子ペアに出場する桐原と、ピラーズ・ブレイクの女子ペア決勝リーグに出場する雫。明後日はピラーズ・ブレイクの女子ソロに出る深雪、シールド・ダウンの男子ソロに出場する沢木が達也の受け持っている部分だ。

ただ、燈也が技術スタッフの手伝いとしてシールド・ダウンの女子ペアの紗耶香やエリカと女子ソロの由夢、ピラーズ・ブレイクの男子ペアのレオを担当することになっているため、そこまでの負担になっていない。

パラサイドールも気にならないわけではないが、ただでさえ働きづめの状態で精神を使っていればいくら達也でも疲労が溜まる、と悠元に諭された。深雪のことも考えれば、万が一に備えて万全なコンディションを整えつつ、今は技術スタッフとしての仕事をしっかりとこなすことに集中していた。

（……正直なところ、俺からすれば悠元がしっかり休むべきだとは思うのだがな）

達也も悠元の行動全てを把握しているわけではないが、作戦スタッフリーダーとしての調整役に加え、選手の取り成しや技術スタッフの手伝い、更には選手としてのコンディション調整。加えてパラサイドール関連だけでなく、別の事にも気を配っている。

これだけ挙げると、達也以上の忙しさとなっていることに加えて深雪の面倒も見ている以上、彼が九校戦中に倒れても不思議ではないだろう。幸い、昼間については緊急事態が起こらない限り本部テントか自分の部屋で仮眠を取っていることが多いため、競技に支障が出ないことは確かだろう。

その悠元はというと、ホテルの一室にいた。今日のお茶会に出向こうとしたところ、内線の電話が掛かってきた。フロントからは相手の名前を聞いたが、どうにも聞き覚えのない名前と部屋番号を聞かされた。

罠の可能性もあるだろうが、この時期に態々接触してくる相手は相当限定される。そして、指定された部屋の向こうに感じる気配からその人物を察しつつノックをすると、待ち構えていたようにその人物がドアを開けた。

誰かが見ている可能性もあるため、悠元が素早く中に入ってドアが閉められたところでその人物――私服姿の風間玄信(かざまはるのぶ)少佐に声を掛けた。

「――風間少佐、私服なので非番なのかどうかは敢えてお尋ねしませんが、どういうつもりです?」

「……その様子だと、今回の九校戦に関して当然気付いているというわけか」

沖縄防衛戦での大亜連合侵攻に関する情報提供から考えれば、悠元が今回の事態を把握できない道理はない。それは当然理解しているからこそ、風間の言葉は感心にも近いような印象を受けた。

だが、悠元からすれば憤りしかなかった。いくら相手がパラサイト関連とはいえ、その対処を同じ国防軍ではなく自分と達也が負わなければならないということにだ。自分らが国家非公認の戦略級魔法師かつ国防軍の特務士官とはいえ、国防軍の尻拭いをする義理は無い。

これに対する回答を風間は持ち合わせていなかった。

ともあれ、このまま立ち話も拙いため、備え付けのソファーに向かい合う形で座った。

九校戦の事情は粗方承知だと考えているため、そこに至った経緯に

ついて悠元は触れた。
「パラサイト事件で独立魔装大隊に一切関わらせなかったのは藤林少尉経由で九島烈に勘付かせないためでしたが、七草弘一が古式魔法に詳しい九島家に協力を要請したことで関東に来ていました」
「それに関してはこちらでも把握している。ただ、パラサイト事件の顛末はこちらも詳しく知らされていない」
「……パラサイトの大半は封印して神楽坂家で管理していますが、その処理の際に九島家がパラサイトを持ち去り、今回の九校戦に持ち込みました。兵器の名称は『パラサイドール』――――ガイノイドにパラサイトを組み込んだものです」
風間の反応を見るに、いくら身内に九島家と繋がりを持っている人間がいるとはいえ、そこまでの情報を得ていない。或いは情報の真偽を響子が探っており、上官である風間にまで届いていないという可能性。
「率直に聞きます。この際、第１０１旅団や独立魔装大隊の動き如何は問いませんが、風間少佐は俺に何を望んでいらっしゃるのですか？」
悠元自身、今までの風間の発言に嘘や誇張は含まれていないと感じていた。それは風間個人としての思いであり、軍人としての行動規律に従わなければならない状況となっても、彼個人との繋がりを切るつもりなどなかった。
風間がこのホテルにいるのは恐らく響子の監視を睨んでのものであり、第１０１旅団や独立魔装大隊としてパラサイドールの排除は出来ない。下手すれば国防軍同士、国防軍と十師族の対立となり、今までの協力関係にヒビを入れかねない。
そうなると、国防軍の装備を使うのは明らかに拙い。万が一達也が動くための装備は作業車に誤魔化して積み込んではあるし、達也にもその辺の事情は説明した。深雪の危険を排除するためと言われると、こちらとしても止め切れる自信がなかったからだ。
「……恥を承知で頼みたい。国防軍の暴走を止めるべく、悠元の力を貸してほしい」

風間は座りつつも深く頭を下げた。この状況に対して風間は動くことが出来ない……それは重々承知している。響子経由で達也にある程度の話が伝わっているのは、達也に対する戦略級魔法師としての監視行動から把握しているものと思われる。
「それは、国防軍の軍人としてのお願いですか？　それとも、風間玄信個人としてのお願いですか？」
「後者と捉えてほしい。自分自身、十師族に対して良くない感情を持っていることは悠元も知っているだろうが、国の護りを疎かにしたいという欲など持ち合わせていない」
彼が大越戦争でのゲリラ行為を起こしたり、その後の出世に対して何も文句を言わずに軍人としての職務を全うしている以上、彼にとって出世欲よりも軍人として……一人の国民としてこの国を守りたい気質は信じても良いと思っている。
風間の十師族嫌いは知っているが、彼とて公私の分別ぐらいは持ち合わせている。でなければ、自分や達也を独立魔装大隊の特務士官として受け入れることはなかっただろう。
「……分かりました。今回の件については神楽坂家と上泉家、それと四葉家が既に動いています。それと、九重先生も今回は看過できないということで協力してくれています」
「師匠もか……」
風間に対し、スティープルチェース・クロスカントリーが近くなれば響子が接触してくると思われるが、今回は一切の装備提供は要らないと釘を刺した。どう対処するのかという風間の疑問に対し、悠元はこう答えた。
「昔の言葉で『目には目を、歯には歯を』というものがありますが……なら、パラサイトには相応の装備で挑みます。達也には自分が陸軍兵器開発部にいた時に試作した『ストライク・スーツ』と『バハムート』、それとパラサイト事件の後に渡した新装備で対処してもらいます」
「達也が動く……いや、その可能性は極めて高いな」
『ストライク・スーツ』――――あらゆる極限状態に対応し、スーツ内部に仕込まれた仮想起動式展開領域によってＣＡＤから発せられる

起動式を吸収して装着者の精神領域に送り込むだけでなく、想子を一時的に蓄積・解放させる機構を搭載することで疑似的な『接触型術式解体（グラム・デモリッション）』を再現することに成功した。

ただ、このスーツは保有想子量が潤沢でないと使えないピーキーな代物の為、当時は自分以外だと達也か深雪ぐらいにしか使えない代物であり、兵器開発部で放棄されていたものを三矢家でこっそり接収して完成させた。

現状スティープルチェース・クロスカントリーでパラサイドールをどのように配置するかは不明だが、深雪の身に危険が迫れば達也は間違いなく動くであろう。彼には守護霊（サーヴァント）の魔法結晶を内蔵したＣＡＤを持たせているので、いざとなれば『交差する機械仕掛け（クロス・エクセリオン）の運命』を使うのも問題はないと言い含めている。

万が一男子のスティープルチェースに出てきた場合、最悪は『陽光疾走（サンライズ・オーバードライブ）』か『霊魂雲散（スピリット・ディスパージョン）』で対処することも念頭に入れている。流石に九島烈がコース前半にパラサイドールを配置するように言い含める可能性はないと思いたいが、油断は禁物だろう。

「……本当ならば、国防軍絡みのことは身内で対処できるようになってほしいです。それでは、失礼します」

それは、偽らざる本心からくる言葉であった。

悠元は部屋を出た後、深く一息吐いた。本来なら響子が達也を動かすことになるのだろうが……そもそも九島烈からすれば、身内に被害が及ばなければ問題ないとでも考えているのだろうか。

いや、原作における七草弘一の考え方からすれば、九島烈がそう考えたとしてもおかしくはないのだろう。ただ、九島家を危うくさせる行為は光宣の苛立ちを加速させるだけだと気が付くべきだと思う。（ここでもし、光宣が健全な状態に回復すれば……それはそれで問題が山積しているわけだが）

光宣には兄や姉がおり、奇しくも悠元と似たような環境に置かれている。ただ、自分が記憶している限りにおいて、パラサイト化した光宣に対して手助けをするような形となったのは事実だろう。その背景には『九島家が十師族から降格した』という七草家の身代わりと

なった受け入れがたい事実もあるわけだが。
もし、光宣を回復させてこちらに不利益を被らなかったとしても、今度は現当主の実子による次期当主の争いが加速しかねない。間違いなく光宣が選ばれることになれば、長男は九島家に居場所がなくなり、下手すれば殺傷事は免れないだろう。
その懸念を抱いていたからこそ、似たような環境にあった自分は今の父親である元と向き合った際、転生者であることを明かした上に三矢の家督継承を拒否した。
「……無駄に親切心過ぎるのも問題なのかもしれんがな」
国内の問題だけならまだしも、国外の問題まで山積している……そこまで気を遣っていることに、今更ながらそんな自分を皮肉るように呟きつつ、悠元は自分の部屋に戻ったのだった。

慢心は出来ぬ

大会3日目はシールド・ダウンのペアとピラーズ・ブレイクのペア決勝リーグが行われる。午前中は男子の試合で午後は女子の試合となるため、達也の担当が被ることはない。悠元はその様子を本部テントで見つめつつ、手元にある折りたたみ型端末を弄っていた。

「悠元君はいいのかい？」

「修司とレオの最終調整は昨日の段階で済ませていますからね。そもそもの話、予選の段階でレオの防御が突破できなかった時点で相手の負けは決定したようなものですし」

シールド・ダウンのペア練習に付き合っていた時も桐原の『高周波ブレード』はおろか、沢木の『圧力波（マッハ・パンチ）』すら防ぎ切っている時点で、レオの防御力はかなり高い精度へと極まっている。これでもレオからすれば横浜事変やパラサイト事件の時の経験からして「まだまだだぜ」と述べてしまうほどにそう感じている。

レオの防御魔法だけでも厄介なのに、修司の火属性の天神魔法は相手の情報強化すら嘲笑うかのように氷柱を斬り落としていく。現に、モニターに映っているピラーズ・ブレイク男子ペアの決勝リーグ第一試合では、もう既に相手陣地の氷柱が残り2本となっている。

物体を切断するというイメージが強いのは専ら木属性（風属性）だと思うが、その気になれば他の属性でも物体を切断することは可能である。それに、修司は宮本家の人間なので剣術に長けており、物体を斬るイメージに関してはかなり長けていると踏んでいる。

加えて、天神魔法の特性――――現代魔法を『喰らう』ことによって威力が増すため、情報強化はかえって逆効果になってしまうという訳だ。下手をすると会場を壊しかねないが、その辺は修司も考慮して威力を抑えている。

ピラーズ・ブレイク男子ペアの決勝リーグに関してほぼ盤石となっているし、女子ペアについても最悪は雫の『フォノンティアーズ』で纏めて吹き飛ばす方法もあるため、特に心配はしていない。

達也のことだから、その辺も見越した作戦を二人に伝えるのは既定

路線である。
シールド・ダウンの男女ペアについては、正直仕上がっているという他ない。男子ペアの十三束については、自身の魔法特性から『接触型術式解体（グラム・デモリッション）』や触れているものならば得意だが、自身のサイオンを飛ばすという遠隔系は苦手であった。
十三束が昔魔法学者に言われたこと――――彼の〝核〟がサイオンを強く引き寄せる性質を持っている――――即ち『リンカーコア』の性質によるものと推察していたことを思い出し、改めて『天神の眼（オシリス・サイト）』で内密に解析した。その結果、十三束の『リンカーコア』はかなり特殊ということが判明した。
『術式解体（グラム・デモリッション）』が最強の対抗魔法でありながらも普及しない理由は、消費するサイオンが高いとされていることだが……これは明らかに間違いである。
魔法演算領域を経由こそしないが、『リンカーコア』から放出するサイオンを収束するという方法を取っているため、その際に制御しきれていないサイオンが大気中に放出されることで余計な消費が掛かっているのだ。
達也の場合は桁外れた想子保有量もそうだが、本来普通に生活していても漏れ出ているサイオンすら制御していることで無自覚的に『術式解体（グラム・デモリッション）』の効率的な使い方を会得している。この辺は「流石、お兄様」と褒める以外の言葉が出てこないだろう。
話が逸れたが、十三束の『リンカーコア』は一般的な魔法師よりもサイオンの収束・放出率が極めて高く、本来『ゲート』を通して発動する魔法の中で十三束から離れようとする魔法式に含まれるサイオンを大気中に含むものと認識して吸収してしまい、結果として遠隔操作系や放出系の魔法が上手く使えないという結果に至っている。
「でも、まさかあんな形で十三束君の悩みを解決するとはね」
「ちょっと考え方を変えてやっただけですよ」
十三束の認識を変えたのは達也であり、『爆風（ブラスト）』の起動式を改良したのは千秋の功績。そして、そこにダメ押しという形で悠元が一つの起動式を提供した。

その魔法は『防壁解体（シールド・デモリッション）』――――十三束の得意とする『接触型術式解体（グラム・デモリッション）』を疑似的にシールドで再現するだけでなく、硬化魔法の特性も併せ持っている。相手のシールドに展開した防御術式を無効化するだけでなく、そのまま相手のシールドすら叩き割ることも可能。

離れた場所が苦手でも、手に持っているシールドを十三束の身体の一部として認識させる魔法――――加えて、硬化魔法は収束系魔法の一種なので、遠隔操作を一切必要としない。

十三束には空気を扱う魔法が使えない、という情報を鵜呑みにしていた相手選手からすれば対処方法が一気になくなるだけでなく、十三束にヘイトを集めることで桐原が自由に動けるメリットも生まれる。

男子リーグ決勝は一高と二高、三高による組み合わせとなったが、一高と三高がそれぞれ1勝ずつとなったところでの事実上の決勝戦。前情報を当てにしていた三高の選手は圧縮した空気塊を防ぎ切った十三束に驚愕していた。

ここで勝負を決めに出た桐原が振動波の合成でリングを揺らし、相手の足元を揺らがせる。そして、桐原と十三束が相手ペアのシールドを破壊して優勝を勝ち取ったのだった。

◇　◇　◇

3日目の結果はというと、ピラーズ・ブレイクの男女ペア共に1位。シールド・ダウンの男女ペアも共に1位を取っていた。

シールド・ダウンの女子ペアは予選で三高と同じ組み合わせになるも、紗耶香の剣士としての見切りに加え、最早音速レベルといってもいいぐらいの動きを披露するエリカに翻弄され、相手選手はあっという間に場外へと弾き飛ばされた……主にエリカの高速移動による衝撃波のせいで。

これにはエリカも不満気であったが、レオが来た途端に軽口を叩いていた辺り、彼女も素直ではないということなのだろう。この辺は幼馴染としての長い付き合いからくるものもあるわけだが。

ピラーズ・ブレイクの女子ペアに関しては、完全に達也が真紅郎の作戦を読み切った形となった。氷柱を角の一点で立たせることで花

音の『地雷原』を防ごうと目論んだのだろうが、練習の際に花音へ渡していた共鳴振動領域魔法『迅地雷源（じんちらいげん）』と雫の『フォノンティアーズ』で相手の氷柱を全て破壊しきり、優勝を勝ち取った。
ペア４種で全て１位を取ったことにより、３日目を終えた時点で一高の点数は４６０点。２位を確保した三高は２６０点と大きく引き離しにかかっている。
そして、大会４日目。今日はピラーズ・ブレイクの男女ソロ決勝リーグが行われる。午前が女子、午後が男子の予定となっており、出場選手となる悠元と深雪のコンディションは十全な状態となっていた。
「……分かってはいたことだが、エグイな」
「言葉にしないでくれ、悠元」
深雪は決勝リーグの２試合を『凍刃爛舞（シヴァレイド・エッジ）』と『氷結六花（ダイアモンド・ダスト）』でほぼ１０秒以内に完封するという強さを見せつけた。下手すれば相手選手にトラウマを植え付ける様なものだが、深雪はそれを気にするような素振りを見せず、寧ろ深雪の浮かべる笑みに魅入っていた。
試合の関係で控室から見ていた悠元の言葉に対し、達也が窘めるように呟いた。
悠元自身ＣＡＤの調整はできるし、天神魔法の関係もあって他人に触れさせるのが難しい。だが、今回は達也も把握している魔法しか使わないため、仕上げの最終調整を達也に頼んだ。そこには深雪からのお願いも含んでいるのは言うまでもないが。
「調整が終わったから、確認してくれ」
「……ん、問題ないわ。いい仕事するよ、本当に」
達也からの後押しを受ける形で、午後から始まったピラーズ・ブレイクの男子ソロ決勝リーグ。男子の決勝リーグは悠元と将輝、そして二高の選手という組み合わせとなった。
第１試合の悠元と二高選手の試合は、開幕直後に『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』を発動させて、相手の最前列の氷柱４本を破壊し、それを触媒として大量の霧をフィールドに展開する。
サイオンを知覚する術に長けていたとしても、視野が限定されたと

ころに魔法を投射する技術は魔法科高校のレベルだと極めて難しいだろう。いや、現代魔法の範疇に広げても難しいのは否定できない。
こちらの氷柱を視認できなくなったことで動揺する相手選手を待ってやる義理など無く、残り８本の氷柱を『天壌流星群（ミーティアライト・フォール）』で破壊し、勝負を決めた。
第２試合は将輝と二高選手の戦いとなり、危なげなく将輝が『爆裂』で勝利を収めていた。
そして、悠元と将輝が１勝同士で迎える第３試合。実質的な決勝戦だが、昨年の新人戦ピラーズ・ブレイクでは悠元が『天照絢爛（てんしょうけんらん）』で瞬殺して勝負を決めている。だが、同じ手段で悠元が勝つ気などない事を将輝は知る由もない。
試合開始を告げる青色のランプが点灯した直後、悠元はフィールド全体に魔法を投射する。
それを知ってか知らずか、将輝は『爆裂』を悠元側の全ての氷柱を範囲内に収めるように魔法式を投射する。
（今年は邪魔してこない？……なら、その油断を突かせてもらう！）
将輝は『爆裂』を展開できたことに訝しむが、悠元が昨年の事から油断したと結論付けて疑問に思うことなく『爆裂』を発動させる。
その時、将輝は気付いていなかった。悠元が僅かながら口元に笑みを浮かべていたことに。
「――――将輝。いくら昨年のことがあったとしても、俺が油断や慢心をするとでも思ったか？」
将輝が『爆裂』を発動させた直後、フィールド全体に霧が発生する。これだと第１試合と同じように思えるが、霧が発生した直後に将輝は思わず顔を顰める。
「ぐっ……!?（な、何だこの膨大な量のサイオンは……）」
相手への直接攻撃は禁止されているため、高密度に満たされたサイオンは２４本の氷柱が置かれた競技フィールド内にしか発生していない。だが、サイオンを知覚することで魔法を行使している魔法師は嫌でもサイオンを知覚させられることになるため、競技フィールドに向けて魔法を行使している将輝が影響を受けている形だ。

そして、将輝の放った『爆裂』による影響はというと……将輝側の前列４本がその被害を受けていた。
悠元が行ったのは、昨年の新人戦モノリス・コードで使った高密度の霧とサイオンフィールドを発生させることで指定した相手の知覚を狂わす天神魔法『五里霧中（ごりむちゅう）』と『相転移炸裂弾（フェイズ・バースト）』、そして『ミラーフォース』のマルチキャスト。
将輝の『爆裂』の威力を一時的に蓄積させ、将輝側の氷柱に対して『相転移炸裂弾（フェイズ・バースト）』で返しただけというシンプルな話だ。将輝側の氷柱全てを壊さなかったのは、悠元がこれから使う魔法を将輝に対して披露するためだ。
魔法行使の動きが見られない将輝に対し、悠元は眼前に広がっている霧に向けて手を翳した。
「俺に『爆裂』は通じない――――王手（チェック・メイト）」
右手に持っている汎用型ＣＡＤから起動式が読み込まれ、悠元は魔法――――『天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）』を発動させる。その直後、将輝側のフィールドから噴き出す様に舞い上がる大量の水蒸気。そして、その水蒸気が霧雨のシャワーとなって観客席に降り注ぐ。
舞い上がった水蒸気の余波でフィールドに展開していた霧も晴れ、無傷の状態となっている悠元側の氷柱だけが残っている状態となっていた。呆然とした表情を浮かべている将輝に対し、悠元は一息吐いてから真剣な表情を浮かべると、瞼を閉じて静かに頭を下げた。
悠元が将輝に完勝したことで、悠元の決勝リーグ成績は２勝０敗。男子ピラーズ・ブレイクのソロで優勝を飾ったのであった。

◇　◇　◇

大会４日目の結果はというと、ピラーズ・ブレイクの男女ソロで１位、シールド・ダウンの男女ソロで１位を取り、総合２位の三高を完全に引き離していた。現２年生の構成が大きく変わっているため、この成績は納得できるものであった。
シールド・ダウンに関しては由夢と沢木がそれぞれ全試合で速攻を掛けて試合を決め、問題なく優勝を勝ち取っていた。
ここまでに使用した魔法に関して問い合わせが相次いだが、それを

一括で拒否した。起動式の改造自体は悠元が多少なりとも関わっているため、神楽坂家として魔法技術の漏洩を防ぐ意味でも問い合わせを拒否したのだ。
国立魔法大学から『魔法大全（インデックス）』への登録を匂わせる様な問い合わせを受けたが、今春の魔法師排斥運動に対するカウンターを担った神楽坂家の次期当主である悠元に対して強く出ることが出来なかった。加えて、上泉家と神楽坂家の釘差しによって以後の問い合わせは起きなかった。
そもそもの話、その起動式を一つ公表するだけで現代魔法の先進国であったＵＳＮＡは大幅な方針転換も含めて混乱を回避できなくなるだろう。仮説上の代物であった『リンカーコア』の存在が明るみに出れば、態々『ゲート』を経由しなければならない現代魔法は次第に廃れていく可能性があるからだ。
悠元とて国外勢力の我が物顔をするような干渉は許さないが、現代魔法を飛躍的に進化させたいという欲は持ち合わせていない。レリック関連についても複製方法は確立しており、実験で完全再現可能だと判明しているが、表に出すのが拙いと判断して上泉家に預けている。
「……深雪、凄くご機嫌だね」
「そう言いつつ脇腹を抓らないでくれ、雫」
雫とて自分の立場ぐらい理解しているし、深雪が悠元の部屋で寝ていることも把握している。いくら婚約者の一人とはいえ、春休みの際に腰が抜けるほど愛されてしまった経験からか、悠元に依存しすぎるのは宜しくないと思っている。
なので、せめてもの抵抗として悠元の脇腹を抓っていたのであった。
「由夢も優勝おめでとう」
「ありがと、悠元。正直拍子抜けだったけれど」
「無理言うな。知り合いの同性だとお前の速力についていけるのがエリカぐらいしかいないだろうに」
なお、三高の知り合いだと沓子がロアガンの女子ソロで2位、栞が

ピラーズ・ブレイクの女子ソロで2位を取っていた。彼女らも弱い訳ではないが、セリアと深雪が規格外なだけである。
今日のお茶会はというと、さすがに知り合いだけで集まっても多すぎるため、達也、深雪、悠元、姫梨、由夢、修司、雫、ほのか、そしてケントであった。それ以外の面子は燈也がいる作業車でお茶会を楽しんでいる。
「えー、深雪と雫、それに姫梨は付いてこれると思うんだけどなぁ」
「由夢……そんなことをしたら、会場が壊れかねません」
「それは同意する」
「私でもそこまでは無理ですよ」
由夢の言葉に対して、窘める姫梨に同意する雫、そして深雪は謙遜するように呟いた。実際のところ、『神将会』として力を磨かねばならないことは理解しているが、九校戦でその実績を披露するつもりなどなかったのは由夢とて納得している。
その最大の理由は迫りくるスティープルチェースとドイツ絡みのせいなのだが。

どうあっても苦労は増える

九校戦の本戦をトップで折り返した一高の快進撃は止まらなかった。

新人戦の男女ロアー・アンド・ガンナーは共に優勝し、女子ロアガンの射手（ガンナー）として出場した香澄は得意げな表情を表彰台で見せていた。男子のほうは達也とケントが担当して七高を打ち破って優勝した。悠元はというと、香澄のエンジニアとしてその腕を如何無く発揮していた。

男子シールド・ダウンは3位。女子シールド・ダウンは水波と理璃が出場し、そのエンジニアを達也と悠元が担当するという反則級のバックアップ付きだが、出番は殆どなく無事に優勝した。

男子ピラーズ・ブレイクは2位、女子ピラーズ・ブレイクは泉美の独壇場となった。泉美が喜びのあまり悠元に抱き着いていたが、これぱかりは悠元も周囲の人間も止めるような行動はしなかった。

ただ、一高の活躍が目立った一方で四高の二人――――亜夜子と文弥の活躍も目立っていた。

新人戦3日目のミラージ・バットでは、亜夜子の得意とする『疑似瞬間移動』をダウングレードさせたものだが、それでも2位につけていた一高の後輩をみるみる引き離していく。

「……悠元お兄様、ひょっとしてこのことをご存じだったのですか？」

「偶然知った、という形になるかな。流石に魔法の詳細は泉美でも教えられないけど」

元治と穂波の結婚に際して再び出会った後、剛三の付き添いで四葉の部隊を鍛え上げるという上泉家の裏家業を手伝ったことがあり、その際に文弥や亜夜子と対戦することになった。

文弥の固有魔法『ダイレクト・ペイン』を直接返してしまう特性を持つ自身の固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』で文弥をノックダウンさせるだけでなく、亜夜子の『疑似瞬間移動』を自身の転生特典――――自身の認識や思考によって魔法を構築する『創造大全（マテリアル・インデックス）』が自動で解析してより洗練された魔法を覚えてしまった。

この時点で達也や深雪はおろか、四葉の関係者にすら言っていないことを教えられるわけがなかったため、適当に誤魔化したのは言うまでもない。

続く男子モノリス・コードでは、一高が琢磨を筆頭にして食らいついていっているが、四高との直接対決では文弥の『幻衝（ファントム・ブロウ）』で誤魔化している『ダイレクト・ペイン』で優勝候補と目された三高だけでなく一高も破り、「黒羽姉弟は四葉の関係者ではないか」という噂を更に濃くさせていた。

この噂を流した理由は達也と深雪から話題を逸らさせる狙いがあったのだろう。この辺は「クリムゾン・プリンス」を2年連続で破ったことにより変に悪目立ちしている自分が言えた義理ではないだろうが。

ただ、当初の予定通りに点数を稼ぎ切ったため、新人戦の優勝は一高で確定した。これによって2位の三高との差は３００点近くとなり、万が一スティープルチェースでしくじったとしてもミラージ・バットとモノリス・コードで安定した成績を出せれば総合優勝はほぼ確定となる。

悠元はというと、モノリス・コードに出場する3年生のＣＡＤを担当していた。達也の陰に隠れがちだが、昨年の新人戦スピード・シューティングに出場した雫と本戦ミラージ・バットに出場した深雪のサブエンジニアに加え、昨年の新人戦モノリス・コードで調整を担当した達也からの〝お墨付き〟もあって担当することになっていた。

「達也ほどではありませんが……何か違和感があれば、遠慮なく言ってください」

「いや、十分すぎるほどに馴染んでいる。寧ろしっかりと使い切れるかが不安だな」

「そんなことを言わないでくださいよ、会頭」

「分かってる。だが、この九校戦が終われば次はお前に任せることになる」

服部から副会頭選出の際にその辺の事情を全て聞かされており、特に異存は無かった。そもそもの話、生徒会長に悠元と深雪のどちらが

立候補するのか、ということについて特に騒ぎが起きることは無いだろうと踏んだ。
仮に生徒会役員として残っていた場合、深雪は辞退して悠元に生徒会長への立候補を推した可能性が極めて高い……というのは深雪本人も言っていたことである。
「まあ、十文字先輩や会頭のように出来るかは保証できかねますが、まずは選挙に当選してからの話でしょう」
「いや、悠元……学年主席の君を蹴落とせる様な輩がいると思うのかい？」
「幹比古、それは言わないでほしい」
原作と異なり、幹比古の担当を美月が担っている。美月は精霊の活性度から幹比古のコンディションを視ることに長けており、それに見合った調整方法を行っている。その方法は『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』を持つ佳奈と同じ方法であり、佳奈が直々に叩き込んでいた。美月も魔法工学に対して強い関心を抱いていたのもあり、今では幹比古のパートナー的存在として噂になりつつある。
「しかし、あの感じは初心なカップルだな。まあ、神楽坂と司波に至っては阿吽の呼吸を無意識でやっていると言うべきか」
「三七上（みなかみ）先輩、今は茶化す場面じゃありませんよ……」
なお、美月の後ろには佐那が色々と美月を諭して（この場合は「唆す」とも言えるかもしれないが）おり、それを聞いた美月と幹比古が頬を赤く染めるほどであった。
実を言うと、悠元は当初姫梨のエンジニアも担当する予定だった。だが、姫梨のミラージ・バットにおける成績と2種目が重なる事情を考慮した結果、姫梨の担当は別のエンジニアが見ている。
結果として、夕食の席では安堵の雰囲気が漂っていた。そんな中、服部は本人の気質故なのか、悠元に確認の意味も込めて訊ねた。
「神楽坂、本当に感謝しているが……だが、いいのか？」
「明日の事でしたら、事前に打ち合わせした通りで進めます」
原作よりも一高の面々が強化されている以上、下手なリスクを背負う必要がない。只でさえスティープルチェース・クロスカントリー自

体が大の大人でも躊躇ってしまう様な軍事訓練であるため、危機管理を優先しても問題はないと踏んだ。
問題があるとすれば、『プラスワン』の要素が既にドイツ方面で出ていることからしてパラサイドール方面にも影響が出ていないとは考えづらい。一応ピクシーがパラサイドールの波長を感じ取ってはいるが、明日はピクシーへの被害を抑える意味で彼女の能力をなるべく使わせない様にしておいた。なお、ピクシー関連の情報は達也経由で聞き及んでいる。
いくら原作よりも強化された達也でも不覚を取らない保障がないため、万が一の保険と言うべきか……上泉家先代当主である剛三が作業車の護衛に入ることとなった。その理由として、剛三自身がピクシーの見極めをしたいというのが一つ。加えて、ここが国防陸軍の基地内であるため、余計な詮索を入れない為の護りということらしい。
◇　◇　◇
スティープルチェース・クロスカントリーを明日に控えた夜遅く。珍しい相手からのメールに少し驚きつつ、その人物は深雪とも知己であるために説得は割と手早く済んだ。そして、呼ばれた場所というのはホテルの屋上であった。
「やあ、悠元君。いや、この場合は〝若殿〟と呼称すべきかな？」
「……八雲先生がそう呼ぶということは、大方『元老院』も絡んでいるのですね？」
「半分は正解だね。彼らは妖魔をこの国から追い出したいようだけれど」
「彼らは分かって言ってるんですか？　とうとう頭のネジが逝かれましたか？」
悠元がそう述べた理由は至って単純で、今の段階でそれをやってしまえば、「フリズスキャルヴ」でその情報を掴んだ顧傑が独自のパイプを使って「日本が妖魔を生み出し、世界に解き放った」などという謂れのないデマを広めてくる恐れがある。
そんなリスクを負うぐらいならば消滅させる手段を取るが、千姫から頼まれた案件は〝再封印〟もしくは〝ガイノイドからの離脱不能

状態〟であるということ。場合によっては、「アリス」との〝同調（シンクロ）〟で片を付けるつもりだ。
　八雲も悠元の言いたいことが理解できたようで、頭を掻くような仕草を見せた。
「その点については千姫殿が一喝して事を収めたそうだよ。それで本題だが、明日の女子スティープルチェース・クロスカントリーはまだしも、男子のほうに達也君は投入できない」
「いえ、そうしてもらった方がありがたいです。達也には深雪のストッパーとしていてもらわないと困りますので」
　相手は以前のようにパラサイトと人間を融合させた存在ではない。素体が機械であるからこそ、人間では躊躇ってしまう様な動きを平気で繰り出してくる可能性がある。そんな相手に達也が無傷で完勝できるとは思わない。肉体的なダメージをゼロに抑えられたとしても、消費したサイオンの充填が間に合うとは思えなかったからだ。
「達也君と藤林君、それと風間君との話し合いに立ち会ってね。風間君は古式魔法の使い手として旅団長にその危険性を伝えなかったそうだが……どう思うかな？」
「佐伯少将が古式魔法に疎いこともそうですし、古式魔法ならではの理由もあるでしょうが……詳しくは分かりませんが、少佐は何か知っているのではないかと思います」
　パラサイドール関連の情報を集め始めた際、陸軍兵器開発部絡みのコネを使って情報を引き出したところ、国防陸軍から少なくない額が予備費の用途不明金として消えていた。名目上は〝見込み預金利息の不足金〟として処理されていたが、そのルートを洗い出した結果……旧第九研に流れていたことまで判明した。
　この情報を流す先次第では面倒事になりかねないため、八雲には予め話してある。ただ、この情報は千姫でも与り知らぬことであり、現状は悠元と八雲の二人しか知らない事実である。
　このことを風間が知っているかどうかはともかくとして、八雲の問いかけに対して都合の悪いことを隠す必要性が一体どこにあったのかと思う。仮にも部下である響子や達也の前で醜態は晒したくない、

というプライドが働いていたとしても、答えないこと自体が却って不利になると考えなかったのだろうか。
「別に風間少佐がパラサイドールに関わっているとは思いませんし、少佐からも頼まれましたからね……その上司に関しては分かりませんが」
「おや、悠元君は佐伯少将に対して何か確執を抱いているのかな？」
「……昨年春の防衛大の入学式の際、本来ならば技術士官としてしか強要できない権限を用いたのは佐伯少将ですから。報告書では風間少佐が招集したという体になっていましたが」
　別に好き好んで対立したいなどとは思わない。だが、原作における達也に対する扱いは一種の〝誘蛾灯（パトリオット）〟のようなものだ。いくら相手が『十三使徒』の一角とはいえ、貴重な戦略級魔法師を平気で囮にするような真似をしたからこそ、関係が決定的に拗れたのだ。達也でなかったら冗談抜きで死んでいただろう。
　尤も、似たような立場に置かれている自分もそんな心境になりつつある一人なのだが。
「別に彼女も共犯とは言えないかもしれませんが……ただ、九島烈に対しての意識は根強いでしょうね。独立魔装大隊の存在意義を含めれば分からなくもないですが。そんなことはともかく、男子のスティープルチェースについては了解しました」
「にしては、かなり用意周到に達也君の装備を整えてきていたね。この事態を読んでいたりするのかな？」
「そこまで万能じゃありませんよ、俺は」
　未来をある程度読めているのは、それこそこの世界が原作に近い流れを辿っているからに他ならない。顧傑や周公瑾を今すぐ倒さないのも、その流れを途切れさせないために態とそうしている。
　今までの事象から考えても、確かに自分の介入による改変は起こっているが、大枠での結果が殆ど変わっていない。だが、この先に待っている展開を考えた場合、〝彼〟を早い段階で救う方法を考えなければならない。
　ましてや、自分が知る限りにおいてその大筋に関わっている水波の

状態が大幅に書き換わっている。もし、世界の修正点が何らかの作用を齎すとすれば、水波の身体と魔法力の改変は一つの試金石とも言える。

「情報隠蔽と裏工作の件については黙っておくということで決着をつけているけど……ローゼン家絡みのほうは何とかなりそうかい？」

「レオに話は聞きましたが……意外にも直球勝負なのは驚きましたね」

レオは最初、話したがろうとしなかった。自分が起こしたいざこざ――エルンスト・ローゼンがエリカをまるで道具のような扱いをするような発言に対し、怒ったことだ。その際、エルンストが咄嗟に張った障壁を破壊せしめた。

ただ、エルンストの体に触れるすんででレオが我に返り、寸止めの形となったので傷害事にはギリギリならなかった。普通なら障害未遂だが、エルンストのほうから不問にした以上は周囲からも強く言えなかったようだ。

事情はエリカがレオを問い詰め、そこから聞き出した内容を聞いただけに過ぎない。ただ、その一件以降は警備が厳しくなるという結果となり、エルンストも下手に動くことが出来ずにいた。

「仕掛けるとするならば、スティープルチェース・クロスカントリーの後。国防軍としても、色々痕跡を残されるのは拙いと警備を態と緩めるでしょう……行く先々で内ゲバばかりというのは頭が痛くなりそうな話です」

その情報を基に、レオの口から事情を説明させた。レオは躊躇っていたが、こちらからバスティアン・ローゼンの遺産相続権を保有している事実を伝えると共に、悠元の祖父である剛三がゲオルグ・オストブルグとルーカス・ローゼンの亡命に関わっているため、無関係ではないという事実も告げた。

レオだけでなく立ち会っていたエリカも驚いていたが、ローゼン家が無理矢理連れていく危険性に触れるとエリカはその可能性に同意した。なお、エリカが飲み物を買いに行くと出て行った際、レオからエルンストが「エリカを好きにしても良い」という文言を言われてカ

チンときたらしいという情報を得た。
恋人同士なのだから、しっかりとその辺を伝えるべきだ……とは一応言っておいた。
「九島烈の弟――――セリアの祖父も関わっている話なので、セリアにも手伝ってもらえるようにお願いはしました」
「……ローゼンは哀れだね。何せ、この世界の戦略級魔法師二人を相手にするのだから」
「俺もセリアも国家非公認の戦略級魔法師ですけれどね」
ここだけの話だが、剛三の仲介でドイツの国家元首や『十三使徒』の一角であるカーラ・シュミットと面会している。なので、個人的にはコネを有していたりする。だが、あまり表立って行動するのは宜しくないため、剛三に任せている。

パラサイドール・クッキング

そうして迎えたスティープルチェース・クロスカントリーの本番当日。午前は女子、午後は男子が走ることになっているが、未だ予断を許さない事態なのは間違いないだろう……別に一高の総合優勝が危うくなるというわけではなく、主にパラサイドール関連なのは間違いないが。

（流石に言えることでもないからな……位置は……なんだこれは？）

周りに気付かれないよう、天幕の奥に移動して（他の面々には午後に向けて少し仮眠を取ると言い含めている）『天神の眼（オシリス・サイト）』で演習林のコースを覗き込んだのだが、悠元は明らかにトラップでもパラサイドールでもない代物がコース外に紛れ込んでいることに気付く。

その情報を解析した結果、原理的にはパラサイドールに近いものの、それを強化した代物だと判明した。ここで悠元の持っている通信端末の着信音が鳴ったので手に取ると、聞こえてきたのは達也の声であった。

『悠元、今は大丈夫か？』

「ああ。態々連絡をくれたということは、何か気になることでも？」

達也は先程までＣＡＤ調整で働き詰めであり、その疲れを理由として天幕から離れていた。なので、間もなく女子の部が始まるにもかかわらず、彼がいないことを訝しむ者はいなかった。悠元が先程検知した代物は現状動く気配を見せていないが、油断はできない。

『〝彼女〟が何かを感じとったようだが、そこまで手を出せる余裕がないだろう』

「ふむ……念のため、先生に頼んでおくよ」

『そうしてくれると助かる』

通信を傍受されている可能性もあるため、手短に会話を交わすと通信が切れた。そして、悠元は八雲にコース外の兵器をそれとなく見ておくようにメールを送ったと同時に、モニターに映っているスティープルチェース・クロスカントリーの女子選手が一斉にスタートした。それは即ち、『ストライク・スーツ』を纏った達也が演習林内に突入し

たことを意味する。
悠元はモニターを見つつ、『天神の眼（オシリス・サイト）』で先程コース外にいた兵器を注視する。
（達也が演習林内に入っても動く気配は無し……というか、パラサイドールの数を減らすスピードが段違いだな）
ピクシーのフォローもあるわけだが、予め渡しておいた武装やストレージ、もしもの時の天刃霊装を含めれば、達也がしくじる可能性は低いだろう。向こうがピクシーの存在に気付いて私兵を差し向けたとしても、ピクシーのいる作業車には剛三がいる。その辺は達也にも言い含めている話なので、問題はないと思う。

◇　◇　◇

選手のほうはというと、トラップ以外は殆ど人の手が入っていない演習林であるため、ほぼ一直線……とはなっていなかった。一高の集団から数人ほど突出しているのが見て取れた。その面々はというと、深雪、由夢、エリカ、姫梨の四人である。なお、雫は花音やほのかが無茶をしない様にとフォロー役を買って出ていた。
「っと、みんな、そこの沼に足を踏み入れないで！　ロープのトラップが仕掛けられてるかも！」
「サンキュー、エリカっち。経験があるの？」
「家の道場で対トラップ訓練はしてたし、悠元の伝手で新陰流剣武術の訓練も受けてたからね。気絶させてくるトラップがないだけまだマシよ」
「それはエグイですね……」
四人も前方から霊子（プシオン）の波長を感じ取っていた。深雪からすれば、その対処をしているのが自分の兄だということも把握している。いくら達也が深雪のガーディアンとはいえ、もう少し抑えてほしいと思わざるを得なかった。
疲れている以上はゆっくり休んでほしい、という願いが最も強い理由である。そんな深雪の心情に気付いたのか、エリカが声を掛ける。
「……深雪、達也君なら大丈夫よ。達也くんだと負けるというビジョンが見えないもの」

「……ふふ、そうですね」
その言葉に深雪は気持ちを切り替えて、そのままゴールを目指す。途中で機能が停止したガイノイドを発見するが、演習か何かの残骸だとそのままスルーしたのだった。
達也が16体のパラサイドールの対処に掛かった時間は僅か5分ジャスト。達也自身の技量が上がっていたこともそうだが、対処したパラサイドールの中には『プライム・フォー』と呼ばれる連携行動型のパラサイドールが含まれていなかった。
女子のスティープルチェースは四人の示し合わせにより、深雪が1位、姫梨が2位、由夢が3位、エリカが4位という結果となった。
◇　◇　◇
昼食を挟んで、午後――――スティープルチェース・クロスカントリーの男子の部が行われる。モノリス・コードで出場した選手がエントリーしていない一高に対し、余裕なのかと見られていたのは言うまでもないが、あくまでも魔法技能の喪失や安全面を配慮しての事なので、一々目くじらを立てる必要などなかった。
女子の部が始まる前に見つけた強化型パラサイドールだが、八雲の連絡では昼食中にコース後半部へ配置されたと連絡を受けている。最先行組として走ることになる燈也と修司、レオにその事実を伝えた。
「……幸いなのは、スティープルチェースのコースの視界がかなり限定されることですね。『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』の威力を落とせば、鈍らせることは可能でしょう」
「問題は再封印だが……悠元、いけるのか？」
「そこについては抜かりない。なので、作戦通り最先行するプランに変更はない」
パラサイドールがいる雰囲気を感じ取っているのは、身近にいる人間だと自身を除いてこの三人だけであった。ただ、レオからは一つ疑問が挙がった。
「悠元、本当に俺は三人の後をついていくだけでいいのか？」
「単純な技量を比較すれば、申し訳ないけどレオが一番下になる。な

ので、そこは我慢してほしい」
「ま、その辺は自分でも理解しちまってるからな。異存はねえよ」
　そして、男子の部がスタートした。当初の予定通り最先行する四人。道中にある邪魔なトラップや枝、網などは破壊していくわけだが、悠元は時折木を切っては空中に放り投げていた。方向からするに、三高が走る予定のコースということを察した燈也が冷や汗を流した。
「あの、そんなことしてルール違反にならないんですか？」
「直接攻撃してるわけじゃないし、木を切って飛ばしてはならない、というルールは存在しないからな。それに、間引きをしとけば強い森に成長するわけだし」
「自然のトラップを生み出すという行為なんて誰もやろうとはしないだろうがな」
　事前に運営に問い合わせており、相手選手への直接攻撃に該当する行為でなければ問題はないと回答を貰っている。選手が空中に飛ぶのは反則行為だが、それ以外のものが空中に飛ぶことはルールの範疇にない。予め設置しているトラップを破壊する可能性もあるわけだが、こればかりは自分の責任ではないために無視することとした。
　気が付けばコース半分を過ぎたあたりで、燈也がパラサイドールの接近に気付いて声を掛けてきた。
「悠元、近付いてきます」
「みたいだな……速攻で片を付けるぞ」
「だな」
　燈也は感じる気配目がけて『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』を放ち、次々とくるパラサイドールの動きを鈍らせていく。強化型のパラサイドール――明らかに戦闘用として秘密裏に開発されたガイノイドに対しては、修司が自らの魔法と体術で次々と戦闘不能にしていく。これには何もしていないレオが冷や汗を流すほどであった。
「マジでやることがねえな」
「いや、普通はこんな競技じゃないからな……妨害要素の魔法師の代わりといえば聞こえはいいが」

悠元はレオにそう返しつつも銃形状ＣＡＤを構え、『天神の眼（オシリス・サイト）』でパラサイドールに仕込まれた術式を全て書き換えて再封印を施した。
この術式――――『護法式神（ごほうしきじん）』は天台宗系統の使役術をベースに組み上げた悠元の術式で、以前話したことがある「本山」の術式よりもアップグレードしてしまった代物。悠元には別の封印術式があるため、予め八雲に提供している。
なお、提供された側の言葉としては「ここまでされると僕の立つ瀬がなくなりそうだよ」と述べており、この術式については『伝統派』への漏洩を防ぐ意味で八雲だけが知る形となった。
達也の場合は『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』自体が知覚系魔法で認識されるために直接対決していたが、悠元の場合は『天神の眼（オシリス・サイト）』を『万華鏡（カレイドスコープ）』で直結することによって相手からの感知を無効化している。
なので、相手がこちらを認識して近づく限りは『超能力』といえども万能ではない。この部分はパラサイト事件での領域を超えていない予測だったが、想定の範囲内に収まったのは僥倖といえるだろう。
「さて、これで２４体……まだ増えてないか？」
「減る気配がありませんね」
「マジでどうなってるんだ？」
修司、燈也、そしてレオの呟きを聞いてコース外にまで索敵範囲を広げると、その数に驚愕した。何と……残り３６体。倍プッシュが可愛く見えるレベルである。幸い、まだ稼働のシグナルは検知されていないため、今なら対処は可能。
向こうがそれらのパラサイドールを稼働させる前の一手として、悠元がＣＡＤをその方角に向ける。
「――――永遠に眠ってろ」
悠元はパラサイドールに組み込まれた封印術式を『天照絢爛（てんしょうけんらん）』で消し、即座に『護法式神』で再封印を施した。その上で通信機に『八咫鏡（ヤタノカガミ）』でパラサイドールに組み込まれている周波数の通信先――――九島家が管理している司令塔に向けて、戦略級魔法『オゾンサークル』を発動させる。
流石に殺しはしないが、一時的な昏睡状態に陥るなら痕跡が残らな

い方がいい。残留するオゾンは『分解』で無害化することで解決している。
「……もう疲れるわ、色々と。俺らは体の良い実験台（モルモット）じゃねえんだが……っと、もうゴールか」
「何か、一気に駆け抜けすぎてて忘れてましたね。トラップ関連は修司とレオに任せてましたし」
「レオ、ご苦労さん」
「お、おう……大したことはしてないんだが」
道中、修司がトラップを焼き切ったり、レオが持ち前の硬化魔法で飛んでくるペイント弾を受け流したり、燈也は燈也でロープを強引に引き千切っていた。人は見かけによらない筆頭だと思わざるを得なかった。
結果として男子ティープルチェース・クロスカントリーは悠元が1位、燈也が2位、修司が3位で、レオは4位となった。この辺はお互いの話し合いによるもので、特にレオが「できればエリカと同着にしてくれ。下手に順位を上げると文句が出てきそうだからな」との言葉が原因であった。

◇　◇　◇

無事に総合優勝を勝ち取った一高の面々は後夜祭パーティーで盛り上がっていた。無論、エンジニアとして奮闘していた達也もその注目の一人としてパーティーに参加している。
そんな中、あまり喧騒が好きでなかった悠元は庭で休んでいた。ダンスの時間は色々と大変であったが、この後は一高貸切の祝賀会がある。それまではゆっくり休んでいようかと思っていたところで、少し珍しい来訪者が姿を見せた。
「お、エリカにセリアか……誰か探してるのか？」
「まあね。レオの奴を見なかった？　アイツ、ホテルを抜け出したっぽいのよ……って、セリアに聞いたんだけど」
「丁度玄関を出て行くのは見えたんだけど、祝賀会があるからすぐ戻ってくるようにとは言ったんだよね」
原作とは異なり、レオは一高の代表選手として出場している以上は

祝賀会を欠席することが出来ない。セリアの言葉を聞いてエリカが動いた形だろうが……彼女が焦りを見せている理由はそれだけではなかった。
「実はね、アイツのところにエルンスト・ローゼンが接触していたのよ。良くは見えなかったけど、何かを渡していたのも見えた気がした……で、何処にいるか分かる？」
「連絡を取れば一発だろうが……通信妨害されてるようだな」
エリカの言葉を聞きつつ、通信端末でレオへの通信を試みるが、通信が届かない場所にいるというメッセージが届くだけ。こうなると手段は選んでられないと思い、『天神の眼（オシリス・サイト）』でこの近くで何が起きても問題はない場所――スティープルチェース・クロスカントリーで使用した演習林を起点に捜索する。
「――いた。スティープルチェース・クロスカントリーのコースエリアの丁度中心辺りだな」
「……国防軍の連中は何やってるのよ。てか、アイツもアイツよ！こんな夜中にノコノコ出歩くなんて……何よ、セリア？」
「いやー、エリカも存外レオにぞっこんなんだなって」
「はあっ!? な、何で、アイツ……いいから、とっとと追いかけるわよ！」
セリアの追及めいた言葉に反論しようとしたところで何かを思い出して顔を赤らめつつ、それを見られまいと思って駆け出すエリカを見つつ、悠元とセリアもエリカの後を追いかける。明らかに警備員の数が殆どいない上、本来稼働している筈のセンサー類が全て切られている。こうなると、エルンスト・ローゼンの意向を受けた国防軍の責任もあるだろう、と悠元は溜息を吐きたい気分だった。
「にしてもお兄ちゃん、多分エリカはやっちゃっただろうぺしゅっ!?」
「人の恋路に茶々を入れるんじゃないの。レオが連れ去られない内に追いつくぞ」
「ほいほーい」
エリカが自己加速術式を起動したのを認識すると、悠元とセリアも自己加速術式でエリカの後を追う。

正直なところ、パラサイドールもそうだが国外勢力の連中はいい加減『身の程を弁える』ということを覚えてほしいと思わざるを得なかった。

余所見をすると危険です

レオが一人で演習林を訪れたのは、それこそ祖父譲りの生来の癖もあるわけだが、元継や剛三、更には軽運動部における悠元との鍛錬を通して気配の察知も伸びており、自分に対する目線を把握するのも容易かった。

だが、下手に巻き込めないと判断してレオがホテルよりも遠く、一人きりになりやすい場所としてスティープルチェース・クロスカントリーで使用したコースがいいと判断した。四方約2キロも離れていれば、魔法で無関係の人間を巻き込むリスクも減るだろうという気遣いからくるものだろう。

「……こんなところでいいか。出て来いよ、付いてきてるのは分かってんだよ」

レオの言葉で姿を見せたのは、戦闘用スーツに身を包んだ二人組。体格からすれば女性なのは間違いないが、生憎レオはフェミニストではないし、明らかに友好的ではない相手を殴ったところで咎められる謂れは無いと判断した。

「西城レオンハルト、私達と一緒に来てもらえませんか」

「……訳が分からねえな。その目的の推測は友人から聞いちゃいるが、俺は爺さんの遺伝子の4分の1しか受け継いでねえ。その意味でお前らの目的が達せるとは思えねえよ」

彼らが欲しているのは第一型式（エアステ・アルト）で長く生きたゲオルグ・オストブルグの遺伝子。だが、孫であるレオは自然交配による隔世遺伝でゲオルグ譲りの魔法力を得ただけの存在。ゲオルグの4分の1しか継承していないレオにその役割は〝重い〟とまでは言わずとも、それを含みつつレオが言い放った。

その言葉に、二人組の片割れが言い放つように言葉を発した。

「確かにそうでしょうが、貴方は一年前までそれ程の魔法師ではなかったとも調べが付いています。その源泉はどこにあるのかを知るためにも、貴方には破格の待遇を約束します」

「……俺にダチを売れと言っているのか？」

レオがここまでの強さを得た背景には、悠元が大きく影響している。現代魔法を〝欠陥魔法〟と言いのけてしまうだけの並外れた実力を有する友人を売るにも等しい行為は、レオの中に怒りの炎を灯らせた。
「ほう、貴方の友人がですか……一体何方なのか興味がありますね」
そう言ってヴァールブルク姉妹の片割れであるエマ・ヴァールブルクが指を鳴らすと、周囲には彼女たち以外に14人の戦闘用スーツを着た人物が揃っていた。これにはレオも内心で驚くが、目の前に映る光景は先日の南盾島での一件――「わたつみシリーズ」を助けた時のことを思い起こさせた。
「エマ、少々気を逸らせすぎです……いくら4分の1とはいえ、ローゼン・マギクラフトの調整施設で作られた以上は、その権利をローゼン・マギクラフトが保有しているも同然なのです」
「競走馬みてえなことを言いやがって。俺に何をさせようっていうんだ？　どうせエルンスト・ローゼンの言っていたことのような生易しい事じゃねえんだろう？」
先日のエルンスト・ローゼンとの会談の際、彼からは教導官みたいな扱いを仄めかす様な言葉を述べられたが、パラサイト事件の際にパラサイトの〝声〟を聞いたことで、彼に秘められている〝欲望〟をそれとなく感じてしまった。
別に断る以上は聞く必要もない事だが、レオの直感が時間を稼ぐべきだと判断した上での問いかけ。無論、レオを取り囲んでいるヴァールブルク姉妹たちがそのことに気付くわけもなく、リンダが笑みを零したような声を漏らしつつも、レオに対してハッキリと答えを返すように述べた。
「フフッ、過酷な事なんてありません。まあ、体力的にはきついかも知れませんが、貴方にとってはいいことですよ」
「まさか……」
「そのまさかですよ。貴方には卵子提供者の女性と自然交配してもらい、新たな調整体を生み出すための遺伝子を提供してもらうという訳です」

「要するに……」
「もういい。それ以上は言わなくとも分かったことだしな」
　これ以上聞くと余計なことまで聞きそうになったため、レオはエマの言葉を強引に断ち切るような形で言い放った。明らかにレオが戦闘の構えを取ったことは普通なら悪い印象を与えそうなものだが、ヴァールブルク姉妹からすればまたとない〝好機〟そのものともいえた。
　第一型式（エアステ・アルト）の云わば〝改良型〟と位置付けられているレオ。第三型式（ドリッテ・アルト）で優秀な個体とされているヴァールブルク姉妹からすれば、己の力を示す好機とも言えるだろう。
「ご不満ですか？　なら、最初は彼女にしましょうか。千葉エリカでしたら、きっとお眼鏡に適うと――――」
「もう喋んな！『ドラグーン・ブレス』!!」
　レオがエリカの名を出されたことによる怒りで繰り出した『ドラグーン・ブレス』。リンダとエマが反射的に硬化魔法で防御を試みるが、彼女らが有している完全思考操作型ＣＡＤの処理速度すら上回ったレオの魔法は二人を吹き飛ばした。
　だが、この程度の魔法ならば……とリンダとエマは直ぐに体制を整えてレオと相対した。
「貴方のそのＣＡＤ……なぜ我々のＣＡＤよりも処理速度が速いのですか？」
「教える気はねえよ。こいつをくれたダチとの約束もあるしな」
「……リンダ、彼女らも使って取り押さえましょう」
「そうね、それが――――」
　リンダとエマの使用している完全思考操作型ＣＡＤすら上回ったレオの持つリストバンド型の漆黒のＣＡＤ。その技術を持ち帰るだけでもローゼン・マギクラフトにとっては利益となる。エマの言葉にリンダは頷き、他の包囲している１４体に指示を出そうとしたその時、更なる乱入者が姿を見せた。
「――――人様の国で何我が物顔のように暴れてるんだか。てめえらの脳みそは、ひき肉か蒸かし芋でも詰まってんのか？」

「悠元、気持ちは分かるけど……レオ、無事？」
「見りゃ分かるだろう。って、済まねえ」
「……レオが謝罪したのは意外だね、エリカ」
「それ、あたしの台詞だから」
　レオの背中を守るように姿を見せたのは、悠元とセリア、そしてエリカの姿であった。悠元とセリアの言葉に対してツッコミを入れつつ、レオに声を掛けていた。その姿にヴァールブルク姉妹が睨むような雰囲気を見せていた。
　そんなことを意に介する気すら見せず、懐から『オーディン』を抜いて構えた。
「千葉エリカ、エクセリア・シールズ、それに神楽坂悠元……何故です？」
「その質問は野暮だと思うがな……レオを平気で誘拐しようと目論んだお前らが正論を語れると？　お前らこそ『恥を知れ』だ」
　大体、ゲオルグ・オストブルグの件を建前にしたところで確実に政府レベルが動き出す羽目になる。現にエルンスト・ローゼンの監視役として公安が動いていた以上、日本政府としても事態の把握ぐらいはしているだろう。表沙汰にしていないのはドイツ政府との関係が拗れるのも強く影響しているが。
　いくら世界で有数の魔工メーカーが国外で誘拐沙汰を起こしただけでも国際問題レベルなのに、プレゼン用と偽って戦闘用スーツを密輸入したことも問題なのだ。この国と同盟関係にない新ソ連や大亜連合でも厄介なのに、同盟国であるＵＳＮＡもそうだし、イギリスも面倒極まりない。ここに加えてドイツまで入ってきたとなれば……別に人種で一括りにしたくはないが、かつての白人主義が根強く残っているのかもしれないと思いたくなる。
「レオにエリカ、あの二人は任せる。俺とセリアで残り１４人を抑える」
「……正気ですか？　我々を誰だと思っているのですか？」
「我が国の魔法師――――俺の友人を拉致しようとしたテロリスト集団」

厳密に言ってしまえばスパイみたいなものだが、国防軍の混乱に乗じてこのようなことをしでかした以上は犯罪者の括りに入る。なので、国力を落とそうと目論むテロリストでも別に問題はないと思ったまでのことだ。
悠元のハッキリとした物言いに対し、エリカとセリアは揃って吹き出し、レオに至っては二人を見て若干呆れ顔であった。
この物言いに対し、リンダとエマはプライドを逆撫でされた形となり、叫ぶように指示を飛ばす。
「いけ！　身の程も弁えぬ愚か者どもに我らの優秀さを見せつけてやれ!!」
野暮かもしれないが、その一言が無ければもう少しマシだったのではないか、と悠元は内心で独り言ちた。
それはともかく、レオとエリカは各々リンダとエマに接敵し、残る１４体のヴァールブルク姉妹――固有名称はあるらしいが、敵なので覚えるのが面倒と判断して見ていない――が一斉に襲い掛かり、悠元とセリアは短く言葉を交わす。
「早く済ませないと、女王様が怒るからね」
「……後で爺さんにツケを払わせてやる」
硬化魔法を纏って飛んでくる拳を徐に掴み、悠元は全力で腹部を蹴り飛ばす。弾かれるように飛んでいく一人目は数本の木を薙ぎ倒し、十数本目の幹に衝突してぐったりとした表情で意識が落ちた。
これに怯んだ他の姉妹に対し、セリアはチャンスとばかりに十数個の金属球を取り出した。
「これは護身用だけれど……『ダンシング・スター』！」
本来はダガータイプのＣＡＤを使うのだが、今回は護身用という形で直径がビー玉程度の大きさを持つ合金製の鉄球を魔法で操作し、一度に三人の兵士を薙ぎ倒す。間髪入れずに悠元が魔法を発動させる。
「ぶっ飛べ――『エアライド・バースト』」
悠元の放った三矢家の秘術『エアライド・バースト』によって、六人を一度に吹き飛ばして気絶させた。
本来ならばセリアの『ムスペルスヘイム』で一気に片付けてもいい

が、下手すると大火災になってしまうために、今回は出来る限り対人戦闘を意識した魔法選択となっている。残るは四人となった相手に対し、悠元は『オーディン』を構えた。
「さて、ちょっと変わった空の旅にご招待してやろう。行き先固定――――『無敵砲弾（インビンシブル・カノン）』、発動」
悠元の放った『無敵砲弾（インビンシブル・カノン）』で残る四人だけでなく、先に倒した10人も含めて夜空へ旅立っていった。別に相手を大気圏外に飛ばしてはいないので安心してほしい。まあ、行き先は〝ドイツの大統領官邸の庭〟に設定はしたが、その先の問題はドイツ国内の問題なので関与する気などない。
ここまでにかかった時間はジャスト1分……これにはレオやエリカの二人と対峙しているリンダとエマが信じられないような表情を見せた。その結果、武術訓練をみっちり受けているレオとエリカに隙を見せる形となった。
「……あっ」
「あちゃあ……」
レオの全力の『ドラグーン・ブレス』、エリカの『泰山衝（たいざんしょう）』をまともに受ける形となり、エマは数十メートルにわたって吹き飛ばされ、リンダに至っては地面に減り込む形で埋まっていた。これには悠元とセリアが揃って憐れむような表情を見せていた。
「……ねえ、レオ」
「何だ？」
「今日はレオの部屋に泊まらせなさい。修司と由夢には話してあるし、寝かせないから覚悟してよね？」
「……勘弁してくれ」
エリカはレオとヴァールブルク姉妹のやり取りについて聞いていない。なので、レオを追跡する際に悠元からその辺の事情を聞いていた。そして、ここでも似たようなことがあったのでは……という彼女なりの勘が働き、レオの部屋へ押しかける大胆発言をした。これにはレオも流石に言い返すことは出来ず、せめて穏便に済ませてほしいと懇願するように呟いたのだった。

「悠元にセリア……って、いねえし」
「さ、レオ。とっとと立ちなさい。まずは祝賀会なんだから」
「……あのよ、ダンスを断ったことにまだ怒ってるのか？」
　レオは最初、目立つのが嫌だと言ってエリカの申し出をやんわりと断った。エリカもエルンスト・ローゼンのことが念頭にあったので、それについては納得していた。けれども、恋人としてはレオに男らしくあってほしいと思っている。流石に幼馴染のようなジゴロは勘弁願いたいとも思っているが。
「べっつに？　全然怒ってないんだから……手ぐらい握らせなさいよね」
「へいへい、分かったよエリカ。……どうした？」
「急に名前呼ぶとか反則よ」
「どうすりゃいいんだよ……」
　これまで周囲が男性ばかりの環境で育ってきてはいたものの、可愛い妹みたいな扱いをされてきたエリカからすれば、千葉という色眼鏡で見てこないレオにいつしか惚れてしまっていた。レオから名前で呼ばれたことに本気で頬を赤らめているエリカに対し、レオは疲れたような表情を見せたのだった。
　互いに悪い印象からスタートしたこの関係……恋人繋ぎをしている二人の手はしっかりと握られていたのであった。
◇　◇　◇
　あの場から先に離れていた悠元は、セリアに達也らへの連絡を任せると一人エルンスト・ローゼンが宿泊している部屋に出向いた。滅多にやらない全力の隠形で部屋の中にあっさりと入ってソファーに座ったところで隠形を解除すると、エルンスト・ローゼンは驚愕しており、護衛のボディーガードは悠元に対して追い出そうとするが、エルンストはそれを制した。
「……いつの間にこの部屋へ。それが君の魔法という訳かな、神楽坂悠元君」
「その解釈はどうぞご自由に。さて、私がここに来た理由ですが……レオを誘拐しようとしたことは既に掴んでるんだよ、エルンスト・

ローゼン。ちなみにだが、誘拐しようとした連中は全員ドイツに『送り飛ばした』。魔法装備に関しても接収させて頂いたよ」
「君は、ローゼン・マギクラフトに喧嘩を売るつもりか？」
　エルンストは睨むような素振りを見せたが、悠元は本気の想子制御で一瞬にしてこの部屋を高濃度のサイオンで満たし、護衛を瞬く間に気絶させた。エルンストに対しては若干緩めになるように放ったため、激しい呼吸をするような状態で済んでいた。
「元々喧嘩を売ったのはそっちだろう。大体、うちの爺さんが頑張ってローゼン・マギクラフトが不利にならないよう便宜を図っておいて、この掌返しは目に余る行為だ」
「……今、何と言った？」
「ハッキリ言ってやるよ、エルンスト・ローゼン。俺の母方の祖父は上泉剛三――ゲオルグ・オストブルグとルーカス・ローゼンをこの国に亡命させた張本人で、俺はその孫だ。それに、二人の各々の孫であるレオとエリカは俺の友人だ」
　エルンストは愕然としているが、三矢家と上泉家の繋がりをある程度把握できていたとしても、スポンサーとその提供先という関係以上を見出すのは電子情報だけならば難しいだろう。正直な話、剛三のことを次第に知っていった側としても、エルンストのように驚いたのは言うまでもないが。
　ここで悠元個人を責めれば、確実に剛三まで動くことになる。しかも、運の悪いことに剛三がこのホテルに宿泊しているオマケつきだ。前夜祭の時に挨拶はしなかったが、ちゃっかりＶＩＰ席で観戦はしていた。
「要求は二つ。レオとエリカに対して金輪際関わるな。そして……バスティアン・ローゼンの遺産相続権の速やかな履行を要求する」
「一つ目はまだしも、二つ目はどういうことだ？」
「俺の爺さんがバスティアン・ローゼンから渡された全遺産の約３分の１――その相続権を引き継いだのが俺だからだ。当時、その場にはバスティアン・ローゼンもいて、遺産管理人にも話は伝わっている。ちなみに、引き渡し先は爺さん宛で頼む」

つまるところ、ルーカス・ローゼンの名誉回復を履行しなければ遺産相続の交渉すらしない剛三の要求を呑まざるを得ず、更には剛三と千姫経由でドイツ政府にも今回の顛末は伝えており、ローゼン・マギクラフトはドイツ政府の要求を全て呑まざるを得ない立場に置かれる。

なお、ルーカス・ローゼンの要望でローゼン・マギクラフトで働く従業員やその家族の権利保障はしっかりと根回しをしている。

言いたいことも言い終えたので、そのまま立ち上がって去ろうとしたところでエルンストが尋ねてきた。

「君は……一体何者だね？」

「この国を護る一族――――護人が一角を担う神楽坂家次期当主兼当主代行。それが俺の肩書だ」

敢えて仰々しく言ったが、実際のところはレオやエリカを助けるため――――友人を助けるための方便のようになってしまったのは否定しない。何はともあれ、これで一区切りは出来た形となったことに内心で息を吐きたくなった心境であった。

後は野となれ山となれ

祝賀会では一緒に戻ってきたレオとエリカに対して追及が飛んでいたが、こればかりは彼ら自身の事なので助け舟を出す気もない……と、遠目で見ながら悠元は一息吐いた。

「本当にいいのかな？」

「下手に助けるとこちら迄火傷を負うぞ、幹比古。お前らも味わっていたわけだし」

「まあ、うん……そうだね」

苦笑を浮かべる幹比古の横には顔を真っ赤にして俯いている美月がいた。二人は佐那の後押しで後夜祭のダンスを踊ることとなり、踊り終えた後で各々追及されていた。この辺を楽しんでいるあたり、佐那も父親譲りの性格をしているのかもしれない。

国防陸軍の対大亜連合強硬派の中心人物であり、今回の九校戦の競技変更を推し進めた酒井大佐を始め、一派の中心人物は軒並み拘束された。その拘束に動いたのは他ならぬ剛三であり、作業車でピクシーと水波を守り切った上で駆け付けた警備員を黙らせ、その足で酒井大佐らのグループすら抑え込んだ形だ。これだけ精力的に活動したとしても、本人からすれば「準備運動程度」と片付けられることでしかないわけだが。

外敵を早急に排除したいという思想は一定の理解を示すが、仮に大亜連合の力が弱まれば今度は新ソ連が出張ってきかねない。下手をすれば、この国と新ソ連の軍事衝突が発端となって四度目の世界大戦が起こる可能性もあるのだ。

九島家をはじめとした「九」の家に対しては佐伯と風間が動く手筈となっていて、今頃はその辺の話し合いもしていることだろう。『元老院』の考え方自体は理解できなくもないが、この国が国家の体を成すために必要とされるものは大国と比べて遥かに大きい。

その辺のことは千姫や剛三も理解していることなので、まだ救いはあるだろうと考えている。

「悠元にも言えることだよね。次の会頭になってほしいとお願いされ

たわけだし」
「それを決めるのは生徒の選挙だけれどな。お前も人のことは言えないと思うぞ」
服部からは次の部活連会頭として悠元を指名した。とはいえ、ＣＡＤ携行の関係で生徒会選挙を挟む形になるために決定事項とは言えないものの、昨年度の生徒会選挙で無効票ながらも全校生徒の約３分の１を得票している以上、ほぼ内定していることに関して悠元は内心で溜息を吐きたかった。
更には、二科生から一科生へと上がったことで注目されている幹比古も次期風紀委員長の呼び声が高い。同じぐらいの評価を雫も得ているが、その雫は委員長という面倒な仕事を抱えたくないという理由で幹比古に押し付けようと画策している。
前人未到の四連覇という偉業からくる喧騒を見つつ、この喜びも一時的なものに過ぎないことを悠元は誰よりも強く感じていたのだった。

◇　◇　◇

西暦２０９６年８月１６日。中華街の一角を襲っている黒づくめの集団を『霊亀』で感じ取っていた悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』をそちらに向けていた。なお、今悠元がいる場所は箱根の神楽坂家本屋敷の私室からだった。
（黒羽の部隊で、追いつめている対象は周公瑾……『元老院』の差し金の可能性が高いな）
そもそも、彼の危険性を考慮するならば『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』や『ブランシュ』、横浜事変の折に排除しても不思議ではなかった。パラサイト事件のことも然りである。そうなると、今回の事件の裏にも周公瑾が大いに関係している証左だろう。
単にパラサイドールを暴走させる術式を持たせた方術士を送り込んだ罪だけで動くわけもなく、周公瑾自身の正体に気付いてようやく動いた……その辺の因果関係は既に神楽坂家で把握していることだが。
最初は加勢も考えたのだが、神楽坂家の試しの儀である『月夜見（つきよみ）の

儀』が近いこともあり、自室での待機を命じられた。現場には達也と文弥が向かっており、相手が卓越した方術使いと言えども後れを取ることはないだろう。

万が一を考えて遠隔からの魔法発動ということですぐ傍に『ワルキューレ』と『オーディン』を置いているが、『霊亀』から流れ込んでくる映像情報で周公瑾が化成術『哮天犬（シャオビエンチェン）』で黒羽貢（くろばみつぐ）の右腕を引き千切り、その隙に逃げ果せた。

認識している以上は魔法を使うことも出来たが、ここで周公瑾に退場されては困るためにその行使はしなかった。引き千切られた貢の腕は駆け付けた達也が『再成』で瞬時に治していた。

これで一つの顛末を迎えたと判断して『天神の眼（オシリス・サイト）』の発動を止めると、扉の向こうから声が聞こえてきた。少なくとも聞き覚えのない声だな、と思いつつも悠元は立ち上がった。

「若殿、奥様がお呼びでございます」

「分かりました……聞いてはいましたが、何をやってるんですか」

悠元が扉を開けた瞬間、思わず目を見開いてからジト目に変わった。何故ならば、そこには使用人が袖を通す着物（温泉旅館の従業員が身に着ける様な軽装とも言えるが）に身を包んでいて、正座している深夜の姿があった。

そして、それを微笑ましそうに見ているカジュアルな姿の千姫がその背後にいた。

「勿論、若殿の御世話役ですから」

「……とりあえず、部屋の中に入ってください。それと母上も」

「そうね、流石に部屋の外だと風邪を引いてしまいますから」

この屋敷に入る際は姿を見せなかったわけだが、千姫の説明では次期当主となる悠元の世話役として深夜を宛がうことにした。いくら現状がシングルマザーみたいな状態とはいえ、婚約者序列第一位となっている深雪の母親を使用人として迎えるのは常軌を逸しているとしか思えなかった。

部屋に備え付けられた炬燵に入ったところで千姫が話を切り出した。

「悠君なのですが、儀に関しては免除としたく思います」
「……理由をお尋ねしても？」
「『天照（アマテラス）』もそうですが、『月読（ツクヨミ）』の単独正式発動は現状だと悠君にしかできない所業です。この状態で力試しをしたところで他の参加者の心を折りかねませんから」
　ただ、要らぬやっかみを考慮して自室で待機するように命じられた、というわけだ。今頃は修司や由夢が儀式に向けての準備を進めていることだろう。その上で悠元はここにいる深夜についての質問を投げかけた。
「それは了解しましたが、深夜さんがいる前で話していいので？」
「深夜ちゃんは悠君の専属使用人にしますので、少しでも悠君のことを知ってもらうには丁度良いと判断したのです。勿論、深夜ちゃんをどう扱っても悠君の自由ですよ」
「どう扱っても、って……」
「性的なものも含みますね。所謂愛人ポジションよ」
　アッサリと言いのけてしまう性根の強さはさておくとしても、政略結婚した元夫が愛人と結婚したことを引き摺っていないのは確かだろうが、婚約者ではなく愛人ポジションで深夜が納得したことには驚きを禁じ得なかった。
　これに関しては深夜がこう説明した。
「私は表向きに見ればバツイチの子持ちだし、深雪の機嫌を損ねたくないもの。私は悠元君の寵愛を受けれれば文句はないし、お世話をしてあげたいって気持ちは本当だから。望むなら、いくらでも抱いていいのですよ？」
「……」
　ある程度の説明を終えると、千姫は「お二人でごゆっくり」と言いのけてその場を去った。しかし、外見は２０歳代半ばぐらいとはいえ、実年齢は生まれの母である詩歩とほぼ同い年……それに、恋人もとい婚約者の母親を抱くというのは道徳的にどうなのかと悩んだ訳だが、そんな悩みは深夜が徐に立ち上がり、身に着けていたものをその場で脱ぎ捨てたことでその思考が綺麗に拭き取んだ。

「あの、何やってるのですか？」
「若殿……私じゃご不満でしょうか？」
　ある程度の自制は出来ていても、若さを保っている魅力的な身体に一人の男性として諍えるはずもなく……何かのスイッチが入ったように立ち上がると、そのまま深夜を押し倒したのだった。
「そうやって誘惑する以上、覚悟してもらいますからね？」
「はい。お好きなようになさってください、〝ご主人様〟」
『据え膳喰わぬは男の恥』と言い訳するつもりはないわけだが、そうやって挑発する以上は何をされても文句は言えないという意味を込めて、気の向くままに彼女を抱いた。
　九校戦の時は何とか深雪の魅力に負けないように頑張っていたのだが、気が付かない間にストレスを溜めていたのかもしれない。何度も言っているが、それでも最後の一線だけは死守している。
　そして、翌朝……悠元は一つ息を吐いて目の前に映る光景を見ていた。
「……自分の責任なのは自覚するが、深雪は積極的だな」
「だって、九校戦の時はしてくれませんでしたから」
　詳細を話すと、深夜との〝夜間戦闘〟の折に自室へ入ってきた深雪と沓子がそれを見て負けじと乱入する形となり、何が起きたのかを語りたくても語れない『あられもない有様』へとなってしまった。
　悠元の両端には一応布団を掛けて深い眠りに就いている沓子と深夜がいて、布団を掛けて仰向けに寝ている悠元に覆いかぶさる形で深雪が身体を密着させている。ようは悠元と掛布団の間に深雪がいるわけだが、この時点で何をしているのかは察してほしい。
「お互い競技がある以上は仕方ないでしょうに……怒らないのか？」
「お母様が悠元さんに向けている感情は気付いていました。でも、一番は絶対に譲りませんから」
　正直な話、どこまで耐久出来るのかと考えたことはある。だが、相手を肉体的にも精神的にも壊してしまう可能性があるため、無茶はさせない様に心掛けている。精魂が尽き果てるという感覚を味わうどころか、更に増している有様には……強靭となっている自分の身体に

対して盛大な溜息を吐きたかった。
別に魔法師として強くなる分には構わないが、前世のことも考えると相当抑え込まれていた欲が転生したことで吐き出されているのかもしれない。こうやって他人事のように話せるのはある意味達観しているからなのかもしれないが。
「序列に関しては俺が触れていい領分じゃないからな。そこに納得しているのなら口を出す必要もないし……どうした、深雪？」
「だからこそ、私も含めて色んな女性から好かれるんですよ」
「意味が分からん」
別に女性たちの好感度を稼ごうとして目立っているわけではない。単に魔法師としての実力を〝魅せる〟という意味合いで目立っているだけだし、「クリムゾン・プリンス」に関しては完全に前世の兄の面影が見えてしまっているため、それにムカついてボコボコに負かしただけだ。
深雪からすれば、そういう行動だけでも悠元への好感度がストップ高となってしまうわけだが。
なお、沓子と深夜に関しては腰が抜けてしまい、結局は自分が治すことによって二人の好感度が更に上がってしまうこととなった。沓子曰く「愛梨に知られたら嫉妬で殺されそうじゃ」とのことらしいが……昨年の後夜祭で見せた嫉妬の様子からして冗談で済まなくなるので止めてほしい。
◇　◇　◇
そんな出来事の後、中華街での手助けを終えた達也を労う形で悠元が神楽坂家本屋敷の自室に招いた。使用人もとい深夜が出してくれた玉露と茶菓子に手を付けつつ、悠元が話し始めた。
「すまないな、達也。本来なら俺も手助けするべきだったんだろうが」
「いや、悠元の場合はパラサイドールに加えてローゼン・マギクラフトのこともあった訳だからな。この場合はお互い様だろう」
「そういうことにしておこうか」
ローゼン家絡みについてだが、バスティアン・ローゼンの遺言に基づきルーカス・ローゼンの名誉回復がドイツ政府の指示で成された。

悠元が飛ばしたヴァールブルク姉妹の存在をドイツの国家元首が知り、更には千姫が直接ドイツにいる『十三使徒』ことカーラ・シュミットへその詳細を伝え、忽ちドイツ政府の知るところとなった。
　ルーカス・ローゼンの願いを聞き遂げるという意味でドイツ政府がローゼン・マギクラフトに対して従業員及びその家族に対しての雇用保障をサインさせ、更には当面日本を含めた東アジア方面への事業拡大策を禁じた。
「しかし、エリカのことは幹比古から聞いていたが、レオもその一人だったとは。春休みの一件で難しい表情をしていたのも頷ける」
「おや、達也は聞いてなかったのか？」
「迂闊に踏み込んでいい話題でもなかったからな。とりわけ四葉（うち）の事情は悠元も知っているだろう？」
「まあな」
　日本支社長であるエルンスト・ローゼンは支社長職を留任。だが、今回の事態は日独間の国際問題へと発展しかねない案件の為、ローゼン家の次期当主候補から外された。それでもローゼンの名を名乗り続けることは許されたあたり、身内に甘い裁定となったのは確かだろう。
　演習林での戦闘データはヴァールブルク姉妹の記憶から完全に消し去っており、レオやエリカの持っている並行思考操作型ＣＡＤのことは秘匿されたままとなった。
「パラサイトも面倒だが、国防軍も相当だわ……国外もそうなんだろうが」
「今日は何時になく辛辣だな」
「達也が来る前に九島烈と会っていたからな。深夜さんの姿を見て驚愕していたが」
「母上のことは俺ですら驚きを禁じ得なかった」
　エルンスト・ローゼンの遺産引継ぎは無事に済み、放棄していたアンナ・ローゼン＝鹿取の遺産相続分の倍額に相当する金額をドイツ政府が〝慰謝料〟としてエリカとレオに支払った。二人は固辞しようとしたが、その引き渡しの代理人が剛三ということもあって断るに断

れなかったのだ。
　烈との会談は３０分程度のものだったが、彼の表情はどこか肩の荷が下りたような面持ちであった。だが、悠元は彼に鞭を打つような形でこう告げた。
『ならば、光宣（みのる）が誇れるような九島の在り方ができるよう、残りの人生を全て賭してでも成し遂げてください』
「――とまあ、こんなところだろうな。もう少し普通の高校生らしい休みが欲しくなるわ」
「……悪いんだが、悠元。そうも言ってられなさそうだ」
「何かあったのか？」
　達也がそう言って差し出したのは一枚のデータカード。悠元は折りたたみ型端末をテーブルの上に置いてカードを差し込み、データをつぶさに確認していく。一通り見終えたところで悠元は深い溜息を吐いた。
「『進人類（しんじんるい）フロント』による東京オフショアタワー爆破計画……これをどこで？」
「中華街で周公瑾のアジトに乗り込んだ際、文弥が残っていた端末から見つけたものだ」
　最初は周公瑾の潜伏先を探るために端末を弄っていたのだろうが、そこから出てきたのは魔法師を新たな人類として主張する過激派の一つが超高層建築物（ハイパービルディング）を破壊しようと目論んでいること。
　東京オフショアタワーは高さ２０００メートルという破格的な高さを有し、旧港区の人工島である〝お台場〟に建築された。四つの大陸プレートにより頻発する地震対策として、振動を吸収するための耐震装置だけでなく、ＦＬＴで開発されたジャイロドライブシャフトが常時回転することにより、高層建築物が影響を受けやすい風の対策も万全となっている。
「タワー爆破ってバカだろ……このタワーが万が一崩れたら、落下物による津波の被害が下手すると東京湾全域にまで波及しかねないんだぞ」
　万が一電力供給が止まった場合は地下３５階で待機している魔法

師によってシャフトを回転させることで対応することになっているが、彼らからすればそれが許せないのだろう。無論、危険が伴う仕事なので危険手当も含めればかなり高額な報酬が支払われる。それに目を瞑って実行するとなれば、単純に馬鹿としか言いようがない。

津波の被害が起きた場合、近くに存在する東京湾海上国際空港が最も被害を受けることになる。最低でも数週間から1ヶ月は通常運行が不可能となり、その損害額は計り知れなくなる。下手をすればこの国の国際信用度にも関わってくる話だ。

尤も、こちらから喧嘩を吹っかけてこなかったとしても、魔法という一要素で喧嘩を吹っかけてきている国外勢力とか国家とかもいるわけだが。

タワーのプレオープンを記念してパーティーが開かれることとなっており、悠元もビジネスネームである『神坂佑都』として招かれている。尚、このパーティーには雫とほのかが参加する手筈となっていて、深雪と水波も同席する予定だ。ちなみに達也はパーティーに参加せず、テロ工作の対策として黒羽姉弟の手伝いをすることとなっている（本人曰く「目立つのは嫌いだからな」とのこと）。

原作にない流れと展開に、正直なところ考えられるだけの対策は立てているが、あとはなるようにしかならないだろう。

一方的な論理の押しつけ

都内の高級ホテル――――実態は四葉家が経営している系列のホテル――――の一部屋にて、四高1年の黒羽文弥（くろばふみや）はソファーに座りながらタブレット型端末と睨めっこしていた。

画面には東京オフショアタワーの公式サイトが表示されており、その情報を頭の中へと叩き込むように見ていると、文弥の後ろから扉が開く音が聞こえ、姿を見せたのは文弥の双子の姉である黒羽亜夜子（くろばあやこ）であった。

（姉さんってば……）

声には出さないものの、文弥は正直目のやり場に困る心境を少し抱いていた。というのも、髪はタオルを巻いて結っているが、真紅のキャミソールと紫のガウンを身に着けただけだ。流石に双子の姉なので異性として見ることは出来ないものの、亜夜子の今の姿を見てドギマギでもすれば、それをネタにして姉がからかうのは目に見えていたため、その気を逸らす様に問いかけた。

「任務は明日の夕方からだっけ」

「そうね、17時ごろから張っていれば問題はないんじゃないかしら……もしかして、周公瑾のことが気に掛かるの？」

「そりゃ、そうだよ……父さんですら手を焼くような相手なんだ。達也兄さんがいなかったら、今頃父さんは右腕を失ったままだったんだから」

今回の襲撃計画を知ったのは文弥の功績だが、周公瑾の追跡ではなく東京オフショアタワーの工作員の身柄取り押さえを命じられたとき、やや不満げであった。亜夜子は話を聞いただけだったが、どこか納得がいかなかった様子の父親と弟の姿を見て、思わず首を傾げたほどだ。

いくら文弥でも、父親である貢の実力はしっかりと把握している。その彼ですら手古摺る相手に自分が敵うとは思っていない。なので、周公瑾の追跡は貢がそのまま行うことに異存は無かった。

「文弥。私たちに与えられた今回の任務はテロ工作員の身柄取り押さ

え、『進人類フロント』の本拠地と資金源を突き止めることよ。今回は達也さんも手伝ってくれるそうだから、せめて達也さんの負担を減らす様に私たちが頑張らないと」
「分かってるよ」
亜夜子の達也に対する好意は文弥でも理解している。深雪が悠元に対する好意を抱き始めた頃から、お互いの想い人と結ばれるための相互努力として亜夜子は深雪と親密な関係を築いていた。
加えて、四葉の裏家業絡みで悠元を知ることになった亜夜子は深雪の初恋と自分の初恋を成就させる意味でも悠元と仲良くなっていた。彼の固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』と亜夜子の特異魔法『極致拡散（きょくちかくさん）』は周囲のサイオン平均分布を制御する意味で似通っており、亜夜子にとっては達也と同じぐらい悠元も尊敬に値する人物である。
無論、達也に向ける感情と悠元に向ける感情は完全に別物であるが。
「ホントに？　ホントのホント？」
「それぐらいは弁えてるよ……（姉さんってば、達也兄さんが関わると我儘になるんだから）」
目線を合わせない様にタブレット型端末で顔を隠す様に呟いた文弥の言葉を聞き、亜夜子は思わずクスッと笑みを零したのだった。

◇　◇　◇

――東京オフショアタワー。
東京タワー、東京スカイツリーに続く都心のシンボルとして建造され、高層ビルなどの遮蔽物による通信障害を考慮した次世代型通信規格――今まで建てられた二つのタワーの役目を受け継ぐこの国の象徴となるべく超高層建築物（ハイパービルディング）。地上３６０階、地下３６階で構成されており、最上階のレストランであるスカイラウンジは標高約２０００メートルに達する。
「悠元も招待状が来ていたなんて知らなかったよ」
「まあ、今の実家の絡みでな。深雪と水波はその付き添いだが」
ドレス姿の雫とほのか、深雪に水波。そして悠元は『神将会』で身に着けているフォーマルなスーツ姿で出席している。正直、こういっ

たお祝い事のパーティーは前世でも今世でもあまり好きではないが、今回はそうも言っていられない事情がある。
「達也さんは、今回出席していないんですね」
「仕方がないわよ、ほのか。今回はプレオープンのパーティーですもの。それこそ財界や著名人が集まるぐらいよ……今度、お兄様とデートできるように図らってあげるわね」
「い、いいよ深雪！　そこまでしてもらわなくても！」
ご機嫌な深雪はほのかをからかうように述べ、ほのかは顔を真っ赤にして深雪に詰め寄っていた。原作だとライバル関係みたいな二人だが、深雪の恋愛感情の矛先が変わったことで良い友人関係を築いていた。
「水波、大丈夫か？」
「あ、はい。正直なところ、このようなドレスまで仕立てていただいて……」
いくらガーディアンとはいえ、深雪に釣り合う様な格好をするべきという千姫と深夜の共謀により、かなり値の張るオーダーメイドのドレスを仕立てられていた。そのデザイナーは神楽坂家お抱えで、世界的に著名な人物だったことは驚きという他ないが。
参考程度に値段を聞いたところ、軽く見積もっても7桁という値段に水波が恐縮したのはここだけの話。
「悠元さんも大変ですね。さっきまで色んな人に声を掛けられていましたし」
「九校戦の有名税もあるだろうけれどな……悪いけど、少し席を外すよ」
すると、悠元の視界に見覚えのある人物が目に映り、四人に断りを入れてその場を離れた。深雪もついていきそうな表情を浮かべていたが、その人物――四葉家の筆頭執事である葉山忠教（はやまただのり）と深雪が公の場で接触するのは拙いと視線で語り掛け、深雪も渋々納得した。
悠元が近付くと葉山も悠元の姿に気付き、軽く会釈をした。
「これは悠元殿。見るに深雪様もおられるようですが……このパーティーに招待されたのですかな？」

「ええ。彼女をここに連れてくるのは今の段階で好ましくないと思いまして……葉山さんは、真夜さんの御意向を汲んでこちらに？」
「そのようなものと認識していただければ幸いです。達也殿から詳細は聞き及んでいることでしょうが、もしもの場合の対処をお願いせねばならなくなるかと思われます」
　高層建築物を倒壊させる場合、一番簡単なのは土台を爆破してしまうこと。もしくは安定材料となっている柱の電力供給を止め、自然災害の力によって傾かせること。後者については宝くじが当たるぐらいの豪運がないと無理だし、前者の場合は少なくない魔法師が犠牲となりかねない。
「何も起こらない方が一番望ましいですが……心に留めておきます。深雪のことは必ず守りますのでご心配なく」
「とても頼もしいお言葉を聞けて何よりです。それでは、私はこれにて」
　その場を去っていく葉山の姿を見つめつつ、悠元は少し考え込んだ後、深雪たちの元へと戻った。簡単に「知己と会っていた」とは返しておいたが、葉山のことを知っている深雪と水波は後で事情を聞こうとしている様子に悠元は内心で溜息を吐いた。

◇　◇　◇

　本来ならば、深雪のガーディアンである達也がパーティーに同席するのが筋だろうが、達也の『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』のリソースを割いている以上は問題ないし、深雪の傍に悠元がいる以上は自分の出る幕もない。ほのかのことも聞いてはいるが、雫がいる以上は何とかなるだろうと判断していた。
　尤も、最大の理由は「目立ちたくない」という達也のある意味我儘のような言葉に集約され、それを聞いた深雪が思わず笑みを零したほどだった。
　電力供給ケーブルに繋がる採掘抗への入り口。その近くの茂みに隠れているライディングスーツ姿の達也は『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』で近付いてくる電力会社の作業服を身に纏っている二名の男性を視界に捕らえた。

（――『進人類フロント』の構成員か。恐らく、電力遮断を目論んでの行動だろうが）
「達也兄さん、彼らは？」
その達也の横には女装している文弥の姿があった。
先日の九校戦で一躍有名になってしまったからこそ、その必要性は文弥自身も理解しているが納得はしていなかった。元々母親譲りの顔立ちのせいもあってか、達也のように男らしくありたいと思っている……実に男の子らしい理由の話はさておき、文弥の問いかけに達也が小声で出来る限り短く答えた。
「間違いなく『進人類フロント』の構成員だろう……背後にも二人いるようだな。どうやら、こちらの存在には気付いているようだ」
「――なら、私の出番ですね」
すると、僅かに揺らいだ風と共に亜夜子が姿を見せた。亜夜子の『疑似瞬間移動』に対して達也は感心するように見ていて、文弥は思わず大声が出そうになって慌てて自分の手で口を塞いで事なきを得た。
「お、驚かさないでよ……」
「ふふっ……えいっ！　ご・め・ん・な・さ・い」
「ちょ、離れてよ姉さんっ……！」
亜夜子の耳元で囁くような声と吐息で思わずくすぐったさを覚えてしまう文弥だったが、流石に双子の姉に欲情するような倫理観は持ち合わせてはおらず、引き離す様に亜夜子から離れた。
「ごめん、ごめん……って、達也さんもごめんなさい」
「それは構わないが、手早く片付けるべきだろう」
「そうだね。姉さん、僕を後方に。達也兄さんは建物の中にいる連中をお願いします」
手早く役割分担を決め、文弥がナックルダスター型ＣＡＤを装着する。
「それじゃ、行くわよ」
亜夜子が達也から予め渡されていたＦＬＴ製の思考操作型ＣＡＤを用いて手首に身に着けたＣＡＤを操作し、『疑似瞬間移動』で文弥を後方に飛ばす。文弥は間髪入れずに『ダイレクト・ペイン』で工作員

を素早く気絶させた。
後方から聞こえてくる悲鳴に目をくれることもなく、達也は建物の中にいる工作員を『精霊の眼(エレメンタル・サイト)』で捉えると、『分解』で四肢の付け根を穿って痛覚による意識のシャットダウンで黙らせた。その痕跡は『再成』で治したのは言うまでもない。
「流石、お仕事が早いですね」
「文弥ほどではないがな。……敵影は無いな。彼らの拘束と回収は任せてもいいか？」
「はい。ありがとうございます、達也さん。このお礼は必ずしますので」
「……お手柔らかに頼む」
ほのかとリーナもそうだが、亜夜子が達也に向けている好意のことは深雪からの説教のこともあって理解していた。先に挙げた二人に追随しているスタイルの良さからして冗談で済むようなことにはならないと思いつつ、達也は亜夜子の感謝の言葉にそう返すしかできなかったのであった。

◇　◇　◇

(魔法の発動兆候……達也に文弥、亜夜子ちゃんもいるか)
悠元は達也らの姿を『天神の眼(オシリス・サイト)』と『万華鏡(カレイドスコープ)』で視認していた。工作員は既に拘束されており、手際の良さは一級品と呼べるだろう。どうやら、達也は他に周辺の敵意が無いかを探っているのが感じ取れた。
すると、深雪が思念による会話で悠元に問いかけてきた。
(悠元さん、先程の魔法はお兄様たちですか？)
(ああ。『進人類フロント』という名称は聞いたことがあると思うが、その連中を取り押さえたらしい……だが、油断はしない方がいい)
『進人類フロント』の構成員には〝数字落ち(エクストラ)〟が含まれている。その詳細を入念に調べたところ、岬寛(みさきひろし)――――恐らくは「三」の数字(ナンバー)を冠していた三咲(みさき)家の人間の可能性が高いだろう。
原作だと「一」の一花家(現在の市原家)、それと「七」の七倉家(名倉家)の二つまでは把握していた。元三矢の人間であるため、第三研

で数字を剥奪された三咲家と三宅(みやけ)家のことは知識として知っているわけだが、ここで関わってくるとは思いもしなかった。
ここで気になるのは、三矢の家を出た自分が他の魔法師からどういった印象を抱かれているのか、という疑問だ。
神楽坂家の詳細を知っているのは魔法師社会でも一握りであり、神楽坂家の由来を知っている古式魔法の界隈ならばまだしも、十師族や師補十八家、百家の一部を除く現代魔法の界隈となると〝数字落ち〟の憂き目に遭った……と解釈できなくもない。
現に、夏休み後に魔法科高校の同級生からそういう風に軽く見られることがあったので、その認識が他の魔法師にも波及している可能性は十二分にあるという訳だ。
(もしかして、彼らはこのタワーを狙っているのですか?)
(今回のパーティーにＶＩＰクラスとも言うべき存在はいるが……背負うリスクが大きすぎると思う。彼らだってそのことは分かっているなんだがな)
このパーティーには雫の家族も参加していて、その意味では彼らも救助対象となるだろう。そうやって深雪と話している念話はフロアの照明が落ちて非常電源に切り替わったことで現実のものとなった。
「停電ですか?」
「いや、原因はあれだな」
悠元が見上げた先にはこのタワーを支えている筈のシャフトへの電力供給が停止したことの表示がモニターに出ており、招待客は何事かと慌てていた。だが、悠元は通信端末を取り出して素早く操作をしていた。
(……管理者コードでアクセス、全シャフトの非常用稼働を開始。同時に管理センターと電源管理室からの稼働状態を改竄……元々地震や津波による電源喪失状態を想定しての非常用システムが生きるとはな)
悠元が独自に設計したジャイロドライブシャフトは、仮に地下を通る電力ケーブルでの供給が止まってもシャフトの両端にある超高電圧対応次世代型蓄電池で非常時の稼働制御を行っており、最長で７２

時間の無電力供給に耐えられるように設計されている。
悠元は設計者の権限としてシステムに残していた管理者コードを使い、シャフトの非常用システムを稼働させた。この非常用システムは地下１階の管理センターと地下３４階の電源管理室が機能不全となった際に特殊コードで稼働させるシステムなため、管理センターと電源管理室でも制御が出来ない様になっている。この発想は前世で知った大地震による発電所の電源喪失状態から考え付いたものだが、こんな形で活用する羽目になるとは思いもしなかった。
そんな風に思っていたところで、モニターの一つが切り替わってガスマスクを身に着けた集団が映っていた。正直な感想として、その恰好を見れば「私たちはテロリストです」と吹聴しているようにしか見えないのは自分だけなのだろうか。
『我々は魔法師の権利回復を目指す団体「進人類フロント」です。我々は皆さんに危害を加えるつもりはありません。ただ今日、ここで起きることの証人になって欲しいだけです』
「つもりはない、か……管理センターが占拠されたのは事実だろうな」
「そんな……」
しかも、彼らは〝証人〟と言っているが、場合によってはこのフロアにいる人間が〝人質〟という言い方も出来なくはない。
『このビルでは、魔法師が地下深くで〝奴隷労働〟を強いられています』
「奴隷……ねえ」
『しかも、地下３５階で災害発生時に逃げることも許されない仕事。もしもの時は生き埋めになれと言っているも同然です！　魔法師の権利回復を目指す者として、文明社会に生きる者として、このような前時代的人柱を許容することなど出来ません！』
ここで働く魔法師の報酬は一般的な魔法師よりも高く、下手すれば軍人魔法師にも匹敵する。しかも、タワーで働く魔法師は日本魔法協会による〝斡旋〟や〝紹介〟によるものであり、強制された事例は何一つとして存在していない。
そして、このタワーは災害発生時に隔壁が作動してシェルターとな

り、魔法師の待機所となっている地下３５階は頑丈な素材による耐震・耐高水圧設計で生き埋めとなるような状況は避けられるように設計されている。
『抗議の証として、このタワーを1時間後に爆破します。そこにいる皆さんは速やかに避難してください。――――但し、我々の妨害をすれば即刻このタワーを爆破します。大勢の犠牲を出すのは我々も本意ではありません。皆さんが賢明な判断のもと、歴史の証人になることを望みます』
『進人類フロント』による声明を聞き、倒れ込む客もいる中、雫とほのかは心配そうな表情を向けてきた。向けられた側の悠元はというと、表情には出さないものの憤っていた。これが同じ「三」の人間が言うべき台詞なのかと……。
「――――どいつもこいつも余計な仕事ばかり増やしやがって。尻拭いをする立場にでもなってみろってんだ」
彼らは理解していない。東京オフショアタワーの設計には上泉家系列と神楽坂家系列の企業が関わっているのだ。つまるところ、このタワーを襲撃しようとした時点で『進人類フロント』の行く先が決定した形だ。
更に、その構成員の中に第三研の数字落ち（エクストラ）がいたことで、後始末も兼ねる形で三矢家も動くことが決定してしまった。元三矢の人間としても、神楽坂家の人間としても……悠元が動く理由が出来てしまった形となったのだ。
パラサイドールで九島と国防軍にドイツ関連と面倒事を片付けたところで今度は元実家絡みの案件という有様に、悠元から思わず漏れ出た台詞に対して周囲の人間は苦笑を滲ませていたのだった。

タワー一つ直せずして世界相手に戦えない

『進人類フロント』による爆破予告の映像が切れた後、東京オフショアタワーのスカイラウンジは瞬く間に騒めきへと変わった。海抜２０００メートルという高所に閉じ込められた状態なので、我先に逃げ出そうとする人も多い。この場にいる参加者の大半が非魔法師なので致し方ないだろう。

「……仕方ないか」

この場にいるタワーの警備員の負担を減らすため、悠元は『流星雪景色（ミーティア・スノーライト）』に情動干渉系魔法『梓弓（あずさゆみ）』の効果を乗せてこの場にいる参加者全員に放つ。魔法が放たれた後、先程までのパニックが嘘のように消え、警備員の声が通るようになったお陰で綺麗に列を成していた。

それを見届けつつ、悠元はほのかにデバイスを差し出した。

「悠元さん、これは？」

「飛行デバイスだよ。ただ、緊急時に使うものだと考えてほしい。雫は自前のものがあるし、俺らは自分用に調整したものを持っているから安心してくれ」

ほのかは自前の飛行デバイスを持っていないが、内蔵されている起動式は達也がほのか用に調整済みのもの。ちゃんとしたものは後日達也が渡すとのことだが、まずはこの状況を切り抜けるのが先。雫は家族のこともあるので、ほのかに同行するよう言い含めている。

「悠元に深雪、水波。気を付けて」

「その、無理はしないでくださいね」

これから何をするのかという察し方をされていたが、必要以上のことを聞かずに去っていく二人の後ろ姿を見届けると、葉山の姿を視界に一瞬入れてから深雪と水波のほうを向いた。

「深雪、水波。俺らも行こうか」

「はい」

「分かりました」

三人は葉山に近寄り、悠元が率先して声を掛けた。

「葉山さん。今回の状況をどこまで把握されていますか？」
「悠元様や達也殿とほぼ同じ程度のものです。タワーの爆破を回避できれば、それに越したことはございませんが……」
「それは、『あの方々』も同様と捉えて宜しいですか？」
　正直なところ、『元老院』が何らかの保険を四葉家に掛けているのは予想していたが、葉山がその『元老院』のエージェントを兼ねているのは息子の忠成から聞かされるまで知らなかったことだ。
　悠元の発言に深雪は訝しむがそれ以上のことは聞けず、葉山はその問いかけに対して頷く形で肯定の意を示した。その上で葉山は悠元にお願いをした。
「悠元殿。本来ならば神楽坂家の貴方様に出張って頂くことではございませぬが、どうかお願いできますでしょうか？」
「事態は急を要する以上、ここで見て見ぬふりは出来ないでしょう。そのお願い、引き受けさせていただきます」
「分かりました。水波、深雪様と悠元殿をしっかりとお守りするように。それが奥様からの伝言です」
「は、はい！　承りました！」
　伝えるべきこと伝えた上で離れていく葉山。テロリストもとい進人類フロントのリーダーは〝1時間〟と言っていたが、そんなに悠長な暇を与えてくれるとはとても思えない。ともあれ、地下1階の管理センターに向かう必要がある。
「悠元さん、どうやって下に向かうのですか？　エレベーターでとは言いませんよね？」
「それこそまさか。一番手っ取り早い方法を使うまでだよ」
　悠元ら三人が向かった先はタワーの外壁部のすぐ内側。悠元は持っていた『オーディン』で外壁に向かって魔法を放つ。すると、外壁の一部に円形の映像のような描写――壁の外側に映る風景が映し出されている。
「あの中に飛び込めば、すぐ外に出る。いいか？」
「はい」
　先んじて悠元がその魔法――『鏡の扉（ミラーゲート）』を飛行魔法を展開した状

態で飛び込む。深雪も水波と一緒にその中へと飛び込む。補足しておくが、水波には予め彼女専用の飛行魔法デバイスを渡している。
　三人が高度２０００メートルにも達する上空に移動したところで悠元は『ミラーゲート』の発動を停止した。気分はさながらパラシュート無しの疑似スカイダイビングだが、楽しんでいる余裕がないのも事実だ。
　地上との相対距離に合わせて飛行魔法を発動し、悠元が地上に降りてから続いて降りてくる深雪と水波に手を差し伸べる。二人もその手を取ってゆっくりと降下したが、水波は高高度からの着地は初めてのようで、思わず腰が抜けてしまった。
「あ、す、すみません」
「いや、水波の反応が普通だよ。ともあれ、急ぐぞ」
　タワーの正面から避難で無人になっている１階を通過して地下への階段を下りる途中で、悠元は踊り場で屈んで『天神（オシリス・サイト）の眼』で地下の様子を探る。
「地下１階の管理センターに五人。地下２階から地下３４階、地下３６階は無人。地下３５階に３５人……非常事態に備えている筈の魔法師が昏睡状態に近い形で眠らされているな」
「タワーにいる進人類フロントの人数は五人ですか？」
「いや、地下３５階にいる魔法師全てが正規の人間とは限らない……近くの湾岸で銃撃戦とは、かなりの組織力を持っている……ん？」
　湾岸に意識を向けたところで、悠元は微かなサイオンの揺らぎを感じた。そして、『聴覚強化』で本来人間では捉えることが出来ない波長――地震波を感じ取った。それを認識した悠元の対応は早かった。
「二人とも、直ぐに屈め！」
「っ!?　……これは、爆破ですか？」
「違う、地震だ」
　救いなのは、シャフトを含めた耐震システムが非常用の状態で稼働しているため、タワーに対しての被害はほぼないだろう。ただ、これが自然の地震なのかという疑問は残るわけだが……厄介なのは、この地震によってエレベーターが緊急停止によって地上１８１階で停止

している上に、そのエレベーターには雫とほのかが乗っている。
「今の雫の魔法力なら、エレベーターにいる人間全員を無事に地上へ降ろすことは出来るが……エレベーターを通常稼働に戻した方が早いだろうな」
悠元は先程の管理者コードでエレベーターを独立稼働状態に戻した。このタワーへのメイン送電システムは一つだけだが、不測の事態に備えての予備システムが3つほど存在しており、その内の一つを稼働させてエレベーターを通常稼働状態に切り替えた。
「これでタワーに残ることになるのは、俺らと進人類フロント、そして地下35階にいる魔法師や警備員らだけになる……5分待ってから動くぞ」
「はい。それにしても、流石は悠元さんですね」
「大したことはしてないよ」
これだけの超高層建築物に何の対策も施さないのは危険極まりなかった。何せ、この世界は魔法の力があるだけにだ。なので、そのタワーの話を聞いたときに剛三へ随分無理を言って計画に参加させてもらう形とした。
深雪からの誉め言葉に対して謙遜気味に返しつつ、エレベーターが無事に1階へ到着し、雫たちが外へ出たところを確認してから動き出す。
地下1階の管理センターに続く通路を極力音を立てない様に近付き、『天神の眼(オシリス・サイト)』で相手の動きを見る。すると、先程まで管理センターにいた五人の内、二人がライフル銃を手に見張っていた。
相手のメンバーの中には知覚系魔法の持ち主がいて、視られていた感覚は既に感じていた。彼らの配置変更でそれが確証に至った形だ。
悠元は歩いて彼らに近付く。彼らは不審者だと判断して悠元にライフルを構えて放つが、そこで水波が単層障壁を展開して悠元への物理攻撃を無力化し、その反射した弾が彼らに向かう形となって彼らが退いていく。
タワーには地上部分に誰も残っていないため、別に交渉する必要などない。だが、彼らの真意を聞くべきだと判断して悠元はそのまま歩

を進める。すると、向こうから先程の男性二人に加えてもう一人の男性が姿を見せた。
　モニターではガスマスク越しに話していた人物なのは間違いなく、その彼は自らを『カンペール』と名乗った。
「これはこれは……お待ちしておりましたよ、三矢悠元殿。失礼、今は神楽坂悠元と名乗られていましたね」
「……待った覚えも何も、俺はあんたらの事など知らないんだが？」
「これは失礼を致しました」
　恭しく挨拶をする『カンペール』もとい岬（みさきひろし）寛に対し、悠元は警戒するような視線を岬らに向けた。
　彼の視線は以前似たような感覚――――昨年春におけるブランシュの一件で、達也の持っていた『疑似キャスト・ジャミング』を欲した司一（つかさはじめ）が達也をブランシュの同志に勧誘した時と似たような感覚に極めて近かった。
「元は十師族・三矢家の人間でありながら、貴方の兄や姉らが覚醒していく中で家を追い出される憂き目に遭った。我々はその才能を非常に惜しんでおります」
　数字（ナンバー）を剥奪される理由とすれば、普通は既定の能力を有していないか人道的に憚る内容でないと辻褄が合わない。そもそもの話、悠元が転生して数ヶ月の段階で三矢の家や家業を継がないと現当主に宣言している事実はほぼ内輪の話に止められている。
　その部分と神楽坂家の本質を知らない人間からすれば、悠元の人並外れた能力を危ぶんで三矢家から追放された、と受け取ったとしても何ら不思議ではないのだ。まあ、原作では別の勢力が人外の存在を追放しようと目論んだりはするが、今は置いておく。
「我々ならば、貴方に然るべき立場と報酬をお約束いたしましょう。その上で我々が――――」
「言いたいことはそれだけか、カンペール。いや、岬（みさきひろし）寛」
　岬の言葉を遮る形で悠元は素早く『オーディン』を懐から取り出し、岬の両側にいる男性のライフルを分解し、更に男性二人に対して『ダイレクト・ペイン』で気絶させた。驚きを隠せない岬は叫ぶように悠

元へ言い放った。
「何故ですか⁉　貴方は悔しくないのですか⁉　それだけの力を持ちながら、十師族の立場を追われた貴方が！」
「追われた、というのは貴方方から見た推論でしかない。本当の事実も知らない貴方方が俺の何を知っているんだ？」
　岬らが知っているのは、悠元が三矢の姓を名乗らなくなったという事実だけ。もし、この時点で師族会議との確執があるようならば、そもそも九校戦で目立とうとはしないだろうし、実家との諍いがあれば何かと他の十師族が囲い込もうとしてくるだろう。
「……っ！　やれっ!!」
　岬の命令に従う形で通路の曲がり角の先から飛んでくるダガータイプの武装一体型ＣＡＤ。その術式がスターズで良く用いられている『ダンシング・ブレイズ』というのはすぐに分かった。だが、国家非公認の魔法結社の一つである『進人類フロント』のメンバーがその術式を使っていることには違和感を覚えた。
　そのＣＡＤは水波が障壁で防いだが、女性二人が両手を翳して発動させた『キャスト・ジャマー』によって水波の障壁が強制的に解除される。岬は倒れ込んでいる男性らの背中に手を当て、女性らは岬の肩に手を置く。すると、男性らが持っていた武装一体型ＣＡＤも含めてかなりの数の武装一体型ＣＡＤが悠元目がけて飛ばされる。
「――俺が言えた義理じゃないが、身の程を知れ」
　悠元は『オーディン』を構え、『分解』で『キャスト・ジャマー』と武装一体型ＣＡＤを消し飛ばした。それに動揺する岬らだが、間髪入れずに放たれた『零点銀世界（ゼロ・ニブルヘイム）』で岬らは瞬時に凍らせられた。
　気が付くと悠元の隣に深雪が立っており、先程の凍結魔法は深雪によるものであった。何はともあれ面倒事は回避できたと思っていた悠元だったが、地下３５階で『共振破壊』の発動兆候を感じ、『術式解散（グラム・ディスパージョン）』で魔法式は速やかに破壊したものの、物理法則改変の影響がタワー最深部にあるシャフトに深刻なダメージを与えているのが確認できた。
「……やってくれたな」

「何があったのですか？」
「細かい事情は後で必ず話す……深雪に水波、今すぐタワーから脱出しろ。水波、深雪の守りは任せる」
　タワーのシャフトの修復を単体で行うのは簡単だが、こういった超高層建築物は緻密なバランスで成り立っているため、柱を1本ずつ修復したところで他のシャフトに負荷が掛かって結果的に全てのシャフト――タワーそのものを修復しなければならなくなる。
　達也の『再成』では恐らく処理がぎりぎりのレベルになるであろう。そうなると、自分が出張るしかなくなる。その場に深雪を居合わせるのはリスクが大きいため、水波に深雪の護衛を優先するよう指示を出す。
「悠元さんは、どうされるのですか？」
「最深部に降りてこのタワーを修復する。……付いてきたい気持ちは分かるが、ここは我慢してくれ。っと、丁度迎えも来たな」
「悠元、深雪に水波。……どうやら、喫緊の事態のようだな」
　すると、タワーの異変を察してなのか、達也がその場に姿を見せた。達也もタワーの状態を深雪を経由する形で把握しているようで、こうなれば話が早いと悠元は達也のほうを向いた。
「達也、深雪と水波を連れて脱出してくれ。ここから先は俺がきっちりと受け持つから、心配しないでくれ」
「……分かった。帰ってこないと、俺が直接最深部に潜り込むからな」
「お兄様⁉　……悠元さん、お気をつけてください」
「分かってるよ……それじゃ、行ってくる」
　ある意味心配されている、という達也の言葉を聞き終えた上で、悠元は凍らせた岬を無視して走り出した。最深部に繋がるエレベーターの空洞部を経由して最深部のシャフトと油圧式ダンパーが置かれた部分に到着する。
　柱の数本がひび割れを起こしており、このまま放置すればあと数分でタワーが崩壊を始めてしまう。悠元は『オーディン』をしまい、『ワルキューレ』を取り出して天井に向けて構えた。
　この状況で使う魔法は一つ――天神魔法『天照《アマテラス》・

五行相生：天陽照覧（ごぎょうそうせい：てんようしょうらん）』。これまで使ってきた規模とは桁外れとなるが、悠元に躊躇いは無かった。
「このタワーを修復できないようじゃ、この先世界を相手になんて出来る訳がないからな……やるか」
悠元は『ワルキューレ』の引き金を引き、八重の起動式が展開する。それは『天陽照覧（てんようしょうらん）』を発動させるための陰陽五行七天陣を組み上げていくための魔法。
「エイドス変更履歴、取得。タワー構造情報、素材情報取得。タワー全情報統合完了。陰陽五行七天陣、効果対象をオフショアタワー構造体の全体に設定」
『ワルキューレ』のリミッターをすべて解除し、桁外れた高密度のサイオンと『万華鏡（カレイドスコープ）』によって得た規格外の魔法演算領域で瞬く間に組みあがっていく魔法式。そして、崩れそうになるタワーを押し止めるために精霊の力でタワーそのものに重力制御を発動させる。
「さあ、いくぞ――『天陽照覧（てんようしょうらん）』、発動!!」
悠元の決意を込めた叫びにも近い言霊が魔法に乗せられ、タワーは眩い光に包まれていく。その光が晴れると、東京オフショアタワーは何事もなかったかのように健在していた。その様子をタワーの外で見ていた水波は驚きの言葉を口にしていた。
「これが、悠元兄様のお力……これが、人間の成せる業なのですか……？」
水波は事前に達也や悠元の力を知識として知らされていたが、実際に目の当たりにした訳ではなかった。今回、悠元がこれだけの建築物を瞬時に直し切った悠元の力に驚愕せざるを得なかった。
その一方、深雪は心配そうな表情でタワーを見つめていたが、正面玄関から少し疲れたような表情を見せる人物の姿に表情をほころばせ、一目散に駆け寄ってその人物もとい悠元を抱きしめた。
「悠元さん！　……おかえりなさい」
「ああ、ただいま。って、泣かないでくれよ……心配させたのは謝るけどさ」
ただでさえ女性としての魅力が増している婚約者に抱き着かれる

こと自体嬉しいことだが、性欲のほうも強まってしまうために抑えようと必死だった。そんなことを考えてしまうあたり、自分もこの世界に大分染まってきたのだなと思う。
深雪に続く形で達也と水波も悠元の元に近付いた。
「お疲れだな、悠元。進人類フロントのメンバーについてはこちらで回収するように手配したが、大丈夫か？」
「ああ、構わないよ……達也、彼らは本来スターズが使っていた魔法をいくつか使用していた。詳細の報告は後でするが、単に〝彼〟の仕業だけではなさそうだ」
四葉家だけではなく、岬寛のことも含めると第三研を管理している実家の三矢家にも連絡を入れなければならない。更には神楽坂家と上泉家にも今回の顛末を報告せねばならないと思うと、悩みごとが尽きそうにないと悠元はそう感じたのだった。

平穏な未来への一石

旧群馬県高崎市にある上泉家の本屋敷。その離れにて、剛三は目の前にあるモニターと向き合っていた。８８歳という高齢ではあるが、現代魔法の知識を吸収するために機械関連の知識や操作も今の若者と互角以上に使いこなしている。

そして、剛三が今話している相手は神楽坂家現当主である千姫であった。

「本来ならば顔を合わせるべきだろうが、多忙故にすまないな」

『いえ、ローゼン・マギクラフト関連のこともあるでしょうし、お気になさらず』

上泉家はローゼン・マギクラフトのことと国防軍が九校戦で暗躍した件も含め、上泉家が主導する形で九校戦の運営体制を見直すこととなった。昨年の『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』による浸食も含めれば、その対応は妥当ということで国防軍や魔法協会は拒否できなかった。

その辺りの領分は本来現当主である元継が担当すべきなのだが、彼は今別件で上泉の本屋敷を離れており、加えて上泉の人脈という観点から剛三がその役割を請け負っていた。

「先日の東京オフショアタワーの件だが、進人類フロントのメンバーが本来スターズでしか公開されていない『ダンシング・ブレイズ』に加えて『キャスト・ジャマー』を使用していたと悠元から聞き及んだ」

『その報告はこちらでも聞いています。パラサイト事件の時に周公瑾がその情報を得た可能性もありますが……問題は、進人類フロントがＵＳＮＡにおける魔法結社のいくつかと繋がりを有していた事実です』

魔法師社会は全人類の人口比で見れば少数の世界。単独では力が及ばないからこそ、協力体制を築くことは自然の流れとも言えよう。数年前の旅行で剛三や悠元にちょっかいを掛けようとした組織をある程度は〝間引き〟したが、利口な連中は剛三や悠元への手出しを控えてその被害を免れていた。

「顧傑（グ・ジー）は面倒な相手よの……己がＵＳＮＡに利用されているとも気付

かずに。いや、この場合はエドワード・クラークに利用されている、と言うべきか」
『確か「エシェロンⅢ」の開発者の一人でしたね』
「情報で世界の覇権を握りたい欲は理解できるが、そのとばっちりを受ける側からしたら面倒なものとしか断言できぬがな」
剛三や千姫は、かつて世界群発戦争で全面核戦争の回避を行うために国際的な超法規的遊撃部隊の一員として参加していた。それはあくまでも核の傘を自力で持たないこの国を護るための戦い。結果として周辺国による侵略で被害は受けたものの、国家としての体裁を守ることは出来た。
海洋国家であるこの国を護るために戦略級魔法は必要不可欠。現にこの国への欲を持っている大亜連合や新ソ連は無論の事、ＵＳＮＡや欧州もその対象に含まれている。その彼らがこの国の魔法を損なおうとするのならば、例え今の味方であっても容赦するつもりなどなかった。
「対大亜連合強硬派と烈は何とか抑えられたが、佐伯の奴が何かを画策し始めておる。恐らくだが、悠元と達也君の持つ戦略級魔法を抑え込むつもりのようだ」
『それは……お義兄様の勘ですか？』
「否定はせぬ。だが、連中は分かっておらん。我らとは異なり、十師族とて民間組織の領域は逸脱できぬ。その一員が国家を揺るがしかねぬ力を有するのは危険だと思うのは理解できなくもない」
いち民間人が国家を揺るがす力を持つことに危険視する意味は剛三とて理解している。ならばこそ、相手との利害が一致するように意見をすり合わせるのが筋ではないのか、とも考えている。魔法という要素に囚われ過ぎてそれ以外の要素に目を瞑るのは〝節穴〟と評したいのが剛三の偽らざる見解である。
「その話は今度だな。周公瑾が討たれれば、今度は間違いなく顧傑本人が出向くことになるだろう。狙うとするならば……来年の師族会議だな」
『悠君からはその辺の対応を昨年の夏の段階で打診されました。なの

で、既に罠は構築済みです』
「……あ奴の頭の回転の速さは歴代の神楽坂家当主でも随一よの」
『お義兄様、彼はまだ次期当主ですよ』
「何を言う。当主の代行を務めさせている時点で実質的な当主と変わりないであろうに」
剛三も千姫もお互いに〝いい歳〟とも言える間柄。ここから先は若者たちが担うべき世界であり、その為に剛三は後を元継に託し、千姫は後継者として悠元を選んだ。

◇　◇　◇

進人類フロントのメンバーは全員拘束され、本拠地や資金源は粗方洗い出された。彼らは独自にＵＳＮＡの魔法結社とも繋がりを有しており、一部のメンバーは魔法因子の保有を誤魔化して渡米したことも確認されている。
彼らと関係を結んでいたＦＥＨＲ（フェール）――『Ｆｉｇｈｔｅｒｓ ｆｏｒ ｔｈｅ Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ ｏｆ Ｈｕｍａｎ Ｒａｃｅ（人類の進化を守るために戦う者たち）』の略称で、バンクーバー市政府が認めた合法的な魔法結社――は今回のオフショアタワーのテロが起こる１ヶ月前に進人類フロントとの関係を解消している。
同じ魔法師保護に対して〝積極的〟というよりは〝過激的〟な側面を持っている彼らでも進人類フロントのやり口についていけないと判断したのか……別口の情報では、出所不明の情報提供があったという噂が存在していた。
渡米したメンバーの殆どはＦＥＨＲに吸収される形となり、これに目くじらを立てたところで建設的な議論など出来るはずがないと判断してこれ以上の追及はしないこととなった。
「それじゃ行ってくる」
「いってらっしゃい。お土産とかはいらないからな……行ったか」
出かけていく達也を見送った悠元。玄関の扉が閉まってから発した言葉の意味は単純で、今日のセッティングの片棒を担いでいたからだ。すると、深雪が物陰からひょっこりと顔を出す様にして悠元を見やった。

「悠元さん、お兄様はお出かけになったようですね」
「ああ。にしても、深雪が積極的に達也とほのかのデートを勧めるとはな」
「お兄様は女性の扱いに関して無頓着にも程がありますから」
深雪の恋愛感情の矛先が変わったからというのもあるのだが、これには深雪が少し疲れたような表情を見せつつ呟いた。春の亜夜子との会話で見せた対応もあるのだろうが、これでこそ原作主人公らしいとも言えなくは無かった。
玄関に立ったまま会話というのも変な話なので、リビングに移動して水波が用意してくれたコーヒーを飲みつつ、その話を続けることとなった。
「無頓着は……流石に少しだけ言い過ぎのような気もするが」
「私としては悠元さんのように積極的になって欲しくもあるんです」
「いや、俺の場合は予め外堀どころか内堀まで埋められた上に退路すら断たれていたからな？」
東京オフショアタワーでの一件の後、司波家に帰った悠元を待っていたのは深雪からの積極的なスキンシップであった。心配をかけたことは自分の責任なので否定できないが、恋人としてのステップを踏まずにいきなり既成事実の領域まで踏み込んだせいもあってか、断るという選択肢は取れなかった。
深雪と付き合い始めてかれこれ1年が経過したわけだが、対等な付き合いというラインはかろうじて維持されている。深雪から「従属したい」というレベルは何とか回避し続けているが、気が付けば複数の婚約者に加えて愛人枠まで出来ている。油断すると実現しそうなだけに気は抜けない。
いくら魔法師社会の実力主義のために早婚やら政略結婚が望まれているとしても、節度はあってしかるべきだと思う。そうならない理由の一つに悠元自身の精力が常人を遥かに超えているという千姫の言葉には疑問を呈したい。
「それに、達也を好いている相手が軒並み洒落にならんレベルでヤバい」

現状で言えば『エレメント』の一族であるほのか、ＵＳＮＡのスターズ総隊長『アンジー・シリウス』であるリーナ、そして四葉の分家の一つである黒羽家長女の亜夜子辺りが明確に好意を示している。
それ以外で言うと、平河姉妹も好意のようなものを覗かせており、卒業生という観点から鈴音も達也に興味を寄せているが、好意とまで行くのかは不明。スバル辺りも達也に興味があるのは否定できないし、三高の十七夜栞（かのうしおり）も達也に関心を寄せていると沓子から聞いている。あと、最近だと香澄が達也に関することを聞いてきたりしているので、関心があるのは間違いないだろう。
「ま、最近の達也は魔法の修得で九重寺に籠り気味だったし、達也のデートには九重先生も賛成してくれたからな……面白がって賛成した線は否めないが」
達也が『分解』の通用しない相手に対する近距離直接攻撃魔法を開発しているのは知っていたし、その協力を八雲がしていることも知っている。というか、その魔法を使うためのハード面での設計の手伝いをしている以上は筒抜けにも等しいが、敢えて尋ねるようなことはしていなかった。
「悠元さんはお兄様の新魔法の開発をお手伝いしていないのですか？」
「達也から『これは俺自身で導き出さなきゃいけない』と断られたからな」
ＦＡＥ（フリー・アフター・エグゼキューション）理論の証明は『ブリオネイク』で示されたわけだが、これを安定した技術として利用する手段は確立していない。何せ、サイオン自体の復元力が高すぎるが故に「１ミリ秒以下の時間で次の魔法を発動させる」という極めて厳しい条件が付き纏ってしまう。
これではまともに使い物にならなくなると考えた悠元は独自でＰＦＥ（サイオン・フリー・エグゼキューション）理論を編み出し、物理法則改変の束縛を突破している。達也に対して軽く説明はしたが、達也はあくまでもＦＡＥ理論を用いての新魔法に拘っている。これはリーナに対する対抗心も含んでいるのだと思う。

「それに、俺は俺で新魔法の開発で忙しいからな……どうした、深雪？」
「いえ、叔母様の魔法をあれだけアレンジできても尚必要なのかと思いまして」
「そう言われるのも無理はないけど」
『灼熱と極光のハロウィン』の時点では威力制御が未完成だった『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を完成させること。そして、対古式魔法も視野に入れた完全非殺傷性の有機物干渉魔法の開発に注力していた。
後者の魔法は情報を有さないサイオンが物理現象に変化を齎さない現象を利用したもので、対象者である魔法師の体内に存在するサイオンを強制睡眠状態のレベルにまで活性度を低下させる。『夢世界（ドリーム・ワールド）』のダウングレード版ではあるものの、魔法演算領域を持たない非魔法師をほぼ無傷で無力化できる。
〝ほぼ〟という表現を使ったのは、眠った際に床への衝突があったり、人混みの中で使えばドミノ倒し状態になってしまう危険性もあるためだ。
「俺が考えているのは、自衛の範囲を越えない程度での魔法行使を市井に認めさせること」
相手に物理的な損傷を与えない形で現代魔法を使うとなれば、精神干渉系や情動干渉系――――つまるところ、現代魔法では忌避されがちな有機物干渉系の魔法となる。
別に高度な魔法を使う必要などなく、防犯ブザーのようにサイオンの情報に人間が嫌がる音の波長を情報として付与し、それを発動するだけなら基礎単一工程の魔法程度の処理で済む。相手の敵意や害意を削いでしまえば、こちらから必要以上に攻撃する必要もなくなる。
「というか、魔法師の基本資質は本人たちの身体能力にも依存しているところが多いのに、魔法科高校だと一般的な体育のレベルになっているのも問題だと思うわ」
「悠元兄様、それは……」
「水波の言いたいことも理解するが、実戦レベルになれば立ち止まったまま魔法を使えるなんて状況はまず発生しない。それこそ水波や

十文字先輩、理璃のように強固な障壁魔法を持たない限り、そんな戦い方は出来ない」
　別に魔法科高校に軍事カリキュラムを取り入れろ、なんて行き過ぎたことを言うつもりはない。ただ、世の中で活躍している一線級の魔法師は身体能力の面でも秀でている部分が大きい。悠元自身も含めた三矢家現当主の子らがそれを如実に証明している。
「或いは深雪のように圧倒的な領域干渉を起こせるレベルでないと土台無理な話だと思う」
「お兄様はその典型的な例ということですね」
「本人は九重先生に勝とうと頑張っているがな」
　達也の魔法訓練については逐一八雲から聞き及んでいるが、九重寺の地下訓練施設の最下層にあるのは核兵器への対抗手段としての魔法開発を目的とした施設。尤も、達也が開発している新魔法は核兵器を無効化したり放射線を遮断する魔法ではなく、ある意味その逆とも言える魔法だが。
「悠元さんはお兄様が何の魔法を開発なさっているのかお分かりなのですか？」
「まあ、ハード面で牛山主任から相談されてはいるが……恐らく達也がやろうとしているのは、貫通力が極めて高い中性子を用いた近距離攻撃魔法だ」
「それって、放射線兵器に抵触しないのですか？」
「無力化する方法は達也の持つ魔法で解決済みだよ」
　二人には話さなかったが、悠元もＰＦＥ理論を用いた攻撃魔法をすでに開発している。この魔法はＰＦＥ理論で起こすサイオン構造の空白地帯を意図的に作り出すことで、軌道を変更したり相手の防御すら貫通させることが可能。
　達也の開発している『バリオン・ランス』とコンセプト自体は似ているが、別に中性子を用いた攻撃ではない。『流星群（ミーティア・ライン）』の基礎理論を用いた攻撃魔法で一度放たれれば相手に命中するまで止まらない一撃必中の魔法――『死翔の槍（ゲイ・ボルグ）』という名を付けた。
「そうそう、水波にも防御主体の術式を組み立てているから、完成した

ら渡しておくよ」
「え!?　いえ、悠元兄様にそこまでしていただくのは……！」
「――――水波。君は深雪のガーディアン見習いだが、俺からすれば家族みたいなものだ。何かあってから後悔なんてしたくないからな」
　東京オフショアタワーの一件を考慮し、既に知られてしまっている水波の障壁魔法を全てバージョンアップする腹積もりだった。その殆どは悠元の持つ『ミラーフォース』の下位互換となってしまうが、十文字家の秘術である『ファランクス』と同レベルに持っていくだけでも十分なレベルだ。
　そして、対戦略級魔法師との戦闘を見据える形で水波の魔法師としての能力を鍛えると共に、対戦略級魔法に特化した広域防御魔法を水波に提供する。このことは深雪や達也だけでなく、真夜や葉山からも同意を得て準備を進めている。
「今後、リーナの時のように国外の戦略級魔法師や欲をかいた連中が達也を付け狙わないという保証なんてない。それに、俺や達也が常に深雪の傍に居れるという確証もない。その時に深雪の傍を守れるとしたら、間違いなく水波の役目だ」
「悠元兄様……」
「そういうわけで、ＣＡＤも含めた面倒を見ることになった……深雪、真面目な話をしているときに脇腹を抓らないで」
「水波ちゃんだけズルいです……」
「何故に」
　深雪が悠元に対してやきもちを焼いている光景に、水波はキョトンとした後に思わず吹き出す様に笑みを見せたのだった。

古都内乱編

立場故の難しさ

周公瑾が横浜・中華街から去った。正確に言えば〝逃げた〟というのが一番妥当な表現である。彼がこの国に対して与えた影響は最早魔法師社会としても無視できるものではなかった。

――西暦２０９６年９月２３日、日曜日。

彼が根城にしていた中華飯店の最奥に悠元は足を踏み入れていた。流石に周公瑾も痕跡を残すのは拙いと考えたのか、顧傑と連絡を取っていたと思しきツールとしての死体は綺麗に無くなっていた。

「流石の周公瑾でも必要以上の痕跡は残していないか。ただ、黒羽以外にも出入りしていた痕跡が残っているな。これは……防諜第三課の人間か」

先日の黒羽による襲撃で粗方のデータ収集や家宅捜索は済んでいて特に残っているものはないわけだが、それ以外の勢力がここに立ち入った形跡を見つけた。『天神の眼（オシリス・サイト）』で確認したところ、国防軍情報部――それも防諜第三課の人間だとすぐに判明した。

七草家の影響力が強い部署が動いているとなれば、七草家現当主の指示があったのは間違いないだろう。尤も、彼に直接問いただしたところで防諜第三課が勝手に動いただけだとシラを切るのが目に見えているわけだが。

「あれほど『関わるな』と母上に言われても尚動くか……いや、これが〝修正力〟の一端なのだろうな」

本来の歴史ならば、ダブルセブン編の終盤で弘一が名倉を経由して周公瑾にメディア工作の協力を取り付けることで四葉家を除く反魔法主義のプロパガンダを抑えていた。それを金という経済の暴力で主要メディアを買収し、大陸系の政治献金問題も合わせることで反魔法主義の言論を一気に封じ込めた。これによって七草家だけでなく周公瑾のお株を悉く奪った形となった。

七草家と十文字家に春の恒星炉実験協力の名誉は与えているわけ

だが、実績は三矢家と四葉家が持っていく形となった。それで納得できないところは人間らしいとも言える。
「問題は……俺がどこまで動けるかによるな」
周公瑾を捕縛するだけならば然程問題ではない。問題なのは、周公瑾を匿っている連中が『伝統派(でんとうは)』と名乗っている古式魔法師の魔法結社だということだ。
陰陽道系古式魔法の大家である神楽坂家は皇族の護りを第一の命題としており、この国の皇居が東京に移った際に神楽坂家もかつての本拠地を捨てて箱根に移った経緯がある。なので、他の古式魔法使いが神楽坂家の行動をどう見るかは様々であり、その行動を異端と見る家もあったりする。
かつての十師族・三矢家の名字を名乗っていた時ならばいざ知らず、今の自分は神楽坂家の次期当主兼当主代行。現代魔法を主体とする師族会議とは異なる独自のネットワークを有している古式魔法使いの間では、当然悠元だけでなく上泉家現当主となった元継の存在も把握しているだろう。
それこそ、八雲が関わるよりも遥かにヤバい事態――『護人』と『伝統派』の全面戦争になる可能性も捨てきれない。
「別に好き好んで対立したいとは思わんが……正統派の古式魔法使いからしたら有難迷惑とも言える連中だからな」
だが、これはこれで却って四葉家と達也や深雪の関係性を隠すことにも繋がるメリットも存在する。九校戦で自分が黒羽の人間と親しげに話している場面は多くの人間が目の当たりにしており、昨年の九校戦で自分が十師族の人間だということも知られている。
文弥と亜夜子が四葉家所縁の人間ということで目立つデメリットはあるが、自分が古式魔法の家の人間となったことで、魔法使いとしては新参者扱いとなる司波家の二人が自分の知り合いか部下という認識を与えることが可能だろう。
◇　◇　◇
中華街での痕跡調査を終えて悠元が司波家に帰宅すると、見慣れない靴が二足あることに気付く。日曜日は出掛けることの多い達也が

珍しく家にいるのは知っていたが、それを見計らうように来訪するとなれば、大方四葉絡みなのは間違いない。
　すると、帰宅した悠元を出迎えるように早歩きで深雪が姿を見せた。
「おかえりなさいませ、悠元さん」
「ただいま、深雪。それで客人がいるようだが……」
「ええ。文弥君と亜夜子ちゃんのお二人です」
　深雪の後に続く形でリビングに入ると、文弥と亜夜子が挨拶をしてきたのでこちらも挨拶を返した。二人と対面するのは今年に入ってから三度目である。
「久しぶりという感じでもないけれど……元気そうだね」
「はい、悠元さんもお元気そうで」
「そういえば、深雪お姉様が拗ねられたと聞いておりましたが」
「まあ、それは何とかなったよ」
　亜夜子と悠元のやり取りを聞いて、思わず恥ずかしがるような仕草を見せる深雪。何だかんだ積極的な行動を取ることの多い深雪でも恥じらいを持っていることはさておき、悠元と深雪がソファーに座ったところで、亜夜子が悠元に一通の封筒を差し出した。
「……これは？」
「御当主様から悠元さんに、とのことで」
　達也の手に持っているものとは別のもの。原作にはない流れなのはさておくとして、四葉家現当主が神楽坂家当主代行への手紙というのは達也や深雪も興味深そうに見ていた。封を綺麗に切って中身の便箋に素早く目を通すと、文弥と亜夜子のほうを見やった。
「周公瑾捕縛の依頼に達也が関わる場合、その手伝いのお願いか……」
「悠元さん、難しいのですか？」
「昨年の九校戦までの俺ならいざ知らず、今の俺はれっきとした古式魔法使いの人間だからな。それも陰陽道系の大家だ」
　封筒の中にはもう一枚便箋が入っており、それは神楽坂家現当主もとい悠元の今の母親である千姫からの〝言伝〟にも近いようなものだった。四葉家のスポンサーとして協力するのは問題ないようで、京

都や奈良にいる古式魔法使いにも話を通しておくと書かれていた。
　原作とは異なり、『九頭龍（くずりゅう）』の長たる八雲自ら血気が逸るような行動はしないと思われるが、次期当主としても一応釘は刺すべきだと考えている。その点で言うと、神楽坂家の次期当主である自分にも言えたことなのだが。
「……九重先生には俺からも話をしておいた方がいいかな。それで達也、どうするんだ？」
「話を受けたいんだが、それで構わないか？」
　達也としては、真夜からの依頼を受けることで文弥や亜夜子の手伝いをしたいと考えているようだ。だが、文弥から齎された情報を鑑みるに、達也や深雪だけでなく同居人の水波や居候の悠元にも迷惑をかける形となる。達也としてはその辺を危惧しているような様子を見せていた。
「ああ、いいよ。というか、ここの家の主は実質的に達也となるわけだから、居候の俺に決める権利はないよ……って、どうして懐疑的な目を向けるんだ、お前らは」
「すみません、悠元さん。春のことを考えると、どうしても悠元さんが主導権を持っているように見えてしまって」
「亜夜子ちゃん……ともかく、話は分かった」
　メディア工作の一件は七草家に任せきりにすると四葉に対する風当たりが強くなることを懸念してのものであり、政治家への介入もその一端を担っていた形だ。だからと言って、司波家での主導権を握った覚えなどないし、達也へ積極的に介入する気もない。特に彼の恋愛事に関わることについては一番近い身内である深雪に投げているぐらいだ。
　ほのかの後押しをしている雫や深雪もほどほどになるよう仕向けているし、リーナの身内であるセリアも「こればかりは本人たちの問題だし、突っ込み過ぎて地獄に落とされたくないからね」と言ってしまうほどだった。
「二人とも、帰りは気を付けてな？」
「っ……」

「は、はい……」
帰り際に悠元からの〝忠告〟にも近い一言を浴びせられ、黒羽姉弟は思わず緊張した面持ちを見せたが、何とかにこやかな表情を見せながら司波家を後にした。リビングに戻ったところで達也が悠元に問いかけた。
「悠元、今の言葉で二人が動揺していたということは……」
「何かしらの尾行を受けて、それを撒かないように指示されていた可能性が高いな。ちなみにだけど、司波家に予め式神の結界を張っているから、古式の魔法使いが偵察しようとしたら勝手に反撃してくれるよ」
「いつの間にそんなものを用意していたのですか？」
「俺が司波家に居候し始めてから。達也には内密に話してたけど」
天神喚起で四霊が一角を担う『麒麟』に司波家の周辺を探ろうとする連中の探知と自動反撃を任せていた。最初は『竜神』あたりにでもしようかと思ったが、沖縄での一件とブランシュ、戦略級魔法師対策を鑑みて最高クラスの式神を置いている。
周公瑾がいなくなったことで『霊亀』を中華街に置く必要もなくなり、今はこっそり深夜が箱根に所有している別荘の守りに就かせている。尚、想子消費自体は周囲の大気に含まれる想子を用いているため、使役している悠元自身の負担はほぼないに等しい。
「ただ、達也に付きっ切りということが大分出来るようになるだろうな……まずは部活連会頭の選出選挙に当選することが前提になるだろうが」
風紀委員のオーバーワークじみた状態を解消する一環として、生徒会役員にＣＡＤ携行許可を与えることができる生徒会長だけでなく部活連会頭にも一部の幹部クラスに携行許可を認める案が昨年の生徒総会で通過した。
その代わりとして、生徒会長と同じように部活連会頭も選出選挙によって決められる仕組みへと変更した。元々生徒会長ほどではないにせよ、かなりの権限を与えられていた役職にＣＡＤの携行許可の関係で生徒からの信任を得るという後ろ盾が必要となった。

選出選挙の立候補者についてだが、生徒会長には深雪が、部活連会頭には悠元が各々単独立候補で締め切られているため、信任投票となることが決まっている。
実は、悠元の姉である詩鶴から生徒会長には女子が、部活連会頭には男子の流れが続いている。別にそれ自体の慣習など存在していないわけで、純粋に生徒会長と部活連会頭の性質の違いからくるものもあるわけだが。
「風紀委員長は……幹比古か雫のどちらかってことになりそうだな」
「雫は周りの噂を聞いて面倒そうにしていましたけど」
「それは俺も散々聞いてるな」
話を達也の周公瑾捕縛に関することに戻す。
今回の相手は今まで達也が戦ってきた相手よりも苦戦は免れないかもしれない。原作よりも想子制御や魔法の発動速度、魔法技術が洗練されている達也であっても、実際に古式魔法の使い手と対峙するのはこれが初めてとなるだろう。
「今回の任務は恐らく長期に渡るかもしれない。時々家を空けるとなると、水波は無論だが……悠元にも迷惑を掛けることになる」
「それは百も承知だから。今年の論文コンペは京都である以上、トラブルは避けられないだろうし、〝神楽坂〟の名を聞いて喧嘩を売ってくる連中がいないとも限らないからな」
古式の魔法師といえども一枚岩とは言えない。それは正統派や伝統派という派閥を形成している点からして明白なことだが。
東道家のように導師（どうし）の家が古式魔法師をコントロールしているといっても、その全てをフォローしきれていないため、どうしても一定数の野良の魔法師が存在してしまう。それは現代魔法師における『数字落ち（エクストラ）』も実質的にその範疇に入ってしまうのだ。
ましてや、護人である神楽坂家と上泉家に対して好意的な印象を持つ者もいれば、逆に敵意を向ける人間もいたりする可能性は高い。いくら魔法師と言っても人間であり、画一的な感情で生きているわけではないのだから、そうなってしまうのは仕方がない部分も存在する。
「かつての都であった京都を捨てて関東に移り、長きに渡って皇族の

護りを担ってきた一族。目的の為ならばあっさりと発祥の地である故郷を捨てるという行為を他の古式魔法師がどう見るかは各々によりけりだからな……まあ、俺の場合はただ血を引いてるだけであって、その辺の事情などは書物でしか知らんが」
「つまるところ、伝統を重んじる古式魔法師では異端と仰るのですか？」
「母上自身もそう言いのけていたからな」
伝統を重んじるのならば、京都に一定数の影響力を残せるように分家を置くことも考えられた。だが、京都には京都御所（きょうとごしょ）と八坂神社（やさかじんじゃ）に『九頭龍（くずりゅう）』の一角である安宿（あすか）家を置く程度に止められている。
これは、当時の情勢（皇族が東京に移ったのは）が伝統派の成立よりも一世紀半以上前の事であり、今の伝統派と呼ばれる人間たちも神楽坂家が京都を離れることを了承した。その護りの一角となるバランスを九島家をはじめとした旧第九研の連中がかき乱し、古式魔法師の対立構図を生み出した。
その過程で「神楽坂家が京都を離れなければ、『九』の連中に隙を与えることは無かった」と神楽坂家を恨む人間がいたとしても何ら不思議ではないのだ。現に、九島家の先代当主である烈と神楽坂家現当主の千姫の間には何らかの確執が存在しており、その理由は流石に聞いていない。
尤も、伝統派の言い分自体が実際にあるとしても身勝手な理由という他ないが。
「しかも、母上のみならず俺自身も因縁を抱える羽目になるとか……九島家はトラブルメーカーの気質でも持っているのかと問いかけたくなってくるわ」
「……世界広しと言えども、俺らと同年代で九島烈をそこまで言えるのはお前ぐらいだと思うぞ、悠元」
「達也はもっと怒っていいと思うんだがな」
「そうですよ、お兄様」
「深雪姉さま……」
先代当主とその弟による家督継承の御家騒動、その血縁であるリー

ナとセリアによる戦略級魔法師拘束未遂、そしてパラサイト関連の事件。原作だとそこに光宣が烈を殺し、九島家そのものまで巻き込んでの事態となった可能性がある。

悠元の言葉に感心するような視線を向けた達也に対し、若干呆れ気味に放たれた悠元の言葉を深雪が力強い口調で同意し、水波はそれを見て若干引き気味な口調で呟いたのだった。

無自覚は続くよ、どこまでよ

達也が周公瑾捕縛の依頼を受けた翌日の月曜日。

今年の論文コンペ――――『全国高校生魔法学論文コンペティション』まであと1ヶ月。昨年は大亜連合という名のテロリスト連中が出て大騒ぎとなったわけだが、そんなことがあったとはいえ……いや、この場合はその事件があったからこそ、昨年のリベンジに燃えている学生も少なくない。

ただ、一高生の話題と言えばその論文コンペよりも一つの話題で持ちきりだった。

「今年は去年みたいな騒動なんて起こらないだろうな」

「起こりようがないだろう。大体投票自体も要らんし、対立候補が出てきたとしても司波さんと神楽坂の圧勝で決まってる」

「司波さん、良いよなあ……くそう、神楽坂さえいなければ……」

「やめとけ。三高の『クリムゾン・プリンス』すら完封しちまうんだぞ？　俺たちが敵う相手じゃないって」

という2年生男子の会話や、

「誰を役員にするのかしら。司波さんを抑え込んだ神楽坂君は部活連会頭だし」

「昨年みたいなことがあったらね……」

「司波さんのお兄さんも少しカッコいいけど、神楽坂君はイケメンよね。あんな弟が欲しくなっちゃうわ。寧ろお兄様って呼びたいかも」

「貴方、上級生でしょうに」

といった3年生女子の会話がちらほらと耳に聞こえてくる。

その理由は週末に控えた生徒会長選挙と部活連会頭選挙が主な理由だ。無論、食堂でもそういった会話が繰り広げられるため、普通に昼食を取っている達也らの耳にも自然と入ってきてしまう。

「……深雪がいなくて正解でしたね」

「不謹慎ながら、燈也の意見に賛成だな」

悠元と深雪、ほのかと雫、それと姫梨やセリアは生徒会室で昼食を取るということで人目を避けて分散しているわけなのだが、深雪の兄

というネームバリューに加えてエンジニアとしての評価から達也への注目も増えるようになった。
燈也の言葉に対して否定する材料もない、と言わんばかりに達也は呟いた。
「にしても、昨年の生徒会長選挙の得票数上位がそのまま生徒会長と部活連会頭に立候補だもの。これでトラブルが起きるようなら、悠元が無言で黙らせるでしょうし」
「オイオイ……いや、出来ねえという理屈もねえか」
「そうですね」
エリカの冗談めいた発言にレオは窘めようとしたものの、事実になりそうだという判断から必要以上の干渉を避け、エリカの発言に短く同意したのは佐那であった。今年入学したばかりの1年生はともかく、2・3年生は昨年の生徒会長選挙の詳細を知っているために、これで暴動なんか起こそうものならば悠元が無表情で鎮圧するのが目に見えている。
「多分ですけど、達也さんが役員になるのは避けられないかと思います」
「達也には悪いけど、僕もそう思ってしまうんだよね」
「美月に幹比古……いや、分かってはいることだが」
悠元は今年度の前半までは部活連副会頭のかたわら、生徒会の協力員として深雪のストッパー役を買って出ていた。生徒会長であるあずさに加え、部活連会頭の服部と風紀委員長の花音まで同意見となり、このまま部活連会頭となっても深雪のストッパー役の側面は消えないこととなった。
そのため、基本的には副会頭以下でも回るように組織を固めなければならず、懲罰会議などの部活連会頭本人でないと判断できない事項以外の仕事はしないという方向性で固められ、悠元は内心で盛大な溜息を吐いた。
ただ、悠元が四六時中深雪のフォローは出来ないため、自ずと達也が生徒会役員に引き込まれるのも無理はない話である。
「おや、達也君にしては諦めが早いわね。やっぱり深雪には勝てな

いってこと？」
「そういうことじゃないが、悠元に負担の大半を負わせるのは〝癪に障る〟だけだ」
以前の自分ならばそういう言い方をしなかっただろうが、先日の九校戦ではパラサイドールを含めた対応の殆どを任せてしまっていた。あまり他人との関わりを積極的に持ってこなかった達也の変化を深雪が聞けば喜びそうだと思い、達也は内心で苦笑した。
その似たような会話は生徒会室でも繰り広げられていた。ほのかの問いかけに対し、ややうんざりとした感じで深雪が答えるほどだった。
「だから、まだ決めていないって言ったでしょう？　そもそも、まだ選挙も経ていないのに決める権利はないのよ？」
「深雪の言う通りね。ま、ほのかからしたら、達也の進退が気になって仕方がないでしょうし」
深雪の言葉に同調したのはセリアで、彼女はそう言いつつもお茶の給仕をしているピクシーに視線を向けた。ピクシーの一件は悠元経由で聞き及んでおり、こればかりは身内（リーナ）であっても言える案件ではないために秘匿されている。
それは確かに、と悠元もピクシーに視線を向けるほどだった。これにはほのかも顔を赤らめて俯いていた。
「ほのか、焦る気持ちは分かるが……まあ、達也が何かしらの形で生徒会に関わるのは変わらないと思うぞ？」
「ほ、本当ですか!?」
「良い意味でも悪い意味でも目立ってしまっている以上、今更引っ込むということにはならんだろう。前例はいくらでもいるわけだからな」
悠元が思い浮かべたのは自身の兄や姉らのことだ。ただでさえ十師族というネームバリューに加えて学内外の実績は著しい。加えて、主だった役職に就いていたことからして、達也が深雪の生徒会長就任で引っ込むという形にはならない。ただでさえ、魔工科設立の大きな理由になっているだけに今更とも言えるだろう。

尤も、達也のＣＡＤ携行許可だけを考えるのならば部活連の幹部メンバーに引き込むことも考慮に入れるが、それは選挙の結果を踏まえての話になる。
「そういう悠元君は、もう部活連のメンバーを決めているの？」
「深雪と同じく自分もまだ選挙で確定したわけじゃないですよ、千代田先輩。一応声掛けはしていますけど……」
部活連のメンバーは3年生が抜けた穴を1年生が埋める形となるわけだが、悠元は実戦力を加味して魔工科や二科生からもメンバーを幅広く入れる予定だ。一科生からすれば不満を抱く人間もいるだろうが、最終手段として自分が動くという〝抑止力〟を目の当たりにしている生徒が少なくない以上、反論は全く出ていなかった。
大体、まだ会頭である服部も二科生の一人である紗耶香を実戦力で入れている経緯がある以上、その前例に則ってやっているだけで問題などないはずだ。それに文句を言いたいのならば、自分自身の実戦力が無いと言っているようなものだ。
なお、ピクシーの想念形成に関わっているほのかはまだ立ち直っておらず、隣に座っている雫と姫梨が諌め、事情を知る五十里と花音は生暖かい目でほのかを見ており、昨年度のことを知らない香澄と泉美は揃って首を傾げた。
「ねえ、悠元兄。光井先輩は何であんなことになってるの？」
「そうだな……自分の秘めていた想いを好いている人の前で赤裸々にバラされた、と言うのが正しいな」
「あー、それは……確かに恥ずかしいですね」
流石にパラサイト絡みの案件なので、事情を知らない二人相手では恋愛事情の問題だと誤魔化しつつ説明したところ、二人も納得したような表情を浮かべていた。誤魔化したとは言ったものの、ピクシーの部分を引っこ抜けばほのかの恋心を赤裸々にされてしまったのは事実なので、決して嘘は言っていない。
なお、悠元の言葉が追い撃ちとなってほのかが盛大にテーブルに突っ伏したのは言うまでもなく、顔は隠せても真っ赤に染まった耳は隠し切れていなかったのだった。

そんなほのかの様子などいざ知らず、食堂にいる達也らの話題は論文コンペに移っていた。達也は代役といえども昨年の発表メンバーの一人であり、春の『恒星炉』実験からすると今年も発表メンバーに選ばれるのだとエリカは少なからず思っていた。
「そういえば、達也君は論文コンペに出ないの？」
「深い意味はないんだが、単に取り組んでいるテーマがまだ発表できる段階に至っていないだけだ」
達也が今取り組んでいるもの――――ＦＡＥ理論を用いた戦闘用魔法の開発――――に関しては流石に自身の固有魔法にも関わってしまうため、流石に言えるはずもない。その魔法がまだ完成していないので、発表できないというニュアンスも間違ってはいないわけだが。
「達也君もそうだけど……いや、悠元の場合は寧ろダメね」
「だな。その恩恵を受けちまってる俺らですら、コンペの参加は強要できねえし」
達也以上に悠元が論文コンペに出ようとしないことを話題にしようとしたエリカだったが、現代魔法を〝欠陥魔法〟だと言い放ってしまう彼がどんな論文を出しても確実に評価どころの騒ぎでなくなると判断し、レオも悠元の影響を受けている一人としてエリカの意見に賛同した。
「啓先輩からサポートは頼まれていないんですか？」
「今のところはな。それに、今回俺の出る幕は無いだろう」
何せ、昨年夏の段階で現代魔法の基本（カーディナル）コード全てを把握しており、彼から提供された魔法はその基本コードをベースに組み上げられている。更には既存の現代魔法や古式魔法すら超えた魔法を編み出すだけの実力を兼ね備えている以上、論文コンペは余計な悪目立ちにしかならない。
それに、彼が選挙を経て部活連会頭に正式就任すれば、論文コンペの警備隊に回されることとなる。その彼を発表メンバーとして参加させるのは酷すぎる話だ。
「論文コンペは横浜と京都で交互に開催されているが、それぞれ評価する傾向が異なるんだ。横浜の時は技術的なテーマが好まれるが、京

都の時は純理論的なテーマが好まれる。後者の分かりやすい例は『カーディナル・ジョージ』や佳奈先輩の基本コード理論だな」
「成程、達也の得意分野を生かせないってことか」
「達也は純理論の部分でも高校生離れしてると思うんですけど」
そんなこんなで会話が進んでいき、午後の予鈴が鳴るまで続くのだった。

◇　◇　◇

原作だと、達也が響子のプライベートナンバーを使って連絡を取っていたため、深雪の不機嫌を直すのに2日ほど要した。達也も今回の仕事に直接関わってもらうわけではないにせよ、深雪と水波にも達也の動向を把握してもらうための説明は後でするとして、悠元の部屋から超高圧縮通信を用いたヴィジホンを響子につなげた。
「神楽坂です。夜分遅くにすみません」
『悠元君。それに達也君も……事前に連絡した時点で面倒事の臭いしかしないのだけれど』
「それを言わないでください……」
今回のことは重要度の高い案件の為、達也が使っている音声のみの暗号通信よりも遥かにセキュリティーの高い『五芒星（ペンタゴン）』を用いてのものとなる。それに、モニターの向こうから聞こえる音声を聞く限りにおいて、向こうも細心の注意を払って通信しているのは言うまでもない。
メールについても検閲の可能性を考えて『夜にまた連絡をするので都合を空けておいてください』としか記述しなかったぐらいだ。
『それにしても、悠元君のその暗号通信技術は垂涎ものね。世界中の諜報機関が知ったら、こぞって欲しがるのは間違いないわ。『電子の魔女（エレクトロン・ソーサリス）』の名が形無しよ』
「それはまたの機会ということで。今回は達也の案件で連絡をしました」
『達也君の？』
「はい。九島閣下に協力をお願いしたい件があります」
響子と悠元の会話に割り込む形で達也が言葉を発した。今回の案

件は国防軍第１０１旅団・独立魔装大隊副官である〝藤林響子少尉〟ではなく、九島家先代当主である九島烈の孫娘にあたる〝藤林響子〟に依頼するというもの。
　達也からの話を聞いた時点で響子にもその心当たりがあったらしく、少し考え込んでから尋ねてきた。
「閣下と私的な会談の場を設けてほしいのですが」
『それは構わないけど、どうして悠元君が直接交渉しないの？　悠元君だったら、お祖父様のプライベートナンバーぐらい知っていそうなものなのに』
「……率直に言います。今回、達也が関わっている案件に表立って神楽坂家の人間が関与すれば、師族会議ですら止められない〝内戦〟の可能性も秘めているためです。それは、古式魔法の家柄である藤林家の令嬢たる響子さんが一番ご存知かと」
『っ!?　……成程ね。今の悠元君はもう十師族じゃなかったのを忘れていたわ』
　別に達也の手伝いをする分には四葉と神楽坂の関係性から言っても合理的に済むが、表立って九島家の人間と交渉したことが公となれば、「神楽坂家が九島家に肩入れをした」と見做す古式魔法使いも出てきかねない。
　神楽坂家と上泉家、それに賛同する正統派の古式魔法使いと『伝統派』の争いとなれば、これはもう立派な〝内戦〟となるだろう。
　それに、これは達也と響子に話していないことだが、九校戦でテストされたパラサイドールの性能を知った佐伯少将が裏ルートで九島家現当主と交渉し、既に旧第九研で製造が再開されているのが伊勢家からの報告で判明している。
　こんな大事を今の時点で公表すれば、間違いなく周公瑾の逃亡を手助けしかねない。なので、この情報は千姫と八雲、それと上泉家の現当主である元継にだけ話している。佐伯少将が増長して悠元や達也を制御しようと目論んだ場合、蘇我大将を通して抑え込んでもらう。彼女の軍人としての実力は確かなため、対新ソ連を見据えて北海道の最前線防衛に回されることとなるだろうが。

『それで、達也君のお仕事はやっぱり実家絡みかしら？』
「――ええ。横浜から逃亡した大陸の方術士を見つけ出して捕らえることです」
『成程ね。国防軍としても、あの男の対処に苦労しているのよ。達也君が任せてくれるというのなら、藤林少尉としても大歓迎よ……相変わらず皮肉が通じないのね』
「達也にそれを求めるのは酷すぎますよ……そのついでなんですが、俺から独立魔装大隊副官である藤林少尉にお願いを一つ」
『あら、悠元君もなのね。悠元君のように敵情報の俯瞰地図は出せないけど』
　敵軍の戦術・戦略予想能力は国防軍の観点から見ても悠元がずば抜けている。その一端を達也も把握しているからこそ、響子の台詞は悠元に向けての皮肉だとすぐに読み取れた。
「そこまでは言いませんが……その方術士が万が一国防軍の施設内に立て籠もった場合、俺は『神将会』として達也に敵勢力排除の目的で施設侵入許可を出します。響子さんには、そのことを一応頭の片隅に入れておいて欲しいと思いまして」
『達也君が追いかけている人物が国防軍を頼ると言うの？』
「その方術士は国防軍との繋がりも有していて、昨年秋の大亜連合特殊部隊と達也が戦うことになった原因の一つにレリックの存在もありましたから」
　響子のことだから、達也が大亜連合特殊部隊との戦闘行為からレリックの複製依頼絡みを掴んでいたとしてもおかしくはない。このこと自体は特段隠す必要もないため、悠元はそう言い切った。
「国防軍と一口に言っても、全て一枚岩とは言えません。中には現代魔法――十師族を嫌う人間もいますからね。大陸系の魔法師に融和的な軍人だって存在することも鑑みれば、その人物が頼らない道理などありませんから」
『……分かりました。祖父に都合を聞いてみます。連絡はメールでいいかしら？』
「それで構いません。暗号は独立魔装大隊のものでお願いします」

少し考え込んでから出てきた響子の言葉に達也がそう返したところ、響子はぶっきらぼうな態度で通信を切った。その一連の流れを間近で見ていた悠元はジト目を達也に向けた。
「達也。お前は響子さんも落とすつもりなのか？」
「いや、そういうつもりで言ったわけではないのだが……寧ろ、余計に邪推されたような気はしたが」
「そりゃ、こないだの九校戦前に送ってきた差出人が空白のメールに当て擦りされたと思うような言い方をされたら、向こうもそうなるとは思うんだが」
「……」
ライトノベルの主人公は呼吸でもするかのように人を堕としていく、というのは強ち間違ってもいないことなのだろう。現に、悠元の目の前にいる人物も無自覚に異性を惹き付けている。
それを悠元が言えた義理ではない、というのは本人が一番分かっているためか、こめかみに指先を当てつつ深い溜息を吐いたのだった。

不気味すぎる信任率

電話を終え、喉の渇きを覚えた悠元と達也がリビングに向かうと、二人を待ち構えるような形ではないにせよ、出来立ての紅茶を準備していた。何もお願いしていないのだが、こういった気配りの速さは流石達也の妹だけはある。

「お兄様に悠元さん。喉が渇いていると思いまして、飲み物を用意しました」

「……出来る妹だな、達也」

「誉め言葉と思っておく」

温度は熱すぎたり温すぎたりすることはなく、用意されたアイスミルクティーでのどを潤す。達也は一人掛けのソファーで、悠元と深雪が二人掛けのソファーに座る。司波家では悠元と深雪が隣り合って座るのが当たり前となっており、これには特に反論や異論を唱える気もなかった。

尤も、一番異論を唱えそうな達也が深雪の説得に屈したのが最大の理由だが。

「どなたかと連絡を取っていたのですか？」

「響子さんだよ。周公瑾の逃亡先が京都である以上、九島家の協力は不可欠だろうからな」

神楽坂家経由で連絡を取ることも考えたが、『伝統派』に必要以上の警戒をされないためにも達也と響子の繋がりを使わせてもらう形とした。

「そう言われるということは、独立魔装大隊絡みではないのですね？」

「正解だよ、深雪。一応念には念を入れてプライベートナンバーでの音声通信に止めている」

「成程……ちなみにですが、どちらが藤林さんのプライベートナンバーをご存じなのですか？」

「俺は知ってるよ。独立魔装大隊の検閲を通すと拙い部分の依頼関係で連絡を取る必要があったから」

とりわけ『サード・アイ』や『サード・アイ・エクリプス』はその

最たるもので、それを含めた魔法技術関連の依頼で響子と直接連絡を取る必要があったため、その為にプライベートナンバーを交換していると深雪に説明した。
　それを聞いた深雪の反応はと言うと、少しご機嫌斜めと言った感じであった。
「そうですか……私よりも先に藤林さんが……」
　好きな人のプライベートナンバーを最初に知ることが出来なかったというヤキモチ。ここからどうなったのかと言えば、誠心誠意の話し合いで何とか翌日の朝には元通りになった。なお、朝起きた際に深雪から「悠元さんはズルいです。そうやって愛されたら、全て許しそうになってしまいます」と赤く染まった頬を布団で隠すような素振りをしながら言われた。
　誤解の無い様に言っておくが、先に手を出したのは深雪であり、悠元はそれを受け入れた側であるということを述べておく。達也や水波も理解しているからこそ、必要以上の追及が飛んでくることは無かった。
　月曜に連絡を取ってから４日後、メールでの一報の後にヴィジホンで響子と電話することとなった。今回は響子からの連絡なので『五芒星（ペンタゴン）』を用いてはいないが、通常回線に三重のダミーをかぶせることで逆探知することも織り込み済みのようだ。
　達也は若干興味を見せたが、流石に自分が十全に再現できない分野に首を突っ込む気もなく、話の続きを促すような視線を響子に向けた。
『達也君に悠元君、祖父は面談に応じるそうよ。日時は１０月６日の１８時で、場所は奈良県生駒市の九島家本邸』
「大丈夫です」
　達也はそこまで忙しくないため、予定に関しては割と余裕がある。それと秘密裏に進めている『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』も計画スケジュールがほぼ固まったため、原作よりも余裕を持った対応が出来るというわけだ。
『達也君、覚悟しておきなさい。既に悠元君が踏み入れている領域―

――日本魔法界に蔓延る十重二十重のしがらみ。その真っ只中に飛び込むことになる』
「――――覚悟の上です」
『結構。当日は私も立ち会うから』
「お願いします」
　今回は深雪や水波も無関係とは言えない部分もあるが、それ以上に先日の連絡を取った件を鑑みてのものだった。響子との連絡を終えたところで深雪が心配そうな表情を向けていた。
「お兄様、本当に宜しいのですか？」
「京都・奈良方面の土地勘はその方面に詳しい人間がいい。それに、九島烈は恐らく俺の素性や魔法のことを知っている」
「推定でなく確定に近いだろうがな。彼は一時期真夜さんや深夜さんの魔法の先生をしていたからな。その縁でうちの爺さんや四葉の先々代当主である四葉元造ともかかわりを持っていたようだし」
　悠元は達也以上に裏の事情を把握している。原作知識による部分もあるが、母方の実家である上泉家に通った結果として四葉家の事情もそれとなく知ったのだ。
　今の時点で深雪がそのことを気にする必要などなく、深雪を守る立場である達也や深雪の婚約者である悠元が意識を向ける領分。
「昨年の九校戦で九島烈が精神干渉系魔法を使ったお遊びをしていただろ？　あれは俺の実力だけでなく達也と深雪の実力も測るためのものだったかもしれん」
「成程。それに、深雪は母上や叔母上の面影が強いから、察するのはそう難しくないな」
　別に九島烈と進んで敵対するつもりはないのだが、向こうがこちらを散々利用したり色々吹っ掛けてきたのは事実だ。それが結果として彼の孫の心労を蓄積させているという結果に繋がっている。
「それに、九島烈は達也だけでなく俺も戦略級魔法師であることを把握しているだろう。国家にとって最重要とも言える存在のパーソナルデータをかつて『世界最巧』とも謳われた元国防軍人が理解していないはずなどないからな」

「……俺以上に因縁が深そうだが、大丈夫なのか？」
「達也に心配されるとは思ってもみなかったが、問題はない。最悪は彼の孫や響子さん経由で説得することも考慮に入れておく」
達也からすれば、先日の九校戦でパラサイドールのデータ取りに利用された一件だけだが、悠元はそれ以上の因縁を抱えてしまっている。言っておくが、剛三を通して初めて出会った時のことはまだしも、それ以降のことは自分をまるで〝人ならざる者〟にでも触れるかのような扱いを受けていたことには遺憾の意を示したい。
加えて、神楽坂家と九島家の因縁にも関わってしまった以上、少なくとも九島烈個人は味方に引き入れておきたい。いくつか考えられるリスクはあるだろうが、九校戦の一件で身を引きつつある彼の魔法師社会や国防軍に対する影響力は未だ健在。そうする最大の理由は、既に増長の傾向が見られる佐伯少将を抑え込むための切り札として彼を利用するためだ。
その為に、この先の展開そのものを書き換える必要がある。原作知識が通用しなくなるリスクはあるが、今までの展開からして〝修正力〟にバラつきはあれど、最終的な結果は原作から大きく逸脱はしていない。
水波が本筋に関わるのはまだ先の話。そして、彼の孫がこの先に起こる出来事で大きな変化を起こした場合、恐らく九島家は多かれ少なかれ家内の騒動に繋がるかもしれない。なので、九島烈という存在は生かしてこそ意味を成す。
尤も、生存している烈の弟を日本に帰化させるという手段も考慮に入れてはいるが、あくまでも最終手段としてのカードになるのは明白であった。

◇　◇　◇

９月２９日、土曜日。今年は生徒総会も生徒会長選挙、そして今年度から実施された部活連会頭選挙も波乱などなく無事に終わった。
選挙の形式も昨年のような無効票を防止するため、使い捨ての近距離無線カードが採用されている。このカードには非接触型ＩＣチップリーダーが組み込まれており、生徒手帳代わりとなるＩＤカードを

重ねることで有効化され、受信側の端末でボタンの有効回数などを容易にコントロールできるため、複数回のボタンを押す行為も防止できる。
カード自体は北山家の傘下企業による試供品の無償提供だが、ＦＬＴからの技術供与もあってよりセキュリティー面で強化された仕様に仕上がっている。
大人の事情はさておき、新方式の電子投票による即日開票の結果、悠元と深雪は信任率１００パーセントによって各々部活連会頭と生徒会長に就任することとなった。それを見た悠元が「逆に何かの陰謀かと思いたくなってくるな」とぼやいたのを聞いた生徒会役員の面々が苦笑を浮かべていたのは言うまでもなかった。
「それでは、悠元の部活連会頭と深雪の生徒会長就任を祝って、乾杯！」
エリカの音頭でソフトドリンクのグラスが高く掲げられる。アイネブリーゼに集まったのは身内と友人と後輩で、具体的には達也、美月、エリカ、レオ、幹比古、ほのか、雫、燈也、姫梨、セリア、佐那、修司、由夢、香澄、泉美、水波、理璃、ケントだ。祝われる側となる悠元と深雪を含めれば２０人というちょっとした団体様レベルとなっている。
「まっ、順当な結果でしょうね」
「双方共に信任率１００パーセントだしね」
「当然です！　悠元お兄様と深雪先輩にしか部活連会頭と生徒会長は務まりません！」
エリカの言葉に続く形で、誰も不信任票を投じなかったことで逆に不審がった悠元の気持ちを代弁するように幹比古が呟いた後、エキサイトする泉美の姿に香澄は下手に関与しないように大人しくドリンクをちびちびと飲んでいた。
「悠元の気持ちも分からなくはないが……あの『クリムゾン・プリンス』を2年連続で完封しているからこその結果だろうな」
「言いたいことは分かるが、昨年は俺が二科生の教室に出入りしたり名字が変わっただけで因縁を吹っかけてきた奴がいたのに、そいつら

が自ら進んで信任ボタンを押したのが逆に怖いわ」
「……それは言えてるかもね」
　その場面を雫やほのか、燈也は見ていたからこそ、修司の言葉に対する悠元の言い分も納得できると雫は短めに呟いた。ともあれ、結果は結果なのでそれは受け入れるしかないわけだが。
「公式の挨拶は学校になるが、お手柔らかにお願いするよ、深雪」
「はい。こちらこそよろしくお願いします、悠元さん」
「おー、早速惚気てへぼっしゅ!?」
「誰が惚気だ……」
　悠元と深雪のやり取りを見たセリアの茶化しに対し、悠元は『圧力波（マッハ・パンチ）』を応用した軽めのデコピンでセリアの額に空気の塊を直撃させる。食らった側のセリアは若干涙目で睨んでくるが、悠元はその視線を受け流しつつグラスを手に取った。
「それで深雪、役員は決めてるのか？」
「ええ。理璃ちゃんと泉美ちゃんにお願いしようと思っているわ」
「きゃあむぐっ!?」
「理璃、フォローありがとう」
「気にしないで、香澄。こんな風になるのは目に見えてたから」
　深雪の指名で泉美が思わず声を上げようとしたところで香澄と理璃がまるで息の合ったコンビプレイで泉美の口を手で塞いだ。これには苦笑を見せつつも、深雪は達也と水波に視線を向けた。
「お兄様と水波ちゃんには書記をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」
「それは構わない。水波はどうだ？」
「は、はい」
　生徒会役員の人選は司波家で事前に打ち合わせており、達也が副会長となる案もあったのだが、達也と水波を同じ役職に置くことで動きやすくする意図も含まれている。深雪は達也を〝書記長〟にする案もあった訳だが、これは下手な諍いを生むことになるために却下させた。
「会計はほのかとセリアにお願いしようと思うのだけれど」

「う、うん。深雪の指名なら引き受けるよ」
「私は問題ないわよ」
　これで、生徒会役員の人選は完了したことになるわけだが、もう一つの人選である部活連の幹部人事は予め声を掛けており、既に了承は得ている。そのことについて深雪が尋ねてきた。
「そういえば、悠元さんのほうは既に決めていらっしゃるのでしょうか？」
「幹部人事は事前に声掛けをしたり、服部会頭が選抜しているよ。現2年だとエリカ、レオ、燈也、佐那がメンバー入りすることになる。副会頭は七宝とエリカに頼むつもりだが」
　これに反応したのは春の一件に関わっている面々で、特に深雪と泉美が心配そうな表情を向けていた。その反応も仕方が無いと思いつつ、悠元は続きの言葉を口にした。
「……その反応が出ることは分かっていた。まあ、春の一件で俺だけじゃなく彼の父親からもキツイ説教を受けているわけだし、問題は無いと思っている。万が一の場合は模擬戦で叩き伏せるが」
「叩き伏せるどころか潰れそうな気がするんだけど」
　今年の春に起きた琢磨の一件は、彼の父親である七宝拓巳によってキツイ説教を受けることで決着させた。琢磨も事態の深刻さを痛感したのか、その翌日には悠元に謝罪した。その際、悠元は「強くなるのは構わんが、誰かを犠牲にしないと示せない強さはただの暴力だ」と言い放った。
　七草家に対して必要以上の敵対心を抱く様子は見られなくなったため、次期会頭を睨んだ副会頭の人選は琢磨に任せることとした。また真紀が唆すようならば、今度は真紀の父親も巻き込んで後悔させてやるだけだ。
「それと、1年メンバーにケントも入ってもらうこととなった。燈也や佐那もそうだが、部活連のメンバーにも技術系統に詳しい人選は欲しかったからな……姉らがやってきたことに対する追い撃ちのようなものだが」
　単純に実力ありきで選ぶのもありだが、昨年の九校戦で達也のエン

ジニア入りに難色を示したのが現3年のメンバーだった。現代魔法師である以上、そのツールであるＣＡＤに詳しい魔法工学系の生徒を部活連のメンバーに組み込むのは、九校戦でのエンジニアの重要性を忘れさせないための対策の一環である。
「僕がどこまで出来るのかは分かりませんけど、頑張ります」
「別に実戦力で選抜したわけじゃないから、変に肩の力を入れないでくれ」
一部の騒いだ面子もいたが、店の雰囲気を尊重してかパーティは和やかな雰囲気で終わった。明日は土曜日ということで、店を出たのは日没前だった。アイネブリーゼで注文したのは軽食に属するものだが、結構な量を食べたので今日の夕食は取らないこととした。
キッチンで深雪と水波の諍い（誰がお茶汲みをするのかというレベルのものだが）もあったが、一足先にシャワーを浴びた悠元はそのまま自室に引っ込んだ。悠元は神将会専用のレシーバーを耳につけると、端末を起動する。
モニターの分割されたウインドウには他の神将会のメンバーである元継、姫梨、修司、由夢、雫が映っていた。すると、悠元の近くに深雪がいないことを疑問に思ったのか、悠元に尋ねた。
『おや、悠元。今日は司波家にいないのか？』
「いや、今深雪は……入っていいぞ」
「失礼します。皆さん、遅れてすみません」
『ま、事情は察せるから気にしてないけどね』
深雪が悠元の部屋に静かに入り、悠元の隣に立った。流石に立たせたままというのは忍びないため、部屋にあった簡易版の椅子を用意して深雪を座らせた。
悠元がこの時間に神将会のメンバーを集めた理由。それは、先日達也が受けた周公瑾の捕縛に関する案件が深く関係している。神楽坂家同様、神将会も古式魔法に連なる面々が多いため、『伝統派』との対立は扱い次第で内戦に発展する可能性も秘めている。
『さて、悠元。今回の招集は急を要するのか？』
「ある意味でそうとも言える。達也が四葉家絡みで周公瑾捕縛の依頼

を受けた。伊勢家から連絡が行っていると思うが、周公瑾は京都三千院で小競り合いを起こした後、消息を晦ましている」
『京都……また厄介なところに逃げ込んだが、奈良に比べればまだマシか』
『伝統派』にも派閥が存在し、過激派が多い奈良方面と穏健・融和派の京都方面に分かれている。そもそも、古式魔法と現代魔法ではある意味毛色が違うのに、自分らが望んだ結果を手に入れられるという美味しい話がそうそう出てくるはずなどない。
『となると、匿っているのは『伝統派』がメインってことになるね……悠元は動くの？』
「母上からの頼みもあったから、俺個人としては動く。だが、『神将会』自体は動かせない」
『どうして？』
「周公瑾には黒幕がいる。うちの爺さんが自ら討つと公言している人物――名は顧傑（グ・ジー）、別の名はジード・ヘイグ。四葉が滅ぼした崑崙方院を追われた生き残りで、復讐の機会を奪った四葉家を復讐の対象にしている」
普通ならば四葉家に肩入れした剛三も復讐の対象に含まれているのだろう。だが、調べた限りでは顧傑が剛三を敵視していないのは、剛三がその復讐劇で魔法行使に支障が出るほどの後遺症が治っていないと判断してのものだった。
何せ、剛三の場合は魔法抜きでも武術で大抵のことを成してしまうため、世界旅行で暴れた情報も武術によるものだと推察しているような節が見られた。漫画やアニメのような所業を武術だけで成しているというのは間違っていないが、だからといって全盛期と遜色ない魔法が使えるという最悪の可能性を考えない辺り、顧傑も老いたという証なのかもしれない。

不審者に鉄槌（物理）を

『「伝統派」が関わってるとなれば、神将会も表立っては動けないというわけか』
「下手すれば、『護人』に迎合する形で正統派の古式魔法師だけでなく、比叡山や金剛山をはじめとした大きな派閥まで動く事態になりかねない。そうなると、京都と奈良を起点とした古式魔法師同士の内戦となる。国内に少なくない被害が出るし、諸外国に付け入る隙を与えかねない」
　今回の目的はあくまでも周公瑾の捕縛（千姫の依頼では、止むを得ない場合は殺害も許可すると含まれていた）であり、別に『伝統派』そのものを相手にするわけではない。だが、周公瑾の巧みな話術と方術によって洗脳されて襲撃してくる可能性があり、もしくは今年の九校戦の前に彼が手引きして入国した大陸の術士が『伝統派』に匿われていることもある。
「ただ、相手が達也や深雪のみならず、近しい人にまで手を出す可能性が極めて高い。雫、ほのかを暫く北山家で預かれないか？」
『それは可能だけど……論文コンペのこともあるの？』
「昨年があんなことになったからな。尤も、相手が国内の魔法師に代わるだけかもしれないが」
　流石に人型兵器といった大型の物理兵器は持ち出してこない可能性が高いだろうが、相手がいくら古式魔法師と言えども最終手段として物理兵器や自爆特攻紛いの呪術を持ち出さないとも限らない。昨年の論文コンペは大亜連合という国家が相手にしてきたが、流石にそこまでの規模にならないと思いたい。
　奇しくも、周公瑾という存在が2年連続論文コンペの舞台で暴れまわっているのは間違いのない事実ではあるが。
「修司と由夢は暫く行動を共にしたほうがいいだろう。姫梨とセリアまでいて余計な手を出すとは考えづらいが……」
「悠元さん？」
「いや……こうなると、居候している俺の関係者も手を出してくる可

能性があると思ってな」
『一番怖いのは侍郎と詩奈か。父には俺から話そう。丁度連絡を取る予定があったからな』
なお、レオに関してはエリカの伝手で暫く千葉家に置いてもらうことで話を進めることとした。燈也はその気になれば単独で対処できるが、居候している新発田家に迷惑を掛けるのは拙いと言うことで、ミアの家（六塚家が用意した住居）に暫く泊めてもらうこととなるだろう。
メンバーの中で一番非力になる美月については、幹比古と佐那に任せることで一致した。
「詳しい事情はまだ先の話になるが、今回は京都ということで会場警備の下見をすることになる。万全を期して『聖天八極護法式陣』の打ち込みもしておきたいからな……どうした？」
『なあ、悠元。その魔法って前にお祖母様から聞いたんだが、確かあべのせいめい安倍晴明にしか使えない探査結界術式のはずじゃ……』
「俺も使えた代物じゃなかったんだが、爺さんの世界旅行に付き合ったせいで覚えた魔法で解決した」
『聖天八極護法式陣』――天神魔法において最上級の難易度を誇る探査結界術式。あらゆる妖を悉く滅ぼすだけでなく、術者に敵意や害意を持つ者を一切の容赦なく滅する感情をトリガーとした魔法。
本来は儀式のために龍脈を把握したり高価な触媒を用いることが必要なわけだが、それを解決したのはエジプトで修得した『陽光疾走』だった。触媒の代わりにその魔法を保存した札を埋め込むことで、簡単に陣の敷設が可能となった。尚、『霊亀』や『麒麟』の敷設の技術はその方法を応用したものだ。仮にその札を他者に見つけられても、使用者である悠元以外のサイオンを受け付けない仕様となっている。
その陣を敷設するのは至って簡単な理由で、原作では探査の式を飛ばしていた幹比古の負担を軽くするための一環である。それに、論文コンペ会場を起点として打ち込んでも京都市全域は容易にカバーできるため、周公瑾の居場所を簡単に突き止めることが出来る算段だ。

『……悠元には頭が上がりませんね』
『まあ、姫梨は悠元に身も心もあべちっ!?』
『真面目な話の時にふざける奴がいるか、阿呆が』
『大変だな、悠元も』
「元治兄さんや元継兄さんが逆に羨ましいと思うよ……何がとは言わないけど」
　自分自身の力は無論自覚しているし、この世界の魔法使いの事情も理解している。婚約のことについても納得した上で受け入れても、やはり隣の芝が青く見えてしまう様な印象は拭えないのだった。
「追加の話になるが、周公瑾が根城にしていた中華飯店の私室跡を探った。流石に本人の行き先に関する手掛かりは得られなかったが、一つ気になる痕跡があった」
『痕跡？』
「国防軍情報部防諜第三課がその調査に立ち入っていた。恐らくだが、四葉家の特殊部隊を秘密裏に監視している可能性が高いだろう」
　国防軍情報部はその性質上、市街地監視システムの使用を認められている。先日の黒羽の特殊部隊に関しても事前に見張っていた可能性が高い。七草家と周公瑾の明白な繋がりは確認できていないが、七草家当主の腹心である名倉が周公瑾と繋がりを有していることは事実。
　とはいっても、あくまでもビジネス面での一時的な協力という側面が大きいが、名倉の端末を解析して得られた情報履歴を見るに、周公瑾は密かに七草家へ協力もしくは隠れ家の打診をしていた可能性がある。
『…ねえ、そのセクションって確かパラサイト事件の時に動いていたっていう？』
「その通りだよ、由夢。達也とリーナが戦った際、達也が倒した『スターダスト』の連中を拘束したのが彼らだ。しかも、四葉家が回収したパラサイトを強奪しようと目論んだようだが、姫梨と佐那が頑張ってくれた」
「悠元さん、色々と初耳なのですが？」

「余計な心配を掛けたくなかったからな。言っておくが、四葉家のパラサイトは神楽坂家の助言を受けて厳重に管理されているから問題は無いと思っていい」
レイモンド・クラークの誘導によって第一高校の演習林に集結したパラサイト。集合体に含まれずに封印された2体のパラサイトを四葉家と九島家が持ち去ることとなった。その際、四葉家側の引き取った側となる亜夜子は防諜第三課の襲撃を受けたが、姫梨と佐那が撃退している。
師族会議で七草家が問題提起する可能性はあるが、そのカウンタープランは既に構築済みだ。最悪神楽坂家の名を出すことも必要だろう。
そもそもの話、七草家が四葉家に執着しなければそんなことを考える必要もない訳だし、兵器としての宿命ではなく真っ当な人間を目指してほしいというのならば直接言えばいいのに、昔の婚約関係が完全に尾を引いてしまっている始末だ。
『……なあ、悠元。七草家が事態を余計にややこしくしているのは気のせいか？』
「それは言わないで、元継兄さん」
魔法使いとして強くなりたい向上心は尤もだが、七草家はとりわけ十師族の中でも表と裏の両方に精通してしまっている。裏側の火遊びは結構だが、それでも結局は表側の人間である七草家現当主と四葉家では住む世界が違う。
別に真由美や香澄、泉美と絆を結ぶことに異存はなかったが、弘一の前妻の子である長男と次男に関しては積極的に関わりを持つ気などなかった。剛三と行動していた時もそれは同様で、泉美との婚約を持ち出して味方として引き込もうとしてくることも考慮しなければならない。
神将会としての今後の方針を話し合った後、話し合い自体は３０分ほどで終わったのだった。
◇　◇　◇
最近の達也の行動ルーティンはＦＡＥ理論を用いた魔法の開発に

殆どのリソースを注いでいた。その影響で牛山から悠元に対してその魔法を使うためのアタッチメント型ＣＡＤの開発を依頼されており、その辺は達也も勘付いているのだろうが、特に何か言われることは無かった。

そして、悠元は自室でモニターに映る魔法の起動式と睨めっこしていた。論文コンペについては春の『恒星炉』実験における議員や記者らへの対応を評価されて免除の権利を貰っており、それを躊躇いなく行使した。

「『ブリオネイク』から得た直線放出の記述改造はこれで問題なし。『死翔の槍（ゲイ・ボルグ）』の反復元力投射記述もこれでいけるか」

既に現行の現代魔法から遥かに進んだことをしている悠元だが、これはあくまでも魔法の民生利用をするための位置付けとして組み立てている魔法。魔法技術の軍事的云々を言う様な輩は少なくないが、民生品の殆どが軍事的に利用できるものばかりであり、それを魔法だけの問題で片付けるのはおかしな話である。

達也が『バリオン・ランス』で使うことになるアタッチメントも並行作業で進められているわけだが、原作と比べて大分強化されている今の達也でも『分解』と『再成』以外の魔法の干渉力を持たせるという作業は難しいようだ。

「起動式の読込補助はいけるとしても、問題はアタッチメントの形状だな。場合によっては『トライデント』の本格的なハード調整も視野に入れないといけないし……ん？」

すると、司波家に張り巡らせている『麒麟』に動きがあり、意識を向けると家の塀の延長線上に浮遊しているサイオンの塊を発見する。それには悠元も心当たりがあった。

（人造精霊――式神か。分解するのは容易いが、少し趣向を凝らすか）

単純に達也がやっているように『分解』するのが手っ取り早い訳だが、彼らの目的を探るには一番早い方法を取ることにした。悠元は『ミラーゲート』で玄関にある自分の靴を引き寄せると、再び『ミラーゲート』を展開してその式神の発信元――司波家から５００メート

ル離れた公園に降り立った。
司波家を探っていたのは、式神の術者と認識阻害の術者の二人。その二人は背後から近づいてくる悠元の姿に気付いていない。完全に気配を偽っている悠元が近付くと、式神を放っていた術者が驚くような反応を見せた。どうやら達也も式神の存在に気付いて『分解』を使ったとみられる。
一体何が起きたのかを把握できていない二人に気遣ってやる必要もなく、悠元は手を翳した。
「さて、どちらにせよ敵意を向けたんだ。天神喚起――――来い、『応竜(おうりゅう)』」
悠元がそう呟いた瞬間、周囲に満ちる風の気質が記述された高密度のサイオンが吹き荒れ、ベンチに座っていた二人の術者もその波動に気付いて慌てて立ち上がったが、常軌を逸した高密度の情報体による〝支配〟で身動きが一切取れなくなっていた。
「な、なっ……!?」
「りゅ、竜の喚起魔法……!? それに、お前は……!?」
「流石に顔は覚えられている訳か。大方誰の差し金なのかは察しが付くが……とりあえず、眠ってもらおうか」
公園に吹き荒ぶ風が二人術者を舞い上げ、地面に強く叩きつけられる。威力軽減はしているので死に至るケガなどはないが、急激な身体の揺さぶりによって意識をブラックアウトされた術者は気絶していた。
悠元は『応竜』を解除して、気絶した二人に触れて彼らの記憶を魔法で読み取る。彼らは『伝統派』に雇われた野良の古式魔法師で、周公瑾や大陸の方術士に繋がる様な手掛かりはないようだ。
「(どちらにせよ、『伝統派』の一派が達也や深雪を古式魔法師と見ている可能性はある。まあ、俺の存在もあるのかもしれんが……)さて、後はお任せしても宜しいですか?」
悠元がそう呟いた先にいたのは、一人の僧形。偽られた気配からするに三人はいるとみていい。僧形は悠元の言葉に僅かな頷きで返しており、二人の術者に関しては彼らに任せても問題ないと判断した。

悠元は再び意識を偽ると、茂みの中に姿を晦ませて『ミラーゲート』で司波家に帰宅したのだった。
悠元が自室に戻ってリビングに移動したところで見た光景は、涙目の深雪と少し慌てている達也、昼食の準備ということでキッチンに向かう水波の姿であった。恐らくは原作のワンシーンだと思い、悠元が冗談交じりに声を掛けた。
「やーい、達也。妹を泣かしてやんの」
「俺が悪いのは認めているから、これ以上焚き付けないでくれ……それで、悠元は公園に行って何をしていたんだ？」
「流石に気付くか。式神の術者をボコって、そいつらは九重先生のお弟子さんに引き渡してきた。彼らは戦えなくてやや不満げだったが」
本当ならば、彼らだけでも十分に拘束できる算段があった訳だが、その手柄を横取りした格好となった。とはいえ、魔法だけでなく武術も卓越した腕前を持つ悠元相手に挑むほど彼らも愚かではない、と達也は推察した。
「流石悠元さんです。……お兄様はもう少しご自身を労わって欲しいと思うのですが」
「長年ガーディアンとしての役割が染み付いている達也にそれは酷だと思うぞ、深雪。とりあえず、昼食が優先だな」
「……そうだな」
それぐらいは自分でも分かり切っていることだが、改めて面と向かって言われるのは何だか納得がいかなそうな様相を見せる達也だった。

慣れは違和感を生じさせる

今夜も達也は魔法の訓練をするために九重寺(きゅうちょうじ)を訪れる訳になるのだが、今回は同行者もとい悠元も一緒だった。古式魔法師の諍いとなれば無関係と行かない、という悠元の言い分は至極もっともであり、達也も同行を断るわけにもいかなかった。

「俺はてっきり、達也は深雪と水波のこともあるから留守にしてくれ、とか言いそうなものだったが」

「悠元の言い分も事実だからな。現代魔法師でしかない俺には間接的な縁になるが」

「間接的……間違っては無いか。どうやら、向こうの迎えも来たな」

二人が寺の敷地内に足を踏み入れると、八雲の弟子の案内で僧坊の一室に招かれた。この部屋は達也がスティープルチェースの一件で通された部屋のようで、その辺りの件(くだり)は八雲が説明をした。

「また何かの厄介事に巻き込まれているようだね」

「悠元から聞きましたが、お手間を取らせてしまいましたか?」

八雲の言葉で悠元が話していた式神の監視の件だとすぐに察し、達也は軽く頭を下げた。一方の八雲はと言うと、少し困ったような表情を見せていた。

「血の気の多い弟子が多くてね。悠元君が代わりに対処してくれたから穏便に済んだよ」

「まあ、この近辺の縄張りを野良とはいえ、古式魔法師にうろつかれるのは我慢ならないというプライドもあるでしょうが」

「それもあるかな。尤も、悠元君が使った喚起魔法で彼らにとってもいい薬になったようだ」

あの状況だと簡単な精神干渉系の魔法でも良かったわけだが、もしかしたら二人を通してこちらの動きを探る魔法を使っていることも考慮し、圧倒的な力を見せることで事の重大さを気付かせる目論見があった。

結局のところ、そのような魔法を使った形跡などなかったわけだが、目撃した側となった八雲の弟子たちにとっては自分たちの実力を

知るいい機会になった、と八雲は呟いた。
「良い薬というのは大袈裟かと……なんだ、達也？」
「悠元、野良の魔法師と言ったか？」
「ああ。彼らの素性がてら『伝統派』の手掛かりを探っただけだが、彼らは『伝統派』に雇われたフリーの魔法師だった。九重先生のほうはどうでしたか？」
「悠元君が調べた以上の情報は出てこなかったね。にしても、流石は神楽坂家の次期当主だ。かの安倍晴明（あべのせいめい）の再来などと言われても納得できるよ」
　達也のような現代魔法師からすれば古式魔法師も全て管理されていると思いがちだが、一定の実力やライセンス評価項目に満たない魔法因子保有者は少なくない。それこそ一つの能力に特化した魔法師（ＢＳ魔法師）がいる以上、魔法協会で管理できていない魔法師もいるのだ。
　古式魔法師となれば、世俗を嫌って裏の仕事に携わる者も少なくない。『伝統派』もそういった歴史を抱えている魔法師の集団である。
「そういう有名税は要りませんよ。ただ、俺がいることで達也や深雪を古式魔法師とにらんで動いてくる可能性は高いですが」
「まあ、君らはある意味普通の現代魔法師とは言い難いからね」
　現代魔法のみならず古式魔法にも造詣が深い悠元、普通の現代魔法が上手く使えない達也、そして悠元の婚約者である深雪。奇しくも全員神楽坂家の血筋を引いているため、強ち間違っていないことに悠元は苦笑を浮かべた。
「九重先生にお願いしたいのは、自分らだけでなく俺らの身辺や友人も狙われる可能性があるため、秘密裏の警護をお願いしたいのです」
「警護ねぇ……達也君が受けた何かしらの事案が大きく関係しているのかな？」
「詳しくは言えませんが、京都方面の仕事になるかと。師匠の手を煩わせずに済めばいいと思っています」
　実際のところ、原作と異なり八雲は『九頭龍』の長であるため、千姫から四葉家が周公瑾の追跡をしていることは把握している。ただ、

四葉家だけでなく魔法師社会には『九頭龍』の存在自体公然の秘密となっているため、八雲はそれを秘匿しつつも話を続ける。
「分かったよ。既に悠元君が関わっている以上、こちらとしても協力する口実は出来ているからね。悠元君のほうは三矢家もフォローすべきかな？」
「ええ。三矢の使用人である矢車家もそれなりに古式魔法に得手はありますが、全てをフォローできているとは言い難いですし。まあ、上泉家は言わずとも動いてくれるでしょうが、その辺は元継兄さんにお伺いはしています」
　結果的には、悠元の存在で上泉家と神楽坂家が動く口実となってしまったわけだ。『伝統派』の方々はご愁傷様と言えばいいだろう。それに、九重寺の門人にとっても格好の得物になるのは目に見えている。
「俺としては、師匠にあまり動かれるのも大変ですが」
「内戦の危険性を孕んでいることだろう？　それを危惧するのなら、『伝統派』が悠元君に喧嘩を売った時点で既に賽は投げられたも同然だよ。だから、達也君は自分の仕事に専念するといい」
　別に奈良・京都方面の古式魔法師全てを相手にする気など全く無い訳だが、勝手に警戒された上にちょっかいを出してきている時点でこちらの平穏を脅かす意図しか見えない。これで物理的な手段に訴えた場合、京都全体に結界魔法陣を打ち込んで本格的な〝聖域〟に仕立て上げることも辞さないつもりだ。
　達也が古式魔法師の内戦を危惧したのは別の側面があり、元々『正統派』――伝統な修行法を忠実に守り続ける表側の古式魔法師――と『伝統派』――旧第九研に協力して望んだ力を得ることが出来ず、『九』の各家と対立関係にある裏側の古式魔法師――という構図が存在し、正統派からすれば「『伝統派』を粛正すべし」という声も少なからず存在する。
　上泉家は元々武家から派生した陰陽道系古式魔法の大家であり、神楽坂家は皇族の守護を代々担ってきた陰陽道系の一族。力の求め方は『伝統派』に近いものの、失われた古式魔法の技術を守り続け、天

神魔法に関しては伝統ある修行方法を忠実に守り続けている。
　それに、正統派の中には二家で修行して大成するケースも少なくないため、古式魔法師では一応中立の立場にある『護人』の舵取り次第で正統派と『伝統派』のパワーバランスが大きく変わるほどだ。
「別に自分から喧嘩を売りに行くつもりはありませんが」
「それだけ悠元君の持つ『神楽坂』の名は古式魔法師の世界にとって畏怖と尊崇の意味が込められている、というわけだよ。それは、実際に現地へ行ってみればわかる話だよ」
「……分かりました。肝に銘じておきます」
　釘を刺すつもりが逆に刺された気分を悠元は抱き、それを見た達也は悠元の抱える事情の深さを見て、四葉家における達也自身の事情が寧ろ可愛く見えてしまう、と錯覚してしまいそうになったほどだった。

◇　◇　◇

　会談があった翌日の西暦２０９６年１０月１日、第一高校新生徒会が発足した。メンバーは生徒会長：司波深雪、副会長：七草泉美・十文字理璃、書記：司波達也・桜井水波、会計：エクセリア＝シールズ・光井ほのかの計７名という歴代の生徒会でも多い人数となる。
　これには生徒のみならず普段は生徒会運営に口出しをしない職員室からも疑問が噴出したわけだが、過去の経験からくる部分に加えて次の生徒会役員構成を睨んでの人選だと言われれば、それ以上の異論を唱える者は出てこなかった。
　そもそもの話、部活連ですら認められた人員の増員を生徒会だけが認められないのは筋が通らない。同じ全校生徒を対象にするだけでなく、場合によっては風紀委員の補助に入るとなれば役員一人当たりの仕事量はかなり膨大となる。それを少ない人数でこなしてきた歴代の生徒会長や部活連会頭が単純におかしかっただけなのだ。
　そして、課外活動連合会――――新部活連メンバーの発足も行われた。
「この度、部活連会頭となった神楽坂悠元だ。歴代の会頭を務めた方々に恥じぬ振る舞いを心掛けていきたいと思うので、よろしくお願

いする……何故黙る」
「いや、それは酷すぎない？　寧ろ笑顔が怖いわよ」
「いっそのこと笑えよ」
　別に威圧感とか出しているわけではなく、悠元が気配の抑揚を止めているだけで大半のメンバーが何も言えずに緊張している面持ちを見せていた。辛うじて反応できるエリカの言葉に、悠元は若干引き攣った笑みを見せていた。
「別に十文字先輩のように威厳があるわけでもなく、服部先輩のようなプライドの高さなんてないが……巡回メンバーは以前話した通りだし、今回は顔合わせだけだからな。まあ、月末に京都で行われる論文コンペの警備メンバーには割り当てることもあるので、ビシバシしごくのは決定事項だが」
　別に脅しめいた言い方すらしていないのに、一言述べるだけで委縮している始末。これには流石の悠元も怒りたくなってきた。１年生はまだしも、同級生にまでそういう態度を取られるのは癪に障る。なので、論文コンペの警備メンバーの鍛錬は厳しめに行くつもりだ。
　それでも、人間卒業レベルである剛三との鍛錬レベルに持っていくことは金輪際無いに等しいが。
「なあ、鷹輔。俺が何か悪い事でもしたか？」
「いや、その、現生徒会長を止められるのは司波かお前しかいないからさ。皆は機嫌を損ねたくないんだよ」
「……」
　辛うじて出てきた鷹輔の言葉に他のメンバーも頷いたりしており、お前らは人を深雪のストッパー扱いするな、と声に出して言いたかったが……なまじ事実の側面もあるために言い返せなかったのだった。
　解散後、悠元はそのまま生徒会室に足を運んだ。悠元の生徒会室の出入りに関するＩＤ登録自体は抹消されていないが、それでも別の組織である以上は礼儀正しくノック（この場合はチャイムと言うべきか）すると、ロックが解除されたので中に入った。
「失礼する」
「悠元さん。態々ノックをしなくても歓迎しますのに」

「分かっちゃいるが、流石に初回からいきなりノックもなしに入るのは拙いだろう……コホン。この度部活連会頭となった神楽坂悠元だ。宜しくお願いするよ、司波生徒会長」
「はい、神楽坂会頭も就任おめでとうございます。……やっぱり、名前呼びがしっくり来てしまいます」
　高校入学から司波家で居候しているせいか、名字呼びではなく名前呼びの弊害が出てきた形となった。それは深雪も同じだったようで、苦笑を零していた。すると、部屋の隅で達也と話していた幹比古が悠元と深雪に近付いてきた。
「何はともあれ、お互いに頑張っていこう……っと、幹比古が風紀委員長か。宜しくな」
「うん、悠元も宜しく」
　花音の後となる風紀委員長は幹比古と雫の一騎打ちだったが、面倒くさいオーラを全開にした雫の無言の圧力に屈した形だ。尚、風紀委員の部活連推薦枠に入っていた3年生が引退して一人空く形となったため、個人的にやる気が見られた由夢が風紀委員となり、教職員推薦枠からは修司が風紀委員となった。
　雫と修司、由夢が結託したとなれば、幹比古の委員長選出はある意味納得できるものでもあった。その雫はと言うと、ほのかやセリアとガールズトークで盛り上がっているわけだが。
「幹比古、この後時間は取れるか？」
「あ、うん。活動記録の作成が終わればいいけれど」
「なら、手伝うよ。生徒会にいた時に風紀委員の仕事も一部やっていたし」
　データベースなどの改良で生徒会の仕事が手持無沙汰となることが多く、その際に摩利や花音の頼みで風紀委員会の活動記録を作成することが多かった。尚、本人たちに言ってもどうせ聞かないと判断して修次や五十里に相談している。
「……悠元って、どういう役職だったの？」
「部活連幹部兼生徒会役員補助兼風紀委員長補佐、みたいな感じだな」
「今更ながら、悠元さんにかかる負担が大きすぎましたね……大体先

輩方のせいですが」
　その元凶は大体泉美の姉のせいなのだが、ここで彼女の身内を貶す理由もないためにそのことは心の中に仕舞っておくこととした。
　生徒会室横の直通階段で風紀委員会室に入り、手早く活動記録の作成――――そのためのテンプレートは既にあるため、巡回記録などで気になる点を書く程度のもの――――を済ませたところで幹比古が切り出した。
「それで悠元、話って？」
「ああ。実は昨日の話だが、古式魔法師からちょっかいを受けてな」
「……ねえ、悠元。その魔法師たちは悠元を舐め切ってるのかな？」
「さあ？　九校戦の知名度はあるにしても、今年に関してだと使った古式魔法は天神魔法ぐらいだし」
　悠元のことを昔からよく知る幹比古からすれば、悠元が古式魔法の大家である神楽坂家に血縁と実力で選ばれた事実を把握している。だが、事情を知らない古式魔法師からすれば、永らく表舞台に姿を見せていなかった神楽坂の名を耳にしたことで、その実力を試そうと躍起になる人間が一定数いるのも事実である。
「で、そいつらは『伝統派』に雇われたフリーの古式魔法師だった。彼らの処置は知り合いの忍術使い――――九重八雲先生にお願いしてる」
「『伝統派』……悠元が態々首を突っ込むように思えないし、大方達也絡みなのかい？」
「まあ、概ねその考えで合ってる。達也に協力の立場を取っているのは事実だが」
　幹比古は将来的に東道家へ養子と入る以上、裏側の事情だけでなく『元老院』にも触れることとなる。そして、幹比古も達也や深雪が四葉の人間であることを知っているため、今回の一件も四葉家絡みだとすぐに察していた。
「今年の論文コンペは奇しくも『伝統派』の一派がいる京都。おまけに、達也が受けた仕事が『伝統派』に関与せざるを得ない相手と言えば察しが付くか？」
「……成程ね。実は達也に改造された式神の起動式のことを教えたん

だけど、事はそう簡単じゃなさそうだね。コンペの警備もしっかり考えるべきか」
「そうだな。会場警備や護衛の総指揮は服部前会頭に任せて、俺は現地警備に回るけど」
　幸いにして、部活連会頭の悠元と風紀委員長の幹比古でお互いに連携が取りやすく、生徒会長の深雪とも知り合い（悠元からすればそのレベルではないが）なので、護衛や警備に関してはスムーズに決められると踏んでいる。
「彼らの標的が俺らだけに限定してくれればいいんだが、俺や達也の身内に加えて友人関係にまで狙いをつけてくる可能性がある。一応打つべき手は打っているが……俺らの中で非力の部類になるのが美月とほのかだ。ほのかは雫にフォローを頼んでいるが、美月に関しては幹比古に頼みたい」
「え、えっ!? ぼ、僕がかい!?」
「別にそう手間がかかることでもないだろう。二人の家の個別列車（キャビネット）の最寄駅からすれば丁度同一の幹線だ。往復で１０分程度の手間なんてそう難しくないだろう？」
　幹比古のほうはもとより美月の家がある場所を知っていたのは、彼女が伊勢家の養女となる手続きの際、千姫に同行したことでその辺の事情も知ったからだ。それに、悠元の元実家である三矢家の本屋敷が厚木市にあるため、奇しくも三人の家が電車の幹線上に沿った形となっている。
　ただ、悠元の場合は司波家に居候している関係で神奈川方面を利用するのはかなり減っているため、幹比古に頼むのが一番理に適っているという訳だ。
「……断る理由もなさそうだね。というか、柴田さんを危ない目に遭わせるわけにはいかない以上、僕が腹を括れば済む話か。分かったよ、悠元」
　なお、こういった距離的な理由だけでなく、一線を越えているのに初心な反応を見せることが多い幹比古と美月の仲を進展させたいという佐那の思惑が含まれているのはここだけの話だ。

要らぬ迷惑

西暦２０９６年１０月５日。生徒会・部活連・風紀委員会の新体制が発足して最初の一大イベントとなる論文コンペの準備が本格的に始まった。昨年は鈴音の論文テーマである重力制御魔法式熱核融合炉のように大掛かりな実験装置を必要とはしないが、魔法実演の側面から実験器具製作が急ピッチで行われている。

メインの執筆者となる五十里のテーマ『投影型魔法陣（とうえいがたまほうじん）』に関わる準備は講堂で行われている。サブメンバーはあずさと三七上ケリーの二人だけであり、あずさ以外はそれなりの実戦力を持っている面々であっても昨年の横浜事変を鑑みて護衛と会場警備が付けられることとなる。

例年の不文律ということで服部が魔法科高校九校の合同警備のリーダーを務め、現部活連会頭の悠元は自動的に会場警備に関する打ち合わせを生徒会や風紀委員会と行うことになる。

その悠元は、風紀委員長である幹比古や生徒会役員である達也と講堂での作業を見ながら打ち合わせをしていた。

「――――では、今年も風紀委員以外から護衛の有志を募るんだな？」

「昨年のことが今年は起きないなんて保証はないからね。有志とは言っても、半分以上は部活連のメンバーに頼る形だけれど」

昨年のトリガーとなった周公瑾は関東近辺にいない。だが、今年の論文コンペが京都開催という点を踏まえた場合、それを知った彼がちょっかいを掛けてくる可能性が高い。むしろ、論文コンペの会場で騒ぎを起こし、それに目を向けた隙に逃亡することも考えられる。

「会場警備に関してだが、部活連からは俺とレオ、エリカに佐那を現地の会場警備に回すつもりだ」

「え？　コイツなら護衛が似合うんじゃない？」

「おい、人を肉の壁扱いすんじゃねえよ」

「痴話喧嘩はよそでやってくれ」

悠元の言葉にエリカが「誰が痴話喧嘩よ！」と声を上げようとしたところをレオが宥めているわけだが、大体エリカが護衛という性分を

素直に引き受けるとは思えないからこそ、レオを会場警備に回すという選択肢を取ったまでのこと。それは幹比古もすぐに理解したのか苦笑を浮かべていた。
「俺はてっきり、悠元が合同警備の指揮を取る者かと思ったのだがな」
「モノリス・コードの優勝校がコンペの警備指揮を執る不文律があったし、俺の今の名字は京都方面じゃ色々訳アリだからな。達也もその場に居合わせてたから分かるだろうが」
　古式魔法師は現代魔法師以上の歴史を抱えており、元十師族・現護人の身分である悠元もいまいち実感がわかないのは無理からぬことだ。ただ、その一端を今年の正月で受けた以上、嫌と言うほど理解しているつもりではあるが。
「へえー、コンペの警備はそういうことになってたのか」
「別に十文字先輩が十師族だから、という理由じゃなかったのね」
　その意味で、元々古式魔法師の家柄である佐那に入ってもらうのは向こうの国防軍や警察との印象を必要以上に悪化させない緩衝材のような意味合いも含まれている。
「それで、達也。護衛と警備のどちらに回ってくれるかな？」
「俺が関わることは決定事項か……警備で頼む」
「了解だよ。会場の周辺警備は悠元が責任者だから……任せてもいいかな？」
「元々そのつもりだからな」
　達也と悠元は周公瑾捕縛の件で京都方面に出向くこととなる。発表者の護衛よりは警備の方が動けると判断してのことだ。現在他校の警備責任者とオンライン会議で打ち合わせている服部からも昨年の遊撃による会場警備の実績を買われているため、悠元に断る理由などなかった。
「京都だから日帰りも可能だが、あの場所は古式魔法師の魑魅魍魎（ちみもうりょう）が跋扈する場所だからな。万全を期す形を取るなら、下見は泊りがけの方がいいだろう」
「魑魅魍魎って……ミキの側に立った悠元がそれを言う？」
「最初に言い出したのは母上だからな」

「僕の名前は幹比古だ……」
　厄介なのは、パラサイドールの件に託ける形で周公瑾が手引きした大陸の方術士が『伝統派』に合流していることだ。最悪の場合、今まで多用してこなかった分野の天神魔法を実戦で使うことも想定しなければならない。
「泊りがけねえ……間違いなんて起きるはずもないか」
「それはどういう意味かな、エリカ？　返答次第では〝御神渡り〟でもやらせるぞ」
「あんなの人間辞めてないとできないわよ！」
　悠元が口にした『御神渡り』は新陰流剣武術の師範教練の一環で行われるものであり、全面結氷した湖の氷を踏みぬくことなく足元の氷を膨張・収縮させることで本来自然現象によって起こる『御神渡り』を人工的に生み出すというもの。絶妙な力加減と緻密な魔法制御が求められるため、上段者の大半が躓く難所の一つだ。
　武術の訓練に足捌きが求められるのは言うまでもない話だが、力の掛かり方を相手に悟らせないための一環としてその訓練が行われており、この訓練をクリアした人間でないと剛三相手にまともに戦えない。
　なお、悠元は初回で制御を大幅に間違えて高さ2メートル超、全長20キロメートル以上の『御神渡り』を作ってしまい、それを見た剛三からは盛大に笑われたことがある。その訓練を幼馴染の誼で見に来ていたエリカも、これにはドン引きに近いような笑みを見せたほどだ。
「……軽運動部の制御訓練メニュー、もう少し重くするか。千刃流の免許皆伝者を薙ぎ倒せるところまで来てるし」
「あれ？　あたしって和兄や次兄と遜色なくなってるの？」
「いや、お前のスピードに追い付ける人間がほぼいねえよ」
「確かに」
「あ、あはは……」
　朱に交われば赤くなる、という言葉があるわけだが、悠元という規格外の存在が身近にいることでエリカの自己評価自体も狂っている

という事実にレオ、幹比古が揃って肯定するような言葉を発し、大人しくしていた美月が苦笑を零したのだった。
ここで達也が何も言葉を発しなかったのは、下手に言ったところでブーメランになってしまうのを察したためであった。
「護衛には壬生先輩や桐原先輩、千代田先輩に千倉先輩もいるし、中条先輩には燈也が護衛に就くからな。そもそもの話、五十里先輩と三七上先輩も相応の実力者なわけだが」
現代魔法の範疇で言えば逆に護衛なんていらないだろうが、古式魔法師まで出てくれれば話は別だ。八雲もその辺を察してか弟子たちを密かに派遣してくれている。八雲としては「血気が逸らないことを祈るよ」と苦笑交じりに述べていたが、弟子は師匠に似るものと考えるのならば、その原因を作っているのは言うまでもない話。
◇　◇　◇
公共交通機関が大人数一括輸送型から少人数個別輸送型にシフトしているのは何も電車だけではない。自宅と駅の間はコミューター＝ＡＩタクシーを利用するのが大都市圏では一般的である。自宅から駅に行くときは住民ＩＤを使ってコミューターを呼び寄せ、その逆の場合は駅前のコミューター乗り場で空車を捕まえる。乗り場が無い街角の場合は公共交通ネットワークにアクセスして空車を呼び寄せる。
いくら魔法があると言っても市街地での魔法使用制限はかなり厳しいため、達也らも普通に利用している。原作だと達也と深雪、水波が関わったシーンだが、今コミューター乗り場にいるのは悠元と深雪だけだった。
「達也が流石に強いとはいえ、一人で出歩かせるのは危険だからな」
「それには同感です」
実際のところはと言うと、買い物がある水波の護衛ということで達也が同行している形だ。いっそのこと四人で固まって帰る案もあったわけだが、珍しく達也から提案してきた形となったため、断る理由もなかった。
「それに、明日は九島家に出向くからな。まあ、準備自体は既に済ませ

ているが……抓らないで」
「悠元さんは器量が良すぎです」
「それに不満を持たれても困るんだが」
　すると、コミューターから３０歳代ぐらいの男性が降りてきて、空車となったコミューターがゆっくりと二人が待つ乗り場へと移動してくる。だが、その時点でコミューターの中に仕掛けられた人造精霊の存在に悠元と深雪は気付き、素早く懐からＣＡＤを取り出す。
　コミューターの中で炸裂しようとする人造精霊の自爆を深雪が水属性の天神魔法――――精霊の動きを抑え込むことで精霊の自爆を封じる『水鏡清廉（すいきょうせいれん）』で相手の人造精霊を一つ抑え込んだ。
　だが、もう一つの人造精霊が自爆したことで悠元と深雪の周囲に高密度のサイオンが漂う。
「（魔法発動を察知させなくするつもりか……となれば、次にとる手は……）深雪」
「はい、悠元さん」
　悠元に呼びかけられた深雪が魔法を発動させたと同時に近くの噴水の水が大量に噴き上げられ、辺り一面を濃い霧が覆う。霧を含んだ大気だと『気流操作』の難易度が上がってしまうことを見越してのものか、別のコミューターから降りてきたと思しき人物の存在を悠元は聴覚のみで判断する。
　相手の古式魔法師が攻撃の姿勢を取ったところで辺り一面の霧が深雪の魔法によって一気に晴れ上がる。これに動揺する二人の古式魔法師に対し、悠元は直接的な攻撃手段であるクロスボウを持った魔法師に素早く迫ると、クロスボウを鋭い蹴りで宙高く舞い上がらせた。
　間髪入れずにけり上げた左足の軌道を相手の頭に引っ掛ける形で腰を回し、相手を容赦なく地面に強打させた。咄嗟に衝撃軽減の術式を使っているので、死に至るリスクはほぼない。
　先にコミューターから降りた古式魔法師は魔法を放つも、深雪の圧倒的な領域干渉で攻撃魔法を発動出来ない。これでは勝てないと踏んだ古式魔法師が逃亡を図ろうとしたところ、悠元が先回りしてその

魔法師の進路上から突っ込んだ。
「はい、逃げないでくださいね」
「がはっ!?」
すれ違い様にラリアット気味のタックルで相手を容赦なく気絶させた。魔法を使うのならば簡単だが、こんな市街地で躊躇いもなく魔法を使うとはどういう魂胆なのかと思いながら気絶させた魔法師の記憶を素早く読み取る。
すると、周囲が安全だと判断したのか、深雪が駆け寄ってきた。
「悠元さん、大丈夫ですか?」
「怪我はないし、相手も気絶させただけだ。しかし、こんなものまで持ち出してくるとはな」
悠元が手にしているのは、最初に気絶させた古式魔法師のクロスボウにセットされていた破魔矢であった。クロスボウを蹴り上げる前に強引に引き金を引かせ、射出した瞬間を掴んでからクロスボウを蹴り上げて魔法師を沈めたのだ。
音速レベルの木刀を躱すことのできる動体視力を有する悠元からすれば、クロスボウから放たれる矢など豆鉄砲レベルの速さでしかない。ただ、破魔矢を持ち出したということからして、自分のみならず達也や深雪、それと水波も古式魔法師として見ている節がある。
「さて、警察は何時になったら来るのかが問題だな」
細かい話は司波家ですると言い含め、トラブルを察知して駆けつけてくるであろう警察の事情聴取で取られる時間のことを思うと、溜息を禁じえなかった悠元であった。
◇　◇　◇
事情聴取自体は３０分程度で終わった。街路カメラと想子波用センサーのデータもそうだが、ここで悠元の知名度が生きた形となった。神楽坂の名に加え、悠元が九校戦で将輝を破っている事実は様々な方面に大きな影響を与えており、事情聴取を担当した女性警察官は悠元のファンだった。
その反動で深雪の機嫌が若干悪くなり、家に着くまではずっと悠元の腕から離れようとしなかったほどだった。先に帰っていた達也か

らはその辺の事情を深雪に残している『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』で察していたためか、「お疲れ様だな」と労われてしまった。
「達也のほうは特に何もなかったのか？」
「そうだな。どうやら、先日の件でお前が対処したことも関係しているのかもしれない」
「……だろうな」
　達也の準備は深雪と水波の二人で行っているため、リビングには本来準備するはずの達也に加えて既に準備を終わらせている悠元の二人だけだった。
　確かに、先日司波家を偵察していた魔法師の対処をしたのは自分だが、気絶した後は九重寺の門人に任せており、彼らの尋問などは一切していない。それだけ『伝統派』が神楽坂の名を恐れているのだとすれば一定の説得力はあるわけだが。
「今後襲われない保障なんてないけどな……だが、今回の一件で達也だけでなく俺も明確な標的となったのは間違いない」
　周公瑾との関わりは昨春の『ブランシュ』による排除の監視をしていた時に察知した。達也に対しての敵意や害意を向けていなかったため、辛うじて達也の関心を引くことは無かった。なお、周公瑾に監視されていた事実は未だに秘匿したままだ。
　だが、その事実から鑑みれば標的にされる理由が成立し得る。
　すると、準備を終えた深雪と水波がリビングに姿を見せ、そのままティータイムと相成った。
「そういえば、悠元は『伝統派』のことを知っているのか？」
「元十師族とはいえ、古式魔法の家と付き合いは長いからな。爺さんや母上から聞いた話もあるが」
　正統な修行方法を忠実に守り続けている『正統派』の古式魔法師からすれば、『伝統派』という言い方よりも『異端派』や『外法派』がしっくり来てしまう。それは、古い魔法を伝える者が抱えている――――いや、今の時代における非魔法師の魔法に対する恐怖の根幹を理解しているからこそのしがらみが大きく影響している。
「元々魔法という存在はどう取り繕っても一つの『力』だ。古き魔法を

伝承している者たちは異端者扱いされることを嫌っていたが、それ以上に権力者が魔法の存在を公にすることを嫌った。証拠を残さない方法の干渉は権力闘争の武器になりかねないからな」
「呪殺か。古代王朝時代からの伝統だな。歴史書では通説とされているものだが、事実である裏付けはあるのか？」
「上泉家や神楽坂家の歴史書にはその裏付けとなる記録がたくさん残されている。それに、現代魔法の範疇とは言えその暗殺を成した人物が達也や深雪の祖父にいるだろう」
　四葉元造の『死神の刃（グリム・リーパー）』はその典型的な例で、その魔法の詳細を剛三から教わった。その情報を基に転生特典が勝手に働いてデメリットを完全に排除した『死神の刃（グリム・リーパー）』が完成したのは言うまでもないが。
「そうなのですか？」
「俺も爺さんから聞いた話だが、四葉の先々代当主が得意としていたのは精神干渉系魔法『死神の刃（グリム・リーパー）』――自身が認識した相手に『死』のイメージを植え付け、問答無用で死に至らしめる魔法だ」
「俺は噂程度に先代当主から聞いていたが、そこまでの魔法とはな」
　四葉の復讐劇に最も関わっていた人物なだけに、達也や深雪、水波はその詳細を知らされていなかったようだ。かく言う自分も沖縄防衛戦後に剛三から四葉の復讐劇の詳細を知った形なので、三人がそこまで知らなくとも無理は無いだろう。
「話を戻すが、『伝統派』は複数の拠点を持つ魔法結社の連合体とも言える。旧第九研に協力しておきながら、最終的に十師族への報復を目的の一つとしているわけだが」
　彼らは力を求めて現代魔法の研究に手を貸したが、結果的には受け入れられなかった。それが古式魔法師としてのプライドを逆撫でされた形となり、自分たちの力を誇示するために報復を目的の一つとしている。
　ただ、彼らの拠点の殆どが元々いた正統派の拠点近くにあるようで、元居た場所への執着が捨てきれなかったのが見て取れる。頑なに正統の修行を重んじる古式魔法師からすれば、そんな彼らを〝半端者〟と感じて排除しようと叫ぶ者が出てきても何らおかしくはない。

「それで夕方に襲撃されたことに関してだが、破魔矢まで持ち出していた以上は俺と深雪を古式魔法師として認識していた可能性が高い。俺はもとより深雪も天神魔法を学んでいるから、その意味で古式魔法師という認識も間違ってはいないが」

だが、悠元と深雪はお互いに十師族の血縁の為、元々現代魔法師の側面が強い。そうなると、一つの可能性が浮上してくる。

それは、四葉家と黒羽家の関係性は周公瑾も認識していたが、黒羽家と達也らの関係性は知らないままという点にある。

「悠元が言いたいのは、四葉と文弥や亜夜子の関係性を周公瑾が掴んでいても、文弥や亜夜子と俺たちの関係が不明瞭のままという点か」

「ああ。なので、俺らは黒羽の依頼を受けた古式魔法師という体で監視してくる可能性が高い。幹比古には予め美月の護衛を頼んだし、元継兄さん経由で実家の三矢家にも注意喚起はした」

正直なところ、詩奈の護衛を務めることになる侍郎はその実力をメキメキと伸ばしており、上泉家では女性の門下生に可愛がられているらしい。その様子を見て詩奈がヤキモチを焼いている場面があり、元継や千里が宥めているとのこと。剛三がその役目を積極的に買おうとしたところ、詩奈に投げ飛ばされたらしい。

あの祖父がセクハラ紛いのことをするはずなど金輪際無いので、それだけ詩奈の嫉妬深さが強かったのだろう。ご愁傷様という他ない。

誰だって思ってしまう懸念事項

事前に八雲との約束を取り付けているため、護衛に関しては問題ない。それでも昨日起こった事実を早めに伝えるべきだと考えて悠元は雫に連絡した。

「すまないな、こんな夜中に」

『ううん、大丈夫。悠元が相手ならいくらでも時間を空けるよ』

「サラッと言うのな……雫にも関係するからしっかり聞いてほしい」

最初に雫を選んだのは、一人暮らしをしているほのかを北山家で預かってもらうことを鑑みた場合、事前に連絡した方がスムーズに進むと判断してのことだ。惚気混じりの言葉に若干呆れつつも悠元は気持ちを切り替えて話し始めた。

「今日の夕方だが、俺と深雪が古式魔法師に襲われた。先日話した達也の一件が絡んでいるわけだが、達也の近しい友人で非力の部類になるのはほのかと美月になる」

『襲われたって……二人に喧嘩を売る方が哀れだけど』

「そう言ってやるな。それで、事前に話していたことだが」

『そっちはもう両親に話してる。一応悠元絡みってことにしたけど……ゴメン』

雫の両親を納得させる意味で悠元の名前を出したことに雫が謝罪したが、悠元はその謝罪は必要ないと返しつつ言葉を続ける。

「問題ない。達也の一件で俺も関わることを決めてるからな。それで言い忘れていたことだが、魔法科高校ならばまだしも魔法大学の関係者にまで首を突っ込んでくる可能性がある」

『それって……悠元のお姉さんたち?』

「それと、十文字先輩や七草先輩、渡辺先輩を中心とした面々だな。その辺は明日理璃や泉美経由で伝えるつもりだ」

原作だと達也の近しい友人を狙って動いているわけだが、ここで引っ掛かったのは達也と結構仲の良い魔法科高校の卒業生を狙ってこなかったことだ。もし、周公瑾が原作通りに四葉を狙い撃ちにしようと目論んだ場合、割りと仲の良い真由美を狙わない理由がない。

この辺も含めて周公瑾と名倉が取引をしていたのだとすれば筋は通るが、今回はそのパターンが完全に消えている。なので、高校時代に達也と交友があった魔法大学生や防衛大学生が狙われない道理が無い。

下手に上泉家や神楽坂家を刺激して古式魔法師同士の内戦に持ち込んだ場合、周公瑾は逃亡の時間を稼げるリターンと引き換えに得るリスクが重く圧し掛かる。最悪の場合、スターズを動かして顧傑を殺すことも厭わないだろう。

周公瑾とて自分が負うべきリスクヘッジを十二分に把握しているからこそ、昨春以降はこちらを直接排除する方法を避け続けている。夕方の襲撃では、あくまでもこちらの動きを阻害するような動きに終始していた。

だからと言って、何もしないという選択肢を取らない周公瑾ではないはずだ。

「何事も無ければいいが、昨年の横浜の件もある。論文コンペが終わるまでの辛抱だが、それまでほのかを頼む」

『……本当は悠元の手伝いをしたいけど、ほのかをほっといたら大変だからね。悠元の頼みなら、精一杯頑張る。その代わり……埋め合わせはしてね』

「それは承知の上だよ」

通信を終えると、悠元は背凭れに身を預けるような形で深く座り込んだ。

周公瑾のことを考えるのも大変だが、それ以上にこれから向かうことになる行き先――九島家とは個人的にも様々な因縁を抱えている相手。とりわけ元十師族となった悠元からすれば〝面倒な相手〟とも言えてしまう。

「……かったるいわ」

十師族であろうともなかろうとも付き纏ってくる魔法師としてのしがらみ。十師族には過ぎた力だと言われ、大人しく抜けたところで文句を言われる。結局は自分らにない力を持つ俺に文句をただ言いたいだけなのではないのか、と問答したくなった悠元であった。

そんなうだうだ言ってるぐらいなら、魔法の訓練を精力的にやっている四葉家現当主を見習え、と言い放ちたくなった。その理由が不純な要素を含んでいるのは流石の悠元でも苦笑を禁じえなかったが。

◇　◇　◇

放課後の部活連本部室では、悠元が副会頭である琢磨とエリカに今日は生駒の九島邸へ行かなければならない私用を理由に、早めに帰ることを伝えた。

「九島家……既に十師族ではない会頭がですか？」

「実は昨日の夕方、駅で深雪と帰っていた時に襲われた。特に怪我はないが、相手は古式魔法師だった。その辺も含めて九島邸に行くこととなる」

「……あっさり言いのけたというか、襲った相手は自殺願望でもあるの？」

「さあ？　その辺の心情は俺ですら知らん」

悠元の実力を知っている琢磨とエリカだからこそ、襲った相手が不憫か自棄でも起こしたのかと言いたいような問いかけがエリカから出たことに、悠元は流石に相手の心まで推し量れないと返した。

「会頭と会長が古式魔法師に……俺たちも気を付けた方がいいのでしょうか？」

「今のところ、俺や達也の身辺や友人関係が狙われる可能性が高いが、既に護衛は頼んでいる。万が一の場合が起きた際、全校生徒への注意喚起も視野に入れるつもりだ。今月末の論文コンペのこともあるからな」

昨年の横浜での一件を経験している人間からすれば、今年は起きないという保証など出来ない。今年入学したばかりの琢磨がその辺の実感を持てないのは無理からぬことだろう。「分かりました」と言って先に出て行った琢磨を見送った後、エリカは怪訝そうな表情を浮かべていた。

「どうした、エリカ」

「いや、ね……悠元の前でやけに素直になり過ぎて、逆に気味が悪いのよ。あれだけ達也君に噛みついていた七宝と同一人物なのかって

思っちゃって」
「それは言わないでくれ……俺も思ったけどさ」
流石にそうさせてしまった当事者が言うのはどうかと思うが、それでもここまでの変わりようはエリカでなくとも訝しむのは無理からぬことだろう。琢磨の父親――――七宝家当主からの説教があったと思しき翌日、深々と頭を下げて謝罪した琢磨に思わず懐疑の目を向けてしまったほどだ。
自分としてはそこまでの確執が無いので、謝罪は素直に受け取ることとした。その上で達也にも謝罪するように言い含めており、その後で達也からも琢磨からの謝罪があったことを明かした。いくら師補十八家の一角とはいえ、魔法科高校で必要以上に家の権威を揮うなど以ての外なのだから。
なお、琢磨本人は七草姉妹との模擬戦の時にほのかに気遣われたことで何かしらの気があるようだが、当のほのか本人は達也に恋している。他人の恋愛事に関して必要以上の干渉を避けているのは前世での恋愛経験が尾を引いているせいなのかもしれないが。
「コンペ会場の下見は多分コンペの前週末になるから、レオにもしっかり準備してくれと伝えてくれ」
「って、あたしから言うの？　……まあ、いいけどね」
悠元ならばレオへの連絡は簡単にできるが、敢えてエリカに頼んだことは彼女自身も少し不満げだったが、自分の恋人と連絡を取れる口実に出来ると考えたのか、頬を薄らと赤く染めながら若干投げやり気味の口調で答えたのだった。
余談だが、論文コンペの護衛に関しては特に変更していない。魔法大学の生徒が狙われる可能性に関しては昨晩に雫との連絡を終えた後、メールで元と佳奈、美嘉にその旨を伝えている。その返信の中で美嘉から『悠元を狙うって火種の中に核爆弾でも突っ込む気？』という文言には遺憾の意を表したい。
◇　◇　◇
現状で打てる対策を打った悠元らは生駒の九島家へと向かった。奈良まではリニア列車で、そこからは個別列車（キャビネット）での移動となる。前世

ではまだ実験段階だったリニア列車がこうやって乗れるということには内心興奮していた。京阪神地域は遺跡や歴史的建造物がある地域を除けば首都圏に匹敵する交通網が整備されている。
「お兄様、アイスクリームを頂きませんか」
「そうだな」
男女四人一組で向かい合わせに座ることとなるわけだが、そこで問題となったのは席であった。てっきり深雪が強権で悠元の隣を確保してくるものかと思いきや、意外な手段を取ってきたのだ。
「水波、大丈夫か？」
「あ、は、はい……」
そう、窓側に座る悠元の隣の席が水波となり、悠元と正面で向かい合う形で深雪が窓側の席にいて、達也は深雪の隣に座っている。ガーディアン的な発想で考えれば極めて効率的な護衛体制だが、悠元はこっそり深雪に尋ねた。
『どうして水波を後押ししたんだ？』
『水波ちゃんも遅かれ早かれなので、いっそのこと巻き込みました』
『……』
確かに、今の自分の母親である千姫が水波のことを深夜から聞いていてもおかしくはない。言っておくが、水波に対して今のところは一切手を出していないし、こちらの気持ちを伝えたが水波からの明確な答えはまだ貰っていない。
深雪と雫、姫梨の場合は親の決めた許婚の関連で関係を持ち、同じく許婚絡みで手を出してしまった相手に関してはちゃんとフォローしていくつもりだ。尤も、婚約者関連の最終結果がどうなるか分かったものではないが。
その深雪はというと、車内販売で買ったアイスクリームを食べつつ笑みを浮かべていた。これには隣に座っている達也も苦笑を滲ませていた。
「大変だな……」
「この程度、大変という内にも入らないけどな」
これから待っていること――九島烈との会談に比べれば、恋愛事

なんてまだかわいい方だと内心で無理矢理納得しつつ、悠元は持ち込んでいた折りたたみ型端末を開いて作業を始めた。すると、ここで達也が話しかけてきた。
「悠元、相談があるんだが」
「珍しいな。別に司波家でも構わないのに」
「家にいるとどうしても考え込んでしまうからな」
　達也の言い分を解釈すると、最近の達也は『分解』が通用しない対人戦闘を見据えた新魔法を開発しており、基本的に思考と時間をその為に費やしている。普通の現代魔法を使うだけで四苦八苦してしまうのは間違いないが、それを補って余りある特異魔法と知識を持つ達也からの相談事は久々だった。
「詳しいことは無論家で話すが、俺が新魔法を開発しているのは知ってるだろう？」
「まあな。どうせ達也のことだから、俺が牛山主任から相談を受けているのは知ってるんだろ？」
「ああ。流石にハード面で悠元以上の技術者を探すのは難しいからな」
　達也が今悩んでいるのは、『分解』で取り出した亜原子粒子（バリオン）をＦＡＥ理論に基づいて極小時間で移動魔法を射出し終える仕組みについてだった。この会話は無論遮音フィールドを張っていて、より効率化した魔法を水波に提供している。
「……達也は、あくまでＦＡＥ理論に拘ると考えていいんだな？」
「ああ。お前のやっている方法を真似ると骨が折れそうだからな」
「じゃあ、万が一今年の論文コンペに出せと言われたら備えてたこれを見せるか」
　悠元が端末を操作して、併せて持ってきていたタブレット型端末にデータをコピーした上で達也に手渡した。それを達也と隣の席にいる深雪が見やると、二人とも驚きに包まれていた。これには水波が首を傾げて悠元に尋ねた。
「悠元兄様、お二人に一体何を見せたのですか？」
「ＦＡＥ理論研究の最新版。あれでもまだまだ未完成だけどな」

ＦＡＥ（フリー・アフター・エグゼキューション）理論の基本理論は『魔法によって改変された事象は本来この世界にない筈の事象であるが故に、事象改変の直後は物理法則の束縛が緩く、正常な物理法則が働くまでのごく短いタイムラグにおいては、通常の事象改変よりも遥かに少ない干渉力で魔法を行使できる』というもの。

日米共同研究されてはいたものの、大した成果が出ずに打ち切られた訳だが、ＵＳＮＡではその理論を追求した結果として『ブリオネイク』が完成した。悠元は独自にＰＦＥ（サイオン・フリー・エグゼキューション）理論を組み立てて魔法に使用しているが、陸軍兵器開発部の解析担当を片手間にこなしつつＦＡＥ理論を研究していた。

その理由は、ＦＡＥ理論を魔法技術として確立することで道筋が見える〝魔法の重ね掛け〟のハードルを下げる意味合いがある。

現状、魔法の重ね掛けは事象改変に伴う魔法式同士の事象干渉力が加算して、結果的に実現不可能とされている。この最大の理由は現代魔法の成立過程――核兵器抑止が大きく関わっている。

複数の魔法で一つの対象物に重ね掛けできるとなれば、核反応を抑制する魔法と相反する魔法を用いることで意図的に核反応を暴走させることも可能になってしまう。そのため、旧合衆国の研究者たちは魔法式の中に魔法干渉が出来ないようなプログラムを組み込んだ。

だが、その時点で曖昧にしか解析できていなかった魔法は、同じ人間が発動しても重ね掛けが出来ない〝欠陥品〟になってしまった。当時は核兵器抑止という最大の命題を解決することに夢中で、戦後に魔法を技術として取り入れる際にそのハードルが重く圧し掛かることとなった。

話を戻すが、現代魔法の事象改変プロセス自体も古式魔法に比べるとかなり限定的であり、実はそこがＦＡＥ理論を用いるにあたって最大の障壁となっていた。元々物理法則の改変という範疇に収めていたが故にそれが足枷となっているのだ。

そこで、現代魔法で用いられることのない魔法技術を流用してＦＡＥ理論のタイムラグを1ミリ秒以下から1秒に伸ばすことに成功した。約１０００倍以上の進歩と言えば聞こえはいいだろうが、それで

もまだ1秒という結果には納得できていないが。
使われた魔法技術は現代魔法の発展の過程で打ち切られてしまった数多くの魔法技術研究の中の一つで、サイオンによる疑似結界によって物理法則の復元力を緩和する研究が存在した。現在は遮音フィールドという振動の物理法則遮断という限定的なものに止められており、しかもフィールド内に使用者がいないと発動できない制約がある。
悠元は神楽坂本家の結界魔法を読み取ったことで得た知識を基に、現代魔法で打ち切られてしまった結界術式研究を独自に進めて完成させた。この技術には零加速結界障壁（ゼロ・アクセラレーション・ウォール）の技術も使われている。
「……悠元兄様は、一体どこを目指していらっしゃるのですか？」
「それを言われるとな……強いて言うなら、この国の技術立国化かな」
現状でも秀でた技術力を有しているが、そこに魔法の民生利用が可能になれば一気に世界屈指の技術立国へと伸し上がるだろう。付随する問題は出てくるだろうが、それはその時に対処する腹積もりだ。
すると、タブレットに載っている論文を見終えた達也が悠元に視線を向けていた。
「お前のその発想が末恐ろしいな。流石は『トーラス』と言うべきか」
「よせやい。その部分は『シルバー』に触発された部分もあるのだから」
結果として、その論文を用いれば達也が懸念としている課題もクリアできるということで、そのデータ自体は後で渡すことも決めた。なお、深雪からキラキラとした眼差しを向けられたのは言うまでもない。

烈との会談

元々十師族には、お互いの家を親しく行き来する習慣はない。この辺は師族会議における規則が絡んでいるのもあるわけだが、年頃の男女が縁を求めて、ぐらいの程度にはあったりする。

達也と深雪は四葉の血縁者ということを秘匿しているために交流は無いが、悠元は剛三に連れまわされる形で当主クラスと面識を持っている。なので、必然的に生駒山東山麓にある九島家本邸への道案内をすることとなった。自動運転のコミューターを使えば早々道に迷うことなどない訳だが。

到着時間は約束した時間の5分前――――17時55分。呼び鈴を鳴らすと、出迎えたのは使用人ではなく一足先に来ていた響子であった。

「いらっしゃい、達也君と深雪さんに水波ちゃん。それに悠元君もよく来てくれたわね」

「すみません、態々付き合わせてしまって」

「いいのよ。さ、入ってちょうだい」

響子の案内で敷地内へ踏み入れるわけだが、門から屋敷の正面玄関まで高さ2メートルを超す生垣の壁による迷路が形成されている。初めて来たときは流石に驚いて、剛三もその様子を見て笑い声を上げていた。水波は左右をキョロキョロ見回しており、深雪は視線こそ動かさなかったものの、この光景には心を動かされてるようだ。

「水波ちゃんを見てると、悠元君が剛三さんを伴って初めて来たときを思い出すわね」

「もう3年前になりますか……その時は響子さんじゃなく九島閣下が『仮装行列（パレード）』で使用人を装って接触してきたときは流石に驚きましたよ」

剛三と響子の仲介という形で九島家を訪れた際、烈から妙な熱烈的な歓迎を受けた記憶は今でも忘れない。九島家本邸の造りに目を奪われたところで間髪入れずの形で歓迎を受けたのだ。

「その光景は私も見てたけど、悠元君が一目でお祖父様を看破したの

は凄かったわ。私も事情を聞いていなければ騙されていたもの」
「……流石だな、悠元」
「人智の埒外による理不尽を受け続けたら、嫌でも察してしまえるようになっただけだ」
ＵＳＮＡでアンジー・シリウスを返り討ちにして大統領を関節技で気絶、南アメリカでゲリラの襲撃を受けて撃退したら新国家から勲章を贈られ、アフリカでは古代の王の霊に遭遇するわ、欧州では魔法使いの権力闘争に巻き込まれそうになったので刺客を全員病院送り、新ソ連では本気で命を狙われたので現国家元首の書記長を殴り倒し、クレムリン宮殿が半壊する羽目になった。
そんな非常識な経験を積み重ねた結果、九島烈の魔法をあっさり見破るぐらいに成長した。ただ、その代わりに失ったものは計り知れないが。
「一度目にしているから真新しさはありませんが、ここの迷路は相変わらずですね」
「それは仕方がないもの。当時の政府の決定事項で九島家が担うこととなった役割が大きいから」
「大阪の監視ですね」
「張り合いがないわねえ」とぼやきたくなる響子の心情はともかく、旧第九研の最高作と謳われた九島家がここに居を構えているのは、大都市圏における国外勢力の魔法師工作員対策の一環が根強い。それならば大阪と奈良の県境に位置する生駒山の西山麓に拠点を持つのが効率的だが、九島家が国外勢力と結びつくことを恐れた政治家の意図によるものだ。
魔法と政治に関わる話題は迷路が途切れる形で終わることとなり、それ以上掘り下げられることはなかった。
「お祖父様、達也さんがお見えです」
「久しぶりだな、司波達也君。それと……神楽坂君も同行していたとは」
九島烈は既に応接室で待っていた。とは言っても、時間は約束した時間の1分前であるため、遅刻でもなければ早すぎるということもな

い。ただ、烈は悠元の姿を見て驚いていた。これには悠元が響子に視線を向けると、彼女もバツが悪そうな笑みを零していた。
どうやら響子も神楽坂家と九島家の確執を聞いているようで、変な憶測を広めないように配慮した結果なのだろうと内心で納得して一息吐いた。
「直接お会いするのは九校戦後以来ですね、閣下。今回は達也の協力者ということで同行しています」
「そうか……本来であれば、君らの前に顔を出せた義理ではないのだが、君らから会いたいと申し出てくれた。再会が叶ってうれしく思う」
スティープルチェースのパラサイドールに関する件の後始末は千姫と剛三、元継に全て投げているため、その結果を了承したも同然の立場である悠元はその件で烈をこれ以上問い質すつもりもなかった。
達也に関しても似たような感じだが、それだけのことを起こした当事者側となれば罪の意識に苛まれても致し方ないのだろう。烈はその意識を思い起こしつつ謝罪の言葉を口にした。
「自己満足かもしれないが、謝罪させてほしい。パラサイドールの件は私も考えと覚悟があってやった事。敗者となってしまった以上は言い訳をするつもりなどないが、君らの手を煩わせて君らに苦痛を与えたことは、本当に済まないと思っている」
烈は、パラサイドールの性能実験を対象とするならば高校生世代でトップの実力を有する達也と悠元なら確実に対処してくれるを見込んでのもの。達也も悠元も無人魔法兵器の開発そのものを否定するつもりはない。ただ、その方法を急ぎ過ぎたのは否定できないだろう。
「――閣下、顔をお上げください。何を最善と考えるかは人ぞれぞれです。無人魔法兵器を開発すべきというお考えを否定するつもりはありません」
「そうか……先日、達也君と同じぐらいの歳の少年にも同じことを言われてしまったよ」
それを述べた相手が間違いなく悠元であることを悠元以外の面々

の視線が悠元に突き刺さる。これでは話が先に進まないと悠元は烈に視線を送り、烈もその視線に含まれた意図を察して話を続けた。
「響子から話は伺っている。周公瑾の捕縛。これは真夜……四葉殿より下された任務だね？」
「そうです」
　この部屋の中にいる人間は全員達也と深雪が四葉家との関係を持っていることを知っている。元々烈が達也と深雪の素性を知っていると踏んでいるからこそ、達也は烈の言葉に対して一切否定することなく肯定した。深雪は表情にこそ出さなかったものの、内心で動揺しているような素振りが一瞬垣間見えた。
「四葉殿が誰の依頼で動いているのか、それは知っているのかね？」
「概ね理解しております。だからこそ、悠元が同行しているわけですから」
　今年の正月に東道青波と面談しているからこそ、というのもあるが、悠元が四葉のスポンサーである神楽坂家の次期当主と当主代行を兼ねている以上、達也もある程度の事情は察していた。烈もその辺を察しつつも言葉を選ぶように話を続けた。
「そうか、君は『あのお方ら』も知っているのか……失礼した。十師族は定められたルールに縛られている。十師族は師族会議を通さずに共謀・協調してはならないという決まりがある」
「はい」
　何とも空々しい規則だ、と悠元は内心で吐き捨てた。共謀と協調という方をしているものの、表沙汰にしていない関係なんて少なくない。第一、今春の反魔法主義の報道を焚き付けた七草家を目の前にいる人物は黙認している。賛成はしていないにせよ、その動きを黙認した時点で事情に関わっているも同じだ。それだって広義的に見れば共謀や協調の類と見られてしまう。
　それならば沖縄防衛戦後の三矢家と四葉家の関わりはどうなるのかという嫌疑が掛けられるわけだが、この部分は上泉家が仲介という形でお互いの秘密を守るという手打ちにしただけで、自分がＦＬＴに関わることになった件についても向こうの善意による提案を受けた

だけに過ぎず、四葉家へ魔法技術の提供はその時点でしていない。
「そのルールの手前、九島家は四葉家の協力依頼を受けることは出来ない。なので、この件は九島烈個人として司波達也君の協力依頼を受けようと思う」
「ありがとうございます」
　何はともあれ、烈の協力を取り付けられたことは僥倖だろう。悠元が必要以上に喋らなかったのは、これが司波達也と九島烈の会談の席であり、ただでさえ九島家と因縁を抱えている神楽坂家の人間が態々口を挟むことではない、と判断してのことだ。
　だが、事には何事もイレギュラーというものが存在するかのように、烈が口を開いた。
「神楽坂君、少し時間を貰えないか？」
「……それは、達也たちに聞かせたくない話と解釈しても宜しいですか？」
　悠元の問いかけに烈は僅かばかり表情を険しくさせていた。これは『当たり』だと悠元は判断して達也ら――――響子に視線を向けつつ告げた。
「響子さん、達也たちの案内をお願いできますか？　どうやら、閣下は自分との直接の対談を望まれているようですので」
「……分かったわ」
　達也はともかくとして深雪は不安そうだったが、別に何かしらの因縁を吹っかけられるわけではないから安心してほしい、と言い含めると深雪も渋々納得して部屋を出て行った。
　応接室の中が悠元と烈の二人きりとなったところで悠元はＣＡＤを使わずに遮音フィールドを張った上でソファーに再び座った。全盛期から劣るとはいえ、かつて『トリック・スター』と呼ばれた烈は悠元の魔法にすぐに気付いた。
「……今のは、遮音フィールドか。いやはや、剛三も大概と思っていたが、君も現代魔法師としての範疇をとうに超えているようだな」
「誉め言葉と受け取っておきます。それで、どのような用件ですか？
　予め言っておきますが、十師族に戻れなんて世迷言を言うような

ら、ここでの会談の内容は母上と爺さんに伝えます」
　その可能性は無いに等しいが、何せ昨夏の臨時師族会議の発起人が悠元の目の前にいる人物。既に三矢家の家督継承関連に道筋がついている以上、残る問題は佳奈と美嘉の結婚相手ぐらいだ。女性の当主という可能性とするならば佳奈と美嘉にもその資格はあるわけだが、その二人も大学進学を期に元へ家督継承権の放棄を申し出ている。
　悠元の警告も含めた言葉に対し、烈はその考えなど無いと断った上で話を続ける。
「いや、同年代トップクラスの一条の御曹司と十文字の長男殿を破った以上、その実力は証明されている。私が今更口を出せることでもないと理解しているよ。光宣にも叱責されたからな……私が気にかけているのは、他でもない光宣のことだ」
　九島家現当主の末子にして、九島家に存在する全ての魔法を会得した天才魔法師。まるで一流の美術品に染色したような出で立ち――――彼が調整体魔法師という事実は彼との邂逅の際に『天神の眼（オシリス・サイト）』で確認している。
「光宣は確かに優れた魔法師です。場合によっては、戦場に立つことも余儀なくされる……閣下がパラサイドールの製造に踏み切ったのは、光宣を戦地に赴かせたくなかったから、ですか？」
「ああ、それもある。……神楽坂悠元君。今まで君に対してやってきたことを許してほしいとは言わない。だが、光宣は無関係だ。かつて光宣以上に病弱だった君が健常者と変わらぬ様相へと変化させた方法――――それを光宣に施してやって欲しい」
　日本魔法界の長老たる存在だからこそ、いくら元が箝口令を敷いていても知る術は数多に存在する。転生する前の記憶では直接面識がなくとも、元から多少は相談されていた可能性がある。
　しかし、病弱だった肉体の変容を引き起こしたのは今の自分の精神が彼の肉体に転生・定着したからこそだ。その過程だけで言えばパラサイトの憑依プロセスに似通っているため、転生した当初に元がパラサイトの可能性を疑っても無理はないのだろう。
　この世界に転生している人間は自分以外だとセリアが該当するわ

けだが、彼女の場合は赤子の状態からのスタートだったらしく、それほど疑われることなどなかった。それ以外に存在していてもおかしくはないが、それを一々探すのも面倒である。
「私が知る限りでは、深夜と五輪家の令嬢、それと十文字家当主が現代の医学で治せなかった症状から改善されているように見受けられた。そして、彼らに関わっている人間で最も可能性があるのは君だと結論付けた」
悠元の固有魔法の一つである『領域強化（リインフォース）』は、現代医学はおろか現代魔法、ひいては物理法則の処理限界を超えている。魔法師としての能力を阻害しているマイナス要因の状態を強制的にプラス要因へと反転強化してしまうため、それに直接関係する部分まで強化されてしまう。
深夜の治療を行った際にアンチエイジング現象が起こったのは、大脳の状態を可能な限り元に戻すという過程でその大脳の処理能力に耐えうる肉体が必要だと魔法が判断し、その結果として見た目が若返ってしまったということだ。
水波の場合は寿命に関わる遺伝情報を書き換えたことによる肉体の再構成が働いた形となるわけだが、スタイルの変化に関しては対象者の意思が反映する部分もある。穂波を治療した際にその部分が変化しなかったところを見るに、そう結論付ける他なかった。
「……そのことを他の人間は？」
「九島家に限って言えば、現当主である息子はおろか、今の話は家族のみならず側近や使用人であっても漏らしていない。私の知己にも一切話していないのは断言しよう。ただ、弘一君は勘付いている可能性が高いかもしれない」
昨年の九校戦で試しとはいえ殺意を向けられたこと、そして今年の九校戦で自分と達也をパラサイドールの実験対象として利用したこと。その２つのことを棚上げにするとしても、光宣をただ治すだけでは意味がない。
九島家を中心とした御家騒動が起こる危険性を秘めており、加えて九島家の現当主が縁戚であるリーナやセリアを利用しないとも限ら

ない。そして、七草家の存在は正直悠元も悩みの種であった。
「七草家のことは一先ず置いておきますが……仮にそう出来たとして、閣下はこちらの提示する対価を過不足なく支払っていただくことになります。その〝覚悟〟はおありですか？」
ここに来る前、悠元は事前に剛三と千姫に光宣に関わる危険性を早急に取り除くことを相談し、二人もこれに関しては了解した。残るは……光宣本人の意思を確認する必要があるわけだが、その為には烈にも協力してもらう必要があると感じていた。
今まで治療してきた人々の中で対価を要求しなかった相手はいない。剛三を治した対価は彼が隠していた手紙を四葉の姉妹に届けること、深夜と穂波を治した対価は然るべき時まで悠元の身分を明かさないこと、五輪澪や十文字和樹を治した対価は治療を施した人物の完全な秘匿。
こちらとしても慈善事業で魔法を使用していない。ただでさえ人智を越えた魔法なだけに、相応の対価と秘匿は覚悟してもらわねばならない。烈もそれを理解していたためか、座ったままだが深く頭を下げた。
「分かった――君の望む対価を全て？もう。それで、私は君に何を支払えばよいのかね？」
「治療した人物の秘匿は無論ですが……光宣に九島家から離れていただきます。閣下にはその説得のお手伝いをしてもらうことが一つ目の条件です」
「なっ……」
光宣が望むのは、優れた魔法師としての人生を歩むこと。それが叶うのならば、別に九島という家に拘る必要などないと思う。自分の場合は突出した力で元治の家督継承を危ぶませないために早い段階で家督と家業の継承を拒否した。それが結果として十師族というしがらみから離れたが、特に困ることなど起きていない。
「彼は九島家現当主の子世代で一番の実力者。その優れた力を危ぶんで彼の兄や姉らが早まった行動に出かねないのを防ぐためです。御家騒動に費やす労力は閣下が一番ご存知の筈だと思われますが？」

「……君は、私と私の弟のことをどこまで知っているのだ？」
只でさえこの先が面倒な出来事のオンパレードなのに、師族二十八家の一角を担う九島家が御家騒動でぐらついては困るのだ。ならば、病弱の状態を改善することで生じる問題を早急に取り除くのが一番手っ取り早いと判断した。引き取り先としてはいくつか候補を考えているが、最悪は光宣の転校も視野に入れるべきだろう。
「母上が親切丁寧に教えてくれました。その絡みにはなりますが、一高にいるエクセリア・シールズおよびＵＳＮＡにいるアンジェリーナ・シールズの二人に関して、九島家は金輪際関わらないでください――これが二つ目の条件です」
光宣を失うことで現当主が焦ってセリアを何らかの形で引き込むことは想定しており、達也の婚約者募集でリーナが遅かれ早かれ来日することを考えた場合、縁戚である九島家が首を突っ込む可能性が高い。だが、剛三と千姫は絶対にそれを許さないだろう。その意味を込めての二つ目の条件を提示したのだった。

役割の押し売り

悠元は光宣の治療にあたってそれ以外の幾つかの条件を提示し、烈は大人しくそれを呑まざるを得なかった。

正直な話、あれだけのことをされても九島家の事に関わるのは正気を疑う行為かも知れない。だが、水波に大きな変化が起きている以上、それが光宣にどういった変化を及ぼすかは不明だ。なので、次善策として光宣の治療を受ける形とした。

光宣を九島家から切り離すのは、あくまでも将来の禍根を断つためのもの……そう言い切ってから応接室を出た悠元を待っていたのは、話題の当人――――烈の孫の一人で、九島真言（まこと）の末子である九島光宣（くどうみのる）その人。

「悠元さん、お久しぶりです！　お祖父様と面談していると聞きまして」

「光宣も久しいな。あまり興奮しすぎると、また体調を崩すぞ」

「あ、そ、そうですね」

剛三を介して九島烈や九島真言と面識を持った際、家族として紹介された一人に光宣がいた。正直な話、光宣の兄や姉らは明らかにこちらを値踏みするような振る舞いをしたのに対し、光宣は高圧的に出ることなく畏まった態度で接してきたので割と好感が持てた。

悠元が問いかけると、光宣ではなく応接室から出てきた烈が答えを返した。

「それで、態々待っていたのは夕食のお誘いかな？」

「ああ、私がそうするように言い含めていてな。光宣の事情は悠元君もご存じだろう」

「成程……こちらとしては拒否する理由もありませんので」

「そうか……光宣、悠元君を子供用の食堂（親たちに連れてこられた未成年同士が親睦を深める場）に案内してあげなさい」

「はい、お祖父様」

烈は光宣に悠元の案内を託すと、応接室の前から去っていった。それを見やってから光宣は悠元に軽く頭を下げた。

「申し訳ないです、悠元さん。お祖父様はあれだけの力を持ちうる悠元さんを下手に十師族から手放したくなかったようで」
「意図するところは分からんでもないから気にするな。大体、光宣に心労を掛けさせてる時点でボケ始めてきたんじゃないか？」
「……あはは」
　光宣は悠元の辛辣な言葉に反論したかったが、パラサイドールの件もあってかその線をどうしても疑わざるを得ず、強ち間違いでもないという結果にたどり着いてしまった。光宣はせめてもの意思表示として苦笑を滲ませたのだった。
「いや、九島閣下が長年かなり苦労されている御仁だというのは察しているし、単に疑問を述べただけだよ。気分を悪くしたのなら謝るが」
「いえ……この場合はお互い様と言うべきか、こちらが悠元さんに迷惑を掛けている側ですし」
「堂々巡りになりそうだから、この話題はここまでにしよう」
「そうですね」
　お互いに謝り続ける未来しか見えず、悠元の提案に対して光宣は素直に頷いた。そうして目的の場所に辿り着いて光宣がノックをすると、中から聞こえてくるのは響子の声。そしてドアを開いたところで光宣が硬直していた。
「（まあ、深雪を直に初見で見たらそうなるよな）光宣、そこに立ったままだと俺が入れないのだが」
「……あっ、す、すみません」
　硬直していたのは光宣だけでなく、深雪や水波も光宣を見て驚きを禁じ得なかった。達也は深雪以外にもここまで容姿の整った人間がいることに感心するような素振りを垣間見せていた。その光景を傍から見ていても楽しい訳だが、流石に夕食の時間ということもあって、悠元が口を開いて光宣の意識を強制的に戻させた。
　そして、光宣が四人の座っているテーブルに近付き、響子の隣の席に立ったところで自己紹介をした。
「はじめまして。九島家当主、九島真言が末子、九島光宣と言います。

司波達也さん、司波深雪さん、桜井水波さん、お会いできて光栄です」
「はじめまして、司波達也です」
「妹の深雪です」
「桜井水波といいます。光宣さん、私達のことをご存じなのですね」
「ええ。皆さんのご活躍は九校戦で拝見しました。それと、僕は桜井さんと同学年ですので、年相応に接していただけると嬉しいです」
原作では光宣に一目惚れして慌てふためく水波の姿があるわけだが、恋愛事情が変化しているためか、光宣に対しての印象は深雪の容姿に対してのものと似通っている反応となっていた。
そのため、水波が光宣への呼び方は「光宣さん」という形となり、これには同い年である光宣も恐縮が過ぎると呟いたのだが、そこに悠元と達也のフォローが入ったため、光宣は渋々ながらその呼び方を認めたのだった。
変わっている部分と言えば、光宣の友人事情もあるわけだが。
「見たところ、悠元は光宣君とかなりの付き合いのようだが」
「初対面は3年前だがな。九島家の現当主の子でまともに話せそうだと思ったのが光宣ぐらいだし」
「悠元さん……それだと、僕の年の離れた兄や姉らがまともじゃないように聞こえてしまいますが」
その当時は十師族・三矢家の人間であることを一切明かさず、剛三の親族という体で長野佑都の名を名乗っていた。その中で出会った光宣に対して、悠元は自分の出自を密かに明かした上で頻繁に連絡を取っていた。
光宣ほどではないにせよ、悠元も二人の兄とは割と年が離れているため、転生した当初はどう接したものか悩んだことがある。姉らや千里の口添えもあったりするが、三男として長男と次男の道筋を整えることで上手く関係を築けた。
光宣に同様のことを起こしてもらって九島家の兄弟姉妹間の仲が良くなるかは不透明だが。
「響子さんは立ち会ってるから知ってるだろうが、その時は三矢の姓を名乗ってなかったのもあるけど、爺さんの親族にも拘らず、感じら

れた視線はこちらを明らかに見下してきたんだぞ。そんな人間と積極的に仲良くするなんて願い下げだ」
「……藤林さん、本当ですか？」
「残念ながら事実よ。悠元君が光宣君と話した後、お祖父様から直接言われたもの」
「深雪、取り敢えず落ち着け」
明らかに怒りの表情が魔法として漏れかけている深雪を抑えつつ、悠元は続きを述べた。
「その意味だと、光宣はあっさりフレンドリーに接してくれたからな」
「あはは……僕は事前にお祖父様から話を聞いて〝凄い人物〟だと想像はしていたのですが、実際に接してみて、むしろ想像を遥かに飛び越えていました。その時点でも悠元さんの力は十師族の当主クラスに比肩していると言わんばかりの魔法力を感じたほどです」
魔法力、気配や存在の隠蔽といった技術は沖縄防衛戦後から本格的に取り組み、光宣と出会った時はその途中段階であった。なので、悠元が内包している想子保有量が桁外れていると察してしまったらしい。
「中々学校に行けない僕としては、悠元さんの存在は貴重な友人であり、偉大な目標です。一種の憧れとも言いましょうか」
「目標に憧れねえ……現に達也や深雪からも目標にされているけど。自分自身、そんな凄いものとは思っていないんだが」
「いや、俺の体術の先生ですら半分白旗を上げる様な実力を持つ悠元が言えた義理ではないぞ」
「そうですね」
光宣の言葉に否定気味な言葉を発するが、そこに対して発せられた達也と深雪の言葉に悠元は何も言えず、助けを求めようと水波や響子に目線を向けるが、水波は苦笑を浮かべて目線を逸らしてしまい、響子もこれには笑みを浮かべていた。光宣はこれがツボに入ったようで、口元を隠してはいるが笑いが漏れてしまっていた。
八雲から避けられているのは神楽坂家絡みのこともあるわけだが、剛三の功罪が最も影響していると思っている。彼と本気で戦ったこ

とはないが、負けない算段はある。尤も、本気を出そうとしたところで八雲が白旗を上げそうなところまで既定路線なのだろうが。
「そういえば、今日はこの後どうされるのですか？　泊まっていかれるんですか？」
「いや、近くに宿を取っている。というか、達也らはともかくとして今の俺が泊まっちゃ九島家に迷惑が掛かりかねない」
「あっ……すみません、我儘を言ってしまって」
烈との会談に臨んでいる時点で迷惑云々など今更だが、必要以上に親密な雰囲気を作るのは『伝統派』に変な印象を与えかねない。彼らがどこまで情報収集などをしているのかにもよるが、先日の司波家での出来事を考えれば九島家に式神を飛ばしているのは明白だろう。
悠元の言葉に光宣はシュンとしおらしい表情を見せており、これを見た達也は「とても九島烈の孫とは思えないな」と小声で漏らすほどだった。それを見た響子がフォローを入れる形で光宣に話しかけた。
「それだったら、明日は達也君たちに奈良を案内してあげたら？」
「ええ、是非。悠元さんもそれならいいですよね？」
「それは助かるよ。俺はともかく、達也たちはこっち方面の土地勘が無いだろうからな」
剛三に全国行脚紛いに付き合わされたことは以前にも話したが、そこには現代魔法のみならず古式魔法使いの武道家や忍術使いといった新陰流剣武術に縁のある人物と顔を合わせる機会があり、『正統派』の類に属する宗教家とも面識を持っている。とりわけ京都や奈良は有名な寺社が集中していることから覚える数も半端ではない。
その過程で修験道の門下生や忍術使いとやり合う羽目になり、しかも全く自重しない転生特典のせいでその上位互換版まで修得してしまった。正直な話、こんな経験を思春期真っ只中の中学生の段階でしてしまったことが異常だと思う。
「よろしいのですか？」
「それにね、光宣君は『伝統派』の潜伏していそうな場所についても詳しいわよ」
「ええ、学校を休みがちな分、お祖父様の仕事については詳しい自信が

あります。達也さんのお仕事は『伝統派』の術者を探すことですか？」
「……大体そうだな」
「でしたら、お役に立てると思います」
光宣とほぼ歳の変わらない達也がそういった仕事をしていることには疑問を持たず、確信めいた口調で問いかけたのはそれだけの頭脳を持っているという証左。そして烈の仕事に詳しいということは、九島家――――烈の役に立ちたいという彼なりの頑張りの結果なのだろう。
本当の目的は『伝統派』に匿われた周公瑾の捕縛だが、周公瑾に繋がるラインに『伝統派』がいる以上、達也の受け答えもあながち間違いではない。
「伝統派の拠点が集中しているのは、かつて神楽坂家が本拠を置いていた京都ですが、奈良にも拠点のいくつかがあります。明日はそちらをご案内します」
「えっ、『伝統派』の拠点ってそれだけあるのですか？」
水波がそう疑問を呈してもおかしくはないだろう。普通ならば一つの魔法結社に指で数える程度の拠点があるぐらいがちょうどよく、本来ならば京都・奈良だけで数多くの拠点を抱える必要性などない。
「伝統派は一つの魔法結社だけど、単一の組織じゃなくて十を超える古式魔法師集団の連合体なの。だから、それぞれの集団ごとに本拠地と呼ばれる場所が存在するわけ」
「なるほど……」
いくら旧第九研への復讐を目的にしているとはいえ、実態を明かせば『伝統派』で修めている古式魔法の種類がかなり多岐に渡ってしまう。加えて、古式魔法師特有の秘密主義を加味すれば、各々の流派・宗派がそれぞれ本拠地を持つのはおかしくないというわけだ。
「ご厚意に甘えよう。光宣君、よろしく頼む」
烈に個人的な協力を取り付けてはいるものの、あの黒羽貢に手傷を負わせた周公瑾と彼を匿う組織を相手にする。それが並の魔法師を相手にするよりも苦労するのは目に見えている。だが、達也がそう決定した以上は口を挟むべきではないと判断した。

◇　◇　◇

翌日、悠元らは早々にホテルをチェックアウトして、再び九島邸を訪れていた。『伝統派』との諍いを一応想定してのものなのか、深雪と水波はパンツルック姿で整えていた。朝7時という早い時間ではあるが、光宣は眠気も疲れも一切感じさせない顔で四人を待っていた。

「みなさん、おはようございます。朝食はお済みですか？」

「おはよう、光宣君」

「大丈夫です、済ませてまいりました」

光宣の連絡先を悠元が知っているため、朝食に関しては各々で済ませてから合流する方向で話を固めていたので、光宣に要らぬ心配をかける必要は無かった。やり取りをしていた時に光宣が悲しげな文面を垣間見せていたが、光宣や烈、響子以外に今回の件を知らせるような真似などするつもりは無かった。とはいえ、出入りしている以上は九島家現当主の耳に入ってしまうことは避けられないが。

「では、こちらへどうぞ。車を用意してあります」

案内された先に停まっていたのはリムジンであった。これには一応四葉の係累である達也も内心で驚いていた。深雪と水波に至っては驚きが表情に出てしまっていた。嫌でも目立ってしまうため、嫌がらせと邪推してしまうのも無理はない。

悠元の場合は三矢家や神楽坂家で時折利用することはあるものの、それこそ要人との会談の際に格式が必要とした場合しか乗ったことが無い。剛三と一緒に行動していた時は基本的に公共交通機関か徒歩（自己加速術式を併用したもの）なので、贅沢をするという感覚が抜けきらない。この部分は前世の庶民感覚が残っているせいかもしれないが。

後部座席には四人しか乗れないということで、最初は悠元が助手席に座ろうとしたが、達也に押し切られたというか、深雪の熱烈な要望で悠元が後部座席に乗ることとなった。達也としては深雪の護衛役ということで甘んじて助手席に乗ったため、諦める他なかった。悠元と深雪、水波と光宣が隣同士で乗り、悠元と光宣、深雪と水波が向かい合わせになる形だ。男性二人が向かい合っても余裕があるぐらい、

このリムジンの快適性が窺い知れる。
　まずは伝統派が比較的大人しい葛城（かつらぎ）方面に向かうこととなるわけだが、光宣からは先程の席順決めに関しての推測を問いかけられた。
「先程の様子を見ていて思ったのですが、悠元さんと深雪さんはお付き合いされているのですか？」
「まあ、概ね間違っては無いかな。高校に入ってから色々付き合いがあったし、気が付けばそうなっていたとも言えるが」
「もう、悠元さんってば……光宣君、利き腕にＣＡＤを身に着けているのですか？」
　ご機嫌な様子の深雪だったが、ここで光宣の袖から少し見えているＣＡＤが目に入った。昨日の夕食からするに光宣が右利きなのは見て取れていたが、その利き腕にＣＡＤを装着するのは珍しい事でもあるからだ。
　この深雪の問いかけに対し、光宣は「あ、これですか？」と言いながら両腕の袖を捲ると、両手首にリストバンドタイプの汎用型ＣＡＤを身に着けていた。
「そのタイプは確か、かなりハイエンドのモデルだったか」
「悠元さんの意見を参考にしたんです。それに、今はこれもありますからね」
　そう言って光宣が胸元から取り出したのは先日発売された思考操作型補助デバイス。確かにそれがあれば１００個以上の魔法を使う光宣にとってこれとないツールである。しかも、それを製作した『トーラス・シルバー』の二人が同じ車に乗っているのだから、深雪の機嫌はうなぎのぼりである。これには水波も乾いた笑みが漏れるほどだった。
「悠元さんは見たところ使っていないようですが……」
「ＦＬＴの依頼で色々テスターをしているから、持っているデバイスの殆どは思考操作型ＣＡＤなんだよ。そのフィードバックで完成したのがそのデバイスらしい……とは知り合いから聞いたよ」
「そうなんですか。悠元さんほどの実力者なら納得出来る気もします」

九島家きっての天才にそう評価されるのは吝かではないし、九校戦では『クリムゾン・プリンス』こと一条将輝を2年連続で下している。なので、その評価は至極尤もなわけだが、この強さを得るまでに失ったものもある。それを口にすると、自分が認めたも同然になりそうなので絶対に言うつもりもないが。

奈良の散策

本物の天才にそう褒められたところで、その天才こと光宣は別の話を切り出した。

「ところで、悠元さんは『伝統派』のことをどこまでご存知ですか？」

「達也は恐らく九重先生から聞いているだろうが……俺の場合は爺さんや母上から聞いているな」

元々は権力者の汚れ仕事に手を貸していた『裏』の古式魔法師や江戸時代以降に地下へ潜った高名な寺社で法力を揮っていた僧兵が起源とされている。俗に言う〝戦闘魔法師〟が大本となっているわけだが、この現象が顕著に見られるのは関西地方――京都・奈良方面という〝九〟の数字を冠する家が監視対象に置いている地域である。

「京都と奈良方面はともかくとして、他の地方で『伝統派』は存在しないのですか？」

「存在しないわけじゃないが、主だった拠点は上泉家と神楽坂家が吸収してしまっているからな。それに、他の師族が古式魔法師を蔑ろにしているわけじゃないし」

関東・中部地方は上泉家が、中国・四国・九州地方や東北・北海道地方は神楽坂家の『九頭龍』が主だった古式魔法師の勢力を吸収――正確には、正統派との和解という形で伝統派を二家に取り込んだ――しているため、『伝統派』が表立って動けばそれだけ護人の二家の介入を許すことになる。

ただ、現代魔法師と古式魔法師の対立は一つの問題として根強く残っており、国防軍の中には十師族を認めなかったり嫌ったりしている者も少なくない。特殊な事情で十師族の人間が所属しているとはいえ、独立魔装大隊は十師族に頼らない戦力を主目的として設立された。

剛三が討つと宣言している顧傑は国こそ違えど、そういった対立の煽りを受けて国を追われた古式魔法師の一人である。

「ただ、国防軍内には十師族に対して良くない感情を持っている者も少なくない……ま、その気持ちは理解できなくもないが」

「どうしてですか？」
「単純な感情論だよ」
十師族設立を提唱したのは九島烈。元国防軍退役軍人の彼が独自に現代魔法師を纏め上げた――というのは表向きの理由で、実際には上泉家と神楽坂家が国防軍を腐敗させないための策として講じたもの。この国の近隣国家は敵が多く、適度にガス抜きをする必要があるのは理解できるし、世界群発戦争に加えて四葉の復讐劇が師族会議の在り方に大きく影響している。
世界群発戦争が終結した当時の九島閣下の年齢を考えれば５０歳代後半。国防軍の軍人では将校クラスどころか、幕僚長の椅子も十分に考え得る功績を持っていた。その彼が国防軍を退役して独自に現代魔法師を纏め上げた組織を設立したという事実だけを見れば、元々国防軍で功績を挙げていた数字を持たない軍人魔法師からしたら『九島閣下に裏切られた』と思わなくもない。
そこに加えて、旧第九研が古式魔法師を利用して魔法を現代魔法で使えるように研究した。その結果として『伝統派』だけでなく国防軍内に十師族を好ましく思わない勢力が出来ても不思議ではない。
九島家をはじめとした〝九〟の数字付きの家は関係修復を積極的にするべきなのに、最強を誇示したいがためにその努力すら怠った。その結果がこの有様と言える。悠元の元実家である三矢家も国防軍の一部と諍いを持っているが、九島家に比べればマシだろう。
「自分たちが国を護る最前線に立つという軍人としてのプライドは俺個人も味わってるからな。実力でボコしたら割と分かってくれたのもいれば、襲撃部隊を差し向けた奴もいたし」
「……もしかして、昨年正月に襲撃された件ですか？　お祖父様から少しは聞きましたが、本当の事なのですか？」
「本当だよ。ご丁寧に対魔法師装備の完全武装仕様までしてな……全部破壊してやったが」
昨年の正月。上泉家本邸で過ごしていた悠元は剛三に「ゆっくりしているといい」と言われ、久々に寝正月でもして過ごそうかと思っていたところに、明らかに上泉家では見かけたことのないハイテク装備

に身を包んだ兵士が数人入ってきた。
その兵士の一人はアサルトライフルを悠元に向けた上でこう言い放った。
――――大人しく来い。抵抗しなければ命は取らない……ただ、その魔法はこの国に害を為すため、封じさせてもらう。
別に国防軍に対して敵意を持ったつもりなどなく、むしろ魔法装備などの開発で貢献している側の人間に対して「お前は敵だ」と言われているにも近い有様だった。天神魔法でアサルトライフルを使用不能にした直後、拳の先に『ファランクス』を展開して兵士の頭部を殴りつけた。高純度の合金仕様であるヘルメットは『ファランクス』に仕込んだ『相転移装甲（フェイズシフト）』の分子破壊フィールドで粉々に破壊され、『ファランクス』を纏った拳をまともに喰らった兵士の一人が塀の向こうへ飛んでいく。
残りの面子を一々相手にするのも面倒だったため、寝正月の暇潰しで開発していた『エアライド・バースト』を放って纏めて吹き飛ばした。その際、兵士の身に着けていた武装も『エアライド・バースト』の炸裂によって生じた衝撃波の刃で完璧に破壊され、身ぐるみを全て？がされた状態で飛んで行った光景を見た悠元は気まずい表情を浮かべた。
元々は前世の漫画で見ていた忍術（俗に言う〝風遁（ふうとん）〟）を再現できないかという目論みで組み立てた代物だが、まだ完成しきっていない状態であれだけの威力を出したのは想定外だった。その光景を駆けつけてきた佳奈と美嘉に見られ、『エアライド・バースト』は三矢家の秘術の一つとなったのだった。
正直な話、装備を全壊されて真冬の外に吹き飛ばされたなんて可愛げがあった話のようで、後で聞いた限りでは全身打撲やら内出血なんてザラで、一番酷かったのは全身複雑骨折に加えて意識を飛ばされた人もいたほどだ。それでも誰一人死ななかったのは奇跡的なレベルという他ないだろう。
それでトラウマを負っていたとしても、俺は責任を取るつもりなどない。

「ま、その件は既に過ぎたことだ。今は『伝統派』に集中しないとな。光宣、まずはどこに向かうんだ？」
「葛城古道の方から行こうかと。そちらは比較的大人しくはありますが」
「妥当な判断だな」
流石にいきなり過激な場所に行こうものならば流石に止めていたが、そういったところから丁寧に潰していくのが望ましいだろう。それに、周公瑾が奈良地方に潜伏している可能性は低い。以前周公瑾を捕捉した時に感じた雰囲気がこの辺りでは感じられないからだ。
あくまでも感覚的な話なので確証などなく、相手が『鬼門遁甲（きもんとんこう）』で感覚を狂わせることが出来ることを考えれば、その憶測だけで周公瑾の行方を伝えるわけにもいかない。
葛城古道は本来、観光ならば徒歩で6時間から7時間掛かる。なので、今回は時間が無いためにリムジンは散策路の出口で待ってもらい、立ち乗り式のロボットスクーターを借りる形での散策をすることとなった。
一人乗りの場合は原付免許、二人乗りの場合は小型二輪免許（免許系の公的な名称は前世から変わっていない）が必要で、達也と悠元、光宣が免許を持っているのでそこは問題なかった。
特筆すべきことがあるとするならば、深雪が悠元と、水波は達也と一緒に乗る形となった事であり、達也曰く「水波と一緒にしても良いが、深雪の機嫌を損ねたくないんでな」とのことで、これには聞いていた深雪が不満げに少し頬を膨らませ、水波は苦笑を滲ませており、光宣は顔を背けていたが間違いなく笑っていた。ロボットスクーターは横に二人乗りで、運転手がハンドルを、同乗者が安全バーを掴む形となるわけだが、深雪は悠元の腰に手を回して掴まっていた。案内をする関係で光宣、悠元と深雪、達也と水波の走行順になるため、前を走る二人を見て複雑な感情を浮かべる水波に達也は柄にもなく苦笑にも似た表情を見せたのだった。
葛城古道に手掛かり自体は無かった。元々可能性が低いエリアの探索だったので、この程度は想定内である。その点は光宣や達也も同

様の意見だった。九品寺(くほんじ)や一言主神社(ひとことぬしじんじゃ)、高天彦神社(たかまひこじんじゃ)といった名所を拠点観察という形で訪れたことで、心をリフレッシュするいい機会にもなった。

そして、高鴨神社(たかがもじんじゃ)では思わぬ人物（悠元は原作知識で知っているわけだが）と再会を果たした。神職見習いということで白袴をつけた人物が悠元の姿を見て声を掛けてきたのだ。

「君は、三矢君？　いや、今は神楽坂君だったか」

「司(つかさ)先輩。いえ、鴨野(かもの)先輩と呼ぶべきでしょうか」

昨春の第一高校襲撃騒ぎと『ブランシュ』の拠点制圧の一件。それに大きく関わっていた元第一高校の生徒で当時剣道部主将だった司(つかさ)甲(きのえ)。今は両親が離婚した関係で鴨野(かもの)の姓を名乗っている。

「そこまで存じているとはね。いや、君の今名乗っている名字からすれば納得もいく話だ」

高鴨神社は全国にある賀茂神社の総本社、賀茂氏の氏神神社にあたる。ブランシュ事件の後で八雲から甲が賀茂氏の傍系にあたると聞いていたが、奇しくも神楽坂家――安倍氏と賀茂氏の血統を継ぐ悠元とはかなり遠縁の存在とも言える。

「自分もその事実を知ったのは昨年の九校戦の時です。兄のこともありましたから、家を離れることに抵抗はありませんでしたし」

「そうか……本家からは君の為人を聞かれてね。とはいっても、あくまで先輩と後輩という関係しかなかったわけだし」

甲の眼のことを本家が甲を見習いとして引き取ることで魔法師としての力を高めるのはよくあること。賀茂氏としても本家の血統を継ぐ神楽坂の名を持つ人間が表舞台に出たことを知り、同じ高校に通っていた甲に色々尋ねたとのことだ。

「それはご迷惑をお掛けしました」

「その台詞はこちらが言うべきことだよ。罪滅ぼしになるかは分からないが、司波君も含めて改めて挨拶に伺わせてもらうよ」

境内の掃除に戻っていく甲を見送り、そのままロボットスクーターを止めたところまで戻っていこうとしたところ、壮年の神職らしき人物が帰り道の途中に立っていた。向こうは悠元がどういった存在な

のかを認識した上で深々と頭を下げた。
「これは神楽坂殿、お初にお目に掛かります」
「いえ、こちらこそ。本来ならば賀茂氏の血族としてご挨拶に伺うべきですが、此度は別件で立ち寄ったまでです」
「それとなく存じております。こちらを神楽坂殿にお渡ししたく」
そう言って神職が手渡したのは格式張った手紙。それこそ式典の祝辞などで読み上げる際に用いられる包み方だった。二通渡され、一通は悠元に、もう一通は千姫宛であった。神職の男性は深くお辞儀をした上で立ち去ったので、悠元は手紙を懐に仕舞いつつ、『ミラーゲート』で千姫宛の手紙を箱根の本邸に転送した。
ロボットスクーターのところに戻ったところで悠元は自分宛ての手紙を開いて読み始める。そこには、『伝統派』に関する動きの動向が事細やかに書かれていた。これで得た情報の開示判断は悠元に委ねるという文言も含まれていたので、達也らにもその情報を伝えた。
「御蓋山（みかさやま）の近辺で待ち伏せている、ですか。確かに、その中には『伝統派』の大規模拠点がありますが」
「近くを通れるのは確か春日山（かすがやま）遊歩道になるが……達也、どうする？」
「今は一つでも手掛かりが欲しい。案内してくれるか？」
明らかな警告を滲ませたものだが、周公瑾の手掛かりを探る意味で退くことは出来ない。達也の決断により、葛城古道からそのまま奈良公園に向かうこととなる。いくつかの『伝統派』の拠点の捜索をスルーした形だが、高鴨神社で受け取った手紙の中には『伝統派』の拠点に関する情報が書かれており、その情報を基に判断した。
２１世紀前半までは御蓋山の山域に車で乗り入れるドライブウェイもあったが、魔法の科学的発達によって聖なるものに対する〝畏れ〟が復活した影響が大きい。在るかどうか分からないものが「あるかもしれない」という考え方によって神聖なるものに対する敬虔さが取り戻されたということだ。
五人は最初、先程のように光宣が先導して、悠元と深雪、達也と水波が続く形となっていたわけだが、春日大社の末社である浮雲神社を通り過ぎたあたりで悠元と深雪が先導する形となった。悠元がこの

辺の地理も把握しているので問題ないという判断もあった訳だが、光宣としては悠元以外の同年代の人間と話す機会が恵まれなかったのもある。
「いやはや、お二人が纏っている空気が恋人というよりも長年連れ添った夫婦にも見えてしまいます」
「あの二人は最近アイコンタクトだけで意思疎通しているからな。この場合は深雪が押しかけ女房みたいなものだが」
「あはは……桜井さん、大丈夫ですか？」
「あ、はい……（お二人とも、このような場所で罰当たりでは……）」
それ以上に、水波が悠元と深雪の様子を見て耐えているような状態だった。これは光宣もフォローすべきと考えて達也と水波に歩調を合わせている。そして春日山遊歩道に達した時点で悠元は徐に歩みを止めて周囲を見渡した。これには深雪も只事ではないと判断して悠元の腕から離れた。
「悠元さん、敵ですか？」
「まだ距離はあるが、この先で待ち伏せているな……結構な数だ」
第一陣的なものだと１０人から２０人前後と言ったところだが、その後陣に３０名ほどの気配を掴んだ。とはいえ、ここで引き返せば要らぬ被害を民間人に与える可能性がある。
「どうします？　引き返すことも出来ますが」
「いや、一時的な処置でも彼らの追撃は避けたい。痛くもない腹の内を探られるのは気分が悪いからな。水波、万が一の場合は先日渡した術式をメインで使ってくれ」
「分かりました」
「達也もそれでいいか？」
「ああ」
提案したのは悠元だが、達也としても悠元の意見に同調した。何事も無いように振舞いながら遊歩道の中に入る。古式魔法師の中でも高位の結界術者であり、精神系魔法に得手のある深雪でも気付かないほどの微弱な術力でゆっくりと馴染ませていくことで魔法に気付かなくさせる手法は古式魔法ではよくある手法だ。瞬間的な高出力を

出すことを主とした現代魔法では出来ない手法でもある。
術者は巧みに魔法で気配を断っているわけだが、悠元も遊歩道の直前に魔法を展開して相手の認識を阻害している。その証拠に、相手は音が聞こえるのに姿が見えないという困惑を見せていた。
「これは……古式魔法ですか？」
「いんや、『仮装行列（パレード）』を改造した隠蔽術式だよ。完成度は精々５０パーセント程度だが」
九島烈とセリアとの対面で写し取った『仮装行列（パレード）』の起動式をベースとして、一定範囲内のエイドスに術者のエイドスが持つ情報を複写することで疑似的な〝影分身〟を生み出す魔法。便宜上ということで『月影行列（ムーンエスケープ）』という名を付けている。この魔法は『パレード』と異なり、写し取ったりする情報を自在に設定できるため、今回は分身の足音を増幅して遊歩道の森に潜む術者に聴覚を狂わす方法を取っている。
すると、達也も気配を見つけたのか森の中へと走っていく。森に入ってから少しすると聞こえてくるのは達也以外の悲鳴――――恐らく達也が『分解』で相手の急所を穿っているのだろう。
「これは……負けていられませんね。悠元さん、後ろはお任せします」
そう言って光宣が徐に歩き出していく。いや、厳密には『パレード』を展開して歩き出す。その魔法が分からなければ、光宣が無防備で歩いているようにしか見えない。現に彼を狙い撃とうとした魔法はすり抜けるか、位置情報の定義改変条件を満たさずに破壊されていく。
「幻影ですか？　信じられない……」
水波がそう言葉を漏らしても仕方が無いだろう。悠元や達也ほどではないにしろ、魔法師はサイオンを光や音と同じように知覚する。水波の目に映る光宣の身体は先程まで一緒に歩いていた実際の肉体と同じパターンを備えていたからだ。

皆纏めて痛み分け

相手の古式魔法師からすれば、光宣が何もないところから姿を見せたものの、あらゆる魔法が光宣をすり抜けていくことに驚愕するのも無理はない。そして、その魔法――『仮装行列（パレード）』から光宣が九島家所縁の人間ということに古式魔法師たちも気付くが、あらゆる魔法を駆使しても通らない攻撃に焦りを感じていたのは確かだろう。

「あの魔法の精度、リーナよりも上でセリアと互角だな」

「リーナ？　もしかして、以前第一高校に留学していたアンジェリーナ・クドウ・シールズさんのことですか？」

「ええ。軍人として甘いところはあるけれど、それでも魔法の技能は一級品よ。でも、そのリーナですら上回るだなんて」

魔法の技能だけで言えば、間違いなく九島家現当主の子世代でトップの実力を有する。それを生かすだけの肉体を持ち得ていないからこそ、彼はその力を発揮できずにいる。逆に言えば、その状態だからこそ九島家の中で命の危険に脅かされるという可能性も少ない訳だが。

セリアに関しては、転生者というアドバンテージを得てはいるものの、光宣のように九島家の魔法全てを学んでいたわけではないというのは本人から聞いている。彼女の祖父である九島健が九島家の秘術をＵＳＮＡ軍に漏洩させないためというのが最大の理由だろう。

尤も、光宣自身は「悠元さんに比べれば、魔法の技能も精神も未熟ですから」と幾度も述べているが、自分はあくまでも精神的に成熟しているためと前世の非凡なる身内の影響でそうならざるを得なかっただけだ。加えて色んな人と会わせようとする祖父の存在もあったが。

相手の古式魔法師たちは『隠形』を展開して、自分たちの気配を偽っている。悠元には『天神の眼（オシリス・サイト）』を使わずとも感じ取っているわけだが、そう出来ない光宣はと言うと、放出系魔法である『スパーク』を自身の目の前に映る表層土全体に展開した。

空気中に電気を放出するのではなく、物質中の電子を強制的に抽出

して放電現象を起こす基礎的な術式だが、ただでさえ空気は電気を通しにくいのにも拘らず、光宣がそれだけの現象を引き起こしたのは、広範囲に放たれた『スパーク』を〝捨て石〟にするだけの潤沢な想子保有量を有しているからだ。

そして、光宣の『スパーク』で咄嗟に防御せざるを得ない古式魔法師はその反動で『隠形』が解除され、一人ずつ確実に仕留めていく。

「おのれ、こうなれば――」

「はい、寝てろ」

「がはっ!?」

すると、破れかぶれの特攻として姿を見せた古式魔法師がいたため、悠元も姿を見せて思いっ切り殴り飛ばした。その古式魔法師は手に持った札を手放したのを見て悠元が手に取り、サイオンを込めて札を制御した。

別に光宣に任せても問題はない訳だが、この後に来ている第二陣を一々相手にするのは面倒だと判断したからだ。

「あの、悠元さん。その札を普通に使えるんですか?」

「特に害するような要素はないし、精々〝管狐〟を制御するだけのものだ。ま、折角なので利用させてもらうがな」

悠元は札を通して管狐を操ると、それを通して気配を明らかに偽っている先を探る。第二陣は30人……先に読み取った気配に過不足は無いと判断した。

「――天仙結界、『影仙陣』発動」

そして、管狐を操って30人の中心点に移動させると、管狐を起点とした四方約200メートル程度の〝黒い箱〟が遊歩道の一角に展開された。悠元はその結界を発動し終えたところで火属性の天神魔法で札を完全に焼却した。この札を持っていても何の証拠もないし、先程悠元が吹き飛ばして気絶させた古式魔法師を突き出した方が早いと踏んだからだ。

後は結果待ち……と悠元はここで、目をキラキラと輝かせている深雪の存在に気付く。

「すごいです、悠元さん! やはり深雪の眼に狂いはありませんでし

た！」
「……分かっちゃいたけど、まだ安全圏じゃないからな深雪。で、光宣も興味津々そうな目で見ないでくれ」
「す、すみません。でも、九島家の魔法でもあのような魔法はありませんし」
家の関係で古式魔法絡みを学んでいる光宣はもとより、天神魔法を習っている深雪ですら驚いたのは単純明快で、あの魔法は天神魔法の中でも極めて難度の高い天仙結界（てんせんけっかい）――――属性魔法や喚起魔法の複合術式であり、神楽坂家本邸に用いられている結界術式はこの天仙結界によるものだ。
現当主である千姫ですら下手に手を付けられなかったのは無理もない話で、この魔法は全七属性の魔法行使が出来て初めて可能となる。
すると、ある程度の片付けが済んだ達也も悠元らのもとへ戻ってきた。達也の興味もあの黒箱に移っていたらしく、それが出来るであろう悠元に尋ねた。
「……悠元、あれはお前の仕業か？」
「間違ってはない。ともかく、これで追撃の手は逃れられるから、後のことは地元の警察に任せるよ」
悠元がそう述べたのには理由があり、先程まで展開されていた結界が解かれたからだ。おそらく悠元が殴り飛ばした術者が結界を張っていた可能性が最も高い。
「にしても、相変わらずの手際の良さだな、達也は」
「俺からすれば、光宣や悠元の方が凄いと思うがな。俺の場合は悠元の魔法を利用しての不意打ちに過ぎない」
「それを言うのでしたら、僕も騙し討ちみたいなものです。あの大人数をあっさり閉じ込めた悠元さんほどではありませんよ」
「あー……ま、いっか。どうする？　多分拠点に行っても欲しい手掛かりは得られない可能性が高いが」
このままだと確実に謙遜のし合いで決着がつかないと判断し、悠元は話題を変えることにした。周公瑾が仮にあの拠点にいたとしても、

今頃は襲撃絡みの情報を聞いて人知れず行方を晦ましているだろう。
　それに、今のところ得た情報では京都の三千院近くで小競り合いを起こして消息が途絶えている。その彼が奈良方面に移動しているのはリスクを伴う行為であり、確実に『九頭龍』の監視網に引っ掛かってくる。
　それが無い以上、達也の欲しい情報は確実に得られないということを含めてのものだった。
「そうだな、今日はここまでにしたほうがいいな……あの結界は何時解かれる？」
「ここの近くの山の霊脈と〝繋げている〟から、彼らが全員戦闘不能になるまで解かれない仕組みだよ。ま、いいところ精々１時間程度ぐらいかな。それ以上伸びれば確実に警察のお世話になるし、遊歩道から入ってきた観光客が結界の範囲内に入り込んでも対象に含まれないから問題ない」
『影仙陣（えいせんじん）』――結界内に存在する対象者と同レベルの〝影〟を生み出し、強制に戦わせる。しかも、〝影〟同士が対象者と精神的にリンクしているため、一人の攻撃が〝影〟を通して本来味方である２９人に精神的苦痛という形で与えられる。更に、残り一人となった時点でその結界内に蓄積されたダメージの情報がその対象者に流れ込む。
　今回は相手を気絶させる前提の為にダメージのリミッターを設定しているが、リミッターを外せば相手に外傷を負わせることなく〝殺す〟ことも可能な魔法。云わば四葉元造（よつばげんぞう）の固有魔法である『死神の刃（グリム・リーパー）』をより汎用的にした魔法とも言える。
「なら、ここは僕が見ておきます。そういえば、帰りの電車は何時頃ですか？」
「１９時半だな」
　元々捜索自体に時間を掛けるつもりでいたため、学業に支障の出ない範囲内で切符を買っていた。ただ、原作とは違って幾つかの探索場所をスキップしているため、時間的にはお昼を少し過ぎたあたりだ。
「なら、折角なので温泉でもいかがですか？」
「温泉……？」

光宣の言葉に深雪が疑問を浮かべ、水波は思わず自分の服の匂いを確かめるような仕草をした。これには光宣が拙いと感じたのか、慌てて取り繕おうとする。
「あ、いえ、決して汗臭いからという訳ではないです」
「光宣、それは自爆だ」
ただ、友人がなまじ少ないからか自爆めいた言葉が次々と飛んでいく光宣を達也が窘めた。この状況だと二人を諌めるのは自分の役目だと諦めつつ深雪に話しかけた。
「深雪、光宣は折角奈良に来てくれたんだから、疲れを癒す意味で温泉を勧めてくれたんだ。明日からまた学校だし、英気を養うのは大事なことだよ。なら、光宣の提案に甘えることにしよう。それで納得してもらえるか？」
「悠元さんがそう仰るなら……」
なお、背後から感謝の気持ちが籠った視線が達也と光宣から向けられているのはここだけの話。「話術ぐらい磨け」と言いたいが、今はこの場を離れることを優先することとした。

◇　◇　◇

光宣に案内されたのは平城京跡からそう遠くないロケーションの老舗ホテルだった。あの場に残ると言った光宣に状況説明させるのは酷だと判断し、悠元は達也と一緒に無理矢理引っ張る形で案内させた。
（迂闊だったわ……恨むぞ、達也と光宣）
原作だと、達也と光宣が話す関係で深雪と水波が大浴場に向かう形となったわけだが、ここに悠元が加わることで行動自体も変化が生じていた。光宣と達也が何か話したいことがあると言って客室に籠り、悠元は深雪に引っ張られる形で家族風呂に巻き込まれていた。
いくら婚約者で既に致している身でもＴＰＯは弁えているため、お互いに湯着を付けた状態で湯船に浸かっている。水波は緊張なのか照れていると言うべきか、頬を赤くしながら俯いているわけだが。
「水波ちゃん、大丈夫？　顔が赤いわよ？」
「は、はい、だ、大丈夫です」

「あー……水波からしたら、深雪は女性としてのアイデンティティすら揺るがす存在だものな」
ただ、家族風呂のお陰で周りに人がいないため、深雪の存在で他の宿泊客に迷惑を掛けていないのは事実。別に深雪自身が悪い訳ではないが。
「悠元さん、私からすれば水波ちゃんも十分綺麗になってますけど」
「言い分は理解できるけど、元から抱いていたものはそう簡単に払拭出来たら苦労しないよ……何で密着してくるんですか、深雪さんや」
「当ててますから」
ここ最近は本当に甘えることが多くなっている。来年正月の慶春会も意識しての事なのだろうが、最大の理由は深雪の母親である深夜が悠元の専属使用人になったことが大きく影響している。
それからというものの、大体寝る15分前ぐらいに悠元の部屋を訪れ、そのまま一緒に寝ることが多くなった。流石にベッドのサイズも狭くなるため、寝具を新調する羽目になった。一緒に寝てるだけ……という言い方をすれば嘘になってしまうが、あまり口にするのもどうかと思うので察してほしい。
「水波ちゃんも悠元さんに触れるべきよ」
「え、いえいえ、私なんかが悠元兄様のお体に触れるなど……」
(凄いな、顔が真っ赤だわ)
照れのあまり顔が真っ赤になっている水波。それでも逆上せているような様相でないのは読み取れていた。これでは水波の疲れも取れないだろうに……と、心なしか水波を心配そうな目で見つめていた悠元だった。
この後、上がりたそうにしている水波をしっかり湯に浸かるよう深雪が勧めたのもあって、悠元に必要以上の負担が掛からなかった。
すっかりリフレッシュした深雪と、少しばかり英気を養えた悠元、そして疲れ切った表情で出てきた水波という有様に達也は何があったのかをそれとなく察していたが、追及することはなかった。時間もあったのでホテルの夕食コースを堪能し、リムジンで奈良駅まで送ってもらった。

「では、ここで。今日は楽しかったです」
「ああ。論文コンペもあるから、また近いうちに助力を頼むことになると思う」
「そうですね。その時は是非協力させて下さい」
　原作だと存在した光宣と水波の会話シーンが無くなり、その代わりとして悠元が光宣と会話を交わすことになっている。今更ながら原作の中に組み込まれるつもりなどなかったわけだが……いや、十師族の中にいた時点で何かしら関わっていたのは間違いないだろう。現に深雪が自身の婚約者となっているのはその証左とも言える。
　別れの挨拶を再会の約束で代用し、悠元たちは光宣と別れた。

◇　◇　◇

　東京に戻った四人はそのまま家に帰った。自室に戻った悠元が端末にメッセージがあるのを確認すると、通信機を付けてその連絡先につなげた。
『ハロハロー、お兄ちゃん。九島家に行ってたんでしょ？　あとは伝統派絡みとか』
「……そういう前提ありきで喋るな。まあ間違ってはないが」
　通信を繋げた相手はセリアだった。お互いに原作知識を知っているからこそ、セリアは凡その予測を断定するような口調で話す。これに対して窘めつつも肯定しつつ、悠元は遮音の結界と通信強化で『五芒星（ペンタゴン）』を張った上で話を続ける。
「九島烈とも会談してきた。達也たちも含めた会談の後、直接対談することにもなった。その中で言われた依頼内容は……九島光宣の治療だ」
『……引き受けたの？』
「ああ。九島家現当主からの依頼なら絶対に引き受けなかったが、九島閣下となれば話は別だ」
　既に九島家の家督を譲り渡した先代当主の身ではあるが、魔法師社会や国防軍に影響力を残す『トリック・スター』の異名は未だに健在。悠元はその影響力を利用するため、九島烈の依頼を受けた。その対価として出した条件の中にはリーナとセリアに関する扱いも含まれて

いる。
「後半のキーパーソンである光宣を治療し、彼を九島家から完全に切り離す。ただ、九島本家の近くに置くと拙いから、光宣には北海道か沖縄方面……あるいは小笠原諸島に移住してもらうことも考えている」
『そこまでやるんだ……ううん、そこまでしないと無理ってことだよね』
「俺はそこまでじゃないが、『数字付き(ナンバーズ)』絡みのプライドって油汚れ以上に頑固でしつこいからな」
　その一つに今春の〝ダブルセブン編〟がある。十師族入りを目指そうとする琢磨の執念じみた行動はその代表例とも言える。七草家がこれ以上動かなければ、次の師族会議で九島家が責任を取る形で十師族の立場を辞することはないと思っていたが……どうやら、七草家は搦め手で事を進めるつもりのようだ。
『でも、七草家はお兄ちゃんが釘を刺したんでしょ？　流石にお兄ちゃんと泉美ちゃんの婚約のことがある以上、手を出すのは拙いと思うし……最悪、泉美ちゃんが現当主を殴り飛ばすと思うよ？』
「グーで済むなら優しいと思うがな。黒羽の部隊を七草家の影響が強い国防軍の部署が監視している。おまけに、奈良で遭遇した連中絡みの管轄が国防軍情報部になった。誰の指金かは言わずともわかるが」
　今頃、達也は響子と通話をしている頃合いなのは片手間でも読み取れている。何せ、セリアと会話しつつあらゆる場所のサイオンデータを読み取っているため、リアルタイムでも状況を把握できる。その技術自体は流石に漏洩を考慮して誰にも話していない。
　国防軍情報部は個人的にもいい思い出がない。七草家だけならばまだしも、元の実家を未だに甘く見ている十山家の存在もある。「個人的には今すぐ潰してやりたい」と以前述べた剛三の言葉が今になって分かるような気がした。
「ただ、家は潰せない。それが九島であっても七草であっても」
『どうして？』
「影響力が強すぎるんだ。数が少ないとはいえ、マイノリティーの魔

法師社会でなまじ影響力が広範囲に及んでいる。それなら、いっそのこと現当主の影響が強い直系の子全員を殺すしかなくなる」
家単体というなら十山家は簡単に潰しやすい部類だ。あの魔法技能は惜しいが、下手に他の師族を巻き込もうとする考えはあまり看過できない。
七草家と九島家は魔法師社会のみならず、前者は政治家やマスメディア、民間企業や国防軍に影響力を有し、後者は国防軍に強いシンパを有している。そうでなくとも、他の師族ですら民間企業、政財界や軍の関係者とも繋がりを有している時点で、それを他の師族へ簡単に引き継げるように師族会議のシステムが想定されていないのだ。
「変に格下げなんかしたら、それこそ七草弘一は何をするか分からん。あんな悪だくみを平気でする奴は目に届くところに置いておかないと逆に危険すぎる。その意味だと九島真言も似たようなものだが」
家単体だけではなく、それと繋がりを有する民間企業も少なくない。言ってしまえば、師族そのものが第二次大戦後に解体された財閥に近い性質を持ってしまっている。下手に解体すれば、国のあらゆる分野に混乱を来たしかねない。
それを分かっているからこそ、七草弘一は大胆な悪だくみを平気で出来る訳なのだ……その理由があまりにも子供じみていると思うのは自分だけなのだろうか、と悠元は内心でそう独り言ちた。

考えることが多いと頭痛になる

悠元が発した言葉に対し、セリアは気難しそうな表情を浮かべていた。

無理もない。セリアからすれば祖父の代で袂を分かったとはいえ九島家の血縁者なのは事実で、そのことを九島家の現当主が利用しないとも限らないのだ。

『それは難しいね。普通に働いている人たちを路頭に迷わすわけにもいかないし』

「避けようと思えば救済することは可能なんだが……今しがた入った情報だと、国防軍情報部から七草家に今日の一件が伝わったみたいだ」

娘の婚約のことを鑑みるのならば、七草家現当主が企みに走る必要など逆に首を絞めかねない行為だ。だが、先程述べたことが大きく影響していることに加え、いざとなれば「国防軍の一セクションが独断で行動した」と切り捨てることも厭わないだろう。

『……ねえ、お兄ちゃん。泉美ちゃんの婚約のことを考えたら、また破棄することも視野に入れるの？』

「どうせ『自分の部下もしくは国防軍情報部が七草家を慮って勝手にやった事』などとしらばっくれるのは目に見えている。場合によっては母上に伝えて婚約序列を変更するのが関の山だろう」

千姫からの話だと、内密に一色家と一条家からの婚約打診があったと報告を受けている。一色家の場合は愛梨で、一条家は将輝の妹である茜がその対象に含まれる。更に、剛三経由でゴールディ家からも英美の婚約打診の相談をされたことも付け加えられた。

現状第七位の婚約序列の泉美だが、七草家の対応次第ではその序列を下げるのが関の山だろう。正直な話、婚約者だけでなく専属使用人兼愛人の時点でも腹一杯の心境なだけに、同じ心境にありながらもまだマシな達也を少し羨ましく思ってしまった。

「周公瑾は奈良方面での気配を感じなかった。消息を絶った地点から計算して、京都近辺なのは間違いないだろう」

周公瑾は恐らくいくつかの拠点を転々としている可能性が高い。四葉でも諜報に長けた黒羽の追跡を掻い潜っている以上、その可能性の先に国防軍の基地を最期の潜伏場所とした経緯があるとみている。

亡霊となってしまってからを鑑みるならば、人間としての最期と言うべきなのかもしれない。元々人間なのか怪しい彼をどうカウントすべきなのかは疑問に残るが。

『宇治近辺を虱潰しに探すのはどうなの？』

「最初にそれをやると確実に周公瑾に勘付かれるからな。それに、次来るときは論文コンペの会場警備の事前視察が主目的となる以上、北部を重点的に探させれば周公瑾の眼も多少は欺ける」

その辺はこれから幹比古や達也に相談せねばならない案件だが、論文コンペの会場となる京都新国際会議場は京都市の北部――――そこから更に北には鞍馬山（くらまやま）があり、『伝統派』の拠点の一つがある。国際会議場を基点として探査の式を打つことになるだろう。

『……なら、私も事前調査には同行するよ。九島家のことはどこかで向き合わないといけないし、人手は多い方がいいでしょ？』

「そうだな。美月とほのかは流石に連れていけないが、佐那には協力が得られた。燈也も中条先輩の護衛があるから動けないが」

元々セリアには事前調査の協力を頼むつもりでいた。佐那に関しては幹比古の補佐という形で動いてもらう予定だ。今までの『プラスワン』の要素がここで働かないという理由もないため、万全を期するつもりでいた。

『そういえばさ……名倉さんはどうするつもりなの？　このまま放置の方向？』

「それなんだが、一つ手は打っておいた。これで周公瑾と接触するようになってくれれば御の字だが」

申し訳ないが、名倉はこちらの想定通りに〝一度〟亡くなってもらうつもりでいた。流石の周公瑾でも黒羽貢に使った影獣の類の魔法をそう簡単に用意できないことは先日の調査において『天神の眼（オシリス・サイト）』による記憶情報の遡及で把握済みだ。

だが、単に見殺しにするのではなく、『数字落ち（エクストラ）』とはいえ彼の能力

は十分戦力として通用する以上、神楽坂家に引き込むつもりだ。その前例は先日のパラサイト事件で成功した以上、出来ない道理はない。

◇　◇　◇

奈良駅で別れた光宣はそのまま生駒の九島本邸に帰宅した。いつもならば使用人が出迎えることが多かった――――厳密に言えば、光宣と血の繋がった兄や姉が出迎えること自体少ない――――わけだが、今日は光宣にとっても少々意外な出迎えだった。

「帰ったか、光宣」

「お祖父様。態々待って頂いたのですか？」

「この程度が出来なければ剛三に笑われるものだ。……光宣、話がある」

会談の場所は光宣の部屋で行うことになった。今日は珍しく調子がいい光宣がまた体調を崩すことを考慮してのもので、光宣自身もこれには異を唱えずにベッドへ腰かけた。それを見た烈は備え付けの椅子に腰かけた。

「光宣、まずはすまない。お前の気持ちをしっかりと受け止めてやれなかった」

「お祖父様、いきなり何を」

「悠元君に言われたからな。『光宣が一番何を望んでいるのか、それをしっかり聞いてやれ』とな」

「悠元さんが……」

光宣自身、優れた魔法師として活躍したいという欲求がない訳ではない。だが、自身の体調面がそれを許さないからこそ強く主張するということはなく、烈からは魔工技師や研究者としての道を諭されたことにも納得がいっていた。それに対して光宣が素直に頷かなかったのも、なまじ魔法師としての実力があったからこそだ。

「……光宣。もしその体質を治すことが出来るのならば、受けたいか？」

「えっ……この体質が治るのですか？」

「治療が可能の範疇と答えてくれたことは確かだ」

烈から述べられた言葉は光宣を驚かせるに十分過ぎた。現状、九島

家の魔法に光宣が抱えている問題を解決するための魔法がない事は確かだ。その例外ではない烈から出た言葉から、光宣は烈が取引を持ち掛けた相手を自ずと察した。
「もしかして、悠元さんがその魔法を使えるのですか？」
「……ああ、そうだ。『十三使徒』の一人である五輪澪君や、光宣が会った司波達也君と司波深雪君の母親が元気になったのは彼が大きく関係している。彼もその事実を認めた」
三矢家――――いや、彼にしか持ち得ない固有の魔法なのではないかと光宣は思った。正直なところ、これまで九島家が悠元に対しての行いを鑑みれば、自身の治療に協力的になってくれるとは到底考えづらい。それを察したのか、烈は言葉を付け加えつつ話した。
「私が神楽坂悠元君に光宣の治療を依頼した。その引き換えとしていくつかの条件を提示されたわけだが……その治療を受けるとなれば、光宣を九島の家から出さねばならない。お前には申し訳ないと思うが……」
「そうですか……」
条件が複数となれば、悠元の魔法の秘匿も当然条件に含まれるだろう。それに加えて九島の家を離れるということは、悠元自身も三矢の家を出たことを見れば理解できる話だと光宣は結論付けた。
彼は元々の病弱体質が治った後、正式に三矢の家督と家業の継承を拒否したと本人から聞いている。その理由は能力の優れた自分が残れば、長男の行き場所を無くすことにも繋がりかねないと理解していたからだ。
「お祖父様。僕が九島の家を出る理由は、次代の家督争いを避けるためですね？」
「その認識で合っている。どうする？　彼からは光宣の同意を得ることが必須と言っていたが」
自身の魔法師として活躍したい思いと自分の実家の事。光宣が今置かれた環境を考えた時、九島の家を離れるという選択肢は自身の命を守る意味でも理に適う。いくら優れた魔法師といえども、魔法が使えなければ只の人間と同じだ。そこまで考えた上で光宣は烈を見

やって告げた。
「僕は……受けようと思います。ですが、九島の姓を名乗らなくなっても、お祖父様――――九島烈の孫だということに胸を張れるよう己を律します」
「そうか。彼には私から話をしておこう」
半ば諦めていたもの。それに手が届くのならば、そのチャンスを無駄にしない。光宣が話を受けたことに対し、烈はどこか寂しげな表情を浮かべていたのであった。出来れば九島の家に残ってほしくはあるが、彼のような存在を生み出してしまった人間として、せめて孫が不利益を被らないように動こうと密かに決めたのだった。
◇　◇　◇
セリアとの通話を終えた後、喉が渇いてリビングに足を運ぶと達也がソファーに座って寛いでいた。深雪と水波は自室に戻っているようで、キッチンに入ってミネラルウォーターの入ったコップを持った上で、達也が座っている場所の近くに腰かけた。
「悠元、誰かと連絡していたのか？」
「セリアとな。今度の事前調査にも同行すると言っていた」
本来の筋を考えれば、「九」の数字を冠する魔法使いの家への復讐を考えている『伝統派』が起こしたトラブルを国防軍が担うのはおかしい話だ。いくら魔法師絡みと言えども、それこそ国内の犯罪に関係する類は専ら警察の仕事なのに、その仕事に横槍を入れた挙句横取りしたようなものだ。
「そう言うってことは、達也も誰かと電話していたのか？」
「藤林少尉とな。お前なら既に知っていそうだが、夕方の襲撃の件が国防軍情報部の管轄になったそうだ」
しかも、達也をターゲッティングするためだけにそういった行動を取るのは、単に七草家や十山家だけでなく、周公瑾が国防軍に働きかけた可能性があることも意味する。直接的な関与はともかくとして、結果的に七草家と周公瑾が間接的に関わりを持ってしまっている形なのは疑うべくもない。
「いくら警察でも手が出しにくい『伝統派』絡みとはいえ、警察の面子

を潰すって正気じゃないわ……」
「ただ、藤林少尉曰く悠元は対象に含まれていないらしい。心当たりはあるか？」
「……そうなると、周公瑾は俺を警戒しているとみるべきか。直接会った事はないけど」
　その上で、昨春のブランシュ関連で周公瑾が悠元を監視していた事実を達也に話した。こればかりは達也も驚くような表情を見せていた。流石に霊子（プシオン）の動きを見るのが難しい達也が察知できなくても無理はないと思う。
「そんなことがあったのか。周公瑾とはそれ以降何も？」
「関わりはないが、中華街の監視を式神にやらせていたぐらいだよ。そもそも、彼の考えと護人の考えが相反している以上、手を組むのは論外だな」
　それに、七草家のことを考えれば足を引っ張られるような動きをするのは間違いないだろう……妙な安心感には納得いかない気もするが、今は置いておく。
「悠元、今度の論文コンペの事前調査に関してだが、主導は任せていいか？」
「服部前会頭との調整も含めれば妥当だし、俺が音頭を取らなきゃいけないのは道理だから問題はない。ただ、京都入りはスケジュールを早めることになる」
　何せ、神楽坂家にとって京都はかつて居を構えた父祖伝来の地。千姫から聞いた話では、『正統派』に属する古式魔法師と面会するのが今後のためにもなる、と伺った。
　奈良の高鴨神社、京都の北野天満宮（天神魔法の名称は菅原道真（すがわらのみちざね）から名付けられた）に加えて比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）と言った主だった神社や寺に挨拶をせねばならない。
　これは神楽坂家次期当主としてせねばならないことの一つであり、千姫が今担っている高僧の教導を引き継ぐためでもある。
　真っ当な宗教家は神楽坂の分家である伊勢家・高槻家で神職を目指す人間が修行を積み、仏寺の住職は神楽坂家や上泉家で修行を積むこ

とが多く、人格的・倫理的に適うと認めた人間しか推薦されない。
話を戻すが、今回の事態は既に正当な宗教家にも伝わっており、京都で達也らが問題なく活動できるように取り計らうのも目的の一つだ。それと、下手に介入して周公瑾の思う壺にさせないことも含まれている。
「流石に学業もあるから、動くとしても来週金曜あたりになるかな……母上が既に手を回して公欠扱いなのは溜息しか出なかったが」
達也に予め説明したのは、その関係で一足先に京都へ向かうため、深雪を抑え込んでほしいというものだった。流石に婚約者とはいえ、厳密にはまだ神楽坂家の人間でない以上は必要以上に関わらせるつもりもない。無論悠元からも説明はするが、そのフォローを頼むことも含めての物言いに対し、達也は静かに息を吐いた。
「成程、事情は分かった。深雪が迷惑を掛けてすまないな」
「何を今更、とも言えるけどな」
達也との会話を終えた後、自室に戻った悠元を待っていたのは……既にベッドに潜り込んでいた深雪であった。若い男女が同じベッドに寝るとなれば何かしらあるわけだが、深雪の機嫌がすこぶる良かったことから、何が起きたのかは察してほしい。

搦め手交じりの名誉挽回

西暦２０９６年１０月８日、月曜日。休日も終わって平日となれば、また違った忙しさが来るのは当たり前のことだ。とりわけ魔法科高校の場合は今月末に控えた論文コンペの関係で、かなりの数の関係者が駆り出されている。

「それで、悠元さんはどうしてここにいるのですか？」

「不思議そうな表情はご尤もだと思う、深雪。平たく言えば『追い出された』ようなものだ。もしくは生徒会役員の警護とも言えるが」

だが、悠元は生徒会室で生徒会役員の仕事を手伝っていた。部活連は警備メンバーの訓練（これは基礎訓練や対人戦闘を見据えた戦闘訓練が主体となる）もあるので、確かに深雪が不思議がってもおかしくはない訳だが、その理由は至って単純なものだった。悠元の兄であり、今は上泉家現当主である元継が母校へ新陰流剣武術へのスカウトも兼ねて警備メンバーを鍛えているため、教導役の座を奪われた形の悠元はここにいるという訳だ。

尚、論文コンペの手伝いで達也はここにいないわけだが、その達也からも生徒会室の見張りを頼まれた。流石に魔法科高校のセキュリティを突破してくるようなことはないだろうが、八雲や悠元の存在を鑑みてのものらしい。

「お兄ちゃんなら五十里先輩に呼ばれてもおかしくはないと思うんだけどね」

「あのなあ……俺のアプローチは五十里先輩と違うから、擦り合わせるだけでも一苦労だぞ？」

今回、五十里が取り組んでいるテーマに関しては、悠元からすれば既に通り過ぎた部類の話になってしまう。現代魔法はおろか、古式魔法や古代文明の魔法を会得している事実など、それを世界が知ればとんでもない騒ぎになってしまう。その中には『投影型魔法陣（とうえいがたまほうじん）』という代物も存在しており、これの技術は天神魔法に繋がる部分もあるので絶対に明かせない。

「悠元お兄様の魔法のアプローチ……気になります……」

「うん、そうやって好奇心旺盛なのは流石七草家の血筋と言うべきかな」
「こら、泉美。そこ間違ってるよ」
うっとりしている泉美に冷や水を被せる様な発言をしたのは理璃だった。その指摘で慌ててキーボードを叩く泉美の様子に深雪は微笑ましく見ていた。泉美曰く「理璃ちゃんはまるで香澄ちゃんがいるみたいです」とのことで、流石に双子特有のテレパスが繋がっているという訳ではなく、性格や言動がどことなく似ているとのことらしい。
これには作業を進めている水波も思わず苦笑を浮かべていたところで、ほのかが生徒会室に入ってきた。悠元が生徒会室にいることもそうだが、ほのかが部屋の中を見回していることで誰かを探しているのは明白だった。
「ほのか、達也なら五十里先輩のヘルプでここにはいないぞ」
「あ、そ、そうなんだ。でも、悠元さんはどうしてここに？」
「まあ、簡単に話すけど――」
悠元の事情を話した上で、休憩ということで水波が紅茶を淹れてくれた。達也がいる場合はピクシーが給仕を行うが、それ以外の場合は持ち回りが基本である。尚、悠元の給仕に関して深雪と水波でひと悶着あったことはここだけの話。
「それで、特に何もないのね？」
「うん、雫のご両親も心配してくれて、態々警備会社まで頼んでくれたの」
「警備会社？」
「えっと、森崎君のご実家の……」
ほのかが言いづらそうにしているのも無理はない。森崎は入学の頃、達也に対して「お前を認めない」と大胆に発言した。その際に悠元へ「負けない」と発言していたが、夏休みに何かあったのか、大分大人びた思考と発言をすることが目立っていた。
ほのかからすれば好きな人を貶されたようなものだし、ましてや身内である深雪にこういうことを言うのはどうかという思いもあった

のだろう。聞いた側の深雪としては、別に森崎家をどうこうするつもりもなく、ほのかの気遣いもそれとなく理解していた。
ただ、論文コンペが無事に終わるまではそうしてほしいと事前に言っていたおかげか、ほのかが必要以上に不安がる様子は見られなかった。
「雫からも『ほのかは気にしないで。昨年のことがあるから、お父さんが張り切っただけだよ』とは言われてるし、本当によくしてくれてるけど……悠元さん、論文コンペが終わったら、雫を労わってあげてください」
「それは本人との会話で約束しているけど……雫の親友であるほのかの頼みなら引き受けないといけないな。代わりに達也とのデートぐらいならセッティングしておくよ」
「え、あ、えっと……もし、お願いできるのなら、またお願いします」
ほのか自身、達也に迷惑を掛けたくないという思いもあって、達也とのデートはそこまで多くない。その場合だと悠元と深雪、もしくは悠元と雫が同行する形になることが多い。ただ、将来のことを鑑みるのならばそろそろ二人でいることに慣れてほしいとは思う。達也の側は問題ないが、恋する乙女の気持ちは流石に悠元でも推し量るのが難しい。
というか、雫のこともあるので敬語は止めてほしくあるが、この辺はほのかの性分なので仕方ないと思う。とりわけ恋愛関係ともなれば尚更だろう。ほのかが畏まった態度を見せたことに、周囲からは微笑ましい様相が感じられたのだった。
◇　◇　◇
そういう事情もあって暇を持て余す形となった訳だが、怠惰を貪るぐらいなら鍛錬に費やす方がいいと思い、悠元は軽運動部の活動場所となっている武道場で汗を流した後、一足先に帰宅することとした。とはいっても、そのまま帰るのではなく色々寄り道をしていた。
一緒に帰れないことに深雪は不満げだったが、論文コンペの事前調査に関わる部分と説明すると、渋々ながらも頷いてくれた。司波家で取り成すのは確定事項だと諦めつつ、用事を済ませているところで幹

比古と美月に出くわした。
「あれ、悠元じゃないか。一人なのは珍しいね」
「こっちはこっちで用事もあったからな。幹比古は美月の送り迎えか」
「えと、私はいいって言ったんですけど……」
美月が恐縮になるのも無理はないが、今は時期が時期なだけに一人で帰らせるのは危険だろう。ただ、そんな美月を諌めたのは合流してきた佐那だった。
「二人とも……って、悠元さんもいたのですか」
「こっちに用事があって、二人と会ったのは偶然だよ。そしたら、俺はさっさとお暇させてもらうよ」
恋愛事に態々首を突っ込むつもりもないし、今は三矢の人間でない以上、帰り道に同行する理由もない。幹比古はどこか落ち着かない表情を垣間見せていたが、こればかりは本人が克服せねばならない問題なので、その場を静かに去りつつ制服の内ポケットに手を入れ、あらかじめ用意していた札にサイオンを込める。
「あとは、先生のお弟子さんにお任せしますかね」
本来なら幹比古も佐那も気付いていることだが、彼らに幹比古の実力を悟らせないのは目晦ましにもなる。それに、東道家を必要以上に関わらせれば、下手すると東西の古式魔法師同士の内紛になりかねない。
神楽坂家の人間が関わるのもどうかと思うが、元々達也の依頼で既に『伝統派』の古式魔法師と対立している以上は一つや二つ面倒事が増えても今更だし、元十師族という立場のせいでそれを快く思わない魔法師の存在もいる。
後片付けは適任者がいるため、悠元はそのまま帰宅の途に就いたのだった。
◇　◇　◇
翌日、悠元は幹比古から呼び出しを受けて風紀委員会室に出向いていた。論文コンペのこともあるため、その辺の誤魔化しは容易にできる。そして幹比古が電話で済ませなかったのは恐らく昨日の事だろ

うと思いながら中に入ると、幹比古が出迎える形で待っていた。
「ゴメンね、悠元。君も忙しいのに」
「論文コンペの折衝は専ら服部先輩の仕事だからな。それで、幹比古が聞きたいのは昨日の事か？」
「……うん。悠元が対処してくれたんだろうけど気になってね」
　原作ならいざ知らず、今の幹比古は達也が四葉の人間であることを知っている。面倒事を嫌う悠元が美月を守るためとはいえ、自ら首を突っ込んでいるのは幹比古としても疑問に思ったのだろう。
「僕は最初、東道さんが対処してくれたのかと思ったけど、身に覚えが無いと返されちゃってね。そうなると、悠元ぐらいしか心当たりが無かったから」
「手応えを見るに、あれは『裏』の魔法師だった。幹比古も美月が見張られていたのは感じていたんだろう？」
「うん。それで悠元、何か手伝えることはあるかい？」
「そうだな……」
　事前調査に関しては、今のところ悠元と達也に深雪と水波、それとレオにエリカ、セリアで動く予定だ。ただ、大人数で動くのは目立つために分割して動くことに加えて姫梨も調査に加わると連絡を受けている。修司と由夢は千姫の言いつけで東京に残り、ほのかと美月の護衛を引き受けることになった。
　吉田家が原作と異なり、正当な精霊魔法を継承していることに加えて神楽坂家の諜報組織である『九頭龍』の一角を担っている。ただ、後半部分はほんの一握りしか知らない事実であるため、吉田家の次期当主ではない幹比古がその事実を知る筈が無い。
「今のところ、吉田家を積極的に関わらせるつもりはないんだが。幹比古、その辺はどうするつもりだ？」
「そうだね……じゃあ、こうしよう。僕も事前調査のメンバーに加わるよ。悠元もその方が達也の協力もしやすいだろうからね」
　ようは、幹比古が探査の式を無作為に放ち、伝統派の魔法師を引き摺り出す魂胆のようだ。今回の論文コンペ会場となる新国際会議場は京都市街地の北端辺りに位置しており、これは昨年の横浜事変の二

の舞を避けてほしいという地元の意見が多かったためだ。北には森林などの自然が多くあり、更に北には鞍馬山――伝統派の大きな拠点の一つが存在する。
「なら、そこにひと手間加えよう。俺が会場を起点に『聖域』の結界を張り直すから、そのトリガーの札を幹比古に渡しておく。それを使えば探査の式も楽になる筈だ」
「『聖域』の結界……悠元に掛かれば何でもアリだね」
「言っとくが、偶然に偶然が重なって出来るようになっただけだ」
そうなると、自分と達也が一緒に行動するのは避けた方がいいだろう。今まではそれが許されても、春日山遊歩道での一件で『伝統派』が警戒を強めていない保証などない。まして周公瑾ならばそれすらも好機と睨むかもしれない。
「だが、美月はどうする？　流石に連れて行くわけにもいかないだろう？」
「……そうだね。流石に柴田さんを危ない目に遭わせるのは僕も許容できない」
「なら、母上に頼んでみるよ。必要なら元実家の力も借りるが」
既に八雲の部下が見張ってくれているが、伊勢家の養女となることが決まっている美月のことを考えれば神楽坂家お抱えの魔法師に見張らせることも必要だろう。
実を言うと、昨日詩奈を監視していた古式魔法師がいて、その人間は矢車家――侍郎が対処したと元から連絡を受けていた。その部分を『プラスワン』と見るべきかは判断できないが、自分の憂慮が役立ったことに内心安堵していた。
その背景も鑑みると、いくら実力が付いてきたとはいえ美月を京都に連れて行くのは危険だと悠元も結論付けている。美月を危ない目に遭わせたくない、という幹比古の心情は既に美月への恋愛感情を持っているに等しいものだが、他人の恋愛事は当人同士の問題なので敢えて黙ることにしたのだった。
◇　◇　◇
その日の夕方、悠元は横浜にある日本魔法協会支部を訪れていた。

原作ならば達也だけに用件があったものだが、非公式とはいえ深雪の婚約者となった以上は四葉家にも関わらざるを得ない。面会の相手は四葉家の筆頭執事である葉山だった。
「悠元様。お呼び立てすることになり、大変ご足労をお掛けいたします」
「いえ、此度の一件は自分も他人事で済む話ではありませんから」
面会の申し出自体は四葉家からのもので、本来ならば立場的に下となる四葉家が神楽坂家に出向くのが筋。だが、次期当主兼当主代行である悠元は未だ高校生の身であり、七草家があれこれと動いているために悠元から面会場所を指定した。
既に十師族の軛から外れているのに、余計なことで引っ掻き回さないで欲しいとは思う。
「そもそも、達也が主となる依頼ですのに」
「それは承知しております。達也殿には後日お伺いを致しますが、奥様より達也殿に匹敵する実力者である悠元様からも話を聞いてほしい、と」
別に達也の四葉に対する感情を推し量ろう、という訳ではないが、これも真夜が先日話していた達也の四葉家次期当主推薦への道筋を建てるための試しだろう。完璧な第三者とは言い難いが、悠元君ならば色目を付けずに評価してくれる――というのが葉山から述べられた真夜の意見であった。
「自分が結構手助けをしてしまっていますが、実力面では十分すぎるほどかと。最近は論文コンペの手伝いに駆り出されて忙しそうですが」
「達也殿は優秀ですからな。こちらでも探りは入れているのですが、如何せん監視地域の対象外ですので、悠元殿のようにはいきません」
「それが普通ですよ。自分は現代魔法師と断言できない立ち位置ですから」
葉山はおろか達也らや『神将会』の面子にも話していないことだが、奈良での『伝統派』の襲撃から2日後の昼休み、泉美と香澄から内密に相談を受けていた。

泉美は以前悠元のことを名倉に調べさせていたこともあって真由美の次に顔見知りだったが、屋敷の中ですれ違った際に名倉から何か恐ろしい雰囲気を感じ取ったというのだ。泉美は慌てて香澄に相談し、現代魔法の範疇にない現象に心当たりが無いか確認しに来たという塩梅だ。

確証はないが、泉美は恐らく名倉の『死の前兆』なるものを感じ取った可能性が高い。只でさえ香澄と双子特有の感覚を有しているだけでなく、七草家の中でも非凡な才覚に目覚めつつある。その反面、香澄は「正直、ボクは優秀な現代魔法師でいいよ」と述べていた。その原因は恐らく彼女の姉と妹のせいなのだろうが。

閑話休題。

「……葉山さん。七草家当主が腹心の部下を使って周公瑾の抹殺を目論んでいるようです。その方面で黒羽を動かすことは可能ですか？

可能であれば文弥と亜夜子を京都に送り込んでほしいのです」

「何と、七草家が……して、その二人を指名したのには理由がおありなのですか？」

「実は、達也が依頼を受ける際に司波家を訪れた際、尾行を撒かないように指示を受けていたらしく、帰り際にそれとなくカマをかけたところ、事実とも言える様な受け答えをしまして」

達也を慕っている（亜夜子の場合は好いているのも含むが）二人だからこそ、達也や深雪を危険にさらす様な事は許容しづらいだろう。とりわけ文弥は黒羽の人間でありながらも優しい性格をしており、そのことに対して必要以上に思い悩みやすい。

ならば、その〝名誉挽回〟として名倉の追跡を文弥と亜夜子に任せたいと考えていた。無論、二人だけだと危険もあるので保険は掛けるし、その時点で周公瑾の捕縛はしない。

「では、二人に周公瑾と七草の部下が接触したところで急襲を？」

「いえ。周公瑾は気配にかなり機敏で、昨春のブランシュの一件で見張られていたのを看破したところ、すぐさま術の発動を切ったのです。貢さんでも手を焼いた相手だと二人には荷が重いでしょうし、彼らにはその部下――名倉三郎なる人物の〝回収〟をお願いしたく

思います」
　それに、達也がこのまま周公瑾を追跡してくれなければ今後の計画にも色々狂いが生じかねない。文弥と亜夜子には周公瑾と名倉の接触と戦闘を見届けさせ、戦闘後に名倉を回収する。気配を断つ意味ならば亜夜子の『極致拡散』が生きるため、問題はないと踏んでいる。

物事の俯瞰は時において大事となる

悠元が葉山に提案したのは名倉の〝回収〟。そして、その際の条件に生死は問わないよう言い含めていた。それは、悠元が名倉を使ってあることの実証実験をするつもりだからだ。無論、このことは千姫や剛三、元継に了解を得た上で進めている。

黒羽の部隊ですら追い詰めきれなかった周公瑾を雪辱戦という形で協力させることはできても、最後の詰めを担うのは間違いなく達也以外にいないと悠元は判断した。それは、周公瑾の討伐から顧傑への情報が流れる際に悠元の情報はなるべく秘匿したい思いもあった。

「今春の一件で七草家とは周公瑾との関わりを断つように言い含めはしたのですが……七草家の当主はどうやら諦めきれていないようです」

「ほう……このことは奥様にご報告しても？」

「構いません。どうせしらばっくれるのは目に見えていますからね」

来年の師族会議で誤魔化すことは考えられるが、名倉を送り込んで周公瑾に殺されることで、七草家に対して「部下を使って周公瑾を殺そうとしたのは、七草家が他の師族の与り知らぬところで周公瑾と手を結んでいた」という嫌疑が生じる可能性が生まれる。それが信憑性のないものでも、四葉家や九島烈、そして悠元――神楽坂家の面子を潰しかねないことをしたのは紛れもない事実になる。

ここまでのことは口にせずとも、聡明な頭脳を持つ葉山は無論の事、四葉家当主こと真夜も同じ考えに至るだろう。このことを師族会議で持ち出すか否かについては四葉家の匙加減とすることにした。

「話を戻しますが、黒羽の部隊ですら追い詰めきれなかった以上、達也の力は必須とも言えます。彼自身が周公瑾を〝討つ〟ことで四葉の道筋も定まる……そんなところでしょうか。自分は早めに京都入りし、正統派の古式魔法師の方々と話を付けます」

「それは……ご足労をお掛けいたします」

「お気になさらず。母上からも父祖伝来に住まう地の者と縁を結ぶように言いつかっておりますので」

奈良・高鴨神社での一件で神楽坂の名の一端を窺い知ることが出来た。だが、かつて本拠を構えていた京都はその比ではないはずだ。今の名を名乗る前に京都は何度か足を運んでいるが、それはあくまでも剛三の親族である『長野佑都』としての訪問だったし、門下生と思しき人間には容赦なく襲い掛かられた。

それが十師族・三矢家の人間となり、護人・神楽坂家の人間となったことは九校戦で明るみになっているし、現代魔法師よりも古式魔法師の方が殊更神楽坂の名に敏感である。ただ、現代魔法師から古式魔法師の家に籍を移すケースは極めて稀であり、それこそ古式魔法に深い造詣を有している家柄でないと厳しいだろう。

なので、力試しと称して襲撃してくる可能性は未だに残ったままだ。流石に八雲のような〝テスト〟までは仕込まれないと思いたいが、油断はできないだろう。

「ところで、奥様から深雪様のご様子を窺うように言い付かっているのですが、何か粗相などはございませぬでしょうか？」

「多少の依存癖は目を瞑っていますが、それ以外であれば至って優秀ですよ。流石は現状において四葉の次期当主筆頭候補と目されているだけあります」

司波家では専ら水波と家事を分担しているわけだが、勉学や魔法の練習にはしっかりと時間を割いており、学校の成績も学年次席をキープし続けている。自分や達也も家庭教師として教えてはいるが、それを成績としてしっかり残しているのは深雪自身の努力の賜物だ。

現代魔法の習熟のみならず天神魔法も着々と修得している。独自で編み出した想子制御も相まって、魔法の実力で言えば光宣以上の実力者へと成長しつつある。その代償は口に出したくもないし、自分のやってきたことに対する結果だと納得せざるを得なかった。

本人の前では流石に四葉家のことを極力絡めないようにしているため、世辞にも似たような台詞となったことに思わず笑みが漏れてしまった。これには葉山からも笑みが零れるほどだった。

「悠元殿からそのような評価を頂けるとは、正直驚きました。何せ、以前青木がご迷惑をお掛けしたことを鑑みれば、厳しい評価を頂いても

致し方ないでしょうから」
「懐かしいですね。あれは自分に対してというよりも達也に対するものでしたし、若干意固地になったのはこちら側でもありますから」
　あの時点では、深雪に対する恋愛感情というよりも達也の不当な扱いに対する反抗心みたいなもの。四葉家における達也の扱いは本人や深雪からも聞いていたため、後で達也に感謝されたのは正直苦笑ものだった。
　加えて、内密に真夜からも謝罪を受けた際に「悠元さんの目の前でねえ……青木さんの給料、暫く減らそうかしら」とぼやいたので、それは流石に拙いと窘めた。下手をすれば他の十師族から干渉を受けたと言われかねないためだ。
「と言いますか、気になるのならば司波家に直接連絡をして頂いても問題はないのですが。あくまでも自分は居候の身ですから」
「それをしてしまうと悠元殿と話したくなってしまう、と奥様が仰っていたものですから」
「……流石に娶るとかは勘弁してください」
「その辺は奥様もご承知しております。深夜様のことは悠元殿の能力を秘匿する意味でも必要なことだと納得されておりますので」
　今までの関わりからして、真夜がそうならない理由などなかった。深夜に関しては已む無く受け入れたもの（神楽坂家の専属使用人ともなれば、悠元の秘密を知っても問題ない人選が難航しかねなかったため）の、これ以上四葉家から婚約者だの愛人などを受け入れれば、他の師族から要らぬ妬みや恨みを買いかねない。
　これぱかりは葉山も悠元の言いたいことを理解しつつ、言葉を述べた。
「……葉山さん。一つお伺いしても宜しいでしょうか？」
「何でございましょうか？」
「先程触れた達也の四葉家次期当主の指名に関してです」
　自身の『天神の眼（オシリス・サイト）』で達也の魔法力に封印が掛かっているのは確認できていた。その封印を解くことで達也が四葉家の当主に足る能力を証明したところで、ハードルとなって立ち塞がってくるのは分家の

現当主達だ。
津久葉家は夕歌が悠元の婚約者となるため、その交換条件として達也の扱いに関する部分は中立の立場を取ってもらうことで合意した。もし津久葉家が自主的に達也の協力をしても黙認することまで見据えられている。
流石に原作よりも強化された達也に加えて深雪と水波がいる以上、下手を打つ可能性は極めて低いが油断はできない。
周公瑾のこともそうだが、その部分の対策を考えなければ話にならない。とはいえ、いくら遠縁の血縁関係を有していても、神楽坂家が四葉家の次期当主選定に口を出すのはあまり宜しくない。真夜と直接話した際もあくまで〝相談事〟としてのもので、悠元が真夜に命令したわけではない。
「我々がそう納得しても、今まで達也のことをそう扱わなかった使用人や四葉分家の現当主達は反対するでしょう。寧ろ、達也を世界から隔離しようとするかもしれません……それこそ馬鹿げてるとしか言えませんが」
戦略級魔法に対するハードルを下げたのは間違いなく達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』と悠元の『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』だが、その相手がいずれも戦略級魔法を有する国家の軍隊だったため、已む無く使用した経緯がある。
非魔法師からすれば、いつ飛んでくるか分からない恐怖に苛まれるわけだが、本来存在しなかった魔法師と非魔法師の調停役に不敬ながらも皇族を利用させてもらうこととした。イギリスでも王家を使って併存させようとしたのだから、同じ島国であるこの国が出来ない道理などない。
それ以上にヒステリックな反応を見せたのは四葉分家の当主達だが、少なくとも四葉の復讐劇を聞かされて育っているにもかかわらず、真夜や深夜に対して心のケアを怠ったからこそ、達也のような存在が生まれた結果となったのだ。
この世界では上泉家と神楽坂家も一枚噛んでいるが、既に魔法師社会の表舞台に立ってしまった達也を今更隔離したところで〝もう遅

い〟。現に、『第一賢人』を名乗っているレイモンド・クラークは自分と達也が戦略級魔法の使い手であることを認識しているし、その父親であるエドワード・クラークも知っている体で考えていいだろう。

仮にこの時点で達也を隔離したとしても、却って達也が『灼熱と極光のハロウィン』の片割れであることを暴露するようなもの。四葉分家の当主連中はこのことをしっかり認識すべきなのだ。

「ですが、自分は既にスポンサーの一つである神楽坂の次期当主。表立って介入は出来ません……なので葉山さん、ご相談があるのですが」

「お伺いいたしましょう」

悠元は葉山とそこから３０分ほど会談をした後、部屋を後にした。

◇　◇　◇

１０月１１日、木曜日。論文コンペまで残り半月となり、校内の騒がしさは俄然増したとも言える。昨年ほどの大掛かりな作業にはならないものの、魔法科高校にとっては九校戦に並ぶ一大イベントなため、結局は大騒動になっていた。

プレゼンそのものはメイン執筆者である五十里が陣頭を取る形で追い込みに入っている。警備チームの訓練は服部に加えて元継が担当しており、京都への移動の手配はほのかと泉美、理璃が担当している。

深雪は生徒会長として全体の進行状況を把握しており、必要に応じて生徒会から助っ人を派遣している。その助っ人は達也とセリアが担当することになり、加えて達也は警備チームの訓練にも参加している。生徒会の仕事でカバーできない部分は悠元が担っているため、原作に比べて達也の忙しさは大分緩和されている。

その日の夜、京都市某所にて悠元はライディングスーツに身を包んで忍んでいた。その目線の先――――体感にして数百メートル先の川辺に周公瑾と名倉が相対している。その傍には夜の闇に溶け込みやすい服装をしている文弥と亜夜子もいる。

「悠元さん、周公瑾を討たなくていいのですか？」

「最終的にそうなるのが望ましいが、彼が単独で来ているとも言い難

いからな」
何せ、『伝統派』の協力を得ていたとしても、周公瑾は慎重に事を運ぶ行動方針というのは見て取れる。相手が名倉一人だからこそ周公瑾も一人で出向いているが、どこかに『伝統派』の魔法師が隠形で隠れていない保証など出来るはずもない。
「それで名倉三郎の回収とのことですが、生死を問わないのは何か理由がおありなのですか？」
「ちょっとした〝実験〟も兼ねているからな。流石に大っぴらに出来るはずもないし、無論文弥と亜夜子にも箝口してもらうつもりだから」
「寧ろ、私達の方が悠元さんに借りが多い立場ですから」
二人のＣＡＤ関連もそうだが、文弥には更に改良した『ダイレクト・ペイン』を提供しており、亜夜子に関しても『極致拡散』と『疑似瞬間移動』の魔法改良をしている。加えて達也の恋愛事情にもそれとなくアドバイスしている立場の為、文弥と亜夜子からの評価は極めて高い。
そんな会話が交わされている先では、名倉と周公瑾の戦闘が開始された。影獣を操る周公瑾と川の水から水の針を生成して対抗する名倉。『群体制御』を主とする旧第七研の数字落ち（エクストラ）である名倉の攻撃を周公瑾は巧みに回避する。
「決め手に欠けている感じですね」
「曲がりなりにも大陸の術士を手引きするだけの実力を有しているし、貢さんに深手を負わせた相手だ。それに、現代魔法師と古式魔法師では得意とする分野が変わってくる」
速さと汎用性を求めた現代魔法に対し、古式魔法は現代魔法が忌避しがちな分野を得意とする。名倉が話術を織り交ぜながら周公瑾の隙を作ろうとしているのは、周公瑾が大陸の方術士である以上、昨秋で横浜事変に関わった陳祥山（チェンシャンシェン）や呂剛虎（ルウガンフウ）が使っていた方術『鬼門遁甲（きもんとんこう）』を警戒してのものだろう。
すると、周公瑾は徐に令牌を投げつけた。遅延発動型の影獣を２体発動させ、川の端にいる名倉を川岸の方向――――周公瑾に〝近付く〟

方向へ飛ばせた。そして、周公瑾は影獣で名倉の腹部を貫いた。流石に『鬼門遁甲』と言えど万能ではなく、名倉の水の針によって周公瑾は多少の傷を負ってしまっていた。その光景には文弥や亜夜子が目を見開くほどだった。

「あれが『鬼門遁甲』……ですね？」

「周公瑾が名倉に集中していたからこそ見えてるが、奴がその気になればここら一帯の方角すら狂わすことが可能だ」

周公瑾は名倉の近くに屈んで言葉を掛けていたが、名倉の心臓辺りが突然炸裂し、周公瑾に手傷を負わせた。流石に致命傷となり得なかったようで、周公瑾は黒い布を覆うように振るい、その場から姿を消した。

「『疑似瞬間移動』!?」

「いや、あれは方術の一種だな。闇に同化することで視覚を欺くためのものだ……少し様子を見よう。言っておくが、追いかけるのは禁止するからな？」

「流石に父さんですら追い詰めきれなかった相手を追いかけるのは自殺行為だと分かってますし、達也兄さんに迷惑を掛けてしまいますから」

昨春で感じた気配――――周公瑾から感じる存在がある程度距離を取ったと確認したところで、悠元は森から出て名倉の死体を確認する。既に息はなく、死んでいると言っても過言ではない。

それを確認したところで、悠元は胸ポケットからルービックキューブぐらいの大きさがある透明の立方体を取り出し、名倉の炸裂した心臓辺りに置く。すると、その立方体は名倉の血を吸い取っていき、川岸に広がった痕跡まで吸い上げた。

ものの３０秒ぐらいで立方体が血の色に満たされると、血が中心部に凝縮して淡い光を発し始めた。それを確認した上で悠元は立方体を拾い上げると、付着した血を魔法で綺麗にしてから胸ポケットに仕舞い込んだ。

「これでよし。あとは……警察に連絡しておくか。この辺の警察相手なら俺の名を出す方がまだ諍いもなく進むだろう」

「今更ながら、悠元さんの姓名が変わり過ぎて理解が追い付きませんよ」
「それは言わないでくれ。大体、爺さんの事だけでも満腹感でいっぱいいっぱいなんだから」
三矢の家に転生したこともそうだが、母方の祖父である剛三が世界的にも名の知れた英雄で、しかも四葉の家とも縁が深い事情だけでもお腹一杯だというのに、そこから神楽坂家という存在を知るだけでなく、そこの次期当主となってしまった。
俺はただ、四葉の家と敵対しないように仲良くやっていくつもりだけだったはず。それがどうしてこうなったのかと言えば……俺にも分からない、としか答えようが無かった。現実は小説よりも奇なり、とは本当によく出来ている諺だと感心を覚えた。
文弥と亜夜子は四葉の迎えで一応宿（京都市嵐山にある神楽坂家系列の旅館）へ先に向かわせ、警察の聴取には悠元が立ち会った。
形式上第一発見者である悠元は名倉が十師族・七草家と所縁のある人間であり、身元照会についてはそちらに尋ねる方がいいと説明した。警察の側はよもや古式魔法の大家である神楽坂所縁の人間が相手である以上、長時間の拘束は出来ないと判断して悠元の証言を全て信用した。
悠元が宿に戻った後で文弥や亜夜子と夕食を共にし、事前に二人も公欠扱いにしたことも説明して、ゆっくり英気を養うように言い含めた。部屋は結局文弥の要望で三人が同じ部屋となった。理由は言うまでもなく、亜夜子の存在が大きかった。
「……文弥の言わんとしたことも理解できるな」
「理解が早くて助かります」
四葉の魔法師とはいえ、流石に女子一人だけにするのは拙いが、彼女の同年代よりも成長している身体に加えて若干露出の多い寝間着姿。とはいえ、達也に恋慕している相手を横から掻っ攫う真似などしたくもないし、ただでさえ四葉の同世代から二人を娶る（深夜と水波は別枠扱い）ことになっている悠元からすれば、手を出す方が地獄を見る羽目になる。

「正直、文弥に見合う相手が出てくるのか不安ですが」
「それを言うなら、達也もちっとは手を出してほしくある……とか思ってるんじゃないの？」
「否定はしません。深雪お姉様から色々話を聞いていますけど、私にそこまで出来るかどうか」
正直な話、深雪とのことは居候している事情が大きく加味しているし、切っ掛けは大半が深雪からのスキンシップによるものだ。達也でも止められない以上、彼女の機嫌を損ねないように対応しているというのが偽らざる本音だろう。
尤も、思春期の男子としての肉体に精神が引っ張られてしまい、魅力溢れる女性に対して歯止めが掛からないのは他でもない自分の責任ではあるが。

所詮は高校生の身分なので

「……雫、これはどうにかならんのか？」
「事情は分かってるけど、これは仕方ない」
京都から朝一番のリニア列車で東京に戻り、鞄に入れていた第一高校の制服で登校したはいいものの、今日は天気も良かったので屋上で昼食を食べることにした悠元を待っていたのは、不機嫌な深雪だった。
彼女とて悠元がどのような立場に置かれているのかを理解できないわけではなく、目を離すと何かしら増えそうな気がするからだと述べていた。なので、今日は悠元と深雪、雫に姫梨が屋上で昼食を食べることになった。悠元の隣で弁当を食べてはいるが、未だに拗ねている深雪に対してため息交じりに言葉を発した。
「全く、別に遊びに行ってるわけじゃないんだがな」
「……それは分かっています」
「仕方がないですよ、悠元」
恋愛感情に希薄だった昔と異なり、今は流石に言葉を選んで相手と接することが多い。英美の件に関しては、本人との話し合いで友人関係で何とか決着させた。曰く昨年のブランシュの一件が大きく影響しているらしい。
ただ、その件が片付いても来年正月あたりに公表する件で一悶着生まれるのは間違いないだろう。主に『クリムゾン・プリンス』絡みで。
「そうだ。詳しいことは後で話すことになるが、来週の土日に論文コンペの事前実地調査を行う。雫には悪いんだが、その間幹比古の代理を頼む」
「吉田君も同行するってこと？」
「彼もれっきとした古式魔法師だからな。それなりに融通は利くだろう」
そして、事前に『九頭龍』を通す形で高槻家と四十九院家にも動いてもらうこととした。論文コンペ絡みで将輝が来ていたことを考えれば、同学年である沓子も動けるだろう。伊勢家の代理として姫梨も

動くことになるし、深雪はコンペの宿泊先となるホテルの担当者との打ち合わせもある。
「分かった、ほのかのことも任せて。本人は同行したがっていたけど」
「直接戦闘することに忌避するのは仕方ないとしてもな……達也が言い含めたら奮起しそうだが」
「流石に、お兄様でもほのかにそのようなことはさせないかと」
「寧ろ、達也君が率先して片付けそうですね」
　それは確かに、と思いつつも悠元は話を続ける。
「まあ、いくら俺が現部活連会頭とはいえ、今のは提案事項に近い。正式なお願いは幹比古と達也から受けることになるから、そのつもりでいてくれ」
「……少し疑問に思うんだけど、悠元って人間？」
「止めて。爺さんのせいで人間という概念がバグりだしてるのは俺だって気にしてるんだから」
　雫がそう訊ねたのは単純明快で、生徒会室で手伝いをしている悠元が処理している書類が他の人と比べて明らかに速すぎるためだ。
　これにも理由があり、悠元が以前所属していた国防陸軍兵器開発部ではレリックの解析一つでも細かい許可や処理が求められ、時には一つの解析だけで数十枚の許可申請書やら解析報告書の提出を求められることが多かった。
　確かに国家機密レベルとなればそうなるのも無理はないが、解析のメイン担当に据えられた悠元はこの時の経験で身体強化魔法『自己並行加速（マルチタスク・アクセラレーション）』を修得するに至り、書類仕事をする際は無意識的にこの魔法を使用することが多い。結果、書類の処理スピードが人智を遥かに超えてしまった。簡潔にまとめれば、一種の職業病（ワーカーホリック）を拗らせた結果とも言えるが。
「大体、存在感を見せたところでパラサイトすら逃げる有様だぞ？面と向かって人外扱いは正直傷つくわ。って、何で深雪は笑うかな」
「ふふっ、すみません……何と言いますか、流石悠元さんと言いますか」
「その内、悠元が神様になってもおかしくないですね」

徳を積んだ覚えもないのに、勝手に祀り上げられるのは御免被る話だ。そんな話が出ようものなら、真っ先に潰すことも吝かではない。

進人類フロントと対峙した時も似たようなことを言われて勧誘されたが、大体俺は最強の称号だってほしくもないし、別に世界の支配者になる気もない。大切な人たちを守り切るために磨いているだけであり、前世の面倒な関わりの影響もあって、より一層鍛錬に励んでいるだけだ。

司波家での魔法制御訓練もその一つで、三矢家や上泉家にいた時からやっているルーティンを継続している。最近は達也や深雪、水波も一緒になって参加することが多く、それに加えて九重寺での鍛錬――――というよりも武術指導の一環で時折出向いている。

ただ、達也と異なるのは八雲自ら達也に仕掛ける忍術などを試すことが多々ある。これの理由として八雲曰く「君のレベルだと僕ですら躊躇うのに、門下の弟子が相手をしたら全く歯が立たないからね」とのこと。

弟子の心を折りたくないという八雲なりの気遣いは分からなくもないが、だからといって自分をその実験台にするのは神楽坂に関わる人間としていかがなものか、と疑問を呈したい。

「幹部クラスはおろか、構成メンバーにすら畏怖されてる始末だからな。念のため十文字先輩に聞いたら『俺の時もそういったことはあったが、それは深刻だな』と逆に同情されたわ……確実に姉らの功罪もあるんだろうが、大概の原因は一条だな」

「えっと……人のせいにしてしまうのはどうかと思いますが」

「でも、三高の『クリムゾン・プリンス』を二年連続で破ったのはれっきとした現実。その事実を聞いて尻込みしてる男子も多いみたい。深雪に対してのちょっかいが減ったのもそれが大きい」

「私としては、一条さんに感謝していいのか悩むところですが……」

深雪がそう思うのも無理はない。何せ、将輝は深雪に一目惚れしており、悠元と深雪が仲良くしているのを目撃している。尤も、将輝からすれば二人が一高でも有名なカップルという事実はおろか、それ以上の関係にあることすら知らない。後者は仕方ないとしても、前者の

場合は同じ魔法科高校なのだから知っていそうなものだ。
ただ、そのことに関して真紅郎に確認したところ、将輝はその事実を全く知らないとのこと。曰く「将輝はまともに恋愛経験が無いからね」とため息交じりに返ってきたことから、こちらの事情をある程度は把握していると判断した。
「俺と将輝を一緒くたには出来んが、同じ十師族の直系だった状態で俺は告白したんだがな。ま、父親からの後押しもあった訳だけど」
元々三矢の家を継がないことは転生して数ヶ月経った際に元から問い詰められた中で決めたことだが、その過程で魔法技術を編み出して(この世界の魔法の仕組みとも言うべきだが)は兄や姉達に教え、加えて侍郎を密かに魔改造した挙句、詩奈に関してはＣＡＤの提供のみならず、新陰流剣武術の絡みで武術の面倒を見始めている。
三矢の本家には矢車家に嫁いだ詩鶴がいるために時折出稽古の形式で面倒を見ているわけだが、聴覚魔法制御技術を教え込んでからの詩奈の成長は目を見張るものがあり、特に魔法面では侍郎すら超えた素質を発揮している。元治よりは少し多めに影響を受けているとはいえ、三矢の名に恥じない実力を身につけつつある。それを見た侍郎が危機感を募らせて鍛錬に励み、構ってくれないことに詩奈が拗ねて侍郎が謝るところまでワンセットとなりつつあるのはいい傾向かも知れない。
兄離れは少し寂しいが、あまり兄に依存されて嫁ぎ先を失うという女性としての幸せを奪うよりはマシだと思う。こんなことを考える辺り、シスコンの気があったのは間違いないと心の中で苦笑した。
◇　◇　◇
放課後、達也の忙しさの合間を縫う形で幹比古が直通階段経由で生徒会室に入ってきた。直通階段を使い慣れていないというのもあるが、幹比古としては達也に対する申し訳なさも含まれていた。
「失礼します」
「時間通りだな、幹比古」
「達也があれだけ忙しそうにしていたら、遅れる方が失礼だろうからね」

幹比古と達也のやり取りを聞いた深雪が「皆さんが吉田君や悠元さんのような心掛けでいてくれると助かるのですけれど」とぼやき気味に呟いたため、これは司波家でのフォローがまた増えることになると悠元は内心で溜息を吐いた。

ただでさえ達也は論文コンペ関連で各所に駆り出されたりしている。その達也からすれば、深雪のフォローを一手に担ってしまっている悠元の方が忙しいだろうと思っているわけだが、その問答を後回しにして本来の議題に入ることとなった。

それは、論文コンペの警備のために一度京都市へ出向いて実地調査をするというものだった。

「早速打ち合わせを始めよう」

「そうだね。今日打ち合わせをお願いしたいのは、論文コンペで現地の警備に関する下調べです」

幹比古は大きな電子ペーパーをテーブルに広げると、映し出されたのは京都市の市街地が表示された地図。原作だとここにはいない部活連関係者だが、悠元が現会頭であるためにその辺の問題も解消された形となる。

「当日の警備は服部前会頭が準備を進めていますから、ここでの打ち合わせの結果は神楽坂会頭から伝えてくれると助かります」

「了解した、吉田委員長。生徒会の方もそれで異存はないか？」

「ああ。それでお願いするよ、神楽坂会頭」

ここにいるメンバーでは、達也と深雪、水波と幹比古にはここでの打ち合わせに関して事前に擦り合わせを行っている。セリアに関しても既に話を通しているわけだが、今回の調査で理璃にも同行をお願いせざるを得なかった。今後も見据えた論文コンペに関わる現地担当者との顔合わせが最大の理由だ。

残るは、事情を知らないほのかや泉美に不自然がられないように話を進める必要がある。

「ここが会場となる新国際会議場」

「随分街のはずれにあるのですね」

「街の真ん中で会議をやってほしくないっていう地元の意見が強くて

ね」
　その根底にあるのは昨年の論文コンペ重なる形で起きた横浜事変が一番大きい。ましてや、京都は外国人の出入りが多い大阪にも程近く、大亜連合と休戦状態とはいえ二の舞を警戒するのは致し方ないことだ。
「昨年の横浜が大変なことになったからな。地元の住民が不安がるのも無理はないが……ただ、この場所は民家こそ疎らだが、北部には森が広がっている。そこに即席の拠点を作っていても不思議ではないな」
「そこまで警戒するんですか？」
「鳴りを潜めている人間主義の連中がちょっかいを掛けないとも限らないからな」
　一番そうなりそうなのは『伝統派』の古式魔法師だが、人間主義者が出没しないとも限らない。『伝統派』を上手くダシに使う形で魔法の危険性を煽ることだって十分に考えられるからだ。尤も、そうなった場合は彼らの資金源を根こそぎ奪いつくすだけだ。
「九校戦の時も基地のゲート前で人間主義者のデモがあったぐらいだからな。加えて昨年のことも鑑みれば、会場近辺だけに危険が潜んでいるとは考えづらい」
「つまり、より広い範囲を調べておく必要があるということですね？」
「その意見には賛成だな。俺たちは所詮高校生でしかないが、それでもやれることはやっておくべきだろう」
　達也の言葉にはほのかと泉美、それと水波から疑念も入り混じる視線を向けられたが、達也はそれをそのままスルーして話を進める。流石に達也が〝所詮〟という言葉自体似つかわしくないのは正しい反応だと思うが。
「下調べに行くメンバーはどうする？」
「僕が行くよ。代理は北山さんにお願いしようと思う。悠元はどうするんだい？」
「俺も行くが、少なくとも別行動になる可能性が高い」
　悠元が別行動を起こす理由は事前に達也らへ説明しており、とりわ

け悠元の今の名字である神楽坂の名は京都において知らぬ者はいない存在。昨日の警察とのやりとりでもそれを実感しているだけに、達也らとは別行動をするのが理に適っていると判断した。
「分かったよ。それと、達也にも来て欲しい」
「ああ、分かった」
幹比古と達也が同行するのは既定路線で、そこに加わる形で深雪が声を発した。
「お兄様、宜しければ私もご同行したいのですが。皆さんが泊まるホテルの担当者と直接打ち合わせをしておきたいのです」
「深雪が態々行かなくても、そんなことなら私が」
「ほのかには移動や予算のことでお願いしている件があるでしょう？」
「そ、そうだった……」
ほのかとしては、達也と一緒に行きたそうにしているのが見て取れた。泉美も羨ましそうにしている様相が見て取れたのか、深雪がにこやかに微笑みつつ泉美に対してお願いの言葉を投げかける。
「泉美ちゃんには私が行っている間、副会長として代理をお願いしたいのだけど」
「お任せください！」
原作ほどではないにせよ、深雪の言葉にやる気を見せている泉美。敢えて水を差す必要もないと判断しつつ、日程を詰めることとなった。
「調査の日程だけれど、コンペの前の土日――２０日と２１日でどうだろう？」
「妥当な線だな」
「ふむ……なら、俺は１８日から公欠を貰って京都入りした方がいいな」
「え？　そこまでするのかい？」
幹比古が思わず首を傾げたが、これにはちゃんとした理由がある。
只でさえ京都は大小含めると数多くの寺社が建立している地であり、主だった場所に限定しても挨拶回りだけで丸一日を平気で潰しか

ねない。というか、確実に一日で済むとは思えない。
　単なる挨拶だけで済めばいい訳だが、『伝統派』がこちらの動きに気付いて刺客を放ってくる可能性もある。事前調査を前に少しでも『プラスワン』の要素となりうる目を潰すのが一番手っ取り早いと判断した形だ。
「宿は母上の伝手があるから、そっちに泊まることにする……で、何故視線を向けられる羽目になるんだ？」
「いや、あまり積極的に動こうとしない悠元らしからぬと思ってな。悪いものでも食べたか？」
「俺は至って正常だよ、達也」
　周公瑾の絡みで学校を公欠にするのは風聞が憚られる問題だが、これを解決したのは悠元というよりもすでに卒業した美嘉絡みの要素が大きい。校長の百山としては自慢とも言える一科生と二科生のシステムにケチをつけられた形だったため、あまりの怒りで彼女の祖父である剛三迄引っ張り出してしまった。
　ここに当時生徒会長だった佳奈まで加われば、この時点で上泉家・三矢家対百山家の構図が書きあがったも同然だった。その話を遥経由で聞いた後に元から改めて聞き出したところ、当時のことは元だけでなく詩歩ですら怒り心頭だった。自分がそこまで詳しくなかったのは、当時長野の姓を名乗っていたのと上泉家で暮らしていたためだ。
　更に付け加えれば、ブランシュの一件で二科のシステムの弱点を完全に露呈された形となったわけだ。原作知識で知っていたとはいえ、自分が入学した段階でそうなったのは皮肉と評するほかないが。
　更に付け加えると、中学2年に進級する時点で魔法大学模試の合格ラインを満たすだけの結果を出しており、この事実は第一高校にも通達されている。他の追随を許さない成績を挙げている人間ともなれば、百山と言えども拒否することなど出来ないらしい。別の言い方をすれば「あまり関わりたくないから許可している」のかもしれないが。

見られる歪み

生徒会室での話し合いは水波が達也らの宿泊を手配することで決着した。泉美はそれを聞いて頭を抱えていて、恐らくは深雪から頼まれたことへの葛藤もあるのだろう。その辺は泉美本人で納得してもらう他ない。

その後、実験棟へ立ち寄って雫に改めて幹比古の代理をお願いし、帰宅の途に就いた。

キャビネットで悠元は情報端末に目を向けていたが、その中の京都方面のローカル版ニュースに名倉が殺された記事が掲載されていた。悠元の表情に気が付いた深雪が声を掛けた。

「悠元さん、どうかしたのですか？　何やら事件の記事のようですが」

「ああ。京都で殺された名倉三郎という人だが、同姓同名でなければ七草家のボディーガードをしている人間だ」

「七草家の……悠元、偶然だと思うか？」

「偶然にしては出来過ぎのレベルを超えてるよ、達也」

達也らは知らないが、悠元は名倉が殺された場を目撃している。達也が知らないところを見るに、文弥と亜夜子に頼んだ箝口がしっかり効いている証左とも言える。ここら辺の事実は追々明かさざるを得ないが、今は口に出来ない歯痒さを内心で感じている。

九島家ならばともかく、関東地方を守護・監視している七草家の関係者が京都で殺されたのは明らかに違和感しかない。彼が数字落ち（エクストラ）の一人とは言え、十師族の一角に重用されるほどの実力となれば、彼を殺せるだけの実力を持つ者は限られてくる。

それこそ、黒羽の部隊を退けた周公瑾クラスの実力者でなければ――と、達也はここまで推察するだろう。尚、名倉の素性に関しては昨秋に真由美の護衛という形で駅まで送った後、深雪の機嫌を直すついでに説明している。

「……実は、泉美ちゃんから内密に相談を受けていた。名倉三郎から〝死の気配〟のようなものが見えた、とな」

「死の気配、ですか？」

「現代魔法というよりは一種の予知に近いが、香澄ちゃんも双子特有の感覚で察していた」
原作では真由美単独で動いていたが、名倉をそれとなく知っている香澄と泉美も動くことは想像に難くない。だが、悠元は今春に七草家を訪れた際、周公瑾に関する約定を真由美の目の前で弘一と取り付けている。いくら真由美が家の意向と関係なく動くとしても、彼女が七草家の長女である限りはその約定を無視できない。
この先の展開を考えると、真由美が協力を求めてくる可能性が少なからず出てくるだろう。そう思い、悠元は記事を閉じて素早くメールを打ち込み、送信したのだった。
◇　◇　◇
その晩、名倉の死を警察からの身元照会で知った真由美は七草家で弘一を問い詰めた。だが、弘一はまともに取り合おうとせずに「お前には関係のない話だ」と一蹴してしまった。
弘一とて真由美の性格を知っている以上、ある程度の情報を開示して納得するように話をするべきだった。だが、今回の一件は七草家の〝我が侭〟で引き起こしたようなもの。ましてや、真由美本人の前で神楽坂家の当主代行と結んだ条件を反故にした形だ。
さしもの弘一でも以前泉美の婚約破棄で泉美本人から「親子の縁を切る」という事態にまで発展しかねなかったからこそ、真由美に対して情報を開示することは当主のみの権限という形で誤魔化した。
だが、真由美は納得できなかった。
そこまで親身という間柄ではなく、名倉は真由美に対して慇懃な態度で、一人の使用人として接していた。真由美からすれば気味が良くない相手なのは間違いなかったが、自分の父親が命じた仕事で死んだ。いや、〝殺された〟と真由美は思っている。
「真由美ー……こりゃ重症だね。お湯でも持ってくる？」
「片付けが面倒になるからやめておけ。真由美、少ししゃんとしろ」
「え、あ、うん。ごめんなさい。あと、つぐみんは何でお湯を持ってこようとしたのか教えてくれるかしら？」
翌日のお昼時。魔法大学のカフェテリアでは、真由美と亜実、そし

て摩利の三人がいた。只でさえ露出が少なくない服装の十師族・七草家令嬢である真由美が少し際どい恰好で儚げな表情をすれば、それこそ周りの目線がこちらに向くことになる。
「気分をスッキリさせるのなら熱湯がいいかなって」
「温度によっては火傷ものじゃない」
なお、摩利は防衛大の教練をサボっているわけではなく、魔法大学には防衛大における魔法師の士官を育成する学科（防衛大特殊戦技研究科と呼ばれる）に所属する学生から大学側が選抜したメンバーが週に一回のペースで魔法大学へ聴講に訪れる制度があり、摩利はその制度に選ばれて魔法大学へ聴講をしに来ている。
冗談はさておき、亜実は遮音フィールドを展開しつつ冗談を止めて真由美に問いかけた。すると、フィールドが張っているにもかかわらず、真由美は手で口元を隠す様な形で話し始めた。
「……なら、真由美は何で悩んでるの？」
「ボディーガードの名倉さんはつぐみんと摩利も知ってるわよね？」
「ああ、何度か顔を合わせてるからな。その人がどうかしたのか？」
「――殺されたの」
サラッと言い放ってしまった真由美に対し、自分の身の危険云々はどうだったのかという疑念を摩利や亜実は抱いた。それを察したのか、真由美は付け加える形で言葉を続けた。
「でも、帰り道に私が襲われた訳じゃないの。父の仕事で京都に行ったらしく、そこでね……」
「お悔やみ申し上げます」
「……ありがとう」
親密とまではいかないものの、友人の知り合いが亡くなったことに対して亜実と摩利は死者を悼む心を言葉で示した。彼に対する黙禱なのか、少しの間を置いて摩利が真由美に尋ねた。
「それで、真由美はどうしたいんだ？　まさかとは思うが」
「弔い合戦をしたいわけじゃないの。ただ、このままにしておくと間違いなく何かしらの代償を支払わないといけなくなる気がするの」
「代償？　誰に？」

「それも分からないのよ」
　以前、十山家が悠元を誘拐しようとした件に関して七草家はその動きを無視して上泉家の不興を買った。それに加えて三矢家と秘密裏に結んでいた妹の婚約が破棄となった。その時ですら結構開示された情報が今回の場合だとかなり制限されている。
　確証があるわけではない。だが、ここまで開示しないとなれば今春に自分の目の前で悠元と父親が交わしていた約束にも大きな影響が出かねない――そんな気がしたのだと言いたげに、摩利と亜実の問いかけに応えた。
「でも、摩利は忙しいんでしょ？　防衛大のカリキュラムはチラッと見せてもらったけど、相当自由が無いし」
「そうだな。亜実はどう思う？」
「うーん……十文字君に相談するとかかな。あとは、美嘉先輩か佳奈先輩あたりがいいかもしれないね」
　亜実がここで魔法科高校を対象に含めなかったのは、自分の恋人（既に婚約者なのは周知の事実だが）が論文コンペの発表メンバーの護衛を務めていることを知っているためだ。これには摩利が小声で亜実に尋ねた。
（亜実、達也君や悠元君の名を出さなかったのはどうしてだ？）
（確かに今年のコンペは京都だけどさ、ある意味七草家の身内事に彼らを巻き込むのはどうかと思うよ？）
　今回の場合は、あくまでも真由美の私用でしかない。別に七草家当主代理として名倉の遺品を引き取るようにも言われていないため、すでに卒業した魔法科高校の人間をあてにするのはどうかという思いもあった。
（まゆみんの個人的な事情に態々時間を割かせるんだよ？　何も対価なしにボランティアみたいなことをさせたら、七草家の品性が疑われかねないと思うんだよね。摩利の家だって、今は三矢家の外戚なんだし、そこら辺はもう少し自覚を持つべきだよ）
（そうだな……）
「……よし、ここはお姉ちゃんとして弟の交友を見る意味でも」

「って、何言ってんじゃい！」
「きゃうんっ!?」
　亜実と摩利が小声で話している間、何かを決意したように立ち上がって話し始める真由美を強制的に座らせる意味で亜実のチョップが真由美の脳天に直撃した。あまりの痛さに頭を抱えて涙目の真由美に、若干息を荒げている亜実。そして、相談する相手をしっかり決めるように言い含めようとした摩利の姿がそこに存在しているのだった。
　そこに加わる形で姿を見せたのは、珍しく一人でいた美嘉だった。
「――――で、弟の交友絡みを何で他の家の人間であるまゆみんが見るって訳の分からないことになってるのよ。第一まゆみんは悠元と婚約もしてないのに」
「はい、仰る通りでございます」
（ねえ、摩利。やっぱりこれって……）
（だな。本人に忠告したところで誤魔化すのが関の山だが）
　真由美が何を考えたのかというと、論文コンペの警備はモノリス・コードの優勝者――――今年の場合は前会頭である服部が受け持っている。かつては同じ生徒会役員として一緒に仕事をした間柄なので、そこから現部活連会頭である悠元に協力を仰ごうとしたようだ。
　美嘉は悠元と深雪が付き合っている（婚約している）ことを知っており、九校戦を期に知り合った時から悠元に対する恋愛感情のようなものに気付いていた。既に十師族でない悠元の恋人に家格という概念が必要なのかはさておき、深雪の魔法師としての実力を見れば、悠元の婚約者となる資格は十二分にあると判断した。
　真由美が意図的にそうしているかはさておくとしても、十師族に他の魔法使いの婚姻事情にまで首を突っ込む権限などないはずだ。
「で、事のあらましの予想は付くけれど、名倉さんの事？」
「っ!?……どうして分かったのですか？」
「あのね、私だって面識ぐらいあるのはまゆみんだって知ってるでしょ。ま、偶々ニュースを見ちゃってね」
　美嘉は偶々京都方面の観光特集を見ていたのだが、そこで京都方面

の治安を見ようと最近のニュースを調べたところで名倉の記事がヒットした。流石に同姓同名の人間を知っているため、真由美に確認したところで見事に繋がったという形だ。
「それで、悠元に協力を仰ごうとしているようだけど……正気で言ってる？」
「え？　ダメですか？」
「……あのねえ」
美嘉が案じたのは悠元の七草家に対する印象の問題だ。
昨年正月の十山家のことに加え、今春のメディア関連の問題。そこに加わる形で今回は悠元の周辺に探りまで入れている。美嘉も自分の父親から聞いた話が殆どだが、これで七草家に好印象を持てという方が極めて難しい。
内密に泉美との婚約を結んだことで、七草家はそれを利用して増長したのかもしれない……婚約のこと自体も元から聞いているが、時折連絡を取っている弟の疲れたような表情を見る限り、不本意な部分もあるが受け入れざるを得ない心境だと悟った。
「十山家の一件だけでも嫌われる要素満載なのに、悠元が穏便に済ませてくれる好意に甘えすぎだよ、まゆみんは。いや、この場合は七草家全体と言うべきでしょうけど」
「なら、どうしたらいいんですか？　このまま狸寝入りをしろと？」
「……十文字君は？」
「いや、流石にそれは……」
「でしょうね」
十文字家のことに関しても、理璃絡みの一件で迷惑を掛けてしまった立場。これ以上下手なことは出来ないと鑑みた場合、そうなると真由美の脳裏に一人の人物が浮かび上がった。
「なら、達也君あたりなら話ぐらいは聞いてくれるかもしれない」
「……まあ、好きにしたら？」
達也は昨年の論文コンペで発表メンバーに急遽代理として選ばれた。そのことを鑑みれば、忙しい立場かも知れない。ある意味自分勝手に物事を進めている真由美を見て、ある程度納得できたところで放

置する方向に舵を切った美嘉であった。

◇　◇　◇

１０月１４日、日曜日。達也が横浜の日本魔法協会支部を訪れていた頃、悠元は『神将会』で使うスーツを身に纏い、都内の高級料亭を訪れていた。いくら内緒話をするとはいえ、前世ではいち庶民だった身分からするとあまり信じられないという違和感が拭えない。

そんな自分自身の事情はともかく、先に到着して座っていると襖が開いて一人の偉丈夫が姿を見せる。頭はツルリと剃り上げられているが、高級スーツを纏う初老辺りの風格を持つ人物。若き頃は見るからに偉丈夫と呼ばれていたであろう風格に加え、白く濁った左目が妙な威圧感を与えてくる。

「急な呼び出しをして済まぬな、神楽坂悠元」

「いえ、平日に呼び出されないだけ配慮していただいたと解釈しております、東道殿」

この国を裏から見つめ、時にはその力を揮う者たち。この国の「表」の秩序が「裏」の力――怪異や妖魔、道を外れた魔法師や異能者の力で乱されないよう、退治や封印、排除すること。

その組織こと『元老院』の最高格である四大老（しだいろう）の一角を担う東道（とうどう）青波（あおば）（表向きは世俗と関わっていないことを示すために出家しており、青波（せいは）入道と呼ばれることもある）。その四大老には神楽坂家と上泉家も含まれており、各々の名を継ぐということは四大老の座を継ぐことにもなる。

彼なりの謝罪の言葉を聞きつつ悠元は座るように促すと、青波も軽く頷いて悠元の向かいの席に座ったところで改めて口を開いた。

「そうか……娘から事情を聞いているが、周公瑾は厄介な輩のようだな」

「流石に黒羽の部隊に協力は仰ぎましたが、今この状況で排除するのは得策ではないと判断しました。七草家お抱えの部下ですら手を焼く相手ですから」

青波も名倉に関しての情報は既に集めていたようで、特に驚くようなそぶりは見せなかった。ただ、主として動いている四葉家を妨害す

るような動きに関してはスポンサーである立場からして許容できる範囲を超えつつあるようだ。
「その辺の采配は全て任せる。七草に関してだが、こちらから特に干渉は必要と考えるか？」
「逆効果かと。現当主である七草弘一が四葉を諦めない限り――――次の当主が前妻の子に変わったところで、確実に裏から口を出すのは間違いないと断言します」
　もしかすると、七草弘一は元老院入りを目指しているのかもしれない。流石に四大老こそ難しいが、元老院に選ばれたとなれば他の十師族――――四葉家よりも上の立場へ抜きん出ることとなる。
　原作だと真夜はもとより、烈も少なからず知っていた。十師族でも当主クラスにしか知らされていない秘密だからこそ、七草家は『元老院』の一角たる神楽坂の力を早とちりして名倉を動かしたのかもしれない。
「仮にも四大老の一角を担う神楽坂との約定を軽んじたペナルティは彼らにきっちり支払って頂きます。なので、他の四大老の方――――樫和殿には〝余計な口や手を出すな〟とだけ言い含めておいてください」
「相分かった。……一つ聞きたいが、貴殿がそこまで彼を敵視する理由は何だ？」
「敵視ですか……そう言ったとしても不足気味な気はしますが」
　現状の四大老は神楽坂千姫、上泉剛三、東道青波、そして樫和主鷹の四人で構成されている。悠元自身としては樫和に含むところなどない――――いや、〝なかった〟と言うべきなのかもしれない。
　悠元自身、原作になかった十山家の襲撃に関して事細かに調べる必要があった。原作だと深雪や水波を間接的に襲撃した十山家の行為自体、十師族への叛逆行為と見做されるに等しいことを平然とやったのだ。いくら国家防衛の裏側を担うとはいえ、師族同士を平気で争わせる行為など国家の力を削ぎかねず、明らかに褒められたものではない。
　師補十八家の一つである十山家の行いを本来咎めなければならな

い七草家はともかく、同じ第十研である十文字家ですら咎めなかったのはおかしいと思い、国防陸軍の功績で築いた情報網で入念に調べた。

その結果、十山家もとい国防軍情報部にその指示を下した黒幕――――樫和主鷹の存在が浮上した。だが、当時は『元老院』のことを詳しく知らず、剛三に対して迷惑を掛けるべきではないと判断して調査を打ち切った過去がある。その辺は前世での経験からくる引き際のラインを踏まえての行動であった。

「簡潔に述べれば、昨年正月の国防軍による襲撃を指示した可能性が極めて高かったから、ですね。流石に刺客を差し向ける様な愚かな真似はしないと思われますが、それでも信用できないためです」

「そうか……そのことは胸の内に秘めておこう」

悠元自身、最悪殺すことで背負うことになる気苦労を考えたくなどない。だが、自身の生死に直結しかねない問題となれば座視など出来ない。樫和の繋がりの中には百家最強と噂される十六夜（いざよい）家の存在もあり、この繋がりから余計な問題が起きてほしくなどないと願いたい悠元に対し、青波は力を持つが故の苦労を知っているためにその発言を口外しないと断言したのだった。

緩衝が一つ追加するだけで変わる雰囲気

１０月１５日、月曜日。論文コンペの準備真っ只中である第一高校に来客があった。国策機関であるために関係者とはいえ外部の人間が訪れるということは珍しい訳だが、その人物――――昨年度の卒業生である七草真由美が来校した。

単なる卒業生の来訪ならまだしも、真由美は十師族・七草家の長女として面会を求めてきた。その相手は達也であり、気が気でない生徒が数名いる中、悠元はいつものように生徒会室のテーブルで黙々と端末のキーボードを叩いていた。

すると、周りに気遣いながらではあるが、セリアが小声で話しかけてきた。

「……お兄ちゃんを頼らないのは意外だね」

「そうか？　まあ、先輩は約定のことを知っているからな。それに配慮して達也を選択したのかもしれない」

悠元は事前に美嘉へ真由美に関する情報を伝えており、今回の場合は七草家との約定があるために真由美が協力を申し出たとしても受け入れられない、と言い含めている。

昨日、美嘉からは『真由美を上手く説得できた』と返事が来た。ただ、当初の予定はこちらの交友関係をダシにして訪れるつもりだったらしく、思わず頭を抱えたくなった。すると、二人で話しているところに泉美も近付いてきた。

「悠元お兄様。その、お姉さまは司波先輩に何をお願いするつもりなのでしょうか？」

「流石に分からないが、七草家に繋がる何かを達也にお願いするつもりだとは思う」

でなければ、真由美が卒業生という体ではなく十師族・七草家の体を使ったことに筋が通らなくなる。

ただ、真由美は知らないが達也は四葉直系――――現当主の甥という血縁関係がある。深雪の安全を考えて秘匿している以上は仕方のない事だが、一歩間違うと師族会議の規則に抵触しかねない。

達也と深雪が四葉の関係者という事実はごく一部の人間（十師族関係だと九島烈や七草弘一が該当する）しか知らない。これは四葉の復讐劇による影響が３０年以上経った現在でも根強く残っているし、現当主はその要因となった事件の被害者だ。
次代を担うことになる人間を秘匿するのは魔法という力を鑑みても理に適っている。この世界における三矢家も家業と役割の関係で別の姓を名乗ることがあるし、財界におけるビジネスネームも財力という一種の力が関わっているため、身の安全を守るために名を隠すのはよくあることだ。
「十師族が十師族でない人間を頼るってどうなの？」
「まあ、理屈は分かる。ただ、先輩は頼れる人間にも限界があるからな」
弘一も真由美がどういった性格をしているかぐらい把握しているだろうし、護衛迄とはいかなくとも監視の目ぐらいは配置しているとみていい。態々放置するということで「七草家は最終的に周公瑾に裏切られたため、達也に協力する形で真由美が動いた」という筋書きまで考えている可能性が高い。そう考えると、名倉の死もその筋書きを補強する上で都合の良いトラブルになるというわけだ。
詳しいことは達也が戻ってきてから――と思っていると、応接室から戻ってきた達也の姿に不安そうな表情をしていた数名の視線が達也に向けられた。
「お疲れ、達也。七草先輩はどんな用件だったんだ？」
「ああ。今度コンペの事前調査に関してだが、先輩も京都に同行したいと言われてな」
達也が京都というワードを出したことで泉美の表情が曇った。真由美の用件が名倉絡みだと察している様子だが、悠元は気付きながらも知らぬふりをして達也の説明の続きを待った。
「先輩のご用というのが何なのか教えていただけなかったからお断りしたが、割と深刻そうな表情をされていたな」
これは明らかに嘘である。応接室で達也と真由美が会談していた時に遮音フィールドの発動を感知していたため、真由美からは詳しい

事情を聞いていないはずなどない。だが、ここで正直に「七草家で雇っていたボディーガードが京都で亡くなり、その原因を探りたい」などとこの場で言えるはずもない。
　達也がその辺を配慮して嘘をついているのを見抜きつつ、悠元が率先して声を発した。
「達也。調査自体は余裕を持たせておくし、必要ならば人手を分けて分担する。七草先輩の用件に関して俺も詳しいことは分からないが、十文字先輩や市原先輩らよりも達也を頼ったのは余程の事情があると思う。服部先輩、七草先輩が同行しても大丈夫ですか？」
「あ、ああ。事前調査の段取りは神楽坂に一任しているから、神楽坂が賛成すれば反対する理由もない。司波はそれで納得できるか？」
「ええ。お手数をお掛けします」
　原作だと服部やほのかが同行に賛成する形で上手く帳尻を合わせたが、今回は悠元が現会頭兼会場警備の調整役をしているため、悠元を介する形で服部を説得した形となった。その上で悠元は泉美に話しかけた。
「泉美ちゃん、七草先輩に今週末の調査に関する連絡をしてもらえるか？」
「わ、私からですか？　お兄様ならお姉さまの連絡先ぐらいご存知の筈ですが」
「それはそうなんだけれど、達也らよりも先に京都入りする関係で手が離せないからな。お願いできるか？」
「はい、喜んで!!」
　頼りにされたと喜んでいる泉美だが、これには七草と神楽坂の約定に加えて悠元の近くでニコニコと笑顔を浮かべている生徒会長の存在が大きく、それを察したセリアが悠元の肩に手を置いていた。
「お兄ちゃん、悪い男だね」
「グーで殴るぞ？　割と本気で」
　この場の雰囲気にほのかだけでなく水波まで苦笑が漏れ、達也に至っては珍しく疲れたような表情を垣間見せていたのだった。
◇　◇　◇

ところ変わって箱根、神楽坂本邸の執務室（和風の様式なので〝執務の間〟という述べ方が妥当であるが）にて、千姫は老年ながらも振る舞いに衰えの見られない人物――――四葉の筆頭執事にして『元老院』のエージェントの一人である葉山忠教を迎えていた。
「本邸を訪れるのは久しぶりですね、葉山さん」
「そうでありますな。愚息は立派に務めあげておりますでしょうか？」
「あらあら、葉山さんからしたら忠成さんは何時まで経っても未熟のままですか」
「傲慢になられても困ります故。それに、仕える主人の気持ちを言葉に発せずとも察するのが執事のあるべき姿ですから」
元々、葉山を四葉の執事として送り出したのは千姫の父親こと神楽坂家先代当主。四葉家をコントロールするという意味合いで神楽坂家の影響下に置くのが狙いであったが、奇しくもその願いが次期当主で完成をみるという状態にさしもの千姫でも笑みを禁じえなかった。
「それで、恐らく東道殿からの手紙を預かってらっしゃるかと思うのだけれど、当たっているかしら？」
「流石でございます。こちらが東道閣下より千姫様への手紙にてございます」
葉山が差し出した手紙を千姫は受け取り、道具を使うことなく封を開けて便箋に目を通すと、千姫はその便箋を葉山に差し出した。葉山も知るべきという情報という千姫の意思を察した彼は千姫に一礼した上で受け取り、素早く目を通した。手紙を千姫に返した上で葉山から口を開いた。
「……よもや、四大老の一角たる樫和閣下が関わっていらしたとは。このことは？」
「無論調べは付いておりました……ですが、今彼を外すのは非常にタイミングが悪すぎます」
現状、周公瑾を捕縛あるいは〝討伐〟する流れで進めている以上、『元老院』の最高幹部の一角を外せば確実に国内がゴタゴタになりかねない。それこそ顧傑の狙い通りになってしまう。

ただ、千姫としても四大老として腐ってしまった樫和を早めに排除する方針に変わりはなかった。その理由は、周公瑾を含めた中華街の実質的な治外法権が今まで許されたのは樫和の影響が関与していたためだ。
「今までは、この国の利益に適うかもしれないという曖昧な理由で見逃してきました。ですが、彼が人にあるまじき妖となれば国の利に適わないと判断しました。今まで難色を示してきた樫和が已む無く賛成したのも、身の保全を狙ってのものでしょう」
「……悠元殿が狙われることになるやもしれませんが」
「仮に彼が私の息子を害するようなことがあれば、樫和の名を世界(れきし)から消滅させます。彼に賛同する魔法師も含めて」
暴力的な魔法と武力という点では剛三が一際目立っているが、彼の義妹でもある千姫もまた一線級の魔法師。日本各地を襲った空襲の被害に対し、千姫は襲撃した外国艦隊全てを海の藻屑へと帰した。一晩でまるで手品のようなことが起きたため、千姫が成したことは殆どの人間が知らない。剛三はその出来事が千姫の仕業だと即座に見抜いた数少ない一人だ。
珍しく真剣な表情を浮かべる千姫の言葉に対し、葉山は深々と頭を下げた。その様子を見たところで、千姫は閉じていた扇子を広げてにこやかな表情に変化させた。
「まあ、あの老人に神楽坂へ喧嘩を売る度胸があるのならの話ですが。ところで葉山さん、達也君は頑張っていらっしゃるかしら?」
「ええ。周公瑾に至る手掛かりは掴めていませんが、九島烈の協力は得られたというのは評価に値するかと」
「そうですか……こんな時ぐらい、師族会議の杓子定規に当て嵌めなくても良いでしょうに」
今春の七草家によるメディア工作絡みとはいえ、周公瑾の一件はその時の師族会議で既に存在を仄めかしていた。
烈ならば国防軍経由で七草家が動いていることを察しているだろうに、弘一に対して説教とまではいかなくとも説得ぐらいはできたはずだ。それをしなかったことで七草家お抱えの部下であった名倉を

死なせるという事態に繋がった。だが、彼の死は決して無駄ではないと千姫は直感でそう考えていた。
「奈良での襲撃は国防軍情報部が介入したとのことです。どこの部署が介入したのかも調べは付いておりますが」
「それぐらいは許しておきましょう。葉山さんが訪ねられたのは、達也君がお願いした〝増援〟にも関わるかしら？」
「千姫様のご慧眼、恐れ入ります。必要であれば四葉から傭兵を出しますが」
「止めておきましょう。代わりといっては何ですが、私から一筆認めて吉田家に動いてもらいましょう。それと千葉家にもお願いしましょうか」
七草家が四葉を調べるような動きを見せている以上、傭兵とはいえ都心をうろつかれるのは七草家としても面白くないだろう。先に約束を破った側に対して配慮など考える必要などないが、逆襲という形で痛くもない腹を探られるよりはマシという千姫の判断だ。
千姫から出た名には葉山も少し驚くような素振りを見せた。相手が『伝統派』である以上、古式魔法の家である吉田家が担うのは理解できる。だが、現代魔法――百家本流を担う千葉家が古式魔法師相手の護衛に就かせる意味を尋ねる前に千姫が先んじる形で口を開いた。
「意外、と思われるでしょう。ですが、我々とて無尽蔵に援軍を派遣できるわけではありません。百家最強の十六夜（いざよい）家が樫和と繋がりを持っている以上、彼らを頼れるかどうかも疑わしい。なら、悠君の繋がりを利用して千葉家に古式魔法を体験してもらうことで〝経験〟を積んでもらおうかと思います」
「成程。周公瑾の先を見据えてのことですな？」
「正解です」
現代魔法師は古式魔法師と根本的に魔法の使い方が異なる。双方に通じている現代魔法師が少ない以上、古式魔法の経験を少しでも積んでもらうべく千姫は悠元の交友関係を利用する形で千葉家に手伝ってもらうつもりだった。

百家の中には古式魔法に通ずる人間もいるが、十六夜家は百家最強の名を冠しつつも古式魔法師に対して面倒見がよく、彼らの旗頭として担ぎ上げられることもある（古式魔法の旗頭は上泉家や神楽坂家の存在があるため、そこまで目立ってはいない）。

更に、十六夜家は作られた魔法師――――遺伝子操作や生化学的処置による魔法技術の向上に対して嫌悪感を隠そうとしないことで有名だ。十師族に対しては流石に遠慮しているが、現在におけるタブーと化した数字落ち（エクストラ）に対する蔑視を止めようとしない。

実際のところ、悠元が神楽坂家次期当主を公表した際、上泉家当主継承も含めて十六夜家が抗議を入れてきたことがある。その背後に誰がいるのか察したため、千姫は「文句があるのならば、それに見合う実力を証明して見せよ。現に妾が指名した次期当主はルールの範疇とは言え佐渡侵攻を食い止めた『クリムゾン・プリンス』を破ったのじゃからな」と十六夜家に押しかけた上で現当主に言い放ち、押し黙らせた。

その件があったため、千姫は十六夜家がいくら古式魔法に造詣が深くとも素直に神楽坂や上泉の要請を受けるとは微塵も思っていなかった。

話を戻すが、幸いにして達也のクラスメイトに千葉家の人間――――エリカの存在がある以上、千葉家も身の安全を確保するという意味で神楽坂家の要請を断れない。万が一エリカに何があれば、千刃流（ちばりゅう）道場の門下生が〝お礼参り〟だの〝復讐戦〟という名目で『伝統派』に喧嘩を売りかねない。

なお、その当人はレオと付き合っていて、彼らの祖父の繋がりが引き寄せたとも思える様な有様にはさしもの千姫も笑みを禁じえなかった。

「それに、先日のパラサイト事件で神楽坂（ウチ）や上泉家と名目上は協力していますから、諍いは寧ろ少ないでしょう。国防や警察関連にも顔が広いので、七草も在校生である娘の安全を鑑みて首を縦に振らざるを得ない。十文字も同様の理由で協力を取り付けられるでしょう」

「御助力いただき感謝いたします、と御当主様に代わってお礼を申し

上げます」
「お気になさらずですよ、葉山さん。困った時はお互いさまというものです」
緊張した雰囲気はあったものの、葉山と千姫の会談は最終的に和やかな雰囲気で幕を閉じたのだった。
◇　◇　◇
葉山が部屋から退出すると、部屋の外で待機していた実の息子である忠成の姿があった。忠成は父親の表情を見るに、和やかな感じで会談が終わったのだと察しつつ声を掛けた。
「お疲れ様です、父さん」
「忠成か……てっきり、達也殿の行動面に関して尋ねられるものかと思っていたが、そこには触れずに終わったよ」
「父さんは、不安なのか？」
忠成は父親から達也に関する過去の出来事を全て聞き及んでいる。その中には達也の四葉における扱いや……かつて達也が四葉分家の当主達に殺されそうになったことも含めて。葉山も身内の前にいるためか、珍しく執事らしからぬ言葉遣いも混じりながら話した。
「不安、か。達也殿に至ってそのような言葉は深雪様が関わらなければ無いに等しい言葉だろう」
「それは知っている……ここに来る前、四葉本家で何かあったのか？御当主様でないとすると、黒羽殿あたりから？」
いつになく執事としての顔を崩すことが極めて少ない父親の珍しい態度。そこから導き出した忠成の推測に対し、息子の成長を内心で喜びながらも葉山は言葉を吐き捨てるように述べ始めた。
「正解だよ、忠成。黒羽殿は達也殿が周公瑾捕縛の任を与えられていることに疑念を抱いていた。四葉に対する忠誠など達也殿にはないとな」
「黒羽殿が仕損じた相手を達也殿が任されていることに加え、駆け付けた達也殿に治してもらったと報告は聞いている。多分、そのことで最低の醜態を一番見られたくない相手に晒したと思っているかもしれない」

「醜態……そうかもしれないな」
黒羽から見れば、今回の一件は達也の四葉に対する忠誠心を見るためのものと推察しているだろう。
だが、忠成の推測は違った。それが仮に本当だとするならば、次期当主候補である深雪を危険に晒す様な黒羽姉弟の行動自体おかしいものとなってしまう。単に深雪のガーディアンとしての能力を示すとしても、四葉の次代を担うであろう貴重な魔法師を失うようなリスクは論外だ。
忠成は遮音の結界を張った上で葉山に尋ねた。
「父さん、答えられないのならば答えなくてもいいが……四葉家は達也殿を次期当主に据えたがっているんじゃないのか？」
「……流石だな、忠成。神楽坂家筆頭執事として立派な推察だ」
達也を四葉家の次期当主候補にさせたいという真夜の真意を知っているのは、本人以外だと葉山や達也を良く知るごく一部の使用人に加えて千姫や剛三、そして悠元しかいない。
現状はその真意を知らない忠成だったが、父親の言葉でそれが肯定された形となった。その上で葉山は言葉を続けた。
「達也殿の力は最早四葉の外に出せぬ力となってしまった。御当主様もそれを存じているからこそ、〝実の息子〟に次代を継がせたく思っている」
「……達也殿が、真夜殿の実子だって？」
「それは間違いない事実だ。恐らく、達也殿も気付いている筈だろう。彼の『眼』はそれほど強力なものだからな」
葉山から述べられた事実――あまりにも衝撃的な事実に、忠成は絶句に近い表情を浮かべた。それを見た葉山は口元に笑みを見せつつこう告げた。
「この事実は、来年の慶春会が済み次第公表する。千姫殿は無論ご存じの事だろうが、改めてお前の口から述べるといい」
「……分かった。玄関まで見送ろうか？」
「息子にあまり年寄り扱いはしてほしくないのでな。これで失礼させてもらう」

葉山は言いたいことを言えたのか、まるで憑き物が落ちたかのような足取りでその場を離れていった。忠成は遮音の結界を解除した上で葉山の去っていく方向に向けて深々と頭を下げた。

父は四葉に仕え、自分は神楽坂に仕える身……お互いに守るべき一線を弁えるという意味も込めて。

逃げ道まで塞がれる周到さ

１０月１８日、木曜日。本来ならば学校がある日なのだが、悠元はリニア列車に乗って京都へ向かっていた。下手に多人数で行けば却って目立つことに加え、神楽坂家としての仕事もあるために学校へ公欠願を出していた。

百山は最初、あまり良くない表情を垣間見せていたが、悠元自身の実績に加えて元実家である三矢家絡みを勘案して渋々納得した。そこに加えて今春の神田議員がアポなし訪問で応対したことも原因の一つであるが。

悠元が独自に調べた限りでは、周公瑾は既に京都北部方面から離れている。名倉の一件もあって慎重に動いているのは間違いないようだ。京都の『伝統派』は周公瑾が招いた大陸の方術士を取り込んでいるところもあるが、静観を決めている一派も存在する。

「単にそれだけなら、別に速く動く必要もなかったけどな」

皇族を守護するためとはいえ、既に京都という父祖伝来の地を1世紀以上離れている神楽坂家は自ら進んで関わりを持とうとはしない。その最大の理由は九島家による古式魔法師への一種の〝冷遇〟――――と思っているのは、望んだ力を得られなかった古式魔法師たちだけだが――――が大きく尾を引いている。

九島家先代当主こと九島烈の実弟である九島健。表向きは魔法に関する教育システムの対立でＵＳＮＡに事実上の国外追放を食らったが、大体その程度の対立で今後の魔法技術の発展に有益な人物を平気で国外に出す方がおかしい。政府ですらまともに反対しなかったのかと疑問を浮かべた。ＵＳＮＡ（旧合衆国）が工作した可能性も捨てきれないが。

この世界の場合だと九島烈が弟へのコンプレックスのために強化措置を受けて成功し、軍人魔法師としての実力を発揮しただけでなく、烈に協力的なシンパを集めて健を国外に追いやることで九島家当主の座を勝ち取ったのだ。

何故ここで九島家の話を出したのかといえば、悠元が早く動く理由

の一つはその九島家絡みであるためだ。厳密に言えば光宣絡みなのだが。

九島烈から光宣の治療を頼まれたが、慎重に事を運ぶ必要がある。幸いにして、今年は京都で論文コンペがあるため、いくら病気がちの光宣でも京都であれば生駒から比較的近いので問題ないと踏んだ。そして、『伝統派』で比較的穏健な組織は分かっているため、彼らに協力してもらうつもりでいた。

ただ、自分が早めに動くからと言って光宣に強要するつもりなどなく、光宣には予め今週末で動けないかと打診しているため、今更予定を急に変更させる気もない。

更に付け加えると、『聖天八極護法式陣』をトリガーとして京都市全体に『聖域』を復活させる腹積もりでいた。これは将来奈良と京都の『伝統派』が仮に対立したとしても、防御を整える意味合いがある。正直に言えば『伝統派』の力を分断することで取り込みやすくするためだ。

（問題は、光宣を九島家から切り離した後だな）

悠元は最初、光宣と響子の仲の良さを勘案して藤林家に送ろうかと考えたが即座に却下した。何故ならば、光宣の血縁上の母親は藤林家に嫁いだ九島家当主の実妹。光宣の出自のことが九島家の中でどこまで知られているかは不明だが、少なくとも遺伝子提供をした側には知られている可能性が高い。光宣もその様子を訝しみ、いつかは自分自身の出自に勘付くだろう。

そうなると、光宣を引き取るにはあらゆる条件が付きまとう。それこそ下手に著名な家に送り込めば、九島家に残った光宣の兄や姉らが妬むだろう。不幸中の幸いにして、この世界の光宣は悠元という存在を目標にしているためか、十師族という軛にあまり拘っていない様子が見られた。

悠元の知己を通して軍人家系の家に送り込むことも考えたが、これも却下した。何せ、国防軍における九島烈の名と影響力は未だに根強い。何せ、烈を熱心なまでに慕っている部隊まであるほどに。そこに九島烈の孫である光宣を送れば、彼を旗頭にすることなど分かり切っ

た話だ。
国防軍自体を全面的には信用していないが、諸外国のことを考えた時に国防の力を分断せしめるような真似など望んでいない。なので、光宣を治療して九島家から切り離した後は暫く上泉家で預かってもらい、肉体面も含めて鍛え上げてもらうつもりだ。剛三も昔の誼を考えれば光宣を鍛えることに異存はないだろう。
「――それで、何故安宿(あすか)先生が同行しているのかお伺いしたいのですが？」
そう、四人が座れる席に悠元が一人きりで占拠しているわけではなく、悠元の向かい側に座る形で第一高校の保健医をしている安宿怜美(あすかさとみ)がゆったりとした私服姿で座っていた。
「神楽坂の御当主様の命でね。悠元君のサポートをして欲しいって」
「いや、平日の学校に保健医が不在なのは拙いかと」
「そこは大丈夫よ」
確か原作だと既婚者だった筈なのだが、この世界だと未婚者となっている。以前二人きりで会談された際に安宿家が悠元の婚約者に怜美を押す方向で乗り気だと聞いているし、高校に入ってから月に1、2回あるカウンセリングでも遥に代わっている始末だ。
尚、遥個人としては怜美が悠元の相手を受け持ってくれたこと自体嬉しかったようで、三矢の人間が今までに積み上げてきた功罪もあって、他の教職員から過保護とも言える様な扱いをされていたらしい。
「何を以て大丈夫なのかは聞かないでおきますが、正直一杯一杯ですよ。特に婚約者絡みは」
「あら、聞いたところだと司波君のお母さんを愛人にしたそうじゃない」
「最終的に受け入れたのは認めますが、母上に内堀まで予め埋められて拒否なんてできませんよ」
深夜の件は自分にも責任はあるが、その当時はれっきとした人妻だったので絶対に手を出せないのに向こうから積極的にスキンシップを取ってきたのだ。元々政略結婚の体だったので恋愛感情が無かったのは仕方ないにせよ、一歩間違えれば寝取ったようなものだ。

怜美が深夜の件を知っているのは千姫から聞き及んでいるのだろうと思っていると、怜美は思いもよらない爆弾発言を投下した。
「なら、愛人がもう一人増えても誤差の範囲内ね」
「……今何と？」
「私が愛人２号になるってこと。いつでも手を出していいってことよ」
「倫理観はどこに行ったんですか。貴女、保健医と言えども教師でしょうに」
この場合、自分がおかしいのだろうか？　とは思ったが、即座にその考えを振り払った。確かに神楽坂家の人間として『九頭龍』の家と繋がりを持つことは必要だろうが、何も婚姻とか愛人に拘る必要なんてない筈だろう。そう疑問に思っていると、怜美が笑みを零しつつも説明してくれた。
「悠元君は知らないから無理もないでしょうけど、内密に婚約の申し入れをしている古式魔法の家が多いのよ。その中には『伝統派』に繋がりそうな家の娘もいたりしてね」
神楽坂家の家柄を考えれば怜美の発言も腑に落ちる。ただ、悠元の出自が十師族にも係っているため、それで二の足を踏んで様子を見ている家も多いらしい。こちらとしては寧ろこのまま引き下がってくれた方が必要以上の気苦労を負わずに済む。
それに、同年代の古式魔法の家柄に生まれた男子が自分だけではないのだから、そういった連中からの妬みを買いたくないのが偽らざる本音だ。『伝統派』に繋がりそうなところは尚更御免というもの。
「流石の俺でも嫌です。古式魔法に連なる家の男子は俺一人だけしかいないわけではないでしょうに」
「それはそうなんだけれど……やっぱり、不安？」
「火種を自ら進んで抱える気なんてありませんから」
優れた魔法師ほど優れた容姿になる――――というのがこの世界の概念だが、現に十師族の名を隠していた小学・中学時代もラブレターはそれなりに貰っていた。とりわけ中学２年になって雫やほのかと同じ学校に通うこととなってからは、それが原因で雫がえらく不機嫌

になったことがあったりした。
学校生活では魔法云々のことを極力触れないようにしていたし、剣道部の一件を除けば帰宅部で大人しく過ごしていた。万が一のことを考えて魔法に頼り切らないことを念頭に置いていたのもあるが、変に目を付けられて自分が十師族直系だとバレないためでもあった。
別に勉学や運動で目立つような動きはしていないのだが、今にして思えば深雪や雫から散々言われた〝ジゴロ〟のような有様だったのは否定できない。だが、そのことで自分の婚約者に立候補するのはまた別の問題だと思う。
「姫梨や雫、夕歌さんの件だけでも十二分に配慮はしているつもりなのですが……それでも足りないと？」
「悠元君と縁を結ぶことが出来れば、神楽坂家の力を借りられるかもしれない――――なんて考えている家も少なくないでしょうね」
「そんな単純にしか考えられない馬鹿ばっかりですか？　いっぺん滝行で心頭滅却してから出直して来いと突き返しますよ、俺は」
〝力（ちから）〟というのは、人を簡単に狂わせる一種の精神干渉系魔法のようなもの。その一端を前世で散々味わったからこそ、神楽坂家としての力の使い方には細心の注意を払っている。それを分からずに擦り寄ってくるのであれば、家ごと勝手に潰れてもらった方が寧ろ支払うコストが安く済むというものだ、
ただ、それにも幾つかの例外が生じてしまっているのも悩みの種の一つである。
「大体、現時点でセリア――――血縁だけとはいえ九島家の縁者と婚姻を結んでいる以上、それを許容できないのであれば論外です」
「……悠元君はよかったの？　一応ＵＳＮＡの関係者よ？」
「そこは向こうの大統領と約定を交わしてます。ヴァージニア・バランス大佐が立会人である以上、スターズが介入でもしようものならばＵＳＮＡ政府が本気で動きます」
『セブンス・プレイグ』と『アルカトラズ』の解体交渉の際、セリアは既にスターズから完全に除隊した扱いとなっていることを再確認している。その際の議事録や音声記録は日米双方で管理しているた

め、証拠を一方的に握り潰せば政府の意向を完全に無視した独断行動として処罰することも可能だ。
「そんな事情もありますので、古式魔法の家絡みの婚約に関しては伊勢家と鳴瀬家、それと四十九院家で打ち止めだと母上にはお願いしました」
「そうなると、私の愛人は認めてくれるのかしら？」
「母上が許可している以上、俺に拒否権があるとでも？」
婚約で確定しているところを除くと、一色家・一条家・五輪家あたりが婚約の打診をしているのは聞き及んでいる。
百家にまで話を広げると複数の家も内密に相談という形で申し入れを受けており、中には千葉家――エリカの姉絡みの話もあったことは確認しているが、こちらから進んで幼馴染の不興を買う気もないので願い下げだと釘を刺した。エリカとの会話でもそれを出したところ、「あのどうしようもないダメオヤジは……」と漏らしたほどだ。
『九頭龍』については前にも述べたが、婚姻だけでなく『神将会』や友人関係で誼を結べているところが多いため、ここに関して特に異論はない。ただ、矢車家（ここでは三矢家の使用人である分家ではなく本家のほう）からは多くても二人を推薦するとのことらしい。しかも、矢車家現当主のお墨付きという形でだ。
元実家のことに加え、侍郎と詩奈の後押しをしてくれるという条件を持ち出された以上、その話は断れないだろうと内心で深い溜息を吐きたかった。千姫からは「問題があるようならば私自ら出向きますので、悠君はどっしりと構えていてくださいね」と言われたが、前世の倫理観がまだ残っている身としては正直複雑と言う他ない。
怜美との会話でそのことを口に出さなかったのは、現状誰が来るのか読めないという点だ。とりわけ交友関係だと剛三の付き添いをしていた影響で無駄に広いし、原作の範疇でない人間の把握は流石の自分でも難しい。
「……そのことは一旦置いておきましょうか。安宿先生――怜美さんが同行するのは仕方ないとしても、極力自分の傍を離れないでください」

「実家からは、市街地だと比較的安全とは聞いているけれど」
「そうなのですが、そこはまあ……これから行く場所の相手次第ですね」
　怜美からの質問に曖昧な部分を滲ませつつ返した悠元。その理由を怜美が知ることになるのは、京都で最初に向かう場所に到着してからだった。

◇　◇　◇

　京都は長い事この国の首都的な役割を担ってきた。その一方で魔法による呪殺や天罰、鬼や妖怪などと言った逸話にも事欠かない。過去の争いによって荒廃しかけたことであらゆる人物らの妬みや恨みが積み重なった結果、それを鎮魂する意味合いで多くの仏寺や神社が建立されている。
　流石の自分でも全ての神仏を祭る場所を訪れるのは骨が折れるために主要の神社や仏寺に絞った。その中でも一番厄介な場所を悠元は最初の訪問先に選んだ。その場所とは、かつて〝第六天魔王〟などと仏僧から言われていた織田信長（おだのぶなが）が大きく関係する場所――比叡山延暦寺。
「この場所は八雲さんも関係しているのに、それでも警戒しているの？」
「爺さん絡みで足を運んだ際、中段や上段の門下生と手合わせさせられましてね」
　別に喧嘩を売りに行ったつもりなどなく、あくまでも剛三の付き添いで見学するつもりでいた。ただ、割と強気な門下生の一人が自分に対して強引に模擬戦を申し込み、剛三もそれを認めたので已む無く叩きのめした。
　それだけならばまだしも、その門下生は納得がいかずに寺で泊まることになった悠元の寝床を急襲した。剛三との訓練で既に殺気を読めるぐらいになっていたため、返す刃で相手の意識を刈った。それを知った住職が悠元に対して深く謝罪した。その際、剛三は悠元の素性をその住職に明かしている。
　単に素手ならば問題もなかっただろうが、寝床を襲われたときはガ

チの真剣を持ち出された。しかも、あの有名な『村正(むらまさ)』だったという事実。結局、呪い――――エジプトでの経験からして、霊的な概念を浄化したわけだが、詫びという形で悠元に譲られ、今は神楽坂家の自室に飾られている。

「爺さんの行脚絡みは誰にも詳しく話してないんですよね。その一端でも現実味が無いと返されますから」

「剛三さんは今を生きる埒外だもの……悠元君」

「ええ、分かっています」

会話を途中で切った怜美の言葉が耳に届く前に悠元も今の状況を把握していた。延暦寺の正門まで大体約１００メートルぐらいの筈だが、いくら平日という事情を鑑みても二人以外に人一人いないのは明らかに人除けの結界だと察していた。

数年前のことを鑑みたとしても、反省しているのか疑わしく感じてしまう。すると、四方八方から飛来してくるもの――――手裏剣を見て、悠元は怜美を已む無くお姫様抱っこで担いだ。

「えっ、悠元君!?」

「少し飛びますので、しっかり掴まっていてください」

そう言って、悠元は自身の脚力だけで飛び上がると、魔法による方向転換と簡易的な足場を駆使して飛来してくる手裏剣や苦無を難なく躱している。別に一人だけならば著名な忍者漫画のように風圧で弾き飛ばすことも考えたが、今回は怜美がいるので避ける方向に転換した。そして、正門目がけて悠元は怜美を担いだまま足にサイオンを収束させる。

「断ち切れ――――『青龍嵐脚(せいりゅうらんきゃく)』」

悠元が間髪入れずに新陰流剣武術の奥義『青龍嵐脚』を叩き込んだところ、人除けの結界を張っていたと思しき数人の術者が技の衝撃波で派手に吹き飛ぶ。その一連の行動で結界が晴れると、二人はいつの間にか延暦寺の境内の中におり、周囲には武器を構える修行増（九重寺での鍛錬もあってか、僧兵という言い方がしっくりくる気もするが）がいた。悠元は怜美を地面に降ろすと、躊躇うことなく『叢雲』を発現させた上で呟く。

「武器を構えているということは、その気だと解釈していいんだな？
――来い、『白虎（びゃっこ）』」
そう呟いた直後、悠元の持つ『叢雲』を起点として迸る黄金色の雷光。悠元から感じられる尋常ならざる覇気（この場合は〝霊気〟とも表現できるが）に武器を構える門下生もたじろぎ、悠元の傍に居る怜美はその力に身動きが取れずにいた。
何かのきっかけでいつ戦いが始まっても不思議ではない……その緊張を破ったのは境内に響かせるように聞こえてきた声であった。
「――そこまでだ。武器を収めよ」
その声に門下生らが境内の奥を見つめるが、そこには誰もいない。怜美もそちらを見ているようだが、悠元は直ぐに声を発した人物が正門の前に立っていることに気付き、『白虎』と『叢雲』を解除した上で振り向いて頭を下げる。
「お久しぶりです、住職殿。此度の訪問は何時になく過激な対応かとお見受けいたします」
「安宿殿に長野殿。いえ、今は神楽坂殿でしたな。どこの生臭坊主に似てしまったのか、血気が盛んな弟子が面倒をお掛けしました」
悠元とその人物こと延暦寺の住職――天台座主（てんだいざす）の姿を見た部下たちが武器を捨てて慌てて平伏する。だが、住職はそんな彼らに対して冷ややかというよりも凍てつくような視線を見せていた。
「直ちに下がりなさい。それと、客人をもてなす準備を恙無く執り行いなさい」
まるで怖いものでも見たかのような逃げ足に近い足取りで去っていく門下生たち。その姿が見えなくなったところで住職は改めて悠元に頭を下げた。
「今代の神楽坂である千姫殿より話は伺っております。拙僧も妙な雰囲気を京の都から感じておりましたが……立ち話もなんですから、どうぞこちらへ」
住職の招きで案内されたのは東塔（とうどう）の一角にある大書院――昭和天皇がの即位にあわせ東京の村井吉兵衛（むらいきちべえ）の邸宅の一部を移築したもので、迎賓館として使用されている――に招かれた。座る姿勢は好

きにして構わないとのことだったので、悠元は遠慮なく胡坐をかいた。これには住職も思わず笑みを零した。
程なく茶菓子でもてなしを受けつつも悠元から口を開いた。
「訪問の理由は大陸の関係者――――方術士である周公瑾と名乗る人物が京都に潜伏している件で出向いたのですが……あの手荒な歓迎はそれに関連してのものでしょうか？」
「是と答えるべきでしょう。最近、『伝統派』で過激な部類の鞍馬山に住まう者たちが度々我らの領域に踏み込んでおりましてな」
元々真っ当な古式魔法師の派閥と『伝統派』は対立の構図にある。彼らとて一大勢力である比叡山の領域に踏み込んでくる愚かな真似はしてこないと思っていたが、どうやらその考えは甘かったようだ。
「こちらの情報では、周公瑾の招きで九島家に来ていた大陸の方術士が合流したと聞き及んでいます。ですが、ここで派手に事を起こせば……」
「彼に逃げる隙を与えるということですな。分かりました、弟子らにはきつく言い含めておきましょう。先程の神楽坂殿を殺しかねなかった件も含めて」
神楽坂の名を名乗るということは、それに見合うだけの技能を会得しているという証左でもある――――ということは千姫から聞いていたが、住職から感じる凍り付くような怒りを見るに、神楽坂の名は自分が思っていたよりも重いと実感していた。
「ところで住職殿、今回の主導をしたのが前回私の寝床を襲撃した仏僧の可能性は？」
「……有り得なくもないでしょうな。罰に関しては厳しくするので、どうか取り潰しだけはご勘弁を」
「いや、私がいくら神楽坂の当主代行と言っても、一時の感情で叡山は潰せませんよ」
前回の襲撃の件では、剛三が本気でキレて危うく延暦寺どころか比叡山が跡形もなく消え失せるところだったのを何とか諌めたのだ。その剛三と同等クラスの千姫に今回の襲撃を伝えようものなら、翌朝には延暦寺が忽然と姿を消しかねない。

大体、その時相手を全身複雑骨折のレベルにまで追い込んだのは自分だ。確実に過剰防衛で訴えられても文句は言えないだけに、今回の襲撃というか力試しについては水に流すつもりでいる。
「結界を破る際に門下生数人を吹き飛ばしてしまったので、彼らに詫びを入れねばならない立場ですから」
「そうですか……彼らに関しては、拙僧も含めて厳しく律しましょう。八雲のナマグサにも困ったものです」
悠元と住職が会話をしている間、怜美は一言も喋ることが出来なかった。いくら『九頭龍』の家の人間とは言っても、当事者間の話に口を挟むのは野暮だと感じて大人しく茶菓子に手を伸ばしていた。怜美がようやく口を開いたのは延暦寺を出て京都市街地に戻る途中で悠元から話しかけられてからだった。

避けても迫ってくる面倒事

比叡山延暦寺での話し合いは穏便に終わった。明らかに命まで狙う様な力試しと怜美は思っていたようで、市街地に向かう電車の中で呟いた。

「全く、いきなり手裏剣とか……仏僧が忍者の真似事でもしているのかと思ったわ」

「言われれば確かに」

そう言われると、確かにその通りなのだろう。天台宗となれば密教絡みの魔法はあるが、古式魔法の主体となるのは僧兵などの直接戦闘系魔法のイメージが根強い。だが、精神干渉系の魔法は密教でかなりの規模を誇る宗教になると顕著で、中世（主に室町時代から江戸時代初期）では宗教そのものが一つの勢力として成っていた頃に忍術の原型となるものが生まれたらしい。

鞍馬山にいる『伝統派』が叡山にちょっかいを掛けているのは、彼らのルーツの中に叡山から破門された仏僧や僧兵が含まれているためだ。住職は公言こそしなかったものの、以前剛三からその辺の事情をかいつまんで教えてもらったことがある。

「ただ、あれらは全て忍術による幻術ですね。人除けの結界に合わせる形でこちらを誘導するかのように放たれたものです」

「……凄いわね、悠元君は。私でも流石に危険を覚えちゃったもの」

この辺は八雲による試しを受けていた経験ですぐに見破ることが出来た。相手の意図も察していたため、敢えて乗る形で怜美を抱えて境内の中に足を踏み入れた。

正直なところ、いくら八雲が部下であっても絶対に感謝なんてしたくないのが本音だが。それを言ったところで確実に付け上がるのが目に見えている。

「この後はどうするの？」

「神楽坂の人間として賀茂御祖神社（かもおみやじんじゃ）と晴明神社（せいめいじんじゃ）は顔を出すべきでしょうね。可能であれば『伝統派』の情報にも探りを入れる方向で。その辺は怜美さんにお願いします」

「そうね。悠元君の愛人としてちゃんと認めてもらわないといけないもの」
「……」
悠元としては、先程のこともある上に『九頭龍』の一角を担う以上はこの地域を担っている安宿家の人間として交渉役に立ってほしいというものだったが、怜美はすっかりやる気になっていた。
明後日には達也らが一時合流することになるため、それまでに何とか帳尻を合わせられるような言い分を考える必要があることに内心で溜息を吐きたくなるような気分だった。
◇　◇　◇
先に述べた二つの神社に加え、北野天満宮（きたのてんまんぐう）、八坂神社（やさかじんじゃ）、清水寺（きよみずでら）、東西の本願寺（ほんがんじ）、天龍寺（てんりゅうじ）といった京都の主要な寺社を訪れた後、そのまま嵐山にある神楽坂系列の旅館に泊まることとなった。
その場所は先日周公瑾と名倉の戦闘があった場所に近いが、流石の周公瑾でもこの近くに潜伏している可能性は極めて低い。自身の『天神の眼（オシリス・サイト）』でも反応しなかったところを見るに、この近辺に周公瑾はいないと断言できる。
前回もそうなのだが、ここの旅館は神楽坂家の関係者やＶＩＰクラスの要人が利用できる〝離れ〟が存在しており、下手すると一泊で数十万円が飛んでいても不思議ではない部屋に通された。
ただ、今回は悠元の他に怜美がおり、そういう流れになる可能性が捨てきれない。流石の自分でも思春期の男子に見られる性欲の強さには勝てない。明らかにハニートラップの類となれば容赦しないが、千姫から認められているものを邪険にする勇気など持ち合わせていなかった。
「悠元君はどうするの？」
「食事の時間まで軽く眠りますよ。流石に考えたいこともあるので」
「分かったわ。時間が来たら起こすわ」
「助かります」
怜美は浴衣を持ってその場を去ったので、恐らく温泉に向かったのだろう。この近辺に『伝統派』が潜んで監視している線は否めないが、

一応監視対策として四霊の一角である『鳳凰』を敷せておく。
式神の布陣も終わったところで、悠元は座布団を枕代わりにして畳の上に寝転んだ。
（しかし、神楽坂の名は思った以上だったな。まあ、安倍氏と賀茂氏の血縁を継いでいる以上、分からなくもない話だが……）
安倍氏や賀茂氏の系譜は、著名なところで言えば安倍氏系列だと土御門家や倉橋家に幸徳井家、賀茂氏系列だと勘解由小路家や備前鴨氏が該当する。安倍晴明の血縁は女系を通じて皇族にも継がれており、護人の二家と現皇族は遠い縁戚関係を持つことを意味する。安倍晴明という存在が一種の護符と言っても過言ではないだろう。
神楽坂家の場合、安倍晴明の娘と賀茂忠行の孫が初代当主として記されており、主体は賀茂氏の趣が強い。ただ、武士の台頭による内乱や陰陽道宗家の争いによる家の衰退を避けるべく、皇族と各地の寺社を結ぶ伝奏として天神魔法も含めて裏に徹したことで魔法技術を衰えさせることなく鎌倉・室町の武士による乱世を無事に生き延びた。
その後、江戸時代に武術の御役目を担うこととなった上泉家に目を付け、未だに陰陽道絡みで争いを続けていた安倍氏・賀茂氏系列の他家と一時的に袂を分かち、同じ天神魔法を伝承している上泉家に当時の神楽坂家当主の娘を嫁がせることで天神魔法の表側を担ってもらうことを正式に認めたのだ。これが、現在に続く『護人』の原型と言っても過言ではない。
自分に流れる血の半分は十師族――――作られた魔法師の系譜であるとはいえ、上泉家と神楽坂家の血が流れていることも事実であると実感させられてしまった。晴明神社や賀茂御祖神社では九校戦での活躍もあり、今代の神職からは「あの奇跡はまるで安倍晴明の再来とも言うべき所業です」とも言われた。
正直なところ、彼がやっていたことを再現しようと思えばできるかもしれないが、変に他の古式魔法師から要らぬ恨みなど買いたくはない。現に百家の一つである十六夜家からよく思われていないことも把握している。

あの家の現当主の弟は『元老院』の指示を受けて行動しているようだが、優れた魔法師であることに誇りを持っている。そんなプライドを傷つけられたぐらいで敵意を向けるのならば、その人物の器も大したことはないと思いたくなる。

（プライド一つで解決できるなんて、世界はそう単純に出来ちゃいない）

既存の利益構造に穴を開けられるような存在に対する恐怖感を理解できたとしても、それに妬みや恨みを抱くのは自身に利を守れるだけの力が無いと証明したようなものだ。

大体、こちらは敵対する気などないのに、向こうが勝手に危機感を覚えて自爆しただけだ。それを「向こうが悪い」という身勝手な理由で敵意を向けた以上、相応の態度を以て対応するだけだが。

そこまで考えたところで、静かに息を整えてからひと眠りすることとした。

そろそろ夕食の時間だろうと深い眠りから意識が目覚めつつある悠元は自分の後頭部が座布団とは違う感触であることに気付く。存在を探るとそれは怜美と異なる人物だと気付き、瞼を開けた悠元の視界に飛び込んできたのは、第三高校の制服を身に纏っている自分の婚約者の一人――四十九院沓子（つくしいんとうこ）の姿であった。

「目が覚めたのか、悠元。気分はどうじゃ？」

「悪い気はしない。ただ、合流は早くても明日の夕方だと思っていたんだが」

いくら沓子の実家が『九頭龍』の一つとはいえ、沓子はれっきとした高校生。それを言ったら自分も含まれるのだが、大体三高の校長がすんなり公欠を出したことに疑問を浮かべていると、沓子が説明してくれた。

「わしも最初はそう思ったのじゃが、昨年はあんなことがあったからの。一条の倅が週末に調査へ出向くとは言え、一人で立ち回るにも限界があろう？　なので、吉祥寺に加えて愛梨や栞も京都に来ることとなっておる」

恐らく、沓子の公欠手続きを要請したのは間違いなく千姫か剛三の

どちらか以外に考えられないだろう。両方という線も捨てきれないが。
横浜事変の影響を鑑みて、不測の事態に陥らせないための準備をするという沓子の言い分は分かる。ただ、コンペの発表メンバーに据えられているであろう真紅郎まで調査に加わるのは些かオーバーワークではないか、と思ってしまう。
「そういや、怜美さんは？」
「丁度飲み物を買いに行っておる。わしが行くと言ったのじゃが、愛人と婚約者では立場が違うなどと言っておっての……また増えたんじゃな」
「好き好んで増やしたわけじゃない」
「じゃろうな。悠元は面倒事を一番嫌うからの」
その真紅郎が動いたのは将輝に関わる理由が大きいと話す。将輝が三高で一番の実力者なのには違いなく、同年代の十師族直系においてはトップクラスの実力と実績を有する。それでもなお真紅郎が心配しているのは、将輝が過剰な行動に走らないかという友人としての心配からくるものだった。
それは置いといて、自分が眠っている間に怜美と話したようで、ジト目で沓子から見つめられることに対して悠元は正直な本音を漏らすと、沓子は納得したように呟いた。
「てか、流石に重くないか？」
「気にするでない。わしは他の婚約者と違って頻繁に会えぬから、これぐらいはさせてくれぬとわしが拗ねるぞ」
「……複雑だな」
沓子には、今日の行動の内容をかいつまんで説明した。叡山での出来事はこちらが許した以上、当事者への罰は叡山の匙加減に任せることも含めているところまで説明すると、沓子は一つ溜息を吐いた。
「全く、お主は強いの。惚れ直してしまうではないか」
「そういうものなのか？」
「そういうものじゃよ」
そんな他愛もない話をしているところに怜美が戻ってきたため、悠

元は沓子に礼を言いつつ起き上がった。沓子は少し寂しそうな表情を見せていたが、この反動が後で返ってくることなど読めていた。『予測可能回避不可能』という言葉を作った奴は実に天才だと思う。

ともあれ、今後のことについて予め話しておくこととした。

「沓子は知ってることだし、怜美さんはどの道知ることになる話ですが……達也は今四葉家の依頼で周公瑾の捕縛に動いています」

「周公瑾……昨年の時も彼が動いていた形跡はあったけれど。でも、達也君がどうして四葉家の依頼で動いているの？」

「簡単ですよ。彼の母親は深夜さんで、つまるところ達也は四葉家現当主こと四葉真夜の甥です」

いくら『九頭龍』でも完璧に見破られないほどに四葉の情報隠蔽能力は優秀な部類である。あの八雲ですら、千姫から内密に情報開示を受けて達也と深雪の素性を把握するに至るほどだ。元々人道的に憚られる実験を繰り返していた元第四研を引き継いだだけはある。

「十文字家や六塚家、一条家は次代を担う優秀な魔法師がいますから、四葉もそろそろ次代の指名をしてもおかしくないでしょう」

「……そうなると、深雪嬢は除外されるの。悠元の婚約序列第一位なのじゃから」

十文字家は現当主を治療したことで次代継承を急く必要が無くなったものの、十文字現当主の和樹は来年の師族会議で克人に当主の椅子を譲り渡したいという思いがあったことは治療した時に聞き及んでいる。克人は既に当主代行としての実績を積み重ねているため、経験という点では申し分ないし学業の点で言っても問題はない。それに、師族会議で既に何度も立ち会っている以上は問題ないと踏んでいるのだろう。

和樹の治療は元々克人のためというより対七草家を睨んでのものだが、和樹からすれば引き取ることになった理璃の教育も睨んで当主の座を克人に継がせるとみられる。それと、十山家の一件で同じ第十研の立場としての責任を取る意味に加え、水面下で進んでいる婚約関係の話も含めての引退。

その婚約なのだが、和樹は元に克人の婚約者として美嘉を迎えたい

と相談していた。先日三矢家に詩奈と侍郎の武術指導という形で訪問した際、元との会話で判明した。学年が一つしか変わらない上、既に美嘉へ話を通しているとのことだった。

美嘉自身も婚約には前向きだが、ここで問題になってくるのが悠元の魔法技術に関する問題だ。何せ、三矢家の７人兄弟姉妹の中で悠元の影響力を強く受けているのが佳奈、美嘉、そして詩奈の３人。詩奈は侍郎との婚約を矢車本家の協力を得る形で進めているので問題ないし、佳奈はというと達也の婚約者として嫁がせるのが現状の最有力候補に浮上している。血縁上だと悠元と深雪が婚約を結んでいるがあくまでも神楽坂家としてのものなので、三矢家として四葉家に嫁を世話する形で佳奈を送り出すのが魔法技術を秘匿する意味でも理に適っていると元は判断した。

ただ、美嘉の場合は悠元に関する諍いもあってそこをどうするべきか悩んでいたらしく、当事者として問題ないかを確認されたので「美嘉姉さんの幸せを優先してあげてください」と返しておいた。

魔法師としての基礎能力を向上させる鍛錬法は別に部外秘と自分が定めていたわけではなく、元が自分の子らに危害が加えられないようにするための箝口だ。その方法を編み出した側に配慮するのは一応頷いたが、ＣＡＤ頼りの現代魔法師に肌が合わないことには変わりない。正確に言えば瞬間的な瞬発力が求められる現代魔法とそりが合わないとも言うが。

ただ、自分の鍛錬法を通して『ファランクス』による継続・断続的な魔法発動を求められる十文字家が相対的に強化されれば、もう一つの秘術である『オーバークロック』に一切頼る必要性がほぼ皆無となって十文字家自体の延命にも繋がる。それが結果的に三矢と十文字の結びつきを強化できる形になれば、多少のコストを支払うだけの価値があると思っている。

それに、今後この鍛錬法は世に出すことを考えているため、特に痛手にもなっていない。

閑話休題。

「話を戻すが、その絡みで叡山と話は付けてきた。大陸の方術士は捕

縛するか討伐することになるが、京都の『伝統派』は論文コンペが終わり次第こちら側に引き込む」
「引き込むって……過激なところの扱いはどうするの？」
「奈良に比べれば、まだ話が出来ると思っています」
　これは延暦寺での会談の際、天台座主から頼まれた案件も含まれている。鞍馬山の『伝統派』に逃れた元同門の仏僧を連れ戻したいという内容だ。
　鞍馬山の忍びは、かつて九郎判官こと源義経に戦う術の一端を盗まれた陰陽師鬼一法眼が編み出した忍術『天狗術』（魔法史研究では定説とされていて、最初に提唱した学者は新陰流剣武術の門下生だった）を使いこなすらしい。悠元の知り合いで『天狗術』に長けている人物もいるが、今は置いておく。
　彼らの正統派に該当する鞍馬寺に一度訪れる必要はあるが、「九」の家によって乱された京都の治安を回復することで奈良の『伝統派』に対する力を削ぎ、九島家に対しての意趣返しとする。『聖域』が京都に復活すれば、その意味を『伝統派』と言えども無視できる話ではなくなり、神楽坂家の提案を断れなくなる――というのが千姫の出した結論だった。
「延暦寺の住職の言い分も理解できますからね。既に母上が手紙で正統派の方々に根回しをしているようで」
　実は、京都を訪れる前に『伝統派』の潜伏拠点を原作知識から思い出しつつ、鞍馬山の忍びに関する情報を集めていた。他の古式魔法師に関しても油断はできないが、とりわけ鬼一法眼が編み出した古流剣術京八流の原点を知りたいという知的欲求からくるものだった。
　その流れで『伝統派』に関する部分も情報を集めたわけだが、結論から言えばこれらの忍びも俗に言う〝抜け忍〟という事実が判明した。
　彼らの大本を辿ると、元々は源義経に武術を教えた山伏（創作上では天狗という言われ方をされることもある）が義経の逃亡を助ける形で奥州（現在の東北地方）にまで同行。その影響で鎌倉幕府に嫌われ、室町幕府でチャンスをつかんだものの、重用してくれた人物の一

族が賊滅して武功が消し去られた。その後、丹波(たんば)の山に逃げ延びて頼れる主を得ることができなかった。

歴史における忍者という括りでは伊賀(いが)や甲賀(こうが)、風魔(ふうま)などといった者たちもいるが、以前八雲が口にしていた忍術使いという意味では、彼らは身体技術が優れた忍者に歴史の流れから追いやられてしまった悲運な存在だろう。

そんな彼らに手を差し伸べたのは神楽坂家だ。皇族の守りに就く以上、内外を問わず周辺の情報収集をするのには単独だけで限界があった。加えて先に述べた忍者への対抗手段を得るため、当時の神楽坂家当主が一族郎党まとめて召し抱えた。

神楽坂家が第二次大戦後、連合軍に対する信頼を訝しんだ上泉家の要請を受ける形で本拠地を箱根に移した際、神楽坂お抱えの忍びたちは愛宕山(あたごやま)に京の守護として置かれている。その彼らの中で世の中へ出たいという欲求に加えて修行に不満を持った人間が逃げ出してかつて祖先がいた鞍馬山に拠点を置いたらしい。

世の中に出たいというのであれば、人様に迷惑を掛けない方法で穏便に進める方法が無かったのかと切に問いたい。

嵐を諫めるための先手

「のう、悠元。この近辺は大丈夫なのか？」
　そう訝しんだのは沓子だった。彼女は四十九院家でも優れた力を有しており、とりわけ〝予知〟に近い彼女の勘は世迷言と切り捨てられない要素だ。悠元はそれを聞きつつもテーブルに電子ペーパーを広げて京都市街地の地図を表示させる。
「この離れに『鳳凰』で周囲を監視させているが、隙があれば予め潰すのもアリか……その場合、怜美さんは留守をお願いします」
「それが妥当そうね。でも、私を狙ってくる可能性もありそうだけれど」
「なら、これを渡しておきます」
　悠元が怜美に渡したのは一枚のお札。外見上は魔よけのお札のようなものだが、実際は緊急脱出用の代物だ。使い捨てではあるが、お札にサイオンを込めることで接触型に魔改造した『鏡の扉（ミラーゲート）』が発動して、悠元の近辺に転送される仕組みだ。
　セキュリティを考慮して二枚一組となっていて、もう一枚のお札は悠元が持っている。
「疑似的な瞬間移動の魔法とは。世界がこぞって欲しがりそうだの」
「絶対軍事利用に悪用されかねないから、漏れた場合は容赦なく口封じするけど」
「……今更ながら、先に婚約者となった人たちが強く感じちゃうわね」
　軍事利用そのものを悪だと断じる気はないが、今の国防軍は派閥の関係もあって下手に口を出したくない。それに、周公瑾が潜伏先に選んだ場所も国防軍の基地という原作知識がある以上、全面的に信頼するための要素が欠けている。
　自分が国防陸軍の特務少将という身分でありながら国防軍を批判するのは如何な事かと思うだろうが、過ぎた力は人を酔わせ、時には国家にとっての劇薬と化してしまう。戦争に負けないための力は必要だが、勝ちすぎてしまうのも厄介な問題を招く。
　例えば、大亜連合に対する積極侵攻を主張する派閥と宥和を主張す

る派閥があること自体に問題はないが、それが国防軍という国家の守りを主とした公僕の軍人に許されていることが問題だ。
それに、大亜連合がある大陸国家は何かとこの国との因縁を抱えている上、朝貢外交絡みや倭寇などといった歴史的背景からしてこの国を下に見る気質が根付いてしまっている。
そんな国を軍事力で制圧したところで戦後支払うことになる投資を回収できる見込みなど無いに等しくなるし、寧ろ新ソ連と国境を接することで軍事費がかなり跳ね上がりかねない。いくら優れた魔法があろうとも、そのアドバンテージは新ソ連側とて同じであり、完全な鼬ごっこの様相を呈するだろう。
「話を戻すけど、『聖天八極護法式陣』を京都市全域をカバーできる形で張り巡らせる。石清水八幡宮と比叡山に起点となる札と布石は渡したから、明日は観光という形で清水寺に訪れるつもりだ」
いくら大掛かりな仕掛けを使わずに結界魔法を使えるようになったとしても、それを長期間維持させるためにはこの地の龍脈と調和させるのが必須で、その触媒として札と護石となる水晶を伏せておく必要があった。
石清水八幡宮へは名倉と周公瑾が会う前に訪れており、京都に来て最初に比叡山を訪れたのは南北のラインを構築するためでもあった。この二つは奇しくもかつてあった京から見て陰陽道的に鬼門（北東側・比叡山延暦寺）と裏鬼門（南西側・石清水八幡宮）に丁度合致しており、そこに護法陣の基点を置くのは理に適った結果とも言える。
「天台座主に渡していたお札と水晶はその為なのね」
「発動基点となる場所も恩恵を受けますから、強力な護符としても立派な抑止力になります」
「そうなると残るは東西のラインじゃが、西は嵐山として、東はどこに置くつもりじゃ？」
「稲荷山が妥当だと思ってる。嵐山には夕食が終わったら出向くつもりだよ」
嵐山に潜伏している『伝統派』の一派がいる以上、視認しやすい昼に行くのが本当は望ましいが、敵性勢力と仮定できる相手ならば加減

を変に考える必要もなくなるし、夜ならば闇夜に紛れさせることで誤魔化しも効く。
　すると、ここで沓子が真剣な表情をして悠元を見やった。
「悠元、わしも連れて行ってくれ」
「……先程の話で半ば認めたようなものだから、同行は許可する。但し、無茶は絶対にするな。それが約束できないと今後はこういったことに連れて行かない」
「分かっておる。わしとて天神魔法は修得途中の身でもあるしの。流石に深雪嬢のようには出来ぬのじゃ」
　婚約序列に夕歌と沓子が加わった際、二人にも想子制御の訓練法と天神魔法を教えている。結果として二人の魔法師としての実力はかなり上がったわけだが、その反動で自分に対する好意の評価も天井知らずの状態になってしまった。
　夕歌は今年護衛をしていたガーディアンが亡くなった影響からか、週に1回のペースで司波家へ遊びに来ていた（悠元の姉である詩鶴と親友関係のため、それに託けて来訪することが多い）。深雪と友好的な関係を築いているためか、夕歌が悠元の部屋で寝泊まりすることに文句は出なかった。その分、深雪に甘えられるということが起きているのは言うまでもないが。
　魔法師としての実力は深雪の次点とも言えるのだが、当の夕歌本人は「次期当主になったりしたら悠元君の妻になれないもの」と言いのけているあたり、四葉の次期当主の椅子は夕歌にとってもはや無用の長物となってしまった。
　話を戻すが、沓子はそう述べたものの、元々古式魔法の家系に生まれているためか洗練の具合は群を抜いて高いと感じている。そもそも、深雪も達也とは比較にならないが実戦経験をこなしている身。家としてのスタンスが違う以上、戦いに対する覚悟の違いが出たとしても仕方が無いだろう。
　結果、悠元と沓子が出向くことになり、怜美は宿で留守をすることになった。
◇　◇　◇

札と水晶を埋め込む最適な場所として選ばれたのは奇しくも『伝統派』のアジトの一つ。達也の場合は古式魔法にそこまで詳しくないため、敢えて踏み込むことで敵を制圧した。だが、『天神の眼（オシリス・サイト）』のこともあって視認する必要性などこちらには皆無だった。

「さて、手っ取り早く済ませるか」

そう呟いた上で悠元は地面に手を置き、その刹那、発動した魔法による人間の悲鳴が町村の集会所のような建物の中から聞こえてきた。これには沓子ですら苦笑を零す様な口調になっていた。

「容赦ないの。というか、情報を引き出さなくてよいのか？」

「俺が情報を引き出す場合、相手の生死は一切関係ないからな……怖いか？」

「否定はせぬが、寧ろ頼もしく思えてくるの」

ともあれ、悠元は建物の鍵をあくまでも〝合理的〟に解錠して中に入る。建物の中には十数人の人間が気絶しており、数時間も経てば目を覚ますだろう。悠元は虱潰しに彼らの手に触れて情報を読み取っていく。

その中のリーダーらしき人物が周公瑾に関する情報を持っていたところで悠元は情報の読み取りを止め、建物の板を一部壊した上で地面の中に埋める形でお札と水晶を埋め込み、「ワルキューレ」を取り出して『再成』で壊れた板を完全に修復した。

その間も沓子は悠元の様子を真剣に観察していた。建物に入る前に悠元が使った金属性の天神魔法『千鳥（ちどり）』も含めて学ぼうとしているようだ。

「全く、お主に援護は必要なかったの」

「今回は上手く行っただけだし、俺の婚約者となることはこういうことも平気でやらないといけなくなるからな。さて、帰るぞ」

「うむ」

下手にアジトを潰せば、周公瑾がそれに気付いて潜伏先を変更することも想定される。念のために『月読』で相手の魔法でやられたという記憶情報を消去し、『鏡の扉（ミラーゲート）』で沓子と一緒に宿へ直帰した。離れの玄関に降り立ってそのまま部屋に戻ると、怜美が出迎えてくれた。

「あら、早かったわね」
「うむ。悠元が強すぎてわしの出番が無かったわ」
「別に『伝統派』全部に喧嘩を売る腹積もりではありませんでしたので。そしたら、ひと汗かいたので風呂にでも行ってきますよ」
覚悟はしていたとしても、心の準備ぐらいはしたい。
怜美の浴衣姿を見て、どこか諦めたような心境を抱いたのは何故だろうかと思う。
◇　◇　◇
その後、一人でのんびりしたかった悠元の気持ちとは裏腹に、沓子と怜美が揃って浴場に突撃してくる羽目となった挙句、その場の雰囲気に流されてしまった。咄嗟に一線を超えないための術を掛けたので大事には至らなかったものの、部屋に戻ってからも男女の交わりは続いてしまった。
それでも、日頃の習慣のせいで朝早くに目が覚めてしまったのは言うまでもないが。
「……精神だけは無駄に歳を食ったが、なんでだろうな」
神楽坂家の人間として次代を残すことも使命の一つだということは分かる。それでも、前世でこういう経験が一切なかった反動が今世の性欲に反映されてしまったのだろう。しかも、複数人の女性に手を出していても、その対象同士で話が付いている始末。
昼ドラのような修羅場は御免被りたいが、これはこれで逆に怖いと思ってしまう。姫梨からは「平日をほぼ毎日相手にしている深雪さんが異常ですよ」とまで言われてしまう始末。雫からも「寧ろ深雪からの求愛を凌いだ上で屈服させてる悠元は本物のジゴロ」と言われ、セリアからは「絶倫お兄ちゃんが相手なら、私は奴隷になるのも吝かじゃない」と言われた際は反射的にバックブリーカーを掛けた。
「ん……早いの、悠元」
「悪いな沓子、起こしたか？」
「問題はないの。しかし……お主と関わると、心の奥まで従属してしまいそうになってしまうの」

あくまでも対等であるべきという俺の考えとは裏腹に、婚約者らは自分の言いなりでも構わないと思っている節がある。流石に自分の妻となる相手を奴隷のように扱ったりなど出来るはずがないため、以前達也に深雪絡みで相談したことがある。

返ってきた言葉は悠元への謝罪しかなかった。暗に「諦めろ」ということなのだろう。

「従属は止めてくれ。昼ドラみたいな展開も御免だが」

「悠元の言い分は分かるのじゃが、あれだけ愛されると全てを受け入れたくなってしまうのじゃ」

「沓子からもそんな言葉を聞くことになろうとはな」

愛人はともかくとして、婚約者自体に序列という区切りは存在していても待遇に差をつけるつもりなどない……今後を考えれば、一部の人間に対して設けられる可能性は高いが。

それが結果的に婚前交渉のラインを踏み越えてしまっているわけだが、千姫だけでなく剛三も認めているし、更には四葉家（真夜）と北山家（潮と紅音）、伊勢家と津久葉家の現当主に加えて九島健からも婚前交渉を容認するかのような文言などがあった。

「ほう、そのようなことを他の婚約者から……深雪嬢かの？」

「正解だよ。てか、こういう時にここにいない女性の名を出すのはどうかと思うが」

「今のはわしから言い出したことだから問題は無かろうて」

それは置いといて、今回お札と水晶を埋め込んだ場所は論文コンペが終わり次第買収して神社を建立することを決めている。千姫に『聖域』も含めて報告したところ、俺が宿泊している神楽坂系列の宿からも『伝統派』のアジトがあることを懸念する声が大きかったため、京都の『伝統派』を取り込むドサクサのついでにやってしまおうというものだった。

建立に掛かる費用は全て神楽坂家というか自分の資産から拠出することに決まり、建築自体は上泉家お抱えの宮大工が関わることになる。資金拠出の関係で神社の命名権が俺に投げられたのは癪だったが、護人――――安倍晴明の名で嵐山を鎮める意味も込めて

神泉晴嵐天満宮（かみいずみせいらんてんまんぐう）の案を千姫に投げたところ、そのまま通った。
神職などについては、現状だと千姫の管轄になるので事細かく干渉する気はない。それが間接的に自分の手が入ったものだとしてもだ。

◇　◇　◇

１０月１９日、金曜日。朝早くに出かけて東側の敷設場所となる稲荷山の布陣も終わり、そのまま京都観光したいという気分も抑えて、悠元は沓子を伴って鞍馬寺に赴いていた。怜美は実家である安宿家に昨日のことも含めた報告をすると言って別行動をしている。
流石に延暦寺のような荒っぽい歓迎こそなかったものの、ここに来るまでに遠くからの監視を受けていた。それは鞍馬寺の人間ではなく、どちらかと言えば周公瑾によく似たタイプ――大陸系の方術だとすぐに理解した。
「悠元、さっきからやけにこちらを見張っておる者がいるようだが……どうするのじゃ？」
「向こうが手を出すなら対処するが、今の状況でこちらから過剰防衛するわけにもいかんだろう」
いくら大陸の方術士と言えども、正統派の拠点を間近にして仕掛けるという愚行をすれば、それこそ鞍馬寺を怒らせる事態になりかねない。七福神の一角たる毘沙門天（びしゃもんてん）を祀り、平安時代には著名の女流作家らが訪れ、室町・安土桃山時代には戦勝祈願のために訪れられた霊山。古くは鑑真（がんじん）の高弟が鞍馬山を訪れた際に鬼に襲われ、毘沙門天に救われた逸話――その際に結ばれた草庵が鞍馬寺の発祥の原点とも言える。
『伝統派』の一派がその霊山を拠点にするのは、かつての〝鞍馬天狗〟に準えてのものだろうが、その場所に身を置いただけで何も大成しないのは彼らとて分かり切っている現実だ。
「血筋だけで優れた魔法が使えるのなら、それこそ一流のアスリートやアーティストに通用しない道理が無いだろう。大体、古式魔法を現代魔法に落とし込む段階で敷居が下がると甘く見ている時点で甘すぎるわ」
魔法の資質自体に個人差が生じるのは仕方無いにせよ、現代魔法の

在り方を定義づけてしまったのは他でもない旧合衆国もといＵＳＮＡだ。大体、魔法による空中の物体移動だけでも複数系統・複数工程を要求されている時点で非効率的すぎるし、手で直接移動させた方が手っ取り早い。
　核反応抑止という意味合いで物理法則の改変範囲を狭めているのは致し方ないにせよ、持続力を要求される古式魔法の使い手からすれば、現代魔法を軽視したり侮蔑したりするのは一種の妬みや僻みも含んでいる。
　何せ、今の世界において政府や軍が確保するのに向いているだけでなく、現代魔法師は古式魔法師に比べて〝制御しやすい〟側面もある。そういう風に魔法使いを道具のように見られたくなく反発したり公言することも起こっている。
　結局のところ、国家の欲望が積もりに積もって古式魔法師の立場や印象を悪くしているのは施政者の責任だが、積極的に干渉する気もない。せめて手を下す前に自浄作用が働いてほしいと願いたい。
「悠元が言いたいことは分かるのじゃが、魔法師が炎を出したりする方がよっぽど危ないと思うぞ？」
「魔法師は公僕というわけでもないからな。沓子の言い分も理解しているさ」
　軍人魔法師として身を置いている古式魔法師もいるが、魔法使いの家系は非魔法師と同じように一般企業へ就職している者が多く、魔法因子保有者全てが魔法の才能を発揮できる環境下にない。
　そもそもの話、昨年の魔法科高校卒業生のうち半数未満が魔法大学や防衛大以外の進学・就職に進んでいる。個々の魔法を生かせる進学・就職先が欠けているのもあるが、それに対する努力を学校側が怠っているのも事実だ。
　そういった環境が積もり積もって今の魔法師社会の秩序が崩れないという保守的な考えもあるが、逆に魔法による犯罪者を生み出す遠因にもなってしまっている。
「っと、どうやら住職殿直々にお出迎えのようだ。沓子も頼むぞ」
「やれやれ……母上の代理も兼ねるとはいえ、大変な事じゃの」

鞍馬寺の正門で二人を出迎えるように立っていたのは寺の住職で、その後ろには袈裟を纏った数人の高僧が両手を合わせて頭を下げていた。事前に連絡をしていたとはいえ、ここまでの出迎えになるとは思いもよらず、悠元は思わず苦笑を漏らした。

二人が階段を登り切って住職の前に立つと、悠元が先んじる形で声を発した。

「神楽坂家次期当主、神楽坂悠元と申します。態々お出迎えまでしていただき、感謝に堪えません」

「初めまして、四十九院沓子と申します」

「この鞍馬寺の住職にてございます。護国を担う神楽坂の方の来訪は5代ぶりのことですが、数多の御恩を受けている身として礼を尽くせと先々より伺っております。そして、加賀一之宮の御令嬢ですな。さて、大した御持て成しは出来ませぬが、どうぞこちらへ」

鞍馬寺の住職になるための修行は神楽坂家が担っており、箱根に移ってからは富士の樹海による修行を積むことで心頭を滅却して悟りを開くことに繋がると話していた。仏の悟りを開眼できるかはともかくとして、優れた魔法を使うには何事にも動じない精神が必要なため、ある意味理に適った練習法と言えよう。

清水の舞台から飛び降りる

鞍馬寺の応接の間らしき場所に通された悠元と沓子は出された茶菓子をゆっくりと味わっていた。すると、住職が少し汗を掻きつつも戻ってきた。

「お待たせして申し訳ありません、神楽坂殿に四十九院殿」

「こちらが言い出したことですので気にしておりませんが、大方門下生あたりでしょうか？」

「左様でございます。聞けば、神楽坂殿は伊勢神道流の奥伝、それと新陰流剣武術の師範と伺っておりますので」

成程、と悠元は住職の言葉で大方の事情を察した。

新陰流剣武術が形を成す過程で上泉信綱（かみいずみのぶつな）が京を訪れた際、天神魔法のみならず数多の術を学ぶ過程で『天狗術』と京八流の剣術まで学んでいたらしい。前世では陰流、神道流、念流を学んだとされる信綱だが、持ち前のセンスで京八流の免許皆伝目録を受けるほどに至るあたり、戦国時代における剣の達人は化物レベルばかりだ。

鞍馬寺は『天狗術』のみならず京八流の道場としての趣も持ち合わせており、上泉家と神楽坂家における武術と魔法の二本柱の礎とされている。自分はその意味で古式魔法と現代魔法の複合術式を使えるだけでなく、武術においても達人級の目録を剛三から認められている。

「それがどこからか漏れてしまいまして、神楽坂殿に手合わせしたいと血気盛んな門下生を抑えておりました」

「……なら、師範に至って日は浅い若輩者ですが、それでもよければ武術指導いたしましょう」

「悠元、大丈夫なのか？」

「流石に爺さんレベルがゴロゴロしているわけじゃないから問題はないと思う」

仮に剛三クラスの実力者がこの寺に複数人いるようならば、鞍馬山にいる『伝統派』など瞬殺レベルだろう。山に籠っている連中も鞍馬寺にいる実力者と差が拮抗しているために手を出せずにいる可能性

が高い。それに、一度寺を出たものの戻りたいが戻るに戻れないジレンマを抱えている者もいるかもしれない。
悠元の言葉に沓子は剛三の実力を知っているだけに苦笑を零し、住職に至っては申し訳ない気持ちが顔に出てしまっているほどだ。
「それに、京八流の剣術と『天狗術』に興味があるからな。後者は知り合いの軍人にその術を使う人がいるし」
「神楽坂殿、それはもしや〝大天狗〟と呼ばれるお方ですか？」
「ええ、国防陸軍少佐風間玄信（かざまはるのぶ）とは個人的な誼がありまして」
『天狗術』絡みで風間の名を出したところ、寺の住職は納得したような表情を見せていた。武術指導云々はともかくとして、まずは鞍馬寺の住職との話し合いに専念することとした。
「さて、今日赴いたのは鞍馬山にいる『伝統派』に関してです。昨日、延暦寺の住職殿から一度離れてしまった者たちを戻す機会を作りたいと申し出を受けまして」
「何と、叡山が……私どもとしても、力を求めて出て行った者たちを引き戻したい思いがありました」
複数の勢力が集って『伝統派』の一派を形成しているため、鞍馬寺単独で連れ戻そうにも比叡山から圧力が掛かることを懸念していた。奈良方面はともかくとして、まだ穏健に事を進めている京都方面なら元に戻せる可能性があることの証左とも言えよう。
「第二次大戦後、国外の連中に陛下を利用されるのを防ぐため、已む無くこの地を離れた我が家ですが、嵐山の地――『伝統派』の拠点を取り潰して、神楽坂家が天満宮を建立することで京の『聖域』を本格的に復活させます。その際、京都の『伝統派』に対して元の鞘へ納まるよう勧告を行います」
「真でございますか!? この地に『聖域』を……いえ、その表情からして世迷言ではないのでしょうな」
その一角に比叡山が含まれているが、京都北側の守護という意味で鞍馬寺の果たす意味は非常に大きくなる。責務を十全に果たすためにも、鞍馬山の解放は悲願とも言うべきだろう。
1世紀以上という長い時が過ぎても、京都・奈良方面における神楽

坂の名は未だに生き続けている。ならば、神社建立という大きなイベントで京の都に神楽坂の名を再び刻み込む。幸いともいうべきか、数年後には菅原道真（すがわらのみちざね）の千二百回忌という節目が控えており、その為に建立したという言い訳も十二分に立つ。

流石に雷神とも言われた人間を卑下する気はないし、前世では合格祈願で態々北野天満宮にまで足を運んでお参りした身として尊敬に値する人物だと思っている。

この世界における道真は、死後に反感を抱いていた藤原氏だけでなく、朝廷の要人までピンポイントで落雷死させたほどの器用さを誇っていたらしい。病死とされた藤原氏の人間も当時の記録からして〝心臓麻痺〟の可能性が高かった。そこで当時の神楽坂の人間が道真の霊を説き伏せ、何とか成仏したと神楽坂家の史記に残されていた。

話を戻すが、道真の鎮魂を目的として建立する神社である以上、それを妨害すればかつての藤原氏のような祟りに遭う――――下手をすれば、今度は『伝統派』全てが対象になりかねないと必要以上に危機感を抱くものも出てくるだろう。今回は京都方面にのみ対象を絞っているが、奈良方面にいる過激な『伝統派』ですら及び腰になるのは想像に難くない。

天神の伝承を今一度呼び起こさせることで、最終的に『伝統派』の自然消滅を促す――――それこそが『聖域』復活の真の目的とも言える。

「天神様の祟りは代々聞き及んでおります。我らとしても天神様の怒りなど一切買いたくありませんので、神楽坂殿の要請に全て応える所存です」

「そう畏まらずに。我々としても難しい要求を其方に唱えるつもりはありません。鞍馬寺に対しての要請は、鞍馬山に住まう者も含めて『伝統派』に属する元門人の免罪状を書いていただきたいのです」

個別に交渉すると面倒になるため、神楽坂家が『伝統派』と正統派の仲立ちとして一括交渉する方法を取ることとした。延暦寺にも『伝統派』の交渉については了承してもらい、免罪状についても八雲を通して神楽坂家に渡すことで決着した。もし寺に戻りたくないという人間がいれば、神楽坂家で引き取った後に知己の魔法使いの家に送り

込んだりする方法などが取れるからだ。
いっそのこと、関東を担っている上泉家――――剛三のところに送れば、彼なら嬉々として門人を鍛え上げるだろう。何せ、あの八雲ですら師事したことに加え、世界群発戦争の生ける伝説に師事出来るとなれば力を求める古式魔法師も喜んで飛び付く筈だ。
まあ、剛三の本気の鍛錬を受けて余計な思考など完膚なきまでに粉砕されるのは言わぬが花、というオマケつきだが。
「この寺から離れたことで忸怩たる思いを抱く者がいても不思議ではありません。我々は『伝統派』に身を置く者たちにとっての逃げ道を提供したいのです。無論、この国を守るために彼らが輝く場を与えることになるやもしれませんが、それでも宜しいでしょうか？」
「ええ。鞍馬の霊山が解放されれば、我らも安心して経を読めるというもの。神楽坂殿に四十九院殿、宜しくお願いいたします」
話し合い自体は３０分少々で終わり、約束を果たすべく悠元は京八流の道場へ赴いた。手合わせということで悠元は道場の備品である竹刀を手に取った。対する門下生は木刀を持ちだしており、一歩間違えるとけがを負いかねないことに沓子が抗議した。
「お主等、そこまでして勝ちたいのか!?」
悠元からすれば、音速で飛んでこない木刀など遅く振っているに等しい所業の為、竹刀で的確に相手の手の甲を打ち込んで木刀を落とさせた上で強烈な一撃を見舞った。ある者は二の腕を強打され、別のものは弁慶の泣き所を打ち込まれ、また別の者は脇腹に打ち込まれてダウンした。ただ、ここまでやっても精々内出血を起こす程度で、一応致命傷にならないよう配慮はしている。
体感にして1時間ほど徹底的に扱いたところで悠元が一息吐いた後には、道場の床で疲労困憊による死屍累々の絵図が完成していた。
「よし、軽めだがここまでとする。各人、何故負けたのかをしっかり考えた上で鍛錬に生かせ。いいな？」
『あ、ありがとうございました……』
門人らは辛うじて挨拶をしたので、悠元もこいらが潮時と考えて竹刀を片付けた後、沓子に近付いた。その沓子はというと、少しご機

嫌斜めであった。
「全く、悠元は優しすぎるのじゃ」
「……道場のこの惨状を見て優しいと言えるのもどうかと思うんだが、沓子の言い分は大人しく受け取ろう。住職殿、お手数をお掛けします」
「いえ、寧ろこちらが謝礼を支払わねばならない立場ですので、後始末は我々が責任を持ってやらせて頂きます」
寺を離れる際、住職から〝京八流の武術指導〟という名目で報酬を受け取ることになったのだが、その額は何と１００万円……武術指導でこの金額は流石に多すぎると思ったのだが、住職の表情を見るに自分への迷惑料も含んでのものだろう。何も言わずに受け取って欲しいという言葉を含んだ表情を見て、これも神楽坂の名を受け継いだ一端と諦めて受け取った。
ともあれ臨時収入が入ったため、沓子に京都観光の提案をしたところ、彼女も快く返事した上で悠元の腕に自身の腕を絡めていた。
「昨日も言ったことじゃが、今は滅多に会えぬからの。これぐらいは深雪嬢も許してくれるはずじゃ」
「ま、いいけどね」
これで沓子の機嫌が直るのならば、自分が骨を折るのも吝かではないと思いつつ、一路京都市街地へ足を向ける悠元であった。
「……」
「深雪？　深刻そうな顔をしてどうかしたの？」
「いえ、何でもないわよ、ほのか」
（絶対に悠元のことを考えていたんだろうね）
その頃、休み時間の第一高校２年Ａ組の教室で端末を見つめる深雪。ほのかが心配そうに声を掛けると、深雪は何でもないと取り繕ったが、雫は十中八九というか確実に悠元へ連絡を取ろうか悩んだのだと察したのだった。
◇　◇　◇
鞍馬寺と鞍馬山の一派は間接的に繋がっているが、鞍馬寺としても鞍馬山の扱いに困っていた――この情報が手に入るだけでも、今後

の動きを大分改善できる。それに、偶々宿泊場所が嵐山の『伝統派』の一派に近く、『聖域』を張る意味で一度制圧する必要があった。尤も、その彼らは襲撃されたことすら忘れているわけだが。

鞍馬山から一度京都駅近辺に戻り、(元々行く予定にはあったが)沓子のリクエストで音羽山清水寺(おとわやまきよみずでら)に赴くこととなった。上り坂が続く参道の途中までコミュニターがあるものの、特に予定も決めていないので別に急く必要もないと判断してのんびり歩いていた。

秋の行楽シーズンから外れてはいるし、今日は金曜日だが平日の括り。それでも観光客が多いのは表面上の平和があることを意味している。それを指し示すかのように参道は主に外国人の観光客でごった返していた。

「平日とはいえ、流石に人が多いな」

「……のう、悠元。お主、何かしておるのか？」

「魔法は使ってないよ」

無意識に身に付いた気配の認識操作を操る形で、参道の通行人が無理のない範囲で二人を避けるように移動しているだけだ。別に気配を消して移動しているわけではないので魔法の範疇にないだけだが、沓子からすれば感心に値するようなものだったらしく、笑みを見せていた。

「ふふっ、お主は本当に〝手品師(マジシャン)〟の異名が似合うのじゃ」

「別に脱出イリュージョンとかは出来ないけどな」

「いや、何を言うとるんじゃ」

沓子が言いたいのは『鏡の扉(ミラーゲート)』のことだろうが、そんな便利な魔法を面前でおいそれと使う訳にもいかない。先日の魔法は軍事機密レベルの魔法で、この魔法を知っている人間は千姫と剛三に元継、それと沓子に限定されている。所属している国防軍――独立魔装大隊の人間に話していないのは、それが漏れて徒に危険視されたくないという思いもある。

沖縄防衛戦での大亜連合の軍事行動の兆候を電子情報として提供している影響はあるだろうが、風間からは「一軍人としてはともかく、一人の人間として敵対しない」とまで確約に近い言葉を貰った時は溜

息しか出なかった。特務少将への任官の際に蘇我大将からも「情報部の一件で国防軍に遣る瀬無い思いはあるだろうが、私は君に敵対しない道を取りたい」と言われたほどだ。

それでも、自分のことを……いや、自分の魔法を利用できないか考えている輩が一定数要るのは間違いない。独立魔装大隊に関して言えば剛三のシンパも多いためにその可能性は極めて低いが、佐伯少将に関しては自分の知る限りで利用は出来ても信用は出来ないと踏んでいる。

その最大の理由は、原作において達也を他国の戦略級魔法師に狙われていると知りながら利用したことだ。それだけはいくらどんな事情があろうとも許される所業ではない。

閑話休題。

〝清水の舞台から飛び降りる〟のことわざで知られる清水寺の本堂前桧舞台からは京都の市街地が一望できる。悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』で先日目撃した周公瑾の気配を探る。すると、市街地をなぞる形で南東の方角に痕跡が残っているのが確認できた。

元々来る予定はなかったが、実際に市街地を虱潰しに歩くよりも手っ取り早く知ることが出来た。最悪『万華鏡（カレイドスコープ）』を使って嵐山からの道のりを視る必要もあったが、その手間が省けただけで幸いだろう。

「そういえば、悠元は京都に来たことがあるのか？」

「爺さんの付き添いでしょっちゅうな」

三矢家に転生した後、元の紹介で剛三と出会うことになるわけだが、いたく気に入れられた剛三に付き合わされる形で大規模の演武場がある北海道に〝転校〟させられる羽目となった。その最大の理由は修行に集中したいという剛三の要望や交通費の節約というものだが。

小学3年の途中から中学1年の終わりまで矢車家（剛三からは当初三矢家に仕えている矢車家の親族とだけしか説明を受けなかったが、神楽坂家の家督を継ぐことになった際に本家だと聞き及んだ）で生活しつつ、時折矢車家の手伝いという形で寺や神社の手伝いをすることもあった。

侍郎に対する鍛錬のこともあって、矢車家の人からは特に良くしてもらっていた。後、矢車家にいた時は古式魔法の基礎知識を聞きかじることもあったので、上泉家で保管されている魔法を覚えるのにもさほど苦労しなかった。その代わりに天神魔法のことで盛大に頭を悩ます羽目になったが。

「当時、表向きは爺さんの単なる親戚みたいなものだったからな。沓子と出会ったのもその時だったし」

「そうだったの。じゃが、初対面で男の子扱いはショックじゃったわ」

沓子と初めて会った時はまだ小学生高学年に入った位の時だったため、女性としての成長はしておらず、パッと見では女顔の男子という風にも見えていた。喋り方自体からして一瞬転生者の類を疑ったが、麿の言葉遣いが舌足らずでこうなっていると早とちりしてしまっていた。

「仕方ないだろ？　当時はまだ修行途中の身だったし。あの頃から比べたら立派な女性になったよ、沓子は」

「そんなことをサラッと言うでない……惚れ直してしまうじゃろうて」

「いや、事実を述べただけなんだが」

沓子自身の口から女性だと言われてようやく気付き、こればかりは自分が悪いと謝った。つまるところ第一印象はマイナスからのスタートの筈なのだが、沓子からすると一目惚れの相手に女性と見られなかったことが悔しかった、自分に腹を立ててしまった、と述べた。

「実家の神社には神職がおるとはいえ、男性が近寄れぬ場所があるからの。加えてわし自身、異性からの視線を敏感に感じてしまってのの……そんな時に出会ったのが悠元じゃ」

古式魔法の使い手は感受性で言うと現代魔法師よりも過敏に感じてしまう部分がある。加えて、神社の巫女という点において優れた才覚を持っている沓子は異性からの視線を逸らす意味で男子のような恰好をしていた。

そんな事情もなど知らずに接してきた悠元に対し、沓子は一目惚れをした。寧ろ一線を引いて接してきたことが沓子の中で評価を上げ

たらしい。
「その時は恋愛感情云々が良く分かってなかったからな。寧ろ嫌われる要素しかなかったと思うんだが」
「お主、危険を省みずにわしを助けてくれたじゃろ？」
「そんなこともあったな」
　四十九院家に滞在中、祠の様子が気になって大雨の中を出て行った沓子を探しに悠元が急いだ際、小川の鉄砲水が簡易的な木製の橋すら呑み込み、丁度通過していた沓子が水流に巻き込まれたのだ。
　ただでさえ冷静な判断力を欠いていた沓子が魔法を発動できるはずもないと判断し、悠元は沓子の気配を掴んだ上で本来なら一条家の人間しか使えない秘術『爆裂』に川上への指向性を持たせて発動、水流が弱まった一瞬を見計らって悠元も川の中へ飛び込み、沓子を救い出した。
　その際、水を多少飲んでしまっていることを考慮して軽く人工呼吸をしたが……あれは人命救助の一環なのでキスではない。よって、俺の中では実質的にノーカウントとしている。
「助けられた後に決めたのじゃ。悠元がどのような身分であっても、お主の妻になりたいとな。しかし、十師族というだけでも驚きじゃったのに、その先はわしですら読めなかったぞ」
「大丈夫、俺自身も想定の範疇を超えてるから」
　四十九院家を去る際、当主からは「将来、娘を送り出しますので宜しくお願いいたします」と言われたものの、当時の自分は恋愛感情の件もあって適当に笑って誤魔化した。あの人はここまで見通していたのでは、と思うと……いくら強くなっても勝てない人間はいるものだ、と感心に近いような心情にならざるを得なかった悠元だった。

礼を欠けば失する代償は大きい

清水寺の観光を終えた後、参道を下る形で悠元と沓子が歩いている。すると、沓子がふと疑問に思ったことを悠元に尋ねた。
「そういえば、悠元。清水寺に用があると言っておったが、住職に会わなかったのは何故じゃ？」
「ん？　ああ、そのことか。清水寺自体に用事があった訳じゃないよ」
昨夜の話し合いで悠元は清水寺に出向くことを発言していた。だが、寺にはただ観光で訪れるだけの形となり、何もしなかったことに疑問を抱いていた。それを疑問に思っても仕方がない、と悠元は思いつつも説明を始めた。
「清水寺に行くと言ったのは、正確には『伝統派』の拠点の一つを訪れようと思ったからさ」
「『伝統派』の拠点？　流石に危なくないかのう？」
「まあ、嵐山のアレは荒い方と解釈してくれ」
沓子は嵐山の『伝統派』の拠点に同行していたため、倒れていた彼らから感じられた気質で危険を考慮しての疑問だった。ただ、これから訪れる拠点は京都方面の『伝統派』でも穏健な部類だと思う。事前に原作知識も含めて京都の『伝統派』を調べたが、ここが比較的マシだと判断した。
そうして二人が訪れたのは、参道の途中にある豆腐料理店だった。何故料理店が『伝統派』の拠点なのかと疑問に思うだろうが、その質問をする前に沓子の腹の虫が鳴ってしまい、沓子はお腹を押さえつつ恥ずかしそうにしていた。
「時間的にお昼時も近いし、混み合う前に腹ごしらえもするか。沓子もそれでいいか？」
「う、うむ……わしの腹の虫を時計代わりにするでないぞ」
「いや、俺もお腹がすいてきたころだったから。腹の虫は鳴らなかったけど」
「も、もう！　悠元の意地悪！」
これを意地悪などと言われるのはどうかと思ったわけだが、ともか

く中へと入る。着物姿の店員の案内でそのまま座敷席に座った。『天神の眼（オシリス・サイト）』で探ると、店の奥に魔法師らしき人物はいたが、特に逃げるような素振りは見られなかった。

すると、沓子の通信端末が鳴って沓子が端末を手に取った。流石に他の客もいるので声は控えめだが、沓子が端末を見ている間にさっさと注文するものを決めるため、メニュー表を眺める。

メニューを決め終えたところで沓子も通話を終えたのだが、その表情はこれから厄介事が舞い込んでくるかのような表情だった。

「沓子、どうした？　注文するものは決めたか？」

「う、うむ。そっちは決めたのじゃが……ちと問題が生じての」

「……とりあえず、先に注文するから話は後で」

「そうじゃな」

店員を呼んで悠元は湯豆腐を、沓子は湯葉鍋を注文した。同じ料理にしなかったのは単純な理由で、悠元は剛三の付き添いでこの店を何度か訪れたことがある。剛三曰く「ここの豆腐と湯葉は美味いからの」との理由で京都に滞在しているときは昼食をこの店で取るのが当たり前だった。

健康志向という上泉家の気質も相まって湯葉鍋をほぼ毎日のように食べていたため、流石の悠元でも〝飽き〟の感情が芽生えたほどだった。それを流石に沓子の前で言う訳にもいかないため、適当に誤魔化した。

「それで、会話を聞いている限りだと愛梨と栞の二人のようだったが、何かあったのか？」

「流石は音に敏感な悠元じゃの。実は二人が既に京都へ来ておるんじゃ」

「……三高の校長が良く許したな」

魔法科高校のカリキュラムを考慮すれば、平日の金曜も授業があるのに二人が許可を貰って京都へ出向ける方が奇跡的だろう。いくら師補十八家・一色（いっしき）家と百家・十七夜（かのう）家の肩書があろうとも、三高の校長がそう簡単に公欠の許可を出すはずがないと思っていた。

「そうじゃの。ましてや栞は生徒会会計じゃからの。コンペの手配で

忙しい筈じゃというのに」
「愛梨や将輝、真紅郎はそういう役職に就いてないのか？」
「愛梨は生徒会長、一条は風紀委員じゃよ。吉祥寺はそういう話をすべて辞退しておる」
　対新ソ連を睨んでの防衛を担う一条家の都合を考えれば止むを得ないことだが、一条家当主の一条剛毅（ごうき）からすれば、それも人を率いるための経験として一喝しつつ役職を務めるように言い含めるはずだ。
　それでも将輝が風紀委員長に就かなかったのは、彼自身の気質も鑑みれば仕方のない事だが。
「度胸が無いな、将輝も。俺なんて深雪のストッパーを兼ねてる事情があって、構成メンバーはおろか幹部クラスにも畏怖の目で見られてるわ。下級生は仕方ないとしても、同級生にすらそう見られるのは未だに納得できんが」
「おう……何というか、悠元も苦労しとるようじゃの」
　第一高校の側も生徒会長の深雪が打ち合わせも兼ねて出向く以上、別に愛梨が出向いてきても不思議ではないし、その補佐で栞が同行していても違和感はない。ただ、将輝のストッパーを兼ねる形で真紅郎が会場の下見をしに来るのは「ご苦労様」と思わず労いたくなる。
　豆乳を温め、表面に出来た膜を竹串で掬って食べる湯葉鍋の関係で時間は掛かったが、この後は特にする予定もなくじっくりと会話を楽しみつつ食事をし終えたところで店員の方が近寄って声を掛けてきた。
「お客様。店主がお客様をお呼びするようにとのことですが、大丈夫でしょうか？」
　これは正直意外だった。こちらとしては様子を見に来ただけで会話をする予定などなかったからだ。ただ、悠元の存在と神楽坂の名は九校戦で知られている以上、ここの店主としても無視できるものではないと判断したのだろう。沓子を見やると、彼女は静かに頷いたので悠元は店員に視線を向けた。
「はい、大丈夫です。お代はこちらに置いていきます。釣りは要りませんので」

昼食代と会談を取り持ってくれた〝手間賃〟という含みを持たせ、一万円札を伝票の上に添えた。鞍馬寺での心遣いから出しているために懐が痛むことはない。

通された部屋は和洋折衷の間であった。そして、漆(うるし)塗りのテーブルと背凭れに精緻(せいち)な透かし彫りが施された木製の椅子。これだけでもそこらの高級品よりも高価な品だというのが見て取れた。

そして、二人を待っていたかのように立っていたのは一人の壮年の男性。引き戸が閉まったところで深々と頭を下げてきた。敵意などはなく、寧ろ畏れや怖さを抱いているに近いような雰囲気を見せていた。

気の流れを見るに呪(まじな)い師と呼ばれる人間だと推察した。茶人帽(ちゃじんぼう)に作務衣(さむえ)という格好は来客を招く作法としてどうかとは思うが、そもそも急に来訪したのはこちら側なので、それを窘める気もなかった。

ともあれ勧められるままに悠元が真ん中の席に座り、沓子はその隣に座った。

「よもや、かつて京都に居を置いていた神楽坂の名を継ぐ方が来訪されたことに驚いております」

『伝統派』の魔法師は徐にそう切り出した。京都や奈良の魔法師を信じ、皇族の護りという大任を果たすべく京を離れた神楽坂の人間がこの地を訪れた――――この行動だけでも、『伝統派』のみならず古式魔法師からすれば神楽坂が京都と奈良の古式魔法師に〝罰〟を下しに来たのでは……と彼はそう述べた。

「今回は特に何かをするわけでもなく、何もしないのであれば客としてそのまま立ち去るつもりでいましたが」

「神楽坂殿からすればそうでありましょうな。ですが、多かれ少なかれ恩恵を受けている神楽坂家の方に礼をせねば、我々など忽ち泡沫の如く消え去るでしょう。それを分からぬ者が出てきてしまったことに、我々も大変苦慮しております」

「もしや、大陸の方術士を匿っておる一派かのう？」

「ええ、その通りです」

剛三がここの店を懇意にしていたのは、京都の『伝統派』がまだ穏

便に和解することを理解していたからというのもある。もしかすると、その時から悠元を神楽坂家次期当主として据えるための準備をしていたとすれば、本当にただならぬ祖父である。
　沓子の問いかけに対し、魔法師はそう述べた。
「最初は確かに報復を考えておりましたが、具体性などは一切ありませんでした。それと、報復と言っても私を利用した第九研に対するもので、祖国を裏切るつもりは一切ありませんでした」
　第九研での実験は「九」の家で進められているが、その命令を下したのは当時の政府。この国の魔法をより良いものにしようとした結果、京都と奈良に『伝統派』を名乗る一派が生まれてしまった。
　本来、責任の所在を問えば確実に当時の政府および内閣にまで波及する。だが、政府がこの問題が顕在化しているのにも拘らず放置し続けてきたのは、公権力という民衆の力が魔法よりも強力に存在しているためだ。だからこそ、魔法師ライセンスや魔法使用に関する厳しい法律が通用出来ていることにも繋がる。
　そして、政府が公権力に甘えた結果、第九研に縁の強い「九」の数字を冠する家に対して『伝統派』が敵意を持つ構図が出来上がってしまった。政府からすれば、魔法という力を持つ魔法師同士が争ってくれれば政治にまで干渉する余裕も生まれないだろうという安易な考えだったわけだが、当の魔法師側――――現代魔法師のみならず、古式魔法師から見ても――――からすれば迷惑千万という他ない。
　政府だけでなく、これを放置し続けた『元老院』に対しても「この国を真に憂うのであれば、今まで何もせずにしてきた責任を取れ」とまで言いたくなるほどに。
「奈良の連中のやり方には、もう付いていけません。獅子身中の虫になると分かっていて何故、大陸の術者を身中に引き込むのか……日本人の魔法師の忠誠心が日本以外にないように、彼らの忠誠心の在りどころも、祖国にしかないというのに」
　忠誠心は思想に対するものではなく心情に悖るもの、と魔法師は語った。例え国を離れても、遠く離れてしまった祖国に対する想いが決して消え去ることはない。

「旧第九研とはこれ以上対立しない、というあなたの思いは理解しました。ですが、それは京都全体の『伝統派』の総意とも言えないでしょう。嵐山にいた魔法師、それと鞍馬の魔法師は大陸の方術士に取り込まれてしまっている――――違いますか？」
「……その通りですが、いつそれを？」
「嵐山の近くに宿を取っていまして、嵐山の『伝統派』の拠点に『聖域』再建のための敷設をしに赴いた際、彼らは周公瑾なる人物と接触していた情報を入手しております。それと、鞍馬寺に赴いた折、大陸系の方術士と思しき気配も感じましたので」
　初老の魔法師は驚愕という表情を滲ませていた。悠元が元十師族ということは当然この男性も知っていることだが、古式魔法師の拠点をあっさりと攻略してしまう手際はこの地にいる古式魔法師の力を集約したとしても〝不可能〟という思いが強くなっていた。
　そして、悠元が口にした『聖域』という文言は、かつて安倍晴明（あべのせいめい）が京の都を守るために敷設した護符による護法式陣の伝説にも出てきた言葉。普通の人間ならば世迷言と切り捨てるだろうが、悠元の表情からしてそれは出来ないし、隣に座っている沓子の表情を見ても嘘とは言えなかった。
「この地にかつて安倍晴明が敷いた『聖域』を復活成されると？」
「既に話が進んでいることですが、７年後には天神様こと菅原道真の千二百回忌の節目となります。そこで、嵐山に新たな天満宮を建立し、嵐山と比叡山に稲荷山、そして石清水八幡宮の４ヶ所を起点として『聖域』を構築します。そのため、嵐山にいる『伝統派』の拠点は〝私有地の不法占拠〟という形で取り壊すことが決定しております」
　嵐山と愛宕山の一帯は土地所有者の台帳上神楽坂家の所有となっており、『伝統派』の拠点も本来ならば法律違反ということで追い出すことはいつでも出来た。だが、その勧告を悉く無視したので天満宮建立上の〝行政執行〟という形で彼らを拘束し、建物は即刻取り壊すことが決定している。
「それと、嵐山や鞍馬山にいる者も含め、貴方方京都の『伝統派』に〝選択肢〟を与えようと思います。大陸の術者は良くて強制国外追放

の処分になりますが、元々この国にいる人間を外に出すわけにもいきません。幸い、叡山や鞍馬寺をはじめとした正統派の方々にも話を付け、望むのならば元の鞘に納めることも叶える所存です。無論、このまま残るというのであればそれなりの処遇を約束します」

『伝統派』の繋がりを利用した京都の監視体制の確立――――「九」の家の人間が聞けば悔しがるかもしれないが、政府に代わって和解の道すら探そうとしなかった人間に言われる筋合いはない。

それに、九島家は今年の九校戦で周公瑾からパラサイドール絡みで術者の亡命を受け入れている事実がある。しかも、その術者が脱走して『伝統派』内部の混乱を生み出しているのだから、真っ先に責を問われかねない有様。本来ならば九校戦の後で自主的に十師族の座を降りると言えばまだ恰好は付いたかもしれないが、更には佐伯少将との繋がりでパラサイドールの研究を続けている。

進むも地獄、戻るも地獄の有様だが、その周公瑾がらみで『九頭龍』に痕跡調査をお願いしていた過程でとんでもない事実が判明した。

本来ならメディア工作の件で周公瑾と七草家が繋がりを持っていたところを断ち切ったのだが、今年の6月初めに周公瑾と名倉三郎が会談し、その直後に周公瑾が九島家を訪れて大陸の方術士の亡命を頼み込んだのだ。後者の情報は九島家を訪問した際に『天神の眼（オシリス・サイト）』で過去情報を遡及し、その時の会話情報を既に電子情報として落とし込んでいる。

単に周公瑾と名倉が会話しただけならば七草家と周公瑾の関係性を疑うことはまずないが、当時の名倉は七草弘一の腹心の部下。だからこそ、ここに関する因果関係の情報が既に手にしているが、後は本人に確認することが必要だろう……名倉に関しては〝現状死亡している〟のは事実だが。

「我々を、神楽坂家が引き取ってくださるということでしょうか？」

「選択肢自体は一つだけではありません。故郷が懐かしいというのであれば、神楽坂に縁のある家に渡りをつけて帰郷させることもいたしましょう。出来るだけ早い返事をしてくれれば構いません」

「……分かりました、同志や仲間には私からお伝えします。遅くとも

年末までには京都の『伝統派』としてお答えを出します。その時間を頂く代わりに、何かできることはありませんか？」
　嵐山にいる人間に対しての処遇の軽減を求めない辺り、そこまですれば神楽坂の恩赦に泥を塗りたくる行為だと深慮をしたのかもしれない。それと、嵐山と同じく大陸の方術士に〝汚染〟されてしまっている鞍馬に対しての処遇に関しては、比叡山と鞍馬寺が本格的に動き出す口実を与えかねないので彼も寛大な処遇を一切求めなかった。
「嵐山と鞍馬に関してですが、場合によっては苛烈な手段を用いて大陸の方術士の影響力を祓います。そこに関しては一切首を突っ込まないように願いたいのです」
「彼らが大陸の魔法師に取り込まれてしまっているのは存じておりましたが……分かりました。他にも何かありますか？」
「その大陸の方術士――――彼らの手引きをした横浜・中華街からの逃亡者である周公瑾が嵐山から南東方面に逃亡した痕跡は掴めましたが……確認したいのですが、宇治川を越えて奈良方面に逃れた可能性はあるでしょうか？」
　原作知識も含めての話だが、彼が宇治川の〝結界〟（とはいっても神楽坂家本邸に用いられているものとは明らかに強度が異なるが）における管理者の一人ということは調べがついていた。それに、周公瑾が現時点で宇治川を越えていないことも確認済みだ。
　なので、彼に対しては〝結界〟の存在も仄めかす様な尋ね方をしたところ、魔法師は驚くような素振りを見せていた。
「その言い方をされるということは、宇治川の結界にも気付いている御様子ですな」
「宇治川の結界……上流にダムがあったはずじゃから、ダムを基点として、そこから流れる水の一部を霊的に浄化しておるのか？」
「おおっ、お連れの方も流石でございます。概ねその通りです」
　水に関する古式魔法はもとより、霊的な祭事に関わることが多い四十九院家の人間である沓子の推察に魔法師は感心したような言葉を述べた。結界とはいっても精々警報装置のような役割しか持たせられないが、彼は周公瑾個人を見張っていると述べた。

目の前にいる魔法師も周公瑾の存在を危険視しているというのに、パラサイドールの欲に負けて大陸の方術士を受け入れた九島家現当主に対して同情すら掛ける気にもならない。この辺は古式魔法師と現代魔法師のスタンスの違いもあるだろうが、十師族として力を求めたが故に歪んだ結果とも言える。

周公瑾が宇治方面にいるのは確実だが、宇治川を超えていないのも確実的。北や東に逃れるのは多大なリスクを負うことになるし、周公瑾が大阪あるいは奈良方面に逃れるとしても宇治川を通過せねばならない。

そうなると、彼が潜伏先に選んでいて尚且つ十師族の目も掻い潜りやすい場所――――国防陸軍宇治第二補給基地が最有力候補に挙げられることとなる。

いい加減隠居させるべき御仁の一例

店主との会話を終え、何事も無かったかのように店を出た二人。すると、沓子は気に掛かったことがあるようで、悠元に横目で視線を向けつつ小声で尋ねた。悠元はそれを見て移動式の遮音フィールドを即座に張った。

「悠元、確か十師族の一つである九島家が京都・奈良・滋賀・紀伊方面を担当しておるはずじゃが、九島家は頼れぬのか？」

「それな……俺も最初は九島家を上手く使えないか思案したことはある」

だが、それは確実に関係悪化を招くどころか治安の悪化を招きかねないと判断した。九島烈が当主をしていた時とは異なり、今の九島家当主は力を求めている。その一端が彼の末子の光宣という結果に行き着く。九島烈が実弟に対抗して魔法師強化措置を受け、成功してしまったことが九島家を歪ませる発端だった。

十師族や師補十八家に分家というシステムがない（四葉は表向き秘匿しているため、ないという形になっている）のは、徒に勢力を拡大されては管理できなくなるという政治家や将校たちの思惑が大きい。

だが、その弊害が九島家はおろか多少なりとも師族二十八家を歪ませ、師族特有とも言える変なプライド――言い換えれば一種の選民思考が根付いてしまっている。その代表的な例は七宝琢磨の七草家に対する対抗心や七草弘一の四葉真夜に対する想いあたりが分かりやすいと思う。その影響は百家にも出ており、高校入学時における森崎の二科生に対する態度が一番分かりやすいだろう。

「九島家や九鬼（くき）家、九頭見（くずみ）家も動かすことも考えたが……結論から言おう。九島家自体に改善の余地が見られないと、九島家は近いうちに十師族の座を降りざるを得なくなる」

「……本気で言っておるのか？」

「勿論。大体、九島家は九島閣下の存在で成り立った。他の『九』の家も閣下を窺ってばかりで現当主の影が霞んでしまう」

九島家は例えると戦国時代の越前朝倉（えちぜんあさくら）家、それも朝倉宗滴（あさくらそうてき）が一番

しっくりくる例えかもしれない。細かい部分にまで触れると違う部分もあるだろうが、よく似ていると思ったのは、高齢でありながらも家に強い影響力を残している点だろう。

既に９０近い歳とはいえ、先代当主の烈による影響力が家内のみならず魔法協会や国防軍内でも未だに健在であり、十師族の当主クラスが彼を当てにすることもあったりする。高齢の人間に鞭を討つような真似は道徳的にいかがなものかと思うが、裏を返せば九島家の現当主は他からすれば頼りなく見えるのかもしれない。

大体、九島家が十師族の座に居られるのは九島烈が存命という理由が大きい。いい加減隠居しようとしても彼の教え子には十師族の当主クラスもいるため、彼らにしがみつかれて大人しく隠居できない状態を延々と続けられている……主に七草家が原因で。それに加えて光宣の存在も烈が未だに隠居できない要因になってしまっている。

パラサイドールの開発は九島家の現当主と先代当主が進めていたが、周公瑾の斡旋による大陸の方術士を受け入れる方針を決めたのは現当主で、烈は責任の所在を周公瑾に押し付けることで九島家も一種の被害者になるよう画策した。この部分には、現当主の力に対するコンプレックスが大きく影響しているだろう。今も秘密裏に開発を続行している事実も含めて。

「何せ、元実家の初代当主――――俺の父方の祖父も父の影が霞まないように全ての手筈を恙無く行い、元実家とは極力連絡を取らず、十師族の影響力が及ばない場所に隠居しているぐらいだからな。そこまで九島閣下が踏み切らなかった以上、十師族の中で能力的に劣ってしまう九島家の衰退は避けられない」

「悠元が編み出した訓練法を用いてもか？」

「堪え性の無い奴に教えたところで〝猫に小判〟にしかならん」

理由を簡潔に説明するならば、九島という家のプライドに固執している人間に何を言ったところで通用するとも思えないし、初対面の段階で対等に見ようとしていない時点で対価など期待できない、と結論付けた。

寧ろ、こちらの立場も鑑みずに厚かましく要求をしてくるかもしれ

ない以上、教える気は微塵も感じられない。
「話が大分逸れたな。九島家や他の『九』の家を頼るにはリスクが大きすぎるし、『伝統派』が生まれた経緯に旧第九研の魔法実験が大きく尾を引いている。そんなことが出来たとしても、奈良方面にいる『伝統派』が京都方面に怒りの矛先を向けかねない」
仮に九島家が主体となって京都の『伝統派』と和解が成立した場合、奈良の『伝統派』は北と西を抑えられる恰好となる。紀伊方面は神楽坂家の筆頭主家である伊勢家が三重方面を抑えていることになり、岐阜・名古屋方面は十師族の一角である四葉家の管轄。
抑え込まれることで自棄になって暴動でも起こせば、奈良にいる正当な古式魔法師の名家や寺社がこぞって抑えにかかる。これこそ、正統派の古式魔法師が動くと最も拙いパターンであり、奈良を基点として畿内が内紛状態に陥ることとなる。
こうなると、周公瑾としてはありがたい事この上なく、戦況を長期化させるために奈良の『伝統派』へ積極的に関与するのが目に見えている。それは彼の師にあたる顧傑を喜ばせるだけに過ぎないだろう。
「神楽坂家が九島家と諍いを持っているのは旧第九研の一件もあるが、神楽坂家は当初、魔法力に優れた九島閣下の実弟を当主に推していた。だが、そこに茶々を入れた奴がいてな。強化措置が成功した閣下を次期当主に据え、その弟をＵＳＮＡに追い出したんだ……表向きは同盟国の魔法研究協力のためとはなっていたが」
烈が九島家当主になれたのは、彼を支持した人間の存在が大きい。当該人物は既にこの世を去っているが、その子息がとある組織の幹部クラスに座している。
その組織の名前は『元老院』。九島烈を九島家当主に仕立て上げた人物の子息の名は樫和主鷹（かしわかずたか）……こうなると、烈が元老院の存在を知っていてもおかしくなくなったことになる。
「そういえば、九島家の縁者がおったな……確か、一高のエクセリア・シールズじゃったか？」
「ああ。彼女とその双子の姉が九島将軍の孫娘にあたるが、九島家からしたら複雑だろうな」

無理矢理当主の椅子を奪った者からは優秀な魔法師が生まれず、人道的に憚られる手段を取った。その一方、祖国を追い出された人物の孫娘は双方共に戦略級魔法師足り得る実力を有している。余計なことをしなければ九島家は今も優れた魔法師の系譜を継ぐことは出来たかもしれないが、既に後の祭りだ。

兄よりも優れた弟の存在は兄のプライドを刺激し、最悪殺傷事に発展したケースは現実や創作物を問わず数多く存在している。烈もかく言うそのケースに該当する一人だ。

彼との会談では九島家の家督継承の争いに関して詳細を仄めかす様な言葉を述べたが、既に終わってしまったことに対して掘り返す気などない。だが、いくら剛三の孫だと知っていて試しであっても殺意を向けたことは決して気分の良いものではない。

「ま、九島閣下にはリーナとセリアに関して口を出すなと釘を刺したが、現当主がそれを認めるかは微妙なところだ。最悪、リーナに関してはどこかの家に引き取ってもらう形を取った方がいいかもしれん」

「……つくづくながら、悠元も大変じゃのう」

「全くだ」

悠元が光宣の治療の条件として烈に提示したのは、〝最低でも12個の条件〟を一切の不足なく呑むこと。その中には当然リーナとセリアの扱いについても含まれており、セリアは既に八雲の養女という形で九重家に籍を入れている。

前世の妹を婚約者に迎えるのは道徳的にどうかと思う人もいるが、正確に言うと彼女は〝従妹〟だった。その事実は転生する際に謝罪した女神から教わったが、正直自分の耳を疑った。再会した後にその事実を確認すると、女神の述べていた言葉が現実だと知る羽目になった（妹も同じ女神に会っていたらしく、その時に聞いたと述べていた）。

少なからず妹のことを女性だと認識する部分はあったが、それでも実の妹だと理解していた。なので、前世で妹と恋人になろうとかそんな気は一切なかった。付き合っていた彼女とあんな別れ方をした以上、恋人を作る気にもならなかった影響もあっただろうが。

転生してセリアからも「本当にいいの？」と聞かれたことはあったが、セリアが転生者だと明確に知っているのは俺だけだ。彼女の拠り所になることで力を抑えるストッパー的な役割を担うのは深雪の前例がいるので認めざるを得なかった。

それに、軽い調子で接することが出来る人間は非常に限られているため、俺の素性を知っている人間が近くにいるのはありがたい。あまり調子に乗るようならばツッコミを入れて黙らせるが。

要するに、前世は前世、今世は今世と割り切っているし、身内とはいえ少なからず女性だと認識していたし、向こうの気持ちを無碍にする必要もない。元々問題なかったものを知らなかっただけでしかなかった。

そんな風に割り切れているのは、俺自身の精神が変に擦れているからかもしれないが。

閑話休題。

「そんな辛気臭い話はここまでにして、愛梨や栞とはどこで合流するんだ？」

「１４時に京都駅じゃな。ただのう……あの口調からして、色々追及されそうな気がするのじゃが」

「それは仕方が無いだろう」

そもそも、家の用事とは言え学校から公欠扱いで昨日から動いているのだ。第一高校と第三高校で合同警備以外の情報のやり取りがされているわけではないが、昼食時の連絡で沓子は愛梨から『ところで、本当に沓子一人なのですか？』としつこく聞かれていた。確かにいくら自衛のための手段を持ち得ているとはいえ、女子生徒を一人で歩かせるのは風聞的にも宜しくないだろう。

◇　◇　◇

そして、京都駅で合流した後、愛梨は挨拶もそこそこに沓子への追及が始まった。流石に周囲の視線もあるため、手頃な喫茶店に入ったところで改めて愛梨が沓子から情報を聞き出そうとしていた。これに関して下手に触れずにコーヒーを飲んでいると、悠元の向かいに座っている栞が小声で話しかけてきた。

「ねえ、悠元。沓子って悠元の恋人なの？」
「……大体間違ってはいない立場だ、としか答えられん。この話は十師族の当主クラスでも秘匿されてるからな」
「成程ね。最近はコンペで忙しいのに、沓子が学校を休んで京都へ先に出向いてると聞いてからあの調子で……」
「俺にはどうにも出来ない話なんだが」
　大体、沓子は百家だが『九頭龍』の一角を担う四十九院家の令嬢。対して愛梨は師補十八家の一つである一色家の令嬢。
　愛梨がこちらに向けている感情はそれとなく察しているが、婚約話自体が泉美を除けばほぼ身内に止められている段階だ。千姫から聞き及んでる範囲から推測すると、四葉家の次期当主が固まり次第神楽坂次期当主の婚約者募集も行う手筈になるだろう。
「それに、俺の婚約者が最終的に何人になるか読めんからな。『クリムゾン・プリンス』ならまだ話は分かるんだが」
「……一条とは違って、悠元は割と親しみやすいからだと思う」
「将輝が聞いたら膝から崩れ落ちそうだな」
　まあ、当の将輝は深雪に気が向いてしまっていて、他の女子など見向きもしていないに等しい。そんな風に思っていると、沓子が涙目で腕にしがみついてきた。どうやら埒が明かなくなって助けを求めてきたようだ。
「助けてくれ、悠元。わしにはどうにもならんのじゃ」
「……分かった。愛梨、これから話すことは十師族の当主クラスでも秘匿している事実だから、それを踏まえて聞いてくれ」
「は、え、ええ、分かりましたわ」
　音声改竄の結界を張った上で、自分の婚約に関する情報を一部開示した。当事者側の沓子やそれとなく聞いている栞はともかく、愛梨は驚きを隠せなかった。
「ふ、複数の婚約者が既に……やはり、悠元さんは只ならぬ人ですわね」
「現状は非公表の事実が多くてな。というか、愛梨。少なくとも嫌った覚えはないが、何を焦ってたんだ？　まあ、予測は付くが」

「……概ね、悠元さんの思っている通りですわ」
愛梨が言うには、昨年の九校戦の段階で縁談があったらしく、愛梨としてはその縁談を断りたかった。この時点で自分への好意を持っていたらしい。九校戦で活躍したことにより、その縁談が白紙に戻って今度は三矢家に縁談を申し込もうと画策し始めたのだ。
ただ、ここでネックとなったのは将輝と真紅郎が当時三矢の姓を名乗っていなかった悠元に無礼を働いた件だった。将輝の母親は一色家の傍系で、一条家と一色家は親戚関係にあたる。将輝が無礼を働いたことにより、一条家だけでなく間接的に一色家もその被害を被る形となったことに加え、剛三に良からぬ印象を与えてしまったのが二の足を踏ませていた。
「あー、あのロリコン呼ばわりの件か。爺さんは笑ってたし、特に不快などなく、むしろ愉快であったと述べてはいたが」
「そうでしたの。ただ、その状況で私が婚約者と名乗り出ても、叔父様たちは七草家の二の舞になるのではと危惧していたようで」
「そこでそう来るわけね」
この国の法律上、一夫一妻制という形が多いし、いくら十師族でも再婚はしていても重婚はしていない。身近に愛人を作って子まで成した例があるのは知っているが、幼馴染を貶す理由もないので黙っておくこととした。
「それで、正月に沓子が戻ってきて以来、以前よりも女性らしくなったことに疑問が浮かびまして。もしかしたら、そこに悠元さんが関わっているのではと思うと……すみません」
「俺に謝られてもなあ……なあ、沓子。俺は一応序列に口は出せるのか？」
「それは問題ないじゃろう。何せ、最終的にはお主が決めることじゃからな」
「悠元、何をする気なの？」
現状の婚約序列は、第一位に深雪（四葉家当主の姪）、第二位以降は雫（北山家令嬢）、姫梨（伊勢家長女）、沓子（四十九院家令嬢）、夕歌（津久葉家長女）、セリア（九島家縁者）、そして泉美（七草家三女）の

順となる。今回の一件で七草家が大きく関わっている以上、婚約自体の解消はしないが婚約に関するペナルティは支払ってもらうつもりだ。それに、愛梨の母親からも愛梨のことについては「良ければ娶ってやってください」と好意的に見られている以上、それを無碍にする気もない。
「愛梨、年を越す前に一色家から三矢家に申し入れをするよう頼んでもらえ。三矢家当主には俺から話を付ける」
「え……えっ？　本気で仰ってるのですか？」
「至って本気だが。それとも、愛梨は俺との婚約が不服か？」
「そんなことはありませんわ！　寧ろ、政略結婚で見知らぬ人間よりも悠元さんに嫁げる方が幸せですもの……って、栞や沓子は何故そんな目を向けるんですの!?」
　表情を綻ばせている愛梨の様子に、栞と沓子は愛梨に対して生暖かい目線を向けていた。これには愛梨も気付いて声を荒げた。
　だが、そんな言葉を聞き流すかの如く栞が声を発した。
「沓子が悠元と付き合っているかもしれないと危惧して仕事が手に付かなかった愛梨がそれを言う？」
「ううっ……その件については深く反省しております、栞さん」
「ふふふ、愛梨も隅に置けぬのう」
「大体、沓子が悪いのですよ！」
「なんでじゃあ?!」
　婚約に関しては千姫や剛三から「他に気に入った子がいれば、遠慮なく引き込め」とは言われていたが、ただでさえ綺麗どころを掻っ攫っている現状で余計なことをするつもりなどなかった。だから、愛梨の件に関しては踏ん切りをつけるという意味で引き込む形とした。序列は七草家のペナルティも含めて第七位に据える。
　そういえば、エリカの武装一体型ＣＡＤの関係で五十里家に赴いた際、五十里先輩の妹とも会話することはあったが、あくまでも一線を引いた上で接していた。ただ、帰った後に先輩からのメールで『妹が頻りに君と話したいって言って来たんだけど、どう返したらいいかな？』と聞かれた。兄としても妹の気持ちを無碍にしたくないという思

いで相談してきたため、チャットアプリのプライベートアドレスを教えて度々連絡する程度にはなっている。

流石に彼女まで手を出す気になんてならないし、そんなことをすれば間接的に千代田家とも縁を結ぶことにもなってしまう。別に花音のことを悪しく言うつもりはないが。

異次元の妖すら逃げ一択

愛梨や栞は京都市街地のホテルに泊まるため、駅で別れた。悠元と沓子はそのまま嵐山の宿に帰ると、先に帰って寛いでいた怜美が声を掛けてきた。

「悠元君に沓子ちゃん、おかえりなさい」

「ただいまなのじゃ」

「ただいま戻りました。実家の方は何かありましたか？」

「そうね。まずはお茶を淹れてからにしましょう」

怜美が率先してお茶を淹れることになったため、座布団に座った上で大人しく待った。そして、怜美から差し出されたお茶は丁度良い熱さ加減で飲みやすかった。

「美味しいですね」

「ありがとう。うちの実家は宇治に茶畑を持っているらしくて、神楽坂殿の持て成しに使いなさいって押し付けられたの」

「宇治……ひょっとすると、周公瑾の情報も入っていますか？」

「ええ」

『九頭龍』の一角を担う安宿家は、元々京都諏訪氏の流れを汲む一族。室町幕府滅亡後、当時の京都諏訪氏当主が明智光秀に仕えたが、山崎の戦いで敗北した。その後、朝廷の意向を受ける形で神楽坂家が京都諏訪氏を引き取り、諏訪神党の一つである安宿家を名乗らせたのが発祥である。

現在は旧京都府南部を拠点とし、国防陸軍宇治第二補給基地は安宿家が所有する土地を〝貸与〟する形で建設された（神楽坂家および上泉家が所有する土地は特殊な私有地扱いになるため、書面上は『政府による土地の買い上げ』となっている）。

「悠元君なら気付いているかもしれないけど、13日に周公瑾が基地の中に入っていったそうよ。それから今のところ動く様子は見られなかったって」

「ふむ、『鬼門遁甲』の発動形跡もありませんでしたか？」

「ええ。御当主様から提供された対方術用の結界にも今のところは」

方術『鬼門遁甲』を実際に経験しているのは、横浜での経験で言えば元継、レオにエリカ、悠元と深雪、そして雫の六人。そこでの経験を踏まえて『鬼門遁甲』対策も含んだ対方術に特化した結界術式を千姫経由で安宿家に提供した。
「逃げておらんとすると……時間稼ぎのつもりかの？」
「もしくは、名倉三郎との戦闘で負った怪我を治療するためだろうな。あるいはそこで消費した手札の補充という線も考えられるが」
「……え？　その名前って確か、先週嵐山で亡くなっていた七草家の護衛の人よね？　どうしてそこで周公瑾が関係してくるの？」
「そうですね、これは秘密にして欲しいのですが」
怜美が名倉を知っていたのは実家の関係もあるが、昨年の論文コンペの時に千秋絡みのトラブルで偶然会った事があったとのこと。悠元は周公瑾が名倉三郎を殺した犯人であることを明かした。これには沓子や怜美も驚いていた。
「つまるところ、七草家が周公瑾を殺そうとしたってことよね？　でも、四葉家が九島閣下の協力を得て周公瑾を追っているのだとしたら、師族会議の結果でそうなったの？」
「いえ、師族会議で母上から当主達に周公瑾の存在を仄めかす形で周知されましたが、周公瑾の名前はもとより追討の決議もされていません。しかも、達也らが九島閣下と会談した事実を掴んで行動を起こしたようで。つまりは、七草家が何か知られると拙い関係を周公瑾と持っていた可能性が浮上します」
「……何ということじゃのう」
念のためにメディア関係も含めて周公瑾の行動を洗い出したところ、今年2月中旬――パラサイト事件が終結する前の段階で名倉と横浜・中華街で会っていた事実まで出てきた。偶々中華街の行きつけの店で食事をしていたのならば筋は通るだろうが、そこには七草家当主・七草弘一も同席していたのだ。
周公瑾と名倉三郎、そして七草弘一。ここまで主要な人物が一堂に会した時点で何も起きないはずなどなかった。
それを指し示すかのように、七草家の息が掛かったメディアの報道

は４月以降だと反魔法主義の記事が圧倒的な比率を示していた。それを相談された上で黙認したのは他ならぬ九島烈。『恒星炉』実験以降は周囲のメディアに圧される形で野党議員のスキャンダル記事が目立っていたが。

そして、６月初めに周公瑾と名倉三郎が会談し、その直後に周公瑾が九島家を訪れて現当主と会談している。こうなると、周公瑾が名倉、七草弘一、九島烈と経由する形で九島家現当主との会話を取り持った形が濃厚だろう。

原作だと「フリズスキャルヴ」経由でパラサイドールを知った顧傑が周公瑾を動かし、何の前触れもなく九島家を訪れた。この時点で怪しさというか、九島家が密かに開発しているパラサイドールの存在に気付かれていると睨むべきだが、現当主はパラサイドールの強化に利用すると画策して受け入れた。

結果として大陸の方術士が奈良や京都の『伝統派』を困らせているのだから、九島家は非を認めて謝罪するべきなのにそれが出来ない。いや、それをすればパラサイドールを開発したのが九島家だと疑いを掛けられることになりかねず、最悪魔法師社会の秩序が崩壊しかねない。

どちらにせよ、将来的に十師族の座を降りざるを得ないのにも関わらず、無駄にあがき続けて事態をより悪化させている始末だ。

話を戻すが、実は光宣から相談を受けた際、周公瑾の訪問に気付いていたらしい（その日は体調が悪く、学校を休んでいた）。その際、使用人からは「先代様のご紹介での来客」と聞き及んだとのこと。

さしもの周公瑾もいきなり訪れるという慣習破りは相手に要らぬ疑念を持たれると警戒したのかもしれない。四葉に狙われた時点で意味のない行為になってしまったが。

「実は、その際に名倉のＣＡＤデータをコピーする形で回収した」

「えっ、悠元君も現場にいたの？」

「いましたね。ただ、目的は名倉さんの〝回収〟にありましたし、向こうはこちらの気配に気付かなかったので無視しました」

あくまでも周公瑾の捕縛は達也が担うべき仕事であり、『元老院』に

関わることになる自分が手を下すべきではない。それに、これは達也の四葉家次期当主就任に際して大きな実績となるので、四葉の分家当主達を黙らせるためにも自分が手を出す領分でないと判断した。
そして、名倉に関することは達也の実績を重ねさせる意味で大きな意味を持つと睨んでいた。
「〝回収〟というと……悠元の事じゃから、魂でも回収したのか？」
「厳密には〝魂魄（こんぱく）〟と呼ばれる代物だな。〝亡霊〟や〝幽霊〟の類にはなるが、周公瑾が名倉を殺してくれたことで実験出来た形だ」
〝魂〟そのものに定義を持たせるのは難しいが、原作において周公瑾が光宣の肉体に乗り込んで支配しようとした出来事――パラサイトの人体掌握プロセスは知識として知っていたため、ピクシーとアリスに協力してもらう形でパラサイトの霊子波を計測・把握した。
死の間際に肉体から分離する精神体は、従来だと想子の供給構造が消失するために維持できず、そのまま粒子単位まで分解されてしまう。この部分はパラサイトが実体次元や情報次元において単独で維持できない事実からして間違いないとみている。
ピクシーやパラサイドールの例からすれば、霊子で構成された独立情報体を何らかの形で止めることが出来れば、人間の精神体――〝魂〟を保存できるのでは、とも考えた。
幸い、パラサイドールのデータはスティープルチェース・クロスカントリーの際に嫌というほど収集したし、基本構築自体は難なく終わった。流石に生きている人間相手に使えるはずもないので実験はしていなかったのだが、今回の一件を利用させてもらうことにしたのだ。
「便宜上は『紅玉（こうぎょく）』と名付けた代物だな。元々、別のものを作る過程で出来てしまった副産物なんだが、何かに使えないかと完成させたのが役に立った形だ」
「魂を封印するって……広める気はなさそうね」
「当り前です。理論上は『無限転生』が可能になる代物なので、施政者や野心家が知れば間違いなく世界大戦が起きかねません」
「それって聖遺物（レリック）レベルの代物じゃぞ、悠元」

そのまま死なせるには惜しい名倉の力を生かす方法をどうにか考えた。『天陽照覧（てんようしょうらん）』では周公瑾に残る名倉の血の針が消えかねないため、その次善策として考え付いた形だ。

幸い、現代魔法に関わる実験の影響で世の中に出せない実験体や調整体が多いため、いくらでも都合を付けられると思ってはいたが、そこまでする手間が省けたのは幸いだった。

だが、こんなことをするのはこれ一回きりにするつもりで、『紅玉』自体は神楽坂本邸の地下深くに埋めて、使用方法は神楽坂家当主以外に一切伝授しない。分解した方が早いかもしれないが、万が一皇族が断絶しかねない時の〝保険〟として残すつもりだ。

何せ、この『紅玉』自体も面白い副産物を含んでおり、『紅玉』を触媒にする形で天神魔法『天照』『月読』を使用した場合、五行相剋および五行相生が単独でも発動可能になった。千姫に試してもらった際、その効果があることまで判明したのだ。

ただ、千姫としてはこのまま悠元に当主の座を渡したい方向性に変わりはなく、あくまでも緊急時の切り札として残すのが良いと判断した。これの製造方法はというと自分の頭の中にしかなく、本来は『恒星炉』のためのレリック複製の過程で偶然出来てしまっただけなので、複数作るつもりなど毛頭ない。

一応、今後の保険も考えて千姫にだけ製造法は教えたが、千姫からは「パラサイトが悠君を避けたがる気が分かってしまいますね」と言われた。誠に遺憾だと述べたかった。

「なので、この存在を知っているのは俺と母上以外は文弥と亜夜子ちゃん、そしてお二人だけです」

「絶対に言わないわ。ううん、言えないもの」

「全くじゃ。婚約解消どころかわしらの命まで消えかねん」

「俺は魔王じゃないんだが」

状況は分からなくもないが、人を見て怯えるのは止めてほしい。いくら俺でも分別のある人間にしか話さないと決めているし、大体婚約者や愛人として押しかけて来た側に言われるのは何だか釈然としない気分だ。

この後、二人から「何でもするから許してください」みたいなことを言われたので、つい反射的に母直伝のトールハンマー(こめかみグリグリ)を炸裂した。その際に沓子が痛みで暴れて沓子を押し倒す形となり、怜美からは「もっとやっちゃいなさい」と煽られ、沓子からは「わし、食われるのか？」と頬を赤らめつつ期待するような眼差しを向けられた。

この後、何があったのかと言えば……いくら精神年齢が年を食っていても、自分に好意を抱く魅力的な女性に誘われて何もしない男性がいるだろうか。いや、いないだろう。

いるとすれば、それは余程の朴念仁か性欲に激情しない輩ぐらいかもしれない。

「……」

「お兄様？　窓の外を見て、どうかなさいましたか？」

「いや、誰かが噂をしているような気がしたのだが、どうやら気のせいだったようだ。最近の忙しさで疲れているのかもな」

「なら、ほのかにモゴッ」

「雫、今とんでもない事言おうとしたよね!?」

その頃、放課後の生徒会室で不意に窓の方を見た達也に深雪が首を傾げて尋ねたが、達也は変に気を張り詰めているせいかと自分の中で納得させ、それを見ていた雫が何かを提案しかけたところでほのかがその先を予想しつつ、頬を赤らめながら慌てて雫の口を塞いでツッコミを入れたのだった。

「……」

「泉美ちゃん、どうかしたの？　自分の胸を触って」

「あ、いえ、何でもありません……お兄様は……」

「……今何か言うと、槍玉になりそうですね」

「同感です……」

そんなやり取りを聞いて、徐に自分の胸を確かめるようにしている泉美にセリアが尋ねると、泉美は慌てて取り繕ったが、水波と理璃が小声でお互いに場の雰囲気へツッコミを入れる気にはならず、押し黙ってしまったのだった。

◇　◇　◇

「……まーたやっちまったよ、畜生」
　別に関係を持ってしまったこと自体を悔やんでいるわけではなく、場の雰囲気に流されてしまっている自分を恨めしく思った。夕食の前に風呂で寛いだ後、豪華な夕食を堪能してもう一度風呂に入った。今日は流石に風呂への襲撃が無かったが、部屋には空気を呼んだのか、三組の布団がピッタリとくっつく形で敷かれていた。
　二人は入れ替わる形で温泉に行ったので、仕方がないと諦めながら真ん中の布団に寝転がったところで、枕元に置いた通信端末が着信音を鳴らした。その相手も悠元が知る人間だが、珍しく音声通信という点が気になりつつ通話ボタンを押した。
「もしもし、こちら神楽坂ですが」
『あ……悠元、今大丈夫？』
　相手は雫だが、どうにも息が上がっているようで、まるで逆上せたような喋り方だった。確か、ほのかが北山家に泊まっているため、その絡みで何かあったのかと推察した上で尋ねた。
「大丈夫だが……その様子だと、ほのかと長風呂でもして逆上せたか？」
『……やっぱ、悠元に掛かれば何でもお見通しだね。覗いてた？』
「いくら何でも覗けるか、阿呆が」
　いくら相手が婚約者でも、覗きたいという欲求があったとしても道徳的にダメなものはダメだ。出来なくはないが、雫だけでなくほのかの裸まで見てしまうことになる。それを隠したところで雫にバレる可能性があるし、ほのかが塞ぎ込む可能性が高い。そんなリスクを一々負いたくないので、『万華鏡（カレイドスコープ）』を使う時は細心の注意を払っている。
「大体、こっちは京都にいるんだぞ。いくら雫とそういう関係を持ったとはいえ、嫌われるようなことはしたくないからな」
『……やっぱり悠元はジゴロ。そういう一線を弁えてるから、もっと好きになる……私の全部を愛してほしいぐらいに』
「逆上せて理性のネジが吹っ飛んでないか、雫さんや」
　すると、雫の会話を聞いてほのかが『何言ってるの雫!?』とツッコ

ミを入れていた。間違いなく頬を赤らめながら恥ずかしい発言を咎めているのかもしれない。
　すると、向こうの端末が音声通信から映像通信に切り替わったようで、こちらも映像通信に切り替えると、雫とほのかが寝間着姿で映っていた。額には熱冷却シートが貼られていたので、大方の予想通り長風呂のし過ぎで逆上せたのだろう。
『悠元さん、その、雫が変なことを言ってたみたいで』
「気にするなよ、ほのか。しかし、その様子を見ると風呂で逆上せたみたいだな……ガールズトークの内容は敢えて聞かないが」
『京都に行きたかったんじゃないのかって聞いたけど、ほのかは納得してた。それに、ほのかがいい女だって話はした。あと、胸が許せなかったから揉んだ』
『雫ぅ?!　いくら悠元さんが相手でも、そういうことを正直に言わないでー!!』
　やっぱり、原作で起きていたことがここでも起きていた。ただ、正直なところで言うと雫の胸は同年代で言っても平均以上になっている。誰のせいなのかは敢えて言わないが。それでも、雫からすれば大きい胸というのは羨ましく思えるのだろう。
「ははは……まあ、ほのかは性格的にも好かれやすいからな。雫の気持ちは分からんでもないが。ほのか、もう暫くは北山家で泊まってもらうことになってしまうが、申し訳ないな」
『い、いえ、雫から悠元さんに頼まれてというのは聞いていますから』
『悠元、帰ってきたら沢山m』
　雫が何かを言いかけた段階で通話が途切れた。多分、ほのかが慌てて通話を切ったのだろう。今の途切れた発言から予測できる内容だと、自分と雫の関係にほのかが気付いてもおかしくはない。ただ、それをほのかに強要してしまうとロクなことにならないのは確実極まりないが。
　すると、空気を読んでの展開なのか、通信を終えたところで風呂から戻ってきた浴衣姿の沓子と怜美が姿を見せた。
「ただいまなのじゃ。おや、誰かと話しておったのか？」

「雫とほのかの二人とな。雫が何かを言いかけて通信が切れた形となったが……ともあれ、明日のことについて少し打ち合わせよう。朝は達也たちと合流する手筈になっているからな」
畳の上に電子ペーパーを広げて、三人で明日のことについて話し合ってから就寝した。流石に午前中から行動するので慎みたかったが、密着してくる沓子と怜美のスキンシップに根負けしてしまった。その代わり、翌朝の二人の機嫌が良かったのは言うまでもない。

強敵に挑む装備に糸目は付けない

１０月２０日、土曜日。いつもならば学校に通っている日だが、今日と明日は来週末に予定されている論文コンペの事前調査ということで、達也らが来る予定になっている。第一高校からは達也、深雪、水波、レオ、エリカ、幹比古、セリア、姫梨、佐那、そして理璃が出向いてくる。

「ふう……まだ5時だし寝ててもいいんだぞ、沓子」

「流石に目が覚めてしまっての。悠元はいつもの鍛錬か？」

「ああ、一日でもサボると癖が付きかねないからな。沓子もやるか？」

想子制御も含め、魔法力の制御訓練は演算領域を鍛える上で非常に有効な鍛錬法で、適度にサイオンを活性化させる必要がある。魔法の〝燃料〟となりうる精神――霊子（プシオン）の保有量は想子保有量に比例するため、常日頃から想子や霊子の流れを把握しておく必要がある。

「そうさせてもらおうかの……どうかしたのじゃ、悠元？」

「……せめて下着ぐらいは身につけろ」

沓子の今の恰好は、浴衣を着てはいるが下着を身に付けていない。しかも、起きたばかりのせいで着崩れており、視線の方向次第で胸元が見えかねない。この程度で乱されていては話にならないため、諦め混じりに諭した。

すると、沓子は悪戯っ子のように面白そうな笑みを向けていた。

「ふふ、悠元も男の子じゃの。わしはいつでも歓迎するぞ？」

「阿呆。今日と明日は忙しくなるかもしれんからな」

冗談ではないにせよ、時と場合は弁えてほしいとツッコミを入れつつ立ち上がった。沓子の気持ちは察するが、元々その為に来ているわけではないのだ。なので、別個で時間は作るつもりだが、今やるべきことを優先したい。

「どこに行くのじゃ？」

「朝食まで時間があるし、風呂で汗を流そうと……で、何故腕にしがみつく」

「決まっておろう。背中を流してあげるだけじゃ」

「……信じるからな？」
沓子の押しに根負けする形で一緒に風呂に入る形となったが、流石にそれ以上の行動は窘めた。行き先次第では『伝統派』との戦闘になるため、体力を温存しておきたいという理由が一番だ。これには沓子も理解してくれた。
怜美は嵐山の宿で待機する形で留守を預かる形となり、悠元と沓子は京都駅へ出向く。すると、駅の改札口には既にレオと幹比古、それと佐那が到着していた。
「三人ともおはよう、先に来ていたのか」
「おう、おはよう悠元」
「おはよう、悠元」
「悠元さん、おはようございます。そちらの方は確か三高の」
「うむ、宜しく頼むぞ」
幹比古は実家の関係で四十九院家の存在を知っていたため、少し気になるような素振りを見せていた。家絡みの話題に触れるのもどうかと思い、悠元は幹比古に対して話題を変えるように問いかけた。
「それで、幹比古。他の面々は次のトレーラーで来るのか？」
「そうだね。あと３０分ぐらいで到着するとエリカからはメールが来たけど」
「にしても、悠元は一昨日から京都にいたんだろ？　何かあったりしたのか？」
「あるにはあったが、あまり聞いても面白くないことばかりだぞ？　エリカなら面白がるかもしれんが」
比叡山で盛大な歓迎を受け、嵐山の拠点を一時的に制圧し、『聖域』の布石を整えただけに過ぎない。エリカが聞いたら興味津々に聞いてきそうだし、深雪は別の意味で目を輝かせそうな気がする。
全部を話すわけにもいかないため、ある程度かいつまんで話したところ、幹比古は苦笑を浮かべ、レオは感心したような様子を見せており、佐那に関しては「当然ですね」言わんばかりに納得したような感じだった。
「いやはや……悠元は相変わらず規格外だね」

「『竜神』を制御できる領域にまで踏み込んだ幹比古がそれを言うか？」
「すげえな、悠元は。俺も見習わねえと」
「悠元さんは凄いですね、叡山の僧兵を怯ませるなんて」
「まあ、それに関しては天台座主に怯んだというのが大きいが」
ともあれ、達也たちが来るまでに時間があるため、悠元は幹比古に一本の扇子を渡した。それが単なる扇子ではなく鉄扇で、親骨と中骨、そして扇面の部分に刻印が掘られている。これが武装一体型ＣＡＤだというのは幹比古でもすぐに分かった。
「悠元、これは？」
「幹比古専用の鉄扇型ＣＡＤだよ。刻印されているのは術式じゃなく、幹比古が持っている術式補助具を強化するためのものだ」
実を言うと、幹比古自身の技量が大分上がっているため、幹比古が普段使いしている術式補助具がネックになりつつあった。そこで、次世代型刻印式魔法陣の試作品――――幹比古が使う精霊魔法に特化させたブースター兼思考操作型ＣＡＤを古式魔法用にチューニングしたものを急遽準備した。
「試験機能としてＣＡＤの自動段階調整（オート・ステップアジャスター）機能が付いているが、あくまでも補助機能と思ってくれ」
「これは……また頭が上がらなくなる要素が一つ増えたね」
「気にするな。幹比古はいわばテスターみたいなものだし、物自体は知り合いの魔工技師に頼んだものだから」
レオに関してはパラサイト事件の時に渡した並列思考操作型ＣＡＤに加え、ある程度克服したとはいえ未だに苦手な遠隔・精密操作系統を補助する意味で、悠元がローゼン・マギクラフトから買い付けたナックルダスタータイプの完全思考操作型ＣＡＤをハード面で改造し、リストバンドから出力された魔法を強化する補助具としてレオに渡した。
佐那については、あまりにピーキーすぎる鉄扇をより効率化した術式が刻印された二本一対の鉄扇を渡した。鉄扇の要同士が紐で括りつけられているが、紐にはチタンと銀でコーティングされた糸が編み

込まれていて、紐の間には全部で１２個の銀製の立方体が紐に括り付けられている。
　これは、古式魔法における高等技術の一つである『呪詛返し』をより効率化するために、術者の負担を減らすべく材質に糸目を付けないで組み上げた。佐那に渡した際、彼女から「これだけの呪具、平気で億単位は出さないと手に入れられないのですが」と言われたが、幼馴染である幹比古を守るのに半端な装備は渡せない、と言い含めると渋々受け取っていた。
　ＲＰＧでＲＴＡ（リアルタイムアタック）でもしない限り、ボスに挑むときは万全の備えをするのが普通だと思う。今回は下手すると生死に関わる部分も含んでいるし、『プラスワン』の要素が自分以外に襲い掛かる可能性もある。なので、出来る限りの準備はしておいた。
　最悪、周公瑾を〝消し飛ばす〟ことも考慮に入れる必要はあるが。
　幹比古への説明を終えたところでトレーラーが到着したアナウンスが構内に響き、それから数分後に達也たちが合流してきた。彼らからも沓子の存在が異質に見えたが、事情を一番知っている深雪はというと、笑顔を浮かべていた。
「沓子さん、お久しぶりですね」
「うむ、深雪嬢はより磨きが掛かっておるの」
「それはもう、愛する人の為なら努力は惜しみませんので」
　その言葉に視線の矛先が悠元に向けられ、その当人は溜息を吐きたそうな様相を浮かべていた。すると、セリアがこっそり悠元の背後に回って小声で話しかけてきた。
「流石ハーレムおぼっしゅ!?」
「少し黙ろうか？」
「い、いたひ……」
　言っておくが、自ら望んでハーレムを目指したわけではない。相手の気持ちを極力無碍にしたくないがため、この結果となっただけだ……結局のところ、望んでいるのとほぼ変わらないことに内心で盛大な溜息を吐きたかった。
　セリアに対する悠元の鉄拳制裁を見た一同は揃って冷や汗を流し

たのだった。

◇　◇　◇

　達也たちは宿泊先のホテルに荷物を預けに行くというので、一旦そのまま同行する形とした。その方が効率的に動きやすいというのもあったからだ。そのままコミューター乗り場に向かおうとしたところ、身に覚えのある気配――――それも、知己に会えて嬉しそうな雰囲気を纏っている人物――――を感じて悠元が真っ先に視線を向けると、光宣がこちらに向かってきていたので声を掛けた。

「おはよう、光宣。確かホテルで合流の予定の筈だったが」

「おはようございます、悠元さん。達也さんに深雪さん、水波さんも」

　知り合いがこちらに来るというので、居ても立ってもいられなかったのだろう。何せ、彼の友人自体が少ないため、その気持ちは分からなくもなかった。なので、運転手に無理を言って駅で合流する形としたとのことだ。

　一度顔を合わせている自分と達也、深雪と水波はともかくとして、エリカ達は驚きと関心が入り混じったかのような様子を見せていた。そこまでなら話は分かるが、その中で理璃が光宣を見て頬を赤く染めていた。

　そんな中、光宣からすれば親戚にあたるセリアが率先して声を発した。

「いやー、驚きだね。まるで男性版深雪みたいな風貌だよ。っと、初めまして。第一高校2年のエクセリア・クドウ・シールズです」

「貴方が大叔父様の……第二高校1年、九島光宣と言います」

　本来、面識を持つはずなどなかった……いや、片方は存在すらしていなかった九島家の人間同士の邂逅。お互いに九島の人間ということを名乗らなかった。それは、セリアも光宣も同じ魔法科高校の生徒として扱ってほしいという意思表示だ。

「第一高校2年、千葉エリカよ」

「同じく第一高校2年の西城レオンハルトだ」

「吉田幹比古。僕も第一高校2年だ」

（凄い、千葉家や吉田家の……それに、西城さんは確か、今年のピラー

ズ・ブレイク・ペアで優勝した実力者）
光宣は、魔法が得意でも心の裡を隠す対人技術は未熟なようで、彼らの自己紹介を聞いて軽く眉が動いた。佐那と沓子、姫梨の名字も九島家の人間だからこそ聞き覚えがあったようで驚いていた。
そして、残る理璃はというと……顔を真っ赤にしていた。水波を治療した影響が理璃に移動した可能性が高いだろう。すると、理璃は慌てて我に返り、深々と頭を下げた。
「は、はじめまして！　第一高校1年の十文字理璃と言います！」
「えっと、宜しく十文字さん（十文字家の……にしては、偉く畏まられてる気がするけど）」
同級生だというのに、水波以上に畏まられているのは光宣にとっても意外だったらしく、どうしたものか悩む節を見せていた。なので、それを仲介する形で理璃を落ち着かせ、光宣に話せる範囲で説明をした。
最終的にはお互いに納得したので良しとしたのだった。
しかし、この様子だと理璃が光宣に惚れているのは間違いないが、国防軍において影響力やシンパを有する九島烈の孫と国防陸軍総司令官である蘇我大将の親族にして十文字家の娘。これはこれで一悶着起こるのは間違いないかもしれない。
◇　◇　◇
達也たちはホテルに荷物を預け、そのまま今回の論文コンペ会場となる京都新国際会議場へと向かった。世界群発戦争終結後に元々あった京都国際会館を建て直したもので、自然が豊かな立地に加えて周囲には精々2階建てまでの民家ぐらいしかなく、近くにあったスタジアムは老朽化に伴い解体され、現在は公園となっている。
「大人数で隠れられる場所はなさそうだな」
「そうだね。でも、逆に言えば少人数のグループが複数隠れることは出来る」
「え？　山の中に野宿するとかは考えられないの？　とはいっても、そこまで出来るほど深そうな山じゃなさそうだけれど」
エリカが達也と幹比古の会話を聞いてそう発言しても無理はない。

ただ、論文コンペ自体は既にスケジュールも決められており、会場近辺はもとより京都市も宿泊先や交通機関の関係で周知されている。
　それに、横浜の場合は会場近くにあった廃ビルが大亜連合の破壊工作員の拠点になっていたが、そういった類のものは見られない。だが、京都の場合は横浜の時と比較して古式魔法師という存在が重要なファクターとなってくる。
「別に見張っておく必要もないんじゃねえのか？　相手からしたら、俺たちがいつ来るかなんて分かり切ってる話だろ？　だったら、当日隠れるだけで済むと思うぜ」
「あ、確かに……てか、アンタにしては頭が回るわね」
「余計なお世話だっつーの」
「はいはい、惚気は人のいないところでやってくれ」
　別にキャンプなどする必要は無く、寧ろリスクになりかねない。コンペは魔法技術者も来賓として参加はするが、横浜の時と違ってそれを実行した場合、『伝統派』は政府に対して公的な立ち退きも含めた『行政処分』という名の大義名分を与えてしまうことになる。
　レオとエリカの言葉に対してやや辛辣に釘を刺した悠元は、周囲を見回した後で幹比古に視線を向けた。
「それに、民家があるのなら隠れる方法がいくらでもある。そうだろ、幹比古？」
「そうだね。数人――――二、三人程度なら隠れるのは容易になる。古式の術者なら住人に暗示を掛けたり、認識阻害の術式で身を潜めることもできる。悠元が言った通り、隠れる方法は現代魔法師よりも多彩だからね」
「なら、虱潰しに歩いてみるか？」
　悠元と幹比古の会話を聞き、心にもない提案をしたのは達也だった。すると、これに対して答えを述べたのは佐那だった。
「達也さん、それでも見つけるのは極めて難しいかと思います。古式の術者は術自体の強度をギリギリにまで絞っているでしょう。達也さんや深雪さんの技量は無論知っていますが、高度な古式の術者であれば、民家の外に漏らさぬよう細心の注意を払うはずです」

「そうですね。まあ、悠元ならば歩いているだけで見つけられるかもしれませんが」
「人を勝手にアクティブソナー扱いするな、姫梨さんや」
原作よりも魔法力自体は強化されているが、それでも古式魔法の認識阻害や暗示を見抜くには経験が足りない部分があるし、虱潰しに探すわけにもいかない。この辺は事前に達也や幹比古と打ち合わせている。
「それで、どうする？」
「なら、僕が探査の式を飛ばすよ。レオとエリカ、それに佐那さんは護衛をして欲しい」
「俺らが？」
「それはいいけど……何か理由でもあるの？」
「エリカ、探査の式を飛ばしている間は幹比古さんの防御がおろそかになります。なので、西城さんとエリカにも手伝ってほしいのです」
古式魔法に精通している佐那の言葉に、レオとエリカは大人しく頷いた。古式魔法の厄介さは二人も理解しているためだ。その上で幹比古の視線は達也の方を向いた。
「達也と深雪さんと桜井さんは先週の打ち合わせの通り、市内を回ってくれないか。それで、ええと……」
「なら、僕も達也さんたちに同行します。昨年のようなことがあって困るのは二高も同じですので」
「光宣は藤林さんの親戚でな。その伝手で案内してもらうことになったんだ」
幹比古がどう扱えば迷っていたところに、光宣は察した上で達也らと同行することに決めた。その上で達也が言い放った言葉から、国防軍関連絡みのものだと判断していた。すると、深雪が理璃の様子に気付いて達也に提案した。
「お兄様、理璃ちゃんも同行させてあげるべきかと」
「……成程、そういうことか。光宣も構わないか？」
「はい、構いません」
光宣としても、十文字家の人間が加わってくれることでもしもの時

も上手くやり過ごせると判断していた。先日のことからしても、いかんせん現代魔法だと過剰防衛を疑われる可能性を減らしたい思いがあったからだ。ただ、理璃としては光宣に対して見とれており、これには水波までもが珍しくフォローに回る有様だった。

そして、幹比古の視線は悠元に向けられた。

「それで、悠元はどうするんだい？」

「会場の担当者と打ち合わせておきたいから、そちらは任せる。その後は状況を見て動くことにするから、もし助力が必要なら連絡をくれ」

悠元と沓子、それとセリアに姫梨の四人で動くということを伝え、各自で行動を開始することになったわけだが、別れて行動する前に深雪が近寄ってきた。

「悠元さん……東京に帰ったら、甘えさせてくださいね」

……どうやら、帰ったら帰ったでお姫様のご機嫌取りをせねばならなくなったようだ。

人すら殺めかねない天才の遺物

３つのグループに別れる形で各々行動を開始した。悠元と沓子、姫梨とセリアは新国際会議場で警備担当者に論文コンペ当日の警備スケジュールの打ち合わせを行い、その結果は直ぐに服部へ送信した。事前に打ち合わせていた内容の確認のため、ものの１５分程度で用事が済んだ。

「打ち合わせは終わりましたけど、私達はどうします？」

「そうだな……」

原作で出向くことになる嵐山は悠元が既に一度制圧した際、周公瑾に関する情報を入手している。そして、周公瑾が潜伏している可能性が最も高い場所も推察できている。だが、これらの情報は達也から情報提供を求められた際に開示するつもりでいた。

あの場では理璃に達也の素性を知られることになるため、情報開示を避けた形だ。

「『聖天八極護法式陣』――――『聖域』発動の下準備は終わったし、トリガーとなる札の準備は終えているが……幹比古に渡すのは夕方以降か明日の午前中のほうがいいな」

「何か理由があるのか？」

実を言うと、『聖域』構築に適していると踏んで採用したこの『聖天八極護法式陣』だが、念のためにこの効力を上泉家本邸で試したところ、本邸の近くにある寺が管理している墓地に憑りついていた悪霊の類が根こそぎ消えたのだ。

アリスにもこの効力を計測してもらったところ、パラサイトのような妖魔の類であれば瞬時に消え失せるとのこと。しかも、範囲内に予め展開されている結界の効力まで増幅するため、邪な人間が聖別された川に足を踏み入れるだけで大ダメージを負うという予測まで得られた。

達也が周公瑾と接触していない段階で『聖域』を発動させた場合、宇治にいる周公瑾が瞬殺されかねないという可能性が浮上した。なので、幹比古には探査の式による探索を少しでも楽にするための補助具

を渡す形になった。
「現時点でそれを発動させた場合、恐らくだが大陸の方術士のみならず『伝統派』まで多少なりとも被害を受けかねない。何せ、鬼や妖怪、悪霊すらも必ず殺す絶対聖域だからな」
「に、人間にまでダメージを与えかねないって……」
　この魔法が編み出した安倍晴明以外まともに扱えないのも納得がいく話だし、しかもこの魔法は蘆屋道満（あしやどうまん）こと道摩法師（どうまほうし）を負かすためだけに編み出したものだった。対人間にも効果が出てしまうのはその背景があったからだが、平気で魔法を編み出していく晴明の存在は師ですら手を焼いていたのかもしれない。
　まあ、道満は晴明の妻とねんごろになり不義密通――――現代の言葉で言うところの〝不倫〟をやらかしており、それにキレた晴明が怒りを原動力に護法式陣を編み出して、呪術を繰り出した道満を歯牙にも掛けず圧倒した、と神楽坂家に遺っている晴明直筆の手記にて判明したほどだ（道満と不義を働いた妻をどうしたのかという文言は記載されておらず、晴明自身もこればかりは本気で悩んだのかもしれない）。
「単なる結界術式かと思えば、悪意のある人間すらも殺しかねない浄化の結界は正直に言ってかなりヤバい。なので、術式自体は一応改造したが、それでも悪意を持つ人間を気絶状態に陥らせるので精一杯だった」
「いや、それだけでも十分すぎると思いますよ？」
　ファンタジーで言うところの『魔物を絶対殺す結界』を平気で完成させている存在如何はともかく、護法式陣を発動させると京都市街地を含めた旧京都府南部をほぼカバーできる形となり、大阪・奈良・滋賀の一部もその影響下に含まれる。『聖域』の再構築が成れば、古式魔法師はおろか現代魔法師も無視できないだろう。
　本来なら協会本部がある関係で日本魔法協会に通達するべき話なのだが、『伝統派』に対してロクな影響力すら発揮できない組織に言われる筋合いはない――――というのが千姫の結論であった。
「そしたら、うちらはどうするの？」
「……戦力的には申し分ないから、鞍馬山の拠点を潰すか」

「サラッというあたり、お主も怖いの」
幹比古の探査の式に引き寄せられる形で大陸の方術士らしき気配が会議場に移動している。幸いにして、先日鞍馬寺を訪れているので鞍馬山までの移動工程は多少なりともショートカットできるが、『鏡の扉(ミラーゲート)』はあくまでも緊急時の移動手段に過ぎない。悠元は懐から『ワルキューレ』を取り出した。
「市街地で魔法を使ってもいいの？」
「予め九島閣下から直接許可は取っているから、問題はない」
光宣の治療に関する条件の一つに、京都・奈良方面における魔法使用許可を烈から取り付けている。本来ならば九島家当主に伺うのが筋だが、その見返りに変な要求を呑まされる可能性が大いにあった。
悠元は『ワルキューレ』で『疑似瞬間移動』をより効率化させた音速移動魔法『音速瞬動(ソニック・ドライブ)』を発動させ、四人は瞬時に鞍馬寺の近くの山林に降り立った。
「うおっ、と。あっという間に鞍馬寺の近くまで来れるとは、流石悠元じゃのう」
「さて、手早く済ませるとしましょうかね」
「……これ、私達の出番があるのでしょうか？」
「姫梨、それは言わない方がいいかと」
サラッと常識外のことを成す悠元だが、沓子はもとより姫梨やセリアもれっきとした実力者。自分らのことを棚に上げる様な言葉は、無論悠元の耳にも入っていたのだった。

◇　◇　◇

悠元らが鞍馬山の拠点を潰しに向かった頃、達也らは左京区大原にいた。葉山からの情報で、周公瑾は三千院の付近――正確には『後鳥羽天皇大原陵(おおはらのみささぎ)』『順徳天皇大原陵(おおはらのみささぎ)』で黒羽の捜索部隊と小競り合いを起こした後、行方を晦ましている。双方共に陵墓の禁域に足を踏み入れることは避けたようで、達也の眼で見ても特に周公瑾の痕跡と思しき物は見つからなかった。
情報によると、周公瑾は律川(りつせん)に沿う形で上流側に逃げて行ったらしい。

尚、同行している理璃は曲がりなりにも十師族の一員であるため、今回の一件に関する情報は十文字家の人間（理璃の父親である和樹に対しても同様で、七草家への情報漏洩を危惧してのもの）に漏らさないことを条件として一部開示された。理璃も周公瑾の名前は耳にしたことがあるようで、その意味をすぐに理解して頷いていた。それでも、達也と深雪が四葉の人間という事実は光宣も知らないために秘匿されたままだが。

「その方角ですと、鞍馬山の方角になりますが……向かってみますか？」

「……（これは……悠元たちの気配か？）」

光宣の言葉で達也はふと鞍馬山の方角に眼を向けた。すると、明らかに馴染のある気配を鞍馬寺の近隣で感じた。注意深く見ないと気付けない気配からして悠元なのは間違いなく、彼らが向かう先が鞍馬山だとするなら、自分らが向かったところで既に終わっている可能性が高いだろう。

それに、方術『鬼門遁甲』の性質は悠元から聞き及んでいるし、周公瑾が態々リスクを冒してまでコンペ会場の近隣に潜んでいるとも考えにくい。黒羽の部隊から逃げ果せている事実を鑑みても、彼が鞍馬山にいる可能性は極めて低いだろう。そこまで考えた上で達也は言葉を発した。

「いや、市街地に戻ろう」

「達也先輩は、件の術者が市街地の中に潜伏していると思われているのですね」

「成程、木を隠すなら森の中ということですか」

達也の意図を理解して理璃と光宣がそう返した。それを聞いた上で達也は先程掴んだ情報を共有する意味でもハッキリと述べた。

「それと、今しがた鞍馬山のほうを視てみたが、知っている気配が感じられた」

「……悠元さんたちが鞍馬寺の近くにいるのは感じました。一体何をする気なのでしょうか？」

「それは分からないが、悠元の相手をする古式魔法師は『ご愁傷様』と

言うべきなのだろうな」
　達也の言葉を聞き、悠元と深く関わっている深雪がその方角に悠元の存在を認めた上で尋ねたが、達也はこれから起こりうることを想像した。彼の敢えて述べられた言葉に対し、光宣や水波、理璃は苦笑を零すほどだった。
「鞍馬山に関しては悠元さんに任せていいでしょう。市街地の『伝統派』となりますと、清水寺の参道に金閣寺の近隣、それと天龍寺の裏手辺りになりますね」
「意外に少ないんだな」
「京都は本物の伝統を受け継ぐ宗派の勢力が奈良以上に強いですから。名前だけの新興勢力は周辺の山の中に押しやられているんですよ。それに、神楽坂家の影響力が残っていますから」
　宗派の勢力を支えているのは他でもない神楽坂家の教導によるもの。名のある高僧が態々箱根の神楽坂本邸に出向き、霊峰たる富士の麓に広がる樹海で研鑽を積む行い自体は神楽坂家が箱根に移ってから続いていることだが、その結果として正当な宗派が『伝統派』に対する影響力を有する結果となり、『伝統派』としても彼らを敵に回して神楽坂家の怒りを買いたくないのだろう。
「悠元の今の実家がか……そうなると、『伝統派』を名乗っているのはせめてもの抵抗の表れなのかもしれないな」
（達也様、容赦のないご感想ですね）
「……正直分かりません。彼らの目的が第九研および『九』の各家へ復讐することが目的だった筈です」
　光宣が理解できなかったのは、報復を目的とするならば奈良に集中していてもおかしくはなかった。だが、現実問題として京都へ行ってしまった『伝統派』も数多くいる。そんな光宣の疑問に対して達也が自分の考えを述べた。
「そうか？　伝統派を名乗った明確な動機はともかく、奈良を離れた理由なら分かるぞ」
「えっ？」
「『伝統派』が一枚岩でないというのは光宣が教えてくれたことだが、

ならば第九研に対する温度差も個々によって激しいんじゃないのか？」
　特に強い恨みを持っている『伝統派』は奈良方面に残り、３０年以上報復の機会を伺い続けている。だが、その報復によって逆に更なる報復を生み出し、結果的に報復を恐れたことで奈良から離れて京都に流れた一派も生まれた。旧第九研での魔法実験は古式魔法と現代魔法の融合――――古式魔法の術理・術法を取り入れた現代魔法師の〝開発〟にあったことは秘密にされておらず、協力の見返り自体も社会的地位や金銭で行うことは説明されていた。
「その熱意を建設的な方に向ければ、国家や社会に貢献できたかもしれないでしょうに」
「気持ちは分かるが、どんな状況でも前向きであり続ける方が難しい。それは深雪が一番分かっていることだろう？」
「……そうですね」
　だが、魔法師と言えども人間であり、ましてや外部に漏らせない魔法を会得できる機会だと〝勝手に解釈〟した結果、『伝統派』が生まれてしまった。いや、この実験を主導した当時の政府は恐らく数多くの古式魔法師を集めるために魔法を報酬に含める様な誘惑の言葉を入れていたのかもしれない。尤も、当時のことを良く知る人間でなければ知りえない情報の為、達也にはそこまで言い含むつもりなどなかった。
「でしたら、どうして伝統派は大陸の方術士を受け入れるような真似をしたのでしょうか？　いくら力を手に入れるためとはいえ、下手をすれば政府から叛逆者の誹りを受けることも免れないかと」
「最初は力を手に入れるためだったが、それが積み重なった結果として周公瑾からの依存から抜けれなくなったのだろう。だが、これ以上は許されないだろうな」
「……悠元さん、ですね」
「そうだ。師匠から教えてもらったことだが、神楽坂家は古式・現代の魔法の如何を問わず、全ての魔法師を統括する立場にあるらしい」
　永らく京の都を離れていた神楽坂の人間が再び足を踏み入れた。

そのことだけでも、この状況を座視できないという姿勢を見せたことになり『伝統派』は選択をせねばならなくなった、と達也は八雲から聞いていた。
「その辺は俺らの領分でない以上、深く関わるべきじゃない。ともあれ、市街地の方を探りたいと思う」
「金閣寺と天龍寺が同じルート、清水寺だけ別のルートになりますね。いずれにしても、吉田君たちと一旦合流したほうがよさそうです」
「いや、態々合流するのは時間が惜しい。このまま清水寺に向かおう。そして金閣寺、天龍寺の順で行こう」
「わかりました」
　隠れている人物を探るには、達也や深雪が修得している魔法でも厳しい。それに一番長けている悠元が鞍馬山の近くにいるということは、『伝統派』の拠点を潰すために行動していると思われる。彼ならば戦闘をする手間など皆無に等しいが、今は少しでも手掛かりが欲しい。ならば、今は自分が出来る範囲で動くのが一番理に適っていると判断して動くことにした。
◇　◇　◇
　鞍馬山の『伝統派』の拠点の制圧はそこまで手間にならなかった。初手で悠元が『千鳥』を拠点内に撃ち込み、辛うじて被害を防いだ忍術使いに対しては姫梨、沓子、そしてセリアが難なく制圧した。特にセリアはスターズの訓練をしっかり積んでいた（魔法訓練よりも対人戦闘を主とした訓練をリーナ以上にこなしていた）ため、あっさりと沈んでいく忍術使いに同情を禁じえなかった。
「よし、終わりっと……不完全燃焼気味だけれどね」
「そう言うな。相手がどんな術を使うのかも分からない以上、不意を打たれないようにするのも戦術の一つだよ」
　大体、戦闘のルールは試合のルールではないし、視覚ひいては知覚による認識を前提とする現代魔法の術者だと舐めて掛かったのだから、騙し討ちとか卑怯などといわれる筋合いはない。ここの後片付けは鞍馬寺と延暦寺に任せることとし、拠点の外に出たところで悠元の端末が鳴った。映像通信を繋げると、相手は幹比古だった。

「幹比古か。そっちは襲われたのか？」
『まあね。鞍馬山の忍術使いに大陸の方術士がいたよ』
　会場近くの宝ヶ池で忍術使いの襲撃を受けたが、エリカとレオが難なく退けた。そして、大陸の方術士が傀儡式鬼を駆使して忍術使いを亡き者にしようとし、挙句の果てには大陸の妖怪である『相柳（そうりゅう）』を繰り出してきた。これに対して幹比古が『竜神』の喚起を考えたところで『相柳』が破裂した。それは会場の視察に来ていた一条将輝が『爆裂』で成した事であり、術を破られた反動で方術士は近くの林の中で死んでいたとのこと。
「こっちは鞍馬山の拠点を制圧した。後のことは既に任せているから問題はないが」
『……あっさりと潰してしまう手際は流石だね。こっちは警察の対応が残っているから、悠元たちのほうは好きに動いてくれて構わないよ』
「了解した」
　幹比古との通話を終えたところで、悠元は三人に事情を説明した上で今後の動きを考えることにした。恐らく達也は周公瑾の『鬼門遁甲』を考慮して光宣から『伝統派』の拠点を聞き、清水寺と金閣寺、天龍寺に赴くことが予想される。
「ただ、拠点に行ったところで手掛かりが得られる可能性は低いでしょう。周公瑾がうまく逃げ果（おお）せていることを考えても、市街地の中にいるのは考えづらいかと」
「そこなんだよね……お兄ちゃん、何か知ってる？」
「……周公瑾の潜伏場所の見当はついている。ただな、その場所がかなりヤバい」
「どこなのじゃ？」
「国防陸軍宇治第二補給基地」
　悠元が言い放った言葉に対し、三人は絶句に近い有様だった。国防軍の施設に周公瑾が潜伏している――――九校戦の時は対大亜連合強硬派を唆し、今回は対大亜連合宥和派に匿ってもらっている。この事実だけを見ても、国防軍が必ずしも国家の利益を守るための軍人たる

責務を果たしているのか疑問が尽きない。
「だが、俺が手を下したとして、それはそれで神楽坂家と『九』の家との確執を増やすだけだ。だから、今回は達也が動いてもらわないと話にならない」
「今すぐ達也さんに伝えないのですか？」
「それに関してだが……周公瑾は普通の人間じゃない。だから、達也が周公瑾を取り逃がす可能性もある」
嵐山に関する情報提供で達也の負担を減らすことは出来る。ただ、周公瑾の捕縛には達也と将輝、そして光宣の三人が動ける状況を作るのが理に適っていると判断した。なので、いくつかのイベントをスキップする必要は出てくるが、今日の深夜に仕掛ける算段で動くつもりでいた。体調面に不安の残る光宣を無理強いする気はないが、彼の気質からして無理を押してでも動くことは想定される。

歪みを正すために

本来、軍人の職務は命に従って国家を護ることにある。だが、いくら繋がりを有しているとはいえ、大陸の人間――それも、この国を幾度も脅かしてきた実行犯を匿った時点で国防軍の足並みが揃っていないことに問題大アリ、と言うべきだろう。

そもそもの話、この国の軍の規模は周辺国家に比べれば小さい。そんな中でかつての陸海軍による対立で足並みが揃っていなかった愚行を繰り返す方が〝愚か〟としか言いようがない。その為に、態々今上天皇にお願いをして『おことば』を賜ったにも拘らず、この有様には誰だって悲観的な意見の一つぐらい言いたくなるだろう。

「本当に呆れる他ねえよ。その国防軍の特務少将をしている自分が言うのもどうかと思うが」

「……そういうのはスターズのみならずＵＳＮＡ軍でもあったりするから、他人事だと笑えないんだよね」

「あはは……笑うべきことではないのじゃろうが」

「沓子さん、こればかりは仕方が無いかと」

国防軍やスターズなどの規則や規律云々の話はともかく、周公瑾は間違いなく国防軍宇治第二補給基地にいる。周公瑾がいくら姿を紛れ込ませようが、彼の中に残っている名倉の血の針は周公瑾の所在を確かなものにしていた。

正直なところ、自身の固有魔法である『万華鏡（カレイドスコープ）』が周公瑾にどこまで通用するか不明瞭だったが、対パラサイトとの戦闘で得られた情報がそのまま周公瑾に生かせているのは正直に言ってありがたい。

「達也らのほうは時間が掛かるだろうから、先に幹比古達と合流しよう。将輝もいるようだから、アイツには嫌でも協力してもらうつもりだ」

「どうしてじゃ？」

「将輝は周公瑾と面識があるから」

悠元は昨秋の横浜事変の報告書で将輝が周公瑾と面識を持っていることを知っていた。正義感の強い将輝ならば、周公瑾の存在を聞い

て黙っていられる訳もない。
原作では達也と将輝にプラスする形で黒羽の部隊、それとは別に光宣が立ち塞がる形を取っていた。本来ならば国防軍自ら動くのがいいのだろうが、「九」の家に『伝統派』という勢力が乱立している以上、期待できることはあまりにも少ない。
それに、その国防軍から命を狙われた身として……いくら軍事機密に関わる立場にあろうとも、三矢家の人間として国防軍に義理立てする意味合いは神楽坂家の人間となったことで消失している。
沖縄での叛逆者を見抜けなかったこと、十山家および国防軍情報部による襲撃を抑えれなかったこと、そしてパラサイドールの一件で一切の情報開示をしてこなかったこと。この時点で仏の顔をして見過ごせるボーダーラインを超えつつあり、挙句の果てに周公瑾の一件で止めだ。
「お兄ちゃん、怒ってる？」
「……まあ、そうとも言うな。言ったところで改善するかどうかなんて分からんが」
どいつもこいつも視野が狭すぎる、と思う。沖縄と佐渡で侵略された過去をもう忘れたのか、と。昨秋に大亜連合の部隊による襲撃を受け、あまつさえ軍をこの国に差し向けようとしていたことも含めて。
皮肉にも、一度危ない目に遭わないと理解できない輩が多すぎる。これも、第二次大戦後の〝戦後体制（レジーム）〟による国民意識の変化が一番大きい。これはもう、本当の意味で目を覚まさせる意味合いも含めて政治家の尻にＴＮＴを括りつけるぐらいのことをしないと本当の意味で改善は望めないだろう。
だが、それは周公瑾も含めた懸案事項を取り除いてからの話だと判断して、端末を取り出すと幹比古へのメールを打ち込み始めた。
◇　◇　◇
流石に帰りを魔法で移動するのは迷惑が掛かるし、今頃市街地に向けて移動している達也たちとの歩調を合わせる意味でもゆっくり行くのが理に適っていると判断した。なお、深雪からは時折画像付きのメールが届くため、観光でも楽しんでいるような感じだった。

新国際会議場に戻ってきたときには警察が撤収を始めており、ようやく解放されていた幹比古たちが悠元らに気付いて駆け寄ってきた。短時間しか拘束されなかったのは、佐那の名字である「東道(とうどう)」が大きく影響しているのだろう。
「悠元、ミキから聞いたわよ。鞍馬山に行っていたって。何で面白そうなことを勝手にやってるのよ」
「どうしても必要な事だったし、お願いされていたことだからな。てか、そっちだって派手に暴れたんだろ？」
「否定はしないけど、少し拍子抜けだったわ。水の妖怪が出てきたときは焦っちゃったけど」
軽運動部での訓練に加え、最近は元継の勧めで新陰流剣武術を本格的に学んでいるため、原作よりもより洗練された剣術を繰り出すエリカ相手では、いくら忍術使いでも準備運動レベルになったのだろう。それはエリカの後ろで苦笑しているレオも同様だったようだ。
「その辺にしてやれよ、エリカ。悠元らに比べれば、俺らは古式の術者相手の経験が少ないんだからよ」
「……アンタがまともなことを言うなんて、明日は雪でも降るのかしらね」
「夫婦漫才は人のいないところでやってくれ。そして、久しぶりだな将輝」
「あ、ああ。にしても、四十九院が一緒とは驚きだが」
「何じゃ、将輝。不都合でもあるのか？」
事情を知らない将輝からすれば、沓子が悠元らと一緒にいるのが不思議に思えてならなかったのだろう。これに対して不満げに言い放った沓子の言葉に将輝は慌てて取り繕った。
「い、いや、そういう訳じゃないんだが……神楽坂、さっきのことも含めて情報交換がしたい」
これはありがたい、と内心で思った。どう切り出そうか悩んでいたが、向こうから先程幹比古たちが戦っていた古式の術者のことも含め、コンペを無事に成功させたいという思いがあるのだろう。
「……それなら、どこか内密に話が出来る場所の方がいいな。ちょっ

と待ってくれ」
新国際会議場の一部屋を借りるということもできるが、事は周公瑾に関わる案件であるし、大陸の影響力を受けた他の連中が見張っていない保証もない。出来るだけ市街地に近い場所で内密に話が出来るとなると、選択肢は結構少ない。
そして、悠元はとある場所に連絡をして事情を説明したところ、話が出来る場所を快く貸してもらえる話が付いたので、連絡を終えた上で他の面々と向き合った。
「清水寺（きよみずでら）の住職殿に相談をしたら、応接の間を貸してもらえることになった。情報交換はそこでいいか？」
「ああ、それはいいんだが……神楽坂、一体どんな伝手を使ったんだ？」
「爺さんと今の実家の伝手だな。十師族の将輝からしたら不思議に思っても仕方ないだろうが」
北法相宗（きたほっそうしゅう）の本山である清水寺は神楽坂家で精神の修行を行い、上泉家で更なる修行を積むことが多い。旧群馬県と旧新潟県の県境には仏僧のための修行を行う施設があり、自分も魔法の訓練の為に出向いたことがあり、そこで多くの仏僧が精神統一の修業に励んでいた。
自分の場合は天神魔法の研鑽をするため、滝行というか滝の水を操って水の属性を持つ精霊や神霊の喚起制御の訓練をしていた。その際に引き寄せられた『水竜神（すいりゅうじん）』――『竜神』よりも遥かに強力な水属性最上位神霊の一角で、かの安倍晴明ですら手古摺った存在――から従属の意思を感じた際には冷や汗どころか寒気がしたほどだ。
閑話休題。
「ともあれ、どこかで昼食を済ませてから向かおう。そういえば、将輝は公共交通機関で来たのか？」
「いや、俺は動きやすいようにバイクで来たんだ」
将輝だけ別の移動手段を用いている以上、観光地の近くでは停める場所にも苦慮するはずだ。将輝はバイクを一度ホテルに置いてから同行するとのことで、それならば京都駅近辺で昼食を済ませるのがいいと判断し、行動を開始した。

すると、エリカが軽く手招きしたので悠元が近付くと、エリカが小声で話しかけてきた。
「実はね、悠元たちが来る前にバイク絡みの話をしたんだけれど、その時の一条君たら妄想をしている素振りを見せたのよ。あれは深雪絡みで間違いないと思うわ」
九校戦でのやり取りは選手であったエリカも見ており、将輝が深雪に対して惚れているのはすぐに分かったらしい。達也ではなく深雪に話しかけている時点でバレバレなのは言わぬが花、とも言えるが。
本来はパラサイト事件の時に達也のバイクの存在を知るわけだが、この世界では春休みにレオが二輪の免許でも取ろうか悩んでいた時、偶々達也が相談に乗っていた。それでエリカも達也が二輪を持っていることを知ったのだ。
「……正直、一条君が哀れよね。勝ち目のない戦いに挑むなんて、九校戦で悠元と戦った時みたいじゃない」
「あれでも十師族だからな。純情な気持ちだけは褒めてやりたいが……無理矢理奪うようなら、アイツの顔面を凹ます」
「いや、悠元がやったら顔面が破裂しそうで怖いわよ」
その気になれば出来なくもないが、自らおぞましい光景を作る気にもならない。『千鳥』で気絶させたり、奈良で同士討ちを狙ったのはそんな気持ちもあったからだ。エリカの言いたいことも分からなくはない、と悠元は溜息を吐き、それを後ろで聞いていたレオは肩を竦めていた。

◇　◇　◇

昼食の際、別の交通機関で京都に来ていた真紅郎と合流して一緒に昼食を食べることとなった。何せ、真紅郎からすれば昨年は第三高校の発表直前に襲撃を受けて面子を潰された形だったため、今年の気合の入りようは尋常でなかった。将輝の調査に付き合うと言ったのも、そういった懸念が今年も起こらないか不安だったのかもしれない。
ただ、清水寺への同行は真紅郎から辞退した。彼曰く「将輝が関わるとなると、僕が口を出せる領分じゃなさそうだからね」という文言もあり、悠元も無理強いするつもりはなかった。

一行は清水寺に向かう。深雪や光宣ほどではないにせよ、参道を容姿の整った面子が歩くためにあちこちで人がぶつかる様子が見られた。その主たる原因は将輝で、将輝当人としては困惑している様子が見られたが、この程度で困っていては十師族なんて務まらない……とは思っても口に出すことなく清水寺に入った。

寺では住職自ら出迎え、彼の案内で奥にある応接の間へ通された。腰を下ろして持て成しの茶菓子を頂いたところで悠元が口を開いた。

「まず、前提として一つ教えておくことがある。俺は国防陸軍第１０１旅団所属の特務将校兼独立魔装大隊の特務士官だ。これは国家機密に準ずるものなので、他言はするな」

「なっ……!?」

いきなり言われたことに将輝は「嘘だ」とは言えなかった。それは、悠元の周囲の人間が神妙な表情を浮かべていることからして、事実だと察するほかなかった。将輝が頷いてその事実を受け入れてくれたところで、悠元が話を続ける。

「今回は、俺が実力のある達也にお願いをして、横浜事変も含めた複数の事件――喫緊だと、九校戦で国防陸軍の対大亜連合強硬派を唆した人物の捜索任務でここに来ている」

本当は達也が四葉家――ひいては『元老院』の命を受けて動いているわけだが、本当のことをいう訳にもいかない。まあ、達也に協力しているのは事実だし、『元老院』の一角を担っている以上は？を言っているわけではない。

『神将会』に所属している姫梨は言うまでもなく、実家から何かしら話を聞いているであろう沓子や佐那、原作を知っているセリアも大して驚きはしていなかったが、幹比古やレオ、エリカは驚きを露わにしていた。

ただ、悠元が自ら関わっていることに加え、その危険性を聞いたところで辞退するかと言われると……それはないとお互いに納得させていた。

尤も、この中で一番驚いているのは将輝に他ならない。

「……それで、その人物の名は？」

「お前も会った事のある人物――――横浜・中華街の方術士、周公瑾だ」
「周公瑾!? あいつが!?」
予想通りとも言うべきか、将輝は悠元から聞かされた名を聞いてすぐにピンと来たようだ。将輝は周公瑾の厚意――――いや、この場合は彼の策略によって戦線離脱を余儀なくされた。ただ、あの場には自分や達也のみならず、独立魔装大隊や『神将会』に三矢家の協力員までいたので、将輝一人抜けたところで痛手ではなかった。
「報告は聞いているが、中華街に逃げ込んだ大亜連合の部隊を引き渡したのが周公瑾だったんだな?」
「ああ、神楽坂の言う通りだ」
将輝としては、周公瑾に〝虚仮にされた〟と内心で怒りの炎を灯している。このやる気があるのならば、こちらがこれからやろうとしていることも素直に協力してくれるだろう。本来、師族同士の共闘や共謀は師族会議のルール上許されないが、神楽坂家の人間である自分が仲立ちする形で共闘するのならば問題ない。
「それで、その人物の行方は分かっているのか?」
「ああ。12日まで嵐山の拠点にいたが、その翌日には南東方面に移動している。奈良や滋賀、三重方面に離脱した形跡はない。将輝、もし周公瑾の捕縛に協力する意思があるのなら、覚悟を決めろ」
「……まさか、神楽坂。周公瑾が潜伏している場所というのは」
将輝は悠元が言い放った情報から嵐山の南東にある場所の見当がついたようで、将輝は動揺を隠せなかった。その答え合わせをするかのように、悠元はハッキリと言い放った。
「国防陸軍宇治第二補給基地。周公瑾はその基地の対大亜連合宥和派に匿われている。今迄得られた情報からして間違いない」
「……」
「今言った情報を父親に伝えて判断を仰いでもいい。だが、相手は卓越した古式の術者で、方術『鬼門遁甲』を得意とする。お前が動こうか動くまいが、今日の深夜に基地を襲撃して周公瑾を捕縛する」
「正気か!? お前も国防軍の軍人なんだろう!?」
将輝の言い分も理解はする。だが、周公瑾が自分の方術で匿ってい

る軍人を〝洗脳〟して迎撃してくる可能性が残っている。軍内部の自浄作用を待っていては周公瑾に逃げられるだけだ。
「国防軍の人間だからこそだ。近年の沖縄や佐渡、そして横浜での一件で大亜連合や新ソ連による襲撃を受けた以上、今の軍人たちに求められるのは国家への忠誠心に他ならない。ただでさえ、この国は経済規模こそ世界屈指だが、軍の規模の差は歴然。お前だって佐渡や横浜の戦闘を経験している以上、国防軍の分断が何を齎すかなんて分かる筈だ」
「……そう、だな」
「ここまで説明した上で将輝に尋ねる。お前は協力する気があるか？　ないのならば、周公瑾への悔しさも忘れて事前調査なりするといい。但し、妨害した場合は容赦なくいかせてもらう」
キツイ言い方だが、本来この国への忠誠を誓うはずの軍人がこの国を混乱させ続けた実行犯を匿った時点で〝犯罪幇助〟が成立してしまっている。匿っているのは一部の人間だが、それを怪しむことなく見過ごしている時点で基地どころか国防陸軍、ひいては国防軍の問題になる。
武力という力を持っている以上、同じ力での正攻法で勝てる相手ではない。だが、これはルールに則らない戦闘である以上、別に相手を正攻法で倒す必要などない。
悠元の辛辣な問いかけに対して将輝は少し考えた後、真剣な表情を悠元に向けた。
「神楽坂、協力させてくれ。周公瑾に虚仮にされた落とし前は自分の手で付けないと気が済まない。その為なら、相手が国防陸軍でも戦ってやる」
「……分かった。それじゃ、残る協力者には後で説明するとして、大まかな作戦を立てる。レオやエリカ、幹比古に佐那も手伝ってもらうから、覚悟しておけ」
ここまで聞いた以上、最早一蓮托生という有様に幹比古も諦めたような表情を浮かべ、エリカはやる気満々と言わんばかりに喜んでおり、それを見たレオは疲れたような表情を見せていた。佐那は幹比古

を窘めていて、その言葉で慌てふためく幹比古の様子を生暖かい目で見つめるセリアや姫梨、沓子の姿があった。

姉も姉なら妹も妹

将輝から協力を取り付けることは出来た。まあ、本人としてはここで活躍できれば深雪にもいい印象を与えられると思っているのだろう。

そもそも、昨年のモノリス・コード決勝でオーバーアタック未遂をやらかした件に関して謝罪を受けていないこともそうだが、深雪の心を動かすにもそれなりの労力がいることを理解しているのだろうか。自分の場合は深雪から一目惚れされ、身を挺して彼女を助けたことで決定的となってしまったわけだが。

別に深雪から甘えられること自体を苦労だとか思っていない。寧ろ一人の男性としては役得のレベルに達するために、それで文句を言ったら他の男子から血涙が流れかねないレベルで嫉妬の目線を向けられかねない。

正直なところ、デートなどといった恋人らしいステップを綺麗に吹き飛ばして婚前交渉から入ってしまったのは自分でも理解や予測が追い付いていなかった。まあ、一緒のベッドで眠ろうとしてくる時点で多少のスキンシップやラッキースケベを起こしかねないと覚悟はしていたが、流石に予想外だった。

周公瑾の捕縛や後片付けもあるわけだが、その後に待っていることが一番の難関だと思う。とりわけ来年初めには四葉家の慶春会――〝四葉継承〟に繋がっているだけに尚更だ。

協力を得られたところで達也にメールで連絡を入れたところ、丁度清水寺の参道にある豆腐料理店（メールには書かれていなかったが、悠元と沓子が食事をした場所で間違いない）を丁度出たところで、清水寺で合流することとなった。

その返信メールから十数分が経過し、達也らも合流した。将輝は深雪の姿を見て真っ先に声を掛けており、悠元と深雪のことを知る面々からすると、将輝の行動が〝滑稽〟にも見えているような素振りを見せた。

「達也、すまないな。捜索を打ち切るような真似をさせてしまって」

「いや、こちらはこちらで情報も得られたからな」
　達也が言うには、その料理店で出会った魔法師が悠元や沓子と出会っていたことを明かし、周公瑾に関する詳しい情報ならば悠元に聞くのが一番早いとまで言っていた。ともあれ、達也らに着席を促した上で悠元が改めて説明する。
「……その魔法師は確かに俺と沓子も会っていた。その中で向こうは嵐山に関する情報も開示されたが、結論から言おう。周公瑾は嵐山方面におらず、彼が現在潜伏している先は国防陸軍宇治第二補給基地だ」
「国防陸軍のですか!?　成程、それならあの魔法師が言っていた情報と一致しますね」
　光宣の驚きの言葉を聞きつつ、「道理で見つからない筈だ」と達也はそう零した。その上で、悠元は言葉を続ける。
「だが、国防軍の悠長な対応を待っていては論文コンペにも大きな影響が出る。なので、今日の深夜に基地を襲撃して周公瑾を捕縛する。最悪は殺しても構わないと母上から許可は貰っている」
　周公瑾は大陸の方術士で、〝数字落ち〟の人間すら倒しているだけでなく黒羽貢ですら殺し切れなかった相手。それに加えて基地の軍人が周公瑾に操られる形で襲撃してくることも予想される。
　悠元の言葉を聞き、元よりそのつもりであった達也は頷きつつも尋ねた。
「ここに一条がいるということは、一条も協力するということでいいんだな？」
「無論だ、司波。俺にとっても周公瑾は無関係じゃない」
「……分かった。その言葉を信じるぞ」
　まず、第一段階として基地の人間を北側におびき寄せる。魔法次第で目立たせることは出来るが、その役目はセリアに任せることにした。
「セリア、基地の北部に魔法を撃ち込んでほしい」
「……なら、〝アレ〟使ってもいい？」
「構わない」

セリアが〝アレ〟と言ったのは、アンジー・シリウスが使う戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』のことだ。リーナとは違い、その魔法の制御面を全面的に担えるセリアならば局地的な被害に抑えられるだろう。プラズマによる電磁波障害によって基地の機能を一時的に麻痺させられることは南盾島の一件で判明している。
民間への被害はこの一件の後に賠償金をざっと５０００億円ぐらい払えば誰しもが口を噤むだろう。俗に言う札束ビンタに近い所業だが、贅沢は言っていられない。
懸念されるのはＵＳＮＡからの抗議だろうが、南盾島の件であれだけ盛大にやらかしておいてセリアが『ヘビィ・メタル・バースト』を使っただけで目くじらを立てた場合、ＵＳＮＡのプライドと信頼がマリアナ海溝レベルで凹むかもしれない。
大体、セリアは既に除隊して帰化している扱いの為、ＵＳＮＡが反論できる材料など皆無なわけだが。
「エリカとレオ、姫梨は基本セリアのバックアップを頼む。基地の人間――最悪、装甲車や戦車が出てくることも念頭に入れてほしい」
「認識阻害に関してはどうしますか？」
「それは準備しておいたから、後で受け取ってくれ」
流石にヘルメットをかぶった状態だと、この中で剣術を使うエリカが全力を出せなくなるデメリットが生まれる。正直なところ、音速レベルで動いているエリカを目視で視認出来たら、そいつは将来立派な軍人になれると保証できるが。
「深雪は宇治川の高架橋で待機を、沓子と水波は深雪のフォローを頼む」
「悠元兄様、周公瑾は東に逃げる可能性が低いと？」
「無論、そうなってもいいように手は打ってある」
実は、名倉の件の際に文弥と亜夜子を通す形で高峰山（たかみねさん）に黒羽の部隊を忍ばせるようにお願いしていた。それに加えて伊勢家の人間もいるため、周公瑾が『鬼門遁甲』を使っても逃げられる可能性はゼロに等しい。
「光宣は宇治川の橋で待ち伏せてくれるか？　理璃ちゃんには一応そ

の護りを任せたい」
「は、はい！」
「周公瑾の『鬼門遁甲』は方位を狂わせる術と聞いています。なら、僕とは相性が良さそうですね」
　いくら周公瑾でも光宣の『仮装行列（パレード）』は突破できない。そして、万が一周公瑾が車で突っ込んできても理璃の『ファランクス』ならば防ぎ切ることが可能。これは原作において克人が突っ込んできた車を完全に静止させた知識からくるものだ。
「で、達也と将輝は周公瑾を追いかけてもらう訳だが、俺が国防軍の特務少将としての特例権限を用い、二人を一時的な特務査察官として基地に突入してもらう」
「特務査察官？」
「俺も初耳だな。悠元、説明してくれるか？」
　聞きなれない言葉に将輝は首を傾げ、達也も特務規則に含まれていない知識の為、説明を求めた。なので悠元は説明を始めた。悠元が国防軍の特務少将という話をした際に将輝が何も言わなかったため、既に説明が済んでいるものと解釈してくれたお陰で、そのまま話を続ける。
「ああ。このままだと達也らが国防軍の基地へ不法侵入したなどと言われかねないからな。俺が独立魔装大隊へ所属を移行する際、いくつかの権限保持を認めてもらっている。その中の一つに〝非常時に基づく現地の魔法師への協力要請〟がある」
　これは本来、軍を統制する政府が持ち得ている権限の一つ。だが、悠元は沖縄防衛戦で達也を暫定的な指揮下に置いた上で敵軍を退けた実績を持っており、国家非公認戦略級魔法師である達也に命令できるのは悠元以外にいないという剛三の口添えがあって認められている。
　正直、『神将会』のこともあるのでこの権限を使うことなどないと思っていたが、今回ばかりは持っていて助かったという他ない。
「その権限を用いて、ここにいる全員を一時的に特務査察官――簡単に言えば、臨時士官として統制する形とする。ま、形式的なもので

実行力は皆無だが」
「え、お兄ちゃんの命令なら何でもするよ？」
「マジでやめろ」
風間に対して戦闘報告書という形で提出はするが、今回ばかりは事前に風間へ尋ねたところ、パラサイドールの借りが大いにあるために独立魔装大隊内で止め、佐伯への詳細な報告はしないと確約を貰っている。
光宣をその対象に含めているのは、形式的なものでも九島家の人間が関わったということにすれば九島本家の眼を逸らせると考えたからだ。九島家が招いたことで九島家自ら尻拭いをしているマッチポンプみたいなものだが。
「ともかく、装備も含めた手配は既に済ませているから、２０時に新国際会議場前集合としようか」
「え？　相手は宇治にいるのに……あー、成程ね」
悠元の言葉で疑問に思うエリカだったが、その移動手段に心当たりがあったのでそれ以上の追及を止めたのだった。恐らく、エリカは魔法による移動を予想しているのだろうが、この場合は魔法よりもさらに効果的な方法で乗り込むつもりでいた。
◇　◇　◇
流石に２０時となると新国際会議場には人がおらず、民家の明かりや街頭による明かりぐらいしかない。そんな中、悠元の言葉で集まった一同。これから一体どうするのかという疑問を抱く面々を見つつ、悠元は端末を手に取って時間を確認してから呟いた。
「――時間通りだな」
「え？　一体何が？」
「……成程、そういうことか」
エリカの疑問に対し、達也は視線を上に向けて『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』でその物体の正体を見やった。すると、次第に近付くローター音で達也以外の面々も気付いたようだ。
開けた草原に着陸したのはティルトロータータイプの軍用機。しかもそれは、国防軍で採用されたばかりのステルス仕様機であった。

これだけでも驚きだろうが、ハッチが開いて中から出てきた面々に達也や幹比古は驚きを隠せなかった。
「達也さん、深雪！」
「吉田君！」
「ほのかに美月」
「え、ええっ!?　どうして!?」
　驚きを隠せない幹比古に、少し動揺している様子の達也。企みが成功したような表情を浮かべる悠元だが、別にこれだけの為に非戦闘員の部類に入ってしまう彼女らを呼んだわけではない。二人の後に続く形で雫が降り立った。
「悠元、時間通りに間に合わせたよ。こんなことを考えているだなんて最初は思いもしなかったけど」
「ご苦労様、雫」
「えっと……説明してくれるか？」
　悠元と雫の会話に割り込む形で将輝が尋ねた。態々国防軍の軍用機まで持ち出してきた以上、これから一体何をするのかという疑問に対し、悠元はこう答えた。
「決まってるだろう？　全員に宇治へ降下してもらうためだ」
『……えっ？』
　何を言っているのだ、とは思うが、その為にバッテリー式の飛行デバイスを一部の人間に持たせる――とは言っても、それを渡すのは将輝と光宣、それと理璃だけだ。他の面々は達也や悠元経由で渡しており、降下する分に問題はない。
　ただ、雫やほのか、美月と幹比古はある役割を担ってもらうためにローター機で待機してもらう。
「ほのかは光学迷彩を展開して、ローター機を完全に隠してくれ。美月は対象となる人物の動きを追ってもらう。それで、雫と幹比古は彼女らを守る役目に加えて……幹比古にこの札を渡す」
「この札は……見たところ、陰陽道系のものみたいだけれど」
「周公瑾が宇治川近辺に来たら合図を出すから、間髪入れずに発動させろ。それが『聖域』発動のキーだから失くすなよ？」

「う、うん、分かった」
悠元の言葉を聞いて、奮起しているほのかに美月。幹比古も美月の傍ならば奮起しようとするはずだ。流石にローター機を基地上空で待機させるわけにはいかないので、メンバーが降下した後は北側に退避してもらうことになるが。
「そういえば、悠元さんはどうするのですか？」
「俺は宇治橋で光宣たちの援護だな。場合によっては遊撃として動くから、自分の身ぐらいは自分で守ってくれ」
「分かりました」
最初、悠元は京都に来るメンバーだけで片を付けようと考えた。だが、『プラスワン』の要素が今のところ見えないにせよ、警戒するに越したことはなかった。
そこで、原作知識から光学迷彩を使えるほのか、霊的な視覚を有する美月、そして春休みの事件で海軍から接収した飛行艇を活用することとした。飛行艇は独立魔装大隊の協力を得る形で『魔法技術実験機』という体でティルトローター機に改造された。
なお、パイロットに関しては北山家専属の使用人にお願いした。雫も腕はいいと信用しているので文句はなかった。
「雫、頼んだ装備は？」
「全部持ってきてる。遠慮なく使っていいってお父さんも言ってたし」
その言葉を聞いて、達也が乗り込んで着替え始めた。内部は通常のローター機と異なり、軍による作戦を意識した構造となっているが、一応男女別に着替えられるだけのスペースは確保されている。
中にはホクサングループ関連の装備もあり、データを取って欲しいという淡い期待も込められてのものだと思う。なお、雫はそれを聞いて若干呆れてしまったらしい。
十数分後、今回の捕縛に参加する面々全員がしっかりとした装備に着替えた。なお、達也と将輝に関しては独立魔装大隊から預かった特注のムーバル・スーツのため、マスク部分は悪魔のモチーフである。
「……司波、このデザインは正直どうなんだ？」

「諦めてくれ」
　このデザインをした人間のことを説得できるはずもない、と達也が呟き、将輝もこれ以上の追及を止めて備え付けの座席に座った。全員が準備を整えたところで、ティルトローター機が飛び立ち、一路国防陸軍宇治第二補給基地へと向かう。
　飛び立ってから約２分弱で国防陸軍宇治第二補給基地の上空に到達。ハッチを開き、セリアが先陣を切る形で『アルテミス』を構えた。
「さあ、狼煙を上げるわよ――『ヘビィ・メタル・バースト』、発動！」
　基地の北部にある装甲車を照準に『ヘビィ・メタル・バースト』を発動させ、膨大なプラズマによる爆発のみならず、その余波で発生したプラズマ雲で膨大な量の電磁波が発生する。ローター機への防御は理璃が咄嗟に『ファランクス』で防いだが、基地周辺の民家が軒並み停電するという事態に陥っていた。
「……やっぱりーナの双子の妹だわ、お前は」
「えへっ、やりすぎちゃったあうちっ!?」
「それじゃ雫に幹比古、こっちは任せた。万が一の時は遠慮なく離脱してくれ」
　セリアに拳骨をお見舞いした上で悠元はハッチから地上に飛び降りた。それに続く形で達也らが飛び降りたのを確認して、悠元が『音速瞬動（ソニック・ドライブ）』で各々の持ち場に飛ばした。その上で悠元は『鏡の扉（ミラーゲート）』を開き、宇治橋の東側へと転移した。

在るべき輪廻に還れ

セリアによる『ヘビィ・メタル・バースト』を撃ち込まれた直後、国防陸軍宇治第二補給基地は騒然としていた。基地の北部で起きた大規模のプラズマ爆発のみならず、電磁波によって通信機能が軒並みやられる状態となり、指揮系統が混乱していた。

その一室で、周公瑾は膨大な想子の波動を感じた。最初は『霹靂塔』を疑ったが、とても市街地で使えるような代物ではない。大亜連合といえども自分を〝裏切者〟と断定して送り込んだにしては手際が良すぎる。

すると、周公瑾が無実だと信じ込ませた軍人こと波多江(はたえ)大尉が駆け込んできた。

「周先生、どうやら基地が襲撃を受けているようです」

「……成程、恐らく狙いは私でしょうね」

元々この基地を狙う戦略的価値などない。そうなると、この基地を混乱に陥れてでも狙うべき対象を考えた場合、周自身以外に存在しえないとすぐに察した。ならば、この基地にこれ以上長居する必要もないと判断した周はこの混乱を逆に利用した。

「なら、皆さんは襲撃者を迎撃してください。基地の全戦力を使って」

そう呟いた直後、波多江のみならず中隊全員に電流が走ったような衝撃を受けた。周は車の鍵を差し出す様に波多江へ告げると、ぎこちない動きで鍵を周に差し出した。そして、周の煽るような口調で放たれた言葉に、波多江は感情の籠らない口調で指示を飛ばす。

「……しかし、荒っぽいやり方をする人もいたものですね」

国防陸軍の基地をあっさりと襲撃することなど、愛国心が薄い周でも考えが及ばなかった。北側は無論の事、恐らく東西も守りを固められている筈だ。ならば、南側を突破して宇治川を超え、奈良方面に逃げれば『伝統派』もいるため、まだ機会はあると踏んだ。万が一の場合は『鬼門遁甲』で逃げることも考慮に入れた上で。

だが、彼は気付いていない。

神楽坂悠元によって伏せられた仕掛けは、確実に周公瑾を捉えてい

るということに。

◇　◇　◇

セリアの『ヘビィ・メタル・バースト』に紛れる形で基地に降り立ったエリカとレオ、そしてセリアと姫梨。兵士が無力化用のゴム弾を放ってきたため、対物障壁が付与された想子障壁（サイオンウォール）で防ぎつつ、眼前にいる兵士を見据えていた。

「どうする？」

「攻撃された以上は反撃するしかねえ、だろ？」

「分かってるじゃない」

レオの返答を聞いて笑みを零したエリカは『疾風丸（ハヤテマル）』の刀身部を展開し、身体強化で姿を消すと、向こうにいる兵士の悲鳴が聞こえてくる。彼女の速力は雷属性の天神魔法に長けた由夢に匹敵しており、並の軍人では太刀打ちすることすら難しいだろう。

「アイツは……ま、援護してやるか」

仕方がない、と思いつつもレオがブレスレット型ＣＡＤで『ドラグーンブレス』の起動式を読み込み、正面にいる残存の兵士を吹き飛ばす。威力は弱めに設定しているので、死ぬことはないと判断した。

すると、セリアは遠くからくる物体に眼を顰めた。

「装甲車はまだしも戦車って……」

「魔法師をそれだけ警戒しているということなのか、もしくは」

「操られてるという可能性もあるって訳ね」

この状況だと、誰が操られているかの判断は難しいだろう。現に自分たちが基地を襲撃した以上、外敵を退けなければ国防軍の威厳に関わる話だ。それに、手早く済ませないと異変を知った他の基地から救援の部隊が差し向けられかねない。

そこまで察した上でセリアは『アルテミス』を戦車に向けた。

「セリアさん、戦車は行動不能にするだけで構いません」

「それは分かってるよ――――『ガングニール』、発動」

セリアの『アルテミス』から放たれた電磁波収束魔法『ガングニール』――――高密度の電磁波を纏った想子弾が戦車の目前の地面に着弾し、炸裂するように広がる電磁波の嵐によって戦車が行動不能とな

り、キャタピラの強い摩擦で急停止した。
何が起きたのかと焦って運転席から出てくる兵士に対し、姫梨は風属性の天神魔法『春風(はるかぜ)』で兵士たちを地面に叩き落した。これにはセリアが思わず苦笑を漏らした。だが、そんな思考は次々と来る兵士の姿と彼らが持っているライフルで消え去ることとなる。
「とうとう実弾まで……こんなことなら、リーナに無茶を言って『ブリオネイク』の起動式でも教えてもらえばよかったかも」
「それは流石に死人が出るかと……」
「ちょっとした愚痴だよ、姫梨」
すると、吹き荒れる風と共に吹き飛ばされていく兵士。その中心にはエリカがいた。
「アンタら、いっぺん精神叩き直してきなさい！
『我が麗しき父への叛逆(クラレント・ブラッド・アーサー)』!!」
本来、天刃霊装の発現状態でないと繰り出せない〝伐刀絶技(ばっとうぜつぎ)〟をエリカは何と『疾風丸(ハヤテマル)』の状態で繰り出している。これは、CAD自体に守護霊(サーヴァント)の護石が組み込まれているからこそできる芸当。
そんなハード面の理由のみならず、エリカ自身レオに負けたくないという意地もあるのだろう。流石にレオの方は天刃霊装を展開するわけにもいかないので、硬化魔法や『ドラグーンブレス』で兵士を薙ぎ倒している。
「やれやれ……この感じは」
すると、セリアの事象を認識する能力――彼女が名付けた名は『森羅万象の眼(イデア・サイト)』が達也と将輝の様子を捉えた。彼らは問題ないが、思ったよりも敵となる兵士や兵器の数が多いと判断したセリアは、その全てを〝捉え〟、『アルテミス』を上空に構えた。
「……――――穿て」
上空に展開する無数の雷の矢。そして、セリアがそう呟くと、基地の向こう側に落ちていき、蒼穹の雷光と共に轟音や兵士の悲鳴が聞こえた。先程の『ガングニール』をセリアなりに改造した魔法『オーバード・ガングニール』は的確に達也や将輝の敵を大幅に減らすことに成功した。

「セリアさん、まだ来ますよ」
「分かってる。全く、お兄ちゃんが怒る理由もわかっちゃうな」
姫梨の言葉にセリアはそう呟きつつ、『アルテミス』を襲い来る兵士に向けた。軍人としての矜持は理解できなくもないが、この国の軍人として本当に守るべきものを理解しているのかと問いかけたい〝兄〟の気持ちが分かる気がした。

◇　◇　◇

悠元は宇治橋の東側で静かに事を見守っていた。基地の東ゲートについては正統派の魔法師にお願いをし、西ゲートは『伝統派』の魔法師が守りを固めている。最早彼にこの先を見届けさせる気はない。
基地から聞こえてくる爆音や轟音を聞きつつ、あそこで戦っている面子を思っていると、光宣が話しかけてきた。
「悠元さん、南ゲートの方からセダンが一台、こちらに向かってきてます」
光宣が達也と同じく『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』を持っていることは悠元も気付いていた。だが、同じ『エレメンタル・サイト』であっても、光宣の場合は古式魔法に精通しているためか、古式の術に見られる想子の流れを把握している。
そのセダンには周公瑾が乗っているのが確認できたため、悠元は躊躇うことなく『オーディン』の引き金を引き、『千鳥』でセダンの衝突防止装置を強制的に起動させる。それを見た光宣の右手が車に差し伸べられ、魔法によってエンジンが爆発する。
周公瑾は間一髪で脱出し、幻獣による攻撃を繰り出すが、届き切る前に幻獣が霞となって消え去る。こんな経験は周が今まで生きてきて初めてのもので、それを成した原因が分からない以上、周公瑾が取った判断は逃亡だった。
その場には九島光宣だけでなく、周が一番警戒している人物――神楽坂悠元の存在があった。昨春における嫌な予感を信じるのならば、戦うこと自体〝自殺行為〟と考えた結果の行動だった。
だが、悠元は周公瑾を追跡しようとしなかった。その理由は、悠元の隣で顔色が悪くなっている光宣の存在があったからだ。

「追いますか？」
「いや、そちらには達也と将輝が向かっている。光宣は休んでろ。顔色が悪いぞ？」
「あっ……すみません、悠元さん」
　多少無理を押していたことがあからさまだったが、周公瑾を追い込んだ実績は紛れもなく光宣の功績だ。欄干に凭れ掛かって休む光宣の面倒は理璃に任せることとし、悠元の視線は下流側に向けられた。
　やはりと言うべきか、周は高架橋の下側を通る形で川を越えようとしていた。だが、橋の上には深雪と水波、そして沓子が待機しており、それに追いつく形で将輝と達也が周公瑾を追い詰めた。　確認したところで悠元は頭上に信号弾代わりの閃光を発する魔法を空中に発動した。
「閃光の魔法……分かったよ、悠元。護法式陣、発動!!」
　それが『聖域』発動の合図だと察した幹比古は札に想子を込めると、嵐山・比叡山・石清水八幡宮・稲荷山に敷設された触媒により、京都の上空に市街地が丸ごと入るかのような大きさの魔法陣が展開した。
　この神秘的な光景に、達也たちだけでなく周公瑾まで目を奪われるほどだった。だが、その感慨に耽っている暇は周に与えられなかった。
「ぐ、がっ、こ、これは……!?」
　悠元が睨んだ通り、周は普通の人間ではなかった。安倍晴明が編み出した護法式陣は自然の摂理から外れた結びつきを祓う護法陣。本来、周の肉体に宿る精神ではない〝彼ならざるもの〟は急激に肉体への支配力を失っていく。
　その摂理で言うと悠元やセリアも対象内に入りそうだが、乗っ取ることと転生することでは肉体や想子体への影響が大きく変わるのだろう。現に、『聖域』内に入っている悠元自身が苦しんだりすることはなかった。
　そして、達也と将輝にじりじりと距離を詰められている上、先程発動した魔法陣によって道術『神行法（しんこうほう）』が安定して発動できない。これでは『鬼門遁甲』も同様だろう。最早打つ手がない、と周は高らかに

笑った。
「ふ、フフ、フハハハハハハ……お見事と言っておきましょう。だが、たとえここで死すとも、私は在り続ける!!」
そして、周公瑾は最後の力を振り絞って全身から血が噴き出し、赤い血は赤い炎となって燃え上がり、肉体は骨の一欠片も残すことなく燃え尽きた。だが、肉体は滅びていても、精神体――〝亡霊〟は上流へ上ってきた。
『神楽坂悠元、我と一つになれ!』
ここで働いた『プラスワン』、いや『アナザーワン』とも言うべきことが起きた。本来なら動けない光宣を狙うのではなく、悠元を狙ったのだ。
周公瑾の判断は決して間違っていない。九島家は古式魔法にも精通しており、その九島家の人間を狙ったところで支配できるか疑わしかったのだろう。理璃を狙うことも考えられたが、周としては一番実力がある悠元を狙うことで、更なる力を手に入れようとした。
確かに、現代魔法を統べる単なる十師族であれば、自分を乗っ取って支配することもできただろう。だが、今の自分は古代文明魔法、古式魔法、現代魔法の三系統魔法を会得している身。加えて、守護霊(サーヴァント)である『アリス』の存在もある。
「……判断は間違っていない。それだけは立派だと思うよ、亡霊風情(しゅうこうきん)。そろそろ、永き時を彷徨う時間は終わりだ。在るべき輪廻に還るがいい――『万華鏡(カレイドスコープ)』、発動」
悠元が発動させた魔法は固有魔法の一つ『万華鏡(カレイドスコープ)』。〝概念干渉〟という現代の魔法水準を超越した力により、周公瑾の亡霊は瞬く間に朽ちていく。その上で、周公瑾の持つ魔法知識全てを吸収した。その全てを吸収し終えた時、周公瑾の亡霊は誰の目にも止まることなく夜空の闇に消え去った。
悠元は一息吐くと、光宣に近付いた。
「周公瑾は消え去った。光宣の功績も相まって、無事に終わったようだ」
「そ、そうですか……コホッ、コホッ」

「やっぱり、無理をしてたな。先にホテルに送るから、ちょっと待ってろ」
そう言って悠元はエンジンが爆発したセダンに『再成』を掛けて瞬時に直した。これには光宣や理璃も驚いていたが、悠元の非常識さは今に始まった事ではなく、魔法については一切詮索しないと心に決めた。
「俺が運転するから、二人は乗ってくれ」
「え、免許を持っているんですか？」
「ハハ……悠元さんは何でもありですね」
「はいはい、病人は大人しくしてなさい」
悠元は雫に連絡して達也らはティルトローター機で回収してから愛宕山に降りるよう指示を出し、光宣と理璃は悠元の運転する車で宿泊先のホテルに送った。
◇　◇　◇
目を離すのは拙いので光宣の看病を理璃に任せることとしたわけだが、光宣を見ている目線が熱っぽい理璃が光宣に話しかけられた瞬間、慌てて立ち上がって「何か飲み物を買ってきます！」といって出て行った。
「え、えっと……」
「惚れられたな、光宣」
「ええ……どうしたらいいでしょうか、悠元さん」
「まあ、腹を括るしかないだろうな」
何にせよ、理璃がここにいないことは好都合だった。一々呼び出すにしても都合を付けるには双方の距離がネックとなるためだ。
「光宣、九島閣下から聞いているとは思うが、お前の治療をする。その際の条件も聞いてはいるか？」
「はい、そのことは僕も納得しています。ただ、1年生まで二高に通わせてほしいんです」
光宣が生徒会副会長になっているため、その辺の引継ぎや整理で時間が欲しいというお願いであり、悠元も生徒会役員の経験をしているため、光宣の言い分を認めることとした。

「光宣は『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』を使えるようだが、自分のことは視れないのか？」
「ええ。あくまでも敵意や悪意のある相手や古式の魔法を感知する程度のもので……悠元さんも使えるのですか？」
「自分の場合はその上位互換だな。相手の精神体まで視ることができる。ただ、そのせいで亡霊とかに襲われることもあったわ」
見え過ぎるのも困りもの、という言葉は言わなかったものの、そう言いたげな悠元に光宣は思わず笑ってしまった。確かに、力があることは自分の意思を通せるが、要らぬやっかみを買ってしまうこともある。ただでさえ優れた容姿の為に同じ男子から嫉妬の視線で見られたこともあった。
「光宣の想子体は異常な活性を起こしていて、そのせいで想子体の〝管〟が破壊される。その反面修復スピードも尋常じゃないから、健康と病気の状態を行き来している有様だ」
「もしかして、精神のリミッター説が大いに関係しているのですか？」
元々、人体そのものが魔法を稼働させることに適しておらず、魔法の行使を１００パーセント抑制するリミッターが存在するという説。そのリミッター云々はともかくとして、悠元は自身の眼と原作知識を駆使してあらゆる検証を重ねていた。
この世界の人間は、肉体・想子体（幽体）・精神体の３つで構成されている。肉体を実体的な存在と例えるならば、想子体は理（ことわり）――――理性的な存在であり、精神体は本能的な存在であると悠元は考えている。
肉体の定義と精神の定義を繋ぐのが想子体の役割で、精神が変調を来たせば、その情報が想子体を介する形で肉体へ影響を与える。魔法は想子という理を以て実体次元に術者の精神で望んだ現象を描き出す技巧ではないか、と仮定した。
肉体的に変調が無く、想子体が異常に活性化しているとなれば、残るは精神体に問題があるとしか考えられない。事細かく視ていく悠元は、光宣のリンカーコアを見て驚きを隠せなかった。
「……光宣、よくこんな状態で魔法を行使できたな」

「え？　原因が掴めたのですか？」
「ああ……これから話す言葉は信じられないだろうが、よく聞いてくれ」
　魔法のリミッター説――――予測が正しければ、これはリンカーコアに備わっている制御機構が正常に機能していないのが大きな原因である。
　本来、魔法のリミッターを担うリンカーコアに関わる因子は魔法演算領域の有無を決定づける因子に紐づけされている。だが、現代魔法を研究する上で判明したいくつかの因子のうち、その半数以上が遺伝子調整によるリミッターの抑制減少をした場合、元来備わる筈のリンカーコアの機能を損ない、実に9割近い確率で想子の異常活性による病弱や虚弱体質、寿命減少を起こす結果が得られた。
　この事実は、悠元が国防陸軍兵器開発部にいた時、管理されている強化サイキックや調整体などのデータを虱潰しに見た中で判明したものだ。こんな無茶な実験を平気でやっていたことに怒りを通り越して呆れたほどだ。
　光宣の場合、リンカーコアが半壊――――この場合は〝欠損〟という言い方が望ましいだろう。精神体が想子体に見合った霊子を送り出そうとしてリンカーコアの欠損によって狭まった経路を通る際、その圧力が想子体に反映されて異常活性を起こし、結果として想子体の管が破壊されて体調を崩していた。
　ようは、ホースの口を狭めることで水の流路が限定され、本来よりも圧力の強い水の流れが起きる現象――――それが光宣の体内で起きていた、ということだ。
「魔法師に備わっている〝核〟――――リンカーコアというプシオンのみで構成された器官がある。光宣はそのコアが半壊している状態だ」
「……そのコアが治れば、僕も悠元さんや達也さんのようになれますか？」
「健康体になるのは間違いない。ただ、俺や達也のようになって欲しいかと言われると微妙だな」
　何せ、深雪のように女性の目線を釘付けにしかねないのだ。正直な

ところ、しっかり制御しないと流されるがまま複数の女性と婚姻を結ばされるだろう……同じ境遇の自分や達也が言えた台詞ではないが。
「リンカーコア自体の修復は直ぐに終わる。ただ、コアの完全治療によって体調の変化や変調を来たすことが多いから、最低でも1時間は安静にすることが絶対条件だ」
　これは、深夜や穂波、水波といった面々を治療した時の経験から算出した安静にすべき時間だ。コアの状態が正常になることで想子体や肉体の気の流れが大きく変わるため、しっかりと馴染ませる意味でも絶対に必要な行為だ。
　これを聞いた光宣はキョトンとした表情を見せていた。
「え？　丸一日安静とかではないのですか？」
「普通はそう思うし、今まで治した人からも言われたことだが、これはちゃんと検証した結果から得られたデータだから。まあ、光宣の場合は今までのことを勘案して、響子さんが来るまで寝ておいた方が無難だろう」
「そうですね。そうさせてもらいます」
　そして、悠元が『領域強化（リインフォース）』を発動させ、光宣の治療を行う。治療を終えると、今まで抑制されていた精神の流れが想子体や肉体を活性化させ、光宣は高熱を発して寝込むことになってしまった。
　これも光宣が健常者になるためのものだが、脳へのダメージを考慮して『夢世界（ドリームワールド）』で想子の動きを抑え、光宣をそのまま寝かせた。熱も一気に引いて平熱のレベルに落ち着き、落ち着いた寝息を立てて眠っていた。
　一通りの処置を終えたところで飲み物を手に持った理璃が姿を見せたので、理璃に光宣の様子を見るよう押し付けた上で部屋を後にした。
「え、ええ……と、とりあえず、様子を見ないと……」
　無論、押し付けられる羽目となった理璃は光宣に対して顔を真っ赤にしつつも頑張って様子を見届けた。疲れのあまりベッドの横で眠った理璃が次に起きた時には、光宣に頭を撫でられており、思考のオーバーヒートで気絶した。

これにはどうしたものか慌てふためく光宣の葛藤は、迎えに来た響子が部屋の中に入るまで続いたのであった。
「――――てなことがあってね。それよりも悠元君、本当に御免なさい」
「別にいいですよ。既に終わった事ですので」
響子から謝罪を受けたが、今回は自分が国防軍の軍人として〝自浄作用〟を促しただけだ。流石にセリアの『ヘビィ・メタル・バースト』を隠蔽するのに『エシェロンⅢ』のシステム自体にまで細工を施す羽目となったが、大して痛手にはなっていない。
何にせよ、これで烈に提案した条件の一つを響子に提示することが出来る算段が付いた。
「そういえば、響子さんは身を固めないのですか？　婚約者のことは自分も聞いておりましたが」
「そうね、良い出会いがあれば考えなくもないけど……って、どうして悠元君が気にするの？」
「いやー、実は閣下との会談で響子さんにいい相手がいないか相談されまして、思い切って達也を推薦したんですよ」
「お祖父様ってば……」
これは嘘である。正確に言えば、達也の魔法の詳細を知っている側である響子を味方へ引き込むため、達也が将来的に四葉の直系だと発表された際、烈に響子を達也の婚約者候補として送り出す様に条件を付けたのだ。
リーナは九島の血縁とはいえ、大枠で見ればシールズ家の人間。響子も九島の血縁を引いているが藤林家の人間。なので問題はないとみている。それに、烈としても沖縄防衛戦で婚約者を失った孫娘が嫁ぐことになれば、祖父としても安堵できるだろう。
「まあ、響子さんは自分や達也の魔法を結構知っていますし……達也に送ったチョコは本命のようでしたし」
「あら、バレてたのね。達也君から聞いたの？」
「ええ」
達也としても、自身のことを知っていて話せる相手となればかなり少ない。とりわけ四葉家以外ともなれば数えるレベルになってしま

うほどだ。なお、達也からは「好かれること自体吝かじゃないが、どう答えるのが正解なんだ？」と聞かれた。

なので、「気軽に話せる相手なんだし、話が来たら大人しく娶れ」とだけ言っておいた。ちなみに、深雪の意見は割と好意的だった事実も付け加えておくこととする。

天才に弄られる埒外

　響子の婚約に関する話はさておき、響子は改めて頭を下げた。それが悠元に対する九島家の数々の無礼に対するものだということは直ぐに察した。
「ごめんなさい、悠元君。本当なら、お祖父様や伯父様が頭を下げるべきだというのに」
「響子さんは藤林家の人間ですから、無関係とはいかないでしょうが……それも既に終わった事です。ただ」
「ただ？」
「達也や深雪、ひいては四葉家に国防軍が干渉するようならば、俺はあらゆる手段を用いてでも敵を殺します。」
　それは物理的な殺傷事に限らず、社会的な抹殺も含めてのものだということは言うに及ばず、それを実行できてしまうだけの権力を有している悠元の言葉に響子は頷く他なかった。この文言は将来起こりうる情報部絡みの案件だが、上泉家先代当主の逆鱗に触れておいてそれを起こすリスクを理解しているのならばまだいいが、油断はできない。
　今更言うことでもないが、この場に改竄の結界を張っているため、傍から聞いても単に楽しくお喋りしているだけにしか聞こえない。
「そういえば、光宣君も治療してくれたそうね。ありがとう」
「九島閣下の御依頼でしたから。ただ、その治療に関する論文はいずれ『トーラス・シルバー』の名義で世界に公表します」
　独立魔装大隊はおろか第１０１旅団でも悠元の魔法の詳細は伏せられており、戦略級魔法だけでなく二つの固有魔法――『万華鏡（カレイドスコープ）』『領域強化（リインフォース）』の詳細を知っているのは風間と響子の二人しかいない。なので、響子は光宣を治療したのが悠元だとすぐに分かった。
「……光宣君の功績のために？」
「それもありますが、この論文は世界を劇的に変化させかねない内容なので」
　そもそも、リンカーコアの存在自体が魔法師社会でもあやふやな存

在であり、魔法学的には〝核〟としか公表されていない。大体、霊子の性質自体ハッキリと判明していない代物だが、自分もパラサイトに関わることでこの世界の魔法がようやく目に見えてきた。
「それこそ、今まで人体実験の憂き目に遭っていた軍人たちが一気に実戦レベルで通用出来るまでに仕上がってしまうでしょうね」
「……そこまでなの？」
実験という形でパラサイト事件の憑依経験者を対象として、霊子（プシオン）とリンカーコアの魔法理論に基づいて魔法訓練を課した。その結果、スターズで例えるならばスターダストや衛星級（サテライト）の実力者が二等星級（スター・セカンド）、人によっては一等星級（スター・ファースト）クラスに匹敵する魔法技能を獲得している。
しかも、この理論の驚くべきところは通説の魔法教育理論――魔法の修得が肉体の成長を阻害するという理論を根底から破壊することになる。
悠元の場合、７歳から魔法の鍛錬を始めており、通説とされる男子の９歳から１３歳までの期間は奇しくも沖縄防衛戦の関係で手を抜くことなど出来なかった。元も窘めようと思ったが、悠元の影響で強くなっていく自分の子らを見て、何も言わない方が良いと判断した。
「それに加え、通説で言われている魔法を使わない方がいい時期ですが、これは肉体の鍛錬を並行して進めないと精神とのバランスが崩れてしまうために起こりうる現象だと分かりまして。これを発表したら、魔法科高校はおろか魔法大学、ひいては魔法教育学に多大な影響を及ぼしますので」
「……悠元君のお姉さんが基本（カーディナル）コードを見つけたことだけでも凄いのに、悠元君が魔法教育学の通説を覆したら、間違いなく三矢家が十師族最強に躍り出ちゃうわよ」
ファンタジーにおける魔導系チート主人公の典型例として、魔法のみならず基本的な身体能力も優れているパターンが多い。武術で言うところの『心（精神・霊子体）、技（理・想子体）、体（肉体）』の理念はこの世界における魔法の在り方に大きく影響している。
大体、一線級の実力を有している魔法師の傾向を見れば、魔法のみならず肉体的にも鍛え上げられている人間が多い。肉体を鍛えると

いうよりも〝磨き上げる〟という文言が正しいのかもしれないが。
「俺はもう三矢の人間じゃないのですがね」
「それは分かってるけど、悠元君をそう判断する人間は少ないでしょうね」
ふと思ったことがある。
原作で達也の戦略級魔法も含めてこの国を脅かしたのは大亜連合、新ソ連、ＵＳＮＡ、そしてイギリス。何の因果か、奇しくも第二次大戦後に設立された国際連合（こくさいれんごう）の安全保障理事会常任理事国――通称〝五大国〟のうち４つの国の後継国がこの国を脅かした。そして、ディオーネー計画はＵＳＮＡとイギリス、新ソ連の共謀による達也追放計画。まるで〝ヤルタ協定の再来〟と言っても過言ではないだろう。
もしかすると、彼らは恐れたのかもしれない。この国が核に代わる〝矛〟を持つことでＵＳＮＡの力を借りずに真の独立を果たし、第二次大戦の復讐をされてしまうという一抹の不安。それに駆られての行動と考えれば、自然と腑に落ちる。
そもそも、それだけのことをしたという自覚があるというのならば、その矛を自国に向けられないように〝損して得取れ〟を実行すればいいだけの話なのに、それが出来ない時点で狭量という他ない。
達也の戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』と自身の戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』をＵＳＮＡ本土に向けない約定はＵＳＮＡ大統領、そしてヴァージニア・バランス大佐と交わしている。
これでエドワード・クラークが達也の排除に動いた場合、ＵＳＮＡ政府は安全保障の面子を潰されることになる。ましてや、大統領は大半の非魔法師の安全を預かる身でもあるので、この国の戦略級魔法から国民を守るという功績に泥を塗られる形だ。
新ソ連に関しては、数年前に襲撃を受けた際、逆襲という形で現国家元首の書記長をボコボコにしてクレムリン宮殿が半壊。その場で『新ソ連は日本に侵攻及びそれに準ずる戦闘行為を行わない』という誓約書を書かせておいて、ベゾブラゾフの干渉を受けた。次に干渉した場合、クレムリン宮殿に『トゥマーン・ボンバ』を撃ち込むことも

辞さないつもりだ。
それでベゾブラゾフに嫌疑が掛けられれば御の字だし、上手く逃れたとしても新ソ連ひいては共産主義国家における〝忠誠〟を問われかねないだろう。
イギリスはというと、今後想定されるエドワード・クラークとウィリアム・マクロードの共謀によるオーストラリア軍の破壊工作に乗じて何らかの手を撃ち込む。恐らく第二次大戦の戦後処理のように立ち回る二枚舌のお家芸で回避するだろうが、それを断じて許すわけにはいかない。
手を貸した以上は〝同罪〟――――死罪に処されないだけマシだと思わせてやるつもりだ。
閑話休題。
「今年は今年で大変だったわね」
「響子さん、今年が終わるまであと2ヶ月もあるのですが」
「そうなんだけれど、色々あり過ぎて3年ぐらい過ごした気分よ」
正月過ぎからのパラサイト事件、わだつみ事件、反魔法主義のプロパガンダに「七」の家、パラサイドールにローゼン・マギクラフト絡み、新人類フロント、そして周公瑾と『伝統派』。正直なところ、1年足らずでこれだけ事件が起こっているのが異常という他ない。
大体周公瑾のせいで片が付くというのが滑稽と言うべきか。
「そういえば小耳に挟んだのですが、独立魔装大隊の皆さんが昇進されると聞きました」
「あの話ね。多分、九校戦での一件や悠元君たちの襲撃を隠すためよね」
「恐らくは」
国防陸軍宇治第二補給基地は半壊し、基地機能の早期復旧という形で上泉家が動いた。襲撃の報告を聞いた元継は遠い目をし、剛三は盛大に笑っていた。千姫は笑みを見せて「国防軍に巣食う悪しき思考に一石を投じれたので不問にします」と述べた。
ただ、九校戦での競技変更も含めた国防陸軍の失態を隠すために一部の軍人を昇進させることで疑惑の目を逸らそうとしている。その

昇進は悠元にとっても他人事ではなかった。
「そういう悠元君も昇進なのでしょう？」
「ええ。特務中将への昇進と国防陸軍参謀本部への配置転換、特務技術士官への転属と風間少佐から。主な仕事自体は変わりませんので、書類仕事は一切ありませんが」
　これは、悠元からの進言を受けた千姫が蘇我大将に伝え、佐伯少将の危険性を感じ取った蘇我は悠元を第１０１旅団から陸軍参謀本部付特務参謀へ配置転換することとなった。主な仕事は蘇我大将の意見役といったところだ。
　そして、昨春の一件を重く見て独立魔装大隊の〝特務技術士官〟に所属が変わった。これにより、佐伯は悠元の戦略級魔法に関する命令を一切出せなくなる。あくまでも悠元の戦略級魔法使用に関する許可は千姫と剛三の管轄になる。
「いいわね、悠元君は。転職も考えようかしら」
「その分、気苦労も増えましたよ。そしたら、光宣のことはお願いします」
　光宣には、治療した事実を悟られないように今までのペースで第二高校に通ってもらう形とし、光宣も家内のことを鑑みて了承した。
　そして、九島本邸では光宣の変化を隠し切れない、と判断して藤林家から学校に通ってもらうことにした。響子の母親であり光宣の遺伝上の母親である藤林家夫人の責任でもあるため、烈の説得によって受け入れざるを得なかった。
　それだけ、烈の影響力が健在という裏返しである。
　翌日、何も事情を知らない真由美に達也らが同行する形で名倉を殺した犯人を追いかけることとなった。尤も、その犯人は既に死んでいるわけだが、達也からそのことを特に指摘することはなかった。特に犯人に繋がる手掛かりは得られなかった、という形で真由美も渋々納得した。
　周公瑾の討伐によって嵐山を調べる手間も無くなった。なので、日曜の午後には東京に戻ったが、司波家に着いた途端、深雪に引っ張られる形で深雪の部屋に入っていった悠元の姿に、達也は内心で「頑

張ってくれ」と呟くことしかできなかった。
水波はというと、主人である深雪の邪魔をしてはいけないと空気を呼んでその場を後にしたが、時折気になっている様子を達也が目撃したのは別の話。
◇　◇　◇
翌週末――２０９６年１０月２８日。論文コンペはというと、第二高校が優勝した。
本来の発表者が急遽欠席することとなり、光宣が発表者として壇上に立った。テーマは『精神干渉系魔法の原理と起動式に記述すべき事項』と原作と変わらないものだったが、健常な状態の光宣が自信を持って発表していることで、会場の観客の視線を釘づけにしていた。
真紅郎は悔しがっていたが、曲がりなりにも十師族直系、しかも九島烈の孫にして九島の魔法の全てを会得した天才。それに正面切って勝つ方が難しいだろう。尤も、その光宣からは「僕ですら想子情報体のアプローチが限界なのに、精神体のアプローチまで出来る悠元さんに敵う気がしません」と言われた。思わず遺憾の意を唱えたくなった。
そのコンペの喧騒を他所に、悠元は宇治川の高架橋の真下――周公瑾の肉体が消失した場所に来ていた。そして、悠元は人除けの結界を張った上で懐から〝紅玉〟を取り出して放り投げると、〝紅玉〟は空中に静止した。
それを確認してから悠元は左手を〝紅玉〟に向けて翳した。
「――理を曲げ、今再び今世に舞い戻れ。『天陽照覧（てんようしょうらん）』」
悠元がその言葉を呟いた直後、〝紅玉〟から夥しい量の紅い血が渦を巻き、それは次第に人の形を成していく。
いくら悠元でも『天陽照覧』の〝２４時間以内の死亡を蘇生する〟という効果を捻じ曲げるのは難しい。だが、周公瑾の肉体そのものを復元させることは出来る。そのトリガーとなるのは、彼の中に残っていた名倉三郎の血の針。
そして、その執念の針を依り代として名倉を復活させる。外見は周公瑾になってしまうが、既に名倉の死体が無い上、肉体的にも若い周

の肉体ならば、これから名倉に担ってもらう仕事も問題はない。
　時間にして5分後、空になった〝紅玉〟を懐に仕舞うと、そこには周公瑾の肉体があった。だが、その肉体に宿る精神は名倉三郎。周改め名倉が目を開くと、そこには悠元の姿があった。
「……ここは。それに、確か神楽坂悠元殿でしたか」
「ええ。〝名倉さん〟、体の調子はどうですか？」
「体ですか？　……これは、周公瑾の!?　まさか、私は周公瑾になってしまったのですか!?」
　水面に映る自分の姿を見て、まさか自分が殺そうとしていた相手になっているとは露にも思わなかっただろう。混乱する名倉に対し、悠元は説明をした。
「落ち着いてください。既に周公瑾は死んでいる身ですし、名倉さんも死んでいます。ただ、想子のパターンが大きく書き換わっていますので、周公瑾によく似た人間という認識しか持たれないでしょう」
「……そうですね。あの時、私は確かに相打ちを挑んで……となると、周公瑾を殺したのは別の人間なのですね」
　嵐山でなく宇治で目覚めたことは名倉もすぐに察したようで、ひとまず落ち着いた。その上で、悠元は一つの提案をした。
「その恰好では七草家のボディーガードも難しくなるでしょう。そこで提案なのですが、身なりをある程度変えて神楽坂家で雇い入れたいと考えております」
「〝数字落ち（エクストラ）〟の私をですか？」
「名倉さん、私も既に十師族の家を離れた身です。周公瑾に一矢報いた実力のある魔法師を雇い入れるのはおかしくないことだと思いますが」
「……そう、でしたね」
　名倉の決断は早かった。既に一度死んだことは名倉自身も理解していたため、七草家に戻るのは無理だと悟ったのかもしれない。
　なので、名倉の長い髪を切って若者っぽく散切り頭に仕上げた。その上で名倉に〝支倉佐武郎（はせくらさぶろう）〟の身分証明を渡した。名倉改め支倉に身なりも周が着ていたスーツではなく別のスーツを急遽準備し、その

まま新国際会議場に何食わぬ顔で戻った。
達也や光宣は支倉を見て驚くような素振りを見せていたが、肉体こそ周公瑾だがその本質が周本人ではないことは直ぐに分かったようで、表向き初対面の支倉と挨拶を交わしていた。
無論というか、同じ転生者であるセリアは支倉の外見が周公瑾、中身が名倉ということにもすぐに気付き、小声で悠元に尋ねた。
「……お兄ちゃん、あれ名倉さんでしょ？」
「まあ、正解。周公瑾を追い詰める実力者を失うのは惜しいからな」
そして、周公瑾の肉体と融合させることで名倉が本来持つ『群体制御』の技術も進化し、何と影の針を飛ばすことが出来るようになったわけだが、その反動で支倉は悠元に対して忠誠を誓う形となった。
曰く「一度死んだ身でありながら、私の力を惜しんで蘇生させてくれた御仁だからこそ、真に忠誠を誓いたいのです」とのこと。偽りの忠誠を結ばされていた七草弘一が少し哀れだと思ってしまった。
その支倉だが、当分は東京の神楽坂家別邸で使用人として働くことになる。周公瑾と面識を持つ黒羽の部隊に誤解されないよう、千姫経由で真夜に説明をしておくことで合意した。
すると、支倉の存在に何かを感じ取った泉美が支倉に話しかけた。
「あ、あの！　どこかでお会いしませんでしたか？」
「……いえ、初対面だったと記憶しています。神楽坂殿の付き人の支倉と申します。何かと宜しくお願いします、七草泉美様」
「あっ……は、はい……」
名倉の〝死の気配〟に気付いたからこその問いかけだが、支倉は初対面を装って丁寧に取り繕った。これには泉美もそれ以上の追及が出来ないと踏んだ。
コンペ終了後の懇親会（昨年は横浜事変の一件があったため、開催されなかった）で、一人のんびりしていた悠元のもとに達也と光宣が来た。
「達也に光宣。光宣は優勝おめでとう。素晴らしい発表だったよ」
「いえ……それにしても、支倉さんを見た時は驚きましたよ」
「それは俺も同意見だな。悠元、周公瑾は確かに消滅したのだな？」

「ああ、それは断言できる」
『天陽照覧』のリミットを越えると死の定着が完全に定義化され、肉体を再生しても器となる魂まで復元できないことはいくつかの実験で証明されている。なので、今回は名倉の血を触媒とする形で周公瑾の肉体を再生したが、魂となる精神体の情報は痕跡すら残っていなかった。その例外を生み出すのが〝紅玉〟だが、乱発など以ての外である。
「まあ、周公瑾の〝亡霊〟は俺を乗っ取ろうとしたが、それは俺の魔法で消滅させた。その駄賃として彼が持っていた魔法技術を根こそぎ奪ってやった。２人が必要なら、その分野の情報はいくらでも出すよ」
「えっと……周公瑾が哀れですね、達也さん」
「そうだな。悠元という埒外を敵に回したのが間違いだな」
「お前らなあ……泣きたくなるわ」
原作でも十代の十師族直系においてトップクラスの２人に弄られるというのは、あまり気分がいいものではない。かく言う自分も元とはいえ十代の十師族直系なのは分かり切っている話だが。
だが、周公瑾の一件はこれから起こりうることの始まり。光宣を治療して九島家から引き離し、水波の魔法師としての能力は対戦略級魔法も見据えた防御能力を有するに至った。これから相手にするのはこの国の外にいる者たち――大亜連合、新ソ連、イギリス、そしてＵＳＮＡ。
そんなことを思っていると、３人を探しに来た面々の姿を見て、内緒話はここまでだとお互いに肩を竦めた。
「さて、光宣は懇親会の主役なんだから頑張れよ」
「あの、流石に僕だけだと……」
「お前には『絵に描いたような朴念仁（クリムゾン・プリンス）』みたいになってほしくないからな。ほら、理璃ちゃんを待たせるんじゃない」
「わわっ、あ、歩きますから、押さないでください！」
自分の恋愛事だけでも精一杯なのに、他人の恋愛事情に態々首を突っ込むほど暇ではない。周囲の人々から生暖かい目線を向けられ

て恥ずかしがる光宣に対し、理璃の顔は耳まで真っ赤に染まっていたのだった。

四葉継承編

お前は一体何を言っているんだ

論文コンペから1週間後――――西暦２０９６年１１月５日。京都の『伝統派』が比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）を通す形で神楽坂家へ京都一帯の意思を伝えた。年末までの予定を無理やりにでも早めたのは、『聖域』の再構築がほかの『伝統派』の魔法師も感じていたからだろう。一部の魔法師は『聖域』の影響で強制的に気絶させられたことも大きい。

主だった宗派に属していた元門人については神楽坂家を通す形で正統派に戻し、年齢などの関係で京都に居を残す者については、安宿家の配下に据える形で近畿方面の情報網として置かれることが決まった。大陸の方術士については『伝統派』だけの力で対処できないため、正当な宗派の力を借りる形で拘束し、政府経由で大亜連合へ強制送還の措置が取られた。

これに危機感を覚えたのは奈良方面の『伝統派』であった。

先日、京都一帯に構築された『聖域』により、京都方面の『伝統派』を〝裏切り者〟と処断することが事実上不可能となった。それに加え、金剛山（こんごうさん）などを筆頭とした奈良の正当な宗派の勢力が力を増し、「九」の家に復讐するという目的を果たすことが厳しくなった。

その一件に関わったのが安倍晴明や賀茂忠行と縁の深い神楽坂家の人間であるのならば、ここで選択を誤れば自分たちの命にまでかかわると危惧した。「九」の家に従うことは出来ないが、同じ古式魔法の神楽坂家ならばまだ大丈夫だろうと判断した。

神楽坂家としても無駄な血を流す必要は無いと判断し、正統派との和解を取り持った。但し、大陸の方術士に関しては京都同様の措置を取らなければ〝国家に対する叛逆者〟と見做す、という文言は彼らを怯えさせ、素直に従った。

奈良・京都の『伝統派』の中で魔法の力を欲する古式魔法師に関しては、まとめて剛三の元に送り込んだ。剛三は嬉々として彼らを受け入れ、今は北海道にある大規模の演武場で文字通り〝叩き込まれてい

る〟だろう。
時々剛三と連絡を取っているが、その際にスピーカーから聞こえてくる怨嗟にも似たような呻き声が聞こえるほどだ。剛三に目を付けられた以上、彼らが逃げ出せる確率は〝ゼロ〟である。無駄に力を求めなければ地獄を見ずに済んだだろう……「ご愁傷様」という他ない。
その地獄を乗り越えた時、一線級の実力を手にすることが出来る。代償として剛三に決して頭が上がらない構図まで出来上がるのはここだけの話だ。
国防陸軍宇治第二補給基地の襲撃に関する報告書は響子を通じて風間に提出されたが、国防陸軍の失態を十師族が解決した、などと知られては風間の上司である佐伯の権力闘争に支障が出かねず、更には十師族依存の体制から脱却すべきという国防軍の意向に疑問を投げかけることになると判断され、風間の一存で独立魔装大隊内で収めることが決定された。
そもそも、階級で言えば特務と言えども風間よりも悠元のほうが高いため、戦闘報告書というよりも〝戦闘詳報〟という体が正しく、特務少将として犯罪者を匿った国防軍を正しただけに過ぎない、と判断するよりほかになかった。
なお、波多江大尉も含めた基地の部隊員は周公瑾によって操られていた事実が神楽坂家や京都の古式魔法師による診断で明確化され、本人たちの体調を考慮して1週間ほど基地内で経過観察の後、形式上の無罪放免となった。
国防軍での昇進に関してだが、元々『上条達三（かみじょうたつみ）』の名で中尉相当官という体で特務士官になっているが、これは当時推薦した真田繁留（さなだしげる）の階級が中尉であり、加えて自分の祖父である剛三から武術を学んでいたことからくるものだった。
沖縄防衛戦後に特務少佐へと一気に昇進したが、これは国家非公認とはいえ戦略級魔法師が尉官扱いというのは外聞的にも宜しくなく、加えて人工衛星なしに戦略級魔法を自在に扱えることを考慮した風間が「可能であれば、本官と対等の立場に置きたい」の申し出を受けてのものだ。

情報部（十山家）の一件に加え、第１０１旅団長による越権行為を重く見た剛三が蘇我大将に掛け合った（新陰流剣武術は非魔法師の門下生も多く、蘇我はかつて門下生だった）結果、神楽坂家の養子を期に特務少将への〝三階級特進〟が認められた。非常勤職とはいえ、少将という地位にしたのは九島烈が退役少将であった名残からくるもの、と剛三と蘇我大将から聞き及んだ。

そして、九校戦の対大亜連合強硬派による介入の謀略を阻止したことに加え、周公瑾によって操られた国防陸軍宇治第二補給基地の部隊鎮圧の功績をたたえる形で、特務職とはいえ軍人魔法師としては初めてとなる中将に昇進する。

各方面から要らぬやっかみを買いそうではあるが、自分から決して国防軍内の派閥争いに関与する気はない。大体、同じ日本人でありながら民間組織である十師族と縄張り争いを続けているのは十師族の設立理由からくる名残だろうが、身内で足の引っ張り合いは止めてほしいものだ。

そもそも、十師族や師補十八家はともかくとして、軍人は公僕たる存在のはずなのに独断で犯罪者を匿ったり権力を振りかざして九校戦に介入している時点で〝腐っている〟と判断できなかったのだろうか。

この辺については千姫や剛三に尋ねたところ、『元老院』で処断を止めてほしいと主張した四大老が存在していた。周公瑾の捕縛はおろか、中華街における実質的な治外法権の取り上げに関しても難色を示したせいで実行できなかったと述べていた。

だが、周公瑾が横浜事変で大亜連合の特殊部隊を密入国させたことで渋々認めたそうだ。この辺は国会の野党勢力が大きく減少したことが強く影響しており、先日のメディア買収に合わせて野党のスキャンダルを千姫が積極的に推したのは、彼に対する鬱憤が相当溜まっていた証左なのだろう。

そのついでに千姫へ与党の国会議員に近々実施される参議院選挙に合わせる形で衆議院の解散総選挙を行い、野党勢力を大幅に削る提案をしたところ、千姫も賛同した翌日に臨時国会で衆議院解散による

衆参同時選挙が決定された。千姫の〝要請〟にはさしもの総理大臣も首を縦に振らざるを得なかったのだろう。

先日の政治献金スキャンダルで足並みが揃わない野党議員に対し、更なるリークを追加して人間主義者の影響力を極力まで削る。与党一強の状態を作るのはＵＳＮＡ政府からの圧力を受けやすくなるデメリットもあるが、ここに関しては何個か手を打つつもりだ。

名倉三郎改め支倉佐武郎――再構築された周公瑾の肉体に名倉の精神が宿った姿――から、周公瑾の殺害を七草家当主こと七草弘一から指示を受けた事実は、直ぐに悠元から千姫へ伝えられた。

実行しようとした人間がこう言っている以上、紛れもない事実だろう。千姫も支倉が嘘をついているという印象は無いと判断した。なお、この事実を四葉家に伝えるかは七草家の正月の動き次第という形で決着を見た。

そして、悠元は周公瑾が持っていた仙術・道術・方術などの大陸系古式魔法の知識を吸収したことで、魔法の幅が更に広がった。魔法のみならず、周公瑾がパラサイトを人間に寄生させる際のプロセスを含めた魔法技術まで知識として得たことで、古代魔法や古式魔法も含めた全魔法対応型ＣＡＤの着手に取り掛かっていた。

今まで得た『ワルキューレ』と『オーディン』をはじめとした戦闘データを統合し、更なる完成形となる二丁銃形状汎用型ＣＡＤ――『セラフィム』と『ラグナロク』の開発に取り掛かっていた。自身のＣＡＤの名に〝熾天使〟と〝神々の黄昏〟という名を付けるのは躊躇ったが、『殲滅の奇術師』と呼ばれていることを考えれば、これぐらいのインパクトはあっても申し分ないと納得させた。

――西暦２０９６年１１月２６日。

悠元はＦＬＴの魔工技師〝上条洸人〟に宛がわれた研究室で一人モニターと向き合っていた。今開発を進めているＣＡＤに搭載するプログラムに関しては、ハード内に搭載するブラックボックスの関係で達也の手を借りれないため、『フォース・シルバー』シリーズの基礎システムをベースに膨大な量のプログラムを組んでいる。

水面下で進めている『ＥＳＣＡＰＥＳ』計画については、四葉家と

神楽坂家の共同出資という形でプラントを二ヶ所に構える予定になっている。ＦＬＴの筆頭株主は深夜で、次席株主が悠元のために起こり得ていることだ（なお、深夜が現在持っている株は将来悠元に譲渡される予定だったが、四葉の資金源になっていることも鑑みて固辞し、達也へ譲渡される予定）。

一つは四葉所有の島で、もう一つは国防海軍の研究所があった南盾島に建設される……いや、南盾島に関しては既に地下にプラントが完成して恒星炉を用いた核融合発電のテストが進められており、『ブリオネイク』の結界容器の仕組みと術式から組まれた超高密度想子粒子ビームによる遠距離送電システムの実験も合わせて行われている。先日京都で使った『音速瞬動（ソニック・ドライブ）』はその送電システムの根幹を成す魔法だ。

この仕組みが安定化すれば、送電ケーブルを介することなく送電設備と受電設備、そして蓄電施設を置くだけで恒星炉による多大な恩恵を国内のみならず国外も受けることが可能となる。

スポンサーや政財界との交渉事はともかく、根本的なシステムは達也が担うことになるために悠元はこうやってＣＡＤ開発に没頭できるわけだが、今日は珍しく第三課の女性職員から通信が入った。

第三課の人間は悠元の素性を全て知っているが、ＦＬＴではあくまでも『上条洸人』という魔工技師としているため、職員もそれに倣って悠元に接してきた。

『上条さん、失礼いたします。黒羽貢様と名乗る方が面会を希望されているのですが、如何なさいますか？』

悠元はその名前を聞いて考えこんだ。

直接の面識は４年前の沖縄防衛戦の前、個人的なパーティーで顔を合わせた程度だ。だが、あの時は長野佑都としての面会であり、十師族・三矢家や護人・神楽坂家の名字を名乗ってからは一切会っていない。

彼の子である文弥や亜夜子とは学生としても四葉家の裏家業絡みでも親交を持つが、別に黒羽へ便宜を図りたいがためにしたわけではない。

大体、黒羽家からすれば四葉の資金源であるＦＬＴは管轄外だし、達也ならばまだしも自分に会いたいという意味が不明だ。神楽坂家が四葉家のスポンサーだという情報は知っていてもおかしくないだろうが、この時期の面会となると来年正月にある慶春会――〝四葉継承〟に関わる話なのは明白だった。

ここで推察しても結論は出ないため、悠元はその申し出を受ける形とした。

「分かりました。オフラインの応接室でお願いします」

『畏まりました』

悠元が研究室を出て応接室の中に入ると、部屋には既に貢が座っていた。その表情が真剣な様子を窺わせていることから、これは一筋縄ではいかないとすぐに察しつつ挨拶を交わした。

「お久しぶりです、貢さん。お会いするのは４年ぶりになりますね」

「ああ。文弥や亜夜子が世話になっているようで感謝する」

「いえ、良き友人として接しているだけです。それで、どのようなご用件でしょうか？」

明らかにぶっきらぼうな言い方だが、同じ当主（悠元の場合は当主代行だが）でもかたや四葉分家の当主、かたや神楽坂家の次期当主。力関係で言えば悠元に分があるのは貢と言えども理解していた。

だが、ここは年上としての年功序列を優先する形で貢が話し始めた。悠元もそれに関して咎めることはせず、向かい合わせの形でソファーに座って貢の言葉を待った。

「悠元君、正月に四葉の慶春会が開かれることは知っているか？」

「ええ。尤も、自分は神楽坂家の次期当主なので正月には慶賀会がありますし、そもそも自分は四葉家の人間ではありませんので、出席の資格も当然ございません」

「それは承知している。悠元君、恥を承知での頼み事だが……我々の味方をして頂けないか？」

正月に開かれる慶賀会の話を持ち出し、その上で貢は〝我々〟という単語を持ち出して味方になって欲しいというお願いをしてきた。この時点で大方の予想は付くが、こればかりは貢の口から説明させる

のが良いと判断した上で悠元は質問を投げかけた。
「貢さん、それでは話が見えません。慶春会で貢さんを含めた〝誰〟の味方をしろなどといわれても、納得しかねる話です」
「そ、そうだな……周公瑾の件は君も関わっていたから知っているだろうが、あれは彼の四葉に対する忠誠心を測るためのものだった」
その辺のことは先月前半の段階で葉山から聞かされていた内容だが、ここはあえて「そうだったのですか」と適当に相槌を入れた。そして、達也という名前を使わずに〝彼〟という表現を使った時点で、達也に対してどのような印象を抱いているのか自ずと分かってしまう。
敢えて述べるのならば、それは次期当主候補である文弥に対しての〝脅威〟ではなく、達也という存在に対しての〝恐怖〟ともいうべきものだった。
「貢さんとしては、達也の忠誠心に不安があるから味方をしてほしい、と仰るのですか？」
「いや、そうではない……先日のことだが、真夜さん――御当主様から来年正月の慶春会で次期当主を指名すると話があった。恐らく、選ばれるのは深雪だろう」
貢はそう話したが、四葉家の水面下では真夜と深夜や葉山、ごく一部の人間によって深雪に代わる次期当主候補の発表を準備している。真夜に対しては忠誠を誓っている貢にすら伝えていないところを見ると、達也の次期当主候補の発表に関する部分は仮に漏れていても噂程度に収まっているとみるべきだ。
そもそも、四葉の大半の人間から疎まれるような扱いを受けてきた達也がいきなり次期当主候補になるなど現実味がなさ過ぎて〝有り得ない〟ことだろうが、この世界における真夜と達也の関係性に加えて四葉家における当主の権限、そして封印されている達也の能力を考えれば実現可能となる。
「しかし、ある重要な案件が片付くまで次期当主の指名を延ばすべきだと分家当主の大半が一致した」
「……黒羽以外にどこが賛同なされたのですか？」

「君は立場上四葉の事情に詳しいから隠さないが、椎葉・真柴・新発田・静も賛同したことだ」
四葉家は本家以外に8つの分家があり、直系に近い司波家と津久葉家、武倉家以外の分家当主が深雪の次期当主指名を時期尚早だとした理由。深雪が次期当主となることで起こりうる事象の中で彼らが望まないものとなれば、それは達也が四葉家内で確固たる地位を確立することに他ならない。
そして、悠元の予測は貢の言葉で証明される形となった。
「……達也の処遇ですね」
「その通りだ」
貢が言うには、あと2年もあれば水波は深雪のガーディアンとして相応しい実力を手にする予測でいた。そうすれば、達也を『トーラス・シルバー』として縛って四葉の資金獲得に貢献させる〝飼い殺し〟をするつもりのようだ。
国防軍の特務士官に関しても辞めさせるつもりだが、それを辞めさせたことによる抑止力のリスクが悠元に圧し掛かってくる。目の前にいる人間は達也の事ばかりに目が行き過ぎて、彼を世界から隔離することによって生じるデメリットを考慮していない。
大体、ＦＬＴの件はともかくとして、国防軍の特務士官の件は真夜と佐伯少将で交わされた契約だ。慶春会の出席に関する書状はまだ来ていないようだが、現当主の意向を無視して〝現当主の実子〟である達也の出席を阻止するような真似をすれば、最悪達也が結界を『分解』してでも四葉本家に来る可能性を分家当主達は考慮しているのだろうか。
仮にそうなったら、最悪自分が尻拭いをする羽目となる。その対価となりうるものを彼らが支払えるのかと言われると、かなり懐疑的にならざるを得ない。
「ちなみにですが、四葉の御当主様にお伺いはしたのですか？」
「何度も翻意を申し入れたが、聞き入れてもらえなかった。だが、君からの申し出ならば御当主様も考え直してくださると思ったのだ」
ほう、と悠元の中で何かのスイッチがカチッと入るかのように、無

意識的に抑えていた気配を全開にした。これには四葉の裏の家業を数多くこなしてきた貢でさえ、全身から冷や汗が噴き出るような感覚がまるで槍で突き刺されたかの如く受ける羽目となっていた。
「貢さん。貴方は神楽坂家を何だと思っていらっしゃるのですか？いくら黒羽が神楽坂の傍系に連ねる立場とは言え、〝本家〟に連なる人間を捕まえて達也を世界から隔離するために手伝えと？」
「き、君も分かっている筈だ！　あの男の魔法を！」
「〝あの男〟？　言っておきますが貢さん、俺も達也と同じ国家非公認戦略級魔法師ですよ。その表情を見るに、どうやら知らなかったようですね」
「な、なんだと……（何だ、この恐怖は……まるで、すぐそこに〝龍〟でもいるかのようだ……）」
　貢の達也に対する呼び方を聞いた瞬間、悠元は応接室の中を高密度のサイオンで満たした。貢は悠元の背後に龍が佇んでいるかのような恐怖を植え付けられていた。
　そして、悠元が言い放った言葉を聞いて貢は唖然としていた。貢は悠元が達也に匹敵しうる魔法師だということまでは知っていたが、彼に関する詳細な調査は真夜の一存で差し止められていた。その彼が達也と同じ戦略級魔法の使い手という事実に言葉が出てこなかった。
「聞いていれば、先程まで貴方が仰っていたことは四葉家現当主の意向に対する叛逆の意あり、と取られかねないことです。神楽坂家は四葉家のスポンサーのひとつですが、四葉の当主を決めるのは四葉の家内の問題。私が四葉とどう付き合うかは、現当主も含めて次期当主と直接決めることです」
「し、しかし……」
「……貴方とこれ以上話すことはありません。お引き取りください。それでも食い下がるようならば、達也を世界から隔離したいあなた方の思惑を文弥と亜夜子にお伝えしても構いませんが？」
「!?　そ、それだけはやめてくれ！」
　悠元の脅しも込めた言葉に対し、血相を変えて貢がそれだけはやめてほしいと言わんばかりに懇願してきた。

四葉のほとんどの分家当主が達也の地位確立に難色を占めている背景も察しがついている。自分は達也よりも軍事・外交の情報を手に入れられる立場に加え、響子に自分の部屋を貸している対価として情報を提供してもらっている。

その一つに『灼熱と極光のハロウィン』において達也が使用した戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』の存在がある。あの戦闘後、水面下では各国が戦略級魔法の使用も含めた対日軍事同盟や安全保障条約の締結に関する問い合わせや交渉が活発化している。

なお、原作では新ソ連からの申し出も含まれていたが、ベゾブラゾフによる『トゥマーン・ボンバ』の攻撃が影響してか申し出は無かった。その代わりにＳＳＡ（南アメリカ連邦共和国）からの申し出があり、現在来日しているディアッカ・ブレスティーロ大統領はその条約も含めての交渉をしていると報告があった。

なお、戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』に関しては、自分が達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』の最終トリガーにも関わってくるため、一切の情報公開はしないことが取り決められている。剛三曰く「他国が戦略級魔法の起動式を公開しておらん以上、親切心を見せる必要もない」とのこと。

護人に属する人間の戦略級魔法は文字通り〝世界を揺るがす〟ため、国を護るための最後の切り札としての役割が求められる。尤も、自分の場合は『十三使徒』の戦略級魔法も使えるためになまじ国家公認の戦略級魔法師として表に出せないとのこと。

四葉の分家当主達が望んでいるものは『何者にも害されない力』であり、『世界を揺るがす力』ではない。達也に確固たる地位ができれば、達也に向けられる矛先が自分に向けられるかもしれないという恐怖。その恐怖を取り除くため、達也を世界から隔離したいのだろう。

本当に愚かとしか言いようがない。そんな都合の良い力を手にしたところで、その力を他者に知られれば力の本質など簡単に書き換わってしまう。結局問われるのはその力を揮う者の意思に他ならない。

大体、四葉の復讐劇があったのにもかかわらず、四葉の一族が心を癒すことよりも世界への復讐として力を望んだ結果、この世に生を受

けたのが司波達也という存在だ。
「……最後に一つだけ言っておきます。俺からすれば、達也は戦友であり親友です。その彼を世界から隔離しようとするならば、例え神が許しても俺は貴方方を絶対に許しません」
悠元はソファーからゆっくりと立ち上がり、去り際にそう言い放って応接室を出た。
貢が今の言葉を聞いてどう行動するかは彼の心次第だろう。そもそも、文弥と亜夜子が達也を信頼している現状に加え、もし実の父親が信頼している人物を世界から隔離するなどと知ったらどうなることか。
正直なところ、達也に恋慕している亜夜子から親子の縁を切られても貢が弁解することもできないだろう。何せ、達也が生まれた時に四葉の分家当主らが彼を殺そうと目論んだ事実があるのだから。

降り掛かる責務と突き付けられる事実の羅列

教室に鳴り響くチャイムの鐘が放課後の時間を告げる。授業端末などによってオンライン化した授業とはいえ、昔からの名残がそういったところに出ている。正直なところ、今日は特別だろう。

西暦２０９６年１２月２５日。世間一般で言うところのクリスマスの日だが、魔法科高校にとっては２０９６年度２学期の最終日でもある。とはいっても、授業は午前中で終わり、終業式などの儀式的なものはない。

あるとすれば、進級・卒業が危ぶまれる生徒が職員室に呼び出されるぐらいだが、成績優秀者で構成された２年Ａ組で呼ばれる人間は流石に皆無だろう。呼び出される方も嫌だが、呼びだす方も要らぬ労力を使うので、お互いに気分が悪い後味しか残らないのだ。

まるで経験したことがあるような言い方だが、あくまでも前世での話だ。尤も、自分の場合は身内の影響で胡麻を擂る人間が教職員にまで及んでいた。あの時は偶然学校の裏帳簿を手に入れて、教育委員会では握り潰されると判断して兄経由で知り合いの市議会議員に任せた。後日大々的なニュースとなって、自分に媚を売った人間が軒並み逮捕されて、内心で「ザマアミロ」と呟いた。

そんなどうでもいい前世のことを思い出していると、一喜一憂しているクラスメイトの間を縫うように燈也が近付いてきた。どうやら達也らと一旦分かれて態々Ａ組の教室に来ていたようだ。

「悠元、聞くまでもないですが評価はどうでした？」

「問題無かったよ。燈也もその分だと良さそうだな」

「ええ、まあ。尤も、僕の場合は憂鬱ですが」

「あー……あの件か」

燈也が若干気怠い感じでいるのは、今月初めに魔法協会を通して十師族・師補十八家および百家に通達された件が大きく関係している。それは、六塚家現当主六塚温子（むつづかあつこ）が次期当主として燈也を指名することに加え、その婚約者として五十嵐亜実（いがらしつぐみ）とミカエラ・ホンゴウを迎えることを正式に発表した。

この辺の話は事前に剛三と元継の耳に入っていたらしく、しかも元継は九重寺の武術指導で燈也と面識を持っており、その元継が上泉家当主として政府に働きかけたとのことだ。
「でも、先輩が好意を持ってるのは事実だろ？」
「まあ、それもそうなんですけどね」
その一件以降燈也に対する視線の変化は顕著に表れており、３年生の国東久美子（くにさきくみこ）は今年の九校戦で燈也と同じロアー・アンド・ガンナーに出た関係で男女合同練習をしていく中、男子に対して恐怖心を抱いていた久美子は普通に接してくれている燈也に好意を抱いた。
九校戦の時点では燈也が十師族直系ということで諦めかけていたが、燈也の婚約発表の際、現当主が現状は婚約者募集の段階であると明言しており、それを聞いた久美子も申し込んだ。それをどこからか聞きつけた亜実は久美子も引き込もうと画策していることに燈也は溜息を吐きたくなったという。
「何分、今まで信頼できる人間が少なかったのもありますけど、その僕がまだ二十代の姉に代わって当主なんて実感が沸かないんですよ。確かに、魔法師としての実力を考えるのならば分かりますが……」
燈也が調整体という話は内密に本人から聞いたが、本当に神様の悪戯が働いたとでも言わんばかりに寿命も魔法力も遺伝子調整による欠損は認められなかった。彼を貴重なサンプルだと研究していた連中の気持ちは分からなくもないが、彼の尊厳を考えなかった時点で人として終わっている。
確か、六塚家の現当主は現在２９歳だったと聞いているが、十師族の当主としては若輩の部類だ。その彼女が当主の座をすんなり降りるというのが燈也にとっても懐疑的なのだろう。
「流石に仕事の全てを放り投げる訳じゃないんだろう？」
「それは流石に僕でも無理ですよ。今は高校生の身であって、六塚家の仕事全部は管理しきれませんから」
十文字家でも当主代理をしていた克人の領分自体は限定されており、学業でフォローできない分に関しては和樹が担っていた。恐らく、温子はそこら辺を参考にしてまずは六塚家当主としての体裁を整

えるために婚約発表（婚約者募集）に踏み切ったのだろう。
その辺は神楽坂家次期当主兼当主代行である自分も無関係ではなく、政治家や皇族の方との折衝役が現状における仕事内容となっている。神坂グループに関する決裁や書類仕事も増えてきているが、国防陸軍兵器開発部の仕事で身に付いてしまった『自己並行加速（マルチタスク・アクセラレーション）』によって瞬時に片が付いてしまう。
そのせいでグループの役員からは「残業時間が少なくなって助かる」とか「書類が早く片付いて助かっています」とホワイト傾向が強まったが、この遠因となる七草家の長女に対して素直に感謝など言えるはずない。言えば調子に乗るのは彼女の父親譲りであるだけにだ。
◇　◇　◇
時間は午後5時。授業が午前中に終わると言っても生徒会や委員会活動、クラブ活動を終えた達也たちは行きつけの喫茶店であるアイネブリーゼに集まっていた。
「それでは、一日遅れというのは気にせずにご唱和ください。メリークリスマス！」
『メリークリスマス！』
エリカの音頭に合わせて一斉に唱和する。こういうのは役目だろうと言われがちだが、こういうのはやりたい奴にやらせればいいと思いながらドリンクを口にした。
「欲を言えば日があるうちにやりたかったんだけどねえ」
「そこはしょうがないよ、エリカっち。皆役員だったりクラブ活動だったりしたし」
部活連でも2学期の締めくくりとなる活動と挨拶はあった訳だが、その中で悠元の言葉を誰一人も遮ることなくきちんと聞いているメンバーの姿を思い出し、悠元は怪訝そうな表情を浮かべた。
「悠元、部活連で何かあったのか？」
「……挨拶しないで引き籠りたくなったわ」
「仕方ねえだろ？　あの雰囲気じゃ俺やエリカでも口を挟めねえよ」
「別に責めるつもりはないんだけどな」
何があったのかと言えば、2学期の締めくくりの挨拶と冬休みに関

する連絡事項を述べた後に、構成メンバー全員が風紀委員会でするような敬礼のようなポーズが一人も乱れることなく揃っていた。
なまじ深雪の恋人という事実が広がっている上、彼女のストッパー役を担っている以上は仕方のない事だが、こちらは別に部活連を軍隊のように統率しているつもりなどない。修司やレオの言葉に対して別に異論はないと言い含めるように答えた。
「しかし、今年のクリスマスイブは各々パーティーで忙しかったな」
「そうよね……あの親父はこっちの足元を見やがって」
「あはは……」
本当なら２４日にパーティーをするつもりだったが、参加予定の大半が家の都合でパーティーに駆り出されていたのだ。悠元は皇族の招きに与る形で皇居の晩餐会に参加し、その後は今上天皇との対談で今後の世界情勢に関する意見を述べた。
不満を漏らしたエリカは千葉家長男の寿和の付き添いで関東地方警察のパーティーに送り出された。彼女曰く、レオとの交際を認める代わりに突き付けられたらしく、今までロクに本家の人間扱いしてこなかった父親に怒りを抱いても仕方がないのだろう。その愚痴の矛先は当然同行者であり未だ婚約者のいない寿和に向けられた。
苦笑する幹比古は、吉田家一門の若手組によるパーティーに駆り出された。女性比率が高いということで固辞したかったが、兄に監督役を頼まれて強情を貫けなかった。その代わり、パーティーには美月と佐那がそのお手伝いということで参加したとのこと。
「悠元が別件で外せないって聞いたときは航が残念がってた」
「仕方が無いだろう？　今上陛下直々のご招待は無碍に出来ん。断る方が不敬に思われるからな」
「そ、それって皇居に行ったってことですよね？」
雫は父親の経営する会社のパーティーに参加していた。『娘同然』ということでほのかも駆り出されていた。悠元は一度断りつつ、その代理として暇だった修司と由夢を神坂グループ代表代理ということで駆り出した。由夢は露出の高いドレスを選ぼうとしたので、それを見た修司が拳骨を落としたのはここだけの話。

「その席に私まで呼ぶのはどうなのよ、お兄ちゃん」
「最も適切な人選をした結果だ」
「確かに、悠元さんの傍に居て問題が無い人選はかなり限定されますからね」
　セリアは書面上帰化したとはいえ現ＵＳＮＡ大統領の孫娘という肩書があるため、形式は悠元の護衛ということで皇族の招待を受ける形となった。文句を漏らしたセリアに悠元が淡々と答えると、それを聞いて納得したように声を上げたのは深雪であった。
　そんな事情が重なった結果、友人同士でのパーティーが今日にずれ込んだというわけだ。
　なお、今日のパーティーは悠元、達也、深雪、レオ、エリカ、幹比古、美月、佐那、燈也、姫梨、セリア、雫、ほのかと2年生だけ。1年生組はクラスのパーティーに出席している。
「今年ももう終わり……というより、本当に1年経ったのか疑問に思っちゃいますね」
「同感ですね、美月」
　美月の言葉に姫梨が同意するほど、確かに今年はハプニングを通り越してあわや国際問題になりかねなかった案件ばかりだった。その先陣を切ったパラサイト事件はセリアも当事者の一人なだけに苦笑を漏らした。
「あはは……そういえば深雪から聞いたけど、ピクシーの告白事件は秀逸だったね」
「何なら当時の書き起こしもあるぞ。リーナの心境も聞き出してるし」
「マジ!?　お兄ちゃん、後で頂戴！」
　あの場では聞かなかったが、後日ピクシーからリーナが抱いていた心境を聞き出しており、それを『記憶編纂（メモリーライズ）』で電子データ化して保存している。悠元の言葉を聞いたセリアが食いついたことに、その感情を向けられる側である達也が悠元に視線を向けた。
「……悠元、後で相談がある」
「分かった。悪用はしないから安心してくれ」

「そこに関しての不安はないんだがな」
多分、リーナのことに関することを聞きたいのだろうが、本来深雪にしか向けられない情動がリーナとの関わりによって緩みが生じてきている。この辺は自分が教えている想子制御の部分も大きいとみている。なお、ピクシーの想念形成に大きく影響しているほのかの顔が真っ赤になっているのは言うまでもない。
「南盾島も今年なんですよね。そういえば、九亜(ここあ)ちゃんたちは元気でやってるのですか？」
「ああ。クリスマスプレゼントは郵送したが、お礼のメールが届いてな。みんな喜んでたよ」
わだつみシリーズに関しては神楽坂家と上泉家主導の協議の結果、上泉家本邸で預かることになり、元継と千里が親代わりとして面倒を見ている。魔法行使による自己喪失状態も回復し、彼女らには自ら治療を施して人並みの寿命に改善されたが、九亜や四亜(しあ)たちは魔法師を目指して勉強している。千里も魔法のことで苦労していた経験からか、九亜たちの母親代わりとして奮闘しているらしい。なお、剛三は九亜たちから「お祖父ちゃん」と呼ばれて満足気らしい。
「七宝絡みも今年なのよね。『恒星炉』実験は本当に凄かったわ」
「ホントだぜ」
「それで九校戦の競技変更もあったな」
「……本当に濃密だよね」
神田議員のアポなし学校訪問に合わせて実施された『恒星炉』実験、国防軍対大亜連合強硬派による競技変更にパラサイドール、極めつけは京都でのトラブル……口に出すのもなんだが、七草家が十師族のネックになってしまっている。〝十師族版十山家〟と言っても過言に聞こえないのは何故だろう、と思う。
真由美や香澄、泉美に罪はない。強いて言うなら赤い機体が特徴的な某ロリコン仮面曰く『君の生まれの不幸を呪うがいい』の一言に集約されると思う。別に飛行艇に乗って特攻させるつもりなどないが。
「なあ、達也。今年は横浜の一件よりも大変だった気がする」
「奇遇だな、悠元。俺もそう感じていた」

悠元と達也はそのトラブルの当事者兼対処した張本人なだけに気苦労も人一倍感じており、来年こそは穏便に過ごさせてほしいと願いたい。

尤も、結果に差こそあれど原作通りに進んでいる流れを鑑みた場合、来年というか、これから起こりうることに対する気苦労を考えると、正直寝正月で過ごしていた前世が少し羨ましく思えてならなかった悠元だった。

◇　◇　◇

午後7時。パーティーもお開きとなり、店の前に出た。ほのかが達也に初詣の提案をしたが、達也は正月に用事があると言って丁重に断った。すると、達也の隣にいる深雪がどこか浮かない表情をしているので、悠元は深雪の頭を撫でた。これには深雪も気持ちよさそうに瞼を閉じていた。

「深雪、すまないな。俺も家の用事があるから、正月までは動けなくなりそうでな」

「い、いえ……すみません」

「別に謝ることじゃないだろうに。そしたら達也、深雪を頼むぞ」

「言われるまでもないが、悠元も気を付けてくれ」

「ああ」

一応、先月貢と話したことは達也にだけ伝えた（流石に千姫や剛三から聞かされた四葉家の事は内緒のままだが）。いずれ深雪にも勘付かれるだろうが、話すタイミングは達也に一任した。

達也も流石に貢らが悠元に対して刺客を差し向けるとは思えない。寧ろ返す刃で責任追及をされた場合、神楽坂の権力と国家規模の資産を持っている悠元に対して如何なる対価を支払えるかという問題になるためだ。

普通なら3人で帰るところだが、悠元はこの後箱根の神楽坂本家に出向かなければならない。これは現当主の千姫から〝厳命〟と強く言われたことだ。本当ならパーティーも欠席するはずだったが、それを聞いた千姫からは「暫く深雪さんと会えなくなるでしょうから、いい思い出を作ってください」と念を押されてしまった。

離れていく達也と深雪の２人を見つめたが、心の中で「頑張れ」と呟いてその場を後にした。
久々に２人で帰ってきた司波家。玄関に上がったところで達也は深雪に声を掛けた。
「深雪、体調が戻るまで部屋で休みなさい。食事の支度は後でいい」
「……はい、分かりました」
達也でなくとも、明らかに体調が良くない様子の深雪。その状態で無理はさせられない、という達也の気遣いに対し、深雪は反論することなく素直に頷いた。
断熱材の入った家でも流石に冬の寒さを半日以上凌げるはずもない。深雪は魔法で部屋を暖めた後、暖房のスイッチを入れた。流石に温度変化も含めた科学変化の持続的な部分では機械に分がある。
コートと制服を脱ぎ、私服に着替えたところで深雪が机の上に置かれている招待状の封筒を手に取った。中に入っている案内状は来年正月に四葉本家で行われる慶春会のご案内。今までは招かれなかったが、今回は真夜の直筆サイン入りで出席を命じるもの。その意味を深雪は自ずと理解していた。
（叔母様は、四葉の次期当主を指名なさるおつもりなのね）
四葉家の次期当主候補は４名。現当主の姪である司波深雪、黒羽家長男の黒羽文弥、新発田家長男の新発田勝成、そして津久葉家長女の津久葉夕歌。そして、客観的に見た場合、この中で魔法力に優れているのは深雪に他ならない。そうなると、真夜が次期当主に指名するのは自ずと深雪に絞られることとなる。
ここで気掛かりなのは、神楽坂家次期当主である悠元の婚約序列に深雪も入っているという点。しかも序列第一位と最も近しい地位を与えられていて、他の婚約者よりも恵まれた環境での生活を許されている。
四葉の次期当主に興味はないが、自分が次期当主となることで自ずと達也の立場も次期当主の側近となり、今まで四葉家内において疎まれていた達也の立場が大幅に改善されることとなる。
だが、神楽坂家次期当主夫人と四葉家次期当主の座は両立し得な

い。前者の家は護人の一角を担う陰陽道系古式魔法の大家、後者は現在の十師族において最強格の勢力を誇る一族の家。両者に遠からぬ血縁関係は存在するが、次期当主である悠元が自ら出た形とはいえ三矢家から籍を抜けたことからも分かり切っている話だ。

もし後者を選んだ場合、当主の責務として結婚相手が付随する。それも、自ら愛している悠元ではない誰かと結婚する可能性も残ったままだ。何せ、悠元との交際はおろか、神楽坂家の婚約に関する部分について真夜は深雪に対しての言及を避け続けてきたからだ。

愛する者と添い遂げたい女性としての想いと、敬愛している兄を認めてほしいという妹としての我儘。その二つの間で揺れ動く深雪が姿身を見ると、そこには深雪の守護霊（サーヴァント）――平安時代に名を馳せた女流作家、清少納言（せいしょうなごん）がジト目をして深雪を見ていた。これには深雪も思わずたじろいだ。

「え、せ、清少納言さん？」

『……あのさ、深雪。本当にどっちかを選ばなきゃいけないの？』

「でも、叔母様の……」

『いや、だってさ』

どう返そうか悩む深雪だが、そんな深雪の事情も吹き飛ばすが如く清少納言が言い放った。

『態々夜這いまでしに行って、それはそれは熱い夜を何度も過ごしてるのに？』

「え、あの」

『抱かれてるときは悠元さんの名前を連呼して、気絶するまで求めちゃって』

「ちよ、ちよっと」

『挙句の果てには、とてもメディアでは放送できないような行為とか言動を連発してるのに。〈――――（禁則事項です）――――〉とか、〈――――（とても表現できません）――――〉とか、〈――――（想像にお任せします）――――〉とかもあるし、終いには』

「ス、ストップしてください!!」

容赦のない恥ずかしい事実の羅列に加え、とても公衆の面前では言えない言葉が言い放たれたことに、深雪は頬を真っ赤に染めて止まる

ように懇願した。自身と契約した守護霊（サーヴァント）は契約した者の全ての事情を把握できる立場にいるため、それに対してのツッコミは出来ない。

気が付けば、悩んでいることよりも自分が使役している守護霊（サーヴァント）を止めることで疲れていた深雪に対し、清少納言はクスクスと笑みを零しながらこう告げた。

『何にせよ、行っていきなり四葉の慶春会があるわけじゃないでしょ？　深雪の叔母さんに、次期当主の辞退と引き換えにお兄さんの地位改善を申し出れば済む話でしょ？』

確かにその通りである、と深雪は自分の考えの浅さを内心で恥じた。ただ、いくら自分の身内とはいえ、四葉の当主である叔母が何を考えているのかは深雪でも推し量るのが難しかった。

「……その考えはありませんでした。ただ、叔母様が素直に呑んでくれるかどうか」

『大丈夫だよ、深雪。もしかしたら、私の言ったことが現実になるかもしれないし』

そう言って、姿見から消えた守護霊。深雪は徐に姿見に触れるが、何も反応は返ってこない。だが、彼女が嘘をついているとは思えなかった。

「何にせよ、まずは叔母様に会わないと。その為にも、絶対に慶春会の出席に間に合わせないと」

そう呟いた深雪の表情は、先程までの暗い様子が綺麗に吹き飛んでいた。これでは自分の師匠もとい婚約者に笑われてしまうわね、と呟きつつ、元気付けてくれた自分の〝相棒〟に心の中で感謝したのだった。

諭したら妹が増えたあの日

西暦２０９６年１２月２６日。魔法科高校も短いとはいえ年末年始の冬休みに入った。流石に国策機関である以上は公務員である教員たちも休みたいのが本音だろう。精々、クラブ活動や自主練で学校に来る人間はいるかもしれないが。

「おーい、無事か？」

「……あと５分休ませて」

富士の麓にある神楽坂家が所有する修行のための訓練所。その一角にある滝の上から声を掛けると、滝の下で大の字になって横たわっているセリアの声が辛うじて聞こえた。

何をやっているのかと言えば、セリアの天刃霊装を完全修得するための修行。この修行のことは事前に説明したにもかかわらず、セリアが夜這いしに来たので〝返り討ち〟にしてやった。その後、姫梨や深夜まで乱入したのはここだけの話。

１２月ともなればこんな寒い時期に修行をする意味があるのかと思うだろうが、これも想子制御を行うための修行の一環なのだ。前に沖縄でやっていた温度調整はその修行の一つで、今回の場合は周囲の気温との摩擦を考慮して１８℃に保ちつつ天刃霊装を展開し続けるというもの。転生者というこの世界でも屈指のスペックを誇るセリアでも、滝の水を浴びながら６時間以上霊装を持続させるというのは大変なことだった。

自分の場合はというと、剛三との旅行で新ソ連を横断した際、マイナス４０℃以下の極寒の中で常時１８℃に保つことを最短でも２４時間は行使し続けていた。これは自身の規格外すぎる想子保有量と魔法演算領域を更に鍛え上げるという意味で必要だったことだ。

すると、修行所に張り巡らされた結界魔法が来訪者の存在を感じ取ったため、悠元は修行を切り上げて滝の上から飛び降り、滝壺の上に〝立った〟。そのまま岩場に飛び乗り、セリアに対して『癒しの風（フローラル・ウィンド）』を掛けると、体調が瞬時に整ったセリアは思わず飛び起きるように上半身を起こした。

「お兄ちゃん、誰か来たの？」
「ああ……姫梨だな。で、何で態々背中から抱き着くんだ？」
「悠元さん成分を補給したくて」
セリアと悠元の言葉に反応する形で、悠元の背中に抱き着いてきた姫梨。正面から来なかったのは恐らく姫梨が天神魔法を使って悠元たちの背後から来たからだ。別に敵意や害意はなかったので気付かない振りをしていたが、昨晩あれだけのことをしておいて足りないというのはどうかと思うし、そもそもそんな成分がどこにあるのかと疑問を呈したい。
あと、姫梨は婚約者の中で最もボリュームがあるし、おまけに下着を身に付けていないのか感触がダイレクトに感じられる。しかも、何だか擦り付ける様な動きをしており、時折感じているような息遣いが漏れている。
これに気付いているセリアは何も言わず、寧ろ「やっちゃえ」と言わんばかりに期待の眼差しを向けている。公衆の面前ではないにせよ、もう少し淑女としての慎みぐらいは持ってほしいと思う。
結局のところ、訓練所の小屋に2人を連れ込んだ後のことは……想像に難くないと思うが口に出すのも恥ずかしいので控えようと思う。
「それで、姫梨は何か用事があってきたんだろう？」
一通りの事を終えて身だしなみを整えたところで悠元が切り出した。明らかな婚前交渉の行為に対することは今更なのでツッコミを入れないが（恐らく千姫か由夢がその辺を煽った可能性が高い）、本当の用件を尋ねた。
「そうでした。実は、悠元さんを呼んで欲しいと御当主様から仰せつかりまして。その際、かこつけて押し倒してもらいなさいと」
「……いくら何でも、高校生の段階で〝仕込む〟つもりは毛頭ないのだが」
「その気遣いが平然と出来るから、お兄ちゃんの嫁になりたい人が増えるんじゃないかな」
「婚前交渉を平気で認めてる時点で頭のネジの去就が不安になるレベルだわ」

大体、当主の命令に加えて唆すあたり、千姫も楽しんでいる節は否めない。普通は用事が済んだ後にそういう計らいをすべきものだが、この辺の常識を問いただすとキリがないので諦めた。
「まあ、分かった。とりあえず、姫梨はセリアの修行を見てやってくれ」
「え、まだやるの!?」
「言っとくが、達也らはともかくとして俺も含めた天刃霊装の習得者は最低でも２４時間の常時展開が可能だからな。ビシバシ扱いてやってくれ」
「分かりました。遠慮なく行きますね」
ちなみに、天神魔法に関する部分で言えば悠元はまだ優しい方で、姫梨は伊勢神宮の神職を担う立場の伊勢家の人間。故に、姫梨は天神魔法の修得に関しても厳しいスタンスを持っている。
当主からの呼び出しということで、その場を速やかに離れた悠元。その後、訓練所からセリアの悲鳴にも似た声が聞こえたという噂の真相は……神のみぞが知る。

◇　◇　◇

神楽坂本家の千姫の書斎は、悠元が当主に宛がわれる部屋から代々の先代当主が住まう離れに移動していた。書斎とは言っても昔ながらの日本建築に見られる囲炉裏や薬缶があり、耐火性の保存魔法が掛けられた初代当主からの机の前で胡坐をかきながら仕事をしている。
すると、身に覚えのある人の気配を感じ取った千姫は立ち上がって入室を促した。
「悠君、入っていいよ」
「失礼します。って、仕事はよろしいのですか？」
「ちょっと一休みしたいからね。丁度魚も焼けたし」
食事というよりは軽食程度のものだが、焼きたてのシンプルな塩味の焼き魚と淹れたてのほうじ茶を頂きつつ、悠元が一息入れたところで千姫に尋ねた。
「それで母上。姫梨から呼び出しを受けて来たのですが、どういう用件でしょう？」

「実はね、この辺りを管理している人員で獣医が急遽北海道に行くことになってね。ようは故郷で開院したいってことだから、物入りのお金も〝引っ越し祝い〟で出すんだけど」

神楽坂家が本拠を置く箱根一帯は今も国立公園の名残が残っており、稀少な植物や動物の保護は生態系の維持のみならず、ひいては龍脈の安定化にも結び付く。龍脈を安定化させることは自然災害の多いこの国において最も重要視されるファクターであり、護人である上泉家と神楽坂家が揃って関東地方に拠点を置くのは、皇族の守護だけでなくそれを支える国民や国土を自然の驚異から〝護る〟ことにも直結する、と千姫から聞いている。

十師族の監視・守護はあくまでも治安的な要素が強く、医療や教育などの分野には強く関与していない。その反面、護人に連なる家はあらゆる分野にコネがあり、昨秋の『トーラス・シルバー』による魔法医療関連の口添えを千姫にお願いしたことがある。

獣医自体は神楽坂家の経済基盤である神坂グループからの〝業務委託〟で管理しているが、その内の一人が親御の都合で北海道に戻ることとなったらしい。

「その引っ越しを手伝えと？」

「いやー、悠君の『鏡の扉（ミラーゲート）』は便利だけど、流石に引っ越し業者の仕事を奪う訳にもいかないでしょ？」

「それは確かに」

自分で荷物を運んだりすることはあるが、自分の魔法で運ぶのはそれこそ極めて高い機密性が要求された場合だけだ。ともなれば、何故獣医の話を千姫が持ち出したのか……すると、千姫は含み笑いを見せた。

「そっか、悠君は当時三矢の姓も名乗ってなかったから、いくら十師族の生まれでも十師族もとい師族二十八家との関わりはお義兄様の事を除けば薄かったんだっけ。師族会議もとい彼らの成り立ちは悠君も知っているよね？」

「ええ、まあ」

「なら、〝数字落ち（エクストラ）〟のことも当然知ってるでしょ？」

知らない筈がない。原作知識も含めると一花家（市原鈴音、十七夜栞）、三咲家（岬寛）、七倉家（名倉三郎、現在の支倉佐武郎）ぐらいが関わりのある、もしくは関わりのあった人々だ。

ただ、自分の知り合った人間でそれらしき人はいなかった筈だ。この辺は調べれば分かるのだろうが、何分達也や深雪から敵対しない事を優先していたため、それに敵意を向けてこない人間に関して興味など持てなかった。

すると、千姫はこう述べた。

「実は、矢車家の伝手でちょっと頼み込んでこようかと思ってる人がいて、何とね、そこの娘さんと居候している女の子を婚約者にって矢車家から申し出を受けたの」

「……え？　ちょっと待ってください……」

『九頭龍』の一角を担う矢車家の担当地域は北海道全域。となれば、矢車本家で過ごした小学3年から中学1年までの間に自分が知り合った人の中にいる、ということになる。そして、千姫が最初に述べた獣医という言葉に加え、女子2人を含む家族構成を自分が知っているとなれば、矢車本家を除くと一つしか該当しない。

悠元は当然、その名字を知っている。

「母上が声を掛けたいのは遠上家の方ですか？」

「正解。第十研の数字落ちで十神と名乗ってた一家だよ」

「……ミーナ――茉莉花の奴が数字落ちの一族。となると、もう一人は伊庭アリサってことになりますね」

2人の女の子――遠上茉莉花と伊庭アリサの出会いは、悠元が『長野佑都』を名乗って過ごしていた時に遡る。

悠元が小学3年生の時、父親である三矢元の勧めで上泉家で修行することになり、更には剛三の提案で北海道の矢車本家に連れてこられた。最初は三矢家と矢車家の繋がりからくるものだと思っていたが、話を聞くに三矢家の〝素体〟となったのは当時の矢車家当主であったことを知った。

矢車をそのまま捩ると「八」の家――第八研出身と勘違いされてしまうため、第三研の出自と矢車の姓を合わせて「三矢」と名乗った、

という事実を本家の人間から聞き及んだ。本来折り合いが難しい現代魔法と古式魔法の家が雇用主と使用人の関係を築けているのは、元は同じ矢車の血族だからであった。侍郎と詩奈の進展に前向きなのはその辺の事情も含んでいる。

話を戻すが、矢車家は古式の術式を使う関係で動物を介した術も会得しており、近くの町で動物病院を営んでいる遠上家と親交があった。アリサは母親と一緒に遠上家で暮らしていたが、その母親が亡くなったのだ。

当時、悠元の年齢はまだ8歳で、アリサと茉莉花は5歳。自分の実の妹である詩奈よりも更に年が2つ下。悠元が2人と出会ったのは、アリサの母親である伊庭ダリヤの葬式に矢車家の付き添いで出向いた際、アリサと茉莉花の面倒を見てほしいと茉莉花の兄である遠上(とおかみ)遼介(りょうすけ)に頼まれたからだ。

ダリヤには親戚がおらず(矢車家の人から葬式の後で聞いた)、幼いアリサに喪主が務まるはずなどない。その為、親交が深かった遠上家が喪主として忙しなく動いており、遼介もその手伝いとして駆り出されていた。

――おかあさん、どうしてなの。

ただ悲しい、というよりもアリサの中にあったのは困惑だった。ただ、その時点で他人に等しい自分がどこまで関わっていいのかという疑問もあったため、様子を見ていた。アリサの傍で気遣っている茉莉花もどうしていいか分からずにいた。

すると、アリサの目線がこちらを向いた。

「その、おしえてほしいんです」

そう言って、アリサは話し出した。母親から「あなたの父親は遠いところで生きている。偉大な魔法師で私のことを愛してくれていたけど、どうにもならない事情があって私の方から別れを切り出したの。だから、どうか父親のことを恨まないで。すべては私の責任だから……」と何度も言っていた。その意味がアリサには分からなかったし、茉莉花もピンと来ていなかった。

正直なところ、それを聞いた瞬間に自分の父親を連想したが、どこ

からどう見ても愛妻家である父が隠し子など到底想像できなかった。そもそも、魔法師らしい行動をしてなかったせいか、その自覚すら薄かった自分にはアリサの母親の心情を推し量るのは難しかった。

だから、こう言うしかなかった。

「僕は君のお母さんの為人を知らない。けどね、きっと君のお母さんが言いたかったのは、君のお父さんのことについてはお母さん自身の問題で、君が恨む必要なんてどこにもない。ようするに、君のお母さんは君に幸せになって欲しいということだと思うよ」

この時の自分は初対面のアリサや茉莉花の事すらロクに知らなかったのだ。ましてやアリサの母親であるダリヤの事など知る筈もない。ただ、アリサは茉莉花の家族を見て、自分に父親がいないことを不思議に思ったのだろう。それに対する答えがダリヤの言葉だとするのなら腑に落ちる。

アリサからすれば、顔も知らないであろう父親のことを恨むかもしれない。「何故母を強く引き止めなかったのか」と思うかもしれない。でも、ダリヤは自分からアリサの父親に別れを切り出した。それは、その相手の幸せを慮っての事なのかもしれない。

偉大な魔法師と称された実の父親が母親の葬式に出てこないことも問題だと思う。今更出てきて父親面出来るほど図太い性格ではなかったか、それともダリヤの死そのものを知らなかったか。どちらにせよ、それで偉大な魔法師というのは聞いて呆れる、と内心で愚痴った。

悠元の言葉を聞いて、何かを考えるようにしているアリサ。茉莉花もアリサの様子を不思議そうに見ていた。すると、アリサは唐突にこう言い出した。

「あの、だったら、わたしのおにいちゃんになってください！」

「……はい？」

もはや何が何だか分からなかった。自分は口説いたつもりもないし、自分が知る部分を総動員して至極真っ当な答えを返しただけだ。それがどう繋がって初対面の人間に対して「兄になって欲しい」と懇願されなきゃならないのだ……と思ったところで、口に出たのは疑問

を浮かべた返事だった。
アリサにとって唯一の血の繋がりを有していた母親が亡くなった。そして、遠上家と家族同然の付き合いをしていたアリサからすれば、兄がいる茉莉花が羨ましく思えてならなかったのだろう。その結果として自分に兄になって欲しいと懇願したことは理解しておく。
初対面なので会った時に自己紹介だけはした（茉莉花とアリサは矢車本家の人とも交流があり、悠元はその本家繋がりの人間と紹介された）が、流石に行きすぎだろうと窘めようとしたところで茉莉花が詰め寄ってきた。
「アーシャ、ずるい！　わたしのおにいちゃんにもなって!!」
「……」
茉莉花（ブルータス）、お前もか。
結局、5歳児2人のパワーに圧倒されて兄呼びを認める羽目になった。更には二人の呼び方をアリサの母親に倣う形で「アーシャ」「ミーナ（ロシア人女性の名前「ジャスミン」の略称からくるもの）」と呼ぶことになった。自分に対する呼び名はアリサが「佑都お兄ちゃん」、茉莉花が「佑兄」となった。
大体、茉莉花には実の兄がいるのにいいのか、と尋ねると、茉莉花は「りょうすけ兄（にい）はやさしくない」とぶった切るような発言が飛び出し、偶々近くにいた遼介が部屋の隅に移動して泣いていた。頑張れ遼介。
それから4年間は家族ぐるみで交流を持つことになった。2人が小学校に上がってからは2年ほど同じ小学校に通っていたが、休み時間になるといつも遊びに来るようになり、同級生からは「未来の嫁さんが来たぞ」とからかわれ、2人も満更じゃなさそうな表情をしていた。その当時の自分は恋愛感情に希薄だったせいで適当にあしらっていたが。
自分が武術を習っていることが影響してか、茉莉花が矢車家にある武術の道場に通い始め、アリサも茉莉花に連れられる形で習い始めた。なお、遼介も両親の勧めで通っており、「頑張れよ、未来の義弟（おとうと）」と言われたときは釈然としなかった。

中学1年の終わりに身体面の成長を鑑みる形で新陰流剣武術の修行が一旦終了し、師範代の目録を渡されたことに加え、三矢家当主からの意向で東京に行くこととなった。引っ越しの1ヶ月前に遠上の一家とアリサに伝えたところ、自分を実の兄のように慕ってくれた2人は当然引き留めてきた。

茉莉花の両親の提案により引っ越しの日まで遠上家で暮らすわけになったが、学校の時以外は常に傍から離れようとしなかった。寝るときは勿論、お風呂にも一緒に入る羽目となった。ちゃんとタオルで隠してはいたが、一度だけ迂闊にも下半身を見られ、2人は興味深そうな眼をしていた。特殊な性癖など持っていないので、流石に9歳相手に性欲など湧く筈もない。

別れの日。お世話になったということで2人には髪飾りをプレゼントした。アリサには桜のモチーフの髪飾りを、茉莉花にはジャスミンの花をモチーフにして作り上げた。デザインの原案は自分で一から書き起こし、バランス調整はＦＬＴ・ＣＡＤ開発第三課にいた職員にも手伝ってもらい、製作自体は自分一人で最後まで完成させた。

この2人に渡した髪飾りは、後に深雪の手に渡ることとなる髪飾り製作のフラグになったという訳だ。

けれど、これで二度と会えなくなるわけではなかったし、その気になれば連絡は取れるということで、プライベートナンバーを茉莉花の父親に渡した。流石に通信料を考えてメール主体ではあるが、魔法科高校に入った今でも続いている。

最近は各々端末を持ったのか、茉莉花の父親経由のメールはほぼ無くなった。その代わり、父親である遠上良太郎（とおかみりょうたろう）から「娘の親離れは早いかもしれない」と言いたげなメールが時折来るようになった。俺にその話題を投げられても正直困るだけなのだが、当たり障りの無い程度の返信はしている。

しかも、良太郎だけでなく彼の妻である芹花（せりか）からもメールが来るようになり（アドレスは夫から聞いたと説明を受けている）、少なくとも良太郎と芹花は悠元が十師族・三矢家、そして現在の名字が神楽坂を名乗っていることも把握している節が見られた。

「其方が良ければ茉莉花とアリサのどちらかを娶って欲しい」みたいな雰囲気を文面の各所から感じたのは……気のせいにしたかった。

ただ、茉莉花とアリサは九校戦をテレビで観戦していたが、『佑都の面影を感じる』みたいな文言があったので正直素性を伝えるべきか悩んだが、良太郎と芹花から止められている。多分だが、いくら数字落ち(エクストラ)に対しての差別が禁止されたとはいえ、多少の蟠りは燻ぶっているような状態だ。それは先日のオフショアタワーで対峙した岬寛がいい例だろう。

……今更ながらに思うが、アリサが間違いなく母親似なのは葬式に出ていた関係で把握している。そうなると、アリサの母親ことダリヤが言っていた言葉が気に掛かる。

『偉大な魔法師』という時点で、これがダリヤのみならず魔法師社会で知られている魔法師の男性なのは間違いない。『遠いところにいる』という文言が国内外のどちらを指すかは不明。

一番問題なのは、『愛してくれていたけど、どうにもならない事情があって別れた』……これ、相手の魔法師が二股以上掛けていて、アリサを妊娠させておきながらその事実を知らなかった、ってことになるよな。護人の方針とはいえ、実質二股どころじゃ済まない自分が言っても何の説得力にもなりはしないが。

あとヒントになりそうなのは、家族付き合いをしているときに茉莉花の父親から魔法の練習はしているのかと聞かれたことがあり、別段隠すことでもないので正直に答えると、「茉莉花やアリサには魔法を見せないで欲しい」と懇願されたぐらいだ。その時は魔法教育の根拠の薄い通説に配慮した結果だと納得していたが。

何にせよ、結論に至るまでのピースが足りない。茉莉花のことも驚いたが、アリサに関しては只事じゃない素性が隠されていそうだ。もしかすると、自分の素性を2人に隠したい理由は茉莉花に対してというよりもアリサに対してのものかもしれない。

「それで、何時出発するのですか？」

「1時間後。ここからティルトローター機で羽田(はねだ)（東京湾海上国際空

港）まで一度飛んで、新千歳（しんちとせ）を経由して矢車本家に向かう予定だよ」
「……まあ、いいですけれど」
態々姫梨を煽らなかった方が時間的に余裕もできるわけだが、この辺の時間調整も見越しての発言ということは言うに及ばず、事前に泊まるための準備もして欲しいと言われていたので問題はなかった。
あと、時間が取れるということは『セラフィム』と『ラグナロク』のプログラム調整の時間も確保できるということなので、調整用の端末と併せて一応持ってきてはいる。尤も、現状で使うのは『ワルキューレ』と『オーディン』、そして手首につけている完全思考操作型ＣＡＤ『シャドウブレイズ』ぐらいだろう。
別にベゾブラゾフや国家元首の書記長に対して〝交わした約束の契約不履行〟の理由で新ソ連へカチコミをするわけでもないので。

優先度の違い

箱根の神楽坂本邸からティルトローター機で東京湾海上国際空港に到着し、降り立った悠元の目前に映るのはこれから乗ることになる飛行機。普通は旅客機と思ったのだが、出発の準備をしているのは政府専用機であった。

「母上、民間機ではないのですか？」

「いやー、私も最初は民間機で手配したんだけどね。総理が『神楽坂家の御当主の方々を民間機のエグゼクティブクラスに乗せるのは、国としての沽券に関わる』と言って、政府専用機になっちゃった」

「なっちゃったって……」

先日の衆参両院選挙で大勝し、続投が決まった総理大臣の感謝の気持ちもあるが、国の重鎮とも言える護人の方々を最上級のＶＩＰ待遇で手配するのが神楽坂家に対する〝礼〟である以上、千姫も無碍に出来なかったようだ。

ともあれ、千姫に続く形で乗り込むと、ＣＡたちが深く頭を下げて出迎えた。彼らは非魔法師であるが、マナーや礼儀だけでなく魔法に対する知識も徹底的に叩き込まれているため、非礼や無礼を働くことは許されない。

「お世話になります」と軽く頭を下げつつ、席に座った。

席に座ってウェルカムドリンクとしてノンアルコールのドリンクを貰ったところで専用機が動き出し、滑走路に到達した時点でエンジンが唸りを上げ、加速による負荷が悠元に掛かる。とはいえ、剛三との訓練のせいでこの負荷も細波程度にしか感じなくなった自分が人間離れしていることに溜息を吐きたくなった。

滑走路から飛び立った政府専用機は一路新千歳空港へと進路を向ける。体制が安定状態となったところで、悠元は端末を取り出してキーボードを叩き始める。

（しかし、矢車家からの話とはいえ、母上自ら出向くとはな）

箱根に本拠を置いていることを考えれば妥当だが、今回の話は遠上家と矢車家だけの問題ではない、と千姫は説明していた。

現状、数字落ちは数字付きや百家よりも厳しい魔法制限――――固有魔法の使用制限と引き換えに、立場の差別禁止を勝ち得ている。だが、彼らが数字を剥奪されて研究所を追放された理由は研究所の目的と合致しなかったがため。ひいては当時の研究所を管理していた政府と元老院に原因がある。

その数字落ちが主犯格となって起こした東京オフショアタワー爆破テロ未遂事件は、護人にして元老院の一角である上泉家が関与した建物を狙うという悪質なものだった。

当然、この事件に関しては元老院で荒れに荒れた。この事件によって魔法師社会の仕組みそのものが変化の時期に来ていると判断した千姫と剛三は、四大老として数字落ちの根本的な待遇改善を主張、樫和は現状維持を主張し、東道は沈黙することで中立の立場を取った。

――――内々に面従腹背の輩を抱えたまま外の脅威に備えろと？　儂や千姫、元造たちのように命を賭したことすらなく、影で座ったまま戦ったことのない貴様らに何が分かる!?　恥を知れ、小童ども！

そこで激怒したのは剛三だった。

師族会議のシステムが構築されて３０年余り……国防軍の腐敗を防ぐため、要足り得る魔法戦力の独自性と魔法師の基本的権利の守護を謳ってきた組織だが、魔法が技術の一つとなったことと変化する世界情勢は、師族会議と国防軍の相互協力体制を必要としていた。その理由に戦略級魔法ひいては戦略級魔法師の存在が大きい。

だが、現状はどうだ。

国防軍は確たる目的を失ってみっともない派閥争いで文民統制の制御から外れかけている上、魔法協会ひいては師族会議からの干渉を受けない部隊を設立する動きもある。独立魔装大隊もとい第１０１旅団はその最たるものだろう。その暗部では〝再教育〟という名目で師族の人間の誘拐未遂事件まで起こしたのだ。

師族会議に関しても、師族同士を争わせようとする師族や、魔法師としての実力を強めることに足を引っ張ろうとする師族までいる始末。何せ、家督を継がない立場の人間が魔法師として優れた力を発揮していることを理由に、彼の実家に対して追及した過去がある。

更に、魔法師の勢力が強まることを恐れて力を削ることに腐心した政府――政治家や官僚たちによって、この国の魔法師社会の様相は混沌の極致にあった。公権力が魔法の力に脅かされる惧(おそ)れはかつての呪殺を警戒しての事だったかもしれない。だが、その行いは結果として魔法師のみならず非魔法師にも影響を与えている。

魔法を学んでも、社会に見合った能力でなければ発揮される場所が無い。あまりに特化しすぎたが故に飼い殺しの憂き目に遭い、結果として犯罪に手を染める者も少なくない。力を求めたいがために、本来なら敵扱いされる人間すら引き込んだという事象も起きたほどだ。

魔法の力が歴史の表舞台に〝技術〟として出たことは、古今東西における技術革新に伴う軋轢の例に漏れることなく問題が顕在化している。それは魔法に秘められた〝秘匿〟に反する動きであり、古式魔法師と現代魔法師の間で軋轢が生まれる一因にもなっている。

魔法を検知する監視システムがいくら充実しようとも、魔法を使えない者からすれば想子の動きを視覚で捉えることが出来ず、結果的に『見えない力』と恐怖されてしまう現状。元々軍事的な要素として取り入れられたが故の宿業が、約1世紀も経過した蓄積がここに来て噴出した。

こんな未来の為に親友は命を懸けたのではない。「人間」であることを望んだ親友の想いを、この国の人間は何も考えていない。実際に刃を交えることなく引き籠ってきた人間に、命を削って戦っている人間の思いを推し量るなど笑止千万。剛三は、自ら世界群発戦争を戦って生き抜いた人間として、その命題を東道と樫和に突き付けた。

それに続く形で千姫が口を開いた。

――我らの使命、忘れたわけではあるまい。だが、妾も義兄(あに)も平和のぬるま湯につかり過ぎていたようじゃ。奇しくも、妾の子は権力や権威に対して人一倍厳しいぞ。主等にとては劇薬じゃろうが、その苛烈さが無くては国を変えることなど夢じゃろう。

千姫は佐伯少将と烈を含めた「九」の家の先代当主たちとの取引を把握しており、その中で佐伯は「国防軍は魔法師を軍人への道に強要しない」と告げていた。それに倣う形で千姫は自身の子が戦略級魔法

師であることも踏まえた上で、魔法師を「兵器」扱いすることは金輪際許さない、という意思も含めた言葉を述べた。
元老院での会議の結果、数字落ち（エクストラ）に関する扱いは護人の二家預かりとし、その第一歩として千姫は遠上家を神楽坂家の傘下に引き込むことを決めた。そして、数多の問題を起こした十山家を師族会議から永久追放し、その穴を埋める形で遠上家を数字付き（ナンバーズ）の序列に加える腹積もりのようだ。
ただ、現状残存している数字落ち（エクストラ）全てを元に戻すのは難しく、中には過激な思考の組織に入り込んでいるケースもある。この国に害を成すならば、一切の情けを掛けることなく滅ぼすと千姫と剛三は宣言したそうだ。
それと、千姫が言うには、四葉家の次期当主として達也を指名すれば、自ずと国防軍情報部と十山家は動くとみている。そして、孤立無援となった十山家が万が一の可能性として十文字家を頼った場合も考慮済みと述べていたため、その辺は任せることとした。
遠山つかさは詩奈と知己であることは自分も知っており、自分を引き出そうと詩奈を利用することも想定しているが、この辺は「身内のことは三矢の係累だけで決着をつける」と述べ、千姫もそれには頷いて承諾した。
詩奈には、相手にどのような理由があれども、国防軍絡みの際には何かしら連絡するよう言い含めている。なので、万が一相手が騙して詩奈を連れ去った時点で加担した人間全員を病院送りにする腹積もりだ。
それこそ特務中将としての権限で全員拘束して厳罰に処するべきという具申を防衛大臣に送れば、文民統制の引き締めという名目で幕僚らの尻を叩かせることも可能だ。そんなことをせずに自ら動いてくれるならば御の字だが。
閑話休題。
（しかし、遠上家か……遼介さんが留学に行ったまま帰ってこないのは聞いたが）
遠上遼介（とおかみりょうすけ）は悠元の3つ上――――悠元の姉である美嘉と同い年。今

年1月、交換留学でＵＳＮＡ旧カナダ領域バンクーバーに留学し、その2ヶ月後に音信不通となっている。
本来許されないはずの魔法因子保有者の留学が許された経緯は、パラサイト事件もとといＵＳＮＡの身勝手な事情による『灼熱と極光のハロウィン』戦略級魔法師殺害未遂事件（どう取り繕おうがスターズまで動かして実行した時点で立派な国際犯罪だと思う）が原因だ。
自分で調べた限りでは、公的な情報によるとバンクーバーにいるのは間違いないが、街に設置された監視カメラによる情報を統合した結果、バンクーバー市政府公認の魔法結社『ＦＥＨＲ（フェール）』に所属している可能性が極めて高い結果が得られた。
その組織に関しては先日の東京オフショアタワーに関する事件で、『進人類フロント』のメンバーの一部がその組織に引き込まれた。その後は過激な報告を聞かなかったために放置していたが、まさか知り合いの一人が所属しているというのは初耳だった。
遼介が遠上家の人たちにどこまで話しているか分からないが、メールでの文面を見る限りにおいて何も知らない可能性が高いだろう。音信不通の部分は向こうも納得しているだろうが、ＵＳＮＡの魔法結社に所属していると知ったらどういう反応を示すのだろう。
（まあ、その時はその時だな。大方、レナ・フェールに絆されたとみるべきか）
悠元も『ＦＥＨＲ』のリーダーであるレナ・フェールとは面識があった。見た目通りの年齢でないのは散々見た目の年齢詐欺に該当する面々と関わりが多かったためだが、年齢を訊ねる気などなかったし、女性に対して年齢の話はタブーである。
剛三との世界旅行で夜のバンクーバーを散歩していた時、数人の魔法師らしき人物に囲まれたことがあった。その連中全員を一撃で倒したところで、彼らのリーダーと思しき女性が姿を見せた。それがレナ・フェールであった。
『私の同志がご迷惑をお掛けいたしました。貴方のその強い魔法力に興味があり、ただお声を掛けさせていただくつもりでしたが、同志が早合点を起こしてしまったようで』

逃げ道を塞ぐように取り囲んでおいて何を今更、とは思ったが、最悪覚えたばかりの『鏡の扉（ミラーゲート）』で脱出することも織り込んだ上でレナの招待を受けることとなった。

レナからは悠元の魔法力に関する質問があったが、その一遍だけでも世界を揺るがすことになりかねないため、適当にあしらった。レナの周囲にいた同志の一人が掴みかかろうとした瞬間に合気道で床に叩きつけたことで、他の人間は彼我の実力を察して手を出さなくなった。

レナも深く追及することは避け、丁重にホテルの近くまで送り届けてくれたが、自ら進んで味方になろうという気にはならなかった。その時は達也や深雪のことが念頭にあったのが一番の理由かもしれない。

別れる際、レナから『叶うならば、我らが主となって頂きたかったです』みたいなことを言われたが無視した。会談の時からなんだか熱っぽい視線を浴びていたような気もしたが、その一言で神様みたく祀り上げているのだと判断したのだった。

翌朝、剛三にそのことを話したら、盛大に笑った上で背中をバシバシと叩かれた。地味に痛かったから加減をしてほしかったのはここだけの話。

◇　◇　◇

新千歳空港に到着した悠元が目にしたのは、リムジンだった。この待遇は納得しているものの、前世の庶民だった価値観からしてどうにも納得し難いものがあった。これには、隣にいる千姫が思わず笑みを零すほどだった。

一々驚いてもキリが無いと諦め、悠元と千姫がリムジンに乗り込む。

「そうそう、今回は神楽坂家の人間としてではなく、神坂グループの人間として出向くことになっています。なので、悠君は会長の御曹司兼取締役という体ですね」

話の流れを説明すると、まず神楽坂家の要望を聞いた矢車家が遠上家に「こんな話を知り合いから聞いた」という感じで話し、次に神坂

グループで業務委託している開業獣医の募集を公募したところ、問い合わせをしてきた中に遠上家が入ってきたので、今は矢車家と遠上家の話し合いが持たれている、という形になっている。遠上家としては、矢車家経由で提示された条件に関して問題はないという感触を得ているらしい。

その上で、実際の業務を担っている神坂グループの人間が遠上家と詰めの交渉に入る――――そのための来訪という意味合いが強い。若干急ぎ気味なのは、悠元が四葉家に関する部分で動くことを知っている部分もある。

「獣医関連は分かりました。では、婚約者関連は？」

「今は単に矢車家から『悠君に好意を持っている節がある』という報告までですね。アリサさんは既に母親が亡くなっていますし、父親に関しては戸籍情報上だといないことになっていますので、養親である遠上家の方とお話しせねばなりません」

要するに、千姫は何らかの形で茉莉花とアリサの婚約にまで漕ぎ着けるつもりだと察した。その為に親交のある自分を連れてきたと思われる。千姫自ら来たのは、自分の母親としてもそうだが、今回の交渉相手が数字落ち（エクストラ）という点が大きいのだろう。

「随分と急ぎますが、何か理由でも？」

「そうだね……悠君の婚約者募集は、四葉の次期当主と婚約者募集に合わせて発表するの。現在悠君の序列に入っているのは、先日三矢殿からの打診を受けて追加した愛梨さんも含めて８人」

深雪、雫、姫梨、沓子、夕歌、セリア、泉美、そして愛梨。他にも婚約の申し込み自体はあるわけだが、千姫はこの婚約者募集の前に一桁台の序列を固定したいらしい。

「泉美ちゃんは申し訳ないけど、先日のペナルティを支払う形で第１０位に落とし、愛梨さんが第７位に据えます。それで、その２人の序列は成立すれば第８位にアリサさん、第９位に茉莉花さんを置きたいのです」

つまり、神楽坂の面子を潰した現十師族よりも数字落ち（エクストラ）である遠上家の人間を上位に据えることで、神楽坂家における重要度を明確化し

たいようだ。序列自体に意味があるわけではないが、何かと面子を気にしてしまう人間からすれば、この序列の〝格付け〟は屈辱的にも見えるだろう。

十師族の四葉家、師補十八家の一色家、百家の四十九院家、更には九島家の縁者に神楽坂家の係累よりも優先度としては下だ、と宣言するようなものだ。なお、アリサの序列が上なのは単純に遠上家でのアリサと茉莉花の関係を矢車家から聞いた結果らしい。

「なので、交渉に関しては私が全面的に引き受けます。悠君は九校戦で顔を知られているので、姿を誤魔化してくださいね」

「……まあ、分かりました」

姿を誤魔化すのは『仮装行列（パレード）』や『月影行列（ムーンエスケープ）』、古式だと『纏衣の逃げ水』辺りが使えるが、今回は単に外見を変えるだけなのでＣＡＤ使用に支障の出ない『仮装行列（パレード）』でいいと判断。

悠元は念のために眼鏡――術式の補助具みたいなもので、刻印によって術の継続発動を半自動化する――を掛けて『パレード』を発動させると、悠元の髪の色が白銀に染まり、瞳は暗めのグレーに変わった。

この仕組みはパラサイト事件にリーナやセリアが身に着けていた仮面のデータをセリアから貰って作ったもので、試しにセリアに渡したところ「あの仮面、正直抵抗あったんだよね」と呟いていた。この感想はリーナも抱いていたものらしい。

「あら、イケメンな外人さんに早変わりね。私も術で銀髪にしようかしら」

「必要あります？」

「気分の問題ですよ、気分の」

結局、千姫のＣＡＤに『仮装行列（パレード）』の起動式をインストールし、千姫は『パレード』を発動させて綺麗な黒髪を銀髪に変化させた。更には瞳の色を悠元と同じ暗めのグレーにしたことで、ちょっと年の離れた外国人の姉弟の様相となった。

九島の秘術をあっさり渡していいのかと言われそうだが、身内もそのことを理解しているし、別に悪用するつもりもない。大体、既に十

師族を離れている以上は一々追及されるいわれも存在していない。
なお、言うまでもないが矢車家に着く前に魔法は一度解除している。

◇　◇　◇

矢車家の本家は北海道南西部にあり、外見は立派な寺といっても過言ではない。正門の前に着いたリムジンから降り立つと、悠元にとっては知己である矢車本家の当主こと矢車慶一郎（やぐるまけいいちろう）が頭を下げた。
「お久しぶりですね、佑都さん。いえ、今は悠元さんでしたか。千姫様もお久しぶりでございます。正月は母が代理として出向き、自ら顔を出せなかったことをお詫びいたします」
「お久しぶりです、慶一郎さん。お世話になります」
「朔夜（さくや）さんより事情は伺っております。あの時は新ソ連の逆襲を警戒していた時期でしたので、お気に病む必要はございませんよ」
「感謝いたします。それでは中へ」
過度な歓迎は周りに要らぬ詮索を与えると分かっているためか、出迎えは慶一郎と数人の使用人しかいなかった。手荷物に関してはＣＡＤを持ち込んでいる事情を話した上で自分で持っていく形とした。
『トーラス・シルバー』のことについては神楽坂家でも一部の当主クラスにしか開示されておらず、慶一郎も悠元がその片割れだと知る一人の為、悠元が自分で荷物を持っていくことを察して、使用人に指示を出していた。
矢車本家の屋敷に入ると、慶一郎の妻に加えて四人の子ども、そして正月に会った先代当主の朔夜が出迎えた。慶一郎の子どもは１７歳の長男と１４歳の長女、１３歳の次女、１１歳の三女と長男以外女子という構成。
長男の純一郎（じゅんいちろう）は魔法科高校に通っておらず、魔法力を隠すために普通科の高校へ進学していて、悠元が本家で過ごしていた時に同い年の男子ということで仲良くなっている。女子三人とも仲良くなっているが、恋人関係に発展しないよう細心の注意を払ったうえで接していた。その気遣いが他の方面にもできていればまだ穏便だったのかもしれないが、既に後の祭りなのでもう諦めた。

子どもらからは九校戦での活躍を主に聞かれた。あの『クリムゾン・プリンス』を完封して一方的に負かしたことは感動的だったらしく、純一郎から「今通ってる学校は小学校からの奴が結構いてな。『あれって佑都だよな!?』って興奮気味に聞かれたよ」と聞かされた。
純一郎には「恋愛部分も含んでボコボコにしただけだ」と返したところ、直ぐに深雪のことが浮かんだようで、深雪と付き合っているのかと聞いてきたので、それには素直に頷いた。
「成程なぁ。あんな綺麗な人となら悠元と釣り合うわな」
「それは、どっちが高い前提で話してるんだ？」
「悠元の方だな。一条にはとてもじゃないが釣り合わんと思うよ」
深雪や将輝のことを実際に見たわけではないにせよ、純一郎はそう述べた上で「いくら『クリムゾン・プリンス』と呼ばれようが、昨年のモノリス・コードで威力制御をミスってオーバーアタック紛いの魔法を放った時点で程度が知れてる」と辛辣に切り捨てていた。
何せ、純一郎は悠元の魔法訓練を見たり、一緒に鍛錬していた経験がある立場。三矢家が矢車の血族を引いているとはいえ、並々ならぬ魔法力を有している悠元がそれを暴走させることなく制御しきっていることに強い関心を抱いていた。
悠元が7歳まで病弱だったことも、もしかすると長く生きられないことも噂程度に聞いていたが、その噂を覆してこうやって会話を交わしていることに比べれば、彼に対する嫉妬など無いに等しかった。
「なあ、悠元。この間分家の次男の写真を見てた上の妹がな、目をキラキラさせていた」
「それって侍郎のことだよな。でも、アイツには詩奈が嫁ぐ予定だが」
「愛人でも良いとか言ったものだから、親父が泡を噴いてぶっ倒れた」
「……そりゃぶっ倒れるわ」
魔法師社会の婚姻が上の立場になればなるほど政略結婚になるのは仕方が無いにせよ、密かに愛人ブームでも広まりつつあるのだろうかと懐疑的にならざるを得なかった。
なお、その上の妹のことを聞いた朔夜が、千姫経由で悠元に侍郎と詩奈の婚姻を後押しすることを約束した。古式の家ならば内縁関係

にする手段も取れるため、侍郎はこれからモテ期に突入するのかもしれない。

……せめて、詩奈が歪み過ぎて『Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．（なかにだれもいませんよ）』とならないように配慮はしておこうと決めた悠元であった。

大人らに振り回される子どもら

悠元がセリアとの修業に励んでいた頃、達也がＦＬＴに用事があると言って出かけたのと入れ替わる形（時間自体に１時間ほどの差異はあったが）で夕歌が尋ねてきた。その応対自体は深雪が行うことになったが、夕歌は深雪の表情を見て笑みを零した。

「夕歌さん、どうかなさいましたか？」

「ちょっとね。深雪さんが何かを決意した表情を見せたものだから」

「ええ、まあ、そうですね。ところで今日はどのようなご用件で？　悠元さんは正月まで神楽坂家の仕事があると言って帰ってきませんが」

「あら、そうなの。にしては、動揺したりしていないのね」

「悠元さんと誠心誠意話をして、こういう時も出てくることは覚悟の上ですから」

笑顔でアッサリと言いのけている深雪に対し、夕歌は内心で「強いわね」と感嘆にも似た言葉を吐露した。水波が差し出してくれた紅茶を頂きつつ、夕歌は今回の来訪の目的を話した。

「深雪さんは、来年正月の慶春会に出席されるのかしら？」

「ええ。叔母様からのご招待を受けていますので……夕歌さん？」

「そのね、深雪さん……今年は気を付けなさい」

夕歌からそう言われるということは、深雪は自身を狙う者の存在を連想した。だが、九校戦でもそうだが、自分が四葉の係累だと知るのは身内以外を除けば達也の友人たちや三矢家の人間に限定される。

まず、三矢家から自身の情報が漏れるということはほぼないに等しい。現当主とその夫人、上泉家当主となった次男の元継、そして自身の婚約者である三男の悠元の４人が該当するが、彼らは秘匿を約束してくれた。

友人たちも四葉の名の重みを知っているためか、秘密にすることは約束してくれていたので、深雪絡みでないことは間違いない。

そうなると、深雪が動くことでその同伴者となる達也や水波のどちらかとなるわけだが、水波は世俗との関わりがまだ薄い方なので恨みを買っている節は見られない。そうなると、夕歌からの忠告は主に達

也絡みであると深雪は結論付けた。
「出ない方が良い、とは仰られないのですか？」
「まあ、私も次期当主候補だけど、筆頭候補の深雪さんには勝てないもの。いくら魔法力を磨いても、深雪さんの愛には勝てそうにないし」
この辺は夕歌も深雪と同様に悠元の婚約者序列に入っていることが大きく、四葉分家にして神楽坂家の『九頭龍』の一角を担う家柄。現当主の津久葉冬歌（とうか）は娘を四葉の次期当主候補として考えていたが、悠元の婚約者となったことでその線を既に捨てている。
夕歌自身も序列第５位という立場には納得しており、その上位にいるのはいずれも神楽坂家に縁のある者たち。そうなれば、悠元から歳が少し離れた自分が無理をする必要もないと判断した。尤も、母親から「身を固めなさい」と口煩く言われていたので、悠元との婚約は夕歌にとって救いとなった。
「週に1度はうちに来て泊まっているじゃないですか」
「最近、またサイズが合わなくなってきたのよね……深雪さんも大変でしょうに」
「うちはその、お母様や叔母様の例もありますので想定はしていましたが」
「それはそうよね……って、話がずれたわね」
夕歌と深雪の特定部位に関する話で水波が思わず身を背けて「大丈夫でしょうか」と不安げに自分の胸を見つめていたことに深雪と夕歌は気付いていたが、そこは触れないようにしつつ夕歌が話を戻した。
「御当主様のご命令は絶対だもの。それは表向き四葉との関わりを出来るだけ薄めてきた2人も例外じゃない。ただ、分家当主達が良からぬ動きをしているって母が漏らしていてね」
「冬歌さんがですか」
「あれはわざとでしょうけどね。まあ、それが不安ならどこか途中から一緒に行くというのはどうかしら？」
八ヶ岳山麓には津久葉家が所有する別荘があり、夕歌は例年その別荘を経由する形で本家に赴いている。夕歌自身が最初からついていくことで襲撃を逸らさせる可能性もあるが、あの母親が態々その情報

を漏らしたということは、かなり厄介な事態になると夕歌は読んだ。
だが、夕歌が途中で合流する形で本家に向かえば、いっそのこと偶然鉢合わせたという体も取れるだろう。残る問題は、四葉分家そのものが妨害してきた場合だけになる。
「お気持ちは嬉しいのですが、夕歌さんが伝えた懸案に夕歌さんが巻き込まれる危険もあります。いくらお兄様と水波ちゃんがいても、無傷でやり過ごせるわけではありませんから」
「そう……分かったわ。もし、３０日までにトラブルがあって着かないようなら連絡を頂戴。私は３１日に本家へ向かうから、貴方と達也さん、水波ちゃんの３人ぐらいなら大丈夫よ」
「分かりました。お兄様にもそう伝えておきます」
夕歌は自分のガーディアンが亡くなったことを深雪に伝えなかった。深雪のガーディアンは現状達也だが、その役目は水波に引き継がれる。身内もしくは家族同然の付き合いをしている深雪の心証を態々悪くする必要もないと判断し、カップの紅茶を飲み干してから立ち上がった。
「御馳走様。それじゃ深雪さん、次に会うのは慶春会になるかしらね」
「ええ、そうありたいと思っています」
深雪と水波に見送られる形で去っていく夕歌。そして、夕方に帰ってきた達也に深雪は夕歌の来訪と彼女から受けた忠告を伝えた。
「成程……深雪は、俺絡みの可能性が高いと踏んだのか」
「はい。私が四葉の人間だと知るのは、四葉家を除けばごく一部。ですが、夕歌さんの口ぶりからするに分家の方々が私を狙うのはあまりにも不自然すぎると思いまして」
「確かに、その通りだろうな」
深雪は四葉本家の使用人や分家からも認められた存在。その一端は昨年のＦＬＴにおける青木の言葉遣いからも分かることだった。そして、まだ深雪に話していないことだが、達也はＦＬＴで貢から慶春会の出席を辞退するように言われた。あくまでも出席するのは深雪であって、自分はその護衛の為に付いていくだけに過ぎない。
そして、達也の疑問に対して貢は「慶春会までに間に合えば疑問に

答えてやろう」と言っていた。この辺の話はここにいない悠元辺りに聞けば早いかもしれないが、彼は神楽坂家の事情で正月までいないし、今年は達也の行動の後始末として動いていた。それを心配する妹のことを考えれば、ここで悠元を頼るのは何故だか自分を許せなくなってしまう、と達也は内心で苦笑した。

「何にせよ、自力で着ければ御の字だな。最悪の場合、夕歌さんに合流する形で本家を目指そう。深雪もそれでいいか？」

「はい。夕歌さんには連絡したほうが宜しいでしょうか？」

「いや、止めておこう。こちらの動きをリークされる可能性もあるからな。それはギリギリまで待とう」

「分かりました、お兄様」

それに、夕歌が深雪と同じく神楽坂家次期当主の婚約序列に入っていることは、当人たちとその身内だけに止められており、万が一傷を付けるような真似をすれば、神楽坂家が動きかねない。

流石に貢が形式上の中立を宣言したことは信用するとしても、彼を含めた分家当主の差し金によって唆された相手が襲撃する可能性が残っている。黒羽の諜報能力で自分らの行動を追跡される可能性も残ったままだ。何にせよ、出発予定は２９日と実質的にあと２日。万全に準備を整えた上で臨む必要があると達也はそう感じていた。

◇　◇　◇

津久葉家の自宅に帰った夕歌はコートを脱いだ。備え付けのサーバーで紅茶を淹れると、紅茶をテーブルに置き、ソファーに座った上で背伸びをするような動きをした。

「全く、どこに縁が転がっているのか分からないものね」

夕歌が悠元と出会ったのは、親友である詩鶴を介して三矢家の屋敷で出会ったことが切っ掛けだった。魔法科高校入学時でも高い魔法力を発揮していた詩鶴は在学中にメキメキと実力を上げ、生徒会長就任時には十師族当主クラス以上の魔法力を有していた。

その秘密をそれとなく尋ねたところ、詩鶴は「弟に魔法の見方を教わった」と聞き、四葉に連なる人間としてその秘密を探りたい欲求から彼と接触した。正直、周囲の男子にすら見向きもしなかった（魔法

力を隠していた以上、下手に競えば厄介事になると分かっていたため）夕歌にとって、悠元の存在は煌びやかに見えた。
　それからというものの、詩鶴に託ける形で三矢家を訪れては悠元と会話をするようになった。その当時、悠元は常に三矢家にいるわけではなく、学校の長期休みの時だけいる形が多かった。その理由は上泉家――――あの上泉剛三から武術を習っていると聞き、悠元の非凡さがそれだけでも窺い知れるほどだった。
　バレンタインのお返しということでホワイトデーに手作りのクッキーが贈られてきたが、それを口にすると何故だか「納得いかない」という気持ちでいっぱいだった。今にして思えば、女性としてのプライドを刺激されたのだろう。
　悠元が十師族・三矢家の姓で魔法科高校に入り、九校戦後に神楽坂の姓を名乗る。そして昨秋の横浜事変後、母親の冬歌から唐突に婚約の話が舞い込んだ。
「夕歌、貴女は神楽坂家の次期当主となった悠元君を知ってるわよね？」
「ええ、知っていますが」
「貴女には彼に嫁いでもらいます。貴女の親友である三矢さんも婚約したのですから、貴女もそろそろ身を固めなさい」
「……え？　はい？　婚約？」
　最初は政略結婚になるかと思った。だが、婚約相手は自分も良く知る人物であり、自分も嫌いではない。そのことを知っていた母が神楽坂家当主に相談し、そのまま婚約を結ぶこととなった。
　正月に悠元と顔を合わせた時、夕歌は改めて自分の気持ちがようやく理解できた。その前に深雪と会話をしたが、深雪も似たような気持ちを抱いていたことを知り、夕歌自身の中にあった悠元への感情に合点がいった。
　それからというものの、表向きは悠元に護身術の手解きを受けるという名目で週に1回は司波家を訪れ、そのまま泊まっていくことが多くなった。悠元と関わることで益々彼への恋慕が強まり、終いには露出の高い恰好で誘い……その日以降、抱かれるようになった。

「一緒に暮らしていたら、深雪さんはしょっちゅう抱かれてそうね。寧ろ、深雪さんが襲っている側ってところかしら。達也さんも水波ちゃんも苦労してそうね……一番苦労しているのは悠元さんだけれど」

時折、我慢できなくなった深雪も乱入することも起きており、悠元から聞いた限りでは深雪に「従属させてほしい」と懇願してきたことに夕歌は絶句した。でも、深雪の気持ちも同じ女性として分からなくはないと思っている自分自身もいた。

「それは置いといて……正直愚かとしか言いようがないというのに」

夕歌がそう評した相手は達也を目の敵にしている分家当主達のことだ。文弥や亜夜子はもとより、夕歌と次期当主の件で敵対している勝成ですら達也のことを認めている節があることは夕歌も知っていた。

彼らが何故達也を遠ざけようとしているのか……こればかりは夕歌も分からずにいたが、推測は出来る。それは、四葉家の持つ『触れてはならない者たち』の考え方が大きく影響していると推察した。

達也の持つ『分解』と『再成』は夕歌も知っており、戦略級魔法『質量爆散』についても聞き及んでいる。何せ、その魔法を封じるための魔法は津久葉家によるものだからだ。

達也の前者の魔法はまだしも、戦略級魔法は四葉の力から大きく逸脱していると分家当主達は考えた。四葉の異名を保つため、何者にも害されない力を求めた先に生まれたのが世界を震撼させた力。

――そして、分家当主達は達也の『マテリアル・バースト』を〝恐れた〟。

「三矢家の場合は家族の大半にまでそれに匹敵しうる実力を身につけちゃったから、三矢殿も口煩く言わなかったのでしょうけど」

夕歌の婚約者である悠元も達也と同じ戦略級魔法師であることは知っている。『灼熱と極光のハロウィン』において新ソ連の部隊を壊滅させた戦略級魔法の詳細は夕歌ですら知らないが、起こった現象を察するに真夜の『流星群』と同じ性質を持った戦略級魔法であると

推察した。
四葉家とは異なり、悠元自身は三矢家の家督を継がずに神楽坂家の養子として引き取られ、神楽坂家次期当主として公表されている。悠元だけでなく現当主の子の殆どが魔法科高校で抜きん出た成績を発揮しているのと、家を継がないという悠元のスタンスが他の兄弟姉妹にも伝播したのか、特に御家騒動に繋がるような様相は見られない。
正直なところ、夕歌からすれば、そういう風に振舞えてしまう三矢家が少しばかり羨ましかった……と思っていたところで着信を知らせる音が響き、夕歌は通話のボタンを押すと、モニターには四葉家当主こと四葉真夜の姿が映っていた。
『夕歌さん、こんばんは。今は大丈夫かしら？』
「はい、丁度休んでいたところでしたので。それで、どのようなご用件でしょうか？」
慶春会が近いというのに、このタイミングで真夜から通信が来るとは思いもしなかった。真夜が態々次期当主候補の一人である夕歌に声を掛けたのかという疑問はあるが、その疑問を解決すべく夕歌は尋ねた。すると、真夜は笑みを零しながら声を発した。
『夕歌さんなら当然疑問に思うでしょうね。態々こんな時期に、次期当主候補の一人である貴女に当主である私自らが連絡するのですから』
「あ、はい。その、慶春会でどなたかの味方をせよというご命令でしょうか？」
『それこそまさか。夕歌さん自身、何方が相応しいかぐらい理解していることですし、できれば強制はしたくありませんもの。実は、夕歌さんに護衛を付けようと思いまして』
「護衛、ですか？」
現状、黒羽家と津久葉家を除いて次期当主候補にはガーディアンが配置されている。その次の選定には時間を要するため、とても慶春会までには間に合わないと事前に連絡を受けている。その穴を埋めるための護衛を真夜が付けようという提案だった。
『腕に関しては保証しますよ。何せ、私だけでなく葉山さんのお墨付

きもありますから』
「葉山さんが認めたほどのですか」
葉山は四葉の復讐劇のサポートを担い、先代当主から仕えている四葉の筆頭執事。魔法師としての技量は定かでないものの、真夜の傍に仕える彼が手放しで評価できる人間の数など指で数えられるぐらいだろうと夕歌は思っている。
何にせよ、単なる体裁で護衛を付けるなどとは思っていない夕歌に対し、真夜はもう一つの事項を告げた。
『それと夕歌さん、その方は私の代理として、夕歌さんも含めた次期当主候補の皆様が無事に本家へ到着するための〝見届け役〟です。くれぐれも粗相など為さらぬ様に』
「!? ご、御当主様の代理ですか!?」
これには流石の夕歌も目を見開いていた。真夜の代理ということは、即ち四葉家当主代理としての命を帯びて夕歌の護衛に就くということ。色々思うところはあるが、拒否することが出来ないと判断して夕歌は慌てて頭を下げた。
「護衛の件、確かに承りました。それで、その護衛の方は何時?」
『実はですね。彼は今北海道におりまして、夕歌さんがそちらを出発する予定の29日昼には間に合わせるとご連絡を頂いております』
「ほ、北海道ですか……?」
それを聞いた夕歌は国防軍あたりから護衛を頼み込んだのかと首を傾げた。コロコロと変わる夕歌の様子を見て真夜が笑みを零していたが、葉山の『奥様、お戯れも程々に』との言葉で、真夜は一応踵を正して夕歌に告げた。
『それでは夕歌さん、次は慶春会でお会いしましょう。おやすみなさい』
「はい。御当主様もおやすみなさいませ……もう、何が何だか分からないわよ」
真夜との通信を終え、そう呟いた夕歌。だが、真夜の言っていることに決して誇張などないというのは真夜の雰囲気からして悟っていた。何はともあれ、その護衛に会えば分かる話だと夕歌は気持ちを切

り替えたのだった。

撃ち込まれた再会のツケ

矢車本家の客間で一夜を過ごした翌朝、悠元は『仮装行列（パレード）』を使い、眼鏡を掛けた上で動きやすい運動着でランニングを始めた。ランニングとは言っても、普通のランニングと全力ダッシュを１００メートル毎に交互に行うことで、緩急による負荷への抵抗と持続力を磨くためのもの。

ランニングを終えて居間で朝食を食べるのだが、『パレード』自体が興味深いのか、純一郎の妹たちは興味深く見てくる。これには純一郎も苦笑し、慶一郎は娘たちを窘めた。朝食後、少し落ち着いてから再び鍛錬を始めようと歩いていると、演武場（矢車家が門戸を開いている武術の道場は門下生の練度によって部屋が分かれている）の中で下段に位置する道場から声が聞こえてくる。

この時間は上段の人間しか来ない時間帯と聞いているので、恐らく誰かが自主的に練習しているのだろう。扉の隙間から覗くと、そこには一人の女性が砂の入った的に向かって打ち込みをしていた。

白銀に近い金色の髪を結っている胴着姿の女性らしき人物。見るからに外国人と思われる。単に見ているのもどうかと思い中に入ると、扉が開く音でその女性も振り返ってこちらを見た。

悠元は思わず驚いた。金色の髪に濃い緑の瞳。その人物には悠元も心当たりがある。記憶からすれば、間違いなく伊庭アリサであると。よく見ると、アリサの胴着の胸元からわずかにサラシが見えた。こういったスポーツ用の下着は持っていないのかと推察していると、アリサは首を傾げてこちらを見つめていた。

それもそうだ。今の悠元は銀髪灰眼の青年に加えて念のために眼鏡をしている。なので、アリサからすれば初対面の人間になってしまう。なので、悠元は踵を正して挨拶をした。

「いや、済まない。邪魔をしてしまったみたいだね」

「日本語がお上手ですね」

「まあ、親が日本人だからね。僕は……ユーリと呼んでくれ」

安直すぎると思うが、変に凝った名前にしたら後で弄られそうだと

思ったからだ。それに、見た目からすればこの名でも問題ないと踏んだ。すると、アリサは丁寧にお辞儀をした上で自己紹介した。
「初めましてユーリさん。伊庭アリサと言います」
「よろしく伊庭さん。それで、伊庭さんは一人で自主練してたみたいだけど、悩みごと？」
「あ、はい。その、私には妹同然の子がいるんですけど、その子と比べると上達が滞ってしまって……」
アリサが言うには、妹同然の子――――恐らく茉莉花のことだろう。茉莉花の上達スピードが速く、アリサはそれに置いて行かれないように自主練をしていたのだが、どうにも打ち込みが上手く行かないと話した。
「ふむ……伊庭さん、さっきやったように打ち込みをしてみて。見たら何かが分かるかもしれないから」
「あ、はい」
悠元（ユーリ）の言葉にアリサは頷き、息を整えて打ち込みの練習を再開する。その上で悠元はアリサに対して『天神の眼（オシリス・サイト）』を使用して彼女の魔法資質を探る。無論、武術面の動きをきちんと見た上で。
ダリヤがアリサに言っていた言葉の『偉大な魔法師』が真実だとするならば、アリサにもその一端が受け継がれていてもおかしくはない。幸い、悠元はこの世界のあらゆる魔法を知ったからこそ、その源泉も直に分かる自信があった。
そして、悠元はアリサの中に秘められた魔法資質を把握した。
その資質は二つ。
一つは魔法演算領域過剰稼働技術『オーバークロック』。
そして、十師族・十文字家の固有秘術『ファランクス』。
この二つがアリサの中に秘められているということは、アリサの父親は間違いなく十文字家の人間の誰か。つまるところ、アリサは十師族直系の人間にして十文字家の〝隠し子〟という事実を知り、愕然とする悠元のもとにアリサが近寄った。
「ユーリさん？　どうかしましたか？　その、私は武術に向いていませんか？」

「あ、すまない。ちょっと考え事をしていてね。それで伊庭さん、君の動きは所々が〝速過ぎる〟んだ。もう一度構えて、そして打ち込んでみて」
「は、はい」
　アリサが構えたところで、悠元はアリサの背中に手を置く。そして、アリサが打ち込もうとした瞬間に想子を流し込み、アリサの動きで速過ぎる部分を矯正する。すると、先程迄鈍い音だった的への打ち込む音が甲高い音を放った。
　今まで感じたことのない手応えに、アリサは表情を綻ばせて悠元の左手を両手で握っていた。
「あ、ありがとうございます！　やっと抜け出せたような気がします！　って、あ、す、すみません！」
「いいよ、いいよ。何にせよ、お役に立ててよかった」
　人間、各々の稼働許容速度は個人差がある。無論、鍛えることで強化することは可能だが、それでもどこかで限界が生じる。それを補うために技巧があり、技巧を突き詰めることで技と成り、その果てに奥義が存在する。
　アリサは茉莉花に追いつこうとした結果、無意識的に茉莉花の速度を再現しようとして本来出せない許容速度を出そうとしていた。だから、精神の指令に対して肉体が再現できなかった。そこで、悠元はアリサの出せる許容速度ギリギリに抑えることで、肉体への連動をスムーズに行えるようになっただけだ。
　この強制は一時的なものなので、後は今の感覚を忘れずに反復練習すれば、アリサもしっかりと成長できるようになるだろう。
　そんな和やかな雰囲気を壊すかのように、悠元の背後から殺気を感じた。悠元が飛び退くと、明らかに速力の乗った蹴りが床に叩きつけられる。
「アーシャ、無事!?」
「ミーナ!?　待って、その人は……！」
「何者だか知らないけど、アーシャには先約がいるのよ！　アーシャを奪うってんなら、勝負しなさい！」

その人物の正体はミーナ――――遠上茉莉花なのには間違いなかった。こちらもサラシを巻いているのがちらりと見えたが……胸を見てしまうのは男としての悲しい性かもしれない。
警戒心を露わにする茉莉花に対して宥めようとするアリサだったが、茉莉花の〝先約〟という言葉に反応して恥ずかしそうにしていた。
「……んん？」
「って、何で首を傾げるのよ！　アーシャに色目を使っていたでしょうが！　私の目は誤魔化せないんだから!!」
「色目って……おっと！」
アリサに対して武術のアドバイスをしただけなのに、それがどう湾曲して茉莉花の言う『色目』に繋がるのか分からずに首を傾げるが、茉莉花の拳が飛んできたので紙一重で躱す。
「って、逃げるな！」
「この状況で逃げない理由などないんだが？」
「このっ、佑兄みたくちょこまかと……!!」
悠元に倣う形で茉莉花とアリサも武術を習っていたが、茉莉花は何かにつけて勝負を挑んできた。だが、その時の自分でも遼介を軽く捻じ伏せるだけの実力を有していた。そんな自分が大人げなく負かすわけにもいかず、適当にあしらった上でスタミナ切れを狙い、茉莉花に「負けました」と言わせるまで逃げ続けた。
だが、それはあくまでも４年前の話。あれから成長した茉莉花の動きは見違えるほどに速くなっていた。まあ、比べるのは失礼だろうが、剛三の繰り出す攻撃に比べると止まっているレベルになってしまうのが悲しいが。
「こんの……舐めてるんじゃないわよ！」
このままスタミナ切れを狙おうと思っている悠元に対し、茉莉花の身体からまばゆい想子光が迸った。それが魔法発動の兆候だという事実は、悠元も……魔法を本格的に学んでいないアリサにもすぐに分かった。
「どりゃあああ!!」

そして、茉莉花は右の拳を悠元の顔面目掛けて繰り出した。
普通なら、悠元の『相転移装甲(フェイズシフト)』で無力化できるだろう。万が一怪我を負ったとしても自己修復術式で瞬時に治ってしまうだろう。だが、それで茉莉花の攻撃が止まるかと言えば〝否〟だ。
ここまで昂った状態の茉莉花が戦いを止める方法は、彼女が勝つか……彼女の魔法演算領域がオーバーヒートを起こすかの二択。だからこそ、悠元は顔を振り払って身に着けていた眼鏡を誰もいない方向へ飛ばした。
悠元が茉莉花の方へと顔を向けた時、魔法障壁を纏った茉莉花の拳が眼前に迫っていた。そして、悠元は魔法を纏った茉莉花の拳を……額で受けた。
「……あっ」
「……な、何で……」
脳へのダメージを避けるべく、局所的に『相転移装甲(フェイズシフト)』で脳を防御し、筋肉の弛緩によって衝撃を地面に受け流した。だが、外傷まで避けることができず、茉莉花の攻撃によって悠元の額から血が流れていた。
先程まで躱されていた攻撃が当たったことに、アリサはおろか茉莉花までも驚きを隠せず、茉莉花は十神の固有魔法『リアクティブ・アーマー』を解除した。
茉莉花とアリサが自分を見倣って武術を習うようになったことは嬉しかった。転生して四葉との関わりを持つ前、漠然としていた生き方に彩りを与えてくれたのも事実。だからこそ、悠元は甘んじて茉莉花の攻撃を受けた。
呆然とする二人をよそに、悠元は何事も無かったのように眼鏡を拾い上げたところで、茉莉花の想子の波動を感じて慶一郎が入ってきた。
「失礼する、先程の……ユーリさん、その怪我は?!」
「あ、これですか? 其方のお嬢さんの拳を咄嗟に額で受けてしまって。大したことないですよ」
「そうは行きません! 誰か、ユーリさんの治療を。遠上さんに伊庭

さん、貴方達はここで正座していなさい」
「は、はい」
「……はい」
慶一郎は大方の事情を察しつつ、ユーリもとい悠元のケガの治療と2人の監視を別の門下生に任せ、その場を急いで去った。慶一郎の有無を言わさぬ言葉に対し、アリサは慌てて返事をし、茉莉花は辛うじて返事をした上でその場に正座をした。
その光景を横目にしつつ、怪我の治療ということで悠元はその場を離れたのだった。
◇　◇　◇
矢車本家は自分の魔法全てを知っているわけではないため、甘んじて治療を受けることになっていた。傷の手当てなんて、それこそ前世で何度かあった位だ。今世では自己修復術式を早い段階で会得していたため、傷跡が残る様な怪我などしなかった。精々沖縄防衛戦で深雪を庇った時が一番の重傷だろう……達也の『再成』で治されたが。
治療を終えて額に傷パッドを貼られた悠元は客間で大人しくしているように言い含められ、仕方が無いと畳の上に寝転がった。
「……流石に奥義を撃ち込むわけにもいかなかったからな」
最初、悠元は新陰流剣武術武闘奥義が一つ、〝白虎雷神掌（びゃっこらいじんしょう）〟を撃ち込もうか考えた。だが、この奥義は彼我の距離にある情報量に応じて威力が増す――情報体次元（イデア）に含まれる想子情報の分に応じてその想子を掌握し、その全てを威力に転化する――特性があり、『リアクティブ・アーマー』などの防御系魔法を全て引き剥がして無防備となった相手に膨大な密度の想子の塊と圧縮された空気を撃ち込む。
ようするに、かなり加減をしないと完全なオーバーキルどころか道場すら壊しかねなかったため、甘んじて茉莉花の拳を受けたのだ。かれこれ4年半以上会っていなかったツケだと。
すると、物音がしたので起き上がると、襖を開けて矢車家の使用人がその場に座ってお辞儀をした。
「神楽坂様、旦那様がお連れするようにと」
「分かりました」

流石に恥ずかしいので額のパッドを取りたいところだが、これも自分がしたことに対しての〝報い〟だと甘んじることにした。まあ、既に傷を自己修復術式で治しているが、この辺は昨年の九校戦において達也もモノリス・コードで耳を負傷していたので、同じような気持ちを抱いたのかもしれない。

使用人に案内される形で悠元が招かれたのは応接の間で、そこには千姫と慶一郎、私服に着替えた茉莉花とアリサ、そして茉莉花の両親である良太郎と芹花が座っていた。彼らに対し、千姫が声を発した。

「彼は息子のユーリです。今は神坂グループで私の手伝い――――取締役を担っている身です」

千姫が喋ったということは、この場で喋るのは宜しくないと判断して黙って頭を下げた。そして千姫の招きで隣に座ると、良太郎が深々と頭を下げた。

「ユーリ君、うちの娘が大変申し訳ない事を致しました。神坂グループの取締役を怪我させたことに対して謝って済む問題ではありませんが、本当に申し訳ありませんでした」

良太郎に倣う形で芹花が頭を下げ、両親の態度で拙いことをしたと察した茉莉花も頭を下げ、アリサも深々と頭を下げた。すると、厳しい表情をしていた慶一郎が口を開いた。

「ふむ、元々チェルシー（千姫の偽名で、昔日本人離れしていたことから名付けられた綽名）殿とユーリ殿は詰めの交渉の為に出向いてもらっていましたが、此度のトラブルはとても見過ごせません。最悪、今までの交渉を白紙に戻さざるを得なくなるかと」

「そ、そんな……」

慶一郎の言葉に良太郎と芹花は肩を落とし、茉莉花に至っては自分のしたことで親に迷惑を掛けていることに表情が青褪めていた。そんな茉莉花をアリサは心配するように見つめていた。すると、ここで助け舟を出したのは千姫だった。

「矢車様。そう目くじらを立てる必要はございません。元を正せば子どもの喧嘩ですし、息子も黙ってはおりますが、怒っているわけではありません。そうですよね？」

千姫からそう言われ、悠元も黙って頷いた。元々自分から攻撃を受けたので怒るも何もないのだが。それを見やった上で、千姫はこう続けた。
「ですが、事情を聞くに娘さんが未熟ながらも魔法を使って怪我をさせたことは本来で言えば罪に問われますが、今回のことを黙る代わりの条件として、茉莉花さんと……アリサさんの２人を息子の婚約者に迎えたいと考えています」
「えっ……」
「ちょ、ちょっと！　どうしてそうなるのよ!!」
「茉莉花！」
千姫の言い放った発言に、呆然とするアリサと詰め寄ろうとする茉莉花、そしてその行動を窘めようとする良太郎。慶一郎はこれに対して口を挟まないところを見るに、千姫からある程度の段取りを聞かされていたのだろう。
その発言をした上で、二人の様子を見た千姫が微笑みつつ問いかけた。
「あら、そのご様子ですと、好いている方がいらっしゃるのですか？」
「っ……あ、貴女には関係ありません！　アリサも佑兄のことを言っちゃだめだからね！」
「あ、う、うん」
千姫の悪戯めいた笑みと共に放たれた言葉に対し、茉莉花は顔を赤くしつつも反論した上でアリサに釘を刺し、アリサはその想い人を脳裏に思い浮かべたのが、頬を赤く染めて俯いていた。
もはや千姫が描いた茶番と化している有様に、内心で深く溜息を吐いた。これではまるでドッキリを仕掛けているようなものだ。このままでは埒が明かないと慶一郎の方を見やると、慶一郎は首を横に振った。つまり、慶一郎にも手に負えないということのようだ。まあ、相手が神楽坂家現当主なだけに、矢車家当主として物申すこと自体大変なことだと察した。
良太郎や芹花も困惑した様子を見せており、どうしたらいいのか分からないのだろう。なので、悠元は諦めたように傷パッドと眼鏡を外

して『仮装行列(パレード)』を解除した上で声を発した。
「やれやれ、母上、お戯れも程々に。アーシャとミーナが困っていますから」
「えっ……えっ!?」
「ユーリ……さん？　髪の色が……それに、その呼び名は……」
　声自体の魔法による変化はさせていなかったが、４年半以上も音声的なやり取りはしていなかったので気付かなかったのだろう。悠元の発した言葉で茉莉花は悠元の髪の色が変化した――――元に戻ったことに驚き、アリサはそれに加えて親しい人しか呼ぶことが無い愛称を口に出したことに驚いていた。
　良太郎と芹花も驚きはしたが、元々悠元のことに気付いていたからか驚きは二人に比べると少なかった。千姫はそれを見た上で自身も『パレード』を解除し、本来の黒い髪へと戻った。それを見た上で、悠元は改めて頭を下げた。
「長野佑都改め、元十師族・三矢家が三男、隣にいる神楽坂家当主こと神楽坂千姫が養子、神楽坂家次期当主神楽坂悠元と申します。何分著名の身になったため、姿を偽ってこの場に姿を見せたことに対してお詫びいたします……お久しぶりです、良太郎さんに芹花さん。それと、アーシャにミーナも久しぶりだな。４年半以上ぶりになるか」
「ゆ、佑兄？　九校戦で『クリムゾン・プリンス』を破ったのがあの佑兄なの？」
「……佑都、お兄ちゃん……」
　茉莉花とアリサも悠元の言葉を聞いて、漸く長野佑都が九校戦で『クリムゾン・プリンス』を破って優勝した三矢悠元、そして神楽坂悠元であると理解し、昔の呼び名を口にした。そして、アリサは徐に立ち上がると、悠元に駆け寄って抱き着いた。
「佑都お兄ちゃん、久しぶり！」
　滅多に見ることのないアリサの屈託のない笑顔に、悠元はやれやれといった感じでアリサを抱き留め、良太郎と芹花、そして千姫と慶一郎までも微笑ましそうに２人を見つめていた。そして茉莉花は、姉同然兼〝恋のライバル〟であるアリサの積極的な行動に対して、ただ呆

然とするほかなかった。

安易に一撃必殺とはいかない

悠元が正体を明かし、アリサが悠元に抱き着いた光景に呆然としていたが、直ぐに意識を取り戻した茉莉花は悠元の背中から抱き着いた。前からアリサに、後ろから茉莉花にというモテモテの状況だが、悠元は一つ息を吐いた上で呟くように尋ねた。

「あの、二人とも？　身動きが取れないんだが？」

「お兄ちゃん……」

「我慢してよね。というかアーシャ、離れてよ」

「そういうミーナだってお兄ちゃんに抱き着いてるじゃない」

「……」

胴着姿では分からなかったが、こうやって抱き着かれると胸の感触が感じられる……サイズ的には茉莉花の方が上だが。道場の後でシャワーでも浴びたのか、フローラルな香りが感じられるほどだ。

その２人はお互いに牽制しあっているが、そこまで険悪なムードという訳でもない。ただ、４年半以上顔を合わせていなかった兄同然の自分と再会したことで、その時間を埋めようとしているのかもしれない。

正直、４年以上も顔を合わせていなかったから茉莉花の兄に懐くかと思ったのだが、そんな予測自体が認識不足だと理解させられてしまった形だ。すると、千姫が声を掛けてきた。

「あらあら、悠君はモテモテですね。お義兄様にそっくりですよ」

「ええ……」

剛三もモテる部類だった事実を初めて知った。彼女曰く、若い頃の剛三はいわば〝男性版深雪〟――――ようは前世の兄や光宣みたいな存在だったそうだ。それでいて妻が一人で済んだのは奇跡的だと千姫は付け加えた。

まあ、魔法の実力が優れているほど整った容姿になるのはこの世界の常識なので、剛三は何となく想像が付いていた。それでいて上泉家の人間である剛三の妻（自分にとっての母方の祖母）が一人で済んだのは、その妻の独占欲が凄かったためらしい。

ともあれ、成すがままにされること10分が経った頃に解放されたが、席が変わって自分の両側にアリサと茉莉花が座る形となっていた。
「さて、先程の話の続きですが……」
「あ、あの、先程言っていた婚約者なんですが、普通悠兄の妻になれるのは一人だけの筈です」
「その心配は無用ですよ、茉莉花さん。悠君は複数の婚姻を政府が認めたほどの実力者です」
「……ホントなの？」
「ああ、本当だ。自分でも最初聞いたときは半信半疑だったが」
魔法師としての実力を後世に継がせる意味はこの場にいる誰もが理解していることだ。そして、悠元がこの国の政府からその力を認められ、力を残すことを求められていること。懐疑的な茉莉花の言葉に対して悠元がそうハッキリと答えると、茉莉花も嘘ではないと察して座り直した。
「良太郎さんに芹花さん。矢車家との交渉の件ですが、神楽坂家が全面的に面倒を見る形で箱根への移住を認めます。その代わり、茉莉花さんとアリサさんを悠君の婚約者にしたいと思っております」
「……宜しいのですか？　私たちは」
「本来、政府が前面に立って貴方方のような境遇の魔法師を救わねばならないのですが、今の政府は弱腰です。茉莉花さんが悠君に嫁ぐことで、将来的に遠上家を〝十神〟家へ戻すことも含めた名誉回復が十分可能になるでしょう」
良太郎が懸念したのは数字落ち（エクストラ）に関する部分だが、千姫は気に病む必要などない、と言わんばかりにハッキリと述べた。
遠上家の数字（ナンバー）剥奪の陰にあったのは当時の政府の思惑だが、その行いを千姫はハッキリと批判したに等しい。それが出来るのは、神楽坂家が『元老院』の四大老の一角を担うだけでなく、護人として全ての魔法師を統制する立場にあるためだ。
それと、京都での一件後に数字落ち（エクストラ）の1人――――支倉佐武郎（名倉三郎）を神楽坂家の使用人として雇っているため、次期当主の婚約者

として数字落ち(エクストラ)の人間を迎えることに何ら問題は生じない。
そもそも神楽坂家は陰陽道系古式魔法の大家。今まで目を背けて解決しようとしてこなかった現代魔法の連中に批判される謂れなど無い、と千姫はそう思っている。
「それに、未熟とはいえ茉莉花さんは魔法を発現させておりますし、アリサさんもどうやら並々ならぬ魔法力を抱えているご様子。幸いにして、悠君は古今東西の魔法技術を会得していますので、教えるにしても悠君の近くで生活させるのが最良かと思います」
茉莉花が無意識下とはいえ『リアクティブ・アーマー』を発現させた以上、魔法知識をしっかりと学ばせることが必要なのは確かだし、アリサに至っては『オーバークロック』の問題が重く圧し掛かっている。幸いにして、十文字家当主こと十文字和樹を治療した時に読み取った知識がそのまま生かせるし、十文字家でも実現していない『魔法師としての基礎能力向上法』をこの2人にも教えるつもりだ。
茉莉花は、千姫の話を聞いた上で深く頭を下げた。
「千姫さん、あたしを悠兄の、悠元の婚約者にさせてください！　元はと言えば、あたしが何の事情も鑑みずに殴りかかって怪我をさせました。その責任を取る意味で、あたしは千姫さんの提案を受け入れたいんです」
「ミーナ……私も、悠元お兄ちゃん――――悠元さんの婚約者になりたいです。私にとって、ずっと優しくしてくれた兄同然の……いえ、一人の女性として悠元さんを愛しています」
茉莉花に続いてアリサも悠元の婚約者になることを受け入れた上で頭を下げた。茉莉花とアリサの言葉を聞き遂げた千姫は良太郎と芹花に視線を向けると、遼太郎と芹花は互いに見合って頷いた後で千姫に対して言葉をかけた。
「千姫さん。茉莉花とアリサの願いをどうか叶えてやってください。2人にとって、悠元君は兄でもあり……恋焦がれた相手でもあります」
「私からもお願いします。茉莉花の母親として、アリサの母親代わりを務めてきた身として、二人には女性としての幸せを掴んでほしいの

です」
「お父さん、お母さん」
「小父さんに小母さん……」
　良太郎と芹花の言葉に、茉莉花とアリサは揃って後押ししてくれたことに驚きを見せていた。その言葉を聞き遂げた千姫は悠元に視線を向けた。
「では、決まりですね。詰めの話は大人達でしますので、悠君は彼女たちに魔法の知識でも教えててくださいな」
「……分かりました」
　千姫はそう言うと、大人たちがぞろぞろと部屋を出て行き、応接の間には悠元と茉莉花、そしてアリサの3人だけとなっていた。その状況となったところでいつものように悠元が口を開いた。
「さて、改めて久しぶりだなミーナにアーシャ。姿を見せなかったのは謝るが、それでも気付くとは思ったんだが……」
「いや、だってあの時は十師族だなんて言ってなかったじゃない」
「言える訳が無かったんだよ。三矢家の仕来りと家が担っている役目を考えた時、下手にばらせば命の危険に直結しかねなかったんだから」
　まして、当時の自分が下手に三矢家の人間だと明かせば、妹である詩奈に危険が及ぶことになる。なので、自分の身分を明かせる人間は非常に限られていた。俺が転生者だという事実はその更に一握りという有様なだけに尚更だ。
　茉莉花も魔法師としてのリスクを知っているためか、それ以上は強く言い返さなかった。
「てか、そんなに変わった気なんてしてないんだが」
「……確かに九校戦を見てお兄ちゃんかと思ったけど、あまりにカッコよすぎて……」
「確かに成長はしたが、そこまで言うほどでもないと思いたいんだが」
　何せ、昨年の九校戦でも散々カッコいいだのジゴロだので弄られまくっていたのと、カッコいいというのは将輝みたいなのを指すと思っていた。のだが……九校戦後、生徒会のシステム更新の際に達也から

非公式ファンクラブの存在を聞かされて絶句した。会員数４００名と第一高校全体で換算すると約３分の２が入っているという事実は常軌を逸しているとしか思えなかった。
「悠兄、鏡の前に立たせようか？」
「それはやめろ。何にせよ、まずは土台を整えることから始めるか……」
本来、固有魔法『領域強化（リインフォース）』の本来の使い方は〝治療〟だが、身体能力向上のための〝調和〟としての機能も備わっている。対価としては自分の婚約者になることもそうだが、他の婚約者とうまく付き合ってほしいことを頼み込むつもりだ。
いくら『オーバークロック』対策とはいえ、アリサだけにこの魔法を使うのは不公平が過ぎると考え、まずは茉莉花に使ったところ、「うひゃっ…あうっ…」と擽ったそうな声を上げていた。魔法を掛け終えると、茉莉花は徐に足を前に突き出し、太腿のあたりを触っていた。恐らく茉莉花はその辺がシェイプアップしなくて悩んでいたのだろう。
「え、嘘、細くなってる……ダイエットの魔法なの？」
「違うわ、阿呆。魔法を十全に使うための準備と言っただろうに。アーシャも準備はいいか？」
「は、はい。お兄ちゃん、その、痛くしないでくださいね？」
先程の茉莉花の反応を見ていれば痛みを伴うものではないのだが、魔法資質――精神に見合う肉体改変という経験は前例がないので、アリサの気持ちも少しは理解できる。
アリサの背中に手を当てて『領域強化（リインフォース）』を使用するのだが、悠元は更に『万華鏡（カレイドスコープ）』でアリサの中にある『オーバークロック』を大幅に書き換えていく。周囲に巻き起こる膨大な量の想子は茉莉花ですら「綺麗……」と零すほどで、アリサに至っては「あっ…だめっ…」と甘い声が漏れていた。
別にアリサに対して性的な行為に及んでいないはずなのだが、当の本人はあまりの心地よさに頬を赤く染めていた。そして、魔法を掛け終えた直後に「ブチッ」と何かがちぎれる様な音とそれに気付いたア

リサが慌てるように胸元を隠した。
「あ、え、ええっ!? ど、どうなってるの!?」
この現象は前に一度経験している。
それは、水波の魔法師としての資質と寿命を真っ当に整えた際、水波の想いである「深雪様のように悠元兄様と釣り合う人間になりたい」という願望が、彼女の胸部を強化してしまった。今回もそれに似たようなもので、恐らく茉莉花の胸の大きさが羨ましかったのだろう。
すると、茉莉花はジト目のままアリサに近付いて徐に彼女の胸を掴んだ。
「きゃっ、ミ、ミーナ!?」
「悠兄の魔法のせいとはいえ、これはあたしに対する当てつけかな?」
「ま、待ってミーナ! お兄ちゃんが見てるっ……あんっ」
「あたしだってそれなりにあるもん、Cはあるもん……」
アリサは止まるように茉莉花を宥めるが、茉莉花は興味と嫉妬が入り混じったような心境で真剣にアリサの胸を掴んでいた。時折感じる強い刺激にアリサもたまらず甘い声を漏らしていた。この様子を見ていた悠元は……自分の手に負えないことだと判断して立ち上がった。
「……とりあえず、使用人を呼ぶか」
悠元の呼び出しを受けた女性の使用人によって、どうにかアリサの下着問題は一時的に解決し、改めて魔法に関する知識を教え込むことになった。
なお、魔法を掛ける前のアリサはAだったらしいが、現在は「D寄りのC」と茉莉花が恨めしそうに呟いた。「あたしだってあるもん」という言葉と共に。そして、好きな人の前で胸のサイズをバラされたことにアリサは顔を真っ赤にして俯いていた。
「その辺は一先ず置いておくが……二人には、魔法の基礎知識から学んでもらう必要がある」
その気になればいきなり魔法を使うことは出来るだろうが、無意識に魔法を使うのと意識的に魔法を使うのでは消費される想子と霊子

の量にかなりの差異が生じる。これは悠元が基礎単一系魔法を使った計測の際に試した結果から得られた知識である。
「魔法師は脳の無意識領域に森羅万象の情報を取り込み、それを意識できる形態へ加工・変換する機能が備わっている。その名称は一般的に『魔法演算領域』と呼ばれている」
「加工？　変換？」
今まで魔法の勉強をしてこなかったため、ピンと来ていないのだろう。これは茉莉花だけでなくアリサも同じであった。何せ、今まで魔法と無縁となるように過ごしてきたのだから無理もないだろう。
「そうだな……例えばミーナ、ここにケーキがワンホールあったとする。そのワンホールを一口で食べろ、なんて無理だろう？」
「うん、あたしでもそれは絶対に無理」
「要はそれと同じで、この世界に存在する全ての情報を人間一人で掌握するということは実質的に不可能だ。なので、世界という膨大な情報の一部を自分の望んだ情報へと書き換える技法――これが魔法の一般的な概要になる」
その常識を壊しているのが自分の固有魔法だが、それは一先ず置いておくこととする。
本来、魔法演算領域は鍛えることでその許容量を増やしていくが、通説では一定の許容限界が生じる。それは、大半の魔法師が霊子の感知を十全に出来ておらず、霊子の性質を把握していないためだ。
何故大半の魔法師が感知できないのか。それは、人間が他の人間の霊子――感情や情動とも呼ばれる類を感知するのが極めて難しいためだ。
「ミーナもアーシャも、先程俺の魔法で膨大な量の粒子を感じただろう？」
「うん、凄く綺麗だった」
「あれは、一体何なのですか？」
「二人が感じた粒子の正体は想子（サイオン）と言って、魔法を使う上で五感と同じように感じることが必須の粒子で、魔法師が魔法を行使する際の〝扉〟の役目を担う。そして、想子とは別の粒子――霊子（プシオン）と呼ばれる

粒子が魔法師の望んだ事象を世界に描き出すことで魔法は成り立っている」
実を言うと、霊子による現象はいくつか起きており、その一つにピクシーの自我形成が大きく関わっている。想念という概念は、本来理性によって制御された感情に基づくものの可能性が高い。
パラサイトの憑依プロセスを鑑みた場合、バレンタインの時にほのかが無意識的に想子だけでなく霊子まで発していたとすれば、ピクシーの霊子情報体に影響を与えられる可能性が極めて高くなる。
それともう一つ、深雪の感情が昂った際に漏れ出てしまう魔法もその一端だろう。理性では分かっていても、それを感情が上回った時に彼女の固有魔法である『コキュートス』の一部が凍結魔法として世界に干渉してしまうのだと考えれば筋は通る。
こうやって挙げていくと、事象干渉力――魔法の根源に関する部分は割と初めからその片鱗を見せていたということになる。
「幸いにして、魔法の入口へ入る準備は整った。けれども、ここから先は魔法を使うことだけ求められる訳じゃない。魔法を使う上で最も大事なことを学び、自らを鍛えなければならない」
一般的に現代魔法は想子の動きのみが重視される。安定的かつ膨大な出力が求められる特性を鑑みても、想子保有量よりも瞬間火力を求められるのが現在の現代魔法の教育方針であり、持続力や多変数化という技巧的な部分は魔法力の評価対象になり得ない。
だが、悠元はその考えを良しとしなかった。いかに戦略級魔法といえども、〝一撃必殺〟が簡単に出来るという保証など無かった。そのいい例が自分の親友である達也だ。
そして、原作知識の中にあった魔法を継続して使用した場合、想子消費よりも精神が尽きるという文言から、精神もとい霊子が事象干渉の要――ファンタジー小説や王道ＲＰＧでよく耳にする『魔力』に繋がっていると考えた。
いきなり色んな単語が出てきたことで茉莉花もアリサも理解するのに苦心しているが、この程度など魔法技術の入り口の基礎レベルでしかない。尤も、今話した内容の一部は魔法科高校はおろか魔法大

学、ひいては殆どの魔法師社会の人間ですら知らない魔法の知識なわけだが。
「えっと……つまり、どういうこと？」
「結論から言うと、今の状態でも茉莉花とアリサは魔法を使うための最低条件は満たしている。だが、漠然と使うよりも魔法を理解して使うことで、より安定化した魔法の使い方が出来る。尤も、当分は魔法そのものよりも魔法を使うための基礎能力――　一般的には『魔法力』と呼ばれる部分を重点的に鍛え上げる、ということだ」
　この方法は、実を言うと悠元はもとより三矢家の殆どの人間が実践している方法で、れっきとした実績がある三矢家独自（発祥は悠元）の鍛錬法だ。最初は悠元1人でやっていたが、それに興味を持った佳奈と美嘉が一緒にやるようになり、それにつられて詩鶴まで参加するようになった。
　一通りのやり方は佳奈と美嘉にせがまれて教えていたため、そのときはまだ粗削りの部分があったが、それでも魔法師としての実力が軒並み伸びていき……結果として九校戦でのずば抜けた成績に繋がった。
　上泉家や矢車家での生活（元継や千里への教導、侍郎の魔改造も含む）を通して精査を進め、沖縄防衛戦後にようやく完成した鍛錬法。そして、パラサイト関連の事件を経ることで更にその精度が高まった。
　周公瑾（あのぼうれい）は大変なものを残していきました、と言いたいようなレベルだったのは言うまでもない。余談だが、その部分の知識は顧傑にすら伝えていないという記憶情報が吸収した知識の中に残っていた……弟子にすら信頼されていなかった師匠など哀れである。
「ただ、この方法は魔法科高校や魔法大学、ほぼすべての現代魔法を教えている私塾でも教えているところはない。言うなれば、俺の元実家である三矢家のちょっとした秘術みたいなものだ」
「……お兄ちゃん、いいの？」
「俺の婚約者になるということは、各々強くなってもらわないと困るからな。言っとくが、俺の婚約者の殆どは九校戦で実績を挙げている

面々ばかりだ」
今年で言えば、女子アイス・ピラーズ・ブレイクソロで優勝した深雪、女子アイス・ピラーズ・ブレイクペアで花音と組んで優勝した雫、女子ミラージ・バットで優勝した姫梨、女子ロアー・アンド・ガンナーソロで準優勝の沓子、女子ミラージ・バットで準優勝の愛梨、そして同じく女子ロアガンソロで優勝したセリアに新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝した泉美。
そして、愛梨と泉美以外は悠元の鍛錬法を受けている面々の一部でもある。
九校戦での実績云々を述べたのは、単に魔法師としての実力というのを推し量るのが難しいため、それならば誰の目から見ても分かりやすい〝物差し〟としての例を提示したに過ぎない。
高い学力と魔法師としての高い実力。この２つを併せ持てば、いくら茉莉花が数字落ち（エクストラ）の一族とはいえども、確かな実力を目の当たりにすれば大半の人間は押し黙るだろう。
それに付随する問題はいくつか出てくるだろうが、それは婚約したこちら側が負うべきことであり、彼女らには優れた魔法師として成長してほしいという願いがあった。その為ならばこの手を血でいくら汚そうが構わない。
護るためとはいえ、自分は既にその引き金を引いた人間なのだから。

現代魔法に甘んじるな

茉莉花とアリサに魔法の基礎中の基礎を教えているのだが、気が付けば千姫や慶一郎だけでなく、総一郎や彼の妹たちまで聞き入っていた。なお、良太郎と芹花については話し合いも無事に終わったため、遠上家に帰ったとのことだ。

「何してるんですか、母上。古式魔法の大家の当主としてそれはいいんですか？」

「神楽坂家は古今東西の魔法の知識を上泉家のように取り入れるからね。悠君の魔法理論にすごく興味があるし」

（上泉？　あれ、どこかで聞いたような……）

悠元と千姫のやり取りの中にあった単語にアリサが疑問を浮かべていたが、それを無視して話を続けることにした。なお、これはあくまでも現代魔法向けのものだが、発動プロセスが一部似通っている古式魔法にも他人事ではないのだろう。

「まあ、分かりました。前もって言っておきますが、これから話す内容は既存の魔法の常識すら壊します。万が一外に漏らしたら……」

「どうなるの？」

「土下座の上、泣きながら『ごめんなさい』と言わせるまで尻にタイキックを食らわす」

「……絶対に漏らせないですね。総一郎、貴方達もいいですね？」

慶一郎は悠元が新陰流剣武術の師範クラスの実力者だと知っており、剛三の教えを直に受けた人間ということも知っている。剛三仕込みの蹴りなど、本気を出せば全身複雑骨折で済む方が〝まだマシ〟だと察し、慶一郎の言葉に彼の子どもたちは勢いよく頷いた。

茉莉花は昔悠元のアイスを勝手に食べたことで食らった尻叩きを思い出してゾッとなり、その光景を目撃していたアリサも勢い良く頷いた。

「じゃあ、まずは魔法の基本発動プロセスから説明するか」

まず、ごく一般的な現代魔法の場合、以下のプロセスを経ることになる。

1、ＣＡＤから起動式を受信する。
2、起動式に変数を追加して、意識領域から無意識領域へ送る。
（起動式に照準などの変数が含まれる場合、省略される）
3、無意識領域にある魔法演算領域で起動式と変数から魔法式を構築する。
（魔法式は無意識に自動構築される）
4、構築した魔法式は無意識領域の最上層にして意識領域の最下層（ルート）に送られ、意識領域と無意識領域の狭間（ゲート）から情報体次元（イデア）に送る。
5、情報体次元（イデア）に出力された魔法式が情報構造体（エイドス）に干渉して情報を書き換え、事象を改変する。

現在の現代魔法において、魔法演算領域を意識して使うことは出来ても、魔法演算領域で行われる内容を意識することはできない。何せ、精神の無意識領域とされる部分――人間の情動を司る精神体の存在が明確化されていない上、霊子（プシオン）の存在についても未知の部分が多すぎるためだ。

起動式に変数を追加するのは精神の意識領域――理性的な思考を司る想子体の部分で行われる。そして、一般的な魔法学で〝核〟と呼ばれている部分もとい『リンカーコア』を経由して無意識領域に存在する魔法演算領域に送られることとなる。

そして、起動式が魔法式に構築される仕組みなのだが、この部分で重要な動きを果たしているのはプシオンの存在だ。

まず、起動式に組み込まれた魔法式構築のプログラムに基づき、プシオンで構成された魔法式が構築される。次に使用済みの起動式を分解して何の情報も持たなくなったサイオンをプシオンの魔法式に基づいてサイオンの魔法式として再構築する。云わば『鏡合わせの魔法式』が構築される。

では、同じ魔法を使っても魔法展開速度や事象干渉力に違いが出るのは何故なのか、という疑問が出るだろう。

答えは簡単だ。魔法展開速度に違いが出るのは魔法演算領域の出力許容範囲もあるが、それ以上に「術者本人の魔法理論」が大きい。こ

れは単純に魔法の基礎理論――――現代魔法では数学や物理などといった実体的な理論が多い――――だけでなく、魔法の理論に対して術者が最も納得出来る「合理的な理論」が求められる。

合理的な理論の例を挙げると、例えばとある場所から目的地に行く場合、自分にとって〝最も納得出来る〟移動手段を用いるとしよう。仮にAさんが『車が一番早い』と述べても、その道中に渋滞となりそうなポイントが複数あるとすれば、それを聞いた別の人は車に拘らず有効な移動手段を模索するだろう。

だが、今の現代魔法は教科書的・算数的な教え方みたいなもので、答えが一つしか与えられない状態となっている。理屈では分かっていても、本人が納得できなければその分の誤差が生じる。その考え方の誤差は魔法演算の誤差となり、結果として展開速度に差が生じてくる。

魔法展開速度については、達也の人工魔法演算領域が分かりやすいかもしれない。彼の人工魔法演算領域は潤沢な想子保有量に対して出力が低いが、これは彼の持つ『分解』と『再成』の魔法演算領域のせいというよりも、人工魔法演算領域を植え付ける際に殆どの情動を消し去ってしまったからだ。

深夜は達也の『分解』や『再成』が感情で暴発しないように対策をした結果、激しい情動が生み出す元来の事象干渉力まで削いでしまったのだ。四葉の秘術である『フラッシュ・キャスト』を使うのならばまだしも、CADから読み込んで魔法を展開する技能が遅いのは、激しい情動の消去に伴う著しい出力低下が原因である。

『分解』と『再成』で占有された魔法演算領域は残った分の情動で補わなければならず、加えて達也に掛けられた〝封印〟によってさらに制限されたため、原作で使用した『ベータ・トライデント』は彼自身が得意とする『分解』系統の魔法、しかも『誓約（オース）』が一時解除された状態の達也ですら構築に時間が掛かる有様だった。

無論、達也の事情に関しては説明から省いている。

事象干渉力の差異が発生するのは、プシオンの魔法式――――魔法学的に表現するなら〝事象干渉力〟と言われる存在――――が『ルート』

を通じて『ゲート』から情報体次元（イデア）に投射される際に生じる「プシオンの減衰」が原因だ。
『ゲート』を通過して情報体次元（イデア）に投射される際、精神の意識領域を構成する想子体を必ず通過する。想子体に一定量のサイオンが流れていれば問題ないが、一定以下の圧力もしくは流量になると、精神体が想子体とのバランスを保つために精神のセーフティーとしてリンカーコアが周囲のサイオンを想子体に集めようとする働きが生じる。
普通はその働きが起きる前に意識領域のセーフティーという形で強制的に気絶するわけだが、余剰サイオンを制御しきれていないことによって精神のセーフティーが誤作動を起こし、それが魔法式投射の抵抗となって魔法式が本来出せるはずの事象干渉力を削いでいる。
「とまあ、ここまでが現代魔法の魔法展開におけるプロセスだが、俺の場合はこうなる」
1、ＣＡＤから起動式を受信する。
2、起動式に変数を追加して、リンカーコアを介する形で起動式の想子信号を特殊な信号に変換して意識領域から無意識領域へ送る。
3、無意識領域にある魔法演算領域で起動式と変数から精霊魔法式（エレメンタル・マギテクス）を構築する。
4、構築した精霊魔法式（エレメンタル・マギテクス）を、リンカーコアを経由して情報体次元（イデア）に投射する。
5、情報体次元（イデア）に出力された精霊魔法式（エレメンタル・マギテクス）が情報構造体（イドス）に干渉して情報を書き換え、事象を改変する。
1は同じだが、用いている起動式自体は悠元が合理的に納得した魔法理論に基づいて構築された記述が用いられている。2に関しては、魔法師のリンカーコアが本来持っている機能を使ってのプロセスで、変数追加の際に特殊な処理を用いることでサイオンの〝疑似性質変化〟を行うもの。
そして、悠元が説明した中に出てきた精霊魔法式（エレメンタル・マギテクス）という言葉に、千姫が興味津々と言った表情で尋ねた。
「悠君、その精霊魔法式（エレメンタル・マギテクス）というのは？　神楽坂家でも魔法歴史学でも一切聞いたことがありませんが、どういった代物なのですか？」

「これはですね……古代文明で用いられていた古代文明魔法（エンシェント・マジック）の魔法陣をベースに組み上げたもので、俗に言う〝原初の魔法陣〟に近い魔法構築式です。現在の俺の魔法はこの構築式しか用いていません」

従来の魔法演算領域による魔法構築では、一つの魔法を継続して使うと精神の負担が重くなり、最悪魔法演算領域のオーバーヒートを起こすリスクが存在する。

情報体次元（イデア）の復元力に対して投射する魔法式は欠けた部分を想子で修復すれば問題ないが、魔法の事象干渉力はそうもいかない。魔法式自体を『面』とするなら、事象干渉力はいわば『立体』。この時点で一つの魔法展開に対する使用量の差が生じるのに、それを継続するということは事象干渉力という『立体』を維持し続けなければならない。

ベクトル操作ならば『面』になるだろうと思う人もいるだろうが、例えば『ベクトル反転』の魔法で飛んできた銃弾を同等の速度で跳ね返す場合、飛んでくる銃弾の速度の2倍のベクトルを銃弾に与える必要がある。しかも、余程動体視力が良くなければ身体全体を覆う形で展開しなければならない。

『トーラス・シルバー』によって重力制御魔法が発表される前、飛行魔法が実現不可能とされていたのはこの法則に近く、魔法を重ね掛けする際に本来必要としている移動ベクトルを実現させるためにそれ以前のベクトルを打ち消すだけの移動ベクトルが必要で、その結果として事象干渉力の累乗加算が発生して飛行魔法の継続限界が生じていたためだ。

話を戻すが、そもそも起動式から霊子の魔法式を組み立て、そこから想子の魔法式を組み上げるという〝手間〟がネックになっているし、『ゲート』通過による霊子の減衰もそうだが、『ゲート』を通すということは魔法継続中も魔法式を通して自身の精神と外界が接続した状態になっている。

現代魔法には魔法式を展開した時点で術者と切り離されるようになっているが、息継ぎを経ての同一魔法の行使は世界という名の〝膨大な情報〟と断続的接続を繰り返していることになり、魔法式を通す形で魔法演算領域に情報が逆流し、魔法の継続処理だけでなく魔法を

通して流れ込んできた情報まで処理しようとして魔法演算領域が過熱する――――これが行き過ぎた結果として起こるのが魔法演算領域のオーバーヒート現象なのではないかと推察した。

原作において一条剛毅や桜井水波がこの現象に陥ったのは、広範囲に展開した障壁に対する戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』の威力もそうだが、防御系魔法の持続展開自体が〝継続展開〟であり、十文字家の秘術である『ファランクス』のように条件付けの断続的展開となっていない。

加えて、範囲攻撃の広さと「爆発」という化学変化の中でも情報変動が極めて激しいものであったため、広範囲の目まぐるしく変化する膨大な情報が障壁を経由する形で彼らの魔法演算領域に流れ込み、それらまで処理しようとしたことでオーバーヒート現象が起こったのだとすれば一応の説明は付く。

このオーバーヒート現象には、現代魔法の第一パラドックス――――魔法による事象改変に物理エネルギーの供給がされず、魔法はエネルギー保存の法則に縛られない――――と余剰次元理論の関連性も大きく関与しているとみられる。

何せ、色々な魔法の検証をした際、明らかに足りないエネルギー収支が生じることが起きていた。もしかすると、魔法を継続して使用したり精神干渉系魔法を使用した場合、不足分を補うべく魔法的なエネルギーを別次元から引っ張ってきて、その引き出した余波が魔法式と『ゲート』を通じて魔法演算領域に流れ込む可能性が浮上する。

現代魔法が体系化して約1世紀、現代魔法の魔法力評価が継続性よりも瞬間的かつ爆発的な威力を求めるようになったのは、これまでに積み上げてきた表沙汰に出来ない数々の人体実験で現代魔法の継続使用のリスクを知っていたからなのではないか、と推測した。

これらの推察から、『ゲート』を通す魔法が明らかに危険だと判断した。なので、リンカーコアを経由する魔法に全て切り替えると共に、世界で自分にしかできない芸当――――転生特典の『創造大全（マテリアル・インデックス）』を用いた魔法式から起動式を書き起こす技巧――――を用い、リンカーコアを経由して尚且つプシオンの消費を抑えつつ魔法による事象改変を

最大限発揮できる魔法構築式を模索した。
魔法幾何学の勉強で大きさ1センチの移動系魔法の魔法陣を書いていたり、異なる系統魔法の連結陣を構築したり、課題として失敗した26工程の振動系魔法陣、更に『スキャニング・キャスト』と『リンゲージ・キャスト』の確立は全て精霊魔法式（エレメンタル・マギテクス）を完成させるために必要だった。
サイオンによる事象改変力を最大化するため、プシオンにサイオンの性質を〝付与〟することで従来の魔法と比較して数十倍から数万倍の威力を発揮する魔法構築式。更には想子制御によって制御下に置いたサイオンに自身のプシオンを〝転写〟することで、一番のネックであったサイオンとプシオンの消費比率を劇的に改善することに成功した。
元々『万華鏡（カレイドスコープ）』という規格外の固有魔法や天神魔法を持っているのに必要だったのかと言われそうだが、現代魔法の理論自体が自分にとって「こんなの魔法って言えるか！　単なる化学変化や物理法則の無駄遣いだろ!!」みたいな気持ちもあったため、自分で納得のいく魔法を使いたいというのもあったし、精神を開きっぱなしにして無防備を晒す怖さを考えると必要だった。
「この構築式は、起動式の記述変更自体は難しくありませんが、一番ネックになるのはサイオンとプシオンの制御、そして〝性質付与〟になります」
「具体的には？」
「プシオンの感受性はサイオンのそれに比例するのですが、問題は自分たちがプシオンもとい精神を削って魔法を使用している自覚が希薄過ぎることです」
現代魔法でピックアップされているのは主にサイオンであり、プシオンは判明していない部分が多すぎるために重視されない傾向が強い。
大体、サイオン自体が物理法則に左右されない粒子という事実がある。いくらサイオンに情報という要素を加えたところで、サイオンそのものに物理法則への干渉力が無い以上、事象改変を行っているのは

プシオンに他ならない。
一番分かりやすい例は、達也とリーナが一緒にいた時、リーナが挑発してサイオンの球を達也に放とうとしたことだ。サイオンの球を放っても〝銃で撃たれたような感覚〟で済むということは、肉体と精神を結び付ける想子体の存在を示すと同時に、〝収束〟という情報を与えられることで一定の構造を有するサイオンの球自体に物理的な干渉力は認められない、ということになる。
問題は、サイオンの性質を知っていれば自ずと出てくる疑問に対して現代魔法師の殆どが目を背けている――――いや、魔法教育学そのものが間違った魔法の教え方をしているということだ。
「実は、達也たちにこの辺のことを聞くと、みんな驚いていましてね……制御法を教える際、うちの姉さんたちや元継兄さんに聞いたときも同じ反応をしたほどです。爺さんはあのことがあったからか逆に自覚があり過ぎますが」
「まあ、それもそうでしょうね……皆さん、驚きを隠せない様子ですね」
「母上が大物過ぎるだけです」
何せ、現代魔法の魔法展開理論を真っ向から否定する新体系の魔法理論を構築したようなものだ。しかも、現代魔法のリスク面を克服した形となるため、これが外部に漏れれば、各国はこぞってこの構築式を知りたがるだろう。
補足だが、リンカーコアを経由して魔法を継続展開させる場合、『ゲート』を通す場合と比べてオーバーヒートのリスクが約９９．９パーセント減るという計算結果が得られた。リンカーコアは『ゲート』と異なり、精神のセーフティーが備わっていることは確認できていたが、ここまでの結果を得られるとは思ってもみなかった。
大学で魔法演算領域のオーバーヒート関連の研究を専攻している夕歌に見てもらったところ、唖然とした表情を浮かべたほどだ。曰く「これを発表したら、間違いなく魔法学に名を残すわね」とのこと。
「ただ、プシオンの性質付与はどうやってやるのです？　私も個人的に知りたいのですが」

「母上なら難しくありませんよ。『現身の理』の言葉で分かるかと」
「成程、あの技法を用いるのですね」
正直なところ、千姫の場合はサイオンの制御だけでなくプシオンの制御まで無自覚かつ完全に制御しきっている。剛三の義妹にして神楽坂の名を継いだのは必然と思わざるを得なかった。
サイオンにプシオンの性質を付与する方法は至って単純で、サイオン粒子の復元力をほぼゼロに低減した状態で自身のプシオンの波長をサイオンに流すと、疑似的なプシオンとなって事象干渉力を得ることが可能となる。この技術自体は天神魔法でも用いられている基礎的な技術の一つで、ＰＦＥ理論はこの性質付与の副産物なのだ。
「密教系や陰陽道系、天神地祇を重んじる神道系古式魔法では割と基礎的な技術でした。九重先生も興味があったので教えたところ、思わず面を食らっていましたね……基礎を疎かにするとロクな目に遭わない、とはこのことでしょうか」
「正に灯台下暗し、ですね。私も未熟であったと痛感します」
「いや、母上や爺さんは今の状態でも十分おかしいですからね」
何せ、剛三から聞いた話だけでも、千姫の凄さはかなりヤバい。何せ、ホッキョクグマを蹴りで吹き飛ばし、クレバスに落ちても無傷かつ自力で生還し、ローマ法王だけでなく枢機卿たちですら「敵にしたら明日の朝日を拝めなくなると思え」という教訓と共に恐れられている。実際、その言いつけを破った枢機卿の一人はその翌朝に亡くなっていた。
イギリス王室からは『我が国において多大なる功績を挙げた東洋の聖女』として王室もしくは皇族以外の人間で初となるロイヤル・ヴィクトリア頸飾を贈られている。しかも、本来死後に返還しなければならないが、千姫はその例外として保持の継続を許されている。
「悠君がいじめる……今夜は茉莉花さんとアリサさんに仕込んで……」
「……止めるのは諦めますが、程々にしてください」
この母親のことだから、どうせ今夜あたりに仕込むのは予想でき

る。とはいえ、ここで逃げるというのは男として最低としか言いようがなく、受け入れる他ないのかもしれないが、相手はまだ１３歳……倫理観が戦国時代準拠ではないか、と錯覚してしまいそうになった悠元であった。

あと、せめて当人がいる前でその話はしないで欲しいと思う。現に、その話を聞いた茉莉花は顔を赤くして「あ、あたしが悠兄と、そ、その？」と困惑しており、アリサに至っては頬を紅く染めて「お兄ちゃんとはじめての……」と期待するような眼差しを向けていた。

「逃げるなら……いや、もう遅いか」としか言いようが無かった。

母の繋がり

この世界に転生した時、病み上がりでベッドから動けない間、まず考えたのは自分の境遇だった。

七人兄弟姉妹という構成は原作と同じだったが、長男の元治と末っ子の詩奈以外の構成が明らかに変化していたのだ。男子が元治と元継、そして悠元（じぶん）の三人。女子は詩鶴と佳奈、美嘉と詩奈の四人。

自分がこれから魔法の訓練を行うにあたり、真っ先に自分の様子を窺おうと接触してくるのは佳奈と美嘉なのは時折部屋を訪れることからして間違いなく、早めに味方へ引き込む方策を考える必要があった。

そして、転生特典のせいで魔法技能も現代魔法の水準を超えてしまう可能性があり、何も対策をしないようでは三矢家の家督継承に関わりかねない。家督継承を断ったとしても、家業を継げと言われるかもしれない。

なので、父親の元から問い詰められたとき、俺はその時点で三矢の家督と家業を継がないと決めた。いくら魔法を極めてみたいからと言って、兄の居場所を奪うのは気分的にも宜しくないし、家族の軋轢を生むことになってしまう。

前世で兄に恋人を奪われたことはショックで、大学進学を期に家を出て一人暮らしを始めたことは鮮明に覚えており、転生しても覚えていることに釈然としなかった。それが結果的にこの世界における恋愛感情の希薄化の原因となっていたわけだが。

前世と今世の兄は別物――――そう割り切ったからこそ、元治に対しての感情は面倒見のいい兄に落ち着いたし、元治からも良く頼られる形に落ち着いた。

元から問い詰められる前日に十山つかさ（当人は遠山つかさと名乗っていたが）と第三研であったが、彼女の何かを値踏みするような視線に対して気付かない振りをしつつ応対した。

それで自分は「この女狐とどうにかして会わない方法を考えないと」と考えた矢先に元からの呼び出しを受けたので、いっそのこと三

矢家を継がない選択を取った方が自分や兄の為にもなると考えた。
結局、高校入学前の正月に襲撃を受けたわけだが、自分で言うのもどうかと思うが、お前がまともだという証拠を見せて見ろ、と言いたくなったほどだ。手に負えなくなる前に〝再教育〟しようとする時点で、達也を殺そうと画策した四葉分家当主と何ら変わらないと思う。
家督と家業を蹴った話は直ぐに元治の耳に入り、元治からも聞かれた。それに対して「元治兄さんが継ぐのが一番合理的です。それでも不安に思うのなら、元治兄さん自身が強くなればいい」と言い含め、護身術程度でもいいから新陰流剣武術を学ぶべきと背中を押した。
上泉家もとい剛三にはいたく気に入られ、北海道に連れてこられて矢車家で過ごすことが多くなり、長期休み中は三矢家に帰って侍郎や詩奈の面倒を見たり、佳奈や美嘉に混じって魔法の訓練をしたり、あとは剛三の誼で千葉家や吉田家を訪れることが多くなった。幹比古やエリカとはその頃からの付き合いだ。
その当時のことを話すとエリカはノリノリで幹比古を弄り、幹比古は「やめてくれ！」と言うのがお約束となっていた。
そんなわけで、自分自身は早々に十師族そのものに見切りを付けていた。十師族の直系として過ごした時間が短いのもあるが一番の理由は十山家の存在だろう。心の中で感謝はするが、言葉に出すことは絶対にしない。
正直なところ、十師族を含めた師族会議のシステム自体がかなり浮ついているのが現状における問題だ。当時の政府の意向で作られた魔法師による魔法師全体を統制するシステムで、提唱者は国防軍退役少将の九島烈。現在の師族会議で力を有する四葉家と七草家の当主は九島烈の教え子である。この世界の三矢家は母方の祖父である上泉剛三の弟子ということもあり、十師族の中でも高い発言力を有する。
この世界の古式魔法を統括するのは〝導師〟と呼ばれている古式魔法の家で、東道家と樫和家が主にこの役目を担っている。そして、それらの更に上位としているのが〝護人〟の神楽坂家と上泉家。更

には国家の安定を担うための『元老院』がある。
師族会議の構成自体が政府の意向を受けているようなもので、千姫と剛三が意図した〝国防軍の腐敗を防ぐための役割〟自体が陳腐化してしまっている。師族会議の成立過程を見ると、本来は現在百家と呼ばれる家も含めるべきという案も存在したが、師族会議自体の収拾がつくギリギリを考慮した結果、切り捨てざるを得なかったらしい。
師族会議自体は民間組織だが、政治家や国防軍などの軍事や外交といった国家の対外政策に大きな影響を与える部分に干渉できる存在を〝民間人〟と呼ぶのは流石に限界があるだろう。とはいえ、下手に権力を与えれば確実に魔法師社会で内乱が発生する。
何もかも「事なかれ主義」で進めてきた結果がコレという有様だ。
おまけに、現在の魔法教育も軍人魔法師を前提にした部分が多く、それ以外の進学先の開拓も昨年の『トーラス・シルバー』によって魔法医療技術の国家プロジェクトが動き出したばかりだ。
その手始めとして今年の４月、旧群馬県に国立魔法医科大学（通称：魔法医大）が開校した。全寮制・全日制のカリキュラムで、講師は魔法大学附属病院などで経験を積んだ医師や技師が担当することになり、今年度は定員５０名に対して受験者数が２００名を超えた。国内のみならず国外からも問い合わせが殺到していて、ＳＳＡのディアッカ・ブレスティーロ大統領の来日日程には魔法医大の視察も含んでいるほどだ。
なお、ここの技術を盗み出そうとする輩もいるが、そういう連中は新陰流剣武術の門下生が拘束して警察や公安、国防軍に引き渡している。魔法医大を建てた場所が旧群馬県なのは、上泉家の保護を受けやすくするためのものだ。
……素直に頭を下げて見に来ればいいものの、それが出来ない時点で人としての礼儀を欠いていると言わざるを得ない。なお、スパイの比率は新ソ連、大亜連合、ＵＳＮＡ、そしてイギリスの順で多い。本当にバカばっかりだと言い放ちたくなる。
魔法師を縛る法の理があっても、納得しようとしない輩は多い。人間主義者は自然のあるがままにとか宣っておきながらアンティナイ

トを用いている時点で支離滅裂の極みだ。某映画の元大佐風に言うなら「アンティナイトなんて捨ててかかってこい」と言うべきだろう。
原作で相手が魔法師とはいえ女子生徒を取り囲んでいる絵面が出来ている時点で「変質者の集団が女子生徒に乱暴を働こうとしている」と言っている様なものだ。大体、魔法云々で罪の軽重が変えられるというのなら、法を軽んじているのはそれを宣う当人たちに他ならない。
魔法一つで力関係が劇的に変わると言うのなら、その対抗手段として拳銃を持つことが許されるのか。銃の携行許可を緩和したところで、銃を使った犯罪が横行するのが目に見えている。それは刃物なども同じだろう。対抗手段を持とうとしても、結局はその対抗手段を用いた犯罪が横行し、メディアによって謂われなき批判を魔法師が受けることにも繋がる。
だったら、認めるべき権利は認めるが、その対価と義務を与えることで相互にとっての利を追求した方がまだいい。いっそのこと、この国の政府が魔法結社という形で認めるのも一つの手段だろう。幸い、政治家の改革はこの間の選挙で大分進んだので、後は官僚の部分の〝大掃除〟を残すのみだが。
大体、現行の師族会議のシステムだと、師族が入れ替わっても師族各々の監視基盤をそう簡単に引き継げない部分が問題として存在する。その中の一つが全国に存在する魔法技能師開発研究所の管理問題だ。
監視・守護の担当と研究所が密接にリンクしてしまっているため、これを引き離すのは魔法技術の漏洩の観点からして難しい。なので、第四研を除く閉鎖された研究所をいっそのこと解体して、その跡地に魔法研究のための施設でも作る方が効率的だと思う。
第一研の跡地に金沢魔法理学研究所を設立したように、他の部分でもそれは十分可能だろう。この辺は上泉家が得意とする部分なので、元継に話は付けている。魔法技術の秘匿云々というのなら、政治家の連中の尻をバットでフルスイングする勢いで叩いて、政府として責任を負わせる形で主導する。

第四研に関しては表向き解体の方針としつつ、生きている設備を継続させはするが、将来的に研究施設の移設をするべきという打診を既にしている。四葉家が管理する巳焼(みやき)島に移設することも既に聞き及んでいる。

普通に裁けない罪人となった魔法師を人体実験に使うのは黙認した。医学でも死刑囚などを使うことで発展させてきた経緯を鑑みれば、それぐらいは許容すべきと考えたからだ。変に飼い殺しをして手に負えなくなるよりはマシだと思う。

◇　◇　◇

遠上家が箱根へ移住する話は付いたらしく、箱根で開く予定の動物病院の建設や人員募集などは既に千姫が神坂グループを通して手配を済ませており、良太郎と芹花は神楽坂家が手配した引っ越し業者の出迎えの為に戻ったとのこと。

茉莉花とアリサの部屋は流石に親でも触れない私物があると思うので彼女らも遠上家に戻る必要があるが、茉莉花とアリサは寂しそうにしていた。これは付いていくべきだと千姫を見やると、千姫は笑みを零した上で「構いませんよ」と答えた。

そして、引っ越しの為の準備が大急ぎで進められるわけだが、実は事前にある程度の荷物を纏めてあったため、そこまで手伝う必要もなかった。重い物を率先して運んだ際、周りからは尊敬やら羨望みたいな目線を向けられたが。

動物病院のほうは大丈夫なのかと思ったが、実は箱根で話していた獣医がそのまま建物と設備を活用するとのことで、引っ越し先の動物病院の設備は最先端技術のものを採用していて、全て神楽坂家で費用を受け持っている。その金額を小耳に挟んだ茉莉花の顔が青ざめるほどだった。自分がいまいちピンとこなかったのは、現在の自分の資産がえらいことになっているためかもしれないが。

ともあれ、荷物運びをすべて終えたところでアリサが何かを持って悠元に近付いてきた。どこか申し訳なさそうな表情をしていたので、恐らくは彼女の手に持っているものの相談事であろう。

「あの、悠元お兄ちゃん。今大丈夫？」

「大丈夫だよアーシャ。それで、その手に持っているものは？」
「あ、うん……これ、お母さんから渡されたもの」
　アリサから渡されたのは差出人が書かれていない封筒と、数枚の絵ハガキ。なんでも、アリサの母親であるダリヤが亡くなる1週間前にアリサへ手渡したもので、実質的なダリヤの〝遺言〟なのは間違いないだろう。
　絵ハガキの方は、差出人の部分が黒塗りになっていた。恐らくダリヤがそうしたのだと思われる。
「ダリヤさんがアーシャのことを信頼できる誰かに渡そうとした……それも、差出人の部分を態々隠したってことは、相手方への迷惑を考えたのだと……待てよ」
　差出人のことに気が向いていた思考を一度リセットする意味で絵ハガキの絵の部分を見やる。すると、どこかで見覚えのある筆跡に加え、改めて絵ハガキの消印を見ると、旧神奈川県厚木市の郵便局から送られたものとすぐに分かった。司波家で居候しているため、どうしても重要な書類は送ってもらっていたからだ。
「こうなったら、魔法で巻き戻す方が早いな」
　こうなると、差出人を探るべく悠元は『天陽照覧』で絵ハガキを〝巻き戻す〟。幸いにも消印の日時は読み取れたので、その日の翌日ならばダリヤの手は入っていないだろう。そして、眩い光が絵ハガキを包み込んだ後、黒塗りの部分が綺麗に消えて差出人の名前が露わになる。
　その名前にアリサは声を上げた。そして、悠元は思わず頭を抱えた。
「この人、いつもお母さん宛に送ってた人で間違いない……お兄ちゃん？」
「……ここでそう繋がるか？」
「アーシャ、悠兄。飲み物持ってきたよ……って、どうしたの？」
　世界は狭い、というのは本当に出来た言葉だと思う。アリサが思わず声を上げたことと、魔法のことを説明しているとき、上泉の名に首を傾げていたこと。ここでそう繋がってくるのかと。

そんな二人のもとにペットボトルを持って現れた茉莉花がその様子を訝しんだので、悠元が茉莉花に視線を向けた。
「お、ありがとうミーナ」
「いいよ、気にしないで。それで、それは何？」
「アーシャのお母さんがアーシャに預けていた封筒と絵ハガキで、絵ハガキの差出人の筆跡を探ったんだが……何でその名前が出てくるかね」
「え？　〝上泉詩歩（かみいずみしほ）〟さん、って読むっぽいけど、悠兄の知り合い？」
差出人の名前を悠元が知らぬはずなどない。悠元の母親である三矢詩歩。旧姓は〝上泉〟。そう、その名前は……旧姓表記とはいえ、自分の生みの母親なのだから。
「知り合いも何も、俺の生みの母親だ」
「え？　お兄ちゃんのお母さん？　でも、あの人――――千姫さんのことをお兄ちゃんは『母上』って」
「自己紹介の時に『養子』と言っただろ？　ここに書かれている上泉詩歩――――現在は十師族・三矢家当主夫人、三矢詩歩と名乗っている」
「え、ええっ!?　アーシャのお母さんが悠兄のお母さんと知り合いだったの!?」
自分の生みの母親である詩歩は剛三の影響で各方面に顔が広く、とりわけファッション分野やアパレル界隈、アクセサリー関連のコネはかなり豊富に存在する。中にはどこでそんなコネを手に入れてきたのか謎な部分もあった。
「そうなると、この差出人不明の封筒はうちの母さん宛の可能性が極めて高い……そんな話なんて一度も聞かなかったんだが」
上泉の姓でやりとりしていた（できていた）経緯も含めて詩歩から直接事情を聞いた方が早いと考え、悠元は折りたたみ型端末を床において、レシーバー経由で『五芒星（ペンタゴン）』を起動した上で三矢本家に連絡を入れる。すると、丁度書斎にいた元がモニターに映った。
『どちら様、っと悠元か。いきなり連絡をするとは珍しいな。両側にいるのは悠元の新たな婚約者か？』
「……まあ、間違ってないけどさ。２人は爺さんの関係で矢車家にお

世話になった際、知り合ったんだ」
　ともあれ、通信モードをスピーカーモードに切り替えつつ、悠元は茉莉花とアリサのことをかいつまんで説明した。すると、元は思わず笑みを零した。
『千姫さんはお前のスペックを考えれば三人では到底足りないと言っていたが……元継も苦労しそうだ。っと、初めましてお嬢さんがた、十師族・三矢家当主、三矢元という。悠元は既に三矢の人間ではないが、今でも家族――――自分の息子だと思っている。悠元をどうか宜しく頼むよ』
「は、はい！　遠上茉莉花といいます！」
「伊庭アリサと申します。その、悠元さんの……婚約者です」
　まさかいきなり十師族の当主と顔を合わせるなど思っていなかったため、茉莉花とアリサはどこかぎこちなさそうに頭を下げた。すると、元はアリサを見て見覚えがあるような素振りを見せていた。
『これは丁寧に……悠元、伊庭さんがどこかで見た覚えがあるような気がするのだが』
「そうだった。父さん、母さんをこの場に呼んでくれ。隣にいるアリサが大きく関係する話だ」
『詩歩が、か……分かった、直ぐに呼ぼう』
　元が態々席を外したということは、詩歩の居場所が分かっているからだろう。時間にして1分ぐらい経つと、改めてモニターに映った元の隣に詩歩の姿が映っていた。どうやら書斎の隣の部屋（元と詩歩の部屋）にいたらしい。
『悠元、久しぶりね』
「はい、母さんも久しぶりです。最近は中々顔を見せることも出来ず、すみません」
『悠元が忙しいのは聞いていますし、婚約者と仲良くすることに専念して構いません。それで、大まかな事情は夫から聞きましたが……新たな婚約者はダリヤさんの娘さんに、芹花さんの娘さんと言ったところかしら』
「は、はい。伊庭アリサと言います」

「え、えっ!?　お母さんをご存じなのですか!?　す、すみません、遠上茉莉花といいます」
　詩歩は悠元の両隣りにいるアリサと茉莉花を悠元の婚約者だとそれとなく見抜きつつ、母親の名を口にしたことでアリサと茉莉花は驚愕を禁じえなかった。単に顔が広いだけでなく、読みの鋭さは流石剛三の娘であると言わざるを得ない。
　その一方、詩歩は微笑んでいて、元に関しては感服したように瞼を閉じて頷いていた。
『それはもう、芹花さんとは学生時代に競い合った仲ですから。にしても、2人の娘と私の息子である悠元が出会ったのは何と言いますか……その、アリサさん。ダリヤさんは』
「その、8年前に……」
『そう、手紙が送られてこないからまさかとは思ったけれど……落ち着いたら墓参りに行かせてもらおうと思うのだけど、いいかしら?』
「はい。母もきっと喜ぶはずです」
　手紙のやり取りが途絶えた時点で詩歩はダリヤの死を推察していたのだろう。自分が伝えるべきことだったかもしれないが、あまり暗い話題を伝える気にもならなくて黙っていたし、ダリヤと自分の母親が知り合いだなんて知らなかった。
　詩歩とアリサが会話を交わし終えたタイミングで悠元が詩歩に話しかけた。
「さて、母さん。実はアーシャ――――アリサがダリヤさんから宛先が不明の手紙を預かっていまして。一緒に手渡された絵ハガキから察するに、おそらく母さんに宛てたものだと」
『成程、彼女の……実を言うとね、手紙のやり取りの中でアリサさんのことは全く触れていなかったの。多分、三矢家に迷惑が掛かると思って避けていたのでしょうね』
　詩歩が言うには、手紙の頻度からして北海道に移住したダリヤに子どもが出来たような感じはあったものの、それには直接触れないようやり取りをしていたらしい。名字の宛先自体を旧姓の上泉にしていたのは、ダリヤやアリサだけでなく遠上家のことも慮った結果だと詩

歩は述べた。
『悠元、封筒をその場で開けて中身を読んで欲しいの』
「宜しいのですか？」
『ええ。その方がいいような気がするから。あなたもよろしいかしら？』
『この場合、私に当主の権限を振りかざす資格などないよ。悠元、読み上げてくれるか？』
「分かった」
詩歩と元の言葉を聞いて、封筒の封を開けて中身を取り出す。中には便箋が一枚入っており、その内容を読み上げた。
ダリヤと詩歩が出会ったのは１９年前の話。亡命ロシア人だったダリヤが三矢家に招かれたのだ。この時点で五人の子どもを産んでいる詩歩は逞しかったわけだが、ある日詩歩は当時生きていた詩歩の母親にして剛三の妻――上泉奏姫（かみいずみかなめ）がダリヤを紹介した。
それから友人としての付き合いをしていたが、１４年前にダリヤは北海道へ突然帰った。詩歩はその少し前からダリヤから色々と相談を受けていて、ダリヤが十文字家の男性と付き合っていたことまでは読み取っていたと話す。
ダリヤは北海道へ行く直前に詩歩のもとを訪れ、色々協力してくれたのに申し訳ないと謝罪したことを懐かしむような文面が見られた。その上で「この時点で女の子まで生まれていた詩歩は子育てなどで心を痛めているのに、何も恩返しできずに去ってしまったことを許してほしい」と書かれていた。
北海道に移り住んで自身の死期を悟った時、ダリヤは詩歩に一つの頼みごとをすることとした。
それは、「自分の娘であるアリサを詩歩の娘として育ててほしい」というダリヤの〝遺言〟が便箋に書かれていた。とはいえ、子宝に恵まれて子育てが大変な彼女にその役割を押し付けるような形となるため、ダリヤは相当悩んだ様子が文面から窺える。
そこで、詩歩から送られた絵ハガキの差出人の部分を黒塗りで塗りつぶした上で、もし詩歩がアリサの持っている手紙と絵ハガキに気付

いたら、その手紙の内容をどうか受け入れてほしい、と懇願していた。
そして、「叶うのならば、詩歩の息子とアリサが出会って結ばれることを祈る」という文言と共に、便箋の文章は終わっていた。
奇しくも、その願いはダリヤの死を切っ掛けにした出会いによって齎された形となり、縁結びの神様の気まぐれがダリヤの最期の願いを叶えたのかもしれない。

家族を重んじるか、魔法を守るか

ダリヤが遺した手紙を読み終えると、詩歩は思わず涙ぐんでいた。長い付き合いだったため、彼女に対して色々思うところがあるのだろう。だが、その感傷に浸り続けている暇はない、と判断して悠元が詩歩に問いかけた。

「母さん。ダリヤさんが当時付き合っていた人間は……恐らく十文字家の人間ですね？」

『ええ、そうよ。十文字和樹（じゅうもんじかずき）――――現在の十文字家当主です。悠元ならアリサさんの魔法資質に気付くのも無理はないわね』

『……やはりか。十文字殿も面倒な問題を』

悠元の質問に対して詩歩がハッキリと答えると、それを聞いていた元が頭を抱えつつ盛大な溜息を吐いた。詩歩と会った事があるのなら、当然その夫である元もダリヤと面識を持っていておかしくはない。

元も、まさか自分の知己の問題が回りまわって同じ十師族絡みの問題へ発展するなど思ってもみなかったのだろう。

「父さんは知ってたのか？」

『ああ。ダリヤさんが十文字殿と付き合っていたこともそうだが、十文字殿は彼の遺伝上の父親から今の妻にあたる慶子さんとの婚姻を勧められていた。なので、私は十文字殿に「後々下手な諍いを生まないためにも、ダリヤさんとしっかり話し合った上で別れたほうがいい」とは伝えていたのだが……』

克人の年齢を考えると、5歳の時に和樹が再婚した計算になる。しかも、克人や他の人間に黙って二股をかけていて、あまつさえダリヤに手を出して妊娠させたのだ。元としても十文字家が家庭の事情で混乱を来たすようなことは避けるべきだと釘を刺したが、その願いは無残にも散ってしまった形だ。

もしかすると、ダリヤはアリサを妊娠したことに気付き、十文字家の諍いの種にならないために自ら身を引いたのかもしれない。詩歩に尋ねると、ダリヤは書置きだけ残して和樹に別れを告げたと述べて

いたので、アリサが聞き及んでいたダリヤの話と一致する。
　すると、詩歩がアリサと茉莉花に尋ねた。
『アリサさん、それに茉莉花さん。アリサさんは現状芹花さん――――遠上家でお世話になっていると解釈していいのですね？』
「はい、その通りです」
「は、はい。でも、お父さんとお母さんはアーシャを、アリサを養子に迎えることを躊躇ったので」
『ありがとう、二人とも……あなた、アリサさんを三矢家の養子に出来ないかしら？』
『……不可能、というわけでもないな』
　詩歩が案じたのは、アリサの後ろ盾の弱さであった。現状のアリサの戸籍は天涯孤独の身であり、それでいて十文字家の魔法技術を有してしまっている。悠元の婚約者になったところで、魔法師としての立場の弱さが残ったままなのだ。
　そこで詩歩が考えたのは、ダリヤの遺言に沿う形でアリサを三矢家の養女として迎えることだ。
　現状、既に妻を迎えて家督と家業を継ぎつつある元治、上泉家に婿養子として迎えられて当主となった元継、矢車分家に嫁いだ詩鶴、婚約予定の佳奈と美嘉、神楽坂家の養子となり次期当主に指名された悠元、侍郎との婚姻を条件に矢車家の後ろ盾を得ている詩奈。悠元の影響もあって、元の子どもたちは全員将来の道筋がほぼ決定している。
　元と詩歩からすれば子育ての荷が大分下りたところなので、アリサを養女として迎えても何ら問題はないし、将来悠元の婚約者になることを考えると彼女の後ろ盾になるぐらいのものだ。
　詩歩の提案には元も前向きだった。夫婦揃って知己である人物の娘であり、引き合わせてくれた詩歩の母親からは「あの子にもし何かあれば、力になってあげて」と頼まれていたので、今こそ約束を果たすべきだと考えた。
『悠元、千姫さんもそちらにいるのだろう？　それと遠上家の方々にも話を通したい。通話の強度は問題ないか？』
「それは大丈夫。ミーナ、ご両親を呼んできてくれるか？　俺は母上

に話を通してくる」
「う、うん！」
　そして、急遽神楽坂家・遠上家・三矢家での保護者面談となり、ダリヤが詩歩に宛てたと思しき遺言の手紙が公表された上で、元と詩歩はアリサを三矢家の養女として迎えることを提案した。ただし、あくまでも戸籍の手続きの話で、アリサが望めば遠上家で暮らすことも問題は無いとした。それと、まだ三矢の姓を名乗っていない詩奈のこともあるので、当面は三矢の仕来りに従って長野の姓を名乗らせることも伝えられた。
　悠元とアリサの婚約については既に悠元が三矢家の戸籍を抜けており、血縁的に何ら問題が生じないことは証明されているため、そのままで行くことも伝えられた。千姫もその案を了承した。
『残る問題は十文字殿のことだが……魔法技術を教えるのは悠元に任せたい。私が知る限り、三矢家の人間の中でお前以上に十文字家の魔法技術を知っている人間がいないからな』
「分かったよ、父さん」
　アリサの中にある『オーバークロック』と『ファランクス』の術式自体を大幅に書き換えているため、感情が昂っても『オーバークロック』は発動しないようになっている。そもそも、『オーバークロック』そのものが〝全くの別物〟となっているが、敢えて言うことでもないので黙ることにした。
「ただ、十文字家が父さんにアリサの引き渡しを求めてくるかもしれないけれど」
『それは断るように元治にも言い含めておく。慶子さんが納得してもアリサさんと同い年の竜樹（たつき）君は面白くないだろう。最悪アリサさんへ嫉妬や敵意を向ける可能性もある以上、それは出来ないと思っている』
　十文字和樹の子は現在、前妻の子である克人、和樹の妹の子の理璃（りり）、和樹の弟の子である勇人（ゆうと）、そして後妻の子である竜樹（たつき）と和美（かずみ）の五人。
　理璃の場合は勇人を引き取った前例があったので、家庭内の不和が起きることはなかったし、理璃本人に十師族としての心構えを教えた

際に尋ねたところ、「家族みんな優しくしてくれますし、和美ちゃんなんてお姉ちゃんと呼んでくれますので」と聞き及んでいるので間違いない。

だが、これでアリサまで引き取ると、同い年の竜樹は間違いなく父親に対して悪感情を抱くだろう。下手をすればアリサに対してその感情を向けることも考えられ、最悪十文字家の家庭事情が最悪のものになりかねない懸念が生じる。

万が一それが起こらなかったとしても、今の妻である慶子が和樹に事情説明を迫るのは間違いないし、離婚する可能性も十分考えられる。十文字家の役割を鑑みて不満を呑み込んだとしても、家庭内の空気は一気に悪化する未来しか見えない。

そうなると、克人と美嘉の婚約に関しても大幅に見直さざるを得なくなり、婚約解消も視野に入れる必要が出てくる。元としても、アリサという存在をこのまま十文字家に入れることにより生じる問題を無視できない思いもある。

その辺の空気を呼んだのか、元と詩歩が映るモニターに美嘉も姿を見せた。元は驚いていたが、詩歩が「私が呼んだ」と説明すると元は踵を正しつつ座り直した。

美嘉は悠元の両隣りにいる茉莉花とアリサを見て、ジト目を向けていた。

『悠元、また増えたね。妹がたくさんなのは嬉しいけど、干からびない？』

「美嘉姉さん、女の子がいる前でそういうことは言わないの」

『冗談、冗談。で、私が呼ばれて母さんまで関わってるとなると、十文字家絡み？』

「概ね正解」

美嘉の鋭さは今に始まった事ではないので、悠元はそれとなく流しつつ今までの経緯を説明すると、美嘉は納得したように頷いていた。

美嘉も元が抱いた懸念を感じていたようだ。

『私もそう思うよ。だって、竜樹君からしたら父親が母親に黙って二股かけて隠し子を作ったってことでしょ？　自分のことを本当に愛

してくれているか疑問を抱くと思うな。最悪家出しちゃうかもしれないし、和美ちゃんだって内心は面白くないかもしれない。そんな未来が予想できるところにアリサちゃんを引き渡すなんてできないよ』

十文字家の当主は来年あたりに克人へ変わったとしても、家内の大黒柱は和樹であることに変わりない。しかも、和樹は約１４年間もアリサのことを放置し続けただけでなく、いくらダリヤの方から別れたとはいえ、そのケアも後始末も怠った。その意味で、偶然ながらもアリサを救った悠元の存在は大きい、と美嘉は述べた。

『懇ろな関係を持ったのなら、本当に大丈夫かどうかを確認するべきだったはずよ。自分の責任を果たすためにも探偵とかに依頼して様子を見るなり出来たと思う。それすらも怠ったんだから、十文字殿に父親面する資格はないって私は思う』

『美嘉……十文字殿は将来の義父になりうるかもしれないのに。随分と辛辣だな』

『そう？　このままいけば来年の師族会議でかっちゃん（克人の綽名）が十文字家当主を引き継ぐことになって、その折に私との婚約発表の予定でしょ？　私だって三矢の人間としての責務は果たすけど、嫁ぎ先の家庭事情が関わるとなったら私も無関係だなんて言えないもの』

克人と美嘉は既にお見合いを済ませており、しかも同じ第一高校卒業生にして魔法大学の学生。学年自体も一つしか変わらないため、和樹はもとより克人も前向きに捉えていた。些か生真面目な克人には利発的な相手の方が丁度良い、と和樹は考えている。

しかも、美嘉は十文字家を何度か訪れており、第一高校での活躍は同性の理璃や和美からすれば一種の憧れで、和樹の妻の慶子だけでなく、勇人や竜樹からの信頼も既に勝ち得ている。この辺は美嘉の人付き合いのスタンスが十文字家の信頼を勝ち得た形だ。

この状況でアリサが加われば、今まで築いてきた温和な家庭環境が一変しかねない。その意味で、美嘉にとっても他人事では済まされないのは確かだろう。美嘉曰く「アリサちゃんが加わることによって家庭内の空気が悪化するのは避けられないし、私一人で負い切れない」とアリサを十文字家で引き取ることに反対の姿勢を見せた。

『大体、アリサちゃんの婚約者である悠元をどう説得するのよ。十文字家が引き取ることはこれまでの悠元の善意を潰すことにもなる。上泉の御祖父様のように金銭でも地位でも靡かない弟に十文字家は一体何を支払えるというの？』

生真面目な性格の克人が『オーバークロック』の危険性を指摘したところで、悠元にはその解決ができる方法を有している。美嘉も全てを聞いているわけではないが、今まで悠元が成してきたことを考えれば「出来てもおかしくはない」と推察していた。

『そうだな……そう言われると、私でも精々味方になることしかできないな』

『でしょ？』

国防陸軍の特務中将に昇進が確定している国家非公認戦略級魔法師『殲滅の奇術師（ティターニア）』。ＦＬＴの次席株主にして真の『トーラス・シルバー』の片割れ。皇宮警察本部特務隊『神将会』の第一席にして神楽坂家次期当主。既に数々の肩書を持つ悠元に対し、十文字家が支払えるものなどほぼないに等しい。

「美嘉ちゃんの言う通りですね。三矢殿、アリサさんの件は私が責任を全面的に請け負います。もし十文字殿が交渉に来た際、私に取り次ぐよう計らっていただいて構いません」

『千姫殿、よろしいのですか？』

「元々悠君の婚約者決めは私と剛三（あに）の専決事項ですから。和樹の若造がアリサさんの母親であるダリヤさんと懇ろな関係を持っていて、ダリヤさんから別れたとはいえ何事もなかったかのように再婚したのは、男性としても父親としても最低の類です」

ましてや、悠元に対して十文字家は数々の〝借り〟を有しているため、この状況でアリサを十文字家で引き取るためには、これまでの〝借り〟を全て清算しきる必要がある。

しかも、十文字家は知らないが悠元は『ファランクス』を使用できるし、その上位互換である『ミラーフォース』を有している。魔法技術の提供という手段も取れない以上、彼らに出来るのは悠元の味方になるということだけなのだ。

『悠元を敵に回せば、向こうの勇人君(ゆうと)も黙っていないでしょうね。お互いに仲がいいから』
「ははは……」
同じ〝ゆうと〟の名を持つ人間――――十文字勇人は悠元から見れば3つ下にあたる。
今は亡き彼の実の父親である十文字和樹の弟はかつて新陰流剣武術の門下生の1人で、元とは同門の誼にして元と詩歩の仲人まで務めたことがある。勇人の名は悠元に準えて名付けたらしく、当時は病弱だった悠元の分まで生きてほしいという願いを込めてのものだったそうだ。
悠元が病弱の状態から改善して約8年後、七草家のバレンタイン騒動の折に克人の招きで勇人と初対面を果たす。最初は同じ名を持つこともあってライバル心を抱かれていると思ったのだが、勇人からは何故か尊敬の眼差しを向けられていた。
その理由は悠元が「長野佑都」の名で出場した全国中等部剣道大会で、勇人はその大会を見に行っていたらしく、無名ながらも並み居る強豪を全て一撃で沈めて優勝したことに感動していた。その翌年の大会で出てこなかったことは残念だったが、悠元と会った瞬間にそのことを思い出し、自分からすれば憧れを抱いた人物と同じ呼び名ということに感動したらしい。
魔法科高校に入ってからもその辺は変わらず、寧ろ九校戦で将輝を破ったことにより勇人の中での悠元に対する評価はストップ高を更新し続けている有様。その意味では男性版の七草泉美だろう……勇人の好みが女性なのは言うまでもないが、一応触れておく。
「ともあれ、遠上家が箱根に引っ越すから、その折に会いに行くことになると思う。母上、引っ越しはいつ終わりますか?」
「作業は業者の皆さんだけでなく、矢車家の皆さんも協力してもう終わりました。明日には箱根に到着しますので、三矢殿との会談は可能であれば明日にでも」
『分かりました。悠元、会談の際は元治と詩歩にも同席してもらうから、そのつもりでいてくれ』

「分かったよ、父さん」
　気が付けば、あれだけあった荷物が綺麗に片付いていることに驚きを隠せない。千姫曰く神坂グループの引っ越し業者は実戦レベルとまでいかないものの日常生活で安定して使えるレベルの魔法師が多く、剛三の意向で筋トレが趣味らしい。一仕事終えた後のプロテインも日常で、色々見てはいけないものを見たような気がした悠元であった。
　余談だが、千姫は和樹の有様に対して怒りを通り越して呆れ返ったため、愚痴混じりにその事情を剛三に伝えたところ、このような言葉が剛三から返ってきた。
「あの阿呆が……１４年間も娘の存在を知らずにいる以上、奴に父親を名乗る資格もないわ。大体、遠上家に養育費も含めた慰謝料を支払うべき立場であろうに」
　その上で、剛三は和樹を含めた十文字家にこの事実は伝えないこととした。折角悠元が和樹を治療して少しは大人しくなったかと思えば、今度はその和樹が過去の女性関係で盛大にやらかしたのだ。
　これで和樹の代理として克人が赴くようならば、剛三自らが赴いた上で「十文字家の問題」ではなく「十文字和樹の問題」として和樹が表に出ろ、その勇気がないならば金輪際アリサの父親面などするな、十文字家がアリサを引き取る資格など無く彼女の後ろ盾として上泉家も責任を持つ、とまで発言した。
　このことは上泉家現当主である元継にも伝わり、元継当人も「十文字和樹殿が自ら関わることが交渉の最低条件だ。それを後妻の慶子さんや前妻の子である克人に負わせれば、和樹殿にアリサの父親と名乗る資格などない」と発言した。
　元継は克人と仲が良く克人の為人を知っているが故に、和樹からアリサのことが伝われば十文字家に引き取る前提で動くだろう。だが「アリサのことを放置し続けたのは他でもない和樹殿であり、アリサが十文字家の魔法資質を有しているとしても、前妻の子である克人が引き受けるべき話ではない」と元継はそう述べた。
　要するに、上泉家は十文字和樹に対してかなり怒っている、という

ことである。
その一方、魔法師としての絡みである意味二股以上になっている悠元に関しては、剛三曰く「いつでも曾孫を待っておるぞ」とのことで、それを聞いた元継が全力で蹴飛ばした上で「悠元はまだ高校生だから無茶を言うな！……俺の分の皺寄せが来てしまって済まない」と剛三に怒鳴った上で謝られた。さらに「お前はちゃんと最後まで責任を負おうとしているからな。そのせいで複数の女性に言い寄られているのかもしれんが」とのこと。
加えて、「1年以上関係を持っている人もいるのにデキてないとなると、恐らく魔法を使っているのでしょうが、無節操なことをしないから婚約者の皆さんは悠元君により一層惚れるのでしょうね」といつの間にか剛三にお仕置きをしている千里から言われた。
納得がいかねえ、とは口に出さなかったが、何だか釈然としなかった。手を出した以上は責任を取るが、これ以上増えてほしくないと願う自分がいた……他に惚れられている人物を鑑みると、まだ増えるのが億劫だと思えてならなかった。
結局のところ、そのストレスが性欲に昇華されているのかもしれない。そうすることで婚約者たちからはより一層好意が強まり、中には従属を願う人間もいたりする。愛人の存在は専属使用人のこともあるので渋々受け入れたのに、婚約者を奴隷扱いなんて出来ない。
なお、達也から「深雪を大人しく従属させてやってくれ」と頼まれた。恐らく自分を説得するために深雪が兄を頼ったのだろう……泣き落としで。
現状の四葉家の次期当主候補筆頭を従属させるってどんな罰ゲームだよ、全く。

堀を埋められ、激流に身を任せる

矢車慶一郎。矢車本家当主としては若輩の２５歳にして家督を継ぎ、神楽坂家の諜報機関『九頭龍』の一角を担い、北海道方面を監視することでＵＳＮＡ及び新ソ連の動きを見続けている。

実を言うと、慶一郎は元々矢車家の人間ではない。元は上泉芳綱の末子として生まれたのだ。

上泉家の歴代当主は近年のものを挙げると、剛三の父である上泉政綱、政綱の長男の上泉芳綱、次男の上泉剛三（元々家業の新陰流剣武術の総師範を継ぐ予定だったため、家督を継がない立場を示すために「綱」の字は名付けられなかった。芳綱と剛三の間に女子がいて、政綱の三番目の子という意味で名前に三の数字が付けられた）、そして今代の当主である上泉元継。二代続いて「綱」の字が名付けられなかったため、元継と千里の子にその字が再び名付けられる予定とのこと。

四葉の復讐劇後、芳綱が病気で急死した。当時、芳綱の子であった慶一郎は幼かったため、復讐劇に参加した後遺症で魔法力が安定しなくなったとはいえ、武術は達人級の剛三が已む無く上泉家当主の座を継いだ。剛三が武術の指導に引き籠ったのは、元々当主の座にあまり関心が無かったことも大きく影響しており、実務部分は剛三の妻が請け負っていた。

そして、慶一郎は幼馴染であった矢車朔夜の娘と懇意になり、剛三が仲人というかたちで矢車家に婿養子として送られた。

上泉直系の血を引く慶一郎が剛三の引退後に上泉家当主へ選ばれる可能性はあった（慶一郎の上は全て姉という女系家族であり、既に嫁いでいる関係から慶一郎に白羽の矢が立った）が、慶一郎は上泉本家に赴いてその話を丁重に断った。

慶一郎は「今の私は神楽坂の門下に名を連ねるもの。血の為と簡単に離れる様な事があれば、戦火で乱れた世は更に乱れましょう」と述べ、剛三も彼の言葉を受け入れた。

その上で、慶一郎は新陰流剣武術で頭角を現しつつあった元継を推

薦した。元継と千里の問題を片付けたいと述べた剛三に対し、神楽坂家に伝わる〝婚約の儀式（儀式とは言っても格式張ったものではなく、秘中の香を用いて避妊をした上で懇ろな関係を築く）〟を薦めたところ、見事に結ばれた。悠元が元継を起こしに行こうとして見た光景は、その儀式後だったという訳だ。

「……彼は、立派に成長しましたね。剛三殿の教えを全て受け継ぎ、千姫殿の眼鏡に適う実力者へと」

悠元に起こった変化は、慶一郎も薄々感じていた。だが、〝生まれ変わった〟彼は人の絆を無意識的に追い求め続けていた。その結果、あらゆる家の娘を婚約者として迎えることになった。そしてそれは、数字落ち（エクストラ）と呼ばれる一族の娘をも娶ることになった。

彼の強靭な精神力を支えているのは、その絆によって結ばれた婚約者たちのお陰でもあると慶一郎はそう感じていた。

「私だったら、とっくに逃げ出しているかもしれませんね」

千姫から聞いた話では、「婚約者たちと熱い夜を繰り広げている」と面白おかしく述べられていたが、婚約者同士で諍いが起きていないのは彼の人徳所以だろう。

常人ならざるからこその苦労など慶一郎には分からないが、普通ならば少なくとも一人ぐらいはそういった諍いを起こしそうなものなのに、それが起きずに良好な関係を築けるというのは並大抵のことではない。〝女たらし〟とは言われそうだが、これも彼が知らず知らずのうちに築いてきたものなのだろう、と慶一郎は考えた。

◇　◇　◇

矢車家の大浴場は門下生も利用するために規模が大きく、近くの市民も利用する憩いの場となっている。営業時間が過ぎると矢車家の人だけが入れるプライベート用の風呂場となり、その奥にある露天風呂に悠元は浸かっていた。

「ふぅ……1年もようやく終わりに差し掛かるか。いや、まだ二つ仕事は残っているが」

まさかアリサと茉莉花のことに加えて引っ越しの手伝いはまだしも、明日には東京に戻って厚木の三矢本家を訪れなければならない。

アリサ自身も三矢家の養女になることは前向きで、茉莉花もアリサと一緒に暮らせることに喜んでいた。
その上、明後日から暫くは別件で動くため、今回は寝正月をして過ごせないことに頭を抱えたくなった。別に〝彼〟の実力を疑うわけではないが、誰かが横槍を入れないとも限らない。いくら言葉で述べようとも、それが本当に実行されるか否かはまた別の問題なのだ。
ともあれ、まずは懸案の一つにめどが立ったと思うことにしよう……そう結論付けたところで悠元は露天風呂の扉の向こうから気配を感じた。数は2人で、感じられる気配から察するに女性だというのはすぐに分かった。
そして、今の時間に悠元が入っていることを知っているとなれば……悠元の予感はその2人――――アリサと茉莉花が姿を見せたことで確信に変わった。2人ともタオルを巻いていて、アリサは長い髪を結っている。
「あ、ここにいた！」
「ミーナ、落ち着いて」
「……やれやれ」
どうせ千姫の差し金なのは言うに及ばず、ここで慌てても得することは一つとしてない。それに、12月の北海道、それも夜はかなり冷える。今日は珍しく風が吹いていないが、それでも外気の中をタオル一枚でうろつかせるのは悠元にとってもあまり気分のいいものではなかったからだ。
露天風呂は広く、魔法科高校の一クラス分の生徒が入ってもまだ余裕があるぐらいの広さ。にもかかわらず、温泉に浸かったアリサと茉莉花は悠元に密着していた。
「アーシャにミーナ、何故引っ付く？」
「だって、悠兄とこうやって一緒に入るのも4年半以上ぶりだし、もう婚約者だし」
「お兄ちゃんと一緒に入りたくて……ダメ？」
「ダメとは言わんが、もう少し節操を持ってほしい」
4年半以上（正確には約4年9ヶ月）という時間は2人にとっても

寂しかったようだ。尤も、自分の場合は雫やほのかと学校で会ったり、ＦＬＴに行ってはＣＡＤ開発に取り組んでいたり、爺さんの付き合いで海外旅行に突き合わされたりと事欠かなかった。
「正直に言って、アリサは遼介さんにも懐いていたし、遼介さんに恋焦がれると思ってた」
「お、悠兄もそう思うでしょ？　アーシャったら、毎日悠兄と撮った写真を眺めていたぐらいぞっこんでね」
「ミーナ！　……だって、お兄ちゃんは私にとってお母さん以外の初めての家族だから。遼介さんのことは慕ってたけど、ずっと忘れられなかった」
　どうやら、アリサには若干家族依存のようなものが見られる。まあ、父親を知らず、母親を亡くして天涯孤独の身となったアリサが兄代わりとなった自分に依存してしまうのは自然の流れなのかもしれない。茉莉花の指摘に対して、アリサは頬を紅く染めつつ悠元を見つめていた。
「でも、お兄ちゃんと兄妹の関係でい続けることが苦しくて……こうやってお兄ちゃんと再会して、やっと分かった。私は、お兄ちゃんのことを一人の男性として好きなんだって」
「アーシャ……」
「む、あたしだって悠兄のことは初めて会った時に好きになったのに、悠兄ってばのらりくらりと躱すし」
「あの時は俺がまだ8歳、２人は5歳だぞ？　５歳の女の子に恋したら色々問題があるわ」
　今だって辛うじて認めているぐらいで、２人と同い年の茜にだって一応１６歳を目安にした形で答えを返したのだ。当時の年齢を鑑みても道徳的にも倫理的にもアウトにしかならないのだ。どこの光源氏だよ、と思ったほどだ。
「それはそうだけれど。ねえ、悠兄。あたしらのこと、どう思う？」
「どう思う……って、何してるんだ」
「誘惑って奴？　どうせ今夜悠兄としちゃうんだし」
「あのな……って、アリサもいつの間に……」

「お兄ちゃん。私の体、たくさん触れていいですよ」
何と言うか、思春期真っ盛りの茉莉花は身に着けていたタオルを外し、直接悠元の体に密着していた。アリサの方もタオルを取って悠元の胸元に顔を埋めるようにして抱き着いていた。というか、よく見ると2人の表情が蕩けるような感じ……これから起こることを〝期待〟するような眼差しを向けていた。
これはもう、千姫に何かしら仕込まれているとみて間違いないだろう。
「なあ、母上に何か渡されたか？」
「あ、うん。何か〝ひやく〟みたいなのを渡された。それを飲むと〝避けられる〟ことができるって言ってたけど、どういうこと？」
「私も渡されて、そんなことを言われたの」
「……あの人は」
いや、まあ、確かに倫理的な問題を考えれば、千姫のしたことは褒められるべきだろうが、その薬の副次的効果としてアリサと茉莉花の息が荒くなり始めている。このままだと風呂で致す羽目になり確実に逆上せかねない。なので、悠元は気を強く持った。
「アーシャにミーナ、部屋に行こうか。このままだと逆上せるからな」
「う、うん」
「お兄ちゃんがそう言うなら……」
その後、何とか着替えさせて客間に辿り着いた悠元がみたものは、徐に敷かれた3人分の布団であった。これから起こりうることを考える暇もなく、茉莉花とアリサがまるで悠元の体に自らの体を擦り付ける様な仕草を見せ始めている。
これ、避妊薬の副作用は激しい媚薬のような効果を起こしているのだと推察した悠元だが、そんな考察はアリサからの突然のキスで吹き飛ばされた。
「ん……お兄ちゃん、もう我慢できない。私を、お兄ちゃんのものにして？」
「あたしも！　あたしも悠兄のお嫁さんにして欲しいの！」
「……やれやれだ」

結局、千姫の思惑に乗せられる形で茉莉花とアリサを抱く羽目となり、何だかんだストレスが溜まっていたのか、二人にとって初めての経験であることも忘れて激しく愛してしまった。翌朝、目が覚めると悠元の上に覆い被さる様な形でアリサが眠っていた。茉莉花に関しては、悠元の右側で眠っていた。
「……もう勘弁してほしい」
「んみゅ……あ、お兄ちゃん、おはよう」
「おはよう、アリサ。昨日は大丈夫だったか？」
流されるままとはいえ、拒否するための逃げ道を綺麗に潰されている状態で婚前交渉をする羽目となったことに悠元はもういいかな、と思い始めたように呟くと、アリサが目を覚ました。
「うん……ねえ、これからもお兄ちゃんって呼んでいい？」
「別に構わないよ。アーシャがそうしたいのなら、そうするといい」
「ありがとう。……お兄ちゃん」
「生理現象です」
アリサと会話を交わしている悠元だが、悠元の魔法で成長したアリサの体に反応する形で悠元の欲望の化身がアリサの身体に触れ、アリサは昨晩の事を思い出したのか、頬を紅く染めつつ恥ずかし気に尋ねたので、悠元は冷静に答えた。
だが、アリサの行動は早かった。
「ねえ、お兄ちゃん……ミーナが起きるまで、ダメ？」
「いやらしい妹だな、アーシャは」
「お兄ちゃん限定だよ。こんな口調もお兄ちゃんにしか使わないから、あっ」
結局、アリサと寝技（意味深）をする羽目となり、アリサの声を聞いて起きた茉莉花が悠元に襲い掛かって、結局矢車家の使用人が起こしに来るまで愛し合う羽目になっていたのだった。
そして、朝食はそれを見越したように赤飯となっていて、周囲からの生暖かい視線に悠元は素知らぬ顔で朝食を食べ、茉莉花とアリサは揃って顔を真っ赤にして俯きながら朝食を食べたのだった。
「……」

「深雪？　何かあったのか？」
「い、いえ、何でもありませんよ、お兄様」
　その様子を見てもいないのに、悠元に婚約者が増えたのではないかと心の中で訝しむ深雪に対し、達也が尋ねると慌てて取り繕った。これは間違いなく悠元に何かあったのだと悟った達也であった。
◇　◇　◇
　朝食後、出発まで時間があるということで遠上家とアリサに集まってもらった。一体何を話すのか疑問に思う茉莉花に対し、悠元が切り出した。
「遠上家の方々とアーシャに集まってもらったのは、今後俺が２人の魔法訓練の面倒を見ることに関わる話です」
「え？　うちは箱根に引っ越すからそう遠くないでしょ？」
「そうも言ってられんから話すんだ」
　いくら神楽坂本邸が近くとも、そこを魔法訓練の場所にするのは拙い。しかも、悠元はまだ高校生の身であり、現状東京（司波家）から通っている状態だ。十文字家の人間に見つかるリスクを鑑みた場合、悠元は一つの提案を持ち掛けることとした。
「良太郎さんに芹花さん、アーシャとミーナを上泉家本邸で預かりたいのです。そこならば安全も保障できますし、俺も時間が取れますので」
「上泉？　もしかして、上泉剛三殿の？」
「ええ。俺の母方の祖父ですし、今の当主は俺の血縁上の兄にあたります。魔法を鍛えるには、精神のみならず肉体も合わせて鍛えないことには話になりませんので」
　剛三の存在はこの国にいる人間ならば少なくとも一度は聞く名前だし、現当主の元継は第一高校の九校戦で圧倒的な実力を見せつけた元三矢家の一人にして『神将会』の副長。それに、エリカとレオに奥義まで叩き込んだ片割れなので、実績は十分ある。
　そして、悠元も新陰流剣武術を学ぶことで魔法の研鑽に磨きが掛かった。女性の門下生で言えば悠元の姉である詩鶴、佳奈、美嘉も目に見える実績を挙げているので、二人を磨き上げるにはこれ以上ない

環境とも言える。
「上泉剛三……え？　歴史の教科書で出てくるあの上泉剛三？」
「そうそう」
「……英雄とまで呼ばれた人に教われる……あたし、剛三さんに学びたい！」
「あー、うん、そっか……爺さんに話はしておくけど。アーシャはどうしたい？」
「私も剛三さんに学びたい。お兄ちゃんのように強くなりたいから」
　茉莉花とアリサの意気込みは買ってあげたい。ただ、剛三の常軌を逸した〝地獄を越えた地獄コース〟の鍛錬にならないか正直不安なところもある。一応、元継と千里に話はしておくことでどうにかしようと思う。
　その上で、悠元は良太郎と芹花の意思を確認すべく視線を向けた。
「良太郎さん、芹花さん。二人はこう仰っておりますが、ミーナの親として、アーシャの親代わりとしての意見を聞きたいです」
「……遅かれ早かれ、茉莉花もアリサさんも魔法を学ぶ時が来ます。悠元君のような偉大な魔法師に加え、かの英雄たる上泉殿が教えてくれるのならば、私は2人の意見を尊重したいです」
「私も同じ意見です。それに、好きな人から魔法を教わるなんて滅多に出来ないことです。茉莉花、アリサさん。やるからにはしっかり励んでください」
「う、うん！　ありがとう、お父さんとお母さん」
「小父さん、小母さん。ありがとうございます」
　これで、剛三のもとに茉莉花とアリサを送り出すことは決まった。推薦状は自分が書くこととし、元継と千里には事前に話を通すつもりだ……剛三が張り切り過ぎて自分の二の舞にならないようにするためにも。
　そうして出発の時間を迎えた。矢車本家からはリムジン、新千歳空港から再び政府専用機で東京湾海上国際空港に移動し、そこから更に別のリムジンで旧神奈川県厚木市の三矢家本邸へと向かった。あまりの豪華な待遇に、茉莉花の表情は完全に目が点になるぐらい驚愕の

連続だった。良太郎と芹花もこれには驚き、アリサはその凄さを完全に分かっていないためか驚きよりも感動を覚えていて、千姫は笑みを零した。

そんな一幕を経て、三矢家での会談に臨むこととなった。三矢家からは当主の元、次期当主の元治、そして当主夫人の詩歩に加え、次期当主夫人である三矢穂波(みつやほなみ)も同席していた。穂波の同席は詩歩の計らいによるものらしい。

「お久しぶりです、穂波さん。中々挨拶が出来ず、すみません」

「いえ、悠元さんも変わりなく。深夜様から偶に連絡を頂きますが……深夜様が本当にご迷惑をお掛けしてすみません」

「お気遣いなく。元治兄さんとはうまくやっていますか？」

「はい……稚児(ややこ)を授かりまして、夏に生まれる予定です」

深夜のことはそこそこに、夫婦仲のことについての悠元の問いかけに穂波はお腹のあたりを擦りながら答えてくれた。穂波の許可を貰う形で悠元が手を触れると、指先から感じる胎動の波動で命の鼓動を感じた。

「…男女の双子ですね」

「凄いです、悠元さん。その通りです」

「悠元の非凡さにはいつも驚かされるな」

一発で妊娠している赤子の構成を見抜いたことに、元治は若干呆れつつもそう述べた。ちゃっかりやることはやっているだけに、元としてもその赤子が無事に生まれて育ってくれることを期待しているのだろう……17歳で叔父になることに少しショックを受けたのはここだけの話。

事前に話をある程度詰めていたため、アリサが三矢家の養女となる手続きは遠上家がアリサの法定代理人として良太郎と芹花が、アリサの養親となる元と詩歩が署名を行い、家庭裁判所の許可書謄本は千姫が既に手配を済ませている。

提出に関しては千姫が一括して行うため、早くとも明日には正式にアリサは三矢家の養女――――五女となる。末っ子だった詩奈からすれば、妹が増えた形となる。

なお、会談の後に詩奈が姿を見せ、アリサと早速仲良くなっていた。侍郎はアリサに対して緊張するような素振りを見せたことに詩奈が頬を少し膨らませて侍郎の尻を抓った。既に尻に敷かれている有様に元は頭を抱え、詩歩は娘の逞しさに対して微笑んでいた。

「……悠兄。三矢家って賑やかだね」

「そんな風に言えるのはミーナぐらいだと思う」

そして、剛三との通信では若々しい剛三の姿に遠上家全員が唖然とし、アリサは歴史の教科書に載っている英雄と話していることに興奮していた。

アリサの大物ぶりと、遠上家から感じる忘れかけていた常識外れの感覚を思い出し、いつの間にか常識の範疇がマヒしていたことに改めて気づいた悠元であった。

対価の程度が分からない護衛

現代魔法の起点が１９９９年。その後、各国が鎬を削るように魔法技能の研究に明け暮れた。無論、人道的に憚られる研究も進められる中、寒冷化現象による食糧不足を発端とした世界群発戦争。

これにより、アフリカと南アメリカ大陸の国家が軒並み崩壊することになったわけだが、アフリカの鉱山資源を狙った理由の一つに魔法の触媒として宝石を用いることがあるため、とも考えられる。

その事情は一先ず置いておくが、この国の政府は魔法を軍事や外交の道具（ツール）として利用できないか考えた。表向きは〝非核三原則〟に基づく核兵器を封じるための魔法技能の研究。

ただ、第一研で研究していた「有機物干渉」は核兵器そのものを封じるための分野ではなく、相手の殺傷も視野に入れたもので、一花家が数字落ち（エクストラ）の憂き目に遭ったのは、間違いなく『元老院』の差し金があったとみられる。

一条家の『爆裂』が許されて、一花家の『生体干渉』が許されないというのは待遇の整合性が取れないため、表向きは佐渡侵攻での協力の姿勢に基づく処遇とされた。

だが、当時の佐渡侵攻は一条家が〝単独〟で当時国防陸軍の北陸方面司令官だった酒井大佐に掛け合って義勇軍を編成出来た。加えて、偶々出合わせた燈也が新ソ連の兵士を倒したことで大きな犠牲を出すことなく退けられた。

いくら魔法師と言えども実戦経験の差は如何し難く、その意味で経験豊富だった一条家が音頭を取ったのは自然の流れだし、一花家に実戦経験のある人間がいなかったのも事実だ。その部分を鑑みずに切り捨てた連中に関しては、剛三からの要請ということで秘密裏に〝消した〟が。

そんな政府の思惑から魔法師を「兵器」ではなく「人間」と位置付けるため、烈は千姫と剛三の提案を受ける形で師族会議を発足させた。

元々は魔法技能師開発研究所の管理も含めて、現代魔法師の基本的

人権の確立と国家権力の横暴を防ぐため、政府――政治的権力から離れた位置で独自の力を保持する。その為にはこの国の魔法師の中で〝最強〟とあらなければならない……これが、十師族を含めた師族会議の本質だ。

戦国時代に例えるなら、政府を民衆の支持を受けた存在――大名とするならば、師族会議はいわば〝公家（くげ）〟のような存在である。表向きの権威と権力は有さないが、政治や軍事・外交といった分野に影響力を持ち、表向きは民間人として経済活動や社会貢献に勤しんでいる。純粋な公家というよりは一般市民とのハイブリッドと言うべきだろう。

公権力を持たないが、公権力を有する人間でも無視することができない存在。日本魔法協会がこの問題を扱うにも荷が重すぎる。魔法師ライセンスに関しても、魔法師の管理という点で生み出された仕組みとはいえ、強制力自体が極めて乏しい。

立ち位置自体が中途半端過ぎる師族会議の責任は本来その原因を生み出した政府が負うべきだが、日和見する国会議員に辟易して、選挙中の野党議員へのリークはかなり多岐に渡った。そのドサクサ紛れに今後敵となりうる与党議員も選挙という正当な手段で落選させた。

だが、それでは足りないと考えている。

まず、師族会議の発足に大きく関わる魔法技能師開発研究所の設立が大体２０３０年代前半に集中しており、寒冷化による食糧事情の悪化だけでなく、この辺りから食糧と耕作地を巡っての戦闘が散発的に発生する。寒冷化が長期化した際、軍事衝突が起きることも想定して研究が加速した。

そして、現十師族の当主の年齢を考えると、最年長は九島家当主九島真言（くどうまこと）が来年の師族会議開催時点で６４歳（２０３３年生まれ）で、最年少は六塚家当主六塚温子（むつづかあつこ）が２９歳（２０６８年生まれ）。

その次に若い八代家当主八代雷蔵（やつしろらいぞう）が３１歳（２０６６年生まれ）の二人を除くと、十師族構成メンバーが大体４０歳代前半から５０歳代半ば――２０４０年代前半から２０５０年半ば生まれで、世界群発

戦争の前から最中に生まれている世代。
要するに、師族会議――――「一」から「十」の名を冠する魔法師の一族は、世界群発戦争の勃発と激化の最中で生まれた「戦争のための魔法師」と見ることが出来る。
戦争終結後、魔法師の育成に国家の施策として取り組むことになるわけだが、ここで問題となったのは人道的な問題である。
流石に第二次大戦のような一方的な裁判とまではいかなかったものの、当時の政府の命令で非人道的な実験を行っていたことが明るみになれば、国際社会からの非難は免れない。それは強化サイキックや強化調整体が飼い殺しとして世間から隠されている要因だ。
そして、それは魔法技能師開発研究所の実験体であった面々（師族二十八家）も同様であった。それらの魔法師開発の闇を明るみに出さないため、政府――――正確には『元老院』が主導する形で国防軍退役少将の九島烈が先頭に立ち、師族会議の発足を宣言した。
更に、『元老院』のメンバーが全て古式魔法の家で構成されている事実は確かで、その大本を辿ると研究所のスポンサーを担っていた家ばかりであった。中には政府の重鎮や大物議員と繋がる者もいて、彼は自ら手を汚すことを嫌っている。こっちの方が公家らしい振舞い方をしている。
武家に仕えた剣豪を祖とする上泉家先代当主の剛三が本気でキレた意味も分かってしまう、というものだ。
自分たちは手を汚したくない。だから自分たちの手足である現代魔法師（へいきし）を使って処理させる。ただ秘密裏に命じただけなので表に出ることはなく、明るみに出せば社会的に抹殺するだけ……正直なところ、最優先で滅ぼすべきは『元老院』なのではないかと思ってしまうほどだ。
『元老院』のメンバーは己の権威と権力に酔っているものばかりだ。多少まともな人間もいるにはいるが、俺は自分で動こうとしない人間に価値など求めていない。
権威や権力をただ振りかざすのはまだしも、実働部分を部下に任せて安全な場所でのうのうとしているなど、元老たちは〝王〟にでも

なった気分でいるのだろうか。仮に八百万の神がそれを認めても、俺は絶対に認めない。殺される覚悟を持たぬ者に人を殺す資格などない、と自分は少なくともそう思っている。

魔法師を『新たな人類』だと宣う魔法結社や過激派の存在に支援しているという噂もある以上、いずれ『元老院』も綺麗に〝掃除〟する腹積もりだ。

その後の古式魔法師の取りまとめを東道家だけに負わせるのは青波が過労死しかねない（将来的に継ぐ幹比古も同じ目に遭いかねない）ため、神楽坂家の分家か『九頭龍』に属する古式魔法の家に協力を求めるつもりだ。

東道青波には既に『元老院』の整理も含めた話をしているが、青波は自分の娘と同い年の少年にその事実を突きつけられ、完全に押し黙った。剛三と千姫の叱責を受けた後だったためか、彼も『元老院』の腐敗という現実に頭を抱えてしまったらしい。

諸外国の日本に対する無自覚の恐怖とこの国の事なかれ主義の気質が〝第二次大戦の悪しき遺産〟だとするなら、『元老院』にしがみ付く老輩は〝世界群発戦争の悪しき遺産〟だ。もうじき２２世紀を迎える以上、未来を害するだけの存在にご退場願わなければ、安心して眠れやしない。

他者同士が争わないと食っていけない存在は前世の創作物であったが、アレに比べれば規模が国内で収まっている。仮に彼らを排除しても問題ないような道筋は既に立てている。その力を示すために、京都の『聖域』を復活させたのだから。尤も、京都の一件は単に周公瑾を追い込んだり『伝統派』を取り込むだけにしたわけではないし、天神様を今一度祀るためでもある。

利用するのは罰が当たりそうだが、きっと道真（みちざね）公もかつての藤原（ふじわらし）氏のような横暴は目に余る行為だと思う。その予兆として、コンペの前日に北野天満宮へ論文コンペの成功祈願をしに行った際、霊的な言葉を耳にした。

――――高みに上りて血を嫌い富を貪りし者、真に許さざる所業也。

この言葉がとても空耳に聞こえず、自分が手を下すよりも先に天神

の祟りが直撃して死亡する人間が出るかもしれない。
実際、嵐山に天満宮の建立を進めた際、『元老院』の中にはそれに反対する輩もいた。曰く「既に京には数多の神仏の施設があり、天満宮の建立は理に適うものではない」と言っていたが、そいつらは周公瑾から利益享受を受けていたことも判明している。
自分が手を下すか、剛三の怒りが落ちて消え去るか、天神様の怒りを受けて家を潰すか……このどれかが早いだけの状態だと気付ければよいが、それに気付こうとする気配もない。権威と権力を有する古式魔法の家が聞いて呆れる、としか言いようがない。
そして、幸か不幸か……周公瑾の持つ知識を取り込めたのは僥倖とも言えた。何せ、彼は剛三が討つと決めた顧傑の弟子。当然、得た知識の中には顧傑から聞き及んだ目的も聞いている。
『四葉家の社会的抹殺』……これを目論んだ時点で、顧傑は有罪（ギルティ）確定である。原作だとレイモンド・クラークがＵＳＮＡ軍で使われなくなった小型ミサイルが紛失した情報を『フリズスキャルヴ』で知り、〝七賢人〟としてリーナにリークしている。
この２日前の時点でＵＳＮＡ統合参謀本部情報部内部監察局は紛失の事実を知るわけだが、問題は保管記録以外のデータ改竄が〝異常なし〟――つまりほぼ完璧だったのだ。
バランス大佐でも難解なこの疑問だが、彼女は議会の有力者が顧傑を利用した、と考えた。だが、それをして得られるメリットは一体何なのかを導き出せずにいた。それは、バランス大佐がＵＳＮＡだけの事情に注視していたからこそ見抜けなかった。
顧傑は自身を追い出した崑崙方院を滅ぼした四葉家を憎んだ。その事情を知っている人間となれば、自ずと絞られる。確かに軍内部の関係者が関与したのかもしれないが、持ち出した形跡の映像が無く、あまつさえデータ改竄までほぼ完璧だった。そんな芸当が出来るのは、情報セキュリティに詳しい人間にしかできない。顧傑が情報セキュリティの分野に詳しくないことは『フリズスキャルヴ』に頼っている時点で明らかだろう。
そして、原作ではこの時点で達也が四葉家の人間であると魔法師社

会に知られることとなった。加えて、達也はパラサイト事件の際、レイモンドに戦略級魔法師『破壊神（ザ・デストロイ）』などと呼ばれたことがある。
達也が四葉の係累だと知る人間、顧傑の目的を知る人間、そしてＵＳＮＡ軍施設のセキュリティをいとも簡単に改竄できる人間……３つの異なる条件に該当しうる人物はただ一人、レイモンドの父親にして『エシェロンⅢ』の開発者の一人であるエドワード・クラークしか有り得ない。
だが、顧傑やエドワード・クラークと言えども計算外の要素があるとすれば、悠元が周公瑾の亡霊を消滅させた引き換えに彼の知識を得たこと。その中には当然僵尸術（きょうしじゅつ）に関するものも含まれているし、師である顧傑の使う術についても把握している。
元々神楽坂家の為に行う仕事だったが、そこに付随する形で〝情報提供〟できるのだから一石二鳥という他ない。
この時点で、顧傑がこれからやろうとしている計画そのものが破綻しているということに顧傑も……エドワード・クラークも気付いていない。出だしから躓かれた顧傑がどういった行動を起こそうが、この国に踏み入れた時点で彼は逃げられないのだから。
ふと思ったが、もしディオーネー計画が発表された場合、気になるのは悠元に対する扱いだ。『トーラス・シルバー』に関する部分は厳重なセキュリティを敷いているし、戦略級魔法師の部分だとＵＳＮＡ関係者で明確に知るのはヴァージニア・バランス大佐とリーナの二人。『エシェロンⅢ』の傍受システムに細工を仕掛けたので、オペレーターか管理者であるエドワード・クラークがこの国の情報を検索した場合、すぐに分かるようになっている。
だが、物事に絶対はない以上、万が一に備えて念には念を入れておく。レイモンド・クラークが悠元を『灼熱と極光のハロウィン』の戦略級魔法師だと知っている以上、エドワード・クラークに伝わらないとも限らない。いや、既に伝わっている前提で四葉家にも一報を入れるべきだろう、と悠元はそう考えた。
◇　◇　◇
西暦２０９６年１２月２８日。四葉家次期当主候補の一人である

津久葉夕歌は八ケ岳編笠山麓にある津久葉家別荘に四輪の自家用車で向かっていた。
四葉本家の慶春会は翌年の元旦。なので、夕歌は当初真夜の述べた護衛を待ってから移動するつもりだった。ところが、母親の津久葉冬歌から29日の移動は危険だと〝警告〟を受けた。
「全く、他の分家当主も困ったものよね……」
なので、夕歌は已む無く予定を繰り上げ、今日別荘に移動した上で31日に四葉本家へ向かう予定となった。護衛を頼み込んでくれた真夜に対してお詫びの連絡を入れると、「そちらは都合を付けましたので、夕歌さんが謝罪なさる必要はありませんよ」と述べ、護衛は別荘に向かわせると伝えられた。
いきなりの予定変更に、夕歌は他の人間すら巻き込んでいる分家当主らに腹が立っていた。
ともあれ、お昼前に別荘へ到着した。すると、夕歌を出迎える形で別荘の前に立っていたのは、スーツを着こなした一人の少年。その少年は夕歌にとって婚約者でもある人物の存在に夕歌は目を見開いた。
「へ？　悠元君？　何でここにいるの？」
「お久しぶりです、夕歌さん。まあ、立ち話だと風邪も引きますので、まずは中に入りましょう」
「あ、うん。そうね」
悠元に導かれるがまま別荘の中に入る夕歌。リビングに通されたところで夕歌はコートを脱いでソファーに座り、悠元は向かい合う形でソファーに座った。
「さて、まず自分がここにいる理由ですが、表向きは夕歌さんの護衛です」
「護衛……あー、成程。御当主様と葉山さんが認めるのも頷けるわね」
真夜と深夜の仲を修復しただけでなく、真夜からはいたく気に入られ、深夜は悠元の愛人兼専属使用人として仕えている。そして、四葉の筆頭執事である葉山からは魔法師としての技量だけでなく悠元の為人を高く評価している。
達也と同格の戦略級魔法師である悠元が護衛というのは、正直夕歌

からすれば「何を対価にすれば成立するの？」と疑惑の目をしていた。強いて挙げるとするならば深雪と夕歌は悠元の婚約者として水面下で指名を受けた身。ただ、その護衛が婚約者であり神楽坂家次期当主という時点で釣り合わないと感じていた。

「で、表ってことは……裏の事情もあるのね？」

「ええ。先月、貢さんが訪れて達也の処遇決定に不満を漏らしていまして、更には神楽坂家に無礼を働きましてね。その場は話にならないと強引に切り上げました」

「……（何してるんですか、貢さんは）」

悠元から伝えられた裏事情の一つがとんでもない爆弾であることに、夕歌は引き攣った笑みを浮かべたほどだった。

悠元の実力は言うに及ばず、彼の現在の実家である神楽坂家に貢が喧嘩を売った形となったということは、神楽坂の腹立ちを収めるために如何なる対価を支払うことになるのか見当もつかない。

「その辺のことは達也にも伝えてありますが……昨晩、九校戦で競技変更を捻じ込んだ酒井大佐の一派に加え、国防陸軍宇治第二補給基地の波多江大尉の部隊に何者かが唆したようで。更には〝予知〟に詳しい魔法師まで使っているようでして」

「……（マズくない？　いや、マジでどうするのよ……）」

夕歌は正直冷や汗が止まらなかった。

九校戦での出来事も先日の周公瑾の件も聞き及んでいる。そのどちらも達也は確かに関与しているが、後片付けを担ったのは主に神楽坂家という事実も知っている。悠元は〝何者か〟という単語を使ったが、話の流れからして四葉の分家当主ら以外に考えられない。

護人・神楽坂家の面子を潰しただけでも大問題なのに、その当事者である悠元の努力を水泡に帰したのだ。悠元が司波家に居候している事実を知るのは一部の人間だが、少なくとも貢が文弥や亜夜子経由で知っていてもおかしくはないはず。

そして、達也を通す形で悠元に依頼したのは四葉家当主こと四葉真夜。悠元の面子を潰すということは、ひいては真夜の面子すら潰すということに等しい。正直、分家当主全員が連帯責任という形で消され

ても文句を言うことは許されない。

下手なアクション映画よりも臨場感がある

悠元の口から述べられた事実に、夕歌は暖かいリビングにいるはずなのに冷や汗が止まらなかった。津久葉家は中立の立場を取っているのでその騒動の処罰対象にはならないだろうが、何らかの責任を負わないとも言えない。それに気付いたのか、悠元は笑みを漏らした。

「夕歌さん。今回の一件に津久葉家が関わっていないことは母もご存じの事です。なので、夕歌さんの婚約を解消するということは絶対にありえません」

「え、あ、うん……でも、どうして悠元君が私の護衛を？」

「四葉分家の傾向と言いますか、彼らが達也を殺そうと目論んだことは爺さんから聞いていまして。深夜さんからも確証を得ているわけですが……深雪が本家に出向くとなれば、その護衛として達也と水波が付くのは自明の理です」

仮に深雪に何かあれば、達也がブチ切れて全てを消し去ってでも四葉本家に出向きかねない。とはいえ、彼でも社会のルールをできる限り遵守するだけの常識は持ち合わせている。なので、強行突破は達也にとって最終手段となる。

「神楽坂家は四葉家のスポンサーですが、四葉の次期当主の決定は四葉家当主の専決事項であり、家内の話です。とはいえ、国防軍の一部が動いている以上は無視も出来ない。そこで、真夜さんにお願いをしたのは、夕歌さんの護衛と四葉家慶賀会に参加される次期当主候補が31日までに全員本家へ到着させるための〝見届け役〟を買って出ることです」

「御当主様の代理として出向く、というのはそういうことね」

「ええ、その通りです」

いくら四葉分家の人間が直接出てきたとしても、本家当主の代理人がいる以上は下手な真似など出来ない。ましてや、魔法技術においては世界屈指の戦略級魔法師が務めるのだ。

実力面において彼に肉薄できる相手という意味では達也しか彼を止められない、という事実に夕歌は乾いた笑みを零してしまった。

「ちなみにだけど、四葉家がそれを受けることへの対価は？」
「真夜さんに一任しました。今回はこちらの〝我が侭〟でお願いしたことですし、元々コンペの前に葉山さんへ打診していたことですから」
「そ、そう……（2ヶ月以上前から想定していただなんて……多分、御当主様が内密に悠元君へ相談していたのかもしれないわね）」
　そして、達也らと出会う際には九島家の秘術である『仮装行列（パレード）』で髪と瞳の色を変え、ビジネスネームの名字を用いる形で「神坂（かみさか）」という野良（フリー）の魔法師という体で動くことも夕歌に伝えられた。
「それじゃ、時間もありますので魔法訓練の習熟度合いを見ましょうか」
「こ、これから？　……大丈夫かしら？」
「一体何を想像したのですか」
「な、何でもないわ！　……興味ある？」
　今ハッキリと魔法訓練という単語を使ったのに、自身の匂いを気にしている夕歌に対して悠元は内心で盛大な溜息を吐いた。悠元のある意味辛辣な言葉に対し、夕歌は頬を赤らめて慌てて取り繕いつつも誘惑を仄めかす様な仕草を見せた。
　これに対して、悠元の取った行動は……夕歌の身体をまるで米袋を担ぐように肩に乗せた。
「え、ちょっと!?」
「今日はビシバシ行きましょうか」
「え、激しくしてくれるの？」
「ちょっと何を言っているのか分からないですねえ」
　それはそれ、これはこれといった感じで、悠元はそのまま別荘のリビングを出た……もちろん、魔法訓練の為に。気が付くとお互いに軽い口調となっているのは、悠元も夕歌も互いに気を許しているからこそではあるが。
◇　◇　◇
　普段ならいるであろう別荘の使用人はおらず、悠元がその辺の切り盛りを担うことになっていた。普通なら複数人必要な家事のオート

メーションを悠元は手元にある折り畳み型端末で操作しつつ、夕食の準備に取り掛かっていた。
そして、普段なら自分でやる家事を執事用の制服に着替えた悠元がこなしていることに、夕歌はジト目を向けていた。
「……手慣れ過ぎじゃない？」
「そうは言いましても、上泉家だと門下生の分も含めて１００人以上の食事の支度やら洗濯もありますし、浴室の清掃も持ち回りでしたので、こういったところは自ずと慣れました」
三矢家では主に３Ｈや家事のオートメーションを使うことが多かったし、上泉家や矢車家では門下生の食事の支度などもあったりして大忙しであった。
なお、自分が暇つぶしに漬けていた松前漬けっぽいものが割りと好評で、曰く「食べると疲れ知らずで動ける」とか「鍛錬が楽しくなった」とかの感想が出ていた。言っておくが、法に触れるものは一切使っていないし、精々やったことといえば、漬物樽を一から自作したことと、手頃な石が無かったので態々富士の樹海から調達したぐらいだ。
閑話休題。
そうして夕食を食べることになったのだが、食後に夕歌はこう述べた。
「深雪さんと水波ちゃんが悠元君に包丁を握らせたくない理由が分かるわ」
「ええ……」
不味い訳ではない。美味しいのは間違いない。ただ、これだけのレベルのものをあっさり作ってしまわれると、何故だか女性として悔しい気分にさせられるのだ。この辺の話は司波家へ出向いた際に深雪から聞き及んでいたが、こうして目の当たりにすると本当に納得がいかない、と思ってしまった。
尤も、それを言われた当人は納得しがたい表情を浮かべていた。
「そしたら、私の背中を流した上で一緒に寝なさい。それで許してあげるわ」

「司波家に来てやってることと変わりない気がしますが」
「折角の機会を逃すほど、私は甘くないもの」
独占したい、などと夕歌は思っていない。深雪のことを鑑みると、現状のペースで構ってくれれば文句などない。というか、週に一度の関わりだけでも濃密なため、あれだけのことをしてちゃんと回避できているのが逆に不思議なくらいであった。
そういう魔法がある、とだけ聞かされてはいるが、夕歌以上に付き合いの長い深雪が未だに〝そうなっていない〟ということからして間違いないのだろう。それによって序列順に関係なく横一線の為、トラブルが事前に回避できているのだと夕歌は考えた。
「それに、私の護衛をするのだから、悠元君はそれぐらい美味しい思いをしなきゃダメよ」
「そういうものなのですか？」
「そういうものよ」
夕歌も厄介事に首を突っ込む覚悟はあるということ。このまま本家へ向かえば他の四葉分家の妨害を受けずに済むというのに、そうしない選択肢を選んだようだ。
ともあれ、今は夕歌の護衛という役目を果たすべく、悠元も夕歌の指示に従ったのだった。

◇　◇　◇

翌朝、夕歌よりも早く目が覚めた悠元は起こさないようにベッドから抜け出し、手早く着替えた上で朝食の準備をしていく。近くに置かれた折りたたみ型端末――南盾島での作戦の際に使ったものと同じだがいくつかのアップデートを行っているが――には『八咫鏡（ヤタノカガミ）』から得られた国防軍の動きが映し出されている。
（松本で管理されてるはずの強化超能力者（サイキック）が小渕沢駅から四葉本家に向かう道中に潜伏している……関与していると思しき人物は……矢口中尉、対大亜連合強硬派の派閥に属していた人間か。大方、酒井大佐の釈放を目的として深雪を人質にでも取るつもりだろうな）
あそこで管理されている強化サイキックの能力を高めに考慮しても、原作より強化された達也ならば問題ない。それに、クリスマス

パーティーの前日は司波家でパーティーに参加できない詫びとして達也に術式提供を行っている。
『バリオン・ランス』の最終調整に加えて、より実戦的な達也の能力を生かせる並行思考操作対応円環形特化型ＣＡＤ『シルバートーラス・デルタ』を渡している。これは原作で使っている『シルバートーラス』ではスペック不足だと思って開発したもので、達也が得意とする『分解』『再成』系統に加えて無系統魔法である『術式解体（グラム・デモリッション）』や『術式解散（グラム・ディスパージョン）』の展開補助を担っている。
加えて、水波の持つ術式ならば、相手がいくら魔法式の同時展開による相克を起こそうとも問題ない様に仕上がっている。
すると、寝間着姿の夕歌が瞼を擦りながら姿を見せたので、コップに水を入れて渡すと夕歌はそれを一気に飲み干した。
「おはよう、悠元君。朝早いわね」
「おはようございます夕歌さん。朝が早いのは武術を学んでた名残ですよ」
そして、そのまま朝食を食した後、家事をこなしながら端末を見ている悠元の様子が気に掛かり、私服に着替えた夕歌は暇つぶしに読んでいた書籍を肘掛けに置いて立ち上がり、悠元の後ろから覗き込むように観察していた。
「悠元君、その端末に映っているのは何かしら？」
「これですか？　ちょっと軍事的機密も入ってますが、小渕沢駅を起点とした人の動きを観察しています」
「……成層圏プラットホームの監視カメラの映像を使ってるの？」
「いえ、これは俺の固有魔法で可能としていることです」
概念干渉魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』。自分は最初、この魔法を知覚系魔法だと思い込んで使用していた。何せ、四葉本家を見ることに成功したため、そう思い込んでいたのだ。いくら知覚系魔法でも見破れないものがあると思っていたが、限界が存在しない上に、本来触媒などを用いないと知覚しない筈の霊子（プシオン）を見ることが出来たのだ。
それから様々な実験をした結果、この魔法が〝概念〟に干渉しうる魔法と判明したのだ。

「悠元君の固有魔法……達也さんの魔法とは違うのかしら？」
「達也の魔法は軍事的なものもあって知っていますが、俺の持っている魔法は特殊ですので」
　元来、先天的に備わる魔法は魔法演算領域を占有するのが一般的な常識とされている。だが、自分の場合は転生というワンクッションを挟んで疑似的な先天性を獲得し、『万華鏡（カレイドスコープ）』と『領域強化（リインフォース）』を得ている。
　そして、『万華鏡（カレイドスコープ）』の持つ〝概念干渉〟と『領域強化（リインフォース）』の持つ〝肉体と精神の領域拡張・強化〟が相互に干渉しあい、結果として二つの固有魔法を扱うための魔法演算領域が生来持っている魔法演算領域とは別に形成された。この事象を煮詰めたところ、肉体の成長に合わせて精神も成長し、あらゆる経験を積むことによって精神領域が拡張することも判明した。
「実を言うと、固有魔法のことは2人にも話していないんです。なので、これを機に明かそうとは思っていますが……達也あたりは気付いているかもしれませんけど」
「意外ね……てっきり話しているものだと思ったけど」
「純粋に忘れてたんですよ」
　深夜と五輪澪を治療したことは達也も聞き及んでいるが、現代魔法では解決が難しい魔法治療となると、達也も悠元が固有魔法を持っていることに気付いている可能性はある。居候してから明かさなかったのは、単に学校生活やらトラブルやらで時間が割かれ、更には魔法訓練やら魔法の開発が楽しくて肝心なことを言い忘れていたのだ。
「夕歌さんには先に話しますが、俺は2つの固有魔法を持っています。一つは『万華鏡（カレイドスコープ）』。現代魔法の分類では系統外魔法となり、概念干渉を可能とした魔法です」
「が、概念の干渉って……じゃあ、あらゆるものを無かったことに出来たり、実在したりすることはできるの？」
「可能だと思いますが、試したことはありません。違和感に気付かれて魔法がバレるのは嫌でしたので」
　折りたたみ型端末には、個別電車（キャビネット）で長野方面に向かっている人の存

在が察知された。キャビネットはその性質上、搭乗している乗員のデータを身分証明のＩＣチップで管理しており、その電車に乗っているのは達也と深雪、水波のパーソナルデータが表示された。
「この端末はインターネットを一切通していません。成層圏や衛星軌道上にある世界各国の人工衛星から送られているデータを直接傍受することで、詳細なデータを得ることが出来ています。どうやら、達也たちが小渕沢に着いたようですので……画面を切り替えましょうか」
　ちょうど紅茶の準備も整ったので、悠元はトレイと折りたたみ型端末を器用に持って移動を始めたので、夕歌もそれに続く形でついていく。
　リビングに移動してトレイを置いてから端末をテーブルに置き、予め温めていたカップに紅茶を注ぐと、夕歌に手渡した。悠元の場合は砂糖とミルクを入れてミルクティーにした上で口を付けつつ、端末を操作する。
　すると、端末の真上に複数の仮想モニターが表示され、あらゆる視点から達也らの様子が見れることに夕歌が驚きを隠せなかった。
「こ、ここまで出来るの？　カメラでもついているの？」
「いえ、ついてません。自分の魔法だからこそできる所業ですが」
（……こんなことされたら、完全に行動が筒抜けじゃない）
　気配や存在の察知に敏感な達也が気付いていないとなると、悠元の固有魔法の凄さが身にしみて感じられる、と夕歌は内心でそう呟いた。
　そうして迎えの車に乗り込んだ達也らだが、四葉本家に向かう道路を走ること１０分後、迎えの車の前後にいる配達業者の車からグレネードが放たれる。水波の障壁展開を予測してのものなのか、１１個の魔法式が車を取り囲むように展開された。
「１１個同時に？　かなりの手練れね」
「まあ、普通の魔法師ならこれで一発アウトですが」
「そうね、普通ならそうなんだけど」
　すると、グレネード弾が分解されて車の周辺に落下、相克を起こし

ている魔法式も難なく解除された。これでは強行突破するのも無理だと判断したのか、車は町の方へとUターンするが、その折に誰かが車から飛び出す。服装からして達也だというのはすぐに分かった。
　達也は向けられる銃を分解し、タイヤのナットを分解することで脱輪させ、深雪と水波への追跡を阻止した。相手は近くにいる達也にターゲットを定め、近接戦闘用ナイフで襲い掛かる。
「達也さんも無茶するわね……って、あの動きはまさか人造サイキック!?」
「致死量にも達する電力量の帯電と、慣性を無視した自己加速術式……達也の敵になり得ませんね」
　電気を扱うという意味では服部の『這い寄る雷蛇（スリザリン・サンダース）』や光宣の『スパーク』に軍配が上がるし、自己加速領域で肉体と得物を自在に制御できる意味では由夢やエリカ、それと剛三の方が更に強い。
　尤も、剛三の場合は慣性を無視するどころか本来描かれる斬撃の軌道自体がおかしいのだ。昨年剛三の鍛錬を受けたエリカ曰く「常識を何もかも無視した斬撃なんておかしいとしか言えない」とのこと。
　そんな論外レベルの動きを知っているからこそ、強化サイキックの動きを〝甘い〟と思う訳だが、達也は歯牙にもかけないレベルであっさりとサイキックを次々と圧倒していく。極力『分解』を使わずに倒していくのは達也なりの優しさなのかもしれない。
「……何か、下手なアクション映画を見るよりは迫力があったけれど、達也さんの実力の一端が見れただけでも良しとしなきゃね。ただ、この様子だと明日も襲撃を受けそうね」
「そうですね。今度は通常火器に加えてＥＭＰ爆弾でも持ち込んでくるかもしれませんね」
「え？」
　達也の今回の相手は、松本の軍施設で軟禁されている筈の強化サイキックだけであり、宇治の部隊は確認できなかった。更に警察まで動いているとなると、貢が直接関与していなくとも、黒羽の人間が関与しているのは間違いないだろう。四葉の分家の中で警察のコネが結構あるのは諜報を担う黒羽家が筆頭候補に挙げられるためだ。

宇治の部隊は先日の襲撃でセリアによるＥＭＰ攻撃（戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』と電磁波収束魔法『ガングニール』）をかなり受けており、その対策としてＥＭＰ爆弾が配備されたと聞いている。なので、それが用いられる可能性は十分考えられる。

結局、達也は警察が来たのを察してそのまま小渕沢駅に戻り、深雪や水波と合流してそのまま東京へと帰ったことを確認したので、悠元は仮想モニターの展開を解除したのだった。

騙して悪いが、これも仕事なのでね

夕食は夕歌が準備することになった。彼女曰く「あのまま勝ち逃げされるのは納得いかないのよ」と言ったが、悠元は別に勝ち逃げとかの損得勘定を持ち込むつもりなどなかった。それでも、夕歌からすれば女性として……将来の妻の一人として引き下がったままではいられなかった。

その結果、夕歌自身も今までにない程の出来栄えの料理が完成していた。

「美味しいですね。一人暮らしで鍛えられた感じですか？」

「そ、そうね……何でここまで上手く出来たのか自分でも不思議なぐらいだけど」

魔法師としてのライバルはいても、女性の心を擽るような存在は今までにいなかったせいかもしれない。だが、そんな存在が現れたのだ……それも恋焦がれる男性というオマケつき。向上心というのはそう簡単に湧き上がるものではないが。

「夕食を終えたら、ＣＡＤの調整をしましょうか」

「……なら、お願いしようかしら。でも、ちゃんとシャワーを浴びてからにしたいんだけど」

「そこはお任せしますよ」

別荘の地下室にはいくつかの設備があり、司波家の地下室にあるタイプのＣＡＤ調整機が置かれていた。悠元がテキパキと調整機の立ち上げを済ませたところで、バスローブ姿の夕歌がＣＡＤを手にして入ってきた。

「な、何だか緊張するわね。悠元君は平然としてるけど」

「いや、これでも興奮しないようにしてるだけですよ……何故抱き着くんですか」

「んー、誘惑？」

「そういうのはいいですから」

夕歌からＣＡＤを受け取って台座にセットする。そのＣＡＤは今年発売した『シルバーブロッサム』シリーズの最新型。カバー部分が

照準補助アンテナとなっているタイプで、照準補助システムを汎用型ＣＡＤに組み込む仕組みは昨年の九校戦において雫が使用したデバイスのシステムを使用している。
　悠元に軽くあしらわれたことに対して夕歌は頬を軽く膨らませるが、仕方が無いと悠元から離れてバスローブを脱ぐと、彼女は黒い下着を身に付けていた。そして、恥ずかしそうに下着を覆う様な形で手で隠しつつ立っていた。
「そ、その、変じゃない？」
「十分魅力的ですが、今は調整をするのが先です」
「……今日は、離してあげないんだからね」
　明らかに「襲う」と言いたげな言葉を聞き流しつつ、夕歌が調整機に横になったことを確認した上で悠元は調整を始める。
　実を言うと、夕歌の調整に立ち会うのはこれが初めてではない。司波家で夕歌のＣＡＤ調整を達也が担当した際、悠元も調整できるという話を達也がしたため、その次からは夕歌から頼まれることが多くなった。
　これには深雪も不満げだったが、達也が宥めたのもあって深雪から調整を頼まれることは避けられた。何せ、その時点で雫と姫梨、セリアのＣＡＤ調整を担当していただけでなく、文弥や亜夜子のＣＡＤのハードウェア調整（本格的な調整は達也が担っている）まで関わっているため、深雪もこれ以上の負担を強いるのは不本意だと判断した。
　術式自体の調整は前回までに終えているため、今回は単に想子波計測データに基づく微調整とハードウェアの定期点検だけだ。調整自体は３分程度で終わり、悠元がＣＡＤを取り出して立ち上がった上で声を掛けた。
「夕歌さん、終わりましたよ」
「あ、うん。ホント仕事が早いわね」
「これでも達也には速度で負けますけど」
「いや、私から見ればほとんど差が感じられなかったけど」
　夕歌はバスローブを着て立ち上がり、ＣＡＤを受け取った上で悠元にそのまま抱き着いた。これは離す気が無いと判断して、悠元はその

まま夕歌を抱きしめた。すると、夕歌はそのまま悠元の唇に自身の唇を重ねた。
「んっ……今日は私がリードするんだから、覚悟しなさい」
「分かりました。それじゃあ、任せますか」
「え、きゃっ、ちょっと！」
どう足掻いてもこれから来ることは避けられないと判断し、悠元は夕歌をお姫様抱っこしていた。いきなりの行動に夕歌は思わず悠元の首に手を回す感じで抱きしめた。
こういう思い切りの良さもそうだが、いつもは誘惑してもサラッと流す態度とのギャップもあって、絶妙に女性としての心を揺さぶってくる。その心地よさが夕歌にとっては心地よく感じていた。
「あ、歩けるから！」
「じゃあ、今日は止めます？」
「そ、それは嫌！　私をこんな風にしたのは悠元君なんだから、最後までしないと……満足するまで離してあげない」
「……畏まりました、夕歌お嬢様」
いつから自分はこんな我が侭になったのだろう。自身のガーディアンが死んだときは特に湧き上がる感情などなかったが、悠元と本格的に関わるようになってから、夕歌の中で寂しさにも似た喪失感を時折感じるようになった。
この後、地下室から夕歌の部屋に移動した後、何が起きたのかというと……夜間の訓練（意味深）が発生した。なお、夕歌の最終防衛ラインは絶対死守されている（悠元が踏み込まないように対応している）のは相変わらずだが。
「……私がリードするつもりだったのに、悠元君はズルいのよ」
「何の理由もなしにズルいなどといわれても納得できかねますが。あと痛いです」
翌朝（西暦２０９６年１２月３０日）、目を覚ました夕歌はタオルで体を隠すようにしつつ悠元の背中を抓り、悠元はその痛みを自覚しつつも、夕歌の言葉に対して率直な感想を述べたのだった。
朝食を済ませ、夕歌は私服にコートを着込んで外出の準備を整えて

いた。一方の悠元は特注のライディングスーツに着替え、準備は既に万端だった。悠元は夕歌にレシーバーを差し出した。
「これは自分の通信機に直接連絡できるタイプのものです。夕歌さんに渡しておきます」
「受け取るけど、悠元君は一緒に乗らないの？　それぐらいの余裕ならあるわよ？」
「自分は二輪で移動しますし、達也たちを乗せるので丁度いいかと」
「まあ、それもそうね」
　夕歌も自分が運転している四輪の自家用車に乗せられる人数を考えれば、四人は乗せられなくもないが、後部座席に余裕がなくなる。そして、悠元は二輪に乗ってきているという言葉からすれば、これが一番効率的だろうと考えた。
　別荘の前に出ると、漆黒のカラーリングの二輪車が止まっており、市販されているタイプではなくかなり改造されているものだとすぐに分かった。路面が凍結する冬の時期に二輪車は危険だが、ここまで無事故でこれたとなると路面対策もされていると考えられる。
　そんな風に考えている夕歌を横目に、悠元は『ワルキューレ』をメーター横のホルダーに差し込み、二輪のイグニッションキーを押してエンジンを始動させると、閉じた状態の折りたたみ型端末をタンク横のスペースに差し込む。すると、バイクのメーター上部に仮想モニターが表示され、悠元はレシーバーを付けた上でヘルメットをかぶる。
「ねえ、悠元君。そのバイクってどう見ても特注品よね。どこで調達したの？」
「答えるのは簡単ですが……聞きたいです？」
「……止めておくわ」
　この二輪車は司波家にある私用の為のものではなく、軍事行動を目的としたもの。元々は特撮もののバイクがカッコよくて色々魔改造を施した結果、自分専用の軍事用バイク『ドレッドノート』になってしまったというオチだ。なお、名前の由来は前世でハマっていたゲームから名付けた。
　このバイクの機能の一つとして『フリクション・ドライバー』が搭

載されていて、これはフレーム下部に取り付けられた想子波照射レーダーで路面の摩擦係数を計測し、電気から変換されたサイオンを刻印型魔法陣に流し込むことで、意図的に地面の摩擦係数を上げることで夏季の乾燥した路面状態と何ら変わりなく運転操作できる仕組みだ。
セキュリティ部分は『ワルキューレ』を差し込まないとエンジン始動はおろかタイヤロックまでかかるため、持出は実質的に不可能。登録上は独立魔装大隊所有の軍用車で、普段は神楽坂本家のガレージで厳重に保管しているが、今回の為に引っ張り出してきた。
夕歌に渡したレシーバーとのペアリングを済ませつつモニターの情報をチェックしていると、達也たちの乗る電車が小渕沢を通り過ぎ、長坂白井沢（ながさかしろいざわ）に降りる情報をキャッチした。
「夕歌さん、達也たちは長坂白井沢で降りて本家に向かうようですが、どうします？」
『そうね……待ち伏せていると思しき部隊は？』
「昨日の場所からそう遠くはありませんが……昨日も言いましたが、ＥＭＰ爆弾を所持している可能性があります」
自分の乗る『ドレッドノート』はＥＭＰ対策を済ませているが、夕歌の乗る自家用車が無事に済むという保証はない。なので、達也らの進行方向で一応伏せつつ、戦闘が収まったタイミングで夕歌が深雪に連絡をして回収するのが筋だろう。
『本家からの送迎の車がＥＭＰ対策をしていないとは思えないんだけど』
「意図的にＥＭＰ対策のシステムを切られたり抜かれていたりしたら、流石の運転手も察知するのが難しいでしょう。流石に運転手がグルとは思えませんが、万が一に備えて動くのが最善です」
『分かったわ。合流のタイミングは頼むわね』
「了解です」
夕歌からの返事を聞いた上で、『仮装行列（パレード）』を発動して銀髪灰眼の姿へと変える。そして、『ドレッドノート』に先導する形で夕歌の自家用車も別荘から出発した。
達也らを乗せた本家への車が通る予想ルートを辿る形で走行して

いると、そのルート上にヘリとトレーラーの存在を感知。更に、モニターには解析結果まで瞬時に表示され、ヘリの所有が国防陸軍宇治第二補給基地に配備されたものと判明し、トレーラーの中にいる部隊は間違いなく波多江大尉の部隊であるとすぐに判明した。

合流までにかかる時間は達也が部隊を片付け切るぐらいの時間で収まるが……すると、悠元のモニターには警察が達也らの方面に向かっているのを確認した。警察に捕まるのも面倒なため、音声フィルターを通す形で警察無線に割り込んで指示を飛ばした。

「連絡、犯人は諏訪方面に逃亡した模様。近隣の警官は至急応援を要請する……騙すのは不本意だが、下手に捕まって時間を稼がれるのは御免なんでな」

その気になれば皇宮警察本部特務隊『神将会』の名を出すことは出来るが、一介の警察官に説明している時間が惜しい。そうして現場に着くと戦闘自体は既に決している模様だった。達也らに加えて運転手と思しき気配が自走車――――四葉本家からの送迎の車のあたりに集まっているのが分かる。

『悠元君、トレーラーをどかせる？』

「それは大丈夫です」

悠元は兵器開発部での仕事上、レリックの運搬を行うために自ら車両を動かすこともあったため、あらゆる車両の運転免許を取得している。悠元はヘルメットを着けたままトレーラーを後退させると、トレーラーが動いていることに警戒はしたものの、夕歌の乗る自家用車を見て少し警戒を解いていた。

どうやら、悠元がバイクを降りてトレーラーを動かしている間に深雪へ連絡を取っていたようだ。達也らが夕歌の自家用車に乗り込んで走り出すのを確認すると、悠元も『ドレッドノート』に乗って夕歌たちを追う形でその場を去った。

運転手には気の毒だが、自力で何とか帰って欲しいと願うことしかできなかったのだった。

◇　◇　◇

悠元は『ドレッドノート』をガレージに入れた上で『ワルキューレ』

と折りたたみ型端末を手に取り、そのまま客室に上がって手早くスーツに着替えると、予め準備していた紅茶とコーヒーが入ったポッドと空のカップを持って達也らがいるリビングに姿を見せた。
「失礼します。紅茶とコーヒーをお持ちしました」
「……ええ。ありがとう、神坂さん。あとは自分でするわ」
「畏まりました」
夕歌は別荘にコーヒーなど置いてなかった筈だと知っており、間違いなく悠元が持ち込んだものだと察した上で、使用人と同じように接する。下手に長居すると宜しくないと思い、悠元も夕歌の言葉を聞いた上でリビングから去った。
そこまでは良かったのだが、背後から聞こえてくる声に反応して振り向くと、そこには疲れた表情をしている達也の姿があった。
「――すみません、少しよろしいですか？」
「おや、確か司波達也様でしたか。私のような若輩者に何か御用でしょうか？」
「はぁ……何をしているんだ、悠元」
「……まあ、達也はリーナや光宣の『仮装行列（パレード）』を見てるから分かったのかな？」
「それもあるが、気配を偽る感覚が九校戦のものと一緒だったからな」
達也は『仮装行列（パレード）』と気配隠蔽の感覚が身に覚えのあるものだったため、直ぐに気付いたようだ。声は少し低めに喋っていたが、それでも直ぐに分かった達也に対して悠元は魔法を解除することなく言葉遣いだけ崩した。
深雪と水波は夕歌と話をしているので、今すぐ達也を追いかけることはしないと判断して悠元は説明を始める。
「俺がこんな回りくどいことをしてるのは、表向きは夕歌さんの護衛だ。その実は慶春会に深雪を含めた次期当主候補全員が明日までに揃うための〝見届け役〟――四葉家当主の代理人も兼ねてる」
「叔母上の代理人を悠元が……いや、納得できる話だな」
神楽坂家がいくら四葉家と関わりを持とうとも、各々別の家である以上は家内のことに対して下手に干渉できない。だが、悠元の魔法は

真夜の『流星群（ミーティア・ライン）』をアレンジしたのものも含まれていて、真夜が悠元をいたく気に入っているのは間違いない。
　それに、真夜のプライベートの世話を担う葉山も高く評価している人間だからこそ、四葉家当主の代理人という立場を任せられるという訳だ。
「ようするに、夕歌さんだけでなく深雪の護衛も兼ねられる立場という訳か」
「そういう解釈で助かる。ただ、表向きの関与じゃないから、このことを知ってるのは本家でもごく一部の人間だけ。なので、深雪や水波には言わないで欲しい」
「分かった。だが、何でもかんでも一人で背負うなよ。深雪のストッパーも楽じゃないからな」
　悠元の説明に納得したのか、達也はそういい含めてリビングに戻った。自覚はしているが、達也がそれを言うのはまさしく「お前が言うな」になると思ってしまう悠元であった。

◇　◇　◇

　その日の夜、四葉本家の真夜の私室では、真夜が葉山から深雪に関する報告を受けていた。
「深雪様は本日も襲撃を受けられたとのこと。今晩は津久葉家の別荘で一泊なさるそうです」
「……困った人たちね。でも、〝掃除〟は済んだのでしょう？」
「ええ。対大亜連合強硬派および対大亜連合宥和派・反十師族グループは大きく勢力を削り、花菱（はなびし）も手間が少なく済んだ、と報告を受けております」
　津久葉家の別荘には夕歌の護衛という形で悠元がいる。そこに深雪と達也、水波が合流したということは、この国において最大級の戦力が合従したも同じ。人造サイキックのことはそこまで気にしていないが、九校戦での一件や周公瑾の件に関わっていた勢力に肘鉄を撃ち込めたのだから御の字である、と真夜は判断した。
「ただ、分家当主の方々にも困ったものね。そう思わない？」
「仰る通りにてございます。分家の方々は達也殿の力を過小評価して

いるようですが」
「その考え方が根本的に間違いなのよね。しかも、悠君との関わりで強くなってるみたいだし」
『分解』と『再成』だけでも十分に強い達也だが、悠元と関わることによって更に強くなっており、達也が使う魔法の一部は悠元から術式の提供を受けている。まだ達也が本家を覆う結界を強引に突破してこないことが奇跡的である、と真夜は思いつつも空のカップを差し出すと、葉山はポッドのお茶をカップに注ぐ。
「正直なところ、悠君が夕歌さんの護衛だけでなく深雪さんの護衛と案内まで担う形になったのよ。悠君には報酬の如何を任されたけど、何を報酬にするべきか悩むわね……いっそのこと、私自身が報酬になろうかしら」
「畏れながら、深夜様と深雪様がご不満に思われるかと」
「ふふ、半分冗談で言ってみただけですよ、葉山さん」
半分本気で言っている、という真夜の言葉に対し、葉山は真夜が悪戯めいた笑みを零しているのを見て、半分どころかほぼ本気で言っていたのだと察しつつ、女性としての振る舞いを見せる自分の主にどこか親心のようなものを垣間見せていたのだった。

矢面に立つ埒外

今回の報酬を「自分自身」と発言した主に対して葉山は窘めると、真夜は笑みを零しつつカップにはいった茶を口にする。その味を確かめるように嗜んだ上で真夜が言葉を続けた。

「達也さんは分家の方々の動向なんてあまり気にしないでしょうけれど、今回の一件は神楽坂家の――――悠君の働きを無に帰すような行い。正直、慶春会で首謀者が消されても私にはどうすることも出来やしないわ」

九校戦のパラサイドールにしろ、周公瑾の討伐にしろ、悠元の働きによって想定よりも遥かに少ない労力を割くことで決着することが出来た。そのことは四葉の分家当主達にも正確な情報を渡しており、その意味が分からないはずなどないのだ。

あまり勘繰りたくはないが、分家当主らが七草家と内通している疑念を疑ってしまいたくなると思慮する真夜に対し、それを察した葉山が声を発した。

「奥様、分家当主の方々と七草家が共謀されているとお考えなのですか？」

「万に一つもないただの空想ですが、私がやろうとしていることの邪魔をしているんですもの。そう勘繰りたくならないかしら？」

「そう仰りたい心情は察しますが、流石に言い過ぎではないかと。少なくとも文弥殿と亜夜子殿は悠元殿に協力的でもあります」

「達也さんに並ぶぐらい頼りになる人ですもの。とりわけ亜夜子ちゃんは悠君のことを兄のように思っているみたいですし」

悠元と亜夜子に恋愛感情はないが、亜夜子からすれば悠元は恩人であり、自分の恋路を応援してくれる人。文弥から見れば、悠元は男らしく見えるらしく、尊敬すべき人として見ている。そのことは真夜も無論知っており、黒羽家に関しては何とかなるかもしれない。

「ところで奥様、二つほどお伺いしたいことがございます」

「あら、葉山さんが質問なんて珍しいわね。構いませんよ」

「では……深雪様と夕歌様の婚約を本人たちに言及されなかったの

は、何か理由がおありなのでしょうか？」
　神楽坂家の次期当主の婚約者として既に深雪と夕歌が内定している。彼女たちの恋愛感情を鑑みれば妥当だし、深雪に至っては居候の立場ということもあって悠元と深い関係になっているのも気付いている。
　だが、真夜は深雪と夕歌の婚約に関しては今まで言及を避け続けてきた。その意図を尋ねた葉山に対し、カップをテーブルに置いた上で真夜が話し始める。
「深雪さんは四葉の次期当主候補において筆頭と目される。それも、分家当主の方々や使用人たちにも好意的に思われている以上、間違いない事実でしょう」
「深雪様を外に出すとなれば、反発は避けられないと？」
「少なからず出るでしょうね。それに、私がこれからしようとしていることからしても、まず四葉の家内を引き締めることが肝要。その意味で深雪さんにも協力してもらう必要があるもの」
　神楽坂家に深雪を嫁がせるため、家内の足並みを揃えなければ四葉家としての面子が立たない。そして、真夜がこれを期に実行しようとしていることを鑑みれば、深雪の協力が必要不可欠となる。その一手に最大限の効力を発揮させる意味で、慶春会はまたとない機会だと真夜は睨んでいる。
「つまり、夕歌様の婚約を発表しなかったのも、深雪様と揃えるためですな？」
「夕歌さんを先に発表したら、深雪さんが嫉妬して都心が氷の世界になってしまいますもの」
「氷解しました。では……勝成殿は如何なさいますか？」
　葉山が述べたのは、次期当主候補の一人である新発田勝成（しばたかつしげ）が達也らを妨害するという懸念であった。
　妨害自体が問題というよりも、当主の代理人である悠元が同行している状態で妨害することにより、悠元が矢面に立つことで起こる問題を葉山は懸念した。その懸念は尤も、と軽く頷きつつ真夜はこう述べた。

「その予測は悠君自身もしておりましたし、そうなったらなったで勝成さんを引き込める算段も付く、と述べていましたから、恐らく琴鳴さんと奏太さんを〝治して〟しまうかと」
「成程。確か、新発田家には六塚殿の弟殿が居候しておりましたな」
六塚燈也が新発田家で居候している事実は真夜も把握しており、六塚家当主が真夜に好意的なのは師族会議でのやりとりや季節の挨拶を律儀に貰っていることからも理解していた。それに、燈也と悠元が元クラスメイトである点を考えれば、琴鳴と奏太のことを聞いていてもおかしくはないだろう。

◇　◇　◇

翌日――――西暦２０９６年１２月３１日。連日の妨害を考えれば今日も何かしらの妨害があると考え、悠元は朝早くから『ドレッドノート』の準備をガレージで進めていた。すると、同じことを考えていた達也が姿を見せた。
近くに深雪や水波の気配はいないことを確認した上で、普段の言葉遣いで話しかける。
「おや、達也。おはよう」
「おはよう、悠元。その二輪はかなり手が入っているようだが」
「一応独立魔装大隊管轄の軍用車的な扱いだよ。まあ、操縦も整備も俺にしかできないけど」
「そうか」
達也は『ドレッドノート』に興味津々のようだ。この電動二輪は魔法技術がふんだんに使われており、書面上は高速移動しながらの魔法展開技術を確立するための〝実験機〟。実際は悠元専用の〝ワンオフ〟として運用されていて、週に一度はこの二輪でツーリングすることが多い。
「達也が御所望なら、別の一台を融通できるように取り計らうけど」
「いいのか？」
「別にあって困るものでもないしな。次の誕生日プレゼントの先渡しと思ってくれていい」
「誕生日に贈る代物としては高すぎる気もするのだが」

達也は呆れ気味にそう述べているが、悠元も贈り物の類でそういった経験をしている。
具体例を挙げると、剛三の繋がりで大型クルーザーを貰ったことがあったし、ローマ法王から本来枢機卿しか身に纏うことを許されない礼服を賜った(流石に着れないので大切に保管している)し、バスティアン・ローゼンから彼の遺産相続権の約3分の1を譲渡された。
それに比べれば、軍用の電動二輪1台程度は安いもの……金銭感覚に加えて機密性は問題ないのかと言われそうだが、二輪関係の車両管理は自分の管轄になっているため、特務士官である達也に譲渡するのは何の問題もない。
これ以上この話題を話すと疲れると判断したのか、達也は話題を切り替えた。
「悠元は、まだ妨害があると思うか？」
「あるだろうな。寧ろ無いとは思えん、と言った方がいいか」
達也のことを尊敬している文弥や亜夜子が妨害に出てくる可能性は限りなく低いが、表面上深雪や夕歌と対立関係にある勝成が妨害に出てくる可能性は高い。そして、道中で待ち伏せるのは勝成の魔法特性から考えると、その個所はかなり限定される。
「四葉本家へのゲートがあるトンネルの入り口付近……そこが最も可能性の高い襲撃ポイントになると思うが、達也の意見はどうだ？」
「俺も同意見だ。出来る限り早く出発した方がいいだろう」
「だな。まあ、事故るのは勘弁だから、夕歌さんが起き次第でいいか？」
「ああ」
そして、夕歌たちが起きてくるのを見計らって朝食を用意した。悠元は先に食べた上で朝食を達也らに提供したのだが、夕歌はおろか深雪からも睨まれ、水波はどことなく腑に落ちない様子を見せ、達也は溜息を吐いていた。
何故朝食を作っただけで睨まれるのか。味は控えめになるようにしたのだが、薄すぎたのだろうかと思わず首を傾げる。
朝食の後片付けをテキパキと済ませると、出かける準備を済ませて

いる夕歌から小声で「あんなにおいしい朝食を平気で作っちゃう悠元君が悪い」と言われた。甚だ遺憾の意を示したい。

◇　◇　◇

昨日と同じく、悠元の『ドレッドノート』が先行する形で出発した。本家への最短ルート上――――本家に繋がるゲートがあるトンネルの手前まで敵性勢力の感知はみられない。こうなると、達也との予測からトンネル手前での妨害が想定される。

出発したのは9時30分。別荘から本家まで約2時間の道のりだが、妨害を想定するのならば早く到着するに越したことはない。夕歌は悠元と達也の説得で渋々納得した。

正直な話、四葉の人間でない自分がこうやって物語の本編に関わっているのが可笑しいように思えてならなかった。達也や深雪に敵対しない、出来れば味方でいるぐらいの立ち位置で動こうと思っていたはずが、色んな人の縁も相まってこうなっていることに笑いを禁じえない。

だが、そんな考えはトンネルに差し掛かった時に感じた魔法の発動兆候で思考の片隅に追いやられた。魔法の兆候の後、道路の側面から白い津波――――雪崩が押し寄せてくる。

「無茶をしてくれるな……全く!!」

悠元は障壁魔法に偽装した半球型の『ファランクス』を二輪と夕歌たちの乗る車を包み込む形で展開した。車も水波の半球シールドが展開され、更には雪崩が水となり、濁流となって流れていく。これ以上の雪崩は発生しないと判断し、『ファランクス』を解除し、二輪を邪魔にならない場所に停めて『ワルキューレ』をスーツの内側に仕舞い込んだ。

雪崩は車の直撃コースではなかったが、二輪からすれば確実に直撃コースだった。恐らく相手からすれば車だけ通過するものと見込んでいたのかもしれない。それでも、偶然とはいえ待ち伏せていたことには変わりないだろう。

「ゆ……コホン。神坂さん、無事かしら?」

「ええ、大事ありません。恐らく、夕歌お嬢様の車だけ通るものと相手

は予測されていたようです」
「お兄様、神坂さんは狙われたのでしょうか？」
「いや、神坂さんの予測通りだろう。そして、待ち伏せだな」
夕歌は悠元の名前を言いそうになって咳払いをした上で尋ねると、悠元は問題ないと返した。深雪は先程の出来事を達也に尋ねると、達也は悠元の意見を肯定しつつ相手の目的を述べた。すると、これを聞いた夕歌が怒鳴るように言い放った。
「出てきなさい！　出てこないなら、遠慮しないわよ！」
四葉本家のお膝元で、しかも自分の乗る車を狙っただけでなく、自分の護衛をも巻き込もうとした。しかも、それは姿を隠しているが自分の婚約者。その事情も相まって、夕歌は本気で精神干渉系魔法『マンドレイク』を発動させた。
（夕歌さんも本気だな……洒落にならない魔法を使うとは）
『マンドレイク』は相手に恐怖のイメージではなく恐怖の情動を発生させる魔法で、この魔法を浴びたものは心理的耐久性に関係なく激しい恐怖に囚われ、精神が著しく衰弱する。被術者は虚弱状態に陥るか、耐えきれずに意識を失い、人によっては精神に深い傷を負う。
しかも、この魔法は想子波動（サイオン）――サイオンの「音」を媒体とする（より厳密には、想子に備わった情報を基に霊子（プシオン）が「音」の振動波長を改変することで相手の情動を改変する）ため、物理的な音波遮断では防げない。
言い換えると、同じような「音」の想子波動を用いれば防御は可能となる。それを指し示すかの如く放たれた魔法――音波減衰魔法『サイレントヴェール』によって『マンドレイク』の想子波動が軽減される。
深雪と水波はそれに驚き、達也が『サイレントヴェール』であると見抜きつつ説明をするように述べた。そして、夕歌はその魔法を放った相手に心当たりがあった。夕歌が『マンドレイク』を使うことを想定していた人間の名を叫んだ。
「この魔法は琴鳴さんね！　正体は割れているのよ！　勝成さんも女の陰に隠れていないで出てきなさい!!」

その言葉の直後、夕歌の前に熱線が放たれ、路面から発生する熱で陽炎が生じている。熱線によって水分が蒸発しただけでなく、舗装材まで熱せられたことによって熱い空気の層が局地的に形成されたせいだ。そして、その魔法は悠元や達也にはすぐに分かった。
「……フォノンメーザーですね。これはまた面白い魔法を使うものです」
「面白さの問題ではないかと思いますが」
悠元の言葉がちょっとした冗談めいた言葉なのは達也も察したが、今はそれを求めるべきではないと釘を刺すように述べた。達也の目の前にいる人間が普通の魔法師の杓子定規で量れないことは分かり切っていることだが。
「私は隠れてなどいない」
よく通る低音の声が前方から響き、陽炎に目線を奪われていた夕歌や深雪、水波は思わず顔を上げた。悠元と達也だけが先程の雪崩で落ちてきた巨岩の陰から3人の男女が姿を見せたことに気付いていた。
「散らばった障碍物を抜けるのに時間が掛かっただけだ」
面倒ならそうしなければ良かったものの、とは思ったが、三人の真ん中に立つ男性――――188センチの長身で、外見上は痩せて見えるが、大男の鈍重な感じは全く見られない。肉体はがっちりと鍛えこまれており、ボクシングの重量級ランカーと紹介されても違和感が生じない体格を持つこの男性は、防衛省入省1年目の職員にして、四葉分家が一つ、新発田家の長男である新発田勝成。
彼は達也のことを良く知る人間だからこそ、あのような手段で強引に引き留めた。
「隠れてないんだったら、何故すぐに答えなかったのよ」
「こうやって話せる距離にまで近づいて答えるつもりだったが、答える前に撃ったのは君だ。相変わらず好戦的だな、夕歌さんは」
「それは否定しないけど、私の護衛が危うく巻き込まれるところだったのよ。私はその報復をしたに過ぎないわ」
「ほう？　確か、夕歌さんのガーディアンは亡くなっていたと聞いていたが……君が認めるほどの実力者がいたとは初耳だったよ」

勝成は夕歌とのやり取りを聞いた上でその護衛である悠元を見やった、今の悠元は『仮装行列(パレード)』で姿を隠している上、気配も可能な限り抑制している。なので、勝成から見れば自分のガーディアンである二人に劣らないという判断を下した。

夕歌はその値踏みをするような視線が気に入らず、勝成に話しかけた。勝成の隣にいる青年は今にも叫びたそうにしていたが、それを勝成が手で制していた。

「なら、津久葉家の人間として新発田家の人間である勝成さんに尋ねるけど、私は深雪さんと達也さん、水波さんを連れて本家へ向かうの。黙って通してくださらないかしら？」

「それは出来ない。夕歌さんはまだしも、その三人を通すわけにはいかないのだ」

勝成の答えは夕歌の予想通りであった。夕歌はまだしも、深雪や達也、水波は通すことが出来ない。恐らく、このまま来た道を帰るように言い含めるだろう。

この時期にそんなことを言い出すこと自体正気を疑うし、深雪や達也がここで大人しく呑んだところで、最悪飛行魔法で四葉本家に乗り込んでいく可能性もある。そうなった場合、四葉家が混乱に陥ってしまう。何せ、夕歌は昨日の深雪の本気度を知っているだけに尚更であった。

「……通りたければ、力づくで来いと？」

「その通りだ」

「……神坂さん、御当主様の代理人としてどう思いますか？」

「なっ……!?」

そして、夕歌が口にした事実は勝成のみならず、彼の両端にいる堤琴鳴(つつみことな)と堤奏太(つつみかなた)、そして深雪と水波まで目を見開くほどに驚いていた。この中で夕歌以外に事情を知る達也は冷静に悠元の方を見つめると、悠元は一息吐いた上で夕歌の方を向いた。

「夕歌お嬢様。彼らが妨害するとなれば、新発田家が本家に反旗を翻したと認識せざるを得なくなります。特に四葉の関係者であるお嬢様方が戦えば、その疑念は強くなるでしょう。なので、私が代理とし

て彼らと戦います。尤も……負けるつもりなど最初(ハナ)から御座いませんが」
「なっ、ふざけてんのかてめえは!!」
「ふざけておりませんよ？　それに、あまりみっともなく吠えると、隣にいらっしゃる貴方の主人が恥を掻くことになるだけだと思いますが？」
「く、くっ……」
　悠元が述べた言葉に対して奏太が吠えるように叫ぶが、悠元はあっさりといなした上で勝成の恥になりたいのかと窘めるように告げると、奏太はその意味を理解して言い淀んだ。これには夕歌も感心するように呟いた。
「へえ、琴鳴さんだけでなく奏太さんにも相当慕われているのね」
「ああ、私にはもったいない部下だと思うほどにね。尤も、四葉家の流儀に従うのならば君のようにドライになるべきと思うこともあるが、君はその護衛をいたく気に入っているようだ」
「……（言えるはずないじゃない。気に入っているレベルじゃないなんて）」
　夕歌はその護衛（悠元）の婚約者であるだけに、勝成の言葉に対して押し黙る他なかった。彼らの会話が途切れるタイミングを窺った上で悠元は護衛としての名と自己紹介を述べる。
「話が少し逸れましたが……改めて、夕歌お嬢様の護衛を務めております神坂と申します。それで提案なのですが、決闘というのであれば私は一人で構いません。貴方方は一人でも二人でも……何でしたら、三人いっぺんでも構いませんよ？」
「何だと？（彼は正気か？　だが、彼の表情は相手がどう出てきても問題ないといった表情をしている。しかも、夕歌さんはおろか、達也君が異論を唱えずに彼の提案を聞き流しているのがなお怖い……）」
　悠元の提案に対し、どう返答すべきか勝成は悩んでいた。
　相手の実力は未知数。しかも、相手は人数差で不利になりうる状況でも構わないと発言した。更に、その提案に対して無謀だと彼の主人である夕歌はおろか達也ですら口を挟まないことに違和感を覚えた。

勝成も達也には確実に勝てるなどと思っていない。幼い頃から四葉家先代当主によって戦闘技術を叩き込まれてきたあの達也が〝彼〟の提案を無謀な策だと思っていない節が見られることに、勝成は二の足を踏むような状況に陥っていた。

妥当な判断だが、無意味だ。

悠元の提案――――悠元が一人で戦うことに対し、勝成らの人数は如何様でも構わない――――に対し、勝成は何も物申さない達也が沈黙で肯定の意を示していることに恐怖を感じていた。そんな勝成の葛藤を見たのか、奏太は勝成に提案した。

「やらせてください、マスター。アイツの実力は確かに未知数ですが、相手は一人。勝てない相手じゃないと思います」

「しかし……」

「私からもお願いします。同士討ちを避けたがっていた勝成さんにとって望ましい決着の筈です！　勝成さんが出ずとも、私達だけでやって見せます！」

ここで勝成は深雪の方を見やった。彼女も事態をただ見つめていて、達也が何も申さない以上は自分が口を挟むべきことではないと判断したのだろう。それに、彼が御当主の代理だということは、夕歌が述べていることに加えて達也が驚いていなかったところを見るに本当のことだと判断したようだ。

お互いに譲れない以上、戦闘回避は不可能。なれば、勝成に出来るのは……二人を信じることだけだった。彼は何人でも構わないと言った以上、勝成自身の介入も許されていることも加味した上で、勝成は二人に激励を贈る。

「……分かった。勝って来い、琴鳴！　奏太！」

「お任せください！」

「任せてくれ！」

そうして相対する悠元と琴鳴、奏太。事情を知らぬ人間からすれば一介の護衛とガーディアンの戦闘にしか見えないが、その護衛の正体は元十師族にして世界屈指の戦略級魔法師。その事情を知っている夕歌と達也からすれば、この勝負自体見えているも同然だった。

「……達也さん、私達は少し下がりましょうか」

「……そうですね。そうした方が彼の邪魔にならないでしょう」

深雪と水波のこともあるため、二人は悠元から更に距離を取った。

それを横目で確認した上で悠元は勝成の前に立つ琴鳴と奏太に視線を向けていた。
「場所はどうしますか？　其方の好きになさって結構ですよ」
「……結構よ」
「そうですか、では――――」
　そのやり取りが交わされた後、琴鳴の姿が一気に空中へ投げ出される。そして、あわや急降下するところを勝成が魔法で落下速度を緩和し、琴鳴を受け止めた。お姫様抱っこの形となったことに琴鳴は頬を紅く染め、勝成はホッとしたような表情を見せていた。
「す、すみません」
「気を付けろ。彼は達也君と同等、もしくはそれ以上の実力者とみていい」
「はい」
　今の一瞬の攻防で、勝成は彼が四葉の『フラッシュ・キャスト』に匹敵する魔法発動速度を有している時点で、達也と同レベルの魔法師であると判断した。彼の言葉が誇張などではないことが理解できたと同時に、一抹の不安を覚えていた。
「分かったら行け。奏太が苦戦している」
「分かりました！」
　だが、その不安を呑み込んだ上で琴鳴を送り出した。
　琴鳴が向かっている先では、悠元と奏太が戦っており、悠元は胸に掌底を撃ち込みつつ仮想波動で奏太の心臓を揺らす。だが、奏太は自身の体内に振動魔法を撃ち込むことでその波動を相殺した。
　すかさず距離を取って指を鳴らすと同時に魔法を展開――――音を増幅する魔法を放つが、悠元は調整し終えたばかりの新型銃形状ＣＡＤ『セラフィム』で『術式解散（グラム・ディスパージョン）』を発動し、奏太の魔法を分解する。
「なら、これはどうだ!!」
　奏太が発動させたのは『音響砲（アコースティック・キャノン）』――――人体の機能に一時的な不調を引き起こす指向性を持った轟音を打ち出す魔法。
「成程ね……確かに効果的だ。だが――――〝無意味〟だ」
　発射される「音」に対し、悠元は魔法式を壊す必要など無いと『セ

ラフィム』を下ろす。観念したのか、と勝利を確信したような笑みを浮かべたが、『音響砲（アコースティック・キャノン）』から放たれた音の波動は、悠元に届こうとした瞬間に掻き消された。

これに驚愕する奏太だったが、悠元がその場で殴るモーションを出した瞬間、奏太の身体を強烈な衝撃が通過した。

新陰流剣武術武闘奥義『白虎雷神掌（びゃっこらいじんしょう）』――彼我の距離に存在するサイオンと空気を圧縮して打ち出す技により、奏太は倒れ込む。今回は拳の範囲に限定して打ち出したので、意識を刈り取るまでには至らなかったようだ。

そして、悠元は一気に距離を詰めて奏太の意識を完全に刈り取ろうとしたところで、琴鳴の魔法『音響爆弾』が悠元と奏太の周囲に展開する。

琴鳴と奏太――調整体魔法師『楽師（がくし）シリーズ』は音波に干渉する魔法を得意としており、自身と自身を取り巻く空気の層に音の情報強化の防壁を常駐させている。なので、琴鳴が味方を巻き込むような攻撃を放ったところで、奏太にダメージは通らない。

その意味で、琴鳴の魔法の選択は間違っていないのだろう。

だが、琴鳴は知らない。琴鳴と奏太が戦っている相手は生来の異常聴覚を克服したことで、彼らと同じく音波干渉を得意としている事実に。そしてそれは、彼もまた音の情報強化の防壁を常駐させているということ。

琴鳴の『音響爆弾』が炸裂するが、倒れているのは先程悠元の攻撃を受けた奏太だけ。悠元はというと、平然とその場に立っていた。

「う、嘘……何で立ってられるの……」

攻撃特化の奏太と比べれば、攻撃魔法の出力が劣ることは琴鳴自身も理解していた。だが、何のダメージも負わずに平然と立っている彼が最早常人の領域にいないことを琴鳴は本能で感じていた。相手の視線がこちらに向いた以上、攻撃してくると思った瞬間に彼の姿が消えていた。

「えっ……」

「姉さん!?　てめえ、姉さんから離れろ！」

自分の意識が彼に刈り取られた、と気付くまでもなく、琴鳴はそのまま倒れ込もうとしたところで悠元が支えとなり、そのまま舗装された道路に寝かせた。すると、その様子を見た奏太が琴鳴に何かするのではと反射的に『フォノンメーザー』を放つが、悠元は何と『フォノンメーザー』を放って相殺させた。

具体的には、奏太の『フォノンメーザー』と逆の現象を引き起こす情報を込めたサイオンを空洞化させた『フォノンメーザー』の内側に封じめて射出することで、衝突した瞬間に放出されたサイオンによって振動波長を中和させ、威力を無力化する仕組みだ。

このまま奏太の意識を完全に刈り取るために動き出そうとしたところで、悠元に対して圧縮空気弾が襲い掛かる。その衝撃を受けて悠元は『相転移装甲（フェイズシフト）』で凌ぐが、空中での被弾であったために姿勢を崩しつつも道路に着地した。

（まあ、元々介入してもいいとは言ったが……琴鳴さんが倒されたことで介入することを決意したか）

勝成が得意とする〝密度操作〟――収束系魔法の基本だが、それ故に応用できる範囲も広い――による圧縮空気弾が悠元目がけて放たれる。だが、悠元からすれば「既に通過した道」。そう言わんばかりに、悠元は腕に着けた『シャドウブレイズ』から起動式を読み込み、三矢家の秘術である『エアライド・バースト』をぶつけて相殺する。

その上で、悠元はもう一つの新型ＣＡＤ『ラグナロク』を取り出して、頭上に構えて魔法を放つ。遥か上空の空気と水分が急速に圧縮され、季節外れの積乱雲を生み出すと同時に数多の稲光が発せられる。そして、魔法式によって制御された雷を悠元は放つ。

「食らえ――天神魔法・最上級魔法が一端、『神雷波濤（じんらいはとう）』」

天候すら操る天神魔法の一つ、積乱雲を人工的に発生させ、膨大な量の電気を一つの雷に束ねて撃ち込む最上級風属性魔法『神雷波濤（じんらいはとう）』。

「（まずい、対物障壁と真空皮膜を……なっ、防御が破られ……）ぐあああっ!!」

勝成は咄嗟に対物障壁と真空皮膜で防御するが、その程度の防壁など簡単に〝食らって〟しまう。防壁が破られたことにより、勝成がそ

の直撃を受けた。尤も、発動時間をごく短時間に設定したことで、勝成はその場に片膝をついていて、辛うじて意識を保っている状態だった。
「マスター！　こいつ……なっ!?」
勝成がやられたことに気付いた奏太が悠元にＣＡＤを向けるが、その照準を合わせまいと高速移動する悠元に翻弄されて照準が合わせられず、悠元が放った鋭い蹴りで奏太は今度こそ意識を飛ばされた。
悠元はそのまま琴鳴と奏太に近付いて『セラフィム』を向けると、魔法を発動させて彼らを〝治療〟した。そして、彼らの主人である勝成にも『セラフィム』を向けて魔法を発動させ、勝成は十全な状態に回復していた。
「これは、『再成』なのか？　君は一体……」
勝成に使ったのは確かに『再成』のようなものだが、正確には『天陽照覧』を使用しただけだ。尤も、琴鳴と奏太の二人については意識の回復以外は治していて、ついでに『領域強化（リインフォース）』を使っただけだ。この辺を上手く利用できるかどうかは四葉家当主の腕の見せ所といったところだろう。
勝成の問いに答える義理など無いので、悠元はそのまま勝成に問いかけた。
「私はあくまでも四葉家御当主様の見届け役、なので今回は命のやり取りをする場ではございません。そちらの御二方も応急処置は済ませておりますのでご心配なく。それで新発田勝成殿。夕歌お嬢様とご同行なされている司波殿を含めてここを通らせていただいて構いませんね？」
「……私まで加わって敗北した以上、私に止める権利は無くなった。君が達也君に匹敵する魔法師だとは思わず、正直見縊（みくびっ）っていた私の負けだ」
「そうですか。では、遠慮なく通らせていただきます」
勝成が琴鳴と奏太のことに掛かりきりになる上、夕歌の護衛である彼が達也に匹敵する魔法師であることに加え、勝成の介入すらあっさりと退けた。事象干渉力でいえば深雪にも匹敵し得る実力者だと見

抜けなかった自分の敗北である、と勝成は悠元の要求を受け入れた。
　それを聞いた上で悠元はＣＡＤを懐に仕舞い、夕歌と達也らに近付いた。
「夕歌お嬢様。勝成さんから通行の許可を頂きましたので、このまま本家に向かいましょう」
「あ、うん。そうね……大丈夫なの？」
「あれしきで怪我を負っていたら、魔法師の護衛など務まりませんので」
　音速で飛んでくる木刀の〝暴風雨〟やら、明らかにおかしい軌道で迫ってくる祖父を経験した身からすれば、圧縮空気弾なんて精々大型犬がじゃれついて来るようなものだ。非常識の経験をしているからこそ対応が楽に出来ている、という意味合いが若干含んだ悠元の言葉に対し、夕歌はただ頷くことしかできず、達也は普通じゃないものを見たような視線を送っていた。
　少なくとも、普通とかの概念を置き去りにしている達也が向けていいものじゃない、とは言いたかったが、深雪と水波がいる前でそういう訳にもいかず、二輪に乗ってヘルメットをかぶり、『ワルキューレ』を差し込んでエンジンを始動させると、そのままトンネルの中に入っていく。達也らも夕歌の自走車に乗り込んでトンネルの中に入った。
　トンネルの中には自動ゲートがあり、特定の想子波を照射することでトンネル途中にある脇道が姿を見せ、悠元は迷わずそちらにハンドルを切る。夕歌の自走車も付いてきており、勝成らの追跡は確認できない。
　この後は何事も無く、１５時（午後３時）に四葉本家へ到着した。
　夕歌は津久葉家の離れに案内され、水波は上京まで使用していた４人部屋、達也と深雪は二人部屋へと案内され、悠元はというと……真夜の私室に招かれた。しかも、達也と深雪が離れたタイミングを見計らって姿を見せた葉山直々の案内ということもあり、使用人たちも大事な客人として悠元を見ていた。
　私室に入ったところで悠元は『仮装行列（パレード）』を解除すると、その様子を見ていた真夜は笑みを零しつつ立ち上がり、まるで子どものような

はしゃぎっぷりで悠元の手を引いた。
「悠君、お疲れ様。さあ、座ってちょうだい」
「真夜さん、そんな急かさなくても大丈夫ですって」
「そうはいかないもの。えいっ」
　悠元の言葉を介することなく、真夜は悠元をなぜか私室の奥にあるベッドに座らせた上で後ろから悠元を抱きしめていた。いつの間にか葉山の姿がない事から、予め人払いをするように言い含めていたのだと悟り、真夜のしたい様にさせてやることとした。
「ふふ、姉さんには負けてないでしょ？」
「……あの、一体何をする気なのですか？　いや、大方の予想は付きますが」
「その『まさか』かもしれないわね」
　色々拙いと思う。何せ、自分は深雪を婚約者にしている上、深夜を愛人兼専属使用人に迎えた身なのだ。これで真夜まで抱くことになったら色々問題が生じかねない。それに勘付いたのか、真夜は悠元と向き合う形で座った。
「では、こうしましょう。悠君の今回の報酬は別として、私を抱いてくれたら深雪さんと夕歌さんの婚約を四葉家当主として認めるということで。あと、おまけに水波ちゃんも付けちゃいます」
「水波をおまけ扱いって……そもそも、俺に拒否権がありませんよね？」
「ふふっ、そうとも言いますね。でも、抱くのは今回だけでいいです。それ以上望むと姉さんや深雪さんに嫉妬されそうですから」
　いくら真夜が〝産めない〟と分かっていても下手に手を出していいものではない。とはいえ、深雪を結ばれるために〝達也の母親〟を抱くってどんな仕打ちなのだと思う。頼れるべき存在である葉山がいないとなれば、断る手段など無かった。
　それでも〝奇跡〟とかの万が一のことも考え、一線を越えないように処置はしておく。この世界だとそんな類のことはあり得ないのだろうが、自分がやってきたことを鑑みると起こり得ないと断言できるはずもなかったからだ。

「それに、悠君のここは……昔見た父のより大きいわ」
「見たことあるんですか……」
結局、そこから約3時間ほど真夜とのスキンシップ（意味深）をする形となり、色々複雑な心境を抱えつつも身だしなみを整えたスーツ姿の悠元は、同じく身だしなみを整えてドレス姿となっている真夜と会談することとなった。
「ありがとう、悠元君。昔の記憶と漸く決別することが出来たのは、悠元君のお陰よ。四葉家はこれからも神楽坂家の意向に従うようにしておくから、安心して頂戴」
「……感謝します。母にも今の言葉を過分なくお伝えします」
真夜を苦しめていた３５年前の事件。〝知識〟へと変換されても悪夢として蘇っていた事実をここで知った。真夜が言うには、このことを源として世界への復讐を考えていたが、悠元によって姉妹の仲が完全に修復できたことで、その意味も薄れてしまった。
だが、完全に悪夢が消えることなど無かったため、その悪夢から解放されるために悠元を頼ったのだ。曰く「似たような経験で掻き消せば消えるんじゃないのか」と思ったそうだ。
その手段が褒められたものではないとはいえ、偶発的にも人助けができたことには変わりないので、これはこれで良しとしたいところだ……このことを多分深夜は双子の勘で気付くだろうし、深雪のことも考えれば気苦労は更に増えるが、今更だろうと諦めた。
「それで、この後の予定ですが、１９時に奥の食堂で色々と発表することになるのだけれど……悠君には何度か相談しているから気付いているでしょうけど、達也を五人目の次期当主候補として発表いたします。その際、達也に掛けられた封印も解きます。流石に『誓約（オース）』は解除できませんが」
「その鍵となったのは恐らく、深雪と亜夜子ちゃん、それに夕歌さんの三人ですね」
「ええ、正解です。深雪さんと夕歌さんには酷だけれど、後で美味しい思いをするのだから、問題ないと判断しました」
達也の呼び方を変えたということは、達也の扱い方が次第に変わっ

ているということの証左。現に、四葉本家へ到着した際の使用人の達也に対する扱いは、深雪と同格のような扱いとも言えた。尤も、自分の場合は葉山が応対したとこもあって当主クラスのような扱いであるが。

真夜の言う「美味しい思い」というのが自分との婚約発表なのだろう。とはいえ、表向きは部外者である自分が四葉家の次期当主決定の場に立ち会うべきなのか、とも思ってしまう。その考えを見透かしたのか、真夜が微笑んだ。

「あら、悠君も無関係ではありませんよ。何せ、達也の遺伝子提供者――彼の遺伝上の父親が誰なのかも、悠元君は気付いているのでしょう？」

「……そうですね。正直、その可能性は否定したかったのですが」

原作だと司波（司馬）龍郎と司波（四葉）深夜の子が達也にあたるわけだが、この世界では何の因果か、それが書き換わってしまった。達也の母親は四葉真夜、そして父親――――遺伝子提供者は矢車慶一郎（けいいちろう）。つまり、達也は矢車家（上泉家）と四葉家（神楽坂家）の血を継ぐ人間である。

どうしてそんなことが起こったのかを考えた際、真っ先に挙げられたのは剛三と千姫の存在だった。剛三にこの可能性を問い詰めた時、剛三は観念して白状した。

四葉の復讐劇が終わり、失意のどん底にあった剛三は仲間の遺骨こそ持ち帰れなかったが、剛三は辛うじて設備が生きていた冷凍倉庫から冷凍処理された真夜の卵子を発見し、密かに持ち帰って四葉家に引き渡した。そして、千姫が真夜からの相談を受けて上泉家の係累である慶一郎の精子を提供させ、受精卵を深夜に定着させた。

その結果、上泉家と神楽坂家の血を引く存在として達也が生まれた。つまるところ、悠元から見れば達也は遺伝上の再従兄（はとこ）にあたる。

「まあ、当人からは『兄呼びは止めてくれ』と言われましたが」

「多分深雪さんのこともあるのでしょうね。深雪さんは姉さんに似て甘えん坊ですから」

「……まあ、それは分かり切ってるので今更ですが」

深夜と真夜の達也に込められた想いも無視はできないが、『再成』の上位互換である『天陽照覧（てんようしょうらん）』と『分解』の上位互換である『月影観鸞（げつえいかんらん）』――二つの究極魔法を備えられるだけの下地が遺伝子レベルで整えられていたからこそ、『分解』と『再成』の魔法が魔法演算領域を占有する結果に繋がったのだろう。

二つの『アンタッチャブル』

〝この世界〟の達也の出生に関する事実を知り、頭を抱えたくなる悠元であったが、それは今更か、と諦めた上で真夜の話を聞く。

「悠元さんはまた姿を隠した上で夕食に参加してください。次期当主の方々の証人となって頂く予定ですので」

「分かりました。それに付随することなのですが、勝成さんのガーディアンである堤琴鳴さんと堤奏太さんの二人についてご報告を」

悠元は勝成らの妨害を受けた際、矢面に立つ形で琴鳴と奏太の２人と戦い、更に途中で介入した勝成すら一撃で退けたこと。そして、琴鳴と奏太の２人に穂波や水波と同じ処置を施したことも報告すると、真夜は笑みを零した。

「あら、やはり悠君の仕業でしたか」

「何かあったのですか？」

「実は着替えている時に葉山さんから連絡がありまして、琴鳴さんの胸部が大きくなったそうで、それを目の当たりにした勝成さんが琴鳴さんの魔法で吹き飛ばされたと」

自分の服装など気にせずに慌てて介抱する琴鳴の胸部を見た勝成は、「ここに天国があったのか……」と言って気絶したらしく、琴鳴は慌てふためいて勝成を自分の胸に押し付けるように抱きしめたらしい。奏太は琴鳴の魔法の巻き添えを食らって気絶したらしく、事態の収拾に水波が駆り出されて何とか収まったらしい。

「……勝成さんと奏太さんは死んでませんよね？」

「琴鳴さんが無意識的にセーブしたようでして。愛の成せる業って凄いわね。何にせよ、勝成さんが次期当主辞退の代わりに琴鳴さんと婚姻するのは認めようと思います」

「その辺は四葉家の家内の事ですのでお任せします」

そして、この時期に話すべきことではないが、周公瑾の師にあたる顧傑についての情報を提供することにした。出来るだけ早い時期に話しておけば、対策のしようもあると考えたからだ。

「真夜さん。先日達也が討伐した周公瑾ですが、更に上の存在――

黒幕の顧傑に関してです。そちらも彼の術などについての詳細はないでしょうから、こちらをお渡しします」
「あら、これはご丁寧に。これはお礼にもう一度」
「止めてください。深雪に凍結されかねません」
「ふふ、冗談ですよ」
悠元は『記憶編纂（メモリーライズ）』で電子データ化した顧傑に関する詳細な情報が入ったメモリーカードを真夜に差し出し、真夜は素直に受け取った上で冗談めいたことを言ったので、悠元は勘弁してほしいと降参の意思を示した。
「でも、剛三さんですら知らなかった情報を良く調べられたわね」
「調べたというよりは、偶発的に入手したという言い方が正しいでしょうね。周公瑾は広義的に言えば〝パラサイト〟の類で、肉体を消滅させた後に自分を乗っ取ろうと目論んだようで」
「その先は想像が付いてしまうわね。周公瑾も哀れと言うべきかしら」
情報の出所が顧傑に最も近い「周公瑾」なのだから、顧傑に関する情報の信憑性は疑うべくもないし、それを消滅させた悠元の手腕は最早〝世界最強〟の名を冠しても過分ではないと真夜は感じた。
「この情報を師族会議に流す際は剛三殿か千姫殿の名で出しておきます。悠君もそのほうが宜しいでしょう？」
「ええ、そうしていただけると助かります。事前に爺さんと母上にはこの情報を提供していますので、上手く辻褄は合わせられるかと思います」
そうして話し込んでいると葉山が姿を見せたので、『仮装行列（パレード）』で再び姿を変える。その手際に葉山は「流石でございます」と褒め、真夜に至っては嬉しそうに悠元の右手を握っていた。
これでは真夜に「婚約者が出来ました」と言っているようなものではないか……と思いつつも、葉山がどうにもならないといった感じで首を横に振ったので、奥の食堂までの辛抱だと諦めつつ真夜を案内するような感じで歩いていく。
「……」

「み、深雪？　どうしたんだ？」
「お兄様、何故だか分かりませんが、叔母様に嫉妬してしまうんです……」
「み、深雪姉さま……」
「その、落ち着いてください……」
「……」
（この際、悠元君でもいいから早く来て――！　私には無理よ――！）
その頃、奥の食堂では魔法が漏れないように我慢こそしているが、かなり機嫌が悪い深雪の様子に達也も思わず動揺を隠せず、文弥と亜夜子は何とか抑えるように宥めており、勝成は下手に首を突っ込むと危ないと判断して顔を伏せるようにして目線を逸らし、夕歌は内心で悠元の助けを呼んでいたのだった。

◇　◇　◇

奥の食堂の扉――――上座側の扉の前に着いたところで真夜が悠元から手を放し、その両脇に悠元と葉山が控える感じとなる。傍に控える使用人が扉を開けてそのまま進むと、次期当主候補世代――――右側は手前から達也、深雪、夕歌。左側は手前から文弥、亜夜子、勝成の六人。
普通ならガーディアンである達也は自分で椅子を引くのだが、今回は給仕役の使用人が椅子を引いた。他の五人も同じように使用人が椅子を引いていた。
「皆さん、急な招待にも関わらず、よくおいでくださいました」
そう言って真夜が葉山の引いた椅子に腰を下ろすと、他の六人も腰を下ろした。そして、真夜は悠元の方を見やった。
「本当ならば身内のみといいたいところですが、貴方も色々あって食事に在りつけておりませんので、折角ですからご一緒にいかがですか、悠元さん？」
このタイミングで正体を明かす、というのは見知らぬ人間だと色々疑問が出るからだろう。真夜の意図を理解した悠元は『仮装行列（パレード）』を解除すると、事情を知っている真夜と葉山、達也と夕歌以外の面々は驚きを露わにした。

そして、悠元は四葉の次期当主候補の中で一応初対面となる勝成に視線を向けて自己紹介をする。
「昼は大変失礼を致しました、新発田勝成さん。元十師族・三矢家三男、護人・神楽坂家が次期当主、神楽坂悠元と申します。貴方や貴方のガーディアンのお二人のことは燈也――――六塚殿から聞いておりました」
「……成程、道理で私が勝てなかったわけだ。私の方も部下共々申し訳ありませんでした」
「お気になさらず。勝成さん自身に責任の所在はありませんし、騙していたのは私の方ですから、お気遣いなく」
勝成の言葉にそう断りを入れた上で、悠元は真夜と向かいあう形で下座の空いている椅子に自ら椅子を引いて腰を下ろした。
四葉家のスポンサーである神楽坂家の人間が上座に座らなくていいのかと思うだろうが、そのことを知っているのは次期当主候補でも限られている上、今回の集まりはあくまでも四葉家の次期当主に関するもの。下手に上座に座って要らぬ勘繰りをされるよりはマシだと判断した結果だ。
悠元の左側に座っている夕歌はホッとした表情を浮かべ、深雪の表情は先程と打って変わってご機嫌だった。これには達也と文弥、亜夜子が揃って「本当に助かった」という目線を送っていて、一体何があったのかと思わざるを得なかった。
この中には成人している人間もいるが、酒はなく洋食のコース料理（厳密なコースというよりはそれっぽい感じの料理の出し方）を丁重に頂く。この辺は明日が正月で御節が出るからという理由が最もだろう。
そして、食事を終えたところで真夜が切り出した。
「――――さて、そろそろ本題に入りましょうか。勝成さん、夕歌さん、深雪さん、文弥さん。貴方達は四葉家次期当主候補の四人。いよいよ明日の慶春会で次期当主を指名します……というのは、皆さんもある程度は予想がついていると思いますが」
真夜の言葉に四人の表情が引き締まる。ここまでは原作通りの展

開だ。だが、真夜はここで唐突に最大級の爆弾発言をした。
「実は、五人目の次期当主候補がおりまして、その方を皆さんに紹介したかったのです」
　その発言に六人の視線が悠元に向けられるが、肝心の悠元本人は興味が無いといった感じで目線を逸らしていた。大体、神楽坂家次期当主に指名されている人間が四葉家次期当主に指名されるはずなどないし、いくら神楽坂家の繋がりがあろうとも脈略が無さすぎる。
　深雪の婿養子という線はあるだろうが、その線は当にない事など真夜から確認済みだ。
「真夜殿、これでは話が進みません。私が五人目の候補ではないかと思われ、次期当主候補の方々も困惑しております」
「あらら、ごめんなさい。皆さん、悠元さんは四葉の大事なお方として今回の見届け役を担って頂いてるだけですので悪しからず」
「……叔母様、発言の許可を頂きたいのですが、宜しいでしょうか？」
　ここで発言したのはこの中で筆頭候補に挙げられる深雪だ。悠元の助け舟を出したいという気持ちもあるが、深雪が一番気になっているのは深雪よりも上座に座っている達也の存在であった。
「深雪さん。ええ、宜しいですよ」
「では、失礼して……先程、叔母様が仰られた『五人目』の次期当主候補というのは、お兄様が私よりも上座に座っていることに関係しているのでしょうか？」
「流石ね、深雪さん。そう、五人目の次期当主候補は貴方ですよ、達也さん」
　真夜が述べた台詞に、悠元以外の面々が驚きを隠せない様子で、一方の達也はまるでこの事態を予測していたような様子を見せていた。今までの四葉本家での扱いから一変すれば、達也でも一体何があったのかを疑問に思うだろう。
　ただ、次期当主候補にまで担ぎ上げられるのはさしもの達也も予想外と言った感じの様子が垣間見えた。すると、ここで疑問を呈したのは勝成だった。
「御当主様、ご質問がございます」

「何かしら、勝成さん」
「御当主様もご存じのことですが、達也君は確かに優れた戦闘魔法師であることは私も認めております。ですが、達也君から感じる魔法力に関しては、それ程のものとは見えないのです。御当主様は何故、このタイミングで達也君を次期当主候補として発表したのかをお教えいただきたい」
　勝成の疑問は至極尤もと言えた。次期当主候補の中で深雪は達也の実力を信頼しているし、文弥と亜夜子は達也に好意的な部分もあり、彼の実力を良く知っている。夕歌も無論達也に掛けられている『誓約（オース）』の関係で達也の実力を把握している。
　だが、達也の『誓約（オース）』を解除したところで深雪の事象干渉力に匹敵し得るとは考えられない、と勝成はそう思ったのだろう。その疑問を解決すべく、真夜はその答えを述べる。
「勝成さんがそう思っても仕方がない事なのです。何故なら、現在の達也さんの魔法力は『誓約（オース）』と3つの封印で大幅に制限しているのですから」
　この封印というのは、最初津久葉家の『誓約（オース）』によるものと思っていた。だが、神楽坂家に伝わる魔法を学んだことで、達也に掛けられた封印は天神魔法における精神干渉系魔法『極星霊座（きょくせいれいざ）』であると判明した。
　この魔法は被術者の魔法力や魔法演算領域といった精神領域の一部を半永久的に凍結し、そのトリガーとなる対象者の特定の行動を被術者に施すことで封印が解除される仕組みだ。簡単に言えば、トリガーを握る対象者がハイリスクを負わない『誓約（オース）』の上位互換版と言える。
　なお、その解除方法は口付け――これを設定した千姫本人曰く「お姫様のキスで王子様が覚醒するってロマンチックじゃない？」とのことらしいが、起こす相手は王子様というより魔王と呼ぶ方が妥当な気もする。
「論より証拠を見せた方がいいでしょう。深雪さん、亜夜子さん、それに夕歌さん。達也さんに口付けをしてあげてください。それですべ

てハッキリとしますので」
『誓約(オース)』の場合は深雪が達也の額に口付けをするのだが、この世界の場合は罷り間違って『極星霊座』が解除されないようにするためのものだと考えられる。亜夜子はともかく、深雪と夕歌は不安げな表情を向けていたので、悠元は二人に声を発した。
「それが達也の力を証明するためなら、今回は目を瞑る。さあ、遠慮せずにやってくれ」
「悠元、それは俺が言いたい台詞なのだが」
達也の言いたいことは理解するが、達也が四葉の次期当主候補に足り得ると証明するために必要な事ならば、ここは我慢するのが自分の選択だろう。それに、深雪が四葉家における兄の待遇改善を求めてきた節はずっと感じていたので、その深雪の想いを無駄にしたくない。
「ありがとうございます、悠元さん……お兄様、いきます」
思い切りの良さが出てきたのか、深雪が先頭を切る形で達也と口づけを交わす。そして、夕歌も「こうなったらやるしかないわよね!」と言った感じで口づけをし、残すは亜夜子となったわけだが、何時も大胆な行動をする亜夜子にしては何だかおとなしかった。
そして、その理由を悠元は察してしまった。
「……ファーストキスか」
「い、言わないでください! しかも、こんな知り合いの前で……特に文弥の前でなんて」
「いや、なんで僕がいると恥ずかしく感じるのさ!?」
文弥の言うことも尤もだろう。あれだけ弟をからかおうとしていた姉がいきなり女らしい態度を見せたことで、流石の文弥も今の発言は〝理不尽〟だと思ったのだろう。これをみた真夜が悪戯っ子のような笑みを浮かべて達也と亜夜子に提案した。
「では、一時的にこちらの扉を使っても宜しいので、その扉の向こうでしても良いのですよ?」
「御当主様!?」
「はあ……」
これでは埒が明かないと判断したのか、達也は立ち上がって亜夜子

の傍に寄った。自分の愛しい人が傍に居るせいか、いつものような発言がなかなか出てこない亜夜子の様子を察してか、達也はこう尋ねた。
「亜夜子、今まですまなかった」
「た、達也さん？」
「知っての通り、俺は深雪以外に激しい情動が持てずにいた。だが、亜夜子が俺のことをどう思っているかは悠元や深雪に散々言われてしまった……その上で、亜夜子は俺を愛してくれるか？」
　明らかに恋の告白じみている言葉に、悠元は徐にカメラを取り出してこっそり撮影する。レコーダーも起動しているため、音声データも残すつもりだ。それを知ってか知らずか、亜夜子は達也の言葉に対してハッキリと答えた。
「何を今更。達也さんは私の心を射止めたのです。私だって、深雪姉さまのように好きな人と添い遂げたいのです。父が迷惑を掛けた以上、達也さんの愛人でも構いません。私のファーストキスを貰うのですから、絶対にお傍においてくれないと襲ってしまいますよ？」
　そういって、亜夜子は達也と口づけを交わす。そして、３つの『極星霊座』の封印が解かれたことで、達也の身体から膨大な量の想子が噴き出す。それは深雪が『誓約（オース）』を解除した時に発するサイオンよりも桁外れに多いのが見て取れた。
　この想子波は他の次期当主候補も感じており、一番近くにいる亜夜子は達也の膨大な想子量に〝酔って〟しまい、達也の胸に凭れ掛かった。他の候補や真夜に関しては、悠元が溢れ出すサイオンを制御して想子酔いを防いでいた。
「あ、す、すみません達也さん。あまりの想子量で、その、酔ってしまいまして」
「いや、俺の方こそ済まない。それと、悠元も感謝する」
「気にするな。今まで少ない魔法力を上手くやりくりしていたんだ。そんだけ膨大な魔法力を手に入れていきなり制御しきるのは達也でも難しいだろうからな」
　それに、良い絵も撮れたからな、とまでは口に出さなかった。この

データは後で亜夜子に渡すのは確定となり、亜夜子にとってはいい記念になるか、思い出して恥ずかしがるか……そこは本人次第と言うところだろう。

達也は絶対に気付いているだろうが、必要なら達也にマスターデータを渡すだけで解決する。他人の恋路を温かく見守ることはあっても、極力首を突っ込みたくないからだ。

亜夜子の想子酔いは対応した経験のある悠元が『癒し(フローラル・ウィンド)の風』で治療し、達也が自分の席に戻ったところで真夜が声を発した。

「さて、これで達也さんが次期当主候補であると証明できたことでしょう。勝成さんも納得していただけたかしら？」

「はい、それはもう充分に感じました。御当主様、新発田家は私――新発田勝成の次期当主候補の地位を返上し、四葉家の次期当主候補に司波達也君を推薦したいと考えております」

原作だと、勝成は黒羽家の文弥、津久葉家の夕歌に続く形で多数決の論理に従って次期当主の座を返上していた。その対価として琴鳴との婚姻を認めてほしいと頼んだのだ。

だが、勝成は先程の達也の魔法力を見ただけでなく、姿を偽っていたとはいえ悠元と戦闘する形となり、敗北を喫した。この時点で自分が四葉の次期当主となるには不相応と判断したのだろう。

「あら、それは先程の達也さんの魔法力を感じての事かしら？　それとも、先程悠元さんが述べていたことかしら？」

「それらもありますが、四葉を四葉たらしめる意味において、私は御当主様に近い血縁者の達也君と深雪さんのどちらかが次期当主となるべきだと考えています。津久葉家と黒羽家が深雪さんを推すというのであれば、多数決の論理に従います。当主・理(おさむ)からは次期当主候補の進退と推薦は自分に任せると仰っておりましたので、したがって私は達也君を推薦いたします」

四葉の『触れてはならぬ者(アンタッチャブル)』の名を体現する意味において、勝成は真夜に近い血縁者の達也か深雪が次期当主になるべきと進言した。まさか勝成がいの一番に名乗り出たことは想定外と言えよう。だが、勝成が最初に辞退した意味は恐らく、彼がそれと引き換えに望むこと

だろう。
「それで、次期当主候補の地位を返上するにあたり、御当主様にお力添えを願いたいことがございます」
「もしかして、貴方のガーディアンである堤琴鳴さんとのご結婚に私から口添えをして欲しい、ということですか？」
「はい。父からは調整体が故に止められておりましたが……」
「そうね……愛する者同士を引き裂く真似は出来ないし、勝成さんが新発田家当主を継ぐことになるなら問題はないでしょう。それに勝成さん、琴鳴さんは調整体であっても既に調整体ではありませんから」
「？　それは一体……もしや、琴鳴の体格がより女性らしく変化したことと何か関係が？」
　体格の変化、という単語に達也と深雪は悠元の方を見やると、悠元は黙って頷きつつグラスの水に口を付けていた。疑問を浮かべる勝成は、変化の前後で関わっている人間となれば一人該当することに気付き、悠元の方を見やった。
「……もしや、君が琴鳴を？」
「ええ、俺の固有魔法である『領域強化（リインフォース）』によって、琴鳴さんと奏太さんは普通の人間と同じ寿命を獲得しています。言っておきますが、このことは部外秘でお願いします。無論、身内が相手でも漏らすことは許しません。最悪記憶を消し飛ばさないといけませんので」
「そうか……感謝する、神楽坂殿」
「いいんですよ。その代わり、末永く幸せにしないと許しませんから」
　幸いにも、ここにいる人間は勝成を除くと悠元のことをかなり知っている部類の人間しかいない。それでも、悠元の固有魔法に関して２つとも知っているのは夕歌だけで、それ以外は『領域強化（リインフォース）』しか知らない。一応治療魔法のような触れ方にしたが、この魔法の本質である〝構造情報干渉・強化〟の部分は話せる相手が大分限られる。
　少なくとも、これを期に達也と深雪に話しておくことは必要だと考えている悠元であった。

望めど許されない寝正月

琴鳴のより女性らしくなった体格の変化。その原因となった要因は色々あるだろうが、四葉家内だけ見ても、深雪と亜夜子、夕歌といった次期当主関係者もそうだし、少なくとも当主の真夜とは勝成のガーディアンとなる時に一度会っている筈だ。

あの場で『領域強化（リインフォース）』で治した際、琴鳴から何かが切れる様な音が聞こえたが、あれは下着のホックが破損した音だとすぐに気が付いた。何故わかったのかと言えば、水波とアリサの二人がその前例として存在するためだった。そのことを正直に伝えて色々誤解を招くのは御免だったため、最悪戦闘中に壊れたのだと適当に誤魔化すつもりでいた。

悠元の口から発せられた固有魔法の存在に対し、その場にいる人間は機密の遵守を誓った。とりわけ深夜と穂波を治した実績を知っている真夜は次期当主候補者に対して悠元の秘密を守るように誓わせた。

勝成からは新発田家の人間として当主を必ず説得すると強く言われたので、その辺は家庭内が拗れない程度にしてくださいと答えるにとどめた。

「さて、勝成さんがこれで辞退なされたけれど……」

「叔母様、発言をしても宜しいでしょうか？」

「あら、深雪さんも次期当主候補を辞退なさるのかしら？」

「はい。私――――司波深雪は次期当主候補の地位を返上し、お兄様――――司波達也を四葉家の次期当主に推薦いたします」

勝成の次に次期当主候補の辞退を申し出たのは深雪であった。

元々、深雪は自身の次期当主候補の地位返上と引き換えに、達也の四葉家における待遇改善を申し出るつもりであったが、真夜から達也が5人目の次期当主候補と紹介された以上、これは深雪にとって「渡りに船」である。

勝成が達也を次期当主に推薦したことで先陣を切られるような形となったが、筆頭候補と目される自分が達也を推薦すれば、達也のこ

とを好意的に見ている黒羽家（文弥）と津久葉家（夕歌）の協力を得られると考えた。
「私は元々、今回の慶春会で四葉の次期当主候補の地位を返上し、四葉家におけるお兄様の待遇改善を求めるつもりでした。ですが、叔母様がお兄様を五人目の次期当主候補として紹介した時点で、その気持ちがより固まりました。先程感じた私以上の魔法力を有するお兄様ならば、四葉の名に恥じないと私は考えております」
「あら、そこまで決めていたのね。もしかして、深雪さんも恋焦がれる人の為に大人しく身を引きたかったのかしら？」
「……はい」
深雪はチラリと視線を悠元の方に向け、それに気付いた悠元が微笑むと、深雪も頬を紅く染めて微笑んでいた。これには二人の間にいる形の夕歌が苦笑を浮かべ、亜夜子は二人を羨ましく眺めていた。
その深雪に続く形で文弥が挙手をしつつ声を発した。
「御当主様、発言をお許し頂けますか？」
「あら、文弥さん。よろしいですよ」
「では……黒羽家は私――――黒羽文弥の次期当主候補の地位を返上し、司波達也さんを次期当主に推薦いたします」
そして、次に発言したのは文弥であった。黒羽家は中立を宣言しつつも貢は達也に対して敵対心を見せていた。このことは文弥と亜夜子も気付いており、当然真夜も貢の行いを把握している。これには思わず笑い泣きをしてハンカチで涙を拭う真夜が文弥に尋ねる。
「あら、もしかして次期当主を本家の一存で決めてはならないと入れ知恵でもされたの？」
「いえ、そのようなことは一切ございません」
「横から口を挟む御無礼をお許しください、御当主様」
真夜の言葉に文弥は否定し、言い終えたタイミングで亜夜子が口を挟んだ。特に黒羽家は神楽坂家に対する無礼もあるため、この辺はどういった判断をしたのか黙って見つめていた。そして、そのまま亜夜子が説明を続ける。
「元々、私と文弥は深雪お姉様が次期当主に相応しいと考えておりま

した。ですが、深雪お姉様が次期当主候補の地位を返上して達也さんを推薦なさった以上、私と文弥はそれに倣う形で達也さんを次期当主に推薦したいと思います」
「それはいいけれど、貢さんはどう思っていらっしゃるのかしら？」
「父は次期当主の推薦に関して私と亜夜子の判断に委ねる、と最終的には納得していただけました」
　貢としても、達也が四葉の次期当主候補になるなど「寝耳に水」だろう。それに、ここ数日の達也らに対する襲撃部隊や警察を唆した件は多かれ少なかれ黒羽家が関わっている。その辺を含める様な真夜の言葉に対し、文弥は真剣な表情でハッキリと述べた。
　これで、勝成、深雪、文弥（プラス亜夜子）の推薦を得た達也を見つつ、真夜は夕歌に視線を向けた。
「さて、これで残るは夕歌さんだけだけど、津久葉家はどうされるのかしら？」
「皆さんの行動が早すぎて一番最後になったのは恥ずかしい事ですが、津久葉家は私――――津久葉夕歌の次期当主候補の地位を返上し、司波達也さんを次期当主に推薦いたします」
「あらあら、夕歌さんまで返上するとなると、達也さんだけしか候補がいませんね」
「先程感じた魔法力を見せられて、気丈に振舞って次期当主候補の名乗りは上げられません。次期当主候補筆頭と目された深雪さんを推していた津久葉家としては、深雪さんが推した達也さんを推すのが道理だと判断しました」
　夕歌の次期当主候補の辞退を聞き、真夜は右手を頬に当てて少し困ったような様子を見せたことに対し、夕歌はやや苦笑気味に先程の達也の封印解放に触れた上で、次期当主に推していた深雪が達也を推薦したため、それに倣う形で達也を推薦するのが合理的だと判断した。
　次期当主候補者らの多数決の状況からすると達也が次期当主に指名されるのは確定的で、これには達也も肚を括ったような表情を見せていた。その表情を横目で見てから悠元に視線を向けた。

「悠元さん……いえ、神楽坂殿。四葉の次期当主は達也さんを指名することになります。それで異存はございませんか？」
「私に四葉家内の決定権はございませんよ、四葉殿。他の次期当主候補が揃って達也を推薦して納得されているのであれば、私が特に述べることはありません」
この中で一番難色を示しそうな勝成が真っ先に達也を推薦したのだ。それに続く形で深雪、文弥、夕歌が推薦した以上、自分がいくら四葉のスポンサーの一つである神楽坂家の次期当主とはいえ、四葉家に依頼することはあっても四葉家内の事情に首を突っ込むのは宜しくない。
その上で、悠元は踵を正して周りを見た後、真夜に向き直った。
「この場にて、四葉家御当主様、並びに次期当主候補者の皆様に改めて申し上げます。明日、来年元旦を以て、私――――神楽坂悠元は正式に第１０８代神楽坂家当主を襲名いたします。家としてはお互いに古くからの付き合いではございますが……今代は無論のこと、次代の四葉殿とも良き付き合いをしたく思います」
実は、周公瑾の討伐は達也のみならず悠元にとっての最終試験であった。
先月末、京都に敷いた『聖天八極護法式陣（せいてんはっきょくごほうしきじん）』と『伝統派』の和解という功績を以て、悠元が正式に神楽坂家当主を名乗るよう千姫から言い付かっている。
なお、神坂グループの会長職と経営やそれに伴うコネ、神楽坂家当主として神職・仏僧の教導を行う護人としての仕事は順次引き継がれていくこととなる。
現状当主の仕事の４割を既に引き継いでいる悠元からすれば、約２倍に増えたところで書類まみれだった国防陸軍兵器開発部での処理に比べれば〝まだ楽〟の部類であったのは……一種の職業病なのかもしれない。
一つの解析で書類を数十枚作成する手間と、多岐に渡る分野の決裁を纏めることは、トータルで見れば同じ分の書類を捌くことに変わりないかもしれないが。

「あら、これはご丁寧に。上泉家当主に続いて神楽坂家当主ともなれば、三矢殿はさぞや鼻が高い事でしょう」
「父は自分から積極的に自慢をするような性格ではございませんよ」
「そうでしたわね」
　そして、食事も終わり各々が戻っていくこととなるが、真夜、達也と深雪が残る形で悠元は食堂を後にした。そうして悠元が案内されたのは風呂であり、ＣＡＤの取り扱いに関しては自分以外が下手に触れないようになっているため、その旨を使用人に伝えつつ自分で服を脱いで風呂に浸かる。
　今頃、達也と深雪は真夜から２人の出生に関わる事実を伝えているのだろう。深雪に関しての部分は今まで聞いたことはないが、原作知識から『完全調整体』であることは間違いなく、寿命に関する部分も念のために深夜から打診されて確認したが、「問題なし」と判断した。
　この辺は光宣の例があるので誤魔化すことは可能だろう。
　風呂から上がり、綺麗に畳まれたスーツとＣＡＤを手に取り、使用人が案内した先は一番格式の高い客間――――四葉家にとって無視できない立場の人間を迎える客室――――であった。しかも、奥には布団が１つに枕が２つ。これから起こりうることを予想して、悠元は一つ息を吐いた。
「……お茶でも汲むか」
　夜中にお茶はどうかと思うが、ないよりはマシだと思いつつ温めのお茶を湯呑に注ぐ。一杯目のお茶に茶柱が立ったことが、何故か不満を漏らしたくなった。男としては女性に好かれること自体悪くはないが、婚約者間の匙加減が色々難しいのだ。
　すると、通信端末に着信が鳴り、悠元はスピーカーモードで通話ボタンを押すと、そこに映ったのは千姫であった。
『こんばんは悠君。ホントは一緒に年越しそばを食べて年末番組でも見ながらゴロゴロ新年を迎えたかったのですが』
「正月に送付する書状やら元旦の挨拶がありますからね。半分ぐらいは手伝いましたが」
『ホント助かったわ。七草家に送る文章なんて書きたくありませんで

したが、筆を折るのは勿体無いので堪えました』
パラサイト回収の妨害、メディアによる世論誘導、周公瑾との取引と事欠かない上、四葉家や九島家の動きを知って独自に部下を送り込んで失敗した事実まである。千姫としては、泉美の婚約を解消したい思いと彼女の好意を無碍にしたくない女性としての心情を天秤に掛け、已む無く押し黙った。
その影響が正月の挨拶――――悠元を正式に神楽坂家当主として襲名する旨の書状を認めていたのだが、七草家にだけ送らずに無視してやろうか、と思うぐらいに千姫は苛立ったのだ。仕方がないので、悠元が代筆としてその書状を仕上げた。
「四葉の次期当主が決まったことで婚約発表も出来ますが、それでまた一悶着ありそうです」
『一条家の長男ね。でも、悠君と深雪さんの結婚は戸籍上も遺伝上も全く問題ないのに？』
達也と深雪が仮に婚約する場合、彼らの母親である真夜と深夜の扱いが問題視される。戸籍上は〝従兄妹〟として成立するが、真夜と深夜が双子の関係である以上、遺伝上の近親婚になりうる可能性があるからだ。
悠元は元三矢家の人間で、深雪は四葉家の人間。双方共に神楽坂家の血縁者だが、遠縁に当たるので近親婚は一切成立しない。この辺は千姫も念入りに確認したことであり、それに不服を申し立てるというのが理解できなかったようだ。
「以前、九島烈が俺の十師族離脱で臨時師族会議を招集した過去を参考にして、『優れた血統が続けて十師族の外に出て行くことは、将来的に十師族の衰退を招くことになる』とでも理由を付けると思います」
千姫は悠元の予想に対して訝しんでいるが、一条家は将輝の妹である茜が悠元に恋慕している。もし、茉莉花とアリサの存在が一条家にバレた場合、茜も問題ないという判断を下すかもしれない。そうでなくとも、深雪の交換条件として茜を悠元の婚約者として申し込む可能性は残ったままだ。
そして、七草家の中では香澄が達也の婚約者として（香澄のほうは

まだ打診の段階)、泉美が悠元の婚約者となるため、五輪家長男と上手く行っていない真由美が五輪家との婚約を解消した上で悠元の婚約者として送り込んでくる可能性が残っている。
　達也と悠元のどちらが可能性が高いといえば、真由美は悠元に対しての後ろめたさが残っているのと、スキンシップの頻度からして悠元の可能性がかなり高い。七草家から二人を婚約者として送り込むのは許されるのかと思うだろうが、最悪真由美を神楽坂家に対する〝人的賠償〟という形を取ることも想定される。
『ああ、成程。その理由は確かに考えられますね。にしても、一条殿は親馬鹿ですね。長男殿も本気で好いたのなら、深雪さんが四葉の血縁だと名乗る前に告白すればよかったのに』
「女性に好かれても、女性に接することが出来るとは限りませんよ。大体、自分は家督と家業継承を既に放棄してましたし、元々三男だからこそ告白出来たにすぎません」
　自分と将輝では同じ十師族直系と言えども置かれている立場が違うため、将輝が勇気を出せずに告白できなかったことについては、ほんの少しだけ同情する。そもそも、告白したところで深雪が将輝の告白を受ける確率は……顧傑が突如心変わりしてＵＳＮＡ内で連続爆弾テロを起こす確率ぐらいないかもしれない。
『悠君に身も心も捧げてますからね、深雪さんは。そういえば、深夜さんから「妹が悠元君を襲った」と言われまして。大変ですね』
「あっさり言わないでください……深雪と夕歌の婚姻を認めることを対価にされた以上、受け入れざるを得なかったのです」
『ふふ、真夜ちゃんもこれで悠君に救われましたし、今後は達也君や彼の子どもを愛でたいのでしょう』
　達也に敵対しないルートを選んだら、深雪を婚約者にするルートと深夜を愛人にするルート、更には真夜に襲われるルートまで開通したなんて一体誰が信じられるだろうか。からかい気味に述べられた千姫の言葉に対し、悠元は溜息を一つ吐いた上で釈明に近い言葉を伝えた。
　正直、真夜が必要以上に悠元を頼らなかったのは、達也の存在が大

きいとみている。
『四葉の次期当主の発表と同時に、四葉家の方から深雪さんを悠君の婚約者として発表します。悠君の神楽坂家当主としての新年の挨拶と、悠君の婚約者募集も合わせて行います。尤も、色々考えることは多いですが』
「それは確かに」
達也が四葉家の次期当主として発表される以上、その身内である深雪のことも発表しなければ帳尻が会わない。下手に勘繰られるよりは四葉家の人間だと併せて公表した方がまだスムーズにいくだろうと踏んだ。
ただ、四葉家が正月の挨拶代わりにこのことを発表した場合、他の十師族がどう動くか。とりわけ四葉家に対して過敏なほどに反応する七草家も他人事ではないだろう。
その七草家絡みの話だが、論文コンペの翌週末に姫梨の埋め合わせも兼ねて遊園地に行ったところ、香澄と達也に遭遇したのだ。香澄としては自身の気持ちもあったりするが、真由美が迷惑を掛けたという理由付けを含めて達也とのデートをしていた。
九校戦の準備や新人戦のことも含めて達也の世話になっている部分もあるだろうが、香澄が明確に達也へ好意を抱いたのは昨年の九校戦で達也が新人戦モノリス・コードに代理として出場した際に一目見て惚れたらしい。
なお、遊園地では英美とスバル、そして桜小路紅葉（さくらこうじあかは）が遊びに来ていたのだが、英美の実家であるゴールディ家絡みの騒動に巻き込まれた。遊園地にはバイトとして十三束もいて、彼の協力を得る形で英美を襲った連中の退治をすることになった。
「貴様はあの時のがはっ!?」
「ん？　よく見たら、いつぞやの時計塔で俺を拉致ろうとした連中じゃないか。エイミィ、こいつらボコしていいか？　いざとなったら記憶とか消すから」
「あの、出来れば穏便にして欲しいんだけれど……」
「悪い、それ無理」

ロンドンで観光をしていた時、自ら首を突っ込んだ覚えはないのに、ゴールディ家の後継者絡みに巻き込まれたのだ。恐らく剛三を味方に付けようとしたのだろうが、何故自分を人質にしようと目論むのか「意味不明」としか言いようがなかった。

その時は見逃してやったが、英美からゴールディ家の秘術『魔弾タスラム』を知ろうとした連中があの時の奴らと同一だったため、達也に協力を仰いで迅速に鎮圧した。

その後、巻き込んだお詫びということで食事を一緒に食べることとなったわけだが、その時に香澄から色々尋ねられ、達也からは自分と香澄の仲の良さに関して尋ねられた。泉美のことがあるので、香澄とは良き友人関係から逸脱することは無いと断言できる。

閑話休題。

「燈也も婚約者を発表しましたし、その意味で光宣も他人事ではないでしょうね……将輝ぐらいですよ。同年代で婚約者募集をしないのは」

『無理からぬことと思っちゃいます。一条殿の気質が長男に受け継がれているとなれば、女性が複数いても振り回されるだけかと。そういえば、克人君は来年の師族会議の時に美嘉ちゃんとの婚約を発表するのよね』

「ええ、当人や両親からもそのように聞いています」

六塚家次期当主の指名を受けた燈也は今頃六塚本家の屋敷で過ごしているだろうし、藤林家でお世話になっている光宣もあの美貌を考えれば言い寄ってくる女性は多いだろう。

ただ、自分や達也に劣るとはいえ、将来的に戦略級魔法『海爆（オーシャン・ブラスト）』を使うだけの実力を有する将輝が婚約者募集に踏み切らないのは、本人の恋愛事情を一条家当主がそれとなく察しているからかもしれない。

余談だが、真紅郎は今年一条家で年を越すこととなり、瑠璃に（無理矢理）抱き着かれている写真が送られてきた……それを見て「どう反応すればいいんだ？　俺に同情を求められても困る」と返すことしかできなかった。

十文字家絡みで言うなら、遠上家のことについては神楽坂家の責任を以て遠上家の固有魔法『リアクティブ・アーマー』の全面使用を解禁する運びとなった。克人と美嘉の婚約は師族会議終了後、日本魔法協会を通す形で師族会議構成メンバーと百家の一部に通達される。

なお、十文字和樹が起こした過去の女性問題に伴う形で発生したアリサの処遇だが、アリサの母親である伊庭ダリヤが詩歩に宛てた〝遺言状〟同然の手紙には詩歩の名が記載されており、法的に有効であると千姫が判断した。

よって、アリサを十文字家の都合に関係なく三矢家の養女として扱うことは十文字家の魔法技術の漏洩に当たらない、と判断した形になる。

埒外だからこそ納得される判断材料

千姫との通話を終え、一息吐いたところで湯呑が空になっていたので、二杯目の茶を注いだところで来客を告げるノックの音が響く。気配で誰が来たのかを察していたので、そのまま入室を促す様に言い放つと、襖が開いて達也と深雪が姿を見せた。

達也のほうはスーツ姿のままだが、深雪は下着姿も同然の単衣を纏っているだけ。今の状態の深雪が都心を歩けば忽ち大混乱になるのは想像に難くない。だが、自分がこれから話すことを鑑みて、改めて気を引き締めた。

「達也に深雪。話は終わったのか？」

「ああ。叔母上――――いや、〝母上〟から言われた事実をお前にも伝えておかないといけないからな」

深雪の緊張した面持ちを見るに、達也から深雪が『完全調整体』ということは聞き及んでいるのだろう。ともあれ、襖を開いたままでは2人が風邪を引いてしまう（達也に風邪を引くという概念が通用するかは不明だが）ため、そのまま部屋に招き入れた。

達也からは、自分が真夜の息子であることと、達也の父親が龍郎ではないこと。深雪が『完全調整体』として達也の制御を担うために生を受けたこと。真夜は説明こそしていなかったが、封印が解除された達也の中には『流星群（ミーティア・ライン）』に占有されて特化した魔法演算領域まで備わっている。この辺は真夜の〝楽しみ〟として残しているのだろう。

「……達也、深雪。唐突なことを聞くが、〝転生〟という言葉を知っているか？」

「転生、ですか？」

「一応は聞いたことがある……まさか、悠元がそうだというのか？」

「ああ。魔法という技術が顕在化しなかった並行世界、とでも言えばいいか。俺はその記憶を引き継いで三矢家三男、三矢悠元の魂と〝融合〟した形になる」

前世の名前を名乗ったところで意味はないし、元々三矢悠元に宿っていた魂は記憶以外にその痕跡が残っていなかった。この世界では

三矢家の殆どと剛三、千姫しか知らない事実を2人に打ち明けた。
よもや、〝並行世界の人間〟が目の前にいることに達也や深雪も驚きを隠せなかったようだ。ただ、達也らの存在を「創作物の登場人物」として知っていることに関する言及は避けることにした。ただでさえ自分の知らない人間までいる以上、その知識を与えたところで意味があるか正直分からなかったからだ。
「この世界で俺が〝転生者〟だと知っている人間はごく一部に限られる。俺のような存在を知ることで、良からぬ企みを考える人間も出てくるだろう」
「……何故、俺と深雪にそのことを明かしたんだ？」
「――――大切な〝友人〟として、隠し事は出来ないと思ったからな。遅かれ早かれ知ることになるのなら、自分の口から言うのがいいと思ったまでだ」
大体、こちらは原作知識も含めて達也と深雪の秘密を知ってしまっている身だ。それでいて自分の秘密を明かさないというのはフェアではない、と考えた。
それに、このまま関わり続けていけば自ずと知ることになるのは避けられないだろう。達也の『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』が封印解除によって更なる領域まで覗けるようになっていたら、自分の秘密も明るみになってしまう。
「大体、俺は2人の秘密を結構知ってしまっている。それでいて俺だけ隠すのはアンフェアのような気もしてな……まあ、このことを聞いてどう思うかは2人の判断に委ねる」
「そうか……なら、俺は信じよう」
そう述べた悠元に対し、達也はあっさりと悠元の言葉を受け入れた。それは、今まで悠元がやってきたことに対しての説明に説得力が出てくる、と考えたからだ。
現代魔法の水準から見れば、悠元の成していることはその水準をまるで小石を飛び越えるが如く軽々とやってのけているようなもの。なので、悠元が転生者という事実は、達也にとって疑惑ではなく納得できる〝判断材料〟になっていた。

「……アッサリ信じたのはありがたいが、いいのか？」
「悠元の埒外さは今に始まった事じゃないからな。昨年の九校戦で十文字先輩が言っていた言葉を借りるなら、『例外が一つや二つ増えたところで今更だ』と思ったまでだ」
「普通の魔法師じゃない達也が言っていい台詞じゃないだろうに」
「それは否定しない」
　悠元の皮肉に対してあっさりと受け入れた達也に悠元は思わず肩透かしを食らったような気分を抱いた。ここで何も言わないまま黙っている深雪の方を見やると、深雪は悠元に対して目を輝かせていた。
「悠元さんがそんな存在だったのは驚きですが、それでも私は悠元さんを愛しています。それに、お兄様が信じているのならば、私が悠元さんを信じない理由なんて無くなりますから」
「……逞しくなったな、深雪は」
「それはもう、悠元さんに沢山鍛えていただきましたし、愛されている身ですから……」
　頬を紅く染めつつ恥ずかし気な視線を送ってくる深雪に対し、思わず襲ってしまいようになるが、ここは一先ず我慢した。まだ話すことが残っているためだ。すると、達也が悠元に問いかける。
「悠元、もしかしてセリアは悠元にとって前世の関係者なのか？」
「ああ。前世の妹で、生まれ変わってから従妹だと知った」
「セリアをあっさり受け入れたのはそういう事情もあるわけか。二人のやり取りが単なる恋人の会話ではないと思ってはいたが、納得だな」
　セリアの素性をあっさり明かすのはどうかと思われるだろうが、セリアは達也に殺される危惧を抱いている。現時点においてその危険性はかなり低いが、達也や深雪を納得させられる判断材料を提供することで、達也や深雪からの敵対を避けるという大きなメリットを得られる。
　達也からすれば、セリアの信頼を得られれば双子の姉であるリーナ（アンジー・シリウス）に繋がるラインを確保できるし、リーナの隠し

事をセリアに看破させることも実現可能になる。
「セリアには後で俺からも話すが、このことは他の連中に言わないでくれ。俺も父に明かした時は〝パラサイト〟の類を疑われたからな」
「事情を知らなければそう思われても仕方が無いだろうな。分かった」
「他の婚約者の方々にはお話しするのですか？」
「……少なくとも、雫と姫梨、沓子は理解してくれるだろうから、その3人には俺から話す」
　転生者という情報を明かす相手は選ぶが、原作主人公とヒロインを怒らせるリスクなんて誰も負いたくない。無論、俺だって負いたくない。原作を知る人間としては、一利を得るために達也や深雪を怒らせて〝億損（おくぞん）〟を被る度胸なんてない。
　臆病とか卑怯とか言われようが、誰だって自分の命は惜しい。「いのちだいじに」はこの世界を生き抜くうえで最も大切な事だと思っている。損が億単位で済むかと言われると何も言えないが。
　姫梨と沓子は元が古式魔法由来の家なので、少なくともそういった類の知識に長けている。神仏系の魔法や儀式の中には〝降霊〟の類のものもあるため、早めに味方につけておきたい魂胆も含まれる。
　なお、この翌日にセリアから「雫と姫梨、沓子に問い詰められてバレちゃった」みたいな文言のメールが送られてきた（通信端末自体は悠元が改造して『五芒星（ペンタゴン）』内蔵型の通信システムを備えているため、『フリズスキャルヴ』での傍受は不可能となっている）。
　セリアの説明では、悠元をお兄ちゃん呼びしていることに疑問を抱いた沓子が指摘し、そこまで疑問に思っていなかった姫梨と雫迄疑念を抱き、結果的にセリアが白状した挙句、悠元も転生者だとバラしたらしい。説明の手間が省けたのはありがたいが、後でお仕置き確定である。
　その後、雫と姫梨、沓子から相次いで年初の挨拶のメールを貰ったのだが、雫からは『寧ろ納得できたし、悠元には私を惚れさせた責任を取ってもらう立場』と言いたげな内容が届き、姫梨からは『恋人なんて作らないと言っていた私を惚れさせたのですから、生まれに一々

拘りません』とあっさり受け入れる様な文言が出て、沓子からは『妖すら全力で逃げる事実に比べれば、お主の生まれなど些細な事よ』と言われた。

　ようは「転生という事象には拘らない。その代わり、本気で惚れさせた責任を取ってほしい」ということのようで、このことを知った千姫からメールで『それだけ悠君は他の男性よりも魅力的に映るということです』と述べられた。世の中の男性が〝意気地なし〟という風に読み取れるのは……自分の勘違いと思いたい。

「そして、先程の次期当主指名に関する部分にも触れる話だが、俺は2つの固有魔法を有している。その一つが『領域強化（リインフォース）』という魔法で、広義的には〝有機物干渉魔法〟、厳密には〝構造情報干渉・強化〟を主とした魔法だ。深夜さんや穂波さんを治療した魔法がこれで、五輪澪に使ったのはこれのダウングレード版になる」

「お母様ですら精神構造情報の干渉だけなのに……その、水波ちゃんの体格が変化したのは何故なのですか？」

「俺自身も良く分からないんだが、どうやらこの魔法は被術者の願いが強く反映されることがあるらしい。水波の場合は……間違いなく深雪の存在だろうな」

　水波が一目惚れをした時点で、悠元は深雪に恋慕しており、深雪も悠元に対する恋心を自覚していた。そんな2人を目の当たりにしたからこそ、水波は深雪のようになりたいと願ったのだろう……その結果、下着のホックが服の中で弾け飛び、深雪から甘えられたのは言うまでもないが。

「それで、もう一つの魔法が『万華鏡（カレイドスコープ）』。この魔法の定義を名付けるなら〝概念干渉〟の類に入る」

「概念に干渉する魔法……成程、俺の魔法を再現できているのはその魔法があるからか？」

「その解釈で間違っていない。まあ、『天神の眼（オシリス・サイト）』もそうだが、この魔法のせいで俺が転生する際に貰った能力が何かとヤバい」

「能力？　どんなものなのですか？」

「『創造大全（マテリアル・インデックス）』――対象者自身の思考に基づいてあらゆる魔法を

生み出す能力で、その魔法における〝最善最高の魔法式〟を生み出すと言っても過言ではない。かれこれ1万以上の魔法がコイツによって生み出されてる」
『万華鏡（カレイドスコープ）』との連動によって、本来認識できない筈の魔法展開処理まで読み取れるようになり、結果として魔法式から起動式を作る能力を得てしまった。達也は一から魔法を作るという労力や大変さを『バリオン・ランス』の設計で味わっているため、悠元の規格外さを改めて感じていた。
「正直に言うと、深雪に渡した『氷結六花（ダイアモンド・ダスト）』の雛型はその産物の一つだ」
「そうなのですか……でも、悠元さんが私に与えてくれた魔法であることに代わりありません。本当に悠元さんは凄いです」
「……正直、疑われそうな気はしてたんだが。受け入れるのが早くないか？」
「師匠よりも遥かに納得がいく話だからな」
（話が変に拗れないのはありがたいが、比較対象がエロ坊主はどうなんだ……）
達也からすれば、八雲よりも得体が知れてるからこそ悠元は信頼できるし、『トーラス・シルバー』においてハードウェアの設計部分は世界随一のレベルに達する。その事実を支えているのが悠元の並みならぬ能力だとするなら合点がいく話だと結論付けた。
それに、自分の〝妹〟がすっかり悠元に絆されている為、変に暴走して悠元に迷惑を掛けていないか、というのが達也にとって最も気に掛かるところであった。
従兄妹なので婚姻は出来るし、いくら深雪に対して激しい情動を有しているとしても、妹に劣情を抱くのは何かが違う、と結論付けた。
達也としては、今まで妹同然として関わってきた深雪をそういう対象として見るのは、何故だか兄として納得できない気分であった。深雪を実の妹のように接してきたからこそ、深雪との関係が少し変わっても実の兄妹のように接することを深雪が望んだからこそ、達也も深雪との関係をこれまでと変わらない立場を選んだ。

これには、深雪の泣き落としによって悠元に「深雪を従属させてやってほしい」と頼んだ部分も大いに関係している。正直なところ、悠元に対して内心で「本当に済まない」と詫びたほどに、深雪の妙な部分で発揮される行動力には時折手を焼くほどだった。

その思いを知ってか知らずか、悠元は改めて達也と深雪を見やった。

「達也、深雪……ありがとう。俺はこれからも、2人とは家の事とかを抜きに〝友人〟として、深雪の場合は〝愛しい人〟としてになるが、来年以降もよろしく頼む」

「それはこちらもだ。今年は悠元に世話になった以上、その借りは必ず返す。それと……色々我儘な妹のことを、どうかよろしく頼む」

「もう、お兄様は……悠元さん、不束者ですが、どうぞよろしくお願いいたします」

達也と深雪は兄妹から従兄妹の関係になったが、深雪からの『お兄様』呼びはこれからも続けるとのことだそうだ。達也も文弥や亜夜子のことがあるので、深雪の達也に対する呼び方は彼女の自由にすると決めていたらしい。

司波家での居候はそのまま継続することになるが、他の婚約者に対しての配慮をどうするかは現在神楽坂家（千姫）、四葉家（真夜）、上泉家（剛三）の三者で話し合い中とのこと。

達也は「部屋に戻る」と言って客間を後にすると、深雪は我慢していた分を解き放つように悠元へ飛び掛かる様に抱き着いた。これには少し驚きつつも深雪を抱き留めた。

「おっと……そういえば、深雪と出会って4年4ヶ月か。何だかあっという間だったな」

「そうですね。元を正せば、お母様が悠元さんと元治さんに挨拶しに行ったのが切っ掛けでしたね」

剛三のお節介とはいえ、そのお陰で達也や深雪と出会えた。深雪とは魔法の事（主に九校戦の観戦の話）とかで話したわけだが、その時のことを深雪は思い出すように呟く。

「淑女として色んな勉強を叩き込まれてきた私からすれば、同年代の

中学生は『レベルが低い』と思えてならなかったんです。そんな中、私と同じ目線で話せる悠元さんと話せることが嬉しくて、空港で別れた時は何故だか辛かったんです」

四葉の次期当主候補として、達也を抑え込むための〝理性〟として……そういう教育を詰め込まれてきた深雪からすれば、達也を除く周りの中学生をそう思ったとしても無理はないだろう。そんな時に自分と出会えて会話が出来たことは、深雪にとって〝同年代の理解者〟を得たような気分だったらしい。

「貢さんのパーティーやクルーザー、国防軍の基地ではお兄様をたった一撃で気絶させ……あのクッキーは反則です。私の女心が白旗を揚げたくなるほどだったんですから」

「それを言われてもなあ……後日、達也からそのことを聞かれたが、達也ですら自身の抱いた疑念に疑問を呈していたぐらいだし」

「それぐらい悠元さんは女心を刺激する存在なんです……そして、悠元さんは私を庇って、私の命を守ってくれた」

達也の『再成』に頼らずとも復帰は出来ていたが、国防軍の特務士官として達也を現地徴用の戦闘協力員として据え、大亜連合の部隊を2発の戦略級魔法で退けた。沖縄防衛戦後、深夜と穂波を治療したわけだが、その深夜から割と刺激の強いスキンシップを受けていた。

最終的な結果として、深夜が神楽坂家の専属使用人兼愛人となったのは色々驚きしかなかった。

「悠元さんは、私の命を守り、私の心を救ってくれた人です。悠元さんが望むなら、私のことはいくらでも好きにしてください」

「……言っていることが大体深夜さんと同じなんだが」

「そうですか……でも、若さなら私の勝ちですから」

「深雪の前で名前を出したのは俺の落ち度だが、そこで何故張り合う。あと、何故に脱ぐ」

大体、深雪は婚約序列第一位であり、深夜は使用人・愛人の立場。〝行為〟自体の優劣は出来る限り避けるが、今後のことで発生し得るであろう〝跡継ぎ〟のことは婚約者の立場にいる人間が優先されるべき事項。

そして、深雪は身に着けていた単衣をそのまま脱ぎ、何も身に付けていない状態で悠元と向き合うように抱き着いた。
「悠元さん、私……もう我慢できません」
考えれば、クリスマスの夜からかれこれ6日も経っている。悠元の場合は他との関わりがあった訳だが、深雪からすればここまで悠元と一緒に居れずに我慢し続けてきた。この場合は単なるスキンシップで済まないのは確定だろう。
「……そういえば、達也から従属させてほしいなんてお願いをされたな。深雪、そうするということはされる覚悟があると解釈する」
徐に深雪の肌へ触れると……深雪は興奮しているのか、甘い声が漏れ始めている。時折擽ったそうな声も出ており、1週間近く悠元に触れなかったことで触覚がやや過敏になっているような様子が見られる。
「あっ……やっ……悠元さんのえっち」
「何も身に着けずに抱き着いている深雪がそれを言うのか？」
気が付くと、深雪を布団の上に押し倒しつつ、自分の服を脱ぎ捨てて深雪に覆い被さる。これでは深雪を見て下心を抱いてしまう男性を笑うことなど出来ないだろう。言わずもがな、最終防衛ラインは絶対死守の意思を以て魔法を唱えた。
「今更な言葉かもしれないが……愛してるよ、深雪」
「私も、悠元さんを愛しています」
遠くから聞こえる除夜の鐘の音は自分が愛する人の声に掻き消されていたが、慌ただしかった1年の終わりを確かに感じていたのであった。

四葉家慶春会

年が変わり、２０９７年の元旦。
悠元は予め準備されていた羽織袴に着替えて寛いでいた。達也や深雪は今頃正月に相応しい身支度を使用人の手によって施されている最中だろう。自分の場合は１人で支度が出来るために手伝いを丁重に断った。
神楽坂家当主になったとしても、自分で出来る範囲は自分でやるし、こういう挨拶で使用人の仕事を増やすわけにもいかない。現に千姫は身支度を全て１人でこなしており、曰く「自分でやれることを任せたら、あっという間に心身がボケてしまいますから」とのことで、妙に説得力が出ていた。
ちなみに、深雪との新年早々の〝スキンシップ〟はあったが、慶春会のこともあるので程々に済ませている。
すると、羽織袴姿の文弥と振袖姿の亜夜子が姿を見せたので挨拶をする。２人の様子は若干ぎこちなかったが、恐らく貢絡みであるとは思うが、そこには敢えて触れないようにしておく。
「あけましておめでとう、文弥と亜夜子ちゃん」
「あけましておめでとうございます、悠元さん」
「あけましておめでとうございます。この場合は『神楽坂様』とお呼びしたほうが宜しいでしょうか？」
年が明けたことで悠元の立ち位置は神楽坂家当主へと変わったわけだが、まだ高校生の身分であるために全ての仕事を引き継いだわけではない。亜夜子の言葉に対して悠元は苦笑気味に言葉を返す。
「別に公の場でない以上、今は年功序列で構わないよ……ところで亜夜子ちゃん、ここに昨日のデータがあるわけだが」
「これはご丁寧に、悠元さん。そういう気配りを受けることができる深雪お姉様が本当に羨ましいですわ」
「……実の兄妹のように仲がいいよね、姉さんと悠元さんは」
何と言うか、恋人関係には決してならないが、一昔前の時代劇における悪代官と越後屋のような共謀関係を自然と築けている感じだ。

無論、友人関係であることが前提となるわけだが。
悠元が昨日の達也とのやり取りのデータを亜夜子に渡すのを見た文弥は、血が繋がっていないのに実の兄妹のような雰囲気を出している2人に対して正直な感想を述べたのだった。
「まあ、俺の場合は血の繋がった妹がいるし……この間、三矢家の養女という形で妹が増えたけど」
「三矢殿の隠し子ですか？」
「仮にそんな存在がいたら、母さんが全力で甘えて弟か妹が増えると思う。両親の知り合いの娘さんでな。彼女は頼れる親族がいなかったし、知り合いの人の遺言に沿う形で両親が養女として迎えたんだ」
実年齢こそ真夜や深夜とそこまで変わらないが、パッと見では３０歳代後半に見えてしまう詩歩に本気で迫られたら、元も断れないだろう。母のことを大事にしている父だからこそ、もし隠し子なんていた日には数ヶ月後に母が妊娠しました、ということになっていても不思議と思えない自分がいた。
アリサのことは遅かれ早かれ知ることになるため、文弥と亜夜子には事情を掻い摘んで説明した。あとで達也と深雪、夕歌にも説明すべきことだが、その3人に対してはアリサの出自も話しておく必要がある。もしかすると、十文字家が3人を頼ろうとする可能性もあるからだ。
「養子ではなく養女ということは……悠元さんの妻候補ということですね」
「まあ、間違ってはない。文弥も早いところ覚悟を決めた方がいいと思うぞ」
「え、ええっ!?」
「それは道理ですね。尤も、文弥は寧ろ可愛がられる方かと」
「姉さんまで!?」
達也が次期当主に指名され、婚約者募集まで始まると文弥も他人事ではいられなくなる。
四葉家で既に辞退した者も含めると、深雪と夕歌は神楽坂家当主の婚約者として、亜夜子は達也の婚約者に立候補するのは明白で、勝成

は真夜の口添えを得る形で琴鳴との結婚を許された。
　そうなると、四葉家の達也と同世代の人間の中で文弥だけが独り身という形になってしまう。少なくとも存命である彼らの祖母ことと四葉夢女(よつばゆめ)からプレッシャーを掛けられるのは想像に難くない。
　四葉の力を維持する意味でも、達也と亜夜子の間に出来た子が黒羽家を継ぐことも考えられるが、次期当主候補を辞退した文弥が黒羽家当主となるほうが四葉家の意識のズレを解消しやすくなる。よって、早急に身を固めるよう圧力を掛けられる可能性は極めて高い。
「亜夜子ちゃん、文弥が些か疎くないか？」
「お父様は仕事の部分こそ厳しいですが、それ以外は文弥に甘いですから」
「……悠元に亜夜子ちゃん、新年早々仲がいいな」
「まるで兄妹みたいですね」
「お、達也。あけましておめでとう」
「達也さんに深雪お姉様、あけましておめでとうございます」
　困っていた文弥に〝救いの手〟という形で姿を見せた羽織袴姿の達也に、振袖姿の深雪が悠元と亜夜子の仲の良さに対して感想のような言葉を述べると、悠元と亜夜子は揃って挨拶を交わす。それに一拍遅れる形で文弥も挨拶したが、深雪の姿に見とれていた。
「その、凄いですね」
「単純な感想じゃないの、文弥。悠元さん、婚約者として深雪さんの振袖姿をどう思いますか？」
「そうだな……振袖姿というよりは花嫁衣裳みたく思えるし、この姿の深雪が外に出たら、太陽も恥じらって東に沈みそうな気がするな」
「悠元さん……私はそこまで出来ませんよ」
　まるで悠元なら出来そうな気がする、みたいな返しはさておくとして、悠元なりの誉め言葉を聞いた深雪は恥じらうように袖で口元を隠しつつ目線だけは悠元を見つめ、これを見た達也は一つ息を吐いていた。「参考にしないと」と言わんばかりの文弥と亜夜子の様子を見つつ、達也は悠元に尋ねた。
「ところで悠元、慶春会に参加するのか？」

「ん？　うーん……参加というよりは〝口を挟む〟感じになると思う。この辺は真夜さんの匙加減になるから分からんが」
神楽坂家当主としての最初の仕事は、慶春会で四葉の分家当主らに対する〝釘差し〟であった。先々月の貢の訪問もそうだが、昨年末の襲撃の件は自分も関わっているだけに看過できることではない。
今まで身内以外は年功序列を優先してきただけに、言葉遣いも神楽坂家の当主として強い口調を使わないといけない。エルンスト・ローゼンの時はレオとエリカに対する怒りの感情もあってすんなり出せたが、今後はその言葉遣いを意識して使うことも求められる。
ただ、公の場以外とかであまり使う気になれない。この辺は千姫も「それはよくわかるわ」と同意されたことがある。
「まあ、何にせよ真夜さんから話を振られるまでは気配を偽って大人しくしてるから。ただ、神楽坂の人間として普段抑制してる気配を全部解放するから……一応気を強く持ってくれ」
「気配の……もしかして、ピラーズ・ブレイクの時のような感じになるのですか？」
「あれでも一応3割に抑えてるから」
「あれで3割なのか……」
達也が驚くような素振りを見せるのも無理はない。何せ、悠元の言葉を信じるのならばその程度の抑制で相手選手を委縮させるほどの威圧を放っていたのだ。その約3倍かつ至近距離となると、気絶者まで出かねないのでは……と達也は考えた。
「疑うのも無理はないけど……じゃあ、一瞬だけ全解放するから、気を強く持ってくれ」
悠元はそう言ってほんの短時間だけ抑制していた気配を解放する。まるで衝撃波でも通り過ぎたかのような感覚に、達也も思わず表情を強張らせた。文弥と亜夜子は揃って腰が抜けたようで、深雪に至っては……何故か尊敬の眼差しを向けていた。
遠くの方から「一体何事だ!?」と慌てる声が聞こえ、瞬間的な気配の解放で使用人が何人か倒れたような様子が聞こえた。
「――とまあ、何も考えずに全方向へ解放するとこうなる」

「……沖縄の時はそんな気配を感じさせなかった筈だが」
「前に爺さんの絡みでエジプトのピラミッドに行った話はしただろ？　その時に霊を祓っただけでなく、彼らの〝力〟が勝手に吸収されたんだ」
　ピラミッドは霊的な力場を維持する『聖域』としての形状から、彼らの〝魂〟を封じ込めていた。だが、墓荒らしなどの邪な欲望を吸い取って悪霊と化してしまっていた。
　悪霊を祓う際に使用した『陽光疾走（サンライズ・オーバードライブ）』の副次効果で歴代のファラオの魂まで勝手に吸収され、剛三曰く「抑制の技術を覚えぬと、悠元の神々しい気配を感じた連中が祀り上げるかもしれぬ」とまで断言されたほどの力を得てしまったのだ。
　強くなる分には歓迎するが、要らぬ副産物まで増えて正直頭を抱えたくなり、結果として剛三から気配の抑制や偽装といった隠形の技術をたった〝1日〟で修得する羽目になった。
「九重先生ばりの隠形を獲得したのは、先程のことが原因という訳だ」
「納得した。お前も大変だな」
　八雲にはお互いに色々悶着というか因縁というか……苦労しているからこそ、達也もそれ以上の追及を止めたところで振袖姿の夕歌が姿を見せた。
「あけましておめでとう。ところで……さっきのは悠元君の仕業？」
「あけましておめでとうございます、夕歌さん。ちょっと説明がてら気配を一瞬だけ解放しまして」
「威圧じゃなくて気配で相手を気絶させるってどういうことなの……」
　この場合、夕歌の反応が一番まともなのだろう。すると、そろそろ時間ということで案内役を仰せつかっている水波が入ってきた。恭しく挨拶をした上で文弥と亜夜子が先に部屋を出て行く。
「そういえば、悠元君はその身なりだけど、慶春会に参加するの？」
「会場には入りますが、気配を偽って達也と深雪の後ろに付く形ですね」
　それを聞いた夕歌は、達也と深雪に慶春会の会場へ入場する際のア

ドバイスをしていた。２人は初めての参加なので、勝手が分からないと思ったのだろう。
　そのアドバイスを終えたところで夕歌が呼ばれて案内され、最後は達也と深雪の番になったので、悠元は２人の後をついていく形で部屋を後にした。
「次期当主候補、司波深雪様、並びにその御兄上、司波達也様、おなーりー」
　水波の口上に、達也は腰が砕け、深雪に至ってはこめかみが引き攣っている。これには隠形で気配を偽っている悠元も笑みが漏れてしまい、予め千姫から受け取っていた扇子を広げて顔を隠した。案内している水波が疲れていたのは、この口上で声を張り上げないといけないということだろう。
　水波の案内で２人が真夜の両側に着席したのを見計らって、悠元は参加者の最後列のさらに後ろへそのまま腰を下ろす。深雪だけならばまだしも、達也が真夜の隣に座るというのはざわめきが起きるのだろう。
　この席の座り方も真夜から事前に打診されていたものであり、四葉の人間でない以上は最前列に座って要らぬ勘繰りをされたくもない。昨日の次期当主候補による夕食会でもそんな様子が見られたのだから、慶春会となればその視線が更に増えることになる。誤解を解く労力を考えると、面倒事など進んで起こしたくもない。
　そして、未婚ながらも金糸をふんだんに使った黒振袖を身に纏った真夜が新年の挨拶を述べる。
「皆様、改めて、新年おめでとうございます」
　その言葉に続く形で参加者たちも「おめでとうございます」と頭を下げる。悠元は声を発するのが拙いと判断し、頭を下げるに止まる。それを見やった真夜が笑みを浮かべつつ、話を進める。
「本日はおめでたい新年に加え、あと２つ明るいお知らせを皆様お伝えすることが出来ます。私はこれをとても喜ばしく思います」
　そう述べた真夜の視線は勝成と琴鳴に向けられた。勝成は悠元らと同じく羽織袴姿であったが、振袖姿の琴鳴は居心地が悪そうにして

いた。
何せ、ガーディアンである琴鳴が四葉の血縁者と同じ席に参加者としているだけでなく、彼女の着ている振袖は割と値の張るものなのは間違いない。この辺は神楽坂家の人間となったことで千姫の衣装管理も偶に手伝ったりしている経験から得た知識でそう判断した。
「この度、新発田家長男の勝成さんが、堤琴鳴さんと婚約されました。私の姉のガーディアンをしていた桜井穂波さんに続く慶事は、私としても大変喜ばしい事です」
この発表は、周囲から「まさか」という声よりも「やっとか」みたいな感じに受け取られていた。
元々内縁関係にあった勝成と琴鳴だったが、琴鳴が調整体ということから新発田家当主が難色を示していた。だが、悠元が琴鳴を治療したことで問題がクリアされ、穂波が元治に嫁いだ〝前例〟を用いる形で真夜がお祝いの言葉を述べた。
その穂波は既に妊娠しており、しかも男女の双子を身籠っている。現時点で魔法資質云々は断言できないが、少なくとも『領域強化(リインフォース)』による治療を受けている人間から生まれた子どもが元治や穂波の魔法力を超える可能性が十二分に考えられる。
「そして、次に皆様が関心を寄せられていることを発表いたします。何を発表するか、皆さんはもうお気づきの事かと思いますが」
そう述べた真夜から、ついに四葉の次期当主が指名されると参加者は固唾を飲んで見守っていた。ここにいる参加者の大半は真夜の隣にいる深雪が指名されると思っているだろう。
だが、その予想を覆すことで生じる動揺の表情を見たいがため、真夜は夕食の席での話を分家当主の誰にも伝えていないのだろう。悪戯っ子のような笑みを垣間見せつつ、しっかりとした口調で述べた。
「私の次の当主は、ここにいる私の息子――――達也にお任せしたいと思います」
真夜から投下された史上最大級の爆弾発言に対し、参加者はおろか使用人たちからも驚愕やら動揺の表情が垣間見え、状況が全く見えずに混乱している様子が見られた。そんな様子を悠元はただ冷静に見

つめていた。
（まあ、それもそうだよな。参加者の大半からすれば深雪一択の出来レースを真夜さんが卓袱台返しで白紙に戻し、その上で達也を指名したようなものだ。真夜さんも悪戯好きというか……）
　しかも、深夜の息子だと思われていた達也が真夜の息子という風に発表されたこともその混乱に拍車を掛けていた。すると、参加者である貢から真夜に対して質問を投げかける。
「御当主様、説明していただきたいことがございます」
「何でしょうか、貢さん」
「彼が四葉の次期当主に指名されたこともそうですが、彼が御当主様の息子というのは全くの初耳でございます。その辺の事情をご説明願えませんでしょうか？」
「ああ、そういえばそうでしたね。実は、四葉の復讐劇に参加なされていた唯一の生存者――――上泉剛三殿が偶然採取されていた私の冷凍卵子を見つけ、秘密裏に持ち帰ってくださったのです。その卵子と精子提供者によって出来た受精卵を、私の姉である深夜に代理出産してもらう形で生まれたのが達也なのです」
　この世界において、原作で述べていた嘘が剛三によって真となり、何の因果か上泉家と神楽坂家の血縁を含む存在として達也はこの世に生を受けた。紛れもない〝四葉真夜の息子〟として。
　過去のことをまるで知識を語るように述べた上で、真夜は貢に対して説明を続ける。
「そして、四葉家先代当主である英作さんと津久葉殿、そして神楽坂家先代当主である千姫さんの手により、達也の本来持ち得る魔法力を大幅に封印し、感情の爆発によって魔法が暴走しないように戦闘訓練を課すことで達也を四葉の戦力として育て上げました。あとは分家当主の皆さんもご存じのことでしょうから説明は省かせていただきますが、この度封印を解いた達也は深雪さん以上の魔法力を有しており、私の魔法である『流星群（ミーティア・ライン）』も使うことが出来ます」
　達也が生まれたあたりのことをぼかしたのは、分家当主らが達也を殺そうと画策したことに対しての〝釘差し〟も含んでいるのだろう。

大体、分家当主らが達也の殺害を目論んだとして、仮にそれが成功したとしても分家当主らは確実に〝死んでいた〟だろう。ましてや女性として幸せを奪われた真夜にとって待望の子どもを奪うということは、崑崙方院の連中とやっていることが何ら変わりなくなるということに気付いたのだろうか。

その話を英作が聞いた際、彼も正直耳を疑ったかもしれない。確かに達也の力は驚異的だが、それも使い方次第では有用だと思っていたところの分家当主らの提案。こんなことになるならば達也の力を明かさずに隠せばよかった、と達也の保護に動いていた千姫から当時の様子を聞いていた。

四葉元造は命を賭し、「人」としての在り方を証明するため、一族の者たちと共に大漢（ダーハン）と崑崙方院を壊滅させた。だが、四葉の分家当主らは、真夜と深夜の関係修復に自ら動くことなく、四葉の『触れてはならぬ者（アンタッチャブル）』の異名に甘えた。

元造の遺志がきちんと継がれずに四葉の異名だけが独り歩きしてしまい、力を求めた結果に得た力の大きさに耐えきれなくなり、達也を四葉の罪とすることで自分たちが本来背負うべき罪を押し付けた。

これを〝怠慢〟と呼ばずして何と呼べばいいのだろう。

新春の茶番劇

――国際魔法協会アジア支部主催の少年少女魔法師（マギクラフトチルドレン）交流会において四葉真夜が誘拐され、七草弘一が負傷した事件。

――当時中国大陸の南半分を占め、現代魔法において大亜連合より優位に立っていた大漢（ダーハン）の崑崙方院における真夜の〝人体実験〟。

それによって深い傷を負った真夜、真夜を救うために心を殺した深夜、そして娘の未来を奪われたことに対する怒りを原動力として起こった大漢政府と崑崙方院への復讐。後に〝四葉の復讐劇〟として『触れてはならぬ者（アンタッチャブル）』の異名と共に語り継がれる一連の事件。

物語上では真夜と深夜の復讐のきっかけ――達也と深雪の存在が生まれることになる原点として語られているだけだし、四葉家の人間でもない限りは深く知ろうと思わなかった。

奇しくも自分の母方の祖父はその復讐劇に元造の親友として関わり、復讐劇に関与した31人の戦闘魔法師の中で唯一の生存者。とはいえ、あまり詳しく聞こうとは考えていなかった。人間誰にだって語りたくないことの一つや二つはあるものだ。

自分がそのことを知ろうと思った切っ掛けは4年前――沖縄防衛戦の後、剛三に頼まれて倉庫の掃除をしていた際、箱の隙間から手紙が出てきた。そこに記載されていた名は〝四葉元造〟となっており、直ぐに剛三へ見せたところ、復讐劇に付き合うということで倉庫に立ち寄った際に元造も倉庫の中に入っており、恐らくその時に忍ばせたのだと思われる。

手紙の中に入っていた便箋には一言、「お前に頼むのは酷なことだが、真夜と深夜の未来を見届けてくれ」と書かれていた。この時点で元造は死を覚悟して挑むつもりであったらしく、剛三は珍しく泣いていた。

「あの頑固者の馬鹿野郎め……」という言葉からして、剛三は元造に生きていて欲しいと思ったからこそ、復讐劇に参加して元造の未来を変えようとしたのかもしれない。

弘一を負傷させ、真夜を誘拐した連中は間違いなく大漢政府の息が

掛かった人間――――崑崙方院だけでなく大漢政府まで標的にしたのは、真夜の誘拐犯が大漢軍の兵士だと知ったからだろう。
西暦２０６２年は世界群発戦争が終結していない時期であり、そんな時に大亜連合と大漢からみれば距離的に程近い台北（タイペイ）で交流会を開催した。当時、大漢はこの国と対大亜連合の軍事的な協力関係を結んでいたから、この交流会自体も実現できた可能性が高い。
仮に真夜を誘拐しても国家として大漢への報復はされず、適当に隠して誤魔化せばどうにかなると思ったのかもしれない。それだけこの国は〝甘く見られている〟……それは過去２０００年に渡るこの国と大陸の関わりの時点で分かり切っていることだが。
四葉の復讐劇は完全な私情による殺人行為として十分国際問題に発展する事件だが、当時の四葉一族の参謀として葉山忠教――――『元老院』のエージェントが付けられていた。
つまるところ、『元老院』は四葉家が大漢政府と崑崙方院を滅ぼせば東アジア一帯における世界群発戦争が終結すると睨み、最終的にはこの国への被害が減ると算段を付け、補佐として葉山を送り込んだ。
これだけ見れば『元老院』は国の利益に与した行いをしたと判断できるわけだが、同時に疑問も浮上する。
当時の年齢を考えるのならば、東道青波はまだ３０歳前後。そうなると当時の四大老は青波の父親（以後は東道氏と呼称）が務めていたと考えられる。仮に四葉の復讐劇を東道氏が後押ししていたとして、部下である四葉の戦力を大きく削ってでも得られる利を東道氏は得られると確信していたからこそ、復讐劇の後押しをしていたという矛盾の疑問。
そして、剛三の父親である政綱も当時は存命で、四大老の一角を担っていたと聞いている。千姫は既に四大老としてその席に座っていたらしい。上泉家と神楽坂家は四葉の勢力衰退を懸念して復讐劇に反対だったが、剛三が参加することで已む無く賛成したそうだ。
この辺の事情を聞いて自分が疑ったのは、『元老院』の構成メンバーが真夜の誘拐に関与していた可能性であった。
弘一と真夜が婚約したことを快く思わなかった人間がいるのでは、

と思って調べたところ、少なくとも当時の四葉家と七草家の中は割と歓迎する傾向にあった。でなければ婚約を結ぶということにもならないわけだが。軍関係や政府関係も調べてみたが、特に恨みを買っているような節は見られなかった。

こうなると、最も怪しくなるのが『元老院』であり、入念に調べ直してみた。その結果……真夜の誘拐に手を貸したのは東道氏の可能性が極めて高いという結果になった。

まず、かつて四葉家が東道家の部下にあたる関係であったが、復讐劇後に関係を解消している。表向きは「第四研秘匿に伴う四葉家の保持」とされているが、それならば関係の解消をせずに前線へ出さないような依頼をすればいいだけだ。

なのに、スポンサーとしての体と依頼の主従関係を残して部下としての関係から切り離したのは、恐らくその事実を知られて復讐されるのが怖いと判断したからだろう。

四葉家を部下として扱う関係を解消したのは、〝部下殺し〟を悟られたくなかった可能性もある。

原作における青波は魔法師を兵器として見る節があり、恐らく父親である東道氏もその傾向が強かっただろう。その彼らからすれば、四葉元造の精神干渉系魔法『死神の刃（グリム・リーパー）』は最大の戦力であり、同時に最大の脅威でもあった。

東道氏は元造を恐れ、四葉から何としても彼を切り離すか殺すための策として真夜の誘拐を大漢と崑崙方院にさせることで、自分への矛先を向けることを回避すると共に、合理的に四葉家の戦力を削ることで制御しやすくしようと目論んだのかもしれない。剛三の参戦というイレギュラーは生じたものの、結果的に四葉の戦力を削ることに成功したわけだ。

『元老院』はこの国において政財界に多大な影響力を有する。その気になれば国外の伝手もあるだろうし、大漢宥和派の軍人や国会議員を使って弘一と真夜を交流会に参加させる手筈も整えられる。

魔法師の人体実験ならば弘一も連れ去られる可能性が高かったが、彼は負傷こそ負ったが誘拐はされなかった。この時点で弘一に対し

て何らかの便宜が働いていた可能性がある。結果として婚約は解消され、後の七草家と四葉家の因縁に繋がる。

いくらその当時から四葉の諜報技術が優れていたとはいえ、少なくとも2日で崑崙方院に囚われていることの情報と救出に成功するまでに費やす準備と時間を考えた場合、誰かが黒羽重蔵（くろばじゅうぞう）に情報を提供しなければかなり難しいことが窺える。しかも、国内ならばまだしも国外となれば『元老院』クラスでなければ早急に手はずを整えられない。

真夜の誘拐によって四葉家を煽り、大漢政府と崑崙方院に敵意を向けさせることで四葉元造の抹殺と一族の戦力を削って四葉家の力を抑える。大漢を著しく衰退させることで大亜連合の勝利を呼び込み、東アジア地域における世界群発戦争を終結させてこの国の安泰を図る。

四葉の復讐劇は、この国の権力を握る一人の男が呪殺によって自らの地位を脅かされる恐怖が引き起こした事件。この事実に辿り着こうとした人間を東道氏は水面下で殺し、懸念材料であった剛三は親友を失ったショックで引き籠り、東道氏は勝ちを確信した。

だが、東道氏は最大の誤算を犯した。剛三の代わりに上泉家当主代行をしていた剛三の息子（剛三と奏姫（かなめ）の子で詩歩の兄にあたり、生きていれば間違いなく上泉家当主を継承していた）が東道氏の四葉に対する行いを見て真実を知ったため、表向きは〝大漢の残党による殺害〟に見せかけて殺したことが千姫に露見した。

千姫は躊躇うことなく〝四葉殺し〟の件も含めて剛三に伝え、二人は「この国の利にそぐわぬ行い」と見做して東道氏を殺した。それが、今から35年前の話になる。

青波が東道家当主と四大老の座を継ぎ、その箔付けとして剛三の娘の一人を娶ることになった際、青波が剛三と相当揉めたのは東道氏による〝四葉殺し〟と〝剛三の息子の殺害〟が大きな原因だった。千姫と奏姫が仲介役となることで何とか問題は収まったが、それでも剛三からすれば父親譲りの青波の魔法師に対する態度が気に食わなかった。

剛三とて東道氏の罪が息子の青波に及ばないことぐらい理解している。だからこそ、渋々娘との結婚を認めた。だが、今度同じような真似をするようならば……剛三はこう述べた。

「よいか、東道青波。娘を、その子らも幸せにせぬと儂自ら殺す。主の父が恐怖した四葉に対しても同じこと。わし等上泉の人間は元を正せば剣豪上泉信綱を祖とする武家の出。謂れなき侮蔑でわし等やわしの大切な存在、家族を貶めた時は……上泉家が東道家の〝全て〟を滅ぼし、歴史からその名が完全に消えると思え」

魔法師としての力は衰えても、武人としての剛三は既に達人の域へ踏み込んでいる御仁。その気になれば青波の首と胴体が瞬時に飛んでいくような鋭い殺気を剛三は青波に向けて発していた。青波も剛三の本気の殺気を感じ、黙って頭を下げる他なかった。

青波は四葉家に対する関係を深めようとせず、出来る限り協力の姿勢を見せている節は原作でもそれなりに見られた。青波本人からは聞いていないが、青波は恐らく父親の〝四葉殺し〟を何らかの切っ掛けで知り、その贖罪として達也や八雲に協力しているのかもしれない。

それから35年。東道家は佐那が生まれ、青波は上泉家に隔意がない事を示すため、還暦を期に出家して青波入道（せいはにゅうどう）を名乗った。それでも青波は東道家当主としての役割は果たしている。そして、四葉家への配慮を示すため、達也と仲が良い古式魔法師として幹比古の存在が浮かび上がり、彼を養子に迎えることとした。

自身の推測も含めての流れを千姫と剛三に確認したところ、二人は揃ってその事実を肯定した。これまで四葉家に伝わってこなかったこと自体が奇跡としか言いようがなく、今青波に退場されても困るので、最悪樫和に全ての罪を被ってもらうことも視野に入れるつもりだ。何せ、当時東道氏主導による四葉の復讐劇には樫和も関わってしまっているのだから。

犯した罪は消えることなどない。逃げることなど以ての外。だが、その罪を一つの存在に押し付けて逃げようとする輩がいるのも……人間の生存本能による業なのかもしれない。

◇　◇　◇

真夜が述べた衝撃の事実に、慶春会の参加者の殆どだけでなく葉山と紅林を除く使用人も混乱の様相を見せていた。真夜としては真実を端的に分かりやすく説明しただけなのにだ。すると、ここで質問を投げかけたのは分家の中で中立をいち早く宣言していた津久葉家当主、津久葉冬歌（とうか）であった。

「御当主様、ご質問しても宜しいでしょうか？」

「冬歌さん。ええ、構いません」

「御当主様が達也さんを当主に指名なさった事情はご理解しました。では、何故慶春会まで分家当主である我々にも隠し続けた理由をお聞かせ願いたいのです」

冬歌の言い分は確かに道理である。少なくとも、四葉の分家当主らに「達也が次期当主候補足り得る」という情報だけでも判断材料の一つとなり、今のような混乱は避けられたのかもしれない。会場が静まり返ったところで真夜は冬歌の問いに答え始める。

「それは至って簡単な事です。達也が次期当主に足り得る力を持っているかどうかも分からないのに、殆どの分家の皆様は私から生まれたばかりの達也を取り上げようとしたんですもの。先代当主の英作叔父様も達也の能力を解析なさった際、貴方方分家の荒れ様に一番心を痛めていたのです」

真夜と深夜の心情すら推し量らず、それを救うこともせずに生まれ出てしまった達也の存在。それを一番心苦しく思ったのは当時の四葉家当主であった英作であった。彼の遺書にはその当時の苦悩が記されており、兄の代わりに父親としての面倒を見ることも、自分の子である椎葉家ですら達也のことを快く思わなかったことも、彼にとっては心残りであると記されていた。

背負ってしまった以上は、四葉の力として育てる。このまま『アンタッチャブル』の名に甘え続けるのは、英作の兄である元造を筆頭に代官の復讐劇で散っていった四葉の一族にしがみ付き続ける形となってしまう。

その状態を打開するためにも、英作は達也に一縷の望みを託した。

例え彼が自分の姪たちの望む〝復讐〟の願いによって生まれ出た存在だとしても、四葉の一族の未来を切り開いていく旗頭になってくれることを信じた。
「なら、然るべき時までその力を封じ、深雪さんのガーディアンとして仕立て上げれば、誰も好き好んで達也を害しようなどとは考えないでしょうから。そんなことをすれば、深雪さんが怒りますし……達也の友人も怒らせることになります。そうですよね、神楽坂様？」
真夜は〝取り上げる〟という言葉を使ったが、達也を殺そうとしたことは既に知っている。
そこで、一計を案じたのは深夜であった。真夜の子という事実を隠した上で達也を深夜の子とし、深夜自身のガーディアンとして据えれば、然るべき時まで達也を害しようなどという輩は抑えられると考え、真夜もその案を呑んだ。
深夜の案に英作も賛同した上で、達也に厳しい訓練を課した。達也はその後、深夜が産んだ深雪のガーディアンとして据えた上で深夜は四葉本家と距離を置いた。それは全て、達也を守る為に実行された。
そして……達也による人の縁が繋がった。達也の力を封じた千姫の養子が深雪と恋仲となり、達也とは親友の関係を築いている。さらに、真夜と深夜の心を救った少年。真夜は、その名を口にする。
真夜の言葉を聞いた瞬間、悠元は気配偽装を解除して気配の抑制をほぼ切った状態で姿を見せた。悠元は徐に立ち上がり、自然と開かれた〝道〟を通って真夜の眼前に胡坐をかいて座った。その様子を誰しもがただ黙って見つめていた。
「全くでございますな四葉殿。改めて、新年おめでとうございます、四葉殿、達也殿、深雪殿。此度は新発田殿の婚姻に加え、我が親友であり、四葉殿の実子であられる達也が四葉家の次期当主に指名されたこと、今代の神楽坂としてお慶び申し上げる次第です」
「神楽坂様。ご丁寧な新年の挨拶、大変痛み入ります。ささ、こちらへ」
真夜は達也に視線を送ると、意図を察した達也は横に移動した。そうして真夜と深雪の間に人一人分が座れるスペースが出来たため、悠

元はそれに従って腰を下ろした。隣に愛しい人がいることに、深雪は柔らかな笑みを零していた。
　そうして、悠元は改めて慶春会の参加者に対して自己紹介をする。だが、昨日の挨拶と明確に異なるのは、立場だけでなく言葉遣いも変わっていた。
「護人・神楽坂家が第１０８代当主、神楽坂悠元と申す。此度は四葉殿の招きに与って慶春会の様子を見ていたが、私はとても残念に思う次第だ。寧ろ憤っている。何故だか分かるか、黒羽貢殿？」
「い、いえ、私には存じ上げませぬ」
「そうか……先々月に椎葉（しいば）・真柴（ましば）・新発田（しばた）・静（しずか）の当主の方々と合わせて、達也の処遇がこのまま決まることに不満を漏らしていた其方が『何も知らぬ』と？」
　そう呟いた悠元が殺気を込めると、会場の空気が一気に圧迫するような様相を呈していた。まるで、首元に死神の鎌が付きつけられたような冷たい感覚に、分家当主らは揃って顔がすっかり蒼褪めていた。
「昨年末の話になるが、達也殿と深雪嬢がここに向かう際、三度の妨害を受けている。一度目は国防陸軍・対大亜連合強硬派による強化サイキックの襲撃。二度目は宇治第二補給基地に配属されている筈の波多江大尉の部隊。そして、三度目は新発田勝成殿による待ち伏せ」
　深雪は達也を狙ったものと解釈しているが、達也は少なくとも自分だけ狙うにしては用意が周到過ぎると感じていた。火器類が大分抑えられていた（対魔法師用のハイパワーライフルなどといった重装備を使わなかった）のは、先日の事件で比較的お咎めが少なかったが、国防軍の装備一つでも基地の外に持ち出すとなれば許可が必要となる。その許可が出にくい装備を避けての結果だろう、と達也は推察した。
「まあ、三度目のものについては私自ら対処したので、そのことに目くじらは立てないと勝成殿に伝えている。よって、今更勝成殿の罪を掘り起こすことはしない。時に新発田理（おさむ）殿。勝成殿の態度を見ている限りにおいて貴方が勝成殿を唆したと思われるが、異論や反論はあるか？」
「そ、それは……」

「神楽坂様、横から口を挟むことをお許しください。父は達也さんの魔法を畏れて〝封印〟を強く主張しました。それを見た私は説得が不可能と考え、無意味な同士討ちを避けるために父の提案を受けました。父を罰するというのなら、妨害をした私も同罪になります」
「そんな！　神楽坂様、それを言うのであれば貴方と戦った私も同じ罪を背負うべき立場です。ですが、せめて奏太だけは許してあげてください」
　目の前にいるのは達也と同い年の少年の筈だが、慶春会の参加者の殆どがまるで老獪な雰囲気を滲ませている悠元を見て、とても年下のような扱いなど出来ないと判断していた。
　悠元の問いかけに言い淀む理（おさむ）に対し、勝成が割り込む形で説明した上で実行者として勝成は甘んじて罰を受けると発言した。それを庇い立てするように、琴鳴もその罪を背負うと発言したのだ。その代わり、奏太に対しての許しを求めた。
「――――勝成殿。同じことはあまり述べたくないが、私も姿を偽って接触した以上、私は貴方を許した。ならば、貴方が指示した琴鳴嬢や奏太殿も同じく許すと決めている。ましてや、勝成殿は同族による同士討ちを回避しようと為さった。琴鳴嬢と奏太殿も自らの身を顧みずに主の願いを遂げようとされた。その心情は立派である故、許すに値すると結論付けた」
「神楽坂様……」
「だが、新発田殿を含めた達也の隔離を目論んだ方々は別だ。達也を四葉から切り離せば、本家と分家の〝同士討ち〟――――即ち御家騒動が勃発する。仮にそんなことになれば、私は達也の親しき友人として四葉本家に味方する所存よ。尤も、神楽坂と上泉――――護人の二家を敵に回したい気概があればの話だが」
　悠元は先日の『伝統派』の一件で数多くの古式魔法師を味方につけているだけでなく、師族二十八家において十師族の一角を担う三矢家の出。母方は護人・上泉家であり、今代の当主は悠元の実兄。〝最低でも〟二つの護人の当主を敵に回すという覚悟が分家当主らにあるのか、という問いかけに対し、問われた側は何も答えることが出来ず

にいた。
それを見ていた達也は、深雪の周りを魅了するような力場を悠元が展開し、しかも先程悠元が述べた面々にだけ殺気を飛ばしているのがすぐに分かった。魔法でも一線級の彼が単なる殺気だけでここまで怯えさせるのは最早人の成せる業ではない、と思っていたところで真夜が悠元の方へ向いて頭を下げつつ、徐に弁明の言葉を口にする。
「申し訳ありません、神楽坂様。愛しい我が子である達也の身の安全を鑑み、今まで分家当主らを強く説得してこなかった私に全ての落ち度がございます。このような場である故、どうか腹立ちをお収めいただけませんか？」
「……ふむ、四葉殿の仰ることも筋が通りますね。私としても新年早々に血を見る様な諍いは避けたいところ。四葉殿が謝罪為さり、今後一切の仕置きをするというのであれば、此度は四葉家の家内の問題ということで収めることは可能でしょうが」
「無論、ただで腹立ちを収めてほしいとは申しません。聞けば、神楽坂様は隣にいる深雪さんと恋仲であると聞き及んでおります。そこで、四葉家は神楽坂家への隔意無き証として、深雪さんを神楽坂様の妻として送り出したいと考えております」
成程、と達也は真夜の考えた策と悠元がここにいる意味を理解した。
先日の襲撃に関して、悠元は勝成に対しての罪は求めず、琴鳴の寿命を改善することで勝成を味方に引き込んだのだ。
だが、悠元は勝成を許しても彼の父親は許していなかった。しかも、貢は悠元を説得すれば真夜を説得するのも容易いと踏んだが、悠元からすれば友人や婚約者を売るに等しい行為を許容など出来るはずがない。
そして、達也の四葉家次期当主継承は悠元も「四葉を四葉足らしめる意味で妥当」という理由で認めていたことを昨晩の真夜との話し合いで聞かされた。それに見合う魔法力に関する封印も悠元は事前に把握していたということであり、これには達也も悠元に対して白旗を上げたくなったほどだ。

「おや、確か深雪嬢は四葉の次期当主候補の筆頭と目される実力者、と聞いておりますが」
「深雪さんは達也の本来の魔法力を肌で感じ、自ら次期当主候補の地位を返上して達也を推薦なさったのです。その際に聞いたところ、愛する人と添い遂げたい意思を感じました。四葉の当主だけでなく女性としても、深雪さんには私の分まで幸せになって頂きたいのです。神楽坂様、我が姪の幸せを叶えるためにも、どうかこれで腹立ちをお収めください」
　真夜は、深雪の身内としてではなく〝四葉家〟として神楽坂家に隔意無き証を立てるため、既に婚約序列第一位に据えられている次期当主筆頭候補だった深雪を悠元の妻として送り出すことを宣言した。
　慶春会の場で悠元の婚約者として真夜が推薦することで、分家当主らに「分家当主（あなたがた）が悠元を怒らせたせいで深雪を神楽坂家に送らざるを得なくなった」という〝罪〟と〝責任〟を背負わせることにしたのだ。
　いくら達也の罪から逃れようとする彼らでも、深雪が責任を取ることとなった罪を達也に押し付けることは許されない。これは紛れもない四葉家の責任であり、分家当主らも等しく負うべき罪なのだから。
「……まあ、対大亜連合強硬派ならびに宥和派の勢力を削ぐことが出来たのは偏に達也の功績ですし、四葉殿の誠意と達也の活躍に免じ、此度は深雪嬢を娶らせていただくことで腹立ちを収めましょう……深雪さん、勝手に話を進めてしまったようで申し訳ないが、異存はありませんか？」
「はい。此度は分家当主の方々がご迷惑をお掛けして大変申し訳ございません。至らぬ部分が多い未熟者でございますが、どうぞ末永くお傍においてくださいますよう、お願いいたします」
「こちらこそ、未だ至らぬところもありますが、宜しくお願いいたします」
　事情を知る人間からすれば、これは最早〝茶番〟でしかない。だが、真夜の口から明確に深雪の婚約を認める文言が出た以上、深雪は

内心嬉しさでいっぱいだった。悠元の言葉に対して謝罪を口にしつつ、深雪は悠元のほうへ座り直した上で深々と頭を下げた。それを見た悠元も、深雪のほうへ座り直した上で頭を下げた。
「あらあら、新年とはいえまだ冬ですのに、ここだけ春満開ですわね」
「母上……戯れも程々になさってください」
二人の雰囲気にあてられたのか、にこやかに話す真夜に対して達也は内心で溜息の一つでも出そうな感じを抑えつつ真夜を嗜めたのだった。

トリリオン・ドライブ

真夜が悠元の嫁に深雪を送り出す――――事実上の婚約容認に対し、参加者や使用人はまたもや動揺を隠せなかった。だが、それを一瞬にして静寂に変えたのは、悠元から放たれた気配によるものだった。

悠元は全てを圧倒するだけの力を持ち得ていて、彼はそれを無闇に振りかざしたりしない。彼が刃を揮うのは、明確に害を為すと判断した時のみ。しかも、その前段階としてあらゆる方面からの攻撃で敵を追い込む。魔法で殺さずに金などの実体的な力で殺すことを平然とやってのけるだけの精神力には、さしもの達也ですら感心を覚えるほどだった。

すると、モーニングコートを着た葉山が四人の前で平伏した。このタイミングで挨拶をしに来た意図を察しつつ、葉山の挨拶を受けることとなった。

「達也様、深雪様。達也様の次期当主指名と深雪様のご婚約、真におめでとうございます」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。ですが、顔を上げてください」

真夜は深雪を悠元の妻として送り出す、と述べたことを踏まえて葉山は明確に〝婚約〟という言葉を述べた。これは主の意思を明確に示すと共に、使用人のトップであるからこそ、主に仕える意思を他の使用人に知らしめる意味合いも含まれていた。

深雪は丁寧に返しただけだが、達也は大袈裟な作法にどことなく居心地の悪さを感じていた。葉山は元から達也に対して真摯に接してきたが、ここまでされるのは達也としても今までに味わったことが無いため、困惑に近いものを覚えたのだろう。

「自分は本家の仕事や仕来りをまるで知りません。なので、葉山さんにはいろいろと教えていただきたいのです」

「光栄に御座います。ご不明なことは、この老骨に何なりとお尋ねください。そして、神楽坂様。この度の当主襲名とご婚約、神楽坂家で忠成が世話になっていることも含め、感謝とお慶び申し上げます」

「これは葉山さん。ご丁寧な挨拶、大変痛み入ります」
葉山からすれば、実の息子が神楽坂家の筆頭執事として務めている(悠元も忠成を認めており、筆頭執事の続投が決定している)ことも踏まえての挨拶に、悠元は丁重な言葉で応対した。真夜に一番近い使用人だからこそ悠元と深雪の関係も知っているため、特に異論などはみられなかった。
だが、これだけのために挨拶に来たのではないだろうと思い、葉山に問いかける。
「それで葉山さん。恐らく達也殿にご用件がおありなのでしょう?」
「中々のご賢察、痛み入ります。達也様、以前魔法協会でお会いした際の約束を覚えておいででしょうか?」
「約束……ええ、覚えております。ですが……」
葉山の問いかけで何を言いたいのか察したが、達也はその魔法を使う上で最も大事な装備を受け取っていない。達也から視線を向けられた悠元は当然その意図を理解しつつ、徐に口を開いた。
「分かっておりますよ、達也殿……奇しくも、四葉家は新年に3つの慶事となりましたが、未だ次期当主に指名された達也殿の御指名に納得されていない方がいらっしゃるご様子。なれば、その力をお見せするのがよろしいでしょう」
そう呟いた悠元は懐から白いハンカチを取り出し、それを眼前にいる参加者と視線を一瞬遮るように振るうと、悠元の前には一つのジュラルミン製のケースが姿を見せた。その術が周公瑾が主に用いていたものと『鏡の扉(ミラーゲート)』の複合術式だとすぐに分かったのは達也だけであった。
そして、悠元はハンカチを仕舞った上で達也にそのケースを差し出した。
「達也殿の四葉家次期当主の就任祝いとして、知己の魔工技師に作製していただいたCAD用アタッチメントです。遠慮せず受け取ってください。折角ですから、新魔法のデモンストレーションで実際に試してみてください」
「では……ありがたく受け取らせていただきます」

達也がケースの中身を空けると、そこには『トライデント』に装着することを想定したアタッチメント――リーナの『ブリオネイク』に対抗して作った魔法ということで、『ブリューナク』の名が刻まれている。形状は原作の杭型ではなく砲身を延長するような形状となっており、俗に言うサイレンサーのような位置付けになっている。

達也の初期案は炭素鋼の杭を取り付けるだけのものだったが、悠元は達也に掛けられている封印を解除した状態での魔法力を勘案して設計した結果、炭素鋼の杭を変換するプロセスをより簡略化する方法を考え出した。

それは、空気中に含まれる窒素から中性子を取り出す方法だ。炭素と窒素の原子番号は一つしか変わらず、原子自体の安定性はさほど変わらない。加えて、空気中のみならず有機物にも含まれているので取り出しはそう難しくない。

アタッチメントの上下には窒素を急速圧縮するための通気口が空けられており、急速圧縮のための機構は『術式解体（グラム・デモリッション）』におけるサイオンの圧縮プロセスを応用した。元々『術式解体』を使いこなしている達也からすればそう難しくないと判断し、ハードウェアの機能に組み込んだ。

そして、『バリオン・ランス』と名付けていた魔法だが、このアタッチメントを完成させた折に達也からこの魔法に名を付けてほしいと頼まれた。曰く「俺だと安直な名前になるから」とのことで、已む無く名前を考えることになった。

達也の特異魔法である『分解』と『再成』だからこそ可能とする、ＦＡＥ（フリー・アフター・エグゼキューション）理論を用いた中性子砲撃魔法。あらゆる物体を瞬時に炭化させうる魔法。『バリオン・ランス』改め〝トリプル・バリオン・キャスト・ドライブ〟――『トリリオン・ドライブ』と名付けた。

バリオン粒子を使った攻撃であることを隠す意味合いもあるが、この魔法は悠元が研究を進めているＦＡＥ理論の最新版を用いているため、炭素鋼という固形物に頼る必要もなくなったことから名称に『ランス』を含めなかった。悠元のＦＡＥ理論を『ブリオネイク』に応

用した場合、サイズが大分圧縮できることも分かっているため、この魔法は達也以外に使わせないようにする気でいる。
理由は至って単純で、ＵＳＮＡの魔法技術の発展に寄与するつもりが無いからだ。すると、悠元の言葉に気になるフレーズがあったのか、葉山は悠元に問いかけた。
「神楽坂様。今、新魔法と仰いましたか？」
「ええ。私も少しばかり知恵をお貸ししましたが、達也殿は新たな魔法を開発しまして。葉山さんは達也にその辺りの約束をされたとお聞きしていた次第です」
「新しい魔法⁉　見せて頂戴！」
「お兄様、私も見てみたいです」
達也の新魔法ということで、真夜に続いて深雪まで興味津々と言った感じで詰め寄るような様子を見せたことに、流石の達也もたじろぐような素振りを見せた。だが、四葉の当主たる力を見せる必要があるという悠元の意図は理解していたし、納得していた。
それは、昨年正月に参加した神楽坂家の慶賀会で悠元が行った魔法デモンストレーションを見ていたことから、今度は自分の番なのだと心の中で納得させた上で立ち上がった。
「それでは準備いたしますので、少々席を外します」
達也は会場に面した庭にＣＡＤのケースを持って現れた。達也の向かい側に猪が入った檻が置かれる。
原作ならば達也が説明をするところだが、達也は昨年の悠元に倣う形で説明はしなかった。その代わりに悠元が会場に向けて簡潔に説明をする。
「これから達也殿が使う魔法――『トリリオン・ドライブ』は生物を対象とした致死性の魔法となります。無用な殺傷を好まない方がいれば、直ちに別室へ移動されたほうが宜しいでしょう」
悠元が説明したことは達也も耳にしており、これではまた悠元に〝借り〟ができたようなものだ。悠元自身は親友である達也に貸し借りの勘定など考えていないが、達也からすれば深雪のことも含めて悠元に礼を感じており、リーナやほのか、亜夜子に対する態度の変化は

彼の存在無しでは考えられないことだ、と内心でそう感じていた。
そして、彼はシルバーホーン・フルカスタマイズ『トライデント』を構えた。銃口には先程悠元から受け取ったアタッチメントが取り付けられており、外見上は『トライデント』の砲身がそのまま延長されたように見える。
照準を猪に構えて、引き金を引く。
魔法のプロセスが一斉に、一瞬にして走る。
【マテリアル・ナイトロジェン圧縮】
【マテリアル・バリオン分解】
通気口から空気が吸引され、空気中に含まれる窒素の原子核を分解する。窒素分子から原子に、原子から電子を分離し原子核を取り出し、更に原子核から陽子と中性子、バリオンを取り出す。
【ＦＡＥファーストプロセス実行・粒子収束】
物理法則の束縛が緩い粒子群を円盤状に集め、分解の定義対象に含まれないレプトン・電子が陽子に捕獲される。
【ＦＡＥセカンドプロセス実行・射出】
悠元のＦＡＥ理論――――事象改変に伴う現象変化をそのまま用いる魔法プロセスを使用した場合、特定の条件下で更に物理法則の束縛が緩む事象――――によって射出される円盤状のバリオンが、標的に向かって撃ち出される。その魔法力の限界を超えたバリオンの塊のスピードは秒速５万キロメートルに達する。
【マテリアル・再成】
全てのプロセスが逆転するが、アタッチメント横の部分が展開して強制排気される。排気方向は達也への被害が及ばないよう、術者に対して外側へ排気されるようになっている。
「えっ？」
「何だ？」
「何が起こった？」
達也の魔法を見ていた観客からそんな声が湧き上がったのは、猪が音を立て倒れた直後だった。
生憎と、達也にはこの魔法の種明かしをする気もないだろう。昨年

の自分の場合は、元々天神魔法の技巧である『天刃霊装』と『天神喚起』を使ったからこそだし、その存在を知る面々が察して何も言わなかったことが大きい。
だが、慶春会の参加者はそこまで頭がいい人間ばかりでなかった。その現象を不思議に思った勝成が達也の『トリリオン・ドライブ』について尋ねたのだ。それを横目で見やりつつ、庭に降りて猪の入った檻に近付く。
「デモンストレーションのためとはいえ勿体無い……」
そう呟いて、悠元は『天陽照覧』で猪を生存状態に戻し、『夢世界（ドリームワールド）』でそのまま強制的に寝かせた。何事も無かったかのように会場へ戻ったところで深雪が問いかけてきた。
「悠元さん、何故お兄様が殺したあの猪を生き返らせたのですか？」
「……単純に勿体ないと思ったからだが、おかしかったか？」
「ふふっ、いいえ。そんな風にやさしいから、私も含めて惹かれるのですよ」
食材としての猪の利用を考えての事だったが、その辺も察しつつ深雪は笑みを零した。すると、真夜が達也の『トリリオン・ドライブ』について尋ねてきた。
「悠君、先程の魔法は中性子線を射出する魔法ですね？」
「ええ。達也の特異魔法に加えて、達也の封印されていた魔法演算領域が解放されたことで可能とした致死性の攻撃魔法です。分解、射出、再成のプロセスによって放射性物質は一切残らず、攻撃した事実だけが残る……ある意味究極の魔法でしょう」
「ふふ、流石達也ですね。勿論、悠君の働きもあるのでしょう」
視線を達也の方へ向けると、勝成は満足したようで達也のもとを離れていく様子が見られた。この世界では悠元と対峙したため、達也に対して「その魔法を妨害されなかった時に使わなかったのはなぜか」とは聞かれなかった。
『中性子（ニュートロン）バリア』に関する部分が聞かれなかったのは僥倖だが、『トリリオン・ドライブ』は『バリオン・ランス』に備わらなかった性質が追加されている。この性質がかなり凶悪で、原作通りに克人と戦っ

た場合……下手すると克人の腕が吹き飛ぶだけで済む問題で無くなる。まあ、戦わずに済めばそのことを述べる必要もなくなるので、今は伏せておくこととする。

そして、機を見計らったように真夜が宣言するような口調で声を発する。

「御見事です、達也。正しく四葉の次期当主に足る力と私は認めます」

新魔法のお披露目も無事に終わり、慶春会はこれ以上のトラブルもアクシデントもなく終了した。ただ、四葉家次期当主ならびに四葉家現当主・四葉真夜の息子となった達也に早速仕事が待っていた。

それは、達也の封印を施した神楽坂家先代当主への報告も含めた護人・神楽坂家への新年の挨拶。そのために達也が箱根の神楽坂本邸へ出向くことであった。

◇　◇　◇

護人の二家の当主は当主指名による襲名制だが、権威と権力を保持している関係で代替わりの度に皇居を訪れ、今上天皇による権威と権力の附託と承認を受けて初めて護人の当主として認められる。

これは『元老院』の中でも神楽坂家と上泉家だけが行っていることであり、皇族への忠誠を誓うとともにこの国に住まう民を護る役目を背負う誓いを立てるもの。故に、代々の上泉家と神楽坂家の当主は四大老の中でも別格とされている。

悠元が昨年のクリスマスイブに皇居を訪れたのは、晩餐会への出席だけではなく神楽坂家当主の権威と権力の附託と承認を受けるためであった。正式な襲名は元旦を以てするとしたが、その日まで今上陛下を働かせるべきではないと考え、宮内庁と相談した上で晩餐会のある日に決めたのだ。

なお、東道家も次代を継ぐことになる幹比古から今上天皇の附託と承認を受ける形で話を詰めており、これで四大老の中で附託と承認を受けないのは樫和家だけとなる。そのことを知らせていないのは、青波曰く「自らの権威と権力を王のように振舞い、陛下を蔑ろにしていると気付かぬのなら、そこまでの男だったというだけだ」とのことらしい。樫和の父は〝四葉殺し〟の一件で青波の父に四葉の力を削ぐ

よう迫ったらしく、その〝報復〟ということなのだろう。まさに因果応報であるため、自分も聞かなかったことにした。
今の天皇に権力は存在しない。だが、この世界において長きに渡り権威を保ち続けた象徴を蔑ろにするのは不敬に値する。そのことをこの国の民が理解できているのかと言えば疑問を投げかけることになるが。
閑話休題。
悠元は達也に同行する形で四葉本家から箱根にある神楽坂本邸に向かう。悠元と達也の他には深雪と水波、夕歌が同行することとなった。荷物は無論すべて持ってきており、服装は慶春会での恰好のままで来ているが、水波だけは真夜の指示で着替えさせられて振袖姿になっている。いきなりのことに水波も驚きを隠せなかったが、真夜から何かを言われたようで、悠元のほうを見る度に頬を紅く染めていた。
「正月早々に大変だな、達也」
「悠元ほどじゃないがな。確か、エリカたちも神楽坂の本邸に来ているのだろう？」
「ああ。まあ、エリカは家にいると色々言われる立場だからな」
神楽坂の本邸には、昨年のメンバーに加えて愛梨と栞、セリアと佐那も来ているらしく、他の面々と交流を深めているらしい。それと、婚約者となった茉莉花とアリサも来ていて、将来入ることになる魔法科高校の面々と仲良くなっているそうだ。
幹比古と美月、佐那は言うまでもない事なので省くが、エリカの場合は家にいると父親が変な縁談を持ち込んできそうだった為に神楽坂家からの誘いを受け、レオもエリカについて来る形になった。その原因は大方ローゼン家の絡みだが。
「九校戦の祝賀会の時にエリカがすっかりレオ君と仲良くなってましたが、そういうことがあったのですか」
「俺も無関係じゃなかったからな。爺さんの知り合いということでバスティアン・ローゼンの遺産を受け取る羽目になったし」
「今更だけど、悠元君の交友関係はどこまで広いの？」

どこまでと言われると結構多岐に渡るし、味方と敵対の両方ともなれば周辺国にまで及ぶ。大亜連合の関係者と出会ったことは一切ないが、ＵＳＮＡ、ＳＳＡ、イギリス、フランス、ドイツ、新ソ連の国家元首と出会ったことがあるし、軍関係だと剛三の弟子の繋がりで結構な人数に上る。

「普通に生活していて直接会えないという意味だと、ローマ法王猊下とか今上陛下かな」

「いや、何でそんなに平然としてられるの？」

「そうでもしないとやってられませんから」

最初の方は流石に緊張したが、次第に会う人が積み重なっていく時点で驚くのに疲れてしまった。なので、「驚く」という感情は生まれるものの、それに対するリアクションが丁重な挨拶をするという反応に置き換わっていったのであった。

身内に人外と言うか論外の存在を知った以上、驚きを既に通り越したとも言えるが。

婚約事情のおはなし

箱根の神楽坂本邸に到着し、悠元と達也、深雪はそのまま大広間に通された。神楽坂家の慶賀会の準備が既に終わっているが、出迎えたのは髪を結っている振袖姿の千姫であった。曰く「単衣を着るのは慶賀会といった重要な儀式のときなので、振袖着てもいいじゃない」とのこと。

昔は結構口煩かったそうだが、時代に合わせることも必要だと千姫が大分改革したそうだ。そんなことはさておき、悠元と達也、深雪が座ったところで挨拶をする。

「あけましておめでとう、悠君に達也君、それに深雪ちゃん」

「あけましておめでとうございます、母上」

本来ならば当主となった悠元が千姫の隣に座るのだが、今日は慶賀会の本番ではなく私的な会談という立ち位置の為、悠元が達也らの側に座っている。千姫もそれには口煩く追及することなく悠元の挨拶を受けた上で達也と深雪を見やる。

「あけましておめでとうございます、先代の神楽坂殿。この度四葉家次期当主の指名を受けた四葉家現当主が長子、司波達也と申します。改めて、以後お見知りおきを願うと共に、先代殿が自分に掛けた封印を解いたことを報告すべく、こうして出向きました」

「これはご丁寧に、達也君。真夜ちゃんには別に手紙でいいと言ったのですけど、あの子は変なところで律儀だから。神楽坂の当主は既に悠君へ譲りましたので、以後は悠君を遠慮なく頼ってください」

「それは承知しておりますが……」

「だから、親友に損得勘定は要らんと言うてるだろうに」

達也のある意味頑固なところは真夜や深夜にも通ずるところがあるようで、悠元が窘めるように呟くと、深雪や千姫は揃って笑みを零した。そして、千姫は深雪に視線を向けた。

「改めて、叔母様――四葉真夜から神楽坂家当主の妻として嫁ぐよう言い付かりました司波達也の従妹、司波深雪と申します。至らぬ身ではありますが、どうかご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたしま

す、千姫お義母様」
「あらあら、ようやく悠君と深雪ちゃんが婚約できるのですね。悠君のお陰で沢山義理の娘が増えそうです」
「元々女系の気質が強かったのに、もっと増えていいのですか？」
「巫女さんもただで雇えないですから」
悠元に重婚させるのは、箱根にある富士山麓神宮（ふじさんろくじんぐう）――元々京都にあった神楽坂の祖先を祀る為の神社を移設し、霊山である富士山の龍脈を抑える役割も担うための護国の為の神社――巫女の手伝いをさせるためと千姫が発言した。
ちなみに、ここの巫女のバイトは割と給料が良く、年末と三が日だけで１０万以上は出すとのこと。都心から離れていることと、休みたい時期に駆り出すという配慮のためらしいが、割と競争率が高いらしい。
明らかに現金なことを述べる千姫に対し、悠元は呆れたような表情をしていた。それに気付いたのか、千姫は扇子を開いて口元を隠していた。正直、その言葉をどこまで本気と捉えるかは難しいところだと思うが、婚約者の中には神宮での勤務経験がある人間もいる（姫梨と沓子）ため、割と本気で言っている感が拭えないのだ。
「ふふ、冗談ですよ。婚約した後のことですが、悠君の司波家の居候はそのまま認めます。それで、他の婚約者に関してですが、今後のことを考えると東京の別邸では少し狭いので……町田にあるＦＬＴの北側が丁度空いていますので、そこに建てましょう」
そんな簡単に決められるのは、世界群発戦争後のドサクサに生じて〝四葉殺し〟の関係者を始末した際、戦争による死亡で所有者不明となった関東圏の土地をタダ同然で買い上げたからだ。
しかも、結構一等地レベルの場所が多く、神楽坂家の別邸は皇族警備の重要拠点ということで固定資産税が実質〝ゼロ〟にされているほどだ。ＦＬＴの土地自体も神楽坂家が貸している形で、『トーラス・シルバー』による恩恵を割と受けている。
千姫の構想では、東京の別邸を修司と由夢の〝新居〟として渡しつつ、『神将会』の拠点として活用する。そして、箱根と都心を繋ぐ形で

町田に悠元の婚約者が住むための住居を建設する腹積もりでいた。
「あそこの土地ですか？　ＦＬＴ本社の北側は確か旧研究施設跡地で、住居一つ建てたとしても大分余りますが」
「なら、その隣に達也君の婚約者用の住居も建ててしまいましょう」
「……すみません、千姫さん。今の話はどういうことなのですか？」
　町田にあるＦＬＴ本社・研究施設は、『トーラス・シルバー』による事業拡大や将来の『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』のため（表向きは魔法を用いた自然エネルギー効率化事業の為の研究施設）に移設・改築を行っており、先々月に新しい研究施設が完成して旧研究施設は魔法実験も兼ねて解体され、現在は更地になっている。住居はそこに建てるとのことだ。
　すると、千姫の発言に気になる点があり、達也が問いかけた。達也は婚約に関することの大まかなところを聞いてはいるが、婚約者が複数できることを前提としていることに疑問を呈した。
「あら？　真夜ちゃんは何も言っていなかった？」
「母上からは『たっくんの婚約者ですが、１人に絞らなくていい』とまでしか言われませんでした。なので、自分としては愛人などを認めるつもりなのかと思いまして」
「成程ね。悠君が複数の婚約者を娶る意味は達也君も分かるでしょ？　達也君も同じ立場だからこそ、それを求められているの。政府には既に特例として達也君の重婚を認めさせました」
「……」
　千姫の発言を聞いた達也は、絶句とまではいかなかったものの、呆然に近いような様子を見せていた。
　悠元だけでなく燈也までがそうなっているのに自分がそうならない、という安易な考えはしていなかった。だが、こうして目の当たりにすると、流石の達也も言葉が出なかった。
「それにね、真夜ちゃんから達也君の婚約者候補となりうる人たちをリストしてくれって頼まれたから、協力してるの」
「ちなみに、どういった人たちが候補に挙がっているのでしょうか？」
「まずはセリアちゃんの双子の姉であるアンジー・シリウスもといア

ンジェリーナ・シールズちゃん、光井ほのかちゃんもそうだし、後は黒羽家の亜夜子ちゃんがまず上位に来るね」
　その３名は深雪も当人たちの気持ちを知っているだけに、達也の婚約者となることは確定的だろうと考えた。リーナからキスをされて達也の思考が停止し、ほのかはピクシーを通して達也への気持ちを暴露され、亜夜子の恋心に気が付かないことで達也は深雪からの説教を受けていた。こうやって思い返すと自然と朴念仁系主人公でもやっているようなものだと思う。
「後は、数字落ち（エクストラ）の一花家から２人――――市原鈴音ちゃんと十七夜栞ちゃんだね。師族関係だと三矢家から佳奈ちゃんの打診を受けてるし、七草家は香澄ちゃんの婚約を打診されてて、あとは九島烈から藤林家の響子ちゃんも対象に含まれるね」
「佳奈さんが……悠元さんは御存知だったのですか？」
「話程度なら聞いてはいたよ。その時点で確定という訳じゃなかったから、話そうと思わなかっただけだ」
　それ以外だと、平河姉妹（小春・千秋）もそうだし、カウンセラーの小野遥も打診をする予定らしい。それと、ゴールディ家から英美も対象に含まれている様な感じが見受けられた。
「仮に全員と結婚すると１０人を超えるか。流石だな達也」
「それ以上になりそうな悠元が言っていい台詞じゃないのだが……ところでだが、悠元。一条の奴が深雪に告白すると思うか？」
　近い未来のハーレム云々はさておき、達也はふと気に掛かることを悠元に尋ねた。
　将輝が深雪に対して恋心を抱いていることなど、そういう光景を何度も目にしてきたことでハッキリと分かっていた。そもそも、あれだけあからさまな態度を見れば、大抵の人は将輝の恋心に気付くだろう。
　四葉家からは、日本魔法協会を通して師族の二十七家と百家などの有力な魔法使いの家に対し、達也の次期当主指名と婚約者募集、深雪が悠元の婚約者となることを発表する方針で決まっているため、一条家が動くとするならここでしか考えられない……尤も、明らかに他の

魔法使いの家から非難されかねない〝横槍〟の形になってしまうのは言うまでもないが。
「将輝が、と言うよりは将輝の父親である一条剛毅が俺と深雪の婚約に異議を申し立てる形で横槍を入れてくる可能性がある」
「どうしてですか？　悠元さんと私が婚約することは戸籍上でも遺伝上でも問題ない筈ですが」
「母上には事前に話している内容に関わるが、俺が十師族・三矢家の籍を抜けて護人・神楽坂家の養子となった際、九島烈の提起で臨時師族会議が開催されたことがある」
　悠元は九校戦の新人戦２種目で『クリムゾン・プリンス』こと一条将輝を完膚なきまでに負かしている。その九校戦が終わった直後という時期で十師族直系としての立場を放棄し、護人の次期当主として指名を受けた。元々婚約者選定も剛三と千姫の専決事項であったため、近いうちに十師族としての立場から抜けることはある程度覚悟していた。
　だが、自分の抜きん出た力が十師族の柵（しがらみ）から離れたことで、十師族の存在意義が揺らぐと危惧した九島烈は急遽臨時師族会議を開催して元を問い詰めたのだ。
　その部分は烈との直接会談で問いただしたところ、実戦経験のある将輝を易々と破った実力を示した上で十師族を抜けることを認めれば、今後同じようなことが三矢以外の師族二十七家にも起こり得てしまい、師族会議の統率力のみならず意義そのものが揺らぎかねない、と烈は危惧したらしい。それだったら烈の教え子の１人である七草家当主をどうにかしろ、と思わず言いたくなったほどだ。
「十師族でトップクラスの発言力を得ている三矢家の三男である俺ですら、九島烈が師族会議まで巻き込んだ上でそんな大事になったんだ。十師族最強格の四葉家現当主直系である深雪が四葉家の籍を抜けて神楽坂家当主第一夫人になるとなれば、確実に問題は起きるとみている」
「『優れた魔法師の血が続けて十師族から離れれば、十師族の強さ――――〝最強〟の存在意義が揺らぎかねない』ということか」

「突かれるとしたらその点だろうな。それに加えて、将輝には４つ下の妹である一条茜がいるのだが、俺はその子に惚れられている。恐らく、一条剛毅は俺とその子を婚約させることも視野に入れてくるだろう」

その臨時師族会議の前、新人戦モノリス・コード決勝後にも臨時師族会議が開催され、『クリムゾン・プリンス』一条将輝が表向き無名（『殲滅（テイ）の奇術師（ターニア）』という異名はあったが）の三矢悠元に２種目で敗れたことが波紋を呼んだ。その際、克人と悠元の非公式試合のことまで明かされ、十師族の当主らから要らぬ関心を買われたことがある。

「一条家の茜ちゃんの婚約は私も認めるつもりなのですが、一色家との折り合いもありましたので保留状態ですね」

「母上は一色家の方と親交があるのですか？」

「何を隠そう、愛梨ちゃんの母親である愛佳（まなか）ちゃんは私が仲人をしてますので」

一色愛佳。名前こそ日本名に見えるが彼女はれっきとしたフランス人（帰化した際に日本名へ改名している）で、しかもフランス王族の末裔の１人らしい。

どうやってそんな結婚が出来たのかと思うだろうが、ここには色々な事情がある。

まず、一色家は一条家と間接的に親戚関係を結んでいるが、十師族の座を虎視眈々と狙っている。そして、愛佳の実家もといフランスは戦略級魔法の面で同じ旧ＥＵ構成国のイギリスやドイツに後塵を拝している。かつての国際連合で〝五大国〟とまで謳われたフランスは、近年アフリカ大陸における覇権争いに介入してきた大亜連合にまで押されてしまっていた。

フランスが欲したのは、イギリスやドイツと異なる戦略級魔法を獲得すること。これが可能となれば、イギリスやドイツと対等に渡り合える下地が出来上がり、相互不可侵の均衡状態に持ち込めると考え、フランス政府は恥を忍んで千姫に頭を下げたのだ。そして、それを聞いた千姫は師補十八家の一つである一色家を紹介したことで、一色家に愛佳が嫁ぐこととなった。

愛佳も祖国の願いを知っており、その意味で力を欲した結果として一色家は一男一女を儲けることができた。つまるところ、愛梨はフランス王家の血筋を引いた〝王女様〟みたいなものだ。
「……皇族の方々は何か仰っていましたか？」
「特には仰っておりませんよ。そもそも、今の神楽坂家――――亡き私の父は皇族の血縁でしたから」
「はい？」
前世における唯一の男系を継承していた親王で断絶するのを危惧した神楽坂家が一計を案じ、千姫からみて従姉にあたる人物が神楽坂家から完全に縁を切る形で嫁いだ。これは、かつての明治天皇に倣う形で皇家の血を細らせないための策（皇族の存続という重大な危機への対策）により、男系天皇継承の道は途絶えずに済んだ。
そのことが可能だったのは、神楽坂家が政争や金銭的事情などで座を追われたりした親王や内親王を密かに引き取っており、その彼らと婚姻を結ぶことで皇族の血筋と安倍氏・賀茂氏の血統を存続させ続けたからだった。
下手すると現在の皇族よりも皇たる血が濃いが、神楽坂家は頑なに外戚などへ入ろうとしなかった。下手に目立てば今までの行いが知られ、国を分かつ事態になると誰よりも理解していたからこそ、皇族の陰となりてその血筋を保ち続けている。
皇族は神楽坂家の忠義に報いる形で親王の1人を臣籍降下させ、神楽坂家の婿養子として送り出した。それが千姫の父であり、神楽坂家は上泉家に嫁いだ奏姫（かなめ）、先代当主となった千姫（ちひろ）、そして鳴瀬家に嫁いだ紅紗（あずさ）と見事なまでに女系ばかりとなった。
「フランス政府が何を考えているのかぐらいは周辺国を見れば一目瞭然ですし、『十三使徒』を有している二国と国境を接しているからこそフランスも焦っているのでしょうね。尤も、愛梨ちゃんの子をただでフランスに送るなんてことは許しませんけど」
「明らかに条件が整っている前提で話をしないでください」
「ふふ、分かっていますよ。それで話を戻しますが、悠君の婚約者絡みを急いだのはその辺の事情もあるのですよ」

現状婚約が決まっている面々以外で申し込んでくる可能性があるのは、一条家、五輪家、七草家あたりが怪しいと睨んでいる。
師族二十八家でいくと六塚家は燈也と友人関係にあるし、近しい年齢の女子がいないので可能性はゼロ。八代家と九島家（シールズ家でなく本家筋の方）も同じ理由で除外。十文字家は後妻の子とそこそこ仲はいいが、年齢が6つも離れていて現在小学5年生。とてもじゃないが婚約対象になり得ないため、論外扱いにしたい。百家にまで広げると、可能性がありそうなのは五十里家にいる啓の妹なのだが、彼女は茉莉花やアリサと同学年になるため、許容しがたい部分がある。
それ以外になってしまうと……全部聞かなかったことにしたいレベルになるし、これ以上増えるのは考えたくもない。いっそのこと、達也か燈也に押し付けたくなるほどだ。
「悠元さん……」
「抓らないで、深雪さんや。俺だって好き好んでこうなった訳じゃないんだ」
悠元は既に戸籍上三矢家の人間ではないが、悠元と深雪の婚約は実質的に三矢家と四葉家が親戚同士となることを意味する。そこに佳奈が達也と婚約することで表向きの理由が成立する形だ。
大体、暗礁に乗り上げてしまっているが七草家だって『十三使徒』五輪澪がいる五輪家と縁談を進めようとしていた事例がある（前妻の子は長男が既婚、次男は性格に難ありとのこと）以上、同じ十師族とはいえ血縁的に関係が無い一条家から婚約のことを咎められる謂れなどないのだ。
少し頬を膨らませた深雪に脇腹を抓られ、悠元は疲れた表情を見せつつ弁明にも近い言葉を呟いた。これには千姫が微笑み、達也は疲れたような表情を垣間見せていた。
「ともあれ、封印解除の件は了解しました。達也君が四葉家の人間として力を誇示するのは時として必要ですからね。にしても、『誓約（オース）』は完全解除されなかったのですね」
「自分としては、深雪たちが解除してくれた膨大な魔法力を制御するのが先決ですので、まずはこのままでいいと思っています。深雪も

『誓約(オース)』の部分解除だけでリーナを圧倒した実績がありますので」
「そうですか。深雪ちゃんの魔法力が急激に伸びているのは、悠君に愛されているからでしょうね。愛の力は凄いわ」
その辺は憶測も入るが、恐らく『万華鏡(カレイドスコープ)』と『領域強化(リインフォース)』の影響が多かれ少なかれ入っていると考えられる。深雪の場合も感情が昂ると魔法が暴走する事例からすると、行為を介する形で魔法が発動して深雪に干渉している可能性がある。
それを可能としているのは、一線を越えないための魔法――安倍晴明が編み出した『封精霊魂(ほうせいれいこん)』は物理的な精気を遮断する代わりとして感情的な精気を双方向に伝える魔法。お互いの精神を一時的に接続した状態となるため、固有魔法同士が干渉しあって悠元の膨大な想子量と魔法演算能力が深雪にまで影響を及ぼしているとみられる。
九校戦後に雫が膨大な魔法力の封印を解除したことで深雪と並んでいたが、翌年の九校戦の練習を見る限りでは深雪が勝ち越していた。深雪と雫で差が付いたとすれば、間違いなく悠元と接している時間の差ぐらいだろう。
千姫からの言葉に深雪は頬を赤らめ、それを隠す様に俯いていた。

白紙の運勢

千姫との話を終えたところで襖が開かれ、入ってきたのは達也の〝産みの親〟であり深雪の実母である深夜であった。深夜は使用人としての服装ではなく、千姫の指示で真夜と似たような金糸の入った黒を基調とした着物姿で現れた。一瞬真夜と見紛う格好に達也と深雪も目を見開き、深夜は笑みを浮かべていた。

「あらあら、まるで同じ人を見たような反応を見れるなんて、千姫さんも意地悪なお人ですね」

「ふふ、そうでしょう？」

「……母上、深夜さん。戯れも程々に」

根が似た者同士だからこその反応に、悠元は一息吐いた上で窘めるように呟いた。これには深夜も笑みを零しながら謝罪の言葉を口にする。

「ごめんなさいね、悠元君。いえ、この場合は〝旦那様〟とお呼びすべきでしょうか？」

「公の場じゃないんですから……達也と深雪に用があるのでしょう？」

「そうでしたね……達也に深雪。改めておめでとう」

深夜は千姫の隣に座り、達也と深雪に新年のあいさつを述べた。これには二人も頭を下げつつ挨拶の言葉を述べる。

「あけましておめでとうございます、お母様」

「あけましておめでとうございます」

深夜としては、深雪はともかくとして達也が律儀に頭を下げて挨拶する光景は何度も見てきたはずなのだが、ガーディアンではなく四葉の人間として達也が挨拶したことに思わず目頭が熱くなって、ハンカチで目元を拭った。

「お母様？　どうかされたのですか？」

「ごめんなさいね、深雪。正直、こうやって達也が四葉の人間として、真夜の息子として頭を下げる光景を見れるとは思わなくて」

深夜は過去に自身の固有魔法である『精神構造干渉』の酷使で体調

を崩しており、４年半近く前の沖縄旅行が深雪と行ける〝最期〟の旅行になると思っていた。
だが、悠元との出会いによって、穂波の治療に伴う形で自身も治療を受けたことで、二人の母親として生きられる時間が更に増えた。更には娘と同じ人を好きになってしまうということまで起きたし、双子の妹とも漸く和解できた……全てが元に戻ることはないが、世界への復讐は別の形に昇華されて霧散したのだ。
気が付けば、達也のこの姿を間近で見れたことが嬉しく、思わず涙を浮かべていたのだ。
「母上。いえ、今となっては叔母上ですが……差し支えなければ、〝母さん〟とお呼びして宜しいでしょうか？」
「お兄様……」
「別に構いませんが、貴方の中で何かあったのですか？」
それは、今まで呼び方を強制されてきた達也からの〝お願い〟。これには深雪も驚いたような表情を見せており、深夜も目を見開きつつ、達也が一体何を考えているのかという真意を尋ねた。
「特に何かがあった、とはハッキリと言えませんが……強いて言うのであれば、沖縄での戦闘の後、箱根の別荘で俺と深雪は決意しました。魔法を――魔法師を兵器だと断じてしまう世を変えたい。感情に乏しくなってしまった俺でも、人として生きられる世に変えたい」
「それは、すごく大変な道よ」
「ええ。ですが、それは四葉家の先々代当主が願ったもの……そうではありませんか、母さん？」
達也は復讐劇の全てを知らない。だが、先代当主である四葉英作が達也にその復讐劇のあらましを聞かされていた。そこには、元造の実弟である彼だからこそ理解できた四葉元造の〝想い〟が込められていた。
皮肉と言うべきか、英作は四葉の戦力として育てられたはずの達也に「人」としての在り方を吹き込んだ結果……達也は沖縄での戦いを通して、その道を目指そうと決めた。そこには、彼と共に戦った〝友〟の存在が大きいのかもしれない。

「悠元は穂波さんに人としての幸せを願い、母さんに俺たちの母親としての願いを込めて治療したと聞いています。そして、彼は俺よりも柵の多い世界で戦っていて、深雪もその道を支えようとしている。なら、ここで俺が逃げるという選択肢など取りたくない……それが理由です」
「……やっぱり、達也はお父様の孫ですね」
達也の姿に、深夜は亡き父の面影を感じていた。深夜も元造自ら報復をすることは反対の立場だった。だが、元造は頑なに「これは真夜だけの問題ではない。お前の未来も救う戦いなのだ。こんな頑固な父親で本当に済まない」と譲らなかった。
四葉元造と上泉剛三――――何の因果か、二人の孫である達也と悠元は親友であり戦友の間柄となった。だが、深夜は父のようにならないと何故かそう思えた。それはきっと、深雪の存在が大きいのだと思った。本来達也を繋ぎとめる為に生まれた深雪は、悠元と縁を結ぶことで達也を孤独にさせない強固な絆が生まれた。
同年代の子と中々友人を作らない娘が自分から話しかけられる存在。気が付けば、深夜は深雪に対して少し嫉妬していたのか、元治に対して滅多にしない質問攻めをしていた。
沖縄海戦の後、達也と深雪を先に帰らせて悠元の面倒を見るという名目で元夫（当時は結婚していた）相手にすらしなかったスキンシップを積極的にしていた。結局、神楽坂家当主の専属使用人兼愛人として、深夜は女性としての幸せを手に入れた。
「沖縄での戦いが終わった後、達也を本家に戻そうかという話はあったの。その時、真夜が自分の息子である達也を四葉の次期当主に出来ないかと相談されたわ」
「では、その時からお兄様を次期当主にしようと動かれていたのですか？」
「元々そういう流れはあったのだけれど、分家当主達の一件もあってね。達也の安全を考えるのなら、深雪のガーディアンに収まっていた方が安心という部分もあったわ。これは真夜も同じ意見よ」
真夜の述べた〝分家当主達の一件〟は恐らく貢から聞いた話に関

わる部分だと判断した。確かに、深雪のガーディアンが兄ならば家族としての体も整えられる。達也がそう思考している間も深夜は説明を続ける。
「悠元君を司波家に居候させようと提案したのは、深雪の願いを叶えたいというのもあるけれど、本当の理由は達也を守る為だったの」
「深雪ではなく俺を、ですか？」
「表向きは四葉の人間ではないとはいえ、事情を知る人間がちょっかいを掛けないとも限らないし、進学する第一高校には既に十師族の人がいたもの。なら、同じ十師族である人間が一緒に住んでくれれば、仮に居候がバレても『悠元君の護衛』で通せると思ったからよ」
　何分達也と深雪のスペックの高さは魔法科高校入学時点で超高校生級なため、目立ってしまうのはどうしても避けられないだろうと思った。そこで、入学の時点で同レベル以上の悠元を居候させることで表向きは「司波家が三矢悠元の護衛を担っている」と思わせる算段だった。
　燈也の居候先に新発田家を推薦したのも、似たような理由で燈也の同居人兼使用人みたいにミスリードさせるのが目的だったのだ。
「悠元君がそのまま三矢家の人間ならば深雪の婿養子として迎え入れることも考えていたけど、千姫さんが悠元君を養子に迎えて神楽坂家の人間としたことで、深雪を悠元君の妻として送り出し、達也を四葉の次期当主に据えようという方針で私と真夜、葉山さんと紅林さん、それと千姫さんと剛三さん、更には悠元君と元継君の賛同を得る形で実行したの」
「そこまでの協力を得ていたのですか……」
「……話してくれてありがとうございます、母様」
　深夜が述べた協力者の名に悠元が入っていることに、深雪は感心とどこか不満を覚えるような感情が入り混じった雰囲気を見せており、達也はその様子を感じ取りつつも深夜に対して頭を下げた。すると、深夜は笑みを零していた。
「いいのですよ、達也。私の独り言みたいなものです……あら、深雪ったら、悠元君に詰め寄っておりますね。私も参加しようかしら？」

「母さん……あまり度が過ぎると、深雪が拗ねるだけかと」
達也の視線の先には、振袖に皺が付くことなどお構いなしと言った感じで悠元に甘えている深雪の姿があり、それを見た深夜の一言に対して釘を刺すように呟いたのであった。
結局、深夜も参加して深雪が更に悠元へ抱き着く力を強め、その状態が３０分ほど続くことになったのだった。
ちなみに、達也が四葉の姓を名乗ることになるのは真夜から当主の座を襲名してからにするらしい。
理由は大きく分けて二つあり、一つ目はまだ不満が残っている分家や使用人への〝躾〟を真夜や葉山が中心となって行うとはいえ、長年達也を四葉のガーディアンとして扱ったことで染み付いた慣習を塗り替えるのは割と時間が掛かるためだ。
もう一つは、今の名である〝司波達也〟を将来のビジネスネームとして用いるため、魔工技師としての功績を積み重ねることで名を売っていくためとのこと。『トーラス・シルバー』の件は近い将来バレてしまうため、その際に四葉の名を名乗っているとＦＬＴのイメージに四葉の『触れてはならない者たち』の異名が大きく影響されてしまうので、それならばまだ今の名の方がゴタゴタにならない利点がある。
それと、産みの親だからこそ達也に司波の姓をまだ名乗って欲しいという深夜の我儘も含まれている。
◇　◇　◇
流石に度を越えた展開は昼間からならなかったが、深雪は悠元の腕にしがみ付く感じで腕を絡ませており、すっかりご機嫌となっていた。流石の達也でもそうなっている深雪を止める術などなく、悠元は深雪が満足するまで大人しくしていた。
千姫と深夜の会談を終えた後、友人たちが集まる客間に姿を見せると、正月らしく振袖や羽織袴姿の面々が揃っていた。
「お、お兄ちゃんじゃん。ハッピーニューイヤー！」
「無駄にカッコよく言うんじゃない。あけましておめでとうだと言いたいところだが、セリアは新年早々タイキックな」
「お、お慈悲を……深雪ぃ……」

「駄目ですね」
「ガーン！」
（ノリがリーナに似ているな……まあ、双子だから当然なのだろうが）
いの一番目に声を掛けてきたセリアに対し、ある意味死刑宣告同然のお仕置き発言を聞いたセリアは深雪に助けを求めるが、満面の笑顔で放たれた容赦のない一言に擬音が口から出て、それを見た達也はやはりリーナの双子の妹なのだと実感するように見ていた。
すると、ほのかと雫が近寄ってくる。
「あけましておめでとう」
「あけましておめでとうございます」
「ああ、おめでとう」
「おめでとう、雫にほのか」
それを皮切りに新年のあいさつを交わしてく面々。すると、幹比古が達也のちょっとした変化のようなものを感じて問いかける。
「ところで達也、どことなく雰囲気が変わったような気がするけど、何かあったのかい？」
「……そうだな。幹比古やエリカはどの道知ることになるし、ここにいる面々だとセリア以外は知っていることになるが」
そう言って、達也は自分が四葉家次期当主に指名されたことと、四葉家現当主の実子であること。そして、その際に封印されていた魔法力のことにも触れた。最後のことはどの道魔法実習でバレる可能性があるため、それなら早めに伝えようと思ったからだった。
周囲の反応はといえば、「まあ、達也ならそうなってもおかしくないな」みたいな反応ばかりで、これには達也も納得しがたいような表情を垣間見せており、悠元と深雪は揃って笑いを堪えていた。
「へえ、マジかよ。ってことは、今の達也は悠元並みの魔法力を持ってるってことか？」
「いや、俺も自分の封印を解かれてようやく気付いたことだが、悠元の本来の魔法力は少なくとも俺の3倍以上あると見積もっている」
「へ？　達也君が三人いても倒せないってこと？」
「おいエリカ、どういう計算をしたのか聞きたいんだが？」

レオの問いかけに対し、達也は自分の感覚から読み取れた悠元の魔法力の概算を述べると、それを聞いたエリカの発言に対して悠元が問い詰めるように疑問を投げかけた。
達也が三人もいたら、『質量爆散（マテリアル・バースト）』とか『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』、『トリリオン・ドライブ』が連発して飛んでくるようなものなので、正直相手にしたくない。寧ろ絶対に逃げか降参の二択となるだろう。
「達也さんが四葉の人間だと明かすってことは、深雪もそうなるよね？」
「ええ。明日、神楽坂家の慶賀会で悠元さんの婚約者としても発表されるし、魔法協会を通して発表もされる予定なの」
「……その、悠元さん。達也さんは？」
「俺と達也は〝婚約者募集〟と言う形で発表されるが、一足先に深雪が俺の正式な婚約者として名が挙げられる形になる」
悠元の婚約者序列は〝婚約者募集〟を通す体で確定し、達也も千姫のリストをベースとして婚約者募集という名の選定が行われる。どちらも政府が戦略級魔法師クラスの実力者であると認めているからこその待遇である。
雫の問いかけに深雪が答えると、不安げな表情をしたほのかに対して悠元が補足説明を入れる。すると、ほのかは「達也さんの婚約者に立候補します！」と声を張り上げたのだが、その場には結構な人数がいることを一瞬忘れており、あまりの恥ずかしさに部屋の隅で体育座りをして蹲り、雫がほのかを宥めていた。
「いやー、二股以上なんて流石ジゴロの悠元よね」
「……その様子だと、また渡辺先輩にちょっかいをかけて修次さんに叱られたんだろ？」
「うぐっ」
腐れ縁だからこそだが、軽い口調で話しかけてくる中に微妙な揺らぎを感じ取った悠元の指摘にエリカは言葉を詰まらせ、エリカと付き合っているレオは疲れたような表情を見せていた。
大方、クリスマスの鬱憤を偶々道場に来て鍛錬していた摩利に八つ当たりをして修次に叱られたのだろう。言わずとも大体読めてしま

うだけに、いい加減兄離れすべきだと思わなくもない。
尤も、千葉家の問題なのでいくら腐れ縁と言えども首を突っ込む気は更々ないが。
「そういえば、愛梨や栞、沓子に茉莉花とアリサの姿が見えないが」
「3人なら温泉に入りに行ったわよ。厳密には栞の様子が気になった愛梨と沓子が連れだして、そのついでに二人も巻き込まれたんだけれど」
「……なら、その内戻ってくるでしょう」
夕歌の言葉を聞いてそう判断すると、ゆっくりと腰を下ろして寛ぐ。少ししてから愛梨たちが戻ってきて、これから初詣へ行こうということになり、千姫がいつの間にチャーターしていた観光バスで富士山麓神宮へ向かった。
到着して歩いていると、悠元らは整った容姿が多いために他の参拝客からの視線が向けられる。こればかりは仕方がない事なのでそのまま境内へと足を踏み入れた。拝殿には前世のメディアでよく見たような光景――大きなブルーシートが敷かれ、参拝客がその中に賽銭を投げ入れている――が広がっている。
ただでさえ目立ってしまうため、ともかくお参りを済ませようと悠元がシート目がけて賽銭を投げたところ、他の参拝客が投げた賽銭と衝突・反射する形で飛距離が伸び、結果的に賽銭箱へ吸い込まれた。これは達也たちも目撃しており、視線が悠元に向けられる。
「……偶然だよ、偶然」
そう言って拝殿前から抜け出し、せっかくだから御神籤(おみくじ)でも引こうというエリカの提案で引くことになった。エリカは吉に対してレオが中吉、幹比古が大吉を引いたことで突っかかっていて、他の面々もそれなりにいい結果のくじを引いた中、達也の引いた結果は〝末吉〟。ここまでは誰も凶を引いていないという点で良かった。
「悠元さん、悠元さんはどうでした？」
「今開けてみる……え？」
正直、この流れなら〝凶〟とか〝大凶〟を引いたとしても仕方が無いだろうな、とは思っていた。流石に重婚を許されているとはいえ、

それに対しての嫉妬を買っているという意味で運が悪くなることは覚悟していた。

だが、そんな悠元の予想を遥斜め上の方向で裏切った。何が出たのかと言えば……本来運勢などが書かれているはずの御神籤に何も書かれていなかったのだ。これには悠元だけでなく深雪も首を傾げ、それを見た達也も疑問を浮かべていたほどだった。

「……吉でも凶でもないってどう判断すりゃいいんだよ」

「お兄ちゃん、結果はどう……って、真っ白じゃん!?　何、お兄ちゃんを占うのも烏滸がましいってことなのかな？」

「んなことあってたまるか」

これだったら、中途半端に末吉でも引いた方がまだ判断に困らなかっただろう……実を言うと、似たような経験は一度だけあった。それは、転生して初めての正月に訪れた神社でおみくじを引いた際、運勢が書かれておらず、金運などの指標も吉と凶で書かれているであろう文が入り混じっていたのだ。

流石にそんな結果を見せるわけにもいかず、家族には適当に誤魔化して持ち帰った。

だが、今回の場合はそれよりも更に分からなくなってしまった。これだったらいっそのこと大凶でいいから出てほしかったと思う。セリアの言葉を耳にした面々が次々と悠元の御神籤を見ていた。

「……こんなことってあるんですね」

「いや、珍しすぎるパターンじゃない？　大凶引くよりも難しいと思うよ」

「それは確かにな」

姫梨は初めての現象に目を見開いており、由夢はこんな結果を引くこと自体〝奇跡〟であると言いたげに述べて、修司は由夢の意見を肯定するように頷いた。その御神籤を持ち帰りたくもなかったが、諦めたように仕舞い込んだ悠元であった。

――翌日、西暦２０９７年１月２日。四葉家と神楽坂家が日本魔法協会を通して、護人・十師族・師補十八家・百家数字付きなどの有

力な魔法師に対して通知を出した。
四葉家からは、
司波達也を十師族・四葉家次期当主に指名する。
司波達也を四葉真夜の息子として認知する。但し姓名は家内の都合により当分は司波達也のままとする。
司波達也の婚約者募集を行う。
神楽坂家からは、
神楽坂悠元が２０９７年元日を以て第１０８代目神楽坂家当主を襲名する。
神楽坂悠元の婚約者募集を行う。なお、それに先立って神楽坂悠元と司波深雪が婚約したこと。
多くの有力な魔法師が、協会本部にある四葉家と神楽坂家の私書箱宛に祝電を送った。だが、全てのナンバーズが祝電を送ったわけではなかったのだった。

師族会議編
燈也の率直な指摘

――西暦２０９７年。

これを聞いてピンと来る人間なんて普通はいやしない。これから待っている未来なんて誰も予想なんて出来ないのだから。だが、自分にはある程度の原作知識が入っている。ここまで世界情勢が混沌としている状況で原作通りのことが起きるのかと言えば……これまで起きていることを鑑みても「起きない」なんて断言できない。

まず、顧傑による自爆テロ事件に端を発した反魔法主義論争。大体コイツのせいで若手会議があんな展開になったのだ。ブラジルが『シンクロライナー・フュージョン』をゲリラに使ったことで色々問題になったことはって？　あれは彼らの自業自得だ。

尤も、この世界では南アメリカ自体の国家が変わっているし、ＳＳＡ（南アメリカ連邦共和国）のブレスティーロ大統領は新年早々に大々的な経済政策を打ち出し、反魔法主義の世論を完全に封じ込めた。当時のゲリラ勢力は剛三の鉄拳制裁によって現在は屈強な軍へと様変わりしており、対ゲリラ戦においては世界トップレベルと言ってもいいだろう。

顧傑に話を戻すが、原作で使われた廃棄予定の小型ミサイルに関して情報をアンジー・シリウス――リーナに流したのはレイモンド・クラークでほぼ間違いない。ヴァージニア・バランス大佐に情報を流したのも恐らくレイモンドだろう。

死体は『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』や『ブランシュ』の頃の伝手が生きていれば問題ないとして、小型ミサイルを横流しできる人間をリストアップしたところ、大統領次席補佐官（ホワイトハウスの職員の監督・統括、大統領のスケジュール管理、大統領と訪問者の面会を調整する大統領首席補佐官の補佐役）であるケイン・ロウズの名が真っ先に挙がった。

彼を含むグループはＵＳＮＡ国内における人間主義者の矛先を国外に向けさせることを選択した。だからといって同盟国の日本を

真っ先に選ぶあたり、彼らの思想と人間主義者の過激さを比べても〝五十歩百歩〟にしかならないと思う。

ただ、横流しをするにしても問題となるのは、綿密な情報の改竄をしなければ軍関係者に早急にバレてしまう点だ。四葉家を社会的に表に出して自分と同じ苦しみを味わわせたい顧傑に引き渡すとしても、情報システムに詳しい人間でなければあっさりと見抜かれてしまうだろう。

いくら廃棄予定とはいえ兵器なのには変わりなく、先日のスターズの脱走事件を鑑みれば二の舞を防ごうとかなり高いセキュリティに更新したりと手を打っている筈だ。その最新版のセキュリティを突破し、小型ミサイルに関する情報を改竄しなければならない。そういう類は国防総省への直接的な通報システムも備わっている筈なので、それすらも欺かなければならない。

それだけの高度なセキュリティを突破するには、それほど凄腕のハッカーか、解析用のスーパーコンピューター。あるいは……そのシステムの設計者自らが関与でもしない限り極めて難しいだろう。

顧傑の目的を知り、ケイン・ロウズのグループが狙う目的すらも知り、四葉を葬り去ろうと目論む者。そしてそれは、達也と自分のことを戦略級魔法師だと知っている人間の関係者。更には、ケイン・ロウズのグループを通じて顧傑に武器提供させた〝真の黒幕〟。

ＮＳＡ――――北アメリカ合衆国国家科学局において大規模情報システムの専門家であり、全世界傍受システム『エシェロンⅢ』の中心的な設計者であり、バックドアシステム『フリズスキャルヴ』の管理者（アドミニストレーター）、その名はエドワード・クラーク。

彼が恐れたのは四葉によるＵＳＮＡへの〝報復〟なのだろうが、それであれば手を出さずにいればマシだったと思う。触らぬ神に祟りなし、である。だが、達也が戦略級魔法師であることと、達也が四葉家の人間だと知ることで、彼はまず顧傑を使って四葉家を社会的に抹殺しようとしている。

その対策の１つ目として、箱根にある神楽坂系列のホテルを使うことになるわけだが、丁度運よく老朽化に伴う建て替え工事の関係で

使っていない棟があり、今年はそこで師族会議を開催させることとした。
万が一爆破されても、千姫曰く「テロリストが態々発破処理してくれるなら、解体業者も大助かりですね」とのこと。ミサイルに用いられるぐらいなので、威力は十分にあると判断したのだろう。
無論、これ以外にも対策は立てているが、使わずに済めば御の字というものが多い。
ＵＳＮＡ政府のスキャンダルが露見されるのは怖いとスターズが顧傑を潰しに来るだろうが、以前ヴァージニア・バランス大佐との会談で「パラサイト事件以降、ＵＳＮＡから来た人間が犯罪に相当する行動を起こした際、この国の法に則って処理する」と約束をしている。
二者間で交わした口約束であるため、「実際にサインをした訳ではない」としらばっくれる可能性もある。尤も、その場合はケイン・ロウズのグループの資金源である組織が何個か〝消える〟ことになるだろう。そのついでに人間主義者の資金源も消せば、人間主義の勢いが一気に躓く。
これでエドワード・クラークも大人しくなってくれればいいが、四葉を目の敵にしている以上はその願いなど意味がないのだろう。そのことを剛三が知った日には……次の日にエドワード・クラークの自宅と職場が落雷で焼失しました、なんてことになりかねないと思う。
彼を抹殺すれば一番早いだろうが、それをしない理由はＵＳＮＡの自浄作用を促すことが一つ。そして、それが果たされなかった場合……ＵＳＮＡに金銭面で決して支払えない事を実行してもらうためだ。四葉を含め、自分らに余計な干渉をすれば進むも地獄（ヘル・オア・ヘル）、戻るも地獄であることをエドワード・クラークはまだ知らない。
◇　◇　◇
西暦２０９７年１月２日。四葉家当主・四葉真夜から日本の魔法師社会に発せられたメッセージは、関係者に大きな衝撃を与えた。
内容は次期当主の指名、並びに次期当主の婚約者募集。国立魔法大学付属第一高校魔法工学科２年・司波達也は四葉真夜の実子であり、

彼を四葉家次期当主に指名することに加え、婚約者募集を行うというものだった。

今まであまり表に出てこなかった四葉家が表立って発表するという意図に首を傾げるものもいたが、その答えは同日に神楽坂家先代当主・神楽坂千姫から発せられた新年の挨拶の内容にあった。

それは、一昨年夏に次期当主指名を受けた元十師族・三矢家三男こと三矢悠元もとい神楽坂悠元が昨日――――元日を以て神楽坂家当主を襲名した。先代当主となった神楽坂千姫は隠居と言う形ではあるが、まだ高校生である悠元の後見人・当主補佐となることも含まれていた。

彼も達也と同じように婚約者募集をする旨が書かれていたが、それに先立つ形で四葉の縁者――――四葉真夜の双子の姉である司波（四葉）深夜の娘の司波深雪が神楽坂悠元と婚約をしたことが発表された。

四葉家の次期当主の件もそうだが、護人・神楽坂家の当主が四葉家直系の女子と婚約する――――事実上の〝正妻〟として選んだという意味を含むメッセージは、各方面に衝撃を与える大きな出来事であった。

しかも、昨年の九校戦において悠元と深雪は本戦ピラーズ・ブレイク・ソロとスティープルチェース・クロスカントリーの2種目で男子・女子優勝している実力者同士。未来の魔法師を目指す者にとってはアイドルのような憧れの存在同士の婚約に話題が盛り上がる者もいた。

一方、達也はエンジニアとしての実績を着実に重ねており、非公式ながらもファンクラブまで存在するほどに彼の人気も着実に高まっていた。

彼らを良く知る人間からすれば、達也と深雪が四葉直系という事実にショックを受ける者もいれば、悠元が元十師族ということもあって、彼が仲良くしているのも納得だろうと判断する者もいた。友情、競争心、もしくはそれ以上の感情を抱いていた少年少女たちからすれば、まさに「晴天の霹靂」とも言えるメッセージと言えよう。

尤も、第一高校に在学している人間で現部活連会頭の悠元と現生徒会長の深雪の関係性を知らぬ者はいないに等しいため、婚約と言うメッセージは寧ろ「やっと婚約なの？」という意見が大半を占めていた。彼らの中には、既に深雪が妊娠しているという妄想を働かせる者までいたとかいなかったとか。

その第一高校の生徒であり、達也も含めた三人のことを良く知る人物――――達也と同じ魔法工学科２年にして先日六塚家次期当主として指名された六塚燈也は、現当主であり遺伝上の姉にあたる六塚温子に呼ばれて彼女の私室にある炬燵に入って寛いでいた。

燈也は里帰りということで六塚家に帰ってきたのだが、彼の婚約者である五十嵐亜実とミカエラ・ホンゴウ（帰化して本郷未亜と名乗っている）も同行しており、女子二人で〝大事な話〟があるといって風呂場に向かい、燈也は暇になったところで温子からの呼び出しを受けて今に至るというわけだ。

そして、のんびりとした雰囲気は温子の一言から均衡が破れることとなった。

「燈也。司波達也君と司波深雪さんのことは知ってるわよね？」

「それはもう。深雪とは昨年度同じクラスでしたし、達也とは同じ魔工科ですから。彼らが何かありましたか？」

「今日、四葉家が魔法協会を通して新年の挨拶に添える形でメッセージが届きました」

その２人の名前を出した上で四葉家の名が出たということは、間違いなく達也と深雪が四葉家の関係者だと察した。以前から達也と深雪は十師族に連なる関係者ではないかと疑っていて、彼らもそれを否定しなかったので燈也はそのまま秘匿していた。それを知ってか知らずか、温子は説明を続ける。

「四葉殿は、四葉家の次期当主に司波達也君を指名したそうよ。婚約者募集もするそうよ」

「達也が四葉のですか」

「司波達也君は四葉真夜殿の実子で、冷凍卵子から人工授精で生まれた子らしいの。戸籍データだけでなく、ＤＮＡ鑑定のデータまで出し

てくるとなると、間違いないでしょうね」
「成程」
温子の説明に対し、燈也は短めに答えを返すだけで深くは追及しようとしなかった。戸籍だけならまだしも、遺伝子鑑定のデータまで丁重に添えてきたということは、事実だと認識すべきなのだろう。
元々その疑いが晴れたというだけであり、四葉家の魔法師は普通じゃないと知っていたからこそ、達也も燈也自身が知らない秘密をまだ抱えているという勘に近い確証があった。そこで燈也は達也のことばかりで深雪に関する話題が出てこないことに首を傾げ、これには温子も燈也の様子を気に掛けていた。
「燈也は、達也君が四葉家の人間だったことが気に掛かるのかしら？」
「え？　ああ、いえ、達也が十師族の関係者なのではないかとはそれとなく思っていましたし、本人たちも否定しなかったので、発表は寧ろ事実確認ぐらいのものです。僕が気になったのは、達也の妹である深雪はどういう立場になるのかと思いまして」
燈也は深雪の今の両親（父親とその再婚相手）に生まれた子でないことは少しだけ耳にしていた。燈也の目の前にいる姉は真夜の大ファンで、真夜との記念写真などが大事に保管されており、中には丁重に真空処理までしている有様に燈也が引くほどだった。
その写真に写る真夜を見ると、深雪は真夜と似ている。だが、四葉家のメッセージでは真夜の息子と認めたのは達也だけで、深雪が入っていない。そこがどうにも気に掛かったのだ。
「姉さんが大事にしている四葉殿の写真ですが、見れば見るほど深雪が四葉殿に似ているんです。でも、それならば四葉殿が娘として認めないのはなぜかと思いまして」
「簡単な事ですよ。四葉殿には四葉深夜という双子の姉がいます。表向きは子どもがいないとされていますが、深雪さんは深夜さんの娘であるという内容が神楽坂家からの書状で知らされています」
四葉深夜は表向き禁忌の系統外魔法『精神構造干渉』の酷使による長い療養生活を送っているとされているが、温子は深雪が真夜の娘でないとするならば深夜の娘ではないかと推察した。

深雪は明らかに真夜の面影を有しているが、真夜は過去の事件で生殖機能を失っており、子を成せない体になってしまった。となれば、まだ子を成せる可能性が残っている深夜が関わっている可能性を考えたのだ。その予想は神楽坂家からのメッセージで事実だと判明する形となった。
「同日神楽坂家から届いた書状で、神楽坂悠元君の当主襲名に加えて、婚約者募集をするそうです。それに先立ち、悠元君と司波深雪さんが婚約したと発表されました」
「……僕から見れば、やっと婚約ですか、という気持ちですよ」
一昨年の九校戦の後に告白したというのは本人たちから聞いていて、五十里と花音のようにいちゃつくことは殆どしないが、明らかに割り込める隙が無い状態であった。
それを目の当たりにしていたからこそ、今回の発表は漸くそのラインに立ったという印象が強かった、と燈也は正直な気持ちを吐露した。
「私は一昨年の九校戦を直接観戦してたけど、その時点であの『クリムゾン・プリンス』を圧倒するなんてすごいと思ったわ。三矢殿も内心はとても喜んだでしょうね」
「それで、僕に聞きたいことは他にもあるのですか？」
「……噂で聞いたのだけれど、その『クリムゾン・プリンス』は司波深雪さんに惚れていると聞いたのよ」
「あー、それは間違いないと断言できます。ですが姉さん、深雪は悠元に恋慕している節が強いですし、遺伝上の問題も戸籍上の問題もクリアしている他家の婚約事情に首を突っ込むのは常軌を逸しています」
生まれの関係で遺伝とか戸籍とかの問題で一番揉め掛けた経験があるからこそ、燈也は一条家が悠元と深雪の婚約に横槍を入れるのは一体何の問題があるのかと首を傾げた。
その燈也の問いかけに対し、温子は過去のことを思い出しつつ説明をする。
「燈也には大分前に話したと思うけど、悠元君が事実上の十師族離脱をした件に関して臨時師族会議が九島閣下の提起で開かれたことが

あったでしょ？」
「ありましたね……深雪が神楽坂家に嫁ぐことを〝十師族からの離脱〟に相当すると異議を申し立てるんですか？　無茶苦茶にも程がありますよ」
　大体、悠元が神楽坂家次期当主となる前に彼の兄である元継が上泉家当主となり、彼の姉である詩鶴が矢車家に嫁いでいる。悠元だけを槍玉に挙げて元継や詩鶴のことを問題にすらしなかったのに、深雪が神楽坂家に嫁ぐということで異議を申し立てれば主義主張の一貫性が無いに等しいのだ。
「そもそも、護人の家の婚約事情に十師族が介入できる筈もないと思うのは僕だけでしょうか。師族会議はいつから護人の監視組織になったのですか？」
「燈也もそう思うわよね。多分だけど、一条殿は七草殿あたりを頼るんじゃないかしら」
「……こういうことはあまり言いたくありませんが、彼らは馬鹿ですか？」
　正直なところ、六塚家に年頃の女子がいなかったことは本当に〝救われていた〟と燈也のみならず温子もそう感じている。運命の悪戯とも言える様な奇跡だが、温子からすれば自分以上の実力者である燈也が六塚家を継げば、十師族の椅子はほぼ安泰だろうとみている。
　尤も、燈也はそれに甘んじることなく鍛錬を続けており、彼からすればそれ以上の実力者を直接肌で感じているからこそ、慢心など出来ないと直感していた。
「ともあれ、四葉家と神楽坂家へ早急に祝電を送った方が良さそうですが」
「ええ、今回は私と燈也の連名といたしましょう。先日の燈也の次期当主指名の際に四葉家と神楽坂家から祝電を頂いておりましたので、その返礼と新年の挨拶も含めての祝電といたしましょうか」
　奇しくも次代に恵まれた十師族・六塚家。常識的な思考を持ち得る次期当主を得たことで、現当主の温子も安堵している。その根端にあるのは、四葉家に対する崇拝にも似た心情なのかもしれない。

なお、六塚家の次期当主がその晩、二人の女性から迫られて大人の階段を上ったという噂話は……神のみぞが知る。

天才は惹かれ合う

いくら軍人と言えども人間であり、とりわけ上官の立場ともなれば緊急出動さえなければ普通に休むことを許される立場だ。

独立魔装大隊は表向き〝実験部隊〟の性質を持つため、大隊長である風間は無論のこと、大隊に所属する士官クラスの人間も昇進に伴う「特別休暇」という形で年末と正月の三が日を休んでいた。

休み明けに中尉へ昇進が決まった藤林響子（ふじばやしきょうこ）は京都付近に居を構える藤林家の実家に戻ってきていたが、父である藤林家当主の言い付けで年始の挨拶に駆り出されていた。２０９２年夏に起きた沖縄防衛戦で婚約者を失ってから４年半少し。実家からもそろそろ身を固めるよう言われている響子もそのことは重々承知していた。

そんな響子のもとに、彼女ですら予期しなかった来客が舞い込んだ。

それは、九島家先代当主こと九島烈が年始の挨拶ということで藤林家を訪れたのだ。

「お祖父様、新年おめでとうございます。言ってくだされば生駒に出向きましたのに」

「おめでとう、響子。なに、仕事から離れると体を動かさぬと落ち着かぬのでな」

烈の突然の来訪は藤林家がちょっとした騒ぎとなった。普段なら手紙か九島家当主の子の誰かが出向くことが多かったが、今年は烈が訪れた。義理の父親でもある烈に対して響子の父親――藤林長正（ふじばやしながまさ）は恐縮しっぱなしであった。

来年で９０歳の大台に乗る御仁だが、親しい友人である上泉剛三の影響もあってか精力的に動いている。そして、光宣の問題に道筋がついたことにより、以前よりも思い悩む様子が大分減ったと響子はそう感じていた。

「そうは言いましても、あまり無理はなさらないでください。両親も慌ててておりましたので」

「そうだな。今後は善処するとしよう」

響子の忠告に対して烈は笑みを零しながら返したが、どこまで善処してくれるか正直分からない、と響子は思わず頭を抱えたくなった。
ともあれ、烈は年初の挨拶の後、響子と話がしたいと言ったので、応接の間に烈を通した。響子は一体何を聞かされるのかという疑問に対して答えるように烈が話し始める。
「響子。司波達也君のことは無論知っているだろう」
「達也君ですか？　ええ、勿論です」
独立魔装大隊の特務士官・国家非公認戦略級魔法師大黒竜也特尉（おおぐろりゅうや）――達也の独立魔装大隊における名と地位――であり、彼の特異魔法（『分解』と『再成』）や戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』、そして彼が十師族・四葉家の人間であるということを知っている。その彼が一体どうしたというのだろうか、と響子は烈の言葉の続きを待った。
「今日、四葉家から魔法協会を通してメッセージが届けられた。真夜は四葉家の次期当主に達也君を選んだだけでなく、彼は真夜の実子だそうだ」
「……え？　達也君が四葉殿の実子ですか？　それは本当なのですか？」
「ああ。修正された戸籍データだけでなく、真夜と達也君の遺伝データも丁重にな」
響子は深雪のことからして達也が次期当主になると睨んでいたが、まさか達也が真夜の実子だということは驚いていた。それに対する答えと言う形で烈が説明を入れると、響子は大きく驚くことはなく落ち着いて話を聞いていた。
烈も最初はその話を訝しんだが、崑崙方院が実験に使おうと抽出した真夜の卵子を冷凍保存していて、それを唯一の生存者である剛三が持ち帰ったとすれば辻褄が合うと睨んだ。
添付されていた遺伝データを見ても、間違いなく達也が真夜の息子であることを証明するに足ると烈は結論付けた。
「そうなると、深雪さんも？」
「いや、彼女は紛れもなく深夜の娘だと神楽坂家からの書状に記されていた」

「神楽坂家？　お祖父様、何故そこで悠元君の今の実家の名が出てくるのです？」
「昨日、元日を以て悠元君が神楽坂家当主を襲名した。そして、彼の婚約者募集に伴い、深夜の娘である司波深雪君と婚約したのだ」
　同日に四葉家と神楽坂家が揃って書状を発表したということは、恐らく四葉家の次期当主が決まり次第神楽坂家の当主に関する発表をする段取りが組まれていた、と烈はそう判断した。
　四葉家は現当主の魔法師としての実力に加え、実子の魔法師としての実力とその姪（遺伝的には実の娘と呼んでもいい）が護人の家に嫁ぐことで十師族としての強さを証明した形になる。
「それで響子。達也君も婚約者募集を行うとのことらしい。悠元君からそれとなく話は聞いているが、お前が望むなら私が推薦する形で達也君の婚約者に立候補するといい」
「……大丈夫でしょうか？」
「達也君のことを承知しているからこそ、他の婚約者たちに負けない武器となろう。それに、いい加減身を固めろと長正らから言われているのだろう？」
　年齢という部分を響子は気にしたが、同じ独立魔装大隊に所属しているからこそ把握している達也の事情を誰よりも知っており、どうしても表に出来ない相談を受けやすい立場にあるのは十分武器になる、と烈は諭した。そして、婚約者を失ったことに触れた上で烈は響子に問いかけた。響子は少し考えた後、烈に対して頭を下げた。
「分かりました、お祖父様。お手数をお掛けいたしますが、宜しくお願いします」
「気にするな。真夜も君ほどの情報に精通している人材は喉から手が出るほど欲しがるだろうからな……ところで、光宣は今頃東京にいるのか？」
　光宣は論文コンペ後、九島本家と距離を取るために療養の名目で藤林家で居候していた。その彼が周公瑾の調査をしていた際、1人の少女と恋仲になったと響子から以前聞き及んでいた。しかも、それは十文字家現当主の義理の娘（現当主の妹の子）で、奇しくも光宣と同学

年。体調が改善した孫が恋愛までするようになったことを内心で喜んでいた。
だが、その光宣は現在藤林家にいない。彼がいるのは東京――十文字家の本邸宅であった。
◇　◇　◇
光宣がどうして十文字家の邸宅にいるのかと言えば、それは烈が関係していた。
十師族の当主クラスからすれば、かつて師族会議で議長役として音頭を取っていた烈を無視することなど出来ないが、今回の烈からの〝頼み〟は無理強いをするものでもなかった。だが、十文字家当主の十文字和樹（じゅうもんじかずき）は烈の頼みを受けて年末と魔法科高校の休みである期間まで光宣の滞在を認めたのだ。
その光宣はと言うと流石に何もしないという訳にもいかず、克人とのお下がりと言う形（成長が早く、何着も着れなくなったものがあった）で羽織袴を着て新年の挨拶の手伝いをしていた（この辺は和樹が2人の仲を見て、九島家との友好をアピールする意味でも関係者に顔を覚えてもらえば、九島烈のシンパが多い国防軍方面の繋がりを得られるとの打算からくるもの）。和樹の後妻である慶子（けいこ）は光宣をいたく気に入り、克人の弟や妹たちも謙虚な姿勢を見せる光宣に対して友好的な姿勢を見せていた。その最大の理由は言うまでもなく、光宣の隣で顔を赤らめている振袖姿の理璃であるのは言うまでもない。
実は烈から和樹に対して光宣と理璃の恋愛事情に触れつつ光宣と理璃の婚約を申し出ていた。和樹としても九島烈の孫である光宣が優れた魔法師という噂は聞き及んでおり、本人たちの意思を確認する意味で光宣が十文字家に招かれた側面があるのは確かだ。
すると、一段落着いたところで羽織袴姿の克人が声を掛けてきた。
「九島、理璃。本当にすまない。折角の休みなのに駆り出してしまったのはこちらの落ち度だ」
「いえ、構いませんよ。理璃さんは大丈夫ですか？」
「は、はひ、大丈夫れす」
別の意味で緊張している理璃の有様に光宣は苦笑を滲ませ、克人は

義理の妹の初々しさに対して笑みを零していた。克人は幼い頃から厳しい訓練を積んできた影響からか、弟や妹らに対して親密に接してこれなかった。
その意味で理璃が十文字家に来たことは今までの不義理を埋める機会だと思ってはいるものの、上手に接することが難しかった。最近はお見合いの関係で三矢家三女の美嘉が十文字家に来ては弟や妹たちとのコミュニケーションの緩衝役をしてくれており、長男なのに家族のことをあまり見てこれなかった克人からすれば早くも頭が上がらなくなりつつある。
すると、3人のもとに十文字家の使用人が姿を見せた。
「克人様に理璃様、光宣様。旦那様が書斎でお待ちになっております」
「自分だけではなく、2人もですか？」
「はい、そのようにと伺っております」
克人は流石に疑問を抱いた。礼を労うのであれば、何も書斎で話す必要などないだろう。それに、自分と理璃までならまだ分かるが、客人である光宣まで呼ぶとなれば、それほどの大事なのだろう。
念を押して尋ねて聞いた克人は間違いないと判断して光宣と理璃に視線を向けると、2人も「問題ない」という意思を込めて頷いたので、克人は使用人に視線を向けた。
「分かりました。直に向かいます」
「畏まりました」
そうして書斎に着くと、和樹が応接用のソファーに座っていた。和樹の隣に克人が座り、2人と向き合う形で光宣と理璃が座った。使用人がお茶を差し出して書斎を去ったところで和樹が切り出した。
「すまないな、光宣君。本来なら休んでほしくはあったが、君も恐らく無関係とはいかないだろうから、この場に出向いてもらったのだ」
「僕も無関係ではない……師族会議関連のお話でしょうか？」
「ああ、そうなるな。先程、魔法協会を通す形で四葉家と神楽坂家がメッセージを出した」
かたや十師族で最強格の勢力の一角。かたや護人の一角を担う陰陽道系古式魔法の大家。その2つの家が揃ってメッセージを出すと

いうことに克人や理璃、光宣は和樹の言葉を待った。その視線を感じたのか、和樹は話を続ける。
「四葉家のほうだが、四葉家の次期当主に第一高校2年の司波達也を指名しただけでなく、彼は四葉真夜殿の実子であると公表した。そして、婚約者を募集するとのことだ」
「達也さんが四葉家の……すると、妹の深雪さんも四葉家の人間ということでしょうか？」
「うむ。第一高校2年・司波深雪殿の素性は四葉深夜殿――――四葉殿の双子の姉に当たる人物の娘で、神楽坂家当主を襲名した同じく2年の神楽坂悠元殿と婚約したことが神楽坂家のメッセージで伝えられた。克人、理璃。お前たちから見て、2人はどういう風に見えた？」
　光宣の問いかけに答える形で、和樹が補足説明をするように述べると、その上で同じ高校出身である克人と理璃に視線を向けた。
「自分は1年ほどしか見ておりませんが、昨春の入学式の際、神楽坂と司波妹が仲良くしているところに七草が突っかかっていたところを目撃しました。それを見ている分だけでも、2人の仲は恋人よりも深い関係にあると感じました」
「私も昨春からの付き合いですが、九校戦での練習も含めて深雪先輩が悠元先輩に甘えたりしていたので、単なる恋人と言うよりも既に婚約に近い関係にいたのでは、とも思いました」
「そうか……ところで、光宣君は司波達也君と司波深雪君を知っているのかね？」
　克人と理璃の私感を聞いた上で、和樹は光宣に対して気になることを尋ねた。達也の名前を出した際に真っ先に反応しただけでなく、深雪のことも知っているような雰囲気が見られたからだ。光宣は周公瑾のことを伏せつつ、和樹らに事情を説明することとした。
「実は昨年秋の話ですが、達也さんと深雪さん、悠元さんたちが〝人探し〟の為にお祖父様を訪ねられたことがありまして。その際に知り合って、奈良や京都で一緒に行動していたのです。京都の時は理璃さんも一緒でしたけど」
「そ、そうですね。あまりお役には立てませんでしたが」

「そんなことが……ちなみにだが、その内容に関して光宣君は何かご存じなのかな？」
「申し訳ありません、十文字殿。この内容は悠元さん――――神楽坂家から箝口令が敷かれているため、これ以上のことを申し上げられないのです」
　この辺は光宣が東京で赴く際、もしかしたら十文字家から何かしら聞かれる可能性を考慮して悠元に相談したのだ。これに対し、悠元は最悪自分が責任を負う形で「神楽坂家の箝口令という事情で話せない」という逃げ道を使っても構わないと伝えておいた。四葉家の依頼を手伝う形だったので悠元自身が関与していたのは間違いなく、いくら十師族といえども迂闊に話せないことがかなりあるためだ。
「ただ、その際に古式魔法師の襲撃を受けたのですが、悠元さんが敵を引き付け、達也さんと僕で撃退したことがありまして。その事実だけでも、達也さんの実力はかなりのものだと思います」
「……克人と理璃は、達也君のことに関してどう思う？」
「一昨年の時点で当時生徒会副会長だった服部を模擬戦で倒し、九校戦の新人戦モノリス・コードでは代理メンバーとしてアタッカーを務め、神楽坂と組んで優勝に貢献していた事実からすれば、司波の実力は十師族に足るものと判断できます」
「昨春の話ですが、香澄ちゃんと泉美ちゃん、七宝君で模擬戦をした際に審判を務め、『ミリオン・エッジ』を含む大規模魔法を瞬時に無力化したことがありました。その意味でも、達也先輩が四葉家の人間だと言われても信じれると思いました」
　四葉の魔法師は普通の魔法師と一線を画するという意味で、克人と理璃は自分が見た達也の功績を挙げつつ率直な評価を述べた。克人は述べたこと以外にも『ブランシュ』の拠点制圧において無傷で最奥部まで辿り着き、兵士を難なく倒していた光景を目撃している。兵士の傷から見て桐原がやった傷とは思えず、しかも床には分解された銃の部品や弾丸が散乱していたことを覚えている。
　達也が彼らの所持していた『キャスト・ジャミング』発動圏内でも相手を制圧できる術を有していることに関して詮索はしなかったが、

四葉の魔法師として考えれば成した所業にも納得がいくと克人はそう推察した。
「そうか……克人。十文字の方針としては、司波達也君の次期当主指名ならびに神楽坂悠元君の当主襲名に対して祝電を送る。そして……理璃。お前が望むのなら、光宣君と婚約を結んでも構わないぞ」
「よ、よろしいのですか？」
「家族に対して真摯に関わってやってこれなかったのでな。その罪滅ぼしという訳ではないが、両親を失った理璃を引き取って十文字家の娘として迎えたこともその一つだ。ちなみにだが光宣君、九島閣下からは婚約に関して君の自由にさせてやりたいと申し出を受けている」
「……僕自身、九島の本家では疎まれていて、そんな僕を気に掛けてくれていたのは響子姉さんにお祖父様、それに悠元さんでした。十文字殿、魔法師として未熟な身ではありますが、理璃さんと真剣なお付き合いをさせて下さい」
　和樹の口から出た言葉に理璃は思わず目を見開くが、元々理璃は十文字家の〝分家〟みたいな形の存在だったからこそ躊躇うことなくその提案を出した。奇しくも克人以上の資質を有する理璃が同い年である九島家の孫と恋仲ならば、縁をそのまま結ばせるのはどう転んでも利になると和樹は判断していたし、烈も2人の婚約には前向きという事実を聞かされていたからこそでもあった。
　なら、光宣も躊躇う理由が無いと判断し、真剣な表情で和樹に対して頭を下げた。頬を赤らめている理璃も光宣の姿を見て「お、お願いします！」と言いつつ頭を下げたが、勢いが良すぎてそのままテーブルに額をぶつけてしまった。お茶は理璃が無意識で展開した『ファランクス』のお陰で辛うじて零れなかったものの、ぶつけたところが赤くなって涙目になっている理璃に対して光宣が慌てて慰めている光景が出来てしまい、これにはあまり笑顔になることが無い克人も「やれやれ」と言いたげな感じで口元に笑みを浮かべていた。
　この後、十文字家の家族に対して光宣と理璃の婚約が伝えられ、和樹は烈に光宣と理璃の婚約を認める旨を伝えた。その際、烈からは「光宣は将来九島の家を離れるため、剛三の協力を得る形で十文字家

に見合う養子とした上で送り出す」という旨を伝えた。これは悠元が出した光宣の治療に関する条件の一つで、九島家の御家騒動を避けるために光宣の持つ〝九島家としての格〟を落としつつ、剛三を介することで〝光宣個人としての格〟にすり替える。この辺は穂波が四葉家のガーディアンという特殊な事情を秘匿するために渡辺家の養女として元治に嫁いだことを前例として用いる形になる。

２人の婚約の発表は師族会議の際に十師族当主へ通達し、師族会議後に魔法協会を通す形で発表する形となった。光宣はその前に九島家から別の家の養子として出される形となることが烈から和樹に伝えられた。何故正月三が日でないのかと訝しんだが、達也と悠元の婚約者募集によって理璃を娶りたいと申し出てくる家が奇跡的にもいなかったため、和樹はそれ以上疑うことなく烈の申し出を受けることとなった。

落ち込む末っ子と母に似る末っ子

近しい人間からすればそこまで大事ではないと割り切れても、そこから少し離れた側からすれば十分大事と捉えられるのはよくあることだ。まして、３５年前の大漢（ダーハン）政府と崑崙方院を壊滅に追い込んだ四葉家の人間が自身の近しい所にいたとなれば、色々複雑な心境を抱いても何ら不思議ではないだろう。

その複雑な心境を抱いていた一人――――第一高校ＯＧにして防衛大学校１年の渡辺摩利は学校の正月休みを利用して、自身の恋人である千葉修次（ちばなおつぐ）と一緒に渡辺家で過ごしていた。

何故修次の実家である千葉家でないのかと言えば、エリカのこともそうだがエリカからすれば父親にあたる千葉丈一郎（ちばじょういちろう）の存在が大きかった。

「まさか、こんな形で摩利の実家で正月を過ごすことになるとは思わなかった」

「すまないな、シュウ。流石に大したもてなしも出来ないが」

「気にしなくていい。正直、僕もエリカの事情をちゃんと慮ってやれなかったからね」

寿和がクリスマスのパーティーに参加する際、婚約者がいないということでエリカが駆り出され、そのエリカが摩利に苛立ちをぶつけたことに修次が怒って摩利へ謝罪するように言い放ち、修次とエリカが勝負する形となった。

結果、千刃流（ちばりゅう）免許皆伝の修次が印可の目録までしか得ていないエリカに敗北を喫した。ただ、エリカは勝負を終えた後に「本来関係の無い渡辺先輩に私の苛立ちをぶつけてしまい、本当に申し訳ありませんでした」といつもの様子の彼女からすれば考えられないぐらいに丁寧な口調で頭を下げ、道場を後にした。

これには、修次だけでなく摩利までも呆然としてエリカの後ろ姿をただ見ていることしかできなかった。

「寿和兄さんに事情を聞いたところ、エリカは西城君と付き合っているらしくてね。親父は未だエリカを政略結婚の材料として考えてい

るようで、西城君との付き合いを交渉材料にして兄さんの付き添いを頼んだらしい」
「……それはエリカが怒っても無理ないだろう。大体、エリカは千葉家を継ぐ立場でもないだろうに」
　摩利の言う通り、エリカは千葉家当主である丈一郎の愛人が生んだ子なので、当初は千葉の姓を名乗ることすら許されなかった立場だった。だが、幼馴染に十師族直系である悠元の存在が浮上したことで、丈一郎は悠元の婚約者として――三矢家の外戚となることを目論み、エリカに対して千葉の姓を名乗る様にさせた。
　当の本人同士に恋愛感情は一切存在せず、悪友に近い友人関係を築いていることは修次も理解していた。ただ、悠元が今回神楽坂家当主に襲名し、合わせて発表された彼の婚約者募集に際してエリカと早苗を婚約者として申し出ていた（なお、エリカに関しては本人の承諾を得ていない。事後承諾の形に持ち込んでレオとの関係を解消させる腹積もりでいた）。
「しかも、父さんはエリカと早苗姉さんを悠元君の婚約者として申し込んだそうだ」
「いやいや、正気か!?　確か、早苗さんは以前にも断られているのだろう？」
「ああ、摩利の言う通りだ。エリカと仲がいい悠元君からすれば早苗姉さんとの婚姻は願い下げだろうし、エリカとの婚約も現実味がない」
　修次と摩利は知らないことだが、現状において悠元は深雪を含めて１０人の婚約者候補がいる。ただでさえ悠元からすれば一杯一杯なのに、幼馴染と婚約してこれ以上の気苦労を負いたくないという個人的事情を抱えている。
　それはエリカも同様で、昨年夏のローゼン家絡みの一件もあってレオとの関係を深めており、そのレオも九校戦での活躍で他の女子から声を掛けられることが増えた。それを見たエリカがヤキモチを焼いて、佐那に協力する形で幹比古と美月にちょっかいを掛けるようになったのは言うまでもないが。

「大体、今回公表された悠元君の婚約者の一人が達也君の妹なんだ。達也君と深雪君の二人が実は従兄妹の関係で、あの四葉家の人間とは……多分だが、悠元君は知っていたのだろうな」
「元十師族なら、知っていてもそう可笑しくはないだろう。沖縄防衛戦の後、三矢家と四葉家が親密な関係を模索していたという噂があってね。多分だけど、その前後辺りで面識を持ったと考えるのが妥当だ」
十師族の人間でも知っている人間はかなり限定されるが、三矢家現当主の母方は上泉家の人間であることを千葉家の人間の一部が知っている。その繋がりで三矢家と四葉家が親密な関係を持ったと考えるのが妥当、と修次はそう推察した。
「それで、エリカにはどう説明するんだ？」
「……悠元君は既に神楽坂家の当主の立場だ。家として主たる立場に置かれることは父さんだって承知の筈。父さんには悪いが、エリカの説得をする気はない。元はと言えば、父さんが母さんのことを考えずに愛人なんて作り、エリカまで儲けたのは父さんの責任だ。それを僕らに押し付けるのは筋が通らない」
悠元とエリカ――――お互いの心情を正確に把握しているからこそ、修次は丈一郎からエリカの説得を頼まれても引き受けない、と明言した。早苗あたりならば喜ぶだろうが、ただでさえ仲が悪いエリカとの仲が更に拗れることは目に見えている。
寿和は立場上父親の命令に逆らえないと引き受けるかもしれないが、エリカとの関係悪化をしたくない方向に舵を切るだろう。
そう考えた上で、修次は摩利に対して頭を下げた。
「なので摩利、頼みがある。ほとぼりが冷めるまでは渡辺家から通わせてほしい」
「え、ええっ!?　……シュウなら両親も断らないと思うが、一応聞いてみる。もしダメだったら済まない」
「いや、無理強いしているのはこちらのほうだからね」
修次の評価は魔法師としても高く、摩利の両親としても修次と摩利がそのまま婚約・結婚してくれればありがたいと思っているため、修

次の提案――――丈一郎からエリカの説得を頼まれないよう、暫くは渡辺家から防衛大学校に通うこと――――に対して快く引き受けた。その際、「孫は早めにお願いしますね」という両親の言葉に対して摩利が顔を赤らめ、両親に対して「そ、そ、そういうのはまだ早いから！」と必死に反論したのだった。

なお、千葉家の申し出の事実は千姫と悠元を介する形でエリカに伝わり、それを聞いた際のエリカの一言目は「あんの腐れ外道……父親だなんて思いたくもないし、いっそのこと海の藻屑にしてやろうかしら」と今までの恨み辛みを言霊に凝縮したかのような言葉と共に、皮を剥こうと手に持っていたリンゴが皮だけ綺麗に斬れた。

『朱に交われば赤くなる』という言葉があるが、埒外の幼馴染に関わったことで自身もその埒外となっていることに気が付いていなかったエリカは、その出来事の後に部屋の片隅で酷く落ち込み、レオは「仕方ねえか」と言いつつもエリカを慰めている様子に周りの目線は温かかったのだった。この場合は恋愛事に対する野次馬根性が働いた結果とも言えなくはないが。

◇　◇　◇

その頃、厚木の三矢家の本屋敷では元がモニターに真剣な表情を向けていたが、そんな自分がまるでおかしかったように笑みを零し、気が付けば自身が笑っていることに気付いた。

「ようやく、と言うべきなのだろうな。全く、こういうところは似てほしくなどなかったが……いや、向こうの都合故に致し方ないことだな」

思えば8年前……悠元が謎の高熱を出して意識を失い、元も悠元の死を覚悟していた。だが、運命の女神――――魔法という存在があって、神様という存在がいるのかなど不明だが――――は彼に新たな魂を宿らせた。

今までの悠元と打って変わって精力的に動くようになり、気が付けば先天的な異常聴覚を抑えるためのイヤーマフすら無くなり、魔法技術や魔法に関する本、ＣＡＤ関連技術の書籍や論文などを読み漁っていて、これには元も良からぬものが憑りついたのだと訝しんだ。

だが、悠元が明かした内容――――転生した存在と聞かされた時、元は今まで学んできた知識の全てにヒビが入る様な感覚を覚えていた。その時からきっと、悠元が三矢家に大きな変化を齎してくれる……元はどこかそんな確証を抱いていたのかもしれない。

母方の祖父に気に入られて彼から武術関連を学びつくした結果、初陣となった沖縄防衛戦（沖縄海戦と呼称されることもある）において約３０００人以上の兵士を殺し、沈めた大亜連合の艦船は潜水艦も含めると５０隻近く。この時点で佐渡侵攻を食い止めた『クリムゾン・プリンス』一条将輝すら超えたのだ。

そして、彼はその場に出くわした司波達也と共に戦ったことは、四葉家当主四葉真夜との会談で聞かされる形となった。四葉家の先々代当主四葉元造と上泉家の先代当主上泉剛三。奇しくも四葉の復讐劇に関与した二人の孫が揃って国家非公認戦略級魔法師となった。

（剛三殿――――義父上が崑崙方院から真夜殿の冷凍卵子を持ち帰り、達也君が生まれた。そして、義父上の血を引く孫として、私と詩歩の子として悠元が生まれ、そして〝生まれ変わった〟）

世界への復讐を考えた姉妹の想念が達也という存在をこの世に生み、長くは生きられないと諦めかけていた命に新たな魂が世界を超えて宿ったことで悠元は新たな生を得た。

奇しくも同じ年代に起きた〝破壊〟と〝再生〟の誕生。そして、その２つの存在を引き合わせたのは、達也の妹もとい従妹であり、悠元と婚約した深雪の存在が大きいとみている。

そんな風に考えこんでいた元の意識を戻す様に、書斎のノック音が響いたので元は入室を促すと、振袖姿の佳奈と美嘉、そして羽織袴姿の侍郎に加え、姉達と同じく振袖姿の詩奈が姿を見せた。

長男の元治は新年の挨拶回りで外に出ており、本屋敷への訪問は基本的に元が請け負っていたが、漸く一段落着いたところで四人を呼び出した。侍郎と詩奈まで呼び出したのは、これから伝えることに関して二人も無関係とはいかないからであった。

「今日、四葉家と神楽坂家から書状が届けられた」

「四葉家？　新年の挨拶という訳じゃなさそうだけど」

「その通りだ、美嘉。四葉家の次期当主に関することで、四葉殿は第一高校2年の司波達也君を指名した。しかも、達也君は四葉殿の実子だという事実も添えられていた」
「達也君が……うん、まあ、普通じゃない演算領域を持っているのは視えてたから、納得かな」
佳奈の『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』は本来精神領域まで視えるものではなかったが、悠元の鍛錬法に加えて天神魔法を学んだ影響で能力自体が進化し、本来無意識領域に存在する魔法演算領域の性質まで読み取れるようになっていた。この能力は精神分析系魔法の所持者であった四葉家先代当主、四葉英作に似通っていた。
悠元の影響で人並外れた魔法師の能力を獲得した娘たちに対して苦笑しつつ、元が説明を続けることとした。
「話を続けるが、神楽坂家の方は悠元が神楽坂家当主を襲名し、同学校同学年の司波深雪さんとの婚約を発表した。更に、悠元と達也君の婚約者を募集する旨も付け加えられている」
「……御当主様。自分と詩奈を呼んだのは、その事実を知ってもらうためですか？」
「そうだ、侍郎君。受験もしていない以上は確定と言えないが、第一高校に入学した際、彼らは3年生となる。十師族直系の子が五人も同学年に在学するのは、十文字殿の長男や七草殿の長女の世代すら軽く上回ることだ」
現1年生も七草・七宝・十文字の三家四人が在学しているが、現2年は三矢（現：神楽坂）・四葉・六塚、本家ではないが九島（シールズ姓）の五人が在学することとなる。しかも、現生徒会長が四葉直系の子女という事実はどうあっても隠し切れないだろう。
幸いにして、侍郎と詩奈は揃って達也や深雪と面識を持っているため、四葉の人間だと初対面で警戒するような真似は避けることが出来ると元は睨んでいた。
「話を少し戻すが……佳奈。お前がそれとなく達也君に興味があることは知っている。一応事前にお伺いはしているが、お前が望むのならば達也君の婚約者として正式に打診しよう」

「……ま、真由美に行き遅れだなんて言われたくないし、達也君もなかなか面白いからいいよ」
「佳奈姉、そこは素直にあいだだだだっ!?」
「美嘉はいいわよね。もう十文字家の家族に気に入られてて」
「二人とも、落ち着きなさい……」
　美嘉は既に克人との婚約が秒読み段階となっており、最大の懸念事項であった剛三から「早くとも師族会議後、もし看過できぬ状況が発生した場合はその事態が解決後に公表する」という許可の文言を貰っていた。
　歳が近いこともあり、何だかんだ比較されがちな二人。静かな佇まいで周囲を吹き飛ばす佳奈に対し、目にも止まらぬ速さで叩きのめす美嘉。見事に静と動の対極関係にあるからこそ、口では喧嘩しても本当は仲が良い二人の様子に対し、元が窘めた。
「うう、どうせ今も絶賛成長中のその胸で達也君を誘惑する癖にあびゅっ!?」
「美嘉お姉様、話が進みませんから大人しくしてください」
「は、はい……詩奈がどんどん母さんのように逞しくなっていくよ」
「……こればかりは美嘉と同意見ね」
　それでも文句を言いたげな美嘉に対して拳骨を落としたのは、いつの間にか立って美嘉の背後にいた末っ子の詩奈であった。詩歩に溺愛されていることとすぐ上の兄である悠元に強い影響を受けているためか、最近は姉相手でも容赦なく拳骨を落とすことが出てきた。
　それも理不尽な理由ではなく、ちゃんとした理由に基づいてのことなので美嘉もこれには文句を言えず、佳奈も美嘉の意見に同調するように呟き、侍郎は冷や汗を掻きながらその様子を見つめ、元に至っては手で目の部分を隠すようにしながら天を仰いだ。
　そして、詩奈からの視線を感じたため、元は踵を正す様に座り直した。
「コホン。ともあれ、四葉殿には三矢家として佳奈の婚約者の申し入れを行う。今回ばかりは元治ではなく私が行う。もう一人の婚約者の斡旋もせねばならぬからな」

「？　父さん、それってこないだうちの養女になったアリサちゃんのこと？」
元の説明に対し、質問を投げかけたのは美嘉だった。アリサと三矢家の人間との顔合わせの際、一番組み合わせ的に馴染んでいたのは美嘉に他ならない。
美嘉は先天的な特異体質が影響したのか、元の子どもの中で唯一髪の色が異なり、茶色がかったパールグレイの髪を持つ。そして、アリサから「外国の出身ですか？」と聞かれたのだ。これには流石の美嘉も目を見開いたらしい。
何分、十師族という肩書に加えて美嘉の性格もあってか、髪の色に関する部分を弄ろうとする勇気のある輩は今までいなかったのだ。
閑話休題。
「いや、アリサは悠元の婚約者だから、既に申し入れ自体は済んでいる。正直な話、私もこの話を持ち込まれたときは驚きしかなかった」
それは、既に一線を退いた三矢家先代当主こと三矢舞元（みつやまいと）から送られてきた一通の手紙に端を発したものだった。
出身研究所の違いもあって舞元は四葉の復讐劇に参加こそしなかったが、剛三と葉山の要請で戦闘機の手配も含めて復讐劇に必要な物資の調達役を一手に引き受けていた。復讐劇より以前から、世界群発戦争で各地を核抑止部隊の兵士として飛び回って〝戦火の嗅覚〟を磨き抜き、その経験とコネが三矢家の家業である小型兵器ブローカーに生きている形だ。
そして、舞元は九島健が九島烈によって九島家次期当主の座を奪われた際、彼の〝国外逃亡〟に手を貸した人物でもあった。
「四人は九島将軍――九島閣下の弟のことは知っているか？」
「それは勿論。あれ？　確かその人の孫娘って双子で昨年留学に来て、その片方が今も悠元と同級生だったよね？　もしかして……」
「その『もしかして』だ。昨年留学生として第一高校に来ていたアンジェリーナ・シールズさんを司波達也君の婚約者に打診してほしい、と九島将軍並びに父から申し出を受けたのだ」
元は正直、この申し出を受けた瞬間に頭を抱えたくなった。何せ、

リーナことアンジェリーナ・クドウ・シールズがＵＳＮＡ軍の〝世界最強〟と自称する魔法師部隊『スターズ』総隊長アンジー・シリウスであると元は知っているためだ。

確実に『スターズ』がリーナを使って四葉家を探るか、あるいは達也を殺そうと目論んだかなどの可能性を捨てきれないため、元は内密に元継と剛三、千姫と悠元に相談したのだ。

その結果はというと、こうなった。

『リーナが達也に対して恋愛感情を抱いているのは確実で、諜報能力が壊滅的にないリーナが達也を暗殺するなんて〝無理難題〟とセリアが断言したため、盗聴器などの可能性を全部検(あらた)めてから受け入れることになる』

申し出自体は受けるが、ＵＳＮＡから嫁ぐにしても『スターズ』からの除隊は絶対条件となり、更には戦略級魔法師を密かに受け入れる以上、それに対する戦力補填はＵＳＮＡ政府が他国に強いることなく自らの国だけで責任を負うこと。更に、リーナを受け入れる際の戸籍手続きは〝上泉家〟の人間として処理することが明記された。

どれか約束を一つでも守らなかった場合、もしくはリーナに対して謂れの無い罪を押し付けた場合、その報復手段の一つとして〝ＵＳＮＡがアフリカ大陸の戦闘を全て仲介する〟というどう足掻いても無理ゲーの所業を押し付けることも吝かではない。

娘の涙と妻の冷厳な言葉

旧石川県金沢市にある十師族・一条家の屋敷では、当主である一条剛毅（ごうき）と将輝の妹で中学1年生の一条茜（いちじょうあかね）が座敷で対面するように座っていた。

剛毅は本来なら表向きの仕事である海底資源発掘会社の現場を飛び回っているか、一条家の配下にある魔法師の訓練を監督しており、夕食の時間にならないと帰ってこないことが殆どだ。ただ、正月三が日は十師族・一条家の当主として挨拶を受ける側であり、茜は着慣れない振袖姿で来客の対応に追われる母にして一条家当主夫人の美登里の手伝いをしていた。

なお、長男の将輝は第三高校の制服を着た上（学生の正装は制服なため）で年始の挨拶のために外出しており、遅くとも夕食の前に帰ってくるだろうと予想していた。

今日の剛毅への来客が済んだところで茜は座敷を去ろうとしたが、剛毅は「話がある」と言って呼び止めた。茜からすれば、普段はあまり口煩く言わない印象が強く時折粗暴な口調が出ることもあるが、それは一条家の当主としてのものだと内心で納得しつつ姿勢を正した上で座り、足を崩して脇息に肘を突いている父親の言葉を待たずして問いかけた。

「それでお父さん、話って何？　兄さんの帰りを待たなくていいの？」

「それは問題ない。茜がいれば逆に話そうとしないかも知れないからな」

自分がいると話さないことを兄から聞きたがっている、ということはさておき、剛毅は将輝だけでなく茜にも用件があると言いたげな雰囲気を感じていた。強引に聞き出すのもどうかと思っていたところに、剛毅から一つの問いが投げかけられた。

「唐突なことを聞くが、茜。長野佑都――――いや、今は神楽坂悠元と名乗っている彼のことだったか。お前は今でも好きなのか？」

「は？　何でお父さんにそのことを聞かれなきゃいけないのよ！」

父親から聞かれたのは、まさかの恋愛話。しかも、よりによって茜

が一番恋焦がれている相手への気持ちを聞かれ、茜は思わず声を荒げていた。だが、茜の頬が赤く染まっており、それだけでも茜が悠元のことをどう思っているかが一目瞭然であった。

されど、剛毅は茜の抗議めいた言葉を平然と受け流しつつ、真剣な表情で茜に態度ではなく言葉での回答を促した。

「大事なことだからだ。それで、どうなんだ？」

「……この気持ちは変わってない。ううん、寧ろ強くなってる。でなきゃ、本命のチョコを態々用意して贈ったりしないわよ」

出会い方としては悪くなかったものの、実の兄が悠元を「ロリコン」だと言いたげな発言をして、兄の親友が「ダメだよ、将輝。そういう趣味の人がいるのも認めてあげないと」と笑いながら弁解したため、悠元が双方纏めて関節技で気絶させた。その手際の良さと男性としての強さに茜は心奪われてしまった。

悠元からは「１６歳まで気持ちが変わらなければ受け入れる」と言ってくれていたため、茜はそれから女性として、魔法師として一層努力を重ねていた。

その彼が十師族・三矢家の人間であり、茜としては婚約・結婚するにあたっての家格が問題なくなったことに内心で喜んでいた。九校戦後に彼が十師族の人間でなくなったことは驚きもしたが、茜自身も元々家を継ぐかどうかも分からない立場であり、最悪兄に一条家を継がせて彼に嫁ぐことも考えていた。

そして、そんな茜の気持ちを見透かしたかのような言葉が剛毅から言い放たれることになる。

「先程、神楽坂家から協会を通して書状が届けられた。内容は、神楽坂悠元が元日を以て第１０８代神楽坂家当主を襲名し、婚約者を募集するとのことだ。そして、それに先立つ形で司波深雪との婚約が発表された」

「え？　婚約を発表しているのに婚約者を募集する？　つまり、重婚ということ？」

十師族の当主は、前妻が亡くなって後妻を迎えたりすることはあっても、妻を複数持つことはこの国の民法上認められていない。だが、

神楽坂家の書状において当主を襲名した悠元の重婚を認める様な文言を剛毅から聞いた茜は、思わず首を傾げていた。
神楽坂家が古式魔法の大家だということは剛毅から聞いていたが、古式魔法と現代魔法では民法で認められている裁量が違うのか、と訝しむ茜に対して剛毅が説明を入れる。
「その辺に関する説明だが、神楽坂悠元は現状において戦略級魔法師と同等クラスの実力者と政府が認め、その力を後世へ確実に残すべく複数の妻を持つことが許されたそうだ。これは神楽坂家の先代当主である神楽坂千姫殿に加え、上泉家先代当主である上泉剛三殿が神楽坂悠元の実力を認めている、と記されていた」
「世界に名を残す英雄が悠元さんを認めてる……凄い事じゃない」
「それは分かっている。九校戦のこともあるからな」
現に、悠元は昨年と一昨年の九校戦で出場した種目すべてで優勝している。しかも、同じ競技に出ていた将輝を歯牙にも掛けないような勢いで圧倒した実力は剛毅も認めているほどだ。その上で、剛毅は茜に対して毅然とした態度を見せつつも言い放つように告げる。
「正直、もうじき中学2年になる茜との婚約を受け入れてくれるかは分からん。だが、事前に上泉殿を通して神楽坂悠元との婚約を打診していたが、感触は決して悪くなかった。その上で茜に問う。このまま彼との婚約を進めていいかどうか……それは茜が決めろ」
「……一つ聞きたいんだけど、そこまで急ぐ理由ってお父さんが言った悠元さんの相手――――司波深雪さんだっけ。その人が関係しているの？」
茜の問いかけに、剛毅は腕を組んで少し考え込んだ。
深雪の部分に関して茜から聞かれることは覚悟していたが、彼女のことに関しては将輝から聞かなければならないことも含まれている。だが、何も答えられないという回答など目の前にいる娘が納得するはずもないと判断し、剛毅は少し観念したように話し始めた。
「実はな、その彼女に将輝が本気で惚れているらしい。真紅郎君にも尋ねたが、その認識で間違いないと返されたのだ」
「……ねえ、お父さん。もしかして、悠元さんと司波さんの婚約に異議

を申し立てて、それぞれあたしと将輝の婚約の申し込みを割り込ませるつもりなの？」
　茜から核心を突くような問いかけを述べられたことに、剛毅は完全に押し黙ってしまった。この辺は将輝が深雪に対してどれぐらい本気で思っているのかを尋ねてから判断するつもりでいた。だが、剛毅が言い淀む姿を見たことで、茜の中の疑念は確信へと変わっていった。
　そして、茜は叫ぶように剛毅へある種の〝絶交宣言〟にも近い言葉を発したのだった。
「……」
「お父さん、沈黙は肯定って受け取るよ？　そんなことするぐらいなら、あたしは一条家の人間として嫁ぐ気なんてない！　今すぐこの家を出て行くから！」
「待て、茜。何もそうするとは決めていない。将輝に司波深雪の気持ちを聞いてから判断するつもりでいた」
「じゃあ、何!?　兄さんが司波さんのことを本気で好きでいたとしたら、一条家として異議を申し立てるっていうの!?　大体、司波さんに告白しない兄さんに問題があることじゃないの！」
　茜は怒っているように言い放っているが、内心は冷静そのものだった。
　そもそもの話、茜からすれば兄である将輝の女性へのアプローチが下手なことは重々分かり切ったことだった。名字からすれば、相手が〝数字付き（ナンバーズ）〟でないことも踏まえて、将輝が一条家の長男である以上は格の釣り合いという問題もあるのだろう。だが、その問題が払拭されたから剛毅がそんなことを考え付いたのだと茜は分析した。
　その人物は一昨年の九校戦で実際に出会っているし、九校戦の競技シーンは何度も見返している。そこから導き出した茜なりの答えは、将輝にその目があるとは到底思えないという乙女の勘めいたものだった。これ以上父親と話したところで確実に感情論のぶつけ合いにならないと判断し、茜は徐に立ち上がった。
「もういい！　お母さんに今の話を全部伝える」

「待て、それは」
「悠元さんとの婚約はあたしとしても嬉しい。でも、兄さんの事情をあたしの未来を決める婚約に巻き込まないで。もしそんなことをしたら、あたしはこの家を出るから」
　それだけ告げると、茜は剛毅の制止も聞かずに座敷を出て行った。やや乱暴に閉められた障子を見つめながら、剛毅は脇息に凭れ掛かる形を保ちつつ、空いている左手で目元を押さえるように覆っていた。
「……儘ならんものだな。いや、この場合は俺自身も、か」
　茜には司波深雪が四葉家の人間という事実を隠して伝えたが、将輝が深雪に対してアプローチする上での問題が解決したと茜は読み切った上で、「将輝の事情に自分と悠元を巻き込むな」と突き付けてきた。最悪の場合、茜が一条家という後ろ盾を捨てるという選択肢を突き付けられた以上、一条家の当主としての行いが1人の父親として最低なことを実行しようとしていたことに今更ながら気付かされた形だ。
　剛毅としても、出来れば将輝自身が動けば自分が口を出すつもりもなかった。だが、子は親に似るという言葉の額面通りとなったことにどうしたものか悩んでしまった剛毅。すると、障子の向こうから声が聞こえてきた。それは、茜のものでもなく将輝でもない……剛毅が一番よく知る人物――妻である美登里の声だった。
「入っても宜しいですか？」
「ああ、構わない」
　まだ着物姿であった美登里は膝立ちで中に入り、膝をついた状態で障子を閉める。夫婦の間では過剰とも言える丁寧さではあるが、この辺は一条家なりの礼儀作法に基づくものであった。そして、剛毅のすぐ真正面に腰を下ろした美登里の表情は、笑顔だが口元が一切笑っていなかった。
　それが「怒っている」と認識するまでにそう時間は掛からなかった。
「戻ってきた茜が盛大に泣き崩れたので、宥めてから事情を聞きました……確かに、貴方は一条家の当主として十師族の一角を――北陸地方を守護する立場においても、長男である将輝の婚約相手を選ぶの

は大事なことです。その意味で、貴方がやろうとしていることが一条家の力を強めるためと考えれば……当主としては、将輝の父親としては正解なのかもしれません」
「……」
「ですが、茜の父親として最低の道を選ぶことになります。しかも、相手が悠元君だから茜まで巻き込むのは、茜だけでなく悠元君だっていい顔をしません。今の悠元君は家の主という意味で貴方と同格、家の格で述べれば間違いなく格上の相手です。最悪、神楽坂の勘気を被って一条家が滅ぼされることだってあり得なくもないでしょう」
悠元との初対面の際、彼は家の事情で三矢の姓を名乗っていなかったからこそ、剛三が近くにいたからこそ出来るだけ穏便な解決手段を用いた。もし、九校戦のアイス・ピラーズ・ブレイクのように魔法の制限なしで戦った場合、間違いなく将輝が敗れる未来しかない。しかも、それを2年連続で達成している以上は実力を疑うべくもなかった。
七草家は国防軍情報部の襲撃（誘拐未遂）を見逃していても左程のペナルティを支払うまで至っていないことから、剛毅はどこか悠元の優しさに甘えてしまっていた。
だが、美登里はその甘さを否定した。一条家に見えていない部分で何らかのペナルティを支払っているのだとすれば、同じようなことをすれば神楽坂家に〝取り潰し〟を食らう可能性だって無きにしも非ずであった。
「……そう、だな。茜には後で俺から謝る。茜の初恋を叶える意味で、神楽坂家に送りだそう」
「将輝はどうされるのですか？」
「異議を一切申し立てず、四葉家と神楽坂家に新年の挨拶と祝電を送り、四葉家に対して断りを入れつつ将輝と司波深雪の婚約が可能かどうかのお伺いをしてみるが……後は将輝の技量に委ねよう」
親馬鹿な気質の剛毅は将輝にもう少し便宜を図りたかったが、このままでは将輝が一条家の人間としてきちんと成長できるかどうかも怪しい部分があったのは事実。なので、将輝を鍛えるという意味でも

四葉家へ将輝と深雪の婚約に関する〝質問状に近い打診〟を行うのが精々自分に出来る範囲での対応だ、と剛毅自身の中で無理矢理納得させた。

すると、美登里は茜から聞いた情報になかった四葉家の存在が剛毅から出たことに疑問を呈し、剛毅へその辺の情報を尋ねる。

「四葉家ですか？　もしかして、悠元君の婚約者は四葉家の人間なのですか？」

「ああ。第一高校2年の司波深雪が四葉深夜殿の娘で、同じく2年の司波達也が四葉真夜殿の実子というメッセージが届けられた。そして、四葉家の次期当主に司波達也を指名したことに加え、四葉家も次期当主の婚約者を募集する旨が書かれていた」

美登里は茜と同じく一昨年の九校戦で悠元に出会っていて、その近くに深雪がいたことも知っている。その彼女が悠元の婚約者というのは、何故か納得出来る気がすると美登里は心なしかそう感じていた。

すると、そこに丁度障子の向こうから将輝の声が聞こえてきたので、剛毅は入室を促した。どうやら挨拶回りを終えて帰ってきたところのようで、将輝が障子を開けたところで目にしたのは両親が近い距離で話し合っている光景だったため、これには将輝がいろいろ想像して慌てふためいていた。

「あ、えと、その……親父、改めた方がいいか？」

「何を考えているかは知らんが、ただ話していただけだ。入れ」

「じゃ、じゃあ遠慮なく……」

その後、美登里が立ち会う形で将輝は剛毅から深雪に対する気持ちの強さや出会いなどを散々聞き出された挙句、四葉家と神楽坂家のメッセージの件を伝えた上で深雪との婚約を前向きに考える気はあるか、という問いかけに対して、自分の想いを後ろめたく思う理由が無い将輝は力強く頷いた。

深雪本人にその想いをぶつけるよりも先に、婚約打診（厳密には質問に近いが）という形で親の口から気持ちを伝えられることに将輝は難色を示したが、剛毅から「なら、大人しく諦めるか？」というある

意味発破にも近い問いかけにムッと来たのか、将輝は改めて深雪への想いを口にした。これによって、将輝は事実上自ら退路を断った形となった。

夕食後、剛毅は美登里から厳しく叱られたことに触れた上で頭を深く下げて茜に謝罪し、十師族・一条家の娘として茜を悠元の婚約者に推薦することを伝えた。将輝に関しては深雪の実家に質問状を送り、後は将輝の技量に委ねることも伝えると、茜は納得した様子を見せて静かに頭を下げた。

この翌日――――２０９７年1月3日、十師族・一条家は返事の遅れに対しての謝罪も含めて新年の挨拶と司波達也の四葉家当主指名、神楽坂悠元の神楽坂家当主襲名に対して祝電を送った。

そして、一条家は長男の一条将輝の想いに触れる形の文面とした上で、一条将輝と司波深雪の婚約の可能性に対しての質問状を四葉家に向けて送付した。更に、一条家の長女である一条茜を神楽坂悠元の婚約者として申し込む旨を神楽坂家に送付したのであった。

七草香澄の憂鬱

ボクの名前は七草香澄。十師族・七草家の次女で、姉に真由美お姉ちゃん、双子の妹に泉美がいる。母親は違うけど兄二人いて、長男の智一兄貴はともかく、次男の孝次郎兄貴はボクも正直苦手というか、滅多に顔を合わさないからどうとも言えない、というのが正解かも知れない。

そして、療養の名目で別居中のお母さんと……お父さんこと七草家当主の七草弘一。正直に言って、泉美が婚約破棄の時に詰め寄った件からして、ボクもあまりいい印象がなくなりつつある父親だ。

泉美の婚約相手――――悠兄こと神楽坂悠元。昔は長野佑都と名乗っていた悠兄との出会いは、七草家が主催したパーティーに悠兄が中年の偉丈夫――――この人が上泉剛三だったらしい――――の連れということでやってきていた。

最初はお姉ちゃんを狙っているのかと少し警戒したが、お父さんとお姉ちゃんの挨拶もそこそこに、会場の壁際で佇んでいた。これには思わず首を傾げた。何せ、このパーティーには政財界の方々も参加していて、ボクや泉美も父の手伝いということで駆り出されていた。大人たちが主体のパーティーなので子ども連れは少なかったが、それでも子ども同士が交流を深めている所もあったのにだ。

大抵の人はお父さんかお姉ちゃんとの親交を深めようとする人が普通なのに、まるでそんなことには「興味が無い」と言わんばかりの様子が気になったので近付くと、既に先客がいたようで話していた。ボクが近付いたところで悠兄と話している人物が妹の泉美だったことに驚きはしたが、更に言えば泉美の表情がまるで恋する乙女のような雰囲気を纏っていた。

何せ、泉美は何気に理想の男性像のハードルが高すぎるのだ。泉美からしたらボクの警戒心の無さは問題らしいけれど、人のことを言えるのかと思ってしまう。将来結婚できるのかと思わなくもなかった泉美が家族相手でも滅多に見せない嬉しそうな表情で悠兄と話してて、ともあれ悠兄に話しかけたところで泉美の表情が一気に険しく

なり、突き刺すような視線をボクに向けた。
「香澄ちゃん……漸く見つけた私の王子様を奪うのですか？」
「いや、声を掛けただけなのに何でそうなるのさ!?」
ボクは単純に悠兄が他の参加者と交流を深めないことに疑問を持っただけで、泉美の邪魔をする気は無いと必死に宥めると、泉美は「なら、応援してくれますよね？」と笑みを浮かべて問いかけてきたため、ボクは即座に頷く他なかった。いつになく妹が怖くて、ボクは命の危険を瞬時に悟ったが故の反射的な返事だった。
そんなことがあり、悠兄とボクは義理の兄妹みたいな関係になった。多分交流の深さで言えば兄貴たちよりも深くなっていた。お姉ちゃんが悠兄を気に入った時はお姉ちゃんと泉美の板挟み状態になり、この世の地獄を生きながらに味わった気分だったよ。生きているって本当に素晴らしいことだと思う。
密かに悠兄と泉美の婚約が結ばれた訳だが、お姉ちゃんの知的好奇心とお父さんの謀略の影響をもろに受ける形で婚約が破棄された。泉美が悠兄と婚約を結んでいたこともそうだが、それが破棄された事実は最初お父さんとお姉ちゃんしか知らなかったのだが、それを聞いた泉美が書斎に殴りこんだ挙句、お父さんを威圧で黙らせていた。
うん、あの時は本気でお父さんが死ぬんじゃないかと思ったよ。何せ、泉美は覚えたての魔法でかつて「天才魔法師」と呼ばれていたお父さんを圧倒し始めていたのだから……悠兄への愛の力は偉大だと思うね。
お父さんが必死に宥めたお陰で事無きを得たけど、泉美のお父さんに対する評価は最底辺よりも下、という扱いになった。泉美曰く「世の中の男性の中で一番最低のカテゴリに属する人間」と酷評していた。フォローする気はないのか、とか言われそうだけど……ボクだって命は惜しいんだ。
正直なところ、泉美を止められるのは悠兄だけだと確信めいたような思いがある。世辞とか身贔屓とかを排除したとしても、それはきっと変わらないのだろう。
お姉ちゃんが「泉美ちゃんが段々恐ろしくなってくるわ」と小声で

呟いていたが、後日悠兄が手作りのお菓子を持参して七草家に来たときは正直驚いたね。何せ、同じ十師族の三矢家の人間だったのだから。お姉ちゃんは落ち込んでたけど、泉美は偉くご機嫌だった。

その際、お姉ちゃんが「悠君は鬼畜よ……」と落ち込んでいたが、これには理由が分からずに首を傾げた。美味しいんだけどね、このクッキー。お姉ちゃんは悠兄のお菓子に親でも殺されたのだろうか、と思ったほどだ。

悠兄と同じ魔法科高校に入学できたのは良かったけど、七宝には正直辟易していた。

別に十師族・七草家の人間として師補十八家・七宝家の人間を見下すつもりはなかったけど、向こうからしたら旧第三研で第七研の最終実験体になった七草家は七宝家を含めた第七研の面々の成果を「掻っ攫った」と恨むように思い込んでいたらしい。このことは七宝との模擬戦の後に悠兄から聞いたことだ。

いや、それをボクや泉美にぶつけられても、正直困るとしか言えないんだよね。それは当時の七草の人間が非難されるべきことであり、その子孫にあたるボクらからすれば「有難迷惑」としか表現できないんだよ。

結局、ボクもカッとなってトラブルを起こし、仲裁案として提示された七宝との模擬戦は司波達也先輩の判断で双方失格。その時の達也先輩の毅然とした態度に、ボクの中で今まで感じなかった感情が湧き出たのだ。それが恋心だと明確に知ったのは九校戦の後ぐらいだった。

泉美やお姉ちゃんには話したが、お父さんには絶対に言えなかった……それをどこで嗅ぎ付けたのか、お父さんは内密に呼び出した上で「司波達也と婚約する気はあるか？」と尋ねてきたのだ。ない訳じゃないけど、達也先輩ぐらいの人なら競争相手が多い。なので、「叶うかどうか分からないけど、その気はある」とだけ答えておいた。

すると、向かい側に座っていたお父さんの表情は「あ、これ絶対良からぬことを考えている表情だ」と言わんばかりの笑みを口元に浮かべていたので、ボクはこれ以上のことを何も言わずにそそくさと自室

へ戻った。
論文コンペの後に達也先輩とデートすることになった……ボクの恋愛事情も含まれるが、一番の理由はお姉ちゃんが迷惑を掛けたことに対する謝罪の気持ちからくるものだった。どうして謝罪からこんなことになったのかと言えば、お姉ちゃんが京都に行って帰ってきた翌日、改めて達也先輩に謝罪と礼を言いに行った。先輩は「事前調査のついでだったから気にしなくていい」と言っていたけど、そこから司波会長と北山先輩が色々目論んだ結果、遊園地のデートになってしまった。
遊園地では明智先輩が実家の絡みでトラブルに遭遇していたが、そこに悠兄と伊勢先輩、十三束先輩が加勢してあっさりと鎮圧していた。その後、悠兄と伊勢先輩と一緒に食事をすることになったのだが、達也先輩からボクと悠兄の仲の良さについて尋ねられた。泉美のことを引き合いに出すと先輩も納得してくれたようだ。
これがごく一般的なデートかと言われると正直自信が無い。悔しいけれど、恋愛の経験値では泉美やお姉ちゃんに勝てないんだ。
そして、正月の七草家は来客が多く、十師族の中で社交的な部類の為にお姉ちゃんだけでなくボクや泉美まで駆り出される始末だった。尤も、本気で興味があるという訳ではなくお父さんとの付き合いで、という意味合いが強い。そんな中、居間に呼び出したお父さんは四葉家からのメッセージと神楽坂家からの書状について話すことになったんだけど……どうしてああなったのか、ボクにも理解できなかった。

◇　◇　◇

1月3日。この前日、四葉家と神楽坂家が揃って発表した事実に対して、あらゆる家が魔法協会の私書箱宛に祝電や婚約の申し込みを行っていた。そんな中、一条家が達也でも悠元でもなく深雪の婚約に関する質問状を魔法協会経由で四葉家に送付していた。
七草家当主・七草弘一は今回の情報を集めるべく、七草家の影響下にある国防軍情報部からも情報提供を受けていたが、その中にあった一条家の質問状が目に入った。一条家から剛毅の長女を悠元の婚約

者として申し込んだ部分も把握していたが、弘一の興味はそのことよりも四葉家へ質問状を出した経緯に興味が湧いたのだ。
（恐らく、子息の一条将輝のことだろうな。彼の性格を考えれば横槍も考えたのかもしれんが、妻か娘に咎められたのかもしれないな）
ほぼ弘一の読み通りであり、剛毅は将輝の恋愛を応援しようとしたわけだが、それに託けられることを茜が拒み、その事情を聞いた美登里が剛毅を止めた。無論、一条家で何が起きたのかは弘一と言えども承知ではないが、限られた情報の中で弘一は想定される中で一番の最適解を導き出した。
一昨年の段階で護人・神楽坂家の次期当主兼当主代行として指名を受け、昨春は神楽坂家の当主代理として弘一は悠元と面談していた。その際、弘一は目の前にいた少年がとても十代の人間には見えなかったのだ。
十文字家の長男である克人も同年代離れした体格と風貌で大人びている。だが、悠元の場合は身に纏っている雰囲気がまるで長い事政治の世界に君臨する長老クラスの議員と遜色ないレベルの老獪さを覗かせていた。だからこそ、弘一は年功序列を気にすることなく悠元との会談に臨んだことがあった。
弘一は四葉家に指名された司波達也のことも、神楽坂家当主の婚約者として発表された司波深雪のことも……そして、深雪の婚約相手である神楽坂悠元のことも知っていた。
最強の対抗魔法を使いこなし、高校生離れした体術を有する司波達也。流石に彼の使っている魔法に関して詳しいことは不明のままだが、彼は『灼熱と極光のハロウィン』で使用された2つの戦略級魔法の片割れの可能性が高い、という報告を受けている。その彼がまさか真夜の息子だという情報は弘一ですら予想だにしなかった。
一昨年は『氷炎地獄（インフェルノ）』や『ニブルヘイム』、当時発表されたばかりであった飛行魔法を自在に使いこなした司波深雪。それだけでなく、昨年の九校戦では全く新しい魔法を披露し、その内の一つは第七研の研究テーマである『群体制御』をより実戦向きに改造された術式であると七草の研究者から報告を受けていた。司波深雪に関しては、司波深

夜の娘であることは確証がないものの既に分かっていた。
そして、元三矢家の三男であった神楽坂悠元は元々重度の先天的な異常体質を抱えており、１０歳を迎える前に死ぬかもしれないと研究者が述べていた……はずだった。
三矢家の未来を覆すが如く悠元が元気になったのを皮切りに、長男の元治を除く彼の兄と姉らが次々と九校戦で目覚ましい活躍を見せていて、弘一はそのきっかけを作ったのが当時三矢の姓を名乗っていなかった神楽坂悠元であると確信していた。
それは国防軍情報部が彼を〝再教育〟の名目で襲撃した折、七草家は国防軍の部隊の見逃しという言い逃れのできない罪により、上泉剛三の勘気による影響を被ったことからも明らかであった。それを知る代償として彼と娘の婚約破棄を三矢家から言い渡されただけでなく、泉美から笑顔による無言の圧力を受けることになり、天才とも謳われた弘一ですら娘の勘気に対して有効な手立てが見いだせなかった。
司波達也と司波深雪が四葉の中軸となった場合、四葉家以外の十師族・師補十八家を構成する二十七家が束になったとしても……いや、恐らく四葉家に味方するであろう三矢家のことも鑑みると、他の二十六家で抑えられる自信など皆無に等しかった。
三矢家は元の長男である元治が渡辺家の養女と婚約・結婚し、長子継承の路線を進むが如く下の兄弟姉妹が各々家を離れることは想定していたが、次男の元継が上泉家に婿養子となった後に上泉家当主を襲名し、そして三男の悠元が神楽坂家の養子として迎えられ、今年の元日に神楽坂家当主を襲名した。
元自身は「既に別の家の人間である」と護人の二家の外戚でありながらも距離を置くことで友好的な関係を保つことを選択したが、弘一からすればこの選択そのものが一番されてほしくないことだった。
弘一は当初、達也と深雪を抑えるために悠元を利用する腹積もりでいた。詳細な情報は国防軍経由でも一切出てこないが、司波達也と同じく第１０１旅団・独立魔装大隊と縁が深いというところは把握しており、悠元が司波家で居候していることも掴んでいた。

これを利用して三矢家と四葉家に揺さぶりをかけようと目論んだところで、九校戦後に悠元が十師族を離脱して神楽坂家の養子かつ次期当主となったことが臨時師族会議で明かされた際、弘一は愕然とした。四葉の動きに気を取られて他の家の動きを見逃していた行いは十山家の一件で痛感したはずなのに、今度は神楽坂家に先手を打たれていたことを見抜けなかったのだ。

そして、止めと言わんばかりの神楽坂悠元と司波深雪の婚約発表。直接的に見れば深雪が四葉家を出て行く形となるため、弘一の望む展開――達也か深雪のどちらかが家を出て、その後四葉家を説得することで国内のパワーバランスを保つ――に見えるだろう。だが、弘一からすれば、これが最も恐れていたことの一つだった。

本来、護人の家は血縁を強く重んじるため、上泉家が先代当主の孫世代にあたる三矢家の子を上泉の孫娘の婿養子に迎えるまでは想定の範疇だった。だが、神楽坂家が直系や分家の子ではなく、先代当主となった千姫の姉の孫を養子として引き取り、その子を次期当主――当主として襲名させた搦め手は弘一のみならず、各方面の古式魔法の家を驚かせた。

これは、上泉家と神楽坂家が数代おきに双方の婚姻を行っているが故に可能となることだが、今までそれを実行した人間はいなかった。大抵の場合、家内に不穏な雰囲気が流れることになり、最悪その子が殺される可能性が極めて高かったからだ。

上泉剛三が手放しで認めるほどの武術の力量、神楽坂家先代当主となった千姫の慧眼、『クリムゾン・プリンス』の異名を持つ一条将輝を完封した実力、そして古式魔法と現代魔法の複合術式を行使するだけの卓越した魔法技術。それらの条件が揃っていたからこそ、悠元が千姫の養子となりえた。そしてそれは、神楽坂家から「師族二十八家に三矢悠元を御する資格などない」と通告されたも同然の出来事であった。

その意味で、司波深雪の婚約発表は彼女が神楽坂悠元の妻に足り得る力量である、と千姫が四葉家の力を認めた形を示すことになる。しかも、四葉家の次期当主に指名された司波達也は神楽坂悠元と同じく

複数の婚姻を推奨されている身上。同じ魔法師社会ではなく政府が間接的に達也の力を認めたということは、政府は異名も含めて四葉家に関心を寄せている……とまで行くかどうかは不明だが、少なくとも友好的な関係を模索している風にも捉えられる。

七草家は現状泉美の婚約が復活しているが、昨春に悠元と交わした約束を既に破っている。真由美辺りが名倉の件を通じて薄々勘付いている節はあったが、真由美が京都から戻ってきた後は彼女からその件で問われることはなかった。

なお、名倉を殺した周公瑾の足取りは一切掴めずにいた。周公瑾が国防陸軍宇治第二補給基地にいたことまでは掴んだが、先日その基地が謎の勢力に襲撃を受けた際、周公瑾の消息もそこで途絶えていた。襲撃のあった日、京都に第一高校と第三高校の生徒が数名いたことが判明しているが、それが基地襲撃に繋がる決定的な証拠になり得なかった。

（……試す価値はあるだろう）

戸籍上も遺伝上も全く問題が無い婚約である以上、下手な横槍は出来ない。だが、一条家の質問状に歩調を合わせれば何かしらの成果を得られる。

そう考えた弘一は娘たちを居間に呼んだのであった。

味の分からない闇鍋なんて腹を壊すだけ

真由美は漸く新年の挨拶が一段落着いた、と思ったところでの父からの呼び出しに正直辟易していた。正装はドレス派の真由美からすれば、家の仕来りでやむを得ぬこととはいえ振袖姿で愛想を振りまくのには正直疲れる。

だが、それ以上に真由美は父親であり、七草家当主である弘一のことを快く思っていない。真由美自身とて七草家の長女である以上、その役目も理解しているつもりだ。ただ、最近は親が婚約者として推してきた五輪家の長男と会わない（向こうは四国の本家へ帰ったままの為、疎通の状態が続いている）ことを一々煩く言われないために、夜な夜なパーティーに出掛けては真夜中に帰宅することが増えている。

その根底にあるのは昨年の論文コンペ前に起きた名倉が〝殺された〟件。達也に協力してもらう形で殺害現場を探ったが、特にめぼしい手掛かりは得られなかった。ただ、警察の人から名倉の第一発見者が悠元であることと、悠元は警察に名倉が七草家の関係者であることを伝えていたからこそ、その照会連絡が自分に掛かってきた。

コンペが終わって半月後、真由美は美嘉が仲介する形で悠元と会った。そして、その際に悠元から名倉が殺されたのは間違いないということ。犯人は横浜・中華街にいた華僑の方術士であることと、その人物は既に「自殺していた」ことも聞き及んだ。

そして、真由美が弘一に対して最も抱いていた疑念――名倉は父の命令で京都に出向き、その方術士を殺そうとして殺されたのか――に対して、悠元は隠すことなく肯定した。

しかも、件の方術士は昨春に弘一が神楽坂家と三矢家の代理として出向いた悠元と結んだ約定の対象人物であり、これには真由美も凍えると言っても過言ではないぐらいに全身の血の気が一気に引いた。

「そ、その……悠君は、神楽坂家は……どうするの？」

「……今七草家に潰れられても困りますが、正直七草弘一の行動は目をつむる度合いを超えました。尤も、自分は一応当主代理の権限を頂いていますが、この件に関して首を突っ込みたくありません」

「え、えっと……どういうことなの？」
悠元はこの場で「取り潰し」を言われても可笑しくはないと思い込んでいた真由美に対して「面倒」とでも言いたげな答えを返した。これには流石の真由美もどう判断していいのか首を傾げてしまった。その反応は無理もない、と悠元はこれに関しての説明をする。
「ここから先の話は、決して誰にも口外しないでください。それが約束できないのなら、大人しくお帰り下さい」
「約束するわ。父が悠君との約束を破った以上、私も無関係で済まされないでしょうから」
「……実を言いますと次の師族会議に関してなのですが、師族が選出され直された後で師族会議のシステムそのものを作り変えます」
「……え？」
本来国を護る役目を担う国防軍が縄張りとか軍閥とかの考えを持っていること自体、公僕の領域を超えており、滅私奉公の理念が完全に失われている。大亜連合やら新ソ連の問題もあるのに、同盟国なのに敵対心を持つ勢力があるＵＳＮＡといった軍の規模が何倍も違う周辺国家の情勢も考えずに政治家みたいな動きをする軍のシステムは明らかにおかしい。
しかも、十師族当主が魔法師として表立って行動する場合には統合軍令部の同意を得る必要がある、という政府との非公式の取り決めが存在している以上、師族会議はどこまで行っても〝軍人〟に準じるようなものだ。これでは政府が本腰を入れて魔法師社会への配慮を行わないのも納得がいく。
正直、第二次大戦前の大日本帝國時代と戦後の日本国時代、そして魔法という要素を全て突っ込んで煮詰めた闇鍋状態の様相としか言いようがない。『元老院』の連中は大概５０歳代から６０歳代の年齢が多く、奇しくも世界群発戦争に被る形で生まれている。現行の『元老院』の面々は第三次世界大戦後のゴタゴタで成り上がった古式魔法師の子女が大半であり、それを知っていた連中の一部が政府に協力し、『元老院』になれなかった古式魔法師が『伝統派』へと変貌したのだろう。

なら、まだ食える食材を拾うよりも一度鍋の中身を全部捨てて鍋料理を作り直した方がまだいい、と判断した。
「大体、この国を護るという意味では国防軍と同じなのに、縄張り争いなんて労力の無駄遣いです。しかも、魔法師という貴重な戦力を師族と国防軍で取り合っている。これで国を守れるなんて保障が国民に対して出来ると思いますか？」
「一般論で言えば、確かに出来ないでしょうね。だから、師族会議のシステムを作り変えるっていうの？　下手すれば混乱を招くわよ？」
「問題ありません。いざとなったら今上陛下に頭を下げて、この国の根幹を成す法律を一度壊します」
「……はい？」
原作は西暦１９９５年（日本の元号では平成７年）からの歴史が分岐した架空の近未来、という設定になっている。現代魔法の発祥とされるターニングポイントが１９９９年に狂信者集団の核兵器テロをある一人の超能力者が未然に阻止し、「超能力」の研究が始まったわけだが、それならば１９９９年からの歴史が分岐したことにしても良かった筈なのだ。この年でなければならなかった理由――――思い当たるとすれば、この年の政権がイデオロギーで対立関係にあった政党同士が手を組むという大連立に近い野合（やごう）政権であり、しかも第二次大戦終結から半世紀の節目として、時の内閣総理大臣が終戦記念日に際して第二次大戦に対する談話を発表したのもこの年だ。
大体、第二次大戦終結から１５０年以上も経っているというのに、この国には呪縛が多すぎる。ならば、この国の根幹となる〝憲法〟を今の時代に即した方向性に変えるしかない。
それが可能なのかと言われれば、実は『できる』のだ。例えば、日本国憲法の条文には改正自体にかなり高いハードルが設けられている。だが、この憲法を一度破棄した上で新たな憲法を再制定するハードルは条文に存在しない。この辺は勝者側の連合国が憲法を破棄してまで喧嘩を売るという力が無いと見越してのものなのだろう。
何故師族会議のシステムの再構築に憲法の再制定が必要なのか。それは今の師族会議のシステム上だと〝固定化〟が免れない上、国防

軍との連携も儘ならないのだ。ファンタジー物でみられる騎士団と魔導師の対立構図の近未来風みたいなものだが、外国の脅威を退ける意義を本当に理解しているのだろうかと尋ねられると、正直怪しいと思う。

魔法を技術の一つとして見做せば既存の法律を修正するだけで済む。だが、軍事的な要素を含んでしまっているために刑法上の判断も厳しい。その為の監視システムのはずなのだが、取り締まれても一定レベル以下であり、つまるところ「ないよりはマシ」程度のものでしかない。

だから、師族会議――十師族当主が表立って動くための権限を政府および統合軍令部から剥奪し、当分は護人の二家による合議制とする。『元老院』に関わらせないのは、連中の大半が結局自ら手を汚すことを畏れて権限を乱発させかねないからだ。

国防軍の増長の遠因は間違いなくこの十師族当主に関する非公式の取り決めのせいだと考えられる。十師族の基本理念の中に「国家権力の横暴に対抗して魔法師の人権を守る」というものがあるわけだが、政府との取り決めによって統合軍令部にいる幕僚は十師族という〝後ろ盾〟を得ていると広義的に解釈が可能となる。そして、十師族の理念の一部を曲解して国防軍にも国家権力の横暴に対抗する権利があるのだと思い込んだのかもしれない。

だったら、国防軍の立ち位置とその権限全てを政府が一元的に管理するべきだ。それでこそ民主主義の文民統制（シビリアンコントロール）の範疇にあたるし、軍人は便宜上〝公務員〟の立場にあたって公僕としての義務を負う。大体、ここ5年で2つの国に四度の侵攻を受けたのだ。軍人としての道を自ら選んだのであれば、その責務を果たすべき時が来ただけなのだ。

憲法の再制定は国防軍の在り方と明確な交戦規定――積極的自衛権の行使を明記することとなっている。メディア辺りが何かしら言ってくるだろうが、憲法を悪用して自分たちの権力を主張している彼らが言う筋合いなどない。

憲法に定められた自由はあくまでも国家における「基本的人権の尊

重」を前提とした〝法治の上に基づく秩序ある自由〟なのだから、それを破っている側が我が物顔するほうが大問題なのだ。

正規の軍籍を持つ魔法師は軍人魔法師として政府が一元的に管理し、警察や公安などの治安組織に所属する魔法師は各々が管理責任を負うべき問題。民間魔法師に関しては、今の魔法師ライセンスで管理できないのならば国独自で例えば〝国家魔法技術師（こっかまほうぎじゅつし）〟などの名称による政府公認の国家資格を与えればいい。

要するに、憲法の再制定は基本的人権の尊重を魔法資質の如何を問わず等しく与えること。法律の理によって民間魔法師と軍人魔法師で明確な線引きを行うこと。いくら魔法師が国の戦力になると言っても、まともな戦闘訓練を受けていなければ単なる的にしかならないことは魔法の有無以前の常識だ。

そのついでに、いい加減人間主義などの差別的な主義・主張を繰り返して、あまつさえ危害を加えたりする輩を政府に対する〝国家の力を低下させようと目論むテロリスト〟と認定すべき時に来ている。その前例として『ブランシュ』やら『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』がいたのだから、出来なくはない筈だ。

かといって、魔法を使える人間を〝新たな人類〟と論ずるつもりなどない。魔法はあくまでも技術の領域を超えてはならず、過ぎた力は要らぬ欲を周囲に与えてしまう。それを許した先に待っているのは、少数の魔法師が大多数の非魔法師を支配する世界に他ならない。

主義・主張ぐらいは別に構わないが、暴力まで伴えばそれは最早テロリストと変わりないのだから。

そして、魔法使用による司法判断も刑法に基づく同等の扱いとすることを明記する。〝魔法を使ったから〟という恣意的な理由による刑罰の軽減を認めるのは、それこそ既存の刑法に喧嘩を売っているのと同義。なので、達也に協力を仰いで『トーラス・シルバー』の名で魔法可視化監視システムを発表する。

目に見えれば誰しもが魔法を使用したと認識できるし、システムの構築が間に合わないのであれば、ＣＡＤのハードウェア部分を少し改造するだけで魔法の可視化は十分可能なラインとなる。民間魔法師

が魔法の可視化処理で困ることはないし、民間用と軍事用でＣＡＤの仕組みを区別すればいい。魔法式を見ただけで相手の魔法が分かるのならばまだしも、使った魔法の起動式まで分かるわけではないのだから。

軍事用ＣＡＤの横流しが出来ないよう管理体制が銃刀法以上のことになるだろうが、そこは仕方がない部分だろう。

更に、師族会議で正式に選定された十師族の当主に対し、皇居で今上天皇による承認を受けることをルールとして明確化する。元々日本という国家に物申すための組織ではあるため、十師族・師補十八家の管理権限は政府にも魔法協会にも存在しない。

師族会議自体が完全な自治組織と化している以上、誰かがその存在を認める必要があると考えた時、権力に依存しない相手となれば皇族以外に選択肢はなかった。

魔法は都合の良い慈善事業の為の道具ではなく、時として国家を守るための剣であり盾でもある。だが、行き過ぎた特権思想は将来へ遺恨を残す。ならば、国家の象徴である天皇が師族会議を軍とは異なる〝国防の要〟として存続を認めることが必須。それは特別扱いではなく、天皇から与えられた役割――国防を果たす義務の対価として十師族の特権を保障する等価交換によるもの。

この国に生きる以上、この国の象徴を無視して生きることなど不可能なのだから。それ以前に〝不敬〟に値する。

正直な話、何で政治家でもない自分が政府の尻に核弾頭を撃ち込む真似をしなければならないのだ、と愚痴りたくなるほどだ。真由美に対してそのことを話しているのも、それに対するストレスが溜まっているせいなのかもしれない。

「そもそもの話、十師族も含めて師族会議自体が地域に根付いてしまっているため、師族間の代替わりもロクに出来ていません。俗に言う〝固定化〟によって、万が一師族の交代が起きても場合によっては監視・守護地域に空白が空きかねません」

「それは分かるけど、でも、どうする気なの？」

「十師族の椅子を増やします」

「え？」
現行のシステムだと師族の交代による弊害が発生しかねないのに、何故十師族の椅子を増やさなければならないのか、と思うだろう。これは、国防軍から完全に切り離す目論見に加えて、師補十八家に甘んじているいくつかの家に北海道もしくは沖縄方面の監視・守護体制を構築する必要があるからだ。
そして、悠元は現行案として三矢家に北海道方面か沖縄方面の監視・守護を担ってもらいたいと考えている。沖縄方面なら既に一線を退いている三矢家先代当主の協力を得られるし、北海道方面なら矢車本家の協力も得やすくなる。
何より元に渡した『精霊の鏡（カーヴァンクル）』であれば家業の面で調整は必須だが態々厚木にいる必要がなくなり、第三研の管理は共同管理している三日月家に魔法技術を叩き込むか、或いは侍郎を三日月家の養子兼次期当主にしてしまう手もある。そうすれば、三矢家も侍郎の第一夫人として詩奈を送り出すことの重要度が増すことになる。
空いた屋敷はそのまま三日月家に引き渡せば有効に使ってくれるだろうし、第三研自体は元々他の師族に対しての魔法技術提供も視野に入れているため、他の研究所に比べればまだ融通が利きやすいと思っている。
そして、七宝家と並んで師補十八家の中で実力のある一色家には三矢家で担当できない地域を担ってもらう。一からのスタートとなるため、早急な監視・守護体制を築くという意味で自分も神楽坂家当主として積極的に関わる。『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』の骨子や基本計画を前倒しにしてでも進めたのは、師族会議の改革案を早急にまとめるためでもあった。
あとは、婚約者の1人として一色本家の愛梨を娶るので、彼らも一条家と同じ十師族の立場に上がれば、一条家の外戚という立場から同等の立場へ昇格できることになる。尤も、十師族当主としての品格は別の話であるが。
七草家が自分との約定を無視したせいで、どの道九島家の十師族落ちは避けられない状況になりつつある。なので、九島家が抜けた穴を

埋める一助として京都の『聖域』を構築し、最終的に『伝統派』との和解へ漕ぎ着けた。
光宣にも九島の十師族落ちの可能性とその原因を話しており、光宣としても実家が十師族落ちするのは悲しいが、「達也さんと悠元さんにまで迷惑を掛けた以上、僕からは何も言えません」と述べ、こればかりは当然の報いであると納得していた。
「何にせよ、当主でない七草先輩にはあまり関係が無い部分になるので……先ほども言いましたが、このことは内密に」
「それはいいけれど……ちなみに、あの時父と約束した中で復活という文言を使っていたけど、あれは泉美ちゃんとの婚約の事？」
「正解です。別に待遇の部分で差を設ける気はなかったのですが、目に余り過ぎる行いのペナルティとして、正式に婚約が決まり次第、泉美ちゃんの籍を七草家から抜きます」
籍を抜く――――つまり、婚約が正式に決まった際は泉美を七草家の娘として扱わないということを意味する。そして、泉美の養親とする形で六塚家当主・六塚温子が法的後見人となり、温子の娘として嫁ぐことになる。このことに関しては既に六塚家当主から了解を得ており、その仕事の責任を以て当主の座を退き、燈也が六塚家当主の座に就くこととなる算段だ。
この手法は十文字家の隠し子であるアリサを三矢家の養女として引き取った事例を応用したもので、同じ十師族の娘として嫁ぐし、別に名字が変わったところで問題など生じない。七草家が何かしら言ってくるだろうが、約束を先に破った側である彼らに言われる筋合いなどない。
最悪の場合、名倉もとい支倉から聞き及んだ周公瑾殺害に至る経緯の電子データを全て四葉家へ引き渡す覚悟だ。師族会議における七草家の評価はガタ落ちだろうが、元はと言えば十山家の件も含めてしつこい程にパワーバランスという名目で行っている〝四葉下ろし〟のせいだ。
自業自得であって、いい加減別居中の妻と本気で向き合え、と言いたい。弘一（アンタ）は娘たちを自分の都合の良いように動く道具としてしか

見ていないのか、と。
閑話休題。
悠元から事前に七草家に対するペナルティは聞かされていたが、そのどれもが扱い上において〝国家重要機密〟に準ずるため、真由美はそのことを気取られないようにしていた。その意味で、先陣を切る形で弘一に話しかける。
「お父様、ご用件は何でしょうか？」
「お前たちにはまだ教えていなかったが、昨日魔法協会を通じて、四葉家と神楽坂家が師族会議ならびに百家などの有力な魔法師に公表があった」
「神楽坂家は悠兄の今の実家だけど、四葉家も……どんな内容だったのですか？」
弘一の言葉に対し、普段はあまり丁寧な言葉を使わない香澄が問いかけた。というのも、神楽坂の名を聞いた瞬間に泉美が悠元のことを思い出したようで、妄想に耽っていたために香澄が已む無く問いかけた上で泉美を現実に引き戻した。
「重要な話だ。二家にとっても、お前たちにとっても」
「私達にも、ですか？」
ここで疑問の声を上げたのは泉美であったが、弘一は勿体ぶることなくその答えを提示した。
「まず、四葉家の方だが、次期当主に第一高校２年の司波達也君を指名した」
「ええっ!?」
声を上げたのは真由美だが、泉美もこの事実には目を見開いており、香澄も今しがた自分が耳にしたことへの理解が追い付かず、俄かに信じがたい表情を浮かべていた。すると、ここで尋ねたのは香澄だった。
「お父様、達也先輩が四葉の人間であった、ということですか？」
「そうだ。それも、現当主である四葉真夜さんの実子だと書状に書かれており、戸籍データと２人のＤＮＡ鑑定データまで丁重に送られてきた」

「……」
真由美は達也が深雪や悠元と一緒に登下校しているのは目撃しており、もしかしたら2人が『四の数字落ち(エクストラ)』ではないか、と推測したことがあった。だが、弘一の述べたことが事実とするなら、悠元は多かれ少なかれ達也が四葉の人間であるという事実を知っていた、ということになる。
すると、ここで泉美が深雪の存在に触れつつ問いかける。
「お父様、そうなると深雪先輩も四葉家の人間という認識で宜しいのでしょうか？」
「その通りだ。司波深雪嬢は四葉真夜さんの姉にあたる旧姓・四葉深夜さんの娘で、戸籍上は達也君と深雪嬢が従兄妹の関係となる。そして神楽坂家の方だが、神楽坂悠元君が元日を以て正式に神楽坂家当主を襲名した」
一昨年の時点で既に神楽坂家の次期当主という事実は通達されていたが、高校生の身で当主を襲名することに娘たちは驚きというよりも聞いたことが信じられないような気分であると弘一は見抜いていた。尤も、泉美の方は「流石です、悠元兄様」と笑顔を浮かべていたので、機嫌を損ねない内に弘一は話を進めることとしたのだった。

約束破りの前払い、察する厄介事の火種

司波達也の四葉家次期当主指名と彼の実母が四葉家当主・四葉真夜であるという発表。そして、神楽坂悠元が神楽坂家当主を襲名した事実。これだけでも真由美たちからすれば十分衝撃的な内容であったが、泉美の機嫌を損ねない内に弘一が説明を続けた。

「そして、ここからが大事なことだ。二家とも司波達也君、そして神楽坂悠元君の婚約者を募集するという旨があった訳だが、神楽坂悠元君のほうはそれと同時に司波深雪嬢との婚約を発表した」

「悠兄と司波会長が……うん、まあ、納得かな」

「ええ、あれだけ仲がいいお二人ですし、当然のことです」

「いや、何で泉美が誇るのさ」

弘一の言葉に対し、悠元や深雪と関係を持っている香澄と泉美は揃って悠元と深雪の婚約に納得していた。昨年の九校戦前に偶然会った際、２人がデートしていたのは明白であり、同じクラスということもあって単独で行動しているのがそれこそ男女別での授業ぐらいである、という認識を持っていた。

泉美はまるで自分のことのように誇るような言葉遣いで胸を張っており、これには香澄が若干引き気味になりながらも冷静にツッコミを入れた。すると、その辺の事情を聞きたそうに弘一が尋ねてきた。

「ふむ、香澄と泉美は悠元君と深雪嬢の仲の良さを知っているようだが、そこまで仲が良いと？」

「はい。既に一高では生徒の誰もが知らぬ事など無いと言わんばかりに公然の恋人関係になっています。その辺は泉美が詳しいかと」

「私たちの入学式の時点で、２人がお付き合いしているような素振りは見られました。それに、悠元兄様はお姉様の前で深雪先輩との関係を自ら御認めになっていましたので間違いないと思われます」

「成程……」

弘一の問いかけに対して、香澄と泉美はあまり飾ることなく事実に基づく説明をした。これに対する弘一の反応は、納得するような素振りを見せていたものの、彼が最も欲しがっていた言葉ではなかった。

そして、ここで弘一は達也と悠元の婚約に関する本題を切り出した。
「香澄、お前が司波達也君に気があるのは察していた。なので、既に四葉家へ司波達也君の婚約者として申し込んでいる。言い忘れていたが、司波達也君と神楽坂悠元君は複数の女性との婚姻を特例ながら認めたらしい」
「ちなみにですが、泉美はどうなるのですか？」
「泉美は昨春、神楽坂家との会談の際に婚約を復活させて頂いた。そこに関する書状も三矢家から頂いている」
「……」
この抜け目ない父親だから、どうせ既に婚約者として申し込んでいることぐらい読めていたため、香澄は拒否する姿勢を見せずに婚約が破棄された妹を気遣う形で弘一に尋ねた。
これに対し、弘一が泉美の婚約が復活した事実を述べたのだが、今までの流れからして「ありがとうございます」と述べそうな泉美が真剣な表情をして弘一を睨むようにしていた。過去のことからして、口でそう言われても信じ切れていないのだろう、と香澄は内心で溜息を吐いた。
そして、事態の推移を大人しく見守っていた真由美がようやく口を開いた。
「お父様。もしかして昨春というのは、悠元君が訪れてメディア関係のお話しされたときのことですか？」
「そうだ……心配はいらない。約定通り、私は約束をきちんと履行しているからこそ、泉美の婚約は破棄されていない」
（この、タヌキオヤジ……悠君はもう全部知っているのよ？　そして、泉美ちゃんの扱いに関しても変わるということを）
弘一と悠元が結んだ口約束。それは、〝とある人物〟――――名倉を殺した横浜の華僑の方術士（周公瑾）ともし関わりがある場合は直ちに縁を切ること。そうでなければ繋がりを持たないこと。更に、その者の対処に七草家が関わらないこと。
弘一は確かに周公瑾との縁を切った。だが、当時の腹心であった名

倉三郎が約定を結んだ後に周公瑾と接触している上、四葉家を出し抜こうとして名倉に周公瑾の殺害を指示したことは当人の証言も含めて全て事実であると証明されている。
　それでいて泉美の婚約が破棄されていないのは、正式な婚約になった際の手続きが七草家の与り知らぬところで既に整っているからこそであった。泉美の女性としての気持ちを尊重しつつ、七草家に対して明確なペナルティを与えるとなった際、七草家が神楽坂家の外戚となる繋がりを断つ方法が一番効果的だと判断した。
　そのことを悠元から知らされている真由美であったが、日ごろから鍛えられている猫被りで弘一からの追及を避けることに成功した。すると、弘一はとある提案を真由美に持ちかけた。
「……真由美。実は五輪家から書状が届いて、洋史（ひろふみ）君の婚約者候補から外すと正式な連絡を貰った。ただ、お前も今年で２０（はたち）歳となる身。親としてはそろそろ結婚を考えてもらいたいと考えていることも分かって欲しい」
「え、ええ……」
「実は、一条家が四葉家に質問状を出していた。内容は一条将輝君と司波深雪嬢の婚約に関するもののようだ」
　最近連絡すら疎遠になっていた洋史との関係解消は止むを得ないことだと納得していたが、その次に弘一の口から出た事象は真由美ですら首を傾げた。
　一昨年の九校戦終了後のダンスパーティーで将輝が深雪を誘っていたことは目撃していたが、その時の将輝の表情からして深雪に脈があるのはすぐに分かった。悠元と深雪の婚約に口を挟みかねない質問状の内容はともかく、どうしてそこで自分が関与してくるのかが分からない、と言いたげな視線を送る真由美に対し、弘一はサングラスのフレーム中央を押さえつつ尋ねた。
「真由美、お前が神楽坂悠元君に気があるのは分かっている。とはいえ、七草家としては既に泉美の婚約を認めてもらっている以上、１つの家から同じ血を引く姉妹を出すことで要らぬ詮索を呼ぶ可能性がある。なので、お前にその気があるのなら、神楽坂悠元君との婚約が

可能かどうかの質問状を送るつもりだ……どうする？」
「……構いません。いえ、お願いいたします」
真由美自身、父親の言いなりになりたくなくて反抗し続けてきた。そんな中で出会った悠元は真由美からすればとても羨ましく見えた。
三矢と七草……同じ十師族のはずなのに、その名に囚われることなく振舞えている悠元や彼の姉達の姿を見ていると、七草家の名に拘っている自分が本当に正しいのかと自問自答するようになっていた。
十師族としての矜持は悠元自身も理解していたが、それ以前に人としての在り方を彼は重んじていた。あずさが生徒会長選挙に出た時の暴動を抑えた深雪を窘めた上で、厳しい言葉をぶつけた。
そんな彼が羨ましくて、いつしか彼に惹かれていて、深雪と仲が良いことをあまり快く思っていなかった。もし、深雪がその時点で四葉の姓を名乗っていたら、自分はきっと涙を呑んで大人しく身を引いていたかもしれない。
弘一の提案に対し、真由美は一切反論することなく丁寧に頭を下げた。すると、ここで訝しむ視線が妹たちから向けられていることに真由美は気付いた。
「お姉ちゃん……やっぱり悠兄を狙ってたんだね」
「お姉様……やはり泥棒猫は身内でしたか」
「二人とも、やっぱりって何!?　大体、悠君は複数の婚約者を求められているし、私はまだ婚約できるかどうかも分からないでしょ！」
「三人とも、落ち着き……うっ」
悠元と仲が良い香澄からすれば、真由美は尊敬できる姉であるが、泉美との件で苦労したことから、真由美が悠元と婚約する可能性があることに対して正直香澄自身の気苦労が増える未来しか見えず、反対というより「悠元の人の良さに甘えるな」と唱えたかった。
泉美からすれば、真由美の存在は「私と深雪先輩の想い人を独占しようと目論む泥棒猫」という風に思い込んでおり、複数の婚約者でも問題ないという前提があったとしても、目の前にいる姉は結構独占欲が強いことを知っているため、他の婚約者との輪を乱さないか正直不安であった。

香澄と泉美のジト目と容赦のない言葉に対し、真由美は事実に基づく反論を叫ぶように言い放つが、２人の耳には全く届いていない。
そして、それを咎めようとした弘一だったが、次の瞬間に泉美から発せられた〝何か〟によって意識を手放し、ソファーに凭れ掛かる形で気絶した。これにすぐ気付いた真由美は弘一の方に手を翳していた泉美を問い詰めた。
「ちょっと、泉美ちゃん！　お父様に何をしたの!?」
「心配いりません、お姉様。サイオンの塊をお父様にぶつけただけです。私は別に七草家を勘当されても構わない覚悟はとうに持っていますので」
「……ボクは何も聞いていないし、見ていない」
「香澄ちゃん!?」
その後、弘一が目を覚ました時には真由美達の姿が無かったが、一体何が起こったのかを把握する術は……真由美だけでなく香澄と泉美からも快く思われていない弘一には確かめる術も存在しなかったのであった。

◇　◇　◇

七草家でそんなことになっていた頃、旧愛媛県松山市にある十師族・五輪（いつわ）家の本屋敷にて電動によるパワーアシスト付きの車椅子に乗りながら、この国の国家公認戦略級魔法師にして『十三使徒』の一人、五輪家長女こと五輪澪（いつわみお）が書斎にて五輪家当主・五輪勇海（いつわいさみ）と対面する形で勇海からの説明を聞いていた。
「悠元君が神楽坂家当主に、ですか」
「そうだ。しかも、司波達也君と同じく複数の婚約者を政府から認められたということは、２人は恐らく戦略級魔法師……もしくはそれに準ずる実力を有している可能性が高い」
五輪家は澪の存在があるからこそ十師族としての立場に居られた。だが、元々虚弱だった澪がどれだけ生きられるかで、五輪家が十師族から転落するという危惧もあった。そんな中、彼女の体質を改善した悠元の存在に目を付け、彼が当時十師族・三矢家の三男だったことから、彼を婿養子として迎えた上で澪と結婚させられないか、と勇海は

考えていた。
だが、彼が十師族から離脱して護人・神楽坂家の次期当主となったことで、その夢が潰えてしまった形だ。そして、その彼が先日神楽坂家当主を襲名したことは事実上止めを刺されたような心境であった。
「洋史が七草家の長女と疎遠になってしまった以上、彼が恋焦がれている三矢家の次女に対して婚約の申し入れの書状を出した。そして、澪。家の都合で振り回して済まないが、悠元君の婚約者として神楽坂家に申し入れを出した。事後承諾になったことに関しては言い訳のしようもない」
「……いえ、元々『十三使徒』の身である以上、覚悟はしていたことです。それに、表向き政略結婚とはいえ、私としては好きな人に添い遂げることが出来ますし、神楽坂家の本拠は箱根である以上、首都の要を担う役目は果たせると考えています」
勇海は知らないが、三矢家は既に達也の婚約者として佳奈を送り出す方向で話が進んでおり、佳奈自身も達也との婚約に前向きであった。そこに五輪家が洋史と佳奈の婚約の申し入れを三矢家に送るということは、原作で起きていた達也と深雪の婚約に対する一条家の申し入れに近い状況が発生することになる。
無論、この時の勇海も元もそんな事態になるなど思ってすらいなかっただろう。
そして、五輪家としては体質の改善によって澪が子を成せる公算が立ったことになり、大亜連合との講和条約で暫くは小康状態になると見越した上で澪を悠元の婚約者として申し入れることとした。戦略級魔法師クラス同士の子となれば、その子の魔法資質も大いに期待できると見込まれたもので、澪は悠元への恋慕の感情も含めつつ勇海の提案を素直に受けた。
「それで、お父様。悠元君が神楽坂家の当主である以上、単に申し入れるだけでは十師族・五輪家の人間としても『十三使徒』としても示しがつきません。なので、箱根の神楽坂家に直接出向きたいのですが、よろしいでしょうか？」
「そのことだが……政府から澪に『召喚命令』が下された。直ちに東京

へ来て欲しいとのことだ。その際、皇居で上泉家当主である上泉元継殿、そして神楽坂家当主こと神楽坂悠元殿と対面することになる」
元々大亜連合との戦闘を睨んでの出征の後、澪は事態の推移を見守るという理由で五輪本家に留め置かれていた。そこには澪の健康状態の改善に気付かれまいとする勇海の優しさも含まれており、澪はその優しさに甘んじていた。とはいえ、部屋に籠りきりは体調を崩すため、時折訓練場に出向いては体力トレーニングに勤しんでいた。
流石に年齢のせいで身長が伸びるという淡い期待は持ち合わせていなかったが、自身の膨大な魔法力を生かす意味で近くにある新陰流剣武術の松山道場に通っている。その道場を預かる女性の師範は澪の素性を知っており（彼女は剛三の娘の1人で、東道家に嫁いだ姉と詩歩の妹にあたり、千里の叔母でもある）、他の門下生とは別のトレーニングメニューを与えている。更には、週に一度師範自ら出向いて澪の鍛錬をしている（表向きは護身術という名目だが、内容は本格的な対人戦闘用のもの）。
話を戻すが、日本政府は東京に『十三使徒』がいないことを鑑みた（首都防衛の要として十文字家や十山家がいるというのに、彼らを信じ切れていない故なのか）だけでなく、大亜連合との講和条約で小康状態にある以上、澪が五輪本家に留め置かれる理由が無いと判断しての政府の召喚命令。それだけならば澪も納得しなかっただろうが、皇居への召喚も含まれていて、更には先日神楽坂家当主となった悠元との面会を求められた。
「悠元君と……確か、その二家は十師族よりも上の立場にいる方々。ということは、『十三使徒』として出向かなければならないということですか」
「そういうことになる。お前ならば心配していないが、私も同行する。洋史には、そろそろ私の後を本格的に継いでもらうために仕事を覚えてもらわないと困るからな」
つまるところ、洋史は五輪本家で当主代行として暫く留め置くということ。勇海は約1ヶ月後に迫った師族会議のため、元々東京に出向いて根回しをするつもりであった。表向きは自由に動けない澪の同

行者として赴き、皇居への同行も求められたのだ。
「私がいることで五輪家は十師族の地位にあるわけですが、やはり不安であると？」
「……五輪（うち）家は家業として海運を担っているが、ここ最近の物の動きがどうにもおかしい」
「おかしい、とは？」
　勇海も澪が昔のままならばこのようなことを漏らさなかっただろうが、澪の体質の改善に加えて彼女が神楽坂家当主となった彼の存在に期待して、勇海は家業から読み取れた気になる情報を澪に提示した。
「大亜連合方面の物の動きが鈍くなりつつあることもそうだが、それと比較してＵＳＮＡ方面からの物の動きが大分活発になってきている。この状況でＵＳＮＡと新ソ連が一戦交えるとは思えないが、警戒は必要だ」
「……その、もしかしてＵＳＮＡは一昨年の『灼熱と極光のハロウィン』をまだ警戒しているのではないでしょうか？　もしくは、かの国でまだ精力的な活動を続けている人間主義者のケースもあります」
「人間主義者、か……（確か、昨年の春に四葉家が名古屋で人間主義者を捕らえた、と言っていたな）」
　五輪家の家業である海運会社の本拠地は四国地方（松山）だが、九州（鹿児島）・近畿（大阪）・東海（名古屋）・関東（横浜）に支社を置くことで、太平洋方面の船舶の管理だけでなく海外からの監視に目を光らせている。その取引実績から近年のＵＳＮＡ方面と大亜連合方面からの取引の伸びが気になっていた。
　勇海が述べた可能性に対し、澪は自身が出征する要因となった横浜事変の可能性とＵＳＮＡで未だに勢力を保っている人間主義者の存在を示唆した。これを聞いた勇海は昨春の臨時師族会議で人間主義者対策を話し合った際、四葉家が名古屋でＵＳＮＡの人間主義者を拘束したと述べていた。
　もしかすると、また密かに人間主義者らが密入国している可能性も浮上することとなる。彼らを扇動してこの国に再び反魔法主義の運

動を起こさせることも考えられるだろう。そして、あの時千姫から明かされた顧傑（グ・ジー）なる人物の存在を明かした意味を考えた時、勇海は残された時間が少ないと察した。その結論に至った上で、勇海は澪に一つのことを頼むこととした。

「澪、皇居で上泉殿や神楽坂殿と対面した際、そのことを相談して差し上げてくれ」

「……事は急を要すると？」

「憶測の域は出ないが、一昨年のことを考えれば密入国した人間主義者らが過激な行動を取らないとも限らない。現にＵＳＮＡにおける人間主義者らは横流しされた軍の旧式の武器を用いている噂も流れている。この国で銃器を持ち出すことも鑑みればおかしいことで済まされないだろう」

　そして、五輪家は昨春のことも鑑みて三矢家と四葉家に情報を提供することとした。三矢家ならば国外の事情に精通しているし、四葉家は人間主義者を捕らえた実績があることは聞き及んでいる。しかも、元三矢家の人間である元継と悠元のことも考えれば、警戒しすぎても決して徒労には終わらないだろう、と勇海は確信めいた気持ちを持っていたのだった。

神楽坂の襲名

――西暦２０９７年１月２日。

その日、神楽坂本邸は荘厳な雰囲気が漂っていた。今日は神楽坂家慶賀会――神楽坂に連なる筆頭主家・分家、そして『九頭龍』に連なる護廷十三家の当主格が一斉に会するこの日。特に今年は長年神楽坂家の主を担ってきた千姫が引退し、未だ１６歳である神楽坂悠元が第１０８代神楽坂家当主を襲名したため、そのお披露目会――神楽坂襲名の儀が慶賀会の前に行われる。

今日は、悠元が当主として神楽坂の係累に名を連ねるその一歩となる大事な日だ。

来賓も錚々たる面々が揃っており、今上天皇名代として皇太子・皇太子妃両殿下、内閣総理大臣、東道家当主の東道青波など、この国の未来を担う存在の重さを誰しもが実感せざるを得なかった。

魔法師社会からは、十師族・四葉家当主名代として次期当主である達也が、北山家の代理として雫が担い、吉田家の代理に幹比古、千葉家の代理（本人は固辞したかったが）としてエリカ、日本魔法協会現会長の十三束翡翠（とみつかひすい）、更には護人・上泉家から当主名代として剛三が参加していた。

そして、大勢の人間が大広間に集った中、その当主の座に向かって歩く者が一人。誰もがその姿ではなく気配を悟り、自然と頭を下げていた。決して威圧しているわけではなく、その彼から感じられる気配がまるで神が目の前に降臨したかのような錯覚すら覚えるほどだった。

その少年は、最前列に座る皇太子・皇太子妃の両殿下に一度膝をついてから正座をして深く頭を下げた。

「新しき年を迎え、両殿下がこの吉日にお越し下さったことにつきまして、神楽坂の当主として感謝の言葉を申し上げます」

「神楽坂殿、貴方は十代半ばと未だ若い身。青春を謳歌することも神楽坂の人間としての務めと思い、果たされていくことを切に望みます」

この少年の行動に対し、皇太子は祝福の言葉を掛けた上で改めて頭を下げた。皇太子妃も「大変でしょうが、どうか無理はなさらずに」と気遣う様な言葉を掛けた上で頭を下げた。これは、神楽坂家当主が皇族に対する敬意と忠義を果たす意味合いも含まれている。

両殿下への挨拶が済み、その少年――――神楽坂悠元が纏っている漆黒の羽織には金糸の刺繍で誂えられた神楽坂家の家紋である四方揚羽菊紋（しほうあげはきくもん）（皇室を示す菊紋を囲むように土御門家が用いている揚羽蝶（アゲハチョウ）の紋様が四方に誂えられており、朝廷ひいては皇族を四方八門から守護する意味合いが込められている）がその存在感を一層引き立てている。

そして、悠元は一度上座の前で深く一礼をして、上座に座ったところで改めて深く頭を下げた。

「此度、神楽坂家の第１０８代目当主となった神楽坂悠元である。両殿下のみならず、内閣総理大臣閣下、東道青波入道閣下、そしてかの英雄と名高い上泉剛三閣下に見守られた中、此度の襲名を受けられたことは真に喜ばしい事であり、神楽坂家はこの国の護りの担い手として微力ながら一層の尽力を尽くす所存であることをここに宣言する。この決定は先代当主となられた千姫殿の御決断によるものであるが……異存は無かろうな、神楽坂筆頭主家こと伊勢家当主・伊勢佑作殿？」

「異存はございません。神楽坂に伝わる秘術を会得なされていることはこの目で見ております故、その実力を十全に発揮できるよう、『星見』の担い手として主たる神楽坂様に忠誠をお誓いいたします」

佑作の言葉を皮切りとして、神楽坂分家と『九頭龍』に連なる面々も「我らは神楽坂様に忠誠をお誓いいたします」と高らかに宣言した。これは代替わりの通過儀礼のものだと千姫から聞かされていたが、下座に座る十二単姿の千姫は笑みを零していた。

小声で「私が代替わりの時はどこか面従腹背の様子を見せていたのですが」と述べており、昨年のデモンストレーションがかなり効果的であったのだろうとみている。

「宜しいでしょう。未だ世界情勢は予断を許さぬ状況にあります。

我々を下等な人種だと見下す輩もおりますが、彼らに対する報いは既に手筈を整えております。大物を釣るが如く、焦ることなく確実に手繰り寄せましょう。それが我々の得意とする武器なのですから」

そうして、神楽坂襲名の儀が無事に済んだところで、慶賀会は親しい人間同士での正月の団欒と化していた。当主となった悠元は尤も格式の高い上座に座り、その隣には千姫が仕立てていた振袖に身を包んでいる深雪が甲斐甲斐しくお世話をしていた。

その様子を振袖に着替えた千姫が楽しそうに眺めていた。

「ふふ、もう既に夫婦みたいな雰囲気ですね。これは孫の顔も期待できそうです」

「母上……俺はまだ高校生の身分ですよ」

「分かっております。深雪ちゃん、この息子をどうかよろしく頼むわね」

「心得ております、お義母様」

昨日は正直大変だった。真夜からの報酬に加えて深夜と怜美、更には深雪から後押しされる形でとうとう水波と関係を持つ形になってしまったのだ。その際、水波からどういう関係を望むか聞いたところ、水波は「悠元兄様のお世話をしたいのです」という言葉を聞き、自ら使用人兼愛人のポジションを望んだ。

水波としては、生まれのこともあって今まで四葉のガーディアンとして育てられた影響が色濃く残っていて、奉仕の精神は最早本能的にも近いレベルとなっていたことから、深夜もこれにはお手上げであった。

それに、水波が深雪のガーディアンを務めるというのは同じ女性としても理に適っており、男性禁制の場所に同行できる同年代の存在はとても貴重である、と結論付けた上で水波の要望を叶えることとした。

そして、婚約者序列に入った愛梨に関しても抱くこととなり、一通りの説明をした上で確認を取ると、愛梨も納得していた。彼女曰く「そうやって女性を気遣う姿勢がより好感を稼いでいるのですね」とため息交じりに言われた。何故だ。

なお、翌朝水波から「悠元様は本当にお優しいお方です」と熱っぽい視線を向けられた。これにやきもちを焼いた深雪と愛梨からせがまれたのは言うまでもない。２人は別の学校でライバル関係にあったはずが、自分の存在を介することで共闘関係も生まれていた。

まあ、修羅場展開で昼ドラのような厄介事になるよりはマシだと思いたい。達也経由で頼まれた深雪の件に関しては、二人きりの時だけ許容すると伝えた。

同じ学校に通っている深雪、雫、姫梨、セリアの４人はともかく、沓子と愛梨は三高の人間で、夕歌は大学生、アリサと茉莉花は中学生なので、フォローが正直大変だ。泉美の場合はというと、流石に七草家の人間である以上は手を出せない、と判断している。

申し訳ないが、七草家はそれだけ神楽坂家に対しての罪があるということだ。

「そういえば、修司と由夢の件はどうなりました？　母上は２人を婚姻させたがっておりましたが」

「そうそう、それを悠君に頼みたかったのです」

千姫が言うには、元々千姫の代で片を付けるつもりだったが、天刃霊装の件で宮本家と高槻がゴタゴタしたことがあり、これでは自分の代で婚姻の申し渡しが出来ない状況となってしまった。

具体的に言うと、修司と由夢の扱いを巡って「由夢を宮本家に嫁がせてほしい」やら「修司を婿養子に」と当主そっちのけで親族らが紛糾したため、宮本家当主こと宮本宗司（みやもとそうし）と高槻家当主にして出雲神社の宮司を務める高槻柳明（たかつきりゅうめい）が揃って千姫に相談し、伊勢家まで駆り出されてあわや御家騒動にまで発展しかけたのだ。

「……何をやってるんですか。いや、自分もその原因の一端ですから無関係とはいきませんが」

「年末にやっと片が付いたときには２人の婚姻を言い出せなくなってしまって。そうそう、深雪ちゃんも当主夫人となる以上、この仕事は深雪ちゃんも担ってもらうから、ちゃんと覚えてね」

「はい、分かりました」

本来、古式魔法の家の婚姻は民法に則った上で各々の伝統とする婚

婚の儀を執り行う訳だが、神楽坂家の場合は皇族を密かに引き取るだけでなく、皇族や朝廷に伝わる儀式の全てを余すところなく継承している。

万が一伝承している奏者が途絶えた時のことを鑑みてのことであり、その事情もあって皇室関係の国家事務、天皇の国事行為である外国大使・公使の接受に関する事務、皇室の儀式に係る事務および御璽・国璽の保管等を所管する内閣府の機関である宮内庁から信頼を置かれている。

話を戻すが、神楽坂家の場合は婚姻する男子と女子それぞれに婚姻の意思を確かめ、それが合致すると神楽坂家当主が判断した場合、婚姻を認めるというもの。政略結婚ではなく恋愛結婚の形式に近いが、双方の強い恋愛感情が生まれる子の魔法資質にも強く影響している――所謂呪術的要素が魔法の資質を決める重要なもの、と神楽坂家では信じられているためだ。

この場合、修司の意思を自分が確認し、由夢の意思を深雪が確かめ、二者の意見を集約して悠元が婚姻の判断を下すというものだ。尤も、修司と由夢は『神将会』のメンバーであり、2人の関係性は聞くまでもなく既に知り切っているようなもの。

それでも、一応儀式――悠元が一昨年に経験した、男女の交わり――を挟むことになるため、その覚悟を問う意味合いもあるのだろう。

「まあ、話は分かりました。今晩仕掛けますか？」

「そのつもりです」

ともあれ、修司にはいい加減覚悟を決めてもらわなければ困るのは確かであり、その背中を軽く押してやるだけだ。あまり他人の恋路に首など突っ込みたくなどないが。

「新年おめでとう、悠元君に深雪君。いや、悠元君の方は『神楽坂殿』とお呼びした方が良いのかな？」

「先生!?」

すると、にこやかな表情で近付いて来るのは袈裟を纏っている人物――九重寺の住職である九重八雲であり、これには深雪も目を見開

いていた。八雲は深雪が驚く表情を見て満足げな笑顔を浮かべており、これには悠元が釘を刺すように呟く。
　ちなみに、達也は「用を足しに行く」と言ってその場を離れており、その合間を狙って挨拶に来る辺りは八雲らしいと思った。
「九重八雲和尚――――いえ、九重先生。いくら生粋の忍びとはいえ、戯れも程々に。達也に本気で殴られますよ」
「寧ろ、僕に土を付けてくれないと教え甲斐が無いからね。改めて、当主の襲名おめでとうだよ、悠元君。深雪君も悠元君と婚約出来て嬉しそうだね」
「ありがとうございます、先生。それにしても、何時お知りになったのですか？」
　深雪は『神将会』に所属しているとはいえ、八雲が『九頭龍』の長であることは未だに知らない。元々当主関係者にしか知らされない事項であるため、八雲はあくまでも神楽坂家と仲が良い一介の忍術使いとして出向いていた。
「僕は寺の和尚であり忍びだからね。それぐらいなら調べられるけど、今回は先代の知己である千姫殿が教えてくれたんだ」
「大丈夫ですよ、深雪ちゃん。ここにいる生臭坊主は私の教え子の１人ですから」
「いやー、その節は大変お世話になりました」
　八雲が剛三だけでなく千姫に師事していたのは事実であり、『九頭龍』を隠す意味でも十分すぎるカバーストーリーなため、深雪もそれ以上の追及を避けた形となった。八雲は達也にも挨拶をしてくると言い、一礼をしてからその場を去った。
　賑やかな正月の団欒も過ぎ、その夜は次々と襲い来る（夜這いともいう）婚約者を返り討ち（意味深）にして、三が日の二日目が過ぎた翌日、目の前に映る「表現するにもどう言えば穏便な表現になるのか分からない有様」に目を瞑り、悠元は汗を流すために浴場へと足を運んだ。
　先程の光景を忘れたいわけではないが、昨晩は修司と由夢のこともあるので、出来るだけ考えたくないと思っていたところ、タオルを身

に付けた修司がやってきた。見るからにかなり疲れているようで、由夢に相当せがまれたのが見て取れた。
　すると、修司は悠元の姿が目に入ったので声を掛けてきた。
「おはよう、悠元」
「おはよう、修司。見るからに疲れてそうだが、大方由夢辺りに絞られたか？」
「まあ、意味合いとしてはそうなる」
　お互いの事情を察しつつ、あまり込み入ったことは聞かずに体を洗い流し、お互いに向き合う形で広い浴槽に肩まで浸かる。今までの疲れがお湯に溶け込んでいくような感じで、修司も落ち着くような表情をしていた。
「悠元、今年が始まってまだ三日だが、どうなると思う？」
「……少なくとも、１ヶ月後に十師族選定会議がある以上、油断はできないだろうな」
　その原因となるのは周公瑾の師である顧傑（グ・ジー）で、彼はかつて存在していた大漢（ダーハン）の魔法師研究機関である崑崙方院（こんろんほういん）に勤めていた古式魔法師の一人。だが、崑崙方院内で起きた現代魔法師との派閥争いに敗れ、彼らは北米（現在のＵＳＮＡ）に逃亡した。
　その彼が同じ大漢の亡命者によるネットワークを作り上げ、闇社会の黒幕として大人（ダーレン）と呼ばれる立場にまで伸し上がった。『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』といった組織に支援を行い、彼の手駒であり弟子でもあった周公瑾を失った。
「前に言っていた『七賢人』のことも関係するのか？」
「大いに有り得る。大体、疑問が多すぎたからな」
　そもそも、顧傑と弟子たちは何故崑崙方院で得た情報を以て大亜連合に亡命しなかったのかが疑問であった。元々向こうの大陸出身者は儒教を重んじるため、裏切り者に対しては非常に厳しいのだ。それでも、魔法的な面で劣勢だった大亜連合からすれば、大漢への復讐を条件に魔法技術の提供を含めた協力を持ち掛けることだって考えられたはずだ。
　その答えは、彼らの逃亡に手を貸していた東洋系の人間の存在で

あった。それも、彼は姿を偽っていたが日本人であり、しかも古式魔法師であったことが判明した。彼は顧傑に落ち目である大亜連合よりも復讐の基盤を整えやすい北米への逃亡を手助けした際、彼は自らの〝眼〟で顧傑に緩やかな暗示をかけたと思われる。これは、周公瑾の亡霊から吸収した記憶の中から読み取った情報からの推察に過ぎないが。

それは、顧傑が力を付ければ付けるほど、大漢への復讐心が強まるという暗示。同じ古式魔法師の中では遠隔操作系や人間を魔法的な道具に作り変える精神干渉系を得意とする顧傑でも、彼の情動に干渉する暗示の刻印からは逃れられなかったのかもしれない。それが作用する形で、彼は大漢への復讐が果たされなかった恨みを四葉家に向けたとするなら筋は通る。

これは現状における仮説だが、もしこの仮説が正しい場合、顧傑の身体に何かしらの魔法的な刻印が埋め込まれているのは間違いない。半永久的な持続魔法は『誓約(オース)』や『極星霊座』の例がある以上、それを調べれば誰の術なのかが一発で分かる。

「顧傑の感情を利用した暗示、か……可能性はなくもないな」

「大亜連合に情報を持ちこんで、大漢と伍することは十分可能だった。だが、それを止めたのは『元老院』の人間が送り込んだ古式魔法師と思われる。瞳術を得意とするのは主に古式の術者、それも密教系や修験道系の術者によくみられる、と聞いたからな」

実を言うと、東道青波の白く濁った左目も東道家に伝わる先天的資質を施術によって引き出した結果だそうだ。これは佐那から聞き及んだことであり、極めて優れた古式の術者ならば、施術を受けると瞳に色が宿るとも言われるらしい。

尤も、自分の場合は『天神の眼(オシリス・サイト)』を有しているためにそういった眼を持つ気になどならない。この力だけでも正直腹一杯な心境なのに、これ以上瞳の力を手に入れたところで邪魔にしかならない、と思ったからだった。

働けるものは治してでも働かせる社畜理論

悠元と修司が話したことは、朝食後に開かれることとなった『神将会』の会合でも議題として取り上げられた。昨日は上泉家の当主名代として剛三が来ていたが、今日は新当主への挨拶ということで元継が出向いている。

そこで、悠元は以前真由美に話した師族会議の改革案の全容を話すこととした。

「――――以上が、現在考えている案だ」

「そこまで既に手を打っていたとはな。だが、固定化を回避するのはどうする？」

「考えている方法は２つ。１つ目は分家制度を認め、家督と家業を完全に分割させる方法。この方法は当然リスクが生じる」

「まあ、言わずとも分かっちゃうよね」

元継の問いかけに対し、悠元が１つ目の案を提示したところで由夢が怪訝そうな表情を浮かべていた。彼女も実家のことを思い出したようで、これには修司も同意するように頷いていた。

「では、２つ目の案というのはどういうものなのですか？」

「固定化の回避を諦め、監視・守護地域を更に規定化する」

「規定化？　どういうことなの？」

現状、師族二十八家は既に市井の中にまで浸透しており、魔法技能師開発研究所の問題もあって固定化を回避するのが難しくなりつつある。ならば、いっそのこと現在の監視・守護地域を大幅に見直す。これは、以前一条家が三矢家に山陰地方の監視・守護を提案したものの、三矢家がそれを固辞した過去からくるものだった。

監視・守護地域を大幅に見直し、現状案は北海道、東北、関東（山梨・伊豆半島を除く）、北陸、中部・東海（山梨を含む、三重を除く）、近畿（和歌山・大阪・奈良・三重）、山陽（兵庫南部・京都中部・京都南部を含む、山口を除く）、山陰（兵庫北部・京都北部・山口を含む）、四国、九州、沖縄（奄美諸島・南西諸島）の１１の地域を〝１３〟の師族が関わることとする（佐渡島、隠岐島などといった離島について

は基本的に最も近い沿岸を有する地域の担当師族が担うこととなり、対馬は国防軍の基地があるために除外、小笠原諸島については神楽坂家所有の島が大半を占めるため、師族会議の監視対象外とする）。

２つの師族が関わるのは、首都圏を擁する関東地方、そしてもう一つは大阪・京都を中心とした近畿地方を監視・守護する役割（近畿・山陽・山陰の担当を補佐し、魔法協会や近畿方面の国防軍との交渉役が主となる）を担う。近畿方面に２つの師族を置くのは外国の工作員対策というのもあるのだが、もう一つは現状の九島家における仕事の割り振りが異常であることに起因している。

「光宣から聞いたんだが、本来九島家の現当主が担うはずの仕事を先代当主である烈がこなしていた。それも来年で９０歳を迎える御仁がだ。精力的に活動なされていることは見習うところも多いが、普通ならばおかしいことだと思わないか？」

「そういえば、光宣君は確かに『お祖父様の仕事に詳しい』と仰っておりました」

九島烈が現在も国防軍の魔法顧問を務めている（昨年の九校戦の後に辞意を示したがっていたが、国防軍からの要請で撤回される形となった）上、４年前の師族会議における十師族選定会議までは議長として九島家の代表を担っていた。

８０歳を過ぎた人間が出しゃばり過ぎている、とも思うだろうが、逆に言えば烈から劣る魔法力しか得られなかったが故に彼の息子である九島家現当主・九島真言が師族会議の場に姿を出すことが無かった、とも受け取れる。

そして、師族会議は今でも九島烈の影響力を受け続けているという証左とも言えよう。

「『伝統派』の和解によって一先ずの危機は回避できた。だが、九島家がそれに甘んじられては困る……どの道、九島家の十師族落ちは避けられないが」

九校戦の際、周公瑾からの要請を受けて政府に黙って便宜を図り、大陸の方術士の亡命を幇助した。しかも、その方術士と周公瑾は京都と奈良、関東方面で騒ぎを起こした古式魔法師を使って悠元や達也、

その友人らを襲おうとした。
　そして、七草家は約定を破って部下経由で周公瑾と接触し、あまつさえ四葉家と九島烈が動いたことで危機感を抱き、名倉を使って周公瑾を殺害しようとしたことは明白。光宣の治療の際、師族会議に関する条件は付けていないが、烈ならば恐らく自分にも責任があるということで七草家を庇い、九島家が十師族の座を退くことで場を収めるだろう。
　九島家と七草家の名誉回復は自らの手で行うべきことであり、こちらが手を貸す義理など一切ない。そして、九島家復活の切り札と成り得る光宣は、既に養子手続きの為に相手方との交渉に入っており、近日中に結果が出る。
「大体読めたな。悠元は九島烈に師族会議の大々的な改革案を提起させるつもりだな？」
「正解。ただ、『星見』の報告だと師族会議を顧傑が狙うのは確実だから、その提案は顧傑の一件が済んでからになる……ついでに買収したＵＳＮＡのメディアを使って大々的な人間主義者の犯罪リークに加えてスキャンダルまで全部暴露する」
　元々ケイン・ロウズのグループは小型ミサイルの件だけでなく、金銭面の援助や兵器密輸などで便宜を図り、その見返りに闇社会を通じて世論を自分たちが有利な方向へ働くように仕向けていた。元から癒着が無ければ、いきなり小型ミサイルを渡されると顧傑とて流石に怪しむのは明白だ。
　ＵＳＮＡが混乱するだろうが、そんなことは知った事ではない。人間主義者の矛先を押し付けるような真似をするのだから、その報いはきちんと自らの手で清算すべきことなのだ。戦略級魔法の件と言い、パラサイトのことといい、ＵＳＮＡがトラブルの温床地帯と化している。
「ＵＳＮＡが混乱に陥るが、いいのか？」
「パラサイトを呼び寄せ、この国に招いたのは向こうの落ち度。いつまでも尻拭いさせ続けるようなら、個人で保持している１００兆円相当のアメリカ国債を全部売却するつもりだし」

何故そんなものを個人で保有しているのかと言えば、以前話した莫大な資産の一部でＵＳＮＡとイギリスの国債をそれぞれ１００兆円ほど買い込んだのだ。それでも現在保有している個人資産額は合計を出すとこの国の国有資産総額の５割近くに相当すると思う。

明確な数字を出していないのは、この資産が帳簿上神楽坂家の非課税対象資産（これは皇族と政府より認められている合法的な資産）として位置づけられているのと、『トーラス・シルバー』としての膨大な収入もあって増え続けているため、計算するのが面倒になってしまったからだ。

それでも、流石に神楽坂家当主となったので明確な数字までは出したが、正直数字を見たところで、前世の庶民感覚もあってか現実味がなさ過ぎたのだった。

「やられたほうはたまったものじゃないね。最悪世界規模の金融危機に陥るよ？」

「分かってるよ、雫。だからこいつに手を付けるのは最終手段だ。こいつを担保に大統領へ脅しを掛けることも可能だが、今はやらない」

しかも、その国債の購入者としてＦＬＴの在宅魔工技師『上条洸人』の名を使用している。これはいわばエドワード・クラーク対策の一環で、もしエドワード・クラークが上条洸人の名前を記者会見で出した場合、国債の売却をちらつかせればＵＳＮＡ政府もしくは財界が本気で止めに来るだろう。

いくら情報を握ろうが、エドワード・クラーク一人で全世界の金融事情を掌握できるわけではないし、その権限すら彼には存在しない。金融・経済部分で問題が生じれば、宇宙開発なんて言ってられなくなる。魔法という力があっても結局は技術でしかなく、実体経済の上に成り立っている以上、国債の売却は一種の切り札（ジョーカー）となる。

「それで、本題なんだが……今年の師族会議の開催場所は建て直し予定の神坂グループが経営するホテルで、開催の前後三日はホテルの敷地内へ一般人が入れないようにする。表向きは解体工事に伴う準備期間ということで折り合いは付けた」

顧傑が死体を操る術を使うことは分かっているし、周公瑾の知識か

ら得た情報では、『ソーサリー・ブースター』なしで僵尸術を行使する場合、最大１０キロメートルが限界のようだ。市街地の住民を盾にすることも考えられるため、『神将会』のメンバーは全員非常時に備えて厳戒態勢を取ることが決まっている。
「市街地へテロを起こそうとした場合は？」
「その場合、深雪に渡した『氷結六花（ダイアモンド・ダスト）』で人形と爆弾を凍結させる。人形の座標は全て俺が捉えるから、深雪は魔法を行使することだけ考えればいいし、恐らく用いてくるのは死人しかいないだろう。深雪、いけるか？」
「はい、覚悟は決めております」
　昨年の九校戦前に深雪に渡した戦略級魔法『氷結六花（ダイアモンド・ダスト）』を用いて、原作において達也の『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』による座標情報を受けて深雪が弾丸を凍結させた事象を応用し、自分の『天神の眼（オシリス・サイト）』による座標情報を用いる形で深雪が魔法で人形と爆弾を〝凍結粉砕〟させる。
　いくら顧傑でも粉々に粉砕された爆弾を再生して爆発させるなんてことは出来ないと既に把握済みだ。ホテルに入り込んだ人形に関しては、予め元継と修司がある程度数を減らしてもらう算段でいたし、姫梨と由夢、雫には認識阻害――『仮装行列（パレード）』の術式が刻まれた仮面で姿を隠しつつ、十師族当主の脱出を手伝ってもらう。
　ようは、どうせ爆薬を持ち込んでくれるのだから、ホテルの解体作業の一助になってもらおう、という現金的な考えに基づくものだ。なお、一応サンプルということで数個ほど回収させるつもりでいた。三矢家に渡せば家業の繋がりですぐに解析できるし、ＵＳＮＡへの脅しの材料にもなる。その辺は追々話し合うつもりだが。
「爆薬持ち込んでくれて助かったわ。でも、死んでもらおうか」という恩を仇で返す様な有様だが、師族会議を狙う以上は自分も無関係ではなくなる。そしてそれは、元継と深雪からすれば同じことであった。
「九島家の絡みで思い出したが、コンペ前の襲撃の件を聞いたときは驚いたな」
「むー、私達も参加したかったのに」

「いや、得意分野の関係上、お前ら二人を参加なんかさせたら、最悪周囲1キロの家屋が漏電で大規模火災になってたぞ？」
　修司の得意とする火属性、由夢の得意とする金属性の場合、天神魔法の性質上では攻撃力が一、二を争うレベルでまずい威力しか叩き出さない。悠元が勝成に対して使用した『神雷波濤（じんらいはとう）』ですら、発動時間を事細かく規定しなければ簡単に人を殺せるレベルであり、天神魔法の特性によって魔法防御すら貫通するため、基地の復旧が大変なレベルになると見込んでセリアに『ヘビィ・メタル・バースト』を使わせたのだ。
「悠元の言い分には納得してる。ま、由夢は不満げだが」
「むー……その分、師族会議では顧傑の人形をボコボコにしてやるもん」
「ボコボコで済むのかしら……」
　凹むというよりは貫通して穴が開くレベルになりそうだと姫梨はため息交じりにそう呟いたが、出来ないと言わない辺りは由夢の非常識さに慣れてしまったということなのだろう。
　すると、元継がふと気になることを悠元に尋ねた。
「悠元、九島家には光宣君という九島烈の孫がいるはずだが、論文コンペの発表を見る限りにおいて彼の才能はこのまま九島家にいさせるのは惜しいと思う」
「それなんだけど……そうだな、これもいい機会かな」
　そして、悠元は『神将会』のメンバーの中で悠元が転生者であることを知らない修司と由夢にそのことを明かし、更には深雪以外のメンバーが知らない悠元の固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』と『領域強化（リインフォース）』について説明した。その反応はというと、驚きよりも納得が完全に勝っていた。
「はー……道理で勝てないわけだよ。物語のチート主人公が出てきたようなものだし」
「誰がチートだ、誰が。大体、そんな能力を持っていてもまともに振るったら面倒事のオンパレードにしかならねえから、これでも結構自重してるんだよ」
「まあ、うん、納得だな。兄貴らのことを考えれば理解も納得もできる

話だ」
　世界最強の称号を名乗りたくないのも、魔法以外の手段で社会的・合理的に片付けようとしているのも、全ては自分のチートじみた能力を周囲に知られたくないが故のものだった。尤も、その反動でこの世界の割と主要な女性たちから惚れられるということにもなってしまっているわけだが。これぱかりは前世の兄の気持ちが少しだけ分かるような気がした。
「話を光宣絡みに戻すが、光宣は九島真言と彼の妹の遺伝子を持って生まれた遺伝子調整体だ」
「それって、事実上の近親行為ってことじゃん!?」
「ああ。それに付随する問題は俺が片付けた。で、だ。先程述べたことが起きれば光宣も色々思い詰めるだろうから、彼には九島の家を出てもらうつもりだ」
「それはいいが、光宣を一体どこの家に任せるつもりなんだ？」
「色々考えた結果、壬生（みぶ）家にお願いすることとした」
　九島烈の孫という肩書きはかなり重く、下手に国防軍の関係者がいる家に預けるわけにもいかなかった。だが、その肩書を一種の護符として利用することも鑑みて考えた結果、息子がいない家に養子として預けるのがいいと判断。自分が知る中で交渉がしやすく、魔法に理解を示してくれる家となれば、第一高校3年の壬生紗耶香（みぶさやか）がいる壬生家が妥当と判断した。
「その家は確か、壬生先輩の家でしたか？」
「ああ。実を言うと既に話し合いは進めていて、向こうも息子がいないから前向きに考えてくれている」
　懸念材料があるとすれば、紗耶香の父親である壬生勇三（ゆうぞう）が現在独立魔装大隊の大隊長を務めている風間と知己であること。いくら風間が十師族嫌いとはいっても、大隊に二人の十師族関係者――戦略級魔法師を抱えている以上は無視することも出来ない。尤も、風間の場合は十師族そのものというより魔法師を兵器だと思っている輩が嫌いという意味合いが主となるわけなので、交渉の余地は十分あると睨んでいる。

話し合いが破談しても最悪上泉家に預けるという方法は取れるため、交渉が失敗しても問題ないようになっている。
「かなり入れ込んでるね」
「彼自身も優れた魔法師だからな。出来れば味方に引き込んでおきたいのさ」
それに、光宣は十文字家に引き取られた理璃と仲が良い。十文字家も光宣と理璃の婚約・婚姻には前向きで、やはり九島烈の肩書は未だに強いという意味を持つ。
「でも、九島家にいる彼の兄と姉らはどうする？」
「……正直、そこまで面倒は見ていられない、という結論に至った」
あれだけ高圧的な態度を受けた以上、今更謝ったところで許す気にもならない。それが理由だ。子供じみた理由かもしれないが、必要な時には頭を下げる必要だってあるのだ。それをさも特権階級の人間のように振舞うのは明らかに違うと思う。
顧傑の捕縛任務には光宣も神楽坂家からの依頼という形で頼むつもりでいて、将輝（一条家）、悠元（元三矢家）、達也（四葉家）、燈也（六塚家）、光宣（元九島家の予定）、克人（十文字家）の六人が主体となって動くことになるだろう。尤も、自分と光宣は師族会議の意向を待たずに動き始めるつもりだ。
そして、そろそろ蒔いた種から芽を出させる時が来た。
「悠元さん、何か考えがあるのですか？」
「考えというか、一昨年に仕込んでおいた策を発動させようかと思ってさ」
「一昨年？　その時点から顧傑の襲撃を予測していたのか？」
「顧傑のためというか、元々想定外のトラブルに備えて万が一の保険として仕掛けておいたものだが、幸いにも時間を稼げたのは僥倖だった」
系統外・精神干渉系魔法『流星雪景色（ミーティア・スノーライト）』。この魔法は術者の望む対象に向けて特定の効果を自在に与えることが出来る。情動干渉系魔法『梓弓（あずさゆみ）』の効果を乗せてこの魔法を放ったのは、極めて短時間の間に広範囲を対象とした大規模の精神干渉系魔法を可能としているか

らこそだ。
　そして、一昨年の春に横浜ベイヒルズタワーの屋上からこの国全域にこの魔法を発動させた理由。探知の為の領域を構築する意味合いもあるが、本当の理由はこの国がＵＳＮＡに対してのアキレス腱となっている代物――――強化サイキックや強化調整体といった人道的な事由で隔離を受けている者たち。彼らの精神構造を〝調律〟することで、彼らを立派な国防軍の兵士として実戦可能な状態にすること。
　実を言うと、昨年末に達也を襲撃した彼らも対象に含まれており、彼らの調律条件は自分よりも強い相手に負けること。どうあっても達也との戦闘が避けられないと踏んで、彼には申し訳ないが彼らの調律相手になってもらった。一応達也には前以て話したところ、寧ろ達也から謝られた。曰く「深雪のことを考えれば、この程度は借りを返したことにもならない」とのこと。解せぬ。
「……ちなみにだが、松本で軟禁されていた強化サイキックはあの後どうなったんだ？」
「全員四葉家に引き取ってもらった。調律は既に終えてるから、今頃は真夜さんと葉山さんの命令に忠実に従う魔法師として働いているだろう」
　元々人員不足気味だった四葉家の戦力増強に対して真夜からお礼の手紙を貰い、その中には「悠元さんと深雪さんの子どもが早く見たいです」という文言があった。なお、達也にも真夜から婚約のことに関する書状が届き、それを見た達也が盛大な溜息を吐いたのはここだけの話。

歩く人間ドミノ製造機

西暦２０９７年１月４日。『神将会』の会談があった翌日、悠元は滅多に袖を通さない国防陸軍の軍服（とは言っても礼服しか持っていない）を身に纏っていた。しかも、予め中将の階級章が付けられている新品の制服という有様だが、一々目くじらを立てても仕方がないと諦めた。

本来なら、非常勤職とはいえ幹部クラスである中将となれば、昇進のための式典を執り行っても不思議ではない。だが、それは一切せずに陸軍最高司令官である蘇我大将との会談に臨んでいた……その場所は、防衛省内にある国防陸軍総司令部であった。

「上条達三特務少将。本日を以て特務中将並びに陸軍総司令官直下の特務参謀に任ずる」

「はっ、微力を尽くして任務にあたらせていただきます」

「うむ……正直なところ、私が頭を下げねばならん立場なのだが、儀礼故に許してほしい」

「いや、二言目にそれを言われましても困るのですが……」

悠元と蘇我は年齢こそ離れているし、立場も異なる。それでいて蘇我が悠元と友好的に接しているのは、同じ新陰流剣武術の門下生であることが起因している。蘇我からすれば悠元は弟弟子であり、蘇我は上段まで行ったが悠元は師範の目録を有している。神楽坂家も含めたそんな事情が色々絡み合って、儀礼以外だと蘇我は悠元を格上のように扱い、それに対して悠元が窘めるという構図が出来ている。結果的に言葉遣いだけは年功序列に沿う形となった。

その事実は陸軍総司令部の中で既に公然の秘密となっており、剛三のシンパが多いこともあって顔見知りが多いのも悠元の総司令部入りが受け入れられた理由の一つだ。尚、悠元の素性は九校戦のこともあって知られているが、誰が聞いているのか分からないこともあって基本的に『上条達三』の名で通されるが、蘇我と２人で話す際は神楽坂悠元として呼ばれることが多い。

「それで、風間達にも挨拶はしていくのかな？」

「直行したら要らぬ詮索をされそうですから、日を改めるつもりです」
一時期のＵＳＮＡによる監視の目は鳴りを潜めたが、それでも最近は新ソ連やらイギリスの情報員がうろついている。なので、適当に気絶させて粗方の情報を引っこ抜いている。別に目ぼしい情報を拾うための苦労ではなく、彼らの素性を調べ上げてその背後にいる人間関係を洗いざらい探るための方策に過ぎない。
大体、『神将会』で触れた米英の国債についても、正式な購入方法よりも更に畏まったやり方を取っている。イギリスの国債は剛三経由でイギリス王室にお伺いを立ててから（ゴールディ家の一件を片付けた際、剛三の繋がりで国王から叙勲を受ける羽目になった）イギリスの国家元首の許可書を得て購入しているし、ＵＳＮＡに関しては大統領に直接質問状を送り、大統領のサインが入った国債購入許可書を得た上で購入した代物だ。
向こうもまさか個人単位かつ兆円規模で購入してくるとは思っていなかったようで、双方共に１００兆円に達した段階でストップがかかったのでそこで止めたのだ。そして、その情報は日本政府にも入り、神楽坂家を訪れた財務大臣がいの一番に土下座した時は思わず首を傾げたほどだ。
イギリスの諜報機関（某スパイ映画でよく聞く諜報機関）が探りを入れてきたこともあり、全員気絶させて八雲に引き渡した。なお、それを聞いたどこかの四大老の一人の顔が青ざめていたそうだが、そんなことは自分の知った事ではない。
閑話休題。
「要らぬ詮索……情報部も入っているのかね？」
「ええ、まあ。尤も、身内に手を出した場合は苛烈に行きます。本気で痛い目を見ても分からなかった場合は、唆した連中も含めてあらゆる手段を以て抹殺します……すみません」
「悠元君が謝る必要などない。沖縄の件も佐渡の件も、そして横浜の件でも君は十分な功績を果たしている。寧ろ今すぐ大将に推薦したい気分だ。大友参謀長も君が望むなら参謀長の椅子を明け渡してもいい、と言っているほどだからな」

「いや、それはそれで問題大有りですからね？」
沖縄防衛戦における大亜連合による侵攻の察知と部隊・艦隊の撃破、新ソ連の佐渡侵攻に関する事前情報、そして横浜事変における民間人の軽微な被害と大亜連合と新ソ連に対する強烈な打撃。これらが成し得たのは全て悠元のお陰であることを蘇我は知っている。その彼がいくら冗談でも大将への昇格を仄めかしたことに悠元は固辞した。
神楽坂家当主は今上天皇より権限と権力の保持を認められた者。内閣総理大臣よりも格上となるため、国防軍の階級で例えれば間違いなく〝国防軍全軍の最高司令官〟という位置付けになってしまう。ただでさえそんな状態となっているのに、国防陸軍内で昇進するのは要らぬやっかみを抱えることになるため、本来ならば最悪佐官クラスで事を済ませようとも考えた。
だが、それを許さなかったのは佐伯の動きであった。戦力としての召喚命令は契約に含まれなかったものの、技術士官としての召喚命令で無理矢理動かしたことは流石に看過できなかった。その腹いせで出来てしまった木彫り熊という名の精霊標の存在もあるわけだが。
余談だが、あの木彫り熊『ハルノブ』は富士山麓神宮の拝殿に置かれ、それに対して願い事を呟くと御利益があるということで一種のパワースポットとなっているらしい。あまり関与したくないので聞かなかったことにしたかった。
「本当ならば、ギリギリ大佐までが許容できる範疇だったのですから……佐伯少将のせいで受け入れざるを得なくなりましたが」
「しかし、まさか佐伯がそこまでやるとは……防衛大からの報告を聞いた際は耳を疑ったほどだ」
「その原因は大方師族会議といいますか、十師族当主と政府の取り決めが間違いなく影響しているかと」
国防陸軍のみならず国防軍全体の勢力争いに対し、悠元は神楽坂家当主として統合軍令部を前に「国内・国外情勢が緊迫状態にある中、貴方方軍人は勢力・派閥争いに感(かま)けて国防軍本来の任務を疎かにしている。そのようなことで最高司令官たる内閣総理大臣と隊務統括を担

う防衛大臣に顔向けできるのか」と痛烈な言葉を発した。
「その様子だと……いや、政(まつりごと)は本官の領分でない以上、聞くことも野暮だな」
「国防軍を本来の在り方に変えるというだけですので、大将閣下が直接害を被る話ではございませんが」
「いや、大亜連合との戦争、そして講和条約は私自身の考えも改めさせられた。これを期に国防軍本来の任務へ注力できるような仕組みづくりが求められている。これは陸軍の最高司令官たる私の喫緊の課題でもあるだろう。ところでだが、君の戦略級魔法に関する扱いは現状維持という認識でいいのかな？」
　悠元が放った圧倒的な気配に押し黙ってしまい、反抗する者は誰もいなかった。あれで威圧でなかったのだから末恐ろしく、威圧だけで人間をショック死させる存在となると、他に出来るとすれば蘇我の師である剛三ぐらいかもしれない、と蘇我が思うほどだった。
　悠元は新陰流剣武術の師範の目録を有しており、この肩書が飾りでないことは国防軍でも選りすぐりと言われる沖縄方面部隊の兵士を一人残らず打ちのめしたことで証明されている。
「自身の戦略級魔法である『天鏡霧消(ミラー・ディスパージョン)』と『星天極光鳳(スターライトブレイカー)』……そして、先日完成した対消滅粒子収束魔法『太極八卦陣(コスモ・ノヴァ)』のトリガーを自身で管理することを上泉家と神楽坂家の先代当主の二者による合議で決定しています」
「……いやはや、君自身が3つの戦略級魔法を扱えるとはな。私は白旗を挙げることしかできぬよ」
　厳密にはＵＳＮＡの『ヘビィ・メタル・バースト』や『リヴァイアサン』、新ソ連の『トゥマーン・ボンバ』と『シムリャー・アールミヤ』、大亜連合の『霹靂塔(へきれきとう)』、旧ＥＵの『オゾンサークル』など、『十三使徒』の戦略級魔法まで把握しているだけでなく、それを封じるための魔法も既に完成している。それが先程悠元が口にした新型戦略級魔法『太極八卦陣(コスモ・ノヴァ)』。
　この魔法は古代文明魔法に使われている特殊な記述を用いており、起動式をそのまま読み込む〝術式順転(じゅつしきじゅんてん)〟によって魔法式に組み込

まれた戦略級魔法発動に必要とされる前提条件の記述を全て書き換える――戦略級魔法を無効化する戦略級魔法『太極順転・蒼穹』。
起動式を逆から読み込む〝術式反転〟により、相手の魔法式の投射先を投射元と入れ替えてしまうだけでなく、投射先の発動必要条件をすべて引き継がれた上で反転される一種の〝呪詛返し〟の戦略級魔法『太極反転・煌星』。
流石に〝対戦略級魔法特化型戦略級魔法〟なんて言えるはずもないし、一応この戦略級魔法は順転と反転の2つを同時展開して融合発動させることで対消滅反応粒子による攻撃魔法『太極八卦陣』と化すため、間違ったことは言っていない。それに、起動式の読込手順を変更できるのは悠元が会得した精霊魔法式による部分が大きいため、おいそれと他人に教えられないのだ。
そして、この戦略級魔法を難なく発動させるためにも新型ＣＡＤである『セラフィム』と『ラグナロク』の開発が必要だったというわけだ。
「現段階ではあくまでも懸念事項でしかありませんが、佐伯少将が独立魔装大隊に所属している戦略級魔法師・大黒竜也特尉に加え、大隊技術士官の自分を抑え込もうと画策するかもしれません。なので、蘇我大将には然るべき時に御助力をお願いする事も出てくることになるかと」
「分かった。最近の国内・国際情勢は予断を許さないことも把握している。十師族を含めた師族会議とのかかわり方も含め、私も統合軍令部の人間として防衛大臣に進言させてもらうつもりだ」
「感謝いたします」
その上で、蘇我に悠元は非常時における命令系統などの打ち合わせを綿密に行い、神楽坂家に帰宅したのであった。
◇　◇　◇
悠元が独立魔装大隊への挨拶に関して日を改めるのは、達也が明日出向く（今日は改めて八雲のところに挨拶へ伺っていて、深雪も同行している）のでそれに同行するつもりであったこともそうだが、蘇我に言ったことも決して間違いではない。更に付け加えるならば、悠元

の婚約者との約束を優先した結果であった。
神楽坂家当主として新年の挨拶周りは欠かせない訳だが、それでも悠元は未だ高校生の身分。そして、婚約者に対するフォローは欠かさずに行っている。ただ、同じ一高メンバーや夕歌、そして専属使用人の面々は機会が多いため、自ずと三高メンバーと中学生メンバーのフォローに絞られることとなる。
魔法科高校の新学期開始は1月8日からなので、それまでは新年の挨拶をこなしつつ相手をしているわけだが、今日はアリサが「どこかに出掛けたい」ということで、アリサと一緒に横浜ベイヒルズタワーに来ていた。茉莉花も入り口まで一緒だったのだが、一緒に来ていた愛梨や沓子と先に入っていった。
アリサの様子を見るとどこか照れているような様相を見せていて、別れる直前に茉莉花が小声で呟いたことが大きく影響しているのだろう。
「アーシャ、大丈夫か？」
「う、うん。もう、ミーナってば……」
「ともかく、のんびりウィンドウショッピングでもいい気はするが……ん？」
すると、悠元から見て後ろの方向から女性が「きゃっ!?」と所々から聞こえる有様が気になり、悠元は視線を向けた。すると、その原因となる私服姿の少年の姿を見て、悠元は女性の悲鳴がその美少年に見とれて他の人にぶつかるトラブルのせいであったことをすぐに察した。
隣にはビクビクしながら少年の腕にしがみ付いている少女の姿があり、どことなくあずさのような小動物的な雰囲気を感じてしまった。
アリサは目をパチクリさせて、その光景を見てどうとも言えないような表情をしていたところ、少年が悠元の姿を見つけたので近寄ってきた。
「光宣、理璃ちゃん。新年おめでとう」
「あけましておめでとうございます、悠元さん」

「か、神楽坂先輩、新年おめでとうございます。ところで、そちらのかたは？」
「ああ、俺の……戸籍上だと義理の妹になるけど。アーシャ、２人は九島光宣君と十文字理璃ちゃんだ」
「（九島に十文字……）長野アリサといいます。お兄ちゃんの恋人でもあります」
　アリサの自己紹介を聞いて、光宣と理璃は驚くどころか逆に納得するような素振りを見せていた。ただ、理璃の方はアリサの様子を見て疑問に感じているようだが、ともあれお互いに自己紹介をした上で、悠元は提案をした。
「ともかく、移動しようか。光宣の姿を見て人間ドミノが出来かねんからな」
「あ、そうですね。お手数をお掛けします」
　後で話を聞いた形だが、達也や深雪、水波に理璃と清水寺に続く参道を歩いていた際、光宣に見とれた女性が他の通行人とぶつかるハプニングが散発したらしく、これには流石の達也も苦笑を禁じえなかったらしい。
　今の状態でも割と大変だが、理璃の存在も相まって被害が拡大しない内にタワー内へと入ることとした。
　買い物自体はそれとなく順調に進んだ訳だが、アリサが「下着を見に行きたい」という提案に理璃が賛成し、更には自分と光宣まで巻き込まれた。
　今までロクに買い物すら来たことが無かった光宣は、当然女性に対しての免疫が十全にある筈もなく、目の前に広がる下着に恥ずかしがり、それに店員が見惚れる事態になっていた。喜怒哀楽だけで女性を惹きつける才能は別の意味で完成していると言えるだろう。
　それだけならばまだしも、悠元はアリサの、光宣は理璃の下着選びにまで巻き込まれることとなり、悠元に至ってはアリサによって試着室の中へ連れ込まれてしまった。それを見た店員が「あらら、お盛んな事ね」と咎める訳でもなく、寧ろ焚き付ける様な感じになっていた。
　こんな場所で流石に行為にまでは及んでいないが、心を冷静に保ち

ながら大人しく手伝っていた。アリサからすれば「お兄ちゃんのイケズ」ということらしいが、公衆の面前で中学生の女子に手を出していたら普通にヤバい話なのだ。主に法律的な意味で。
　ある意味、光宣の存在によって窮地を脱したようなものだ。
　そして、昼食も兼ねてレストランのテーブル席に座った４人。表面上は平然としている悠元に対し、光宣は少し疲れていた。こういう経験自体が初めてなだけに疲れてしまうのも無理ないだろう。
「ゆ、悠元さんは何で平気なんですか？」
「他の女子に散々付き合わされたからな。『平気』というより『諦めた』という方が正解だが」
「な、なるほど……」
　他の婚約者を例に挙げると、深雪、雫、セリアはアリサと同じような行動を取り、姫梨と夕歌は試着室で見せるのを恥ずかしがる（寧ろこれが普通だと思う）。沓子、愛梨、茉莉花、そして泉美に関してはまだ未経験なので述べることが出来ない。
　専属使用人の部分で行くと、深夜と怜美は試着室に連れ込んだ挙句押し倒されようと誘惑してくる（何とか言いくるめて、帰った後で埋め合わせしている）。水波がこうならないことを切に望む次第だ。
　すると、理璃はここで徐に手首に身に付けたＣＡＤを操作（ＦＬＴで開発された思考操作型ＣＡＤを介する形だが）し、遮音フィールドを展開した。その確認をしたところで理璃が真剣な表情を浮かべて尋ねてきた。
「神楽坂先輩。その、アリサさんのことで聞きたいことがありまして」
「どうしたんだ？」
「……アリサさんから十文字家の魔法資質に酷似した資質を持っているように感じたのです。何と言いますか、その、私は魔法師の皆さんのサイオンの流れが見えるので」
　これにはアリサだけでなく光宣も驚きを隠せなかった。理璃は十文字家の中でも魔法資質で言えば現当主の長男である克人ですら超えている。流石に実戦経験の差で克人には勝てないが、理璃も経験を積めばそう遠くない未来に克人を超えるだろう。

その理璃がアリサの体内にあるサイオンの流れを感じて、十文字家に見られる〝何か〟を感じ取ったのだろう。なお、光宣や悠元の場合だと濃過ぎて見えないらしい。理璃の疑問を下手に十文字家の人間に知られても困るため、悠元は一息吐いてからアリサを見やると、アリサは「悠元に任せる」といった感じで頷いたので、悠元はそれを確認した上で光宣と理璃に視線を向けた。
「……これから話すことは決して他言無用だ。それは絶対守って欲しい。何せ、理璃の指摘はある意味正しいからな」
「え？　どういうことですか？」
「……アリサの父親は十文字家現当主・十文字和樹。アリサが保有している技術はこちらで何とか対処したが、血縁までは変えられんからな」
「隠し子、ということですか……」
悠元の言い放った言葉にアリサは俯いており、光宣はまさか十文字家の当主が隠し子を作っていたことが驚きだった。すると、理璃は何かを思い出したように頭を抱えていたことに光宣が気付いて問いかけた。
「あ、あの日記の文言はそういう意味だったの……」
「理璃さん、何か知ってるんですか？」
「えとね、私の両親が春に亡くなったんだけど、その遺品整理をしていた時に母の日記が出てきたの」
理璃はマメな性格の母が日記を付けていたこと自体、別に驚くことでもなかった。ただ、母がどんな思いで過ごしていたのかが気になって開いた1ページ目の内容があまりにも衝撃的すぎた。
何せ、日記の始まりが約14年前。理璃が生まれて1歳となった折につけ始めようとした日記（タイトルに「理璃の成長日記」と付けており、理璃の成長を綴るもの）だというのに、そこには理璃の母――十文字和樹の妹が兄に対しての怒りをぶつけていたのだ。
――あのバカ兄貴！　ダリヤさんがいなくなったからってしょげてんじゃないわよ！
――詳しいことは何も話さないけど、大方兄貴がダリヤさんを身

籠らせたから、ダリヤさんが大人しく身を引いたんでしょ……とか言ったけど、兄貴は『そんなことはない……多分』と自信なさげに言っていた。その時点で心当たりあるってことでしょうが！

――――今すぐダリヤさんを追っかけてきちんと話し合え！　って言ったけど、兄貴は動こうともしなかった。慶子さんと奏姫（かなめ）さんにどう説明したらいいのよ……あのバカ兄貴。

――――って、理璃の成長の日記に書いちゃった……これも自分への戒めだと思って、残しておこうかしら。本当はバカ兄貴が戒めるべきことなのに、何で私も巻き込まれてるのかしら。

「……その、何と言うか」

「……ダリヤという名前、うちの母の名前です」

「そして、現在の十文字殿の妻である慶子さんに、もう一人の女性は俺の爺さんの奥さん、俺の母方の祖母だな。元気になった時には亡くなっていて、会ったことはないんだが」

理璃の母は兄が慶子とダリヤの二股をかけていたことをすぐに悟り、散々「十文字家の為を本気で思うのなら、ダリヤさんと別れろ。でなかったら十文字家当主の座を降りろ」と言っていた、と日記を読んだ理璃はそう強く感じたらしい（母の遺品の中でこのことに触れていたのはこの日記の1ページだけだった）。

「なんでこんなことになるんですか……」と盛大にテーブルに突っ伏した理璃に対し、宥めている光宣、少し悲しげな表情を浮かべて悠元に凭れ掛かるアリサ、そして悠元はそれを支えながらアリサの頭を撫でた。

その状況証拠だけでアリサが十文字家の隠し子だという重大な事実を知り、藪蛇どころじゃなかったと泣きたくなっていた理璃の姿を見て、それだけ大事な事なのだと光宣も察してしまった。正直なところ、俺だって泣きたい。何で他家の隠し子の問題を自分が解決しなければならないのだ、と。

「ともかく、このことは光宣と理璃ちゃんの胸の内にしまっておいてくれ」

「それは勿論です。というか、絶対に言えません。竜樹と和美が確実

に反抗期を迎えることになりますし、兄さんに嫁ぐ予定の美嘉さんの気苦労が大変なことになります」
「……え？　確か、悠元さんのお姉さんでしたか？」
「ああ。兄弟姉妹の婚約とかの話は既に他人事みたいなものだからな」
　美嘉が克人に嫁ぎ、光宣と理璃が婚約することによって三矢・九島・十文字のラインが構築されることになる。尤も、光宣は壬生家に養子として出ることになるため、正確には三矢・壬生・十文字にプラスして桐原が間接的に親戚関係となる（聞いた話だと、桐原の父親と紗耶香の父親が知り合いらしく、双方共に前向きである）。
　更に付け加えるなら、自分の存在も含めれば一昨年春の『ブランシュ』事件関係者が繋がることにもなるというオマケつきだ……別に狙ったつもりもないが。
　ともあれ、この話題は早々に打ち切ってダブルデートと言う形でタワーの買い物を楽しんだのだった。九島の家を出ても別の意味で問題に遭遇する意味では、光宣は何かしら〝持っている〟のだろうと思う。

天体観測しようぜ、お前お星さまな！

正月の三が日も無事に終わったので、悠元は達也や深雪、水波と共に司波家へ戻ってきていた。今までの家事当番とかが変わるわけではなかったが、これを期にということで水波を自身の弟子として迎えることにした。最低でも護身術を学ぶ意味合いにおいて理に適っている、と判断した形だ。

深雪のガーディアンについては、達也が四葉家の次期当主に指名されたことで空席となったところに水波が入って正式に深雪のガーディアンとして就任し、加えて悠元の専属使用人兼愛人という三足の草鞋を履く有様になっていた。

なお、元々悠元の夜のルーティン自体に余裕があったため、水波には空いている1日を宛がうことになった。水波は最初固辞したがっていたが、深雪の無言の威圧に圧し負ける形で受け入れた。

しかも、深夜や怜美といった愛人メンバーの仕込みで、明らかに誘っているとしか思えないスケスケのネグリジェやセクシーな下着を身に付けて部屋に来るため、結局は手を出してしまっている。それでも最終防衛ラインの死守はしているが。

自分に好意を真剣に向けられて、更には誘惑してくるのだ……笑いたきゃ笑えよ、野菜王子（ベジータ）。言うまでもないが、達也経由の約束によって深雪も積極的に迫ってくるため、大人しく受け入れてしまっている。何度も言っていることだが、修羅場になって殺傷事にならないだけありがたい、と納得するしかなかった。

悠元が防衛省で会談していた頃、達也と深雪は改めて九重寺を訪れていた。その際に東道青波と対面したらしく、達也は静かに頭を下げると、青波も軽く会釈をした上で境内を後にしたらしい。

八雲からは2人に関する〝確認事項〟――――達也と深雪の出生に関すること――――を聞かれたものの、別れ際に八雲は「明日からビシバシ扱くから、覚悟するように」と言われ、体術を学ぶことは継続されるとのこと。

達也は四葉の人間だと名乗ったことで関係が解消されることも覚

悟していただろうが、この世界の八雲は『九頭龍』の長。そのことを八雲から名乗ることはないかもしれないが、神楽坂家と四葉家の関係からすれば寧ろ切れない縁である、と八雲自身も認識している。
なお、軽運動部（新陰流剣武術）に関する条件もいまだ健在で、その条件は「八雲の幻術を全て見破って、一度も倒されることなく八雲を倒す」らしい。それを律儀に守っている達也も流石の胆力と言わざるを得ない。
そのことはさておき、悠元と達也は深雪と水波を家に留守番させた上で旧茨城県土浦市にある国防陸軍霞ヶ浦基地――第１０１旅団基地の独立魔装大隊本部に出向いていた。
元々特務士官である達也はともかく、悠元は年明けから国防陸軍総司令部の非常勤職へと変更となったため、独立魔装大隊との関係は〝陸軍総司令部からの出向〟へと変更された。
陸軍兵器開発部に所属していたこともそうだが、達也専用ＣＡＤ『サード・アイ・エクリプス』を製作した実績は国防軍でみても世界屈指の魔工技師としての評価を確立している。加えて大隊内で設計された魔法装備に悠元の手が入っていないものは存在せず、彼の存在がこの国の魔法装備の発展を握っているような状態となっている。
尤も、軍の依頼で解析を頼まれた聖遺物（レリック）関連の本当の解析データは世の中に出すだけでも戦争沙汰に発展しかねない物ばかりしかなかったため、他の解析担当の結果に倣う形で誤魔化した。
「考えてみれば、こうやって二人同時に出向くのは初めてだな」
「言われてみれば確かに。まあ、各々立場は異なるから仕方がないけど」
入場はＩＤカードとバイオメトリクス認証で難なく入った。達也は平服（スーツ）姿で、悠元も『神将会』で着ているスーツ姿だった。今回は訓練でも魔法装備の依頼でもなく、新年の挨拶の為の来訪だった。
すると、本部の玄関に見知った顔――響子がいるのを見つけて挨拶を交わす。
「あけましておめでとう、大黒特尉。そして、上条特務中将〝閣下〟」

「おめでとうございます、藤林中尉」
「おめでとうございます、中尉。しかし、いきなり閣下呼びはどうかと思いますが」
　スーツ姿の人間に敬礼をすることも違和感を覚えるだろうが、この中では悠元の階級が特務職とはいえ最も高いため、響子が「閣下」と呼称を付けたことに悠元は苦言を呈するように述べると、響子は笑みを零していた。
「ふふ、ごめんなさい。でも、こればかりは仕方が無いと諦めてください」
「はあ、分かりました。風間中佐にご挨拶したいのですが」
「ええ、では案内いたします」
　この後の風間との挨拶でも同じやり取りが繰り返されることを予見してなのか、悠元は深い溜息を吐いた。このまま突っ立っているわけにもいかず、藤林の後に続く形で中に入った。
　隊長用の執務室には1人の気配しか認められなかった。響子がノックをすると風間の声が中から返ってきたので中に入る。達也だけならば風間も書類に目を通していただろうが、既に応接の為の準備が整えられていて、風間はデスクから立ち上がって敬礼をした。その対象は言うまでもなく悠元に向けられたものであった。
「これは上条特務中将閣下、新年のお慶びを申し上げます。更に、この度の陸軍総司令部へのご栄転、誠におめでとうございます」
「風間中佐殿、ご丁寧な新年の挨拶、大変痛み入ります。この度のご昇進、おめでとうございます」
「ハッ、ありがとうございます」
　あくまでも儀礼的なものだが、年下の悠元に対して年上の風間が丁寧な言葉遣いをするという異様な光景に対し、敬礼をして暫く黙って見つめていた達也がふと響子を見やると、彼女は声を殺して笑っていた。これにはお互いに挨拶を交わしていた悠元と風間もそろって肩を竦めた。
「……あの、藤林中尉。何で笑うんですか？」
「だ、だって、達也君と同い年の悠元君に中佐が丁寧な言葉を使うだな

んて光景、そうそう拝めないもの」
「はぁ……藤林、2人にお茶を出してやってくれ。大黒特尉も、あけましておめでとう」
「はっ。風間中佐、新年のお慶びを申し上げます」
　達也は早々に話を切り上げる意味で敬礼をしつつ短く答えただけに止めた。風間も達也の意図を察しつつ、着席を促したので悠元と達也は並ぶ形でソファに座った。
「それで、今日はどうした。依頼や訓練はなかったと記憶していたが」
「隊長を始め、幹部の皆さんが昇進なさったのに知らぬ顔は出来ませんので」
「右に同じくです。まあ、皆さんの昇進が遅れた分の皺寄せが自分に来た感は否めませんが」
　悠元の言葉に対し、響子のみならず風間も「それはご尤も」と言わんばかりの表情を浮かべていた。本来なら、中尉相当官から中将の階級を得るまでに普通なら30年程度は掛かってしまうからだ。書面上では20歳代（国防軍の規則上、非常時を除いて17歳未満の任官は認められていない）とはいえ、それをたった16歳の人間が成していることは正直自分で言うのもなんだが「異常」という他ない。
「悠元の言い分は否定できないな。尤も、自分の場合は給料もほとんど上がらないがね。同期から見た出世順も下から数えた方が早いぐらいだからな」
　風間は過去の大越戦争（だいえつせんそう）で活躍した実績から疎まれて昇進を見送られ続けていたが、周囲の声に耐えきれなくなったことから今回の昇進へ繋がった。その背景には昇進が塩漬け状態となっていた部下たちのことも含めてのものだった。
　だが、悠元の場合は沖縄防衛戦、佐渡侵攻、横浜事変に加えて先日の国防陸軍宇治第二補給基地で〝洗脳されていた兵士の鎮圧〟と言う名目で続けざまに昇進した。言うなれば「戦争ならびに戦争に準ずる軍事行動で多大なる軍功を挙げたと認識された」ということになる。
　とはいえ、ここまで急激に伸びた悠元の地位の影響が、塩漬けにさ

れていた独立魔装大隊の昇進にまで飛び火した可能性も捨てきれないわけだが。
「風間中佐、独立魔装大隊の編成に変更はありますか？」
「一つあるとすれば、悠元――――上条特尉は陸軍総司令部から出向の技術士官として〝非戦闘要員〟という位置付けとなった。陸軍総司令官直属の特務参謀と特尉の戦略級魔法の最終許可を担う関係上、前線に出すのは危険だと統合軍令部が判断した次第だ」
この処遇は一昨年春の防衛大入学式で行われたデモンストレーション戦闘への召喚命令が大きく尾を引いている。この決定に対して佐伯は不服を申し立てたが、大友参謀長から蘇我大将および統合軍令部、ひいては防衛大臣および内閣総理大臣による決定事項ということを伝えられ、大人しく引き下がる他なかった。
悠元の持つ戦略級魔法の許可自体は悠元自身が最終決定権を有し、達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』についても悠元が最終解除許可を出すこととなり、達也もそれには同意している。
ようするに、いくら国家非公認の戦略級魔法師とはいえ、独立魔装大隊および第１０１旅団としてその力を我が物のように揮うことは認めない、とする統合軍令部の最終決定であった。
「要は留守番役みたいなものですが」
「……本部で控えていようが、前線に出ようが、同じだけの功績を挙げることのできる悠元に首輪など着けられないと判断してのものだろう」
そして悠元が特務中将へ昇進したことで、九島烈ですら入れなかった統合軍令部直属の非常任機関、統合幕僚会議における情報担当に関わる役職の椅子を得る形になってしまった（悠元の情報は陸軍だけでなく海軍・空軍にとっても作戦を円滑に進める上で非常に役立ち、本来陸軍とは仲が良くない彼らも悠元を認めていた）。
派閥や勢力争いに一切興味を持たない悠元だからこそ、剛三の孫という事実も相まって、国防軍全体において注目の的とされてしまっている。当の本人からすれば「面倒だから関わりたくもない」と一蹴したくなる。

「首輪なんて着けようとする輩がいたら、その頭をボールの如く蹴り飛ばしてやるだけです」
「悠元君がやったら、宇宙まで蹴り飛ばしそうなんだけれど」
「爺さんのように宇宙まで蹴り飛ばしたことはないですが、前にニューヨークで遭遇した人間主義のテロリストを全力の魔法込みで蹴り飛ばしたら、大西洋を横断しちゃってフランスの海岸に到達していたことはありましたね。辛うじて生きていたようですが」
　あの時はいきなり銃を突き付けられたので、反射的に蹴り飛ばしたらまるで弾丸ライナーの如く地平線の向こうへ消えていったのだ。その3日後、フランスに立ち寄った際に地元の警察から国際指名手配されていたテロリストの逮捕協力の感謝状を貰う羽目になった（ニューヨークでの目撃証言の後、フランス西海岸の砂浜に出来ていた人型の穴から発見されたらしい）。
　俺は悪くない。銃を突き付けて「邪教の徒よ、死ぬがいい！」と襲ってきた奴が悪い。ちなみに、剛三によって蹴り飛ばされたテロリストの連中は綺麗にお星さまになった……正確に言えば、大気圏まで到達して骨すら残らずに燃え尽きた、というのが妥当な表現だが。祖父に比べたら、相手が生きているだけまだ有情だと思う。
「……風間中佐」
「……特尉、これが剛三殿とその愛弟子の到達点だ」
　達也と風間が人を人外扱いするようなことを言っているが、非魔法師からすれば魔法師も十分〝人外〟扱いされかねない事象だと思う。その筆頭格だと周囲から言われている自分が言うのもどうかと思うが。
「話を戻すが、達也。君が四葉家の次期当主となった以上、今まで通りの協力は得られなくなると覚悟している」
「その辺は母上と話し合いましたが、今のところは利害が対立することがない以上、従来通りに契約は続けると回答を貰っています」
　独立魔装大隊に達也と悠元が所属しているのは風間や真田との個人的なコネクションによる部分が大きい。風間としては、達也が四葉家の次期当主となり、悠元は神楽坂家当主となったことで今までの協

力が得られるかを危惧しつつあった。
　達也はそれに対して、真夜と話し合ったことを明かしつつ、利害の対立が起きていない現状では契約の破棄をするに至らず、協力体制は継続すると述べた。
「そうか……悠元の方はどうなんだ？」
「そうですね。まあ、達也の戦略級魔法の最終トリガーを自分が担っているのは些か疑問ですが、自分も風間中佐や真田少佐と現状において対立するような要素は抱えておりませんので」
　風間から昨年の九校戦で頼まれごとはしたが、元々やるべきだったことなので問題ないし、真田とも良好な関係は築けている。独立魔装大隊の魔法武装も当分は自分が手を付けるべき領域の話ではないことも確認している。
　なお、『セラフィム』と『ラグナロク』に関しては天神魔法の絡みもあるために当分は秘匿したままだ。そうでなくとも、ＦＬＴには塩漬け状態のＣＡＤの試作機が数多くあり、今はこれを段階的に整理している最中だ。
「そうおかしな話でもあるまい。達也の魔法を簡単に使わせる方が問題を起こしかねん。下手をすれば、四葉の『触れてはならない者たち』を利用する輩も出てくるだろうからな」
「それは理解していますよ……どうせＵＳＮＡを含めた諸外国が動く可能性もありますし」
　『灼熱と極光のハロウィン』の後、ＵＳＮＡが最高戦力であるアンジー・シリウス――「スターズ」まで動かして戦略級魔法を無効化しようと目論んだのだ。ヴァージニア・バランス大佐と約束は取り付けているが、彼女も一介の軍人である以上は国の意向を受けて行動せねばならないことがあるのは重々承知の上。
「佐伯閣下の分析では、１年以内に中規模の軍事衝突が東アジア地域で起きるとみているが、悠元の見解はどう見ている？」
「まずＵＳＮＡ方面ですが、達也が九重先生から聞いただけでも魔法師社会の広い範囲に達也と深雪が四葉家の人間だと周知されました。中佐も当然ご存知ですよね？」

「ああ。人の噂は広まるのが早いからな。ましてやあの四葉家となれば、な……昨年冬のように大規模の調査部隊を送り込んでくる可能性があるとみているのか？」

元々、達也はＵＳＮＡで『グレート・ボム』と呼称された戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』で大亜連合の鎮海軍港を消滅させたことで、その魔法がＵＳＮＡ本国に向けられることを恐れたＵＳＮＡ軍統合参謀本部が中心となって調査および戦略級魔法の無効化任務が行われたことはとうに知っているし、悠元も容疑者の1人として襲われた身だ。

たった３０人（プラス剛三で３１人）で一つの国を滅ぼした四葉の一族。その一族に戦略級魔法師の疑いを持たれた達也が名を連ねた事実は世界各国の諜報機関も把握している可能性が高く、今度は調査部隊ではなく〝暗殺部隊〟を送り込んでくる可能性が高い。

「戦略級魔法師だと疑った人間が大漢を滅ぼした一族の人間だと知った以上、今度は達也を殺すための部隊を送り込んでくるでしょうね。ただ、アンジー・シリウスを退けた事実はごく一部の人間だけに知らされている状態なので、躍起になってスターズの全軍を送り込んでくるような真似をしないとも限りません……その場合は自分が片を付けますが」

軍艦だろうが潜水艦だろうが、果ては人工衛星だろうが全てシステムを掌握すれば無用の長物と化す。ＵＳＮＡが自前で『エシェロンⅢ』を組むぐらいなのだから当然セキュリティも世界トップクラスだろうが、その軍の機密情報を『フリズスキャルヴ』で抜かれていたら本当に〝立つ瀬がない〟と思う。

非原子力動力でありながらも原子力に匹敵する航行能力を得たＵＳＮＡ軍で４年前に就航した空母「エンタープライズ」の秘密を全世界に暴露して、世論で国内を混乱させて国防総省を過密労働状態にし、命令を受けるスターズの行動を立ち行かなくさせるのもありだが、これも最終手段の一つだろう。

騒いでいたら心臓がもたない

ＵＳＮＡ方面は四葉を目の敵にしているエドワード・クラークの存在がある。一応身辺を洗い出してみたが、彼自身が四葉家によって何かしらの被害を受けたわけではない。単に、クラーク自身の野心――――情報によって世界の覇権を握りたいという欲からくるものだ。

『エシェロンⅢ』にはクラーク以外にも複数のシステム担当者が関わっており、彼の動きは国防総省の幹部クラスにも当然伝わっている。その動きを政府は国家の利に反するものではない、と見逃されていると思っていいだろう。

だが、疑問がある。

クラーク親子――――父親のエドワード・クラークはともかく、息子であり『七賢人』を名乗るレイモンド・クラークは魔法が使える人間だということは留学していた雫から聞き及んだ。ただでさえ国外への移動が厳しい魔法師を息子に持っていて、それを伴って簡単に来日できる方が疑わしい。

表向きは政府機関で働く情報システムの専門家であるクラークが、レイモンドの出国を簡単に許可させられるだけの権限を持ち合わせているとすれば、彼には軍に対する権限も与えられている可能性がある。その気になれば匿名メールで真実と嘘を織り交ぜて軍を動かすように仕向けることも可能だろう。

熱心な愛国者という風に海外の記事で取り上げられてはいるが、裏でやっていることは日本と大亜連合の力を削ごうとした周公瑾とどんぐりの背比べが出来るレベルだと思う。尤も、周公瑾からすればクラークと比較されること自体「非常に不服です」と生きていたらそう述べていたかもしれない。

そもそも、他国の『十三使徒』であるウィリアム・マクロードやイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフを呼び出すどころか、その護衛にアンジー・シリウス（リーナ）まで駆り出し、更には空母『エンタープライズ』を大西洋に派遣するように出来るだけでなく、さもリーナの上官――――軍人のように振舞うクラークは一体何様のつも

りなのだろう。
本来、軍のシギント（通信、電磁波、信号等の、主として傍受を利用した諜報活動）システムの管理者の一人に過ぎないクラーク……物語上において〝悪役〟が必要とはいえ、国家・国防の具申・命令・秘匿の権利を行使できる立場にないはずだ。これが許されてしまうと、軍事・外交アドバイザーの立場にある人間を著しく害するに等しい。
情報を握っているから自分は偉いんだ、とクラークは自分に酔っているのかもしれないが、自身が身を置く国に一番喧嘩を売っているのは恐らく彼なのかもしれない。
閑話休題。
「新ソ連方面ですが、ベゾブラゾフと思しき人物がモスクワにいるそうで。ウラジオストクの軍港再建が完了するのは早くても今年の5月なので、当分は様子見ですね」
ウラジオストクの軍港は悠元の『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』の余波で消滅したため、新ソ連軍はかなりの数の軍人と物資を投入して急ピッチで再建にあたっていた。そのために旧シベリア鉄道を態々復活させたほどで、不凍港であるウラジオストクの軍港を使用不能の状態のまま放置するのはＵＳＮＡや大亜連合への牽制が出来なくなると踏んでの物だろう。
「ベゾブラゾフが極東に詰めてきていないとはな」
「それなんですが、どうやら旧ＥＵ東側と北欧地域で反魔法主義の運動が活発化しているようで、国境を接している新ソ連側にもその余波が生じて、各地で反政府デモや暴動が起きているようです」
これは昨春、悠元が大々的なメディア買収工作を仕掛けて日本の反魔法主義報道を一気に沈静化させた影響が出ている。ＵＳＮＡにいる人間主義者は日本の神坂グループがＵＳＮＡ大手のメディアを買収したことによって人間主義勢力の衰退という危機感を抱き、勢力拡大を目論んで新ソ連と国境を接する東欧・北欧を含めた欧州に反魔法主義の風を吹き込んだ結果生じたものだ。
さらに、新ソ連国内の反政府勢力が何処かから膨大な量の武器や物資提供を受けたらしく、各地で暴動やテロが頻発しているらしい。正

規軍が鎮圧しようと動くと、それを察知して疾風の如く撤退する有様とのこと。
新ソ連の政府は止むを得ずベゾブラゾフをモスクワ（厳密にはクレムリン宮殿）の護りとして留め置いているようだが、彼の戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』はとても対人戦闘で使える代物ではない。明らかに対拠点攻撃用の魔法でしかないのだ。
反政府勢力もそれを把握しているが如く少数で動いている上、実戦クラスの魔法師も味方につけているとのこと。新ソ連国内は完全に鼬ごっこの様相を呈していた。
「……悠元が関与しているわけではないのだな？」
「当り前です。自分がやるんだったら、直接クレムリン宮殿に乗り込んで国家元首を南極送りにするだけです」
「とても冗談に聞こえない辺りが悠元らしいが……大亜連合方面はどうだ？」
「それなんですが、陳祥山（チェンシャンシェン）と呂剛虎（ルゥガンフゥ）を生かして突き返したとはいえ、火種は消えていないも同じ。あの国というか、この国と大陸の因縁は世紀単位でのものですから、一昨年秋の講和条約に不服を持つ人間が講和状態を壊そうと工作を仕掛けてくる可能性は高いでしょう」
原作における〝南海騒擾編（そうじょう）〟で実際に動いて来る兆しは見えているため、顧傑の一件を片付けても東アジアの情勢は平穏の二文字を許してくれないようだ。そうでなくとも、彼我の二国間には様々な因縁が積み重なっていて、その中には四葉の復讐劇も含まれている。
大亜連合からすれば、大漢の魔法技術による優位を取り除いてくれたことに対する感謝と同時に、現代魔法の技術を知る術が奪われたことに対する恨みも生じていた。その結果が5年前の沖縄防衛戦であり、一昨年の横浜事変ともいえよう。
その中核を担っていた二人をフルボッコにした挙句、生かしたまま大亜連合に追放した形だが、これでまたこの国を攻めようものならば、その時は彼らの矛先を新ソ連へ向けざるを得ない状態にするまでのことだ。彼らとて正面作戦という愚策を取ることは……首脳陣が余程の馬鹿か愚か者でない限り有り得ないだろう。

それでも警戒はしておくつもりだが。
「……聞いているだけで耳の痛い話が飛んでくるものだな」
「別に嫌味は含まれていませんよ?」
「それが分かっているからこそ、国防軍の軍人として身を引き締めなければならない、と痛感しただけだ。上条閣下、大黒特尉も期待している」
そう言って、風間は悠元や達也との会話を締めくくった。
そして、響子はそのまま自身が使っている部屋に案内した。そこは本来悠元――――上条達三特尉に宛がわれた防諜性の高い個人用の部屋だが、悠元自身使う気もなかったので軍務上の機密事項が多い響子に貸している。なので、悠元の私物などは一切なく、響子の私物が結構置かれている。デスクの上には書類があり、かなり多忙であると見て取れた。
真田と柳は忙しく、山中は不在だったので挨拶をしようか悩んでいた達也を見て響子が二人を誘った。その際に「ご案内いたします、閣下」と茶目っ気一杯に言い放ち、それを見た悠元が響子にジト目を向けるほどだった。
「それにしても、達也君もそうだけれど、悠元君が当主になったことは実家の父も驚いていたわ」
「やはり、十代で当主襲名は今の世からすると珍しいですか」
「それもあるけどね。何せ千姫さんの実力は古式の術者で知らぬ人間なんていないに等しいもの」
天神魔法において闇属性を好んで使っていた千姫は、年齢からかけ離れた美貌も相まって『黒夜の孔雀(アルティミシア)』という異名を持っていた。尤も、当人からしたら「真っ暗な夜で人の顔なんて判別できないじゃありませんか。私は顔なしとでもいいたいのかしら」とまるで子供のように拗ねていた。
その彼女が長い事神楽坂家の当主を務めていたのは、彼女には伊勢の姓を名乗る息子（伊勢佑作）と宮本家・高槻家に嫁いだ女子二人がいるが、そのいずれもが千姫の眼鏡に適う実力を有していなかったからだ。神楽坂家の究極魔法『月読(ツクヨミ)』……この魔法を継げるだけの資質

を千姫が求めた結果、自身の姉の孫を当てにした。それが悠元であった。
「自分は上泉だけでなく神楽坂の血縁者なので、母上も妥当であると判断したのでしょう……事実として4分の1しか継いでいませんが」
「成程ね。達也君はどうなの？」
「どうと言われましても、自分もなるようになってしまった感が強いので」
　真夜からすれば、実子である達也に継がせたいと思うのが筋だし、魔法力の観点から言っても申し分なかった。ただ、力を持つことを危ぶんだ分家当主らが達也の排除を主張した。仮にそうしたところで間違いなく千姫が介入した可能性が高く、最悪神楽坂の部下という形で十師族の一角を担い続けるだけの存在に成り下がっていたであろう。
「そういえば、響子さんが達也の婚約者として申し込んだと光宣から聞きましたが」
「お祖父様が話したのね……ええ、そうね。今回の婚約者募集で拍車が掛かったところに、お祖父様が提案してきたものだから。正直、早婚が望まれる魔法師社会では遅すぎるぐらいだけど」
「まあ、藤林中尉なら母上も良く知っていますし、俺の魔法を知っているアドバンテージがありますから、間違いなく候補に入るでしょう」
　それに、バレンタインでは達也に本命のチョコを渡しているあたり、響子もいい加減婚約者を失った悲しみと向き合う時が来た、ということなのだろう。それに、情報関連の技術に精通しているという強みは大きいと思われる。
「その、達也君から見て私は十分魅力的に見えるかしら？」
「贔屓目でなくともそう見えると思っていますよ」
「……お邪魔なら席を外そうか？」
「それは止めてくれ。まだ俺は誰とも関係を持っていないんだから」
　達也に向けられる響子の熱っぽい視線を察し、悠元が大人しく去ろうとしたところを達也が引き留めるように呟いた。その言葉だけで悠元が深雪と関係を持っているということを響子は察して問いかけ

てきた。
「あら、悠元君はもう深雪さんに手を出していたのね」
「手を出したというか、そうならざるを得ない状況に家ぐるみで囲われた、と言うべきでしょうね。それを甘んじて受け入れたのは事実ですから、どう言われても否定しません」
「……へえ」
「止めてください、中尉。母上に知られたら『孫が見たいのよね』と言い出して本気で子作りをするように画策しかねないので」
「ふふ、冗談よ」
どこかで聞いていてもおかしくは無いと思いつつ、達也は肩を竦める様な素振りを見せつつ窘めると、これには響子もからかい過ぎたと思い、冗談っぽく聞こえるように返した。その言葉のどこまで冗談なのかと言われると……精々1割ぐらいだろうと悠元は推察した。
そう断言めいたことが言えるのは、響子の達也に向けている視線が深夜や怜美の自分に向けてくる熱っぽい視線に酷似していたからだ。
達也の言う通り、真夜がそれを知ったら達也にあの手この手を駆使して子作りをするよう迫るのは明白だろう……婚前交渉に含まれる行為だが、真夜なら深夜や葉山、それに剛三や千姫まで巻き込むのは目に見えているだけに、これには既に婚約者と関係を持っている悠元も思わず肩を竦めたのだった。
◇　◇　◇
西暦２０９７年1月8日、新学期初日。悠元たち４人はいつもより３０分早く登校していた。
前学期最終日にセレモニー的なものが無かったように、新学期初日に何かしらのセレモニーがあるわけではない。この理由は学校側からの呼び出しで、主に達也と深雪の届け出に関することで事情を聞きたい、という旨の連絡が前日にあった。
尤も、原作と異なり達也と深雪に関する説明は四葉家だけでなく上泉家と神楽坂家からも行うこととなり、護人の人間として現当主となった悠元も同行することになっていた。
学校側としては、事情聴取と学校の虚偽の記載を届け出ていたこと

に関する叱責、ついでに言えば悠元が司波家に居候している事実は学校側も当然把握しているため、その辺の節度を弁えろ、とでも言いたいのだろう。

今更それを言うか、と内心で吐き捨てつつも校長室では教頭の八百坂(やおさか)と、重厚なデスクを挟んで向こう側にいる校長の百山東(ももやまあずま)がいた。元々メールは達也と深雪の二人にしか届けられていなかったため、水波は自分の教室にいて、悠元は隠形を展開して部屋の隅からその様子を見守っていた。

原作だと出生届の誤記という風にされていたが、四葉家の異名を建前として「本当の母である真夜がかつて自身を襲った悲劇が息子にも及ぶことを危惧し、代理出産した深夜が達也を深夜の子として匿うために司波家の人間として届け出た」という筋書きを取る形とした。

達也の命が狙われたのは本当のことだし、達也を守るために四葉の姓を名乗らせないための合理的な理由として成立する。大体、それを言ったら中学校まで「長野佑都」として通っていた自分はどうなるのか、という話だし、古式魔法師だけでなく現代魔法師にも止むを得ない事情で名を変えたりしている人間は少なくない。

魔法師のみならず、人間というのは多かれ少なかれ秘密を抱えて生きている。そのことを一々詮索する方が失礼というものだろう。

百山は達也の物怖じしない態度に対して僅かに眉を顰めた。それを感じ取った八百坂はオロオロしつつも質疑応答を続ける。この程度のことなど達也からすればすんなりと流せる程度のもので、必要な質疑を終えた八百坂が百山に不備や違和感は見られないと報告。

それを聞き終えた上で百山が声を発する。

「事情は分かった。確かに、君たちに責任はない。罪無き者を罰するなど教育者としてあってはならんことだ。ただ、今回の件は学籍取り消し処分にも繋がる重大な過ちと成り得た可能性があることだ。よって、ご父兄にも厳重に抗議させていただく」

「分かりました」

そもそも、達也は自身の『精霊の眼(エレメンタル・サイト)』で悟っていたからともかく、兄妹が実が従兄妹でしたなんて事象は前世の自分とセリアに思いっ

切り該当する。ＤＮＡ鑑定とかすれば分かるだろうが、そうでもない限りは親の言うことを信じることしかできない。
　血縁関係の真偽を当人たちに追及するのは甚だ〝筋違い〟というものであり、その辺の事情を二人の親である真夜や深夜に聞けば済む話で、当人たちにはその結果報告も含めての生徒指導をするのが筋なのではないか。
　つまるところ、彼らも四葉家の異名が恐ろしいのかも知れない。
「それから、君たちの家に神楽坂君が居候しているようだが、特に司波深雪君は彼の婚約者ということも聞いている。校内での節度を弁えるように。そして特殊な事情を鑑みて、同居は不問とする」
「ありがとうございます」
　そのあと、八百坂が念を押す様に二人に告げたのを見届けた上で、悠元は校内で殆ど使うことのない『鏡の扉（ミラーゲート）』で一度屋上に飛び、そこから2年Ａ組の教室に向かった。悠元が丁度Ａ組の教室に入ろうとしたところで深雪と出くわす形となった。
「悠元さん、教室にいたのではなかったのですか？」
「いや、流石にあの発表があった後だから、教室の雰囲気がどうにもな……ってなわけで、さっきまでぶらついてた」
「そうだったのですか」
　あそこまで隠形をフル回転させると達也ですら苦戦するらしく、八雲曰く「君に本気で隠れられたら、僕でも炙り出すのに1週間はかかりそうだよ」とのこと。忍術使いからそういう評価を貰えるのは嬉しいことだが、大体剛三絡みのせいという……自分が獲得した能力のせいもあるわけだが。
　教室に入ると、案の定深雪に視線が向くも、直ぐに逸らされていた。畏怖という感情もあるわけだが、同じクラスメイト同士の婚約ということもあり、現3年の五十里と花音のようになるのでは、と話題を盛り上げている生徒もいる。これで大体のことを把握できてしまうのも悲しいことだと思いつつ、雫とほのかに声を掛けた。
「おはよう、二人とも」
「おはよう、悠元に深雪」

「おはよう。えっと、その……」
「大丈夫よ、ほのか。これぐらいは覚悟していたもの」
ほのかが周囲の様子を悟った上で深雪を気遣うように声を掛けると、深雪はいつも通りの笑顔で返していた。深雪が悠元と婚約したことで、お互いの恋愛感情が衝突せずに気の許せる友人同士となったのが大きい。ただでさえ深雪とほのかは繊細な性格をしているだけに、フォローをするのは大変だからだ。
「分かっちゃいたけど、こんなんで動揺する方がおかしい」
「し、雫……」
「それはしゃーないと思うよ、ほのかさん」
「セリア、いつの間にいたのか」
「やっはろー、諸君」
何もなかったかのように明るく振舞うセリア。彼女からしたら（物理的な意味で）死活問題になり得るので、四葉家のことを聞いても「まあ、校内で見ても、達也はお姉ちゃんを倒したし、深雪もお姉ちゃんを圧倒したから妥当じゃない？」と答えていた。
達也の場合はラッキースケベを発動させての決着なので勝敗以前の問題だろうが。
「しかし、まるで見世物みたいに向けてくるのはどうなんだかな」
「その、申し訳ありません」
原作だと深雪が四葉家の人間だと知るのは慶春会より後であった。だが、悠元の存在によって慶春会より前に知ったことで友人たちの心の整理がついたのは非常に大きかった……自分よりはマシだという判断も添えられた上で。非常に解せなかった。
「深雪が謝る必要なんてない。気持ちは分からなくもないけど、それで付き合いを変える時点でその程度だったってことだし」
「……来て早々にえらくドライな場面に出くわしましたね。そして辛辣ですね、雫」
「一々騒いでいたら心臓がもたないから」
話し込んでいる所に姫梨もやってきて、クラスメイトが四葉の名で色々動揺していたり、悠元と深雪の婚約で盛り上がっている他の女子

たちを横目に、容赦ない言葉を発する雫に対して感想を述べるように呟いたのだった。

どう反応していいか分からない御身分

原作だと、達也と深雪が四葉の人間であり、加えて二人が婚約するということで周囲からはれ物に触れる様な状態になってしまっていた。レオやエリカはともかく、美月が委縮して幹比古が避けたがっていたのも分かる話だ。

だが、ここに悠元を含めて複数の原作にいなかった面々が加わり、更には第一高校で元々恋人関係として知られていた悠元と深雪が婚約した事情が生徒の間で伝わり、「腫れ物に触る」というよりは「身近にいたアイドル同士がようやく婚約した」様なものへと変化していた。

その変化の一端は2年E組の教室に入った達也のもとに平河千秋（ひらかわちあき）が近寄って尋ねてきたことだった。

「おはよう、司波君」

「おはよう、千秋（元々名字で呼んでいたのだが、同じ魔工科となったことに加えて千秋の姉である小春（こはる）のこともあって名前呼びになっている）」

「うん。そういえば、達也君の実家があの四葉って本当なの？　あ、ゴメン」

「気にしないでくれ。そういう言われ方をされるのは覚悟していたからな」

達也自身、実家である四葉家のことに関して割とドライな目線で見ていた部分は多かった。元々達也の素性を知りつつ真摯に対応してくれた人間はいたし、同世代の人間からも高い評価を貰っていた。

「その、お姉ちゃんも不安に思ってたし、婚約者募集のことも気に掛けていたから」

「そうか。今すぐ何かが変わるわけではないから、小春先輩にもそう伝えてくれるか？」

「うん……ちゃんと、お姉ちゃんも含めて責任を取らないと許さないから」

分家当主たちが自身に向けてくる敵意みたいなものは無論察して

いたが、深雪に向けられたものではない、と判断して綺麗に切り捨てていた。その辺は年末に貢から聞かされた達也の出生に関する事実に対して「センチメンタルな感情」と冷ややかに吐き捨てた。
　そんな事情もあって、あまりいい思い出がないから産みの親である深夜も四葉本家に戻らなかったのだろうと思う。その母親は現在、当主となった親友の専属使用人兼愛人という達也でも理解不能な立場になっているわけだが。
　まるでツンデレのテンプレート的なセリフを吐いた後、去っていく千秋ではあったが、同じ魔工科の女子に囲まれて質問攻めに遭っていた。それを見ながら近づいてきた燈也が声を掛けた。
「おはようございます、達也。それとも〝四葉〟達也さん、とお呼びすればいいですかね？」
「まだその名字は名乗らないぞ、燈也。大体、立場で言えば俺とお前は将来の十師族当主同士だ」
「痛いところを突きますね。まあ、事実なので仕方ないですが」
　奇しくも魔工科に十師族次期当主の二人がいるという形となり、燈也のこともあって話題が達也や深雪に集中するということを避けられていた。その意味で達也は燈也に感謝している。
「達也のところもそうですが、うちも婚約者募集をするということで、姉からデータが大量に送られてくるんですよ……ざっと１００人は超えていると聞きました」
「事情が事情なだけに、他人事とは思えないな」
　同じ十師族でも、四葉家は特に過去の異名もあって申し込もうとする件数がかなり多い、と真夜からのメールで知らされてはいるが、最終的な候補人数は達也ですら聞いていない。六塚家でそんなことになっているのであれば、古式魔法の大家とはいえ元十師族である悠元が当主となった神楽坂家の場合はもっと多いだろう……無論、達也とて他人事で済まないのは言うまでもない事だが。
「悠元の場合、彼の身内も相まって世界中から問い合わせを受けてそうですが」
「否定できる材料がないというのも驚きしかないな」

現に、悠元の婚約序列第六位であるセリアは九島家の縁者でありながら現ＵＳＮＡ大統領の孫娘の肩書を持ち、スターズ総隊長補佐の地位にあった元軍人〝セリア・ポラリス〟その人だ。
加えて、正月の時に会ったアリサの母親がロシア人ということもあり、加えて愛梨もフランス人とのハーフであることも知っている。ドイツ人のクォーターであるエリカとは悪友に近い幼馴染で、イギリス関係で言えば英美とも仲が良い。
正直、ここまで国際色豊かな交友関係はそうそう築けるものでもないだろう。
◇　◇　◇
原作だと二人きりにされてしまった達也と深雪だが、友人たちの理解力も相まって普通に食堂で昼食を食べることになったわけだが、周りが学食の中、悠元だけは手作りの弁当であった。そして、新学期最初に作ったのは……セリアだった。
「どうしたの、お兄ちゃん？　難しい顔して」
「いや、リーナの普段の様子を見てたから、正直不安しかなくてな」
「何故に!?」
少なくとも、前世でこうやって弁当を作ったりすることはなかったし、転生先が先なだけに不安しかなかった。何せ、恋愛感情で進歩がみられても、家事の方面で進歩がみられるのは別問題としか言いようがなかった。
まだお弁当箱の蓋は開けられていないが、今のところは嫌な予感などない。変な臭いも感じられない。なるようになるか、と諦めつつ蓋を開けると、今世の彼女からすれば似つかわしくない和食で彩られた弁当だった。
これには周囲の人間も驚きを隠せず、とりわけ達也が一番驚きを見せているような素振りが見られた。
「……これ、本当にセリアが作ったのか？」
「なんで達也がそんなこと言うのですか!?」
「冷凍食品、というわけでもなさそうですね」
「深雪まで!?」

学内でもかなりのポンコツ具合を披露しまくったリーナの双子の妹なだけに、司波兄妹の期待度は正直低かったのだろう。それと、結構自分をからかったりすることが多くて、その度にお仕置きを食らっている彼女がこんな弁当を作ったこと自体〝奇跡〟と言いたげだった。

ともあれ、目についた煮物に手を付けてみる。

「……美味いな。本当にリーナと血が繋がってるのか不思議に思いたくなる」

「お姉ちゃんが草葉の陰で打ちひしがれるから、やめてあげようよ」

「セリア、それリーナが死んでることになる」

「恋愛的な意味で敗北者じゃけえ……おうちっ!!」

雫の率直なツッコミを無視して実の姉を容赦なくネタにするセリアに容赦なくチョップを食らわせつつ、黙々と食べていく。量自体もそれなりにあり、味加減も絶妙だった。身贔屓を差し引いても割と高得点をあげられると思う。

「で、お味はいかがだったかな？」

「世辞抜きで美味かった。ただ、疑惑も浮かんだ」

「疑惑？」

「生まれた際にリーナの生活に関する学習能力をセリアが分捕った疑惑が浮かんだ」

「何故にホワット!?」

なお、その頃遠い場所で……自室で眠っていたリーナの瞼から涙が零れたのは……本人しか知らぬことだった。人間、誰しも知らずにいた方がいいことだってあるというものだ。

結局、この日以降から悠元の婚約者である深雪、雫、姫梨、そしてセリアの４人が代わる代わる悠元の昼食の弁当を作ることで決まった。なお、水波も深雪の命令によって参加することが決まっている。

泉美はというと、「悠元兄様にお出しできる領域に居りませんので一層精進いたします」と言って暫くは参加しないことが決定した。それに倣う形でほのかが達也の弁当を作ると言い出したのは当然の流れで起きえたことだった。

◇　◇　◇

今日の夕食は水波が当番となっているため、普段なら達也と深雪も各々の時間を過ごしているだろうが、今日の呼び出しのことも相まって今頃は四葉家当主への直通番号をコールして真夜との会話をしている頃だろう。

あの発表から1週間も経っていないが、結構な数の婚約申し込みが来ていることを千姫からのメールに添付されたリスト一覧で確認している最中だが、現代魔法の家だけでなく尻込みするであろうとみていた古式魔法の家からも来ており、更には海外の魔法使いの名家などからも打診が来ていた。

「もう、ツッコミどころが多すぎて、どう反応していいか分からねえよ」

悠元がそう述べたのは単純なことで、友好的に接したつもりなんてないところからも正式な手続きに基づいて来ていることだ。しかも、その中には大亜連合の「劉麗雷（りゅうれいらい）」に加え、フランス経由で「エフィア・メンサー」、更には小国クラスの王女の名とかもある。

ただでさえ婚約者が2桁に突入しているだけでも苦労が絶えないのに、無秩序に増やす気なんてない。しかも、先程名前を挙げた面子は悠元が剛三との世界旅行の時、実際に出会ったことのある人物たちだった。

劉麗雷に関しては、祖父にして［十三使徒］の劉雲徳（りゅううんとく）が是非にと勧めてきたことがあり、一応友人関係のラインで話はしたが、今回の婚約は大亜連合政府が根回しをしている。

正直、未来の［十三使徒］になり得る人間を送り込むとか正気の沙汰ではないが、陳祥山か呂剛虎あたりが日本との交戦を避けるべく主張した結果の打診かも知れない。

エフィア・メンサーはギニア西海岸出身の少女で、原作だと『アクティブ・エアーマイン』を大亜連合に使用したことで有名となった武装勢力に所属する魔法師だが、ニジェール・デルタ地域で剛三が腹いせ（夕食時に大亜連合軍の兵士による襲撃を受けて食べ損ねてしまったことが原因）に大亜連合軍を蹴散らしたことでその報奨金をフラン

ス政府から授与される事態となった折、そのお金全部を押し付けた相手だ（当時は武装勢力に所属しておらず、立ち寄った店で給仕をしていた）。

その後、エアメールでのやり取りを続けていたが、フランスに留学したという連絡の手紙を最後に所在が掴めなくなっていた（調べようと思えば調べられたが、面倒事になると思って放置した）が、今回の打診はフランス政府からのものだった……頭が痛くなりそうだ。

正直、今上天皇とか宮内庁辺りから内親王の降嫁を迫られてもおかしくないレベルだが、実を言うと、この問題は解決している……というよりは〝自然と解決できてしまった〟と言うべきだろう。

その要因は婚約序列第四位の沓子にある。彼女は四十九院家の次女にあたるわけだが、彼女の父親は親王が臣籍降下を受けて嫁いだ人物。しかも、神楽坂家の政策によって子沢山となった今上天皇の四男――皇太子の弟にあたるのだ。

同じく臣籍降下した千姫の父親は皇族にあたるが、親等による問題は余裕でクリアしている。なので、皇族が無理に悠元の嫁へ内親王を降嫁させる手間が省けた形だ。なお、その事実は沓子本人ですら知らなかったらしく、今頃は四十九院家で驚く暇もなくガチガチの教育を受けていることだろう。

（しかも、この二人に限って言えば原作において結構キーとなる人物だしな……）

劉麗雷は将輝が戦略級魔法『海爆（オーシャン・ブラスト）』を放つことになる遠因だし、エフィアは『アクティブ・エアーマイン』によって達也が伊豆で謹慎に近い状態へ追いやられた原因を作った人物だ。前者はともかくとして後者の現在の素性を探ると、どうやらフランス国籍を取得している上にフランス軍の軍籍を保有した軍人魔法師となっていた。

これ以上増やすのは正直滅入るが、エフィア・メンサーをアフリカから切り離すついでにフランスへ戦略級魔法の一つでも提供すれば、エドワード・クラークの目論見を潰せるかもしれない。

将輝の心の平穏と達也の心の平穏は、悠元の中で必ずしもイコールではない。特に劉麗雷は一歩間違うと新ソ連との戦闘ルートに突入

しかねない。エフィアを引き取ることで他の婚約者に説明責任は生じるが、それぐらいは必要経費だと割り切るほかにないだろう。
　王族クラスとの婚約に関しては、正直愛梨絡みでもう結構である、と千姫にエフィア・メンサーを序列に加えてもいいという旨のメールを送信したところでノックの音が聞こえた。悠元が入室を促すと、深雪がドアの裏からひょっこりと顔を出すように姿を見せた。
「悠元さん、リビングに来ていただけませんか？」
「リビングに？」
「はい、叔母様が悠元さんにご相談したいことがある、と仰いまして」
　てっきり達也と深雪はもう真夜との連絡を終えたのかと思えば、真夜が悠元に相談したい、と深雪が伝えてきた。少なくとも、学校の抗議の件と深雪に対する婚約のことも聞かされているのだろう、とは思っていた。
　自室でやることも一区切りついていたため、悠元はそのまま立ち上がって扉の所に来ると、深雪は悠元の腕にしがみ付くように抱き着いていた。人のいないところでは甘えたがるため、これも仕方が無いとばかりに諦めつつ、深雪に引っ張られるような形でリビングに来ると、モニターに映る真夜と達也が何かを言い合っていた。
　すると、達也が悠元と深雪の姿に気付いて視線を向けてきた。どうやら真夜に婚約者のことに関して根掘り葉掘り聞かれていたのだろう、と察しつつ悠元は達也の横に立ち、深雪はしがみ付いていた腕を離して悠元の隣に立った。
『こんばんは。そしてごめんなさいね、悠元君。折角休んでいたのに』
「こんばんは、真夜さん。家の仕事をしていただけですよ。それで真夜さん、自分に相談事とは？」
『実はね、先程達也と深雪さんに話した内容なのだけれど、一条家から深雪さんに関する婚約への質問状が届いたのよ』
「質問状ですか？」
　原作だと達也と深雪の婚約に横槍を入れていたわけで、自分の場合は最悪（十師族離脱による師族二十八家の相対的な能力低下と十師族の最強という名の信憑性に関する嫌疑）を想定した話はしていた。だ

が、結果として一条家は婚約の申し入れではなく質問状を送るというやさしめなものに変わっていた。
『私も最初は悠元君と深雪さんの婚約に異議を唱えて、その上で一条将輝君と深雪さんの婚約の申し入れをするものだと思ってたの。でも、悠元君は千姫さんの養子で今や神楽坂の当主。さしもの一条殿も神楽坂家当主に喧嘩は売りたくないと判断したのでしょうね』
「成程……（母上から当主は当初高校卒業を期に襲名させると言っていたが、変な横槍を防ぐために早めたんだろうな）」
高校卒業時でも１８歳での襲名となるため、元々の予定が１年ちょっと早まった形となった。京都の『聖域』と『伝統派』関連も本来は将来の九島家の衰退を見込んでの策だったわけだが、結果として神楽坂家当主襲名への〝箔付け〟となった形だ。
悠元の想定は真夜も元々抱いていたようで、婚約の申し入れではなく質問状という体には真夜だけでなく葉山も首を傾げたらしい。
『深雪さんの婚約者に関しては悠元さん以外に認める訳は行かないもの。達也のことを蔑ろにしてきた面々に対する罰の側面もありますから。それで、どう返事をしたものか困っているのよ』
「そうですか……」
単に婚約の申し入れをしてきたのならば、然るべき時期――――恐らく師族会議の際に断りを入れるだけで済む。だが、相手である将輝の気持ちを慮って欲しいと文面で触れられている以上、真夜としてもどう返事をするのかが正解なのか分からないのだろう。
それを聞いて悩む悠元に対し、達也が問いかけてきた。
「悠元、何を悩んでるんだ？」
「いや、将輝はなまじ自分が九校戦でボコボコにした相手だからな。ジョージに聞いた話だと、一高で俺と深雪が付き合っている噂はネットワークの掲示板を通じて三高も知っているそうだ」
真紅郎とは度々連絡を取っており、その中には自分と深雪のことに関する噂についても聞かれたのだ。それに関しては否定する懸念事項もないので肯定したところ、噂を聞いた将輝は「どうせ噂だし、そんな素振りは見せてなかった」と強く否定したため、真紅郎はこれ以

上この話題について聞くことはしなかったそうだ。
「その噂を否定するほど強く思い込んでるんだ。彼の父親である一条殿は打診をしたかったのだろうが、多分将輝の妹である茜ちゃんか一条殿の奥さんが止めたんだろう……とはいえ、親同士の決め事で諦めるとは思えん」
一昨年、昨年の九校戦で三矢の名を名乗ってた時と神楽坂の名に変わった後でも、負けたからと言って深雪へのアプローチが変わることは無かった。真紅郎でも察しているとなれば、愛梨や沓子、栞も当然その噂を耳にしていたのだろう。その結果がコンペ前の行動になったと考えるのが筋だろうが。

黒羽文弥婚約計画

一条家からの質問状ということで、悩んでいる悠元に対して疑問に思う深雪。何故そこまでと思うだろうが、身近な例は実を言うと四葉家も例外ではないからだ。そう、モニターに映る真夜がかつて七草弘一と婚約し、それが破棄されたことで起こっているも過言ではない七草家の〝四葉下ろし〟があるからだ。

「悠元さん、何故そこまで悩まれるのですか？」

「うん、まあ、深雪がそう思う理由も分かる。だが、この問題を適切に処理しないと将来一条家が七草家と組んで嫌がらせしないとも限らないからな」

『……ああ、成程。悠元さんの御懸念はわかりましたわ』

何せ、あそこまで完膚なきまでに叩きのめしたのに、未だに深雪のことを諦めきれず、その止めと言わんばかりの婚約発表に茶々を入れる形で質問状を送ってきたのだ。送ったのは父親である剛毅だが、彼も出来れば息子が好いた人と結婚してほしい、と思っているのだろう。その遠因に悠元の兄である元治のこともあるのだろうが。

「……こうなれば、回りくどい手を使うのはやめよう。深雪、頼みがある」

「はい、何でしょうか？」

「将輝と一度話し合うための機会を設けたい。そこでキッパリと断って欲しい」

ようは、将輝と深雪のデートをセッティングする、ということだ。ただし、これに関しては一度きりで二度目はない。それを聞いた深雪が悠元に尋ねる。

「それは、一条さんに拒否を示すため、デートをしてやってほしいということでしょうか？」

「有体に言えばな。だが、深雪の言葉でないと奴は絶対に聞き遂げない性格だからこそ、深雪にお願いしたい」

「……分かりました。その代わりと言っては何ですが、その夜はたくさん愛してくださいね？」

デートの埋め合わせにデートを要求するかと思えば、それ以上のことをあっさりと言いのけたことに悠元は「やはりか……」といった感じで頭を抱え、達也は一つ深い息を吐き、真夜に至っては面白そうな表情を浮かべつつ笑みを零していた。
『あらあら、これは孫の顔が見れるのも楽しみですね』
「あのですね……高校生の身分で仕込めませんよ。せめて社会的な立場を確立してからになるかと」
『そうは言いましても、既に各方面で地位を確立している悠元さんがそう仰ると僻む者もいるでしょうね』
「……」
確かに、ＦＬＴ絡みにしろ、国防軍絡みにしろ、そして神楽坂家絡みにしたって既に地位を確立したも同然の悠元だが、その殆どは神楽坂悠元の名を隠した上で行ってきたことだ。
ほぼ公然の秘密でバレている部分もあるわけだが、未成年という事由など神楽坂家当主となった時点で意味を成さないことも分かり切っている。ただ、非魔法師の観点から見て公然の肩書ぐらいは整えておきたい、という前世の平民感覚の部分を引き摺っているのは確かだろう。
「ともかく、師族会議で一条殿に質問状のことを聞かれた際は、最終的な回答としてそういう風に取れる様な受け答え方でお願いします」
『年末に渡してくれたデータについては如何しますか？』
「そうですね……一先ず十文字家にお渡ししてください。そこからなら七草家に渡ってもよしとしましょう。ただし、オフライン環境下での閲覧を念入りに推してください」
『……分かりました。それと、ありがとう悠元君』
そう言って通信が切れたところで、いきなり深雪に抱き着かれた。その深雪はというと、やや不満げな様子であった。先ほどの真夜の様子を見て何かを察したらしく、達也もこればかりは止められないと白旗を挙げている状態だった。
「ともかく、夕食にしようか。キッチンで水波ちゃんがこちらを見ているし」

「そうだな。深雪もそれでいいか？」
「……はい」
ともあれ、これで話す内容が増えたと思いつつ、夕食の後にそのまま浴室に行ったところで後から浴室に入ってきた深雪に襲い掛かられ、なし崩し的になってしまった（最後の一線は死守、これ大事）が、全員がリビングに集まって深雪がコーヒーを淹れてくれたところで悠元が話し始める。
「年末の話だが、真夜さんとの会談の際にジード・ヘイグ――――顧傑の術に関する情報を電子データで渡している」
「もしや、奴の狙いが師族会議だと言うのか？」
「その可能性は極めて高い。特に今年は十師族選定会議で箱根に集まるからな」
現状ではまだ大きな動きになっていないが、顧傑と思しき人物がロサンゼルスの市街地で確認されている。彼が支援していた『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』が消えても、その残党という存在は未だに巣食っており、顧傑に手を貸しているのはその連中だろう。
船の積み込み状況から見て出航に掛かる時間は１週間前後。半月もあれば日本に到着する計算だ。ＵＳＮＡ軍の施設から盗まれた小型ミサイルは計算したところ、おおよそ少なくても〝５０発〟――――弾丸に搭載された弾薬量で言えば最低でも約３５０キログラムになる。
「だからこそ、今年の開催には神楽坂家と上泉家も関わる。具体的には建て替えのために営業していないホテルが一棟あって、そこの解体と建て替えを上泉家にお願いしている。更には、師族会議当日、新陰流剣武術の上段クラスに位置する面々がホテルの従業員に扮して師族会議メンバーを出迎える。一種の〝貸切〟だな」
この程度の情報など、『フリズスキャルヴ』を有している顧傑ならば既に知っていてもおかしくはない。それに、彼がメディアを通じて十師族を非難するつもりだろうが、その為に『神将会』の全メンバーを箱根に集結させるつもりでいた。
このご時世に限った話ではないが、どの船も船籍を有して航路申請

を出さなければいけないことは国際法上において守らなければならない。そうでなければ〝不審船〟として軍の強制調査対象に含まれるからだ。
　当然、顧傑が乗る予定の小型貨物船も横須賀港を経由して沼津港に停泊する申請を出している。横須賀港を経由するのは外国船の入港手続きがあるためだが、その時点で死体やミサイルなどが見つからなかったことがおかしい。まあ、その辺は便宜を図るなどの手段がいくらでも取れるため、これを怠慢などと罰する気もない。
「今回は深雪も加わってもらう。自分の補佐として、あるいは顧傑が万が一市街地を狙った際、俺の『天神の眼（オシリス・サイト）』を通してテロリストを凍結させるつもりだ」
「悠元が直接やらないのか？」
「他のメンバーの指揮もあるし、ホテルに特殊な結界を張るつもりだからな」
「大丈夫です、お兄様。前にも仰いましたが、もう覚悟は決めております」
　ホテルに天仙結界の一つ――――対象物を相対的に固定し、陣内で定義された物体だけは絶対に壊れない『金剛陣（こんごうじん）』を張るため、市街地のフォローは深雪に頼むつもりでいた。ただ、それでは達也が不安がると思ったのか、深雪が達也を宥めた。
「……それだったら達也、深雪のフォローという訳じゃないが、四葉家への依頼として達也に箱根市街地の監視を頼みたい。顧傑が恐らく使うのは死体を使役する術だから、その辺のデータは後で渡す」
「分かった。悠元が相手なら別に依頼でなくてもいいのだが」
「そうしないと貸し借りの勘定を持ち出すだろうが、お前は」
　気が付けば、こんな風にお互い軽口を叩き合える仲になっていたわけだが、これには深雪と水波が揃って笑みを零していた。そして、悠元は水波に視線を向けた。
「水波には達也の補佐を頼みたい。表向きはガーディアンとなった水波が達也からの指導を受けるための場という形だ」
「は、はい！　分かりました！　でも、学校にはどう説明するのですか

？」

「『師族会議の関係者』ということで話は通しておく。校長も春の一件の手前、嫌とは言わないだろう」

原作だと達也と深雪、水波は普通に学校へ行っていた。その流れを変えてまでもやらなければいけない。折角ここまで骨を折ったというのに、顧傑に卓袱台返しされるのは〝気に食わない〟からだ。

それに、達也が自爆テロを阻止した実績が〝過去にあった〟から悠元は達也に市街地の監視を頼んだ。それは今年の春――厳密には西暦２０９６年５月１５日にまで遡る。あの日は悠元と達也、深雪と水波で帰りの無人運転公営タクシー（ミューターコ）を待っていた時だった。

小西教団（こにしきょうだん）と呼ばれる如何にも「カルト宗教です」と言わんばかりの連中の信者が自分と達也に襲い掛かったのだ。その際に達也と２人で伸しつつ、彼らが持っているものに爆弾の存在を認識したので小声で「こいつら爆弾を持ってる」と達也に伝えたところ、達也は迷わず『分解』で起爆装置全てを外した。

その教団が反魔法主義を唱える『今よりも人間的な暮らしと社会を実現する会』という如何にも聞いただけで胸やけを起こしそうな組織と繋がっていることが分かったため、対処は上泉家に放り投げた。

『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の残党と聞くと剛三が真剣６本を持ち出した、と元継から報告があったが、何が起こったのかなど火を見るより明らかだったのでそれ以上は何も聞かなかったし、達也もそれ以上関与する気にならなかった。それが一番まともな反応だと思ったのは……ここだけの話だ。

ただ、身内が出張る以上は無視するわけにもいかず、しかも周公瑾ひいては顧傑が関わっているとあっては黙っても居られなかったために、『神将会』の仕事ということで出張った。

結果として、小西教団の〝教祖〟である小西蘭（こにしらん）――正式な名が西小蘭（シー・シャオラン）は、悠元が実験がてら展開した天仙結界『将星陣（しょうせいじん）』――術者自身が認めない人間の魔法行使の一切を封じ、外部からの遠隔操作を断ち切る魔法――によって死を免れて拘束され、秘密裏に神楽坂家が伊勢家に送った。

彼女の座っていた椅子には芋虫のようなものがあり、どうやら周公瑾に監視されていたようだ。一応術を誤発動させて小西が死んだと偽装したが、吸収した知識でも小西が死んだと思い込んでいたのは確かなようだった。

そして、その際に「亜貿社（あぼうしゃ）」と呼ばれる黒羽家傘下の忍者（忍術を扱う『忍術使い』とは異なり、それ以外の特殊技術を継承された存在という認識が強い）の暗殺結社と面識を持った。元々名前も組織の実態も剛三から聞き及んでいたが、傘下に入ったのは達也と深雪が中学3年の時だったそうだ。何でも、その組織に所属する少女が殺そうとした相手を軍の命令で始末しに来た達也に先を越された形になったらしい。

まあ、達也のことを何も知らなければ「殺そう」だなんて選択肢など取れないだろう。一応パーソナルデータ自体はあるのだし、母親の名に深夜がいることぐらい掴めた筈だろうに、とは思ったが、殺し屋としての矜持に火が付いた結果、黒羽家が出張る結果となったのは一番穏便に済んだ方ではないかと考える。最悪達也の『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』でビルごと消える事態にならなかっただけマシだと思う次第だ。

何故この話をしたのかというと、その少女――榛有希（はしばみゆき）が教団にいた女子大学生を相手にしていたので、その大学生を体術であっさりといなして気絶させた。驚きを隠そうともしない有希に対し、悠元はただこう呟いた。

「命あっての物種だろう？　どうやら友達の件で恨んでたようだが……ふむ、二人とその友人とやらも鍛えれば化けるか」

「は？　何言ってるんだ？」

洗脳されていた山野（やまの）ハナに加え、その友人で帰化フィリピン人の仲間杏奈（なかまあんな）――フィリピン名アンナ・サントスを軍の施設から救出した。杏奈はかなり依存性の高い後天的なマインドコントロールを受けていた形跡が見られたため、已む無く『天陽照覧（てんようしょうらん）』を併用する形で、日本へ逃れてきた以降の記憶を全て『領域強化（リインフォース）』で〝知識化〟した。

自分に好意が向くのは困るため（マインドコントロール解除の反動による依存の危険があるため）、杏奈の忠誠心（好意）が文弥へ向けら

れるような形になるよう亜夜子へお願いをした。ハナについては一応『領域強化』で洗脳を解き、亜貿社か黒羽の部隊で引き取れないか打診はしておいた。そのついでに文弥といい関係となるよう手筈は整えておいた。

超能力持ちの人間は身近に侍郎がいたため、有希を気絶させて『領域強化』を施した。そしたら……自分は決して望んでいないのに胸部か強化されていた。具体的には先に気絶させたハナと同じぐらいに。女子というものは大きな胸に希望でも抱いているのだろうか（なお、ハナと杏奈は特に身体的な変化が確認できなかった）。

どうやら有希は文弥に対しての特別な感情があるのは分かったが、それが愛情になるかどうかは本人たち次第だろう（いい雰囲気になるよう知り合いに手筈は頼んでいる）。気絶して数分後に目が覚めた有希は自分の胸が大きくなったことに対して噛みついてきたが、「じゃあ戻す？」という問いかけに対して「それはもっと嫌だ」と返してきたので、結局そのままとなった。

その際、「有希の手助けとフォローを文弥から頼まれた」と説明し、有希に起きた身体の変化もフォローの一環だと説明した。実際にそういうお願いをされていたので嘘は言っていない。その際、「あ、アイツ、もしかして……」と頬を紅く染めながら呟いていたので、脈があることは間違いなかった。

なお、その三人は年明けから上泉家で魔法師となるべく厳しい修行を受けている。魔法師ライセンスの評価基準に足りない魔法師の鍛え方は色んな人間で実践して開花させた実績があるので問題ない、と踏んでいる。「某ゲーム情報誌より信頼性は５０００兆倍ある」と自負しているつもりだ。なお、その教官役は元継が務めるため、千里にやきもちを焼かれているらしい。

まあ、魔法師育成の結果が九校戦やらコンペなどでの実績に加えて、少なくとも一般的な魔法師を卒業することになるというのは言わぬが花だが。

そのついでとは言うのもなんだが、文弥からのお願いもあって亜貿社の割と戦力になりそうなメンバーをその道に詳しそうな所に送り

込んだ。国防軍に復讐心を抱くフリーの殺し屋なんて何処に送ればいいんだ、とは思ったが、それは八雲が引き受けることになった。その結果として『忍者』が魔法師になってしまうのはいいのか、と文弥に聞いたところ、「最悪黒羽の部隊に取り込めばいいので」と返ってきたのでそれで良しとした。

なお、文弥が有希を含めた女性三人に惚れられるプロジェクト――『黒羽文弥婚約計画』のことは文弥に言わず、亜夜子にだけ伝えておいた。それを聞いた亜夜子は「悠元さんも悪ですね」と言っており、それに対して「それを楽しもうとしてる亜夜子ちゃんも悪だよね」と返すと、お互いに悪い笑みを零していた。

恋愛感情にはならないが、亜夜子とはいい友人付き合いが出来そうだと改めて感じた。重婚になりそうな場合はどうするのか、という疑問だが……その辺は総理大臣と伝手を持っているので、それこそ「例外が一つや二つ増えたところで今更だろう」という結論になった。

更に、四葉直系に近い分家の黒羽家の将来に関わることでもあるので、現当主の貢とその妻である黒羽（旧姓東雲）亜弥、貢の母で真夜の叔母にあたる四葉夢女、そして四葉家現当主である四葉真夜と筆頭執事の葉山まで巻き込んでの壮大なプロジェクトとなった。無論、ここには剛三と千姫も一枚噛んでいて、更には達也と深雪の協力も取り付けている。

何にせよ、頑張れ文弥。黒羽家の未来は君に掛かっていると言っても過言ではないのだから。

閑話休題。

「当日は万全を期す意味で文弥と亜夜子ちゃんにも手伝ってもらうことにした。四高の校長には事前に話を通したし、貢さんに対しては真夜さんから直々に命令を下しているから嫌とは言わないだろう」

「レオやエリカ達には声を掛けないのか？」

「学校を襲撃するなんて阿呆なことは考えないと思うが、学校のセンサーをこっそり改造してＵＳＮＡ軍の全兵装の爆薬を感知できるようにしたから、万が一襲撃されてもセンサーで引っ掛かるのは間違いない。相手が死体ならレオ達でも十分対処できるだろうしな」

あまり人手が居過ぎると逆に顧傑に警戒されかねないし、最大戦力と成り得るセリアを学校に残すのは原作知識からの乖離による想定外の事象を解決するために必要な人材としているからだ。それに、古式魔法に精通している幹比古や佐那もいるので、まず被害を受ける可能性は大分減ったと言えよう。

ただ、四葉家と仲が良いという理由だけで三矢家もターゲットにする可能性もあるため、厚木周辺は既に厳戒態勢を敷いており、屋敷周辺のセンサーも許可を取った上で今回盗まれたミサイルの弾薬を感知できるように改造しておいた。侍郎には詩奈に近付く怪しい影が居たら「詩奈を連れて全力で逃げろ」と念を押しておいた。

「……今、USNA軍の兵装と言ったな。敵がUSNA軍の武器を用いてくるのか？」

「正確には旧式となった小型ミサイルの炸薬だな。現時点でその事実を知っているのは盗難に関与した人物と自分だけだ」

「何故分かったのですか？」

「まあ、俺の魔法――『万華鏡（カレイドスコープ）』の性質によるものが大きいけど、本当に偶然だったんだよ」

原作知識である程度知っていたとはいえ、どこにどれだけの兵器を管理しているなんてUSNAぐらいの大国となれば調べるのに骨が折れる。そのことをあまり考えず、人間主義を利用しようとしていたケイン・ロウズを含む一派の動きを観察していたところで小型ミサイルの横流しを知り、それらの改竄記録まで既に押さえている。レイモンド・クラークがそれを知ったのが確か現地時間の1月23日（日本時間では1月24日）なので、2週間少し早く情報を押さえることが出来た。

「人間主義がまた飛び火しないかを見ていたところ、国外――この国に人間主義の矛先を向けようとする政治サイドの一派が、顧傑を通して反魔法主義の火種を燃やそうとしていたのが分かった。その副産物として小型ミサイルの盗難まで掴んだという訳だ」

「成程。悠元兄様、何故USNAの彼らが同盟国であるはずのこの国を選んだのですか？」

「同盟国であり潜在的敵国、というのが彼らの認識だからな。彼らは怖いんだろうよ」
「怖い？　何がですか？」
「大漢（ダーハン）を滅ぼされたときのように、第二次大戦で二発の核を受けたこの国が報復として戦略級魔法をＵＳＮＡ本国へ向けてくることだろうよ……推測の域は出ないが、そうとしか思えんほどにステイツの連中のやっていることがまさにそれに近い。『パラサイトじゃなくてフランクリン・ルーズベルト旧合衆国大統領でも憑りついたのか？』と言いたい気分だ」
　かつての旧合衆国大統領のことを悪しく言うつもりなどないが、大陸の権益を守るために度重なる対中懐柔工作を行って日中戦争を泥沼化させた要因を生み出した人物なのは間違いない。しかも、日本の増長を認めないかの如く交渉を拒絶した挙句「ハル・ノート」まで突き出した人物の影響がここまで引き摺っている……とは思いたくないが、第三次大戦以降大統領が外遊しようとしなくなった時点で、ＵＳＮＡは覇権を欲しながらも報復を恐れたと言っても過言ではなくなった。
　そしてそれは、同盟国である日本にまで潜在的敵国という印象を持っていることからしても明らかだろう。どうせ『積極的自衛権』を盾にしてスターズを派遣したのだろうが、やっていることは立派な内政干渉だ。だったら、ヴァージニア・バランス大佐との口約束や『セブンス・プレイグ』と『アルカトラズ』の時に結んだ約定を全部破棄することも視野に入れなければならないだろう。
　ただでこちらの魔法技術で手に入ると思えば大間違いだ、ということをいい加減ＵＳＮＡの連中にも本気で〝痛い目〟を見てもらう時が来たのかもしれない。そして、顧傑にはこの国を本当の意味で独立国家としての体を成すための〝礎〟となってもらおうと思う。

似通った境遇、恋路の行方

新学期2日目も、話題は深雪と達也のことで持ちきりだった。更に追加される形で悠元と深雪の婚約となれば、当然悠元もその対象に含まれてしまう。ただでさえ複数の女子と一緒に居ることが多い悠元なだけに、あの中には〝愛人候補〟だの〝内縁の妻〟と噂する人間も少なくなかった。

まあ、その噂がある意味正解なのは仕方がない。悠元の場合、婚約者として深雪を発表したと同時に婚約者募集を行うという魔法師社会では前代未聞の大事を発表したのだ。更には日本魔法協会が補足説明として「神楽坂悠元は日本政府が複数の婚姻を特例で認めた」と述べたことにより、国内外から婚約申し込みが殺到した。

だが、正直悠元自身はその殆どが地雷要素ばかりであることを前世の経験から見抜いており、リストで明らかに怪しいものは全てチェックして千姫に報告している。エフィア・メンサーの件についてだが、千姫から『愛梨さんは明確なフランス人という訳でもありませんし、お隣の政府（イギリス）が何か言ってくるかもしれませんが、脅しを掛ければ黙るでしょう』とあっさり言いのけていた。

聞けば、彼女の異名である『黒夜の孔雀（アルティミシア）』の名付け親は今や『十三使徒』のウィリアム・マクロードの父親で、それを聞いた千姫によって危うく天に召されるところだったらしい。彼としては魔女らしい名を付けたわけだが、千姫からすれば「魔法師であるお前が言うな」と言わんばかりに彼を半殺しにしたそうだ……何してるんですか、うちの母は。

話を戻すが、深雪がいるA組の場合は悠元をはじめとした理解者が多くて出羽亀も控えめで、B組もエリカの影響（本人は嫌がっていたが、千葉家の名が大きかった）もあってそこまでもない。魔工科のあるE組も燈也のお陰で事無きを得たが、1年組はというと、水波がクラスメイトからの追及を受けていたのだった。

「ですから、本当に何もありません」

本当のことを知っているからこそ余計に言えず、しかも水波自身も

恩恵を受けている身なので余計に応えることが出来ない。だが、女子生徒たちの興味がそれで尽きるわけでもなかった。
「そういえば、桜井さんは3人の先輩たちを様付けで呼んでたけど、桜井さんも四葉家の人なの？　それとも三矢家の人？」
「以前そのように呼んでいたのは達也様の指示があったからです。私は四葉家から援助を貰っている身なので。悠元様は私の伯母が三矢家の関係者と繋がりがあるからそうお呼びしているだけです」
流石に全部の真実など言えるわけがなく、予め悠元からカバーストーリーを組まれているお陰で水波は上手く受け答えが出来ていた。
魔法師は元々危険な仕事が多く、殉職した魔法師の子女を雇い主や同僚が引き取ることなどそう珍しくもない。第一高校にもそういった生徒は少なくないので、水波の言葉に怯んだりすることはなかった。
それ以上のことを聞き出そうとしたところで、人垣に声を掛けてきたのはたった今登校してきたクラス委員長である理璃だった。
「皆さん、そろそろ始業時間ですよ？　評価点が下がってもいいというのなら、全員強制的に座らせますよ？」
理璃が満面の笑みを浮かべて放った一言に、人垣を形成していた女子生徒は蜘蛛の子を散らすが如く自分の席に座っていく。
以前、理璃は騒いでばかりいた複数の男子生徒を『ファランクス』による絶妙な力加減で叩き、満面の笑顔で説教をしたことがあった。それを目撃していたクラスメイトは、彼女もやはりかつて部活連会頭を務めた十文字克人の妹という認識を抱き、1年A組で彼女に逆らう人間はいなかった。
自分の席に着こうとした理璃に対し、水波はお礼を述べる。
「あ、ありがとうございます」
「いいって。家庭の事情となったら言えないこともあるんでしょう？」
2限目が実習だったため、休み時間に水波の周りに人垣ができることはなかった。だが、昼休みはそうもいかない……と思ったところで、水波に対して一番先に声を掛けたのは理璃であった。

「桜井さん、一緒に行きましょう」
「あ、はい」
それを許さなかったのは理璃だった。元々「さくらい(桜井)」と「じゅうもんじ(十文字)」と五十音順で近く、席が隣同士なので理璃としては声が掛けやすかった。それに、自分が所属している生徒会の会長が深雪である以上、同じ生徒会役員である水波のことは無関係とはいかない。
同じクラスメイト・生徒会役員ということもあって割と交友関係を築いていた理璃からすれば、水波が四葉に関わりのある人間でもそう驚きはしていなかった。だが、水波からすればそれが不思議だった。
「あの、十文字さん。その、何で助けてくれたんですか?」
「うーん……何でと言われるとね……私も似たような立場だし」
「え?」
「私の本当の両親、南盾島で亡くなってね。その直後に十文字家に引き取られたの」
南盾島の名は水波も聞き覚えがある。当事者でないが故に詳細は知らされなかったが、真夜から伝えられた情報では、海軍の戦略級魔法研究所があった場所と聞いている。それをあっさりと言いのけた理璃に対し、水波は悲しげな表情を見せて頭を下げた。
「その、お悔やみ申し上げます」
「あー、いいよ。私自身、吃驚し過ぎて悲しみすら通り越しちゃったし……それに、悲しんだところで帰ってくるわけでもないから」
変にドライな考え方をしている、とは理璃自身もそう思っている。だが、小さい頃から『自分を守れない人間に他人を守れるわけなどない。味方が傷ついても、それで自らの守りを放棄するような弱さを見せるな』と教え込まれたからこそ、理璃は両親が亡くなったことに関しても悲しまずに気丈な振る舞いを見せた。
「辛くはないのですか?」
「辛かったよ。でもね、何かと一人でいることの多かった昔の生活に比べたら、十文字家での生活は家族もいて楽しいから。って、桜井さんが聞いても面白くないよね」

「い、いえ、聞いたのは私の方ですから」
国防軍の仕事で家を空けがちだった両親との生活に比べれば、十文字家という柵はあっても家族がいることに理璃はとても嬉しかった。来た初日はその嬉しさのあまり、人目も憚らずに大泣きしたほどだ。
理璃はバツが悪そうに謝罪すると、水波はこちら側にも非があると返した。すると、理璃は思い切ってこう提案した。
「ねえ、桜井さん。これからは水波って呼んでいい？　仲の良い友達に名字呼びはちょっときついから、私のことは理璃って呼んで欲しい」
「……はい、いいですよ理璃さん。私のことも水波と呼んでください」
「って、さん付けはどうなの……って、そういう性分だから仕方がないのかもしれないけど、さん付けはなしですからね？」
「えと、努力はしてみます」
原作では数奇な運命を辿ることになってしまう桜井水波と原作にはいなかった存在の十文字理璃。そんな二人が友人関係を構築する切っ掛けになり得たのは、間接的にも神楽坂悠元と九島光宣の影響が強いのだろう。
「へっくしゅん！　……体調はすこぶるいいんだけど、誰かが噂話でもしているのかな？」
「悠元はただでさえ目立つから致し方なし」
「雫さんや……」
そして、別に本人たちが噂話をしているわけでもないのにくしゃみが出てしまう悠元であった。
◇　◇　◇
1月12日。新学期が始まってからの初めての土曜日で、授業自体は午前中のみだが、生徒会などの各種組織およびクラブ活動も本格的に動き出している。そんな中、食堂には元1年E組のメンバー（とはいっても達也を除く形で）だけが珍しく集まっていた。
「考えて見りゃ、この面子で集まるなんて最近は無かったな」
「そりゃ、アンタとあたしにミキは一科生になっちゃったし、美月は魔工科だもの」

悠元が教えた魔法科高校では一切習わない魔法技術の影響で、エリカ達は高校生離れどころか一線で活躍する軍人魔法師すら倒せるレベルの実力まで手にしてしまった。二科生から一科生に上がるという離れ業など、正直自分の身に起きるとは思ってもみなかった、というのがエリカの弁であった。
「そうですね。大体悠元さんのお陰ですけど」
「この変化を〝お陰〟と言い切れる美月も相当大物よね」
「全くだよ」
加えて、エリカとレオは部活連メンバーとなり、レオは昨年秋から山岳部部長になった（本来なら燈也が部長になると思われたが、山岳部のイメージと体裁を考えた際にレオが適任だと述べた燈也の提案がレオ以外の満場一致で通った）。
達也と悠元の存在もあってか、水波は正式な部員として体力作りや登山訓練をこなしており、水波の頑張りを見て奮起する男子部員の姿にレオは内心で「現金過ぎるな」と漏らしていた。
「そういえばレオ、〝あの子〟とは連絡を取ってるのかい？」
「……おい、幹比古。コイツの前で彼女の話は止めてくれと言ったじゃねえか」
「ほう？　どうやら只ならぬ話のようじゃない。美月、ミキを押さえて。いざとなったらその自慢の武器で引っ付きなさい」
「エリカちゃん!?」
ここで幹比古が振った話にレオが怪訝そうな表情を浮かべて受け応えると、それを聞いたエリカがレオに〝女〟の陰が出たことを聞いて黙っても居られなくなり、美月に色仕掛けも辞さないように言い放つと、美月もそれには恥ずかしがってしまった。
昼食を食べ終えたとはいえ、まだ時間があるためにエリカの追及は止まらない、と観念したのか、レオが事のあらましを話した。
事の起こりは一昨年のクリスマスの前。悠元と達也、レオと幹比古がクリスマス用のプレゼントを買うために都心へ来ていたところ、一人の少女がレオに助けを求めたのだ。四人の距離的にレオが一番近かったというのもあるのだが。

そして、少女の後を追いかけてきた面々を見て悠元がレオにプレゼントを押し付ける様な形で渡しつつ前に出た。
「レオ、お姫様の盾役は任せた。騎士のように剣はないけど適当にボコして警察を呼ぶか」
「って、うおっと!」
四人の中で最も権力を有するだけでなく、武術面でも圧倒的な実力を有する悠元が前面に立ったことで勝敗は決した。少女曰く金銭面のトラブルということらしいが、ここで悠元は端末を取り出して電話を掛けていた。
「もしもし母上？　実はセレスアート絡みで……そこまでするの？　あ、成程……了解」
あっさりと決着がついたわけなのだが、その少女はレオに対してキラキラとした視線を向けていた。これは悠元がすぐに気付いた。なぜならば、その視線を深雪に向けられたときと同じ状況がレオにも起こり得ていたからだ。
悠元からは「彼女の事務所であるセレスアートは神楽坂家の方で何とかするらしい」とのことで、直ぐに対処するとスピーディーな対応となった。その際、ＣＧドール「雪兎（せと）ヒメ」の中の人だと知り、悠元は前世で言うところのヴァーチャルアイドルの中の人を知った時ってこんな心境になるのだ、と思った。
この顛末には実は続きがあり、昨年の春、彼女を狙おうとしたフィリピンマフィアとそれの売買を請け負う連中がいたのだが、その連中は翌朝には建物ごと消え去っていた。
尤も、ここにいるレオ達には知らされずにいたわけだが、魔法の暴走を懸念した千姫が内密に悠元へ『領域強化（リインフォース）』による〝魔法の安定化のための遺伝子治療〟と言う名目で神楽坂の別邸に呼び、彼女――調整体魔法師「月」シリーズの第一世代である宇佐美夕姫（うさみゆうき）に施した結果、彼女が望んでいた女性らしい体を手に入れていた……その門出と言わんばかりに、彼女の下着のホックが盛大に千切れる音と夕姫の悲鳴が部屋に響いたのだった。
夕姫からは「その、レオ君といい関係になれるよう手伝っていただ

けますか？」という問いかけに対し、悠元は頷く他なかった。
「で、その彼女とは連絡を取ってるの？」
「まあ、流石にそんなことがあった手前、ほっとくのも後味が悪いしな……何だよ、エリカ？」
「いやー、女の気が無かったアンタにそんなことがあったなんて面白いじゃない。どうせなら、レオが責任持って娶りなさいよ」
「はあ？」
　レオはてっきり、エリカが夕姫をレオにくっつくお邪魔虫か泥棒猫と見るのかと思えば、寧ろエリカは夕姫にその気があるのならレオが責任を取って彼女を妻にしろと言い出したのだ。これには流石のレオも盛大に首を傾げつつ驚きの声を上げた。
「忘れたの？　あたしは千葉の人間だし、別にうちの親父みたいになるのは勘弁願いたいけど、レオに妻の一人や二人いても目くじらなんて立てないわよ。寧ろ男としての甲斐性を見せなさいって言ってんの。ミキだって美月と佐那を娶るんだし、別に問題ないでしょ」
「エ、エリカちゃん！」
「ちょっと、何で僕らを引き合いに出すのさ！」
　元々千葉の姓など名乗りたくなかったエリカからすれば、自分が愛人の子であることに不満など持っていなかったし、千葉家の人間という風に色眼鏡で見られること自体鬱陶しいと感じるほどだった。
　なので、エリカはレオを独占しようなどという気が無かったと言えば嘘になるが、幼馴染の悠元と幹比古が複数の女性と関係を持った以上、レオにも男としての甲斐性を発揮できる相手がいたことに内心で嬉しかったのだ。
「何だったら、悠元に頼めば一夫多妻になるよう民法改正ぐらいするでしょ」
「いや、それは一番マズいだろうに……」
　引き合いに出されて恥ずかしがる幹比古と美月の反論などお構いなしに言い放ったエリカの爆弾発言に対し、レオは常識の範囲で常識外れの手段を用いるのは一番マズいと評するほかはなかった。だが、ここで止まるほどエリカは大人しくなかった。

「よっし、それじゃ早速悠元のところに行かなきゃ。今だったら部活連の本部室にいるはずよね」
「お、おい！」
「……吉田君、どうしますか？」
「柴田さんはクラブ活動に行っていいよ。僕は風紀委員会の仕事があるから、一応付いていくよ」
「お、お願いします」
　そうと決まれば、と言わんばかりに立ち上がってトレイを片付けに行ったエリカの後を追う形でレオも立ち上がり、美月にクラブ活動を優先するように伝えると、幹比古も風紀委員会の仕事のついでにエリカとレオを追った。
　そうしてエリカが意気揚々と本部室のドアを開くと、エリカは場の雰囲気に思わず気圧されていた。具体的には、中央の上座にあたる席に座って気配の抑制を切っている悠元と、それと相対する形で立っている琢磨の姿であった。これにはエリカの後を追ってきたレオと幹比古もたじろいでいた。
「ん？　エリカにレオ、幹比古か……七宝、事情は分かったし、生徒会と風紀委員会にも本人にきちんと叱ったと報告はする。だが、二度目はないぞ？」
「は、はい！　本当に申し訳ありませんでした！」
　琢磨からすれば、エリカとレオ、幹比古といった達也に近しい人物が天からの助けに見えたのか、三人に対しても深く礼をした上で本部室を去っていった。これには揃って首を傾げる三人に対して悠元は気配を抑えてから話しかけた。
「それで、何かあったか？　幹比古が一緒となると、なんか大きなトラブルでも？」
「実は、レオ絡みの話でエリカが突っ走っちゃって……そっちも何かあったのかい？」
「いや、実はな……」
　琢磨が悠元からの説教と取り調べを受けていた理由。それは、悠元が風紀委員会の打ち合わせも兼ねて本部室を離れていた時に起こっ

た。生徒会からの連絡役ということでほのかが来ていたのだが、応対した琢磨がほのかに告白しようとしたところに悠元と雫がタイミング良く（琢磨からすれば悪い方向だが）その現場に居合わせた。
　元々ほのかが達也のことを好きだという噂はピクシー暴露事件から少しずつ浸透していったため、当然琢磨もそのことは知っていた。だからこそ琢磨は自分の気持ちに整理を付ける意味でほのかに告白しようとしたところでその言葉を聞き終える前に中断されてしまった。
「こうなった以上、琢磨とほのかを二人きりで会わすわけにもいかんだろうし、雫がいい顔をしないだろうからな。俺もほのかの友人として下手に会わせるのは危険だと判断した」
「でもよ、本人が諦めるために『好きでした』と告白しようとしたんだろ？　間が悪かったというのもあると思うが」
　この場合、レオの言い分にも一理はある。悠元の脳裏に浮かんだのは、先日の司波家でのやりとりで深雪に頼んだ解決法で、これを琢磨に適応しないのは差別になると踏んだ。
「それなんだよな……変に拗れるのもあれだし、謝罪の機会ぐらいは設けるか。部活連側は俺が、生徒会側は深雪に立ち会ってもらうことにしよう。幹比古、悪いけど風紀委員会室を貸してもらえるか？　幹比古と雫にも立ち会ってもらいたいし」
「あ、うん。北山さんには僕から話すよ」
　今後の組織間のぎくしゃくを解消するという意味で、風紀委員会に仲介してもらう形で部活連と生徒会が今回の一件を不問にする、という流れに持っていくこととしたのだった。
　今は良くても、次年度の生徒会と部活連のトップが師族二十八家の人間になることは間違いないだろうし、七草家と七宝家の因縁自体が完全に消えたわけではない。その意味で、ここでちゃんと一区切りをつけることで後顧の憂いを断とうという思いがあった。

皇たる者の決断

風紀委員会室にて風紀委員会立ち合いのもと、琢磨とほのかの話し合いの場が持たれた。琢磨は悠元からの謝罪が効いていたのか、「先程は申し訳ありませんでした。どうか司波先輩とお幸せになってください！」と臆することなく言い放ったことに、ほのかの思考がオーバーヒートして気絶した。

これを見た雫は「これは大物になる予感がする」と呟いていた。なお、その琢磨は小和村真紀からロックオンされているわけだが、琢磨からすれば「同志みたいなものですから」と若干朴念仁の気がみられた……まあ、他人の恋路に首を突っ込むほど暇じゃないので、この辺は法律に触れなければスルーの方向にした。

噂話の方は追々沈静化していくと思われるので心配はいらないが、そのことばかりに耳を傾けていられないのも事実であった。

◇　◇　◇

1月13日、日曜日。達也がＦＬＴの研究施設に出社していた（達也は表向き会社と契約している研究員）頃、悠元はスーツ姿で皇居に赴いていた。

礼儀を重んじるならば羽織袴か礼服が常識と思うが、護人の二家の当主クラスは特例という形であまり失礼のない服装であればいいというお達しを受けていた。これは皇族が世俗を良く知る相談役として護人を頼りにしていることへのせめてもの礼を形にしたもの、と説明を受けている。

応接室では、悠元の他に同じくスーツ姿で上泉家当主である元継が座っていた。

「悠元、前に言っていたクラーク親子に関することだが、奴らは達也の素性を見抜いていると思っていいのか？」

「それなんだけど、気になるものを見つけた」

それは、『七賢人』――――レイモンドがＵＳＮＡの新興軍需企業『サムウェイナームズ』のエージェント、ナオミ・サミュエルにあるメッセージを送っていた。それは、『トーラス・シルバー』が司波達也であ

る、という情報だった。これが送られたのは昨年の１０月初め――――論文コンペと周公瑾の追跡の裏側で起きていたことだった。
しかも、まぐれ当たりだろうがナオミは『摩醯首羅（マヘーシュヴァラ）』と呼ばれる戦略級魔法師が司波達也である、と国防軍の士官に話していた。なお、その面々は昨年の内に黒羽の部隊によって消されている。
「そのことは本人に？」
「これが発覚した時点で伝えた。四葉本家に伝えるかは達也の裁量に任せてる」
原作では『ディオーネー計画』が発表され、レイモンドが姿を偽って『七賢人』として暴露した情報で達也が追い込まれた。だが、仮にそんなことになったとしても、こちらには魔法以外で追い詰める手段は数多く存在する。
どうしようもならなくなった場合の最終手段は考えてあるが、正直言ってやりたくないのが本音だ。何故なら、これを使った場合のＵＳＮＡの国際信用度は底が無くなるレベルに達するからだ。
「そうなると、周公瑾が逃亡したのもクラーク親子の差し金と思いたくなるな……『トーラス・シルバー』のことに関してだが、悠元は問題ないのか？」
「俺は『トーラス』と呼ばれはするけど、一切名乗ってないからな。それに、顧傑が一段落した後の発表によって『トーラス・シルバー』は国内から切り離せなくなるように仕向ける」
それは、政府が『トーラス・シルバー・プロジェクト』という形でＦＬＴとの官民合同プロジェクトを立ち上げ、国土強靭化計画の一環としてライフラインの再整備計画を打ち出す。『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』はその一環として組み込まれる形となり、魔法の力を有効に活用して国益に繋げることで魔法の有無を問わずに恩恵が受けられる形とする。
魔法の力で恩恵を受けられないのであれば、魔法の力で生み出された形あるものを提供することで非魔法師への不満を解消する。そこに利権は生じてくるが、そこは政府の手腕に掛かっている。
「この国はただでさえ災害が多い。その意味で余力のあるライフライ

ン構築は急務だ。無駄だと騒ぎ立てる輩はいるだろうが、電気・ガス・水道などといったライフラインは一般企業の杓子定規を用いてはいけない」
「……ただでさえ計画的な運営が求められている以上は余力がないも同然だな。大きく力を削がれたが、野党やその支持母体は無駄だと騒ぎ立てるだろうが」
悠元は前世の記憶で「無駄だ」と騒ぎ立てたり、核アレルギーによる原子力発電の延々として進まない再稼働により、長年使用している火力・水力発電所までほぼフル稼働で酷使する状態となっていることは強く記憶に残っている。
地理的要因でこの国は災害に見舞われやすいのに、人々の生活を支えるライフラインが消費と同等の供給能力しかないのは一番の問題だ。それこそ、ピーク消費量が供給量の6割ないし7割に抑えられるようなシステム作りが急務とされている。
そのためにも、まず野放しになっている犯罪の温床全てを取り除くため、根本となる憲法を再制定し、国防軍には本来の任務である領土・領空・領海を含め、国家の根幹を成す国土と国民を守ってもらわねばならない。
「使われなければ無駄だろうけど、『転ばぬ先の杖』という意味を分かっちゃいない。電気を生み出すのだってただじゃないんだ……連中には一度自給自足の生活がどれほど大変なのか身を以て体験させたい気分だ」
「そのためにも、犯罪の温床となっている状態を改善するために憲法を作り直す、か。大変なことだな」
「当然政府にも今までのツケは払ってもらう。そのための『トーラス・シルバー・プロジェクト』だ」
すると、ノックする音が聞こえたので会話を止めて踵を正す。扉が開かれると、そこには案内役である宮内庁の職員が立っていた。
「神楽坂様、上泉様。両陛下がお呼びですので、ご案内いたします」
「ご苦労をおかけします」
「宜しくお願いいたします」

職員に案内された場所は今上天皇の住居である赤坂御所。本来ならば一般の人間がおいそれと踏み入ることを許されないが、天皇自らの希望によるものだった。職員が「この先は私でも入ることは許されませんので」と言って下がっていき、悠元が先んじて足を踏み入れ、深く頭を下げた。
「失礼いたします。神楽坂家が当主、神楽坂悠元に御座います。此度のお招き、真に感謝いたします」
「上泉家が当主、上泉元継にでございます。陛下におかれましてはご健勝で何よりと存じます」
「態々来てくれて感謝いたします、神楽坂殿に上泉殿。さ、どうぞ座ってください」
部屋には今上天皇とその使用人がいるだけで、天皇が目配せをすると使用人は頭を下げて静かに部屋を去っていく。そして天皇の気遣いを受ける形で悠元と元継はソファーに座る。
「今回お呼びしたのは、以前神楽坂殿が仰られていたことについてです。ここからは必要以上に敬語を使われなくて結構です。私も屈託のない率直な意見を聞きたいですから」
「では、お言葉に甘えまして……陛下に憲法の如何のお伺いを立てたのは、最早平和憲法としての体を成すには国内情勢があまりにも混沌に満ちているためです」
非魔法師からすれば平和に見えるだろうが、それは最早ヒビの入った薄氷……いや、もう割れてしまっている部分を避けようとしてさらに被害が拡大しているような状況であった。
それに、ここ5年で大亜連合、新ソ連、ＵＳＮＡ、そしてドイツの干渉を受けただけでなく、横行するスパイや人身売買などといった無法を放置することなど、日本という国家の存続の危機に瀕しているも同然。
「本来、国を守るべき公僕であるはずの国防軍が政治家のように政（まつりごと）を口にし、個々の思想による派閥を成すことなどあってはならない。一個人の思想に対して考えを押し付けるつもりはありませんが、私人の思想・信条を軍務に持ち込むのは言語道断。それを許し続ければ、第

二次大戦前の軍事政権が再び生まれかねません」
「神楽坂殿は民主主義に基づいた文民統制を敷き、軍の暴走を抑えたいのですね」
「その通りです。しかし、政治家は非魔法師であるが故に無力。よって、政府との非公式な約束によって動きを抑えられている師族会議のシステムを政府と国防軍から切り離し、護人の二家による古式・現代の如何を問わない魔法資質保有者の秩序の保守をお認め頂きたい」
　今まで漠然としていた護人と師族会議の関係を見直し、政府や国防軍の影響から切り離した上で神楽坂家と上泉家が師族会議に対する権威の附託と秩序の再構築を行う。古式魔法の家が現代魔法の家を抑え込むという構図になるわけで、当然不満を漏らす者はいるだろう。だが、そんなことを一々聞いていられるほど悠長にはいられないのだ。
「そして、陛下には十師族となった当主の方々に国防の要たる任を与え、その見返りに彼らの持つ権限をお認め頂きたいのです」
「……上泉殿は、どうお考えなのですか？」
「隣にいる弟からは既に話を聞いていますが、誰かが秩序の責を負うとなれば、それは我々しかいないのも事実だと痛感しております。元々九島退役少将の提案で始まった師族会議のシステムですが、退役少将は来年で御年９０の大台を迎えるため、次代の担い手の確保は急務と言えましょう」
　師族会議自体ほぼ九島烈ありきのシステムでしかなかったし、九島家も烈が居なければ十師族の椅子を維持できるだけの力を有していない。しかも、十師族当主の中は彼の教え子も少なくなく、烈亡き後の師族会議の全体像はもとより、その運営自体も不透明過ぎるままだ。
　だからこそ、烈に代わる強固な柱として上泉家と神楽坂家が彼らの支柱として存在することがこの国の魔法師社会の秩序を守るために必要だと強く感じていた。
「幸いにも、我々は現代魔法の権威である十師族の一角を担う三矢家と古式魔法の権威足る上泉家・神楽坂家の血筋を継ぐもの。先日、京

都と奈良の『伝統派』を弟が和解させ、彼らは弟に対して恭順の姿勢を見せております。なれば、今こそ我々が魔法師社会の舞台に立つ時が来たのではないかと強く思っております」
「……成程。確かに道理ではあります。世論が反魔法主義に染まっていない今だからこそ、国を建て直さねばならない。分かりました、私も国家を見守る皇として肚を括る時が来たようです」
「陛下？」
「来週執り行われる内閣総理大臣の承認式に際し、私から『おことば』として総理大臣に日本国憲法の再制定・師族会議との約定破棄を含めた国家再生の任を与えます。それを戒めとして生前退位を行い、皇位を次代に継承致します」
　つまり、本来ならば国家の政に口を出さないという天皇の役割に対し、今上天皇は「おことば」として総理大臣に強く要請する。それを受けられないのであれば総理大臣の承認は認めない、という脅しそのもの。そして、今上天皇は慣習破りを自らの戒めとして生前退位を申し出て、皇太子に皇位を継承する。
　その決意の言葉を聞き、悠元と元継は揃って頭を上げた。
「陛下の苦渋の末のご決断、大変頭が下がる思いです」
「よいのです。まだ若い貴方方が護人の当主として国家を護る為に尽力されている以上、象徴たる私に出来るのはこれぐらいでしかありません。神楽坂殿、上泉殿。今後ともどうかこの国を護るべくよろしくお願いいたします」
「はっ」
「勿体なきお言葉」
　赤坂御所での今上天皇との会談を終え、そのまま帰れるかと思えば職員の案内で通されたのは迎賓館である赤坂離宮であった。何故なのかと思っていたところ、通された応接室でその謎が氷解した。
「あ、悠元君！　元継君もお久しぶり」
「……お久しぶりです。なあ、悠元。澪さんってこんな人だったか？」
「俺が聞きたいよ」
　場所が場所なだけに、澪の言葉遣いに対して小声で話し合う元継と

悠元。その原因が悠元にあることぐらい本人も承知しているが、やや納得しがたいような雰囲気を見せている二人に対し、澪は頬を膨らませて不満げな様子を浮かべていた。
「むー、悠元君もつれないな。こんな美少女を釣り上げて放置するなんて」
「放置って……大体、澪さんは軍務も兼ねて四国の五輪本家にいたのでしょう？　こちらはまだ学生の身分なので、おいそれと外に出て行けませんよ」
「でも、剛三さんと一緒に国内外を旅してたじゃない」
「いや、あれはうちの爺さんが勝手に悠元を連れまわしてたものだから……」
沖縄防衛戦の後、剛三は当主としての仕事を元継に放り投げて悠元と一緒に国内外を飛び回っていた。正直、小学校時代よりも中学時代の思い出がないレベルで、名目上は「療養」という形で旅していた。その際に世界各地の名立たる名医にも会う事になり、彼らから「問題なし」という太鼓判を貰ってはいた。
ニジェール・デルタ地域に出向いたとき、どこかの兵士によって夕食を台無しにされ、暴行を受けていた少女（それがエフィア・メンサーだと知ったのは後のことで、エアメールは基本的にフランス政府を介して送られていた）を救い、その兵士が逃げた先の拠点を剛三が高電圧の雷の雨を降らせる『雷鳴断光閃（ファントム・ダイブ）』によって焦土と化していた。
そこが大亜連合が支援している勢力の拠点だと知り、連中は大軍を差し向けてきたのが後の祭り。剛三からすれば、連中の命よりも食い物の恨み（プラス相手が大漢に勝った大亜連合）が勝ってしまった。
――儂を知らぬとは、いい度胸よの。よし、悠元。奴らを全員アフリカから叩き出すぞ。
――はあっ!?　正気かよ、爺さん!!
結局、悠元は諦めたように認識阻害用の仮面を被り、大亜連合の戦略級魔法『霹靂塔』を疑似的に編み出して改良した戦略級魔法『霹靂瞬光（ライトニング・ディザスター）』で部隊を殲滅し、剛三は大亜連合のニジェール方面軍基地を戦略級魔法『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』で消滅させた。

最終的な被害は大亜連合方面軍および大亜連合が支援していた武装勢力が合わせて１０万（ニジェール・デルタ地域のみならず、アフリカ大陸にいた大亜連合の兵士がほぼ犠牲となった）に上り、ニジェール地方を縄張りとするフランス側の武装勢力の被害はゼロ（偶々近くを偵察していた人間はいたが、危険を察してすぐに逃げた）。

この戦闘――――正しくは殲滅劇によりニジェール・デルタ地域は支援を受けていたフランス政府の擁護を求め、直ちにフランス軍が派遣され、正式にフランスの領土となった。後に〝ニジェール・デルタの奇跡〟と呼ばれるこの出来事は瞬く間にアフリカ大陸全土を駆け巡った。

フランスを除く欧米諸国はこの奇跡を成した魔法師の行方を探ったが、全く情報が出てこなかった。彼らが最終的に得た情報は「アジア系男性の二人組」という手掛かりのみであった。何せ、大亜連合側は兵士がほぼ生還していなかった上、生き残った兵士からも「か、雷が……やめろ、来るなぁ！」とトラウマを抱えていたため、何が起きたのかすら知る術がなかったためだ。

成層圏プラットホームによる魔法監視システムでも戦略級魔法に相当する大規模の魔法発動兆候が感知されなかったため、これ以上の調査は無理だと判断されて打ち切られた（被害が雷系統の魔法によるものであったため、最終的には『霹靂塔』による自爆もしくは『十三使徒』に匹敵する大亜連合の非公式戦略級魔法師が『霹靂塔』による反乱を起こしたもの、と結論付けた）。

唯一彼らの所業を知ったフランス政府は慰謝料という名目（お金自体は大統領のポケットマネーから出していた）で莫大な報奨金を渡したが、彼らはその金を武装勢力の兵士による暴行を受けた少女に全て渡した後、消え去るように去っていった。そして、その少女――――エフィア・メンサーが原作と異なる運命を辿ることになったのだった。

閑話休題。

「コホン。私こと五輪澪は神楽坂悠元殿の婚約者として申し込みました。良い返答を期待しております」

「母上のことですから、多分断ることはないでしょうね。まあ、確定したとしても当分は東京に居ることになりそうですが」
「それは覚悟してます。それで、悠元君に元継君。父からの懸念事項を伝えます」
「五輪殿が？」
　澪から伝えられた十師族の五輪家当主・五輪勇海からの懸念事項。それは、最近ＵＳＮＡ方面からの船舶移動が活発化していることだった。その辺の動きは当然掴んでいたが、具体的な数字まで述べると明らかに伸びが顕著とも言えた。
「五輪殿が懸念されたのは、ＵＳＮＡから来るであろう人間主義者の密入国か」
「恐らくは。流石に国外の動きとなると五輪家でも限界がありますので、こうして神楽坂家と上泉家の方に伝えようと思った次第です」
「……悠元、どう見る？」
「その可能性はありますね。政府内部に人間主義者と繋がりを有している人間がいる以上、向こうの監視体制の如何なんて袖の下次第でどうにでもなりますから」
　かの国がいくらテロを警戒する体制を整えていたとしても、政府内部に人間主義を支援する連中がいればどうにでもなってしまう。寧ろ、国内の騒動が収まるのであれば出国を許容することだってあり得る。その意味でＵＳＮＡから人間主義者が来る可能性は極めて高いだろう。自分の国さえよければ同盟国を平気で巻き込むＵＳＮＡを〝自分勝手な国家〟だと言い放ちたくなる程に。

閑話　恐怖よりも現実的な打算を

フランス共和国。西欧に位置するラテン系の国家で、かつて旧合衆国などの大国に対抗するべく設立された欧州連合において重要な位置を占めていて、第二次大戦後は国際連合の安全保障理事会常任理事国（通称：五大国）の一角を担った。

だが、世界群発戦争によってＥＵは崩壊し、フランスとドイツの国境を境に東西ＥＵとなったが、かつての自由経済圏に匹敵するようなものではなく、あくまでも国家間同士の安全保障に関わる部分に限定される一種の相互不可侵条約並びに軍事同盟の側面を持つにとどまった。

これは、魔法という力が技術として、次第に軍事力として顕在化したために、各国における引き締め――魔法資質を有する人間の囲い込みが激化したことによるもの。その大本の原因は旧合衆国が行った〝囲い込み〟に端を発するものであった、という認識は欧州各国の政府の誰しもがそう認識しているが、ＵＳＮＡに加えてかつての旧ソ連以上の力を持つ新ソ連の台頭が欧州各国の危機感を募らせていた。

ＥＵにはイギリスで完成された戦略級魔法『オゾンサークル』があり、この起動式は旧ＥＵ加盟国――当然、西ＥＵの構成国であるフランスにも提供されている。

だが、フランスには『オゾンサークル』を扱えるだけの人間は存在しなかった。辛うじて戦術級魔法が限度で、加えて戦略級魔法を有する大亜連合がアフリカ大陸での覇権争いに介入してきており、これにはアフリカの勢力を支援していたフランス政府も頭を悩ませた。

そこで、フランスは当時大亜連合と緊張状態にあった日本に眼を付けた。小国ながら世界屈指の経済力を有し、近隣の大国からの圧力を跳ね除けている〝サムライ〟の国ならば……と。欧州での核戦争抑止の為に派遣された中に日本人の魔法師がおり、彼女にフランスへの移住を持ち掛けたが、断られてしまった。それでも何とか粘り強く交渉したところ、資質のあるフランス人を日本の魔法の名家に嫁がせないか、と彼女が持ちかけた。

隣国にして国際魔法協会の本部があるイギリスのことは問題ないのか、と話すと、彼女は「どうせ将来、我が国が台頭すればかの国は難癖をつけることに定評がある国の元宗主国です」と言いのけ、それがＵＳＮＡとイギリスということを理解するのにそう時間は掛からなかった。

フランス政府は、戦火を生き残った王族の中で魔法資質を有している子女を日本に送り出した。それが西暦２０６０年代後半の話になる。それから約３０年近く……〝ニジェール・デルタの奇跡〟でアフリカ大陸に領土を得たフランスだが、一層緊迫する国際情勢を鑑みたフランス政府は、その縁と奇跡を頼る形で一人の少女を送り出そうとしていた。

少女の名はエフィア・メンサー。ギニア西海岸出身の１５歳の少女だが、見た目はどこからどう見ても白人の身なりをしていた。彼女の両親も白人で、元々第二次大戦後にニジェール・デルタ地域に移住したイギリス系の一族の末裔だった。

〝一族〟という言い方をしたのは、その彼らがイギリスを追われた古式魔法師の家柄だった。そのことはエフィアの身辺調査をしたフランス政府も完全に予想外だった。エフィアの話を聞くに、祖先は追手から逃れるべく各地に散らばった上でアフリカの地に逃れた、と聞き及んでいたらしい。

そして、奇妙とも言える出会いがあり、エフィアは思わぬ大金と名誉、そしてその邂逅が彼女の魔法資質を開花させ、フランス政府の招待を受ける形で留学を許された。そしてエフィアは本来ならば軍人魔法師が入ることを滅多に許されない大統領府に招かれていた。

「メンサー少尉、急な呼び出しをして済まない」

「いえ、私のような雑兵にそのようなお言葉を掛けて頂けただけでも光栄です、大統領閣下」

「ふふ、君のような従順さと忠誠心は是非わが軍に欲しいものだ。おっと、すまないな」

エフィアは軍人魔法師として（法律では未成年扱いとなるため、表向きは１８歳以上となるようにされている）パリ近郊にある陸軍基地

に勤務しており、ルビーのような光沢の赤い髪とエメラルドグリーンの瞳に加え、年不相応ともいえるメリハリのあるプロポーションも相まって、基地のアイドル的存在として可愛がられていた。エフィアにセクハラを働こうものなら、彼女の親衛隊（別にエフィアがお願いしたわけではなく、基地司令を中核とした有志の部隊）が容赦なく制裁を加えていた。

軍人としてそんな風紀はどうかと思う訳だが、結果的に彼女が勤務する基地の統率力や部隊の実力が向上しているため、フランス軍参謀本部も「あれはわが軍の『アンタッチャブル』だな」と零して放置するほどだった。

放置というよりも〝匙を投げた〟と評するのが正しい評価とも言えるが。

「昨今の情勢は厳しさを増している。反魔法主義の波は何とか抑えたが、東欧および北欧の熱が新ソ連側に飛び火しているうちはまだ良い。だが、取って返す形で西欧が巻き込まれない保障など無い……そこでだ、メンサー少尉。君には然るべき家の養女として嫁いでもらいたい」

「……え？　はい？」

エフィアからすれば、大統領の話の整合性が見いだせず、首を傾げて疑問に思っていた。これには大統領も「すまない」と一言述べた上で、コホンと一つ咳払いをした上で説明する。

「今から３０年近く前の話だ。当時の政府はかのサムライと呼ばれた国――日本を頼り、王族の子女を送り込んだ。子女が産んだ子に期待したわけではなく、イギリスやドイツに頼らない外交ルートを構築するためにな」

「その話は私も伺っております。パリでは美談として語り継がれておりますので」

「そうだったな。そして、かの国は一昨年、大亜連合と新ソ連の攻撃を受けたが二発の戦略級魔法によってこれを退けた」

祖国の繁栄という大きな夢を抱いた少女が、かつてマルコ・ポーロが記した見聞録にて〝黄金の国（ジパング）〟と呼ばれた国に旅立つ――実際

はそんな生易しいものではないが、パリでは美談として語り継がれていることにエフィアが触れると、それに対して笑みを漏らしつつも大統領は真剣な表情を浮かべて日本に関する情報を口にした。
　この事実は日本政府によって開示されている情報だが、一つは大亜連合の鎮海軍港に向けて放たれたもの。そして、もう一つは新ソ連のウラジオストク軍港を消滅させたもの。この二つの現象は全く異なり、二発の戦略級魔法が使われたと各国は認識していた。
「メンサー少尉。君は確か、故郷であるニジェール・デルタ地域で二人の日本人と出会っていたね？」
「はい。暴行されていたところを助けて頂いたのです……結局、名前も聞けずじまいでしたが」
　エフィアは粗相を働いたとして難癖をつけてきた兵士に暴行されていたところ、少年と中年ぐらいの偉丈夫という二人のアジア系の人に助けられ、男性が「ちと掃除してくる。わしの飯を台無しにした罪は重いぞ」と言って外に出て行き、怪我をしていたエフィアを少年が治療した。
　瞬く間に傷が無くなったことに、エフィアは少年に対して頬が熱くなるような感覚を抱いた。だが、彼らは名前も言わずにその場を去っていった。
　その数日後、男性と少年から「迷惑を掛けた慰謝料」としてかなりの大金を受け取ることとなり、男性に同行していたフランス政府の高官からの誘いと両親の後押しもあって、エフィアはフランスに留学し、魔法資質を見出されて軍人となった。彼女の両親も後を追いかける形でフランスに移住し、エフィアが貰ったお金を元手に家を買い、現在はフランス南部の街で精力的に働いている。
「その二人組のことなのだが、一人は上泉剛三――――かの世界大戦を渡り歩いた英雄にして、あの四葉の復讐劇の詳細を知る唯一の生き証人。そして、もう一人の少年は神楽坂悠元という」
「ユート……あの彼が……もしかして、私が嫁ぐ相手というのは」
「そう、君が出会ったと言っていた彼だ。向こうからも『特に断る理由はありません』と好意的に受け取ってもらっている」

エフィアからすれば命の恩人で、彼女にとって初めて〝恋心〟を抱いた相手。気が付けば頬を紅く染めて俯くエフィアに対して大統領は笑みを零したが、真剣な表情に切り替えた上で説明を続ける。
「正直なところ、私も悩んだ。フランスが奇跡的にとはいえアフリカに領土を得たが、これによってアフリカでの大敗を取り戻そうと躍起になっている大亜連合と対立関係にある。かの国と大亜連合が講和状態にある以上、ここで送り込めば二国の講和を破棄させるつもりなのかと疑われてもおかしくはない」
日本と大亜連合――――東アジアにおける過去の因縁は長く、この講和状態も何時までもつか分からない、と大統領も政府の諜報機関もそう睨んでいた。それに、西ＥＵの構成国でありながら独自の路線を行こうとしているイギリスや東ＥＵのドイツがフランスを人間主義の矛先に向ける可能性があることも認識していた。
「なので、こちらでの書面上は私の養女だが、既に断絶した貴族の名を名乗らせた上で嫁がせることになる。メンサーの名はミドルネームとして名乗ることも許そう。今回は君の事情に我々の思惑を被せてしまうことになるからな。ご両親には既に了解を貰っているし、君が我が国に帰ることになったとしても、身分は保証しよう」
だからこそ、フランス政府による〝先行投資〟という形を伴ってしまうが、エフィアを日本へ送り出すことで何らかの伝手を作っておきたいと考えた。かの国の『トーラス・シルバー』が昨春に発表した常駐型重力制御魔法式継続熱核融合炉の論文のこともあり、フランスはかつての原子力発電に代わる大規模発電システムを欲し、核兵器に代わる力の傘を欲した。
ＵＳＮＡやイギリスも動くだろうが、かの国の戦略級魔法の恐怖はこの際〝二の次〟と大統領は決断した。寧ろ、あの『触れてはならない者たち』がいる国となれば余計に手を出す方が却って危ないと判断した。この決断が後に良かったのか悪かったのかは、その時の大統領にも正直見いだせなかった。
「ありがとうございます、閣下。そのお話、ありがたく受けさせていただきます」

「うむ。今回は首相の訪日視察も兼ねてのことになるので、貴官は表向き首相の秘書官兼護衛役として日本に赴くことになる。その後は向こうの担当者と話を付ける算段になっている故、しっかり頼むぞ」
「はっ！　閣下のご期待に沿えるよう、しっかり励みたいと思います！」
　エフィアはその拝命を受けて敬礼をすると、大統領執務室を後にした。そして、彼女と入れ替わる形で入ってきた首相に対し、大統領は一息吐いた。
「どうしたかね、首相。また野党の連中が人間主義とつるんで悪だくみでもしている情報でも入ってきたのかね？」
「いえ、訪日の日程の打ち合わせにと訪れた次第ですが……メンサー少尉のあの話、本気で進めるのですか？」
「不服か？」
「いえ、そうではありません。かの『アンタッチャブル』とも呼ばれた四葉の人間を婚約者に迎えるとなれば、その彼はかなりの実力を有すると思われますが」
　日本の魔法師社会の情報は大使館を通じて報告が入ってきており、神楽坂悠元（当時は長野佑都と名乗っていた人物）のことは大統領も直接顔を合わせたことがあった。その時、大統領は悠元の並みならぬ実力を感じていた。
「そうか、首相は直接会ったことが無かったか。当時の私は大統領として未熟だったが、剛三殿に喝を入れられ、かの少年が剛三殿を嗜めていた。これを見た私は思ったのだよ。もしかすると、日本との――彼らとの繋がりを得ることが一番の国益になるのではないか、とね」
　かの国は『トーラス・シルバー』の件を見ても、魔法技術の民生利用や非魔法師が恩恵を受けられる魔法医療方面の発達が目覚ましい。つい先日ＳＳＡ（南アメリカ連邦共和国）のディアッカ・ブレスティーロ大統領が自ら訪日し、視察を終えて帰国したニュースは記憶に新しい。
　本来ならば国の面子を賭けるという意味で大統領自ら外遊に踏み

切りたかったが、側近たちが死に物狂いと言わんばかりに止めてきたので、次善策として首相に行ってもらう形とした。なお、大統領直筆の手紙を首相に持たせ、今上天皇と内閣総理大臣、そしてエフィアが嫁ぐ相手となる神楽坂家の先代当主と現当主に渡すよう厳命している。

「かの国の戦略級魔法のこともあるが今は置いておこう。もしかすれば、この繋がりを経る形でイギリスやドイツに先んじることも夢物語ではないだろう」

諜報機関の調べによれば、ＵＳＮＡ内部で日本に対して何らかの攻撃を仕掛ける予兆らしきものが見られ、フランスから見ればドーバー海峡の向こう側にあるイギリスに関しても日本のパワーバランスを懸念するような世論が見られていた。

ドイツに関しては、昨夏のローゼン・マギクラフト関連騒動の影響が残っており、当分は日本に対してのアプローチは避けるような動きが見られた。なればこそ、年明けのこの時期に国のナンバー2である首相が外遊で訪日するのはまたとない好機になると見込んでいた。

「そうでありますな……アフリカの件は如何いたしますか？」

「そうだな……確か、元々海軍派遣をするつもりでいたな。その領土の防衛と駐留のために少尉の所属している基地の連中を同行させ、陸は彼らに一任しよう。メンサー少尉の故郷を守るためといえば、彼らも海の連中も嫌とは言うまいとは思うが、どうかね？」

なお、大統領の決断とエフィアの日本行きを知った兵たちが「少尉が日本で頑張るんだ。俺たちが腑抜けてたら顔向けできねえ！　そうだろう！」という謎の根性理論が発揮されていた。この基地の面々の大半は3日ほど剛三の厳しい指導（軍事大臣からの依頼によるもの）を受けており、その際に身に付いた経験によって裏打ちされた実力は、今やフランス軍屈指の精鋭部隊と化していた（エフィアの親衛隊に目を瞑れば、の前提は付くが）。

それがエフィアの故郷であるニジェール・デルタ地域に派遣され、襲撃する大亜連合の兵士をまるで小石を蹴飛ばすが如く蹴散らしていくことになるのは……そう遠くない未来の話であった。

◇　◇　◇

その頃、ＳＳＡ――南アメリカ連邦共和国の首都ブレスティーロ（剛三命名で、ディアッカは固辞したかったが周囲の後押しに屈した）にある大統領府にて、訪日を終えて帰国したディアッカ・ブレスティーロ大統領は側近から報告を受けていた。

「何？　ＵＳＮＡできな臭い動きだと？」

「はい。ニューヨークにある現地の大使館からの報告です」

ＳＳＡ内での反魔法主義は完全に封じ込めた。彼らの中にはゲリラ活動を目論んだ者もいたが、精鋭の対ゲリラ部隊が即座に鎮圧したという報告を受けている。それとは別に、未だＵＳＮＡで精力的に活動している人間主義の動きが最近鈍化しつつある、という大使館の報告を持ち込んだ。

普通ならば喜ぶところかもしれないが、ディアッカはこの動きを訝しんだ。最近は特に彼らの資金源に繋がる様な企業や銀行などが潰れたなどという報告は受けていないし、メディアも精力的に活動しているのは確かだ。

となると、ディアッカは動きを見せていないＵＳＮＡ西海岸に目を向けた。

「西海岸の方はどうなっている？」

「西海岸ですか？　そちらからは特に報告が上がっておりませんが」

「小さなことでもいい。普段と異なる動きがあれば知らせるようにしてくれ」

「は、はいっ！」

普段なら自国のことで手一杯だろうが、人間主義の問題は何もＵＳＮＡに限った話ではない。かの国から飛び火してこの国が巻き込まれる可能性だってある。ディアッカが指示を飛ばすと、側近は慌てるように執務室を後にした。それを見送る様にディアッカは椅子に座り、大きく息を吐いた。

（ＵＳＮＡは一体何を考えている？　そんなに世論が大事か？　魔法師だって魔法が使えなければ非魔法師と何ら変わりないというのに……いや、何もかの国に限った話ではないが）

この国は偶々『十三使徒』――――戦略級魔法師がいるが故に国家の成立を許された。今や戦略級魔法は核兵器に代わる〝抑止力〟としての役割を自然と担ってしまっている。それを理解できるだけの非魔法師が少ないというのも問題なのだ。

ディアッカはそう思いながらデスクに置いた鞄を開き、紙媒体の資料に目を通す。それは、訪日で得た成果――――魔法医療技術に関する協定書であった。

魔法医療機器自体が完全なブラックボックス状態で購入し、それを扱う医療従事者を〝留学〟と言う形で送り出す。魔法の秘匿性を守るための必要な措置として、ディアッカはその条件を呑んだ。議会から質問は出るだろうが、ＵＳＮＡのことを考えればこの秘匿性を遵守するのが妥当であると踏んだ。

（この分野が上手く軌道に乗れば、非魔法師からの追及も自ずと減るだろう。言いたい輩は出てくるかもしれないが、あくまでも魔法は〝技術〟であり〝技能〟なのだ。新たな人類に至るための〝種〟ではない）

人は類人猿からの進化の過程で様々なものを使えるようになったことで進化の道を歩んできた。だが、ディアッカから見れば魔法は未だ人の手に余るものとも思えた。しかし、一度手にしてしまった以上は適切に扱わなければならず、行き過ぎた人間主義による隔離は、将来魔法師による反乱を引き起こすことになりかねない。人間主義を唱える連中は最悪の未来を本当に回避できると思って行動しているのだろうか、と思う。

なればこそ、施政者としてあるべき道を模索し続けることこそが自分に課せられた使命なのだ、と思いつつ訪日によって得られた情報を丁寧に精査していくのであった。

機密保持に爆発は付き物

ＵＳＮＡ政府に人間主義と通じていたり、彼らを利用しようとしている輩は何時の時代も無くならない。悠元と元継、そして澪の会話は続く。

「……それって、ＵＳＮＡ政府のスキャンダルってことだよね？」

「有体に言えば。まあ、しかもテロを起こそうとしている連中の支援すらしていますから」

「もしかして、エドワード・クラークもその一人か？」

「まあ、正解」

北アメリカ合衆国国家科学局――通称ＮＳＡ（Ｎａｔｉｏｎａｌ Ｓｃｉｅｎｃｅ Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ）と呼ばれるこの政府機関なのだが、名前だけ見ても魔法関係か科学技術研究の機構という風に見えるだろう。表向きは情報セキュリティを含めた技術振興の為の政府機関だと謳われているが、実態は違う。

ＮＳＡ――英語による正式名称は〝Ｎａｔｉｏｎａｌ Ｓｅｃｕｒｉｔｙ Ａｇｅｎｃｙ〟。これは、旧合衆国において国防総省の政府機関の一つであるアメリカ国家安全保障局（以後旧ＮＳＡと呼称）の通称であり、国家科学局は旧ＮＳＡの存在を隠す為に設立され、旧ＮＳＡのシステム設計に大きく関与している。その最たるものが全世界情報傍受システム『エシェロンⅢ』に他ならない。

しかも、旧ＮＳＡの規則に存在した「ＮＳＡは中将によって指揮される」がＮＳＡでも健在であり、現役の陸軍中将がＮＳＡの長官を務めている。

ＮＳＡは事実上ＵＳＮＡ軍の組織の一部でもあり、『エシェロンⅢ』を含めた情報の機密保持の観点から一種の治外法権を得ている組織。そのシステムの開発者の一人であるエドワード・クラークはその功績を鑑みて実質的に少将もしくは准将クラスに近い権力を有している。これがスターズ総隊長であるリーナに対して強気でいられた理由の一つだ。

「そのエドワード・クラークって、どういう人なの？」

「表向きは情報セキュリティを主とした専門家、いわば学者です。その実態はＮＳＡのエージェントの一人にして、世界を牛耳ろうとする野心家です」
「世界をって……ＵＳＮＡの大統領にでもなる気なの？」
「彼のプランの過程にはそれが含まれるかもしれませんね」
　内密に『エシェロンⅢ』のプログラムを覗いたところ、エドワード・クラークが手を加えた個所がいくつか見つかり、それを解析したところ……得られたデータの中で四葉家に関するデータをクラークの自宅にあるサーバに送信するよう仕込まれていた。明らかな私的流用に相当する行為だが、これを未だに咎めないのは国益に反する行為ではないとＵＳＮＡ政府や国防総省が判断しているからだろう。
　仮にクラークがＵＳＮＡ大統領になったところで、正直破滅の道しか見えないのは自分だけだろうか。「おい、達也を敵に回すとか正気か？　死ぬわ、アイツ」という感想しか出てこない。最悪ＵＳＮＡが氷河期と化すか、焦土と化すか、地球上から消えかねない未来しか見えない。
　『十三使徒』の一人である澪にこのことを話すのは、国家の守りを担う者としての役割に加え、将来の顧傑捕縛に協力してもらう腹積もりだからだ。
「……正直、スケールが大きい話だけど、ＵＳＮＡが本気で牙をむくと？」
「『灼熱と極光のハロウィン』が大きな要因でしょうね。間違いなくイギリスと新ソ連も首を突っ込んでくるでしょう」
　イギリスは『エシェロン』運用の片棒を現在でも担いでいる（元々『エシェロン（前世ではエシュロンと呼ばれていた）』はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドで結ばれたＵＫＵＳＡ（ユークーサ）協定国で運用していると考えられている）ため、その繋がりでイギリスを引き込むことは十分可能。
　新ソ連の場合は『ハロウィン』でベゾブラゾフが悠元の戦略級魔法に押し負けたことから、その雪辱を果たさせるためにクラークが接近することはあり得る話だ。

「それに、ＵＳＮＡの場合は前例があります。昨年の冬、留学と称して派遣されたＵＳＮＡの面々の中に『スターズ』がいて、総隊長アンジー・シリウスまでいました」
「……ねえ、そんな報告なんて父から聞いていないんだけど」
「その事件の際に九島閣下がパラサイトと呼ばれるプシオン情報体を旧第九研に持ち帰り、その過程で作られた『パラサイドール』が九校戦のスティープルチェース・クロスカントリーで使用されました」
「は、え、ええっ!?　何でそんなことになってるの!?　それこそ一番問題じゃない!!」
「……俺は予め聞いてたが、改めて聞かれるととんでもないことだな。十師族落ちじゃなく数字剥奪でも足りんぐらいだ」
　澪からすれば、五輪本家にいた間も父親である当主から師族会議の報告は聞いていた（健康になったことで、勇海も国防の観点から必要な情報として澪に話していた）が、パラサイト関連はおろかその過程に九島家が関与していたことはまさに青天の霹靂としか言いようがなく、大きな声を上げて驚いていた（言うまでもなく遮音の結界は張っている）。元継は『神将会』の絡みで予め聞いていたが、それでもその内容に驚きを隠せなかった。
　澪に対して言わなかったが、ここに至るまでに七草家も関与していると知ったら、澪は間違いなく絶句するだろう。あとで知ったことだが、五輪洋史と七草真由美の婚約を解消し、しかも五輪家が三矢家に対して婚約の打診をしたと聞いたときは、五輪家は辛うじて巻き添えを回避した形となったことに内心で安堵した。
「閣下がその行いに踏み切ったのは、孫である光宣にありました。まあ、その辺の処置は済んでいますが、九島家の目を誤魔化すために藤林家で療養してもらっています」
「……まあ、悠元君だから何をしたのかすぐに分かったけど。それで、私は何をすればいいの？」
「話が早くて助かります。実はこの国に対してテロ行為を働こうとする人間がおりまして、彼を抹殺しようとＵＳＮＡ軍がスターズを送り込んでくると思われます。その際、澪さんにはＵＳＮＡ軍の艦船を封

じ込めるために『深淵（アビス）』を使用してほしいんです」
達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』に比べれば澪の『深淵（アビス）』は規模も威力も十分調整可能なラインなので、ＵＳＮＡが何かしら言ってくるかもしれないだろうが、テロリストの国外逃亡を封じ込めるために使用したと政府に声明を出させることまで織り込んでいる。飛行デバイスを使用した場合は飛行術式に仕込んでいる〝ブレーカー記述（セーフティー）の一環で、術者の想子保有量が一定以下のラインに到達した場合、強制的に降下させる仕組み〟を強制作動させればどうにでもなると踏んでいる。
「予め民間の艦船にはテロ対策の厳戒態勢という名目で関東圏および太平洋側の夜間航行を禁止します。守らなかった船がいるとすれば、後ろめたい事情を抱えている艦船ぐらいでしょうね」
「顧傑が日本海側に逃げる可能性は？」
「それは難しいでしょうね。箱根に神楽坂、中部地方の四葉、群馬に上泉がいて逃げ果せたら神業と褒めてもいいぐらいです」
「あ、それは無理よね」
何せ、剛三が顧傑を〝自ら引導を渡す〟と豪語している以上、上泉家による北関東の監視網がかなり厳戒な体制になるのは想像に難くない。師族会議が行われる箱根でテロ行為を働けば神楽坂家を本気で怒らせることになり、護人の二家は揃って政府にテロリストへの断固とした対応を迫ることになる。そうなれば、政府も弱腰だと非難される前に迅速な対応を迫られるだろうが、報復を恐れて何も出来ない可能性が高い。
尤も、そうなってもいい様に打ち合わせは済んでおり、今上天皇には昨年末のクリスマスの会談で話を通している。いつまでも政府が弱腰のままでは国防軍が好き勝手するのも無理はなく、こちらとしても政府が本腰を入れて文民統制をしてもらわなければ困るのだ。
悠元の言葉を聞いた澪は即座に不可能だと判断し、これには元継も苦笑していた。
「その首謀者は昨春の師族会議で母上が話した顧傑と呼ばれる人物です。彼が得意とする術は神仙術の一つで人体操作――――とりわけ死

体を操る死霊使い（ネクロマンシー）です。生体を感知するセンサーでは当然感知できない対象です」
「悠元、もしかしてここ最近横須賀で頻発していた貧民の消息不明の事件と関係があるのか？」
「ほぼ間違いないと思う。顧傑はそれにＵＳＮＡで盗んだ旧式のミサイルの炸薬を括りつけ、自爆テロをする腹積もりだ」
　死体操作なら対象の抵抗を受けることがないし、必要最低限のコマンドを撃ち込むだけならそう難しくなく、爆破の際に接続を切れば顧傑が反動を受けることがない。だが、相手が師族会議を狙っているのであれば、それはそれで好都合。顧傑にノーリスクでテロが決行できると思ってくれればこちらとしてもありがたいのだ。
「テロに関しては何かあるんでしょうから、これ以上は聞かないけど……それで、九島家のことはどうするの？」
「無論、責任は取って頂きますが、九島烈には師族会議の提唱者として最後の仕事をしてもらわないといけません」
「……切腹？」
「何でそうなるんですか。戦国時代でもないんですから……九島家は次の選定会議で師補十八家に落ち、基本１５期６０年間、師補十八家から十師族への昇格を認めません」
　この〝刑期〟設定は旧第九研設立から計算した年数で、本来なら『伝統派』の和解を積極的に行うべき責務を放棄したものとして見做し、国益に適うだけの働きをすればそれに応じて期間の短縮も認めるというもの。
　どんな事情があろうとも、少なく見積もっても３０年以上『伝統派』の問題を放置し続けたことは言い逃れできない事実。それは九鬼・九頭見の両家にも言えたことだが、近畿地方の守りを疎かにするわけにもいかない為、彼らは今回対象に含めなかった。
「更に、現当主である九島真言は１年以内に当主の座を退き、九島家次期当主の任命権を藤林家に委ねます。藤林家は九島閣下の末妹が嫁いでいますし、パラサイドールの一件では九島家の動きを看過したのですから、それぐらいの責務は負ってもらわねば話になりません」

「ほ、本気で言ってるの？」
「至って本気ですよ。今まで九島烈に頼りきりだったツケが回りまわった結果です。ちなみにですが、光宣は選定会議の前に壬生家へ養子に出すことが決まりました。名目上は国立魔法医科大学に併設する附属病院への入院です」
　壬生家の大黒柱である壬生勇三は新陰流剣武術の門下生であるため、その縁を頼った形だ。何で他人の家督継承に口を出さなければならないのかと思うところだろうが、これで九島真言がパラサイドールの開発に注力すれば、それに協力している佐伯少将諸共〝最前線送り〟に出来る手筈が整うことになる。
　これは最終通告であり、これを機に足を洗って真っ当に生きるのならばそれで構わない。そうでないなら潰すだけ。立ち直るチャンスを与えたのだから、それを生かすか殺すかは今度の九島家次第という他ない。
　言うまでもない事だが、響子を通して四葉家に、光宣を通して十文字家に助けを求めようとしてもそれは絶対に許さない。自分が神楽坂家当主となった以上、神楽坂家と九島家の確執は既に他人事の領域ではないのだから。
「澪さん、ここで話した内容についてですが、顧傑が師族会議を狙っているという情報は既に四葉家と三矢家に伝えています。なので、そのことだけは五輪殿に伝えても構いませんが、いかなる電子媒体を決して通さないでください。それと、ＵＳＮＡ関連と九島家のことも〝国家機密〟に準ずるものとして決して口外しないでください」
「それは分かったけど、オンラインを通してはいけない理由って？」
「顧傑はハッキングツールを持っています。ほぼ全ての通信や情報を傍受できるツールと言えばいいですか。なので、五輪殿にお伝えする際は遮音フィールドを必ず張って口頭だけで伝えてください」
「……分かった」
　明確に『フリズスキャルヴ』とは言わなかったが、ハッキングツールを有しているという理由で澪は事の重大さを悟り、頷いた。相手がこちらの情報を掴む手段を有しているというだけでも衝撃的だった

のだろう。自分たちにもできるのだから、相手に出来ないなんて道理はない、と考えて行動するのが普通だと思う。

ともあれ、五輪家にも師族会議が狙われる可能性がある、とだけ言い含めておけば協力も得やすいと考えた。師族会議の開催場所を意図的に隠さなかったのは、顧傑に確実に攻撃してもらうためだ。

顧傑は何も理解していない。

師族会議の開催場所である箱根で自爆テロを起こすこと。それは、顧傑が四葉家の居場所をこの国から無くすことではなく、彼を基点としてこの国の人間主義者の勢力がほぼ壊滅に追いやられることに。顧傑の行いが非魔法師による行き過ぎた魔法師への迷惑行為を非難することに繋がるのだと、彼はまだ知る由もなかった。

◇　◇　◇

その頃、達也は『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』の設計の取りまとめをしていた。魔法工学関連では超高校生級の達也でも非魔法分野――――とりわけ工業系統の技術は高校生の域を出なかった。

だが、悠元は工業系統において「一流の科学者や技術者と遜色ない」という牛山の評価から、間違いなく世界でもトップクラスの実力であり、計画を進める上でなくてはならない存在とも言えよう。

（悠元が転生した存在というのも逆に頷けるな。寧ろ、こればかりは悠元に頭が上がらんな）

達也は『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』という名前が付く以前に悠元（その当時は長野佑都であったが）へ最初にこの計画の協力を持ち掛けた。すると、悠元は快く協力を引き受けてくれた。達也が考えた『ＥＳＣＡＰＥＳ』の綴りを見て、「これでは長すぎるし、メインコンセプトが掴みにくい」ということで、『特型恒星炉太平洋循環エネルギー送電システム』（Ｅｓｐｅｃｉａｌｌｙ　Ｓｔｅｌｌａｒ　ｄｒｉｖｅ　Ｃｉｒｃｕｌ　Ａｔｉｏｎ　Ｐａｎ　ｐａｃｉｆｉｃ　Ｅｎｅｒｇｙ　ｌｉｎｅ　Ｓｙｓｔｅｍ）の名称になった。そして、達也が現在考えている４つのスキーム――――『恒星炉』による発電、生み出した電力と高熱を利用した高熱水蒸気電解法による水素ガスの生成、逆浸透法による海水から真水を取り出す、濃縮した海水から有用物質と有害物

質を取り出す――だが、これら全てを悠元は実行しようと言い出したのだ。
現在、南盾島で既に『恒星炉』が稼働実験を行っており、魔法式の保存に必要な人造レリックに関しては完全に製造の目途が立った。既存の物質を特殊な条件下で生成することによって人造レリック『オモイカネ』が作られた。このレリックは現状２４時間（現状は稼働チェックの為に１２時間毎と規定）魔法式による魔法継続発動が可能となっている。
このレリックには位置情報を認識する魔法式が予め設定されており、特定の処置を施した上で運ぶことが必須で、仮に盗み出して国外に持ち出したとしても２４時間後に半径１０メートル以内を巻き込む爆発を起こして消滅する仕組みだ。その時間内に解析しようとしても、特定の想子波長を同時に１３個流さないといけない上、『オモイカネ』はそれぞれ固有の波長が割り振られており（一種のセキュリティキー）、その想子波を特定のタイミングで流さないといけない。３回失敗すると当然爆発する。
もし、『恒星炉』の技術を国外に輸出する際、別の人造レリック『マジストア』を用いる。こちらの場合は『オモイカネ』と異なり、保存した魔法式で魔法を発動し続けられるのが現状６時間と設定されている（既に１２時間に延長可能だが、当分は様子見としている）。当然、こちらのセキュリティも『オモイカネ』と同系統のもの（『オモイカネ』のものとは別物であり、解析による盗難を避けるための措置）を採用している。そのどちらも製造ノウハウを有しているのは悠元に他ならない。
つまり、達也と悠元の両方に許可が出なければ『恒星炉』の技術提供を受けることが出来ないようになっている、というわけだ。
達也も魔法協会を通じて非魔法分野の協力を仰ぐつもりだが、悠元が神楽坂家当主となったことでその傘下にある神坂グループ（存在自体は悠元から聞いている）には工業系などの非魔法分野が多く、彼の婚約者の一人である雫の実家こと北山家――ホクサングループの協力も得やすい。

（悠元は俺のことを「二度と戦いたくない奴」と評していたが、俺からすればそれは俺が言いたい台詞だな）

悠元は達也の力を認めているからこそ対立したくない、と述べていたが、達也は自身が持たない権威と権力を有する悠元を認めているからこそ対立したくないと思っていた。お互いに「一番戦いたくない相手」と評していることに、達也は思わず苦笑が漏れた。

元々ＣＡＤ設計能力の高さを見込んでの協力関係だったものが、いつしか親友・戦友の関係となり、そして魔法師を兵器という宿命から解放するための仲間となり、将来は従妹である深雪が悠元に嫁いで家族の関係となる。

人の縁というものは本当にどう転ぶか分からないな、と達也はモニターに映る計画の概要文を見ながら笑みを零したのだった。

桜に撒いても花が咲かない灰

この世界では深雪とほのかが同じ相手を取り合うことが起きていないため、生徒会の中も和やかな雰囲気を保っている。その反面、自分の影響で達也と深雪の素性を〝些事〟の如く片付けられることは何だか癪だった。

ともあれ、悠元は部活連会頭として風紀委員会室を訪れていた。特にクラブ活動のトラブルは起きていないし（ＣＡＤ規制が緩む新入生勧誘週間を除く）、校内でトラブルめいたことは確認されていない。

「悠元。呼んでくれればこっちから出向くのに」

「幹比古だってそうそう暇でもないだろうに……これ、巡回メンバーからの報告だ」

「ありがとう、助かるよ」

流石に風紀委員だけで取り締まるのは限度があるため、部活連の巡回当番と協力して校内の違反行為に目を光らせている。普段なら誰かに頼むところだが、今回ばかりは悠元が動くべきだと判断した。その内容はメンバーから受けた〝気になる報告〟が主であった。

「……部活連でも同じ報告があったのか」

「ああ。実際の被害は出ていないし、警察に届け出ても取り締まっていないそうだ。被害が無ければ動けないからな」

それは、最近魔法科高校の生徒を対象に盗撮やストーカー行為を働いている、というものだ。年明けからそういうものがあったことは気付いていたので、その連中の顔を見て調べたところ、人間主義者の団体ということは直ぐに分かった。

明らかに昨年まではなかった動きとなれば、外部から入り込んだ面々なのは間違いなく、調べたところではＵＳＮＡで活動している日系人の反魔法主義者の団体があり、そこが関与している。言うまでもなく顧傑の息が掛かった連中なのは間違いない。

「暴言を放つ時点で大人げないだろうが、この先エスカレートしないとも限らない」

「正当防衛で魔法の使用をすることに対して過剰防衛だと謳うってこ

とかい？」
「可能性は大いにある。これは直ぐに生徒会へ報告しよう」
今すぐ対処しないのは、彼らに暴力的な行動を起こさせることを目的としているからだ。万が一魔法技能を喪う生徒が出た場合、その部分の対処はきちんと請け負うつもりでいる。
ああいった声が大きいヒステリックな連中程、焚き付ければ簡単に攻撃してくる。顧傑からすれば焚き付けるための燃料を持ってきたつもりだろうが、生憎それで焼かれるのは顧傑本人だ。尤も、死に掛けの老人を焼いても何の有難みも湧かないし、灰を桜に撒いたところで桜の木が腐りそうな気がする。
そんなことはともかく、幹比古と一緒に直通階段を通じて生徒会室に向かい、このことを報告した。無論、報告を受けたのは達也だった。
「ふむ……なら、全校生徒に注意を促した方がいいだろうな」
「それと、出来る限り一人で登下校しないように注意を促そう。流石に複数相手なら手を出しにくくなるだろうから、当分はそれで様子を見たほうがいいだろう。生徒会長はどうかな？」
「ええ、ではそのように対処します」
下手に手を出しにくくするには、今のところ複数での登下校が望ましいと考えた。
悠元は少し考えた上で、幹比古にお願いをすることにした。
「幹比古、被害にあった生徒の状況を今のうちに纏めてほしい。今後の被害の推移は予測できないが、傾向は掴んでおきたい。部活連の方は俺が責任を持って纏めるから」
「分かった、出来るだけ早く纏めるよ」
その被害を受けた場所や時間帯（少なくとも制服を着ている平日の登下校が多いと思われるが、休日に狙われている可能性もある）、可能であれば相手の身なりを確認することでどれだけの組織が関わっているのかを炙り出す。部活連に来ている分は既に詳細の情報を纏めているが、風紀委員会や生徒会との情報を合わせればより正確なデータが取れると踏んでいる。
「なら、生徒会の方は俺が纏めておこう。悠元はそれでいいか？」

「ああ、構わない。ま、一時的なもので済めばそれで良しとすればいいし、また再発した時の参考にもなるだろうからな」
尤も、この犯罪まがいの行為は少なくとも続くのは明白。何せ、これを煽っているのは顧傑も一枚噛んでいるが、人間主義者を煽り建てている人間は他にもいる。その一つがＵＳＮＡの大統領次席補佐官ケイン・ロウズを含む議会のグループに他ならないのだから。
◇　◇　◇
1月19日、土曜日。
達也と深雪、そして悠元の噂も落ち着いて普段通りの生活へと戻っていた。一部で変化はあったものの概ね平穏を取り戻している中、昼休みの食堂では香澄と泉美、そして理璃が昼食を食べていた。そしてこの三人、奇しくも婚約者として申し込んでいる、或いは婚約を認められた者同士という組み合わせだった。
「ここ数日、あの噂も大分落ち着いたよね」
「達也先輩と深雪先輩、それに悠元兄様の噂ですか。いつまでも賤陋（せんろう）な性根でいられると困ります」
「……『せんろう』って何？」
「身分とか人格を指す言葉で、卑しくて品がないって意味だよ、香澄」
泉美の時折難しい言葉に香澄が疑問を唱え、それに対して理璃が答えている。元々七草家と十文字家は同じ関東地方の監視・守護を担っていて、更には卒業生の克人と真由美が同学年ということもあり、三人が一緒に居ることをごく自然のことだと周りの生徒は見ていた。親衛隊と呼ばれる様なものこそないが、「昔のアイドル」のような扱いを受けている形だ。
「よく知ってるね、理璃」
「私は元々そういう家系の生まれだからね。まあ、要するにいつまでも野次馬根性で騒ぐな、って言いたかったんでしょ？」
「ええ、理璃さんの言う通りです」
理璃からしたら、香澄ですら知らない言葉を一体どこから吸収しているのか疑問に思うほどだったが、香澄は率直な意見を口にした。
「だったら最初からそう言えばいいのに」

「私は上級生の皆さんを『下衆』だなんて呼びたくありません。当校の生徒は皆様紳士淑女だと信じたいですから」
「ねえ、香澄。私は泉美が一番容赦ない言葉を浴びせてる気がするのだけれど、気のせいかな？」
「大丈夫だよ、理璃。私もそう思ってるから」
　泉美がそこまで辛辣な言葉を述べていることに、その理由が泉美の好いている相手が含まれているからだと察しつつ、理璃は香澄に尋ねると、香澄もそれには同意するように呟いた。すると、泉美は二人の会話が聞こえているのか、笑顔を浮かべたままこう言い放つ。
「そんなことはありませんよ、香澄ちゃんに理璃さん。私は皆様の本性が下衆だと断定して述べているわけではなく、一時の気の迷いで卑しい興味に取り憑かれたと思っているだけですから」
「難しい言葉を使えば本音を隠せるものでもないと思うけど……」
「何か言いましたか、香澄ちゃん？」
「な、何でもないよ！　ね、理璃！」
「う、うん！」
　理璃も香澄や泉美と関わることで泉美の本性を知ることとなり、その意味では香澄の苦労人気質を一番理解する人間となった。泉美の追及に対し、食事のマナーを盾にどうにかやり過ごしつつ、香澄は理璃と泉美に尋ねた。
「そういえば、生徒会はどう？　特に変わりない感じ？」
「そうだね。無理をしているような感じもなかったし」
「寧ろ、予め覚悟を決めていたような雰囲気を感じました。もしかすると、心を許せる方々には予め知らされていたことかもしれません……まあ、単なる予測ですが」
（泉美の場合、その勘が当たっていそうだから怖いんだよね……）
　実際のところ、生徒会メンバーの中で一番驚きそうなほのかですら特に動揺することなくいつも通りに仕事をこなしており、悠元が来ても深雪が惚気る様子もなく、キチンと一線を弁えている様子が見られた。それを見た泉美の乙女の勘めいた予測に対して香澄は内心で毒づくように呟いた。

「何にせよ、当人たちが弁えているのに、不躾な目線を向けて無責任な噂話に興じる方が多いようでは、雰囲気が多少悪くなったとしても不思議ではありませんね……あくまでも一般論ですが」
（いや、思いっきり私情入っているよね？）
その泉美の言葉に心当たりがあったのか、周囲で聞いていた同級生が俯いて縮こまっていた。それを得意の空間認識能力で瞬時に把握した理璃は泉美の言葉に対して口に出すことなく、心の中で呟いたのだった。

◇　◇　◇

おおよそ同じ頃、国立魔法大学の食堂も賑わっていた。
その中には防衛大学校特殊戦技研究科からの聴講生も含まれており、あるテーブルに一緒に座る三人の内一人の女学生が防衛大で魔法士官として訓練を受ける魔法師の一人だ。とはいえ、見た目上は魔法大学の学生とそこまで大差があるわけではなく、明るく笑う姿は、魔法大学の学生はおろか一般的な女子大学生と変わりないものだった。
「もう、摩利！　そこまで笑わなくてもいいじゃない！」
「すまんすまん。しかし、真由美がようやく重い腰を上げたのかと思うと、笑わずにはいられなくてな」
笑った方の女学生――――元第一高校風紀委員長の渡辺摩利は謝罪しつつもまだ笑い続けており、これには向かい側に座る元第一高校生徒会長の七草真由美が摩利を睨みつけていた。
睨んでいるのは怒りというよりも羞恥によるもので、何も笑う事じゃないだろうに、と言わんばかりに捲し立てつつ、真由美は摩利の隣にいる女学生こと元第一高校の五十嵐亜実に助けを求めた。
「つぐみん、摩利が私を重い女のように扱ってくるんだけど、酷いと思わない!?」
「いや、実際に重いんじゃないかな。主に家柄的な意味で」
「ぐっ……いや、そっちを抜きにしてもよ！」
相手が十師族の直系だというのに、バッサリ斬り捨てるがごとく言い放たれた亜実の一言に対して真由美は一瞬言葉を詰まらせたが、それでも摩利の発言がどうにも納得いかなかった。

昼休みの時間も無限ではないため、亜実は話を進める方向に舵を取りつつ会話を進める。
「はいはい、真由美の細かい事情は後日聞くとして。それにしてもねえ、摩利……」
「そうだな。まさか結婚に関する質問状を今の悠元君の実家に送り付けるとはな」
「結婚じゃなくて婚約よ！」
亜実の場合は六塚家次期当主の婚約者としてすでに発表されており、摩利の場合は修次との付き合いだけでなく将来結婚することも視野に入っている（双方の親が認めている）ため、三人の中ではある意味〝行き遅れ〟状態となっている真由美の指摘に対して「どう違うんだろうか？」と揃って内心で首を傾げていた。
「真由美が悠元君に気があるのは知ってたけど……一高のあの噂もあるの？」
「……あれは噂じゃないのよ。昨春の入学式で会った時、二人が恋人だって認めてたのよ」
「その時には、か……」
亜実が尋ねた噂というのは、第一高校の生徒である神楽坂悠元と司波深雪が恋人同士である、という噂であった。元々彼らが入学して1週間ほど経った頃に出た噂で、本人たちも特にその噂を気にするような素振りは見せていなかった。
真由美はその噂が本当なのかどうかを確かめる意味でも悠元に対してスキンシップを取っていた。それによって深雪の機嫌が悪くなるという現象は三人の中で当事者の真由美を除けば摩利が一番目撃しており、よく拳骨を落として引き剥がすことが多かった。
そして、昨年4月の入学式の際、真由美は悠元と深雪が本当に恋人として付き合っていることを知った。実を言うと、一昨年の8月の九校戦の祝賀会で二人の雰囲気の変化に気付いて真由美が問い詰めたが、悠元が一切ボロを出すことが無かったため、思い過ごしだったとその場は追及を諦めた。
「私は婚約先の関係で知ってるけど、摩利は二家の通達と書状ぐらい

しか知らない感じ？」
「まあ、そうだな。渡辺家の義理の姉が三矢家に嫁いでいるが、それ以上のことは特に聞いていない」
「実はね、悠元君と深雪さんの婚約に対して、一条家が深雪さんと一条将輝君の婚約が可能かどうかの質問状を四葉家に送ったそうなの」
「は？　いや、無理筋じゃないか？」
　実際の話、一昨年の九校戦終了後に行われたダンスパーティーで、一条将輝が深雪にダンスのパートナーをお願いして、一緒に踊ったという記憶は摩利も亜実もある。その時の将輝の表情が〝恋を抱く男子〟だということも二人は直ぐに読み取っていたし、真由美に至っては先日京都で一緒に行動していたことから知っていることだった。
　だが、いくら一条家の跡取りとはいえ、神楽坂家現当主の婚約者に実質的な〝横槍〟を入れる様な行いであり、正直神楽坂家の勘気を被ってもおかしくない案件に違いない。
「確かに一時期三矢家と四葉家の接近の噂は聞いていたが……あの三人が一緒に住んでいるとなれば、そう邪推する輩が出てもおかしくはなかったわけだ」
「えっ!?　何それ、初耳よ!!」
「え、知らなかったの？」
　摩利はおろか亜実ですら達也と深雪が住んでいる家に悠元が居候している事実を知っていたが、真由美は初耳とも言える情報に声を荒げた。二人はてっきり七草家の人間である真由美なら既に知っているものと勘違いしており、真由美の新鮮な反応に思わず目を丸くしていた。
　これは一昨年のバレンタインの際、真由美のふとした思い付きに便乗した弘一が悠元の素性を調べたことに起因する。三矢家の役割を阻害するような行為に対して厳重な抗議を受けたため、真由美は悠元に関することの調査はしないように心掛けていた。それも、生徒会長なら閲覧しようと思えば見れる現住所などのパーソナルデータも見ないようにしていた。
　なお、同じ家に住んでいるかどうかの真偽はともかく、達也と悠元、

深雪（彼らが2年となってからは水波も加わる）がほぼ一緒に登下校しており、生徒たちの間では近所に住んでいるのでは、と憶測が飛び交うほどだった。
　今回の発表によって悠元と深雪が婚約者となったことで、別段同じ家で暮らしていてもおかしくはないということに加え、校長室での会話を偶然聞いた生徒から二人が同居（同棲とも言えるが）している事実が広まった。
「真由美が意外と乙女だったとはな」
「……ねえ、摩利。私を何だと思ってたのよ」
「猫被り腹黒女と評価すればいいか？」
「それはもう悪口じゃない！　私はあのタヌキじゃないもん！」
「もんって……」
　狸親父の娘が猫というより〝女狐〟というのは親子間の化かし合いにしかならないな、と摩利は思いつつも、話を一条家の質問状に関することに戻した。
「あたしは一昨年の九校戦で見ていただけだから、そこまで詳しいという訳じゃないが……少なくとも、その気はあったと思ったな。その辺は真由美が詳しいんじゃないか？」
「そうね……実は昨年のコンペの時に同行したんだけど、一条君が深雪さんに熱い視線を向けていたのは確かよ。悠元君は黙ってたけど、あれは間違いなく機嫌が悪かったと思うわ」
「そりゃそうでしょ。悠元君からしたら自分の恋人に一条君が色目を使ってるようなものだし……それで、便乗して真由美も悠元君との婚約が可能か打診したってこと？」
「び、便乗ってそういう訳じゃないでしょ！　大体、悠君のことは……」
　話題が悠元のことになると急にトーンダウンする真由美に対し、摩利と亜実は顔を見合わせて頷いた。これはもう、真由美が悠元に対して好意以上の感情を抱いているのは間違いない、と踏んだ。
「じゃあ、何で尻込みしてるの？　家柄で言っても悠元君は元を辿れば真由美と同じ十師族の人間。婚約者となった深雪さんが十師族・四

葉家の人間であったとしても、家格だけで見れば同等の立場だよ？」
「……なあ、真由美。以前お前の妹が悠元君と婚約していたが破棄されたと言っていたな。それが関係しているのか？」
踏ん切りがつかなそうな態度を見せる真由美の様子に対して問いかける亜実の言葉を聞き、摩利は思い出したように以前真由美が話した内容に触れると、真由美の表情が強張った。摩利の予想が当たった形となったため、真由美は観念したように話し始める。
「泉美ちゃんの婚約の件なんだけど、昨年の春に復活していたの。ただ、その際に交わした条件を父が破っていると悠君から聞かされてしまって……」
「……また破棄されちゃうの？」
「ううん。ここから先は本当に秘密にして欲しいんだけれど、泉美ちゃんの婚約が決定次第、泉美ちゃんは七草家の人間じゃなくなるの。うちの母も既に了承していることよ」
泉美に関する婚約の約定はほぼ全て秘密にされているが、「婚約が決まり次第七草家の人間でなくなる」ということだけは秘密を必ず守れる人にだけ明かすことを求めている。真由美は内密に母親のもとへ赴き、泉美に関することを尋ねると全て事実であると認めた上で弘一を通さずに神楽坂家と約定を交わしたことまで知らされた。
「成程な。ここでもし真由美（おまえ）が悠君の婚約者に名乗り出れば、お前も妹のように七草家の人間でなくなる公算が高い、ということになるな」
「……真由美は七草家の人間として生きたいの？」
「分からない。ううん、分からなくなってしまったの……」
今まで十師族・七草家の人間として振る舞い、それを誇りに思い続けてきた真由美からすれば、泉美のように愛する人の為ならば躊躇いなく家の名を捨てることが出来なかった。かといって、父親の言いなりになるのが嫌で勧めてきた縁談に乗り気でなかったのも事実だった。
一体何が正しくて何が間違っているのか……質問状の件に関しても、結局真由美は〝七草家の人間〟としての前提が伴う考え方をして

しまっている。これでは父親が今まで持ち込んできた縁談と何が違うのか、と真由美は思い悩んでしまった。
「……これは重傷だね。摩利、いっそのこと真由美を七草家から引き剥がさない？」
「な、何を言ってるのよつぐみん!?」
「だって、このままだと踏ん切りがつかないんでしょ？　家にいたところで結局は七草の名が付き纏ってくるじゃない」
　亜実の唐突とも言える爆弾発言に真由美は反論を試みたが、亜実の痛烈な正論に真由美は完全に押し黙った。このまま七草家の娘として、父親の言いなりとして生きていくのか。それとも七草真由美という人間として生きていくのか。亜実の発言はこの選択に一石を投じる形となった。
　すると、三人の姿を見て近寄ってくる一人の女学生――――魔法大学3年にして元第一高校生徒会長の三矢佳奈であった。いつもは魔法科高校の魔工科の教官として教鞭を揮っている（実務経験と論文発表実績による特例という形で教員免許を取得した）が、月に一度魔法大学に来て所属ゼミの後輩の指導を請け負っていた。
「あれ、真由美に亜実、摩利じゃない。もしかして婚約絡みで深刻な悩み？」
「どうも、佳奈先輩」
「ええ、まあ……そうだ、佳奈先輩。真由美を三矢家で預かってもらうことは可能ですか？」
「ちょ、ちょっとつぐみん!?」
「……事情を聞いていい？」
　そうして、亜実が主体となって真由美に関する事情を話した。佳奈は少し考え込んだ後、真由美に対して普段は見せることのない〝眼〟を見開いて真剣な表情で真由美を見た。これには真由美も思わず息を呑むようにして佳奈の言葉を待った。
「真由美、隠し事はせずに正直に言って。弟の、悠元のことが好きなんだよね？」
「……はい」

「それは、元は同じ十師族だから？　悠元が優れた魔法使いだから？」
「違います！　悠君は、その……」
「うん、十分脈はあるという訳だね。いいよ、亜実。真由美、今すぐ家に連絡して。私も実家に連絡して事の次第を話すから」
佳奈は真由美の心情を汲み取り、〝眼〟で彼女の気持ちに偽りがないのだと察しつつ、今は気持ちの整理が必要だと判断した。本来なら真由美の母親が諭すべきことなのだが、佳奈も七草家の家庭事情をそれとなく知っているため、あまり贅沢は言えないと内心で呟いた。
「父さんと、元継兄さんに……悠元にも話をしておこう」
「え、いや、そこまで巻き込むんですか!?」
「何言ってるの、摩利。元はと言えば家庭の和を保とうとせず、謀（はかりごと）に感（かま）けて居るあそこの当主が悪い」
佳奈がいつになく辛辣な言葉を吐き捨てたことに摩利は冷や汗を流したが、そんなこともお構いなしと言わんばかりに連絡を取り始めた。
将来四葉家に嫁ぐことをとうに覚悟している佳奈からすれば、四葉家に対して執拗に突っかかる七草家のことは弟の件も含めて許す気になどなれないが、ライバルであり可愛い後輩の一人でもある真由美を放っておくことなど出来はしなかった。
なので、これが三矢家の人間として真由美にできる最後のお節介である、とそう思いながら佳奈は電話の向こう側にいる相手に事情を説明し始めた。

紛失した爆発オチ

学校から帰った悠元は、届いたメールの相手に少し驚いた。それは自分の姉である佳奈からのメールだったが、態々暗号メールを使用するほどの案件ということに身構えつつ、メールに目を通した。

その内容を見た時、これは確かに暗号メールでないと不味いのは確かだった。

(七草先輩を三矢家で暫く預かることに関する件か……)

佳奈からのメール内容を見るに、元実家の三矢家と真由美の実家である七草家に話を通しているのは間違いないが、その中には元継と悠元の名まで含まれていることに疑問を抱いた。

今までこんなことが無かっただけに、直近で考えられる可能性とすれば七草家が神楽坂家に送付した質問状が大きく関係しているのだろう。その上で、佳奈は明日の夜に会って話がしたいと申し出てきた。

別に身内相手ならそう身構える必要もないだろうが、今回の場合は事情が事情なだけに神楽坂家当主としての案件と捉えるべきだろう。そう思いつつ、返事をすぐには出さずに隣の部屋の扉をノックした。

「佳奈先輩がですか。七草家のことなのに、何故なのでしょうか?」

深雪は悠元から事情を聞いたが、いまいち要領を得ないといった感じで首を傾げている。確かに三矢家と七草家は悠元を介する形で数々の因縁を抱えてしまっている。なので、佳奈が真由美に声を掛けて三矢家でほとぼりを冷まさせることが不思議だったのだろう。

「佳奈姉さんからすれば七草先輩は確かに同じ十師族直系の人間だが、同じ生徒会長経験者だし、姉さんは先輩を可愛がっていたからな。これが三矢の人間として出来る最後の親切心として先輩を諭したんだと思う」

「あ、成程……」

佳奈は現状四葉家次期当主の婚約者として申し込んでいるが、その佳奈に対して先日五輪家が長男の洋史との婚約を申し入れる形となった。何と言う一方通行状態の有様に対し、元が悩んだあまりその

愚痴を悠元に対して零していた（悠元は今までの恩義やかけた迷惑もあるため、大人しく元の愚痴を聞いていた）。
　どちらにせよ、佳奈が別の家の人間となる以上、真由美に構っていられなくなることが増える。とりわけ達也の婚約者となれば七草家と対立構造にある四葉家の人間となるため、一個人として真由美と接することは出来ても、時として四葉家の人間たる立場で敵対する可能性だってあるのだ。
「多分、先輩は周りに言われて混乱しているんだろう」
「混乱、ですか？」
「昨秋の名倉さんの件もそうだが、先輩は七草家の人間としての在り方が揺らいでいる。泉美ちゃんの場合はとうに七草の名を捨てる覚悟を固めているが、先輩は今までの七草家長女としての実績や誇りを捨てきれないんだろう」
　父親の言いなりになりたくない。かといって、今まで七草家長女として築いてきた全てを捨てることに真由美は恐れてしまった。その場には摩利と亜実がいたことも佳奈のメールで書かれていて、恐らく二人は真由美にどうありたいのか迫ったのだろう。
「けれども、俺への好意は紛れもなく本物だと佳奈姉さんがそう断言していた……本当に困ったものだと思うよ」
「……私は、悠元さんの決定に従います。それでも、一番を譲る気はありませんから」
「深雪……前にも言ったが、序列をそうおいそれと変える気はないし、本妻の座は深雪のものだ」
「そしたら、メールを返してからで構いませんので、声を掛けてくださいね」
　今日も深雪と一緒に寝ることは確定となり、悠元がメールを返信し終えたタイミングでノックの音が響き、寝間着姿なのだが明らかに下着を身に付けていない深雪が入ってきて、そのまま一緒に眠ることなった。
　翌朝、いつものように起きたところで朝の鍛錬に出掛けようとする達也と出くわしたところ「いつも苦労を掛けるな」と労われた。

◇　◇　◇

佳奈が指定したのは『アイネブリーゼ』だった。実は佳奈もお気に入りの店で、魔法科高校の帰りに立ち寄ってはのんびりコーヒーを飲むのが彼女なりのストレス解消法だった。

学生でありながら魔法科高校の教官職に就いているというのは異例なことで、研究者としての佳奈の能力が生かされないことを危ぶんだ一部の大人からは、彼女を政府の魔法研究機関に推挙するような動きも見られたが、佳奈自身がその道を固辞した。曰く「私の道は私が決めること。貴方方に指示される謂われはない……余計なことというと、祖父に言いつけますよ？」と押し黙らせた。

「ごめんね、悠元。いきなりメールを送っちゃって」

「別にいいよ。姉さんだって教官の仕事で忙しいだろうし」

「そっちは私の好きでやってることだから。悠元には敵わないけど」

「……いや、あの論文を一人で書き上げただけでも凄いけどね。それで、話は昨日のメールのこと？」

基本（カーディナル）コードの一つを自力で見つけ、更には重力制御魔法を熱核融合炉に対応できるような起動式記述に改良した実績は疑うべくもなく佳奈自身の実績である。そんな魔法技術に関する話はともかくとして、悠元は遮音フィールドを張りつつ話を切り出した。

「うん。私は途中から話を聞いた形だけど、あのままだと真由美がただ流されるだけの人生になっちゃうと思ってね。悠元のことが好きなのは間違いないだろうけど、このまま引き合わせたとしたら、ただ真由美が依存するだけの関係になってしまう」

「……成程。だから、冷静に考えさせるという意味で三矢家で先輩を預かるってことね」

「そういうこと。私と摩利、亜実の想いは真由美がどうありたいかを自分の意思で示すこと。私の場合は家のこともあるけど、達也君に興味があるのは事実だからね。いざとなったら知恵とコネをフル活用して黙らせる」

ほとぼりを冷まさせる意味で知り合い――――それも同じ十師族の家にいるというのは七草家としても安心材料となるだろう。そして、

真由美の護衛は暫く矢車家が引き受け、念のために上泉家も関与するとのこと。
「それで、悠元は大丈夫？　真由美を三矢家で暫く預かっても問題ない？」
佳奈が悠元を呼んだのは、真由美に対する気持ちのことは予想が付くとしても、悠元自身が七草家と数々の因縁を抱えてしまっていることを危惧したからだ。下手をすると、三矢家に対して拒否の姿勢を示すかもしれない、という摩利や亜実の不安からくるものだった。
「……姉さん。俺は先輩のことと七草家のことは別の問題だと思ってる。確かに現当主に対して憤りは持っているけど、先輩や香澄ちゃん、泉美ちゃんのことは別に嫌いだとは思っていない。でなければ、泉美ちゃんとの婚約を復活するように言い出したりしないよ」
「……そっか。なら、真由美のことは好き？」
「女性としては魅力的だと思う。家柄という面倒事のせいで全面的な好意とまではいかないけど」
「それだけ聞ければ十分かな。ありがと、悠元」
悠元の言葉を聞き、佳奈は内心で安堵すると共に納得したような気持ちを抱いていた。命の危機を抱くほどの相手を見逃したとなれば、それは最早〝敵意〟を抱いたとしても不思議ではない。だが、悠元はあくまでも最悪の結果に至らないように努力してきた。
彼の努力を無に帰したのは、他でもない七草家当主・七草弘一その人。だからこそ、佳奈もあまり好きになれなかったし、社交パーティーで呼ばれることはあっても極力七草家関係者と距離を置いて付き合っていた。
「そういえば、五輪家長男の洋史さんから婚約の申し出を受けてたけど、どうするの？」
「丁重にお断りするつもりだよ。向こうにその気があっても、私にその気はない。ただ、向こうがどうしても話したいというのなら、父に頼んで会談の場ぐらいはセッティングしてもらうつもり。こればかりは悠元に頼めないからね」
気が付けば、悠元を含めた三矢家の兄弟姉妹全員が先を決めている

という状態。これは十師族の中でも極めて恵まれた方だと言えるだろう。なので、真由美を三矢家で一時的に預かり、気持ちを整理してもらうことが出来るというわけだ。
「そういえば、アリサちゃんだっけ。あの子の資質が十文字家のと似てるんだけど、何か知ってる？」
「……十文字家現当主の隠し子だよ、アリサは」
「あー……美嘉も大変ね。最悪十文字殿が美嘉の関節技（サブミッション）の餌食になりそうね」
明らかにぶっ飛んだ会話が繰り広げられているが、美嘉は既に十文字家で家族に溶け込んでおり、この事実が明るみになった際は間違いなく和樹の後妻の子どもに味方するのは想像に難くない。
相手が誰であろうとも容赦しない美嘉の性格を考えれば、最悪和樹が四肢脱臼になっていても何ら不思議ではない、と思ってしまう自分がいた。不倫をしてその相手に子を宿し、１４年間家族に黙り続けている罪は重いのだ。
遮音フィールドは張っているが、その会話の内容を傍目から察しているアイネブリーゼのマスターは、空気を読んだようにデザートをサービスとして二人に差し出したのだった。

◇　◇　◇

セリアことエクセリア・クドウ・シールズ。前世では解答不可能とされた数学の難問を解き明かし、数学の世界的権威から認められて一躍有名となった。彼女自身としては別に名誉が欲しかったわけではなく、単に兄に褒められたいという欲求の一環でしかなかった。
転生した際にいくつかの特典を貰ったが、彼女の事象を把握する『森羅万象の眼（イデア・サイト）』と前世で獲得していた瞬間演算能力――与えられた問いに対する答えを感覚的に把握するという人並外れた力が融合し、オンライン上に存在する無数の数字列を視ただけでそこに存在する情報を読み取る能力を獲得していた。
そして、セリアは電子の海を視覚的に見るためのツール（スターズに所属していた際に作成したもので、留学の際に密かに持ち込んでそのまま自分専用のツールとして使っている。なお、セリア以外に使え

る人間がいない代物の為、セリアの私物扱いとされている）を用いてＵＳＮＡ方面のデータを覗いていた。
（あー……お姉ちゃんってば、訓練施設をまた派手に破壊してるよ……）
　セリアが視ているのはスターズ関連の情報で、その中にはリーナ（アンジー・シリウス）の物損に関する始末書のデータであった。スターズほどの魔法師部隊となると備品や施設、装備を壊すことは少なくないのだが、一等星級（ファースト）クラス――部隊で言うところの総隊長・隊長クラスとなると被害の度合いが凄まじいことになる。とりわけリーナの場合は制御が利かずに膨大な威力で設備を破壊してしまうことが多い。
　そのため、リーナだけならばまだしもセリアまで基地司令の愚痴を聞かされる羽目となり、その度にリーナを関節技で締め上げていた。体術面で鍛えているリーナですら、オリンピックのメダリストレベル以上の身体能力を持つセリアには一度も勝てたことがない。
（ん？　何コレ？　……廃棄予定の兵器が紛失した報告書？）
　すると、セリアはデータの中に妙な報告書のデータがあることに気付く。それを読み解くと、国防総省に提出されたのはＣＬ―２０（ヘキサニトロヘキサアザイソウルチタン）を主成分とする炸薬を弾頭に使用した歩兵用携帯式対空ミサイルが〝紛失〟したという情報だった。
　これにはセリアも身に着けていたＶＲ（ヴァーチャルリアリティ）型のＨＭＤ（ヘッドマウントディスプレイ）を外してツールの電源を落とし、瞼を閉じて自らの中で演算をしていく。
（確か、前世の時点だと最大級の威力を誇る爆薬の筈。この時代だと旧式扱いだけど、兵器としての炸薬の威力としては十分。軍の人間が関与してる？　それにしたって改竄の形跡があまりにも綺麗すぎる）
　唯一改竄されていなかったのはミサイルの処理記録のみ。元々旧式の廃棄待ちであった代物なのは間違いない。そして、セリアは悠元と同じく〝原作〟を知っているからこそ、渡った先を当然把握している。だが、セリアが気になったのはその入退室記録や認証システムに

至るまでほぼ不自然な点が無いということだ。
　処理記録を除き、ここまで軍の関係施設のセキュリティシステムをほぼ完璧に改竄した……そうなると、セリアの中には心当たりがあった。
（買収されたとかならば、直ぐに足が付くのは間違いない。恐らく廃棄命令と偽って持ち出された可能性が高い。そして、軍のセキュリティシステムをここまで弄れる人間となれば、間違いなく国防総省（ペンタゴン）――シギントを含めた情報セキュリティ関係を担っている国家科学局の人間しかいない）
　セリアが念頭に置いていたのはＮＳＡ――ＵＳＮＡ国家科学局に所属している情報システムを扱う人間だった。保管施設には人手による定期的な点検作業を義務付けていたが、セリアが視た情報の中では年が明けた１月最初の人手による定期点検の際に盗まれた可能性が高いとみている。この時、保守点検という形で監視カメラが一時停止しており、１時間後に監視カメラが再起動しているのを確認した。この時点検を担当していた兵士からも「特に異常はなかった」と報告がされている。
　生体認証などのセキュリティは何らかの方法で無効化して通り抜けられ、全品管理されている兵器の無線タグは盗まれた際に廃棄処理扱いとして持ち出されることで回避し、無線タグを兵器から取り外した上で改竄されている可能性が高い。
　ここまでの情報を整理すれば、間違いなく国防総省内にテロリストへミサイルを渡した人物に協力した人間がいるのは間違いない、とセリアは睨んだ。仮に直接でなくとも、間接的に紛失の情報改竄をしている時点で共犯者とも言えるだろう。
（でも、今の私は帰化して日本人だからね。悪いけど、ＵＳＮＡに顧傑は殺させない……そう割り切りは出来るけど、お姉ちゃんの場合はどうなんだか）
　元々前世が日本人ということもあるわけだが、リーナの場合はスターズの総隊長〝アンジー・シリウス〟としての面子がある。そのリーナだが、自分の祖父である九島健が悠元の祖父にあたる三矢舞元

を通して四葉家に婚約者の申し入れを行ったと聞かされた時は思わず椅子から転げ落ちたほどだ。
周囲の人間からすれば、達也に好意を抱いているリーナに色仕掛けでもさせて四葉家の素性を探らせようとするのだろうが、セリアからすれば「絶対やめて」と言わんばかりのことだった。
「分かってない……あの馬鹿どもは何も分かってない。力で抑えればどうにかなるって本気で思ってるの？　あの〝お兄様〟とお兄ちゃんを敵に回して生き残れると本気で思ってるの？」
セリアは対峙したからこそ、実際に戦闘したからこそ悠元の恐ろしさを肌で感じていた。そして言うまでもなく達也のことも敵に回してはいけないと強く心に誓っていた。なのにもかかわらず、ＵＳＮＡ軍の参謀本部の頭の硬さにセリアは本国に向けて『ヘビィ・メタル・バースト』でも打ち込んでやりたいような気分を抱くほどに苛立っていたが、過激な思想をしていることに気付いて一つ深呼吸をした。
「……お兄ちゃんならとうに知ってるだろうけど、一応知らせておこう。文面は……『やっぱり爆発オチってサイテー』とでも打っておけば分かるでしょ」
仮に『フリズスキャルヴ』で読まれたとしても、これのどこにテロリストの要素が出てくるのか疑問に思う人間がいるだろう。これはセリアと悠元が同じ前世で暮らしていたからこそ通じるネットスラングの強みを生かした意思疎通方法であった。
ちなみに、そのメールを受け取った悠元も文面の意図を理解しつつ、日常会話の流れになるよう返信したのだった。

万夫不当の武士（もののふ）

上泉剛三（かみいずみごうぞう）。『護人』を担う上泉家の先々代当主（現当主の元継から数えて）――上泉政綱（かみいずみまさつな）の三番目の子として生を受けた。元々魔法や武術に関しての素質は優れており、２０歳にして新陰流剣武術総師範候補筆頭に上り詰めるほどだった。

剛三自身、武術や魔法を極めることが楽しくて上泉家の家督や家業に関しては見向きもしなかった。そして、彼は戦略級魔法『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』を完成させた翌年、妻として神楽坂家の人間――２０歳にして現当主を襲名した千姫の姉である奏姫（かなめ）を迎えた。この時（西暦２０３０年）、上泉剛三は２２歳だった。

世界群発戦争の折、剛三は核抑止を担う超法規的部隊の一員として世界各地を飛び回った。約１７年という長い期間、一年の半分以上を妻と共に海外で過ごし、帰国した剛三に飛び込んできたのは四葉真夜が大漢の崑崙方院に誘拐され、救出されたという情報だった。

それを聞いた剛三は直ぐに四葉本家へ飛び込んだ。そして、剛三が目の当たりにしたのは、涙ぐむ深夜と全てをまるで達観したが如き目をしている真夜だった。

――貴方は、剛三さん？　……ごめんなさい、以前のように振舞うことが出来なくなってしまったの。

その謝罪の言葉に、剛三は涙を零しながら真夜を抱きしめた。これには深夜も目を丸くしたほどだった。「すまない」と剛三はそう呟いた後、真夜から離れて一目散に二人の父親である四葉元造のもとへと向かった。

「剛三……俺は決めた」

「まさか、やるというのか？」

「ああ。止めてくれるな、剛三。これは真夜と深夜の父親としての、『四葉』の私怨だ。お前が首を突っ込むことではない」

元造の意思は固かった。だが、剛三は諦めなかった。元造の妻は既に亡くなり、二人の肉親は元造しかいない。親無しの不幸を二人に背負わせる気かと迫った。だが、二人ともお互いに譲る気など無く、最

終的には元造が剛三の手を払いのけた。
――すまない、剛三。帰ってくれ。
悩んだ末、剛三はせめてもの助けという意味で自身の伝手――『元老院』を頼った。四葉の参謀役として葉山忠教を送り込み、そして剛三自身もその復讐劇に加わった。次々と亡くなっていく四葉の人間を見て、剛三は歯痒さを覚えるほどだった。
そして、崑崙方院の中枢に飛び込むという段階で、剛三は元造と再会した。
「……元造」
「剛三か……お前なら来ると思っていた」
「元造。まだ、今ならまだ間に合う。俺が戦略級魔法を放てば、崑崙方院を消滅できる」
剛三の戦略級魔法『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』ならば、これ以上の犠牲を出すことなく終わることが出来る。元造も生き残れるこれが最後のチャンスだった。だが、元造はその提案を蹴った。
「悪いな、剛三。ここまで一族が命を張った以上、俺も命を張らなければ意味がない。既に死んだ27人に報いることが出来なくなる」
「俺が言えたことじゃないが、ここに来て武士のようなことを言うな！　お前が死んだら誰が真夜と深夜を見守るんだ！　お前は代えの利かない二人の父親だろう!!」
海外生活こそ長かったが、剛三と奏姫は子宝に恵まれ、次代の上泉を担う未来は明るかった。だが、今ここで四葉が元造を失えば、真夜と深夜は間違いなく世界を恨む。剛三は父親だからこそ、元造に「生きろ」と強く迫った。
それでも、元造は首を横に振って、二通の手紙を剛三に放り投げる形で渡した。
「それを娘に……お前と切磋琢磨した時間、そしてお前という存在に会えて、俺は嬉しかったよ」
そう言い放って崑崙方院の中に消えていく元造。追いかけようとする剛三に対して突如魔法が襲い掛かるが、剛三は持ち前の反射神経でそれを躱す。

魔法が飛んできた方向から向かってくるのは大漢軍。凡そ５万の大軍に対し、剛三は手紙を懐に押し込んで両脇に差している６本の真剣を抜き放つ。握られた真剣の刃から蒼穹の雷が迸り、空が瞬く間に黒雲に包まれ、雷の雨が降り注ぐ。

――そして、剛三は泣いていた。

「お前らが……お前らさえいなければ……俺も元造も……許さんぞ、大漢（ダーハン）。その命を以て、散っていった四葉の命を贖え!!」

本人曰く『一騎当千』――死体が残存していた兵士の数で１０００人斬り――を為した剛三。その最終的な内容は、大漢軍１００万の兵に加え、陸軍の戦車が約１０万台。空軍の戦闘機が約２万７０００機。大漢海軍所属艦約１５０隻を壊滅させたが、その代償として剛三は魔法演算領域を負傷し、長時間・高出力の魔法行為が難しくなった。

その後、そんな剛三に追い打ちを掛けたのは、次期当主と目された兄の死と、自分の長男である碇綱（さだつな）の死。そして、碇綱と元造の暗殺を命じたのは『元老院』の四大老の一角を担う東道家の人間だった。それを千姫から聞かされた剛三は、真剣を持ち出して東道家に殴りこんだ。

「ま、待て、剛三殿！　これは、仕方が無かったことなのだ！　だから、い、命だけは……!!」

「黙れ。お前の身勝手で碇綱を、元造を、真夜を、深夜を……息子と四葉を殺した罪、万死に値する。安心しろ、東道の家だけは貴様の命を以て許してやる。地獄に行って元造に詫（ころさ）びるがいい」

命を本気で賭けたことのない人間に命の重みを語る資格など無し、と剛三は命乞いをした東道氏の首と胴体を分かった。その後、新陰流剣武術の総師範として俗世から離れた剛三は武術のみを生きがいとしていたが、当主代行を担ってくれていた妻の奏姫を９年前に〝失った〟。

失ってばかりの人生だが、その代わりに得たものもあった。その一つが、三矢家三男として生まれた悠元であった。彼は生まれついた異常なまでの魔法資質により病気がちの生活を送っており、もって１０

年の命とされていた。だが、９年前に彼は〝生まれ変わった〟。
「よし、次は手裏剣一つで木刀の雨を凌いでもらうぞ！」
「何言ってんだ、この爺さん!?」
結構無茶な鍛錬をしたこともあったし、あちこちを連れまわしたことで思春期らしい生き方をさせてやれなかったが、それでも剛三からすれば楽しかった。悠元を起点に、彼の兄である元継や剛三の孫娘である千里、自分の孫である三矢家の人間が強くなっていくことに、剛三は何時しか「もっと生きたい」と願うようになった。
そして、四葉の手紙を見つけられたとき、悠元の魔法によって剛三は老成した技術と全盛期の魔法力を獲得するに至った。その悠元が〝転生者〟だと知った時、驚きはしたものの剛三は受け入れていた。恐ろしさや怖さなどはなく、どこか懐かしさを覚えていた。
まるで、自分の妻である奏姫にどこか似ている、と。

◇　◇　◇

上泉家当主の座は元継に譲ったものの、剛三の新陰流剣武術総師範としての地位は未だに健在であった。この地位も近々元継に引き継ぐつもりでいたが。
そんな剛三が訪れたのは四葉本家であった。四葉家先々代当主・四葉元造の頃から親交がある御仁となれば本家の出迎えもかなり丁重なものとなり、一族を代表とする形で現当主の真夜が私室に招き入れた。
「もう、驚きましたわ。家中が引っ繰り返す様に大慌てになりましたもの」
「はっはっは、元造が当主の時はこうやってしょっちゅう来ていたんじゃがな。忠教は気付いておったが」
「それはもう、剛三様に散々鍛えられた身ですので」
剛三のアポなし訪問は本当に家中が大騒ぎとなって「一体何があったのか」と不安を覚える使用人もいたほどだが、葉山は剛三の姿を見て全てを察した上で適切な指示を出したことで騒ぎは無事鎮静化した。
真夜や深夜の相手を驚かせる癖は、それこそ剛三や千姫の受け売り

でもあった。
「まあ、次は使いぐらい寄越すとしよう。今日はそろそろ隠居する挨拶に加え、例のジード・ヘイグに関して打ち合わせに来た」
「隠居ですか……そのようなお姿には見えませんが」
見た目３０歳過ぎ、実年齢４７歳の真夜に対して、見た目３０歳代半ば、実年齢８９歳となった剛三。何も知らない第三者から見れば、３０歳代の男女が語り合う光景にしか見えない。とても隠居するようには見えない風貌を持つ剛三に真夜が問いかけると、剛三は苦笑を漏らしつつ話し始めた。
「当主の座を元継に継がせたが、未だ新陰流剣武術の総師範はわしが持っている。ジード・ヘイグの件に片が付けば、わしは総師範の地位を元継に継がせる。これでようやく一区切りといったところじゃ。教導の件も元継に継がせるので、宜しく頼むぞ」
「分かりました。しかし、父の頃からお世話になっている剛三さんが素直に引退されるとは、どうかしたのですか？」
上泉家は師族二十八家の武術や魔法の指南役を請け負っている（近年の出来事により、一部の家に対する教導を取り止めている）し、特に四葉家は裏の部分で多くの恩恵を受けている。その意味で剛三が態々説明に出向くのは何らおかしくはないものの、どこか体調が優れないのかと訝しむ真夜に対し、剛三はその不安を払拭するかの如く笑みを漏らした。
「なに、悠元が千姫から神楽坂を継承し、烈がようやくケリをつける覚悟が出来たのなら、わしも一線を退くだけと決めただけよ。老いを持つようになると考えが凝り固まってしまうからの」
「私の目から見ても、十分お若いと思いますよ」
「それでも、身の引き際ぐらいは自分でしたいと思ったまでよ……顧傑を討ってもなお心残りがあるとすれば、旧大漢（ダーハン）に残ったあやつらの遺骨を持ち帰れなかったことぐらいかの」
復讐劇で生き残ってしまった剛三が持ち帰れたものは、元造が真夜と深夜に宛てた手紙、そして冷凍処理されていた真夜の卵子だけであった。真夜からすれば十分すぎるものだが、それでも剛三は元気な

内に大亜連合を訪れ、３０人の四葉一族の遺骨を持ち帰るつもりでいた。
「それが叶えば丁重に弔ってやりたいと思っておる。千姫の伝手で叡山の和尚に経を読ませるつもりだ。無論、四葉の村に……話が逸れたな。その前にジード・ヘイグの件だ」
今回はテロを警戒するという意味で神楽坂家にも協力を仰ぎ、北関東（群馬・栃木・茨城・埼玉）は上泉家が警戒に当たり、南関東（東京・神奈川・千葉・伊豆半島）は神楽坂家が担当する。そして、四葉家は中部地方の警戒に当たりつつ、ジード・ヘイグ討伐の任を与えられることになる達也が出張ることになる。
「真夜には予め話しておくが、既に政府と国防軍からの協力は取り付けた。テロの首謀者捕縛任務は護人の二家――――悠元と元継が総指揮を取ることが決まっている。本人たちの話し合いにより、悠元が総隊長、元継が副長となる形だ」
「二家が本格的に動かれるのですか。そのことを七草家と十文字家には？」
「伝えておらぬ。ただでさえ七草の小童は悠元に喧嘩を売りおったからの。振り回される泉美ちゃんと真由美ちゃんが可哀想じゃ」
剛三は、今回の顧傑捕縛任務を基に次代の魔法師社会の枠組みを構築することを聞かされている。剛三自身も今の師族会議のシステムが九島烈ありきであることを懸念していて、烈に散々言い含めていても何ら効果が得られなかったことに歯痒いような思いを抱いていた。
「テロリストという国家を揺るがす敵に毅然と立ち向かう意味で、国防軍を統制する政府には確たる姿勢を示してもらわねばならない、と悠元は述べていた。今上陛下も動かれた以上、この国を本当の意味での独立国家にせねばなるまい。その意味で、四葉も護りの要としてこれまで以上の働きが求められるだろう」
「ということは、忙しくなるという訳ですか。ＵＳＮＡのことはたっくんから聞きましたけど、あの国は本当に厄介ですね」
「正直なところ、あの国にいる健やＵＳＮＡ大統領が不憫でならんよ」
しがらみを嫌った剛三だからこそ、施政者として数多くの人々の擦

り合わせをしていることになる大統領もそうだし、九島家のお家騒動の責を被る形で国外に追いやられた九島健が今度はＵＳＮＡでのスキャンダル絡みに巻き込まれていることに同情の念を禁じえなかった。

『トーラス・シルバー』の一件は真夜も達也から「ＵＳＮＡが自分のことを『トーラス・シルバー』であると認識している節がある」と連絡を受けており、これには深い溜息を吐いたほどだ。

「七難八苦という言葉があるが、七草が難を持ち込み、九島が苦渋を強いるような言葉に聞こえてしまうな。そういえば、先日うちの義理の倅が健の孫娘に関する婚約を申し込んだと聞いたが？」

「ええ。事前に剛三さんを含めた方々にご相談した上で申し込んだと聞いておりますが」

「それは間違いない。元（あやつ）のことだから、ＵＳＮＡの陰謀を疑ってのことだろう。尤も、彼女の一番近い身内が『それは無理難題のレベルです』と断言しておったから、わしも千姫も了承しておる」

〝アンジー・シリウス〟――三矢家によるリーナの婚約申し込みに関して、九島家を通さなかった理由を察しつつ、剛三は彼女に一番近い身内のセリアが潜入捜査の類に関してリーナにその適性がない事を明かし、更には悠元と達也、深雪の証言からして間違いないとみている。

「人間主義者に関してはどう対処なされるおつもりですか？」

「その対処は既にお願いしておる。人間主義者が暴発した段階で、彼らが一番無視できない立場の人間から声明を貰う約束を取り付けておるのでな」

剛三は、今まで築いてきた伝手を頼る形で〝とある人物〟に声明を頼み込んだ。その人物からの回答はというと「剛三殿に対する恩義を形として果たせる時が来た」と非常に前向きで、事が収まり次第〝訪日〟する約定を取り付けられた。

「なら、そちらに関してはお任せいたします。ところで、来日されているフランス共和国の首相に七草家がコンタクトを取っているようですが」

「……利用できるものは何でも利用するのがあ奴の癖よな。だが、利用など出来ぬよ」
　ニジェール・デルタ地域での一幕を通して剛三と悠元に恩義があるフランスとしては、いくら七草家からのお願いといえども聞き遂げられない公算が極めて高い。既に訪日の日程自体は予め慎重に組まれていて、師族会議前に帰国する段取りまで決まっている以上、七草家の付け入る隙は無いに等しい。
　しかも、上泉家の傘下にある民間警備会社（表向きは民間企業だが新陰流剣武術の門下生が殆どで、実力で言えばＳＰクラスの強者ばかりという構成）が護衛に就いているため、悠元の件で剛三の顰蹙を買っている七草家がどうにもできない有様だった。
「既に１０人もおり、複数の愛人も抱えているというのに、フランスは嫁を宛がってきおった。しかも、〝ゴールディ家〟の末裔とはの」
「確か、たっくんの婚約者候補にその血筋の方がいますが」
「聞けば、第二次大戦後の御家騒動で追放された分家筋らしい。あの女狐めが知ったら驚くであろうな」
　第一高校にいる英美の両親の仲人をした剛三からすれば、英美との婚約に否定的だった悠元に対し、ゴールディ家の血族に連なる人間が婚約打診をしたことにある種の運命を感じずにはいられなかった。
　イギリスにあるゴールディ家からすれば、追い出した遠縁の一族が生きていて、しかもその娘が剛三の孫と縁を結ぶと知ったら、正に青天の霹靂だろう。寧ろ、これを機に本家が接近して分家として認めるかもしれない。
「彼女――――エフィア・メンサーなる少女の風貌が、どことなくわしが仲人を務めた夫婦の娘に似ておったからの。内密に遺伝子データを提供してもらって解析した結果から判明した次第よ」
「そうなると、イギリスが四葉と神楽坂を探ってくるかもしれませんね」
「かもしれぬの。忠教、今暫く『元老院』の仕事は抑える故、真夜のフォローを頼む。必要ならば四大老としてわしも動く。千姫も喜んで力を貸すだろうし、青波にはわしから言い含めておく」

「畏まりました、〝御前〟」
「よせよせ、わしは既に隠居同然の身よ」
人に慕われるのは嫌いではないが、人に畏まられるのはあまり好きではない。それが剛三の実力によるものだと理解はしていても、葉山の受け答えに納得できないような表情を浮かべている剛三を見た真夜は思わず口元に笑みを浮かべていた。

妹が居ても治らないポンコツ戦略級魔法師

セリアのみならず、顧傑やＵＳＮＡの動きを既に把握している日本側とは異なり、旧式携行ミサイルの紛失にＵＳＮＡ軍が気付いたのはセリアが把握した２日後の１月２１日であった。ＵＳＮＡ軍の内部ではこの問題が取り上げられ、保管基地内部の問題に留まらず、ＵＳＮＡ軍統合参謀本部情報部内部監察局が調査に乗り出していた。

憲兵隊（ＭＰ）ではなく内部監察局が乗り出してきたのは、この件にテロ組織の関与が疑われている為だった。

紛失した旧式携行ミサイルは計７０発。弾頭に搭載された爆薬量で換算すると約５００キログラムに上る。それだけの炸薬が積まれたミサイルがテロに利用されるようなことがあれば、兵器の出所が明るみになれば世界中から非難を浴びることになるだろう。国防省としては何としても避けたい事態だ。

しかし、事件発覚から6日が経過した1月27日現在、何一つ大きな進展が見られなかった。日曜日にも拘らずオフィスに詰めている内部監察局ナンバーツーのヴァージニア・バランス大佐は報告書に目を通しながらも疑念に駆られていた。

この事件は、あまりにも手掛かりがなさすぎるのだ。

旧式の携行ミサイルとはいえ、軍の兵器をを持ち出すには少なくとも軍関係の内部協力者が必須。仮に保管基地の部隊長を買収したとしても、持出の痕跡と成り得る人体認証・機械認証などといったほぼすべての情報履歴に残っていないということがこの事件の難解さを物語っていた。

（全く、この時期にこの問題が降りかかってくるとはな……何だ？）

バランスは正直、別の問題を抱えている中でこの問題が出てきたことに頭を抱えずにはいられなかった。そんなバランスに対してまるで救いの手の如く鳴った電子メールの着信音。それも情報部のトップレベルが使っている暗号通信を介したものだ。

バランスは機械的な手つきで暗号メールを市販の情報機器では使用できない専用メディアに複写し、オフラインのデコーダーに読み込

ませる。これは平文化されたメール内容の流出を防ぐためのものだった。
そして、表示されたメールの差出人は『七賢人』。その内容を繰り返す様に見ていくバランスは自分が荒い息をしていることに気付いた。
「こんなことが、許されていいのか……いや、非常に不味い……」
『七賢人』からの密告には、今回の兵器流出に大統領次席補佐官が関与していると記されていた。そして、その目的も添えられている。ここに書かれていることが事実だとすれば、この廃棄予定兵器流出事件はバランスの予想を上回る大規模な陰謀の一環となる。
バランスが懸念したのは、かの国には二人の英雄――上泉剛三と神楽坂千姫の存在。そして、彼女が知るかの国の戦略級魔法師にして年明けに神楽坂家現当主を襲名した神楽坂悠元。この三人を敵に回した時の代償が今のＵＳＮＡに支払えるのか、という懸念が浮かんできた。
バランスは悩んだ。彼らの卓越した情報網からすれば、少なくともこの国を出てテロを起こそうとしている存在を既に察知している。もしかすると『七賢人』が伝えてきた情報全てを握っている可能性すらある。
その意味で『アンタッチャブル』と評されている彼らを下手に刺激すれば、返す刀でＵＳＮＡ政府のスキャンダルを大手メディアにリークされる可能性もある。日本政府に対して内密に事を進めようとしても、彼らの前では丸裸で行動しているに等しい状態となるだろう。
それに、バランスは以前訪日した際、悠元と結んだ約定の中に「今後日本に不法侵入したＵＳＮＡの関係者についての扱いは、日本の法秩序に則って処理する」という文言を呑む引き換えに、『ハロウィン』で使われた戦略級魔法をＵＳＮＡ本土に向けないと約束したのだ。そしてこの場合、既にＵＳＮＡを出たテロリストが〝ＵＳＮＡの関係者〟に該当し得る案件であった。
ともあれ、バランスはヴィジホンに手を伸ばし、ナンバーボタンに触れようとしたところで手が止まった。この状況で頼れる人間となると、一体誰になるのか……バランスはそれを見いだせずにいたの

だった。

◇　◇　◇

アンジェリーナ・クドウ・シールズもといリーナは、久々の休日をショッピングで満喫した。無論、ＵＳＮＡの国家公認戦略級魔法師『十三使徒』アンジー・シリウスやＵＳＮＡ軍統合参謀本部直属魔法師部隊『スターズ』総隊長アンジェリーナ・シリウス少佐としてではなく、１７歳の少女のリーナとしてである。

基地から最寄りとなるロズウェルではなくアルバカーキまで足を延ばしたのは、同行したシルヴィア・マーキュリー・ファースト大尉、通称シルヴィの提案によるものだった。

――シルヴィ、このままだとお姉ちゃんのファッションはおろか、生活能力までポンコツになっちゃうから、しっかりフォローをお願いね！　何かあったらメールや電話を頂戴。可能な限りシルヴィの力になるから！

――はい！　任されました、セリア！

――二人とも何を言ってるのよ!?

元々セリアはスターズの中でも特殊過ぎた立場上、訓練の過程で知り合ったシルヴィを通じてファッションセンスを磨いており、リーナ以上に友人というよりは姉妹のような関係を築いていた。

――あの正月の恰好を見せられて、信用できると思ってるの、お姉ちゃん？

――あ、ゴメンナサイ。だからヤメテ。

日本での任務を終えて、セリアが除隊・帰化して日本に居残ることになり、セリアはシルヴィにリーナの生活能力全般の低下を危惧してフォロー役をお願いした。これにはリーナも思わず反論の声を上げたが、セリアの正論攻撃に対して涙目で降参してしまった。

この光景を見たシルヴィは、これではどちらが姉なのかと思ってしまい、思わず笑みが漏れたほどだった。

シルヴィから見ても、同じ血を引く双子の姉妹なのに髪の色が異なるのは仕方がないにせよ、リーナが持ち得ない生活能力やファッションセンスをセリアはしっかりと身に着けていた。セリアに出来たの

だからリーナに出来ない道理なんてない、というセリアの言葉に対し、図らずも昇進してしまったからこそシルヴィはリーナを立派な女性とするための使命感に燃えていた。
結果としてリーナはシルヴィの着せ替え人形のような扱いになっていたが、嫌とは思わなかった。なぜなら、リーナ自身もファッションセンスを磨かないといけないと泣きを見たことがあった。
――何時の時代の人間なんじゃおんどれぇ!!
――ギブギブギブ！　止めてセリア、人体はそっちに曲がら……あっ
既に日本にいた昨年の正月、明らかに時代錯誤の服装をして初詣から帰ってきたリーナを待っていたのは、（どこで買ったのかは不明だが）般若の面を被ったセリアによる関節技地獄であった。
それによって気を失い、きれいな川の向こうにいた母方の祖母から「アンタはまだこっちに来ちゃダメでしょう！」と追い返されて意識を取り戻したことがあった。この一件以降、ファッションをはじめとした女性としての常識をセリアやシルヴィから厳しく叩き込まれていた。
最近はシリウスとしての出動はないが、いい気分転換になったとリーナは大量の戦利品を抱えて上機嫌で宿舎の自室の前でシルヴィと別れ、部屋に入った。そんなリーナの機嫌は端末に届いた一通のメールで霧散することとなった。
「特暗号メール!?」
宿舎の私室に任務絡みの暗号通信が届くことはそう珍しくなかった。だが、本来スターズの隊長間、および参謀本部とスターズの隊長、総隊長の間でのみ使われる特殊暗号を使った通信がこれまで私室に送られることはなかった。
普通ならばこの〝慣習破り〟とも言えるメールを怪しむべきだが、リーナは余程の緊急事態なのかと判断してデコードの終了を待った。そして平文化されたメールの内容を見て、リーナは驚愕した。
「七賢人……？」
リーナも最初は「悪戯か？」と訝しんだが、直ぐにその考えを否定

した。以前ＵＳＮＡ軍のプロファイラーが彼らを愉快犯的なメンタリティの持ち主と評していたことを思い出しつつ、態々特暗号メールという形式を取った事からして、まずは内容を確認することが大事だと判断した。

文面には一見彼女と関係のない事件の顛末が書かれていた。そして、メールの末尾に差し掛かったところでリーナが大きく関係する事件に関する情報が記載されていた。

「えっ、パラサイト事件の黒幕ですって……!?」

〝シリウス〟であるリーナ、そして当時〝ポラリス〟だったセリアが派遣されたのは、西暦２０９５年１０月３１日に朝鮮半島南端で使用された『グレート・ボム』（ＵＳＮＡ軍における『質量爆散（マテリアル・バースト）』の呼称）、佐渡島上空を基点に新ソ連方面から南下した艦隊を呑み込み、ウラジオストク軍港を消滅させた『シャイニング・バスター』（ＵＳＮＡ軍における『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』の呼称）の使用者特定の為だった。

だが、ＵＳＮＡ本国から日本に逃亡したパラサイトに感染しているスターズ隊員の存在が明るみとなったため、スターズ総隊長本来の任務としてその「処分」を任ぜられた。

パラサイト発生の原因は事故によるもので、当事者は既に死亡したと説明を受けていた。だが、それが偶発的なものではなく意図的に仕組まれたものだとすれば、リーナやセリアに同胞殺しの任を押し付けた元凶はその人間となる。断じて許せるものではなかった。

「……その黒幕が、盗んだ旧式ミサイルを使って日本でテロを起こそうとしている？　冗談でしょう？」

いきなり送り付けられたメールに関して、信憑性の有無は無いに等しい。そもそも本当に『七賢人』が送ったのかどうかすらも確かめようがない。

以前、同じように『七賢人』から送られたメールだって信憑性すら疑わしかった。

だが、リーナはそれを知ってしまった以上、何もせずにいて後悔するよりも、自分が納得し得る形で後悔する方がマシだと考えた。

あのメールによってＵＳＮＡが日本に負い目を被る可能性は極め

て高い。パラサイト事件の時こそ穏便に済んだものの、その後の南盾島における戦略級魔法研究所の襲撃では、スターズの中核を担うリーナとカノープス少佐、アルゴル少尉をはじめとした作戦参加メンバーが一時拘束される形となり、聞いた限りでは凡そ３０兆円（主に軍事衛星『セブンス・プレイグ』と『アルカトラズ』の解体費用）という膨大な金額を神楽坂家に支払う形で釈放された。

そして、今回ＵＳＮＡ軍の兵器によるテロを許した場合、それ以上の代償をＵＳＮＡ側が支払うことになる、とリーナはそう感じていた。

出来れば自分の手で黒幕を仕留めたい。だが、〝シリウス〟である自分は国外に出ることにかなりの制限が掛けられている。だとするならば、一番信頼できる人間に相談しようとリーナはクローゼットを開き、スターズの制服に袖を通した上でヴィジホンを掛けた。

◇　◇　◇

バランスがヴィジホンに手を伸ばしたものの、どこに掛けようと思い悩んでいたところで着信音が鳴り、落ち着いた仕草で通話ボタンを押した。

『大佐殿、突然失礼いたします』

バランスの目の前にある画面に映ったのはスターズの制服を今着たばかりのように見えるリーナの姿だった。彼女が今日休暇であることは間違いなく、生真面目な彼女からすれば何らかの緊急の用件であると思いながらバランスはリーナに問いかける。

「おや、少佐は確か休暇だったはずだが、何か緊急の用件でも発生したのか？」

『ハッ。実は大佐殿にご報告とお力添えをお願いしたく思い、連絡を致しました』

バランスは先程『七賢人』からのメールを確認していた。この分だと、リーナも『七賢人』から情報提供を受けたものと内心で推測したが、リーナから伝えられた内容はバランスの予想通りであった。

『先程、小官が外出しておりました時間帯の間に、七賢人を名乗る差出人の名で暗号メールによる情報提供を受けました』

「七賢人というと、あの『七賢人』か？」
『そう書かれていただけで、信憑性は全くの不明です』
　ここで差出人――『七賢人』の真偽を問いただしても進展は無いに等しいため、バランスはリーナに説明の続きを促した。
『差出人の如何はともかくとして、七賢人はわが軍から盗み出された廃棄予定の歩兵用携行対空ミサイルによるテロを敢行する予定のこと。標的は日本です』
「……少佐、貴官はそのような事件が本当に起きていると思いなのか？」
『事実は存じませんが、噂では、廃棄予定の兵器が盗難に遭っていると耳にしております……大佐殿？』
　「箱入り士官」ともいえるリーナですらその噂――実際には事実だが――を知っているとなれば、兵器管理に関する軍規の緩みが一部の例外ではないと痛感するバランスに対し、画面に映るリーナは機嫌を損ねたのかと不安を覚えた。だが、ここでリーナに八つ当たりをしたところで大人げない行為だと内心で抑えつつ、リーナに続きを促すことにした。
「何でもない、続けてくれ」
『ハッ。標的に関する言及はありませんでしたが、首謀者に関する情報がありました。氏名はジード・ヘイグ。大漢滅亡（ダーハン）による政治難民で、中国名は顧傑（グ・ジー）。推定年齢は６０歳から９０歳代。瞳は黒、髪は白、アジア系でありながら黒い肌が特徴とのことです。崑崙方院（こんろんほういん）の生き残りではないか、という特記事項が添えられておりました』
「その名は確か、あの四葉に滅ぼされた大漢の魔法師研究機関のことか？」
『小官も同様に考えます』
　旧式の小型ミサイルを持ち出したところで、あの『アンタッチャブル』を滅ぼせるならとっくに出来ていてもおかしくはない。しかも、３５年前の四葉の復讐劇の唯一の生存者である上泉剛三の存在がある以上、四葉に対して敵意を向ければ間違いなく彼が動くことになる。

リーナが述べたジード・ヘイグという人物は自棄でも起こしたのだろうか、とバランスは疑わざるを得なかった。
『また、ジード・ヘイグはパラサイト事件の黒幕であると情報提供を受けた次第です』
「……成程。少佐は自分を嵌めたに等しいジード・ヘイグをその手で仕留めたい、と考えているのだな？」
『その通りであります。小官の立場上、それが大変厳しいことも承知しております』
ここで、バランスは考えるような素振りを見せた。兵器紛失の件もそうだが、バランスが頭を悩ませていたのは目の前にいるリーナが大きく関係する案件に他ならなかった。しかも、その案件は参謀本部や国防総省（ペンタゴン）ではなく大統領府から直接バランス大佐へ届けられたもの。
実際のところ、パラサイト事件の際に任命されたＵＳＮＡ大統領の特使という任は解任されてはいるが、〝別の形〟としてその権限が生き続けている。それについては後に述べることとする。
「少佐の情報提供、そして自らの手で終止符を打ちたい思いは理解した。アンジェリーナ・シリウス少佐、明日の貴官の訓練は中止とし、明朝９時（0900）に基地司令室へ出頭せよ」
『ハッ！』
通信を終えたところで、バランスは深い溜息を吐いた。参謀本部はリーナの日本行きを利用して四葉の内情を探れるのでは、と期待しているかもしれないが、それであればリーナよりも既に除隊したセリアの方が適任者だったと思う。だが、彼女は既に帰化しており、戦略級魔法『グレート・ボム』の最重要容疑者である司波達也、バランスの前で戦略級魔法師と認めた神楽坂悠元、そして英雄の上泉剛三と、国家公認戦略級魔法師の五輪澪の５人がかの国に集っている。
これでリーナまで加われば、いよいよ日本を敵に回す方が危険であると認識せざるを得なくなってしまう。
「……出頭って、ワタシ何かまたやっちゃったのかしら？」
その一方、リーナはバランス大佐の呼び出し命令にハッキリと返事したものの、また基地司令による説教が待っているのでは、と内心で

ビクビクしていたのだった。

シリウスの建前

リーナは結局その日の夜は眠れたものの、バランスの出頭命令のことが頭から離れなかったせいか、いつもより早い時間に目を覚ます羽目となった。そのせいで少し眠たげな様子を見せるリーナに同行するのは、スターズのナンバー・ツー、第一隊隊長を務めるベンジャミン・カノープス少佐であった。

「ベンも呼び出されたのですか？」

「ええ。ですが、見当もつきません。総隊長が訓練施設を全壊させた件は先日基地司令からお叱りを受けたばかりですので、それは間違い無くないでしょう」

「で、ですよね」

スターズの中ではリーナ、そして既に除隊したセリアが備品や施設を頻繁に壊すため、基地司令から愚痴と嫌味を聞かされることが多い。

尤も、セリアが物を壊した場合はリーナに良からぬことを吹き込もうとする輩がいたり、上官クラスがリーナにセクハラを働こうとした場合にのみ起こることであり、通常の指揮系統に含まれないセリアに関しては基地司令ですら命令権を有していない。それでも基地指令としては愚痴を零さずにいられないし、セリアもこればかりは甘んじて受けていた。

セリアが俗に言う〝ワンマン・アーミー〟同然の扱いだったのは、リーナよりも制御できない人間を管理することに関して、国防長官が「統合参謀本部でも管理できないと匙を投げました」と年甲斐もなく涙ながらに大統領へ報告したためだ。

大統領も胃に穴が開いて倒れる軍人が続出しかねず、軍事行動に支障を来たすことを最大限に危惧した結果、大統領が命令権を有した上で「スターズへの出向」の名目と共に大統領の護衛魔法師として所属することで何とか解決した。

なお、軍の人間や政治家がセリアやリーナに手を出そうとした結果、セリアの勘気を被って更迭された大将クラスの人間は6年間で2

５人、それ以外の将官クラスだと５４人、政治家の辞職に至っては上院・下院議員含めて３８人に上っている。どちらにせよ、国防総省（ペンタゴン）からすれば頭痛と胃痛の種と化していた有様だった。
なお、事実上の上官である大統領からすれば、彼に敵対していた勢力の議員が多数を占めていたためと、セクハラという正当な理由によるものなので気に留める素振りを見せなかった。
その様子を傍から見ている副大統領を含め、大統領府（ホワイトハウス）の大半の人間からすれば頭痛と胃痛の種と化していて、セリアの帰化と除隊を聞いた際、ホワイトハウスとペンタゴンは軽いお祭り騒ぎとなったらしい。
閑話休題。
カノープスにはリーナより二歳年下の娘がいるせいか、リーナのことをまるで娘のように見てしまうことが多い。更には、リーナの時折見せる子どもっぽい仕草によって、カノープスの保護者欲が加速していることにリーナは気付いていない。
何とか心の不安を心の中に押し込め、司令室の前まで来たリーナは自分が出来る限りの真剣な表情で（出来ているとは言っていない）ノックをする。「入れ」という言葉に従ってリーナとカノープスが中に入ると、本来デスクの奥にいるはずの基地司令ではなくバランスが座っていることにリーナは目を見開いたが、慌てて敬礼をする。
「た、大佐殿⁉　コホン、失礼いたしました。アンジェリーナ・シリウス少佐、大佐殿のご命令により出頭いたしました」
「同じくベンジャミン・カノープス少佐、出頭いたしました」
「ご苦労。今回は基地司令のウォーカー大佐にお願いして部屋を借りた。中に入ってくれ」
「ハッ！」
普通ならば基地司令のウォーカーがこの場に居てもおかしくないだろうが、彼が最初から居ないとなれば余程の機密に触れる話なのだろう、とリーナは思いながらデスクの前に立ち、横に並んだカノープスと改めて敬礼をした。
「両名とも、楽にしてくれ」

「ハッ」
バランスはそう言ってリモコンで扉に鍵を掛け、その上でリーナと向き合った。リーナはここに来て昨日の件に関する回答だろうと覚悟していたし、戦略級魔法師〝アンジー・シリウス〟が下手に国外へ出ることを許されないことは理解し、納得していた。
「シリウス少佐。昨日の件に関しての回答だが、統合参謀本部としては『アンジー・シリウスの国外出征を認められない』と回答があった。これに関しては私も同意見である。本国東海岸の情勢を鑑みた場合、最悪の場合の抑止力として貴官に出動を命じることもあるだろう。シリウス少佐もそれは理解できるな」
「……ハッ。元より厳しい事であると覚悟はしておりました」
バランスは口にしなかったが、リーナの実力は確かに一線級だが未だ十代の――――それも17歳の少女がUSNA軍の魔法師部隊を率いていることに不満を持つ人間も少なくなく、中には「日本に対する過度なシンパシィを抱いている」などと無責任な噂を立てる人間も居たりする。
バランスとてリーナの忠誠心を疑うつもりはないが、セリアというUSNAでも扱い切れない戦略級魔法師が帰化する形で日本に残った以上、セリアの存在がリーナの噂の信憑性を高めてしまっているのも事実であった。
「だが、このまま放置するとあってはUSNAそのものの沽券に関わることになる。そこで、カノープス少佐に日本へ向かってもらうこととなった。カノープス少佐、詳細はこの後で話す故、現時点での質問は控えてほしい」
「ハッ、了解しました」
「シリウス少佐もそれに関して異存はないな？」
「異存はありません。カノープス少佐の実力は私も高く評価しておりますので、任務の遂行に支障はないと考えております」
これで、軍統合参謀本部からの対テロおよびジード・ヘイグに関する任務をリーナからカノープスに引き継ぐ段取りが完了したことになる。その上で、バランス大佐は一息吐いた上でリーナを見つめた。

「ところで、シリウス少佐。先日、日本魔法協会が発表した内容は貴官も存じているな？」
「ハッ。小官は大統領閣下からの通信により把握した次第です」
「それに大きく関わる話だが、少佐の祖父――――九島将軍が貴官を四葉の次期当主の婚約者として推薦するよう計らったそうだ」
「……え？　はい？　あの、小官は何も聞かされていないのですが……」
バランスが持ち出した話題――――達也が四葉家の次期当主に指名されたことや、悠元が神楽坂家当主を襲名したこと。悠元と深雪が婚約したことに加え、達也と悠元の婚約者を募集するという旨の内容はリーナも父方の祖父である大統領の通信で聞かされた。
その際に達也や悠元のことについての印象を述べたことはあったが、バランスが言い放ったことに対してリーナはシリウスとしての真剣な表情が崩れ、完全に呆然とした表情を浮かべていた。
未だに事情が呑み込めないリーナに対し、バランスが気遣うように声を掛けた。
「シリウス少佐、一先ず落ち着くといい」
「ハ、ハッ！　……それで大佐殿、その話がカノープス少佐に任務を任せる事とどう繋がるのでしょうか？」
「説明をする。まず、一昨年から昨年にかけて起こったスターズ隊員の脱走事件の際、私は大統領閣下より特使の任を帯びて訪日したことは覚えているな？」
「勿論であります」
当時、東海岸を中心に活動している反魔法主義のこともあって、政治家ですら国外に赴くのを躊躇っていた。それならば、中立的な立場で物事を判断して尚且つリーナを確実に制御できる人材としてバランスに白羽の矢が立った。その結果、日本政府とも穏便に事を収めることが出来た。
尤も、その直後に起きた南盾島における日本の戦略級魔法の問題のせい（厳密にはＵＳＮＡの核兵器搭載型軍事衛星に関する落下予想情報の隠蔽）で、まだ日本にいたバランスが政府との交渉役を一手に担

う羽目となっていたことは、当事者側であるリーナやカノープスも当然把握している。
「しかし、あの事件は既に収束し、大佐殿の特使の任は解かれていると認識しておりましたが」
「私もその認識で考えていたが、昨年の１２月にお会いした際、閣下から特使の任に代わる形で大統領府の職に就くこととなった。今の私は情報部内部監察局の第一副局長だが、同時に大統領直属特別顧問の肩書を持っている。このことはくれぐれも他言せぬ様に」
　本来、軍人の職務に就いている人間が大統領府に関する職を拝命することなどない話だが、内部監察局自体が極めて機密性の高い組織の為、バランスの素性を表の世界で知っている人間など数えた方が早いレベルでしかなく、それこそ国防総省の長官・幹部クラスに限定される。
　その機密性とバランスの特使としての実績を鑑み、大統領はバランスを大統領直属の顧問職に据えることでスターズに関する情報をいち早くつかもうと考えた。これには先日の脱走事件によるスターズ内部の情報隠蔽が問題視されたことも大きく影響している。
「シリウス少佐。大統領閣下からの命により、貴官には〝アンジェリーナ・シールズ〟として日本に赴き、四葉家の次期当主に指名された司波達也の婚約者として送り出す。貴官に関する書面上の除隊・帰化申請もこちらで取り計らう」
「（私が、タツヤの……）ハッ。それで、小官はいつまでに準備を整えれば宜しいでしょうか？」
　元々、大統領が自身の孫娘の〝女性としての幸せ〟を願ってのことだが、偵察や隠密などといった潜入捜査の類を得意としないリーナに「婚約者として嫁ぐことで四葉の内情を探れ」という無理難題を押し付けた参謀本部の企みも混じっている。
　書面上は〝アンジェリーナ・シリウス〟の除隊と帰化を認めるが、『十二使徒』戦略級魔法師〝アンジー・シリウス〟の軍籍はスターズの総隊長に紐付けされて残ったままとなる形だ。
　だが、バランス自身としてはリーナに四葉の秘密を探れる期待は持

ち合わせていないし、そもそもあの国には双子の妹である〝ポラリス〟――――セリアがいる以上、こちらの目論見など瞬時に見抜かれてしまう。

以前、バランスがセリアの実力を測る目的で出した課題に対し、セリアは一切の情報端末を用いずしてその背後関係まで見事に当てて見せた。これを聞いたバランス本人も背筋が凍るような感覚を抱いたほどだった。

話を戻すが、そこまで私物を持たないリーナからすれば、数時間もあれば宿舎内にある荷物を纏められる（元々結構な荷物があったが、シルヴィによって大胆に片付けられたお陰だった）ため、今から取り掛かれば今日の夜が出発でも間に合う。

「明日の夜には基地を出られるよう準備は出来るか？」

「問題ありません」

「分かった。なお、貴官にサポート役としてマーキュリー大尉を同行させる。彼女に関しての手続きと手筈もこちらで整えているため、心配はいらないと考えてくれ」

「了解いたしました。直ちに準備に取り掛かりたく思いますので、退出しても宜しいでしょうか？」

「ああ、シリウス少佐の話はそれだけだ。カノープス少佐は先程の話が残っている故、そのまま待機してくれ」

「ハッ！　それでは、失礼いたします」

バランスとの会話を切り上げる形でバランスとカノープスに敬礼をし、司令室を出て宿舎の部屋に向かうリーナの足取りは非常に軽やかだった。何せ、自分が恋焦がれた相手に会えるとなれば、リーナも恋する乙女の表情にならざるを得ないほどに嬉しさで満ちていた。

（タツヤ……待っててね。ワタシは一度狙った獲物を逃がすほどお人よしじゃないんだから）

スターズ最強の名を冠する総隊長にして戦略級魔法師〝アンジー・シリウス〟。そんな雰囲気を微塵も感じさせないほどにリーナは完全に舞い上がっていたわけだが、そんなリーナを部屋の前で待ち受けていたのはサポート役であるシルヴィであった。

「あれ、シルヴィ？　どうかしたのですか？」
「リーナ、お話は既に大佐殿から窺っております。さて、早い所片付けますよ」
「え、何？　そんな笑顔を浮かべて、ワタシが何か悪い事でもした――」
　気が付くと、急に意識が遠くなっていくリーナが最後に見たのは、「すみません、リーナ」と満面の笑顔を浮かべて謝罪の言葉を述べたシルヴィであった。
◇　◇　◇
　リーナがそんなことになっているとは露知らず、基地司令室ではバランスとカノープスが向き合っていた。実を言えば、リーナに何が起きたのかをカノープスは事前に知らされていた。
「シリウス少佐のことだが、カノープス少佐は不服であったか？」
「いえ。ですが、あそこまで手の込んだことをせずとも、他にやりようはあったかのように考えている次第です」
「そうだな。だが、今回ばかりは時間が無かったのだ」
　リーナを眠らせ、表向きは〝新ソ連地域の混乱に伴う東アジア方面の監視を睨み、アンジー・シリウスに国外出征を命じる〟という体で日本への再出征を命じた形にし、いくつかのアンジー・シリウスとしての装備――『ブリオネイク』も含まれる――もシルヴィによって持ち出されることとなる。
　何も眠らせる必要は無いだろう、とカノープスは考えたが、バランスにとってはリーナを眠らせることに意味があったと話す。
「貴官も存じていることと思うが、現状のスターズの階級が事実上塩漬け状態となってしまっている。本来の軍の序列を鑑みれば、第一隊隊長の貴官が大佐クラスに昇格していてもおかしくは無いと思っている」
「……もしや、統合参謀本部が総隊長そのものを欲したと？」
「馬鹿を言うな、少佐。仮にそんなことになれば、大統領閣下が上層部を刷新する形で全員の首を切りかねない」
「そうでありますな。失礼いたしました」

本来、スターズを含めたＵＳＮＡ軍はＵＳＡ軍からの名残で１８歳以上からの入隊が基本とされている。だが、戦略級魔法師としての資質があったリーナは特例という形でスターズに入隊し、戦略級魔法師としての実力もあってスターズ総隊長の座にいる。

元々正規の入隊を経ずにいきなり部隊の総隊長の椅子に座れば、多かれ少なかれ部隊内でも反発が生じるのは予想できたことだ。だが、統合参謀本部は〝シリウス〟の穴を埋めることと戦略級魔法の力を欲するがあまり、本来の軍の杓子定規に無理矢理当て嵌めようとした。その結果として軋轢が生じてしまった。

「参謀本部は未だに戦略級魔法師『アンジー・シリウス』の力を手放そうとしない。これではシリウス少佐だけでなく、将来的に我々まで無駄なプライドという泥船に引きずり込まれてしまうだろう……そのことは後日の話としよう」

バランスは一つ息を吐いた後で、『七賢人』から齎された情報――ＵＳＮＡ軍で廃棄予定の歩兵用携行対空ミサイルが盗まれ、それを使ったテロが日本で起きる、という情報をカノープスに伝えた。その際、テロの首謀者であるジード・ヘイグの情報も合わせてカノープスに提示された。

「以上が事の詳細だ。質問はあるか？」

「いえ、ありません」

「そうか、では私からの質問になるが、ベンジャミン・カノープス少佐――いや、ベンジャミン・ロウズ少佐と呼ばせてもらうが」

バランスがカノープスの名を敢えて言い直したこと――本来ならば素性を隠すために星の名（コードネーム）で呼ばれている名字ではなく、本当の名字を口にしたことでカノープスは表情を引き締めた。カノープスの実家は元々軍人や政治家を多く輩出する家系であり、カノープスも元々は軍人を目指していた時期があった。だが、魔法の資質があったことでスターズに抜擢された経緯を持っている。

カノープスはロウズ家の関係者ではないかと内心で予想したところ、バランスから問いかけられたのはその予想が的中したような内容であった。

「貴官は大統領次席補佐官のケイン・ロウズ氏と血縁関係にあったな？」
「ハッ。大佐殿は御存知のことと思いますが、次席補佐官殿とは父親同士が従兄弟であり、母親同士が再従姉妹（はとこ）であります」
「……実は、『七賢人』から齎されたのはテロに関する情報だけでなく、その便宜を図ったとされるロウズ次席補佐官に関する内容だ」
『七賢人』から齎されたのは、ジード・ヘイグに兵器を渡すだけでなく国外への持ち出しを許し、ジード・ヘイグの逃亡に手を貸した人物にケイン・ロウズの存在が浮上したとする内容だった。
「大佐殿は、次席補佐官殿がテロリストに買収されているとお考えなのですか？」
「寧ろ、その方がまだいいとも言えるレベルだろう。私は次席補佐官が買収されたのではなく、次席補佐官や彼に繋がる議会の有力者がジード・ヘイグを利用しようとしている可能性が高いと睨んでいる」
どちらにせよ政府のスキャンダルなのは言うに及ばないことだが、彼らは顧傑を利用する形でこの国にいる人間主義者の矛先を日本に向けさせることに狙いがある、とバランスは睨んでいる。
「テロリストを利用ですか……もしや、この国の人間主義者による魔法師排斥運動の矛先を日本に向けさせると？」
「聡いな、少佐。私はロウズ次席補佐官も早急にこの国の人間主義を抑えるための手段を求めた結果、ジード・ヘイグによるテロを利用しようと目論んだとみている。爆弾を使ったテロの性質は貴官も良く知っているだろう？」
爆弾テロとなれば対象を定めない無差別攻撃を主とするため、仮に十師族といえども全ての人間を守り切れるわけではない。多方向からの攻撃によって魔法師が無傷でいられても、その場に居合わせた非魔法師の一般市民が被害を被るのは目に見えている。
「標的を定めない無差別攻撃、ですね……まさか、次席補佐官殿の狙いは」
「そのまさかだ。『七賢人』からはそこに関しての想定されるシナリオも記載されていた」

その出来事を魔法師による〝見殺し〟として人間主義者の目を向けさせることで日本国内の魔法師排斥運動を強めさせ、ＵＳＮＡ国内の排斥運動を弱めようとするのが『七賢人』によって齎されたシナリオであった。

「大佐殿。総隊長――――いえ、リーナを早急に日本へ送ったのは、このためでもあるのですか？」

「今回ばかりは結果論に過ぎないよ、少佐。私もシリウス少佐の心情を理解できぬほど鬼ではないからな」

日本と大亜連合が講和状態にあるとはいえ、この状態がいつまで続くか分からない。新ソ連も人間主義者や反政府組織によって首都のモスクワ近郊が慌ただしくなっているが、その状態も何時までなのかの見通しも不明。加えて、東欧方面に集中している人間主義の火種が北欧や西欧、ひいてはＵＳＮＡに返ってこないか不安な要素もある。

バランスはこの非常時に非常の力を欲し、背に腹は代えられない思いで日本にいるセリア、そして神楽坂悠元の力を借りる他にないと判断した。

その為にも、切り札である〝アンジー・シリウス〟に大統領特命という正式な手続きで日本へ出征させることにした。このことは大統領のみならず、副大統領に加えて国務長官と国防長官、更にバランスの直接の上司である内部監察局長も既に承認している。

軍統合参謀本部へはリーナが日本に到着次第、ＵＳＮＡ軍の最高司令官たる大統領から国防長官を経て特命の作戦内容が通知されることとなっている。

バランスとて、同じ女性としてリーナの人としての幸せを願うぐらいの気持ちは持ち合わせている。日系人という立場故の苦しみに加え、若すぎるが故の軋轢、先日の脱走事件の〝暗殺〟も本来ならばリーナが咎を負うべきことではない。

だが、力があるが故にリーナは〝シリウス〟の名を継いでしまった。今回の大統領特命もそれに対する謝罪が含まれていることを知るのは、命令を出した大統領を除けばバランスしか知らない事だった。

なお、リーナを眠らせたのは日本にいる身内や友人との連絡を物理的に封じるためで、万が一その連絡を盗聴されて〝アンジー・シリウスが日本に内通し、軍に対する叛意を見せている〟などという根も葉もない噂を流されるのを避けるためであった。
「少佐に与える任務はかなり厳しいことになると予想される。当分は統合参謀本部からの任務という形になるが、ジード・ヘイグは崑崙方院の生き残りだという特記事項も触れられている。そうなれば、かの四葉の復讐劇において唯一の生き証人――――上泉剛三が出張る可能性が極めて高い」
「統合参謀本部からのプロファイルでは、戦略級魔法を放てぬほど衰えている、という報告はありましたが」
「実際の為人を見ていない人間の報告など当てにするな。確かにかつて『世界最巧』と謳われた九島将軍の兄と同い年なのは事実だが、彼の現在の実力は今代を含めた歴代の〝シリウス〟すら凌駕し、恐らく〝ポラリス〟に匹敵すると私はみている」
ＵＳＮＡ国内における剛三に関する報告はどれもが常軌を逸しており、リーナが悠元に敗れた件で剛三とも対峙したことのあるバランスからすれば、下手に殺意を向けただけで次の瞬間に「殺される」と思ったほどだ。
その時に出会った彼の教えを受けたであろう少年――――後に神楽坂悠元と名乗る彼の実力ですら冷や汗を流したというのに、剛三の秘められた実力となればバランスですら「底が見えない」と判断するほかなかった。
「加えて、『黒夜の孔雀（アルティミシア）』と帰化した〝ポラリス〟に神楽坂悠元、未だ見つからない『グレート・ボム』の戦略級魔法師もいる以上、任務を果たせないと判断した場合は直ちに任務を中止して帰国することも許可する。その後のことは政治家の仕事であるが故、我々は必要に応じて情報提供を行う姿勢を見せるので手一杯となるだろう」
統合参謀本部は躍起になっているであろうが、正直この国よりも高位の魔法師が揃っている日本に敵う魔法師となると、正直リーナと辛うじてカノープスが入るぐらいだろう、とバランスはそう考えていた

……あくまでも、日本の戦略級魔法師クラスが出てこないという前提が付けば、の話だが。
　その戦力差で任務を遂行するためにはスターズの増員も必要だろうが、昨年のように派手に動かせば日本政府や国防軍にスターズの動きを知られてしまう。なので、リーナとサポートのシルヴィ、そしてカノープスが現時点で動かせる最低人員となるだろう。
「ハッ、了解しました」
「すまないな、少佐。貴官にこのような汚れ仕事を押し付けるのは心が痛むが、テロリストが高位の魔法師と予想される以上、相応の実力を有する魔法師が求められるのだ」
　カノープスにしてみれば、今回の任務は身内の犯罪行為に対して毅然とした対応をした上で断罪するという〝処刑執行人〟の役割を押し付ける様なもの。申し訳なさを感じるバランスに対し、カノープスは安堵にも近い表情を浮かべてこう述べた。
「大佐殿のご配慮、痛み入ります。ですが小官へのお気遣いは無用に願います。寧ろ、小官は大佐殿の人選に感謝しております。既に軍を離れたセリアもそうですが、リーナには……出来る限り暗殺という陰湿な仕事をさせたくありませんから」
　歳が近い娘がいるからこそ、リーナにはできる限りその道を歩んでほしくはない、とまるで父親のような感情を滲ませつつ、カノープスはバランスに対して任務受諾の意を示す様に敬礼をしたのであった。

近いのに遠くなるような輝き

宿舎の前で眠らされたリーナが次に目を覚ました場所は、どこかのビジネスホテルの一室だった。その間取りを見て、その場所がアルバカーキ国際空港の近隣にあるビジネスホテルだとすぐに気付いた。時間は昼過ぎぐらいで、服装はスターズの制服ではなく私服に着替えられていた。

「えっ、服装も……そうだ、荷物は……」

リーナは飛び上がる様にベッドから飛び降りると、デスクの上に貴重品やパスポートなど渡航に必要なものは一通りそろっていたが、唯一通信端末だけは見当たらなかった。デスクの傍にはアタッシュケースがあり、中には先日買ったばかりの服まで入っていた。

すると、部屋の扉が開いて飲み物を持ったシルヴィが入ってきた。

「リーナ、起きましたか」

「シルヴィ、これは一体どういうことなの!?」

「落ち着いてください、リーナ。それについてきちんと説明します」

シルヴィはリーナを宥めるように言い含め、これにはリーナも渋々了解しつつベッドの横に腰かけた。それを見たシルヴィは買って来たばかりの飲み物の一つをリーナに手渡した上で説明を始める。

「まず、バランス大佐から既に聞いていると思いますが、リーナが四葉家の次期当主である司波達也の婚約者として申し込んだのは、リーナの祖父である九島将軍によるものです」

「お祖父様が？　……そういえば、この前閣下と話していた際にタツヤとのことも聞かれたけど」

「なので、九島将軍と大統領閣下はリーナの幸せを願って送り出すつもりでいました。ただ、それを知った統合参謀本部が反対し、『アンジー・シリウス』としての軍籍を保持したままリーナに任務を帯びさせる形で出国を認めました」

「……何よ、それ」

元々、九島健とＵＳＮＡ大統領――――リーナの二人の祖父はリーナの〝人としての幸せ〟を願って送り出す決意を固めた。だが、アン

ジー・シリウスを国外へ送り出すことに懸念を抱いた統合参謀本部が反発し、結局アンジー・シリウスの軍籍が残ったままとなった。
　リーナが呆然気味にそう零しても仕方がない、とシルヴィは思いながら説明を続ける。
「セリアは元々『制御しきれない』だなんて言われてたから分かるけど……その命令って？」
「婚約者として潜り込み、四葉の内情を探ること。可能であれば司波達也の能力を探れという命令だそうですが」
「ワタシにタツヤを売れというの!?　ふざけんじゃないわよ！　セリアですらタツヤに喧嘩を売るのが危険だ、って言っていたのに……」
　今まで軍の命令ということで逃亡者の暗殺も我慢して受けていたリーナにとって、自分が恋焦がれる人を売るような真似なんて出来ない、と初めて拒否の姿勢を見せたことにシルヴィは優し気な表情を垣間見せていた。
「それについては私もセリアから忠告を受けました。その上で、バランス大佐からの命令を預かっております」
「……〝アンジー・シリウス〟少佐はその能力に鑑みて、独自の判断に基づいて日本でテロを起こそうと目論むジード・ヘイグを拘束せよ。場合によっては日本の魔法師との連携を許可する――――って、これは」
「はい。大佐殿の予測では、こちら側の全ての事情を既に日本側が把握している可能性が高いと踏んでいます」
　つい先ほどシルヴィがリーナに言い渡したのは統合参謀本部としての命令で、シルヴィから渡された書類に書かれていたのは大統領府が発令したもので、バランスがシルヴィに渡した命令の概要であった。
　この際、ＵＳＮＡ政府のスキャンダルが明るみになるリスクを負ってでも、日本の勘気を被ることが何より一番の〝損益〟になると踏み、リーナに最悪の事態を回避するための役割を担ってもらう命令だった。
　そして、リーナは統合参謀本部からの命令という〝ハズレ籤〟を引

かせることになってしまったカノープスに対して同情の念を禁じえなかった。
「……ベンには悪いことをしてしまったわね」
「少佐殿なら気にしませんよ。寧ろ、少佐殿からすれば娘同然のリーナに暗殺などという汚い仕事なんてさせたくない、と思っているでしょう」
「もう、ベンったら……この仕事が終わったら、お詫びでもしないといけないかしら。で、シルヴィ。ワタシの通信端末はどこにやったの？」
　その命令を受ける意思を固めたところで、リーナは目下の問題であった通信端末の行方をシルヴィに尋ねた。すると、シルヴィは笑顔でこう返した。
「私が持っております。これはセリアからもう一つ忠告を受けまして、仮に何らかの形で日本行きが決まったらＵＳＮＡ国内にいるうちに知り合いへ連絡する可能性が高いし、それを軍に傍受されている可能性が高いから、日本に着いてから渡せと強く言われまして」
「ぐっ……ワタシはそんなに信頼ないの!?　てか、セリアと頻繁に連絡を取っている方が危険でしょう!?」
「それはシンプルな理由です。電話では日常のやり取りだけにして、本当に相談したいことはエアメールでやり取りしていましたし、傍目から見て分からないように暗号文形式にしていましたので」
「……」
　連絡一つをするにもアナログ且つかなり手の込んだ手段を用いている事実を知ったリーナは、それを平気でやってのけているシルヴィとセリアに対し、内心で戦慄に近い感覚を受けたのだった。
◇　◇　◇
　民間機でアルバカーキ国際空港からロサンゼルス国際空港を経由し、日本の東京湾海上国際空港（新羽田空港、羽田とも呼称される）にリーナが到着したのは、日本時間の１月２９日の２０時だった。
　パラサイト事件の際に使った部屋は引き払われておらず、そのままセリアが一人暮らしをするために賃貸契約が引き継がれていたため、

リーナとシルヴィはセリアに連絡をしたところ、セリアも断る理由は無いということでそのままセリアが住む家に向かった。
　リーナが呼び鈴を鳴らしたところ、玄関の扉を開けて出てきたのは私服姿のセリアだった。
「お、お久しぶり、セリア」
「……別に取って食おうって訳じゃないのに。何にせよ、久しぶりお姉ちゃん。シルヴィもお久しぶり」
「はい、お久しぶりですセリア」
　前は同じ軍人として住んでいたわけだが、「ポラリス」としてのセリアではなく、魔法科高校の生徒として生活を送っているセリアと寝食を共にすることにはリーナも少し緊張していた。
　各々使っていた部屋は綺麗に掃除されており、二人がリビングにきたところでセリアは注いだばかりの紅茶を差し出した。これには今まで二人のサポートをしていた名残からか、シルヴィが申し訳なさそうにしていた。
「すみません、セリア。本来なら私がやるべきことですのに」
「いいよ、シルヴィ。私はもうスターズの軍人じゃないし、二人は長旅で疲れてるだろうから。それでお姉ちゃん、どの面下げて日本に来たの？」
「ど、どの面って、ワタシの事情はセリアも知ってるはずでしょう!?」
　確かにセリアはリーナが日本に来た大まかな理由を把握している。その中には既に除隊したセリア相手に話せない〝軍事機密〟があることも当然把握している。だが、魔法的な部分で同調しやすいリーナとセリアの繋がりによって、セリアはリーナから感じるプシオンの波長でリーナの持つ情報を〝把握〟した。
「まあ、大体はね。でもね、お姉ちゃん。『七賢人』という理由でその情報を信じるってどういう事かな？　その裏をちゃんと取った上でバランス大佐に報告したの？」
「……いえ、していません」
「はぁ……シルヴィはどこまで聞いてるの？」
「あまり声に出しては言えませんが、大まかにはリーナがバランス大

佐に伝えた情報と同じ程度です」
　その受け答えで、セリアはシルヴィに伝わっている情報がリーナと同程度のものであると認識した。その上で、リーナに尋ねた。
「ねえ、お姉ちゃん。そのメールの中にお姉ちゃんが関与していない事件が記載されていたようだけれど……それ、全部ジード・ヘイグに関わる事件だよ」
「えっ、だって殆ど日本で起きた事件で、ワタシが殆ど関与した覚えなんてないわよ？」
「お姉ちゃんが関与していなくても、少なくともお姉ちゃんが婚約を申し出た相手である達也と、おに……コホン、悠元が関わった事件なの」
　リーナが見た情報――――『ブランシュ』、『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』、そして周公瑾に関わる事象――――をセリアが瞬時に共有出来ている事象は以前にも何度かあったため、シルヴィも特に驚くことなく聞いていたが、セリアから伝えられた情報にはリーナのみならずシルヴィも驚いていた。セリアは危うく悠元をいつものように〝お兄ちゃん〟と言いかけたが、慌てて咳払いをした上で何とか誤魔化すことに成功した。
　そして、セリアは一番大事なことをリーナに尋ねた。
「これが一番大事なことだけど……お姉ちゃん、そのメールってどの形式でどこに送られてきたの？」
「どの、って……特暗号メールという形で宿舎の私室にだけど、それが何か問題なの？」
「大アリなんじゃボケェッ!!」
「ひうっ!?」
　実戦部分を担っているリーナと異なり、情報・通信部分を担う形でリーナのフォローをしていたセリアは、特暗号メールを出す際の基準や扱い方について厳しく教えられていた。
　本来、特暗号メールはいくらスターズの総隊長宛とはいえ、機密性を重視して直接宿舎の私室に送ることを禁じている。これは宿舎の私室に解析用のデコーダーがあるとはいえ、特暗号メールによる作戦行動上の齟齬を防止する目的がある。

従来の手順では、統合参謀本部がスターズが所属する基地司令に特暗号メールを添付した出動要請の暗号メールを送付することが義務付けられていて、その上で基地司令が総隊長および隊長に基地内の解析機がある専用の通信施設で受け取る様に指示することとなっている。

総隊長・隊長間の連絡でも作戦行動中を除いて個々の通信端末を用いての特暗号メールの使用は禁止されており、同じく基地内の通信施設を使っての連絡が規則として定められているのだ。

これにはスターズの隊長間が連携して軍の叛乱を防ぐ目的がある。先日の脱走事件後、セキュリティに関するルールも一層厳しくなっていて、その中には当然特暗号メールの扱い方に関するものも含まれていた。

今まで特暗号メールを受けたことはあっても、特暗号メールを送る作業は全てセリア任せにしていたため、リーナがその〝規則破り〟をしたことに気付かないのも無理はないが、それでもセリアは叱責するように声を上げ、これにはリーナもたじろいだ。

特暗号メールに関する事項は基本的に隊長クラスと統合参謀本部にしか知らされないことのため、シルヴィがその部分を疑問に思わないのも無理はないだろう。

「規則破りもそうだけど、『七賢人』がスターズの暗号通信を使えるって時点で『七賢人』がＵＳＮＡの国内にいる様なものじゃない……何でバランス大佐も気付かないのよ……」

「え？　どうして？」

「……リーナ、シルヴィ。ここから話すことは私しか知らない事実だけど、私は〝ポラリス〟として活動していたころ、『七賢人』を名乗る者からメールがあった。そして、妙なものを送り付けられた」

スターズの〝セリア・ポラリス〟として活動し始めてから数週間後、セリアは明らかに慣習破りとも言える特暗号メールを受けたことがあった。それはリーナ相手に特暗号メールを送り付けた時と同じようなものだが、内容はセリアの素性について事細かに書かれたプロフィールにストーカーの類を疑ったが、その３日後に送り付けられた

のはＶＲ（ヴァーチャルリアリティ）型のＨＭＤ（ヘッドマウントディスプレイ）。
　セリアが受け取ったのは『エシェロンⅢ』のバックドアシステムである『フリズスキャルヴ』の端末だったのだ。
「それって、セリアの私物であるあの機械？」
「そう。私がかなり弄ったせいで元々の機能よりもえげつないことになっちゃったけどね」
　〝原作〟のことを知っていたせいと、使い方に関する『七賢人』のメールで『フリズスキャルヴ』の存在を知ったセリアは、意趣返しの意味も込めてスターズや軍の技術を使って、『フリズスキャルヴ』の端末を大幅に弄った。最悪壊しても、それはそれで相手への意趣返しになるとセリアはそう踏んでいた。
　その結果、どうしても残ってしまう『フリズスキャルヴ』の検索記録を簡単に改竄できるようになっただけでなく、『エシェロンⅢ』そのものにアクセスできるようになってしまった。このことは誰にも言っていないセリアだけの秘密だった。
「それはともかく、リーナにやった手口と私にやった手口が全く同じだった。そのタイムラグは大体３年だけど、年々更新される特暗号メールの通信システムを有しているのは、本来スターズの隊長クラスと統合参謀本部しかない筈。他にあるとすれば、ＵＳＮＡ国内で特暗号メールの暗号通信システムを管轄する政府機関しかない」
「……まさかだけど、特暗号メールを送った『七賢人』が政府機関の関係者だっていうの？」
「私は少なくともそう思っている。ただでさえ例の脱走事件があった後だよ？　暗号通信の規律を破るなんて不祥事を起こしたら、もし統合参謀本部の人間がやったとしたら一発で更迭案件だもの。そんな規律を知らない人間が送り付けたとしか思えない」
　とりわけ先日の脱走事件でより神経質になっているところで、統合参謀本部がそんなミスを犯せば大統領の耳に入った時点で更迭対象となってしまう。
　現時点で統合参謀本部が送ったという証拠が出てこない以上、特暗

号メールのセキュリティを使えるだけの政府機関の人間――――それも、軍規を全く無視した愉快犯であり、そんなメールを出せる人間となれば『七賢人』の名を唯一名乗っているレイモンド・クラークしかいない、とセリアは睨んでいた。
「私のプライベートを丸裸にした恨みは絶対に忘れないんだから……あ、おかわりはいるかな？」
「で、では頂きます」
「ワ、ワタシも頂くわ！」
なお、その際にレイモンドから「君のことが好きだ。是非付き合ってほしい」という愛の告白を受けたが、人のプライベートを赤裸々にしてしまう様な人は願い下げだと言わんばかりに、セリアはその後の『七賢人』からのメールを全て読むのを止めた。というか、全部削除した。
そして、セリアは前世で好いていた相手と結ばれる機会を得ることが出来た。このことをレイモンドが恨んで、達也だけでなく悠元への情報提供をしていないのでは、とも推察した。
その人の為人を知りたいからといって、人のプライベートに土足で踏み込むような人間など、セリアからすれば前世にいた胡麻を擂る大人達と一体何が違うのか、という気分しか持てなかった。
◇　◇　◇
翌日――――1月30日、リーナの希望を叶える形で達也との会談を取り持つ形とした。場所をどこにするか考えたが、司波家でなら機密性も十二分に確保できると見込んで達也に相談した結果、相手がリーナということもあって承諾してくれた。ただ、悠元たちはいつも通り学校があるため、会談の開始時間は18時からとなった。
「ハ、ハロー、タツヤにミユキ、それにユート。南盾島以来ね」
「久しぶりだな、リーナ。それで、〝アンジー・シリウス〟が態々日本に来るということは、テロリストを追跡でもしてきたのか？」
達也は事前にジード・ヘイグ――――顧傑の情報を貰っているため、リーナが態々来るとなればその案件が最も可能性の高い案件だと睨んで問いかけた。これにはリーナが「降参よ」と言わんばかりのジェ

スチャーをしながら答える。
「いや、そんな潜入めいたことが無理ってタツヤなら分かるじゃない。というかミユキ、この前よりかなり綺麗になってない？」
「そうかしら？　そういうリーナは痩せたんじゃない？　仕事が忙しいの？」
「体重は増えちゃってるけどね。筋肉がついたのかもしれないわ」
「ふーん、シェイプアップしたのね」
　まるで恨めしそうに睨んでくる深雪に対し、リーナは内心で「いや、深雪がそれを言ったら嫌味にしか聞こえないわよ」といわんばかりに、女性らしさの部分で綺麗になっている深雪の輝きに若干引き気味だった。
「そういえば、ユートと婚約したんですってね。おめでとうミユキ」
「ありがとう、リーナ。にしても、ずいぶんと耳が早いのね」
「あの『四葉』のプリンセスの婚約ですもの。関心を持たずにはいられないわ」
　悠元絡みの話題を持ち出したことでより一層深雪の輝きが増したように思え、視えない筈のキラキラとした輝きのような〝圧〟に、リーナはソファーに座っている筈なのに距離が遠くなったような気がした。

具材争いをする日系米国人姉妹

深雪の輝きという圧を受けて距離が遠くなっているような感覚を受けているリーナだったが、そこに助け舟を出す形で静観していた悠元が尋ねてきた。
「それで、リーナ。父から話は聞いたが、達也の婚約者として申し込んだのは本当のことか？」
「あ、うん……コホン。私、アンジェリーナ・シールズはこの度、司波達也殿の婚約者として正式に申し入れをさせていただきました。大人たちが余計なことをしてるけど、ワタシがタツヤを好きだって気持ちは嘘じゃない。それだけは本気よ」
「……そうか。まあ、セリアからも聞いていることだし、信頼はしよう」
「何か腑に落ちないんだけど……」
リーナが達也の言葉に対して不服そうにしていたが、このご時世では仕方が無いと諦めつつ、リーナが持っている情報を伝えることにした。
「以上が『七賢人』から伝えられた情報よ。任務には他の人が当たっているわ」
「……ベンでしょう？　ベンジャミン・カノープス少佐」
「な、何で分かって……あっ」
「南盾島で対峙した彼か。確かに、リーナに次ぐ実力者でジード・ヘイグの力量が分からない以上は妥当な戦力だな」
実は、既に箱根を起点とした警戒網を敷いているが、沼津港に停泊している小型貨物船に顧傑の姿を既に確認している。しかも、昨日の夜半にＵＳＮＡ大使館所有のクルーザーが貨物船の近くにいて、更にはそのクルーザーにＵＳＮＡ軍の駆逐艦が接近して一人の男性が飛び乗ったことを確認している。特殊通信を用いたＧＰＳによるパーソナルデータ照合でその男性がスターズのナンバー・ツー、ベンジャミン・カノープス少佐であることは確認済みだ。
セリアだけでなく、名前を聞いた悠元がカノープスとその時点で面

識を持っていたことにリーナが目を丸くしていた。
「それでね、そのジード・ヘイグは四葉（ヨツバ）を目の敵にしていると思うの。その意味でタツヤも狙われる可能性が高いわ」
「そうか。だとするなら、尚のこと悠元に協力した方がいいな……悠元、リーナを参加させないか？」
「うーん……セリアの判断を聞きたい」
　正直なところ『ブリオネイク』があるならまだしも、リーナの能力はどちらかといえば対拠点攻撃を含めた広範囲殲滅攻撃に向いている。それに、いくらＵＳＮＡ大統領の特命を帯びているとはいえ、アンジー・シリウスを白昼堂々動かす事態は避けたい。なので、悠元はセリアに判断を仰ぐことにした。
「私？　……正直なところ、私が七草家の双子みたく制御してやれば行けなくはないけど、あまり離れた距離だと負担が大きいんだよね。そうなると、私も箱根に出向いた方がいいんだけれど」
「学校が狙われる可能性があるってことだよな。いっそのこと、一高を休みにして外出を自粛しておけば被害は減るだろうが……その線で行くか」
　顧傑が乗ってきた貨物船から運び出されたコンテナの行方は全て把握しているが、顧傑はどうやら『ソーサリー・ブースター』を所持していない。なので、彼の僵尸術による最大１０キロメートルの範囲を考えるのなら、箱根の市街地がギリギリの範囲になるだろう。
　師族会議を狙った際に標的となる十師族以外に非魔法師の市民が巻き込まれたことを狙おうとする顧傑のことだから、ホテルに非魔法師の市民がいないと市街地にまでテロを仕掛ける恐れがあるため、予めいくつかの仕掛けを施していた。
　まず、今回の師族会議に使われるホテルだが表向き営業しており、ネット上でも通常通り宿泊予約できる。だが、師族会議が行われる２月４日と５日は〝リニューアル工事に伴うお知らせ〟の但し書きで紙媒体によるお詫びの書状を送り、同じ箱根にあるワンランク上のリゾートホテルへの代泊とするだけでなく、差額は神坂グループで全額負担する旨を添えている。

そして、ホテル全体に天仙結界を敷き、更に『幻影行列(ムーン・エスケープ)』を改良した『幻影夜行(ナイトメア・ファントム)』を用い、無数の市民に扮したサイオン情報体を設置することで、顧傑から見れば多くの宿泊客がいるように見せかけられるというわけだ。この術を使った際の僵尸術との間隔などは事前にテストしており、完全に顧傑を騙し切れると踏んだ。

それでも万が一の可能性を鑑み、深雪や達也に協力を仰ぐことは決定している。

「そんな風にあっさりと話せる辺り、ユートが当主になったってことなのよね」

「理由はどうとも言えるからな。いっそのこと『古式魔法師によるテロ対策』でもいいし」

「……間違っていないから困るけどね」

表向きは日本の古式魔法師が師族会議の決定に対して暴発しないようにするためのもので、顧傑も広義的に言えば古式魔法師の一人であるため、そのテロ対策で臨時休校にするということに変わりなくなるため、セリアは悠元の言葉に対して苦笑を混ぜつつ呟いた。

「リーナ。いくら任務とはいえ、下手すればスターズから叛逆者として扱われかねない。その覚悟は当然あるだろうな?」

「……ええ。タツヤがやられるなんて思えないけど、ワタシにだってまだ〝シリウス〟としての誇りがある。あの事件の黒幕を仕留める事がワタシにとって――――〝シリウス〟の心残りだし、元々その覚悟が無かったら態々日本行きを呑んだりしてないわ」

「お姉ちゃんがまともなことを言ってるよ」

「ちょっとセリア、それは酷くない!?」

こうやってシールズ姉妹のやり取りを見ていると、セリアはなるべくしてリーナの妹になったのだと悠元はそう感じていた。すると、夕食の準備をしていた水波がこちらを窺うように見ていたことに気付く。

「水波、準備が出来たのか?」

「はい。今日は人数が多いのでお鍋にしてみました」

「そうか。リーナとセリアもよかったら食べていくといい」

「そしたら、お言葉に甘えようかしら」
　そうして六人で鍋を囲むということになったわけだが、特に先程までの雰囲気はなく、和気藹々と楽しんでいた。和食ということでリーナは大丈夫かどうか不安な点はあったが、セリアから祖父の影響で、シールズ家は和洋の複合した食卓――――現代の日本のような状態だったそうだ。なので、リーナもお鍋料理に抵抗を見せたりすることはなかった。
「ちょっと、セリア！　それはワタシが狙ってたお肉なのに！」
「甘いぜよ、お姉ちゃん」
「……私も聞かされていましたが、本当に根は日本人なんですね」
「まあな」
　具材の取り合いになり、危うく拾い箸になり掛けそうになったところで悠元がセリアにチョップを食らわし、「ざまあみろ」とほくそ笑むリーナに対して「お前もだからな？」と言わんばかりの圧を掛けると、これには涙目で「ゴメンナサイ」と謝ったリーナの姿に、達也と深雪、水波は揃って苦笑を浮かべていた。
◇　◇　◇
　西暦２０９７年２月４日。今日から２日間の予定で師族会議が開催される。
　師族会議は日本魔法界のサミットで、十師族を魔法師のリーダーとして仰がない古式魔法師も、師族会議の影響は決して無視できないものとなっている。特に二日目の十師族選定会議、今後四年間の十師族を決める会議に関心が集まっている。
　この前日となる２月３日の夕方、政府から緊急会見という形で官房長官による記者会見が行われた。その内容は、〝教育行政システムの刷新に伴う教育データベースシステムの大規模メンテナンス〟という名目で魔法科高校および国立魔法大学、更には各種学校を含めた教育機関全てが政府――――文部科学省からの通達で二日間の臨時休校措置が取られることとなった。
　さらに、〝感染症対策〟の形で首都圏に不要不急の外出を控える緊急声明を発表し、その際に発生した損害は全て政府が責任を負うこと

が付け加えられた。この世界では病気による死亡率が劇的に減少したとはいえ、インフルエンザの流行による学級閉鎖も未だにあり、裏向きの目的である爆弾テロ対策に利用させてもらう形で発令した。
話を戻すが、いくら高校生の身であっても、いずれ魔法師として身を立てていこうとしている者からすれば無関心ではいられない。とりわけ十師族と師補十八家、次の十師族に選ばれる、あるいは選ばれない可能性がある家の関係者は、会議の様子が気になって仕方がないのだろう。
とはいえ魔法科高校は臨時休校となったので、テロの標的になったところで被害がそこまで出ることはないし、以前のようにデータベースから魔法技術を盗もうとしても対策はされている。
「それで――なんで皆ここにいるのかね？」
そうぼやいた悠元の視界に映るのは、神楽坂本家の客間にいる友人たちの姿だった。
達也と深雪、水波とセリア、それにリーナはまだ分かる。『神将会』の関係で修司と由夢、姫梨と雫も理解はする。だが、エリカとレオ、幹比古に美月と佐那、そしてほのかに加えて燈也までいる有様だった。
「何でって、そりゃ千姫さんから招待を受けたから？」
「別に実家に居ても大差ないだろうに」
「それは絶対に嫌ね。家に居たら親父が妙なプレッシャーをかけてくるのよ」
エリカは、父親が彼女に無断で婚約打診をしたことで完全にキレてしまい、新学期からは一人暮らしをしていたレオの部屋に転がり込んでいた。レオも最初は実家に帰った方がいいのでは、と諭しはしたが、結局エリカと話し合い（物理）をした結果、黙る他なかった。
「レオも大変だね」
「ああ。しかも幹比古が知ってる絡みのことも起きたからな……マジで冷や汗もんだったぜ」
そこに、レオの家の住所を知った夕姫が押しかけ、結局神楽坂家の斡旋で今の家賃と変わらない〝元日く付き〟の広い部屋へ引っ越すことになった。無論、除霊の類は自分も関わったが、八雲が太鼓判を

押す形で「問題は無い」と断言したので、大丈夫だとみている。
　修羅場になるかと思えば、エリカと夕姫がお互いに共闘関係を結んでレオを押し倒したそうだ。結局、大学卒業後に職が安定次第籍を入れることになるらしく、エリカが内縁の妻扱いでいいとのことらしい。
「エリカも随分妥協したな」
「そう？　まあ、あたしの名字なんて元々オマケみたいなもんだし、あの実家があたしに対して素直になるなんて思えないのよ」
「辛辣だね、エリカ」
　そんな関係になった影響でレオが夜中にどこかをふらつく頻度が激減し、仮にどこか行こうものならエリカと夕姫が捕まえてベッドに押し込まれる、とレオから相談を受けていた。
　それに対しての回答は「変に出歩かれたら別の女に浮気すると思い込まれるだろうが。何も言わずに外なんか歩いたら、下手すると修羅場になるが、いいのか？」で、これにはレオも正論と捉えたらしく「まあ、確かに正論だな」と肩を竦めていた。
「で、ミキと美月の子どもはいつになるのかしら？　さては、もう仕込んでるんじゃないの？」
「エ、エリカちゃん!!」
「流石に早すぎるって！　僕も柴田さんもまだ高校生なんだから！」
「やってることは否定しないのね？」
「……」
　幹比古と美月、佐那に関しては東道家で話が付いており、高校卒業後に幹比古は青波の養子として迎えられることになる。青波自身は「節度さえ守れば、営み程度で目くじらは立てぬ」と述べていたが、それでも幹比古はきちんと成人してから考えたいと思っており、一線だけは律儀に守っている。
　エリカの直球発言に対し、幹比古と美月は揃って頬を紅く染め、顔を俯かせていた。
「ほほう、これは是非修司との営みの為にもおうちっ!!」
「馬鹿野郎。他人の恋路に首を突っ込むな」

「お姉ちゃんは……ダメね、煙が立ってるわ」
「ほのかも同様だね」
　由夢は、彼らの夜の営みに関して聞き出そう、と目論んだところで修司の鉄拳制裁を食らって畳の上で頭を抱え、ここの面子の中でそういった経験がないリーナとほのかが揃ってテーブルに突っ伏しており、これにはセリアと雫が冷静に「無理もない」と判断していた。
　そして、男性陣の中である意味〝残された〟側の達也はというと、悠元と将棋を打ち合っていた。
「ここかな」
「やるな……なら、ここだな」
　聞こうが聞くまいが、どの道逃げ場所なんて無いと思っていたところで悠元から将棋を打たないかと誘われ、そのまま勝負に興じていた。打ち筋だけ見ればその道のプロクラスと言っても過言ではない盤面の戦いに、燈也は感心するように見ていた。
「それにしても、燈也は師族会議に出席しなかったんだな」
「既に当主である悠元と違って、僕はまだ次期当主でしかありませんからね。その意味では達也も同じでしょう？」
「そうだな」
　燈也は六塚家の次期当主として発表されているが、六塚家の当主としての仕事をしているわけではない。その意味で正月に四葉家次期当主として指名された達也も同じ立場に近い。悠元も神楽坂家の当主だが師族会議の関係者ではないため、血縁的に十師族関係者であっても無関係の立場となる。
　師族会議は基本的に十師族の当主のみが参加し、そして明日の十師族選定会議では師補十八家を含めた師族二十八家の当主だけ参加するのが通例となっている。例えば、十文字家の当主代理をしていた克人は師族会議に参加しているが、七草家の長女でしかない真由美は会議に参加していない（寧ろ、あの父親と同じ部屋に居たくないと思うだろう）。
　これは機密性を重んじてのものだが、せめて一人ぐらいは護衛を付けるべきと思わなくもない。

「悠元は次の十師族をどう見ます？　やはり変わりなく行くでしょうか？」
「――――無理だな」
　燈也の問いかけに対し、悠元は一刀両断するかの如く言い放った。これには周囲からの目線が向いていたし、深雪も心配そうに悠元を見ていた。
　深雪を慰めるように頭を撫でた後、悠元は盤面を見つめつつ話し始める。
「身贔屓を抜きにしても、まず三矢は確定ラインだろう。二木、四葉、五輪、六塚、八代も監視・守護地域の関係上で替えが利かない。その意味で対新ソ連の最前線を担うことになる一条もそのライン上にある」
「……七草、九島、十文字は違うと仰るのですか？」
「十文字の場合、師補十八家の十山にしがみ付かれている節がみられる。ここは旧第十研の誼から下手に切れないんだろうが……それよりも、十師族としての意識が足りない」
　十文字家が担う役割は首都防衛の最後の砦たる存在として力を発揮すること。だが、守りに徹し過ぎて攻めへの意識があまりにも欠如し過ぎている。かの『ファランクス』は攻防一体型の移動型干渉装甲魔法だが、攻撃と防御で完全に別系統の魔法として割り振られている。
　原作知識からするに、スターズの『分子ディバイダー』に対して有効な攻撃方法とは言えなかった。守るだけで相手を負かそうとしないのは変に恨みを買わない為だろうが、時として相手の心を折らなければ鼬ごっこの様相を呈することになる。
　力のある者が力無き者を守らなければならない論理は当然分かっている。だが、それは必ずしも〝義務〟ではなく〝権利〟を行使しているに過ぎない場合が多い。
　例えば、とある人が偶々別の目的で合法的に銃を携帯しているとして、近くに熊が出たから倒さなければならないか、と言われると、必ずしもそれは〝義務〟として成立しない。それならば熊の習性を熟

知している専門家に頼むのが一番確実であり、筋が通る話だ。
魔法師の場合、何の専門家なのかと言われると判断に困る。救急系統に優れているのか、高所などの危険な作業に適しているのか、あるいは対テロなどといった危険な仕事に向いているのかなんて、非魔法師からすれば判断なんて出来ないに等しい。魔法師ライセンスも実戦的能力の保証を謳っていながら、魔法師の専門性に関するフォローを一切していない。
創作物における魔法だと多岐に渡る種類の魔法が存在している場合があり、その能力に応じた役割を担うことで周囲の人間もその為人を認識することが出来るし、特定の種類の魔法が使えることで必要とされる専門職がある。そしてこれが一番大事なことだが、魔法使いでない人も魔法の恩恵を受けられているために、人々が魔法に対して必要以上に忌避する感情をある程度抑えることが出来ている。いわば一種の〝棲み分け〟が成立しているのだ。
結局のところ、物理法則改変主体の現代魔法では「何ができるのか」となった時、戦闘行為という誰の目から見ても暴力的な行為になってしまう。それに付随している事象が多いからこそ、非魔法師が魔法師に対して恐怖を抱いている一因でもあるだろう、とみている。
話を戻すが、悠元が十文字家に意識が欠如していると述べたのは、時として毅然とした対応をするだけでなく、このままだと十文字家は七草家の言いなりになっているに等しい状況を危惧してのことだ。
もし、アリサの件で引き渡しを求めた場合は千姫が全権を負うと明言したが、悠元がその交渉の場に出るつもりでいる。神楽坂家当主となった以上、当事者として代理で済まそうなどとは一切考えていない。
「七草の勢力の大きさは理解こそするが、相互監視の目的に対して十文字の勢力は弱すぎる。今の十師族でいえば、七草・三矢・四葉を関東地方に置かないとパワーバランスが取れない状態だ」
「……七草家と九島家はどうなんです？」
「そこなんだけどね……まあ、九島家のペナルティは決まったが、七草家は正直決めかねてる部分がある」

九島家の処分はあっさりと決まったが、七草家の扱いをどうしたものか正直悩んでいた。具体的に言えば、七草家を仮に関東地方から引き離したとして、今まで七草家が担っていたメディア工作や政治家への働きかけと言った政財界へのフォローが極めて難しいことについてだ。

それと、都心を含めた関東圏内に七草家関連の企業が数多くあり、極めつけに国防軍情報部に独自のセクションを持っていること。これらの問題をどう対処するかで今後の動きを決めねばならない。

「ペナルティって、七草家が何をしたの？」

「簡単に言えば、俺が命を狙われる原因を見逃し、実家の仕来り破りを行い、終いには俺との約束をあっさりと破った……若造だと思って甘く見やがって」

その証拠に関する部分は全部上泉家と三矢家、四葉家にも渡している。真由美や香澄、泉美は個人的に親交があるので見逃すし、彼女らの母親も対象外だ。だが、現当主とそれを諌めもしない前妻の二人の子は問題の対象と見做す。

七草の評価が地に落ちようが最早知った事ではない。こうなれば、少なくとも十師族として昇格することになる七宝（しっぽう）家に繋ぎをつけることも考慮に入れるべきだろう。

なお、九島家のペナルティについてエリカが触れなかったのは、ここにはその遠縁であるリーナとセリアがいるためであった。

フィクションですら匙を投げかねない

一息入れるという形で、悠元は神楽坂本邸の自室――――当主の執務室に戻り、そのまま畳の上に寝転んで瞼を閉じた。脳裏で今後の動きをシミュレートすることに集中力を傾けた。

（ジード・ヘイグ――――顧傑の動きは現時点で確認できない。横須賀から運ばれたコンテナは1つで、今のところ僵尸術によって動き出す気配はなし、か）

正直なところ、僵尸術の破り方を周公瑾の知識で得ているため、その気になれば顧傑が人形を市街地で爆破させる前に止めることは可能だ。最終手段として『天陽照覧（てんようしょうらん）』を使うことも視野に入れる必要があるのは間違いない。

少なくとも、顧傑には箱根を離れるまで彼が思い通りに行ったと思わせる必要がある。選定会議の次の日に顧傑がメディアを通じて声明を発表するが、それに被せる形で政府による緊急会見を行い、顧傑の爆弾テロを「我が国の国民の命を脅かす極めて悪質なテロ行為」と非難させる。

しかし、原作で顧傑が何故十師族選定会議の最中を狙い撃たなかったのかが気になる。いや、それで巻き込んで師補十八家の誰かが犠牲になれば、正当な理由で師族会議による報復行為が成立することになる。顧傑は十師族を社会的に抹殺すべく、それを効果的に演出するために十師族だけを狙い撃った。それも、無差別攻撃と見られがちな爆弾テロという形で。

四葉の本家を狙い撃つような素振りは見られない以上、いくら『フリズスキャルヴ』でも四葉本家の場所は突き止められなかった、とみるべきだろう。

（しかし……復讐の理由がそう簡単に忘れられるものなのか？）

周公瑾は特殊過ぎるが故に例外だとしても、顧傑に愛国心があるとするならば、それを滅ぼした四葉家だけでなく大亜連合にも向けられるべき感情の筈だ。なのにも拘らず、顧傑は四葉家だけにその復讐の矛先が向かっている。

しかも、顧傑が北米に亡命したのは２０５４年頃――彼が５４～５５歳の頃。四葉の復讐劇がその８～９年後の話だから、実質的に６２～６３歳の時に四葉への復讐心を抱いたことになる。若い頃の恨みが積もり積もってというのならばまだ分かるが、その年齢の人間だと復讐心を抱くには遅すぎるはずだ。

むしろ、約１０年という遅延のタイムラグに耐えうる魔法があったのかと考えた際、前世の創作物関連で一つ心当たりがあった。

それは、薬物などによる身体・精神を著しく先鋭化した強化人間を安定化させるため、精神的な同調を施すだけでなく一つのブロックワード――本人と最も密接に関係している〝キーワード〟を用いることで人間としての記憶を隔離し、命令に忠実な兵士を作り上げるという事柄。

顧傑が北米へ亡命する際、それを手助けした人間によって〝崑崙方院〟もしくは〝大漢〟、それと〝四葉〟というキーワードを条件に復讐心を抱くよう仕組まれていたとすれば、ある程度の辻褄は合う。

周公瑾の知識を見る限り、四葉の復讐劇が全世界に広まったのを起点として顧傑は大漢（ダーハン）の亡命難民によるネットワークを構築し、闇社会（アンダーグラウンド）に浸透していくことで復讐の為の力を蓄えてきた。

つまり、２０５４年時点で四葉を脅威と考えていた人間でなければ、顧傑を使おうなどとは考えられない。更に、顧傑は崑崙方院の主導権争いに敗れて国を追われた身。この策を目論んだ人間は、顧傑の崑崙方院に対する無念や後悔といった感情を利用した形になる。

そうなると、真夜の誘拐に端を発した四葉の復讐劇も顧傑に埋め込んだ復讐心を抱かせる〝楔〟を発動させるために起こした可能性が高い。『元老院』が積極的に関与したのもそれを確実的なものにするためだったとみるべきだ。

（その時点で脅威に考える人間がいるとするならば……古式の術者か『元老院』の四大老、それに九島烈）

原作だと、達也や深雪（主に達也の方が強かったが）を気に掛ける素振りが多く、かつては真夜や深夜の魔法の教師役をしていたことがあった。ならば、四葉家先々代当主・四葉元造とも面識はあって当然

と考えられる。
　では、第四研の四葉家と第九研の九島家の接点は一体どこにあったのかと考えた際、一番考えられた線は元造の妻・真夜と深夜の母親である阿部泰夜（あべやすよ）であった。
　この世界の場合、泰夜は土御門家の傍系（神楽坂家は安倍・賀茂氏系列の家と江戸時代に一度袂を分かったが、明治政府成立に際して明治天皇より安倍氏と賀茂氏の嫡流として認められた）にあたり、その母親は神楽坂家の人間――千姫の伯母にあたる人物だった（千姫の叔父の息子が元造であり、元造と泰夜は従兄妹同士で結婚したことになる）。そして、泰夜の父方の従姉が九島烈の妻であった。つまり、九島烈と四葉元造は土御門家を介する形で義理の従兄弟の関係ということになる。
　原作の古都内乱編で達也たちが嵐山の『伝統派』と戦った後、陰陽道系の古式魔法師である警察官から執拗な取り調べを受けていた。その一方、第九研による古式魔法の現代魔法化への協力に陰陽道系の土御門家が協力的だったのは、九島家もしくは「九」の家と土御門家に何らかの血縁的関係がある可能性を推察したが、この世界では血縁関係という形で証明されたことになる。
　話を戻すが、烈との会談の際、実はこの部分についても問い詰めた。すると、烈は後悔の念を吐き出す様に全て話した。
　その当時、『元老院』の四大老である東道氏と樫和氏から相談を受けるだけでなく、四葉の弱点となるような要素を執拗に尋ねられていた。その際、烈は真夜と深夜の存在だけでなく、彼女らの固有魔法――真夜の『流星群（ミーティア・ライン）』と深夜の『精神構造干渉』まで全て話したらしい。
　その資質が後の世代に継がれることを危惧した彼らは、烈に対して七草弘一と四葉真夜に台北で行われる少年少女魔法師交流会（マギクラフトチルドレン）に出席するよう強制した。その引き換えとして、当時千姫と剛三が進めていた十師族による魔法師社会の秩序の担い手に烈を推挙するという餌を与えた。
　この事実は、悠元に話すまで烈と東道氏、樫和氏の三名しか知る者

はいないということも付け加えられた。
自ら力を欲した烈は分の悪い賭けに勝って力を得た。だが、生まれつき特異的な魔法を有する四葉の魔法師である元造を烈は羨んだ。それが本人の気付かないところで憎しみや妬みへと変化し、終いには彼らを〝売った〟。力を求める在り方は十師族らしい考え方に基づくものだが、やっていることは七草家の四葉降ろしよりも遥かに酷いだろう。
正直、今まで剛三はおろか千姫にすらバレていないのは驚きしかなかった。
この辺は自分の推測も混じるが、恐らく九島家の御家騒動で九島家と神楽坂家に確執が出来てしまい、千姫も九島家の衰退を見越して放置する方向に舵を切ったのだろうと思う。それと、東道氏の〝四葉殺し〟がその隠れ蓑として機能してしまった結果、千姫ですら気付かなかった可能性が高いと踏んだ。
身内のことが大きすぎて、それに烈が関与したというところまでは読み切れてなかったのだろう。それに、命を落とした東道氏も死の間際まで烈の名前を出さなかったことを見るに、師族会議体制の成立にそんな裏があったことを知られたくない、という思いがあったのかもしれない。既に亡くなっているため、真偽のほどは不明だが。
なので、烈には全てを清算する意味で自らが旗頭となってきた師族二十八家体制に終止符を打つ役目を担ってもらうつもりでいた。事情はどうあれ、長年この国の為と働き続けた功績だけは認める。だが、真夜の幸せを奪い、深夜を苦しめ、剛三を悩ませ、元造を含めた四葉を殺した罪は消えない。この国の体制を揺るがそうとする輩を育ててしまった罪は、九島家の十師族落ちも含めた態度で示してもらう。
烈がこの先何年生きるかなど不明だし、原作のような死を回避できたとしても想定外の事態によって命を落とすことも有り得る。万が一のことも含めて、全て今年の春までにケリをつけてもらうつもりだ。
（……まずは顧傑を捕らえる。仮に死んだとしても、彼自身に掛けら

れた魔法の情報履歴は決して消えない）
生死を問わず顧傑を確保することが最重要であり、仮に死体が消滅しても最終地点さえ分かっていれば『天陽照覧』で復元・蘇生させることは可能。先日の周公瑾に使った『天陽照覧』はその確認も含めてのものだった。彼に植え付けられた〝楔〟が死に至らしめるトリガーを有していなければいいが、保険の為に天仙結界で遮断して取り除くことも考慮に入れて行動するつもりだ。
最終的には顧傑を拘束し、〝国防軍〟によってＵＳＮＡに輸送する。この辺は日米同盟に基づく共同基地協定により、同盟国内で指定された基地を共同利用することが出来る取り決めを利用する。ＵＳＮＡ軍側が使えるのだから、国防軍側にも当然この権利を行使する資格がある。
そして、その護送には独立魔装大隊を使うつもりでいて、そのついでにベンジャミン・カノープス少佐を同行させるつもりだ。
剛三も悠元の案には賛成しており、彼が顧傑を〝討つ〟という文言は「一発ぶん殴らせろ」という言い草に近い。崑崙方院の生き残りとはいえ、顧傑が残っていればあのような事件は起きなかったかもしれないという抑止力を放棄したことへの鉄拳制裁をしたいだけ、とのこと。
てっきり殺すつもりなのかと思ったが、「それでは顧傑を慕ってたやつらを絶望の淵に叩き落せぬじゃろうが」という理由を聞いたとき、ＵＳＮＡのアンダーグラウンドを合法的に壊滅させろ、という願いを聞いたような気がした。その辺は千姫から正式にお願いされているが、その理由を述べた剛三は顧傑の護送に付き合うと発言した。
万が一、その飛行機を撃ち落とそうものならば、剛三は「国防総省に乗り込んで顧傑を押し付けてくる」と豪語しているため、剛三の命の心配はしていない。寧ろ、ＵＳＮＡの本土が落雷による被害で混乱しないか不安に感じるほどだ。独立魔装大隊のメンバーに誰を使うか次第だが、風間の場合だと剛三の無茶ぶりに付き合わされることになるだろう。カノープスも剛三を止めることなど出来ない、と匙を投げるかもしれない。

某格闘漫画に出てくる主人公の父親よりは理知的だが、一度敵対するとそれよりも被害が可笑しいレベルに振り切れること間違いなしだ。

何せ、滞在中に遭遇した爆弾テロによって倒れかけた自由の女神像に掌底を撃ち込んで強引に直立させた荒業は、世界中を探しても剛三以外に出来ないやり方だと思う（そのせいで所在がバレて、大統領府の人間の呼び出しを受けてホワイトハウスで大統領と面会する事態に発展した）。

なお、その時の掌底の後は直さずに残したらしく、かの英雄の手形として新たな観光名物になったらしい。

正直言って、誰かに尋ねたい。

まるで「ハンス＝ウルリッヒ・ルーデルに武術と権力と魔法のチートが備わって転生しました」というフィクションですら匙を投げかねない人物を倒せる手段があるというのなら、是非ご教授願いたい。

俺の場合はって？　音速で飛んでくる某国民的人気アクション漫画みたいな存在なんて敵にしたくない。面倒この上ないと思う。正直、そんな存在が身内で助かったという意味では、自分は運に恵まれたかもしれないだろう。

仮に剛三がファンタジー世界に飛ばされた場合、開幕魔神が飛んできて「お願いですから命だけは」と土下座する光景が見えてしまいそうになる、と思うのは自分だけだろうか。

◇　◇　◇

師族会議――――高校生にとっては、場合によって喧嘩のタネになるぐらいのものであったが、当事者側である大人達にとっては、命を賭けるような真剣な闘争の場となっていた。師族会議の会場となる神坂グループのホテル、その貸し会議室に置かれた円卓に次々と会議参加者が集う。

日焼けによって赤銅色に染まっている身体に、ラフなセーター姿で席に座る〝海の男〟のような風貌を持つ男性は北陸・山陰地方を監視・守護する一条（いちじょう）家当主・一条剛毅（いちじょうごうき）。先日４２歳を迎えたばかりで金沢（旧石川県）在住、表向きは海底資源採掘会社の社長。

髪をアップにした上品な和服姿の熟女は阪神・山陽地方を監視・守護する二木家当主・二木舞衣。芦屋（旧兵庫県）在住の５５歳で会議参加者では九島家に次ぐ年長者。表の職業は複数の化学工業・食品工業の大株主。

ポロシャツの上からジャケットを羽織ったラフなスタイルの、小柄ながらもがっちりとした体格を有する男性は、国際情勢を含めた国外の情報収集を担う三矢家当主・三矢元。厚木（旧神奈川県）在住の５３歳で、表の職業は国際的な小型兵器ブローカー（ブローカーとは名乗れないため、表向きは防衛省の兵器調達を専門に扱う貿易商という体になっている）。

ワインレッドのフォーマルなワンピースを纏う美女は中部・東海地方を監視・守護する四葉家当主・四葉真夜。どうみても３０歳過ぎにしか見えないが、実年齢は現在４７歳。十師族の中では唯一表立った職業を有しておらず、現住所も公表していない。

整ってはいるが、参加者の中では〝地味〟とも言える風貌――まるで垢抜けないビジネスマンのような男性は五輪家当主・五輪勇海。宇和島（旧愛媛県）在住の４９歳で、表の職業は海運会社の重役だが実質オーナー。

栗色のストレートヘア、パンツスーツ姿のグラマーな女性は東北地方を監視・守護する六塚家当主・六塚温子。仙台（旧宮城県）在住の現状の十師族では最年少となる２９歳で、表の職業は地熱発電所掘削会社の実質オーナー。

２０世紀後半（１９８０～９０年代）のエリートビジネスマンを思い起こさせるかのようなやや古風な人物は関東地方を監視・守護する七草家当主・七草弘一。東京在住の４８歳で、室内であっても外さない薄い色の付いた眼鏡が彼の特徴となっている。表の職業はベンチャーキャピタル経営。

ノーネクタイのスーツ姿で髪を立て気味の七三分けにした男性は対馬・沖縄を除く九州地方を監視・守護する八代家当主・八代雷蔵。３１歳で福岡（旧福岡県）在住。表向きは大学の講師と複数の通信会社の大株主。

海外ブランドのスリーピースを着こなした白髪の紳士は京都・奈良・滋賀・紀伊（和歌山）方面を監視・守護する九島家当主・九島真言。生駒（旧奈良県）在住の６４歳で、表の職業は様々な軍需産業会社の株主に加え、出資者と債権者も担っている。

羽織袴姿の剃髪した男性は七草家と共に伊豆半島を含めた関東地方を監視・守護する十文字家当主・十文字和樹。東京在住の４４歳で、表の職業は国防軍を得意先とする土木建設会社のオーナー。

これが現十師族の各家当主だ。なお、ここにいる参加者の中で十文字家だけが、和樹の長男で一時期当主代行を担っていた克人を伴っている。

当主全員が席に着き、ドアが閉まる。その際の役目は最年少である克人が担う形となった。

「十文字殿、昨年の師族会議から復帰なされたとはいえ、今日は克人殿を伴われて如何なさったのですか？」

まず口を開いたのは、ここにいる参加者の中で最年長となる真言であった。

十師族は基本的に各家平等であるが、進行役がいなければ会議は進まない。そのため、年長者が音頭を取るという不文律が出来ていた（２０８９年以前の師族会議では九島烈が議長役を担っていたため、この不文律が定着していた）。

昨春の師族会議（南盾島の調整体魔法師に関わること）では、真言を含めて十師族の当主が２年ぶりとなる和樹の復帰に喜んだわけだが、その和樹が克人を伴っているのは「健康上の理由があるのか」と訝しんでのことだった。

「それについて、皆様にご報告したいことがございます」

真言の言葉を受けて、和樹が立ち上がった。本来ならば座ったままの発言がスタンダードとされている師族会議において、彼のその振る舞いだけで重大なことを告げるのだと他の参加者は察しつつ和樹の言葉を待つように見つめた。

「突然な事ではございますが、私、十文字和樹は十文字家当主の座を隣にいる息子の克人に譲ります。つきましては、ここにいる皆様方に家

督継承の立会人となって頂きたいのです」
「それはまた……急な事ですな」
　参加者の誰しもが勝手なお喋りをしない中、代表するような形で真言が正直な心境を吐露した。そう言われるのも「無理もありません」と言いたげな表情をしつつ和樹は続けた。
「以前、私は魔法力低下の病に罹っておりました。その為に一時期は克人に当主代理としてこの場を任せておりましたが、その病も無事に完治いたしました。皆様の不安を払拭するために説明しておきますが、これは十文字家特有のものの為、皆様を含めた普通の魔法師が罹るものではない、と断言いたします」
　和樹が説明したことに対する問いかけに先んじる形で補足説明を入れたため、これには何か聞きたそうにしていた弘一も納得したような様子を見せた。その一方で、剛毅が一番の疑問を和樹に対して尋ねた。
「十文字殿がそう仰るのならば、その言葉を信じますが……では、魔法師としての力を取り戻された十文字殿が、何故当主の座を克人殿に譲ると仰られた理由をお聞きしたい」
「これは以前より考えていた事なのですが……理由を簡潔に述べるとするならば、私は〝彼〟に対する償いをするという意味で当主の座を降りる時が来た、と判断した次第です」
　和樹が述べた〝彼〟という存在に首を傾げる者や考え込む仕草を見せる者がいたが、ここで和樹の視線が元に対して向けられていることに他の参加者も気付いた。その一連の流れだけで〝彼〟が誰を指しているかなど一目瞭然であった。
「三矢殿。既に三矢の籍を離れたとはいえ、三矢殿の息子――神楽坂殿も含め、三矢家に対して数々の非礼を働いたことは事実です。本来ならば当人の前で謝罪すべきことであり、上泉殿から勘気を被っても致し方が無いと覚悟していました。謝罪で済む問題ではありませんが、本当に申し訳ありません」
「十文字殿……頭をお上げください。そのことに関しては既に解決した問題であると私も認識しておりますし、神楽坂殿からも『克人殿か

らも詫びられたことなので、気にはしていない』と言付かっています」
念頭にあるのは十山家による〝再教育〟の件と、理璃に関する部分だと元は察しつつ、事前に悠元から預かった言葉を含めて和樹に語った。だが、それでも和樹の意思は固いと元は直ぐに悟った。
「三矢殿と神楽坂殿の器の広さに感謝しておりますが、謝罪の言葉だけでは口先だけに終わってしまい、十文字家の当主としての沽券に関わると痛感した次第です。なので、未だ成人してはおりませんが、克人にこの先の十文字を託したいと考えます。皆様、如何でしょうか？」
悠元を含め、三矢家に対する非礼の償いを口だけのものにしたくはない。それを形として示すために和樹は十文字家当主を克人に継承したいと告げた。
「十文字家のことは家内でお決めになられるのが筋だと思われますが、私は構いませんわ。喜んで克人殿への継承の立会人となりましょう」
「克人殿の為人は弟を通じてよく御存知ですし、一時は当主代理として立派に務めあげておりましたので、私も異存はありません」
真夜の賛同に続く形で温子が声を上げた。温子は元々真夜に憧れている節があり、加えて師族会議のみならず弟の燈也を通じて克人と面識があるため、彼の実績を踏まえつつ温子も賛同した。
「残念な事ではありますが、十文字殿がそう決められたのならば引き留める理由もありませんな。喜んで克人殿への十文字継承に立ち会わせていただきます」
「……私も他家の家督継承にとやかく物言いをつけるつもりはありません。私も克人殿の当主就任を歓迎いたします。和樹殿には、違った形で魔法界に貢献されることを期待いたします」
先程の謝罪に関することもあって元も積極的に賛同の姿勢を示し、弘一は少し考え込んだ後に賛成の立場に回った。
十師族の中で勢力の強い四葉・三矢・七草が支持したことに続き、他の家の当主も和樹に対して労いの言葉を掛けつつ、克人の当主就任を歓迎した。

「それでは克人殿。新たな十文字家当主として、その席に座られよ」
真言の言葉を受けて、克人の十文字継承は他の十師族に認知される形となった。
和樹は口にすらしなかったが、この継承の背景には悠元の神楽坂家当主襲名が大きく影響している。まだ１６歳、今年の２月に１７歳になる人間が古式魔法の大家の当主となる意味――――それは十文字家当主である和樹でも無視できないものとなった。
今まで上泉剛三の親族、十師族・三矢家の直系という立場で許されていた事も、彼が神楽坂家次期当主となったことで一変して許されなくなり、当主を襲名したことでそれが確定した。
仮に悠元自身が許していても、そのことが明るみになれば十師族の一角としての沽券に関わる。和樹は今までの非礼を自身の責任として取る形で十文字家当主の座を降り、克人に家督を継承したという次第だ。
それを後で聞いた悠元は「そこまでの覚悟が持てるのなら、自身の女性問題ぐらい向き合えただろうに」とやや呆れ気味に呟いたのは言うまでもない。

師族会議　前編

師族会議の会議場から和樹が退出し、克人が鍵を閉め直した上で席に座った。十文字家の当主交代という事柄があったが、改めて議長役を担う九島真言が口を開く形で師族会議が始まった。

「それでは、改めて師族会議を始めます。まず各担当地域に関する動向をお願いします。一条殿」

「北陸・山陰方面に目立った動きは無い。ただ、『ハロウィン』で被害を受けたウラジオストク軍港が早くとも今年5月の半ばに復旧完了するという情報提供があり、佐渡島の防衛体制も含めて一層の警戒は必要と考えている」

剛毅は『灼熱と極光のハロウィン』で被害を受けたウラジオストク軍港の復旧作業を注視しているが、それ以外の動きとみられる軍事的な行動の兆候は確認できないと報告した。

「六塚殿」

「東北方面に目立った動きはありません。人間主義者の侵食も現時点では確認されていません」

「二木殿」

「昨年末頃の『伝統派』の和解騒動の後、特に阪神方面の反政府活動は大きく減っております。目障りで掃除したく思っていましたが、恐らく古式の術者によるものでしょう。この偉業ともいえる事を為した方が何方かは存じませぬが、頭が下がる思いです」

温子は東北方面に異常がない事を報告し、舞衣は問題が起きていない山陽方面に触れず、阪神方面（主に大阪）の反政府活動が『伝統派』の和解騒動（神楽坂家による一括交渉の為、師族会議には一切報告されていない）に連動する形で激減していることに触れた。

舞が感謝の言葉と共に『伝統派』の名を出したことで真言は冷や汗を掻きつつも、冷静を装って議事を進める。

「では、五輪殿」

「四国方面に目立った動きはありません」

「八代殿」

「阪神方面の影響からか、北九州地域の反政府活動は小康状態にあります」
「そうですか。今後も注視を怠らぬ様に」
　勇海は四国方面に関して特に問題は無いと述べ、雷蔵は舞衣の述べた報告に影響していると述べつつ現状の様子を伝えると、真言は誤魔化す様な形で注視の継続を促した。
「七草殿」
「関東地方は反魔法主義の活動が活発化の兆しにあるものの、メディア関連では大きな動きになっていません。昨春の神坂グループによる大規模なＴＯＢによって凡そ４割近くのメディア媒体が神坂グループ関連の傘下となり、その対象に含まれなかったメディアが『二の舞を演じたくない』と怯えているものと思われます」
　昨年春の悠元によって仕掛けられたＴＯＢ制度を利用した国内外のメディア買収（文字通りの会社買収）工作により、国内の約４割にもおよぶ民間の報道機関が神坂グループ、あるいは神坂グループと提携を結んでいる別のグループによって買収された（その中にはホクサングループも含まれており、約１割を買収している）。
　反対活動を起こしても焚き付けるメディアが存在せず、未だに残っている反魔法主義の傾向があるメディアも下手に記事を書けば「次は自分たちの会社が買収されて追い出される」と戦慄しており、書きたくても書けない状況を生み出している。国外では神坂グループがＵＳＮＡ最大手のメディアを現金一括で買収したことにより、その信憑性がより高まっていた。
　しかも、相手は個人のものも含めると国家資産規模の資金を有する古式魔法師の大家による大財閥。政財界でも喧嘩を売ることすら〝御法度〟のレベルに達する神坂グループに正面切って喧嘩を売るのは、正しく自爆テロに等しい行い。
　弘一はその辺の事情の一端を知っている側の人間だからこそ、その事情も交えつつ正確な情報を報告した。
「それと、横須賀方面に不穏な動きがありました。破壊工作員が侵入を図っているのかもしれません」

「十文字殿も同じお考えか？」
「反魔法主義に関しては、我が十文字家も七草殿と同じ評価です。破壊工作員については当家でも掴めておりません」
「ふむ、人間主義者に関しては後程詳しく話し合いましょう」
弘一の報告を聞いた上で真言が問いかけると、克人はこの部分に関して情報共有はしているが、破壊工作員の手掛かりは掴めていないと話す。人間主義に関する議題は各家の報告の後に話し合うこととして、真言は真夜に問いかける。
「では、四葉殿」
「中部・東海方面ですが、関東方面でのメディア抑制の動きと京都・奈良方面での古式魔法師の動きに連動して、古式の術者が人間主義者を〝神の名を騙る異端者〟と水面下で弾圧している動きが確認されました」
東京都心を中心としたメディア買収、京都・奈良の『伝統派』の和解によって正当派の古式魔法師が一丸とした勢力を築く形となった事が融合した結果、元々『伝統派』において過激派であった奈良の古式魔法師が「九」の家に向けていた復讐のエネルギーを全て人間主義者に向けていた。
曰く「護り手に楯突く愛を伴わぬ異端者はこの国から出ていけ」という主張を掲げ、元々公安などにマークされていた危険人物に属する人間主義者を水面下で弾圧していた。
主に金剛山などの僧兵・修験道や陰陽道系の術者によるものが多く、四葉家もこの動きは確認していたが、単に暴走しているのではなく公安などが黙認した上でのことなので、裏的には超法規的な方法によるものと推察した。
「ですが、人間主義者の動きは予断を許さない状況が続くでしょう。それと、七草殿に十文字殿」
「四葉殿、何でしょうか」
「伊豆方面に不審な動きがあります。監視体制を強化されることをご提案します」
真夜は弘一と克人に対し、二家の監視地域である伊豆半島方面で不

審な動きがあることを述べつつ監視の強化を〝提案〟という形で要請した。この時ばかりは弘一も社交的な要素以外も含んだ笑顔を覗かせたが、真夜はそれを見ても関心を寄せることはなく、ただ事務的に返すだけであった。

「分かりました。具体的にどのような動きがあったのか、教えて頂いても構いませんか？」

そう返すのは克人で、年長者に囲まれても気後れするような様子は見られない。以前父親の代行として師族会議に参加していた経験もあり、重々しい声で真夜に尋ねる。

「宜しいですわよ。先週、北米航路で横須賀港に到着した小型貨物船が、現在沼津港に停泊しております。その貨物船をＵＳＮＡ大使館が所有するクルーザーが観察しておりました。現在、大使館のクルーザーは姿を消しておりますが、監視は続いているようです」

「四葉殿、クルーザーの行方は御存じありませんか？」

「存じません。公海にでも浮かんでいるのではないかと思われますが……三矢殿は何か御存知ではありませんか？」

弘一の問いかけに対して無責任な風にも聞こえるような口調で答えつつ、真夜は元に話を振った。

三矢家は関東地方を監視する七草・十文字家（調査の分野は七草家の管轄で、十文字家は有事の実戦闘要員としての性質が強い）とは異なり、監視・守護する地域を持たないが第三研の関係で国防軍と繋がりが深く、家業に関しても悠元による国防軍のコネによって国防軍お抱えの小型兵器関連企業という形で国防軍から保障されることとなった。

主に本拠地である神奈川全域とその周辺海域を監視対象としつつ、海外の軍事関連を主とした情報収集を担っていた。一条家にウラジオストクの状況を伝えたのも三矢家によるものだ。

「その大使館のクルーザーについて調べたところ、先週の火曜日に房総半島と大島の中間海域で停泊していて、そのすぐ近くを相模灘から南進してきたＵＳＮＡ海軍の駆逐艦とすれ違っていたのが確認されました」

「ただ近くを通っただけ、とは考えられないのですか？」
「国防軍から情報提供を頂いたのですが、成層圏監視カメラの解析によれば、クルーザーと駆逐艦がすれ違った際にぼんやりとした影が映ったそうです。情報提供者の分析では、その現象は魔法を使った光学迷彩によって起きる現象に間違いないと述べていたので、クルーザーに乗り込んだのは魔法を巧みに扱えるＵＳＮＡ軍の兵士――――もしかすると、スターズの人間が乗り込んでいる可能性もあるでしょうな」
　元の述べたことに対して弘一が問いかけると、元は悠元から受けた情報を開示した。その情報提供者を〝国防軍の人間〟としたのは、悠元が現在国防陸軍総司令部所属の特務参謀であることを内密に知らされているからだ。加えて、独立魔装大隊に所属する藤林響子中尉の所見も貰っているため、元も間違いないだろうと納得していた。
「では、小型貨物船に関しては現在のクルーザーの行方も含めて当家で調べておきましょう。三矢殿の可能性が全て真だった場合、その貨物船がＵＳＮＡからの人間主義者のテロ要員を運んできた船の可能性が極めて高くなります。沼津は四葉家の担当地域ではありますが、横須賀港に寄港している関係もありますので、こちらでフォローいたしましょう。三矢殿もそれでよろしいでしょうか？」
「こちらは一向にかまわない。どうかお願いする」
「ええ、お願いいたしますわ。それで九島殿、そちらの方面は如何なのでしょうか？」
　弘一が元の述べた情報提供者が悠元であると確信しつつ、それには触れず纏めに掛かった。
　元と真夜もそれに異議を唱えることなく頷き、顧傑の貨物船とカノープスのクルーザーに関する議題はこの後出てくることはなかった。
　そして、真夜から投げかけられた言葉により、一同の視線は議長役を務めている真言に向けられた。
「京都・奈良の『伝統派』が正統派と和解して消滅したことにより、以前よりも反政府活動は目に見えて減っている。滋賀・紀伊方面もそれ

に呼応する形で反政府活動が激減しているが、人間主義者のこともあるので油断はできない状況と考えている」
真言も最初、この報告を聞いた際は青天の霹靂のような心境だった。
長年対立関係にあった『伝統派』が突如解散したこともそうだが、それをなした人間を調べても正体が判明しなかったからだ。先代当主で父親の烈に聞いても「こればかりは私も分からなかった」と述べており、心当たりが無いということでその調査は打ち切られたのだ。
「九」の家に対する敵愾心も大幅に減ったものの、あくまでも古式魔法師の中で和解が成立しただけであって、友好的なムードと程遠かったのは事実であった。
議長役の真言が締める形で九島家の報告を行い、各家による定例の報告が済んだところで会議の雰囲気が変わった。いつもならば弘一が先陣を切っていたが、今回は珍しい人物――勇海が声を発した。
「九島殿。お時間を頂戴したいのですが、よろしいでしょうか？」
「五輪殿？　ええ、構いませんよ」
勇海からの申し出に真言は少し驚くものの、定例の報告は済んでいるため、真言はその申し出を了承した。それを見た上で勇海は元に視線を向けた。
「三矢殿。先日出させて頂いた件――長男の洋史とそちらの次女である佳奈殿の婚約の件に関して、この機会に返事をいただきたく思いまして。あと、既に三矢の籍を抜けてはいますが、神楽坂悠元殿に長女である澪の婚約を申し込みました」
これには他の参加者も驚いていた。五輪澪はこの国で唯一の国家公認戦略級魔法師『十三使徒』の一人。それを擁する五輪家が澪を元の息子である悠元へ嫁がせることに注目が集まるのも無理はないが、元は勇海が述べた前半部分に関して回答を述べる。
「五輪殿。それに関してですが、佳奈にこの件を尋ねたところ『申し訳ないけど、とてもそういう感情は抱けない』という風に述べておりましてな。加えて佳奈は既に四葉家次期当主の婚約者として申し込んでいる以上、洋史殿に対して思考を割く余裕はない、と否定的でして」

「……互いに会って話し合うのにも気が進まない、と?」
「断言はしていませんが、そういう雰囲気を纏っていたのは事実です。とはいえ、付き纏わられるのも困るので、双方の親同伴での話し合いには応じる、と申しておりました」
　五輪家を選ぶにせよ、四葉家を選ぶにせよ、既に元治経由で結ばれた繋がりを考えればどちらでも構わない、と元は選択の権利を佳奈に与えた。それでも佳奈は「洋史さんには何かこう……面白みがない」と五輪家との婚約に否定的だった。
　とはいえ、洋史がストーカーのような行為に走られても困るということで、最後のチャンスという形で話し合う機会は与える、という佳奈からの伝言を元は勇海に伝えた。
「ええ、それで十分です。洋史は三矢殿や次期当主のご長男殿のように好いた相手と結婚できるのが羨ましいのでしょうね」
「これはお恥ずかしい。しかし、息子は中々に慎重でしてな。漸く子を授かれたことに一安心です」
「あら、初耳ですわ。三矢殿もとうとう祖父になられるのですね」
「気が付けばそうなっていた、ともいいますがね、四葉殿」
　十師族の当主・次期当主となれば、自身の感情を押し殺してまでも世継ぎのため、家を次代以降に残していくために政略結婚する場合が多い。元の場合は相手が護人・上泉家の娘だったからこそ恋愛結婚できたのであり、元治の場合は剛三の仲介があったからこそ成し得たことだ。
　元の言葉に真夜は驚くような素振りを見せつつ、茶目っ気を混ぜるようにお祝いのニュアンスも含めた言葉を贈ると、それに対して元は苦笑を覗かせつつ返した。
　すると、この流れを機と見たのか、剛毅が口を開いた。
「これに託けてしまう形となるが、四葉殿。先月出させて頂いた婚約に関する質問状に対しての答えを頂いていない以上、ここでお答えを聞きたいのだが可能だろうか?」
「ああ、貴家の将輝殿と当家の深雪の婚約が可能かどうか、の件でしたね。申し訳ありませんが、それは出来ないとお答えするしかありませ

ん」
　剛毅が婚約の申し込みをするのかと身構えたところで、実際に来たのは質問状だったために真夜も思わず肩透かしを食らったような気分を抱き、これには葉山も思わず苦笑を禁じえなかったほどだ。
　そんな心境のことはともかく、真夜は敵対ムードを敢えて見せずにまずは柔らかな口調で剛毅の質問に〝ノー〟の回答を突き付けた。
「理由をお伺いしても宜しいか？」
「ええ、構いませんわ。今回の婚約――――神楽坂家当主の悠元殿と当家の深雪の婚約を〝政略結婚〟と捉えている方がいるようですが、その前提条件が根本的に異なります」
「というと？」
「何せ、二人は婚約者になる前から恋人としてお付き合いしていましたから。それも一昨年の夏から、と姉から聞いております。しかも、悠元殿は当時三矢の姓を名乗った状態でです」
　これには剛毅のみならず、円卓に座る殆どの人間が驚いていた。すると、ここで口を出してきたのは弘一だった。
「確か、悠元殿は高校入学を機に達也殿や深雪殿が暮らす司波家に居候されていましたね。もしや、慣習破りの婚前交渉を目論んでいたのですか？」
「勘違いしないで下さいな、七草殿。元々居候の提案は私の姉である司波深夜が提案したものです。私は事情こそ聞かされましたが、四葉はそれに関して全く関与していませんわ。それを婚前交渉などと勝手に評するのは性根や品性を疑いますが？」
「口を挟むような形になるが、その件は当事者である悠元と司波家の間でのことで、私や三矢の人間は一切関与していない。勝手な言いがかりで決めつけられては困りますよ、七草殿」
　人の上げ足を取るような物言いに対し、真夜と元が続いて反論した。双方共に事情こそ聞いたが、最終的な判断は居候する上で関係者となる悠元・達也・深雪の意思を確認した上で判断させる形とした。
　ここには深雪の恋愛感情もあった訳だが、この時点でそこまでの事象に発展する可能性があったとすれば、深雪が暴走して悠元を押し倒

し、既成事実を作る可能性ぐらいだろう。

師族会議　中編

弘一の物言いに対して毅然と反論する真夜と元。それに対する弘一の横槍を入れさせないため、真夜は視線を剛毅に向けた上で言い放つ。

「一条殿。貴家からの質問状には将輝殿の想いが記されていたことからして、一条殿が父親として子の強い想いを叶えたいという気持ちは分からなくもありません。ですが、私も叔母として……同じ女性として姪の気持ちを尊重したいのです」

「深雪殿の気持ちですか？」

「ええ。姪の深雪は神楽坂家当主となられた悠元殿を好いております。悠元殿も深雪を好いているからこそ、恋人同士になりました。言うなれば、婚約者の関係はその追認のようなものです。私や姉が長く苦しんでしまった分、姪の深雪に苦しみを背負わせるようなことはしたくありませんもの」

四葉の復讐劇で真夜は女性としての幸せを失っただけでなく、父親を失い、更には人としての喜怒哀楽の記憶が全て知識に変えられてしまった。深夜による行いが真夜を助けるためだったというのは、頭で理解していても納得できない部分があった。

だが、剛三から渡された元造の手紙には、真夜を救いたいという気持ちと深夜の行いは全て自分に責がある、と記されていて、あの時深夜は父親を慮って「自分のせい」だと述べていた。お互いに不器用なものだ、と真夜は思わず笑ってしまった。

真夜の言い分には、同じ女性である舞衣や温子が頷き、他の殆どの参加者も真夜に関する事柄を知っているために口を挟もうとはしなかった。それでも、剛毅は怯まずに話を続けた。

「深雪殿の気持ちは、本当に動かせないものでしょうか？　叶うのであれば、将輝にもチャンスを頂けないだろうか？」

「チャンスですか？　互いに好き合っている関係に横槍を入れたいと？」

「深雪殿は将輝のことをほとんどご存じない筈だ」

「それは将輝殿にも言えたことでは？　ご子息は深雪の容姿以外に関して、何もご存じない筈でしょう？」
　真夜の正論に剛毅は一瞬怯むが、息子の想いを叶えてやりたいという思いからお互いのことを良く知らない内から断られるのはよくない、と述べたところでオウム返しのように返された問いかけで剛毅は言葉を詰まらせた。
「しかし、恋愛感情をいったん棚上げして客観的に判断するなら、将輝殿と深雪殿の婚約は魔法界にとって良縁だと考えますが」
「七草殿。それはあくまでも〝現代魔法〟の話でしょう？　悠元殿の血縁だけで言えば、かの英雄こと上泉剛三殿の孫にして、三矢家と上泉家、それに神楽坂家の血を引いています。魔法界の発展という意味では、将輝殿よりも悠元殿に軍配が上がるかと思いますよ」
　真夜は口にしなかったが、自分の血を継いでいる達也も半分は上泉家の血を引いている。英雄を生み出した家に連なる存在となれば、誰しもがこぞって婚約を申し込もうとするだろう。だからこそ、元は詩歩を可能な限り表に出そうとはしなかった。
　十師族の当主クラスには書状で悠元の素性を明かしているが、真夜が改めて口にしたことでその信憑性が増した形となる。
「外見だけで惚れてしまった、というのは否定しようもありません。ですが、チャンスもなく振られるのは将輝とて許容できないでしょう。四葉殿が姪である深雪殿の気持ちを汲むように、私も息子の気持ちを汲んでやりたいのです」
「なら、何故四葉の縁者だと明かす前に婚約を申し込まなかったのですか？　一条殿が最初からそう思っていらしているのであれば、家柄を気にせずに申し込めば済む話だった筈です。こちらが発表した後でそのような行動を起こされても、家柄という体面を気にして将輝殿の感情を無視していたようなものではなくて？」
　心情に訴えたところで、真夜から突き付けられた正論に剛毅は押し黙ってしまった。大体、その時点で悠元との勝負になっていないと真夜は内心で愚痴る風に呟きつつも、真夜は言葉を続けた。
「大体、先程からの一条殿の物言いは悠元殿が将輝殿と比べて男とし

て劣っていると仰っている自覚がありまして？　悠元殿はあまり気になさらないかも知れませんが、今や神楽坂家当主となった彼に対して侮辱にも等しき行いかと私は思いますが」
「それはない」と否定したかった剛毅だが、将輝の想いを優先するがあまりに悠元への侮辱を無意識にしてしまっていたことを真夜の痛烈な言葉で自覚させられた。すると、ここで口を挟んだのは元だった。
「四葉殿。確かに悠元はその辺に関して口煩く言いませんが、将輝殿とは一昨年と昨年の九校戦で戦っている相手ということもあり、それでいて自分の恋人に好いているような真似がどうにも〝目障り〟と言いたげな雰囲気がありまして、私にも相談してきたのです」
「それは姪の深雪も同じですよ、三矢殿。婚約の打診ではないにしろ、お断りしてほしいと言付かっておりますから」
明言こそ避けたが、元と真夜は将輝がストーカーの様な行いに走らないか危惧しているような節がみられた。すると、ここで口を開いたのは克人であった。
「三矢殿に四葉殿。自分がこのようなことを提言するのはどうかと思いますが、どうか同年代の男子として、何らかの機会を与えてやって欲しいのです」
「……いいでしょう。将輝殿が本気で深雪を振り向かせることが出来たら、婚約の件について考え直しましょう。三矢殿もそれでよろしいでしょうか？」
「……そうですな。後は当人同士でしっかり決着をつけてもらえばいいかと」
克人の提言に対し、真夜と元は顔を見合わせた後に最大限の譲歩を見せる形とした。
尤も、恋人というか既に婚前交渉のレベルに入ってしまっており、婚約指輪まで渡している状態で残るは籍を入れるだけという秒読み段階。そんな段階から将輝が付け入る余裕があるのか、と元や真夜はそう思っていた。
更に一番の問題は、一昨年の九校戦の新人戦モノリス・コード決勝、

将輝が放ったオーバーアタック相当の魔法使用に関して将輝が謝罪していないことだ。将輝が放った攻撃を反則相当として咎めなかった大会審判も問題だろうが、そのことを今更〝忘れた〟で済ませられるはずなどない。ましてや十師族直系となれば尚更の話だ。

弱みを見せてはいけない矜持も大事だろうが、自身の弱さや非を認めて謝ることが出来るのも立派な強さの一端である。殺傷未遂なので被害者側の達也と悠元（プラス幹比古）は気にしないだろうが、深雪としてはそのことを決して忘れたりはしない。

1年半前のことを未だに突っぱねて謝罪していない時点で、深雪の将輝への評価はゼロどころかマイナススタートに等しい。

「ご配慮感謝する。十文字殿もかたじけない」

「いえ、自分は何も」

剛毅は軽く頭を下げたが、克人は手を挙げてそれを制した。これでお開きになるかと思われた会議だったが、今度は真夜が真言に提案した。

「九島殿。お時間を頂いても問題はありませんでしょうか？」

「おや、四葉殿からとは。ええ、構いません」

議長役である真言を立てる上で断りを入れた真夜。だが、これから話す内容はその真言すらも追い込む爆弾を含んでいるということに、円卓の参加者は気付いていなかった。

「皆さんは、三矢家と四葉家、神楽坂家の共同提起という形で昨春に行われた臨時師族会議のことを覚えていらっしゃいますか？」

「ええ、勿論です。して、その会議に何の関係が？」

「先代の神楽坂となられた千姫殿が仰っていたジード・ヘイグの弟子――この国で『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』を操り、大亜連合の侵攻部隊を招き入れ、更には『パラサイト』や南盾島といった一連の事件を手引きしていた人物が判明致しまして。横浜中華街を根城にしていた大陸出身の古式魔法師で、彼の名は周公瑾（しゅうこうきん）」

元の相槌を挟むような形で言い放たれた真夜の言葉に、弘一は真剣な表情を浮かべているが、真言に関してはその名に対してまるで怯えるような素振りを見せた。これには真夜も当然気付いているが、敢え

て見ないふりをした。
　すると、ここで雷蔵が問いかけてきた。
「四葉殿。それは三国志に出てくる呉の周瑜公瑾ではないですよね？」
「ええ、無論です。かの者はこの国で代理を務めていた人物でした」
「過去形で述べられているということは、その者は既に処分済みだからですか？　それとも、既に海外へ逃亡済みだからですか？」
　明らかに顔色が悪くなっている真言に対して温子が「大丈夫ですか？」と声を掛けるが、真言は「問題はない」と追及を躱した。その間も続く真夜と雷蔵のやり取りの中、雷蔵の問いかけに真夜はこう答えた。
「周公瑾は昨年の１０月、一条将輝殿と九島光宣殿、十文字理璃殿に神楽坂悠元殿をはじめとした友人たちの協力を得る形で達也が仕留めました」
（み、光宣が……!?　あの子からそんな話は……）
　一条、神楽坂（三矢）、九島、十文字の協力を得て達也が周公瑾を討伐した情報に、真言は意外感を表した。剛毅は将輝から、元は悠元から、そして克人は理璃から聞いていたため、特に驚くようなことはなかった。
　ただ、視線が真夜の方を向いていたためか、真言の表情を読み取られるということはなかった。弘一、剛毅、真言を除いて、皆感心したように頷いていたからだ。
「光宣殿というと、九島殿の末のご子息ですな」
「ええ……」
　雷蔵の問いかけに真言は愛想笑いを浮かべるものの、光宣は師族会議の前に九島の家から籍を抜いている。あくまでも一時的な十師族としての離脱を意味するが、光宣自身も覚悟を決めた上で養子行きを決めており、真言も光宣を手放すことに抵抗はしなかった。その行動で光宣にとっては「見切りが付いた」と断言していた。
「一条家の将輝殿、四葉家の達也殿、九島家の……そういえば、光宣殿は療養の為に養子へ出されたとか」

「え、ええ。先代からの勧めもあったもので」
「そうですか。ですが、そう仰る三矢殿もご子息たちが次期当主ならびに当主となり、娘さん方も嫁ぎ先が決まったとか」
「いやはや、漸く父親としての肩の荷も下りそうです。今年にはとうとう祖父になりますからな」
　元からの問いかけに何とか言葉を振り絞って答える真言に温子も残念そうな表情をしつつ、元に視線を向けて羨むような言葉を投げかけた。これには元も苦笑を滲ませながら頑張った甲斐はあったと返した。
「その意味では、六塚家の燈也殿や十文字家の理璃殿も次代を担う一角となるでしょう」
「私からすれば後輩たちになりますが、彼らの活躍は自分としても身が引き締まる思いです」
　そして、舞衣の言葉に続く形で克人も賞賛の言葉を述べたことで和やかな雰囲気になっていたが、真夜の発言でそれが一気に霧散した。
「七草殿。貴方は周公瑾と関係を持っていましたね？　それも、単なる取引相手ではなく共謀関係に」
「……四葉殿、それは根拠があってのお話ですか？」
　真夜が問いかけた言葉に対し、勇海が辛うじて出た問いかけを投げかけるも、弘一は黙ったままだ。
「『パラサイト』関連の事件の最中であった昨年の2月、部下の名倉三郎とともに会談しており、その後も部下を通してコンタクトを取っていたことは調べが付いています。その際、周公瑾との取引で民権党の神田議員を唆して反魔法主義を煽るメディア工作を約束し、実行したことも把握しております。何か反論はおありですか、七草殿？」
「……四葉殿。その根拠をお聞かせ願いたい」
　真夜が言い放った言葉に対して、ゆっくりと口を開いた弘一。だが、ここに援護する形で克人が声を上げる。これには周囲の視線を集めるが、克人は気にすることなく証言を続ける。
「発言しても宜しいでしょうか。自分は七草殿の娘である真由美殿から相談を受け、三矢殿の娘である佳奈殿や美嘉殿と共に神楽坂悠元殿

のもとを尋ね、その際に彼から七草殿がメディアを唆して反魔法主義を煽っていたことや神田議員が関与していると思しき証言、更には神楽坂殿が七草殿と会談したことも知りえた次第です」
（何？　真由美はあの時『先輩と友人に招待されたから出掛ける』とは言っていたが……）
　克人の言葉に、弘一は内心で真由美がそのような行動を起こしていたことに複雑な感情を抱いた。真由美が美嘉と一緒に七草家に来てドレス選びをしていたが、行き先は先輩や友人たちとの食事会としか聞いていなかった。
「七草殿、何か反論はおありですか？」
　そんなことを思っている弘一に対し、温子が厳しい目を向けた。それに対して弘一は余裕のある笑みを浮かべていた。
「確かに、概ね四葉殿と十文字殿の仰られた通りです。しかし、私が彼とコンタクトを取ったのは、周公瑾による無秩序なメディア工作を事前に察知し、それを実行させないためでした。無論、取引材料はただではありませんでしたが、日本の魔法界に不利益を被るような代償は差し出しておりません」
「確かに、その働きは立派であったと思います。ですが、いくら理由があろうとも神楽坂家と三矢家の代表として出向いた悠元殿が提示した条件――――周公瑾との一切の関わりを禁ずる約定を貴方は破っております。そもそもの話、周公瑾が横浜事変も含めてこの国に害を為していたことは事実です。そのような相手を手を組むこと自体、十師族として相応しからぬ行いではないかと思われますが？」
　真夜の言葉で弘一は本人ですら見落としていたことに今更ながら気が付く。そう、あの時の悠元は神楽坂家と三矢家の代理として赴いていた。悠元との約束は即ち、二家との約束を意味する。この時点で三矢家に対する礼を欠いた行いでもあり、現当主である元の顔に泥を塗ったようなものだ。
「……七草殿。非常に残念だが、約定を破った以上は弁護など出来ない。他の皆様は四葉殿の主張をどう思われるか？」
「然りである、と自分は考える」

三矢元の真剣な表情を受ける形で一条剛毅が賛同を示し、
「四葉殿の仰る通りです」
「確かに、十師族としては看過できぬ行いですな」
「真由美殿を通じてお止めになるよう申し入れましたが、残念です」
「七草殿にもお考えがあったのでしょうが……」
六塚温子も、八代雷蔵も、十文字克人も、五輪勇海も、真夜の言葉に賛同の意を示した。
「七草殿。いかなる理由や理屈があろうとも、超えてはならない一線、組んではいけない相手というものがございます」
そして、舞衣が賛同を示したが、弘一は決して笑顔を崩そうとしない。この中で賛否を示していないのは真言だけとなった訳だが、その真言は表情が凍り付いた様な有様だった。
何せ、舞衣の言い放った言葉は真言にも当て嵌まる。弘一とは事情が異なるとはいえ、周公瑾と結託していたことは事実だからだ。
そんな真言の苦悩は、扉をノックする音が響いたことで終わりを告げる。
『入れてもらっても構わないだろうか』
本来防音性の高いドアの向こうから声が聞こえることなどない。だが、その声の主は十師族当主ならば誰しもが聞いたことのある老人のものであった。扉に一番近い克人が立ち上がり、一座を見回す。頷く者はいても、首を横に振る者はいなかった。
克人が出入り口に歩みより、ドアを開けた。そこに立っていたのは、引退したはずの九島家先代当主・九島烈であった。
「老師、ご無沙汰しております。それにしても、今日はどう言ったご用件で此方に？」
舞衣が丁重な言葉で烈を迎える。克人は自分の席を勧めようとするが、烈は笑って手を振った。
「すまないが、今の話は聞かせてもらった」
烈は前置きをすることなく本題に入った。
どうやって、と問う人間はいない。師族会議の発言は対外秘がルールだが、会議の模様を様々な手段で漏らしているのは九島家だけでは

ないということの証左でもあった。
「皆が弘一を責めるのは当然だ。だが、責任を問うのは待ってもらいたい」
烈が弘一を「七草殿」と呼ばなかったのは、今回は師族会議の元メンバーとしてではなく、日本魔法界の長老的立場だった者――九島家の先代当主としての発言であることを公言する意味合いが含まれている。
「反魔法師運動を煽るメディア工作について、私は弘一から相談を受けていた。私は神楽坂家や上泉家の勘気を危惧して止めるよう進言したが、結局は黙認してしまった」
烈は「四葉家が突出しない為」だと主張する弘一に対し、今度こそ上泉家もしくは神楽坂家の勘気を被ればいくら十師族・七草家と言えども取り潰しは免れない、と進言した。だが、結局は師族会議の体制維持を主張した弘一に圧し負けてしまった形で黙認した。
この発言に様々な憶測が飛び交っていたが、烈の真意を知るのは真夜と弘一、それと元の三人だけであった。
「それに、周公瑾と関係を持ったのは我が九島家も同様だ。私はパラサイトを用いた無人魔法兵器に周公瑾から提供された技術を使い、罪もない若人を犠牲にしようとした。真夜の息子だけでなく、六塚殿の弟や三矢殿の息子――神楽坂殿がいなければ、取り返しのつかないことになっていただろう」
烈は、弘一に関する罪を知りながら強く引き止めなかったどころか、周公瑾に関する罪を七草家の代わりに引き受けるということを仄めかしながら言い放った。これには詳しい事情を知らなかった温子が目を見開いていた。
「とはいえ、何も代償なしに弘一を取り成せとは言えぬ。加えて、弘一は神楽坂殿との約定を一方的に破ったことも聞き及んでいる……分かるか、弘一？　お前は神楽坂家に叛意を見せたも同じ行いをした以上、何もお咎めなしとは言えぬぞ。七草が取り潰されず、まだその立場に座れているだけマシだと思え。よいな？」
「……心得ております、老師」

烈から苛烈な眼差しを向けられ、そんな様子の烈を今まで見たことの無かった弘一は、ただ頭を下げる他なかった。

師族会議　後編

烈が今まで見せたことのないような苛烈な視線に、こればかりは弘一も座ったままではあるが頭を下げる事態になっていた。真言の表情が強張った状態であることも察しつつ、烈は言葉を続けた。

「真夜。師族会議が成立する前のことだが、私は既に亡くなった『かの方々』に脅され、其方を含めた四葉を売る真似をした。３０年以上も経っておきながら謝罪の一つすらしなかった私のことを詰(なじ)ってくれても蔑(さげす)んでくれても構わない。元造を死なせた責任の一端は、老い先短い身だがこの命を以て果たす所存だ」

「先生……頭をお上げください。元々持っていた感情ならば先生とお呼びすることも許せないほどに怒っていたでしょうが、父と姉に救われた際に先生との関わりもまるで他人事に感じてしまうようになりました」

本来ならば、真夜はその被害者として烈を非難する権利がある。だが、真夜はその選択肢を選ばなかった。ここで親の敵として烈を殺したところで、彼を慕う者たちが四葉に敵意や殺意を向けてこないとも限らないからだ。

一度過ぎてしまった過去を取り戻すことなど、魔法という力を以てしても不可能に近い所業。それを可能としているであろう人物の存在を真夜は知っているが、知っているからこそ真夜は今の状況を受け入れていた。もし女性としての幸せを再び手に入れたとしたら、真っ先に彼へ嫁ぎたいと思ってしまうからこそ、真夜は自分のことで今まで苦しんでいた姉とその子に幸せになって欲しいと願った。

それと、もしそれが明るみになれば、過去の婚約を持ち出す輩が出てこないとも限らない。だからこそ、真夜は自分の血を引く達也だけで十分と考えた。

「それと、私の父が遺した手紙には先生のことについても触れてありました。父は先生が四葉を売ったことに気付いていましたが、それを承知の上であの復讐劇を完遂したのです。『烈が犯した罪を許せとは言わないが、烈も含めて〝持たざる者の苦しみ〟を理解してやれ』―

――それが父の最期の言葉でした」
対抗手段として達也という最凶の切り札（ジョーカー）を有しているが、自分が受けた苦しみを実の息子に押し付けたくはなかった。元々世界の復讐を託すために生を受けた息子に対しての母親の情なのかは分からないが、「それは何かが違う」と真夜は率直に感じていた。
「なので、私は許します。お叱りの役目は他に相応しい方がいると思われますので」
「真夜……本当に済まなかった」
もし、烈が四葉の情報を売らなかったとしても、当時四大老にいた青波の父親である東道氏が四葉を調べ上げることも可能であった。弘一と真夜が台北の交流会に参加していなかったとしても、別の機会に狙われた可能性も考えられた。
烈の存在の有無を比較すると、もしかしたら真夜ではなく深夜が狙われた可能性だってある。過ぎた過去に〝ｉｆ（もしも）〟は存在しないが、深夜が真夜と同じ苦しみを受けたかもしれないと考えた時、烈に罪がないとは言えないが、彼が関与せずとも起こり得ていた可能性がある、と真夜はそう結論付けた。
それに、烈が態々出てきた理由は弘一も含んだ九島家の対応であり、真夜への謝罪はそれに託けた形でのもの。四葉を貶めた罪は烈自身の罪であり、本人も償う姿勢を見せている以上は自分がここで追及することなど「野暮である」と真夜は感じた。
「それで、先生。ご自身のことはともかくとして、七草殿のことも含めてどのように取り成されるおつもりでしょうか。それを私も含めたここにいる皆様が気になされております」
正直、烈はこの場で真夜の『流星群（ミーティア・ライン）』によって死ぬことも覚悟の上で来た。だが、真夜から許しに近い言葉を受けただけでなく、元造は烈の行いを見抜いた上で復讐劇を実行したことに思わず目を見開いていた。
烈は今更ながらという面持ちを見せて「私は最後まで元造に勝てなかったのだな」と思いながらも、真夜の言葉によって周囲の視線を感じたので、気を引き締めるように真剣な表情を見せた上で告げた。

「そうだな……これは神楽坂家との約定もあっての話となるが、九島家は七草家の十師族存続と引き換えに十師族の座を降りて師補十八家のひとつとなり、以降15期にわたって十師族への昇格の資格を剥奪していただきたい。一先ずはそれでこの場を収めて頂けないか」
「先代……それは!?」
15期――つまり、烈の死後も含めて今後60年、九島家は十師族への昇格権を失効するという数字剥奪（エクストラ）に次ぐ重い処分を烈は希望した。これには真言が縋る様に烈へと視線を向けるが、これに対して烈は苛烈な視線の矛先を真言に向けた。
「真言。お前には周公瑾に直接便宜を図った罪がある。周公瑾から送り込まれた大陸の道士の件で、一条家と四葉家、三矢家や六塚家に十文字家だけでなく、千葉家や吉田家、果ては上泉家と神楽坂家にまで迷惑を掛けている」
「なっ……!?」
大陸の道士――それに〝洗脳〟された『伝統派』によって、当事者側の四葉家だけでなく関東方面にも京都や奈良の古式魔法師が出没して狙われる事態になったことを烈は聞いている。十師族の半数だけでなく百家の一部や古式の家、更には護人の二家まで巻き込んだ以上、このまま十師族の座に居続ける事こそ十師族に相応しからぬ振る舞いである、と強く感じた。
「更に、昨秋の護人・神楽坂家が成した『伝統派』の和解という大業。本来であれば『九』の家が成さなければならぬことを今代の神楽坂殿が成し得たことも含め、お前が自ら言い出さなければならなかったことだったのだ――無論、私も含めて」
「先代……父上！」
「大罪を犯した私が言えた台詞ではないが……真言、お前には失望した」
烈の口から述べられた『伝統派』の和解に悠元が主に関与している事実は参加者を驚かせていたが、烈から言い放たれた痛烈な失望の言葉に、真言は力を失ったように項垂れた。その様子に対し、口を挟んだのは真夜であった。

「先生、もう宜しいのではありませんか？　九島家として責任を取られるというのであれば、四葉家もそれで納得いたします。七草殿には今後の貢献で不祥事を償っていただければ結構ですわ」
　こればかりは先程のことも含めて音頭を取った方がいいだろう、という真夜の想いもあったが、烈が今のところは現状の師族会議体制を維持したいという思いを汲んでのことだ。
　現状、十師族の勢力でいえば四葉・三矢・七草が拮抗した勢力を有している。ここで七草家が離脱するようなことがあれば、三矢家に大きな負担が掛かってしまうことになる。真夜の姪婿（現状は婚約者だが）は三矢家の縁者であるだけに、迷惑を掛けてしまうのは失礼だという真夜の考えもあっての発言だった。
「四葉殿がそう仰られるのであれば……」
「確かに今、七草殿に十師族を抜けられると穴が大きすぎますな」
　温子と雷蔵は真夜の言葉に理解を示しつつ、弘一に対して厳しい目を向けていた。その弘一はというと能面のような無表情で顔を俯かせており、これには真夜も「珍しいものが見れた」と言わんばかりに口元に笑みを浮かべた。
「皆、失礼をしてしまったな。行くぞ、真言」
　烈の言葉に、真言は覚束ない様な足取りながらも議場の外へ出て行き、烈が改めて「本当に申し訳なかった」と頭を下げた上で扉を閉めていった。色々驚くようなことばかりで言葉が出てこなかったわけだが、ここで元が言葉を発した。
「二木殿。議長役の九島殿が抜けた以上、次点となる貴殿が議長役を務めることになるわけですが、大丈夫ですか？」
「え、ええ。お気遣いありがとうございます、三矢殿。では、九島家に代わる十師族を決めなければなりませんね」
「そうだな。三矢殿、どなたか心当たりはおありか？」
　本来、任期途中で何らかの事由により十師族としての責務が果たせなくなった場合、他の九つの師族による推薦と合議で補充メンバーとして師補十八家から選ばれることがある。明日は十師族選定会議なので無理に選ぶ必要もないだろうが、日本魔法界の秩序に立っている

十師族の座を空席にしたままとするのは沽券にもかかわってくる話となる。
　先程まで議長役であった真言が抜けたため、その次の年長者となる舞衣が補充メンバーの提案をし、剛毅が賛同した上で元に尋ねた。
「柵などを一切無視するならば、堅実な選択肢として七宝殿が適任であると私は思いますが」
「あら、三矢殿も七宝殿を推薦されるおつもりでしたか」
「というと、四葉殿も？」
「ええ。七宝殿は配下の魔法師は少ないですが財力もなかなかのものですし、当人は思慮深い方ですので」
　七宝家は旧第七研の絡みで七草家と確執を持つが、元と真夜の推薦に対して弘一は異論を一切唱えようとせずに無反応を貫いた。この反応は剛毅、勇海、克人が見ていた。弘一の態度は事実上の黙認ということで捉えた舞衣は周囲に視線を送るが、特に異論を唱えるものはいなかった。
「それでは、十師族の新たなメンバーは七宝殿に決定いたします。一日限りではありますが、直ぐに七宝殿へお伝えしましょう」
「では、私が」
「それならば、一度休憩に致しましょう。再開は３０分後で如何ですか？」
　舞衣の提案に反対の声を上げるものはいなかった。

◇　◇　◇

　師族会議の内容は部外秘だが、その内容を外部に漏らしているのはどの家でもやっていることだ。そして、今回の会場が神坂グループ――その経営母体となる神楽坂家としても、師族会議の内容は当然把握していた。
　神楽坂家の離れでは、胡坐をかいて向き合う一組の男女がいた。片や神楽坂家先代当主にして『黒夜の孔雀（アルティミシア）』と呼ばれる神楽坂千姫。片や神楽坂家現当主でＵＳＮＡに『触れ得ざる者（アンタッチャブル）』と呼ばれる神楽坂悠元。
　悠元の横には端末があり、それを介して表示されている仮想モニ

ターには師族会議の様子が鮮明に映っていた。
「真夜ちゃんは現実的な判断を下したね。しかも、他に十師族の当主がいる中で烈を許したから、相対的に四葉家の価値を高めることになる。それに引き換え、あの小僧は……」
「……母上は御存知だったのですか？　九島閣下が四葉を売ったことを」
「まあね。とっとと処分したかったんだけど、〝素体世代〟の連中が煩くてね。厳密には、それを送り出した九条の連中なんだけど」
〝素体〟というのは十師族を含めた各魔法技能師開発研究所で生み出された実験体の親世代。そのどれもが古式魔法に連なる家系であるのは事実だった。
例えば四葉家は司馬空哉と東雲真彩から生まれた子が四の数字を使って四葉から四葉となった。この世界の三矢家の場合、素体世代となった矢車家の一文字を貰って三矢の姓を名乗った。
千姫が言うには、九島家の素体世代――九島烈の祖父母の家である九条家が大きく関与しているらしい。
「実を言うと、上泉信綱に天神魔法を教えたのが九条植通という手記が残っていてね。その折に神楽坂の人間も信綱に剣術を教わったのが伊勢神道流の原点になってるんだよ」
「摂関家がそこで出てくるんですか……まるで室町時代が先祖返りでもしたかのようですね」
「全くだよ、ホント」
しかも、九条家は信綱の妻として娘を送り出しており、過去のことはいえ上泉家と神楽坂家にとって九条家は無視できない存在とも言える。公武の融合を睨んだ当時の幕府の思惑があったとはいえ、それを利用して上泉家は着実に技術を高めていった。九条家としても幕府で確たる地位を得た上泉家の金銭的支援で次第に潤っていったらしい。
旧第九研のテーマが『合理化し再体系化した古式魔法を現代魔法として実装した魔法師の開発』のため、その素質に見合った者として九条家の人間が選ばれたのだろう。陰陽道を継承した家も公家（明治時

代以降は華族）として扱われていたので、他の公家が古式魔法を会得していても不思議ではない。四十九院家に繋がる白川家やこの世界の吉田家もその公家の一つだった。
「あれ？　でも、九条家が天神魔法を持っていたなら、何故九島家にその一切が継承されなかったのですか？」
「実を言っちゃうとね、九条家が『天照（アマテラス）』を含めた天神魔法を有していたのは、家伝の相続ということで預かっていたにすぎないの」
「家伝の相続ですか？」
　神楽坂家は裏の一族として朝廷の庇護者となっていたが、そのことを公家が何も知らない筈などない。そこで、神楽坂家は表向きの公家として摂関家であった鷹司家（たかつかさけ）や近衛家（このえけ）などに傍系の娘を送りだしたりして必要以上の関与を避けていた。
　皇族に近い血を引く娘を宛がわれる以上、文句など出るはずなど無く、公家全体の歴史から見れば神楽坂家の血縁者が嫁いでいない公家を探す方が早いぐらいだ。藤原氏の栄華を極めた藤原道長（ふじわらのみちなが）でさえ、広義的には皇族たる神楽坂家に頭が上がらなかったらしい。
　話を戻すが、元々表の天神魔法は安倍氏や賀茂氏の血縁――――土御門氏が管理していたわけだが、当時の当主が応仁の乱を切っ掛けとして戦火で疲弊した京（現在の旧京都市）を離れて陰陽頭としての職務を放棄していた。その際、天神魔法の伝承は京から持ち出すことへの忌避感から九条家に預けられ（土御門家は近衛流だったが神楽坂家と距離を置かれていたためと、当時は戦国大名の三好（みよし）氏の勢力が強かったために三好氏と縁故のある九条家を頼った）、九条家へ預けていた時期に上泉信綱が訪れて天神魔法が信綱に伝わった。
　当時の神楽坂家当主は江戸に首都が移ることを予見し、京以東の蝦夷（北海道）・東北・関東・甲信越・東海の護りを上泉家に託すべく、九条家を通して表の天神魔法を土御門家に戻すことなく上泉家に継承させた。
「土御門家からすればたまったものじゃないかと」
「当時の当主は『帝に降り掛かるであろう火の粉を回避するための上奏を行うべき陰陽頭（おんようのかみ）が職務を放棄し、あまつさえ三好への印象を良

く見せようと画策した上で若狭（旧福井県西部に相当）に籠るとは何たる不忠』と怒ってね。当然土御門家は天神魔法を上泉家から戻す様に頼み込んだけど、そのことがあったからガン無視したのよ」

結局、陰陽道宗家を巡ってまた闘争を繰り広げた土御門家（彼らからすれば、実力を示せば天神魔法が戻ってくると見込んでいた）に神楽坂家が完全に見切りをつけて、上泉家に天神魔法の伝承に関する正当な証明として娘を宛がったことに繋がった。

土御門家からすれば、江戸幕府から陰陽道の権威として認められたものの、肝心の天神魔法に関しての技能継承は、いくら陰陽道の免状を管理する立場を得ても許されなかった。陰陽道としての名は得ても、その実に関しては「骨折り損のくたびれ儲け」と評するべきだろう。

元々神楽坂家は表立って安倍氏・賀茂氏の係累や陰陽師と自らを呼称することなく朝廷に仕えていたし、表向きは五摂家の一つである鷹司家の傍系という体（当時の神楽坂家当主の側室として鷹司家の娘が嫁いでいた）を取っていた。

皇族や五摂家という外戚を得ている以上、家格という意味では同じ陰陽道を継承していても全く立場が異なるというわけだ。当時の神楽坂家当主がガン無視できた理由も頷けるというものだ。

「魔法のノウハウは失われても、技術ぐらいは残っていたと思うのですが」

「公家は手を汚すことを忌避するからね。天神魔法を恐れて伝承しなくなっちゃったんだよ。神楽坂家の場合だと継承の過程で断絶した武家の娘を引き取ったりもしたし」

「その中には平家も含まれてます？」

「含まれてるね。分家の伊勢家は伊勢平氏の正当な家系だから」

この内容が非常に驚きだった。何せ、史実では死んだとされていた安徳天皇と彼の祖母にあたる平時子が兵士に扮した神楽坂家当主に助け出され、源頼朝と源義経の確執による混乱に乗じて京へ連れ帰り、内密に生前譲位という形を取って伊勢神宮へ匿われた。皇族と平氏の血を引く彼が神楽坂家の子女を娶ることで伊勢の名を名乗

り、伊勢平氏本流ひいては神楽坂分家の一つである伊勢家の源流となった。
「そのお陰で天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)は二本存在することになっちゃってるけど、本物は神楽坂家が預かってるんだよね」
「歴史学者が知ったら、泡を噴くどころか青天の霹靂ですよ。というか、皇室に渡さないのですか？」
「これが所謂〝聖遺物(レリック)〟の類でね。皇室で扱えないから下賜される形で保有してるの」
　正直な話、聞いているだけでもこの国の歴史があらゆる意味で〝壊れている〟と思った。ちなみにだが、戦国の三英傑と謳われた織田信長(おだのぶなが)も密かに救出し、出雲大社の神職として働かせるようになったのが後の高槻家のルーツらしい。
　尚、当時から信長は糖尿病(その当時は飲水病とも言われた)を患っていたが、神楽坂家の術者が数ヶ月を掛けて陣を敷き、『天陽照覧』で信長を若かりし頃に戻したという記録が残っていた。それを機に信長は自らの名を捨て、神道に携わる人間として人生を全うした。それでも過去の一向一揆のことから仏教のことを嫌っていたらしい。
　まあ、１０年以上も仏僧と争いを繰り返していたら、正直嫌になるのも無理はないだろう。

逃げることも時には大事

話が天神魔法関連に逸れてしまったので、本来の目的である九条家の話に戻す。

現在の師族会議を構成する師族二十八家。その母体となったのは各々の素体世代とされる古式魔法師の存在があった。だが、呪殺などを恐れる政府の高官クラスが古式の術者をそう簡単に説得できる筈がない。困っていた政府に手を差し伸べたのは『元老院』の存在だった。彼らは全国に点在する魔法技能師開発研究所のオーナーとなることで、その影響力を強めると共に実行力の伴う力を求めた。

正直、この『元老院』の役目が最初見た時は疑問に感じた部分があった。それは、メンバー自体に人数のばらつきはあれど、四大老になれる家が固定されていることだ。「裏」の秩序を守るとはいえ、いくら複数人による合議統治だとしても腐敗するリスクがないとは言えない。それこそ四家全てが腐敗する可能性だって無きにしも在らずなのだ。

この世界の四大老は神楽坂（かぐらざか）、上泉（かみいずみ）、東道（とうどう）、そして樫和（かしわ）の四家で構成されている。

正直これだけで何を意味しているかなんて分からないに等しい。だが、特定の家のみが特定の官職に就けるという現代日本における法の常識から逸脱した行為には前例が存在する。それは中世の日本における摂関家の三公（律令制における太政大臣・左大臣・右大臣。のちに、左大臣・右大臣・内大臣の三職）、そして藤氏長者（とうしのちょうじゃ）（藤原氏一族全体の氏長者）に関する決め事に近い。

その仕組みと当時の公家と武家の関係性を照らし合わせれば、師族二十八家――師族会議はいわば武家のような存在に成り得るわけだ。この場合、『元老院』は天皇を飾りとして政に関与させない朝廷のような立場になる。

「向こうは元老院の構成メンバーの一角で、こっちは四大老の一角。正直無視しても良かったのだけれど、樫和のアホンダラまで諫めに来てね。その面を凹ましてやろうかと思ったほどよ」

神楽坂家を定義する場合、血族としての家柄で言えば皇族かつ陰陽

道の賀茂氏・安倍氏に連なる家と見做されている。だが、土御門家と袂を分かった際に衰退の兆しがあった勘解由小路(かでのこうじ)の家号を受けるだけでなく、明治以降の即位式において新天皇に灌頂(かんじょう)(種々の戒律や資格を授けて正統な継承者とするための儀式)を授ける即位灌頂の儀を掌る役目を二条家より引き継いでいる。その際、仏教的要素を排除して神道的要素を取り入れた結果、名称も皇範伝授(こうはんでんじゅ)と名を変え、第二次大戦後の憲法による文言で象徴化した今でも神楽坂家の専任事項となっている。ビジネスネームとして用いられている神坂(かみさか)の家号はその際に下賜されたものらしい。

その際に二条家の娘を娶っていたため、広い目線で見れば藤原氏九条流の流れを汲む一派と見做すこともできるが、流石にそれは道理が通らないと感じた。それを諌める形で首を突っ込んできたのは、樫和氏だった。

「周公瑾に関する報告を全部流したら押し黙って帰ったけどね。ザマアミロって思ったわ」

「九条家はかつての栄光――五摂家のようになりたいのですか?」

「まあ、樫和を排除したら考えなくもないけど、それをやるメリットもないのよ」

かつての朝廷と武家の関係と異なる点があるとすれば、それは『元老院』自体が権威だけでなく権力まで有していることに他ならない。

中世の公家は元々荘園などを所有していて、それなりに力があったところを武家による戦乱が彼らを困窮させた。土地本位から金本位となった現代において、魔法の力を保持するということがどういう意味を齎すのかも『元老院』は分かっていながら、現代魔法師を囲んで彼らに役目を押し付けた。やっていることはさながら公家による武家への復讐のようなものだ。

魔法師の基本的人権の保障を基本理念とする師族会議において、その動きに真っ向から対立しているのは『元老院』ではないか、と思ってしまうほどに。

「悠君はどう思ってるの?」

「一定の強固な統治システムは確かに必要ですが、上が腐り続けない

という保証なんて誰にも出来ません。人という存在が介在している以上、絶対という道理が通じるものなんてありませんから」
国防の為に抑止力が必要なのも理解はするし、その為の力が求められるのも理解はする。前世で原子力という力を封じたせいでどういった現象が起きたのかを知っているからこそ、国家経済を構成する力に強さが求められるのは仕方がない事だ。
だが、だからといって頭ごなしに自らは動かず、ただ命令するだけの存在に成り下がるのは真っ平御免である。
「古式魔法の勢力バランスを考えて選出された四大老の一角が舐め切ったことを述べている以上、彼に遠慮する理由も無くなりました。東道殿にもそのことは伝えています」
「……まあ、悠君は間接的だけど狙われた側だものね。で、いつ実行するの？」
「それなんですが、『星見』からの報告でＵＳＮＡにきな臭い動きがあると。それを待ってからになりますね」
その報告というのは顧傑（ジード・ヘイグ）絡みではなく、その後のイギリスも含めた諸外国の動きになる。
ただでさえ表向き５つの戦略級魔法を有している日本に対し、それを排除しようと目論む輩の存在。その上で動いて来るのは『十三使徒』――――世界の秩序を謳っておきながら、新たな戦略級魔法の存在を認めない一種の老害のような存在。
大体、国家公認だからといって相手の国へ戦略級魔法を使う時点で〝宣戦布告〟に等しい行為だ。自分のことを言うようで正直嫌な感じだが、戦略級魔法師は国際的な慣習や常識が欠如しているのだろうか、と疑いたくなる。
どこかの戦略級魔法師は相手の魔法師を街中で平然と殺そうとしたり、別の魔法師は連邦構成国の兵士を唆して破壊工作を仕掛けさせたり、また別の戦略級魔法師は宣戦布告もなしに民間の別荘地や政府機関を攻撃しようとした。この事実だけ見れば、十分国際問題案件に成り得ると政府関係者なら盛大に頭を抱えてしまう事案だ。
それを言ったら自分自身にも当て嵌まるわけだが、こっちの場合は

相手から仕掛けられた喧嘩を買った形になる。自分だって魔法を使う相手ぐらいは選んでいるつもりだ。
ただしテロリスト、テメーは見敵必殺だ。
「それと、イギリスも動いている節があるようで、香港経由で大亜連合にコンタクトを取っているようです」
「……講和反対派の軍人ね。ま、色々過去の影響が残っている国だから、小国であるこの国に頭を下げられないのでしょうけど」
「国の大きさに拘っている時点で器が小さいと思いますけどね。一部の連中は国防軍を〝日帝軍〟なんて呼んでるみたいですし」
その根底に存在するのは間違いなく先進国に対する〝劣等感〟なのだろう。だからと言って攻め込んで奪おうとする時点で民度が窺い知れてしまうし、分裂と統一を散々繰り返してきた大陸の国家に詰られる謂れはない。
「……母上。先の話になりますが、もしオーストラリアが関与して来たらこちらで対処しても宜しいですか？」
「ふふ、当主は悠君なのだから、別に許可は要りませんよ。もしかして、例の技術を合法的に獲得するためかしら？」
「そんなところです」
どうせイギリスが表立って関与してくるなんざ思っちゃいない。あの国はうまく立ち回って最終的に敵を盾にして逃げる事なんてお家芸のようなものだ。
オーストラリアには正規の手続きで入ったことはあるが、本当に何もしていないのにオーストラリア軍の連中が自分と剛三を執拗に見張っていた。時には事故を装って襲撃してきたこともあった。なので、こればかりは剛三と意見が一致してオーストラリア軍を相手に戦略級魔法『オゾンサークル』で壊滅させた。
即日オーストラリアを脱出し、東南アジア同盟（インドネシア）を経由してインド・ペルシア連邦に入国した。あの時は海を渡る試験を受けた経験が生きた形となった……その際、剛三が腹いせ代わりにオーストラリア海軍の軍艦を蹴り飛ばしたが、見なかったことにした（後日、ニュースでエアーズロックに軍艦が突き刺さったニュースを

見て思わず冷や汗が出た)。
原作で『十三使徒』のウィリアム・マクロードがエドワード・クラークやイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフと手を組んだのだって、最終的には「二人を止めようと努力したが、それも叶わなかった」と言い逃れするための材料としての価値も含んでいたのだろう。

◇　◇　◇

２０９７年２月５日。師族会議は２日目を迎え、今後４年間の十師族を決める十師族選定会議が同じ会場で行われる。その様子を『神将会』の戦闘服に身を包んだ悠元がホテルの屋上から『天神の眼(オシリス・サイト)』で見つめていた。
(――――人形が動き出した。市街地に向かうことなく全てホテル内に潜り込ませるつもりか)
既にホテル内は『幻影夜行(ナイトメア・ファントム)』による宿泊客に扮した幻影を置いており、天仙結界『金剛陣』の展開準備も完了している。相手を騙す魔法の精度は世界を渡り歩いた際に研鑽しており、古の魔法使いですら騙し切れる自信はある。
会議室内では十師族選定会議が予定通り開かれ、補充メンバーとして入った七宝家がそのまま十師族の座に就き、一条、二木、三矢、四葉、五輪、六塚、七草、七宝、八代、十文字が今後４年間の十師族を担うこととなった。
『悠元、こちらは配置についた』
「了解。爆弾を付けた死体は全てホテルの中に入ったとはいえ、油断はできない。元継兄さんと修司、由夢は予定通り十師族の方々の保護を。可能であれば、爆弾の回収を頼む」
『オッケー。さて、ボコボコにしてやるわ』
『悠元の結界術があるとはいえ、程々にしろよ?』
箱根の市街地がパニックに陥らないよう、事前にエリアメールを利用して『感染症対策に伴う不要不急の外出自粛』を呼び掛けており、外に出ている市民もかなり疎らである。今回は対策の一環で沖縄から知り合いの軍人魔法師に出動要請を掛けていて(統合軍令部の許可は得ている)、万が一の時は沖縄防衛戦の経験が生きることになる。

「雫と姫梨は下部のフロアにいる死体の殲滅を。リーナはそのフォロー役に置く」
『分かった』
『お任せください』
『……不満はないけど、ワタシがフォローってどういうことよ？』
「適切な人選の結果だ。『ブリオネイク』なら薙ぎ払いで殲滅できるからな」
雫と姫梨、リーナに加えてセリアがリーナの魔法を制御することで爆弾を爆発させることなく死体を〝殺せる〟と踏んだ。古式魔法対策に関してはこの一件が片付いた後で対処することとする。
「達也は万が一市街地に死体が出た際の対処を。『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』は俺の権限で使用を許可する」
『分かった』
「水波は達也のフォローを頼む」
『お任せください』
そして、実戦力のある達也と水波を市街地の監視役に置き、どうせ黙っていることなんて出来ないであろうレオとエリカ、燈也と佐那は幹比古を主軸としたメンバーで固めて達也の補佐に回した。ほのかと美月は神楽坂本邸で留守番させている。
なお、『神将会』の戦闘服に身を包んでいる深雪は自分の隣で静かに見守っていた。
「……ふう。これで一先ずは指示を終えた形になるな」
「お疲れ様です。それにしても、何故首謀者をこの場で捕らえる方向にしなかったのですか？」
「ああ、それね。ジード・ヘイグにはこの国が真に独立するための〝踏み台〟になってもらうためだ」
テロリストを踏み台に使うという発想は本来有り得ないものだろう。だが、過去の歴史ではテロリストや大規模テロに直結するような大量破壊兵器の保持を疑惑として国際会議の場で持ち出し、合理的に戦争を起こした事例が存在する。まあ、ＵＳＮＡの前身であるＵＳＡが起こした事なのだが。

今回、ジード・ヘイグの所持している爆弾の大本となったミサイルの弾頭本体とランチャーはどうせＵＳＮＡ国内で破棄されているだろうが、爆弾さえ回収できれば爆薬を起点として『天陽照覧』を使用するだけで大本の兵器が判明する。それを三矢家に調べさせて、ＵＳＮＡの責任の所在を明らかにする。

間違いなくホワイトハウスとペンタゴンは大慌てになるだろうが、ＵＳＮＡ国内で活動している人間主義者らが入国している情報も掴んでおり、それらも含めて明日施行される「テロ対策特別措置法」の記念すべき第一号となってもらう。前世のものとは異なってより実効性のある施策として成立することになり、これをより実効性のあるものとするために師族会議と国防軍の〝分業〟が必須となる。

ＵＳＮＡが敵対するリスクはあるだろうが、こちらには多方向から攻めれるだけのカードを保持している。個人で保有している国債の売却を視野に入れると宣言した日には、向こうの金融長官がペンタゴンに殴りこむかもしれない。

「……始まるか。さて、こちらも始めよう」

「はい」

お互いに『仮装行列（パレード）』の刻印術式が刻まれた仮面を身に付け、悠元の髪の色が銀色となり、深雪の髪の色は漆黒からプラチナブロンドへと変化する。そして、悠元は床に手を付いてプシオンを込める。

「天仙結界――『金剛陣』、発動」

悠元がホテルの構造物全体に対する状態固定の魔法『金剛陣』が敷かれた瞬間、ホテルの一角で爆発が発生した。

◇　◇　◇

十師族選定会議の後に開かれた師族会議の最中だった面々は、扉の外から感じた振動に警戒した。だが、ビクともしていない扉に克人がゆっくりと近付き、扉を開けると忽ち爆薬の焼けた匂いと死体の悪臭が会議場に流れ込んできた。

「これは……死体の臭いですか？」

「そうでしょうな。ですが、考えられる爆発の規模からすると、誰かが建物に魔法を掛けているかもしれません」

立ち込める臭いに顔を顰める七宝拓巳(しっぽうたくみ)に、防御魔法に関して得手のある十文字克人(じゅうもんじかつと)が答えた。このホテル全体となればいくら十師族の当主でも長時間耐えうるだけのものではない、と判断して元は『スピードローダー』を改良した『ラウンドオーダー』を展開する。
「そうなると、早めに脱出すべきでしょう。いつまで無事でいられるか分からないでしょうからな」
「……っ、三矢殿の意見には賛成だ。どうやらパペット・テロのようだ」
この中で有機物干渉系に長けている剛毅が魔法で操られている人形の存在を感知した。下の階に行けば行くほど人数が多いため、この場合は上の階に行くのが最良であると感じた。
すると、扉の方から漆黒の仮面を身に付けた戦闘服姿の男性が姿を見せた。
「生きているな、十師族の方々」
「何者だ！　貴様がテロの首謀者か！」
「死体を操る禁術を使う下衆な輩と一緒にしないで頂きたい。総長の命により、貴殿らを守りに来ただけだ……信用するかどうかはともかく、死にたくなければ付いてこい」
剛毅の物言いを涼しく受け流しつつ、そういって去っていく男性に一同はあっけにとられるが、下の階の方から響いてくる振動で意識を取り戻す様に克人が声を発した。
「今は避難することが先決でしょう。彼の正体如何を問うのはそれからでも遅くありません」
「……そうですね。急ぎましょう」
これには弘一も納得した上で男性の後を追っていく。扉を出たところで爆弾を括りつけられた複数人の人間が襲い掛かるが、十師族当主の隙間を縫うように放たれる雷の斬撃が死体を吹き飛ばす。すると、そこにいたのは格好こそ似ているが、両刃剣を携えた黄金色の髪を持つ女性の姿だった。
「行きなさい。〝副長〟は上に向かったわ」
「君は……」

「喋る口があるのなら動きなさい。さもないと、是非を言わさず〝斬る〟わよ？」
　その少女が放った尋常ならざる殺気に、いくら十師族の当主と言えども恐れを感じるほどであり、今はただ少女の言うことに従って彼の後を追うように面々が駆けていった。その姿を横目で見送りつつ、少女は両刃剣を振りかざして別の階段に向かって雷撃を飛ばした上で耳に付けた通信機のスイッチを入れる。
「……こちら由夢。十師族の方々はそちらに向かったわ」
『了解した。上の階は片が付いたから、爆弾を回収してくれ』
「ほいほい、了解したよ、〝総長〟」
　先程の殺気を垣間見せた姿とは打って変わり、のんびりとした口調で話した少女もとい由夢は、通信機の向こうから聞こえてくる〝総長〟の指示で爆弾を回収するために動き出した。
　上の階へ向かって行く十師族の面々だが、その途中には爆弾を抱えた死体が四肢を斬られている惨状が所々に見られた。これには克人が問いかけた。
「今のところ死者や怪我人は見られませんね。逃げ遅れた人はどのくらいいるのでしょうか」
「分からないが、このホテルは神坂グループ――神楽坂家の管轄だ。もしかすると、先導している彼や扉の前で会った彼女もその関係者なのかもしれないな」
　十師族の当主の中で『神将会』のことを知っているのは、実際に姿を見たことのある克人だけであり、真夜も存在自体や深雪が所属していることは聞いているが、その活躍自体を見たわけではない。
　難なくホテルの屋上へ到達すると、先程出会った〝副長〟と思しき男性に加えて一組の男女の姿があった。仮面で顔を隠して髪の色も変わっているが、真夜は少女が自分の身内であるとすぐに気付き、その傍らにいる少年が誰なのかも想像が付いた。
「総長、無事にお連れしました」
「ご苦労様です、副長殿。さて、仕上げと行きましょう。お願いできるかな？」

「畏まりました、総長殿」
　仮面を付けた少女が恭しく頭を下げると、一切サイオンが漏れることなく魔法が発動してホテル内部にいる死体に掛けられた魔法の刻印を〝凍結粉砕〟させる。ホテルにいた死体全ての僵尸術は確認できないが、顧傑が射程範囲である１０キロメートルの範囲から出て行かない以上は魔法の再発動もありうるため、〝総長〟と呼ばれた少年は『白牢陣』を敷いて僵尸術の発動を封じる。
　それを敷き終えた上で十師族の当主らに向き直った。
「さて、我々の役目は終わりました。とはいえ、ここもまだ危険ですので、早めに避難されると宜しいでしょう」
「待て。お前たちは何故我々を助けた？　それだけの力を持っているのであれば、我々が知らない筈など無い。お前たちがテロを起こした首謀者という嫌疑もある」
「……」
　確かに剛毅の言い分も道理ではあるだろう。心配そうに見つめる少女の頭に手を置いて安心させるように宥めた上で少年は口を開いた。
「助けて貰っておいて随分と上からの目線で語るんだな、一条家当主・一条剛毅。生憎こちらにはアンタらの嫌疑に答える義務なんてものはない」
「なっ、何だと!?」
「何が最強だ。強すぎれば杭を打ち込むが如く干渉を平気でするような組織に従う義理はない……帰るぞ」
「ああ」
「はい」
　少年――悠元は剛毅らの問いかけを斬り捨てるように厳しく言い放った上で飛行魔法で空高く飛び上がり、〝副長〟もとい元継と、少女こと深雪も短く答えた上で空高く飛び上がっていった。これには剛毅が『爆裂』で撃ち落とそうとしたところに克人が止めに入った。
「十文字殿、何を」
「……彼らは横浜の時に見たことがあります。その際、皇宮警察本部

特務隊『神将会』と名乗っていました。誰の命令かは分かりませんが、我々を助けるためだったことは事実かと思います」
「……あれが、『神将会』」
克人はその構成メンバーに悠元と深雪、そして雫がいたのは確認していたが、今回は悠元と深雪と思しき人物以外に別の二人が確認できた。
十師族の当主となった克人とてその素性を明かすことは禁じられているため、彼らが『神将会』なる存在であるとだけ答えると、勇海が驚くような素振りを見せつつ呟いた。そして、その後方では真夜が口元に笑みを浮かべていた。これには雷蔵が気付いて声を掛けた。
「四葉殿、如何なされましたか？」
「いえ、八代殿。我々以外にも心強い方がいると思うと、思わず笑みが出てしまいまして」
「……そうですな」
正直なところ、真夜のように言えたらどれほど気楽な事か……と、雷蔵は内心で自身の無力さを感じずにはいられず、苦笑にも似た乾いた笑みを見せていた。

閑話　ハンス・エルンストの七難八苦

私の名はハンス・エルンスト。ドイツのしがない軍人魔法師として普通の軍人よりも高い給料を貰って生活している。そんな私だが……今（西暦２０９６年１２月１０日）、極寒ともいえるモスクワ郊外にいた。ドイツの軍人が新ソ連（新ソビエト社会主義共和国連邦）の、しかも首都近郊にいるというだけで射殺案件ものだが、これには理由があった。

『イワンの戦車が見えたぞ、エルンスト！　さあ、飛ぶんだ！』

「……何時も無茶を言いやがるな、〝ハンス〟は」

自分のことを名前で呼んでいるようにも聞こえるだろうが、実は違う。ある日を境に、私の中には別の人格が宿った。彼の名は〝ハンス＝ウルリッヒ・ルーデル〟――ドイツの軍人を志すならば避けて通ることが出来ないとも言われる史上最高峰の爆撃機乗り。

きっかけは約１年前――日本で起きた『灼熱と極光のハロウィン』の影響が残っていた時、１９歳になったばかりの私は新ソ連への潜入捜査を命じられ（所属の部隊内で独身だったのがハンスしかいなかったため）、せめてもの神頼みということで街の教会に行って祈った。正直、神に祈ってもそれが返って来るかどうかなんて分かったものではない。とはいえ、信仰している以上は無碍にも出来ない。

刻々と近付いてくる任務の足音に悩みを抱えていたある日、南米にいる義理の伯父――現在南アメリカ連邦共和国初代大統領となっているディアッカ・ブレスティーロから贈り物が届けられた。

「伯父さんの奴、今度は何を贈ってきたんだ？」

伯父は神に対する信仰が強く、それを政治の場に出すことは決してしないが敬虔なキリスト教徒として知っていて、そんな真面目さに私の伯母（ブレスティーロ大統領夫人）も惚れたことはさておき、大抵御守りとか十字架を贈ってくることが多い。曰く「安全祈願」らしいが、これには私も苦笑いであった。

今度は一体何の贈り物かと取り出すと、それは見るからに高そうな十字架のネックレスだった。同封された手紙によると、「知り合いが

暇つぶしに石を圧縮していたら出来上がった代物」らしく、御守り代わりになるだろうと送ったそうだ。
しかも、その人物というのはかの英雄こと上泉剛三の縁者らしい。
「……伯父さん、とうとう頭でも打ったのか？　馬鹿らしくて信じられねえよ……寝るか」
私は「どうせ夢でも見ているのだろう」と思って眠りに就いたわけだが……その日の夜、夢の中で彼と出会う羽目になった。
――やあ、ハンスとはいい名前じゃないか。私と同じ名を呼ぶのは混乱しそうだから、君のことはエルンストと呼ばせてもらおう。私はハンス＝ウルリッヒ・ルーデルという。イワンが大嫌いな飛行機乗りだ。
――……誰だあああああああっ!?　いや、え、あのルーデル殿ぉっ!?　てか、夢の中で意識があるってどうなってんだぁっ!?
――カルシウムが足りていないな。牛乳を飲むと良い。
――怒ってるわけじゃねえよ!!　色々驚いてるんだよ!!
それからというものの、私の肉体の中に二人の〝ハンス〟の精神が同居するという普通ならば有り得ない（魔法師でも聞いたことがない）状況が発生しており、念のために健康診断を受けたが、特に肉体的変化は認められなかった。
ただ、ルーデル（彼曰く「私はとうに死んでいるので、君は相棒みたいなものだ」とのことで呼び方も含めて敬語禁止になった）の飛行機乗りとしての神業にも等しい操縦能力や強靭な精神、それに私の持つ魔法技術が奇跡的に噛み合い、本来私が使えなかったレベルの威力を叩き出す魔法を行使することに成功してしまった。
更に、ＦＬＴで発表された飛行デバイスの存在により、ルーデルの飛行機乗りとしての血が騒いだ。
ここで説明しておくと、私は遠隔操作系の魔法が苦手だが、その反面自身からただ放出するだけの魔法は得意であった。しかも、細かいサイオンコントロールが苦手で、軍から試験的に貸与された飛行デバイスを使うのにも四苦八苦していた。
そこに魔法技術を知ったルーデルという化物クラスの精神が憑依

したのだ。結果として何が起こったのかと言えば……自身の肉体に物理干渉装甲を纏って超高速で敵兵や敵兵器に突撃するという私にしか出来ない突貫戦法が確立してしまった。
『これは楽しいな。そうだろう、エルンスト』
「いやあああああああっ!?」
ルーデルと言えども元は生身の人間だったので、戦闘機を駆る以上は航空力学という物理法則に勝てなかった。だが、飛行デバイスには飛行機のような翼が要らない以上、私当人の肉体さえ持てばいくらでも自在に飛べてしまう。
過去ルーデルの後部座席に座った人たちが仮に生きていたら、揃ってこう言ったかもしれないだろう。
『本当にご愁傷様である』と。
だから、私はひたすらに鍛えた。もう逃げられない以上は必死に鍛えまくった。加えてルーデルの飛行魔法制御に何度も気絶させられ、気付いたときには全身がボロボロになっていたため、上官からは寧ろ心配されたほどだった。
『今日もイワンの戦車が大量だな。例の戦略級魔法師とやらが出てこないが』
「そんなのを首都近郊で使ったらあっちが大惨事だ」
そして、新ソ連に潜入した私はソ連嫌いのルーデルに引っ張り出される形で暴れることになり、姿を一応スモーク付きのヘルメットと防寒も兼ねた特殊スーツで隠しているため、新ソ連から「魔王の再来（リターン・オブ・ルーデル）」という異名まで得てしまった。皮肉にも間違っていないというのが一番性質が悪い話だと思う。
この活躍が切っ掛けで、新ソ連国内にいる反体制派と出会うことが出来た。リーダーは所謂精霊信仰に詳しい人間らしく、私の中にいるルーデルの存在にすぐ気付いた。彼に事情を説明すると、彼からは寧ろ同情された。
「五体満足で国に帰れるといいな」
「……そうですね」
『なに、足の一本や二本位失っても平気だぞ』

黙れルーデル。お前とは違って私はまだ人間の範疇でいたいのだ。『既に遅いじゃないか』なんて満面の笑顔で言ってそうな言葉に思わず怒ってしまい、持っていたステンレス製のマグカップが粉砕した。リーダーにも慰められたほどで、正直泣きたかった。

そして、それから1週間後の１２月１７日。世間はクリスマスが近い時期だが、人間主義の連中が現体制を覆そうという反体制派に協力の手を差し伸べたせいでモスクワ近郊は荒れに荒れており、上官からの秘密通信を受けて帰国することになった。

仲間たちも残念がっていたが、戦車や装甲車を含めるとおおよそ1年で約５００両も壊せば祖国も〝帰ってこい〟ということになるだろう。ルーデルは残念がっていたが、『ならば、一人ゼーレヴェでも』とか不穏なことを言い出したので黙らせた。

更に、元々一人で帰る気でいたわけだが、一人の少女を連れ帰る羽目になってしまった。

「ハンス、私もいく」

この子は昨年末に反体制派と協力して引っ掻き回していた際、新ソ連の部隊が村を焼き払ったのだ。そこは特に反体制派のメンバーの家族が住んでいたわけではなく、ただ国家元首の〝あの村を残せば反体制派に利用される〟という言葉だけで。

念のために村の跡を探したところ、奇跡的に焼失を免れた小さな小屋に女の子が眠っていた。新ソ連軍が引き取るとも思えず、更には少女からあの村の住人ではないという事実を知り、已む無く連れ帰って面倒を見ていた。

ルーデルはそれを見て『ほう、私と似た趣味があるのだな』と述べたことに関してはガン無視した。可愛がることはあっても娶ろうなどという気などない。

この子――――ナターリヤに誰か親族はいないか本人に聞いたのだが、彼女は「お祖父ちゃんが軍のお偉いさん」と聞き、その名前はレオニードと聞いた瞬間に一人心当たりがあった。

――――国家公認の戦略級魔法師『十三使徒』レオニード・コントラチェンコ。

これは彼がいる基地に送り届けようと、こっそり手紙を出したところで遭遇する羽目になり、ナターリヤのことを話すと「すぐに会いたい」と言い出した。なので、正体がバレているのも覚悟の上でナターリヤとコントラチェンコを会わせたわけだが、その時の表情は孫娘を可愛がる祖父の表情だった。

そして、それで終わるかと思いきや、ナターリヤは私を指さして「あの人と結婚する」と言い出したのだ。見るからにスモーク付きのメットと戦闘用スーツを着た不審者に信用なんて出来る訳がない。だから、私は諦めてヘルメットを取った。

覚悟を決めたわけではない。ただ、どんな結果になろうとも、ここで私が死んでも文句は言えないという諦めからくるものだった。

「……なかなかいい男じゃないか。よいか、ナターリヤ。こやつを誘惑して早くひ孫の顔を見せておくれ」

「うんっ！」

「何言ってんだ、アンタらはぁっ!!」

この時、私は２０歳。一方、ナターリヤは１０歳。彼女はとても子が成せる年齢ではないし、色々問題しかない。だが、コントラチェンコがナターリヤを私に預けるのは、ナターリヤが新ソ連内において既に亡くなっている扱いだったためだ。

『ハハハ、好みが似て結構なことだ。夜の営みに関しては私がしっかりレクチャーしてやる』

「……もう、好きにしてくれ」

コントラチェンコは自らの権限で私が忍び込んだことの記録を抹消すると言った。あんなことを言ったが、コントラチェンコも危ない場所にいるぐらいなら孫娘を信頼できる人間に預けたいということなのだろう。

明らかに不審者の立場なので何も言えないし、逆らえない。なので、『十三使徒』の孫を娶ることになった。もう訳が分からない。ルーデルはノリノリで夜の営みに関するアドバイスをしてやると言い出しているわけだが……それに関しては実績があるので信用はするつもりだ。

そんな事情が重なり、ナターリヤをお姫様抱っこして夜中に拠点を抜け出して飛び立った。ルーデルに散々飛ばされたお陰で、周囲の温度を保ちつつ長時間ただ飛ぶだけということに慣れ切ってしまった。戸籍がないナターリヤのこともあるため、直接祖国の空軍基地へと到着した私を待っていたのは、まさかの大統領閣下の出迎えだった。

「帰ってきたな、〝ミスター・ルーデル〟。未来の妻まで連れてきたのかな？」

「……何ですか、その名は」

帰ってきてみれば、自分の名前が『ハンス・エルンスト・ルーデル』となっていて、勲章を授与して少佐に昇進。しかもナターリヤは大統領の養女兼国家元首公認の婚約者となってしまった。これにはルーデルも『いいぞ、もっとやれ大統領』と煽る始末。もうね、盛大に泣きたいよ。

ただ、この事実が明るみになると新ソ連が躍起になってもう一人の戦略級魔法師であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を東ＥＵへ向けて放ってくる可能性があった。

なので、ドイツ政府とドイツ軍は私を書面上は〝任務中の事故による戦死（四階級特進）〟という形で伯母のいるＳＳＡ（南アメリカ連邦共和国）へ〝貿易物資の輸送〟に託けた形で送り出された（ドイツとしては、ＵＳＮＡの抑えとしてＳＳＡに期待を込めて送り出した）。

私を温かく迎えてくれた伯母と義理の伯父――――大統領夫妻はその素質が十分にあるということで国家非公認の戦略級魔法師として登録されることになった。ミゲル・ディアスとも出会ったわけだが、彼は上泉剛三に師事を受けたことがあり、目指すは彼のような魔法師らしい。戦略級魔法師ですら尊敬する英雄ともなれば、一度はお目に掛かりたいと思う。

ちなみにだが、ルーデルはここら辺にも所縁があるため、『早速山登りに行くぞ！』とか言い出して南米の山という山を制覇してしまった。日頃の無茶ぶりが私を鍛えてくれたのだと思うと……喜んでいいのか、悲しむべきなのか分からなかった。

ナターリヤは祖父であるコントラチェンコの言い付けなのか、明らかに派手な下着で誘惑してくる。流石の私でも倫理や道徳を無視して社会的に死にたくないので、せめて一緒に寝るところまでは妥協した。

ルーデルは『意気地なしめ』と煽ってくるが、完全に無視した。魔法師の部分でおかしくなっても人間らしい生活を送りたいのだ。『今更だと思うがね』という言葉に対しては「誰のせいだ！」と本気で言いたくなった。

そして、伯父の護衛――――『ハンス・エルンスト』という名（流石にルーデルの名を出すと過剰に反応する人間がいるため）で訪日した際、かの英雄である上泉剛三と対面した。彼と握手を交わした際、私の中のルーデルが『彼は私と同じ匂いがする』と呟いていた。つまりはルーデルと同類なのだと察してしまった。

帰国するまでの間は剛三殿に武術を学んだわけだが、本当に隙がない。一歩動くだけでやられると本能で察したほどだ。すると、剛三殿から「後ろを向かず逃げなかっただけでも上出来だ」と褒められてしまった。その上で魔法技術も含めた技巧を磨くこととなった。

帰国した私がゲリラの動きを察して出動した際、剛三のアドバイスを受けて出来るようになった放出系魔法もとい武装一体型ＣＡＤを介することで完成した戦略級魔法。大気を収束して敵意のある人間のみを排除する『サイクロン・エクスプロージョン』が猛威を振るい、ゲリラのみを的確に排除できた。それにはルーデルの的確な制御があったのも事実だ。

これにはミゲル殿から褒められ、伯父からも勲章が贈られた……普通の魔法師だったはずなのに、上泉剛三というチートめいた存在と関わることで、私はいつしか戦略級魔法師クラスの実力を得てしまった。

この情報をどこから得たのか、ＵＳＮＡ大使館経由で送られてきたエドワード・クラークなる人物の手紙には「スターズ」への勧誘を仄めかすような文言が書かれていた。それもごく一部の人間しか知らない『ハンス・エルンスト・ルーデル』の名で。

これを見たルーデルは『こいつはクサいな。ゲロと呼ぶのもゲロに失礼なぐらいキナ臭い招待だな』とぼやいたが、私も正しくその通りだろうと思う。

私はまだいいが、ナターリヤは新ソ連の『十三使徒』レオニード・コントラチェンコの孫娘なのだ。もしかすると、彼はナターリヤも含めて新ソ連への取引材料に私を利用する気なのかもしれない。

伯父に相談したところ、伯父は直ぐにＵＳＮＡの大統領へコンタクトを取ってくれた。その際「私の身内を脅しの材料に使う気か？　そうであるならば、この事実をミスター剛三にも伝えるぞ」という言葉に、受話器からは『ま、待ってくれ、それだけは絶対にやめてくれ！』と焦っていた。

直に会った事のある私が言うのもなんだが、あの人なら日本から自ら飛んで来てホワイトハウスがＳＦ映画ばりに破壊される光景がフィクションで済まない様な気がした。ＵＳＮＡ大統領もその危機を感じていたからこそ、焦っていたのかもしれない。

なお、ルーデルから聞いたエドワード・クラークの印象はというと、こうであった。

『手紙を見ただけで野心家を臭わせる辺り、彼は情報に絶対の自信があるのだろうが、情報があろうともそれを引っ繰り返す存在がいれば情報に価値など成さない』

私の中にいる常識外の極み（リアルチート）が言うと説得力があるだけに、私の相棒という形で定着した彼に関して信頼はしている。尤も、やっていることの程度が常識外過ぎて未だに慣れないところはある。

私は彼と違って、まだ人間でいたいのだから。

三枝（さえぐさ）と七草（さえぐさ）

その首謀者である顧傑は、現場から約９キロ離れた小田原のとある一軒家でソファーに座っていたが、その表情はどこか満足げであった。

旧式とはいえＵＳＮＡ軍で採用された爆薬は現役の爆発物探知機に引っ掛かることなくすり抜け、『僵尸術』で操った肉人形もセンサーに捉えられなかったし、ホテルの中で呼び止められることもなかった。

顧傑が立てた自爆テロ攻撃は、最もロスが少ない形で成功した。

警備が甘かったと言うつもりもなければ、市街地のセキュリティレベルが低かったわけではない。『フリズスキャルヴ』でもこの近辺に本拠を構えている可能性が高いとされる神楽坂家を出し抜けたことは、同じ古式の術者として自身の技量が勝った証拠に他ならない、と顧傑は結論付けた。

死体に埋め込んだ呪印が突如〝壊された〟ことは驚きだったが、感知した死者は４０人ほど。負傷者を合わせれば１００人は下らないだろう。

十師族が誰一人怪我を負わなかっただけではなく、謎の集団が十師族を守った。謎の集団の正体については『フリズスキャルヴ』で探るとして、こちらの予定通り十師族の当主達は怪我を負わなかった。

だが、これは負け惜しみなどではなく元々そうなることが顧傑にとって望ましい展開だった。

これだけの人数が巻き添えになったというのに、十師族が生き残った。その事実を顧傑は教えてやるつもりだった。

十師族は、自分たちが生き残るためならばお前たち日本人を見捨てるのだと。

お前たち日本人は、十師族によって殺されるのだと。

十師族――――四葉は、日本人に憎まれて日本から居場所を失うのだと。

顧傑は暗い愉悦に満ちた笑いを浮かべ、移動すべく立ち上がった。

その足元にはこの家の持ち主とその家族の死体が転がっていた。
その彼が立ち去ってから30分後、玄関のほうから一人の少年――
――悠元が足を踏み入れた。脈を確認してこの家の家族が死んでいるのを確認すると、悠元はまず『天神の眼（オシリス・サイト）』でこの家の記憶情報を読み取った。
（『僵尸術』の発動基点はここで間違いない。顧傑本人が『幻影夜行（ナイトメア・ファントム）』によって爆発させた対象を誤認識しているのは間違いないな……）
得られた情報を確認した上で、悠元は『セラフィム』を抜き放って『天陽照覧』でこの家の住人を蘇生させた。死亡から一日以上経っていなかったところを見るに、顧傑は夜中に侵入して彼らを殺した可能性が高い。
悠元は仮面を外して認識を偽る刻印が組み込まれたサングラスを身に着けた上で、彼らが意識を取り戻すのを待った。
「うっ……ここは」
「大丈夫ですか？」
「君は……そうだ、妻は、妻は無事ですか!?」
「ええ。今は意識を失っているだけのようです。私は警察のもので、家の中に人の気配があったにも拘らず郵便受けに物が残ったままだったので、心配で中に入ったところで貴方方を発見しました」
これに関して嘘は言っていない。『神将会』は皇宮警察でありながらも警察官と同じように捜査権限を有し、場合によっては警視総監と同等の権限で警察省の人間を動かすことが可能である。そのため、『神将会』として活動する際は偽名の警察手帳（ビジネスネームの要領を利用していて、本当の名を使わないのは身分がバレる危険を減らすため）を携帯している。
悠元は男性を気遣っていると、彼の妻である女性も起き上がった。少し様子を見てから手帳を見せ、何か思い出せることはあるかと尋ねたところ、昨晩見知らぬ男性が尋ねてきて、道を尋ねてきた折に襲われたらしい。
やっていることは立派な住居不法侵入と殺人行為である。これに加えて横須賀の貧民行方不明事件に関与した挙句、爆破テロ行為の首

謀者。ＵＳＮＡのスキャンダル関係はって？　向こうの自業自得なのでカウントする気にもならない。
「そうですか、ご協力感謝します。他に思い出したことがあれば遠慮なくご連絡下さい」
　そういって渡したのは『神将会』が〝警察省の捜査官〟として使うためのナンバーで、端末上は同一だがナンバーごとに暗号強度の度合いがわざと変えられている（敢えて組織に合わせた強度にすることで相手を誤認させる手法）。悠元は丁重に頭を下げて家を出ると、誰もいない人陰に入って『鏡の扉（ミラーゲート）』で神楽坂本邸の自室に直接帰った。
◇　◇　◇
　私服に着替えた上で悠元が再び現場に戻ると、警察官が現場検証をしている姿や現場の様子を報道するメディアの姿が見られた。死者こそ出なかったし、怪我人と言っても全員新陰流剣武術の門下生だったため、特に問題は無いとみていいだろう。
　余計な詮索が起こらないよう、警察の方から「現場に爆発物が残っている危険性があるため、警察省から公式な発表を行うまで不必要な情報の流布を避けてほしい」と申し入れをさせている。
　そして、原作では警察官による取り調べを受けるわけだが、ここにも一つテコ入れをしておいた。それは、彼らに事情を聞いているのがエリカの関係者に他ならない。
「お、悠元。もう、何もなかったから暇だったわよ……って、アレは和兄に稲垣さんじゃない」
「何もない方がいいだろう、エリカ。達也たちもお疲れさん」
「ああ」
　ここは本来思想にニュートラルな警察官の方がいいかもしれないが、今回の一件を魔法師同士の抗争からくるテロ行為などと言われるのを防ぐためだ。それに、魔法師の警察官なら態々身構えなくてもいいという理由もある。まあ、百家本流の千葉家としては十師族に対して事情聴取をするのが心苦しいかもしれないが、そこは職務として割り切ってもらう。
　すると、被災通知メールを受け取って急行してきた香澄と泉美、琢

磨と理璃が姿を見せた。彼らとしては達也と深雪、悠元はともかくとして、本来関係のないエリカ達までいることが疑問だったのだろう。
「先輩がた、どうしてここに？」
「エリカ達は偶々箱根に遊びに来たらしくてな。この騒ぎを見て駆け付けて来たんだよ」
嘘らしくもあるが、決して間違ったことは言っていない。それを理解するからこそ、エリカは思わず顔を背けて笑っていた。これにはレオが頭を掻きながら「やれやれ」と言いたげな様子を見せたが、香澄らにとってはそれを疑問に思わなかったようだ。
泉美は視線の先に取り調べを受けている十師族当主の方々の中に弘一の姿を見つけると、駆け寄ることなく一つ息を吐いてから呟いた。
「お父様は……生きていらっしゃるのならばいいです」
「泉美、せめてもうちょっとオブラートに包もうよ」
「そうですか？　なら、『お父様が爆弾テロに遭われたとお聞きして取り急ぎ駆け付けましたが、私の心配が取り越し苦労に終わって何よりでした』と表現した方が良かったでしょうか？」
「ゴメン、泉美。私が悪かった」
無駄に包み過ぎて、まるで嫌味にしか聞こえなくなった泉美の言葉に香澄が正直に謝り、これには理璃のみならず琢磨まで引き攣った笑みを見せるほどだった。それを聞いていた周囲の人間も冷や汗を流すほどだったのは言うまでもない。
すると、その場に見覚えのある赤系統の制服――第三高校の制服を着た男子生徒の姿があった。
「将輝」
「えっ……って、神楽坂。司波さんもいらっしゃってたんですか」
「ええ、大変なことになりましたね」
将輝が悠元の隣にいる深雪の姿を見て複雑な表情を浮かべていることは直ぐに分かった。それは当然悠元だけでなく深雪にも理解できていた。
元々悠元と深雪が恋人として付き合っていたことへの追認という

形だが、婚約を認められた矢先に一条家から質問状が来たとなれば、当然深雪としても面白くない。どうあっても悠元への想いが揺らぐことなんてないのに、余計な手間を増やさないで欲しい……という深雪の想いは当然悠元も理解している。

だが、親同士で解決させたとしても婚約を解消された人間がどのような行動を起こすか……下手をすれば、七草弘一のように婚約者だった相手の家を貶める事すらしかねないだろう。それを危惧したからこそ、悠元は一度だけ機会を与えることにした。だが、二度目は許さない。

「本当に……各家の方々はあちらですか」

「ええ、事情聴取を受けているようでして」

「事情聴取⁉　すみません、少々失礼します」

「……何あの色ボケ男子。アレが本当に『クリムゾン・プリンス』？」

なお、この場には悠元と深雪以外の面々もいるわけだが、将輝の分かりやすい態度を見たセリアが一言呟いた。原作を知っていてなおそういい放った彼女の言葉に、「それはわかる」と言いたげに（いつの間にか復活した）エリカがジト目を浮かべていた。

すると、将輝が向かったのと入れ変わる形で克人が姿を見せた。

「十文字先輩、聴取は一段落ですか？」

「いや、お前たちにも事情を説明した方がいいと思ってな」

この中では克人と初対面になる1年組（水波と琢磨）と自己紹介をした後、起きたことをありのままに説明したところで克人は悠元に視線を向けた。それは恐らく十師族の避難誘導に神将会が関与していると理解しているからこそだろう。

「神楽坂。以前横浜の時のような連中が助けてくれたが、心当たりはあるか？」

「……あるにはありますが、先輩にお答えする義理はありません」

「それは、護人・神楽坂当主としての回答か？」

「そうでもありますし、別の立場としての回答でもあります……これ以上はいくら十師族の当主に連なる方でもお答えできません」

「いや、それだけ聞ければ十分だ。感謝する」

克人の問いかけに足する答えは、護人の当主として、神将会の総長として、そして国防陸軍の特務中将として答えられない案件である、と仄めかすぐらいしかできなかった。これ以上は特に聞きたいこともないため、克人は近寄ってきた香澄と泉美の異母兄である七草智一（さえぐさともかず）のもとに足を向けた。

香澄と泉美、琢磨と理璃はそれぞれ身内と一緒に帰るということとなり、悠元たちのもとを離れた。すると、あまり目立ちたくなかったのか後ろにいた元継が声を掛けてきた。

「悠元、俺たちも行くとしようか」

「……そうだな。すまないが、この後は各々気を付けて帰ってくれ。俺と兄さんは大事な一仕事が控えているから、ここから別行動になる」

悠元と元継が別行動を取る――――このことで護人絡みだと判断したのか、深雪は「お気を付けて」とだけ言い、達也と一緒に帰ることとなった。他の婚約者からも労われたが、セリアだけは「もしかしてソッチの気も」とか宣った瞬間に拳骨を落とした。お前はどうしてオチを付けたがるんだ……とは言わずに、セリアを追いやる様に行かせた。

◇　◇　◇

警察の事情聴取から解放された十師族の当主達（別行動していた克人も含む）は、将輝が乗ってきたヘリで横浜ベイヒルズタワーにある日本魔法協会関東支部へ向かった。付き添う形で将輝は無論のこと、香澄や泉美に理璃、琢磨だけでなく智一も一緒だった。

魔法協会に到着した彼らは、将輝、香澄、泉美、理璃、琢磨、智一を別室に待たせて会議室に籠った訳だが、会議はまだ始まらなかった。何故ならば、当主の一人である弘一が職員に呼ばれて応接室に出向くこととなったからだ。

そして、弘一が対面することになったのは、昨日師族会議の場に姿を見せた九島家先代当主にして弘一の魔法の師でもある九島烈その人だった。

「すまないな、弘一。忙しいのは承知しているが、今でなければ話せな

いからこそ呼び出させてもらった。本来ならば、弘一に師と呼ばれる筋合いなど無かったがな」
「……先生、昨日四葉殿に対して仰られたことは本当なのですか？」
「本当だ。その意味で婚約していたお前にも迷惑を……いや、お前の人生を狂わせたと言っても過言ではない」
　弘一が烈に尋ねたのは、先日烈が真夜に対して謝罪した一件のことだ。自分にとっての恩師が四葉を売り、真夜が子を成せなくなったことで弘一と真夜の婚約は解消されてしまった。そして、弘一は七草家の次期当主たる義務という形で親から新たな許婚を押し付けられた。
　これに対して弘一が憤るのも無理はない、と烈はそう感じていた。その上で、烈は今まで弘一が見えていなかった部分を打ち明けた。
「『あの方々』に屈した私も同罪だ。今更逃げることなど許されぬ身だということは承知している」
「……なら、何故断る様な抵抗をなされなかったのですか。『あの方々』の言い分が我が侭だと主張為さればよかった筈です」
「その婚約を破綻させようと最初に目論んだのが〝三枝（さえぐさ）〟――第三研の実験体の素体世代である三枝家だとしたら、どうする？」
「なっ、何ですって……」
　いつもならば冷静な口調な弘一ですら絶句するほどの有様に、烈は静かに説明を始める。
「当時、優秀な遺伝子を持つ者による交配が緩かった時、お前の両親は真夜と深夜のどちらかと恋仲になることを期待して私に弘一の師事を求めてきた。私としても優秀な次代を担う者が少しでも増えてくれればと思い、引き受けた。それは偽らざる私の気持ちだ」
　真夜と深夜の両親の親世代――彼女らの祖父母に神楽坂家所縁の人間がおり、七草家としても神楽坂家との繋がりを期待しつつ、弘一の魔法の師事を烈に頼み込んだ。結果として、弘一と真夜が仲良くなったため、七草家と四葉家は婚約を結んだ。
「だが、それに対して快く思わなかったのが三枝家だった。彼らは武家より派生した密教系魔法を使う古式魔法の使い手であり、その意味で公家の出である神楽坂家を敵視していた」

元々甲斐国（旧山梨県）を縄張りとしていた三枝家にとって、西国から皇族の護りとして移って来た神楽坂家が箱根を起点とした富士山南部を支配下に置いたことも、霊山たる富士山を我が物にするための〝侵略行為〟と敵視する要因になっていた。

その一方、上泉家とはその祖たる上泉信綱が武田信玄より偏諱授与を受けていたこともあり、武田氏と後の江戸幕府を開いた徳川氏を通じて仲が良い関係を築いていた。

「彼らは『あの方々』を通して私を脅し、更には三枝家が私を脅したのだ。断れば古式の術者に大義名分を与えて、九島家のみならず『九』の家に関わる人間すべてを潰すとな。そんなことになれば、古式魔法師と現代魔法師の内戦になってしまうのはお前も気付いているだろう」

「……先生は、その最悪の可能性を回避されるために、四葉を売ったのですか」

「結果論に過ぎぬよ、弘一。元はと言えば力を求めておきながら、結局は望んだ力を子孫たちに与えられなかった愚かな私の責任だ」

その意味で息子の真言があのような凶行に走ったのを烈は止められなかったし、咎めることも出来なかった。光宣に魔法師としての力はあっても、それに耐えうるだけの肉体を有さなかったのは皮肉としか言いようがなかった。

「……真夜は、あの苦しみを受けて、それでも先生を許しました。それこそ、私の右目の痛みなど比べ物にならないことは理解しています」

「……」

「私だって納得できないことはあります。それでも、十師族の一角として……七草の名を預かる者として、これ以上の無様を晒すつもりはありません。既に地の底に落ちてしまったからには、藻掻いてでも這い上がるしかないことは承知の上です」

弘一は、十師族の秩序を守るという理由で成り上がろうとする四葉家にちょっかいを掛けてきた。その気になれば報復されてもおかしくないようなことを見逃されてきたのは、真夜がまだ自分に気がある ものだと思い続けてきた。

だが、昨日の真夜と烈のやり取りを聞いた時、真夜の心の中には既

に弘一がいないということを思い知らされてしまった。自分の子が成せないという苦しみを司波達也という存在によって救われ、更に神楽坂悠元という存在にも救われたことで彼女自身の心境は既に過去を向いていなかった。

前に烈から言われた「過去の清算」を真夜がしてしまった以上、自身のこの想いにも決着を付けねばならない、と強く感じていた。その為にも、この事件を可及的速やかに解決せねばならない、と思い立ち上がった。

「……長い間、今までありがとうございました、先生。どうか、残りの余生を何事も無く健康に過ごされることを切に望みます」

全てを納得したわけではない。だが、このまま引き摺っていては自分の子らに同じ思いをさせるだけだ。真夜との婚約解消に納得できなかったかつての自分を思い出し、婚約に乗り気ではなかった真由美の姿によく似ていると笑みを漏らしつつ、弘一は応接室を出た。

その姿を烈はただ見送った後、ソファーに深く座り込んだ。

「……老兵は去り行くのみ、とは確かに良く言ったものだ。元造の孫に剛三の孫……この二人は、この国だけでなく世界すら変えていくだろう。私はただ、見守ることしか出来ぬな……ハハハ、この歳になって生きたいと思うなど、皮肉にも程があるな」

――四葉元造の孫にして、四葉の復讐の象徴足り得る存在の達也。

――上泉剛三の孫にして、三矢の再生の原点たる存在の悠元。

奇しくも『灼熱と極光のハロウィン』でこの国を救った戦略級魔法師に、烈は老い先短い身ながらも、この世界の行く末を見たく感じた。この歳になって長生きをしたい、と思うようになったことに烈は柄にもなく盛大に笑ったのだった。

今代の護人の介入

応接室を出た弘一は、魔法協会の職員に再び案内される形で会議室に入った。会議が始まっていないことはさて置くとしても、弘一は不思議な光景に思わず訝しんだ。それは、１０人しかいない筈の十師族当主なのに、用意された席は『１２席』。

弘一は疑問に思いつつも、断りを入れつつ師族会議の時のような席順――――温子と雷蔵の間に座る。

「申し訳ありません、遅くなりました。会議は始まっていなかったようですが、まだ何方か参加されるのでしょうか？」

「ええ。職員からはその方々が来てから会議を始めてください、と伺っています」

弘一の疑問に舞衣が答えたが、舞衣を含めて他の参加者から弘一が何故呼ばれたかを尋ねる者はいなかった。昨日の一件に関するものでは、と考えている人間がいてもおかしくは無い状況の中、会議室の扉が開いて二人の人物が入ってくる。

「お待たせしました。お揃いですね、新たな十師族の方々」

「待たせたな、各々の方々」

一人は高級なスーツに身を包み、右手に扇子を持つ少年。もう一人も高級のスーツを纏った青年。十師族当主の中でその二人と直接面識を持っている人物――――三矢元はその姿を見て内心で驚きと喜びが入り混じった感情を覚えていた。

他の参加者の中には雷蔵や舞衣のように驚く者がいるだけでなく、一部の者――――弘一や剛毅は複雑な感情を向けていた。なお、真夜と温子に関しては歓迎するような面持ちを見せていた。

師族会議――――十師族よりも更に上の立場に立ち、全ての魔法師を統括し、この国の護りを担う二つの家。その名は『護人（さきもり）』。

「護人・神楽坂家当主、神楽坂悠元と申します。ここにいる方々は長野姓や三矢姓で面識のある方もいらっしゃいますが、くれぐれも線引きはして頂きたく思う所存です」

片や賀茂忠行（かものただゆき）や安倍晴明（あべのせいめい）の血族に加えて、戦乱などで朝廷を追い出

された皇族を匿い引き取ることで皇族の血を残し続けた陰陽道系古式魔法の名家。世界群発戦争で活躍した神楽坂千姫を生み出した神楽坂家の第１０８代当主・神楽坂悠元（旧姓：三矢悠元）。
「同じく護人・上泉家当主、上泉元継だ。今更言うまでもない事だろうが、俺と悠元――――神楽坂殿は既に三矢家の人間ではない。そこについてはしっかりと認識していただきたい」
片や箕輪長野氏の家号を継承し、かの剣豪こと上泉信綱よりその剣術と魔法技能を研鑽し、『新陰流剣武術』を確立した武家の流れを汲む古式魔法の名家。かの英雄こと上泉剛三を生み出し、表の天神魔法を受け継ぐ上泉家第４０代当主・上泉元継（旧姓：三矢元継）。
だが、今までの師族会議に出てきたのはどちらも先代当主となった千姫と剛三。悠元と元継が師族会議の場に出てくることが初めてであり、更に言えば、師族会議で護人の二家が揃って場に出てくること自体異例中の異例。ここにいる中では悠元が最年少の立場になるが、立場としては同じ十代の克人よりも上。
この状況の中、最初に口を開いたのは最年長である二木舞衣であった。
「神楽坂殿に上泉殿、お二方が揃ってこの会議に参加されると解釈して宜しいでしょうか？」
「無論です、二木殿。ただ、師族会議の場合とは異なり、私や上泉殿と貴方方では格が違うことをお忘れなきよう。なので、上泉殿が議長役を務めます。よろしいですか？」
「……ええ、分かりました」
舞衣からの言葉を聞いた上で、悠元と元継が席に座る。克人の隣に元継が、剛毅の隣に悠元が座る形となったわけだが、相手の表情を窺う暇などないと言わんばかりに元継が話を切り出す。
「二木殿から了解の旨を得られたということで、自分が進めさせていただく。こちらも貴方方の事情を既に把握しているため、事情説明は不要とする。それと、議論している時間は不要だ」
「上泉殿、それは何故なのですか？」
「護人の二家は、この事態を想定して既に動いていたからだ」

「上泉殿。つまり、我々がテロリストに狙われること――――師族会議が襲撃されることを事前に知っていたということですか？」
　議長役を引き受けた元継の説明に対して克人が尋ねると、元継は誰が聞いても分かりやすい言葉を告げた。つまり、十師族当主が狙われることを予め知っていたということに他ならない。これには雷蔵が問いかけたが、元継は臆することなく真剣な表情で答える。
「端的に言えばそうなる。尤も、仮に襲撃されても死者を出さないような配慮をしていたからこそ、非魔法師に怪我人は一人も出ていない上、魔法師でも軽い怪我で済んでいる」
「なら、何故事前にその情報を我々に提供されなかったのですか!?　狙いが我々であるならば、それこそ会場を直前で変えるなり出来たかもしれません！」
　元継の言い分に真っ向から発言したのは剛毅だった。確かに、単なるテロリストならば剛毅の言ったような対策も取れただろう。だが、彼らは何も知らない事実を悠元が口にした。
「一条殿、今回のテロの首謀者がハッキングツールを使っているとしても？　それも、最低でも師族会議で使われている暗号強度すら簡単に突破できるツールを有している事実があったとしても？」
「馬鹿な、そんなものが――――」
「あるんです。大体、有り得ないことを起こせる魔法を使っている貴方がその存在を否定するのか？」
　悠元と元継は神楽坂家にあった『フリズスキャルヴ』の端末を知っているからこそ、顧傑（ジード・ヘイグ）がその端末の所有者であることも把握している。そんなことなど〝有り得ない〟と否定したかった剛毅だが、悠元の真剣な視線に対して押し黙った。この一連の流れで、相手がこの会議のことも見張っている可能性があることに気付く者もいたが、それを制する形で元継が発言する。
「予め言っておくが、この会議室には特殊な結界を予め張っているため、外部からハッキングされる可能性はほぼゼロといっていいが、ないとも言い切れない。では、神楽坂殿。説明をお願いする」
「分かりました、上泉殿」

元継に促される形で悠元が説明に入る。参加者の視線は当然悠元に向けられることになるが、特に気にすることなく進めることとした。

「まず、十師族当主の皆様方に対して説明しなければならないことだが、事前に情報を流さなかったのは私の発案だ。理由はテロの首謀者がハッキングツールを持っていることもそうだが、自棄を起こして市街地で無差別テロを起こして非魔法師を虐殺し、『十師族は日本人を盾にして逃げた』などと謂れなき風評を流されて、魔法師社会に対する批判を避けるために行ったことだ」

何せ、旧型とはいえ悠元の前世では最大クラスの威力を誇る爆薬を用いた爆弾。それを市街地で無差別爆破でもされた場合、非魔法師の被害は良くて数十人、下手すると数百から数千人にまで膨れ上がる可能性があった。

しかも、箱根だったからよかったものの、仮に会議を日本魔法協会支部のある横浜でやった場合、被害はさらに大きくなっていた可能性が高い。十師族当主には申し訳ないと思ったが、万が一の手筈は整えていたために被害をほぼゼロに抑えられると踏んで相手を誘導する方針に切り替えた。

「そして、ホテル自体にも細工を施すことでテロの首謀者ことジード・ヘイグを騙すことにした。この辺りの細工は事前に確認しているので問題はない」

「神楽坂殿、もしかして相手が使っていた術に心当たりがあるのですか？」

「ヘイグが使用していたのは僵尸術（きょうしじゅつ）と呼ばれる大陸の術で、対象の精神に干渉することで人間を自我無き死体（にんぎょう）に変えるネクロマンシーの類の魔法だ。制御の最大射程距離は約１０キロメートル。術の痕跡は小田原の民家から放たれたものだと確認出来ている」

悠元が口にした顧傑の名に心当たりがある者が多い（千姫が昨春の師族会議でそのことについて触れている）ため、驚きを露わにしているものが多い中、有機物干渉に一番得手がある剛毅が問いかけたので、悠元はその術の詳細を答えた。

「それに、ヘイグは元々貴方方を殺せると踏んでテロを起こしたわけではない。爆弾の爆発程度なら十文字殿の『ファランクス』で凌ぎ切れるからな」
「殺すつもりではなかった？　では、何故？」
「爆弾テロの本質は『無差別のテロ行為』――――そう仰れば、何が狙いなのか貴方方とてすぐに分かるはずだ」
　別に雄弁を揮うつもりなどないが、何も一から十まで説明する気もない。なので、気付かせるように話した悠元の言葉に、ヘイグの狙いが十師族そのものではなく十師族が無事でそれ以外の人間が被害に遭う構図で引き起こされる結果が何なのかに、他の参加者も当然行き着いた形となった。
「年が明けてからの話だが、第一高校の生徒が人間主義者と思しき人物にストーカー同然の付き纏いや盗撮、更には暴言を浴びせられたという被害相談を受けていた。この行為にヘイグの狙いが噛み合えば、第一高校のみならず各魔法科高校、それに国立魔法大学に通う人間も含めて魔法資質を持つ人間が狙われることになる。これを看過すれば、それこそ魔法界の秩序そのものが崩壊しかねない」
　顧傑の企みを阻止することは、この国の魔法資質を持つ人間の安全を守る為に必要な事。人間主義者に対してのカウンターも必要だが、まずは彼らの動きが活発化させる要因を取り除くのが先決と考えた。
「この場に私と上泉殿が直接出向いたのは、今回の事態が最早十師族――――ひいては師族会議だけの問題ではなく、この国の未来に掛かっている重要な問題であると認識していただくためだ。そして、今上陛下より国家の安寧を託されたものとして、此度の一件は私こと神楽坂悠元が総責任者、上泉元継殿を補佐とする形で、日本政府と国防軍から引き継いだ十師族に関する取り決めに基づき、ジード・ヘイグ拘束の任を十師族に要請する」
　原作では十師族のみで取り決めていたことだったが、そこに上泉家と神楽坂家が政府と国防軍から十師族に関する全てのルールや契約を引き継ぎ、法に則った正式な手続きに基づいた要請を十師族に要請する。これには新たに十師族となった七宝拓巳（しっぽうたくみ）が問いかけた。

「今、政府から取り決めを引き継いだと仰いましたが、どういうことなのですか？」
「十師族当主は統合軍令部の許可が無ければ表立って動けない政府との非公式の約定も含め、政府および国防軍が握っていた師族会議に関する約定全てを剥奪し、今上陛下の承認のもとにおいて上泉家と神楽坂家がその責を負うことになった」
それに答えたのは元継だった。
師族会議成立の過程で政府と結ばれていた幾つかの取り決めだが、政府も最初は譲渡に難色を示し、国防軍に至っては『国防に匹敵し得る戦力の私物化』と反対意見すら出る始末であった。これに対して今上天皇が内閣総理大臣の承認式の際、これらも含めた国家再生の任を背負う覚悟がないのならば、私は国民を見守る立場において承認など出せないと明確に発言した。これに対して総理大臣はその場で正座して土下座し、今上天皇に対して「政治生命の全てを賭して国家を真なる独立国家に導く」と国家の長たる誓いを立てた。
その誓いを実行するべく、総理は国防軍の最高指揮権を有する立場として師族会議に関する全ての取り決めを護人の二家に譲渡する約定を交わし、即日実行された。これに伴い、統合軍令部における師族会議に関する約定も全て譲渡され、十師族ひいては師族会議が護人の二家による統制下に置かれる形となった。あくまでも特権階級に基づく考え方ではなく、戦力の私物化でもない。この国の軍や治安組織に属しない魔法師は、今上天皇により認められた国家守護の任を帯びる立場が課せられることになる。
その意味で元継の述べた〝剥奪〟という意味に偽りはないと言ってもいいだろう。
「本来ならば当主である皆様方に動いてもらうべきだが、先程述べた人間主義者の件だけでなく、反魔法主義による模倣犯が警戒されるため、各々方にはそういった動きに目を配って頂くことになる。なので、現状の担当地域を鑑みて十文字克人殿にこの任の総括をお願いしたいと考えている。これは上泉殿との合議によって決定した人選である」

「……数々の非礼をした手前であるにも拘らず、大任を任されたことを大変感謝いたします。十文字家当主・十文字克人、神楽坂殿と上泉殿の要請をお引き受けいたします」
悠元と元継は、十文字家の当主が和樹だった場合は監視地域の道理をかなぐり捨ててでも元に総指揮を取らせるつもりだった（元治は妻の都合もあるので無理はさせられないと判断していた）。血縁関係によるものだという非難を受けるような人選なのは覚悟の上だったし、最悪パラサイト事件の要請を蹴り飛ばしたペナルティ代わりにする腹積もりでいた。
だが、和樹が今までの無礼に対する責任という形で当主を退いたため、まだ軋轢が少ない克人に総指揮の任を与える形にした。とはいえ、元々実戦力の部分に長けている十文字家だけで全てを賄い切れるつもりなどないのは重々承知していた。
「テロリストの情報収集担当として三矢元殿、十文字殿の補佐役として七宝拓巳殿を指名する。そして、肝心の捜索を兼務する実働部隊だが……一条家・一条将輝、四葉家・司波達也、六塚家・六塚燈也の三名を指名したいと考えている」
「お待ちください、神楽坂殿。その三名はいずれも高校生ではありませんか。十師族の務めとはいえ、高校生の身で学業を長期間犠牲にするのは如何なものかと存じますが」
悠元が指名した後半部分の人選に関して舞衣が常識論に基づく正論を投げかけた。それを聞いた悠元が真夜に視線を送る。真夜は悠元が言いたいことを悟ったのか「任せます」と目配せをし、その意を受け取った悠元が説明をする。
「私は何も考えなしにこの三名を指名したわけではありません。この三名は高校生ながらいずれも実戦経験があるからこそ指名したのです。場合によっては私も実働部隊に加わるつもりですので」
「……しかし」
「では、テロリストという相手を確実に抑えられる人選が他にいるというのなら、是非教えていただきたい。こればかりは私でも把握しきれない分野なので」

大体、昨年のパラサイト関連でも有効的に動けていたのは悠元の姉である詩鶴、佳奈、美嘉。それに達也たちぐらいだろう。相手が卓越した古式魔法師である以上、その戦闘経験を持つ将輝と達也は外せないし、燈也も佐渡侵攻を食い止めた実績を持つ実力者。なお、光宣に関しては養子の手続きを済ませているが、学校の関係で藤林家にいるので動かすのはマズい。

悠元の言葉に対し、舞衣は黙ることでしか答えを返せなかった。すると、ここで勇海が尋ねた。

「神楽坂殿に上泉殿、質問しても宜しいでしょうか？」

「どうぞ、五輪殿」

「今回の事件を考えた場合、当該地域を担っている七草家にも助力を願うべきだと思うのですが、何故外されたのでしょうか？　もしや、周公瑾との繋がりを重く見てのことでしょうか？」

やはりその質問は来るだろうな、と思いながら悠元は元継に視線を向けると、元継は「仕方ないだろうな」と言わんばかりの表情をしつつ勇海の質問に答えた。

「それについては自分が答えよう。隣にいる神楽坂殿と七草殿は昨年の春、七草家のメディア工作を黙認する代わりに周公瑾との関与を直ちに止める様にとの約定を交わしている。その場には七草殿の長女である真由美嬢もいたので、彼女にもその事実は確認しているが……七草殿はその約定を破ったのだ。しかも、周公瑾を仕留めようとして部下を送り込んだが、失敗した事実も聞き及んでいる――名倉三郎当人からな」

名倉三郎。現在支倉佐武郎として神楽坂家に仕えている使用人から、弘一に周公瑾を始末するよう指示されたことを告白している。しかも、周公瑾と名倉の戦闘は悠元だけでなく文弥と亜夜子まで目撃しているため、言い逃れをすることすらできない状況に追い込まれている。

親切と甘やかすことは違う

「これについては、九島家先代当主・九島烈からどうにか出来ないかと相談を受けた。だが、お咎めなしではこちらの沽券にもかかわることになる。そのペナルティとして、今回の任に関して七草家に与える役割は〝ない〟。これは今代のみならず二家の先代当主も決めたことだ。反論は許さない」

そもそも、テロリスト追跡という手前において体制を一本化しないといけないのに頭を増やして解決する問題ではない。原作だと克人が名目上の責任者として、弘一の長男である智一が実質的な責任者となっていた。

七草家と十文字家の役割分担による弊害が露呈した形だが、それだったら少数精鋭でいい。調査に宛てる人員は七草家以外から引っ張ってこれば問題はない。その為に政府と国防軍から師族会議に関する権限を全て引き継いだのだから。

人員を確保できる見込みが立ったため、七草家抜きでも顧傑を拘束できると踏んだ。そもそも、剛三からしたら周りでうろつかれる方が迷惑極まりないし、二次被害の犠牲になると見込んで七草家を参加させないことで合意した。

顧傑を捕らえるのは、十師族としてではなくこの国の沽券にも直結し得る問題。ＵＳＮＡが動いていることなどとうに知っているし、仮に七草家が手を組むようなことがあるとすれば、今度こそ取り潰しは免れない。何も余計なことをさせなければ、そこら辺の動きも読めると踏んでのものだ。

なお、悠元が口を開かないのは、下手すると弘一に対して今までの分の恨み言をぶつけてしまうと考えたからだ。

「異議や異論があるのならば俺が聞こう。如何か、七草殿？」

「……せめて、十文字殿の補佐として智一だけでも付けることは出来ませんか？」

「必要ない。余計なことをされる方が迷惑だ。どうしてもというのであれば、人間主義者の動きに目を光らせてもらった方がありがたい」

弘一の提案に対し、元継は不必要であると断じた。周公瑾の一件が大きく尾を引いているためか、他の十師族の当主も積極的に弘一を庇おうとする様子は見られなかった。すると、ここで声を上げたのは真夜と克人であった。

「上泉殿。現状の体制では調査をするにも七草家抜きでは些か厳しいかと存じます。上泉家や神楽坂家からも人手を出していただけるのでしょうが、せめて都心部の調査を土地勘のある七草家に頼めませんか？」

「申し訳ない話ではありますが、自分からもお願いいたします。当主である前に大学生の身分である以上、動ける時間に制約がありますので」

「……神楽坂殿」

真夜と克人の要望に対し、元継は悠元を見やった。悠元としてはこの要請を突っぱねることもできるが、特に四葉家は婚約者である深雪のこともある。緩和させるにしても相応の対価を求める必要があるわけだが、正直なところ、七草家が抱えているコネとかを貰っても場合によっては足枷になりかねない。

弘一に対して一発殴る手段が一番手っ取り早い訳だが、今後弘一がまた四葉降ろしを繰り返さないとも限らない。

「十文字殿も学業がある以上、別途調査部隊が必要なのは確か。確かに道理ではある……では、七草家の担当は東京・千葉方面の調査に限定すること。そしてその方面の調査は七草殿のご長男が指揮を執り、立ち位置はあくまでも〝有志による協力〟とすること。ここまでが譲歩のラインだ」

北関東（群馬・栃木・茨城）は上泉家でフォロー可能であり、都心を含めた東京・千葉を七草家で担ってもらえれば、伊豆半島を含めた神奈川にマンパワーを注ぎこめる。三矢・神楽坂に加えて四葉の三家による調査体制、そして周公瑾の知識を出す意味において余計な人間など入れたくないのが本音だ。

それに、地域を限定するのは全く役に立たないという訳でもない。顧傑の動きに便乗して動くであろう人間主義者の動きを把握すると

いう大任を任せるのだから、テロリストに扇動されて周囲への被害が起きる前に止められる可能性が増すことにもなる。
　尤も、気付いたところで止められるかと言われれば微妙なところだが。
「七草家に対するペナルティはこの件が済み次第公表することになるが、先んじて一つだけ言っておく。七草家には護人の二家に対する謀反に等しき嫌疑を払拭する機会として、奄美・沖縄方面の監視・守護に鞍替えしてもらうことになる」
「神楽坂殿。その方面は国防軍の縄張りでは？」
「そのことだが、国防軍には本来あるべき文民統制（シビリアンコントロール）の統治下におくべく、組織そのものを刷新する。これに伴う空白地域を埋める役割を担ってもらうだけだ」
　元々関東方面に残す気でいたが、七草家に対するペナルティの一環で弘一には3年以内に当主を引退してもらい、七草家の家業であるベンチャーキャピタル経営に専念させる。そして、前妻の子（長男か次男）に七草家の家督を継がせて奄美・沖縄方面に鞍替えする。監視・守護地域が隣接していることで四葉家のことを意識するというのならば、十師族当主としての仕事から切り離した挙句、その対象地域を遠くに飛ばす。
　表と裏をうろつかれるぐらいならば、完全に表側の人間として確立させてしまえばいい。それに、七草家の家業がある関東圏ならば目の届く範囲に居ることになるので、万が一何かを企んでも対処しやすくなるメリットはある。政治家や国防軍とのコネクションを利用するデメリットは存在するが、遠くに引き離してごねるよりはマシだと思った次第だ。
　正直、何でまだ16歳の人間がいい大人である七草家当主の処遇を決めねばならんのだ、と思わなくもない訳だが。ちなみに、九島家との猶予の差は、現当主が抱えている仕事量の差による引継ぎに要する時間を勘案した結果である（九島家の場合、当主の仕事を烈が殆ど引き受けていて、真言は家業の仕事に専念するという分業制となっていた）。

「本来ならば、先代当主が揃って不満を漏らしていたことから取り潰しも検討されていた。その上でここまでの温情ある処分になった……これでもまだ不服があるか、七草殿？」
「……いえ、ありません」
悠元の殺気が込められているような視線に対し、弘一は座ったまま深く頭を下げることしかできなかった。それは、円卓に座る人間が神楽坂悠元という存在を改めて心に刻んだことを意味していたのだった。
そして、今回の事態に関するテロリストへの非難声明は十師族と日本魔法協会に神坂グループ、そして日本政府の四者合同によるものとなり、翌朝に正式の声明を発表する。
さらに、先日施行されたテロ対策特別措置法（正式名称は『国家の存亡に多大な影響を及ぼす危険犯罪に対する特別治安維持対策法』）に基づき、テロの首謀者こと顧傑（ジード・ヘイグ）を〝極めて悪質な無差別攻撃を行う犯罪者〟――国内指名手配犯として認定し、厳戒態勢が敷かれることになる。
◇　◇　◇
会議が終わって十師族の当主達が出て行った会議室には、悠元と元継が残っていた。既に会議が終わっているため、お互いに当主としてではなく兄弟としての接し方で元継が話しかけた。
「……悠元は、あれでよかったのか？」
「結局どこに置こうが、家督がある以上は企み事を捨てきれんだろうからな。ただ、直前に九島烈と話し合ったからか、何かと向き合おうとする姿勢は見られた……既に遅いことだが」
既にペナルティの骨子が決まった以上、恭順の姿勢が見られたとしても今更それを軽減させるつもりなどない。謝って全てが解決するのならば警察など必要ないのだから。それに、この件が片付き次第、師族会議体制の刷新に取り掛からなければならない。
四葉家と十文字家の申し出は予想の範疇であったし、何もさせないでいたらまた出し抜くような動きを見せるかもしれない。それだったら、本筋には関わらせないが人間主義の動向を監視してもらうだけ

でも十分役割を果たしていると言えるだろう。
「爺さんや母上が三枝家を〝大幅に削った〟以上、その系譜に繋がる七草家に何のお咎めもなしとは言えない。九島烈に関しても大事な仕事をいくつかしてもらうつもりだからな。日本魔法界の長老として後の世代に後腐れなく全てを継承させなければならないのに、その教え子に甘い裁定なんて下せない」
第三研の素体世代の系譜である三枝家に対しては、四葉の復讐劇が進行する過程でかなりの勢力を千姫が削り取り、一族全体の7割が息絶えた形となった。
東道氏や樫和氏の後押しがあったとはいえ、内戦を仄めかす様なやり口は看過できないということで容赦なく殺したそうだ。神楽坂家に敬意を払う密教・修験道系古式魔法師が中心となって三枝家を抹殺し、当時は少年だった八雲もそれに参加していたらしい（見た目で忘れがちだが、彼の現在の実年齢は５０歳代）。仏の心を説く人間が人殺しという禁忌を犯すのはどうかと思うが、この国は過去に前例があるために〝今更〟なのかもしれない。
三枝家は穏健・非戦派だけが残る形となり、内戦を唆した罪を償うという体で奄美方面に居を移した。代替わりした当時の三枝家当主が「近くにいたままでは神楽坂を意識して復讐を謳う輩が出ないとも限らないため、離島に身を置いて罪を償いたい」という願いを叶えた結果、山梨方面も神楽坂家の管轄下となり、霊山である富士山を完全な支配領域に置いている。
九島烈に関しては、正直色々功罪が積み重なり過ぎているため、まずは師補十八家に落ちた九島家だけでなく九鬼家・九頭見家への関与を今後禁止し、魔法協会に対しての口利きも禁じた。
ただ、国防軍の魔法顧問の職は〝命を賭して〟完遂してもらう意味で継続させる。この辺は国防軍が再統制するとはいえ、反十師族・反師族会議の姿勢が強まらないとも限らないための対策だ。どこかの将校は嫌な顔をするかもしれないが、「十師族に頼らないこと」と「十師族を嫌う」というのはまた別の話であることを理解すべきだと思う。

そして、彼には九島家の魔法全てを九島健の孫娘であるリーナとセリアに全て叩き込んでもらう。光宣を欠いた九島家に魔法技術の全てが余すところなく後世に継承されるか怪しいため、その保険としてのものだ。ＵＳＮＡへの技術漏洩の危険はあるにはあるが、セリアは言わずもがなだし、リーナも日本人に帰化する方向なので何ら問題は無いとみている。

「で、一条も参加させるようだが……」

「将輝絡みは面倒だが、早めに解決させないと面倒なことになる」

前世でもそうだったが、恋愛事に関するトラブルは本当に面倒なのだ。前世の場合はとりわけその対象が兄（前世のセリアと従兄妹の関係であったことが判明したため、もしかすると従兄かもしれないが）だったから尚更だった。その時は自ら身を引いて未練を断ち切った。だが、今回ばかりは引くわけにいかない。

というか、そんなに好きならとっとと告白すれば良かったのに、振られるのが怖くて出来ていなかった。十師族の跡取り息子である自分なら難しくないだろうと思いながら、拒否されることへの恐怖があった。

自分の場合も自ら告白したわけだが、この時点で深雪が自分に対してどう思っているかなど散々知ってしまったから出来レースの様相になったことは否定しないし、仮に振られても覚悟はしていた。その場合、達也が深雪を宥めるという気苦労を背負う羽目になるわけで、最悪深雪に襲われていたかもしれないだろう……いや、襲われる時期が遅かれ早かれだっただけの話かもしれないが。

そもそも、将輝が深雪のことをどう思おうが、深雪からすれば将輝への印象は良くない。その原因を将輝自身が気付けばいいのに、それを探る努力すらしようとしない。これでは恋が叶うはずもない。

テロリストを捕まえられたら惚れてくれるかもしれない、ってどんだけご都合主義的な思考回路なんだ、と思いたい。せめて本気で体を張って死に物狂いで守るとかしないとダメだろうと思う……それは流石にリスクが高いのでお勧めする気にならないが。

大体、こっちなんて達也に敵対しないルートを選択するべく、達也

と上手に付き合いつつ深雪と友人的な意味で良い関係を構築しようと努力しただけなのに、深雪当人だけでなく母親の深夜にも惚れられ、更には彼女の叔母である真夜に婚約の公認と引き換えに男女の関係を迫られたのだ。

それに、十師族も含めて色んな場所を訪れているわけだが、積極的に仲良くしない方針（分を弁える行動）を取ったら逆に興味を持たれたパターンもある。茜や泉美、夕歌はこの例に該当する。世の中の男子は礼儀という部分を著しく欠いているのか、と勘繰りたくなってしまう。

こうなってしまったのは自業自得だと理解も納得もしているが、その苦労が将輝（おまえ）に分かるか？　と問い質してやりたい。

「一高の百山校長と三高の前田校長に話は付けている。魔法大学のデータ回線を使えば、一高で授業を受けて三高の単位認定に充てれるし問題はないと判断してくれた」

流石に全ての魔法科高校が同じカリキュラムで運営されていない（各校の校風が履修のカリキュラムに表れている）以上、全部をフォローしきれないが家庭学習を漠然とやらせるよりはいいと判断され、三高の校長から一条家当主に伝える形となる。

なお、受け入れ先はリーナとセリアの留学実績から鑑みて2年Ａ組に編入される形となるらしいが、正直嫌がらせとしか思えなかった。何せ、婚約している二人がいるクラスに捻じ込んでくるあたり、百山も分かった上でやっているようにしか見えないのだ。

「……美嘉姉さんの件の腹いせも兼ねてるのかね、クラス決めに関しては」

「流石にそれは大人げないにもほどがあるだろう……いや、美嘉の物言いにキレたことはあったらしいが」

それは、美嘉が魔法科高校に在籍中、当時風紀委員長として禁止用語を伴う二科生いじめを制圧した結果、校長に呼び出しを食らった件のことだ。百山は美嘉を第一高校の生徒に相応しからぬ態度と見做して退学処分にしようとしたが、佳奈が剛三とも巻き込んでお咎めなしになった。

その件以降、美嘉からすれば「何が魔法教育の権威よ。いじめや差別を助長するような学校システムを運営し続けてる人間に権威もへったくれもないでしょ」と底抜けの評価を下すほどに百山のことが嫌いとなった。

卒業式の際、美嘉は卒業生代表として「一科生だからと甘えるな。二科生だからと卑下するな。自分の運命ぐらい自分で切り開けるように努力すれば、結果は自ずとついて来る」と答辞を全部丸投げにしてそういい放ち、壇上を降りた。これには当時生徒会長だった真由美が引き攣った笑みを浮かべていたらしい。

「でも、間違ったことは言ってないんだよね。問題なのは、魔法科高校の生徒に辛抱が出来ない奴が多すぎることなんだけど」

「確かに……」

魔法科高校に入ったことで魔法師としての第一歩を踏み出すはずなのに、その一歩目でエリート気取りは正直頭を疑う話だ。いや、現実として体感した事なのは間違いない訳だが、本格的に魔法を学び始める段階で成績の低かった二科生を見下す魂胆がどうにもおかしい。

学園ファンタジー系の物語ならば有り得る話だが、その場合は大抵が貴族の息子だったりする。原作やこの世界の場合だと森崎がその筆頭株となっていた。だが、その取り巻きが偉そうにできる理由なんざない。お前らは由緒ある魔法使いの家なのかと聞きたくなるし、そうでないとするなら一科生だという理由だけで見下していたことになる。

「魔法科高校に入れたからエリート気取りって、国家公務員のように難関を潜り抜けたわけでもないのに、何でそんなことが出来るんだかって思うよ。そんなに凄いんなら『カーディナル・ジョージ』のように世界を驚かせるような論文の一つでも書いてみせろってんだ」

「お前が言うと嫌に説得力が増すな」

別に魔法に限った話ではないが、あらゆる技能を一足飛びの形で修得できるだなんてそうそう美味い話なんてものは存在しない（但し度を越えたチートは除く）。世界に名立たるアスリートやアーティストだって、自分にしかない武器を得るために時として血の滲む様な努力

を重ねたりすることもある。
「それで思い出した。昨年の論文コンペの際、選考論文提出を廿楽先生に言われてさ。『現代魔法に関する三つの欠陥』というテーマの論文を見せたら先生が気絶した」
「……それは確実に気絶するだろうに」
悠元がその論文で触れた内容は、以下の三つ。
――基本（カーディナル）コードは全１６種ではなく、系統および系統外魔法も含めて全６４種存在すること。
――継続型魔法障壁の術式構成に関すること。
――魔法力は不変のものではなく、特定の行動を起こすことで高めることが可能であること。
現代魔法の権威であるＵＳＮＡにでも見せれば、確実に国内がパニックになりかねない代物。いや、ＵＳＮＡ国内のみならず全世界すら巻き込んだ大事になる、と元継はテーマの題名を聞いただけでそう思った。
なお、その論文は意識を取り戻した廿楽がその場でシュレッダー行きになった。曰く「自分の手には負えないが、下手に他の人にも見せられない」とのこと。

他人に見せられない身内事

悠元と元継が会議室に残って話し合っていた頃、日本魔法協会関東支部――――横浜ベイヒルズタワーの屋上から飛び立ったヘリが西北西に進路を変えて飛び去って行く。それは将輝が乗ってきたヘリで、一条剛毅とその息子である将輝が乗っていた。

「将輝」

「はい」

将輝の名を呼ぶ剛毅の声音で、そのことが親子としての会話ではなく一条家当主とその嫡子としての会話であるとすぐに察し、改まった応えを返す。

「今回のテロに対する師族会議の方針を伝える。が、今回は今までのものと趣が異なる」

「それは、どういうことでしょうか？」

「先日施行したテロ特措法の適用範囲と認定され、十師族は護人の二家からテロの首謀者を捜索し、捕縛する任が与えられた。総責任者は神楽坂殿、その補佐役が上泉殿。どちらも先代当主ではなく今代当主――――三矢殿の縁者の二人が統括する」

剛毅の言葉で、将輝の表情が強張った。将輝は師族会議の内容を剛毅から度々聞かされていたが、今回出てきた二家の人間は今代の当主。それも、将輝からすれば神楽坂家の当主である悠元とは浅からぬ因縁がある。

「明日、十師族と日本魔法協会、師族会議の会場となったホテルを経営している神坂グループ、そして日本政府が合同でテロに対する非難声明を発する。捜索部隊は十文字殿が責任者となる。ここまではいいか？　将輝」

「……っ、は、はい。我が一条家はどのような役割を担うのですか」

「十文字殿以外の十師族当主はテロ再発防止の任に当たる。そして将輝、お前は十文字殿のもとでテロリストを追う任が与えられた」

先程の将輝の表情を見るに、恐らく悠元のことを意識した結果なのだろうと剛毅は思いつつ、将輝に対して悠元が選出したという事実を

省く形でテロリスト追跡の任を言い渡した。このあたりは剛毅の親心が出た形となったのは言うまでもない。
　それが功を奏したのか、将輝はテロリストの捜索・捕縛を名誉なものと考え、表情には興奮の色が見られるほどだった。そこに何の打算が含まれているのかなど明白で、深雪に対するアピールとなると考えたからだ。
「学校は暫く休んでもらうことになるだろう。学生の身であるお前には辛い事かもしれんが、此度は緊急性を擁するため、それは覚悟するように」
「はい」
　将輝は学校生活に愛着を持っているし、本音を言えば学校を休みたくない。だが、十師族としての責務はそれ以上に重い物だと将輝自身の中で定義されている以上、剛毅の言葉に異論は唱えなかった。
「なお、捜索部隊には四葉家の司波達也殿、六塚家の六塚燈也殿がお前と同様、十文字殿の下で捜索に加わる。意地を見せろよ」
「はい」
　かたや九校戦の不敗神話を築き上げたエンジニアにして四葉家次期当主。かたや将輝の親友である真紅郎を真正面から叩き潰した実力を有する六塚家次期当主。彼らに負けない実力をみせれば、深雪をきっと振り向かせられると将輝はそう思い込んでいた。
　……そんな風に都合よく思っているのがこの親子だけという事実は、言わぬが花であった。
◇　◇　◇
　東京のセリアの家に帰ってきたリーナは、〝アンジー・シリウス〟としての仮面を外して『仮装行列（パレード）』を解除した。ともかく私服に着替えてリビングに来たところでシルヴィと出くわした。
「お疲れ様です、リーナ」
「ただいま、シルヴィ。久々に物を壊さずに暴れられたし、スッキリしたわ」
「それは他の人のお陰でもあったのですよね？」
「うぐ、それは分かってるわよ……」

悠元の常識外れた結界術式の技術はＵＳＮＡですら実現できていない。それがあれば物的賠償が減る、と挙って悠元に教えを請おうとするかもしれないが、セリアから国立魔法医科大学へのスパイ行為を聞かされたリーナは正直頭を抱えたくなった。シルヴィの指摘に押し黙る形となったリーナは大人しくシルヴィからコーヒーの入ったカップを受け取った。

「セリアはどうしました？　一緒ではなかったのですか？」

「日本の魔法協会支部で会談があるらしくて、ワタシだけ先に帰ってきたのよ。それでシルヴィ、テロに関してどんな報道になってるかしら？」

「……ステイツでは有り得ないぐらい穏便な報道になっています」

この国で先日施行されたテロ対策の法律により、政府および警察省の公式発表があるまでテロに関する情報は〝模倣犯対策〟の一環で所在不明・信憑性の薄い情報の流布を禁じている。言論統制だと騒ぎ立てている意見も見られるが、それも現状はごく一部に止まっている。

ＵＳＮＡだと二大政党のスポンサー的立場としてメディアがバッシング合戦を繰り広げる光景は、第三次大戦を経ても変わらなかった。寧ろ、人間主義に関する部分もあって更に激化している。

昨年の大統領選挙戦の時、神坂グループが買収したメディア（ＵＳＮＡでは珍しく中立での立場での論争が繰り広げられる番組構成のため、与野党の支援者による視聴率が高い）の本社ビルの近くで自爆テロが起きた（この日は大統領候補同士の討論会が行われる予定だった）が、その首謀者は翌日明確な証拠と共に警察当局に拘束されていた。あまりにも迅速過ぎる逮捕劇の為、議員の関与も噂されていた。

「成程……ふと思ったことだけど、何で人間主義者たちは狙いを新ソ連沿いに移したのかしら。それこそ無政府状態が起きているアフリカ大陸でもいい様な気はするけど」

「それなのですが、バランス大佐からの情報では一時期新ソ連に出没していた『魔王の再来（リターン・オブ・ルーデル）』が関係していると仰っていましたが」

『魔王の再来（リターン・オブ・ルーデル）』――新ソ連軍のみを的確に潰す謎の魔法師。年

が明けてからはその姿を一切見なくなったことに新ソ連軍は歓喜しているが、その代わりに雪崩れ込んできた人間主義者によるテロ行為が後を絶たない状況である。

「アレのことね……正直な話、パラサイトなんてものを経験した身として言うなら、ルーデルが蘇っていただなんて夢物語という風に笑えないわよ」

彼の存在が新ソ連に人間主義者を呼び込んだ一因なのは間違いないが、ここに人間主義特有の〝宗教事情〟が絡んでくる。人間主義は大元がキリスト教の異端的主義で、愛を重んじることを教書に記されているほど重要な教えが捻じ曲がって、魔法師にその愛を受ける権利などないと宣うような主張をしている。

当然、唯一絶対の神と愛を説く敬虔なキリスト教徒からすれば傍迷惑極まりない話で、日本で起きていた古式魔法師――――正統派と伝統派の対立――――の構図が世界規模レベルになったと言っても過言ではない。

キリスト教と並ぶ世界規模の宗教であるイスラーム教（イスラム教）や仏教としても他人事ではなく、真っ当な宗教家の見解では人間主義を一種の〝宗教テロ〟という見方が強まっている。これが行き過ぎた結果として、日本の東海地方で起こっている人間主義者への弾圧に繋がっている。

尤も、その対象は公安にマークされるほどの危険人物なため、公安も見て見ぬふりをしている（以前『ブランシュ』の一件で反魔法主義の侵食を受けたことがあったため、その罪滅ぼしという事情も含んでいる）。

この動きを受けて、ＵＳＮＡで強い勢力を有するプロテスタントやカトリックといったキリスト教主流派の支持を受けている大物の上院議員が人間主義を厳しく非難し、神の教えを騙る輩に言論の自由を与えるべきではないとメディアの討論会で発言して波紋を呼んでいた。人間主義者は過激かつ暴力的行為に及んでいるのに、それを厳しく取り締まらない警察の怠慢であることも発言していた。

だが、ＵＳＮＡの各都市の政府が公認している魔法結社の中には過

激な思想を持つ輩も多く、それらに対する援護射撃ではないかと諌める者も少なくない。
「まあ、彼は我が国のサンダーボルトⅢ（スリー）（旧合衆国の爆撃機だが、装備などが刷新されてもルーデルからアドバイスを受けた設計思想自体は一切変わっておらず、ＵＳＮＡになっても改良を重ねて現役で運用されている）に多大な影響を与えていますので、敵対しない限りは味方になってくれるかもしれませんね」
「その思いやりがこの国に対してあればまた違ったでしょうに」
　かつて軍としての命令で達也を殺そうとしたことはあったが、正直なんでそこまで目の敵にするのかとリーナがそうぼやくのも無理はない、とシルヴィは苦笑を漏らした。
　ＵＳＮＡにとって、日本が同盟国であり西太平洋地域における潜在的な競合国だということはリーナも知っている。正直なところ、南盾島の戦略級魔法に関しても今にして思えば、同盟国の戦略級魔法を利用するという手段ではなく排除する方向に舵を切った時点で、統合参謀本部は新ソ連よりも日本を敵視しているように思えてならない。
　世界の秩序という意味合いを考えるのならば、日本に複数の戦略級魔法があって然るべきなのに、軍の上層部にはそれを良しとしない人間がいる。その戦略級魔法の担い手の一人として、リーナはＵＳＮＡという国は好きになれてもスターズが嫌いになりそうであった。尤も、シルヴィがいる手前でそんなことは言えないが。
　すると、玄関の方からセリアの声が聞こえてきて、セリアがリビングに入ってきた。そこまでは良かったのだが、もう一人の来訪者にシルヴィが驚く。
「ただいま、お姉ちゃんにシルヴィ」
「おかえりなさい、セリア……って、そちらの方は!?」
「ああ、うん。お姉ちゃんと私に魔法を教えてくれる先生。閣下、彼女らは私の同居人です」
「成程。初めましてと言うべきかな。九島烈という。君が健の孫娘だね？」
「あ、は、はい！　アンジェリーナ・クドウ・シールズといいます！」

来訪者もとい烈の登場にリーナも思わず勢いよく立ち上がって頭を下げた。『世界最巧』の異名を持っていた人物で、彼のことは祖父である健から聞かされていた。特に嫌味などのマイナス要素を一切聞かされていなかったため、リーナからすれば「真っ当な人物」という印象が強かった。

リーナは学生でない以上暇になってしまう。とはいえ、魔法の訓練もせずにグータラなんかさせたら生活能力のポンコツさに磨きが掛かることを危惧し、九島家が所有している東京の拠点（元々師族会議などで滞在するためのもので、現在は別宅という体で烈が管理している）で烈から魔法の手解きを受けさせることにした。

烈がここに出向いたのは、その為の話し合いということからくるものだった。

「成程。リーナ、是非受けるべきです」

「そうね、腕を錆びらせるのはいただけないし……その、どこか体術を磨ける場所はありませんか？」

「そうだな……私の知り合いに頼んでみよう。彼のことを考えれば、首を横に振ったりはしないだろうからな。少し待っていてくれ、今連絡を取ってみよう」

烈の述べたことに少し引っ掛かりはしたが、押し掛けた身なので何も言えないとリーナは大人しく甘えることにした。その上で烈は断りを入れつつどこかに連絡を入れると、リーナのことを説明した上で了承が取れたので連絡を終えた。

「私の知り合いに体術を教えている人物がいてな。九重寺（きゅうちょうじ）の和尚が君を鍛えてくれるよう取り計らってくれるそうだ」

「お寺のお坊さんが、ですか？」

お寺の住職が体術の先生という響きに繋がらなかったのか、リーナは盛大に首を傾げた。言うなればキリスト教における教会が体術を教えてくれているようなものなので、荘厳とした雰囲気に似合わないと思ってしまったのだ。こればかりは「無理もない」と烈は微笑んだ。

「その反応になっても仕方がないだろうな。だが、彼の実力は私も保障できるほどのものだ。あとはリーナ君の頑張り次第だよ」

「は、はい！　ご配慮感謝します！」
　体術は九重寺で学ぶことになり、魔法は九島邸で烈から手解きを受けることになる。リーナは達也に負けないように頑張るという想いがあった訳だが、ここに対して更に要求をしたのがセリアだった。
「家事などの日常生活能力の習得は私が責任を持ってやらないとね。シルヴィ、手伝って」
「お任せください、セリア」
「ちょっと、どう言う事よ!?　それだとワタシが生活能力ゼロの人間ってことじゃ」
「あんな暗黒物質（ダークマター）を量産するような真似を達也と深雪の目前で晒したくないのよ！」
　根底にあったのは、新学期が始まってからやり始めた日代わりでの悠元の昼食づくりだった（現状は深雪、水波、雫、姫梨、セリアのローテ）。その折に新メニューの試食ということで達也たちにも食べてもらっているが、リーナとその度に比較されることに正直腹が立っていた。
「食らいなさい、得意の十八番（おはこ）をっ!!」
「ぎゃあああっ！　羊殺しは止めて！　ギブギブ!!」
「だが断る」
「断るにゃあああっ!?」
　セリアが絶賛関節技を掛けている双子（アンジェリーナ）の姉のせいだというのがなお悪い。
　リーナの料理の腕前を誰よりも理解しているからこそ、セリアはスパルタ気味にでも改善させる腹積もりでいたし、いざとなれば深雪にも協力を仰ぐつもりでいた。なお、深雪からは「そうね、お兄様に嫁ぐのがそんなものを量産させる様な有様なら、四葉の名に傷が付いてしまうわね」と手を貸すことに協力的だった。
「おかわりは要りますか？」
「頂こう。にしても、賑やかなことだな」
「ええ、まったくです」
　そして、そんな二人の様子に生暖かい視線を向けている烈とシル

ヴィであった。
◇　◇　◇
顧傑による無差別爆弾テロという波乱の一日が終わろうとしていた。
その後、警察省から公式発表があり、負傷者は八人、死者はゼロという様相にメディアの中からは虚偽報告ではないかという質問が飛び交ったが、爆発物解体に立ち会った国防軍の風間と消防庁の報告によってその疑念は立ち消えた。
本来独立魔装大隊が出張るのは要らぬ嫌疑を与えることになる為、今回は偶々非番だった風間に声を掛けて、残留している爆発物の処理の為に専門の部隊派遣を依頼しただけだ。階級こそ塩漬けされていてもその実力を知る者は少なくないし、悠元の持つ肩書が生きた形となった。
負傷者も新陰流剣武術の人間であったが、ここに関しての慰謝料などの支払いは七草家と九島家が全面的に担った。そして、会場となった神坂グループのホテルを爆破された賠償も支払っている。元々解体予定の建物だったため、装飾品の賠償として約６０００万円が支払われた形となった。
「悠元さん、ここが分からないのですが」
「どれどれ……ここはね」
原作だと達也が深雪の勉強を見ている形だったが、悠元が深雪の勉強を見る形となった。水波は夕食の準備をしていて、達也は地下室に籠っていた。どうやら先日の周公瑾の追跡で感じていたことをずっと研究しているらしい。
電話のコール音が鳴ったが、水波が取っていた。そしてどこかに通話転送したとなれば、間違いなく達也にだろう。魔法応用学の課題が一段落したところで、休憩を入れようとリビングに来たところで達也と出くわす形となった。
「達也、電話は終わったのか？」
「ああ、母上からのものだった。詳しいことは悠元の指示を受けてくれと言われたが」

「あの人は……」
原作と異なり、『フリズスキャルヴ』ですら破れない『精霊の鏡（カーヴァンクル）』を用いた通信の為、細かい情報まで伝えられてはいたものの、肝心の指示は悠元に丸投げという真夜の方針を聞いたとき、悠元は思わず頭を抱えたくなった。
確かに自分も場合によっては部隊に参加することは会議の場で明言していたが、これだと部隊内で指揮系統が二系統生じることになってしまう。なので、悠元は全員がソファーに座った上で説明を始めることにした。
「まず、今回のテロに際して師族会議と政府・国防軍間の取り決めは全て護人の二家が管理することとなった。それに合わせて十師族を含めた古今の魔法師の統括を二家が正式に担う。早い話が今まで議長役を担っていた九島烈の代わりとなる旗頭というわけだ」
九島烈本人が知らず知らずのうちに日本の魔法界の長老的立ち位置となり、師族会議をけん引する立場にいた。その結果として誰もやりたがらない役職を押し付ける形となり、原作では彼が亡くなった後の魔法界のまとまりが一気に減ってしまった。ただでさえ少数派の魔法界が纏まらなければ、自らの意見を押し通すことも難しくなってくる。
その為、本来裏舞台にいた神楽坂家と上泉家が表舞台に立つ形となった。しかも、双方共に古式・現代の血統を継ぎ、実績を残している魔法師であることは周知の事実。
「師族会議の会議そのものは基本的に十師族でやってもらうが、必要に応じて議長役として入ることでも出てくるのは覚悟している」
今存在する秩序を作り直す――それが大変なことは承知している。
だが、誰かがやらなければ何も変わらないし、将来その歪みが大きくなりすぎて国家が亡ぶようなことがあっては本末転倒である。だからこそ、その苦労を買って出る必要があった。その役目を自分が担うことになるのは最早性分なのかもしれない。

精々反面教師が関の山

「本格的な話に入ろう。達也、お前は基本的に十文字先輩の下で動いてもらい、顧傑捕縛に動いてくれ。最悪顧傑が死んだ最終位置さえ把握できればいい」
「……まさか、顧傑を一度殺すのか？」
「それは最終手段になるかな。何せ、今回は爺さんが自ら動くわけだし」
スターズの先代の〝シリウス〟が使っていた『分子ディバイダー』。現代魔法においては最強クラスの魔法だが、天神魔法からすれば〝自殺技〟と化してしまう。
何せ、天神魔法による想子掌握からすれば高密度の『分子ディバイダー』の展開領域は格好の燃料となるし、剛三の魔法体質の特性として「相手の力全てを食らう」というえげつない能力を有している。とりわけ剛三の武術面での技巧は達人級なため、相手がどこに居ようとも追いつめて殺すことが容易に出来てしまう。
イタリアマフィアの抗争に巻き込まれたとき、剛三は「儂のピザとお気に入りの店を壊した恨み」という名目でイタリアにいる五本の指に入るであろう大きな勢力のマフィアを四つほど殲滅した。そこで得たお金はお店の再建費用ということで店主に支払われた。
その店主はイタリアでも屈指の技術を持つシェフで、その息子は神楽坂家お抱えの三ツ星レストランで料理長に就いている。剛三が繋いだ絆を千姫が育むことで世界各地にシンパが多く、国外のメディア買収工作が成功したのもこのコネを利用したものだ。
「俺は当分部活連会頭として人間主義者が生徒を襲わないか目を光らせておく必要があるからな。レオやエリカ、幹比古達にはコンペの時と同じように当分一人で帰らないように言い含めておく」
今度はその対象が魔法科高校の全生徒に掛かってくるし、しかも魔法大学や防衛大学校もその対象になると睨んでいる。更に、顧傑が『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』を支援していたとなれば、当然出てくる代物――アンティナイトの存在である。

現状の魔法科高校の生徒にこれを真正面から打ち破れる人間の数が少ない。そのため、ＦＬＴ経由で特殊な防犯ブザーの開発をすることにした。使い方自体は一般的な防犯ブザーと変わりないが、魔法を使える生徒がこれに想子を流し込むと、ノイズ状態の『キャスト・ジャミング』に構造という〝秩序〟を与えられ、発動基点のアンティナイトを中心に約２メートルほど一種の催涙状態を引き起こすフィールドが張られる。

有機物干渉は禁忌とされているが、それだったら移動魔法で相手を吹き飛ばすのだって有機物の情報に干渉して飛翔させているということになるし、『爆裂』なんて有機物干渉の極みだ。別に相手を殺傷するわけではなく無力化するためのものだし、犯罪の凶暴化を防ぐという意味では理に適っていると考える。

既に量産にまで漕ぎ着けており、表向きは人間主義者による被害を未然に防ぐための防犯ブザーとして魔法科高校の生徒に貸与されている。

「そこが一段落次第、顧傑を拘束する。恐らく妨害にＵＳＮＡ軍――――スターズも出てくるだろうが、達也は気にせず任に当たってくれ。事前に解除した『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』だけでなく、必要ならば他の機密指定に入っている魔法の使用も認める。それと、達也専用の戦闘用バイクも手配しておく」

それが先日悠元の使っていた『ドレッドノート』と同型の戦闘用二輪車だということは達也もすぐに理解して頷いていた。

明日には顧傑が犯行声明を出すのだろうが、自身を正当化したい輩は何故か神やら聖戦という言葉を持ち出すことが多い。自らに理があることを示したいがために分かり易い対象を選んでいるのだろうが、宗教的な倫理観で法治主義における犯罪行為を正当化するとなれば、これは最早〝戦争〟でしかない。

「今回は周公瑾の時のように人員を割くことは難しい……そういえば達也、現状『精霊（エレメンタル・サイト）の眼』のリソースをどれだけ深雪に割いているんだ？」

達也は『精霊（エレメンタル・サイト）の眼』の魔法的なリソース――――超知覚を含めた力

の半分（四葉家で封印を解く前の段階の話）を深雪に割いている。悠元が自身の『天神の眼（オシリス・サイト）』を説明した際、達也から『エレメンタル・サイト』に関するリソースのことも聞き及んでいた。達也が封印していた魔法力の解放は魔法だけでなく『エレメンタル・サイト』に使えるリソースが増えることを意味する。

深雪が昔のように弱い訳でもなく、今では信頼できる親友もいる。それでも達也自身に残っている深雪への感情が全てを解除するという訳にはいかなかった。

「そうだな、増えた魔法力のお陰で1割弱程度のリソースさえあれば以前と同じようにカバーリングできるようになった。最終的には解除するつもりだが、今はその時じゃないからな。そういう悠元も深雪にリソースを割いているのだろう？」

「まあ、大体1億分の1パーセントで達也と同じぐらいの規模だよ……反論しろよ」

「無理だな」

「おい」

悠元の持つ『天神の眼（オシリス・サイト）』の場合、周囲に存在するサイオンを取り込んでしまうため、実質ノーリスクで深雪のみならず婚約者らの様子を見ることが出来る。しかも、相手の現状の映像が流れ込んでくるため、対象が非常時以外は流れ込まないようにしているのだ（常時適応にすると風呂や着替えまで見てしまうことになりかねないため）。

そのリソースを分ける作業は神楽坂本邸にいるときにやったわけだが、その時に婚約者（当時は深雪と雫と姫梨）の裸の映像が流れ込んできた（丁度温泉に入っていた）のだ。その反省もあって、沓子以降の婚約者には事前に説明した上でリソースを振り分けている。

「お兄様の『眼』のことは聞いていましたが、悠元さんもですか……あの時、視られた感覚がしたのは気のせいじゃなかったんですね」

「悪気はなかったんだよ」

「知ってますよ。今夜は寝かせないでくださいね」

「明日も学校なんだがな……」

達也がリソースの割合を減らすのは、深雪の感情が昂ってしまう場

合にも流れ込んできてしまい、深雪の性欲が達也にも影響を及ぼしているためであった。一昨年の夏以降、よもや一般的な男子の欲情を抱くようになったことに達也は動揺を覚えていた。
深雪への家族愛を除いて激しい情動こそ抱けないが、人並の欲情を抱くことは可能な達也からすれば、どんどん綺麗になっていく従妹をフォローしきれている親友に尊敬の念を抱いていた。
「……正直、顧傑がいることも問題だけど、いないことによって発生する問題の抑止力にもなってる気がするのは俺だけかな？」
「大丈夫だ、悠元。俺もそう思う」
「？」
別に顧傑に対して感謝などする気なんてないが、顧傑がいないことで起こり得る問題――――婚約者とのバランスを保つという問題を回避できているということに、何だか釈然としない気分を抱いた悠元と達也の姿に、深雪と水波は揃って首を傾げたのだった。
話し合いを終えた後、達也から相談をされた。その内容は『鬼門遁甲（きもんとんこう）』の破り方を教えて欲しいというものだった。悠元の中で周公瑾の知識は利用するものであり、別段秘密にする理由もない。なので、地下室で『鬼門遁甲』そのものを教えることにした。
『鬼門遁甲』の本質は、漠然とした時間と方向の分岐点を術者の望む通りに操る術法で、精神干渉系魔法――――幻術の類に属する」
「幻術か。ただ、魔法力が上がっても才能自体が偏っている俺にも破れるのか？」
「ここで重要なのは、自身がその幻術に掛かっていることを自覚できるかどうか。強いて言うなら、自我を如何に『その場にいる』と自覚し続けられるかが重要になる」
確かに現代魔法の部分で偏っていても、それを補うために学んでいる武術の影響で古流の秘術に対する耐性は極めて高い。この辺は彼が上泉と神楽坂の血を引いている影響もあるのだろう。
「自覚と言っても別段難しい話じゃない。例えば、弛緩させている筋肉を一気に締め上げることで相手の組み技に対抗できる技法もあるんだが、これの要領でサイオンを放出することで疑似的な『接触型

術式解体（グラム・デモリッション）』を行い、相手の陣を吹き飛ばす技法もある。『意気』によって『波』と『流れ』を制し、操り、断ち切り、壊すのが古流の術の本懐だ」
「……『意気』は想子流だとするなら、『波』は想子波動で『流れ』は想子経路といったところか？」
「そんなところかな。知識を教えたところで、実践と行こうか」
その瞬間、達也は目の前にいる悠元が本当に目の前にいるのか掴めなかった。周公瑾を捕らえようと追跡した時、あの時は名倉三郎の血の針によって何とか追いかけることが出来た。サイオンの流れを見ても悠元が目前にいるように視えた。
その時は周公瑾へ意識を割いていたからか、魔法力を制限されていたこともあったせいかもしれないが、今は敵意を向ける相手ではないことから達也は自身の置かれている状態に集中できていた。
達也は全身を神経インパルスではなく想子によって完全に掌握した時には、目前に悠元の姿がなく、背後から声が聞こえてきた。
「程度を弱めていたとはいえ、あっさり破るか。流石達也だわ」
「……いや、悠元の知識が無ければ破るのは難しかったな。もしもの時は師匠に教えてもらうつもりだったが」
「あの先生なら、色々難癖付けそうな気がするけど」
今のは『鬼門遁甲』の初歩位のものだが、周公瑾の追跡の経験がある達也なら対『鬼門遁甲』も極められるだろう。なお、達也との魔法の講義を横で聞いていた深雪は目を輝かせており、話が終わると悠元を引き摺る様にしながら地下室を出て行った。
その光景を見た達也が、内心で悠元に詫びたのは言うまでもない。

◇　◇　◇

翌日、達也が日課の朝練から帰ってくると何だか複雑な表情をしていたので尋ねたところ、リーナが九重寺にいたとのこと。話を聞くに、九島烈の紹介で体術を学びに来たらしい。八雲はセリアを養女にしている関係でやる気になっていて、いきなり手合わせをしたらしい。
それでも、世捨て人と自認しているあたり、不注意にリーナの身体

に触れないよう防御魔法を挟む形で打撃を撃ち込んでいた。リーナもすっかりやる気になっていて、これには傍から見ていた達也も呆れ返ったらしい。

そんなイベントが挟むほどの平穏は昼休みまでしか持たなかった。

悠元らが食事を始めてすぐ、緊急ニュースが流れて、テロリストの犯行声明が読み上げられていく中、悠元が口を開く。

「……何が〝聖戦〟だ。まるで自分たちが『神の代理人』とでも言うつもりなのかね。こんな奴を野放しにしてたＵＳＮＡはどう責任を取るつもりなんだか」

「あの、悠元さん？　今ＵＳＮＡって言いませんでしたか？」

「言ったけど、純然な米国人じゃないことは言っておく。俗に言う〝難民〟の類だよ」

それを聞いて騒ぎ立てたりすることはないし、今は昼食の時間ということでそちらに集中しつつ犯行声明を聞く。すると、その声明の中に矛盾点が生じていることにエリカが首を傾げた。

「あれ？　和兄から聞いた話だと死者は出ていないって聞いたけど、〝犠牲〟ってなんか変じゃない？　……もしかして悠元、あんたがテロリストを騙したの？」

「まあ正解。実際のところ、そのテロリストは殺人未遂と住居不法侵入の罪確定だけど」

大型ディスプレイは更に緊急ニュースが流れ、内閣総理大臣によって今回の爆破テロがテロ対策特措法の適用条件内にあると発表し、テロリストを強く非難。更には「我が国の力を損なおうとする不逞の輩に対し、テロ対策特措法に基づき緊急事態宣言を発令する」と宣言した。国策機関である国立魔法大学とその付属高校には十師族関係者も在学しているため、原作も本来ならばここまでやるべきなのだろうが、日本政府が完全に及び腰になっただけでなくＵＳＮＡ政府からの圧力があったのだろうと思われる。

「……なあ、さっきの声明を出してたテロリストの存在感が明らかに薄れていくような気がするんだが」

「犯罪者のことを覚える必要がある時は、それこそ指名手配で顔写真

が出たぐらいでいいと思う。道行く人全てを覚えるわけにもいかんだろうし……ごちそうさま、姫梨」
「はい、お粗末様でした」
お昼の弁当生活はかれこれ1ヶ月を過ぎようとしているわけだが、腕前を知っている深雪と水波はともかく、姫梨とセリアに雫もちゃんとした出来栄えのお弁当となっていた。
特に雫のお弁当を見たほのかが「これ、雫が作ったの？」という疑問を投げかけた際、雫がほのかを連れて食堂を出て行った。その数分後、顔を真っ赤にしているほのかと何かをやり遂げた雫の表情で大体を察してしまったわけだが。味は「申し分無かった」とだけ言っておく。
「悠元からすれば、あまり興味がない感じですか？」
「相手がテロリストだからな。言い換えてしまえば無差別殺人鬼と同義な存在に関心はあっても、興味なんて持つ気にもならん」
周公瑾（というか、亡霊の方）の記憶からするに、顧傑の復讐心は一種の「祟り」だろうと周公瑾は吐き捨てていた。ただ、顧傑の手前でそのようなことは一切言わなかった。漸く手に入れた安寧を自分から壊す気にもならなかったのだろう。その意味で自分に対するちょっかいが「ブランシュ」以降なかったのも頷ける。
「精々反面教師になるぐらいが関の山だろうな」
今にして思えば、顧傑が弟子を連れて大亜連合に下らなかったのは自明の理とも言えるだろう。何せ、あの大陸は２０００年の間に分裂・統一を繰り返し続けている。それも広義的に見れば同じ中国人が争っている。
何分相手を簡単に信じ切れない性分だからこそ、仮に顧傑が大亜連合に崑崙方院の情報を持ち込んだとしても、その情報を出し切った時点で顧傑に何らかの罪をかぶせて殺す可能性もあった。全てそうであるとは言い切れないが、騙し合いや殺し合いを続けてきたことは歴史が証明してしまっている。
テロリストもとい顧傑の犯行声明と、それに対して日本政府が発表した非難声明。魔法師と言えどもこの国に住む以上は日本国にとっ

ての〝財産〟であり、それを侵す行為は認められないとハッキリ述べたことで、食堂に居る生徒の反応は様々であった。

ただ、テロリストを擁護するような意見は一切見られなかったことだけ明記しておく。

ローラーするのではなく、丁寧に一つずつ

原作だとニュースキャスター（日本特有の言い方で、他の先進国では「アンカーパーソン」と呼ばれることが多い）が勘違いした正義感を振りかざす様な行いは、この世界では見られなかった。神坂グループらが本気のメディア株式買収工作に踏み切ったことに加え、政府がテロリストを正式に犯罪者として認定した以上、ここで反十師族を含めた反魔法主義の論調なんか書こうものなら、周囲から袋叩きに遭うだけだと理解しているからこそ、比較的穏便な論調に収まっている。

そもそもの話、非魔法師の割合が多いメディアからすれば、魔法という力も政治家や官僚が持ち得る権力と同列に見ている部分が多い。〝目に見えない力〟というのが一番の理由だが、その対策としてＦＬＴが世界に先駆けて「シルバーブロッサム」の新シリーズに現代魔法の光学可視化システムが搭載される。同日には『トーラス・シルバー』の開発チーム名義で論文も発表する。

補足しておくが、開発元としてその名を出していても開発者名としては一切登録していない。論文に関しても提出者に『上条洸人』の名を使ってはいるが、『トーラス・シルバー』はあくまでも〝開発チーム〟として外部協力の関係を結んでいるだけに過ぎない形に止めている。

『ディオーネー計画』が多少の変化を含む可能性はあるものの、どういった形であっても対抗できるように仕込んでいる。

後々問題になりそうな『アクティブ・エアーマイン』だが、達也が開発者名登録を行う際に起動式の記述修正という形で新しい起動式を提出させた。起動式のデータ自体は特に変化が無い様に見えるが、変数処理に特殊な記述を追加することで、一定以上の威力を出そうとすると起動式の読込順も変化して、別の魔法という形で展開されるようにしておいた。

この技術は古式魔法における隠蔽技術の一つで、現代魔法の光学迷彩にも使われているものでもあるので、これが明るみになっても特に大きな損失にはならない。

達也と燈也が打ち合わせの為に十文字家の屋敷で話し合っている頃、悠元は神楽坂家の別邸にいた。面子は悠元以外に元継、修司、姫梨、由夢、雫に深雪――――『神将会』の会合である。

今回のテロリストの追跡任務は護人の二家が十師族に依頼した形だが、相手が大陸の古式魔法師である以上、どこまであてに出来るか分からない不安があった。無論、達也や燈也、克人の実力は疑うべくもないが、相手が顧傑だけでなくＵＳＮＡ軍まで加わるとなれば話は別となる。

「以上が今回のテロに関する結果だな。だが、問題はここからだ」

「人間主義はメディアを抑えられたから、まだ勢い付くところまで行っていない。だが、予断は許されないか」

正直、昨春のメディア買収工作はどこまでの範囲を対象にするべきか直前まで悩んだ。原作知識に頼らないとしても、大規模な変化に対する想定外の事象が起こり得ないとも限らない。だが、ここまで来た以上はどう転んだとしても将来のリスク軽減を取るべきだ、と判断して踏み切った。

「政府と国防軍から師族会議を切り離したが、相互関係まで破棄させるわけにはいかない。とはいえ、魔法師を怖がる人間が一定数いるのも事実……いっそのこと、発祥国である旧合衆国――――ＵＳＮＡが責任を取れば済む話なんだが、そのＵＳＮＡが顧傑の抹殺に動いている」

「それって、お昼に悠元が言っていたことが関係しているの？」

「まあ、あの時は大分ぼかしたがな」

しかも、動きを見る限りでは流石に日本国内で抹殺するリスクを嫌っている節がみられるわけだが、その辺の動きは全て『八咫鏡（ヤタノカガミ）』で把握している。その中心となっているのはスターズのナンバー・ツー、ベンジャミン・カノープスで間違いない。

「彼らのシナリオ上で考えているのは、公海上にまでおびき寄せて顧傑を『分子ディバイダー』で船ごと沈めるつもりなんだろう。そのためならばこの国の強化兵も使うつもりなのだろうが、座間にいる強化兵は全員引き取っているからな」

座間基地には後天的強化措置を施された「特殊戦術兵」を収容する訓練所が存在している。日米共同利用基地にそんなものが存在している理由は、この訓練所が日米の共同研究に大きく関わっているためだ。

南盾島の件の際、悠元はＵＳＮＡ大統領と直接連絡を取り、座間基地にいる特殊戦技兵全員を日本側で引き取ると要求。それを拒否した場合、闇の存在である『アルカトラズ』の存在を全世界に公表するという交換材料と共に呑ませた。

その為、特殊戦技兵訓練所は表向きの形である訓練所の肩書きを生かして、基地内の兵士の訓練施設へと化していた。

座間基地のみならず、東京を含めた関東圏一帯の強化措置を受けた実験体は全て治療が完了しており、現在は悠元の魔法理論に基づく厳しい訓練を受け、最終的には独立魔装大隊や十師族お抱えの魔法師として配属されることになる。

実力的にはスターズの隊長クラスに匹敵するが、人としての道徳を徹底的に叩き込まれるため、忠誠心は極めて高いと言えよう。なお、一部の魔法師は自分に対して忠誠を誓っている節がみられ、そういった面々は神楽坂家で引き取ることになりそうだ。

「そこまで手の込んだことをするなんて……顧傑はどうするの？」

「出来るだけ首都圏から遠ざけてから拘束する。相手が９７歳の老人なんざ知った事じゃない。テロを起こした以上は罪を償ってもらうのが法治国家としての道理だ。ＵＳＮＡが敵対する場合、彼らに致命傷を負わせるカードはいくつかあるからな」

どうせ痕跡を残さないように非合法工作員（イリーガル）やらスターダストを投入して、最終的には彼らを捨てるのだろうが、折角の戦力を捨てるのであれば拾ってやろうと思う。パラサイト事件の時に脱走した兵に関してもそうしてきたので、別段問題はない。

「日本側で逮捕し、ＵＳＮＡに護送して真っ当な裁きを受けさせる。その際、メディアにスキャンダル情報をリークして暴露させる。そのついでに野党側とテロリストの癒着もリークすれば、ＵＳＮＡ国内はそれで一気に身動きが取れなくなる」

「……エドワード・クラークやレイモンド・クラークが動いてくる可能性があると思うが」
「その時はその時だ。だが、彼らは政府機関の人間であって政財界の人間じゃない。こちらの工作だと騒ぎ立てたところで政府が首を縦に振れる筈がない」
　いくらエドワード・クラークが軍に対する影響力を有していると言っても、文民統制（シビリアンコントロール）の前提を壊すような真似は御法度。いくら国防長官にコネクションを有していると言っても、こちらは更に上の立場である大統領と繋がりを有する。その意味で、剛三の世界旅行に付き合った面目躍如と言えるかもしれない。
「仮にスターズが暗殺を目論むようなら、直接ホワイトハウスの大統領執務室に乗り込むことも辞さない。そうなれば、向こうの統合参謀本部の首が飛ぶだろうな」
「比喩？　比喩だよね？」
「リアルに飛ぶかもしれんな」
「えと、それは流石にこのご時世では……」
　そんなＵＳＮＡの悲観的な未来予測はさておき、まずは顧傑に関する情報だ。
　小田原の民家を出た後、鎌倉周辺から顧傑の悪しき気配を感じている。いくら彼が老獪な古式魔法師といえども、復讐心を完全に御するなど不可能に近い。ましてや武術の達人でもない以上、彼から漏れ出ている負の感情はハッキリと捉えている。
「当分は十師族に依頼した以上、彼らに任せるのが道理だ。周公瑾の記憶情報から関東圏の隠れ家のデータは全て洗い出している。あと、多摩川に強力な〝聖域〟を展開しているので、顧傑は事実上神奈川から西と北に出れなくなった」
　多摩川に仕込んだものは宇治川にあったものを参考にしているが、その強度は宇治川の比ではなく、悪しきものが触れると死に至るレベルに設定している。相手がテロリストである以上、生死に情けなんて掛ければ死ぬのはこちら側だ。
「人間主義者がテロ事件の後に活発化しているのは事実だから、当分

はこちらの片付けを優先する。場合によっては顧傑との繋がりでテロ特措法適用対象として資金源の凍結や拠点の強制捜査も視野に入れておく」

人間主義を唱える組織のどれもが多かれ少なかれ『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』との繋がりを持っていたことは明らかで、言い換えれば彼らの残党という表現も可能なラインだ。つまるところ、顧傑とは間接的に繋がりを有していた共謀関係と見ることも一応できるし、顧傑が起こしたテロに託ける様であれば処罰の対象とすることは可能だと踏んでいる。

警察や公安にとっては多忙な事とは思うが、これも今まで放置し続けてきた組織のツケだと思って甘んじて呑み込んでもらう他ないだろう。

「そもそも、神の奇跡を使うのが悪魔の力だと言うなら、科学技術なんて同類の所業だろうに。魔法がダメで科学技術がオッケーという時点で論理が破綻してるわ」

「まあ、連中は魔法を否定したいだろうからな」

「それは理解してるけど、何で悪魔なのかね。他人への愛を忘れた狂信者のほうがよっぽど悪魔じみてるわ」

宗教は本来、人の心を定義するための一要素でしかない。神の名を振り翳して道徳に悖る行いをするほうが人としての道徳や倫理を疑う。なので、自分にとっての宗教は信仰するものであってもそれを目的や手段の要素に取り入れる気などなかった。

人間主義者はその宗教――――神を拠り所にして自分たちの活動を正当化している。だが、その〝畏れ〟の考え方は魔法の存在に由来するものであり、その辺は自分の都合の良いように解釈しているに過ぎない。

この国にはあらゆる自由が憲法によって認められているが、それはあくまでも人として守らなければならない必要最低限のルールを守った上での話。そのルールを破った以上は法によって裁かれなければならない。これが通用しなくなれば法治国家としての体が崩壊してしまう。

悲しいことに、その必要最低限のルールすら鑑みずに平気で法を犯す人間が多すぎる。なので、ここいらでその見せしめとして人間主義者らには犠牲となってもらう必要がある。テロ特措法による刑法の適用範囲は〝国家反逆罪〟――――最高刑の死刑まで適用される。生かしておくと神格化される危険もあるし、下手に殺してもそうなるわけだが、そうなった場合は組織ごと潰すのが手っ取り早くなる。
「人間主義の絡みで、今のテロ事件が収束次第ローマ教皇が来日するそうだ。そこで人間主義に対して〝破門〟の最後通告を行うらしい」
「それって悠元のお祖父さんの絡み？」
「俺自身の絡みもあるけどな」
イタリアマフィアを片付けた後、剛三の誼でバチカン市国を訪れることになったのだが、先日潰したマフィアに支援していた枢機卿の数人が刺客を差し向けたのだ。無論、殺気がバレバレで即座に潰した後、剛三は天性の勘で犯人を証拠を探り当て、黒幕の枢機卿らは剛三の雷で蒸発した。
功績は無論剛三のものだが、教皇はお詫びの気持ちとして悠元に贈り物をしている。一番マズいと思ったのは〝指輪〟で、自分はキリスト教に改宗するつもりはなかったわけだが、せめて感謝の気持ちを示したかったと言われれば無碍にするわけにもいかず、渋々受け取った。無論死蔵行き決定であり、他のキリスト教の信者に知られるわけにはいかない。
「話を戻すが、神将会としての行動方針は人間主義者が片付くまで当分後方支援に徹する。爺さんと母上が遊撃として動く以上、相手も下手なことが出来ないと思いたいが油断はできない」
「特にＵＳＮＡだな？」
「そういうこと。場合によっては顧傑の逃亡を支援する可能性がある。その場合、相手国の出身の如何を問わず、国内法で対処する」
テロリストの逃亡を助けるということは、テロリスト支援の名目で動いていると解釈する。そこに顧傑の始末が関わっているとしても知った事ではない。大体、大統領特命として派遣されたリーナはともかく、それ以外のＵＳＮＡ軍関係者がこちらに接触してこない以上、

テロ特措法に基づく「テロ支援者に対する処罰」ということで処理する。
「実働部隊は誰を動かすのですか？」
「十文字先輩を軸として、達也と燈也、それに将輝の三人を宛がうことにした……なんだかんだ言っても実力はあるし、周公瑾の追跡にも十分な成果は挙げているからな。深雪も思うところはあるだろうが、これに関しては認めて欲しい」
「……ええ、実力があることは私も認めていますので、異論はありません」
悠元と深雪が婚約関係にあるというのに、その横槍を入れて来たにも等しい将輝のことは正直深雪だけでなく悠元から見ても鬱陶しいと感じるほどだった。いっそのこと果たし状でも送られてくれれば話が早い訳だが、そんな素振りも見られない。
事情はどうあれ、『クリムゾン・プリンス』と呼ばれるだけの実力があることは確かだし、第三高校は実戦を意識したカリキュラム構成なのは知っているため、彼の実力だけ見れば疑うべくもない。悠元の気遣いを察しつつ、深雪も少し考えた後で頷いた。これには周囲の人間が苦笑交じりの表情を滲ませていた。
◇　◇　◇
護人の二家が師族会議を先に掌握したのは、他の部分に関しても算段が付いているから来るものだった。今回のテロに際して国家の組織が一体となって対処できる下地を作る……とはいえ、今までの軋轢からそう簡単に出来るものではないことはとうに分かり切っていた。
国防陸軍総司令部の執務室にて、デスクに座る最高司令官こと蘇我大将は大友参謀長からの報告を受けていた。
「――それで、佐伯への要請は今のところ音沙汰なしと捉えていいのかね？」
「ええ。彼女は元々反十師族の派閥の一員ですし、中央にはその派閥が巣食っていますので」
今回の一件は魔法的要素が強く、テロリストの犯行声明からしても「相手は高位の魔法師の可能性が高い」と統合幕僚会議の参謀担当が

断言している以上、魔法部隊の独立魔装大隊を有する第１０１旅団に支援の要請を出した。だが、佐伯はその返事に対して沈黙を保っている。蘇我とて昨日の今日で返事が来るとは思っていないわけだが、問題は第１０１旅団が反十師族・反九島烈の支持基盤の一角をなしていることだ。
「ただ、独自に動いている節は見られています……如何しますか？」
「元々神楽坂家――〝彼〟からの要請はあくまでも『任意協力』と念を押されていた。彼は最初から独立魔装大隊や第１０１旅団を信用していなかったのかもしれんな」
　それが決定的になったのは、恐らく一昨年春の一件だろうとみられる。技術士官として必要最低限の依頼はこなしていたが、それ以上の貢献をしようとする気もなかったし、更には国防軍内の不祥事の処理を彼に押し付ける格好となった。これでは彼が国防軍に不信感を抱いたとしても可笑しくはない、と蘇我は睨んでいる。
「加えて、ＵＳＮＡ軍がこちらに働きかけて余計な動きをしないように言ってきている……我々はいつから彼らの言いなりになることを覚えさせられたのかね？」
「……では、無視すると？」
「それでは文民統制の面目が立たん。当初の予定通り、都心の政府機関を中心に厳戒態勢を敷く。人間主義者などがデモ活動を起こす可能性が高いため、それに乗じたテロ行為を阻止する」
　本来は警察の仕事なのだが、相手がテロリストである以上は警察の手に余る領域に踏み込む。蘇我はテロ特措法による要請に基づいて政府機関の周辺に厳戒態勢を敷き、範囲内での集会活動などに目を光らせることを大友に指示した。そして、テロリストの拘束に関する仕事は、不本意ながら彼の手に委ねるべきだと結論付けた。まだ成人もしていない人間に責を負わせることを内心で詫びつつ、指示を飛ばすのだった。

線引きの境目

達也のほうはというと、十文字家で今後の捜査に関する確認が行われた。とはいっても、七草家が東京・千葉方面の監視に人員が割かれるため、メインとなる神奈川・伊豆方面は三矢家も動員される形となり、十文字家と面識が深い美嘉が代表として出向いていた。

「昨日のテロ事件のことは両名とも聞いていると思うが、二人の力を借りたい」

達也はここで美嘉の表情を見やるが、何時になく真剣な表情を浮かべている様子であった。

「その件については、母上と悠元から頼まれている件ですので、勿論俺は協力します」

「助かる。六塚には連絡という形だが了解の旨を貰っている」

燈也は当主である温子との会談が先に入っていたため、十文字家の話し合いには参加できないという旨を伝えられていた。克人としては、燈也から協力を取り付けられただけでも御の字と思っていたので、家の事情を優先しても構わないと伝えている。

その上で、克人は美嘉に表情を向けた。

「美嘉先輩。今回は変則的な体制故、貴女には三矢殿との連絡役をお願いしたい」

「ま、それが妥当よね。で、真由美は今回関わらせない方向でいいの？」

「そうしていただけると助かります」

美嘉は事前に師族会議の様子を元の表情からある程度は察しており、今回の体制に七草家がリーダーシップを取らないとなると、間違いなく悠元絡みだということは言うまでもなかった。克人が部隊の責任者となり、達也に燈也、それと将輝が実働部隊、そのバックアップに三矢家と七宝家が担うこととなっている。

今までの流れからすれば考えられなかった〝七草抜き〟での捜査体制の裏側には、七草家と九島家の不祥事があるということは流石に達也と美嘉にすら言えない、と克人は思いながら話を続ける。

「ただ、秘密情報網などの関係でどうしても通せない情報があると思いますので、そこに関しては美嘉先輩の判断に委ねます」
「かっちゃんは手厳しいことを言うね。未来の妻候補にも容赦ないね」
「……美嘉先輩、今の話は初めて聞いたのですが」
「ありゃ、〝たっくん〟は知ってると思ったけど……ま、テロの関係で発表が延期になっちゃったけど、かっちゃんと婚約を結んだの」
よもや実母以外にそう呼ばれる羽目になるとは露にも思わず、達也は柄にもなく苦笑にも似た表情を滲ませていた。悠元といい、三矢家は十師族の中でも非常に特異的な存在だと思わずにはいられなかった。
「それで、どうするの？　私はともかく、流石に大学や高校を休むわけにはいかないでしょ？　それに、相手が師族会議の場所を探り当てた以上、盗聴対策も必要だし」
「その件も含めて相談したく思い、呼ばせてもらった次第です。司波、有力な手掛かりが出るまでは各自で動けるようにしておきたいが、進捗を確認する場を設けて情報交換を行っておきたい」
人間主義のことも気がかりだが、先日のテロの一件を考えると連絡を取り合うのは危険だと考えた。それなら、狙われるリスクを考慮しても直接会って話をしたほうがまだ盗聴対策がしやすい。克人との提案に対し、達也は異論を唱えなかった。
「俺は構いません」
「そうか。六塚には……確か、司波と同じ魔工科だったな。そちらもお願いできるか？」
「分かりました」
盗聴を意識するならば、達也が燈也に伝えるのが一番合理的であり、そのお願い程度ならば苦にもならないと判断した。残るは美嘉の返答だったが、美嘉は異論を唱えなかった。
「私も問題ないよ。ただ、魔法大学の近くだといいかも。私は毎日出てこれないけど、場合によっては佳奈姉にもお願いするから」
美嘉は昨年大学に提出した魔法医療に関する論文の関係で、夏休み

明けから国立魔法医療大学の非常勤講師を任される形となった。元々姉の詩鶴の影響で魔法治療に関わる免許（魔法に関するものというより医療従事に関する免許）を特例で取得していたため、国立魔法大学の教授陣は点数稼ぎを睨み、美嘉の非常勤講師の勤務を単位認定としていた。

これを耳にした美嘉が「やってることが百山と何ら変わらない」と評したのは言うまでもない。

「分かりました。手配もあるので、情報交換は明後日からにしたい」

克人から指定されたのは、明後日の１８時に魔法大学の正門前に集合すること。その時間なら生徒会を休んで一度自宅に戻ってからでも十分間に合うと素早く計算して、達也は頷いたのだった。

◇　◇　◇

言う迄もなく、テロリストの捜索に当たっているのは十師族だけではない。

首都の目と鼻の先で起こった爆破テロは警察の矜持を傷つけ、首脳部は当然怒り狂った。このため、当該地域である神奈川・静岡の地方警察ではなく、警察省の広域特捜チーム（通称「日本版ＦＢＩ」）が担当に割り当てられた。本来だと各地方に派遣されていたチームが神奈川・伊豆方面にマンパワーを集中させていた。

千葉寿和警部は、元々横須賀の不審者情報が箱根方面に向かったというタレコミを受けて調べていた最中、神坂グループのホテルテロを目撃し、魔法師の警察官ということで急遽十師族の取り調べをする羽目になった。

そんな寿和の心労を加速させるが如く、捜査は早くも行き詰まっていた。

「……犯人が全員死亡済みってどういうことだ？」

爆弾を括りつけられていた実行犯は、爆弾こそ全て取り外されていた（『神将会』と名乗った人々の素性こそ知らないが、皇宮警察の組織だということは聞き及んでいたので、爆薬の処理は彼らに任せた）ものの、明らかにホテルの中で息絶えた形跡がなかった。

寿和のぼやきに運転手をしている稲垣警部補が寿和を宥めるよう

に応じた。
「自爆テロなら、そういうこともあると思いますが」
「にしてもだ。彼らの肌色が明らかに死んでから時間が経ち過ぎているし、爆発した形跡の無い死体まで既に死んでいたんだろう？」
　検死の結果、実行犯とされている死体の死亡推定時刻は一日以上前。最大十日前後にまで遡る、という結果にはさしもの寿和ですら顔を顰めるほどだった。
「B級オカルト映画でも見せられてるのかよ！　って笑い飛ばせたらどれだけ楽な事か」
「警部は、死体を操る魔法があるとお考えなのですね？」
　稲垣の問いかけに対し、寿和は渋々頷いた。運転中の稲垣に余所見をさせるわけにはいかないので、「そうだよ」と取って付けた上で呟く。
「そう考えるのが妥当だろうな……忌々しいことに」
　魔法という非現実的なファクターを虚構の産物として捜査から除外していたのは前世紀迄の話で、魔法が技術として体系化された以上、現代の警察捜査に魔法というファクターは外せないものとなっている。
　とはいえ、現代魔法の使い手である寿和にとって死体を操る魔法という存在は、どうにもうさん臭さを感じずにはいられなかった。
「やはり、専門家に聞くしかないんじゃありませんか？」
「死霊魔術（ネクロマンシー）の専門家なんているのか？　確かにこっちはまるっきり素人だ。講釈してくれる相手がいれば助かるんだが」
「……彼を頼ってみませんか？」
　稲垣が出した〝彼〟という発言に寿和は頭を抱えた。確かに、寿和の知り合いに古式魔法の使い手はいるし、その中でも彼の技術は世界屈指の魔法技術を有すると寿和も認識している。
　だが、その選択肢に対して寿和は拒否の姿勢を示した。
「いや、ダメだ」
「何故ですか、警部。警部に近い人間で古式魔法を詳しく知っているとなれば彼しかいませんよ？」

「……エリカのことに加えて早苗の一件で親父がやらかしたんだよ」
「ええ……お嬢様は西城君と付き合っていますよね？　しかも、その件って一度断られたはずでは？」
　千刃流の門下生からすれば、エリカの恋人であるレオに対してまるで親心のように厳しい目を向けているが、当のレオ本人の実力は九校戦で示されており、エリカとレオの付き合いは道場公認となっていた。
　レオのことを悪しく言う輩がいれば、エリカが手解きという形で今や寿和はおろか修次ですら勝てなくなってきている実力によって叩き伏せられる。それでも相手の悪かったところを的確に指導する辺りは単なる八つ当たりではない為か、却ってワザと受けようとして寿和や修次が制裁することも起きていた。
　早苗の婚約の件は噂程度のものだが、エリカが愚痴をこぼしていたことを道場の人間の大半が知っていたため、事実であると認識していた。
「以前ならばまだ穏便に済んでいた。だが、今の彼は神楽坂家の当主だ。その意味で親父と同格になる。まだ親父が引退しろなどと言われていないだけマシなんだろうが」
「流石に彼でもそれぐらいの分別は付けると思いますが」
　稲垣の言い分も理解はするが、迷惑を掛けている側が現在進行形で諦めていないことも問題なのだと寿和は呟きつつ千葉家の事情を口にした。
「加えてエリカの件で、エリカは西城君の家に転がり込んで、修次は渡辺家に逃げ込んだ」
「……警部が頑なに帰ろうとしないのは、その被害を受けない為ですね？」
「そういうことだ」
　父親が悠元とエリカの婚約をゴリ押そうとしたことは寿和にとっても頭の痛い問題だった。なので、寿和はマンスリーマンションを借りて本家に帰らない生活をかれこれ1ヶ月以上続けていた。元はと言えば千葉家当主の過失なのに、そのとばっちりを受ける羽目になっ

た寿和に稲垣は同情の視線を向けていた。
「ともかく、情報がない以上は動けない。稲垣君、ロッテルバルトへ向かってくれ」
「あの情報屋ですか……。了解です」
ここまで聞かされては稲垣も諦めざるを得ず、言われたとおりに車を走らせたのだった。
横浜・山手の丘の中ほどにある喫茶店「ロッテルバルト」。寿和は数年前に偶然立ち寄って、ここのマスターが所謂「情報屋」であることを知り、特に情報を買ったりすることが無くてもコーヒーを飲みに立ち寄ることが多い。この喫茶店の常連ぐらいになっている寿和は、寿和はカウンターの奥にいる女性が目に入り、その女性――――藤林響子も寿和と稲垣の姿が目に入った。
「あら、警部さん。ご休憩ですか？」
「ええ、藤林さん」
流石にこの喫茶店のマスターのことは響子も知っている範疇だが、響子はあくまでも「今日は非番ですので」と返すにとどまった。コーヒーを頼みつつメモ書きを差し出すと、マスターは一切動揺することなく受け取り、寿和らが注文したコーヒーを淹れる作業に取り掛かる。
寿和と響子の関係はというと、原作ならば響子が寿和に接触して警察――――千葉家を動かす形となった訳だが、この世界では『神将会』と三矢家が中心に動き、千葉家はあくまでも避難する魔法科高校の生徒の避難誘導に当たっていた。その時、襲撃してきた正体不明の部隊に関する引継ぎで顔を合わせた程度でしかない。
だが、寿和は響子が古式魔法に詳しい藤林家の人間ということは知っていたため、それを聞き出そうとしたところでマスターがコーヒーを差し出し、更には寿和にメモ書きを渡した。寿和はそれに目を通したところでそのメモ書きをマスターに返した。
寿和は響子にお願いがあると言って情報料も含めた支払いを済ませ、コーヒーを味わってから店を出たのだった。
ロッテルバルトを出た寿和は響子の案内で彼女の車に乗った。当

然その後ろには稲垣の運転する覆面パトカーが付いてきている。
「――――それで警部さん、お伺いしたいことは先日のテロ事件に関することでしょうか？」
情報に携わる身として、事件の詳細は響子も把握している。ただ、響子ですら思いもしなかった魔法の数々が投入されており、十師族はおろか民間人に怪我人こそ出たものの、関係者以外で死人は確認されなかった（厳密に言えば、顧傑の絡みで死者は出ているが、悠元が蘇生したために事無きを得ている）。
そのことよりも寿和が聞きたいのは、実行犯に関する部分であると響子は思いながら寿和の話を聞くことにした。
「あのテロ事件には奇妙な点がありまして、実行犯に生存者がいなかったのです」
「それは、自爆テロで亡くなったのではなく？」
「ええ」
実行犯が全て街路カメラに映っていたにもかかわらず、爆発物を検知する探知機に一切引っ掛からなかったこと。その実行犯がホテルに入ったが出てこなかったことはホテルの敷地内にある監視カメラの映像でも確認されている。
「不幸中の幸いだったのは、今回の会議に使われたのが建て替え工事が予定されていたことで、当時そのホテルに宿泊する筈だった客は全て神坂グループが経営するリゾートホテルに代わりの宿が用意されていました」
「……（悠元君なら、その辺を全て予測してテロリストを誘き寄せてもおかしくないでしょうけど）」
寿和の状況説明を聞く中で、響子は今や神楽坂家当主となった悠元がテロの首謀者を陥れるために張り巡らせた罠ではないか、と思い始めていた。そんな響子の思考を遮る様な形で寿和は話を続けた。
「これが一番大事な事ですが、実行犯たちは恐らくテロの前日までに亡くなっていると考えられるんです」
「そうでしたか……それで、警部さんは『人形師』のところへ話を聞きに行かれるんですね」

「『人形師』ですか？」
　寿和がロッテルバルトのマスターから紹介されたのは、「反魂術」に詳しいとされている魔法研究家の家だ。決して人形制作者や人形操者を尋ねるつもりなどなかったため、響子の言葉に寿和が首を傾げた。
「警部さんが尋ねようとしている人物は単なる魔法研究家ではなく、『人形師』とあだ名される古式魔法師です。死体を操り人形に変える禁断の魔法を使うと噂され、魔法協会から要注意人物としてマークされている魔法師です」
「それは……」
「確かに彼ならば、死体を操作する術について詳しく教えてもらえるでしょう。表向きは魔法研究家ですから……ですが警部さん、くれぐれも気を付けてください。『人形師』近江円磨（おうみかずきよ）は大漢（ダーハン）出身の魔法師と浅からぬ交流があると言われています」
　命の危険すらあるという響子の忠告に対し、寿和は顔を引き締めて頷いた。すると、響子はもう一つの懸念を口に出した。
「正直にお尋ねしますが、警部さんの妹さんの友人には古式魔法に詳しい神楽坂家や上泉家、吉田家の人間がいるはずです。何故其方を尋ねられなかったのですか？」
「……その妹を神楽坂家の婚約に押し込もうと父が画策し、妹が激怒して『家に帰る気なんてない』と家出に近い有様になりまして。しかも、そのとばっちりという形で自分や弟も家に居づらくなりまして」
　ここで隠す理由も無いと判断し、寿和は千葉家の現状を正直に吐露した。それを聞いた響子は藤林家がそこまでのことになっていないことが〝奇跡〟としか表現できない、と心なしか思ってしまった。
「そうですか……分かりました。私が取り次ぎますので、その方を尋ねた後は東京にある神楽坂家の別邸を訪れてください」
「藤林さんは、神楽坂家と伝手をお持ちなのですか？」
「以前仕事の関係で顔見知りになりまして、何か困ったことがあれば相談に乗ると快く連絡先を頂きましたので」
　実際には響子と悠元が国防軍の仕事の関係でプライベートナン

バーをお互いに交換していて、その辺を適当にぼかしつつ響子が答えた。態々危険を冒す必要もないと言いたかったが、千葉家の事情を聞くと強く引き止めるわけにもいかなかった。なので、古式魔法に関しても自分以上の知識量を有するであろう悠元に寿和を任せる事にした。

寿和らと別れた後、響子は早速プライベートナンバーで悠元に連絡を取ったところ、映像通話で悠元が姿を見せた。背景を見る限りでは司波家の自室だろうと響子は直ぐに察した。

「こんばんは、悠元君。今は大丈夫かしら？」

『ええ……こちらから傍受対策はしておきました。それで、今日はどうしたんですか？　独立魔装大隊の装備絡みの依頼ですか？』

「そっちじゃなくて、実は先日のテロ事件の絡みなんだけれど……」

響子はテロ事件の捜査をしている寿和と稲垣に会い、ロッテルバルトのマスターに死体操作に関する魔法の術者を紹介してほしいということで『人形師』を紹介され、二人はそちらを尋ねるとのことらしい。これには悠元が思わず頭を抱えていた。

『……別に寿和さん自身に恨みはないですし、パラサイト事件のことを考えればまだ好意的な部類なんですが……あのマスターもなんで現代魔法の人間にあの人間を紹介したんだか』

「何か懸念があるの？」

『テロリストの首謀者、ジード・ヘイグ。中国名は顧傑。彼は大漢（ダーハン）出身の古式魔法師なんですよ』

悠元から伝えられた情報に響子は一抹の懸念を覚えた。今日は確かに寿和へ「『人形師』近江円磨（おうみかずきよ）は大漢（ダーハン）出身の魔法師と浅からぬ交流がある」と伝えていた。今回のテロの首謀者がその大漢出身の古式魔法師となれば、彼と『人形師』が繋がっていてもおかしくはない。

「……一応、彼を尋ねた後に神楽坂家の別邸を訪れるように念を押しておいたの」

『なら、まだ対処は出来ますね。分かりました、自分が対処します』

「私も同席させて。流石に私が引き留めなかったことも責任になるわけだし」

悠元の言葉に対し、響子は協力を申し出た。いつもならば断ることなどなかった悠元だが、今回ばかりは事情が明らかに違っていた。
『すみません、響子さん。今回ばかりはお引き取りください』
「どうして？　もしかして、光宣君の治療の条件に関わる話なの？」
『それはありませんが……国防陸軍第１０１旅団・独立魔装大隊副官の藤林響子中尉、自分は国防陸軍特務中将として貴官のこれ以上の関与は現状として認められない』
「えっ……」
家としての話ではなく、よもや国防軍としての体裁に関わる話を持ち出されるとは思わず、響子は思わず驚きの声を口に出していた。
悠元が態々「上条達三」としての体を持ち出したのには理由があり、神楽坂家は既に師族会議を統治する立場として裏舞台に君臨している。無論政府や国防軍にも要請は出しているが、悠元が出した〝任意の応援要請〟に未だ旗色を示していない独立魔装大隊もとい第１０１旅団の構成員である響子を関わらせるのは、どちらの立場からしても望ましくない事であった。
仮に響子個人で関わらせたとしても、彼女が九島烈の孫娘ということから九島家が擦り寄ってくる危険性があるし、パラサイドールの一件では藤林家が黙認していた。知っていて黙っていたとなれば本来なら同罪だが、それでも九島家の再生を鑑みて甘い裁定にしたのだ。なので、この件で九島家所縁の人間が関われるとすれば、分家のような存在になるリーナとセリアだけと決めている。
『任意ながらもこちらの協力要請に対しての姿勢が見られない以上、非協力的であると対応せざるを得なくなる。これは統合軍令部および統合幕僚会議の了解も得ている。もし中尉が個人として協力を申し出たとしても、今回の一件が明るみになれば九島家が中尉を頼ることも想定されるだろう。よって、協力は受けられない。分かりましたか、響子さん？』
「……ごめんなさい、悠元君。そして、どうか宜しくお願いします」
最後の呼び方で国防陸軍ではなく先程の喋り方に戻ったことを理解しつつ、響子は深く頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

そうして通話を終えた後、響子は神妙な表情を浮かべていた。
（……一体、何を考えているのですか）
響子は自分の上官だけでなく、その上司――――第１０１旅団長である佐伯少将に対しても疑念を抱いていた。
第１０１旅団や独立魔装大隊の設立理念は理解しているわけだが、九島烈の血を引く響子や四葉家の達也、そして悠元を大隊内に引き込んでいる時点でその論理が破綻してしまっている。
十師族に頼らない魔法戦力といいつつも、結局は決定的な一手となる戦力の魔法師を十師族ひいては師族会議に依存してしまっている。戦略級魔法師に至っては十師族内に関係者が多く、打つ手が無いに等しい有様だった。
個人的な繋がりで辛うじて保たれている関係を断つような真似をして、一体何を考えているのかと響子はそう思わずにはいられなかった。

面従腹背の輩など抱えたくない

悠元が寿和の後始末を引き受けて響子を関与させなかったのは、自分の幼馴染絡みの案件で迷惑を掛けたお詫びの気持ちもあるわけだが、これには別の事情も含んでいた。

悠元は『九頭龍』を知る以前から、自身の情報網だけでなく複数の情報屋とも個人的に伝手を有しており、提供してもらった情報で得た報酬の一部を支払うことで良好な関係を築いていた(元々自身で稼げるだけの収入を有しているため、報酬はほぼ貯蓄に回すぐらいしかなかった)。ロッテルバルトのマスターともアイネブリーゼの絡みで良く知っていた。

テロがあった翌日、『神将会』の会合の前に悠元は立ち寄ったアイネブリーゼのマスターから相談を受け、そのままロッテルバルトに向かったところでマスターが内密に相談してきた。珍しく「CLOSED(クローズド)」の札が掛かっていたが、悠元が来たタイミングで扉が開き、マスターが中に招き入れた。

「――妙なリストが出回っていた、ですか?」

「ええ、それと分からぬようにばら撒かれたそうで。他の同業者にも確認したところ、崑崙方院残党との繋がりが疑われている魔法師が載っていました」

情報屋は情報の正確性を求めるため、必ず裏を取ることが多い。テロが起きたタイミングでそんなリストが出回ること自体何か裏があると睨み、マスターは同業者に確認したところ、そのリストが出回っているのは間違いないと確信した。

「そのリストは見ることが出来ますか?」

「ええ。念のため紙媒体にプリントアウトしてあります」

マスターから見せてもらった崑崙方院残党との関与が疑われているリストを目に通した悠元は、そこに記載されている情報のセキュリティレベルを考慮した場合、この情報を流した相手が政府機関か国防軍の関与だとすぐに分かった。

加えて、事件の状況で古式魔法師――それも死体操作魔法の専門

家に繋がる様な人選をしている以上、このリストを作成した人物は古式魔法師を良く知る人物で間違いない。
だが、情報部が関与した形跡は認められなかった。十山家あたりならやりかねないだろうが、態々警察官を狙い撃ちにしてこのことが警察省にバレた際、最悪警察省と防衛省の協力関係にヒビが入りかねず、明らかに国益に繋がる行為ではない。
上泉家を怒らせた件で勘気を被っている以上、彼らとて自ら首を掻っ切る様な真似はしないだろうとは思う……国家に対する行き過ぎた忠誠心があればやるかもしれないが、明らかにデメリットが大きすぎる。
「ありがとうございます……とりあえず、気を付けるように念を押すしかないですね。同業者の方々にもあまり逸った真似はしないように忠告しておいてください」
「分かりました。相談を受けて頂き、ありがとうございます」
しかし、警察や公安がいくら『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』で煮え湯を飲まされたとはいえ、身内ともいえる警察官が関わりそうな案件にこんな回りくどい手など使えるはずもないし、最悪不祥事で上層部の首が飛びかねない。
明らかに崑崙方院残党と指定している以上、四葉家の絡みが強いと睨んでの行動を起こせる古式魔法師を有する組織など、悠元の中では心当たりが一つしかなかった。
第１０１旅団、そして独立魔装大隊がリストを情報屋に流したとみて間違いない。あそこは元々反九島烈――反十師族の派閥の組織である以上道理は通るし、今回のテロ事件は十師族が大きく関係している以上、第１０１旅団がこの事件に関与しなくても何らかの形で顧傑の協力者を炙り出すような真似はしてくると踏んでいた。
だからといって、一歩間違えれば警察省や百家の千葉家を敵に回すような行為は断じて認められるものではない。悠元自身、佐伯少将の能力こそ評価はしているが、思想・信条はどうしても相容れない部分がある。その最大の要因は達也を囮にして敵の戦略級魔法を探ろうとした原作の一件からくるものだ。

それがこの世界でも起きるとは必ずしも言えないが、元々の『トゥマーン・ボンバ』の射程距離は精々１５００キロメートルが限界だということは判明している。尚、悠元が改良したものは実質的に距離の制限を受けることはない。

佐伯少将がテロリストを崑崙方院残党と断定したのは、師族会議の場でないと巻き込めない人間となれば、間違いなく四葉家当主の真夜が該当する。それ以外の十師族当主は表立った職を有しており、その気になれば屋敷を直接襲撃する可能性もある。

それが起こらなかったのは、四葉家を狙うとすれば十師族選定会議がある師族会議が一番確実だと考えたのだろう。

閑話休題。

悠元が神楽坂家の別邸にいる使用人に連絡を入れ、水波に急用で出かけることを伝えた上で司波家のガレージに持ち込んだ『ドレッドノート』に乗って神楽坂家の別邸へ向かった。到着したところで出迎えた使用人の案内で応接室に向かうと、寿和と稲垣を修司と由夢が応対していた。

「修司、由夢。忙しくさせたみたいだな」

「気にしないで。悠元、稲垣さんに掛けられた呪印（カース）は解除しておいたよ」

「特に返しなどの兆候は見られないが……現代魔法師が古式魔法師に精神面で対抗するなんて難しいのに、警部さんたちも無茶をする」

元々神事に携わっているからこそ、由夢は稲垣に掛けられた呪印を見抜いてすぐに解除し、修司はその術を破った反動を見守っていたが、特に変化は見られないと断言していた。寿和もまさか稲垣がそんな術を受けているとは知らず、稲垣自身も術を掛けられてそう時間が経っていない為、体調面での変化はみられなかった。

ともあれ、悠元は一番上座となるソファーに腰かけた上で寿和と稲垣を見やった。

「……寿和さんに稲垣さん。警察の矜持は認めなくもないですが、何でこちらを尋ねる前に『人形師』のところに出向いたのですか？」

「!?　な、何でそのことを……まさか、藤林さんが言っていた知り合い

というのは？」
「紛れもなく自分のことです」
　そもそも、伊賀忍者の系譜を引き継いでいる藤林家の人間ならば、仮に専門分野でなくともそういった古式魔法の存在ぐらいがあることぐらいは知っていてもおかしくないのに、魔法使いの柵で教えようとしなかったことにも問題がある。
　現代魔法では禁止同然とされている有機物干渉の類の魔法は古式魔法ならば数多く存在する以上、自分たちが手を汚さずに警察に任せる高みの見物をするぐらいならば、寧ろ余計なことをせずにこれ以上の外敵の侵入を防いでほしいと思ってしまう。
「エリカのことは理解しています。こちらとしては、千葉家当主はともかく寿和さんや修次さんに迷惑を掛けているのも事実です。なので、そちらの疑問に答える形で情報を開示します。そして」
「そして？」
「神楽坂家当主として、先程警察省に協力要請を願い出ました。内容は〝テロリストを支援する勢力の摘発〟です」
　どの道、現状の警察官の殆どは古式魔法に不得手の人間が多いため、それならば現代魔法の範疇で対処可能な勢力を摘発してもらうことにした。周公瑾の知識から顧傑に繋がっている可能性が高い組織のリストを内閣総理大臣経由で警察省に渡している。
　ただ、準備も必要なので現状は警察省を管轄する国家公安大臣（前世で言うところの国家公安委員長の立ち位置）でストップされており、表向きは人間主義を含めた反魔法主義のテロ対策ということで準備が進められている。別に嘘は言っていないので何ら問題はない。
「正直に言えば、千葉家の人間の中で対古式魔法の経験値が最も多いのはエリカ以外に居ません。なので、千葉家ではなく友人の誼として協力を頼むつもりです。それで、テロ事件で使われたと思しき魔法ですが――――」
　悠元は死体操作魔法『僵尸術』の存在を寿和と稲垣に明かし、それと引き換えにこれ以上テロリストの追跡は認められないと神楽坂家当主の名で厳命した。今回の魔法は下手すれば二人が死兵として日

本人に牙を向ける可能性があったことを伝えると、その説明で納得したらしく二人は帰っていった。
二人を見送った由夢が戻って来てソファーに座ったところで、修司が尋ねた。
「今回は何時になく苛立っているな、悠元」
「……否定はしない。まったく、どいつもこいつもそんなに組織の面子が大事か？　人の好き嫌いで関与の可否を決めるなんざどうかしてるとしか言いようがない」
原作だと反魔法主義の激化を本来調停者として抑えるべき政府が日和った。政治家も世論ばかり気にして国会議員としての職務を全うしているとは言い難い。国策である魔法に対する批判的意見を抑圧するのは憲法で保障している言論の自由に抵触することになるわけだが、だとしても、この国の現代魔法界を構築しておいて肝心な部分で何もフォローしていない時点で、国家の長たる確固とした意志が皆無過ぎる。
だからこそ、今上天皇が内閣総理大臣に迫った。
――国の長たる人間が国家の柱である『基本的人権の尊重』を魔法資質を持つ人間に認めないような風潮を看過することは、先日私が述べた等しく国民である思いと相反する行い。そんな人間だというのであれば、私は貴殿を内閣総理大臣に認めることは一切しない。
その承認式の後、今上天皇は表向き〝国家の安寧を若き世代に託すべく、象徴たる人間がその手本となる〟という体で今年の３月３１日を以て退位を行い、４月１日に皇太子が次の今上天皇として即位する。天皇は上皇として職務から手を引くと公言しつつ、一個人として国内外を歴訪する意向を示している。
なお、現在の天皇は前世で上皇となった天皇の男系の曾孫にあたり、年齢はまだ６０歳。退位するには若すぎると思うだろうが、自身が元気な内に子へ継承することで皇族の安寧を図るという目論見があった。
ただでさえ魔法資質保有者は様々な制限を掛けられているわけだが、制限に対する見返りが十二分に与えられているとは言い難いし、

魔法科高校に入れなかった資質保有者が犯罪者となっている現状を見逃しているのは目に余り過ぎる。
警察や公安だって魔法師の人員が欲しいのに、そこに繋がる教育機関などのラインが戦後３０年以上経った今でも構築されていないのは問題である。
「自分が言えた義理ではないことぐらい承知の上だが、テロリストの良いようにされるなんざ国家としての体を疑いかねない」
国防軍に関しては統合軍令部および統合幕僚会議の了解を取り付けているが、魔法師部隊の動きに関しては鈍いという他ない。人間主義によるテロ対策もあるのだろうが、十師族が動いていることもあって非協力的な部分が出てきているのも事実である。
政府は野党勢力を大幅に削ったことで協力を取り付けやすく、場合によっては外務省にＵＳＮＡ関連の情報をリークすることも辞さない。情報を握り潰す可能性もあるが、その時は買収したＵＳＮＡの大手メディアに報じてもらえばいい。
「しかも、独立魔装大隊――いや、第１０１旅団は今回の事件に対して関与しないつもりらしい」
「……反十師族という理由でか？」
「それと反九島烈の勢力だな。本当にあの人は功罪が多すぎるわ……その責任も取ってもらわないといけない」
九島烈が東京に来ているのは、国防軍の退役少将として〝最後の奉公〟を行う形で国防軍の意思統一を図るため。このことは光宣の治療の条件の一つに含まれている。リーナとセリアに九島家の魔法を教えるのはそのついでという形ではある。
今回のテロ事件を機に、十師族当主は〝国家防衛の要〟として民間人から公人という形になる。事実上の権威を与える形だが、私的な戦力保有が認められないと主張する輩がいる以上、まずは十師族当主が民間人という軛を抜けてもらわなければならない。十師族当主は護人が立ち会う形で今上天皇より承認を受けるわけだが、その妻子や親族にはその範囲が及ばない。言うなれば中世日本における〝官位〟の考え方に基づく箔付けだ。

その箔付けを根拠として、十師族の家には各地域における内外の敵対勢力に対応してもらう。七草家を当初の予定から大きく変更した以上、各守護地域の策定も多少変更が加えられる形となる。
国防軍が担うのは〝外敵からの国家防衛〟であり、十師族を含めた師族会議が担うのは〝敵対勢力の排除〟。特別視するのではなく、現在持ち得るコネや影響力に対する対価の義務として十師族には対象地域の守護を担ってもらう。国防軍はあくまでも積極的自衛権に基づく国土防衛の組織と位置付け、師族会議には外敵に対する抑止力の役目を負わせる。
この国が世界屈指の経済規模を持つとはいえ、人的資源という問題が付き纏う以上は領土拡張こそ愚策に等しい。新ソ連に対する抑止力という意味では、精々樺太か千島列島が限界だろう。
「その旅団にはペナルティを負わせないの？」
「あくまでも任意の要請という体で蘇我大将に打診したからな。ただ、いくら魔法戦闘の実験部隊とはいえ、相手が高位の魔法師である以上は遊ばせておく理由もない。そのことを佐伯少将が理解していないとも思えない筈だが」
正直、軍人が感情論を振り回していいのか、と思う。一昨年春の一件は本来の契約に基づかない無理な出動要請だったため、数ヶ月間依頼以外の連絡を断ち切った。契約の内容に関する国防軍側の契約違反行為に対しての抗議行動とはいえ、自分の場合もその感情で振り回した側だから人のことなんて一方的に悪く言えないわけだが。
テロ行為という国家の存亡にかかわる行いを見逃して十師族が国外に追いやられるようなことがあれば、叛逆されて死人が出ても文句なんて言えないに等しい。国家を守る役目を担う人間が私的戦力の保有を認めないという原則に固執する理由は分からなくもないが、時代は進んでいるのだ。なれば、政府が認められないのならば天皇の附託を受けた護人がその力の保有を認めるしかない。
「悠元はその国防陸軍の将校だろう？　権力を使えば従わせることも行けると思うが」
「無理矢理従わせて面従腹背の輩を内に抱えたくない。だったら何も

してくれなくて結構だ」
　これまで貢献していた恩恵を吹き飛ばす様に裏切る様な連中がいる組織を信用したくない。それでも悠元がまだ国防軍に軍籍を置いているのは、蘇我大将を含めた国防陸軍総司令部だけでなく防衛省の制服組からも信頼を勝ち得ているためだ。
　正直度重なる昇進を訝しんでいたが、それは防衛省の制服組が悠元が国の抑止力としての配慮をせめて形として示したかっただけ、と現職の内閣総理大臣から聞き及んでいた（制服組は大半が新陰流剣武術の門下生とのこと）。
　国家非公認の戦略級魔法師だからこそ、魔法という戦力を有しつつも制御できるか疑わしい部分がある為、悠元には抑止としての役目を担って欲しいとのこと。大友参謀長が地位の椅子を譲りたがったのはその側面が働いた結果だった。
　確かに、非常勤職とはいえ九島烈よりも高位の中将となれば、佐伯少将は立場上だと下になる。制服組の数人とも会話をしたが、いずれも「佐伯の増長が目に余りつつある」と零しており、戦略級魔法のことを考えれば反十師族の流れは宜しくない、と昨春の動きを反省しているような節がみられた。
　独立魔装大隊には個人的に親しくしている人間もいるので、一個人としては信頼している。だが、ここに組織などの柵が加わってくれば話は別だ。だからこそ、達也の軍事機密に指定されている『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』も含めて自分が許可を出した。

お役所仕事は手続きに時間が掛かります

司波家に帰ってきた悠元はいつも通り深雪に出迎えられたが、夕食後に達也から「相談がある」ということでリビングに集まっていた。内容は実働部隊の関係で直接情報交換をすることとなり、どこまで出せばいいのかの匙加減であった。

原作ならばいざ知らず、深雪は神将会の関係で細かい事情を知っており、その流れで達也も今回の首謀者である顧傑の情報を知っている。達也としてもその情報提供元である悠元を出来るだけ隠したいという意図を汲み取りつつ、顧傑の拘束に繋がりそうな情報の開示は問題ないこととした。

ようは達也の匙加減に委ねるというもので、これには流石の達也も「これは大変なことだな」と漏らしており、それを見た深雪はクスッと笑みを零した。

次の日の夜、達也は四葉家から連絡を受けて周公瑾が隠れ家として購入していた一軒家を訪れたところ、ジェネレーターと遭遇したが、これを難なく退けた。素性を調べて欲しいという達也からの画像情報を基に調べた結果、『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』が健在だったころに製造されたジェネレーターだということが判明した。

肝心の顧傑に繋がる情報は無かったが、現場を訪れた際に顧傑の軌跡――周公瑾が歩いた痕跡を視ることが出来た応用――では、どうやらそう遠くへは行っていないものの、上手に逃げ果せる辺りは周公瑾の師と呼ぶべき実力者なのだろう。

そして、その日の週末は雫の誘いで北山家の屋敷を訪れていた。原作なら達也と深雪の役目だったところが、悠元と深雪に変わっていた。なお、達也は相談事があると言って四葉本家に向かった。大方、先日の襲撃に関するものだろうと思う。

いつもならばそう畏まった服装をすることなどないが、悠元だけノーネクタイのスーツ姿である（そもそも『神将会』の時にネクタイをすることなどないが）。

「お邪魔するよ、雫」

「どうぞ、あがって」
「それでは、失礼します」
いつもならば魔法の練習をしたり、勉強をしたり……まあ、後は婚約者としての時間を過ごしたりとしているわけだが、今日ばかりはそういう訳にもいかなかった。その理由はラフな格好とはいえ雫の父親である北山潮にあった。
「お待たせして申し訳ありません、神楽坂様」
「お久しぶりとは言い難いですが。あと、そこまで畏まらずに普段通りで構いませんよ、潮さん」
悠元が神楽坂家の当主となった以上、国内有数の大財閥である神坂グループの総帥とも言える存在であるが故、こうやって呼び出してしまうのは潮であっても恐縮してしまうのは無理もない。加えて、娘がその婚約者であってもその外戚として威張ることは許されないのを分かっているからこそ、潮は畏まって頭を下げ、悠元はそれを嗜める。
それに、今回の呼び出しの一件に関して雫から事前に聞き及んでいるため、比較的動きやすい自分が出向くのが筋だという合理的な考えに基づいている。
「では、失礼をさせていただくついでに話を聞きたいと思っていてね。特に神坂グループを率いているであろう君の意見を聞きたい」
「実質的な権限はまだ母上が持っていますが……まあ、いいでしょう。お聞きになりたいのは魔法師に対するネガティブキャンペーンの再発ですね？」
「そうだな。妻も娘も、そして息子も魔法師である以上、私としても無関係ではいられないからね」
潮の長男にして雫の弟でもある北山航だが、昨年春に新陰流剣武術の道場に通い始めてたった半年で封印解除をしても問題ないという元継の判断で魔法師としての資質を解放した。それでも潮は航に後を継がせる方向性に変わりはないようだった。
この辺のことはともかくとして、現在メディアによる反魔法主義のネガティブキャンペーンは今のところ行われていない。その原因は神坂グループによる大規模のＴＯＢ（公開買い付け）を含めたメディ

ア買収により、その主張を取れるはずのメディアが完全に及び腰になっているためだ。
顧傑が犯行声明を発表して少し出たぐらいだが、発信力の強いメディアは完全にテロリストを非難する記事に傾いてしまっている。何故かといえば、先日施行されたテロ特措法には各種メディアによるテロリストを擁護するような動きを制限するものも含まれており、あまりにも酷い場合はテロリストの犯罪幇助の予備罪として問われる形になる。
要するに、テロリストを「触らぬ神に祟りなし」の精神で見守ることしかできなくなった、ということだ。
「先日、日本政府・日本魔法協会・神坂グループ、そして十師族の連名でテロリストの非難声明を発表しました。そして十師族はテロリストの拘束に動いています。メディア方面に関してですが、テロ特措法の罰則もあってどこも及び腰になっています。まあ、楽観視は出来ませんが、必要に応じて対策は取るつもりです」
「そうか。君ぐらいの人間ならば、私の力など必要ないかもしれないが」
「私とて一人の人間ですので、出来ることに限界は生じます。必要とあらば潮さんの力もお借りすることになるかもしれません」
面倒なことだが、世論の力というのは時として世界すら揺るがす。過去に起こった革命は民衆の不満が爆発して、数の力で国家を引っ繰り返した。だからこそ、必要以上に騒ぎ立てるつもりなどない。
対策は施したが、それが上手く機能するかどうかも今のところは何とも言えない。ただ、テロ特措法の中に〝軍事物資に相当する稀少物資の不正所持に関する罰則〟を組み込めたのは僥倖とも言えよう。
「事前に全てを防ぎ切るのは難しいというのだね？」
「最初から特定の思想を持っているならばいざ知らず、一部の民衆による突発的な感情の爆発で思わぬ被害を被ることだってあります。その意味で被害を全て防ぐのは厳しいでしょう」
暫くは一人で帰らないようにすることぐらいしか手の打ちようがない。それに、殆どの生徒が魔法以外の防衛手段を持っていない以

上、魔法使用による過剰防衛を懸念している。刑法の改正に関する意見は既に政治家へ通しており、ＣＡＤ所持に関する明確なルール付けと合わせて行われる。
　いくら資質を有していようが、緊急時の魔法使用が出来るかどうかは本人の意思次第な部分もある為、どうしても不安定さが付き纏う。それに、必要とされる系統の魔法の得意・不得意の部分もあるので、その意味で瞬発力に優れた現代魔法が持続力を発揮される非常時の事態に適しているとは言い難い。
　ともあれ、メディア関係については今後の様子も見ながら適宜必要な措置で対処していくことを確認し合った。
◇　◇　◇
　２月１１日、月曜日。いつものように登校してきた悠元らは校内が妙にざわついているのを感じていた。顧傑の犯行声明の翌日もざわついていたが、それとは毛色が違っていて好奇心やら興奮に近いものだとすぐに分かった。
　尤も、悠元はその原因に心当たりがあったからこそ、特段驚くようなそぶりは見せていなかった。２年Ａ組の教室に入ると、先に登校していた雫とほのかが声を掛けてきた。
「おはよう、悠元に深雪」
「二人とも、おはよう」
「おはよう、雫にほのか。にしても、何だかクラスの中が興奮気味な様子だが、何かあったのか？」
　とはいえ、その詳しい事情は機密にも触れてしまう部分がある為、何も知らない体を装って問いかけた。すると、この中で交友関係が広い方である雫が答えた。
「私はエリカから聞いたんだけど、学校に三高の一条さんが来ているって」
「一条さんがですか……悠元さんは何か知っていますか？」
「勉学上の便宜を図れるようにはしたけど、それ以上のことは学校側の問題だからノータッチだよ」
　このクラスでは先月に退学者が一名出てしまった。なので２５台

の端末に対して２４人しかいない状態だったわけだが、将輝が短期受け入れという形で２年Ａ組に入ることはある程度予測していたことだ。
「ようは例の事件絡みってことですか？」
「そうなるな。何にせよ、そう長引くとは思っちゃいないが」
ほのかや雫が懸念を滲ませる様な心配そうな表情を向けるのも無理はない、と思いつつも悠元は深雪を気遣った。相手の事情や心情を素直に慮ってやれるほど自分はそこまで器の大きい人間ではないのだから。
将輝を指名したのは、あくまでもけじめを付けさせるためであり、これで諦めないようならば、本気で多大な功績を示して黙らせるつもりでいた。今までの功績を出したとしても信憑性がかなり薄い、という事情もあるわけだが。
当事者側となる２年Ａ組に担当教官ではなく教頭の八百坂と一条将輝が入ってきたときの雰囲気といえば、悪くはなかったと言える。何せ、将輝が深雪を好いている情報は精々十師族関係者に止められており、その事情を聞かされている雫とほのかから見れば将輝が姿を見せたことは「よく顔を出せるものだ」という感想を抱いたらしい。
流石にクラスの雰囲気を悪くしたくないので、二人とて何も言わずに歓迎するような雰囲気を出していた。
「皆さんもご存じの通り一条君は第三高校の生徒ですが、この度お家の都合により１ヶ月ほど東京で生活することとなりました」
流石に私語をするような生徒はいなかったが、家の都合というだけで一条家――――十師族の絡みで東京に出向くとなれば、間違いなく先日のテロ事件に関するものだと察する生徒は少なくない。
まあ、男子生徒と女子生徒で将輝に向ける視線が違っているのは言うまでもなく、悠元に至ってはまるで興味が無い様な視線をしていることに雫が気付いて小声で話しかけた。
「……悠元、やっぱり不満？」
「正直に言えばな」
だが、下手にストーカー行為に走られて一条家の心証を害するよう

な行為は避けたかった。それは自分の婚約者として申し込んだ将輝の妹こと一条茜のこともある。なので、キッパリ決着してもらうためにも将輝の招集は苦渋の決断だった。

周りが第一高校の制服の中、赤系統の第三高校の制服を着ている将輝は否応にも目立つが、今回の一件は転校ではなく魔法大学ネットワークを利用した短期受け入れの為、最長1ヶ月の為だけに態々第一高校の制服を用意するにも非効率的すぎるので、これに関しては仕方がないだろう。

「実習や実験についても単位の取得とはなりませんが、皆さんと一緒に学んでもらいます。一条君にとっても皆さんにとっても、きっといい刺激になることでしょう。仲良く、切磋琢磨してくれることを望みます。では、一条君」

そう述べた八百坂に促されて将輝が半歩進み出る。

「第三高校の一条将輝です。この度は第一高校の皆様のご厚情により、一緒に学ばせていただくこととなりました。1ヶ月の短い間ですが、宜しくお願いします」

将輝が頭を下げたのと同時に、温かい拍手が起こる。このクラスは元々1年A組出身者が多く、リーナやセリアを留学生として迎えた経験がある為、こういう突発事には慣れているクラスであった。

ただ、2年A組の生徒全員が悠元と将輝が対戦した相手であり、正直気が気でならなかったが、その悠元は淡々と拍手をしていた。表面上は礼儀として歓迎しているわけだが、実際は「お前の為に骨を折る様な苦労なんざ御免」と言わんばかりの様相を見せていた。そのことに気付いた深雪は自分だけでなかった感情を察しつつ、悠元へ愛の籠った視線を送っていた。

これには近くにいた雫が「やっぱり悠元は天性のジゴロ」だと思わずにはいられなかった。

◇　◇　◇

この日の昼食の時間、将輝は深雪と同じテーブルにつかなかった。彼はまずA組の男子生徒と親睦を深めることを優先したようで、森崎たちと同じテーブルについていた。将輝の心情を知っていたエリカ

は「意外」と零していた。
「てっきり、深雪に付いて来るかと思ったのに」
「エリカ、それを言ったら俺にも当て嵌まる様なものだが？」
「悠元はまあ、事情が事情なだけに許されてるわけだし」
　エリカの呟きに悠元が棘のある言葉を投げつけるように言い放ち、これには幹比古が苦言を呈した。悠元からすれば深雪と雫、ほのかは元々親交があったので、将輝とはその点で異なるのは事実であった。
「リーナやセリアは女の子だし一緒に居てもおかしくはないけど、一条さんは男子だからね」
「そうね。婚約者持ちの女子を追っかけ回すようなことをしたら、プリンスのイメージがガタ落ちよね」
「エリカ……まあ、分からんでもねえけどよ」
　さしものエリカも婚約とまでは行かないものの、レオと付き合っていることは父親以外の家族に認められている（異母姉には厄介払いの如く煽られたらしい）ため、悠元と深雪の気持ちを察したような言葉にレオが頭を抱えたくなりそうな口調で窘めた。
　すると、雫がセリアにリーナのことについて尋ねた。ここにいる中では修司と由夢の二人がリーナと直接面識を持たない。雫の場合は南盾島の一件でリーナと知り合っているが、留学の時の話は何故かしていなかった。
「セリア。リーナってどんな子？」
「……日常生活不適合者かな」
「セリア、辛辣すぎるんじゃない？」
「魔法のことなら一線級だけど、それ以外がポンコツのお姉ちゃんを褒めろって私には無理難題だよ……達也には申し訳ないと思うけど」
「まあ、リーナのことは俺も良く知っているからな。一番の身内であるセリアの情報は貴重だと思っている」
　達也が下手に庇わないあたり、リーナとの関わりでそういう気質を読み取っていてもおかしくはない。ただ、それでもやや不満げな心境なのは表情からして読み取れていた。
「深雪や達也が加減していたとはいえ、準ずる実力を有しているのは

確かだろう……セリアが肝心の社会適応能力を奪ったせいでポンコツなのかもしれないが」
「私何もしてないよ、お兄ちゃん」
　ほぼ同じ環境に居ても、ここまで性格に差が出るのは正直本人の過ごしてきた行動に関わる話だ。セリアが不服そうにしているが、双子ならば否応にも片方と比較されがちなのに、そうなっていないのは二人の意欲のベクトルが違っていたからだろう。
　セリアが転生者だからこそというのもあるかもしれないが。
「それにしても、一条君がね……悠元は事情を知っていたりするのかい？」
「知っているというか……まあ、当事者側だからな。それよりも幹比古、俺も当分は人間主義者に目を光らせるから、今まで通りデータの共有は頼む」
「……てっきり、悠元はそっちの方へ動くと思ったけど」
　幹比古の言い分は分かる。本来なら警察が関わるべき案件だが、古式魔法師の領分だと関東圏の警察官の魔法師では対処が難しい。その為に警察はテロ対策に動かさず、十師族の実働部隊が動く手筈となっている。
　それに、沼津港の貨物船は見張られている上に、神奈川と沼津を結ぶ要所の箱根は神楽坂家による厳戒態勢が敷かれている。顧傑が国外へ脱出するためには、東京湾・三浦半島・相模湾の大きく分けて三つのルートで逃亡しなくてはならない。
「どうせテロリストが動くとしても、行動範囲はかなり限定されるからな。まずはそいつらに繋がりそうな連中に対処すべきだろう。まあ、過剰防衛にならないように系統魔法の使用をある程度制限すべきだとは思うが」
　その手筈をＵＳＮＡが整えるとしても、この国のテロ特措法は相手が如何なる事情の国であっても、少なくとも２週間は掛かる様になっている。ここでＵＳＮＡ政府が強権を使うようなら即座に耳に入ってくるし、エドワード・クラークやレイモンド・クラークといえども日本政府に直接命令する権限は持ち合わせていない。大使館経由で

あったとしても、夜間の船舶の航行は緊急時を除いて認められていない。
それが例え〝ＵＳＮＡ関連の船舶〟であったとしても。
そして、『フリズスキャルヴ』がどうせこちらの検索データを探ってくるのは目に見えているのだから、そのデータ量を一気に増やす算段は付けた。その為に南盾島の『恒星炉』を稼働させているのだから。
「模倣して爆弾を持ち出す可能性もあるし、一昨年の『ブランシュ』の一件からすれば、火器を使う人間もいるだろう。流石に死人を出す様な真似をするのは悪手だと理性が働けばいいが、そうも言ってられんだろうな」
「……武術を習っている人間ならばともかく、魔法の使用を凶器の使用と同列に見られると考えているのですね？」
「まあな」
原作だと暴力を振るった反魔法主義者が武術を習っていた。彼が魔法科高校の生徒の重傷を負わせておきながら、その防衛行動として魔法を使用した場合、先に加害を行った側の罪よりも魔法云々というような風潮が見られた。
裁判に原告・被告双方の心情や精神状態を鑑みる情状酌量の余地の有無を見ることは必要だが、相手が魔法を使えることを分かっていて暴力を振るった時点（下校中に狙ったのだから、当然制服は着ている可能性が高い）で、明らかに衝動的犯行というよりも計画的犯行に近いだろう。これで反魔法主義者に罪が無いとでもいうつもりなら、三権分立の定義が根本的に崩壊していると言わざるを得なくなる。
再制定される憲法には裁判官の規定も大幅に改正され、魔法に関する正しい見識を持つ人間――魔法学関連の有識者も選出対象となる。既に魔法が技術として成立している以上、司法も魔法の存在を正しく認識しなければならない。もし特定の思想・信条に基づく判決を下すようならば、その時は情報をリークして社会的に抹殺するだけだが。
「何にせよ、当分は集団下校するように言い含めた方がいいだろう。部活動のほうへは俺からメンバーに伝えるから、幹比古と深雪は各々

出来る範囲で注意喚起を頼む。風紀委員の見回りの補助として部活連も動くつもりだ」
「そうだね。そうしてくれると助かるよ」
「分かりました、悠元さん」
悠元はそう締めくくって、先に立ち上がった。「やるべきことがあるから、先に戻るな」と言いつつ、今日の弁当を作ってくれた深雪にお礼を言ってその場を後にした。

何時から「撃てない」と錯覚していた？

その日の授業終了後、達也が珍しく2年A組の教室を訪れた。その目的が悠元や深雪ではなく将輝にあったことは明白だが、悠元が率先して廊下に出る形で声を掛けた。

「おや、達也が来るのは珍しいな。一条に用事か？」

「ああ。頼めるか？」

「それぐらいなら構わない。後は頼んだぞ」

悠元は将輝に声を掛け、達也が来ていることを伝えた上でそのまま部活連本部室に向かう。無論と言うべきか雫と深雪が付いていく形となり、これに対して将輝が視線を送っていることに悠元は気付いている。

その視線にどういった感情が含まれているのかも。

悠元がテロリスト捕縛に率先して加わらないのは人間主義者の対処を先決したからだが、その情報交換にまで顔を出さないのは顧傑が『フリズスキャルヴ』による情報収集を懸念していたからだ。

それに、部活連の活動とは言っても、今の時期は注意喚起に加えて風紀委員会との合同警備をするぐらいしかできない。なお、言うまでもない事だろうが琢磨と香澄の両者は敢えて別になるよう組ませているので問題はない。

あと、強いて言うなら将輝の〝横槍〟に対する深雪のメンタルケアをすることと、深雪の身辺警護をすることで達也の負担を減らしてやりたい思いがあった。友人としての厚意だし、特に損得勘定なんて持ち込めないのだが、こういった気遣いですら達也にとっては〝借り〟になるらしく、これには深雪も苦笑を漏らしたほどだ。

「甘えん坊だな、深雪は」

「別に甘えん坊でも良いです。悠元さんは、こんな私はお嫌いですか？」

「いんや、仮にそれだったら一緒に寝る事すら拒否してるからな？」

「もう、悠元さんったら、そんなこと言われると悠元さんに襲われたくなります」

「……」
深雪も流石に他の人がいる前で甘えたりはしないし、寧ろ正式な婚約者になったことで適切な距離感を測っている節がみられる。その反面、二人きりだったり身内しかいない時になると甘えてくることが多くなり、この辺りは身内譲りなのだろうと思う。
今の状況を述べると、机で端末のキーボードを叩いている寝間着姿の悠元に後ろから同じく寝間着姿の深雪が抱き着いている。椅子越しという形になる為、悠元の後頭部にはクッションのような柔らかい感触に当たるわけだが、明らかに下着を身に付けてないのは布一枚を隔てての感触で分かってしまい、悠元は内心で溜息を吐いた。
嫌という訳ではないし寧ろ冥利に尽きるわけだが、もう少し節度ぐらいは保ってほしくある……尤も、深雪の側から「従属したい」なんて言われたことを受け入れた以上、スキンシップとしてはまだマシだと割り切った。
捜査の進捗に関しては、真夜が達也に連絡をして四葉家の暗号通信が傍受されている危険性を示唆した上で手紙による連絡をするとした。『精霊の鏡（カーヴァンクル）』を使わなかったのは相手の出方を見るためらしく、今後は用いる形で達也との連絡をすると言っていた。この辺は今まで出来なかった親子の団欒という意味でも許可することにした。
翌日、いつものように鍛錬を終えて帰ってきた達也が四葉の関係者から渡された手紙を読み、悠元に差し出した。流石に読んでいいのかと思ったが、達也からは「正確な判断が欲しい」と言われたので大人しく読むことにした。
そこには、顧傑の逃亡に国防軍が関与している可能性を示唆する内容が書かれていた。
「悠元はどう思う？」
「腐敗してないなんて確たる証拠はないからな。出来なくもないとは思う」
その発言の根拠にあるのは、原作における情報部関連の動きだった。この世界ではなっていないが、元々原作では他のパラサイトを釣り出すためにピクシーを青山に連れ出していた。その時に監視出来

ていたのだから、顧傑を事前に把握できていてもおかしくはない。
ただ、少なくとも七草家の息が掛かったセクションで把握しているとは言い難い。もし把握していたとしたら、内密に襲撃して点数稼ぎをする可能性もあるわけだが、周公瑾との繋がりが切れていないのではないかと疑われる可能性も出てくる。
悠元は見せてもらった便箋を達也に返し、達也はそれを封筒に仕舞った。
「国防軍も本来あるべき姿への改革中だが、それに反した動きを取る人間はどうしても出てくるだろう。何にせよ、どこかで距離を取る必要はあったんだ。それが早まったと言うべきだろうな」
「……そうだな」
いくら十師族を含めた魔法師社会の在り方を変えるとは言っても、国防という定義自体は人によって様々だ。相手を一方的に負かす力は無論の事、そうさせない為の別の力による抑止への奉仕も国防に繋がる。『恒星炉』も上手に使えば一種の抑止力として立派に機能することとなるのだ。
単に魔法を使う事だけが魔法を使える者に課せられた義務としたくない。あくまでも魔法は技術であり、それを行使する可否の選択権は特定の場合を除いて魔法師が有するべき権利である。
勝ち過ぎれば、それが面倒なこととなるのは歴史が示しているのだから。

◇　◇　◇

２年Ａ組の一時限目は実習だった。内容は「魔法の終了条件定義」である。
この世界において、魔法は永続しない。刻印型術式であれ、魔法の燃料である『魔力』を注ぎ続けない事には継続発動できないようになっている。終了条件を定義していない魔法は、何時切れるか分からない状態で発動対象上に残り続ける。
魔法を別の魔法で上書きするためには、元々の魔法が持っている事象干渉力を上回る必要がある。『術式解体（グラム・デモリッション）』や『術式解散（グラム・ディスパージョン）』、或いは『キャスト・サイレント』を使わない限り、その法則は揺らがない。

これはサイオンとプシオンの関係に大きく影響しており、現状の現代魔法はそれ以外の方法で相手の魔法を無効化する方法は確立していない。なので、魔法式の終了条件定義は魔法師の技量を評価する上で重要なファクターである。

魔法式の終了条件定義は、発動時間を定めるものと魔法の結果を定義するものの二つに分類される。前者はトーラス・シルバーの飛行魔法で評価されており、後者は実践の場面で用いられていることが多い。

今日の授業は、作用時間を変数として自分で定義する実習だ。具体的には、白いプラスチックの球を赤、緑、青の順番で変化させる魔法を３０秒間で１０セット行うもの。なお、実習ごとに時間と回数は異なるが、平均１秒という作用時間は変わらない。

この実習は二人一組が基本となるわけだが、２年Ａ組は奇数で一人は必ず余る。言うまでもなく悠元が一人で練習していたわけだが、別に退屈と思うこともなかった。寧ろ、奇抜過ぎる練習をして生徒のみならず指導教官ですら黙らせていた。

それは、作用時間を平均１秒ではなくその百分の一で作用させ、３０秒間に１０００セットこなすものだった。そこまで精密な作用時間定義が必要なのかと思うだろうが、緻密な制御練習と膨大な魔法力を錆びらせない為の練習だった。

流石に将輝が加わったとはいえ将輝と深雪をペアにするつもりもなかったため、姫梨に目配せをすると彼女は深雪に声を掛けた。それを見てから悠元はいつものように一人で練習でもしようかと思ったところ、意外なところから声を掛けられた。

「神楽坂、ペアを組まないか？」

「……ああ、いいぞ」

そう言いだしたのは将輝であった。これには思わず目をパチクリさせたが、将輝の視線から感じられたのはライバル心にも似た心境だった。周囲が騒めく中、別段断る理由もなかったので悠元はその申し出を受けた。

第三高校のカリキュラムや授業内容は時折真紅郎から聞いていた

ため、より実践的な魔法実習をしていることは知っている。一昨年の時点で深雪に匹敵する魔法の実力を見せていた将輝からすれば「簡単」なのだと思っている節は見られた。
「……30秒ジャスト。流石だな」
「それはどうも。そしたら、次は一条の番だな。カウントは？」
「必要ない」
将輝からすれば悠元への対抗心が働いた結果、意地になっている部分があると思いながら、ストップウォッチを構えて合図を出した。将輝は別のグループで練習している深雪にいいところを見せようと臨戦態勢に入った。悠元の合図で将輝が魔法を使い始めたが、悠元はラップスイッチを押しつつ作用時間のばらつきを見る。
そして、30秒が経過してプラスチック球の色が白に戻ったところで悠元が終了の合図を出した。
「余り、0．9秒。カウント無しにしては上出来だと思うぞ」
「……どうも」
悠元の言葉に将輝は何とか礼を述べたが、カウント無しかつジャストで合わせた悠元と比べれば少し不甲斐ない結果に終わったことに納得できなかった。結局、将輝は一時限を丸々使って課題をクリアしたのだった。

◇　◇　◇

お昼休みになり、ほのかが将輝に声を掛けていた。その根底にあるのは単なる親切心で、将輝としても少なからず顔見知りがいた方がいいだろう、というほのかなりの気遣いだった。ほのかは予め雫と深雪に聞いていて、最終的には自分にも「大丈夫かな？」と聞かれてしまったので、これについては了承した。
円滑な学校生活を送りたいと思う以上、こちらから変な諍いなど作りたくない。将輝は躊躇っていたが、深雪の言葉で同席することにしたようだ。
昼食の際、エリカが捜査のことについて尋ねてきたが、現状は特に変化は無いと答えるに止まった。話題は今日の実習に移っていった。
「悠元さんは一回で終わらせていましたね」

「まあ、作用時間が１秒程度なら安定はするさ」
「この前の時は３０秒１０００セットとかいうことをしてたけどね」
「それは言わないでくれ、雫」
　雫が明かした内容に他の面々が食いつき、ごく短い作用時間の連続発動という離れ業を以前やっていたことに将輝は驚きを隠せなかった。飛行魔法でもＣＡＤのサポートという形で０．５秒間隔なのに、その５０分の１となれば人間業ではなくなる。
「それにしても、一条さんが羨ましいです」
「羨ましい、ですか？」
　突然深雪にそう言われ、将輝は気になる人からそう言われたのもあってか激しく動揺していた。この反応に面白可笑しいような笑みを見せたのは、母親譲りともいえる深雪は将輝の質問に答えるように述べる。
「だって、悠元さんが感情をむき出しにする相手は非常に限られますから」
「……深雪。間違ってはいないが、別に態々言うことでもないだろうに」
　根底にあるのは間違いなく深雪の嫉妬からくる言動に、悠元は溜息を吐きながら深雪の言葉を嗜めるように呟いた。
　悠元でも感情を吐き出す相手を慎重に選んでいる節があるのは認める。節操なしに負の感情を吐き出すばかりでは相手にとって気が休まらないだろう。なので、悠元が毒を吐く相手は相当信頼されている証でもある。
　いくら婚約者とはいえ、心優しい深雪が必要以上に思い悩んでほしくないからこそ、悠元は深雪に対して正直な気持ちを吐露することはあっても、悩みなどを必要以上に零したりしない。深雪にとってはそれがやきもきする部分なのだろうとは思う。
「そうだね。普段の悠元なら作用時間を途中でわざと変えつつ３０秒ジャストに収めたりしてたのに、今日は全部一律だったし」
「……まあ、柄にもなくムキになってた部分は否定しない」
「わざとばらけさせつつ収めるなんて、僕でも難しいですよ」

普通なら指導教官が物申す様な事をしているが、それでも強く言われないのは悠元が試験の際に誰の文句も言えないような結果を出しているためだ。雫の指摘に対して悠元は諦め気味に呟くと、ここに反応したのは燈也だった。
「その点、達也はきちんと一律にしていましたね」
「俺は悠元ほど魔法力の制御に長けているわけではないからな。こういった細かい制御も訓練の一環だと思ってる」
「あれだけの魔法力を手にしたのにですか？」
「手にしたからこそ、というのもあるがな」
その話題には将輝が首を傾げるも、達也から感じる魔法力が以前京都で一緒に戦った時よりも増大しているのは感じていた。それでも一滴も漏らさないように抑え込まれているサイオンの挙動によって、正確な魔法力までは推し量れなかった。

◇　◇　◇

悠元は放課後、部活連の副会頭である琢磨とエリカに事の次第を任せて、司波家に戻ってライディングスーツに着替えた後、『ドレッドノート』を駆って霞ヶ浦の独立魔装大隊本部に到着した。
元々『ドレッドノート』が登録上軍用車両にあるため、ＩＤカードでのパスによってヘルメットを取った状態で難なく基地に入り、司令部のあるビル前にバイクを停めた。
当面人間主義者を中心に対処した上で顧傑を捕縛する方針に変わりはないが、達也に見せてもらった手紙の部分に魔法戦力を有する知己の部隊まで侵食されているのは正直気が休まらなくなる。
それに、顧傑はジェネレーターの調達先を本来の強化兵ではないところから行っているため、顧傑と関係のある組織――周公瑾の知識から読み取れた関係各所の捜査を警察だけでは明らかに人手が足りない。
正直、風間の都合を電話で聞くのも躊躇ったが、面会の約束をする以上は仕方がなかった。面会の時間までまだ時間はあったが、こちらの到着を聞いてなのか、直ぐに部屋に通された。この辺は自分が風間よりも上の立場にいるせいもあるのだろう。

事実、部屋に入る際の礼儀も軍規に則ったものとなったのは言うまでもない。
「失礼します、風間中佐」
「態々お越しいただき感謝いたします、上条閣下」
「楽にしてください。それと、ここには二人しかいませんので、年功に応じた話し方をしてください」
「では、失礼して……今日はどのような用件で？」
正直なところ、こうやって話すのは年明けぶりで、最近は装備関連の依頼も入ってこない。いくら悠元が既に十師族でないとはいえ、実質上の上官に当たる人物を技術士官として扱うのは気難しい部分があるのは否定しない。
お互いにソファーに座ったところで放たれた風間の問いかけに対し、悠元は真剣な表情を浮かべた。
「中佐は既に今回の事件のことは御存知だと思いますし、その絡みで警察省の人間を使って元凶を炙り出そうとしたことも掴んでおります。まあ、その件に関して私が罰するつもりもないですが……蘇我大将閣下より第１０１旅団に協力要請があったことは御存知ですか？」
「（やはり、掴んでいたか）……ええ。ですが、佐伯閣下より今回の事件に関わる事はしないと厳命を受けています」
まどろっこしいことをしておいて関与しないというのは明らかに筋が通らない話だが、大隊長である風間に文句を言ったところで、その上にいる佐伯少将が動かないことにはどうにもならない。
そもそも、今回の問題は最早十師族だけの問題ではない。テロリストが十師族を標的にしたということは、人間主義者に魔法師殺しの聖戦を謳っているも同じ。模倣犯を防ぐにも古式魔法に通じた面々を現代魔法だけで対処するのは厳しい。
そのために上泉家や神楽坂家が先頭として動いているが、各家の動きは正直に言って鈍い。
「何故ですか？　よもや佐伯少将の立場故に動けないと申されるつもりですか？」
「……」

「風間中佐。私は別にあなたを責めるつもりはない。立場故に動けないことも承知している。なら、何故味方を犠牲にするような協力を認めたのですか？　最悪、千葉家が反国防軍の旗を振り翳すところでしたよ？」

千葉家の修める千刃流の門下生は国防軍や警察も含めて各種の治安維持組織に就いている人間が多い。千葉家の長男とその門下生をある意味嵌めたにも等しい行為が明るみになれば、千葉家の鶴の一声で組織間の連携が一気に崩壊する。

最悪、千葉家の武術の本流に当たる上泉家にまで影響が波及しかねない問題となり、国防軍の組織そのものの武力による浄化が加速するのは目に見えている。流石の剛三もそうなると多くの血を流すことになると懸念を示しており、今のところは自浄作用の経過を見ている段階だ。

「幸い、千葉家と武術的なつながりのある上泉家は『まだ本格的に動かない』と言伝を貰っています。ここからが本題なのですが、今回の作戦から大黒特尉に関する軍事関連魔法の権限はすべて私が管理することになりました」

「……それはまさか」

「神楽坂家当主として、大黒特尉の『質量爆散（マテリアル・バースト）』を含めた管理権限を一旅団が管理すべきものではないと判断し、蘇我大将閣下より権限の附託を受けた次第です」

政府が取り決めていた十師族当主に関する権限と合わせて、国防軍と十師族の間にあった各種の取り決めも全て護人の二家が管理することとなった。その中には独立魔装大隊と四葉家の契約に関するものも含まれており、達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』や『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』、『ホーリー・トライデント』や『トリリオン・ドライブ』といった魔法の最終解除権限は悠元が保持することになった。

このことは達也に話しており、正直達也の魔法を管理するのは「骨が折れる」と吐露したところ、達也からは「お前の魔法を管理する方が骨が折れそうだ」と返された。誠に遺憾であると言わざるを得ない。

なお、上泉家――――元継からは「流石に爺さんのことで一杯だから、悠元に任せる」と言われた。早い話が面倒事を押し付けられたような気分だが、仕方が無いと割り切った。

そして、『サード・アイ・エクリプス』に関してはその所持を悠元がすることとなった。理由としては、ハード面に関して触れる人間が悠元しかいない為だ。正直なところ、その気になれば自前でそれを超えるＣＡＤを製作することは可能だが、そこまでの必要性が無いということで使い続けるつもりだ。

万が一達也が宇宙に出ることになった際、その後継機を作って地球外から『質量爆散（マテリアル・バースト）』を撃てるようにするのも吝かではない。

社会適応と魔法力のトレードオフ

風間に告げた大黒竜也特尉――――達也の魔法に関する取り決めの権限移譲。それはつまり、今後独立魔装大隊が達也を動かす際、悠元の承認を得なければならないことを意味する。それを反故にするような真似をすれば、参謀でもある彼の情報提供が一切受けられなくなる。態々口にせずとも風間は理解してくれる、と信じて悠元は言葉を続けた。

「それで、風間中佐。独立魔装大隊には先程の件を払拭するための機会として、人間主義者――――この際、〝テロリスト予備軍〟と呼称しましょうか。『ブランシュ』やその下位組織である『エガリテ』、更には『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の残党の対処にあたって欲しいのです」

「……そこまでハッキリと言っていいのか？」

「良いんですよ。何せ、先日のテロ事件に使われた死体はいずれも横須賀の貧民でした。こんな状況を放置するのは国防に大きく関わりますので」

ハッキリと述べた根拠として、その貧民の誘拐を主導したのは『人形師』近江円磨に他ならない。流石の顧傑もエシェロンⅢを利用した通話システムは有していなかったが、周公瑾が根城としていた場所にあったブースター付きの死体が近江の邸宅に運び込まれたことが判明した。

とはいえ、現状は物理的な証拠がないために逮捕することが出来ない。なので、彼は顧傑に殺させることが決まっている。尤も、顧傑に口封じ目的の殺人容疑が追加されるわけだが。

一歩間違えれば治安維持組織間の連携の足並みを崩すような真似をされるぐらいなら、国防を担う者として警察でも対処が難しいテロリストの拘束に協力させる。この命令は既に蘇我大将へお願いをしており、今度は〝内閣総理大臣および防衛大臣からの出動要請〟として出される。言わずとも両大臣に対して辻褄合わせの了解は得ている。

これで断るようならば、一体何のための魔法師部隊なのだと苦言を

呈したい。
「間接的には十師族に協力するような形になるでしょうが、今回の一件は最早十師族のみならず、この国の魔法師の尊厳にかかわる重要な問題です。それを認識できないというのであれば、私はもうこれ以上付き合うことを止めます……これをどう取るかは中佐殿にお任せいたします」
自分とて個人間の関わりは出来る事なら切りたくない。だが、軍人としての関わりを金輪際切ることも想定して動かなければ、独立魔装大隊もとい第１０１旅団は一切動かないだろう。そう言い終えた上で悠元は静かに立ち上がり、風間に軽く一礼をしてから部屋を後にした。
（しかし、よくよく考えると不自然だよな……）
九島烈と佐伯広海。この二人がライバル的関係にあるというのが原作での流れだが、そもそも九島烈はもうじき９０歳の大台に対し、佐伯は軍人でも高齢となる５９歳。おおよそ３０歳も異なる二人の間柄を考えた時、流石に男女の関係は難しいと思う。
佐伯が烈に一種の憧れを抱いていて、九島烈が国防軍を退役して師族会議を立ち上げた際に声を掛けられず、それが「裏切られた」という切っ掛けになったと見るのが自然だろう……この辺は本人から聞くわけにもいかないので、あくまでも推測の域は出ないが。
用事を済ませた悠元はそのまま司波家に帰宅した。出迎えはいつものように深雪が玄関で待っていた。
「おかえりなさいませ、悠元さん」
「ただいま。達也は出掛けたのか？」
「はい。今日は四葉家のお仕事で遅くなると」
顧傑の隠れ家の情報は掴んでおり、達也は今日そこで仕掛けるつもりのようだ。同行者として文弥と亜夜子にも声を掛けていて、念のためにリーナも同行させることを決めたそうだ。
テロ事件の後、顧傑が乗ってきたと思しき貨物船を監視するＵＳＮＡ大使館のクルーザーの情報と、そこに乗っているであろう人物――――ベンジャミン・カノープスの情報があるからこそ、達也はリーナに

同行を頼んだ。
「まあ、達也がいて全滅する可能性は限りなくないに等しいが……先に風呂にするよ」
「分かりました」
悠元が得た情報では、顧傑の動きを掴んでいるＵＳＮＡ軍が動くことを想定している。恐らくパラサイト事件でも使われた『キャスト・ジャマー』を用いてくることも想定の範囲内だ。
彼らに誤算があるとするならば、達也と文弥、亜夜子のＣＡＤを手がけたのは一体誰なのか、ということぐらいだろう。自分から名乗ったことも名乗るつもりもないが、『トーラス・シルバー』の片割れとしてＣＡＤのハンドメイドに一切手など抜いていない。それが自ら製作したものならば尚更である。
◇　◇　◇
その翌日、達也のモチベーションは見るからに下がっていた。サイオンのパターンから顧傑の所在までは突き止められたが、その捕捉よりも窮地に陥った文弥と亜夜子を救うことを優先した。特に亜夜子は達也の婚約者（候補）なので尚更だったのだろう。
『キャスト・ジャマー』によるＣＡＤの阻害は無効化出来ていたが、これを見た敵が逐次的に数を増やしたのだ。四葉の魔法師だということで必要以上に警戒していたのは確かだろうが、流石に達也でもこればかりは無視できないと判断した。
これには流石のリーナも「『ブリオネイク』でも撃つ？」と達也に聞いたらしいが、相手が米軍ということもあって今の段階でリーナの存在を明るみにしたくない、と丁重に断りを入れた。
「……済まない、悠元」
「別に謝るなよ、達也。一朝一夕で片が付いたら誰も苦労しない。それにだ、達也」
「？」
「身内とはいえ、そうやって深雪以外の他人を気遣えるというのも人間として成長している証だよ」
達也とて今までに順風満帆なエリート街道を歩んできたわけでは

ない。寧ろ逆のスパルタ教育を受け続けた挙句、大半の激しい情動を奪われてしまった。だが、激しさが無くなろうとも喜怒哀楽そのものが失われたわけではない。その部分が深雪以外にも見せれるようになったという点で人間として成長している、と諭した。
「……敵わないな、悠元には。一種の歳の功かな」
「その話題はやめろ。地味に効くから」
夕食を終えてのんびりしていたところで、エプロンを身に付けた深雪が達也に箱を差し出した。そう、明日はバレンタインなのだが、悠元の存在が出来てからはその前日に手作りのチョコを貰うのが当たり前になっていた。
「一日早いですが、どうぞお兄様」
「ありがとう、深雪」
「どういたしまして。それでは、私はまだ作業がありますので」
そう言ってキッチンに消えていく深雪。達也は早速丁寧にラッピングされた箱を開けると、中には綺麗に整えられたチョコが並んでいた。毎年チョコを貰っている悠元の目から見ても、菓子店のチョコと遜色ない様な出来にしか見えなかった。
「……毎年貰っておいていうのもなんだが、お店で売ってても違和感が無いと思うんだよな」
「俺もそう思う……食べるか？」
「いや、俺が手を付けたら深雪に怒られそうだから止めておく」
キッチンには水波も同席しており、二人で楽しくやっている様子は聞こえてくる。今更ながらに思うが、本妻と愛人でここまで仲が良いということ自体異常だろう……何度も言っていることだが、昼ドラのような修羅場の連鎖にならないことは本当に頭が上がらない思いしかない。
「そういえば、明日は悠元の誕生日だな。プレゼントは手配しておいたから、遠慮せずに受け取ってくれ」
「……まあ、楽しみに待っておくよ」
昨年の場合、達也からはマシな誕生日プレゼントだったが、深雪からはチョコに加えて〝深雪自身〟という扱い方が精密機械以上に慎

重を期すレベルの代物が飛んできた。正直これ以上のものがどう出てくるかなんて……考えることはとうに止めた。
どうしてか？　と聞かれてしまうと、自分が置かれている立場上、正直貰っても置き場に困るものというのはどうしても出てきてしまうためだ。とりわけ自分は剛三の付き添いで世界各国を旅しているため、国内外を問わず知己が多くなってしまった。パーソナルデータを見れば誕生日は記載されているため、それを見て送ってくる人間は神楽坂家の人間となってから増えている。
「ふと思ったことだが、俺は誕生日プレゼントに何かを貰うことは少なかったが、悠元はどうなんだ？」
「俺の場合はなぁ……時折『そんなものを渡されても困る』代物が付随してたからな」
単に貴金属などの高価な品をプレゼントとして提供するのはまだいいとしても、権利書とかもらっても正直処分に困るとしか言えない。頭を悩ませたのはアラブ連合から届いた土地の権利書だった。砂漠が誰にもどうにもできないからと言ってぶん投げるな、と言いたかったが、これはこれで活用させてもらうこととした。
気が付けば海外のあちこちに土地の権利を有している形となったため、割り切る形で上泉家が所有する民間の海運会社『飛龍海運（ひりゅうかいうん）』を立ち上げた。就職は基本的に新陰流剣武術を修得している人間に限定しており、加えて秘密裏に引き取った治療済みの強化兵や『伝統派』の魔法師が船員として所属する。流石に経理などの部分は非魔法師が強い所もあるので、その辺は持ちつ持たれつといったところだ。
海賊からしたら、絶好のチャンスと思って飛び込んだ先が魔窟という名の地獄。そして、亜貿社は名ばかりの貿易業ではなく実利を伴う会社として、飛龍海運の東京支社となった。船員の強さだけで言えば、下手すると『スターズ』の隊長クラスすら倒せるかもしれないだろう、というのが元継の評価だった。
閑話休題。
「達也も今年からは他人事じゃなくなると思うがな」
「……母上のあの様子だと、何を贈られても不思議じゃないのは俺も

感じているが」
　真夜としては、達也をようやく実の息子として接することが出来る機会を逃すまい、ととびっきりのプレゼントを寄越す可能性が高い。このことは達也も想定していたようで、深いため息が漏れるほどだった。

◇　◇　◇

　悠元は達也に頼まれて、襲ってきた米軍の詳細を洗い出した。すると、リーナが動く側とカノープスが動く側で命令系統が別であることに気付く。この辺はリーナが述べていたことやセリアの予測が間違っていなかったことを意味する。
　リーナとカノープスに命令を伝えたのは間違いなくヴァージニア・バランス大佐だが、彼女は統合参謀本部――――国防総省からの命令をカノープスに任せ、リーナは大統領から直接命令を受けている。普通ならば、軍の最高指揮権限を有する大統領が鶴の一声で止めることもできたであろう。
（大統領閣下は無理に止めなかった……いや、〝炙り出す〟気だな）
　今回が政府のスキャンダルであることはもはや避けようがない。ならば、その当事者を含めて芋蔓式に反政府勢力を叩き出すつもりなのだろう。悠元がデスクの引き出しから取り出した手紙の差出人は現在の大統領首席補佐官に当たる人物からのものだった。
　その内容は、顧傑に関するＵＳＮＡ軍の動きに留意する旨に加えて、大統領からの言伝も含まれていた。元々与党内でも人間主義を掲げる組織との癒着は細やかなレベルではあるが噂されていたため、再選を機に大統領は世論を味方につける形で大々的な経済政策を打ち出し、その裏でテロリストに関わった人間を処分するつもりなのだろう。
　そんな国外の話はさて置くとしながら悠元は手紙を引き出しに仕舞い、立ち上がって制服の上着に袖を通した。リビングに来ると朝食の準備は済ませており、とても今日が自分の誕生日とは思えなかった。本当ならば友人たちで誕生会をやるつもりだったが、このご時世では致し方ないだろう。

「おはよう、達也に深雪、水波」
「おはよう、悠元」
「おはようございます、悠元さん」
　いつものように登校したところで、まずは机の上に数個。大方二科生のものだとは思うが、減っているような傾向が見られないことに内心で溜息を吐いた。すると、早めに登校してきたほのかと雫が近付いてきた。
「おはよう、悠元。相変わらずモテるね」
「おはよう、雫にほのか。にしたって、俺は婚約者持ちの人間なのに、それでも律義にくれる精神を疑うんだが」
「まあ、悠元さんはきちんと返していますから……悠元さん、義理ですが」
「これは珍しい」
　すると、ほのかから義理チョコを貰う形となった。それに続く形ではあるが雫からも本命のチョコを貰う形となった。正直なところ、ほのかとしては何かと達也絡みでお世話になった意味でのチョコなのだろう。
「悠元は気にしないって言ったんだけどね」
「でも、色々お世話になってる手前、何もしないのもどうかなって思ったから」
「ま、ありがたく受け取っておくよ」
　重さ的にチョコだけのものとは思えない為、恐らく誕生日プレゼントと合わせてラッピングしたものと見られる。雫のほうは手提げ袋で、中にはチョコとプレゼントの二つが別の包装に包まれていた。
　すると、生徒会で席を外している深雪が戻ってくる前に姫梨とセリアもやってきた。
「やっはろー、お兄ちゃん。愛しの妹が愛情たっぷりのあいだだだだだっ!?」
「お前は騒がしくしないと死ぬんか？　ええ？」
「キレのいいアイアンクローですね」
「それはいいからとめてくだしゃいいいっ!?」

ともあれ、姫梨とセリアからもチョコとプレゼントをそれぞれ貰うこととなった。なお、深雪と水波からは家に帰ってから貰う予定となっているようで、朝の段階ではチョコを仄めかす様な素振りは見られなかった。ただ、少し遅く帰ってきて欲しいと頼まれている以上は断る訳にもいかなかった。

「そういえば、深雪からは貰ってないの？」

「朝一緒に来た段階ではな……おう、おはよう将輝。机の上が早速盛況だな。モテる奴は違うな」

「……おはよう、神楽坂。それをお前が言うのか？」

不意に声を掛けられる形となった将輝はそう返しつつも、同じクラスメイトの男子生徒から手提げの紙袋を貰う形となり、手早く机の上に載っているチョコを丁寧に入れていく。この時点で、悠元と将輝のチョコの個数は悠元がやや有利であった。

◇　◇　◇

部活連会頭という職からすれば異性を遠ざける要因にもなるのか、とかつての克人や服部の例からしてそうなるものだと思っていた。

だが、現実はそう甘くなかった。悠元は元々三矢家の人間なので、現3年は美嘉と面識を有している。加えて佳奈が第一高校の教官として生徒を教えているため、その分も加味してなのか人気が高い。

「……昼食に手提げ袋を持ってきておいたのが功を奏したが、どうすりゃええねん、これ」

「見るからに3年生や1年生が多かったですね。泉美ちゃんも渡しに来てましたし」

婚約者がいるのに、何故ここまで増えるのだと疑問を呈したい。婚約者候補としていい印象を与えようという思惑があるのかもしれないが、見知らぬ人間を娶れるほど自分はそこまで大きな器を持っていない。

「そういや、レオや幹比古も地味に貰ってたな……複雑そうな顔をしているが」

「……正直、貰えたのは嬉しいが、どうしたものか困ってるんだよ」

「僕もレオと同じ意見だね」

原作だとそんなに貰えてなかった二人だが、お互いに成績が優秀なこともあるし、身なりが整っているのもあってモテる部類である。ただ、レオの場合は隣で物凄い笑顔を浮かべているエリカのこともあってか言葉を濁している。
「あら、いいじゃない。モテるってことは良い証拠よ？」
「……幹比古、お互いに気を付けようぜ」
「うん、そうだね」
その先に何が待っているのかなど目に見えているため、こればかりはフォローできる気がしないとセリアが作った弁当を無事完食した。
「ご馳走さまでした。一月前よりも腕が着実に上がっているな」
「そう言ってもらえると嬉しいよ。その反面、うちの姉は……料理に魔法を使おうとして慌てて止めたよ」
「……瞬発力的な火力なんて現実的じゃないだろうに」
なお、今年のリーナのチョコはセリア経由で達也の手に渡った。味に関してはセリアとシルヴィア・マーキュリー、そして何故か巻き込まれた九島烈の太鼓判付きだという。さしもの『トリックスター』でも弟の孫娘の片割れがここまで生活能力に乏しいとは予想しておらず、魔法力を得られなかったことが却って良かったような表情をしていたらしい。
期待した魔法力を得られなかった烈の子孫と社会適応能力を得られなかった健の子孫。このある意味〝究極の選択〟に対し、烈が「私は……正直あのままでも良かったのかもしれないな」と呟いたことにシルヴィアが苦笑にも似た笑みを見せたほどだった。
その視線の先には、セリアに関節技を掛けられて意識を飛ばすリーナの姿があったのは言うまでもない。

資源のリサイクルは難しい

バレンタインで浮ついた空気は放課後にも見られていた。流石の人間主義者も人の恋路にちょっかいを出して地獄に落ちるような真似は避けた、と楽観視したくはあるが、正直なところ反魔法主義のメディア露出は増えつつあるものの、それでも大っぴらに声を上げているような節は見られない。

今日は遅めに帰ってきて欲しいと言われてしまったため、最近出来ていなかった巡回に加わることとした。出来ていなかったというよりも〝させてもらえなかった〟と表現するのが真っ当になるわけだが。

あちこちで桃色の雰囲気を感じてしまい、流石に邪魔するのは野暮だとお得意の隠形を全開にして巡回を続けた。自分だってされて嫌なことを相手にするつもりはないので、真っ当な行動に移しただけだと自分の中で納得させた。

それでも時間が余ってしまったため、学校を出た悠元はコミューターに乗って一路厚木の三矢家の屋敷に出向いた。事前にメールでの連絡だけしておいたところ、玄関前には侍郎の父である矢車仕郎が出迎えてくれた。

「急な訪問になってしまい、申し訳ありません」

「いえ、旦那様より十分に便宜を図るよう言いつけられておりますので。それではご案内します」

今回の捜査体制は七宝家と三矢家が十文字家の補佐として入っているため、その辺の経過やテロ事件で回収した炸薬や復元した兵器の詳細を洗い出すために依頼していた。無論、自分が『天陽照覧』で炸薬の元の兵器の状態に復元したのは言うまでもない。

「神楽坂殿、今日はどうなされましたか？　もしや、誕生日で待たされている感じでしょうか？」

「……父さんには敵わないな。まあ、そんなところだよ」

公的には悠元が上の立場となったため、私的な場ではいつもの親子のような会話で妥協してもらっている。変に畏まるのは肩が凝って

致し方ないというのは元も同様であったため、互いに笑みを零した。
ただ、家督と家業を継ぐ元治にはその辺を厳しく言い聞かせており、元治も自身の能力を把握しているからこそ元の言葉に深く頷いていたそうだ。
「そのついでに解析結果を聞こうと思って来たんだよ。相手が優れたハッキングツールを有している上、米軍も動いているのは確認できたから、ここは自分が出向く方がいいと思った」
「成程……先日悠元から頼まれた炸薬と兵器の解析結果だ」
そう言って元は紙媒体で差し出し、悠元は手早く目を通した後で元に返した。炸薬の製造時期はそこまで古くはないものの、兵器の性能としては既に型落ちのもの。しかも、その製造場所は間違いなくＵＳＮＡ製だと判明した。
悠元は目を通すと、そのまま元に紙の束を返した。
「この国における同タイプの炸薬は５年前の時点で既に全数廃棄されていた。隠し持っていた節は否定できないが、兵器の製造元がＵＳＮＡ製のものなのは間違いない」
「……ＵＳＮＡのスキャンダルを有耶無耶にして、この国に反魔法主義の流れを促すのは間違いない、か」
「もしや、この国の戦略級魔法を狙って行動を起こしているのか？」
「可能性は大いにある」
こんなことが明るみに出れば、ＵＳＮＡと同盟を結んでいる他の国だって他人事では済まされない。下手をすれば同様の模倣によるテロ行為で混乱させられる危険性があり、最悪安全保障を睨んだ同盟が崩壊してしまう。
顧傑を狙ったのは単なる偶然ではない。『灼熱と極光のハロウィン』から続く線を鑑みれば、反魔法主義の活発化で件の戦略級魔法師を炙り出し、その当該人物を狙い撃ちすることは十分考えられる。その主だった例は原作における『ディオーネー計画』に他ならない。
「達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』、爺さんから元継兄さんに継がれる予定の『雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）』、そして俺の『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』に『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』。澪さんの『深淵（アビス）』も加えれば、小国たる我が国で最低でも５つの戦略級魔

法を有している訳だ」
　この国の近隣には新ソ連と大亜連合という非常に無視できない大国がいる上、同盟国のＵＳＮＡも潜在的競合要素を有している国。周囲を大国に囲まれている以上、戦略級魔法という抑止はどうしても必要となる。
　尤も、それをパワーバランスの観点から〝持ち過ぎ〟だと非難したがる奴はいるだろうが、第二次大戦の経緯からして大亜連合も新ソ連も、そしてＵＳＮＡも全面的に信用など出来ない。だったら自衛のための手段はあるに越したことはない。
　南盾島での作戦の際、リーナは〝世界の秩序〟という言葉を口にしたらしいが、それを双子特有の精神感応で聞いたセリアはリーナを締め上げながら「いつからＵＳＮＡ（ステイツ）中心の世界になったんじゃ、答えてみい!!」と問いかけていた。
　そんな質問を米国人であるセリアが言うのはどうかと思うが、結局のところＵＳＮＡも新ソ連も大亜連合もかつての〝五大国〟という影響に囚われているのだろう。それは無論、イギリスも言うまでもない話だろうし、フランスもそういう部分があるのは否定できない。
　ただ、フランスだけは戦略級魔法のことを二の次にしてイギリスと真逆の路線を取っているあたりは現実を見れているのかもしれない。
「過去の栄光って……そんなにいいものなのかね。支配する方は良くても、される側としては堪ったものじゃない。大事なのは、この世界から戦争という人殺しを抑え込むことだろうにとは思うけど」
「悠元……」
　絶対量が決まっている以上、それを巡って争うのは人の性だ。だからといって、他人の土地や財産を無条件で奪っていい事にはならない。列強諸国がアフリカ大陸でやったことはまさに国が認めた〝犯罪行為〟でしかない。
「自分が戦略級魔法を持ったのは、そんなかつての既得権益を取り戻そうとする奴らに現実という名の鉄槌を食らわすためだ。栄光なんかで人の生活が豊かになるわけじゃない。そんなに欲しけりゃ勝手に追い求めて、誰にも迷惑を掛けることなく沈んでほしい……ごめ

ん、父さん」
「気にするな。元はと言えば、そこまでの役目を背負わせている我々大人の不甲斐なさもある。何が十師族の当主だ……これでは悠元のことなど言えぬな」
ニジェール・デルタ地域で剛三の行為に手を貸したのは、大亜連合が合法と認めたような犯罪行為を知らしめ、その報いを受けさせるためだった。その一件と『灼熱と極光のハロウィン』で勢力を落とした大亜連合はかつての分裂状態になることを恐れ、その捌け口としてアフリカへの再侵攻を目論んでいる。
どうせなら首都近郊が混乱している新ソ連に侵攻して、ウラル山脈以東を切り取ってもらえばこちらとしても助かる。そのドサクサに生じて樺太と千島列島を〝旧ソ連の不法占拠状態からの奪還〟と称してこちら側に引き込むことも想定している。
なにせ、第二次大戦後に結ばれた平和条約は旧ソ連がサインしていない事実がある。つまりは「隙あらば侵攻する」という意思は佐渡侵攻とイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』で証明されているため、誰もそれを咎めるための材料など持ち合わせていない。
極東地域が大亜連合の支配下に置かれる懸念はあるが、一年を通して寒冷な一帯を支配下に置くメリットが正直少ない。精々地下に基地を作って自給自足できるように仕込むのが手一杯だろう。
まあ、こんな物騒な話はともかくとして、今大事なことは顧傑を確実に捕縛することだ。
「首謀者は現状のところ、多摩川以南かつ箱根以東にいる可能性が高い。この辺には周公瑾の絡みで隠れ家の存在や知己の魔法師が住んでいるのもあって、彼らを頼りつつ転々としている……この動きを当然ＵＳＮＡ側は掴んでいる」
「……国際問題はこちらの分野ではないから、悠元に任せよう。それで、テロリストは殺すのか？」
「いや、絶対に生きてＵＳＮＡに帰ってもらわないといけない。その引き渡し先は大統領の眼前だよ」

ＵＳＮＡ側――――厳密に言えば顧傑を唆した側は彼を殺そうとしている。別に彼を殺すこと自体に問題はないものの、その場所が問題なのだ。
仮に公海上で殺したとなれば、ＵＳＮＡ側の言い分は成り立つし追跡権も成立してしまう。スキャンダルの責任を全て死んだ顧傑に被せれば問題ないと踏んだのだろうが、関与した側が何のお咎めもなしにのうのうと職務を続けられるはずがない。その辺は〝愛国心〟という大義名分で片を付けるつもりなのだろう。
これが日本の領海内で殺害したとなると、即座に同盟国同士の国際問題に発展する。原作で十師族に反発してなのか、大きな動きを見せていない国防軍の責任問題にも直結する事態になる。
「つまり、悠元も動くのか？」
「人間主義者に片が付く大筋が固まり次第、神将会も動かして顧傑を拘束する。今回は爺さんと母上も前線に立つと明言しているから」
「……あまり無茶はして欲しくないのだが、仕方があるまいな」
外見上こそ若々しいが、実年齢を考えると双方共に８０歳代の高齢。元も二人の実力は理解しているが、あまり無茶はして欲しくないという年齢からくる心配を口にした。
「その際、ＵＳＮＡ軍関係についてはこちらで受け持つ。どうせ使い捨てしてくる兵士もいるだろうが、そいつらも回収してこちらの戦力に引き込む」
「パラサイト事件の際、『スターダスト』も引き込んだと聞いたが？」
「どうせＵＳＮＡに帰っても人体実験の憂き目に遭うのが関の山だ。本人たちもそれを理解したからこそ、こちらの提案を快く受けてくれた」
祖国に帰ってモルモット同然の扱いを受けるか。もしくは祖国を捨ててこの国を新たな祖国としつつ魔法師として生を終えるか。彼らが取った選択肢は言うまでもなく後者であった。彼らだって好き好んで『スターダスト』として身を窶したわけではなかった、と治療した際に聞き及んだ。
スパイというか非合法工作員（イリーガル）についても、密かに回収して戦力に組

み込めるように魔法力を鍛えさせた。彼らもその秘密を知った上で恭順の姿勢を見せてくれた。その一人曰く「ステイツの軍の上層部は、魔法を人の為ではなく道具としてしか見ていない。我々は彼らの都合の良い道具ではないことを生きて示したい」とのこと。
「国際問題に発展させる気なら、こちらが掴んだスキャンダル関連の情報を全部ＵＳＮＡだけでなく全世界に公表する用意がある。顧傑に関わった関係者の首が無事に済まなくなるだろうが」
「……やれやれ、そういった苛烈さは元治にも見習わせたく思うが、贅沢が過ぎるのかな？」
「俺は出来るからやってるだけで、相手が穏便に済ますなら引っ込めるつもりでもいる。ただ、テロリストを放置していたＵＳＮＡの責任はどう足掻いても免れないけど」
顧傑を拘束次第、政府や各種メディアを通じて十師族の全面協力によってテロリストを逮捕したと知らしめる。ローカルメディアである様な連行のシーンを敢えて撮らせることで、顧傑が逮捕されたと市井にも知らせる必要はある。そして、その際には京都・奈良方面で古式魔法に得手がある警察官を動員して協力してもらう算段は付けている。
この辺は『伝統派』の消滅による副産物だが、今回のことはあくまでも警察の面目躍如ということで主題を置くことが決まっている。その後、同盟の取り決めに従ってＵＳＮＡに護送される。もし、この時に爆破するような真似を企んだ奴は、その折に消えてもらうつもりだ。
この情報は神楽坂家で買収した国外メディアでも報道させ、世界に知らしめる。顧傑が『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』とも繋がりがあることも公表し、各国を篩に掛ける。これでこの国を害するように動くような奴がいれば、間違いなく〝敵〟の可能性が高くなるだろう。
「……そうだ、父さん。今年は沖縄の一件から５年の節目になる。多分だけど、彼岸の法要に関することもお願いが来ているんじゃないか？」
「もうそんなに経つのか……そうだな、我が家で言えば元治に穂波さ

ん、それに悠元も含まれる話だな」
２０９２年８月に起きた大亜連合による沖縄侵攻（沖縄防衛戦や沖縄海戦とも言われる）において、悠元は「上条達三特尉」として参戦し、現地協力員として参戦した達也と共に戦略級魔法で大亜連合を退けた。
今年は５年という節目に合わせて行われる慰霊祭が夏に予定されており、その流れで３月に彼岸の法要が執り行われることが決まっている。護人や十師族を含めた魔法師社会の中で、その関係者となると悠元と達也、元治、深夜に穂波の五人が該当する。
「魔法協会からも十師族の代表として元治に打診が来ているが……済まないが悠元、三矢家の代理として頼めるだろうか？」
「まあ、当時は半分三矢家の人間だったし、受けることは吝かじゃないよ。多分達也や深雪も出ることになりそうだし」
その辺の話は事前に真夜と葉山がいる前で相談しており、真夜としても達也の四葉家当主としての箔付けの意味で達也と深雪を法要に参加させると明言していた。なお、深雪の場合は自分の婚約者としてという形ではあるが。
「ふむ……悠元ならば適当に誤魔化すこともしそうなものだが」
「いやいや、俺も前線で戦った人間として死んだ人間を弔う責務はあるでしょう。全てを救うだなんて大それたことなんて言えないけど、せめて救えなかった人間の遺志ぐらいは汲み取りたいから」
そして、自分が出向くのはここ最近妙な動きをしている大亜連合とイギリスの絡みが大きい。その裏でエドワード・クラークが動いているのも確認済み。具体的には年明け辺り――厳密には、達也が四葉家の次期当主に指名されてからその兆候が見られ始めた。
相手が達也を戦略級魔法の使い手であることも、『トーラス・シルバー』であることもとうに掴んでいる。自分や達也の身辺を探ろうとしている連中は全て調べ上げており、中には新ソ連の人間もいた。漏れなく上泉家や九重寺行きになっているのは言うまでもないが。
「事件が終わった後で報告にまた来るよ」
「分かった。元治と穂波さんには伝えておくし、本人たちから改めて

代理を頼むようにしておく」
「やっぱり、初めての孫となれば父さんも嬉しいか」
「当然だよ。元継のところで引き取った子たちも含めれば、私は本当に果報者だと思うぐらいにな」
魔法力が上がらなければ、こんな風に他の家へ嫁がせることもなかっただろう、と元は付け加えた上で昔を懐かしむように呟いた。悠元が転生した時、元治はともかくとして元継より下が魔法科高校に通っていない時だったのも、そこまで大きな騒ぎにならなかった理由だった。
「何度も口にしていることだが、今にして思えばお前を受け入れたことが我が家の転機だったのかも知れないな。確かに恐ろしくも感じていたが、元々魔法が大衆に恐れられている部分を鑑みた時、私の悩みも些細なものだと思った」
「……正直言って、家督と家業を継がないと決めたのは十山家のせいだけど。一目見ただけで人を値踏みしている節があったのは確かだから」
「ははっ、その時に見通すとは……私の目がまだ曇っていなくて良かったよ」
十山家が懲りて大人しくしてればいいのだが、正直十文字家の地位が向上した際に擦り寄る可能性は捨てきれない。元々第十研の繋がりがあるため、同研究所出身者は身内みたいなものだ。
七草家の場合はって？　あれは第三研を政府の都合で勝手に飛び出したので論外。

法の論理とは何ぞや

バレンタインの雰囲気は街中にも見られており、悠元はそれに見て見ぬふりをしつつコミュニューターの最寄り駅に降り立った。すると、普段なら待っている筈のない人物が駅前にいたことに悠元は思わず首を傾げていた。

「達也？　珍しいな」

「時間通りだな」

達也は悠元からの解析結果を聞きたいと考え、今日は深雪や水波と帰らずにミーティングへ出席し、その丁度帰りであったらしい。指定された時間なら悠元と合流できると踏んで待っていたらしい。

「ミーティングは特に進展もなかったからな。今日は悠元絡みの用事もあるからと言って抜けてきた」

「それはまた……先輩たちや将輝は驚いてなかったか？」

「特にはな。ただ、一条が少々訝しんでいたが」

そもそも居候は深夜の提案を受け入れての形なので、別に一条家の顔を窺う必要性もないし、師族会議の中でもそれに関する話は出たらしい。ただ、将輝が知らない節を見せていたとなれば、多分剛毅は将輝に居候のことを伝えていないと考えられる。

ともあれ、寒空の下で立ち話もそこそこにしつつ、魔法で周囲の寒さをやわらげつつ司波家に向かいながら話をした。当然音声阻害の魔法は丁重に施している。

「――――テロに使われた炸薬と兵器は間違いなくＵＳＮＡ製の旧式対空ミサイルのもので間違いない。実はＵＳＮＡにいる工作員がロサンゼルスで解体された兵器類の残骸を発見していた」

「スクラップにして、炸薬だけ取り出したのか……先日の妨害は、そのスキャンダルを隠すためのものだな？」

「それだけならまだマシだけど、そこに大統領府や議会の関係者まで関与している。対処に来ているベンジャミン・カノープス――――本名ベンジャミン・ロウズの親族がな」

「……口封じの目的もあるわけだな。だが、この国の中で暗殺するの

は目立つだろう」
　達也のように『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』でもすれば早いが、『分子ディバイダー』は達也の『分解』には程遠いレベルで、顧傑の死体を消そうとするとかなり高出力の領域展開を有してしまう。これは『分子ディバイダー』の魔法の特性上、結合を分断する形状でなければ威力が十全に発揮できないデメリットを抱えているためだ。
　少なくとも、人体を粉微塵に分解するためには最低でも数百メートルに及ぶ領域展開が必要となり、そんな魔法を使えば間違いなく検知されかねないし、ＵＳＮＡ軍が日本国内で魔法を使用したことが問題視される。そうなれば、人間主義の運動は日本だけでなくＵＳＮＡ全体にまで波及してしまう。
　こんなシナリオはＵＳＮＡ政府内はおろかＵＳＮＡ軍統合参謀本部ですら認められない。そうなると、顧傑が逃げ出す手引きをするのは明白で、公海上に出た段階で殺すのが目に見えている。
「こないだの襲撃の際、マーカーは？」
「文弥と亜夜子がピンチだったからな。そこまでの余裕はなかった。悠元の眼で追いかけることはできないか？」
「出来なくはないが、相手にこちらの動きを見破られる可能性は捨てきれない。それに、達也が見つけることで相手を焦らせた方がいいと思う」
　本当ならばあのテロで死者を出すつもりだったが、大財閥である神坂グループのホテルを爆破しただけでも既に政府は財界から厳しい突き上げを食らっていることに加え、非魔法師からもテロに対して厳しい対応を求めるネットの声が凄まじいことになっている。
　この辺は怪我人に対して十師族を代表する形で十文字家が治療費の全面負担を申し出ていて（掛かった実費は他の十師族とも合わせて負担している）、更には国立魔法医療大学の生徒が最先端の魔法治療でケアもしている。
「相手がそう簡単に動くと？」
「この時点で仕掛けないと、顧傑は攻撃の手段を失うことに繋がる」
　テロで思った結果が得られなかった。メディアの動きもかなり鈍

化している。こうなれば、多少強引にでも手駒の残党を動かしてでも反魔法主義を強引に焚き付けるしかない。そうなれば、狙われる可能性があるのは残党が潜伏している三大都市圏の近く――――第一高校と第二高校がその標的になる可能性が高い。
「ただ、政府機関の周辺はテロ特措法の関係で集会行動が禁止されている。今回、国立魔法大学はその対象に含まれないが」
「同じ政府機関なのにか？」
「魔法という自衛の手段があるから問題ないとみている輩も多いんだと思うけど……今更だけど、高校生の話す内容じゃないよな」
「同感だな」
　達也とて出来る限り穏便に過ごしたい気質の為、悠元の愚痴めいた言葉に対しで肯定の意を示す様な口調で呟いた。
　気が付くと司波家の前に来ており、悠元が先んじる形で中に入ると、エプロン姿の深雪が出迎えてくれた。
「おかえりなさい、悠元さん。お兄様もご一緒だったのですね」
「ただいま、深雪。達也と丁度駅で会ってな」
「そうでしたか。ささ、早くリビングに」
　深雪に急かされる形で悠元がリビングに向かうと、そこには豪勢な料理がテーブル一杯に並べられていた。これには事情をある程度聞かされていた達也ですら目を丸くするような素振りを見せていた。
「……深雪さんや。これは嬉しいが、大変だったんじゃないか？」
「いえ、前日に仕込みをしていた分もありますので。今日は本気で腕を振るいましたので、遠慮せずに食べてください」
（それはいつものことじゃないのか？）
　悠元のツッコミが入り混じる様な問いかけに深雪は嬉しそうに答えた言葉を聞き、達也は内心で悠元のこととなると見境が無くなる妹に対して問いかけた。こればかりは深雪のこととなると本気で怒れてしまう自分が言えた台詞ではないのかもしれない、と達也が思ったことも含めて。
　何にせよ、同じく準備していた水波も含めて四人での悠元の誕生会は、会話も弾んで楽しく進んでいった。そして、バースデーケーキと

いうことで運ばれてきたのは……ワンホールサイズのザッハトルテであった。律儀に蝋燭に火を灯したので、悠元は静かに息を吹きかけて火を消した。
「お誕生日おめでとう、悠元」
「おめでとうございます、悠元さん」
「ありがとう、達也に深雪、水波も。しかし、ザッハトルテとは思い切ったな……一昨年の春のこと、根に持ってたのか？」
「そんなことはありませんよ」
深雪はにこやかにそう答えるが、誕生日のケーキに割と難度が高めのものを選ぶあたりは根に持っていたのだろう。ともあれ、切り分けられたケーキの皿を受け取り、悠元がまず口にする。
「……ふむ、美味しいな」
「本当ですか？　少し苦めになったのですが」
「本当だよ。別に苦い食べ物が嫌いという訳でもないし」
飲み物と食べ物が同じく苦くても、緑茶や抹茶は普通に飲める。コーヒーや紅茶は独特の味わいがあるので甘めにしないと嫌なだけだ。その反面チョコが程よく苦ければ割とバランスが取れるため、これは恐らくその辺を深雪が気遣った結果だろうと思いながら食べ進める。
「なら、コーヒーを貰えるかな？　ミルクと砂糖入りで」
「はい、わかりました！」
ご機嫌な様子でキッチンに消えていく深雪の姿を見ながらケーキを食べるわけだが、正直この後が山場なのは言うまでもない。チョコ代わりのバースデーケーキなんてその〝前菜〟に過ぎないのだ。
達也や水波もその雰囲気を感じているからこそ、特に何も言うことなく苦笑だけを浮かべていた。
ケーキを食べ終えた後、風呂にのんびりと浸かった際も特に突撃することはなく、脱衣所も兼ねた洗面所で悠元は髪を魔法で乾かして寝間着に着替えた。深雪ならやりそうなものなのに、それがないことに思わず首を傾げた。
地下室でやることも特にないため、そのまま自室に戻った悠元は目

を細めた。悠元の視線の先にあるベッド――――そこに不自然な膨らみが見えていた。そして、机の上に置かれた箱。恐らく、この仕掛けは悠元が箱に気を取られた隙にベッドから飛び出して飛び付く算段なのだろう。

（……甘いな、深雪さんや）

悠元は付けた部屋の電気をわざと消し、そのまま布団に潜り込んだ。すると、そこにいたのは予想通りの人物――――深雪であった。流石に何も身に付けていないという状態ではなかったが、透けているランジェリーで大事なところまで見えている始末だった。

「……いつ買ったの？」

「その、お母様に悠元さんを誘惑するにはどうしたらいいか相談したら、こんなものが贈られてきまして」

既に婚約者として発表されているのに、他の婚約者に主導権を握られまいとする本妻候補としての葛藤なのだろう。これを画策した人の思惑に乗るのは少々癪だが、正直一人の男子として今の深雪の恰好を見て理性を保てる自信はとうに無かった。

「今年も深雪自身がプレゼントになったのか。なら、遠慮なく頂こうか」

「今年も頂かれちゃうんですね……遠慮せずにお好きにしてください」

「そういうのを平気で言っちゃうのはズルいわ」

何度も言っている大事なことだが、最後の一線だけは死守しつつ深雪をそのまま抱いた。翌日が学校ということなどすっぽ抜けていたが、その辺は最悪魔法でどうにかしようと思いながら。

◇　◇　◇

そんな甘い雰囲気が翌日にはガラッと一変した。何が起きたのかと言えば、魔法大学前で抗議をしていた市民団体（大方人間主義絡みなのは間違いない）によるデモ隊が大学前をガードしていた警官隊に対して投石やプラカードによる攻撃を掛けたのだ。

「……暴力に走るとかどうかとおもうぜ」

「いやはや、全くですよ」

レオの言葉に燈也が頷く。せめて穏便に抗議していれば警官隊とトラブルを起こすこともなかった。いや、彼らからすれば警官隊がアクションを起こさせることこそ目的であり、その様子を彼らの意向に沿ったメディアが報道しているわけだが、そこには他のメディアが一部始終を放映しており、国営放送もデモの一部始終をノーカットで流している。

この放送の仕方でも姿勢が丸わかりなのは言うまでもないが。

「それでも全員逮捕出来る訳じゃありませんが、少なくとも数十人は下らないでしょうね」

「魔法も使われてたけど、相手が投石までしている以上は怪我をさせようとしているようなものじゃないの。何が『言論の自由に対する侵害』よ」

佐那の言葉にエリカが毒づいたのは、モニターに映っている弁護士が警察官の身の安全云々を置き去りにして『言論の自由に対する弾圧』を懸念するようなコメントを述べたことだ。

憲法で保障されている自由は何をしても良い〝自由（フリーダム）〟ではなく、法的に保障された基本的人権と公共の福祉による秩序の範囲で認められた〝自由（リバティー）〟だ。

分かりやすい例を挙げれば、職業の自由だって特定の職に就くために一定の手順を踏まなければならないことは誰だってわかる常識だ。一番触れる機会の多い言論だって公序良俗に反するようなものは情緒教育の観点から規制されているのに、デモ活動はまだしも、抗議相手をケガさせればそれは立派な犯罪行為でしかない。彼らには刑法という概念がないのだろうかと問いかけたいほどだ。

実際のところ、その夜のメディア報道――与野党の国会議員がそれぞれ別のメディアに出て論調を展開していた。与党側は「警察官は不法侵入や公務執行妨害として逮捕したまでであり、投石やプラカードによる攻撃が先である」という論調に対し、野党側は「手当たり次第に逮捕するのはやりすぎである」と非難するような論調であった。

警察官は職務としてデモの暴徒化の拡大を抑制するために働いたというのに、魔法一つでどうこう言うのはお門違い過ぎる。先に相手

をケガさせるような動きを見せておいて逮捕されないというのは流石に法に背く行為でしかない。これを見逃すのは法治国家であるこの国の司法が形骸化したと見做されてしまう。
『野党側はもう少し突いて来ると思ったけど、割と穏便ね』
「まあ、そうですね。尤も、この程度など序の口でしょう」
夕食の後、悠元は千姫と通話していた。『フリズスキャルヴ』で見られる可能性は拭えないが、そんな会話を一体何時何処で聞いていたのか？　と突いたところで連中は押し黙るしかなくなる。
『そうね。大阪方面の人間主義者が痺れを切らして動くでしょう。名古屋方面は軒並み壊滅に追いやられていますし』
「母上は宜しいので？」
『そっちの件は公安が対処していますので、態々出張る必要もないでしょう』
反魔法主義の動きは鳴りを潜めつつある。顧傑はこのままだと復讐の機運を盛り上げることが出来ずに朽ちるだけ。稲垣に撃ち込まれた刻印は早々に解呪したため、その反動を撃ち込んだ本人が受けているだろうが、こちらの知った事ではない。
『人形師』本人の生死は確認していないが、特に報告に上がってくることがない以上は生きているのだろう。
『悠君は彼が魔法科高校の生徒に危害を加えると睨んでいるのですね？』
「狙われやすいのは大阪に近い第二高校、そして都心に近い第一高校でしょう。とりわけこっちは顧傑の標的の関係者がいますから」
言論で埒が明かなければ暴力沙汰で事を解決しようとするのは『ブランシュ』の一件で経験済み。その例に則るならば、今度は魔法師がアンティナイトを使うことも想定している。おまけに、古式魔法の遠隔操作で魔法を放つ技術は第三研で研究されていた『サテライト・キャスト』の大本となる代物。その研究の一部が引き継がれた先は十山家である。
何とも皮肉めいた因縁というべきか……今はそのことに関して問うことなどしないが。

◇　◇　◇

その翌日、デモ活動自体は打って変わって穏便になっていたが、とうとう魔法科高校の生徒が反魔法主義者に襲われたという事件が発生した。

悠元は部活連本部室に詰めていたが、生徒会からの呼び出しを受けて生徒会室に赴いていた。部屋には生徒会役員だけでなく風紀委員会の幹比古と雫もいた。

「悠元さん」

「達也にはメールで簡潔に連絡しておいた。状況は？」

「現状は伝わっていること以外特には。今桜井さんが第二高校と音声会議を繋いでいる所だよ」

下校中の第二高校の女子生徒が反魔法主義者の集団に襲われ、助けが入ったことで女子生徒にケガはなかった。ただ、女子生徒が抑え込むために魔法を使用したものの、その加減を誤って犯人側が酷い怪我を負ったとのことだ……字面だけ見ても、未成年の女子を襲おうとした不審者の時点でどちらに非があるかなんて明白だと思う。

すると、連絡を受けて引き返してきた達也が生徒会室に入ってきた。

「悠元もいたのか」

「ああ。詳しい状況はまだ分からん。今二高と回線を繋げている所だよ」

すると、水波の方から回線が繋がった報告が上がり、深雪はマイクに向かって話しかける。

「第一高校生徒会長、司波深雪です。第二高校さん、聞こえていますか？」

『第二高校生徒会副会長、壬生光宣です。音声はクリアに聞こえています』

スピーカーから聞こえてきたのは、達也と悠元、深雪に水波、幹比古に雫やほのかにセリア、そして理璃にとって聞き覚えのある声が生徒会室に響く。

「光宣君。貴方が副会長になっていたのね」

『ええ。まあ、副会長の補佐みたいなものですが。ところで深雪さん、テレビ回線に切り替えませんか？』
「ええ、構いませんよ」
　こちらは特に見られても困る様なものはないし、音声回線が繋がっていれば映像回線への切り替えは直ぐに終わる。いきなり映像回線でないのは一種のマナーみたいなものだ。
　モニターには光宣の顔が映し出され、息を呑むような声が聞こえたが、光宣の方は嬉しそうな表情をしていた。
『お久しぶりです。達也さんに悠元さんもいたのですね』
「ああ。久しぶりだな、光宣」
「まあ、部活連会頭としても放置できる案件じゃないからな。久闊を叙すると行きたいところだが、詳しい事の次第を聞きたい。説明をお願いできるか、壬生副会長」
『分かりました、神楽坂会頭』
　事を簡潔に述べると、こうである。
　下校中の女子生徒が一人で下校していたところ、六人ほどの男性に取り囲まれ、彼らは大声で『人間主義』の教義を唱え始めた。この時点で迷惑行為甚だしいが、女子生徒が防犯ブザーを鳴らそうとしたところで男たちの一人が防犯ブザーを取り上げようと揉み合いになったらしい。
　正直に思うが、この時点で婦女暴行未遂と受け取られても仕方がない行為としか思えない。
　そこに騒ぎを聞きつけて同じ第二高校の男子生徒が四人ほど介入し、男たちと乱闘になった。その内2年生の男子一人が骨折・内出血を含む重傷、1年男子の一人が鎖骨骨折で、もう一人が脳震盪を起こした。残る男子一人と襲われた女子にケガはなかった。
　反魔法主義者の一人に拳法系の格闘技を身に着けていたものがいて、それによる被害を見て女子生徒が放出系魔法の『スパーク』と収束系魔法の『プレス』を使用したとのこと。反魔法主義者側の被害は不整脈が一人(元々高血圧で不整脈が出やすい人だった)、倒れた際に歯が欠けたものが一名、他は打ち身と擦り傷だそうだ。

光宣が通話に出たのは、生徒会長ともう一人の副会長が教官と共に警察へ出向いている為であった。
「正直、被害の度合いからすれば過剰防衛にならんだろう……というか、魔法技能の消失というリスクからして、過剰防衛なんて取り方をすれば警察の性根を疑いかねんと思う」
『あ、あはは……いつにもなく辛辣ですね』
「まあ、これでも武術を修めている身だからな」
単に怪我云々を量るのであれば、過剰防衛の線を疑われても仕方がない。だが、魔法科高校の生徒は極力魔法を使わずに救い出そうとした。相手がテロ事件の影響で表立って魔法を使えないのをいいことに武術で圧倒するなど以ての外だ。『ブランシュ』の一件の時は相手が武装していたので一撃で相手を気絶させたが、それと同列に出来るはずなどない。
いくら武術の本質が「弱きを助け、強きを挫く」とは言っても、魔法科高校の生徒を一律に強い人間と評する考え方には到底納得できない。とりわけ一番怪我の状況が酷かった2年生の男子相手にそこまでやったことが異常すぎる。内臓にまでダメージが行っている以上、明らかに〝殺意があった〟と見做せるような行為なのだ。
これで反魔法主義者をお咎めなしとするようなら、司法は立法と行政に対する叛意を見せたに等しくなる。いくら三権の独立性が謳われると言っても、魔法の存在を危険視するばかりで実用性を鑑みない司法官などこの国にとっては害を為す存在に成り下がるだけだ。

主義を語る前に社会常識を知れ

結局のところ、第二高校の魔法使用の件は過剰防衛とみられることはなかった。それが決定的となったのは男子生徒の一人が重傷で、二人も怪我を負った度合いからくるものだった。魔法使用に関する部分は刑法に盛り込むよう進言しているが、明確な判断基準が出ない限りは裁判官の思想の匙加減で自衛のための魔法使用を全面的に禁止することも十分考えられる。

「実際に被害が出ているから、今回は正当防衛であることを認める、か」

「被害が出ないとどうにもならないという時点で司法の限界なんだろうが……既に現内閣に対して刑法も含めて魔法に関する権利の明確化を進言している。尤も、施行は早くてもこの事件が解決した後になるだろう」

この一件はメディアでも報道するように仕向けており、多少のリスクはあろうとも被害が出ている以上はしっかり伝えるべきだし、一方的に難癖をつけて暴力を振るった事実は否定できない。そもそも、複数の男性が女子一人を取り囲んだ時点で反魔法主義に対する世間の心証は最悪極まりないが。

現行法における魔法使用の基準がかなり曖昧で、公務員の職務や民間人による公的職務の代行を除いて曖昧な匙加減となっている。これは魔法師が公権力の道具として使われてきた歴史的背景からくるもので、社会秩序の維持や災害防止の為、なるべく自由に魔法を使用できるようにする政府の思惑によるものだ。

なので、個人の魔法使用に対する基準を明確化すると共に、半ば機能していない魔法師ライセンスの代わりにこの国独自の国家資格として魔法技能検定による『国家魔法技能師』の制度を4月から立ち上げさせることで既に話が進められている。

基本は魔法科高校や国立魔法大学を卒業することで一定以上の基準を満たすものと判断して付与できる形とし、既に卒業している人間でも魔法師としての実務経験を鑑みて見合った等級に認定される仕

組みとなる。
　ようは医師免許などの特定の学校に通うことで得られる免許制度だが、古式魔法師向けにも一般試験という形で門戸を開く。現在の魔法師ライセンスでは評価しきれない部分を掬い上げる意味での制度なので、ここに関して魔法協会と競合することはないようになっている。
「政府による魔法師の管理だ」と反発する人間も出てくるだろうが、身元がハッキリしない人間の方が却って怖いのが当然の反応だ。
「こうなると、暫くは複数での登下校をするように注意喚起する必要はあるが、一高生が狙われないとも限らんからな……水波ちゃん、後でＣＡＤを貸してくれないか？」
「え？　元々悠元さんから頂いたものですので、お貸しすることに異論はありませんが……何をされるのですか？」
「元々ハードに組み込んでいて封印していた機能の解放と、試してほしい防御魔法があってな」
　元々深雪や水波の持っているＣＡＤには予め対『キャスト・ジャミング』用の機能が組み込まれているが、今まで使うこともなかったので一時的に封印していた。それの機能を解除すると共に、水波に対して新たなタイプの防御型魔法を提供するつもりでいた。
　これには達也が興味を持って尋ねてきた。
「悠元が作った防御型の魔法か。どういうものなんだ？」
「相手の攻撃を無力化する防御魔法というのは当たり前だが、今回は『極減速』をテーマに組み上げたものだ。今の水波の魔法力ならゆうに丸一日の継続展開でも余裕だろうとみている」
　反射したり逸らしたりして相手にダメージを返すのがダメだというのなら、相手の攻撃の速度を限りなくゼロにしてしまう方法。数学で言うところの無限級数の収束に基づいた理論で組まれたもので、原理的には複数の層を超高密度に圧縮した窒素でシールドの前に展開する仕組み。元々窒素を圧縮する工程は『窒息乱流（ナイトロゲン・ストーム）』や『ブリューナク』から改良したものなので、別段苦労はしていない。
　そしてこの魔法、本来は魔法を通過してしまう『キャスト・ジャミ

ング』を完全に遮断する効力も備わっているだけでなく、相手にそのまま『キャスト・ジャミング』を返してダメージを与えるもの（対魔法師を想定したもので、非魔法師相手にダメージは行かない）となっている。無理矢理突っ込んでいけば濃密度の窒素を吸って呼吸困難に陥る。勿論、外部からの接触判定に関する記述も入っているため、その窒素を吸った相手が精々軽い呼吸困難で数分ほど動けなくなるようになっている。

「達也は無論のこと、俺も出来る限り深雪の傍に居るようにはするが、部活連会頭としてすぐに対処できない場合がある。そうなると最後の砦は水波に他ならないからな。水波と深雪のＣＡＤにはシグナル発信機能も付けられているから、緊急時には躊躇うことなく使ってほしい」

「はい、分かりました！」

四葉家の人間として明かした以上、深雪が魔法師でない市民相手に魔法を使うのは不味い。深雪が武術で抑え込むことは可能だが、相手がそれを見越して複数人で襲い掛かってくる可能性もある。

悠元の頼みに水波は真剣な表情と確かな決意を以て頷いた。

◇　◇　◇

原作よりも強化されているとはいえ、達也と燈也しか強化されていない以上はそう簡単に進展が進むわけでもない。いや、厳密に言えば既に顧傑の行き先は確実に狭まりつつある。その前に片を付けなければいけない部分があるため、本格的に動いていないというだけだ。

２月１８日。卒業式も近いということで悠元は一人部活連本部室で卒業式の祝辞の原稿に取り掛かっていた。本来ならば在校生代表として生徒会長である深雪が担う部分なのだが、現３年生と何かと交流が多かった立場として深雪は悠元を指名したのだ。

悠元も世話や迷惑を掛けた側として断る訳にもいかず、渋々引き受けた。この辺は深雪の負担を減らすという婚約者としての気遣いも含まれているわけだが。

（……これは……）

キリの良いところで切り上げた悠元がふと深雪のほうに〝眼〟を

向けると、悪意が深雪の近くから感じられることに気が付く。そして、その悪意から読み取れるものを見て、只事ではないと判断。悠元は周囲に誰もいないことを確認した上で『鏡の扉（ミラーゲート）』を発動させ、一気に飛んだ。

流石に街中へ飛ぶわけにもいかない為、深雪の気配を感じる場所からそう遠くないビルの屋上に飛び、悠元はそのまま下に視界を向ける。

「……この絵面を見ただけで、非は連中にあるとしか思えんな」

悠元がそう零した理由は、男たちが深雪と水波、そして泉美と理璃を取り囲んでいた。そして、水波に予め渡していた防御術式『極減速防盾（アクセル・ディーセラレーション）』と理璃の『ファランクス』で連中の『キャスト・ジャミング』を防いでいる。この程度なら深雪が事象干渉力を上げるだけで対処できるレベルだが、自分や達也の言い付けをしっかり守っている証拠だった。

だが、この状況をただ見守るのは趣味でもない為、悠元は一息吐いてビルの上から男たち目がけて飛び降り、そのまま男の脇腹に蹴りを食らわす。そのまま壁に吹き飛んで動く気配はないが、死んでいないのは確かであった。

そして、深雪は嬉しそうに悠元の名を口にした。

「悠元さん！」

それを聞きつつも、悠元は『キャスト・ジャミング』に対して自身のプシオンの性質を付与し、全てのノイズを秩序化して掌握した。現代魔法においてはサイオンが重要視されるため、未だに解明されていないプシオンの制御などは一部の古式魔法にしか精通していない部分が多い。

突如ノイズが消えたことに男たちのリーダーはもう一度『キャスト・ジャミング』を放とうとするが、すると何かのヒビが入るような音が鳴り響き、次の瞬間には男たちが身に着けていたアンティナイトの指輪が粉々に砕けた。

「な、ななっ!?　アンティナイトが砕けただと!?　貴様、魔法を使ったのか!?」

「魔法？　言っとくが、系統魔法を含めた現代魔法なんて使っていないぞ」
　悠元が用いたのは、プシオンを付与したサイオンを相手のアンティナイトに過剰に流し込んで、ノイズ構造を秩序化するという反作用を起こさせる情報を流し込んだだけで、相手が無理矢理『キャスト・ジャミング』を発動させようとすることで指輪内に情報処理の相剋を起こし、情報過多状態で指輪が砕けた。
　その動揺の合間を縫うように悠元は深雪に目配せをすると、意図を察した深雪は水波と理璃に指示をした。
「水波ちゃん、理璃ちゃん。維持したまま人垣の外へ」
「分かりました」
「はい」
　幸い、通れる隙間は悠元が男の一人を蹴飛ばしたお陰で空いており、悠元の横を抜けるような形で人垣の外に出たところで、悠元が水波と理璃に声を掛けた。
「水波、理璃ちゃん。魔法を解いてもいいぞ」
「はい」
「深雪、三人を連れて学校に戻ってくれ」
「分かりました……どうかご武運を」
　深雪は三人を連れてそのままその場を去っていく。男とたちは未だに動揺していたが、リーダーが我を取り戻した。
「何をしている！　同志たちよ、邪教の徒を取り逃がすな！」
　男たちは先程悠元が気絶させた奴も含めて１５人。その先鋒として五人が悠元の横を走り抜けようとした。だが、それが彼らにとって悪い結果しか齎さなかった。悠元が息を吐きながら両手を勢いよく叩くように合わせた。
　その一瞬の後、五人の男たちは糸が切れたようにその場に崩れ落ちた。
「貴様！　魔法を使うのが許されると思っているのか!!」
「大人数で不法な監禁をしようしたこともそうだし、明らかに深雪らを狙い撃ったことも事実。更に言えば――――俺は警察省の特別捜査

官なのでな」
　そう言って悠元は懐から警察省の特別捜査官であることを証明する警察手帳を見せ、彼らに確認させた上で懐に仕舞った。尚、手帳自体は『神将会』が公的に活動する際の身分証明でもあるが、それを態々教えてやる義理もない。
「その上で、『エガリテ』の残党であるあんたらを不当な監禁および暴行未遂、並びにテロ対策特措法における軍事物資相当の稀少物資不法所持に加え、公務執行妨害で全員この場で拘束させてもらう」
　悠元がそう言って指を鳴らすと、男たちを取り囲むように私服姿の警官が３０人ほど姿を見せた。その中には寿和や稲垣も含まれている。
　元々、悠元は深雪が狙われる可能性が高い上に、十師族直系である泉美や理璃もそれに準じるため、寿和や稲垣をはじめとした魔法師の警察官に彼らの護衛を密かに頼んでいた。こちらが張っておいたあからさまな網にまんまとかかるあたり、彼らの稚拙さが見て取れた。
「こ、この……死に」
「はい、黙れ」
　リーダーと思しき人間が何かを抜こうとした瞬間、悠元は『抜き足』で彼の胸元に近付き、振動で彼の脳をまるでピンボールの如く揺らして強制的に脳震盪を起こさせ、気絶させた。その際に彼の呪印に気付いて無効化した。
　他の連中もその折に全員気絶させ、悠元はリーダーに『天神（オシリス・サイト）の眼』を向けた。こちらが片付けている時に達也が戻ってくるかどうかも分からない為、保険という形で彼に刻まれた呪印からその発動主の元を割り出し、『万華鏡（カレイドスコープ）』でその大本である『人形師』近江円磨の家を視た。
　達也の場合は『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』で因果を辿る必要があるが、悠元の『天神（オシリス・サイト）の眼』はリーダーが関わった人物の〝歴史〟を辿ることで魔法を掛けられた時点を割り出し、それに関わった人物の情報を情報体次元から引き出す。そして、悠元の固有魔法である『カレイドスコープ』は相手に一切察知されることなく必要な情報を見通す。

（……近江は殺されたか。近くにいるのは……間違いない、顧傑だ）
顧傑のいる場所は割り出した。明らかに顧傑らしからぬ焦りが見えるような行為からすると、恐らく顧傑の『フリズスキャルヴ』が凍結されたとみるべきだろう。明らかに切り捨てるような行為だが、そこから辿られて『フリズスキャルヴ』ひいては『エシェロンⅢ』を明るみにされたくないのだろう。
ハッキングツールが使えないとは言っても、未だにＵＳＮＡ軍の支援を受けているような状態に変わりない。
「悠元君。いえ、神楽坂殿。ご無事ですか？」
「寿和殿。ええ、大事ありません」
正直、達也にこの役目を担わせるつもりでいたが、今回ばかりは止むを得ない。既に必要な情報は神楽坂本邸にいる千姫に送信しており、早くとも今日中には結果が出るだろう。気絶した犯人らの動向の報告については本職である寿和らに任せ、悠元は「学校に事情を説明します」とだけ伝えてその場を後にした。
◇　◇　◇
悠元としては、あまり気分のいいものではない。とりわけ身内事のこともあるため尚更だが、今回は第一高校の生徒が巻き込まれた以上は細かい説明をする必要があると考えた。当事者側の事情を全て纏めた上で、悠元は教師らと相対していた。
「――では、桜井さんと十文字さんが障壁魔法を使った以外は、一切魔法は使っていないのですね？」
「ええ、その通りです」
深雪と水波、理璃と泉美は事情聴取ということで八王子署にまで出向いている。別の襲撃を鑑みて達也に同行を頼んだ。達也なら『キャスト・ジャミング』の対処法も理解しているし、万が一の場合は体術で打ち倒せるので問題ないと踏んだ。
被害を受けたクラスの指導教師に加え、校長と教頭の五人を相手にしているわけだが、正直悠元からすれば本気の殺気というものを知っているため、睨んだところで強がりに見えてしまうという悲しい現実もあったりする。

悠元が使ったのは、アンティナイトを砕くために情報を込めたサイオンを注ぎ込んだのと、サイオンを収束してショットガンのように拡散させることで至近距離からショットガンで撃たれたような感覚を相手に錯覚させ、気絶させただけに過ぎない。一人は割と本気の蹴りで壁にぶつけたが、命に別条がない事は確認している。歯の何本か歯折れたかもしれないが。

「相手がキャスト・ジャミングを使用したのは本当ですか？」

「それも本当です。その証拠となるアンティナイトの指輪は警察の方に引き渡しましたので、実物は持ち合わせておりませんが」

警察による連行の合間を縫ってアンティナイトの指輪を『天陽照覧』で修復し、それも『キャスト・ジャミング』を使った証拠として寿和らに引き渡している。そもそもアンティナイト自体が軍事物資指定の稀少物資であるため、個人がおいそれと持ち歩けない。

本当なら悠元も事情聴取の対象だが、今回は警察省の複数の警察官がその一部始終を見ていたためと、今回は警察省の特別捜査官として対処したため、報告書に関しては本職の人間に任せた。というか押し付けた。

すると、ここまで黙っていた校長の百山が口を開いた。

「神楽坂君。暴漢が司波くんや七草君の姿を見てターゲットを変えた、と別の女子生徒が述べていたと報告を受けていたが、本当かね？」

「はい。司波会長や七草さんの名を聞いた途端、別の生徒を取り囲んでいた男たちが突如狙いを変えたそうです。その上で司波会長らに人間主義の強引な説法を始めたと聞いています」

「つまり、彼らは明確な標的として取り囲んだと？」

「聞いた事情からすれば、間違いなくそうではないかと思います。何せ、あの場には十師族直系の子女が三人おりました。彼らが名を呟いた上で取り囲んだ以上、明確な意図を以て行ったとみるべきかと思われます」

この場では別に神楽坂家当主として振舞う必要もないため、年齢に応じた言葉遣いで悠元は百山の問いにハッキリと答えた。これを聞いた百山は明日から23日の5日間を臨時休校とする旨を口にした。

その意図が分からず教頭の八百坂は百山に尋ねるが、百山は怒らない代わりに「この程度も分からないのか」と言いたげな表情を向けていた。その上で百山は今回のテロが明確な目的を以て行ったとみており、凶暴化の懸念を考慮してのものだと口にした。
「単に見境なく行うのであれば不平分子の暴走だが、彼らが明確に標的を変えるような行動を起こしたのであれば、それは組織的かつ計画的な犯行の線が強い」
彼らの素性自体は既に知っているため、悠元は特に顔色を変えることはしなかったが、教頭や校長席の周りにいた大人たちは顔が蒼褪めていた。大体、一昨年春のテロ襲撃事件のことがあったのに、そんな楽観視できる方がその人の神経を疑いかねない。
それでも教師なんてよく名乗っていられるな、とは敢えて口にする必要も表情に出す必要もなかったが、悠元は百山に対して声を発した。
「百山校長。明日から２３日の臨時休校に関しての放送をしても宜しいでしょうか？」
「それは、君の部活連会頭としての判断かね？」
「はい。学校側からの緊急メールもあるでしょうが、現時点で学校に残っている人にも呼びかけをすべきだと判断しました」
「……そうだな。許可をしよう」
部活連会頭である悠元はこの学校で強い影響力を有しているため、彼の言葉ならばそれに反する動きを抑えられるだろう……そう思った百山は悠元の要請に対して静かに頷いたのだった。

今果心の呟き

学校での報告をして悠元は帰宅の途に就いたが、その折に達也からメールが来て「事情聴取に時間が掛かる」と連絡を受けた。多分１９時前後になるだろう、とのこと。

そうなると夕食を作っても時間が余り過ぎると思い、悠元は久々に九重寺へ出向くと、いつもならば偽った気配を読んで八雲辺りが出張ってきそうなのに、今日は上段の弟子の一人が出迎えた。

「神楽坂殿、これはどうも」

「おや、珍しいですね。八雲和尚は留守でしょうか？」

「いえ、今接客をしておりまして」

珍しいこともあるが、そもそも古式魔法師の間で八雲は『果心居士（かしんこじ）の再来』あるいは『今果心（いまかしん）』とまで謳われる御仁。本人は「世捨て人」と自称しながらもあらゆる伝手を有し、彼を知る人間がこの寺を訪ねることも少なくない。尤も、彼に見合う報酬を支払えるかはその人次第だろうが。

その八雲が来客を受け入れているとなれば、かなり限定されてくる。それこそ『護人』か『元老院』クラス、その口利きを受けたものぐらいだろう。

そんな風に悠元が考え込んでいると、寺の奥から歩いている人物が一人。歳こそ取っているのが風貌にも見て取れるが、それでも偉丈夫の面影を残すスーツ姿の男性。そして一際目を引くのが白く濁った左目を隠そうともせずに堂々たる足取りを向けるもの。

『元老院』の四大老の一角、青波（せいは）入道もとい東道青波その人であった。青波も悠元の姿に気付き、近付いて足を止めて頭を下げた。

「これは神楽坂殿。よもやこの場所で会うとは思わなんだ。聞けば襲撃に遭ったと聞いたが……其方に限って怪我など有り得ぬだろうがな」

「これは御謙遜を、東道殿。私とて不意を突かれれば怪我ぐらいは致します」

「そうか……八雲の茶は何時も上達せぬな。では、私はこれで」

愚痴気味に八雲の淹れた茶の感想を零すあたり、八雲のことを信用できないというか、弱みを握られたくないと思っているのだろう。八雲が『九頭龍』の長であることも大きいと思うが。
改めて弟子の案内で庫裏ではなく本堂の奥の間に通された悠元を待っていたのは、茶の間を意識したようなセッティングをして待っていた八雲だった。
「おや、今日は四大老の方々が態々不味い茶を飲みに参られたのかな？」
「皮肉はよしてください、九重先生」
「冗談だよ、悠元君。何にせよ、まずは一杯点てよう」
そうして八雲は丁寧に点てた茶を悠元に差し出し、悠元は一応礼儀作法に従って茶を飲んだ。これでいて「不味い」と言える辺りは東道青波の性格やら八雲への心情があるのかもしれないが。
「結構なお手前で。美味しいです」
「そうか、そうか。いやはや、流石に上司である君の前で不味い物なんて飲ませたら、君の母や剛三殿に拳骨を食らいかねないからね」
茶の礼儀作法は千姫から学んだものらしく、神楽坂家は魔法以外にも茶道や華道などの文化的な作法や技術の継承にも力を入れている。悠元は男性ながら一応学んでおり、本妻となる深雪もその作法などを学ぶことになる。
それはともかく、悠元は胡坐をかいた上で八雲と相対した。
「先程東道殿と会いました。何か依頼を受けたのですか？」
「依頼というか、達也君の補助をして欲しいと頼まれてね。彼が不都合な状況に陥らないようにして欲しい、ということらしい」
「……言い方は悪くなりますが、あの人は馬鹿ですか？」
悠元がそう言い放ったのは単純明快で、既にエドワード・クラークが達也の素性を知りえた以上、何らかの動きをＵＳＮＡを介する形でアクションを起こすのは明白。それだけでなく、彼が『エシェロンⅢ』を介してイギリスや新ソ連を突くことだって予想される。
ここまでのことを知らないのは無理ないとしても、『パラサイト事件』の折に達也は戦略級魔法師としての容疑をＵＳＮＡ軍に掛けら

れ、その始末として『スターズ』までもが動いていた。これを一過性と考えることの方が愚かとしか言いようがない。
「達也君がその状況に既に陥っていると？」
「正確に言えば、ＵＳＮＡの国家科学局のエージェントことエドワード・クラークは達也が戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』の使い手であることを認識しており、今回の一件はその下準備として顧傑を利用しています。彼が追跡を逃れるために用いていたハッキングツールの出所はＵＳＮＡの通信傍受システムなので」
「……閣下はそのことを知らないように思えたから、まだ楽観視するようなことを述べたという訳か」
　悠元から放たれた事実に、八雲は真剣な表情をしつつも頭を掻くような仕草を見せた。八雲も忍術使いとして情報収集に自信はあるが、現当主である悠元の情報収集能力には度肝を抜くほどだった。尤も、悠元は自身に関わりがない限り国外にリソースを振り分けており、国内のリソースは『九頭龍』などの専門職に放り投げている。
「そして、水面下ではオーストラリアと大亜連合も密かに動いています。そこで、九重先生にお願いしたいのは沼津にある顧傑が乗ってきた貨物船を平塚の新港に移動させてほしいのです」
「それぐらいはお安い御用だけど、顧傑の乗ってきた足を平塚に運ぶのはどうしてだい？」
「ああ、それなんですが……顧傑の棺桶になってもらうつもりです」
「ん？　一体どういうことなのか、説明してくれるかい？」
　八雲からすれば、青波から聞いた話――顧傑をこの国から追い出すのに手を貸してほしい――という趣も当然理解している。だが、悠元が頼んだことは一歩違えば顧傑の逃亡を手助けすることとなる。八雲の疑問も尤もである、と思いながら悠元は説明を始める。
「顧傑が海上に逃げて、公海上に出たところでＵＳＮＡ軍が出張ってくるのは目に見えています。いや、彼の逃亡を阻止しようとする十師族の実働部隊すら妨害するのも想定の内です。なら、味方と敵の思惑双方を根底から邪魔してやろうと思いまして」
「……成程、顧傑に化けて敵の目論見を欺くという訳だね。その間に

貨物船で顧傑を国外へ出せば、日本に出張っているＵＳＮＡ軍はこれ以上手が出せなくなる訳だ」
　当初、ＵＳＮＡ軍の攻撃の直前で介入して面子を潰してやろうと考えていた。だが、正直エドワード・クラークの一件でも腹が立っていたことから、思い切ってＵＳＮＡの目論見を根底から潰すため、悠元は顧傑の姿に偽って彼らの目論見が成功しかけたところで姿を明かし、直接交渉する方針にした。
　元々考えていた方針に少し脚色した程度だが、別段困ることはない。
「まあ、どちらにせよ顧傑はＵＳＮＡに引き取らせます。大漢の難民ネットワークを放置し続けた責任は大きいですし、向こうは向こうでスキャンダルものですし」
「手厳しい事を言うものだね」
「元は向こうの身から出た錆です。その錆落としをこの国でやらせようとした報いと受け取ってもらいます」
　そのため、今夜は夕食を作った後、達也の帰りを待って一気に行動を起こす。今回の作戦には実働部隊の誰かに協力してもらう必要があり、その中で一番適任である達也を引き込む必要がある。
　なお、逃げるパフォーマンスをする際、事のついでに顧傑の関係者を処分させる腹積もりでいる。実働部隊に負担を強いる形となるが、この国を少しでも良くするための〝仕事〟だと割り切って欲しい。
「そして、肝心の顧傑の代わりですが……爺さんに担ってもらいます」
「それは構わないけど、本人の許可は得ているのかい？」
「ええ。その代わりとして今夜仕掛けることになりましたが」
　顧傑に成り代わるとすれば、割と体格が近い人間が良いと考えた。剛三の方が体格的にがっちりしているが、この辺は魔法で誤魔化せば行けると踏んでいる。これを想定して魔法を付与する古代の方法を再現したりはしたが、まさか本当に使うことになるとは思ってもみなかったのが本音だ。剛三も最初は難色を示したが、ＵＳＮＡに一泡吹かせるためといわれれば引き受ける他なかった。
「……十師族は今回の逮捕劇に大きく貢献した、ということで政府と

警察から発表させます。その後の法律関連の仕事で手を抜くようならば、尻にダイナマイトでも仕掛けるつもりです」
「比喩だとは思うけど、君が言うと信憑性が出て来そうで怖いね」
平気で人を欺くような忍術使いの人に言われたくはないが、悠元は新たに点てられた茶を飲み干した上で静かに立ち上がった。
「それでは、顧傑が乗ってきた貨物船の方は任せました」
「確かに引き受けたよ。君も若いのに大変だね」
「……流石に文句の一つぐらいは言いたいですがね」
別に好き好んでこの役割を引き受けたわけではない。転生しても苦労を自ら買ってしまっている部分は性分なのかもしれないが、本来大人たちが正すべき部分を直さなかったことに起因する。既得権益を守りたい保守的思想は分からなくもないが、魔法という存在が世の中に出ている以上、それに即した体制作りは避けられないものとなってしまった。
悠元が出て行ったあと、八雲は苦笑にも似た表情を見せていた。
「やれやれ、あの歳で神楽坂の名を背負うだなんて、僕ならとうに逃げ出しているね」
八雲からすれば、達也ならばまだしも悠元の存在を初めて認識した時は冷や汗が止まらなかった。達也はまだ敵対さえしなければ穏便に済むだろうが、悠元の場合は敵対せずとも利敵行為に走った段階で切ることを躊躇わない。この辺は実の祖父である剛三譲りなのだろう。
ＵＳＮＡの一部が達也を敵視している以上、悠元がＵＳＮＡに対しての態度を崩さないことは明白で、しかも魔法以外の社会的・経済的手段を用いて相手を締め上げている。
いくら米軍が強大でも、それを裏打ちするだけの大衆の支持を得た大統領を抑えられては下手に動けなくなる。それを見越した上で動ける悠元に八雲は感嘆にも似た呟きを漏らしたのだった。
◇　◇　◇
悠元が司波家に戻ったのは１６時ぐらいであった。そして、悠元は手早く着替えて『ドレッドノート』を駆って第一高校に向かった。目

的は達也らの私物の回収であった。元々車両乗り入れの許可証は出している（家の都合でどうしても緊急の交通手段を用いるため、という目的で申請している）ため、特に呼び止められることもなかった。
　すると、悠元を出迎えるように燈也とエリカが立っていた。
「お、早かったじゃない。はい、深雪と水波の私物よ」
「こっちが達也の私物になります。しかし、かなり高そうなバイクですね」
「まあ、物が物だからな……二人とも、ちょっと耳を貸してくれ」
　悠元は後部座席のアタッシュケースに私物の入った袋を丁重に入れた後、悠元はヘルメットを外した上で二人を近くによらせ、小声で話す。
「今夜、テロリストの拘束に動くことになる。十文字先輩や将輝には達也経由で話す様にしておくが」
「……まあ、どうやって特定したのかは聞かないけど、兄貴に話した方がいい？」
「できれば直接口頭で伝えてくれ。今回の一件はＵＳＮＡも絡んでいるからな」
「ＵＳＮＡって……あの国はこの国を貶めたいのでしょうか？」
　悠元の言葉を聞いて燈也がそうぼやくのも無理はないが、その原因が人間主義者にあるということは今の時点で伝えるわけにはいかない。事の次第が全て片付いてからになるだろう。
「まあ、詳しい事情は今のところ何も言えん。燈也はこのまま十文字先輩の指揮で動いてくれ。必要ならレオや幹比古にも声を掛けるつもりだ」
「うーん……そうですね、万全を期すならレオの防御力は先輩に劣りませんし、自分から声を掛けます。エリカもいいですか？」
「ま、アイツの頑丈さはあたしが良く知ってるからね。対魔法師用のハイパワーライフルの弾丸すら〝潰す〟なんて人間業じゃないし」
　レオの防御力向上の訓練は続けられており、現状では極音速ミサイルですら無効化出来るほどの防御力を獲得している。その反面という形でエリカや夕姫に押しかけられているのは否定できない事実だ

が。
「分かった。そしたら今日の２２時、平塚の新港で合流ということで」
「オッケー。でも、いいの？」
「今回は国防軍が大っぴらに動かない以上、警察に頑張ってもらうしかないからな」
　エリカが懸念していることも理解するが、今回は警察の矜持を回復させる意味で必要なことだ。それに、国防軍は別口で動いてもらうため、顧傑の捕縛は専ら十師族の実働部隊に任せる事になる。
　尤も、ここにはもう一手切り札（カード）を加える形となることは殆どの人間に言っていない。そのカードは、使い方を変えれば立派な〝軍事力〟となるためであった。
◇　◇　◇
　達也らの私物を持ち帰って各々の部屋に置いて来たところで達也からメールがあり、聴取の合間に顧傑へマーカーを撃ち込んだと報告があった。口頭での連絡にしなかったのは、ＵＳＮＡ軍が顧傑の動きを把握している為だったという旨も添えられていた。
　帰宅は１９時ぐらいになるということで、悠元は夕食でも作ろうかと思案したところで端末の着信音が鳴り、悠元はそのまま通話ボタンを押した。
「もしもし、神楽坂ですが」
『あ、悠元。今はまだ学校？』
「いや、家に帰ってたよ。それで姉さんはどうして連絡を？」
　電話を掛けてきたのは美嘉だった。襲撃のことは少なくとも耳にしているだろうが、そのことを聞くまでもなく美嘉は本題を切り出した。
『今日、そっちの方で襲撃があったって聞いてね。それで、かっちゃん――十文字家の当主が達也君たちを招きたいと提案したの。その席に悠元も同席させたいことも』
　十文字家は警察関係にも伝手がある為、そのラインで情報を得たのかもしれない。今回の襲撃がテロ事件の後に起きており、双方とも魔法師を狙った事件となれば事情を聞きたいと思うのは無理もないだ

ろう。
「それは構わないけど、居候先にいる桜井さんを一人残すわけにはいかない。どうにか出来ないか？」
『水波ちゃんね……じゃあ、一緒に連れてきたら？　その子も当事者なんでしょ？』
美嘉は水波が一人となったところで襲撃されるぐらいなら、対処できる人間が傍に居る形で同行させた方がいいと踏んだ。どうせ一人ぐらい増えても問題ないとしたので、悠元は了承の旨を伝えた。
美嘉との通話を終えて達也の端末にメールを送ったところ、十文字家当主の招きとなれば無視も出来ない、ということで「了解した」と返信が来た。それが１７時過ぎ頃のことで、達也らが帰ってきたのは予定よりも１時間早い１８時だった。送迎に関しては寿和と稲垣がしてくれたらしい。
本来の時間よりも早かったのは、今回は警察官の現行犯の取り押さえという部分が大きく、一部始終を複数の私服警官が見ていたというのも大きい。なので、深雪らが聞かれたのは事件の事実確認だけで済んだ形となる。
達也らを労いつつも、克人の招きもあって失礼のない程度にフォーマルな恰好をしていくこととなった。尤も、悠元の場合は神楽坂家当主としての立場もある為、ノーネクタイのスーツ姿に着替えた。

不動の表情、止まらぬ悪寒

達也が案内する形で出向いたのは、ミーティングに使っているレストランだった。外見だけ見れば少し大きな戸建ての住宅にしか見えない為、紹介制のレストランということは間違いない。

深雪と水波は疑問を呈するような表情を見せていたが、特段驚くようなことでもない。魔法師と懇意にしている以上、どうしても隠しておきたい部分は存在する。ただ、その場には克人だけでなく佳奈に燈也、そして将輝がいた。

「お待たせしました」

「急に呼んですまないな。神楽坂殿もご足労をお掛けします」

「気にしておりませんよ、十文字殿」

この場には八人がいるわけだが、四人掛けのテーブルに達也は燈也や水波と同席する形となった。これは、今回克人が聞こうとしていることに達也はそこまで関与していない為だ。

そうなると、自ずと克人と将輝、悠元と深雪、そして佳奈で同じテーブルを囲むことになるわけだが、克人がテーブル端のホスト席に座り、深雪を佳奈の前に座らせた上で悠元は将輝の前に座った。

すると、分かっていた流れと言うべきか、将輝は深雪に対して怪我の有無を問いかける。特に何もなかったと深雪は社交辞令的な笑みを浮かべて返すと、将輝は顔を赤くしながら安堵する様子を見せた。

「神楽坂、今日は災難だったな」

「それは否定しません。幸い得手があったので人間主義者のリーダーが銃と魔法を使うところは抑えられましたが」

そして、克人は将輝を嗜めるのではなく悠元に声を掛けた。悠元と克人は互いに家の当主だが、この場でそれに目くじらを立てる必要もないと判断して克人の言葉に知られていない事実を付け加えた上で答えた。

「魔法？　その人間主義者のリーダーは魔法師だったの？」

「いや、正確にはそのリーダーなる人物を魔法の中継点――――俗に言う無線の子機みたく魔法を飛ばす古式魔法の技法によるものだった。

その一端は第三研でかつて研究していたものにも繋がるので直ぐに対処できただけだよ、佳奈姉さん」
　現代魔法で離れた相手に魔法を掛ける技術は元々第三研で研究されていたものの一つで、その技術は旧第十研にも提供された代物。悠元の言葉で昨夏のことを思い出した佳奈は口を噤んだ。
「そして、今回の一件に関わっていたのは『ブランシュ』の下部組織――『エガリテ』の残党でした。更にアンティナイトの出所ですが、一昨年春の事件で国防軍に引き取られたはずのものが一部紛失していたようです……正直、国防軍には知り合いもいるのであまり口悪く言いたくないのですが、職務の怠慢と言わざるを得ないほどです」
　『ブランシュ』に関してはその摘発に十文字家や七草家が関わっていたため、その残党がいるなど思いもしなかったような表情を克人が見せていた。だが、裏の世界は克人が思っている以上に複雑怪奇である。自分が危ないと見れば、平気で蜥蜴の尻尾切りを実行できる。そんなのが平然と罷り通るのがアンダーグラウンドの社会に他ならない。
「……神楽坂、今のは本当なのか？」
「本当だよ。使われていた指輪の形状があまりにも似ていたから、直ぐに調べてもらった」
　悠元はアンティナイトの保管状況を蘇我大将に依頼し、すぐさま兵器開発部で管理されているアンティナイトを調べたところで発覚した。ものの数時間で結果が出たということは、分かりやすい形だったのは間違いなく、現在はアンティナイトを含めた入退室記録を洗い出しているそうだが、出てくる可能性は低いとみている。仮にそうなったらそうなったで別の対応をするだけだが。
「リーダーに掛けられていた術式の記録解析を専門家に頼んでいます。早くても明日中には結果が出るでしょう。分かり次第先輩方にお伝えします」
「それはありがたいが……実働部隊に加われないと？」
「今の状況で船頭を増やしたら、忽ち泥船に早変わりですので」
　悠元と元継はあくまでも最後の詰めの段階にならないと動かない

――その意を伝えるように、克人の問いかけに対する答えとした。現状の実働部隊の構成上、悠元が下手に介入すれば指揮系統に混乱を生じさせることは事実であり、これには克人も頷くほかなかった。
「それにしても、深雪ちゃんは災難だったね……以前それっぽい人たちが第一高校の生徒を取り囲んでいたことはあったけど、私と美嘉の姿を見るなり逃げていったんだよね。丁度1週間前になるかな」
「そんなことがあったのですか……」
佳奈と美嘉も人間主義者と遭遇したが、その時の男たちの人数は七人程度だったらしい。見るなり逃げていったとなれば、十師族関係者なのに優先度がかなり下に位置していたことを意味する。
「深雪ちゃんが狙われたとなれば護衛を付ける必要があるけど……まあ、悠元がいるから事足りるかな」
「佳奈姉さん……もしかすると、今度は狙われる可能性があるんだから、あまり一人で出歩かないで欲しい」
「その時は、誰か近くの生徒に声を掛けて一緒に帰るようにする」
佳奈は悠元の強さを誰よりも知っているし、今回の一件の対処は主に悠元が担当したため、不足は無いとみている。それは理解しつつも悠元は心配そうな表情を佳奈に向けていた。それが血の繋がった実の姉弟からくるものだと達也や深雪は理解していた。
「そうですね、悠元相手なら人間主義者が逆に嵌められて社会的に抹殺されそうですし」
「……言っとくが、神楽坂家当主の前に魔法科高校の学生だからな、俺は。そんな事を言うなら、〝歩く爆散死体製造機(ターミネーター)〟の一条(コイツ)はどうなる？」
「お、おい、神楽坂!?」
「いや、本当のことだろう？　佐渡や横浜では『爆裂』で敵性勢力を屠ったことは紛れもない事実だろうに」
物理的にグロテスクかつホラーの光景へと変貌させる魔法を使える将輝のことを悠元が指摘すると、将輝は「そんな人間じゃない！」と否定したがったが、悠元から言われた事実に思わず怯んでしまった。
「ま、京都では多少なりとも成長していたのも事実だな」

「……お前は人を褒めたいのか貶したいのかどっちなんだ？」
「両方」
「はぁ……」
　将輝に対して平然と言ってのける悠元の態度に反抗しようとも思ったが、この場には将輝の想い人である深雪がいる以上、彼女の前で子供のような真似は出来ないと諦めて大人しく引き下がった。当然、悠元も将輝が変に反論しなかった理由を察しつつ、話を続けることにした。
「そんな態度を見せるってことは……深雪を囮にでも使うつもりだったのか？」
「そんなことはっ……！」
「ま、どうせ真紅郎（ジョージ）が一応前置きを置いた上で考えたんだろうが……そこで一条が代わりに申し出たところで囮の意味がなくなる」
　将輝の武名（実績）はこの国で知らぬ者はいないし、国外にも知れ渡っている部分がある。明らかに相手を殺せる魔法を有する将輝を矢面に立たせるのは明らかに失敗する流れしか見えない。彼の魔法が『爆裂』だけでないことは無論知っているが、彼が囮になることで却って魔法師に対する恐怖を煽る結果に繋がりかねない。
「ちなみに、護衛の提案は一体誰が？」
「智一殿だ。流石にいきなり頭ごなしにするわけにもいかないと思ったのでな」
「不要です。必要であれば自分が深雪の護衛をします」
　神楽坂家当主が自分の婚約者の護衛というのは変な話に思われるかもしれないが、この辺はしっかりとした算段があって成り立っている。元々居候である悠元からすれば、世話になっている司波家（達也と深雪）の人間を守るのはその対価の一つであり、護衛をするのは別段おかしい話ではない。
　十師族の観点で言っても家督継承から遠い自分と異なり、達也と深雪はその椅子に最も近い存在だった。魔法力や実戦力の観点を抜きにして考えれば、力のある人間が弱い立場の人間を守るのは「筋が通る」と考えている。

提案主は智一とのことだったが、七草家当主の意向が入り混じっていないとも限らない。なお、真由美に関しては三矢家から通う生活を続けており、その間の部屋は悠元が元々使っていた部屋で生活しているらしい。自分の為に部屋を余らせる必要もないので、そこに関しては特に気にしていない。

「その点で言えば、アンティナイトの経験がない十師族関係者が狙われる可能性があります。幸い、第一高校は２３日まで生徒の安全確保の為に臨時休校となりましたが、付け狙われることもなくは無いと思います」

「そうだな……今回は理璃も巻き込まれている以上、他人事とは言えんからな」

その後、ミーティングもそこそこに会食と相成ったが、将輝が若干居づらそうにしているのを達也は心の中で「ご愁傷様だな」と何故か呟いた。複数の女性に言い寄られる立場は理解できなくもないが、将輝の恋を叶えるためのハードルは将輝本人が思うよりも遥かに高いことに当人は全く気付いていない。

（まあ、万が一深雪を振り向かせたところで手綱を握れるとは思えんがな）

何せ、自分の妹（正確には従妹だが）は独占欲が強いし、急激に伸びた彼女の魔法力を完全に抑え込めるのは自分か悠元の二人だけしかいない。

そもそもの話、悠元と深雪の関係が婚約者とは言っているものの、内情を見れば立派な夫婦みたいな関係になっている。深雪を強引に奪おうとすれば、悠元の怒りを本気で買うことになる。

まだ悠元が将輝のストーカー化を危惧して穏便に出ていることを将輝が感じ取れればよいのだが、それを認識している節は見られない。

一途な恋を向けて来るという感情という意味では、達也はほのかが該当すると思っていた。ただ、彼女の場合は達也の事情もあって受け入れられたが、将輝の場合はそうもいかないし、既に恋仲となっている相手がいる。しかも、その相手は同じ十師族の係累にして名家の当

主。
単純に「分が悪い」という言葉で片付けられればどれだけ楽だろう……と達也は思わなくもなかった。
◇　◇　◇
顧傑は焦っていた。
彼とて、この国のことを最初から軽んじていたわけではない。かの英雄と呼ばれた上泉剛三は四葉の復讐劇で力を落とし、もう一人の英雄である神楽坂千姫も永らく表舞台からその名を見せなかった。
だが、その片割れで神楽坂の名を継ぐ者が浮上した。彼の者の名は神楽坂悠元。その存在はこの国で開催された九校戦にてその存在感を如何無く発揮し、十師族すら抑え込む芸当を見せた。
だが、いくら彼でも古式魔法の全てを把握しているわけではなく、彼自身が先導するわけでもない。十代という若さからすれば、十師族の当主のように動くことはまずないだろうとみていた。
実際、箱根のテロは不発に終わった。顧傑はすぐさま原因を探ったが、出てきた情報は皇宮警察本部特務隊『神将会』が関わったという事実だけ。『フリズスキャルヴ』で皇宮警察のサーバーを探っても、それに繋がる情報は一切該当しなかった。
メディアや人間主義者を煽ろうとしても、神坂グループ――神楽坂家によって抑え込まれた。そして、その現当主は十代という若さでその地位に就いた神楽坂悠元。彼が飾りではなく本当の意味で当主として動いているのならば、顧傑にとって勝ち目は一切なくなるも同然だった。
手駒であった周公瑾が死んだ遠因に彼の存在が関わっていたという情報がある以上、この国に留まり続けるのは四葉家への復讐を完遂できなくなるリスクしか負わない。知り合いの魔法師が剣術家の子弟に印を打ち込んだがあっさりと解除されたこともそうだが、いよいよ顧傑にとって脱出が出来る機会のリミットは刻一刻と迫っていた。
（……っ!?　な、何だ、意識が……こんな、時に……）
すると、顧傑は誰かから見られている気配を察する間もなく息苦しさを覚え、急激に意識がブラックアウトした。死に至るわけではない

というのは自身が使う魔法から察したものの、抵抗する猶予もなく顧傑は意識を手放したのだった。

◇　◇　◇

会食を終えた悠元は達也と深雪、水波に同行を願った上で本気の隠形を展開し、林の中で達也が顧傑に想子のマーカーを打ち込んだ直後に悠元が『オゾンバレット』で顧傑の肺の中にオゾンを発生させ、意識を奪った。どの程度の量で死に至らなくなるかは横浜の時に実験済みだし、死んでも２４時間以内に『天陽照覧』で一度だけ蘇生が出来る。

その上で、悠元は達也のマーカー座標を基に『鏡の扉（ミラーゲート）』を発動させ、意識を失った顧傑の身体を移送した。

「……犯人だけをこうやって確保できるのはお前だけだろうな」

「まあ、今回は事情があるからな。とりあえず、余計な魔法が発動しないように仕込みをして……」

三人には予め事情を説明しているが、今回の方法はあくまでも相手を騙すための仕込みであり、この魔法の存在を世に出さないための口止めを頼んだ。その際、深雪からは「暫くは一緒に寝てください」という普段とあまり変わりないお願いに達也が悠元の肩に手を置いて同情の念を送っていた。

そんな事情はともかく、悠元は顧傑の額に札を貼った。見た目は僵尸（キョンシー）みたいなものだが、これはれっきとした〝魔封じ〟のためのもの。顧傑に掛けられ続けている魔法はともかく、それ以外の魔法発動を封じるために施した。

「そういうわけでして、暫く隠しておいてください、九重先生」

「まあ、神楽坂の御当主様の意向なら断ることもできないね。法的に正当な手段で追い出したとなれば東道殿も納得するだろうし」

そして、暫く身を隠せる場所として九重寺を選んだ。これは一種のアピールの為に必要な措置であり、最終的に公的な手段で国外へ追放するとなれば東道青波も納得するだろう、と八雲は愚痴をこぼすように呟いた。

八雲は顧傑を担ぐと、何事も無かったかのように消えていった。

「さて、向こうの仕込みも既に終えたし、残るは……達也の出番だな」
「そうなるな」
別にこんな事態を想定していたわけではないだろうが、そこまで表情に出ないことがこの時ばかりはありがたいと達也は思わなくもなかった。
◇　◇　◇
ベンジャミン・カノープス少佐はここまでの動きを訝しんでいた。いや、そもそも出国する前の段階で日本側がＵＳＮＡの情報を掴んで行動を起こしていたとする状況証拠はいくらでもある。その点で言えばヴァージニア・バランス大佐の指摘は当たっていたと言えよう。
（だが、テロ事件を死者の一人も出さずに収束させる……それは可能なのか？）
いくらカノープスが優秀な軍人魔法師といえども、『スターズ』が網羅できる範疇はあくまでも現代魔法もしくはネイティブアメリカン関連の古式魔法が殆どだ。顧傑――ジード・ヘイグの魔法の技量は定かではないにせよ、並の魔法師で太刀打ちできる相手とは思えない予測が出されたからこそ、カノープスに白羽の矢が立った。
その相手の魔法を全て読み切り、相手を騙して死人が多数出たように見せかけた。結果として怪我人は出たものの、死者はゼロという無差別テロ事件として最小限の結果に終わったことは確かだろう。
メディアや人間主義者の件も大枠で見れば不発に終わり、こうなるとジード・ヘイグは脱出を余儀なくされることになる。
今回の任務は非合法性が極めて高いため、昨年の脱走兵処分事件よりも極めて高い難度の証拠隠滅が求められている。日本の強化兵は軒並み引き抜かれて使えなくなってしまったため、已む無く『スターダスト』まで動員する形となった。
失敗は許されない任務。だが、カノープスは正直冷や汗が止まらなかった。それは、顧傑の暗殺そのものが失敗するという懸念よりも、これから刃を揮う相手がとてつもなく強大な〝何か〟を相手にするかのような……そんな予感をモニターの先に映る顧傑の想子パターン反応が発しているような気がしてならなかったのだった。

立ち昇る蒼雷の龍

上泉剛三が顧傑の代わりを引き受けたのは、大まかな目で見ればお互いに〝被害者〟であることに他ならない。

剛三は身内同然の四葉の人間だけでなく、実の息子を『元老院』に殺された。顧傑は崑崙方院の権力争いに敗れてその地位を剥奪されるだけでなく国を追われた。裏舞台を知り、互いに失ったものがある両者が別々の道を歩んだのは、そこに〝家族〟という存在の有無が一番大きかったのだろう。

実際のところ、顧傑に復讐心を掻き立てる術式を植え付けたのは他ならぬ『元老院』の人間ということも剛三は理解していた。恐らく、あわよくば剛三や千姫と言った実力者を社会的に葬る為の東道氏や樫和氏の企みだと知りつつ、剛三は顧傑の行方を積極的に探そうとはしなかった。

結果的にその当人が自分の子や孫に迷惑を掛けている以上、その尻拭いをすることに剛三は溜息しか出なかった。

「黒顧大人（ヘイグダーレン）、杜（ドウ）です。入っても宜しいでしょうか？」

「入れ」

そうやって思案していた顧傑に扮した剛三の下に、一人の人物が姿を見せた。彼は顧傑が座間から逃げ果せるときにその逃亡の手助けをしていた人物。名前は「ジョー＝杜（ドウ）」と述べていたが、明らかに身元不明の死体や被疑者に付けられる「ジョン・ドウ」から付けたとしか思えないことに内心で苦笑した。

彼は昨晩、顧傑（剛三）の無事を確かめてそのまま姿を消したが、特に訝しむ様子は見られない。元々天神魔法の術式から現代魔法用にアレンジされた『仮装行列（パレード）』は、悠元という規格外の才能を介してなり替わる相手の想子パターンまで全て再現する『幻影仮装（ファントム・イリュージョン）』となり、剛三はそれを断続的に発動できるＣＡＤで顧傑に成り代わっている。

「平塚に沼津に置いた貨物船を移動させました。ひとまずはそちらに向かいましょう」

「敵が網を張っている場合があるが？」
「そこについても対策はしておりますので……いつ発ちますか？」
今のところ、内密の連絡で十師族の実働部隊に動きは見られない。だが、動くとすれば今夜だろう。恐らく顧傑本人もそう考えて動くに違いない。
「夕方の時間に発つ。その時間なら非魔法師も市街地にいる以上、下手に手出しは出来んだろう」
「畏まりました」
部屋を出て行く杜を見送った後、剛三は一息吐いた。
顧傑程ではないにせよ、自分もそろそろ９０歳という大台が見えている年齢。後継は既に託したが、まだ隠居は出来ないと思っていた。それは、国内の情勢が片付けば次は海外絡みが浮上するためだ。
「……別に恨みはないが、主には次代の礎になってもらうぞ」
剛三が零した言葉。これが顧傑に対してのせめてもの手向けだと知るのは……剛三以外に居なかったのだった。

◇　◇　◇

十師族もＵＳＮＡ軍も顧傑の居場所――――正確には顧傑に成り代わった剛三の居場所だが――――を突き止め、双方共に動き出した。実働部隊は克人が主体となって、将輝と燈也、そして事情を知っている達也がいる。そして、信憑性を増させるために〝アンジー・シリウス〟となったリーナも同行させている。
「大丈夫でしょうか？」
「まあ、その辺は爺さんがどう動くかにもよるが……ジョセフ・ドゥ（ＵＳＮＡ側におけるジョー＝杜のコードネーム）は気絶させて平塚新港に向けて動き出したな」
表面上の構図はテロリストを追う十師族側とそれを妨害するＵＳＮＡ軍側。だが、実際には顧傑に扮した剛三が単独で車両を動かし、平塚新港に向かっている。ジョセフ・ドゥを犠牲にしなかった辺りは剛三なりの優しさなのかもしれない。
船の甲板上で端末を見ている『神将会』の戦闘服を纏った悠元に、その傍で同じく戦闘服を身に纏う深雪が見つめていた。

「ＵＳＮＡ軍側に予定外の動きは無し……さて、始めますか。艦長、予定海域にはあと何時間で到達しますか？」
『予定では３０分後となります、閣下』
「ありがとうございます。作戦が終わるまで警戒は厳に」
『了解であります』
　冬の海上ということで海風が当たる為、その軽減フィールドを張りつつ通信機で尋ねると、相手先の艦長と呼ばれた人物は忠実に職務をこなしていた。彼には悠元が国防軍関係者であることが明かされ、その序列に基づいて言葉を返した。
　蘇我や風間の件で分かってはいるが、正直年齢に応じた話し方が中々出来ないことに若干不機嫌となり、これには深雪が笑みを禁じえなかった。
「それにしても、これだけの〝空母〟をどこで調達したのですか？」
　悠元と深雪が立っている場所は、空母のカタパルト部分の端。そして、それは先日公式に発表された「ずいかく」型航空母艦よりもさらに大型となっていた。海洋国家である以上は抑止力として必要なものだが、全長にして３５０メートル超の大型空母となれば周辺国も騒ぐだろう。
　だが、敢えて騒がせることで達也からの目を逸らさせるために悠元は国防軍の戦力として発注した。無論、建造の費用全額を悠元の個人資産から出していて、最終的には政府が買い取って運用することになるため、結果的に懐が痛まないわけだが。
「調達したというよりも建造させたんだよ。魔法技術の一環として『太陽炉』を搭載した新型航空母艦――『ずいほう』型原子力空母」
　核融合も核分裂も広義的に見れば原子の力を用いるため、その意味で原子力空母という扱いになる。表向きは水素と酸素の燃料電池稼働がメインであり、『太陽炉』はそのサブシステムとして運用される。
　『太陽炉』――『恒星炉』とは基本理論自体同じだが、重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させることで半永久的なエネルギーを得るという創作物の代物だった。ただ、悠元はその作品における問題点を全て魔法で解決してしまったため、地球内で製造できてしまった。

正直機密塗れの代物の為、動力源のほぼ全てをブラックボックス化し、メンテナンスは神楽坂家お抱えのごく一部の技術者にしか触れないようになってしまったし、「ずいほう」以外に搭載する気はない。
「それは、お兄様の『恒星炉』とは違うのですか？」
「基本理論は同じだが、俺が手掛けた四基の『太陽炉』は古代文明の魔法技術がかなり用いられている。一つはこの船に積んであるが、残る三つは『恒星炉』のサブシステムとして使うことになる」
正直、四基も作ったのは『複製』の実験も兼ねて増やした結果であり、こればかりは反省したくなった。使わないのは癪なので『恒星炉』の発電システムのバックアップ機能として使うことにした。
この秘密は、少なくとも神楽坂の名を継ぐことになる人間にしか教える気はないが。
閑話休題。
「さて、実働部隊の方は……やはりＵＳＮＡも動いてきたか」
克人と将輝、そして燈也はＵＳＮＡ軍によって足止めを食らっていた。だが、確実に制圧されていく妨害部隊がいきなり発火したのだ。兵士だけでなく武器までもが。
「深雪、大丈夫か？」
「は、はい……ここまで、やるのですね……」
「ＵＳＮＡの肩を持つわけじゃないが、相手とて下手に証拠は残せない。その為の自爆魔法だ」
分かってはいるが、胸糞が悪くなる光景に悠元は深雪を気遣うように声を掛けた。深雪は「大丈夫です」と返すが、顔色が多少良くないのは確かだった。なので、悠元は頭を撫でつつ端末に映る光景に目を凝らした。
兵士に関しては、現場近くに十師族の部隊がいるので今すぐに対処はしない。２４時間以内に回収できればいいので、特段問題にはならないだろう。
達也と将輝、燈也とリーナは近くにいた沿岸警備艇に乗せてもらう形となった訳だが、そこには真由美も同乗していた。今回は七草家の関与を極力排除していた筈だ……恐らくだが、発破をかけたのは佳奈

か美嘉だろう。
今回のことで七草家が瀬戸際に立ってしまった以上、その人間としてではなく七草真由美個人として何をするのか、と問いかけたのかもしれない。ただほとぼりが冷めるまで動かない選択肢もあったが、真由美がその行動を取ったことで結果的に原作をある程度なぞる様な形となった。
尤も、八雲は顧傑の身柄を預かっていることもあってその場に居合わせていないが、千姫が代わりにいた。こうなると、真由美が七草家長女ではなく一個人として協力しているとみるべきだろう。
そして、二人がいる空母は予定海域となる大島と房総半島の中間海域に差し掛かった。これだけの空母を隠すのは普通無理だが、そこは悠元という存在あってのことだった。二人の視界には、陸地から向かってくる高速貨物船とそれを追いかける高速巡視船、そしてそれに横槍を入れようと近付くＵＳＮＡ軍の駆逐艦の三隻が映る。
その駆逐艦から飛行魔法で飛び上がった物体――ベンジャミン・カノープスが魔法を発動した。その魔法は無論、分子間結合力反転術式『分子ディバイダー』。並の魔法師相手ならば確実に消え去ってしまう威力だが、悠元はそれを振り下ろしたカノープスに憐みにも似た表情を見せた。
「まあ、確かに合理的だ。顧傑ならばそれで消し去れる……だが、相手が悪かったな」
そう呟いた直後、高速貨物船から立ち上る蒼き雷の龍。その龍が真っ向から『分子ディバイダー』の展開領域に食らいつき、それをまるで紙でも引き千切るかの如く食い破った。一体何が起こったのかを察するまでもなく、その物体は弾き飛ばされるように駆逐艦の装甲に叩きつけられた。
◇　◇　◇
殆どの人間が呆然とする中、急遽停止した高速貨物船。そしてその貨物船から巡視船に飛び乗った物体に警戒するが、千姫は特に警戒すらしていなかった。この事態をまるで分ったかのように呟いた。
「まったく、独断専行なんて何時ぶりですか」

「年甲斐にもなく張り切ってしまったわ。皆の者も済まぬな」
「剛三さん、お久しぶりです」
「正月ぶりになるかの、達也君。言っておくが、後のことは孫と千姫の倅に任せてもらえるか？」
「……そうですね。ＵＳＮＡ軍の方もお願いします」
　達也は顧傑を拘束したことを知っているし、その対処の適任者は他にいるので問題ないと判断し、頭を下げて不利益が来ないように頼み込んだ。これには剛三も笑みを零した。
「任せておくがいい。千姫、こやつらの世話は任せるぞ。わしはこれからＵＳＮＡに飛ばねばならんからの」
「まさか、いつぞやに聞いたやり方ですか？」
「それもあるがの……あの根性なし共にお灸を据える意味でも、今回は大人しく輸送機で行くさ」
　巡視船に対して駆逐艦のほうから抗議の通信が入っており、困り果てている巡視船の船員からレシーバーを受け取ると、剛三が応じた。
「わしが当事者の上泉剛三だ。さて、今回は我が国に甚大な被害を齎したテロリストを捕まえるために潜入していたが、それに向かっていきなり『分子ディバイダー』を放つとは一体どういう了見か？　いくら抗議しても構わんぞ？　尤も、貴様らにわしを怒らせた代償が支払えるか否か」
　スピーカーからは『ふざけるな！　そんな言い訳が通用すると思っているのか！』と声を荒げていたが、剛三から大統領に直訴することが言い放たれると、彼らは逆に慌て始めた。どうやら、以前にも何度か同じことがあった様に思えた達也だった。
　そして、通信を終えてレシーバーを船員に返すと、達也らに向き直った。
「此度の一件、実に見事であった。主等が更に成長して十師族の一角を担い、この国を護ってくれることを切に願っておる。では、わしは野暮用があるのでな」
　そう言い残して去っていった剛三。まるで台風が過ぎ去った後のように周囲は静寂に包まれ、聞こえてくるのは海の風の音と巡視船の

機関音だけであった。
事は終わった。最悪ＵＳＮＡ軍が駆逐艦以外に兵器でも持ち出してくるかと思ったが、杞憂に終わって何よりだった。流石に妨害部隊のことで深雪の機嫌が悪くなったため、休校期間は深雪の機嫌を直すのに注力すべきだろう。
すると、巡視船が近付いて達也が甲板に飛び乗ってきた。流石に強化された達也の眼では誤魔化せないだろうし、仕方がない。
「達也、お疲れさん」
「単に走っただけだったがな。深雪は大丈夫か？」
「はい……悠元さん、今日は寝かせませんから」
「……大変だな」
「今更だよ、達也」
ともあれ、達也はそう労った上で二人に同行する形となり、「ずいほう」はそのまま横須賀港に到着する形となった。
その翌日、日本政府からその空母が世界に公表され、テロ対策も含めた海洋の安全保障政策の一環として極秘裏に建造したと発表。国外からの問い合わせが相次いだが、この国がここ数年海外からの攻撃を受けていた事例を挙げ、その対策としての海軍強化であり、パワーバランスの観点から言っても極端な変化は起こさないと主張した。
◇　◇　◇
顧傑に扮した剛三の登場により、ＵＳＮＡ側は混乱に陥っていた。ホワイトハウスは無論のこと、ペンタゴンも無論混乱の極みにあった。参謀本部の予測では、四葉の復讐劇で十全に魔法を使えないと判断してベンジャミン・カノープスの派遣を認めた経緯があるのに、それがあっさり破られるとは思ってもみなかったためだ。
そして、剛三に突き飛ばされたカノープスは何の因果か国立魔法大学の付属病院に運ばれた。本来ならば共同基地の医療施設に運ばれるのが筋だが、剛三のごり押しで魔法治療を受けてもらう形になったためだ。
魔法装備を身に着けていたので命に別状はなかったが、剛三の魔法を直に受けたために三日間は安静にしなければならないという医師

の判断にカノープスは大人しく従った。その病室に一人の少女――――リーナが花束を持って見舞いに訪れた。
「ベン、大丈夫ですか？」
「総隊長。いえ、リーナ。まあ、この通りとしか言えませんが……彼は強かった。先代のシリウスよりも遥かに」
カノープスとてあの時、慢心や加減などしていなかった。渾身の力を以て振り下ろした『分子ディバイダー』に一切のほころびは無かったと断言できる。だが、それすらもまるで児戯の如く打ち破った剛三に、カノープスは悔しさよりも感服に近い心情を抱いた。
「しかし、不思議なものです。軍人として任務に失敗した事よりも、完膚なきまで叩きのめされたことで逆に清々しい気分なのですよ。負けず嫌いのリーナからすれば理解できない感情かもしれませんが」
「……そう、ですね」
なまじ実力があるせいで同年代よりも一回り以上年上の人間を相手にすることが多いリーナからすれば、カノープスの述べた言葉を理解できなくても無理はない。これにはリーナもただ頷く他なかった。
「ベンはその、大丈夫なの？」
「それなのですが、『お前さんが不利にならぬよう根回しはしておく』と剛三殿が仰っていたのは耳にしていましたが……これ以上のことは私にも分かりません」
リーナは今回の任務失敗の件の責任が全てカノープスに及ぶことを懸念していたが、彼が気絶して運ばれる前に剛三が便宜を図る様な台詞を発しており、これにはカノープスも正直疑問を浮かべていた。いくら世界的に知られた英雄とはいえ、そのことが本当に可能なのかと。
後日、カノープスが帰国した先で待っていたのは、圧を掛けているようにしか見えない笑顔を浮かべる大統領の姿であった。

『母親』との再会

横須賀港に到着した「ずいほう」から降りた悠元と達也、深雪の三人を出迎える形で待っていたのはエリカとレオ、そして幹比古の三人だった。

「無事だったか？」

「まあね。にしても、和兄貴の話は聞いてたけど、テロリストに遭遇するなんて面倒だったわ」

『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の残党が軒並み壊滅したとしても、組織から利益の享受を受けていた関係組織や団体が残っているのは事実。エリカ達にはその件も含めて警戒にあたらせたが、案の定テロリストの襲撃を受けたらしい。

「そう言ってるお前が嬉々として打ちのめしただろうに……ま、俺らは特に怪我もなかったぜ」

「そうだね。正直、夜だったからまだ良かったけれど」

達也や悠元らと関わる事で戦闘経験に関してはトップクラスに位置しつつある三人。流石に今回は雫と姫梨に非戦闘要員の抑え込みを頼み込んだ。

すると、丁度彼らの上空を飛ぶ音速の輸送機が飛び立つ姿が見えた。

「あれって、国防軍の輸送機？」

「いや、確か神坂グループ関連企業が所有している音速輸送機だな。行き先は……言うまでもないが」

旋回して一路東へと飛翔する輸送機。テロ特措法の関係上、夜間の民間機の飛行はかなり制限されているが、あの輸送機に乗っている対象は紛れもなく顧傑なのだろう。

「何にせよ、これでテロリストの件は片が付いたが……」

「何かあるの？」

「こっからが問題なんだ」

今回の一件で日本がＵＳＮＡを出し抜いたことは確実に政府関係者に露見する。その中には当然エドワード・クラークも含まれるだろ

う。スキャンダルの一件はメディア経由である程度スクープという形で取り沙汰されるが、大統領府の人間が関与していても大統領の進退問題には影響が出ないようにしておく。
　ＵＳＮＡとしては、この問題をきっかけに監視体制やら工作員を送り込むことは容易に想像が付く。最悪誘拐や脅迫、暗殺も視野に入るだろう。
「細かいことは省くが、今回のテロリストはＵＳＮＡから来た。当然チェック体制やらセキュリティやらでごった返すのは目に見えている」
「……昨年のことといい、あの国は疫病神でも憑りついているのかい？」
「ミキ、それは何でも……有り得ないなんて言い切れないのが困りものね」
「全くだな」
　幹比古が半分冗談めいた言葉を零したことにエリカは否定しようと思ったが、彼女とレオは昨年の九校戦でドイツ絡みの経験をしているだけに、エリカだけでなくレオもそう零した。これには深雪だけでなく達也も苦笑を滲ませていた。
「その発端は間違いなく俺と達也だ。下手すると、俺と達也をこの国から……いや、地球から追い出すことも考えるかもしれん」
「それって……そもそも、二人をどうやって追い出すのよ？」
　本来ならば顧傑の行方が有耶無耶になったせいで反魔法主義の火種が消えなかった。だが、公的に魔法師が認められる法体制の整備が決まった以上、下手に反対も出来ない。そもそも、この国の非魔法師の部分にも恩恵を与えつつある『トーラス・シルバー』を大多数の民衆が素直に引き渡せる方法をどう思案するつもりなのだろうか。
　十師族間の意思疎通が出来るように仕組み自体も大幅に変更したが、まだ予断は許さないだろう。
「だって、達也君はともかくとして悠元は神楽坂家の当主よ。既に家を継いだ人間を追い出すって正気の沙汰じゃないもの」
「ま、この辺は様子見しかないだろうな……エリカは実家に帰るのか

？」
「いや、当面はレオの家に転がり込むわ。これでもちゃんと家事は出来るんだから」
「そこまでは聞いてないと思うけどね」
なお、司波家に到着した後、深雪に必要以上に引っ付かれた悠元と、それを黙って見送る達也、そして最早笑うしかなかった水波の様相がそこにあった。
◇　◇　◇
２０９７年２月２０日。悠元はスーツ姿で皇居に出向いていた。本来なら関係職員ですら踏み入ることを許されない天皇の私室に通され、悠元は今回の一件に関する報告を述べた。
「――――以上が、今回の一件の顛末となります。首謀者である顧傑は日米間の協定に基づき、ＵＳＮＡの共同基地にて引き渡しを行いました」
「ご苦労様です、神楽坂殿」
拘束した顧傑は国営メディアの撮影映像を各種メディアに提供する形でテロ事件の首謀者逮捕は全国版のニュースとして大々的に報道。合わせて日本政府の発表で顧傑（ジード・ヘイグ）は国際指名手配の犯罪者として扱われ、渡航元のＵＳＮＡでも余罪があるために日米間の協定に基づいて護送したことも公表された。簡単に言えば身柄を押し付けた格好だが、ＵＳＮＡ側のお粗末な対応が目立つ形となったのは言うまでもない。
焼死した妨害部隊については、その翌日に『天陽照覧』で蘇生させて現在は上泉家本屋敷の道場でリハビリという名の訓練に勤しんでいる。本人らも自我を取り戻したことによる感覚のズレを治すためのものなので、決して間違ってはいない。
一応祖国に帰るならば伝手はあると述べたが、全員帰国を拒否してこの国に骨を埋める覚悟を決めていた。その一人曰く「帰っても人体実験の憂き目に遭うのは必須。ならば人として生きたい」とのこと。「ＵＳＮＡから抗議は来ましたが、元をかえせば彼らの責任で此方が被害を被った形です。なので『テロリストの出国と兵器持ち出しを未

然に防げなかったＵＳＮＡの管理体制にも問題が大アリでしょう』と返しておきました」
　向こうがＵＳＮＡ国内にいる人間主義者の矛先を同盟国である日本に向けた事実はどうあっても覆し様がない。ＵＳＮＡから日本に入国した人間主義者は全員顧傑が護送された輸送機と同型の別の機体でテロ特措法に基づく永久国外追放処分（仮に再入国した場合、テロリストに準ずる国家反逆に関する重犯罪者という形で死刑に相当する）とした。
　いくら同盟国とはいえ、やっていい事とやって悪い事の区別をつけるためであり、差別するわけではない。
　一通りの報告を終えたところで、天皇は悠元を労いつつも問いかけてきた。
「改めてご苦労様でした。神楽坂殿……ところで、神楽坂殿は上泉奏姫殿をご存知ですか？」
「爺さん――上泉剛三の妻であり、自分の母方の祖母ということは聞いております」
　上泉奏姫（かみいずみかなめ）――悠元にとって血縁上の母方の祖母であり、戸籍上は義理の伯母に当たる人物。だが、悠元は一度も出会ったことがなく、精々写真が飾られているものを見たぐらいだ。
「ただ、不審な点もあります。本来、人が亡くなれば生きていた証となる標（しるし）が残っている筈です。それに、上泉家の本屋敷にあるその人の部屋は今でも定期的に清掃されていると聞きました」
　剛三から〝亡くなった〟とは聞いたが、墓も無ければ位牌もない。神楽坂家にもそう言った痕跡がない事から、歴史上において秘匿しなければならない事実でもあるのかと訝しんだが、痕跡を探っても当人が上泉家を出た後に消息が途絶えていることしか掴めなかった。
　愛妻家と聞き及んでいる剛三ならば、妻を失った影響で墓を建てることが彼女の死を認めることになると思って人知れぬ場所に建てた可能性もあったが、そういった雰囲気も認められなかった。
　悠元の疑問を聞き終えた所で、天皇は徐に口を開いた。
「その疑問はご尤もです。何故なら、彼女は先代の当主である千姫殿

にすら明かしていない事実があります」
「母上にすら？　もしかして、陛下はその事情を？」
「ええ。神楽坂殿、お時間はありますか？」
「無論です」
　血の繋がりがあっても直接対面したことがない母方の祖母の所在を知っているという天皇の誘いに、悠元は頷いて同行することとなった。お忍びということで必要最低限の警備を付けての移動となった先は———過去の大戦で国の為に戦って亡くなった民を祀る場所。靖国神社（やすくにじんじゃ）だった。
　天皇は神職に耳打ちをすると、その神職は天皇に鍵を手渡した。移動した先は神社の更に最奥の間。その地下に続く階段を悠元が『流星群（ミーティア・ライン）』の応用で光を集め、照らしながら降りていく。
　そんな中、唐突に天皇は爆弾発言を投下した。
「私は、君が他の世界から迷い込んだ人間だと知っています。驚きましたか？」
「……それは、まあ。そのような素振りは見せていない筈ですが」
「ええ、見事に私も騙されるほどでした。何故知っているかと言えば、奏姫殿が病弱だった三矢悠元を救うため、一つの手段に賭けたのです」
　天皇が悠元を〝憑依転生〟した人間と認識していたのは驚きだが、その根拠にあったのは上泉奏姫が三矢悠元を救うために動いたことだ。
「一つの手段、ですか？」
「ええ。次元の壁の先にある魔法エネルギーを用い、奏姫殿と所縁のある〝この次元ではない〟人間を呼び寄せる術を用いるため、その依り代としてこの地を選んだのです」
　過去の大戦で犠牲となった人間の霊的なエネルギーを依り代として次元の壁を壊すことなく接続し、壁の向こうにある魔法的エネルギーを以て異なる次元の魂を呼び寄せる術式。現代魔法はおろか、古式魔法でも極めて困難とされる技法———自我を保ち続けながら魔法発動を継続させ、更には術者当人と〝霊的に似通った魂〟を呼び寄

せる方法。
　そして、悠元は偶然にもその心当たりがあった。そして、その推測は階段を降り切った先に見える膨大な量の想子と魔法的エネルギー、それを制御する巨大な術式が広大な地下に建造されたこじんまりとした庵を基点に構築されている。
「神楽坂殿、分かりますか？」
「ええ、術式は分かりました……何故天神魔法を二つに分けたのかもこれで氷解しました」
　本来魔法は秘匿すべき性質を持つものであり、『天照（アマテラス）』と『月読（ツクヨミ）』も元来管理を考えれば一つの家で管理すべきものなのだ。だが、その基本を破ってまでも上泉家と神楽坂家で分割管理した理由。
　それは、『天照』と『月読』――――その五行を相生・相剋させることで生じる４つの魔法。
『天照』の『天照絢爛（てんしょうけんらん）』と『天陽照覧（てんようしょうらん）』、『月読』の『月影観鸞（げつえいかんらん）』と『月牙総濫（げつがそうらん）』。この４つを寸分の狂いもなく相反させる形で同時発動させることで発動可能とする究極の中の究極魔法。安倍晴明が遺した手記の最期のページに名だけ記載されていた。
　術者の魂の記憶を拠り所に隔絶した次元を繋ぐ魔法――――名は『夢想天成（むそうてんせい）』。
　正直、自分の場合は神様を介しているため、この魔法の効力に懐疑的だった。だが、この魔法が神様という一般的に言うところの概念的存在まで干渉できるという計算結果からして、恐らく女神が謝っていたおぼろげな記憶は決して間違っていないのだろう。
　神様がヒューマンエラー（神様ならゴッドエラーと言うべきだろうが）を起こした線も否めないが、概念的存在が気まぐれで自分を殺したというのも正直現実味がない。だとするなら、転生前の俺はこの世界から放たれた魔法で〝殺された〟ことになるわけだが……何というか、正直転生前で結構肩身が狭い思いをしていたため、「よくも殺してくれたな！」という感じよりも「生まれ変わらせてくれて感謝する」気持ちが強い。
　そんな事情はともかく、この状態を放置していてはマズい。今は安

定しているが、術者が死ねば自動的に魔法が解除されるわけだが、次元の壁が急に閉じる訳でもない。下手をするとパラサイトが発生しかねない状態なのは間違いないだろう。

なので、悠元は『セラフィム』と『ラグナロク』の両方を庵に向けて術式の構築を始める。

「……陛下。次元の壁を閉じるため、あの術式を壊します。後ろにお下がりください」

「……分かりました」

天皇が悠元の背後に移動したことを確認した上で、悠元は術式構築を開始する。正直『天照』と『月読』の４つの魔法を同時行使するのは初めての試みだが、泣き言など言っていられない。庵を基点に発動している魔法陣を包み込むように、魔法を構築する。

いつもとは比べ物にならないほど情報体次元へのアクセス量を増やしているが、それでも悠元には余裕があった。剛三の無茶ぶりに付き合った甲斐はあったと思いながら、『夢想天成』を相殺するために『夢想天成』を構築。

実験で試していた感覚を思い起こしつつ、悠元は術式の構築を完了させた。

「術式構築完了。天神魔法が究極魔法、『夢想天成』――――発動」

そして、悠元が手に持った『セラフィム』と『ラグナロク』のトリガーを引いた瞬間、元々の魔法に対応する相殺術式が展開され、悠元の放った『夢想天成』は次元の壁を包み込んで壁が綺麗に収束していく。

大規模の魔法発動ということもあって不安もあったが、少し疲れた程度で済んだことに悠元は一息吐いた。そして、魔法の気配が消えた庵の中から気配を感じ、そちらに目を向けると襖が開いて一人の少女が姿を見せた。

「……」

外見の年齢だけで言えば高校生ぐらいで、年齢詐欺の事例は今に始まった事でもないのでそこは気にしていなかった。悠元が完全にジト目でその少女を見ていたのは、その少女の服装にあったからだ。

「えっと、君は誰？」
「……ふ」
「ふ？」
「服を着やがれぇっ!!」
「うにゃああっ!?」
　ものの見事に全裸だった。メリハリのある高校生らしからぬスタイルを隠すことなく曝け出したことに、悠元は反射的に『鏡の扉（ミラーゲート）』で庵の中にあった服装を適当に彼女の上から降らした。
　そして、少女が降って来た衣服類の反動で庵の中に戻っていったのを確認した悠元が天皇を見やると、彼は「やれやれ……」と言った感じで頭を抱えていた。
「陛下、あの人がもしかして」
「ええ、上泉奏姫殿です」
「……」
　今日は何かしら黙ることが多すぎて、正直お腹一杯の気分である。それしか言えないのかって？　……神様ではないのだから、俺にだって分からないことはある。

◇　◇　◇

　そうして数分後、身なりを整えた少女の招きで庵に招かれた天皇と悠元。そして、少女は開口と共に深く頭を下げた。
「陛下、永らくの身勝手をお許しください」
「構いませんよ、奏姫殿。それに、貴女の行いで隣にいる悠元殿がこの場にいることも立派な功績です」
「……そうか、君が悠元君だね」
「はい。元十師族・三矢家三男、現在は神楽坂家当主を務めております神楽坂悠元といいます。お初にお目に掛かります、上泉奏姫殿」
　奏姫と天皇の言葉の後、頭を下げた悠元。だが、それを見ていた奏姫は正直複雑な心境を表情に出していた。それはまるで、後悔や懺悔を滲ませたような謝罪の様相であった。
「怒らないの？」
「怒ったところで何も解決しませんよ。それに、前世は前世で燻ぶっ

ていた身ですので」
身内にチートじみた連中がいたために迷惑を被ったりしたことがあり、その影響で人との関わりをあまり深くしてこなかったのは否定しようがない。それに、セリアとの関わりで従兄妹の関係だと知った以上、恐らく自分が直接血が繋がっていない対象だと推察はしていた。
その証拠を指し示す様に、奏姫が呟いた。
「……ごめんね、〝悠人（ゆうと）〟。前世の親として、本当に何もしてあげられなくて」
「……気にしてないよ、〝お母さん〟」
奏姫が今の自分の名ではなく、前世での名で呼んだというのは雰囲気で伝わり、そしてその言葉で確証を得るように返した。
物心ついたときには育ての親に世話になっていたことから、それ以前に本当の両親が亡くなっていたことになる。尤も、そのことを今更調べようとしても世界が変わってしまった以上は何も出てこないだろう。
にしても、三矢悠元としての母である詩歩、神楽坂悠元としての母である千姫、そして今世の祖母が前世の母親となんだかんだ言って家族に恵まれているのは前世の反動なのかと思う。ただ、この影響なのかは知らないが友人の母親らにも好かれていて、最たるところでは愛人関係になっているわけだが。
「危険を承知でこの世界に招いてくれたことは感謝する。あのままいたら、多分ロクなことになってなかったと思うから……まあ、その対価として神楽坂家当主としての責任は果たす。俺だってこの国を護りたいから」
「そう……頑張りなさい、悠元」
なお、お決まりのパターンと言うべきか、奏姫にハグされる羽目となり、その一連のことが終わった後で司波家に戻った悠元が深雪の襲撃を受けたのはまた別のお話。

敵の功罪に振り回される

事件の後処理に関しては、その半分以上を関係各所に放り投げていた。元々関係する組織の不手際も大きく関係している以上、いくら自分が神楽坂家当主と言えどもその全てをフォローする気はなかった。自らの身から出た錆ぐらいは自らの手で洗い落としてもらうのが筋というものだ。

それに、自分には解決しなければならない事項が他に存在している。その話をするべく、悠元はセリアが住んでいるマンションを訪れていた。

「……リーナを一高に通わせる、か」

「うん、ダメかな？」

その一つはリーナに関する相談をセリアから持ち掛けられたことだ。

セリアは悠元と違い、〝原作〟がどのような終わり方までしたのかを知っているが、悠元はそれを敢えて聞かなかった。多分光宣を何らかの方法で封印する際、水波もそれに同調した可能性が高い、とみたからだ。

達也でもパラサイトを殺す方法はその時点で確立していただろうし、完全な赤の他人ならば殺すことを躊躇わない。だが、これが水波の関係者となれば話は変わってくると睨んでいた。それに、パラサイトの影響を受けながらも己の力で支配から逸脱した存在は貴重だろう。ただ、九島烈を殺したことでこの国はおろか地球上で当たり前のように出歩くのは極めて難しくなっただろう。

話を戻すが、現状のリーナの戸籍がどうなっているのかを確認したところ、三矢元の父親こと三矢舞元（まいと）の養女として移されていることが確認できた。これは達也への婚約申し込みの際に日本国籍を取得するための法的後見人が必要となったため、こうなったとみられる。てっきり九島烈を頼るものと思っていたが、ここはかつての確執が今も尚生きているという証左なのだろう。

リーナは「三矢理奈（みつやりな）」として帰化するため、セリアは軍人としての

活動で失った時間を取り戻させる意味でも魔法科高校に通わせるのはどうかと提案した。ここには〝アンジー・シリウス〟を手放さないＵＳＮＡ軍統合参謀本部への意趣返しも含んでいるのだろう。
「別に構わないとは思っているが、本格的にリーナがこの国の人間となれば、欧米は騒ぐだろうな」
「主にステイツとイギリスだね。でも、原作以上の手を使ってくる可能性があるのに、大丈夫なの？」
「俺がそれを懸念してないと思うか？」
「いや、それはないね」
　戦略級魔法の使い手、それに準じる実力を有する魔法師がこの国に集結していることは周辺国の危機感を高めることは分かっているし、『灼熱と極光のハロウィン』で新ソ連もといイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフによる妨害を受けたことは忘れていない。
　国の規模に伴う物量差がそう簡単に埋められるものではない以上、質を高めることでその脅威を跳ね除けるしかない。「ずいほう」「ずいかく」の二つの空母はその布石の一つだ。艦載の戦闘機は全て国産戦闘機で、大本はＦ―３５「ライトニングⅡ」を全て国産で賄えるように魔改造した。ライセンス関連などは全て剛三に交渉を任せ、全て通ったので製造に踏み切った。
　名前は自国の戦闘機という意味合いも含めて「震電（しんでん）」の開発コードネームを持ち、対外的なものとしてはＦ―１５Ｊ／ＤＪ「イーグル」の後継機であるＦ―１５Ｊ／ＤＥＸ「ソニックイーグル」と公表する。無論、戦闘機だけでなく支援機や各種装備も充実させていており、レーダー関連では世界トップクラスとなるサイオンによる情報体次元感知レーダーを実戦配備した。
「戦わずに済めばいいが、色白の連中の中身は腹黒の奴が多いからな。リーナをダシにして戦闘を吹っかけてくることも考えられるし、達也がやろうとしていることに邪魔してくるかもしれない」
「お兄ちゃんや私もその対象に含まれて来るね……２１世紀版ハル・ノートでも出す気なのかな？」
「それに見合う対価を連中が支払えるんなら、話ぐらいは聞いてやる

けどな」
　確かに政府との関わりを持っている『十三使徒』が相手なのは骨が折れる話だが、そもそも新ソ連に関してはこちらとの約束を既に破っている。今は人間主義のテロ行為に手を焼いており、しかも厳しい冬によってモスクワは極寒に晒されている。
「ふと思ったけど、どうして人間主義は新ソ連を狙い撃ちにしたの？
　自分たちの主義主張を貫きたいんなら、それこそＵＳＮＡ国内をかき乱した方がいいと思うんだけど」
「少し調べたんだが、そいつらの資金の動きに新ソ連や大亜連合が関与しているようなんだ」
　まず、人間主義はキリスト教の亜種というか異端的な立ち位置に当たる。真っ当な宗教を信仰する人間からすれば、彼らの過激な行動は宗教の品位を著しく損ないかねない。魔法師を邪教徒――――『悪魔』と断ずる彼らの主張が罷り通れば、それこそ根幹を成す『神の子』イエス＝キリストを否定しかねないことに繋がる。
　顧傑が拘束された翌日、急遽バチカン市国から訪日したローマ教皇は声明を発表した。
「人間主義を唱える者に告げる。奇跡の力を『悪魔』と断ずることは、我らが御子たるイエスを否定するに等しき思想。それを平然と掲げる汝らを我らの同胞として決して認めない。我々はこれからも真摯に教えを守り、愛する心を今一度唱えることをここに宣言する」
　キリスト教のトップによる事実上の〝破門宣告〟は瞬く間に世界中を駆け巡った訳だが、この流れ自体は昨年の夏ごろから見られ始めていた。真摯なカトリックやプロテスタントは双方の敵として人間主義をターゲットに選び、更には彼らの攻撃によって被害を受けていたイスラム教までもが人間主義を「我らの預言者を否定する敵」と認定した。
　このため、人間主義の活動が先鋭化する一方で、その矛先を同じキリスト教の一派である東方正教に定め、その一環として東欧および新ソ連に潜り込んだ。これを機と見た大亜連合やＵＳＮＡの一部の勢力が密かに彼らへ資金・武器提供をしており、それに対して新ソ連は

ＵＳＮＡ国内の人間主義者に資金提供をしている。
いうなれば、人間主義者は一種の傭兵みたいな扱いへとなり果てていた。
「……ちなみに、この国の人間主義者を支援してたのは？」
「大亜連合、新ソ連、ＵＳＮＡ、イギリス、フィリピン、そしてオーストラリア。関連の金融口座は合法的に接収して国庫行きになった」
「（何やってるのよ、ホント……）」
その中にはスイス銀行絡みも含まれていたが、テロ関連の正当な証拠を出すと口座凍結に賛同して即座に対処してくれた。彼らとてテロ支援国家の烙印を押されたくないという姿勢の表れなのだろう。なのでスイスに関しては信用しているし、その礼としてスイスに改良された戦略級魔法を提供した。その魔法は欧州絡みなら当然知られている魔法なので、誤魔化し様はいくらでもある。
「そうだ。急な話になるが、ＦＬＴの北に共同のツインタワーマンションが建つことになった。下層はＦＬＴの社員寮で、上層は俺や達也の婚約者が住む形になる。完成は今年の３月下旬になるから、社員の移動が終わり次第引っ越ししてもらう」
「春休み……沖縄と被るね」
「全くだ」
当初はシェアハウスの形だったのだが、流石に四葉と神楽坂の関係者となればこじんまりとしたものにするのはマズいと判断された。建設自体は上泉家が担当しており、たった一月で地上２０階のタワー型マンションの完成まで漕ぎ着けるとのこと。無論、耐震設計は最新のものを使うため、数百年単位で運用できるようになる。
上層と下層の出入口自体も秘匿の関係で分離し、コミューターを地下に引き入れてもらうことで機密も確保している。公共交通システムの私的な発着所があるのはどうかと思われるだろうが、色々秘密にする部分がある以上は仕方がない事だろう。
「まだ先の話になるが、俺の方は既に父から三矢家の代理として出ることになってる……リーナも戸籍上は三矢家の人間だし、出てもらうか」

「そうなると、達也（おにいさま）の婚約者としてになるけど……うーん、大丈夫かな？」
「そこは双子の妹として信頼しとけよ」
　正直、自分が関わったせいで強化されている現3年生のメンバーと達也、独立魔装大隊の幹部だけでも十分すぎるし、一時的に協力することになる大亜連合の特殊部隊も弱くはない。そこに〝アンジー・シリウス〟まで加わらせるのはどうかと思うが、これには一つの打算が含まれている。
　それは、ＵＳＮＡとイギリスの協力体制を揺らがせることだ。
「顧傑の逃亡に使われようとした高速貨物船だが、航路の申請書を見る限りではシドニー行きとなっていた。オーストラリアの現状を見る限り、間違いなくイギリスが関与している」
「『十三使徒』ウィリアム・マクロード……頭の中にパンジャンドラム思想でも詰まってるのかな？」
「どういう思想だよ、それは」
「イギリスお得意の二枚舌外交」
　既にイギリスが香港経由で大亜連合軍内の日亜講和条約に不満を持つ兵士を唆していることは調べがついている。オーストラリアに関しても近日中にウィリアム・マクロード自ら出向くことが判明している。狙いは日本の人工島であることも……そうやって戦争を煽り立てることを平然としている時点で、『十三使徒』は一種の戦争屋と誤認したくなる気分になってしまう。
　この先、世界の舞台に出てくる『十三使徒』は一部を除いて過激な行動を実行している……いくら戦略級魔法師が特殊だからと言って、何をしても良い訳ではない筈なのだ。それが国益に適うと言っても、力を振るった時点で〝宣戦布告無しの一方的な先制攻撃〟に他ならない。
　まあ、人のことは言えなくもない訳だが。
「そういえば、十師族――師族会議のシステムも大幅に変わるんでしょ？」
「厳密には監視・守護地域の大幅な見直しだな」

飛び地などにならないよう整理することとなり、その一環で旧魔法技能師開発研究所は稼働している現第三研を大幅に改修して、文部科学省管轄の国立魔法科学技術研究所（通称：魔法研）の中央研究所として生まれ変わる。他の稼働している研究所や旧第一研の跡地に建てられた金沢魔法理学研究所や旧第九研の跡地にある第九種魔法開発研究所は魔法研の各支部研究所となり、師族会議の管理下から外されて政府機関となる。

閉鎖されている研究所に関しては政府の管理下に置かれる形となり、魔法に関する機密の管理を師族会議に委託することとなる。

一条家は当初の新潟・富山・石川・福井・鳥取・島根から山陰地方が外れて秋田・山形が加わり、東北日本海側・北陸地方を担当することになる。これは佐渡方面の防衛を考えた際、広範囲に日本海を監視するのは効率が悪いと考えており、以前三矢家に打診された山陰地方の監視・守護を要望通りに切り離した。

山陰地方（島根・鳥取・兵庫北部）と山口は師補十八家から一色家を選出した。元々一条家に近い位置にいたため、引継ぎの意味で受け入れやすい位置にいたためだ。なお、愛梨からは何故か頭を下げられた。あくまで合理的な選択しただけに謎である。

六塚家は青森・岩手・宮城・福島に加えて茨城の太平洋方面に集中してもらう形とした。あれこれと手広くやってもらうよりもリソースを集中させる方が遥かに効率が良くなる。

七草家が抜けた後の関東地方だが、十文字家は残留となり、後釜として三矢家が関東地方の監視・守護を担うこととなる。理由は至って単純で、現当主の娘が十文字家と四葉家に嫁ぐので三家による連携行動が上手に機能できるのでは、という思惑があった。現行の十師族の中で唯一監視地域を持たないが、これで三矢家も他の家と対等な立場となる。

八代家・五輪家は現状に変更なし。四葉家は担当地域から三重が外れて愛知・岐阜・静岡・長野・山梨の中部・東海地方を担当し、二木家は広島・岡山・兵庫南部（淡路島を含む）・大阪・和歌山西部を担当する。

七草家は新規地域となる奄美大島・沖縄方面、七宝家は北海道方面を担当することとなった。前者はペナルティによるものだが、後者は当主自らの提案が通った形となる。この辺は「七」の家に関する確執が関係している形だが、国防の最前線で確たる地位を築くことが出来ればこの先の家の存続も安泰になる。

では、残る和歌山東部・三重・奈良・京都・滋賀方面は誰が担当するのか。結論から言えば、ここに関しては現代魔法の家に管理できない部分となる為、「九」の家に関与させるつもりはない。なので、護人の神楽坂家・上泉家が監視・守護を担当することとなる。

「古式魔法の家からすれば、『九』の家と確執が完全に消え去っていない以上は『伝統派』の再結成も有り得る。その不安を払拭する意味でも護人の家が管理することになるだろう。正確には護人から管理を委託する形になるが」

「それって、姫梨の実家とか？」

「伊勢家を中心として、いくつかの古式の家に管理を頼むことになる」

そもそも、政府主導とはいえ「九」の数字（ナンバー）を持つ家による魔法実験が尾を引きまくった結果として『伝統派』が生じてしまった。いくらプライド云々があるとはいえ、実利を優先した結果がこの有様だ。ならば、日本魔法協会の本部が京都にある以上、そこに根付いている古式の術者に守りを頼むのは決して間違いではない。

「そういえば、お兄ちゃんのお祖母ちゃん――――奏姫さんだっけ。そっちはよかったの？」

「……前世は前世だ。そこに拘っても実利はないからな」

既に言葉として奏姫には伝えたが……自分からすれば前世で不条理な死を遂げた分、今世で自由に過ごせていることは感謝だった。

「恨みが無かった」とは決して言えないが、そこに拘っていても何の利も得られない。なので、彼女との関係はこの世界の血縁関係に基づく形として納得していた。

彼女が『夢想天成』を継続発動させていたのは、世界群発戦争によって生じた負の歪みが暴発して重力の壁に穴が開く寸前だったため、それを食い止めるためにあえて奏姫自身を依り代として術を発動して

いた。自分が『夢想天成』で解除した際に神楽坂家で覚えた結界魔法で壁を補強したので、軽く数百年は問題ないだろう。
前に寿命云々の話をしていたが、奏姫がやったように『夢想天成』で魔法的エネルギーに支配されず自我を保ち続けていた場合、その自我が明確な限り肉体が年齢を経ることが無くなる。というか、逆に〝若くなる〟。そもそも膨大な量のプシオンを浴びるなんて経験など基本的にない訳だが……調べた自分も思わず首を傾げた。
「上泉家に同行したが、爺さんは喜んでたな……うちの両親が恋愛結婚した理由が何となく頷けたよ」
剛三は奏姫が亡くなったと思っていなかった。魔法の才能的には自分よりも勝る彼女だからこそ、この国の為に重要なことをしているのだろうと思っていたらしい。それでも対外的な言い訳として彼女が亡くなったということに一応しておいたそうだ。
奏姫の部屋が片付けられずに時折掃除されていたのも、彼女がいつか戻ってきたときの為を思ってのことだろう。
ただ、上泉家の家督継承は奏姫が帰還しても元継が継ぐことに変わりはない。寧ろ奏姫は「曾孫を早めにお願いしますね」と発言して周りを騒動の渦に巻き込んでいた。
「お兄ちゃんも他人事じゃないよね。私はいつでもウェルカムなのに」
「精神は成人してても、社会的に高校生である以上は未成年だろうに、俺らは」
「ここはこんなことになってるのに？」
「泣かすぞ？」
「きゃーおにいちゃんのおにいちゃんでなかされるー」
顧傑の件が片付いたと思えば、悠元を待っていたのは婚約者と愛人らによる攻勢だった。色に溺れないように心掛けてはいるが、女性陣の積極性にはどこか呆れも含んだような心境だった。
付け加えると、悠元とセリアがいるのはセリアがいつも使っているベッドの中だった。真面目な話をしようと訪れたら、リーナとシルヴィアがいないのをいいことにセリアが誘惑した結果、こうなった。

「別に蔑ろにしてるつもりもないし、可能な範囲でフォローはしてるんだが……俺って節操なしって思われてるの？」
「普段はお兄ちゃんに迷惑を掛けないように大人しくしてる反動なのだよ、ワトソン君」
「俺も学校の風紀を守る側の人間だから、迂闊な事なんてできねえよ」
悠元の婚約者は来月の１１日に本決定となることが千姫から伝えられた。現状婚約者となっている面々に加え、五輪澪と一条茜、エフィア・メンサー、そして……七草真由美で打ち止めとなる。
現婚約者たちの攻勢も、このことで拍車が掛かっている。何せ、学校が休みということで愛梨と沓子が神楽坂家の別邸に泊まっていて、昨日は二人の相手をしていた。
真由美については七草家の籍から二木家の籍に移ることが決まった。これは二木家当主である二木舞衣が三矢家と七草家からの相談を受けて引き受ける形となり、十師族の力を保つという意味で神楽坂家と間接的な縁故を結ぶためのもの。監視・守護地域の観点から言えば妥当だろう。
正直、顧傑の功罪に振り回された気がしないでもない……と思ってしまう。

南海騒擾編
諸外国の思惑

――国家公認戦略級魔法師『十三使徒』

核兵器が封じられた形となるこの世界において抑止力であり戦力の切り札と成り得る存在。その数が皮肉にも裏切り者を含んでいるような形となっているのは、果たして偶然なのだろうか。

公にされているのはその数だが、非公式の戦略級魔法師については世界中におおよそ５０人前後はいる、と推測されている。どの国も戦略級魔法を使える人間を確保することで、もしもの時のことを鑑みるのは国家に携わるものとして当然と言えよう。

西暦２０９７年２月２４日。世界が人間主義によって反魔法主義の火がじわりと広がる中、ＵＳＮＡ首都――――ワシントンの大統領官邸（ホワイトハウス）にて、ジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領は自身の執務室にヴァージニア・バランス大佐を呼びつけていた。

それは、先日引き渡された顧傑に関する報告であった。

「――――以上がジード・ヘイグに関する最終報告となります。刑は予定通り執行され、精神干渉系に得手のあるスターズ隊員が対応いたしました」

「苦労を掛けるな、大佐。いや、この場においては顧問と言うべきなのだろうが」

「そこは閣下のお好きなように仰ってくだされば幸いです」

ヴァージニア・バランスは軍人でありながら大統領直属の軍事関係（主にスターズ）に関する顧問職を任命された。本来軍務に携わるものが政治の中枢に近い場所にいるのは問題視される可能性もあるが、脱走事件の対策の一環として監査の立場にいる人間を軍の最高指揮官たる大統領の直下に置くことで、速やかに情報を得られやすくするメリットを唱えられれば誰も強く反対できなかった。

「それで、閣下。今日はどのような要件でお呼びになられたのでしょう？」

「うむ。リーナが正式に四葉の婚約者候補となったことは耳にしているか？」
「噂程度には。参謀本部の一部は四葉を知る機会だと息巻くような有様でしたが」
　遡ること一昨日の２月２２日、四葉家は一次通過の候補者リストを公表した。秘密主義の四葉家にしては珍しいが、その中にはリーナの名が含まれていた。このリストを公表した目的は、他にも魔法師の男子がいる以上はあまり時間を掛けると余計なやっかみを受けると鑑みた結果である、と四葉家が声明を出した。
　ジョーリッジはあくまでも祖父として孫娘の幸せを願って送り出したというのに、参謀本部があの有様では情けがない……というのはバランス大佐も同意見であった。
「全く……彼らはどうあっても『灼熱と極光のハロウィン』の戦略級魔法をどうにかしたいようだが、仮に成功しても我が国が負うリスクヘッジは国家予算規模になるのだぞ。この前ＦＲＢ（米連邦準備制度理事会）議長と副議長が揃って来て、軍部を抑えるように強く要望された」
　ＵＳＮＡの金融政策自体は前身となる旧合衆国を受け継ぎつつ、カナダ・メキシコにも連邦準備銀行を置くことで混乱を最小限にしつつ金融政策の迅速な実行が可能となった。
　政府機関であるＦＲＢの議長と副議長が揃って大統領に頭を下げたのは、かの国――日本の持つＵＳＮＡの国債額が一個人だけで１００兆円という無視できない要素を含んでいるためだ。これがもし一度に放出された場合、第一次大戦後に起きた世界恐慌や２１世紀初めに起きた世界的な不況すら超える大恐慌を引き起こすことになると推測されている。
「その片割れは私も直接聞き及んでいますが、やはり大統領も賛成は出来ないと？」
「当然だ。聞くに、こちらから敵対さえしなければ敵視されることもないのだろう？　だが、軍人というのは見えてしまっている恐怖を抑えたいのは気質なのだろう。現に躍起になっているのは大佐とて

知っている筈だ」
「それは当然です」
バランス大佐の言葉にジョーリッジはそう吐き捨てつつ、引き出しからデスクの上へ放るように置かれた一枚の書類。「見るがいい」というジョーリッジの言葉にバランスは「失礼します」と断りを入れつつ手に取って目を通す。
その書類を再びデスクの上に置いた後、姿勢を正したバランス大佐は断言するように呟いた。
「彼らは正気ですか？　といいますか、誰がこんなバカげた作戦を立てたのですか？　……申し訳ありません、閣下。言葉遣いが乱れてしまいました」
「いや、バランス大佐の言い分もご尤もだ。この情報は参謀本部にいる私のシンパが上げてきた情報でな。本部もＵＳＮＡ軍を使わない以上は行動を黙認するようだ」
その内容は、大亜連合内にいる日本との講和に反対する勢力を唆し、講和状態にある二国の均衡を再び崩すことであった。明らかに失敗する要素が多い無謀な作戦だが、その作戦の中には失敗することで捕虜となった人物に四葉を探らせることも含まれている。
バランス大佐から見れば、博打に近いこんな作戦が立案された段階で監査を行って対象者を軒並み吊り上げたくなるほどの杜撰さ。ジョーリッジが書類として提示したということは、恐らく参謀本部がＧＯサインと同然の黙認をしたとみていい。
「私も流石に国防長官へ苦言を呈したが、既に作戦は実行されたようだ。なので、既にこの件はＵＳＮＡの関与できる範疇ではない」
「なら、この情報をすぐにでもかの国へ伝えるべきではないのですか？」
「既に送っているよ。問題は……その件にイギリスが関与してくるかもしれん」
ジョーリッジが聞いた範囲では、大亜連合軍において講和条約に反対する勢力が多いのはどこも同じだが、香港方面でイギリスの諜報員と思しき人物が積極的に関与しており、大陸側にいる軍人魔法師が相

次いで脱走していると報告を受けている。
「我が国でも無理だったものをイギリスがどうにか出来るとは思えん。失敗することも織り込み済みなのだろうが……彼を敵に回すことがどういう意味を持つのか分かっていない連中が多すぎる」
ジョーリッジからすれば、『グレート・ボム』と呼称された魔法よりも『シャイニング・バスター』と呼ばれた魔法の方が恐ろしいと思っている。何せ、その魔法が通り過ぎた後には何も痕跡が残らなかった。同時に発動したとみられる『トゥマーン・ボンバ』の魔法式すらも綺麗に消え去ったほどに。
「その彼がセリアと婚約を結ぶことになったのは正直僥倖だった。最悪は私の政治家生命全てを賭す意味でも訪日し、土下座も辞さない」
「……その時は私も同行して頭を下げます」
「そうか……ありがとう、大佐」
ＵＳＮＡのトップが自国に返ってくる被害を現実的に考えられているというのに、かの国にある脅威を取り除くことに腐心している連中がいる。人間主義の脅威が完全に消え去っていない以上、現代魔法の先進国として取るべき立場がある。
悲しいことに、ジョーリッジやバランス大佐のような常識的な判断を下せる人間が少ないというのが一番の問題であり、それは何もＵＳＮＡに限った話ではなかった。

◇　◇　◇

オーストラリアのダーウィン基地。かつては民間国際空港として賑わったが、世界群発戦争後にオーストラリアが国家の政策として厳しい出入国制限が設けられ、民間空港としての役目を終えた。その代わり、イギリスの肝いりで魔法師研究施設が建設された。
第三次大戦後にイギリス連邦は事実上消滅したという形となっているが、歴史的背景による国家のコネクションは未だに健在である。新イギリス連邦として立ち上がることが可能ではあるが、それが唯一の手段ではないことはイギリスもオーストラリアも理解している。
ダーウィン基地に一機の極超音速輸送機が降り立つ。成層圏上層を音速の六倍で飛ぶ爆撃機に転用可能なイギリス軍の最新鋭機が使

われた理由は、送り届けた乗客がイギリスにとってＶＩＰと呼ぶに等しい人物であった。
　その輸送機に対し、正式な儀式とでも言いたげに基地司令をはじめとした基地の幹部クラスが軍帽をきちんと被って敬礼している。それだけでなく、国旗の掲揚台にイギリスとオーストラリアの国旗が掲げられるほどの様相で出迎えられたのは一人の男性。彼は高級将校や有力政治家ではなく民間の魔法研究者だが、オーストラリアにとって魔法技術を齎した人間であり、イギリスにとって国防力を左右する重要人物であった。
「サー・ウィリアム・マクロード。我々はイギリスの英雄を歓迎いたします」
「丁寧な歓迎、痛み入ります」
　イギリスの国家公認戦略級魔法師――『十三使徒』の一人であるウィリアム・マクロード。年齢は６０歳で、銀髪を綺麗に撫でつけた長身痩躯の老紳士。マクロードは丁重に出迎えたダーウィン基地司令と握手を交わす。
　そして、基地司令の副官に導かれる形でマクロードはロールスロイスのリムジンに乗り込んだ。
　リムジンが向かった先は基地シェルターの奥深くに守られた研究所であった。そこは調整体魔法師の研究・製造施設であり、かつてマクロードはここでオーストラリア軍に魔法師製造を指導していた。
　調整体のみならず自然発生した魔法師の強化にもマクロードのノウハウが生かされており、オーストラリアにとってもマクロードは一種の〝英雄〟足り得る存在とも言えた。
「待たせたね、ジャズ。ジョンソン大尉も変わりないようで何よりだ」
「いえ、サーにこうしてお会いできることに勝る喜びはありません」
「恐縮であります、サー」
　そんな彼を出迎えたのは、一組の男女。女性はどう見ても１２ないし１３歳の少女であり、男性は３０歳代。見た目だけで言えば「似ていない親子」の有様だが、双方共にオーストラリア軍の軍服を着ているし、少女に関してはその見た目でありながらも実年齢は既に２０歳

を超えている。
「私も二人に会えて嬉しいよ。早速だが、話に入ってもいいかね？」
「問題ありません」
「では二人とも、楽にしてくれたまえ」
「ハッ！」
　マクロードはソファに座るが、「ジャズ」や「ジョンソン大尉」と呼ばれた少女と大尉は休めの姿勢を取っただけで座るような素振りは見せなかった。彼は二人に対してそれを咎めもせずに話を続けることとした。
「二人とも、話は聞いているかね？」
「イエス・サー」
「貴国にとって不本意な作戦とは思うが、近年の日本における軍事力増強は著しく、これ以上は世界のパワーバランスの観点から見て好ましくない。この作戦は貴国だけでなく、イギリスにとっても有意義なものとなろう……ウィリアムズ大尉、かの国に何か因縁があるのかね？」
　マクロードが話しかけた「ジャズ」の名で呼ばれた少女――本名はジャスミン・ウィリアムズ大尉。マクロードが直接調整を手掛けた調整体魔法師「ウィリアムズ・ファミリー」の一人だ。
　「日本」という単語に反応したのか、その彼女の表情が若干険しくなったことにマクロードが問いかけると、ジャスミンは苦々しい表情を隠そうともせず、淡々と呟いた。
「かの国に対する敵対心ではありません。ですが、かの国と思しきアジア系の人間に煮え湯を飲まされたのは事実です、サー・マクロード」
「ほう？　その話は私も初耳だな。ジョンソン大尉は何か御存知かな？」
「数年前、軍の命令で親子と思しき二人組を追跡したのですが、ものの見事に煙に巻かれてしまいました。小官の自己加速魔法でも追い縋れないほどに速かったのです。申し訳ありません」
　ジャスミンの言葉にマクロードが興味を示すと、ジョンソン大尉はありのままに起こったことを答えた。

当時から二人一組（ツーマンセル）を組んでいたジャスミンとジョンソンはオーストラリアに観光目的で入国したアジア系男性の二人組を追跡する任が与えられた。だが、その彼らの気配察知能力はおろか人智すら超える速度で追跡をあっさりと振り切った。ジャスミンは自身の魔法で彼らを足止めしようと試みたが、その悉くを無力化された。

マクロードが良く知る二人ですら止められなかったその人物らに、彼は些か興味を持ち始めていた。

「いや、私は興味本位で聞いただけで、君らを咎める権限など持ち合わせていないよ。それほどの実力を持つアジア系の親子は私も興味はあるが……おっと、話が逸れてしまったね」

マクロードとしても興味は尽きないが、話の本題を忘れてはいけないと言いたげに懐からカード型ストレージを取り出した。

「聞いているのは作戦の概要だけと思うが、ここに作戦の詳細が記されている。当然だが、地名と人名は省かれている。攻撃の対象は沖縄諸島、久米島の沖合。日本が建設した資源採掘用の人工島だ」

もし、マクロードが先程ジャスミンの話に見当がついていれば、その作戦を提示することに躊躇ったのかもしれない。だが、マクロードは当該人物に心当たりがなかった。ジャスミンとジョンソンも軍の命令で追う際、顔写真は見せられてもその人物の名は聞かされなかった。

理由は「その人物の片割れが世界的な英雄の一人であり、オーストラリア軍が彼の誘拐を指示したなどと言えるはずがないから」だ。

更に付け加えるとするならば、安くない代償としてオーストラリア海軍の軍艦が十数隻エアーズロックの上に突き刺さる被害を受けていた。こんな事実が世界に公表された場合、オーストラリアは自らの手で自身の首を更に締め上げることになる。

それだったら何も作戦に参加しなければ良かっただろう、と彼らを良く知る人間からすればそう辛辣に吐き捨てられるのかもしれないが、「無知」というものは真に恐ろしいものである。

◇　◇　◇

所変わって、南アメリカ連邦共和国（ＳＳＡ）の首都ブラジリアに

ある大統領府。その執務室のデスクに座る褐色のがっちりとした体格を持つスーツ姿の人物ことディアッカ・ブレスティーロ大統領と傍には秘書官がおり、デスクを挟む形で軍服に身を包んでいる白人の男性――――ハンス・エルンストがいた。
「エルンスト大佐(国を移った際、戦略級魔法師という事情を鑑みて昇進した)、急な呼び出しをして済まないな。奥方と貴重な時間を割いたことは詫びねばならん」
「いえ、お気遣いなく。して、今回はどのようなご用件でしょうか?」
「うむ。実は来月、日本の久米島沖に人工島『西果新島(さいかしんとう)』の竣工記念パーティーが予定されていることは貴官も聞いているな?」
「ハッ」
日本の海底資源採掘用の人工島が完成した記念のパーティー。本来ならば国内の関係者に限定しての催しとなる予定だったが、この世界では少し事情が異なる。
今年の初めにディアッカは訪日し、その際に日本政府と資源開発に関する提携の協定を交わした。それは将来『恒星炉』の技術提供を睨んでのものだが、日本との友好をアピールすることでＵＳＮＡやＥＵに対する牽制を早い段階から進めておこうという狙いも含まれている。
「本来の筋ならば向こうの国内の関係者に限定される話だが、そのパーティーを工作員が狙っているとの情報提供があった」
「……ならば、出席は控えるべきかと小官は具申いたしますが」
「それが普通だと思うが、私はその工作自体が成功すると考えていない。寧ろ失敗することを前提に置いている可能性もある」
ディアッカは大統領であった以前に軍人としての経験がある。彼の場合、軍人以外に政治家としての資質が開花してしまったために大統領へ担ぎ上げられた。それはともかく、ディアッカは現時点で得られている情報の内容から察するに、その工作自体が成功ではなく失敗を前提に組まれたものだと推察していた。
「閣下、その根拠をお聞かせ願えますか?」
「うむ。まず、あの人工島を仮に爆破するとしても要人を狙ったとい

う意味では正解だが、戦略的価値としては低くなる」
　ディアッカが事前に受け取っていたリストでは、政府に近い要人クラスの人間は幾人かいるが、人質としての価値を考えると釣り合いが取れない。人工島自体には一時的な構造強化として魔法技術が使われていて、東京オフショアタワーで採用された技術も取り入れられている。そこを爆弾で爆破するというのはどう見ても「現実的ではない」とディアッカは考慮していた。
「仮に成功して日本と大亜連合が戦争状態となった場合、誰が得をするのかと考えれば……新ソ連、欧州、そしてＵＳＮＡといったところだ」
「閣下は、ＵＳＮＡのことを信用してはいないと？」
「当然だ。先日のテロリストに関してもＵＳＮＡ内部のスキャンダルが関係している噂もある。火のない所に煙は立たぬよ」
　ディアッカとて頭ごなしにＵＳＮＡ全体を否定的に見ているわけではない。だが、政府の中には所謂〝祖国至上主義〟とも言える過剰なナショナリズムがあるのも事実。その一人がエドワード・クラークなる人物だとディアッカはそう睨んでいた。
「話を戻すが、そんなことになれば我が国とて無関係とはいくまい。一時的な平和とはいえ、日本と大亜連合の講和状態を崩壊させることは断じて認められない。そこで、ハンス・エルンスト大佐。貴官には私の護衛として同行し、日本軍と協力して敵の工作活動を防いでほしい」
「……ハッ！　微力を尽くします」
　虎の子とも言える戦略級魔法師を連れ出すリスクは当然ある。だが、表向きの戦略級魔法師としてこの国にはミゲル・ディアスがいる以上、ハンスを国外に出すことのメリットは当然存在するし、ハンスの得意な魔法であればどの状況下でも十全に動けると判断してのものだ。
「事前の情報では、大亜連合からの脱走兵に協力している勢力があるらしい。以前上泉家から貰った情報から考慮すれば、可能性があるのはイギリスの関係――――オーストラリアが関与してくる可能性もあ

る。そうそう、そちらの奥方も同行させたいが構わないかね？」
「……私はまだ結婚していないのですが」
法律上では結婚していないハンスだが、大統領はおろか周囲からも既に妻扱いされている１０歳年下の婚約者がいる。完全に夫婦扱いされていることに対して、ハンスはもう抵抗するのを諦めていた。彼の中にいるもう一人の〝ハンス〟からは寧ろ煽られる始末であり、ディアッカからの命令を受けたのはせめてもの抵抗の表れなのかもしれない。

何処に居ても苦労する性分

顧傑の事件が収束し、非常事態が解除されて一応は落ち着きを取り戻しつつあった。国会をはじめとした政府機関では、テロ事件の再発防止策だけでなく魔法師に関する法律の見直しも進められている。

異例とも言える若さでの天皇の生前譲位も含まれているが、国の象徴たる存在の進退を自ら判断して次代に繋げる動きはこの国の組織の新陳代謝を促しつつあった。尤も、魔法師に対する恐怖を煽ろうと活動する輩が一定数いるのは人間の性とも言えるが。

将輝は当初事件が収束次第金沢に戻る形だったが、一条家当主の意向を受けて３月１０日まで居残ることになり、将輝の愚痴を真紅郎経由で聞かされた悠元の感想は「知らんがな」の一言に集約した。

その絡みで将輝の妹である茜が２月２４日に東京へ来て、その観光案内を悠元がする羽目となった。尤も、それ以前に東京へ来ていた愛梨と沓子（表向きは家の都合）が同行する形となったことは茜も少し不満を見せていた。茉莉花とアリサのことがあったとしても、二人と茜では置かれている前提条件が根本的に異なるためだ。

そのことが分からない茜ではなかったため、渋々受け入れる代わりに悠元の傍から離れようとしなかったことに、愛梨と沓子は揃って苦笑を漏らした。

将輝と深雪の件だが、流石にデート云々というのは目立ってしまうため、エリカらにも協力を頼み込んだ。具体的にはレオとエリカ、幹比古と美月に佐那の五人を将輝と深雪、水波に付き合わせる形にしたことにより、仲の良い男女の友人同士が遊んだようにしか見せなくした。

費用は全額「下らん茶番に付き合わせる慰謝料」として予め渡しているが、最初一人あたり１００万円ぐらい払おうとしたらエリカから「確かに悠元の言い分も理解するけど、それだけは勘弁して」と言われた。解せぬ。

結局、将輝は深雪に告白したが、深雪はしっかりと丁重に断った。これで将輝が素直に諦めてくれればいいが……と思っていた次の日

の月曜日、将輝から模擬戦の申し出を受けた。こちらから条件をあれこれ付けるのは面倒だったため、将輝の望む条件を全部呑んだ上で勝負に挑んだ。
　勝負自体はモノリス・コードで見せたような遠距離からの空気弾の打ち合いだが、今回はほぼ無制限である（但し『爆裂』は除く）。その状況下で悠元は将輝からの攻撃を全て『ファランクス』で凌ぎ切り、更には将輝の圧縮空気弾の魔法式と逆の作用を引き起こす魔法式を重ねることで強制定義破綻による魔法発動を封じた。
　攻撃の手段を封じられた将輝に対し、悠元は『攻撃型ファランクス』を展開して将輝を吹き飛ばし、気絶に追い込んだ。その模擬戦の結果を見た達也曰く「あれは俺でも心が折れると思う」とのことだった。
　言っておくが、天神魔法を含めた古式魔法は一切使わずに相手と同じ現代魔法の範疇で戦っている。『ファランクス』の多重魔法展開・断続的な魔法保持の技術は元々第三研で開発された技術なので、別にこちらが『ファランクス』を使えたとしても文句を言われる筋合いはない。
　模擬戦の後に禍根を残さないという悠元の言い分を将輝は呑んだが、これで諦めないというのなら今度は本気で心まで折りに行くつもりだ。そんな一幕が過ぎた3月１０日、悠元は横浜の日本魔法協会支部に赴いていた。千姫から神楽坂家の家督を継承されたとはいえ、社会的には未成年であるために当主としての本格的な仕事は表に出ない部分が大半となっている。そもそも、面会が秘匿を求められる相手だからこそ、悠元は特に異論を唱えなかった。
「ごめんなさいね、悠元君。この場合は神楽坂殿とお呼びすべきでしょうか」
「他に誰か見ているわけでもありませんので、言葉遣いに一々注文は付けませんよ。それに、四葉家の置かれている状況は理解しておりますし、私自身の用事もありましたので」
　悠元はテーブルを挟んで向かい側に座る真夜、その背後に控えている葉山を見つつ傍に置いた鞄から封筒をテーブルに置いた。真夜の指示で葉山が封筒を受け取り、中身を精査したところで真夜に手渡し

た。真夜はその中身に目を通して封筒に仕舞ったところで溜息を吐いた。
「…はぁ。顧傑の一件が片付いた矢先にこれですか。でも、悠元さんなら直接たっくんに頼めるでしょう？」
「そうすると、貸し借りの勘定を持ち出してくるんですよ。幸い、今年は5年の節目となるので彼岸の法要もありますし、私も関係者――三矢家代理として赴きますので」
悠元が渡したのは大亜連合からの脱走兵――――日本との講和条約に反対を唱えていた勢力の兵士が今月下旬に久米島沖の人工島で行われる竣工記念パーティーの妨害工作を計画しているというもの。
脱走兵の詳細については紙媒体として渡す形とし、5年前の事件に関与している達也と深雪の協力を仰ぐのではなく、あくまでも四葉家としての〝公務〟という形で関わらせるつもりでいた。それが達也の当主就任への箔付けの意味合いもあることは真夜も気付いている為、そこに触れることは一切なかった。
それに、悠元は当時三矢家の人間として戦闘に参加している。三矢家の関係者ならば元治も該当するが当時四葉側だった穂波と結婚しているし、その彼女は今大事な時期にある為に悠元が三矢家代理として出向くことになっている。
「そういえばそうでしたね。悠元君はこの妨害が成功すると思っていますか？」
「……講和状態を拗らせるには些か手が弱いです。せめて、公海上から大亜連合の潜水艦が首都に向けてミサイル攻撃をするレベルでないと無理でしょう」
ある程度の装備を有していたとしても、調べ上げた内容では決定打に欠けている部分が多い。仮にオーストラリアによる戦略級魔法の攻撃を仕掛けたとしても、使われた魔法で当事国の責任追及は免れない。
〝原作〟を知っているからこそというのもあるが、この作戦はあくまでも失敗を前提としたものと考えるべきだろう。
「とはいえ、国家体制の再編の最中に余計な横槍は勘弁願いたいのが

本音です。なので、師族会議の議長たる神楽坂家の当主として四葉殿に工作阻止の協力を要請します」
師族会議はあくまでも２０８９年以降の師族会議の体制や慣習を引き継ぎつつも、一色家が新たに十師族の一角として入った。そして日本魔法協会の本部が置かれている京都を含めた近畿（兵庫・大阪を除く）は護人の二家が管理下に置き、古式魔法師が多い地域は九島烈を含めた「九」の家から完全に切り離した。
ただ、統括の役目を神楽坂家と上泉家が引き継いだため、師族会議の議長役についてはこの二家による相談の上、十師族の合意によって行うことが決定された。２０９７年から４年間は神楽坂家当主――悠元が議長役を務める。これは悠元の実績を鑑みてのものであり、三矢・四葉・六塚・十文字・七宝・一色の６家による推薦を受けて就任する運びとなった。
尤も、未だ高校生であるために非常時の副議長として上泉家当主の元継が入ることになったが。
「異存はありません。四葉家としても看過できませぬ故、師族会議の要請を引き受けましょう。それにあたって何か注文はありますでしょうか？」
「そうですね……仮に件の魔法師を捕らえたとしても、その中にこちらの内情を探る輩を紛れ込ませるかもしれません。なので、身柄の拘束については警察省の管轄に委ねるつもりです」
四葉家や三矢家、護人でも〝彼女〟の身を預かりたくない。かと言って国防軍に預けるのは交渉材料を渡すも同義。なので、国内法に基づく犯罪処理という意味で警察省に委ねるのが妥当ということにした。
「国防軍には預けられないと？」
「交渉材料となる要素は排除すべきと考えます。まあ、最悪私の権限で国防軍から警察省に引き渡します。達也と深雪には封筒の内容に基づいて依頼をお願いします」
「分かりました、神楽坂殿。そうそう、深雪さんはご迷惑をかけていないかしら？」

「寧ろ献身的で助かってます。まあ、今日は一条の見送りで達也と同行してます」
　別に将輝に対しての気遣いではなく、先日の模擬戦で若干の蟠りが残っているからこそ悠元は見送りに顔を出す気が起きなかっただけだ。言っておくが、悠元自身は将輝に対して含むところは一切ない。人の婚約者だと知っておきながら近づこうとした以上、完膚なきまでに叩きのめしただけに過ぎない。
「私としては水波が少し身を引き気味なのがどうにも」
「あの子は元々ガーディアンとしての気質が強いですから。何でしたら、私の方から発破をお掛けしますわ」
「……度が過ぎない程度でお願いします」
　婚約者（表向きは候補扱い）とのスケジュール管理は現状２週間サイクルだが、平日は司波家で、週末は神楽坂家の本邸や別邸、上泉家に出向くことが多い。大体予定を埋めると月に２日程度は一人で過ごす時間が取れている。
　いくらチートじみたとしても、精神を休ませたい時ぐらいはある。そういう時は大体達也の手伝いでＦＬＴに出向いていたりもしている（表向きは株主扱いである元の代理という体は今も継続している）。
　深雪の発破によって関係を持つことに至っても恥ずかしいものは恥ずかしいらしく、この前風呂上がりでのんびり着替えていたら入ってきたエプロン姿の水波が顔を真っ赤にして逃げていった……一般的な女子の反応を見ているような気がして、とても元調整体とは思えない人間らしさを感じた。
　その後、自室に戻るとベッドの上の正座する下着姿の水波がいて、「私を躾けてください」と土下座をされて言われたときにどう返そうか迷ってしまったのはここだけの話。
◇　◇　◇
　達也らが司波家に戻ったところで、達也から今回の任務についての細かい事情を聴きたいという要望があり、夕食後のリビングで水波の淹れたコーヒーを口にしつつ話し始めた。この辺は達也が真夜から受けた依頼の内容を深雪にも話しておきたいという思惑があるのは

言うまでもない。
「まず最初にだが、日本と大亜連合で講和条約が結ばれたことは知っているだろう。昨年の対大亜連合強硬派のような勢力が大亜連合について、そいつらが脱走した形になる。ＵＳＮＡの一件は大亜連合とて知っているだろうから、早々に解決したいと思うはずだ」
「そうだな。だが、そいつらを唆した黒幕もいるのだろう」
「……ああ。オーストラリア――――いや、この場合はイギリスと言うべきだろうな」
「何故イギリスが？」
　疑問に思っても仕方がないだろう。大亜連合もとい中国大陸とイギリスでは過去に大きな因縁がある。その最たるものはアヘン戦争とそれに伴う香港割譲だ。とりわけ過去の因縁を強く重んじる中国方面からすれば面白くないことかもしれない。
　だが、国際魔法協会の本部がロンドンにある以上、大亜連合とて無視できる要素ではないし、イギリスにある魔法技術のいくつかは香港方面を経由して大亜連合にも伝わっている。
「一昨年秋の横浜の件だが、大亜連合が偽装した武装艦船の船籍はオーストラリア国籍扱いになっていた」
「悠元は、その時点で大亜連合とイギリスの繋がりを怪しんだのか？」
「正確にはそれ以前からかな」
　剛三の海外旅行に同行した（連れ回されたと言うべきだが）折、オーストラリアで戦略級魔法『オゾンサークル』の攻撃を受けたことがあった。即刻無力化した挙句自身の能力でその魔法を覚えてしまったのは言うまでもないが。
　それだけでイギリスの関与を疑うのはどうかと思われるだろうが、オーストラリア軍の魔法技術はイギリス軍のそれに近い系統だと肌で感じていたため、この感覚を悠元は信じていた。
「それで、悠元。このことはターゲットとされる人物に伝えるのか？」
「今回は極秘任務扱いだからな。早めに伝えて要らぬ警戒を与えるだけでなく、工作員が自棄にならんとも限らん。手筈は整えるが、パーティーの直前に伝えるべきだろう」

ターゲットとされる人物は信頼できるものの、その身近にいる人間が吹聴しないとも限らない。それで相手が自棄を起こして戦略級魔法を放たれる方が面倒になる。
なので、今回に関してはパーティーの直前に伝える方向で行くべきだと思う。ただ、一部の人間にはそれとなく伝えておいた方がいいかもしれない。
「近日中に大亜連合政府から脱走兵捕縛に関する協力の打診が来るだろう。こちらとしても受けるのは吝かではない……万が一の場合は俺自ら手を下すが」
この国に大きく関与している大亜連合軍関係者となると、陳祥山（チェンシャンシェン）と呂剛虎（ルウガンフウ）が該当する。周公瑾の手引きによる一件は未だに忘れていないが、大亜連合の脱走兵が日本国内をうろつかれる方が迷惑極まりない。なので、彼らを捕まえるために動くことは異論などない。

◇　◇　◇

その翌日、悠元と深雪が授業のために移動しているところで雫から声を掛けられた。
「悠元、深雪。昨日はゆっくり過ごせた？」
「まあな。それで、改まってどうしたんだ？」
「うん、皆で沖縄に行かないかって」
雫からのお誘い。この辺は元々〝原作〟で知っている流れの為、悠元は特に驚くこともなく雫の話を聞くことにした。
「この時期に沖縄と言うと、例の人工島か。確か、雫のお父さんの会社も出資していたよな？」
「そうだね……悠元がいると話がサクサク進むのは嬉しいけど、なんか釈然としない」
「なんでやねん」
雫の父親である潮は日本でも有数の企業グループの総帥。なので、久米島沖の人工島『西果新島』に出資していたとしても何ら不思議ではない。補足だが、その人工島には上泉家お抱えの建設会社が大きく関わっており、神楽坂家も神坂グループを通して出資している。雫が

やや膨れ気味になったことに悠元が疲れたような表情を浮かべると、深雪とほのか、そして姫梨がクスッと笑みをこぼしていた。
「済まないが、俺と深雪は同じ時期に家の用事が入っていてな」
「それって、神楽坂家絡みですか？」
「今年で沖縄海戦から５年の節目ということで、慰霊祭の打ち合わせと彼岸の法要が入っているんだ。俺も元十師族だし、今回は三矢家代理ということで出向くことになってる。深雪の場合は言うまでもないけど……何故背中を抓るんですか、深雪さんや」
「悠元さんはズルいです」
「解せぬ……」
説明する機会を奪ってしまったことには謝るが、ヤキモチに似た感情を向けられることに悠元は一つ溜息を吐いた。
「なので、お兄様と私、それに悠元さんは２３日の終業式が終わり次第沖縄に発つことになっているの」
「そっか……もし時間が空いたら、一緒に遊ばない？」
「そうね、ほのか。都合が付いたら連絡するわ」
この辺は特に何も変わり映えしない日常。そして３月１５日。卒業式自体も滞りなく進行した。現部活連会頭として前会頭の服部に花束を渡すことも特にトラブルは起きなかった。
ただ、悠元が一つ文句があるとすれば、まさかの送辞を読む羽目になった事だろう。本来なら生徒会長である深雪だけの役目の筈が、変な気遣いで急遽書き上げることになった（生徒会長と部活連会頭が送辞を読むという異例だが、教職員は止めなかった）。別段トラブルを起こさないよう言葉遣いに細心の注意を払ったが、読み終えた後で達也から「何か悪いものでも食べたのか？」と気遣われてしまった。解せぬ。
◇　◇　◇
３月１７日、日曜日。霞ヶ浦の独立魔装大隊本部の会議室には悠元と達也だけでなく、風間と真田、柳と響子の六人が揃っていた（悠元と達也は軍服を着ていない）。なお、響子が達也と会った際に抱きしめていたのはここだけの話だが……悠元は紙媒体の束を持ちながら

一つ溜息を吐いた。
先日の顧傑の一件で蟠りが生じてしまったわけだが、今回の件は蘇我大将から直接佐伯少将への〝命令〟であるし、講和状態の崩壊に繋がるとなれば佐伯も断ることは出来なかった。
「風間中佐。何で私が説明役なんですか」
「この場にいる人間の中で最高位は中将閣下ですので、小官はそれに従ったまでです」
風間の冗談も含むような言葉に響子だけでなく真田や柳も思わず笑みをこぼし、達也も苦笑に近い表情を見せていた。このまま押し問答を続けても意味が無いと悠元は諦めて説明を始めた。
「はぁ……まずは体制再編で忙しい中、集まって頂いて感謝する。今回の件は久米島沖の人工島『西果新島（さいかしんとう）』の竣工記念パーティーを狙う破壊工作を阻止することにある」
情報では既に国内に入り込んでいるのを確認している。大亜連合だけでなくオーストラリアからの〝観光客〟もいることから油断はできない。
「今回のパーティーだが、国外からＳＳＡとフランスの首脳クラスが来日する運びとなる。特にＳＳＡからは戦力の協力の申し出を受けたので、これを受諾した。何でも戦略級魔法師クラスとのことだ」
「かの国の……『十三使徒』ミゲル・ディアスですか？」
「それとは別らしいが、聞いた話ではあの『魔王の再来（リターン・オブ・ルーデル）』らしい。うちの祖父の手解きを受けているので、実力は折り紙付きだと思う」
相手が戦略級魔法師まで用いてくる（表向きは「その可能性がある」）以上、魔法師の協力を受けられることに異存はない。その辺の話は剛三から直接聞いていたが、『妙なもの』に憑かれていると述べていた。ただ、パラサイトのような本能的なものではないと判断して見逃したらしい。
「話を戻すが、今回の陣頭指揮は風間中佐に一任する。中佐以下四名は先行して沖縄に入り、工作員の情報を洗っていただきたい。本官と大黒特尉は彼岸供養の後で合流する。尤も、特尉ではなく四葉家の魔法師である司波達也として、私も神楽坂家の魔法師として協力する形

となるので、そこはご了承いただきたい」
「了解であります」
「達也も異存はないか？」
「ハッ、誠心誠意任務にあたらせていただきます」
「……達也」
よもや国防軍の特務士官として敬礼してくるとは思わず、怪訝そうな表情を浮かべた悠元に対して周囲の大人たちから笑みが零れたのだった。

残念だがそこは私のゾーンではない

２０９７年３月２３日、土曜日。
終業式終了後、悠元と達也、深雪と水波、そして悠元の発案（プラス真夜の依頼）でリーナの五人が慌ただしく沖縄へ向けて発つことになった。悠元ら四人とリーナは東京湾海上国際空港のエグゼクティブクラスラウンジで合流する運びとなった。
「あら、タツヤにミユキ。それにユートも」
「リーナ？　どうしてここに？」
これには達也や深雪も目を丸くしていた。
悠元はリーナの参加に関してセリアに言及はしていたが、判断自体はセリアと四葉家側――――真夜に委ねていた。真夜としても達也に婚約者の序列をそろそろ決めて欲しい思惑があるのだろう。
なお、その上位候補となるほのかは雫と一緒に２５日の便で沖縄入りするし、今回は亜夜子も四葉家もとい達也のバックアップとして２４日に現地入りするらしい。
「〝そっち〟の御当主様に依頼されたのよ。タツヤの仕事を手伝ってほしいって。まあ、タツヤの婚約者のことが大きいんでしょうけど」
「その件か……母上から何も聞いていないんだがな」
リーナの説明に対してそう返した達也の言葉も決して間違っていない。真夜はその件を執事の青木に任せているわけだが、元々青木は達也のことを快く思っていない。それを分かっていて達也絡みの仕事を任せる辺りは真夜も意地が悪いと思う。
「リーナの実力は私も把握しているけど……今回は魔法戦というよりも社交がメインになるわ」
「分かってるわよ、ミユキ……セリアとシルヴィに散々叩き込まれたからね」
リーナの社会適応能力改善計画の一環で、セリアとシルヴィ、そして九島烈から社交儀礼を改めて叩き込まれた。元々祖父にＵＳＮＡ大統領を持つ身としてその辺のマナーなどは叩き込まれているわけだが、日本とＵＳＮＡで異なる部分も多い。なお、その過程で何度も

セリアに関節技を掛けられて現世と〝綺麗な川まで一歩手前〟の反復横跳びをする羽目になったのは口に出さなかった。
「にしても、達也や深雪と知り合ってもう5年も経つのか。何だかあっという間だな」
「もしかして、ユートって沖縄の一件の関係者？」
「もしかしなくてもそうだよ。達也は深雪のボディーガードみたいな感じだったが」
「そうだったな」
　中学1年の夏――――沖縄防衛戦の前に知り合った悠元と達也、そして深雪。その頃を懐かしむように達也が呟くと、深雪は頬を紅く染めていた。
「そうですね。思えば、私の初恋もその時の出会いでしたし。あの時は悠元さんと別れるのが何だが心苦しかったんですよ。今になって思えば、私はその時から悠元さんが好きになってたのかもしれません」
「ねえ、タツヤ。ホノカから聞いたんだけど、ミユキってあの『クリムゾン・プリンス』から惚れられてたんでしょ？　どう見ても彼に勝ち目がなかったのね」
「……そうだな」
　達也としては、もしあの時悠元と出会っていなければ、深雪の愛情の矛先が全部自分に向いていたかもしれないと思った時、「とても正気でいられる自信がない」と結論付けた。その意味で悠元という存在は達也を救った恩人とも言えるかもしれない。
　悠元が深雪だけでなく複数の女性を娶ることになった訳だが、それは何も彼だけに限った話ではなく、達也も直面する話である。
　今回は全員エグゼクティブクラスのカプセルシートになった。水波は使用人ということでどうなのかと抵抗を示していたが、悠元の「表向きは深雪の護衛なのだから、深雪の近くにいるのが道理だと思う」という言葉に達也も同意したため、慣れない様子でカプセルシートに座っていた。
　5年前は達也がノーマルシートに座っていたが、今の達也は四葉の

次期当主であるために同じカプセルシートとなった。その達也も贅沢することに慣れていないせいか大人しく端末に視線を落としていた。

沖縄の宿泊は空港近くにある神坂グループ系列の高級ホテルとなった。沖縄にあった別荘は誰も住まなくなったことを理由として処分したそうだ。この世界では穂波が存命しているが、将来ここの地域の監視が七草家になった際、色々問題が生じるのを避ける意味も含んでいるが。

ホテルの部屋割りに関しては、手配自体を四葉家に全て任せた結果として悠元と深雪と水波、達也とリーナの組み合わせになった。

元々三人と二人の組み合わせとなるよう予約されていたが、それを聞いた深雪とリーナが共謀した結果の為、悠元と達也は揃って疲れた表情を見せる羽目となった以外に何かしらの出来事は起きなかった。

その翌日、3月24日の彼岸法要も特段何かしらの出来事が起きることはなかった。達也とリーナは四葉家の代表（その際、リーナは達也の婚約者候補として振舞った）、悠元と深雪は神楽坂家代表および三矢家の代理として振舞っている。

ここまでは予定通りの流れであり、式典が終わって着替えた悠元らが向かったのは空港の隣だった。国防陸軍那覇基地のすぐ目の前にある二階建てのレストラン。ここは沖縄料理店ではなく「取り残された血統（レフト・ブラッド）」と呼ばれる元沖縄駐留米軍遺児の子孫が経営するステーキハウスだ。

「おっ、達也に悠元！　久しぶりだな」

「久しぶりだな、ジョー。この前東京に来てた連中に聞いたけど、昇進したんだって？」

「おう、軍曹にな」

髪を剃り上げた大男――――ジョーこと桧垣ジョセフは悠元や達也と対等に接している。5年前の沖縄の一件が起きる前まではチンピラのような言動を見せることが多かったが、あの戦いで功績が認められて「取り残された血統（レフト・ブラッド）」に対する偏見の目が和らいだのは事実であった。

一部のレフト・ブラッドが反乱を起こして敵を手引きした事実はあったが、そこに関しては秘匿された。これは悠元も同意見と言うか、戦闘のドサクサに紛れて「消し飛ばした」ため（報告書では「戦闘による消息不明」と記載された）、その事実を隠蔽する意味でも提案を呑んだのは正解だったようだ。

ジョセフは達也と悠元に負かされた経験があるからこそ、二人の実力を誰よりも認めている。今日は非番で店の手伝いをしているのが彼の恰好から見て取れた。

「お前らの方も良く名を聞くぜ。まさか達也があの」

「ジョー、ＴＰＯを考えようか」

「あ……す、すまねえ。お連れさんが二階でお待ちだ。そこの階段から上がってくれ」

ジョセフが何を言い出すかを分かったため、悠元が遮ったことでジョセフも「危うく口を滑らせるところだった」と我に返り、悠元と達也はジョセフに目礼で返してから二階へ上がった。扉の前でノックをして「神楽坂悠元です」と述べると、鍵が開く音がして扉が開いた。その役目を担ったのは真田だった。

「よく来たね、さあ、入って」

真田には事前に同行者の存在を告げていたが、その中にリーナがいたことに風間や真田は驚きを見せていた。リーナが達也の婚約者候補の一人ということは当然知っている。彼女が〝アンジー・シリウス〟ではないかという疑念を抱いていることは知っているが、達也と悠元は真実を知らせていない。

そして、そこにもう一人の婚約者候補が達也たちに近付いた。

「達也君に深雪さん、それに悠元君。式典では声を掛けられなくてごめんなさいね」

「藤林中尉。いえ、それは気にしていません」

「そう……それで、貴女がお祖父様の弟さんの孫娘ね。はじめまして、九島烈の孫にあたる藤林響子といいます」

「九島健の孫娘のアンジェリーナ・シールズです。九島閣下には個人的にお世話になっております」

本来ならこうやって出会うことが無かった九島家の縁者同士の会話。そこから達也絡みの話で盛り上がっているわけだが、悠元はその部屋の中に風間と真田、そして陳祥山がいた。
達也と水波、リーナはともかくとして悠元と深雪は一昨年の横浜で彼を拘束した側の人間。なので、深雪は彼の存在に驚くのも無理はないだろう。それに気付いているからこそ、風間が忠言を入れるような形で口を開いた。
「今回の作戦だが、我々と協力関係にある。大亜連合軍の陳上校は味方としてここにいることを理解した上で席に座ってくれ」
「分かりました。『今回は』ですね？」
風間は悠元が国防軍の軍人であり、皇宮警察特務隊『神将会』の人間であることも知るからこそ、この中で一番の実力を有する悠元に了解を求めた。これには悠元も念を押すような言い方をして席に着いた。
その言い方には真田が思わず苦笑いを零したが、見なかった振りをして風間の説明を待った。席には達也と悠元、深雪が座り、リーナと水波がその傍に立つ形を取った。
「早速だが、現状を説明する」
沖縄本島に既に入り込んでいる工作員に大きな動きは見られず、一度大亜連合軍の『人食い虎』呂剛虎をけしかけたが、それに対して報復行動を取ることもなく現状は慎重に振舞っている。
工作員の内訳だが、本島に六人。この中に日本人二人とオーストラリア人が一人含まれている。いずれも本島内で大きな動きを見せておらず、目標とされる場所に重点を置いている節がみられるとのこと。すると、達也がオーストラリア人と言うところに興味を持った形となって風間に問いかけた。
「オーストラリア人ですか？」
「パスポート上はな。搭乗記録も出発地はシドニーとなっている。名前はジェームズ・ジャクソン。年齢は４０歳で職業はジャーナリスト。入国の目的は観光、１２歳の娘を連れている」
風間はそう言ってタブレット型端末を悠元に渡す。達也と深雪に

も見えるように持ちつつ表示されているその写真を眺めていると、悠元は何かを思い出す様な仕草を見せていた。これには達也や深雪だけでなく風間も疑問に思い尋ねる。
「どうしたんだ、悠元君。もしかして、彼らに心当たりがあるのか？」
「どこかで見たような気がするんですよね。多分、爺さんの付き添いでオーストラリアに立ち寄った際なのは間違いないのですが……少なくとも、見た目はあてにならないと思います。とりわけ魔法師ならば尚更かと」
　原作の知識をそのままいう訳にはいかないし、悠元が発した言葉も決して嘘ではない。少なくとも彼らが助けた側の人間でないことは確かだろう。なので、思い出したら連絡するということにした。悠元自身独立魔装大隊との連絡手段を有している為、特段問題はない。
「カモフラージュではないと考えているのか？」
「ええ。一度メディア方面で素性を洗い出してみます。工作員である以上は裏付け程度にしかなりませんが」
「いや、そちらには疎いからしてくれるだけでも助かる……達也君も同様かな？」
「はい。単にカモフラージュならば彼女のような存在はかえって足手纏いと見るのが普通です。こちらの眼を惑わす何らかの『切り札』である可能性を考慮すべきと思います」
　陳祥山の前で言っていいのかと思うかもしれないが、自分の場合は実力行使自体最後の手段と認識している。実際に戦う前に相手の戦意を削げば、余計な人的被害を抑えることは十分に可能なラインとなる。
　それでも交戦意欲が抑えられないようならば、美味そうな領土を〝北〟に用意してやればいい。尤も、手を出せば泥沼に嵌る毒饅頭にしかならないが。
「悠元ならば知っていることだが、オーストラリア人の情報の入手は難しい。だが、君らの意見を考慮して対応に当たるとしよう。それまでは英気を養ってくれ」
「分かりました」

沖縄本島で騒ぎを起こしつつ久米島方面への狙いを逸らさせる可能性も否定できないが、敵の狙いが西果新島であることは間違いない。風間も陳祥山から齎された情報で確証に至っている節がみられた。

陳祥山に対して隠すべきことは悠元と達也が戦略級魔法師であること。その一点さえ秘匿できれば他の部分は公表されてしまう部分になるので何ら問題は生じない。悠元の場合は秘匿する項目が多すぎる訳だが、彼の前では『神将会』として名乗っているため、これ以上彼にバレたところで何のデメリットもない。

寧ろ、悠元が戦略級魔法師だとバレた際のリスクを彼に押し付けることもできるため、特段困ることはない。

「私の方からは以上だ。この後はどうするかね？」

「そうですね……深雪が疲れていますので、この場はお暇させてもらおうと思います」

「そうか」

風間の言葉に悠元がそう言い切った。

今回は事情故に陳祥山が味方側にいるわけだが、こちらの手の内を明かせるほどに友好的になれる相手でもない。とりわけ大亜連合内に日本のような小国を侮る様な感情や思想が根付いている限り、悠元とて無条件に信用など出来るはずがなかった。

そして、達也を先頭にする形で部屋を後にする際、悠元が陳祥山に対して『中国語』で言い放った。

『陳祥山、今回は味方として見ておいてやる。だが、次に敵と見做した時は呂剛虎共々お前らをこの世から消す。横浜であれだけのことをした以上、無残に死にたくなければこの国を攻めようなんて馬鹿げた考えを捨てることをお勧めするぞ』

そう言い放って扉が閉まった後、陳祥山は図らずも一つ深い息を吐いた。何故かと言えば、彼からとてつもない恐怖を感じてしまったからだ。大亜連合軍の特殊部隊を率いる軍人である陳祥山からしても「あれが本当に人間が放つことのできる殺気なのか」と思わざるを得ないほどに。

無論、その部屋にいた風間と真田も、そして響子も悠元が述べたことに大方の察しがついたためか、揃って冷や汗を流したのは言うまでもない。

◇　◇　◇

悠元と達也が風間と会っていた頃、那覇のショッピングモールを一人の金髪の男性が歩いていた。長身かつしっかりとした筋肉を持ち、ジーンズとTシャツの上から薄地のジャケットを羽織っているが、目を隠す様にサングラスをかけていた。

「まったく、閣下に息抜きをしてこいとは言われたし、ナターリアの面倒は伯母さんに任せられたからいいものの……こうやって外を歩くのは何時ぶりだろうな」

そうぼやくように呟いたのは、南米連邦軍（ＳＳＡ軍とも言われる）所属のハンス・エルンスト大佐その人だった。先程沖縄海戦の彼岸供養にも大統領の付き添いとして出席したが、幸い人々の関心は四葉と神楽坂の二家の出席者に向いており、ハンスもその為人を情報として得ている。

（司波達也。あの若さで四葉の次期当主とは大したものだ。隣にいた神楽坂悠元――――お世話になった上泉剛三殿の孫にして神楽坂家当主か……）

『近くにいたのはフィアンセだろう。尤も、君も負けていないじゃないか』

（誰のせいだ、誰の）

そんなハンスの脳裏に語り掛けてくるのは、奇妙な縁で彼に住み着いた〝相棒〟――――前世紀の魔王ことハンス＝ウルリッヒ・ルーデル（以後ルーデルと呼称）だった。彼との出会いによってハンスは戦略級魔法師としての実力を手にすることになった……その切っ掛けを作ったのは悠元の魔法実験の結果に出来たアクセサリーということから、彼もまた埒外の影響を受けて覚醒した魔法師であった。

特に目的は無かったが、せめてお土産でも買っていこうかと歩いていたハンスはルーデルとの邂逅で得た〝魔眼〟――――自身の視力のみならず情報体次元の変化まで視ることができる能力――――で視界

の先に１２歳ないし１３歳ぐらいの少女がいることを確認した。これにはルーデルも気付いた。
『ほう、金髪の少女か……』
（どうした、ルーデル。お前なら「即刻声を掛けるべきだろう」とか言いそうなものなのに）
『失敬な。まるで私が見境の無い幼女趣味みたいではないか』
（お前の生前がそれを物語ってるだろうに）
　最初はドイツ軍のエースパイロットの憧れとして接していたが、ハンスも相棒の無茶ぶりに対していつしか敬語を使うことすら忘れていた。ルーデルからすれば、こうやって自分を敬わずに接してくれる相棒のことをとても信用していた。
『私はこう思うのだよ。姿と中身は限りなく似通るべきだと。無論、女性が綺麗でい続けたい論理は尊重すべきだが、あれは私のストライクゾーンから大きくかけ離れているな……それにハンス、気付いているか？』
（……無論だ。誘拐かそれに乗じての猥褻行為か……どうやら、俺以外にも気付いている人間がいるようだが）
　ハンスの視界の先では、その少女に声をかけている一組の男女の姿がいて、つかず離れずのところに男女の五人組がいる。見るからに高校生か大学生の一行で、視えるサイオンの量からして魔法師なのは間違いない。
　そして、彼らが近付いたところで少女を狙う黒服の男たちが近付く。あたりに人影がない事から、恐らく人除けの結界とハンスは判断した。
『どうするかね、ハンス？』
（この状況だと、よく分からんのが本音だ。黒服の連中だが、動き方からするに――あれは軍人だ。しばらく見守るぞ）
『そうだな。介入するかはハンスに任せよう』
　そうして日本人の魔法師らと黒服の連中が戦闘になるわけだが……いや、最早戦闘と呼ぶにはあまりにもかけ離れ過ぎた一方的ないじめに等しかった。

何が起きたのかと言えば、沢木が『圧力波(マッハ・パンチ)』で男二人を戦闘不能に追い込み、桐原は『高周波ブレード』の応用で相手の脳を揺らして強制的に脳震盪を起こさせることで相手を黙らせた。壬生はファッションベルトに擬態した五十里家謹製の護身具を用いて瞬く間に叩き伏せ、残る連中も服部やあずさが適切に対処した。

ここまではよかったわけだが、黒服の二人が魔法を使わなかった五十里と花音を狙おうとした。これには流石の服部や桐原も焦ったが、彼らの間に割り込んだ影がその危機を救った。

「ほい、大人しく寝てやがれ」

「がはっ!?」

その影は言うまでもなくハンスであった。状況が分からない以上、偶々結界内に取り残された人間として少女を救おうとした彼らが真っ当な人間だと判断した。尤も、少女の方はルーデルが指摘したことがあるために現状で〝シロ〟とは断言できない。

戦車を破壊することに比べれば、魔法で強化した人体といえどまだ楽。とはいえ、相手の事情も読めない以上は気絶させるのが妥当と判断した。そうやって助けに入ったハンスに対し、五十里が礼を述べた。

「えっと、ありがとうございます」

「礼はいい。ひとまず、その少女を連れてここを離れるぞ」

「えっ、ですが……」

「こんな状況を警察に説明する方が面倒になる」

ハンスの見立てが正しければこの一件で警察の時間を取らせるのはマズいし、彼らの折角の旅行を台無しにしたくはない。その意見に沢木が同意したことで、一行はモール内のファーストフード店に向かうことにした。

餅は餅屋の仕事

ファーストフード店に入り、ここは大人の責任ということでハンスが全て支払った。あの場を離れるのはどうかという懸念もあったが、ジャズと名乗った少女が「ＧＰＳ付きのモバイルを持っているから大丈夫」と発言したことで、彼女の父親と思しき人物が彼女を見つけるのも時間の問題だろうと判断した。

そしてテーブルに全員が揃ったところで紗耶香がジャズに話しかけた。

「ジャズ、大丈夫？　怖くなかった？」

「ええ、大丈夫。お姉さんたち、ありがとう」

ハンスから見て、日本語を巧みに話せる時点で日系人の線を疑った。やけに大人びた振る舞いはどうにも気に掛かっていたからだ。すると、服部がハンスに話しかけた。

「先程は助かりました。ええと……」

「ハンスだ。言っておくが、そちらの『ジャズ』と名乗ったお嬢さんとは無関係でな。先程の騒動に図らずも巻き込まれたようなものだ」

「そうだったのですか」

ハンスとしては嘘をつく理由がないため、ありのままに起こったことを伝えると、特に怪しむ要素もないために服部や桐原、沢木は納得したような様子を見せていた。一方、女性陣はジャズと話しているわけだが、先程の人たちに関して心当たりは無いと述べていた。

だが、ハンスの内心ではルーデルの言葉も気に掛かる為、念のためにサイオンの動きだけを読み取ったところで彼女の父親と思しき人物が姿を見せた。

「ジャズ！」

「ハイ、ダディ」

「急に居なくなって！　ＧＰＳでこの店に辿り着けたからよかったものの……それで、貴方方は？」

仕草を見る限りでは娘を本気で心配する父親の構図に見えなくもない。すると、彼は服部らに気付いてジャズと一緒に居ることを含め

て尋ねた。
「ジャズのお父さんですね？　私は服部刑部といいます」
（服部刑部……確か、国立魔法大学付属第一高校だったか。となると、大方卒業旅行の類ということか）
　ハンスは下手に口を出さず、事態の推移を見守ることにした。服部は先程ジャズが四人組の男たちに狙われ、最終的には十人ほどの集団に襲撃されたが、事なきを得たことをありのままに伝えた。
　すると、ジャズの父親は被っていた帽子を取って頭を下げた。
「偶然その場に立ち会わせたため、娘さんを人目の多い場所にお連れした次第です」
「ソーでしたか。モーシ遅れました。ワタシ、ジャズの父のジェームズ・ジャクソンと申しマス」
（……いや、さっき普通に喋っていたよな？　わざわざカタコトにする必要があるのか？）
　ジェームズの娘よりも下手な日本語という時点で、どうにも違和感が拭えない。ただ、服部らが問い詰めるような素振りを見せなかったため、ハンスもその雰囲気に同調して問い詰めようとはしなかった。
「まだ仲間が近くにいないとも限りません。もし警察に行かれるというのでしたら同行いたしますが」
「イエ、それには及びませン」
「そうですか。せめて、人目の多い場所を選んで行動されたほうが宜しいかと思います」
　これには流石のハンスも訝しんだ。いくら外国人とはいえ、先程の件を警察に相談するぐらいは〝真っ当な立場の人間〟ならしてもおかしくはない。だが、それを彼が拒んだということは……彼らは〝真っ当な目的〟でこの国を訪れているとは考えにくい。
　そして、父親に手を引かれて去っていくジャズの姿が見えなくなったところで、ハンスは遮音フィールドを張った。その手際の良さに服部らは目を見開いていた。
「貴方は、魔法師なのですか？」
「まあ、間違ってはいない。言っておくが、ちゃんとした手続きで入国

しているし、襲って来た連中も知らないことは確かだ。ただ、あの男たちが普通じゃないのは……君も気付いていたんじゃないのか？」
「……ええ。分かりやすかったですか？」
ハンスがそう言って視線を向けた先にいたのは沢木だった。沢木が何か懸念を覚えるような表情をしていたことにハンスが尋ねると、沢木は正直に頷いた。
「俺でも注意深く見ないと無理だったさ……あの黒服の連中は中国語を使っていた」
「それって、大亜連合の？」
「いや、一概に決めつけることはできないと……ハンスさんの意見はどうなのですか？」
「俺は格闘技も齧っているわけだが、連中は大陸方面の軍隊格闘技に古式魔法を使っていた。サイオンの流れからして『鋼気功（ガンシゴン）』と呼ばれる身体強化術式だろう」
ハンスは剛三から『相転移装甲（フェイズシフト）』を会得したため、その術式における気の使い方で最も近いのはそれだと結論付けた。それに、ハンスは軍人魔法師として他国の魔法に関する資料にも目を通していたため、『鋼気功』にもすぐに気付いた。
流石に先程出会ったばかりの相手なので、信じ切れなくても無理はないと思いながらハンスは立ち上がった。
「何にせよ、お前さんらも魔法師として気を付けるといい。ではな、第一高校の卒業生の諸君」
そう言い終えてから遮音フィールドを解除すると、ハンスは人ごみの中に消えていった。暫く呆然としていた服部らだったが、最初に口を開いたのは桐原だった。
「非常識の類は司波兄や神楽坂で学んだって言うのに、世界は広いな……しかも、あのハンスって奴、俺たちの素性を知っていたな」
「うん……敵ってことかな？」
「いや、そんな雰囲気は感じなかったな。ただ……」
「ただ？」
「見た感じ、俺らとそこまで年が離れている訳でもねえのに、纏ってい

る雰囲気は俺の親父以上かも知れねえ。一体どんな経験をしたらあなるのか想像もつかねえよ」
見るからに２０歳前後の金髪の外人なのは間違いないが、彼の身に纏う雰囲気が既に歴戦の兵士と遜色ないことに桐原は冷や汗を流した。それこそ、達也や悠元から感じたような雰囲気に限りなく近いのかもしれない、とは口に出さなかったが、桐原の言いたいことを察してしまった紗耶香は下手に声を掛けられる雰囲気ではないと思ってしまうほどだった。
◇　◇　◇
その頃、風間らと密談したステーキハウスを後にした悠元らであったが、そこでリーナが話しかけてきた。先程の内容に関してリーナも思うところが出てくるのは仕方がない事だ。
「タツヤ、ユート。今回は向こうの作戦に加わるわけじゃないのね」
「ああ。俺らが受け持つのは当日だからな」
「それに達也ならいざ知らず、俺の場合は隊に籍があっても、そこでの扱いは非戦闘要員だからな。国防陸軍の人間として動くことはまずない」
今回の作戦によって達也と悠元が戦略級魔法師だという情報が大亜連合に明るみになるのはマズい。それに、悠元は国防陸軍総司令部勤務の特務参謀の肩書きが優先されるため、いくら大隊内に特尉として籍を置いていても、それはあくまでもサポート要員であって戦闘要員とは決してならない。
その為、今回の作戦において戦闘要員の肩書きを得るために悠元は神楽坂家の魔法師として協力する立場にいる。その一件で独立魔装大隊内にその論理が通用するなどとは思われたくないが。
「ようはリーナのスターズ内における立場が少々特殊化したのが俺の置かれている立場だ。加えて達也の魔法の管理もしている以上、俺の立場を締め上げる行為がどんな結果を招くかは言わずとも分かるだろう？」
「あー、そうね。流石にワタシもタツヤに敵対できないわ……尤も、あっちの軍は未だにタツヤをどうにかしようと動いてるみたいだけ

ど」
　リーナの〝アンジー・シリウス〟としての軍籍は未だにＵＳＮＡ軍内に残ったままだが、リーナは最悪祖国を切り捨てるつもりでいた。あれほどスターズの人間として動いていたリーナに対し、深雪が辛辣な台詞も混ぜながらリーナに問いかけた。
「お兄様と本気の殺し合いまでしたのに、まるで他人事のように言うのね、リーナ」
「……ミユキ、ワタシだって触れてはいけないものの分別ぐらいわかるの。それに、好いた人に嫌われたくないわけだし」
「ふふ、その気持ちは分かるわ」
　互いに好き合った人がいるからこそ……魔法師としてはライバル関係にある二人が通じ合っている横で、悠元は見て見ぬふりをしながら水波にタクシーの手配を頼んだ。すると、水波が訝し気に眉を顰めた。
「水波、どうした？」
「その……タクシーセンターが応答しないんです」
「センターがか……」
　悠元はスマートフォン型端末――――自身が一から設計した仮想モニター展開型の通信端末――――を取り出し、この近辺の交通システムの稼働情報を表示させて達也らにも見えるようにした。
「規模的にソフトウェアの障害ではないな。ハードウェアがやられたとみるべきだが、破壊工作か？」
「だろうな。ただ、仮にテロ行為で破壊するにしても重要な中継局を潰していない。十中八九逃亡が目的だろう」
　通常のモバイル通信網に併設されている形で張り巡らされている軍用通信の中継局は、ビルなどの構造的障害物が多い市街地内の通信を円滑化し、かつ大容量データ通信を円滑に行うためのものだ。仮に民間用の通信施設の基地局が破壊されても別の中継ポイントに切り替わるだけだし、最悪の場合は成層圏プラットフォーム回線や衛星回線が直接使える。
　達也と悠元の推測が当たったかのように水波が「あっ、繋がりまし

た」と述べた。
「工作員は近くにいるのでしょうか？」
「いや、近くにはいないだろうな。ただ、こちらを警戒する可能性は残ったままだ」
大亜連合にとって大漢（ダーハン）を滅ぼすに至らしめた四葉家は捨て置けない存在と言っても過言ではない。それと同列に語れるのは上泉剛三の存在であり、その孫である悠元も警戒対象に含まれるだろう。
ただ、彼らはその実力を知らない。何せ、悠元と直接対峙した陳祥山であってもほぼ一方的な展開だったために悠元の実力を把握しきれていない為だ。
「その、脱走兵がタツヤやユートを警戒してるってこと？」
「正確には俺らの今の立場、それと俺の祖父（じいさん）である上泉剛三の影響だな。水波、タクシーを呼んでくれ。行き先はホテルで頼む」
「畏まりました、悠元様」
「名は体を表す」とは言ったものだが、その意味で深雪やリーナも無関係とはいえない。名目上は慰霊祭の打ち合わせと彼岸の法要だが、滞在期間が延びれば西果新島の竣工記念パーティーに出席することぐらい読んでいるとみるべきだ。
今回の一件に関して悠元は積極的に独立魔装大隊の手助けをする気はない。今回は顧傑の一件（アンティナイトの紛失）でやらかした国防軍の怠慢に対する汚名返上の要素も含んでおり、本筋で関わる気があるのはパーティー中の工作阻止ぐらいでしかない。
それに、相手の居場所を特定できるだけの人材がいる以上、悠元が無理に出張る必要もない。その分深雪の機嫌取りに割ける時間が増えることになるので、達也や水波の負担も相対的に減ることとなる。そう思いながら悠元は到着した無人タクシーに乗り込んだのだった。
◇　◇　◇
その少し前、ホテルに戻ったジャズ――――オーストラリア軍所属のジャスミン・ウィリアムズ大尉はきつい口調で「父親」を詰った。
「ジョンソン大尉、先程の言葉遣いは何だ？」
「何って、いかにも日本に慣れていない外国人という感じだっただろ

う？」
　彼の名はジェームズ・Ｊ・ジョンソン大尉。れっきとしたオーストラリア軍の軍人魔法師である。外見上はジャスミンの方が幼く見られる形だが、これには彼女に関する〝事情〟の側面が強いため、ジェームズもその部分をとやかく言わずに返した。
「あれでは逆に無用な注目を集めるだけだ。現にあの場にいた人物から不審を抱かれていたぞ」
「マジか」
「……まったく、うんざりにもほどがある。パートナーを変えてもらいたいぐらいだ」
「無茶言うものじゃないと思うぞ」
　わかっている、とジャスミンは小声で呟きながら息を吐きつつケースを開いて作業を進めていく。
　ジャスミン・ウィリアムズ大尉は調整体魔法師。彼女は計画された通りの魔法技能を有していたが、その代償として彼女が背負ったのは肉体の成長障害であった。１２歳相当の肉体に成長したのが２０歳の頃で、そこから９年間は全く成長しなくなった。
　だが、軍はジャスミンを治療しようとしなかった。少女の外見を持つ優れた魔法師に価値を見出し、潜入工作のための専門家（エキスパート）として育成したのだ。
　だが、子どもの身なりではジャスミンの単独行動だと確実に浮いてしまう。そのための父親役としてジェームズが抜擢された。単に外見の問題ならばジェームズ以外にも適任者はいたが、その中で彼が選ばれたのは戦闘魔法師としての適性とジャスミンとの相性の良さにある。
　ジャスミンは後方からの遠距離攻撃を得意とするのに対し、ジェームズは自己加速術式を含めた前衛型の魔法師。互いにカバーリングできるからこそ軍上層部は彼らを組ませ、実際に成果を上げている以上は今更解消というわけにもいかない。
　ジャスミンは生産性の無い愚痴を止めて話題を切り替えた。
「先程私を攫おうとした連中の素性は分かったか？」

「大亜連合の特殊部隊。俺たちが組んでいるのとは別口のな」
「やはり追跡部隊か。一体どうやって私たちの素性を掴んだのだろうな」
「そりゃ、大方日本軍の情報部から教えてもらったんじゃないか？」
ジェームズの予測はある意味当たっていた。だが、その部分に関して調べるだけのリスクを負えない彼らにそれを知る余裕はなかった。日本と大亜連合で講和条約が結ばれた以上、双方が協力することも何ら不思議ではない、とジャスミンは結論付けた。
「そして、あの場に居合わせた白人の男性だが、そっちは？」
「一応調べたが、あっちはどうやらＳＳＡの関係者だ。ハンス・エルンスト――ドイツ系の軍人で訪日しているディアッカ・ブレスティーロ大統領の護衛となっている。彼もこちらの障害になると睨んでいるのか？」
「分からない。ただ、警戒するに越したことはないと思っている」
当初聞いた話では、竣工記念パーティーには日本国内の関係者が出席する運びとなっていた。だが、いざ作戦を準備した段階でフランスとＳＳＡが相次いで訪日し、沖縄海戦の彼岸法要と人工島の竣工記念パーティーにも出席する方向で話が進んでいた。
こうなると、もはや二国間だけでなくイギリスと同じ西ＥＵに属するフランスや南アメリカの一大勢力となったＳＳＡの問題にもつながる。これを大亜連合とオーストラリア――ひいてはイギリスが画策したなどと知られれば、仮に失敗しても国際問題に発展してしまうのは避けられなくなった。
「新ソ連やＵＳＮＡにつけこまれないよう、仲直りしたところを見せつけなきゃいかんだろうからな。破壊工作を許した日には、両国の面子が丸潰れになる」
「見事に私達と利害が反しているな」
「そりゃそうだ。俺たちは国家的事業のスタートセレモニーを台無しにしようと動いているからな」
追跡部隊まで出て来た以上、ジャスミンとジェームズが泊まっているこのホテルも当然マークされている、と言葉にせずともお互いに理

解していた。どの道マークされているのならば、振り切るために多少荒っぽいやり方をするしかない。

その結果として通信の基地局がいくつか破壊され、交通システムが一時的に麻痺したのだった。

知らぬこと、知らざらぬこと。

国防陸軍基地の会議室。今回の任務に際して独立魔装大隊の臨時司令部として借り受けた部屋で風間は響子からの報告を受けていた。その報告にはさしもの風間ですら頭を悩ませていた。

「ホテルをチェックアウトしたオーストラリア人の工作員を追跡していた部隊ですが、全滅との報告を受けました。死者はゼロですが、全員行動不能の状態です」

「敵の増援か？」

「いえ、捕獲対象の魔法攻撃を受けたものと思われます」

感情を押し殺した声で響子が風間に報告した。追跡部隊は確かに彼らの姿を捉えていたが、捕縛という段階で失敗してしまった。相手が軍人魔法師である可能性も当然考慮しての行動だが、一筋縄ではいかないことだと風間は思いつつも響子に詳細を尋ねた。

「魔法攻撃はどのようなものだ」

「高濃度のオゾンガスによる攻撃です。部隊の隊員に麻痺症状が見られました」

「そうか……真田、どう見る？」

「これは私見ですが、恐らく『オゾンサークル』ではないかと思われます」

今回、部隊が倒されたのは屋外での出来事。屋内ならば他にもオゾンガスを発生させる魔法はあるが、屋外の広範囲で急速にオゾンガスを生成する魔法となれば戦略級魔法『オゾンサークル』であると真田は推測を出した。

幸いにも真田は悠元から『オゾンサークル』に関する資料を大気収束に関する魔法開発の一環で受け取っていた。本来日本が欧州の戦略級魔法の術式コードなど知る筈もない訳だが、悠元の「以前その魔法による攻撃を受けたために知り得た」という言葉に嘘偽りを感じなかったため、真田はそのまま受け取っていた。

「オーストラリアの魔法師が『オゾンサークル』を？」

「そう不思議な事でもあるまい」

戦略級魔法『オゾンサークル』はイギリスのウィリアム・マクロードとドイツのカーラ・シュミットが操る戦略級魔法として有名だが、元々はＥＵ分裂前の欧州連合でオゾンホール対策として共同開発された経緯がある。
東西分裂前の協定に従い、旧欧州連合加盟国の間で『オゾンサークル』の魔法式に関する情報は共有されている。なので、イギリス連邦の一員だったオーストラリアの魔法師が『オゾンサークル』を使用できたとしても何ら不思議ではない。
裏を返せば、追跡対象であるジャスミン・ジャクソンとジェームズ・ジャクソンのどちらか、或いは両方がオーストラリア軍の魔法師という可能性が高いことを意味する。
「藤林、あの二人の正体は分かったか？」
「いえ、まだです。ただ想子センサーの記録を見る限り、魔法を行使したのはジャスミン・ジャクソンのほうであると推定されます」
「少女の方か」
「或いは少女の姿をした魔法師ということです」
藤林の言葉に風間が訝しげな表情を浮かべる。別に副官である彼女の言葉を疑うわけではないが、その言葉は先程の会合で悠元と達也が発していた懸念と同質の発言であっただけに尚更であった。
実際のところ、魔法に優れた者が年齢にそぐわぬ風貌を持ってしまう現象は風間自身目の当たりにしている。ただ、それが十代にまで及ぶ事例はあまり聞いたことが無かったため、一応頭の片隅に置きつつ別の話題を口に出した。
「悠元と達也が同じ懸念を口にしていたが……いや、前例は確かになくもないが。ところで、大亜連合側の部隊を妨害した者たちの素性は掴めたか」
「はい。国立魔法大学付属第一高校の卒業生です。こちらは卒業旅行で訪れていたようです。それと、ＳＳＡ軍のハンス・エルンスト大佐もその場に居合わせていたようです」
「そういえば西果新島の竣工記念パーティーに五十里家の長男が招かれていたな。エルンスト大佐の合流予定は明日だから、こちらの事情

を知らなくても無理はないか」
　藤林の報告に風間は溜息を洩らしつつ笑い声が出ていた。日本とＳＳＡ自体特に蟠りもなく、大統領は親日家として広く知られている。その部下として同行しているハンスも日本に好意を持っていることは風間も耳にしていたため、今回は偶然鉢合わせたとみるのが妥当だと判断した。
「藤林は引き続き身元調査を進めてくれ。真田は敵本隊の捜索だ」
「分かりました」
「両名は既に上空のカメラで捉えています。決して逃がしはしません」
「よろしい」
　真田と響子は同時に立ち上がり、風間に敬礼してその場を去った。
◇　◇　◇
　その頃、大統領が宿泊する高級ホテルに戻ったハンスは、そのまま大統領が泊まるスイートルームに出向いた。すると、大統領夫人である女性と楽しく喋っていた少女がハンスに気付いて駆け寄り、そのままハンスに抱き着いた。
「おかえりなさい、ハンス」
「ああ、ただいま。小母様もありがとうございます」
「お気遣いなく。私にとっても娘のようなものですから。夫に報告があるのでしょう？　彼でしたらベランダに居ますので」
「分かりました」
　ハンスは少女――――ナターリヤ・コントラチェンコの頭を撫でつつ大統領夫人に彼女を任せると、そのままリビングに出た。
　普通なら護衛の一人ぐらい置くべきだろうが、ここは神坂グループが経営するホテルの為、魔法に関するセキュリティーが張り巡らされている。なので、本来ＶＩＰ扱いであるディアッカ・ブレスティーロ大統領が一人のんびり読書に耽っていても何も咎められなかった。
「ハンス・エルンスト大佐、戻りました。こちらがお土産です」
「気苦労を掛けるな、ハンス。さて、何かしらトラブルがあった様に見受けられるが」

「……敵いませんね。実は――――」
ハンスは街に出ていた際、大亜連合の軍人と思しき集団がジャズと名乗った白人の少女を攫おうと動いていたこと。そこに偶然出くわして少女を助ける方向で動いたこと。ジャズは父親を名乗った人物とその場を後にしたことをディアッカに伝えた。
「ふむ……ハンスはその二人組をどう見る？」
「流暢な日本語を喋っていたことから、最初は日系人かこの国に好意的な感情を有しているものかと思いましたが……彼らの言葉遣いからイギリス英語の発音の仕方が聞こえたような気がしたのです。それに、少女の方は年齢からすれば精神が成熟しきっているように見えました」
母国語以外の第二外国語を学ぶ場合、どうしても一番慣れ親しんだ母国語の発音やニュアンスが混じってしまうことがある。ジェームズ・ジャクソンと名乗った男性の拙い日本語のがわざとらしく聞こえたこともハンスが彼らを疑う要因となっていた。
「少女も父親と名乗った人物もおそらく軍人魔法師の可能性が高いとみています」
「仮にそうだとして、大亜連合軍か？」
「いえ、サイオンの流れ方がどうにも違いました。一番近いとなると……イギリスの魔法師ですかね」
欧州連合は東西に分裂したが、それまでの交流がいきなり途絶したわけではない。新ソ連やＵＳＮＡといった大国クラスに対抗するべく軍事的な合同演習や会合は続いており、その一環でハンスは以前イギリスを訪れたことがあった。その時の感覚からジャズと名乗った少女とジェームズ・ジャクソンのサイオンの流れがどうにも似通っていた。
「無論、私見でしかありませんので、間違っている可能性もありますが」
「いや、ハンスを疑う余地は今のところ存在しない。……確か、ジャズはジャスミンの名を省略して呼ぶことが多かった筈だな。となると、こちらがお節介を掛けた形になったか」

「……藪蛇だったと？」
「ハンスの場合は仕方がないだろうな。聞いた状況からすれば、仮に私がその場に居たら間違いなく助けるために動いていただろう」
恐らく、少女の身柄を確保しようとした相手を図らずも妨害する形となったことにディアッカだけでなくハンスも気付き、破壊工作に通じたとみられる可能性が出てきてしまった。それに対してディアッカは「そこは政治の仕事だ」と述べた上で話を続ける。
「念のために詫びを入れておくが、明日からエルンスト大佐には日本の国防軍と協力して工作阻止のために動いてくれ」
「ハッ、了解しました。閣下は如何されるおつもりですか？」
「暫くはのんびりさせてもらうつもりだよ。ここ最近は書類の山と格闘していたからね」
実を言うと、ディアッカが多忙だったのは人間主義の活動とＵＳＮＡの怠慢の影響が大きかった。
人間主義が早々に鎮圧されたＳＳＡと異なり、ＵＳＮＡは逆に人間主義を使って他国を貶めようとする動きがあった。その一つが顧傑を唆して日本に人間主義の影響を移そうとしたものだが、それは何も日本だけではなくＳＳＡも似たような被害を受けるところだった。だが、その動きは対ゲリラを専門に扱う元ゲリラ兵で構成された特殊部隊によって早急に鎮圧され、拷問に近い取り調べでＵＳＮＡから唆された痕跡となる書類を発見した。
更に、その組織が顧傑と関係が深い元大漢難民で構成された組織であったため、大統領権限によって即座に拘束し、国家反逆罪に相当すると見做した上で表向きは「海賊船の公開爆破」という形で拿捕されていた海賊船諸共爆破された。彼らの中には海賊と繋がりがあったのも事実であり、ＳＳＡ側は何ら嘘を吐いていない形となった。
「貴官の奥方もこちらでしっかりと面倒は見させてもらうよ」
「……小官は、まだ結婚はおろか婚約すらしていないのですが」
「向こうの首相閣下もとうに結婚したものと見做すだろう。諦めてくれ」
「分かっていますよ……」

今更どう取り繕ったところでドイツとＳＳＡの国家元首から〝夫婦〟と見做されている以上、ハンスの抗議も単なる足掻き以外の何物でもないことは彼自身理解している。それでも、ハンスとしてはまだ人間としての矜持を捨てるつもりなどなかった。

◇　◇　◇

ジャスミン・ジャクソンの偽名を使用しているジャスミン・ウィリアムズ大尉と、ジェームズ・ジャクソンの偽名を使っているジェームズ・Ｊ・ジョンソン大尉がその情報を耳にしたのはその日の夜のことだった。

彼らは風間の部下の追跡を強引に振り切り、イギリス系国際資本のシーサイドホテルで大亜連合軍脱走部隊の幹部と密かに合流していた。

「四葉の魔法師が？　それと、神楽坂家の当主？」

まるでオウム返しのように尋ねたジャスミンに対し、反講和派のリーダーの一人で、今回の破壊工作の首謀者であるダニエル・劉（リウ）が頷くことで答えを返した。

「今日の式典に、四葉の次期当主と神楽坂の現当主、それと後者の婚約者も参加していました」

「神楽坂……名ぐらいは聞いたことがあるが。式典と言うのは、５年前の戦役で犠牲になった者たちの慰霊祭ですか？」

ジャスミンは以前、ウィリアム・マクロードから神楽坂の名を持つ者に関する話を聞かされたことがあった。厳密にはマクロードの父親がその者を揶揄する渾名で呼んだ際、返り討ちという形で２週間の入院生活を強いられたことがあったというエピソードを聞いただけだ。

流石にその当事者が来ているわけではないだろうが、リウが警戒するとなると少なからず関係者とみるべきなのかもしれない、とジャスミンは内心で思いつつリウに尋ねると、リウは細かい訂正をせずに再び頷いた。

「横から口を挟むことに失礼しますが、この国の魔法師のリーダーが戦没者の為に代理を遣わすのは別段おかしい話でもない気がします」

「確かに不思議ではありません。ですが、無視できるわけでもないと思います。とりわけ神楽坂の現当主は5年前の戦いに参加していたと風の噂で聞いています。我々の沖縄入りと無関係だとしても、彼らがここにいるというだけで作戦の大きな障害になりかねません」
神楽坂家の現当主――――悠元が5年前の戦闘に参戦していたという事実は昨年春に民権党の神田議員が漏らしたわけだが、その場に居合わせたメディアの誰もが口を閉ざすような恰好となった。それでも偶々聞いていた魔法科高校の生徒から〝風の噂〟程度のものが広まり、リウもそれを聞いてはいた。
だが、実際にどのような動きをしていたかまでは掴み切れず、リウの判断はあくまでも四葉の魔法師として出席した達也と深雪の次点であると結論付けていた。
「だが、彼らはまだ高校生の筈」
「横浜の作戦では、当時高校生だった十文字家の現当主だけでなく、彼らと同年代と思しき生徒によって我が軍の精鋭が倒された事実もあります。子どもだからと言って侮ることはできません」
ジャスミンの反論にリウは首を横に振った上で一応の注意を促す形でそう述べたが、リウは達也や深雪のみならず、悠元やリーナの真価を知らなかった。
いや、正確に述べるのならば「その知識が無かった」という一言に尽きるだろう。
◇　◇　◇
２０９７年３月２５日。
敵の工作員から要注意人物認定を受けていた三人だが、精力的にカウンターテロ作戦に勤しんでいた――――という事実はなかった。いつものように九重寺へ赴くということはないが、それでも染み付いた習慣のように達也はベッドで目を覚ました。上半身を起き上がらせると、その隣で寝ている少女を見て笑みを漏らした。
達也がこんな風に感情を出すことなど、以前ならば深雪以外になかったかもしれない。だが、悠元との出会いによって少しずつ変わり、未だに夢の世界にいる少女によって達也は己の殻を破ることがで

きた。
　すると、少女の方が声を上げながら重たそうに瞼を開けた。
「おはよう、リーナ。まだ眠っていてもいいんだぞ？」
「おはよう、タツヤ……あれだけのことをしたのに、タツヤが平然としているのが何か釈然としないわ」
「平然としている訳じゃない。正直、リーナがああいった行動に出るとは思わなかっただけで、今もまだ混乱している」
　何があったのかと言えば、簡単に述べるなら達也とリーナが男女の関係になったということだ。
　より詳しく述べると、同室となった二人のうちリーナが迫って、達也は抑えるように言い含めたが、ここでリーナは四葉家当主からの手紙を達也に差し出した。それはリーナを婚約者序列の第一位に据えて欲しいというものだった。しかも、関係を持ったとしても別に構わないという文言で達也はいよいよ逃げ道がないことを悟った。
　そのため、急遽悠元にその辺の対処法を教わり、何とかリーナの提案を受け入れたという結果になった。
「昨晩は、ミユキもユートに愛されてるでしょうけど……迫ったワタシが言うのもなんだけど、本当に良かったの？」
「母上が面白がって認めた線も否めないが、向き合ってこれなかった俺にも一定の責任があるのは承知している。尤も、リーナ相手だと歯止めが利くか分からんが」
「……今も襲いたいって思ってる？」
「それをリーナが望むのならな」
「そういうところはタツヤらしいわね」
　年相応の男子らしい一面が見れたことに、リーナは思わず笑みが零れた。お互い子どもらしい人生を歩んでいなかったからこそ、リーナは達也の気苦労が少しばかりわかる様な気がした。
「まだ朝食まで時間はあるから、のんびりしようか」
「のんびりするはずが激しくなっちゃったりして」
「……そういうところはセリアによく似ているな。何故抓る」
「セリアと同類に見られたくないのよ」

そうは言いつつも、結局仲が良い双子の姉妹だと思いつつ、朝食までベッドの中でスキンシップを取っていた……無論、その様子を隣の部屋で宿泊している人たちが気付かないわけがなかった。
「……よかった。達也も思春期の男子だったか」
「……そうですね。私もようやく一安心です」
実は、リーナが持っていた真夜の手紙は悠元と深雪の入れ知恵も含んでいる。正直、達也の婚約者になろうとしている面々の中には結構我が強い人も多く、どの道過激な誘惑をする未来は見えていた。なので、達也が一番関心を寄せているリーナと男女の関係を持つことで、人に言えない好みを持っているのではと邪推される危機を回避できた形となった。
言うまでもないが、悠元の上に被さる形で深雪が一緒に寝ている。
「そしたら、一安心したところで深雪を満足させないとな。今日は深雪の誕生日だし」
「ふふっ、そうでしたね。じゃあ、今日は一日『御主人様』とお呼びしますので」
「……せめて他の人に聞こえないようにしてくれ」
今日の主役であるはずの深雪が自ら悠元の下僕となるような発言に、多少の我儘は仕方がないにせよ、せめて場を弁えた行動と発言はして欲しいという願いを込めた台詞を述べた悠元であった。
……余談だが、水波は隣のベッドで気持ちよさそうに寝ていたのだった。

悩みの種は海の向こうから

スキンシップ……と呼ぶべきかどうかはともかくとして、悠元と深雪はシャワーで汗を流してからお互いに朝食を取っていた。
「たまには贅沢するのも悪くはないな」
「そうですね」
「私は落ち着かないのですが……」
バルコニーにあるテーブルでゆったりとした時間を過ごす二人に、水波は恐る恐る反論を述べていた。
高級ホテルの最高級とも言える持て成し。悠元が神楽坂家現当主、達也が四葉家の次期当主、深雪が悠元の婚約者として公表されている以上、護人・十師族の当主クラス――ＶＩＰともいえる要人なら本来であればもう少し警備の人間がいても何ら不思議ではないが、神楽坂家お抱えのグループということもあり、警備面で万全の体制が取れるスイートルームの選択に異を唱えるつもりはなかった。
水波が恐縮してしまうのは育ちの部分が滲み出ているからだろうが、四葉家の体面上で深雪のガーディアンであるという事実は未だに消えていない為、護衛の人間を別の部屋に泊まらせるのは現実的ではないという悠元と達也、そしてリーナの援護射撃によって水波は渋々受け入れた。
「本来であれば水波も客人の側なのだがな」
「悠元様のお世話をしたいのです、って。水波ちゃんらしいわね」
「お二方とも……」
実を言うと、部屋割りの際に水波は達也とリーナの方に行こうとしたわけだが、そこは深雪が「悠元さん、水波ちゃんを引き込みましょう」という鶴の一声で決まった。その裏ではリーナとの約束もあるわけだが。
水波はせめてもの抵抗ということで悠元と深雪の世話役をすることで自身を納得させていたのだった。この国にチップという習慣はないし、従業員にも害はないのでそれぐらいはさせてやることにした。

「改めてになるが、昨日はお疲れ様。疲れは取れたか？」
「はい。一杯愛してもらいましたし」
「……あー、うん。そうだな。今日は天気もいいし、遠出でもするか？」
そういう関係になったのは既に受け入れたものの、どこか気恥ずかしさがあるのは事実。それは悠元だけでなく深雪も同様であった。そんな感情面のことは置いといて、悠元は深雪に提案した。
「はい、喜んで！」
深雪には『神将会』の絡みで今回の任務に関する説明を事前にしている。脱走兵の部隊などを見つけるのは本来国防軍の仕事であり、自分たちはあくまでもその協力要員に過ぎない。「別にリーナのように街中で戦略級魔法を放つわけにもいかないだろう？」と述べたら深雪はあっさりと納得してくれた。
そもそも、今日一日の深雪のスタンスは「悠元の下僕」である。彼女としては日頃からそうなりたい欲求があるが、公での立場もあるのでそれは止めて欲しいと悠元が止めている。その反動が深雪の甘える行動に繋がっているわけだが。
……深雪の誕生日なのに、自ら立場を下げるような扱いにして欲しいというのは釈然としないわけだが、婚約者の可愛い我儘ということで大人しく呑むことにした。
「水波も同行してほしい」
「畏まりました。達也様方はどうなされますか？」
「そっちも同行する。船に乗るから、動きやすい服装にしてくれ。別に急ぐ必要は無いからな」
深雪と水波が奥の部屋に行ったのを見届けてから悠元も着替え始めたのだった。その際、特にハプニングとなるようなことは起きなかった……悠元たちの方は。
◇　◇　◇
達也たちも誘う形で遠出をすることになった訳だが、腰を擦るような動きを見せていたのはリーナだった。何があったのかといえば、達也とリーナが〝若気の至り〟に繋がるような行動を見せていた。事

情を聴くに、達也のほうの歯止めが効かなかったらしい。その前にリーナが誘惑していたのもあるので、この場合は痛み分けなのだろう。
　既に達也の『再成』で治っているとはいえ、未だ疑心暗鬼になっているのは仕方がないのかもしれない。身体的に異常がなくとも、精神的なものでどうしても疑ってしまうのはよくあることだ。
「ううっ、タツヤってばハード過ぎるわ……いや、ワタシのせいもあるけど」
「この場合は俺も悪いな」
「……同類？」
「かもしれませんね」
「そこの万年バカップル、アンタたちがそれを言う？」
　達也とリーナが互いに謝罪している光景を見た悠元と深雪が揃って首をかしげると、これにはリーナが食い掛ろうとし、達也が肩を抑えて宥めていた。これには水波も苦笑しか出てこなかった。
　悠元の案内で港に着いたわけだが、そこには昨日会ったばかりの桧垣ジョセフ軍曹が停泊しているクルーザーの前に立っていた。
「よう、悠元」
「今日は宜しく、ジョー」
「……えっと、悠元さん。これはどういうことです？」
　悠元と達也、そして目の前にいるジョー以外は行き先を知らない為、深雪が尋ねるのも無理はない。今回の遠出の企画者として悠元が説明を始めた。
「元々飛行機で行く予定だったんだが、ジョーのほうが船を出してくれるということになったんでね。折角の沖縄だし、お言葉に甘えさせてもらうことにしたんだ」
「桧垣ジョセフ軍曹であります。本日は皆様の護衛を務めさせていただきます」
　悠元の説明が終わると、ジョセフが平服姿でありながら敬礼をした。一昔前のチンピラのような態度から比べると愛嬌が出てきたように見えてしまう。これには達也も思わず微笑むような表情を見せ

ていた。
「まあ、護衛というよりも接待だな。お偉いさんが『四葉』の名を無視できないのもそうだが、悠元の場合だと上泉剛三殿の孫に加えて『神楽坂』の当主だしな。ま、お前さんの国防軍内での肩書きも大きく影響してるんだが」
「なるほど、ジョーも聞いてるのか」
「悠元と仲が良いって理由が大きいがな。それと、５年前の一件のせいだ」
悠元が国防陸軍特務中将という高官である事実を知るのは国防軍全体でもほんの一握りで、本来軍曹の階級であるジョセフがそれを知ることはない。だが、５年前の事件で近い関わりを得てしまったため、悠元の内情を知ってしまう一人となった。
その口止めとして来月には少尉への昇進が決まっており、それに合わせて関東方面への部隊配属転換となることもジョセフが説明した。
「別に騒がなければこちらも手を出す気はないんだけど」
「分かってはいても心配しちまうのが軍人の性だからな。そこに風間中佐の入れ知恵もあって、俺が護衛を務めることになった」
ジョセフが借りてきたのは最新鋭のクルーザーで、本来軍の将校クラスの視察用に使われるものを乗組員ごと借りて来たらしい。その理由付けになってしまった悠元の表情がジト目になっていたのは言うまでもない。
「悠元のリクエスト通り、石垣島でいいんだな？」
「ええ。島に着いたらジョーは達也らの観光案内をお願いします。こちらは寄るべきところがありますので」
「石垣島ですか？　驚きました」
深雪もそこまで遠出するつもりだったのか、と驚かざるを得なかった。流石に沖縄本島から程近い離島ぐらいかと思っていたのだろう。元々原作で行く予定だった場所だが、悠元にとってはもう一つの用件をこなすために足を運ぶ必要があった。
「天候次第では中止せざるを得なかったからな。早めに伝えて落胆させたくなかったんだよ」

「そうだったのですか。嬉しいです」
深雪は言葉通りの表情を悠元に向けていた。
沖縄本島から石垣島までの約４００キロメートルを3時間。流石に高官視察用のクルーザーということもあって、道中は快適に過ごせた。達也とリーナ、そして水波はジョセフの案内で観光スポット巡りをすることになり、残った悠元と深雪も悠元が運転するレンタカーで走り出した。
「済まないな、深雪。本当なら観光名所巡りでもさせたかったんだが」
「お気になさらないでください。それで、どこに向かっているのですか？」
「俺のもう一人の祖父――――三矢舞元（みつやまいと）がこの島に居を構えていてな。折角だから挨拶しに行こうかと思って」
悠元の血縁上の父方の祖父こと三矢舞元。十師族・三矢家初代当主でありながら、引退後は関わりを極力持たないように隠居生活を送っている。それでも国防軍との関わりで彼を知るものが多く、この島で琉球空手の道場兼魔法の私塾を営みながら農業に勤しんでいると元から聞いた。
年齢は９０歳の大台を迎えているが、魔法師の性なのか風貌は歳不相応とのことらしい。
「俺一人でも別に良かったんだが、聞いた話だと四葉の先々代当主こと四葉元造とも顔見知りらしくてな。その孫娘を見たいと言ったそうだ」
「そうだったのですか。私としても義理の祖父になりますので、吝かではありませんよ」
「……ありがとう、深雪」
車を走らせること２０分。元から事前に聞いていた住所の場所に着くと、見た感じはこの地域の伝統的な家屋だが、他の家と比べると倍以上は大きい。隣接している道場の方からは元気のよい声が聞こえてくる。流石に知り合いもいないのでどうしたものか悩んだが、ともかく声を掛けようとしたところで後ろから声を掛けられた。二人が振り向くと、買い物帰りと思しき若い女性が立っていた。

「あの、どちら様でしょうか？　見るからにこの辺の方ではないとお見受けしますが」
「東京から来まして、こちらに舞元さんがいるとその方の息子さんから窺いまして」
「あら、夫のですか。少しお待ちくださいね」
　そう言って家屋の奥に入っていく女性。見るからに十代半ばから後半ぐらいの容貌だったが、金髪碧眼の女性が悠元の祖父のことを「夫」と呼んだことに首を傾げた。これには深雪が尋ねてきた。
「どうかしたのですか、悠元さん？」
「いや、父から聞いた話では独身のはずだと言っていたんだが……何がどうなってるんだ？」
　元が嘘をついているとは思えないが、仮に今の言葉が事実ならば三矢家の〝分家〟が存在することになってしまう。もしかしたら内縁の妻という可能性も拭えない為、邪推は避けようと思ったところで家屋の奥から一人の男性が顔を見せた。髪は白いがきちんと整えられており、がっちりとした筋肉は偉丈夫の面影を残している。そして、その男性は悠元の姿を見ると駆け寄ってきて抱きしめたのだった。
「おー、悠元ではないか！　九校戦の活躍はしっかり見ておったぞ！」
「え、ちょ、何？」
「ハハハ、まあ分からなくもないか。お前さんが物心ついてから出会うことはなかったからな。それでも、元の奴が律儀に写真を送ってくるから、わしはすぐに分かったぞ」
　見た目は年齢で言うなら３０歳前後……この人物こそが悠元の祖父である三矢舞元その人だった（三矢家と極力関わりを持たないように長野の姓を名乗っている）。舞元は悠元から離れると、その近くにいた深雪に視線を移した。
「初めましてになるかな、司波深雪さん。わしは長野舞元（ながのまいと）。かつて三矢の名を名乗っていた人間で、悠元の祖父に当たる。よく見れば、泰夜の面影があるの」
「はじめまして、舞元さん。悠元さんの婚約者の司波深雪と申します」
「これはご丁寧に。さて、遠慮せずに上がってくれ」

舞元の招きで家屋に上がった二人。先程出会った女性が淹れてくれたお茶を頂きつつ、悠元と深雪が隣り合う形で舞元と向き合っていた。そして、話題を切り出したのは悠元の方だった。
「既に戸籍は別だけど、祖父さんと呼ばせてもらうよ。で、祖父さん。先程の女性はどういうことなの？　事と次第によっては父に全部伝えるよ？　今の俺は師族会議の議長だから」
「何と……いや、剛三の奴から聞いていたが……そうだな、どこから話したものか」
今でも剛三や元と連絡を取っていることはさて置き、舞元は話し始めた。
舞元は四葉の復讐劇で後方支援に徹し、その時に培ったコネや家業を元に継がせて当主の座を退いた。元々は戦闘機や戦車などの中型・大型の兵器関連も取り扱っていたが、軍人魔法師が取り回ししやすい武器や兵器を専門に扱う意味合いで小型兵器のブローカー業に専念させつつ日本国外の軍事情報を師族会議に提供する役割に特化させた。
「そのせいで十山家の奴が増長しおったが……悠元のお陰で大分鳴りを潜めた。感謝する」
「お陰って言うか、向こうが勝手に自爆しただけだよ」
「そうか。おっと、話が逸れたな」
先程の女性は今から5年前――――沖縄海戦の直後だった。舞元の妻に当たる女性は元が当主を継いだ翌年に亡くなっており、元と詩歩の仲睦まじさを見れば舞元が無理に再婚する必要も無いと判断し、ずっと独身だった。
「その時、わしは民間人の避難を先導していてな。大亜連合が引き上げた後、砂浜に流れ着いた少女がおった。それが先程お主等と出会った人よ」
「……身元は分からなかったのか？」
「身分を示す様なものは恐らく流されたのじゃろうな。あの戦いでは戦略級魔法も使われたらしいので、その際に海へ投げ出されたのかも知れぬ」

元々宣戦布告無しの大亜連合・新ソ連の同時侵攻だったため、それに巻き込まれた民間船がいたことも聞いている。舞元は最初戦闘に巻き込まれた『レフト・ブラッド』の可能性を探ったが、少なくとも日本国内にいる外国籍および帰化した外国人ではなかった。更に、日本へ入国した外国人の中に彼女は含まれていなかった。更に舞元が困ったのは少女が〝記憶喪失〟だったことだ。

「サイオンの流れを見るに、少なくとも魔法師なのは違いなかった。そうなると、身分を偽って渡航――あるいは亡命しようとしていた線も否めん。だが、息子に知られれば七草辺りが口煩く言うかもしれん。なので、最悪わしが全ての責を被る意味で隠すことにした。記憶が戻れば彼女の好きにさせてやることもな……正直、老い先短いわしに惚れんでも良かったとは思うが」

「……祖父さんの自業自得かと」

「そうやって辛辣に言いのける辺りは詩歩さんや奏姫さんの血を継いでおるな」

記憶が戻るまで……そう言い聞かせて少女の看病をしていた舞元だが、彼女は献身的に接してくれる舞元に惚れ、更には周囲の人々から実質的に夫婦扱いされている。彼女は戦争難民として届けられ、戸籍不明のままでは不自由なために日本国籍を取得させることにしたそうだ。その辺の手続きは剛三や千姫も関与している、と舞元は説明した。

「悠元さん、どうにかなりませんか？」

「記憶を取り戻させるならそう難しくはないけど……何か嫌な予感がするんだよな」

正直、彼女の存在がこの先の〝何か〟に関連するのは間違いなかった。単なる直感だが、この世界が原作通りの流れにある程度沿いつつあるのは間違いない。そうなった場合、この女性も無関係とはいえない……何故だか、そんな気がしてならなかった。

「……悠元。彼女の記憶を戻せるのか？」

「出来る。ただ、取り戻した直後に意識の混濁で暴れる可能性もある。最悪の場合、俺が責任を持つ」

「いや、わしが責任を持つ。こればかりはいくら孫でも譲れぬよ。この先の寿命を考えれば妥当だと思っておる」
舞元が責任を持つと聞き遂げた上で、彼はその女性を呼び出した。悠元は女性に記憶を取り戻す意思があるかどうかを尋ね、彼女は記憶を取り戻す意思があることと今までの記憶が喪失する危険性を悠元に尋ねた。だが、その危険性は無いと悠元はハッキリと断言した。
今回使うのは、悠元の固有魔法の一つ『領域強化（リインフォース）』。『天陽照覧』の場合、対象の状態が変化した後の記憶が喪失する現象が見られたためだ。その点、前者であれば〝記憶喪失〟という不全の状態を治療するため、喪失後に得た記憶が喪失する危険はない。ただ、実質的に二つの人格を融合させることになる為、記憶を取り戻した直後は記憶の混濁による暴発的な行動を起こすことがある。
そして、悠元は『領域強化（リインフォース）』を彼女に対して使用した。無論、記憶を治す過程で悠元はその女性の記憶を読み取ったわけだが、それが悠元にとって新たな悩みの種となったのは言うまでもなかった。

油断ならぬ相手

結論から言えば、少女の記憶喪失は無事解消した。記憶を取り戻したことによる突発的な行動も起こすことはなかった。この辺は彼女の記憶に対する姿勢も大きいとみている。

しばらく様子を見ること３０分……その少女はこの国の礼儀に従って正座で頭を下げた。

「ありがとうございます。お陰で記憶を取り戻せました」

「……治療の際に記憶を読み取ったけど、君はＵＳＮＡの関係者だね？」

「はい。改めまして、ラウラ・カーティスと申します」

カーティスの名字には聞き覚えがあった。セリアから聞いた原作知識の中にＵＳＮＡの上院議員であるワイアット・カーティスという人物がいた。悠元はその線を疑って尋ねた。

「もしかしてだけど、ワイアット・カーティスの関係者かな？」

「はい、私の大伯父にあたります。尤も、捜索願が出されていない以上は既に死んだと思われているかもしれません」

「悠元、その人は何者だ？」

「ＵＳＮＡの上院議員。前に知り合いから名前だけ聞いていたんだ」

自分も最初は身なりからして香港在住のイギリス系の人間かと予想していた。だが、蓋を開けてみればまさかのアメリカ人。しかも身辺に大物議員がいるという始末。これには舞元だけでなく深雪も苦笑を滲ませていた。

しかし、魔法師の才能を持っている彼女がどうしてそうなったのか……そのことをラウラは説明してくれた。

彼女とその両親は観光目的で香港を訪れていた。そこから台湾経由で日本入りをしようとした際、民間便が大亜連合政府によって全便運休となった。この辺は日本侵攻の為の動きだったことは明白だ。

更には通信封鎖もされてしまったため、一家は已む無く民間の高速貨物船に乗り合わせる形で日本を目指すことにした。同盟国ならば帰国の目途も立つと踏んでのものだろう。だが、その道中で彼女は高

波に攫われ、気が付けば砂浜に打ち上げられていたとのこと。
　それが沖縄防衛戦の日であり、達也が『質量爆散（マテリアル・バースト）』を、悠元が『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』を使った日であった。元々津波の被害は沖縄本島側だけ防いだため、その余波が貨物船を襲った形となった。
「……普通なら、捜索願とか出されていても不思議ではない筈だが」
「あの時は戦争中だったからの。悠元は何も聞いておらんのか？」
「その辺のことは何も聞いてない。まあ、大亜連合側に抗議はしているんだろうが」
　大亜連合側も日本への侵攻を隠す為に宣戦布告無しの戦闘行為に及んでいる。その際に民間船への襲撃を抑える様徹底はされていたわけだが、結果として民間人への被害を出す形となってしまった。
　国防軍側も戦争終結後に周辺海域の捜索を実施したが、死亡または行方不明者は見つからなかった。軍人で亡くなった人間はいたが、当時沖縄方面にいた民間人・外国人に死者および行方不明者は出なかった。この辺はシェルターへの早期避難が功を奏した。
　その時点で自分は国防陸軍の特務士官だったが、戦略級魔法の秘匿を考慮して沖縄防衛戦後の捜索活動に参加していない。
　……もしかすると、この世界の横浜事変の裏側には彼女の存在が大きく関わっているのかもしれない。周公瑾の関与があったことも事実だが、弱みで大亜連合を脅したという線もあるのだろう。
「とりあえず話は分かった。ここで決められる話でもないから、暫く大人しくしていてくれ」
「分かりました。正直、すぐに捜索されると思っていたのですが」
　ラウラがそう思っても仕方がないのだろう。当時の記録を遡ったところ、周辺海域を通過したと思しき貨物船はその後佐世保港に到着していた。ただ、ラウラの一家は内密の渡航だったため、公式の記録には残っていなかったことも後に確認した。
　ラウラの両親については、母親がラウラを失ったショックで衰弱し、翌年に亡くなっていた。父親も家族を失ったショックで自殺したことが判明している。
　ちなみにだが、ラウラが舞元に向ける感情に恋愛の部分は無くなっ

たが、命を救われた恩返しということで暫くは留まるつもりらしい。この辺については舞元がある意味安堵の表情を浮かべていたことが印象的だった。

すぐにこの辺の情報をＵＳＮＡの大統領宛に送信したところ、カーティス上院議員に伝えるという文面のメールが返ってきた。その３時間後に大統領から上院議員を西果新島の竣工記念パーティーに急遽派遣する運びとなり、舞元とラウラにもそのパーティーに出席させる方向で話をまとめた。招待関連は自分から政府に働きかけて何とか取り付けた。

最悪、こちらにはリーナもいるので彼らの護衛に宛がう方向にするのも悪くは無いと思う。

そんな一幕があった後、舞元らと昼食を共にして彼らと別れた後、悠元と深雪を乗せた車が向かった先は有名な真珠専門の装飾店だった。

「神楽坂悠元ですが」

「お待ちしておりました、神楽坂様」

悠元が名前を告げると、店員は丁寧な応対で店の奥にあるテーブルに案内した。これには深雪も少しばかり訝しむような素振りを見せつつも悠元の後を付けるように移動した。そして、一旦奥に引っ込んだ店員が、持ってきたネックレス用のジュエリーケースを丁寧に開ける。

「これは……私にですか？」

深雪がそう感嘆を漏らしたのは、見事なまでのマルチカラーネックレス。白、黒、金の三色の真珠で構成されたもので、歪みや傷などが一切なく、専門家でなくとも一目で分かる高級品であった。

「ああ。達也は既に渡していたみたいだけど、出来れば誕生日プレゼントとして渡したかったからね。長さを見て頂けますか？」

「かしこまりました」

原作だと達也がプレゼントしていた代物だが、その達也は深雪にブレスレットをプレゼントしていた。曰く「そういうアクセサリーは門外漢なんだがな」とぼやき気味に言っていたことには思わず苦笑して

しまった。
なので、ネックレスをプレゼントしようかと相談したところ、達也から「深雪からチョーカーあたりでもねだられたらどうする？」と問い返された。言っておくが、いくら深雪を好いていると言っても将来の妻を奴隷のように扱う気は金輪際無い。
そう返したら、達也が溜息を吐いた上で「諦めないと思うがな」と言われたときは妙な説得力を感じて冷や汗が流れた。
「こんな高価な物を頂いて、深雪は幸せです。大事にいたしますね」
……深雪から妙に熱っぽい視線を向けられていることに関しては、もう諦めた悠元であった。
なお、その後で来店した達也は金の真珠のネックレスをリーナに贈っており、その光景を生暖かい目で見つめることになったのはここだけの話。

◇　◇　◇

「ジョー、今日はありがとう」
「いいって。俺ものんびりできたしな。達也、彼女さんをちゃんと幸せにしてやれよ」
そう軽口を叩いた上でジョセフは無人タクシーに乗って去っていった。そのタクシーが見えなくなると同時に、悠元は視線を通りの向かい側のビルに向けていた。
「……悠元」
「ああ、いるな。リーナ、あまりジロジロ見ない方がいい」
「そうね。こんな時に無粋とは思うけど」
無論、視線に敏感な達也も気付いており、元軍人であるリーナも険しい表情を浮かべていた。当然、その動きは深雪と水波にも伝わるわけで、水波は深雪を守れる位置に移動した。
「水波、大丈夫だ。向こうは敵意を向けていない」
「……悠元兄様がそう仰るのでしたら」
悠元の言葉でも完全に疑念が拭い取れないようだが、元々家の用事で来ている以上は水波の警戒は無理もない対応といえる。視線の先にはカーテンが閉まった窓しか見えない。悠元と達也はともかく、

リーナも視線に気づいたのは経験が生きたせいなのだから、深雪と水波が見えなくても仕方がない。
だが、深雪の場合は悠元との鍛錬によって天神魔法を会得している為、周囲の敵意を探る探知の術式でその視線の先に誰かがいるのは理解したようだ。
「悠元さん、捕まえますか？」
「いや、今の状況で捕まえても聞き出せる情報は無いだろう。まあ、こんな要らぬ心配をした〝仕返し〟は必要だろうが、それは今でなくてもいい」
情報を聞き出せなくとも、その対象の〝歴史（きおく）〟は取り出せる。悠元は自身の左手で深雪の右手を握り、そのままホテルの回転扉をくぐったのだった。

◇　◇　◇

悠元、深雪、達也、リーナ、水波の順にホテルへ入っていくその姿を、道路を挟んで向かい側にあるビルの一室で見送って、オーストラリア軍の軍人魔法師であるジェームズ・J・ジョンソン大尉は詰めていた息を吐き出した。額を手で拭おうとして、掌が冷たい汗で濡れているのを今更自覚していた。
（あの五人の中にいた餓鬼……間違いない、数年前に捕縛しようとしたあの餓鬼だ）
ジェームズが大亜連合の脱走兵のグループから貰っていた情報の中に顔写真は無かった。だが、今日張り込んでいたターゲットの中にジェームズがジャスミンと組んで追跡に失敗した少年とよく似た……いや、間違いなく本人だと彼は当時の感覚と照らし合わせてそう断定した。
上泉剛三の付き添いということで只ならぬ存在だとオーストラリア軍上層部は警戒していたが、よもやその一人と再び出くわすなどジェームズですら想定していなかった。
（あんな感覚、拭いたくても消え去らなかったからな……緊張じゃないな。恐怖していたのか、俺は？）
現在のオーストラリアは、鎖国政策によって外交面だけでなく軍事

面でも孤立政策を取っている。他国と同盟関係もなく、合同演習の類も一切参加していない。
だからと言って、ジェームズのような軍人に実戦の機会が一切訪れないわけではない。オーストラリアは砂漠化の停止と砂漠の緑化に成功したことにより、他国に頼らずとも自国の自然農業で食糧事情を賄える完全自立した国家である。当然、領土的野心に燃える他国の工作機関相手の謀略戦は日常茶飯事とも言えるレベルで頻発している。
また、表向きは孤立政策を取っていても、完全な中立を堅持しているわけではない。今回のように、秘密の非合法作戦で他国の武装組織と手を組むこともある。ジェームズは軍の中でも工作活動を専門に扱っており、暗闘の最前線で戦ってきた百戦錬磨の魔法師だ。死線を潜り抜けた回数は一度や二度ではなく、大抵のことには動じないとそう自負している。
(監視に気が付いていただけじゃない。片方はこっちの精神を貫いて心臓まで届くような……まるで死神の如き視線。『アンタッチャブル』の名は伊達ではないってことか)
――日本の四葉に手を出すな。手を出せば破滅する。
上泉剛三が成した一騎当千の所業と共に囁かれた戒めの言葉。そこには第三次大戦で名を馳せた二人の英雄――上泉剛三と神楽坂千姫に関する噂も含んでの言葉だった。
裏の世界では、大亜連合が日本相手に不利な状況で講和を余儀なくされたのは四葉に手を出したからだ、という噂が真顔で語られている。朝鮮半島南部を灼いた戦略級魔法は四葉家が開発したものではないか、という声も少なくない。
更に、佐渡島上空からウラジオストク軍港を消滅させた魔法は二人の英雄を生み出した上泉家か神楽坂家が開発した戦略級魔法という噂も少なくない。当時、ウラジオストクには『十三使徒』に一人であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがいたという情報に加え、佐渡島に向けて戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を放ったという未確認情報も出回っている。
更に付け加えるならば、世界最強の呼び声が高いＵＳＮＡのスター

ズを撃退したという未確認情報もあるわけだが、ジェームズはどれも額面通りに受け取れなかった。
今回、ジェームズたちの敵として指揮を執っているのは、インドシナ半島で勇名を馳せた『大天狗』風間玄信。彼をはじめとして、日本軍所属魔法師の実力は高い水準にある。未確認情報ではその更に上官となる上条達三特務中将が実際の総指揮を執っているという報告もあるが、これに関する情報は一切入ってきていなかった。
それはともかく、一昨年の『灼熱と極光のハロウィン』で使われた戦略級魔法は国防軍の秘密兵器という認識が根強い。〝常識的に考えて〟、民間組織で持つには大きすぎる力だ。そんなことを許容すれば国のパワーバランスが瞬く間に傾いてしまう。
――四葉と神楽坂は、侮ってはならない相手だ。
――それがたとえ十代の学生であっても。
とりわけジェームズにとって悠元は捕縛に失敗している因縁の相手。だからこそ、彼は戒めを課すが如く心に深く刻み込んだ。
◇　◇　◇
深雪の誕生日ということで、泊まっているホテルの高級レストランでディナーを楽しみ(この時は五人での会食となった)、悠元と深雪は二人で展望ラウンジにてグラスを傾けていた。とはいえ、未成年である以上はノンアルコールのカクテルなのは言うまでもない。そのはずなのだが……深雪は酔っていた。
「悠元さん……私、何だか……」
二人のカクテルにアルコールが入っていないことは『天神の眼(オシリス・サイト)』で視ていた。いくら神坂グループのホテルとはいえ、流石に未成年相手にアルコール入りのカクテルは出せないと良識が働いていたのも事実だ。となると、〝雰囲気に酔った〟と解釈すべきなのだろう。
深雪が着ているドレスはオーソドックスなもので、普通なら座っていても膝が見える程度のスカート丈なのだが、座っているソファーの高さとクッションの相乗効果で膝のかなり上まで見えている。
しかも、深雪はあくまでも行儀よく座っているだけに、こればかりは悠元も目のやり場に困ると同時に原作の達也の我慢強さを賞賛し

たくなった。
「なら、部屋に戻ろうか」
悠元の問いに深雪は反論することなく従った。そして深雪は悠元の左腕にしがみ付くような形で身を寄せていた。この程度のことなら別に拒否する理由もないし、今の自分たちは婚約者として公表されている。
それでも深雪の表情には微かに安堵の表情が見えていた。拒否されることは無いと思っていても、どこか不安な気持ちがあったのだろう。悠元は深雪に左腕を預けるような形で展望ラウンジを後にしたのだった。
部屋に入ると、深雪は悠元から離れて先に入浴するために脱衣所へ向かった。それを見た上で悠元も着替えるためにベッドルームへ向かった。いくら婚約者とはいえ、その辺の一線は弁えている。スーツから寝間着代わりのルームウェアに着替えたところで、悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』を発動させる。
顧傑の一件で達也の『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』も進化しているが、悠元の場合はさらに飛躍的な進化を遂げていた。今までは当該人物そのものを認識しなければ情報を辿れなかったが、写真や電子画像などといった対象を映したものであれば、その人物の情報を情報体次元から引き出すことができるようになった。
そして、ホテルへ戻ってきたときにこちらを見ていた対象の人物を悠元は探り当てた。
（オーストラリア軍の軍人魔法師、ジェームズ・ジェフリー・ジョンソン。階級は大尉……どこかで感じた気配だとは思ったが、爺さんとオーストラリアを訪れていた時にこちらを追いかけていた連中か）
元々、オーストラリアを訪れたのは純粋に観光目的だった。正当な手段で入国したというのに、オーストラリア軍の連中がこちらを拉致しようと追いかけてきたのだ。なので、已む無く正当防衛として相手の魔法を無力化した。その時点で『術式解散（グラム・ディスパージョン）』を修得していたことは不幸中の幸いであった。
ジェームズ・J・ジョンソン大尉の居場所を探ると、久米島北東沖

に存在が確認できた。彼にはサイオンのマーカーが打ち込まれており、恐らくは達也によるものと判断して放置することにした。
（あの時の意趣返しとして送り込まれた節も否定はできないが……〃もう片方の少女魔法師（ねんれいさぎ）〃はいないか。流石に一時的な協力体制とはいえ、彼女の存在を大亜連合側に明かせないのは理解できるが）
直接的な被害は被っていないが、少女の姿をした魔法師が剛三と悠元の二人に対して戦略級魔法『オゾンサークル』を発動させた。それについては悠元が無効化してそのまま音速並みの速さで逃げ切りつつ海上を爆走した……今にして思えば、そんな無茶ぶりが自分を強くしたのかもしれないと思うと、何だかやりきれない気持ちを抱いた。
そう思いつつも悠元はジェームズを基点として『万華鏡（カレイドスコープ）』で構造情報を解析する。
（潜水艦ね……どうにも5年前を思い出してしまうな）
あの時は悠元が率先して魚雷を無力化し、そのついでに潜水艦を『分解』した。当時はそこまで友好的な関係でなかった達也らの意識を魚雷に向けさせていたし、互いに使った魔法について詮索しないと決めていたので、その後も特に何か言われることはなかった。
こちらから情報を送るかどうかについては、達也が風間に今日のことを報告したかどうかで判断すべきだと思い、特に報告するようなことはしなかったのだった。

もう一つの任務

悠元は入浴その他諸々を済ませてベッドルームに戻ると、二人で寝ているベッドに深雪が腰かけていた。
いつもなら寝間着姿（時にはブラジャーを付けずに着ていることがあったりする）なのだが、今日は悠元の誕生日の時に身に着けていたものと似たような代物――――ランジェリーだが本来下着を身につけた上で着る透けた生地のタイプなのだが、深雪は下着を付けずに身に付けている為、大事なところまで見えてしまっている。
雰囲気に酔っている様子の深雪には、そんな恥ずかしさも関係ないように思えた。
「……まあ、今日は深雪の誕生日だからな。可能な範囲でリクエストに応えるが」
「でしたら、今日はいつもより激しくしてくださいね。本当なら悠元さんの子供も欲しいですが」
「まだ気が早いわ」
魔法師の社会的に早婚が望まれていても、一般の社会的な視点でいえば色々言われかねない年齢。流石に神楽坂家当主となった身であっても、表向きの社会的な地位をしっかり固めるのが一番だと考えている。
なので、自分の今の母親や自分の両親・祖父母が望んだとしても、魔法大学を卒業して社会的立場を確立してからにしたいと考えている。流石に高校卒業を期に籍を入れるというのは決定事項であるため、今更反対は出来ないが。
「俺はそこまで節操なしになったつもりもないが……婚約者たちに迫られると断れないのも事実。その辺は他の男子連中と変わりないが」
「そんなことありませんよ。私も含めて悠元さんが大切にしてくれるからこそ、心の底から独占されたいって思えるのですから。いっそのこと私を下僕のように扱ってもいいのですよ？」
「被独占欲って奴ね……つーか、将来の妻を下僕扱いってどうなのよ」
結局、深雪をそのままベッドに押し倒して熱い夜を過ごした形と

なった。やっていることは司波家にいるときとあまり変わり映えしないと思えてしまうが、こんなことが許されるのは自分の実力所以だと思うと……正直喜んでいいのか疑問に思ってしまう。
それに文句を言えば、その他大勢の男性が血涙を流して悔しがる光景しか見えてこないため、今更不満など述べるつもりなどない。きっと達也も似たような心情だと思う。
「何というか、あまり変わり映えしなくてすまないな」
「それは私が言うべき台詞ですよ、悠元さん」
翌朝、自分の上で眠っていた深雪から起き掛けに襲われたのはここだけの話としつつ、達也たちに今日の予定を告げた。
「今日は当初のスケジュール通り久米島に行く」
「風間中佐たちと合流するのか？」
「いや、合流はしない。本音を言えば、彼らだけで工作部隊の居場所を掴めれば、こちらの取り越し苦労で終わるからな」
別に楽観視したような発言ではなく、紛れもない本音であることに達也も思わず額を押さえるような仕草を見せた。達也はジェームズ・J・ジョンソン大尉に仕込んだマーカーから当人の情報を風間に暗号メールで伝えているが、その辺りのことも『フリズスキャルヴ』経由でエドワード・クラーク辺りは既に把握しているだろう。
達也はジェームズがいる居場所を伝えなかったので、悠元も態々伝える気にはならなかった。自分が国防陸軍の将校であっても、それ以前に神楽坂家の当主である以上は国防軍と一定の距離を取ることがどうしても求められる。
「タツヤ、大丈夫？」
「ああ、問題ない」
今日は久米島へ観光がてら西果新島を見に行くぐらいのつもりでいた。任務の成功可否は竣工記念パーティーを無事に終わらせること。その為には敵戦力全体の特定と減衰が必要だが、その分野はあくまでも国防軍が担うべき部分であり、師族会議・十師族の魔法師が担う範疇ではない。
とはいえ、ホテルで寛ぐだけというのは怠けているようでいい気は

しない。どうせこちらの動向は見張られているのだから、精々引っ掻き回してやろうと思っていたところで通信端末にメールが入った。
　そのメールは昨日沖縄入りした雫からのお誘いであり、達也たちも特に異論は出なかったため、そのお誘いを受けることにした。
「飛行機の時間は雫たちと偶然重なる形だが８時半。ＣＡＤの持ち込みは特に問題ない」
　ＣＡＤの持ち込みは、公務員の場合は警察に申請すれば大抵は認められる。国立魔法大学、防衛大学校、魔法科高校といった魔法関連の教育機関所属の生徒もそれに準じる。ただ、緊急時の救助義務は課せられてしまうが。
◇　◇　◇
　那覇空港のロビーに到着したところで、聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「達也さん！　って、リーナも一緒だったんですか？」
「あら、おはようホノカ。ワタシも家の用事で一緒に行動してるのよ」
「……おはよう悠元。きのうはおたのしみだったみたいだね」
　双方ともに達也の婚約者であるが、リーナの余裕があるような行動に雫が若干訝しみつつも悠元に声を掛けた。その口調が棘交じりに聞こえてしまい、悠元は表情を竦めた。
「雫さんや、その辺は今度埋め合わせするから許してくれ」
「ちょっとした冗談だよ。悠元の場合、埋め合わせするどころか山盛りに貸しが積まれるから返すのが大変」
「意味が分からん……」
　別に恩や貸しを相手に押し付けたつもりは微塵もないのだが、悠元の言葉に雫や深雪だけでなく、ほのかやリーナまでも笑みをこぼしていた。悠元は気を取り直す形で彼女たちといた集団に声を掛けた。
「中条先輩、おはようございます」
「おはようございます。神楽坂君たちも久米島に？」
「ええ、そうです」
　先日の彼岸法要の中にあずさ達卒業生組がいたのを確認している。久米島に来ることも知っていたため、特に違和感を覚えることはな

かった。あずさと会話を交わした後、服部、五十里、花音、桐原、紗耶香、沢木と言葉を交わす。悠元は達也たちの中で全員と友好的な関係を築いているため、話し手になるのは無理もない事だった。
日単位で重なることは想定していたが、時間単位で重なったのは偶然とも言えるだろう。話の流れ的に言えば必然とも言えてしまう訳だが、そこに一々ツッコミを入れるべきでもないと判断した。
「光井さんたちともお話していたんですけど、神楽坂君たちもご一緒しませんか？」
「ええ、構いませんよ」
雫からのメールではあずさ達のことについても触れていたため、達也たちも事情を知っているので異論はなかった。流石に達也や悠元たち五人、ほのかと雫の二人、卒業生組七人の計１４人はちょっとしたツアー旅行になってしまうが。
久米島に到着した一高生及び一高ＯＢ・ＯＧ一行は、まず雫がチャーターしたグラスボートで島の周りを一周することで話が纏まった。当初の計画は乗り合わせのボートにする予定だったが、ここまで人数が増えた以上は一隻丸ごとチャーターする方向にした。
悠元の方で話を纏めても良かったのだが、雫曰く「これぐらいはさせて欲しい」と言われてしまっては拒否も出来なかった。那覇空港を出発する直前に依頼して、久米島に到着した時に既に手配が完了しているのは、流石日本有数の大富豪である北山家と言うべきだろう。
ただ、原作と異なるのは悠元がグラスボートの操舵を担当する形となった。本来なら年齢制限があるのだが、上泉家や神楽坂家の仕事で使うという理由で海技士の国家資格を取得している。
「本当に助かりました。担当の者が休んでしまったので」
「別に構いませんよ。その辺の経験は積んでいますので」
本来なら１８歳以上の人間でないと操舵室に入れないが、昨日掴んだ潜水艦の情報を鑑みると自分が担当するのが理に適っている。その代わり、達也たちと同行できなくなって留守をすることになるが、そこは仕方がないだろう。
「というわけで雫、これを渡しておく」

「カメラ付きの端末……成程、ほのかが何かしらアクションを起こすと睨んでいるんだね？」
「達也とリーナの雰囲気には当然気付いているだろうからな」
　別に弱みを握ろうというわけではない。あくまでも親しい友人として彼女の頑張りを記録しておくという単なる親切心だ。またの名をお節介とも言うが。その状況を冷静に撮影できるという役割を雫に担ってもらうことにした。
「……先輩方ははしゃいでるな。まあ、無理もないか」
　今回チャーターしたグラスボードは、半潜水艇タイプのもの。「窓」というよりは喫水下の側面が船首・船尾を除いて透明になっていた。さながらパノラマ写真のような海中の風景が見えることもあって、一高生や卒業生たちはボートの中を忙しなく動き回っていた。
「悠元は楽しくないの？」
「いや、楽しんではいるよ。ただなあ……〝色々〟あるからな」
「そうだね……〝色々〟あるよね」
　今回の任務に関しては『神将会』を動かすべきか直前まで悩んだ。ただ、今回の主体はあくまでも国防軍であり、皇宮警察の所属である『神将会』を動かすのはそれこそ最後の手段と結論付けている。念のために情報共有だけはしたので、雫も今回悠元と達也が関わっている任務の詳細を知っている形だ。
　船が久米島沖にある無人島「はての浜」に到着し、船員が甲板でゴムボートを準備している光景を見つつ、悠元は操舵席に座りながら仮想モニター型の情報端末に目を通している。すると、妙な暗号通信が飛び交っていることに気付き、悠元はすぐさまその通信を解析した。
（暗号通信……発信先は隣の砂州から。通信先は沖合の潜水艦……ジェームズ・J・ジョンソンが乗っていると思しき大亜連合の潜水艦か）
　向こうがこちらの事情をどこまで把握しているかは知らないが、大方5年前にもやろうとした誘拐行為をしようと目論んでいるのだろう。とはいえ、折角の楽しい雰囲気を態々壊したくない為、悠元は同じく留守番することになったリーナに小声で話しかけた。

「リーナ、落ち着いて聞いて欲しい。こちらの動きを見張っている連中がいる。昨日ホテルの前を見張っていた連中の仲間だと思われる」
「ユートは実力行使に出ると思っているのね？」
「少なくとも現時点で船を制圧するつもりはないが、油断はできない。恐らく達也たちが戻ってきてからになるだろう。その時は恐らく達也が指示を出すことになるから、いつでも魔法を放てるように準備はしておいてくれ。今は俺が見張ってるから、一先ずゆっくりしているといい」
「そうね、そうさせてもらうわ」
　事前に伝えておけば、そこまで身構えなくてもいいとリーナも判断したらしく、ゆったりと寛いでいた。そんな様子を見つつ、悠元はリーナに思い切って尋ねた。
「というか、ボートの仕様上仕方がないとはいえ、留守番で良かったのか？」
「まあ、ワタシが抜け駆けした部分があるのは否めないし、ホノカも何かしら決意している様子だったし、ならワタシがいない方がホノカもタツヤに仕掛けやすくなるでしょ？　ユートもその辺を察してシズクに端末を渡したみたいだし」
　ゴムボートは六人乗りで、こちらは１４人。悠元も船舶免許（小型のみならず大型船舶を操舵できる海技士の国家資格も取得している）は持っているので３台目のボートを準備しようか雫は悩んでいたが、今回は手伝いをしている人間が船の留守番をしていた方がいいと判断して、そう達也たちに説明した。
　すると、リーナもそれに便乗する形で辞退した。互いに将来が決まった身なので、間違いが起きるはずが無いと達也も納得していた。
「俺の場合は立場柄男女問わず交友関係が広いからな。というか、ほのかに直接相談された」
「ホノカに？　割と顔馴染みの関係なの？」
「中学２年の春から同じ学校でクラスメイトだったからな。雫のこともあって割といい友人関係は築けてると思ってる」
　遡ること一昨日の３月２４日、彼岸法要を終えた悠元がホテルに

帰ってくると映像通信の着信音が鳴り、特に見られて困るものもないために悠元は通話のボタンを押すと、表示されたのは同学年の女子である明智英美からだった。
『お、悠元。いきなり連絡しちゃってごめんね』
「今は丁度ホテルに帰ってきてな。この後出掛けなきゃいけない用事はあるが、３０分ぐらいは余裕があるよ。というか、データ上の相手はほのかの端末なんだが」
『いやー、ほのかやウチと割と仲が良くてほのかの相談相手になりそうな男子が悠元か燈也しかいなくてね。踏ん切りがつかないほのかの代わりに掛けたんだよ』
　音声を聞いている限りでは、英美の他にほのかがいるのは間違いなく、他には里美スバルや佐那、更には姫梨や由夢、おまけにセリアの声が聞こえている。言うなれば「光井ほのか包囲網」の状況が目に浮かんでいた。
『唐突だけどさ、司波君を誘惑するとしたら水着はどうかなって思うんだよね』
「まあ、アピールするには絶好の恰好だと思うし、ほのかなら見劣りすることはないだろうな。周りの男性から達也に対して殺意にも似た敵意が向くかもしれんが。つーか、エイミィは誘惑しなくていいのか？」
『私は立場さえ安泰なら無理はしたくないのよ。母方の実家から変な圧力なんて貰いたくないし』
　英美の実家絡みで巻き込まれた側とはいえ悠元や達也も関与している。だからこそ、英美はこれ以上迷惑を掛けたくないと思っている節がみられる。
　スピーカー越しに聞こえる英美の後ろにいる女子連中はほのかを寧ろ焚き付けていた。ほのかは自身の羞恥心と達也へのアピールを天秤に掛けた結果……後者が勝ってしまったようだった。
「……まあ、せめてほのかが後で恥ずかしさのあまり部屋から出てこれなくなるような露出度は避けるように言っておいた。一部の女子はマイクロビキニを推すつもりだったみたいだが、後で合流した雫が

何とか止めてくれた」
「流石シズクね……今更なんだけど、タツヤってそういうのが好みなの？」
「揃いも揃って達也を狂戦士（バーサーカー）にでもする気か？」
いくら激しい情動が殆どの場合を除いて発生しえない達也でも人並みの性欲は存在する。そんな達也ですら感情的になってしまうリーナがそんな恰好をすれば、次の瞬間には物陰で〝頂かれる〟だろう。どういう意味での言葉なのかは察してほしい。
「その意味でユートも大変よね。複数の女性を相手にするのも大変でしょうに」
「……なってしまった以上はなるようにしかならんしな」
そう話している中、ゴムボートの船外機の音が遠ざかっていく。深雪と雫に対しては後で埋め合わせすることは伝えているし、今の状況は彼女らも理解しているだろう。
実を言うと、達也の動きの鈍さには深雪も頭を悩ませていたらしく、時折深夜だけでなく真夜からも達也の様子を頻りに尋ねられていた。本人たちが直接達也に問い質しても正直な感想が出ないと思ったため、一番近い身内である深雪に白羽の矢が立った。今回の沖縄の任務も大事だが、実は真夜からもう一つ依頼を受けている。それは「達也の交友関係の改善」――――ようは婚約者たちに対する自覚を促すというものだ。こればかりは悠元一人でどうにかなる問題ではない為、深雪と雫、リーナに水波も巻き込んでいる。
その後、砂州の方で積極的にアピールするほのかの姿を雫はバッチリ端末のカメラに収めていたのだった。
◇　◇　◇
達也たちがグラスボートに戻ってきても、ほのかのアピールは続いていた。それに対してリーナは大人しくしていたわけだが、そこは達也との関係の差が大きいのだろう。それはともかくとして、船長から発進準備を頼まれた際、悠元は端末で久米島周辺のソナーデータを船長に見せた。
「兼城（かねぐすく）港までの予定航路ですが、当初の予定を変更すべきです」

「……これは、君の伝手から得た情報かね？」
「そう捉えて頂いても構いません。この周辺海域にこれほどの大型構造物の残骸は確認できませんので、間違いなく潜水艦――それも国外のものとみるべきです」
当初の予定は来た道をそのまま帰るルートであった。だが、天気も良いので多少航路が長くなっても特に支障はなく、西回りで帰ったとしても問題はないと踏んだ。
船長は元国防陸軍の退役軍人で悠元と面識があり、風間を通して悠元の非凡さを知り得ている。なので、安全を優先した悠元の提案を蹴る必要性はどこにもなかった。
「分かった、君の判断を信じよう。もし潜水艦が追跡したとなれば、その時はどうする？」
「……襲撃してきた場合は身元を確認した上で放り投げましょう。下手に追跡され続けるほうがリスクですので」
こちらの誘拐を目論む相手が５年前のことを理解していれば、ここで手出しをする確率は低くなる。だが、相手――大亜連合の軍人は変に対抗心が高く、それでいて面子を気にする。講和条約を結んだ際の大亜連合側の反対派の意見には、日本のような小国に頭を下げることに耐えられない感情的な論調が見られていた。
約２０００年にも及ぶ思想や立場を引き摺っている時点で、彼らは〝後進国〟としか言いようが無いと思うのは自分だけなのだろうか。

堀なんてものは既に存在しない

グラスボートが予定の航路から外れていくことに一番驚いたのは、一高生・ＯＢ・ＯＧの一行ではなく潜水艦で彼らを待ち伏せていた大亜連合脱走兵とオーストラリア軍工作員であった。

「ボートは予定されている航路ではなく、西回りで港に帰る模様です。いかがしますか？」

オペレーターの報告を聞いた大亜連合脱走兵集団のリーダー、ダニエル・劉（リウ）上校は本来グラスボートが通るべき航路から外れることに疑問を抱いた。

元々、ボートに乗っている魔法科高校および国立魔法大学の生徒、北山家の娘を拐かし、営利誘拐や身代金目的に見せかけることでパーティーへの警戒を逸らすと共に、四葉家の魔法師に対して２８日の作戦決行日に妨害できなくさせるという発案はリウの側近によるものだった。

リウ自身乗り気ではなかったが、積極的に反対はしなかった。強硬に反対意見を述べたのはオーストラリア軍のジェームズ・Ｊ・ジョンソン大尉。だが、多数決に加えてリウの優柔不断がこの作戦を決行に至らしめた。

「……追跡をせよ。ただし、一定の距離を取って決行せよ」

グラスボートが予定にない航路を辿ることで、潜水艦の居場所が特定されたのかと訝しんだ。だが、現在潜水艦とボートの直線距離は約１キロメートル程度。潜水艦側からならば特定できてもボート側から特定するのは非常に難しいはずだ。

だが、作戦を確実に成功させるためにも妨害になりそうな要素は出来る限り排除すべきと考え、リウはボートの追跡を命じた。

リウや同乗しているジェームズも含めて彼らは気付いていない。既に彼らの首元には死神の鎌が添えられているということに。

◇　◇　◇

直前で変更した航行ルート程度で彼らを振り切れるとは到底思っていない。悠元は操舵をしつつ手元に置いた端末で潜水艦の動きを

探る。一定の距離を保ちつつボートを追跡するのが分かった。
（目的はこっちの誘拐なんだろうが……そんなにプライドが大事か？）
　正直に言って、分裂・統合を繰り返して長らく単一国家としての体を保てていない中国大陸の国家に一体どんなプライドがあるのかと思う。別に対抗心を燃やすのは構わないが、それが高まった挙句に変な思想で周辺国家に迷惑を掛けている時点で合法的な山賊や海賊としか言えなくなる。
　すると、操舵室に達也が入ってきた。彼も潜水艦の存在を認識したのだろう。より正確に言えば達也がジェームズ・Ｊ・ジョンソンに撃ち込んだマーカーで事を読み取ったと思われる。
「悠元、どうやら潜水艦が追跡しているみたいだ」
「それはこちらも把握している……流石に島へ攻撃を加えるとは思えんが、民間人への被害はマズいな……そして、考えさせてくれる暇もなしか」
　悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』で、達也は『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』で潜水艦から魚雷が発射されたことに気付く。原作なら水波が担当していたが、悠元は一緒に来ていた雫に声を掛けた。
「雫、ボートの後方３０メートルを基点にして、海底への射角１８度で『フォノンティアーズ』を撃て」
「任せて」
　今の雫は完全解除された魔法演算領域によって深雪に匹敵する力を獲得しており、悠元との訓練によって離れた場所から魔法を発動させることもできるようになった。海底への被害は最悪『天陽照覧』で直すため、今は潜水艦への牽制攻撃も含めて雫に任せた。
　ボートへの魔法攻撃の余波は水波がいるために問題なく、雫が放った『フォノンティアーズ』は熱線によって水蒸気化した海水によって巨大な水柱が舞い上がった。
「……悠元はやっぱりジゴロ」
「何で自分が責められるんだよ……あー、次に有人魚雷が飛んできますので、先輩方に対処を任せていいですか？　どうせ暴れたいんで

しょうし」
「沢木と桐原はそうかもしれんが、自分や五十里は例外にしてくれ……」
悠元の言葉に駆け出していく沢木と桐原。服部は悠元に溜息が混じりつつもそう吐き捨てた上で二人のフォローをすべく走り出した。
原作でも相手の兵士を圧倒していた二人だが、悠元という埒外との関わりで同学年の中でも群を抜いた強さを手にした結果、沢木は一撃で相手の兵士を沈め、桐原は『高周波ブレード』の応用で釣竿を強化して相手の防護服だけを綺麗に斬ってしまった。その不意を突こうとする兵士に対し、服部は氷の弾丸で鎮圧した。
「こいつらは？」
「海賊の一種ですかね。まあ、このまま連れ帰っても面倒になるので、突き返します」
悠元は服部の質問に答えつつ相手の素性を探った後、ドライスーツのベルトを徐に掴んで、まるで相手の兵士を銛投げでもするかの如く海中目がけて投げ飛ばした。これには服部だけでなく沢木や桐原も呆然としていた。
「その、一体何をしたんだ？」
「追跡した相手がどうやら潜水艦なので、そこ目がけて投げてやりました」
この程度のことなど、悠元からすればそこまで苦にもならないことだった。
霊的な存在に襲われたり、国ぐるみの誘拐から逃げたり、マフィアに襲われて全員地面に頭から突き刺したり、果ては数百発にも及ぶミサイルを地中に埋め込んだりした。更には廃棄された核兵器搭載型人工衛星を消滅させたりしたのだ。それに比べれば敵の兵士に硬化魔法を掛けて敵の潜水艦に向けて投げおろす程度など苦にもならない。
「ともかく、時間は稼げるので今のうちに逃げましょう。ただ、万が一を考えて暫くは気を付けた方がいいと思います」
それは明後日のパーティーも暗に含めての発言だが、全部理解でき

なくてもいいと思いながら悠元は操舵室に戻ったのだった。
「……つくづく思っちゃいたが、神楽坂を敵に回した奴に同情してしまうな」
戻っていく悠元の後ろ姿を見て、桐原は率直な感想を口にした。その言葉に込められた感情は、言うまでもなく味方としての信頼と敵に回した時の恐怖に他ならなかった。
◇　◇　◇
桐原が思わず同情した相手――――潜水艦側も無傷とはいかなかった。公海上に避難したが、投げつけられた兵士によって損傷し、潜水機能が一時的に使用不能となった。これでは潜水艦を調達した意味が無いと思いつつ、ジェームズはリウを窘めた。
「相手が学生とはいえ油断ならない。そう仰ったのは貴方の筈です、リウ上校殿」
この場にジェームズの相方であるジャスミンは潜水艦に搭乗していない。それは作戦上の観点というよりもジャスミンの外見という武器を大亜連合脱走兵のグループに知らしめたくなかったからだ。
その為、ジャスミンはジェームズと別行動をとっている。
「それで、これからどうするのですか？」
「作戦対象を２８日のパーティーに絞ります」
ジェームズの問いかけに対して答えたリウの口調が歯切れの悪いものだった。誘拐作戦を看破されているような相手の動きに加え、いくら脱走兵とはいえ軍人を学生が圧倒せしめた。この状況からすればミッションを続行するなど不可能だが、それを認めるのはジェームズが正しく、自分たちが間違っていると認めるようなもの。
ようは面子が酷く傷ついていた。そして、それはリウのような人間にとって、耐えがたいものであった。
そもそも、日本との講和条約に反対した勢力の言い分はその面子の問題に起因している。その根源を辿るとするならば、大昔の朝貢や三度の世界大戦などといった争いごとによるもの――――思想・信条に基づく彼らのプライドであった。
「しかし、一体どうやって我々を察知したのか、それが分かりません。

彼らとの距離は1キロメートル以上あったというのに、まるでこちらの待ち伏せを看破したが如く航路を変更したようにも見えます」
「……上校殿は四葉の魔法の線を疑っているのですか？」
ジェームズの問いに対する答えは、リウですら持ち合わせていなかった。彼らとて魔法のことを知っていたとしても魔法に関する全てを知り得ているわけではない。この世界にいる殆どの魔法師は、魔法の真の原理すら把握することなく魔法を使っている。
その事実に気付かない限り、彼らに最初から勝ち目などない事を知るのは……その場に誰もいなかったのだった。
◇　◇　◇
神楽坂の名を持つ人間は、21世紀の歴史の表舞台に限れば神楽坂千姫と神楽坂悠元の二人しか該当しない。日本の魔法師社会といえども、神楽坂家は安倍晴明や賀茂忠行の血と技を受け継ぐ陰陽道系古式魔法の大家という認識であり、神坂グループの経営母体として国有数の財閥グループを有している。
その更に一握りの人間だけが『元老院』の四大老の一角を担うことを認識できるレベルであり、こればかりは『フリズスキャルヴ』でも正確に見抜くことはできない。
確かにジェームズを監視しているのは達也だが、悠元は海域単位で監視をしている。国防軍が所有する潜水艦のコードも把握している為、明らかに不審と思しき船がいればすぐに把握できる。彼らは既に悠元の認識下にいるということすら知らない。
雫からの誘いはあったが、家の仕事が残っている（慰霊祭の打ち合わせも含めて）ために断って本島へ戻って来たところで悠元は達也に尋ねた。
「達也、明日辺りに動くのか？」
「そうだな……いや、夜に動こう」
達也が気に掛けたのは、悠元による〝魔法攻撃〟で手負いの状態となっている潜水艦を見過ごすよりもここで攻め切った方がいいという判断だった。その上で達也はリーナに視線を向けた。
「リーナ、手伝ってくれるか？」

「そうね。ミユキにもタツヤを見張っててくれって頼まれたし」
「……深雪」
「すみません、お兄様。ですが、お兄様の性分だと放っておいたら要らぬ心配事で疲れを溜め込みますから」
　言わずとも理解していそうなことを敢えて述べた深雪の言葉に、達也は降参の意思を示すような仕草を見せた。これには悠元が苦笑を漏らしていた。
「じゃあ、風間中佐には俺から連絡しとくよ。響子さんにも話をしたほうがいいか？」
「そうだな。居場所の特定のことは俺が適当に誤魔化しておく」
「そうしてくれると助かる」
　達也も居場所特定の精度で言えば悠元に勝てないことを自覚している。だからこそ、その辺は適当に誤魔化すつもりだったようだ。なお、リーナについては〝戦略級魔法師アンジー・シリウス〟としてではなく〝九島健の孫娘のアンジェリーナ・シールズ〟として協力することになった。
　話が纏まったところでホテルの中に入ると、ロビーの向こうから歩み寄ってくる少年少女の姿――――達也と深雪からすれば再従弟・再従妹にあたる黒羽文弥と黒羽亜夜子の二人がいた。
「お久しぶりです、達也兄さん」
「文弥か。亜夜子もどうしてここに？」
「奥様の言い付けで達也さんのお手伝いをと」
　原作では四葉家にいる八人の執事の序列第六位、白川執事が派遣されるはずだった。だが、深雪は四葉の関係者というよりも悠元の婚約者としての趣が強く、加えて悠元自身が神楽坂家当主としての実績もある為、真夜は執事の派遣ではなく息子のサポートとして二人を派遣した。しかも、四葉家で発注した快速艇を佐世保から態々乗ってきたという。
　問題は快速艇の操舵手だが、その疑問は更に姿を見せた一人の女性の姿で氷解した。
「佳奈姉さん？　ああ、成程。確か姉さんも船舶免許は持っていたっ

け」
「久しぶり、悠元。まあ、四葉殿の思惑も混じってるけど」
「思惑ねえ……」
亜夜子と佳奈。明らかに達也に抱かれることを想定しての人選であり、その後押しをしたのは紛れもなく四葉家当主こと真夜の仕業。筆頭執事である葉山が反対しなかったことを見るに、彼も血が細ることを良しとしなかったのだろう。
ともあれ、スイートルームに一度戻って達也らの部屋に集まったところで佳奈が一つ溜息を吐いた上で悠元に手紙を差し出した。
「そうそう、悠元。元継兄さんから手紙を預かってる」
「手紙？　別に通信でも良かったと思うが……ああ、そういうこと」
その中に書かれていたのは、３月２４日に上泉家へ十文字克人が訪問し、アリサのことについての相談を持ち掛けられたことだった。
元継が聞いた範囲では、克人は父である十文字和樹より隠し子であるアリサの存在を知らされ、更には三矢家の養女として上泉家で暮らしていることを聞かされた。克人は十文字家の魔法師として避けられない問題である『オーバークロック』が念頭にあり、更には十師族の魔法師としてアリサを迎え入れるべきだと判断し、元継との会談に臨んだ。
だが、元継は克人の提案を一蹴した上で、『オーバークロック』に関しては既に解決済みであるだけでなく、今回の一件は上泉家・三矢家・神楽坂家・遠上家の四者が関わり、最終交渉権は悠元の今の母親である千姫が有していることを克人に伝えた。
「――――克人。この件はアリサの母親である伊庭ダリヤさんの遺言に従って三矢家の養女となり、法的手続きが既に済んでいる。そもそもの話、いくら十文字の血縁とはいえ当事者ではないお前に交渉の権限は存在しない。お前の父親である十文字和樹が直接アリサの元に出向いて謝罪しないことには交渉の余地すら認めん」
１４年間もその可能性を危ぶんでおきながら、何もしなかった実の父親に今更どんな面が出来るのか。十文字和樹は「父親ではない」と法的に認めた以上、いくら十師族の当主と言えども法に従ってもらわ

ねば法治国家としての体が崩壊してしまう。元継は上泉家当主として克人にそう告げた。
　更に、元継はこうハッキリと告げた。
「これが呑めないというのならば、最悪お前と美嘉の婚約も破棄せねばならん。アリサは既に十文字和樹の娘ではなく、俺の血縁上の両親である三矢元と三矢詩歩の娘だ。そのことをお前の父親に告げろ」
「……分かりました。お時間を取らせてしまい、申し訳ありませんでした」
　神楽坂家まで関わったとなれば、悠元とも交渉せねばならない案件の為に元継は沖縄に行く佳奈経由で悠元に手紙を持たせたということだ。
　当然、悠元の答えは言うまでもない訳だが。
「悠元さん、これはアリサちゃんのことですか？」
「ああ……文句があるのなら俺が矢面に立つ覚悟はとうにある」
「悠元さんが……あの、十文字家相手でも圧し潰しそうな気がするのですが」
　文弥の言葉に悠元以外の面々は「それは確かに」と言わんばかりに頷いており、これには悠元も引き攣った笑みを浮かべた。とはいえ、態々怒るのも馬鹿らしいので深い溜息を吐いたのは言うまでもない。その意を汲んだのか、亜夜子が悠元に話しかけた。
「悠元さん。ここにいる文弥ったら、部下の女性たちに惚れられているのに中々手を出さないんですよ」
「いや、婚前交渉はマズいでしょう!?　達也兄さんや悠元さんも何か言ってください！」
　以前、黒羽家お抱えの特殊部隊絡みに首を突っ込んだことはあったが、それ以降のことは黒羽家もとい四葉家の専決事項なので放置した。文弥のことを誰よりも知っている亜夜子に任せているので、その懸念は尤もだろう。
　文弥は慌てた様子で達也と悠元に助けを求めたが、その二人は揃って文弥の肩に手を置いた。
「文弥、諦めることも時には必要だ」

「達也兄さん!?」
「もしもの時は力になる。まあ、性急に子どもが出来てしまう事態は避けるようにするから」
「悠元さんまで!?」
　既に婚約者と関係を持ってしまったため、文弥に対してそう言うことしかできなかったのは言うまでもない話。

名分は既に得た

達也と悠元の白旗宣言によって落ち込む文弥。正直なところ、文弥自身は任務上女性に変装することもあって男らしさに憧れている。だからと言って文弥自身もそこまで性急に男らしくありたいとは思っていないわけだが。

「お父様も『妻に似た以上は急ぐ必要もないのだが』と零していましたが、お祖母様や御当主様からも圧力がありますし、同世代の四葉関係者で言えば文弥だけが決まってませんので」

「それは理解してるけど、何も急ぐ必要なんて……」

文弥からすれば、まだ16歳の人間が将来を早急に決めるのは如何なものかと訝しむ気持ちも分かる。

だが、達也が四葉家の次期当主となったことで勝成がガーディアンとの婚約を認められ、深雪と夕歌、そして亜夜子が婚約者候補として名乗り出た以上はまだ決まっていない文弥に視線が向けられるのはごく自然の流れとも言える。

「アヤコ、フミヤの婚約者候補は何人いるのかしら？」

「現状は四人ですね。ただ、お母様やお祖母様経由で古式の家の娘とも誼を結ぶよう言い付かっていますので、両手で収まるかは不明ですが」

「何でそんなことになってるの!?」

原作とは異なり、リーナもセリアに厳しく躾けられたお陰で四葉の関係者ともいい関係を築けている。すると、ここで深雪が追い打ちをかけた。

「文弥君。あまり女性を待たせてはいけませんよ」

「深雪さん!?」

「……悠元、どうする？」

「……どの道避けられない運命なんだ、文弥は」

ともあれ、達也とリーナの準備を手伝うことになった悠元。率直に言えば、それに託けて逃げ出したと言われても否定はしない。

潜水艦の状況を考えれば、パーティー当日まで久米島の周辺海域に

居続ける可能性が高い訳だが、達也が急いだ理由は「変な気苦労を背負いたくない」という一言に帰結する。ジェームズ・J・ジョンソンに撃ち込んだマーカーには気付かれていないが、それがいつまで騙せるか未知数という部分もある。その辺を達也は懸念事項として有していた。

潜水艦の制圧という任を帯びた達也たちをホテルから見送った悠元はそのまま深雪と水波を伴ってホテルに戻ったのだった。

◇　◇　◇

明日は慰霊祭の打ち合わせがあるが、そちらは最悪悠元がいるために心配していない。かの英雄の一族である悠元に無理難題を吹っかければ、魔法以外の手段で黙ってしまうのは想像に難くない。リーナたちが作戦に参加できるか分からない為、代表して風間のところを訪れた達也を出迎えたのは事前に連絡を受けた響子であった。

「あら、達也君。ふふ、こんな時間に来るなんて夜のデートのお誘いかしら？」

「そこまで口が回る人間ではありませんよ、俺は……悠元から事前に連絡が入っていると思いますが」

「ええ。正直、悠元君なら黒幕の背後関係まで全部把握していそうだけれど、そこまで首は突っ込めないわ。で、どんな情報かしら？」

響子の茶目っ気めいた台詞に対し、達也は疲れたような表情を垣間見せつつも早々に本題を切り出した。響子もしっかりとした口調で答えるが、それはあくまでも同じ大隊内の隊員としてではなく友人同士の会話に近かった。

「今日の昼間に潜水艦から襲撃を受けまして。恐らく敵の工作部隊によるものだと推察されます」

「……まあ、達也君と悠元君がいて捕まる危険性は皆無よね。直に隊長と協議するから、協力者の方々と待っていてもらえるかしら？」

「分かりました」

響子から一定の信頼を置かれているのか、それとも相手に対する憐みを含んでのものなのか……響子は達也からデータカードを受け取ってそのまま奥に消えた。

◇　◇　◇

日本と大亜連合の共同作戦による工作阻止・脱走兵の捕縛が水面下で進む一方、ＳＳＡの国家元首であるディアッカ・ブレスティーロ大統領は西ＥＵの一角を担うフランスのヴィクター・セナード大統領が非公式の会合を行っていた。

「ブレスティーロ大統領閣下とこうして直に会えるとは嬉しく思います」

「建国記念の式典にお会いして以来ですが、ご健勝で何よりです」

第三次大戦以降、国外への渡航は安全を考慮して細心の注意を払っている部分が殆どで、大半は腕利きの魔法師を護衛として置かざるを得ない。だが、基本的に非魔法師である政治家が魔法師の力を危ぶんで近くに置かない場合が多く、それが結果的に政治家の外交にも大きな影を落としている。

ディアッカもヴィクターも国外へ出ることのリスクは無論承知の上だが、彼らにとって無視できない要素がトーラス・シルバーによって提唱された『恒星炉』の案件であった。

表向きに公表されていないが、今回の西果新島は単なる資源発掘用プラントではなく、南盾島と巳焼島に次ぐ恒星炉発電システムの中継基地としての役割を担い、東南アジア方面へのエネルギー供給を視野に入れたものとなっている。

フランスとしては、魔法によって発言力を有するイギリスに伍するため、原子力発電に代わる大規模発電プラントの建設を睨んでの土台作り。ＳＳＡとしては『恒星炉』のエネルギーラインシステムへの参画・協力を取り付けるために虎の子である戦略級魔法師のハンスを伴い、工作阻止に協力の姿勢を見せた。

「明後日の久米島沖の人工島のパーティーですが、我が国で調べたところではそのパーティーを妨害しようとしている勢力にイギリスが関与していると思しき動きが見られました」

「イギリス……直接は考えにくいでしょうし、私の部下がそれらしき人物と遭遇したそうです」

「それはそれは……そうなると、大亜連合軍で脱走したと思しき一派

は香港方面の線が強いでしょうな」
　フランスとイギリスは同じ西ＥＵに属し、国土的にもドーバー海峡を挟む形で接している。だが、この二国は過去に幾度となく刃を交えており、現在の情勢下でも国単位の主導権争いは水面下で激しく行われている。
　イギリス軍でも最新鋭の輸送機がオーストラリアに向かい、その後イギリスに帰投した情報はフランスも掴んでいた。新イギリス連邦の復活を目論んでいるのかと考える意見もあったが、大亜連合軍の特殊部隊が日本に派遣されている情報でヴィクターはイギリスがそのパーティーを妨害しようと目論んでいると推察した。
「この国の力が強まるのは仕方がない事かと思います。ただでさえ新ソ連や大亜連合という二大国と接しているのです……ジョンブルどもやメリケンたちは恐れてるのかもしれませんね」
「第二次大戦のような『神風』を起こされたくないと……どうやら彼らは『触らぬ神に祟りなし』という諺を知らないと見えますな」
「全くです。彼らを知れば知るほど、我々に出来るのは白旗を振ることぐらいでしょう」
　奇しくもその存在を目の当たりにしたからこそ、ディアッカもヴィクターもその人物に対して最大限の礼儀と便宜を図っている。この世界の常識など、彼らからすれば〝有って無いようなもの〟でしかない。悲しいことに、己のプライドや面子――凝り固まった価値観に拘り過ぎて盲信している輩が国内外にいるのも事実である。
「ジョンブルがその程度のことなど見抜けぬはずがない。となると、工作員はいわば〝トロイの木馬〟やもしれませんな」
「――成程、魔法技能による探りを入れると。それこそ悪手ではないかと私は思いますが」
　その仮説による事実が露見した場合、オーストラリアが支払うべき代償は桁外れのものとなる。当然、関与したと思しきイギリスも無傷ではいられないだろう。最悪、イギリス・大亜連合・オーストラリアの三国間のトラブルが起きかねない。
　正直、ヴィクターの仮説に驚きはしたものの、埒外の経験をしてき

たディアッカからすれば納得のいく仮説ではあった。だが、イギリスが態々火中の栗を拾う様な愚行をするとは思えなかった。
　イギリス単独というよりはイギリスの要人。それも多少の混乱も水に流せるような人物となれば、ディアッカの中で一人しか心当たりが該当しなかった。
「ですが……『十三使徒』なら、多少の失敗があっても殺すことが出来ないでしょうね」
「ウィリアム・マクロード卿……彼らを擁護する気はないが、人間主義の連中の気持ちが少しばかりわかってしまうな」
　卓越した魔法技術を有しているからこそ、下手に手が出せない。そんな輩が背後にいる可能性にディアッカとヴィクターは揃って肩を竦めた。不幸中の幸いがあるとするなら、彼らの知己に彼を押さえられる可能性が高い人物の存在がいることであった。

◇　◇　◇

　そんな会話が繰り広げられている頃、達也は作戦卓の一角に座っていた。意外と時間が掛かった理由だが、その場にいる面子を見て達也は納得せざるを得なかった。
　風間、真田、柳の、独立魔装大隊幹部に加え、大亜連合軍の特殊部隊である陳祥山と呂剛虎、更には達也も知らなかった金髪の青年――南アメリカ連邦共和国（ＳＳＡ）軍の軍人魔法師であるハンス・エルンスト大佐がいた。
　なお、この場にリーナと佳奈、文弥と亜夜子は同席していない。その四人はあくまでも〝達也の協力者〟であり、軍の命令を強要することはできない。更に言えば、佳奈と呂剛虎は一度対面しているため（その辺の事情は達也も佳奈本人から聞き及んだ）に、変な諍いを避けるためだ。
「司波殿、と呼ばせてもらう」
「ご自由に、上校殿」
　達也は一昨年の秋に呂剛虎と八王子特殊鑑別所で対峙したことはあるが、直接的な因縁はそれぐらいであった。陳祥山と呂剛虎が間接的に様々な工作を仕掛けていたことは認識していたし、その当時は達

也にとって明確な敵だった。
　とはいえ、その時の因縁を態々持ち込むことは疲れるだけだし、何より達也よりも悠元が彼らを明確に〝敵〟と認識している以上、彼らが取る行動でこの先の未来が決まるのだから、寧ろ「ご愁傷様」と内心で呟きたくなった達也だった。
　作戦自体は「敵潜水艦の沈没」という主題で進むことになっていた。
「敵潜水艦を沈める作戦会議と伺っているが、その潜水艦に工作員がいることは確実なのか？」
「当該潜水艦に貴国の脱走兵と行動を共にしているオーストラリア軍の魔法師が同乗しているのは確実です」
「どうやって知った、というのは聞くべきではないのだろうな」
「申し上げられません」
　達也のハッキリとした拒否の姿勢に重ねて問いかける声はなく、会議はそのまま続けられていく。該当する潜水艦は日本や大亜連合のものではなく、外交チャンネルを持つ各国にも問い合わせたが、いずれも該当する答えは無かった。
「その潜水艦ですが、今日の夕方に自分と友人たちを乗せたクルーザーを襲撃しましたが、難なく撃退しました。その際に襲った連中を照会したところ、大亜連合軍所属の兵士という結果も得ています。なお、その兵士は全員海に放りだしました」
「何と……その際に捕縛しなかったのは、追撃を恐れてのものか？」
「その通りです。クルーザーには非戦闘員もおりましたので」
　襲撃した海賊の照会については全て悠元が行ったものであり、身元も全て響子に渡したデータの中に含まれている。独立魔装大隊のメンバーからすれば、それを行った人物がすぐに該当するが、大亜連合軍に明かすメリットもないために沈黙を貫いた。
　そして、達也がそのことを敢えて口にしたのは別の理由があった。だが、その理由を口にしたのは真田であった。
「成程。達也君はそのアクシデントがテロ特措法の適用範囲に含まれると考えているのかな？」
「ええ、その通りです。我が国の法では、敵性勢力による誘拐未遂も適

用範囲に含まれると認識していますので」
厳密には、誘拐未遂に加えて破壊工作の準備罪という形で彼らを捕まえられる名分が揃った。仮に潜水艦が公海上にいたとしても、一度トラブルを起こした以上はこちら側に追跡権が成立する。
あの場には達也だけでなく、悠元たちや卒業生の一行もいた。加えてクルーザーの乗務員の目撃証言もある為、状況証拠として潜水艦を追跡する目途がついた。
「支障がないのであれば、遠距離魔法攻撃で沈めるのもありと思います」
「いや、それは最後の手段にしておこう。もしもの時の保険は取っておきたい」
達也の申し出は真っ当なものだが、風間は陳祥山や呂剛虎に余計なものを見られたくないために、あくまでも「保険」と置いた上で真田に視線を向けて発言を促した。それを見た真田は潜水艦の現在位置を口にした。当該対象は現在海上に浮上して補給と修理を受けている、という情報であった。
「敵艦は浮上中です。恐らく補給を受けているものと思われます」
無論、潜水艦単独でいるわけではなく、中型タンカーを改造した係船ドックに隠れている模様であった。この時代の石油に燃料としての用途は廃れているが、工業原料としての需要は今も高いニーズがある。タンカーが東シナ海にいたとしても何ら不思議ではない。
「補給にどの程度の時間が掛かるかは不明ですが、今ならばタンカーごと潜水艦を押収できるものと思われます」
「我が軍から脱走した者たちは、お引渡し願えるだろうか」
「無論です。こちらの作戦に協力していただくのですから、可能な限りの便宜は図らせていただきます」
風間の言葉に納得した陳祥山は風間に対して頷き、呂剛虎に目線を送った。
呂剛虎がそのまま立ち上がって部屋を出ていく。恐らく襲撃する部隊の編成に向かったとみられる。
「この作戦は時間との勝負だ。直ちに出撃準備を整えろ」

「十分で出撃できます」
「エルンスト大佐殿もよろしいですか？」
「ああ。此度の指揮官は風間中佐殿だ。それに従うことに異論はない」
その後、達也の言葉を合図とする形で全員が椅子から立ち上がった。

◇　◇　◇

達也たちを見送った悠元だが、何もしないというわけではなかった。悠元はアタッシュケースの奥から『神将会』の戦闘服を取り出し、素早く着替えた。今回の作戦に関しては『神将会』の長として天皇より竣工記念パーティーの成功を願うという言葉を賜った。
別に命令しても問題はなかったが、今上天皇として残り少ない任期を全うするべくの言葉を無碍に出来ない為、悠元は『神将会』の一人として動くつもりであった。すると、脱衣所の方から姿を見せたのは同じく戦闘服を身に纏った深雪であった。
「……明日のことがあるのだから、別に留守番でも異論はなかったんだがな」
「そうは行きませんよ。悠元さんが動かれる以上、私も補佐役としての役目がありますので」
慰霊祭の打ち合わせで無理難題など言われるとは思えないし、寝不足の状態で表に出したくは無いと思っていた。それでも深雪の頑固さは達也に似ているため、断ったとしても泣き落としを食らいそうだったので止む無く同行を認めた。
悠元は一つ息を吐いた上で水波に視線を向けた。
「水波、すまないが留守を頼む。流石にここを狙うような愚か者はいないと思うが、もしもの時は躊躇うことなく連絡を入れてくれ」
「はい。悠元兄様、深雪様。どうかお気を付けて」
水波の言葉を聞き終えた後、悠元は『鏡の扉（ミラーゲート）』を発動させて深雪を伴う形で光の扉を潜ったのだった。

今日の海は時折氷柱が発生します

敵性勢力――――大亜連合の脱走兵たちが用いている潜水艦は通常型のものだ。原子力機関（厳密には核分裂反応機関）を兵器に用いることは国際魔法協会の憲章に反するため、仮に保有していたとしても管理が厳重にされている代物を調達するのは極めて難しい。

リーナたちと合流した達也は、目の前にいきなり現れた光の扉と、そこから出てきた悠元と深雪の姿に深い溜息を吐いた。流石に悠元も深雪が泣き落としをされる前に屈したと判断して声を掛けた。

「悠元……苦労するな」

「まあ、お互いにな。ともかく、作戦を詰めるぞ」

「そうだな」

今回、急襲するタンカーについての割り振りだが、達也、リーナ、文弥、亜夜子、佳奈に加えて悠元と深雪、更に風間の八人がタンカーのブリッジを掌握する役目を担う。実働部隊が多いとみられる潜水艦と係船ドックのセクションは柳と呂剛虎の部隊が受け持つことになる。

「逃亡を阻止する段取りとして、深雪には降下時に凍結魔法でタンカーの周囲を氷結させて動けなくしてくれ。最低でも一時的な混乱を起こせれば十分だ」

「分かりました」

「達也はこちらに被害が及ばない程度にシステムを破壊、文弥と亜夜子が先行し、佳奈姉さんとリーナは後方支援に回ってくれ」

別にリーナを最前線に送ってもいいのだが、本来リーナはアタッカー向きと言えない。どちらかといえばアタッカーをサポートする動きが魔法的にも理に適っていると判断した。体術や修得している魔法を考えれば、達也と文弥が前に出る方が最適解と考える。

「風間中佐にはどう説明する？」

「魔法に関しては俺の権限で秘匿させる。佐伯少将が四葉の魔法を探る可能性もあるからな」

「……まあ、悠元は以前国防軍の襲撃を受けてるから、そうなるよね」

その辺は八雲にも協力を取り付けており、八雲としても「四葉家もそうだけど、上司を敵にしたくないからね」と苦笑交じりに述べていた。
「ユート……あなたも苦労してるのね」
「リーナほどじゃないけどな。わずか十代で部隊長なんて色々やっかみを買ってそうだし」
「そうやって事実を突きつけられると、今更ながら自分の立ち位置が危ういって思えるわ」
」
すると、ジェームズ・J・ジョンソンの存在が潜水艦から離れていくのが確認できた。作戦の為に離れたというよりも、昼間の襲撃によって軋轢が生じたとみるべきだろう。その辺は達也も感じているようだが、黙っている所を見ると風間たちに伝える気はないのだろう。
「で、タンカーと潜水艦については俺の方で接収する。船舶免許は持っているから」
「接収？　何かに使うのですか？」
「こんなものを国防軍で引き取らせるわけにはいかないからな。法的な手続きはちゃんとやるけど」
表向きは「軍事物資に相当する機器の解体」として神坂グループで買い取り、南盾島に運び込む。潜水艦は魔改造を施して島の防衛として役立てる予定だ。値引くどころか上乗せするので誰も文句は言わないだろう。移動方法は『鏡の扉（ミラーゲート）』になるわけだが。
「正直な話、なんで高校生の身分でこんな大事に関わっているのかと愚痴りたくなる。大人たちは一体何をやっているのか……御年６０で身を引かれる今上陛下を見習えって思う」
「悠元さん……」
そもそもの話、現状の独立魔装大隊ですら達也や悠元の力を当てにしないと敵の所在を掴み切れていない現状がある。下手に使い潰されないために悠元は非戦闘員としての立ち位置となった。そこには佐伯に対する不信感があるのは否定しない。

今更愚痴を言ったところで劇的に変わる事など無いと理解しているが、それでも言わずにいられなかった悠元に深雪が心配そうな表情を向けたので、悠元は深雪の頭を撫でつつ、達也の後ろに向かって声を掛けた。
「そういう訳ですので、脱走兵の引き渡しについては全てお任せしますね、風間中佐」
「やはり気付いていたか……今のは割と本気で誤魔化したのだが」
「達也は気付いていませんでしたので、流石だと褒めておきます」
別に嫌味ではなく、素直な賞賛の意味を込めての発言に風間は苦笑で返した。自分の実力は風間の師である八雲ですら認めているので別に意地を張る必要もないし、褒めるべきところは褒める。軍人関係はともかくとして、風間玄信個人との付き合いを解消するつもりはない。
「それで、中佐殿は盗み聞きでもする為だけに来たわけでもないでしょう？」
「ああ。こちらは既に出発できる準備が整った。君らは名目上、上条中将閣下の指揮下に入る形となるから、宜しく頼む」
表向きは悠元（上条達三特務中将）の指揮に入る形で参加したため、特に混乱は起きなかった。真田が操縦するジェット機から目標のタンカーとすれ違うタイミングで降下し、着地する直前で重力緩和の魔法で降り立った。
柳と呂剛虎、そして彼らの部隊はそのまま係船ドック部と潜水艦へ素早く歩を進めた。装備自体は『ムーバル・スーツ』ではないものの、ある程度の銃弾なら防御できる防護服を身に付けている。ただ、達也たち四葉側の協力者に関しては特殊な魔法防護を施せる装備を与えている。
原理的には魔法に仕込まれた刻印型魔法陣にサイオンを流し込むだけで『ファランクス』に相当する防御能力を展開できるもので、身に付けた対象者の周囲に展開している情報強化の術式に上書きする形とすることで座標固定の手間を一切省き、サイオンの消費も軽いものとなる。一昨年の九校戦モノリス・コードで使ったマントの仕組み

を応用したもので、達也は感心するように説明を聞いていた。
「……流石だな。師匠が手放しに誉めるだけはある」
「大したことはしてませんよ。あの人とまともにやりあえていませんし」
降り立った直後に悠元が『オーディン』で『オゾンバレット』を発動させ、甲板上にいた部隊全員を瞬く間に無力化した。風間の賞賛に悠元はそう返すも、それは単に八雲が悠元とまともに戦っていないからというのは気付いていた。その上で悠元は結界術式『影狼陣(えいろうじん)』を発動させて、監視カメラの認識を弄って侵入者の存在を掻き消した。
それを確認した上で深雪が『零点銀世界(ゼロ・ニブルヘイム)』でタンカーの周囲を凍結させた。一時的な拘束でいいと言ったのだが凍結範囲が海底にまで及んでおり、巨大な氷柱の上にタンカーが置かれているような状態になってしまった。
「……深雪」
「張り切ってしまいました」
そうやって茶目っ気に言いのけてしまったことに、悠元や達也のみならず周囲にいた人々は驚きを通り越して呆れ返ってしまっていた。それを見た上で達也は遠隔銃座やガス発生装置、隔壁などの防御装置を『分解』で無力化した。
悠元は当初の予定通りに進めようと思ったが、感じられる気配が想定よりも少ないと察知し、少々作戦を変更することにした。
「暫く見つかることは無いと思うが、リーナと佳奈姉さん、文弥と亜夜子はここで待機。俺と深雪、中佐と達也で艦橋を制圧しましょう。潜水艦方面から感じられる気配も少ないですので」
「ふむ……なら、そうしよう。悠元は『天狗術』を扱えるのか？」
「昨年秋に鞍馬山を訪れた際、それに関する秘伝書を閲覧させていただいたので、問題なく行けます」
論文コンペの下調べとして沓子と一緒に鞍馬山を訪れた際、急に頼み込まれた武術指導の詫びとして鬼一法眼(きいちほうげん)が記したとされる秘伝書を読ませてもらうことができた。こちらから頼んだ訳ではなく、鞍馬寺の住職がせめてもの足しと言うことで見せてもらった。

最初は秘伝書を渡すとまで言われたが、流石に秘伝書が鞍馬寺に無いのは色々問題ということで固辞した。そこから少し話し合った結果として、秘伝書の写しを貰うことで決着した。

悠元の提案に偽りは無いと風間は判断してその提案を呑み、悠元と深雪、風間と達也の二人組で艦橋に入っていく。念のために別々のルートで侵入しており、悠元と深雪のほうは二人一組の六人がすれ違っていったが、特にこちらに気付くことはなかった。

四人共に多かれ少なかれ八雲の師事を受けているが、今回は純粋に『天狗術』の有無で分けている。風間と達也がブリッジの根元にある指令室に、悠元と深雪が操舵室に入って制圧する算段だ。

『天狗術』の効力は術者に依存するが、風間以上の技量と先天的な異常聴覚から獲得した音の制御によって相手の認識を完全に逸らしてしまう。それこそ、一度に数千人から数万人の動きを誤魔化すなど容易い。悠元は操舵室の扉を開ける音ですらも遮断して敵兵の注意を一切向けなくさせている。

悠元は深雪に目線を送ると、深雪は頷いて右手を前方に構える。操舵室にいた数人の兵士は急激な体温の低下によって気絶し、その場に倒れ込んだ。一昨年の時とは異なり、深雪の魔法制御も大幅に成長している証拠だった。

特に隠れている気配や存在も確認できないところで、悠元のレシーバーに通信が入る。

『こちら風間。指令室を掌握しました』

「こちら上条、操舵室の兵士は無力化を完了。脅威と成り得るトラップは確認できない。潜水艦方面の制圧が完了次第、偽装ドックの凍結を解除して那覇港に移動する。協力員と直ちに合流して周辺警戒に当たれ」

『はっ』

あくまでも別陣営とはいえ、国防軍の体裁で参加している以上は階級が一番上となる。なので、風間の畏まった報告で察しつつも悠元は指示を飛ばした後で通信を切った。すると、深雪が尋ねてきた。

「悠元さん。これで全て済んだでしょうか？」

「……いや、肝心のオーストラリア軍の魔法師が逃亡しているからな。連中からすれば潜水艦を軸として作戦を進めたかったのだろうが……無理をする可能性は残っている」
何せ、前世の記憶からしても島の領有権を主張するために偽装した船をこの国の公的な船舶にぶつけるようなことをしでかした国があった場所に成立した後継国家だ。未だに〝日帝軍〟などと言う言葉を使う以上は、傷つけられた面子を回復させるためにゴリ押しをする可能性も残ったまま。
作戦の段階で言えば間違いなく失敗と判断すべきだが、脱走兵が国に戻ったところで待っているのはＵＳＮＡの『スターダスト』のような扱いだ。どの国にも洗脳などによって忠実な兵士を作り上げている事例は確認済みで、大亜連合の場合は『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』経由で顧傑から齎された魔法技術が使われているようだ。
「こんなことをした以上は彼らの未来などない。オーストラリア軍も貧乏籤を引かされた形だな」
「では、一体誰が得をするというのでしょうか？」
「イギリスとＵＳＮＡ。ついでに言えば新ソ連だな」
国際魔法協会の本部があり、ウィリアム・マクロード擁するイギリス。現代魔法の最先端を行き、自称世界最強の魔法師部隊を擁するＵＳＮＡ。そして、ＵＳＮＡと同勢力を有する新ソ連。
原作ではこの一件で日本と大亜連合の状態を見抜いたからこそ、新ソ連が軍事行動を起こす要因となった。尤も、モスクワ近郊にいる人間主義者との対立は未だに続いているため、そこまでの余力を生み出せるか疑問だが、油断はできないだろう。。
脱走兵たちはタンカーをそのまま那覇港に移動させる形で移送し、到着次第大亜連合側に引き渡された。無駄に飯を食わせる気にもならないが、輸送中に死なれても困るので最低限の治療などを施しはしている。それを変に恩義と捉えて甘えるようならば突き放すだけだが。
◇　◇　◇
風間と陳祥山の部隊、四葉の協力員らによって潜水艦とドックが制

圧されたころ、ジョンソン大尉はまだ海中にいた。
当初の予定よりも早い段階での離脱だが、ジョンソンは嫌な胸騒ぎを感じていた。それは今までに死線を潜り抜けたことで培った経験則によるものだが、潜水艦にいた面々との軋轢が生じていたのも事実だった。
時間は真夜中であったが、ランデブーポイントに到着し、海中で小型潜水艇を降りてドライスーツで浮上。事前に連絡したポイントにはクルーザーに偽装した工作船が停泊しており、ジョンソンは柄にもなく安堵の溜息を漏らした。
だが、そんな安堵の感情もクルーザーに搭乗していた人物を見て驚きに変わっていた。彼の視線の先にはジャスミン・ウィリアムズ大尉がいたからだ。
「ジャズ!? 何かあったのか?」
「何も知らないのか? いや、知らなくても無理はないか」
彼女が単なる気まぐれで計画を変更するような性格ではないことはジョンソンが良く知っている。問いかけに対する彼女の反応で、ジョンソンは嫌な予感が過っていた。そしてそれは奇しくも現実としてジャスミンが言い放った。
「明日の作戦の主力部隊が日本軍に捕まった。戻って早々だが、打ち合わせがしたい」
「――了解した。着替えてくる」
ジョンソンはジャスミンが「ダイニングで待っている」という言葉の後に去っていく姿を見届けることなく、更衣室に割り当てられたキャビンに向かった。
ダイニングにはジャスミンと大亜連合脱走兵のブラッドリー・チャンがいた。チャンがジャスミンのほうをチラチラ見ているが、これはジャスミンが本当にオーストラリア軍の大尉なのかと疑問に思っていたためだ。
元々、ジャスミンの特異性を鑑みてリウ以外の脱走部隊に会わないようにしていた。見た目が12~13歳程度の少女を外国の軍の魔法師などと言われても信じるものは極めて少ないだろう。

だが、そんなことを論じている暇は彼らに無かった。
「捕まったというのは、臨検を受けたのか？　彼らは公海上のドックにいたはずだ」
「……調べた限りだと、昼間の襲撃を状況証拠としてこの国のテロ特措法適用対象という形で拿捕したらしい。ほぼ奇襲に近いが、こちらからそれを責めることはできない」
「……」
だから実行するべきではなかった、とジョンソンは内心で独り言ちた。非合法的な作戦という点では彼らを責めることなど出来ない。
「他に分かっていることは？」
「大亜連合の特殊部隊がその襲撃に加わっていた。そして、未確認になってしまった情報だが、襲撃にいた面子の中に少年少女の姿も居たそうだ」
「……もしや、四葉の魔法師か？」
「それは分からない。だが、可能性として無いとも言い切れない」
映像がない以上、判断するための情報は非常に限られている。仮にそれが四葉の魔法師だとすれば、既に虎の尾を踏んでいるかもしれない危機感が生まれてくる。四葉の復讐劇もそうだが、かの家と仲が良い英雄――――上泉剛三の無双劇に近い惨状が大亜連合とオーストラリアに齎される可能性もある。
「どちらにせよ、ここまで来た以上は連中も自白剤の使用を躊躇わないだろう。こうなってしまっては、作戦が破綻している」
今回の作戦において、オーストラリア軍が担うのは反講和派のバックアップ――――基本的には物的支援に止めるもので、万が一の場合に備える形でジャスミンとジョンソンが派遣された。彼らは主戦力として派遣されたわけではなく、主な目的は状況の監視であり、已む無く戦闘を行う場合は許可するというものだ。
オーストラリアとしても全面的に戦闘を禁止するつもりなどなく、そうでなければ腕利きの二人を派遣するということには至らなかった筈だ。今回はあくまでも日本のプレゼンス拡大阻止を狙ったイギリスが立案した作戦で、オーストラリアは秘密同盟国として協力して

いるに過ぎない。
「作戦は実行すべきです。ここで中止しては、今までの犠牲が無駄になってしまう」
だが、ブラッドリー・チャンは作戦の続行を強く推した。
香港がイギリスの政治的影響下にあるのは公然の秘密だが、それでも所属している国家は大亜連合。元香港軍の彼はジャスミンやジョンソンと異なり、祖国の軍を抜け出した反逆者。捕まって祖国に戻ったところで、良くても強制重労働、悪ければ洗脳されて忠実な兵士に作り変えられる……待っているのはチャンにとって悲惨な未来しかない。
チャンに残された道は、今回の破壊工作を成功させて罪を功とし、例え祖国に認められなくともその功績を以てイギリスかオーストラリアに亡命する。そのためには作戦の中止など到底受け入れられなかった。
「しかし、主力の潜水艦は失われてしまいました」
「小型艇は残っています。要は海中から気付かれずに接近できれば良いのです。潜水艦が必ずしも必要という訳ではありません」
「それが出来ると？」
「我々の部隊には水中での活動を得意とする魔法師が残っています。人数は減ってしまいましたが、作戦に支障はありません」
強気なチャンの発言を聞き、ジャスミンとジョンソンは顔を見合わせた。そこから導き出した答えは、オーストラリア本国に作戦の続行をすべきか照会するというものだった。

触れてはいけないものに触れるという意味

作戦を終えたハンスは那覇港に降りた後、無人タクシーでそのまま宿泊先のホテルに帰った。流石に真夜中なので極力音を立てないように部屋に入ってベッド傍のライトを点けると、ベッドで眠っている少女の姿にハンスは安堵したかのように息を吐いた。

「流石に彼の孫とはいえ、まだ子どもだからな……」

少女――――ナターリヤはあの『十三使徒』の血縁者。普通ならば祖父であるレオニード・コントラチェンコが責任を持って預かるものだと思っていた。身分も分からない人間に預けるなんて相当博打に近いだろうし、新ソ連に対する人質にも成りかねない危険をはらんでいる。

だが、コントラチェンコはナターリヤを国外へ連れ出す様に頼み込んだ。新ソ連が危うい位置にいる、と彼はそう思ったのかもしれない。もう一人の『十三使徒』であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがいるにもかかわらずだ。

(もしかして、あの人はベゾブラゾフが衝動的な行動に出る危険性を考慮したのか？　同じ国の戦略級魔法師であるというのに？)

『人というのは欲に勝てないものだ。私もかつてそうであったようにな』

(……お前が言うと妙に説得力が増すわ)

ただひたすら戦場を飛び回って独裁国家ですらカバーしきれない膨大な功績を挙げたルーデルの言葉に、ハンスは妙な説得力を感じつつも着替え始めた。

(新ソ連がかつての旧ソ連と同じとは思えないが、確かに5年前の佐渡侵攻はどう見ても大亜連合が起こしたとは思えない。陽動にしても、捨て駒にされたと知られれば国内で暴動が起きてしまう。それだったら、距離的に近い対馬要塞および九州を狙うはずだ。となると、新ソ連が大亜連合の動きを察して動いたとみるべきか……ロクでもないな)

沖縄防衛戦と時を同じくして起こった佐渡への襲撃は、日本が今年

の正月に全ての情報を開示している。使われた装備を考慮しても新ソ連で配備されていたものと非常に酷似していると記載されていたが、新ソ連側はその事実を否定している。
だが、それによって一時新ソ連内で暴動が起きたことがあった。これはハンスが新ソ連国内に潜入した際に反政府勢力から聞いた話だが、佐渡への侵攻部隊には新ソ連政府の有力者の親族がいたらしく、政府の〝脱走後に行方不明〟という発表に納得できず、周囲の有力者まで巻き込んだ結果……かのスターリンを彷彿とさせるような大規模の粛清が行われたらしい。
『やはり、イワンの根っこは変わらんな。聞こえはいいが、やっていることは人間を奴隷のように扱う様なものだ。あの御仁はそれを危惧してエルンストに預けたのかもしれんな』
(……意外だな。お前ならすべての新ソ連を憎むものかと思ったが)
『私だってイワンの全てを滅ぼしたいわけではない。ドイツに敵意を向けた者は容赦なく殲滅してやっただけだ』
それをどう捉えるかは人の自由だが、ハンスからすれば「特に秘訣など無い」と言いたげな人間だからこそ、どうすれば生き残られるのかを本能で悟っていると思わざるを得なかった。そうして寝間着に着替えたハンスは空いている方のベッドに潜り込んでライトを消した。
『無防備の女性を襲わないとは紳士的だな。意気地なしとも言えるが』
(勝手に言ってろ。俺はとっとと寝るからな)
なお、朝起きた時にハンスにしがみ付くように寝ていたナターリヤの姿を見てハンスが深い溜息を吐いたのはここだけの話である。
◇　◇　◇
昨晩の共同作戦による襲撃は成功したが、まだ予断は許されない。明日のパーティーが無事に終わるまでが任務と言わんばかりに風間は気を引き締め、響子から報告を受けていた。
「それで、オーストラリア軍は回答を保留していると？」
「そうなりますね」

ジョンソンは傍受を避けてイギリスの軍事用通信衛星を経由する形で本国の上官に問い合わせるというものだった。だが、この通信は当然のように日本側も傍受していた。

響子の異名である『電子の魔女（エレクトロン・ソーサリス）』は主にハッカーとしての技量から付いたものだが、魔法師としての異名にも繋がっている。電気・電波信号に干渉する発散系・収束系・振動系魔法の使い手として。

電磁波を直接的な攻撃及び防御手段として用いるのではなく、有線・無線を問わず、通信に介入する魔法を得意とする「魔女」。光通信であっても現状は最終的に電気信号に変換されるため、彼女の守備範囲に含まれている。

また、現在行われている通信だけでなく、上書きされ消去された磁気・電子・光学記憶媒体のデータを再構築する特殊な技能も持ち合わせている。

「真田、どうだった？」

「はい。明日の作戦に関して中止すべきかどうかの判断を仰ぐ内容ですね」

彼女に解読できない通信はあっても、傍受できない通信は存在しない。ジョンソンの暗号通信は響子の魔法を通して独立魔装大隊の受信機が確かに捉えていた。

そして、響子が解読できなくても真田には大抵解くことができた。彼は魔法工学の技術者として優れているだけでなく、暗号技術者としてもエキスパートである。

「こちらとしては、続行してくれた方がありがたいが」

この場に達也か悠元がいれば、間違いなく反論が飛んでくるであろう風間の言葉。ただ、悠元からすれば「大亜連合の脱走兵が追い込まれている状況で特攻紛いの行動を仕掛けても何らおかしくない」と那覇港で別れる際に聞いており、風間もこの意見には同意であった。

敵の勢力は元々祖国の軍からの脱走兵。オーストラリアが積極的な戦力投入をしてこない以上は失敗する公算が高くなり、仮に被害が出たとしても微々たるものになると推察していた。それに、下手に国外へ逃げられるよりもここで捉えて公的に送り返した方が面目も立

つ。
　すると、響子から傍受の報告が齎された。一度解析済みの暗号通信なので、平文化自体は実に簡単なものであった。
「オーストラリア軍からの回答、来ました」
「何と言って来た」
「『明日の作戦決行を許可する。大亜連合反講和派と協力して作戦を成功に導け』とのことです」
「そうか。柳、陳祥山にこのことを伝えて迎撃フォーメーションを詰めて来い。細かい部分は任せる」
「ハッ」
　風間の指示で柳が部屋を出ていく。残った三人のうち、最初に口を開いたのは真田だった。
「しかし、オーストラリア軍は強気ですね。もしや、潜入している工作員に何かしらの兵器――――いや、『オゾンサークル』とは別の戦略級魔法でも持っているのでしょうか？」
「そうは思えないな。寧ろ、失敗するのを見込んでの作戦なのかもしれない」
　真田の予測を風間は否定した。
　確かに、オーストラリア軍が新型の戦略級魔法を開発した可能性はあるかもしれないが、それならばイギリスが真っ先にオーストラリアを抑えつつも戦略級魔法の情報を共有し、場合によってはイギリスがマクロードとは別の国家公認戦略級魔法師と共に発表する厚かましさを見せてくる公算が高かった。
「彼らの破壊工作の成功確率が格段に低い中、増援などの必要な手立てを打つような素振りは見られない。参謀本部と現場の見えている情報の差もあるかもしれないが、本気で成功させるならば後方支援の点で十分なバックアップを付けるべきだ」
「……では、失敗することを分かっていて何故強行するのですか？大亜連合の脱走兵らはともかくとして、オーストラリア軍にそこまでするメリットはないように思われますが」
　正規の他国の軍隊が破壊工作を目論む脱走兵（テロリスト）と手を組んで非合法

の作戦を実行しようとしていることも問題だが、オーストラリア軍からすれば作戦協力の続行は〝悪手〟とも言える。
　最悪、日本とオーストラリアの二国間の国際問題へと発展しかねない状況だというのに、オーストラリア軍は作戦続行を決めていた。起こりうる最悪の可能性という名の響子の懸念に対して風間が答える。
「送り込んだ工作員が失っても痛くない人員という可能性も勿論あるだろう。仮に捕らわれても失敗の責任が問われないようにする目論みもあるかもしれない。もしくは……」
「もしくは、何ですか？」
「彼らの目的が我々や大亜連合軍に無かった場合だな。その場合で言えば達也や悠元が最も該当し得る対象になる」
　普通に考えれば、正規軍相手に正規軍の工作員を送り込むことは水面下の暗闘で割とよくある話だが、今回は達也が四葉家の代表として、悠元が神楽坂家代表・三矢家代理として赴くことは関係者に知らされている。
　もし、昼間の潜水艦による誘拐未遂が起こらなかった場合、風間たちは潜水艦の存在を把握できていなかったかもしれない。
「中佐は達也君や悠元君たちが襲われた一件に〝四葉〟の名が大きく関与していると思われたのですか？」
「可能性は極めて高いかもしれん。何せ大漢（ダーハン）を滅ぼした四葉の係累と上泉剛三殿の親族だ。悠元の方は表沙汰になっていないが、剛三殿とオーストラリアで軍関係者に襲われたことは私も聞いている」
「……逆恨みという線はないでしょうが、変に警戒した輩が画策したのかもしれませんね」
　真田の言い分にも一理はあるとしつつ、風間は内心で溜息を吐きたくなる様相だった。何せ、風間当人ですら「絶対敵に回したくない人間」として達也と悠元がおり、四葉の悪名は誰しもが知るものだった。ただ、あれから３０年という時間が経過したために、そのことを誇張表現だと捉える輩が出てきても何ら不思議ではない。
　知らなくても無理はないが、未だ残る言葉に警戒を解く理由にはならない。それこそ〝百聞は一見に如かず〟と言うべきだろう。

「その意味で、魔法師を捨て石に使うという意図は何ら不思議ではない。四葉は未だに健在なのかを知る目的で送り込んだのだとすれば辻褄は合うとみている。仮に、我が国にとって脅威と成り得る魔法師が国外に出現したとして、そこに達也や悠元を単独で送り込むのはリスクが大きすぎる」
「そうですね。多かれ少なかれサポートやバックアップは必須と考えます」
　単なる軍人ならば、四葉家と言えども興味は示さない。だが、軍人魔法師となれば話は別となる。仮に少女が風間の予測通りの人物ならば、四葉家も少しは興味を持つだろう。だが、それを看過するような悠元ではないと風間はみている。
「もしかすると、今回の作戦は悠元の力を探る目的もあるのかもしれないな」
「可能性は大いにありますが……魔法的にも武術的にも、加えて社会的にも強い彼を靡かせる材料なんて存在するのでしょうか？」
　悠元が誇りと言うものをそこまで重視しない性格だということは、風間は無論のこと真田や響子も理解している。少なく見積もっても十代ながら世界でトップクラスの実力を有する彼に「一体何の対価を支払えるのか」という真田の疑問に対し、答えられる人間はその場にいなかったのだった。

◇　◇　◇

　箱根の神楽坂家本邸――――その離れでのんびりしている千姫だが、部屋の片隅には立派なスーツケースが置かれている。今からどこか遠出することを想定してのものだが、襖の向こうから聞こえてくる声と気配で千姫は寝転んでいた状態から起き上がって胡坐をかいた。
『奥様、起きていらっしゃいますか』
「いいよ、起きてたから。冷えるから入ってちょうだい」
「では、失礼します」
　千姫の声で襖が開き、中に入ってきたのは東京の別邸にいたはずの支倉佐武郎その人。支倉を呼んだのは他でもない千姫であった。
　単独でも護衛無しで十分問題ない千姫だが、忠成の忠告を聞き遂げ

るために支倉を身辺の護衛に置くこととした。その理由は、千姫がこれから向かう場所に大きく関係していた。
「急にごめんね。態々東京から引っ張り出しちゃって。引越しの手伝いもあるのに」
「そちらはほぼ終わっていましたので。こちらに呼ばれたことを伝えると、他の使用人から『また奥様の我儘だな』と憐れむような目線を向けられました」
「そんなにわがまま言った覚えはないんだけど」
　実年齢は高齢なのに、見た目も相まって子どもっぽい反応を見せる千姫に、支倉も苦笑を禁じえなかった。別に我が侭で困らせているというよりは当人の精力さに周囲からは「本当に大丈夫なのか？」という高齢者に対する気遣いと心配の結果であった。
「ま、いっか。支倉さんには私の護衛として明後日に西果新島で開かれる竣工記念パーティーに参加してもらいます。その辺は七草の小僧絡みで経験があるよね？」
「勿論でございます。そのパーティーには確か若様も出席なさるはずですが」
「社交界でのお披露目も兼ねるけど、私は神坂グループの名誉会長として出席するから。深雪さんやリーナさん、水波ちゃんの分の〝予約〟もしているかしら？」
「それは恙無く」
　魔法界としての公表は既にされているが、このパーティーは神楽坂悠元の社交界における正式なお披露目も兼ねている。事前に北山家へ知らせており、二人の関係性を見せることで政財界へのアピールも見せることになる。
　更にはリーナを達也の婚約者として印象付ける側面も持ち合わせており、メイクなどの準備に関しては千姫自身のコネを活用してその筋では超一流の太鼓判を押せるほどの専門家に頼み込んでおり、千姫の本気の度合いが窺い知れる。
「当日はＳＳＡのディアッカ・ブレスティーロ大統領、フランスのヴィクター・セナード大統領、それとＵＳＮＡのワイアット・カーティス

上院議員もいらっしゃいますが……その顔触れだけ見れば、国際会議クラスですね」
「そこまでの人物を呼んだのは悠君あってこそでしょうが、イギリスの連中は分かっているのでしょうか」
奇しくも悠元によって招かれたと言っても過言ではない顔ぶれだが、そのパーティーを台無しにするという意味が本当に分かっているのか、と千姫は独り言ちた。
仮にそのパーティーが中止となった場合、まず国内の防衛体制の穴を指摘されかねず、最悪政府側の権力によって大々的な人員整理が敢行されることになる。主賓クラスとして参加する神楽坂家の面子と建設に関わった上泉家の面子を傷つけることになり、その矛先は当然大亜連合とオーストラリアに向けられる。横浜事変の件で軍艦をオーストラリア国籍の貨物船に偽装した一件がある為、その事実を持ち出されるとオーストラリアも無関係とは言えなくなる。
そして、オーストラリア軍の魔法師を派遣した件に関してウィリアム・マクロードが関与している事実は神楽坂家で既に把握している為、イギリス王室とイギリス政府にこの事実を伝えて責任の所在を明確にする。更に言えば、この馬鹿げた案を作ったＵＳＮＡ側にも責任問題を波及させる。
つまるところ、今回の一件を企てた輩は四葉家や悠元の力を探ろうとしているのだろうが、怖いからと言って余計な搦め手を用いた時点で悠元は黒幕――エドワード・クラークを敵として認識している。
その意味を相手が認識した瞬間、どうなっているかは神のみぞ知る。

おい、仕事（デュエル）しろよ

翌日、３月２７日は慰霊祭の打ち合わせとして悠元と深雪が出席することになった。本来ならば四葉家の次期当主である達也がその場に出るべきなのだが、師族会議議長である悠元に加えて達也の代理として深雪が出れば無茶は言われないだろう、という結論に至り、達也は作戦の疲れを癒す様に窘められた。

「タツヤ、不満なの？」

「いや、不満はない。疲労の度合いで言えば悠元の方が大きいからな」

「それが不満みたいなものじゃない」

部屋でゆったりしているリーナにそう言われ、流石の達也も「確かにな」と返しつつ水波が淹れてくれたコーヒーに口を付けた。

達也がジェームズ・Ｊ・ジョンソンの監視をしているからこそ、明日の本番に備えて英気を養えという気遣いは素直に受け取らざるを得なかった。その理由は、リーナや給仕をしている水波だけでなく他にいる面々にもあった。

「達也さんは本当に罪作りな人です。そういったところも達也さんの魅力ですが」

「それは分かる。リーナさんが惚れるのも頷けるかなって」

「亜夜子に佳奈さん……」

そう、その場には亜夜子と佳奈も同席していた。元々同じホテルに泊まることになったので想定はしていたが、二人も真夜からの手紙という〝免罪符〟を出されては達也も拒否できなかった。

あの母親は早く孫が欲しいのかもしれないだろうが、流石に高校生の身分で妊娠させたとなればマズいと思っていた。その意味で悠元に助けられたことも事実だ。

達也はその話題を引っ張られると居心地が悪くなると判断して、別の話題を切り出した。

「今日はどうしますか。自分は時間が空いてしまったので、外にでも出かけますか？」

四葉家としての公務は既に終わっており、残るは国防陸軍特務士官

としての任務しかない。明日は昼に久米島へ入り、諸々の準備を整えてパーティー会場である西果新島に入る。本来なら四葉家で手はずを整えるところだが、それに関しては悠元から説明が入った。

『母上がパーティーに出席するということで、２７日に政府専用機で沖縄入りするそうだ』

神坂グループの会長職としての〝公務〟――――既に第一線を退いたとはいえ魔法師としての実力は健在で、会場内の魔法行使を完全に抑えるために出向くとのこと。本人としては「まあ、悠君がいる以上は私の役目など必要ないかもしれませんが」と零していた。

更にはメイクやドレスアップなどの専門家も同行させる手筈で、この辺りは深雪や水波、リーナらに対するフォローとみられる。

付け加えると数人の魔法師も同行するようで、その中には警察省の千葉寿和警視（テロ事件の功績という形で昇進させられた）も含まれている。更には、ＵＳＮＡ上院議員のワイアット・カーティスも同席するらしい。

事情を聴くと、カーティス議員は過去に政治がらみの案件で千姫に救われたことがあり、個人的なコネを有しているとのこと。顧傑の一件に関するベンジャミン・カノープスの任務失敗の際に千姫が彼の罪を取り成したことで、カーティス上院議員にとって千姫は一生頭が上がらない存在となってしまったそうだ。

カーティスが急に参加を決めたのは親族の生存を知ったからこそであり、表向きは「ＵＳＮＡ大統領の親書を届けるため」として国外に出る。大統領本人の直筆である親書を携えていくことは決して間違いではなく、そこにどんな思惑が含んでいるのかなど電子情報に流れない以上は知る由もない。

閑話休題。

「それだったら、ホノカも誘わない？　なんだったらシズクも同行させればいいし」

「それはいい案ですね。私も悠元さんと仲良くしている身として親交を深めたいですし」

「……達也君はいいの？」

「まあ、負担にならない程度ならば目を瞑ります」
四葉のガーディアンだった頃ならば無理を押していただろうが、よもや弱音のような言葉が自分の口から出たことに達也自身苦笑を禁じえなかった。その意を汲みとったのか、佳奈も笑みを漏らしていた。
「雫がいてくれるなら水波もいくらか気分が楽になるだろう。水波はそれでいいか？」
「はい。深雪様から達也様を見張っててほしいと頼まれておりますので」
「……」
無茶をする気は無い、と口で言ってもその程度の基準は人次第。とりわけそのハードルが高すぎるからこそ、深雪のお節介に近い言葉に達也は内心で溜息を吐きたくなる気分を抱いたのだった。

◇　◇　◇

慰霊祭の打ち合わせ自体は何の問題もなく終わった。何かしらの注文を付けられる前に悠元が自分の資産から〝香典〟として1億円支払うだけでなく、慰霊祭に叡山から天台座主を招いて法要を執り行うことを提案すると、他の参加者も文句は何一つ言えなかった。俗にいうパワープレイとか札束ビンタの恰好だが、余計な注文を付けられる前に日本魔法界として死者を平等に弔う姿勢を見せた方が早いと結論付けた。
そして、悠元と深雪はそのまま近くの喫茶店で休憩することにした。
「本当にすぐ終わりましたね」
「向こうもこちらの素性は知ってるだろうし、余計な事を言って前言を撤回されるのも周囲の顰蹙を買うだけだからな。魔法界として非魔法師であれ平等に弔う姿勢を見せるにはこの方法が一番分かりやすいだろうと思ったまでだ」
魔法がごく限られた存在でしか行使できず、魔法資質保有者であれども資質を開花できる人間に限りがある以上、非魔法師の魔法に対する恐怖を完全に取り除くのは難しい話だ。ならば法と秩序の統制下

で魔法の存在を制御する他ない。
一部のレフト・ブラッドの兵士による裏切り行為が公表されなかったのは、反魔法主義に対する追い風とならないようにするための隠蔽工作の側面も併せ持つ。
「問題は明日のパーティーを乗り切った後だな」
「……悠元さんは、これが始まりだとお考えなのですね？」
「間違ってはないが、連中がそう簡単に諦めるとは思えん」
原作においてオーストラリア軍の魔法師を四葉家に潜り込ませる作戦は頓挫しており、この世界では国防軍に引き渡すのではなく警察省によって犯罪者として逮捕したのち、オーストラリアに強制送還する手筈となっている。
これは、佐伯少将が彼らを利用してイギリスと個人的なコンタクトを取り、最終的に達也の力を法的に拘束しようと動くことを阻止するためだ。一昨年の命令の一件で悠元は佐伯を信頼しておらず、九島烈が実質的な力を失ったことで野心を拡大させる可能性が高いためだ。
もしかすると、彼女はその功績を以て『元老院』に入り込もうと画策しているかもしれない。戦略級魔法師を御するだけのものとなれば、『元老院』の構成メンバーも決して無視はできないと思われる。
尤も、そんなことになどさせないように立ち回るのは確定事項だが。
「大事になる前に顧傑は排除できたが、反魔法主義の火種は燻ぶったままだ。いつまた再燃するか分かったものじゃない。それに、連中（うみのむこう）は俺や達也の素性に気付いているわけだしな」
『第一賢人』と自称したレイモンド・クラーク――ひいては『七賢人』や『十三使徒』という既存の世界のシステムが立ち塞がるのは間違いない。軍上層部が『セブンス・プレイグ』や『アルカトラズ』の一件を冤罪の理由にしてこちらを追い出そうとするかもしれない。
ＵＳＮＡ政府とはヴァージニア・バランス大佐を経由して戦略級魔法に関する約定を取り付けているが、ＵＳＮＡ軍は未だにこの国の戦略級魔法を奪うことを諦めていない。それが如何に馬鹿な事なのかと理解すればまだいいが、どうにもこの世界の軍人は野心家が多すぎ

る。出世欲のために他人を蹴落として犠牲にすることはあり得ない事でもないが、少し考えれば分かることを理解できない奴ばかりだ。
ＵＳＮＡだけでなく、イギリスや新ソ連も正直油断できない。特にベゾブラゾフとは戦略級魔法のぶつけ合いを経験している以上、復讐と称してこちらの排除を狙ってくるかもしれないだろう。
「では、如何なさるのですか？」
「……いっそのこと、オーストラリアをこちら側に引き込む。かつてマシュー・ペリーが黒船を率いて当時鎖国していたこの国に対して開国を迫った様にな」
こちらが支払うリスクを最小限として、オーストラリアには選択を迫る。このまま大亜連合と同じ穴の狢として敵国同然の扱いを受けるか。あるいはオーストラリアを売るような真似をしたイギリスに一泡吹かせたいか。
どちらにせよ、破壊工作に関わった以上はこのまま日和見など許されるはずなどない。そして、オーストラリアにはイギリスにはない利を生み出せるだけのものが存在する。
「その絡みで妙な報告が一件。『ジャスミン・ジャクソン』、『ジェームズ・ジャクソン』と名乗る人物がパーティーに参加する。調べて見たら、イギリス大使館からの招待になっていた」
西果新島の竣工記念パーティーは全て招待制にしており、達也と深雪は神坂グループの取締役である神坂佑都の名で招待状を出している。元々国内の招待客に限る予定だったが、ＳＳＡとフランスの国家元首が参加されるため、それをどこからか嗅ぎ付けたＵＳＮＡとイギリスの大使館が自国の招待客を入れたいと打診した。
前者の場合はカーティス家関連で明確な理由に基づくものだが、後者の理由は「国際魔法協会本部の特使」とのことだった……パーティーでは壇上に立つ予定もないのに、イギリスは魔法協会に喧嘩でも売りたいのかと思ってしまう。いや、この場合はウィリアム・マクロード個人を非難すべきだろうが。
「深雪。達也に『ゲートキーパー』をジャスミン・ウィリアムズ大尉に仕掛けるように言ってくれ。ただ、それはあくまでも俺の魔法と言う

ことで通す」
「……宜しいのですか？」
「敵さんが俺と十文字先輩の模擬戦もどうせ掴んでいる可能性が高いからな」
　達也に対する戦力見積もりの下方修正と自身に対するヘイトを向けさせるのが狙いで、魔法を使わずとも相手を制圧可能なのは深雪も理解しているからこそ、悠元はその提案をした。どうせ達也の『質量爆散（マテリアル・バースト）』や自身の『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を封じようとしてくるかもしれないが、その為の対抗策は既に構築済み。
「それに、敵を無力化しても気絶はさせない。連中には大事なメッセンジャー兼人質になってもらうからな」
「……すみません、悠元さん。一体何をお考えなのですか？」
「強いて言うなら……味方を思い切って増やす作戦だな」
　深雪が考え付かなくても無理はない。何せ、この作戦はオーストラリアの持つ力を存分に使って〝世界の勢力再編〟を狙うためのものだ。その為には、オーストラリアをイギリスから切り離すことが極めて重要となる。
　切り離すと言っても、オーストラリアには引き続きイギリスとの関係を保ち続けてもらう。俗にいう〝二重スパイ〟を担ってもらうつもりでいた。大亜連合との関係性を含めれば三重になってしまうわけだが、元々宗主国が〝三枚舌外交〟ということをしていた以上は、その程度の気苦労は負ってもらわねばならない。
「この作戦が成功すれば、アフリカの大部分からアラブ同盟、インド・ペルシア連邦、東南アジア同盟、オーストラリア、南アメリカ連邦共和国といった国家を巻き込むことができる……今のところ言えるのはそれだけかな」
　オーストラリアには名誉を与えることでオセアニア方面の国家として存在感を見せてもらい、世界屈指の経済大国である日本が実を取る形で音頭を取る。仏教・神道が主体とはいえ、宗教に関して寛容な国家が主導すれば他の国家とて文句が出ることはそこまで多くないとみている。

各々の国家に対して解決してもらう問題は山積しているが、その為にもフランスとドイツにも頑張ってもらわねばならない。ここで何故ドイツなのかと言えば、ハンス・エルンストの出身がドイツである為に東ＥＵも西ＥＵを出し抜ける好機を与えるつもりだ。

付け加えるならば、エルンスト・ローゼンに対する再起のチャンスとも言えよう。とはいっても、エリカやレオの件を蒸し返したら白紙にするつもりなのは言うまでもない。

「そこまでのことをしても、悠元さんは統べる気が無いのですね？」

「当り前だ。俺はあくまでも御膳立てをするだけで、上手く交渉できるか否かは政治家や政府の役人の仕事だ。破談にしたら許す気などないが」

本当ならば、そこまでのお膳立てをせずとも自国の政府がしっかりと働いていればこんなお節介など焼く必要もなかったのだ。だが、将来の『ディオーネー計画』を鑑みた場合、そこまで待っていられないというのもある。

まだ噂程度だが、今年の九校戦が実行委員会の不祥事続きによる体制の刷新で十全に機能する状態ではなく開催を中止する動きが見られているらしい。それを自分や達也のせいだと騒ぎ立てるところに『トーラス・シルバー』の騒ぎを起こすのは目に見えている。

自分も無関係ではないが、現部活連会頭でもあり神楽坂家現当主となった自分が国際的なプロジェクトに関与する気などない。宇宙に魅力を感じていない訳ではないが、自ら宇宙に行きたいかと言われるとそれは全く別の問題でしかない。

名誉を口にしようものならば話を聞く気もない。あくまでも実利に基づく交渉ならば話は聞いてやるが、それでも無理難題に近い実利を吹っかけるつもりだ。例えば、もし新ソ連が参加を表明したとなれば『旧ソ連時代に不法占拠した樺太・千島列島の領土・領海に関する全ての無条件譲渡』も条件に追加するつもりだ。

そもそも、『恒星炉』に関する交渉の相手や条件を決める権利はこちらにある。別に連中が『ディオーネー計画』をでっち上げたとしたら、ＵＳＮＡ・新ソ連・イギリスは真っ先に優先交渉対象から除外する。

軍事同盟関係にあるからといって何をしても許されるわけではないことをまずは身をもって知るべき時が来ただけに過ぎない。
「……本来なら高校生がするべき話ではないんだがな」
「まあ、悠元さんとお兄様ぐらいにしかできませんから」
　メディア工作によって反魔法主義の勢いを大幅に削いだが、油断はならない。師族会議の体制を大幅に変更したため、遠方に飛ばされる格好となった七草家が動き出すかもしれない。ただ、未だ当主の座にある弘一がこれ以上余計な首を突っ込むとは考えにくいが、一応警戒は続けておく。
　九島家に関しては十師族から師補十七家に降格した形で、今後は基本６０年という長い時間を十師族の下で過ごさねばならない。元々は既に引退すべき年齢であった九島烈に頼り切ったツケの結果でしかないが、烈本人はともかくとして九島家に残った面々が果たしてそれで納得するのかという疑問もある。
　その疑問の根底にあるのは、第九種魔法開発研究所を接収した際にパラサイドールの素体やガイノイドなどの関連するものが全てキレイに無くなっていたという報告だ。恐らく九島家が全て持ち出したとみるべきだが、他の「九」の家が関与していた可能性もあるだろう。この辺の調査は全て伊勢家に委託している。
「その達也（おにいさま）からメールが来たな……なになに、『一緒に買い物に行かないか』とさ。深雪はどう見る？」
「そうですね……お兄様もそろそろ年貢の納め時が来たのかもしれませんね」
「別に悪い事ではないがな」
　キーとなりうる光宣と水波の関係が変化した以上、似たようなことが起きても全く同じ結果になるとは限らない。だが、慢心は出来ないだろうと思いながらも伝票を手にして席を立ったのだった。

次世代の苦労

達也たちと合流してショッピングに付き合った後、悠元は千姫から呼び出しを受けて宿泊先のホテルの敷地内にある会員制の高級和食料亭に赴くこととなった。流石に場所が場所なので事前に持ってきていたパーティー用のスーツではなく『神将会』で着るスーツを纏っている。

受付に自身の名を名乗ると、そのまま奥の部屋に案内された。部屋にはレディースーツ姿の千姫が既に酒を飲み始めていた。年齢上は高齢の女性に酒というのは危ないが、止めたところで止まるとも思えない為、悠元は何も言わずに向かい側の席に座った。

「お先に頂いてるよ、悠君。止めないんだね？」

「言って止めるようなら、そもそも母上は飲まないでしょうから。にしても、珍しいですね」

悠元が「珍しい」と口にしたのは、千姫の性格を考えれば深雪か雫を同席させたとしても不思議ではなかったからだ。悠元の言葉の意図をすぐに察した千姫は笑みを零した。

「明日のパーティーはともかくとして、それが失敗に終わった後が肝心だからね。ジャスミン・ウィリアムズ……正直、マクロード（かれ）の名なんて聞きたくもなかったけど」

千姫の渾名を考えたのはウィリアム・マクロードの父だが、その当人も英雄たる千姫や剛三を日本から追い出して戦力を低下させようと目論んでいたらしい。だが、四葉の復讐劇に端を発した大漢崩壊によって二人は表舞台から姿を消したため、それ以上は強く言えなかったそうだ。

「今回、ジャスミン・ウィリアムズ当人を実際に視認したわけではありませんが、以前オーストラリアで襲撃を受けた際に彼女から精神感応能力のようなものを感じ取りました。恐らくはほぼ同一の遺伝情報によるテレパシー能力で神楽坂家や四葉家を探ろうと送り込むためのものかと思われます」

「成程ね。その分野で四葉だけじゃなく古式魔法の大家である神楽坂（うち）

に喧嘩を売るってことか……大亜連合の脱走部隊は独立魔装大隊や大亜連合軍の特殊部隊に任せるとして、その二人はどうするの？　悠君の魔法でオーストラリアに強制送還する？」
「いえ、二人には親書を持たせて堂々とオーストラリアに帰って頂こうかと」
　狙いはオーストラリアの緑化による砂漠化抑制技術。その気になればオーストラリアに潜入して根こそぎ持って帰ることは可能だが、今回は敢えて選択肢を迫る。このまま泥船に乗ったまま沈むか。あるいは裏切り者と蔑まれても自国の安寧を貫くか。
「実は、爺さんの絡みでアラブ同盟から土地権利を貰ってしまいまして。テストケースとしてアラビア半島の主要な砂漠を耕地化してしまおうかと考えています。イギリスのことがあるとはいえオーストラリアには自給自足の実績がありますので、アラブ同盟も断りはしないと思います」
「オーストラリアが断る心配はないのかしら？」
「そこについては問題ないです。オーストラリアにとって一番のアキレス腱を壊す準備は既に整っていますから」
　砂漠の緑化のみならず、海水の淡水化プラントの建設にも協力することで地下水の枯渇を防ぐ。主要河川から運河を敷くこともできるだろうが、気象に左右されやすい河川の水量に期待するよりも海水から引き上げる方が効率がいいし、淡水化で残る塩や残留物質も十分価値が見いだせると判断している。
　鎖国状態ということは、外部からの情報がかなり規制されていることを意味する。かつて日本も外の宗教からの保護という名目で鎖国に踏み切った歴史があり、停滞してしまった２００年以上の時間は国家を腐敗させ、黒船来襲に端を発した国家の維新騒動に繋がった。そこからオーストラリアの弱点を突いてイギリスの捨て駒でいいのかと問いかける。
「仮にオーストラリア政府が二人の存在を認めなかった場合、戦略級魔法『オゾンサークル』の起動式データを東南アジア同盟とＳＳＡ、インド・ペルシア連邦とアラブ同盟に横流しします。本来旧ＥＵ諸国に

しか存在しない筈の戦略級魔法のデータが流出したとなれば、オーストラリアと繋がりのあるイギリスが間違いなく矢面に立たされる形になります」
「東西ＥＵが更に分裂しそうね。新ソ連とＵＳＮＡには流さないの？」
「前者はともかくとして、後者は今回の作戦の片棒を担いでいます。なので表向きは非難しませんが義理を果たす道理なんてありません」
　別に流したところで痛手にはならないが、「相手から受けた戦略級魔法のデータを解析できる」などと余計な詮索をされる方が余計に困る。だからＵＳＮＡに果たす義理はないと悠元は結論付けた。
　新ソ連に関しては言わずもがなで、特にベゾブラゾフは悠元も既に敵として認識している。彼が自身の保身に走ればそれでいいが、仮に自分や達也を排除しようと目論んだ場合、新シベリア鉄道を運行不可能状態に追い込むことも考慮に入れている。
「てっきり、母上ならイギリス大使館の申し出を蹴るように動くと思いましたが」
「国際魔法協会本部からの要請を受けていたのは事実ですから、蹴る理由もありませんでした。まあ、このことが露見したら魔法協会も大騒ぎでしょうね」
「まるで他人事のように仰いますね」
　千姫が魔法協会を信用していないのは、過去に起きた世界群発戦争が原因である。その戦争では世界中の魔法師が団結して全面核戦争を抑え込んだという美談が伝わっているが、国際魔法師部隊の実態は国家間での権力闘争の代理戦争状態だったと話す。
　日本からは神楽坂千姫、上泉剛三、上泉奏姫、九島烈、そして四葉元造が主だった戦力として参加していた。四葉の悪名によって暗殺部隊が送られなかったのも元造の功績が一種の抑止力として機能していたためだ。
　欧米の人間からすれば「たかが第二次大戦の敗戦国家に何ができる」と疑問視する声も少なくなかった。それを実績によって黙らせていた形だ。

「その時に嫌がらせをしていた連中が今も〝時計台〟で魔法協会を我が物顔で支配していますからね。彼らが悔しがっても何も出来はしません」
どの国家にも欲をかいて既得権益にしがみつく輩がいる話はさておき、悠元はもう一つの話題を切り出した。それは、今後動いて来るであろう連中対策の一環で動かしている計画についてだ。
「南盾島方面は問題ありませんか？」
「ええ。にしても、私がカーティス上院議員を取り成した際に伝えたら、彼は凄く驚いておりましたが」
陰の実力者であるカーティス上院議員が驚いても無理はない。悠元はセリアから聞いた暗号メールの件を通信でヴァージニア・バランス大佐に伝えるのではなく、カーティスと大統領を経由してバランス大佐に伝える方法を取ることにした。
顧傑に関する情報だけでなく、パラサイト事件でのメディア報道や『第一賢人』ことレイモンド・クラークのビデオメールの一件も伝えた。悠元と達也が戦略級魔法師という事実は伏せたが、パーソナルデータにない情報を把握されていることを伝えるとカーティスは冷や汗を流したという。
千姫が尋ねると、彼は内密に大統領から情報提供を受けており、悠元と達也の素性を把握している数少ないＵＳＮＡ関係者の一人と判明した。
「とはいえ、カーティス議員も動かぬ証拠を手にした時点で動くことになるでしょうから、ＵＳＮＡ国内のことはお任せしましょうか」
「そうなりますね」
国内外の情勢がどう動くかなんて現状では想定が付かない。そもそも人間主義が集中して新ソ連で暴動を起こしているのが北欧・東欧、あるいは中央アジア方面に飛び火しないとも限らない。
国内で暴動を起こす確率が極めて低くなったとはいえ、追い詰められた十山家や九島家が暴れないと断言できない為、監視の目を緩める理由はない。とはいえ、前者の場合は家単位というよりも国防軍の情報部単位で動くことになるかもしれないが。

「目下の心配事は大亜連合だけど、悠君はどう見る？」
「……あの国に情けを掛けたところで意味がありません。いっそのこと、台湾に大陸を統一させた方が有意義かと思います」
講和条約を結んでも互いに強硬派が出るほどに水面下の感情が拗れている以上、いっそのこと〝霊的に生まれ変わる〟ことが起きでもしない限りは完全な友好関係など結べるはずがない。
ただでさえ沖縄と横浜の一件でそれが浮き彫りになったわけで、それなら独立国である台湾に『中華民国の復興』という名目で大陸を統一してもらった方がまだ穏便に済むかもしれない。第二次大戦時の遺恨はあるだろうが、まだ親日感情が根強い以上は近隣の味方として心強いだろう。
なにせ、大陸は旧共和国時代以前に遡っても何かと因縁を抱えていたし、大漢も大亜連合も自国の〝本国至上主義〟の根幹が変わらない以上は何も期待できない。だからこそ、陳祥山に対して警告はした。それでも聞けないようならば自分の手で殺すと決めている。
◇　◇　◇
千葉寿和。
百家本流の千葉家の長男にして、千葉家の頭領。とはいえ、千葉家の家督は父親である丈一郎が保持したまま。本来ならば顧傑に関わる一件で亡くなる筈だった彼は神楽坂悠元によって生き延びることができた。
一人の剣士として確実に功績を積み重ねている弟と、幼馴染の影響で既に兄二人を超えてしまった妹の存在を羨ましく思いつつも、借りたマンションで非番の時間を貪っていた彼の休みは一本の電話で終わりを告げた。
「もしもし……今からですか？　分かりました……この時期に呼び出しとは、上司も人使いが荒いな」
ぼやいていても仕方が無いと諦め、寿和はいつものように支度を済ませて車を走らせ、警察省の庁舎に赴くと入り口のところで待っている部下――稲垣警部補の姿が目に入った。
「おはようございます。警視も呼び出されたんですか？」

「おはよう。稲垣君もか……何かしら嫌な予感がするのだが」
警察省の魔法師が呼び出されるという時点で嫌な予感自体はしていたわけだが、寿和だけでなく稲垣まで呼び出されたとなれば只事ではないのだろう。思わず口に出した寿和に対して、稲垣は顔を顰めた。
「警視が出張る時点で只事じゃないのは確定ですよ」
「人を見て事の重大さを判断しないでくれ、稲垣君」
二人で呼び出し先――警察省特殊捜査課の課長室に出向く。広域特捜チームは大半が魔法師で構成されているが、管轄は特殊捜査課の扱いとなる。部署名に魔法という言葉を使わないのは国民を守る立場の警察官として非魔法師に余計な恐怖を抱かせないという配慮によるものである。
その上司から指令書を手渡された二人は車で一路目的地に向かっていた。
「紙切れ一枚で『指定の場所に出向いて護衛対象と接触せよ』って、こういうのって相手方も護衛位付けているだろう？　俺ら警察官の仕事じゃないと思うんだがね。専ら機動隊の職務の範疇だと思うのだが」
「警視……それは自分も思いましたが、今回の仕事は神楽坂家からの要請です」
「分かってる。無碍に断れないってことはな」
寿和と稲垣を指名したのは神楽坂家。二人は顧傑の一件で近江（おうみ）円磨（かずきよ）から呪いを受けたことで世話になってしまっただけでなく、エリカの件で迷惑を掛けてしまった千葉家の関係者。
その千葉家だが、神楽坂家当主の顰蹙を買ったということで寿和、修次、エリカの三人が本家から出ている状況が続いている。寿和もいい加減父親が非を認めて謝るべきだと思うのだが、その様子も見られない以上は自分が態々火の粉を被る気もなかった。
「親父がとっとと諦めて千葉家の当主を修次にでも渡せば、俺も楽できるんだがな」
「そうなったところで、次は警視に婚姻を申し込もうとする魔法師の

家が殺到するだけかと」
「稲垣君、心の片隅に追いやっていたことをほじくり返さないでくれ」
寿和も稲垣の言い分は尤もだと思っていた。
早苗はともかくとして、弟の修次は渡辺家の娘と仲が良く、渡辺家からも好意的に見られているので秒読み段階の状態。妹のエリカも同級生の男子である西城レオンハルトことレオと仲睦まじく、しかも二人の祖父同士が知り合いという事実だけでなく、エリカの幼馴染に悠元がいる関係で武術を習っている。
道場にいる連中もレオの実力を認めているが、丈一郎だけはエリカを悠元の嫁に出来ないかと未だに諦めきれていなかった。そして、その状況は千葉家長男である寿和に対してもプレッシャーとして圧し掛かっていた。
「良い出会いがあれば吝かじゃないんだがな」
「少し狙っていた藤林家の令嬢には振り向かせられなかったようですが」
「あのな、稲垣君。彼女に酷な事は出来なかったんだよ」
原作では横浜事変の前に知り合った二人だが、この世界では変化が生じていた。沖縄防衛戦で亡くなった響子の婚約者と寿和は顔見知りであり、その切っ掛けは剛三の武術指導にあった。
その友人から沖縄での一件の直前に『もしもの時は彼女を頼む』と任された以上、寿和としては響子に恋愛感情を抱いたとしても友を裏切るような真似は出来なかった。
そんな会話が交わされていた車の行き先は会員制の高級料亭で、指令書に書かれていたキーワードを口に出すと、店員が案内した。その先には寿和と稲垣が良く知る人物――――上泉家先代当主こと剛三がいた。その隣には見知らぬ人物がいたが、寿和は底知れぬ人物だと判断して深く頭を下げた。それを見た稲垣も黙って頭を下げた
「これは上泉殿、ご無沙汰しております」
「妙な呼び出し方をして済まぬな。まずは席に掛けたまえ」
剛三の言葉で向かい合わせに座る寿和と稲垣。すると、剛三の隣に座る人物がＵＳＮＡ上院議員ことワイアット・カーティスという紹介

を受け、寿和と稲垣も自己紹介をしたところで食事会となった。
父親の代理などで経験のある寿和はともかく、稲垣は出てくる料理に目を白黒させる始末であり、普段見ることのない彼の表情に寿和だけでなく剛三やカーティスも笑みを漏らした。友好的に進んだ食事が終わったところで剛三が話を切り出した。
「さて、千葉寿和警視に稲垣矩朗(くろう)警部補。今回の要請は神楽坂家から千葉家へのものだが、お主も知っての通り神楽坂家現当主は千葉家当主に不快感を抱いておる。よって、上泉家が仲裁に入る形でお主等を表向き〝警察省の魔法師〟として呼び出させてもらった」
「その件につきましては、言い訳のしようもございません。父を強く止められなかった自分の不徳の致すところです」
「そう自身を卑下するでない。其方や修次殿も被害者だということは認識しておる」
剛三は寿和の謝罪を受けつつも「寿和や修次に非はない」と断言した上で、ワイアット・カーティス上院議員の護衛を帰国するまで引き受けて欲しいと願い出た。カーティス自身も護衛は連れているが、今回の訪日予定に含まれている西果新島の竣工記念パーティーでのトラブルを懸念してのものと剛三は説明した。
「何か起きると上泉殿はお考えなのですか？」
「起きるというか、もう起きておるがな。大亜連合からの脱走兵がテロを目論んでおる。その一環で孫が襲撃を受けたからの」
「……失礼かもしれませんが、敵が哀れにしか思えません」
寿和は悠元の実力をエリカ経由で知り得ている。現代魔法のみならず古式魔法も使いこなし、武術に至っては寿和の目の前にいる剛三の直弟子に近い立場で、新陰流剣武術師範の目録を有している。その意味も含んだ寿和の言葉に稲垣も苦笑を漏らし、カーティスは別の意味で納得するように軽く頷いていた。
「パーティー会場の中に工作員が紛れ込まないとも限らんし、狙われる可能性も決して低くはない。千葉殿と稲垣殿にはカーティス議員の護衛として会場入りしてもらう。当日は政治家や財界の人間もいるので、上手く対処してほしい」

単に寿和の魔法師としての実力だけでなく、千葉家の人間としての社交性も問われる任務。寿和一人にしなかったのは、今回の任務があくまでも警察省の魔法師としての職務という表向きの理由を強めるためと直ぐに理解した。

「(それに、下手に自分一人だと親父が首を突っ込んでくるだろうからな……)隣にいる部下共々しがない警察官の身分ですが、微力を尽くします」

「それは重畳」

寿和のこの決断が後の自身の未来を決めることになろうとは……当人ですら分からぬことだった。

任せっきりは面目が立たない

３月２８日。迎えたパーティー当日だが、脱走部隊の対処は主に風間らに加え陳祥山と呂剛虎の大亜連合軍がいる以上、問題は無いとみている。追加で招待リストに入った面々も確認して脅威になりそうなのはオーストラリア軍の二人の魔法師ぐらいだろう。

悠元が四葉家現当主に頼んだ仕事も今日が本番。とはいえ、こちらの戦力に南アメリカ連邦共和国軍のハンス・エルンスト大佐、そしてフランスからはエフィア・メンサーが戦力として加勢することになった。

片や戦略級魔法師、もう片方は戦術級クラスの実力者。その二人が加勢する以上は達也が風間たちに合流する必要も無くなった。それに、達也が四葉家次期当主として公の場に出る形となる為、無理に引っ張り出す必要も無いと風間は判断したようだ。

「悠君、こちらは準備が整いましたよ」

そう声を掛けたのは千姫だった。当初は四葉家から人を出す予定だったが、そこは千姫自ら顔を出すということで決着をつけた。沖縄本島から久米島へは小型のプライベートジェットで移動し、準備を整えてから会場入りする手筈となっていて、達也や深雪、水波とリーナには既に話している。

それと、既に久米島にいる雫やほのかにも連絡はしており、メイク関連については「神楽坂家で出す」ということに恐縮するほのかを雫が抑えるという一幕があったのはここだけの話。

「パーティーは夕方開始だけど、今日は長い夜になりそうですね。五十里家のご子息にはいつ話すの？」

「向こうに着いてから話します。直前に話してしまうのは気が引けますが」

今まで五十里に話さなかったのは、婚約者である花音から情報が洩れてパニックになるのを避けるためだった。流石に百家の人間である以上は信用したく思うが、五十里と花音では悠元から見た信用の度合いが違い過ぎる。そのため、出来る限り混乱は避けようと判断し

た。
　特にトラブルなど起きるはずもなく、無事に久米島空港へ到着したところで雫やほのかと合流した。
「おはよう、悠元。さくばんはおたのしみだったんでしょ」
「プレッシャー掛けないで、雫さんや」
「ふふ、冗談だよ」
　昨日は昨日で一人のんびり湯船に浸かっていたらバスタオルすら巻いていない深雪に襲われた。慌てて後を追って来た水波も深雪によって衣服を脱がせられた。その後に何が起きたのかというと、「何もなかった」なんてことは起きなかったことだけ述べておく。
　溺れるのは御免だが、それでも男として魅力的な女性に迫られると断りにくい……無論、ちゃんとした婚約関係を結んだ人間限定であり、それ以外の人間がやろうものなら反射的に気絶させて然るべきところに突き出すだけだが。
　そんなことを深雪に言ったら、「そんな風に割り切れるからこそ、私も含めて抱かれたいって思うのですよ」と返ってきた。転生前も含めての自分の精神年齢が妙に高いせいかもしれんが。
　ほのかが達也に対して積極的に会話しているタイミングで、深雪が悠元に話しかける。
「悠元さん、今後はどうしましょうか？」
「パーティーは立食形式と聞いてるからな。この島の名物で昼食でいいと思うが、雫はどうだ？」
「私もそれで考えてた。お店は調べてある」
　なお、雫はパーティーまで家族と別々に行動するつもりだと述べていた。今回は両親に加えて弟の航も来ているが、今回は家族水入らずで過ごす必要も無いと思っているらしい。その理由は親友であるほのかの存在が大きい。
「いつもは悠元が下調べを済ませるから」
「流石に何の情報もなしにパンドラの箱を開けるなんてことは避けたいだけだよ……何故抓る」
「出し抜かれてる側の気持ち」

「謝れば済むのか、それは……」
ほのかが雫と仲が良い事は近しい人なら知っているが、北山家との繋がりで誘拐される対象になりかねない。彼女を守るという意味では雫の気遣いも決して無駄ではない。その雫から背中を抓られて溜息を吐く悠元と、それを見てクスッと笑みを漏らした深雪がいた。
「今回のメイクはそっち持ちだし」
「それは俺じゃなくて母上に言ってくれ……何か言いたそうだな、雫」
「千姫さんから聞いたけど、メイクでも一流の女優を唸らせたんでしょ？」
「……爺さん、後で元継兄さんに電話して〆てもらうか」
雫が聞き及んだのは、フランスで剛三の知己である映画監督の好意で撮影現場に赴いた際、急遽休んでしまったメイクアップアーティストの代わりに主演女優のメイクを受け持ったのだが、偶々自分がメイクしたシーンが決め手となってその映画はタイトルをほぼ総なめし、主演女優賞を取った人物からお礼の手紙を貰った。
何でメイクが出来たのかと言えば、女系家族のきらいがあって女性と関わる機会が多かったため、手伝いの一環で産みの母の詩歩から化粧の技術を教わり、会得してしまっただけだ。前に詩奈のメイクを手伝った結果、母から「化粧一つでここまで変わらせるなんて、悠元はメイクアップアーティストにもなれるわね」と評されたことには、家族贔屓の類かと判断した。
正直、嫌な予感しかしないのでその道を進む気などないわけだが、先述した映画のエンディングロールに『ユーノ・ロングフィールド』と明らかに長野佑都を捩った名前を見た瞬間、表情が思わず凍り付いた。
何故知っているのかというと、偶々雫やほのかの誘いでその映画を見ることになったためだ。正直、隣の席にいた雫にその時の顔を見られなかったのが幸いとしか言いようがなかった。
だが、そんな話は当事者側の剛三以外に知らせてはいないはずだが、雫は千姫から聞いたと述べた。そうなると、剛三が千姫に話したラインしか思い浮かばない。当然、こんな話をすれば深雪が食いつく

わけで……目をキラキラさせて悠元のほうを見ていた。
「でしたら、深雪を是非メイクアップしてください」
「いや、本職じゃない人間がやって深雪の美貌を損ねたくないんだが……雫さん？　一体何を懇願するような目線なのですか？」
「悠元なら安心できるから」
「……はぁ（母上が仕組んだな、これは）」
結局、婚約者二人の説得は出来ないと諦めてメイクアップを引き受けることになった。千姫にそのことを報告したら、「悠君も婚約者には甘いんですね」と返された。一先ず最善は尽くすが、その後で本職の人間に確認してほしいと頼み込むことで話は付けた。
なお、達也にそのことを報告したら肩に手を置いて「いつも苦労を掛ける」と労われた。
◇　◇　◇
深雪と雫のメイクに関しては雫たちが泊まっているホテルで行うことになり、悠元は当時の感覚を思い起こす様にメイクを仕上げていく。
汗の一つも掻きそうなぐらいに集中したのは天神魔法でも高難度に位置する天神喚起の制御訓練以来で、一流のメイクアップアーティストでも1時間以上は掛かるであろう作業なのに、悠元はそれを３０分で仕上げて見せた。一人当たり１５分しか掛かっていない計算となる。
その手際には千姫が呼び寄せた本職の人間も「勉強になる」と言わしめたほどで、何故かその技術を学びたいと言われたときは正直冷や汗が流れた。
「……お父さんに請求させるね」
「もう好きにしてくれ」
まさか家族相手に磨いていた技術が市井に通用するだなんて思ってもいなかったし、あの時は元々「自然なメイク」という無難な注文だった……最近、普通の基準がどうにもおかしくなっている気はするが、気に留めるのを止めた。
深雪は無論のこと、雫も「普段以上に納得出来る出来」と評した上

で潮に悠元への報酬を支払わせると述べたため、悠元は無理に止めるのを諦めた。
　ちなみにだが、メイクは悠元と達也も対象に含まれていた。神楽坂家現当主と四葉の次期当主が揃って公の場に姿を見せることに加え、悠元の隣に立つであろう深雪に見劣りしない身だしなみは必要という千姫の説得によるものだった。無論、悠元ではなく千姫が呼んだ本職にお任せすることになったわけだが。
「……なあ、深雪。俺の目の前にいるイケメンは一体何者なんだろう」
「本当に疑問ですね。いつもこうやって気遣っていただければ、私の気苦労も減りますのに」
「二人とも……」
　本人曰く〝平凡〟と述べていた達也のしっかりと整った姿に悠元と深雪が揃って首を傾げた。大まかな言葉で真意を汲み取って会話している二人に対し、メイクを終えた達也は盛大な溜息を吐いた。
　なお、ほのかとリーナがそのカッコよさに顔を赤面して「少し風にあたってくる」と言い残してベランダに消えたのはここだけの話。
◇　◇　◇
　西果新島は井桁に組んだ海底資源採掘施設を最下部に持ち、その上にフロートを兼ねる１２本と鉱石の搬出路を兼ねる４本、計１６本の円柱が建てられ、円柱の上に正八角形の人工地盤を載せた半潜水型メガフロート。人工地盤は五層構造の居住区画になっており、その中には来客者用の高級ホテルも作られている。
　今日のパーティーは人工地盤地下第一層にあるそのホテルの宴会場で行われる。開会３０分前になると、宴会場の前のロビーには続々と招待客が集まっていた。
「壬生さん、緊張しているんですか？」
「緊張というか、場違い感がどうにも拭えないのよね」
「大丈夫ですよ、よく似合ってます」
　原作ならば五十里家の招待で友人としての参加だったわけだが、そこも少し変化している。五十里家の代表である啓は無論だし、その婚約者である花音は問題なく、友人として服部とあずさ、そして沢木が

対象に含まれている。
　変化したのは桐原と紗耶香で、これには空母「ずいほう」の就役が大きく関与している。
　ただでさえ人員の要る空母を就役させるため、既に退役した海軍軍人に声を掛けて経験の浅い若手将校や士官の教育係も兼ねて現役復帰させた。その中には桐原の父親も含まれており、今回の一件は桐原の父親の頼みで桐原が出ることになり、紗耶香はその婚約者として出ることになった。
「大丈夫よ、紗耶香。そのうち慣れるわ」
「そうやって自信満々に言われると妙に説得力が増すんだけど……」
　無論、それを聞かされた桐原と紗耶香は驚いていたが、桐原家と壬生家で既に話が付いているという事実を知り、最早退路が無いと知る羽目になった。婚約している身としての花音の言葉に妙な説得力がある、と紗耶香は素直に口に出していた。
　ロビーには二十代前半の青年や、紗耶香たちと同じ歳ぐらいの少女の姿も見られる。意外にも若い人の参加が見られるため、別に紗耶香たちがいても何ら不思議ではなかった。
「寧ろ、あーちゃんだけでいさせたらかわいそうじゃない。私達が傍にいてあげないと」
「千代田さん!?」
「……うん、そうね。花音の言い分も尤もね」
「壬生さんまで!?」
　いくら着飾っても、あずさが年相応に見られる可能性は極めて低い。その意図を汲んだ花音の発言に紗耶香は自身の場違い感を敢えて呑み込み、あずさは少しショックを受けていた。困り果てたあずさが救いを求めようと階段に目線を向けると、顔見知りが階段を降りてくるのが目に入った。
　階段から降りてくる側もあずさ達を視認したのか、他の招待客に邪魔にならない程度に少し足早に歩み寄ってきた。
「中条先輩に千代田先輩、壬生先輩もお早いですね」
　ほのかはそう述べ、雫も小さくお辞儀した。すると、ＯＧの視線が

雫に注がれる形となった。その原因が理解できてしまったのか雫は苦笑を滲ませていて、あまり話題に触れてほしくないと判断した花音は話題を切り替えるように話しかけた。
「ところで、二人だけで来たの？」
花音たちのグループは五十里家と桐原家によるものだが、雫たちの場合は雫の両親が招待客であり、雫とほのかはその付き添いで参加していることを知っていた。本来なら一緒に来ていないと会場入りすらできない筈だった。
その疑問には雫が視線を両親らの方に向けつつ問いに答えた。
「いえ、あちらに」
その視線の先では、北山潮・紅音夫妻と雫の弟である航が花音も良く知る政治家から挨拶を受けていた。
「すごいですねえ」
「あの人、結構偉い政治家よね？　その人が態々挨拶に来るだなんて」
「偉いというか、大臣経験者だよ。あの方は国防族の有力者だから、余計に気を遣うんだよ」
あずさが感嘆を漏らし、花音は呆れるように呟いたところで五十里が小声で補足した。
雫の実家である北山家は、直接兵器を取り扱ったりしている企業はない。だが、銃弾から戦闘機に至るまで、兵器の製造に必要な中間財では高いシェアを有している。なまじ軍事分野が主業態ではない為、北山潮の機嫌を損ねれば中間財の供給先が民生用や輸出に大きくシフトして国防軍への供給が滞る恐れがあった。
その意味で、五十里の述べた「気を遣う」という表現はマイルドに抑えられているのは花音たちですら理解できないだろう。
「丁度良いから、僕たちも挨拶に行くよ」
「どちらに？」
「無論、両方にだよ」
別にパーティー中であれば、雫を介して挨拶に行くことはできる。だが、政治家と少ない人数で会うよりは後輩の家族に会うついでにしようとした五十里の考えに気付くことなく、花音は言われるがままに

付いていった。
「……五十里先輩は苦労しそうだね」
「雫？　それはどういう意味？」
「色んな意味で」
　雫からすれば、大臣クラスと顔を合わせることは家柄上仕方のない事だ。尤も、雫が嫁ごうとしている家はそれ以上の権力者たちですらひれ伏す勢いの名家。その苦労に比べれば、百家本流の一つに過ぎない五十里家が四苦八苦するのは目に見えている。
「ところで、司波君や悠元君はまだ来られないのですか？」
「別のヘリで来る、とは聞いてます」
　最初は一緒のヘリでどうかと思ったが、人数の関係上限界があったために断念した。ほのかは残念がっていたが、こればかりは仕方がなかったためだ。

◇　◇　◇

　達也や悠元たちを乗せたヘリが到着したのは、雫たちが会場前のロビーであずさ達と合流した直後ぐらいであった。だが、そのまま会場に向かうのではなくＶＩＰクラスの招待客が使えるホテルのエグゼクティブルームに通された。
　何せ、神坂グループ会長に神楽坂家現当主、それに四葉家次期当主となればホテル側も神経質になりかねない。急いで会場入りしなかったのは悠元の婚約者とはいえ四葉のプリンセスという肩書がある深雪で要らぬ混乱を招く必要も無いと思ったからだ。
　すると、達也は徐に立ち上がって「コンビニに行く」と言い出した。そこで同行を申し出たのはドレスを着飾った亜夜子で、二人の身長差なら兄妹と誤解されると踏んでのものだった。
「佳奈姉さんはともかく、リーナもよかったのか？」
「何か妙なトラブルの予感を感じたのよ……セリアのお陰もあるのでしょうけど」
　別にリーナも達也が自ら進んでトラブルを起こすとは思っていない。何かしらを見ようとして達也が動いたような気がしたため、亜夜子が同行した方が達也も動きやすいと踏んでのものだった。

「それに、これからパーティーでカーティス上院議員と出会うんだし、体を休ませておきたいのよ」
「あら、リーナでも気苦労を抱えることがあるのね」
「……いつまでもセリアに任せっきりは出来ないのよ」
リーナの気苦労がＵＳＮＡだけで済めばいいのだが、このパーティーには国内だけでなく国外の招待客も含まれている。その分の気苦労を背負うことになろうとは、その時のリーナには知る由もなかった。

気苦労の板挟み

パーティーに入るのは会場が開いてからでも遅くはない、ということで悠元はのんびり端末に視線を落していた。すると、コンビニエンスストアへ行ってきた達也と亜夜子が何事も無く戻って来た。流石に何も買わないのはマズいと思ったのか、達也の手にはミネラルウォーターのペットボトルが握られていた。

「おかえり、達也。お目当ての探し物は見つかったか？」

「ああ。５分程別室にいるから、時間になったら声を掛けてくれ」

「了解。というわけで、リーナに任せた」

「ワタシなの!?　まあ、いいけど」

達也が別室に引っ込んだということは、大方ジャスミン・ウィリアムズとジェームズ・Ｊ・ジョンソンに仕掛けでも施すのだろう。達也からは前もってその魔法を仕掛けることを聞いているため、悠元も異存はなかった。

時間が来るまで悠元は端末に目線を落としつつ『天神の眼（オシリス・サイト）』で西果新島全体を含めた周辺海域の状況を把握する。

（残った連中の気配は……久米島の西を北上中か。大方〝人間魚雷〟でも仕掛ける気か）

正確には魚雷型のカプセルを魔法で動かして西果新島に接近して破壊工作を試みようというのだろう。ただ、その動き自体は全て読まれており、国防軍と大亜連合軍が網を張っている。その先鋒に立つのは『人喰い虎』呂剛虎。

話を聞くに、平河千秋の件で修次に怪我を負わせたが、佳奈に『鋼気功（ガンシゴン）』を無力化された挙句、新陰流剣武術奥義が一つ『玄武重貫掌（げんぶじゅうかんしょう）』をもろに食らっても尚逃げ延びた。

関本勲の件では達也に魔法を無力化された挙句、摩利と美嘉に叩きのめされた。

横浜では原作よりも強化されたレオとエリカに『白虎甲（バイフウジア）』を破られた挙句敗北を喫した。

明らかに特殊部隊のエースとしての面子がズタボロになる戦績だ

が、これは決して呂剛虎が弱い訳ではない。悠元という存在によって大幅に強化された結果、ここまで悲惨なことになっているだけだ。
いくら人外じみた強さでも、真の人外には勝てないという証左だろう……自分のことを言っているような気がするのは納得しがたいが。
そのことは心の片隅に寄せた上で悠元はジャスミン・ウィリアムズとジェームズ・J・ジョンソンの現在地点を割り出した。本来なら鍵がかかっている筈の作業員用階段にいるのが確認できた。
(監視カメラで見ている筈の警備員が近付かないのを見るに、監視カメラに細工でもしたか……達也の仕込みを待ってから、こちらも仕込んでおきますかね)
達也が二人に仕掛けたのを確認したところで、悠元も仕掛けを施した。それを終えると、リーナが達也に寄り添う形で近付いてきた。それを見た深雪が悠元に声を掛けた。
「悠元さん、そろそろ参りませんか?」
「そうだな、そうしようか」
いつもの髪飾りを外して髪をアップにしたことで露わになった深雪の首には、先日悠元が贈った真珠のネックレスが眩い輝きを放っていた。

◇　◇　◇

そこから少し時間は遡る。
コンビニエンスストアで達也たちと遭遇した二人――――ジャスミン・ウィリアムズとジェームズ・J・ジョンソンは足早に作業者用階段へと身を滑り込ませた。そこで安堵の息を吐くが、それも束の間のものに過ぎなかった。
「ジャズ」
「何だ」
「気付かれたと思うか?」
「分からない……」
二人としても、四葉家次期当主である司波達也の情報は調べられる範囲で調べていた。だが、『アンタッチャブル』と呼ばれた四葉家の関係者だけあって、得意な魔法などの情報は殆ど掴めなかった。

マクロードからの情報でも、達也に関する情報は四葉の関係者ということまでであった。
相手の実力が分からない作戦は無論これが初めてではない。ロクに情報が手に入らない状況で暗闘を繰り広げたことも少なくない。
だが、今回の任務は今までの状況すらも軽く超えているようなもの。それこそ、二人が数年前に請け負って失敗した〝アジア系男性と少年の捕縛任務〟に匹敵すると、ジャスミンもジェームズも感じてはいた。
「追いかけてきた形跡はなかった。魔法を使われた様子もない……ジェイ、何もされなかったよな？」
「ジャズ、どうしたんだ？」
ジャスミンがジェームズを階級ではなく愛称で呼ぶ――それは、彼女が動揺していることを示すサインであった。ジャスミンはジェームズの1歳年下でしかない。だが、今の彼女の様子は外見の年相応のような素振りを見せていた。
「分からない……。確かに魔法の兆候は感じなかった。だが、何故なんだ？　何故こんなにも不安を覚える？　まるで、知らぬ内に絞首台のロープを括りつけられているような気分だ。こんなのは、あの任務以来だ」
オーストラリア軍上層部の命令でジャスミンとジェームズが請け負った任務。オーストラリア国内にいる外国人を拉致すること自体に問題はなく、最悪ジャスミンの戦略級魔法『オゾンサークル』で無力化すればいい。任務を受けた当初は二人ともそう楽観視していた。
だが、その二人を視界で捉えても、次の瞬間には消えているのを幾度となく経験し、ジャスミンが已む無く発動した『オゾンサークル』は瞬く間に無力化された。その際、彼女は額に銃を押し付けられているような恐怖を覚えた。
「ジャズ、落ち着け。少なくとも奴は指一本触れていない。それは保証する……ジャズ、今回は止めないか？」
ジャスミンはジェームズが述べた言葉を理解するのに数秒を有した。それは、ここで工作活動を断念して撤退するというものだった。

「……馬鹿げたことを言うな。既に決行命令が下りているんだぞ」
「だからこそだ。今回の任務はヤバい。要注意人物と目される神楽坂家の当主――――数年前に俺たちが誘拐に失敗した片割れのガキだ」
ジェームズが告げた新たな事実にジャスミンは絶句した。
あの四葉の魔法師だけでもこんな状況なのに、かつて失敗した任務の対象がこのパーティーに、しかも四葉家に次ぐ要注意人物としてダニエル・リウが挙げていた人物と同一という事実。
「何故そのことを……いや、今責めるべきことではないな。既に命令が出ているのに、今更引くわけにもいかない」
「ここにきているのは俺たちだけだ。となれば、現地での指揮命令権を有しているのも俺たちに他ならない。深刻な状況の悪化が予測される場合、独自の判断で撤退したとしても問題はない筈だ」
ジェームズの言い分は至極真っ当な正論。相手の一人が得体の知れない実力を有していることに加え、実力の掴めない四葉の魔法師がいるとなれば、この任務自体が成功する確率は極めて低い。
「……数年前の件は、あれが少年が引き起こしたとは断言できないだろう。それに、まだ具体的な事態は発生していない」
「それはそうだが……済まない、さっきのは聞かなかったことにしてくれ」
「そうさせてもらう」
ジャスミンとて、ジェームズの言い分や心情が理解できなかったわけではない。彼女自身も彼が発した驚愕的な情報で工作活動の中止をすべきか迷った。
だが、ジャスミンもこんな身なりなれど一人の魔法師としての面子があった。自分の半分程度しか生きていない子ども相手に負けっぱなしでいられるほど、彼女の精神は大人ではなかった。
◇　◇　◇
西果新島の竣工記念パーティーが始まった。
会場の扉が開き、ロビーでたむろしていた人々は次々と会場入りする。こういうパーティーの場合、上位者に先を譲る考え方か、大物は後から入場する考え方の二通りがあるが、今回は後者の考え方が優先

された形となった。
　特に今回は国内のみならず国外からも招待客を招いている為、そうなったとしても何ら不思議ではなかった。その一人とも言える悠元は背後から声を掛けられ、視線を後ろに向けた。特に警戒しなかったのは、その声と気配が見知っていたからだ。
「長野殿。いえ、今は神楽坂殿でしたな。お久しぶりです」
「ブレスティーロ大統領閣下もご健勝でなによりです」
　ディアッカ・ブレスティーロ大統領と夫人、そして着飾った１０歳前後の少女がそこにいた。大統領夫妻は未だ子どもがいない身と聞いていたし、彼女の風貌は東欧系の印象を滲ませていた。
　『天神の眼（オシリス・サイト）』で彼女の情報を覗くと、『十三使徒』レオニード・コントラチェンコの血縁者という事実を知ることになり、恐らく大統領の護衛に来ているハンス・エルンスト大佐の関係者だと判断して、悠元は隣にいる深雪を紹介した。
「閣下、こちらは私の婚約者である司波深雪嬢です」
「お初にお目にかかります、大統領閣下。十師族・四葉家当主の姪、司波深雪と申します」
「これはご丁寧に。南アメリカ連邦共和国大統領、ディアッカ・ブレスティーロという。かの『アンタッチャブル』の関係者と出会えて光栄です」
　ディアッカは丁重に挨拶をした上でその近くにいた達也とリーナにも挨拶をした。この光景は当然他の招待客にも目撃される形だが、彼らが躊躇ったのは更に近づいてくる人物が要因だった。
「ブレスティーロ大統領閣下、久方ぶりですな」
「おや、これはセナード大統領閣下。閣下も態々お越しになったのですな？」
「無論ですとも。そして、神楽坂殿もお久しぶりです。４年前の件では剛三殿共々感謝しております」
「いえ、自分も祖父の癇癪に巻き込まれただけですので、お気になさらず」
　フランスの国家元首、ヴィクター・セナード大統領は夫人と共に悠

元と握手を交わす。四葉家の関係者に直接会えば下手に邪推されると考えたのか、知己である悠元を介する形で深雪や達也と知り合う形となった。
　挨拶もそこそこにディアッカとヴィクターはそれぞれ夫人を伴って先に会場へ向かった。ただ、挨拶がこれだけで済むはずもない。それは言うまでもなく悠元の祖父である三矢舞元に加え、先日記憶を取り戻したラウラ・カーティスが姿を見せたのだった。
「はっはっは、剛三や千姫に負けじと各国の元首に顔を覚えられるとはな」
「祖父さん、笑い事じゃないんだから……どうやら、向こうもお早い到着のようだ」
「あっ……」
　悠元が目線を向けた先には、老年ながらもしっかりとした体格を有する男性が護衛を伴って近づいてきた。ラウラはその人物を見てすぐに気付き、その人物もラウラの姿を見て少し笑みを見せていた。ＵＳＮＡ・バージニア州上院議員ワイアット・カーティス。ＵＳＮＡの政界では陰の実力者とも言われる有力者。
「大叔父様！」
「ラウラ、君が生きてくれていてよかった……三矢舞元殿とお見受けする。九島将軍から事情は聞いていたが、ラウラを匿ってくださり感謝している」
「これはこれは、既に第一線から退いた身にそのような言葉など勿体ない。ただ見過ごせなかっただけのことですから」
　そんな感動の一幕が繰り広げられている中、悠元はカーティスの護衛として付いて来ることになった二人の男性に視線を移した。言うまでもなく、寿和と稲垣の二人であった。
「お久しぶりです、寿和さんに稲垣さん。今回は色々申し訳ありません」
「気にしないでくれ、悠元君。元はと言えばうちの親父の責任なんだ。エリカが怒って家に帰らないのも無理は無いと思ってる」
　エリカの場合、最悪母親が絶縁状を叩きつけて〝鹿取〟の姓を名乗

ることも考慮に入れているし、本人はレオさえ納得すれば愛人の立場でも構わないと豪語している。
「警視、そこまで率直に仰るのは……」
「稲垣君、これは警察官としての問題でもあると同時に千葉家の問題なんだ。七草家のように勘気を被っていないだけ〝まだマシ〟に過ぎない」
　前者のことは先日の顧傑の一件が大きく関与しており、本来なら被害者である寿和もエリカの件で責任を被るべき立場になっていた。それを承知で要人の護衛に就かせてくれたのだから、寿和として悠元ひいては神楽坂家に敵対しない意思を固めている。
「西城君のことも内密にエリカから事情を聞いたが、よもや祖父世代で交流があったのは驚いたよ」
「何にせよ、暫くは家を通さずに警察省の人間として依頼します。それに、寿和さんもいい加減身を固めろと圧を掛けられるお立場でしょうから」
「……稲垣君ならばともかく、君に言われると立つ瀬がないね」
　挨拶もそこそこに入っていく招待客たち。特に今回は国外のＶＩＰクラスがいるということもあって、他の参加者たちはこぞって挨拶をしているのがロビーからでも見て取れた。国家元首クラスとの挨拶もあって最後のほうに入る形となった悠元たちだが、悠元と深雪の存在感に大勢の人間が見とれていた。
　悠元と深雪が並んで入り、水波がそのエスコートを担い、続いて達也とリーナが会場入りして、その後ろには千姫が構えるという三段構え。会場の静寂が消えたのは、そこに近付いた人物たち――――北山潮・紅音夫妻と航の三人が悠元と深雪に近付いたことでざわめきと変わった。
「お久しぶりですな、神楽坂殿。改めて今後も宜しくお願いいたします」
「こちらこそ、北山さん。今後も良きお付き合いをしたく存じます」
　雫の絡みでそこまで久しぶりというわけではないが、プライベートの部分に態々触れる必要も無いと判断して社交的な挨拶と相成った。

神楽坂家が神坂グループの経営母体という事実は政財界のトップクラスには広く知られている為、当主となった悠元が次期グループ総帥が固いという事実も周囲の認識。水面下で進められている数々のプロジェクトも彼の考案によるもので、将来世に出る『恒星炉』は彼の大きな功績として歴史に刻まれることが確定的だ。

年齢では潮が上だが、立場上は既に悠元が上に立っている。千姫から四大老の座を受け継ぐことを鑑みれば、潮が恭しく礼をするのも、悠元が敬称を〝さん〟付けにしたのも立場の違いを市井にも認識させるためでもあった。

「随分とご立派になられましたね」

「恐縮です。先日17歳になったばかりの若輩者である事実は変わりませんが、宜しくお願いいたします」

潮に続く形で紅音がそう挨拶をしたのは、達也と深雪が十師族・四葉家の人間であったということに対する皮肉だろう。別に騙したわけではなく、達也は事情故に四葉家では疎まれるような扱いを受けていただけに過ぎない。当人も安全の観点で妥当な判断だと納得しているので、こちらから何か言うつもりもなかった。

彼らとて四葉の復讐劇の原因を多かれ少なかれ知っているし、力と言うものが人間を惑わせる劇薬に成り得ることは一番理解していると思っている。それでも文句の一つぐらいは言いたくなる紅音の心情も理解はできる。

悠元に続く形で水波、達也とリーナも潮たちと挨拶を交わす。そんな様子を一高生のOB・OG組、雫やほのかたちが見ていた。

「……ああいうのを見てると、吉田君に少し同情しちゃうわね」

そう零したのは風紀委員長を経験していた花音。花音が思い浮かべたのは一つ上の学年である真由美・克人・摩利で、十師族の直系ではないにせよ摩利の胆力に正直勝てないと花音は正直感じていた。

十師族直系の血族である深雪と悠元がそれぞれ生徒会長と部活連会頭になっており、現風紀委員長の幹比古は正直肩身が狭い思いをしているのかもしれない、と心なしか思ってしまったのだ。

軍人としては一流でも、指揮官としては三流以下

主催者が登壇し、それほど長くない挨拶の後で十人程度が祝辞の言葉を述べる。その中には潮がいて、雫は少し居心地が悪そうだった。ここまでは原作でもあったことだが、この世界では千姫が〝神坂グループ会長〟として挨拶をした。

見た目が２０歳代のため、参加者の中には「会長の代理ではないか」と訝しむ気持ちを抱く者もいただろう。だが、政財界の人間はそれが神楽坂千姫本人であることを肌で感じ取っていた。

「悠元は大丈夫なの？」

「今更だろうと思ってる」

『元老院』の四大老は本来表舞台で姿を見せないことが原則となっているが、千姫と剛三はその原則を根本から否定する動きを見せている。その理由は本人たちの気質によるものが大きい。剛三の場合は新陰流剣武術があるので言わずもがなだし、千姫の場合は古式の術者を技術指導する立場にある。

表立って関わろうとしない東道青波や樫和主鷹からすれば〝異端者〟とみることができるが、おいそれと家督を譲れない立場にいるからこそであり、千姫と剛三からすれば他の四大老を〝怠け者〟と評するだろう。

大体、四葉家と七草家のように現代魔法の家でも軋轢が生じているのに、古式魔法の家同士で争いがないとは言い切れない。『伝統派』の場合は十分な予測に基づく対価を政府や「九」の家が渋った結果、各流派の確執を超えた一大勢力と化した。共通の敵が生じると敵同士で手を組むという行為は昔からあることなので、別に何ら驚くことではない。

「雫は気恥ずかしそうに見えるが……抓らないでくれ」

「そうやって振舞える悠元がズルい」

「文句は別にいいが、痛みを伴うのは勘弁してくれ」

別に本気で苛立っているわけではないことは分かっているが……悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』で西果新島の周辺海域に視野を広げる。すると、久

米島から西に約６０キロメートルのところで漁船――――大亜連合の脱走兵らが調達した工作船が北西に進んでいた。
　数年前までは、この海域で大亜連合による違法操業が後を絶たず、日本の巡視船が追い回した挙句、両国の戦闘艦が出てきて火器管制レーダーを浴びせ合うというチキンレースを呈していた……正直な話、ロックオンした時点で宣戦布告しているようなものでしかない。
　５年前の沖縄海戦で鳴りを潜め、一昨年の横浜事変後は大亜連合側の船舶も表向きは紳士的に海上を航行している。どうせ忘れたころに中間線の話をぶり返して違法操業や領海主張をするのは目に見えているわけだが。
　そして、その工作船から5本の魚雷型カプセルが西果新島方面に向けて射出されたのを確認すると、カプセルの速度から到達予想時刻を瞬時に算出して真田と響子にメールで送った。傍受される可能性はあるが、既に始まってしまったものをこの会場にいるオーストラリア軍の魔法師が取り消すことなど出来ない。
　すると、達也が五十里を伴ってその場を離れていった。恐らく五十里が狙われていることを伝えるためのものだろう。悠元はトイレに行くと言ってその場を離れた。悠元が向かった先には、一見すると「有名会社の社長秘書」と言った感じの控えめなドレスを着た人物がいた。
「あら、悠元君。深雪さんや北山さんがやきもちを焼くわよ？」
「流石に婚約者がいる女性を奪う趣味なんてありませんよ。深雪と雫には事前に話していますので」
　防衛側の戦力が充実している以上、悠元のみならず達也が出る幕もない。そもそも、達也に関しては使える魔法がかなり限定されるために大亜連合側への秘匿が厳しくなる意味もある。その代わりを担うのがハンス・エルンストとエフィア・メンサーなので、問題は無いとみている。
「彼女が前線に立つことを止めはしないのね」
「戦場に男尊女卑なんて考え方を持ったら、瞬く間に死にますよ。大体、昨夏はその女性の魔法師に襲われましたので」

「……手厳しいのね」
　自分でそうあると決めたのならば悠元も口煩く言おうとは思わないし、既に婚約者の中には元軍人もいる。無理や無茶はして欲しくないが、今回の作戦の戦力差で考えれば敵の分が悪すぎる。あわよくば呂剛虎が集中放火されて戦力を削れればいいが、そううまくいかないだろうと踏んでいる。
　言うまでもないが、悠元が音声改竄の結界で内容を誤魔化している為、周囲から見ても知り合い同士で談笑しているようにしか見えない。
「……中尉、多分うちの先輩たちが察してこちらに加勢するかもしれませんので、先輩の一人に事情を話して試作の魔法装備を貸すことにしました」
「中佐は止めないでしょうね。寧ろ、それすら織り込んでいるでしょう。会場のほうは悠元君たちに任せるわ」
「分かりました」
　原作だとパーティー用のスーツ姿だったが、久米島での一件を鑑みれば首を突っ込んでくる可能性が高かったため、悠元は表向き『知り合いから無理矢理持たされた魔法装備があるので、それを使ってください』という旨のメールを服部に送信している。水上バイクの起動キーもこっそり渡している。
　沢木と桐原の性格は悠元も良く知っている為、まだ制御できる人間として服部に任せた。いや、この場合は〝対応を投げた〟と表現すべきだろうが。
「悠元君なら止められそうな気はするけど」
「昨年の九校戦のシールド・ダウンは見ましたよね？　あそこから更に動きがバグったので」
「……悠元君に魔法を学ぶと、現代魔法だけでなく古式魔法ですらも御飯事（おままごと）になるのかしら」
　沢木の場合は速力が増して、由夢やエリカに食い下がるぐらいヤバくなりつつある。桐原の場合は元々剣術を習っているわけだが、『高周波ブレード』を乗せた衝撃波を放てるようになった。服部の場合は

というと、汎用性の高い魔法の使い方をしているところに躊躇いが無くなる。
それが一体どういう結果に繋がるのかというと……敵があまりにも惨めに思えてくる結果しか想像できないのであった。
「止められないか」と聞かれると、「止めることはできる」がやりたくないのが本音だ。変にストレスを抱えさせるよりも適度に発散した方が魔法の技術を磨く上でより効率的という結果は、上泉剛三という完成形がいることで立証されている。
◇　◇　◇
南アメリカ連邦共和国軍の切り札、『魔王の帰還（リターン・オブ・ルーデル）』と謳われたハンス・エルンスト大佐は準備を整えていた。水上バイクの力は借りずに飛行魔法の応用で水面スレスレをホバー飛行することで今回の任務を進める腹積もりだった。
そんな中、真紅の髪を持つ少女から声を掛けられた。
「ハンス・エルンスト大佐殿ですね？」
「ああ、いかにも自分がハンス・エルンスト大佐だが……君がフランスの援軍と見ていいのかな？」
「はい。エフィア・メンサー少尉であります。本作戦の指揮官殿より大佐殿の補佐を任されました」
ハンスの実績は決して表に出せない為、補佐役を付けるのが妥当という判断は間違っていないのだろう。元々ハンスの役割は最終防衛ラインとなるフロート部の防衛になっているし、最前線はあの『人喰い虎』が務める。
その呂剛虎は魔法具を纏って水中に潜った。潜った方向から感じる「波動」は無論ハンスも読み取っており、それに向かってくる物体の存在も把握している。そして呂剛虎が物体を蹴り上げた――――海上に飛び出してくるのは魚雷型カプセルで、それに搭乗していた脱走兵らは慌ててカプセルの外に出た。
「特攻、ですか？」
「……全員カプセルの外に出ているのを見ると、囮ではないな」
呂剛虎のみならず、日本の国防軍もいる以上は彼らに抜け出せる隙

は見られない。海上に出てきた呂剛虎と脱走兵の一人が戦闘になっているのを横目に、ハンスはふと海上に上がってくる敵兵に目線を向けた。
　すると、その敵兵が目にも止まらぬスピードで吹き飛ばされ、まるで石で水切りでもするかの如く脱走兵が盛大に水しぶきを上げていく。そして、その人物は水上に着地していた。
「君は確か……一高ＯＢの沢木君だったか？」
「ハンスさんですか？　ただ者ではないと思っていましたが」
「何をしてるんだ、君は……いや、君らか」
　本来魔法師と言えども民間人が立ち入っていい場所ではない。ハンスはこの場に沢木だけいれば説得も容易いと思ったが、沢木のみならず桐原や服部もいることにすぐ気付いた。桐原は杖術用の杖かと思えば、木刀に見せかけた武装一体型ＣＡＤであり、服部は水上バイクを操りつつ魔法で援護している。
「……大佐殿」
「どうせ風間中佐に具申してもはぐらかされるのがオチだ。我々の手の内を明かさずに済むと思えば、協力してもらう方がいいだろう」
『ほう、ハンスにしては柔軟な判断だな』
（連中は、お忍びとはいえ大亜連合軍の兵士を打ち倒してるからな）
　敵の援軍も見られない以上、こちらの主な役割であるフロートの防衛に専念できる。物は言いようだし、国防軍としても未来の戦力に成り得そうな人材を見れるというメリットもある。ルーデルの言葉に対して尤もらしい答えを返したが、ハンスの本音は「こんなことでストレスを溜めたくない」という自身の我儘に集約された結果だった。
　確認の意味も込めて風間に連絡したが、風間も『偶発的に参戦してしまった民間人に対する権限は持ち合わせていないが、協力的な対応をしている以上はこちらが高圧的に出れない』と公的に戦闘行為に至っていない以上は仕方がないという見解に至り、これを聞いたハンスは深い溜息を吐いた。
◇　◇　◇
　悠元が響子との話を終えて戻ってくると、そこにいたはずの花音と

紗耶香、あずさがいないことに気付く。それだけならばまだしも、深雪と水波、更にはリーナもその場に居らず、残っていたのは五十里と達也、雫とほのか、それとウェイターに扮している南風原少尉（顧傑の一件で応援に来ており、その実績で昇進した）だけだった。
「神楽坂君、話は終わったのかな？」
「ええ、まあ……女性陣はお花摘みにですか？」
「うん、そうだね」
　七人もいるだけでなく、ただでさえ実力のある深雪や雫までついて来るとなれば、流石にジャスミンやジェームズも無茶はしないだろうと思うが……すると、達也が突然溜息を吐いた。
「おや、達也の保護者としての勘が働いたのか？」
「そう言うのは止めてくれ……ここは俺が引き受ける」
「了解。ほのかと雫は家族のこともあるし、ここにいてくれ」
「ん、任された」
　五十里や南風原からすれば理解できない部分もあるだろうが、達也の言葉を聞いて判断した悠元は『天神の眼（オシリス・サイト）』で深雪の現在位置を瞬時に割り出し、認識阻害をフル活用して現場に急行した。
「……ん？」
　パウダールームを出たところにいる形だが、その現場の光景に悠元は首を傾げた。
　トラブルの犯人と思しきジャスミンとジェームズはおらず、花音は床にへたりこんでおり、紗耶香とあずさがその様子を見ている。
　深雪と水波、リーナは特に手を出さなかった形だが、その理由は彼らの視線のさらに奥にいる二人――――千葉寿和とラウラ・カーティスであった。寿和がラウラをお姫様抱っこしているのを見るに、逃走しようとした二人と鉢合わせたため、慌てて寿和がラウラを担いで回避したとみるべきだ。
「あ、悠元さん。すみません、逃がしてしまいました」
「まあ、無関係の人間がいた以上、仕方がないだろう。水波とリーナも無事そうだな」
「はい、特に怪我などはありません」

「そうね。捕らえられなかったのが悔しいけど」
深雪もリーナも主に得意とするのは範囲攻撃型の魔法。なので、無関係の人間だけピンポイントに弾くという技巧は難しいのだろう。
状況を話すと、先に出た花音と紗耶香、あずさがジャスミンと遭遇した。その際、ジャスミンに不用心に近付いた花音がジャスミンに取り押さえられた……立派な脅迫・傷害の未遂ながら現行犯である。
深雪がピンポイントでジャスミンだけ凍結しようとしたところ、出力を誤ってナイフだけが粉砕したらしい。曰く「悠元さんのように敵意だけを取り除こうとしたのですが」という言葉だけを見れば、深雪の実績は賞賛に値すると思う。
「……予定通り、連中は作業員用通路に逃げていったか。さて、深雪に水波、リーナも行こうか」
「行くってどこに？　連中を追いかけるにしても、どこに逃げたのか分かるの？」
「逃げた先というか……〝罠〟と言えるかな」
悠元の言葉に深雪と水波、リーナは揃って首をかしげる。
事情はどうあれ、民間人にこのような仕打ちをした以上はオーストラリアの連中をタダで帰す気など無い。元々失敗前提で組まれたこの作戦の事実を連中にもしっかり認識してもらわなければならない。

◇　◇　◇

「何とか逃げ切れたようだな……ジャズ、大丈夫か？」
「ああ。まさか、あの場に四葉のプリンセスが居合わせるだなんて想定外だった」
ジャスミンとジェームズは深雪の気配を認識していなかった。いや、正確に言えば深雪が身に付けている真珠のネックレスには、いつも彼女が身に付けている髪飾りと同じように認識を改竄する術式が保存されている。認識は対象の魔法力すらも欺くため、ジャスミンとジェームズが深雪の存在を誤認しても不思議な事ではなかった。
更には水波とリーナにも似たような術式を付与したアクセサリーを身に付けさせていた。これは悠元が発案して達也も説得に回ったために実現した対策の一環だった。

「これはやりたくなかったが……私の魔法をパーティー会場に向けて使う」
「それしかないか……」
そんな事情など知る筈もないジャスミンとジェームズだが、状況は最早最後の手段を投じざるを得ないところに来ていた。それは無論、戦略級魔法『オゾンサークル』をパーティー会場に向けて使用することだった。
毒ガス攻撃に等しい以上、どう取り繕っても非難は免れない。先日この国で起きた爆弾テロ攻撃以上に強烈な非難を浴びることになるだろう。最悪、オーストラリア政府が各国の追及を避けるために二人を切り捨てる選択を取ったとしても何ら不思議ではない。
外部からの破壊活動（既に失敗している）も、内部の機械的操作や魔法システムのクラックが失敗に終わったため、残る手段はこれしかなかった。オーストラリア本国司令部の命令が破壊活動の遂行となっている以上、軍人として確実に任務を遂行しなければならない。
「ジャズ、まずは脱出艇のところまで移動しよう。『オゾンサークル』を使えば港は直ぐに封鎖されてしまうだろう。その前に脱出の手筈を整えておいた方がいい」
「了解した」
ジェームズの先導で、二人は整備作業員用の階段を下りていき、港に隣接する作業員用控室に忍び込んだ。直接港に出なかったのは、目撃されるのを防ぐためだった。
だが、控室に忍び込んだはずの二人は自分の目を疑った。何故ならば、作業員用の部屋とは遠く掛け離れた内装が存在しており、誰がどう見ても作業員用のものではなく、明らかにＶＩＰクラスが招き入れられるような調度品や家具が部屋の中に置かれていた。
「ジャズ、これは一体どういうことだ？」
「分からない……確かに私たちは港に向かっていた筈だ」
魔法を受けた痕跡はない。下層に降りていた感覚は紛れもなかった。一体何が起きたのかを理解しかねている二人に対し、その視線の先から声が発せられた。

「――ようこそ、招かれざるお二人さん。直接の面識はないが、数年前は大変世話になったな」
「え……っ!?」
「あんたは……」
ジャスミンとジェームズが揃って視線を向けた先には、スーツ姿をした少年が一人座っていた。
両者に直接的な面識はないが、オーストラリア国内で暗闘を繰り広げた因縁の相手。ジャスミンたちが失敗した任務の対象である片割れ――当時長野佑都を名乗り、現在は護人・神楽坂家第１０８代当主としてその座にいる者――神楽坂悠元がその存在感を露わにした状態で相対した。

矛先の判断

ジャスミンとジェームズからすれば、港を目指していた筈がこのような部屋に出ていた。無論、二人は魔法を放とうとするが、その魔法が放てないことに二人は驚きの表情を露わにしていた。
「お前は……魔法が、発動しない？」
「何だって……お前が何かしたのか!?」
「仮にそうだとして、素直に話すと思うか？」
『オゾンサークル』はもとより、二人が修得している魔法全てが発動できない状態となり、ジェームズはこの場を逃げ出そうと背後にある扉に蹴りを放つが、一切ビクともしない。それならばと悠元に向かって敵意を向けた瞬間、悠元から飛んでくる殺気に二人は動きを止められてしまった。
「オーストラリア軍の魔法師でもこの程度で動けなくなるとは……ジャスミン・ウィリアムズ大尉にジェームズ・J・ジョンソン大尉、こちらは貴殿らに危害を加えるつもりはない」
「それを、信用しろというのか？」
「どの道このまま祖国に戻ったところで無事に済む保証はない。違うか？　何にせよ、まずは座るといい」
悠元は指を鳴らすと、凍り付いたように動けなかった二人は漸く動くことができた。逃げることも抵抗することすらも出来ない以上、相手が用意した交渉のテーブルに着くしかない。
「……ジャズ」
「一先ず、彼の言う通りにするしかない」
先刻、ジェームズから述べられた事実を信じるのならば、このまま大人しく帰れる保証がないことはジャスミンとて理解していた。作戦が失敗したとなれば、二人に対する扱いだけでなく依頼元であるイギリスにも波及する。
態々交渉のテーブルを用意してもらった以上、ジャスミンとジェームズに出来るのは、そのテーブルに着いて少しでも不利な状況を打開し、隙があれば目の前にいる人間を打ち倒して工作活動を成功させる

しかない。
　ジャスミンとジェームズが席に着いたところで、悠元はテーブルに一枚の写真を放り投げた。その写真に写るものに二人は驚愕した。
「これは……なっ!?」
「俗に言う〝念写〟みたいなもので撮ったものだが、よもやイギリスが関与していたとはな」
　正確にはジャスミンの記憶にある情報を投影したものだが、こんなことが出来るのは以前入手した『記憶時計（メモリー・クロック）』を少し弄ることで完成した電気信号変換魔法『投影風景（トレース・ヴィジョン）』によるものだ。
　これの実験には達也も協力しており、幼少期の達也の訓練風景を見事に投影した時は「ここまで引き出せるとなると、俺も白旗を揚げたくなるな」と述べるほどだった。
　今回の任務にイギリスが関与しているのは知っていたが、ジャスミン・ウィリアムズの記憶情報を引き出したことで確証に至った。無論、ジャスミンとジェームズは反論する。
「こんなのはデタラメだ！　我々を侮辱しているのか!?」
「そうだ、この写真のように我々がサー・マクロードと面会した事実などない！」
「まあ、そう言うと思っていたが……アンタらが軍人魔法師なら、今回の作戦がおかしいと何故思わなかった？」
「……何？」
　軍が使い捨てるにしても、戦略級魔法を使える人間を選ぶ道理にはならない。相手の国に戦略級魔法の情報が知られるというリスクを冒す必要などオーストラリアにはないに等しい。
　それも、国土的に近しい距離である経済大国の日本を脅かせば、台湾や親日国の多い東南アジア同盟も同調する可能性が高く、いくら自足時給が出来ているオーストラリアでも数少ない経済・文化交流をストップされる事態になる。
「ジャスミン・ウィリアムズ大尉。お前が戦略級魔法『オゾンサークル』を使えることは俺が一番よく知っているし、数年前に正当な手続きでオーストラリアに入った際、お前らがこちらを追跡したことは把

握していた。その時の誘拐未遂を態々国際問題として提起してやらなかったのに、この仕打ちとは〝恥知らず〟だな」
　そもそも、先に仕掛けたのはオーストラリア軍のほうだ。それに対して自己防衛をしたにすぎず、更には戦略級魔法まで使われたのだ。その相手が世界大戦で名を馳せた英雄とその孫に対して。
「仮に今回の作戦を成功させたいのならば、装備などのバックアップをしっかり受けてから望むのが妥当な流れだ。そもそも、西果新島でなければならなかった理由などありはしない」
「……どういう意味だ？」
「結論から言おう。お前らの作戦は最初から失敗することが前提として組まれていたんだよ。ジャスミン・ウィリアムズ、お前の持つ遺伝子特性による精神感応能力を以て、四葉や俺を探ろうとするための〝トロイの木馬〟としてな」
「……なん、だと？」
　原作ではこの事実を知らなかったが故に、ただの駒として動いていたジャスミンとジェームズ。悠元は彼らにこの事実を突きつけることで、今回の作戦はイギリス――ウィリアム・マクロードがそれを理解していながら、二人に任務を与えたという衝撃の事実を突きつけた。
「そんなことはあり得ない！　サー・マクロードは我が軍の魔法師育成に貢献してきた！　そんな彼が我々を売るような真似をするなど……」
「しないと言い切れる保証がどこにある？　だったら、何故イギリス本国の軍や特殊部隊が一切動いていない？　明らかにイギリスは自らの手を汚さずにオーストラリアへその役目を押し付けたとしか解釈できないがな」
　お得意の三枚舌外交で欺き続け、自らの立場をいいとこどりしようとした国の本質などそう簡単に変わるわけがない。長年貢献してきた人物が「そんなことをするはずがない」と否定したとしても、別におかしなことではない。
「仮にお前らが工作に成功したところで、少なくとも日本のみならず

ＳＳＡとフランス、それとＵＳＮＡ政府はオーストラリア政府とイギリス政府に対して賠償を請求することになるだろう。尤も、お前らの魔法は封じさせてもらったが」
　これは達也の『ゲートキーパー』によるものだが、それを態々明かす義理も道理もない。ましてやジャスミン・ウィリアムズの能力を考えれば、自分が出来ると思わせるだけでいい。あわや国際問題に成り掛けたところを止めてもらったことに関して礼儀を示せば受け取るとしても、仇で返そうものなら本気で殴るだけだが。
「……私達に何を望む？」
「ジャズ!?」
「この場において、私達は無力だ。彼の言っていることが真実か偽りかなど、それを判断できる材料がない」
　戦略級魔法はおろか他の魔法すらも封じられた今、ジャスミンは彼の要求を聞くことに舵を切った。ジェームズが驚きの声を上げるが、彼女は冷静を装いながらも目の前にいる少年の言葉を待った。
「話が早くて助かる。二人はこの後、警察省に連行される形で羽田からシドニーに帰ってもらう。その際、二人に親書を届けてもらう」
「親書を届ける？　それだけなのか？」
「どの道お前たちがこの国で罪を犯したことは明白。だが、長期に渡って留まらせる気もない。明日の朝一にはこの国から追放処分とする。それがこの国の司法判断だ」
　表向きは〝犯罪者の国外追放処分〟、実際の目的はオーストラリア政府への親書を持たせる役割を担ってもらう。上皇と今上天皇、それと内閣総理大臣の署名が入っているが、実働部分では神楽坂家と上泉家が関与する内容が含まれている。それと、その役割を以て二人のオーストラリア軍における処分の軽減を剛三と千姫の両名が求める内容となっている。
　この国に留め置く理由もないし、精神感応の部分についてはリーナとセリアがいるため、四葉家もジャスミンの対応については悠元に一任するという了解を貰っている。国防軍としては不服だろうが、獅子身中の虫を置いて動きを読まれる方が問題であるため、オーストラリ

ア軍関係者の処分は自分の国防軍の肩書きを以て処分することにした。
「それを私たちが大人しく呑むとでも？」
「魔法が封じられている上、お前らの目の前にいるのはかの英雄こと上泉剛三の直弟子だ。あの時のように魔法を無力化しただけでは足りないと言うなら、今この場でやり合っても俺は一向に構わんが？」
「じょうと……ぅ……」
ジェームズが敵意を悠元に向けた瞬間、瞬時に意識が遠のいていく。隣にいるジャスミンに声を掛けることも出来ず、深い闇の世界に閉ざされていくのであった。これには彼女の頬を冷たい汗が流れた。
「殺しはしていない……さあ、どうする？　話の続きを聞くか、このまま気絶するか」
「……分かった。続けてくれ」
既に生殺与奪の権利を握られている以上、ジャスミンが取るべき手段は向かい側に座っている人物の要求を呑むことだけであった。
◇　◇　◇
大亜連合の脱走兵は捕らえられ、正規軍によって高速船に連行されていく。その様子を見るまでもなく、陳祥山と呂剛虎は船の中にある小さな部屋で話し合っていた。
「ご苦労であった、上尉」
「はい」
潜水艦と偽装ドックは法に基づいて日本側に引き渡されることとなったが、偽装漁船も拘束したいた以上は限りなく満点に近かった。一時的に講和を結んでいる相手とはいえ、日本とはまた戦うことになる可能性が高い。
だが、陳祥山は大亜連合政府の方針に対して一抹の不安を覚えていた。それは言うまでもなく神楽坂悠元が発した言葉に他ならない。そんな上官の意図を察したのか、滅多に自分から発することのない言葉を呂剛虎は口にした。
「上校殿、如何なされましたか？」
「……よもや、滅多に自ら発することのない上尉から心配されるとは

な。今回の作戦の前、神楽坂悠元から釘を刺された。次に敵対するときは殺す……そうハッキリと述べていた。それも我々の国の言葉でな」
「それは……小官からすれば、懸念もご尤もかと思われます」
陳祥山は神楽坂悠元がかの英雄こと上泉剛三の孫だと知っており、更には呂剛虎が敗れた三矢佳奈の弟と言うことも掴んでいた。今回の作戦では、大亜連合軍の兵士を手玉に取るどころか、オーストラリア軍の魔法師を傷つけることなく無力化して見せていた。
「上尉の率直な意見を聞きたいが、どうみる？」
「国防軍ですらかなりの手練れである以上、この国の一族は最早我々の手には負えぬものと具申いたします」
「上尉もそう思うか……だが、軍の上層部は面子に拘るものも少なくない。我々の具申を『軟弱者』と断ずる者もいるだろう」
横浜事変の際、陳祥山は神楽坂悠元に完膚なきまでの敗北を喫していた。それも『鬼門遁甲（きもんとんこう）』すらも完全に看破された上で。この事実と自身の面子を天秤に掛けた場合、次に敵として刃を向ければ大亜連合は国家としての体裁すら保てなくなる可能性が極めて高い……と、陳祥山はそう感じていた。
「万夫不当の子孫とて最早油断は出来ぬ。が、刃を向ければ祖国は忽ち戦火に呑み込まれよう……私を弱腰と見るか、上尉？」
「いえ、小官もこの国とは講和状態を維持すべきと考えております。その状態を以て新ソ連や中央アジア方面に力を割くべきかと」
原作ならば達也や深雪の存在を脅威と見て再侵攻を考慮していた陳祥山だが、悠元の存在によって完膚なきまでに叩きのめされたことにより、日本に拘れば自滅する未来しか見えない、と舵を切った。
上官の言葉に呂剛虎も同意した結果から齎されたかどうかは不明だが、彼ら大亜連合の特殊部隊は大亜連合に帰国したのち、領土拡張政策の一環で配置転換をされることになる。
その選択が良かったのか悪かったのかは、その時の彼らには分からなかった。
◇　◇　◇

大亜連合軍の脱走兵の引き渡しも済み、オーストラリア軍の魔法師も段取りは既に組んだ。ちなみにだが、話を終えた段階でジャスミン・ウィリアムズは強制的に『夢世界（ドリーム・ワールド）』で眠らせた。

それ以外での変化と言えば、寿和にラウラが惚れてしまったことだろう。事情を稲垣から聞いた限りだと、ジャスミンとジェームズの騒動に図らずも巻き込まれた形となり、寿和がラウラを助けたのだ。悠元が駆け付けた時に彼女がお姫様抱っこされていたのはその結果から起きたことだった。

更に、親族であるワイアット・カーティスも「このまま祖国に帰らせても今度は両親のことで思い悩んでしまうやもしれぬ。千葉殿、宜しく頼むぞ」と二人の付き合いを認めたというか、そのまま婚姻関係になっても構わないと太鼓判を押す形となった。これを聞いた寿和は「はあっ!?」と驚きの声を上げたのだった。

「お疲れ様です、悠元さん」

「労いをありがとう、深雪。達也もご苦労様」

「ああ。ただ、挨拶に来る人の対応で苦労はしたが……」

今の達也は十師族・四葉家の次期当主と言うことで、隣にいる五十里や北山家の伝手で挨拶に来る人間が多かったようだ。その辺のフォローは五十里がしてくれたようだが。

「本家のほうに連絡はしたのか？」

「パーティーが終わってからでも構わない、とメールが来てな。母上の息が掛かった人間がいてもおかしくはないが……」

一体どこから見ているのか予測もつかない、と言いたげであった達也の言葉を聞きつつ、悠元は視線を雫に向けた。

「まだ1時間少々はあるが、雫もお疲れ様」

「うん。先輩方は戻ってきてないようだけど、いいの？」

「まあ、いいんじゃないかな」

何が起きているのかということは知っているが、流石に公衆の面前で話せることでもない為に言葉を濁した。

多分紗耶香に叱られているのは言うまでもない。卒業生の面々では沢木もヤバいが、戦力として一番成長しているのは紗耶香に他なら

ない。元々魔法力が伸びないことに悩んでいた彼女が一番の成長株となったことに、彼女の父親は喜ぶべきか悲しむべきか複雑であった。
「さて、先に抜けるから後は楽しんでくれ」
　そう言って悠元はパーティー会場を後にした。向かった先は先程ジャスミン達との会談で使ったＶＩＰルームで、その中にはワインを嗜む千姫の姿があった。
「ご苦労様、悠君。ちょっと飲んじゃってるけど、いいかな？」
「……数本をケロッと空けている時点で少しと仰いますか」
　ラベルを見るからに年代物のワインで、まともに買えば六桁は下らない値が付くものばかり。別に自分が支払う訳ではないので千姫の好きにさせてもいい、と判断して悠元は千姫の向かい側に座った。
「悠君には苦労を掛けてばかりだね。それで、予定通り引き渡せるのかな？」
「はい。寿和さんと稲垣さんには苦労を掛ける形ですが、明日の朝一に那覇空港から羽田を経由してシドニーに国外追放させます」
　本来ならば拘留期間を設けるのが普通だが、下手に暴れられないようにとっとと追放するのが最善とした。なので、超法規的措置として即日追放することで余計な被害を減らす方向で話をまとめた。
「にしても、精神感応による情報収集とはね……あの身なりなら、子どもだと思って騙されるでしょうけれど、私や義兄（あに）の眼は誤魔化せませんよ」
「同類だからこそ、というやつですかね？」
「むー、私はあんな性悪になった覚えはありません」
　いかにも子供っぽい様な拗ね方をしてるが、今まで千姫が成してきた功績を鑑みると「団栗の背比べ」に近いかもしれない。それはさておき、今回の任務に関しての報告を続けた。
　ジャスミンとジェームズに今回の工作がイギリスの『捨て石』作戦に他ならない事は伝えたが、その更に背後にいるＵＳＮＡの存在は明るみにしなかった。どうせＵＳＮＡ側も把握している事実をさらに追認するようなつもりもないし、エドワード・クラークに余計な情報

を流す気もない。
　ウィリアム・マクロードあたりなら勘付いてエドワード・クラークにその可能性を示唆するかもしれないが、分かり切っている罠を放置するほど危険なものなどない。なので、イギリスでマクロードが最も裏切ることができない人物に今後の対処をお願いすることとした。

誓約書すら裏切る精神が染み付いている

今回の任務の前、ＵＳＮＡ大使館から直筆の手紙が届けられた。差出人はＵＳＮＡ大統領に加えてヴァージニア・バランス大佐の名が書かれていた。

その内容は、ＵＳＮＡの内部に今回の作戦を唆した実行犯がいる、というものだ。調査自体はＵＳＮＡ政府で行う故、内政干渉に値する行為は慎んでほしい……メディアによる扇動も控えて欲しいという意味を含んでのもの。

悠元はその真摯さを鑑みて今回の作戦に関する扇動行為はしないと決めた。あくまでも〝今回は〟であり、〝今後もしない〟というわけではない。

「大統領のみならず、国防長官やＦＲＢ議長も相次いで手紙を寄越しましたからね」

「悠君は世界の金融や経済の舵取りを握ってしまいましたから、ご機嫌取りするのも已む無き事かと」

「政府関係者はまだいいんですよ……問題は軍部、それも魔法師部隊。それと『七賢人』もといクラーク親子のことです」

別にＵＳＮＡとイギリスの舵取りを握りたくてそうしたわけではなく、魔法以外の分野で相手の首を絞める方策の一環として二国の国債購入に踏み切ったのだ。流石に１００兆円という国家予算レベルは無視できないのも無理はないが。

ここまで手を打ち込んでも、クラーク親子は四葉や悠元を諦めていない節は随所に見られた。自国の安寧とは言いつつも、あの野心家が目指すのは日本をＵＳＮＡの支配下に再び置くことなのかもしれない。日本を橋頭保に出来れば、大亜連合や新ソ連の喉元に剣を突き付けることができる。

だが、それは無理を押して拡張したＵＳＮＡが逆に首を絞めることになる諸刃の剣だ。安全保障上の理由があったとしても、転生前の世界では縮小の傾向にあった在日米軍の存在がある。同盟国に援助金の拠出をしてもらうことで維持していた背景からしても、いくら魔法

があるとはいえ現実的ではない。
　もしかすると、ＵＳＮＡは大亜連合と新ソ連、日本に緊張状態を維持させて軍需の部分で儲ける腹積もりか、或いはスターズを派遣するための大義名分でも作りたいのかもしれない。そこに弱みを作って日本の戦略級魔法を奪う腹積もりなのだろう。
「悠君は何を一番懸念しているの？」
「一番面倒になるのは、大亜連合・新ソ連・ＵＳＮＡが合従することですね。それを出来なくさせるためにも、政府にとある条約を締結させます」
「条約？　大亜連合との正式な終戦条約みたいなものかな？」
「いいえ、大亜連合にではなく台湾、東南アジア同盟とインド・ペルシア連邦、それとアラブ同盟との海上連携協定です。親書の中にはオーストラリアの参加も要請しました」
　主な理由は〝海賊対策〟という理由で西太平洋・南シナ海・インド洋・紅海のスエズ運河に至るまでの軍事協力協定。大統領が自国に引き籠っているＵＳＮＡやイギリス、新ソ連を省くために南半球の国々のみに限定している。
　そして、南アメリカ連邦共和国とフランスも協定締結後に批准することで〝国際条約〟へと昇華させる。フランスが加入するのはアフリカに領土を有しているという理由で、アフリカにもう一つ起こす革新によって、いくつかのアフリカの自治国家を確立させる。フランスにはその後ろ盾となってもらう腹積もりだ。
「列強が強奪した資源は取り戻せませんが、アフリカに関与しているフランスが主導することで欧州の盟主に足り得る名誉を得ます。それを北の島国であるイギリスが看過するとは思えません。何かしらの妨害を仕掛けてくるでしょう」
「……成程ね。こちらに向ける敵意を逸らすわけですか。あくどいことを思いつきますね」
「こちらから態々相手の土俵に乗ってやる義理はありませんので」
　態々火種になりかねないような婚約話を持ち込んだのだ。ノーリスクで美味しい話などない事はフランス側も承知しているだろうが、

西ＥＵの主導権をフランスが握ってもらうことには大きな意味がある。
いくら国際魔法協会の本部がロンドンにあろうとも、今回の失態についてはイギリス軍のみならずイギリス連邦にも波及する問題に成り得る可能性を秘めている。
アフリカに成立予定の国家もその条約を批准すれば、日本と台湾、それとオーストラリアなどのイギリス連邦の構成国以外の南半球の全ての国家が協力できる下地が出来上がる。いくら『十三使徒』を有するＵＳＮＡと新ソ連でも地球の南半分の国家全てを相手に戦争など起こせない。
もし、ＵＳＮＡの軍部が旧合衆国のようにパワープレイに走ったとしても、まずついてくる人間がいない。ＵＳＮＡ政府の首長たる大統領はこちらと友好的な関係を望んでいるし、その側近となったバランス大佐も同意見だと聞き及んでいる。
それだけでなく、長官クラスをはじめとした政府高官、米国の陰の実力者たちも剛三の影響を最も肌で感じており、日本と敵対することを何よりも恐れているのだ。
「個人的に結んだ誓約を一方的に反故にした以上、新ソ連にも掛けてやる情けはありませんが……向こうは人間主義が勝手に暴れていますので、適度にガス抜きさせてやりましょう」
「もしかして、悠君は新ソ連の解体を狙ってたりする？」
「出来れば御の字ですが、無理に狙う必要もないかと。変に介入してこちらの関与を匂わせる必要もありませんし」
残るは新ソ連の扱いだが、人間主義が暴れている以上は下手に手を入れる必要も無いと判断した。それを鎮められる能力を測る意味でも、新ソ連にとってはここが正念場となるだろう。集めた情報からするに、新ソ連の正規軍は大規模な掃討作戦を仕掛ける腹積もりのようだ。
元々ガス抜きが出来ずに不満を蓄積させ続けた結果として宗谷海峡での一件が発生していた。それが解消された場合、新ソ連側が自ら行動を起こすこと自体リスクを伴うことになってしまう。ウラジオ

ストク軍港が修復次第、佐渡のように少数部隊での国土侵入は考えられるため、警戒レベルは自ずと上がるが。
悠元が敢えて介入しなかったのは、どうにかして人間主義を焚き付けたい連中が一定数いるのも事実だからだ。不幸中の幸いは北欧や東欧に飛び火する傾向が見られないことぐらいだろう。
「佐渡の一件も誤魔化し続けている以上、あの国に信なんて置けませんよ。態々〝ソビエト連邦〟を名乗っている国なんて、国家元首を筆頭に疑心暗鬼の集合体としか思えませんから」
「人間主義者が新ソ連から流れてくる可能性がある、と思っているのですね？」
「あるでしょうね。民間レベルでの交流が途絶えたわけでもありませんから」
大亜連合内に新ソ連の工作員がいたケースを考えれば、同じことがこの国で起こり得ないとも限らない。スパイに関しては合法的に軒並み国外追放処分としたが、密航してくる可能性が残ったままだ。
一昨年の秋に悠元が戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を新ソ連からの艦隊に使用したのは、残存兵が有耶無耶になって工作員になってしまう可能性を摘み取る為だった。
「それで、イギリスはどうしますか？」
「そうですね……爺さん経由であの御仁でも決して無視できない人物に釘差しをお願いしました。向こうも快く引き受けていただきましたので」
「成程、察しがつきました。では、祝して悠元君も」
「酒は止めてください」
「えー、悠君のイケズ」
いくら精神年齢が成人化していても、法的な年齢を遵守しなければいけない立場。身内だけなんだからいいだろうと言いたげな千姫の姿に悠元は苦笑を滲ませたのだった。
◇　◇　◇
ジャスミン・ウィリアムズとジェームズ・J・ジョンソンの両名が日本の警察に捕らえられ、その翌日に国外追放処分を受けたという知

らせは追放処分と同日にイギリスのウィリアム・マクロードの耳にも入った。
今回の久米島沖人工島破壊工作未遂事件は日本国内で大きく取り上げられており、大亜連合香港方面軍からの脱走兵とオーストラリア軍の魔法師が共謀した事実は国内外に知れ渡ることとなった。
何故なら、この事件の翌日に日本・ＳＳＡ・フランスの三国首脳会談が急遽行われ、三国による共同声明でオーストラリア政府に対して〝我々の国を脅かした極めて悪質なテロ行為の賠償〟を求めたのだ。
大亜連合政府に賠償を求めなかったのは、今回の事件には大亜連合軍との共同作戦で破壊工作を阻止したことを念頭に置いた発表を行ったためだ。講和状態にある二国間の状態は暫く継続することも併せて公表された。
オーストラリア政府は当然事件への関与を否定した。大亜連合とオーストラリアを結び付けたのはイギリスであり、オーストラリアが公表された事実を認めた場合、その背後関係まで洗われる可能性が高くなる。
真の首謀者がイギリス軍ということが明るみになれば、西ＥＵにおける影響力も大幅に落ちてしまう。それを自覚しているからこそ、イギリス軍情報部は緊迫に包まれていた。
だが、騒ぎになるほどの事態には至っていなかった。この件はホワイトホール（イギリスの政府機関・官庁街）にある国防情報参謀部（ＤＩＳ）本部ビルの中でさえ、外部への情報漏洩を恐れて大きな声では語られていない。だからこそ、余計に重苦しい空気を醸し出している。
マクロードは、自分が非難の視線に曝されていることに気付いていた。既に弁明も求められており、自身の立場が悪化していることなど教えられるまでもなく理解していた。
だが、マクロード当人にはそんな悪感情に頓着するような素振りは一切見られなかった。政府高官の前で軍幹部に詰問されたときも、悠然とした貴族的な態度を崩さなかった。
その一つにマクロードが戦略級魔法師『十三使徒』の一人である、と

いう点がマクロードをイギリス政府が疎かに扱うはずなど無い、と確証に近い計算を弾き出していたのもあるだろう。
　しかし、マクロード自身が態々オーストラリア本国まで乗り込んでおいて、自ら指示までしたという作戦自体に大きく関与している立場なのに、ショックを受けたような感じではないのは、単に自分の地位に安泰であると確信しているからとは思われなかった。
　そんなマクロードは呼び出しを受けたＤＩＳ本部ビルを出ると、一ブロック隣の古いビルの中に入る。そこにはイギリスのシギント（あらゆる手段の傍受による諜報活動）を担う政府通信本部（ＧＣＨＱ：旧軍情報部第１課）の分室が入っている。
　部外者には何に使われているのか全く分からないこのビルは、マクロードの仕事場である。厳密にはＧＣＨＱ分室ビルの一室に、マクロード個人の部屋が割り当てられている。
　元々の特殊性ゆえに人の出入りがただでさえ少ないビルだが、割り当てられたマクロードのオフィスは内部の職員ですら滅多に出入りしないマシンフロアの一角にあり、専用のエレベーターに乗ってしまえば、その部屋に来た事実すら知られることはない。
　部屋に入ってすぐに鍵を閉めたマクロードは、この古いビルに不釣り合いな最新式通信機のスイッチを入れた。その通信機のディスプレイには一人の男性の姿が映し出されており、約束の時間よりも前に陣取っていたようだ。
『ハロー、サー・ウィリアム・マクロード。お身体の調子は如何ですか？』
「ハロー、ドクター・クラーク。体のほうは元気ですよ、年の割にはですが」
『そんなつもりではなかったのですが……失礼しました』
「こちらこそ失礼。単なる冗談ですよ」
　マクロードが話している相手――――困惑気味に笑っている男性の名はエドワード・クラーク。ＵＳＮＡ国家科学局（ＮＳＡ）の学者で、大規模情報システムの専門家だ。
『お人が悪いですよ、サー。ところで〝例の件〟ですが、予定通り失敗

に終わったようですね』
「ドクターに隠し事は出来ませんな」
　一介の学者と戦略級魔法師『十三使徒』との繋がり……マクロードはモニターに映る相手が単なる学者ではないことを知っている。イギリスですら事件の翌日に知った情報をすぐにキャッチできるだけの『システム』を有していることも把握している。
『恐れ入ります。それで、「木馬」は上手く潜り込めましたか？』
「……」
『サー・マクロード？　もしや、こちらの企みが明るみになったというのですか？』
「そこまでは分かりませんが……どうやら、日本の警察に拘束された後、テロ工作の容疑でシドニー行きの民間機に乗せられる形で国外追放処分となったようです」
　マクロードが放った言葉にエドワードは驚きを露わにしていた。当初の目論見は戦略級魔法師であるジャスミン・ウィリアムズを国防軍経由で四葉家の目に留まらせ、潜り込ませる作戦だった。もしくは動きが読めない神楽坂家か上泉家を探らせる予定だったが、完全に当てが外れた形となった。
『あの四葉が簡単に諦めたとなると、厄介ですな』
「ジャズを拘束したのは神楽坂悠元――第三次大戦の英雄こと神楽坂千姫の関係者です。我々の懸念材料が増えた形になりましたね」
『成程……いずれにせよ、世界を制するには情報が不可欠となります。サー・ウィリアム、USNAは貴方のご協力に、作戦の可否に関わらず感謝しております』
「恐縮です。我がブリテンの繁栄の為に、今後もドクターの知恵をお貸し願いたい」
『無論ですとも。我々は同盟者なのですから』
　エドワード・クラークとの通信を終え、マクロードは通信機の電源を切るだけでなく、念入りにシステムをロックした上で秘密オフィスを後にした。そのマクロードがビルの外に出たところで、一台の立派なリムジンが停まっていることに気付く。そこには身なりを整えた

男性が控えていた。
「ウィリアム・マクロード卿でいらっしゃいますね」
「如何にもですが、どのようなご用件でしょうか？」
突然すぎる出迎えに、普通ならば訝しんでもおかしくはない。だが、マクロードは其処に立っている男性がイギリス王族の住まう宮殿の執事を務める男性であることを把握していた。
「陛下からマクロード卿を宮殿に召喚するよう言い付かっております。此度は公的な会談ではない故、格好についてはそのままでも構わない、と仰せです」
「……一度、自宅に寄らせて下さい」
「畏まりました」
まさかの宮殿からの呼び出しにマクロードは少し考えた後、一度自宅に戻って身だしなみを整えることにした。いくら公的な召喚ではないと言われても、そのまま宮殿に向かうというのはマクロード自身の面子が許せない。
自宅で身支度を改めて整えた後、リムジンで英国の王族が住まう宮殿に向かった。宮殿の使用人の案内で応接の間に通され、マクロードは静かに腰を下ろした。
よもやイギリスの国王に呼び出されるとは思っても見なかったことだが、マクロードは大方先日の事件に関することを尋ねられると予想していた。なので、最悪はイギリス連邦の未来の繁栄の為に行ったと釈明する腹積もりでいた。
そして、扉が開いて宮殿の使用人に案内される形で謁見の間に通されたマクロードは、立派な椅子に座るイギリスの王――――いや、女王に対して距離を取った上で片膝をつき、頭を下げた。
「急な呼び出しをして済まぬな、ウィリアム・マクロード卿」
「いえ、女王陛下からの呼び出しとなれば、『サー』の称号を賜った者として礼儀を尽くさねばならぬと自覚しております」
現在のイギリス国王である女王は、なんと当時１８歳（現在２５歳）という若さで王位に就いた。
本来なら彼女の兄である皇子らが即位して国王になるものと思わ

れたが、彼女の父である前国王は魔法師と非魔法師の対立を重く捉え、自身の亡き祖母である女王のように英国に対して慈悲深き心情を持ち得る王が必要と考え、娘に王位を継がせた。

その際、彼は昔イギリスで知り合った日本人の協力を得て、若き英国の女王が誕生した。

彼女は幼少期に祖国を離れて日本に留学して〝とある名家〟で研鑽を積んだ結果、英国の王族として相応しい振舞いを身に着けていた。彼女の王族としてのオーラは、もはや若輩と侮る事すら許されないものであった。

それは国家公認戦略級魔法師のマクロードであっても、イギリスの女王たる風格を持つ彼女の前には自然と臣従の姿勢を取らざるを得なかった。

『十三使徒』の有効利用の一端

ウィリアム・マクロードは英国の女王――――エリザベスⅢ世からの呼び出しを受けた時点で、先日のオーストラリア訪問について尋ねられると覚悟していた。国防情報参謀部の本部で受けた取り調べを改めて行うものだと推測していた。

だが、そんなマクロードの懸念を根底から打ち壊すが如く若き女王が口を開いた。

「マクロード卿、先日日本で起きた破壊工作事件のことで政府高官と軍部から厳しく取り調べられたようであるな。其方は代えが利かぬ戦略級魔法師であり、私も其方の力を頼りにしておる」

「……陛下にお気遣いを頂けること、真に感謝致します」

マクロードを呼び出す前、エリザベスはモニターを通してリアルタイムで政府高官と軍部によるマクロードの取り調べの様子を見守っていた。その呼び出しに至る経緯までイギリス政府およびイギリス軍に資料を提出させていた。

マクロードが軍の極超音速輸送機でオーストラリアに向かった後、今回の事件が発生した以上は彼の関与を疑わざるを得ない。だが、取り調べにおいて彼は一切動揺する素振りを見せていなかった。

その様子だけを見れば、マクロードは単に自身が手塩に掛けたオーストラリア軍の魔法師を労いに行っただけであり、今回の事件に関与している可能性は極めて低いという見方も出来なくはない。

「ふふ、もしや卿は妾が政府や軍部のように其方を責め立てようと予想されたのかな？」

「滅相もございません。今回の日本で起きた件について、先日オーストラリアを訪れたばかりの私も寝耳に水の出来事でございましたので。よもや我がイギリス連邦の友好国であるオーストラリアがそのような暴挙に出るなどとは」

だが、エリザベスはマクロードが大きく関与している――――今回の作戦の立案側に関与していると確信を得ていた。その決定的な状況証拠として、軍部から提出された資料の中に日本へ潜入していたオー

ストラリア軍の魔法師がイギリス軍の通信衛星を用いてオーストラリア本国と連絡を取っていた通信記録の存在があった。
女王はイギリスの関与を明確にするべく、当初通信記録を提出しなかった軍部に対して首相経由で国王命令を下して提出させた。
更に言えば、国家公認戦略級魔法師でありながらもその行動実態が明確に見えてこない部分が多すぎるマクロードに対し、密かに政府の情報機関に対して情報提供を要請した。そこから上がってきた情報を纏めると、明らかにプライベートだと断定できる部分を除くと不明瞭な空白が多い。
クロとも言える要素は多いが、今回の一件はまだイギリス本国が影響を受けていない為、マクロードを責め立てるには決定的な要素が足りない。
「卿がオーストラリア軍の魔法師育成に力を入れていることはよく存じておる」
単にイギリス連邦の再構築を考えるだけならば、マクロードがオーストラリアにここまで肩入れする必要などない。『十三使徒』とまで呼ばれる国家公認戦略級魔法師となった彼がそこまでするきっかけになったのは、世界群発戦争における〝一つの敗北〟であった。
欧州と新ソ連の核戦争抑止の為、世界各国から派遣された魔法師による部隊。当時は国際魔法協会が発足して日が浅く、提唱国であるイギリスが一先ず音頭を取る形となった訳だが、ここでも人種による差別意識による問題が起きた。
日本から派遣された魔法師に対し、欧米各国からその実力を疑問視する声が上がった。そして、それを最初に言い出したのは部隊のリーダーを務めていたマクロードの父親で、彼らを〝東洋の野蛮な魔法師〟だと断じた。
そんな戯言にも耳を貸さず、核戦争抑止の部隊として働いた日本の魔法師たちだが、その功績を妬んだマクロードの父親は〝化物〟と言いたげに千姫を魔女のような二つ名で呼んだ。これが決定打となって千姫はマクロードの父親を病院送りにした。
――〝黄猿〟だの、〝魔女〟だのと好き勝手言ってくれたのう。

これだから妾は主等のような白人共が好かぬ。妾の振る舞いに文句があるというのなら、今度は主等の首を時計台（ビッグ・ベン）の上に吊るしてやろうぞ。

その当時、英国の国王であったエリザベスの祖父はマクロード親子の振る舞いに頭と胃を痛め、千姫を含めた日本の魔法師に対して最大限の恩赦と陳謝を執り行った。以降、英国の王室において『黒夜の孔雀（アルティミシア）』という千姫の異名は禁句とされ、代々の子孫たちには日本の恐ろしさを過不足なく伝えた。

「そして、主が日本と浅からぬ因縁を持つことも亡き祖父より聞かされておる。よもや、日本への復讐など考えておるまいな？　そうだと言うのならば、妾を育ててくれた第二の祖国に対する叛意と見做させてもらう」

「そのようなことは考えておりませぬ。ですが、昨今におけるかの国は魔法技術のレベルが格段に上がっており、このまま看過することは将来我が国にとっても望ましくないことになるやもしれません」

「ほう……マクロード卿はそのように考えておると？　それは卿だけの個人的見解に過ぎぬのではないのか？」

過去に日本とイギリスは同盟関係を結んでいたが、第二次大戦の前に破棄されて太平洋方面で戦争上に至った経緯がある。だが、仮に〝第二次大戦の過去の清算〟という名分で日本が復讐の刃を向けるとしても、第一に新ソ連もしくはＵＳＮＡ、その次点に大亜連合となり、イギリスに対しての報復行為の可能性は低い部類に入る……少なくとも、一昨年秋の横浜事変までは間違いなくそうであった。

だが、かの国で用いられた二発の戦略級魔法。表向きは大亜連合の侵攻部隊だと報道されているが、その侵略行為に加担したオーストラリアとイギリス。そして今回の久米島沖人工島における破壊工作の件で、オーストラリアだけでなくイギリスにも矛先が向けられる可能性が高まった。

「私だけではございませぬ。我が国の政府や軍の内部に私と同じ考えを持つ者もおります」

「（その結果が今回の件のみならず、一昨年の大亜連合による日本侵攻

に水面下で加担したという訳か）……卿の言いたいことは理解した」
　女王は政府への要請でウィリアム・マクロードの通信記録を洗わせたが、彼専用のオフィスにおける公的な通信記録と音声・映像通信に伴う端末の電気使用量が釣り合わないという結果が報告された。とりわけ映像通信はやりとりする情報量が膨大になる為、いくら通信自体が傍受できなくとも情報をやり取りするための等価交換として電気エネルギーが用いられる。
　魔法によるブースターで遠隔通信を行う方法はあるが、端末に相当する部分の維持には物理的なエネルギーを必要とする。大陸系古式魔法『僵尸術（きょうしじゅつ）』はその代表格だが、いくら端末に生体のパーツを用いるとはいえ、それを維持・管理するために魔法以外のコストを支払わねばならない。
　いずれにせよ、イギリス政府やイギリス軍には内密で彼らが知り得ない場所に連絡をしているという事実。そして、政府通信本部には一部の者しか知り得ない全世界傍受システム『エシェロン』のシステムの一部が置かれている。その事実から鑑みた場合、マクロードが連絡を取っていた先として最有力となるのは――――ＵＳＮＡに他ならない。
「さて、此度の召喚は長年我が国に貢献しておる其方の功績を鑑み、『ナイト』の称号を持つ貴殿に『男爵（バロン）』の爵位を与えたいと考えておる……よもや、妾の恩賞を断るとは言うまいな、マクロード卿？」
「……考えが追い付いておりませぬ。既に過分なほどの褒賞を頂いている身でございますので」
「ふむ、卿の言い分もご尤もであるな。ならば説明するとしよう」
「お願い致します」
　「称号を返上せよ」というのかと思えば、まさか更に格上の称号を賜るという名誉にマクロードは困惑を隠せなかった。その状況を察しつつエリザベスが説明を始める。
「其方のお陰で我が軍の魔法師は立派に成長した。国を束ねる女王として感謝の意を示さねばならぬと首相に相談し、この度称号を贈ると共に一つ頼みごとをしたく思う」

「つまるところ、私へ称号を贈るというのはその対価ということでございましょうか？」
「衣着せぬ言い方をすればそうなる。その頼み事だが、卿にはケンブリッジ大学の魔法学専攻の教授として赴任していただきたいのだ」
　魔法という技術を更に高めるべく、各国では専門的な教育機関を設けて魔法教育に力を入れてきた。だが、それだけでは魔法師と非魔法師の軋轢が解消すると思えなかったエリザベスは、ドイツのベルリン大学を手本とする形でマクロードに魔法学の教授として貢献してほしいと頼み込んだ。
　かの大学にはマクロードと同じ『十三使徒』のカーラ・シュミットが在籍しており、英国でも古い歴史を持つケンブリッジ大学ならばロンドンにも近いので、有事の際の召喚もしやすいという利点がある。
「卿は気にせぬだろうが、政府や軍の内部では卿を批難する者も少なくない。今はまだいいだろうが、反魔法主義の運動が加熱するようなことがあれば卿を『十三使徒』――国家公認戦略級魔法師の指定から外す様に声を上げる者も出て来るやもしれぬ。ほとぼりを冷ます意味でも卿には暫くロンドンを離れてもらうのがお互いの為になると判断させて頂いた次第だ」
「……時が至れば、私はまたロンドンに戻ってこれると解釈して宜しいのですかな？」
「無論である。妾の言葉を疑うのか？」
「いえ、滅相もございません。女王陛下のご配慮、有難く受けさせていただきます。ですが、いくつか条件を提示させていただきたい」
　マクロードはエリザベスに現在の仕事場に置かれている機材をケンブリッジに持ち込めるよう頼むと、彼女は無条件で呑むだけでなくケンブリッジでの住居も政府で手配させると述べた上でマクロードの要求全てを受け入れた。
　謁見が終わったところで、エリザベスの傍に控えていた執事が彼女を私室に案内した。私室の奥に引っ込んだ彼女は自ら手早く私服に着替えると、執事が用意してくれた紅茶で喉を潤し、茶菓子に手を伸ばすところで執事から声を発した。

「陛下――――いえ、〝エリー様〟。あれで宜しかったのですか？」
「マクロードのこと？　どうせ国外……多分、ＵＳＮＡあたりの協力者と共謀したとみるのが妥当でしょう。でも、政府と軍部が掴めていない以上、私の推測で国家を引っ掻き回せないもの」
執事がエリザベスのことを愛称で呼ぶのは、彼は王家に代々仕える執事の家系であり、現在の執事長は彼女の祖父から三代の王を見てきた人物。
魔法師であるため、外見的には３０歳代ではあるが実年齢は６０歳をとうに超えている。エリザベスが幼い頃から見続けてきたこともあり、孫のような目線を向けつつも〝三人目の祖父〟の如く厳しく接してきた。
先程の謁見の間にいた人物とは同一と思えないほどに砕けた口調をエリザベスは口にするが、この場には彼女と執事しかいないので彼は咎めようとする気もなかった。
「政府からの報告でも、我が国の戦略級魔法師が何をしているのか分からないってことが常態化してるのが問題なのよ。確かに下手に出れない気持ちも分かるけれどね……だったら、彼には本職である大学教授としての仕事に専念してもらおうと思ったわけ。無論、向こうの国からの要請もあったけど」
日本での事件の発生直後、神楽坂家当主が女王のプライベートナンバーに直接連絡してきた。エリザベスは彼から事件の仔細を全て聞かされた後、彼から「ウィリアム・マクロードには英国の魔法教育の発展に専念してもらうのが理に適っているかと思われます」という提案を受けた。つまり、ウィリアム・マクロードを国外へ出さない為にイギリス本国内で〝軟禁〟させる案を提示されたのだ。
いくら国際問題に直結するような案件でも戦略級魔法師――――それも『十三使徒』の一角を下手に切れない上、新ソ連のこともあるのでマクロードを抑止力として機能させる意味でも英国から切り離すという選択肢は取れなかった。
彼女がマクロードに述べた人間主義の波及の懸念に関して嘘は言っていないし、英国内では既に魔法師を管理すべきという動きが燃

え始めている。国にとっての戦力を失う懸念は最大限取り除くべきだと判断して神楽坂家の提案を受けることにした。
「神楽坂悠元殿……我が国を核の炎から救った神楽坂の名を継ぐ人物にして、数年前に陛下を救った御仁ですな。陛下が無理を言って彼を引き留めようとなされたことは今でも覚えておりますぞ」
「だって、女王になる前から王族である私に擦り寄ってくる男どもなんて下心が見え過ぎなんだもの」
エリザベスは数年前、とある男性との恋人疑惑が突如持ち上がってパパラッチに悩まされていた。危うく車が事故を起こすかと思われたとき、二人組の男性に助けられた。彼女を乗せた車は無事なところに運ばれ、追い掛け回していたパパラッチのバイクは破壊され、記者たちは全員警察に〝女王陛下へ失礼を働いたならず者〟と英語で書かれた紙を顔に貼られた形で突き出されていた。
彼女はその少年に「私の夫になって」と爆弾発言をかましたが、その直後に少年の拳骨が落ちて立ち消えとなった。正直、セバスからすればその少年が嫁ぐことで発生する問題の対処をしなくて済んだ、と内心で感謝していた。その代わり、互いにプライベートナンバーを交換しており、今でも互いに連絡は取っている。
結局、女王に即位してから7年経った今でも彼女は独身のままであった。その少年が決して悪い訳ではないことは確かであり、執事の説得にエリザベスも渋々納得していた。
「今度、日本に訪日して彼に押し倒してもらおうかしら」
「……その少年は今や神楽坂家当主です。そのような行為は互いに要らぬ苦労を増やすだけに御座います」
なお、エリザベスがそのようなことを口走った直後、遠く離れた日本で怖気を感じた神楽坂家当主の姿があったのは言うまでもなかった。

穏便な旅行がしたいです

久米島沖人工島破壊工作未遂事件から一夜が明け、南アメリカ連邦共和国軍の魔法師ことハンス・エルンスト大佐はのんびり休暇を満喫していた。とはいっても、ただ東京の街並みを一人で食べ歩きしていた。

ナターリヤは付いていきたそうにしていたが、このご時世で誘拐を目論む輩がいないとも限らない為、お土産と引き換えに渋々留守番することになった。

『エルンスト……何だか神妙な感情が漏れているぞ』

(お前のように一つの敵だけ考えられんからな、俺は)

ただ旧ソ連だけを相手にしていたルーデルと、周辺国家に対して目を光らせなければならないハンスでは置かれている状況が異なる。それはともかく、ハンスは周りに気付かれないように一つ小さな溜息を吐いた。

(今回の件は、オーストラリア軍と大亜連合の脱走兵が共謀する形となっていたが、鎖国状態のオーストラリアがこのまま見過ごされる可能性は極めて低い。今回の任務の目的が日本軍の戦力を炙り出す可能性もあった)

『私が生きていた頃に我が国と同じ陣営で戦っていた国のか……ジョンブルやメリケン共が勝手に怖がっているだけかもしれんが』

(分からんでもない。だが、この国は力を示した)

その根拠は一昨年秋の大亜連合による侵攻行為に対し、日本が使用した二発の戦略級魔法。一つは鎮海軍港を消滅させた魔法で、もう一つは日本海を南下していた所属不明の艦隊とウラジオストク軍港を消し去った魔法。

それ以降、極東地域でこれらの魔法が使用されるほどの事態に至っていないが、噂ではＵＳＮＡが戦略級魔法を無力化しようと動いていたらしい。だが、ハンスは先日手紙を送り付けたエドワード・クラークなる人物の存在からしてＵＳＮＡがそれを行った可能性が高いとみている。

約１００年間の記憶を知らないルーデルだったが、ハンスの知識を通すことで大方の状況を察していた。その上でハンスにしか聞こえない〝声〟を出していた。
『あの御仁――――上泉剛三といったか。彼を敵にしたほうが哀れと言う他あるまいよ』
（……お前が認めるなんて、明日は季節外れの雪でも降るのかねえ）
『全く、エルンストは容赦がないな。だが、ガーデルマン以上のガッツがあるのはいいことだ。お前の未来は私が保証しよう』
今までに数多くの歴史上の偉人がいても、彼のような〝化物〟などそう多くない。そんな人間に認められるという心境は正直複雑であった。ハンスはルーデルからの言葉に苦笑を漏らしていた。
（……なあ、ルーデル。俺の勘だが、多分ＵＳＮＡと新ソ連は日本の戦略級魔法を奪おうとするかもしれん。それと、俺もその対象に含まれるだろう）
『……エルンストはそう思うのか？』
（キーパーソンはエドワード・クラーク。あの人間は以前にも義理の伯父に『灼熱と極光のハロウィン』のことを尋ねたらしい。当事者でもないのに何で知っているのかと愚痴を聞かされたからな）
世界群発戦争の後、第二次大戦後のように世界の覇権争いが各国で繰り広げられている。最も勢力が強いのはＵＳＮＡと新ソ連であり、その影響を重く見た各国が同盟や連邦国家を樹立しているケースが各方面に見られる。
ＥＵもその例外ではなく、国家単位にまで分裂すれば新ソ連に呑み込まれるだけだと重く見た結果、東西分裂程度に収まっている。本来なら力を結集させて大国の脅威に備えばならないのだが、それが出来ないのは血に塗れた欧州全体の歩んできた歴史に他ならない。
ＵＳＮＡ、新ソ連、そして大亜連合という三大国の脅威に曝される立場の日本は少なくとも三つの戦略級魔法を保有している。辛酸を舐めさせられた大国同士がかつての第二次大戦のように秘密協定を結んで陥れないとも限らない。
そしてそれは、ＵＳＮＡの南にあるＳＳＡも他人事ではなくなるこ

とを意味する。
（ドイツは俺の生まれ故郷だが、南アメリカも俺にとっては最早故郷同然の居場所だ。それを奪おうというのなら、相手が例えスターズの連中でもぶん殴ってやる）
『そうか……よし、ならば私謹製の精神鍛錬をしようではないか。健康促進の意味で総統閣下に勧めたが、拒否されたことがある』
（……そういうことを平気で言ってると、本当にルーデルなんだなと思うよ）
ハンスはかつて魔法の力こそあれども伍長クラスの実力しか有していなかった。だが、ルーデルとの邂逅は彼を戦略級魔法師という地位にまで押し上げてしまった。
ハンスの変化を訝しむ者は少なくなかったが、彼は精神の変化を同僚や上司に伝えたところ、疑われるどころか同情され、更には気遣われた。ドイツ軍にいる彼の元上司曰く「私もかの英雄のように活躍したい欲はあるが、ハンスの飛行を見ていると『私が及ぶ次元の話ではない』と痛感させられた」と述べるほどに、ルーデルの非常識さは群を抜いていた。
その話は国家元首たる首相の耳にも入り、かつてドイツの栄光を取り戻さんとしていた御仁ですら苦心した意味がハンスを通す形で理解できてしまった。
ようするに、あの独裁者とまで言われた人物ですら制御できないと匙を投げたのに、自分たちで管理できるなど到底思えないという結論に至ったのだった。
『しかし、暗殺という手段を取るとも思えないがな』
（そうだな……世界の食糧事情を加味して、人が住める領域を拡大する意味で宇宙辺りにでも進出しようかと言い出す輩は出そうだな）
『ほう、あのにっくきイワンの宇宙飛行士なるものが「地球は青かった」という言葉を残していたアレか』
空を駆る者としてルーデルはそう口に出したが、宇宙に興味があるという雰囲気は一切見られなかった。その理由を尋ねる前にルーデルが自ら口に出した。

『私はな、飛行機乗りとして風を感じたいのだ。風も起きないような場所に身を置くなど考えたこともない』
（そのとばっちりを俺は受けたんだが？）
『ははは……だが、エルンストは私に出会わなければ燻ぶっていただろうな』
（……否定はしない）
ハンスはまだ若いからこそ余地は多少あった。だが、これ以上伸びないまま周りに置いて行かれてたりしたら、自分は周りの環境を恨んでいたかもしれない。
力を持たないからこそ力を欲した結果、その力を得る代わりに背負う責任やデメリットを学んでしまった。奇しくもハンスは両方の立場を文字通り〝身を以て〟知ることになった。そのせいで、それまでの自分の理解が追い付かないほどに世界の実情を知った。
（何にせよ、罷り間違ってＵＳＮＡが暴走するなどということは起きて欲しくないが、油断はできない……帰ったら忙しくなりそうだ）
ホテルに戻ると、そのままベッドの上に寝転んで瞼を閉じたハンス。起きた時には未来の妻である少女が自分にしがみ付くように眠っているのを見て、大人しく二度寝する羽目になったのだった。

◇　◇　◇

卒業生組はパーティーの翌日、飛行機で東京に戻った。だが、在校生組は改めてグラスボートでクルージングを楽しんでいた。前回は乗組員として立ち回っていた悠元も客として甲板の上に寝転がっていて、その傍には深雪が座っていた。
「今回は『任務ではない旅行』になりましたね」
「いやー、これは流石にカウントしたくないんだが」
そもそも、剛三と波乱に満ちた旅行を経験している悠元からすれば〝まだマシ〟なのだが、こればかりは流石にノーカウントにして欲しくあると思う。すると、雫が飲み物を持って近付いてきた。
悠元は上半身を起き上がらせると、雫から飲み物を受け取り、深雪も雫から受け取っていた。
「何を話してたの？」

「ありがとう、雫。なに、今回の旅行を純粋な観光目的のソレと認識したくないだけだよ」
ＵＳＮＡの魔法結社騒動とスターズの演習場侵入に反魔法主義テロとの遭遇、イギリスでの古式魔法師騒動にパパラッチの拿捕、フランスでの映画現場の見学、スペインでは闘牛のアクシデントに巻き込まれ、イタリアとバチカンではマフィア絡み……欧米方面の一端だけでも数年分の事件に巻き込まれた気分でしかなかった。
中東方面では宗教過激派の〝聖戦〟に巻き込まれるわ、インド・ペルシア連邦では大亜連合の工作員を叩きのめし、オーストラリアでは正規軍の工作部隊に追いかけ回された。ついでに新ソ連では国家そのものに暗殺されかけたので、新陰流剣武術の奥義で書記長を全治数ヶ月の病院送りにしてやった。
国内はおろか、国外ですらまともに旅が出来ていない有様であった。
「……深雪と雫に今だから話すが、今回の任務は達也の交友関係の改善も頼まれていた」
「誰に、というのは野暮でしょうね……叔母様の仕業ですか」
「ま、ほのかにもいい加減覚悟は決めてもらわないと話にならない」
リーナ、佳奈、亜夜子、そしてほのか。達也との婚約関係を進めたいという魂胆は真夜ならやりかねないという謎の安心感を悟ったのか、深雪は一つ溜息を吐き、雫は親友の覚悟に対して辛辣に吐き捨てていた。
「そういえば、二人はいつ戻る予定なの？」
「明日の朝一には東京に戻ることになる。そろそろ入学式の準備の為に打ち合わせをしなきゃならんからな」
入学式に関する仕事は主に生徒会と風紀委員会の仕事だが、部活連も補助として手伝う必要がある。それに、来年度の新入生総代は悠元にとって最も縁のある人間だからこそ、その補助も担わなければならない。
例年ならば事前に準備を終わらせておくものだが、今回は任務のこともあって終業式の直後に東京を離れており、打ち合わせが全くでき

ていない。
　ただ、次の新入生総代が確定した時点で悠元から元新入生総代としてのアドバイスや答辞のことについて予め説明している。それが無かったとしても、三矢家には新入生総代経験者が多いので問題はないと踏んでいた。
「今年の総代はまた女の子だったんだよね」
「ええ、そうよ。雫も会ったことがある子ね」
「そうだね。悠元から見て妹さんはどうなの？」
「どうなのってなあ……詩奈は別の意味で常軌を逸しているとしか評価でききんのだが」
　別に貶す意味は含まれていないが、姉や母、そして悠元の影響を強く受け継いだ結果としてイヤーマフ無しでも生活できるレベルに達している。その護衛となる侍郎も一科生レベルの実力を得ており、今年の入試結果は詩奈が新入生総代、侍郎は次席という結果となった。
「三矢らしく育ったと言えばいいが……何故ジト目で睨まれないといけんのだ」
「悠元のことだから、何かしら魔改造してそうな気がする」
「どこかの特撮ものじゃないんだから、そんなことはしてないよ」
　侍郎に関しては最初の頃に魔法師らしい能力を与えただけで、それ以降は『領域強化（リインフォース）』による調整は施していない。詩奈は自分の聴覚制御技術を教えただけに過ぎない。流石に魔法の基礎知識が固まっていない状態で基礎能力を鍛える訳にはいかなかったからだ。
「それよりも、戻って最初にやることは引っ越しの準備なわけだが……当分は司波家とマンションの往復になるだろうな」
　来月からは悠元たちも最高学年の３年生となる。原作の知識が通用しなくなりつつあるが、それに関しては今更であると諦めている。だからこそ、固定観念に囚われることなく動けているわけだが。
　ＦＬＴの研究施設跡に建てられたツインタワーマンションは無事に完成したそうで、東京に居残ったりした面子は既に入居したらしい。
「それと、師族会議を開いて今回の事件の詳細を報告しないといけな

い。議長役も面倒なことだと思うよ」
「十代で師族会議の議長って普通じゃあり得ないけどね」
「そうなんだよなあ……まあ、とうに諦めたが」
ここまでに出来ることは全て仕掛け終えた。相手が情報を握るというのならば、別にそれで構わない。各々が信じるものが正しいという保証なんて誰にも出来ないのに、彼ら自身が手にしている情報という名の手札全てを彼らが信じ切れるという保証なんて誰も出来ないのだから。
師族会議をコントロールできる立場に立てたのは僥倖だが、他の師族がアクションを起こさないという保証などない。ただ、今のところは大筋の内容から大きくずれてはいない。顧傑が一時的に生存していた事実はあるが、最終的に顧傑はＵＳＮＡに殺されている。
九校戦での追加戦力から推測するに、結果の事象が大きく変わらなければ世界の修正力が強く働かない仕組みとなっている節が見られた。
ただ、今年のエイプリルフールに戦略級魔法『シンクロライナー・フュージョン』が使われる可能性は極めて少なくなった。その代わりに『トゥマーン・ボンバ』が使われる可能性が極めて高くなったことは事実だ。
「今回は事情が事情なだけに、国防軍との協力という部分は伏せる必要がある……『神将会』と警察省の協力で通すことになるだろう」
それは、師族会議が傍受されているという前提で考えた場合、あくまでも達也は『神将会』主導の作戦に協力したという体を取るのが彼の戦略級魔法を隠す意味でも理に適うと判断した。顧傑の件の面目躍如として国防軍を動かしたが、表立って動いているのはあくまでも警察省である。
その絡みで思い出したが、ラウラは正式にＵＳＮＡ側の許可を受けて帰化することが決まり、その引き取り先は何と三矢家となった。これは元々三矢元の父である舞元の縁によるもので、彼女の法的手続きが済み次第寿和の婚約者となることが決まった。
間接的とはいえエリカと義理の親戚の関係となるが、もし千葉家が

外戚として偉ぶるようならば「あたしがあのクソオヤジをぶん殴るわ」とハッキリ宣言しており、これには近くで聞いていたレオが深い溜息を吐いた。
「そういえば、あの子――――エフィアさんとちゃんとお話は出来たのですか？」
「こちらも既に納得した話だから、穏便に済んだよ。しっかし、眉の太さを除けばエイミィとあそこ迄瓜二つとはな」
事件解決後、エフィアと再会して話し合った。国としての政略結婚ということはエフィアも納得しており、それ以上に悠元と結ばれることをとても喜んでいた。結果として何が起きたのかといえば、深雪と水波、エフィアに雫の四人と一夜を過ごす羽目となった。
「そして、悠元が見事に骨抜きにしていたね。流石ジゴロ」
「褒められているのか貶されているのか分からんが……今年はもう少し穏便に過ごしたい」
男性としては冥利に尽きても、いくら体力が続いたとしても、やっぱり心のどこかでのんびり過ごしたい思いはある。ただ、現実問題として婚約者たちのご機嫌取りという責任が圧し掛かっている。
既に今年の４分の１が過ぎ去っている訳だが、こういうのも我が侭といえばそうなのかもしれない。
そもそもの話、自分はあくまでも「達也に敵対しない」という一点で魔法科高校入学まで過ごしてきたし、高校入学後も比較的大人しめに過ごしてきたのだ。いくら名字の肩書きがあろうとも、いくら実力があろうとも……力と言うものがどういったことを齎すか嫌というほど味わっているだけに、悠元が呟いた言葉は我が侭というよりも〝願い〟に近かった。
願いそのものが儚いと理解はしている。だからこそ諦めたくないというのは我が侭かもしれない。だが、簡単に諦められないからこそ人間という存在は成長し続けてこれたのだろう。
これから起こりうる時代のうねりを感じつつも、悠元は太陽を掴みとるように手を上に翳したのだった。

激動の時代・孤立編

エイプリルフールであってほしかった魔法

東京・町田にあるＦＬＴ。その北にあった研究施設の跡地には、見るからに高級マンションと言わんばかりの建物が聳え立っていた。名称は「ＦＬＴツインタワーマンション」で、上泉家お抱えの土木業者によって半年で建てられた。土地の名義は悠元が持っており、実質的な大家として家賃収入も得る形となる。

下層はＦＬＴの職員・事務員寮として機能することとなり、上層は南側が達也の婚約者、北側が悠元の婚約者たちが住むことになる。そして、悠元は東京に帰って真っすぐ向かうと、そこには見知った顔がいた。

「お、悠元。相変わらず時間通りね」

「エリカ。それにレオも済まないな」

「気にすんな。ま、引っ張り出されたのは事実だが」

実は、レオはＦＬＴで肉体労働事務兼ＣＡＤテスターのアルバイトをしており、その誼でマンションの下層に部屋を借りることができた。将来はＦＬＴの職員として働かせたい思惑があるのかもしれない。そこにエリカともう一人の女性――――宇佐美夕姫も転がり込んでいる形となるらしい。

「別にいいじゃないの、どうせ暇だったんだし。で、荷物はそこまで多くないのね」

「将来的にはだし、段階的に運び入れないと大変だからな。他の面々はもう来てるのか？」

「そうね」

二人に案内される形で北側のマンションの中に入ると、悠元は一番奥のエレベーターのコンソールに自分の学生証カードを翳すと、ロックが解除されてエレベーターの扉が開く。

このマンションの上層に通じるエレベーターは自身を証明するＩＣチップ内蔵カードが無いと使えないようになっている。今は学生

の身分なので魔法科高校の学生証を使用しているが、将来的には国家魔法技能師のＩＤカードで通す形にする予定だ。
　地上４０階、地下５階の４５階層のうち、２１階から４０階までが婚約者の為の住まいとなっていて、エレベーターは１階から２１階までノンストップで稼働し、後は各階で停まれる様になっている。悠元はそのまま自室がある４０階に移動すると、その部屋にはここで暮らす婚約者たちが揃っていた。
「あ、悠元お兄ちゃん！　おはよう！」
「おはよう、アーシャ。ミーナはそう拗ねないの」
「一番を取られたからと言って拗ねてないもん」
「普通に拗ねてるんだけどね……」
　いの一番に悠元へ抱き着いたのは序列第八位の三矢アリサ。それを第九位の遠上茉莉花が恨めしそうに見ていて、これには第六位のエクセリア・シールズ（帰化して九重瀬理亜（ここのえせりあ）と名乗っているが、本格的に名乗るのは高校を卒業してからと決めている）が苦笑を滲ませていた。
「お疲れ様、悠元君。沖縄の事件に巻き込まれたと聞いたけど」
「深雪に聞いたんですか……ええ、特に問題はなかったですよ」
「悠元さんなら問題はなさそうですが、敵に少しだけ同情してしまいますね」
「全くじゃな」
　第五位の津久葉夕歌からの言葉に誰が伝えたのかを察しつつも返し、その言葉に第七位の一色愛梨が敵を憐れむようなことを呟くと、第四位の四十九院沓子が同意するような言葉を述べた。
　愛梨と沓子が第三高校の在籍という部分は変わらないが、将輝のように端末での座学をすることに加え、実技と体育は第一高校のカリキュラムを受講することで単位認定する方向で話が付いているらしい。なので、九校戦では敵同士として戦うことになる。
「お疲れ様です、悠元。エリカと西城君もありがとう」
「気にしないでよ、姫梨。どうせコイツも暇だったし」
「否定はしねえが……悠元、正直助かる」

レオからすれば、同性が誰もいない状態だったので悠元の存在が有難く見えているのだろう。これには苦笑を禁じえなかったが、ソファーに座って姫梨が淹れてくれたお茶で喉を潤した。
「深雪と雫は一緒じゃないんですね？」
「ああ。深雪は入学式の打ち合わせというか顔合わせで学校に行ってるし、雫は北山家で両親と交渉中だ」
来年度の新入生総代である詩奈との打ち合わせのため、深雪は生徒会長として学校に行っている。付き添いは水波にお願いしているので問題はない。雫のほうはこのマンションで住めるように北山家で両親と話しているらしい。
深雪は原作だと調布にある四葉家のビルに居を移したが、ここのセキュリティーは魔法的な部分も相まってそのビルよりも格段に上となる。
「……一応話しておかないといけないことだが、母上の策謀で愛人が三人いる」
「一人は桜井さんというのは知っていますが」
「わしが知っておるのは確か第一高校の保健医だったかの……あと一人は誰なんじゃ？」
「――司波深夜。俺の婚約者序列第一位の母親だ。彼女は俺の能力を知っているために母上が神楽坂家の専属使用人兼愛人にしたんだ」
驚きとかは見られたが、特に怒ったりするような素振りは見られなかった。寧ろ「そうなっていたとしても不思議ではない」という感じであった。これに関しては遺憾の意を示したい。
「それだけ抱えてもフォローしきれる悠兄も十分凄いけど」
「婚約者が１４人というだけでも正直食傷気味だよ……ちなみにだが、序列第十二位のエフィア・メンサーと一桁台、愛人たちにしか手を出していない」
「そうなると、残るのは一条家、七草家と五輪家だけってことね……まあ、理由は分かるけど」
第十位の七草泉美、第十一位の一条茜、第十三位の五輪澪、そして第十四位の七草真由美。各々事情があるだけに手を出していない。

別に魅力がない訳ではないが、家の事情が大きく絡んでいるだけに尚更だった。
「……正直、関与しない立ち回りをしたら逆に興味を持たれたことばっかりだ。面倒事なんて御免被るんだがな。下心だって同年代の男子と同じぐらい持ってるわけだし」
「あはは……一線を引いていたからこそ、接しやすいと思われたのかもしれませんね」
「あ、それは分かるわ。千葉の娘だって色眼鏡で見なかったから割と話しかけやすかったし」
「さいですか」
法律以前に道徳の面で大きく逸脱しているし、前世の価値観の一部が残っている為か一夫多妻という状況に中々慣れない。ちゃんと話し合って時間を作ってはいるが、少ない時間で濃密な内容を過ごせてる、と婚約者たちは満足しているように見られた。
「悠元、お前は本当にすげえよ。俺だったら間違いなく逃げてる」
「二人を相手にしているレオも大概だと思うぞ、俺は」
エフィアは今日入居する予定で、雫は4月に入ってからの予定らしい。深雪については司波家との往復を考えて現状維持だが、今後はこちらに居を移すことも想定されるだろう。澪については『十三使徒』という関係で東京の五輪家別邸にいることになり、泉美と真由美は入学式の後になると連絡を貰っている。
レオとエリカが帰った後、どういったことになったのかといえば……引っ越し祝いの軽いパーティーとなり、途中で帰ってきた安宿怜美が持ち込んだ酒類によって、とても表現できない展開となった……倫理的な最終防衛ラインは死守したとだけ述べておく。
◇　◇　◇
――西暦２０９７年４月１日。
この国において、象徴たる天皇の即位式が執り行われた。その儀式の後、新天皇による護人・十師族当主の任命式が執り行われることになり、その後は迎賓館で臨時の師族会議を開く予定であった。
迎賓館の会議室に揃ったところで、当主達は膨大なサイオンの波動

を感知して表情を強張らせた。その中で、先に席に着いていた元継は隣に座る悠元に話しかけた。
「大規模の魔法による想子波動……ロシア方面か？」
「感覚的には間違いないかな……これはまた派手にやったものだ」
悠元が手に持っていた端末には、モスクワ近郊の惨状がありありと映し出されていた。魔法発動地点をモスクワから郊外に向けて移動する正規軍の姿がハッキリと見えていた。
元継は悠元の固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』と『領域強化（リインフォース）』を知っており、悠元の端末に映し出されている映像もフェイクではないと理解している。
現状から導き出される答えは、新ソ連が戦略級魔法を用いて反乱軍を爆撃し、正規軍で追撃を掛けている形だと推察した。その上で、悠元はまず他の当主達に席へ座るよう促した。
「先程の大規模な魔法発動兆候ですが、どうやら新ソ連の首都であるモスクワ近郊で発動した模様です。規模からするに、恐らく新ソ連軍の魔法とみるのが最も可能性が高いでしょう」
悠元は端末を操作して、会議室のモニターに情報を開示する。つい先程の出来事だというのに、それらを瞬時に解析して開示できる技術は現行の水準を遥かに超えている。これを見た三矢元は悠元の固有魔法によるものだと理解しつつ、それを問うような真似は避けつつ、その魔法が使われた背景を口にした。
「確か、新ソ連方面では人間主義者が反体制派と組んで暴動を起こしているという情報を掴んでいますが、今回はその〝報復〟とみるべきでしょうか？」
「可能性としてはそれが最も高い。尤も、それが片付いた先に我が国へ矛先を向けないとも限らない。佐渡への二度にも亘る侵略未遂行為があるからな」
新ソ連は欧州、中央・東アジアの国々と国境を接するが、因縁の度合いで言えば日本に矛先を向けてくる公算が高い。反体制派の粛清を終えれば、次は攻めきれなかった日本を狙ってくる可能性が極めて高い。

特に現国家元首はかつて悠元に辛酸を舐められた。その悠元が日本の中枢に近い人間だと知れば、敵視して軍を送り込んでくるとみている。これに反応したのは東北西部・北陸を守護する一条家当主、一条剛毅であった。

「上泉殿、また佐渡が狙われる可能性があると仰るのですか？」

「ウラジオストク軍港は使えないが、極東方面の他の軍港は未だに健在だ。オホーツク海の流氷が引いていけば、千島列島・カムチャツカ半島方面の軍を動かすことも可能だからな」

元継からすれば、悠元に敵対する方が計り知れないリスクを背負うことだと判断していた。当人の実力は、稀代の武人と謳われた祖父の技を全て受け継いだだけでなく、魔法もかつて名を馳せた安倍晴明の再来――『今晴明（こんせいめい）』とこの国の古式魔法師の間で噂されるほどに極まっている。

そんな弟相手に軍隊を送る方が〝正気を疑う〟としか言いようがなかった。５年前の沖縄防衛戦では、大亜連合の沖縄方面侵攻軍の約８割を彼一人で壊滅させたのだ。そこから魔法と武術を研鑽し、アフリカでは祖父と共に大亜連合の１０万の兵をたった二人で退けた。

その気になれば、かつて剛三が成した大漢軍の大虐殺劇すら超えるだろう……と元継は弟を敵視しようとする相手を思わず同情したくなった。自分を引き上げてくれた弟に感謝する意味でも、悠元が敵対する相手に容赦する気など皆無だが。

すると、次に口を開いたのは七草弘一だった。

「それで、この報復に使われた魔法は何なのでしょうか？　モニターに映る情報からするに、感覚的には戦略級魔法にも思えますが」

「推測の域は出ませんが、少なくとも『十三使徒』レオニード・コントラチェンコの戦略級魔法ではありません。そうなると、現状魔法の実態が判明していない戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』の可能性が高いでしょう」

モニターには広範囲にわたる爆発の後が見られた。システムの解析結果によると酸素と水素ガスによる結合爆発であるという解析結果が表示されている。

悠元は以前、佐渡上空で『星天極光鳳(スターライトブレイカー)』を使用した際に『トゥマーン・ボンバ』の発動を受けたが、自身の戦略級魔法によって強制的に無効化した。その際に起動式データを根こそぎ読み取ったことで、『トゥマーン・ボンバ』を使えるようになった。

その事実を口にすると『神将会』のことを話さないといけなくなるため、口に出すことは避けた。悠元の言葉に疑問を持った七宝拓巳が彼に尋ねた。

「神楽坂殿は、新ソ連のレオニード・コントラチェンコの魔法を御存知であると?」

「私ではなく、祖父である上泉剛三からかの人物の戦略級魔法を聞いています。その魔法効果と今回の一件が一致しない為、新ソ連で恐らく判明していない戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』だと推測したまでのことです」

得られている情報を見ても、推定の死傷者数が1万人を下回る可能性は極めて低い。単に反体制派だけならばまだしも、最前線を張っていた正規軍の兵士も少なからず被害を受けている。現政府は反乱軍と繋がりがありそうな疑いがほんの少しであっても、容赦なく粛清したりしている。

ディアッカ・ブレスティーロ大統領との会談の際、ハンス・エルンスト大佐とも会話をした。その際にアリスが『ハンス・エルンストの中に誰かがいる』と教えてくれた。パラサイトというよりも守護霊(サーヴァント)に近かったので、祓う必要は無いと判断した。

その彼は一時期新ソ連の国内に潜入していたらしく、ナターリヤ・コントラチェンコとはその時に出会ったらしい。彼女の祖父であるレオニード・コントラチェンコは孫娘の身を案じてハンスに国外への亡命を頼み込んだ。

正直、ほんの少しの疑いで粛清する辺り、現国家元首の書記長の中にヨシフ・スターリンの精神がいたとしても冗談という風に笑えないだろう。

「一番の問題は、新ソ連政府がどういった発表をするか、でしょうね」

「そうですな、二木殿。四葉殿は如何お考えでしょう?」

「反魔法主義の存在はどの国家でも厄介な存在です。新ソ連が公表するにせよしないにせよ、当分は日本海側に目を光らせる必要があるかと思います」
山陽地方を守護する二木家当主こと二木舞衣の言葉に、九州地方を担う八代家当主の八代雷蔵が頷きつつも中部・東海地方を守護する四葉家当主こと四葉真夜に尋ねると、彼女は一番すべきことをハッキリと述べた。
ここに、山陰地方を守護している一色家当主――一色義道(いっしきよしみち)が声を発した。
「つまり、我ら一色家と一条家がその最前線を担う公算が高くなるということですか……場合によっては二家の共闘や協調体制を取らねばならなくなりますが、宜しいでしょうか?」
「ええ。他の方々も異存はありませんか?」
一色家は一条家に対する思いはあるだろうが、悠元の婚約者に愛梨が選ばれたことに加えて神楽坂家と一条家のトラブルで一歩抜きんでた形となった。その為、現当主である義道からすれば溜飲が下りた形となり、親族からの圧力も大分弱まったことに感謝していた。
師族会議議長選出の際に一色家が積極的に悠元を推薦したのは、その〝恩返し〟と言う側面も含まれていたのだった。
悠元の言葉に元継や他の十師族当主も頷いた。
「さて、その方針が決まったところで私から一つ報告があります。先日久米島沖人工島――西果新島における外国勢力の破壊工作未遂事件についてです」
元々、悠元が総指揮という形で作戦の骨子を務めていたので、誤魔化すのは簡単だった。
大亜連合軍の脱走兵捕縛の要請に基づき国防軍が共同作戦を行い、脱走兵全員を確保して即日国外追放としたこと。パーティーに参加予定だった民間人を拉致しようとした罪状で既に略式命令という形で刑が執行されたこと。
その事実に加えて、今回は慰霊祭の代表として派遣された三矢家代表(悠元)、四葉家代表(達也)が会場に潜入していたオーストラリア

軍の魔法師を拘束したという形にした。達也はジャスミン・ウィリアムズおよびジェームズ・J・ジョンソンに『ゲートキーパー』を仕掛けて魔法を封じていたので、その意味では十分功績に値する形とした。

「そのオーストラリア軍の魔法師は？」

「会場に護衛として来ていた警察省の魔法師が私の知己でしたので、身柄の拘束をお願いすることにしました。事件の翌日に略式で国外追放処分にしており、乗せた民間機が無事にシドニーへ到着したことも確認済みです」

明日には、日本と台湾、南アメリカ連邦共和国、インド・ペルシア連邦、アラブ同盟、そして東南アジア同盟による海上経済協定が締結される。そして、その同日には無政府状態であったアフリカに新たな国家が成立する。

激動の時代は、まだ始まったばかりであった。

神楽坂の兄と三矢の妹

僕は吉田幹比古。吉田家は天神地祇の教義に従って神祇魔法――――広義的には精霊魔法を扱う古式魔法の家柄に次男として生まれた。父から聞いた話では、吉田家は神道の名門として知られる「吉田家」の一派ではなく、古くを辿ればどこの村にも一人はいたであろう雨乞いの祈祷師がルーツだったそうだ。

ただ、そんな彼に一つの転機があった。それは、偶々村を訪れていた吉田家の人間が彼を気に入り、自身の娘と婚姻させたのだ。それを結び付けたのがかの剣豪である上泉信綱だったらしい。つまり、元々何の関係もなかったはずが本物の古式魔法の家として成り立ったということになる……というのを、家の蔵書が納められた倉庫を大掃除していた際に見つけた家系図で知っただけだけど。

次期当主である兄よりも喚起魔法に優れ、「神童」と持て囃されて高慢ちきになっていた僕だけど、中学3年の時の「星降ろしの儀」で僕は『風神』を呼び出した兄に対抗しようとして『竜神』を喚起した。その『竜神』の膨大な情報を浴びた僕は魔法の感覚が無理矢理引き上げられ、結果的にスランプへと陥っていた。

魔法科高校に二科生として入った時は、あまり積極的に関わりを持とうとも思わなかった。同じクラスになったエリカもそうだけど、佑都――――当時三矢悠元と名乗った彼が十師族という事実に加えて卓越した魔法技術評価を得ていることに、僕は思わず嫉妬した。

それから、暇と空いている教室を見つけては喚起魔法の練習をしていたわけなんだけど、それがきっかけで柴田さんや達也と出会い、そして悠元と再会した。彼が根本的に変わっていないことに僕の中で抱いていた嫉妬はいつの間にか霧散していた。

父の言い付けで渋々見に行くことになった1年生の九校戦では、悠元は数々の魔法を使って相手を圧倒した。しかも実戦経験のある三高の『クリムゾン・プリンス』を歯牙にも掛けず、モノリス・コード決勝でも彼を完膚なきまでに叩きのめした。

選手に選ばれなかった僕だが、新人戦モノリス・コードの人員不足

ということで達也の推薦を受ける形で急遽出場することになってしまった。悠元と達也――今にして思えば、十師族直系の二人と組むこと自体反則めいたようなものだった。その二人は互いに信頼しており、僕も二人と各々の関係があったから即席チームとは思えない連携を見せることができた。

悠元が古式魔法に関わる人間ならその名を一度は聞くであろう神楽坂家の次期当主となったことに僕は驚きを隠せなかった。十師族の名を捨てることに葛藤は無かったのかと尋ねたが、「あんな柵だらけの名に拘る必要性が皆無だ」と切り捨てていた。

そこについては、きっと現代魔法師としての彼に関わる何かの経験所以なのだろうと思った。その後にエリカから聞いた話で理解することになった訳だけど。

そんな僕も他人事では済まされない転機が訪れた。九校戦後、父から東道家の養子の話が来た。高校卒業までに結論を出してくれればいいので特に急ぎはしない、と言われたけど……横浜での戦闘後、僕はその申し出を受けることにした。

この家に居続けるのは難しいし、兄とは魔法の部分で対抗心を燃やしているとしても、それ以外の部分でいがみ合うつもりもなかった。その辺は力がありながらも三矢の家を離れた悠元に強く影響されたせいかもしれない。

翌年の正月に東道青波入道と直接会うこととなり、その際に同席した達也が四葉家の人間だということを知った。あの『触れてはならない者たち』の関係者と言うことに驚きはしたが、過去にあった四葉家絡みの事件のことを考えると達也と深雪さんが名字を隠すのも腑に落ちた。

何せ、悠元も高校入学前まで名を隠しており、それでも国防軍の襲撃を受けたらしい。その辺はエリカが知り合いから聞いた話を又聞きした形になるけど、そのことがあったからこそ達也たちを受け入れることもすんなりと呑み込めた。

その一方、青波入道の娘である佐那さんから猛烈にアピールされ、彼女の策略で柴田さんと彼女の二人と関係を持ってしまった。悠元

から『もしもの時の保険』として魔法を教わったとはいえ、僕は堕落するわけにはいかないと心に誓った。

何せ、複数人からアピールされても実力を保持するどころかさらに研鑽している前例が僕の近くにいたのだから。

◇　◇　◇

任命式後の臨時師族会議を終えた後、悠元は一度司波家に戻って第一高校の制服に着替えると、そのまま学校に向かった。あと数日で最上級生の三年生となるわけだが、感慨深いものというよりは季節ごとに厄介事を背負っているような気分であった。

何せ、1年の春に『ブランシュ』、夏は『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』、秋は『大亜連合』、冬は『パラサイト事件』。2年の春は『人間主義』、夏は『ローゼン・マギクラフト』、秋は『周公瑾』、そして冬は『顧傑』。

四季折々という言葉を決して当て嵌めたくないラインナップを今までよく乗り越えられた、と自分の中で太鼓判を押したい気分だった。

物語が平凡であればあるほど面白みがないというのは創作物の宿命だが、いっぱしの人間が求める人生なんてその対極に位置する平穏な人生なのだ。この考え方は前世で受けた経験によるものが大きいのかもしれないが。

それにしたって、これまでの国外絡みだと大亜連合や新ソ連、USNAにイギリス（オーストラリア）、ドイツやフランスと話題に事欠かない。別に望んでいるわけではないし、大体向こうの被害妄想に巻き込まれているようなものだ。

今までの歴史から見れば、死傷者数だけでみれば三度の世界大戦が顕著だが、欧州での戦争の数とそれ以外の地域での争いを比較したら雲泥の差になりかねない。

入学式の仕事は基本的に生徒会役員の領分の為、そこは生徒会長である深雪や生徒会役員の達也と水波が受け持つところだ。

風紀委員会や部活連はどうしてもフォローしきれない新入生の経路誘導（道案内）などの雑務をこなすことになるのだが、悠元の場合は深雪のフォロー役として買われていた側面があるために昨年同様

生徒会の手伝い要因として駆り出される形となった。
　その最大の理由は、今度の新入生総代が三矢家の人間という部分に起因していた。悠元は生徒会室の前に立つと、ベルを鳴らした。
「神楽坂だ。入っても宜しいか？」
『はい、遠慮せずにどうぞ』
　悠元が中に入ると、生徒会の深雪と達也、水波と泉美の四人。風紀委員会の幹比古と香澄（香澄は総代と顔見知りなので駆り出された）の二人。そして、新入生総代こと長野椎菜（ながのしいな）改め三矢詩奈（みつやしいな）が立ち上がると、悠元に駆け寄って抱き着いた。
「お兄様、お久しぶりです！」
「ああ。嬉しいのは分かるが、これからはちゃんと先輩と後輩の区別は付けるように」
「はい、分かっております」
　ますます女性として魅力的になっている詩奈の感触をその身に感じつつ、詩奈の頭を撫でた。いくら転生した身とはいえ、遺伝上は同一の親を持つ実の兄妹。なのでいくら詩奈が綺麗になったところで欲情するわけにはいかない。
　一時期のブラコン度合いから見れば大分マシになったが、それでも自分に対するスキンシップは変わらない。それを彼が嫉妬するわけだが、明らかに非生産的なことでしかない。
　周囲からは生暖かい目が向けられているが、深雪から「羨ましい」という言葉が漫画の吹き出しで出て来そうなぐらいの笑顔を向けてきている。それを察したので、そろそろ離れるように言い含めると、詩奈も深雪の様子を理解したようで距離を置いてくれた。
「というか、イヤーマフは付けたままなんだな。聴覚のほうは克服したと思ってたんだが」
「だって、お兄様がくれたＣＡＤですから」
　自分と詩奈が持つ異常聴覚――――本来人間が聞こえる範囲外の音まで拾ってしまう。これは魔法の知覚力が向上してきたと同時に表面化してきた現象で、それこそ対策なしで音に溢れた都会に出ようものならば、精神が狂いかねないほどのものだ。

診断してくれた魔法研究者は「自身の聴覚を常時強化する魔法を、無意識に行使している」と診断したが、魔法の兆候は見られなかったという。この時点で、サイオンに聴覚の機能を増幅させるという情報が認識されていないということになる。

固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』と『領域強化（リインフォース）』、それと『天神の眼（オシリス・サイト）』の実証実験も兼ねて自身の聴覚に関する情報を取得したところ、一般的な魔法師よりも周囲の情報を集めやすい――――周囲のサイオンやプシオンを利用しやすい体質であることが判明した。

どういうことかというと、魔法師は周囲のサイオンを認識して魔法を行使するが、大半の魔法師は自身の周囲にあるサイオンに内包された全ての情報を認識しているわけではない。

それは、魔法師の根幹となる『リンカーコア』の持つセーフティーによって無意識的に取捨選択を実行している。それと、身体を保護する『情報強化』の防壁が無意識的に発動しているため、普通の魔法師ならば魔法力を高めていけばおのずと周囲の情報からの防御力も上がる。

だが、先天的に魔法の感受性が高い人間はその防御力が極めて高い。普通に考えれば、防御力が弱いから異常体質だと思われるかもしれない。物理的な考えに基づけばその考えは間違っていないが、こと魔法的な考えに基づくとそれは逆になる。

分かりやすいのは自分や詩奈の異常聴覚。仮に魔法で聴覚を制御しようとした場合、物理的な音の減衰はメリットとなるが、デメリットとして魔法に対する感覚まで鈍くなってしまうのだ。

より詳しく調べた結果として、魔法師を守る『情報強化』が周囲の環境に対して防御面の過剰反応を起こし、『リンカーコア』にサイオンとプシオンが流れ込むことで常時活性状態を引き起こす。『リンカーコア』の内部で蓄積して情報過多となった二つの非物質粒子は、想子体に流れ込んで感覚の過剰反応を発生させる。その過剰な情報が肉体の五感にまで影響を与えることで感覚の異常活性を生み出していた。

プシオンで構成された精神体と実体の肉体、それを繋ぐ想子体のバ

ランスが最も重要視されることになり、古来の術者たちが厳しい修行を積むのは魔法を安定して使う精神力だけでなく身体を鍛えることも重要だと理解しているためだ。尤も、現代魔法において魔法師としての根幹そのものが蔑ろにされているわけだが。

閑話休題。

悠元自身、イヤーマフ無しの生活に至るまでに３年は掛かった。何せ、手探り状態から魔法知覚力の感覚制御をするという羽目になった。その経験と知識を詩奈にも教えたことで、彼女も２年で克服していた。だが、悠元からくれたイヤーマフ型のＣＡＤはメンテナンスやオーバーホールを繰り返しつつも大切に使っていた。彼女が長いこと使ってくれるようにサイズ調整機能も付けてはいたが、よもや１０年近くも愛用してくれるとは想定外だったのだ。

その間に色々魔改造を施しており、ＦＬＴが販売した思考操作型ＣＡＤのテストシステムを組み込んでいたりする。これは詩奈が長時間使用することで外耳に負荷がかかることを見越してのものであり、雛型自体は沖縄防衛戦の後で既に完成していた。

「詩奈がそうしたいならそうしててもいいよ。この学校でそれを咎める奴なんざいないだろうし」

「……ちなみにだけど、昨日お父さんからお姉ちゃんたちのことを聞いた」

「……詩奈。それは俺も歩んだ道だから」

詩奈が言いたいことを察し、「何とかなる」と言いたげに彼女の頭を撫ででやった。

その上で、悠元は深雪に視線を向けた。

「ところで司波生徒会長、打ち合わせは終わったのか？」

「はい。泉美ちゃんが頑張ってくれましたので」

「それほどでもありません。深雪先輩や悠元お兄様のお手を煩わせてはいけないと思ったまでですから」

悠元と詩奈の上――――総代経験者である元治、元継、詩鶴、佳奈、美嘉の五人が詩奈にアドバイスしていたらしく、答辞の内容も入学式として相応しい出来栄えだった。深雪は泉美を労うが、泉美はこの程度

など苦でもないと言い切るように断言していた。なお、2年生の入学式以降の話だが、泉美は七草の姓を捨てて六塚の姓を名乗る。表向きは六塚家現当主の養女となるため、燈也とは義理の叔父・姪という関係になる。

それは置いといて、打ち合わせ自体は既に準備を終わらせていたこともあって予定の時間よりも半分で済んでいた。在校生組はこの後も打ち合わせがあるが、詩奈はこれでお役御免という形になる。

すると、詩奈が思い出したように足元のスポーツバッグからピクニックに持っていくようなバスケットを取り出した。

「あの、折角だからとこんなものを作ったのですけど」

中には片手に乗るぐらいの大きさのパンケーキサンドが一つずつワックスペーパーに包まれた状態で入っていた。

三矢家は使用人の矢車家の人が料理などを担当するのだが、悠元は手先を鍛える意味で元の執事である矢車仕郎に教わっていた。北海道の矢車本家で居候中は長期休みの時だけ教わる形だが、その様子を興味本位で詩奈が見ていることがよくあった。

悠元が三矢本家に戻ってきてからは詩奈も手伝いという形で学ぶようになり、花嫁修業の一環と言うことで佳奈や美嘉も加わっていたし、侍郎も矢車家の人間として学ぶようにと手伝いをさせられていた。

なお、三矢家夫人こと詩歩から見た菓子類の出来栄えの評価は「悠元がプロも認めるほどにずば抜けて、詩奈がその次でしょうね」とのことで、これには悠元が不満を漏らしたのは言うまでもない。

「うわ、今日のも美味しそう！」

「詩奈ちゃんは本当にお菓子を作るのが御上手なんですね」

「それほどでもないですよ。お兄様には及びませんので」

香澄と泉美の誉め言葉に謙遜を示した詩奈。それを聞いた深雪の視線が悠元に突き刺さるのを感じた達也は悠元の肩に手を置いていた。すると、幹比古が悠元の手に持っていたものに気付いた。

「そういえば悠元、その包みは何だい？」

「これか？　詩奈に持たせるものというか、生真面目に護衛をやって

る弟分への〝差し入れ〟だよ」
　実は司波家へ帰る前に食材を適当に買い込んで、ほっといたら適当に食事を済ませてしまう弟分への弁当を作ったのだ。詩奈から渡せば彼も断らないだろうと踏んでのものだった。
「あ……侍郎君には私からちゃんと渡しますし、全部残さず食べさせますので」
「いや、普通の出来栄えの弁当だから……」
「悠元お兄様の手作りの弁当……」
　その会話だけで弁当が悠元の手作りという事実を周囲の人間が知ることになるわけだが、そこに食いついてきたのは言うまでもなく泉美であった。その一方、どう反応すべきか分からない表情をしているのは深雪だった。
「深雪姉さま？」
「何故かしら……羨ましい気持ちとズルい気持ちが共存しているのよ」
「……（まあ、分からんでもないな）」
　菓子作りだけでなく、料理も一級品の出来栄えのものを生み出してしまう神楽坂家現当主。まるで魔法の如く美味しいものを生み出す彼に嫉妬のような気持ちを抱いてしまう深雪の気持ちが少しばかりわかるような気がした達也であった。

背伸びしたくなるお年頃

詩奈が作ったパンケーキサンドは在校生たちに好評で、詩奈自身も安堵していた。パラサイト事件の時に達也や深雪と知り合っているが、やはり四葉家の異名である『アンタッチャブル』は抜けきらないのだろう。こればかりは時間で解決していくしかない。

「悠元さんは詩奈ちゃんを送り届けなくていいのですか？」

「余り過保護になるのもどうかと思うからな。兄としても、妹が自立してくれるのが一番いいわけだし」

深雪の問いに返しながら端末に目を通すと、丁度速報という形で新ソ連政府の公式発表が表示された。日本語に翻訳された文章では『我々は国を脅かすテロリストに毅然と立ち向かう姿勢を見せるため、我が国の切り札を使用した。それが兵器なのか戦略級魔法なのかという問いに関しては、軍事機密上の観点から回答することはできない』との見解が示された。

正直、佐渡への二度にも亘る侵攻行為にあれだけ答えを渋っておきながら、今回はあっさりと認めた形になったことには意外であった。尤も、佐渡の場合は日本との国際問題に発展する可能性を秘めているが、人間主義者への〝粛清〟は最悪国内問題で片を付けることが十分可能だったからだ。

（『シンクロライナー・フュージョン』は使われなかった。しかし、明確にしなかったが『トゥマーン・ボンバ』が使われたことで戦略級魔法に対する心象的なハードルは下がったとみていい）

横浜事変の際、日本は二発の戦略級魔法を使用している。大亜連合方面に向かって使われた『質量爆散（マテリアル・バースト）』と、新ソ連方面に使われた『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』の詳細は伏せられたが、日本政府は戦略級魔法の使用を発表した。

魔法に対する恐怖を煽るデメリットは存在するが、特に沖縄方面で暮らす日本国民からすれば４年前に侵略行為を受けたばかりで精神的な傷が癒えていないところに横浜事変が起きた。数年で同一の国家から侵略行為を受けたという事実は拭いたくても完全には消え去

らない。
　別に中国大陸との諍いが今に始まったわけではない。過去の歴史から見ても、日本と大陸の争いは幾度となく行われてきた。その大本は朝貢による上下関係から発展した思想で、皇帝を擁した側からすれば東洋の小さな島国の国など属国だと見下す傾向が多かれ少なかれ存在した。それが大陸に根付いた宗教などと融合した結果、切っても切れない大陸人の気質が根付いたのだ。
　すべての大陸の人間がそうであるという断言はしないが、この国の人間をどう扱おうが構わないという気質が大亜連合や滅んだ大漢にもあったというのは、度重なる侵略行為や四葉家絡みの事件で立証されてしまっている。
「それは違う」と断言したいのならば、この国に対して土下座するぐらいの誠意を見せるところから始めないと土台無理な話だろう。前世で似たようなことを実行した何処かの輩みたいな『いかれた思想』でも持っていないと出来ないことかもしれないが。
　本来、抑止力の観点で言えば使わずに存在を仄めかすだけで相手を抑え込めれば御の字。だが、いくら耳にしたところで目の当たりにしなければ誰も信ずることができない。魔法以前に抑止力として使われた核兵器ですら、その威力の大きさと悪影響に原爆の研究者ですら反対を唱えたことからして、物事は必ずしも計算だけで弾き出せないのだ。
　核兵器を抑え込むために使われたものが、核兵器すら凌駕する抑止力になることは当然の帰結としか言いようがない。
　それに、相手が攻め込むという姿勢をした以上、相手を撃つという覚悟を示したも同然。大体、それ以前から海上でのレーダー照射という宣戦布告紛いの行動を起こしているにもかかわらず、攻めてこないという楽観視なんて本来してはいけない話なのだ。
『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』は『万華鏡（カレイドスコープ）』の特性ゆえに認識されなかったが、改めて国としての力を示す意味で戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を開発した。あらゆる物理法則ですら光速で動く粒子相手には無力。
　どこぞの人間のように速さが世の真理などと宣うつもりなどない

が。
『東アジアの独立国家として、かつて悲惨を極めた第二次大戦の悪夢を繰り返させない為、この国の殆どが瓦礫の山と化した悪夢を回避するために、我々は苦渋の決断として戦略級魔法の使用を決断いたしました』
誰も好き好んで自ら破滅を望む国家などありはしない。国を束ねる者として国家の安全を保障する意味でも魔法の力に頼る。小国だからこそ、周辺の大国に対抗できるだけの力を保持せねばならない。
結局、戦争になれば最終的に勝った側が〝官軍〟なのだ。それは過去の歴史において勝者に立った側が証明している。
大量殺戮・大量破壊の魔法の使用を正当化するべきではない、という意見も当然あった。その主な理由は周辺国家から戦略級魔法の攻撃を受けないかという不安視からくるものだ。しかし、何時まで弱腰でい続けられては困るというということで、悠元は魔法の行使者として内閣総理大臣に日本政府として戦略級魔法の使用を認めろと突き付けた。
横浜事変の時点で『トゥマーン・ボンバ』の発動を受けたことは事実だし、その後も『ヘビィ・メタル・バースト（ブリオネイク）』、『オゾンサークル』と二つの戦略級魔法が日本国内で使用された事実を突きつけた。これでいて専守防衛を語る様ならそんな仕事など止めてしまえ、と暴言を吐くように述べた。
現に、日本の戦略級魔法の存在を世界に知らしめた以上、ただ黙ってさえいればいいという時代などとっくの間に終わっている。沈黙など無言の肯定以外の何物でもないと見做される時代に、最早平和という言葉など紙切れ一枚の価値に等しい。
昼食の時間は専ら新ソ連政府の公式発表で話題が持ちきりだった。死傷者数が明確にされないが、各メディアの情報では約二万人前後にまで膨れ上がると報道されていた。単に人間主義者だけでなく新ソ連の正規軍にまで被害が出ているとすれば、そこまで膨れ上がっても不思議ではないだろう。
「……悠元はどう見る？」

「そうだな。単に敵意を挫くだけならここまで大規模の爆発を伴う兵器なんて逆に使用できない。そうなると、使われたのは戦略級魔法で間違いないだろう」
　大規模魔法の行使に伴う発動兆候は達也たちも感じており、新ソ連からの公式発表を鵜呑みにしている人間はこの場に居なかった。幹比古の問いかけに答えると、次に言葉を発したのは達也だった。
「今のところ判明していない『十三使徒』の魔法となると、新ソ連の『トゥマーン・ボンバ』になるな。その可能性を考慮すべきか」
「ま、俺らが直に関わる可能性は低いかもしれんが、十師族やそれに近い人間が無関係でいられるとは言えん」
「それは、私達が狙われる可能性があるということでしょうか？」
「有り得なくもない。何せ、５年前にあった佐渡侵攻で一躍有名になった『クリムゾン・プリンス』――――将輝は一条家の人間だ。新ソ連がその復讐を画策したとしても、不思議とは思えん」
　旧体制の時でも平気で不可侵条約を破って領土を奪っていった連中の名を持つ後継国なのだ。変な理屈を付けて攻め入ってきてもそれをおかしいとは思えない。それに、新ソ連は既に誓約を破った以上、彼らに遠慮する義理も道理もない。
　それでも敢えて手を出していないのは、日本の国家としての体裁を重んじてのことであり、許可さえ出れば今すぐにでもクレムリン宮殿に乗り込んで国家元首である首相を引っ張り出し、今上天皇と内閣総理大臣の前で土下座させる腹積もりだ。
　午後からの作業は暗い雰囲気もなく順調に進んだ。魔法を使ったのが原作におけるブラジルではなく新ソ連という点も影響してか、和やかに作業が進み、沖縄の任務で遅れていた分の入学式の作業は大分捗った。
　そもそも部活連会頭が生徒会の手伝いをすること自体今までになかったことだが、その理由はここにいない生徒会役員の一人――――ほのかが熱を出して寝込んだことによるものだった。
「悠元さん、誰かからのメールですか？」
「雫からだな。セリアと姫梨の二人と一緒に見舞いへ行ったらしい」

まだ海開きには早い時期に頑張って水着姿で誘惑したほのかだが、本人が恥ずかしさを堪えて頑張り過ぎた結果なので知恵熱の側面もあるのだろう。

そして、この場にいない理璃は壬生家へ挨拶をしに行っていた。学校が始まると忙しくなると踏んでのものであり、光宣との正式な婚約の為に光宣の今の両親と光宣の祖父である烈と会っている頃だろう。十文字家の方は先代当主の和樹とその妻が同席している。

本人たちにとって大事な事なので、そちらを優先させる代わりに悠元が一肌脱いだ形となった。

「理璃ちゃんが羨ましいです。私も悠元お兄様と恋人らしいことをモガっ」

「はいはい、はいはい。そういうことをここで言うんじゃないの」

余談だが、神楽坂家の婚約序列が確定したことで泉美が改めて深雪に挨拶をした。その際に泉美はこう述べた。

「うちの父親と呼ぶにも烏滸がましすぎる輩が深雪先輩と司波先輩、お兄様のご実家へご迷惑をお掛けてしまい、大変申し訳ございません。この身はお兄様に委ねますので、焼くなり煮るなりお好きにしてください」

オブラートというか、明らかに実の父親をここまでするかと言わんばかりの罵倒の意味合いも含んだ謝罪に、深雪はおろか悠元と達也までドン引きしていた。深雪は困って悠元に対応を求めてきたため、悠元は泉美にお願いをした。

「なら、あの真由美(こあくま)を扱き使いたいんだけど、協力してくれるかい？」

「小悪魔……ああ、あのお姉様(どろぼうねこ)のことですね。お兄様の頼みならば、いくらでも協力いたします」

「……あの、達也先輩。どうしたらいいのでしょうか？」

「俺にはどうにも出来ない。諦めてくれ、香澄」

「あ、はい」

明らかに意思疎通している時点で二人が思い浮かべた人を察した香澄は達也に助けを求めたが、達也の無慈悲とも言える言葉に香澄はただ頷くことしかできなかった。言うまでもないが、全てを察してい

た深雪の表情は満面の笑みを浮かべていたのだった。

◇　◇　◇

原作だと詩奈の達也や深雪に対する評価は兄や姉達から齎されたものだった。だが、姉の一人である佳奈は四葉家次期当主の達也の婚約者となり、兄の一人である悠元は達也の妹である深雪と婚約している。それに、一昨年夏と昨年の初め頃に面識を持っている為か、詩奈はそこまで深刻に考える必要も無くなっていた。

傍から見れば、深雪の人間離れしている風貌に詩奈も目を見開いていたのは事実だった。だが、あの『クリムゾン・プリンス』すら破った実力を有する兄の婚約者ならば〝妥当〟であると彼女は内心でそう思っていた。

身贔屓という側面があるのは否定できないが、それを抜きにしても三矢家現当主の血族でずば抜けた実力を有していることは事実で、祖父の上泉剛三が話した「大軍相手に圧倒した」という悠元の武勇伝に目を輝かせていた。

尤も、剛三としては詩奈の物差しで出来ることをすればいいと諭した上で厳しく指導をしているが、詩奈本人は憧れとも言える兄の存在を目指して研鑽を続けている。

この認識のズレがどういった結果を齎すのかは……神のみぞが知るのかもしれない。

「詩奈、お疲れ」

「侍郎君!?」

流石に正門前なので奇行と思われないように声量はとっさに抑えたが、それでも少し驚くような素振りを見せた詩奈に対して少年――――矢車侍郎（やぐるまさぶろう）は肩を竦めた。

「今日はそこまで用事が長引くこともないし、帰っていいって言ったのに」

「護衛が一人で帰ったらマズいだろう。俺が父さんに大目玉を食らうよ」

「それはそうなんだけど……」

詩奈と侍郎は誕生日が２日違いで、三矢家と矢車家の間柄もあって

実の姉弟のような感覚に近かった。その影響の一端は詩奈と歳が近い兄こと悠元の存在が関わっている。侍郎も詩奈が悠元に憧れる理由は理解していたが、何だか釈然としない気持ちをずっと抱いていたことは事実だった。

けれど、まともに魔法が使えなかった侍郎を変えたのは悠元だと父親から知らされた時、侍郎の中にあった悠元に対する評価も大きく変わった。その転機は同時に侍郎の苦労の始まりでもあった。

「……その様子だと、悠元兄さんにも会ったのか？」

「え、何で分かるの？」

「何でって、表情が緩んでるから。そういう時の詩奈が誰に会ったかなんて一番分かりやすいからな」

悠元の影響は詩奈が自ら武術を学びたいと志願したことに始まった。元々三矢家の勧めで新陰流剣武術を学んでいた侍郎だったが、メキメキと実力を上げていく詩奈に遅れは取りたくないという思いでより一層鍛錬に励むようになった。それは男性としての矜持というよりも、一人の女性に恋をする男性としての意地ともいえるようなものだった。

「てか、聞かないの？」

「聞くって、何を？」

「その、司波会長や司波先輩のこととか？」

「聞いてどうにかなる問題じゃないだろ？　なら、精々刺激しないように立ち回ることしかできないだろうに」

侍郎は一時期魔法の実力が伸びなかった。だが、その枷を壊してもらったからこそ、己を律しようと決めている。あの四葉家の人間となれば多少の警戒は必要かもしれないが、侍郎だって全く知らないというわけではない。

「さ、早く帰りましょうか。詩奈お嬢様」

「……無理にお兄様のように背伸びしなくても、侍郎君は立派だと思うよ」

「う、うるさい……」

ここだけの話、矢車本家から愛人を娶るという話が来た際、詩奈の

機嫌がすこぶる悪くなってしまい、侍郎はご機嫌取りに3日ほど時間を費やした。

ラグ無き事態の発露

戦略級魔法に対する感情が噴き出す為の火種が燻ぶっていたのは、何も今に始まった事ではない。魔法に限らず、新たなものが生まれるということは古きものとの対立を生む。宗教・習慣・文化・言語――――果ては人種に至る多様な変化は、そういった対立の名残によって生じたものだ。

反魔法主義の運動は、単に魔法という存在に恐怖しているだけでなく、現在の社会に対する不平不満のはけ口として機能していた。核兵器に成り代わって政府がコントロールできる〝兵器〟というのが、魔法を使うことのできない人々にとっての納得しうる前提であった。

だが、今回新ソ連が使ったと思しき兵器が〝戦略級魔法〟という推測は、瞬く間に全世界を駆け巡った。その根拠として挙げられたのは、成層圏プラットホームで検知された大規模の魔法発動の発動兆候とその痕跡に他ならず、日本はもとよりＵＳＮＡや東西ＥＵ、インド・ペルシア連邦、アラブ同盟、そして南アメリカ連邦共和国の政府高官が相次いで『新ソ連が戦略級魔法に相当する大規模の魔法を使用した』という見解を発表した。

ここまで多くの国が相次いで見解を発表するなど異例のことだが、この背景にあったのは世界群発戦争で永らく無政府状態となっていたアフリカ大陸に新たな国家が成立したことだ。

『今日のこの日を、我々は決して忘れてはならない。今こそアフリカの地を我々の手で豊かにせねばなるまい！』

エジプトとモロッコ、フランスが領土としているニジェール・デルタ以西の地域を除くほぼ全ての国家を統合し、アフリカ民主主義共和国連邦（以後はアフリカ連邦と呼称）が成立。首都は南アフリカ共和国（２０世紀において白人優先政策から解放された名残で選ばれた）の首都であったケープタウンとし、更にはサハラ砂漠の耕地化計画を大々的に発表。

この技術供与にオーストラリアの全面協力を受けてのものだと発表しただけでなく、永らく鎖国政策で国外に出ることのなかったオー

ストラリア首相と握手を交わす様子がリアルタイムで全世界に放映された。
それと時を同じくして日本、台湾、インド・ペルシア連邦、アラブ同盟、東南アジア同盟、南アメリカ連邦共和国、そしてオーストラリアとアフリカ連邦による紅海とインド洋・南シナ海の海賊対策を主眼とした大洋南部経済連携協定（Ｓｏｕｔｈｅｒｎ　ｏｃｅａｎ　Ｅｃｏｎｏｍｉｃ　Ｐａｒｔｎｅｒｓｈｉｐ　Ａｇｒｅｅｍｅｎｔ：ＳＥＰＡ）――通称：横浜協定が締結された。この協定によってオーストラリアは東南アジア同盟へ加盟することになり、アフリカ連邦はアラブ同盟、インド・ペルシア連邦と友好条約を締結して魔法技術の全面的なバックアップを受けることとなる。
世界情勢の変化と新ソ連で戦略級魔法が使用されたという各国の見解。これらの要素が戦略級魔法に対する心理的障壁の崩壊を促す引き金となり、それを理解した人々はヒステリックにも近い反応を見せることとなった。
幸いにして、日本では大々的な改革とテロリストの摘発でその芽は限りなく摘み取られてしまったため、顧傑に関する事件以降は完全に小康状態となっていた。だが、日本の外では楽観視など許されない事態が起きていたのだった。
――西暦２０９７年４月２日。
入学式の準備で出掛けた深雪と達也、水波を見送った悠元は司波家で客人を迎える支度をしていると、丁度呼び鈴が鳴ったので玄関に出向く。扉を開けると、そこにはリーナがいた。
「呼び出して済まないな。達也たちは学校に行ってていないが」
「まあ、そういう時期ってことはセリアから聞いてたから。えっと、お邪魔します」
達也と深雪には事前にリーナを司波家へ招き入れることを話している。悠元はコーヒーを淹れてソーサーとカップをテーブルに置いた。リーナがコーヒーを一口付けてカップを置いたところで声を発した。
「それで、わたしに話って？　達也や深雪に聞かせたくないことなの

？」
「聞かせたくない訳じゃなく、一先ずリーナには先んじて知ってもらいたい情報だからな。キャビネット、コード〝タイタン〟オープン」
悠元の言葉でモニターの電源が入り、そこにはＵＳＮＡの情報が表示された。司波家の情報端末には悠元が２つのコードを仕込んでおり、〝イクシオン〟は国内・国防軍の動きを把握するための情報収集システムが、〝タイタン〟は国外の情報を収集するための機構が備わっている。仮に『フリズスキャルヴ』もとい『エシェロンⅢ』で覗こうとも、特殊な暗号記述によって解読するにも最低で１０年以上は掛かる代物となっている。
悠元が手元に仮想コンソールを表示させて、必要な情報を表示していく。
「現地時間の昨日１０時前、こっちの時間で今日の真夜中のことだが、北メキシコ州モンテレイで大規模な反魔法主義団体による暴動が発生した。これを鎮圧するために州軍が出動したんだが、一部の兵士が反発して発砲。その面々は暴徒に合流してしまった。発砲による死傷者は出ていないようだ」
北メキシコ州というのはメキシコがＵＳＮＡに吸収された際に出来た行政区分で、北回帰線以北でバハ・カリフォルニア半島を含む北メキシコ州、メキシコシティを中心とする南メキシコ州、テワンテペク地峡からユカタン半島にかけての東メキシコ州に再編されていた。
「州軍（ナショナルガード）が暴徒に合流!?　何でそんなことが起きたの!?」
「その原因なんだが、どうやら州軍と一緒に『ウィズガード』が出動していたようだ」
「反魔法主義の鎮圧に低レベルの魔法師で構成されたウィズガードをって……そんなの、火に油を注ぐ様なものじゃないの」
州軍（ナショナルガード）は州政府に所属する、〝魔法師兵力を含まない〟治安維持部隊。
ウィズガードはスターズ候補になれなかった低レベルの魔法師を集めて結成された、連邦政府指揮下の国内向け治安維持部隊。

同じ目的の部隊とはいえ指揮系統が異なり、しかも魔法師部隊とそうでない部隊が反魔法主義の鎮圧に乗り出そうとした……明らかに指揮系統の連携が取れないことを分かっていながらやったとした思えないお粗末さだった。
「一体誰がそんな命令を出したのよ。わたしでも流石に止めるし、セリアなら犠牲を伴ってでも制止するわ」
「そこまではまだ調べがついていない。だが、明らかに拗れると分かっていて『ウィズガード』を派遣した節があるのは間違いない」
何せ、USNA国内の人間主義の矛先を同盟国に向けさせるためにテロリストすら利用する連中だ。政府の人間すべてがそうであるという断言はしないが、軍部には未だ悠元や達也の戦略級魔法を排除しようと目論む人間がいるのも事実であった。その事実からすれば、国内の反魔法主義を焚き付けることで自らも被害者だと見せるアピールが出来る。
「それってどういうこと？」
「暴徒に合流した兵士は魔法師に否定的な思想を持っている者が多いようだ。なので、反魔法主義の暴動に対して穏便に鎮圧しようとしたのだろう。暴動を起こした側とも意思疎通が出来ていたようだ」
「そこにウィズガードがしゃしゃり出てきて、余計に拗れたと？」
「そういう解釈になるだろうな」
「バカじゃないの……」
ウィズガードの名称が「ウィザードガード」を縮めたものであり、『善の賢者』というニュアンスを持つウィザードの名が泣くだろう、という意味合いを込めたリーナの愚痴に悠元も苦笑を禁じえなかった。
すると、リーナは気になることを尋ねた。
「ねえ、スターズは動くのかしら？」
「ふむ……流石に暴徒の鎮圧には加わらないが、包囲されているウィズガードの救助任務として動くようだな。ベンジャミン・カノープス少佐がそのリーダーとして派遣されるみたいだ」
「ベンなら適切な人選をするので問題ないわね」
モンテレイの主要行政機関は暴徒と叛徒の手に落ちている為、場合

によっては他の州から応援として州軍が派遣されることになる。流石に魔法師部隊を必要以上に派遣してこれ以上感情を悪化させるのは回避したいようだ。
「……リーナ。今回の一件だが、恐らくウィズガードを派遣するよう指示した人間と反魔法主義を焚き付けた人間はほぼ同一の存在、あるいは同じ派閥に属する軍部の人間の可能性が極めて高い」
「……えっ!? どういうことよ!?」
原作だとブラジルの戦略級魔法使用の公言が遠因となって起きているわけだが、タイムラグが僅か17時間という短い期間で二つの事象が連動するように動くなど考えづらい。
仮にモンテレイの暴動が突発的に起きたとして、緊急出動が真っ先に掛けられるのは州軍が最優先となり、万が一魔法による被害が増えるようならばウィズガードの派遣、それでも鎮圧がダメな場合はスターズにまで話がいけばいいのだ。
今回の場合、新ソ連で魔法が使われたのが式典後の臨時師族会議の直前なので10時ごろ、暴動が起きた時間を考えるならばほぼ同時のタイミングで起きたことになる。
「仮に今回の暴動が新ソ連で使われた大規模魔法を遠因とした突発的なものだとしたら、タイムラグがほぼない状態で起きたことになる。新ソ連のスパイが引き起こした可能性もなくはないが、仮にそうだとしたら何もメキシコじゃなくてワシントンやニューヨークで暴動を起こせばいい話だ。モンテレイで起こす意味があるとしても、USNAが西海岸へ視線を向けることになって新ソ連にとっては逆効果でしかない」
「まあ、それは確かに……」
そもそも、原作のブラジルがいくら劣勢とはいえ『シンクロライナー・フュージョン』を使った際の影響がどれほどになるかなど分かり切った話だ。政府の人間も反魔法主義の悪影響を考慮して反対意見もあっただろう。だが、ブラジルは『シンクロライナー・フュージョン』を使用し、それを武力解決の手段として公言した。
「突発的な暴動なら北メキシコの州軍でいいし、もし人手が足りなけ

れば他のメキシコ州から応援を寄越してもらえばいい。反魔法主義者に魔法を使う人間がいるとなれば、その段階でウィズガードかスターズを派遣して鎮圧に乗り出せば被害が少なくて済んだはずだ。そうしなかった結果として、モンテレイの主要行政機関は暴徒たちに占拠されてしまったようだからな」

「なんてことなの……」

そこまで強気でいられた理由を考えるとするなら、誰かがブラジルの戦略級魔法の使用に後押しをした可能性が極めて高い。それも、ブラジルが無視できないほどの影響力を有する人物か存在が。

更に付け加えるとするならば、被害の隠蔽に対してあっさり梯子を外すことで反魔法主義を煽り立てようとすることが出来る人物。

その行動によって、誰が一番得をするかを考えた際……それらの事象の先にある計画（プラン）でこの国の戦略級魔法を排除できると睨んでいる存在しかいない。

「じゃあ、仮に悠元が言っていることが本当だとして、その黒幕は何が目的なの？　態々自国の反魔法主義を焚き付けるだなんて、下手すればＵＳＮＡにも少なくない傷を負うことにもなるというのに」

『灼熱と極光のハロウィン』――それに用いられたこの国の戦略級魔法の排除。どうにも海の向こうの軍人連中は諦めてないらしい」

「一時でも被害者面をして、そこから魔法師を救う神様気取りになるって……わたしも無関係でいられない話じゃないの」

原作だと大々的に謳われたあの計画には〝重大な欠陥〟が存在する。その事実に彼が気付いて修正するようならば更に対策を考える必要はあるが、こちらからすれば押し売りの名誉など必要ない。

それに付随する厄介事やトラブルを経験した身からすれば、たかが高校生に大の大人が『大人気ない』ことをしている時点で恥ずかしいと思わないのだろうか、と言いたい。

それでも説得してくるようならば、誰の目から見ても分かる〝実利〟を提示してもらわないと話にならない。誇りで腹を満たせる生き物がいるとすれば、それは最早人間ではなく〝仙人〟と呼称すべき存在であるのだから。

「まあ、多分リーナはどう足掻いても巻き込まれる可能性が高いだろう。何せ、スターズの軍籍は抜かれても『アンジー・シリウス』の軍籍は残ったままなんだろうし」
「何で知って……いや、悠元なら掴んでいてもおかしくないわね。その通りよ。じゃあ、わたしがまたＵＳＮＡに戻される可能性があるってこと？」
「ＵＳＮＡの人間かつ軍部に属している人間で四葉と繋がりがあるのはリーナとセリアだ。ダラスが解体されていない以上、パラサイトの件が再発する可能性もゼロじゃない。最悪スターズ全部がパラサイト化することも想定しておけ」
「……そんな未来になったら、私は本気でＵＳＮＡを見限るわ」
　原作では『スターダスト』と『スターズ』の一部がパラサイト化による影響を受けている。この世界の修正力を考えた際、最悪のシナリオ――――ＵＳＮＡ全てがパラサイト化することを考慮して動くことも考えなければならない。だが、パラサイトの場合はそれが限りなく出来ない状態になっているとみられる。
　その根拠は『アリス』から齎された情報。パラサイト憑依にかかるコストが大きすぎるために、憑依自体を乱発できないだけでなく、憑依に適した想子構造体を有する人間でないと適合できないとのこと。
　それと、マイクロブラックホール発生時の憑依は一時的に重力の壁が開いた状態の為にパラサイト側が無尽蔵のエネルギーを自由に使えるため、そこまでのリスクが生じない。だが、一度憑依するとプシオンの総量が憑りついた対象の容量に依存してしまい、場合によっては自身の仲間を増やすのに必要なコストが跳ね上がる。
　パラサイト事件で彼らが無秩序に仲間を増やせなかったのは、この部分が大きく影響しているためだ。
「何にせよ、向こうの軍部や愛国者たちは諦めていないし、顧傑を焚き付けたのはＵＳＮＡの政府関係者だし、反魔法主義の勢いはこの国だと弱い。欧州方面ではデモも起きているようだ」
「今サラッととんでもない事実が出たんだけど……あのジード・ヘイグを焚き付けたのがステイツの政府関係者って本当？」

「ああ。ベンジャミン・カノープス少佐の親族であるケイン・ロウズ氏をはじめとした一派がな。盗まれた兵器の残骸は神楽坂家のほうで全部回収した上、それを廃棄した連中から裏付けは取れている」
「……わたし、このまま日本に居続けたいわ。寧ろ帰化したい」
リーナからすれば、身内の処分をしたカノープスに同情しつつも、まさか祖国の内部でマッチポンプをして同盟国の日本を貶めようとした事実に本気で頭を抱えたくなっていた。こうなると、セリアから持ち掛けられていた話を受け入れるのも一つの手ではないか、と思い始めていた。

シュミットの懐疑、コントラチェンコの懸念

東ＥＵ――――ドイツ連邦、ベルリン。現地時間４月３日１０時３０分、日本時間同日１７時３０分。

ベルリン大学（ベルリン自由大学より改称）では、魔法共存派と魔法排斥派の学生たちが各々デモ隊を結成し、校内で衝突を繰り返していた。現状暴力的な行為に及んでいるような様子は見られないが、口喧嘩とも言える罵り合いがいつエスカレートしてもおかしくないと誰もが思っていた。

排斥派はともかくとして、共存派の受け容れてやるべきだという主張を聞くに、魔法師からすればどちらの論調にも加担したくないと嫌悪感を示す有様だった。

口論が最早論理的とは言えない口げんかに変容した有様を、大学教授の一人で『十三使徒』の一角を担うカーラ・シュミット教授はモニター越しに見ていた。窓際でそれを見ようものならば、何かを投げつけられるかもしれないと思っての行動だった。

銃弾どころか砲弾が飛んで来てもおかしくはない……そう苦々しく思いつつモニターから目を離したところでヴィジホンの呼び出しサインが瞬いた。シュミットは音声で遠隔操作するのではなく、自らの手でコンソールを操作した。

『おはよう、シュミット教授（プロフェッサー・シュミット）。ご機嫌は如何ですかな』

「マクロード教授（プロフェッソア・マクロード）……ご無沙汰しております。私はお陰様で、肉体的には健康です」

モニターに映る人物――――ウィリアム・マクロードの挨拶に対してシュミットの言葉に少しの間があったのは、彼と連絡を取るのが随分と久しぶりだったからだ。だがすぐに、シュミットは何気ない表情で応えた。とはいえ、言葉で「精神的に参っている」と吐露してしまったのは、相手が同じ『十三使徒』だからということもあったのかもしれない。

「教授（プロフェッソア）は如何ですか？　こちらの学長から聞いた話では、この度ケンブリッジ大学の客員教授として着任なされたと伺っております」

『これはこれは、既にご存知でしたか。私の方も特に悪いところはございませんよ。大学教授に関しては我が国の女王陛下より仰せつかった大任でもありましたので』

既に若くない年齢であるマクロードを大学教授に就任させたのが他でもない英国の若き女王と聞いたシュミット教授は、彼の有用性を重んじてのものだと推察した上で言葉を続ける。

「そうだったのですか。学長は貴方の我が国における教授資格が失効していないので、是非我が大学に招聘したかったと愚痴を零されておりました」

『それを仰るならば、貴方ならば我がブリテンの大学もこぞって歓迎することでしょうな』

「それで、教授（プロフェッソア）は如何なるご用件で連絡を頂いたのでしょうか？」

シュミットは挨拶もそこそこに本題を投げかけた。互いに『十三使徒』――国家公認戦略級魔法師である以上、彼が一体何の用件を持ち込むつもりなのかが気に掛かった。マクロードも下手な前置きは彼女の機嫌を損ねると考慮したのか、少し考えた後に言葉を切り出した。

『シュミット教授、我がブリテンに亡命いたしませんか？』

「……それを正気で仰っているのですか？」

『無論、本気でお誘いしております』

マクロードの提案に、シュミットは正気の沙汰を疑った。だが、彼の表情からするに本気であるということは言葉にせずとも理解していた。

だが、彼女の立場がそれを許される状況に無かった。

個人で国の防衛を支えている存在。『灼熱と極光のハロウィン』以降、それが強まっているのも事実。しかも、先日新ソ連のモスクワ近郊で使われた大規模魔法の行使のことを鑑みれば、それに程近い東ＥＵにその矛先が向けられるとも限らない。そんな状況下でのうのうと亡命など許されるはずがない。

「冗談でないなら、余程性質が悪い冗談にしか聞こえません。私や貴方の立場では亡命など許されるはずがないでしょう」

ただでさえ戦略級魔法師であるシュミットの価値がより高まったのは、この国で誕生してしまった〝怪物〟の存在があった。
名はハンス・エルンスト・〝ルーデル〟。『灼熱と極光のハロウィン』の後、彼はまるで何かに憑りつかれたかのように別人のような有様となった。軍からの報告では『ハンス＝ウルリッヒ・ルーデルが憑りついた』という不可思議極まりないものであったが、新ソ連における潜入作戦で彼が破壊した新ソ連軍の兵器の報告書を見た瞬間、シュミットは目の前が真っ暗になって倒れ込んだほどだった。
２０世紀におけるドイツのエース・オブ・エースを彷彿とさせる戦果。その彼が帰国した際にシュミットは当人と出会ったが、明らかに気苦労を背負い込んだと目で分かるような雰囲気を漂わせていた。
その彼を新ソ連対策の一環で南アメリカ連邦共和国に送るという政府の判断に、シュミットは素直に賛成した。その時に述べた意見は「戦略級魔法師の私ですら卒倒した戦果を叩き出した彼は、この国で制御できるとは思いません」と正直な気持ちを吐露した。
『そちらでは学生同士が激しい口論の応酬を繰り広げているようですね』
「ご存知でしたか……メディアの取材はお断りしている筈なのですが」
『人の口には戸が立てられません。騒ぎともなればメディアはあらゆる手段で嗅ぎ付けるでしょうから。その意味で、今のドイツは貴方にとってあまり居心地のいいものとは思えませんが』
ハンス・エルンストを国外に亡命させたのは、ドイツが仮に二人目の国家公認戦略級魔法師として彼を任命した場合、過剰に反応するのは間違いなく新ソ連と西ＥＵ――イギリスになるとドイツ首相が推察し、シュミットもその意見に賛同した。
更に付け加えると、そこに『灼熱と極光のハロウィン』で三つの戦略級魔法を有する形となった日本の影響が大きかった。昨年のドイツのローゼン・マギクラフト社による〝御家騒動〟により、独日間の経済交流が一時ストップしたのだ。結果的に経済交流自体も再開されたが、日本側から厳しい目を向けられる形となったことに変わりは

なかった。
「ハッキリと仰りますね」
『ですが、現実を一番直視しているのは魔法の平和利用を考えていた貴方ではありませんか？』
　実際、ドイツ国内では魔法師の権利を徹底的に制限すべきだと主張する人種主義の亜流思想を掲げる政党が若者の支持を集めていた。論理的思考を放棄して扇動に身を委ねる若者の姿に、同じドイツ人として見るに堪えないとシュミットは辛そうに表情をゆがめた。
　だが、そんな様子もお構いなしにマクロードは言葉を続けた。
『軍部でも「魔法は国家の力」として影響力を高めてはおりますが……我がブリテンは幸いにして、早い段階から反魔法主義を取り締まってまいりました』
「それは単に反魔法主義者を隔離しただけに過ぎませんか。日本のように封じ込めるには至っていないと聞いております」
『そうですね。だからこそ、かの国は恐ろしいのです』
「……教授（プロフェッソア）。よもやとは思いますが、日本を貶めようなどとお考えではありませんか？」
　シュミットが出した国の名に対して呟いたマクロードの『恐ろしい』という言葉から、彼女は嫌な予感が過っていた。
　先日、日本の久米島沖人工島で起きたテロ未遂事件のことはシュミットも政府からの情報で知り得ていた。その中にはハンス・エルンストも協力していたことからして、「彼も気苦労が絶えないな」と思わず内心で同情の念を禁じえなかった。
　そして、その事件を起こしたのは大亜連合香港方面軍の脱走兵とオーストラリア軍の魔法師……そのどちらもイギリスが十分関与出来てしまう可能性が高い実行犯であった。
　当時パーティーに参加していたフランス経由で伝わった（旧ＥＵ諸国には友好を示す意味で送られた）報告書の中には、オーストラリア軍の魔法師が戦略級魔法『オゾンサークル』を使用した痕跡がある、と記載されていた。
　オーストラリアと深い因縁がある国などイギリス以外に考えられ

ないし、元々旧ＥＵ諸国でしか共有していなかった戦略級魔法がイギリス連邦の構成国家とはいえ欧州以外に渡ってしまったということになる。
　イギリス政府は『原因追及の為に調査する』としているが、シュミットはこの一件にウィリアム・マクロードが関与していると睨んでいた。そんな彼からの提案など、裏に何かあると思ってしまうのは自明の理であった。
「……ご提案は大変ありがたいですが、やはり今の私はこの国を離れる訳には行きません」
『そうですか。ですが、もし研究者として生きることが難しくなれば、いつでもご連絡をください。その際は我が国の女王陛下に掛け合いましょう』
「お気持ちだけ受け取っておきます」
　シュミットはそう言ってマクロードの返答を待たずに通信を切った。
　もし、仮に亡命するとなれば……その時はイギリス以外の選択肢を選ぶことになる、とシュミットが内心で呟いたところで建物の外を映したモニターに目線を向けると、学生同士が取っ組み合いを始めた所であった。
◇　◇　◇
　新ソビエト連邦黒海基地。４月４日１１時、日本時間同日１７時。
　レオニード・コントラチェンコ少将は、モスクワから特別な客を迎えていた。
「閣下、ご無沙汰しております」
「こちらこそ。ベゾブラゾフ博士、ご来訪を歓迎しますぞ。先日の殲滅作戦が成功したと聞き、安堵しました」
「恐縮です。それも閣下がこの基地の部隊を動かし、反乱軍の包囲に成功したのが一番の勝因であると存じています」
　コントラチェンコを尋ねてきたのは、まだ四十代という若さでありながら新ソ連科学アカデミーにおいて魔法研究の第一人者として認められ、国家公認戦略級魔法師『十三使徒』の一角を担うイーゴリ・

アンドレイビッチ・ベゾブラゾフだった。公的な立場は一科学者ながらも、実質的な発言力は国防大臣を凌駕するとも言われている。
　その特別性で言えば、コントラチェンコも似たようなものだ。彼も『十三使徒』に名を連ねる一人で、黒海基地の人員と物資を自由に使える権限が与えられているが、彼は基地司令ではない。無論黒海基地の司令はコントラチェンコと同格の少将だが、コントラチェンコは彼に従う義務がない。制度上、コントラチェンコは国防大臣直属の戦略級魔法師ということになっているが、実態は首相のみが命令を下すことが出来る（新ソ連は以前のロシアのように大統領制を採用しておらず、政府のトップは連邦政府首相であり、旧ソ連の名残で『書記長』という肩書を使うことがある）。
　コントラチェンコはベゾブラゾフを基地の私室に招いた。部屋の造りや調度品の豪華さだけを見れば国際的な一流ホテルのスイートルームに匹敵し、従卒によるサービスは部屋の豪華さ以上のものを提供していた。コントラチェンコが文句を付けるとするならば、どうにも華やかさに欠ける部分だろう。見目がいい従卒を付けられても、男色家ではないコントラチェンコからすれば別に嬉しくない。
　それに、華やかさになりそうだったコントラチェンコの孫娘は両親を失ってこの国を旅立った。その相手があの〝若き魔王（ルーデル）〟ならば、決して悪いようにはしないと確信めいた思いを持っていた。
「博士（ドクタル）はお呑みになられないのでしたな」
「不調法で申し訳ありません」
「いや、お気になさらず。儂も最近は酒にめっぽう弱くなったので、茶で構わぬと思っていたところでしてな」
　恐縮した表情で応えるベゾブラゾフに、コントラチェンコは笑いながらも指を二回鳴らした。すると、従卒が小型のサモワール（紅茶用湯沸かし器）と、ティーカップとヴァレニエ（果実の砂糖煮）を入れた小鉢を2つ持ってきた。従卒がサモワールの上に置かれたティーポットを手に取り、紅茶をカップに注ぐ。そしてカップとヴァレニエをそれぞれ二人の前に給仕し、サモワールを二人の真ん中に置いてから、主が頷くのを見てから従卒は部屋を出ていった。

コントラチェンコは味見することなくティーカップにお湯を継ぎ足してヴァレニエを口の中に放り込んだ後、紅茶を一口含んだ。一方、ベゾブラゾフは紅茶とヴァレニエの味を確認してから紅茶にお湯を継ぎ足した。

差し出された紅茶の味を確かめ終えた後、二人は向き合った。

「さて、未だ反乱軍が根絶やしになったとは言えない状況下で博士(ドクタル)がご来訪されたとなると、やはり昨日起きた暴動の件ですな？」

「その通りであります」

ベゾブラゾフが訪問する切っ掛けとなったのは、この前日に黒海基地で起きた暴動についてだった。

基地内での暴動は速やかに収束したものの、実際に魔法が使われたかどうかを確認する意味で政府はベゾブラゾフを急遽政府からの調査官として黒海基地に派遣した。

「クレムリンからは何と伺っておりますかな？」

「今回の事件に関する詳細を閣下よりお尋ねになって欲しい、と仰せでした。無論の事ではありますが、私は何も閣下のご報告に疑念を抱いているわけではありません」

「その言い分では、まるで儂が暴動の片棒を担いだようにも聞こえてしまうのだが？」

「私は、決して閣下の忠誠心を疑ってはいません。ただ、そう噂するものも少なからずいることだけは御承知おきください」

ベゾブラゾフの様子からして、コントラチェンコを疑っているというわけではないというのは理解した。だが、政府内にそのような疑念を持つ者がいるとなれば、黒海基地の暴動において魔法的な介入があったかどうかを疑問視する声があるのだろう……とコントラチェンコはそう予測した。

「つまり、貴殿は最悪『ドラキュラ』の関与を疑っているとお思いであると？」

「御明察、恐れ入ります」

コントラチェンコが述べた『ドラキュラ』とは、暗殺・破壊工作を得意とするルーマニアの魔法師のコードネームだ。非合法活動の専

門家だけあって、本名も分かっていない。秘匿された戦略級魔法師という噂もあるが、真偽のほどは全くの不明である。
「実は儂も当初はその関与を強く睨み、暴動を起こした兵士たち全てに精神干渉系魔法の痕跡を念入りに調べております。首謀者クラスは儂自ら取り調べておりますので、ご心配なく」
「そうでありましたか。閣下に要らぬ懐疑を抱かせたことに関して、不徳の致すところであります」
「何、博士(ドクタル)もクレムリンに振り回された被害者ですからな……このことは秘密にして頂きたい」
「勿論でございます」
　コントラチェンコとベゾブラゾフは、二人して悪戯小僧のような笑みを零し、先程までの雰囲気とは打って変わって和やかになっていた。
「しかし閣下。先日の暴動が国外勢力や反政府勢力の破壊工作ではないとするなら、また別の懸念が生じませんか？」
「兵士たちの間に広がりつつある、魔法師と非魔法師の対立ですな」
　日本とＵＳＮＡにおける反魔法主義は、社会格差に対する不満や不平をエネルギー源として起こっていた。一方、新ソ連では社会格差というものは存在しない(『存在しないことになっている』というニュアンスが最も正しいが)。非魔法師である兵士は、将来軍で活躍する兵士が魔法師ばかりとなり、自分たちの居場所がなくなることに怯えている。その恐怖が暴動に繋がったのだと二人は睨んだ。
「魔法師だけで我が軍は編成出来ません。魔法師の部隊を作ることはできるでしょうが、彼らだけで前線の兵士全てを賄うなど不可能に近い」
「それを兵士たちに知らしめるにしても、実際に戦場に出る機会が必要ですぞ。とはいえ、兵を反政府勢力の掃討に向ける訳にも行きますまい」
　反政府戦力の追討という名目で兵士たちを動員することは可能だが、下手すれば死兵となる可能性が高い場所に人員を割くのは厳しい。懸念を示したコントラチェンコに対し、ベゾブラゾフは頷いた。

「ヨーロッパ方面は閣下が一番よくご存じの通り、兵を動かすわけにはいきません。反政府勢力を抑え込む意味においても」
「そうなると……極東ですな？」
「ええ」
　コントラチェンコの推測に、ベゾブラゾフは勿体ぶることなく頷いた。
「つい先日、大亜連合の香港軍の士官が部下を連れて集団脱走した事件が起きたようでして」
「それは初耳ですな」
「私も一昨日知ったばかりです。その作戦ですが、脱走兵を捕獲するために大亜連合軍が日本軍と共闘に踏み切ったようなのです」
　ベゾブラゾフの言い分としては、日本と大亜連合が講和によって長年の緊張状態から解放されている。因縁のある相手同士が手を結べるほどの状態となれば、そこにつけ込める隙があるというベゾブラゾフの案は決して悪くないだろう。
　コントラチェンコもその状態につけ込むのが兵士の不満や不平を解消できると睨んでいる。だが、懸念とされている一番の問題がある。
「モスクワに戻って、すぐにクレムリンに提案しましょう。もし作戦の実行が決まれば、閣下の部下も一部をお借りすることになるかと思われますが……閣下、如何なさいましたか？」
「……いや、何でもありません。博士（ドクタル）、その件は儂からもお願いいたします」
　右膝を壊していて、杖を使わないと立てないコントラチェンコは座ったままお辞儀をした。無論、そのことを理解しているベゾブラゾフも老将軍に対して笑顔でお辞儀を返した。
　ベゾブラゾフが帰った後、コントラチェンコは従卒に命じて再び紅茶を頼み、従卒が奥へ消えた後でポツリと呟いた。
「……不満は解消させねばならない。そのことは分かっておる」
　兵士と物資に対する権限を持つ人間として、新ソ連軍を強き軍とする意味でもやらねばならないことだと理解はしていた。

だが、コントラチェンコの脳裏に浮かんだのは……今から約４０年前。新ソ連軍による北海道侵攻を目論んだ艦隊が瞬く間に蒼穹の雷に呑まれていく光景だった。
当時３０歳前後であったコントラチェンコは、荒れ狂う波と夥しいともいえる雷の雨――――そして、それを操る一人の魔法師に味方の戦艦は成す術もなく沈められていった光景を目の当たりにした。彼が乗っていた戦艦は旗艦であったために偶々沈められなかった。
そして彼は、その人物――――上泉剛三と対面した。恐怖で動けずにいたコントラチェンコに対し、剛三は目もくれることなく横を通り過ぎ、艦橋へと歩を進めていった。
嵐が止んだ後、動けるようになったコントラチェンコは艦橋にいた人間全員が跡形もなく消え去っていたことに驚愕した。船を動かせる必要最低限の人員だけを残し、軍の高官全員を葬り去っていたのだ。
その彼が、後年の四葉の復讐劇で大漢軍を単独でほぼ壊滅させ、大漢という国家はその翌年に消滅した。表舞台から彼の活躍が聞こえなくなったことで、上泉剛三の脅威は消え去ったと思っていた。
だが、一昨年の『灼熱と極光のハロウィン』にて内密に編成された新ソ連軍の艦隊を消滅させ、ウラジオストク軍港を破壊せしめた戦略級魔法の存在は瞬く間に新ソ連全土へ衝撃を与えた。しかも、ウラジオストクにはベゾブラゾフがおり、彼は戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を発動させたことは大規模魔法発動に伴う兆候を観測したデータで明らかだった。
その魔法すらも捻じ伏せた相手の詳細は不明だが、コントラチェンコからすれば上泉剛三の再来とも言えるような悪夢としか思えなかった。
「こんな儂にはどうにも出来ん……あの若造が血気に逸らないことを祈る他あるまいな」
コントラチェンコは知らない。
４年前に起きた新ソ連国内の暴動騒ぎに剛三とその孫が暴れたことも。

ベゾブラゾフの戦略級魔法を破った相手は上泉剛三の孫であるという事実も。

面子と面目の問題

カーラ・シュミットとウィリアム・マクロード、レオニード・コントラチェンコとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ。『十三使徒』の情報を掴むのは本来容易ではない。それは四葉家の諜報能力を以てしても、全容を解明するのはかなり大変な労力を有する。

だが、それすらも平気で嘲笑うかのように解析できる能力者が奇しくも日本に二人存在した。

一人は世界の軍事情報全てを掌握する魔法を有する神楽坂家現当主、神楽坂悠元。『灼熱と極光のハロウィン』において戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』を用いて新ソ連側の艦隊を消滅させた張本人で、『十三使徒』の持ちうるすべての戦略級魔法を使うことが出来る世界で唯一の存在。

もう一人はエクセリア・クドウ・シールズ。元スターズの魔法師で『ポラリス』のコードネームを持ち、帰化後は九重瀬理亜と名乗る少女だが、電子情報から全ての事象を把握する並外れた解析能力を有する戦略級魔法師。

そして、この二人は前世の記憶を有したままこの世界に転生した存在であり、従兄妹の関係にあった。いまや婚約者同士ともなった二人は、新ソ連絡みの一件で話し合っていた。場所はＦＬＴツインタワーのセリアの私室だった。

「コントラチェンコとベゾブラゾフが黒海基地で会談……どうせロクでもないことを考えているのだろうし、そのターゲットは大方極東方面になるだろう」

「そうだよね。ヨーロッパに向けたところで『ドラキュラ』とかが出てきそうだし」

「あの魔法師か……」

「お兄ちゃん、知り合い？」

「……まあ、爺さんのせいでもあるんだが」

今から４年前。三矢家の関係で東京に戻った悠元は中学に通うこととなったのだが、剣道絡みで全国大会個人戦で優勝した後、周りの

勧誘を振り切るという意味で剛三の誘いに乗って国外へ飛び出した。
日本からロサンゼルス、カリフォルニア半島を縦断してパナマ運河を飛び越え、ブラジルでは食事を台無しにしたゲリラ勢力を叩きのめし、南アメリカ連邦共和国の成立を見届けた上でそこから北上し、ロズウェルのスターズ基地に誤って突っ込んだ挙句、『ヘビィ・メタル・バースト』を無力化してリーナを撃ち落とした。
そこから大陸横断鉄道でワシントンやニューヨークを観光し、欧州ではイギリスやフランス、イタリア（バチカン含む）、ドイツ、ポーランドと観光してルーマニアに入ったところで一人の少女と出会った。
「聞けば、新ソ連がウクライナを吸収した際に両親と祖父母を殺されたらしくてな。爺さんも復讐の言葉を聞いて黙っていられなかったんだろう。彼女に魔法技術のイロハを叩き込んだ上で、『復讐を成したら日本に来るがいい』って勧誘してた」
「……お兄ちゃんの愛人候補が増えるね」
「絶対に断る。正直フォローしきれん」
それが後に新ソ連で『ドラキュラ』と呼ばれる魔法師となり、現在は新ソ連の反政府勢力や人間主義者の依頼で北欧との国境沿いの基地を襲撃しているらしい。元々筋は良かったが、『領域強化（リインフォース）』の実験と数ヶ月ほど鍛えた結果……戦略級魔法師クラスの実力を有してしまった。
その後、新ソ連に正規の手続きで入ったところ、何故か正規軍のみならず諜報機関の工作員に追い回される事態となった。剛三に心当たりを尋ねたら、多分北海道侵攻を止めたのが原因らしい。逆恨みもいい所である。
あまりにもしつこかったため、流石にキレてクレムリン宮殿にカチコミし、国家元首をぶん殴って誓約書を書かせたまではよかったが、それでも殺そうとしてきたので奥義の『朱雀天翔（すざくてんしょう）』で宮殿を半壊させるほどの威力を叩きつけた。まあ、辛うじて生きていたのは不幸中の幸いというレベルだが。
そこから逃げるようにアラブ同盟（サウジアラビア、エジプト）、オーストラリア、ニューギニア、ニュージーランド、とんぼ返りして

インドネシア、インド・ペルシア連邦、大亜連合、台湾を経て帰国した。
「あの『ドラキュラ』による緊張状態でも回避できないとなると、新ソ連で使った『トウマーン・ボンバ』に対する恐怖が国内の兵士にも蔓延してるんだろうな」
「一発で引っ繰り返しかねないのが戦略級魔法だからね。命あっての物種なのに」
「そう割り切れない奴が多いんだろう」
　そもそも、魔法師でなくとも魔法資質因子を有する者の数はかなり限られる。いくら一騎当千の所業を成そうとしても、魔法師だけの部隊を構築するのは極めて難しい。それこそ国家クラスの軍隊全てを魔法師だけで賄うのは明らかに現実的ではない。
「言ってしまえば、飛行魔法の発表で一線級の魔法師部隊は戦場を自由に動ける機動兵器にも等しくなった。だが、補助戦力や切り札としての役割は担えても、主戦力を担うには数が足りなさすぎる」
　創作物では、機先を制したり相手に不意打ちを仕掛ける意味で魔法を使ったりする場面が良くあることだが、それはどちらかと言えば〝斥候〟に近い動きとなる。個としての戦力が軍隊に匹敵するとしても、最終的に物を言うのは数の力。その意味で非魔法師の兵士という戦力が不必要になるということなど有り得ないのだ。
「例えば、どこかの地域を単独で殲滅したとしても、その人間一人で広大な土地を防御しきることは出来ても統治など出来ない。魔法師の割合が簡単に増えない以上、非魔法師の兵士の有用性は減るどころかむしろ増すだろう」
「拡張政策を掲げる国家なら、猶更人手なんて猫の手を借りたいほどに欲しくなるね」
「そういうことだ」
　話を戻すが、ヨーロッパ方面では各地で反魔法主義による暴動やデモ活動が台頭している。魔法師共存派の意見もまるで上から目線なので、当事者の魔法師からすればどちらも反魔法主義に見えてしまい、困惑しているのが見て取れた。

「にしても、よく反魔法主義を抑え込めたね」
「『トーラス・シルバー』の魔法医療技術は非魔法師でも有効だからな。それと想子波による病気の初期発見システムによって、習慣病のリスクも大幅に減ったし」
「……これでエドワード・クラークがディオーネー計画なんてでっち上げたら、真っ先に日本国民が反対に回りそうだね」
原作と異なり、『トーラス・シルバー』は非魔法師の日本国民に多大な貢献を果たしている。これでディオーネー計画を持ち上げてその理由が『魔法医療技術を日本国外にも輸出してほしい』で宇宙に行かせようものなら、その対策案はいくつか構築している。最悪『エシェロンⅢ』を『鏡の扉（ミラーゲート）』で神楽坂家に運び入れることも考慮するつもりだ。
「消防や救急医療で既に活躍している魔法師の一助として技術提供しているんだ。それが結果的に非魔法師すら救っているのだから、誰にも文句は言わせない。正直、そういったところで貢献できるように技術を磨くべきだと思うんだがな、とりわけ師族二十八家は」
「お兄ちゃんや達也は既に実績があるから、誰も文句は言えないね」
「どうだろうな」
正直、顧傑の一件を大幅に書き換えたことで若手会議が開かれる可能性は低くなった。だが、諸外国の動きを見て反魔法主義がまた息を吹き返さないかという懸念は生じる。その懸念が現実のものとなる前に対策の一環として意見交換の名目で開くことは想定される。
「お兄ちゃんは……その、七草家が深雪を神輿に担がせようと目論む可能性が残っているということ？」
「……正直な話、あの一件はどうにも疑念が残る」
大体、原作の師族会議において九島烈が責を負う形で九島家が降格し、七草家は首の皮一枚で繋がる形となった。その後も達也と真由美をくっ付けようとしてあれこれ工作していた時点で、四葉家から見れば印象は最悪の一途でしかない。
達也と深雪の婚姻では遺伝的な問題が生じる――この一点が大きいのだろう。だからこそ、七草家は深雪を神輿にすることの交換条

件に達也との交渉を考えていたのかもしれない。尤も、達也が強硬に反対したせいでその案はあえなく没となったし、仮に師族会議へ掛けられたとしても、現当主である真夜が反対に回っていた可能性は極めて高い。
「仮に数という多数決の論理で推し進めたとしても、どうあっても四葉の反対は避けられない。最悪四葉家が十師族から離脱する可能性もあった」
「お兄ちゃんは、〝原作〟の七草家が出した案が七草智一の考えじゃないってこと？」
「別に旗頭になりたいのなら、先輩でも十分広告塔に成り得るだろう。本人は嫌がっていたが『エルフィン・スナイパー』の異名がある意味で認知の度合いは深雪に負けていない」
智一が真由美を強く推さなかったのは、七草家で手柄を独り占めすることのリスクを鑑みてのものだと推測できる。何せ、この時代のアイドルは殆どが３Ｄアバターによるもので、実際に顔を見せて活動しているアイドルの方が少ない。レオの一件で知り合った夕姫もそういったアイドルで、危うくマフィア絡みの事件に巻き込まれて誘拐されるところだったのだ（なお、この一件を皮切りにフィリピン政府へ圧力をかけ、フィリピンマフィアを一掃したのはここだけの話）。
実際に顔を出して活動する。しかもそれが魔法師で十師族直系……そうなると、誘拐や殺傷事のリスクが極めて跳ね上がることは想像に難くない。そのリスクを回避するために深雪を神輿へ担ごうとしたとなれば、これは七草智一の案と思えなかった。
「恐らくだが、七草弘一の案とみて間違いないだろう。彼と智一さんの深雪に対する認識の違いを鑑みれば、前者の可能性が極めて高い。その理由を周公瑾絡みの一件で面目を失したと考えれば、妥当な考えだ」
「でも、お兄ちゃんが結構メディア工作をしたんでしょ？　……まさか、お兄ちゃんの面子を辱めようとするってこと？」
「その前に若手会議が開かれるかどうかだし、その場に俺や元継兄さんが呼ばれるかどうかも分からん」

話が大分逸れたが、話題を新ソ連のことに戻す。
ベゾブラゾフとコントラチェンコが会談をした上、モスクワ周辺の動きも慌ただしくなっている。そして、黒海基地にいる部隊の一部が新シベリア鉄道でウラジオストク方面に向かっているのが確認され、更にはベゾブラゾフの動きも極東方面に移動する兆候が見られている。
「ベゾブラゾフはウラジオストクに移動するようだが……目的地は新ソビエト科学アカデミー極東本部。所要時間を逆算すると……入学式の前日か」
「魔法大学の入学式の日に『十三使徒』がウラジオストク入りね……お兄ちゃんの魔法で破られてるのに、意地になってない？」
「あれは副次効果の産物だからな。魔法を破られることと魔法発動の失敗は同じようで別物だから」
達也の得意とする『術式解散（グラム・ディスパージョン）』で魔法式を破壊したわけではなく、『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』に組み込まれた事象干渉力を喰らう効果では魔法式を〝吸収〟した。それによってベゾブラゾフ本人とのラインを通して膨大な事象干渉力が逆流した形なので、ベゾブラゾフ本人としての認識は『自身の発動した魔法がいつの間にか認識できなかった』ということになってしまう。
この認識の仕方は、八雲の協力で天神魔法の訓練をした際、少しちょっかいを掛けようとして防御魔法を発動させたが喰われた八雲の率直な感想で得た知識であった。
セリアには帰化した段階で悠元の固有魔法と戦略級魔法を全て教えている。その際の感想は「お兄ちゃんの奴隷（しもべ）になります」と口走ったので、反射的にこめかみグリグリ（トールハンマー）をお見舞いした。
「ウラジオストク軍港が完全に復旧していないが……小型貨物船が佐渡沖をうろついているようだな」
「一条家の領分だから、私達の出番はなさそうだね」
「将輝が頑張って吹き飛ばしてくれれば御の字なんだがな」
佐渡侵攻の一件はその詳細を知る燈也から聞いた。尤も、十師族当主に明かされることとなったのは顧傑の一件が終結した後に開かれ

た臨時師族会議でのことだった。
非公表だった理由は、そもそも燈也は偶発的に居合わせただけであり、六塚家の人間として名乗っていなかったこと。それと、当時は女性のように髪を伸ばしていたため（姉の温子に『切らないで』と泣き落されていた）に、素直に報告したところで信じれる要素が少なかったためだった。
燈也は相手が容赦なく銃撃してきたため、有無を言わさずに全員の体温を奪うことで血流を凍結させて殺した。燈也の固有魔法『絶氷の業炎（ニブルヘイム・フレア）』の副次的効果によるもので、その際に真紅郎と出会って勘違いされたとのこと。
だが、新ソ連は佐渡侵攻の事実を認めなかった。身元を示す様なものが徹底的に排除されたのだから仕方がないことだが、その兵士の遺体の行方はというと、全て新ソ連に突き付けた。それも、その兵士全てのＰＤ（パーソナルデータ）も丁重に添えた上で。
この辺は悠元が大きく関与していて、魔法の練習も兼ねて身元を全て割り出し、モスクワ郊外に死体を詰めたコンテナを投下した。それに使った魔法は後の『無敵砲弾（インビンシブル・カノン）』のプロトタイプであった。
結果として、兵士の遺族が異論を唱え、大規模な暴動に発展したのだった。
「佐渡の一件を鑑みると、直接乗り込んで取り押さえるだろうけど……明らかに罠くさいよね？」
「虎穴の諺は分からんでもないが、どう見ても罠としか思えん」
仮に、ここでベゾブラゾフがウラジオストクにいるという情報を流せば、流石に一条家も不審船に手を出すということは控えて船を沈める方針に切り替えるだろう。
「厄介な問題を挙げるとするなら、この国で『トゥマーン・ボンバ』の詳細を知っているのが俺とお前しかいないということだ。ベゾブラゾフがウラジオストクにいると伝えても、何をするか分からない相手に手をこまねているというのは、多分一条家の面子として許せなくなる」
佐渡の一件は悠元が三矢家と上泉家を経由して一条家に伝わった

ことで最悪の事態を回避できた。だが、一条家としては『クリムゾン・プリンス』の将輝が九校戦で立て続けに悠元との対戦で敗北を喫している。
単に一条家の御曹司であれば問題はなかったが、実戦経験のある『クリムゾン・プリンス』が表向き実戦経験のない人間に敗北を喫した事実は重い。その汚名を返上する意味でも一条家が単独で不審船の拿捕に乗り出す可能性は高いと言えよう。
「単に深雪を取られた腹いせで突っかかってきて自爆したようにしか見えないんだけどね。でもさ、深雪がちゃんとお断りしたんでしょ？」
「そんなんで簡単に諦めるような性格じゃないんだよ、将輝（アイツ）は」
悠元との模擬戦で完璧に敗北を喫し、深雪からは丁重に振られた。だが、真紅郎との連絡では『まだ諦めていない様子が見えるんだよね』と溜息混じりに愚痴を零されたことがある。どうやら、完全に吹っ切れていない節があるのは間違いないようだ。
「もし深雪を強引に奪うようなことがあれば、その時はアイツに全力（オラオラ）を叩き込むだけだ」
「……お兄ちゃんがそんなことしたら、凹む前に貫通しそうな気がするけど」
「グロテスクな光景は流石に回避するよ……ボコボコにしてる時点でグロテスクにしてるようなものだが」
ちなみに真紅郎からその時に聞いた話では、将輝の妹である茜が父親の剛毅から悠元への好意を尋ね、将輝と深雪の婚約申し込みに利用しようとしたので正月早々に大喧嘩をしたらしい。その日のうちに仲直りはしたものの、後日婚約序列が決定したことを受けて茜が「東京の中学校に転校させて欲しい」と爆弾発言を投下したそうだ。
結局、中学校は金沢で過ごすことが決まったが、高校は第一高校を受験すると言って頑なに譲らないらしい。これには彼女の母親である美登里が賛成していて、自分が卒業した高校に通ってほしいと思っていた剛毅は何も言えなかった。
将輝はその際「あんな奴がいる学校に……」と口走ったため、茜か

ら全力のビンタを貰ったと聞いたときは真紅郎と揃って笑ってしまったのだった。

マイナスの感情をプラスにする者同士の会話

話題が新ソ連に大分裂かれたが、もう一つの話題であるウィリアム・マクロードとカーラ・シュミットのほうに意識を向けた。

マクロードのほうは英国の女王への要請でケンブリッジ大学の客員教授へ就任させた。その際に『エシェロンⅢ』絡みの通信機もケンブリッジ郊外に用意された邸宅内に運ばれたのも確認している。

「一つ聞くが、セリアも『七賢人』――――『フリズスキャルヴ』のオペレーターの一人なんだろう？」

「そうなっちゃうね。ていうか、あのレイモンド・クラークって奴、私のプライベートを明るみにしておいて『付き合いたい』なんて言ってきたのよ。ムカついてぶっ壊すことも覚悟で『フリズスキャルヴ』の端末を魔改造したら……」

「したら？」

「『エシェロンⅢ』までのぞけるようになっちゃった。テヘペロ」

「……埒外がここにもいたか」

彼女が苛立って『フリズスキャルヴ』の端末を壊すのも厭わずに魔改造した、というのは彼女のレイモンドに対する評価の言葉で明らかだった。セリアのしでかしたことが、前に苛立って変哲もない木を精霊標に変えてしまった自分と重なり、血というのは争えないと何故か思ってしまった。

しかし、『フリズスキャルヴ』のオペレーターがエドワード・クラーク（管理者（アドミニストレーター）なのでオペレーターではないかも知れないが）とレイモンド・クラーク、四葉真夜と神楽坂千姫、顧傑にセリア……残る一人ないし二人は不明だが、少なくともクラークが選ぶ人間となればロクな人間とは思えなかった。

そう思いながら、悠元は持ち込んでいたスポーツバッグからヘッドマウントディスプレイの端末を取り出してテーブルに置いた。

「お兄ちゃん、これ『フリズスキャルヴ』の端末だよね？　どこで手に入れたの？」

「これは顧傑がいた隠れ家から見つけた。壊れていたが復元しておい

た」
　顧傑を回収した後、壊れていた端末（恐らく顧傑が使えなくなったことに腹を立てて壊したと思われる）を回収してもののついでに改造したところ、何故か管理者（アドミニストレーター）権限が付与された『フリズスキャルヴ』の端末として復活した。とはいえ、これを神楽坂家で運用する気にもならないと思っていた。
「ただ、こちらとしても無尽蔵に情報を手に入れる手段があるのに、これを運用する気にもならんからな……というわけで、こいつは渡そうと思う」
「渡すって……私は要らないよ？」
「分かってる。なので、これを渡す相手はヴァージニア・バランス大佐殿かワイアット・カーティス上院議員にしようと思う」
　いきなり復活した顧傑の『フリズスキャルヴ』を流石にクラーク親子も訝しむだろうが、それだったら同じＵＳＮＡの人間が使用してくれればいい。それも、政府とのコンタクトが取れる重要人物に引き渡した方が効率的に使ってくれるだろうし、政府高官はどうせ『エシェロンⅢ』だけでなく『フリズスキャルヴ』のことも知り得ている。
　日本国内で使うと「どうせトーラス・シルバーあたりがどうにかした」などと難癖をつけてくるのは想定されるため、それなら大統領や長官クラスと渡りを付けられる人に託した方がまだマシだ。
　手に入れられる情報量が増えて胃薬にお世話になるデメリットもあるが……そこは我慢してほしい所だ。
「うーん、どちらもＵＳＮＡ政府に影響力があるから有効に使ってくれそうだね……私はバランス大佐がいいと思う。今の大佐は確か大統領直属の軍事顧問も兼任してるはずだから、スターズの情報を欲しがる意味でも、後のお姉ちゃんのことを鑑みても有効だと思う」
「パラサイトのことを考えれば妥当か……セリア、バランス大佐に手紙を送れるか？　どこまで伝えるかはセリアの裁量に任せる」
「了解だよ、お兄ちゃん」
　ちなみにだが、セリアの協力を得て試験的に動かした感じでは、セリアの端末から悠元が直した端末の検索情報が読み取れなかったし、

顧傑のアカウントが復活したという認識で動いているのではないと判明した。。
　同じ『フリズスキャルヴ』ではなく『エシェロンⅢ』自体にアクセスしているような感じであり、これにはセリアから「お兄ちゃんの手に掛かると、『フリズスキャルヴ』ですらも玩具になるの？」と言われた。
　それには甚だ遺憾の意を示したい、と言いたいが話題を戻すことにした。
「にしても、カーラ・シュミットがウィリアム・マクロードと連絡を取ってたことね……亡命の打診でもしたんでしょ。ドイツは反魔法主義政策を掲げる政治勢力が若者の支持を取り付けてるみたいだし」
　世界の大半を占める資本主義国家における経済格差によって、その原因が魔法によるものだと断じられる政策を掲げる勢力が勢い付かせている。単にそれだけならば『ブランシュ』がかつてやっていたことの焼き直しのようなものになるわけだが、戦略級魔法が使われたに等しい状況がそれに追い打ちを掛けている。
「非魔法師は魔法にファンタジーやメルヘンを追い求め過ぎていると思うんだがな。現代魔法でも使い方次第で十分凶器になるのは確かなことだが、そもそも魔法に関する基礎知識を全員に学ばせないという時点でおかしいと思う」
　魔法の資質の有無にかかわらず、魔法に関する正しい認識を学ぶ意味でも基礎知識を学ばせるべきなのだ。創作物だと、仮に魔法資質がなくとも魔法に関する基礎知識を学ぶ機会はいくらでも存在する。だが、この世界にはその根本的な機会がほぼ皆無に近い。
　その主な要因は魔法が軍事力と密接に繋がっているためだ。いくら国立魔法大学と魔法科高校が国立の高等教育機関であろうとも、卒業後の進路先の半数近くが軍関係に偏っている時点で昨年春のメディアの指摘も決して間違ってはいない。
「魔法を使えようが使えまいが、魔法の仕組みぐらいは知識として勉強したとしても、直に魔法が使える訳じゃない。安全を期す意味でも最低限の知識は必要だと思うんだがな」

「その意味で平和利用を掲げている研究者には肩身が狭い訳だよね……まさか、ディオーネー計画にカーラ・シュミットを引き入れることでお兄ちゃんやお兄様への説得材料とするつもりなの？」
「それこそ愚か者の思考だと思うがな」
仮に魔法科高校は置いておくとしても、これで国立魔法大学まで卒業単位認定なんて馬鹿げた話を持ち上げるつもりなら、それは明らかに職権の濫用に踏み込むことになる。その最大の理由は真紅郎や佳奈がいることだ。
基本（カーディナル）コードの発見という現代魔法における画期的な発表をしたにもかかわらず、佳奈はもとより真紅郎も高校卒業の面で便宜は図られていない。それで『トーラス・シルバー』だからといって卒業単位認定なんかすれば、明らかに百山が自らの権威を高めたいとしか思えない行動をしているとしか言えなくなる。
政府やメディアに学校運営を干渉されたくないという表向きの理由があるとはいえ、原作では神田議員に対して毅然と対応した学校長として情けない姿を晒すことに繋がる。
「そもそも、今の俺は師族会議議長にして神楽坂家現当主だ。だが、エドワード・クラークやウィリアム・マクロード、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフのように表向きの社会的立場を明確に出していない。ま、達也や深雪にはクラーク親子のことと『トーラス・シルバー』の件も既に掴んでいると教えているし、四葉本家も把握している」
「そうなると、リーナが帰国する関係で私も否応なく巻き込まれそうだよ……レイモンドが顔を見せに来たら、容赦なくボコボコにしてやった上で堂々と〝国外追放〟で帰るけど」
セリアの知る原作知識では生き残ったレイモンドだが、本気で怒らせたセリア相手に逃げ切れるとは思えず、心の中で合掌した。彼の自業自得なので同情する気など皆無だが。
「仮に、このまま佐渡でひと当てあったとするなら、少なくとも達也に動員が掛かるのは間違いないだろう。俺も『サード・アイ・エクリプス』の使用許可を求められるだろうな」

モスクワの新ソ連政府内部の様子は把握済みだ。ベゾブラゾフの提案に基づき、黒海基地の動きも慌ただしくなっている。それに合わせてモスクワ駅の軍用列車も動きを見せている。いくら偽ろうが、人と物の動きまで完全に誤魔化すことは魔法で光学迷彩を展開し続けない限り不可能に近い。

現時点でベゾブラゾフは達也を敵視していない可能性が高い。彼が本格的に敵視するのはディオーネー計画が発表された後だが、油断はできない。寧ろ悠元が敵視される可能性が高い訳だが、不幸中の幸いは悠元の戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』がクラーク親子を以てしても解析しきれていない点にある。

「お兄ちゃんが対処する可能性はないってこと？」

「そもそも、俺は独立魔装大隊の特務士官ではあっても〝非戦闘員〟――余程の非常時でない限りは戦列に加わる命令など出来ないようになっている。俺への命令権限は今上天皇陛下にしかないからな。ようは英国でいうところの女王陛下直属の魔法師みたいなものだ」

事実上の〝最終防衛ライン〟に差し迫らなければ命令権限が発動することはない。沖縄防衛戦の時も当時所属していた兵器開発部ではなく統合幕僚会議の要請を受けて戦列に加わっている。無論、それに助言したのは祖父の剛三だということは後で聞いた話だが。

「昨年の九校戦以降、佐伯少将の行動が目に余り始めたから俺は昇進の話を受諾した。非公式ながら国防陸軍特務中将って……普通なら２０年から３０年ぐらい勤務して漸く座れる椅子の筈だが」

「お姉ちゃんを超えてるし……」

「リーナの場合は仕方がないだろう。それこそ十代で常任の大佐や准将クラスになんて上げたら、スターズだけでなくＵＳＮＡ軍からも要らぬやっかみを買うことになる」

正式に軍へ入っている（厳密には〝入っていた〟なのだが）リーナと特別な形で軍属を持つ悠元とでは置かれている立場が異なる。正直、リーナが総隊長になるのはまだしも、その副隊長兼総隊長補佐としてベンジャミン・カノープスを置けばまだ違ったのかもしれない。

いくら失った〝シリウス〟の穴埋めとはいえ、ＵＳＮＡ軍統合参謀

本部の性急すぎた行いによってスターズ内部で軋轢が生まれていた、というのはリーナの身近にいたセリアが一番よく理解していた。
「私もそれとなくフォローはしてたし、〝シリウス〟を暫く空席にしてでもお姉ちゃんの実績を積ませるべきだと訴えたんだけど……何も分かってない」
「その結果の一端が辞めていった軍人や議員というわけか」
「そっちは単純にリーナや私とか、あとは女性隊員にセクハラとかしようとしたからね。自ら喜んで的役になってくれたんだけどなあ」
　それは確実に〝脅した〟と解釈しても差し支えがない話だが、悠元はそれ以上の追及を取り止めた。単に色々ツッコミを入れるのが面倒になっただけだが。
「ともかく、近日中にベゾブラゾフが動くのは確定している。達也に『トゥマーン・ボンバ』の詳細を聞かれたら教えるつもりだ。昨年の春に七宝と戦った際、その改良した技術を使ってるからな。多分達也も気付くだろう」
「何かそんな気がしたんだよね。支倉さんの件からしてお兄ちゃんが周公瑾の亡霊を食っちゃったんでしょ？」
「物理的に食った覚えはない。知識だけ引っこ抜いて消滅はさせたが」
　何だかんだ原作人物との関わりを先取りしていることには溜息しか出てこないが。すると、セリアが思い出したように悠元へ向けて拝む様な形で頭を下げた。
「お兄ちゃん、お願い。『アルテミス』は流石に持ち運べないから、別のＣＡＤを作ってほしい」
「……まあ、そう来るかもとは思ってた。入学祝という形で今製作中だから……主に牛山さんの役割だが」
「あの人のことだから、明日ぐらいには仕上げて来るんじゃない？」
「有り得なくもない、というのが本音だな」
　そもそも『アルテミス』自体が達也の『サード・アイ・エクリプス』みたいな扱いの代物なので、普段使いする用のＣＡＤを渡すことは考えていた。仮にリーナがセリアを同行させたときの案として護石を

搭載したＣＡＤを引き渡すことにしたのだ。
今のところ、護石を渡したのは達也、深雪、幹比古、レオ、エリカの五人。残る波長適合者は……セリアとリーナが確定して、ほのかと雫、それと水波も含まれていた。パラサイトの軍事利用にも抵触しかねない為、また増えるであろうパラサイトを封印して護石化したとしても誰かに使わせる気など無い。

◇　◇　◇

悠元とセリアが話し合っていた頃、都内の高級料亭で泉美は第一高校の制服を着て一人で待っていた。普通ならば保護者となる泉美の母か弘一、そうでなくとも彼女の兄たちが同伴していないと彼女がこの場にいることに違和感を持つ者が少なくない。
だが、今日彼女がここにいることは七草家の殆どの人間が知らない。双子の勘で気付きそうな香澄には事前に話したが、それを聞かされた香澄は頭を抱えつつも「ボクは何も聞かなかったことにしておくよ」と答えた。
その理由は、襖が開いて姿を見せた人物――――十師族・六塚家当主の六塚温子であった。
「泉美さん。いえ、これからは泉美ちゃんと呼ぶべきかしら。待たせてしまってごめんなさいね」
「いえ、私もつい先程来たばかりですので」
「そうなの。形式上は私の養女ということになるけど、年齢を考えたら姉妹のように接してほしいの」
この話は最初、七草家の件で頭を悩ませていた弘一の妻が千姫へ内密に相談し、そこから泉美の格を出来る限り落とさない方向で五十嵐家に話が持ち込まれ、亜実と燈也の繋がりで六塚家に話が回ってきた。
「分かりました、温子お姉様。この度は父が皆様の敵と言える人物に内応し、多大なご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。本来ならばこのような機会を頂けることなど有り得ないと覚悟しておりました故、六塚家の器の大きさにただ感謝するばかりです」
「……えーと、泉美ちゃん。もしかして、師族会議の顛末を誰かから聞

いたのかしら？」
　話を持ち込まれたのが師族会議の前だったこともあり、温子は初めて聞いたときに七草親子の不仲を疑った。実際、燈也からの証言を得る形でそれが分かり、温子としても悠元を介する形で四葉家と縁を持てるのならばいいと判断して話を受けた。
「はい、悠元お兄様――――神楽坂殿より『当事者側として一連の事情を知った方がいい』とのご厚意で。二木家と縁を結ぶ真由美お姉様は昨年の論文コンペのあたりで聞かされていたと伺っています」
「成程、神楽坂殿が……にしても、血の繋がった七草殿に対して辛辣な評価なのね」
　温子は以前、悠元がまだ三矢家にいた頃に泉美と婚約を結んでいて、国防軍襲撃の件で婚約を解消された件を聞いていた。温子の問いかけに泉美は顔を俯かせつつハッキリとした口調で答えた。
「元はと言えば、姉と私自身の我儘のせいでもございますが、本来娘を止めるべきであろう父親がお兄様のご実家である三矢家、それと四葉家の繋がりを警戒した結果としてお止めにならなかったのです」
「そうだったの……何にせよ、私は六塚家が神楽坂家の外戚になっても、それを笠に着るような真似は致しません。ただ、何か御助力してほしいことがありましたら遠慮なくご相談していただきたいと神楽坂殿にお伝えしていただけますか？」
「分かりました。それでは……七草泉美改め六塚泉美、温子お姉様の娘として何卒宜しくお願い致します」
　泉美も悠元と婚約する際、七草家と縁を切ることを真っ先に考えていた。自分の癇癪のせいで迷惑を掛けた部分もあるわけだが、それすらも勘案した上で婚約を復活してくれたのは本当に嬉しかった。
　ならばこそ、その恩情に応える最も分かりやすい方法――――七草家との縁を切って嫁入りすることで、悠元に対する礼儀としたかったのだ。同じ十師族である六塚家の養女となることに抵抗が無かったのは、そのことが念頭にあったためである。
　ただ、一つ上の燈也を〝叔父〟と呼ぶのはどうかと思わなくもなかった泉美であった。

嵌められた義勇兵

２０９７年４月６日、土曜日。東京では国立魔法大学の入学式が華やかに行われていた。

だが、北陸臨海部はそんな喜ばしさの欠片もなく、肌がひりつくような緊張状態が張り詰めていた。その理由は昨日から佐渡沖で目撃されている不審船であった。

５年前、大亜連合の沖縄方面侵攻と時を同じくして、突如佐渡島に国籍不明の武装勢力が上陸した。だが、上泉家からの警告を受けた一条家は直ぐに佐渡島の住民や研究員をシェルターに避難させ、国防軍の協力を得て武装勢力の撃退に成功した。一条将輝の『クリムゾン・プリンス』はこの戦闘の際に挙げた功績もそうだが、戦意高揚の目的も兼ねての渾名であった。

新ソ連は未だに武装勢力が自国のものだとは認めていない。だが、地元の人間にとっては故郷を踏み荒らす者を許せるはずなどなく、そこに他国家の介在の有無など関係なかった。相手がどこの軍だろうが、どこの武装集団だろうが、自分たちの愛する場所に銃を携えて乗り込もうとする者に情けなど掛けることなどない。

義勇兵の中には佐渡島で暮らしている地元の人間も含まれている。守られてばかりではなく、今度は自分たちが守る番なのだと意気込む者が多い。『カーディナル・ジョージ』こと吉祥寺真紅郎もその一人であった。

「ジョージ、あまり気負い過ぎるなよ」

「分かってるよ、将輝……というか、それは僕が言いたい台詞なんだけどね」

両親が生きているためか、真紅郎に復仇（ふっきゅう）の念など当然持ち合わせていない。寧ろ、真紅郎からすれば将輝がいつも以上に気を張っているように見えていた。その理由も凡その見当がついているだけに、真紅郎は釘を刺す様に呟いた。

「……その様子なら、大丈夫そうだな」

既に実戦を経験している将輝とは違い、真紅郎は実戦らしい実戦を

経験したことがない。いくら第三高校が実戦力を重視している教育理念とはいえ、傍から見ているのと自ら関わるのでは勝手が違う。
将輝は真紅郎の様子を見てそう呟いたところで大きな声が響く。
「全員、準備はいいか！」
「おおっ！」
義勇兵の覚悟を問う声を発したのは、十師族の一条家当主・一条剛毅であった。義勇兵が一斉に気勢を上げ、将輝と真紅郎も遅れずに声を上げた。
「よぉしっ！　全員、いくぞっ！」
「おおっ！」
剛毅の号令を皮切りに総勢１０９名の魔法師が、一条家が海底資源調査船の名目で所有している三隻の装甲船に乗り込む。名目上は民間船なので軍艦のように武装は持ち合わせていないが、昔流の重装甲を兼ね備えている船だ。
そもそも、魔法師による海上戦ではミサイルやフレミングランチャーといった威力が大きく射撃間隔が空く射撃武器は寧ろ不利になる。何せ対物障壁で防げてしまうからだ。なので、機銃などの断続的射撃武器や船の体当たりといった接近戦（インファイト）が魔法師にとって有効な戦術になる。
港を出航した三隻の船団の内、二隻が防衛の為に佐渡島へ上陸、残る一隻が不審船に近付く手筈になっている。不審船は成層圏カメラで捕捉しており、現在位置は公海上。当然継続追跡権も発生していない為、こちらから強引に乗り込んで拘束することなど出来ない。だが、近付くだけでも牽制になるし、もし撃ってくれれば話が更に分かりやすくなる算段だ。
船が港から離れてすぐ、剛毅は傍らに立つ少年――――真紅郎に声を掛けた。
「真紅郎、気分はどうだ？」
「は、はい。少し怖くはありますが、平気です」
「それでいい」
剛毅からすれば、怒りや憎しみなどで恐怖が麻痺している状態が一

番正常な判断が出来ないと誰よりも知っていた。だからこそ、正直に恐怖を吐露した真紅郎の答えに対して満足そうにしていたが、今度は自分の息子に目を向けた。
「将輝、恐怖は覚えていないだろうな？」
「分かっています。恐怖は見せません」
恐怖を〝覚えていない〟のではなく、恐怖を〝見せない〟――――将輝のその返事に剛毅は男臭く、不敵に笑った。
「ならば、今回の先陣はお前に切ってもらう。沖縄諸島海域で神楽坂殿と司波達也殿が武功を挙げたばかりだ。無様な真似は許さんぞ」
「心得ております」
沖縄諸島、久米島沖人工島『西果新島』で起きた破壊工作の事件に関して、表向きは「警察省の特別捜査チームが国防軍と協力して逮捕した」と発表されている。だが、十師族の当主には概要が明かされていた。十師族各家が魔法による実戦を行った場合、規模にかかわらずこれを報告する義務がある。
魔法の私的濫用を避けるための措置だが、秘匿されることが多い魔法戦闘の観点から忠実に守られているとは言い難い規則。しかし、師族会議体制が再編されても、悠元はこの規則を残した。そして、十師族各家に対する手本として、神楽坂家と四葉家がこの情報を開示した。
今回の一件は沖縄海戦の慰霊法要に伴うために四葉家へ協力を要請したことと、国防軍との協力はあくまでも脱走兵を捕縛するために協力を申し出てきた大亜連合側の事情を鑑みてのもので、体制再編に伴う関係再構築の第一歩と明言した。
その際、脱走兵捕縛に協力したという形で達也の名が出され、首謀者クラスを捕縛したのは悠元という形になった。破壊工作阻止に対して敵戦力を削ぐということは立派な功績である、と悠元は師族会議の場で達也の功績を褒め、これには真夜も笑みを浮かべていた。
この一件は十師族の当主にしか開示されていない情報の為、燈也や香澄に泉美、理璃に琢磨、それと詩奈はこのことを無論知らない。だが、剛毅は将輝に対して、その日の夜のその情報を伝えた。その理由

は発破を掛けるためでもあった。
顧傑の一件の後、見るからに落ち込んでいた将輝を見かねて剛毅が自室に呼び出して事情を尋ねた。息子の想い人である司波深雪から丁重に振られた上、その翌日に彼女の婚約者である神楽坂悠元へ模擬戦を申し込み、完膚なきまでの敗北を喫したと聞いたときは頭を抱えた。
臨時師族会議の時にその詳細を悠元から聞いたが、悠元は将輝が提示した条件を全て？んだ上で模擬戦を受け、更には現代魔法のみで将輝を完全に叩きのめした。
『一切手は抜いていないし、一条殿の子息が提示された条件を全て？んだ上で模擬戦を受け、その上で勝っただけのこと。これでまだ私の婚約者に付き纏うような素振りを見せたら、次は〝最悪の事態〟も覚悟していただきたい』
元々、顧傑の一件に関わる将輝の招集は司波深雪に対する気持ちに決着を付けろという悠元の考えもあってのことだと聞かされ、剛毅は深い溜息を吐いた。
何せ、現師族会議議長にして神楽坂家現当主の彼は九校戦で２年続けて将輝を完封している。明確な実力差を見せているにもかかわらず、人の婚約者に対して色目を使うような真似をしたら、次はどんな処分を下すかなど見当もつかない。将輝を一条家から廃嫡しろと言われてもおかしくないことは、正月の挨拶の時に妻の美登里から忠告されている。
（発破を掛けられたまでは良かったが、真紅郎君からは「まだ諦めていないように思える」と相談されたからな。まったく、馬鹿息子が……）
腑抜けたままでいられては将輝の『クリムゾン・プリンス』の名が泣くと鑑みた剛毅は西果新島の件を将輝に伝えた。それを聞いた将輝が復活して訓練に熱を入れるようになったし、今も闘志に満ち溢れている。
ただ、息子の内心では想い人を諦めきれていない様子が見られる、と息子の友人である真紅郎から相談されており、父親として正直困り果てていたのも事実であった。

しかし、そんな親心を見せるのは後回しということで剛毅は気持ちを切り替えたのだった。

不審船に近付く役目の船には将輝と真紅郎、そして剛毅が乗船している。自らを囮とするようなリスクを背負う作戦に、周囲からは当然反対の声が上がった。一条家の一、二にいる実力者を同一の船に乗せて作戦を決行するというのは、仮に二人を失った時のダメージが大きすぎるためだ。

だが、剛毅はその意見を一蹴した。最も強く、最も生存確率が高い自分が先頭に立つことを強く主張したのだ。彼は義勇兵による軍団を組織したのであって、軍隊を指揮しているわけではないのだと。

十師族は魔法師の利益を守る為の組織であり、部下の魔法師は国家にとっての国民に該当する。先日の体制再編に伴って軍という柵を抜けたからこそ、同じ志と使命・義務を有する「仲間」として守らなければならない。そして、剛毅の気質は息子の将輝にも受け継がれていた。

剛毅と将輝が同じ船にいるというのは合理的な判断に基づくものでもあった。それは、海上戦闘が出来る魔法師の数が一条家の郎党であってもそれほど多くないという現実的な問題が大きい。

魔法は原則として一つの事象、一つの対象物に対して作用するものであり、対象物の一部のみを切り取って事象改変を起こすのは高い技術力が必要となる。より厳密に述べるとするならば、情報体次元（イデア）における膨大な連続した情報体の一部を事象改変するのが技術的に難しい、というのが現行の魔法における大きな課題である。

例えば、一条家の『爆裂』は液体を気体に急激昇華させる魔法だが、対象となるのは人体に限らず、機械内部の燃料や潤滑油といった液体類、果ては海水もその対象に含まれる。一条家の魔法師にとって、海水は無限の爆薬庫みたいなものだ。

ただ、どんなに優れた魔法師であっても、実際に海水を魔法に利用する場合はその一部を意識して切り取って魔法の対象に指定しなければならない。これは別に『爆裂』に限った話ではなく、例えば空間に対する領域魔法が特定のものを指定する対物魔法より難しいのも

〝情報の連続性〟が鍵となっている。特に海は「どこまでも続いている」という〝実感〟に縛られてしまい、海水を魔法に利用するのは空気弾よりも難しい。

天神魔法の場合、対象物のサイオン情報を一度白紙にしてしまうため、その時点で対象範囲外との〝情報の連続性〟が無くなり、範囲内の海水を容器の中に入った海水と同じように認識することが出来る仕組みだ。

話を戻すが、魔法に関する事情もあって将輝と剛毅、そういった魔法を使いこなせるメンバーが偵察組に加わったのは自然の流れとも言えた。不審船――――見た目は小型の貨物船が双眼鏡無しでもハッキリと捉えていた。攻撃や回頭はおろか、ただ漂流しているようにも見えてしまう。

しかし、横浜事変における偽装揚陸艦や先日の沖縄では偽装係船ドックのこともあり、油断はできないと判断していた。

このまま不審船を沈めることは簡単である。義勇兵のリスクを考えれば、その選択が一番妥当だということも理解していた。だが、剛毅は最悪海賊的行為に踏み切ってでも敵の正体を掴むことを選んだ。

5年前の時は、新ソ連が白を切り続けた。捕虜はなく、死体にも身分を示すものはなかった。その死体によって新ソ連が混乱したが、外交的に見れば日本の敗北であった。その苦い記憶が剛毅にとってリスキーな作戦を選ばせたのだった。

「偵察隊、突入！」

剛毅の号令によって、将輝を含めた五人の若者。当然戦闘能力や生存能力を前提に考えられたメンバーであり、実質的な先鋒と取っても不足はない。そして、真紅郎がフォローに回ることになる。

「将輝、気を付けて」

「バックアップを頼むぞ、ジョージ」

真紅郎の気遣う声に将輝がそう返して船を飛び出し、海の上を〝駆けていく〟。将輝の後ろに続く四人も彼と同じように海上を走っていく。五人が不審船に近付く間も特に攻撃は受けず、偵察隊は難なく不審船に降り立った。

流石の将輝も不気味さを覚えたのか、無線で真紅郎に問い合わせた。
「ジョージ、そちらからは何か確認できないか？」
『カメラにも人影が映っていない。映像と観測データから観測するに、無人船だと思われる』
それではまるで〝幽霊船〟に乗り込んだようにも思えてしまう、と将輝がそんなことを思ったところで、真紅郎が少し慌てた様子で早口に告げた。
『……将輝。そっちのセンサーで可燃性ガスの漏出を検知した』
将輝は気を引き締め、自分が身に付けている腕時計型の簡易的な多用途検知器で確認した。それでもはっきりとした濃度が出るほどのガスを検知したため、将輝は部下に指示を出す。
「全員、障壁を張って船外に退避」
検出されたガスはプロパン。空気よりも重い気体であるために選ばれたのだろうが、戦場で仕掛ける罠にしては中途半端なレベルのもの。仮に船一杯に充満していたとしても、プロパンの爆発上限（爆発しなくなる気体濃度の上限）が低いためにそこまでの威力は期待できない。
将輝の指示で偵察隊が船外の海面に降り立つ。
その一方で、データリンクでガスの正体を知った剛毅たちの間にも拍子抜けた空気が漂っていた。
それこそが、敵が仕掛けた罠だったと推察するのは、その直後に高まる魔法の発動兆候であり、装甲船にいた剛毅が驚愕の表情を浮かべていた。
「海面上に魔法の兆候……!?」
直前まで魔法攻撃の気配はなかった。しかし、真紅郎がその言葉を言い切ることも許さないかのように、一瞬にして装甲船の周囲を海面に投射された無数の魔法式。それは当然海面に立つ将輝にもハッキリと認識していた。
「親父っ!?」
そう叫んだ直後、魔法が発動して海が爆発する。まるで、海に敷き

詰めた無数の機雷が一斉に爆発したような爆風が将輝たち偵察隊へ襲い掛かった。
将輝たちは爆風にあおられ、波の上を転がって海中に沈む。
直に海上へ上がった将輝の視界は、水飛沫と水煙と塩の雨で混濁していた。
「チイッ！　親父！」
海面に上がった将輝が気流を生み出し、白い闇を吹き飛ばした。装甲船は重装甲のお陰か、船尾部分に酷い損傷は受けたが沈没に至るような船体へのダメージは避けられた。恐らく幾重にも張られた魔法障壁で持ちこたえたようで、それを成したのは自分の父親に違いないと直感した。
だが、将輝の耳に掛けていた音声通信ユニットから悲痛な叫びにも近い声が聞こえてくる。
『将輝、無事かい！』
「ジョージ。ああ、こっちは爆風に飛ばされただけだ……何かあったのか？」
『剛毅さんが大変なんだ！　早く戻ってきて欲しい！』
「親父が……わかった！　だから、お前もまずは落ち着いてくれ！」
部下への指示を飛ばすことも忘れて、親友に冷静となるよう叫びつつ急ぎ足で装甲船へと駆け戻っていく。
幸い、不審船からの追撃はなく、可燃性ガスも爆発の衝撃で吹き飛んでいたのだった。

降ろそうとしたら雪だるま式に増えていく

明日、４月７日は魔法科高校九校の入学式だ。

一昨年は新入生総代だったが、独立魔装大隊というか佐伯少将の〝非常識な要請〟によって出ることが出来ず、結果的に深雪へ負担を押し付ける格好となった。合わせて達也に苦労を強いる格好となり、結局ほぼ原作通りの流れを辿る羽目となった。

昨年は生徒会役員として来賓の応対を任され、その際に克人や七草姉妹との再会、七草真由美（こあくませんぱい）の暴走の一幕もあった訳だが、比較的穏便に事が進んだ形となった。

そして、今年は部活連会頭として入学式の手伝いをすることになるわけだが、来賓の顔ぶれを考慮すると深雪だけに任せるのは良からぬ考えを持つ輩を近づけることにもなる為、自分が応対する必要が出てくるだろう。

まあ、原作に比べると生徒会のメンバーも７名と増員したため、役割分担によって深雪や達也の負担が減るのは確かであるし、風邪が治ったほのかも張り切っている。それを見た雫が「今度は張り切り過ぎて知恵熱で倒れなきゃいいけどね」と釘を刺す様に辛辣な言葉を吐いたのは、いつものことである。

負担が減ったとはいえ、明日の為に早めに寝るのは達也たちも同意見であったが、先に風呂に入った（最近は達也、悠元、深雪の順になることが多く、その後に水波が入っている）悠元が自室に戻ると、極秘の暗号メールが着信していた。

すぐに目を通した悠元は端末を立ち上げ、『八咫鏡（ヤタノカガミ）』で北陸――――佐渡島を基点に成層圏カメラや各種データなど、周辺の情報変更履歴をすべて集めた。人伝に聞く情報も有用だが、まずは現地の情報を全て把握しておく。

その情報を整理し終えた所で司波家のキャビネットに情報を転送した。それが完了したのを見計らったかのように達也からの内線が掛かってきたのは、悠元が自室に戻ってから４５分後だった。

達也ならすぐに情報を伝えるものかと思ったが、どうやら深雪と水

波が風呂から上がるのを待っていたようだった。悠元がリビングに姿を見せると、既に座っていた達也と深雪、水波が悠元のほうに視線を向けた。
　窓は既にシャッターが締められており、こちらを覗いて情報が漏れる可能性は極めて低いだろう。悠元は深雪の隣に開いている席に座り、達也と向き合った。
「すまない、待たせたか？」
「いや、俺も少し考えたかったからな。情報のほうは集められたか？」
「時間をくれたお陰でな。キャビネット、コード〝イクシオン〟」
　悠元の言葉でキャビネットに今回の一件――――佐渡島を中心とした周辺地図が表示される。これにはまだ何も知らされていない深雪と水波は首を傾げているが、達也は既に四葉本家からメールを貰っているようであり、その地図が出たことに対して驚きはしなかった。
「本日の午後、佐渡島の北端から北に５０海里（９２．６キロメートル）のところに不審な貨物船が昨日より出没というか漂流に近い形で停泊していた。その船を調査しようとしていた一条家の調査船が魔法攻撃を受けた。早い話が、その不審船が敵の仕掛けた罠だろうな」
　正直、忠告はしなかった。流石に５年前のことが穏便に済んだ以上、下手なリスクを負う方が危険だと理解する、と判断していたからだ。だが、一条家当主は敵の正体を暴くためにリスクを承知で敵の仕掛けた罠に飛び込んだ形となった。
「広範囲の海上爆撃を防御しようとして、一条剛毅殿が重態の状態に陥ったそうだ。意識はあるものの、肉体が満足に動けないらしい」
「本家は魔法演算領域の過負荷による麻痺状態ではないか、と推測しているが……悠元の見解はどう見る？」
「概ねその認識で間違いない。俺も立場上こういう症状の人間は見たことがあるからな」
　深雪は口に両手を当て、驚きを露わにしている。水波に至っては表情が抜け落ちてしまったような驚きを垣間見せていた。これには悠元と達也がお互いに見合い、思わず苦笑を漏らしてしまった。
　達也は殺し合いも前提とした魔法師との戦闘訓練を受けてきてい

たし、悠元は第三研や祖父の絡みで軍人魔法師と手合わせしたり、魔法演算領域の過負荷による現象も目撃していた。単に経験値の違いなので深雪や水波の反応も仕方がないと思う。
「物理的に神経系統が損傷を受けているわけではないし、意識があるのなら回復の目途も立つ。ただ、一条殿も無茶をしたな」
原作を知っているからこそ、その流れに沿っていることには色々複雑な気持ちである。達也のメールに書かれた四葉本家の報告書によると、剛毅は魔法師を守る為に四枚の魔法障壁を張って防御した。三枚も破られたが、残る一枚で辛うじて止めることが出来た。
だが、剛毅は大人数の魔法師を守る為に現代魔法では効率が悪いとされている障壁魔法を選択した。剛毅が部下の魔法師をどのように思っているかは知っている為、『仲間』を守る為に命を張ったと考えるべきだろう。
「一条殿がこういう状況になったからと言って、将輝がスライドして一条家の当主へ簡単になれる訳じゃない。何より神楽坂の現当主である俺がそれを一番よく理解している」
魔法力だけを見れば将輝は当主足り得る資質を有するが、一条家のネームバリューというのは単に魔法力だけで語れないプレゼンスを有する。それを明確に示したのは5年前の佐渡侵攻に際して一条家を中心とした義勇兵の存在だ。
戦場で活躍したのは将輝（プラス民間人扱いだった燈也）だが、そこに至るまでの強い働きかけで義勇兵を起こせたのは現当主の剛毅の尽力によるものだ。
悠元は魔法の実力を見せることで神楽坂家の次期当主となったが、そこから『伝統派』の解散と聖域構築を功績として当主となった。誰しもが無視できない尽力の功績という意味で、将輝は当主としての箔が足りないのだ。
「一条家にも無論当主不在の際の対処法はあるだろう。一ノ倉家や新たに十師族となった一色家もサポートはするだろうが、守護地域が隣り合う四葉も他人事では済まされないだろうな」
「私達が派遣されるのでしょうか？　それとも、悠元さんが？」

「流石にそれはリスクが高すぎるし、何より俺自身一条家と因縁を持ってしまっている。緊急時にいがみ合うこと自体馬鹿げているが、将輝が絶対にいい顔をしない」
悠元の固有魔法『領域強化(リインフォース)』による魔法治療は確かに強力だが、その副次効果を考えると一条家相手には使いたくない。それに、深雪の件で将輝と蟠りを持っている部分も大きい。
一条家当主が動けない状態となっている時に何を言っているのかと思うが、仮に悠元が剛毅を治療したとしても、将輝が悠元に対する感情を改めるかは別の問題。しかも、一条家の次期当主ということからして、この先数十年は顔を突き合わせることになる相手と必要以上に諍いなど起こしたくなどない。
なので、悠元は次善策を既に三矢家と四葉家、それと北海道方面を監視・守護する七宝家へ提示した。
「三矢家には当分太平洋方面の国外情報収集に専念してもらうことにした。七宝家には新ソ連方面への警戒を強めるよう進言しておいたし、四葉本家には夕歌さんを神楽坂家の魔法治療師として派遣する方針を伝えた」
「夕歌さんは魔法師の治療が出来るのですか?」
「俺が魔法治療の技術や魔法演算領域の知識を全て叩き込んだ。司波家にしょっちゅう来ていたのは単に婚約者としての絡みだけじゃなかったんだ」
国立魔法大学大学院で『魔法演算領域のオーバーヒート』に関する研究をしている夕歌に、悠元は現行の魔法技術では解明されていない魔法演算領域の仕組みや、『リンカーコア』、『ゲート』を含めた魔法師特有の『魔術回路(マテリアル・サーキット)』の知識を全て教えた。
なお、それを聞いた夕歌曰く「そのどれか一つでも発表したら、平気で一生食べていけれるわね」と溜息交じりに言われた。非常識なことは認めるが、納得がいかなそうに言われたことは解せぬ。
「必要最低限の護身術なども教えているが、本人の得意分野を生かす意味で教えたんだが……当たってますよ、深雪さん」
「当ててますから」

「……いちゃつくのは部屋に戻ってからにしてくれ」
魔法演算領域自体、ブラックボックスの要素が多すぎて現行の魔法技術では解明できていないとされている。だが、達也の目の前にいる人物はその領域すらも既に解明していた。驚くことが多すぎて、もう何が出てきてもおかしくはない埒外の天才だな、と達也は改めて思った。
「それで悠元、強力な爆撃による魔法攻撃と言っていたが」
「こっちの分析から推測するに、攻撃は水を分解して生成される酸水素ガスを点火することで広範囲を爆発させる魔法という解析結果が得られた」
そもそも、悠元は『灼熱と極光のハロウィン』で『トゥマーン・ボンバ』を読み取っている。なので、魔法の性質やそれに使われている技術、魔法の効果も既に把握しているが、今すぐに言うことでもないのでその部分に関しては言わなかった。
「威力としてはどうだ？」
「単発としての火力で言うなら『マテリアル・バースト』と比べて遥かに劣る。だが、この魔法は複数地点で同時に点火させることで威力を重ねたり、広範囲を爆撃できる可能性がある。先日モスクワ郊外で使われた魔法の結果と酷似していることから、恐らく同一の魔法の威力を落として発動させたとみるべきだ」
そもそも、単発火力を『マテリアル・バースト』と比べること自体おかしいことだが、達也が受けた戦略級魔法だとそれ以外なら『ヘビィ・メタル・バースト』しかないためだ。下手にその他の戦略級魔法と比較するわけにもいかないので、悠元は話を続けた。
「たかが船一隻相手にとは思うが……多分情報が国防軍から流れてきてないから言っておくが、３日前に新ソ連の黒海基地でレオニード・コントラチェンコとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが会談した。新ソ連の『十三使徒』が揃って会談した３日後にご覧の有様だ。多分、達也が超遠距離魔法による支援という形で招集が掛かる可能性がある」
「やはりか……悠元が情報を纏めている間、俺もその可能性について

考えていた」
「新ソ連が攻めてくる、ということですか？」
「本格的な侵攻とは思えんが、念には念を入れておくつもりだ」
本来、達也に流すべき情報を意図的に流していないことはとうに知っていた。響子に確認すると「ごめんなさい」と謝罪されたほどだ。別に個人的な誼を持ったとしても、達也の戦略級魔法を使う最終許可を出すのは悠元だ。
仮に達也の戦略級魔法を使わせようと婚約者や家族を人質にとるような真似をした場合、『鏡の扉（ミラーゲート）』で乗り込んだ上に『流星群（ミーティア・ライン）』で全員あの世に行ってもらうことも辞さない。
欲の為に法の倫理を破れば、こちらが超法規的措置に乗り出しても誰も咎めるものは存在しない。そういう気質は良くも悪くも今の母親譲りなのかもしれないが。
「今の国防軍……というか、達也が四葉家の人間だと明確にした以上、独立魔装大隊としては距離を置くことを選択するだろう」
「……俺の戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』か」
「そういうこと。俺が一応特務中将として陸軍総司令部所属になっているが、最悪蘇我大将の提案を呑まざるを得ないだろう」
今年初めに悠元が特務中将へ昇進した際、蘇我大将――――正確には経由しての話だが――――から大友参謀長の件と合わせてもう一つの話を持ち込まれていた。それは、統合軍令部への転属の話だった。
悠元が発注して完成した「ずいかく」と「ずいほう」。この二隻の空母の扱いが一番問題視されたのだ。空母自体は海軍の管轄だが、艦載機は現行の国防軍法と経済規模・人員を鑑みて空軍の管轄となっている。
そこで、元々の提案者である悠元が国防陸軍の特務士官であることに防衛省の制服組が目を付け、空軍と海軍の階位を与えようと考えたのだ。その結果、悠元――――上条達三という軍人は陸軍特務中将兼海軍特務大将兼空軍特務少将という何ともちぐはぐな階位になってしまったのだ。
階位の上げ方は当初少将で揃える予定だったが、佐伯の動きを見た

蘇我が陸軍総司令部への転属を含めて九島烈ですら成し得なかった特務中将に昇進。それを聞いた海軍が「ずいほう」の就役に合わせて異例の特務大将へ昇進。空軍も現在特務大将への昇進をさせようと画策しているらしく、それを蘇我経由で聞いた悠元は深い溜息を洩らした。

「何かあったのか？」

「実はな、大人たちの醜い争いのせいで三軍の将官クラスの階位を持ってる。非常任職だが一応給料も出る……別に昇進したくないし、ただ魔法装備の開発と解析をしてただけだというのに……その件で蘇我大将から統合軍令部への転属提案を話された。一応保留にしたが」

ちなみに、空軍と海軍の階位については第１０１旅団および独立魔装大隊に対して通達されていない。変に調子に乗ったり暴走する可能性があるためらしい。防衛省側も国防軍の改革にあたって反十師族・反九島烈のグループの扱いに困っているらしく、この前は防衛省に呼び出された挙句防衛大臣の大人気ない愚痴に付き合う羽目となった。

その後、事情を聞きつけた総理大臣が防衛大臣に拳骨をお見舞いし、揃って土下座するという有様に引き攣った笑みしか出てこなかったのは決して俺のせいではないと思う。寧ろ、摩利に拳骨と説教を喰らう真由美のような既視感を思い出しての苦笑であった。

「常任職じゃないから、いつでも辞められるという利点はあるが、達也のことを考えると縁を切るということにはならんだろうな。それは別に構わないが……もしもの場合、沖縄の時のように大黒特尉を自分の部下――――総司令部参謀補佐官として引っこ抜くことも考えないといけない」

セリアから聞いた話では、原作における未来の達也はベゾブラゾフのこととリーナの一件を皮切りに軍との関係を切っているが、『マテリアル・バースト』のことを鑑みると達也の〝公的な場における社会的地位〟は別にあったとしても問題はない。

大体、師族会議成立時に定めた〝軍関係組織や政府と深い関わりを

持たない〟なんて、提唱者の九島烈自身が国防軍に強い影響力を有している時点で矛盾しているのだ。
「それは、お兄様の魔法を公に使うための便宜ということですか？」
「有体に言えばそうなる。他人に管理できないものを無理矢理管理しようとしている時点で破綻するんだ……ま、新ソ連の動きがどうなるにせよ、今のうちに言っておく。俺は国防軍特務中将の権限を以て大黒竜也特尉の魔法使用および『サード・アイ・エクリプス』の使用許可を出すつもりだ」
　新ソ連の動きが本格的な侵攻とは程遠い動きの為、今回はあくまでも〝演習〟の要素が色濃い。だが、物事というのは感情の爆発で思わぬ方向に舵が切れることもある為、今回は達也の魔法使用に関して特に制限を設けるつもりはなかった。
「そうか……どこまでやったほうがいい？」
「勝ち過ぎるのもあれだから、船の溶接を『分解』して一隻ぐらい沈めれば、新ソ連の兵士にはいい運動になると思うけど……相手の魔法を防げればそれ以上手を出す必要もないだろう。必要なら俺が止めを刺す」
　それに、達也が別に全ての責めを負う必要は無い。悠元も遠距離魔法で支援できるため、もしもの時は艦隊全部を『鳳凰』で灰燼に帰してもお釣りは十分に来るだろうとみている。新ソ連の対日感情が悪化するかもしれないが、佐渡の件を意固地として認めていない新ソ連政府の責任であり、こちらに何ら咎められる謂れなど皆無だ。
　撃ったということは撃たれる覚悟を以て行った、と解釈するほかにないのだから。

可能性を捨てることこそ愚かの極み

人間の意識領域と無意識領域――――広義的に言えば『理性』と『本能・情動』に該当する部分。サイオンとプシオンの現在判明している部分でも、その認識に違いはない。だが、魔法を行使することにおいて、その魔法の仕組み自体があやふやというのは一見すると危険極まりない行為をしているも同義。言い換えれば、箱の中身が何なのかもわからずに開けて覗き込むようなものだ。

そもそも、魔法演算領域というもの自体が明確な定義を有していない。魔法の行使自体無意識的な演算をしているがために、感覚的な部分にどうしても頼らざるを得ない為だ。なので、仮に魔法演算領域の存在を認識できたとしても、意識的に動かすことは出来ても意識的な演算制御は極めて難しい。

なので、悠元が転生して『魔法科高校の劣等生』の世界だと認識した際、まず真っ先に取り掛かったのは魔法に関する基礎演算の確立だった。これは『聴覚強化』という今後一生付き合うことになる自分の特異体質を鑑みた際、サイオンとプシオンの性質を把握することが最優先事項であり、イヤーマフ付きというハンデを持ったまま強敵と戦う様な事を避けるためであった。

魔法を行使する際、魔法演算領域にかかる負荷を具に観察し続けた結果、『ゲート』を展開する記述式を発見。本来、魔法式を出力する『ゲート』自体は常に開きっぱなしとはならない。必要以上の情報が魔法師――――魔法演算領域に流れ込まないように閉じられる。だが、その開閉自体がエイドスに対する事象干渉力を減衰させることにも繋がっていたのだ。

別に『ゲート』そのものを利用することは決して悪いとは言わない。だが、古代文明で使われていた魔法は『リンカーコア』と呼ばれる魔法師とイデアの結節点を利用することで破格的な威力を叩き出す魔法を行使することが出来ていた。『ゲート』の主だった利用方法は、本来身体能力強化などといった意識的領域および肉体強化のための魔法に特化した魔法出力機構でしかなかったのだ。

その常識が長い時を経て伝承が途絶えるなどして捻じ曲がり、『リンカーコア』の存在は一部の古式の技術に残り、『ゲート』を使った魔法出力方式が常態化したのだ。

つまるところ、現在存在する『十三使徒』の戦略級魔法は全部パワープレイの産物としか言いようがなく、大規模演算が可能なコンピューターを駆使しないと使えないものがある時点で、悠元からすれば『欠陥品』としか言えない。

ちなみにだが、剛三や千姫の場合は天神魔法の技術を習得していることもあって『リンカーコア』による魔法行使を行っていた。サイオンを検知するセンサーで見ても、傍目から見れば現代魔法師が魔法を行使する状態と見分けがつかない為、分からなくても無理はないと思う。

閑話休題。

悠元の国防軍の階位に関する話はさて置くとしても、今後達也が対処に駆り出されることは間違いないとみている。

「俺と深雪は『神将会』の人間だが、それこそ差し迫った段階にならない限りは戦場に出るつもりなどない……ただ、さっきも言った通り俺が遠距離魔法で対処することも視野に入れておく」

「北海道方面と佐渡の両面に展開されることも想定してか？」

「情報で得た艦隊の想定規模を考えるのなら、二方面作戦は正気を疑うが……いっそのこと、相手が躊躇わずに戦略級魔法を撃ってくれたらいくらでも言い訳が付くんだが」

それは、仮にベゾブラゾフが『トゥマーン・ボンバ』を日本本土に向けて撃ち込んだ場合、今後の『ディオーネー計画』で仮にベゾブラゾフが協力を表明した段階で〝断れる理由〟が出来るからだ。

いくら新ソ連とＵＳＮＡが協力体制になったからと言って、佐渡の一件すらも白を切っている新ソ連の人間を信用できるかというのはまた別の問題だ。寧ろ日本と新ソ連の友好関係が拗れてくれた方がＵＳＮＡの抱える負担も大きくなる。「こちらの国民を脅かした疑念が払拭できない以上、いくらＵＳＮＡの要請といえども新ソ連の戦略級魔法師が協力している計画に賛同できない」と明確に発言して断れ

れば御の字。
「無論、被害が出ないように対処はするが、俺もそこまで万能とは言い難いからな。最悪、ウラジオストク近辺の変電所を破壊して停電させることも考慮に入れておくが」
「相手が演算コンピューターを使うなら、電気の供給源を断てば大規模魔法行使には踏み切れないということか。その辺は相手も考えていそうだが」
「最悪そこに繋がる電線を炭化させる方法もあるがな」
〝同盟国だから〟という理由だけでＵＳＮＡに従う義理があるというのなら、まずは言い出しっぺの法則でエドワード・クラークがいの一番に宇宙で一生を捧げてもらうのが筋だろう。それと、日本の国益に貢献している『トーラス・シルバー』を態々切り離す以上、将来得るはずだった国益の補填もしてもらわなければならない。

◇　◇　◇

一条家の当主が敵の計略に倒れたという情報は、当事者側の一条家としては隠したかったのかもしれない。だが、この情報は瞬く間に師族二十八家および護人二家に伝わった。だが、その情報の精度は家によって大きく異なっていた。
悠元が自室に戻ると、端末の着信を知らせるランプがついていた。端末を起動させると、モニターには悠元にとって学校の先輩――十文字家当主・十文字克人と、七草家長女・七草真由美の二人が映っていた。
「こんばんは、先輩方。お待たせしましたか？」
『いや、今しがた七草と情報交換をしていた』
『こんばんは、悠君。一条家のことは……もう知ってるわよね？』
「ええ。その件でさっきまで達也たちと話していましたので」
悠元が司波家に居候していることは克人と真由美にも知られていることなので、情報交換していたということに関して『そうか……』と言いたげに頷く克人と、羨まし気に見ている真由美の姿があまりにも対照的に見えた。
本来ならば悠元は当主にして師族会議議長、克人は十文字家当主、

真由美はまだ七草家の人間だが、今回は公的な場でない以上変に気張る必要もないので年齢に沿った話し方をすることにした。
「それで、先輩方は自分に何か聞きたかったのでしょうか？」
『ああ。今回の一条殿が受けた未知の攻撃だが、神楽坂の意見を聞きたい』
「……率直にお聞きします。二人が考えた可能性は何ですか？」
悠元の問いかけに、克人は先程まで真由美と話し合っていた内容について話した。
真由美は今も三矢家で居候しているためにメールで父親の弘一から伝えられた情報らしいが、成層圏プラットフォームの解析データを聞いた克人がベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』の可能性を疑ったが、真由美は『船一隻相手に使うような魔法ではない』と返して、その可能性を棄却した。
それを聞いた悠元は一つ深い溜息を吐いた。それに反応したのは真由美であった。
『悠君？　何で今溜息を吐いたの？』
「……十文字先輩。その推測は今月一日の件も含めての推測とみて宜しいですか？」
『ああ、そうだが……まさか、今回の一件を引き起こしたのはイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフだというのか？』
「概ねその通りとみていいでしょう。こちらの調査では北陸地方に新ソ連の工作員が潜り込んでいました。一条家当主が調査船に乗り込んでいることを把握しての攻撃とみて間違いないです」
黒海基地にいるレオニード・コントラチェンコが動いている様子も見られなければ、黒海基地及びウラル山脈以西から大規模魔法を発動させた痕跡は見当たらなかった。その一方、ウラジオストクにある新ソビエト科学アカデミー極東本部の一室から魔法兆候が確認された。
「海水の一部を利用して魔法を放つという緻密な技術を有する人間は限られてきます。無論、一条家にもそれが出来る人間はいますが、自作自演をする意味もありません。となると、一条殿を負傷させた相手は新ソ連側の人間――それも、遠距離攻撃を可能とする意味合いと

得られた情報を加味すれば、恐らく『十三使徒』イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが最も可能性のある人間ということになります」
『……たかが船一隻に戦略級魔法を使うの？』
「たかが、じゃありませんよ。船に乗り込んでいたのはこの国の十師族の一角を担う一条家当主とその息子の『クリムゾン・プリンス』。新ソ連にとっては無視できない相手がいるんです」
新ソ連に領土の野心があるかどうかと聞かれると、間違いなく前者の方が勝る。何せ、面している海の殆どが凍結および流氷によって閉ざされる。不凍港の存在は新ソ連の海軍にとって死活問題であり、旧ソ連が第二次大戦時に条約を破って日本に侵攻したのは不凍港を獲得する目的もあったからだ。
「確実に殺せるとは思っていなくとも、負傷させることが出来れば御の字。無事にやり過ごせたとしても、二度目の攻撃を警戒して北陸から動けなくなります。そこまでを見越しての罠でしょう」
ここから戦争に発展する可能性は極めて低い。現段階でそれに踏み切れば、間違いなく大亜連合が中央アジア方面から攻め込むのが目に見えている。いくらベゾブラゾフでも大陸から日本海にかけての広大なラインを一度に爆撃するのは負荷が重すぎて現実的ではない為だ。
だが、可能性が残っている以上は〝無い〟と切り捨てることもできない。警戒はしておくが、モスクワ方面の情報では本格的武力衝突に踏み切ることを良しとしていない。人間主義者や反政府勢力がいつ息を吹き返すか分かったものではないからだ。
その辺は人間主義者に資金・物資提供などをしているＵＳＮＡや欧州方面の連中次第だが。
『そうか……何にせよ、神楽坂殿（ｏｒ一条殿に関する）の情報提供に感謝する』
克人はそう言って頭を下げると、モニターが真由美だけに切り替わった。克人も真由美に弄られるのを察したためだろう。
「それで……先輩はまだ何かありますか？」

『むぅ……何で名前で呼んでくれないの？』
「先輩のご実家の責任とはいえ、全く関与していない訳でもないでしょう？」
『いや、それはそうなんだけど……』
　泉美からはメールで正式に六塚家の養女となったことを伝えられている。真由美のほうも二木家の娘となる手続きを進めているが、本人は婚約が確定したのに未だ名前呼びしてもらえないことを根に持っているようだった。
「先輩が正式に二木家の養女となったら呼んであげますよ」
『……本当に？』
「こんなことで嘘ついてどうするんですか」
　法的手続きについては、七草家側は真由美の母親が責任者という形で親権の譲渡を神楽坂家に依頼し、既に裁判所の手続きが進んでいる。普通なら両親が健在なのに親権を養親に譲渡するのは異例なことだが、〝家庭の已む無き事情〟となれば誰も異論を唱えようとは思わなかったらしい。
『……悠君に話しておくけど、実は十文字君と話してるときに、うちの上の兄が十文字君に相談したいと持ち掛けたのよ』
「ふむ……まあ、次の七草家当主に成り得そうな人ですし、十文字先輩に相談してもおかしくはないと思いますが、何か懸念でも？」
『それこそ、うちの父を通せば十文字君に繋がるだろうし、上の兄が十文字家の連絡先を知らないとも思えないのよ。何も、今家と距離を置いている私を通す必要なんてないもの』
　真由美の述べた上の兄――七草智一が克人に相談したいというのは後の〝若手会議〟に繋がる動きだと推測される。現時点ではその可能性というだけで、七草家の次期当主として十文字家当主の克人に教えを乞うということも別に変な事ではない。
　だが、真由美は何故自分を介して克人に持ちかけたのかが疑問に思えてならなかった、と述べた。確かに、智一ならば十文字家の連絡先を知らない筈がないし、師族会議の時点で面識があるとすればお互いに連絡を取り合えるはずだ。

「二人は魔法大学の同期生ですし、顔を合わせやすいという意味では間違ってもいないのでしょうが……それにしたって七草殿を介したくない理由があるのでしょうかね？　先輩がその気になれば自分に相談するかもしれないのに。何か懸念でも？」
『そうね……漠然とした感じなんだけど、何か嫌な予感がするのよ。上の兄に聞いた方がいいかしら？』
　こんな変則的な連絡方法が、仮に師族会議の時の諍いが原因だとしても逆に不自然すぎる。真由美を介せば婚約相手である悠元の耳に入ったとしてもおかしくはない。いや、入ったとしても問題ないと判断してのものだろう。
　だとするならば、仮に若手会議が持たれるとしても自分がその場に出ている可能性は限りなく低い。同じ理由で元継もその場にいない可能性がある。
「先輩が聞いたところで何も答えないかと思うので、無理に聞き出さなくてもいいです」
『……いいの？　悠君に関係することかもしれないのに？』
「明らかに不利益を被ると分かれば、本気で対処するだけですから」
　別に魔法だけが対処方法ではない。あらゆる分野で締め上げて本気の謝罪を引き出させるだけだ。九島烈が実質的に魔法界を退いて庇えなくなった以上、最悪七草家を師補十八家に落とすことなど容易に可能なのだから。
　もしもの時は九島健を帰国させて、七草家の監視・守護地域である奄美・沖縄諸島方面に新たな十師族として興せばいい。
「最後に一つ先輩に伝えておきます。先輩のボディーガードをしていた名倉三郎さんですが、今現在別の形で生きて神楽坂家の使用人をしています。名は支倉佐武郎といいまして、泉美ちゃんから聞いていませんか？」
『え、え？　名倉さんは死んだはずよね？』
「ええ、あの死体は紛れもなく名倉さん本人です。まあ、詳しくは言えませんがパラサイトの技術を応用して生き返ったようなものです」
『……』

真由美が完全に絶句しているのは無理もない話だ。何せ、死んだはずのボディーガードが生き返って神楽坂家の使用人として働いているなど青天の霹靂だ。尤も、さらに驚くことがあるとするなら現在の肉体は真由美の父親が殺せと命じた周公瑾のものという事実。

その部分については色々触れると魔法の秘密に関わるので秘匿する形だが。

「そういうわけで、京都の一件の詳細とかは彼から全部聞きました。周公瑾を殺せと命じられて返り討ちに遭ったことまで全て」

『……はぁ。悠君に掛かると、もうじき他人になるタヌキオヤジがやってることなんて御飯事みたいなものじゃない』

「自分はそこまで万能じゃないですよ。では、おやすみなさい」

そう言って悠元は通信を切った。変に長電話すると真由美がせがんで「一度でもいいから『真由美』って呼んで」と強請るかも知れなかったからだ。なので、そうならないように特大級の爆弾を放り込んでから通信を切った。

なお、空気を読んだかのように扉をノックする音が聞こえ、扉を開けると寝間着姿の深雪が「一緒に寝てくださいませんか？」と頬を染めて上目遣いでおねだりしてきたのはここだけの話。

浮かれていたら命が散るだけ

入学式に関してあまりいい思い出がない、というのはどうかと思われるだろう。だが、家を出てすぐに脅されて北海道に強制連行。字面だけ見れば「犯罪行為に巻き込まれたのか？」と問われると首を縦に振りたくなる気分を抱いていたのは否定しない。

北海道に連行された後、話を聞いて「正直そんなことのために自分を巻き込むな」と返したかったが、今思い返せば佐伯少将が自分の実力を見たいがために独立魔装大隊を動かしたとみるべきだろう。

何せ、響子や真田、柳（当時は響子が中尉、真田と柳が大尉）に確認したところ、風間から『済まないが、上条特尉を「魔法装備のテスター」として招集してくれ』と言われたことは確認済みだ。別にその程度のことなら真田や柳だけでも不相応とは言えないし、寧ろ彼らに対して失礼極まりない命令としか思えない。

そもそも、佐伯とは独立魔装大隊の関係で何度か顔を合わせているが、正直気分のいいものではなかった。独立魔装大隊への所属変更の件は大隊長が風間でなければ拒否していただろう。その後、入学式の一件で決定的な確証に至り、独立魔装大隊への関与は極力減らしていく方向に舵を切った。その過程で起きた神楽坂家入りは渡りに船だったと言える。

蘇我の機転で既に独立魔装大隊の士官として戦線に立つことはなくなったわけだが、かつて防衛陸軍総司令部所属の情報参謀をしていた佐伯に宛て付けるように悠元を総司令官直属の特務参謀としたことについて、蘇我も佐伯の考えは理解するがそのために十師族を掻き乱すようなことは許容できなかったようだ。

それに、悠元は元々佐伯を警戒していた。原作知識の側面があるのは否定しないが、彼女の利の為に自身の戦略級魔法を使うのは釈然としない気分を第一印象の時点で抱いていた。

その根拠の一つは今から約２０年前、佐伯と風間が近付く切っ掛けとなった大越戦争――――大亜連合がインドシナ半島征服を目論んで南下した戦争のことだ。真田経由で風間と面識を持った後、陸軍の資

料倉庫に保管されていた資料からその当時の様子を読み取った。
当時、軍の上層部は大亜連合との正面衝突を回避しようと必死だった。何せ、世界群発戦争が終結してから１０年とはいえ、その傷が完全に癒えたわけではなかった。その目論見を崩したのは風間とそれを支援していた佐伯だった。
女性という部分を差し引いても優秀であったため、上層部は彼女を冷遇など出来なかったのだ。その割を食う形で風間は普通の出世の道を断たれたわけだが、彼はそのことを特に気にも留めていなかった。
沖縄防衛戦後、佐伯は『十師族に依存しない軍人魔法師部隊の創設』という目的を掲げて第１０１旅団の設立を認めさせた。そして、尉官のまま留め置かれていた風間を大隊長とする形で招集、その副官には九島烈の孫にあたる藤林響子を据え、二つの戦略級魔法を用いた十師族を旗下に置くため、達也と悠元を特務士官として組み込んだ。
十師族批判の最右翼として知られる佐伯だが、魔法師に対する感情的な反発や生理的な嫌悪とは全くの無縁である。九島烈と政治的ライバル関係にあると噂されたり、かつて烈の下で学んでいたことからくる恨みで反発しているなどと噂する者も少なくないが、そこに限って言えば佐伯自身にその意識はない。それは悠元も理解していた。
ただ、セリアからの情報を見るに、戦略級魔法を一番使いたがっていたのは佐伯ではないかと訝しんだ。でなければ、戦略級魔法を管理する条約の提案など考えなかっただろう。魔法師を兵器だと見做すことを嫌う軍人魔法師の上司が戦略級魔法師に兵器であることを強要する、というのは皮肉としか思えないが。
十師族ひいては師族会議に関する体制再編に伴い、九島烈が魔法師社会から完全に引退した形となり、その地盤全てを引き継いだのは護人の二家。その当主である悠元は名目上佐伯の旗下に置かれているが、陸軍総司令部からの出向扱いとなったことで佐伯とは完全に独立した立場となった。
護人が明確に〝国家の守護〟という形で十師族を統括する立場を示したとなれば、反十師族の派閥を持つ佐伯としては微妙な立場に立

たされる形となる。蘇我からの悠元の辞令に異議を唱えられなかったのは、そんな側面が大きく影響しているためだ。
そんな過去の戦争の事情はさておき、悠元は風間と面識を持った際に情報の観点でかなり厳しい制約を掛けている。情報提供に関しては、風間から直接佐伯やその一派に流れる危険性を考慮して、風間へ情報を流す際は〝軍事の専門家による政府有識者の予測情報〟の形を一貫して取っている。
悠元の固有魔法『万華鏡（カレイドスコープ）』と『領域強化（リインフォース）』は、第１０１旅団はおろか独立魔装大隊の幹部相手にも話していない。祖父の絡みで武術面や魔法もある程度バレるのは仕方がないとしても、固有魔法や特殊能力（転生特典のことも含む）に関しては変な欲を抱かせかねないと判断してのものだ。
それに、実家の三矢家が国外の軍事情報収集に関して太いパイプを有している為、それを加味して特務参謀という非常勤職に就けた、と蘇我の佐伯に対する意趣返しも含まれていることはここだけの話。
閑話休題。
西暦２０９７年４月７日。今日は魔法科高校九校による入学式が一斉に行われる日だ。昨日の佐渡沖の件は一条家（護人と師族二十八家には既に知られていたが）で止められていたため、第三高校も予定通り執り行うことになったらしい。
生徒会役員である深雪、達也、水波。そして部活連会頭である悠元は式の二時間前に登校した。講堂に入った彼らを幹比古と香澄の風紀委員会組、理璃と泉美、セリアの生徒会役員組、そして新入生総代の三矢詩奈が待っていた。
「おはようございます、お兄様」
「おはよう、詩奈。侍郎とは一緒に来たのか？」
「はい。でも、『私の邪魔をしたくない』とか言って、開場まで校内を見学すると」
悠元と詩奈は既に別の家の人間だが、血縁関係までは断ち斬る事など出来ない。ここにいる面々は悠元が三矢家の人間だったことを知っている。なので、詩奈の呼び方に対して一々どうこうなどと述べ

るつもりもなかった。
　その間に他の面々とも挨拶を交わしたところで、深雪が詩奈に話しかけた。
「三矢さん……詩奈ちゃんと呼んでもいいかしら。お待たせしてごめんなさい」
「いえ、そんなことはありません。私のことは既に卒業したとはいえ兄や姉もいますので、名前呼びで構いません。私のほうも深雪お姉様とお呼びしていいでしょうか？」
「ええ、構いませんよ」
　深雪が悠元と婚約しているので、深雪と詩奈は自ずと義理の姉妹関係になる。それを言ったらセリアと水波、香澄と泉美にも決して無関係ではないことになるわけだが。受け答えをする詩奈のふわふわとした髪に隠れて目立たないようなカラーリングのネックバンド式イヤーマフ型ＣＡＤがチラリと見えていた。
「すみません！　少し遅れました！」
　まだ時間に余裕があるとはいえ、駆け込んできたほのかで生徒会役員全員が揃ったので、最終確認の打ち合わせをすることになった。この辺のやり取りは悠元も昨年生徒会役員だったので問題はなかった。部活連メンバーの打ち合わせ自体は事前に連絡していたし、よもや入学初日からトラブルを起こそうなどという不届き者はいないだろう……多分。
　そこまでならば良かったわけだが、ここで深雪が悠元に祝辞の入った包みを差し出してきた。これには首を傾げる悠元に対し、深雪は「2年前は私が答辞を呼んだのですから、祝辞を読んで欲しいのです」と言ってきた。
　周りが強く反対しない辺り、そこら辺を根回ししていたのだろうと思うが……唯一疑問に思っている詩奈の首を傾げる姿に小動物のような可愛らしさを感じて少し癒された。とはいえ、この学校の生徒会長が通年の慣習を破るのはマズいだろうと思って考えた結果、妥協案を提示することにした。
「……達也、来賓からの祝辞の最後に『師族会議議長の祝辞』を捻じ込

むことは可能か？」
「元々時間に余裕はあるからいけるが、原稿はどうする？　何か用意するか？」
「要らん。今更作っている時間も惜しい。適当に考えておくから、変更の部分を打ち合わせてくれ」
　達也から反対意見が出なかったということは、卒業式の一件でこうなることも想定してタイムスケジュールを組んでいたのだろう。まさに『流石お兄様』である……と思っていたら、後で達也から「心の中であっても兄呼びは止めてくれ」と釘を刺された。解せぬ。

◇　◇　◇

　そうして始まった入学式は、いつもなら何処か浮ついた空気が抑制されていた。新入生も父兄の視線は舞台の下に控える生徒会の顔ぶれが気になって仕方がなかった。いや、厳密に言えば生徒会長である深雪と書記である達也に対して。
　余程暢気な人間でなければ、これから通おうとする学校のことは当然調べるだろう。だから生徒の大半が、現在の第一高校の生徒会長があの四葉家の人間ということは知っていた。
　九校戦を通して深雪を知る者は、この第一高校の入学生でも大半を占めている。だが、実際にこの世のものとは思えないほどの美貌を目の当たりにすると、底知れぬ四葉家の評判と相まって生み出されるプレッシャーに、ただの新入生や父兄に抗う術はなかった。
　それ以外の「ただの」ではない父兄は、深雪から感じられる底知れぬ魔法力と、その隣に控えている達也の、何も感じることが出来ないという不気味な存在感に、緊張を緩めずにはいられなかった。
　だが、この学校には更に上の存在がいるということを、新入生や父兄たちは知っている。この学校において最早〝生ける都市伝説〟となりつつある『触れ得ざる者』。本人は強く否定しているが、その元凶たる存在を彼らはその場で目撃することになろうとは露にも思わなかった。
『最後に師族会議議長、神楽坂悠元殿』
　司会を務める理璃のアナウンスで、講堂の中が少し騒めく。その中

で来賓と生徒会役員に頭を下げ、壇上に上がった制服姿の悠元は掲げられた国旗と校旗に一礼し、演台の前で一度立ち止まる。その場で頭を下げた後、ゆっくりと上げて一歩進み、演台の前に立ってマイクに対して声を発する。

「新入生の皆さん、入学おめでとうございます。この良き日に晴れて皆さんが魔法科高校の生徒となったことは、同じ学校で学ぶ先輩としても、師族会議の議長としても喜ばしい限りであります……とまあ、堅苦しい挨拶はこの辺にしましょうか」

大体、こちらとしては急に降って来たような話だし、ここまで来賓の話ばかり聞いている新入生の中には長話で疲れて眠っている者も少なくない。それを理解したためか、悠元は突然目の前で両手を叩く。その音が講堂に鳴り響いて、眠っていた新入生も飛び起きるようにしている様子が見受けられた。

新入生全員が起きていることを確認した上で悠元は話を続ける。

「ここにいる生徒の大半は、自分が元十師族・三矢家の人間ということは九校戦などを通して承知だと思う。2年前、本当ならこの場に立って答辞を述べていたわけだが、家の事情でそれも叶わなかった。その時に言えなかったことをこれまでの経験も含めて口に出そうと思う」

一体何を言おうとしているのか、と新入生や父兄だけでなく在校生や教職員も見つめる中、悠元は爆弾を放り投げるように言い放った。

「魔法科高校に入学できた時点でエリート……なんて言うのが外から見た評価だが、俺からすれば半月前まで普通の学校に通っていたただの中学生がいきなりエリート扱いする神経が信じられない。褒めて伸ばすにしても、やり方があまりに稚拙すぎる。十師族という立場から言わせれば当然じゃないかと反論する者もいるだろうが、何も十師族だからといって努力せずに九校戦で見せた結果を出すなんてことが出来たら、それは最早人間というカテゴリを疑いかねない所業だ」

悠元自身、類稀なる才能と人並外れた努力の結果に今の実績を勝ち得ている。これまで卒業していった先輩たちもその実力を身に付けるために努力を怠らなかった。

一部の人間はその実力を妬んだりしていたわけだが、彼らは嘗て剛

三が言っていたこと――『最後に勝つことが出来るのは、誰よりも諦めなかったものだ』――を最後まで完遂しようとしなかっただけなのだ。
「前列の一科生、後列の二科生……そもそも、大人側のしょうもないミスのせいで出来てしまったこのシステムだって、俺からすれば馬鹿馬鹿しいと言わざるを得ない。今のお前たちは入学試験の結果を以てその場にいるだけだと自覚しろ。入学したことに浮かれて怠けるような真似をしたら、魔法がお前たち自身を殺す刃として返ってくることを忘れるな」
　現状、魔法科高校に入学した者は半数近くが国防軍関連の進路を進んでいることなど承知の筈だ。魔法科高校に入学するということは、将来軍人への道を歩む可能性を秘めていることを新入生も父兄も理解していなければ話にならない。つまり、どんな形であれ人の生き死に携わる仕事に就く以上、不慮の事故で死ぬことも覚悟せねばならないことを理解しているのだろうか……と。
「何故ここまで厳しい事を言うのか、と思う人間もいるだろう。俺は5年前、沖縄で起きた大亜連合の侵攻に際して魔法師として実戦を経験した。後方支援などではなく、佐渡で活躍した『クリムゾン・プリンス』のように最前線で魔法を使い、敵を倒した。それがどれほど大変な事なのかを体感させることはできないが、将来、ここにいる新入生の何人かが遭遇することになるかもしれない未来を既に経験している」
　沖縄の件は、昨春の段階で神田議員を通してメディアも知っていることの為、別段隠す理由もないと判断した。戦略級魔法『天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）』に繋がるような状況証拠と言っても、当事者側の証言ぐらいだろう。なお、あの戦闘の一部の映像データは風間の手で破棄されたらしい。悠元と達也の素性を知られることを避けてのものだ。
「無論、魔法師になったからと言ってそういった事態に遭遇するとは必ずしも言えない。だが、魔法研究者への道に進んだとしても、決して安全とは言えない。どの道を選ぶかは各々の選択によるが、魔法に携わる仕事をするということは、相応の危険を伴うということをしっ

かりと覚えて欲しい。この場にいるということは、その入り口に立っているということだ」
　話を戻すが、だからこそ魔法科高校で一科生（ブルーム）だ、二科生（ウィード）だのと変な対立をしていること自体無駄な労力であると言わざるを得ない。教職員が止めたがっていそうな雰囲気を漂わせているが、気配の指向で完全に抑え込んだ上で話を続ける。
「この学校における魔法実技の評価は、魔法の展開する速度、魔法式の規模、対象物の情報を書き換える強度の３つ。だが、魔法師ライセンスや先日施行された国家魔法技能師の評価基準は十数項目にも及ぶ。教わる事だけをただこなしたとしても魔法は上達しない。幸い、この学校には多くの魔法に関する文献や資料も存在する。教員の個別指導の有無はあれども、この国の魔法に関する最先端の研究を学べる機会をふいにするな。もし一科生だからとか二科生だからとトラブルを起こすような人間などに魔法師など目指してほしくない。最後の言葉は、俺の姉であり現在第一高校の魔工科副教官をしている三矢佳奈の言葉でもある」
　学べる環境があるというのなら、それを活用しない手などない。来年度から二科生制度が廃止になることが決まった。目下の問題点は二科生に宛がえる分の指導教官不足という点に尽きるが、それは学校側の問題なのでこちらが関与すべき問題ではない。
「教わる事だけで妥協するな。納得がいかないのならば、納得がいくまで考えて実践しろ。魔法に対する答えを持っているのは教官じゃなく、それを扱う新入生の皆であることを忘れるな。長くなってしまったが、これにて祝辞と代えさせてもらう。改めて、皆の入学を歓迎する。第一高等学校課外活動連合会会頭ならびに師族会議議長、神楽坂悠元」
　言いたいことも言い終えたので、丁重に礼をしてから生徒会役員の横に並んだ。そのままバックレようかと思ったが、深雪から視線で「近くにいてください」と言われるような態度を見せられると、これには惚れた弱みでそうせざるを得なかった。
　なお、その後の深雪の祝辞、詩奈の答辞は比較的和やかに進んだ

……先程の悠元の祝辞と比較しての話ではあるが。

来賓たちも悠元の肩書きに遠慮したのか、深雪や詩奈を長く引き止めなかった。師族会議議長の婚約者と血縁者ともなればお近づきになりたい輩がいるかもしれないが、彼の名字である『神楽坂』の名は政財界の重鎮クラスであればあるほど認識しており、変に突いて火傷を負いたくないと判断した結果だった。

建前が変わっても結果はあまり変わらない

詩奈は、これまで兄や姉たちの第一高校における活躍を直に目の当たりにしていたわけではなかった。それは歳の近い兄である悠元にも言えたことだった。

元治は生徒会長、元継は部活連会頭、詩鶴と佳奈、美嘉が生徒会長と続き、そして悠元は現部活連会頭と学校三役を務めてきた実績を有する。無論、十師族・三矢家というネームバリューの影響は少なくないが、それに見合うだけの実力を有していることも事実だ。

詩奈が一番驚いたのは、悠元が師族会議議長として祝辞を読んだ（というよりも〝話した〟と述べる方が正しいが）ことだ。つまるところ、今の兄は自分の父親よりも上の立場にいる形となっているということを詩奈はこの場で初めて知った。

そもそも、詩奈は三矢家を継ぐ立ち位置に居ないので師族会議の内容が知らされなくても無理はない。けれども、血縁者である以上は教えてくれても良かっただろうと思ってしまう。ただ、答辞を読む新入生総代として……兄と同じ立場で入学した以上は失礼な姿を見せられない、と気持ちを引き締めて答辞を無事に読み切った。

来賓の方々との挨拶が比較的手短に終わったのは、恐らく別の家の当主となった兄のおかげもあるだろうというところで、声を掛けてきたのは泉美だった。

「詩奈ちゃん」

「泉美さん？」

同じ十師族直系なら理璃も該当するが、元々十文字の名字を名乗っていなかった理璃は、詩奈とそこまで親密な関係になっていない。とはいえ、生徒会長の深雪が声を掛けるのも十分にあり得た話だが、詩奈に声を掛けるならば詩奈と面識がある人間のほうが良いということで泉美に白羽の矢が立った。

泉美が七草家の末っ子であり、父親の弘一に一番気に入られていた存在だった。その彼女が六塚の姓を名乗ったのはつい先日であり、これには師族二十八家以外の魔法関係者も何があったのかを訝しむ声

が少なくなかった。
その実態は神楽坂家（三矢家・四葉家）と七草家の深刻な対立によるもの———七草弘一の背信行為であるという事実は厳しい箝口令が敷かれている。奄美・沖縄諸島方面への配置転換については、表向き「七草家の魔法の評価に基づく抜擢」として知らされている。
表面上は、七草家は三矢家や四葉家と並ぶ日本魔法界の実力者という形で存在しており、泉美の六塚家への養子縁組は関東方面にも強い影響力を残しておきたいという思惑なのでは、と邪推する者も少なくない。
なお、六塚の姓を名乗ってもそんな前評判のせいで未だに七草家の人間として見られることに、泉美は内心で溜息を吐きたかった。
「立派な答辞でした」
「ありがとうございます。それで、何か御用がおありでしょうか？」
詩奈の声質と口調のせいでどこかふわふわしたような印象を受けるが、その反面彼女はしっかりと落ち着いた上で泉美に尋ねていた。泉美も詩奈のことを理解した上で言葉を続けた。
「例の件を正式に相談したいので、これから少しお時間を頂けませんか？」
「はい、構いません。泉美さんについていけば宜しいのでしょうか？」
「ええ、お願いします。侍郎君には話さなくてよろしいですか？」
「今日の朝に事情は説明してありますので、大丈夫です」
急に幼馴染の名を出されても、詩奈は特に動揺することもなく泉美の問いかけにしっかりと受け答えをしていた。
そうして泉美が案内したのは生徒会室で、中には深雪と水波がいた。
「三矢さん、よく来てくださいました」
先程は詩奈を名前呼びしていた深雪だが、今はちゃんとした場としてのものであり、名字で呼んだことに詩奈は異論を唱えず、中に入って一礼した。そのまま深雪は会長席から会議テーブルに座ると、詩奈は深雪と正面を向く形で座り、深雪の左右に水波と泉美が座る。
ピクシーがお茶を出したことに詩奈は少し驚く。三矢家では使用

人を雇っているために3Hを使うこともないので、まさか学校の生徒会で見ることになろうとは思わなかった。詩奈はそれよりも、ピクシーから感じる波長が魔法師のそれと異なっていることに気付くが、そこに深雪が話しかけてきた。
「『ピクシー』は私の兄の所有物ですので、こうして給仕をお願いすることがあるのです。三矢さんの疑問には、貴方のすぐ上のお兄さんに尋ねるといいでしょう」
「あ、はい。分かりました」
深雪も悠元から詩奈の感受性が極めて高いということを知らされており、『ピクシー』に憑りついた『パラサイト』にも気付く可能性が高いことも事前に知らされていた。なので、深雪は詩奈の疑問に答える役目を悠元に譲りつつ、呼び出した本題を詩奈に話し始めた。
「当校生徒会の慣習については、七草副会長だけでなく貴方のお兄さんやお姉さんがたからも伺っていると思います」
「はい、既に聞いております」
深雪の確認の台詞に詩奈が答える。そもそも、生徒会役員経験者が身内にいるため、詩奈と泉美で既に決着をしていることを正式に確認するだけの儀式的な要素の意味合いしか有していない。
「そうですか。では、改めてお伺いします。三矢詩奈さん、生徒会役員になって頂けますか?」
「はい。兄や姉たちのように上手くできるかはわかりませんが、謹んでお受けいたします」
詩奈の言葉を聞いた深雪の緊張が僅かに緩む。事前に悠元と泉美から応諾の返事を貰っていたとはいえ、断られるのではという杞憂も少しはあった。それは、一昨年の生徒会役員要請の時に深雪が達也のことで直談判したようなことが起きるかもしれないという不安が少しあったのだ。当事者とはいえ、自分のように直談判する可能性をどうしても拭えなかったのは自業自得と言う他ない。
「それでは、三矢さん――詩奈ちゃんには明日から生徒会書記として活動していただきます。仕事内容については、こちらにいる桜井さんに尋ねてください」

「書記の桜井水波です。詩奈さん、宜しくお願いします」
「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」
悠元の存在を介して知り合っていたためか、生徒会室の中は和やかな雰囲気で話が進んでいくのであった。
◇　◇　◇
学生証でもあるＩＤカードの交付が終われば、入学式に関する行事は一段落する。今日は日曜日だが、新入生の為に校舎は開放されている。
多くの新入生は自分の教室に行き、新たなクラスメイトと交流を深める。もしくは、家族と一緒に記念の食事をする。大半はそのパターンに当て嵌まるわけだが、一昨年に新入生総代が家の都合で入学式に出られないという一大事があったことを考慮に入れなくとも、予期しない行動パターンを起こす人間というのは出てきてしまうようだ。
「ふう、やれやれ……突き放すような言い方をしたというのに、あそこまで好意的に絡まれるとは思いもしなかったわ」
悠元はそうぼやきながら制服を魔法で整えた。
祝辞に関しては「教職員の説教など知るか」と言わんばかりに言いたいことを隠すこともなく言い切った。第一線で活躍する魔法師ほど、その現実を誰よりも認識しているのに誰も口にしようとしない。
一昨年は森崎の件があり、昨年は七宝の件があった。ここまで二年続けて男子が問題を起こしている以上、誰かが早めに天狗の鼻を圧し折ってやらなければいけない。結局、渡りに船と言うことで自分がその役目を負うことになった。
だが、式の後に諍いを起こさないかと少しだけ気配を見せつつ歩いていると、新入生たちがこぞって自分に近寄って来た。自分が新入生総代である詩奈の兄であるというのも大きいのだろうが、彼らの表情を見る限りにおいて詩奈とお近づきになりたいというよりも自分に対する興味で近付く生徒が多かった。特に男女問わずと言った感じだったので、流石に少し疲れた。
言っておくが、俺自身は既に婚約者がいるし、同性に対して恋愛感情を持つことなど金輪際無い。せめて後輩として接することはして

も、それ以上をこちらから求めることはないし、相手が求めてきても丁重に断る。
「何にせよ、無事に終わる……とはならんようだな」
一息ついたところで、悠元は聴覚に混じるサイオンのノイズで魔法の感知を察した。波長からして古式魔法の『順風耳(じゅんぷうじ)』なのは間違いないだろう。悠元はそのまま屋上に駆け上がりつつその魔法の発動地点を瞬時に割り出した。第一小体育館の裏側で、しかも事象干渉力――プシオンの波長で誰がその魔法を使っているのかが直ぐに分かった。
それが、自分も関与している身内となれば尚更であった。
「侍郎の奴……あれほど学校で疑われるような魔法は使うなと言ったのに」
その魔法を感知したのは悠元だけでなく、達也と幹比古、雫とほのかが魔法を使っている侍郎の近くにいるのが確認出来た。問題は注意を受けたはずの侍郎が魔法を使っている理由だが、事象干渉力の対象が生徒会室に向けられているということで大方の事情を察した。
(深雪を怪しんだのか、詩奈が無事なのかを確かめたかったのか……何にせよ、話を聞かないことには始まらんな)
いくら今まで三矢の人間が魔法によって暴れてきたと言っても、それはあくまでも職務を全うするために魔法の力を振るってきた。そのことを今の侍郎が理解していない筈がないのだ。何はともあれ、悠元は意に介することもなく屋上から平然と飛び降りた。その直後、彼の姿が〝消えた〟。
その悠元がどこにいるのかと言えば、第一小体育館の屋上だった。簡単に言えば『鏡の扉(ミラーゲート)』によるものだが、目視で見られなければ問題ないということで使うことはある……勿論、目撃証言の齟齬が発生しない程度にではあるが。
(容赦ないな、達也も……『術式解体(グラム・デモリッション)』を侍郎にぶち当てたか。まあ、確かに効果的ではあるが)
元々先天的な能力のせいで魔法を満足に使えなかった侍郎だが、悠元の魔改造によって既に超高校生級の実力を持ってしまっている。

そのことを達也が理解したかどうかはさておき、達也の『術式解体（グラム・デモリッション）』をまともに浴びた侍郎は何とか肉体のコントロールを再構築しようとしつつ、近くの枝を動かそうとしていた。
（そこまでやれば停学もしくは退学だぞ、馬鹿野郎）
そこまで踏み込めば休学どころで済む話ではなくなる、と判断して、悠元が風属性の天神魔法『電光石火（でんこうせっか）』を放つ。
この魔法は術者と対象の〝地続きとなる最短経路〟を超高速の電気が駆け抜けることで、その速度分の加速をダメージとして加算することで強力な攻撃と化す魔法。今回は屋上にいた悠元が小体育館の壁を経由して地上にいる侍郎に電気のダメージを与えた形となる。
突然駆け抜けてきた電撃を喰らって倒れ込む侍郎。一体何が起きたのかを訝しむ達也と幹比古、雫とのほのかだったが、その中で達也は屋上に悠元の姿があるのをすぐに察し、先程の攻撃が悠元の仕業であったのは間違いないと判断して翳していた手を降ろした。屋上から魔法も使わずに平然と降りてくる悠元に声を掛けたのは幹比古だった。
「悠元、来てたのかい？」
「魔法を感知したのは偶々だがな。だが、生徒会室に向けて知覚系魔法を使っていたのは確かだろうし、あの中にいた深雪や詩奈も気付いているだろう……さて、どうする？」
ここには奇しくも生徒会、風紀委員会、部活連のメンバーが揃っている。まずは今回の一件を生徒会がどう判断するのかを確認する意味で悠元が問いかけた。これには三矢家のことを知っている雫が尋ねた。
「身内なのに？」
「身内だからこそ甘い裁定は下せない。幹比古、委員会室を貸してくれ」
「そうだね……悠元に任せた方が良さそうだから、部屋は開けておくよ」
「助かる」
幹比古の言葉を聞いた後、悠元は米俵を担ぐかのように気絶した侍

郎を右肩に乗せた。そしてそのまま保健室へと向かうことにした。保健室にはこの学校の保健医である安宿(あすかさとみ)怜美が思わず首を傾げていた。
「あら、悠元君。珍しく怪我でもしたのかしら？」
「そうじゃないってことは、安宿先生ならすぐに気付くでしょう。肩に担いでいる新入生が問題行動を起こしたので、達也と俺が魔法を撃ち込んで気絶させました」
怜美は遥から引き継いだ定期カウンセリングで悠元と接する機会があり、ここ最近は保健室を貸し切って愛人として接することも少なくない（流石に学校の中で事を起こすまでには至っていない）。そんな事情はさておき、悠元は怜美の指示で侍郎の上着を脱がせ、ベッドに寝かせた。
「後で妹に彼を任せますので、暴れたら遠慮なく伸してください」
「私に悠元君みたいな力はないんだけれど」
「一昨年に平河を取り押さえた人が何を言ってるんですか……」
ともあれ、まずは事情確認が最優先だろう。原作と違い、侍郎が護衛から外されたわけでもなければ、侍郎も達也や深雪を知っている。それでいて騒ぎを起こした以上は侍郎本人の責任であり、連帯責任として詩奈も無関係とは言えない。
そのまま風紀委員会室で生徒会から深雪と詩奈、風紀委員会から幹比古と雫、そして部活連の悠元の五人が話し合うことになった。
まず、侍郎に関する事情を聞いたところ、詩奈の護衛という形を外したらしい。原作だと実力不足だが、この世界では『いずれ婚姻関係を結ぶ相手同士が主従関係を持ったままでは良くない』という三矢家と矢車家の判断なのだが、これをちゃんと聞かなかった侍郎が詩奈の安全を確保しようとして今回の行動に走った。
これでは侍郎の単独責任となってしまうが、そこで詩奈は深雪に主従関係を結んでいた立場として詩奈自身にも責任があると明言し、侍郎への寛恕を求めた。
「……司波生徒会長は、その意見に賛成か？」
「はい。流石に入学初日ですし、それに家の事情ともなればまだ余地

はあるとみていますので。吉田委員長は如何ですか?」
「僕としても生徒会長の判断に異存はない。後は神楽坂会頭次第だけど……」
「こんな初日に懲罰委員会なんて開きたくはないから、今回は生徒会長の提案を呑むことにする。その代わりと言っては何だが、矢車侍郎を部活連の幹部候補として誘いたい。風紀委員会で誘うのも構わないが」
その後、侍郎の実力面を鑑みて風紀委員会の部活連推薦枠として入れることとした。更に、詩奈と侍郎を軽運動部に誘ったところ、侍郎の面倒を見るという観点で詩奈が入部を決めた。
保健室で詩奈と侍郎がどんな会話をしたのかは魔法でみることもできるが、若い二人の行く末を覗き見して地獄に落ちたくないので止めたが、偶々隣室に移動した怜美から会話の全部を聞くことになったのはここだけの話。

正気と我儘を疑いかねない壁

「本当にごめんなさい、お兄様」
　会議が終わった後、詩奈はそう言って頭を下げた。だが、これに関しては詩奈や三矢家、矢車の責任とは言えなかった。自分もよもや侍郎と詩奈の婚約に関する形で侍郎から護衛の役目を外すとは思わなかったのだ。なので、こればかりは自分にも責があることだと思う。
「詩奈だけが悪い訳じゃない。侍郎がそうなった遠因に自分も関与している以上、誰かひとりにこのことを咎める理由はないだろう。とはいえ、侍郎が魔法を使って疑われかねない行動をしたという事実は消えない。その責任を負うということは、当然理解しているな？」
「……はい」
「ならいい。三矢家と矢車家には俺から話を付ける。侍郎は保健室で寝ているから、起こしに行ってやれ」
「……本当に、ありがとうございます」
　そう言って駆け出していく詩奈の後ろ姿を見て、どこか寂しい気持ちを抱いてしまっていた。これが俗に言う〝兄離れ〟なのかもしれない。詩奈との関係は自分が転生する前の三矢悠元から引き継いだものだが、こんな風に思ってしまうあたり自分自身も歳の近い兄弟姉妹に何かしら求めていたのかもしれない。
「話は終わったの？　って、詩奈ちゃんはどこに？」
「保健室だよ。さて、俺も引き上げるとするかな」
「後は若いお二人でってことね……何もしないの？」
「期待の眼差しを向けるな、阿呆が」
　別にいつも出合い頭にやっているわけではないし、別にオチを付けようとしたわけでもない、とセリアの言葉をそのまま受け取ると、彼女が何故か期待の眼差しを向けてきたので辛辣な言葉を吐き捨てた。
　なお、なんだかんだ言って軽口を言い合えている悠元とセリアの姿を羨ましく見つめる深雪や雫の視線が向けられたのは言うまでもない。
　その後、悠元は元に連絡して事情を説明した上で、改めて当人たち

に事情を説明するべきだと進言し、今回のトラブルが大事に発展しなかったが、魔法の無断使用ということで侍郎に関する責任を詩奈が負った事も説明した。
『そうか、私も少し性急すぎたな。仕郎さんには私から説明しておく。にしても、入学式の祝辞でお前が壇上に立つとは思いもしなかった』
「俺も似たようなものだけどね。正直な気持ちを吐露したに過ぎないけど」
『はは……だが、悠元の言い分は至極真っ当なものだろう』
期待に胸を膨らませて入学式に臨んだら、いきなり天狗の鼻を根元から折られたようなものだ。新入生総代の詩奈の関係で来賓として出席した元も最初は驚きを隠せなかった。よもや師族会議議長である悠元が壇上に上がったこともそうだが、彼が二科生制度のことや魔法師の現実を突きつけたことには強い説得力があると感じていた。
『今のお前は九島閣下から師族会議の長を継いだに等しい身だ。そのお前が真っ向から「魔法師は決して甘くない」と現実を見せた。それで、新入生の反応はどうだった?』
「お陰で後輩たちに結構絡まれたよ。詩奈の功績も含んでのものかもしれないけど」
『そうか……何にせよ、迷惑を掛けたな』
そう言って通信が切れた後、悠元は背凭れに体重を預けながら天井を見た。
悠元と元は対外的に見れば一家の当主という立場にいる。だが、悠元は元と親子のように接しているし、元は悠元が神楽坂家の当主であってもそれを盾にはしない。別にそう取り決めたわけではなく、お互いの配慮が噛み合った結果に過ぎない。
「その迷惑がまだ続く模様なんだけどな……」
悠元がそう零した根拠は、国防軍情報部の動きがどうにも怪しくなってきていることに起因する。原作だといきなり十山つかさが出てきて、その後にリーナ達の襲撃を模した一件を起こしている。
情報部絡みの一件とするなら、パラサイト事件の時に七草家の息が掛かった防諜第三課が絡んだことと、それと昨年の論文コンペ絡みで

『伝統派』の事件に介入したことが挙げられる。いずれも原作では達也が深く関与しているので、そこから達也の危険性を睨んだのだろう。

情報部は悠元の〝再教育〟を目論んで上泉家に押し掛けたわけだが、そもそも剛三がいくら全盛期ではない（無論、国防軍側で得られる情報からの推測だが）とはいえ、新陰流剣武術を舐め過ぎているのではないかと思う。

その一件を調べたところ、１５０名にも及ぶ襲撃部隊の出所は朝霞基地に配属されていた部隊らしく、命令の内容は〝敵国と内通している可能性が高い長野佑都の捕縛〟であった。大きく関与しているのは国防軍情報部・首都方面防諜課という部署。十山つかさが『遠山つかさ』として所属している部署でもある。

しかも、その命令はあくまでも〝演習計画〟として立案・実行された形だった。結局、独立魔装大隊と千刃流の剣士、そして剛三をはじめとする新陰流剣武術の門下によって叩き潰された。

（……自分たちがまともなら、同じ立場にいる魔法使いの同士討ちを考える時点で正気を疑うわ）

自分の実力が他の魔法師よりも群を抜いていることは認める。だが、一方的な論理でこちらを〝怪物〟などと宣った上で排除するようならば、躊躇わずに銃を向ける覚悟はある。そもそも、連中の正気を保証できる人間が一体どこにいるのかと問いかけたい。

国家の利益という正義を掲げ続けるならば、相応の対価を支払ってもらわねばならない。

◇　◇　◇

十山家は既に剛三の怒りを買った。それを含めた結果として七草家は奄美・沖縄方面への配置転換を余儀なくされ、十文字家もアリサの件で強く出ることが出来なかった。

沖縄から戻った後、悠元はそのまま十文字家を訪れた。いきなりの訪問で驚く克人だったが、前当主である和樹と話をさせて欲しいという悠元の言葉で大方の事情を察した。その上で丁重に人払いを済ませた上で悠元は遮音フィールドを張り、和樹と克人の会談に臨んだ。

「急な訪問になってしまい、それについては大変申し訳なく思っている。だが、今後の諍いにならぬよう早急に片を付ける必要があり、神楽坂の当主として出向かせてもらった」
「諍い、ですか？」
「そうだ。事の次第は上泉殿から聞いている。何でも、克人殿が三矢家の養女となった伊庭アリサ嬢の身柄を引き取りたいと申し出たそうだな？」
　悠元の言葉に和樹は驚きを隠せなかった。何せ、いくら三矢の係累とはいえ神楽坂家の人間である彼の口から十文字家の隠し子であるアリサの名が出たこともそうだが、上泉家から事情を聞いていたとはいえ、矢面に立つ意味が分からなかった。
　困惑を隠せない和樹に対し、克人が代わる形で悠元に問いかけた。
「神楽坂殿、何故上泉家および三矢家と十文字家の問題に関与されるのですか？　確かに三矢殿のことを考えれば理解できなくもないでしょうが」
「克人殿のお考えもご尤もでしょうな……いいでしょう、説明いたします」
　克人は既に元継から聞かされてはいたが、何故神楽坂家が関与するのかという疑問を抱いても無理はない。その意味も含んだ問いかけに悠元が答えた。
「自分がまだ三矢家の人間――――長野佑都と名乗っていた時、祖父である剛三殿に連れられて北海道で過ごしておりました。その縁で世話になっていた古式魔法の家の方が遠上家と伊庭家とも親交がありまして、彼女の母の葬式の際に顔を合わせ、彼女の願いを聞いて義理の兄妹みたいな関係となりました」
　本当に偶然が偶然を呼んだ結果だった。三矢の家を離れるような動きをしたら十文字の縁者と知り合い、四葉の人間に惚れられ、九島に目を付けられ、一条・五輪と続いて七草からも知られる形となった。
　某漫画の〝幽波紋（スタンド）使いは惹かれ合う〟と言えるかまではともかくとして、『数字付き（ナンバーズ）』の因縁にはどう足掻いても逃げられなかった形だったことに溜息を吐きたくなった。

「そして昨年末、現在の母と共に北海道へ出向いた際、自分はアリサ嬢を婚約者の一人として受け入れました。その後に彼女の母である伊庭ダリヤ殿の遺言が見つかり、その言葉に従って三矢家が彼女を養女として受け入れたのです」
「そんなことが……では、十文字家に関わる技術については？」
「自分が既に〝処置〟していますので、彼女が『オーバークロック』を暴走させるリスクなど既に存在しません。なので、十文字家のみが得ている制御技術を教える必要もありません」
　悠元は以前にも和樹を治療している。なので、誰が対処したかなどという論議を広げる必要など皆無だった。納得したように頷く克人であったが、ここで口を出したのは和樹であった。
「神楽坂殿の配慮には感謝します。……ですが、尚更アリサを十文字家で引き取らせてほしいのです」
　和樹としては、一人の父親としての償いも含んでのお願いだったのだろう。克人も悠元も当然理解しているだけに、普通ならば考慮の余地の一つもあったかもしれない。
　だが、そんなことを今更述べたということに、悠元は気配の度合いを〝引き上げた〟。
「本気で言っているのか、十文字和樹。言っておくが、貴方の当時の事情もこちらは全て把握している。懇ろな関係を持っておきながら、14年間もその可能性を捨て去って十文字家の当主をしていた神経が信じられん」
「か、神楽坂殿？」
「ついでに言っておく。十文字家が引き取った貴方の姪である理璃嬢はアリサ嬢が十文字家の隠し子だということに薄々気づいていた。彼女の母の日記に貴方とダリヤ殿が関係を持っていたことが書かれていたそうだ。更に言えば、克人殿と婚約している姉の美嘉も承知の事実だ」
　アリサの問題は、既に護人の二家と十師族の二家、それと遠上家にまで波及している。もしアリサを十文字家に引き取ることにしたら、今度は十文字家の家族問題に発展し、最悪分裂の危機に瀕することに

なるだろう。
　不幸中の幸いなのは、既に十文字家の当主が克人となっていることだろうが、それでもアリサや遠上家も納得して合意したことを今更白紙になど出来ない。
「先程述べた二人に加え、理璃嬢と婚約した壬生光宣殿も存じている事実だ。これ以上この事実を広めれば、間違いなく和樹殿の奥方や子女の耳にも入ることになる。最悪十文字家が真っ二つになるという事態に陥ってもいいと？　それでも一家を預かる父親の台詞とは到底思えん」
　それに、折角七草家と九島家の処置が一段落したというのに、ここで十文字家が躓く様なら十師族の存在意義に疑問を投げかけられることになる。和樹の提案は言ってしまえば現当主に対する〝叛逆行為〟にも等しいことを彼は認識していない。
　仮にダリヤの生存を確認した上でアリサを引き取っていたとしても、家庭間の問題は回避不可能としか言いようがない。和樹の妻である慶子は良識ある人物だが、アリサを快く思ったかと言えば必ずしもそうとは言い切れない。
「そしてこれが一番大事なことだが、法的に伊庭アリサの父親は貴方ではない。いくら血が繋がっていようが、遺伝による根拠を持ちだしたら貴方の家業を克人殿か夫人に継がせ、貴方自身は遠方に隠居していただく。この決定が不服だというのなら、自分が相手になるが？　最悪力ずくでも貴方方を叩き伏せる用意と覚悟があるとこの場で明言させてもらう」
　自分がアリサの婚約者だからこそ一定の距離を置いた付き合いは許容するが、直接の親戚として付き合うのは真っ平御免である。光宣と理璃にもその辺を説明しており、彼らも「先輩とは良き友人関係でありたいです」と承諾している。
　悠元から殺気を向けられて何も言えずにいる和樹に対し、克人が頭を下げた。
「神楽坂殿、此度は態々出向いていただいただけでなく、事情説明をして頂いたことに感謝いたします。父が隠し子を作っていたことを聞

いた際、自分も呆れてしまったほどです。今後は彼女を十文字家とは関係のない人間として扱うように父を説得いたしますので、この場はどうか矛を収めて頂きたい」
「……いいでしょう。克人殿――――いえ、十文字殿。そちらの父君の処遇は貴方に委ねます」
「寛大な処置に感謝いたします」
　悠元も十文字家の事情に深く関与する気はないし、克人と美嘉が婚姻を結べば間接的にアリサも十文字家と義理の親戚となる。十文字家の人間だと公表する必要もないし、アリサ自身は十文字の名を〝名乗りたくない〟と明言していた。
　克人が和樹の処遇を判断するのであれば、こちらが割く労力も減るので克人の提案をそのまま受け入れた。十文字家がどういった決着を見るのかは克人の当主としての手腕を問われることに繋がる理由もあったりする。
　悠元が帰った後、執務室に戻って来た克人の厳しい視線が和樹に向けられた。
「親父殿、何故神楽坂殿の婚約者となったアリサ嬢の引き渡しを求めた？　交渉は自分に一任すると言ったことは嘘だったのか？　正直に答えてくれ」
　克人がアリサのことを知ったのは、師族会議体制の再編が一段落した３月１４日のことだった。克人は暫く考えた後、知己がいる上泉家に足を運んだ。そこで現当主の元継から事情を聞いた。
　当事者側の遠上家と三矢家の関係性は分からなかったが、今回悠元が述べた事実でその接点が繋がった。
「嘘ではない。だが、父親として何もしてやれなかったことが何よりも悔しかった」
「だから神楽坂殿に交渉を持ち掛けたというのは軽率すぎる。仮に実現したとしても、今度は十文字家が七草家のような立場に追いやられることになる。それが分からない親父殿ではない筈だ」
　関東地方の守護・監視は今年の５月初めに七草家から三矢家へ体制が引き継がれる。師族会議が発足してから担当地域が他の数字付き（ナンバーズ）

に変わるという初めてのことであり、七草・十文字の体制から三矢・十文字の体制に切り替わる。克人と美嘉の婚約はその関係構築の要でもある。

それと同時に、三矢の人間が養子となった護人の二家も十文字家として無視できる要素ではない。和樹とて十師族の前当主としてそれは理解している筈なのだ。こればかりはアリサの父親としての心残りから出た提案だが、その一言は神楽坂家現当主の逆鱗に触れてしまった。

「……親父殿、明日三矢家に出向く。今回の粗相に関して三矢殿に取り成してもらうが、アリサ嬢の引き渡しに関しては一切交渉しない。これは十文字家当主としての決定だ」

「……分かった。克人の提案を呑もう」

十文字家が抱える懸念材料を取り除く――――それを成した悠元の異質さは克人自身も理解していた。切り札とも言える『ファランクス』を無力化する技術を会得している以上、敵対したところで丸裸の状態ともいえる十文字家の人間に抗う術はないに等しい。

克人も十文字家の抱える機能（スキル）のことを考えれば、それが暴発しないように十文字家で引き取ることも考慮に入れていた。だが、克人の目の前にいる父親を魔法師として再起させられるだけの魔法を持っているとすれば、懸念が解消されたという悠元の言葉に説得力が宿っていたのも確かであった。

悠元にその魔法を以て十文字家の宿業を回避してもらう算段も当然考えたことはあった。だが、その能力を下手に明るみには出来ないことは魔法使いの家として理解していたし、彼に支払う対価がどれほどのものになるか想像もつかない。最悪、十文字家が神楽坂家の庇護を受ける形になってしまうかもしれない。

師族会議で明確に護人の麾下となった以上、克人は十文字家の当主としてアリサのことは三矢家に任せる選択を取った。その決定に和樹はただ頷くことしかできなかったのだった。

旧態の癖が抜けきらない身勝手

西暦２０９７年４月７日、魔法科高校入学式の夜。

達也が霞ヶ浦基地に向かったのと時を同じくして、悠元は防衛省内にある国防陸軍総司令部の本部室を訪れていた。呼び出し自体は一条家の件があった２日前だったため、若干タイトなスケジュールなのは間違いない。

呼び出した相手も悠元の事情は理解しているが、早急に相談しなければならない事態ということは悠元も理解している為、それに異論を唱えることはなかった。

防衛省庁舎の中なので流石に銃を持った軍人が徘徊していることなどない訳だが、定時の時間を過ぎても残っていると思しき官僚たちは慌ただしそうにしていた。そんな中、その防衛省で働く四葉家所縁の人物――新発田勝成（しばたかつしげ）と遭遇した。

勝成もまさか庁舎の中で悠元と遭遇するとは思わず、目を見開いていた。

「これは勝成殿、ご多忙のようですね」

「神楽坂殿、ご無沙汰しております。今日は一体どのようなご用件で此方に？」

「国防軍のほうに少し用事がありまして。それ以上は機密の為に申し上げられませんが」

軽い挨拶をしたところで、勝成が時計を見て急いでいるような素振りを見せたので、自分に気遣う必要は無いと述べると、勝成は頭を下げた上でその場を早足で去っていった。事務職であるはずの勝成で忙しそうな雰囲気を見るに、外交官ともなれば更に忙しいのだろう……と思いつつ、悠元はそのまま本部室に向かった。

本部室の前で入室を請おうかと思ったところ、丁度反対方向から来ていた蘇我大将と遭遇し、悠元は敬礼をする。

「大将閣下、このような格好での出頭をお許しください」

そう述べた悠元の恰好は別に私服姿ではなく、『神将会』の人間が身に付けるスーツ姿だった。公的な場で制服を身に付けることはあっ

ても、悠元は正規の形で軍の中に身を置くことはしない。まして師族会議議長となった以上は適切な距離を取らなければならない。
蘇我は悠元の事情を理解した上で敬礼をする。
「いや、今日は魔法科高校の入学式ということを考えれば、君を呼び出すのは心苦しいと思っている。まずは中に入ろう」
誰かが聞き耳を立てているかもしれない、という明言はしなかったが、その可能性を匂わせた発言をしつつ、蘇我に続く形で悠元が中に入った。その奥にある総司令官の執務室に着いた上で、蘇我と悠元は互いに向き合う形でソファーに座った。
蘇我は悠元が常軌を逸した情報収集能力を有していることを知っている。沖縄防衛戦後に方面部隊指揮官として指揮を執った『大天狗』風間玄信大尉（現在中佐）を直接呼出し、事の詳細を聞く中で判明したものだ。とはいえ、迂闊に言える情報ではない為に蘇我が本当に信の置ける人間にしか話しておらず、陸軍総司令部でも蘇我を含めて片手で数えられるほどだ。
「先日の佐渡沖の件は君も当然知っているだろうが、参謀本部の解析では新ソ連が起こしたものと睨んでいる。更には海軍の艦隊が侵攻を睨む様な動きを見せている」
「本部の予測はどのような感じですか？」
「佐渡を含む北陸への侵攻が多数派を占めている」
新ソ連が態々山陰・九州地方へ軍を動かすというのは艦隊への攻撃を受けやすいリスクがあるし、大亜連合も黙ってはいない。５年前の件は大亜連合軍にいる新ソ連のスパイが情報を流してドサクサ紛れに引き起こした可能性が濃厚だろうとみている。双方が協力した線も否めないが、歴史的背景として互いに協力できるかと言われると微妙だろう。
欧州方面への侵攻も新ソ連にとってはリスクだ。現状東西に分裂しているＥＵも、新ソ連からの危機感が強まれば統合とまではいかなくとも東西間の軍事協定を締結して連携するだけの下地は未だに残っている。
「特務参謀殿の意見はどう見る？」

「そうですね……祖父の状況を把握しているとは言い難いですし、可能性は低くありませんが、侵攻を匂わせている時点で敵勢力が一定の目的を達したとは言えるでしょう。とはいえ、欧州方面で動きを見せていない以上、極東方面からの本侵攻に備えて北海道・東北・北陸の各師団を待機させておくのが無難な判断になります」
「そうなるか……今回は魔法による攻撃ということで、第１０１旅団に北海道へ出動するよう要請した。その先遣隊として独立魔装大隊が明朝に出発すると連絡を受けた」
蘇我としては、対魔法師の戦力となる悠元がいれば北陸方面の抑えになると鑑み、魔法師部隊である独立魔装大隊を北海道へ派遣することで二方面への備えとすることにした。その目論見は悠元もすぐに理解した。
だが、ここで問題になるのは大黒竜也（おおぐろりゅうや）特尉――――達也に関する扱いであった。何せ、国防陸軍の上層部に身を置くということは、それに関する情報も得る立場にいる。
「大黒特尉にも出動命令を掛けたのですか？」
「そこまではしなかったようだが、仮に北海道方面への侵攻の兆しがあれば、彼を動員する可能性は捨てきれない……中将としては不服か？」
命令となれば、それに従うのが軍人としての責務だ。だが、悠元も達也も正規の軍人ではない。リーナやセリアのように存在を隠した上で正規の軍人として任ぜられているならばともかく、危機に迫らない限りは従う義理もない……というのは我が侭かもしれない。
含みを持たせるように問いかけられた蘇我の言葉に対し、悠元は率直な意見を口にした。
「不服を申し上げる理由はありませんし、不満はありませんが、身勝手だとは思います」
「身勝手、か……確かに、それを言われると否定はできないか」
悠元の辛辣な言葉に蘇我は否定する言葉を持ち合わせていなかった。
十師族は軍を利用できないが、軍は十師族を利用する。軍のスタン

スとしては至極当然のものだ。だが、十師族を含めた師族会議全体が今上天皇より国の守護を任ぜられる立場となった以上、軍が一方的に魔法師を利用するという事態は〝異常〟としか思えなかった。
　既に政府との非公式の約定も含めて師族会議に対する政府と軍の権利を剥奪したのだ。にもかかわらず力を当てにするということは、〝相応の対価〟を要求されることに国防軍の意識が追い付いていないようであった。
「師族会議と国防軍が国家の利益の為に適切な距離を取るということには賛成します。ですが、軍や政府が我々の力を盾に権力を揮うことは許容できません」
　達也が冷遇されていた時期は、別にそれが起きても大きな問題ではなかった（達也もそこまで問題にしていなかった、という事情も含んでいる）。だが、四葉家の次期当主となった以上はそういった扱いをすること自体リスキーな行為に他ならない。
　師族会議もとい護人の本質は国土および国民を守ることで国家主権及び国益の保全・守護を行うことにあり、必要とあらば国外にある直接の脅威を取り除くことも選択肢の一つとして保有する。
「私の『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』もそうですが、特尉の『質量爆散（マテリアル・バースト）』は地球上で使うにはあまりにも使い勝手が宜しくない戦略級魔法です。単に勝てばいいという安易な理由で使う訳には行きません」
「……私としては安易に頼りたくないと思っているが、そういった考えを持っている軍人は少なくないのも事実だ」
　護人の方針が指す国益はあくまでも〝恒久的平和を望む国家の利益〟であり、政府や軍の利益とは必ずしもイコールではない。悠元が懸念したのは、国防軍が十師族ひいては師族会議の力を悪用する可能性があるということだった。
「勝ち過ぎれば、相手に窮鼠の如く噛みつかれて泥沼に陥り、最終的には国力を落として最悪国が亡ぶ。こんなことは古今東西において度々起きていたことです」
「そうだな。我が国も第二次大戦の時に先人たちがその轍を踏んでしまい、連合国に占領された苦い歴史を我々が繰り返してはならぬ」

仮に、軍の利益として悪名高い四葉の名を持ち出すことで、敵勢力へ必要以上の脅威を与えることが可能ではある。だが、その代償として国家の利益を著しく損なう可能性が極めて高い。現に利益に関係なく四葉の力を削ごうと動いている諸外国の勢力がそれを如実に証明してしまっている。

勝ち過ぎて己の首を絞めるという事例は古今東西の歴史が証明しており、第二次大戦で戦勝国となったアメリカ（旧ＵＳＡ）ですら、〝世界の警察〟と自称して一方的な論理を振り翳した結果、中東情勢に介入して終わりの見えない宗教戦争へと突入してしまった歴史がある。

そもそも、国防軍に対する不信感という点で言えば、悠元は達也よりも多い。決定的となったのは情報部主導の誘拐未遂事件で、その後も国防軍絡みでトラブルに巻き込まれている。昨年の九校戦の競技変更や、周公瑾を匿った一件、止めとして南盾島の戦略級魔法の件が挙げられる。

「最早師族会議は政府直下にある組織ではありません。態度の急変は大黒特尉の戦略級魔法を使いたがる人間を懸念してのものでしょうが……ちなみにですが、統合幕僚会議の意見は？」

「特務参謀を動員するという意見には至らなかった。君が出動するという段階の話になるとすれば、北海道に上陸された時点での話となるだろう」

俗に言う〝防衛ライン〟を超えない限りは悠元が上条達三特務中将として戦場に出ることはない、と蘇我はそう結論付けるように述べた。

その言葉には、悠元が国防軍に対する不信感を持っていたとしても、個人としての縁を切ることはしたくない、という蘇我のせめてもの願いが込められているような気がしたのだった。

「……分かりました。以前にもお話ししていたことの繰り返しになりますが、仮に国防軍の軍人がこちらを囮にしたり脅すようなことがあれば、その際は自らに与えられた権限を用いて対処いたします。その際は防衛大臣から直接許可を取り付けるつもりですので、適切な対応

を願います」
「了解した……本当ならば、君のような若い者に任せる話ではないのだが、どうか宜しく頼むよ〝悠元君〟」
悠元の言葉――それは、今後起き得るであろう達也やリーナに関することを含めてのもの。それをどこまで見抜いたかまでは分からないものの、蘇我は悠元の名を呟くことでそれに対する黙認の意思を伝えたのだった。
◇　◇　◇
達也が霞ヶ浦の独立魔装大隊本部を、悠元が防衛省の国防陸軍総司令部を訪れていた頃、克人は七草智一（さえぐさともかず）との会談に臨んでいた。
会談の場所は都内の高級料亭。大物政治家や一流経済人が多く利用する〝要人御用達〟ともいえる店だが、座敷に端然と座る克人の姿に『場違い』という言葉は存在しなかった……なお、当の本人は義理の妹となった理璃から昨春に言われた言葉で「自分はそんなに老けて見られるのか……」とショックを受けたこともあったのはここだけの話。
二十歳も間近という年齢には見えない克人が黒壇の座卓で待つこと一分、会談の相手である智一が姿を見せた。
「お待たせして、申し訳ありません」
「自分も先程来たところですので。遠慮せずに足を崩して楽になってください」
そう言って頭を下げて克人の正面に座るが、正座に慣れていないのか窮屈そうに見えた克人は智一に声を掛けた。
「ありがとうございます。それでは、お言葉に甘えまして」
克人の厚意に甘える形で智一は膝を崩して胡坐になるが、克人は正座のままであった。智一と克人の座り方によることもそうだが、元々の体格差も相まって克人が智一を見下ろす様な形となる。こればかりはお互いに気に留める様子もなく、社交辞令を交換してアルコールの入っていない飲み物を口にすると、二人はどちらからともなく会談モードに入った。
とはいえ、二人同時に声を発したのではなく、克人が切り出す形と

なった。
「七草さん。妹さんから、私に相談したいことがあるとお聞きしましたが」
「そうですね、本題に入りましょう。十文字さんは、昨今の魔法師に敵対的な風潮について、どう対処すべきとお考えですか？」
魔法師に敵対的な風潮はこれまでも見られたことだ。一昨年の『ブランシュ』の件や昨春の反魔法主義をメディアが焚き付けていた件が主に該当する。しかも、後者の件に関しては克人の目の前にいる人物の父親――七草家当主が関与していたことを、克人は神楽坂家当主（当時は次期当主）との会談で知ることとなった。
諸外国の情報は十文字家の守備範囲外だが、情報共有の一環で七草家（真由美）や三矢家（美嘉）と連絡を取り合っている。反魔法主義を含めた魔法師を敵対視する思想による暴動や騒ぎとほぼ無縁の状態にあるこの国が、外からの思想の流れでデモやテロが再発する可能性は決して低くないためだ。
そんな中、智一が克人の思想ではなく具体的な思考を求めたことに少し意外感を覚えていた。
「どう思っているか、ではなく、どう対処すべきか、ですか。差し当たって、七草さんは反魔法主義の風潮に対して能動的な対応が必要であるとお考えなのですか？」
「その通りです」
智一は誤魔化しや韜晦（とうかい）もせず、克人の言い分をそのまま認めた。この辺りは父親の弘一とあまり似ていないと言える。
「最早、被害を受けたらそれに対応するというスタンスでは凌げないと考えております」
「魔法師に攻撃的なプロパガンダを放置すれば、よりエスカレートして取り返しのつかないことになると？　具体的にはどのようにお考えなのですか？」
克人は魔法科高校在学時に『ブランシュ』の一件に立ち会い、校内の治安回復の為に陣頭指揮を執り、拠点制圧にも尽力して『ブランシュ』日本支部のトップであった司一（つかさはじめ）を取り押さえた。師族会議中

のテロ事件では『神将会』のお陰で特に出番はなく、総責任者としてテロリストの捕縛を命じられたが危うく『スターズ』にテロリストを殺されるという最悪の結果に至るすんでで上泉剛三に助けられた。
　反魔法主義に関わる経験を口に出さず、克人は智一に尋ねた。
「私は箱根テロ事件を上回るような爆弾テロや、まだ魔法を使えない幼児、児童を標的とした誘拐殺人も起こり得ると恐れているのです」
「魔法師ではない人々を巻き込む凶悪犯罪が続発するとお考えなのですね」
「その通りです。そうならないために、我々は何をすべきでしょうか」
　実のところ、反魔法主義に関する実行的な部分は十師族ではなく護人の二家が殆ど関与していた。更に詳しく言うと、克人の後輩である神楽坂家現当主が自身の有している膨大な資産を駆使してメディア関連株式の公開買付を行ったことで、ジャーナリストの『ペンの力』を財力で抑え込んだ。
　この国の半数近くのメディアが実質的な〝粛清〟を受けた以上、残る半数も同じ憂き目に遭う懸念が付き纏う。何せ、諸外国では有数の大手メディアを現金一括で買収せしめたことからして、それほどの力を有していることが如何なる意味を持つのかなど、賢いジャーナリストならばすぐに理解するだろう。
　財力の面だけでなく、魔法の面でも卓越した手腕を発揮している彼の功績は師族会議の場でも全て公にはされていない。智一の問いかけからして、父親からは何も聞かされていないと考えるのが妥当と思いつつ、克人は率直な意見を口にした。
「私には、直ぐには思いつきません。いえ、私一人で時間を掛けたとしても、有効な対策案を考え出せるとは思えません」
「実は、私にも分かりません。一人で対策を練るには重すぎる問題ですし、そもそも一つの家だけでは実行できないでしょう」
「……確かに単独では、現在の反魔法主義運動に対抗することはできないでしょう」
　克人の同意に智一はホッとしたような表情を浮かべていた。克人は智一の為人を知る人間として素直に白旗を揚げるような言葉に意

表を突かれつつも、智一の言葉を内心では否定したかったがそれを呑み込んだ。
何せ、単独ではないにせよ反魔法主義に真っ向から対抗したのが神楽坂家と上泉家の二家。多方面を巻き込んで反魔法主義を抑え込める実力を有するとなれば、現時点で彼ら以外に存在しないだろう。
そして、智一の相談事はその二家に対抗しようとしているように聞こえた。
「この問題は十師族だけでなく、もっと多くの魔法師の知恵を集め、意思を結集して対応しなければならないと、私は考えています」
「多くの魔法師と言いますと、日本魔法協会の総会に諮るべきだとお考えなのですか？」
「いいえ、いきなり多くの人間を集めたとしても、一般論以上の結論が出るとは思えません。それに、当主クラスの人間が集まったとしても、終始腹の探り合いになって実りのある議論ができるとも思えないのです」
「しかし、各家を代表するものが出席しなければ単なる意見交換会程度のものになってしまい、仮に何かを決めたとしても単なるアイデアで終わってしまう可能性が極めて高いと思います」
多くの魔法師の意見を集めるにしても、最終的に纏めたアイデアを実行へ移す段階で師族会議もしくは日本魔法協会の総会に諮る必要が出てくる。師族会議でのやりとりはこれまで父親の代行として経験してきたため、克人も智一の言い分には一定の説得力があることを認識していた。それも含めての反論に対し、智一はここで「我が意を得たり」と言わんばかりに頷く。
「ですから当主やそれに準じる年代ではなく、もっと若い世代の、次の当主に決まっているような方々にお集まりいただくべきかと思うのです。まずは二十八家から始めて、ナンバーズ、百家と増やしていけばいいかと思います」
「ならば、既に当主である自分には参加資格がありませんが」
「いえ、十文字さんはお若いですから、若い世代を集めるという趣旨であれば……」

当主の座に就いて、克人は自分の思考スタイルが変化したことを実感している。最適もしくは最善であることよりも、実現可能性の有無を最優先に考えるようになっていた。一言で言えば柔軟性の低下に尽きるが、理想論を掲げてばかりでは事態を混乱させるリスクが高くなる。

ならば、実現可能性を意識せざるを得ない立場にあるものの、当主ほど縛られない次期当主や直系の子女を集めて知恵を出し合えば、師族会議に対する建設的な提言を生み出せるかもしれない、と克人は考えた。

だが、定義があいまい過ぎるところを突くと、智一は当然慌てた。二人の話し合いの結果として、年齢の定義で３０歳以下の若い世代を集めるということで決着を見た。普通ならばここで終わることだが、克人はここまで触れられていなかった存在を口に出した。

「ところで七草さん。一つ質問があります」

「何でしょうか？」

「先程〝二十八家〟と口にしたこともそうですが、何故師族会議の現メンバーである神楽坂家と上泉家の当主が含まれていないのですか？」

「それは……その二家の現当主は三矢家の血縁者ですので……」

そう、師族会議議長を務める神楽坂家の悠元と、副議長を務める上泉家の元継の存在だ。悠元は現在１７歳、元継は２４歳で、若い世代を集めるという趣旨で言えば二人も該当する案件になる。智一の言い分も尤もだが、彼らが三矢家の血縁者という事実は別に隠しているわけではないし、彼らは既に三矢家の籍から抜けている。

意見を集約して師族会議に提言する意味でも彼らがいるというのは意見が通りやすいメリットもある。それを選択しなかったということからして、克人は智一の提案が彼一人で起こしたものとは思えなくなっていた。

結局、克人の圧力に屈する形で智一は神楽坂家と上泉家の当主も参加の対象に含めるとしつつ、二家への連絡は智一が受け持つと明言したので克人はその提案を呑んだのだった。

継がれていく立場

入学式の翌日の月曜日。勝手がわからずに困っている新入生の姿が見られるものの、概ね平穏であった。とはいっても、悠元は入学式とその翌日を砲弾と硝煙と魔法が入り乱れた演習場で過ごしたため、その惨状に比べれば平穏だと思う。

余談だが、悠元が暴れたことで本来二日間あったデモンストレーション戦闘が一日だけに短縮され、それに参加していた修次を人知れず吹き飛ばしていたことを幼馴染（エリカ）から聞かされた。その際に教えたところ、彼女は「やっぱり悠元は埒外だわ」と言われた。超高速で平然と動くお前に言われたくない、と返しておいた。

そんな黒歴史化しつつある過去のことはさて置き、授業見学で来ている新一年生の視線が自分や深雪に向けられているのは当然気付いているが、一々気にしていたら疲れるだけなので無視した。

「予想していた通りと言うべきか、かなり多いな」

「そうですね」

悠元の隣には深雪、雫、姫梨がいる。四人が何をしているのかという質問だが、単純に新一年生が危ないことをしでかさないかという監督役と見学を兼ねてのものだった。入学式翌日の二日間は特別な時間割と言うことで新一年生に向けての授業見学を主とした形となっている。

今年からは魔工科の授業見学も入ってくるため、昨年までは普通に授業をしていたところが大分変更された形だ。その最大の要因は魔工科に所属している達也の存在である。

「錫の試料を真球に整えるための起動式をエディタで書き起こし、それを10分以内に完了させる課題ですか。悠元は何分で行けます？」

「うーん、起動式の書き起こしは真っ当にやると達也よりも遅いからな。〝裏技〟込みなら2分以内に仕上げられるが」

〝裏技〟というのは、エディタの電子回路に疑似的な〝接続〟をすることで脳内にイメージした起動式を流し込むというもの。これは『記憶編纂（メモリーライズ）』によるものだが、起動式構築に魔法を使ってはいけないと

いうルールは存在しない。
なお、設備調整の一環でジェニファー・スミス教官に頼まれてこの方法で錫の真球を構築したところ、彼女が冷や汗を流していたのはここだけの話。その場に居合わせた達也からも「やはり埒外の天才だな」と言われた。
「……やっぱ悠元は埒外のジゴロ」
「雫さんや。埒外は仮に認めても、この場でジゴロは何も関係ないだろうに」
そんな方法を他の生徒が真似できないし、達也も真似できないと呟いていたため、ジェニファーもルール変更などは特に考えなかった。聞けば、廿楽から悠元の規格外さを聞かされていたらしい。
雫のぼやきにも近い台詞に反応しつつ、悠元は実験室に視線を落とした。
「悠元さん、お兄様は何分で完成させられると思いますか？」
「うーん……魔法力を勘案しても、６分半前後かな。多分、達也なら自然落下だけじゃなく減速落下の構築までやるだろうし」
単に錫の真球を作るだけならば、完全に冷え切った真球を自然落下で落とせば済む話だ。だが、達也の場合は何処かで手抜きをするという考えなど持ち合わせていない。自然落下による衝撃で真球に傷やへこみが出来れば、正確性を求められる評価点が下がってしまう。
なので、飛行魔法に用いられている重力制御術式を含めての起動式を打ち込むだろう。
そんなことを話しているうちに達也の出番となった。大型モニターには起動式データが表示されるわけだが、それを見た新入生からどよめきの声が上がる。それを横目で見た雫はポツリと零すように呟いた。
「やっぱ、こうなった」
「こんな反応が出るのは妥当だろうな……起動式構築に３分で完成させたか」
傍から見て、数字の羅列が表示されたモニターを見て理解出来る人間など数えた方が早い。達也がＣＡＤを作動させて魔法が発動する

と、浮かび上がる立方体の錫の試料は融解して輪郭を失い、球形に成形されていく。
第一高校（魔法工学科以外のクラス）の魔法力評価は主に現代魔法の出力や速度を重視した評価基準となっているが、今回の課題――――魔法工学科の課題に共通して言えることだが――――は、複雑な魔法式を正確に構築することにある。
無論、キャパシティや事象干渉力が全く必要ないとは言えないが、必要であれば魔法式にブーストの記述を追加してやればいいだけだ。尤も、現行の魔法式構築方法では出力する情報量が〝嵩張る〟ということは殆どの人間が知らないことだ。
そして、達也の魔法式によって完全に冷却された錫の試料は音を立てることなく試料台の上に置かれた。時間は6分34秒で、その組の中どころか3年の魔工科では一番速いタイムで完成させたことになる。
「ほぼ予想通りか」
「よく的中させられましたね」
「無理の無い成型をしようとするなら、余裕をもって3分半は掛かる様に見積もるだろうと思ったからな」
それにしても、昨春の『恒星炉』実験の影響からか魔工科を目指そうと見学に来ている人間も少なくないのだろう。流石に見学に来ている全員が魔工技師志望とは言えないが、これも達也の功績の一つなのかもしれない。
◇　◇　◇
新規メンバーが増えるのは何も生徒会に限った事ではない。風紀委員会や部活連でも新一年生への勧誘が行われている。特に入試の成績優秀者は即戦力や将来性も買われて選ばれることが多い。一昔前は生徒会と風紀委員会、部活連で取り合いになって喧嘩沙汰に発展したケースもあったほどだ。
既に卒業した国立魔法大学2年で元生徒会長の七草真由美、元風紀委員長の渡辺摩利、元部活連会頭の十文字克人の〝ビッグ3〟や、現三役では生徒会長の司波深雪、風紀委員長の吉田幹比古、部活連会頭

の神楽坂悠元（かぐらざかゆうと）の名が挙げられるが、ここまで複数の十師族直系や著名の魔法使いの子女が続いたこと自体奇跡なのだ。
　その影響で新一年生を組織同士で取り合うことはせず、互いに話し合いで穏便に済んでいるのは十師族という抑止力が学校内で働いた結果とも言えるだろう。そんな中、悠元は七宝琢磨が連れてきた新一年生の幹部候補と面談をしていた。
「……随分とガタイがいいな。これで先月まで中学生をしていたと言われても首を傾げるしかないな。おっと、済まないな。気に障るようなことを言ってしまって」
「いえ、家族にも散々言われていますので」
「苦労してるんだな……」
　琢磨が連れてきた新一年生は碓氷威満（うすいたけみつ）。現時点でも１８５センチに迫る身長と、８０キロはあるであろうがっちりとした筋肉を有したスポーツマンのような体格をしていた。最初、悠元は琢磨に碓氷の体格を見て連れてきたのか、と訝しんだほどだった。
「碓氷君と呼ばせてもらうか。部活連会頭の神楽坂悠元という。大方の話は副会頭の七宝から聞いてはいると思うが、君を幹部候補生として勧誘したい」
「幹部候補生……その、自分の成績とか尋ねられないのですか？」
「まあ、裏事情を話すと入試の結果は生徒会と風紀委員会、部活連の幹部も目を通すからな。今年の入試の結果が第三位というのは上出来だと思うし、何かしら荒事というのは起きるからな」
　碓氷の見た目からして克人を想起させるような風貌の為、将来の部活連会頭として抜擢するには十分とみている。流石に風紀委員会レベルの対処をするまでには中々至らないが、もしもの時の実力はあって然るべきだと考えているからだ。
「それは、神楽坂先輩が入学式の場で仰っていたことも関係していますか？」
「否定はしない。現実として、魔法科高校・魔法大学または防衛大学校を経由して軍関連の進路に進む者は少なくない。まあ、そんな小難しい話はともかくとして、これからの三年間を意義のあるものに出来る

かどうかは当人の意思と努力次第だがな」
　別に話を断ってもいいのだが、今年の新一年生も何かと癖の強い人間が多い以上は碓氷に話を引き受けて欲しい気持ちもある。新入生を奇人や変人などとは言いたくないし、それを言ったら在校生や卒業生にまで飛び火しそうなので心の片隅に仕舞った。
　碓氷は悠元の言葉を聞き、ほんの少し考える素振りを見せてから頭を下げた。
「宜しくお願いします、神楽坂会頭」
「ふむ、素直に入ってくれるのはありがたいが、これからが大変だぞ」
「腹は括りました」
「で、あるか」
　何処かの〝うつけ〟のような言葉が漏れたことはさておき、碓氷が幹部候補生として入ってくれることは部活連にとって大きなプラスであった。何せ、現2・3年のメンバーは現生徒会長のこともあって悠元に対して忠誠を誓うような有様となっている。それに染まっていない人材は本当に貴重であった。
　そんな気苦労が涙という形で零れ、これには碓氷が少し動揺していた。
「か、会頭？　何故泣いているのですか？」
「ああ、すまない。やっとまともに話せる後輩が出てくれたことに思わず涙が出たようだ」
「……心中をお察しいたします」
　後日、この一連の流れによって碓氷を悠元と琢磨の後を継いで部活連会頭になる運命が決定づけられることになろうとは、さしもの碓氷ですら予想だにしなかったのだった。
　生徒会に入った詩奈、結局風紀委員会の生徒会推薦枠で入った侍郎のことは、身内としても頑張って欲しいと思わなくもない。入学式の時は生徒会での話もあったためか、深雪よりもお近づきになりやすい詩奈はクラスメイトの対処で困っていた。
　そこに割って入ったのは詩奈のクラスメイトである裏部亜季（うらべあき）という女子だ。何故知っているのかと言うと、見回りついでに侍郎を風紀

委員会へ連れて行こうとしたところ、偶々遭遇したのだ。
「ほら、幼馴染が待ってるよ！」と言って詩奈の背中を押す様に教室から出てきたところ、悠元と遭遇した亜季は目をキラキラさせて悠元に対して頭を下げた。
『あの、私は先輩のお姉さん――――三矢美嘉先輩に憧れてこの学校に入ったんです！』
詳しい話を聞いたところ、美嘉がまだ高校生として九校戦に出ていた時、その格好良さに憧れたらしい。まだ自分よりは目標として現実味がある……とは言い難いが、志を高くすることは決して悪いことではない。
人間という枠を卒業する覚悟があるのならば、止めるのも野暮と言うものだろう。
なので、部活連推薦枠という形で亜季を推薦したいと提案すると、迷う暇もなく「宜しくお願いします！」と丁重に頭を下げた。見た目のタイプ的に詩奈とは正反対だが、真由美と摩利のような友人関係になってくれればありがたいと思う。
だが、亜季は知らない。確かに詩奈は雰囲気からすれば親しみやすいのは間違いないし、そのお陰で友人も多い。だが、詩奈の規格外さを知るのはここからであるということを……彼女も含めた新一年生はまだ知らない。
◇　◇　◇
婚約者に対しての新居は出来たものの、悠元と達也はまだそちらへ全面的な引越しをしていない。本人たちが暮らしている（悠元の場合は居候の身だが）家は達也のパーソナルデータ上の父親である司波龍郎の所有物であり、本音を言えば深雪が「思い出深くはありますが、あの父親と思いたくない人間の持ち物というだけで離れたくなります」という言葉で早めの引越しを検討しているが、他の婚約者の転入予定が詰まっているために実現できていない。
何せ、セキュリティー関連のことも含めると手続きに慎重を要するのは事実であるし、とりわけ悠元の場合はその中の一人に国家公認戦略級魔法師『十三使徒』がいるので、その辺の折衝が難航している……

主に軍側からの我儘のせいなのだが、そんな彼らでも〝四葉〟が怖いために五輪澪は5月上旬の転居で決着がついた。

達也側のほうは特に問題はないのだが、残るは悠元側の婚約者である一条茜と七草真由美の二名。真由美と泉美は戸籍を離れたものの、転居は連休前に行うことになっている。そのため、スケジュール調整の観点で真由美は泉美と同じ時期になることが決まった。

茜の場合は通っている中学校と一条家の都合により、転居は高校進学に合わせて行うことが決まった。一条家当主の剛毅が負傷で動けないという事情も相まって、尚更金沢から離すという選択肢を剛毅が渋っているためだ。

茜の母である美登里は娘の希望を出来るだけ叶えたい方針らしく、美登里の実家筋にあたる一色家も茜が悠元と婚約関係になることを好意的に捉えている。

達也の婚約者は、アンジェリーナ・シールズを筆頭として光井ほのかと黒羽亜夜子が続き、市原鈴音と十七夜栞、三矢佳奈、藤林響子、平河小春・千秋姉妹、明智英美、里美スバル、七草香澄、小野遥とここまでは想定通りだった。

だが、これで本決定かと思われた達也の婚約者は真夜の一言で更に波瀾を極めた。なんと、〝暫定の本決定〟と明言したのだ。つまり、達也の性分ならまだ増えてもおかしくはないだろう、という真夜の推測に達也が異論を唱えたかったのは言うまでもない。

その一人になりそうなのは、昨年春に南盾島で助けた調整体魔法師『わだつみシリーズ』の一人である綿摘未四亜（わたつみしあ）である。てっきり、同じシリーズの綿摘未九亜（わたつみここぁ）かと思ったのだが、どうやら達也が助けた時にどこか思うところがあったのだろう。

余談だが、九亜の初恋の相手は何とレオである。どうしてなのかというと、九亜が心を許していたエリカ繋がりのようだが、詳しい事情を聞いたら余計なことに首を突っ込みそうなので踏み込むのは止めた。二人が三人に増えた所で今更だと思う。

早婚の傾向が強い魔法師社会であるが、そんな波は護人や十師族に止まらなかった。

先日の沖縄の件でラウラ・カーティスに見初められ、ワイアット・カーティスにも認められた千葉寿和は４月４日に婚約を結んだ。寿和２７歳、ラウラ１６歳という年の差ではあったが、それを一番喜んだのはラウラの大叔父であるワイアットと寿和の直接の部下である稲垣であった。

一方、複雑な感情を抱いたのは千葉家当主の丈一郎だった。何せ、この婚姻には彼の意向が一切反映されなかったからだ。遊び人気質ながらも女性関係には厳しく、千刃流に関しても一線級の実力者を千葉家は持て余していた。

丈一郎は歳の離れた愛人と子を成し、その子が十師族直系の子息と幼馴染になったことで千葉の姓を名乗らせた。だが、彼女は別の男性と恋仲となり、挙句の果てには家出同然の形となっている。

結果、長女以外の家族が家を出てしまっているという状況に陥っている。正直に言えば、長女が何処かの家に嫁げば済む話なのだが、それを丈一郎が率先して考えない辺り、娘に甘い性格なのかもしれない。

年の差の愛人の子として生まれたエリカの反応はと言うと、寿和の婚約を聞いて腹を抱えて笑っていた。寿和が父親のように年の離れた女性と関係を持つようになったこともそうだが、エリカのことを散々嫌っている長女だけが未婚同然の状態となったことに溜飲が下りて盛大に笑ったらしい。

そんなことから、エリカが寿和とラウラの二人と対面した際、寿和に対して「その子をちゃんと幸せにしないと、あたしと次兄でボコボコにするから覚悟しなさいよ」と発言した。エリカとラウラは義理の姉妹の関係になり、ラウラもエリカと上手くやっていけそうな印象を持ったらしい。

そのラウラなのだが、誕生日が４月４日と言うことで婚約もその日にした。そして、しっかり学業を修めて欲しいというワイアットの要望で第一高校に通わせることとなった。なお、千葉家側の代理として上泉家が身元保証人として立ち会った。ラウラの命の恩人でもある三矢舞元もわざわざ沖縄から上京して見届けた。

千葉家の家督を一体誰が継ぐという問題なのだが、こればかりは千葉家の問題なので関与する気はない。

招待状の時点で感じる陰謀

その日の夜の司波家。夕食も終わって一段落着いていた頃、悠元は通信をしていた。その相手は壬生家に養子として入った光宣であった。単に連絡をするだけならばメールでも良かったのだが、今回は重要な用件もあったために映像通信という形としていた。

それは、光宣が転校するという案件であった。

「そうか、今週末には第一高校に転入するのか」

『はい。正直、学校を休みがちだった僕なんかが目立てるとは思いませんが』

「昨年の論文コンペで優勝を掻っ攫っていった当事者の台詞じゃないんだが？」

第一高校絡みで言えば、リーナも転校という形で入ることが決まっている。クラスはセリアと同じ3年B組になる。そして、光宣は現状空いている空席を考えると2年B組となり、琢磨と同じクラスになる。

論文コンペの時はまだ九島の姓を名乗っていた訳だが、仮に名乗らなくなっても九島烈の孫というネームバリューがそう簡単に色褪せることはない。

『はは、そこを突かれると痛いですね……それで、悠元さんが態々連絡をくれたということは、重要なお話ですか？』

「ああ。光宣が第二高校で副会長を務めていたから、学校三役に勧誘しようと思ってな。ちなみにだが、希望はあるか？」

『そうですね……風紀委員になりたいのですが、ダメでしょうか？』

「別に咎めはしないが、大丈夫なのだろうかと思ってな」

何せ、光宣はいわば〝男性版深雪〟みたいなものだ。京都や横浜で見たような惨事が周囲で発生するリスクはあるが、人間離れした風貌で抑止できるメリットもあるだろう。悠元の言いたいことを察したのか、光宣からも苦笑が漏れていた。

「ま、光宣のやる気を削ぐつもりもないから、話は委員長に通しておく。光宣は幹比古と一度会っているから、話はしやすいと思う」

『助かります。そちらだと知り合いにも限りがありますので』
風紀委員会については、知り合いだけで言えば生徒会推薦枠（幹比古・修司）部活連推薦枠（雫・由夢・侍郎）教職員推薦枠（森崎・香澄）となっており、今後『神将会』の行動を考慮して由夢には風紀委員を辞してもらい、その抜けた穴に光宣を入れる。秋には現3年生が一気に五人も抜ける形となるため、人員入れ替えの際に起きる引継ぎの混乱を最小限に抑える意味合いも含まれる。
光宣が風紀委員を志望したのは、偏に達也の打ち立てた功績によるものだろう。第一高校での〝二科生の風紀委員〟という噂は他の魔法科高校にも伝わっており、光宣はそれが達也によるものだと直ぐに理解したのだ。
現2年の三役構成については、理璃が次期生徒会長、香澄が次期風紀委員長、琢磨が次期部活連会頭と三役全てが十師族直系となる予定だ。もしかすると香澄の代わりに光宣が矢面に立たされる可能性はあるが、それはその時に決めればいい話だ。
「そういや、光宣は元の実家から連絡は来たりしているのか？」
『時折手紙が来たりしていますが、お祖父様や響子姉さんに相談しています。流石に今のご両親や紗耶香姉さんに迷惑はかけられませんので』
「既に十師族の名は捨てた身なのにな」
『全くです。この立ち位置になって悠元さんの気苦労が身に染みるほどです』
疲れたような様子を見せる光宣に対し、悠元は「分からなくもない」と言いたげに顔を竦めた。
実の父親が光宣をすんなりと手放したことで、彼は九島家に見切りを付けてきた。聡明な頭脳を持つ光宣なら、そんな実家から手紙を寄越す目的など手に取るようにわかる。
差出人は光宣の兄で、十師族から落とされた九島家を盛り返すために彼を利用しようとしていることなど直ぐに分かる話だ。なので、光宣はその手紙を祖父の烈や姉同然の響子に持ち込んで相談していた。
『お祖父様から聞きました。お祖父様自身の苦悩も、その苦悩と嫉妬

の結果として大叔父にあたる人をアメリカに追い出し、九島家を守りたいという思いに屈したがために四葉の復讐劇が起きてしまったことも。でも、僕は当事者じゃありませんし、既に九島家の人間ではないので咎めませんでした。ですが、九島烈の孫としてその罪は自覚しなければならない、と思っています』

光宣はいわば、九島烈が悩んだ魔法師としての生の果てに生まれてしまった存在。卓越した魔法力を有しながらも、それに耐えうる器を併せ持つことなく生まれてしまった。光宣はそのことを自覚しつつ、自分の生きたいように生きると宣言するように述べた。

「そうか。まあ、光宣の人生なのだから、お前が好きに決めるといい。ただ……俺や達也、燈也のようになる可能性は高いが」

『それを聞かされると、病弱のまま朽ちていくのが良かったような気がしてきます』

「仮にそうだとしても、今度は九島家の行く末に関われないことに絶望してたかもしれんぞ？」

『はぁ……それは否定できないかも知れません』

九島烈の孫というブランディングは決して侮れない。それを差し引いても、九島家の魔法を全て修得している光宣が一夫多妻の状況に陥ったとしても何ら不思議ではないのだ。既に悠元と達也、それに燈也という前例がいる以上、光宣がそうならない保証など無い。

一夫多妻ということ自体民法から逸脱しているわけだが、戦力としての魔法師の存在を期待する政府としても戦略級魔法師クラスの婚姻に色目を付けることで多少の法を破るぐらいのことは黙認したいのかもしれない。それが後々問題とならないよう法改正を行うことになるわけだが、

原作では病弱のままで拗れてパラサイト化した光宣だが、人間のまま健常者になったらなったで別の心配事を抱えることになった。彼の愚痴に対する悠元の指摘を聞いて、光宣は溜息を吐いていた。

「何にせよ、理璃ちゃんと上手くやっていけるように頑張れ」

『はい……先輩みたいな存在の悠元さんに言われると頑張れそうな気もします』

そうして光宣との通信を終え、そのまま風呂に入ってリビングに来たところで、達也と深雪がソファーに座っていた。達也の手には手紙が握られており、恐らく悠元と光宣が通話してた時に来たものだと推測される。

すると、達也と深雪の視線が同時に悠元へと向けられた。

「達也に深雪、どうした？　二人してこちらに視線を向けてきて」

「丁度良かったと思ってな。座ってくれ」

達也の指示に従う形で悠元はソファーの空いている深雪の隣に腰を下ろした。その上で達也は悠元に持っていた手紙を差し出したので、悠元はそれを受け取って目を通した後、達也に返した。

その内容は今度の日曜日、横浜の日本魔法協会関東支部にて反魔法主義運動対策の会議に招待したい、という趣のもの。差出人は十文字克人で、宛先は達也と深雪の二人に対してのものだった。

「内容は分かった。それで、達也が聞きたいことって？」

「ああ。会議には俺だけが出席するつもりで深雪と水波には伝えたんだが、悠元はどうする？」

「うーん……」

この招待状は若手会議なのは間違いないが、その手紙に達也と深雪の名しかないことが気に掛かった。

十師族・四葉家の人間で関係者だと公表しているのは、現当主の真夜と双子の姉である司波深夜、そして達也と深雪の四人だけ。若手だけを集めるというのであれば、達也と深雪しか該当しないのは道理が通る。

だが、現在の司波家には悠元も居候という形で同居しており、単に効率を考えれば三人へ宛てる形として送った方が安上がりだ。それに、十文字家の現当主は他ならぬ克人なので、彼が悠元の存在を忘れるという失態を侵すとはとても思えなかった。

「その手紙はあくまでも〝四葉家〟の関係者に宛てたものだろうし、別の家の人間である俺が同行するのは筋が通らないから止めておく。尤も、達也は別の懸念も持っていそうだが」

「そうだな。今回の一件がとても十文字先輩の画策とは思えないが、

七草家が考えたにしては捻りがないと思ってな」
今年2月に起きた師族会議を狙った無差別爆弾テロ事件のような出来事が再発しないという保障などない。その名目を考えれば、今回の会議の面目は立つ。それ以前にも大小含めて魔法師に関わる犯罪などが起きている訳なのだから、危機感を共有しつつ具体的な対策を話し合おうという能動的な対応は割と褒められるべき行動だろう。
だが、現実問題として現状の若い世代にあたる面々は世界群発戦争という争いを知らない世代。無論、戦争を機に高まっていく魔法師育成の波に揉まれてきたことは確かだろうが、三矢家直系のような魔法力を有する子女など殆どいないのが現状の師族二十八家の若手世代なのだ。
自分とて前世は戦争を経験していない立場なので、戦争の経験の有無によることを咎めるつもりはない。他の魔法師を救うために能動的な行動を起こすことも賛成ではある。だが、その手法をどうするのかが一番問題となる。
「だとするなら、今回の会議を先輩と共同で提唱したのは七草弘一の長男である七草智一だろうな。先日、十文字先輩と七草先輩の二人と連絡した時、七草先輩が自分を通して智一氏と十文字先輩を取り持ってほしいと頼まれた、と聞いた」
「七草先輩が？」
「ああ。先輩は態々自分を通さなくても七草家と十文字家で連絡できるのに、そうしなかったことに対して訝しんでいた」
元々関東地方を二家で受け持っていた実績を考えれば、そんな回りくどい方法を用いずとも直接連絡する方法はいくらでもある筈なのだ。なのに、態々真由美を介して連絡するということは、直接の連絡で生じる何かを取り除きたかったと考えるのが妥当だ。
何かと考えた際、一番考えられるのは〝七草弘一〟という存在が一番妥当だろう。
「そもそも、まともに対処できる実効的な力さえ持っていない輩が話し合ったところでまともな案が出てくるとは到底思えん。魔法に対する恐怖を取り除くとするなら、魔法を真っ当な非魔法師に向けない

と政府が保障してしまえば一番手っ取り早いんだがな」
原作だと軍関係者がいる家が参加を辞退したことも問題である。別に師族二十八家で軍に対抗しようという訳ではない。国防軍の横槍を防ぎたいという思惑も理解できなくはないが、一番非魔法師という存在に関わっていて尚且つ国家を守る為の組織の人間から見た印象を知ることはとても大事な事なのだ。どこかの家に関しては寧ろ火に油を注ぎかねないので参加してくれなくても結構だが。
政府の言葉に信を置くかどうかも分からないが、それでも言わないよりはマシなレベルだと思っている。日和見をすることの多い政治家に対する皮肉交じりの発言に、達也は一息吐いた後で悠元を窘めつつも問いかけた。
「いつになく過激な発言だが……なら、悠元だったらどうする？」
「ここ最近不祥事続きの九校戦をスポンサーなりサポーターの形で全面的に後援するというのが一番理に適っていると思うが、裏方の仕事を好き好んでやりたがる我慢強い奴らがいるのかね？」
ここ最近、今年の九校戦が中止になるのではないかという噂がネット上に散見されるようになった。一昨年の不審な事故や昨年の軍事色が強い競技変更によって実行委員会のメンバーが一気に刷新され、まともな運営体制が取れるのかという疑問視があるためだ。
なら、魔法師を統べる立場として一番味方にしやすい魔法師を後押しすることで少数勢力である魔法師社会の足場を固めるのが一番効率的だと考える。
だが、十師族の若手の中には自らを特別視して他の魔法師を無意識的に見下す傾向があったりするのも問題として存在する。自分たちが先頭に立つという優越な意識からして、目立ちたがりで他の師族との足並みを乱すどころか味方であるはずの人間の足を引っ張り合いかねないのが最大の懸念事項なのだ。
無論、全ての人間がそうであるとは言わないが、そういった気質を持ち得る人間と面識を持つためにその懸念が払拭できない。
「言い換えれば、師族会議の当主クラスでも腹の探り合いや主導権争いをしているというのに、次期当主や子女クラスで起きていないだな

んて一体誰が保証できるのか、ということにも繋がる。その最たる例は達也たちも目撃しただろう？」
　それは昨年の七草香澄・泉美姉妹と七宝琢磨の一件だ。現在は既に解決した問題だが、実際に起きていたことは確かだ。その場合は七草家の特殊性も相まっての問題だったが、これが他の師族にも起きていない、と断言するには説得力があまりにも足りなさ過ぎる。
　悠元の言葉に対し、目撃していた達也と深雪、そして水波も頷いていた。
「そうなると、悠元さんはどんな案が浮上すると思われますか？」
「そうだな……魔法の有用性を大衆にアピールする――誰かを神輿に担ぎ上げる案が真っ先に浮上する。優れた魔法師は容姿も優れているから、アイドルのように見られることも想定される。尤も、そんな案が師族会議に上がって来たら議長権限で握り潰すが」
　担ぎ上げられる当人へのリスクを考慮しなければ、その案によって社会的貢献をアピールするという行為は決して悪くない。だが、そもそもの前提として現代魔法に割り当てられてしまった〝役割〟――核兵器を抑止、全面核戦争への道を回避する――を見直さないことには、魔法に対する偏見の眼はそう簡単に変えられない。
　現代魔法の根幹を変えない限り、例えアイドルのような真似事をしても一時凌ぎでしかない稚拙な対策として終わる公算が高い。そのことを真っ向から指摘できる人間がいるとするなら、是非味方側に引き入れたいと思う。
「いくら十師族の家に生まれようと、社会に出れば当人の能力が真っ先に見られる。なまじ親が優秀だと子女の世代が割を食うというのは今に始まった事ではないが」
「そうなると、悠元はその会議が穏便に終わるとは思っていないわけだな？」
「師族二十八家に限っても、軍属の関係者が複数名いる。俺も裏向きではそんな立場だが、効率を重視するであろう十文字先輩が達也らの手紙に俺を連名としなかったのは……どうやら、七草弘一は息子の手柄を稼がせる目的もあるかもしれん」

魔法師といえども老いと寿命には勝てない。それはかの剣豪こと上泉信綱であっても打ち勝てなかった事実。魔法師の性質上、真っ当に生まれれば非魔法師よりは長生きできる筈だが、それは古式魔法で顕著に見られることであり、現代魔法に限って言えば下手すると平均寿命が短い場合が多い。これは調整体魔法師などの存在が大きく影響している。

現在の十師族当主は最年少が克人の１９歳(数え年で２０歳)で、最高が５０歳代である二木舞衣と三矢元。明確に次期当主を指名したのは四葉家の達也と六塚家の燈也でいずれも十代に対し、若い世代となる八代雷蔵を除けば、次期当主といえども目立った実績を有していない。一条家は将輝が有力な次期当主筆頭だが、魔法力はともかくとして実務的な部分で経験不足が目立つ。

七草弘一は４７歳と師族会議メンバーでは高齢のほうに入る為、２６歳の智一に次期当主としての箔を付けたいという意味は分からなくもない。

「七草家は体制再編で沖縄方面の守護・監視に回ることになる。それに向けての弾みを付けたいと考えるのなら一応の面目は立つが……達也、万が一深雪を担ぐような真似をしようものならば止めろ。最悪俺の名を出しても構わん」

「……分かった。それは、師族会議議長としての発言と捉えるが」

「構わない。一人に全ての重責とリスクを負わせるということなんて認められん。仮にやるとしても、師族二十八家および護人二家の三十家全て――――ひいては魔法師社会が平等に責任を負わなければ話にならん。なので、仮に俺宛の手紙が来ても『その日は家の用事がある為に出席できません』と丁重に断るつもりだ」

矢面に立たせることになる以上、達也の後ろ盾としての立場を悠元は明言した。達也も悠元からの情報でロクな流れにならないだろうとみたのか、その要請に頷いた。

「悠元さんは、そこまでのことになるとお考えなのですね？」

「俺は七草智一の為人など知らん。だが、七草家と十文字家の共同ではなく十文字先輩を矢面に立たせた段階で七草弘一と同レベルに警

戒すべきだと判断した。この先数十年は顔を突き合わせる相手になるかもしれんが、そんな相手に妥協する必要など無いからな」
ここまで原作からかなり乖離しているのに、原作知識が通用する時点で一周回って噛み合ったような妙な感覚に囚われる。こうなると、光宣と水波の一件も何かしらの形で修正力が掛かるとみていいのかもしれない。
だが、悠元が知り得ているのは将輝の『海爆（オーシャン・ブラスト）』のところまで。それ以降はセリアから聞いているが、その全てがその通りになるとは到底思えなかった。
「それに、会議の日は既に用事が入っているからな。上泉家と今後のことについて話し合わないといけない」
そもそも、悠元と元継は今度の日曜に会談を開くことで調整していた。若手会議のことも大事ではあるが、護人の会談が最優先事項になる。内容は諸外国の動きに関わる事なので、どちらを優先するかと言われると若手会議を欠席するしかない。
自分と次兄がいないことで生じる問題はあるかもしれない。だが、実働部分で主立って動いてきたのは他ならぬこちら側であり、能動的な対応をして来た側から言わせれば、他の師族も積極的な活動をすべきなのだ。
魔法使いとしての矜持はあるのだろうが、秘密という言葉で沈黙を保っても何も解決はしない。だからと言って、誰かを人柱にするようなやり方は絶対に許容できない。日曜の会議はその試金石となるだろう。

三矢の兄弟姉妹（末っ子を除く）

克人からの招待状が届いたのは、言うまでもなく司波家だけではない。封筒というものが移動する関係上、到達の差異が生まれてしまうのは已む無きことだが、厚木の三矢家は達也たちが受け取ったのとほぼ同時に受け取っていた。

手紙の宛先は、当然会議の参加条件を満たしている次期当主の元治であった。とはいえ、現当主は未だ元であり、真っ先に相談するべく執務室を訪れていた。元治は手紙をまず元に読んで欲しいと差し出すと、元は近くにあったペーパーナイフで封を切り、中の便箋に目を通した後で元治に差し出した。

そんなに簡潔な文章なのかと訝しむ元治だが、渡された招待状の内容は確かに十文字家当主らしい簡潔な文章だった。それを読み終えた上で元治は元に尋ねた。

「今度の日曜に会議とは急な話ですね」

「そうだな。それで、どうする？」

「会議には出ようと思いますが……ただ、少し気になります」

「ほう？」

元治の言葉に元は少し関心を覚えた。三矢家直系の子の中で、間違いなく話術に優れているのは現神楽坂家当主の悠元。元継も毅然とした精神力で祖父の剛三譲りの才覚を見せつつある。それに比べると元治は些か優しすぎるきらいがある。

元は催促することなく目の前にいる息子の言葉を待つ。元治はそれを理解したのか、少し思案した後で話し始めた。

「今回の提唱人は十文字家当主の克人殿とのことですが、彼の為人を考えるのならばまず神楽坂家か上泉家に話を持ち込むでしょう。反魔法主義というデリケートな問題を考えるのなら、師族会議を統率する彼らに発起人となってもらうことで強い効力を生み出す案を出せると思います」

「元治は、それをしなかった時点で十文字殿は持ち掛けられた側とみているのか？」

「はい。ただ、過去のやり口から見て七草家のようにも思えるのですが、七草殿が企てたにしては詰めが甘いと自分は考えます」
　三矢家は七草家に代わって関東地方の守護・監視を正式に担う立場に置かれる。その意味で同じ地域を担当する十文字家のことも当然把握しておかなければならない。元治自身、克人との面識はあまりないが、父親伝手に聞く為人からしても彼が発起人とは思えなかった。
　かと言って、七草家の当主にしては些か手段に荒っぽさが目立つと元治は率直な意見を述べた。
「成程、言われてみれば道理ではあるが……今回は私が関わる立場にない以上、お前に任せる」
「分かりました」
　元の執務室を出ると、元治は手紙を持ったまま屋敷の中を進む。このことを妻に相談するのもいいが、今回ばかりは三矢の人間として相談すべきこと。思い悩みつつ歩いている元治に対し、その向こう側から声が掛けられて元治の視線はそちらを向く。
　すると、そこにはカジュアルな私服姿の元継が立っていた。
「どうした、治兄貴。いかにも悩み事がありますって顔をしてるぞ？」
「元継？　今日はどうしてここに？」
「ちょいと親父に相談があったんだが……困ってる兄貴を見捨てるのも忍びないな。妹連中にも声を掛けて話し合うぞ」
「え、あの……」
　元継の即決即断に巻き込まれる形で、元治は屋敷の外に連れ出された。その行き先はというと、東京・町田にあるＦＬＴツインタワーマンション北棟……共同生活スペースに三矢の人間が集められた。
「――というわけで、済まないな悠元」
「よもや、急に呼び出されるとは思わなかったけど」
　部屋の持ち主である悠元のジト目に対し、元継もバツが悪そうに謝罪していた。しかし、元継の思い付きとはいえ、詩奈以外の六人が会するのは久しぶりのことなので、そのことについては素直に嬉しかった。
「継兄さんならやると思ってたから、今更な気もしますが……」

「万が一の場合は遠慮せずに泊まっていいよ。客室は空いてるから」
「お、それは嬉しい限りだね。佳奈姉さんは楽だけど」
「美嘉はどちらかといえば当事者側でしょうに」
　矢車分家の長男と結婚した長女：詩鶴、達也の婚約者である次女：佳奈、克人と婚約を結んだ三女・美嘉。いずれも魔法科高校時代は第一高校生徒会長として輝かしい功績と血なまぐさい歴史を作ってしまった三姉妹。
　ここに集まった六人の兄弟姉妹の中で比較的まともなのは元治に他ならない。時間も時間なのでホットミルクを出し、一口付けて落ち着いてから元治が話し始めた。
「今度の日曜、横浜ベイヒルズタワーの日本魔法協会関東支部で反魔法主義運動の対策を話し合う会議が開かれることになった。差出人は十文字殿だ」
「かっちゃんが？　……時勢的にはあり得なくもないけど、それだったら父さんが表立って話すべきだと思うのは私だけ？」
　元治の説明に対して真っ先に問いかけたのは美嘉だった。彼女は将来嫁ぐ相手としても同じ高校・大学に通っている身としても、とても克人が率先して提唱したとは思えないことに疑問を呈していた。
「今回は師族二十八家と護人二家の若手を集め、将来的には百家なども含める文言からして次世代のコミュニティを作りたいという感じにも見える」
「……悠元、元継兄さん。二人のところに招待状は？」
「来ていないな。悠元は？」
「右に同じく。ここに来る前に同様の手紙が司波家に送られてたのは確認してるが、居候である自分は連名になっていなかった」
　元治の言葉を聞いて、詩鶴は元継と悠元に招待状の送付の有無を確認した。元継に続く形で悠元も招待状を受け取っていないことに、元治のみならず詩鶴や佳奈、美嘉も驚きを見せていた。これに対して真っ先に反応したのは美嘉と佳奈だった。
「おかしい、おかしすぎる」
「そうね。文言では神楽坂と上泉――――悠元と兄さんのことに触れて

いるのに……もしかして、克人はその話を持ち掛けられた側じゃない？」
「俺自身もそう睨んでいる。なので、会議には自分が出席しようと考えているが……元継と悠元はどうする？」
招待状の送付ミスなど有り得るはずがない。箱根に本拠を置く神楽坂家と群馬に本拠がある上泉家ならば、ほぼ同時刻に送付されていてもおかしくはないのだ。仮に入れ違いになったとしても、親展や書留の類でない限りは中身を確認して連絡するように言い含めている。
だが、現時点で悠元と元継の両者に本家からの連絡は入らない。つまり、招待状は出されなかったと判断するほかにない。
そんな不手際を十文字家の人間――――それも現当主の克人の性格を考えれば、絶対に有り得ないこと。だとするならば、誰かが裏にいるのが妥当だろう。
「その日は既に護人で話し合う予定があるが……悠元はどうする？」
「出る気にもならない。最悪厄介事を押し付けられるのが目に見えている以上、まだ護人で話していた方が有意義だから」
そもそも、これまでの反魔法主義運動に対して先頭に立って対処してきたのは神楽坂家と上泉家。諸外国の動向を踏まえてのものというのは理解できるが、どうにも会議に参加してほしくない様子が招待状に垣間見えている以上、無理に参加する道理もない。
「もしかして、七草家か十山家が関与していると？」
「……一条家当主の件の後、十文字先輩と七草先輩が連絡してきてな。その後、七草先輩と二人で話した際、先輩の上の兄が十文字先輩に相談事と言って連絡役をやらされたことに疑問を呈していた」
「そんなことが……じゃあ、真由美を介した連絡がその会議のことだと？」
「それしか考えられない」
招待状の時点で正直まともな議論になるか疑わしいというのもおかしな話だろう、と思う。だが、七草家が表立って差出人に名を連ねなかった時点で、その会議がまともに進むかどうかすら疑わしくなるというわけだ。

「ま、招待状が送られてこなかったところで別に構いはしないし、返事を書く手間が省けるからどう転ぼうとも構わない。問題はこの先だろう」
「……その会議が何かしらの引き金になる、と悠元はそう考えているのね？」
「その通りだよ、詩鶴姉さん」
　若手会議を切っ掛けとして十山家が動き、色々なトラブルを引き起こす。自分の誘拐未遂という事件を起こした手前、よもや情報部がまた動くとは考えづらいが、それでも動く様ならば容赦する気など無い。
　それに、若手会議はもう一つの動きの起点となる出来事。言うまでもなく、『ディオーネー計画』に関することだ。その会議の情報を知ったエドワード・クラークがその前日に起きた新ソ連の軍事行動を見て、協力者の中にベゾブラゾフを加えたとみるべきだろう。
「会議の進捗次第だが、俺もまともな議論は望めんと思う。克人がしっかり諌めてくれればいいが、当主になってから実現可能性を重視しているような感じだからな。場に流されるような形になってもおかしくはない」
「元継、そこまで言うのかい？」
「上泉家当主だからこそ、そこまで言わないといけない。下手すると、詩奈が反魔法主義に対するアピールとして神輿にされる危険性だってあるんだ。何かを決める為の会議となるかは不明瞭だが、兄貴の責任は重大だぞ」
「……ああ、分かった」
　元治をサポートするのならば、悠元や元継にも会議に参加してほしいと思うのが普通だ。しかし、二人は既に三矢の人間ではない為、表立って庇うことは難しい。血縁関係からの協力要請は出来ても、護人の力を笠に着るような真似は許されない。
「継兄もそうだけど、悠元も手厳しいね」
「美嘉姉さん、俺はもう神楽坂家当主だし、元継兄さんは上泉家当主だ。将来父さんの後を継ぐってことは、日曜の会議ぐらい独力で乗り

切れないと師族会議でなんてやっていけない。元治兄さんも父さんからすべて任されてるはずだし」
「その通りだよ。全く、こうやって現実を突きつけられて父や弟たちの気苦労が分かるだなんて、僕もまだまだだな」
元治は肩を竦めて呟いたが、仕方がないことだ。
悠元と元継は三矢の家督相続権を早々に放棄したものの、剛三によって武術を学ぶと同時に、社交界との付き合いを通してマナーや礼儀などを学んだ身。元治も父親から厳しく教えられているのは間違いないだろうが、そもそものスタート時点が違う以上は結果も自ずと変わってくる。
「治(はる)兄貴の場合は仕方がないだろう。ましてや、三矢家は今後七草家に代わって十文字家と一緒に関東地方の守護・監視を担うんだ。これまで以上に兄貴の領分は増えるだろうし、次期当主である以上は否応なく親父の手伝いに駆り出されるからな」
「……ところで、七草家が沖縄方面に移る決定打はやっぱり悠元絡みなの？」
「それもあると言えばあるけど、もっと決定的なのは周公瑾とコンタクトを取って反魔法主義を煽ろうとしてた件。尤も、周公瑾は処刑されたが」
師族会議再編の際、七草家の沖縄方面への〝鞍替え〟については十師族でも実力のある七草家に最前線を担ってもらうという表向きの理由が存在する。正直に神楽坂家と結んだ周公瑾に関する約定を破っただなんて公表すれば、七草家を師補十八家に落とすべきという声が上がるのは想像に難くない。
とはいえ、これまで十師族の中で政府に対して強い働きかけが出来ていたのは他ならぬ七草家だけという現実もある為、周公瑾に関する罪は九島烈ならびに九島家が全て負うという形で決着した。
◇　◇　◇
三矢家での話し合いは夜遅くまで続き、結局悠元と佳奈以外は客室で一夜を過ごすこととなった。悠元もマンションの自室で寝泊まりをした訳だが、寝るときには一人だった筈のベッドの中――悠元の

隣には愛人扱いの一人である安宿怜美が眠っていた。
　これには悠元が一つ溜息を吐いた上でそのまま寝かせてやると、ライディングスーツを着てマンションの地下に降りる。地下には『ドレッドノート』が停まっており、悠元は『ワルキューレ』を差し込んでイグニッションスイッチを押してエンジンを起動させる。
　そしてバイクに跨ってヘルメットをかぶると、コンソールを操作してセキュリティゲートのロックを解除する。コンソール上で全てのゲートが開いたことを確認すると、悠元はスロットルを吹かして開いたゲートへと走り出した。長いゲートを潜った先はトンネルの中で、その道は公道ではなくＦＬＴの敷地内にある私道に繋がっている。
　ＦＬＴの土地自体が神楽坂家から借り受けている形（複数の不動産会社や名義人を通しているため、辿っても神坂グループには行きつかないようになっている）のため、このような方法が取れるというわけだ。それに、悠元はＦＬＴの社員『上条洸人（かみじょうひろと）』の名義を有している為、バイクで乗り付けたとしても誰も咎める人間はいない。
　悠元が『ドレッドノート』を駆って到着した先は無論司波家であった。事前に連絡をしていたとはいえ、ガレージからそのまま家の中に入ると深雪が嬉しそうに出迎えてきた。
「おはようございます。そしておかえりなさい、悠元さん」
「ああ、ただいまとおはよう、深雪。達也はいつもの鍛錬か？」
「はい。直に朝食にしますか？」
「そうだな。じゃあ着替えて来るよ」
　達也の鍛錬のことは時折八雲から聞き及んでいるが、組手では５割の勝率にまで持ち込まれているという。八雲に勝てているというだけでも以前軽運動部に関する条件を満たしている訳だし、八雲も達也に提案したらしい。だが、達也は固辞したという。
　曰く『師匠に本気で「参った」と言わせられるようにならなければ話にならない』とのことで、誰のことを指しているのか分かる話だ。
　自室で上着以外の制服を着た上でリビングに戻ると、丁度朝食の準備が出来ていたので頂く。
「昨日は急に呼び出されたから済まなかったな」

「いえ、悠元さんも家のことがありますから。それで、元継さんの呼び出しの用件は何だったのですか？」
「昨晩届いた招待状の件で、詩奈以外の三矢の人間で話すことになった。早い話が元治兄さんに檄を飛ばす形になったが」
若手会議の件は師族二十八家で知られることになるため、悠元は特に隠すこともなく正直に話した。司波家（四葉家）から達也だけが出ることは伝えなかったが、元治からすれば顔見知りであるために必要以上のお節介を焼く必要もないと判断した。
「今頃、達也も九重先生から会議のことについて言われてるかもしれんな」
「先生の性分を考えると、そうなっていてもおかしくありませんね」
朝食を終えると、悠元は身支度をすると言って自室に戻った。端末を起動させて情報を具に見ていくと、一つ溜息を吐いた。画面に表示されたのは、ＵＳＮＡ軍――スターズが再び日本へ潜入工作を試みるというものだった。その理由も自ずと想像がつく。
「……世界最強と自称するからには、『マテリアル・バースト』と『スターライトブレイカー』を見逃せない理由も分からなくはないが、馬鹿にも程がある」
正直な話、『マテリアル・バースト』に関しては言うまでもないことだが、先日ようやく完成した戦略級魔法『星天極光鳳（スターライトブレイカー）』は、その気になれば全世界のあらゆる地点を起点として対象を破壊することが可能となった。それこそ、空中のみならず地中や海中を起点として発動させることも可能で、悪辣な使い方をするならば休火山や海底火山のマグマだまりで発動させて無理矢理噴火させることも可能だ。
それをしないのは、この国も少なからず影響を受ける可能性が高いためであり、国益に反するものとして実行していないに過ぎない。
自国に向けられたくないと思うのならば、自分たちから歩み寄ろうという気概を持つべきなのに、魔法師としてのプライドが邪魔しているのだろう。それこそ愚かとしか言いようがない。
国内は国内で面倒だというのに、国外のことも加わって面倒事を持ち込もうとしている輩に一発殴ってやりたい気分だ。自分がまとも

な思考をしているとは自負するつもりなどないが、正気を持っているとは思えない人間に正気の沙汰を疑われたくない。

招待の受け取り方

六塚家の次期当主として指名を受けた燈也も招待状を受け取っていた。年明け前までは新発田家に居候していた身だが、年明けに六塚家が東京に所有している別宅で暮らすこととなり、婚約者として既に指名されている五十嵐亜実（いがらしつぐみ）と本郷未亜（ほんごうみあ）（本名・ミカエラ・ホンゴウ）と一緒の生活をしている。

その手紙は司波家や三矢家とほぼ同じタイミングで届いた。

「……燈也君、その手紙には何て？」

「今度の日曜、横浜の協会関東支部で会議を開くとのことです。反魔法主義運動に対する話し合いとのことですが、僕には腑に落ちません」

「どうしてです？」

リビングで手紙を見つめる燈也は尋ねる亜実に問いを返しつつも、どこか納得しがたい表情を見せていた。それには丁度キッチンから紅茶の入ったティーポットとカップをトレイで持ってきているミカエラが尋ねた。

「当主クラスが腹の探り合いで具体案が進まないのは仕方がないにせよ、僕らのような若手で一体何がひねり出せるというのですか、という話です。ロクな流れにならないと思うのですよ」

「成程。確かに十文字君にしては回りくどすぎるね。となると、まゆみんの実家が関与してそうな気もする」

「私はそこまで事情に詳しくないのでどうとも言えませんが……」

「ミアちゃんは仕方がないよ。元々ステイツの人間なんだし」

ミカエラから紅茶の入ったカップを受け取り、一口付けた上で燈也は一つ息を吐く。

彼が訝しむ理由はただ一つで、克人が仮に今回の発起人ならば師族二十八家の若手を中心にしたコミュニティを起点として将来の師族会議体制を固める懇親会という形にすると推察していた。

そうなっていないという時点で誰かの意思が介在しているのは言うまでもなく、亜実の言葉も可能性として十分に考えられるというこ

とだ。
「お二人は知らないことかもしれませんが、大抵の師族直系の子女の場合、家の関連する企業に勤めることが多いです。姉も当主の座を継ぐまでは六塚家が株式を持つ会社の社員として働いていましたので」
燈也からすれば、普通に社会の中に溶け込んでいる直系の人間といえども全て表立って魔法師として活動しているわけではないことを知っている。
いくら魔法が国策として位置付けられていたとしても、魔法の機密性と〝見えない恐怖〟は大半を占める非魔法師にとって恐れを抱かせることになり、下手をすると中世に起きた『魔女狩り』の再来が起きかねない。
「そうなんだ……ねえ、燈也君。何で反魔法主義運動対策なのに肝心な家が入ってないのかな？」
「成程、エリカの実家である千葉家ですね（今回は師族二十八家と護人二家のみに対象を絞っていますが……別に、オブザーバーとして参加してもいい筈）」
確かに顧傑の一件では十師族が表立って動いていたが、警察も独自に動いており、最終的には顧傑の逮捕を警察が行ったという形で決着した。千葉家の子女は全員３０歳以下だし、それこそ現役警察官である長男の寿和がオブザーバーとして出席したところで何ら問題はない筈だ。
「……それで、燈也君は出席するのですか？」
「出るべきだと判断しています。これは僕の予感なのですが、反魔法主義の為にアイドルじみたアピール方法を取るような気がするんです」
それをしなかったということは、燈也自身この会議がまともな議論になるとは到底思えなかった。同調圧力を以て会議を進ませるとなれば、起こりうる可能性として一番高いものを燈也は口に出した。
「魔法師が歌や踊りをするってことですか？」
「極論で言えばそうなりますね。それに、その対象として槍玉に挙げられそうな人間を僕は知っていますし、亜実さんも知っている人で

す」
「……あっ、司波君の妹さんね」
「ええ」
そんなことになれば、まず婚約者である悠元は許容しないし、身内である達也も深雪の危険性を考慮して強硬に反対する。それに、アイドルのリスクについては親友であるレオの婚約者の一人が３Ｄアイドルアバターの関係者絡みで良く知っている。
そのリスクを鑑みた際、四葉の現当主が誘拐された一件の再来を生み出すことに他ならず、最悪日本を起点とした四葉の復讐劇の再来で東アジア一帯が戦火に包まれかねない。
「無論、それは可能性の一つでしかないわけですが、能動的な対抗策を考えるのならば既にある魔法競技のスポンサーを推し進めて、プロリーグみたいなものを正式に作ればいいんじゃないかと思うんですよ。それこそ九校戦でやった競技を参考にすればいい訳ですし」
「魔法競技を……ＵＳＮＡでは聞いたこともないです」
「仕方ないですよ。現代魔法の起源が核兵器の抑止という軍事的な目的ですから」
元々調整体魔法師として生まれたからこそ、燈也は十師族直系の中でもかなり冷めたものの見方をしていた。誰よりも人らしく生きようと考えた時、軍事的な目的で世に出てしまった現代魔法をあまり快く思っていなかった。
だからこそ、誰よりも肉体面を鍛えることで魔法抜きでも対処できるようにしてきた。
◇　◇　◇
四葉家当主・四葉真夜の朝はそこまで早くなかった。フレックスタイム（労働者自身が労働時間の振り分けを決める制度）や在宅ワークの導入で、サラリーマンであっても朝早く起きたりするという忙しさは解消されたが、オフィスワーカーに比べればのんびりしている。
そんな真夜の生活も数年前には大きく変わった。厳密には沖縄防衛戦後に深夜と会談した後、若返った姉に嫉妬してか魔法の訓練で早起きするようになった。更には、剛三の紹介で現当主の父親から武術

の指南を受けている。
　尤も、始めた当初は長年の運動不足が祟って軽い準備運動だけで息が上がっており、同席した葉山が平然としていることに恨めしさを込めた視線を向けたこともあった。今となっては実年齢の同世代と比べて動けており、外見の年相応にまで動けるようになった。
　朝４時に起きた真夜がいつものように朝の訓練を終えたのが朝６時。そこから朝食を済ませて1時間が経った頃に、背後に控えた葉山が恭しい口調で真夜に告げた。
「奥様、達也さまよりビデオメールが届いております」
「ビデオメール？　たっくんなら別に直接連絡をくれてもいいのに」
　真夜としては、実の息子の相談事ぐらい直接聞いても苦にはならないし、母親としてのコミュニケーションに飢えていた。
　その息子がビデオメールという形を取ったのは、今までの経験からして真夜が寝ている時間に連絡するのは忍びないという考えなのかもしれないが、他の誰かならばいざ知らず、達也ならいつ連絡してもいいと思っている。
「届いたのは昨晩、奥様がお休みになられてからのことです。ご不満のご様子ですが」
「葉山さんだけ聞けてるなんてズルいわよ。今までのたっくんに対する扱いからして、そうしたのは理由も分かるけど……そこまで急ぎではないと？」
「はい。達也様は『見て頂くのは翌朝で構わない』と仰せでした」
　それで興味を持った真夜は葉山にビデオメールを見ることを伝えると、葉山が控えていたメイドに指示を出してメールの再生をするための準備をさせる。準備が整ったところで真夜に確認を取った後、葉山が合図を出してメイドたちを退出させた。
　葉山自ら部屋の扉を施錠して防音壁を下ろすスイッチを入れた。デコード済みのデータを入れたメモリーカードをスタンドアロンの再生機にセットすると、真夜の正面に準備されたスクリーンに達也の映像が映し出された。
　メッセージ自体は3分にも満たない程度のものだった。最後まで

見終わった真夜はというと、どこか不満を垣間見せたような笑みを浮かべていた。
「もう、たっくんってば……この程度のことなら私を通さなくても出席すればいいですのに」
真夜からすれば、達也を自分の息子と認めた時点でそれなりの自由を与えたつもりでいた。だが、今回のビデオメールは達也が深雪のガーディアンという名残が何処か垣間見えてしまうものであり、長年そう扱って来た側とはいえ、真夜からすれば頑固とも言える息子の生真面目さに不満であった。
「達也様も、奥様とどう接していいものかお悩みになられているのかもしれませぬ。何分、達也様は長いこと深雪様のガーディアンとして勤めていた身ですので」
「……それもそうね。あの子を守るためとはいえ、厳しく接してきたのは事実ね」
葉山のアドバイスに近い言葉に、真夜も渋々納得した。いきなり振舞い方を変えろと言われても、長年染み付いた癖というものは簡単に抜けない。四葉家の中でも使用人同然の扱いを受けていた立場から一気に次期当主へと躍り出たため、誰しも困惑するのは火を見るより明らかだ。
「して、奥様。達也様からの要請は如何いたしますか？」
「勿論許可するけど、連絡は私から致します。宜しいかしら？」
「畏まりました」
葉山の問いかけに対して、真夜は直接連絡するという形となり、葉山は異論を唱えることなく頭を下げた。
その後、私室のクローゼットを見つめて「似たようなドレスしかないわね……」とぼやく四葉家当主の姿を娘のように見つめる執事がいたのはここだけの話。
◇　◇　◇
本来、光宣は既に九島の家を離れているために参加する立場ではない。当然若手会議のことは何も聞かされていないわけだが、そんな自分に招待状が届いたことに光宣は思わず首を傾げていた。

手紙を受け取ったのは今年の春から魔法大学の学生となった紗耶香で、夕食の席では光宣のことについて持ちきりとなった。早く内容が知りたいとせがむような視線に、光宣はペーパーナイフで封を切って中身を確認した。
「成程、今度の日曜に師族二十八家や護人二家の若手を集めて会議をするみたいです」
「へえ、反魔法主義運動に対する会議……他人事とは言えないわ」
「そうだな、壬生家にとっても避けては通れぬな」
何せ、紗耶香が一昨年の春に『ブランシュ』の一件で洗脳されて騒動を起こした当事者。その事実は養子となった光宣にも知らされることとなったが、『パラサイト』の一件で騒動を起こした元実家のことを考えると、それを非難する権利など光宣にはなかった。
「光宣は会議に出るの？　体調が悪かったら無理しなくていいのよ？」
「そこは大丈夫です、お母さん。ちゃんとお医者さんにも太鼓判を貰っていますから」
元々治療という形で壬生家に籍を移していたため、紗耶香の母からはいつも心配されていることに光宣は申し訳なさと気遣いによる嬉しさを感じていた。九島家では祖父と姉同然の従姉以外から家族と関わる機会がなかっただけに、尚更であった。
そんな心境を思いつつ、光宣は思案した。
「でも、今の僕は師族二十八家と関わりを持たない人間なのですが、どうして十文字殿が僕にも招待状を送ったのかが疑問です」
「光宣は、何か懸念があるの？」
「ええ、まあ。何せ、僕が出れば元実家である九島家の人間と鉢合わせする可能性が高いですから」
光宣が十文字家の人間である理璃と婚約していることは事実だが、それだけで十文字家の当主が光宣に配慮するという理由にはならない。それに、元実家の九島家にも当然招待状が送られているだろう。多分出るとなれば長兄だろうとみており、光宣からすれば距離を置きたい相手と接触するのはあまり宜しくない。

デメリット以上の何かを光宣に期待している意図を感じたのか、一家の大黒柱である勇三(ゆうぞう)が声を発した。
「光宣。もしかしたら、十文字殿は自分に出来ない立ち回りを光宣に求めているのかもしれない。恐らく、会議には四葉家の人間として〝彼〟も出席するだろうからな」
「……成程、達也さんのフォロー役ということですか」
光宣も正直、今度の若手会議が十文字家主体のものではないと薄々と感じていた。会議を立ち上げた側が自ら会議を壊すような真似は避けたいが、内容次第では会議の空気が悪くなると見込んでいるのかもしれない。
なので、十文字家に関わりがある師族二十八家の関係者として光宣に白羽の矢を立てた、と勇三は睨んでいた。勇三も先日四葉家の人間と公表した達也と面識があり、彼が会議に出てくる可能性が高いと踏んでいた。
それは光宣も達也の為人を考えればそうするだろうと結論付けたが、表情が曇った。その理由を察してか周囲の人々も苦笑を滲ませていた。
「正直、僕よりも年上の人が多くなりそうな中で会議のフォロー役なんて、普通は年長者の人間が行うべき案件ですよ。お祖父様の功績というのは時として重く感じてしまいます」
ともあれ、久しぶりに知り合いと出会えるとなれば出ない理由もないため、光宣は会議への出席を決めたのだった。返事の書状も祖父の仕事の手伝いをしていたお陰で直ぐに書き終え、翌日に返事を十文字家に送付した。

◇　◇　◇

一条将輝が若手会議の招待状のことを知ったのは、学校から家に帰った後だった。将輝は帰宅すると、そのまま父親が寝ている部屋を訪れた。
一昨日の戦闘で原因不明の衰弱状態に陥った一条家当主・一条剛毅は、病院で入院せずに自宅で療養している。昏睡で倒れた衝撃による打ち身程度のものはあったが、目立った外傷はおろか内臓や骨にも医

学的なダメージは認められないという医師の判断により、病院では治療できないという理由があった。ならば群馬にある専門機関――――国立魔法医療大学の附属病院に入院する手もあったが、それは剛毅が固辞した。
「失礼します」
「将輝か、入れ」
戦闘でダメージを負った剛毅は満足に起き上がれない状態で、健常な状態よりも眠っている時間は長いものの、意識はハッキリとしている。自宅での療養は剛毅本人の希望でもあった。そこには一条家当主としての責任を息子に負わせるには〝足りない〟という思惑があるのだが、自分から伝えて教えるのではなく将輝自らが学んで覚える姿勢を貫く以上、こればかりは仕方がないことだった。
剛毅は電動ベッドのリクライニングを起こして、凭れ掛かるような体制で座っていた。
「親父、起きていて大丈夫なのか？」
「ああ、大分手足に力が戻って来た」
将輝と話す傍ら、剛毅はベッドの横に控える部下に指示を飛ばす。部下は電子ペーパーのページをリモコンで操作する。
剛毅は起きている時間を利用して一条家配下の魔法師を指揮していた。普段ならば側近に任せる領分の仕事だが、現在東北・北陸方面への侵攻の兆候が見られる以上、自ら指揮をすることで一条家としての責任を果たそうとしている。
「親父、新ソ連の船は姿を晦ましたんじゃなかったのか？」
「所属不明船だ。新ソ連のものとは断定していない」
「公式の話じゃないんだから別にいいだろう。それとも親父は新ソ連以外からやってきた可能性を信じているのか？」
「……不審船は所属不明のままだ。もしかしたら自沈したのかもしれない」
所属不明船はあの一件以降、佐渡沖から姿を消した。当然、新ソ連から来たものだと疑っている将輝に対して、剛毅は何処か断定を避けているような発言に聞こえた。

まるで、第三者に聞かれることを躊躇っているかのような……と、将輝はここにきて己の失態を恥じた。不審船のことは決して興味本位からくるものではなかったが、それよりも先に将輝が声を掛けるべき「第三者」がいることに気付いた。剛毅との会話を「そうか」と短く切り上げた上で、その人物に話しかけた。

「津久葉(つくば)さん、本日もありがとうございます」

「どういたしまして。御当主様も無事に回復されているご様子で、私も無能を曝け出さずに済んで、ほっとしております」

恐縮した様子で頭を下げた将輝の感謝を込めた言葉に、津久葉夕歌(つくばゆうか)は謙遜を含んだ冗談めかした答えを返す。これが入院ではなく自宅療養を選んだ最後の理由だ。

勝手が分からないもの、無神経なもの

佐渡沖で不審船調査に赴いて突然魔法による攻撃を受けたあの日、剛毅が運び込まれた病院では治療法はおろか衰弱の原因も分からず、家族は不安に押し潰されそうになっていた。

娘の茜と瑠璃は情緒が不安定になり、時々声を押し殺して泣いていた。妻の美登里は気丈に振舞っていたが、娘に余計な心配を掛けたくない思いと元気付けるための強がりだということは誰の目から見ても明らかだった。無論、当事者側である将輝も平気な振りを装っていたが、内心の動揺は抑えられなかった。

その動揺にすぐさま反応を見せたのは師族会議議長を務める神楽坂家当主・神楽坂悠元であった。今までに数人の魔法師を治してきた彼は剛毅の容態を「復帰するのに回復可能な状態である」と見解を示した上で、四葉家に要請を出して治療の専門家を派遣すると一条家に伝えた。

当日の内に剛毅の事情を把握せしめた情報収集能力は驚くべきものだが、何をすればいいのか分からない立場として一条家は彼の提案に縋りついた。

そんな事情で派遣されたのは、将輝の目の前にいる女性こと津久葉夕歌（つくばゆうか）である。

原作では国立魔法大学大学院の研究生でしかなかった彼女だが、国立魔法医療大学の新設に併せて設けられた医療従事者としての『魔法治療技能師』の資格を取得している。本来は魔法医療大学を卒業することで取得の要件を満たすものだが、彼女が研究しているテーマ――『魔法演算領域のオーバーヒート』――に加えて幾つかの臨床実験に参加して〝実務経験〟を得ることで特例的に取得を許されている。

従来の医学でも魔法医学は未成熟の分野であり、『トーラス・シルバー』の功績で取り入れられ始めていると言っても、医学全ての分野に浸透しているわけではない。病院での治療が出来なかったのは、そんな医学分野の事情が大きく影響している。

「父は、回復していますか？」
一昨日の時点では首も動かせず、声を出すのも辛い状態だった。そこから考えると、自力で起き上がるのは難しくても2日で座った状態のまま姿勢を維持できるようになったのは大きな進歩だ。
それと同時に、将輝の中には一抹の不安もある。見かけは良くなっていても、身体の状態が悪化する可能性もあるためだ。
「ええ。何分、手探りの部分が多いために何時完治するかまでは申し上げられませんが、このままでいけば来週の初めには全身の痺れも抜けるでしょう」
「そうですか」
夕歌が述べたことは決して嘘偽りではない。
悠元から技術を教わったとしても、彼女には悠元や達也のような『眼』を持たない。生来から得意とする精神干渉系魔法を使って剛毅の情報を読み取りつつ、魔法治療を施す。もし悠元が来れば瞬時に治せるが、悠元と一条家――主に将輝と因縁を抱えている以上、それが出来なかったからこそ夕歌が派遣された。
「心配するな、将輝。俺も何時までも寝てはいられないし、津久葉さんの治療で大分体の自由も利くようになってきた。この分ならすぐに良くなる」
剛毅は夕歌に対する感謝の言葉を口にしつつ、将輝に「治る」と宣言したことで、将輝も幾分か安心した表情を垣間見せた。
「さて、今日はこの辺で失礼いたします。明日も参りますので」
「あっ、送っていきますよ」
「ありがたいですが、お気遣いなく」
夕歌は将輝の見送りの提案をやんわりと固辞し、剛毅に一礼してから部屋を出ていった。それを見た剛毅は部下に短く声を掛けると、夕歌を追いかけるようにして退室した。
二人きりとなったところで、将輝は愛想笑いを止めて剛毅に視線を向けた。
「それで、本当のところはどうなんだ？」
「どう、とは？」

まだ起き続けるのは辛いのか、剛毅が枕に頭を預けるようにしたので、将輝は慌ててベッドのリクライニングを倒すスイッチを入れた。その後で将輝は剛毅からの問いかけに答えを返す。
「彼女は、信用できるのか？」
「将輝……その言葉は、十師族よりも魔法に関して一日の長がある神楽坂家を疑うことになるぞ」
「それは……」
四葉家の息が掛かった魔法師とはいえ、その推薦をしたのは神楽坂家であり、剛毅から見れば息子と同い年の現当主かつ師族会議議長の推薦。息子が四葉の息が掛かった魔法師に身内を委ねることに納得していないのか、九校戦や想い人を巡る争いの関係で神楽坂家現当主を快く思っていないのか……この場合は〝両方〟かもしれない、と剛毅は内心で溜息を吐いた。
確かに、元々現代魔法の権威とも言える十師族直系の子息が未熟とも言える魔法師の治療分野を熟知しているなどといわれても信じ切れない。だが、その信じられない光景を剛毅は一昨年の九校戦でまざまざと見せつけられた。
「今は同じ師族会議の人間なのだ。疑い出したらキリがないぞ」
「そうだな……他に手がない以上、それを信じるしかないか……」
「そういうことだ。それより将輝、そこにある手紙はお前宛だ」
将輝も剛毅が冒すべきリスクを察したのか、自身を納得させるように呟いた。剛毅は将輝がそのことで思考を嵌らせるのは得策ではないと話題を切り替えるように声を発した。
見ると、サイドテーブルには一通の手紙が置かれていた。
「開けてみろ」
「あ、ああ……」
この場で開けて読め、ということは私的な手紙ではないと将輝も判断し、剛毅の言われるがままに手紙を手に取った。差出人が十文字（じゅうもんじ）家当主となれば、失礼な扱いは出来ないと判断して慎重にペーパーナイフで封を切り、手紙を読む。
「何と書いてあった」

「……招待状だ」
「何の」
「護人二家と師族二十八家から３０歳以下の魔法師を集めて、現在小康状態となっている反魔法主義運動へどう対処していくかを話し合う会議を開きたいと十文字殿が提案してきた。日時は今度の日曜、場所は横浜の魔法協会関東支部だ」
「随分と急な話だな」
　将輝が述べた手紙の内容に対して、剛毅が率直な意見を口にした。奇しくも、それは将輝と同じ意見であったが、その意図する意味を汲み取るという意味では剛毅が上手だった。
「十文字殿は横槍を入れさせたくないのだろうな」
「横槍？　どこから横槍が入るというんだ？」
　この場に真紅郎がいれば、剛毅が謂わんとしていることも察しがついただろうが、将輝は謀略の部分に関してそのレベルに達していない。そもそも、十代後半でその謀略のレベルに踏み込んでいる人間の方が異常ともいえる。
「例えば、国防軍。或いは警察当局といったところか」
「……政府が十師族の邪魔をするということか？」
「可能性の話だ。護人の二家も会議の対象に入っている以上、政府が横槍を入れるとは思えんが……どうする？」
　教育方針上、剛毅は将輝に対して必要以上に教えたりしない。自分で理解し、納得するほかにないと常々そうしてきたからこそ、将輝も異論を唱えたりはしなかった。
「出席する。侵略者の動向は気になるが、それに気を取られて蚊帳の外に置かれる方が拙い」
「その意気だ……どうした？」
　将輝の決断に剛毅はお墨付きとも言える言葉を放った。だが、将輝が思い悩む表情を垣間見た剛毅はすぐさま問いかけた。今の言葉を翻す訳ではないことなど分かっていたが、もしかすると会議に出るであろう〝彼〟とのことについてなのか訝しんだ。
「親父……こういう場合は、手紙で返事を出すべきだよな？」

「当然だ」
「……なんて書けばいいんだ？」
佐渡で魔法の猛威を振るった将輝は、これまで十師族の間でやり取りする正式な書面を作ったことがない。一条家の教育方針の反動とも言えるべきものだが、途方に暮れた声で訊ねる息子に対して、剛毅は「情けない……」という眼差しで見返した。
◇　◇　◇
４月９日の夜。
大学から帰宅した克人は、客が待っていると家人から伝えられた。克人は最初、十文字家を訪れている光宣のことを指しているのかと思ったが、家族はおろか家人からも〝理璃の婿〟として認識されている彼ではないと判断した。
続いての可能性は克人の婚約者である美嘉だが、現状は婚約であってまだ同居はしていない。婚姻は克人が大学を卒業してからという形になっているが、態々客という単語で表現したりはしない。
３０分前から待っている、という家政婦の言葉を聞いて、克人は着替えることなく応接間に急いだ。〝一応〟同じ師族二十八家という立場上、ぞんざいに扱える相手ではなかったからだ。
「お待たせしました」
応接間に入るなり謝罪を口にした克人に対し、座っていたスーツ姿の女性は態々立ち上がって丁寧にお辞儀をする。
「こちらこそ、留守の間に勝手ながらお邪魔してしまい申し訳ありません」
「いえ、ただ連絡でもくだされば もう少し早く帰宅できましたので」
互いに恐縮したような台詞を見せた後、克人が勧める形で同時にソファーへ腰を下ろす。
「お久しぶりですね。十文字家御家督継承、遅ればせながらお慶び申し上げます」
「ありがとうございます。２月の師族会議ではお目に掛かれるものと思っておりましたが」
「これは失礼を致しました。ご存じの通り、私は家の方針で軍務に重

点を置いていますので、十山家のことについては弟に一任しております」
本人が言った通り、彼女は師補十八家がひとつ、十山(とおやま)家の人間。名は『十山つかさ』。だが、国防軍には『遠山(とおやま)つかさ』の名で軍務に就いている。
立派な氏名詐称の案件だが、彼女が所属する国防軍情報部では、上司も既に承知のことだ。実質的に陸軍情報部を牛耳っている諜報畑の黒幕的実力者と十山家の盟約により、彼女は身分を隠して軍務に従事している。
「でしたら、本日は国防軍の関係でいらっしゃったのでしょうか？」
「いえ、そういうわけではないのですが」
「では、ご用件は何でしょう」
つかさの感情が籠っていないにこやかな表情と共に出てきた克人の問いかけに対する答えに、克人は性急とも言える問いかけを投げつけても、つかさは嫌そうなそぶりを見せない。年齢で言えばつかさのほうが４歳年上だが、克人に対して落ち着き払えているのは同年代の人間相手でも難しい。この辺は同じ「十」の数字(ナンバー)を受けて来た影響なのだろう。
だが、それ以上に克人が問いかけを急がせた根底にあるのは、現在の十文字家と十山家の関係にある。より詳しく言えば、目の前にいる人物ことつかさの企みによって十文字家が上泉家だけでなく神楽坂家からも厳しい目で見られている事情がある。
国防軍情報部が主導した神楽坂悠元（当時は長野佑都と名乗っていた）襲撃計画。当時の時点で『脅威』と見做して計画された襲撃は、当時の上泉家当主であった上泉剛三を激怒させた。より内情を明かせば、その計画は『元老院』に所属するとある黒幕的人物が襲撃を黙認した。それも、よりによって同じ組織の四大老の実家を襲えという内ゲバ。
その影響で国防軍の襲撃を看過した七草家は多大な罰を支払い、四葉家が正式に中部・東海地方の守護・監視を担うこととなった。七草家の煽りを受けて十文字家も少なくないペナルティとして新陰流剣

武術の門下生数人を雇い入れることを呑んだだけでなく、十文字家が所有する会社の筆頭株主として上泉家が正当な手段で株式を取得している。よく言えば上泉家の監視下に置かれたようなもの。

そして、襲撃対象だった人物は現在師族会議議長にして護人・神楽坂家現当主。正直彼の勘気を被って十山家が師族二十八家から外されたとしても不思議ではないところに今日の訪問。十文字家当主となった克人からすれば、約束もなしに訪れた相手から不信感を拭えなかった。

とはいえ、横暴な態度を見せているわけでもない以上、アポなしの訪問についてとやかく追及することよりも用件を聞くことに克人は重きを置いた。

「克人さんからご招待いただいた件のことについてです。誠に申し訳ありませんが、十山家は御存知通りの事情を抱えておりますので、欠席させてください」

「そうですか……それならば、仕方がありませんね」

十山家は第十研――魔法師開発第十研究所で生み出された一族。十文字家がミサイルや機械化部隊といった〝対軍防衛〟を主眼としていることに対して、十山家は国家機能の防衛――〝要人護衛〟に特化した防衛能力を有する。

前者が国家や国土を守る為のものとするなら、後者は国家機能を守るためのもの。それ故に、十山家は国防軍中枢との繋がりが深い。非常時に国家にとって重要な人物を守り通すという使命を帯びている為か、国防軍の闇の部分に深く入り込んでいる。

十師族の目的は魔法師が国家権力によって使い潰されない為に口答えするための組織だったが、護人二家の本格的介入によって九島烈が提唱した体制時よりも実効性のある組織として再編されつつある。

しかし、欠席の連絡をするならば手紙で別に構わないと克人は思っているし、理由が思いつかないとも思えない。克人とつかさがそこまで年齢が離れているわけではないにせよ、尤もらしい理由を十山家が思いつかない筈など無い。

「欠席の理由は如何されますか？」
「それなのですが、そのことをご相談したいと思いまして。是非とも克人さんのお知恵をお借り致したく」
　十山家の事情を詳しく知っているのは十文字家だけ。だが、つかさが関与した先日の悠元の国防軍襲撃の件は師族会議議長就任の際に公表されている。「既に解決した事項」と念を置かれた上で開示されたが、師族二十八家の一つである十山家が護人の上泉家に喧嘩を売ったにも等しい事項の為、十文字家は庇うことすら許されず、他の二十六家からも冷ややかな視線を向けられている。
「そう申されましても、生憎自分には上手い理由など思いつきません」
「……ちなみにですが、十山家以外にも欠席を申し出てきた家はあるのではありませんか？」
　何せ、克人が十文字家当主として就任して初めて師族二十八家に呼びかける試みの会議。心理的に断るのは難しい申し出であり、今回のことで爪弾きに遭わせるような狭量など克人には持ち合わせていない。
　だが、他の家からすれば旨味のある可能性を捨てるにはあまりにも大きすぎる。とはいえ、時期が急であるがゆえに出席できないと申し出てきた家はある、とつかさはそう睨んだのか、克人にそう問いかけた。
「回答自体まだ数件ですが、七夕（たなばた）家からは出席を辞退するというお詫びの書状を頂きました」
「どのような理由ででしょうか。もしかして、次期当主殿が防衛大に在籍しているから、という理由ではありませんか？」
「……その通りです」
　他人が出した手紙の内容を悪気もなく尋ねてくることに、克人は顔を顰めた。だが、つかさが続けて述べた推測に対して、執拗に答えを迫られることを嫌った克人はその推測を認めた。
「そうなりますと、同じくご子息が防衛大在学中の一色家、ご子息方が軍務に就かれている五頭（ごとう）家、八朔（はっさく）家は会議を欠席しそうですね」
「……つかささん。余り嬉しそうに言わないでいただきたいのです

が。それに、一色家は出席の意向を示す書状を既に受け取っております」
つかさに対しては事細かく言わなかったが、新たに十師族として加わった一色家は確かに息子は出ないものの、第三高校に在籍している娘がいる。一色家からの書状では『僭越ながら……』と前置きをした上で彼女が出席する旨が記載されていた。
「そうでしたか。ともあれ、十山家も同様の理由で欠席いたします」
「……承りました」
にこにこしているつかさとは対照的に、克人は憮然とした表情を見せていた。自分の招待を笑って蹴飛ばす様な素振りを見せたつかさの態度は気に障るとしか言いようがなかったが、十山家の事情を知る者として無理強いすることも出来なかった。

判断が遅すぎる

克人は、そろそろつかさと話すことに疲れてきた。

真由美と話す際、時折感じる居心地の悪さとはまた違う。彼女の場合、悪気はあっても悪意はない。基本的に善良な人間だからだ。

だが、つかさの場合は悪気も悪意も無ければ善意もない。彼女の発想に誰かが喜ぶから、という視点など持たない。喜怒哀楽という人としての感情は備わっているのに、他人の感情を簡単に無視してしまう。

だからと言って、任務に支障がない限りはルールやモラルを遵守するからこそ、なまじ質が悪いのだ。感情がないロボットやアンドロイドではなく、価値観が異なる異邦人でもない。コミュニケーションが何不自由なく行えるというスムーズさが逆に克人を疲労させていた。これならば、まだ家族と話している方がまだ疲れないだろう、とも思い始めていた。

だが、つかさの用件は済んだ。後は別れの挨拶をするだけだろうと思った克人の思惑はつかさの言葉で粉砕されてしまった。

「ところで、四葉家の次期当主とその関係者、司波達也さんと司波深雪さんは会議に来られるのでしょうか？」

「……まだ返事は届いておりませんが、恐らく出席するでしょう」

克人ははじめ、欠席する意向を伝えた側の人間であるつかさがそこまで気に掛けるのか理解できなかった。確かに十師族の中で一際秘密主義の気質が強い四葉家のことを十山家が気に掛けていても不思議とは思わなかったからだ。

「克人さんはお二人とご面識がおありなのですね？」

「一高の後輩ですから」

克人の言葉に、つかさの視線が鋭いものに変わっていく。その瞳は鋭い光を放つ代わりに、まるで深淵を宿しているような雰囲気を克人は覚えた。

「どのような方々なのですか？」

「親しくしていたわけではありませんから、詳しい為人は分かりませ

ん」
「ご存じのことだけでも教えていただけませんか？　少なくとも、秘密主義の四葉家の人間であるにも拘らず、出席が任意の会議に顔を見せると判断できる程度にはご理解されているのでしょう？」
成程、と克人はつかさの来訪理由をここにきて悟った。
単に手紙で済むような用件だけで来る理由もないし、元々十山家のことは彼女の弟が担っているとつかさ自身も明言している。どうしても急ぐというのであれば、つかさの弟自ら出向くことだって可能性の範疇として十分あり得ることだ。
つかさは国防軍情報部という社会の裏側で暗闘を繰り広げる組織の一員。それも重要な役目を担う人物。彼女は欠席の謝罪に託けて四葉の魔法師に関する情報を得るために出向いたのだろう、と克人は理解した。
正直、克人につかさの要求を叶える義理はない。ましてや、上泉家との約定で十山家に対する関与を極力避けるように言い含められている。だが、こちらが知る情報といっても、達也と深雪に関することは自分が知り得た範囲外に無い。
下手にこれ以上首を突っ込まれない為、という消極的な理由で克人は情報を開示する選択を取った。
「次期殿の妹君については、よく分かりません。次期殿は信義に厳しい人物であると感じはしました」
「信義に厳しい？　信義に厚いのではなくてですか？」
つかさの疑問は、普通の人間でも疑問を抱くには無理もないことだ。しかし、つかさの問いかけはまるで答えを理解しているようにも受け取れた。
「一度盟約を結べば、自分から決して裏切らない。だが、裏切りに対しては裏切りで報いる。それが自分の感じた司波達也という人物の印象です」
克人と達也の関わりは、直接的な部分で言えば克人が部活連会頭だった時と、先日の顧傑に関する事件ぐらいでしかない。ごく短い付き合いの関わりで克人は達也の為人をそう評した。それを聞いたつ

かさは少し考え込んだ。
「……政府に、いえ、国防軍に裏切られたとしても、同じだと思いますか？」
「国家に対する利敵行為は働かないでしょう」
「軍の幹部や政府の役人には平気で敵対するということですね？」
「自分の方から敵対するような、愚かな人物ではありません」
明らかに不穏な方向へ内容を傾けようとしていることに、克人は強い口調でハッキリと告げた。
克人は達也の親友である悠元が皇宮警察『神将会』の人間だと知っているからこそ、多かれ少なかれその影響下にある達也が進んで敵対の意思を見せるような行動は取らないと断言できた。
「しかし、絶対的な忠誠心は持っていない」
「つかささん。あくまでも私が少ない付き合いの中で司波達也殿の為人――――印象を述べたまでであり、仮に個人に対する忠誠心は有していなくとも、国に対する忠誠心は持ち合わせていると思っています」
しかし、克人の目の前にいる女性はまるで達也を危険視しているようにも受け取れた。かつて悠元を同じように危険視して痛い目に遭ったというのに、同じ愚を繰り返すようにも見えてしまった。
それを問いかける暇もなく、つかさは更に続けた。
「独善的な愛国者というのは、教条的な平和主義者と同じぐらい有害な存在だと思われますが」
「愛国者も平和主義者も、ただ己の主張を唱えているだけならば害に成り得ません。実際に害を及ぼさない限り、内輪で争うのは得策ではない」
「嫌ですね。十山家には、四葉家と事を構えるつもりなどありませんよ」
つかさのその言葉に克人は眉を顰める。それを素知らぬ感じで受け流すかのように、つかさはすっかり冷めてしまったお茶に口を付けた。
単に疲れるだけでなく、まるで達也を危険視するかのような爆弾発言を残して帰っていったつかさに対し、克人はまず私室に戻って着替

えた。少し遅めの夕食とシャワーを浴びてから克人が向かったのは、光宣が泊まっている客室だった。
理璃と光宣の婚約の話は既に十文字家の家内では周知のことであり、光宣が使っている部屋は客室というよりも光宣の私室にスライドさせることが前提で理璃の隣の部屋となっている。理璃だけでなく、弟の勇人(ゆうと)や竜樹(たつき)、妹の和美(かずみ)とも親交を深めており、兄としての役割を光宣が自然と担っていることに少し寂しい気持ちと嫉妬のような感情を覚えたこともあった。
それも一時のことであり、克人も光宣とは良き義兄弟の関係を構築しつつある。克人が中に入ると、光宣が扉を開いて出迎えてくれた。
「克人さん、おかえりなさい」
「……ああ、先程というわけではないが、ただいまだな。光宣は今一人か？」
「ああ、はい。話があるのでしたら、中に入ってください」
「すまない」
本当なら光宣が客人としての立場になるのだが、異なる事情があったとはいえ家族としての付き合いに飢えていたのは克人と光宣の共通課題であった。そんなこともあってか、お互いに腹を割って話すことが増えており、これには克人の弟や妹たちから羨ましがられていることにさしもの克人も苦笑を滲ませたほどだ。
九島烈の影響を強く受けていたためか、光宣の部屋は畳敷きの和室だった。光宣が手際よく座布団を敷き、克人は軽く頭を下げた上で胡坐をかいて座り、光宣も向き合う形で別の座布団の上に胡坐で座った。
「それで、何かご相談したいことがあるのですか？　もしかして、先程の来客と関係があるのでしょうか？」
「……ああ。師補十八家が一つ、十山(とおやま)家の人間が出向いていてな。詳しい事情は話せないが、国防軍で軍務に就いている人と会っていた」
いくら将来の身内とはいえ、他人である光宣に十山家と国防軍の関わりは話せない。あくまでも師族二十八家の一つである十山家の人間が国防軍関係者でもある、という体を取ることとした。

「彼女は今度の会議の欠席に託けて四葉の魔法師について訊ねてきた」
「四葉……もしかして、達也さんと深雪さんのことですか？」
「そうだ。自分は司波の為人をあくまで関わりのあった範疇で話しはしたが、彼女の言葉はまるで司波を脅威とみているような節があった」
「そんなことが……」
　光宣も克人が会った人間のことは少し気に掛かったが、それよりも達也を脅威と見ることにどこか違和感を覚えていた。
　周公瑾の捕縛（厳密には処刑だが）の際、達也や悠元たちに同行する形で共に動いて最終的に周公瑾を討ち取る一助となった光宣だが、その為人はそこまで詳しくないので「分からない」としか答えようがない。
「克人さんはどう答えられたのですか？」
「司波については信義に厳しい人間と答えた。妹の方は何とも言えないと答えるに止めたが」
「……確かに、その気質は僕も感じました。ですが、達也さんぐらいの厳しさなら〝まだ優しい〟と僕は思います」
　光宣の脳裏に浮かんだ達也よりも信義に厳しい人物――――それは言うまでもなく悠元のことだ。彼の場合、男女による差といった物理的な部分はおろか、魔法の実力面での優劣など二の次でしかない。
　彼が最も重視するのは〝平穏〟であり、それを乱す者がいれば躊躇う素振りなどなくあらゆる手段を以て戦意を挫く。それでもなお敵対するのならば、己の手を血で染めることも厭わない。
　光宣は九島家が十師族を降りた背景に悠元が大きく関与しており、自身の祖父である烈と悠元が話した内容は全て烈本人から聞き及んでいる。
「克人さん、まさか十山家は四葉家を排除しようと目論んでいるのですか？」
「いや、十山家は四葉家と事を構えるつもりはないとそう述べていた」
「ですが、その人物は国防軍の方と仰っていましたよね。ならば、国防

軍が四葉家と事を構える可能性が出てきます」
「……そうだな」
光宣とて、烈のシンパの存在を考えれば国防軍全てが四葉家と事を構えるとは考えにくい。だが、中には四葉の脅威を必要以上に感じている人間も少なくない筈だ。ならば、そういった一部の人間が達也や深雪に矛先を向ける可能性が浮上してくる。
その意図も含んだ光宣の言葉に、克人も納得したように瞼を閉じて考え込むような姿勢を見せていた。
「ところで克人さん。今度の日曜の会議ですが、何故僕が招待の対象として入っているのでしょうか。九島家でも恐らく出席はすると思いますが」
「今度の会議のことなのだが、招待状自体は自分が発起人となっているが、元々は七草智一殿から相談を受けたことが起点となっている」
克人は七草智一から相談を受けたことを隠すことなく明かした。どうせ他の師族からも見抜かれている部分があるだろうし、克人本人の気質からすれば性急すぎる部分があったのは否定できないからだ。
「成程。でも、今の自分は理璃さんの婚約者という立場とはいえ、まだ十文字家の人間ではありません」
「その理璃から少し聞いた話だが、光宣はかつて九島閣下の仕事を手伝っていたことがあったと聞き及んでいる。それと、司波の存在も気に掛かっている」
「早い話が、僕に会議のフォロー役を担えと仰るのでしょうか？」
「自分も可能な限りのことはするが、立場上一方的な肩を持つのは好ましくないからな」
克人が発起人側となっている以上、自ら進んで会議を破綻するようなことは避けたい。だが、場合によってはそうなったとしても何ら不思議ではない。ましてや、四葉家で出席するであろう人物のことを考えれば、内容次第では会議が紛糾する可能性もあるとみている。
壬生家で話していた内容の通りになったことに、光宣は思わずため息が漏れた。これには克人も「仕方がない」と苦笑を滲ませていた。
「まあ、家でもそうではないかと父から言われましたし、出席する旨の

手紙は送りましたので今更欠席はしませんが」
「光宣にはすまないと思っている。尤も、これが杞憂に終わればいい訳だが」
「……その懸念があるのですか？」
光宣の疑問に対し、克人は智一と話した時に護人二家の関係者を招くことに難色を示していた。招待状自体は智一から送ると明言しているが、日曜の会議に出てくるのかは克人でも把握出来ない領分となっていた。
「僕個人、悠元さんとはそれなりに付き合いがあるので、その観点から言わせてもらうと彼が会議に出てくる可能性は極めて低いと思います」
「師族の若手が集まる会議なのにか？」
「別に懇親会程度ならば彼も嫌な顔はしないでしょうが、反魔法主義運動の最先鋒として矢面に立って来た彼からしたら、『判断が遅すぎる』と一蹴するでしょう」
先日のテロ事件ではテロリスト拘束の総責任者として動いており、その後に師族会議議長として就任した。『伝統派』の和解や国防軍に対する対処まで担ってきた人間からすれば、以前から存在していた問題に向き合ってこなかった時点で怠慢だ、と断じたとしても何ら不思議ではなかった。
「上泉家当主の彼のお兄さんも同様です。これまでも水面下で魔法師が被害に遭うケースは祖父の仕事から掴んでいました。全ての魔法師を統括すると謳っておきながら、全ての魔法師を救えていない。無論、僕も含めて師族二十八家が万能とは言いませんが、それでも出来ることをせずに話だけをしても意味がないと思います」
自分に能力がありながらも、原因不明の体質によって歯がゆい思いを積み重ねてきた光宣だからこそ、健常者として動ける人間が積極的に魔法師を救おうとしていないことに疑問を呈した。
『ブランシュ』の件も、元を糺せば魔法師としての能力の差から生じた問題が顕在化して起こった事。しかも、当時克人は部活連会頭としてその問題に向き合った。だが、実行部隊として指揮を執ったのは三

矢の姓を名乗っていた悠元に他ならず、克人や真由美はその助言を受けて行動していただけに過ぎなかった。
「お二人からしたら、他の十師族直系の人間の動きは〝何もしていない〟に等しくなります。勿論、社会人や学生としての領分は守らなければなりませんが、その上で彼らはすべきことを成しています」
「……光宣は、どう行動すべきだと思っている？」
「そうですね……いきなり魔法を好きになれというのは難しいでしょうから、魔法に関する基礎知識を分かりやすく知らせるべきかと思っています」
魔法に対する忌避感や嫌悪感を完全に取り除くのは難しい。ましてや〝目に見えない恐怖〟を完全に取り除くこと自体困難を極める。ならば、まずは〝無知の知〟を出来る限り解消する方向にすべきだろうと光宣はそう考えた。
光宣との会談でようやく自分の考えが纏まったのか、克人は聞き手に徹していた側から話し手として声を発した。
「光宣、感謝する。正直、司波が仮に会議に出たとして、会議が平穏に終わるとは思えなかったからな。神楽坂が出た場合でも同じことは言えそうだが」
「克人さん、それだと達也さんや悠元さんが好き好んでトラブルを起こしたがる風に捉えてしまうような言い方に聞こえるのですが」
「……すまない。無論、二人の性分を考えるとそうでないことは承知しているのだがな」
光宣には話さなかったが、克人が光宣を招待したのは十文字家としての問題も含んでいた。当主という立場上、どうしても現実的な思考に寄ってしまい、積極的な意見には踏み切れないだろうと睨んだ。そこで、元九島家かつ将来十文字家の関係者となる光宣ならば、より柔軟な発案を期待してのものだった。
そこまで歳が変わらない未来の義弟に大人の事情を押し付けることに、克人は光宣に詫びたのだった。

身近の恐怖の先にある強大な危険

――孫美鈴（スンメイリン）。

その名を聞くだけでは、中国大陸もしくは中華系の女性であるという風に思うのが自然な流れだろう。

だが、彼女自身は単なる人間であっても、その義理の父親が裏社会において多大な影響力を有していた香港系国際犯罪シンジケート『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』のトップであったリチャード・孫（スン）となれば、話は大きく変わる。

原作では彼女が『無頭竜』の残党にリーダーとして担ぎ上げられることで、組織が再起することとなったが、この世界ではその芽すらなかった。悠元が『無頭竜』の賭けで損害を被った相手に対し、損失分を補填する代わりに『無頭竜』の残党狩りを敢行させたのだ。

決して安くない額を補填してもらえるとなれば相手も必死になったのは事実で、結果として『無頭竜』の残党は見る影もなく綺麗に消え去った。これには当時まだ生きていた顧傑（グ・ジー）も憤慨したが、アンダーグラウンド全てを敵に回した時のリスクを考えた結果、黙認する他なかった。

孫美鈴はリチャード＝孫が気に入っていた情婦の娘だったのだが、その情婦が不慮の事故で亡くなったためにリチャードが引き取った。だが、その彼も亡くなったことで天涯孤独となった孫美鈴に手を差し伸べたのは、引き金を引いた側の人間である上泉剛三だった。

東日本総支部を潰した際、剛三はダグラス・黄（ウォン）に対してそう宣言した後、カリフォルニアに住んでいた彼女を現地の知り合いによって渡航させ、日本へと亡命させた。その際、連絡の行き違いによって内閣府情報管理局によるマークを受けた形だが、その窮地を救ったのは偶々彼女と行動していた森崎駿（もりさきしゅん）だった。その後、情報管理局のエージェントが剛三の〝シゴキ〟を受けたことを知るのは……ごく一部の人間だけ。

何故彼女の話題が出たのかというと、この世界において彼女は〝第一世代〟――突発的に生まれ出た魔法資質を有する人間だったこ

ともそうだが、その彼女は香港に渡航した後、大亜連合軍にスカウトされていた事実を知った。
日本や欧米諸国からすれば厄介な火種でもあった顧傑やその弟子の周公瑾だが、大亜連合は多かれ少なかれ彼らの影響で魔法技術を得ることが出来ていた。孫美鈴を引き取ったのはそれに対するものではないとしても、事情を知る者からすれば『恩返し』と見られるだろう。
なお、この影響が大きく関わってくるのは更に後の出来事となるが。
閑話休題。
「……重かったら何時でも言ってくれよ」
「寧ろ、悠元の温かみを感じれるので」
ツインタワーマンションが出来てからというものの、悠元は婚約者の絡みで週の半分をマンションで過ごすことが多くなり、一人で寝るという機会はほぼ皆無に近かった。今は姫梨の部屋に招かれて彼女の膝枕を甘んじて受けていた。
婚約者の中で独占欲を出さない代わりに被独占欲という形で甘えられることが多い訳だが、それでも下手にラインを踏み越えていない辺りはしっかりルールが守られている形だ。とはいえ、悠元の全ての事情を知っているのは婚約者序列でも上位のみであり、一番把握しているのは前世で身内だったセリアに他ならない。
「本当なら今日はセリアの日だが、何かを掴んで慌てて出掛けて行ったからな。大方リーナ絡みなんだろうが」
「そういえば、彼女の軍籍は全て抜かれているのですか？」
「いや、肝心の『十三使徒』だけ抜かれていない。〝シリウス〟を空席にするのはマズいと考えているのかもしれんが」
リーナはこの国で〝アンジー・シリウス〟を名乗って活動する気はない、と明言している。達也に惚れた弱みなのかもしれないが、ＵＳＮＡ軍は彼女を完全帰化させることに難色を示す者も少なくない。その結果として『十三使徒』としてのリーナの立場は未だに残ってしまっている。

そして、彼女と同居しているシルヴィア・マーキュリーだが、彼女の本名はシルヴィア・〝バランス〟――この世界において、彼女はヴァージニア・バランス大佐の姪にあたるらしい。その事実はセリアも知らなかったようで、とても驚いていた。彼女は〝アンジー・シリウスのサポート役〟として任じられており、表向きは軍籍を抜けていない。

「よくよく考えれば、十代の人間が魔法師部隊の総隊長なんて訝いの種になりかねん。昨年のパラサイト事件の遠因と見做すこともできる」

「そういう悠元も師族会議議長ではありませんか」

「周囲からの印象があまりにも違うだろうに」

悠元の場合、上泉家当主の元継から実力を認められているだけでなく、十師族の中でも発言力の高い四葉家と三矢家の支持を得ている。九校戦で『クリムゾン・プリンス』一条将輝を下したことで、実力を確かに示しつつ十師族の支持を得ることが出来ている。

リーナの場合は、セリアの存在があるとはいえ、軍参謀本部の意向でスターズの総隊長という立場に据えられてしまった。実力主義とはいえ、本来軍の序列を鑑みればリーナの年上にいる人たちは面白くないだろう。

「セリアが出ていったとなると、多分達也さんか悠元絡みですか？」

「恐らくはな。まあ、ＵＳＮＡが将来頭を下げてくる事態に成ったら、その時は思いっ切り吹っ掛けてやるが」

事態になるというか、そうなる未来はほぼ確定してしまっている。

エドワード・クラークは既に『ディオーネー計画』を立案し始めており、その手始めとしてウィリアム・マクロードと共謀している。原作ではマクロードが途中で離脱したわけだが、達也を戦略級魔法師だと知っておいて日和った相手に遠慮する理由はない。クラークについてはかつてこの国で多大に貢献した〝クラーク博士〟に本気で土下座させてやるつもりだ。

彼の企みは、悠元が事前に調べ上げた情報だけでなく『星見』からも同様の予言を得たことで確証を得た。

「それにしても、宇宙に魔法師を送り出すなんて……」
「単にそれ自体を悪と咎めるつもりはない。だが、同調圧力で無理矢理送り出せば確実に未来への禍根を生み出しかねない。それが分からんのかと言ってやりたい」
仮に原作の『ディオーネー計画』が本当に実行された場合、それによって多くの魔法師が地球から追い出される事態となる。反魔法主義者からすれば一時的に喜ばしいことだが、それによって生じるのは全面核戦争の再来の危険性と魔法師による非魔法師への復讐という二重の危機を迎えることになる。
数々の創作物で起きていた仮想が現実になりかねない危惧を抱えることになる……それをしっかり認識できていればまだ違っていたのかもしれないが、宇宙という未知の冒険や増大する世界人口への対処には勝てなかったのかもしれない。
別に宇宙に行くことは悪いことじゃない。ロマンを抱くのも決して悪くはない。だが、どちらとも優劣意識を持ってはいけない。それが出来ないのは人間としての性なのだろう。
「悠元はどうするのですか？」
「参加する道理がない。俺が宇宙に行くとなれば、俺が今抱えている役職全てを放り出せと言っているのと同義だ。滅私奉公の理念を唱えられても、俺抜きでまともに十師族のシステムが動けるとは到底思えない」
理由や興味があろうとも、クラークの提唱するプランに参加する道理がない。この国は既に『恒星炉』や『太陽炉』という重要機密がある以上、それを秘匿する意味で悠元は宇宙に出ていくことが出来ない。
国際的なプロジェクトに参加する栄誉だと説得してくる輩は出てくるだろうが、そんな栄誉が欲しいのならば自らの足で勝ち取れと言い放つつもりでいる。
「元継兄さんを信用していない訳じゃないが、師族会議体制はまだ改革の途中だし、達也と進めている計画上、他の計画に割けるリソースはない」

「計画ですか……悠元のことだから、また度肝を抜かせるようなものでしょうね」
「まあ、否定はしないが」
原作では四葉家プラス財界と東道青波で進められた『ＥＳＣＡＰＥＳ（エスケイプス）計画』。この世界では、それに追加する形で三矢家と上泉家、神楽坂家とその傘下の神坂グループ、そして極めつけに日本政府まで巻き込むこととした。
過去に起きた大震災や大津波などの大規模災害によるライフライン喪失は、自然災害の多いこの国において重大な課題。悠元はその問題を内閣総理大臣に説き伏せ、現状生かし切れていない魔法科高校卒業生の進路先の一助として計画を組み込んだ。
「その一つとして既に話は進めている。魔法科高校の校長にまだ話はしていないが」
その第一弾は『トーラス・シルバー』による魔法科高校の魔法教育プログラムの抜本的改革案を今年度中に提出し、来年度から実施に踏み切らせる方向で既に文部科学省と国立魔法大学の学長に話は付けている。
現状、ＣＡＤなしで魔法を安定的に使うという訓練は魔法科高校で実施されておらず、国防軍の最前線に配置された部隊で行われていることが多い。そもそも、現行の魔法師の殆どは魔法をただ使っているだけに過ぎず、魔法の〝本質〟を理解して行使していない。
古式魔法では用いられる思考のプロセスを経由しないことで速度を上げる手法を取ったのが現代魔法だが、魔法を行使するのに思考しないという〝矛盾〟は魔法師の寿命を縮めることに他ならない。その具体的な事例は南盾島の「わだつみシリーズ」の子たちが陥っていた自己喪失状態だ。
「教育のカリキュラムに口を出すと？」
「来年度から一高は二科生制度を廃止するらしいが、その反動で何が起きるのかを考えた時、一番考えられることは〝青田買い〟だ。〝玉の輿〟とも言うが」
思考することは、速度を遅くするだけ安全を確保することに繋がる

し、魔法の効力を上昇させることにも繋がる。相手が先攻を仕掛けたとしても、そのコンマ数秒を埋める工夫さえ出来れば魔法発動の速度差などゼロに等しくなる。

大体、現代魔法においても魔法師は魔法演算領域内で演算する関係で正しい情報を有する必要がある。この正しさというのは一律的なものではなく、バイオメトリクス――体内時計のアルゴリズムや想子波に基づく魔法の変数入力システムという個々の資質に依存したものを指す。

尤も、起動式へ個々の思考を追加するプロセスがないために物理法則の範疇から離脱できない有様となっているわけで、魔法がお粗末なために多種多様な魔法師が生まれない原因にもなってしまっている。

「その影響を俺や達也、燈也や幹比古にレオまで受けている以上、他の連中に波及しない筈がない。政略結婚とかが罷り通っているご時世で起きない保障なんてないからな」

「私は別にそういうつもりはなかったですし、いざとなれば愛人でも良かったですし」

「両親が泣くと思うぞ」

伊勢家との話し合いの際、入籍はするが式は大学卒業後にすることを認めてもらっている。

婚約者の中で神楽坂に姓が変わるのは序列第一位の深雪のみであり、第二位以下は雫が母方の鳴瀬姓、姫梨と夕歌、愛梨はそのままの姓で、沓子は白川（しらかわ）の姓を名乗ることとなり、セリアは養女の関係で九重の姓を名乗る。

「父は嘆くでしょうが、母も父を押し倒す形で結ばれたと聞いていますので」

「歴史は繰り返す、か」

アリサは三矢の姓のままで、茉莉花は婚約時に家を師族二十八家入りさせる関係で十神（とおがみ）の姓となり、泉美は六塚の姓のまま。それ以降の茜（一条）、澪（五輪）、真由美（二木）も同様で、エフィアについては親族の関係で明智（あけち）の姓を名乗ることになった。

ゴールディ家の秘術である『魔弾タスラム』を継承している英美だ

が、実はエフィアも遠い祖先から古式魔法をより洗練させた『魔弾タスラム』を継承してきていた。多様性という意味では後者の方に軍配が上がるのだが、これにはゴールディ家の事情が大きく影響していた。

英国において名門の魔法使いと謳われるゴールディ家だが、第二次大戦後に分家の一派が他の分家と結託して本家を無実の罪で英国から追い出した。その分家の当該人物は本家の次期当主候補よりも実力が勝っており、本家が断絶した際の保険として継承していた『魔弾タスラム』の存在によってその人物の父親が欲を掻き、結果として御家騒動が発生した。

ここで致命的な問題だったのは、分家に伝えられていたものは本家のものの〝半分〟でしかなく、その残りを補うために現代魔法の技術を取り入れた結果として完成したのが現在のゴールディ家の秘術『魔弾タスラム』というわけだ。

古式魔法の名家として秘術と呼ぶには余りにも〝子供騙し〟としか思えない『魔弾タスラム』の事実が明るみになったのは、エフィアとの初対面の際に彼女が持っていた祖先の手記によって判明した。それ自体に状態保存魔法が掛かっており、それによって新たな魔法が生み出されてしまったのは悠元しか知らない話。

それはさておき、エフィアの風貌を見た剛三が遺伝子検査でゴールディ家の縁者だと判明した直後に明智家を呼び出し、エフィアと英美が対面した。英美も彼女の両親もエフィアの姿を見て驚き、この事実はすぐさまゴールディ家に伝えられた。

何せ、追い出したゴールディ本家の末裔が神楽坂家の婚約者序列に入ったのだ。英美の祖母――ゴールディ家当主の伯母にあたる人物は当然頭を抱えた。だが、英美は既に四葉家次期当主の婚約者候補として申し込んでいるため、ここで徒に引っ掻き回すのは四葉家だけでなく上泉家や神楽坂家の心証すら悪くすることに繋がる。

『エイミィは良かったのか？　達也の婚約者になって』

『まー、恋愛感情はあったんだけど、ほのかがいる手前どうしたものかと思っちゃってね』

英美自身、一昨年の九校戦で達也に世話になった恩義があり、ほのかの恋愛感情を後押ししているうちに英美自身も達也に惚れてしまっていた。ただ、ほのかへの裏切りになってしまうと思い悩むことも多くなった矢先、達也が四葉家次期当主として婚約者を募集するとなったことを聞いた。

先日の御家騒動に対する謝罪の意を込めるということで、祖母から達也の婚約者となるように言い含められ、結果的には複数の婚約者を娶ることになった達也に少し同情してしまった英美だった。

「その妹さんだが、第一高校に入学したんだったな」

「そうね……早速目ぼしい子を見つけたからアタックするって張り切ってるけど」

「名前は？」

「矢車侍郎って言ってた……ねえ、悠元。その子って確か」

「俺の元実家の使用人の子だ。アイツも春が来たってことか……」

現状、侍郎は詩奈の尻に敷かれ、矢車本家の娘から好意的に見られており、更には姫梨の妹からも目を付けられている。これも侍郎にとっては試練とも言うべきことなのだろう。血に染まった桜なんて見たくはないが、こればかりは侍郎に頑張ってもらう他ない。

なお、その侍郎はここ数日詩奈に引っ張られる形で一緒のベッドで寝ているそうだが、侍郎が朝起きると詩奈が上に跨っている状態だそうだ……一線を超えていないというのは確定事項だが、遅かれ早かれなのかもしれない。

「詩奈の兄としては、在学中に詩奈を妊娠させる事態にさえならなければいいし、他の女性とも上手に付き合ってくれれば文句は言わないつもりだ……何故姫梨が不満げな表情をするんだ」

「だって、私はいつでもいいですし、わざと誘っているのに襲ってくれませんし」

「あのなぁ……」

今の姫梨の恰好は寝間着だが、わざと首元に近いボタンを開けており、布地の間から見える胸を強調するかのような仕草を見せている。節操無しだと思われたくはないが、意気地なしと言われるのも癪に障

る部分がある。
結局、誘惑には勝てずに姫梨の誘惑を受け入れる形となったのだった。

現代魔法（おまえ）を殺す

何かを掴んでセリアが慌てて出ていったのは、その内容が余りにも脅威を招くものとしか思えなかったからだ。単に連絡で済ませなかったのは国防軍にその内容を知られるのはマズいというもので、特に妨害などを受けることなくセリアはリーナが暮らしている住居に足を踏み入れた。

「リーナ」

「セリア、どうしたのよこんな時間に!?」

時間は既に１９時を過ぎており、いくら何でも女性一人で出歩いていい様な時間帯ではない。リーナは少し息を切らしているセリアに驚くものの、ともかく部屋の中に招き入れた。リーナは達也の婚約者となったが、今は住んでいた住居を引き払う形となって引越しの荷造りの途中で、部屋にはいくつもの段ボール箱が置かれていた。

すると、奥の方からシルヴィアが出てきた。彼女もセリアの来訪に眼を見開いていた。

「セリア、どうしたのですか？　そこまで急を要する事態が起きたのですか？」

「ふぅ……さっき情報収集をしてたら把握した事なんだけど。シルヴィ、軍から命令を受けたでしょ？」

「……ええ、その通りです」

セリアの情報収集能力はスターズの中でも群を抜いており、時には軍参謀本部すら凌駕するほどであるとシルヴィアは理解していた。本来ならば除隊したセリアに話せる内容ではないものの、誰かに聞いて欲しいと思ったのかシルヴィアが静かに話し始めた。

「軍の命令？　一体何の？」

「はい。昨年撤退した潜入作戦――『グレート・ボム』および『シャイニング・バスター』の戦略級魔法師の確保を命じられました……言っておきますが、セリアとリーナを敵に回したくありませんし、それは向こうの〝上〟も理解していることです」

２０９５年１２月から２０９６年３月にかけて、リーナとセリアは

日本に派遣されていた。本来の任務は『灼熱と極光のハロウィン』を引き起こした二発の戦略級魔法師の確保、それが叶わぬ場合は戦略級魔法『グレート・ボム』と『シャイニング・バスター』の無力化だった。だが、ＵＳＮＡで起きていた『パラサイト』に憑りつかれた脱走兵が日本に逃亡し、二人は本来の任務ではないトラブルとの〝二兎〟を追う格好となった。

リーナの帰国に際して、魔法大学や一高以外の魔法科高校、魔法関連企業に潜入させていた人員も引き上げることとなり、戦略級魔法師の捜索は有耶無耶になっていた。しかし国防総省（ペンタゴン）は日本に存在する戦略級魔法の脅威を忘れたわけではなかった。

ペンタゴンを統括する国防長官のリアム・スペンサーは当該人物の真の脅威を誰よりも間近に感じていて、出来ることならば大統領府の意向に従って意思の統一を図りたかった。だが、民主主義政治の性とも言うべきか、日本の戦略級魔法を危険視する派閥が国防情報局（ＤＩＡ）を動かす形で今回の作戦を立案した。

政治のコントロール下に無い作戦を認めたくはないが、下手に反発した輩がクーデター紛いのことを起こすのも不味い。苦肉の策として、今回の作戦はあくまでも諜報分野に特化させることで最悪の場合の実力行使による実行力を弱めることとした。

スターズでも屈指の実力者であるリーナとセリア。その婚約者が戦略級魔法師であることをシルヴィアも知っている。その作戦にシルヴィアが加わるのはバランス大佐だけでなく、国防総省（ペンタゴン）の意向が強く反映されていることを明かした。

「なら、どうして？」

「今回の任務はいわば〝ガス抜き〟も兼ねているようです。これが、今回の任務に参加予定のメンバーリストです」

シルヴィアはリーナとセリアに端末を見せた。そこには今回の作戦に起用するメンバーが記載されていたが、前回のものとは比較にならないほど〝お粗末〟と評することしかできない面々ばかりだった。

だが、『パラサイト』事件ではリーナとセリアを起用し、顧傑の一件ではベンジャミン・カノープス少佐を日本に寄越していた。実力面で

はなく諜報面で情報を得たいという意向も含まれているのだろうが、これを見たセリアは深い溜息を吐いた。
「……恒星級（スタークラス）がいないのはまだしも、星座級（コンストレーション）すらいないって、過激な連中はうちのお兄ちゃんやお兄様を舐めてるのかな」
「お兄様って……ああ、達也のことね。確かに舐めているとしか表現できないわ」
シールズ姉妹の容赦ない戦力分析にシルヴィアも苦笑を滲ませる。シルヴィアも決して弱くないことは二人も知っているが、相手にする対象が余りにも格上過ぎる。とりわけ神楽坂悠元はリーナとセリアの二人を魔法戦闘で打ち破った実績を有する。
この部分には新ソ連で使われたと思しき戦略級魔法の存在もある。下手に同盟国を内部工作で引っ掻き回せば、極東方面への軍事作戦を睨んでいる新ソ連と〝共謀〟したなどとあらぬ疑いを掛けられることとなるためだ。
「まあ、私は軍を抜けた身だからどうとも言えないけど、場合によってはお姉ちゃんの肩書きを使ってでも撤退すべきよ。最悪味方を見捨てても罪に問わないように私も掛け合うから」
「セリア……シルヴィ、セリアの言う通り〝アンジー・シリウス〟の名を使ってでも最悪は逃げてください」
「お二人とも……ありがとうございます。そのお心遣いを無碍にせぬよう努めます」
今の〝シリウス〟の名にどれほどの価値があるかなど、リーナにも分からない。だが、『十三使徒』の一人として名を連ねている以上、多かれ少なかれ説得力を有する……とリーナは自分に言い聞かせるようにしながらシルヴィアへそう伝え、姉妹からの言葉を噛み締めるようにシルヴィアも二人に対して敬礼をした。

◇　◇　◇

入学式から三日後、国立魔法大学付属第一高校で今年度の新入部員勧誘週間が始まった。例年の如く狂騒の宴が繰り広げられているわけだが、大きなトラブルは発生していない。四葉の人間である深雪と達也が目を光らせていることもそうだが、今年度の総代の兄が部活連

会頭にいるという存在が抑止力として大いに働いていた。
　それでもトラブルが発生しないという保証もないため、部活連からは悠元と燈也が、生徒会からは達也と詩奈が本部室に詰めていた。
「……暇だな。いや、これが本来あるべきことなのだろうが、来年以降は大丈夫かな」
「俺らには何とも言えないがな、悠元」
「それはご尤も」
　何せ、一年時に様々なトラブルを解決してきた当事者がトップにいる以上、彼らを引っ張り出すような事態になれば、彼らの家にまでその悪評が伝わることとなる。四葉の当代と神楽坂の先代ならば面白がって首を突っ込みそうなだけに、悠元と達也の二人としては大きなトラブルもなく終わってくれる方がありがたかった。
「そういえば、軽運動部の方は良かったのですか？」
「あっちはエリカに任せてきた。まあ、大きなトラブルにならないだろうとみているけど」
　変化があったと言えば、今まで部員の受け入れを原則的にしてこなかった軽運動部が新入部員の募集を始めたことだ。これは悠元の決定で決めたことだ。
　元々、軽運動部は深雪に新陰流剣武術を教える一環で設立した経緯があるが、来年には悠元も深雪も卒業することとなる。その役目を終えるだけでは今まで使用してきた施設の取り決めを巡ってトラブルになりかねないと判断し、部員の募集を始めた。
　ただ、その条件は特殊であり、一科生や二科生の括りを設けずにしている。更には相手の成績だけで人を判別するような人間を受け入れないと決めている。エリカを矢面に立たせたのは、彼女の観察眼を信用してのものだ。
「元々一科生や二科生の括りを考えず、純粋に強くなりたいという人間を集める目的にシフトさせることにした」
「つまり、実戦的な生徒を育てるためのものでしょうか？」
「どちらかといえば実践的な魔法師になるかな」
　現状、『魔法イコール兵器』という括りを取っ払うためには、魔法科

高校の段階からその認識を完全に排除しなければならない。悠元の繋がりで詩奈と侍郎も軽運動部に入るが、それ以外の人間は基本的に成績が低い人間を掬い上げようと目論んでいる。

そして、今年度の二科生組を鍛えるために悠元はもう一つ目論んでいることがあった。

「実は、母上に頼んで今年の一高の二科生組は二クラスが魔工技師志望、残りは魔法師志望の編成にしてもらっている。受験に落ちた子の掬い上げも頼んでいるし」

「……成程、あくどい事を考えるものだな」

「この学校に優秀な成績で入ったからと言って、その先が順風満帆で行く筈なんて無いからな」

魔法科高校九校の入学試験に落ちた有資質者を拾い上げ、今年の四月から小田原に開校した全日・全寮制の国立魔法医療大学付属湘海高等学院に入学させた。

この学校は形式上魔法医療大学の付属校だが、魔法大学と魔法医療大学の協定によって最先端の現代魔法理論に基づいた魔法教育を受講することが出来るだけでなく、この学院で学ぶ教育内容の理論は悠元がこれまでの経験に基づいて構築されたものであり、既に数人の魔法師が一線級の実力を得ているお墨付きのもの。

この国の既存の魔法教育理論を破壊するべく、悠元は実力に乏しいと見做された魔法資質保有者を〝成り上がらせる〟ことで全ての根底を覆すことにした。

一高でも二科生組に最先端の魔法理論を学ばせることで、考査結果に波乱を巻き起こさせる腹積もりであり、魔法幾何学の繋がりで甘楽やジェニファー、身内の繋がりで佳奈にも協力を依頼している。どうせ暇をしているだろうと思ってカウンセラーの小野遥にも協力をお願いしている。

確かにこの学校の教官は第一線で活躍している魔法師が多いが、それはあくまでも既存の魔法教育理論においての評価であり、本当の魔法教育理論に基づいた評価ではない。彼らのプライドを破壊してしまう様なものだが、それについては自分たちの自助努力で片を付けて

もらうべき案件なのだ。
「……今年の1学期末の考査結果が逆に楽しみになってきましたね」
「これで上位の大半が入試の下位組で固まったら、あの校長はどういう言い訳をするのか楽しみだ」
「二人とも……」
「あ、あはは……（胡坐を掻かずに自分も頑張らないと……）」
明らかに物騒なことを述べている燈也と悠元だが、学校にあまり期待していないという意味では達也も同意見であり、こればかりは黙認する形で呆れ返るような素振りを見せた。そして、詩奈も入試の結果だけに満足することなく学習することを決意したのだった。
勧誘週間が始まって3日目――4月12日の夜、そんな学生らしい平穏を破るかのように一本の電話が司波家に掛かってきていた。自室のオフライン端末で『トゥマーン・ボンバ』の細かい術式解析をしていたところ、ノック音が響いた。
すると、姿を見せたのは深雪だった。上は先程も着ていたレースのブラウスだが、下は落ち着いた色のフレアスカートを身に着けていた。
「深雪か。態々着替えたとなると、来客か連絡かな？」
「四葉本家からの連絡です。今はお兄様とお話されておりますが、悠元さんにも同席してほしいと思いまして」
四葉家と神楽坂家の関係に加え、達也の軍事行動の責任者としても他人事ではない。悠元は端末を一旦スリープ状態にして深雪に引っ張られるような形でリビングに赴くと、モニターには四葉家当主・四葉真夜が映っており、達也は特に表情を崩すことなく話していた。
深雪は少し名残惜しそうに悠元の手を離すと、姿勢を正して真夜に頭を下げた。
「お待たせしました、叔母様」
『構いませんよ、深雪さん。悠元さんもごめんなさいね。この場合は神楽坂様と呼称した方が宜しかったかしら？』
「公的な場ではありませんし、別に権力を振り翳す場でもありませんので悪しからず」

真夜は深雪のお詫びの言葉を軽く受け取りつつ、悠元には畏まるように述べたことに対し、当の本人が苦笑を交えつつ丁重に述べた。急な連絡ではあるが、現状新ソ連の侵攻の予兆がある以上、ここで連絡してくるのは既定路線とも言えた。

『では、今度の日曜の午後にいらっしゃい。そういえば、悠元さんは今度の会議に出席されるのかしら？』

発言の前半は主に達也に向けてのものだが、後半は悠元への問いかけ。今度の会議で該当するのは間違いなく師族二十八家の若手による会議だと直ぐに察していた。

「いえ、その日は既に神楽坂家と上泉家、それと政府関係者による会議を予定しています。なので若手会議には出れません」

『あら、そうでしたの。具体的にはどのような会議なのかお伺いしても宜しいかしら？』

「構いません。昨今の国際事情も踏まえて日本国内の政策会議を行うようなものです」

元々、神楽坂家は皇族（朝廷）の裏側に徹しながらも仇をなすであろう敵を排除することで秩序を保ってきた。政治の役割が朝廷から人民の政府に移ってもそれが変わることなく現在まで受け継がれており、今度の会議は護人の意向を政府関係者――――内閣総理大臣に進言することとなる。

「この国における反魔法主義の芽は大分摘みましたが、非魔法師が魔法師に対する恐怖そのものを取り除いたわけではありません。いずれ第二第三の『ブランシュ』が出てくることも十分に考えられます」

『時が経てばそうなるでしょうね。では、悠元さんはどうされるおつもりなのですか？』

「魔法という存在を明確化すること。具体的に述べるとするなら、既存の現代魔法を破壊します」

悠元が述べたことに対して隣にいる達也や深雪、その近くにいる水波のみならず、モニターに映る真夜も驚きを露わにしていた。何せ、現在の師族会議議長が既存の現代魔法を〝破壊〟すると公言したのだ。

「現行の現代魔法は軍事力。より正確に言えば『核兵器および原子力の抑止』に端を発したもの。目に見えないものを守るためとはいえ、目視出来ないことによって生じる恐怖が非魔法師に余計な軋轢を与えている。ならば、魔法が誰の目から見ても分かる形になれば、必要以上の恐怖を与えずに済むと考えたまでです」

『理屈は分かりますが、ではどうやってそれを実現するというのですか？』

「魔法の光学可視化技術――――それを搭載したＣＡＤ『ホーリーブロッサムシリーズ』を開発元『トーラス・シルバー』としてＦＬＴから販売します」

現行の魔法監視システムでも機能していないとは言えないが、政府としても先日の顧傑の一件によって対古式魔法の対策が迫られたのも事実であった。

現在の現代魔法はあくまでもＵＳＮＡ――――旧合衆国から端を発したもの。ならば、既存の魔法理論を一度真っ新にした上で日本としての魔法教育を一から積み上げる。とは言っても、別に今ある現代魔法全てを捨て去る必要などなく、既存の魔法構築式に少しばかり〝思考〟を加えるだけに他ならない。

その分の魔法発動速度は遅くなるが、今まで何も考えずにただ魔法を使っているだけでは上達などするはずがない。一流のアスリートやアーティストだって全て自分だけの力で解決してきたわけではないのだから。

「それと、先程は大袈裟に〝破壊〟などと申しましたが、正確には現代魔法で捨て去ったものを古式魔法に倣う形で取り戻させます。本来魔法の制御に必要である筈なのに捨て去った〝思考〟のプロセスを組み込み直します。既存の起動式を直す手間はありますが、こればかりは喫緊の課題でもありますので。ちなみに、自分が達也や深雪に渡している魔法は全て思考プロセスを組み込むことで柔軟な多変数化による制御を可能にしています」

現代魔法でも変数入力を魔法演算領域で行うプロセスはあるが、既存の起動式によってその変数入力の時間がそのまま魔法発動速度へ

ダイレクトに反映されてしまっている。各々異なる魔法演算領域なのに、画一の起動式を用いて全て同じ結果になるはずなどない。

悠元が渡した魔法の領域制御が従来の現代魔法よりも遥かに柔軟なのは、本来現代魔法で必要とされていない〝思考による変数入力〟のプロセスを組み込んでいる為だった。

名目の上司の頭が高い

現代魔法は物理法則の改変に限定し、古式魔法に存在した思考のプロセスを省くことで発動速度の向上に成功した。当時の魔法研究者は軍事面に偏っていたが故に、相手よりも機先を制することに重きを置いていた。

単純に核分裂反応を抑止したり、貫通力が高い中性子を防いだりすることに成功した部分は核兵器の使用を躊躇わせる意味において重要なファクターとも言えよう。だが、それに欲を掻いて核兵器を制御しようと目論んだ旧合衆国の野望は未だに燻ぶっている。

『つまり、既存の現代魔法を変革するということですか……面白そうですね』

「母上、面白さで語るべきことではないかと思われますが」

核抑止の成功は魔法の単一化構造――――異なる魔法同士の連続性を著しく奪うことに繋がることとなった。古式魔法でみられる〝属性〟や〝精霊〟などといった自然的な概念が現代魔法と噛み合わなかったのは、思考というプロセスを排除したことによる弊害だ。

例えば、古式魔法における飛行術式は使用者こそ選ぶものの、継続的な行使によって安定的な飛行を可能としている。一方、現代魔法における飛行魔法は終了条件を定義することと次の魔法までの感覚を機械で補助しているために安定した飛行が出来ているに過ぎない。

悠元が使っている重力制御と達也が組み上げていた重力制御術式で約4割の誤差が生じたのは、古式魔法に近い構築方法を取っていた悠元と現代魔法中心の組み方をしていた達也の間で生じた魔法知識の差である。

『悠元さん。例えば、たっくんのような魔法師でも普通に魔法を使うことは出来ますか?』

「出来ます。それは既に実験済みですので」

本来、先天的に備わった固有魔法が魔法演算領域を占有するという事態には至らない。仮にその定説が通るとするならば、『コキュートス』を持つ深雪も同様の悩みを抱えているということに他ならない

が、少なくともそう言った素振りは見られない。魔法による魔法演算領域の占有――つまるところ、魔法演算領域そのものが一つの刻印型魔法式のようなものとして成り立っていなければならないということだ。
悠元の言葉の根拠は、紛れもない悠元本人によるもの。魔法知覚力による異常聴覚は言い方を変えれば〝音の情報強化による演算領域占有〟に他ならない。苦労の末にその制御が出来るようになったことで魔法力にもかなりの余裕が出来るようになった。
「実は達也にも黙っていたのですが、魔法の制御訓練には達也の特異的な演算領域を他の魔法でも使えるようにするためのものがありました」
「……確かに、悠元から訓練を受けるようになってから今までまともに行使できなかった魔法も大分使えるようになった。やはり天才だな、お前は」
「やめてくれ、達也……コホン、失礼しました。話が脱線してしまいましたね」
達也からの褒めの言葉に悠元は「大したことなどしていない」とでも言いたげに言葉を返し、真夜は笑みを零しており、深雪は尊敬の眼差しを悠元に向けていた。話が脱線し過ぎたため、悠元はわざとらしく咳払いをした上で話を若手会議に戻す。
「ともかく、私の方は政府と対話をする重要な会議が控えておりますので、若手会議の行く末は参加者に任せる事とします。若輩とはいえ師族会議議長がいることで議論が委縮しても困りますので」
『あら、お優しいのですね。ですが、宜しいのですか？』
「想定される懸念事項は既に達也へ伝えてありますから」
真夜の発言には七草家が何かしらの企みをしていると掴んでいる様なニュアンスが含まれていた。悠元はそれを読み取った上で対策は講じていると明言した。
「七草家の長男が何かしら企んでいるのは既に掴んでいますし、一応身内である兄にも発破を掛けておきました。困った時には味方に引き入れやすいかと思います」

『感謝します、悠元さん。そうそう達也さん、その会議の前に一つ仕事を頼むことになるかと思います』
「仕事ですか？　それは、四葉家としての仕事でしょうか？」
悠元への感謝の後、真夜は思い出したように達也へ仕事を頼むという文言を言い放ち、これには達也が少し疑問に思うような口ぶりをみせた。
『依頼主は四葉家ではなく国防軍になるでしょう』
「成程、新ソ連軍による侵攻阻止の協力と解釈して宜しいのですか？」
『正解です。もう、察しが良くて助かるのは流石私の息子だけど、もう少し分からない振りをしてくれてもいいのに』
「……」
拗ねたような素振りを見せているモニターの母親に対し、どう反応すべきか困っている息子。世話を焼きたいという魂胆は読み取れるが、それに対して「一体どうすればいいのか」という対応は達也にとって未体験のゾーンとなる為、こうなっても致し方がないだろうと思う。
少し困ったような素振りを見せた達也を見て、悠元は真夜に問いかけた。
「真夜さんは新ソ連が戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を用いてくるとお考えなのですね？」
『その通りです、悠元さん。それと、今月初めにモスクワ近郊で使われた魔法、そして一条家を襲った魔法も戦略級魔法「トゥマーン・ボンバ」だと思っているのです。悠元さんの見解は如何ですか？』
「十中八九、そちらの推測とほぼ同一の見解とみています……成程、達也を実際に対峙させることで戦略級魔法を解析させるのが狙いですか」
達也の魔法解析能力は群を抜いている。これまで『十三使徒』の戦略級魔法の中で明確な魔法効果が分からなかった『トゥマーン・ボンバ』を解析したいという思惑を見抜き、真夜は笑みを零した。
『悠元さんに隠し事は出来ませんね』
「魔法で大量に酸水素ガスを生成し、一気に点火するのが『トゥマー

ン・ボンバ』のメカニズムだと母上はお考えなのですか？」
『酸水素ガスを用いた気化爆弾だと思われますが、肝心の仕組みはサッパリですけれど。それはともかく、佐渡沖で使ったとなれば侵攻ルート先の宗谷海峡でも使わない理由がありませんもの』
　モスクワで一度使った以上、明るみになるリスクなどベゾブラゾフも当然理解しているだろう。それに、ベゾブラゾフは過去にベーリング海で『トゥマーン・ボンバ』を用いて当時のスターズ総隊長〝ウィリアム・シリウス〟を葬っている。
　広域爆撃ができるのならば、その逆である収束爆撃も可能だろう。それを原作知識で理解している以上、その対策は既に考えている。とはいえ、ここら辺は達也からの助けを求められれば遠慮なく開示するつもりだ。
『たっくんの「マテリアル・バースト」は流石に使えませんが、「術式解散（グラム・ディスパージョン）」もしくは「雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）」で対処できるのではないかと踏んでいます』
「了解しました」
『それでは達也に深雪さん、日曜日に会えることを楽しみにしています』
　達也と深雪が頭を下げている間に、真夜との電話が切れた。
　電話が終わったことで、立ちっぱなしだった達也はやや乱暴な仕草でソファーに座り込んだ。それには悠元と深雪が顔を見合わせてお互いに笑みを零し、空いているソファーに座った。
「お疲れ様、達也。まあ、真夜さんからすれば貴重な親子の会話なんだ」
「理解はしているのだがな。それにしても、悠元も大分思い切ったことを口にしたな」
「そうか？『ＥＳＣＡＰＥＳ』のことを考えれば、既存の現代魔法で説明できない部分があるから早い段階で明文化しなきゃならない」
　聖遺物（レリック）の存在を加味しても、現行の現代魔法では説明がつかないとＵＳＮＡやイギリス辺りが騒ぎ出すだろう。アンダーグラウンドの犯罪組織も動くことを加味すれば、早い段階で釘を刺さねば話にならら

ない。
　水波が丁度コーヒーを差し出してきたので、それを受け取って一口付けてから悠元は再び話始める。
「その絡みで一つ報告しておく。達也はレイモンド・クラークを覚えているか？」
「ああ。『パラサイト』事件の時にビデオメールを送ってきた人物のことか」
「その父親は政府機関の研究者なんだが、名はエドワード・クラーク。彼はどうやら俺たちの戦略級魔法を恐れて宇宙に追放しようと目論んでいるようだ」
「宇宙に、ですか？」
　深雪が怒りよりも先に疑問を浮かべたのは、単に戦略級魔法師という理由だけで二人を追放するにも説得力が皆無だったためだ。加えて双方共に未成年の高校生であるだけでなく、ＵＳＮＡの中でも悠元と達也の素性を知る者はかなり限定されている。
　疑問を浮かべる深雪に対して、達也は一つの可能性を口に出した。
「……『トーラス・シルバー』。それを理由にして俺たちを追放するということか」
「だろうな。だが、仮にそれを呑むとしても盛大に吹っ掛けるつもりだ。例えば……ＵＳＮＡのシギントシステムである『エシェロンⅢ』を寄越せとか」
　かぐや姫ですら「え、妾でもそこまでしないんだけど……」と逆にドン引きさせるような条件をＵＳＮＡだけでなく国際魔法協会にも吹っ掛けるつもりだ。それが呑めないのならば、マクシミリアン・デバイスや主要ＣＡＤメーカー及びメディアのＴＯＢ（公開買い付け）だけでなく、個人的に保有している米国の国債を〝全売却〟することも通告する。
「それは……流石に向こうも呑むとは思えんが」
「別に呑ませるつもりなんてない。達也はともかく、俺は上皇陛下および今上陛下の信任を得てこの国の守護を任された身だ。その任を放り出せということは、天皇陛下に対する侮辱にも等しき行い。それ

を王でもない公人が口に出す意味を理解してもらわなければならない」
　人の一生を大人が勝手に決めようとしているのだから、大人も損を負ってもらわなければ話にならない。これでもベゾブラゾフが参加を表明したら、新ソ連の東半分を大亜連合と日本、ＵＳＮＡに割譲・分割統治という無理難題を吹っかける予定だ。
『ハル・ノート』の二番煎じだが、エドワード・クラーク――ＵＳＮＡが吹っ掛けた喧嘩を態々買ってやるというのだ。名誉で国の安全なんて買えやしないのだから。
「同盟国とか言っておきながら、肝心の部分は第二次大戦の報復を恐れているとしか思えん。ま、仮に『恒星炉』の技術提供をして欲しいのならば、迷惑料としてかなりふんだくるつもりだが」
　そもそも、パラサイト事件やセブンス・プレイグ落下事件でも大きな損失を被っているというのに、ＵＳＮＡ軍は未だに『マテリアル・バースト』と『スターライトブレイカー』の無力化を目論んでいる。不幸中の幸いがあるとすれば、ＵＳＮＡ大統領をはじめとした政府高官クラスからの謝罪を受けていることに尽きる。
「それとイギリスもだな。新ソ連は……奴らに支払える原資があるのかすら分からんから、極超音速ミサイルでも強奪するかな」
「……悠元ならやってのけてしまいそうなあたり、冗談に聞こえなくなるんだが」
「冗談だよ（まあ、対価は既に頂いたも同然なんだが）」
　新ソ連から奪った対価はベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』だ。その術式を全て把握しているのは、新ソ連を除けば世界でただ一人しかいないという状況。とはいえ、自身の転生特典のせいでより洗練化された『トゥマーン・ボンバ』が完成してしまったのはここだけの話。
「何にせよ、近日中に達也は招集が掛かるだろう。魔法と『サード・アイ・エクリプス』の許可は出しておくから、使用判断は達也に一任する」
「分かった。それにしても、お前も大変だな」

「……今更だと思って諦めてるよ」
気が付けば、悠元の左腕にしがみついている深雪がいて、右側には少し恥ずかしそうな水波がいる。他の男子が見れば嫉妬や憎悪を向けられること間違いないが、達也からすれば複数の女性相手に上手く綱渡りしているような形の悠元を内心で褒めたかったのと同時に、四葉家の関係者として申し訳なさを感じたのだった。
◇　◇　◇
その翌日――――4月13日、土曜日。
魔法科高校の一科生と二科生、それと魔工科生にカリキュラムの違いはあっても、個人の端末による座学の授業は共通して存在する。悠元は教室で端末を見ていたわけだが、学校からの緊急メッセージで手を止め、そのまま立ち上がって教室を後にした。
周囲からの目線はあったわけだが、近くの席にいる深雪と雫に対して『説明は後でする』と言いたげな視線を向けると、二人は軽く頷いた上で各々の端末に目線を戻した。こういう時は本当に立場というものが生きてくると思いつつ、悠元はメッセージに書かれた場所を目指す。
その場所は学校の応接室で、スーツ姿の真田と学校の職員がいた。悠元が目配せをすると、職員は一礼をした上で大人しく去っていった。二人だけとなったところで真田が笑みを零した。
「いやはや、君の立場なら妥当な判断だね。もしくは君の地位もあるかも知れないね」
「そんな訳ないでしょう、真田少佐。っと、丁度来たな」
「真田少佐、それに悠元も？」
達也も端末に送られたメッセージを読んで来たのだろうが、先日「魔法の許可を出す」と公言した悠元まで呼ばれる理由が分からなかった。その答えを示すかのように、真田は遮音フィールドを張って話し始めた。
「状況が変わりました。君たちの力が必要です」
「……どういうことですか？」
真田の言葉に疑問を呈したのは悠元のほうだった。新ソ連の陣容

やベゾブラゾフの動向、想定される侵攻ルートからしても、達也はまだしも悠元まで出動する必要性はない。そもそも、悠元が独立魔装大隊に籍を置いているのはあくまでも〝非戦闘要員〟としての特務士官であり、魔法を軍事的に使用するにも統合幕僚会議の承認を得なければならない。
「詳しくは話せません。ですが、佐伯少将の招集命令です」
「……達也、この場で許可は出すから行ってくれるか？」
「分かった。なら、早退届を出してくる」
　今回のことは事前に真夜から聞いているとはいえ、悠元は〝師族会議議長〟ならびに〝国防陸軍特務中将〟として達也に要請をした。それを聞いた達也は意図を察した上で早退届を出すために応接室を出ていった。
「真田少佐。達也はまだしも自分は本来戦闘を想定してのものではなく、統合幕僚会議が承認を出したところで独立魔装大隊とは別の指揮系統を有する人間として動くことになる。それは沖縄の件で貴方も承知の筈だ」
　応接室に残った悠元と真田。独立魔装大隊内での立場は真田が上だが、国防陸軍においては悠元が完全に上の立場。しかも、国防軍の魔法装備でいえば悠元が手掛けたものは半数以上を占めている。
　それはあくまでも元実家の三矢家を助けるためにやったことで、軍事的なことに無条件で力を貸すほどお人よしではなかった。
「ええ、承知しています。ですが、相手が〝イグナイター〟であることを考えると、『ハロウィン』の一件で佐渡方面の部隊に対処した君の力が必要だと思ったまでです」
「想定される敵部隊の規模では、この国を攻め落とすには至りません。ウラジオストク軍港が再建中の今、ここで仮に『トゥマーン・ボンバ』で無理をすれば新ソ連自身が首を絞めかねません」
　聡明な頭脳を持っているベゾブラゾフでも、原作での攻撃はあくまでも兵士達の〝ガス抜き〟を考慮してそこまでの威力を出さないようにするはずだ。あまり大きな被害を出せば、日本と交友関係を結ぶ国だけでなく、講和状態の大亜連合も中央アジアを経由して一路モス

クワに侵攻することも想定される。ＥＵも多少は無理をしてでも軍を派遣することが想定される。
　それに、先日オーバーホールした『サード・アイ・エクリプス』に組み込んだシステムならば、例えぶっつけ本番でも達也なら使いこなしてくれると踏んだ。
「無論、〝イグナイター〟対策は既に『サード・アイ・エクリプス』に組み込んだ。特尉にとってはぶっつけ本番で使用してもらうようなものだが、『トライデント』を使いこなしている以上は問題ないと判断している……これでもまだ、自分が現場に赴かなければならないと思われているのか？」
「……分かりました。無理な申し出をしてしまい、申し訳ありませんでした」
　最後の悠元の言葉が『上条達三特務中将』としての発言であることに真田も察し、頭を下げることで悠元の命令拒否に対する〝お詫び〟とした。それを見た悠元は「失礼します」とだけ言い残して応接室を去ったのだった。

ここからでも入れる保険がある

応接室を出た悠元は教室に戻らず、一人校舎の屋上に来ていた。そして、学校から遠ざかっていく国防軍の自走車を見届けつつも、考えていた。

「……真田少佐だって自分の事情は知っている筈だ」

悠元を技術士官として独立魔装大隊が召喚するには高いハードルが設けられており、その内の一つに『大黒竜也特尉の召喚命令』が含まれている。これは一昨年の春に命令を偽る形で召喚を行ったことが陸軍総司令部に露呈した結果として追加された事項で、極めて緊急性の高い召喚でなければならないと規定された。

いくら魔法科高校内とはいえ、遮音フィールドの領域内でも話せないとなれば悠元も召喚に応じる理由がなくなる。何せ、悠元の召喚規定には上官の命令の有無に拘わらず全ての軍事情勢を開示することが義務として定められているためだ。

一個人で保有できる力としては自己防衛のラインを大幅に踏み越えていることなど自覚している。だが、今の自分はこの国の魔法師社会の統制を九島烈から渡された立場。その意味で反九島烈の立場にいる人間と一線を引くことが求められている。

お互いに妥協できるのならば歩み寄る姿勢を見せることも必要だろうが、今の国防軍は文民統制（シビリアンコントロール）の範疇にあるとは言い難い。それを助長しているのは他ならぬ『元老院』の存在。その存在によって悠元も被害を受けた身としては、将来的に四大老を継ぐ立場として認められない部分があるのも事実であった。

「まあいいか。達也には説明しなかったが、達也にだけ読める説明書は付けておいたからすぐに理解できるだろう」

『サード・アイ・エクリプス』――超長距離魔法照準用小銃形態特化型ＣＡＤ『サード・アイ』の実用機に位置し、達也の魔法資質に完全特化したハードウェアを備えている。戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』による津波の損害をゼロに抑えるといった精密な制御のみならず、達也が得意としている魔法無効化技術の補助も備えている。

そして、先日のオーバーホールで悠元は密かに一つの機能を追加していた。それは、達也が将来ベゾブラゾフと相対する際、『トゥマーン・ボンバ』の基幹技術である『チェイン・キャスト』対策として達也の『術式解散（グラム・ディスパージョン）』を更に改良した術式データを予めコード化してインストールしておいた。

本来実験室の外ではまともに使うことが出来ない『グラム・ディスパージョン』に古式魔法の思考のプロセスを追加することで、いかなる変数要素を無視して魔法の根幹記述を破壊して無力化する凶悪な術式無力化魔法を編み出した。

現状、悠元と達也にしか使うことのできない魔法の名は『魔導解散（キャスト・ディスパージョン）』。

「……一応メールだけは送っておくこととしよう」

傍受の恐れがある為、念を入れて達也宛てのメールには『ぶっつけ本番になるけど、テキストは準備しておいた。後は頑張ってくれ』とだけ送っておいた。何も事情を知らない人がこのメールだけを見ると、学生の資格勉強でもするのかと疑われる程度で済むだろう。

教室に戻った後、休み時間に深雪たちから事情を聞かれて簡単に答えておいたが、宗谷海峡（国際名称ラ・ペルーズ海峡）にて国防軍と樺太から南下する小型舟艇、そして達也とベゾブラゾフの魔法がぶつかりあったのはこの1時間後のことであった。

◇　◇　◇

達也は途中まで送迎してもらい、司波家に帰ってきたのは夕食の時間前であった。ただ、いつもの達也にしては何処か釈然としない様子を見せていたが、制服から私服に着替えたところで彼が向かった先は悠元がいる地下室であった。

開口一番、達也は彼に対して感謝の言葉を発した。

「悠元、今回は感謝する」

「……そう言うってことは、サード・アイ・エクリプスの置き土産を使った感じかな？」

「ああ。お前の手に掛かると『術式解散（グラム・ディスパージョン）』ですら実践的な魔法になるとは思いもしなかった。無論、今回のことは誰にも口外しない」

「まあ、知られたところであの魔法は特殊過ぎて俺ら以外に行使できないんだがな」
強力な魔法というのは相応の発動条件を兼ね備えているのがお決まりの話であり、『魔導解散（キャスト・ディスパージョン）』は開発者の悠元と使用者の達也以外にこの魔法を使うことが出来ない記述が施されている。
現代魔法の記述文法でも解析できないように一つの起動式ではなく三つの起動式から一つの魔法式を構築するため、膨大な魔法演算能力を有するか特殊な魔法演算領域を有してでもいないと行使できない魔法となっている。
「それで、他にも俺に聞きたいんことがあるんだろ？　例えば、ベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』のことについてとか」
「……ああ。あの戦略級魔法を悠元は知っているのではないかと思ってな」
「知っている。『ハロウィン』において佐渡沖で『スターライトブレイカー』を行使した際、その対抗として放たれた。尤も、俺の魔法によって魔法自体〝喰われた〟形となったが」
新ソ連の『十三使徒』であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』。かの魔法の最大の特徴は幾重にも及ぶ魔法式自動複製・多変数化技術『チェイン・キャスト』にある。
座標（場所）が違うだけならば『術式解散（グラム・ディスパージョン）』でも処理可能だが、発動タイミング（時間）までずらされては全ての魔法式を同一のものとして処理できなくなる。
そして、この魔法の一番の特徴は酸水素ガスの制御――〝水を制御すること〟にある。
「俺は便宜的にその技術を『チェイン・キャスト』と名付けたが、その魔法の多様性は割と目を見張るものがある。かく言う達也もそうなんじゃないのか？」
「そうだな。実際に目にした人間として、悠元が提供してくれた魔法があったからこそ早急に対処できたようなものだ」
『トゥマーン・ボンバ』が使われた初めての実戦は、８年前――西

暦２０８９年にベーリング海峡で起きたアークティック・ヒドゥン・ウォー（英名：Ｔｈｅ　Ａｒｃｔｉｃ　Ｈｉｄｄｅｎ　Ｗａｒ、和名：北極の隠れた戦争）。当時の両国政府の思惑が一致した魔法戦力による暗闘で、この戦いでＵＳＮＡは『分子ディバイダー』を開発したウィリアム・シリウスだけでなく、２桁にも及ぶ恒星級（スタークラス）の魔法師を喪っている。

全人口比からして稀少な存在である魔法師。しかも、ＵＳＮＡ側は魔法開発もしていた当時の〝シリウス〟を躊躇いもなく送り出した。国の抑止力として考えるならば当時の政府の正気を疑う様なものだが、ここについてはセリアから詳しい事情を聴くことに成功した。

エクセリア・クドウ・シールズとして転生した彼女が軍に入ってまず初めに手を付けたことは、その戦いの背景を探ることだった。罷り間違ってセリアだけでなくリーナまで政府に使い捨てにされるのは御免だと思ったからだろう。

ウィリアム・シリウスは確かに優秀な人物だった。スターズ総隊長としても一目置かれていたことは事実であり、分子間結合分割術式『分子ディバイダー』はその最たるものだったといえよう。だが、この『分子ディバイダー』という存在が彼をその戦いに引き込んでしまった決定打となった。

その発端は２０８０年代後半、当時レオニード・コントラチェンコしか戦略級魔法師が確認されていなかった新ソ連内部で相次いで大規模魔法の発動兆候が観測されたことが切っ掛けだった。衛星の解析データから酸水素ガスによる爆発を引き起こす魔法と推測され、ＵＳＮＡ政府は新ソ連政府に情報の開示を求めたものの、新ソ連側はそれを拒否。あわや米ソ間での大規模戦闘と成り掛けたが、その結果として生じたのはベーリング海における小規模の暗闘だった。

相手が分子間結合を用いた魔法ならば『分子ディバイダー』でも対処できると踏み、ＵＳＮＡ政府はウィリアム・シリウスを戦場に送り出した。反魔法主義の支援を受けていた政府の別の勢力の内通によって、その戦闘は熾烈を極めることとなってしまった。

閑話休題。

「とはいえ、ベゾブラゾフも魔法師である前に優秀な科学者だ。対策は練ってくるだろう……達也、『質量爆散（マテリアル・バースト）』以外の戦略級魔法を修得してみないか？」
「何？　こんな俺でもまともに使える魔法があるのか？」
「あるといったら、どうする？」
「……教えてくれ」
　達也も『質量爆散（マテリアル・バースト）』の使い勝手の悪さを自覚している。元々アインシュタインの質量エネルギー方程式を体現している魔法なので、発動対象に対して得られる結果が大きくなりがちなのは確かだ。
　問いかけに対する達也の言葉を聞くと、悠元はオフライン端末のキーボードを叩く。すると、表示されたのは膨大な量の起動式データで、この魔法を読み取った達也は目を見開いた。
「……確かに、これは俺でも扱える戦略級魔法だが、貰っていいのか？」
「遠慮するな。ただでさえ自分の特殊能力のせいで『十三使徒』の魔法まで把握している身だし、今後のことも考えると達也が狙われる可能性だって出てくるからな。一昨年の『ブランシュ』の時は達也が狙われていたわけだし。自分の身を守れないと周囲の大切な人まで巻き込む身になったことを自覚する意味でも、これは達也が使ってくれ」
「そうか、そうだな……ありがとう悠元」
　早速、達也の『トライデント』にその起動式がコピーされ、それに併せて大々的なハード部分のオーバーホールも実施する。達也はその光景を何度も目撃しているわけだが、いくら自分でも手の及ばない部分をこなしている悠元に思わず頭が上がらない気分を抱いていた。
　元々月に一度の定期メンテナンスで度重なるオーバーホールをしている為、その都度機能のプログラミングを達也はこなしているが、腕利きのＣＡＤ職人である牛山ですら唸らせる実力は『ミスター・トーラス』と呼ぶに相応しいと言わざるを得ない。
　その後、地下室へ様子を見に来た深雪だが、達也のＣＡＤ調整の様子を見て悠元にＣＡＤの調整をせがみ、その場で大胆に脱ぎだしかけたところを悠元と達也の二人で止めたのはここだけの話。

正直、達也の心境はベゾブラゾフの戦略級魔法を止める事よりも大胆不敵になりつつある自分の従妹に対するフォローのほうが一番強敵かも知れない……と心なしかそう感じたのだった。

◇　◇　◇

ウラジオストクの新ソビエト科学アカデミー極東本部。その一角にある研究室にて、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフは思案していた。それは、数時間前に起きた新ソ連と日本の戦闘――厳密には下級軍人の〝ガス抜き〟のためでもあり、実戦的な演習を兼ねていた――のことであった。

それだけならばまだ良かったわけだが、ベゾブラゾフは戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』を無力化された。しかも、これで〝二度目〟という事実。一度目は『灼熱と極光のハロウィン』の際、佐渡沖に展開された戦略級魔法の術者を殺すべく発動した『トゥマーン・ボンバ』が不発に終わっただけでなく、研究棟にあったスーパーコンピュータが融解した。

正直、今回もその類かと思ったが、今回は流石に免れた形となった。

（……よもや、私の魔法が二度も不発に終わるとは……）

ベゾブラゾフ自身、自らの戦略級魔法に自負が強く存在しており、8年前のベーリング海でのＵＳＮＡ軍との戦闘では相手のエース級の魔法師を『トゥマーン・ボンバ』で葬っている。だが、日本にはその力が通用しなかった。

不幸中の幸いとして言えるのは、日本側も逆侵攻を考慮していない事だろう。一昨年の大亜連合との戦闘を鑑みても、ここで新ソ連への侵攻は考えていない筈だとベゾブラゾフは睨んでいた。

（しかし、一体何者なのでしょうか……もしや、相手も戦略級魔法師の可能性があるのでしょうか？）

ベゾブラゾフの思慮は真実に近づいていた。だが、その時の彼は気付いていなかった。深淵を覗き込むという行為が一体何を齎すのかということに。

◇　◇　◇

４月１４日、日曜日。今日は若手会議の日だが、結局その招待状は

悠元に届くことなどなかった。克人の不手際を疑うという線はかなり薄いため、恐らく七草家で意図的に送らなかったとみて間違いないだろう。
だが、既にペナルティを支払っている七草家にこれ以上の負担を強いるとなると、一番手っ取り早いのは現当主である七草弘一の即時引退ならびに七草智一への家督継承となるだろう。あとは、七草家が保有しているベンチャーキャピタル関連の株式をＴＯＢで大幅に買い付けることで見えない手綱を握るぐらいだろうか。
達也は日課通りに九重寺へ向かった。悠元は地下室で天神魔法の制御訓練を行った後、シャワーを浴びて脱衣所で体を拭きながら考え事をしていた。
（政府側からは総理大臣が出席する予定となっているが、彼らにどこまで御せるものか）
悠元が懸念したのは、国会議員と官僚の軋轢による省庁の意思統一の体制が取れるのか、というものだ。
人間というものは必ずしも全ての考えが一致しているわけではない。三人寄れば派閥が出来る、という言葉の通り、国防軍でも派閥が出来ていて国会や政府機関で派閥が出来ないわけがない。正直、公僕という立場を一体何だと思っているのかと問いかけたいが、国の利益という流動的なものを完璧に制御できるものがいるとするならば、それはきっと神じみた存在だろうと思う。
原作の『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』においては、産業省および財界が賛成の意向を示し、政界と外務省にメディアが『ディオーネー計画』に流れた。国防軍側――主に反九島烈・反十師族側の派閥も間接的に後者の計画を推す形となった。
今まで外部に頼っていた日本のエネルギー事情を一新できる好機だというのに、日和見を決め込む性質を持つ国会議員。悠元は国会議員に本気で覚悟を迫るつもりでいた。国民の声を代弁する立場というのなら、大多数の国民の利益と成り得る『恒星炉』プロジェクトを本気で後押ししろ、と。それが出来ないのならば即時に衆議院総解散選挙で信を問わせるつもりだ。

（大亜連合、新ソ連、イギリス、そしてＵＳＮＡ。周辺の大国に対して独立国家の体を保つという責任を今の国会議員の大半は認識していない。それは官僚にも同じことが言える）

単に『恒星炉』はエネルギー事情を一変させる起爆剤ではない。使い方次第ではエネルギー事情で世界の覇権を握る立場に躍り出ることもできる立派な武器（ちから）なのだ。昨春に『トーラス・シルバー』による魔法稼働式核融合発電の論文を出したのは、各国の動きを見るための試金石でもあった。

議員や官僚にも各々の言い分はあるのだろうが、この国は独立国家であってＵＳＮＡの属国ではない。彼らの一方的な言い分を呑む理由など存在しない。その意味をまずは総理に理解してもらわなければならない。

若造などと侮るのであれば、まずはその手始めとして今まで国債以外手に付けていなかった金融方面の本格介入を敢行する。国内の主要銀行の経営権を取得することで、国内経済を神楽坂家の意向次第で制御することも脅しに入れる。

まあ、面倒事が増えることにもなってしまうため、総理が大人しく聞き入れてくれれば御の字であるが……と、悠元は物思いに耽っていたせいで脱衣所の扉が開いていることに気付き、そこにエプロン姿の水波が立っていたことにここで初めて気づいた。

体を拭いているとはいっても、下半身はタオルを巻いているので目視できるのは上半身の裸ぐらいだろう。そこまで恥ずかしがっていない悠元に対し、水波は顔だけでなく耳まで真っ赤に染まっていた。

「……水波。今日はお互いに用事があるから、罰するということはしない。一先ず扉を閉めてくれると助かる」

「――――も、申し訳ありません!!」

その後、最近中世ヨーロッパを題材にした小説にハマっている水波から綺麗な土下座と共に「私を悠元様の従順な下僕にしてください！」という言葉が飛んで来て、困り果てている悠元と苦笑している深雪の光景を丁度朝練から帰ってきた達也が目撃する格好となった。

閑話　未来の〝シリウス〟の苦悩

――〝苦労人〟。

言葉の定義は『自分ではない人の為に苦労を背負い込む人間』を指すわけだが、どの世界でもそういった人間は多かれ少なかれ生じる。その苦労が爆発して対象に牙を向けるケースも少なくないわけだが、北アメリカ合衆国――ＵＳＮＡ東海岸、ワシントンＤ．Ｃ．にある隠れ家的な雰囲気のバーでは、プラチナブロンドの髪と碧の瞳を持つ青年がグラスを手で揺らしながら物思いに耽っていた。

その青年を見かねてなのか、ワイングラスを丁寧に磨いている若いバーテンダーが声を掛けた。

「ジェイ、お酒が進まないようだな」

「……そりゃそうさ、マスター。来る日も来る日も積みあがる書類仕事で、ロクに家にも帰れていない。安定した収入が欲しくてお役所仕事を選んだのに」

バーテンダーに愚痴を零す〝ジェイ〟と呼ばれた青年の名はジェラルド・バランス。表向きはＵＳＮＡ国防総省から出向したＵＳＮＡ軍統合参謀本部の職員として名乗っているが、実際は国家安全保障局（ＮＳＡ）のエージェントとして国内はおろか国外迄飛び回っている始末。

普通なら経歴が浅い人間が就く役職ではないが、彼はスターズの恒星級（スタークラス）に匹敵する実力を有していながらも軍人魔法師になることを拒否した人間。そんなジェラルドの親族にいる軍人が彼を抜擢したことで、彼の苦労を背負う人生が決まった。

「伯母さんには感謝しているが、俺は戦うのが嫌いだ。なのに、周りは俺に力があるからと言って軍人になるべきだと押し付けてきた。何で俺にこんな力があるのだと思ったさ」

「……」

「悪い、独り言だ」

「気にするな、お互い様だろう」

ジェラルドとバーテンダーは幼馴染の関係にあり、バーテンダーも

彼には及ばないが魔法師としての資質を有している。だからこそ、目の前にいる彼の苦悩を誰よりも一番目撃していた。
　魔法師の道を進まないことに躊躇いがなかったと言えば嘘になるが、この国では魔法の民生利用がほぼなく、軍事的な力に直結する。とはいえ、折角の魔法の力を腐らせまいと自衛のためにお互い訓練を積んでいる。
「……ところでエル、噂は聞いているか？」
「噂か。いくつか親父経由で聞いてはいるが、どの噂だ？」
「例の日本の戦略級魔法に関する噂」
「ああ、それか……」
　〝エル〟と呼ばれた若きバーテンダーもといエルドレッド・バラッドが勤務するこのバーは、知る人ぞ知る情報屋の側面も兼ね備えている。時折力に物を言わせて脅してくる客も少なくない為、この店のオーナーであるエルドレッドの父親は『銃ですら殺せない』と言わしめるほどの屈強な肉体を兼ね備えている。
　その息子兼次期オーナーとしてエルドレッドも鍛えており、防御力だけで言えば実の父親よりも強くなりつつある。とはいえ、直接の手合わせでは未だに勝ったことがない。
「軍の連中が未だに諦めていないことは掴んでいる……最悪の場合、また脱走事件が起きるんじゃないかと俺は思っている。今度は恐らくスターズの隊規模で起きても不思議じゃない」
「いい加減、この国が一番で居続ける気質は抜けないものかね。肩の荷を降ろせば、余裕が出来るというものだと思うんだが」
「それは難しいだろう、ジェイ。新ソ連という存在がいる以上、舐めた姿勢は見せられないだろうからな……そして、そのせいで母は死んだ」
「エル……」
　エルドレッドの両親は軍人だった。彼の父と母はかつてスターズに所属していたが、８年前のベーリング海での遠征で、彼の母は帰らぬ人となった。一方の父もその遠征に同行していたが、辛うじて生きて帰ったもののスターズに居続ける意義を失って軍を辞めた。

その戦闘に関する内容は軍事機密という理由で公開されていないが、エルドレッドはあらゆる伝手を使って情報を集めた結果、新ソ連の魔法師と戦闘になったことが分かった。父親にその情報を突き付けた所、黙ったままで否定しなかったところをみるに真実であると確証を得た。

母の死の真実を知ったからこそ、エルドレッドはジェラルドの性格を誰よりも理解していた。そして、父の跡を継いで長閑にバーを営みながら情報屋として生活する道を選んだ。

「すまん。お前に責めても意味がないことだな」

「気にするな、いつも愚痴を聞いてもらってる側としてはツケを払わねばいかんのに……その駄賃代わりになるか分からんが、気になることといえば一つあるな」

「何だ？」

「いや、ここのところ国防総省（ペンタゴン）に航空宇宙局や北米魔法協会の連中が度々訪れているらしくてな。小耳に挟んだ程度では、何でも魔法師を宇宙で活躍させるとか言い出しているらしい」

現行の科学技術では、宇宙科学の技術は２０世紀後半から２１世紀前半の時よりも衰退している。それは第三次世界大戦による影響で科学技術のリソースが魔法技術の発展に吸い取られた結果として生じたことだった。

「魔法師を宇宙で……反魔法主義にとっては魔法師を追い出す格好の燃料じゃないか。それを政府機関や魔法協会の人間が話していたなんて、正気を疑うぞ」

「俺も流石に聞き間違いの線を疑ったさ。だが、奴らは本気のようだ。多分、狙いは日本の戦略級魔法を奪うためだ」

「……連中は真珠湾（リメンバー・パールハーバー）の悪夢を蘇らせたいとしか思えん」

ジェラルドの考察を聞いたエルドレッドは、吐き捨てるような口調で辛辣な言葉を口にした。歴史を読むのが好きだった彼は、第二次大戦時にアメリカの高圧的な要求によって、日本が対米戦に踏み切ったという歴史を知っていた。

日本の底力を誰よりも知っているからこそ、旧合衆国はその力と精

神を奪った。その復讐をされてもおかしくはないことをしているだけに、エルドレッドの反応は冷淡としか言いようがなかった。
「辛辣だな、エル」
「事実を述べたまでだ。それと、あの国の『トーラス・シルバー』が発表した論文からして『恒星炉』を欲しがったか破壊しようと目論んでいるのだろうが……この国がいつまで上で居られるわけがない」
国土の大小で国の権威が決まるのならば、歴史的権威の強いイギリスなどは小国と侮られる形になる。周辺国家を呑み込めるということは軍事力の強さを指し示しているわけだが、その強さと経済力の強さが必ずしも釣り合っているとは言えない。
元々北アメリカはイギリスなどの欧州の植民地から独立した新興国家に過ぎない。その為に先住民を容赦なく追い詰めた事実からすれば、日本への嫌がらせは自分たちの祖先が受けた屈辱を別の相手に吹っ掛ける様なもの。
「仮に計画が始動した場合、軍関係者ではない俺たちも巻き添えを食う可能性が出てくる……ジェイ。どこの馬鹿が考え出したのかは知らんが、間違いなく当事者はこの国の軍に影響を及ぼせる人間だ」
「俺もそれを察して伯母さんに一報は入れておいた。全く、新ソ連があちこちに喧嘩を売り始めている状況で余計なことをしやがって……当事者が目の前に居たら、例え仕事を辞めることになっても一発ぶん殴りたいわ」
幼馴染と語り合った翌日、ジェラルドは面倒そうな表情を隠さずにペンタゴンの自分のオフィスへと向かった。今日もまた面倒な仕事かと思った矢先に、壁をノックする音が聞こえたのでジェラルドは振り向く。すると、そこには上司の姿がいた。
「おはよう、ジェイ」
「おはようございます、課長……また書類仕事ですか？」
安全保障局の仕事は表立って名乗れない為、ペンタゴンの内部では他の事務職員と同様に書類仕事に明け暮れることが多い。その仕事を配分しているのはジェラルドの目の前にいる上司に他ならないのだが、その彼は思わず苦笑を滲ませていた。

「そう怪訝そうな顔をするな。今日はお前さんに呼び出しだ――――今すぐホワイトハウスへ行ってこい」
「……はい？」
　表向きは平社員みたいな彼からすれば寝耳に水の話であった。ともあれ、上司から押し付けられた呼び出しの手紙を携えたジェラルドはホワイトハウスに入ったのだが、入念なボディーチェックを受けてから招かれた先は大統領執務室であった。
　そこには当然、執務机に座る大統領が堂々とした姿勢で座っていた。
「失礼します、大統領閣下。ＵＳＮＡ軍統合参謀本部勤務、ジェラルド・バランスであります」
「君が彼女の言っていた〝戦嫌いの魔法師〟か。君の評価は私も目を通させてもらっているよ。安全保障局きってのエリートと会えたことを嬉しく思う」
「……光栄であります、閣下」
　普通ならば魔法師と面会するにも厳重な警戒をするはずだが、ジェラルドと対面した大統領以外には一人の男性しかいない。その彼が実力のある魔法師だということはジェラルドも肌で感じ取っていた。
　そして、嘗て軍に身を置いていた父親経由でその人物のことを良く知っており、ジェラルドが声を掛けた。
「まさか、護衛がベンさん――――いえ、ベンジャミン・カノープス少佐殿とは」
「久しぶりだな、ジェイ。昔のように〝ベン〟で構わない。退役少将殿はお元気かな？」
「ええ。未だに勝てていませんし、いつ現役に復帰しても遜色ないほどです」
　エルドレッドの父親――――バルクホルン・バラッド退役少将はスターズ第一隊の先代隊長〝カノープス〟を務め、８年前に軍を辞めはしたがエルドレッドとジェラルドの魔法の師匠的存在として彼らを鍛え上げた。曰く『お前たちの力を自衛が出来る程度には鍛えてやる』と。

そんな彼は若い頃に武者修行という形で日本を訪れ、とある武人の下で数年ほど修行した後、帰国してスターズの中で頭角を現した。その存在を彼は決して口にしないが、尊敬の念を込めた手紙を毎年のように送っている。
「そうか……詮無き事を聞いてしまったな」
「いえ、お気遣いなく。して、大統領閣下。スターズでもない自分に一体どのようなご用件でしょうか？」
その辺の事情を呑み込みつつ、ジェラルドは大統領に視線を向けた。別に久闊を叙する時間ぐらいは与えようと思っていた大統領からすれば、思わず笑みが零れていた。
「そうだな。ＮＳＡのエージェントである其方を呼び出したのは他でもない。君はエドワード・クラークなる人物を知っているだろう？」
「エドワード・クラーク……あー、確か情報システムの専門家で、国家科学局カリフォルニア支局勤務の人間と聞いております。その彼が何か問題を起こしたのですか？」
ＵＳＮＡが持つ通信傍受システム『エシェロンⅢ』。その設計の中心にいる人物の一人としてクラークの名があることにジェラルドは調査の知識として知り得る立場にいる。彼が熱心な愛国者の気質を有することは以前国家安全保障局（ＮＳＡ）の局長から命じられた身辺調査で判明していた。
最初、その彼が職務上漏らしてはならない機密を他国に売り渡したのかと思ったが、どう考えてもそんな気質を有する人間が国益に反する行動を取る方が〝正気を疑う〟とジェラルドは心の中で結論付けた。
そんな推測をしているジェラルドに対し、大統領は真剣な表情を浮かべてこう告げた。
「問題行動といえば色々あるわけだが、これまでは国益に反しないと判断したからこそ彼を今まで見逃してきた。例えばそうだな……先日の旧式兵器の紛失騒動に関与した事とか」
「メディアにバレたら、一発で閣下の首が飛びますよ」
「その責任はテロリストに押し付けたから、今更過去の罪を遡及など

出来ぬよ。そこにいるカノープス少佐も親族の処罰という汚れ仕事をする羽目になった」
「……少佐殿、ご苦労様です」
「お気遣い感謝します」
ジード・ヘイグ――――顧傑の一件はここにいる三名が各々苦労を負う羽目になった。大統領は日本政府や上泉・神楽坂家との交渉、カノープスはテロリストの処分とテロに加担した親族の拘束、そしてジェラルドは事後処理の書類仕事に加えて情報部内部監察局の依頼による調査で忙殺された。
そんな苦労と漸くおさらばと言ったところで、今度は別の問題がUSNA内部に浮上しつつあることにジェラルドは内心で溜息を吐いた。
「それで？　そのクラークなる人物が今度は何を目論んでいるのですか？」
「それなのだが……最近、国防総省（ペンタゴン）で何か妙な動きがあると聞いてな。その動きにどうやらその人物が関与している様子が見られたのだ」
「妙な動き……航空宇宙局や北アメリカ魔法協会ワシントン本部の人間が頻りに訪れていることは私も目にしています」
その上で、ジェラルドは昨日エルドレッドと話した内容に触れつつ、魔法師を宇宙で活躍させるという計画が進んでいるような動きがあったことを報告した。すると、大統領は盛大に頭を抱えていた。
「……私は宇宙に関する予算を確認した覚えはないし、指示を出した覚えなどない。カノープス少佐、狙いは何だと思う？」
「ハッ。私見を述べさせていただくのであれば、恐らく『灼熱と極光のハロウィン』――――日本の戦略級魔法の無力化と思われます」
これまで、USNA軍は脅威と見て密かに部隊を送り込んだ。それも虎の子とも言える〝シリウス〟と〝ポラリス〟を送り込んで失敗したのだ。更に、その両名は除隊して日本に帰化することも視野に入れている。そのことも職務上知っているジェラルドとしては、正直十代でスターズ総隊長に据えた参謀本部にも大きな問題があると思っているが、その部分は決して口に出さなかった。

カノープスの私見を聞き終えた上で、大統領はジェラルドに視線を向けた上で尋ねた。
「貴官もそう思うか……ジェラルド・バランス〝大佐〟はどう見る？」
「忌憚無い意見を述べるとするならば、カノープス少佐殿と同意見です。ですが、それでは今までと何も変わりませんので……恐らくですが、何らかの形で〝アンジー・シリウス〟に罪を被せて日本を追及することと思われます」
単に戦略級魔法を捨てさせるのは、現在新ソ連によって脅威に曝されている日本にとって自殺行為としかならない。仮に表立ってそんなことをやれば、今存在する軍事同盟関係が瞬く間に崩れ落ちてしまう。なので、表沙汰に出来ない理由の一つとして、『アンジー・シリウスが日本の魔法師に絆されて裏切った』とでっち上げる可能性をジェラルドは口にした。
「エクセリア・クドウ・シールズは元々スターズでも序列外の存在故、彼女に罪を着せるのは得策ではありません。アンジェリーナ・クドウ・シールズも表向きは軍を除隊していますが、アンジー・シリウスとしての席は残ったままとなっています。ここから先は閣下にとっては聞き苦しい点もございますが……」
「よい。可能性をすべて捨て去るのは得策ではない。聞かせてくれ」
「では……アンジェリーナ嬢が四葉の次期当主の婚約者となったことを利用して、先日のパラサイトの発生原因を彼女に押し付けるような情報操作を行う可能性があります」
パラサイト事件の調査はジェラルドも関わっており、加えて当事者側の一人に親族の存在がいたために積極的な情報交換を行っていた。ダラスでの実験によってパラサイトが出現し、結果としてスターズからの脱走兵が生じた。その一人であるアルフレッド・フォーマルハウト中尉はジェラルドの親友の一人だったことも大きかった。
「噂の中には四葉に戦略級魔法師がいるというものがあります。現状では信憑性の薄いものですが、今から五年前に日本と大亜連合で起きた軍事衝突では、鎮海軍港を消滅させたものと似たような魔法が観測されていたようです」

ジェラルドはフォーマルハウト中尉がダラスの研究所の警備をした後に連絡がつかなくなり、その後『数件の殺人容疑で逃亡を図ったため、アンジー・シリウス少佐により処分された』と聞いたときは己の耳を疑ってかかった。だが、調べれば調べるほど現実であるということを知ったのと同時に、ジェラルドはダラスの研究所で何かが起こったものと直ぐに察した。

「閣下が述べたエドワード・クラークなる人物がどこまで掴んでいるのかは現時点で不明ですが、ここまで周囲が動いている以上は国内に限った動きではないと思われます」

「国内に……まさか、新ソ連と手を組むと？」

「可能性としてはあるでしょう。それに、魔法の平和利用を謳うのであれば国際魔法協会本部のあるイギリスも無関係ではないと考えた次第です」

その直後に『第一賢人』なる人物がダラスのマイクロブラックホール実験をメディアに暴露した。やっていることが明らかに愉快犯じみているが、元々の発生原因を特定しつつあったジェラルドは『第一賢人』なる人物がＵＳＮＡ国内の人間ではないかと疑った。明確な証拠はないが、ダラスの実験の事を正確に把握している人間はかなり限定される。事情を知り得る立場にいる人間を調べていった結果、エドワード・クラークもその一人としてリストアップしていたが、当の本人は知らぬ存ぜぬを貫き通していた。

「ふむ……それと、私の孫娘に先日の事件の責任を押し付けることがどう繋がるのだ？」

「まず、表向きの理由は魔法師の平和利用を謳って宇宙に追い出す計画を立てます。そうですね……金星か火星あたりのテラフォーミングならば十分大義名分は立てられます。それが何らかの形で頓挫した場合、アンジー・シリウスが日本の魔法師と内通していたという冤罪を被せて軍事的な圧力で日本に言うことを聞かせる……この辺りが落としどころでしょう。尤も、その為にアンジェリーナ嬢を何らかの形で本国に帰還させる必要がありますが」

リーナの〝アンジー・シリウス〟という肩書がＵＳＮＡ軍で生きて

いる以上、この方法が一番現実味があるとジェラルドは睨んでいた。それに、エドワード・クラークには一人息子がいることも知っており、仮にクラークが動かなくともレイモンドが自宅にあるサーバーを経由して『フリズスキャルヴ』を動かすことも想定している。
　パラサイト事件の身辺調査の際にレイモンドのプロファイリングを知り合いに頼んだが、その結果は『まるで神様のように悦に浸る願望の持ち主』というものだった。余りにも馬鹿げている結果だと思うが、奇しくも『七賢人』に関するプロファイリングと似通っていることに加えて、情報システムの専門家であるエドワード・クラークの息子となれば注意しないわけにもいかなかった。
「リーナに〝アンジー・シリウス〟として働かせると……そして、四葉を貶めるのか？　あの『アンタッチャブル』を表舞台に引きずり出すために」
「これが、自分の得た情報から推察した考えでございます、閣下」
「正直に聞こう。これが成功する確率は？」
「……ゼロ、ですね」
　何しろ、嵌める相手が悪すぎる。
　確かに四葉の悪名は今から３０年以上も前の話なので、その当事者が生きているという保証はない。裏を返せば、生きていない保証もない。正直博打要素が多すぎるこんな作戦をＵＳＮＡ単独で行うにせよ、他国を巻き込むにしても勝算が一体どこにあるのかジェラルドにも訳が分からなかった。
「仮に新ソ連を巻き込むとしても、いくら同盟国とはいえ日本からすれば脅威を与えてきた相手を無条件で信頼できる材料が皆無です。正直に言いまして、新ソ連を巻き込んだ時点で計画が全て破綻するとみています」
「イギリスはどうなのだ？」
「三枚舌外交で散々引っ掻き回して蝙蝠の様な動きを得意とするかの国に信頼なんて置けますか？　今の女王陛下はまだしも、あの国の〝十三使徒〟は先日オーストラリア軍と大亜連合軍の脱走兵が日本の人工島を襲撃しようとした件に関わっている噂もあります。火のな

い所に煙は立ちません」
　容赦のない意見だが、これもジェラルドの立場として国家の利益を守る為に政府の長である大統領へ進言するためのもの。傍にはカノープス少佐もいるが、彼もその情報の重要さを考慮して口外しないことは彼の真剣な表情からして理解していた。
「決定的とも言えるのは、先日に日本が提唱者として締結した大洋南部経済連携協定（ＳＥＰＡ）の存在があります。仮に我が国と新ソ連、イギリスが組んだとしても、日本はその協定を利用して赤道より下の国々を味方につけられる下地が出来上がっています」
　世界群発戦争よりも前、北側に位置する欧州は南半球に位置する国々を植民地として搾取した。それだけでなく、宗教的な問題も抱えてしまっている。嘗て被支配側にいた地を含む国家が日本の呼びかけに呼応して団結した場合、ジブラルタル・スエズ・パナマと言った主要な海峡・運河だけでなく、喜望峰やマゼラン海峡すらも使用できるか疑わしくなる。つまり、世界の海路が大幅に閉ざされるという危険を孕んでいるのだ。
　魔法の平和利用という建前を持ち出して日本の戦略級魔法を奪おうとした場合、民間レベルの経済活動に多大な支障を来たす報復を受ける可能性をジェラルドは示唆した。
「仮に武力で強引な手段を取れば、魔法の平和利用を掲げた国が暴力的な手段に訴えることの正当性を疑われます。国家の信頼も大きく揺らぐことになるのは想像に難くないでしょう」
「そうか……貴官の意見を強く受け止めておこう。そんな貴官に一つ頼みがある」
　後日、ジェラルドはこう語った。というか、絶叫した。
『あのクラーク親子、ロクなことしねえ!!　この際誰でもいいから、アイツらを世界から消し去ってくれぇっー!!』
　ジェラルド・バランス……彼が後にＵＳＮＡ軍の魔法師部隊『スターズ』の次期総隊長〝シリウス〟となることは、当人も含めて誰も予想できるものなど存在しなかった。

護人としての矜持

護人（さきもり）――――日の本の国を真に護るべく、いかなる清濁すらも呑み込んだ上で国家の存続と繁栄を願う者たちが名乗った名称。九州北部に置かれ、大陸からの侵略を防衛するために設立された防人（さきもり）にあやかってその名を冠するようになった。

この国の魔法という存在は皇族や一部の上流貴族の間で知られる秘中の秘とされ、それが表立って世に出ることは決してなかった。だが、力というものに対する驕りの結果、表の歴史に影響を及ぼしてきたことは事実であり、未だに原因がハッキリしない過去の出来事の陰には魔法の存在が関与していたという説も少なくない。

神仏による崇拝や統治ではなく、法秩序による統制へと変わった近代・現代において、魔法の存在は御伽噺の存在へと変わりつつあった中、２０世紀末に起きた事件によって魔法という存在は技術の一つとして世の中に姿を見せることとなった。

この国を真に支配する『元老院』だが、元々四大老は全て護人の家が統治していた。だが、その内の二家が二度の大戦を経て断絶となり、已む無く空席を埋めるべく東叡山宗家である東道と兵衛府（ひょうえふ）に連なる樫和の両家が四大老の席へと座った。

故に、長き時に渡ってあらゆる闇の部分を請け負ってきた神楽坂と上泉、古式の術士といえども四大老では新参者と言える東道と樫和。その間で『元老院』に対する考え方が真っ向に違うのは無理からぬことであった。

神楽坂と上泉が名乗っている護人の名を東道と樫和が名乗れないのは、『元老院』と反する護人の真の役割――――己の善悪の価値観に囚われず、国の秩序に寄与する存在の保護――――という部分で後者の二家とは異なる価値観を有しているためだ。

無論、神楽坂や上泉とて、徒に表に出て歴史を掻き乱しているわけではない。だが、魔法という存在がこの世界の表舞台に出てしまった以上、元老院のあるべき役割も変わらざるを得なくなる。それを誰よりも理解しているからこそ、護人は国の守護を与る者として歴史の表

舞台に立った。
真っ先にそれを理解した者と、理解するよう努める者、そして昔からの権力を手放せずに前の二者を恨んだり妬んだりする者。今の元老院はまさに混迷の極みの真っ只中にあると言えよう。
閑話休題。
悠元は『神将会』で着るスーツを纏い、いつもの通学で使うコミューターの駅まで歩いてきた。休日なので人の姿が疎らだが、出迎えに来た自走車――――大臣や皇族クラスが乗るであろうリムジンが出迎えた時は流石に少し引き攣った笑みを浮かべた。
それを知ってか知らずか、運転手が降りてきて恭しく一礼をした。見た目は若いが、引き締まった筋肉の鍛え方やサイオンの流れを見るに同門の人間だと直ぐに分かった。
「神楽坂様、お待たせして申し訳ございません」
「気にしておりませんので」
「これはご丁寧に。では、お乗りください」
運転手が自らドアを開けたので、悠元が乗り込んだところでドアが閉められ、運転手がリムジンに乗り込むと自走車は目的地に向かって動き出した。流石に休日の市街地をリムジンが走っていたら、一体何事かと訝しむ人間は少なくないわけだが。
リムジンが向かった先は内閣総理大臣が日常生活を行う住居――――総理大臣公邸であった。運転手がドアを開けたのを見て悠元が降り立つと、そこには総理大臣と秘書官がおり、傍に護衛が控えていた。
「これは神楽坂様。ご足労頂いたことに感謝いたします」
「お気になさらず。ご案内頂けますか？」
「ええ、勿論ですとも」
普通ならば、一国の国家元首が若い人間に謙るという光景など〝不可思議〟の一言に尽きるであろう。秘書官や護衛も事情は聞かされているだろうが、何処か腑に落ちなさそうな表情を垣間見せていた。それに気付いたのか、総理大臣は謝罪の言葉を口にした。
「申し訳ありません、神楽坂様。事情は予め説明したのですが」
「気にしておりませんよ、総理。若輩者であることは自身が一番よく

理解しております故」
「……寛大なお心に感謝いたします」
護人の現当主にして、次期元老院四大老の一角を担うであろう若者。更には師族会議議長という日本魔法界の総領の立場に立つのが、総理大臣よりも二回り以上年下の少年。しかもまだ高校生という事情を知ったとしても、疑心暗鬼に囚われるのは無理からぬことだ。
とはいえ、特殊な立場である以上は年功序列の話し方など出来ない。過去に護人の当主へ失礼を働いた総理大臣は、その翌日内閣総辞職に追い込まれたという逸話もあったりする。総理大臣の案内で入った先は会議室のような場所であり、既に上泉家当主・上泉元継が席に座っていた。
「上泉殿。お待たせして申し訳ありません」
「会議が始まる15分前ですし、遅刻ではありませんよ、神楽坂殿」
本来ならば総理大臣が上泉家か神楽坂家に出向かなければならないが、先日の新ソ連侵攻の関係で統合幕僚会議を設置、現在新ソ連の二次・三次侵攻を睨んで厳戒態勢を敷いている為、首都近辺を迂闊に離れるわけにはいかない。
日本政府の事情を悠元と元継も理解しているため、無理に首都を離れさせるのは得策ではないと判断していた。そもそも、国外情勢を鑑みて首相公邸での会議を予定していたので大きな混乱は生じなかった。
そうして三名の参加者が揃ったところで総理が秘書官に小声で話すと、秘書官は軽くお辞儀をした上で部屋を退室した。護衛も部屋の外に出たところで悠元が遮音フィールドを部屋全体に張った上で話し始めた。
「さて、総理。事前に概要を記した手紙を送付させて頂いたが……我々が話したい内容については見当がつくとみられるが、いかがかな？」
「ええ。この国の資源エネルギー事情の抜本的改善、と見受けられました」
盗難などの防諜を鑑みて、両名への手紙には『この国が慢性的に抱

えているエネルギー事情についての会議を開きたい』という旨の内容に止めた。無論、見る人が見ればトーラス・シルバーが関わっている『恒星炉』のことも含むだろう、と見做すこともできる。
「その通りです。1世紀半前に起きた第二次大戦では、その部分を突かれて已む無く旧合衆国と戦争状態に突入し、結果として我々は負けた。その愚を再び繰り返さない為にも、そして自然災害が多いこの国のライフライン基盤を保つためにも……国外が荒れている今だからこそ、抜本的な改革案を提示したく会議の場を提案した次第です」
「……お言葉ですが、この国も先日新ソ連の攻撃を受けたばかりです。再侵攻の可能性は低いとみているのですか？」
「それについては自分が答えよう。現状の新ソ連軍は極東方面で大規模に動かすにも割ける戦力が少ない。戦略級魔法師の〝イグナイター〟を用いるにしても、仮に本土を爆撃した場合は問答無用の宣戦布告と見做して欧州との経済制裁も視野に入れた〝報復策〟を既に思案している」
　達也が対処した新ソ連軍の概要は当人からすべて聞いているが、仮にベゾブラゾフがあそこで本気を出したとすれば、日本軍のみならず新ソ連軍にも相応の被害が想定される。新ソ連政府が『漁船を攻撃した』などと宣うつもりならば、当時の衛星写真も含めて情報の全てを開示することで反撃する用意はあった。
　それに、新ソ連が旧ソ連に近い領土となっていても、使える不凍港の数はかなり限定される事実は変わらない。本格的な軍事侵攻を目論むのならば、民間レベルでの経済制裁も含めた多岐の対策を行使する腹積もりだ。
「とはいえ、戦略級魔法師の力を当てにして攻める可能性は残っている以上、警戒は緩めても解くことは無いよう厳命して頂きたい」
「既に防衛大臣へ伝えております。して、神楽坂殿。具体的にはどのような改革案なのか、ご教授願えませんか？」
「分かりました。現行のエネルギー事情は主に太陽光・風力・水力・地熱発電などによる自然エネルギー、それと補助システムとして燃料電池による発電形態が主流です。ですが、現状ではこの国の電力需要を

満たすには至っておりません」
　こうなった大きな要因は原子力発電の大規模な抑制に他ならない。前世では大地震による電源喪失に加えて〝人災〟による事故で核離れが加速した結果、これまで原子力に頼っていた電力事情が逼迫した。
　この世界では、核兵器抑止の為にテロリストの標的となりやすい原子力発電所が次々と廃炉処分となった。尚、放射性物質に汚染された機器などの処分は厳正に執り行われたわけだが、それでも完全な処分に至っていないのが実情だ。
　その跡地に自然エネルギーを活用した発電所を設置しているが、エネルギー単位で取り出せる根本的な量の違いによって全てをカバーリングできているとは言い難い現実。
「昨春、トーラス・シルバーによる魔法稼働式核融合発電に関する論文を発表しましたが……総理、実は既に魔法技術による核融合発電を実用化させております」
「な、なんですと!?」
「余り大事にも出来ませんし、何せ同盟国とはいえＵＳＮＡの中には日本を危険視する勢力が少なくないのも事実。なので、経済産業大臣には内密に『燃料電池用の水素燃料の輸出』に関する問い合わせを行い、既に海外――――インド・ペルシア連邦およびアラブ同盟相手に民間レベルで輸出を行っております」
　発電規模の関係で大々的なプロジェクトになってしまうだけでなく、実用性や費用対効果などといった経済面での試算に加え、それを国家が主導でやろうとすると間違いなく反魔法主義の後押しを受けた野党から反発に遭うのが目に見えている。
　それに、予算云々の確保となると間違いなく時間が掛かると見込み、悠元は多少の裏技も込みで南盾島の国防海軍魔法研究所跡地に僅か３ヶ月で『恒星炉』の発電施設を完成させた。基本的な実験は既にＦＬＴで終わらせている為に魔法師を配置しての実証実験も１ヶ月で終わり、内密に関係省庁の伝手を使って民間レベルでの燃料電池用水素燃料の輸出に踏み切った。

『恒星炉』における４つのメインスキームの内、水素燃料および工業用高純度水素ガスの生産をまずは最優先で事業化させた形だ。
「最初は外務省に話を持っていったのですが、対応が酷かったのと関係者が横柄な態度を見せたので、『話にならない』と判断して経済産業省に持ち込みました。そちらは直ぐに理解して許可を出していただきましたし、外務省の許可も取り付けて頂きました」
「……本当に申し訳ありません、神楽坂様。大臣も含めて厳しく注意いたします」
「まあ、ここ最近の情勢で忙しいのは理解していますが……獅子身中の虫は徹底的に排除してください。国家の利を考えない者に与える椅子は無い、と」
「はい」
　敢えて〝外務省の官僚〟と指定しなかったのは、外務省の官僚と外務大臣の双方に責任を負わせるためである。とはいえ、即日の更迭などしたらメディアの恰好の餌食になる為、そこは任命責任を問われかねない総理大臣の裁量に任せるつもりだ。
「そこまで進めていたとは……だが、それで終わりではないのだろう？」
「ええ、上泉殿。既に送電ケーブルの敷設及び接続を終えており、伊豆半島の地下に大規模の蓄電施設を設置しただけでなく、首都圏への供給体制も準備を整えております。計算上では、小笠原諸島方面にある『恒星炉』で日本本土の夜間需要を十二分に満たせるラインに乗せることが可能です」
　魔法技術以外の工業系に関する部分は神坂グループで請け負い、土木系統は上泉家の所有する会社に業務委託することとした。当然守秘義務が課せられているわけだが、その代わりに高い報酬を支払っている。名誉だなんだと言って宇宙に飛ばそうとボランティア紛いのことをさせようとしている〝何処かの誰か〟とは違うことを行動として示す。
　元継は事前に悠元との会談をしているので知っているわけだが、総理に現状を把握してもらう意味で尋ね、悠元もその意図を理解した上

で答える。
「……ちなみにですが、その事実を他に知っている者は如何程でしょう？」
「総理なら当然御存知である『元老院』関連ならば、我々の先代当主らと東道青波の三名のみ。それ以外で言うならば『トーラス・シルバー』の関係者といったところです」
燃料電池発電用の水素燃料の運搬は専ら海路だが、主に活躍しているのは上泉家系列となる飛龍海運である。現在の状況を考えると彼ら以外に適任者がいないのだ。
なお、運搬に使っているタンカーは一度沈んだものをサルベージしたり、海賊の根城になっていたものを無理矢理接収して民間船として再利用しており、先日の顧傑が乗ってきた高速貨物船も日本の船籍に書き換えた上で運用されている。
それを付け狙う海賊だが、軒並み返り討ちにしている。しかも、正規軍の潜水艦も数隻ほど拿捕しており、それらは全て国防軍に接収させた。言っておくが、仕掛けてきたのは相手の方であって、それを壊滅させるのは〝防衛行動〟に他ならない。捕まえた軍人については工作員としての危険性も考えて一人の例外もなく本国に強制送還させている。
公海上で過剰防衛の沙汰などを問う真似なんかしたら、下手すると海の藻屑にしかならないだろう。
「総理にお願いしたいのは、伊豆・小笠原諸島を〝国家重要戦略特区〟として法的に保障していただくこと。なお、政府に対して人材や金銭などは一切要求しません。いえ、寧ろ要りません」
「理由をお尋ねしても？」
「最大の理由は現行の魔法技術で再現が難しい代物を使用している為、機密の確保の為に政府および関係省庁の人間を内に入れたくないのです。理由はお分かりですね？」
「……ええ、十分に理解しています」
今の総理に全ての非があるとは言えないが、これまでの政府の政策によって、この国の魔法師社会に歪みが生じた。それは『伝統派』の

一件だけでなく、『ブランシュ』や『無頭竜』を野放しにしていたこともそうだし、法的根拠がない魔法師に対する慣行――――魔法師の海外渡航の自粛など――――もその一つだ。

なので、独立国家としての矜持を示す意味でも、総理を含めた国会議員全員に真の独立国家としての日本の利益を追求してもらわなければならない。刻々と変化する情勢に対応した立法や行政を行う人間も歳など関係なく学び続けてもらう必要がある。

正直、前世もそうだったが……顔がいいから中身が伴っているかと言われると別の問題だ。高学歴やアスリートとしてれっきとした実績を挙げていてもお笑い芸人になっている人間の方が遥かにマシに思えてくる。

この世界で言えば十師族や師補十八家直系の子女が該当するわけだが、大半が会社に勤めていても魔法師としての実績は不透明。何もしていないとは思いたくないが、軍関係の仕事に就いている時点で九島烈の提唱した規則が形骸化している。

「しかし、民間のみでやるにしても法の制限がどうしても生じます。なので、政府が法に基づいた優遇措置を講じて頂ければ、資金の負担や人材の確保はこちらで請け負います。加えて、先日締結した大洋南部経済連携協定に基づいて、エネルギー関連の輸出入に関する関税優遇措置も確約していますので、総理には外務省と経産省の説得をお願いいたします」

「……畏まりました」

正直、こちらで本来政府がやるべき仕事を奪うつもりなどなかった。だが、外務省の怠慢と横柄に腹が立って全ての段取りを外務省抜きで進めた。これで文句を言うつもりなら、外務省役人のスキャンダル記事をメディアに流して大規模の掃除を敢行してもらう。

『沈黙は金、雄弁は銀』という諺はあるが、他国との折衝に一番関与するべき外務省がその矜持で居ては困る。何せ、嘘を言い続けて本当のことのように振舞った前例があるだけでなく、平気で国際条約を破るような輩が周辺国家にいるのだ。

後日、親亜派および親ソ派に属する役人が軒並み〝都合退職〟とい

う形で一掃され、その中には工作員も含まれていたことが判明した。
親欧米の派閥は残ったままだが、彼らが逆に首を絞めることになるのは……もう少し先の未来のことであった。

鑑みることが多い会談

悠元と元継、総理大臣の会談はまだ続いている。議題は専ら国内外の情勢に関するものであった。

「総理、正直にお尋ねする。総理はこの国の行く末をどのように見据えられているのか。それをお聞きしたい」

「……今上天皇陛下ならびに上皇陛下より真の独立国家となるべく邁進する意思に嘘偽りはありません。ですが、それを実現するにも様々な障碍があるのも事実です」

国会議員で言えば反魔法主義の支援を受けている野党勢力、市民団体という名の〝抵抗勢力〟に加え、国会議員と官僚の意思疎通の問題もある。この世界で言えば、そこに国防軍や元老院の問題も加わっている。

国外の問題で言えばＵＳＮＡの問題が念頭に出て来るし、大亜連合と新ソ連の問題も浮上している。大洋の利権欲しさに軍事力を強めようとするのであれば、それに対抗する案も考えている。

「我々は別に総理を責めるつもりはありません。ですが、あまり力を揮って厄介事になるのも御免被りたいところです。我々は別に賛同者だけを集めて思想を固定化させることを望みません」

日本の国としての確たる意思を持つことと日本国民の思想・信条の自由は必ずしも一致しないことなどとうに知っているし、余程酷い誹謗中傷でなければ権利は守られるべきである。だが、その権利の尺度を履き違えている人間が多すぎるのもまた事実である。

「総理。今後、十師族を含めた師族会議に対する問い合わせや陳情は、議員個人や政府機関の如何を問わず、一律して内閣からの要請として日本魔法協会にお願いしたい」

「それは構いませんが、その意図をお聞かせ願えますか？」

「単純な事です。貴方方政治家が利害の調整を担う立場とはいえ、国会や政府機関の無秩序状態を我々は許容していません。国家としての意思を一致させなければ周辺国家に呑み込まれる未来しかないのですから。その悪しき例は貴方とて御存知のはずだ」

その最悪の結果が第二次大戦の敗戦であり、再びこの国を焦土にするようなことは避けなければならない。悠元自身も非公式ではあるが国防軍の軍人魔法師である前に一人の日本国民として、その未来を避けるための力を行使するための覚悟は既にしている。そうでなければ、国外で戦略級魔法の使用に踏み切るということはしなかっただろう。

民主主義国家である以上、全ての人間の意思を一つに纏めるのは極めて難しい。それでも多数決の論理に基づいて現在の世界情勢に即した政治が求められている。魔法という見えない存在に恐怖を抱く気持ちは分からなくもないが、人民の長である政府が魔法という存在を認めない限り、人民の恐怖は決して和らぐことなどない。

それは行政に対しても同じことが言える。手柄欲しさにスタンドプレーなど、本来は公僕たる人間がすべきことではない。そもそもの話、交渉事の関係で締め切りを課すことはまだしも、競争原理という柵を有しない筈の公的機関の人間に民間企業の様なノルマを課すことが問題ではないかと思う。

このお願いは原作における産業省と外務省による認識の齟齬からくるもので、これが原因で魔法協会の会長が入院する羽目となった。別に色を付けろとか注文するのではなく、各省庁の長として情報を共有することで平等に責任を負ってもらうためだ。

それと、軍人魔法師以外の魔法師を統率する師族会議と政府の仲立ちを魔法協会にしてもらう予定だ。別に仲裁や説得といった内容が含まれるのならば、そこは臨機応変に対処すべき問題であるし、国防的に重要な要請の場合は宮内庁経由で今上天皇に伝えることとなっている。

なお、師族二十八家が各々持っているコネクションでの対話や相談事はその対象から意図的に外している。

「ＵＳＮＡは以前、我が国の戦略級魔法を無力化しようと目論み、自称〝世界最強〟の魔法師部隊『スターズ』を留学生並びに交流要員として派遣してきていました。私もその構成員と戦いましたが、怪我を負うことなく退けました」

「そ、そのようなことなど報告に挙がっておりませんが……」
「一歩間違えれば現行の軍事同盟が空中分解する国際問題に発展しかねなかったのもありますし、それを機とみて大亜連合や新ソ連が攻めてくる可能性を考慮して水面下の交渉で手打ちにした次第です」
　その時は顧傑や周公瑾が健在であったため、下手に拗れさせるのも面倒だと判断してヴァージニア・バランス大佐との間で手打ちにした。尤も、国防海軍の戦略級魔法絡みであわや全面核戦争に発展しかねなかったことでＵＳＮＡ政府に多額の賠償を支払わせた。
　なお、その賠償金は一銭たりとも日本政府に支払われておらず、政府が得たのは南盾島に関する権利の売買に伴う臨時収入ぐらいであった。
「その報告は自分も聞き及んでいる。神楽坂殿、もしやＵＳＮＡがまた戦略級魔法の無力化を目論んで何か仕掛けると？」
「今度は魔法師を宇宙開発という名目で地球外に追放するという計画です。下手すれば、この地球上にいる全ての魔法資質保有者が問答無用で地球から追放される危険性を秘めたもの」
「な、何と……それを現代魔法の先進国であるＵＳＮＡが先導すると？」
「かの国は魔法の民生利用を認めていないに等しい。言い方は極端だが、〝魔法帝国主義〟同然のような振る舞いのかの国ならやらない道理はないでしょう……先進国だからこそ、自らが世界の覇権を握りたいという欲を邪魔するものは容赦なく排除する」
　過去の場合は政府というか大統領が一方的に難癖をつけて戦争を吹っかけた例がある。その事例を鑑みても、原作でエドワード・クラークがでっちあげた『ディオーネー計画』がこの世界でも動き出す可能性があり、既にＵＳＮＡ国内でその動きが見え隠れしている。
「いくら同盟国とはいえ、それはあくまでも安全保障などといった国家として対等の立場としてのものであり、我々はＵＳＮＡの属州ではない。それに、今の我々には最優先すべき事項がある為に彼らの計画に割く余力などない。宇宙に行きたいというのであれば、それは国力に余裕がある国家がするべき〝道楽〟であり、それに付き合う道理は

ない」
「……神楽坂殿に上泉殿、もしＵＳＮＡが計画の参加を推してきた場合は？」
「その時は私が直接ＵＳＮＡ大統領に問い合わせましょう。〝民間レベルでの経済的な報復〟も交渉材料に含めた上で」
その下準備として、既に買収した大手メディアの大口スポンサーの株式購入を進めている。表向きは米国内の不動産会社やベンチャー企業が買収している体となっているが、その購入資金の実態は神坂グループによる〝無利子の大口融資〟。
別に融資の対価としてスポンサーの株式の買収を強制しているわけではないし、米国企業の資産強化による見返りとして米国内のあらゆる情報をほぼリアルタイムで仕入れられるように取り計らってもらっているだけで、『そのついでにスポンサーの株式も買っていただければ助かる』と呟いたに過ぎない。勘のいい人間ならば融資の存在に気付くだろうが、その融資の方法も複数の国際銀行を経由してのものなので簡単に尻尾は掴まれないようにしている。
万が一こちらの動きを掴まれた場合は、問答無用のＴＯＢで買収して札束ビンタによる口封じを敢行するだけだ。幹部クラスの人事の刷新（クビではなく、事実上の左遷扱い）はするかもしれないが、何も知らない社員の雇用は保証するし、経営方針に口出しはしない。
「総理から直接抗議されることと存じますが、私も祖父の誼で知り合っておりまして。それに、私の婚約者の一人はその大統領の孫娘です。幸い、彼女は私の味方になってくれることを約束していますので、いくら一国を統べる大統領閣下と言えども身内からの絶交は堪えるかも知れませんね」
仮にエドワード・クラークがこのまま『ディオーネー計画』を進めると、まず初めに大統領の不興を買うのは確定的。レイモンドが唆す形で戦力を増やそうとマイクロブラックホール実験を敢行したら、大統領の執務机が壊れること不可避。更にリーナを『日本と通じたスパイ』だなんて罪を被せたら、ショットガンやらロケットランチャーを装備して参謀本部に乗り込むことが確定している……映画の主人公

みたいなことをやりそうなガタイを有しているだけに、冗談では済まないだろう。
何せ、非魔法師なのにボディビルダー並みの筋肉を有し、軍人時代は並の魔法師すら体術で圧倒したことがあるという。ファンタジーにステゴロで挑むというのは漢気があるとしか言いようがないし、同じ男性として尊敬に値する。
なお、そんな肉体を持ちつつも魔法の才能が加わって極まった結果が悠元と元継の祖父である上泉剛三という存在に他ならない。
「……それは確かに堪えるでしょうな」
総理大臣との会談を終え、リムジンに乗り込んだ悠元と元継。二人ともこのまま〝とある場所〟に向かうために同乗する形となった。乗り込んで走り出したところで、あまり言葉を発しなかった元継が問いかけてきた。
「悠元、若手会議の方は本当に良かったのか？」
「まあ、ちゃんと実行力と責任の所在が把握できる案を纏められるのなら、別に止めるつもりはない」
悠元の知人や顔見知りを除くと、本当に十師族の立場としての責務を果たしているのかという疑問に駆られてしまう。その最たる例が九島家――――正確には光宣の兄や姉達のことだが。それを含むかのように呟いた悠元の言葉に、元継は苦笑を滲ませた。
「悠元がいなければ俺や治兄貴、詩鶴、佳奈、美嘉に詩奈も普通よりは優れた程度の魔法師で終わっていただけに、あまり人のことは言えんな……だが、会議が纏まるとは到底思えん」
何せ、本来師族会議の括りに含まれる神楽坂と上泉を排除するような恰好にしたのだ。どうせ、それを画策した人物はこちらの政治的な事情も把握した上で息子に手柄を上げさせたかったのだろうと思う。
「どうせ恥を掻くのが分かり切っているのに、泣きっ面に蜂みたいなことはしないよ。ただ、今度は自分が発起人となって師族会議の若手で会議を開こうと思っているけど」
「その時点で七草と十文字の面目を潰す様なものだがな」
今度は国防軍の事情とかを完全に無視した上で〝師族会議に属す

る人間として〝招集する。これで欠席するようならば師族会議にいてもらう義理など無いと判断して除名処分も辞さない。尚、その招集をする日は十山家が行動を起こした後にする予定だ。
「そもそも、アイドル的なことは七宝がやっているのに、二番煎じはおろか七宝家に喧嘩を売る様なものだ。目立つようにアピールすることで存在感を示すという意味は分からなくもないが、政治的なパフォーマンスと取られかねない危険性を担保できるのかという問題にもなる」
「仮に詩奈を矢面に立たせるとして、七草家が全面的に〝言い出しっぺ〟の責任を負うとも思えんだけにな。最悪、父や兄貴に責任を押し付けるだろうな」
　外面がいいというのは立派な武器だが、それを無理矢理全面的に押し出したところで軋轢が生じるのは目に見えている。十師族や師補十八家が無理に表舞台に出ようとするから、そういったアイドル的な思考に走ってしまうし、自分の家に被害が及ばないならば賛同するのも無理からぬことだ。
「会議の際、国防軍に横槍を入れることは許さない。最悪防衛大臣を脅してでも押さえつける。それでも聞かない場合は……実行犯たちに病院食でも食べてもらうことにしようかと思う」
「そうなってしまうか……ところで悠元。先程の話についてだが、一体どうやって宇宙に追放させる気だ？　魔法学の研究者ならばまだしも、悠元と達也君は高校生の身分だ。国立魔法大学が単位の融通をするにしても、目立った功績無しに認めれば周囲の反発を買うことになる」
　元継の疑問は至極尤もだと思う。『カーディナル・ジョージ』の真紅郎や自分の姉、『クリムゾン・プリンス』の将輝といった面々ならばともかく、自分や達也は社会的な立場からして魔法師社会に貢献出来ている人材とは言い難い。
　仮に戦略級魔法師だと断定して騒ぎ立てれば、何故日本が隠している存在をＵＳＮＡが暴露するのかという軍事同盟の不協和音を引き起こす火種にしかならない。そんな事を言えば、原作における『トー

ラス・シルバー』の件だってこれに準じているに等しい筈なのだ。
「一つある。兄さんも知っている社会的に通じる功績を挙げた人物の名を使えば」
「……トーラス・シルバーか。だが、既にこの国において重要な存在となっているお前たちをどうやって説得する気なんだ？」
「さあ？　そんな起死回生に等しい一手があるのなら、是非お目に掛かりたいと思うよ」
　ぶっちゃければ、ＦＬＴは『第一賢人』の無責任な映像を流したメディアに対して〝威力業務妨害〟もしくは〝偽計業務妨害〟の名目で訴訟を起こすことも十二分に可能だった。それが安易に出来なかった理由は自ずと理解している。
　メディアが自らを『第三勢力』と称して特権を振り翳している以上、言論は時として人をも殺すことを自覚してもらう必要がある。尤も、真実の探求という欲を制御できていないに等しいジャーナリストに他人を尊重するという思考など皆無に等しいが。
　悠元は徐に端末を弄ると、そこに表示された結果に対して溜息を吐いた。
「どうした、悠元？　若手会議の情報でも仕入れたのか？」
「まあ、そんなところだね」
　悠元は端末を操作して、映像を仮想モニター形式で元継の前に表示した。その内容を見た元継も深い溜息を洩らした。その内容というのは、七草智一の出した案――深雪をアイドルという形で矢面に立たせる――に達也が真っ向から反発したのだ。
　ただ、切っ掛けは達也ではなく元治であった。智一が決定的な台詞を言い出しそうになったところで、元治が一言断った上で克人に会議の進行について問いかけ、その上で血縁上は義理の妹となりうる深雪を矢面に立たせる場合、七草家は全面的に責任を負えるのかという疑問を呈した。
　それを好機とみる形で達也が厳しい意見を発し、四葉家がそれに従う道理はないと明言した。達也の発言に六塚家の燈也、一色家の愛梨、七宝家の琢磨、一条家の将輝と続き、更にはオブザーバーの参加

であった光宣も懸念を示したことで智一の案は没となったようだ。
会議終了後、達也は四葉家での会合がある為に会食の参加を辞退。元治と愛梨、琢磨も家の用事があると伝えて会食の参加をキャンセルした。光宣も元治の招きに応じる形で会食の参加を丁重に断った。
「……七草智一は馬鹿なのか？　父親から何も聞かされなかったのか？　これならば、周公瑾と通じていた七草弘一の方が幾分かマシに見えてくるぞ」
「これで、どちらも四葉家に喧嘩を売ったに等しくなった。彼の娘さんたちが気の毒としか思えないけど」
「そのうちの二人は悠元が娶る相手だが」
「まあ、人柄としては信用できるから」
自分とて好き好んで喧嘩を買っているわけではないし、話し合いで済むのならばその方が掛かる労力も少なくて済む利点がある。そもそも、向こうが勝手に脅威と見て周りを巻き込んでの自爆行為なので、こちらは淡々と対処しているに過ぎない。
すると、リムジンが目的地に到着したようで、車が停止して運転手が扉を開けた。悠元と元継が降りた先は都内の高級料亭。店の中に進むと、従業員の案内で奥の一室に案内された。そこには先客がおり、悠元と元継からすれば血縁上は義理の伯父にあたる人物――元老院四大老が一人、東道青波が座っていた。
「東道殿、お待たせして申し訳ない」
「気にせずともよい。こちらも先程来たばかりだからな。流石に昼間なので酒は出ぬが」
「それで構わない」
本来ならば四大老の関係で青波が格上の立場になるが、三人とも家の当主であるだけでなく、悠元は千姫から、元継は剛三から言葉遣いに関する申し渡しを受けており、護人の前ではいくら青波と言えども偉ぶる事など出来ない。そこには東道家と樫和家が過去に起こした上泉家への〝謀反〟も大いに関係しているわけだが。
青波が席に座るような素振りを見せると、悠元と元継は彼と向き合う形で腰を下ろした。

「今日は確か若手で集まる会議と聞いていたが、そちらは良かったのか？」
「お構いなく。彼らからまともな意見が出れば、師族会議に諮ることも吝かではない。尤も、俗物的な意見が潰れた後、特に画期的な対策は出てこなかったようだが」
悠元の言葉を聞き、その案の内容を察したのか青波が一つ溜息を吐いた。その上で、青波は元継に視線を向けた。
「上泉殿、其方はどう思っておる？」
「無理に能動的手段を取ったところで、魔法に対する恐怖を煽るだけだと認識している。元々、呪殺などの後ろめたい要素を技術として取り込んだ結果といえばそれまでだが、技術の民生利用は大方順調に進んでいる」
家の確執は元々剛三と青波の父親によるもので、家督を継いだとはいえ元継自身はその確執を後世に遺すつもりなどない。尤も、術者の力量を高める事よりも術者を統べることに注力して秩序の上限を下げてしまった樫和と東道に思うところはあるが、それを口に出すことは無かった。
「東道殿。この先、我々元老院に属する人間にも厳しい理が求められる。この先の秩序を守ろうとするのならば、最悪自らの手を汚してでも妖に対処せねばならない。命を賭ける覚悟すら持てずに今まで通り誰かを矢面にするようならば、その者たちを私自ら歴史から消す。そのことを次代の東道にもしかと聞かせよ」
「……しかと心得た」
秩序を守る為に力を忌避することなど、愚かとしか言いようがない。過ぎた力は身を亡ぼすことになるが、力を無用なものと捨て去ることも相手に付け入る隙を与えることになる。
己を知り、相手を知り、相手に攻められない為の力を保持することで自国を守護する。その後ろ盾と〝最後の一手〟を担うのが他ならぬ元老院の役目だ。それを担わずにただ座っているだけの存在など不要、という悠元の言葉に対し、青波は深く頭を下げたのだった。

逆鱗に触れる企み、意趣返しの一手

十師族および師補十八家の若手による会議にブリザードが吹き荒れている頃、そんなことを露も知らない詩奈は自主トレの為に第三研を訪れていた。

第三研――――正式名称：魔法技能師開発第三研究所は、十箇所あった研究所の内、元の看板のまま稼働している5つの研究所（その反例は第一研の跡地に建てられた金沢魔法理学研究所と第九研の後継となった第九種魔法研究所が該当する）の一つであり、最も活発に稼働している。

その理由は第三研の研究テーマが『マルチ・キャスト』――――魔法の同時行使・連続発動に関する技術の研究という点にあった。三矢家は魔法保持技術『スピードローダー』を生み出したわけだが、その三矢家の〝とある人物〟が携わったことにより、個々の魔法師に特化した技術へと変貌した。

魔法を複数発動出来るという点は十師族以外の魔法師にも有用な技術であり、その技術の一部は第十研（現在は稼働を停止している）出身の人間に継承されている。そういった事情の帰結として、多くの軍人魔法師が出入りしている。

末っ子とはいえ、三矢家の人間である詩奈は見た目に反して戦闘力が高い。耳の原因不明とされたハンデも同様の悩みを有していたすぐ上の兄によって解消したが、詩奈本人としては軍人魔法師の道を進む気など無かった。その意思を確認した元は、正直娘が軍人にならないことを喜んだ反面、心のどこかで詩奈のすぐ上の兄のように活躍してほしいという我儘も抱いていた。

加えて、耳のハンデを克服したことで母の祖父の実家にも通うようになり、武術のセンスだけで言えばすぐ上の兄に匹敵するだけのスペックを有している。

そんな詩奈だが、第三研に通うのは『対魔法師の実戦経験を積むという意味でも有用だ』という兄や姉たちの助言を受けてのものだ。第三研に通っている軍人とは知り合いが多く、同じ師族二十八家の彼女

とは知り合いの一人であった。
「あ、つかささん」
「あら、詩奈ちゃん。今日もトレーニングですか？」
国防陸軍情報部所属、遠山つかさ曹長。ここでは「遠山」を名乗っているが、詩奈は早い段階から彼女が「十山」の人間であることを知っていた。
「そういえば、侍郎君は一緒じゃないんですね」
「侍郎君は千葉家の道場に行きました」
「千葉家に？」
「はい。すぐ上の兄と千葉家の方が同級生ですから」
悠元とエリカが同じ学年の生徒であることなど調べれば分かることなので、詩奈も別段隠そうとは思わなかった。正確には二人が幼馴染であることを詩奈も知っているが、ここには色々な事情が入っているために詩奈も空気を読む様な発言に止めた。
すると、つかさが誠実そうな表情を詩奈に向けた。
「侍郎君の資質なら、きっと為になることでしょうね。そういえば、魔法科高校はどうですか？」
「まだ1ヶ月も経っていませんので、今のところは何とも……といった感じです」
「生徒会長があの四葉家の方なのでしょう？」
「（……？）はい。でも、大丈夫です。最初は綺麗な方だと思って緊張しましたけど、すぐ上の兄の婚約者でもありますから、怖い人ではないと理解しています」
つかさの尋ね方にどこか悪意の様なものを覚えたが、詩奈は〝話せる範疇で〟言葉を選びつつも深雪に対する評価を述べた。すると、つかさは詩奈に対してこう切り出した。
「なら、私の仕事を手伝ってもらえませんか？」
「つかささんのって……情報部のお仕事ですよね？」
「ええ。実は、要人救出の人質役を探しているのです」
「……それって、情報部の仕事なのでしょうか？」
詩奈が疑問を呈するのは無理からぬことだ。国防軍の実働部隊や

警察などの治安維持組織が対テロリストや立てこもり犯から人質を救助するという事態は勉強しているが、つかさから諜報機関のようなことしか聞かされていないために、どうにも結びつかないのだ。
そんな詩奈の悩みを知ってか知らずか、つかさは綺麗な言葉を並べて詩奈を説得するように述べた。
「私の担当は防諜が主な任務ですから。情報流出を防ぐために、要人救出をすることもありますよ」
「そうなんですか……少し、考えさせてもらってもいいですか？」
「構いませんよ。では、詳しいことは決心がついてからということで」
「えーっ、今教えてくれないんですか？」
「一応、決まりですから」
こう見えて詩奈は好奇心が旺盛だ。悠元がＣＡＤの製作を家でしなくなったのは、詩奈の好奇心が主な要因である。
そんな詩奈が参加することに前向きな様子を見つつ、つかさは同じ一高の生徒である彼女が人質となれば、「彼」も無視できないだろうと思い込んでいた。
「彼」をテストするいい駒が手に入った。
つかさは優し気な笑顔の下で、妹分の様な彼女を見ながらそのように考えていた……だが、彼女はここで一つの誤算を犯していたということを知るのは、彼女の計画が実行に移された後になってからであった。

◇　◇　◇

その頃、彼女たちの話題として挙げられた対象こと矢車侍郎は、千葉家道場の畳の上で大の字になっていた。端的に言えば〝叩きのめされた〟と評するのが一番だろう。その相手はというと、丁度非番であったエリカの兄である寿和だった。
「おーい、生きてるか？」
「は、はい……これでも、鍛えてはいるんですが……」
「ま、歳を食った数だけの場数が違うからな。お前さんはまだ伸びるんだから、そう急くこともない」
「……ええ、心得ています」

連れてきたのはエリカだが、そのエリカは一緒に来ていたレオを引き摺って離れの方に向かった。剣術の道場ということもあってか、男勝りの性格をしていた妹が〝女〟らしさを見せていることに兄として何処か嬉しい気持ちを抱いていた。
「警視……何か悪いものでも食べましたか？　それとも、どこか身体を悪くされたんですか？」
「稲垣君？　自覚はしてるけど、そうやって口に出されると結構心に刺さるから止めてくれ」
千葉家の家出騒動は結局当主が折れる形で決着し、寿和と修次が家に戻った。だが、末子のエリカは千葉家長女との折り合いもあってか、道場に顔を出すが本家の屋敷には決して足を踏み入れない、と固辞している。
一応未成年かつ未婚の娘であるため、戸籍自体も千葉家に残ったままだが、レオが暮らしている部屋に転がり込んでいる生活が変わる事など無く、このままなし崩し的に婚姻したとしても不思議ではない……というのが寿和から見た率直な見解であった。
レオとエリカの婚約関係も認められることとなるが、魔法師としての立場が弱い西城家という問題があった。だが、これを解決したのは西城家の歴史だ。
ルーツを辿ると、元々三条西家の傍流として西条（さいじょう）を名乗っていた一族から分岐した結果だと判明した。ここら辺の文献は神楽坂家に遺っていた当時の人間の手記によるものと家系図の存在が大きかった。
レオの曽祖父にあたる人物が祖父ことゲオルグ・オストブルグを婿に迎える際の条件を素直に呑んだのは、遠い昔の名誉を復活させたいという祖先の願いを聞き伝えていた……という話はレオ自身が祖母（ゲオルグの妻）から聞いた話らしい。
閑話休題。
「あの、ひょっとして寿和さんは素行に問題がおありなのでしょうか？」
「あるにはありますね。何せ、警察官なのにこの体たらくですよ。

やっと嫁が出来たというのに、その対応で四苦八苦していますし」
「あー、稲垣君？」
「遊び人の気質なのに、女性とまともに付き合ったことがないんですよ、この人は。せめて弟さんを見習えと常々言っておりますから」
「……あ、あはは」
　自分は別に警視のお守りを任されているわけではない、とは口に出さなかったものの、そんなことを言いたげであった稲垣の台詞に、侍郎は最早苦笑しか出てこなかった。何せ、侍郎自身も現在進行形で女性関係の問題を抱えている最中であったからだ。
　結局、限界まで扱かれた侍郎が疲労困憊の状態で帰った先に待っていたのは、拗ねた表情を浮かべた詩奈であるという事実を知るのは……当人たちと二人の両親に屋敷の使用人だけであった。

◇　◇　◇

　悠元が会議を終えて司波家に帰宅したのは午後５時。達也から事前にメールを貰っており、向こうが帰宅するのは午後８時頃になるということだったので、何か作ろうかと冷蔵庫を開けると、そこには既に準備された夕食がラップに掛けられていた。
「……別にそこまでせんでもいいのに」
　親切の押し売りみたいなもののように思いつつ、これを作ったであろう深雪の気持ちを無碍にしないように取り出したところで、リビングの方からヴィジホンの着信音が鳴った。
　長いこと居候している為か、着信音を聞いただけですぐに分かってしまう訳だが、よもや〝四葉本家〟からの電話には少し驚きもあった。
（今日は確か、達也と深雪に水波が本家に出向いていた筈だ。達也に用があるのなら、真夜さんとて息子がいない時に電話を掛けるとは思えない。となると……連絡の目的は自分か）
　冷蔵庫の扉を閉め、食事の皿を台所に置いた上で通話のパネルを押すと、部屋の明かりが暗くなってモニターには四葉家当主・四葉真夜の姿が映った訳だが、いつものようなドレス姿ではなく、カジュアルな私服姿が出た時には思わず目を見開いてしまった。

「……こんばんは、真夜さん。いつものようなドレス姿ではなかったので驚きました」
『ふふ、そうですか。今日の会合もこの姿で出たら、たっくんだけでなく次世代の四葉を担う皆さんまで私の御乱心を疑ったのですよ。深雪さんまで『叔母様、一体どうなされたのですか』って言っちゃったのです。酷いと思いませんか？』
「普段なされない恰好をしたというのは、時として〝心変わり〟を疑ってしまいますので、彼らの反応は至極真っ当なものでしょう」
　まるで子供の様な拗ね方をしている人物が『夜の女王』とも噂される人物なのだと知ったら、周囲は一体どのような反応を示すのか気になるところではあるが……それはともかくとして、悠元のほうから本題を切り出した。
「して、真夜さん。態々達也たちがいない時を見計らって連絡をしたということは、自分に何か内密のご相談でしょうか？」
『そうそう、悠元さんにご相談がありまして。暗号の強度は大丈夫かしら？』
「少し待ってください……ええ、大丈夫です。それで、本題をお願いできますか？」
　この通信は『精霊の鏡（カーヴァンクル）』を用いているが、その上に悠元が『五芒星（ペンタゴン）』を被せることで二重の防御態勢を確立してから、真夜に通信をした本題を切り出させた。
　すると、真夜が話し始めたのは四葉本家での話し合いの内容で、スポンサーである神楽坂家当主の悠元にも伝えた方が良いという判断からくるものだった。
「巳焼島（みやきじま）に新たな実験施設をですか。旧第四研をそのままにするのも問題がありますし、元々四葉家所有の島なので異存はありませんが……あそこには特殊な囚人が収監されていましたね」
『無論、そのあたりは既に話し合いがついております』
　巳焼島は三宅島の東５０キロの海上に存在する島で、２１世紀初頭の火山活動で形成された島であることから『二十一世紀新島』の名で呼ばれることがある。表向きは都内の不動産会社の所有だが、間に数

段階を挟んで実際の所有者は四葉家である。
　現在は犯罪魔法師を収監する監獄が置かれているだけで、大規模の開発はされてない。かつて国防軍の基地はあったが、当時活発化した火山活動によって放棄された。危険な犯罪魔法師については、その一部を上泉家と神楽坂家が引き受けており、現在は真っ当な魔法師として〝更生〟させている最中だ。
『そういえば、たっくんから話は聞きました。悠元さんが旧第四研の実験設備に関するアップデートを担ってくれると』
「こちらの得意分野ですし、旧第四研の研究は現代魔法に欠けているものを埋める意味でも研究の継続は非常に価値がある、と判断した次第です」
　旧第四研の実験設備は大戦中から使っているものが多く、適宜補修などを繰り返してはいるが、基本性能が時代遅れとなっているものが多い。とはいえ、現在の現代魔法研究ではカバーしきれない部分を担っている旧第四研の設備をそのまま破棄すれば、継続されている研究にも不都合が出るのは確かだ。
『この分だと、深雪さんが帰ってきたらお礼という形で襲ってきそうですね』
「嬉しそうに言わないでください……いや、まあ、好かれていることはありがたいことですが」
　なので、ここに関してはハードウェアの部分で世界トップクラスの技巧を有する悠元が一肌脱ぐことにした。具体的には、研究設備を『天陽照覧』で当時の新品状態に戻しただけでなく、現行の部品規格に合うようにＦＬＴで設備を再設計することとした。全てを一新するのではなく、段階的なアップデートという形で旧第四研の研究設備を最新鋭の状態にする計画だ。これは、悠元がＦＬＴへ配属される際に贈与された株式の〝返礼〟という形とした。
　その話が終わったところで、次は若手会議の内容に関するものだった。
『会議の内容は既にご存じだと思いますが、たっくんから深雪さんを神輿にするような意見が七草から挙げられたが厳しく反論して取り

下げさせた、と聞きました。三矢・一条・六塚・一色・七宝に加えて、閣下のお孫さんである光宣君もたっくんの意見に賛同してくれたわ』
「……日和見というか、事なかれ主義の家が多いとしか思えませんね。まあ、三矢の兄には発破を掛けたお陰もあるかも知れませんが」
アイドルというメリットとそれに伴うリスクの天秤を提唱者の七草家が許容したかはともかくとして、師族会議で四葉家に貶められた逆襲という形で深雪を神輿として担ぎ出そうとしたのだろう。尤も、七草家がこれを会議に出した時点で議長権限で却下させるつもりでいたが、杞憂に終わって何よりだと思う。
『そういえば、神楽坂家と上泉家の方が出席しなかったことについては、七草殿が「欠席したいという連絡を受けていた」という説明をされていたそうです』
「そうですか……関係者には何も説明した覚えなど無いのですがね。どうせ、今月末には沖縄に飛ぶ以上、七草が何かしたら丸分かりになりますが」
正直に言えば、これも悠元の策の一つであった。
テロリスト拘束を介する形で師族会議の体制を刷新したが、当然文句が出ないとは限らない。そもそもの話、現行のシステムではどこかの十師族の一つが機能不全となっても、この代わりを担えるだけの勢力が存在しない。
だからこそ護人が前面に立って体制の刷新を行った。
魔法師を育成するにも受け皿が少なすぎるのに、その進学・就職先は多いという砂時計方式のような有様。その為の対策はいくつか提示しているわけだが、それでもすべての魔法資質保有者をフォローできているわけではない。
他の十師族や師補十八家で掬い上げてくれるのならば別に構わないが、即戦力と成り得る人材を拾い上げることばかりに熱心で、魔法協会の掲げる〝全ての魔法師の保護〟には至っていないのが現状。育成のコストを考えれば妥当な判断だが、若手会議でもそういったところに関する具体的な意見が出なかったのは問題だと思う。
「自分が若造という自覚は当然あります。ですが即戦力となる魔法師

のみに目を向けてばかりというのが、そもそも怠慢であると考えています。篩から落とされた魔法資質保有者を救ってこそ、魔法師社会を統率する組織としての矜持に繋がると自分は思うのですが」
『これは四葉家（わたしども）にとっても耳の痛いお話ですね。何かお手伝いできることはありまして？』
「そうですね……今回『喧嘩別れ』のような形で終わった若手会議ですが、今度は神楽坂家と上泉家、それと三矢家や四葉家の四者で呼びかけようと思います」
　表向きは、政府との会議の為に出席できなかったためと、若手会議の内容が余りにも酷かったために〝叱責〟するためのもの。聞けば、大筋で関わっていない筈の顧傑の事件を智一が自慢気に語っていたこともそうだが、それを叱責しなかった克人に対しても厳しい態度で臨むつもりだ。
　基本的な条件は十文字家の呼びかけに準ずるものとするが、会議の場所は神坂グループが所有する箱根のリゾートホテルの会議室を借り切った上で行う。交通費や宿泊費などは全て神楽坂家で負担することも明記する。
「そこに合わせてのご相談なのですが、四葉殿には共同提唱者として名をお貸し頂きたいのです」
『ふふ、構いません。先の会議で舐められた仕返しを其方で考えてくださるのですから、是非協力させてください』
　今度の会議は基本的に欠席者を認めない。それが国防軍関連であっても、防衛大学校並びに国防軍、果ては防衛大臣に対して師族会議議長としての非難声明を敢行する。それを軽んじるつもりならば、水面下の報復も辞さない。
　師族二十八家の名を持つということは、相応の責任や責務を負うのと同義なのだから。

蜘蛛の糸にしがみ付く者の構図

『ちなみにですが、四葉(こちら)の呼び掛け人はたっくんじゃなくてよかったのでしょうか？』

「達也の名を出されて忌避する人間が出ないとも限りませんので。そう考えると内外に敵を作りがちなんですよ、達也(かれ)は」

原作の行動原理が深雪を第一に鑑みた結果という側面もあるわけだが、軍事面も経験している彼の厳しさを理解できない輩が今の師族二十八家に多すぎるのも問題である、と思う。無駄な事を言わずに自覚させるという意味では理に適っているが、悲しきことにそこまで深読みできない輩が多いのも事実である。

「神楽坂家は自分が、上泉家が元継兄さんの名で呼び掛ける以上、当主クラスかそれに準じるとしても今の達也はまだ魔法師社会で確固たる地位を確立しているには程遠い状況です……一応、真夜さんの名代ということで達也を会議の提唱者に含めるのはアリかも知れません」

『たっくんが次期当主だということを正月に公表して、ちゃんと挨拶文も送っているのにかしら？』

「あれは形式上師族二十八家と百家の当主に向けて送られたものですので、会議の参加者がきちんと把握していたとは思えません……残念な事ではありますが」

内密に入手した若手会議の議事録からして、達也を『四葉殿』と呼称していたことは把握している。だが、彼の実績を挙げるとしてもメディアが入る九校戦と昨春の『恒星炉』実証実験ぐらいしかない。それ以外の国防軍関連や四葉家の依頼は全て裏側のことであるため、迂闊に公表できない事情が含まれる。

達也が四葉家縁者だという事実は知っていても、彼が成した功績は魔法師社会でも水面下に潜ったまま。『トーラス・シルバー』の件は遅くても高校卒業後に公表すると既に決めている（この件はどうせ早まるのが目に見えている）。

「その挨拶について、婚約者の件も含めて信憑性が取れない……というのが正直な本音かもしれません。自分の場合は奇しくも『クリムゾ

ン・プリンス』という目立った広告塔の存在がありましたから」
『そう言われると納得できますね。分かりました、たっくんには追々話しておきますので』
「助かります」
　話を戻して、今度は先日達也が関わった宗谷海峡での〝魔法合戦〟についてであった。当然、話題の中心となるのはベゾブラゾフの戦略級魔法『トゥマーン・ボンバ』である。
『悠元さんなら、どう無力化されますか？』
「……一番手っ取り早いのは、気流操作で対象範囲の水蒸気の密度を低減させることでしょうが、その関連なら戦略級魔法『オゾンサークル』で範囲内の酸素を無理矢理オゾンに再結合させて酸水素ガスの比率を偏らせるのが理に適っているかと」
　無効化の方法なら幾つかある。
　例えば、魔法発動に必要なＣＡＤなどの演算装置を完全に無力化して『トゥマーン・ボンバ』の威力そのものを下げる方法。範囲内の空気圧を極端に下げることで酸水素ガスの結合または分解に必要なエネルギーを跳ね上げる方法もある。
　問題なのは、『トゥマーン・ボンバ』が発動するコンマ数秒の魔法に対処できる魔法師がかなり限定されるという点だ。
『あら、悠元さんは「オゾンサークル」を使えるのかしら？』
「実は、以前オーストラリアへ旅行した際にオーストラリア軍の魔法師に襲撃を受けまして。その際に『オゾンサークル』の魔法データを得ましたので。てっきり風間中佐からその辺の話を聞いているものと思っておりましたが」
『成程、中佐殿もご存じと……ちょっぴり悔しいですわね』
「意味が分かりません」
　もっと極端な方法を取るとするのならば、ベゾブラゾフを日本に引きずり出してボコボコにする方法だが、これは『鏡の扉（ミラーゲート）』を明るみにしてしまうリスクがあるので、こればかりは最終手段として残しておく。そうしないように新型戦略級魔法『太極八卦陣（コスモ・ノヴァ）』を完成させたのだから。

「その絡みであまり公然と語られていないことですが、８年前のベーリング海で観測された大規模の魔法発動兆候の片方はベゾブラゾフの『トゥマーン・ボンバ』によるものです。彼はその戦いで当時の〝シリウス〟――――ウィリアム・シリウスをはじめとしたスターズの魔法師を殺しています」

『成程。当時の〝シリウス〟すら葬ったとなれば、こちらとしても無視はできませんね』

「今後、彼がこの国の戦略級魔法を物理的に排除しようと動くことも鑑みて自分が魔法提供をしています。水波には防御術式、深雪には戦略級魔法を渡します」

今まで積極的な魔法提供を避けてきたが、達也自身が狙われるリスクは昨年末の件で跳ね上がったとみていい。それに、今後『恒星炉』の件を鑑みたとしても、達也自身がこれまで以上に強くなることは決して悪いことではないし、その傍にいることになる深雪と水波にも強くなってもらわなければならない。

『たっくんには何もないのかしら？』

「達也には既に二つの魔法を渡しています。一つは魔法根幹式分解魔法『魔導解散（キャスト・ディスパージョン）』。もう一つは戦略級魔法『瞬速極散（ソニック・アクセラレーション）』」

後者の魔法は特殊で、分類上は〝系統外・質量エネルギー分解反転魔法〟――――達也の戦略級魔法『質量爆散（マテリアル・バースト）』によって生じるエネルギーを全て反転させることで、対象範囲に存在する物体を全て圧縮・分解するという最凶最悪の戦略級魔法。

この魔法の最大の特徴は、これまで『マテリアル・バースト』では不可能だった〝対象物単位での質量分解〟を『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』と同じ要領で使用できるという点にある。

アインシュタイン方程式によって生じる質量エネルギーを全て〝鏡合わせの世界〟に送り返すことで現実世界における余波を一切生じさせない仕組みであり、この記述は『夢想天成』を発動した時に得た経験から生み出した技術。

この世界において悠元しか知らない魔法エネルギーと物理エネルギーの制御。それが明るみになると魔法師育成にも革命を齎しかね

ないため、秘匿するつもりである。一応達也にも魔法をインストールした時点で説明したが、『お前は本物の埒外だな』と言われた。解せぬ。
『そうでしたの。これはますます深雪さんに襲われますね』
「孫については大学卒業まで待ってください。自分にも社会的地位というものが必要ですから」
『急かしませんよ。何でしたら、姉さんに仕込んでも構いませんので』
「……」
婚約者ならばまだしも、使用人兼愛人という存在を聞いたときに困惑しかなかった。深夜に始まり、怜美と水波がその一員となっている。
本家では深夜のお世話になりっぱなしだが、向こうからしたら『こんなオバサン相手に積極的ね』と深夜が言う始末。いやまあ、確かに実年齢を考えればそうなのだが、肉体年齢が二十代なだけに女性としての魅力が極めて高い。
その反動で深雪の積極性に拍車が掛かり、二人きりの時は「今日は如何なさいますか、ご主人様」と意識の切り替えが素早い。結局、魅力に勝てずに押し倒して熱い夜を過ごしている形となっているわけだが。
閑話休題。
「それで真夜さん。ここまで話したということは、こちらが進めている計画を葉山さんあたりから聞き及んでいることかと思います」
『ええ、その通りです。現状は巳焼島を候補地として見繕っていますが、如何でしょう？』
「問題はないかと思います」
現状の『ＥＳＣＡＰＥＳ計画』の進捗度合いは、３年前（西暦２０９４年）に神楽坂家系列の神坂グループと上泉家系列の白河（しらかわ）グループによる合弁会社――――南盾島の『恒星炉』による事業を担う株式会社ステラデバイスステクノロジー（通称：ＳＤＴＣ）が発足。悠元は理事長職、元継が副理事長を務める。
元々は第三次大戦で所在者不明となっている不動産管理（悠元が剛

三の代わりとして受け取る羽目となった国外の土地管理も含む）を目的として設立。南盾島の国防海軍研究所の撤退に伴い、それに代わる国防軍の防衛基地新設に伴う資材調達などを担う民間業者として一新した。小笠原諸島でも随一のショッピングモール経営も抱き合わせの形で担当することとなった。加えて、『恒星炉』の事業を実用化するための根拠という形で東京に本社ビルを置くこととなった。

更に、国立魔法医療大学と付属校の新設にも資金提供という形で関与している。

何故、不動産を専門に取り扱う合弁会社が核融合発電やサービス業、魔法教育分野にまで手を広げているのか、と思うだろう。何せ、この株式会社の設立理由は〝魔法資質保有者の就職斡旋〟――――つまるところの職業安定所（ハローワーク）を民間レベルで行うというのが起点であった。とはいえ、表立って魔法関連企業と名乗るのは問題があるし、事務部分で非魔法師を採用することもあって、名目上は不動産会社として発足した。

人口比で見れば、数が少ない魔法資質保有者に合致する働き先というのもかなり厳しい。非魔法師の分野では人材不足であっても魔法師にとっては競争率が高くなり、結局は非魔法師と変わらない職業に就くケースも珍しくない。

なので、働き口を斡旋しつつも雇用先を生み出すという意味で『恒星炉』の事業化を水面下で進めた。現状は工業用・燃料電池用高濃度水素ガスの生産と、その余剰分を用いて水素発電ならびに燃料電池発電がメインだが、将来的には核融合発電による電力供給を視野に入れている。

株式会社ステラデバイステクノロジーが親会社となり、『恒星炉』発電および水素・燃料電池発電は名義上の子会社として東京臨海電力（とうきょうりんかいでんりょく）株式会社が、水素ガスに関する生産部門は株式会社ステラウォーターが子会社として設置される。本土から離れての離島勤務となる為、福利厚生はかなり厚遇され、離島手当も含めれば一月あたりの収入は本土よりも割高になるのは致し方のないことだ。

魔法技術などによる移動手段も考慮に入れているが、本土と南盾島

間を結ぶ魔法技術と科学技術を融合させた新世代型のＶＴＯＬが既に試験運用されている。
　最終的にはメガフロートを建設して、２４時間運用可能な南東京海上国際空港の建設にも着手している。滑走路は３０００メートルクラスが２本となる予定で、環境アセスメントに十分配慮したものとなっている。これは、台風などの自然災害によって本土の空港に発着陸出来ない場合、民間機の避難口としての役割も考慮されているためだ。
「巳焼島に設置するプラントの所有権や会社設立の際は声を掛けて頂ければ政府との交渉をお引き受けします。それで真夜さん、これはまだ秘匿されていることなのですが、実は内密に赤道より南側主要国の国家元首へお声を掛けて、国際魔法協会に代わる魔法資質保有者の権利保全を目的とした国際組織の設立を水面下で進めています」
『それはまた……三矢殿には既に？』
「現当主の父にだけ話しております。次期当主の兄には事の詳細を詰める段階で話すつもりです」
　国際魔法協会は魔法師の保護を謳いつつも主題が〝核兵器の抑止〟と軍事的な目的が強いため、政府に対しても人道的な積極的介入が出来ていない。魔法技術の民生利用を進める意味でも民間レベルの原子力に関する制限をしっかりと定義し、人口の大多数を占める非魔法師の魔法に対する忌避感を和らげる必要があった。
　イギリス、ドイツ、新ソ連、ＵＳＮＡと、欧米諸国やその近隣国と関係国に妨害を受けた身として、悠元は意図的に北半球の殆どの国家を組織構成の初期選定対象から除外した。そして、赤道直下より南側に位置する構成国家を中心として、その国家元首に対して日本が主導する形で国際的な非政府組織を設立する方向で段取りを進めている。
「このことは達也や深雪にも話しておりません。信用していないわけではありませんが、様子の変化に気付いて目聡く嗅ぎまわる人間がいますので、情報の出所はかなり制限しているのです」
『それは仕方がありませんわね。そうなりますと、組織の提唱者には悠元さんが立たれるのかしら？』

「ええ。どうせ祖父や母上のことからして目立たない保証なんて皆無ですし、何でしたら師族会議議長として名乗れば済みますから」
日本、台湾、東南アジア同盟、インド・ペルシア連邦、南アメリカ連邦共和国、アラブ同盟、アフリカ連邦で既に締結されている大洋南部経済連携協定はその組織設立の為の〝地均し〟に他ならない。かつてのヨーロッパ連合（ＥＵ）も複数の経済協定をベースとして設立した経緯があり、それに倣った形だ。
日本の代表者として悠元が出ることになるのは避けられない。何せ、現師族会議議長を務める身であり、国家非公認戦略級魔法師の一人でもあるし、護人・神楽坂家当主でもある。今やこの国において重責を担う立場となったからこそ、かつての達也のように〝逃げる〟という選択肢は取れない。
そして、暫定的に『ＥＳＣＡＰＥＳ』という名を持つ恒星炉の事業スキームだが、魔法師の〝兵器の宿命からの解放〟という意味合いを持つものの、言葉だけを直訳すると『逃げる』という風にも受け取られてしまう。
なので、悠元は南盾島の恒星炉事業立ち上げに際して別の名称を用いている。
――Ｓｔｅｌｌａｒ－ｇｅｎｅｒａｔｏｒ ｓｙｓｔｅｍ
――Ｔｏｔａｌｉｚｅ ｍａｇｉｃａｌ ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ
――Ｅｃｏｎｏｍｉｃ ａｎｄ ｅｎｅｒｇｙ ｌｉｎｅ
――Ｐｒｏｊｅｃｔ
直訳は『恒星炉システムに関する総合的魔法技術による経済活動およびエネルギーライン計画』。恒星炉事業を魔法資質保有者が普遍的な基本的人権を有する〝一歩（ステップ）〟とする意味を込めて、『ＳＴＥＰ計画』を立ち上げた。
『現状、魔法協会でもカバーしきれていないのは事実でしょうけれど、それならば師族会議議長として提言をされても宜しかったのではなくて？』
「実効性の問題もありますし、非公式の約定があっても魔法協会では

政府や軍の魔法師に対する横暴的な対応を咎めるための法的根拠が存在しません。それに、九校戦の問題で多忙を極めるところに騒ぎを持ち込んで機能不全は避けたいですから」

言葉にはしなかったが、魔法協会に対する不信感があったのは事実だ。一昨年の『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』と、昨年のパラサイドールの一件（表向きは軍事色の強い競技変更）に対し、主催者側である魔法協会の後始末はどうにも煮え切らない部分が多かった。

こんな状態ならば、今年一年ぐらいは九校戦を中止にしても不都合は出ないだろう。選手の不完全燃焼を回避するための対案は必要かもしれない。こうやって考えていくと、これまでの日本の魔法師社会が九島烈という存在にどれだけ依存していたのかが如実に分かる。

九島烈を失ってからでは遅すぎる。ただでさえ９０歳の大台が見えている御仁に甘えすぎていた現実――――師族二十八家はその事実と本気で向き合う時が来たのだ。

「九島閣下はもう十分に働かれ、功罪はあれどこの国の魔法師社会に貢献したのは事実です。我々だけでなく、政府や軍、魔法協会や政財界も含めて、もう彼という存在と四葉の『触れてはならない者たち（アンタッチャブル）』に甘える時間はとうに終わりました。数字（ナンバー）を持つ意味を、師族二十八家だけでなく百家も改めて考える時が来ています」

『……そう、ですね。本当に耳が痛くなるお話です』

烈だけに限った話ではない。上泉剛三とその妻である奏姫、神楽坂千姫、そして３０年以上前に国家へ復讐を成した四葉家先々代当主・四葉元造。生死の所在は違えど、彼らは立派にこの国を守ってきた。

今度は、今を生きている現当主世代とその先の世代が彼らが守ってきたものを継ぎ、この国に降り掛かるであろう災厄を退ける。その為にやるべきことは数多くあり、少数の人間で処理するにも無理難題となってしまう。

過去に縋り続ければ、それは緩やかな衰退を齎すことに繋がる。そうした行動の結果に何が起きたのかは過去の歴史が証明しているだけに、魔法師社会の中枢に近い立場を担う人間の役割は必然と大きくなる。

無論、寝言や泣き言などは許されない。恩恵を受けている対価を示さねば、裏での影響力や便宜などにも大きく影響してくる。この点だけで言えば、七草家は自らの地位を高めつつも何とか魔法師にとっての利益となるよう模索していた。

その対価として〝四葉降ろし〟というカードを用いていたことは一番問題だが。結局は七草弘一も四葉の存在に甘えていた一人であった、というべきだろう。

お前に相応しい結末（ソイル）は決まった

真夜との通話を終えた後、悠元は夕食をレンジで温めて食べ、使った食器を洗浄機にセットしてから自室で着替えを取ってから、そのまま浴室に向かった。達也たちは時間が時間なので今日は外食してから戻るらしい、と事前にメールを貰っていた。

「ふう……」

悠元は湯船に浸かって寛いでいた。いつもは聴覚制御を行うことで日常生活にも支障を来たすことはないが、こういう時は聴覚制御を切った状態で鋭敏な感覚を受けることで、自身の力を鍛える一助としていた。

いくら自身に備わった能力と言えども、使わなければ何の意味も持たない。悠元は自分にそう言い聞かせるように聴覚制御と向き合い、それを制御する術を会得した。身体能力に関する自己完結型魔法は現代魔法の分野において未成熟であり、その突破口となるのはパラサイト――霊子情報体に他ならない。

すると、鋭敏な『耳』の感覚で司波家に帰ってきた三人――達也、深雪、水波の存在を感じ取った。テーブルには書き置きを残しているので、それだけで事情を察してくれるだろう。悠元は三人が無事に帰ってきたということで一息吐いた。

だが、そんな彼の安息は一目散と言わんばかりに脱衣所へ駆け出す深雪の存在を感じ取った時点で終わりを告げたのだった。

◇　◇　◇

二十八家の若手を集めた会議の翌日、三矢家は厄介な客を迎えていた。

その客の名は、十山つかさ。国防陸軍情報部の女性士官で、軍名簿には『遠山つかさ』の名で登録されている。対外的に『遠山』を名乗っているのではなく、本名として届け出されている。

本来ならば就役上のルール違反以前の犯罪行為と咎められるべき案件だが、そのことを公に咎める者はいない。十山の名を隠して軍務に就くのは権力者の意向と軍の方針による部分が大きい。

市民にはその存在を知られず、政府要人の為にいざという時動ける状態にしておくことが、権力者によって求められている。

一方、三矢家は第三研の管理・運営という十師族としての仕事の他に、兵器ブローカーという裏の仕事をしている。魔法師としてではなく武器商人として世界の暗部に繋がる、という裏の顔を有する。それ故に、三矢家の人間は政府の暗黙の了解で外国勢力と交渉があり、密かに国外へ出かけることも少なくない。悠元が剛三に連れられても情報部以外の干渉を受けなかったのは、この部分が大きく影響している。

単に情報のみならず、時として外国の武装勢力へ兵器を供給し、日本政府にとって望ましい軍事行動を促す工作窓口としても機能している。

三矢家と国防軍は、ギブ・アンド・テイクという対等の関係ではなく、寧ろ軍の側が得ている利益が大きい。それでも、国防軍の共犯者という事実を以て、三矢家は軍の意向を斟酌しなければならない立場にあった。

つかさは同じ二十八家の人間だ。十山家は十師族に選ばれたことがない（役割上選ばれることがない、とも言うが）から、十山家自体の序列は三矢家よりも下だ。しかし、国防軍の中枢と深くつながっているつかさを三矢家は疎かに扱うことが出来ない。それどころか、多少の無理を聞き遂げなければならないのが、三矢家と国防軍とつかさの関係であった。詩奈とつかさが顔見知りというのは、この関係の副産物でもある。

だが、その関係を壊したのは三矢家三男――――現在師族会議議長兼神楽坂家当主となった神楽坂悠元である。

彼は三矢家の意向という形で国防陸軍兵器開発部の魔法技術を用いた軍用装備の開発・解析を担当していたが、５年前の沖縄海戦で統合幕僚会議の要請に基づき国家非公認戦略級魔法師として参戦。その戦いの後、新たに設立された第１０１旅団独立魔装大隊の特務士官として配属された。

その事実を知った元老院四大老の一人にして悠元の義伯父にあた

る東道青波が三矢と十山の関係性を壊すべく、三矢家の家業に対する表向きの理由を与えた。それを快く思わなかった十山家だったが、愚かにも同じ四大老である上泉剛三の屋敷に情報部主導の部隊が襲撃したことで、剛三の怒りを買って厳しい叱責を受けた。

本来ならば、悠元の事情からして三矢家が十山家に斟酌するという必要などない。それを知ってか知らずか訪れた客を無碍に追い返すのも十師族としての面子に関わってしまうため、三矢元は息子の元治を家業に集中するよう言い含めた上でつかさと対面した。

「お忙しいところすみません」

「いえ。それで如何なるご用件でしょうか」

元は事前に元治から若手会議の内容を聞かされていた。加えて、その会議に元継と悠元が出席しないという言伝も聞いていたため、つかさがどのような内容を述べるのかも大方予測がついていた。

「昨日の会議のことは聞きました。三矢殿は御存知ですか？」

「息子から事の詳細は聞いております。その会議が何か？」

元としては「無駄話をするのならば早く帰れ」と言いたい気分だが、つかさの話し方からして手早く済ませるつもりなどないようだ。十山家が欠席していたことも聞き及んでいる訳だが、『誰から聞いたのか』という疑問を片隅に置いた上でつかさの言葉を待った。

「和やかな雰囲気の中、たいそう親睦を深められたようですね」

「そのようですな」

「ただ残念なことに、最後の方で協調ムードを崩された方がいらっしゃったとか。その切っ掛けを三矢殿の息子さんが作ったとも聞いておりますが」

「……息子はただ、会議の目的がすり替わっているような雰囲気を疑問に思っただけで、息子に咎はありません」

そもそも、会議にすら参加していない十山家の人間に言われる筋合いなどない……と、元はその意味も含めての発言だが、肝心の相手はそれを意に介するような素振りを見せなかった。

「四葉殿は会食にも参加されなかったようですが」

「既に先約があって出席できなかった、とのことだそうです」

元の意思としては、どうにもつかさもとい十山家と四葉家が争うような素振りを見せていることだった。それに、この人物の為人は嫌というほど知っている為、つかさが――――国防軍情報部が何を目論んでいるのかを〝四葉〟という単語で察してしまっていた。

達也の振る舞いを問題とするならば、会食に参加しなかった三矢家や六塚家、一条家に一色家、それに七宝家も問題の槍玉に挙げられることとなるだけに尚更だった。

「司波達也さんの非協調的な態度については、我々も懸念しております」

「我々というと、国防軍ですか？」

「そうです。私どものセクションとしては、司波達也さんが治安維持の妨げにならないかどうか、テストしてみる必要があると感じています」

国防軍という広義的な単語であったが、正確には国防軍情報部だということを元も把握している。何せ、血縁上の息子の一人は国防軍の上級将校にいるから尚更だ。

それに、元はパラサイト事件の際に達也と直接面会している。その時の会話は沖縄のことを抜きにした上での会話だが、達也が自ら望んで秩序を壊すような性格には見えなかった。それに加えて悠元と親交があることからしても、彼がつかさの懸念が意図するような人物には思えなかった。

「司波達也殿は軍人ではありません。国防軍に、そんな権限はないでしょう。無論十師族にも、十山家にも四葉家の人間をテストする権限などない」

つかさの一方的な結論に対して元は強い口調で断言するように述べた。だが、つかさの出した結論が覆ることは無かった。

「権限はありませんが、テストは出来ますでしょう？」

「……十山さんは、我々に何をお求めなのですか？」

心が一切籠っていない笑顔を浮かべるつかさに対し、元は彼女の要求を聞くこととした。叶えるか否かはまだしも、聞くだけならばまだ共犯の領域に含まれないと判断して。

「私たちの演習に詩奈ちゃんを貸してほしいんですよ。演習と言っても、何も危ないことはありません。それに、詩奈ちゃんの許可は得ていますから」
　つかさの要求に元は内心で舌打ちした。十山家と三矢家の諍いの件は家族で言えば当主の元と妻の詩歩に次期当主の元治、当事者側となる元継、悠元、詩鶴、佳奈、美嘉しか知らない。詩奈には時期を見た上で十山家のことを打ち明ける予定だったが、それが仇となった。
「どうせ私に拒否権など無いのでしょう」
「そんなことはありません。私は三矢さんに、快く協力していただきたいと思っております」
　白々しいと表現するほかにないつかさの言い種に、元は表情を強張らせた。危うく舌打ちが出そうになったものの、元は深く一息吐いた上でつかさにこう告げた。
「……一つお伺いする。今回の件、私の息子は当然知っているのだろうな？」
「いえ、知りません。詩奈ちゃんにも彼に伝えないようにしてもらうのが協力の条件ですから」
　つかさが帰った後、元はソファーに身を預けるような恰好で深く座り込んだ。そして、元は執務室の天井を見上げていた。
「……何も分かっていないのはお前の方だ、十山つかさ」
　元がそう呟いたのは、先程つかさに投げかけた質問に起因する。
　彼女の価値観など、所詮は十山家のものではなくその背後にいる人間の価値観でしかない。それに、いくら情報を制限しようとも彼がそれを認識した時点で全てが破綻する。他ならぬ父親として息子の規格外さを一番味わったからこそ、彼女の思惑などとうに意味を成さない。
　すると、扉が開いて元治が姿を見せた。
「父さん、十山さんはお帰りになられたのですか？」
「ああ……詩奈を使って四葉家の人間をテストする、その企みに巻き込まれてしまった」
「そんなことが……どうします、元継や悠元に伝えますか？」

元治は既に三矢の家を出た弟たちの名を出した。だが、元はその問いかけに対して首を横に振った。
「それはマズい。元継や悠元は既に三矢の人間ではないのだ。家族としての付き合いならばまだしも、家として距離を置くというスタンスを崩すのは宜しくない」
「ですが……」
「それに元治。詩奈に何かあった時、下の五人が動かないという保証がどこにある？」
「あー、成程」
元治の脳裏に過ったのは、元継、詩鶴、佳奈、美嘉、そして悠元の行動原理であった。詩奈はアリサを養子に迎えるまで末っ子として家族皆に可愛がられており、その詩奈が危ない目に遭ったとなれば、理由の如何に拘わらず動くこととなる。その時点で上泉家と神楽坂家の現当主を巻き込んでいることからして大事だ。
「あの五人の実力は三矢の人間として飛び抜けている。加えて詩奈だが……義父殿の報告によれば、魔法武術だけで言えば奥伝に踏み込みつつあるそうだ」
「……はい？」
元治の言葉は、正しく元が最初に聞いたときの心境そのものだった。剛三の実力と見識を疑うわけではないが、よもや詩奈が悠元に次ぐだけの資質を有していることに複雑な心境を抱いていた。不幸中の幸いなのは、侍郎という嫁ぎ先がいることぐらいだろう。
「色々驚きもありますが、仮に彼らが暴れたら国防軍との関係が悪化しませんか？」
「それなのだがな……空軍と海軍からは先日の会議を機と見たのか、内密に兵器購入の打診が来ていた」
周辺国家と比べると陸海空の連携が問われる比率が高い日本の軍隊。国防軍内でも魔法師の確保競争が激化しており、とりわけその槍玉に挙げられるのは陸軍所属の第１０１旅団・独立魔装大隊になる。
海軍と空軍は南盾島の件の汚名返上に加え、就役した二隻の空母に関する事情もあり、軍人魔法師との繋がりが深い三矢家に兵器関連の

仲介を頼むことで、仮に陸軍との折り合いが悪くなっても独力で切り抜けるだけの戦力を確保する意味も含まれる。
「悠元――――神楽坂殿から頼まれている部分を補完する意味でも彼らの打診は無碍に出来ない。私が今後悩むことがあるとすれば、彼らが黒幕の十山家の屋敷ごと破壊しないことを祈りたい」
「……」
元の述べたことが、現実離れしつつも実現の可能性が極めて高いということを鑑みた結果、「詩奈に対する報復としてやりかねない」と元治は冷や汗を流していたのだった。
◇　◇　◇
一高の放課後、悠元はのんびり図書館で魔法に関する蔵書を漁っていた。瞬間記憶能力を有する弊害として僅か1年でここにある蔵書や資料の全てを記憶してしまったわけだが、気分の問題でもあった。
すると、静かに蔵書を読んでいた悠元のもとに一人の女子生徒が近付く。制服は一高のものだが、在籍は三高の女子生徒――――四十九院沓子であった。
「悠元、ここにおったのか」
「沓子か。呼び出しか？」
「そういうわけではないのじゃが、会頭であるお主がここにおってよいのか？」
普通ならば学校三役の一角が見回ったりすることもなく図書館にいるというのもおかしな話だろう。だが、ここには悠元だけが抱える事情というものが介在していた。ここで話をするのも他の利用者に迷惑が掛かる為、カフェテリアに移動して飲み物が置かれてから話し始めた。
「三高はどうだか知らんが、俺がいると他の面子が恐縮し過ぎて活動にも支障が出かねない。別に敬ってくれるのは構わんが、その原因の一端がな」
「その言葉だけで大体予測できてしまうのが悲しい性じゃのう」
悠元が深雪の〝抑止力〟という側面を有している為、副会頭以下の面々が悠元の機嫌を損ねたくないという意味が理解できなくもない。

それに加えて、悠元の姉たちが築き上げてしまった三矢家の噂がそれに拍車をかけていた。
「悪さをしなければ、誰だろうと叱りもしないし咎めもしない。魔法師以前に人として当たり前のことなのに、それが出来ていない奴が多すぎる」
仮にそれが出来ていたのならば、詩鶴が高校2年の時に起きた生徒会長選挙傷害事件も起きなかったし、一科生と二科生の争いを強引に止めた美嘉が退学騒ぎに巻き込まれることもなかったし、佳奈が二つの事件の当事者として関与することもなかった。
三矢家が十師族として真っ当な評価を得られていただけに、魔法科高校に入学する生徒の稚拙さにはほとほと呆れ返ってしまう。
「正当な理由での競争の結果として怪我が発生したのならば別にいいが、衝動的な理由や競争というには程遠い理由で発生したとなれば別だ。魔法を修得する前に〝心〟を鍛えるべきだと思うのだがな。義務教育で道徳が蔑ろにされているとしか思えん」
「ううむ、そう言われると否定できぬの」
魔法を使うために必要不可欠なのは〝資質(スキル)〟でも〝技術(テクニック)〟でもない。他ならぬ術者の〝精神(メンタル)〟に他ならない。確かに前者の二つも魔法師として大成するには必要なものだが、いくら能力が優れていたとしても精神が未熟ならば、能力は時として己に返ってくる刃と成り得る。
沓子は百家でありながらも古式の慣習を熟知しており、悠元から魔法力に関する訓練を受けている身としても彼の辛辣な発言には説得力があると感じていた。

苦労を背負う若人たち

悠元と沓子がカフェテリアで話していると、もう一人の女子生徒が近付いてきた。所属は第三高校だが第一高校に〝聴講生〟という形で在籍しており、悠元の婚約者の一人である一色愛梨であった。

「あら、悠元さんに沓子。逢引きですか？」

「逢引きって……概ね間違っていないところが悲しい性だが」

元々四人テーブルのところに二人が向かい合う形で座っていたため、愛梨は悠元の隣に座った。沓子はやや不満げだったが、婚約者に嫌われたくないということでその心情を心の奥底に仕舞い込んだ。

またフォローする一件が増えたと思いながら、悠元は愛梨に話しかけた。

「そういえば、愛梨は昨日の会議に参加していたんだよな。率直な意見として、どう見えた？」

「昨日のことですか……七草殿が些か増長しているように見えましたわ」

ここにいる三人の中で若手会議に参加したのは愛梨だけだ。最初、愛梨も出席する予定ではなかったが、次期当主の長男が防衛大学校に在籍しているという理由で出席できないという理由を聞かされ、正直首を傾げたという。

「本来ならば、防衛大学校に在籍していても一部の事例を除いて軍籍を持っている扱いという訳ではありませんもの。結局、魔法科高校に在籍している私が東京に居るという理由で出席するように言い付かりましたが」

「愛梨も大変じゃのう」

「その程度ならばまだいいのです。問題は……七草殿が深雪さんを神輿として推した際、誰しもが責任を負いたがらないように見えてしまったことです」

昨日の会議において、深雪を神輿として担ぎ出そうとしたことは達也の強硬な反対で頓挫した。

そもそもの話、非魔法師の魔法師に対する恐怖を完全に取り除くこ

とが極めて難しいことは誰しもが理解している。だからといって、国防や治安維持という観点で既に活躍している魔法師に対する批判を削ぐような対策も取っていないことは、許されることではない。折角一般社会に溶け込んでいるというのに、自分の家の名に甘えている人間が多すぎるのも問題だろう。

「……愛梨に前もって話しておくが、今月最終週の日曜に護人・師族二十八家の若手会議を開く。既に招待状は送付した」

「会議をですか？」

「昨日の会議に俺と兄がいなかったのは、前以て政府の要人と会談する予定が立っていたからだ。自分がいない時に他人の婚約者を担ぎ上げようとした人間を纏めて〝説教〟しなきゃならん」

事前に得た情報で若手会議が物別れに終わるのは目に見えていた。なので、招待状については若手会議が開催される間に全て書き上げ、魔法協会経由で既に送付している。今度は横浜ではなく箱根の神坂グループが運営するリゾートホテルで、既に会場と宿泊先は抑えている。

参加者については昨日の若手会議に準じる形としているが、今回の招集は師族会議議長としての招集であり、護人及び師族二十八家には出席の義務が生じる。愛梨に話したのは、一色家の代表として出てもらうためでもあった。

「すまないが、愛梨には一色家の代表として指名させてもらった」

「……はあ、実家と縁を切る方法はないものでしょうか」

「それこそ、一色の名を捨てる方法でしか実現できぬぞ」

「そうなりますわよね。栞が羨ましく思えてきましたわ」

正直、十代半ば過ぎの人間が年上の師族二十八家の人間が集う会議で説教するというのもおかしな話だし、『若造如きが何をぬかす』と反発する可能性もある。だが、表沙汰にしていない部分での功績からすれば、同年代の護人・師族二十八家において間違いなく群を抜いている。

西ＥＵの一角であるフランスを味方につけ、南アメリカおよびアフリカの国家形成の遠因であり、四葉絡みでは国際的な犯罪組織である

『ブランシュ』や『無頭竜』に深く関与していた顧傑を生かして拘束した。更に言えば、ＵＳＮＡの過去の遺産による全面的な核戦争を回避せしめた張本人でもある。
「若手会議が何かを決めずに課題として持ち帰り、今後も定期的に話し合うことで非魔法師の支持を得る方法を模索するというのであれば、会議を開くつもりは無かった。だが、結果はご覧の有様だ」
「そもそも、どうやって支持を得るというのですか？」
「出来なくはないと思うぞ？」
　その一端のヒントは九校戦に他ならない。創作物において、定められたルールの中で技量の優れた人間同士が競い合うということはいくつでも存在する。魔法の秘匿性という問題はあるのだろうが、既に下地があるのならばそれを生かす方法や手段を考えていけばいい。
「例えば、魔法競技をプロリーグにして興行すること。魔法師からは『我々は見世物ではない！』と反発する人間がいるだろうが、だったらプロのアスリートに対して同じ意見が言えるのか？　ということになる」
　魔法師をスタントマンなどに起用することで芸能方面の分野を広げる人間はいるが、それだって裏を返せばかなりのリスクを負っていることに他ならない。とりわけ、魔法師は魔法の実力が伴うほどに容姿も良く、画面映えはするだろうが一方で要らぬやっかみや妬み、恨みを買う可能性が極めて高くなる。
　魔法を秘密にしたいのならば隠せばいいだけだし、ルールで定める魔法だって人を殺傷するようなものは確実に弾かれる。ようはものの考え方でどうにでもなるし、魔法の可視化技術はすでに実現している。『無頭竜』のように審判を買収する可能性はあるだろうが、そこについての全面的な責任の所在は追々考えていくし、必要であれば神楽坂家と上泉家で責任を負う。最悪、裏家業という形で四葉家に依頼して消すことも必要だろう。
「同じ見世物でも、過激な方向に走ることも少なくない芸能分野に比べれば、魔法競技はルールという規則で制限することが十分に可能だ。反魔法主義とかの反発というリスクはどうせ避けられないのな

ら、大半の民衆を熱狂させることで実体経済への寄与に貢献するという方向性に舵を切る」
エンターテイメント分野で盛り上げれば、メディアも下手に反魔法主義を論調として書くことよりも利益を優先する。その結果として魔法師に対する批判を抑えるという点では智一と悠元の結論は一致している。
だが、その過程で生じる責任の所在を提案者ではなく神輿として担ぎ上げられた側が責任を負い、提唱者との同調圧力に屈した側が何の責任も負わないという智一の描いた構図は極めて危険としか言いようがない。
「そこまで考えているのは、同年代でも多分悠元さんぐらいでしょう……私も勉強不足ですわ」
「いや、本来は大人たちが考えなきゃいけないことなんだがな」
「ゆくゆくはわしらに降り掛かってくると思うと、他人事ではいられぬの」
余談だが、次の若手会議にはオブザーバーとして参加していた光宣にも出てもらうだけでなく、治安維持の役職に就いている魔法師ということで千葉寿和にも参加してもらうことにした。実際の職に就いている現役警察官の意見は決して無視できないし、率直な意見を出してもらうことで師族二十八家体制も本格的に刷新していく。
◇　◇　◇
その翌日、悠元は東京の上泉家別邸に赴いていた。
新陰流剣武術の師範ということで武術指導をしつつ、鍛錬をしている茉莉花とアリサの様子を見るためでもあった。いくら婚約者とはいえ、悠元も武術の教練に関しては一切手を抜かない。とりわけ魔法師は襲われるリスクが高くなるだけに、一挙手一投足を見逃すことなく二人の鍛錬を見ていた。
すると、人の〝存在〟を感じた悠元は近くにいた師範代にその場を任せて中庭に出ると、見るからに〝くノ一〟と言わんばかりの恰好をした少女がその場に控えていた。
「神楽坂様、〝星見〟からでございます」

「拝見する。……委細は承知した、とお伝え願いたい」
悠元の答えに〝はっ〟と短く答え、その少女は気配を偽って姿を消した。神楽坂家が風魔一族を保護したことは知っていたが、恐らく彼女もその一族の末裔なのだろう。
ただ、いくら空気抵抗や障害物による妨害を受けないためとはいえ、体のラインがハッキリ出る戦闘用スーツは如何なものかと思う……複数の婚約者がいる手前、欲情する気など皆無だが。
そんな個人的な感想はともかく、彼女から届けられた紙に目を通して天神魔法で燃やし尽くした。
(情報部が動いた。事前情報から察するに、目標はＵＳＮＡから潜入した部隊か……大統領に思わず同情するな)
ＵＳＮＡ自体が政府と軍で異なる意見を有している状態で、この結果として起こったのが二度目のマイクロブラックホール実験だった。そもそもの話、同盟関係にある国の戦力を落とそうとした時点で国の面子などないに等しい。
相手の戦略級魔法を無力化することに躍起になっている理由は察するが、それだったら相手の落としどころを探るのが理に適っているだろうと思う。あの時、セリアが慌てて出ていったのはＵＳＮＡ軍の事情に巻き込みたくないという思惑あってこそだろう。
仮にその情報をＵＳＮＡ側に流したところで、今度は情報部がこちらの関与を疑って探りを入れてくるのが目に見えている。なので、今回は情報部の動きに目を瞑るしかない。だが、何もしないというわけではない。

◇　◇　◇

その日の夜、幕張新都心にある『マクシミリアン・デバイス』の日本工場（実態は工場の一部しか稼働しておらず、ＵＳＮＡ軍の日本における工作拠点）が襲撃された。ニュースとして表沙汰になることはなかったが、その情報は直ぐに悠元とセリアの知るところとなった。
「予想通りになっちゃったね」
「まったくだな。騒がないのか？」
「今騒いでも何も解決しないからね……悲しんでほしかった？」

「よし、いい度胸だ」
「ニャー！　コブラツイストー!?」
　シリアスという空気が何処へ消えたことはさて置き、マンションの悠元の自室で一緒に居た悠元とセリアはＵＳＮＡの工作部隊が国防軍情報部の諜報部隊に襲撃を受けた事実は掴んだものの、当事者に近い立場のセリアは特段悲しむ様子を見せなかった。
　セリアとて別に薄情というわけではないし、シルヴィアが捕まってしまったことについても複雑な表情を見せていた。それを誤魔化すための冗談だと理解しつつも悠元は容赦なく関節技を掛けた。
「今すぐに事態を解決させるのは難しい。今頃リーナが達也に懇願しているだろうが、状況が整えば直ぐにでも救出する」
　単に、情報部が裏で動くことによって達也へ恩義を売る行為ならばまだしも、彼らを内密にＵＳＮＡへ送り返すというつもりはないようだ。正直なところ、セリアから聞いた原作におけるＵＳＮＡ軍の顛末からするに、この一件もＵＳＮＡ軍を意固地にさせてしまった原因なのではないか、と思う。
「状況が整うのは？」
「ＵＳＮＡ軍およびＵＳＮＡ政府が揃って、今後日本の戦略級魔法を無力化するような行為の禁止をヴァージニア・バランス大佐が明言すること」
「口約束だと破りそうなんだけれど」
「別に構わん。リーナを本格的にこちら側へ引き込むためにも、『ヘビィ・メタル・バースト』をＵＳＮＡに返して新たな戦略級魔法を渡す。セリアにも渡すから」
　リーナの帰属問題で一番厄介なのは、戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』と『ブリオネイク』の存在だ。なので、それらをＵＳＮＡに返した上で新たな戦略級魔法をリーナとセリアに渡す腹積もりでいた。
「そんなにホイホイと戦略級魔法を生み出しちゃうお兄ちゃんって、やっぱ前世の兄さんの気質が乗り移ったんじゃない？」
「否定できる材料が皆無過ぎるんだが……子と孫、曾孫に囲まれて大

往生しやがらないとマジで許さねえ。てか、それを今更言うのもおかしな話だが」
「お兄ちゃんがそれになりそうだからね」
「……」
久しぶりに出てきた前世の家族の存在に、悠元は正直感謝すべきか悲しむべきか怒るべきか分からなかった。そして、セリアのとどめとも言える台詞に対し、悠元は黙らせる意味でもセリアをベッドに押し倒した。
「いやん、今日は積極的なお兄ちゃん。きゃーたべられちゃうー」
「めっちゃ棒読みで説得力が皆無なんだが」
「二人きりの時点で興奮しちゃってました」
結局、二人が熱い夜を過ごしたのは言うまでもないことであった。

◇　◇　◇

魔法大学は教育内容が特殊だが、そこに属する学生のキャンパスライフまで一律に特殊というわけではない。カフェテリアの会話が魔法関連に傾いてしまうのは魔法大学らしいとも言えるべき傾向だが、自由を謳歌できない理由にはなり得ない。
そのカフェテリアの一角で文庫本程度の大きさの書籍をテーブルに置いて眺めている女子大生――――背丈のせいでそういう風に見られないこともあるが――――がいる席に、一人の男性が近付く。
「七草、少しいいか？」
「あら、十文字君。別にいいけど、もう私は七草の姓じゃないわよ」
「む、すまん」
若手会議があった日、真由美は都内の高級料亭で二木家当主・二木舞衣と会談し、正式に養女として七草家長女という肩書から二木家次女という立場に代わった。魔法大学にも既に手続きは済んでおり、二木真由美（ふたつぎまゆみ）と名乗ることとなる。
今まで七草の名で呼ばれていたことに加え、養女の件は既に他の師族へ通知されていたものの、克人からすれば呼び慣れた相手の名が変わったことに慣れないのも無理はない、と真由美は申し訳なさそうにしている克人に対して少しからかい気味な口調で話した。

「別にそこまで深刻にしなくてもいいんだけれど。それで、何かあったの？」
「そうだな……」
（ここじゃ話せないことかしら？　大方の予想は付くけれど）
　克人の様子を見るに、どうやらカフェテリアで相談するにも憚られる内容というのは真由美もすぐに察した。なので、その場で詳しい事情を聴くことは避けることにしつつ、克人の言葉を待った。
「手間を掛けるが、駅前の『寂存（ジャクソン）』という喫茶店を知っているか？」
「あの店なら、つぐみんが気に入っている店だから何回か行ってるけど」
「その店の二階に五時半で」
「うん、了解よ」
　話したいことを終えたのか、克人は黙ってその場を後にした。その後ろ姿を見た真由美はというと、背負っているもののオーラからして、とても同い年のそれとは思えぬような重しが圧し掛かっているように見えた。
「……十文字君も苦労しているのね」
　本を読むことと克人との話で夢中になり、すっかり冷めきってしまったコーヒーを一気に飲み干すと、真由美はゆっくりと立ち上がって本を手に取り、その場を後にしたのだった。

私が貴方で、貴方は私

克人から相談を持ち掛けられたその日の帰り道。真由美は克人から指定された古風な佇まいの喫茶店に立ち寄った。名は『寂存(じゃくそん)』――――静寂が存在する場所を意味する店の名――――であり、真由美は以前にも何度か立ち寄っていた。

「久々に来たけれど……ごめんね、つぐみん」

「いや、私も他人事では済まされない立場だし。摩利、無理はしなくていいんだよ？」

「大丈夫だ、亜実」

とはいえ、真由美一人では〝男女の間柄に関する有らぬ疑い〟を考慮してか、真由美は店に良く通っているということで亜実に声を掛けると、亜実は関係筋ということで摩利に声を掛けた。

「正直、とっとと帰ってベッドに寝たいんじゃないの？」

魔法大学と違って、防衛大学校はどの科に所属していたとしても基本教練や戦闘訓練のカリキュラムからは逃れられない。なので、亜実は『無理にとは言わないけど』と気遣う姿勢を見せたが、摩利は『この程度で弱音を吐いていたら、エリカに笑われてしまう』という反抗心みたいな感情から同行することにした。

「それを否定できる材料はないが、エリカに笑われたくないからな」

「そっか……」

「さ、早く入りましょ。先に待ってるはずだから」

摩利の所属する特殊戦技研究科は寮生活を免除されるため、亜実の述べたことを否定する材料はないとしつつも、自分の心情を吐露した。それを聞いた亜実も無理に帰らせようという気は無く、これを見た真由美が話題を切る形で先導して店の中に入った。

店員に待ち合わせであることを伝えると、ウェイトレスが2階に行くよう指示した。既に克人が来ているようだ。2階は四部屋の個室となっており、扉は全て閉まっている。どの部屋にいるのか思案する真由美だったが、右奥の部屋の扉が開いて克人が姿を見せた。

「二木、入ってくれ」

扉を開けている克人の横を通る形で、真由美たちが中に入る。喫茶店に個室というのは些か不便ではないのかと思うが、窓は二重ガラス、床や壁は防音仕様となっており、個別に部屋代でも取っているのだろう、と真由美は思った。
「渡辺や五十嵐も来たのか」
「仕方がないでしょ。それに、二人だって十師族の関係者みたいなものだもの」
部屋に招き入れたところで、克人は嘆息を漏らした。これについては真由美が説明したわけだが、根本的な理由をぼかしたことについては克人だけでなく摩利や亜実も口を挟まなかった。なお、席の座り方は克人の隣に真由美が座り、克人の対面には亜実、その隣に摩利が座る形となった。
各自飲み物を注文し、ウェイトレスが飲み物を運んで退室したのを見計らって真由美が口火を切った。
「さて、十文字君。相談事は先日の若手会議に関してかしら？　それとも、新ソ連に関すること？」
「今回は前者にあたる」
「そうなると、達也君のこと？」
「六塚から聞いたのか……ああ、その通りだ」
亜実が燈也と同居していることは人伝に聞いていたため、若手会議の内容を把握していても不思議ではないし、そもそも秘密にするような内容と言えば顧傑の一件ぐらいしかないため、克人は亜実の問いかけに対して拒否するような素振りを見せずに答えた。
「その話は真由美から聞いたな。何でも、反魔法主義の過激派対策を話し合う内容だったとか？」
「過激派対策ではない。社会の反魔法主義的な風潮に対し、魔法師としてどう対処していくかを話し合う会議だった」
「それって意味があるの？　そもそもの話、魔法に関する根本的な性質を変えないことにはどうしたって心情を変えるのは難しい、って燈也君は言ってたけど」
十師族直系の中でも燈也は特殊と言うべき出生と経験をしている

為か、燈也の魔法に対するドライな発言を口にした亜実の台詞に、摩利だけでなく真由美も引き攣った笑みを浮かべていた。
「六塚がそこまで言っていたのか……先日の会議でそこまで非難はしていなかったが」
「十文字君の顔を立てたかった、みたいなことは言っていたけどね。で、アピールするにしても魔法を振り翳したところで元の木阿弥だけれど」
　燈也も師族二十八家直系の若手の人間が揃って会議に出ること自体稀なため、顔合わせだとしてもいきなり印象を悪くしない方が良いと判断して発言を選んでいた、と亜実が代弁する形で述べつつ問いかけた。
「アピールか……例えば、真由美（コイツ）をメディアに出して喋らせるとか？」
「何で私なの!?」
「九校戦で顔は知られてるんだし、受けはいいと思うぞ」
「そういう問題じゃないわよ！」
　摩利の出したアイデアに真由美が噛みつく。メディアへの受けがいいという部分は確かだし、『エルフィン・スナイパー』という二つ名も十分武器となる。尤も、摩利の意図を察した真由美が声を荒げて拒否に近い態度を示した。
　このままでは口喧嘩になるとみたのか、克人が割って入った。
「渡辺の案も一定の支持を集めた。だが、一番の支持を集めたのは四葉の次期殿の妹に魔法師を代表してもらうプランだった」
「四葉の……深雪ちゃんか。十文字君、その会議に当人は？」
「いや、司波だけが出席した」
「達也君だけって。ああ、それはダメね」
　克人の言葉に亜実が直ぐに察し、彼女の疑問に克人が答えを返すと真由美が直ぐに察して呟いた。達也の為人を考えれば、身内を神輿に担ぐようなリスクを許容するとは思えない。なので、その案が出た時点で却下したのは目に見えている。
　その真由美の考えを肯定するかのように、亜実が話した。
「深雪ちゃんを衆目に晒すという意味で、達也君が許容できるとは思

えない。確か、そのプランに対して反対した人もいたんでしょ？」
「ああ。三矢、六塚、七宝、一色、一条に加え、オブザーバーとして参加していた光宣からも反対意見が噴出して却下となった。その後の会食には反対した者たちが出席しなかった」
「十師族直系の半数が反対した形となったのか……それ以外に反対した家は？」
「特になかった」
　克人の答えに摩利は思わず舌打ちしそうになった。同調圧力と言えば聞こえはいいが、摩利も三矢家の外戚の人間である以上、無関係とは言えなかった。
「問題は、今回の会議の一件で師族二十八家が一枚岩ではないという状態に〝見られている〟ということだ。日本魔法界は護人の二家によって体制再編が進む中、歩調が乱れている状況を看過は出来ない」
「……そういえば十文字君、師族会議の直系と言うなら上泉家と神楽坂家――――元継先輩と悠君も含まれる筈よね？　二人は会議に出ていなかったの？」
「七草殿から欠席すると言伝は貰っていたが、二木は何も聞いていないのか？」
「何も聞いていないわ」
　真由美からすれば、３０歳以下で既に当主となっている二人が出ていない時点で訝しんでいた。とはいえ、既に別の家の人間であるために元実家の事情など聞いていないし、態々聞きに行くつもりもなかった。
「……あの二人は、余程のことがない限り会議を欠席したりはしないだろう。そうなると真由美、元実家の仕業じゃないのか？」
「それが有り得そうだから困るのよ」
「そちらのほうはともかく、どうしたらいいのかという意見が欲しいと思ってな」
「うーん……なら、今度は具体的な対策を話し合う場として会議を開始したらどうかな？　結局、案を出したのは数名だけでしょ？　各々が〝課題〟として具体的な案を持ち寄って、現実的なところで擦り合

わせていくのがいいとは思うけど」
　亜実が述べたのは、同調圧力による会議の進め方ではなく、師族二十八家が各々反魔法主義に対する案を持ち寄るということ。これには克人も意表を突かれた格好となった。
「誰かの考えた案に乗っかるのは簡単だよ。でも、会議の参加者に師族二十八家を代表して来ているという意識が希薄に見える、と燈也君の話を聞いてそう思った。それで将来の師族会議を担える立ちになり得るのか、と思う」
「言い方は厳しいが、亜実の言う通りだな」
　会議を開いた面子を潰したという意味では達也に責任がある話だが、師族二十八家代表として来ているのならば、責任を負うという意味を自覚する立場にいるということだ。
「そうなると、達也君と深雪さんには説明しないといけないわね」
「説明？　説得ではなくて？」
「それはそうよ。深雪さんを神輿に担ぐということは、会議に出ていた達也君だけじゃなくて、婚約者である悠君の機嫌すら損ねる案件よ。三人が同居している事実を考えたら、伝わらない筈がないもの。だから説明……この場合は〝釈明〟と言うべきでしょうけれど」
　それに、先日の新ソ連の件は公にされていないが、一条家当主が負傷して防衛体制に穴を開けた点を挙げれば、そういった〝緊急的な対応〟を次期当主が求められる立場となる。その意味で若くして当主となった側である克人にとっても耳の痛い話だった。
「正直な意見を述べさせてもらえば、親睦とかの段取りをすっ飛ばしていきなり四葉の次期当主の身内を神輿にしようとしたんだろ？　本人の意思が介在しているならばともかく、何も確認せずに担ぎ上げたところで良い結果を生まないとは思う」
　いうなれば、基地司令の娘をＰＲのためのマスコットに仕立てようと言えるようなもの。そんなことを実行しようとしたら左遷不可避の案件になりかねない。
「馬鹿正直に反論した達也君も達也君だとは思うが……それで、どう説得するんだ？」

「十文字君は確定として、真由美もいたほうがいいよね」
「はぁ……血縁の兄の尻拭いをやるだなんて、気が滅入るわよ……何よ、摩利？」
「いや、お前でも嫌がることがあるのだと改めて感じただけだ」
「それってどういう意味よ!?」
結局、説明役ということで克人、真由美、それと摩利が確定となった。まずは達也と深雪を説得した上で、深雪の婚約者である悠元を説得することで決着した。ちなみに、亜実は「余り船頭が多くなっても話が脱線するだけ」という理由で丁重に断った。

◇　◇　◇

魔法科高校で課せられる魔法師としての教育としては別に、深雪には淑女教育として様々な習い事がある。和洋のマナー講座にダンス、生け花、茶の湯とさながら上流階級の令嬢が身に付けるべき類を習っている。尤も、深雪は中学卒業の時点でマスターしている為、身に着けた技能を忘れない程度という形で週に一回程度、上流階級の子女向けのマナースクールに通っている。
曜日を固定していない（一ヶ月前に通うスケジュールを立てるのであまり意味はないが）のは、誘拐などによる周囲への被害を避けるための配慮であった。これは深雪に対してというよりは、他の無力な生徒への配慮と言うべきもの。
「それじゃあ水波、頼んだぞ」
「畏まりました、達也様」
スクールは男子禁制の為、護衛という名目でも達也が入ることはできない。以前はスクールの警備員にお願いしていたが、水波が司波家に来てからは彼女が深雪の護衛を務める形となった。
このスクール通いも夏までには終わらせる予定だ。身の回りがきな臭くなってきたこともそうだが、深雪が嫁ぐことになる神楽坂家ではマナースクールよりも格式の高い習い事が出来るため、今後は〝花嫁修業〟の一環として習い事を学ぶ形となる。
深雪と水波が建物の中に入った後、自走車に乗り込んだ達也がコンソールを操作して通話をすると、そこに映ったのは〝達也の姿〟で

あった。
「達也、予定通り二人はスクールに入った」
『こちらでも確認した。……しかし、ここまで化けられると俺でも立つ瀬がないな』
「あんまり使いたくない代物だがな」
そう、自走車に乗り込んでいるのは魔法で姿を変えている悠元であった。事の発端は達也が八雲から聞くこととなった情報。
一つは、ＵＳＮＡ軍の工作部隊に対して国防軍情報部が何かを策謀していること。もう一つは、ＵＳＮＡ軍を使って達也と深雪にちょっかいを掛けようとしていること。八雲は「何だったら、悠元君を頼るのも一つの方法かもしれないよ」と付け加えた。
八雲が『九頭龍』の長という情報は神楽坂家の当主関係者でもごく一部にしか開示されず、『神将会』に属している人間でも全容を知ることはできない。その彼が悠元を頼ることを許容したということは、神楽坂家としても国防軍による四葉家への干渉を認めない、と述べている様なものだった。
「今回はリーナやセリアがいない以上、苦戦するということにはならないだろうが……九重先生の体術は大まかに分かっているから、達也が出せる範疇で片を付けるつもりだ」
『……すまないな、悠元。本当ならばこちらだけで片を付けなければいけないというのに』
「気にするな。大体喧嘩を吹っかけてきたのは情報部であって、俺は既に因縁持ちだ。ここで因縁が一つや二つ増えても最早誤差の範疇だからな」
情報部に限らず、国防軍絡みのトラブルはここ最近後を絶たない。これには蘇我大将のみならず防衛大臣も頭を抱える案件となっていた。悠元に限っても、一昨年や昨年の案件は正直信用を疑いかねない事態であり、仮に蘇我大将を個人的に信用していたとしても、国防軍に対する心象が悪くなったことは事実。
『一昨年のことは真田少佐から話を聞いたが、あれだけのことをされて十山家を潰さなかったのは正直驚きだった』

「あのな、達也。そんなんで一々潰していったら、大半の師族を潰さなきゃいけなくなるんだぞ？」
単に潰すだけならば問題はない。だが、現在の師族二十八家は魔法師としてだけでなく家業の面で社会的な繋がりを有している為、後釜の選定やら当該の家を支持する各界の要人と利害の折衝をしなければならなくなる。
その意味で十山家は国防軍と直結しているためにまだ潰しやすい部類に入るが、その黒幕となる樫和家当主・樫和主鷹が十山家を師族二十八家から追い出すことに難色を示している。
普通の考えならば、師族二十八家から離すことで逆に〝遠山家〟として使いやすくなる利点が生じると考える人間がいるだろう。
だが、十山家は他の二十七家に存在しない方針――師族二十八家同士の争いを誘発させることで師族間のパラーバランスを保つ役割――が存在する。それを果たす意味でも師族二十八家の一つとして身を置く方が、もしもの時に十文字家を頼れるという名分も出来るという形だ。
「単純に家単位だけならばまだしも、政財界や一般社会関連の折衝なんて一々やってられん。政府が主導してやってくれるのならばまだいいが、国会議員たちはどこか及び腰になる。戦闘に参加した当事者の側からすれば〝軟弱者〟と評価したくなるほどだ」
『……悠元を見ていると、「明日は我が身」という言葉が身に染みるようだ。ともかく、〝二人〟の対処はこちらでしておく。悠元はＵＳＮＡ軍の対処を頼む』
「了解した」
とても高校生の身分で話している内容はともかく、必要な連絡事項を述べた上で達也の方から連絡を切った。その上て座席のシートに身を預けるように座ると、一息吐いた。
「全く、自分の尺度でしか秩序を守れない奴らが多すぎる。常識外れの技術を使うという意味を学べと言ってやりたいわ」
古代文明において存在した時代の魔法や聖遺物（レリック）を現代の技術で復元するという目論見は世界各国において水面下で活発化している。

一昨年の勾玉――――八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）系列の複製を国防軍がＦＬＴに依頼していた件もその一つで、それを基に『ヒヒイロノカネ』や『マジストア』が製造された。それを可能にしたのは悠元の持つ技能と前世の知識であった。

尚、勾玉はデータ分析だけして返却したため、元々依頼を受けていた小百合は不満げだったが、狙った相手が〝大亜連合〟であることだけ伝えると事の重大さを感じたのか、彼女はそれ以上何も言うことなくトーンダウンしたのであった。

準備数日、調理３分

悠元が達也に扮してＵＳＮＡ軍の対処をすることになったのは、単純に国防軍絡みの因縁だけではなかった。最近は鳴りを潜めている『プラスワン』の要素がいつ出てくるか分かったものではないから。

加えて、昨日の放課後に星見経由で渡された情報を確認するべく九重寺を訪れ、対面した八雲が申し訳なさそうに頭を掻きながら話した中身はというと、こんな内容だ。

「――――自分が四葉と情報部の争いに介入しろ、ですか？」

「そうなるね。察しが付くと思うけれど依頼主は東道閣下で、先代である千姫様も了承されている。ただし、情報部を無力化するまではいいとしても、十山つかさを捕縛しないで欲しいそうだ」

「何故です？」

「今の時点で事を起こせば面倒事になる、とだけ閣下はそう仰っていた。その点は先代も同意見だったからね」

ようは、原作で起きたリーナとスターダストによる達也への襲撃でリーナを置き去りにした状況をつかさに置き換える形で無力化してほしい、というものだ。別に面倒な注文ではないし、八雲が達也に教えている体術も十分に再現可能な範囲。

傍から見れば、東道が日和ったと見ることもできる。だが、彼とて父親の件もあって愚かと言えるわけではない。十山つかさがＵＳＮＡ軍の兵士を拘束した時点で因縁が発生した形だが、互いの利害が一致すれば敵対の因縁など簡単に引っ繰り返ることなんて容易に起こり得る可能性もある。

最悪、国防軍情報部とＵＳＮＡ軍が合従される事態は避けたいとみるのが妥当だろう。

「面倒事ですか……まあ、察しは付くので深く追及しませんし、先生もそこまで伺っているわけではないのでしょう？」

「申し訳ないことにね。本当ならば、多少無茶をしてでも調べた方がいいのかもしれないけど、先代からも無茶はせぬように釘を刺されたから」

青波が十山つかさに関しての拘束をしないよう注文を付けたことについて、感情の起伏が欠けている彼女に対して軍人の面子を潰せということなのだろうと思う。このことで彼女の面子がどこまで傷つくかなど不透明過ぎるが、彼が〝面倒事〟と称した内容については恐らく四大老が大きく関与しているものとみられる。
「どうせ魔法で推察されるでしょうが、ちょっと相手を騙してみようと思います。その為の魔法も完成しましたので」
「あの魔法のことだね。僕も初見で見た時は自分に自信が無くなり掛けたよ」
八雲がそう零した魔法は古式魔法［纏衣の逃げ水］をベースに悠元が改良したもので、固有名称は［深淵（しんえん）の水鏡（みかがみ）］。相手の『気』の波長をそのまま写し取ることで、視界のみならずサイオンやプシオンの波長もその当事者に成りすましてしまうという〝コピー能力〟みたいな魔法。
「でも、やり過ごせていたじゃないですか」
「それはホラ、君が僕のレベルに合わせてくれていたからね。御師匠のレベルを出されたら、いくら僕でも死を覚悟してしまうよ」
この魔法のデメリットとしては、魔法行使時に対象が認識できる視界内にいることと、対象の癖まではコピーできないため対象の技巧も当然写し取れない。事実、八雲相手の検証では彼の技巧ではなく悠元本人の技巧に依存するため、同じ忍術を用いても威力や術の強度に差が生じていたほどであった。どちらの強度が上になったのかは……察してほしいと思う。
「あの力をフルに開放なんかしたら、あちこちにクレーターが出来て役人や政治家が泡を吹きかねませんから。なお、新ソ連を旅行した時は加減を忘れずに使った結果として、モスクワ周辺がクレーターまみれになりましたが」
「……君も大概人間を辞めているね」
「もう諦めたことです」
顧傑の一件で剛三が使っていた魔法も一応相手に化けることは可能だが、あれは顧傑が表にあまり出てきていなかった人物であったか

らこそ、あの魔法で事足りた。相手に成りすますという必要性が出てくるのかは疑問であったが、作った以上は中途半端にするわけにもいかず完成させた。

今後使う必要性があるのかは甚だ疑問でしかないわけだが。

「そういえば、その絡みで君の妹さんを情報部が利用しようとしている件だけど、達也君のように妹に甘い君のことだから、とっくに事情を話しているものかと思ったけど……何故話さなかったのかな？」

「やっぱりですか……理由は大きく分けて二つあります」

若手会議があった日、十山つかさが第三研を訪れていたことは別の知り合いの軍人魔法師から聞き及んでいた。その日は詩奈が第三研に行っていたということを侍郎経由で聞いていたため、つかさが何かしら動いているのは既に把握していた。

八雲の発言によってその考察が現実のものとなった事には頭を抱えたくなったが。

「一つは、俺への襲撃で受けた十山家に対する処遇は爺さん――――上泉家による手打ちで既に決着した形だということ。もし、仮に詩奈に伝えれば、彼女は間違いなく十山つかさを嫌うどころか一発じゃ済まなくなるぐらい殴り倒すでしょう。これでは師族二十八家による〝私闘〟になってしまいますし、現時点の社会的地位の都合で樫和氏が首を突っ込みかねません」

「成程、元老院の四大老による内ゲバが今起きれば、そこをつけ込む連中が嬉々としかねないのは確かだ。それで、もう一つの理由は何だい？」

「元治兄さんの妻――――穂波さんが〝四葉家の関係者〟という点にあります」

単に詩奈だけが狙われるというのであれば、自分が襲撃されたことを話すつもりでいた。だが、詩奈の協力を得られなかった場合、元治の妻である三矢穂波（旧姓：桜井穂波）が四葉家と情報部のゴタゴタに巻き込まれる可能性が浮上する。

更に付け加えると、詩奈の妹となったラウラはＵＳＮＡの関係者だし、アリサは十文字家の血筋を引いている。付け加えるとリーナも今

は三矢の関係者だ。情報部がどこまでを対象とするかによって、対処やその後の処分も大きく異なってくる。
　三矢と十山の関係の上で、利用する可能性が高い選択肢を排除して別の危険性を増やしたくなかった。その為、悠元は元に対して詩奈に自分の襲撃の件は秘匿するようお願いした。
「学校では水波が穂波さんの姪という形で在籍しています。水波が狙われる可能性もあるのでしょうが、身重の状態になりつつある穂波さんを危険に晒すのはもっとマズいと考え、十山つかさが最も利用しやすい選択肢を敢えて残す形を取りました」
　正直、詩奈を危険に晒すリスクを無視したくは無かった。だが、一番の安心材料として情報部が詩奈を利用することはあっても、詩奈を害するようなことは出来ない。何故ならば、聴覚制御は単に物理的な音の制御だけではなく、魔法的な音の制御にまで影響するからだ。仮に兵士が悪意を見せれば、今の詩奈ならば即座に気付く。
「情報部を排除する方向に舵は切らなかったのかな？」
「現状、新ソ連やイギリスがちょっかいを掛けているこの状況で、ここにきてＵＳＮＡに国防軍ですよ。利害関係で合従されて厄介な面倒事になるのは避けたかったんです。手を出すことはあろうとも、国防軍の膿を出し切る役目は国防軍の仕事です」
「……ははあ、成程。大方の考えは読めたよ。君もやはり神楽坂の人間だね」
　師族会議と政府、国防軍に関わる約定は全て護人の二家が引き継いでいる。今回の案件を師族二十八家同士の〝私闘〟とみるか、あるいは師族会議に属する十師族の一角と国防軍の〝紛争〟とみるか。九島烈が国防軍を含めた政府の要職に就かないような文言は、この解釈の違いによって生じる内戦を避けるためのものだということは明白だ。
　今回の一件は国防陸軍情報部自体が主体となって行っている為、その対処は国防軍の自浄作用によって責任を負ってもらうのが筋だ。それを成せるだけの戦力は現在新ソ連への対処として北海道に出動している為、彼らには然るべき時に動いてもらわなければならない。

尤も、最初の肘鉄を撃ち込む役目を担うことになるのは確定事項となるが。
「誉め言葉だと思って受け取っておきます。それで、九重先生。情報部が襲撃する対象は達也ですか？　それとも、深雪ですか？」
「多分〝両方〟だと僕は思うね。ＵＳＮＡ軍を使おうとしているあたり、多分達也君にリーナ君が襲撃した状況を作り出すんじゃないかな、と僕が調べた限りではこう推察した」
「その時は深雪が襲われる状況などなかったんですがね……分かりました、引き受けましょう」
　九重寺でのこんなやりとりがあったため、達也の姿に扮した悠元は喫茶店で時間を潰しつつも［天神の眼（オシリス・サイト）］で状況を具に観察する。今回の為だけに予備の『トライデント』を達也に頼んで調整してもらって携帯しているが、使う可能性は限りなく低いだろう。あくまでも〝緊急時の護身用〟という形だ。
（周囲に気配は無し……監視の目が向いているということは、彼らが自分を達也だと認識しているのは間違いない）
　とはいえ、このまま時間を潰して達也が居座れる場所を減らすという選択肢などなく、悠元はカップに入ったコーヒーをきちんと空にした上で自動機で会計を済ませて外に出た。本来ならもう少し人通りの多い場所の筈なのに、意図的に人通りが疎らになるようにされている。大方魔法のせいなのは間違いなかった。
　このまま人通りの多い所に出ていくのも一つの手だが、悠元はここで敢えて人通りが逆に少ない場所――――原作で達也とリーナが対峙した公園に向けて歩を進めていく。
◇　◇　◇
『脱走兵がターゲットＡを捕捉しました』
「モニターを続行。民間人の誘導に抜かりはないな？」
『作戦エリア内に民間人の姿は確認できません』
　現場と上司の会話を聞きながら、遠山つかさは静かに微笑んでいた。今のところ順調に作戦は進んでいる。
（［人形］のコントロールも今のところは問題なし。衛星級に傀儡法が

掛からなかったのは残念でしたが、結果的に再現度は高くなったのでよしとしましょう）

この作戦を立案したのはつかさだった。この場で指揮を執っている上司の階級は少尉であり、軍人の階級序列であれば部下でしかないつかさが実質的な指揮権を握っているのは、偏に十山家と国防軍の密約によるものが大きく、情報部の部長クラスにまで及ぶ。

彼女は意図的に、昨年2月、達也がブリオネイクを携えたリーナに襲撃された状況を再現した。達也にあの時の状況の焼き直しだと誤認させるためだ。それは今のところ、上手く行っているように見えた。

（今回はアンジー・シリウスという大物の駒が存在しませんので、結果は見えているも同然ですが……期待していますよ、四葉の若様）

つかさは貼り付けたような微笑を見せつつ、事態の進展を凪いだ面持ちで見つめていた。

◇　◇　◇

（敵は12人。銃は持っていないのか……魔法があるとはいえ、実質丸腰のようなものだろう）

達也に扮した悠元は既に敵意を感じ、相手の武装や状態を既に把握している。加えて、達也と異なって古式魔法に精通している故に、相手に掛けられた魔法の正体にもすぐに気付いた。敵はスターダストのようだが、強化措置によって生じたサイオンの乱れだけでなく、彼らを操るコマンドが掛けられていることにも気付く。

（この感じは［傀儡法］か。対象に衛星級（サテライト）がいないのは確定となれば、程度が知れてるな。そして、これを操っている先に――やはり情報部か。USNA軍を襲撃したのもこいつらの関係者だな）

因果を辿る達也の［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］と異なり、悠元の［天神の眼（オシリス・サイト）］は対象の〝刻まれた情報〟を基に、昨夜の襲撃の内容まで把握した。傀儡法が掛けられた兵士は全てスターダストで、一番懸念されていたシルヴィア・マーキュリーの存在は確認できなかった。

そして、こちらを監視している情報部の居場所も突き止めた。

（まずは『スターダスト』の対処だな。気絶させた後の後片付けは九重

先生にお願いしたから、それを隠す意味でも市街地は些か目立つ）

この近辺で彼らの監視を欺く意味でも、街中は目立ってしまう。原作の達也ならば人通りの多い居場所に向かうのだろうが、悠元は敢えて人影が少なくなる街中の公園を選択し、そこに向かって歩を進めた。

◇　◇　◇

「ターゲットA、街中の公園に向かうようです。如何いたしますか？」

「……パペットを公園に配置。ターゲットの動きが止まったところで仕掛けさせろ」

現場からの報告を受け取ったスタッフが上司の指示を仰ぎ、指揮官の少尉はターゲットの動きに疑問を抱きつつも、公園ならば民間人への被害を最小限に抑えられるため、少しの考察の後、指示を飛ばした。

これには作戦の推移を見守っていたつかさも疑問を浮かべていた。本来の予定ならば街中で仕掛ける予定だったが、ターゲットである達也の行動は明らかに周囲への被害を避けるような印象を強く受けた。

こちらの動きを読まれているのでは、という疑問は当然生じる。だが、だからこそ試してみる価値がある、という思いも同時に生まれていた。少なくとも、達也が理想主義者の一面もあるという推測を立てることには至った。

「パペットがターゲットAに接触。作戦をフェーズ2に移行します」

計画的に脱走させた兵士がターゲットA、即ち達也（正確には達也に扮した悠元）に仕掛けた。

◇　◇　◇

別に達也をそういう風に思わせるためではなく、単純にスターダストを回収する上での〝後始末〟を容易にするため、公園を相手の襲撃場所に選んだだけだ。それと、情報部が監視している以上は下手に遠隔魔法を使うよりも近接戦闘の方が誤魔化せると踏んだ。

脱走兵の兵士が魔法を駆使した上でナイフを振り翳し、悠元の腕の腱を狙う。それを見た悠元が取った行動は、相手の懐に飛び込んで拳を鳩尾に撃ち込み、触れた箇所から想子の情報を変化させることで［傀儡法］による強制力よりも兵士自身の生命維持機能――――睡眠欲

が勝るようにすることで、相手を瞬時に無力化した。
想子を体外に放出するわけではなく、霊子の干渉力を相手に転写することで無力化する技術は現代魔法のみならず古式魔法にも存在しない。とはいえ、年齢からすれば武術面よりも魔法師――〝四葉〟の色眼鏡で見るのは容易に予想が付く。
（全く、八雲（ぼうず）が直接手を出さない節は理解するが、情報部の連中も連中だ。そこまで既存の杓子定規が必要なのか？）
沖縄侵攻の件だって原作からの変化はあれども、達也抜きでは間違いなく占領されていても可笑しくは無かった。本腰を入れる様な部隊は自分が粗方消し去ったので大亜連合側も一気にトーンダウンした形となった。その反面に得たものが［殲滅（ティーターニア）の奇術師］という二つ名だが、人をこの世のものとは思えない扱いには遺憾の意を示したい。
考え事はしているが、向かってくる兵士を瞬時に無力化しつつ、念のために武装も取り上げている。そうして3分も経たない内に向かってきた兵士全員を無力化せしめた。
（深雪と水波がやり過ぎないか心配だが、万が一の保険として達也が控えているし、文弥と亜夜子ちゃんもいる）
今回はいくら試しとはいえ、無関係の人間まで危険を晒す以上は情報部もお咎めなしとは言えない。深雪や水波にはアンティナイトを含めた［キャスト・ジャミング］対策の術式を予め渡しているし、達也に至っては言わずもがなだ。
徐に端末を取り出し、通話が繋がった時点で悠元はこう一言だけ告げた。
「――〝後片付け〟はお願いします」
そう一言だけ呟き、通話相手の返事を聞く暇もなく通話を切って端末を懐に仕舞うと、悠元は一歩を力強く踏み出して駆け出していった。

面倒事の前の面倒事

達也――――正確には魔法で姿を偽った悠元――――がものの３分で兵士を片付けたことに、つかさは眉を顰めた。だが、その表情が別の意味合いに変化したのは、公園に存在する街路カメラに何も映し出されなくなったことが発生したためだ。これは彼女のみならずスタッフや指揮官も焦りを見せていた。

「何が起きた!?　状況を報告しろ!!」

「わ、分かりません！　カメラはおろか、センサーにもターゲットＡの反応が消失しています！」

（想子センサーにも反応がない？　一体何が起きたというのです？）

街路カメラに併設されている想子センサーのモニターにも魔法の発動兆候と思しき傾向は全く観測されなかった。本来の予定とは異なる展開につかさは訝しむも、スクールの監視カメラに視線を移した上で自分に気合を入れるように〝命じた〟。

「隊長」

「何だね、曹長」

「オペレーションに入ろうと思いますので、席を外して宜しいでしょうか？」

「――――分かった、許可する」

指揮官の少尉は状況が混乱している中での申し出に眉を顰めたが、この任務を授かるにあたり上官から言い含められたこと――――遠山曹長の要望に最大限の便宜を図れ――――を思い出し、つかさに許可を出した。

命令系統に多大な支障を及ぼされるぐらいならば、いなくなってもらった方が良い。そう考えた少尉はつかさの申し出を幸いと見て、彼女を追い出すことにした。

その判断が指揮官にとって良かったのかどうか……当の本人にも分からなかったのは言うまでもない事実として。

◇　◇　◇

その頃、公園から少し離れた人通りの多い場所にて悠元と八雲は並

んで歩いていた。周りの人々は彼らをまるで避けるように歩いていくが、彼らには二人を認識しているという感覚はない。まるで、予め二人をあたかも電柱などの様な〝通れない場所〟と認識しているが如くであった。
「お手数をお掛けします、九重先生」
「いやはや、この程度は苦にもならないよ。弟子たちにとってもいい鍛錬になるからね。ところで、深雪君や水波君のほうはいいのかい？」
「今の彼女たちが現代魔法の分野で後れを取るのはほぼ皆無ですし、それに〝最凶のボディーガード〟が控えていますので」
婚約者や愛人という筋ならば手を出すべきなのだが、今回は達也が二人のカバーリングを担うこととなった。曰く『悠元への借りを少しは清算しないと、面目が無くなる』とのこと。これにはその台詞を聞かされた対象が苦笑を滲ませ、彼の妹が笑みを禁じえなかったことも追記しておく。
「最強ではなく最凶……確かに、言い得て妙なことだね。それでも、君なら理由を付けてでも参加しそうなものだけれど」
「ただでさえ深雪のことで達也から強い恩義を感じるというのに、見知らぬ間に貸しが増えても困るんです。それに、復讐劇の後片付けもありますから」
「身に覚えがない貸しが増える、ねえ。確かに僕でも困る案件だ」
四葉の復讐劇の後片付け――それは、剛三以外に参加した四葉家先々代当主・四葉元造を含む四葉一族の遺体に関する案件であった。悠元は魔法を駆使して３０名の遺体を全て発見して復元し、密かに日本へと運び入れた。
この件で剛三から新陰流剣武術の総師範に関する騒ぎとなったことは言うまでもないが、それは置いといて、改めて四葉一族の葬儀がしめやかに執り行われ、復元された肉体は火葬されて四葉の村に小さな墓を作って弔われた。菩提寺は縁の繋がりで九重寺が務めることとなった。
「それはさておいて、３５年近くも経過した死体を全て見つけて供養

した……四葉殿や執事の葉山殿はいたく感謝していたね」
「その後が大変でしたけどね」
流石に真夜から襲われるという事態は避けたが、深夜と深雪、水波や夕歌の四人から同時に襲われるという事態に発展した。不幸中の幸いなのは、それが春休み中の出来事であったという点ぐらいだろう。なお、それを聞いた千姫が笑っていたのは言うまでもない。
高校生の身分なので色に溺れたくはないが、婚約者や愛人に配慮しなければならないという矛盾に近いジレンマを抱えている身として、正直どう反応すべきなのか困ることが多々ある。結局手を出しているという点で思春期の男子の性には諍えないということなのだろう。それでも気心を許せる相手にしかそういう態度を取らないように細心の注意を払っている。
「仏門なら破戒僧と言うべきものだけど、噂に聞く初代様も大層女子に好かれていたらしいからね。僕には到底難しい世界だ」
「到底どころか、悟りを開くために精進する仏僧として欲に浸かることなどあってはならぬのでは？」
「これは手厳しいお言葉だね」
情報部の司令部は既に居場所を特定したため、そちらは八雲の弟子と黒羽の部隊――――文弥と亜夜子が対処する算段となった。当初の目的通りにつかさを除く全員を拘束し、彼らは九重寺で一時的に拘束した後、東道青波が身柄を引き取ることで決着した。此方としても諍いの種を抱える気になどならないため、その提案を呑んだ。
◇　◇　◇
深雪が通っているマナースクールは、良家の子女（このご時世において身分というものはないため、高額の月謝を支払うことが出来る上流階級の子女、という文言が付くが）が預けられており、警備員も民間の犯罪組織程度であれば問題なく排除できるレベルの女性が配備されている。なので、男子禁制という時代錯誤の規則があれども安心して預けている親が少なくない。
そんな『安全神話』も今日崩壊することとなった。
「深雪様」

「お二人の懸念が的中してしまったことは複雑です」
深雪と水波が小声で話す間、女性講師が深雪を含めた十人の生徒に対して慌てたような様子でセーフルームへの避難を促していた。生徒は深雪以外にもう一人だけ魔法師だが、護衛の方は全員が魔法師で、年代としては二十歳代から三十歳代のように見受けられる。
事前に悠元と達也から襲撃の可能性を言い含められており、達也もスクールへの襲撃を考慮して遊撃の姿勢を取るが、あくまでもスクールが緊急事態に陥らない限りは手を出さない、と明言していた。そこは男子禁制という建前があるからなのだが、そう言ったルールを律儀に守るあたりはお兄様らしいと思った。
何もなければそれで良かったわけだが、結局襲撃は起きてしまった。懸念が的中した慧眼は褒めるべきだが、トラブルが起きたことに関して喜ばしいことではないという点で深雪は『複雑』という言葉を選んだ。
「セーフルームに籠るのは悪手でしょうが、私たちが勝手な行動をして他の生徒に迷惑が掛かるのは拙いでしょうし、お兄様が駆逐するのを待つぐらいは問題ないでしょう。水波ちゃんもそれでいい？」
「はい」
そう決めた深雪の行動は早く、他のスクール生に声を掛けて先導する形で決められたルートを通りセーフルームに向かう。深雪と水波、他のスクール生と護衛、講師の順で列を成す形で。
◇　◇　◇
（ほぼ予定通りか……まったく、悠元には恐れ入る）
その頃、［仮装行列（パレード）］で銀髪と金の瞳というファンタジー色強めな姿に偽った達也は自分専用にカスタマイズされた［ドレッドノート］と同タイプの軍用バイク［イントレピッド］に跨って、スクール近くに停車しつつ、仮想モニターでスクール内部を観察していた。
［イントレピッド］には達也の［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］と連動する形で情報体次元を可視化することで必要な情報のみを達也に伝達する。個々の思考に連動する形で魔法を経由して得られる情報を選定する科学技術と魔法技術の融合は達也でも考えが及ばない領域であった。

悠元が事前に今回の襲撃の予測情報を立てた上で、十分なバックアップを付けて臨んでおり、万が一の時ということで達也にも当然サポート役は存在する。そのサポート役はというと既に非魔法師の生徒という形で扮して配置しており、その情報は深雪と水波にも知らされていない。理由は『不測の事態が起こり得ない保障など無い』というもので、これには達也も納得していた。

ここで達也が市街地に［エレメンタル・サイト］を向けると、公園で兵士を次々と無力化する達也に扮した悠元の姿があった。達也自身でも気付いていなかった癖まで再現する辺り、敵に回した時の代償が計り知れないが、幸いにして従妹の婿にして自身の遺伝上の再従弟という点では達也にとっての安心材料となっていた。

「さて、こちらも動くとしようか」

この緊急事態に男子禁制という文言や体裁を気にしていては守りたい者も守れなくなる。そう自分に言い聞かせるようにして、スクールの襲撃者を排除すべく動き出した。

◇　◇　◇

本来なら十分程度のラグが生じたとはいえ、襲撃者についてはあっさりと片が付いた。深雪や水波と合流した達也だが、ここで生徒の一人であった綱島（つなしま）という女子生徒が進み出てきた。

護衛の津永（つなが）が挨拶をしようとしたところで、達也が敵意に気付いて津永を突き飛ばすと同時に、綱島が無関係の女子生徒を人質に取ろうとした。ここで綱島が災難だったのは、その女子生徒が〝悠元の用意した保険〟――［仮装行列（パレード）］で日本人に扮したラウラ・カーティスであったことだ。

彼女は記憶を失っていたとはいえ、れっきとした魔法師。更には記憶喪失中に三矢舞元（みつやまいと）から魔法だけでなく琉球空手の手解きを受けていた。その結果として生み出されたのは、ラウラによってナイフを瞬時に叩き落とされた上に意識を飛ばされた綱島の姿であった。これには事情を知らない深雪や水波のみならず、事情を聞かされている達也ですらも思わず面を食らったような様子を見せていた。

「あっ、つい癖でやってしまいました」

「……(このことは事前に悠元から聞いてはいたが、正直要らぬお節介だったかもしれないな)」
ただ、達也としても戦闘中に抱いた疑問がある。それは兵士との戦闘ではなく、津永を突き飛ばして気絶させた後に生じた現象――――気絶している筈の津永が魔法障壁を展開していたことだ。
離れた場所に[ファランクス]などといった障壁を展開するという方法は達也自身も一昨年の九校戦で見ている為、それ自体が特段おかしなことではない。本来気絶している人間が無意識で魔法を行使するという事象は本来起こり得ないが、任意の人間を中継点として魔法障壁を展開するという遠隔行使だけに限れば、特段不思議な事ではない。
問題は、対象の意識の有無に拘わらず魔法を行使するという技術の存在。
その後、スクールに侵入した襲撃者は全員警察によって引き取られることとなり、相手が魔法師ということで否応なく寿和が陣頭指揮に立っていた。生徒たちへの聞き取りは女性警官の魔法師が受け持つことになった。
「この場合は災難と呼ぶべきなのかな、司波君」
「そう呼んでも差し支えはないかと思います、寿和さん。それでは、後のことをお任せしても宜しいですか?」
「ああ。帰りも気を付けるといい」
取り調べ自体は達也本人ではなく達也に扮した悠元が受け持ち(状況や経過は達也本人から全て聞き及んでいる)、寿和も止むを得ない判断だと認識しており、詳しい話がある場合は後日学校に伺うと明言して学業に支障が出ないような配慮をすると明言した。
深雪や水波を連れだって自走車に乗り込んで少し走り出したところで、悠元は[パレード]を解除して元の姿に戻った。それを見た深雪が悠元に労いの言葉を掛けた。
「お疲れ様です、悠元さん」
「ありがとう、深雪。尤も、そこまでの労力を払ったわけではないけど」

国防軍情報部については黒羽の部隊によって制圧し、身柄の引き取りは八雲が引き受けた。その後の彼らの処遇は全て放り投げた形だが、こちらに不利益を被ることがないようにすると八雲が公言したため、特に問題はないと判断した。

これで東道青波から受けた依頼は完遂したが、まだやるべきことが残っている。

「悠元様、これで一段落でしょうか」

「そうなってくれたら一番いいがな」

大体、国家を守る国防軍の一セクションに過ぎない情報部如きに秩序の保全を疑われるような権限などないし、師族二十八家の一つである十山家にもそんな権利は存在しない。いくら師族会議と政府・国防軍との取り決めを全面的に変更したとはいえ、その権利を行使するのはまた別の問題なのだ。

今回、動いたのが十山つかさ個人であったとしても、情報部の遠山つかさ曹長であろうとも、彼女に他の魔法師の物差しとなるべき様な模範的な知識を有した状態で事に及んだとはとても言い難い。

その責任を問うのは、今週末の騒動に片を付けてからということとなるのは確定事項であった。

◇　◇　◇

4月18日の夜、マンションの自室にいた悠元は真由美との通信をしていた。その用件はというと、達也と深雪に対して『会って話がしたい』というものであった。

「まあ、先日の会議のことなんでしょうが、それでしたらお二人に直接連絡を取ればいいのでは？　真由美先輩でしたらお二人の番号ぐらいご存知でしょう」

『……呼び捨てにしてもいいのに』

「どちらにせよ、誰が聞いているか分かりませんので」

真由美の言い分としては、達也はもとより悠元の婚約者である深雪に対して心証を悪くするような発言を彼女の兄がしてしまったことに対する〝お詫び〟も込めてであり、まずは二人に近しい関係者である悠元に話を通すべきだと判断した。これは真由美だけでなく、摩利

や亜実、そして克人の判断によるものであった。
遮音フィールドとて物理的に遮断しているだけで、電気信号から通信内容を読み取られるリスクもある為、下手に藪蛇を出さないようにしていることを理解はするが、それでも先輩と呼ばれることに不満げな真由美の姿を見つつ、悠元は真剣な表情を浮かべた。
「と言いますか、十文字先輩はまだしも発言の当事者である七草智一は同席するんですか？」
『その場には出させないつもりよ。兄が良からぬことを企みそうな気がするから』
謝罪という意味では当人にやらせるべきだが、そこは真由美が今回のことで〝実家に対する最後の孝行〟と一区切りするために申し出たらしい。どうせ会議で顔を突き合わせるのだから、説教が先になるか後になるかの違いでしかないと判断した。
「いいですよ。達也と深雪には自分から話をしておきます。今週の土曜で、場所は赤坂の料亭に夕方5時でよろしいですね？」
『ええ、お願いするわね。悠君は来ないの？』
「自分が参加していない会議の問題に巻き込まれる意味が分かりません。当事者同士でちゃんと解決してください」
拗れた部分を当事者間で話し合って納得するのならばそれでいい。それに、予測が正しければその日にトラブルが発生するとみている為、当日は久々に侍郎の鍛錬を学内で見てやろうと考えていた。
『当事者って……悠君もある意味無関係じゃないのに？』
「自分が出ていって後の諍いの種になるのは御免ですので」
達也に進言した以上は当事者とも言えなくはないが、会議当日の様子を燈也から聞いた範囲では悠元の名を使わずに会場のヘイトを集めるような形にしたらしい。恩義とかの貸借関係を考慮してのことなのだろうが、もう少し気を抜くようなことを覚えて欲しいと思わなくもなかった。

言論に躊躇いなど不要

４月２０日、土曜日の放課後。

一高の生徒会室には、生徒会長と書記――――深雪と達也の姿がなかった。水曜の夜に真由美との話し合いの申し出を受けてのものだ。

尤も、ほのかや泉美、理璃とセリアに理由は告げていない。話の内容が秘密にする必要性があるかも知れないというもので、最初に聞いた泉美も真由美の思考を読み取ったのか……特に理由を尋ねることはしなかった。寧ろ、生真面目な生徒会長に対して「先輩がいなくても大丈夫です」と留守を預かることを率先した。

今日はまだ、ほのかやセリア、そして理璃は来ていない。水波は言うまでもなく深雪や達也と同行している。なので、生徒会室にいるのは泉美と詩奈、そして風紀委員（つまり部外者）の香澄だけであった。子どもからの付き合いである三人しかいないこともあって、生徒会室の中は緩んだ空気となっていた。

「ねえ、泉美」

「なんでしょうか、香澄ちゃん」

既に二人は別の家の間柄とはいえ、泉美はそこまで七草という名に対して目くじらを立てていない。あくまでも許せないのは遺伝上の父親だけであり、せめてもの恩情で七草家に留め置かれた香澄に含むところは無い。むしろ、そんな役目を年上の姉が背負わなかったことに対して思うところはあったりする。

「達也先輩と司波会長、やっぱりお姉ちゃんに呼び出されたのかな？」

「多分その可能性は高いでしょうね。ピクシー、お茶をお願いします」

尚、部活連会頭である悠元は学内にいて、今頃は軽運動部の部室で汗を流している頃だろう。この場にいる三人も書類仕事で身体が鈍らないように軽運動部で鍛えていたりするが、生徒会や風紀委員の仕事を片付けてから行うのが基本方針であった。

「詩奈ちゃんも一旦休憩にしましょう……ありがとう」

「あ、はい。分かりました」

泉美は詩奈に声を掛けつつ、ピクシーが淹れてくれた緑茶が入った

湯呑を受け取る。先に休憩というか寛いでいる香澄はブラックコーヒーを口にしている。
「でも、お姉ちゃんがねえ……悠兄の優しさに甘えすぎなんじゃないかなって思うよ」
香澄がそう零したのは、真由美が悠元の婚約者序列に入っているとはいえ、やっていることが悠元の意に反している様な行動をしているようにも見えている。それに対して泉美はこう述べた。
「あれはお兄様も既に承知のことです。寧ろ、そういう感じで胡散臭く動くように指示しているようですから」
「そうなの？　というか、何で知ってるの？」
「私は事前に聞かされてますので」
「あ、そうなんだ……」
真由美の事情を既に聞かされている泉美に対し、香澄は何も聞かされていないことよりもそれで許してもらえていることに姉が甘えている事実は変わらないと納得してしまい、それ以上の追及をするのを止めた。
すると、自分で淹れた紅茶を手に詩奈も席に座った。嗜好がすぐ上の兄に似たためか、蜂蜜入りのミルクティーという極端な甘党。それでいて作るお菓子が甘すぎないのは憧れの存在でもある人物の影響もあるのだろう。
「お姉ちゃんが態々達也先輩や司波会長に取り次ぐ内容って、心当たりが多すぎるんだけど」
「そうですね。今や別の家の関係者となった父親と四葉家の諍いなんて、私たちが知らない部分でも色々抱えていそうですし」
「えっと……大変なんですね」
香澄と泉美でも知らないことは多く、特に四葉家を出し抜こうと動く弘一の思考回路なんてその最たるものだ。堅実に実績を積み重ねれば四葉家と伍することも夢物語ではないだろうに、今や六塚家の養女となった泉美からすれば別に遠慮する必要もない辛辣な台詞に対し、詩奈は苦笑を滲ませていた。
「でも、恐らくは先週末の会議のことでしょう。私はその時別件のこ

とで気を回す余裕なんてありませんでしたから」
「その割に、泉美はあっさり受け入れたみたいだけど」
「悠元兄様と結婚できるのなら別に構いはしないと決めていましたし」
　そんな泉美の個人的事情はさて置いて、話題は真由美と達也や深雪が会って話をするということについての話題を詩奈から切り出した。
「私は会議の経緯を詳しく聞いていないんですが、先週末の会議で何かあったのでしょうか？」
「ボクも人伝というかお姉ちゃんから聞いた範囲での話だけど、うちの兄貴が司波会長をアイドルのように矢面に立たせようとしたんだよね。それに真っ向から反発したのは達也先輩で、その後の会議の空気が最悪になったそうだよ」
「愚かな兄です。深雪先輩を矢面に立たせようなんてことをすれば、悠元兄様が黙っていません」
「いや、そこで泉美が力説しなくても……」
　やっていることを総合したとしても、七草家が自ら四葉家だけでなく三矢家や神楽坂家にまで喧嘩を売る様なもの。いくら同調圧力が掛かろうとも、現在の師族会議議長――悠元を納得させうるだけの交渉材料を有しているとはとても言い難い。その意味も含んだような泉美の痛烈な言葉に対し、香澄が窘めた。その辺のことは詩奈も聞き及んでいたためか、特に疑問に思う様な素振りは見せなかった。
「ただ、その会議には悠兄が出席してなかったみたいだけど。後で気になって聞いたら、政府の要人と会っていたから出れなかったって」
「それならば納得もできるでしょう」
「そうなのですか？」
「今の悠元兄様はあの父親のように一家の当主です。日本政府の要人と師族会議の青年たちを天秤に掛けた場合、どちらを優先すべきかなど自明の理でしょう」
　泉美が弘一を必要以上に扱き下ろす様な言い方はスルーされつつ、彼女の述べた言葉に対して疑問を呈したのは香澄であった。
「まあ、事情は理解するけどさ。お父さんもそういう用事で家を空け

ることが多いし……ねえ、泉美。もしかしたら、うちの兄貴は悠兄に嫉妬してるんじゃないかな？」
「嫉妬、ですか？」
香澄の言葉に反応したのは詩奈だった。七草家長男の智一は二十代後半で、悠元は十代後半。智一と歳が近い三矢家の長男である元治相手ならばまだしも、大体一回りほど違う相手に嫉妬するという感情がどうにも理解できなかった。しかし、香澄の言葉に対する泉美の言葉は〝同意〟と呼ぶに相応しいものだった。
「有り得なくはないでしょうね。何せ、高校生の身分でありながら実績を有している『クリムゾン・プリンス』にルールという制限があるとはいえ負かしています。十師族直系の最強格という肩書を得てもおかしくは無かった兄様があっさりと十師族から抜けたことに対して、面白くない感情を抱いたとしても別におかしくはないかと」
七草家の場合、現当主の弘一が魔法師としての確たる地位を有し、後妻の子である真由美だけでなく、香澄や泉美も魔法師としての評価を得ている。一方、三矢家の場合は当主の子全員が優秀以上の魔法師の実績を得るまでに成長し、次男と三男は実家の伝手で古式魔法の大家の当主に就任した。
男子と女子の格差が激しい七草家と長男以外の兄弟姉妹が著しい三矢家。普通ならば智一が羨むべきは父親や妹たちであるが、その矛先が悠元や元継に向けられた決定的な出来事は顧傑の一件にまで遡る。
「でも、普通ならお父さんやボクらとか、後お姉ちゃんがその対象になるよね？」
「普通ならばそうでしょう。ですが、師族会議の後で七草家の担当地域が奄美・沖縄方面へ移ることになった切っ掛けは兄様のご実家が関係しています」
盤石な地盤を奪われ、一からの関係構築を余儀なくされる。前向きに捉えれば、魔法師として偉大な父親の影響なしに自らの基盤を作れるという利点があるわけだが、元々国防軍の影響下にあった場所となれば一般社会に溶け込んでいる人間の智一がそう簡単に事を進めら

れるはずがない。どう足掻いても父親の協力は必須となるのが予想される。
　こんな苦労をする羽目になったのは父親のせいだが、泉美や香澄の知る人間が自分の息子に対してすべての事情を正直に話すとは思えなかった。そして、その羨望の矛先がどこに向かうのかと考えた結果、九島烈の引退と引き換えに師族会議へ加わった神楽坂家と上泉家に向けられることとなる。
「悠兄だって何も苦労せずにそうなったわけじゃないのに」
「だから愚かなのですよ、あの兄は」
「……泉美、七草の家を出てから大分容赦がなくなったよね」
　恋愛は人を変えると言うが、いくら気の知れた相手しかいないとはいえ、ここまで躊躇うことなく発言していることに香澄はもとより、詩奈も今まで聞いたことのない泉美の台詞に若干引き気味となっていた。
「それはいいとして、話し合いには多分克人さんも出てくるだろうけど、どうするんだろう？」
「どうする、とは？」
「だってさ。元を糺せばうちの兄貴がしでかした事じゃない。だったら、釈明なり謝罪するのが筋だとボクは思うんだけど、違うかな？」
　香澄の言い分は、達也の主張の如何はともかくとして四葉家を逆撫でするような提案を出した側――智一が前面に出て事情を説明するのが筋である、というものだ。
「あの会議の提案者は克人さんですから、彼が前に立つことは理に適っているといえばそうなのでしょうね」
「苦労人気質だよね、あの人は」
　泉美と香澄の会話に詩奈が若干ついていけてないのは、克人と直接の面識を有していないためだ。尤も、詩奈自身三矢の姓を正式に名乗ったのは魔法科高校入学後の話なので、こればかりは無理もない話と言えよう。
「うーん、悠兄もお姉ちゃんに対して色々言い含めてはいそうだけれど、大丈夫かな？」

「……そう言われると、安心材料がどうにも浮かびませんね」
元々蚊帳の外にいる香澄と泉美がどうこうしたところで何も浮かばないし、下手に首を突っ込んで事態をややこしくするのも厄介なことになる。とりわけ泉美にとっては被害者側に近い立場なので、いくら元実家とは言え擁護する気もない。そんな二人を静かに見つめている詩奈。この停滞した状況に新たな来訪者が舞い込んだ。
「泉美ちゃん、お疲れ様」
「香澄、何もなかった？」
ほのかは泉美を労い、雫は変わったことがなかったか香澄に尋ねた。特に忙しそうな様子も見受けられないが、雫は職務の範疇として香澄に質問を投げかけた。
「あ、はい。特に変わったことはないです」
「そう」
香澄の言葉を聞いて短く答えた。元々香澄は非番なので、放課後の時間に生徒会室を訪れていたというのも分かるし、生徒会の仕事を邪魔している雰囲気でもないのは直ぐに理解した。雫はほのかに視線を向けると、その意図を察してピクシーにお茶を入れてもらうようにお願いをした。
特に誤解やトラブルなどが起きることなく飲み物で一息入れていたところ、ピクシーが詩奈の傍に歩み寄った。
「詩奈様。応接室に・お客様が・お見えです」
「お客様ですか？」
ピクシーに言われて自分の端末を確認すると、来客を告げる校内メールがあったことをすぐに知った。
「ピクシー、ありがとう。光井先輩、泉美さん、お聞きの通りの事情ですので、席を外しても宜しいでしょうか？」
「ええ、いいわよ」
詩奈の問いかけにほのかがそう答える。泉美もそれに異を唱えることはなかった。
「ありがとうございます。ピクシー、後片付けをお願い」
「かしこまりました」

「それでは、いってきます」
扉の前で一度振り返り、丁寧なお辞儀の後で再び扉に向き直って出ていった……生徒会室に自分の私物が入った鞄を置いたままにして。
◇　◇　◇
第一高校の裏には広大な演習林がある。魔法の練習をするのだから、当然近隣住民に迷惑を掛けないような規模の広大な演習場を有している。演習林とはいっても単なる森林ではなく、人工の丘陵で起伏に富んだ地形を造り、更には野外プールや水路に加えて九校戦の競技に合わせた専用の練習場まで備えている。
そして、その一つである林間クロスカントリーコースを一人の男子生徒――――矢車侍郎が駆けていた。とはいっても、何かトラブルに巻き込まれたわけではなく、彼の武術教練の一環で〝鬼ごっこ〟をしている。
ルールは複数の鬼から5キロメートルの区間を走って逃げきる、というシンプルなものだが、そこに魔法らしさの要素として鬼が投げてくるおもちゃのナイフに触れたら容赦なくリスタート。移動系魔法に長けている侍郎も最初聞いたときは楽勝だと高を括っていた……最凶最悪の鬼が参加していなければ。
（あの人、一体どこから見ているっていうんだ!?　知覚系魔法を持ってるだなんて言われても知らないぞ!?）
何せ、侍郎の気配を察知できる範囲外から超高速で飛翔する物体を躱すに等しく、それを躱したとしても他に追いかけてくる鬼（エリカの呼びかけで参加しているレオや山岳部の部員、燈也も含まれている）たちも容赦なくナイフを飛ばしてくるため、既に１４度のリスタートを挟んでいる。
尚、悠元はスタート地点からほぼ動かずにナイフを［ダンシング・ブレイズ］で飛ばしており、［天神の眼（オシリス・サイト）］は使わずに精霊との呼びかけで侍郎の位置を正確に把握している。つまり、侍郎が自ら察知できる範囲外に逃げ出している様なものである。
相手の攻撃を避けるという意味で距離を置くということは決して間違っていないわけだが、この場合は『相手が悪すぎた』の一言に尽

きる。
「……エグイね、悠元は」
「この程度のこと、爺さんは平気でやってたからな。寧ろそれよりも遥かに優しいぞ」
「え、マジ？」
　固有の魔法や能力を使わずに現行の魔法を遥かに超える技量を有する悠元を相手にした段階で〝詰む〟という事態など、一体どこの誰が想定できるのかということであり、幹比古は無論のことエリカも若干引き気味な口調で述べた。
　尤も、人間の常識を遥か彼方へ置き去りにしてきた英雄の存在もあったりするが、そこまでは言及しなかった。
「魔法に頼り切って体力を付けないようでは、この先絶対に躓く。だからこそ軽運動部で渡しているメニューも各々に即した課題を克服するための身体能力を身に付ける鍛錬だからな」
「……両手足に各４０キロの鉛板が入ったアンクルを付けた状態で、軽やかに動いている悠元が本当に凄いと思うよ」
　幹比古は疲れ気味な口調でそう述べたが、軽運動部における成長度合いで幹比古はレオに次ぐ成長度合いを見せている。なお、そのせいでエリカに嫉妬されて『ミキ呼びは止めない』という意固地にも繋がっている。
　当の幹比古本人も佐那から「私も〝ミキ〟と呼びたいです」というおねだりに屈したのか、そこまで口煩く言うことは無くなった……時折諦め気味に呟くことはあるが。
「その程度ならまだマシだ。一番大変だったのは、２００キロのバーベルを振り回して槍の雨を防御しろという課題だった」
「いや、何ソレ。というか、持てるの？」
「一応はな……言っとくが、重量挙げの方法だと２８０キロが限界だからな」
「も、持てるんだね……」
　剛三の鍛錬によって一流のアスリートと遜色ない身体能力を得てしまい、沖縄の司波家の別荘でお世話になった際、食糧調達の一環で

漁師の手伝いをしたら銛で大きいマグロを確保してしまった。そのマグロは個人だと食べきれないので一部は冷凍にして三矢家に送ったところ、父親が盛大に頭を抱えたのはここだけの話。

消えた詩奈

侍郎が本格的に武術を学んだのは悠元が新陰流剣武術を学び始めた頃からのもので、レオに関しては横浜事変の前から学び始めた程度。

本来、武術のキャリアの差から言えば侍郎に軍配が上がるが、魔法の技量も含めればレオは悠元から魔法力に関する鍛錬を受けており、悠元から武術の手解きを受けていたことに加えて身体能力の差も相まって侍郎よりも実力が高い結果が、悠元の持っている端末のモニターに映っていた。

「レオもえげつなくなったわね……何よ？」

「いや、エリカがそれを言う資格はないと思う」

「同感だね」

「アンタたちがそれを言う!?」

「まあまあ、エリカちゃん」

人のことを言えた義理が無いという意味ではエリカの発言も間違っていないが、悠元と様子を見に来た幹比古に言われて噛み付くエリカを美月が窘めた。

侍郎は新陰流剣武術の稽古に加えて、子供の頃から第三研で軍人魔法師との戦闘経験を積んでいる。魔法と武術双方の技量は確かに高まったが、悠元という規格外の技量を有する魔法師が直接関与した点でレオはおろか幹比古相手でも苦戦するのは必須だろう。

「で、風紀委員長はこんなところで油を売っていていいのか？」

「一応生徒が倒れてるって通報があったからね。見てる感じだと大丈夫そうだけれど」

「ミキ、アンタも大分毒されてきてるんじゃない？」

そんなレオと副部長の燈也の方針で登山部らしい活動が追加された。それまでは美嘉の影響で『体力づくり部』『サバイバル部』『鶴嘴部』などと揶揄されていた（基礎体力を鍛える意味では決して間違っていない）が、「鬼ごっこ」に参加しなかった部員はオーバーハングした岩壁に嬉々として挑んでいた。

ちなみに、美月は美術部の一環で『躍動する筋肉』という一部の女子生徒が歓喜しそうな題材の為、登山部の岩壁に挑戦する生徒の姿をスケッチしていた。その題材を聞いた瞬間、悠元が率先して「何も聞かなかった」として鍛錬に集中しており、エリカや幹比古もそれに続く形を取ったため、美月は首を傾げた。

そして、２８回のリスタートを挟んだ結果、侍郎は疲労困憊の姿で大の字になって横になっていた。

「おーい、生きてるか？　今なら冷たい水が降ってくるぞ」

「……生きてますから、過冷却の水は止めてください」

「ちなみに、この薬缶の中に入ってるのは過冷却した麦茶だが」

「無駄に冷やし過ぎですって」

別に嫌がらせではなく、ここまで長時間の鬼ごっこをしていた彼に対する労いであり、別に過冷却などはしていない。冗談を本気のように述べている悠元に対し、侍郎は疲れながらもツッコミを入れていた。

「侍郎がどれだけの鍛錬を積んでいたのかはある程度知っている。実戦経験が豊富な軍人魔法師との戦闘経験の意味では確かに一日の長はあるだろうが、美月を除くここにいる面子で言えば侍郎が一番弱い」

「……」

「まあ、言うだけならいくらでも言えるからな。というわけで、幹比古。お前が相手してやれ」

「僕がかい？」

悠元はもとより、エリカやレオ、幹比古はテロリストや敵国の軍人魔法師、古式の魔法使いと達也絡みとはいえ事欠かない実戦経験を積んでいる。悠元に指名された幹比古は思わず首を傾げていた。

「考えても見ろ。レオ相手に苦戦する状況だと、幹比古が相手としては妥当だと思う」

「……魔法は使わなくてもいいよね？」

「風紀委員長が誰かを取り締まるわけじゃないから、そこの裁量は任せる」

悠元は言わずもがなだし、エリカの実力も把握している状況でレオでも苦戦するとなれば、この四人の中だと幹比古が妥当だという判断に、幹比古は異論を唱えることなく確認の問いかけをした。
そして始まった幹比古と侍郎の手合い。ここにいる三年生組の四人の中では体術の分野において一番実力が低い幹比古だが、精霊魔法を学ぶ過程で鍛えてきた体術と最近東道家で学んでいる古武術で完璧に押さえ込まれていた。
時間にして３０分ほどだが、侍郎がまともに立っていた時間の方が少なかった。
その手合いが丁度終わった頃に、一人の女子生徒こと香澄が駆け込む様な形で侍郎に近付き、制服に土がつくことも躊躇うことなくしゃがみ込んだ。
「侍郎、何で詩奈が急にいなくなったの!?」
「詩奈が……いなくなった?」
「……」
香澄と侍郎のやり取りで大方の事情を察しつつ、空気を貪ることも忘れている侍郎の背中を軽く叩いてやる。すると、その痛みで空気を取り込むことを思い出したのか、侍郎がその場で咳き込んだ。
「ケホッ、ケホッ……ちょっと、悠元さん!?」
「窒息するだろうが、馬鹿野郎。とっとと仕郎さんに連絡して確認しろ」
「あ、は、はい!」
まるで他人事のように述べているが、血縁上の関係があっても家としては別の括りにいるため、ここは侍郎が率先して動くように促した。その侍郎は急いで自分の鞄に駆け寄り、携帯情報端末を取り出して連絡を繋げる間、悠元も自分の端末を取り出してメールを打ち込む。
そして、侍郎は周りの人の視線を気にすることなく叫ぶように話し始めたわけだが、その様子は見えていても周囲に音が広がることは無かった。
「あれ？　侍郎の声が……悠元兄の魔法？」

「魔法というか生来の気質を少し使ってるだけだ。とりあえず香澄、分かってる範囲で説明してくれ」
「あ、うん。えっとね……」
香澄の説明では、大体３０分前ぐらいに詩奈が面会の為に生徒会室を離れ、なかなか戻ってこないことを心配に思った雫とほのかがピクシーに問いかけたところ、『詩奈が既に下校している』ことを掴んだ。それも、生徒会室に私物を残したままで。
「事情は理解した。ピクシーに情報開示を頼む必要はあるが……」
悠元がそう述べると、侍郎の肩を叩いて手のひらを彼に向けて差し出した。その意図を察した侍郎がマイクに向かって断りを入れた上で音声通信用子機を差し出された手のひらに乗せ、悠元はそれを付けた上で話し始めた。
「仕郎さん、ご無沙汰しています。悠元です。侍郎の会話はすべて聞いていました」
『これは、悠元様。して、如何様でしょうか？』
「確認しておきますが、三矢の関係者で所在が分からないのは詩奈だけですか？」
『少しお待ちください』
悠元が尋ねたことは、三矢家の関係者――〝三矢〟を名乗っている人間やそれに近しい人間の所在。例えば、悠元の母親である詩歩や元治の妻である穂波、養女となったラウラやアリサが国防軍の対象となっているかの確認であった。
１分ほどの待ち時間の後、仕郎が再び声を発した。
『お待たせしました。奥様や穂波様は御在宅で、ラウラ様は千葉殿が送迎しており、アリサ様は上泉家の本邸にいると確認が取れています』
一応、三矢家と十山家の確執から動くことを考慮して寿和と元継に説明しておいた。どちらも人質に成り得る可能性を秘めている要素を持つだけに、双方とも納得してくれた。［天神の眼（オシリス・サイト）］でリソースを振り分けているアリサだけでなく茉莉花も所在の無事が確認出来たところで、悠元は仕郎にこう告げた。

「分かりました。父と兄に『今日は家から出ないように』と伝えてください。それと、『後のことはこちらで全て処理をする』とだけ確実にお願いします」
『……畏まりました。侍郎の力が必要ならば、遠慮なくお使いください。その程度ならば旦那様や若様もお許しになるでしょう』
悠元の言葉でその意味を察したのか、仕郎は侍郎の指示を全て悠元に委ねる様な形とした。それを聞いた悠元は「侍郎に返します」とだけ伝えて子機を侍郎に返した。
「さて、まずはピクシーに情報開示をしてもらわないと話が進まん。侍郎の鍛錬はここまでにして、生徒会室に行くぞ」
「……やけに冷静すぎない？」
「ここで感情的になっても何も進まん。八つ当たりしても単に面倒事が増えるだけだからな」
「そりゃ確かに」
詩奈に関することは自分の責任も関与しているだけに、率先して動くことに変わりはないが感情的な行動で余計なトラブルを引き起こすのは御免被る。エリカの問いかけに対して冷静に答えた悠元の言葉を聞いたレオは納得したような表情を見せた。
「でも、ピクシーが情報開示してくれるのかい？」
「忘れたのか？　所有の権限自体は神楽坂家――――俺がその一端を担っているから」
「あー、生徒会室にあるせいで達也君だけが管理してるのかと思ってたわ」
ぶっちゃけ、ピクシーの情動形成の関係で達也が所属する生徒会の部屋に置いているだけであり、書面上の管理は神楽坂家が行っているし、ハード的なメンテナンスは全て悠元が関わっている。なのでピクシーからすれば悠元はもう一人の管理者なのだ。
ともあれ、ピクシーから詳細を聞き出すために悠元たちは生徒会室に向かうのだった……香澄の制服の汚れを魔法で直し、混乱している侍郎の首根っこを掴んだ上で。
◇　◇　◇

「ピクシー、俺はお前の管理者（アドミニストレーター）権限を行使する。三矢詩奈に面会を申し出た相手を開示してくれ」
「畏まりました。面会者は・三矢家の・使者と・名乗りました」
「話がスムーズに進んでる……」
「ほのか、ドンマイ」
　ほのかがピクシーの情念に寄与しているとはいっても、ピクシーが仕えたい主は達也であり、彼女が恩義を感じているのは悠元。とはいえ、機械的な手続きに基づくものは正当な手段であり、ほのかがこれに対してショックを受ける必要などない訳だが。
「その使者は誰だ？」
「こちらになります」
　大型ディスプレイに映し出されるのは、それを名乗った一組の男女。女性は二十代前半、男性は三十歳前後の容姿をしていた。
「この方……どこかでお顔を拝見したことがあるような……」
「身のこなしからして軍人なのは間違いないわね」
　泉美が映像から記憶を辿るような仕草を向ける一方、エリカは数秒間の映像から読み取れた身のこなし方で軍人であることを見抜いた。侍郎がその映像を見てもピンとこない辺り、〝彼女〟と面識がないということなのは間違いなかった。
「確か、三矢家が管理している第三研には多くの軍人魔法師が出入りしているよね？」
「そうですが……」
「三矢家の皆様には、国防軍に奉職されている方はいらっしゃらなかったと記憶しております」
「え、でも」
「おおっと、手が滑ったー」
「ぐふぉっ!?」
　幹比古の疑問に香澄が口ごもり、泉美がフォローする形で幹比古の推測を否定した。これに対してレオが何かを言おうとしたところでエリカの肘鉄が入った。ここにいる面子の中では悠元が国防軍の軍人として所属している秘密を知るのが七草姉妹と侍郎以外全員なた

めだ。
　エリカの咄嗟のフォローに内心で感謝しつつ、呆れ気味な口調で悠元が呟く。
「何で夫婦漫才をやってるんだ、お前らは……それはそれとして、彼女に〝懲りる〟って言葉が辞書の中に無いようだな」
「コイツ？　悠元、男性の軍人を知ってるの？」
「いや、雫。俺がコイツ呼ばわりしたのは女性の方だ。なんせ、一昨年の正月に襲撃してきた部隊の首謀者なんだからな」
　その言葉で真っ先に反応したのはエリカと泉美。前者は身内が部隊を退治し、後者はその関係で一度婚約破棄されたために気付いた。
「一昨年って……和兄貴と次兄が関わったっていうあの件よね？」
「ああ。その件で泉美との婚約が一旦解消されたことに繋がる」
「そうでしたか…この人が…」
「い、泉美？　笑顔が怖いよ？」
　多種多様な反応を見せてはいるが、彼女の名をまだ口にしていないからこそ驚きは少ないだろう。すると、ここで問いかけてきたのは幹比古だった。
「それで悠元、どうするの？　もしかしたら悠元の襲撃が失敗したことに対する報復の可能性も出てくるんだけど」
「相手が誰であれ、三矢に喧嘩を売ったのは純然たる事実。父と元治兄さんは家に残ってもらうことにした。元継兄さんと詩鶴姉さん、佳奈姉さんに美嘉姉さん、そして俺が主体となって動く」
「うへぇ……ご愁傷様ね」
　悠元の答えを聞いてゲッソリとした様子を見せたのはエリカだった。何せ、その一人である元継の実力を〝身を以て〟味わっており、加えて悠元だけでなく歴代の生徒会長を務めた三姉妹も揃い踏みとなると、相手が悲惨としか思えなくなってくるほどだった。
　三矢家・神楽坂家・上泉家の三家だけでも十分な戦力だが、相手を完膚なきまでに嵌めるため、悠元はエリカに視線を向けた。
「エリカ、寿和さんに声を掛けて戦力を集めといて。戦力というより〝犯罪者の護送〟の意味合いが強くなるけど」

「あー、了解したわ。嫁さんの一言があればバカ兄貴も喜び勇んで動いてくれるわね。悠元から声を掛けなくていいの？」
「千葉家に借りを作りたくない」
「あ、うん、そうね」
　悠元が寿和に声を掛けない理由が最近起きていたことだと理解したため、エリカもすぐに納得して端末を弄り始めた。すると、悠元のもとに泉美が近付いた。
「あの、悠元兄様。私の方で何かお手伝いできることはありますでしょうか？」
「そうだな……俺の他の婚約者に事情説明のメールをお願いできるか？」
「畏まりました」
　原作とは異なり、既に七草家の人間ではない泉美は無力に等しい。なので、悠元は自分の他の婚約者に事情説明のメールを送るように指示した上で雫に視線を向けた。
「雫は深雪に、ほのかは達也に事の詳細をメールで送ってくれ。その際、『この件はこちらで処理するため、関与しなくていい』と一言付け加えて欲しい」
　先日の四葉家に対する襲撃の件からして、つかさは可能性を残す様な形にしたのだろう。だが、こちらの戦力が十全に揃う以上、達也と深雪には料亭での話し合いに専念してもらう。人がいい先輩方なら会談を中止することもあり得るだろうが、会談がどう転んでもいいように対処することは可能。
「悠元兄、うちの家にも動いてもらう？」
「いや、要らない。俺の時にそうしておいて詩奈の時は親切にしたら、今度は父を怒らせる案件になる。大体、当主は今京都にいるんだろう？」
「え、あ、うん……（正直、悠元兄の情報力に脱帽だよ……）」
　つかさが作戦決行をこの日を選んだ理由は、七草弘一が今京都にいるという理由も大きい。その事実を口にした悠元の情報力に香澄は上手く言い返せなかった。

気が付けば事の主体を進めているのが自分という有様だが、このことに関して一々目くじらを立てることは諦めた。
「そういえば、悠元。何でその軍人を悠元は知っていて侍郎が知らないの？」
ここでふと出たエリカの疑問。第三研に通っている以上、どんな形であれ面識を有していない筈がない。それこそ『侍郎の存在を空間認識で把握していない』限り。
「簡単なことだ。彼女は身に付けている魔法の特性で、意図的に侍郎と会わないように仕向けていた。そういう曲芸じみた工作が得意なんだよ、十山家は」
「え？　十山家って、確か師族二十八家の」
「ああ。彼女の名は十山つかさ。師補十八家・十山家の人間にして、国防陸軍情報部首都方面防諜部に所属する軍人魔法師。そして、一昨年に俺を排除せしめようと動いた実行犯だ」
犯罪者めいた言い方だが、現実を知ってもらうという意味も含めて悠元はつかさの素性を明かした。これを聞いた人間の反応はというと、殆どが絶句に近かった。その唯一の例外はというと、[神将会]に所属している雫であった。
「雫は驚かないんだな」
「これでも十分に驚いてる。正直、ここに達也さんや深雪がいなかったことが幸運だった」
「それは否定しない」
正直、古めかしい〝秩序〟の杓子定規をいつまで持ち出し続ける気なのかが理解に苦しむ。魔法技術はまだ１００年も経ってない技術なのに、既に存在する線引きで納得している方が後でロクでもない事態に陥りやすい。既存の技術だって進歩するというのに、魔法がそうならない理由など存在しない。聖遺物（レリック）の再現が出来ていない時点で既存の知識などまだ成熟しきっていないに等しい。
人間、歳を取ると考え方が固定化されやすくなって頑固になるとは言うが、ここいらで新陳代謝のリセットをするべき時に来ているのかもしれない。

三者三様の人外街道

実行犯という肩書を使ってつかさの素性を明るみに出した悠元。次々と指示を出した上でレオと幹比古に視線を向けた。
「レオに幹比古、今回は協力してもらえるか？」
「……構わないよ。将来は悠元と同じ立場に立たされるんだ。これぐらいの苦労を負えないと話にならないからね」
「俺も構わねえぜ。エリカに任せると犯人の首が飛びそうだからな」
「あたしでもそこまで血気が逸るような行為は慎むわよ、バカ」
幹比古は将来の東道家当主としての自覚から、レオはエリカの行動を抑える役目に回るような言い方をした。エリカはやや不満げながらもレオの言葉に反論したが、頬が若干紅く染まっている時点で照れているのが丸分かりであった。
「あの、香澄ちゃんや私は詩奈ちゃんの捜索を手伝わなくて宜しいでしょうか？」
「相手が師族二十八家の一つに加えて国防陸軍の精鋭だからな。対軍人魔法師との戦闘経験の点で同行は推奨できない。逆に、泉美と香澄にお願いしたいことがある」
「何、悠元兄？」
「君らの姉に『こちらのトラブルに首を突っ込むな』とだけ言っておいてくれ。彼女経由なら十文字先輩も聞き入れると思うから」
今日の達也たちが向かった会談の場所は泉美だけでなく香澄も知らない。七草家の関係者に聞けば教えてくれるだろうが、真由美絡みで首を突っ込むことも考慮した上で強めの口調の言葉を発した。
ここで克人の名を出したのは、神楽坂家当主として十山家が関与している以上は十文字家に関与されて欲しくないという思惑も含んでいる。
「ところで、詩奈の行方はどうやって洗うの？　兄貴たちを動かしてカメラの情報を拾う？」
「もっと確実な方法がある。いくら情報部の人間と言えども私物の車両を使うことは国防軍法に違反するからな」

裏の手続きで入手したとしても、書面上は国防軍の軍事車両として取り扱わなければならない。だが、事情を知っているエリカたちはともかくとして、ここには香澄と泉美がいる。その点についてはどうするのかというエリカの疑問に先んじる形で悠元が口を開く。
「エリカ、今の俺がどんな立場にいるのか分かるよな？」
「……あー、成程。でもいいの？」
エリカが危惧したのは、神楽坂家が国防陸軍情報部に喧嘩を売るという形が明るみになった場合の話だろう。だが、悠元の決意が揺らぐことは無かった。
「一昨年だけでなく、ここ最近の行動は目に余るし、おまけに今週の前半で情報部絡みのトラブルを処理したからな。主に対象となったのは達也と深雪だが」
「えっ、二人ともそんな素振りなんて一度も見せてなかったんだけれど」
「言えるわけないだろ？　国防陸軍情報部が十師族の一角を担う四葉家をテストしただなんて知られたら、国内はおろか国外まで巻き込んだ大事になりかねん」
原作だと開示されなかった情報だが、二人が既に四葉家の関係者という事実が公表されており、師族会議は政府や国防軍から独立した立場となった。だからこそ、悠元は情報開示を躊躇うつもりもなかった。
新ソ連による佐渡の一件は殆ど開示されていないし、宗谷海峡の件もメディアでは〝新ソ連による軍事的挑発〟と報じられていた。真っ先に浮かぶのは新ソ連だろうが、ここに加えてイギリスやＵＳＮＡも含まれて来る。
「自浄作用で片が付けば御の字なんだが、今回はいくら自主的についていった可能性が残るとはいえ詩奈を巻き込んだことは事実。その為の準備時間が必要になる」
「悠元は合法的に対処するような口ぶりだけど、方法はあるのかい？」
「もう既に手は打った」
「え、もう？」

彼らがいくら裏方で動く国防軍情報部所縁の軍人とはいえ、書面上で言えば〝国家公務員〟――――つまり、国の立法府が定めた法律を遵守しなければならない立場に置かれる。その彼らが表立って法律違反を犯せば、彼らとて如何なる理由があろうとも罰せられる対象に含まれる。

軍事的な演習だとかの言い訳など全く通用しない事由を以て、警察に犯罪者を取り締まってもらう算段は既に立てている。彼らが異議を唱える可能性は残っているが、三矢家に喧嘩を売った時点で神楽坂家（悠元）・上泉家（元継）・矢車家（詩鶴・侍郎）・四葉家（佳奈）・十文字家（美嘉）にまで波及する話となってしまった訳だ。

「正直、一昨年の正月に俺が襲われた時点で詩奈がトラブルに巻き込まれる可能性は考慮していた。だが、魔法師として動ける詩奈よりも動けない存在が巻き込まれる危険を考えて、見て見ぬ振りをしていた俺にも責任がある話だ」

「……待ってください。そうなると、詩奈に彼女の危険性を理解していて伝えなかったのですか？」

「その通りだ、侍郎。俺が一番危惧したのは詩歩母さんや元治兄さんの妻である穂波さん、それに三矢の係累となったラウラやアリサに被害が及ぶこと。ひいてはリーナにも関係してくる話だ。そこまで襲撃の可能性を広げられると、俺でも即決即断で対処できなくなる」

原作よりも魔法師としてフォローできる範囲が広がったせいで、結果的に十山家や国防陸軍情報部のターゲットに成り得る存在が増えてしまっている。単純に潰して人員を入れ替えるだけで済むのならばまだいいが、その背景にいるのが元老院四大老の一角という有様。

正直、情報部に関して表立って関与する気にはならないが、降り掛かる火の粉を放置することもできない。侍郎は三矢家の事情を知る近しい立場にいるためか、悠元を咎めることはしなかった。

「やっぱ、悠元は優しいね」

「そうか？　見方によっては、実の妹を生贄（スケープゴート）にしてるようなものだぞ？」

「そうとも言えるけど、ちゃんと後のフォローもしてるから墜ちてい

く女子が多い。私もその一人だし」
「……」
雫やほのかと同じ中学に通っていた時、上泉家での出会いがあったとはいえ雫とは良き友人関係という間柄だった。それが変わったのは、冬休みに雫がほのかと街で買い物をしていた際に誘拐された事件だ。
その時、偶々近くを通った悠元がワゴンタイプの自走車に二人が連れ込まれる場面を目撃し、テストも兼ねて［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］でバッテリーを分解して起動不能状態にした後、慌てて出てきた男たちを全員武術だけで気絶させた。
その一件以降、雫から時折熱い視線を感じるようになった。
今回もそういったフォローの一環なのは否定しないが、いくらそうだとしても血縁で繋がった妹を娶る気なんて毛頭ないし、愛人なんて以ての外だ。なので、詩奈のフォローは全面的に侍郎へ投げることが確定している。
「ほのかは私が責任を持って送り届けるから安心して。お父さんやお母さんも納得してくれるだろうから」
「ま、今の雫に対して不安は感じていないが……何故抓る」
「もう少し心配してほしい」
「ええー……」
雫の実力は深雪に追随している状態で、寧ろ喧嘩を売る相手が不憫に思えてしまう。その事実を口にすると、雫が不満げな表情を浮かべて悠元の脇腹を抓っていた。どう言えばよかったものかと言いたげな悠元に対し、ほのかが思わずクスッと笑みを漏らした。
「話が逸れたが、今回の件はその罪滅ぼしも兼ねている。言っておくが侍郎、お前も詩奈の救出に参加することは決定済みだ」
「え、ええっ!?　父はただ『悠元様に迷惑を掛けるなよ』とだけしか言っていませんでしたよ!?」
「そう言うしかないだろうよ。仕郎さんの立場上の問題でもあるんだからな」
「え、あ、そ、そうですね……」

いくら矢車本家が神楽坂家系列に連なる古式魔法の家柄とはいえ、分家が三矢家と雇用主―使用人の契約関係を築いている以上は三矢家の意向に従わざるを得ない。仕郎が侍郎へ簡潔にそう伝えたのも無理からぬことだ。

悠元の場合は三矢家の係累に加えて神楽坂家現当主であるため、仕郎も侍郎の指示について一任することで一定の理解を示した。三矢家も使用人の矢車家も家単位で動けないとなると、残るは個人で動ける面々となる。

「ともかく、今後の方針は示した。エリカ、最終の打ち合わせはどうする？」

「そうね……癪だけれど、本家（うち）の方が何かと都合がつきそうね」

悠元の問いかけに対し、エリカは渋々といった感じでそう答えた。警察への根回しも含めると、千葉家で話し合った方が動きやすいという利点もあったりする。

「そういや、悠元はお兄さんやお姉さんたちに連絡しなくていいの？」

「さっきメールは送った。この時を想定して合言葉も決めていたからな」

「……上から下まで家族思いなのが少し妬けるわね」

こんな事態を１００パーセントの確定事項として考えていたわけではない。元々は人間主義者などの危険思想主義者に詩奈が誘拐・拉致された時を考慮してのものだが、結局は原作通りに起きてしまったトラブルの為に使う羽目となったことは正直喜べるものではなかった。

「侍郎はそうだな……念のために一度三矢の本家へ帰って、仕郎さんに確認しろ。最悪単独行動を取ることも想定して動くと了解を貰って来い」

「あ、はい。そういえば、詩奈の私物はどうしますか？」

「ここに置いとく訳にもいかんだろう。ついでに持ち帰ってくれるか？」

「分かりました」

詩奈の私物を持ち帰らせるついでに、侍郎には矢車家の人から了解

を貰ってくるように言い含めた。二度手間にならずに済むし、侍郎なら詩奈の持ち物を大切に扱ってくれると理解している。
「でも、本当に三矢家や侍郎の家族まで動かさなくていいの？」
「連中が四葉家――――達也や深雪をターゲットにしているだけならば、まだ分かりやすい。だが、三矢家まで巻き込まれたとなれば対象範囲が一気に広がってしまう。下手すれば、十師族はおろか師族二十八家の半数以上すら巻き込む大騒動に発展しかねない」
とりわけ悠元がターゲットにされた場合、一条（茜）・一色（愛梨）・二木（真由美）・三矢（アリサ）・四葉（深雪）・五輪（澪）・六塚（泉美）・九島（セリア）と十師族だけでなく師族二十八家まで巻き込むことに繋がる。
婚約者関連でも十分すぎるのに、友人関係にまで広げると更に多くの魔法使いの家まで巻き込むし、古式魔法にまで範囲を広げると旧『伝統派』の魔法師まで悠元の味方に付くのが容易に想定される。
「ともかく、十山家については一昨年以上のペナルティを課すことが確定事項だ。正直、いくら現在の師族会議議長とはいえ、大人の尻拭いを何でまだ十代の俺がやらなきゃいけんのだ、とは思うが」
「その気持ちは痛いほどよくわかるわ。あたしもあのクソ親父のせいでレオとのんびりイチャイチャできなかったし」
「と、未来の奥方がそう言っているみたいだけど、レオはどうなの？」
「奥方って……」
ある意味吹っ切れた悠元とエリカの発言を聞いた幹比古の問いかけに対し、レオは「もう諦めた」とでも言わんばかりに深い溜息を吐いたのだった。
◇　◇　◇
そこから少し時間は遡り、深雪は馴染みの美容室にいた。「一見さんお断り」の看板すらも出していないこのお店は警固を要する重要人物を相手にした高級店。そういう店だからこそ予約もすんなり取れたため、ついでに水波の方もお願いしている。
深雪はメールの着信音が鳴ったことに気付き、後ろで電子書籍を読んでいた達也に声を掛けた。

「お兄様、端末のメールを確認していただけませんか？」
「メールか？　分かった」
　深雪の私信を無神経に覗くほどの性格ではないが、深雪からお願いされたとあればそれを拒むほど遠慮深くもない。鞄から通信端末を取り出すと、メールを確認する。
「雫からのメールだ。詩奈がいなくなったそうだが、その辺の対処は悠元が主導するそうだ」
「悠元さんがですか？」
　流石に整髪中なので深雪は美容師の邪魔にならないようにしつつも驚きの表情を見せた。妹離れを気にしていた立ち位置だからこそ、ここで積極的に関わることに驚きを見せた形だ。なお、こうやって普通にメールの内容を話せるのも、美容師の口の堅さを信用しているからに他ならない。
「俺にはほのかから同様の内容のメールが届いた。俺たちには先輩方との会談に専念してほしいのだろう。なお、彼女の救出には悠元の兄や姉たちも加わるそうだ」
「……そうですね。ここで悠元さんの気遣いを無駄には出来ません。お兄様はそれで本当に宜しいのですか？」
「悠元の兄である元継さんの実力だけでも師匠曰く『反則級』と言っていたからな。相手がトラウマを抱えそうな気がしないでもないが（すまない、悠元）」
　達也の内心では、深雪が本来週末に構ってくれる時間を奪われた格好となる為、明日は深雪が悠元に引っ付いて離れないのではないかという懸念が最優先事項として浮上した。仮に詩奈の身の安全が問題ないとしても、代償として悠元の心の安寧が消えるという有様に対して達也は心の中で謝罪したのだった。
「それに、エリカもやる気だそうだからな」
「そうなりますと、警察が動いてくれることになりそうですね」
「そうなるだろうな」
　ただ、雫から深雪に送られたメールとほのかから達也に送られたものでは内容に一部違いが生じている。それは、今回の実行犯の片割れ

に十山家が関与しているという内容を達也は把握しているが、深雪に送られたメールには記載されていなかった。
今回の一件を起こした相手への制裁は三矢家が関与すべきものであり、四葉家はいわば被害者の立場に置かれる。今の四葉家にいくら実力があろうとも、迷惑を掛けた側として後始末は己の手で済ませる……という意図が多かれ少なかれ含まれている。
エリカが動くとなれば千葉家の伝手で警察も動くことになるし、悠元の伝手で下手すると八雲まで動く可能性が生じてくる。この時点で詩奈を連れ去った相手が〝詰み〟になっているということに、心なしか同情の念を覚えた達也であった。
◇　◇　◇
エリカは近しい側だから無論だが、悠元からしても久しぶりの千葉本家はあまり心地の良いものとは言えない。何せ、一度断った婚約を蒸し返しただけでなく、お互いに納得した関係をぶち壊す様な申し出をしてきたのだ。
結局、千葉家の次期当主は寿和が、千刃流の師範は修次が継ぐことで決着がついた。これでエリカが将来千葉の姓を捨てることは確定したわけだが、元々降って湧いたようなものだったし、そこまで未練に思っていないどころか「かえってせいせいするわ」とあっさり言い放った。
とはいえ、詩奈を救出するという意味で『背に腹は代えられない』と己の中で納得しつつ、敷地の中に足を踏み入れた。そんな幼馴染を気遣ってか、隣に立つエリカが声を掛けてきた。
「……悪いわね」
「気にするな。俺の生まれの時点でエリカが巻き込まれるのは想定の内だ。しっかし、丁重に断った婚約を復活させるとか当主の正気を疑ったが」
「多分、泉美のことで行けると踏んだんじゃないの？」
「事情が明らかに違うだろう」
泉美の場合は双方共に穏当な流れの中で婚約を結び、七草家当主のヘマで一度解消された。エリカとの婚約打診の場合は当人同士がお

互いにその気がないのに、千葉家側が強引に押してきていたところを三矢家側が丁重に断った。
　一度破棄された婚約が復活したから行ける、というのは些か剣術家として思慮が足りないように思えてしまう。
「大体、修次さんがこのままいけば間接的に三矢家とつながりを持てるんだぞ。仮に俺とエリカが婚約したとして、百家本流が十師族の外戚になったところで俺はどの道三矢家を出ていくのが確定している。つまり、躍起になったところで意味がない」
「とんだ皮算用に巻き込まれたって訳ね。あたしもアンタも」
「そういうことになるな。万が一強引に来るようなら、俺自ら剣を使ってお前の父親を叩き潰してたが」
　いくら自分でも婚約者の数には限界がある。たとえ今の母親から『もう少しいても咎める人はいないと思いますよ』と発言されたとしても。それだけでも腹一杯なのに、愛人兼専属使用人を三人も抱えているのだ。正直高校を卒業したら山奥に隠居したい気分を覚えなくもない。
　なお、向こうの会談前に送られたと思しき深雪からのメールには『明日は一緒に居ましょう』の一文だけが書かれていた。この時点で司波家に帰ったら何が起きるのかを悟れてしまうあたり、自分も大分毒されたのだろうと思う。
「物理的に潰れそうね、ソレ……何だか、ミキも含めて三人でワイワイやってた時が一番平穏だったわね」
「確かに」
　十師族・三矢家に生まれ、護人・神楽坂家当主となった悠元。
　精霊魔法を得意とする吉田家に生まれ、東道家次期当主と目される幹比古。
　百家本流・千葉家の隠し子として生を受け、将来はレオの愛人予定であるエリカ（なお、剣術の部分で上泉家は養子縁組が出来るかどうか動いている模様）。
　三者三様だが、生家を出て魔法師として生きるという部分で共通してしまった幼馴染三人衆。出会った頃の賑やかさが思わず恋しく

なったというエリカの言葉に対し、悠元は短く答えつつ肯定の意を示した。

海を隔てた苦難のはじまり

ＵＳＮＡ軍による［グレート・ボム（達也の［マテリアル・バースト］の仮称）］および［シャイニング・バスター（悠元の［スターライトブレイカー］の仮称）］の無力化、あるいは当該人物の暗殺任務。

スターズ総隊長にして［十三使徒］アンジー・シリウスのみならず、スターズでも〝規格外〟と評されたセリア・ポラリスを動員しても失敗したのが昨年の初め頃。そして、その最重要被疑者とされた司波達也が四葉家次期当主として、神楽坂悠元が神楽坂家当主となった後、再び二つの戦略級魔法に関する事案が議題として挙がった。

北アメリカ合衆国――ＵＳＮＡの国防総省（ペンタゴン）を統括するリアム・スペンサー国防長官は、かの二つの［アンタッチャブル］に触れるべきではないと判断しており、行政を担当する側の大統領官邸（ホワイトハウス）の長であるジョーリッジ大統領も同意見であり、更には立法府もとい連邦議会の中にも日本を対等な同盟国として対大亜連合および新ソ連方面の協力姿勢を打ち出すべきだという意見は少なくなかった。

だが、対外的な面で彼らを好意的に見る人間もいれば、日本の潜在的脅威を恐怖として感じ取る者や、現代魔法の先進国としてのプライドが日本の台頭を許さない者もいるのが実情であった。

先日のジード・ヘイグを唆して人間主義者の矛先を日本に向けさせようとしたケイン・ロウズ氏を始めとした政界の一派もその一つと言える。尤も、そのテロ事件に関連した旧型兵器の紛失事件はＵＳＮＡ全体でも大きな波紋を呼び、その一派は国家における重要なアクシデントとして大規模な〝粛清〟の憂き目に遭った。この一件が回りまわってメキシコにおける大規模の暴動の遠因になった。

それでも、軍の中には日本に対する潜在的な敵意を見せるものが少なくない。昨年は二件の重要な案件が日本によって潰された形となるが、元々はＵＳＮＡ側が自分勝手な癇癪を起こした結果として生じたものだというのに、それを認めようとしなかった。

そんな国内事情を抱えつつも、ホワイトハウスの大統領執務室ではＵＳＮＡの現国家元首ことジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領、そし

てリアム・スペンサー国防長官が執務机を挟む形で相対していた。
「……どうするのかね、国防長官」
「すでに外交チャンネルを通じて、彼らの速やかな引き渡しを求めてはおりますが、今のところは……」
日本に潜入したＵＳＮＡ軍が日本の国防軍に捕らえられたという情報は直ぐに伝わっていた。大統領も国防長官も正規の外交チャンネルを通して彼らの即時引き渡しを求めてはいるが、魔法師に関する案件となれば政治家や役人の及ぶ範囲に無い部分が当然生じている。
「大佐のほうはどうだ？」
「個人的な誼で既に連絡はしておりますが、その引き換えとしてアンジー・シリウスの戦略級魔法［ヘビィ・メタル・バースト］と［ブリオネイク］をＵＳＮＡに返す、と申し出ております」
「何と、戦略級魔法を手放すと!?」
大統領の傍に控えていたヴァージニア・バランス大佐兼大統領直属魔法軍事顧問は、彼の問いかけに対して〝四葉家からの回答〟を述べた。これに驚いたのはスペンサーだが、ジョーリッジはその意図を察して深い溜息を吐いた。
「そうか、ならばその申し出を受けることで今回のことは手打ちとせねばなるまい。ところで、スペンサー長官。最近ペンタゴンで宇宙開発に関する噂が出てきていると報告を受けたが、其方は何か聞いているか？」
「その噂ですか？　現状はこちらにまで話が来ていない以上、単なる噂の範疇でしかありませんが……大統領は実現の可能性があるとお思いなのですか？」
「実現の可能性があるから尚悪い、というのが率直なところだ」
日本の方で対処してくれると言うならば、それを信じて手打ちとすることで今回の騒動を決着させることで議論をまとめたが、ジョーリッジはスペンサーに対して最近起きている噂――――魔法技術によるテラフォーミング計画――――の真偽の確認も含めた問いかけをし、スペンサーは「単なる噂の範疇だ」と述べつつ問い返すと、ジョーリッジは一つ息を吐いて眉間に自らの拳を置いた。

「人間主義を含めた反魔法主義の火種は未だに根強い。欧米では特に顕著で、新ソ連では反体制派を大々的に支援しているという風の噂もあるほどだ。その状況で魔法の平和利用といえども宇宙開発の話なんか出せばどうなる？」
「悪魔の術である魔法は地球に要らない。故に魔法師は宇宙に出ていくべきだ、と騒ぎ立てる様子が目に浮かびますな」
「無責任に軽々しく宣うことなど、とりわけ私が許さん……と言えればどれだけ楽なことだと思うよ」
　日本の場合は財閥グループの一角が大々的なメディア買収工作を行ったことで、反魔法主義を擁護するような言論が一気に抑えられた。それは、この国と日本のメディアの気質が違うからこそ成し得られた側面もある。
　政府が言論統制を行うなど以ての外であり、いくら現代魔法の先進国としても、それが国策だとしても反魔法主義に対する弾圧など出来ない。その意味で軍上層部や国防総省の一部に日本を妬むような主張があるのも大統領は把握していた。
「相手を妬むということは、自分にそれが出来ていないと証明させられたようなものだ。私も若い頃は大物議員相手に経験したものだが、いい歳の人間がみっともないという神経は我が国の上層部に存在しないのかね？　大佐の率直な意見を聞きたいが」
「そんな性根が備わっていれば、我が軍において最高峰の実力を有するシリウスやポラリスを国外に派遣するという事態には至らなかったと思われます」
「尤もな意見だな」
　ジョーリッジとて非魔法師である以前に、政治家として様々な感情を覚えてきた。その彼がこうやって自制しているというのに、政府の人間には自制できない輩が多すぎるのではないか、という疑問を端的に答えたバランスの回答で納得した。
「話を戻すが、かの「トーラス・シルバー」がテラフォーミングの実現可能性を見出してしまった。別にその存在を妬む気など無いし、「恒星炉」は世界のエネルギー事情を大幅に改革し得るポテンシャルを秘

めている以上、それに繋がるコネクションを得るのが重要課題だ。それだというのに、あの連中は日本の新たな戦略級魔法を奪うことに躍起で、経済活動の基本（ルール）を知らんのかね？」

「それは……」

国の防衛費ひいては国家予算とて打ち出の小槌の如く無限に出てくるわけではない。とりわけ魔法技術の出現によって国内総生産（ＧＤＰ）に対する防衛費の比率も大きく変化してしまった。対日強硬路線の一派は軍事的な行動によって魔法技術を奪うことに躍起だが、その代償として生じる貿易損失などの経済活動に対する影響を全く考慮していない。

ジョーリッジが一番危惧しているのはまさにその部分であった。

「仮に日本の戦略級魔法を無力化出来たとして、今度は我々や欧州、大亜連合が新ソ連の戦略級魔法に備えなければならないリスクを負うだけでなく、民間の経済活動にも大きな支障を来たすことに繋がる。彼らの領土的野心が旧ソ連時代から変わりないことは重々承知の筈だ」

仮にＵＳＮＡが日本の戦略級魔法を奪ったとして、日本政府がその報復として大洋南部経済連携協定（ＳＥＰＡ）を根拠に非加盟国の領海における船舶航行権を剥奪するよう加盟国に打診する可能性がある。

もしそれが実現すると、欧米諸国が紅海やインド洋、東南アジア方面やスエズ運河はおろかパナマ運河（現状は南アメリカ連邦共和国の管轄下）までも航行不可となり、経済活動に多大な影響を与えかねない。さらに厳格化するとなれば、領空はおろか加盟国上空全てが通過不可能という事態に陥る可能性まで波及する。

今や国の抑止力たる戦略級魔法を奪うということは、それだけのリスクを背負っているということに他ならない。国の長としてそこまで読み切っているジョーリッジの言葉に対し、スペンサーは言い返すことが出来なかった。

「ＦＲＢの議長や副議長だけではないぞ。国務長官や財務長官をはじめとした現閣僚のほとんどが『日本に対する潜在的な敵視を止めるべ

きだ』と私に対して公言している。なのに、軍の連中は……先代の〝彼女〟がこれを聞いたら、きっと嘆き悲しむだろう。『我が国はここまで落ちぶれてしまったのか』の言葉と共にな」

ジョーリッジは先代の〝シリウス〟――――ウィリアム・シリウスを良く知っていた。正確には彼女の父親と親友であったことから家族ぐるみで知り合った。娘同然のように思っていたウィリアムの為人はよく理解していたし、政治家になっても付き合いを変えなかった。その彼女は、8年前に帰らぬ人となった。彼女と親しかった〝先代のポラリス〟と共に、新ソ連によって殺された。

個人的に報復したいという衝動に駆られたが、政治家として歯を食いしばった。だからこそ、新ソ連に対する抑止力を日本が有するというのならば、それも一つの復讐の形となるだろう。現に、一昨年秋――――［灼熱と極光のハロウィン］の時は新ソ連の戦略級魔法を無力化したという情報も上がってきている。

日本に対する親近感と新ソ連に対する憎悪。剛三に対して親密に接したのは、彼が昔新ソ連相手に無双したというその力をジョーリッジは無意識的に抑止力として求めた。

その際にセリアを婚約させようとして悠元に締め上げられたのは己の失策であったが、結局二人が婚約したことについては、祖国でも手綱が掴めない彼女を御しきれる貴い手が出たことに祖父として思わず涙が出た。

「閣下……」

「すまない、思わず耽ってしまったな。ともあれ、政府として統一した意見を以て事に当たる必要がある。差し当たって大佐。彼には事前に打診したが、万が一彼女が帰国するような事態になった場合、彼を表向き日本の大使館職員として派遣し、アンジー・シリウス少佐をその護衛として宛がうように手配してくれ」

「……彼女は今日本におります。一体どういう命令で彼女を帰国させるというのですか？」

ジョーリッジが述べた人物を察しつつ、その真意をバランスが問いかけるとジョーリッジはスペンサーに視線を向けた。向けられた側

のスペンサーが僅かに頷くと、ジョーリッジが話し始めた。
「先程話したテラフォーミングにも関わる話だ。此方の予測では、イギリスのウィリアム・マクロードに新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフも関与してくることが想定される」
「双方共に［十三使徒］ですか。まさか、その釣り合いを取る為だけにリーナを帰国させる気ですか？　そんな馬鹿なことを一体誰が考えているのですか？」
「国家科学局が関与しているのは間違いない。現状は噂の洗い出しを進めているが、彼がその懸念を口にした以上は無視も出来ない」
　ジョーリッジはその首謀者も当然把握しているが、現状は可能性の領域を抜け切れていないため、無実の罪を着せることに繋がってしまう。仮に大事になれば、全世界傍受システム［エシェロンⅢ］の存在が白日の下に晒されることに繋がる。宇宙開発の話も現状は噂の範疇を超えていないため、政府として打つ手はかなり限定されてしまっている。
「……分かりました。このことは先方に伝えますか？」
「いや、こちらから伝えずとも既に把握している可能性がある。長官、カーティス議員に渡した親書はきちんと相手に渡っているのだな？」
「はい。議員本人からも確認は取れております」
　ワイアット・カーティス上院議員の急な訪日は周囲にあらゆる憶測を撒いた形だが、表向きはジード・ヘイグの身柄を引き渡してくれた日本政府に対して、大統領特使という形での感謝の意を伝えるもの。そして、裏向きは大統領の身内を娶る神楽坂家当主に対して、ＵＳＮＡ政府としての統一見解を伝えた。
「そうか。ひとまずこちらの政府としての見解は伝わったとみるべきだな……だが、油断も出来ん」
　エドワード・クラークが何を目的として日本を貶めようと目論んでいるのかは知らないが、いち政府機関の人間が政財界を引っ掻き回す様な行動は決して許されるものではない。これが平然と許されてしまうと、法治国家としての体裁が根本から崩壊することに繋がる。
「まったく、面倒な時代になってしまったものだな。核兵器とて扱い

が難しいことに変わりはないが……」
核兵器といえども、隔絶した威力と引き換えに様々な〝負の遺産〟を生み出す諸刃の剣。それが魔法に取って代わったとしても、扱いが難しいという点においては何ら変わりない……と言いたげにジョーリッジがそう零した。
魔法の存在を羨んだことはあったが、その魔法が今度は孫娘にあたる二人の少女に資質があると分かった時、その魔法を根拠として軍に入れることをジョーリッジは彼女たちのもう一人の祖父――――九島健と一緒になって反対した。
人として青春時代を謳歌する権利を奪うことと、魔法師として空席のままとなっている戦略級魔法師の穴埋めという天秤。結果として孫娘が軍に入ることを已む無く許容したが、軍が無理を押してまで行った人事はスターズ内部の〝階級の塩漬け〟を引き起こしてしまい、本来いるべき大佐や中佐などの佐官クラスが生じないちぐはぐな魔法師部隊の編制が完成してしまった。
そこから生じてしまった歪みは、スターズ内部に不協和音を生み出している。軍の最高指揮官たる大統領としても看過できるレベルをとうに超えてしまったが、軍上層部としてはどうしても[十三使徒]アンジー・シリウスを手放したくないという目論見が見え隠れしてしまっている。
ＵＳＮＡ軍の文民統制（シビリアンコントロール）が機能していないことにジョーリッジは正直頭を抱えたくなるような心境であった。
「ともかく、喫緊の事態は早急に片付けなければなるまい。尤も、事態の解決を全て相手に委ねるというのは腑に落ちないが、今回は仕方があるまいな」
パラサイトの事件を受けてダラスの研究所は一時閉鎖されたが、魔法的な安全が確認できたとして稼働を再開している。ただ、マイクロブラックホールの関連実験は『国家において重大なアクシデントを引き起こす可能性が極めて高い』という有識者会議の報告を受けて凍結状態とされている。
国家の存亡にかかわるとなれば政府関係で手を出すことは忌避さ

れる結果となった。だが、政府のコントロールを十全に受けていない軍が暴走して実験を行う可能性は否定できない。

ＵＳＮＡ政府の苦難は……まだ始まったばかりであった。

損壊の危険性と逆鱗、知る者と知らぬ者の会談

千葉本家へ集まった時には夜の六時を回っていた。千刃流の道場では夜の稽古が始まる関係で門下生の出入りがあるが、彼らは正面玄関の前にいる悠元とエリカに対して頭を下げながら道場に向かっていく。

そして、協力すると明言したレオと幹比古、そして強制参加組の侍郎が揃って姿を見せた。

「ミキ、美月はちゃんと送り届けたの？」

「それは勿論……何で面白くなさそうな顔をするんだよ」

「べっつにー？」

「やれやれ……」

佐那の影響もある為か、幹比古が真剣な表情を見せていることに対して面白く無さそうに答えるエリカを見て悠元が呆れ気味に零した後で侍郎に視線を向けた。

「侍郎、家族に了解は貰えたか？」

「はい。父からは改めて悠元さんの指示に従えと」

「そうか……」

生徒会室で話をまとめた後、元と元治には改めてメールで事の仔細を伝えている。［五芒星（ペンタゴン）］を用いての暗号メールなので、情報部といえども万が一傍受は出来ても解析できないようになっている。

素直に従ったところからして、つかさに対して何も抵抗できなかったことに対する罪滅ぼしの部分もあるのかもしれないが、侍郎を引き留めなかったところを見るに、それでも詩奈が心配だという裏返しに他ならない。

「矢車家の方は？」

「完全に見失っている状態です。ただ、御当主様も元治様も騒ぎにする必要は無いとお考えのようで」

「それはそうなるだろうよ」

詩奈がどういう事情でいなくなったのかを知っているため、下手に動けばボロが出かねないのを危惧しているのだろう。尤も、動かない

でいてくれる方が却ってありがたかった。何せ、今回の参加する陣容があれから〝増えた〟のだ。
「下手に増えられても困るし、強襲を掛ける意味でも定員は必要だ。エリカ、警察の方に根回しは？」
「先に現地の前で待機させているわ。兄貴や稲垣さんもそっちに回してるし……悠元のほうこそ、お兄さんやお姉さんたちは大丈夫？」
「大丈夫どころか、むしろ不安に思えてきた」
　別に実力的な面で不安視はしていない。何せ、三矢の兄弟姉妹で元継、詩鶴、佳奈、美嘉、悠元は第三研の対人戦闘だけでなく実戦経験もこなしており、パラサイトなどの妖にも対抗できる時点で十分だと思う。
　それでも悠元が不安の言葉を口にしたのは、救出予定の館が全壊しないかどうかに掛かっている。
「詩鶴姉さんの［一極徹甲狙撃（ディフェンス・ブレイカー）］や佳奈姉さんの［グラビティ・バレット］、美嘉姉さんの［ブリッツ・ロード］を伴った体術を用いる時点で、館をある程度強化しておかないと一瞬で崩壊する」
「……え？　そんなにヤバいの？」
「特に詩鶴姉さんは武術教練のこともあって詩奈を可愛がっているからな。その気になれば一発で高層ビルを破壊できる」
　剣術家の生まれであるエリカが驚くということは、それだけ常識外れの状態になっているということだろう……当の彼女もその領域に両足を突っ込んだ側の人間だが。
「……俺ら、生き残れるのか？」
「そこは心配しなくても大丈夫だと思う……多分」
「悠元!?　気休めでもせめて安心材料を言ってくれないと！」
「自分の生命に直結しかねない部分で嘘なんて言えるか、阿呆」
「あ、あはは……」
　流石に館の中にいるであろう詩奈諸共吹き飛ばすということは決してしないだろうが、詩奈の救出という主題よりも、寧ろこちら側の生存が懸かっているという現実を代弁するかのように侍郎の口から苦笑が漏れたのだった。

ともかく、こんな人通りの多い所では目立つ（侍郎が動いた時点で既に探りを入れている可能性はあるが）ため、エリカの先導で案内されたのは狭い茶室であった。なお、エリカが「剣術に必要なものとは思えないけどね」と愚痴気味に零したのは言うまでもない。

◇　◇　◇

そこから少し遡り、厚木の三矢本家では当主の元と総領の元治が密談を行っていた。元治は使用人である矢車仕郎からの報告をそのまま元に伝えた。

「父さん、詩奈が連れていかれたそうです。そして、事態を知った悠元が動きました」

「そうか……悠元は他に何か言っていたか？」

『母さんや穂波さんたちにも危険が及ぶ可能性を捨てきれない』という理由で、自分と父さんはここから動くな、と」

つかさとの約束では詩奈だけだが、今の三矢家は養子も含めれば三男七女（リーナ、ラウラ、アリサが含まれるため）の大所帯であり、元治の妻である穂波は四葉家の関係者。その線を鑑みれば、元や元治に留守を任せるのは自然の流れとも言える。

「それと、侍郎君が悠元の指示で動くそうですが……よろしかったので？」

「この程度で彼に対する償いにはならんよ」

元の〝償い〟という言葉の真意は、侍郎に詩奈の護衛のことをきちんと説明することなく解除してしまったことに対してのものだ。今まで詩奈の付き人の様な形で傍に居させたのが逆に仇となった。これぱかりは矢車家だけの問題ではないと元はそう考えている。

「にしても、侍郎君はつかささんを知らなかったか。いや、見覚えが無くても仕方がないのかもしれないが」

「第三研に通っていてもですか？　まさか、十山家の魔法特性が関係していると？」

「それもある。だがな、ここまで強硬に事を進めるとは私でも予想していなかったことだ」

いくら十山家に強力なバックがついているとしても、一昨年の二件

の失敗で十山家は師族会議から爪弾きにされかかっていた。そのことを考慮すれば、情報部が悠元を巻き込みかねない案件を自ら引き起こすこと自体〝自殺行為〟でしかない。
だが、つかさは四葉家――――主に達也が要因であるだろうと元は見ている――――へのテストとして詩奈を駆り出した。この時点で元は忠告の意味も込めて『悠元への説明をしたのか』と問いかけた。そして、つかさから返ってきた言葉は……元ですら呆れ返るに等しいものだった。
「真っ当な人間ならば、失敗のリスクを考慮して行動を控えるのが普通だ」
「しかし、現に詩奈は連れていかれました。元継や詩鶴、佳奈や美嘉、そして悠元の逆鱗に触れてしまった」
「……良くも悪くも、義父や父譲りの気質が芽生えてしまったな」
その意味で元治は三矢の次期当主として些か優しすぎるきらいがある。悠元という規格外の傑物の出現によって、元の中に〝要らぬ欲〟が出ていることに思わず苦笑を漏らした。義父のように有象無象を灰燼に帰すということは詩奈がいる以上しないと思うが、相手にする国防陸軍情報部の精鋭部隊相手でも数分もつか否かだろうと元は予測している。
「その絡みで千姫さんから連絡を受けた。『三矢家で軽井沢に別荘を持たないか?』とのことで、後日に土地の権利書を弁護士から受け取ることになった」
「軽井沢ですか? その辺りは四葉家の監視地域に含まれますが……父さん、まさか詩奈の行き先に関係しているのでは?」
「その可能性を拭えないからこそ、向こうの申し出は断れない。悠元の面子を潰すことにも繋がるからな」
どうせ今回の一件で改めて三矢家と国防陸軍情報部が対立関係におかれる以上、断ることは出来ない。これによって、国防陸軍情報部の〝私有地の不法占拠〟および〝住居侵入罪〟は確定。いくら関係者である詩奈が自らの意思で現地にいようとも、元を脅した時点で〝恐喝〟および〝誘拐〟は既に計上されたも同然。もののついでに国

防軍法違反に加えて銃刀法違反も上乗せされる。
「今回の一件が解決したら、その土地の権利は四葉家に無償提供することを考えている。飛び地など貰っても管理が大変なだけだし、中部・東海を担っている四葉家ならば無碍にすることはないだろう。こちらとしては四葉家から受けたものを少しでも返しておかなければならない」
「発端は全て悠元に起因していますが」
「悠元も別に大きな恩や礼など求めていないだろうが、これまでに成したことを鑑みれば妥当な礼なのだがな」
深夜によるＦＬＴの株式譲渡や、深雪と夕歌、そして水波を嫁がせるという現当主の判断。それらは全て悠元が達也と対等な友人としてありたいという結果から生じたものである。四葉家だけ見ても大盤振る舞いなのに、世界に目を向けるといつの間にか世界有数の大資産家として成り上がってしまった。
当人としては『一生暮らす分には困らないとかそういうレベルじゃねえよ！』と一時期不貞腐れたことがあったが、これには元も思わず笑いを禁じえなかった。
「良かったな、元治。悠元がいたからこそ、複数の妻を持たずに済んでいるのだぞ」
「ええ、そうですね……あれだけの婚約者に囲まれて平然と出来ている弟に感謝しかありません」
なお、三矢家では自重していた（パラサイト事件の時は抑えていた）が、ツインタワーマンションと司波家の往復生活になってからは婚約者だけでなく愛人たちにも囲まれて物理的・心情的に熱い毎日を送る羽目になっている事実は彼らですら知らない事実である。
◇　◇　◇
真由美が達也と深雪を招いたのは赤坂の料亭であった。達也たちの、少なくとも三倍以上の年齢だけでなく、地位か、名声か、権力か……あるいはそれら全てが備わっている――そういう人間でないと入ることを許されないような場所であった。ここに来たとき、達也は心なしか親友ならば年齢に関係なくとも似合いそうだ、と思ってし

まったほどだった。
とはいえ、店の者はそういった場違い感の客人を嫌がることなく、笑顔以外の表情を見せることなく案内した。達也たちが着いたのは約束の時間の3分前。そして、案内された席に着いたのは5時丁度。部屋の中には克人が既に来ていた。
「お待たせしましたか？」
「いや、時間通りだ」
克人が多少の時間の遅れを咎めることは無かった。達也が先んじて座り、深雪と水波がそれに続いて正座をする。ただ、招いた真由美本人がいないことに少し疑問を持ったが、その疑問は直ぐに解消された。
「ごめんなさいー！　待たせちゃったかしら？」
「いえ、自分たちも先程来たばかりですので」
真由美の後ろには摩利がいて、大方真由美に巻き込まれてのものだろう……と達也は内心で今までの関わりからそう推察した。全員が席に着いたところで、真由美が話を切り出した。
「さて、深雪さんはおそらく達也君から事情を聞いているのでしょうけど……達也君。先日は兄が無神経な提案をしてしまい、本当に申し訳ありません」
最初の一言目は真由美の謝罪からだった。既に七草家の人間でなくなったとはいえ、自分も間接的に関わってしまった側として無関係とは言えない。本来ならば智一自身が出向いて達也と深雪に謝罪をするべきなのだが、また話が拗れる可能性を勘案してのものだ。
「二木先輩が気に病む必要はありません。あの場は四葉家の人間として全ての責任を背負う道理がありませんでしたし、深雪への危険を考慮して強く反対したまでです。自分の方こそ、会議の空気を悪くしてしまったことについては謝罪すべき立場です」
「達也君……それでも、その切っ掛けを作ったのはうちの兄に他ならないもの。だから、謝罪は受け取って欲しいの」
「分かりました、その謝罪を受けましょう」
達也も深雪に対する危険を考慮しての反発であり、親友の心労を鑑

みると自分のしたことにも非がある、と口にした。それを聞いた真由美は『達也君は何も悪くない』と言いたげにしつつ、頭を下げて改めて謝罪をした。それを見た達也は頭を下げて受け入れた。頭を上げたところで、達也は視線を克人に向けた。

「それで、十文字先輩、と呼ばせていただきますが。二木先輩からは先日の会議についての話がある、とだけ伺ってはいますが、それ以上のことは聞かされておりません。その辺についてお伺いしたいのですが、宜しいでしょうか？」

　この場はあくまでも四葉家次期当主・司波達也と十文字家現当主・十文字克人としてのもの。それを踏まえての言葉遣いに対して、克人は少し頷いてから話し始めた。

「今回来てもらったのは先日の会議についてだ。その後の懇親会のことは司波も何らかの形で聞き及んでいると思うが、物別れという形で終わってしまったのは憂慮すべきだと思っている」

　会議の提唱者として、克人は四葉家を爪弾きにするような形で終わってしまったことを憂慮していた。これから神楽坂家と上泉家が加わった際にこの状況が続いたままでは極めて芳しくない。下手をすれば、参加者全員に対して何らかのアクションを起こすことも想定した。

「あの会議では具体的な方策に至らずとも、一定の方向性を見出せればよかった。流石にいきなり次期当主クラスの人間で集まったとしても、今まで交流がなかったに等しい間柄でいきなり話を詰めろと言われても土台無理な話だ。それは司波も理解してくれるな？」

「それは理解いたします。ならば、何故あの場で七草殿を止めなかったのでしょうか。会議の提唱者としての体裁がそこまで大事だったと？」

「……それは否定しない。こればかりは自分の不徳と認めている」

　若手会議で魔法師の容姿を生かした方策が持ち上がるという可能性を光宣から聞いていたにもかかわらず、会議の発起人として自ら会議を壊すということを躊躇った結果、四葉家の不興を買った。こればかりは自分にも責があると克人は認めた。

「だが、勘違いはしないで欲しい。少なくとも自分は四葉家にも反魔法主義の対策に協力してほしいと願っているが、全ての責を四葉家に背負わせたくはない。それだけは信じて欲しい」
「……そうですね。分かりました、受け入れましょう。それで、自分は何をすれば宜しいのでしょうか？」
　達也から見れば、智一はまだしも克人の為人からして嘘を吐ける様な性分ではない。先日の会議だけを見ても、当主になったからといって大々的に変わったわけではない。達也は克人の言葉を受け入れた上で尋ねると、克人は改めて真剣な表情をした上で達也を見た。
「今度、改めて若手による会議を開こうと考えている。単に場を改めるだけではないかと疑われても仕方がないことは承知の上だ」
「それは構いませんが、先日の会議で出た七草殿の案は完全に棄却していただけますか？」
「無論だ。最悪、自分が七草殿に対して説得する」
　克人の表情からして、ここでの内容を履行してくれることは確定だろう。達也は深雪に視線を向けると、それに気付いた深雪は僅かに頷いて肯定の意を示した。それを確認してから達也は再び克人に視線を移した。
「こちらとしては、十文字殿の謝罪を受け入れます」
「そうか。次の会議についてはまだ日程が決定していないが、近いうちに行う」
「……やれやれ、結局自分は必要だったのか？」
「まあまあ、摩利ってば」
　これで克人と達也の会議が一区切りついたところで、愚痴を零すように呟いたのは摩利であった。これには真由美が宥める格好となったが、会談の雰囲気が緩んだのは確かだ。
「ともかく、明日の野外演習に際して懸念事項は取り除かれたわけだから、良しとしようか」
「防衛大は忙しそうですね。とりわけ渡辺先輩については」
「なんだ司波、心配してくれるのか？」
「いえ、先輩ならば大丈夫だと思っての言葉です」

元は同じ風紀委員会に所属していたからというのもあるが、達也から珍しく摩利を気遣うような言葉が出たことに深雪は無論のこと、真由美も笑いを禁じえなかった。尤も、この裏側では詩奈が国防陸軍情報部に連れ去られて、悠元がその対処に動いているという事実を克人と真由美、摩利はまだ知らない。

どこまで堕ちれば気が済むのか

案内された茶室は中世でよく見る昔ながらのそれを模したものであった。剣術に茶道（エリカは『その道のプロからしたら、真似事程度でしょうけれど』だと零していたが）というのは似つかわしくないかも知れないが、剣のみならず、武道や芸術を修めた者が修行を通して培った縁によって文化に精通する側面が生じることも少なくない。

そんな千葉家の茶道との関わりはともかくとして、エリカが先に行くと、手には湯飲み茶碗を乗せたお盆を手にしていた。立っている意味も特にないため、悠元たちは静かに腰を下ろしていた。

「悪いわね、折角の茶室なのにお茶の一つも点てなくて」

「暢気にお茶を楽しめる場合でもないだろうに。エリカ、こいつが詩奈のＣＡＤに内蔵されたＧＰＳの追跡ルートだ」

悠元が茶を飲みながら端末を操作すると、仮想モニターが茶室の壁に表示されて詩奈が第一高校から辿ったルートが詳細に表示されている。すると、悠元の台詞を聞いたレオが問いかけてきた。

「なあ、悠元。もしかしてだが、お前が俺たちに提供したＣＡＤにも搭載されているのか？」

「ああ。何分試作品とはいえ公に出せない魔法技術が搭載されている以上、セキュリティは万全にしとく必要がある。ちなみに、電力供給については幹比古が一番知っているだろう」

「……ああ、あれのことだね」

魔法師とて常にＣＡＤを使用しているわけではない。俗に言う〝スタンバイ状態〟の時にＧＰＳ機能が作動するようになっている。詩奈のＣＡＤの場合は聴覚制御の機能のオンオフに拘わらずシステムが起動するようになっており、動力源は昨年の九校戦で使った想子（サイオン）電気変換機を更に小型化して搭載している。

「これを見ると、行き先は軽井沢。カートレインも使わずにか……悠元、いつ行くの？」

「今日の深夜に仕掛ける。移動手段は……俺が魔法を使う」

「成程、俺やエリカが経験したあの魔法なら早いか」

悠元ならば［鏡の扉（ミラーゲート）］を用いずとも［無敵砲弾（インビンシブル・カノン）］や［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］という［疑似瞬間移動］系列の魔法を有している為、警察の包囲準備さえ出来てしまえばどうとでもなる。

相手に魔法がバレるリスクも当然存在するが、そのリスクを回避するべく既に其方への根回しは済ませている。仮にバレたとしても、悠元からすれば数多の修得した魔法の一つでしかないという現状もあるわけだが。

「ただ、今回はちょっと趣向を凝らそうかと思ってな。ちょっと待っててくれ」

そう言って悠元が茶室を出ていき、1分も経たない内に戻って来た悠元が手に持っているのは大きめのスーツケース。それをエリカたちの前に置いた。疑問に思う彼らに開けるよう促すと、エリカが先陣を切る形でケースを開けた。中にはネックレスと思しきものが複数入っていた。

「悠元、これってＣＡＤ？」

「ああ。ちょっとしたギミック付きで、参考元はマクシミリアン・デバイスで開発された［スラスト・スーツ］だ。コードネームは［ブリッツ・スーツ］というらしい」

「……このＣＡＤがスーツ？」

物は試しということで、エリカがネックレスにサイオンを込めると、ネックレスが光り輝いてエリカの服を覆うように戦闘用スーツが展開された。

「どうだ？　きつかったりはしないか？」

「寧ろフィッティングし過ぎて気味が悪いぐらいよ……何時サイズを測ったの？」

「それはＣＡＤが勝手にやってくれるからな。いくら何でも幼馴染の身体データなんて持っていてもしょうがないし」

伸縮率が高い特殊なゴムとカーボン素材によって、上限は存在するが魔法師の体格に合わせたフィッティングが可能となった。元々は次世代型［ムーバル・スーツ］に搭載する予定のものだが、真田に先日の非礼の代償として実験データを取る目的で提供させた。

ＣＡＤの情報改変によって現実世界の収納まで可能にした悠元の技術は最早世界最高峰といっても過言ではない。だからこそ、悠元は世界最強という称号に興味を持とうとはしない。
エリカの様子を見て、レオと侍郎もネックレスでスーツを纏って着心地を確かめていた。幹比古については古式魔法の性質上、近距離戦闘自体がもしもの時を想定したものなので、スーツは着ない方向のようだった。
「こいつはすげえな。ＣＡＤ展開にも支障が出ねえのはありがたいぜ」
「これは凄いですね……ちなみに、このネックレスは」
「そいつも試作品みたいなものだから、この作戦が終わったら返してくれ。流石に公に出来ない機能もあるからな」
そうやって説明している中、エリカはスーツがいたく気に入ったようであった。悠元の説明については些か不満げだったが、この技術の凄さを肌で感じ取ったからこそ渋々納得していた。
「エリカ。この一件が終わったらお前専用の戦闘服を融通してやるから、それで勘弁してくれ」
「え？　いやー、催促しちゃったようで悪いわね」
「悠元、いいのかい？」
「どの道、またトラブルに巻き込まれないという保障なんて出来んからな」
悠元とて常に暇をしているわけではないし、達也絡みのトラブルにいち早く対処できる役は一人でも多い方が楽。なので、今回の実験データによって[神将会]の戦闘服をアップデートする対価として、エリカに旧式となってしまう戦闘服を譲ることとした。
それに、自分や達也を目の敵として敵意や悪意を向けてくる相手からして、非力の部類に入るほのかや美月を守る意味でも理に適っていると判断した。
「ついでに、レオと幹比古にも渡す。旧式にはなるが、現行の魔法技術でも最新鋭の戦闘服だから安心して受け取ってくれ」
「……なんだか、本当に受け取っていいのか怖くなっちゃったんだけ

ど……何よ？」
「いや、怖いもの知らずも同然のエリカにしては慎重だなって思っただけだよ」
「同感だな」
　自分の家の父親をあれだけボロクソに詰ることを躊躇わないし、ハプニングやトラブルに喜び勇む様な様子を見せることが多いエリカにしては物怖じするような〝らしからぬ発言〟に対し、幹比古が率直な感想を述べてレオも頷いて同意した。
「何でよ！　悠元のことだから危険なものは渡さないにしても、人間を辞めるようなものをポンポンと渡してくるのよ!?　あたしが今まで学んできた千刃流の剣術だってとうにぶっ壊れたわよ！」
「魔法師に普通の人間はいない、って俺の友人が言っていたんだがな……ゴールデンウィークはみっちりしごくから覚悟しておけ」
　千刃流に関してほぼ頭打ちとなってしまったため、新陰流剣武術を学ばせる意味で既に剛三と元継の許可は得ている。そもそも、横浜事変前のシゴキの時点でレオと共に新陰流剣武術の門を潜ったに等しい。でなければ奥義を教えるということにもならない。
　なお、当人たちにこの事実は今まで伝えていなかった。理由は元継曰く『もう少し鍛えてから門下生と戦わせて判断したい』とのこと。
「……あの、悠元さん。自分は強くなります。詩奈をこの手で守り切れるぐらいに」
「そうか……そう決めたからにはやり遂げろ。半端な覚悟だと何もかも失うからな」
「はい！」
　今までのぶっ飛んだ会話を聞いて侍郎にも何か思うところがあったのか、詩奈を守り切ると宣言したことに悠元は侍郎の肩に手を置いてそう告げた。気持ちの良い返事を聞いた悠元は、端末を仕舞い込んで一息吐いた。
「さて、最後の確認だ。今回はあくまでも三矢家による国防陸軍情報部への報復――――いわば私闘だ。お前たちが参加しても罪に問うようなことはさせないし、警察も動いてくれるわけだが……覚悟はいい

な？」
　ここにいる時点で覚悟は持っている様なものだが、主体となって動くのは三矢家。それも当主や次期当主の意向を受けずに動く独断行動に近い。仮に罪に問われても問題ない様に神楽坂家と上泉家の両当主が最前線に立つ。
　悠元の問いかけに対し、エリカたちは顔を見合わせて頷いた。
「そんなの、今更じゃない」
「そうだぜ、悠元。お前には散々借りがあるんだ。ここいらで少しばかり返させてくれ」
「正直、借りを返すだけでどれぐらい働くべきなのか分からないけど」
「お前らなあ……達也みたく貸し借りの勘定なんかやめてくれ」
「あはは……」
　彼らを強くしたのは悠元に他ならないが、それを勘定に乗せられても正直困るとしか言いようがなかった。これには侍郎が苦笑を禁じえなかった。
「あー、達也君ならその辺をキッチリしてそうよね。深雪もその辺を含めて誘惑してくるんじゃない？」
「誘惑ならまだいいが、服従を強請られたときは本気で頭を抱えたがな。結局達也からの頼みもあって受け入れる羽目になったが」
「……ゴメン。聞いたあたしが悪かったわ」
「気にするな」
　さしものエリカでも深雪が悠元を誘惑するところまでは予想したが、深雪が悠元に服従したいと強請ったことを聞かされて、親友の気苦労を測らずも知った事に謝罪の言葉を口にした。
　基本は単に甘えるぐらいなのだが、二人きりになると自らを下僕のような素振りを見せる。結局歯止めが掛からずに熱い夜を過ごしていることに、婚約者のご機嫌取りやストレス解消の一環だと思って無理矢理納得していた。
「まあ、侍郎も頑張れ」
「ここで自分なんですか!?　いや、確かに心当たりはいくつかありますけど……」

余談だが、侍郎の婚約者は詩奈で決定しているが、姫梨の妹と矢車本家の純一郎の妹が愛人兼専属使用人候補となっている。魔法科高校で更にその候補が増えなくもないため、詩奈が嫉妬する頻度が増えることになるだろう。

更にもう一つ付け加えると、先日詩奈から『侍郎君が他の女子に興味を持つのはいいとしても、一番目でいられる方法を伝授してください』と相談され、一線を超えないようにする術式を提供した。

在学中に関係を持っても大丈夫にはなったが、侍郎が絞られるのは時間の問題となったことも含めてエールを送った悠元であった。

◇　◇　◇

ＦＬＴツインタワーマンション。北棟と南棟の上部にはそれぞれ達也と悠元の婚約者や愛人兼使用人が暮らしている。とはいえ、全ての婚約者が移り住んだわけではなく、現状は殆どの婚約者が住んでいるという状況で、将来は深雪と水波も住むことが決まっている。

会社にほど近い場所に住居を構えるというのは落ち着かない部分もあるが、悠元がこれまで培ってきたリモートワークの実績を生かして達也もその形で勤務する方式を取れるようになる。「トーラス・シルバー」はどの道公表することになるが、セキュリティの面を鑑みてのものである。

そんなマンション北棟では、悠元の婚約者たちが話していた。

「詩奈さんが連れ去られた？」

「うん。私はほのかから事情を聞いただけだけど、お兄ちゃんだけじゃなくエリカたちやお兄ちゃんの兄や姉も協力するって。今日の夜に片を付けるとか言ってたよ」

「それはまた、相手が泣いても許されれん陣容じゃな」

セリアからその事実を聞かされたのは、ちょうどリビングにいた愛梨と沓子であった。セリアもほのかから生徒会の絡みで簡潔に事情を聞いただけなので、詳しいことは全て悠元から聞かないと分からない――――みたいな言い方をすると、沓子が溜息を吐きながら相手を『哀れだ』と心なしか思ってしまった。

「確か、一昨年の正月に悠元さんが連れ去られかけたことは父から聞

いていましたが、同じ組織なのでしょうか？」
「見立てだと首謀者は同じみたいだね。警察が動くから、私たちは大人しく留守番しててくれって連絡されたよ」
関係各所に事情説明をする意味でも、下手に首を突っ込む方が面倒事になる。それを理解したからこそ、セリアは率先して留守番を決めた。これには別の意味合いも含んでいる。
「お兄ちゃんの婚約者は比較的実力がある面子だけど、達也の婚約者はそうもいかない。彼女たちを守るという意味でもここにいることは大事だと思う」
「流石に大袈裟な……とは言いたいが、悠元を態々誘拐しようとした奴らじゃからのう。わしらを誘拐して人質にすることも考えなければならぬ」
マンション暮らしをしている悠元の婚約者の中で、実力がまだ身に付いていない茉莉花とアリサを除けば、姫梨と夕歌、セリアに愛梨、沓子はいずれも実力面では一線級。だが、達也の婚約者の中には魔法の実力が乏しい者も少なくない。そこまで手を出したら〝愚か者〟でしかないが、ここまでくると何が起きても不思議ではないとセリアの言葉に沓子が同意した。
「そもそもの話として、国内でも有数の企業であるＦＬＴを怒らせたら国防陸軍どころか空軍や海軍まで割を食うことになるんだけどね」
「それは確かに……」
魔法工学関連のメーカーは国内だけでも結構な数が存在するが、「トーラス・シルバー」を擁するＦＬＴにおける国防軍への貢献度はかなり高い。その最たるものは重力制御術式を内蔵した飛行デバイスで、国内のみならず国外の魔法師部隊に採用されるほど。
このマンションは書面上ＦＬＴの敷地内に存在するため、関係者以外立ち入りを許されない場所に国防軍が如何なる理由で踏み込んだとしても、住人が〝自己防衛〟という形で魔法を使っても咎められない。万が一の場合は四葉家の鶴の一声で揉み消せる利点もある。
すると、リビングにもう一人の女性――伊勢姫梨が姿を見せた。
「お、姫梨じゃない。周りは大丈夫？」

「ええ。強固な結界を張りましたので、一晩は大丈夫かと。ただ、由夢が早速捕り物をしたようで……」
「侵入者の類かのう？」
「いえ、偶然だったようです」
　姫梨の説明によると、放課後に由夢と修司が街で買い物をしていた際に危うく連れ去られそうになっていた千秋と栞を助け、相手を路地裏に誘いこんで容赦なく叩きのめした。その際、修司が襲撃した相手の一人の顔を覚えており、身元照会を実家の宮本家に問い合わせた。この一件は神楽坂本家の方にも伝わっている。
「偶然とはいえ、まさかそこまでやるとは……その相手は何者だったのですか？」
「国防陸軍の退役軍人のようで、どうやら情報部に弱みを握られて已む無く踏み切ったようですね。身柄は九重八雲和尚にお任せしたとのことらしいです」
「……悠元の気苦労も偲ばれるの」
「全くだね」
　もうスリーアウトどころか一発退場の領域にまで踏み込んでいる上、事の次第は既に剛三にまで伝わっている、と姫梨は述べた。情報部どころか十山家が明日の朝日を拝めることなく消え去ってもおかしくない有様に、四人は揃って溜息を吐いた。
「お兄ちゃんがあれだけ昇進を嫌がったのも分かる気がするよ……いくら特務の非常勤職とはいえ三軍の将校クラス兼務なんて普通じゃないもの。お姉ちゃんでも少佐で留め置かれてるっていうのに」
「スターズで元中佐だったセリアがそれを言いますか」
「別にそれを望んで魔法を鍛えてたわけじゃないから。名誉とか権力なんて人の嫉妬を買うには一番分かりやすい代物だもの。それを分かってない大人たちはいっぺん熱湯風呂で3分耐えきってみせろって言いたくなるね」
　セリア自身の素性は他の悠元の婚約者にも共有されており、悠元の国防軍における立ち位置も婚約者たちに明かされている。事の重要性は階級の時点で察することが出来るため、揃って秘匿している。

いくら魔法に優れていると言っても、見えない力を恐怖に思う他者が少なくない以上は下手に目立ちたくない。だが、下手に拘束されないためには階級が高くならなければならない。名誉や権力のジレンマをリーナの傍にいて一番感じていたセリアの言葉に、他の三人は苦笑を漏らしたのだった。

既定路線のその先に

ＦＬＴツインタワーマンション北棟のリビングで、姫梨の口から述べられた襲撃の事実に対し、セリアは自らの経歴を隠すことなく言い放った上で言葉を続ける。

「正直に言ってね、ＵＳＮＡ（かつてのそこく）がいつまでもデカい顔なんて出来るはずがないのよ」

セリアの脳裏にあったのは、過去の歴史上大国として成立しつつも崩壊した国家たち。主だったところで言えば、ローマ帝国や元、それにオスマン帝国などが最たるものだろう。現状の国土の広さで言えば新ソ連がトップクラスとなるが、それに見合った経済規模を有していない点は旧ソ連時代と何ら変わりないぐらいだ。

いくら現代魔法の先進国を標榜していても、いつか限界が来る。その兆候の一端はまだ十代のリーナやセリアを採用したＵＳＮＡ軍に他ならない。長い将来において安泰という意味合いもあるのだろうが、若さゆえの反発ということも生じる。

「率直に仰いますね」

「だってさ、達也だけでも十二分に反則級なのに、お兄ちゃんという超特大の核爆弾級なんて敵に回したくないもの」

達也の場合は特異的な能力故に出来る範囲が極端に狭まってしまっているが、悠元の場合はそうもいかない。魔法を前面に押し出すことなく、あらゆる分野から盤面を操って勝負を確定させる。魔法の力押しでも勝つことが極めて難しい相手なのに、一体どうやって勝負しろと言うのか……と、セリアはその意を込めながら呟いた。

「尤も、元祖国にいる愛国者の一派は何かやろうとしてるみたいだけれど」

「何か？　もしや、悠元に喧嘩を売ろうとしておるのか？」

「……喧嘩を売れたら、ほんの少しは感心したいと思うんだけどね」

セリアは自らの持つ［フリズスキャルヴ］でエドワード・クラーク主導の計画が進行していることに気付いた。どうやら原作通り［ディオーネー計画］を実行するようだが、問題は［トーラス・シルバー］が

原作と異なって達也と悠元の二人が関与している。
戦略級魔法師という名目では駆り出せないにしろ、仮に［トーラス・シルバー］を引っ張り出すとしても色々問題が生じる。何せ、かたや師族会議現議長にして神楽坂家現当主、かたや四葉家次期当主という日本魔法界の中核に据えられるべき人間を海外ひいては宇宙に引っ張り出すというのだ。
そもそもの前提として、［トーラス・シルバー］の素性を知るのはＦＬＴだけでもかなり限定されており、勤務先のＣＡＤ開発第三課を除くと、代表取締役と達也の〝戸籍上の〟父親である龍郎、それとその愛人である小百合しかいない。
この状況でバレるとなれば、相手の諜報能力が四葉家よりも上であるか、あるいは達也を妬む者による内部告発の二択。後者の場合は真っ先に龍郎と小百合が該当する案件となるため、彼らが割を食う可能性は決して低くない。
仮に達也だけを狙い撃ったとしても、深雪からのお願い如何に関わらず、悠元も親友の誼として達也に協力するのが目に見えている。こうなると師族会議内で統一した見解を出すのはほぼ不可能と言っていいだろう。
「何か、宇宙開発の一環で魔法によるテラフォーミングを進めてるみたいだけれど、仮にお兄ちゃんを名指しで指名したところで、ＵＳＮＡは対価を支払えるのか甚だ疑問だよ」
「ううむ、竹取物語のかぐや姫ですら引くような無理難題になりそうな気がするのはわしだけかのう？」
「大丈夫ですよ、沓子。私も同意見ですから。尤も、うちの祖母や剛三さんがお認めにならないでしょうし」
今上天皇より国家守護の任を与えられた人物を国際的なプロジェクト参加の為に引き抜く。これがいかに無理難題だというのは、四人の統一見解であった。何せ、金銭面でも魔法師社会の立場でも頭角を見せている彼に対する代償――――強大な抑止力を有する人物を引き抜くことで生じる空白の補填を計算したとしても、確実に国家予算クラスを超過しかねない。

国家資産に匹敵する個人資産を有し、世界に名立たる英雄から全ての技術を継承した将来有望の少年をＵＳＮＡ（正確にはエドワード・クラーク）の身勝手で引き抜くのだから、それに見合う対価を支払おうとしたところで問題が生じる。確実に連邦銀行ひいてはＵＳＮＡ政府まで波及する話になる為、最悪ＵＳＮＡ国内で大規模な政治闘争が起こり得てしまう。

「そうなったら学校側にも手が回りそうだけれど……確か、お兄ちゃんのお姉さんが退学の一歩手前まで行ったって話は聞いたけど、これでお兄ちゃんを怒らせて、校長と教頭が病院送りになってもおかしくない」

「セリアさん……周りからしたら、寧ろ死なないだけマシだと停学処分で済むかもしれませんね」

「そもそも処分すら下るのかが疑わしく思えるぞ」

「そうですね」

仮に学校が説得しようとしても、三矢家の一件と国会議員の件で百山は悠元に借りを作ってしまっている形だ。その清算を学校の単位保証という形でやってしまえば、確実に本人だけでなく周囲からの反発も生みかねない。

尤も、悠元の立場を鑑みれば『現部活連会頭を学校から追い出そうとする校長』という図式の時点でもマズいし、ここで悠元が神楽坂家当主としての立場を出せば百山とて口を出すことすらできなくなる。

現代・古式の双方を統率するに相応しい実力と実績を有している以上、学校の単位保証など悠元からすれば〝箔付けの後付け〟に等しい。

◇　◇　◇

千葉家での最終確認を終え、悠元が魔法で長距離移動を行うための場所として選んだのは九重寺の敷地内であった。これは八雲が善意として敷地を貸し出してくれた形となるわけだが、それ以外にも理由があった。

「――ＵＳＮＡの軍人救出ですか」

「そうだね。尤も、君の出る幕がない様に手配は済ませているから安

心していいよ」
「成程、誰に頼んだのかは理解いたしました」
本来、悠元と八雲に神楽坂の主従関係が発生しているが、普段はあくまでも一介の和尚と少年という括りで話している。これは誰の目から見ても違和感がないように努める意味合いが大きい。
それはさておいて、八雲がそう発言したことからして、達也がその役目を担うと考えていいのだろう。十山家の障壁魔法を軽々突破できる技量を持つ魔法師となると、逆に数えた方が早いのが悲しい現実である。
「にしても、君が魔法を主軸かつ積極的に使うのは珍しいね。君でも妹さんが利用されるのは許せないという訳かな？」
「自分の責任でもありますし、情報部は既に自分の技量を見抜かれています。ここで魔法を使って移動したとしても証拠の後付け程度にしかなりませんし、本当の魔法を隠す意味でも使用しない理由がありませんので」
悠元が一番念頭に置いたのは［鏡の扉（ミラーゲート）］の存在が明るみになることだ。その為ならば疑似瞬間移動系統の［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］の使用を躊躇う理由がなかった。
仮にバレたとしても、肝心の術式は自身の固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］に依存したもののため、普通の魔法師が使用するにしても演算能力の関係でオーバーヒート不可避という始末。最悪使い捨てにすればいけなくはないが、人道に悖る凶悪な魔法を世の中に出す気はない。
「現地に到着後、館に魔法を掛けて強度を上げてから突入します。警察の人には周囲の監視をお願いしました。お偉いさんがたへの手筈は問題ありませんか？」
「東道殿も珍しいぐらい快く引き受けてくださったよ……何かしたのかい？」
「四大老の椅子にただ座することは許さない、とだけ述べました。まあ、この件が終わるともう一つ柵が増えますが」
先日というか４月初めの春休み中に四葉の復讐劇の後始末を終えた後、千姫から『遅くともゴールデンウィーク前に元老院四大老の座

を渡す』と明言された。元老院四大老の癇癪が引き起こした一件を後世に引き摺るのは宜しくない、というのが最大の理由。
先代の東道が上泉と神楽坂によって抹殺され、同じく先代の樫和も千姫の手によって謀殺された。その因縁を後世に継がせることこそ国家の利益にならないと判断しただけでなく、高齢という理由で引退をするようだ。
見た目こそ若いが、剛三はもうじき９０歳の大台。千姫も８０歳代半ばともう若くはない。ならばこそ、次に至る道筋を付けたいという道理は通る。東道家も幹比古が養子兼東道家次期当主になることで、東道直系の血筋を引く佐那が四大老の座を継ぐことになる。
尤も、佐那曰く「幹比古さんが四大老の椅子に座ってくれれば、子作りや子育てに邁進できますのに」と冗談に聞こえない台詞が飛んだことには苦笑しか出なかった。
「元継兄さんも今年中には爺さんから四大老の座を渡されるようですし、色々忙しくなりそうです」
「そうなると、樫和氏はどうするつもりなのかな？」
「何もしません。いえ、何もさせません。彼には〝然るべき後継者〟の立場が整うまでただ座する存在に成り下がってもらいます」
今まで述べていたことと矛盾する部分が出てしまっているが、元々樫和家は欠員の出た護人の穴埋め的なものでしかなかった。悠元に対して明確な悪意を見せたも同義の行為をした以上、悠元が四大老に就任して最初にするべきことは樫和家を元老院から完全に排除する仕事。
「ふむ、然るべき後継者か……その言いぶりからすると、当てはあるようだね」
「ええ。少し悪辣な手段にはなりますし、彼女からしたら厄介ごとだと思うでしょうが、自分と知り合ったのを運の尽きだと思って諦めてもらいますよ。言い方を変えれば道連れとも言いますが」
元々実家にそこまでの執着を持っていないというのは出自の関係で理解していたし、幸いにして彼女の繋がりで伝手も作れたので道筋はついた。これで元老院の全面的な改革に目途がついたわけだが、こ

れでも日本魔法界の全面的な改革には程遠い。
「十山家については、どうせ第十研の誼で十文字家に泣きつくのが目に見えています。なので、この際十文字家に十山家の処遇を任せます」
「甘い裁定を下すかもしれないのに、君も甘いね」
　こんな裁定にしたのは、過去にあった一花家や七倉家などの数字落ち（エクストラ）に関するその後の動きだ。皆殺しにすればそれ以降の遺恨は発生しないが、そういった人間を利用したい存在からの遺恨を極力買わない目的もある。
　もとを正せば、政府が自らの都合のいいように選んだ結果として彼らが犯罪者に身を窶すことになったわけだが、同じ穴の狢は勘弁願いたいのが本音。それに、十山家をわざと残すのは樫和家を縛り付けて動けなくするための駒として利用するためだ。
「甘いことは否定しません。ですが、相手が痺れを切らして動く際に判断しやすいという意味で生かすのも一つの手段として考えた結果です。尤も、敵意を見せたら自分が責任を持って殺しますが」
「云わば、十山家は樫和家の〝鈴〟としての役目という訳か。そうなれば飼い殺しもしやすくなるのは道理だね」
　樫和家などの後始末をするのは、それこそエドワード・クラークやイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフを合理的に世界から排除した後となる。今は『相手に隙がある』と思わせる状態を敢えて続けることで、最後の最後に卓袱台返しで相手の思惑を全て破綻させる計画を成功させるために。
　十山家を処分するのは樫和主鷹と言う後ろ盾を排除した後。彼らの役目が政府要人の盾というのなら、その役目を全うさせることで彼らの溜飲を下げさせる。秩序といったものは思考の欠陥を有する人間に任せてはおけないのも理由の一つ。
「正直に言えば、いくら現師族会議議長とはいえまだ十代の人間が大人達の不始末を片付けなければならないことについて疑問を呈したいです」
「いやはや、立場のある人間が聞いたら耳が痛くなりそうな言葉だね

……他の子たちも来たようだから、話はここまでにしようか」
「そうですね」
　悠元は九重寺の敷地を借りる関係で先行してきており、エリカたちが姿を見せたので八雲との会話を切り上げて彼女らに近付いた。
　現地に直接飛ぶ組は悠元、エリカ、レオ、幹比古と侍郎に加えて、悠元の連絡を受けて加勢した面々が同行していた。
「悠元、お待たせ」
「佳奈姉さんに美嘉姉さん。詩鶴姉さんと元継兄さんは？」
「二人は群馬にいるから、直接軽井沢に乗り込むって……悠元の件で懲りたかと思ったら、今度は詩奈を誑かすっていい度胸してるわよ、ホント」
　詩奈を騙したという点で間違っていないため、美嘉の発言に対して悠元は思わず苦笑を漏らした。二人とも最新鋭のＣＡＤを身に付けているが、服装は何処からどう見ても女子大生の私服。普通なら武装している相手にとって格好の的だろうが、三矢家直系の人間にそれが該当しない（現状元治を除く）。
「あの、お二人さん。戦闘しに行くのにその恰好でいいんですか？」
「大丈夫だよエリっち。うちは一切銃弾に当たったことがないし、佳奈姉は銃弾を沈めちゃうし」
「そういうことだから、私たちは大丈夫」
（……ねえ、悠元。この人たちの常識がバグってる気がするんだけれど）
（言うな、幹比古……）
　現役の軍人魔法師を相手にした戦闘経験に加えて、悠元発案の魔法力訓練を続けてきた結果として並の相手では歯が立たない。魔法だけでも十二分に凄いのに、武術も身に付けている人間を相手に生き残れたら手放しで賞賛できるだろう。
　一般的な魔法師の常識すら超えている現状に幹比古が疑問を呈すると、悠元は当事者の側としても頭を抱えたくなるような心境を覚えた。
「何はともあれ、早速現地に飛ぶぞ。姉さんたちも大丈夫？」

「うん、問題ない」
「いっそ一思いにやっちゃって！」
「……［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］、発動」
　無駄に多すぎる信頼感を覚えつつも、悠元は淡々と魔法を発動させた。［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］で飛んだ先は丁度森の中だが、少し遠くに洋風の館が見えていて、その周囲に国防軍の軍人らしき人物がいることを確認した。
「銃を持ってるって……いくら国防軍の軍人と言っても、厳重過ぎるでしょうに。あたしには国防軍の軍人に扮したテロリストにも見えちゃうんだけれど」
「そうぼやくな。さて、始めるか。幹比古」
「任せて」
　悠元が合図を出すと、幹比古は精霊魔法で館の周囲に濃霧を発生させる。単なる霧ではなく、事象干渉によって方向感覚を狂わす方術［鬼門遁甲］の要素を取り入れた幹比古専用の魔法［五里霧中（ごりむちゅう）］によって、館の外を警備する兵士たちが混乱し始める。
　その混乱に乗じて、悠元たちが一気に距離を詰める。
「そおらっ!!」
「……悪いけど、眠っててもらうわよ」
　レオが［ドラグーン・ブレス］で兵士の一人を吹き飛ばして館の壁にぶつける形で気絶させる。エリカは別の兵士の死角に潜り込んで、手に持ったCADで強引に意識を刈り取った。
　それを横目で見つつ、悠元は別の兵士に一瞬で距離を詰め、兵士の手に持っているライフルを蹴り飛ばした上で蹴り上げた足を兵士の頭に引っ掛けると、地面に勢いよく降ろす要領で兵士を地に伏せた。
　佳奈は［グラビティ・ブリット］で兵士を地面にめり込ませ、美嘉は［ブリッツ・ロード］で接敵して兵士を一撃で沈めた。簡単にやってのけていることは否定しないが、相手が弱いというわけではない。
「……館の中に十山つかさの気配はないな」
「え？　詩奈も連れ去られたってこと？」
「それはないな。詩奈の存在が館の中から感じるのは間違いない」

人の気配を誤魔化す術はあるが、人の存在を隠し切るのは極めて難しい。殊更この世界の魔法技術レベルでは古式魔法ですらも難しい部類の所業になってしまう。

先行する形で警察の包囲をしていたため、空間認識に長けたつかさがその異変に気付いたのだろう。それで割を食う国防軍情報部が哀れと言う他ないが。

領分に手は出さないが、私闘として手は出す

軽井沢の館はいかにも〝出ます〟という雰囲気を醸し出していたが、妖と言った霊的なものは確認できない。館の外を速やかに制圧したところで、悠元はサイオンの流れを察して物陰に隠れた。すると、正面玄関目がけて放たれる〝矢〟が炸裂し、扉だけを綺麗に吹き飛ばした。

こんな芸当が出来る人間に心当たりがあるため、真っ先に見解を述べたのは美嘉だった。

「あー、詩鶴姉の魔法ね。ありゃ怒ってるわ」

「無理もない。可愛い詩奈を唆したんだもの……元継兄さんもお疲れ様」

「労ってくれて助かる」

すると、悠元たちの背後から姿を見せる形で現れたのは元継で、そのさらに後ろには詩鶴だけでなく新陰流剣武術の門下生数人まで連れてきていた。

「元継兄さん、門下生まで連れてきたのは想定外なんだけど」

「仕方がなかったんだ。最初は爺さんが真剣六本持ち出して『儂が詩奈を助けるんじゃ！』と豪語してな。妥協の結果として門下生たちを連れてきた」

仮に剛三が出てきた場合、館が全壊どころか更地になりかねない。そうなると詩奈の救出どころではなくなってしまう。尤も、剛三がビルを更地にして人質だけを生存させた前例があることは知っているが、信憑性の問題で回避する形となった。

ともあれ、元継は門下生に指示を出し、侍郎がそれについていく形で館の中に先行した。そこに続いて警察の魔法師特殊部隊が突入する形となった。

「それで、こんなバカげた茶番劇を仕組んだ十山の女狐はここにいないと見たが、どこに行ったと思う？」

「多分、ＵＳＮＡの兵士を処分するために秘密の収容所へ出向いたと思う。尤も、そっちは達也が受け持つみたいだけど」

「……達也君がか。あの女も哀れなことだ」
つかさの実力では魔法を使った達也に勝つことは出来ない。万が一の場合は［トリリオン・ドライブ］を使っても構わないと許可を出しているし、最悪［瞬速極散（ソニック・アクセラレーション）］でも構わないと伝えてある。仮にそれ抜きでも元継が偶に九重寺で達也を指南しており、簡単に負けないどころかつかさにとっては〝悪夢〟でしかない。
「暢気に話してるけど、いいの？　侍郎だけを行かせちゃって」
「敵の数も知れてるからな。門下生も上段クラスで師範候補生の選りすぐりだから。仮に警察が役に立たなくても、ハイパワーライフル程度なら無力化出来るし」
「それを覚えていてすぐに見抜く悠元も大概だと思うが」
「爺さんほどじゃないよ、兄さん」
剛三の絡みで散々相手にしてきたからこそ面識があったし、悠元に対して律儀に頭を下げた時点でどの程度の力量を持つのかはすぐに理解した。裏を返せば、それだけの実力者たちでないと剛三も安心して居残ることが出来なかったという訳だが。
館の中では銃声も聞こえるが、明らかに人がピンボールの如くぶつかるような感覚が館に掛けた魔法を通して伝わってくる。
「エリカたちもいいぞ、存分に暴れてきて」
「ちなみに、相手が降伏しようとした場合は？」
「遠慮なく吹き飛ばせ。館にいる連中は詩奈以外〝法律を破った犯罪者〟と思ってくれていい」
「了解。レオにミキ、行くわよ！」
「お、おう」
「まったく、僕の名前は幹比古だよ……」
暴れたいという意欲を見せていたエリカに簡単な注意事項だけ伝えると、レオと幹比古を引き摺る様な形で館の中に入っていった。館の中に入ろうとしない悠元に対し、佳奈が首を傾げていた。
「悠元、行かないの？」
「いい加減、侍郎には男としての覚悟を決めてもらわないといけないからな」

「……あー、なんとなく察したかも」
「そういうことか……」
突入していく直前に「天神の眼（オシリス・サイト）」で詩奈の居る場所を探ったところ、二階のとある部屋に隣接したバスルームに存在を確認した。そうなると詩奈が今どういう格好でいるのかも察してしまい、侍郎に先んじて行かせることにした。
ここにいる五人の中で経験が無いのは美嘉だけだが、悠元を除く三人も大方の事情を察した。
「予想よりも戦力が少なかったのは拍子抜けだったが、どうする？このまま達也君の援護に回るか？」
「いや、そっちは既に手が回っているし、万が一の保険は用意されているから……あの二人というのが心配だけれど」
「仕方がないとはいえ、天神魔法でも随一の威力を誇る属性を得意とする二人だからな……」
このまま飛んでいくことは可能だが、詩奈が救出された後の帰り道を確保する意味で悠元は留まっている。達也が苦戦してもいい様に保険は準備済みだが、秘密収容所が全壊してもおかしくない二人が保険というのは如何し難い部分があった。
背に腹は代えられない、ということで渋々呑むことにしたのは言うまでもないが。
◇　◇　◇
結局、エリカたちも加わって暴れに暴れた結果、館にいた国防陸軍情報部の部隊は壊滅。彼らは『演習』だと主張したが、悠元の口から「国防軍の軍人が人の土地で勝手に行動してよいと誰が決めたんですか？」と〝私有地無断侵入〟を含めた複数の罪状によって拘束され、魔法師ということで地元の警察ではなく警察省へ護送されることが決まった。そもそもの話、演習という体を取るのであればいくら秘密裏であっても書類が必要になるし、今回の演習内容が末端にまでしっかり伝えられていない時点で違法行為でしかない。
こんな顛末の中、助けられた側の詩奈は拗ねていた。
「……侍郎君のえっち」

「いや、あれは不可抗力だって……」
　拗ねてはいるが侍郎の腕にしがみ付くようにしている詩奈と、それに対して引き剥がそうとするも腕に伝わる柔らかさのせいで力強く出来ない侍郎の構図が出来上がっていた。何でこうなったのかと言えば、詩奈の状態を鑑みることなく突入した侍郎の目に、丁度着替えようとして何も着ていなかった詩奈の姿が飛び込んで来た。俗に言う〝ラッキースケベ〟である。
　詩奈からビンタを食らうということは無く、「とりあえず外に出てて」という言葉に侍郎が大人しく従った。その一件の後、このような結果となった。
「侍郎、いくら詩奈の安否が心配だからと言っても、相手の状態を鑑みろと常々言ってきただろうに。ビンタすら飛んでこなかったことにありがたいと思え」
「ゆ、悠元さん……それはそうなんですが」
　最近は姫梨の妹や矢車本家の娘の件もあって、詩奈が度々拗ねていたのは知っていた。今回の一件で不可抗力とはいえ詩奈の裸を見た以上、侍郎には責任を取ってもらわなければならない。
「三矢本家の方には俺から連絡しておいた。どんな結果になっても甘んじて受けろ。それがお前に対する罰だ」
「……分かりました」
　侍郎は内心で『三矢家を追い出されるのでは』とも思っていそうだが、寧ろ逆である。今回の一件を機に詩奈の婿として侍郎に責任を取らせるのだ。なお、三矢本家に千姫が出向く時点でその先に何が起こるのかなど想像は付くが。
　連行（半ば搬送に近いが）されていく国防軍の軍人たちや警察官が行きかう中、スッキリした表情で館から出てきたエリカに疲れたような表情を見せるレオと幹比古が悠元たちに近付く。
「いやー、久々に暴れたわ。最近歯ごたえが無くて退屈してたのよね」
「ほう？　なら上泉本邸に来るか？　爺さんなら嬉々として相手してくれるぞ」
「いや、あの、どうやっても倒せない相手はちょっと……」

エリカの言葉に反応した元継の台詞に対し、彼女は首を横に振って拒否した。何事も程々が一番だというのが如実に表れている結果だろう。
「結局、扉を破壊しただけでしたが……ちなみに、十山家の屋敷に一発撃ちこんでおきました。窓が壊れる程度で済んでいますが」
「何やってるの、詩鶴姉さん……兄さんも止めなかったの？」
「怒った詩鶴は俺でも止められん。母さんの気質を一番継いでいるからな」
なお、細やかな報復として十山家の屋敷に［一極徹甲狙撃（ディフェンス・ブレイカー）］を撃ち込んだことに対してぼやいた悠元に対し、諦め気味に元継が吐露した。いくら権力があろうとも、人の気質には絶対に勝てないものが実在するという証左であった。
連行する警察官も詩鶴の発言に聞かない振りをしているあたり、三矢家の凄さを身に染みた形だと思う。その祖父に剛三がいるからこそという有名税もあるのだろうが。
元継は盛大に頭を抱えたが、その件については剛三が動くということで無罪放免の公算が高いのだろう。一昨年の件からして十山家は剛三に盛大な貸しを作っている為、詩鶴が問い詰められる可能性は低いし、寧ろ十山家が更にペナルティを課されることになるだろう。
「……俺も聞かなかったことにする」
「いいの？」
「十山家を庇う義理が無いから」
師族会議議長としては宜しくないだろうが、十山家に迷惑を掛けられた身として十山家を庇い立てする理由がなかった。我儘と言われてしまうと否定できないが、人に迷惑を掛けておいて謝罪の言葉すらも寄越さなかった輩に義理立てする事由も存在しない。
結局のところ、今回の一件は詩奈が侍郎に対する感情を明確に出来たという点だけは良かったとしか評価できなかった。
「さて、皆帰るぞ」
そう言って悠元が［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］を発動させるが、悠元だけがその場に残った。そうした理由は、悠元がこれからやることのためでもあっ

た。
「……あの二人もいて下手を打つとは思えんが、セリアからも頼まれた案件だからな」
洋館の二階――――詩奈がいた部屋に入ると、扉を閉めた上で［鏡の扉（ミラーゲート）］で［神将会］の戦闘服を取り出し、素早く着替えた上で着ていた服を魔法で司波家の自室に放った。そして、［天神の眼（オシリス・サイト）］で洋館の情報から十山つかさの経路を割り出す。
魔法力が上がった達也の［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］でも難しい特定人物の経路特定だが、悠元の持つ眼ではその場所に一瞬でも滞在していれば、情報から該当する人物が辿った先の経路まで瞬時に割り出せる。こんな能力が使えるようになったのは、昨年の周公瑾討伐任務において彼の経路を割り出した経験が生きている。
悠元が映像などの媒体であっても一度でも目にしていれば、該当する人物の辿った道を割り出す。チートじみているために頼り切るのは最終手段としつつも、今回はつかさを叩きのめすために使用を決断した。
そして、四葉家の依頼を受けて早めに動きたいであろう達也に情報を伝えるためでもあった。
「――――見つけた」
つかさが逃げ込んだ先は房総半島の先端にある秘密収容所。時間から逆算すると、詩奈を送り届けた後にそのまま館から逃げ出したとしか思えない。そんな輩が良くも『秩序』を語れるものだ……と思わなくもない。
とはいえ、そのまま場所を伝えるのは傍受的にも宜しくないため、悠元は特殊な通信端末で四葉家宛てにＵＳＮＡ軍の工作員が捕まっている場所と相手に察知されない合流地点を連絡した。宛先は葉山に指定したので、彼ならば適切に処理してくれると踏んでのものだ（真夜に連絡すると、その絡みで深雪が拗ねてしまうため）。
それを送り終えた所で、悠元は［鏡の扉（ミラーゲート）］を発動させて一足先に合流地点へ飛んだ。
四葉家もある程度の動きは予測していたようだが、肝心の場所を掴

めなかったのは仕方がない部分もある。何せ、師族二十八家の中で四葉家は国防軍と深い関わりを有していないし、昨年の一件で七草家に情報セクションの割り込みを受けたのが大きく響いた形だ。
予定された合流地点に簡易的なテント（一式の道具類は魔法で取り寄せている）を張り、結界魔法で周囲と遮断した空間を形成。時間が掛かるだろうと見込んでコーヒーでも入れて寛いでいたところに、最初に姿を見せたのは四葉家から連絡を受けた達也だった。
「達也か。流石に見抜かれるとは思ってもいなかった」
「よく言う……俺や関係者以外見えないように細工していたのだろう。それで、詩奈のことは片が付いたのか？」
「既に終わった。ここから先は俺個人の私闘も含んでいる……向こうの手筈に時間が掛かるだろうし、一杯飲むか？」
「そうだな、頂こう」
達也にコーヒーを淹れたカップを差し出すと、達也は丁寧に受け取った上で一口啜った。そうして一息吐いたところで悠元に視線を向けた。
「流石に美味しいな。本家で葉山さんがコーヒーを淹れてくれたことはあったが、それに勝るとも劣らない……深雪が嫉妬するわけだ」
「そういったコツの部分は葉山さんのを見て真似ている部分はあるけどな。試しに淹れたら葉山さんも感心していたし」
「仮にそうだとしても、俺には真似できないが」
魔法を真似ることだけは簡単だが、そこから相手と全く同じように写し取るのはいくら自分でも難しい、と言いたげな台詞を達也が呟いた。悠元も少しズルをしているだけだと返した形だが、それでも達也は悠元を素直に評価していた。
そうして一杯を飲み干したところで、バンボディのトラックが一台近付いてきた。達也にはそのトラックに乗っている青年に心当たりがあるようで、悠元は直ぐに判断してトラックを結界の中に〝入れた〟。
そして、トラックの運転席から一人の青年が降りてきた。四葉家の執事というには若い風貌の持ち主だが、達也のことを「達也様」と呼

称する辺り、四葉家の関係者というのがすぐに理解できた。
「花菱さん、予定よりも早かったようですが」
「はい、手筈は既に整っておりましたので。初めまして、神楽坂様。四葉家執事が序列第二位、花菱の長男であります花菱兵庫と申します。以後お見知りおきを」
「これはご丁寧に。神楽坂家現当主・神楽坂悠元です。四葉家も将来有望な執事をお持ちのようで羨ましい限りです」
「御過分な評価を頂き、感謝いたします」
　達也の補佐として兵庫を付けるということは、将来達也の右腕として働かせることも見込んでのものとみられる。単独行動が多い達也を支えるに相応しい人材なのは、感じられる雰囲気だけでも確かであった。
　自己紹介もそこそこに、兵庫に案内される形で荷台の中に足を踏み入れる。中はちょっとした研究室となっており、そこには達也に譲渡された電動式自動二輪［イントレピッド］と達也用にチューンされた次世代型ムーバル・スーツ――［フリード・スーツ］が置かれていた。
「神楽坂様がどちらも手掛けられた装備とあって、四葉の技術者たちも目を輝かせておりました。神楽坂様、これだけの装備を達也様に提供して頂いて本当に宜しかったのでしょうか？」
　兵庫が疑問に思う理由も分からなくはない。何せ、ここにある達也の［イントレピッド］もそうだが、［フリード・スーツ］は原作において［ムーバル・スーツ］を解析して設計された代物に仮名として名づけられたもの。その名を貰う形で悠元が達也専用のワンオフ仕様に仕上げた。
　達也に渡すということは四葉家に国防軍の技術が漏れる懸念も生じる。疑念を抱くのは無理もないが、それに対して悠元は冷静に言葉を返した。
「構いません。［アンティナイト］すら管理できなかった組織に渡す方が不利益を被る危険も出て来るでしょうし、大体［ムーバル・スーツ］の時点で自分と達也以外パワーアシストが無ければロクに使いこな

せない代物です」
「……一つ聞いておきたいが、悠元。このスーツに見慣れない機能が追加されているようだが、一体どんな機能だ？」
　このまま悠元に話させると国防軍への愚痴が続いて話が進まなくなると判断したのか、達也が［フリード・スーツ］の機能を〝視た〟上で尋ねた。それを聞いた悠元も「コホン」と態と咳払いをした上で説明を始める。
「今までスーツとＣＡＤがリアルタイムでリンクしていなかったからな。達也の能力に最適化させたもので、仮想モニターを通す形で敵の姿を可視化するためのものだ」
　敵味方の位置や武器の所有・健康状態なども瞬時に把握するだけでなく、施設の構造を可視化することで達也が必要な最適化された情報を処理し、ＣＡＤにフィードバックする。思考操作型ＣＡＤの機能を利用して情報の送受信を起動式で送り出しているが、必要な変数入力などは事前に済んでいる形であり、魔法師はただ必要な事象干渉力を消費するだけで済む。
　ただ、桁外れた想子保有量を有さないとまともに使えない為、悠元は次世代型ムーバル・スーツからオミットした機能をフリード・スーツに組み込んだ。
「達也ならぶっつけ本番で使えるように説明書も付けたから、安心して使ってくれ」
「そうか……分担はどうする？」
「達也は依頼通りに米軍の軍人魔法師を救出してくれ。俺も手伝うが、その後は収容所を制圧する。達也はそのまま引き上げてくれて構わない」
　あくまでも、達也が担当する領分は米軍の兵士を救出すること。その後の始末を全て引き受けるという悠元の言葉に対し、達也も邪魔をしてはいけないと感じたのか、静かに頷いたのだった。

最果てにて輝ける槍の一端

（正直、悠元も加わると〝しくじる〟という未来が見えないのだがな）

簡単な打ち合わせの後、達也は［イントレピッド］に跨って収容所へ走らせる。今回悠元は［ドレッドノート］を持ってきていないが、飛行魔法であっさり［イントレピッド］に追随する辺り〝埒外の天才〟だと達也は内心でそう感じていた。

お互いワンマンアーミーの気質が強い上、司波家での生活を通して互いの手の内を知っている為、連携に関しては特に問題はない。互いの領分を弁えているからこそ、達也は悠元を気にすることなく行動に移れる。

ここまでは法定速度を遵守して走ってきたバイクだが、目的地が見えたところでスロットルを全開にし、監獄の壁を飛び越えた。

◇　◇　◇

十山つかさが軽井沢の洋館に詩奈と部隊を置いて房総半島の秘密収容所に来たのは、ここに捕らえられている米軍の魔法師を利用するためではなく、単に詩奈や事情を知らない同僚に問い詰められるのを避けるためであった。

（今頃どうなっているのでしょうか。警察が動いていたのは確認できましたが……）

詩奈を洋館に連れて来た時点で、地元の警察だけでなく警察省の魔法師も動いているのが報告された。そうなると真っ先に動いたのは千葉家ということになる。だが、第一高校に在籍している千葉家の娘と詩奈の間には〝彼〟の存在がある。そうなると、詩奈の異変を感じて真っ先に動いた可能性が高いのはその人物だろう、とつかさは推察した。

余計な詮索をされないために通信手段を遮断したのが仇となっている形だが、つかさはこの時点で軽井沢に残した部隊が違法行為という罪状で逮捕されていることなど知る由もない。

それよりも、つかさの意識はここに収容されている米軍の兵士の扱いに移っていた。拘束時につかさは「捕虜として扱う」と彼らに説明

していたが、この時点で彼らを生かしてＵＳＮＡに返すという選択肢を抱いていなかった。
　つかさにとって、同盟国と言えども敵軍の兵士は人ではなく物として……洗脳が効かない相手となれば尚更その傾向が強かった。だからこそ、解放すれば生存者から洗脳によって人形として利用したことが明るみになれば、不利益を被る公算が非常に高くなる。
　その不利益とはつかさ個人のものならばまだしも、国防軍ひいては日本にまで波及するのは避けなければならない。日本あっての十山家、十山家あっての『遠山つかさ』という思考に基づいて、彼女が虜囚の処分を進言しようと立ち上がったところで警報が鳴り響いた。
　何が起こったのか、というつかさの独り言に応えるかのように、つかさがいた看守の控室に一人の兵士が駆け込んできた。
「遠山曹長、侵入者です！」
　駆け込んできたのは軍曹の階級を有する下士官。つかさは階級を確認した上で彼に問いかけた。
「侵入者の規模は？　警備兵で対処できないのですか？」
「数は四名ですが、いずれも強力な魔法師です！　警備兵だけでは対処できません！」
　四人という数の時点で、つかさは一体誰がこのような場所に乗り込んで来たのかを考えた。真っ先に考えられるのは［スターズ］の隊長・副隊長クラスだが、それに該当し得る人物は東京に居ることが確認出来ている。
　そうなると、国防軍で対処できない魔法師となれば自ずと絞られるが、四葉家もしくは神楽坂家、あるいは上泉家がここを襲撃しても何のメリットもない筈だと考えつつ、兵士に問いかける。
「分かりました。私の装備は何処に？」
「こちらにお持ちしました」
　つかさは軍曹が差し出す情報端末機能付きのワンレンズサングラスを掛け、片耳だけを覆うマイク付きのヘッドセットを装着した。サングラスのモニターには味方兵士の座標が表示されているが、肝心の侵入者の座標が表示されていない。

これにはつかさも訝しんだが、兵士の座標からある程度を割り出すことは可能だと判断した。
「援護を開始します」
つかさはそう言って、十山家の魔法を発動した。
◇　◇　◇
悠元はＦＬＴの技術者としてだけではなく、国防陸軍の兵器開発部に一時期所属していた。その時に十山家が使っている端末の開発にも関与したことがあった。なので、十山つかさが使っている端末を誤魔化す術など、天神魔法を使わなくても問題が無かった。
敵兵が対魔法師ということでハイパワーライフルを持ち出しているが、悠元はそれを意に介することなく［叢雲］を抜き、［抜き足］で兵士に近付くとたった一太刀でライフルの銃身を斬り落とした。動揺する兵士に対して目にも止まらぬ刺突で手足の付け根を穿つ。
これを5秒も掛からずに実行し、次々と兵士の意識を奪っていく。
悠元の技量ならば人体を切断するのも容易いが、今回はあくまでも米軍兵士の救出であって秘密収容所を壊滅させるために出向いたのではない。尤も、そのついでに十山つかさを叩きのめすという一仕事が待っているわけだが。
立ちはだかる兵士の前には魔法障壁が展開するが、十文字家の［ファランクス］すら破る悠元の前には障子の紙が一枚置かれているに等しい所業。今頃別の場所で襲撃している達也や修司、由夢は現代魔法の領域を逸脱した技量を有しているだけに、心配はしていない。
飛んでくるライフル弾は［叢雲］に［鳳凰］を纏わせることで、超高温状態による空気の刃で蒸発させていく。仮に斬られなかったとしても、［鳳凰］の副次効果によって燃焼により酸素が燃やされ、疑似的な二酸化炭素中毒に陥って気絶する。悠元自身は魔法的な〝音〟――温度上昇によって生じる空気の振動を遮断する壁によって守られている為、その被害を受けることはない。
（今の展開速度からして、十山家の魔法障壁だな。間違いなく十山つかさがいる）
別に［術式解散（グラム・ディスパージョン）］でも問題は無かったし、達也と二人で事を済ま

せることも可能だった。だが、相手が三矢家に喧嘩を売った以上、舐められたままでは十師族の一角を担う者としての矜持に関わる。人様の約束を守らない人間に道理などない、と判断して悠元は修司と由夢にも救出作戦に参加するよう命令した。

その代償として秘密収容所の存在が明るみになってしまうことは避けられないにしても、ここの構造からして毒ガスでも流し込まれれば忽ち死に至ってしまう。万が一そうなったとしても対処法があるというのは救いなのだが。

◇　◇　◇

（私の……十山家の魔法が通用しないなんて!?）

味方の兵士を支援するつかさは、心の中で悲鳴を上げていた。

魔法障壁を始めとした防御系魔法に特化した旧第十研出身――十文字家の［ファランクス］、十神家（現在の遠上家）の［リアクティブ・アーマー］が挙げられる。十山家は彼らのように固有の名称を持たないが、個人もとい保護対象への魔法障壁の同時多数投射を有する。

魔法のターゲットが予め設定されている為に座標固定や直接視認の必要がなく、術者のキャパシティが許す限り何度も展開可能な魔法の鎧。その目的は、中央政府の要人を銃弾や爆発から保護するためのもの。十山家が〝中央政府の最終防壁〟として開発された魔法師の一族という理由がこれにあたる。

十山家が守るのは政府要人のみであり、市民はその対象に含まれない。無論、十山家が属する師族会議のメンバーも〝政府要人ではない〟という扱いとなる。だからこそ、十山家が他の二十七家に対して平気で同士討ちを画策できたりしてしまうという側面も生まれる。

本来は逃げるための消極的な目的で開発された十山家の魔法障壁だが、魔法と軍事が結びつくにつれて積極的な使用法も生まれた。それは、味方の兵士や魔法師に防御能力を与えることで、本来兵士が防御に割く分の労力を攻撃に回せるという積極的な発想。

つかさが着けているバイザーはその為のものであり、これによって十山家は「逃げ出す為だけの魔法師」から脱却できた。

十山家にも、前向きに国家に貢献したいという欲があった。
他人を起点として魔法を発動するという性質上、自己と他人を同一視してしまうという自己価値観（アイデンティティ）の境界が曖昧になるという先天的な欠陥を〝植え付けられて〟いる。故に、個我のものというよりも組織単位での貢献に対する欲が強いのだろう。
その為に国防軍情報部と取引した結果、「遠山」の名を持つ魔法師という立場を得た。つかさはその二代目となるが、最早情報部に必要不可欠な存在となっている。
魔法が技術として浸透している為、工作部隊には当然魔法師が含まれる。当然、それを阻止する側にも魔法の力が求められる。魔法師でなくとも魔法の恩恵を受けられるという点で、十山家は国防軍情報部内に大きなプレゼンスを得た。
だが、それが通用するのはあくまでも十山家の常識が及ぶ範囲までの話。現代魔法は確かに発動・展開速度という点で古式魔法よりも優位に立つが、それは現代魔法が世界群発戦争を経る形で軍事的に〝単純化されてしまった〟からこそ。
遠山つかさは気付いていない。同じ師族二十八家でありながらも、既に現代魔法の領域を逸脱して新たな道を描き始めている者たちの存在を。自らの理解の範疇を超えるが故に、それを無くそうとして、怒らせてはならない者の逆鱗に触れた意味を。
その証明として、自らの守りが通用しないという事実を突きつけられることも。

◇　◇　◇

収容所の独房に通じる箇所周辺の掃討を終え、悠元は［叢雲］を解除する。次々と展開される魔法障壁に辟易していたところはあったが、それでも［ファランクス］よりはたかが知れているレベルでしかなく、容赦なく斬った。
兵士は全員気絶しており、銃器類は無論のこと、自爆に繋がりそうな装備を所持していないことは確認済み。顧傑のように兵士を中継点として攻撃魔法を放つこともなければ、昨夏で遭遇した岬寛が行った他人の魔法演算領域を利用して魔法を放つことも起こらない。

そもそも、政府要人の護りを主とする十山家に攻撃手段を持たせなかったのは政府や国防軍情報部であり、十山家を支援する黒幕のせいでもあるが。

すると、通信機から達也の声が聞こえる。

『悠元、こちらは米軍の兵士を全員解放した。修司が手伝ってくれた』

『先に言われたが、こっちは大丈夫だ。これから達也の援護に入る』

「了解。由夢の方はどうだ？」

『指揮指令室を掌握したけど、十山つかさの姿は確認できていない。逃げたにしてはお粗末すぎるけど』

悠元が兵士を惹き付ける遊撃の役割を担い、達也と修司が兵士の救出と護衛、由夢が収容所の指揮系統の掌握という形で動いていた。現状の最大戦力である悠元自ら動くというのはどうかという意見もなくは無かったが、天刃霊装も含めた天神魔法の威力を鑑みての役割分担のため、納得した上で作戦に移っていた。

「……分かった。念の為に俺が探索するから、由夢は二人の援護を」

『了解』

通信を終え、改めて［天神の眼（オシリス・サイト）］で確認をすると、屋根伝いに動いている存在を確認。近くにいる由夢にしてはあまりに〝遅すぎる〟ため、これが十山つかさで間違いないだろう。

予測される行き先は駐車場。恐らく時間稼ぎを狙ってのものだとみるのが妥当だ……問題は国防軍でも一握りの人間しか知らないこの場所に援軍が来るのか甚だ疑問だが。

（今駐車場に行かれるのはマズい。最悪鉢合わせになるのだけは避けなければならん）

そして悠元が弾き出した答えは、［ラグナロク］を取り出して［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］で壁に円形の穴を開けて外に出た。そして、屋根の上に素早く登ることでつかさの進路上に割り込むことが出来た。

つかさはポーカーフェイスを貫いていた（先天的な精神的機能の欠陥のせいで不安を覚える部分も鈍化している）が、仮面を着けて髪の色も変えている謎の人物を見てそれが誰なのかを悟った。

「成程、貴方が出てきましたか。三矢悠元君」

その言葉に対する返礼は魔法によって返された。悠元の［術式解散（グラム・ディスパージョン）］とつかさの魔法障壁展開の攻防。互いに複数の魔法を同時に操る部分に長けた魔法師だが、一つの魔法しか扱えない十山家と複数の魔法を扱うことが出来る三矢家では、その差が歴然として出た。

そして、つかさが膝をついて悠元が追い打ちを掛けようとしたところで、声が響く。

「待て!!」

先程の魔法障壁よりも数段上の多重障壁魔法――――十文字家の［ファランクス］だと悠元は直ぐに分かったため、そこで［グラム・ディスパージョン］の発動を停止した。その直後、上空のヘリから克人が降りてきた。

「この女性を殺させるわけにはいかん。事情は知らないが、引いていただけないか？　神将会の総長殿」

まったく……と、悠元は悪態をつきたい気分になった。克人の為人からして、この格好で事情を判断するかどうかはさて置くとしても、これでつかさに神将会の総長が自分だと明るみにされた格好になった。そして、それは黒幕の樫和主鷹にも伝わることだろう。

克人の言葉に悠元は［ラグナロク］を懐に仕舞った。だが、視線は依然克人を見たまま。

「なら、殺しはしないが……そこの女狐には〝妹〟を誑かした責任を取ってもらう」

そう言って悠元が手を上に翳すと、その手を起点として膨大な光の粒子が集まり出した。それは渦を巻き……中心には全長１０メートルをゆうに超すであろう黄金色に輝く〝光の槍〟が形成されていた。

守護霊（サーヴァント）と契約した人間は、一人の例外もなく彼らの力を具現化して行使する。そして、それは［アリス］と名付けた彼女と契約した悠元も例外ではない。彼が使う伐刀絶技の力の一端を、彼は解放する。

「『鉄壁』の異名を継いだ貴公に防ぎ切れるか、十文字克人。食らうがいい」

――――［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］

悠元と契約する［アリス］の伐刀絶技、［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］。この世の理法全てを無視して因果律そのものを操作・改変・消滅させる最凶最悪の伐刀絶技。加えて悠元の固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］により、事象全てを制御してしまう能力まで獲得した。

悠元が放ったのは〝本来の出力〟の約一万分の一程度。その気になれば街はおろか国すらも滅ぼしてしまう威力の伐刀絶技を限りなく弱めて対人戦に用いた。悠元が放った光の槍は、克人が展開する［ファランクス］を貫くのではなく、彼の［ファランクス］を利用――――克人と彼の展開した［ファランクス］を相対固定化させて、〝一つの物体〟として認識する――――して克人とつかさを吹き飛ばした。

体感的に３００メートル以上吹き飛んだが、〝眼〟で確認する限り生きているのは間違いない。尤も、これで勘違いしてまた襲撃部隊を仕向けた場合、今度は周囲への被害などお構いなしの威力で放つだけだ。

「……聞こえちゃいないだろうが、勝手に人の素性をばらすんじゃないよ、十文字先輩」

ここ最近は色々あり過ぎたせいでストレスが溜まっていたのか、別に他の魔法でも良かったところで敢えて［ロンゴミニアド］を使用した。その発散の捌け口が婚約者や愛人たちとの熱い夜に繋がっている節があるのは否定できない事実なのだろう。

あの様子ではしばらく動けないと判断して、悠元はそのまま屋根伝いに駐車場方面へと駆けて行ったのだった。

『十』の入れ替わり

房総半島にある国防軍の秘密収容所の件はメディアで取り上げられることは無かった。何せ、襲撃者が立ち去った後には何事も無かったかのように無事な状態の収容所が存在していたし、そもそもこの場所の所在が明るみになれば、国防軍への非難が強まるのは避けられず、政府がらみのスキャンダルに発展する。故に、水面下で箝口令が敷かれたのは間違いない。

その事情を悠元が知ることになったのは、翌日の防衛省庁舎内にある国防陸軍総司令官室で、蘇我大将の口から聞かされたからだ。

「休みの日に特務中将を呼び出して済まなく思っているが、これが今回の一件に関する報告書だ。流石に事が事ゆえ、連絡では漏洩する危険性も高いからな」

「拝見いたします……今回の件は自分が関与しておりますが、司令官閣下の判断をお聞かせ願いたい」

今回の顛末を蘇我が聞いた時点で、確実に悠元が関与していることはそれとなく察していた。だが、そもそも事の発端を起こしたのは国防軍情報部であり、同盟国の兵士を人形として工作活動に用いるという〝禁じ手〟を用いたことは極めて遺憾なことであった。

本来ならば国防軍としてケジメを付けるべき案件を神楽坂・上泉・三矢・矢車の四家が担ってくれただけでなく、四葉家が同盟国の兵士救出に尽力してくれた。潜在的な敵国と言えども、軍事同盟を結ぶ相手の面子を潰すのは、軍だけでなく日本政府の問題にも波及する。

「今回の一件は中将の尽力に感謝する。寧ろ深く頭を下げたいところなのだがね」

「そこまで畏まられると自分の胃がやられますので勘弁してください」

そのことを『遠山』――――十山家の人間が認識していない筈など無いのだが、危うくそうなってもおかしくない状態となっていたことに、蘇我は報告を聞いた段階で深い溜息を洩らした。最悪の事態を回避してくれたことに感謝しつつ、〝遠山家の暴走を止めた〟見返りと

して無罪放免と判断した。
　いくら立場が定まったとはいえ、気苦労を必要以上に背負いたくないという意思が垣間見えている悠元の表情を見て、蘇我は思わず笑みを漏らした。
「君の協力者についても無罪放免で構わないだろう。元は情報部の独断によって危うくＵＳＮＡとの関係まで拗れるところだったのだから、この決定に異論は唱えさせないと公言しよう。なお、今回の問題を受けて情報部は当面内情（内閣府情報管理局）の監視下に置かれることが決まった」
「政府による情報機関の文民統制（シビリアンコントロール）、ということですか？」
「そうなるな。全く、かの［アンタッチャブル］の逆鱗どころか一番触れてはならぬ逆鱗まで侵して、命があるだけマシだと思ってほしい所だ」
　国防軍情報部は国防軍そのものから切り離されて、内閣府と防衛省による新設組織である国家安全保障情報局に組み込まれる。日本政府による文民統制を確固たるものにする意味でも、国内外の工作活動を把握しておく必要があるという判断の下で新設された。
「一部の強硬派は自分や達也を危険視する可能性は残っておりますが」
「仮にそうなった場合、軍事法廷による〝粛清〟も選択肢に入ってしまうのだろう。尤も、そうなった場合は全面的に責を負う、と防衛大臣や総理大臣閣下からも言伝を頂いている」
　その前段階として、情報部を内情の監視下に置くことで組織の解体を進めていき、それが完了次第政府機関として吸収するとみている。この部分の利点は七草家が持っていたコネクションの力を相対的に弱めることにも繋がる為、悠元としても異議を唱えるつもりはない。
「それと、君が一番懸念していたであろう遠山つかさ曹長の処遇だが、彼女は来月一日付で北海道方面部隊に転属が決まった。当然異論は各方面から出ていたが、剛三殿が全て一蹴された」
「うちの爺さんがすみません」
「気にしないでいい。剛三殿の言い分も尤もだろうからな」

『盾があるから「自分達だけ無事でいられる」と思うておるからこそ、国の政に命を賭けようなどという気概のあるやつが生まれぬ。ならば連中の頭を冷やす意味でも、遠山の盾は国の守りに生かしてもらうべきだ』

この剛三の鶴の一声と奏姫の支持、そして千姫の後押しによってつかさは国防軍情報部から切り離され、国防陸軍の軍人魔法師として最前線に送られる。十山家の貢献欲を工作セクションではなく実戦部隊に活用することで満たし、彼女を目立たせることによって裏舞台で使いづらくしてしまう。

加えて北海道は新ソ連を睨む最前線でもあるため、いくら[元老院]が出てきても簡単に利用できなくなってしまうし、仮に呼び出せば簡単に足が着くようになってしまう。彼女が動くことで四大老の一角の動きまで連動して見えてしまうという利点を策として用いることにした。

一度は剛三も家諸共潰そうかと考えたが、奏姫が『生きているものを死なせるのは簡単ですが、利用価値があるのならば十二分に使い倒しましょう』という助言で決まったらしい。どちらにせよ、国防軍に飼い殺しされるのが決まったようなものであった。

そして、剛三の忠告を破るどころか国際問題に発展しかねない事態を生み出したとして、悠元は師族会議議長の権限で十山家に師族二十八家からの除名処分を通告、『遠山家』としての再出発に踏み切らせた。

一花家と七倉家以降出ていなかった除名処分が出たことに、他の師族二十七家も様々な反応がみられた。〝数字落ち(エクストラ)〟に対する差別は禁止されている形だが、今回の裏に何があったのかを探る家は出てくるだろう。そのことを一々咎めるつもりはないし、今度の臨時師族会議で改めて説明するつもりだ。

その入れ替わりとなる形で同じ旧第十研出身である遠上家が十神家として復帰。十神家は永らく〝数字落ち(エクストラ)〟の状態だったために基盤も抱える魔法師もいないため、神楽坂家現当主と懇意であることから当面は神楽坂家の傘下に入る形で家の存続を図ることとなった。

今度の若手会議は十山家が除名されたために対象外となり、十神家が対象に含まれる。なので、本来ならば長男の遼介が出てこなければならないが、当の本人はＵＳＮＡに留学したきりで行方知れずの為、已む無く茉莉花が対象に含まれる。それを聞いた当人から『どこかで女の子に現でも抜かしてるのかしら、あのバカ兄貴』という発言が出た。

その推測が大方間違っていないというのが、一番性質（タチ）が悪い話なのかもしれない。

「君も大変のようだね。聞けば、婚約者が複数人いるそうではないか。妻も『彼も若いのに大変ね。貴方は魔法師でなくてよかったわね』と零していたぐらいだからな」

「……なってしまったものに後悔は出来ませんが」

収容所での一件を終えて司波家にとんぼ返りした後、着替えてシャワーを浴びてから自室に戻ったところで深雪に抱き着かれた。放課後の分の穴埋めとして甘えられた（正確な表現で言うと文章表現が出来ない有様だが）形となり、今日は深雪の我儘に付き合うと決めた先の呼び出しだった。

別にすっぽかしているわけではないので深雪は渋々納得し、水波は苦笑を漏らしていた。なお、達也はＦＬＴでやることがあると言って早朝に出掛けていた。

「何にせよ、情報部の独断を許したという意味で三矢家には改めて謝罪せねばなるまい。ところで、ＵＳＮＡの兵士は全員無事かね？」

「ええ。聞いた話では、一部を除いて無事にアルバカーキ行きの民間機で帰国したとのことです」

悠元が〝一部〟という表現を用いたのは、現在リーナと同居しているシルヴィア・マーキュリーのことについてだった。彼女の立ち位置は［十三使徒］アンジー・シリウスの補佐という形で来日しているが、リーナの生活能力を鍛えるためにセリアからのお願いで日本に留まってもらうこととなった。

事情を聞いたリーナは猛抗議したが、セリアの満面の笑みで迫ってくる有様に涙目を浮かべて鎮圧された。これではどちらが上なのか

が分からない、と内心で苦笑してしまった。
「アンジェリーナ・シールズ嬢についてですが、今は九島閣下に魔法を教授されておりますので……彼女はれっきとした日本人として帰化させますので、軍に引き入れる真似なんかしたら許しません」
「無論分かっている。空や海も君の機嫌を損なうような真似は慎むと述べていたからね。無論、私にもそんな気概は無いよ。力があるから、と言って本人が望まぬ未来を押し付けるなど、この国の法理を逸脱した行為でしかない」
蘇我の目の前にいる少年は、これからの日本魔法界を背負うに相応しい実力と実績を兼ね備えている。若輩ゆえにそんな彼を認めない輩が少なくないのも事実であるが、蘇我は魔法という技術によって人々の常識も変わるべき時にいる……と、そんな風に感じていたのだった。
「改めて、ご苦労であった上条特務中将。これからも互いの領分を弁え、共に国を護るべく尽力してくれることを切に願う。そうそう、一つ言い忘れていたが、今回の一件によって君の階級は特務大将に昇格となった。正式な通達は後日行うこととする」
「……最後に爆弾を投下しないでください、閣下。昇進はもとより、私は派閥争いに関与する気などありません」
「それを分かっているからこそ、今言ったのだ。なので、今後は対等に話してくれたまえ」
国防軍もとい防衛省からの通達によって、悠元は陸軍の魔法師でも史上最高位となる特務大将に昇進。陸軍総司令官の蘇我と実質的に同じ立ち位置となるが、元々ワンマンアーミーとしての運用を想定しているために陸軍とは別の指揮系統を有する、と蘇我が公的に認めた形となる。
裏の事情として、今上天皇の直下にいる神楽坂家当主が国防陸軍総司令官の直下にいるという状態は宜しくないという防衛省の制服組のみならず、現内閣――主に総理大臣や防衛大臣からの突き上げがあったというのは蘇我の心の内に秘められることとなった。
「……了解いたしました」

やや困惑しながらも敬礼をする悠元に対し、蘇我も敬礼を返した。

◇　◇　◇

同じ頃、十文字家の自室のベッドで横になっていた克人。「ファランクス」のお陰で命に別状はなかったが打撲と軽い内出血程度の負傷を受け、魔法演算領域の過度な負荷によって一日は安静にするべきという医師の判断に従う形で療養していた。

上半身を起こした克人は、自身の身体の感覚を確かめるように掌を見つめていた。

４月２０日に起きた南総収容所（房総半島の秘密収容所の名称）への襲撃。克人は自室で趣味の音楽鑑賞に耽っていた時、父親である和樹が克人のもとを訪ねてきた。呼び出しならば使用人を遣わせばいいと考えていた克人であったが、態々父親が息子の部屋を訪ねた理由は、その同行者の存在にあった。

同行者の名は十山信夫。師補十八家・十山家当主の彼が和樹を介して克人を訪ねた理由を、克人は口にした。

『――――つかささんを助けて欲しい？　一体どういうことなのですか？』

克人からすれば要領を得ない話であった。いくら彼女が師補十八家の魔法師と言えども、それ以前に国防軍の軍人魔法師。軍務に従事している以上は戦闘行為で命を落とすことも有り得なくはない。

十山家の魔法は十文字の「ファランクス」とは強度も規模も比較にならないが、魔法師の如何を問わず防御能力を付与できる点で国防軍におけるプレゼンスを獲得したことは聞かされている。

その十山家の魔法が通用出来ない人間となれば、克人も数人ほど心当たりはある。もしや……と心の中で推察した克人は信夫の続きの言葉を待った。

『無理を承知でお願いをしたい。今ここでつかさを失えば、十山家の信頼は地に落ちます』

『ちなみに、そこまで急を要するとなれば狙う相手も当然理解されている筈だ。一体どこの誰だというのですか？』

『それは……』

信夫が言い淀む時点で、克人はこの場で口に出せば断られる相手だと察した。そうなると、一番可能性が高いのは一昨年の襲撃に対する復讐という名目を有する神楽坂家現当主。そして、魔法を無力化出来るという意味では彼の姉の一人も該当する。いずれも三矢家の係累という時点で、克人に助ける義理は無くなっていた。

そんな克人の様子を察したのか、和樹が信夫の助け舟を出す形で言葉を発した。

『克人。私からもお願いをしたい』

『……親父殿。今回のことを引き受ける代わりに、親父殿はこれ以上十文字家の舵取りに意見を出さないでくれ。それが呑めないとなれば、俺はこの話を引き受けない』

『それは……分かった、お前の意向を汲もう』

克人の条件――家業はともかくとして、家督を継いだ以上は十文字家の舵取りに意見を述べたとしても、最終決定権は克人がすべて請け負うという形。これには和樹も渋々認めた。そして、克人がつかさの救出に赴いた折、その相手が［神将会］――悠元という現実だけでなく、たった一撃で勝敗を決されてしまった。

（神楽坂のあの魔法……間違いなく加減をされていた）

克人は相対した人物が悠元だということを認識していた。だが、彼が使ったのは［円卓の剣（ラウンド・ブレード）］とは明らかに異なる黄金の光の槍による攻撃魔法。その攻撃を受けた直後、十分以上ロクに体を動かすことすら出来ていなかった。

それでも、彼が本気でその魔法を放ったとは到底思えなかった。寧ろ片手間にその魔法で吹き飛ばしたとしか考えられなかった。

そんな風に考えていると、扉の向こうからノックの音の後に使用人の声が聞こえてきた。

『御当主様、起きていらっしゃいますか？』

「――ああ、起きている。来客か？」

『見舞いの客にてございます。三矢美嘉様が参られておりますが』

使用人の口から出た人物の名は、克人がたった今考えていた人物の近親者。そして、自身の婚約者。体調不良を理由に追い返すことまで

きるが、克人の中には悠元が今回の一件に関与していた理由を知りたいと思い、美嘉を招き入れることにした。
「構わない。入れてくれ」
『畏まりました』
　使用人の声が途切れると、扉が開いて私服姿の美嘉が現れた。手には果物入りの籠があり、克人がこうなっていることを想定して持参したのだろう。
「やっほ、かっちゃん。弟にこっぴどくやられたみたいだね」
「……それは否定しません。先輩は知っていたのですか？」
「だって、詩奈が巻き込まれたんだもの。お祖父ちゃんの忠告すら破って身内に手を出した報いは受けて当然でしょ。私も詩奈の救出に参加したし」
　克人が戦闘で負傷して十文字家に戻った後、父親の和樹から改めて事の詳細を聞いた。
　十山つかさが三矢家の娘を騙して誘拐騒ぎを起こした挙句、神楽坂家の私有地に立て籠もったのだ。一昨年の剛三との約束を破った以上、遠慮する必要が無いと三矢家の兄妹姉妹五人が動き、国防軍情報部の部隊が拘束され、更にＵＳＮＡ軍の兵士を処分しようと目論んだとして十山つかさへの報復が行われた。
　なお、米軍の兵士は四葉家まで動く事態となり、今回の一件は日本政府とＵＳＮＡ政府の依頼でもあるという神楽坂家からの書状で沈黙せざるを得なくなった。
「今回は十山家を庇ったことに対して、その程度の怪我で済んだのがマシってことで納得しなさい。悠元が本気で怒ったら、かっちゃんが消し飛んでいたんだから」
「ええ……加減されたというのは、身を以て感じました」
　克人が軽い打撲や内出血程度で済んだのは、自身の魔法のお陰というよりも悠元の恩情に助けられたに近い。それを肌で感じてしまった克人だからこそ、美嘉の忠告に対して素直に頷いていた。
「まあ、私に色々聞きたいんでしょうけど、私が知っているのはそれぐらい。後は悠元に直接聞いてみることだね。尤も、教えてくれるかど

うかはかっちゃん次第だけど……はい」
　そう言って美嘉が差し出したのは一通の手紙。一緒にペーパーナイフも添えられており、克人は黙ってそれを受け取った上で、封を開けて中身の便箋に目を通した。そして、克人の表情には珍しく驚きの表情が垣間見えていた。
「……先輩はこの内容をご存知ですか？」
「ううん、父からかっちゃんに渡してくれって頼まれただけだから。何があったの？」
「第二回の若手会議の招待状だ。発起人は……四家合同となっている」
　敬語を使うことすら忘れている克人が驚くのも無理はない。若手会議の提唱者として書かれているのは、神楽坂家当主・神楽坂悠元、上泉家当主・上泉元継、三矢家当主・三矢元、そして四葉家当主・四葉真夜とそうそうたる顔ぶれとなっている。当然後者の二家は次期当主がいるので、会議については元の長男である元治と真夜の実子である達也が出てくることになるだろう。
　先日達也らの説得を終えて次の若手会議を開く準備をしようと思っていたところに、別の家が共同提唱して若手会議を開催する。一応前回の提唱者である克人を配慮して〝第二回〟という体裁を取っているが、七草家と十文字家に一切の断りを入れることなく実施したあたり、両家が信用されていないと思っても何ら不思議ではない。
「手紙を渡される際、三矢殿は何か仰っていましたか？」
「父さんから？　あー、そういえば『十文字殿から何か言われたときは、悠元を怒らせた結果として会議の提唱をしたと伝えてくれ』と言っていたかな」
　先日の若手会議でも神輿として担ごうとした深雪は悠元の婚約者として師族二十八家に通達されている。その事実すらも無視するような形で案を出した七草家も、それを咎めなかった十文字家にも憤りを感じていてもおかしくはない。
　美嘉は最初、それを聞いたときに『四葉家を除け者にしようと画策したとしか思えないんだけど』と思ったほどであり、人の婚約者を槍

玉に挙げるという性根自体が腐っているとしか思えなかった。
「私は会議に出ていないから詳しいことは言えないけど……会議の秩序を守りたいって気概は分かるけど、まずは現状の置かれている状況を整理し切ってから具体的な対策の話し合いに持ち込むべきだったと思う。そこがかっちゃんに求められる役割だったんじゃないの？
一朝一夕で反魔法主義への対策なんて出る訳がないでしょう」
「仰る通りでございます……」
歳の差があるとはいえ、珍しくしっかりとした意見を口に出す美嘉に対し、克人は頭が上がらない思いで彼女の言葉に耳を傾けていた。
「大体、師族二十八家の若手が各々家業に関与しているならまだしも、国防軍や防衛大に在籍しているから欠席するとかどういう領分なの？　恐らくだけど今度の会議、悠元や元継兄さんはそれを理由にすることを許さない」
「そこまで断言できると？」
「できるね。あの二人の性格なら、所属している別の組織に慮るぐらいなら師族会議を抜けろと勧告も辞さないと思う」
護人二家の当主であり、特に悠元は国防軍と深く関わりを持つ。前回の会議は政府要人との会談が先に入っていたために欠席したが、仮に前回の会議で参加していたら会議が破綻することも織り込んだ上で厳しい発言を放っていただろう、と美嘉はそう見ている。
今年の第一高校の入学式では、悠元が師族会議議長として厳しい祝辞を新入生に投げかけた。それぐらいのことを平気でやるのだから、もっと厳しい現実を突きつけてもおかしくは無いとみている。
「何にせよ、かっちゃんは音頭を取る側から意見を述べる側に変わったんだし、もう少し気楽にやりなさいよ」
「……ええ、そうですね」
既に将来の夫婦間で力関係が形成されつつある二人。なお、現当主夫人である慶子は美嘉のような女性が前妻の子である克人を諫めてくれる立場になることをとても歓迎しており、十文字家で暮らす克人の弟や妹たちも美嘉を慕っている。正式に婚約を結んでから数ヶ月で、美嘉は十文字家の信頼を勝ち取るにまで至っていた。

なお、先代当主の和樹に対しては、アリサの一件があるためにあまり快く思っていない。その感情があるから寧ろ他の十文字家の人たちに受け入れられている側面があったりする。
「それじゃ、果物を切ってあげるから大人しく看病されなさい」
「いえ、そこまでしていただかなくとも」
「ダメ？」
「……分かりました。甘んじて受けましょう」
将来、美嘉が十文字家に嫁いで家を支える女性社長として辣腕を揮うことになるのは……まだ先の話である。

どちらにせよ常識外の相手

第一回の若手会議が事実上の『喧嘩別れ』に終わるような恰好となったのは、あまりにも性急すぎる七草家の策略に反発して四葉家が突っぱねた――というのが会議の参加者たちの統一した見解だが、師族二十八家の中で〝悪名高い〟四葉家を排除するような真似は到底看過できるものではない。

とはいえ、主だった家が動きを見せようとする前に、今年の十師族選定会議後に新しく加わった護人の二家が若手会議の再開催（名目上は第二回の若手会議と位置付けている）を決め、日付は４月２７・２８日に箱根の神坂グループ系列のホテルで行う。今年二月に起きたテロ事件の反省も踏まえて、表向きは『神坂グループ主催若手交流会』という形で部屋と会議室を押さえている。

だが、いきなり話し合ったところで真っ当な意見が出るとは到底思えない。それは第一回の顛末を聞いた時点で明白であった。

参加者の大半が、魔法師の一族に生まれながらも非魔法師からの暴力に怯えて結局同調圧力に屈したことを一概に悪いとは言えないが、明確な意見を一切述べようともしなかった側にも問題がある。そのために根回しをすることとした。

襲撃から四日後、悠元は横浜の日本魔法協会支部に足を運んでいて、モニターには十師族の各当主の姿が映し出されていた。一条家は当主の剛毅が座っているが、十文字家は現当主の克人が負傷して療養中の為、先代当主の和樹が代理として出席している。

悠元は今回の一件――十山つかさが四葉家をテストしようと目論み、ＵＳＮＡ軍の兵士を洗脳して四葉家次期当主である司波達也をテストしようと目論んだことに加え、その繋がりで三矢詩奈も誘拐紛いの状況に巻き込まれたこと。

既に悠元絡みの案件で離脱一歩手前の状況に追い込まれていたにもかかわらず、その忠告すら無視したので、当初の予定通り十山家を師族二十八家からの除名通告について報告した。

「――以上が今回の会議を開催するに至った経緯だ。最早、十山家

は師族二十八家の中に置くべき家ではないと判断して除名通告を実施した。とはいえ、独断では反発を招く可能性があったため、今回の会議に諮った上で改めて処分を行う……皆様方のご意見を忌憚なく述べて頂きたい」
「質問ですが、神楽坂殿。今回の通告は既に政府も了承されていると認識しても宜しいのでしょうか？」
悠元の発言に問いかけたのは七宝家当主・七宝拓巳だ。彼の問いかけに対して悠元は頷いた上で言葉を続ける。
「国防陸軍の最高司令部のみならず、統合軍令部および防衛省、ひいては日本政府にも十山家の除名処分についての事情説明はしている。日本魔法界の秩序に罅を入れるような行いを看過していた側には説明しておいた。その件にも関わる話だが、十文字殿。克人殿に対して私の秘密を漏洩した報いとして魔法攻撃を実施した。魔法に関する詳細は秘匿させてもらうが、今後十山家に対する恩情は一切許さない、と心するよう伝えておくように」
「……心得ております、神楽坂殿」
悠元と十文字家には、一昨年の襲撃の看過だけでなくアリサの件で諍いとなってしまっている。加えて自身の息子が悠元の秘密の一端を漏洩したことに対して、あの程度の負傷で済んだのが悠元の恩情によるものだと察し、和樹は神妙な表情を見せた上で深く頭を下げていた。
未だ十代の人間にいい歳の大人が頭を下げるという光景など非常識極まりないが、悠元は既に誰も異論を唱えることが出来ない実績を有している。分かってはいても前世からすれば非常識に見えてしまうだけに、悠元は心の中で溜息を吐きたくなった。
そんな事情を察したのか、次に問いかけてきたのは七草家当主・七草弘一だった。
「神楽坂殿。十山家についての処分に異存はありませんが、国防軍に対して何らかのアクションを起こす必要は無いとお考えでしょうか？」
「既に国防軍のみならず日本政府まで対処に動いている為、自浄作用

が働くならばこちらから介入する必要もないと判断した次第だ。異存はあるか、七草殿？」
「いえ、ございません」
やけに素直な物言いをしている側面は否定できないが、特に悠元は真由美と泉美の二人を婚約者として受け入れている。とはいえ、二人は既に二木家と六塚家の養女となっている為、慮る正当な理由も存在しない。
人様の生死に関わるような事態を見過ごしたのは許されないことだが、いつまでも引っ張り続けるのも器の小ささを露呈するようなもの。弘一の息子がしでかしたことの裏に彼の存在がいたとしても、最悪彼を当主から引き摺り下ろすことで決着させる。
すると、ここで六塚家当主・六塚温子が四葉家当主・四葉真夜に問いかけた。
「四葉殿は、何か意見がおありでしょうか？」
「そうですわね……今回は神楽坂殿の尽力もありましたし、四葉家として異論はありません」
「四葉殿がそう仰られているというのであれば、こちらとしても異論はありませんな」
真夜の発言に便乗する形で述べたのは三矢家当主・三矢元。三矢家としては十山家の圧力で詩奈を誘拐紛いの一件に巻き込んでしまったが、自分の子らが尽力して相手を嵌めたことについては、最初聞いたときに『そこまでしたのか……』と呆然になったほどだった。
詩鶴が十山家に一発撃ちこんだと聞いたときは、どうせ動くであろう剛三の姿を想像して深い溜息を洩らした。結果としては詩奈が侍郎に対する感情を明確に出来たという面も出来たので、父親としては複雑だが娘の嫁ぎ先が無事に確保できた、という意味で溜飲が下がった。
寧ろ、そう思わないと正気を保てなくなりそうだった、というのが一番正しい表現なのかもしれないが。
「では、十山家に対する処分に異論が出ないようなので、十師族の総意として日本魔法協会に十山家の師族会議除名を正式に通知する。そ

して、今までならば師族会議の空いた穴を埋めることは無かったが、今回は遠上家を十神家として師族会議に復帰していただく」
十山家と入れ替わる形で十神家を師族二十八家に復帰させる。他にも〝数字落ち(エクストラ)〟の家は存在するが、その中で十神家を復帰させた理由を悠元は説明する。
『能力が足りなかった』とか『反乱を起こした』などという理由で除名された彼らだが、その言い分の主は日本政府や元老院の意向によるもの。結局のところ、彼らが使いやすい魔法師の一族を選定した上で現代魔法の権威として据えたに過ぎない。
だが、師族会議が政府や国防軍のコントロールを外れた今、国防を担う者として日本魔法界の乱れを正すべき時に来ている。その第一歩として十神家を師族会議に復帰させる。無論、十神家に予め事情説明をしており、公の社会で『遠上(とおかみ)』を名乗ることは許可している。これが許されないと、財界で使われているビジネスネームの使用にすら言及せざるを得なくなるためだ。
「師族会議はもはやいち民間組織ではなく、今上天皇陛下より国家守護の任を与えられた治安維持機構に他ならない。魔法協会ですら手を広げ切れていない魔法資質者に対する人道的保護や権利の保全も行わなければならない」
「神楽坂殿は、その方策を既に考えておられるということか？」
「その言葉には少し語弊があるな、一条殿。先日小田原に開校された魔法師育成の為の教育機関は自分が働きかけた結果の産物だ。疑問に思うのならば先代の神楽坂や上泉殿に尋ねてみるといい。もしくは文部科学省あたりなら快く回答してくれるだろう」
「すでに実践されていたとは……」
十師族ですら自ら進んで実践しようとしなかった〝掬い上げ〟の方策。それを悠元は国立魔法医療大学や付属校の開校以前から進めてきた。自身の蓄積していく膨大な資産の一部を使い、魔法資質保持者が犯罪者の道に堕ちないための施策を講じていた。
現状はまだ始まったばかりだが、それでも魔法犯罪の抑止という意味で少しずつ効果が出てきているのも事実。その反動で国内外のア

ンダーグラウンドが彼らを狙う様な動きも見せていたが、時には悠元自らが組織ごと潰した挙句、繋がりのある国内外の組織まで〝根切り〟とした。

「今は沈静化している反魔法主義の論調の再燃防止という意味で、将来の日本魔法界の為にあらゆる視野からの見解を育成したい。その為の〝若手会議〟を今月末に開催する。各当主の方々には協力をお願いしたい。無論、新ソ連の情勢も予断を許さない故に可能な範囲で構わない」

意見を集約する場ではなく、各々の思考をこれからの師族会議を担うために必要な能力に作り変えていく。これまで長年続いてきた〝九島烈一強体制〟を完全に脱却し、〝神楽坂・上泉の護人による統治システム〟を主軸とした日本魔法界を担えるだけの人材を育てるために。

「神楽坂殿は新ソ連が再びアクションを起こす、と見ているのか？」

「ええ、上泉殿。実を言いますと、自分が魔法師であることを偽って長野佑都を名乗っていた時に祖父と新ソ連を旅行中、正規軍の特殊部隊や諜報機関に狙われまして。その際にクレムリン宮殿を襲撃して首相に覚書を書かせましたが、連中は結果として日本に対するアクションを行いました。この時点で新ソ連に対する信頼は地に落ちました」

数年前――悠元がまだ長野佑都の名を使っていた時、剛三との鍛錬旅行で新ソ連に足を踏み入れた。別に不法な方法ではなく正規の手続きで入国したが、その日の夜から正規軍の特殊部隊に宿泊先を襲われ、三日後に正規軍の三個師団と戦闘を繰り広げる羽目となった（相手が剛三ということで〝世界群発戦争で喪った同胞の敵討ち〟が主だった理由であった）。その時点でレオニード・コントラチェンコの戦略級魔法を修得するに至った。

『埒が明かん』という剛三との共通認識のもと、クレムリン宮殿を襲撃して首相に覚書を書かせたが、宮殿を出ようとしたところで待ち構えていた部隊を見て、悠元は珍しくキレた。

『――そんなに死に急ぎたいんなら、死なせてやるよ。黄泉の国で旧時代の書記長（ロクデナシ）どもに会わせてやろうじゃねえか!!』

銃火器を構えた部隊の頭上をあっさりと飛び越えて、執務室にいる首相ごとほぼ一直線上に捉え、悠元は新陰流剣武術奥義――――超高密度に圧縮した空気の層を幾重にも重ねることで、空気の層同士の摩擦による高速加熱で如何なる物質すら溶かしてしまう蹴り技［朱雀天翔（すざくてんしょう）］を炸裂。

部隊の肉壁に守られる形で首相は一命を取り留めたらしいが、剛三と悠元を狙った結果として総計四個師団が壊滅状態に陥った。この戦果の半分を担った剛三も『よくやった』と褒めちぎっていた。

なお、欧州のメディアでは『クレムリン宮殿、謎の半壊!?　魔法師による反乱か!?』という記事で連日話題となっていた。未確認の情報筋などから欧州方面の魔法師による仕業なのではないかという噂もあったほどだった。

閑話休題。

「神楽坂殿は、相応に苦労されてきたのですね。私たちよりも強い理由が納得出来ました」

「ありがとうございます、二木殿。まあ、大体祖父のせいだと片付けられるのが非常に悩ましいことですが」

「……（茜を送り出す意味で頼もしいことだが、複雑だな……あのバカ息子が）」

二木家当主・二木舞衣が悠元を労い、悠元が素直に受け取りつつ愚痴を零す様に述べると、それに対して神妙な表情を浮かべていたのは一条家当主・一条剛毅であった。自身の娘である茜が嫁ぐ相手がこれほどに強いというのは、茜の父親として安心できる反面、将輝の父親としては複雑であった。

しかも、将輝はまだ深雪を諦めていない節が見られた。恐らく悠元に複数の婚約者がいることから、まだ挽回できると見込んでのものだろう。尤も、彼の親友曰く『将輝に勝機があるとは思えないのですが』と溜息交じりに零した台詞を聞いたとき、剛毅は息子の意固地さに頭を抱えたくなった。

「一条殿、如何なされましたか？　もしや先日の後遺症ですか？」

「大丈夫ですよ、五輪殿。神楽坂殿の話を聞いて、少し身内のことを思

い出していただけです」
（一条殿の息子か……悠元も苦労しているな）
剛毅の様子からしてまだ回復し切っていないのかと訝しんだ五輪家当主・五輪勇海の問いかけに対し、ぼかしながらもそう返した。それが剛毅の息子である将輝であることと、そこから考え得る可能性に思い当たりがあった元は深い溜息を吐いた。

◇　◇　◇

師族会議での議決により、十山家は師族二十八家から除名。遠山家となった彼らは国防軍に奉じる魔法師の一家として北海道に移住を余儀なくされることとなった。つかさは悠元との戦闘で魔法演算領域の過負荷を起こしたが、三日の休養で済んだのは偏に悠元の恩情によるものが大きい。
襲撃から四日後、そんな彼女が十文字家を訪れたと聞いたとき、克人は訝しみながらもつかさとの対談に臨んだ。元々父親の強い要望を条件付きで助けた以上、最早十山家に恩情を与えることは許されない。応接室に姿を見せたつかさは、克人の姿を見て深く頭を下げた。
「克人さん、先日は本当に申し訳ありませんでした」
「既に済んでしまったことですので、今更どうこう申し上げることは致しません。ですが、貴方は逆鱗に触れた。故に知ったことは誰にも漏らしてはなりません」
秘密収容所で克人が悠元の存在を仄めかす発言をしたことも含め、克人はつかさに対して余計な推測を述べることも禁じるように言い放った。これにはつかさも『妥当な処置ですね』と述べて、それ以上言いかけた言葉を呑み込んだ。
「そして、今後十文字家は遠山家を庇いません。それがいくら旧第十研の誼であったとしてもです。貴方方の失陥は自身の手で償ってください……手厳しいかもしれませんが、家諸共潰されなかったのは〝不幸中の幸い〟であると」
この先、いくら第十研の誼と言えども十文字家が遠山家を庇うことはない。今回の一件は今後関東地方を担う三矢家との信頼関係にも大きな影を落としただけに、ここから先はいくら私闘と言えども自己

責任で解決すべき、と。
「……助けられた立場ですので、大人しく従いましょう。ただ、一つだけ申し上げても宜しいでしょうか」
「何でしょう」
何の表情も込められていないつかさの表情を見つつ、克人は言葉の続きを促した。
「今回の一件で確信しました。克人さん、貴方なら彼に勝てます」
「……（それはどちらのことだ、と問いかけるべきではないのだろうな）」
つかさが思い浮かべた相手が悠元か達也の二人だとして、前者は間違いなく論外。何せ一昨年の模擬戦がそれを証明しているし、先日の戦闘についても圧倒された。ただ、後者にしても克人は達也の魔法を知らない。魔法を無効化する技術に長けているとは聞いているが、それが彼の全てを示しているとは思えない。
彼女としては、克人を唆して四葉家もしくは神楽坂家の力を削ぎたいのだろうが、それが確実に成功する方法があるのならば知りたい、と克人は心の中でつかさの言葉を反復するように考え込んだのだった。
いずれにせよ、常識的な魔法師を相手にするとは到底思えない――――つかさの台詞を聞いた克人が唯一認識できた事実であった。

苦労性の未来予想図

第二回の若手会議に関する招待状は、一部を除いて４月２１日に師族二十八家の関係者に一斉送付された。とはいえ、今度は先日欠席した護人の二家の関係者まで出てくる。かの英雄を輩出した二家の当主――――それも、三矢家現当主の息子たちということで、今度の会議は三矢家が主導するのではないかという憶測が飛び交うことは予想された。

三矢家現当主・三矢元は師族会議の場で二人を血の繋がった息子として扱いつつも一線を引いた上で振舞っており、それは他の現十師族当主が目の当たりにしている。そして、新たに十師族として加わる様な形となった護人の現当主達も元に対して場を弁えた振る舞いをしている。

それが他の師族に伝わらない筈など無いが……臨時師族会議の後、魔法協会内の応接室に足を運んだ悠元は、先に待っていた人物に頭を下げた。

「お待たせしました、九島閣下」

「いや、君が忙しいことは理解しているからな。寧ろ、こんな老輩を頼ってくれたこともそうだが、多方面で迷惑を掛けた君に〝閣下〟と呼ばれるのは何だかむず痒い気分だよ」

そこにいたのは九島烈その人。悠元は今度の会議を開くにあたり、十師族の各当主だけでなく目の前にいる人物にも協力を願うつもりだった。その最大の理由は、彼が未だに日本魔法界や国防軍への強い影響力を有していることとシンパの存在であった。

「神楽坂家と九島家の因縁はともかくとして、私個人として九島閣下に含むところはございません。今回閣下をお呼びしたのは、来週末に箱根で開催する若手会議のオブザーバーとしてご出席願いたいと考えている次第です」

それに、悠元と烈の因縁は光宣の治療とリーナやセリアの教師役という対価を以て一区切りついている。パラサイト関連は既に烈の手元を離れた案件であるし、九島家の〝格落ち〟は烈が希望して実施さ

れたもの。この後の九島家の没落は既に悠元の目の前にいる御仁自身が強く感じているであろう。
「ほう……その狙いは聞かせていただけるのかな？」
「勿論です」
　そもそも、この世界で四葉の次期当主として選ばれた達也の存在が軽視されているのは、彼の功績が師族会議の当主クラスに留め置かれている話が多いためだ。とりわけその最たるものは戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］による大亜連合軍の軍港消滅――［灼熱と極光のハロウィン］の当事者。加えて、悠元も神楽坂家当主とはなったが、中世・近代ならばいざ知らず今の時世において十代の当主という前例は殆ど存在しない。
　つまるところ、真っ当な社会人として溶け込んでいる師族会議の若手世代からすれば、悠元や達也と言った存在は〝異質〟でしかないわけだ。
「閣下や師族会議の現当主、もしくは次期当主の地位にいれば自分や達也の功績や素性はある程度明るみになっております。ですが、先日の会議に出た若手世代では信用できない部分も多々出てくることでしょう」
「それは確かにな。私も自分の子や孫に話はしているが、とりわけ君の祖父の存在はどうにも異質だと受け取る者が多くてな」
「アレは例外中の例外です」
「そうだな。あれは魔法師としても、武闘家としても異質でしかない」
［トリックスター］の名で馳せた烈ですらも常識外と言わしめた剛三の存在。彼の成したことを鑑みれば〝21世紀史上最強最悪の魔法師〟という称号を送られることは避けられない。それに匹敵するのが悠元や達也だが、世界各地において膨大な数の弟子を持つ剣術家・武闘家のカテゴリでいえば剛三に敵わない。
　元々かの魔王（ルーデル）に引けを取らないとまで言われたほどの功績を叩き出した挙句、その功績が現在進行形で積み上がっているのが一番性質が悪い話かもしれない。
「なので、閣下には会議の口出しこそ控えて頂きますが、必要ならばオ

ブザーバーとして達也の信憑性を説き伏せて頂きたいのです」
「成程……分かった、引き受けよう。私も真夜や深夜の教師として彼女たちの未来を守らなければならなかった身であるからな」
若かりし頃の四葉家関係者（主に真夜や深夜）を知るからこそ、烈の言葉はより信用性を増す。烈自身も二人に魔法を教えた身として、弟子の未来を悲観させないものにするべきだったという後悔が少なからず存在していた。光宣の未来という一番の問題が解消されたからこそ、烈は悠元の要請を承諾した。
「尤も、私のような大罪人にどこまでの信憑性を持たせられるかは不明だがね。そういえば、光宣は第一高校に転入したのだったか。さぞや大変だったのではないか？」
「自分はそこまでではありませんよ。光宣自身は大変そうでしたけど」
何せ、深雪のように周りの女性の視線を惹き付けるだけの容姿を持っているのだ。転入初日、休み時間は早速多くの女子生徒に取り囲まれて大変な目に遭っていた。曰く『病弱だったころはそこまで気にしていませんでしたが、健康になったらなったで大変ですね。精神的に参ってしまいそうです』とのこと。
一方、婚約者である理璃が拗ねてそれを水波や香澄、泉美までが諌めるという事態になっていた。嫉妬で［ファランクス］を暴発させない辺りは流石と言えるかもしれないが、この辺は光宣と理璃の問題なので口を出す気はない。人の恋路を邪魔すると馬に蹴られて地獄に墜ちるのが相場だから。
「魔法師として十全に動ける嬉しさの反面、病弱だった時に噴出しなかった問題が一気に噴き出した形ですから。光宣なら大丈夫だと思っていますが、偶に話ぐらいは聞いてやろうと思います」
「……ありがとう、悠元君。光宣が道を踏み外さなかったのは君のお陰だろう」
「大したことはしていませんよ」
原作においてキーパーソンとなる光宣と水波。この二人との関わりで今後の原作知識が通用しなくなったのは確かだが、別の形で影響

を及ぼすのは確かだろう。その証拠に足り得るかは不明だが、ディオーネー計画が水面下で進行しているのは確かであった。
「何にせよ、今度の会議は宜しくお願いします」
「確かに承った。正直、本家に居ても居場所が殆どなかったからね」
今まで九島家の仕事を担ってきた功労者に対しての扱いでいえば〝妥当ではない〟だろうが、もうじき９０歳の高齢となれば酷使させる側にも罪悪感が伴ってくる。リーナとセリアへ九島の魔法を教えることについて躊躇わなかったのは、実の弟に対しての罪滅ぼしも含まれているのかもしれない。
悠元は会談を終え、深く頭を下げた上で立ち上がり、その場を後にした。
◇　◇　◇
平日はＦＬＴツインタワーマンションで、週末は司波家で過ごすというルーティンになってから幾分か余裕は出来ていた。その理由は単純なもので、安全面の確保という点に加えて婚約者や愛人とのスケジュール調整という意味で、あちこちに忍んで出掛ける必要が無くなったからである。
その反面、一部の婚約者からこれまで以上に甘えられて熱い夜が加速している事実もあるが、それでも自堕落な生活を送る気など悠元にはない。寧ろ、人に注目される立場になったからこそ気を引き締めなければならない。
そう思いながら司波家に帰ってくると、玄関で待ち構えていたように出迎えたのは笑みを浮かべた深雪だった。その後ろにいる水波が苦笑しているのを見ると、悠元が帰ってくることを察知して待ち構えていたのだと解釈するにそう時間は掛からなかった。
「おかえりなさいませ、悠元さん」
「ああ、ただいま深雪。水波もご苦労様」
「いえ、お気遣いなく」
帰ってきたのが丁度昼前だったので、昼食の用意が丁度できた所。リビングには既に座っている達也の姿があった。
「おかえり、悠元。お偉いさんとの話は済んだか？」

「まあね。まずは冷めないうちに昼食にしようか」
何時もなら発言も遠慮しない性分の達也が敢えて仄めかす様な言葉を使ったことに内心で感謝しつつ、まずは既に準備された昼食を頂くこととした。食後、後片付けを深雪と水波に任せたところで、達也は近くの棚の上に置いていた封筒をテーブルの上に置いた。
それは悠元が直筆で書いた会議の招待状であった。
「内容は既に読んだが、まさか母上まで関与しているとは驚きだった。今度のこの会議だが、お前の狙いは何処にある？」
「端的に言えば、師族二十八家の〝責任感〟と〝義務の履行〟。この所在をハッキリさせることにある」
先日の若手会議の場合だと、提唱人・十文字克人で発起人・七草智一であるわけだが、この会議の正当性を保証できる人間が皆無であった。何故かと言われると、会議の体裁を整えたのは主に克人だが、会議中で発言にブレがみられたことは元治や達也を始めとした近親者や知己に確認している。
克人が十文字家当主となったことで思考のスタンスが現実寄りになってしまったことも影響しているだろうが、変に意固地になったのはアリサの一件も大きく影響していると思われる。何せ、自分の父親の不祥事を息子の克人自身が尻拭いするようなもので、一家の当主としてテロ対策の次に来た仕事が身内の恥だとやる気も失せると思う。
「先日の会議は出席した兄や愛梨、燈也からも聞いているが、非魔法師に対するアピールに終始し過ぎて魔法資質保有者という本来守るべきはずの同胞を見捨てるような動きにも見えてしまった。その意味で達也の指摘は的を射ていると思った」
「結果的に俺が場の空気を悪くしたことは事実だがな」
「七草智一が深雪の名を口にした時点で、四葉家がどういうスタンスを取るのかなんて〝過去の事例〟から分かるだろうに。ましてや、その最たる人物が現当主なら猶更だろう」
四葉家を襲った悲劇と大漢への復讐劇。それは日本魔法界――――とりわけ十師族にいる人間ならば知らない筈は無いとも言われるもの。辛うじてあと一歩のところで四葉家を引き戻せたからよかった

ものの、七草家には人の心がないのかと疑ってしまうほどだった。
「過ぎたことに〝ｉｆ（もしも）〟は無いが、俺や元継兄さんが会議に出ていたら周りの非難も承知の上で七草智一を糾弾していたのは間違いない。ましてや深雪は俺の婚約者だ。アバター化したアイドルでもリスクが高いというのに、実際にアイドルとして活動させることへのデメリットを鑑みれば、大切な人間を神輿に担がせるのは許容できない」
アイドル絡みはレオの婚約者の一人である宇佐美夕姫の一件で実感していた。彼女の場合はアバターを介してのアイドル活動だったにもかかわらず人身売買絡みでマフィアに狙われたのだ。それが実際に顔を出しての活動となると、要らぬところから妬みややっかみを抱かれることになる。それが深雪ならば尚更であった。
なので、今度の会議で反魔法主義に対する具体的な方策について考えさせるつもりなどない。大体、大半が声の大きさに釣られて責任を放棄するような真似を犯したのだ。そんな無責任な態度しか取れないのならば、師族二十八家に連なってもらう意味など無くなる。
「まあ、今度の会議は俺や兄さんも出るから、無理に達也が矢面に立つ必要は無いと思ってくれていい。大体、反魔法主義に対する方策を今まで考えてこなかったのかと苦言を呈したい気分だ。まるで〝別の方向に力を割いていた〟としか思えん」
「悠元……」
魔法使いの家に生まれるという意味を知らないわけではない。魔法使いに限らず、古今東西の力を持つ家の宿命というものがどうしても付き纏うのは、人間の競争原理と欲目の結果から来るもの。その結果として起こり得た事象は歴史に刻まれている。
誰とてそれを教訓にしようとした。だが、要らぬ欲目を抱いた結果として悲惨な現実を突きつけられる。とある創作物の黒幕に相当するであろう人物が述べていた『自ら育てた闇に食われて人は滅ぶ』とは正にこのことだろう。
核兵器を自在に操ろうとした欲目の結果、世界の表舞台に魔法という未知の存在が技術として名を連ねた。無論、非魔法師が魔法師を怖がる理由も分からなくはない。だが、魔法師を完全に追放した先に待

つのは封を解き放たれた核兵器による終末戦争（アルマゲドン）の可能性。
エドワード・クラークのディオーネー計画は、この世界の終末までの時間を早める自殺行為でしかない。喫緊の未来を安寧に導けたとしても、数世代先の未来を何も見通していない。更に言えば、魔法師が完全に出て行って荒廃した地球を帰還した魔法師による支配が待ち受けるケースだって無きにしも非ずだ。
創作物の宿命と言えばそれまでかも知れないが、そんな世界など御免被る。ましてやこの世界に生まれ変わった以上はそんな世界など金輪際望まない。魔法の有無に拘わらず、この世界に住む人類が望むのは平和な未来のはずだ。
「俺自身が今まで歩んできた人生だって順風満帆なんて言えない。でも、誰かがやらなければ何も変わらない。だからこそ、俺は師族会議議長の座を引き受けた。達也が自らの夢の為に――『人』であり続けるために計画を進めるのならば、俺はその背中を押してやるだけだ。尤も、隣で歩いている部分があるのは否定しないが」
「……今更ながら、十代で抱えるような話ではないな」
「それは否定できん」
能力があるからこその義務。それが生じるのは無理からぬことだと理解するが、名誉や誇りの為だけに働くなど真っ平御免だ。それが自分の安寧に繋がるのならば躊躇うことなどしないが、そうでないならば誰かの為だけに人身御供などしたくない。
「自分で考え、出来ることを実行する。それが出来るだけの実質的な権力を有しながらも、技術の漏洩を恐れて何もしていない。そんな存在など、ただ踏ん反り返って偉ぶるだけの王と何が違うのか、と言ってやりたい」
「数多の技術を編み出した側の悠元が言うと重いな」
「それを達也（おまえ）が言うか」
これまで社会の根本的な構造に罅を入れるような技術提供は避けてきたが、[恒星炉]を世の中に出していくとなれば多少の漏洩も出てくる可能性がある。その為の技術開発や場所の確保も進めているが、問題はこれが表面化した後の諸外国の動きだろう。

原作ではＵＳＮＡと新ソ連が動いていたが、ここに欧州も一枚噛んでくることが予想される。とりわけイギリスが苦汁を味わったとはいえ［十三使徒］ウィリアム・マクロードがエドワード・クラークとの関係を断ち切っていない以上、何かしらのアクションを起こす可能性は高い。
「ともかく、来週末の会議だが四葉家はどうする？」
「そうだな……留守番にするとお前の苦労が重くなりそうだから、同行はさせる。ただ、会議には俺一人で出る」
「それがいいと思う」
会議中に下手な事を言って、深雪が魔法で会議室を凍結させかねない事態は避けた方がいいだろうという達也の思惑を読み取りつつ、出席の意向を聞いた悠元は軽く頷く。流石に前回の会議があのような形で終わったため、それを蒸し返す輩が出てこないとも限らない。
そんな度胸があるのならば一度はお目に掛かりたいものだが。

若手会議①

第二回の若手会議は第一回と異なり、護人二家および師族二十八家の３０の家の若手クラスが代表者として参加する。更に、今回は会議にこそ参加はさせないが、師族二十八家の当主全員にも招待状を出した。理由は様々だが、一番の理由は先日会談した九島烈の口から師族二十八家に対して明確な〝魔法界からの引退宣言〟を執り行ってもらうためだ。

原作では師族会議での十師族離脱から距離を置いてしまい、肝心の部分に関するフォローを怠った上で亡くなってしまった。結局のところ、十師族ひいては師族会議そのものの存在意義まで疑わざるを得ない状況に陥った。そもそもの話、師族会議議長を務めていた８０歳代まで駆り出されるとはさしもの烈本人ですら想定していなかっただろう。

今回は土曜日の夜に懇親会を行い、日曜日が会議本番という段取りを組んでいる。新ソ連の動向もあって一条家当主・一条剛毅は欠席するが、代理を出すという返事を受け取っているので、これに関してはベゾブラゾフの動向を鑑みれば止むを得ないだろう。

「会議というか、現状における日本魔法界の問題をきちんと認識できているか、ということに尽きる。具体性を話すためのものではなく、これから長くとも数十年は付き合うことになるかもしれない相手との交流がメインだ」

４月２８日、土曜日。学校の授業が終わり、各々の組織に引き継ぎをお願いした上で司波家にいったん戻り、私服姿にスーツケースを持参した上で東京駅から旅客鉄道で一路箱根に向かう。悠元が神楽坂家当主ということもあって一番上のグレードに乗ることとなり、これには達也が居心地悪そうにしていた。

達也とて四葉の悪名を理解できていない訳でもないし、ましてや現当主の真夜が自分の実母であり、更に四葉の次期当主となった以上はこういった待遇も配慮の一環だと理解はしている。だが、理解と納得は別の感情であるために、達也がどうにも言えないことが生じてい

た。
　これには深雪が笑みを零していたのは言うまでもない。
「とりわけ達也は四葉の次期当主を同年代の直系子女から推されている身。いつまでも逃げるわけにはいかないだろうからな」
「分かってはいる。正直、そうやって振舞えるお前には敵わんな」
「あー、俺の場合は〝通算の経験〟が多いからな」
　悠元が述べた言葉に〝前世の経験〟が含まれているのを達也と深雪は事情を知るが故に納得し、一方水波は首を傾げていた。その内水波にも事情は話すことになるが、それを聞いて水波が引き換えに『私を悠元様の所有物にしてください』と言われても困る。何分前例が存在している以上、タイミングは慎重に選ぶつもりでいた。
「魔法師の海外渡航に関する慣例はあるにせよ、俺は例外的に渡航することを認められている。実力面の保障をされているのはありがたいと思うが、大体爺さんのせいで片が付くのがどうにも……その爺さんは今祖母さんと二人で夫婦水入らずの海外旅行に行ったが」
「この時期にですか？」
「ま、生死の心配はしていないんだが。目的は外国の友人の墓参りと言っていた」
　剛三はもとより、奏姫の実力は千姫曰く『彼女が上泉家に嫁がなければ、当主の座は姉が継いでいた』と言わしめるほどらしい。天神魔法はもとより、天刃霊装を修得している様な様子も見られていたとのこと。でなければ、あの［夢想天成（むそうてんせい）］の構築式が説明できなくなるという矛盾が発生してしまうだろう。
　初めに南アメリカ連邦共和国へ向かい、大統領と面会した後にハンス＝ウルリッヒ・ルーデルの墓へ出向くらしい。何でも、剛三の祖父が第二次大戦中にルーデルと知り合った（武者修行中に旧ソ連からの脱出を共にし、当時のドイツの総統とも会話したらしい）ことから埋葬された場所も知っているのだそうだ。その後、アフリカと欧州を経由してＵＳＮＡに行き、日本に戻ってくる予定だと元継から聞いた。
「今の気持ちとしては、反魔法主義者をお星さまにしてしまう爺さんに喧嘩を売るような愚か者がいないことを祈りたい。俺との旅行で

も、全世界換算で約２０万の人員やら数多の軍事兵器が吹き飛んだからな」
　剛三が大漢への復讐で打ち立てた膨大な損害に比べればまだマシという感覚がおかしいのは否定しないが、それでも近年のご時世で万単位の損害は決して少なくない。それだけのことをしてるからこそ恨みも買っているわけだが、それを補って余りある信頼を得ているのは彼の人徳所以だと思う。
「その片棒を若くして担いでいるお前も大概だと思うが」
「否定はしない」
　アラブ同盟の国内では反体制派に誘拐されかけたので、ボコしたら国家元首から勲章を贈られ、本来なら王族にしか許されない待遇で扱うことを約束された。インド・ペルシア連邦を訪れた時は反魔法主義のテロに遭遇して、犯人や背後にいた組織まで芋蔓式に検挙（正確には魔法で物理的に警察や軍の前に飛ばした）。
　この辺を自分がやったのは、剛三がニューヨークで反魔法主義者をお星さまにしてしまったのが原因でもあったりする。被疑者が〝大気圏外に出て行って行方不明〟という実質死亡の証明を治安維持機関の関係者が出来なくなるのはマズいと判断してのものだ。
　この辺の経験を父親の元に話したら、『それは「クリムゾン・プリンス」すら超えてしまう所業ではないか……話せる訳がないな』と頭を抱えていた。そのお詫びにプレゼントしたグラスは、一昨年の臨時師族会議の呼び出しの際に粉砕されてしまったので、その代わりとなるものを調達して改めてプレゼントしている。
「ま、今日はこないだのように喧嘩腰になる必要もないと思う。互いの親睦を深める目的で喧嘩腰になるような輩はいないと思うが」
　そう思いたいわけだが、思えない理由もある。つかさの一件の後に改めて若手会議の詳細を調べたところ、テロ事件のことで七草家と九島家が揉めたそうだ。理由は顧傑の拘束に関する詳細の情報を九島家は受けていない、という九島家長男の問いかけによるもの。
　そもそもの話、顧傑と周公瑾が師弟関係にあることは昨春の時点で当主クラスに開示されており、九島家の現当主が失態を犯したことで

周公瑾が死ぬ羽目となり、顧傑が日本に出張るという原因にも繋がっている。その原因を作った両者が言い争った時点で『責任のなすりつけ』としか思えなくなった。

得意げに話す智一の振る舞いも問題だが、諍いを率先して咎めなかった克人にも問題があると思う……将来の姉婿に対してあまり苛めるのもよくはないだろうが、これも十師族当主としての〝通過儀礼〟だと思ってほしい所だ。

旅客列車で箱根に到着した一行はリムジンによる送迎を受ける。しかも、その場に運転手として赴いたのは支倉佐武郎であった。彼は先日の沖縄での一件で忠誠心をテストされ、千姫から悠元の専属執事として働くことが決まった。

今回の出迎えもその一環のようだ。

「お疲れ様です、若様。論文コンペのパーティー以来になりますが、司波達也様それに深雪様。この度運転手を務めます支倉と申します」

「ご苦労様です、支倉さん。では荷物をお願いします」

「畏まりました」

周公瑾の肉体を得たことで若返った形となり、力仕事も楽々こなせるようになった。ちなみに、千姫から頻りに縁談を勧められているため、同じ立場の使用人からは同情されることが多いらしい。

リムジンの後部座席に水波と悠元、達也と深雪が向かい合う様な形で座った。悠元の隣に座りたそうな深雪の要望を勘案してのもので、水波の気持ちを深雪が汲んだ結果としてそんな席順になった。

そうして車を走らせること10分、目的地である高級リゾートに到着。見た目は古き良き和風をベースとしながらも洋風の要素も取り入れた和洋折衷の趣をしている。ここの宿泊料金で一番下のクラスでも一泊5万円を下らないというのにリピーターも絶えないところを見ると、政財界も配慮せねばならない家の凄さを改めて感じる。

荷物は魔法に関する教育を受けた従業員が受け持ち、そのまま客室に運んでくれる手筈となった。チェックインを済ませて客室に向かおうとしたところで、悠元を呼ぶ声が聞こえた。

「あ、悠元兄様！」

「え？　って、茜ちゃん!?」
　そこにいたのは、私服姿だが紛れもなく一条家長女・一条茜であった。茜は悠元の姿を見て駆け寄り、抱き着いてきた。彼女が一人でいるとは考えづらいと思ったので、その視線の先に将輝がいたことで大体の事情を察した。
　なお、茜が抱き着いたことで深雪の笑顔に凄味が増していることにも当然気付いている。
「気持ちは受け取るけど離れてくれ。これだと話が出来ないからな」
「あっ……ご、ごめんなさい。２ヶ月ぶりだから嬉しくて、兄様の匂いを満喫していました」
「……俺、そんなにいい匂いがするのか？」
　逆に汗臭いのでは、と思って嗅いで見るも、特にそう言ったものは感じなかった。一方、茜の発言を聞いた深雪が『すごく分かるわ』と言いたげな表情を見せたことに、達也が何とも言えないような表情を垣間見せていた。
　そんな状況を知ってか知らずか、将輝が近付いてきた。とは言っても茜がいる手前で深雪に真っ先に話しかける訳には行かず、茜を注意するような口ぶりを見せる。
「茜、いきなり走り出すな。今回は親父の代理で来てるんだからな……すまない、神楽坂。うちの妹が迷惑を掛けた」
「気にするな。久しぶりだな、一条。会議で顔を合わせているが、お前の親父さんが全快して何よりだ」
「あ、ああ……えと、久しぶりですね、司波さん」
「はい。お久しぶりです」
　悠元に対しては立場故に、深雪に対しては恋慕ゆえに。その様子を見た達也と茜が『何やっているんだか……』と心なしか将輝に対する気持ちでシンクロし、水波は苦笑を滲ませていた。それに気付いたのは茜の方で、達也に小声で話しかけた。
「あの、司波さん。うちの兄が本当に申し訳ありません」
「名字だと深雪と被るから達也で構わない。一条の様子は気付いているが、正直深雪を振り向かせるには〝遅い〟のだと気付いてほしくは

ある」
「……あー、成程。何分女心を理解できない馬鹿兄ですから」
司波達也と一条茜。本来ならあまり交わることのなかった二人が将輝という悩みごとを通して仲良くなるという有様に、双方共に苦笑してしまった。それに、今後は悠元を介する形で顔を合わせることになる為、茜としても彼の妻となる人物の兄とは仲良くしたいという思いがあった。
「今後は悠元兄様の妻となる身ですので、達也さんとは良き友人関係を築きたいと思っています」
「そうか……お互いに苦労する身として、頑張ろう」
「そうですね」
苦労する方向性が若干違うのは否めないが、それでも将輝という存在を通して苦労するという共通点で互いに友人関係を築くというのは、変わっていると言われても否定は出来ない事実であった。
言うまでもないが、将輝たちと別れた後、深雪はずっと悠元の腕にしがみ付くような感じで腕を絡ませていたのだった。
すると、悠元はその様子を見て声を掛けようか戸惑っている少年に気付いて、こちらから声を掛けた。
「七宝」
「あ、神楽坂先輩に司波先輩たちも」
見るからに琢磨は一人であった。話を聞くと、父親の七宝拓巳はこの後来るという連絡を受けており、どう時間を潰そうかと悩んでいたところであった。
昨年の諍いについて達也は『今更だな』という感じで琢磨の暴言をスルーしていた。何せ、行きつく先に自身が殺されるか隔離されるかを味わっているし、特異魔法である［分解］と［再成］が明かせない以上は深雪に劣ってしまうのも事実であった。
なので、達也としては敵意や悪意を感じる相手ではなく、寧ろ小和村真紀の件もあって同情を送りたい相手へと変化していた。尚、琢磨はその様子に全く気付いておらず、時折メディア関連で真紀から相談される際、『押し倒して既成事実を作りたい』という感情が文面から滲

み出ていた（アドレスは神坂グループの仕事用のものを使っている）。
七草家のことが無ければ真っ当な実力を出せるし、次の七宝家当主としても頑張って欲しい所だ。父親が『厳しく扱いて、十師族の一角を担えるだけの大人に仕上げます』と公言しているだけに、命が繋がってほしいと切実に思う。
すると、更に姿を見せたのは香澄と泉美、真由美の三人であった。
「あ、七宝もここにいたんだ」
「悪かったな。何分知り合いがいないんだから」
「いや、別に喧嘩を売る気はないんだけど」
昨春の一件があっただけでなく、三姉妹のうち真由美と泉美は既に別の家の養女となっている為、未だ七草の名字を名乗っている香澄としては肩身が狭い思いをしていた。そんな気苦労を知ったため、琢磨も以前のように突っかかることは無くなっていた。
「直接会うのはテロ事件以来ですか。お久しぶりです、真由美さん」
「そうね……別に呼び捨てでもいいのに」
「誰かが聞いて調子に乗らないとも限りませんので」
悠元の述べた〝誰か〟に心当たりがあったのか、真由美は盛大に溜息を漏らした。ここには琢磨を除けば真由美が本性を漏らしても問題ない面子しかいないわけだが、これには深雪も苦笑を滲ませていた。
「ごめんなさい、達也君に深雪さん。既に家を出た身とはいえ、家の血縁上の兄が余計なことを言ってしまって」
「お気になさらず。そもそも会議の雰囲気を壊した自分にも責がある問題ですので」
「ううん、あの場は達也君が強く言ったとしても許されたと思うわ。深雪さんだけに魔法界の未来を背負わせるような行為を口にした方が愚かよ」
家を出てからというものの、元実家に対する悪口を容赦なく言い放つという点で真由美が救われたのかもしれない……と、泉美は思いつつも深雪がしがみ付いている方とは反対側の腕にしがみついた。
「あー、兄様の匂い……」

「俺はアレか？　香木の一種だと思われてるのか？」
「香りだけでなくご利益もありそうよね、悠君の場合は」
「……」
なお、ご利益と災難が同時に降り掛かってくるという等価交換をこれまで味わっているだけに、正直褒められている気がしないと悠元は率直にそう感じたのであった。

若手会議②

人が集まれば自ずと会話に花が咲くのは止むからぬこと。悠元がようやく解放されたところに姿を見せたのは、一色家の代表として来ていた愛梨であった。傍にはゲッソリとした表情の沓子と涼し気な表情を見せる栞の姿があった。

「悠元さん、大人気のご様子ですね」

「人気所以なら別にいいんだが……で、沓子は何故に疲れ切っているんだ？」

「ああ、栞が弄り倒しただけのことです」

「それなら俺が関与できる話じゃないな」

大方、沓子の更に成長した胸部を妬んで弄り倒したという予想がついたため、悠元はその話題に触れることを避けた。その上で、愛梨も話題を変えるように声を発した。

「そういえば、先程一条の兄妹とお会いしました……あの色惚けはどうにかならないのでしょうか？」

「俺にそれが出来たら、今頃世界を掌握出来ている」

一色家は一条家現当主の妻である美登里が一色家の傍系の為、将輝と愛梨は遠い親戚関係でもある。その愛梨が将輝をそう酷評したことに、その対象である深雪ですら苦笑を零していた。

「悠元が言うと洒落にすらならないのじゃが」

「言ってみただけで、やる気などないけどな。余計な妬みなんて買いたくもない」

正直、将輝の気持ちを汲んだ上で東京まで出張ってこさせたというのに、肝心の本人が諦めていない始末。最後の手段として本気で心を折ることも辞さないつもりだが、本来は一条家当主がしっかりと説教すれば早い話で済むだろう。

「……相変わらず、名誉とか栄光に見向きもしないんだね」

「腹の足しにならんものなんて、生きていくだけなら無用の長物だ。尤も、その栄光に縛られてる奴が多すぎる」

その辺のプライドに関する部分が暴発しそうな兆候といえば、今年

の九校戦に関する噂だろう。そもそも、一昨年は［無頭竜］の介入を許し、昨年は九島家の圧力を受けた。この辺を鑑みれば、一度ゼロベースで九校戦の組織委員会を見直すべきだと思う。
「何かあると？」
「最近ネット界隈でよく見る九校戦に関する噂だ。委員会の運営体制もそうだが、世界情勢を鑑みれば今年は中止になることも考えられるだろう」
　九校戦の運営委員会は、主に日本魔法協会と国防軍、そして魔法科高校の経営母体である国立魔法大学の三者によってメンバーが選定される。当然、三者三様の思惑によって成り立っている為、利害関係を洗い出すだけでも複雑怪奇なのは避けられない。
　しかも、ここ最近の不祥事を解決したのは主に四葉家と神楽坂家の関係者。普通ならば、二つの家に詫びどころか焼き土下座しなければならないレベルの問題だというのに、原作の彼らは達也のみならず四葉家に喧嘩を売った。その時点で愚かの極みだろう。
「ここで問題があるとすれば、不満の槍玉に挙げられる可能性が最も高くなるのは達也という点だな」
「お兄様が……別に選手として活躍したわけでもありませんのに」
「そこなんだよな。確かにエンジニアは選手と違って複数の種目に関与出来るが、選手以上にハードだということが理解できていない奴が多すぎる」
　技術スタッフにおける〝不敗神話〟は確かに達也のお膳立ての部分が大きいが、与えられた魔法と戦術をしっかり実行して実績を出したのは選手の実力によるもの。大体、技術スタッフを経験していない人間が実績を妬む気持ちは理解できなくもないが、その悔しさを相手への誹謗中傷に注いでいる時点で程度が知れてしまう。
　一応［インデックス］に登録されている［アクティブ・エアー・マイン］についてはかなり細工を施している。更に、開発者名については『提供元：トーラス・シルバー』と表記している。
　今年の正月、達也が四葉の関係者ということを公表したため、国立魔法大学側が『仮登録のままでは体裁が悪い』という泣き落としに近

い有様だった。達也はその話を受ける前に悠元へ相談し、神楽坂家当主の初めての仕事として魔法大学側との折衝に臨んだ。
『体裁が悪い？　そんなのはあんたがたの都合に過ぎない。第一、軍事転用が可能な魔法を掲載する以上、アンタたちにも相応の責任を負っていただく。それが体裁を整えるということだろうと思うが、如何か？』
　優遇しろ、とは一切口にしない。だが、正式登録されることによってこの魔法が悪用された際の説明責任を国立魔法大学が全面的に負うべき、と明言した。その折衝が何回か続き、結局［トーラス・シルバー］の名を提供元として使うことで決着した。
　ここで問題となるのはトーラス・シルバーの正体が明るみになるリスクだが、達也の戸籍上の父親はＦＬＴの重役だし、達也も彼の息子としてＦＬＴに出向くことが多い。達也が良く通うＣＡＤ開発第三課は、〝社内の島流し〟という部署の特性もあって達也の秘密を外に漏らさないように隠してくれている。
［トライデント］に関するＦＬＴのテスター契約も書面として残している為、達也はＦＬＴで働く父親の息子という肩書だけでなく、［トーラス・シルバー］プロジェクトチームから委託されたテスターとして働いている魔法師の側面も併せ持っている。研究者としての側面は一切オンライン上に存在しない扱いだ。
　四葉の悪名を利用するのはあまり宜しくないが、トーラス・シルバーを詮索しようとしたら神楽坂家にまで喧嘩を売る行為であると魔法大学側も理解したようであり、こちらの要求を全て？んだ。
　閑話休題。
「万が一、九校戦が中止になって達也に対する個人攻撃をするような輩がいた場合、部活連会頭としても師族会議議長としても看過する気はない。文句が言いたければ相手になってやるが、感情的な理由だけで相手を攻撃するというのならば一切妥協しない。そんな気持ちで魔法師なんて目指してほしくないからな」
「容赦ないですね、悠元兄様」
「一時の不満も律することが出来ない奴が魔法師としてやっていける

訳がない」
　不満のはけ口を分かりやすい原因にぶつける、というのは古今問わずに起こり得るもの。魔法一つで原因になるというのならば、それこそ大本の原因を作った旧合衆国を引き継いだＵＳＮＡに責任の所在がある、という飛躍した論理になりかねない。
　そんな論理を表に出されないために、原作のＵＳＮＡ連邦政府はエドワード・クラークの提唱した［ディオーネー計画］を黙認した可能性が極めて高いのだろう。
「俺だって全て律せているという訳じゃない。それでも、一般常識や法理を逸脱しない程度に弁えてはいるつもりだ。それでも、必要以上に煽り立てて話を大きくする輩が一定数居るのは問題だが……内にも外にも」
「悠元……」
　自分より力が無いからと言って、強弁を揮ったりしないことは誰しもが理解している。それは部活連会頭よりも以前の生徒会役員の時も同様だった。学外のことについても、自分を害するような輩が出ない限りは基本放置していた部分があるのは否定しない。
　メディアに対する抑止を行ったのは、将来的に増長するであろう連中に釘を刺しておく意味合いも含んでいた。魔法師が集まって国が出来るのならば、核抑止の為に存在する魔法協会が槍玉に挙げられる案件だ。
「ともかく、九校戦が中止になった際の対応は話し合うべきだろうが、裏方仕事を好き好んでやりたがるもの好きがいればの話だ。言い方は悪いが、そんな気質を持つ奴が少なすぎる」
　優れた魔法師ほど容姿も優れるという事象は、時として容姿にプライドを有することで地味な仕事を引き受けたがらなくなる。達也も真っ当に見れば優れた容姿だが、深雪という比較対象がいるが故に〝地味〟と自己評価しても別段おかしくはない。悠元の場合、容姿云々よりも自己に対する生存意欲を優先した結果として裏方の仕事を引き受けていることが多いため、容姿に関しては深く考えることは無かった。

そんなに目立ちたいのならば芸能界なりエンターテイメント分野で活躍できるように努力すればいいだけなのに、魔法という存在に甘えて自己を磨くという意欲が些か希薄に見える。十師族や師補十八家の人間が努力していないとは言えないが、それこそ〝死に物狂い〟といえるような努力なんて殆どの人間がしていないだろう。

「達也さんが槍玉に挙げられるのなら、それこそ一条や吉祥寺、それに私も非難されそうな気はいたしますが」

「普通はな」

原作の達也が非難される原因に至ったのはアフリカの一件で［アクティブ・エアー・マイン］が使用されたことによるものだが、これも正直疑問が尽きない。大亜連合が戦略級魔法［霹靂塔］を使用したことに対する報復行動だとしても、報復が行われた場所は同じアフリカではなく中央アジアにある大亜連合軍基地に対してのもの。仮に無人兵器の支援を行っていたフランスの手引きだとしても、それだったら旧ＥＵ諸国間で共有されている戦略級魔法［オゾンサークル］を使用すれば済む話だ。

更に付け加えれば、同じ旧ＥＵであってもイギリスとフランスは決して仲が良い状態を保ってきたわけではない。イギリスの面子を潰す意味で［オゾンサークル］を使用する理由はあっても、日本で開発された［アクティブ・エアー・マイン］を態々選ぶ理由がない。この時点で、フランスが［アクティブ・エアー・マイン］を提供した黒幕ではないと判断できる。

昨今の情勢で各国が緊張している中、一介のテロ組織に近い武装勢力がたった一日のタイムラグで約７０００キロメートル前後も離れた大亜連合軍の基地襲撃を成功させたという神風に近い所業を武装勢力単独で成し得たとは到底考えにくい。どう考えても極超音速ジェット機といった最新鋭の飛行機を有している国が密かに援助したとみるのが妥当だ。

そのクラスの飛行機を有している国となると専ら先進国あるいは大国が対象となり、可能性が最も高いのはイギリスもしくはＵＳＮＡが該当する。日本もそのクラスの旅客機を有しているが、いくら水面

下で大亜連合と敵対している状態だとしても一介の武装組織にリスクを負う必要がない。
　一番可能性が高いのは、エドワード・クラークが［アクティブ・エアー・マイン］の起動式を［フリズスキャルヴ］で入手し、そのデータをウィリアム・マクロードに流した挙句、西ＥＵの繋がりでフランスに提供したとみるのが一番現実性の高いものとなる。その可能性が潰えていないからこそ、悠元は開発者名に達也ではなくトーラス・シルバーの名を用いるよう交渉した。
「魔法に携わるということは、全て順風満帆に行くわけじゃない。寧ろ逆風に耐えながら乗り越えていかなきゃいけない。それが独力で分かっていれば楽観視など出来ない筈だが……まあ、そんな心情もあって一高の二科生組を鍛えているから、次の学期末では確実に波乱が起きるな」
「鬼じゃな。寧ろ悪魔ですら可愛く見えて来るぞ」
「学べる環境にあるのにエリートぶって怠けるぐらいなら、別の学校に編入して別の道を進んだ方がまだ利口だと割り切らせるためにも荒療治は必要だ」
　生徒会役員や風紀委員をしていた姉達のように直接力を振るったりはしていない。二科生へのテコ入れも、折角の縁を利用して学力的および魔法的にも教育スピードが遅くなる二科生を補助しているだけに過ぎない。これで危機感を抱かずに陰口ばかり叩く様ならば、魔法師としてあるべき精神の欠如だと言う他ない。
　結構真面目な話をし過ぎたな、ということで愛梨たちと別れた後、そのまま宿泊する部屋に移動した。悠元は神楽坂家当主ということで最上階のロイヤルスイートに深雪や水波と一緒に通された。そして、そこには先客がいた。
「あ、悠兄！」
「お兄ちゃんに深雪さん、水波さんも」
　先日十神（とおかみ）の名字となった茉莉花と、その付き添いとして来ていたアリサであった。二人は茉莉花の両親と一緒に来ていたが、彼らは千姫に『相談したいことがある』ということで連れていかれ、更には千姫

の手筈でこの部屋に通されたとのこと。
「……夜が大変なことになりそうだ。てなわけで、少し仮眠するから誰か起こしてくれ」
「あ、私も寝る！」
「あらあら……水波ちゃんも同伴決定ですからね」
「深雪様?!」
結局、悠元がベッドに倒れ込んだのを皮切りとして、茉莉花とアリサ、深雪と水波も一緒に寝る形となった。流石にパーティーもあるので一線は超えていないとだけ明記しておく。

◇　◇　◇

悠元が諦めたように部屋で仮眠することを選択した頃、悠元の現在の母である神楽坂家先代当主・神楽坂千姫は自室に九島家先代当主・九島烈を招いて会談していた。
「久しぶりじゃな、烈。こうして顔を合わせるのは一昨年振りか」
「……そうだな、千姫」
かつて世界群発戦争で超法規的国際魔法師部隊の一員として共に肩を並べて戦った者同士。戦争が一応の終結を迎えてから３０年余りが経過し、互いに高齢と呼べる年齢に達していた。
九島家と神楽坂家――――正確には九条家と安倍・賀茂氏の関わりに端を発したものだが、九島健の国外亡命に加え、『九』の家による古式魔法師の軍事利用によって決定的な亀裂が生じた。それでも上泉家の仲裁によって互いに関せずを貫いてきた両者の関係者がこうして会うことは珍しいとも言える。
「九島の家は暫く落ち目となるじゃろう。事の全ては其方が要らぬ欲を掻いたせいよ……息子には其方の孫に九島を名乗らせて本家を交代させることも考えておる」
「そうか」
烈からすれば、千姫の息子となった悠元に多大な恩を抱えており、更には慣例的に自分の息子が継いでいた師族会議議長を正式に継いだ。今日の懇親会では改めて悠元に師族会議議長の任を任せると公言するつもりであった。

九島家がどうあっても限界を迎えることは烈自身が良く理解していた。息子や孫の殆どが自身の力を継がなかったのは、烈が手に入れた後天的な強化が遺伝に影響を及ぼさないという証左でもあった。
「反論せぬのか？」
「出来るわけが無かろう。光宣の問題を解決してくれたのはお前の息子となった彼だ。ゆくゆくは『あの方々』となるであろうことも読んでおる」
「少し惜しいの、烈。今回の会議を終えた後に悠元は四大老の座へと就く。まあ、魔法界を引退するお主には関係のない話となるがの」
「ああ、その通りだな」
三矢の三男が独学と剛三の手解きで力を磨き、この国において無くてはならぬ存在へと昇格する。無論、彼がここまで掛けてきた苦労を考えれば、妥当なものであると烈はそう感じていた。
すると、ここで千姫は笑みを浮かべて尋ねる。
「悔しいですか、烈兄さん。でも、先に目を付けたのは私の姉ですから、文句は言わせませんよ」
「……懐かしいな、その呼び名も」
千姫と烈はかつて同じ魔法師の下で競い合い、兄妹のような間柄として仲を深めた。家が異なっても、対立関係を必要以上に深めなかったのはこの縁が根底に存在していたからで、千姫は既に幼い頃から婚約者がいたため、烈と恋仲になることは無かった。
「あの子は三矢を変え、義兄と四葉を救った。だからこそ、私は神楽坂の未来をあの子に託したいと思ったまで。ちょっとズルをしたのは否定しませんよ」
「いや……それも魔法師としての才能だろう」
茶目っ気を見せる千姫に対し、烈の脳裏にはかつて学んだ魔法の師匠の言葉が思い浮かんだ。
『魔法師の実力は、単に魔法の規模や強度だけで個々の強さが決まるものではない。小さな魔法といえど、使い方さえ工夫すれば如何なる大魔法にも勝る。烈、このことを努々忘れないことだ』
それは、一昨年の九校戦懇親会で烈が魔法科高校の生徒に向けて発

した言葉でもあった。その言葉を思い返した時、これまで自分がしてきたことはこの教えに反することばかりであった、と今更ながらに思っていた。
「結局は、私自身の我が侭で振り回したと言うべきなのだろう……老い先短い身であるが、役目は果たそう。この国の未来の為にも」
「ええ、私たちが出張るのはもう止めにするべきでしょう。だからこそ、義兄も心置きなく海外旅行に行きましたから」
もうじき22世紀を迎える以上、元老院も代替わりの時期に来ている。いや、この国そのものがいい加減大戦後の思想から完全に脱却すべき時に来ている。その意味で、未来を担う世代に水を濁すことなく立場を継がせる。烈も、千姫も、その点では一致していた。
「……ないとは思うが、剛三と奏姫が国を興して帰ってきてもおかしくないだろうな」
「……有り得なくもない、のが義兄と姉さんですから」
流石にそんな事態にはならないと思うが、南アメリカ連邦共和国の前例がある以上は何とも言えない……と、烈の言葉に対して千姫は苦笑を浮かべつつ扇子で口元を隠したのだった。

縋るのならば、己の無力を証明したも同然

若手会議の懇親会――――表向きは『神坂グループの交流会』と銘打っている宴会場には、スーツ姿やドレス姿の関係者が多く揃っていた。そして、今回の懇親会には当然四葉家の代表も来ているわけだが、その代表には悠元のみならず達也や深雪ですら面食らっていた。

「……母さんが何故ここに？」

「あら、流石達也ね。本当は真夜も来たがっていたけれど、『やらなきゃいけないことが増えた』とか言って私に役目を押し付けたのよ。真夜も人使いが荒いんだから」

妹の無茶ぶりに少し拗ねた振りをしているものの、姉妹の仲が回復したことで多少の我儘ぐらいは許してやろう、という印象しか受けない。とはいえ、まさかの深夜が四葉家当主代理という有様だが、これには真夜の気遣いもあると深夜が説明する。

「あの子は閣下から直接言葉を貰ったけど、私はまだ貰っていない。父を死なせたことは許せないけれど、あの子が許していて私が許さなかったら、それこそ父が墓の下から蘇ってきて説教しかねないもの」

身内と言えど流石に故人を叩き起こすのは忍びない、という深夜の言葉に、流石の達也も苦笑が漏れていた。すると、四葉家と神楽坂家の一行に近付いてきたのは六塚家当主・六塚温子とその弟で次期当主の燈也であった。

「これは四葉殿。いえ、この場合は深夜殿とお呼びすべきでしょうか」

「あら、六塚殿。妹から話は聞いておりますが、よく一目で見抜きましたね」

「そこは物好きの賜物ということで一つ」

温子が真夜に憧れている一人と聞いているだけに、直に深夜だと見抜いた温子の慧眼を褒めると、温子は真夜に憧れている故に気付いただけ、と丁重に返した。二人が話す間に燈也は達也らに声を掛けた。

「学校で会っているので久しぶりという感覚ではないのですが。この場合は神楽坂殿と四葉殿、と呼ぶべきでしょうか」

「やめてくれ、燈也」

「そうだな。悠元はともかく、俺はまだ四葉の姓を名乗って無いからな」
一年次は悠元と同じクラス、二・三年次は魔工学科で達也と同じクラスの為、結構学校で会っているだけでなく、レオとの繋がりで山岳部のフィールドを使わせてもらっている為、十師族直系の中では割と顔を合わせている燈也の冗談に悠元と達也が相次いで反応した。
「分かりました。それで悠元、今回の会議は前回の続きという訳ではありませんよね？」
「話を聞いた状態を続けても生産性が皆無だろう、と少なくともそう思っている」
一度拗れた話を掘り返しても、何も解決には至らない。それぐらいの常識など誰もが理解している筈だ。それが理解できないようならば馬鹿でしかない。そうなってしまったら、つける薬などないので諦めるしかなくなる。
「過激な反魔法主義者の取り締まりもそうだが、積極的に行動していれば防げたものに対して消極的な対応を取る方が相手を助長させる。過激な対応を取るのも問題だが、何もしないのも相手をつけ上がらせるだけだからな」
魔法という見えない力を持つが故に、強引な正当防衛を非魔法師が主張するかもしれないが、そもそも魔法の如何に関わらず感情的な理由で先に暴力を振るった時点で、加害者側に問題があるという認識を司法がきちんと認識すべきはずなのに、政府も司法機関も非魔法師の暴徒化を恐れて何もしてこなかった。
「魔法師が一般社会で共存していくためにも、軍事に一辺倒な思考そのものを改革すべき時に来ている。尤も、魔法師を一般社会で役立てる受け皿は広いのに、魔法師を育成する機関が少なすぎる上に、魔法技術教育自体も未熟」
人口に対する魔法資質保有者の数を考えれば、他の大国と比較して日本は受け皿が狭すぎる。だからこそ、魔法科高校に入学できた人間がエリート扱いされ、入れなかった人間の一部が犯罪者と化したり、あるいは騙されて人体実験の憂き目に遭うケースが起こっている。

これらは別に日本に限った話ではないが、特にこの国は周囲に敵が多い。国土と国民の生命を守る為にも、強大な抑止力は極めて重要となる。その為に複数の戦略級魔法を有することは必要な事であり、パワーバランス云々を唱えるＵＳＮＡや新ソ連がどうこう言おうとも知った事ではない。
「何もかもが足りないからこそ、次世代に繋がるような施策が必要なんだ。尤も、その辺に危機感を持っていない奴が多すぎるのが一番の問題だし、それを俺が考えていることに関して、暢気に社会人している連中を一発ずつ殴りたいぐらいだ」
「……悠元、ストレスが溜まってます？」
「否定は出来ん」
ＵＳＮＡは旧合衆国時代に日本の力を削ぎ落した実績があり、新ソ連は旧時代に条約を平然と破って侵略した過去がある。正直、過去に遡及して請求してもいいのならば、ＵＳＮＡと新ソ連に第二次大戦時に失った領土の返還や莫大な賠償金の支払いを請求したい気分だ。それこそ、第一次大戦にドイツが負った賠償金など比較にならないほどの大金を。
すると、会場のステージ上に一人の男性――――九島烈が姿を見せたことにより、会話は中断されることとなった。それは悠元たちに限らず、他の参加者たちも同様であった。そして、烈は用意されたマイクの前に立つと、静かに語り始めた。
「まずは、皆が歓談中のところを遮ってしまう様な形になったことを謝罪しよう。ここにいる師族二十八家および護人二家の当主並びに名代、そして次代を担う若者たちに私は話さなければならないことがある」
これまで日本魔法界を牽引してきた魔法師の言葉。誰もが会話を続けることもなく、烈の続きの言葉を待った。これには烈自身が苦笑に近い笑みを漏らした上で話し始める。
「もうじき私は９０歳の大台を迎える。これまでは師族会議議長として、そして日本魔法界の『老師』として見守ってきたが……けじめをつけるべき時が来た、と私は決意した」

その背景にあるのは、孫を救う代わりに提示された神楽坂家現当主との約定。烈は視線を悠元に向けると、それに気付いた悠元は目礼を返した。
「当主やそれに近い立場ならば聞き及んでいると思われるが、私の後継者――――師族会議議長は神楽坂家現当主・神楽坂悠元が引き受けてくれた。未だ十代の身ながら、『九』の家と因縁を有していた古式魔法師と和解したことは、私にとって一番頭が上がらない実績となった」
それが［伝統派］との和解だということは当事者に近い立場ならばすぐに理解できることであり、九島・九頭見・九鬼の関係者が驚きを露わにしていた。それを視界に捕らえつつも烈は話し続ける。
「最早、老兵は去り行くのみ……私は本日を以て、日本魔法界からの完全引退をここに宣言する。なお、国防軍の顧問職は体が動く限り続けるつもりだ」
烈が国防軍との関係を切らないように要請したのは悠元であり、念頭にあったのは烈の強烈なシンパに対する抑止力として働いてもらうためだ。ただし、主な仕事はリーナとセリアに九島の魔法を教える教師役となる。
そんな事情はともかくとして、烈が引退するということに当主サイドはあまり驚きを見せなかったが、次期当主や直系子女の世代は驚きを隠せなかった関係者も少なくなかった。当主から全ての事情を知らされるわけではないため、多大な功績を有する烈に何があったのかと邪推する者も見られた。
「騒がしいですね」
「まあ、特に『九』の家からすれば動揺ものだろう。ここから這い上がれるかは本人たち次第だが」
「手厳しいな、悠元は」
これまで九島烈にしがみつき続けたツケがここになって出てきた……端的に述べると、遅かれ早かれ来ていたであろう時期が今来ただけにすぎない。誰だって予想できたはずの未来に目を瞑って見ない振りをしてきた以上は各々の責任問題でしかない。
関係者である響子曰く『お祖父様はいい御年ですから、大人しく老

後を過ごしても誰も咎めないと思うのでしょうけれど……『九』の家だけでなく九島の伯父や従弟の怠慢もあるのでしょうね』と九島本家のことを辛辣に語っていた。
　すると、同じ九島家の関係者である光宣がこっそり近付いてきた。
「悠元さん」
「光宣か。とばっちりを受けたくなくて逃げてきた感じか？」
「お恥ずかしながら……僕はもう本家に未練はありませんので」
　前回の参加者でもある光宣は既に九島の家の関係者ではない。だが、血縁関係が残っている以上は光宣を頼みの綱にしようと目論んだとしても可笑しくはない。事実、未だに九島本家から手紙が届くことがあり、響子や烈に相談した上で対処しているとのこと。
「ま、別に構わないが。俺も九島家とは因縁持ちだから、その時の非礼を詫びない限りは気遣う理由もないと思ってる」
「……悠元が因縁を抱えるほどって、何かあったんですか？」
「実は、家の兄や姉たちが悠元さんを見下した態度を取っておりましたので」
「成程な。深雪、間違っても会場で凍らせるような真似は止めてくれ」
「お兄様、いくら私でも節操なしに相手を凍らせるほど人でなしではありませんよ」
　ただでさえ名誉や栄光を笠に着るような行為を嫌う悠元に、その行動は明らかに〝燃え盛る火の中に核兵器を放り込む〟行為でしかない。燈也の問いかけ、そして光宣の回答に納得した達也は深雪を嗜めると、深雪は頬を軽く膨らませて悠元の腕を掴んでいた。
　そして、烈が宣言を終えてステージを去っていくのを皮切りに、会場にいる関係者の温かい拍手が烈に対して送られたのだった。
◇　◇　◇
　九島烈の正式な引退宣言はあったものの、懇親会自体は特に気まずくなるような雰囲気もなく終わった。その夜に婚約者たちに押し掛けられるという事態は起きたが、今更だな……と諦めた。
　いくら『妻が一人で足りない』と明言されていたとしても、この辺は前世の一夫一妻制度が脳裏に刻まれているせいか、どうにも納得で

きない部分があったのは事実だ。だからと言って無碍にすることなども出来ず、結局は渋々受け入れたわけだが。

懇親会の翌日の会議当日。会議室に用意されたのは正方形上に置かれた長机と椅子で、一辺に七人ないし八人が座れるようになっている。丁度扉側とその対面となる窓側が八人となる。今回の会議の主催側となる為、悠元は奥側の中央付近の席に座り、達也はその隣に座った。

悠元と達也は互いにスーツ姿だが、達也の方は真新しいスーツを身に着けていた。そのスーツは先日誕生日プレゼントとして真夜がオーダーメイド物をプレゼントしており、映像電話（ヴィジホン）経由で達也のスーツ姿をせがんだ上に深雪や水波に写真を送って欲しいと頼み込んでいた。

実の息子に対する溺愛と考えれば仕方のないことだが、着せ替え人形同然となっていた達也の表情が何とも言えない様相を浮かべていた。

そんな二人の近く――――達也の隣に座ったのは、燈也であった。

「おはようございます、二人とも」

「おはよう、燈也」

「ああ、おはよう」

燈也を皮切りに、次々と入ってくる参加者たち。すると、その中に茉莉花を案内する形で元継が姿を見せた。元継はスーツ姿だが、茉莉花は中学校の制服を着ていた。今回の参加者では最年少となるため、直に用意できるものとなればそれぐらいとなるのは致し方のないことだった。

悠元が達也と先に出たのは、女性の身支度に時間が掛かるというものを勘案してのことであった。

「おはよう、悠兄」

「おはようミーナ。元継兄さんも申し訳ない」

「気にするな。会議の主催者が遅刻する方が大変だからな」

茉莉花は悠元と達也の間に挟まれる形で座ることとなり（周りに知り合いと呼べる人間がいないため）、元継は悠元の左隣に座った。会

議の開始予定時間まであと5分となったところで、三矢家の代表として来た元治が姿を見せた。
「元継に悠元、おはよう」
「ああ、おはよう兄貴。言っとくが、会議中は兄弟としてでなく別の家の人間として扱う。ま、その辺は親父から聞いているとは思うが」
「分かってるよ。父から耳にタコが出来そうなほど言い含められたから」
そうして、全ての会議参加者――第一回の会議で欠席した家の代表者も含めると、合わせて30人。だが、参加者の一部が気になったのは、囲むように置かれた長机から外れる形で置かれた一人用の机と椅子。その答えは会議場に最後に入って来た人物――九島烈の姿に殆どの参加者が驚きを見せた。
中でも、九島家代表として来ていた九島蒼司(くどうそうし)は声を上げて烈に問いかけた。
「お祖父様？　何故この場にいらっしゃったのですか？」
「蒼司、その答えは実に簡単なことだ。神楽坂家当主より今回の会議に際してオブザーバーとして参加要請を受けた。なので、私は会議の推移を見守るだけのもの好きな老人と心得ておくように」
「それは……分かりました……」
烈の発言は、会議で九島家に不利になるようなことがあろうとも庇い立てはしない、と明言したに等しく、蒼司は何かを言いかけたものの、この場で言うべき言葉ではないと呑み込んで頷いた。
その上で、烈は席の奥にいる悠元に視線を向けた上で深く頭を下げた。
「神楽坂殿、此度はこのような配慮を頂いたことに関し、真に感謝する」
「お気になさらず、九島閣下。立ち話もなんですから、席にお座りください」
「では、失礼させていただく」
そうして烈の為に用意された席に座るのを確認したところで、今回の会議の提唱者である悠元が言葉を発した。

「改めて、此度の会議を主催した神楽坂家当主・神楽坂悠元だ。早速会議に入りたいと思ったが、その前に一つ。ここにいる殆どの方々は十文字殿が呼び掛けた会議に参加したわけだが、敢えて厳しい事を言わせて頂こう。たった一人の――――それも人の婚約者を矢面に立たせるような案を提案した側も、それを積極的に咎めなかった者達も、四葉を……魔法師を一体何だと思っている」

魔法師の基本的人権を守るという名分を持つ十師族ひいては師族会議の理念。先日七草智一が唱えた方策は、一人の魔法師を犠牲にするだけでなく数多の被害者を生み出しかねない危険なものであり、理念に真っ向から反する提案でしかなかった。

「我々はあくまでも〝人間〟として、魔法師の人権を守らなければならない立場にいる。それを〝偶像〟として神輿にすることは断じて認められない。それでは魔法師を〝兵器〟と見做したがる輩たちと何が違う？　異論があるなら答えてみせろ」

国家非公認――――厳密には天皇陛下より認められた皇族直属の戦略級魔法師である悠元。存在感で圧倒する悠元の問いかけに対し、その意見に真っ向から異を唱える者はいなかった。止められる存在である元継や達也も特に止めることはしなかった。

「四葉の悪名が轟いた復讐劇から既に３０年以上の月日が経とうとしているというのに、それに縋るということは自身に力が無いと証明するようなもの。何時切れてもおかしくない護符の力に頼って甘えるというのならば、師族二十八家に名を連ねる意味もない」

手厳しい言葉を投げかけるのは、これは単に四葉家単体の問題ではないという意味を指す。表立って縋ろうとしなくとも、いかに四葉家の秘密主義が周りから見れば浮いているところが続く限り、いかなる形であろうとも四葉を利用している時点で縋っているに等しい。

勇者という立場を平気で捨てかねない一例

会議の出だしから始まった悠元の辛辣な発言。それを一番咎められるであろう達也ですら関与しようとすら思わなかった。前回の会議で自分の妹（正確には従妹だが）を神輿に担ぎ上げようとしたことは、克人や真由美らの説得もあったが、一番は深雪がそれを積極的に追及しなかったことで納得した形だ。

だが、深雪が納得しても悠元が許すかどうかはまた別の問題であり、ましてや神楽坂家の婚約者として公表しておいての有様には、流石の達也でも悠元の怒りは尤もだろう……と内心でそう感じていた。

「……まあ、この辺にしておきましょうか。ですが七草殿、人様に責任を投げつけるような提案ができたこと自体性根を疑いかねない行為であり、今後このような提案をすれば七草家そのものの存在まで危うくすると心得よ」

「それは……申し訳ありませんでした」

悠元とて徒に師族二十八家の秩序を乱したいわけではない。周公瑾や顧傑の存在に片が付いたからこそ、漸く国内の事情に踏み込めるという背景がある。悠元の言葉に対し、七草智一は深く頭を下げた。

「では、始めましょうか。招待状に大まかな概要はお伝えしておりますが、忌憚のない意見を述べていただきたい」

「神楽坂殿、意見というのはどこまでを指すのでしょうか。それ次第では意見が出ずに詰まることもありますので」

悠元の発言に疑問を投じたのは前回の会議の主催者である克人であった。誰かが音頭を取るにせよ、この会議の方向性を尋ねたかったのだろう。なので、悠元は素直に応じることとなった。

「概要では反魔法主義に対するもの、と記載はしましたが、具体的には各々の皆さんが非魔法師と関わる中で感じたことを述べていただく〝意見交換〟が主となります。その意見を集約して一定の方針を出すというのは前回の会議でも実践されていたのかもしれませんが」

「すみません、五輪家の五輪洋文です。つまり、神楽坂殿は今回意見交換のみで対策案は出さないと解釈してよろしいのでしょうか？」

「ええ、その通りです五輪殿。誰かが出した案に妥協するのではなく、ここに集まった全三十家の代表が納得できる案を出すべきである、と思案しております」
　誰かの案に乗っかるのは簡単だが、それではあまりに自己の責任――――ひいては師族の家としての責任が希薄すぎる。四葉家を除け者にするのでは駄目だと公言しつつ、師族二十八家に属する以上は平等に責任を負う立場であること。それを改めて実感してもらわねばならない。
「八代隆雷（たから）です。以前の会議では七草殿が『非魔法師の住民は、反魔法主義者の暴力におびえていた』と述べておりましたが、神楽坂殿もそうお考えなのでしょうか？」
　ここで質問を投げかけたのは八代家の代表である隆雷。前回の会議に出ていなかった悠元と元継――――護人二家に質問が飛ぶ形となり、悠元は臆せずに答える。
「魔法師に賛同したい、あるいは中立的な態度を見せる大半の一般市民が積極的に魔法師をかばわないのは、反魔法主義者の暴力的な側面があるのは事実でしょう。自分もそれは否定しません。ですが、より根本的な部分が問題だと自分は考えています」
「それは何でしょうか？」
「魔法に対する認識を根底から変えなければ、反魔法主義者に対するカウンターにはならないでしょう」
　魔法技能という不可視の技術は、最初の出発点が軍事利用という部分から入っていることは周知の事実に近い。たとえ旧合衆国がその辺の事情を隠したとしても、人の口に戸は立てられぬ。
　現に全世界には魔法技能師の極致である戦略級魔法師の存在がある。［十三使徒］がいる時点で、魔法が世界の軍事力かつ抑止力として見られていることは確かな事実。ここで口にせずとも分かり切った話だ。
「魔法が軍事力に直結しているケースは、こればかりは変えられないどころかこの国の生存戦略に直結する大事なもの。ですが、そのことから我々魔法師を〝兵器〟と見做す輩が後を絶ちません」

「打つ手がないと？」
「その逆です。その事実が無理に変えられないのならば、魔法を〝体系化された技術〟として利用する方法です。そうですね、例えば……昨春に第一高校で行った［恒星炉］の基本実験がいい例でしょう」
　既に組み込まれたものを無理に変えれば、今度は優秀な魔法師を引き抜こうと各国のスパイが押し寄せて、最悪日本中でテロが頻発する事態となる。幸い、メディア工作で反魔法主義を抑え込んだ上、過激な組織やマフィアは周公瑾や顧傑の件の裏で粗方潰した。
「魔法師の優れた容姿で大衆の目を惹かせるという〝人気取り〟も効果があるといえばあるでしょう。ですが、その代償として非魔法師の反感を買うことにも繋がります。ならば、魔法という技術を社会の利益に変換して貢献することで、国家にとっての必要な人材であるという認識を政府に持ってもらうのが目標となるでしょう」
「神楽坂殿。趣旨は理解しましたが、それでは警察や消防、国防軍などで活躍されている魔法師の手柄を奪ってしまうことにも繋がりませんか？」
　魔法師としての人気取りではなく、魔法師らしく技術を以て社会に貢献する。それは正しく警察や消防、それに国防軍で活動している魔法師がやっていることそのもの。悠元が言い放った発言に対し、問いかけたのは三矢家次期当主・三矢元治――悠元にとっては血の繋がった実兄だが、この場では既に別の家の人間として問いかけた。
「問題はないと考えています。私が述べているのは魔法工学――魔法を実体のある技術として民生の産業に生かすというもの。魔法を用いて国の治安維持に努めている警察や消防、そして国防軍と異なる路線で動くことで線引きを図ります」
　悠元の発言に周囲の人々はどよめいていたが、当の本人は一切動じていなかった。何せ、その道筋を立てたどころか、既に実用化させて稼働している魔法工業――［恒星炉］プロジェクトは軌道に乗っている。
　第二弾は水素燃料を用いての水素発電を箱根・伊豆半島に限定して送電し、発電の安定性や供給頻度の最終テストを経て来週初めにス

タートする。申し込み自体に強制はしなかったが、該当地域にあるすべての一般家庭や企業が切り替えに同意した。特に発電制限を受けることなく２４時間電気の恩恵を受けられるというのであれば、それはこの時代において最早夢物語に近い。

箱根・伊豆地区でのテストによって、段階的に都心や関東地方、供給用の発電施設の準備が整えば順次各地域にも発電を行う用意がある。ただ、既存の発電エネルギーを利用しない手はないので、水素発電は工場の計画停止時間に合わせて足りない電気使用量を補う方針としている。

「神楽坂殿、それは一体……」

「今の段階ではまだお話しできません。現在、政府と公表に向けての調整を行っている最中です。そこが確定次第、師族会議を通す形ではありますが先んじてお伝えします。それで構いませんか、三矢殿？」

「分かりました。それで納得いたします」

［恒星炉］で得た膨大な電気を用いて海中の有害物質を取り除く計画も進行しており、既に小笠原諸島近海では海水に含まれる有害物質の割合が格段に減っている。海水の有害物質が減るということは、海で暮らすプランクトンや海藻、魚介類や哺乳類にも影響を与えてくる。流石に一年で劇的な変化は見込めないが、十数年も経てば新鮮な魚介類が何の問題もなく食せることに繋がる。

更に、その余剰電力を用いて養殖場も開いており、様々な魚介類を魔法による管理ができるかどうかの実験も行っているし、農業プラントの実験も行っている。単なるエネルギーとしての要素ではなく、それを用いた産業によって雇用を生み出す。

［恒星炉］単体では雇用に限定的な効果が出ることも懸念されるが、それを用いた産業ならば多岐にわたる。特に電気エネルギーは近現代において重要なファクターであるだけに、非魔法師の雇用も自ずと増える。

悠元の答えに対し、元治も必要以上に問うことはせずに引き下がった。だが、そこで声を上げたのは九島家の代表である九島蒼司だった。

「神楽坂殿。先程述べたことについてですが、それは本当に実現可能なものなのですか？　昨春の実験では複数の魔法師が魔法を行使し続けることで［恒星炉］を動かしていたと聞いています。それを実用化させるとなると、魔法師が機械のパーツみたいな扱いを受けることにもなりませんか？」

何も知らなければ確かにそういう受け取り方をすることも想定していた。なので、悠元は特段反応することもなく答える。

「それについても既に解消しております。現在、ＦＬＴで魔法を継続して行使できるシステムの実験を行っておりますが、そのシステムが完成すれば、魔法師は一般的な非魔法師の勤務時間と同じ時間働くだけで［恒星炉］が動かせるようになるとのことです」

稼働に用いられる［オモイカネ］はその根幹を成す人造レリック。いや、あえて名付けるなら魔導具（アーティファクト）と呼ぶべき代物。その存在をあえて仄めかしたのは、悠元にとってここにいる面子の大半を信用するレベルに至っていない上、ここで出した情報がどのように流れるのかを見るための試金石。

ＦＬＴでそのようなシステムを組めるとなれば、筆頭に［トーラス・シルバー］の名が出てくるのは間違いない。政府に許可は取ったが、政府から資金や人材を出させないようにしたのはすべて民間で補うつもりであり、雇用面でのいざこざをできる限り少なくするためのもの。

「まだ何か質問がおありですか、九島殿？」

「いえ、師族会議を通す際は師補十八家にも通達していただきたい」

「そこは抜かりなくお伝えするように手配いたします」

その答えで納得したかどうかはともかく、蒼司は悠元の発言を聞いて引き下がるような形となった。意見を出し合う交流会の体が気付けば質疑応答みたいな形となったことに、悠元は心の中で溜息を吐きたかった。

そもそも、非魔法師に対する信頼を一朝一夕で勝ち得ることなど難しい話という大前提をここにいる面々のほとんどが理解していない。そこを理解したところで、魔法使いの秘密主義という点が立ちはだ

かってくるのは間違いないだろう。
（アメリカはアメリカで大変だからな……しかし、正直意外だった）
念頭にあるのは、現在水面下で進行している『ディオーネー計画』のことだ。原作では夢物語が前提のところでいきなりでっち上げられた話だが、この世界では水面下で国防総省（ペンタゴン）や北米魔法協会に根回しを始めている。
その協力者のリストは［エシェロンⅢ］を通す形で入手したが、そのリストの中には［トーラス・シルバー］＝司波達也の名はあっても、それ以上の実力を有する悠元やセリアの名は含まれていなかった。無論、リーナの名前も記載されていなかった。
リーナやセリアはまだしも、自分は達也以上に脅威と見られてもおかしくはない。ましてや達也よりも高い立ち位置にいるというのに、エドワード・クラークは自分を真っ先に排除するような行為に持ち込まなかった。
だが、よくよく考えればリストに含めなかったのも理解できなくはない。
例えば、メディア買収工作や政治家への働きかけ、皇族との打ち合わせや総理大臣との会談、古式魔法師の仲裁という主だった功績を挙げたとしても、どれもが十代の人間が成したとみるにはあまりにも〝釣り合わない〟。
レイモンドが声高に主張したとしても、リストに載らなかった時点で信じきれなかったとみられる。魔法師以外の分野に影響を及ぼすことは予想できたとしても、非魔法師と縁故を結ぶだなんて当のエドワード本人には考えが及んでいないのかもしれない。
戦略級魔法師という点で選んだとしても、国防軍の上層部はおろか政府機関の信任が篤い人間を国外に引っ張ろうとすれば、間違いなく皇族および日本政府の反感を買う。いくら同盟国の誼と言えども、新ソ連の動向を考えれば出来ない相談となる。それが例えベゾブラゾフがディオーネー計画に賛同したと公表しても。
むしろ、ベゾブラゾフを巻き込んだ時点でＵＳＮＡ政府のトップである大統領は〝サインをしない〟と公言しているし、現政府の長官ク

ラスはおろか連邦銀行のトップまで日本に対する融和策を提唱している。問題はＵＳＮＡ軍だが、こればかりは自浄作用が効かなかった場合、それも日本で問題を起こした場合は莫大な慰謝料を支払ってもらう。

レイモンド・クラークは自分の素性をある程度つかんでいるだろうが、『ディオーネー計画』を立てるということは、悠元や達也の素性をどこまで［フリズスキャルヴ］で読み取ったのかを推し量るには最適なもの。

まあ、クラーク親子による野望と身勝手の結果、ＵＳＮＡや新ソ連という国の評価が著しく下がるのは避けられない。寧ろ、底抜けしてマイナスになったとしても誰も気にしないだろうと思われる。その評価を恨みに変換してぶつけるようならば、こちらとしても一切容赦する気などない。

パラサイトの一件で吹っ掛けたに等しい以上、個人は信用しても国としての信用はまた別の問題なのだから。

◇　◇　◇

その頃、霞ケ浦基地の司令室では佐伯と風間が相対していた。先日の新ソ連侵攻（当の対象国はその事実を公に認めていないのは当たり前だが）に際して出動していたが、大きな動きはなく小康状態になったと判断され、北海道方面部隊に引き継いで独立魔装大隊は第１０１旅団本部に帰還した。

「風間以下１５９名、無事に帰投いたしました。北海道方面の部隊との引継ぎは滞りなく済んでおります」

「無事に戻ってきてなによりです」

独立魔装大隊は書面上『大隊』という位置づけだが、人的規模では二個中隊程度の人数しかいない。今回の出動は大隊全体の約半数に及ぶが、誰も欠けることなく帰還したことに佐伯は安堵の表情を見せた。

軍隊に人的資源のロスはつきものだが、誰も亡くならなかったことに越したことはない。

「中佐、今回出動した隊員には三日の特別休暇を与えます。必要なら

ば外出許可も出しましょう」
「ご配慮感謝いたします。皆も喜ぶことでしょう」
　ここまでは今回の呼び出しの案件の半分、と言わんばかりに佐伯は息を吐き、旅団長ではなく国防軍の謀将としての表情を見せたことに、休暇の話を聞いて口元が緩んでいた風間も表情を引き締めた。
「昨日、恩田少佐から連絡がありました」
「小官は存じ上げませんが、何者ですか？」
「恩田少佐は情報部の特務です」
　階級こそ塩漬けにされていたものの、長いこと国防軍に勤める風間ですら聞き覚えのない人物。そして、佐伯はその人物のことを簡単に説明する。佐伯には情報部に対する権限はなく、その逆も然りであり、両者に手を組むという利点はない。つまり、佐伯の私的な情報提供者である、と風間は心の中でそう結論を出した。
「それで、その恩田少佐は何を知らせてくれたのですか？」
「大黒特尉が粛清リストに載りました。そして、特尉に協力していた三人の魔法師も対象に含まれたとのことです。尤も、後者の場合は不明な点が多く、〝鵺〟というコードで呼ばれることになったそうですが」
　風間はその時点で、達也はまだしもその彼が同行を許せるレベルの魔法師などそう多くはない、と読んだ。となれば、間違いなく悠元もその一人に含まれている可能性が極めて高い。その辺は目の前にいる上司もそう考えているだろう。
　仮にその予測が合っているとしたら、風間としては『最悪極まりない』と評する以外になかった。
「特尉を消そうというのですか？」
「消すのではなく、捕らえて教育するとのことです」
「失礼を申し上げますが、彼らは破滅願望を抱いているのでしょうか」
　書面上は直属の上司だからこそ、そう述べたとしてもおかしくはない風間の言葉に対し、佐伯は静かに彼の言葉を聞いていた。
「仮に特尉を暗殺することが可能だとしても、彼を捕らえること自体困難を極めます。最悪、四葉のみならず上泉や神楽坂まで出張ってく

るだけでなく、情報部の暗部全てが粛清の対象に含まれるでしょう」
「……特尉がそこまでやると？」
「小官からすれば、彼は軍人に最も不向きな性格の持ち主であると申し上げます。それでも彼がまだ軍籍に身を置くのは、上条特尉――――いえ、上条特務大将閣下との縁故によるものだと我々も認識せねばなりません」
　風間も上条達三――――悠元が前代未聞の特務大将に昇進し、陸軍最高司令副官の座に就いたことは帰還する前に知った。軍人魔法師としては異例の辞令だが、防衛省から特段異論が出なかっただけでなく、空軍や海軍の司令部からも好意的にみられていることも含めて。
　独立魔装大隊への出向の扱いはいまだに残っているが、先日の出動要請を正当な事由で蹴った時点で悠元を独立魔装大隊として動かすことはほぼ不可能となった。それを決定づけるための辞令だということも風間にはすぐに分かった。
「仮に、現実世界に物語やゲームのようなラスボスがいるとすれば、それは彼でしょうね」
「ラスボスですか。では、物語をハッピーエンドで終わらせる勇者は何処にいますか？　上条大将がそれに成り得ますか？」
「難しいでしょう。彼は勇者などという立場を嫌う人間ですので……いずれにせよ、彼を必要以上に刺激しないことがお互いのためになると小官は考えます」
　佐伯と風間は同時に噴出した。どちらも自嘲の笑いを見せていた。軍人である身分でファンタジーのようなことを語り合ったのがよほどおかしかったのだろう。
「貴官の意見は恩田少佐を通して情報部に伝えておきましょう。尤も、どれほどの効果が見込めるかは不透明ですが……改めて、ご苦労様でした中佐」
「ハッ」
　風間は佐伯に敬礼をして、執務室を後にしたのだった。

杜撰以上に危険しか秘めていない

若手会議が終わり、ＦＬＴツインタワーマンションへの引っ越しも本格化した。その中で一番驚くような出来事は五輪澪が引っ越してきたこともそうだが、世間的には車椅子が手放せない彼女が平然と歩いていることだった。

当事者の悠元は無論驚いていないし、婚約者たちも悠元なら治しかねないという判断によって澪がマンションの中で歩くということについては許容される形となった。ただ、中には目を丸くして驚いている人間もいたりする。

「……澪さんが歩いてる」

その一人は同じように引っ越してきた真由美であった。荷物自体は七草家の屋敷から運び込まれ、荷物整理には深雪をはじめとした面々が協力している。流石に女性の荷物に手を触れる訳にはいかないため、悠元は暇を持て余す形となっている。

真由美としては『別にいいのに……』と思ってはいたが、同じように引っ越してきた泉美の説得に加え、澪の凄味のある笑顔で黙ってしまうこととなった。その笑顔には澪が健常者と何ら変わりない状態である、という秘密を隠す意図も含まれていたのは言うまでもない。

「何かしたの、悠君？」

「治療はした。詳細はいくら婚約者でも教えられないが」

「あ、うん。それだけ聞ければ十分よ」

真由美は七草家でのやらかしも含めて悠元に多大な借りを有しており、その清算の一端も込めて抱かれてしまった。そのことで改めて悠元の規格外さを目の当たりにした形となり、加えて他の婚約者たちが諍いを起こすことなく友好な関係を築けているのも腑に落ちた。

「でも、まさか私まで追い出されるなんて……盗聴器などの類は私も箱詰めの際に全部チェックしたんだけれど」

『あ、ここにカメラがありますねえ。イエーイ、みってるー？』

「……一度実家に帰ってもいいかしら？　あの親父を魔法の射的にしたくなったわ」

「いくら相手に非があるとはいえ、殺傷事は止めてくれ」
真由美のフラグ建てが聞こえてきたセリアの台詞で回収されてしまい、いつになく澄んだ笑顔を浮かべている彼女に対して悠元は窘めた。今の様子からすると平気で半殺しにしかねないと思ったからこそ。
ともあれ、テーブルに置かれたコーヒーカップを手に取り、一口啜ってテーブルに置いた。
「ここのフロアは真由美のプライベートスペースになるから、必要なものがあれば手配するように言い含めている」
「実家の部屋の数倍も広いんだけど。寧ろ持て余すぐらいよ」
２１階から４０階の内、２１階から２４階が魔法の訓練場兼耐震・対魔法障壁システムの管理室で、２５階から３７階が婚約者および使用人（愛人兼任）のプライベートスペース、そして３８階から４０階の３フロアが悠元の個人スペースとなる。
生活空間は３８階がメインで、３９階と４０階はいくら婚約者と言えども悠元の許可が無ければ入れない仕様となっている。その最大の理由は悠元が今秘密裏に進めている魔法技術開発が主な要因で、三矢家にいた時の懸念を払拭するためにそんな仕様となっている。
近い将来、正式な婚姻が為れば箱根の本邸に生活拠点を移す形となるが、このマンションは魔法技術の秘匿という観点でもしもの時の避難場所として残したままにする。必要性が薄れればマンション下層と同様にＦＬＴ職員寮として引き渡すこともできる。
なお、このマンションの構想段階でマンションの家賃収入だけでなくＦＬＴへの土地貸与による収入が全て悠元に入ってくる仕組みということに当の本人は深い溜息を吐いた。
「それで、悠君。最近のあの噂だけど……可能性はあると思う？」
ここで真由美が問いかけたのは九校戦中止の噂だ。国立魔法大学系列のネットワーク上に突如出たもので出自の痕跡は皆無。大方、その噂を流した人間も検討はつく。
「大いにあるとみている。特に今の一高（うち）は十師族関係者を3年だけで五人も抱えているから、他校からすれば羨望の的になりかねない」

「私たちの時でも散々噂されたからね。摩利は間接的にそうなってただけだけど」
真由美・克人・摩利の〝ビッグ3〟と呼ばれた時よりも、第一高校の現3年組は破格的ともいえる面子。元三矢家・現神楽坂家の悠元、四葉家の達也と深雪、六塚家の燈也、そして九島家の縁者であるセリア。
無論それだけでなく、名立たる家で言えば千葉家のエリカ（本人は凄く嫌がっていたが）、吉田家の幹比古、北山家の雫がそこに加わる。東道家の場合は〝知る人ぞ知る〟のため、数に含めていない。
「中止になった場合はその対策も含めて動くことになるが、一番槍玉に挙げられそうなのは達也だ。誹謗中傷の類など彼自身は気にも留めないだろうが、余計な飛び火を見せるようなら厳しく対処する」
「それが出来るという強みはあの父親でも出来ない所業ね」
「もしかして、ストレス溜まってました？」
「それはあるかも」
姉妹はどことなく似ることもあるだろうが……泉美よりも言葉の棘は少ないが、弘一に対して遣る瀬無い想いを抱いていたのだと察し、心なしか同情してしまった。それでも盗聴や盗撮の類など許されるはずもないので、後で師族会議議長として釘を刺すことはする。
「ここから先はまだ推察の部分もあるが、海の向こうの連中は達也を追い出したいようだ」
「追い出す？　国外にってこと？」
「宇宙に」
「え？　あの超リアリストと言っても差し支えない現実主義の達也君が好き好んで宇宙に行くとは思えないんだけど」
学内での関わりはたった1年間とは言え、『ブランシュ』や『無頭竜』、それに横浜の件で達也の気質を知ったからこその真由美の言葉は至極真っ当な正論だった。
「で、どっちかしら？　西？　東？」
「ある意味両方だな。この件が本格化した場合、真由美にも一芝居付き合ってもらうから」

「それは別に構わないけど……寧ろ、私が尻拭いみたいなことをしてるって兄共は自覚すべきよ」
魔法技術の観点で達也が宇宙に興味を持つ可能性は……何かしらの魔法的な要素があれば興味を持つだろうとは思う。ただ、でっちあげられる計画があまりにも杜撰極まりない部分において、相手にほんの少し感心を覚えている。
そこにシビれも憧れもしないのは明白な事実だが。
「でも、仮にそっちが動くとしてリーナさんが確実に怒ると思うんだけど。寧ろ達也君にせがんで『とっとと帰化したい』って言いだすかもしれないわよ」
「その辺はＵＳＮＡの問題であって、日本の問題ではない。魔法の実力を当てにして〝シリウス〟の穴埋めをしようとしたツケの支払いは俺らが負うべき領分じゃない」
リーナが〝アンジー・シリウス〟という事実は、セリアが元『スターズ』という情報と共に、真由美に開示されている。尚、それを聞いた際の第一声は『絶対あのタヌキに言えないし、言いたくもない』とのこと。
「帰化自体はうちの実家がやってくれる手筈となってる。尤も、その為にリーナには一度ＵＳＮＡに行ってもらう必要はあるが」
ディオーネー計画があまりにも杜撰だと評することが出来るのは、その最たる理由として初期の理想メンバーリストの〝年齢〟にある。何せ、達也が現在１８歳なのに対して、それ以外のエドワード・クラークを含む面々の年齢が平均して４０歳代ないし５０歳代。メンバーの中で最も年長となるウィリアム・マクロードは６０歳代になってしまう。
この時点で３０年という寿命の差が生じており、仮に達也が５０歳までの約３０年間を宇宙で働けば、初期協力メンバーの少なくとも半分が土に還っているか、老人として計画の推進力にすらならない始末。言い方は悪くなるが、それでもしがみつく様ならば確実に〝老害〟の領域へと踏み込むこととなる。
エドワードの後継者としてレイモンドが出てきたとしても、それは

単に『エドワード・クラークの息子』という肩書が優先されてしまう。［七賢人］の名を出せば、それこそ面倒な問題へと発展する。
エドワード・クラークがベゾブラゾフに協力を持ち掛けたのは、表向き協力して達也を宇宙に追放し、そのついでにベゾブラゾフも宇宙へ追放する腹積もりであったのは間違いないと考えられる。
彼の［トゥマーン・ボンバ］の性質とベーリング海での暗闘を鑑みれば、国家を脅かす存在として排除したいと考えるのが妥当だろう。でなければ、ＵＳＮＡにとって最大の脅威である新ソ連の人間を国際プロジェクトに招くという発想自体無かったに等しい。無論、聡明な頭脳を有するベゾブラゾフもエドワードの目論見を読んだ上で計画に乗っかったが、原作では暴走して達也を殺そうとした。
なので、エドワードがベゾブラゾフを巻き込んだ時点でディオーネー計画自体が破綻していた、と考えるのが妥当だ。これがレオニード・コントラチェンコならばまだ改善できる余地はあったのかもしれないが、彼の場合は年齢に加えて身体的な問題で参加できる状態ではない。なので、エドワードもコントラチェンコについては脅威のレベルを下げたのだろう。
そんな破綻前提の計画を持ち込むのは勝手だが、更に問題がある。仮に木星圏から金星まで氷の塊を射出するとして、原作では木星圏と金星に運搬拠点と魔法師を常駐させるとなっているが、木星圏と金星の間には小惑星帯（アステロイドベルト）、火星、地球（月も含む）、更には公転軌道の関係で太陽と水星が存在する。
大気改善の為にメートル単位で運搬するのは非効率すぎるため、最低でも数キロメートル単位になるのは目に見えているし、無重力空間ならば重力による重さをあまり考慮しなくてもいい。何が言いたいのかというと、一歩間違うと『運搬中の事故』という形で巨大な氷の塊が地球に落下しかねない危険性を孕んでいることだ。
最初の方はまだいいとしても、魔法師が完全に地球からいなくなった場合、氷の塊はおろか小惑星クラスを魔法で落下させて地球を氷河期に陥れる……という最悪の未来まで考え得るだけに、ディオーネー計画はあまりにも危険な計画としか言いようがない。

仮に太陽系を迂回して直線的なルートを作るとしても、安定した公転軌道を有する太陽系外惑星の探索に時間が掛かるだけでなく、太陽系を通る公転軌道を有する小惑星や彗星まで存在するリスクまで考慮しなければならない。それらすべての要素を勘案して魔法で運搬した場合、大気改善に掛かる年数は平気で数十年を見込むのが妥当なレベルになる。

その意味で、直線的なベクトル移動を主とする現代魔法では曲線的な移動が難しく、科学技術の全てを補完するに至っていない。安定的な供給を実現させるというのであれば、それこそ先に火星をある程度開発して中継運搬基地を作る方がリスクをより軽減できる。

尤も、エドワード・クラークの目的上、そこまで煮詰められていないことに笑いを禁じえないのは確かだが。

「どうせ一高や魔法協会に根回しをするのは目に見えている。ならば、こちらは日本政府だけでなく諸外国まで味方に引き入れる」

「悠君なら普通に政府要人と面識があるのかもしれないけど……義理の関係となった父に声は掛けなくていいの？」

「中途半端な立場に居られる方が困る。それに、周公瑾と取引をした際は反魔法主義対策から四葉家を意図的に省いていたようだからな」

その部分は周公瑾の知識と記憶を引き継いだ際に読み取った情報で、『こればかりは看過できぬ』と剛三が烈まで巻き込み、本気の説教を行った。その結果が先日の師族会議における当人の態度に繋がった形だ。とはいえ、この程度で凹んでいるとは到底思えないが。

「はぁ……それで、私は何をすればいいの？」

「仮に事が進んだ場合、達也は一時的に学校を離れることが想定される。自分が魔法で姿を偽った状態で達也と面会するので、真由美には同行者という体で一緒に居て欲しい」

「それは構わないけど、悠君が姿を偽る意味は？」

魔法で姿を変える、というのは真由美も九島家の［仮装行列（パレード）］が念頭にあったようで、特段疑問が飛ぶことは無かった。だが、そこまでする必要があるのかという彼女の疑問に対して悠元が答える。

「国防軍情報部の所謂過激派が達也を粛清しようと目論んでるようで

な。一芝居売って俺と達也が戦いつつもそいつらを排除する腹積もりだ」
「成程。ということは、達也君には話を通すのね？」
「深雪と水波にも話を通す。なので、会談自体がほぼ茶番という有様だが」
　これまでの流れを勘案したとしても、間違いなく達也が一高を一時的に離れる可能性は高い。ならば、仮に達也が授業に出る必要が無くなった場合、その時間を用いて打ち合わせる。
　どうせ最近は居心地が悪そうな態度を教官から感じていたため、少しぐらい授業を離れても問題が無くなっている。この辺は姉たちの悪名が功を奏している部分もある為、正直あまり喜べないのが本音だ。
「エリカたちにも話を通して、盛大な罠を仕掛ける。本当ならば国防軍内部で片を付けるべき案件だが、非魔法師の人間に酷なことはさせられんからな」
「分かったわ。にしても、達也君を追い出したいって……神様にでも成り上がりたいようにしか聞こえないんだけど」
　その最大の理由である達也の戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］はアインシュタイン方程式をそのまま魔法として成立させてしまった、この世界における最凶最悪の戦略級魔法。それを言ったら、自身の戦略級魔法［太極八卦陣（コスモ・ノヴァ）］も大概だが。
「仮に神様という存在がいたとしても、絶対にロクな神様じゃないな。俗に言う邪神とか魔神の名が似合うと思う」
「悠君なら、平気で殴って消滅させそうな気もするけど」
「それ以前に絶対会いたくないですが」
　そして、口に出さなかったがディオーネー計画には致命的な欠陥が存在する。それは、エドワード・クラークはプロジェクトの提唱者という体を取っているが、官民の組織や企業まで巻き込む以上はこれらの交渉を纏める〝リーダー〟、そしてそれを後押しする〝総責任者〟の両方が不在ということ。そして、［トーラス・シルバー］＝達也の公的かつそれに見合うだけの立場を保証できないことにある。

エドワードは非魔法師である以上、魔法師と交渉するべくマクロードや魔工メーカーの重役まで協力者として提唱した。では、ＦＬＴも存在を明確に公表していない［トーラス・シルバー］と交渉する役目を一体誰が担うのか？

原作では日本のＵＳＮＡ大使館を使って水面下で達也への圧力を強めたが、これは尤もやってはいけない悪手だし、プロジェクトの参加の可否は個人の自由意志であり義務ではない。魔法協会が十師族まで巻き込んだのも、言い換えれば魔法協会自体が責任を負いたくないからという風に受け取れてしまう。

これがアメリカ国内で完結する話ならば達也は参加を余儀なくされていたが、日本とＵＳＮＡに存在するのは〝貿易の国際条約〟と〝国交〟、それと〝軍事同盟〟。そのいずれも達也を［トーラス・シルバー］として参加させうるだけの明確な理由に成り得ないし、下手な横槍は立派な内政干渉に該当する。

そして、レイモンドがもし［七賢人］として達也の正体を仄めかした場合、パラサイト事件の際に届いたビデオメールを師族会議と日本魔法協会に公表するだけでなく、レイモンド・クラークを〝民間企業に対する威力業務妨害および青少年の安全を危険に晒す脅迫〟の対象として国際指名手配することも視野に入れる。

これで日本に来た場合、何の躊躇いもなく逮捕出来る下地を整えておくこととする。

想念の結果に生じたもの

真由美の引っ越しは人手が居るため、悠元は大人しく引っ込む形となった。その上で彼が向かった先は雫の部屋だった。元々地元なので別に北山家で暮らすこと自体問題は無いと思っているが、雫としては航が一人前になる為にも早く家を出た方がいいと考えていた。

その部屋にはほのかが遊びに来ていた。

「あ、悠元さん。お邪魔してます」

「ああ。大丈夫かな？」

「別にいいよ。というか、悠元ならいつ来てもいいのに」

人付き合いの観点で言えば深雪とほぼ同時期に知り合い、幼馴染であるエリカや幹比古の次に長い付き合いとなっている。尤も、幼馴染以上に長いのはアリサと茉莉花の二人となるが。雫が動こうとしたところでほのかが立ち上がり、簡易キッチンに向かっていくのを見て互いに苦笑を零した。

「……気を遣われちゃったね」

「別に気にしないんだがな。寧ろそれで損をしているわけだが」

「それは確かに」

実際のところ、ほのかはまだ達也に手を付けられていない状態となっている。なので、雫としてはほのかに発破を掛けるための策を教示しているのがテーブルの上に置かれた数冊の女性雑誌で自ずと察した。

「雑誌を見るだけで察しは付くが、ほのかがやったら間違いなく大抵の男が引っ掛かるのは違いない」

「悠元も魅力に思ったりする？」

「一般論で語ればな。ただ、人様の婚約者を奪う様な鬼畜の所業なんて出来ねえよ」

それを聞いた雫は「そんな風にしっかり答えられるから、他の婚約者も含めて好かれるんだよ」と返してきて、これには悠元も深い溜息を吐いた上で空いている席に座る。すると、丁度コーヒーの香りがした方向に視線を向けると、カップを載せたトレーを手に持ってきたほ

のかが姿を見せた。
「お待たせしました。ミルクと砂糖も入れておきましたので」
「ありがとう、ほのか。にしても、表紙だけでも見ても結構派手じゃないか？」
「そ、そうですよね！　私には派手すぎるって言ったんですけど」
　こんな形の話は今に始まった事ではなく、切っ掛けは中学時代に雫の家で勉強会をすることになった時、本棚から派手なランジェリーの専門誌をほのかが見つけたことがきっかけだった。あの時は雫の無言の圧力でお流れになったが、婚約者となった時に聞いたら『悠元を誘惑するための勉強だといってお母さんから押し付けられた』だった。
　この事実はほのかに語られていないが、思春期真っ只中とはいえもう少し倫理と道徳を弁えて欲しいと思わなくもなかった。
「達也さんの周りは綺麗な人がいっぱいいる。深雪の助けを借りられるとはいえ、しっかりアピールしないとダメ」
「で、でも、こんなスケスケはマズいよ!?　悠元さんはどう思いますか!?」
「うーん、一回着てみて達也の反応を見るのが妥当じゃないか？　ほのかにその度胸があるのなら……ほのか？」
「雫、この雑誌を借りるね！」
　何かを決意したのか、ほのかは雑誌を手に取って部屋を出ていった。大方派手なランジェリーを購入するべく動いたのだろうが、ここで雫が意味深な笑みを浮かべていることに気付いた。
「その様子だと、何か仕掛けたんだな？」
「家のコネをちょっとね。後はお母さんにも協力してもらって、ほのかに派手なやつを送ってもらうように仕向けた……効果は実証済み」
　婚約者の間柄となり、北山家の自室にいるときは明らかに誘っている服装ばかり選ぶことが多かった。結局手を出した結果として雫が懸念していた胸の大きさもある程度は改善された。それでも、雫からすれば姫梨やほのかの持つ胸は〝反則〟という認識は変わらないらしい。持たざる者からすれば、持つ者を羨む気持ちも理解できなくは

ない。
「二人きりになったし、私を押し倒しちゃう？」
「獣か、俺は。でも、否定は出来ないのが悔しい」
「寧ろ、情事を重ねるごとに骨抜きにしちゃうジゴロ」
「それを人の固有名詞にしないでくれ、雫さんや」
　いくら相手が婚約者でも、節操なしに行動を起こすのは流石に躊躇われる。それに、雫の部屋に来たのはちゃんとした理由があってのことだった。
「雫、潮さんからの返事は？」
「お父さんも提案を呑んでくれた。そのついでに先日のことで感謝していたって」
　別に呼び出して直接伝える方法でもいいのだが、相手は大財閥グループのトップ。
　こっちがいくら神坂グループの取締役（千姫からは実質代表取締役のような扱いを受けている）で、更に元老院四大老の一角になったとはいえ、多忙の相手を無理矢理呼び出すのは先方にも迷惑を掛けることになる。なので、雫を介する形で潮と連絡を取り、［恒星炉］プラントの正式事業化に向けての準備を進めている。
「あれは偶発的な衝突回避の部類だからな……まあ、返事は受け取る」
「了解。でも、表立って動かないのは何かあるの？」
「あるといえばあるな。国内というか国外が主な原因になりそうだが」
　主な要因はＵＳＮＡだが、新ソ連――――主にベゾブラゾフが油断ならないとみている。何せ、先代の〝シリウス〟を殺した実力は［十三使徒］もとい戦略級魔法師としての実力に他ならない。レオニード・コントラチェンコも戦略級魔法師の一人だが、剛三の予見では手痛い経験からして直接出張る事態にはならないだろうと推測している。
　情報に精通しているエドワード・クラークならば、ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］を調べ上げられるのだから、当然彼の為人も調べ上げられるはずだ。
　原作でエドワードがベゾブラゾフを止められなかったのは、エド

ワード自身魔法師でないために対抗できる抑止力がいないという原因に尽きるが、それ以上にベゾブラゾフを思い止まらせるための交渉材料が皆無だったというのもある。
「国内だけでも魑魅魍魎が可愛く見えるレベルだというのに、国外まで含めると味を無視してぶち込まれた闇鍋にしか思えん」
「そこまで行くと、味が味じゃなくなりそうかも」
「寧ろ味気すらしないだろうな」
ここで疑問なのは、何故エドワード・クラークが達也もとい四葉家を目の敵にしているのか、という根本的な問題だ。
情報という既得権益を考えた場合、たった３０人で一つの国家を滅亡にまで追い込んだ（正確には、そこに剛三が加わって無双劇に発展した）ことを鑑みれば、エドワードが危険視する意味も理解できなくはない。
しかし、大漢の崩壊からもうじき３５年も経過しようとしているだけでなく、直接関与していなかった国の人間であるエドワードが四葉家を恨む理由など本来はないはずなのだ。この点では、大漢の崑崙方院を追い出された顧傑に近しい立場にいると言えよう。
物語上、話を盛り上げる意味でも主人公（おにいさま）にとっての〝悪役（ヒール）〟は必要だろうが、第三次大戦によって北アメリカを掌握したＵＳＮＡの人間が同盟国の魔法使いの家を敵視する理由は見えてこない。それだったら、実は顧傑が生かされてＵＳＮＡ国内で暗躍しているのであればまだ分からなくもない。
正確な年齢は不明（調べる気にもならない）だが、公務員の就業年齢を鑑みれば当時のエドワードの年齢は十代もしくは二十代の頃の話になる。エドワード当人が不利益を被ったとは考えづらく、彼にとって親戚もしくは友人関係にある人物が大漢崩壊の一件で亡くなった、あるいはクラーク一家が何らかの不利益を被ったとみるべきなのが心情的に納得できると思う。
その中で最も考え得る可能性の一つは、顧傑をＵＳＮＡに引き込んだのがエドワード・クラークの近親者だという可能性。
ＵＳＮＡに限らず、あらゆる国家や組織において限りなく一枚岩に

なるというのは難しい。それこそ洗脳などの精神改造によって強制でもしない限りは。

大漢の崩壊は、大量の難民を生み出す形となっただろう。でなければ、海を隔てて遠く離れたＵＳＮＡ国内に難民ネットワークを構築するまでには至らなかった。その影響の一端を強く受けたのがイギリスと関係の深い香港系の人間であり、それが後の［無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）］を生み出すことに繋がったとみるのが自然だ。

魔法の軍事利用を強く推し進めてきたＵＳＮＡとしては、大陸系の魔法技術を手に入れる格好の材料として顧傑や大漢難民の受け入れを認めたのだろう。尤も、相手が魔法師であるということから無理強いできる筈もなく、大陸の古式魔法が［スターズ］の魔法に反映されたかどうかは判断しかねる部分が多い。

「その首謀者に近しい一人がレイモンド・クラーク。当人は［七賢人］の名を使ってビデオメールを送り付けてきた。それも、俺が戦略級魔法師［殲滅の奇術師（ティ・ター・ニア）］だということを知った上でな」

「レイが……あれだけ詳しく知っていたら、納得かな」

志半ばで祖国を追われた顧傑を引き取ることで生じるリスクを考慮してもお釣りがくるメリットを見出した、ということになる。ただ、その当時は人道的な理由と大陸の魔法技術の吸収という理を求めてのことだろうが。

ここでもう一つの可能性を考えるとすれば、四葉の復讐劇にＵＳＮＡの人間――例えば、エドワード・クラークの親世代が関与している可能性。

一見すると突拍子もない可能性だが、状況だけ見てもそれを唱えられるだけの根拠はある。それこそ、エドワードの父親が何らかの形で四葉の復讐劇に関与したために殺されたということも考えられる。なので、調べてみることにした。その結果……予想は見事に的中してしまった。

エドワードの父親も情報システムの専門家で、エシェロンⅡ（ツー）の設計・開発者として政府お抱えの技術者として名を馳せていた。その彼が表向きＶＩＰ待遇の講師という形で祖国を離れることとなったの

が四葉の復讐劇の丁度1年前。彼は日本での仕事を終えた後、そのまま日本から香港経由で大漢の崑崙方院を訪れていたのが、四葉の復讐劇の真っ只中。
リスクを負ってまで出向いた最大の理由は、冷凍保存された四葉真夜の冷凍卵子を引き取る代わりに、大漢に魔法技術の供与を行うための裏取引。彼は非魔法師ながら安全保障局のエージェントも兼務しており、日本の滞在は正体を隠す為の工作活動だった。
取引の最終段階を迎えていた最中に四葉元造を含めた四葉一族の襲撃を受け、巻き込まれる形で命を落とした。後に分かったことだが、真夜誘拐の為に動いていた大漢軍の兵士を台湾に密航させた内通者でもあった。形はどうあれ、因果応報と言えるだろう。
その当時、レイモンドはまだ生まれていないが、多かれ少なかれエドワードから聞かされて育ったのは確かだろう。であれば、達也が四葉を名乗る前はまだ友好的だった態度が、公表後は一変して父親の願いを叶えようとする行動理念も理解できる。
「レイモンドの父親――エドワード・クラークは四葉家を憎んでいる。達也の存在如何に関わらずな」
「それって……レイはそのことを？」
「知っているとみるべきだな。ただ、エドワードの父親が成した所業を鑑みれば因果応報の結果だ。理解していても納得できないなら、話し合う余地は無くなるだろう。雫からしたら酷だと思うか？」
「ううん。そうしなきゃいけないことは分かってるつもり」
でなければ、どうあっても制御できない顧傑に対して［フリズスキャルヴ］の端末を渡すなんて所業も敢行しなかっただろう。最悪、彼の命を犠牲にしてでも四葉家を葬り去る腹積もりであったのは間違いない。その意味で、顧傑はエドワード・クラークにとっての道具（にんぎょう）だったのだろう。
国外にいる魔法師を責めることで国内にいる魔法師に対するリスクを鑑みない時点で、エドワード・クラークの主眼は四葉家への復讐に完全に舵を切ってしまっている。その結果が余りに杜撰な［ディオーネー計画］の骨子だ。

「四葉家を葬り去ろうというのなら、最早俺にとってクラーク親子は敵だ。奴らがどう動くかを見た上で、奴らの用意したテーブルにペンキをぶちまけるが如く面子を潰す。宇宙に行きたければ勝手に行け、俺は一切関与しないと言ってやるさ」
「それでも諦めない場合は？」
「殺す。敵意や害意のある人間なんて、窮鼠の状態にさせただけで何をやらかすか分かったものじゃない」
　追い詰められた結果が原作における［スターズ］のパラサイト化現象であり、ＵＳＮＡ政府はダラスの研究所の動きを把握できる立場にいたはずなのに、軍を咎めなかった。軍も軍で不審なメールの件を一切上に報告していなかった。報連相が出来ていない時点で、スターズの非魔法師に対する不満やストレスを解消させようと積極的に動かなかったツケでしかない。
「尤も、殺すのはパラサイトだけだ。当人たちはしっかり法の裁きを受けてもらうことになるが」
　リーナをその捌け口にした時点で、［スターズ］そのものに不満となるストレスが蓄積していた事実を証明したようなもの。こんな事態にならないように手を打つべきであったのに、参謀本部はその対処を怠った。一番憤慨しているのは他ならぬＵＳＮＡ政府だろうが。何せ、軍が勝手に暴走しただけでなく、兵士や軍の装備まで勝手に動かされた挙句損耗したのだ。
　正直、大統領が本気で助走をつけて某漫画のように複数ページに渡って相手をボコしても誰も咎めないと思う。寧ろ命があるだけマシだと思ってほしいと思わなくもない。
◇　◇　◇
　ディオーネー計画に限らず、あらゆるプロジェクトは計画の規模に比例してやるべき手続きや処理が増える。そして、誰が一番その皺寄せを受けるのかと問われると……その処理を行う現場の担当者であった。
「ふっざけるなぁ!!」
（あー、また増えたんだな。可哀想に）

（言ってやるなよ。気の毒なのは確かだが）
ＵＳＮＡ・国防総省（ペンタゴン）のオフィスの一角で響き渡る怒号に近い叫び。普通ならばそれを咎めたりするべき行為なのだが、そこに高く積み上げられた書類の山を見ただけで、このオフィスにいる者はそれの処理に追われている人物に内心同情を送っていた。別の人は、近くの同僚と小声でその様子を憐れんでいた。
明らかに一人で負える代物ではない書類の山と高速で格闘しているのは一人の青年――ジェラルド・バランスその人。ここ最近増えてきた北米魔法協会からの申請書類に加え、例の宇宙開発に向けての資料作り。その結果として、ここ1週間は職場に寝泊まりするというシステムエンジニアよりも過酷な業務に追われていた。
「処理しても処理しても減らないどころか増えるなんて、ちったあ電子化でもしろよ！　俺は体のいい社畜じゃねえんだよ……エドワード・クラーク、マジで許さねえ」
職場で十分な睡眠など取れるはずもなく、いつも仕事の差配をしている上司もこの惨状を見た上で『辛かったら一日ぐらいは休め』と口にしてしまうほどに、ジェラルドの仕事は極まっていた。
ともかく早急に片付けて家に帰ると意気込んでいた彼の端末に一件のメールが送られてきた。こんな忙しさだからメールもロクに読めないと無視するところだが、ジェラルドは『少しだけ休憩するか……』という気持ちで書類の手を止めて端末を操作すると、そのメールは大統領官邸（ホワイトハウス）から送付されたものだった。
そのメールがジェラルドにとって、この先の将来を決定づけるものになるとは……見ていた当人にも与り知らぬことであった。

埃を被らせるほど勿体ないなら使うべし

第二回の若手会議は悠元の説教こそあったものの、今後も定期的に開催していくことで合意した。魔法使い同士の因縁や秘密主義はあれども、基本的な技術の共有と研鑽は師族二十八家のみならず百家や魔法資質保有者にとっての課題として、各々で対策を講じていくことでも合意に至った。

世間ではゴールデンウィークの大型連休だが、カリキュラム上平日は基本授業が入っている魔法科高校の生徒に休みはない。当然、それに対して弱音や愚痴を吐く生徒も少なからずいるわけだが、こと二科生に至ってはそんな空気など一切見られなかった。

「いいのかね、俺が授業を抜けるようなことになって」

「そんなことを言ったら私も似たようなものですよ」

その二科生の授業を見学しているのは悠元と深雪――――現三年の成績優秀者のワン・ツーが揃って自分のクラスの授業を抜け出すような格好となっているが、別に彼ら自身から『授業を学んでも意味がない』という形で抜け出したいと申し出たわけではない。授業の担当教官が急遽休んでしまったために座学で自習する形となった。

自習だけでは単に暇なため、佳奈とジェニファーに話を通して二科生の授業を見学するという形となった。最初は悠元だけ抜け出すつもりだったが、それを察した深雪に見つかって已む無く同行を許した。

現行の現代魔法はとりわけＣＡＤの重要性が高いため、魔工科の生徒の実地研修という形で魔工科の生徒が二科生にＣＡＤの取り扱い方をレクチャーしている。特に今年度の二科生は魔工科を目指すものも少なくないため、九校戦のエンジニアとして活躍している達也に人気が集まるのは当然の流れと言えた。

「やる気があるのはいいことだと思う。今の状況でも、同じ一年一科生の約３分の１が成績で追い抜かれる格好だろう……酷だと思うか？」

「いえ、努力しないとそれに見合った実力が身につかないのは事実で

すから。せめてお兄様や悠元さんのように自発的に努力なさるのが一番ですが」
「流石に俺や達也のような方法は悪手極まりないがな」
幼少期から感情を殺すよう躾けられてきた達也、そんな彼と対等に並べるよう死に物狂いの努力を重ねた悠元。流石にそこまでのことをしろなどとは言えないが、自発的に努力できるようになればいいという深雪の意見には賛成だった。
今年の二科生の教育方針を仕向けたのは他ならぬ悠元だが、ここについて教職員からは特に問題視するような発言は聞こえなかった。槍玉に挙げられそうな廿楽からも特に相談されてはいないし、カウンセリング関連で怜美と会話した時もその辺の追及は聞かなかった。
そんな一幕もある第一高校の放課後、悠元は珍しく部活連の本部室に詰めて書類に目を通していた。流石に会頭を通さなければならない予算執行の決裁や、各クラブへの九校戦に関する話し合いの段取りを始める時期で、過去の資料を見つつ書類作成に取り掛かっていた悠元だが、傍に置いた情報端末にニュースの着信が入ったことで作業の手を止めた。
「(大方、大亜連合のアフリカ侵攻が原作の流れだが……)……はあ?」
悠元がニュースを見て、思わず気の抜けるような疑問を浮かべた。何故かといえば、そのニュースは欧州メディアを通してのものだが、その内容があまりにもファンタジーすぎた。
事の起こりは日本時間の昨晩。ニジェール・デルタ地域の奪還を目論んだ大亜連合軍が侵攻し、大亜連合軍側は戦略級魔法「霹靂塔」を使用したものの、援軍として現地を防衛していた二個大隊のフランス軍魔法師部隊「閃光の翼(ヴォワチュール・リュミエール)」が戦略級魔法に怯むことなく約五万の大亜連合軍を壊滅に追い込んだ、とのこと。
現地に住む住民やフランス側に死者は出なかったが、怪我人が十数人。大亜連合軍側は連合政府の発表で数百人の死者が出たとしているが、アフリカ連邦政府の公式発表によると『少なくとも二万人の死者と身元不明者が約一万人にも及ぶ』と発表している。
「戦略級魔法でインフラは破壊されてるだろうが、フランスが表立っ

て軍を派遣したとは随分思い切ったな……というか、大亜連合は馬鹿か？」
　これは大亜連合のみならず、当該国の軍事行動を看過した東南アジアとインド・ペルシア連邦、それとアラブ同盟にまで責任が波及する問題。当然、アフリカ連邦は大亜連合軍の通過を許した諸国に責任の所在と行動の把握の有無を問い質すだろう。
　その辺の仲裁をするよう南米連邦と日本政府に急いで暗号メールを送ったので、この辺の問題はすぐに解決するとみている。何せ、日本としては経済同盟を結んだ相手を講和状態の大亜連合が攻めた以上、厳しい態度を取らなければならない。
　そして、大亜連合の新たな戦略級魔法師として劉麗雷（リウリーレイ）の名を公表した。傍から見れば影武者という線は捨てきれないが、実際に当人と会ったことのある悠元は画像に移っている彼女が本人であるとすぐに理解できた。
　今回の作戦を大亜連合の抑止力が健在というアピールに繋げたかったのだろうが、そもそも原作ではブラジルが［シンクロライナー・フュージョン］を使ったせいで非難を浴びているところに大亜連合が戦略級魔法を投じた。当然、大亜連合に対する非難が起きても不思議ではない。まあ、かの国の過去を振り返ったところで、そんな非難など痛くも痒くもないと開き直るのがオチだが。
　達也たちと合流した喫茶店アイネブリーゼでも、先程の戦略級魔法についての話が真っ先に出てきた。先月初めに新ソ連国内で［トゥマーン・ボンバ］と目される戦略級魔法が使われただけに、魔法を使う人間としては気が気でないのだろう。
「魔法を公表したのは他国への挑発ってことなんでしょうけど、部隊が壊滅した事実を隠すためのカモフラージュに聞こえてくるわね」
「その線が濃厚だろうね」
　被害を隠すために強大な力を誇示する――――古今東西で行われてきたことの繰り返しにエリカが正直な感想を述べると、それに対して答えたのは幹比古であった。人が好い彼らしからぬ台詞ではあるが、今どきの男子高校生と考えれば妥当な受け答えであった。

「にしても、［十三使徒］として公表されたのが１４歳とは。俺らよりも年下というのがな」
　世界で公表されている戦略級魔法師でいえば最年少なのは間違いないが、その点で言えば悠元は僅か１２歳で戦略級魔法師となっている。この事実は国防に関わる国家機密として伏せられているのは言うまでもないが。
「年齢を聞いて驚きましたけど、あんなちっちゃな女の子が戦略級魔法師だなんて……」
「国の事情が違うとはいえ、何だかやりきれないですね……」
　ここにいる面子の中で比較的穏健な部類に入るほのかと美月がそう感想を述べてもおかしくはない。何せ、普通なら公表することすら避けるであろう戦略級魔法師をあえて表舞台に出したのだ。すると、達也が問いかけてくる。
「悠元、あの映像に映る少女は本物だと思うか？」
「間違いなく劉麗雷本人だと断言できる」
「どうして？」
「俺が爺さんの旅行に付き合っていたという話は散々聞いていると思うが、大亜連合に行った際に劉雲徳と劉麗雷の二人に会っているからな」
　各国の［十三使徒］自体、普通ならば政府要人として会うことが難しいレベル。だが、悠元は殆どの戦略級魔法師と面識を有しており、その一人が［灼熱と極光のハロウィン］で亡くなった劉雲徳だった。
「二人の関係性が実の血縁関係というのも知っている。ここだけの話、劉雲徳本人から孫娘の縁談を組まれそうになった……本人が死んだお陰で白紙になったが」
「死んだって……それ本当なの？」
「劉麗雷とはたまにプライベートのメールでやり取りしていたからな……抓らないでくれ、深雪さんや」
　交友関係の広さは元々祖父の影響であり、原作でも重要な立場にいる人間なのでそれとなく気に掛けていただけに過ぎない。尤も、隣に座る婚約者（婚姻は確定事項）から焼きもちを妬かれている状況に、悠

元は一息吐いた。
「悠元にかかると、全ての秘密が公然の事実になってしまいますね」
「好きでそうなった訳じゃないんだがな」
好奇心は猫を殺す、の言葉を悠元は誰よりも知っている。表社会で有名となった前世の親族のせいで割を食い、面倒事に巻き込もうとする大人たちや同年代の少年少女を快く思わなかった。だからこそ、人が忌避しがちな系統の趣味に没頭した結果、『魔法科高校の劣等生』を知るきっかけになった。
その性根は転生しても健在であり、自分に力があろうとも栄光や名誉を必要以上に追い求める気はない。要らぬ妬みや恨みを買わないためだが、万が一の場合は自らの手で守れるだけの力を欲した。
行きついた先がかの陰陽師すら超えてしまい、婚約者だけでなく愛人まで囲う羽目になってしまった。結局、自分のストレスが性欲に昇華された挙句、複数人で誘惑してくる相手を無碍にできずに押し倒す日々。
それを苦に思わないどころか、寧ろ被独占欲を剥き出しにしてくる自分の婚約者たち。そして、とうとう一条茜にまで及んでしまった。事後の彼女は『あんなに愛されてしまったら、今すぐにでも東京に転校したくなります』と寧ろ好意が強まっていた。
こうなったのは自分のせいだが、色々解せぬ。
「それにしてもよ、アフリカには既に大きな国家があるだろ？　大亜連合がそこまで躍起になる理由が正直分からねえんだが……」
レオの疑問は尤もで、何の事情も知らなければ大亜連合が新興国家相手に喧嘩を売る――それも戦略級魔法を用いての攻撃など、世界情勢を考えれば針の筵になりかねない行為。ここで雫の視線が悠元のほうを向いた。悠元ならば何か知っているかもしれない、という期待を込めてのものだった。
「……悠元、何か知ってる？」
「俺は便利な道具を出す猫型ロボットじゃないんだが。まあ、さっき言った爺さんとの旅行絡みでニジェール・デルタ地方を訪れて大亜連合軍とひと悶着あったのは事実だ……誰か異論を唱えろよ」

「いんや、無理ね」
「だな」
大亜連合軍が躍起になった理由が目の前にいる人物のせいとなると、逆に納得できるというエリカとレオの頷きに引き攣った笑みを浮かべそうになったが、何とか堪えた上で話を続ける。
「大本の原因は憶測が飛んでいるだろうが、心当たりがあるところとなるとそれぐらいしかない。細かいことは聞かないでくれると助かる」
「そうだな……聞かないほうがよさそうだな」
達也からすれば、祖父世代の親友にして四葉の復讐劇の生き証人が関与した時点でロクなことにならないだろうと察し、悠元も戦略級魔法師クラスの実力者という事実を知るからこそ、それ以上の追及が飛ばないように声を出すことで余計なところに首を突っ込まないようにした。

◇　◇　◇

アフリカでの大亜連合軍壊滅、そしてフランスの介入があったとはいえ勝利したアフリカ連邦は国家としての発言力を強めることとなった。政府発表では『今回の一件に対する報復行動が行わない』と明言した上で、インド・ペルシア連邦およびアラブ同盟、東南アジアや日本・台湾と連携して対新ソ連・大亜連合包囲網を構築する方針で一致した。
この状況で新ソ連と大亜連合が手を組む可能性も示唆されたが、現状では皆無に等しい。何故ならば、[ブランシュ]絡みでアンティナイトをウクライナ・ベラルーシ分離独立派から入手している繋がりもあり、その部分で相容れない溝が存在している。
[アクティブ・エアー・マイン]についても軍事転用できないように威力をかなり低減させているだけでなく、必要以上の威力を出そうとすると起動式の読み込みが変化して[オゾンサークル]を発動するように組み込まれている。元々旧ＥＵはおろかイギリス連邦構成国間でも起動式のデータが融通されているため、誰がどこから入手したとしても何ら不思議ではない。

ここまでの要素もあって、達也が非難を浴びたり魔法大学がメディアに追及されることはなかったものの、西暦２０９７年５月１０日、金曜日の放課後にその事態は起こった。職員室に呼び出された悠元は、そのままの足取りで部活連本部室に向かった。

幹部メンバーのみではあったが、悠元は一息吐いたうえで声を出した。

「今年の九校戦だが、委員会の情報管理体制の問題があるという理由で中止の通達が成された。生徒会でもその報告が行われてる」

「……まあ、昨年がアレだったというのもあるでしょうけどね。深雪のフォローはしなかったの？」

悠元の言葉に対して最初に反応したのはエリカ。本人も選手として出場したため、軍事色の強い競技への変更というアクシデントに巻き込まれた形だ。この発言にはレオや琢磨も納得するような様子を見せていた。

その上で、エリカは同じように話を聞いていたであろう深雪を気遣う様な質問を投げかけた。

「一応しておいたが、万が一は達也が何とかするだろう。それはともかく、九校戦が行われないというのならば別の手段を講じる必要がある」

「別の手段ですか？」

「どうせ教職員が積極的に動くとは思えんから、九校戦中止による不満の捌け口をこちらで用意する。幸い、一昨年の魔法競技ぐらいなら一高の設備があるし、使わずに放っておくのも忍びない。いざとなれば財界の伝手でスポンサー協力はいくらでも付けられるしな」

「……つくづく、アンタの存在がバグってるわね」

エリカの率直な感想はまだしも、まずは部活連で他校の会頭と話をつける必要がある。最低でも『国立魔法大学付属高校・九校魔法競技交流会』の体に持っていくつもりだ。この辺の話はネットの噂が出た時点で千姫にも伝えており、切磋琢磨による魔法技術の向上という点で理に適っているということで話はついている。

「そういうわけで、時期自体はあまり変えないがその前提で話を進め

る。競技自体も一昨年の種目と成績に基づいた人数構成で各校と打ち合わせるから、エリカたちは出場選手の選定を頼む」
「ま、大きな打ち合わせは悠元に任せちまうからな。俺らでやれることはやるか」
「そうね。七宝も頼むわよ、次期会頭」
「は、はい！」
原作だとモノリス・コードのみの交流戦を〝九島烈を偲ぶ〟という理由で開催されたが、それで出れなかった選手の不満が解消されるわけではない。
そこのフォローをする意図も含まれているが、本来意を汲むべき大人たちの怠慢にため息が出そうだった。

他所は他所、うちはうち

九校戦中止の影響は直ぐに広まったが、第一高校は現部活連会頭の悠元の呼び掛けもあってすぐに鎮静化した。九校戦中止の理由も『世界情勢を鑑み、魔法競技の在り方を見直す』という通達によって、特段誰かを攻撃するようなものではなかった。

だが、それとは同時に妙な噂が魔法科高校九校の間に広がっていた。それは、『[トーラス・シルバー]が第一高校の生徒ではないか』という一見すると根も葉もない噂。出所はハッキリとせず、時期を探ると先月の第一回若手会議の後に突如国立魔法大学のネットワーク上に出てきたもので、この噂は今のところ魔法大学の生徒もしくは魔法科高校の生徒の間にしか広まっていない。

この世界における殆どの非魔法師――――日本国民からすれば、[トーラス・シルバー]は医療面で非魔法師に恩恵を与えた技術者という認識が強く、それが高校生となれば将来の日本にとって有益な人物である、と考えるものは少なくない。国外からすれば、その繋がりを得たいと画策したり、最悪暗殺に踏み切るという過激な考え方まで出てくる。

ただ、魔法科高校の生徒からすれば、[トーラス・シルバー]に匹敵し得るであろう人物がエンジニアとして活躍し、『不敗神話』まで作り上げてしまった達也に疑いの目が向けられることは想像に難くない。

「そういうわけでして、第一高校の設備を使うことも視野に入れて動こうかと思います」

『委員会の弱腰は治っておりませんか。なら、今回は私が運営委員長になりましょうか』

「……止めはしませんが、程々にしてください」

九校戦中止に伴う魔法科高校交流会・運営委員会の陣容として、烈には特別にオブザーバーとしての仕事をお願いした。昨年のやらかしの汚名返上をする意味でも、烈に断る理由は存在しなかった。そして、運営委員長は千姫が立候補したため、断る理由が無くなった。

『にしても、部活連にはそういう風に話したのに、悠君は何を考えてい

るのかしら？』
「……先日、情報部が自分や達也を粛清リストに載せやがりましたからね。反撃は追々しますが、その代償として富士演習場南東エリアを丸々神坂グループで買い上げようと思いまして」
　元々、国防軍の演習場は神楽坂家か上泉家の所有地を政府が借りる形（表向きの書面では国有地という扱い）で取り扱っており、国防軍の演習場を〝買い戻す〟こととした。情報部の自浄作用が作用しなかった場合、その粛清を国防軍（独立魔装大隊）に実行させた上で該当エリア――九校戦の競技エリアを接収する方向性で話を纏める。
「代わりの土地は演習場北東のエリアに用意しましたし、元継兄さんには事前に説明して外国将校向けのホテル建設を既に進めています。何かマズかったですか？」
『ふふっ、元々好きにしなさいと言っているのに、そこまで機嫌を窺わなくていいですよ』
「流石に財界や政府まで巻き込んでますので、自分でも裁量の判断が難しいんですよ」
　実を言うとフェンスの移設工事自体は既に開始しており、富士演習場のエリア変更に関する部分は蘇我大将や空・海軍の総司令官、そして総理大臣や防衛大臣にも話を通している。
　民有地となる関係で交通網の整備も行わなければならず、ここは財界の伝手を使ってホクザングループの関連企業も事業に参加してくれている。この辺は他のライバルグループと海外の案件で争っていたところに神坂グループ取締役として斡旋を行い、お互いが納得する形で仕事を分け合った形となった。
「最終的には［恒星炉］の水素燃料発電によって会場や宿泊するホテルの電気を全て魔法技術で賄うという構図にまでもっていきます。問題があるとすれば……」
『アメリカ……いえ、エドワード・クラークなる小僧ですか。流石に悠君を敵に回せなかったようですが、悠君が表立って残している功績は精々［クリムゾン・プリンス］を完封したことぐらいですし』
　魔法界で見れば膨大な功績を残しているが、一般社会で見れば佐渡

侵攻を食い止めた［クリムゾン・プリンス］以上の実力者、という認識でしかなく、使われた魔法もその詳細が不明というまさに［殲滅（ティ）の奇術師（ターニア）］の異名そのもの。

情報部の粛清リストは内密に入手したが、達也はともかくとして悠元や修司、由夢は対象に含まれなかった。克人の言葉をつかさが読み切れなかったか、あるいは箝口するように釘を刺されたか。この場合はまだ楽観視が出来ないと判断するほかに無いだろう。

「多分、第一高校や魔法協会にまで根回しが来ることが想定されます。なので、師族会議議長として動く際は達也を擁護する形で動きます……実質的には、の部分が付きますが」

『小僧や小娘たちは滅私奉公の本質を分かっていませんからね。１０年以上も国外を飛び回るという辛さを味わっていない輩に言えた台詞はありません』

千姫だけでなく、剛三も世界群発戦争で長いこと国を空けていた。国を守るために世界中を飛び回ったのは４０～５０歳代の時。魔法師の数や質が安定しなかったとはいえ、実力のある人間に全てを任せるような形となったことに対して十分な補償をしたとも言えない。

政府としては一応補償はしたが、元老院の暴走を止められなかった意味でも神楽坂家と上泉家に負い目がある。何故かというと、千姫にとって魔法の師匠にあたる人物の娘が剛三の息子に嫁ぐ予定だったが、その人物も樫和家に殺されたとのことだ。そのため、千姫は師の代わりに復讐を果たす意味でも、剛三と共に先代の樫和と東道を殺したらしい。

聞くに陰陽師系列の蘆屋（あしや）氏の血を継ぐ人間だったそうだが、元を辿れば蘆屋道満の不義によって安倍晴明を怒らせたのが原因の為、蘆屋氏は安倍氏の怒りをこれ以上買わないために陰陽師の道から遠ざかって、京から離れた遠方の地で占い師という形で魔法を後世に継いでいた。

そして、千姫の祖父に当たる人物が蘆屋氏を許し、京都に戻った。当時の蘆屋家当主が極めて優れた資質を有していたこともあり、当時から神童とも噂された千姫の師となったそうだ。なお、亡くなってし

まった娘には妹が三人いて、いずれも千姫の斡旋で魔法師の家に嫁いだと聞いている。
閑話休題。
「一番重みのある人間が言うと、断然違いますね」
『むー、私はまだしわくちゃになってませんよぉ』
「誰も母上の容姿と実年齢の話はしていないのですが」
ともかく、九校戦中止に関する対案は自分を中心に進める必要がある。既に護人はおろか元老院の中核に就くことは未だ実感がないというのが正直な感想だ。
◇　◇　◇
第一高校はなんだかんだ言って達也のシンパが多い上、九校戦で打ち立てた実績を見れば誰も文句のつけようがなく、加えて現会頭の悠元のことを考えれば誰も達也を咎めようなどという気など起きなかった。
だが、他校の生徒からすれば、今回いきなり中止となった九校戦の裏に何かがあると邪推する人間は少なくない上、ネット上に流れていた噂を鵜呑みで信じてしまい、達也に対する批判へと繋がるケースが後を絶たなかった。
その一例を翌日の放課後、悠元はカフェテリアで休憩していた時に聞いた。
「金沢――――三高に戻るよう言われたって？」
「ええ、その通りです。私だけでなく、沓子や栞も同様に言われていることでしょう」
周りからすれば、悠元が複数の婚約者を持つことは風の噂程度に流れており（一昨年の時点で深雪、雫、姫梨がいたために例が増えた程度で済んでいた）、愛梨もその一人ではないかという噂も存在した。特に否定する理由は無い訳だが、互いに師族会議の家として話す内容は当然遮音フィールドを張っている。
「九校戦中止だけならそこまで神経質にならないが……例の噂のせいか？」
「ええ。父の話を聞くに、単に達也さんを悪者に仕立ててストレスの

捌け口を作りたいようにしか見えませんもの。なので『戻る理由がない』と前田校長にお伝えしました」
「将輝はともかく、真紅郎（ジョージ）の胃が心配だから胃薬でも送ろうかな」
「十代で胃痛に悩まされそうな性分ですものね、彼は。誰のせいがとは口に出しませんが」
　天才肌の人間でも天然には勝てない、という一例を垣間見たことはさて置き、愛梨から詳しい内容を聞くと、あまりにも稚拙という他ない内容だった。
　九校戦中止に関して動揺がみられたが、更に稚拙だと思ったのは三高にとって一番の悪役（ヒール）として達也が挙げられた上、今回の九校戦中止の原因を達也にぶつけているらしい。将輝はそれに賛同せず咎めているが、そこまで効果がないそうだ。
「一高にいることで家の悪評が広がるというのなら、俺が声明を出してでも咎める用意はある。俺が言うのもどうかと思うが、高校生の分際でエリート気取りなんて誰と比較しての話なんだ、ということになりかねん」
「……そう言われてしまうと、中学校時代の自分に対して助走をつけて叩（はた）きたくなりますわね」
「別に愛梨のことを咎めたつもりはないんだが」
　達也に対する個人攻撃の部分は九校の部活連会頭による会合でも見られ、悠元が八校からの追及に対して応対したが、『噂だけでこちらの生徒個人を誹謗中傷するならば、各校の生徒の品位を疑うだけでなく、将来の魔法師としての品位にも繋がる。沈静化させるつもりがないのならば、国立魔法大学学長に直接訴えることも視野に入れる』という言葉に他校の会頭達は狼狽えていた。
　この程度で狼狽えるのならば、クラブ活動の統括なんて性分ではないと示したようなものではないのだろうか……と思わなくもない。
「しかし、勝てないからと言って陰口を言うのは別に構わないが、大事にするのは看過できん。挙句の果てには『一高は出場するな』とか、勝つための努力云々ではなく自ら『勝てない』と諦めたに等しい」
　文句や不平を持つことは別に咎めはしない。だが、それを相手への

誹謗中傷へ繋げること自体が正気を疑いかねない。愛梨と沓子、それに栞は『三高に戻る気は無い』と宣言したようなもので、この辺は学校の事情よりも家の事情を優先してくれた形になるだろう。
「無論、十師族や師補十八家としてのアドバンテージは否定しないが、それだったら渡辺先輩やエリカは勿論、それこそレオはどうなるんだって話だ」
「……まあ、その辺は悠元さんの協力があってこそでしょうけど」
「否定はしないが、ただでさえ強い卒業生や在校生まで『達也のお陰で勝てた』とでもいうつもりなのかね？　それこそ〝恥を知れ〟だな」
この日の夜、悠元は国立魔法大学学長に対して根も葉もない噂による生徒個人への誹謗中傷を咎める様に要請。昨春の一件もあって学長は事態を深く受け止め、第一高校以外の魔法科高校に対して『出自不明の風説による生徒個人への誹謗中傷は、極めて魔法科高校の生徒にそぐわぬ行為であり、直ちに騒動を収束させること』の内容を通知。
これで達也個人への攻撃となるような状態は一旦終息したものの、それを再度焚き付けるような事態が海の向こうから齎されたのだった。

◇　◇　◇

日本時間５月１２日の日曜日。ロサンゼルスで現地時間前日１３時。海の向こうから届いたニュースは、国際プロジェクトに関するものだった。
提唱者はエドワード・クラーク。北アメリカ合衆国・国家科学局（ＮＳＡ：Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｓｃｉｅｎｃｅ　Ａｇｅｎｃｙ）に所属している政府お抱えのシステムエンジニア。その声明はＵＳＮＡが各国に呼び掛けるという性質を持つものだ。
現状は何の根回しも出来ていない、一方的に打ち上げたプロジェクト――『ディオーネー計画』の概要は、木星圏の資源を用いて金星をテラフォーミングするという夢物語。
金星は、星の直径と重力が太陽系の惑星の中で地球にほど近いものの、分厚い二酸化炭素の大気と硫酸の雲という従来の科学技術では膨大な労力を有する難題により、火星のテラフォーミング計画が優先し

て進められている。
　地球からの距離はともかくとしても、ただでさえ低重力による人体の影響は過去の宇宙開発競争で証明されており、金星が開発可能になれば悪影響は低く抑えられる。その理想を実現するために魔法技術で大気改造を行うというのが『ディオーネー計画』の概要だ。
　エドワード・クラークは『ディオーネー計画』の推進に必要な人材として九人の名を挙げた。主だったところで目立ったのは［十三使徒］の一角であるイギリスのウィリアム・マクロード、新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの名が挙がった。実現性の可否はともかくとしても、名立たる魔法学の権威として協力を求めたのは当然の流れとも言えた。
　魔法技術を用いるということで、研究者以外にも［マクシミリアン・デバイス］の社長ポール・マクシミリアン、［ローゼン・マギクラフト］の社長フリードリヒ・ローゼンの名が挙げられた。いずれも世界に名立たる魔法工学メーカーのトップまで名が挙がったのは妥当だろうと納得感があった。
　そして、エドワードを含む九人が発表されたところで、残る一人の名に注目が集まることを見越した上で彼はこう告げた。
『そして、プロジェクトに是非参加してほしい技術者がいます。居住国の法律で未成年の為に実名は申し上げられませんが、［トーラス・シルバー］の名で活動している日本の高校生です』
「……アメリカには懲りるという文字が辞書の中に存在しないのか？」
「酷く辛辣だな、悠元」
　朝食を終え、自動録画されたニュースを見て吐き捨てた悠元の台詞に対して、達也は一つ息を吐いた上で窘めるように呟いた。元々［トーラス・シルバー］の公表は遅くとも高校卒業時にすると決めていたし、四葉家にも事情は説明済みのため、特に動揺は見られなかった。
　原作だと深雪が泣いてしまう事態になったが、この辺の事情を話している為か特に取り乱す様な素振りは見られなかった。その代わりに深雪からせがまれて（物理的に）熱い夜を過ごしているわけだが。

なお、洗い物のために深雪と水波はキッチンに立っているため、リビングには悠元と達也しかいない。
「水面下で［恒星炉］の計画を進めていたのは、これがあったからか」
「そういうことになる。これで破壊工作を仕掛けた場合、当該国に莫大の賠償を支払わせる腹積もりだが。その意味で、達也は当分忙しくなるだろう」
「それは悠元にも言えたことだろうに」
原作における『孤立編』にあたるが、裏を返せば『多忙編』という変哲もない名が付きそうなぐらい忙しくなるのは目に見えている。
［トーラス・シルバー］絡みはＣＡＤ関連もあるので仕方がないにせよ、未だ高校生の身分で社会人のような忙しさを体感すること自体感覚が狂いそうになる。
「ともかく、［トーラス・シルバー］公表の前倒しを前提で考える必要がある。達也には言ってなかったが、真夜さんには［トーラス・シルバー］の正体がバレている前提の話を通しているから、対処は考えてくれているはずだ」
「そもそも、あの母上が考えない筈もないだろうし、葉山さんも賛同するだろうな」
実の息子を地球外に飛ばそうというのだ。しかも四葉家の次期当主を。それが明るみになった際、真夜が怒ってＵＳＮＡに［流星群（ミーティア・ライン）］を乱発しかねない事態になる方がかなりヤバいことになる。
その意味でも、達也を国外はおろか宇宙になんて行かせる選択肢など〝ゼロ〟に等しい。正直、エドワードは破滅願望でも有しているのかと邪推したくなってしまう。

名誉が欲しければ自分でやれ

ディオーネー計画は主に４つのプロセスで構成されている。

一つ目はロケットを魔法で打ち上げることで必要な人材や資材を宇宙に送り出すというもの。その前例は世界群発戦争の際に極超音速質量弾の砲台を宇宙に作るという計画が持ち上がった際、二人の魔法師が加速・加重系の魔法を用いることで大規模質量体を宇宙空間に飛ばすというもの。

前世でよく見たような液体燃料による噴射方式のように天候をあまり気にしなくていい利点があるだけでなく、費用対効果の点で有益とされた。しかし、過去の打ち上げではそれに携わった魔法師が全員亡くなったという悲惨な結果を生んだ。原因は魔法そのものの欠陥を把握できなかったＵＳＮＡの責任に他ならない。

二つ目は火星と木星の間に存在する小惑星帯（アステロイドベルト）で、小惑星に含まれる金属資源を取り出すプロセス。金星の大気改善には大量のニッケルが必要となるが、それは『Ｍ型小惑星（太陽系の小惑星のうち、金属質のもの。ニッケルや鉄を多量に含む。隕鉄や石鉄隕石の起源と考えられている）』から掘り出すことで解決する。

金属を全て宇宙から調達できれば、地球上の資源を使う必要が無くなる。ここでも魔法を用いることで推進剤を不要とする利点はあるが、それはあくまでも魔法師が近代における炭鉱夫同然の労働環境を肯定した場合の話となる。

三つめは木星から水素を採取して金星に送り、サバティエ反応（水素と二酸化炭素を高温高圧状態に置き、ニッケルを触媒としてメタンと水を生成する化学反応）を起こすことで金星に水を生み出す方法。そして、四つ目はガリレオ衛星のカリストから氷塊を切り出して金星に送り、第三のプロセスによって起こり得る大気の高温化を防ぐというもの。

ディオーネー計画はこの４つのプロセスで構成されているわけだが、一番ネックになりそうなのは第三のプロセスである木星からの水素採取だろう。

なにせ、木星自体下手すると太陽まで行きそうだったガス系惑星の一つで、高密度かつ人間が活動できる範疇の温度ではないことは過去の観測データで判明しているだけでなく、魔法を使用するとしても危険な作業となる可能性が極めて高い。他のプロセスでも無重力・真空状態の宇宙空間で作業するという危険を孕んでいるが、このプロセスが一番危険が伴うと思われる。

世界群発戦争によって宇宙開発は永らく頓挫したような状態となっただけに、安全性を保証できるとは必ずしも言えない。そんな状態の科学技術を魔法技術で補完して宇宙開発を行う……万が一のアクシデントをきちんと担保できるとは到底思えないのだ。

きちんと考えれば杜撰どころか危険極まりないプランとしか言いようがなく、しかも万が一の場合として魔法師が事故で死んだ際の責任を誰が取るのかも明言していない。国際魔法協会が取るのかと言えば、経済的な補償が出来ない組織が責任など取れるはずもなく、提唱国としてＵＳＮＡが支払うのかと言えば不明瞭。

とどのつまり、無責任極まりない立案の時点で却下をするべき案件。

ディオーネー計画の呼び掛けがあった翌日の月曜日。［トーラス・シルバー］探しに躍起になるメディアは……普通ならハイエナ根性でも出して探そうと目論む輩が多かれ少なかれ出るだろうが、表向きは何事も無い平穏な日常であった。

いや、何もない訳ではなかったが、悠元からすれば婚約者たちとの関わりがさらに加速した部分は否めない。詳細を書こうとするとあまりに性愛塗れの描写が並ぶため、発言は慎むこととする。

そんな不純異性交遊のことはさて置き、魔法科高校――第一高校の中はいつも通りに近い日常であった。九校戦中止のショックは大きいが、特に３年Ａ組は一昨年・昨年の代表選手が多いために話題を意図的に避けている傾向がみられる。

何せ、槍玉にこそ挙げられはしたものの、達也の功績は第一高校にいる人間なら誰もが最早認めざるを得ない実績を持っているし、彼がエンジニアを務めたことで九校戦四連覇の偉業に足を踏み入れるこ

とが出来た。その彼を咎める生徒など、もういないに等しい。
その代わり、話題となるのは日曜の宇宙開発に関するものが殆どであった。
「やはり、ディオーネー計画のことについての話題が多いですね」
「そうだな。ロマンはあるだろうが」
過去に第二次大戦後の冷戦時代において、世界の主導権を握るために宇宙開発競争が加熱し、結果は旧合衆国が折れるような形でロシアの主導によるロケットが宇宙へ飛ぶという状態となった。
ディオーネー計画は表向き魔法技術の平和利用を謳っているが、そもそも反魔法主義の風潮を跳ね除けるという大義名分があるとはいえ、魔法の平和利用を今まで考えようともしてこなかったＵＳＮＡにそれが出来るのか？　という疑問は尽きない。
「ロマンはあっても、飯のタネになるとは思えないけどね。マスコミにとってはその限りじゃないけれど」
「それは確かに……ん？」
すると、別の用件で開いていた悠元の端末にメッセージが表示された。その内容は校長室に来るよう指示されたもので、近くにいた姫梨とセリアもそのメッセージを目撃する格好となった。
「……悠元に何の用事でしょう」
「予想は付くけどね。行くの？」
「ここでの俺は一応高校生だからな。一応年長者の呼び出しには従うさ」
今日は早めに学校に来たため、深雪はもとより雫やほのかもまだ登校していない。当然、達也もまだ学校に来ていない。原作の展開を考えるならば達也を説得するような流れなのだが、表立って魔工技師として働いていない自分が巻き込まれる意味が分からない。
在籍上は［トーラス・シルバー］チームが置かれているＣＡＤ開発第三課に勤務しているのは間違いないが、これまで発売したＣＡＤや発表論文は全て［トーラス・シルバー］を個人として表記していない。
悠元は大人しく立ち上がり、姫梨とセリアは事情を知る側の人間の為、察した上で悠元を送り出したのだった。

校長室には、校長の百山と教頭の八百坂、それに魔工学科の担当教官であるジェニファー・スミスがいた。重厚な机に百山が座り、その両端に八百坂とジェニファーがいる形だった。一応『失礼します』と断りを入れた上で百山の前に立つと、百山は前置きを置いて問いかける。

「君を呼んだのは他でもない。君は［トーラス・シルバー］なのかね？」

「いいえ、違います。校長先生は何を根拠にそんな問いかけをなさったのですか？」

百山の問いかけに対して悠元は明確に否定した。牛山から［ミスター・トーラス］などと呼ばれることはあるが悠元は実質的な呼び方として許容しただけであり、メディアで一時期騒いでいた［トーラス・シルバー］ではない。

ここに達也がいれば互いに険悪な雰囲気が流れていただろうが、今のところはまだこちらが高圧的に出る必要もないと判断して悠元は百山の断定めいた発言の根拠を求めた。すると、百山はデスクから一通の手紙を取り出した。

「アメリカ大使館を通じて、ＵＳＮＡ国家科学局、ＮＳＡから書状を受け取った。昨日、私の自宅に大使館員が態々持参したのだ」

百山は第一高校の校長だが、魔法教育の国際的権威としても名高い。公的機関の学長ではあるが民間人同然であり、外交に携わる立場ではない。そんな立場の人間に大使館員が外交文書同然の手紙を寄越すこと自体、異例と言う他ない。

リストに載らなかったはずの自分を計画に参加させるような手紙を持ち込んだ。机の上に置かれているのは二通だが、片方は間違いなく達也に向けてのものだろう。そうなると、達也の手紙はまだしも、自分への手紙を準備したのはエドワード・クラークではなくレイモンド・クラークの線が濃厚となる。

「ここには『［トーラス・シルバー］に匹敵し得る技術者として、ミスター悠元・神楽坂がディオーネー計画に参加できるよう取り計らってほしい』と書かれていた。この中には君が［トーラス・シルバー］ではないかという疑念も書かれていたため、確認の為に問い質せても

らっただけだ」
　その手紙を見るに、恐らく国防軍方面で［フリズスキャルヴ］を使って上条達三としての自分を探り、［トーラス・シルバー］を仄めかすような文面まで準備した段階でＵＳＮＡ政府の上層部やＵＳＮＡ軍参謀本部も自分や達也の情報をある程度知り得ている、と解釈した。
　外交文書に質問を載せることはあるかも知れないが、それを渡す相手のことを鑑みて書いたとは到底思えないことに内心で溜息を吐きたかった。
「自分は［トーラス・シルバー］ではありません。いくら国際的なプロジェクトと言えども、今の自分は国家の重責を担う身として国許を離れることなど出来ません」
「我が校の生徒が国際的なプロジェクトに招かれる。これは非常に名誉なことだと考えている」
　悠元の発言を聞かなかったばかりか、心にもないことだと聞き流しつつ鋭い眼光を向ける百山。だが、それに比例して悠元の存在感も無意識的に外れていく。それを一番『マズい』と読み取ったのは、他ならぬジェニファーだった。
（マズい……校長先生は何を考えているのですか）
　ジェニファーは魔工学科創設前に悠元の姉である佳奈や美嘉を教え子としていた。その際に聞き及んだ美嘉の一高退学騒ぎはジェニファーを震え上がらせた。
　何せ、平然と十師族の一角である三矢家の子女を危うく退学させかけたこともそうだが、その美嘉ですら『弟は名誉や栄光なんて求めない。そんなことを口にしたら穏便に済みませんよ』と口にしていた。それは流石にないだろう……と思っていた過去の自分を本気で殴りたいと思うほどに、今の状況に対して冷や汗が流れる。
　そんな彼女の心境の中、悠元と百山の相対は更に険悪なものとなっていく。
「私だけではない。国立魔法大学の学長も同じ意見だ。君がＮＳＡの国際プロジェクトに参加するなら、当校の卒業資格と国立魔法大学への入学資格を与える。プロジェクト参加により魔法大学の授業が履

修出来ない場合は、参加期間に応じて自動的に単位を与え、期間が四年に達した時点で魔法大学卒業資格を与える」
「――」
絶句というより呆れ返る、と言う他ない。自分の目の前にいる人間たちはディオーネー計画の根本的な問題を読み取れていない。
大体、惑星丸ごとテラフォーミングするという時点で初期メンバーが１０人といえども、最終的に動員される魔法師の数は数万人から数十万人、下手すると地球上にいる全ての魔法資質保有者が動員されかねない。
星一つをそんな簡単に改造できたら誰も苦労しない。現在の魔法教育の権威である百山がそれを理解できない筈がない。政府やメディアに変な圧力を掛けられたくない、という学校の事情を鑑みることは出来るが、今の百山の発言は悠元を怒らせるには十分すぎた。
「神楽坂君。君も――」
「言いたいことはそれだけか。第一高校・学校長、百山東」
「っ……!?」
悠元とて部活連会頭という学校の風紀を正す立場であり、その立場を以て辣腕を揮ったりすることはあったが、家の立場を振り翳すことはしていない。それは一昨年の九校戦前に詰め寄ったクラスメイトを気絶させたことが噂として広がり、悠元が神楽坂家の人間となったことで誰も彼に擦り寄ろうという気概のある輩はいなかった。
生徒ですら踏み越えなかったラインを百山が踏み越えた。ここから魔法科高校の生徒として対応する必要は無いと判断し、悠元は神楽坂家当主として百山と相対する。
「人様の都合も考えずに軽々しくプロジェクト参加を促すなど、それはもう強制としか言いようがない。そんなに我が校の名誉が必要ならば、校長自らプロジェクトに参加すればいい」
「だが、ＮＳＡが求めているのは」
「知らんな、海の向こう（アメリカ）の都合なんてものは。大体、説得と言うならエドワード・クラーク本人が出向くべき話であって、それでも学校の単位を盾にしようものならば、直接国立魔法大学の学長に問い質す」

いくら相手が未成年と言えども、学校を盾にするようなやり方は許されない。何せ、基本コードを発見した真紅郎や佐渡侵攻で功績を挙げた将輝が当時在籍していた中学で何らかの便宜を受けていたという話は聞いたことがない。

日本はＵＳＮＡと軍事同盟関係にあっても、裏を返せばＵＳＮＡに従う大義はそれしかない。ＦＡＥ理論についても当初は共同研究していたが、結局はＵＳＮＡだけで完成させて日本に技術供与を行わなかった。横浜の一件も大亜連合軍の侵攻に際して米軍を援軍として派遣しなかったに等しい。

そればかりか、悠元や達也の戦略級魔法を危ぶんで暗殺部隊――〝シリウス〟や〝ポラリス〟を送り込んだ挙句、パラサイトという向こうが解決すべき問題まで持ち込んだ。持ち込んだのは顧傑や周公瑾によるものだと判明しているが、つけ込まれる隙を作った時点でＵＳＮＡに道義的責任が生じる。

「そもそも、説得がしたいのならば自分のところに直接手紙を送ってこればいいだけの話だ。こんな堀を埋めるようなやり方しかしない時点で、ディオーネー計画の正当性を疑いかねない」

「……神楽坂君、君はどうあってもプロジェクトに参加はしないと？」

「最初からそう言っている。何だったら、姉にやった様に今ここで退学を勧告するか？」

そんなことが出来るはずはない。何せ、第一高校史上最強の魔法師にして、三高の［クリムゾン・プリンス］を2年連続で完封した実力者。おまけに現在まで学年主席を維持している成績を有する人間を切れば、神楽坂家・上泉家・三矢家の少なくとも三家が百山を社会的に抹殺しかねない。

それだけでなく、第一高校の成績優秀者を『国際的なプロジェクトへの参加を拒否した』という理由だけで退学なんてさせようものなら、間違いなく百山の権威は地に落ちる。ひいては第一高校の評判にも直結するだけでなく、魔法大学の評判にも影響してくる。

冷や汗を流す百山は気配を放っている悠元に対し、暫し考えた後にこう述べる。

「……ＵＳＮＡからの回答期限は定められていない。なので、今日から君の授業出席を免除する。出欠に拘わらず、定期試験を受ける必要もない。講義もＡ評価として判定する」
「（答えを引き出すのではなく、分が悪いと判断してそうしたか……）今回はその提案を呑もう。だが、俺の心は一切揺るがない。此方が満足し得る対価を持ってくることが出来たら、話し合いに応じるつもりがあるとだけ言っておく」
『尤も、そんな対価がアンタに用意できるかなど知らんが……』とは言わなかったが、そう吐き捨てて、解放していた意識を抑えた上で悠元は乱暴気味に校長室の扉を開閉して去っていった。
廊下に出て少し歩くと、視界の向こうから一人の男子生徒――――達也の姿が目に入った。達也も悠元が来たことに少し驚くような表情を見せたが、互いに何故呼ばれたのかを察した上でゆっくり近づいてきた。
「朝から大変だな、達也。大方ディオーネー絡みなんだろうが」
「そういう悠元こそな。……あのことは聞かれたのか？」
「聞かれたが、俺は当事者じゃないからな」
関与はしているが、表立って［トーラス・シルバー］を名乗っているわけではない。あくまでも関与しているのは上条洸人としてであり、神楽坂悠元として一切関与していないからこその言葉に達也は思わず苦笑していた。
「部活連会頭なのに授業に出なくてもいい、と言われるとは露にも思わなかったが。ともかく、細かい話は放課後で話そう」
「そうだな、分かった」
悠元はそのまま教室に戻り、達也は校長室へと歩を進めていく。

閑話　メイトリクス大佐

　呼び出しを受けたジェラルドが赴いたのはホワイトハウスの大統領執務室。周りの人間もジェラルドを見て同情の視線を向けるほどに疲れ切っており、それは対面したジョーリッジ・D・トランプ大統領からみても確かな事実であった。
　流石のジョーリッジもジェラルドを気遣うように声を掛けた。
「呼び出して済まないな……家に帰れていないと聞いたが、大丈夫かね？」
「……ええ。話を聞く程度なら大丈夫です」
「なら、遠慮せずに座ってくれ」
　流石に立たせたままでは倒れそうな気がしたため、ジョーリッジは近くにある応接用のソファーに座るよう勧めると、ジェラルドが「失礼します」と頭を上げた後で座った。それを見た上で、ジョーリッジは対面する形で腰かけた。
「ディオーネー計画のことで多忙を極めている君には申し訳ないことだと思うが、安全保障局のエージェントとしての君の手腕を買って、一つ仕事を頼みたい」
「仕事ですか？」
「そうだ。流石に連絡ではマズい内容の為、君を直接呼ばせてもらった」
　そう言ってジョーリッジは懐からメモリーカードを取り出す。ジェラルドは受け取った上で携帯端末で読み込み、情報を読み終えるとカードをジョーリッジに返した。
「シールズ少佐の護衛ですか。ですが、彼女は帰化して日本で暮らしている筈では？」
「それなのだが、軍上層部が彼女を一度帰国させて〝アンジー・シリウス〟少佐に任務を与えるらしい……君の予想が悪くも当たってしまったな」
　ジョーリッジの言葉にジェラルドは首を傾げた。現在、反魔法主義の勢いが日を追うごとに増しているのは事実だが、ここで戦力として

のリーナを呼び戻して戦略級魔法を使おうものなら、確実に新ソ連の二の舞でしかない。
「正直に言って、聡明な人間ならば思い止まることを見越しての予想だったのですが、どこまで愚かなのですか……それを提案した側も受け入れた軍も。そんなんだから俺の母さんは……すみません、閣下」
「気にしなくていい。君の怒りは尤もであるし、暗闘を防げなかった責は私にもある」
　エルドレッド同様、ジェラルドの母親も軍人魔法師だった。それも先代の〝シリウス〟ことウィリアム・シリウス――本名はヴィルヘルミナ・バランス。ジェラルドにとっては厳しくも優しい母親。
　それを奪ったであろう新ソ連の魔法師に対し、ジェラルドはいつか復讐を果たす意思を心の奥底に隠して、政府機関の人間となることを呑んだ。ジェラルドの目の前にいるジョーリッジは彼の感情を理解している数少ない一人。
「閣下は関係ありません。母を奪ったのは新ソ連であり、閣下は国を守る為に苦心しただけのこと。国に殉じた精神は軍人として褒められるべき栄誉です。亡くなった魔法師たちを人として弔ってくれただけでも嬉しく、私は閣下に恨みを抱きません」
「ジェラルド君……ありがとう。それで、話の続きをしていいかね？」
「はい、お願いいたします」
　リーナを帰国させようという命令自体は軍の上層部から出たものだが、ここの根拠がハッキリとしていない。いち政府機関の人間でしかないエドワード・クラークから出たということは勿論だが、ジョーリッジが一番訝しんだのは〝とある空母〟の出動要請であった。
「エンタープライズを大西洋に派遣？　あの〝曰く付き〟の空母をですか？」
「それもエドワード・クラークからの要望だそうだ。別にロンドンで話しても誰も咎めないだろうが、そうしなかったとなれば……」
　新動力――――いや、〝人道を著しく失した動力〟と言っても過言ではない機関が使われているＵＳＮＡ最大の空母。動力が不明という点では日本で就航した新型空母の存在があるが、ジェラルドの見立て

では日本の方が遥かにマシという予想を立てていた。
　その空母を派遣することもそうだが、今現在アフリカや南アメリカ方面で大きな諍いが起きていない以上、大西洋に派遣して睨みを利かせる理由がないし、リーナを連れてくれば余計に悪化しかねない。
「新ソ連――――イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが動くとみているのですね？」
「その通りだ。バランス大佐も同意見だった」
　ジョーリッジとヴァージニア・バランスの見立てでは、ディオーネー計画を本格的に進めるため、大西洋の公海上で会談を持つためにエンタープライズを派遣する流れになるとみている。
　そのために、エドワードは［十三使徒］であるマクロードとベゾブラゾフを味方につける気でいる。では、その為の餌はどうするのかと考えた場合、一番該当し得るのはディオーネー計画の協力希望者リストに出てきた［トーラス・シルバー］に圧力を掛けて参加を強要するというもの。
「ですが、世界的に名が知られているとはいえ、いち技術者でしかない［トーラス・シルバー］に三国で連携して圧力を掛けるだなんて普通じゃ……まさか」
「ジェラルド君？　可能性がある話なら、遠慮せずに述べてくれ」
「もしかしたらですが、［トーラス・シルバー］が『灼熱と極光のハロウィン』の戦略級魔法師と同じ人間なのではないか、という可能性が出てきます」
「何だと？」
　あまりにも現実離れしているかもしれない。だが、決してあり得ない話でもない。その最たる例として［十三使徒］のウィリアム・マクロードやイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが挙げられる。
　彼らは国家公認戦略級魔法師として名を連ねているが、同時にその国における魔法学研究の権威としても名を知られている。研究者と魔法師が両立し得る事例がある以上、魔工技師と魔法師が両立する事例の可能性も出てくる、とジェラルドは踏んだ。
「優れた魔法学の研究者と優れた魔法師が両立し得る事例は既にあり

ます。これまで魔法師と魔工技師が両立する主だった事例はありませんでしたが、それが現実のものとなったとしても不思議ではありません」
「それも、日本の高校生となれば戦略級魔法師として招集は出来ない。だから［トーラス・シルバー］として呼び掛けたという訳か……理屈としては通るな」
理屈は確かに通る。だが、ＵＳＮＡ政府としてプロジェクトを強要することは出来ない。だから、イギリスや新ソ連を巻き込んで大国の同調圧力を以て動かそうとしているのだろう、とジョーリッジは読んだ。
「一番可能性が高いのは、リーナが恋慕した四葉家の次期当主ではないかとみています。尤も、下手に恨みを買いたくないので正直首は突っ込みたくありませんが」
「それは私もだよ、ジェラルド君。こんな時期にクラーク博士は余計なことをしてくれたと思っているよ。だからこそ、君を――安全保障局のエージェント〝ジェラルド・メイトリクス大佐〟をアンジー・シリウス少佐の随伴として指名した」
現状ジェラルドに回ってきている仕事については、本来処理するべき部署に全て回す様に国防長官経由で指示を既に出した、とジョーリッジは明言した。
これは後に分かったことだが、ジェラルドに対して仕事が集中するように仕向けたのはエドワード・クラークの仕業によるものだと判明した。別に恨みを買ったわけでもないのにそこまでされるとなると、ジェラルドにとって最早〝害悪〟と判断するに至ったのは言うまでもない。
「エドワード・クラークがごねることも懸念して、エンタープライズへは直接派遣する形とする。暫くは海の上で仕事を忘れてのんびりしてくれ」
「仕事を忘れても仕事場にいるというのは複雑な気分ですが……安全保障局、ジェラルド・メイトリクス。大統領閣下の命を受けてアンジー・シリウスの護衛の任に就きます」

ＵＳＮＡ・イギリス・新ソ連の三者が集まって会談をする……まるで〝２１世紀版ヤルタ会談〟のようなものだとジェラルドは感じていた。エドワード・クラークとしては、他の二者が戦略級魔法師であるために釣り合いを取ろうとしての行動だろうが、その任を終えたリーナが直ぐに日本へ帰すようなことはしないだろうとみている。
最悪、リーナが日本へ帰る際に一悶着起きるのは確実だろうと思い、ジェラルドは内心で深い溜息を吐きたい気分だった。
◇　◇　◇
１週間分の疲れが蓄積していたのか、久々に家に帰ったジェラルドは丸一日寝て過ごした格好となった。起きた後にシャワーを浴びて意識を覚醒させると、朝食を摂ってから自室にある調整機の上に置かれたＣＡＤを手に取った。
「……こいつを使うのはもうないと思っていたんだがな」
それは、８年前に命を落とした母親が唯一遺していた形見。内部機構はマクシミリアン・デバイスの協力を経て最新化しているが、外装は彼の母親によって数々の訓練や事件で着いた傷がそのまま残っている。
普通の任務ならば決して使うことのないそれは、ジェラルドの母親が息子に遺した〝ＵＳＮＡ第三の戦略級魔法〟が登録されている。彼女が作り出した［分子ディバイダー］、その技術を以て生み出されたが使うことなく闇に葬られてしまったもの。
ベーリング海で起きた魔法師同士の暗闘。その直前にジェラルドは母親と共にアラスカへと来ていた。その時は、そんな事件が起きるなど露にも思わなかった。
新ソ連側の侵攻の兆しがみえるため、基地にいた兵士に出動命令が掛かった。母親は息子に御守り代わりとして愛用のＣＡＤを託し、戦場へと向かった。そして、大規模の爆発が起きて……事が終わって彼が見たものは、爆発によってひしゃげた母が使っていたＣＡＤを傷だらけで帰って来た幼馴染の父親が持ち帰った位であった。
それから、幼馴染の父親に連れられる形で家に帰ったジェラルドは身寄りがいなかったため、親戚の伯母の家に引き取られた。

母が優れた魔法師だったことは知っていた。そのせいで母は死んだ。そして、母親の資質が息子に継がれていると知った軍は彼を引き取ろうとした。だが、それを拒絶したのは引き取った義理の父親もとい伯父だった。

『ふざけるな！　あの子は父親を物心つかない頃に亡くし、母親も失った！　そんなに自国の抑止力が必要か!?　心に深い傷を負ったあの子に人殺しを強要する気か！』

血の繋がりが薄くとも、あの子は私の息子同然。その彼を癒すばかりか心を壊すなんて人の風上にも置けない、と説得に来た軍人たちを容赦なく追い返した。

伯母は内部監察局のエリートというだけでなく、伯父は国防総省の高官。いくら〝シリウス〟の損失を埋めるための抑止力が必要とはいえ、深く傷ついたジェラルドに軍人など酷すぎると拒絶した。それを聞いていたジェラルドが心配そうに見つめると、伯父は笑ってジェラルドの頭を撫でた。

『お前の人生はお前が決めろ。お前の中にある力を否定はするな。その在り方は他ならぬお前が決めるべきことだ』

それから8年が過ぎた。ジェラルドは自分の魔法の力を否定せず、自らを守る力として鍛え続けている。誰かを傷つけるためではなく、誰かを守る為の力として。

「母さん、俺は戦うのが嫌いだ。それはこんな立場になっても変わらない。けど、俺自身のけじめとしてこの魔法を使う」

そうして決意したジェラルドが壁の方を見つめると、そこには真新しい海軍将校の制服がハンガーにかけられた状態で吊るされていた。

（しかし、ディオーネー計画の概要書を見たが……安全性の担保もへったくれもない危険極まりない計画を本気でやるとしても、どうする気なんだ？）

安全性も無ければ責任の所在も不透明、エドワード・クラークが全ての責任を負うと明確に示していない以上、下手すると『トーラス・シルバーと名乗って活動している日本の高校生』に全てを被せる気なのかもしれない。

その時点で計画が頓挫すれば、日本に計画の責任を問わせた挙句、戦略級魔法を無力化する腹積もりとみるのが一番可能性が高い。
（その上でアンジー・シリウス少佐に罪を被せるか……いくら俺でもクラーク親子の面倒は見切れん。せめて国に存在が及ばない範囲で自滅してくれと言いたい）
利用するだけしておいて、最悪脅迫して口封じでもするつもりなのだろう。エドワード・クラークが情報を握る以上、例えばリーナの婚約者が彼女の正体を公表するという脅しでも掛けるとみている。
ただ、将来国を離れることになる［十三使徒］の戦略級魔法師を追い出すにしても、ＵＳＮＡという国家から見れば抑止力となる存在を放棄するようなもの。それをＵＳＮＡ政府が許容できるのか、という問題も浮上する。
「とはいっても、例の空母（エンタープライズ）を大西洋に派遣するとか……名目は〝先日アフリカに侵攻した大亜連合に対する牽制〟ねえ」
人類の人口が地球上で許容できないレベルが迫っているのは事実。ただ、第三次大戦の引き金を平気で引いた挙句フォローすらしなかった列強が手を組む時点で、彼らは第二次大戦で得た〝官軍〟という栄光に縋りたいのか、とすら邪推してしまう。
そのフォローや治安の安定という意味で日本が寄与した実績は大きい。もしかすると、その実績を妬んでエドワード・クラークは新ソ連やイギリスまでも巻き込んで日本を貶めたいのだろう。
最早〝２１世紀版ハル・ノート〟といっても差し支えないディオーネー計画の有様に、ジェラルドは正直『かったるい』と愚痴を零したくなった。迷惑を掛ける側は掛けられた側の都合や事情などお構いなしに話を進めていく。これで日本が軍事同盟を一方的に破棄するような事態になって先日の軍事衛星の件を公表なんてされた日には、全ての周辺国家がＵＳＮＡの敵に回ってしまう。
「そう考えると、日本に払った３０００億ステイツドル（約３６兆円）が一種の前金になる公算が高くなったってことになるな……あの馬鹿野郎どもが」
ディオーネー計画にあたって、現状ＵＳＮＡ側で最も被害を受けた

人間としてディオーネー計画に賛同することは出来ない。それだったら、いの一番にＵＳＮＡが〝名誉ではない対価〟を示すべき話なのに、それすらも出来ていない。

つまるところ、エドワード・クラークにとって宇宙開発など建前の話でしかない。本当の目的は『灼熱と極光のハロウィン』に関わった日本の戦略級魔法師を宇宙に追放するためのもの。

そう考えると、真実を探ろうとした対象としてジェラルドがその一人に入っている……という予測であれば、明らかに人を殺しかねない量の仕事を振らせたのも納得がいく。

「流石にアンジー・シリウスを嵌めて四葉家の人間を引き摺り出そうとしているのは……言っちゃ悪いが、単に馬鹿だろ」

何せ、相手は数十人で一国の興亡に関わる事態を引き起こしたのだ。それも、身内の未来を壊されたという理由で。家族を傷つけるという行為が仮に彼女にも適用された場合、ＵＳＮＡという国家が崩壊しても何ら不思議な話ではない。

命が惜しいのならば、日本を対新ソ連への防波堤として協力関係を模索する……というのが、防衛的な観点で言えば妥当なラインになるし、ＵＳＮＡ側も余計な手間を掛けずに済む。日本の未知の戦略級魔法は確かに脅威だが、平和的な解決方法は存在していた筈だ。

だが、エドワードがやろうとしているのはその真逆になりかねない所業だし、そもそも横浜事変での初動の時点で日本にいた米軍が稚拙な行動を取った時点で信用を失っている。おまけに［スターズ］のトップクラスまで投入した挙句、ダラスでの実験で発生した［パラサイト］の後始末迄巻き込んだだけでなく、あわや核戦争にまでなりかけたところを阻止してくれた。

本来ならば３０００億ドルで済む話ではないところを日本の恩情によって助けられた話を、エドワード・クラークは更にややこしくしてしまった。［恒星炉］の技術を得ようとしているＵＳＮＡ政府にとって、一番最悪の展開になったことは確かだろう。

尤も、これが序章に過ぎないのだということは……この時のジェラルドにも分からなかった。

明確な拒否の為に

形はどうあれ、部活連のメンバーには遅かれ早かれ伝わるとみて悠元は招集を掛け、一連の事情を掻い摘んで説明した。流石に［トーラス・シルバー］絡みについては『嫌疑を掛けられた』というレベルに抑えた上で話している。

「そういうわけで、妙な嫌疑を掛けられた上に行く気すら起きないプロジェクトの参加を打診されたが蹴り飛ばした。何か質問はあるか？　遠慮せずに問いかけていいぞ」

「質問なんだが悠元、そんな簡単に事情を明かしていいのか？」

「元々トップの決裁以外仕事が無かったが、今後の引継ぎも考えて七宝に会頭代行を頼みたいからな。その為に事情を明かした。なに、いきなり全部背負わせるわけじゃないから気を楽にしてくれ」

「は、はい！」

いくら百山が魔法教育の権威と言っても、交渉の対価を学校レベルから逸脱できない以上は悠元にとって満足できる報酬を支払うことは難しい。とはいえ、あと４ヶ月後には会頭を継いでもらうためにも、今から会頭としての仕事を琢磨にもこなしてもらう腹積もりでいた。

授業の出席や定期考査の試験が必要という枷が外れた以上、悠元としても学校に縛られる時間が減った形となる。その分を充てるだけなので特段気にすることではない。五十嵐の質問に対して淡々答えると、琢磨は少し緊張しつつも返事をした。

「じゃあ質問なんだけど、悠元はそのディオーネー計画をどう見ているの？」

「言い表すなら『未来の地獄への片道切符』に他ならない。どうしてそう思ったのかは各々資料を見て考えろ。自分で考えて冷静に判断するのも魔法師として求められる役割だからな」

宇宙という未知の世界に希望を抱く人間の理想を叩き落す様なものだが、別にロマンを抱くこと自体に何も問題はない。全て説明しても納得してくれるかどうかはまた別の問題であり、悠元はエリカの問

いかけにそう答えた。
「じゃあ質問なんだが、悠元は授業に出ないのか？」
「いや、忙しくない限りは普通に出るつもりでいるが。大体、校長自身がやったことは教職員の面子に泥を塗ったも同然だろうに」
「お、おう……そこまで平然と言えるのも悠元らしいが」
百山としては国際的なプロジェクトを輩出するという名誉に駆られての行動だろうが、言い換えれば『悠元を教えられる教官がこの学校に居ません』と公言している様なものであり、第一線で活躍している魔法師でもある彼らの面子を傷つけたに等しい。ひいては百山の魔法教育の権威としての面子にも直結し得る問題。
「俺はそこまで偉ぶるつもりもないし、この学校に来て学んだことも多い。習熟の判断をロクに生徒も見れていない学校長が何をぬかすとは思ったが、存在感を出すだけで止めておいた」
「アンタが存在感を出した時点で相手が死にそうなんだけれど」
「俺はドッペルゲンガーか？」
ともあれ、悠元がディオーネー計画の招集をされたが拒否したということは部活連メンバーの中で止められることが決まった。元々深雪の抑止力として多大な信頼を寄せられているだけに、余計なことをして報復などされたくない……という意見の下での決定に、悠元は盛大な溜息を吐いた。
◇　◇　◇
部活連での話し合いを終え、悠元はそのまま町田のマンションに帰宅した。すると、３８階の生活スペースで最初に出迎えたのはエフィア・メンサーだった。
「お帰りなさい、悠元」
「ただいまフィー（エフィアの愛称として悠元が名付けた）、他の人たちは？」
「皆リビングにいます」
「分かった。着替えて来るから先に行っててくれ」
悠元の会話を終えてエフィアが先に行くのを見届けると、そのまま自室に入って手早く私服に着替え、再びリビングに降りてきた。テー

ブルには深雪を除く13人の婚約者が揃っていて、悠元は声を掛けつつ空いている席に腰かけた。
「気を遣わせてすまない」
「いやいや、これで深雪も加わる以上は下手にお兄ちゃんの機嫌なんて損ねられないしあうちっ!?」
「余計なお世話だ、と言いたいが……まあ感謝はしておく」
「素直じゃないなんてやっぱりお兄ちゃんってツンデレええっ!?」
　セリアの一言に悠元が軽い空気弾の魔法を放ち、セリアの更なる一言でプロレス技を掛ける羽目となったことに周りからは苦笑にも似た声がちらほら聞こえた。一先ずセリアへのお仕置きはいったん中断して悠元は席に戻った上で話し始める。
「どこかの阿呆のせいで出だしから狂ったが、今朝一高の百山校長にプロジェクトの参加打診が言い渡された」
「えっ、悠兄はそれに対してどう答えたの？」
「断ったし、そもそも俺にはやるべきことがこの国にある以上は宇宙に出る気など無い」
　前世でも宇宙飛行士は立派な職業として成立しており、それは義務としてではなく本人たちの意思によるものだった。いくら魔法師だからといって、宇宙開発プロジェクトに参加する義務や義理は無い。茉莉花の心配そうな問いかけに対して悠元はハッキリとディオーネー計画への参加拒否を示した。
「反魔法主義の広がりが無視できないのも分かる。だが、ここで魔法師を宇宙に送り出す名分なんて作り出したら、反魔法主義が却って声高に主張するという発想に至ると思うんだが」
「確かにその通りですね。幸い、この国の反魔法主義は大分抑えられていますが」
「また再燃しないとも限らないからね……ウチのタヌキが画策しそうだけれど」
　この部分はエドワード・クラークが非魔法師という側面も大きい。少しでも息子に対する愛情があるというのならば、魔法師に配慮できるような施策に修正するだろう。そこまでしなかったのは、達也ひい

ては四葉家に対する明確な敵意に他ならない。
悠元と姫梨の会話を聞いた真由美が頭を抱えたそうな口調で述べると、それを聞いた泉美も「同感ですね」と吐き捨てたことで周りの人々に冷や汗が流れた。
「でも、声を掛けるなんて普通じゃないね。表向きは高校生の悠君に何ができるの？　ってことになると思うんだけど」
「そうですよね、澪さん。悠元君の見立ては？」
「連中――少なくともエドワード・クラークには俺が国家非公認戦略級魔法師だという事実が知られているとみている」
婚約者たちが殆ど揃ったため、話し方も年齢相応ではなく悠元が一家の長たる側面もあってタメ口になっている。その要因は〝夜の生活〟に起因している部分が多く、流石の悠元本人も苦笑しか出てこなかったのは言うまでもない。
澪の疑問に対して夕歌が賛同しつつも悠元に問いかけ、その答えとして婚約者には知らされている事実を改めて口にした。その中には悠元が［トーラス・シルバー］の功績に加担している事実も含んでいるが、それ自体を敢えて言うのは止めた。
「じゃが、金銭でも地位でも靡かぬ悠元に支払えるものなんてあるのかのう？　わしらはそれを支払える対価を有しておるが……悠元に加減されているのは癪じゃが」
「あれでも一応抑えているからな。本気でやったら壊しかねない」
「お兄ちゃんの本気……」
話が明らかに下方向へと向けられており、このままだと夜を迎える前に無差別級バトルロワイヤルに発展しかねないと判断して悠元は話題を切り替えるように話を切り出した。
「で、校長室を出た後に達也とすれ違ってな。十中八九達也も似たような提案をされた可能性が高い。そうなると、近いうちに深雪と水波をこのマンションに引っ越させることになる。まあ、ローテーションの司波家の部分がこのマンションに書き換わるだけだが」
現在はマンションと司波家の往復だが、マンションに一本化することで身を守りやすくなるという利点が生じる。流石にマンションに

向けて魔法を放つ愚か者はいないだろうが、国防軍情報部の件もあった以上は油断できない。
「本家の本格的な引継ぎは大学に入ってからでも構わない、と母上が言ってくれたからな。大体、神楽坂家の仕事の半分以上を既に引き継いでいる状態なのに、こんな状態でほっぽりだして宇宙に行けだなんてやったら、確実に国内事情が悪化するわ」
「まあ、それは分かる」
そうして事情説明を終えて解散した後、風呂場でのスキンシップ（ソフトタッチで済んではいないが、描写できない状態）の後に自室へと戻った。そして、自室に招いたのはエフィアとセリアの二人。
婚約者の中では知り合いが少ないエフィア。なので、表向き同じ立場になるセリアと一緒にすることでホームシックのケアをすることとした。なお、その際にセリアから『そういう気遣いをするから奴隷になりたいって言いだすんだと思うよ』と言われた際は反射的にトールハンマー（こめかみグリグリ）をお見舞いした。だが、セリアの言葉は深雪の例で実証されている為、あまり強く言い返せないのも釈然としなかった。
無論、話題となるのはディオーネー計画のこととなった。
「リーナがアメリカに？」
「お姉ちゃんがそう言われたって。四葉家当主の許可は取り付けたとも聞いてる。それで、私はどうしたらいいかなって」
「ふむ……」
書面上は日本人として帰化しているリーナだが、ここで呼び出すとなると『アンジー・シリウス』の肩書きが今も尚生きていることに他ならない。セリアが相談したのは、リーナの付き添いとして当然シルヴィアがいる訳だが、彼女だけで対処できるのかという不安があるからだ。
学校は暫く休学となるが、そもそも成績優秀なセリアであれば『祖国の事情』で帰ることもできる。これを交渉材料にしようものならば学校長と教頭を更迭してもらうように働きかけるだけだが。
なお、リーナが［十三使徒］アンジー・シリウスであることはエフィアにも知らされている為、特段驚く素振りを見せずに話を聞いてい

た。
「万全を期すならセリアにも行ってもらった方がいいが……悪いけど頼めるか？」
「任せて。ちなみに、今何を考えてたの？」
「ああ。もしもの時のことを考えてリーナの味方に成り得る［スターズ］の隊員に御守りでも持たせようかなと」
　原作では成り得なかったパラサイト化が余計に進行する可能性がある。その可能性が捨てきれない以上、その対策として御守りとなるものを渡す腹積もりでいた。
「セリアならこっそり渡せるだろうから、いくつか渡しておく。少なくともカノープス少佐の手に渡るようにしてくれ」
「それだとバレたりしない？」
「ここはちょっとした細工ですぐに出来る」
　軍人ならば誰しもが有しているドッグタグ。［スターズ］で使われている認識票の仕様はセリアから事前に聞いており、材料に必要な金属は魔法の訓練がてら大量に生み出された金属の塊から精製するだけで済む。
　文字を刻む方法は以前幹比古に渡したＣＡＤの技術を応用したもので、ドッグタグを渡された当人の記憶から認識情報を無系統魔法によって読み取った上で刻まれ、以後は普通のドッグタグと何ら変わりない形となる。
　そして、そのドッグタグに特殊な金属板を仕込み、魔法陣を刻み込むことで装着者以外の霊子を強制的に遮断する魔法式が刻み込まれている。この魔法は元々ネイティブアメリカンの魔除けとして用いられた呪（まじな）いの一種の為、技術が明るみになっても特に問題はない。
「実を言うと、婚約者に渡したアクセサリー類にも同様の魔除けを仕込んでいる。意識して使えば相手の魔法を難なく防御できる代物だ」
「それ、［ファランクス］の存在意義を殺してるんだけど」
「そんな事を言われてもなあ……フィー、大丈夫か？」
「あ、はい。つくづく悠元さんが素晴らしい人だなって感動してました」

泉美のような反応は行きすぎだと思わなくもないが、これはこれで何だか気恥ずかしい気分になる。ともあれ、一応対策を立てた上でアメリカに戻ることは決定したが、問題はリーナをどうやって帰国させるかだ。

原作だと逃亡するように日本へ入国しているが、そこに加えて光宣もとい九島家・藤林家のトラブルや新ソ連の一件が出ていた。この世界の修正力を鑑みれば、いくら民間機だろうと無事に帰れる保証がない。プライベートジェットでも同様だろう。

そこで、悠元はある手段を思いついた。

「フィー、フランスの大統領にコンタクトは取れるか？」

「はい。取ることは出来ますし、悠元さんからのお願いなら快く引き受けてくれると思いますが……何を考えているのですか？」

「フランスにリーナの帰国を手伝わせる」

「それはまた……エグイ手だね」

悠元が考えているのは、国内線でアルバカーキからワシントンに飛んで、そこからフランスの大統領専用機で一旦フランスを経由し、そこからアラブ同盟、インド・ペルシア連邦、東南アジア同盟を経由して日本に帰ってもらうルート。遠回りとなるのでリーナやセリアにとって負担となるが、これにはメリットも存在する。

それは、［アンジー・シリウス］の海外派遣という理由に『新ソ連への牽制』という最大の要因がフルに使えるからだ。西回りでの帰国は『ＵＳＮＡの［十三使徒］として新ソ連の横暴は許さない』という暗黙のメッセージを突きつけることにも繋がるし、何よりイギリスに対しての牽制の意味も含まれている。

ヴァージニア・バランス大佐に話を通す必要は出てくるが、ただでさえパラサイト事件はおろかセブンス・プレイグ落下未遂事件でＵＳＮＡ側が多大な借りを負っている以上、この案はすんなり通るだろう。

そして、セリアには既に新たなＣＡＤを持たせている。いくら［スターズ］といえども更に成長した〝ポラリス〟相手に出来るのかが正直不憫だと思わざるを得ない。

「フランスが何故こちらにコンタクトを取って来たのかなど想像は付いている。だったら、対価として存分に働いてもらうだけだ。なんだったら、ついでにフランスで暗躍して反魔法主義の結社を潰せば向こうの政府も喜ぶと思うぞ」
「それはいいね。でもまあ、フィーちゃんのお陰で反魔法主義の連中が勝手に潰れてそうだし」
「あ、あはは……私のお陰かは分かりませんが、そんな噂は聞いたことがあります」
　エフィアがフランスに移住して軍に入った後、フランスにおける反魔法主義の活動がかなり激減した。［ブランシュ］の残党もそうだが、主だった魔法結社は悉く〝謎の爆発〟で壊滅に追い込まれた。
　セリアに聞いたところでは、ＵＳＮＡのエージェントが巻き込まれて已む無く対処したような痕跡があったそうだ。名前はジェラルド・バランスといい、ヴァージニア・バランス大佐の甥にあたるらしい。
　彼が〝転生者〟なのかどうかはさておき、彼もバランス大佐と同様に苦労人の気質を抱えていそうで少し同情したくなった。

◇　◇　◇

　セリアやエフィアと一夜を過ごした翌日の放課後。そのまま帰宅した悠元は真由美のプライベートルームを訪れた。真由美のほうも予め悠元から『相談事がある』というメッセージを受け取っていたため、既に大学から帰宅していた。
　更に、協力者として市原鈴音もその場にいた。
「失礼する。遅くなったか？」
「ううん、リンちゃんと談話してたからお構いなく」
「こうやって会うのは久しぶりですね、悠元君。この我儘猫は迷惑を掛けていませんか？」
「大丈夫ですよ、市原先輩。先輩の癇癪は今に始まった事じゃありませんから」
　まるで姑と婿ののような遣り取りに対して真由美が少し膨れるような様子を見せたため、悠元は一息吐いた上で二人と相対した。
「市原先輩。真由美には説明しましたが、自分と達也をディオーネー

計画に参加させようと目論む連中が動きました」
「計画の概要は目を通しました。もしかしたらとは思っていましたが……達也君からは『参加する気など無い』と断言に近い口調で述べていました」
「それもそうでしょう。何せ、下手すると人類を滅亡させかねない最悪の一手ですから」
　単に宇宙開発によって人類の生存戦略を図るというのであればまだいい。問題は、その計画に動員される魔法師の数が半端ない数へと膨れ上がるだけでなく、最悪魔法資質保有者全員が宇宙に追い出される可能性を秘めた悪魔の計画。
　それを自覚してやっているとすれば、エドワード・クラークは間違いなく魔法師の〝敵〟に他ならないだろう。

新たな段階へ進むために

単に魔法協会絡みであれば真由美だけでいい。だが、達也の行動に説得力を持たせる意味でも真由美の理解者の意味でも鈴音は適材適所と言う他ない。

「それで市原先輩にお願いなんですが、とある会社に雇いたいと思いまして。ようはアルバイト研修を経ての正社員雇用となりますが」

「ふむ……会社の名前は何というのでしょう？」

「株式会社ステラデバイステクノロジー。現在は離島の不動産管理を主とした業務ですが、［恒星炉］関連事業を担う親会社となる予定です」

既に理事として達也の名が登録されている（本人と四葉家当主の許可は得ている）ため、鈴音はその専属秘書として働いてもらう。いきなり大学を辞めてもらわないように、一旦アルバイト研修を挟む形での雇用とする。そして、大学卒業後に改めて正規雇用を行う。

かなりの激務になることも想定している為、給与はアルバイトの段階でも正社員並みのものを支払うことで達也と合意している。

「既に達也はその会社の理事として名を連ねています。なので、理事専属秘書という形になるかと思います」

「……そこまでの待遇を私にですか？」

［数字落ち（エクストラ）］のことを鑑みれば、魔法師の視点で鈴音の反応は至極真っ当とも言える。だが、社会人としての資質や研究者としての才覚は捨てるに惜しすぎる。大体、気にしないように言い含めていてもそのことを根に持つ人間がいるのも問題ではあるが。

「色々手伝ってもらうことになりますので、その対価として受け取ってください」

「分かりました。どうせどこの誰かさんは体で支払いそうですが」

『私、そこまで悪女じゃないもん!!』という叫びに近い声が部屋に響き渡るが、実際真由美と関係を持ってしまったことは事実。その時の感想は『深雪さんが羨ましいわね。悠君の奴隷なんて最高じゃない』と言い放った時は反射的にデコピンを放っていた。

いくら婚約者であろうとも奴隷扱いなんて出来ない……そう言っている筈なのに、被独占欲を出してくる婚約者ばかりで、嬉しくないわけではないが少しは落ち着いて欲しいと思わなくもない。
何度も言っていることだが、よくこれで修羅場になっていないものだと思う。割と切実に。
「ここで反論するということは、既に関係を持ったわけですね」
「うぐっ……だ、だって、仲間外れにされたくないし……」
「そうですか……もしもの時は先輩として相談に乗りますので、遠慮なく仰ってください」
「嬉しい申し出ですが、お気持ちだけ頂いておきます」
まるで真由美を問題児の如く言いのけてしまう鈴音だったが、話を終えて『あとはごゆっくり』と言いたげな表情で部屋を出ていった。すると、二人きりになったところで真由美が右腕にしがみつくように抱き着いてきた。
「ひどいよぉ、悠君」
「それは真由美の今までやってきたことの結果だろうに。後当たってるんだが」
「当ててるもん。悠君に慰めて欲しいんだもん」
「……」
慰めるというよりは別の意味が含まれていそうな気もしたが、とりあえず言葉通り宥めた後で真由美と話すことにした。本人は若干不服そうだったが、ローテーションがある手前で我儘は言えないと黙った。
「それで、私は何をすればいいの？」
「自分としては、師族会議議長として交渉役に十文字先輩を立てる。なので、真由美は同行者として赴いて欲しい」
「つまり、ディオーネー計画の真の狙いについて何も知らない体を演じろってことね。それだったら、美嘉さんあたりが適任そうだけれど」
真由美の言い分も分からなくはない。克人と美嘉が婚約関係にある以上、美嘉が同行しても問題は無いように思える。だが、悠元が美

嘉を選ばなかったのは、単に家族としての誼ではないと述べる。
「あの校長を信じていない美嘉姉さんなら、直感だけでディオーネー計画の真の狙いに気付く。仮に美嘉姉さんなら、ディオーネー計画を潰そうとＵＳＮＡに直接乗り込みかねん」
「それは……やりかねないのは否定できないわね」
ディオーネー計画自体、ちゃんと読み込んで判断できるようになっていないのも問題がある。大体、諸外国の強大さや反魔法主義に怯えてしまって冷静な判断が出来ていないこともおかしい。
「あれ？　じゃあ悠君はどういう役割で赴くの？」
「表向きは〝師族会議議長の任を受けた見届け役〟ということで自分が姿を偽って両者の見届けを行う。今の自分が表立って出たところで達也の味方という事実は覆せないからな」
その最たる理由は婚約者序列第一位に深雪がいること。達也との関係が従兄妹になったとはいえ、悠元と深雪の婚約関係はむしろ強化されたと言ってもいい。そんな立場にいる人間が達也の宇宙行きなど推せるわけがない。
いくら滅私奉公と言えども限度というものは存在する。何せ、計画そのものは提示したが明確な対価を提示していない以上は賛同など出来ない。[十三使徒]の一人である五輪澪だって、国内に留め置かれたり軍に同行するという制約は存在するが、その対価として五輪家が十師族の一角を担っている。
「あー、それもそうよね。深雪さんに泣きつかれたら悠君でも達也君に味方せざるを得ないわね」
「元々達也とは友人関係である以上、そういうことにならないだろうが……なので、師族会議議長として一方に加担するような行動は出来ない」
では、四葉家の次期当主として指名された達也が仮に宇宙へ行くとしよう。そうなると、四葉家としては次期当主どころか真夜の次に座る座が空席のままとなる可能性だって浮上する。この時点で真夜や深夜、更には彼女たちに賛同する葉山を始めとした達也の理解者たちだけでなく、それを後押しした神楽坂家――悠元の面子を潰すこと

になる。
　惑星開発の明確な年数を提示していない以上は幾らでも誤魔化しは利くだろうが、最悪達也が［質量爆散（マテリアル・バースト）］で小惑星帯にある小惑星をＵＳＮＡへの落下軌道に乗せるように撃ちだす可能性だってある。そうなった時の被害は確実に甚大なものとなり、地球は人の住める星ではなくなる。
　まあ、深雪のいる環境を壊す真似は慎むだろうが、少なくともモスクワやロンドン、それにワシントンが消えてもそれは〝因果応報〟になりかねないことをエドワード等は理解しているのだろうか、と思う。
「師族会議議長としては、ねえ……神楽坂家当主としては動くってこと？」
「動くし、既にいくつか手を打っている。なので、真由美には十文字先輩の付き添いということで情報を提供してほしい」
「……分かったわ」
　真由美も十山家の一件を悠元から聞き及んでおり、あわや国際問題に成り掛けたという顛末を聞いたとき『この国の中って本当に闇鍋なのね』と揶揄したのは、紛れもなく本心からくる感想だと思った。
◇　◇　◇
　翌朝。授業を免除された悠元は達也に連絡を取り、待ち合わせ場所を一高の屋上にした。行動を訝しむ人間は出てくるかもしれないが、それも二人の能力からすれば仕方がないと諦めている。
　早めに達也と情報の擦り合わせを行っておきたかったが、互いに婚約者を抱えている以上はそのフォローをしなければならず、校長の申し出は不幸中の幸いと言えた。
「すまないな、達也」
「それはお互い様だろうに」
「まあ、それは違いない」
　ともあれ、互いに百山校長から聞いた話をすり合わせる。すると、悠元のほうでは［トーラス・シルバー］ではないかという嫌疑だったのに対し、達也のほうは［トーラス・シルバー］だと断定するような

文面だった、という百山の説明を達也は悠元に伝える。
「俺の場合は嫌疑、達也の場合は確定事項か……それで、達也はこのまま学校に通うのか？」
「いや、母上と母さんから『ほとぼりを冷まさないか』ということで伊豆の別荘に暫く居座ることになった。悠元にはすまないと思うが……」
「その気持ちはお前の婚約者たちに向けてやれ。片棒を担いだ以上は一蓮托生だからな」
　これまで深雪の（性的な衝動に対する）暴走を止めてくれていたのは、紛れもない達也の功績。いい加減、達也ももう少し報われるべきだと思っての悠元の言葉に、達也は乾いた笑みを漏らしていた。
「そうなると、深雪と水波にはＦＬＴのマンションに引っ越してもらうべきだな。四葉家なら所有のマンションぐらいありそうだが」
「調布にあるらしいが、母上曰く『悠元さんと深雪さんを下手に引き離して、深雪さんが癇癪を起こしたら大変ですもの』ということでＦＬＴのマンションへの引っ越しの手続きを進めるそうだ」
　婚約者たちの引っ越しも大体完了し、残すは深雪と水波のみ。元々の計画が若干早まったようなものだが、この点だけで言えばエドワードに感謝している。尤も、それ以外の部分で帳消しどころか底抜けのマイナスに達しているが。
「……事情は知ってるが、気が付けば役割が逆転していないか？」
「それは言わないでくれ……いや、俺も最近はそう思っていたが」
　元々達也の暴走を止めるために深雪が生み出されたが、悠元の存在によって深雪の暴走を止めるために達也が存在するという逆転現象が生まれてしまった。悠元とて、別にこの事象を意図的に起こそうとしたわけではない。ただ達也と友人になりたいという感情からここまで発展したのは完全に想定外だった。
「そしたら、達也が必要なものならいくらでも調達するから、遠慮なく言ってくれ」
「……また借りが増えるんだが」
「友人の厚意に勘定を持ち込むな」

達也一人ではできなかった工業・経済的な動きの交渉を全て一手に引き受けたのは悠元だが、これも魔法師に対する基本的な意識改革の為に必要なことだった。たかが十代の人間が成した功績だと言われても、大半の人間は決して信じられないだろう。

でも、悠元はそれでいいと思っている。『たかが若造如き』などと侮られることなんて想定の範囲内。寧ろ、勝手に侮ってくれるならば必要以上に騒ぎ立てる必要もない。名誉が栄光が必要ならば他人に迷惑を掛けない理性を以て実行すべきことであり、それに巻き込まれる道理などない。

エドワード・クラークは「フリズスキャルヴ」もとい「エシェロンⅢ」に絶対の信頼を置いている。だが、あくまでもそれで見通せるのは電子の海に漂っている情報であり、そこに存在しない情報は数多く存在する。

人並みの常識を超えた時、人間が真っ当な判断を下すことなど極めて難しい。そうなったとき、頼みの綱は己の信じられる〝情報〟と〝知識〟、そして〝経験〟。だが、それすらも全て通じなくなったとしたら、人は一体何に縋るのだろう。

「その口ぶりからすると、悠元は学校に通うようだが」

「部活連会頭が勝手に学校を休んじゃマズいだろう？　それに、九校戦は中止になったが、その代替案を既に進めている。ほぼ一昨年の九校戦と同規模のものにする予定だが、どうせだからスポーツ競技を何個か入れようと思ってな」

実施競技は一昨年の競技をそのまま取り入れる予定だが、ここに加える形でいくつかの団体競技を追加する。単に魔法の威力だけで勝敗がつかないような競技も前世の記憶から思いついて取り入れる。その試案は千姫に提出しており、魔法の意識改革という点でも理に適っているとゴーサインが出た。

「ちなみに、達也にはエンジニアに専念してもらう予定だ。四葉家次期当主に指名されたからこそ実力を見たいという輩は出てきそうだが……その場合は、俺と達也、それと燈也の三人がモノリス・コードに出場する」

「相手からすれば悪夢だな、それは」
　昨年の九校戦で上位の成績者を輩出した現三年メンバーに加え、九校戦の規定上出場できるラウラやリーナもいるため、既に反則級というかチートレベルに達した第一高校の陣容。他校から文句は出そうだが、それならばルールの範疇で勝ち切って見せろ、と言いたい。
「三高の［クリムゾン・プリンス］と［カーディナル・ジョージ］の時点で十分反則級だし、こちらも相応の布陣で臨むだけだ。尤も、将輝は完膚なきまでに叩きのめすが」
（三年連続完封なんて食らったら、普通は立ち直れないものだがな……）
　二年連続の時点で完全に心が折れてもおかしくないのに、あそこまで深雪に好意を抱けること自体逆に感心できる……と思わなくもない達也だが、その相手が十代にして世界最強クラスの戦略級魔法師だと将輝が知ったらどう反応するのだろうか、と心なしか思った達也だった。
「それと、学校に居ても図書館に籠っているだけになるだろ？　どうせ野外演習場の一角を借りても文句は言われないだろうから、魔法の訓練に付き合ってくれ。その代わりに昼飯は奢るから」
「対価は好きにして構わないが、お前が魔法の訓練を？」
　悠元の言葉に達也は思わず疑問を浮かべた。何せ、悠元の魔法は現行水準を大きく逸脱したものばかりで、魔法抜きでも武術の腕前は達人クラス。基礎鍛錬の継続程度ならばまだしも、そんな彼が強くなる理由があるのか？　という疑問を感じ取ったのか、悠元が説明する。
「この先、相手をするのは［十三使徒］クラスの魔法師、それとパラサイトのような妖魔が再び荒らさないとも限らない。その為にも天刃霊装を進化させて神霊甲縛式（しんれいこうばくしき）・天刃霊装［天魔抜刀（てんまばっとう）］を完成させる必要が出てきた」
　神楽坂家三代目当主が編み出した［天刃霊装］。悠元はこれを更に進化させると言い出した。その最たる理由は現行の［七聖抜刀］では悠元の［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］を許容できないという問題に直面したためだ。

各々で使用することは無論可能だが、[ロンゴミニアド]を秘匿する意味でも天刃霊装で扱えるようにしなければならない。それを解決するため、三代目が命半ばで完成できなかった天刃霊装の最終形――――術者の魔法力を極限の領域まで研ぎ澄ませることで、神魔すらも御しきり、あらゆる災厄を断ち切る神霊甲縛式・天刃霊装[天魔抜刀]に着手することとした。

「昨春の金沢で起きたことのようなことにならんとも言い切れん。過ぎたる力だというのも自覚はしている。だが、不条理全てを跳ね除けるためにも俺は完成させると決めた。なので、力を貸してほしい」

「悠元……分かった、付き合おう。その代わり、俺もその高みへ上るためにお前の力を貸してほしい」

世の不条理全てを跳ね除けるため、その足掛かりとしてディオーネー計画を潰す。そこから出て来るであろう敵の魔法師。その全てを悉く退けるための力を磨くべく、二人は固い握手を交わしたのだった。

「尤も、目下の問題として、いくらローテーションが組まれているとはいえ、自分に心酔している婚約者が増えていくことだが」

「深雪のことか？」

「そっちはとうに受け入れた話だから」

ともあれ、早速悠元と達也は一高の野外フィールドの一角を借りて魔法の訓練を始めた。登山部のアスレチックフィールドの一角を借りる形だが、文句を言われるどころか登山部の部員にまで発破が掛かる始末だった。

最初は二人だけだったのだが、授業に出ずにずっと野外で練習しているのを目聡く見つける人間が次々と現れた。

「もう、二人だけで強くなろうなんて許さないわよ」

「そうだぜ、達也。俺らだって強くなりたいんだ」

最初は登山部の繋がりでレオとエリカが放課後に姿を見せ、次は生徒会の関係で深雪や姫梨にセリア、風紀委員会絡みで幹比古や雫に加え、修司や由夢までも放課後限定だが訓練に付き合うようになった。

原作の時期的に『孤立編』なのは間違いないが、これでは孤立も何

もあったものではない。そして、更に驚くべきことは悠元の弟子として詩奈が姿を見せたことだ。
「……話は分かった。言っとくが、家族の誼があろうとも武術は別だ。厳しく行くから覚悟するように」
「はい、心得ておりますお兄様。いえ、お師匠様」
基本的な武術は詩鶴から太鼓判を押されたが、ここから先は師範クラスの人間が関わるべきという彼女の判断によって悠元に詩奈の修行を任された形となる。詩奈自身も悠元の珍しくも厳しい言葉に対して真剣な表情で答えた。
結局、達也が学校での居場所を無くすことに繋がらないのは不幸中の幸いとも言えた。

最悪の随時更新

悠元と達也に授業免除が言い渡されて数日。達也はある程度予想していたことだが、まさか自分にまでその余波が来るとは思わなかった。まあ、［トーラス・シルバー］のことについて何かしらの手を打つことは想定していたが、回りくどい手を使うものだと正直呆れる。

セリアは学校に休学届を出し、リーナと共に民間機でＵＳＮＡに向かった。なお、シルヴィア・マーキュリーについてはリーナの帰国が無事に済むとは思えないため、伊豆の空き別荘を神楽坂家で購入（書面上はそうだが、元々差し押さえていた空き家に近い）してそちらに住まわせることにしたついでに、東京にいる九島烈も引越しをさせることとした。

烈本人としても『慕ってくれるのはありがたいことだが、いい加減私から離れて欲しいものだがね』と親離れのような言い方をしたあたり、自身の寿命を誰よりも理解しているのかもしれない。

話を戻すが、学校にまで手が回っているとなると、日本魔法協会にまで及んでいると考えるのが妥当だろう。木曜の放課後、他の友人たちよりも早く帰宅した悠元に飛び込んできたのは、録画映像ではあるが新ソ連の［十三使徒］イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフのインタビューがメディアを通じて流れた。

それをリビングで見ていると、私服に着替えた沓子が毒づくように呟いた。

「何が『平和を愛する』じゃ。佐渡侵攻の一件や一条家当主が巻き込まれた件だけでも十分に胡散臭く感じてしまうのじゃ」

そもそもの話、〝ソビエト連邦〟という国名を使っている限りは野心を隠そうとしていないし、旧態依然の国家体制をそのまま引き継いでいても何らおかしくはない。それはともかくとして、インタビューの内容はベゾブラゾフがディオーネー計画に参加することを決意したことを表明する内容だ。

インタビューの中で『理性の力で問題を解決できる』などと述べていたが、平気で戦略級魔法を国外に向けて放つような魔法師に『理性』

なんて言葉が辞書の中にあるとは正直信じがたい。
「表向きは新ソ連の仕業だと公表していないからな。それを言ったら『灼熱と極光のハロウィン』の時の軍事行動だって新ソ連は認めていない……まあ、沓子の言ったことも含めると全部新ソ連の仕業だが」
「容赦なく言うのう」
「事実を脚色する義理も無いからな」
魔法の平和的利用に参画するというポーズと録画映像に映るベゾブラゾフの真偽はともかくとして、これで新ソ連はベゾブラゾフを前面に出すことで国家としての参加を決めたというポーズを見せた。
「こうなると、魔法協会から達也を参加させるように圧力を掛けてくる可能性が高くなった。学校と同様の内容が含まれているとしたら、俺も対象に含まれるだろう」
「……でも、悠元は今の師族会議議長。それに、財界からも多大な支持を得ている財閥の御曹司。それを宇宙に出せと言ったら、間違いなくお父さんや同じ立場にいるグループのトップが非難声明を出すと思う」
「今の立場はなるべくしてなってしまったようなものだけどな」
だが、『灼熱と極光のハロウィン』で新ソ連側と直接対峙した悠元からすれば、これでディオーネー計画に参加する理由は完全に消失した。祖父絡みもあったとはいえ、自分の命を平気で奪おうとした輩に対して〝水に流す〟気など起きるはずもない。
悠元の言葉に対し、同席している雫が淡々と事実を述べる。
魔法界だけでなく、政財界にも顔が利く要人クラスへと進化した現在の悠元。それを宇宙に出すという以上、日本魔法協会のみならず国際魔法協会は悠元の抜けた穴を埋めるための〝代替案〟が確実に必要となる。
だが、組織の性質上では政府にまで遠慮しがちな魔法協会に支払える対価などないに等しい。精々核関連の魔法技術供与や規制の緩和ぐらいが限界だろうし、仮に日本に対して便宜を図れば、今度はＵＳＮＡや新ソ連までもが便乗して圧力を掛けてくる公算が高い。
「ディオーネー計画自体、今回のことでＵＳＮＡと新ソ連、それにイギ

リスもどうせグルの公算が高くなった」
「根拠はあるの？」
「個人的な情報の伝手なんだが、アメリカの空母が大西洋に派遣されるそうだ。表向きは大亜連合への牽制だが……あちらは反魔法主義が活発に動いている状態で軍の派遣なんて、普通は民衆の感情を慮って動かさないのが妥当だろうに」
しかも、〝人道に悖る〟最新鋭空母であるエンタープライズを駆り出すという始末。大西洋上ならば、新ソ連も欧州をそこまで刺激することなく出てこれる。こちらとしては、却ってありがたいと思っている。何せ、陸続きでない以上は下手に脱出など出来ないのだから。
「どうせ話す内容も予想がつく。尤も、こちらの正体を知られた以上は手加減などしない。いくら［十三使徒］といえども、この国の安全を脅かそうとした時点で〝敵〟と見做す。やつらの面子全てを完膚なきまでに叩きのめす準備は進めている最中だが」
「それで達也殿と魔法の訓練をしておるという訳か……負けてはおれぬのう」
「私も頑張る」
「張り切るのはいいが、程々にな？」
『ＥＳＣＡＰＥＳ』、そして『ＳＴＥＰ』の二段階構成となる［恒星炉］計画。
厳密には、魔法の産業利用を進めることで軍事一辺倒の魔法技術から脱却（エスケイプ）し、更には魔法師全体の質を高めることで小国が大国に呑み込まれる最悪の未来を回避するための一歩（ステップ）とする。
そこに至るまでの空白の期間を埋めるためには、自分が悪名を負ってでも抑止力としてこの国を守る必要がある。その意味でもディオーネー計画への参加など出来ない。
悠元が改めて決意をしたのは、この日だったのかもしれない。
◇　◇　◇
エシェロンⅢは複数の技術者によって設計・開発され、エドワード・クラークはその一人である。大統領でも本来知り得ない筈の情報をジェラルド・バランスがそこまで行きついたのは、当然自身の勘の部

分もある。
だが、それ以外にもう一つ。ＵＳＮＡ政府のごく一部しか知り得ない〝エシェロンⅢの基本設計者〟がジェラルドにとって幼馴染だったことも起因している。
ワシントンＤ．Ｃ．の郊外に建てられた一軒家。見た目は何の変哲もないごく一般的な平屋建ての家屋。ジェラルドは宅配便の配達員に扮して訪れていた。
元々エージェントの仕事の一環で政府と繋がりのある配達業者に籍を置いており、勤勉な態度で会社の上司から『君ならすぐにチーフマネージャーでもいいぐらいだ』と言われたが、ジェラルドは若さという年齢を理由に固辞した。
そんな事情はさておき、段ボール箱を片手に抱えながら呼び鈴を押すと、ドアのロックが開いて一人の少女が姿を見せた。髪はボサボサで普段着にしていると思しきジャージ姿にジェラルドは呆れるような表情を見せた。
「宅配便でーす……少しは見た目をマシにしろよ」
「なんだ、ジェイじゃない。ほらほら、上がって」
「（相変わらず人の話は聞かずじまいか……）」
ちゃんと身だしなみを整えれば〝美少女〟と形容しても不思議ではないルックスで、見た目は十代半ばぐらいに見えてしまう彼女はジェラルドと同じ二十代の女性。そして、その若さで全世界傍受システム［エシェロンⅢ］の設計・改善を担当しているティナ・フェール。
バンクーバーにある魔法結社［ＦＥＨＲ（フェール）］のトップを務めるレナ・フェールとは従姉妹の関係らしいが、余計な嫌疑を避けるべく互いに音信不通の状態を取っている。それはティナが置かれている立場からしても無理からぬことだろう。
ジェラルドとティナの関わりは、お互いの両親が知り合いかつ魔法師だったことに起因する。家族ぐるみの付き合いだったが、８年前のベーリング海での暗闘でティナも両親を亡くし、それ以降は［エシェロンⅢ］の開発や改善に没頭していたためにジェラルドも連絡を取ることは無かった。

そんな事情が変わったのは2年前に起きた『灼熱と極光のハロウィン』。身に覚えのない番号の着信にジェラルドが恐る恐る電話に出ると、そこには8年前から身長が変わらない彼女の姿がそこにあった。

薄着一枚でブラをつけていないために胸の輪郭がはっきりと見えてしまい、映像電話(ヴィジホン)で挨拶をする間もなく反射的に視線を逸らしたのはジェラルドにとって衝撃的な記憶になってしまったのはここだけの話。

見た目に反して家の中は綺麗に片付けられており、本人曰く『探すのが面倒になるから』ということらしい。仕事が絡むと合理的なのに、プライベートになるととことんぐうたらになる彼女を娶るような気概のあるやつは現れるのだろうか……などと思っているジェラルドの脇腹に突然痛みが走る。

視線を向けると、何やら不満げな表情を見せるティナがそこにいた。

「何故抓る」

「今、私に関する良からぬことを考えたでしょ」

「何も言っていないだろうに。大体、呼び出しておいて因縁を吹っかけるな」

あまり機嫌を損ねるのも面倒だと判断して、ジェラルドは空いているソファーに座った。すると、ティナは一度キッチンに引っ込んだ方と思うと、コーヒーを淹れたカップと菓子が入った皿をトレイに載せて運んできた。

そして、ティナはジェラルドの隣に座った。

「何故隣に座るのか分からんが……それで、話は？」

「むー、こんな美少女が隣にいて欲情すればいいのに」

「地雷要素が多すぎるお前を押し倒したら、俺の行き先が墓場しかねえよ」

性格的な意味よりも立場的な意味での〝地雷〟に触れたくなくても、隣にいる少女は自分と既成事実を作ろうと画策している、というのがジェラルド本人も理解していた。この前はコーヒーに睡眠薬を入れられたのが直ぐに理解できたため、ティナに飲ませてそのまま寝

かせると、静かに家を去ったことがあったほどだ。
　そうなったとしてもジェラルドが決して手を出さなかったのは、別に性欲が枯れているというわけではないというのは察して頂きたい。
「もう、ジェイなら私は別にいいのに……今度は逃がさないから」
「マジでやめろ。大体、他にいい男ならもっといるだろうに……それで、呼び出した本題を聞きたいんだが？」
　このままいくと堂々巡りにしかならないと判断し、ジェラルドはティナに呼び出した案件を尋ねた。彼女も『次はこういかないんだからね』と頬を膨れつつも情報端末を差し出した。それを受け取ったジェラルドが目を通すと、それは言語翻訳された通話データというのが直ぐに分かった。
「これは……まさか［エシェロンⅢ］を介しての通信を文章に書き起こしたデータか？」
「正解。しかも、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフにウィリアム・マクロードって、［十三使徒］の大物も交えての会話データ。で、これを主導したのは……」
「エドワード・クラーク、か……」
　その三名が出るとなれば、普通ならディオーネー計画を進めるための打ち合わせとみるのが普通だ。だが、それだったら何も秘密通信を通さずに堂々と話し合えばいい筈。それが出来なかった理由はデータに書かれていた内容が如実に示していた。
［グレート・ボム］――いや、［マテリアル・バースト］の戦略級魔法師がトーラス・シルバーであり、それが日本の高校生か……となると、該当者の名前も把握しているのだろうな、クラークは」
「私もそう見てる。でもね、それだけじゃないの。ここを見て」
「ん？　……まさか、〝その可能性〟もあるのか？」
「あると思っていいかな」
　ティナが訝しんだのは、ベゾブラゾフが述べたと思しき文章の一文。この中には『こうしてお話するのは、５年ぶりぐらいになるでしょう』というもの。
　今から5年前といえば、思い当たる節は大亜連合軍による沖縄諸島

侵攻と新ソ連による佐渡侵攻。明らかに示し合わされたと思しき両国の日本への領土侵犯を〝誰か〟が介在すれば、それも可能となる。香港方面に影響力を残すイギリスならば、大亜連合側に日本への侵攻を唆していてもおかしくはない。
「無論、それが失敗に終わって［十三使徒］同士で会談したという線もあるけれど、どちらにしたって新ソ連とＵＳＮＡを仲介したのがイギリスなのは間違いない事実。［エシェロンⅢ］のサブシステムでガードする時点でロクじゃないもの」
「……この事実は誰かに？」
「内部監察局のバランス大佐に紙媒体の手紙で送ってる。私と大佐しか知らない暗号で組んでるから、エドワード・クラークの［フリズスキャルヴ］でも破れないよ」
「それは確かに破れないな」
　こうなると、エドワード・クラークの進める『ディオーネー計画』が明らかにＵＳＮＡへ破滅を促すとしか思えない内容へと化している。ただでさえ日本に負い目を負っている状況なのに、起死回生どころか自業自得の一手になりかねない。
「こうなってくると、エドワードが視野狭窄に陥っているとしか思えん。最悪ＵＳＮＡどころか新ソ連や旧ＥＵまで内乱の嵐になりかねないぞ」
「そこに最悪のお知らせなんだけど、アンジェリーナ・シールズとエクセリア・シールズがステイツに帰ってくるらしいよ」
「……終わったな」
　ジェラルドが予想した流れでは、リーナに不満を有する［スターズ］隊員を何らかの形で巻き込み、リーナを国内に拉致監禁する可能性が最も高いとみていた。だが、ここに［スターズ］でも御しきれないセリアまで帰国するという情報を聞いた瞬間、ジェラルドは正直な感想を吐露した。
「終わったって、何が？　それとも誰が？」
「俺の予想では、日本の四葉家と婚約しているアンジェリーナ・シールズを国内に無理矢理監禁させることで人質にして、該当人物を国外に

引っ張り出そうという魂胆と見ていた。だが、［スターズ］はおろか国防総省（ペンタゴン）ですら御しきれないと匙を投げたエクセリア・シールズまで戻ってくるとなったら……」
「どうなるの？」
「クラークはおろか、マクロードやベゾブラゾフが殺されてもおかしくないし、［スターズ］の半数近くが粛清されても文句は言えん」
ジェラルドはセリアの［スターズ］入隊に関しての受験監督を務めていて、彼女の入隊に際して『とてもスターズ自体はおろかペンタゴンでも御しきれないので、軍で管理するのは無理です』と殴り書きしたのは彼の仕業だった。
そこまで言わしめるほどに優秀過ぎる魔法師だからこそ、セリアの除隊を誰よりも喜んだのは他ならぬジェラルド本人。何せ、［スターズ］関連の処理を担っていただけに、リーナやセリアの始末書の処理が殺人級だったことは他の誰よりも一番経験していた。
迫真過ぎる口調のジェラルドに、これにはティナも思わずたじろぐ程だった。
「さ、流石にいきなり喧嘩を吹っかける事態になるとは思えないけど」
「別にシールズ姉妹から喧嘩を吹っかけるなんざ思っちゃいない。だが、吹っ掛ける相手がいる以上は油断ならない」
「誰？」
「［スターズ］の隊長陣の中には彼女が総隊長であることを不満に思う輩が多い。ここで参謀本部あるいは部隊を管理する基地司令が馬鹿な真似をしでかさなければ、大人しく帰国してそれまでの話になるが」
ＵＳＮＡ軍側は日本の戦略級魔法を無力化しようと諦めていない。一方、ＵＳＮＡ政府は日本を対ソ連への抑止力として戦略級魔法を認める方向性に舵を切りつつある。明らかに文民統制（シビリアンコントロール）の箍が外れつつあることに、ジェラルドは深い溜息を吐いた。
「もしくは、それを唆す要素が出てくれれば話は更にややこしくなる。例えば、フレディに憑りついていた［パラサイト］なる存在とかな」
「ダラスの件は政府が監視しているから、そこまで手を出すとは思え

ないけど」
「どうだかな。可能性がある以上は捨て去ることも出来ん」
なお、去り際に『私という女がいるのに、浮気をしに行くの!?』とか宣ったため、ジェラルドは本気のアイアンクローをティナにお見舞いしてから家を後にしたのはここだけの話。

米英の政府（内輪）事情

リーナは最初、スターズの基地があるロズウェルに近いアルバカーキ国際空港に降りることを考えていた。だが、航空機のチケットの手配をする段階でセリアがストップをかけ、ワシントン・ダレス国際空港行きに変更した。

セリアが懸念した材料――――リーナたちをＵＳＮＡ内に閉じ込める〝鳥籠〟を避けるべく、協力者に会う方がいいと判断してのことだ。その協力者は無論、自分たちの祖父であるジョーリッジ・Ｄ・トランプ合衆国大統領に他ならなかった。

本来ならば入念なボディチェックを行うが、余計な邪魔が入ることを懸念して大統領権限でパス扱いとし、念のためにジェラルド・バランスを護衛とする形で面会することとなった。

「リーナにセリア。話は既にバランス大佐から伺っている。苦労を掛けるな」

「細かい話は何も聞いていませんし、主に動くのは隣のお姉ちゃんですが。この場合は〝アンジー・シリウス〟が、ですが」

「セリア、他人事みたいに……」

「私は軍を抜けたからもう他人事だもの」

まだ〝アンジー・シリウス〟としての立場が残っているリーナとは違い、セリアは完全に軍人としての籍から抜けている上に日本人としての帰化手続きは既に終えている。なので、この場には日本人としているのは確かな事実のため、彼女の言葉にジョーリッジが苦笑を漏らした。

「本来ならばロズウェルのスターズ基地にてウォーカー基地司令から命令を受け取ることになるのが正規の手順だが、今回は最高司令官たる私が〝アンジー・シリウス少佐〟に指令を出す。郊外の国軍基地にてエドワード・クラークと合流後、大西洋上のエンタープライズまで護衛の任に当たれ。なお、今回の任務に関して報告は不要だ」

「？　普通ならば報告するのが当たり前ではないかと思われるのですが？」

ここでリーナはジョーリッジの指示に疑問を呈した。軍人ならば知り得た秘密を遵守することも必要だが、それでも直接の上司に報告を行うのが軍人としての義務。その義務を果たす必要は無いという言葉に疑問を浮かべても全く問題はない。
リーナの問いかけに対し、ジョーリッジは頷きながらも答える。
「普通ならばな。だが、今回エンタープライズに赴くのはエドワード・クラークの他にイギリスのウィリアム・マクロード、そして新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが来訪するという連絡を受けている」
「[十三使徒]が二人もですか……まさか、私が帰国するように言い付かったのは」
「クラーク博士は非魔法師であるが故だけでなく、ＵＳＮＡとしての面子を保つために君を呼びだしたのだ。リーナには本当に済まないと思うが」
相手が信用できるならば、別にスターズの隊長クラスの魔法師を連れていけば済む話だ。だが、現在公的に存在する戦略級魔法師はジブラルタルとアラスカから動かすのが極めて難しく、それでいて相手が[十三使徒]という立場ならば、相応の人間としてリーナを日本から呼び出すという選択肢が一番妥当、というのが統合参謀本部の出した結論だった。
だが、『それだけではない』と付け加えた上でジョーリッジは話を続ける。
「そして、エドワード・クラークは〝アンジー・シリウス〟――――リーナの素性を知り尽くしている。下手に受け答えはせず、彼の言うことは適当に流しておけ。本当に知りたい情報はセリアを介せば知り得ることは可能だからな」
「あ、成程……それで、任が終わればそのまま帰国できるのですよね？」
「……」
「閣下？」
そして、懸念されていた一番の事項についてリーナが尋ねると、

ジョーリッジは沈黙した。政府の長がここまで悩ます事態となると、並大抵のことではない。すると、彼が落ち着こうとしてコーヒーカップを取った瞬間、カップの持ち手が圧し折れた。

祖父のそういう経験からして、明らかに〝怒っている〟とセリアやリーナが察した瞬間、咄嗟に耳を塞いだ。それはジョーリッジの傍に控えていたジェラルドも同様であった。

「あの――野郎(ほうそうできない)!! 何が『知り得た情報を四葉家に漏洩される可能性があるから、下手に帰せません』だと!? だったらリーナを帰国させるようなことをするな!! ふう……はあ、はあ……というあの博士のふざけた理由のせいで暫く残ってもらうことになった」

「あの、閣下。初めの汚らしい侮蔑用語は聞き流しますが、そこまで事情を明かしていいのですか?」

「こればかりは仕方がないのだ、メイトリクス大佐。何せ、相手が相手だ。下手に刺激してＵＳＮＡの各都市が一瞬で消滅なんかしたら、政治生命の前に物理的な命が絶たれることになる」

ジョーリッジの叫びの後に問いかけたジェラルドの問いかけにそう答え、取っ手を圧し折ってしまったカップをそのまま掴んで、中に入ったコーヒーを一気飲みした。流石に片付けが大変なので床に叩きつける行為は慎んで、ソーサーの上に静かに置いた上で、空になったカップの中に折れてしまった取っ手を放り込む。

「なので、ペンタゴンとバランス大佐に頼んで、アンジー・シリウスとしての任務を帯びる形で国外派遣という体裁を取ることとした。それまでは暫くロズウェルの基地に居てもらうことになってしまうが、こればかりは許してほしい」

「……分かりました。そこまでしていただけるというのであれば、護衛の任に就きます」

政府の長である大統領がここまで憤ることなどあまりない。寧ろ、怒ったところなど滅多に見せない祖父だからこそ、大衆からの圧倒的な支持を受けている。リーナが命令に従う体を見たジョーリッジはセリアに視線を向けた。

「セリアはどうする?」

「そしたら、しばらくアビーのところに寝泊まりするわ。時が来たらお姉ちゃんを連れ出すけど、多少の被害ぐらいは許してね？」
「穏便に連れだしてほしいが……場合によっては許可する」
アビーという人物はアビゲイル・ステューアットといい、リーナとセリアの戦略級魔法［ヘビィ・メタル・バースト］と［ブリオネイク］の開発者。天才肌の人間だがオタクの気があり、前世は日本人だったセリアと意気投合するほどで、その様子にはリーナも引き気味だったのは言うまでもない。
ジョーリッジとしては穏便に済んでほしいと思っているが、そもそもリーナを呼び出した時点で最悪の展開続きになっている。いや、大本は政府を無視して宇宙開発計画をでっちあげたエドワード・クラークが一番の元凶だろう。
だが、エドワードは明確に政府の不利益と成り得る行動をしたわけではない。彼の唱える魔法の平和利用という大義名分は、一見すれば反魔法主義への対抗策として有用に見えるし、国際魔法協会もプレゼンテーションに向けて動き出している。
エンタープライズの派遣も統合参謀本部の決定の為、いくらエドワードが関与していても罪に問うことは出来ない。そこにウィリアム・マクロードとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが訪れる時点でディオーネー計画は一定の効力を有することになる。
三国の要人による会談に漕ぎ着けたという点だけで言えば、エドワードの有能さを評価することは出来る。尤も、想定される内容は破滅への輪舞（ロンド）とも言うべきもの。それを理解していてやっているのだとすれば、三国はおろか全世界に影響が及ぶ大事に発展する。
リーナとセリアを下がらせた後、執務室にはジョーリッジとジェラルドの二人しかいない。本来、魔法師を傍に居させるのはリスクが伴うが、ジョーリッジはジェラルドの気質を知っており、その逆も然り。
そのため、必要な護衛をジェラルドに依存することが出来るというわけだ。
「さて、メイトリクス大佐。貴殿にはこの後すぐにエンタープライズへとんぼ返りしてもらうが、先に行ってもらうのはイギリスからの客

人を迎えて欲しいからだ」
「客人？　マクロード卿のことでしょうか？」
「いや、英国王室から派遣される連絡員とのことだ。イギリス大使から渡された女王陛下の親書によれば、秘密情報部所属の魔法師らしい」
　あっさりと内情を明かしてもいいのか、とジェラルドは一瞬訝しんだが、それをイギリスの女王自らが明かしている以上は咎める理由がない。問題は、何故ウィリアム・マクロードが出張ってくるのに王室の命を受けての派遣がされたことについてだ。
「あっさりと手の内を明かしてもいいのですか？」
「そう書いている以上は私も咎められん。それに、イギリスは先日のオーストラリア軍の件でマクロード卿を完全に信用できなくなっている節が見られる」
　ウィリアム・マクロードがオーストラリアへ行った後に、日本の石垣島沖の人工島でオーストラリア軍の魔法師が大亜連合軍の脱走兵と共に破壊工作を行おうとしたが、結果は失敗した。
　今度は大西洋上のエンタープライズへ赴く時点で、また何かあるのだと勘繰ってもおかしくはない。だが、表立って動けば面倒事になる。なので、表向きはマクロードの行動監視も兼ねて護衛の派遣という体にしている、とその親書に記されていた。
『信用しているのかどうなのか分からない』と正直に内情を明かすあたり、イギリスも苦労しているのだろう。その意味で私も女王陛下だけでなく首相殿も苦労が絶えんな」
　ディオーネー計画が発表されて数日で国際魔法協会が動いている時点で、エドワード・クラークとウィリアム・マクロードに何らかの繋がりがあるのは間違いない。
　表向きの肩書きを見れば、かたや政府機関の人間にして情報システムの専門家、かたや英国の魔法研究の権威にして戦略級魔法師［十三使徒］の一人。その二人を繋ぐことのできる方法を考えた時、一番考えられる線はエドワードが関与している［エシェロンⅢ］が最も可能性のあるものとなる。

「一番の極めつけは新ソ連だ。ベゾブラゾフ博士のインタビューの真偽はともかくとして、最大の問題は政府間交渉となった際に私が出向く段取りになる公算が高いことにある。友人を奪った〝敵〟に約束はおろか手を交わすこともしたくないのだが」
「閣下……」
　戦略級魔法師クラスまで動員するとなれば、当然政府高官クラスはおろか国家元首にまで話が確実に及ぶ。そうなったとき、ジョーリッジにとって娘同然の知り合いを奪った敵国との交渉などしたくもない。いくら魔法の平和利用という大義名分があろうとも、最悪の場合は民衆の信を問うために議会解散も辞さないつもりでいた。
「本来、一国を預かる国家元首としてはいけない発言なのだがね。それは当然理解している。だが、ベーリング海での暗闘を無かったことにはできない。それに深く関与しているであろうベゾブラゾフ博士を果たして御しきれるのかという疑問だって出てくる」
　何せ、新ソ連としては佐渡侵攻と佐渡沖への艦隊侵入の二度にわたって阻止されただけでなく、先日宗谷海峡で発生した軽い軍事衝突では新ソ連側が［トゥマーン・ボンバ］を発動した形跡がみられた。
　ディオーネー計画が仮に頓挫した場合、実力行使で日本の戦略級魔法師を排除しにかかるとみているが、相対するであろう人物のことを思うとジョーリッジの率直な戦力分析として〝新ソ連の不利〟になると結論を出した。
「エドワード・クラークが御しきれるかどうかはともかく、マクロード卿は協力しないと？」
「仮にそれをしてしまえば、イギリスは西ＥＵの盟主の座を引き摺り下ろされることになる。それに、イギリスもディオーネー計画発表後に反魔法主義が活発になってきているようでな」
「……哀れ、としか言えません」
　相手に文句のない大儀名分――――それこそ、昨春の［トーラス・シルバー］が発表した［恒星炉］はその最たるものだ。運営自体は魔法師がメインとなるが、その恩恵は魔法の有無に拘わらず全ての人間が享受できるエネルギーとして受け取ることが出来る。

とりわけ夜間の稼働が出来なかった第二次産業や第三次産業にとってその恩恵はすさまじく、ここで反魔法主義の結社が暴動を起こせばテロ対策法に則って処理することが出来るし、主要企業がこぞって［トーラス・シルバー］と伝手を作りたい、と駆け込むだろう。
「かつての宗主国とはいえ、よその国に関与できる余力はないからな……いずれにせよ、頼んだぞ」
「畏まりました、閣下」
今のＵＳＮＡ政府が宇宙開発に手を出せる余力はない。だが、ディオーネー計画はそれを嘲笑うかのように進んでいく。更に、彼らを悩ます事態が国内で起きようとしていることに、この時は誰しもが気付いていなかったのであった。

◇　◇　◇

アメリカだけではなく、イギリスでも慌ただしい動きが進んでいた。国際魔法協会によるプレゼンテーションの準備はベゾブラゾフの参加表明によって急ピッチで慌ただしく進められていたのだった。
そんな中、イギリス王室が住まう宮殿の私室にて、現女王ことエリザベスⅢ世（以後はエリーと記載）は執事から渡された端末に目を通していた。伝統的な装飾に似つかわしくないハイテク機器だが、国を見守るものとしていち早く情報を知る為にも女王自ら許可した。
端末で報告に目を通し終えたエリーは執事に目線を向けた。
「……それで？　卿は何と釈明していたの？」
「マクロード卿曰く『魔法の平和的利用のために、ＵＳＮＡや新ソ連と打ち合わせる』とのことです」
それを素直に信じ切れるほど、エリーはお人よしではない。何分、マクロードは先日オーストラリア軍基地を訪問した後でそのオーストラリア軍の魔法師が日本南方の人工島で拘束されるという事態に発展した。
そして、今度は大西洋上にてＵＳＮＡ軍の最新鋭空母で会談するために国外への遠征許可を求めた。悩んだイギリスの国家元首は判断を王室に仰いだ。
「あんなことがあって、二度目は無いなんて言えないわ。とはいえ、Ｕ

ＳＮＡと新ソ連の動きを見るためにも許可は出しましょう……爺や、情報部の伝手はどうかしら？」
「其方については既に。陛下のお眼鏡に適う人材を派遣することで纏まりました」
　エリーの執事をしているこの人物は、かつて秘密情報部で凄腕のエージェントとして世界各国を飛び回っていた。彼曰く『私に伍するとなれば、かの四葉に仕えているらしいミスター・葉山ぐらいでしょう』とまで言われるほどで、彼を題材にした映画が世界的なヒットになったのはここだけの話。
「それが彼女という訳なんだけど……大丈夫？　〝マクロード卿の孫娘〟なんて抜擢して」
「実力については保証いたします。それに、彼女自身は祖父に対して余りいい印象を抱いていないようでして」
「……爺やの言葉は信じるけど、卿も魔法のことばかりじゃなくて家族に目を向けてやりなさいよ」
　ぼやき気味にエリーが零したのは、その彼女はエリーにとって妹のような存在であり、彼女が優れた魔法師ということも知り得ていた。加えて、彼女の家族事情にも精通していて、祖父であるマクロードとの仲はあまり良くないらしい。
　その理由としては、単に『祖父が魔法ばかりで構ってくれない』というものだが。

対価無きプロジェクトなど無価値

おおよそ２時間後、宮殿の私室に招かれたのはプラチナブロンドの綺麗な髪を持つ女性。風貌からすれば女性というよりも少女のようなあどけなさを垣間見せているが、これでも既に２０歳という事実だけでなく、政府機関の人間として働いている人物。
「アニー、よく来てくれたわね。さ、座ってちょうだい」
「え？　ですが……」
「ここには私と爺やと貴女しかいないもの。なに、私を殺す？」
「そ、そんな滅相もございません!!」
言っていい冗談ではないだろうが、エリーは〝アニー〟と呼んだ女性の緊張をほぐす意味でも言い放ち、これには彼女も『そんな考えなど一切持っていない』と反論も含めた言葉を返した。それを見た執事はメイドを呼び出し、何か耳打ちをして下がらせた。
ほどなくして茶菓子と紅茶が運ばれ、互いに向き合う形でソファーに座り談笑を始める。そして雰囲気が落ち着いたところでエリーが切り出した。
「さて、アニーには爺やから触り程度の説明を受けていると思うけど、貴方の祖父が大西洋上のＵＳＮＡ軍空母に出向くことになりました」
「大西洋？　アフリカ絡みですか？」
「表向きはそうだけれど……ご時世を考えると、例の宇宙開発計画に関するものだとみて間違いないわ」
［エシェロン］の基本ネットワークにイギリスは関与しているが、現行の［エシェロンⅢ］については専らＵＳＮＡの専売特許のような形となっている。ケンブリッジ大学の客員教授として送り出した［十三使徒］ウィリアム・マクロードが、先日ディオーネー計画を理由として国外への出征許可を政府と王室に求めた。
「あの計画ですか……何故祖父があんな計画に賛同したのか理解に苦しみます」
「貴女がそう言うってことは、概要は見たのね？」
「何分、職務の範疇にあったものですし、魔法師が関わるとなると無視

はできませんから」
　先日のオーストラリア軍の一件や新ソ連の戦略級魔法、そして大亜連合軍のアフリカ侵攻によって、秘密情報部もより一層の緊張を余儀なくされていた。その中で持ち上がったディオーネー計画は、一見すると反魔法主義に対する大義名分を掲げているように聞こえる。
「あの計画は、いわば悪魔の計画とも言うべきもの。小国の魔法師を奪い、大国の覇権を揮う先に待つのは、四度目の世界大戦で済めばいいものだと考えております」
「世界規模の戦争で済めばいい……確かにそうね。殊更戦略級魔法なんてものが存在する以上、それが今まで無秩序に放たれてこなかっただけ平和だったのかもしれないわ」
　別に国際魔法協会そのものが機能していないわけではない。だが、協会の組織自体は〝核兵器ならびにそれに準じる魔法の抑止〟を謳っていても、今まで実効的な効力を発揮した例が存在しない。
　第三次大戦となった世界群発戦争の時も、超法規的な国際部隊によって抑止に成功したという事例であり、その一端を〝四葉〟が担っていた。そして、英雄と呼ばれた二人の人物も日本という小国で生まれ育った魔法師であった。
「率直に聞かせて。アニーはこの計画が真っ当な目的で立てられたと思う？」
「いいえ。恐らくは、日本の〝アンタッチャブル〟を排除しようと目論んでのことだと考えています。これは上司も同意見でした」
　大漢（ダーハン）の壊滅によって四葉の悪名は世界に広がった。そのせいというのもあるかも知れないが、何かにつけて魔法に関するトラブルが起きると必ずと言っていい程『四葉』の関与が噂されていた。
　その噂がどれほどの信憑性を持っていたのかは不明だが、結局のところ『四葉』の悪名は一種の〝抑止力〟として世界の戦争を制御していたという一因にも繋がっていた。
「話を聞けば、かの英雄たちも既に高齢と聞き及んでいます。これで四葉を排除できれば、第二次大戦のようなことは起きないとみているのかもしれない……というのが、ディオーネー計画を踏まえての情報

部の見解です」
「そう……ＵＳＮＡも新ソ連も哀れね。無論、それになし崩し的に巻き込まれた我が国もだけれど」
　エリーはカップの紅茶を飲み干し、カップを置いた上で淡々と述べた。
　王室の長となった彼女からすれば、祖国の安寧を乱す様な行為など許せるはずがない。だが、魔法協会はおろかこの国に古くからいる魔法師の家々は積極的に動こうとしない。いくら秘密主義と言えども、非魔法師から謂れなき誹謗中傷を浴びせられて黙っていることの方が〝愚か〟だと非難したかったほどだった。
「その事態を打開するためにも、アニーもとい〝エージェント・ヴィンセント〟にはマクロード卿の護衛としてエンタープライズに赴き、向こうの大統領から派遣されたＵＳＮＡのエージェントと接触。暫くは向こうの大統領府が貴女を匿ってくれるから、時期が来たら帰国して頂戴。何か質問はある？」
「時期というのは具体的に？」
「そうね……向こうの魔法師が何らかの事情でＵＳＮＡを出なければならなくなったときね。言っておくけど、亡命とかの類じゃないから安心して」
「は、はあ……」
　秘密情報部のエージェントとしてはらしからぬ反応だが、そこまでの事態になることを見越しての物言いの為、アニーもといアニエス・ヴィンセントは静かに頷くことしかできなかった。
「その辺の段取りはフランスも関与するから、貴女は無事にイギリスへ帰ってくることだけ考えておきなさい。『いい加減結婚しなさい』って小母様にも言われているのでしょう？」
「うっ、それを言ったらエリーもじゃないの!!」
「あらら、やっと素の言葉が聞けたわ」
「むー……そのまま独身貴族を続ける気なの？　それこそエリーのお兄様たちに言われるじゃない」
　ここまでずっと他人行儀だった言葉遣いがやっと崩れたことにエ

リーは笑みを零し、痛いところを突かれたアニエスは反論するように言葉を紡ぐ。
　それを聞いたエリーは臆することなく言葉を続ける。
「結婚はしないけど、お目当ての男性から子種だけもらうつもりだから」
「え？　冗談だよね？　そこまでして相手を捨てるってこと？」
「相手にも立場があるから、無理に来てもらうのもねえ……爺や、晩夏か秋に行けるように調整しておいて」
「……畏まりました」
　その会話が交わされたころ、遠く離れた国にいる〝お目当ての男性〟が悪寒を覚えたのは言うまでもない。

◇　◇　◇

　アメリカ、イギリス、新ソ連がディオーネー計画に関して動きを見せている中、日本国内でも慌ただしい動きがあった。尤も、自主的なものというよりは外からの情報に振り回される形だが。
　日本魔法協会の会長には百家の数字付き（ナンバーズ）が就任する慣習となっている。改選は毎年6月で、その翌月に新会長就任という流れ。再選の制限はないものの、会長職自体に旨みのあるポストではないために三年以上の経験者は存在しない。
　現在の会長は十三束翡翠（とみつかひすい）――第一高校三年の十三束鋼の実母にあたる。日本魔法協会の本部は京都にある為、一つの例外もなく京都の常駐が求められている。十三束家の実家は東京湾東岸地域を拠点としている為、家に関する事業は夫が、魔法協会に関することは妻が、という風に分担していることになる。
『元々持ち回りみたいなものだから』という軽い気持ちで引き受けたわけだが、ここにきて昨年の自分を呪いたくなるような衝動に駆られ、頭を抱えている翡翠。その理由はディオーネー計画にある。
　いくら大国の一つにして現代魔法の先進国であるＵＳＮＡといえども、魔法を用いての宇宙開発計画の推進自体はまだしも、他国の魔法師――それも戦略級魔法師「十三使徒」を借りるというのはどだい難しい話だと高を括っていた。これについては翡翠だけでなく魔

法協会のスタッフも同じ意見であった。
ところが昨日、その［十三使徒］であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがディオーネー計画参加を表明したことで、猶予が一気にゼロになった。それもＵＳＮＡにとっては最大のライバルである新ソ連の魔法師が。
魔法を宇宙開発という人類の人口増大に対応するための壮大な計画は、一見すれば魔法の平和利用という点で魔法協会の理念に沿っている。反魔法主義者は魔法が見えないことを理由に、非魔法師を殺傷する武器だと主張することで一定の支持を得ている。これに対抗するには、一過性の自然災害の阻止程度では止めきれない。その意味でディオーネー計画は一定の説得力を有している。
プロジェクトの成功の可否に拘わらず、魔法の平和的かつ未来への展望を切り開くための道に成り得る。対立している二大国が協力しようとしている姿勢を見せる中、〝仮にも〟ＵＳＮＡと軍事同盟を結んでいる日本が参加を拒否するなど有り得ない。保留することすら不可能。一刻も早く［トーラス・シルバー］を名乗っている高校生を差し出さなければならない。
実を言えば、翡翠は［トーラス・シルバー］の正体を知っていた。ＵＳＮＡの大使館員が彼女の下に手渡しで届けた。古風にも封蝋が施された書状に書かれていたのである。
翡翠は抱え込んでいた頭を上げた。嘆いているばかりでは何も解決しない。厄介事を肩代わりしてくれるようなヒーローのような存在もいない以上、悲劇のヒロインのような振る舞いをしても何も解決することなど無いのだから。
悩んだ末に翡翠は魔法協会の会長が持つ特殊な権限を行使することとした。
――――『臨時師族会議の招集』
翡翠は専用回線を使い、十師族当主にオンライン会議開催を呼びかけた。一方の十師族当主達も予見していたのか、招集から1時間後、翡翠の見つめるモニターには、神楽坂、上泉、一条、一色、二木、三矢、四葉、五輪、六塚、七草、七宝、八代、十文字の各当主が揃って

いた。
『十文字殿、先日の怪我は完治なさりましたか？』
『はい。その節は大変ご迷惑をおかけいたしました』
『既に解決したことですので、お気になさらず。おっと、失礼いたしました十三束会長。此度の緊急招集について事情をお聞かせ願えますか？』
　変に緊張を避けるべく、悠元は克人と言葉を交わした上で翡翠に謝罪しつつも召集の本題を切り出すように促した。相手がいくら息子と同じ学年の男子とは言え、既に一家の当主にして師族会議議長の重責を九島烈から認められた人物。
　威圧的ではなく、諭す様に尋ねてきたことで翡翠の緊張もいくらか解れたのか、正直に言葉を発し始める。
「御当主の皆さん、お忙しい中、速やかに集まって頂き感謝しております」
『丁寧な挨拶は受け取るが、そこまで火急の用件となると……やはり例の宇宙開発計画に関する話と受け取って宜しいか？』
「は、はい。ＵＳＮＡの技術者が提唱した金星開発の話になります」
　翡翠の言葉に対し、ここで問いかけたのは元継だった。護人は魔法協会の動向も具に観察しており、彼女の為人も既に把握している。その為、率先して声を掛けることで翡翠から情報を引き出そうと考えての行動であった。
「昨日、新ソ連がプロジェクトへの参加表明を行ったことで、日本魔法協会としても早急な対応を余儀なくされてしまいました」
『何故協会が？　エドワード・クラークなる人物は個人の参加を呼び掛けていた筈ですが』
　ここで翡翠に問いかけたのは七宝拓巳。すると、ここに差し込む形で八代雷蔵が声を発する。
『そうは言いましても、日本人が一人指名されてしまいましたからねえ』
『それは向こうの都合だろう。我々が従う義理など存在しない』
「ところが、そうもいかないんです」

雷蔵の言葉に対して強気に発言したのは六塚温子。それを聞いて内心ビクビクしつつも発言したことで、視線が一斉に翡翠の方へと向けられる。モニターによる対面形式だから仕方がないこととはいえ、ここまでくれば一緒と破れかぶれながら言葉を続ける。
「現在魔法師は、平和の敵という謂れなき非難を浴びています。幸い、この国における反魔法主義の運動は下火となっていますが、このぬるま湯につかっていてはいずれ諸外国から非難を浴びることになります」
諸外国に比べれば、日本は非魔法師の反魔法主義がかなり抑えられている。無論、翡翠はこの功績の一端が［トーラス・シルバー］によるものだと理解はしている。
「クラーク博士のディオーネー計画は、魔法を軍事利用以外で人類に寄与することが出来る格好の材料となるのです。国際魔法協会本部は、ディオーネー計画に対する全面的な支援を表明する準備に入っています」
翡翠の述べた中には、既にＵＳＮＡと新ソ連の魔法協会が独自のプレス発表を準備していて、更にはドイツがＵＳＮＡ政府にローゼン・マギクラフト単体ではなく複数の魔法技術関連企業による連合による参加を打診している、という文言まで付け加えられた。
『それで、どうするのですか？　その当該人物を我々に探し出して参加を強制しろと？』
「……実は、探し出す必要もないのです」
娘を戦略級魔法師としてもつ五輪勇海の問いかけに、翡翠は変な力みを有して言葉を発した。そして、彼女の目線はその一角にいる真夜に向けられていた。
「［トーラス・シルバー］は四葉殿――貴女のご子息ですね？」
当然、その問いに真夜は言葉を発しない。『何故そう思われるのですか？』という無言の圧力を画面越しに放っている。
「アメリカ大使館から書状を受け取りました。本人が未成年であることを鑑み、今のところ氏名の公表は控えるから、その代わりに［トーラス・シルバー］こと司波達也氏の説得に力を貸してほしいと」

『体のいい脅迫だな』
翡翠が述べた内容に対し、不満を露わにしたのは一条剛毅。無論、表情からして快く思わぬ人間は数多くいた。その中の一人は無論、その当該人物と近しい関係にある悠元であった。このまま通信を抜けさせるような展開はマズいと考え、声を発する。
『口を挟ませていただくが、十三束会長に何点かお伺いしたい。宜しいか？』
「神楽坂殿？　は、はい、構いません」
『では、まず一つ目。今回の件は周囲の圧力に巻き込まれてのことだと思うが、ロンドンにある国際魔法協会本部から正式な説得の通達は来ていたか？』
「……い、いえ、来ていません」
これは翡翠自身、周囲がディオーネー計画への発表準備に流れが傾く中でそう判断しただけで、国際魔法協会から日本魔法協会に対して「トーラス・シルバー」の参加を強制するような圧力が掛かったわけではない。
とはいえ、ＵＳＮＡ大使館の職員が態々出向いて手渡したとなれば、その重みは確かに重いのだろう。
『では二つ目。現時点でその書状以外にＵＳＮＡ政府もしくは日本政府からの「トーラス・シルバー」の参加要請は来ていたか？』
「……いいえ」
『では最後にだが……仮にその書状の通りに司波達也氏を差し出すとして、日本魔法協会は四葉家のみならず十師族に対して如何なる対価を支払うつもりか？　言っておくが、栄光や名誉という〝俗物〟だと言うのなら、この場で通信を切らせていただく』
「そ、それは……」
魔法は人間の有する能力の一端。それを行使して社会貢献をする以上、然るべき対価を支払えなければ意味がない。滅私奉公の理念を持ち出すとしても、国家公認の戦略級魔法師である五輪澪は従軍などの対価として五輪家の安定に寄与しているし、働きに見合った報酬を得ている。

彼女とてボランティアでやっているわけではないのに、達也にボランティアじみた事をやらせる時点で『ブラック企業と大差ない』とディオーネー計画を評価してしまうことになる。尤も、魔法の平和利用という名分に眼が眩んでいる大人たちがいるのも問題だが。

『別に十三束会長を責め立てる気はない。だが、日本魔法協会として明確な対価を示せないとなれば、師族会議議長として司波達也氏をディオーネー計画に送り出すことなど出来ない。上泉殿、私は別件がある為に後は任せます』

『……承知した。神楽坂殿も苦労を掛ける』

事の次第を元継に任せると、悠元が通信を切った。周りの当主達が様々な反応を見せる中、真夜は自分の言いたい言葉を代弁してくれたことに笑みをこぼしていたのだった。

リモート・トレーニング

通信を終えた悠元は一息吐いた。師族会議議長自ら真っ先に通信を抜けるのはどうかという風聞も当然あるだろうが、日本魔法協会の方針が見えてしまった以上は話を続ける気にもならない。

（会長が会議を招集したのは事実だろうが、そこに至るまでに組織としての見解はある程度固めていたのだろう）

日本魔法協会が国際魔法協会の日本支部という位置付けにはなるが、それにしたって大本の組織もロクな精査をせずにディオーネー計画を後押しするような動きを見せていた。ウィリアム・マクロードが働きかけた線は当然あるだろうが、最大の理由は『灼熱と極光のハロウィン』の時の動きもあるとみている。

当時、達也の戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］が〝核兵器もしくはそれに準ずる放射能汚染を引き起こす重大な魔法〟と見做されたが、結局達也の戦略級魔法はそれに一切該当せず、懲罰部隊は結成されなかった事実がある。『物質の分解・分裂によって劇的な威力を叩き出す』という点で言えば同一だが、核分裂において一般的に必要なプルトニウムを生成する魔法ではないため、結局核兵器に該当しない判定とされた。

その事実があっての［スターズ］襲撃やパラサイト事件と考えると、ウィリアム・マクロードとエドワード・クラークがこの時点でも連絡を取り合って画策した可能性は決して低くない。

（顧傑の一件も元老院が関与しているとはいえ、エドワード・クラークも一枚噛んでいる）

別に某特撮物の『とある悪者のせいで全て説明がつく』とは断言しないが、顧傑に［フリズスキャルヴ］というツールを与えることで四葉への復讐を成そうとした。だが、周公瑾が死に、顧傑だけでなく主要の反魔法主義結社が相次いで倒れたことで、とうとうエドワード・クラーク自らが出張らざるを得なくなった。

原作では四葉家の独立独歩を若手会議で浮き彫りにした挙句、［トーラス・シルバー］の功績を大義名分として達也を宇宙に追放しよ

うとした。達也というストッパーを蔑ろにした場合、真っ先に怒るのは深雪に他ならない。
（何にせよ、『ＳＴＥＰ』への道筋はついた。どうせ説得するために出張ってくることは分かっている……尤も、不義理を働いている時点で協力する気など皆無だが）
パラサイト事件の折、レイモンド・クラークはビデオメールの中で『定期的に情報提供する』と自ら公言しておきながらも、その約束が今の今まで果たされずに来ている。
別に情報収集方法に不満はないし、同じ事を言われたであろう達也にもこの前確認したところ、『そんなことも言っていたな』とあまり気にするような素振りは無く、寧ろ問われてようやく思い出したぐらいのもの。
別に期待などしていなかったが、約束を違える時点で守る気など無いに等しく、そんな輩に協力しようとする道理も義理もない。すると、扉をノックする音が聞こえたので入室を促すと、そこには使用人である深夜が入って来た。彼女の手にはお盆があり、湯呑と急須、そして和菓子が載せられていた。
「お疲れ様です、旦那様。休憩が必要かと思いましたので……いかがしました？」
「いえ、そういう気遣いは深雪によく似ているな、と」
「母親ですから」
ともあれ、そのまま休憩に入る。深夜が淹れてくれたお茶が入った湯呑を受け取り、一口付けた上で一息吐いた。
「臨時師族会議のほうはいかがでした？」
「日本魔法協会の方針がハッキリと分かった以上、あれ以上会話を続けても意味がないと判断して通信を切った」
あのメンバーの中では達也に近しい人物の一人であるため、最悪達也の説得をしろなどといわれても困る以外の何物でもない。それに、達也一人を説得すればすべて解決し得る問題では無くなっていることも重要だ。
「十三束会長は達也を説得したがっていたような節が見られたが、ア

レは自らというよりも周りの空気に流された結果の言動だろう。国際魔法協会や政府の干渉は現時点で確認できなかったが、今後もそうであるという保障など無い」
「真夜も大変よね。寧ろ癇癪を起さないか心配だわ」
「貴女がそれを言うか」
　考えて見れば、四葉元造の［死神の刃（グリム・リーパー）］も大概だが、十師族の中で四葉家はどちらかと言えば古式魔法に近しい特質を有している。深夜自身殺傷能力がある魔法を得意としていないが、彼女の［精神情報干渉］は明らかに現代魔法の範疇を超えている。
「私はもう旦那様のものですから、そのようなことはいたしませんよ」
「……愛が重いわ」
「流石に娘には勝てませんけど」
　張り合う相手云々とかはさておいて、今週末に深雪と水波が引っ越してくることになっている。既に司波家から家具などは運び出され始めていて、土曜日には全ての荷物が運び込まれることになる。達也も必要最低限の荷物はマンションに運び込むが、身を守るものなどは別荘に持ち込むつもりのようだ。
　元々引越しに関わる手続きなどの準備は済んでいるが、家主として立ち会わなければならない場面がある為、臨時師族会議を抜けたのは業者に対して迷惑を掛けないようにするための配慮だ。この後、電気やガスなどの業者が来て立ち会うことになっている。
　それを日本魔法協会に見せるべき部分があるかも知れないが、元々付き合う義理のない計画に参加しないことも当然だが、達也を説得しうる対価を明示できない相手と交渉を持つ気にもならない。
　その日の夜、悠元は元継と通信をしていた。内容は悠元が抜けだした臨時師族会議のその後の展開についてであった。
「……そっか、結局十文字先輩が矢面に立たされることになった訳か」
『悠元は無論だし、俺も武術の絡みで面識はあるが論外。四葉殿もあの後は「急ぎの用件がございますので」と退席したからな』
「ごめん、元継兄さん。嫌な役を押し付けて」
『気にするな。俺が複数の婚約関係を持たない代わりにお前が盛大に

巻き込まれてるんだ。せめて、これぐらいの苦労は負わせてくれ』
真夜だけでなく、六塚温子と五輪勇海、更には一色義道や三矢元までもが相次いで退席した。念頭にあるのは達也とかかわりが深い悠元のラインを使われることを嫌ってのもの、と元継はそう述べていた。
そして、日本魔法協会の意思を伝えるということで達也と年齢の近い克人が交渉役として赴く形となった。
『それに、四葉殿を除けば悠元が達也君に一番近い身上である以上、日本魔法協会ももう少し穏便に話を進めればよかったものの……あれでは達也君を差し出せと言っている様なものだ』
「既に聞いているかもしれないけど、一高の百山校長からも似たような話をされた。俺も［トーラス・シルバー］ではないかという嫌疑を掛けられたが否定した」
『そんなことがあったのか……海外旅行中の爺さんには今すぐ聞かせられん話だな』
あくまでも書状を持ちこんだのはＵＳＮＡ大使館だが、明らかに達也の正体を明るみにするという脅迫まで添えている時点でディオーネー計画の正当性を疑いかねない。まあ、綿密に練り上げられたとしても［トーラス・シルバー］の技術を使えば済む話であって、なにも本人が必須であるという前提は存在していない。
『ベゾブラゾフのあのインタビューにどれほどの正当性があるのかは知らんが、新ソ連とＵＳＮＡが手を組んだ時点でロクな未来にならんぞ』
「建前なんてどうにでもなる、と思っているあたりは大国の人間らしいけれど」
『そうだな。別に当該国に住まう全ての人間がそうであるとは言わんが』
そして、新ソ連を本格的に引き込むために［トーラス・シルバー］と［マテリアル・バースト］の使い手が同一であること、それが達也であることをエドワード・クラークがウィリアム・マクロードとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフに伝えるべく、大西洋上に派遣され

るエンタープライズで会談が行われるという情報まで掴んでいる。
「元継兄さんは爺さんから詳細を聞いているだろうけど、国防軍としての上条達三（じぶん）は書面上国家非公認の戦略級魔法師として登録されている。けれど、その魔法の詳細はデータ上に記載されていない。せいぜい沖縄で行使した［天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）］が関の山だ」
『一昨年に使った［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］はその詳細すら知り得ないということか……情報漏洩を危惧してか？』
「概ねその考えで合ってる」
国防軍には元々技術士官、そして緊急時の軍人魔法師としての立ち位置で登録されている。それは特務大将となった今でも変わることは無く、『灼熱と極光のハロウィン』で使用した際は『神将会』の人間として国防の為に行使したまでのこと。
オンラインデータに残さないというのは不便さを生じさせるが、情報管理という観点から盗聴などの傍受行為を受けたとしても回避できる利点が生まれる。それに、［スターライトブレイカー］は四葉家現当主の特異魔法の技術も使われている為、迂闊に手の内を明かすことが出来ない戦略級魔法でもあるのだから。

◇　◇　◇

今日は達也たちが司波家から引っ越す日。当然居候の身でもある悠元もその対象だが、先月の時点で必要なものは全て業者にお願いをしてマンションの私室に全て運び入れており、司波家に残っていたのは日常生活を送る上で必要最低限のものぐらい。残る私物については深雪と水波の引っ越しに合わせて運び出されることとなった。
マンションへの引っ越しについては婚約者たちが自主的に手伝いを申し出たことにより、完全に手持無沙汰となった悠元はＦＬＴの研究室から大きめのアタッシュケースを持ち出すと、誰の目にも止まらぬよう［鏡の扉（ミラーゲート）］で伊豆にある司波家の別荘に到着した。
「こんな山奥に……不便さよりも静粛さを優先してのことだったらしいが」
伊豆には元々ゴルフ場を改造した防空陣地も存在するが、そこから離れているとなると深夜の感受性を重んじてのことだと見れば納得

出来る。自分の使用人兼愛人となっていることからすれば、どう感想を述べればいいか分からないのも事実だが。
　そんな個人的事情はおいといて、深夜から預かった鍵で中に入る。四葉家によってある程度準備はされている為、悠元がするのはハード面での動作確認。そして持ち込んで来たアタッシュケースを開くと、そこには［トライデント］と同系統の銃形状ＣＡＤとブレスレット型ＣＡＤ、そして魔法技術を駆使して設計されたライディングスーツが入っていた。
　設備の電源を入れて設定を始めてから３０分ぐらいすると、ＶＴＯＬのローター音が聞こえたので達也が到着したのが直ぐに分かった。向こうもこちらの存在を認識していたようで、再び飛び立ったＶＴＯＬの音が聞こえなくなって数分も経たない内に達也が姿を見せた。
「悠元、来ていたのか。世話を掛けるな」
「気にするな。ま、東京に帰ったら帰ったで襲われそうだが」
「……」
　誰に、という言葉を問いかける前に対象を察したためか、達也はそれ以上問いかけるのを止めて黙った。
「さて、真夜さんからどこまで話を聞いているか分からんが、臨時師族会議の決定というか魔法協会の呼び出しの内容について教えておく」
　臨時師族会議では、第一高校で起きたようなことが会議の中で起こった事。悠元は師族会議議長として魔法協会の対価を問い質したが何も返ってこなかったこと。そして、引っ越し手続きの関係で会議を抜けたことも併せて説明した。
「十文字先輩が交渉役にか……悠元、どうするつもりだ？」
　達也から見れば、師族会議議長の意向を無視しての決定と見做せる案件。なので、克人が如何なる提案をしてもディオーネー計画に参加する義理は当然存在しない。ただ黙っているという選択肢を目の前にいる親友が取るなどとは思えないからこその問いかけに対し、悠元は静かに話し始める。
「全部根本から引っ繰り返す方針に変わりはない。日本政府の現内閣にも話は通した。それでなんだが達也、お前を縛っている［誓約（オース）］を

神楽坂家当主の権限で外そうと思う」
「……いいのか？」
「交渉が決裂した時、先輩が力づくで強制しないとも限らんからな。それに、最近深雪からよく相談されていたし」
　達也からすれば、深雪に対する感情と合わせて自身を縛り付けていたもの。それを解除すべきだという悠元の言葉と、契約を結んでいる当事者からも相談されていたことに驚きを見せていた。
「慶春会の時のように見届け役を買った上で俺自身が先輩と対峙してもいいが、どうせ情報部の諦めきれない奴らが首を突っ込むことからして、達也が十全の状態でいることの方が重要だ。まあ、深雪からも泣き落としはされたが」
「妹が迷惑を掛けてすまない」
「気にするな」
　達也には話していないが、この［誓約（オース）］に関わる解呪の権限を四葉家から引き継いでいる。慶春会と神楽坂家での当主就任の後、真夜から提示された『対価のリスト』の一つとしてそれを譲り受けた。
　なお、その中には〝四葉真夜を好きに出来る権利〟みたいなものが存在していたが、リストを持ってきた葉山に聞いても『私にはどうすることも出来ません』としか返ってこなかった。結局丁重にお断りしたわけだが。親友の母親を好きに出来る権利なんて扱いに困るだけだろうと思う。割と切実に。
　じゃあ深夜の場合は？　と問われると、既に母親によって堀を埋められた挙句の結果、手を出した責任は取らなければならない。普通は愛人の存在でトラブルが起こるというのに、この点だけで言えば〝恵まれている〟と解釈すべきなのだろう。
「事が落ち着いたら、達也も他人事じゃ済まないだろうが」
「そうだな……母上からは『いつでも婚姻届を出してもいいですよ』と本気としか思えない口調で言われたが」
　感情や記憶を〝知識化〟されたとはいえ、血の繋がった実の息子に対する愛情は本物で、それは達也の母親と呼ぶにふさわしいものだった。なお、発言の過激さにはさしもの達也ですら引き気味だったこと

は記憶に新しい。
「必要な段取りは自分が『四大老』として対面する時までに整えておく。なので、達也は自分のことに専念してくれ」
「分かった。とはいえ、別荘に引き籠ってばかりというのも暇だが」
この別荘は地下に魔法訓練の為の演習場が元々備わっている。だが、一人でやれることにも当然限界というものが存在する。そんな達也の要望を聞いた悠元は［ミラーゲート］を展開して腕を突っ込むと、取り出されたのは飾り気が一切ない人型アンドロイド。大きさは身長換算で１８０センチメートルで、一般男性の体格に近しいものだと達也もすぐに分かった。
それを演習場に持ち込んで立たせると、達也に説明をする。
「これは昨年に達也が戦った［パラサイドール］の仕組みを改良して開発した［リモートパペット］と呼べる代物で、遠く離れた登録者の動きを魔法面も含めてほぼ再現できる。流石に俺自身は登録してないけど、九重先生のものは登録してるから」
思念だけで操ることもできるし、特定の二点間に絞ることで実測距離を無視して長距離の遠隔操作も可能。八雲も達也の鍛錬を継続できるという意味で賛成し、［リモートパペット］については完全なワンオフのために秘匿することで合意された。
「それと、魔法による音声システムも完備してる」
『やあ、達也君。事情は悠元君から聞いてると思うけど、ビシバシ扱くからよろしくね』
「……ええ、望むところです」
早速、人形を介しているとはいえ八雲と達也の体術の手合わせが始まり、人形とは思えないほどの速さに達也ですらも気が抜けない有様であった。そして、悠元はそれを見届けつつ［ミラーゲート］で東京に帰ったのだった。
余談だが、八雲に使用感を尋ねると『あそこまで動けるとなると、僕も若返った様に錯覚しちゃうよ』と述べていたが、見た目が三十代、実年齢五十代の人間が言っても説得力が感じられないと思う。

苦難と女難を背負い込んだ苦労人

ＵＳＮＡが誇る大型航空母艦エンタープライズ。二千フィート級、全長約６００メートルという前世紀の原子力航空母艦と比較すると２倍近い巨体を原子力無しに稼働している最新鋭空母。だが、その実態を知る者からすれば『人を人とも思わぬ鬼畜の所業』と言わしめてもおかしくはない代物。

その実態を知る人間――――海軍の制服を着ているジェラルドは甲板で暢気に横になっていた。傍には元々この船のクルーとして配属されているジェラルドの同期（エージェントの絡みで一時期海軍学校に通っており、その時の同窓生）がいる。

「……こんなところで油を売っていていいのか？」

「良くは無いんだろうけど、上司からお前の世話係を命じられちゃ仕方ねえよ。それに、明日はお客さんが来るんだろ？」

「正確には〝明日も〟だよ」

エンタープライズはニューファンドランド島（旧カナダの東海岸に位置する島）の東の海上へ５００キロメートル――――大西洋の公海上に停泊している。本来の任務である〝アフリカ方面への牽制〟の意味合いを成すには、この場所での待機に違和感を覚える兵士も少なくない。

そして、ジェラルドの休息の終わりを告げるように聞こえてくる飛行機の駆動音を耳にしてジェラルドはズボンを軽く掃いながら立ち上がる。すると、隣にいた兵士が預かっていた上着をジェラルドに手渡した。

「お客さんは女性なんだろ？　ジェイのことだから瞬く間に墜としそうな気もするが」

「やめてくれ。海軍学校にいた時だってそんなにモテてないんだから」

ジェラルドの女運を端的に述べるのならば、〝男性が妬むよりも同情が勝る〟というものであり、海軍学校にいた時は〝女傑〟の渾名がついた先輩から告白される事態になった。その切っ掛けは彼女が

困っていたところを助けてお礼も求めずに去ったことというのは、ジェラルド本人を除けば、その場面に偶々立ち会った彼――今ジェラルドの横にいる兵士しかいなかった。
「まったく、どいつもこいつも俺のどこがいいというんだか。ＵＳＮＡの魔法師としては〝落第〟とまで言われたというのに……何だよ、ジャック？」
「お前が落第なら、一線級の魔法師が揃ってクビを切られる羽目になると思うんだが」
「んな大袈裟な……」
魔法の軍事色が強いＵＳＮＡからすれば、ジェラルドのような非戦的な魔法師など厄介払いの対象に含まれる。だが、彼の母親が先代〝シリウス〟と言う事実に加え、先代の〝カノープス〟によって鍛え上げられた事実、政府の人間としての功績を鑑みれば、彼を除外するようなことなど出来ない。
ともあれ、身なりを整えたジェラルドは、甲板上に着陸したＶＴＯＬのタラップから降りてくるスーツ姿の女性が目的の人物だと察した。目を隠す様にサングラスを掛けているが、素顔を明るみに出さないためだろうと解釈した上で敬礼をする。
「ヴィンセント中佐殿ですね？　ＵＳＮＡ大統領特使、ジェラルド・メイトリクス大佐と申します。この身なりでの挨拶をお許しください」
「これはご丁寧に。イギリス王室・エリザベスⅢ世が名代、アニエス・ヴィンセント中佐です」
ディオーネー計画――達也を排除するための会談。そして、米英の政府の意向を受けた二人が邂逅することになったのだが、ジェラルドに宛がわれた一室に入ると、アニエスは徐に掛けていたサングラスを外す。すると、その姿に見覚えがあったジェラルドは目を丸くしていた。
「……アニー？　ひょっとしてアニーなのか？」
「その呼び名……もしかして、ジェイなの？」
「あ、ああ。正直驚いたよ……」
本来、国が違う二人が面識を有していたのは、ジェラルドは昔イギ

リスに住んでいたことがあったからだ。正確には、ジェラルドの母親がＵＳＮＡ政府からの依頼でイギリス軍の魔法師を教導していた。その時、ジェラルドの住んでいた家の隣に彼女の一家が住んでいた。早い話が〝幼馴染〟に近しい関係だった。

尤も、母親が亡くなった影響でジェラルドは一時期塞ぎ込み、連絡を取ることもしなくなった。それが８年という時間を経てこうなったことに本気で頭を抱えたくなった。

「いきなり連絡が来なくなったから、本当に心配したんだからね。でも、元気で良かった……気苦労と疲れは垣間見えるけど」

「仕方ないだろ、あんな滅茶苦茶な計画をでっちあげやがった馬鹿な博士が［十三使徒］まで巻き込んで日本を嵌めようとしてやがる。最悪を日々更新してるに等しい」

「え、えらく正直に言うんだね。事実なのは私も認めるよ」

気心の知れた相手だったこともあり、馬鹿正直という言葉がつくぐらい辛辣な台詞を吐いたジェラルドにアニエスは冷や汗を流しながらも肯定の言葉を述べる。いくら相手が知己とはいえ、イギリス王室の意向を受けてのものだということは彼とて承知している。だが、それでもそんな台詞が出たのはここまでのストレスが蓄積してのものなのかもしれない。

「そちらの陛下の手紙も正直に吐露していたからな。こちらも本音をぶちまけないと意味がない。正直、うちのトップは御冠（おかんむり）の状態だ」

「そこまで……（あーもう、エリーってば手紙でどこまで書いたのよ!?）」

そして、アニエスも今回の派遣の意図について説明をする。ジェラルドの部屋には既に遮音フィールドが張り巡らされており、傍受対策については確保しているが相手が相手である以上油断はしない。

「日本の高校生……それも四葉の次期当主が［トーラス・シルバー］で、『ハロウィン』を引き起こした戦略級魔法師の公算が高い、って。最悪の極みじゃないの」

「現状で得られた情報から推理したものだが、可能性は極めて高いと言っていいだろう」

「ねえ、そっちの博士はＵＳＮＡをイギリスや新ソ連まで抱き込んで自滅させる気？　魔法師が追い出される前に国が滅びそうだよ」
「俺もそう思う」
　これまで世界の抑止力を担ってきた〝四葉（アンタッチャブル）家〟の悪名。それを体現し得るだけの力を有する存在が『灼熱と極光のハロウィン』で証明されたとすれば、この先も四葉の名に怯える日々が続く。エドワード・クラークはそれを打開するべくディオーネー計画をでっちあげた形だが、聡明な魔法師からすれば『余計なお世話だ』と一蹴したくなるべきもの。
　仮にディオーネー計画が進行したとして、その前段階となる政府間交渉では確実に衝突が起きる。とりわけ現在のＵＳＮＡ大統領は対ソ強硬路線を表明して一定の支持を得ているだけに、利益交渉は熾烈を極める。下手をすれば魔法師同士の暗闘が再来するかもしれない。
「俺からすれば、新ソ連と大亜連合に伍するだけの実力者が極東地域に現れただけでもＵＳＮＡにとって安心材料になると思ったのだがな。その上で彼が望むものを支払えば安い話なのに、軍やペンタゴンの一部の連中は危険視して『スターズ』まで送り込んだ……失敗したが」
「あのー、ジェイ。そこまで話していいの？」
「どうせイギリスにも伝わっている事実を脚色なんて出来るか、って話だ」
　ジェラルド自身、日本にはまだ〝アンタッチャブル〟の系譜が残っていたというだけでＵＳＮＡへの脅威度が減ったと思ったが、それがＵＳＮＡに向けられるリスクを鑑みた連中はそう思わなかった。『スターズ』――〝アンジー・シリウス〟の派遣を聞いた際、真っ先に反対意見を述べたのはジェラルドに他ならない。
　その相手を探るとしても、相手が戦略級魔法師である以上は無力化出来るだけの人選という意味で彼女の派遣は間違っていない。だが、いきなり喧嘩腰になりかねない状態を生み出す様なやり方には嫌悪を覚えた。
「俺だって祖国が不利益を被るのは許容できない。けれど、それは理

不尽な理由による場合だけだ。昨年の『スターズ』派遣失敗は軍の連中が国の利益だと言って排除しようと動き出した結果に他ならない」
「……もしかして、かなり怒ってる？」
「その後始末に奔走した当事者だからな。伯母さんだけなく伯父さんも頭を抱えてたぐらいだし」
　ジェラルドはこれまでリーナやセリアの後始末を請け負ってきた側の立場にいる。それでいて今回のディオーネー計画でも影響を強く受けている。宇宙に追い出される前に過労死しかねない、と言いたげなジェラルドの言葉にアニエスは苦笑を漏らした。
「だがな、俺がもっと怖いのは日本にいる『ハロウィン』の片割れ――――新ソ連方面の所属不明の艦隊を消滅させた上にウラジオストクの軍港を消し飛ばした戦略級魔法師の正体が見えないことだ。ペンタゴンの予測では［殲滅の奇術師（ティターニア）］の可能性が高いとみていたが」
「ねえ、ジェイ。早めにクラーク博士を切った方がいいんじゃない？」
「俺だってそうしたいが、明確に国家の利益に反するような行動をしていないからな。政府も迂闊に切れないんだ」
　ＵＳＮＡのエドワード・クラーク、イギリスのウィリアム・マクロード、そして新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ。いずれも表向きは国家に対する貢献の意味で支持を得ている部分がある為、下手に切れないという点が政府を悩ませていた（新ソ連の連邦政府は野心バリバリでベゾブラゾフの行動を支持しているのだろうが）。
「そういうイギリスだって相手はあの［十三使徒］だ。とっとと引退を迫れるわけでもないからな」
「でも、もう６０歳の大台なのは事実だよ。祖父には早く引退してほしいと思うけど」
「……祖父？　今、マクロード卿が祖父といったのか？」
「うん、母方の祖父だよ。けど、魔法のことばかりに感けて、孫の私たちにはあまり興味を示してくれてないもの」
　ここにきての特大級爆弾にジェラルドは頭を抱えた。何せ、イギリスに住んでいた時はアニエスから積極的なアプローチ（当時は子ども

だったので半分冗談だったのかもしれないが）をされていたが、年齢を理由に固辞していた。
　どうして自分に近寄ってくる周りの女性は一癖じゃ済まない人ばかりなのだ、と内心で吐露したくなったほどだ。なお、海軍学校時代に告白してきた女性も父親がＵＳＮＡの有力な上院議員だったりする。
「……かったるくなってきた。少し休むわ」
「あ、うん。ところで、私はどの部屋なのかな？」
「そういえばそうだったな。俺が掛け合ってみる」
　そして、ジェラルドが艦長に相談した結果、『艦の兵士との余計なトラブルを避けるためにも我慢してほしい』という倫理上の理由でジェラルドとアニエスが同室となり、彼が盛大に叫んだのは別のお話。
◇　◇　◇
　翌日、エンタープライズに２機の小型輸送機が到着した。空母の着艦手順は１５０年前から一切変わっておらず、垂直離着陸機能を持たない機体はアングルド・デッキ、アレスティング・ワイヤー、アレスティング・フックの組み合わせによって強制的に減速を取る方式が採られている。
　だが、新ソ連の小型輸送機はそのシステムを使うことなく本来１００００メートルは必要であろう距離を魔法によって約１００メートルに短縮させた。無論、その魔法の使い手は言うまでもなく［十三使徒］イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフによるものだとジェラルドは直ぐに分かった。
「ジェイ、良かったの？　付いていかなくて」
「俺はどうせ部外者だ。それに、俺が何もしてないと思うか？」
　空母で使われる部屋については既に把握している。なので、予め盗聴用の機械を忍ばせている。だが、それはあくまでも〝囮〟であり、本命はワシントンでリーナに渡したカードタイプのレコーダー。ただ、それについては大統領を介する形で渡している。
「何も記録されなくてもいいし、エドワード・クラークが強引に没収したところでこちらの推測を裏付けるだけの状況証拠を得ることにな

る……で、何でお前もＵＳＮＡ海軍の制服を持ってるんだ？」
「いや、私の場合は気を利かせた女性士官が貸してくれただけだよ？」
「さいですか……」
　彼らと接触しないようにジェラルドは部屋の中に籠っていた。それはアニエスも同様で、ここまで手際がいいと大統領による差配もあるのだろうと思った。
　会議の時間は大体１時間程度で終了し、マクロードとベゾブラゾフはそれぞれ乗ってきた輸送機で、エドワード・クラークとリーナ（アンジー・シリウス）もワシントン行きの輸送機で帰路に就いたことを報告に来た友人の士官から聞き及んだ。
　その上で、別の小型輸送機でワシントンに向かうこととなったのだが、その輸送機にはアニエスも同乗していた。
「で、お前はイギリスに帰らなくていいのか？」
「詳しいことは言えないけど、ＵＳＮＡが騒ぎになったら帰ってこいって」
「騒ぎ、ねえ……どう考えても一波乱あるのは確定事項のようなものだが」
　ジェラルドはリーナとセリアが帰国した段階で一波乱起きるのは間違いないとみている。祖国のアンダーグラウンドに君臨していた顧傑（ジード・ヘイグ）が居なくなり、魔法結社間の暗闘も頻度が増えてきている。それに、ＵＳＮＡには未だに正体を明るみにしない『七賢人』の存在がある。
「心当たりがあるの？」
「『七賢人』という連中がいる。その詳細は不明だが、一番関与しているであろう人物があのエドワード・クラークとされている」
「昨年のあのニュースもその『七賢人』絡みだったりする？」
「恐らく正解だ」
　『ディオーネー計画の真の狙いなど、日本にいる彼らはとうに把握している』――――伯母であるヴァージニア・バランスから聞いた予測に対し、ジェラルドもその言葉を否定しなかった。何せ、『スターズ』の〝シリウス〟はおろか〝ポラリス〟まで下しているため、情報収集

能力についても真偽を問うまでもなく〝本物〟だと認識するほかない。
普通ならばイギリスの秘密情報部に所属している幼馴染に売るべき情報ではない。だが、人様の身勝手に国家や政府まで巻き込まれている以上、こうなっては手段を問う場合ではない。
「で、多分一波乱あると睨んでいるのは、今の『スターズ』が年齢を無視した実力主義の為に本来あるべき階級の序列を成していない。総隊長のアンジー・シリウスを認めない奴らも少なからずいる」
「……ＵＳＮＡというか、軍の上層部が単に馬鹿すぎると思うけれど」
「言ってくれるな、アニー。だが、事実であるために否定することも出来ん」
戦略級魔法師を失ったために、早急に〝シリウス〟の確保を急いだ軍上層部の怠慢が今日の『スターズ』における歪みを生み出した。
無論、上層部としてはリーナを単に実力面で買っただけではなく、まだ十代のリーナを据えることで兵士の不満の矛先を彼女に向けさせて互いに消耗させ、政府や国防総省（ペンタゴン）への不満の矛先を逸らす狙いも含まれていた……本人たちの実力を競争心によって煽ろうとしている側面もあるのだろう。
アニエスの言葉は辛辣だが、なまじ事実であるために否定する材料もなかった。
「しかも、『スターズ』は昨年の脱走騒ぎで規律が一層厳しくなった。それに対しての不満が爆発する可能性もある」
「でも、それだけでそんなことをしたら『スターズ』が最悪部隊解散の憂き目に遭うだけだと思うけど」
「いや、それは出来んだろうな」
事実の如何はともかくとして、『スターズ』はＵＳＮＡが誇る〝世界最強〟の魔法師部隊。それがごく少数の――――それも戦略級魔法師クラスを相手に敗北を喫したとなれば、それはＵＳＮＡ軍そのものの信用にも関わる。だからこそ、却って部隊を解散して再編成するという手段を取ることは極めて難しい。それは８年前の暗闘で隊長クラスを半数も失った状態が数年も続いた時点でお察しのレベル。

「客観的な事実の如何はどうあれ、そう自負している以上は引き下がることも出来ん。そこに誰かが『アンジー・シリウスは日本に通じたスパイの可能性が極めて高い』なんて噂が蔓延したらどうなる？」
「そんなんで叛乱なんか起きたら、軍の規律が問題視されかねないけど」
「普通はな。けど、それが起こり得る可能性はある。とりわけ今の『スターズ』はそれがいつ爆発してもおかしくない」
　政府機関の人間とはいえ、いくら亡くなった身内が軍人だったとはいえ、今のジェラルドに軍に対する強制力は存在しない。いや、『元から無い』と言った方が正しいが。
　そのことを上司が仲介する形で述べても、肝心の参謀本部が取り合う様な素振りは見えなかった。これでは〝最悪の事態〟がまた更新される……と内心で溜息を吐きたかったジェラルドであった。

見る者が誰しも恐怖しかねない光景（予定）

引っ越しが終わった次の日の月曜日、達也は伊豆にいる関係で学校に姿を見せなくなった。八雲の鍛錬を受けられない代わりは施してきたし、箱根にも近いので時折千姫も様子を見に行くとのこと。遠縁とはいえ神楽坂家の血筋を引いているため、彼女にとっては孫みたいな存在とも言えた。

その一方、悠元も達也と同じ憂き目に遭っていたが、普通に学校に来ていた。とはいえ、授業を受けなくてもいいのならば『やるべきことがある』と言って作業に専念できるようになった。だが、その作業場所は部活連の本部室ではなく生徒会室であった。

「お疲れ様です、〝ご主人様〟」

「……深雪さんや。ここは学校なのだからその呼び方は止めてくれ。誰かに聞かれたら堪らん」

「ふふ、二人きりだからこそですよ」

前の週末にＦＬＴツインタワーマンションへ引っ越してきた深雪。四葉家としては守りを強化する意味で調布のマンションでも良かったわけだが、深雪の心情と悠元の負担を考えて認めてくれた。まあ、ＦＬＴ自体も四葉家の管轄であるし、最新鋭の魔法防御システムを備えているので調布よりは安心できる材料があったのも事実。

その代わり、早速深雪に襲撃された（別に殺傷事ではない）のは言うまでもない話かもしれないが、深雪の精神安定に寄与していると思えば、自分の苦労も決して無駄ではない。

話を戻すが、悠元が生徒会室で作業をしているのは深雪の要望によるものが大きい。なので、学校では九校戦中止の代替案を作成し、家では『ＳＴＥＰ』計画のプレス発表に向けた資料作りをしている。

「いざとなったら、会長権限で暫く二人きりにしても誰も咎めないでしょうから」

「……考え方がどこかあの先々代会長に似てきてる気がするんだが」

「だって、積極的にアピールしないと独占しそうですから、あの先輩は」

深雪の積極的な行動の根底にあるのは〝対抗心〟であり、主な対象は深夜と真由美の二人。それ以外の婚約者とは割かし良好な関係を築いている。なお、深夜としては別に婚約者の座は狙っておらず、深雪を焚き付けるのは『真夜よりも先に自分の孫の顔がみたいから』という単純なものであった。尤も、そういう段階は魔法大学を卒業してから、と了解を貰っている。

真由美の場合はと言うと、関係を持った段階でかなりの借りを悠元に対して持っている状態の為、『他の婚約者や愛人たちとの和を乱さない』ことを約束させている。泉美には真由美を扱き使ってもいいと許可を得ている為、その代わりとして関係を持ってしまった。事後の感想は『今度から〝ご主人様〟と呼称したいです』と言われた。

何で自分と関わると周りの女性（婚約者や愛人）が自身を奴隷扱いにして欲しいと願ってくるのか……深夜曰く『悠元君は一定の距離を最初から取るから、逆に詰めたいと願った結果が奴隷や愛人扱いなのよ』と述べた事に対して、何も言えなくなった。

「序列を今更変える気にもならんし、深雪はその意味でも一番特別だと思ってる……あの、力を強めないでください。余計に当たってるんですが」

「当ててますから」

嬉しいという感情表現に対して嬉しくないというわけではないが、もう少し節度を持ったスキンシップをして欲しい……とはいいつつも、もうじき付き合って（婚約関係もしくは実体的な関係）２年になるわけだが、日に日に綺麗になっていく婚約者を咎める気にもならない。

この場で深雪を押し倒して行為に至っても、誰かに見られても特に問題はない（寧ろ、生徒からは『どこか知らないところで行為に及んでいそう』という噂もあるにはある）。だが、自分の場合はまだ魔法大学の推薦枠で行けるが、生徒会役員の不文律を鑑みると深雪に支障を来たす様な事は避けたい。

なお、その噂を聞いたときに達也は自分ではなく深雪に対して疑念を向け、それに対して深雪が泣き落としで『酷いです、お兄様。私は

そこまで破廉恥ではありません』と述べていた。それを傍で聞いていた雫曰く『深雪がそれを言っても説得力がない』とのこと。
「それにしても……綺麗になってますけど、ご主人様がしてくださったのですか？」
「作業の息抜き程度に軽く掃除しただけだよ……そろそろ離れないと、誰か来そうだよ」
「そうですね……今日は押し掛けますので」
生徒会室に近付いてくる気配を先に悠元が察し、彼の言葉で深雪は名残惜しそうに離れて会長の机に着いたところで扉が開き、ほのかが入って来た。
「あ、お邪魔しちゃったかな？」
「いや、そこまで気を遣わんでもいいから」
「そうよ、ほのか」
「う、うん……」
ほのかからすれば、悠元は中学時代からの友人で、深雪は魔法科高校からの付き合い。しかも、ほのかは達也と婚約関係にあり、悠元と深雪は婚約関係を公表している。いわばここの三人は〝義理のきょうだい（姉妹・姉弟）〟と言う関係になる。
続く形で理璃と泉美、水波が入ってきて、一番最後に入ってきたのは詩奈だった。見事に悠元以外女子ばかりだが、五人の内三人が悠元と婚姻もしくは愛人関係という状態。他の二人も各々婚約を結んでいる為、将来が決定している点が明るみになれば羨む人間が出てくるかもしれない。
すると、詩奈が悠元に問いかけてきた。
「お兄様、ピクシーはどうなさったのですか？」
「あれは元々達也の所有しているものだからな。世話係として一緒に伊豆へ行ってるよ」
実体的な所有権の半分を悠元は持っているが、達也への感情を鑑みるとサポートをしてもらう方がありがたいと考え、ピクシーは達也のもとに送ってもらった。今までピクシーがいた分のサポート的なところは水波が引き継ぐ（使用人としての性分もあるが）ため、特に混

乱は見られない。
「それで、お兄様は生徒会役員ではないのにどうしてここに？」
「まあ、ここに達也がいないことで事情は察してくれ」
「……なるほど」
　原作とは異なり、実兄の婚約者が今の生徒会長であるため、それを守るという意味でここにいるのだと直ぐに理解した。とはいえ、生徒会室で話す内容でもないために続きは行きつけの喫茶店で話されることになった。
　そこにはエリカたちも加わっての会話。達也がいないとはいえ、悠元を中心として3年組だけでなく2年の水波、香澄に泉美。そして1年組の詩奈と侍郎も参加している。
「悠元はいいわよね」
「別にそう望んだ訳じゃないがな。寧ろ実力を発揮できる機会を奪われたに等しい」
「お、おう。そう言っちゃう辺りは悠元らしいな」
　エリカの本心も交えた台詞に対して悠元が答えると、その正直な言葉にレオが冷や汗をかいていた。優秀だからと言って授業に出なくてもいい、というのは本人だけでなく教える立場の教官陣を蔑ろにするような発言に等しいのだから。
　今まで真面目に受けて来た身としては、却って調子が狂うぐらいだ。なので、甘楽先生の授業には今までと変わらずに参加している。先生もそれに触れることは無いが、どこか苦笑を滲ませていたのは確かだ。
　なお、先生からは『私が教える事よりも、教えられることの方が遥かに多い気がします』と言われた。何故だ。
「ねえ、深雪。今度の日曜に達也さんのところに伺っちゃダメかな？」
「そうね……今すぐにと言うのは厳しいけれど、お兄様にはほのかとの時間を作る様に言い含めておくわね」
「ちょ、ちょっと深雪！　そこまでしなくてもいいって!!」
「ほのかは甘い、ここは言葉に甘えるべき。寧ろほのかから押し倒すべし」

「雫ぅ!?」
流石に達也が伊豆に行った理由はここにいる面子なら知り得ていることで、いざとなれば達也の助けともなり得る面々ばかり。まあ、昨春の経験やらパラサイトやら、終いには『スターズ』などの軍人魔法師などとの戦闘経験など、普通に過ごしていたら得ることのない経験をしてきた……寧ろ、平和に過ごしたいのならば要らない経験とも言うが。
「悠元は助けに入らないんですか?」
「ほのかは変なところで一線を引くからな。彼女の性格所以なのかもしれねいけど、別に少しぐらい我儘を言ったところで罰が当たらないと思う」
「それは同感ですね」
何にせよ、今できることをやっていく。良くも悪くもそれしか出来ないのだから。

◇　◇　◇

魔法大学には同好会・サークルの類は無く、クラブ活動が充実している。大手の運動系クラブはトレーナー付と言う充実ぶりで、国立大学としては破格とも言える。これは魔法師の進路に身体能力や体力が必要とされるものが多く、体育系の実技がカリキュラムに含まれていないところを補完するためのもの。
とはいえ、強制加入ではないので学生の中にはクラブに入っていない者も少なくない。その一人である真由美は帰り道の途中で見知った後ろ姿――誰しもが認識しやすいガタイの持ち主――こと克人の姿が目に入る。
真由美が声を掛けようかと思ったとき、前にいた克人は立ち止まって後ろを向き、彼女に視線を向けていた。魔法師としての〝眼の良さ〟を知っていた真由美は特に驚くこともなく克人を見る。
「二木か。珍しいな、一人とは」
「今日はレポートが思ったよりも長引いちゃって。そう言う十文字君も?」
「その通りだ。……二木、少し相談したいことがある」

（随分悩んでるわね。まあ、達也君絡みなのは間違いないでしょうけど）
魔法科高校に入る以前から家の関係で面識を持っている為、克人の為人を把握している。良く知る人間だからこそ相談しにくいとなれば、それこそ真由美が今置かれている状況も加味してのことなのだろう。
「別に構わないけど、どこかの喫茶店にでもお邪魔する？」
「いや、そこまで時間は取らせないつもりだ。電車（キャビネット）の中で話したい」
「いいわよ」
そして、二人は同じ個別電車に乗るのだが、行き先は真由美が帰る場所を想定して最寄りの町田方面だったことに思わず笑みを漏らしつつ、改めて真由美から問いかけた。
「それで、十文字君が悩んでいたのは先日の臨時師族会議と何か関係があるのかしら？」
「誰から聞いた？　いや、二木の立場を考えれば神楽坂殿からか」
「あたり。流石に元実家には頼れないから」
今でも家業の関係で東京に居る血縁上の父親に頼ったら何を対価にされるか分からない、という文言は入れなかったが、それを含む様な発言だと気付きつつも、克人は『話が早い』と置いた上で話し始める。
「今度の日曜に司波のもとへ出向く。なので二木、お前にも同行してもらいたい」
「……私が？　どちらかと言えば達也君の側に近しいのだけれど、それでもいいと？」
「ああ。何分、今回のことで家を動かすわけにもいかないからな」
「いや、何をしに行くつもりなのよ。また美嘉さんに叱られるわよ」
「むっ……」
そのやり取りで美嘉の名が出た瞬間に克人が顔を顰めたことで、『美嘉さんに怒られるようなことをしたのね』と察しつつ、真由美は克人の頼みを了承する方向に話を逸らすことにした。
「まあ、分かったわ。言っておくけど、あまり戦力の勘定としては期待

しないで欲しいの。一応摩利やつぐみんあたりにも声は掛けようと思うけど、それでいい？」
「……余り多くならない程度に頼む」
魔法師同士の人付き合いという点では克人よりも真由美が勝る為、克人はせめて行動に支障が出ない範囲での同行者の人数に収めて欲しいと願い、それを引き受けた。そして最寄りの駅に着いたところで克人に声を掛けつつ降り、それを見届けた後で真由美は一息吐いた。
「……悠君も達也君も、十文字君も大変よね。さて、私も忙しくなりそうだから頑張らないと」
そんな事を言いながらマンションの方へと歩を進める真由美。その足取りがやけに軽やかだったのは……きっと、自分が愛する人の存在所以なのかもしれない。
◇　◇　◇
そして、所変わってＦＬＴツインタワーマンションの北棟にある悠元の私室には、珍しい人物が姿を見せていた。それは、今の悠元にとってみれば〝会うのが憚られる人物〟とも言える藤林響子その人だ。
「ごめんなさいね、悠元君」
「お気になさらず。内密で話をしたいとなると、情報部絡みですか？」
「そうね。正確には達也君を『再教育』したい連中と言うべきだけれど」
同じ国防軍の括りであっても、響子は達也と婚約関係を結んでいる関係で自らが所属する独立魔装大隊にもあまり顔を見せていない。大隊長の副官という立場上はどうなのかという疑問も当然出てくる。
実は先月末、響子に辞令が発せられた。内容は５月１日付を以て陸軍総司令部特務参謀補佐官となり、第１０１旅団での扱いは〝総司令部からの出向〟となった。
こんな事態となったのは、一つが九島烈の完全引退宣言。それでも国防軍への指導顧問は続けているが、以前のように烈ありきの状態から脱しつつあった。もうじき９０歳の大台を迎える御仁にいつまでも依存するのは力の衰退を招くという判断。

そして、陸軍総司令部は〝組織の若返り〟という名目かつ九島烈の縁者ということで響子を昇進させることにした。元々独立魔装大隊自体が階級の塩漬けをしてしまっていたため、異例の昇進人事を経て響子の階級は中尉から少佐への〝二階級特進〟（流石に同一のタイミングでは行わず、時間をおいての二度の昇進）となった。

無論、一番困惑したのは響子本人。別に達也のような功績を挙げたわけではなく、彼女の本分はあくまでも情報関連の仕事。いわば後方勤務の人間がいきなりに階級も上がれば、誰の目にも止まってしまう。加えて、九島烈の縁者ということで要らぬ疑惑を掛けられた結果としての立場となった。

「達也君は今伊豆にいるでしょ？　今度十文字家の当主が出向くことは聞いてるわよね」

「ええ、既に。二人の交渉が決裂したところに襲撃を掛けるとしたら、〝馬鹿者〟の烙印を押してやりたいです」

「全くよ……それで、隊長からは『独立魔装大隊として助けることは出来ない』と伝えてくれって」

元々当てにしていないものが改めてそうなったとしても、別に困る要素など一つもない。恐らく4月末の房総半島に関する件も自分や達也が関与していると推察しているだろうが、その件は日本政府並びに今上天皇陛下より『国際関係を崩壊させるような案件の処理』として『神将会』が四葉家に依頼した形を取っている。

なので、国防軍の一大隊に過ぎない人間に道理を問われる筋合いはないが。

「まあ、そんなことだろうと思ってました。風間中佐とて国防陸軍の一部隊長に過ぎない以上、出来ないことはありますから。響子さん、光宣をお借りしても大丈夫ですか？」

「え、ええ。あの子はお祖父様の仕事の絡みで荒事にも慣れてるから、光宣も貴方の頼みなら快く引き受けてくれると思うけど……何をするの？」

「そうですね……情報部をこの際〝掃除〟します」

一度は猶予を与えた。それでも言うことを聞かずに目論んでいる。

子どもですら叱られたら言うことを聞こうとするのに、それすら出来ないとなれば知能が余りにも幼稚過ぎる。ならば、もう相手に与える猶予はない。
「当日は神楽坂悠元としてではなく、自分が依頼したフリーの魔法師に扮して赴きます。達也には事前に説明していますが、その場の状況次第では十文字家当主を叩きのめし、情報部を抹殺します」
「……達也君が［分解］で消さない辺り、まだ有情にも聞こえそうなんだけれど」
「その代わり、見るもホラーな光景が出来上がりますが。一昨年春以上の地獄が」
「ごめんなさい、前言撤回するわ」
　最初は達也のような〝何も残らない〟よりもマシだと思えたが、一昨年春に起きた防衛大のデモンストレーションの惨劇（なお死者ゼロ）よりも酷いとなれば、先程の楽観した発言など意味を成さない、と響子は発言を撤回した。
「あれでしたら、魔法で中継できるように仕込んでおきましょうか？
　尤も、あまり見ることはお薦めしませんが」
「……一応、こちらから把握できるようにお願いしてもいいかしら？」
「分かりました」
　そして、達也がいる伊豆の別荘周りの監視カメラにアクセスできるコードを響子に渡し、どう使うかの判断を委ねた上で南棟まで送り届けた。なお、戻ってきたところで深雪があらぬ勘違いをしてヤキモチを焼いたのはここだけの話。

収支上のマイナス面につき

達也の許に克人からのメールが届いたのは水曜日の夕方。四葉本家から転送されてきたメールは魔法科高校の先輩・後輩という間柄ではなく、十師族・四葉家の次期当主に対して十師族・十文字家の当主が都合を尋ねるという趣のものだった。

とはいえ、学校から授業の免除を言い渡されている達也にとっては都合などついているに等しく、手短ではあるが丁重な文章で了解の旨を伝える返信をしたところで、来客に視線を向けた。

「達也兄さん、急なご用事ですか？」

「いや、十文字家からのメールだった。何か知らないか？」

「いえ、特に何も……」

この時点で、来客もとい黒羽文弥が訪れた理由は師族会議に関係するものではない、ということになる。尤も、文弥が女装――――様になっている部分は否定しないが――――で来ている時点でも相応の用件ということになるだろう。

そして、達也にはもう一つ気になっていたことがあった。

「今回は珍しく亜夜子と別行動なんだな」

「ええ。姉さんも来たがっていましたが、命令ですから。でも、『いくら文弥でも誘惑したら許しませんよ』なんて半分冗談めいた感じで言われたんです！　酷くないですか!?　僕にだって普通に女性と恋愛する権利はあります！」

「……心情は察しておく。それで文弥、用件の方を聞かせてくれないか？」

男性らしくありたいと思っても、見るからの仕草は同年代の少女よりも魅力的に映るものであった……無論、力説するように声を発した文弥は無論のこと、達也とて男色に興味はない。

普通に訪れる分には態々変装などしなくても良い筈だが、それが出来なかったとなれば四葉本家に関する連絡だと推察した上で、達也は女装にあまり触れないようにしつつ文弥に用件を促した。

「この別荘が襲撃される可能性が高まりました」

「国防軍か？」
「はい。それで……四葉本家からは援軍を出せない、とのことです」
　その根底にあるのは、４月下旬の秘密収容所襲撃に関する件だろう。元をかえせば自分が関与した事なので、当然相手からの逆襲や復讐の類は予め想定している。緊張している面持ちの文弥に対し、達也はゆっくりと言葉を零す。
「妥当だな。元々は四葉家の依頼とはいえ、実行したのは俺だ。今四葉家と国防軍が事を構えるのはマイナスでしかない」
「達也兄さんは、それでいいんですか!?」
「別に四葉の力を借りずとも、好意で力を貸してくれる友人は多いからな。それに、最悪俺一人で片を付ければいいだけだ」
　ここまでの時点で、既に神楽坂家が力を貸すことは確定。上泉家も誼で協力してくれるだろう。同じ十師族の三矢家が家単位は厳しくても、個人単位で協力してくれることは想像に難くない。
　それだけでなく、達也がこれまでに築いてきた友人関係から力を貸そうと首を突っ込んでくる輩がいる。それを自身の口で述べるというのは何処か釈然としない達也に、これには文弥も思わず笑みを零していた。
「文弥、何故笑う」
「す、すみません、達也兄さん。でも、今の兄さんのお顔は『自分で言うのもどうかと思うが』みたいな感じでしたよ」
「否定はしない。それに、ここらは山林の中になる以上、［今果心（いまかしん）］や［大天狗（だいてんぐ）］、それ以上のクラスでもない限りは後れを取ることなどない」
　尤も、八雲や風間以上となると、達也が知る限りにおいて数名しか存在しない人外の領域にいる人物。その一人は奇しくも達也の親友にして戦友。幸いにして、達也の考えを最も理解してくれている味方だという事実は、原作世界以上に達也が強固な後ろ盾を得ていることに他ならない。
「寧ろ、悠元が出張ることになったら、俺が関与するよりも更に酷い惨劇にしかならんが」

「……酷くないですか？」
「客観的事実を述べたまでだ」
何せ、彼の祖父こと上泉剛三が成した大漢（ダーハン）の殲滅劇とまではいかないが、アフリカで起きた大亜連合軍約１０万をたった二人で殲滅した事実には、人を殺すことに忌避感を持たない達也ですら引いた。なお、それを聞いていた深雪が目を輝かせていたのは言うまでもない。
それに限らず、テロリストの大西洋横断やマフィア組織をいくつも潰し、果ては正規軍の魔法師相手ですら赤子の手をひねるが如く倒している。本人曰く『巻き込まれた』のは妥当だろうが、それを差し引いても相手を悉く潰しているのは……四葉の戦士として育てられた側の人間としても〝異常〟としか評することが出来なかった。
「といいますか、悠元さんが敵に回る理由は無いと？」
「……互いに『一番戦いたくない相手』と認めているからな」
そもそも、宇宙開発計画自体を決して否定はしないが、そこに興味を持たない人間が『出来る能力がある』というだけで巻き込まれること自体を良しとしていない。そんなこともあったりするが、一番の理由はお互いに本気で殺し合ったところで、最も怒らせてはいけない人間を怒らせてしまい、悠元が一番被害を受けることになる。
「互いの手の内が分かっているからこそ、面倒事は避けたい。それは向こうも同様だろう」
「悠元さんや達也兄さんでも面倒事というものはあるのですね」
「悠元はまだしも、俺はそこまで万能超人ではないのだが」
その言葉に相応しいのは間違いなく自分の親友である、と思いながらもいずれ来るであろう国防軍の襲撃に対して準備を念入りにしておこうと心に決めた達也であった。
「それに、深雪のこともある。そこまで言えば文弥なら分かってくれるな？」
「あー……納得しました」
達也の口から出た人物の名を聞いた瞬間、二人が対決すると面倒事になる、と瞬時に判断した文弥は苦笑を浮かべていた。尤も、同年代の女子よりも女らしい笑い方をしていたという事実は……達也の心

の片隅に仕舞われることとなった。
◇　◇　◇
その頃、悠元はＦＬＴでの用件を終えて帰宅していた。すると、リビングから明らかに冷気というか〝寒気〟に等しい空気を感じた。その力を発した主の存在を察しつつ、扉を開けるとソファーに座って相対する深雪と亜夜子。深雪は悠元の存在に気付いて、バツが悪そうな表情を浮かべていた。
「あ、その、悠元さん。これは……」
「まあ、事情は後で聞こうかな。亜夜子ちゃん、シャワーを貸してあげるから行っておいで。水波、頼めるか？」
「畏まりました」
大方の事情を察しつつも、ここは別に怒鳴ることでもない。亜夜子のことは水波に頼んだ上で、悠元は［天照絢爛］で深雪が発した魔法を巻き戻した。その上で、深雪の隣に座って彼女の頭を撫でた。
「じゃあ、何があったのかを話してほしい」
「は、はい……」
亜夜子が訪ねたのは四葉本家からのメッセンジャーとしてであり、今頃は文弥が達也のもとを訪れているのだろう、と考えられる。そして、亜夜子の口からは『四葉本家から援軍は出せない』との伝言だった。
これに対して深雪が魔法を漏らしてしまった。原作以上に強化された深雪の今の実力なら下手すると亜夜子を凍結させかねないところだったが、そこは深雪の加減が上手に働いた形となった。
「妥当なところだな。いくら達也が四葉の次期当主として指名されたとはいえ、国防軍と表立って事を構えるのはリスクが高い。数十年も地下生活なんて収益の点でマイナスしか生まないし、最悪子孫の世代で反旗を翻しかねない」
「……」
「そう膨れるな。達也が長年置かれた立場が短期間で変われば誰も苦労しない」
生まれた時から達也は四葉家にとって無視できない存在であり、畏

怖の存在でもある。それを制御するべく〝戦士〟として育ててきたのは先代の四葉家当主であり、そのツケが今になって表面化してきただけのこと。
　いくら次期当主として指名されたという公然の事実があるとしても、内外が収まっていない以上、まだ時間が掛かるのは已む無き事だ。
「悠元さんは、国防軍情報部がいつ攻めてくるとお考えなのですか？」
「……今度の週末に十文字家当主が達也を訪れることになっている。拉致を目論むとしたらそこになるだろうな」
　実際には、既に達也がいる別荘を見張っている可能性は高い。尤も、そのことを四葉家が見張っているからこそ達也に援軍は出せないという判断に繋がったのだろう……執事長である葉山が実の息子が危機に瀕しているというだけで動きかねない母親をどう説得したのかは不明だが。
「達也のことだから、すべて理解しきった上で伊豆の別荘に引っ込むことを選択したのだろう。婚約者のことを鑑みての判断をするあたり、達也も素直じゃないというか」
「まあ、お兄様ですから」
　それで片が付くのは達也本人が納得しないだろうが、こればかりは仕方がないと諦めてもらうしかない。そうして事情を聞いていると、先程とは違う私服を身に付けている亜夜子が姿を見せた。
「亜夜子ちゃん、うちの我儘な婚約者が迷惑を掛けたようですまなかった」
「い、いえ、悠元さんが気になさることではありませんので」
　深雪の魔法は驚異的に映ったのだろうか、どこか怯えを垣間見せているのは致し方がない。ともあれ、改めて亜夜子から四葉家からの伝言を受け取ることとした。とはいえ、内容は先程深雪が話した内容を確認する意味合いでしかなかったが。
「事情は分かった。護人・神楽坂家当主として四葉家の意向を受け入れよう」
「宜しいのですか？」
「達也自身でどうにかなる問題ならば、下手に介入して味方殺（フレンドリーファイア）しす

るほうが危険だからな」
　それに、明確なターゲットの存在は相手の注意を引きやすい。少なくともＦＬＴ周辺に国防軍情報部の姿がないことは確認済みだし、もしもの時に備えて今まで横浜中華街に布陣していた［霊亀］を護りの要として置いている。
「まあ、近いうちに十文字家当主が達也の許を訪れるらしいから、可能であればエリカたちの援護ぐらいはしてくれると助かる」
「？　何故そこでエリカたちが関与するのですか？」
「四葉家は動かせないが、警察は動いてくれるだろう」
　好き好んでトラブルに首を突っ込みたがっている訳ではないにせよ、友人を誘拐しようとする輩を見逃せるほど甘くはない。それに、詩奈救出の時はそこまで暴れられなかったフラストレーションの解消という意味で協力を頼んでいる。
　尤も、エリカたちにも出張ってもらうのは一番張り切りそうなほのかのストッパーの役割も併せてのこと。何はともあれ、亜夜子に対してはお詫びとして新型ＣＡＤを渡すことで折り合いをつけることができた。
　余談だが、この後深雪が悠元をバスルームに引っ張っていく姿を水波が見届けようとしたところで、深雪が『主としての命令』という体で水波まで巻き込んだ結果、三人の間に何が起きたのかは……察して頂きたい。
　◇　◇　◇
　そして日付は流れて金曜日、殆どの授業に出る必要が無くなった悠元は今日も生徒会室のワークステーションで作業を進めていた。オンライン端末なので傍受の危険性は当然加味しているわけだが、別に見られたとしても根幹の技術を盗まれるわけではなく、あくまでも〝事業の説明資料〟程度のものでしかない。尤も、学校でやっている作業は九校戦の代案なので特段問題はないが。
　セリアからは毎日メールが送られてくる（暗号メールかつ前世でのネットスラング満載なので、この世界の娯楽レベルでは決して解読できない）が、実家のシールズ家ではなくアビゲイル・ステューアット

の家に入り浸っているらしい。原作では［ヘビィ・メタル・バースト］と［ブリオネイク］に深く関与した人物だが、この世界でも同様だった。しかも、どうやら〝転生者〟らしい。

何故かと言うと、リーナの潜入捜査に際して魔法少女チックなものに仕立て上げた片棒を担いでおり、セリアはそのアニメを知っていたので直ぐに看破しただけでなく、意気投合したらしい……矛先となるリーナに少し同情を抱いたのは言うまでもない。

なお、アビゲイル当人曰く『どうにかしてリーナの誼で日本に行けないかな!?』とどこかオタク気質が垣間見える一面があった。いや、［ブリオネイク］の時点でＵＳＮＡが死んでも離さないだろうとは思わなくもない……この件については見なかったことにする。

大西洋上では予定通りエドワード・クラーク、ウィリアム・マクロード、そしてイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフによる三者会談が実施されたことは把握している。そして、リーナとセリアの精神感応によってＵＳＮＡ政府の高官（大統領とその側近のみ）も［質量爆散（マテリアル・バースト）］の術者が達也であるという認識を得ている。

だが、ウラジオストク軍港を破壊した［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］については、エドワード・クラークの［エシェロンⅢ］を以てしても『名前も魔法の全容も解明することが出来なかった』とリーナが聞いた情報で判明している。

何せ、物理的な破壊力を有する［マテリアル・バースト］とは異なり、情報そのものすら消し飛ばす［スターライトブレイカー］は現行の技術水準において再現不可能のラインに達する戦略級魔法。レイモンドは状況証拠で悠元を戦略級魔法師だと判断したようだが、その父親であるエドワードが情報開示に踏み切れなかったのは、十分な証拠が揃えなかったためとみている。『現状は』という但し書きがつくのは当然の帰結だが。

悠元が作業している後ろでは生徒会活動の後片付けをしているところで、殆どの生徒会役員が先に出ていった（空気を読んだ、とも言えるが）。今日の作業はここまでだと判断しつつワークステーションの電源を落とすと、振り返った先には深雪が静かに立っていた。

「待たせてしまって済まないな、深雪」
「いえ、いいんですよ。もう宜しいのですか？」
「資料の作成自体は見直しだけだからな。あと数日有れば間に合うよ」
　すると、深雪が何処か決意したような表情をしていることに気付き、悠元は椅子から立ち上がって深雪に問いかけた。
「深雪、達也には事前に〝あのこと〟について話はした。その時に深雪から相談されたことも合わせてな……決意に揺らぎはないか？」
「はい。私はもう神楽坂家の人間も同然です。私が独り立ちするためにも、お兄様を縛る鎖は必要ないかと」
「そうか……明日は同行するが、用事が済んだら一度東京に帰る。とんだ茶番になるかもしれんが。さて、他の人が心配する前に行こうか」
「畏まりました、ご主人様」
　深雪との付き合いはかれこれ5年になろうとしているが、面識を持った当初はこんな関係になるなど想定すらしていなかった。あくまでも仲のいい友人レベルが落としどころだろうと睨んで行動していたわけだが。
「……達也と友人関係であろうと思っての行動が、こんなことになるだなんて誰が想像できるよ。で、深雪さんや。やけに積極的ですね」
「二人きりだからこそですよ。だからこそ当ててますから」
「さいですか」
　別に嫌というわけではないのは深雪にも伝わっており、二人きりの時は誰の目も気にしなくていいと抱き着いて来る。尤も、一線の弁え方を理解しているからこそのスキンシップではある。
　なお、帰る時に二人で出てきたところを他の生徒会役員が目撃し、詩奈が思わず『侍郎君にもああしたら喜ぶかな』と爆弾を投下したことで侍郎に更なる苦難が降り掛かったのは別のお話。

制限解除

深雪やほのかたち生徒会役員に悠元、雫と香澄の風紀委員コンビ、そして詩奈と侍郎の1年コンビ（先日の件でカップルの噂が立っており、詩奈自身が『事実ですよ』と凄味のある笑顔で同学年の男子を押し黙らせた）が帰り道を歩いていると、後ろから呼びかけてくる声に気付いて振り向いた。

「おや、エリカたちじゃないか。今日は巡回当番じゃなかったと記憶してるんだが、何か問題でもあったか？」

「いや、現会頭の悠元の手を煩わせるようなことしたら、生徒会活動にまで波及するわよ」

「意味が分からん」

深雪のストッパーという側面があれば成立する話だが、入学式の一件が在校生にも伝わったようで、下手に騒ぎを起こさないようにしている生徒が後を絶たない。いや、それが真っ当な学校生活と言えばそうなのだが、別に騒動さえ起こさなければ咎めるつもりなど微塵もない。

にしても、クラブ活動であっても残っている生徒があまりいない時間なのに、それまで学校に残っていた理由を美月が説明してくれた。

「実は、放課後に勉強会をしようって話になりまして」

「気付いたら見回りの人に追い出されちゃったのよね」

そして、エリカがあっけらかんと事情を説明した。定期考査が近いので勉強会をするという趣は確かに間違っていないが、元二科生組だけで集まっての勉強会は珍しいとも言えた。

「まあ、勉学を積むのはいい事だと思うが、何かあったのか？」

「別に大したことじゃねえけどよ、俺も魔法大学を目指そうと思って幹比古に相談したんだ」

「レオのやる気を聞いて、僕も改めて勉強しようと思ってね」

元々は男子組二人がやる気になり、それを小耳に挟んだエリカが負けず嫌いの根性で参加し、なし崩し的に美月まで巻き込まれたそうだ。なお、燈也や修司、由夢と佐那は用事があって先に帰ったらしい。

「二人の成績なら別に勉強せんでもいいとは思うんだけどね」
「相変わらずの負けず嫌いだね」
　若干不貞腐れるように言い放ったエリカに対し、雫が率直な意見を述べた。ちなみに、エリカは当初世界へ武者修行を考えていたが、レオと付き合うようになったことで魔法大学への進学を本気で考えている。心変わりの一端には悠元が剛三と一緒に武者修行をした話が大きく関わっているようだが、詳細は敢えて聞いていない。
「そういえば、深雪。達也君と今度の週末に会えないかな？　特に用事は無いんだけれどね」
「……ごめんなさい、エリカ。日曜に先約が入っているの」
「あー、別にいいわよ。なんとなく察したから」
　エリカの問いかけに深雪が申し訳なさそうに答えると、明らかに面倒事の臭いを感じたのかエリカは『それ以上言わなくてもいいわよ』と述べた。

◇　◇　◇

　そんな風に悠元たちが過ごしている頃、四葉本家の真夜の私室に来客がいた。本来、真夜にとって信頼できる人間しか通さない場所にいるのは、見た目は真夜よりも若いが既に高齢の領域にいる御仁――神楽坂家先代当主・神楽坂千姫であった。
「予想通り［フリズスキャルヴ］が止まったようだけれど、真夜ちゃんは大丈夫？」
「ええ、悠元君が提供してくれた術式のお陰で滞りなく。この事態を三矢家にいた時から見越していたと思うと、味方で良かったと思いますわ」
　［フリズスキャルヴ］の存在を四葉家と神楽坂家は相互に把握しており、既に端末が破壊された神楽坂家はもとより、停止するまで使い続けていた四葉家もさしたる混乱は起きなかった。
「まあ、あの子なら［フリズスキャルヴ］を逆に利用してＵＳＮＡを嵌めることまで折り合いをつけているでしょう。ただ、少し気になるのが……レイモンド・クラーク」
「その名前はたっくんから聞きました。確か、パラサイト事件の時の

情報提供者ですわね」
　パラサイト事件終結後、千姫は悠元から報告の詳細を受けており、その中でレイモンド・クラークなる人物の存在を怪しんでいるということまで聞き及んでいた。そして、今回のディオーネー計画の提唱者として出てきたエドワード・クラーク。同じファミリーネームで情報分野に精通している共通点となれば、当然疑うのは血縁関係。
「その件については裏付けが取れたよ。情報提供者はエドワード・クラークの元妻」
「例の人物の……いつ面識を持ったのですか？」
「これは偶然なんだよね」
　神楽坂家が水面下に潜んでいた頃――――８年前に千姫はビジネスネーム〝チェルシー・ウィンスター〟の名でＵＳＮＡを訪れていたことがあった。目的はベーリング海で起こり得るであろう魔法師の暗闘の行く末を見守る為。余りに新ソ連が勝ち過ぎるようならば介入して殲滅も視野に入れていた。
「彼女も偶々アラスカにいて、その時丁度ＵＳＮＡと新ソ連の暗闘があったから、彼女の護衛という体でワシントンに連れ帰ったの。家族のことはその後に聞いたけど、『家族を大事にしてくれなかったから家を出た』ってね」
　なお、その彼女は現在神楽坂家が買収した大手メディアのアンカーパーソンとして著名な存在となっており、ディオーネー計画に対して直訳すると『あの男の立てた計画など人を人と思わない下衆な類の所業です』と言いたげな言動で向こうの政財界を激震させた。
「話を戻すけど、悠君は達也君を支持してくれるわ。一応形式としての挨拶は追々してもらうことになるけど、それまで四葉家は反撃の準備を整えておきなさい」
「畏まりました、千姫さん」
　千姫が訪れた理由は、四葉家に今回は抑えてもらう代わりとして神楽坂家が表立って達也のバックアップを担うというもの。当主としての差配は悠元の領分だが、もしもの時を鑑みて悠元が事前に千姫へお願いをしていた部分になる。

それと、臨時師族会議の結果として十文字家当主に白羽の矢が立ってしまったが、この件によって四葉家と十文字家の対立とならないようにしておく意味合いも含まれている。
「そういえば、分家の方々は大人しくなったかしら？」
「いえ、私があれこれ言い含めているのですけれど……なかなか納得してくれないようで」
「ふーん……達也君と同世代の子女たちは認めているのに、その意見を尊重するのが大人としての義務だと私は思うんだけどね」
かれこれ達也が生きていた18年間という長い時間があるからこそ、分家当主の恐怖も分からなくはない。だが、それを千姫は〝傲慢〟と言わんばかりに話し始める。
「そもそも、四葉に〝何ものにも侵されない力〟を望んだ挙句、真夜ちゃんや深夜ちゃんを止めようともしなかった。英作の阿呆もそうだけれど、達也の存在を生み出したのは他でもない四葉全体の責任。これじゃあ〝元（げん）ちゃん〟が命を賭けた意味すら分からなくなるじゃない」
「あの、千姫さん。その呼び名は父のですか？」
「そうだけど、知らなかった？」
「ええ」
達也に〝復讐〟の業を与えたのは真夜と深夜だが、その二人を止めようともせず、煽り続けたに等しい分家当主が達也を誅する資格などない。そしてそれは、先代当主の英作も同じ罪だと千姫は断じた。
「都合の良い〝兵器〟ではなく、四葉家という家族――〝人〟の在り方を元ちゃんは大漢の復讐劇で示した。そしてそれは、万夫不当の功績を成して大漢軍を壊滅させた義兄（あに）も同じこと」
「悠元君に先日言われました。『もう四葉の悪名に頼る時期は終わったのだ』と……本当にその通りで言葉も出ませんでしたわ」
「それを続けるにも歳を取り過ぎたもの。無論、私も同じこと。だから悠君に後事を託したの。まあ、まだ真夜ちゃんは若いんだから、あと10年ぐらいは当主を続けても咎められないと思うよ」
「千姫さんに言われると複雑ですわ」

いくら一部の魔法師が長生きしているとはいえ、もうじき２２世紀を迎えるこの世界の行く末を今いる人間が握り続けるべきではない。いずれ来る寿命のために、世界を託すという大仕事を完遂せねばならない。
「私はまあ、そう言う御家柄だからね。はやっち、四葉のことは任せたよ」
「畏まりました。後、その呼び名はせめて控えて頂けると助かるのですが」
「えー、私からしたらはやっちは弟子だもの。好きに呼んでいいのは師匠の特権でしょ？」
「……参りました」
よもや、予想外の攻撃が飛んでくると思っていなかった葉山は細やかな反撃をしたが、千姫の図太さに屈してしまった。それを見た真夜が思わず笑みを漏らしたのだった。

◇　◇　◇

土曜日の朝。悠元と深雪、そして水波は支倉が運転するリムジンで伊豆に向かった。行き先は勿論、達也がいる別荘であった。久しぶりとまではいかないが、司波兄妹の語らいを静かに見つめていると二人の視線がこちらに向いていた。
「なんだ？　家族水入らずの時間を無碍にはしないから」
「そういう心配をしているわけではないが……大丈夫なのか？」
「その辺は抜かりないから安心してくれ」
達也が述べたことに深雪は首を傾げているが、悠元が述べたことで達也は納得したように一息吐いていた。その反応で何が起きたのかを察するあたり、流石は達也（おにいさま）なのだろう。
ともあれ、別荘に入ってピクシーのもてなしを受けることになった。水波が手伝いを言い出さないか心配だったか、深雪の言い付けで大人しくしていた。それでも手伝いそうなそぶりを見せていることに思わず苦笑が漏れた。
「さて、悠元。深雪たちはまだ分かるが、お前が一緒に来たということは〝そういうこと〟でいいんだな？」

「ああ。心配しなくても真夜さんから解呪の権限は貰ってるから、四葉家がどうこうするということにはならないよ」
「いつの間に……叔母様が良く許したものですね」
その権限の譲渡を選んだ際、真夜からやたら誘惑されたことは言うまでもない。しかも、そのストッパーとして同行させた深夜まで誘惑してきた始末。
いくら神楽坂家と四葉家の力関係があろうとも、無責任に関係を持つことなど後の諍いになりかねない。その顛末は結局真夜と深夜の二人を抱くことで決着を見たが、こればかりは達也や深雪に言えない秘密である。
……これで達也が四葉家の当主になったら、真夜がそのまま愛人として転がり込んでこないか心配なのは言うまでもない。
「それで解呪の方法なんだが……ちょっと特殊な方法を使う」
原作ならば、一度［誓約（オース）］を一時的に解除させ、封印の再履行をしようとする［誓約（オース）］を［術式解散（グラム・ディスパージョン）］で消し去る。その方法でも十分に可能だが、それでは精神の深部まで覗き込む必要が出てくる。
できるだけ達也と深雪双方の負担を減らすために考えた結果、悠元は深雪に掛かっている［誓約（オース）］を直接取り除く方法とした。その為に使う魔法は悠元の固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］と［領域強化（リインフォース）］、そして天神魔法の［天陽照覧（てんようしょうらん）］。
「達也、［誓約］を掛けられた日は正確に記憶しているな？」
「ああ。今ここで言うべきか？」
「いや、達也はその日のことを脳裏で思い出していてくれると助かる。何分、今回は二人に魔法を掛けないといけないからな」
達也からその日を聞き出して遡及することも可能だが、今回の魔法は深雪の魔法演算領域で達也の魔法演算領域を制御している仕組みの為、達也にはその日に［誓約］を掛けられた認識をしっかり有する必要がある。
まず、［天陽照覧］で達也から［誓約］を掛けられている状態と掛けられていない状態を読み出し、［誓約］の制約がない過去の状態を現在に〝アップデート〟させる。この時に用いるのが［領域強化（リインフォース）］。これ

によって一時的な解呪状態へと移行して、深雪に掛けられた[誓約]の魔法式が活性化する。
そして、[天神の眼(オシリス・サイト)]によって[誓約]の本体を観測した段階で[万華鏡(カレイドスコープ)]を発動し、解呪する。達也と深雪の負担を悠元が肩代わりするわけだが、精神の領域を視るのに一苦労する達也がやるよりは安全性のマージンが取れる。
「いくら達也でも精神の領域を視るのは大変だろうからな。その辺のフォローは九重先生に既に頼んでいるよ」
「師匠なら安心だろうが、あの人のなら面白がって引き受けた感は否めないな……今すぐにでもやるか？」
「そうだな。特に準備も要らないからな」
普通なら儀式めいたことをするべきところだが、下手に負担を掛ける方が大変なので場所だけ移動することにした。別荘の中には和室があり、解呪はそこで行うこととした。悠元は[鏡の扉(ミラーゲート)]で一枚の大きな白い布を畳の上に敷く。そして、三人がその上に立ち、達也と深雪は並んで座った。
「時間はそこまでかからないが……始めるぞ」
悠元は一息吐くと、気配の抑制を解除する。
三矢悠元が先天的に得ていた異常聴覚。これを魔法で抑えると、魔法に対する感覚まで鈍くなる異常防御の体質。この性質を悠元は完全に制御したが、その副産物として得たのは存在・気配の抑制。これに剛三から新陰流剣武術の忍術を教わることで完全な存在遮断の技術を獲得した。そして、エジプトで吸収してしまった古代の王たちの霊力によって、想子のみならず霊子まで制御できる技術まで会得する羽目となった。
遮断を切った悠元の周囲に膨大な量のサイオンが収束し、瞬く間に和室全体を満たす。それは粒子の塊というよりも空間全体が白銀の世界に染まったような感覚は達也と深雪にも感じ取れていた。
そして、準備が整ったところで悠元は手を翳した。
「二人に掛けられた戒めを解き放ち、今ここに完全なる姿を取り戻さん」

瞼を閉じている二人の姿を確認した上で、悠元は［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］を発動。この魔法は全てを破壊するだけでなく、時空の理を捻じ曲げて特定の事象のみを破壊することも可能。ここまでの制御を可能としているのは悠元の能力に他ならない。顕現した光の槍を達也に向かって投げると、達也を貫く前に消えていくように見える。

だが、これで今の達也は［誓約］を掛けられた前の状態に変化し、同時に深雪の中で［誓約］の再履行を求めるが如く魔法式の本体が出現する。それを［天神の眼（オシリス・サイト）］で確認した悠元は［セラフィム］を深雪に向けて構える。

「――［魔導解散（キャスト・ディスパージョン）］、発動」

悠元の固有魔法である［万華鏡（カレイドスコープ）］の能力が付与された［魔導解散（キャスト・ディスパージョン）］によって、［誓約］の魔法式は完全に消滅。互いに対する魔法の反動は確認できず、封じられていた魔法演算領域も特に問題ないことが確認できた。

悠元は［セラフィム］を仕舞い込んだ上で二人に声を掛ける。

「二人とも、終わったぞ」

「え？　もう終わったのですか？　お兄様、どうですか？」

「……問題はない。ありがとう、悠元。俺一人だと大変だったかもしれないのに、苦労を掛ける」

「別に苦労とか思ってないし、婚約者の我儘に付き合ったところでデメリットは無かったからな」

時間にして約1分程度だったので、深雪が不思議がる気持ちも分からなくはない。だが、魔法を抑え込まれている感覚がないことを達也はしっかり感じ取っており、悠元に対して礼を述べた。

悠元は特に気にする素振りを見せることなく、畳に敷かれた白い布を瞬く間に片付けた。すると、深雪が悠元に近付いて腕にしがみつくように抱き着いた。

「それでは、お疲れでしょうからお背中をお流ししますね」

「いや、そこまでせんでもって、引っ張らないで！」

深雪の押しに屈する形で和室から出ていく悠元。それを見届ける

格好となった達也に対し、部屋の隅で見ていた水波が声を掛ける。
「達也様、いかがいたしましょうか？」
「二人分の着替えを浴室に持って行ってやれ。ピクシー、浴室の準備を頼む」
『そう仰ると思いまして、既にお湯を張っております』
「……」
ピクシーの想念のイメージ元からして、やけに準備が良すぎないかという疑念と、二人が達也に対して抱いている思いを汲みとってやらないといけない……と思わなくもない達也だった。
「へっくし！　んー、季節外れの風邪かしら？」
そして、そんなことを思われているとも知らずにくしゃみを漏らした少女がいたのであった。

四葉の代理（戦略級魔法師）

日曜日。折角の休日だというのに、呼び出された側の魔法大学２年の女子生徒こと五十嵐亜実（いがらしつぐみ）は不機嫌であった。その不機嫌の矛先は呼び出した側の真由美に向けられていた。

「ごめんね、つぐみん。折角の休日なのに」

「全くだよ。十文字君も今回は大変だね」

「いや、気にしないでくれると助かる」

「それで……これ普通の市販車なのは確かだけど、良く手に入ったよね」

諦めも入ったのか、呆れ顔で克人が迎えに来た車を見やっていた。今回は真由美が既に実家暮らしではないため、五十嵐家の前で落ち合うこととなった。なお、摩利は前回出張ってもらった代わりとして休んでいる。

亜実が克人が乗ってきた車を知っていたのは、五十嵐家で買おうか悩んでいたことを親経由で相談されたことがあったからだ。元からあるものをカスタマイズしたものではなく、俗に言う特別仕様車（オリジナルモデルをチューンアップした少数生産の仕様）だ……その元が軍用車ベースであったとしても。

「つぐみん、知ってたの？」

「うちでも買おうか悩んだからね。結局用途の都合で買わなかったけど。それで、もう出発する？」

「そうだな……」

真由美から誰か連れてくることは事前に聞かされており、これ以上駄弁っていても時間の無駄であると判断したのか、各々車に乗り込んだのだった。

◇　◇　◇

最初からそこまでテンションが高いとは言えないが、意気揚々に近い状態だったテンションは達也の返答によって一気に急降下した。

「お断りします」

「何故だ」

毅然とした態度で返答した達也に対し、重々しい声で尋ねたのは克人。
双方共に〝対立〟の姿勢を崩していないことに亜実は冷や汗が流れっぱなしだった。一方、この展開を予想していたのか真由美は能面を顔に貼り付けたが如く無表情であった。そして、深雪の表情は厳しいと言わざるを得ないほどに内心が窺えない表情を見せている。
「質問に質問を返すのは恐縮ですが、何故十文字先輩は自分がディオーネー計画に参加すべきであると判断したのですか？」
達也が拒絶を示した克人のリクエストは、ＵＳＮＡもといエドワード・クラークが主導するディオーネー計画への参加。そこに至るまでの過程の説明を克人に求めた。
「２年前の九校戦の折、お前に言った台詞を覚えているな？」
「お前は十師族になるべきだ、とそうおっしゃってましたね」
「そうだ」
十師族・師補十八家――――師族会議は九島烈が提唱した日本魔法界の魔法師互助システム。発足から３０年以上が経ち、その役目は既に引き継がれた。
「俺は強い力を持つ者、優れた者にはそれに見合った道義的責任が生じると思っている」
だが、大半の魔法師がそこまでの力を持たず、魔法という力を差し引けば一般市民と大差ない力を持つ程度というのが実情。これはこの国に限った事ではなく、世界中どこの国でも起こり得ていること。
一方、魔法という力を恐れ、魔法師でない者たちは魔法師を人類ではない〝別の種族〟と見做している例も少なくない。人間主義が今でも跋扈しているのはその考えが根底に根付いている。
「魔法師が別の種族だという考えには、欠片も賛同することは出来ない。だが、魔法師が人類全体から見ればマイノリティになってしまうのも避けられない事実。だからこそ、老師の唱えた十師族という制度は正しいと考えている」
「それが行き過ぎて非魔法師に対する蔑視や排斥に繋がらなければ、自分も概ね賛成だと思っています」

考え過ぎだと思われるだろうが、既にその片鱗は第一高校の一科生・二科生間の問題として顕在していた。魔法科高校というある程度限定された空間だからこそ、一科生の不満のはけ口が二科生に向かうことで非魔法師への被害を減らす側面にも繋がっていた。
「現状、この国において反魔法主義の運動は下火となっているが、世界各国の情勢を見る限りにおいて何時再発しても何ら不思議ではない状態に置かれている。魔法師がいるからこそ、世界から戦争が無くならないという誹謗中傷に近いものも少なくない」
その一端は九校戦の中止だが、これについては達也に全面的な非があるとは思っていない。克人はそのことには敢えて触れず、言葉を続ける。
「司波、ディオーネー計画に参加することのメリットは当然理解している筈だ。それでも十師族の直系に連なるものとして参加を拒むというのか？」
「当然です」
「そこまで拒否するだけの根拠をお前は持っているというのか？」
「そう理解して頂いても構いません」
火花を散らす達也と克人。そして、克人の態度を見た真由美が内心で『あ、これはマズいわ』と思ったのも束の間、克人が十師族当主としての使命感から達也に呼び掛けようとしたところで、思わぬ方向から声が響く。
「おやおや、困りますなあ。十文字家当主・十文字克人殿」
「誰!?」
「貴方は確か……神坂さん、でしたか」
（い、いつの間に部屋の中に……）
スーツ姿にサングラスを掛けた青年――達也が神坂と声を掛けた人物の登場に、事情を知らない真由美と亜実は驚き、素性を知っている達也と深雪、水波はそれほど驚く素振りを見せなかった。一方、話を遮られた克人の重々しい声と鋭い視線は神坂に向けられるが、それを何とも思わない青年は涼しい表情を浮かべていた。
「部外者が一体何用だ。その様子から司波と認識があるようだが、も

しや四葉家の関係者か？」
「部外者、ですか。私はこれでも〝師族会議議長の名代〟として赴いたのですがね」
そう言って懐から放り投げられたのは一通の封筒。封はされておらず、特に魔法の反応も見られない。近くに置かれたということで達也が中から便箋を取り出して目を通すと、神坂に目線を向けた。
「……これを十文字先輩に見せても？」
「ええ、そうして頂けると助かります」
その言葉を聞いて、達也は封筒ごと便箋を克人の前に置き、克人と真由美、亜実がそれを見て驚きを隠せなかった。
その内容というのは、神坂千歳（かみさかちとせ）（今回のことに合わせて改名された神坂グループでの正式な籍を持つ悠元のビジネスネーム）を師族会議議長の名代として派遣する旨であり、賛同者は悠元以外に現総理大臣のみならず現内閣に所属する国務大臣クラス、そして主要財閥グループのトップたちが署名されている。
「事情は理解した。だが、ここで司波の要求を呑んだとしても何の問題の解決にもならない」
「それは、十師族当主としてのご判断と解釈しても？」
「勿論だ」
克人としての考え方に加え、彼自身の気質で達也をディオーネー計画に参加させることに傾いてしまっている。だが、師族会議としての統一見解ではないことに加え、議長の名代である神坂の言葉でも引こうとしていない。
ならば……と、神坂は一つの提案を切り出す。
「そうですか……でしたら、こうしましょう。私が司波殿の代理として、十文字当主・十文字克人――――貴方に決闘を申し込む。貴方が勝てば私も司波殿を説得いたしますが、貴方が負けた場合は結果を日本魔法協会に報告し、以後司波達也殿に対する干渉を取り止めるように説得して頂きます」
「ええっ!?」
ここで驚いたのは亜実。十師族直系の同世代では最強格の一角を

担う克人に師族会議議長の名代とはいえ無名の魔法師が達也の代理として挑むというのだ。事情を知らない人間からすればそう思われても仕方がない。だが、その挑発によって克人の闘争心に火が付いた。
「今述べた言葉を取り消すならば、今の内だぞ」
「取り消しませんよ。何故ならば、勝つのは私の方ですから。怖気ずくのならば今すぐ帰って頂いても一向に構いませんが」
克人の殺気にも近い雰囲気に対し、それを涼しい表情で流しながら挑発の言葉を口にする神坂。そして、その様子を静かに見ていた達也だったが、神坂の視線が達也のほうへ向いたことに気付いて視線を合わせた。
「ということですが、いかがでしょうか司波殿。本来十師族の直系同士の諍いに対して不躾な提案とは存じますが」
「……いえ、この場は宜しくお願い致します」
「ちょっと達也君、正気なの!?」
「至って正気ですが、それが何か?」
何せ、達也は神坂が悠元の変装した姿だと知っている。その実力は2年前に既に分かっているからこそ、真由美の問いかけに対して涼しい反応を見せた。そして、悠元が矢面に立つからこそ、深雪が感情で魔法を漏らす様な事が無いという安心感もあった。
それに、〝師族会議議長の名代〟ということはその辺の解決に関わる権限を与えられているとみていい。深雪と水波を守るだけに集中できるのならば、ここは悠元に任せるのが一番だと判断した。
「先に行っているぞ」
克人は立ち上がり、そう告げて別荘を後にした。真由美と亜実は心配そうに達也たちを見ていたが、克人の後を追った。その場には悠元と達也、深雪と水波、そしてピクシーだけが残る形となった。
「さて、達也。〝ネズミ駆除〟には燈也や光宣にも協力してもらってるから、深雪と水波の護りだけ任せた」
「既にそこまで手を打っていたか……〝アレ〟は使うのか?」
「いや、2年前と同じ手はバレるからな。今回は別の方法で」「ファラン

クス」を圧倒する。というわけで、一応ＣＡＤは準備しといてくれ」
「分かった。ピクシー、ＣＡＤを」
「畏まりました、マスター」
　最初の隠語は国防軍情報部の干渉に対するもの。後者は２年前の模擬戦で悠元が使った［円卓の剣（ラウンド・ブレード）］に関するもの。だが、悠元は今回別の方法で［ファランクス］を突破すると宣言した。
　彼の固有魔法だけでも反則級である以上、何をしたとしても悠元の勝利はゆるぎないと判断しつつ、達也の命令でピクシーがＣＡＤのケースを持って歩み寄る。それを見た悠元が先に歩み出そうとしたところで、スーツの裾を掴まれた。
　悠元が振り向くと、近付くのは深雪の顔。そして、唇同士が重なる。
「……おまじないのキスです。勝ってくださいね、悠元さん」
「やれやれ……これはこれで大変なことだな」
　不意打ちのキスに対し、達也は妹の積極性に頭を抱え、水波は「あわわわ……」と言いながら頬を赤らめ、ピクシーについては……何やら学習している素振りが見えた。三者三様の有様に対し、一番頭を抱えたくなったのは悠元であったが。
　悠元たちが外に出ると、克人たちは乗ってきたＳＵＶの前にいた。この場で戦ってもいいが、ここでは克人が十全の実力を出せないと判断して克人の許に歩みより、そのまま通り過ぎかけたところで悠元が振り返る。
「ついてくるといい、十文字克人。ここだと被害が出かねないので場所を移す」
　悠元を先頭に、達也と深雪、水波が歩き出し、克人、真由美と亜実が歩き出す。歩きながら真由美は先日悠元と話していた内容をここにして思い出し、おもわず「あっ」と漏らしかけたのを慌てて堪えたが、その様子を運悪く亜実に見られた。
（まゆみん？　何を思い出したのか吐いてもらいましょうか？）
（いや、これは言えないの！　あのスーツ姿の人物が悠君だなんて……あっ）
（……それ、十文字君が勝てないじゃん）

真由美が正体を漏らしたのは亜実の口の堅さを期待してのものであり、余計なことをしないようにするためのもの。仮に摩利が居たら、逆に真由美を抑え込んでいた未来があったのかもしれない。

二人の会話は小声で克人には聞こえなかったが、聴覚が異常に優れている悠元には当然この会話が聞こえていた。お仕置きはこの件が無事済んだ後で……というのも覚えておきながら歩を進める。

◇　◇　◇

伊豆半島には、先の大戦で対空陣地として接収された元ゴルフ場の跡地がいくつも点在しており、大戦終結後に返還される手筈だったが、運営会社が予想収益とコストの天秤によって受け取りを拒否したケースも少なくなかった。

そこに手を入れたのは神楽坂家で、運営会社に仕事の斡旋をする代わりとして格安でゴルフ場の跡地を譲り受けた。もしくは株式買収で子会社として跡地の交渉を有利に進めたというケースもあったりするが、悠元はあまり聞かないようにしていた。

流石に対空兵器は撤去されているが、長年手入れされていない影響で開けた荒れ地となっているゴルフ場の一つに悠元は克人を案内した。

「ここなら、家屋や非魔法師への被害はない。存分に戦えるだろう」

「こんな場所で構わないと？」

克人の問いかけは、ここまで開けた場所で決闘を行うという意味。明らかに十師族の一角を担う人間としての問いかけだと悠元も当然気付いている。だからこそ、ここからは一介の魔法師として口調を変えて克人に告げる。

「よもや、十文字家の当主が言い訳をお望みで？」

「いいだろう。初手は譲ってやる」

言い合いの直後、相対する二人の間に暴風が吹き荒れる。正確には、悠元が［術式解体（グラム・デモリッション）］を付与した亜音速の風の円月輪（チャクラム）――――［烈風月輪（サイクロン・チャクラム）］が克人の［ファランクス］に衝突した影響で生じたもの。

そして、悠元の左手には拳銃状ＣＡＤの［セラフィム］がいつの間にか握られていた。悠元が放った［烈風月輪（サイクロン・チャクラム）］は計３２発。その悉

くを克人は三層のシールドで凌いでいた。
「ふむ、領域干渉に情報強化、想子（サイオン）ウォールですか。これまた器用なことを」
「ほう、司波のように見破ったのは流石だと言いたいが、それでは俺は倒せんぞ」
別に揺さぶりのつもりではなかったものの、克人はそのように判断しつつも防御を続ける。
これは確かに、原作の達也ならば［バリオン・ランス］の使用に踏み切った理由も理解できる。これ以上続けても無駄だと攻撃を中断したところで、悠元に向かって二次元の壁が押し寄せる。
［ファランクス］の攻撃派生のバリエーション――［攻撃型ファランクス］。だが、悠元はそれをＣＡＤの構えていない右手を眼前に掲げると、何と迫りくる壁を受け止めるどころか完全に押し止めた。
その上で、悠元は一息吐いた上で右手に想子を収束させると、そのまま手を握った。その瞬間、展開していた２４枚の障壁は一瞬にして砕け散った。
「ほう……」
克人は確かに侮っていた。十師族でもない名も知らぬ一介の魔法師が公言するほどの実力を見せていたことに、感嘆を漏らした。そして、それを見た克人が腰を落とす。当然、悠元の［天神の眼（オシリス・サイト）］には克人の魔法演算領域が激しく想子光を撒き散らしているのが見えている。十文字家にしか存在しない魔法演算領域過剰稼働技術［オーバークロック］――〝首都の最終防壁〟たらしめる切り札であり、十文字家の〝呪い〟とも言うべき先天性の資質。その技術によって、原作の十文字和樹は魔法力を失った。
先月、一条家当主・一条剛毅が陥ったオーバーヒートの前兆。
そして、四葉家先々代当主・四葉元造が亡くなった原因とされるオーバーヒートの前兆。
対抗魔法の障壁と対物障壁を球状に纏い、克人が突撃する。
「馬鹿の一つ覚えの如くタックルとは……」
そう呟いた悠元の行動は、構えていたＣＡＤを敢えて下ろした。見

る人が見れば諦めたのかと思う様な有様だが、［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］を持つ達也には悠元の魔法演算領域が既に次の魔法発動準備を終えていることまで読み取った。悠元がいたところに克人が突撃して通過したが、悠元はそこから一歩も動いていない。悠元の足元には、強引に軌道をずらされて削り取られた雑草の後が確かに残っていた。だが、背中を見せていた克人に対して悠元は敢えて追撃をしなかった。

「……何をした？」

「軌道をずらしただけだが、それが何か？」

現代魔法では速度を重視するあまり、直線的な運動を主とするものが多い。軍事利用を考えれば、照準に対して直線的な距離の方が魔法師の負担も少なく、理に適っている運用方法といえる。だが、それ故に現代魔法は〝欠陥〟であると悠元は断じた。明らかに手の読めるものなど『どうぞ狙ってください』としか思えず、これならば古来からの魔法の方がまだ技術として成り立っているだろうと言える。

なお、先程の過程は克人の［ファランクス］に対して風の壁で遮り、さながら横方向へ流れるコンベアのように軌道を逸らしただけ。いくら事象干渉力が強くとも、それ以上の干渉力を有する自然現象にはいくら［ファランクス］といえども抗いようがない。

克人の魔法演算領域がまた激しく光る。魔法師としての寿命を縮める［オーバークロック］を惜しみもなく使う意味は、当然術者である克人本人が理解している。それは無論、神坂として対峙している悠元もだ。

再び障壁魔法を纏って突撃する克人。今度はすれ違う直前で障壁を更に拡大させると踏みつつ、またもや無防備に見える構えを取る。そして、克人が障壁を拡大させる兆候を感じ取った瞬間、悠元の取った行動は［ラグナロク］を構え、両手に持ったＣＡＤを拡大する障壁に押し付けた。そして――

「ぶっ飛べ」

悠元がそう呟いた直後、克人は障壁ごと地面に吹き飛ばされた。当然克人は［ファランクス］によって守られていたので無傷に見えたが、彼が立ち上がろうとしたところで体中を激痛が走る。常人よりも我

慢強い克人が顔を顰めるほどで、立ち上がれずにその場で荒い呼吸をしていた。
　そして、動けない状態の克人に近付いた悠元は、［ラグナロク］を克人に向けて構えた。
「ぐっ……何を、した……」
「簡単な事。貴方の［ファランクス］と貴方を〝接続〟しただけだ」
　本来、現代魔法は魔法が発動した段階で安全性を考慮して魔法師とのパスが切断される。もし、魔法に掛かる負担が全て本人に返る様なことがあれば、瞬く間に魔法師が死ぬことに繋がる。その一例は京都でエリカたちが対峙した古式魔法師の使役術だ。
　悠元が用いたのは、古式魔法の技術を応用して切断された魔法式を術者と再び繋ぐことで魔法干渉の影響を相手に全て返す［貫通衝撃（フィードバック・ブラスト）］。この威力を更に高めたものが戦略級魔法［太極反転（たいきょくはんてん）・煌星（こうせい）］にあたる。
　そして、同時に佳奈が得意とする［グラビティ・ブリット］と吉祥寺真紅郎の得意魔法である［インビジブル・ブリット］を掛け合わせた無重力砲撃魔法［グラビティ・ブラスト］を発動し、重力の方向を進行方向とは逆に飛ばして地面に強制着地させた。二つの魔法による地面への衝撃により、予期せぬ魔法のフィードバックによって多大なダメージを神経系に負った克人は動けなくなった、ということだ。
「その状態で続けるというのならば、まだお相手しよう。尤も、今度は高度１００キロからのフリーフォールを味わっていただくが」
「……俺の負けだ」
　言っていることが規格外だが、明らかに虚勢でないことはこの時点で示されたも同然。克人は痛みを堪えながらも、降参の意思を示したのだった。

傍から見ればテロリストみたいなもの

克人が降伏の意思を示し、戦闘を続行する意図は無いと判断して悠元は［天陽照覧（てんようしょうらん）］で克人を回復させた。瞬く間に引いていく痛みに驚きを隠せないが、それを成したのが数字（ナンバー）を持たない一介の魔法師という事実に敗北を認めざるを得なかった。

そして、ゆっくりと立ち上がると神坂に対して頭を下げた。

「此度は自分の負けを認める。神坂殿の要求通り、この結果を日本魔法協会に持ち帰って報告することと、司波に対する干渉を取り止める様進言することを十文字家当主の名に懸けて約束する。だが、一つ尋ねたい」

「何でしょうか？　生憎魔法の詳細は教えられませんが」

「貴殿が師族会議議長の名代ということは、神楽坂殿がディオーネー計画に反対する理由も伺っているのか？　もしそうだとすれば、その理由をお聞かせ願いたい」

克人が尋ねたのは、神坂の魔法ではなくディオーネー計画に反対する悠元の意図について。そこの部分を聞いているとは必ずしも言えないが、依頼を受けたからには少なからず賛同した部分があるのだろう、という克人の憶測を読み取ったのか、神坂もとい悠元は一息吐いた上で話し始める。

「正直に考えて、ディオーネー計画自体が〝たかが１０人〟で完遂できる規模を遥かに超えている――それは少しでも考えれば分かる筈の事実だと存じますが。それがいくら［十三使徒］の名を有する戦略級魔法師が入ったとて同じこと」

そもそも、イギリスと新ソ連の戦略級魔法師が持つ魔法など、金星のテラフォーミングには何ら寄与しないに等しい。いくら現代魔法の権威といえども、使用した魔法の帳尻を一体どこで合わせるのかも不透明。

世界の秩序を保つというのであれば、それこそ数人から数十人規模でも事足りる。前例にあるのは世界群発戦争時の超法規的魔法師部隊に他ならない。だが、星一つをテラフォーミングするという大事業

となれば、動員される予定の人員は平気で億単位になることが想定される。
「そもそも、魔法師同士の戦闘をやらかした新ソ連とＵＳＮＡの事情を鑑みれば、いくら同盟国といえども他国の増長を許せるはずがない。彼らの最終的な目的は、『四葉』をこの国から切り離し、最悪滅ぼすこと。それを縁者となった議長殿が許容できるとお思いで？」
「……確かに、それは出来ない相談だな。だが、その暗闘というのは？」
「８年前、ベーリング海で起きた魔法師同士の暗闘。これによって双方二桁に及ぶ一線級クラスの魔法師を喪っています。尤も、私は依頼主（クライアント）から聞いたにすぎませんが」
　その戦闘によって、本来年齢を鑑みなければならない『スターズ』の序列にリーナが加わり、そのサポート役としてセリアが加わった。一方、新ソ連がその不満のはけ口として佐渡侵攻やウラジオストク軍港からの艦隊出撃、更には宗谷海峡での一件に繋がった。
「貴方は司波殿との会話の中で、十師族の責務として互いに助け合うべきだと仰った。だが、貴方が述べた魔法協会の提案は四葉家に『犠牲になれ』と言っているに等しい所業。神輿や生贄を互助の類だと錯覚させるような提案など、相手の感情を逆撫でするものでしかない」
「……」
「どいつもこいつも四葉家を何だと思っていらっしゃるのか理解に苦しみますな……『物好きな邪魔もの』を含めて」
　そう言って悠元が指を鳴らすと、突如降り注ぐ雷雨の嵐。だが、それは無秩序に放たれたものではなく、克人や真由美たち、そして達也たちを避ける形で降り注ぎ、各所で悲鳴に近い声と地面に突き刺さる者ども。
　そして、悠元はそれを冷ややかに見つめていた。
「余程期待されていたようですな、十文字殿。ですが、彼らについては警察を呼んで対処いたしますのでお気遣いなく」
「……余計な詮索はしない方が良さそうだな」
「ええ、それが議長殿の機嫌だけでなく、未来の奥方様のためでもあり

ます」
「ホント、かっちゃんは不器用なんだから」
地面に突き刺さった人物たちの素性を探るのは宜しくない、と判断した克人に対して悠元が意味深な言葉を述べると、そこに姿を見せたのは怒っている雰囲気を漂わせた三矢美嘉がいた。
美嘉は克人に近付くと、頬に一発ビンタを打つ。そして、克人はそれを避けることもせずに甘んじて受けた。
「……何で怒っているか、分かる？」
「分かっている」
「なら、司波君たちにちゃんと謝罪しなさい。今すぐに」
（うーん、流石美嘉姉さん。十文字先輩の手綱をきちんと握ってるよ……）
美嘉の一言で、克人は達也たちに対して「魔法協会の要請とは言え、このようなことに巻き込んですまなかった」と述べた上で頭を下げた。そして、克人は悠元に対しても頭を下げた。
「神坂殿。議長殿の名代を相手に手荒な真似をして申し訳なかった」
「私からはこれ以上申し上げることはいたしません。その代わり、そちらの婚約者殿から沢山説教があるようですので、これ以上は野暮というものです」
美嘉の説教という文言に対し、冷や汗を流したのは克人だけでなく真由美や亜実もであった。ともあれ、静かに去っていく四人を見届けて姿が見えなくなったところで悠元は［仮装行列（パレード）］を解除した。
「ふう、流石に冷や汗ものだった。馬鹿の一つ覚えにタックルを連発してくるとか正気の沙汰じゃないわ」
「お疲れだな、悠元。それで、あちこちに刺さっている人たちはどうする？」
見るからに脳天から地面に突き刺さっていて、ホラーよりも怖い有様に深雪は苦笑していた。達也が動じないのはこれまで人を殺すことを散々やって来たからだし、水波も対人戦の訓練を受けているお陰で何とか正気を保っていた。
すると、そこに達也たちが見知った顔が現れた。

「うへー、これはまたホラーよりもエグイわね」
「綺麗に地面に突き刺さってるからな。抜けるのか、これ？」
「寧ろ窒息死する未来しか見えないんだけど」
　姿を見せたのはエリカ、レオ、幹比古。それとほのかや燈也、更には光宣までいた。この場に姿を見せていないが、雫や修司、由夢と姫梨、それに佐那や美月もいるのは間違いないだろう。
「いやー、流石悠元ですね。僕だと精神を殺すので精一杯です」
「それでも十分に凄い気もしますが……大丈夫ですか？」
「俺たちの方はな。主に頑張ったのは悠元だが」
「相手の油断を誘いまくって罠に嵌めまくっていたエリカたちがそれを言うか？」
　実は、ゴルフ場の近くにある山から襲撃を掛けようと国防軍情報部の部隊がいたが、それを古式魔法の面子で部隊を掻き乱し、実力行使ができる面子（主にエリカやレオ）で部隊を壊滅させた。なお、護送には千葉家の伝手で警察の特殊部隊まで動員し、彼らは魔法関連法違反及び国防軍法違反という罪状で逮捕されることが決まっている。
「光宣君が頑張ってくれたからね。僕は相手の感覚を狂わすことに専念できたわけだし」
「いえ、それを言うなら吉田先輩の魔法も凄かったです」
「というか、そこまで見抜くなんて流石よね」
「それ以上は止めろ」
　あまり褒められても嬉しくない、と言わんばかりの悠元に対し、周囲の面々は笑いを零していた。埒が明かないと見たのか、悠元は一息吐いた上で別荘への帰り道を進む。エリカたちはここまで警察の車で来たので、そのままとんぼ帰りすることとなった。
　なお、悠元もバイクで来ていたのでそのまま帰ろうとしたところに深雪から引き止められ、更には帰ったはずの雫や姫梨が水波まで巻き込んで……その光景を見た達也は悠元に内心で謝罪を送りつつ、ピクシーに家事を任せたのだった。
◇　◇　◇
　悠元がこのような形で戦闘に介入したのは、無論達也のためでもあ

るが、克人のためでもあった。正確に言えば十文字家に嫁ぐ自分の姉の為、と言うべきなのだろう。その根底にあるのは達也が原案を出し、悠元が協力して完成させた［トリリオン・ドライブ］にある。

本来、原作の［バリオン・ランス］の時点でも中性子バリアを無力化する時点で強いのだが、［トリリオン・ドライブ］は固形の炭素杭ではなく気体の窒素を用いた副産物として、射出されるバリオンの密度は極めて高い。無論、威力を制限すれば局所を狙い撃つだけで済むが、もし［バリオン・ランス］の感覚で［トリリオン・ドライブ］を行使した場合、人一人が簡単に消し炭になってしまう。

そこに追い打ちを掛けるように、達也の制限がすべて解除されたことでその公算が高くなった。これでは克人と達也が対峙した場合、最悪克人が消し炭になってもおかしくはない。その最悪の事態を回避するべく、悠元が矢面に立つこととした。

原作以上に強化された本気の達也なら［魔導解散（キャスト・ディスパージョン）］で片が付くのは言うに及ばずだが、それで克人が［オーバークロック］を連発して魔法技能を消失することになっても困る。一番困るのは十文字家であり、悠元の姉である美嘉もその中に含まれる。

強化し過ぎたが故に加減を考えなければならず、しかも［誓約（オース）］を完全解除したばかりの達也が加減を間違えないとも限らない。となれば、現時点で魔法の加減が出来る悠元が矢面に立つことで克人の死亡を回避する方向性に持っていった。

克人はあくまでも魔法協会の要請を持ち込んだにすぎず、達也に対する姿勢は十師族としての役目を達也に履行するように求めた――――という方針は既に上泉家と示し合わせている為、今回大人たちの貧乏籤を押し付けられた側の克人に罰は求めない。

ただ、今回の一件に際して、日本魔法協会にディオーネー計画の参加を求めたいのならば魔法協会の責任者自らが達也を説得しろ、と抗議の文書を送付している。それも、悠元だけでなく政財界の重鎮たちの署名も含めてのもの。

月曜日の朝、悠元はマンションのリビングで朝食を摂っていた。

元々鍛錬の都合で朝は早く、それに参加している深雪や他の婚約者

たちもそれに準じた時間に起きることが多い。昨日は克人との戦闘の後、別荘に連れ込まれて局所的な大規模戦闘になったが、何とか勝ちを拾った。

その後、神楽坂家の迎えで深雪たちが帰り、悠元はバイクで帰路に就いた。別荘に泊まっていってもいいと達也は提案してくれたが、〝今日のこと〟を考えると東京に戻ってきた方がいいと判断してのものだった。

食後のコーヒーを飲みつつテレビの報道番組に目を向けていると、想定されたアクシデントはテレビの中から飛んできた。アナウンサーが慌てるとなると、余程のことだろうと思いつつも悠元は画面を見つめる。

『緊急ニュースです。こちらの画面をご覧ください』

そうしてモニターに映し出されたのは如何にも怪しさの塊と言うべき姿の人物。灰色のフード付きローブをすっぽりと被り、顔には白い樹脂製と思しき仮面を着けている。まるで『パラサイト事件』の時にＵＳＮＡを脱走した連中がしていた恰好を想起させる。

「……怪しさ満点」

「うむ、そうじゃな」

一歩間違えればテロリストと思われても仕方がない様な出で立ちの人物に雫が直球を投げ、沓子も反論する余地がないと賛同するように述べるほど。リビングにいる面々が注目する中、不審人物が声を発する。

『私は七賢人の一人。第一賢人とでも名乗らせてもらおう。私は日本の皆さんに、ある真実を伝える』

そもそも、大半の一般の民衆は『七賢人』という言葉の意味すら知らない。それを知らずに聞いたとしたら、どこかのトチ狂った愉快犯が〝犯行声明〟をメディアに送り付けたとしか思わないだろう。尤も、その言葉を知る側からしても……仮に原作の知識がなくとも想定される事態は予測済みだが。

『私はＵＳＮＡが主導するディオーネー計画が、速やかに実行されることを望む。その為に日本からも、トーラス・シルバーの参加を望ん

でいる。トーラス・シルバーこと、司波達也氏の参加を望む。トーラス・シルバーは、国立魔法大学付属第一高校3年生、司波達也氏である。日本の方々よ、司波達也氏を説得してほしい』

ビデオメールはこの言葉を以て終わった。『第一賢人』――――レイモンド・クラークが変装して達也の説得を呼び掛けたようだが、その中には悠元が含まれていない。しかも、［トーラス・シルバー］そのものが個人名ではなくチーム名という事実に触れずに。

その映像を見終えた所で、深雪が問いかけてきた。

「悠元さん、何故お兄様だけが対象となったのでしょうか？」

「そこなんだよな……第一賢人（やつ）は俺が［トーラス・シルバー］だと察していたわけだが」

『パラサイト事件』の時点でレイモンドは悠元のことを戦略級魔法師［殲滅神（エクスキューショナー）］と呼称していた。百山に送られた書状でも嫌疑を掛けてきたのに、今回の一件では達也に対象を絞って狙い撃った。達也を説得した上で悠元も芋蔓式で強制しようと目論んだとすれば、まだ行動の論理に一貫性が伴う。

「トーラス・シルバー？　え？　悠兄ってそういう立場なの？」

「あー……そういや説明してなかったな」

婚約者の中で悠元が国家非公認（皇族公認）の戦略級魔法師かつ［トーラス・シルバー］の片割れと知っているのは、深雪、雫、姫梨、沓子、夕歌、セリア、澪、そして真由美の七人。茉莉花の言葉を聞いて、改めて事情を説明することとなった。

なお、反応としては逆に納得されてしまった。解せぬ。

「三高（うち）が負けた理由も納得できますわ。ただ、少しぐらい自慢しても罰は当たらないと思いますが」

「自慢したところで［どこかの色惚け王子（クリムゾン・プリンス）］が変に拗れても困るだけだからな。この先数十年は顔を合わせることになるであろう奴と因縁なんて持ちたくないし」

（今、酷い言葉にルビを振ったように聞こえたんですが……）

時間は現在朝の6時半。普通ならば早い時間だが、レイモンドが動いた以上はこちらも手を打つ必要がある。尤も、ＦＬＴに対しては昨

晩の時点で既に手を打っている。悠元は「片付けを任せてもいいか」といいつつ席を立って、自室で『神将会』のスーツ姿に着替える。

その上にライディングスーツを纏った上で［ドレッドノート］を駆り、出向いたのは東叡山円頓院寛永寺（とうえいざんえんどんいんかんえいじ）。開山（初代住職）は天海、本尊は薬師瑠璃光如来（やくしるりこうにょらい）。江戸幕府を担った徳川家十五代の将軍のうち六人が眠る菩提寺で、歴代住職の第三代から幕末の時代まで皇族が就いていたこともあって朝廷との関係も深い。

そして、現在この寺の住職を務めるのは元老院四大老の一角を担っている東道家当主・東道青波（とうどうあおば）。世間体では青波入道（せいはにゅうどう）の名で出家している身だが、古式魔法の大家として四葉家のスポンサーの一角を担っている。

「朝早くに突然の来訪となったことについて詫びさせていただく、東道殿」

「今朝の事情は大まかに掴んでおる。寧ろ、こちらが出向かなければ礼を失するべきところを出向いてくれたことに感謝せねばならぬ、神楽坂殿」

悠元と青波の関係は義理の甥・伯父の間柄だが、互いに一家の当主であると共に元老院四大老という重鎮の立場。しかも、青波は父親の罪で厳しく見られており、樫和家ほどではないにせよ、早々に立場を譲らなければならなくなった。

年齢こそまだ十代にせよ、立ち振る舞いや存在感は最早政治家の重鎮ですら頭を下げかねないほど。それを作り上げた義理の父親に感服しつつも、青波は目線を悠元に向ける。

「して、あの不遜の輩に対する策はあると見ておるが、こちらは何をすればよい？」

「東道殿には樫和家を抑えて頂く。こちらで既に手は打ったが、子飼いの輩が何をするか分かったものではないのでな」

「それは……重大な責任であるな」

細かくは述べなかったが、東道家には汚名返上として樫和家、その子飼いとなっている十六夜家への抑止に舵を切ってもらう。併せて、四葉家のスポンサーは今後神楽坂家と上泉家の二家による運営とす

ることで、青波の父親が起こした〝四葉殺し〟に対する罰とする。
「そして、血族の縁故がある四葉家とは今後の付き合いに距離を置いてもらう。スポンサーは神楽坂家と上泉家が担う故、ご承知おき願う。異存はないか、東道殿？」
「……異存はありませぬ」
四葉の復讐心を作り上げた原因を作ったのが自身の父親とはいえ、そのことを素直に明かすことなく保身に走った罪は事実。それに、古式の術者としての実力は青波よりも悠元が圧倒的に格上。
青波は悠元の提案に一切の不平や不満を唱えず、静かに深く頭を下げたのであった。

エスケイプ・インベージョン編
蚊帳の内外では受ける重みも異なる

『第一賢人』――――レイモンド・クラークが変装して煽る様に『［トーラス・シルバー］は司波達也氏である』という事実は、日本だけでなくアメリカや各国で反響を呼んだ。

そのうちの一つである南アメリカ連邦共和国の大統領官邸では、執務室でディアッカ・ブレスティーロ連邦大統領がハンス・エルンスト准将（先日の沖縄の一件で昇進させられ、魔法師育成の為の学校の教官にも着任）を呼び出していた。

「――――以上が『第一賢人』なる怪人物のメッセージだが、貴官はどう見る？　別に言葉遣いが汚くなっても構わんぞ？」

「あのですね……小官の推察では、とても公に言えない傍受方法で［トーラス・シルバー］の情報を調べ上げたとみるのが妥当かと思われます」

ここにはディアッカとハンスの素性を知る人間しかいないからか、別に閣下と呼ばなくても良いという気遣いに溜息を吐きつつ、ハンスは率直な意見を述べた。

「そうだな。魔工メーカーとはいえ民間企業であるＦＬＴですら公にしていないとすれば、何かしらの工作を仕込んでいたとみるのが妥当か」

いくら魔工メーカーという魔法関連の技術を扱う存在とはいえ、社会的に見れば民間企業のトップシークレットに当たるであろう魔工技師の内情を暴露した。それを流したメディアにも当然責任は伴うが、一番責任を負わなければならないのは『第一賢人』と呼称した怪人物だろう。

「ただ、［トーラス・シルバー］の技術は一部を除いて別に秘匿されている訳ではありません。その最たるものは重力制御術式の公表で、何も本人に拘る必要は無い筈です」

秘匿されている部分は［恒星炉］に関する部分だが、それ以外の部

分は民生分野で利用できるようになっているし、とりわけ重力制御術式という軍事転用による恩恵が最も高い魔法技術を公表していて、この時点で［トーラス・シルバー］の技術を利用することに問題はない。
　つまり、この時点で［トーラス・シルバー］に関係している人物を直接計画に参加させる必要性が無い。にもかかわらず、ディオーネー計画は執拗に達也の参加を薦めているようにしか見えない。そして『第一賢人』の行動は、他の魔工技師からすれば〝落第点〟と評されているに等しいことを誰もが気付いていない。
「確かにそうだな……そういえば、その司波達也氏はかの『アンタッチャブル』の直系か。准将、私は正直チャンスだと睨んでいる」
「チャンス、ですか？」
　ディアッカの言葉にハンスは首を傾げた。
　魔法師の平和利用という点では、ディオーネー計画自体に大義名分が存在する。だが、その詳細を紐解けば解くほど、実態は明らかに魔法師を道具として使い潰す未来しかない。しかも、ＵＳＮＡ・新ソ連・イギリスという名のある三国の協力体制も厄介であった。
「ディオーネー計画の名分は確かに整っている。我が国の反魔法主義は欧米ほどではないが、既に『魔法師は地球から出ていけ』などと宣う輩がいるとの報告がある。だが、彼らの言い分を全面的に認めるわけにはいかない」
「それは仰る通りですが、ではどうなされると？」
「准将、君を日本に派遣する」
「……えっ？」
　話の脈絡が飛び過ぎて話が見えない、というハンスがそう言いたげな表情を見て、ディアッカが含み笑いを浮かべつつも説明を始める。
「まず、司波達也氏が仮に『第一賢人』の言う通り［トーラス・シルバー］だとするならば、彼を強引にディオーネー計画へ引っ張りたい『第一賢人』の正体は、恐らくＵＳＮＡのエドワード・クラークに近しい人物の可能性が極めて高い」
「明らかに計画に賛同するような素振りにしか見えないメッセージでしたからね」

表向き日本のいち民間企業でしかないＦＬＴが認めていない魔工技師の存在をＵＳＮＡが認めているというのもおかしい話だが、ディアッカはこれまでの経験則に基づいて考えた際、エドワード・クラークに近しい人物、あるいはそれに匹敵する情報収集能力を有する人物だと考えるのが妥当だと判断した。

これまで噂で聞いた程度の『七賢人』ならば、エドワード・クラークの提示したプランを無条件で支持するということにはならない。パラサイト事件でのメディア暴露についての詳細は不明だが、これが仮に同じ『七賢人』の仕業だとしても、ＵＳＮＡを混乱に陥れた人物が今度はＵＳＮＡの同盟国に混乱を齎そうとする――――いわば一種の〝テロリスト〟のような行動論理となる。

「ただ、デタラメを言って日本を混乱させる可能性も残ってはいますが」

「裏取りもロクにせずに愉快犯のメッセージを流したりなんかしたら、メディアの情報管理能力そのものが疑われるし、最悪メディア自体が粛清の嵐に遭う」

「そうしなかったということは、確証に近い情報を有している、ということですか」

「もしくは、利益欲しさの話題作りとも言えなくはないが、そのとばっちりを受ける方はたまったものではない」

各種メディアの視聴率欲しさ、ディオーネー計画の平和的な大義名分。『第一賢人』はその意味でメディアを巧く使ってメッセージを発した。ただ、このメッセージは正直〝悪手〟でしかないとディアッカは睨んでいる。

単に参加を呼び掛けたいのならば、別に［トーラス・シルバー］が司波達也であるという事実を公表する必要などない。この時点で、『第一賢人』と呼称した怪人物自身に〝権力がない〟と公言しているも同じとなる。

一流の魔工技師が高校生という新鮮さは生まれるかもしれないが、相手はあの四葉家の関係者。とてもではないが、正気の沙汰ではない博打を打っているに等しい。

「ただ、今の日本はＳＥＰＡによって我が国を含む南半球の国々の〝盟主〟足り得る存在。『第一賢人（いのちしらず）』も馬鹿なことをしたものだと思うよ。司波氏が未成年故に、ＵＳＮＡが下手に情報公開できなかった理由も分からなくはないが」
「大漢（ダーハン）の二の舞が起こり得ても不思議ではない。伯父さんはそう見ているのですね？」
「もしそんなことになれば、新ソ連も他人事とは言えまい。連中は佐渡の一件だけでなくラ・ペルーズ海峡（宗谷海峡）でも軍事的な衝突を起こしていた。最悪モスクワが灰燼と帰すことになる」
　達也が四葉直系の人間だと公表されている事実を鑑みれば、かつての四葉の復讐劇の再来が起きても何ら不思議ではない所業の前提を『第一賢人』はしでかした。下手に追い詰めて逆鱗に触れれば、それこそ『灼熱と極光のハロウィン』以上の被害が想定される。
「折角の条約を無碍にしないためにも、そしてここでいち早く司波氏の味方として宣言することで、将来の［恒星炉］交渉を少しでも有利に進めたい。ＵＳＮＡが何かしら言ってきそうだが、我が国は連中の属国ではない。ミゲルを派遣することも考えたが、あの戦略級魔法の特性上〝明るみに出来ない事情〟がある」
　それに、ＵＳＮＡの戦略級魔法をＳＳＡに向けている余力はない。４月にメキシコで反魔法主義による暴動が起きたばかりで、まだ火種が燻ぶっている状況で不満解消の為に戦端を開くようなことがあれば、間違いなくディオーネー計画どころではなくなる。
「それで国家公認の戦略級魔法師として名乗っていない自分がですか……彼は何と？」
「『ハンスなら問題は無い』と言ってくれた。君が不在の間の教導も喜んで引き受けていたよ」
　剛三の教えによって、ミゲル・ディアスも実力を上げていただけでなく、人を教える楽しさに芽生えた。国家公認の戦略級魔法師ということも相まって、人気では国民的英雄として評されることが多い。
　なお、ハンスに対する南米連邦軍人たちの評価はというとミゲルを筆頭に〝この世の苦労を一身に背負っている御仁〟という評価に

なっている。ルーデルが憑りついている事実は噂程度のものだが、ハンスの実力を見て納得するものが後を絶たない。
「分かりました。それで、小官は何時日本へ？」
「そのついでなのだが、准将には三日後にワシントンへ飛んで欲しい。奥方は私と妻が面倒を見るから安心してほしい」
「……了解いたしました」
真っすぐ日本に向かうのではなく、ワシントンを経由する時点で嫌な予感しかしない……というハンスの予感が良くも悪くも当たってしまうのはまた別の話。

◇　◇　◇

本来、ディオーネー計画を主導している立場のＵＳＮＡにとって、今回の『第一賢人』の暴露は喜ぶべきもの。だが、一つの物事に対して立場が変われば意見が変わる様に、今回の発表を最も喜ぶどころか怒り心頭に近い心境にいたのは、ＵＳＮＡの政財界に他ならなかった。
大統領も無論だが、更にその感情を露わにしていた人物――ワイアット・カーティス上院議員は、自宅の書斎で険しい顔を浮かべていた。
「……」
「旦那様？　その、お加減でも悪いのでしょうか？」
「む、そんな表情になっていたかね？　それは済まなかった」
使用人が躊躇いがちになっていたことで、そこで漸く自身の表情が怒りが貼り付けられたようになっていると気付き、ワイアットは謝罪の言葉を口に出しつつコーヒーを一杯所望すると、その使用人が礼をした上で下がっていく。
改めてワイアットは端末に映った『第一賢人』の画像に視線を落とすが、やはりどうにも怒りが湧き上がっていた。
魔法の平和利用――国家の利益を鑑みた時、とてもではないがＵＳＮＡ一国で出来ることではないし、暫定的な協力体制にいるイギリスや新ソ連、それにディオーネー計画へ協力の姿勢を見せている欧州各国。

だが、日本を主軸として結ばれたＳＥＰＡの加盟国は揃って反応を見せていない。今回の〝扇動〟は［トーラス・シルバー］の参加を促すことで世界の協調を推し進めようとしているのだろうが、実はディオーネー計画の進行と並行する形で、ＵＳＮＡ国内では相次いで企業のＴＯＢ（公開買付）による統合が加速していた。

ターゲットとされているのは主に風力、地熱、バイオ燃料などの資源産業をターゲットとしたもの。それも膨大な額の株式取得によって、関連企業の系列は一気に数える程度の企業グループへと集約された。

ワイアットはこの動きの裏に日本の〝とある財閥〟が関与している噂を耳にしたが、これを調べようと躍起になった人間は全て消息を絶たれているか、弱みを握られて沈黙していることも把握している。それを知った時点で、ワイアットは調査することを止めた。

これがもし今後の［恒星炉］に繋がっていくのであれば、今の情勢はそれが導入されても比較的少ない被害で収束することを意味するだけでなく、政府の信用を大きく稼げる余地が出来る。

迅速に国家が資源産業への補償金を支払う用意が出来れば、現政権の支持にも大きく影響するという公算が立てられる。与党の躍進や野党への肘鉄という意味で、ワイアットは国家の利益を鑑みて大人しく引き下がった。

（『触らぬ神に祟りなし』と、かの国にそういう言葉があったな）

ワイアットは孫娘同然の親族を日本の名家に嫁がせることを認めた。それがＵＳＮＡの信頼に繋がるとは微塵も思っていないが、少なからずコネを作っておくことは政治家としての生き方に繋がる側面もあり、思わず苦笑が漏れていた。

（問題は、『第一賢人』なる人物がしでかしてくれた事態だ。これで日本がディオーネー計画に参加してくれる可能性は極めて低くなった。いや、元から無いのかもしれないがな）

日本とＵＳＮＡに軍事同盟があろうとも、魔法の平和利用に関する協力体制はない。以前魔法技術の共同研究をしていたことはあったが、それも既に解消されている。

そう思案していたところで使用人が現れ、淹れてくれたコーヒーで喉を潤しつつも使用人を下がらせ、再び思案していく。
（日本に伝手があろうとも、今の私にはエドワード・クラークの計画に協力する義理など無い。政府や財界はまだいいが、問題は軍部だろうな）
ワイアットは、ＵＳＮＡの現大統領が対新ソ連への嫌悪を有していることを把握している。その意味で現政府が協力的になるのを避けるのは目に見えているし、長官クラスもこぞって日本への対立姿勢を望んでいない。今は喪った魔法戦力を回復させる時だと考えている意見が多く、上院・下院の議会も概ね政府の方針に賛同している。
一番顕著なのは現駐日大使で、この間のディオーネー計画に伴う書状の件でワイアットは親族伝手に話を聞いたが、ＵＳＮＡから送られてきた書状を『そのまま見なかったことにしてシュレッダーに掛けたかった』と豪語するほど。
彼の子女は魔法の資質があったため、魔法師を使い潰す様な計画などに加担したくはないが、職務を全うすることで我慢した。なお、この数日後にストレス性の胃腸炎で倒れて緊急入院したという報告を大統領府が受けていたらしい。
アメリカの財界からすれば、昨年の巨額出費（［セブンス・プレイグ］や［アルカトラズ］の解体費用）で手痛い所に未曽有の金額が掛かりかねない計画などしたくはない、と殆どのトップが水面下で嫌悪感を示している。それならば、目に見える範囲での喪失で済む［恒星炉］の導入に前向きの意見が少なくない。
その影響で財界の特使や要人が内密にワイアットが住んでいる屋敷を訪れることが多く、彼が怒りを見せていたのは計画の進行に伴う財界の陳情を聞き続けた結果によるもの。
だが、軍部の場合は昨年の戦略級魔法師無力化作戦に失敗するどころか、二人の戦略級魔法師を日本に帰化させてしまっている（それを隠す為にアンジー・シリウスの籍だけが残ってしまっている）。失態以外の何物でもない以上、それを挽回するために司波達也の暗殺計画を立てるだろう、とワイアットは予想している。

自分の親族であるベンジャミン・カノープスが『スターズ』のトップに近い立場である以上、『スターズ』そのものが出張るような事態は避けられるだろうが、エドワード・クラークが何かしらの策を弄する可能性も残ったまま。

エドワード・クラークは明確に国内法・国際法に触れる罪を犯したわけではない。その意味でも彼を罰することは出来ない。だが、いくら［エシェロンⅢ］の関係者といえども軍事関係の越権行為を全て見過ごすことは出来ない。

（懸念されるのは、今帰国している二人のシールズ姉妹だが……軍部の連中め、よもや馬鹿な真似などするまいな？）

ワイアットが懸念していたのは、既に帰化しているエクセリア・シールズと〝アンジー・シリウス〟の籍が残るアンジェリーナ・シールズの二人を軍部が利用しようとすること。現在は軍の要請でＵＳＮＡ国内にいる形だが、彼女たちは今や日本の名家に連なる人物の婚約者。そのどちらも『灼熱と極光のハロウィン』に関与したとされる疑いが高い十代の少年。

仮に彼女たちを人質として参加を強制するような事態となった際、あの悪名高い四葉の直系が如何なる手段を行使するか……『灼熱と極光のハロウィン』の規模で済まない被害が本国を襲った場合、軍統合参謀本部は間違いなく上層部全ての刷新を余儀なくされる。

そうなってしまっては、軍部の責任どころか政府や政財界にまで責任が及び、最悪ＵＳＮＡ国内で内乱が起きかねない。このままディオーネー計画を推し進めて、間違いなくマイナスしか生まない状態を看過する方が一番問題でしかない。

「何か起きる前に動いておくべきだな……誰かいるか？」

「お呼びでしょうか、旦那様」

「急で済まないが、大統領官邸（ホワイトハウス）へ向かう。先方へのアポイントメントと車の手配を」

「畏まりました」

心配が尽きないのならば、ここで動くのが得策だと考えたワイアットは使用人を呼び出した。直にワシントンへ向かうよう指示を飛ば

し、席を立ちあがって出掛ける準備を始めるのであった。

知ることの責任

原作では、ニュースを見た後に数時間思慮した後に四葉本家へ連絡を取っていた達也。だが、真夜と達也の関係性が違う〝この世界〟では、真夜が先んじる形で伊豆の別荘に連絡を取った。流石の達也も情報部との諍いで援軍は出せないと聞いていたが、とうとう我慢できなくなったのだろう……という母親の我儘だと察しながらも達也が通話ボタンを押すと、心配そうに見つめる真夜の姿があった。

『たっくん、大丈夫？　けがはしてない？　ごめんなさいね、援軍を出せなくて』

「……母上、その恰好は何なのでしょうか？　まだ寝ぼけていらっしゃるのでしょうか？」

達也の能力ならば無傷で乗り越えられることを知っている相手だからこそ、通話している真夜の姿に対して冷静にツッコミを入れた。寝間着姿に加えて、腕に抱えている大きなクマのぬいぐるみ……どう見ても飛び起きて連絡を受けたようにしか見えないわけだが、傍に控えている葉山が窘めると、真夜は自分の今の恰好を気にすることなく話を始めた。

『ちゃんと目覚めはいいわよ。それよりも、先程のニュースを受けてたっくんはどうするのかしら？』

「（もう少し恥じらいを持ってほしいが……）それについては今しがた考えていました。ここから先は〝彼〟の協力が必要となりますので」

達也単独で反撃することは可能だが、より積極的な手段となると〝彼〟の協力は必要不可欠。尤も、彼が関わると単なるプロジェクトひとつで片が付くような所業にならないのは〝予測可能回避不可能〟と評するべきだろう。

達也の返答に対し、ここで真夜は少し考える素振りをした後に達也へ提案を述べる。

『そうなるわよね。なら、今から本家にいらっしゃいな。迎えはこちらから出しますので』

「分かりました。あと、今度通話する時はもう少し身だしなみを考え

てください、母上」
「歳を考えて欲しい」などと言ったら傷つく（話が拗れる、という意味もあるが）のは目に見えていたため、他の人が見ても大丈夫な服装で通話に出て欲しいと頼みながら通話を切った。
◇　◇　◇
達也が四葉本家に到着したのは11時半。昨年末から変わった使用人の対応にどこかなれない様子を見せつつも、出迎えた花菱兵庫によって母屋の奥にある食堂に案内された。会食の準備はされていたが、真夜の姿はなかった。
すると、本来当主が姿を見せる扉から来たのは葉山一人だけ。これを訝しむ達也だったが、自分が入って来た側の扉から来る存在に気付いて視線を向けると、入って来た真夜が不満そうに頬を膨らませていた。
「もう、たっくん相手なら無理はないけど、少しは空気を読みなさいな。お母さん、悲しいですわ」
「泣き落としは止めてください、母上。こんなところを誰かに見られたら要らぬ誤解を受けてしまいます」
「大丈夫よ、たっくん。いざとなったら消すだけだから」
「……とりあえず、席に座ってください。葉山さんが困ってしまいますので」
それが出来てしまう時点で、達也は『この人の息子なんだな……』と改めてしみじみと感じつつ、真夜に対して席に座るよう促した。出会い頭に抱き着けなかったことは不満だが、葉山に迷惑を掛けるのは宜しくないと判断して渋々達也と対面の席に座った。
真夜の傍には葉山が控え、達也の傍に兵庫が控える。そして、葉山の合図で食事が運ばれてくる。流石にコース料理ではなかったが、給仕に話を遮られるのを考慮してか、一汁三菜となっていた。
「流石のたっくんも今回は驚いたのかしら？」
「何も情報が無ければ、きっと想定外のことだと慌てたかもしれません」
過ぎたことに〝ｉｆ（もしも）〟はないが、達也自身も悠元から定期的に情報

を貰ったりしなければ、レイモンド・クラークのことについて警戒することは無かった。この辺は深雪に害を為すか否かという自身の価値観に対する不徳と評するべきだ、と達也はそう含みつつ真夜の問いかけに返した。
「とてもそうは見えませんのに」
「仕方のないことです。とはいえ、母上から早々に連絡を頂けたことも助かりました」
「あら、可愛い息子のお世辞かしら？」
「事実を述べたまでのことです」
　面白そうに見つめる母親（まや）と不愛想な表情を見せている息子（たつや）。それでも互いに仲が悪いという訳ではないため、これには葉山だけでなく兵庫も少しばかり表情を緩ませていた。その上で、真夜は直近で起きた達也の変化について問いかけた。
「そういえば、たっくん。［誓約（オース）］は解呪されてるように見えるけど、たっくんが自らそうしたの？」
「いえ、悠元が全てやってくれました。尤も、妹が労おうとして連れていかれましたが」
「あらあら、深雪さんは従妹なのに、まるで実の妹のように扱うのですね」
「長年そうしてきた癖もありますが、深雪がそう望みましたので」
　やはり触れられるか、と達也が心の中で呟きつつも真夜の問いかけに答えた。真夜の反応を見るに、悠元が述べていた解呪の権限譲渡は事実なのだろうと確信を得ていた。その後のことも触れつつ答えると、真夜は兄妹（従兄妹）の仲の良さを羨むように呟いていた。
「母上は宜しかったのですか？　悠元に権限を渡したと聞きましたが」
「四葉家を救ったのは他でもない悠君ですもの。それに、私も救われた立場として恩を返さなければいけません。たっくんに掛けられた［誓約（オース）］の解呪だけでは足りないと思っていますもの」
「……（悠元も母上には苦労してるのだな）」
　沖縄での一件（西果新島での工作阻止）を報告した際、達也は真夜

の様子が見るからに変化していることに気付いた。その原因であろう悠元に聞くと、慶春会の前にあった次期当主指名の直前に真夜に押し倒されたとのこと。しかも、深雪と夕歌、水波の婚約を対価にする形で。

これには達也が謝罪の言葉を口に出した。しかも、双子の誼で深夜が気付き、そこから深雪に伝わって正月三が日の神楽坂家で激しさを増した……何がとは口に出さないが。何せ、近い将来達也自身もその立場に置かれてしまうだけに。

真夜は達也の解呪に関して咎めるような素振りは見られない。相手が相手なのだから尚更だったのだろう。尤も、達也はただ警戒するだけで、克人に加えて、それを監視していた情報部は揃って悠元の手で叩き伏せられた。

なお、情報部のその後については達也も深く追及しなかった。どうせ完膚なきまでに心を折られる以上、こちらに害意が向かなければ知る必要もない、と判断してのことだった。

「さて、本題に入りましょうか。たっくんは今回のことに関してどう考えているのかしら？」

「消極的な対応ではより窮地に追い込まれます。ですので、積極的な対応を取ることを考慮しています。ただ、問題があるとすれば」

「成程、師族会議ですね」

「ええ」

師族会議の体制が変わったことで、神楽坂家と四葉家は護人と十師族の立場こそ違えど同じ立ち位置にいる。そして、師族会議の規則はまだ生き残っている為、二家の人間が動けば〝共謀〟あるいは〝協調〟と見做される可能性が高い。

達也は四葉家次期当主で、悠元は神楽坂家当主。二家が表立って動くためには、師族会議の了解を取らなければ動けない。達也の懸念を聞いて真夜は少し考え込むと、葉山に耳打ちをする。彼女の命を受けた葉山が礼をして下がっていく。

「なら、話の続きは私の部屋でいたしましょうか。兵庫君、案内を頼めるかしら？」

「畏まりました、奥様」
普通ならば執事の上位にしか頼まない案内を兵庫に任せるということは、父親の花菱も含めて真夜の信頼を勝ち得ている証左に他ならない。ともあれ、席を立って兵庫の案内についていく。
達也にとっては昨年の大晦日以来の出入りとなるが、部屋の中には既に葉山がオンライン会議の準備を終えていた。そして二人の差配は兵庫から葉山に引き継がれ、兵庫は頭を下げて部屋を退出する。
これから何が始まるのかは予想がつくものの、確認の意味も込めて達也が真夜に問いかける。
「母上、これから師族会議ということでしょうか？」
「ええ、その通りです。たっくんにも同席してもらうし、［トーラス・シルバー］に関する情報と責任を他の人たちにも負っていただくためにも」
この短時間でそこまで集められたとは思えないため、真夜は達也を四葉本家へ呼び寄せる間に準備を整えたのだろう。そして、真夜の前に置かれたモニターが灯り、護人二家と四葉以外の十師族当主が顔を合わせていた。
克人は達也の姿を見て少し険しい顔になったのを達也は見逃さなかったが、達也の意識は議長である悠元に向けられた。
『先日の魔法協会の招集から日を置かずの招集であるにも拘らず、集まって頂いたことを感謝する。さて、四葉殿。司波殿の意向は既に伺っているが、其方の個人的な見解は司波殿と同一とみて宜しいでしょうか？』
「ええ。私にとってはたった一人の失い難い息子が望まない事を強要したくありませんもの」
真夜が女性としての未来を失ったに等しい中、自分の遺伝を継ぐ達也が望まない計画に参加させる道理はない。悠元の問いかけはあくまでも事実確認のものだが、真夜がそう発言したことに対して様々な反応を見せる十師族当主の面々。
それを見た上で、悠元は納得したように頷きつつ言葉を続ける。
『それは道理ですな。さて、ＵＳＮＡといいますか、いち政府機関の人

間にしか過ぎないエドワード・クラークが我が国を混乱に貶めるような計画をでっちあげ、更には「第一賢人」と自称した理想主義者が［トーラス・シルバー］を司波氏だと断定するような発言までした』
『それについてですが、神楽坂殿はどう思われているのでしょうか？』
『概ね事実だが、私も［トーラス・シルバー］の片割れだ。だが、そうであるからと言ってディオーネー計画に参加する道理は無いとこの場で宣言する。何故ならば、第二回若手会議で触れたことにも繋がるが、この国の大事業に携わる以上、いくら相手が大国であろうとも他の計画に参加する義理など無い』
　悠元の説明に対して七宝拓巳が問いかけるが、ここで爆弾を投下するように放たれた台詞――悠元が［トーラス・シルバー］である事実に、事情を知らない殆どの当主達が驚いている。それを知ってか知らずか、悠元が続けて述べたことにも様々な反応を見せている。
　まるで二十面相のような有様に真夜は笑みを零し、達也は小声で「母上、程々になさってください」と窘めるほどだった。
『神楽坂殿。その話をここでしていただけるということでしょうか？』
『ええ。何せ、今や神楽坂家も師族会議の一員として加わっている以上、率先してルールを破る訳には行きますまい。その大事業につきましては、現状は神楽坂・上泉・四葉・三矢の四家が主体となって話を進めていますので。その概要の説明につきましては――司波殿、お願いできますか？』
「……分かりました。では、ここから四葉家当主・四葉真夜に代わりまして、自分こと四葉家次期当主・司波達也が説明いたします」
『ＥＳＣＡＰＥＳ』もとい『ＳＴＥＰ』プロジェクトの内容についてはその都度悠元と打ち合わせていたため、特に説明で詰まる様なことは無かった。〝逃げる〟ではなく〝立ち向かう〟という姿勢はさしもの達也でも考えつかなかっただけに、内心で悠元に感謝していた。
　そして、達也の口から語られる『ＳＴＥＰ』の全容。達也が説明を終えたところで静寂な空気が流れる中、口火を切ったのは十文字家当主・十文字克人であった。

『司波殿。これが先日の答えの根拠ということか』
「その通りです、十文字殿。ディオーネー計画では魔法師を使い潰す未来に何ら変わりはありません。いえ、もっと酷くなると思われます。そうなった時に起こり得る最悪の未来など自分には到底許容できませんでした」
『理解した。十文字家は「ＳＴＥＰ」プロジェクトに賛同することを、この場で改めて宣言いたします』
　悠元や達也と歳が近い克人が賛同の意思を示したことで、悠元との婚約関係がある一色家・二木家・五輪家・六塚家の当主も相次いで賛同し、七宝家・八代家も同意した。計画の当事者である神楽坂家・上泉家・三矢家・四葉家を除けば、残る反応は一条家と七草家。両家共に悠元と因縁を抱えている家だが、先に言葉を発したのは一条家当主・一条剛毅だった。
『一条家も司波殿が参加なされるプロジェクトに賛同する意思をここに表明する。ただ、ディオーネー計画に参加表明した新ソ連がどう動くか不安要素もある』
『ならば、こちらから人員を割いて防衛に当たらせよう。必要なものがあれば順次申し出て欲しい』
『上泉殿……感謝いたします』
　ここ最近の新ソ連からして暴走する可能性がある以上、剛毅も諸手を挙げて賛同しにくいという言い分は分からなくもない。ここで元継が上泉家として一条家の防衛体制のバックアップを担うと宣言したことで、二家の協調や共謀の嫌疑を避ける狙いもある。
　そして、残るは七草家の反応のみ。当主の七草弘一は少し考える素振りを見せた後、悠元に問いかける。
『神楽坂殿、司波殿が説明なされた計画は素晴らしいものですが、ここで想定されるのは日本政府やＵＳＮＡ政府の妨害です。その辺については如何お考えですか？』
『そこについては既に話を付けている。親米派の役人どもが余計なちょっかいを掛けてきた場合、報復措置も含めた対応も既に整えている』

逆上して軍隊を差し向けた場合、戦略級魔法で葬る。なお、その際に使用するのは［トゥマーン・ボンバ］をベースに改良（ある意味改悪だが）した新戦略級魔法［天極劫火（オメガ・フレア）］。

［トゥマーン・ボンバ］でも実現が難しかった酸素と水素の混合比率を1：2にすることで威力を最大化するだけでなく、［ブリオネイク］に用いられた直射フィールドを流用すること超高温・超高密度の火力を地点単位で照射できる。

さらに、［オゾンサークル］のオゾン結合生成を利用して窒素や炭素などの原子組み換えで酸素と水素を生成することで酸水素ガスの密度を高めていて、皮肉にも新ソ連・ＵＳＮＡ・イギリスの戦略級魔法が一つの魔法として完成した〝意趣返し〟の戦略級魔法。

それで懲りなかった場合、三国に対してあらゆる戦略級魔法を使用する。例えば、新ソ連やＵＳＮＡに対して［オゾンサークル］を使用したり、新ソ連に対して［ヘビィ・メタル・バースト］を使用するなど、互いの国しか知らない戦略級魔法を使うことで疑心暗鬼に陥らせ、共倒れしてもらう策も辞さない。

『政財界には既に話を付けているため、七草殿が関与する必要は無い。他に懸念されるであろう事項はあるだろうか？』

『いえ、現時点ではありません。そうなると、今後ディオーネー計画に関する圧力が来ても無視して構わないと？』

『そう捉えてくれて構わない。その一環で、この後政府から公式発表があるので、決して見逃さないで頂きたい』

臨時の師族会議が閉幕しておおよそ1時間後、日本政府はメディアが流した『第一賢人』についての見解の記者発表を執り行った。内容は「一昨年と今年初めのテロリストによる魔法科高校生徒を狙った悪質な暴力行為を踏まえる」と置いた上で、『第一賢人』を〝国際手配のテロリスト〟として引き渡しの要求を全世界に対して求めた。

更にその３０分後。ＦＬＴから［トーラス・シルバー］の報道に関する発表があり、当社に関わる［トーラス・シルバー］の名を使った扇動に対し、『威力業務妨害もしくは偽計業務妨害に準じるものとして民事訴訟も含めた法的措置も辞さない』と公表した。

今回の記者発表によって、昨春の買収騒動が再来する可能性が再浮上したことにメッセージを流したメディアに対して視聴者やスポンサーからの問い合わせが殺到。即日ネットでの謝罪文書やテレビでの謝罪会見などが開かれ、［トーラス・シルバー］を擁するＦＬＴに対して示談に至るケースまで発生した。

そして、日本での騒動の影響は『第一賢人』が賛同したディオーネー計画の意義にまで波及し、国内外を問わず魔法師に好意的なメディアではディオーネー計画の徹底分析という特番を組んだ上で『魔法師を道具として使うことを厭わない卑劣な策だ』と論じて波紋を呼びつつある。

［トーラス・シルバー］が達也であることを政府関係者以外がバラすのはメリットとして原作で語られていたが、ロクに名の知られていない謎の人物が国を混乱させかねない台詞を吐くことを全く考慮せずに流した側のメディアも当然責任が生じる。

自らの影響力を自覚してやっているのだとしたら、尚更質が悪い。結局、レイモンドのやったことは一時として正しくとも、人様を追い詰めて楽しんでいる時点で〝人としてのラインを踏み越えている〟としか言えない。

だからこそ、原作で〝あんなこと〟になっても平然としていたのかもしれないが。

やってることはさながらカードゲーム

臨時師族会議を終え、葉山の指示で使用人が姿を見せて片付けられていく。そしてお茶の準備も並行して進められていくのだが、ここで達也が訝しんだのは席が〝三つ〟用意されたこと。真夜と達也が座るにしても、残る一席は誰なのか……と達也が思案していたところに、突如として出現する白銀の長方形の障壁のようなもの。

達也は一瞬警戒したが、感じた魔法の波長が〝良く知る人物〟だと理解したところで、障壁をまるで開かれた扉のように潜ってくるのは――先程までモニター越しに会話していた悠元だった。

「やあ、達也。久方ぶりだな」

「ああ。その魔法を使える時点でお前しかいないと直ぐに理解した」

「それは褒められると解釈していいのか？」

「そうしてくれると助かる」

とても師族会議議長ひいては元老院四大老に対する言動ではないにせよ、そこまで口煩く言うつもりもないために、悠元は達也の言葉を素直に呑みこむこととした。一方、その二人の様子を見た真夜は笑みを漏らすほどで、葉山も僅かに笑みを見せていた。

ともあれ、真夜は静かに立ち上がって深いお辞儀をした。

「神楽坂閣下、ようこそおいで下さいました」

「そう述べるということは、四大老の件も母上から聞いているのでしょうね。では……気にするでない、四葉真夜。敵が面倒極まりない相手であるが故、こちらから出向いたまでのこと。それでも気にするのであれば、今後の働きで返してくれればよい」

「そう仰って頂けるだけでも、こちらとしては助かります」

真夜の敬称呼びで大方の事情を察し、悠元は四大老としての立場で台詞を発した。傍から見れば茶番のような有様だが、一応礼儀を欠くようなことは出来ない。双方が挨拶を交わしたところで、悠元から話を切り出した。

「では、四大老としての挨拶もそこそこに話し合いを始めましょう。というわけで達也、その前準備としてＦＬＴからプレス発表をする方

針で固めてる。で、『ＳＴＥＰ』プロジェクトの事業発表は二日後の水曜日で大丈夫か？」
「ああ。どうせ今の俺は暇人にも近いし、悠元のことだから『第一賢人（レイモンド・クラーク）』を嵌めるだけでは済まないのだろう？」
「まあな。嵌める最初の相手は――――国際魔法協会だからな」
魔法師は何らかの形で魔法協会に所属している者が多い。一部の魔法師はライセンスの関係でフリーランスの活動をしたり、最悪はアンダーグラウンドで犯罪行為に手を染めるケースも少なくない。
悠元が初手で国際魔法協会を嵌めるのは、ディオーネー計画の社会的な根拠を正面から叩き潰す為。具体的には、［恒星炉］関連技術だけでなく、今後ＦＬＴの関連技術全てに〝国家機密に準じる特許〟を付与することで、許可の際には全て日本政府を通させなければならないこと。
「先日の日本魔法協会の要請の時点で介在していたとは思えないが、今後介在しないとも限らない。相手に先手を打たれる前に、まずは相手の切り札と成り得る手段（カード）を全て破壊する」
その根底にあるのは、原作で十三束翡翠会長がエドワード・クラークと達也の会談をセッティングしたことだ。
本来、ＵＳＮＡの政府機関の公人でしかないエドワードが日本魔法協会に圧力を掛けることなど出来ない。それがいくらＵＳＮＡ大使館からの要請だとしても、本来政府間交渉が想定される国際的なプロジェクトに国際魔法協会の支部的存在とはいえ日本魔法協会が積極的に関与する義理は無い。
ましてや、達也に敗北を喫した克人の報告が師族会議を経由して日本魔法協会に伝わっていない筈など無い。反魔法主義に対するアプローチ能力が致命的に無い魔法協会が日本政府からの要請ならばまだしも、同盟を結んでいるとはいえ外国の要請に応える論理が成り立たない。
では、どういった方法ならばＵＳＮＡからの要請を日本魔法協会が受理せねばならない事態に陥るのか。答えは至って単純で、国際魔法協会から〝ディオーネー計画に関して最大限の協力をするように〟

と同調圧力を掛けることで日本魔法協会がそう動かざるを得なくする方法だ。
「先程イギリス連邦政府に〝最後通告〟を送付した。『ディオーネー計画に関する一切の圧力を日本へ与えるような真似は慎め』と。こちらの要求が呑めない場合、保持している１００兆円の国債の内、まずは１０兆円を売却するとな」
「……魔法で殺さずに金で殺すか。俺には真似できない芸当だな」
「こうなった大半の理由はうちの爺さんだがな」
　原作では金曜日まで時間を稼ぐこととしたが、悠元が四大老となったことで大幅な時間短縮が見込まれるだけでなく、日本政府も前向きに協力してくれる体制を確約している。尤も、親米派の役人がスタンドプレーをかまして混乱させようとする動きも出てくるだろうが、その対応は既に考えている。
　国債売却を仄めかせば世界の金融市場にまで波及することになるが、ディオーネー計画に対して消極的な対応を見せる企業が危機に瀕した場合は必要な措置を投じる。悠元とて無秩序に離職者を増やしたいつもりなどない。
「話を戻すが。真夜さん、プラント建設の為の業者を明日から巳焼島に入れたいのですが、大丈夫ですか？」
「ええ。受け入れの準備は既に整っております」
「いつの間に……母上も既に一枚噛んでいたのですか」
「そうですよ。ふふっ、そうやって驚く顔が見れて嬉しいですわ」
　師族会議の時点で四家が主体となることは既に話されていたが、業者の受け入れ態勢をすぐにでも出来るとなれば、そこまで計画が既に進んでいるという証左。魔法技術ならばまだしも、工業技術の面では完全に悠元へ依存している形で、これには達也も苦笑を漏らしたほどだった。
「ここからは予測混じりだが、言質を取ろうとエドワード・クラークが来日する可能性がある。そこで達也、もし会談する際は市原先輩を秘書として付ける」
「先輩が……いや、先輩のことだから自主的に引き受けたのだろうが、

申し訳なく感じるな。もし来日しなかった場合は？」
「その時は『スターズ』を暗殺部隊として送り込んでくるだろう。尤も、全員とっ捕まえて〝同盟国に喧嘩を売った愚か者たち〟の烙印を添えて強制帰国させてやるだけだ」
ＵＳＮＡの場合は、という前置きが付くのは当たり前のことだが、新ソ連の場合はベゾブラゾフが出張ってくることになるだろう。
というか、原作の展開的に〝達也の敵役〟という役割は必要だとしても、国家に認められた戦略級魔法師が平然と隣国に戦略級魔法を使用するという〝侵略行為〟をＵＳＮＡですら非難しないのは明らかに異常としか言いようがなかった。
「いうまでもないだろうが、リーナについては必要な対応を取った上で完全に帰化させることになるから、そこは宜しく頼む」
「別にそこまで一々追及するつもりは無いのだが、感謝はしておく」
この時点で、ディオーネー計画そのものの信憑性を著しく欠く結果となり、ベゾブラゾフは完全に戦略級魔法師としてのプライドで執拗に達也を狙い続けた。その果てに起こった結果は……大切な人を殺させまいと決意した達也の行動理念からすれば、言わずとも理解できる。
「達也。『ＳＴＥＰ』によって魔法師の軍事利用一辺倒という事態は回避できるが、軍事に割ける戦力の低下が生じるのは言うに及ばずだ。そこで、元老院四大老の一人として達也に求めたい役割は〝抑止力〟。それも、四葉家次期当主である〝四葉達也〟としてではなく、国防軍〝大黒竜也特尉〟でもなく、他の誰でもない国家公認戦略級魔法師〝司波達也〟として」
「悠元……」
原作では忌避されるように回避されてしまった達也の戦略級魔法師としての立場。なればこそ、悠元は〝司波達也〟の名をビジネスネーム以外で残すためにも、国家公認戦略級魔法師の立場を作ることとした。
日本という小国に二人の〝使徒〟（ここに将輝が加われば三人になるが）。大国であるＵＳＮＡであっても三人しか公表されていない存

在を示すことはデメリットが生じる。だが、四葉の悪名を本当に脱却するためには、いくら四葉に連なる者であろうとも国家に対する保険は必須となる。
「無論、俺も今上天皇陛下より戦略級魔法師として認められているが、俺が修得している戦略級魔法の関係で表沙汰に出来ん。まあ、達也のそれも書面上は非公式扱いとなるから、深くは考えなくていい」
四葉の悪名だけでなく、剛三の存在もそこに拍車を掛けている。見た目３０歳代にしか見えない剛三が突然倒れて死ぬという未来が明らかに見えないが、もうじき実年齢が９０歳の大台を迎える。その意味でも、いい加減剛三を責務から解放してやらなければならない。
その為にも、悠元は自分の我儘を呑み込んで神楽坂家の養子入りを受け入れた。結果として神楽坂家当主とまでなっただけでなく、婚約者が１４人に加えて愛人まで加わって毎日が大変な日々となっている。
正直、一昨年夏の千姫の台詞――『悠君は三人だけでは足りない』という言葉に対して反論したかったが、結果として１７人を相手にしても平然としている自分の規格外の体力と欲望に思わず溜息を吐いた。
別にこんな事態を想定して魔法や武術を磨いていたわけではない、ということだけは断言しておく。
「第三次大戦が終わって３５年も経った以上、昔の英雄に頼り切る悪癖から抜け出すべきなんだ。それを大の大人たちが誰も言い出さない時点で、責任の怠慢としか言いようがない。ディオーネー計画が完全に破綻したら、俺は世界の表舞台に立つ。『灼熱と極光のハロウィン』で戦略級魔法［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］を放った者として」
「……その役割を悠元だけに背負わせない。その時が来たら俺も立とう」
「達也……どうせ、言っても聞かないだろう？」
「無論だ」
かつて、大漢を滅ぼした二人――四葉家先々代当主・四葉元造と上泉家先代当主・上泉剛三。その二人の孫である司波達也と神楽坂悠

元が成した『灼熱と極光のハロウィン』によって、大亜連合は講和を余儀なくされた。
　世界はまだ知らない。この二人の成した功績は、最早世界の誰しもが無視できないほどに大きなもの。明るい未来を予感させるような二人のやり取りを見て、真夜は葉山に話しかけた。
「葉山さん。5年前の貴方の予想通りね」
「恐縮です。おかわりは如何いたしますか？」
「頼めるかしら？」
「畏まりました」
　達也をこのような存在にしたのは自分の責任もあるが、それを上回る様に四葉を救った一人の少年。規格外の力を手にしてしまった達也と対等以上に渡り合う存在が、自分の実の息子とこうやって語り合えていることに、真夜の心の中にはいつしか世界への復讐が別の意味へと昇華していた。
（たっくんと悠君の存在は、最早世界の誰しもが無視できなくなる未来が来る。剛三さんや千姫さんの言った通りね）
　娘の未来の為に命を賭けた父・元造、分家と真夜の息子の確執を生み出さない為に苦心した叔父・英作、そして……この国を救った二人の英雄の血筋は、二人の戦略級魔法師をこの国に生みだした。
　これから如何なる苦難があろうとも、彼らなら乗り越えていける気がする……それこそ、真夜が彼らに託した〝世界への復讐（ちょうせん）〟。
◇　◇　◇
　悠元は［鏡の扉（ミラーゲート）］で達也を伊豆の別荘に送り届けた。瞬時に離れた場所を移動できる悠元の異質さは今に始まった事ではないが、それでもここまで出来る悠元の強さに達也は感服すら覚えていた。
「さて、俺はこのまま東京に帰るが、何か必要なものはあるか？　いざとなったら［サード・アイ・エクリプス］の複製品も準備できるが」
「今の装備でも十分すぎる気はするんだが。というか、国防軍に許可は取らなくていいのか？」
「忘れたのか達也。今の俺の国防軍内の階級は将校クラスだ。誰にも文句は言わせない」

「……それは確かに強みとして十分だな」
　将校の階級にいても派閥を作るような動きを一切見せない。下手にシンパなんて作れば、九島烈の前例からして余計な問題になりかねない。そして、悠元の設計するＣＡＤは世界でも指折りの性能を有するため、彼の機嫌を損ねれば戦力面で大きな問題として跳ね返ってくる。
「[恒星炉]は俺にとっても夢の実現となる大事なもの。そこに立ち塞がるというのならば、相手が誰であろうとも叩きのめす。それで逆切れして殺す様なことをして来たら、死ぬよりも辛い目に遭わせる。それでもダメだった場合は……言うまでもないな」
「俺が言うのなんだが、性格が悪いな」
「御所望なら姿身を準備してもいいぞ？」
「止めてくれ」
　互いに〝性格が悪い〟と自覚しているからこそ、こうやって腹を割って話せる。
　ここまで来た以上は誰にも邪魔はさせない。それを壊そうという輩が誰だろうと、最悪殺すことに忌避感は無い。
「そういえば、深雪に残したリソースから読み取れたが、一高の周囲にメディアらしき姿はなさそうだ」
「政府の発表だけなら暴走しかねない輩が居そうだったから、ＦＬＴから[トーラス・シルバー・プロジェクト]の記者会見を水曜に開く、と今朝の段階で発表しておいたからな。もし国立魔法大学や魔法科高校などの魔法師育成機関へ無断の取材を行うような場合、会見への参加をお断りするという文言も添えておいた」
　この辺は昨春の神田議員が訪問した件を重く見てのこと。ＦＬＴの要請を受ける形で国立魔法大学および国立魔法医療大学、当事者側になってしまう第一高校を含めた付属校もＦＬＴの公式発表を掲示している。これでも取材しようと横暴な態度を取るメディアがいた場合、〝生贄〟として神坂グループでＴＯＢに踏み切る腹積もりだ。フリーランスの場合は、高額の報酬と引き換えに口封じも辞さない。
「相手が高校生という未成年の立場すらもお構いなしに駆け込むつも

りなら、最悪自分が矢面に立つことも辞さない」
そして、これはメディアの中に紛れて反魔法主義者が魔法科高校の生徒を殺す様な行為に及ぶことを避けるためでもある。原作だと達也だったからこそ対処できたが、これが他の生徒だったらと思うとやりきれない思いを抱えることになる。
「万が一ということもあるから、今日は俺が深雪たちを送迎していく。折角真夜さんから貰った電気自走車（エレカー）を使わないのも勿体ないからな」
「……すまない、悠元。うちの母親が迷惑を掛ける」
「気にするな。俺はもう割り切ったから」
達也の解呪の権限では足りないと真夜が駄々をこねた結果、受け取ったものの一つはエレカーだった。達也が主に運転しているものとはタイプが異なるが、四葉家の力で最新鋭のセキュリティまで組み込まれており、更には悠元がそこから魔改造したことで空や海の中まで自在に移動できる乗り物へと化した。
そのため、表向きの名義は〝上条達三特務大将〟――――国防軍統合軍令部所属の軍用車となってしまっている。無論、日常生活で使用できるような仕様なのは言うに及ばずだが。
「全く、そんなに力が怖いのなら対価を差し出してこちらの機嫌を取るのが基本中の基本だろうに。大国というぬるま湯に浸かり過ぎて腑抜けたとしか思えん」
古今東西、これまで大国が数世紀も続いた試しなどない。集約した国家も時代の流れで分裂する可能性だって今現在も残っている。無論それだけではなく、魔法に関して一日の長があるという自負やプライドがあるのかもしれないが。
その対価に名誉や栄光を選んだ時点で、エドワード・クラークは魔法師を蔑視しているとしか思えない。いくら反魔法主義者が活発に動いているとはいっても、このまま放置すれば国家の利益に反する事実を無視して四葉の排除を目論んだ。
目先の利に囚われて、子孫の世代に負債を残す様な真似を許容する連中など、最早〝害悪〟でしかない。それでもＵＳＮＡ政府がエドワード・クラークを切り捨てられないのは、彼の発言に一定の説得力

が存在しているためでもあった。
「さて、ゆっくり茶の一杯も飲みたいところだが、これでお暇する。時折夕歌さんのご機嫌取りの為に来ることもあるが、そこら辺は許してくれ」
「寧ろ、俺が謝罪したいことなのだがな」
ここで夕歌の名が出たのは、達也の別荘を監視したり狙おうとする不届き者を追い払うための結界を展開・維持するために四葉本家の命で夕歌が出張る為だ。一条家当主の治療で金沢に行って、今度は達也を守る為に伊豆まで来ることになる為、自ずと婚約者との時間が減る。
そのフォローは悠元がすることになるため、断りを入れるように述べると、それに対して達也は逆に謝罪するような言葉を述べた。そして、悠元は［鏡の扉（ミラーゲート）］で別荘から姿を消したのだった。

今になって味わう規格外の片鱗

東京のマンションに戻った悠元は、エレカーに乗って第一高校へと向かう。丁度放課後の時間に間に合うように着いたが、特にメディアなどの姿は見受けられなかった。事前に連絡を受けていた深雪と水波を先に連れ出す形でエレカーに乗せて走り出した。

「それにしても、悠元さんが免許を持っていたのは驚きました」

自走車の運転免許は今でも満１８歳以上と定められている。だが、この法令には抜け道が存在しており、業務上の理由があり、事業者の許可があれば取得可能だ。

悠元の場合、三矢家にいた頃に事業主となる三矢元の許可で取得している。加えて、国防陸軍兵器開発部にいた関係で機密データを持ち出す際に自分で自走車やバイクを運転する必要が生じたため、本来なら許されない１４歳で免許を取得している（無論上条達三名義）。

「国防軍に関わっている関係でどうしても必要とされたからな。中学生の段階で免許を取る形となった時は溜息しか出なかったが」

検定試験は通常よりも厳しくなるが、悠元の場合は前世で身分証明も兼ねて取得していたため、その時の経験が生きて特に問題もなくクリアできていた。実技試験の担当官に『ここまで運転慣れしている中学生は珍しい』と言われたときは苦笑しか出てこなかった。

「そういえば、メディアの人間が周辺にいなかったが、特にトラブルは起きなかったか？」

「はい。ちらほら敷地の外に見受けられましたが、昼休みの後は全く姿を見ませんでした。何かされたのですか？」

「なに、［トーラス・シルバー］に関する記者会見の件で魔法師関係機関に妨害などをしたら取材から締め出す、と発表するように働き掛けただけだよ」

正直、レイモンドのやっていることは達也の妨害という点では理に適っているとも言える。だからこそ、悠元はそのカウンターとして『第一賢人』を国際指名手配する形に持っていった。

そもそも、事情を詳しく知る者からすれば『第一賢人』を厳しく取

り締まらなかった時点でＵＳＮＡにも責任が生じる。どういうことかといえば、本来知り得るはずのない情報を政府機関で働く父親を持つとはいえ、一民間人がこんなことをすれば間違いなく〝業務妨害〟の罪に問われることとなる。

　それがＵＳＮＡの国益を害するようなものでなくとも、ここで顧傑の事件の詳細を明かされたら、間違いなくＵＳＮＡに説明責任が生じる。それが回りまわってエドワード・クラークにまで容疑が波及する可能性だってゼロではない。

「……いよいよ発表される、ということですか？」

「まあ、そうなるな。尤も、達也が［トーラス・シルバー］だと明かしたとしても、本当の実情を公にする気はない。ここで俺まで明かしてしまえば、クラーク親子は間違いなく［トーラス・シルバー］を理由にして参加を強制してくるのが目に見えている」

　元々悠元にまで嫌疑が波及しないように、［トーラス・シルバー］に関する部分の情報統制だけでなく、ＦＬＴ内部での立ち回りもきちんと分けていた。ＦＬＴの研究室で作業する時は［恒星炉］一本に絞り、ＣＡＤ設計については可能な範囲でリモートワークによる作業を行い、実際の作製は牛山に一任していた。

［トーラス・シルバー・プロジェクト］は解散する代わり、日本政府による次世代エネルギー構想の中核を担うチームとして再出発する。ＦＬＴと神坂グループ、白河グループに三矢家の合同出資会社――トライローズ・エレクトロニクスへの出向扱いになるが」

　トライローズ・エレクトロニクス（Ｔｒｉ―Ｒｏｓｅ　Ｅｌｅｃｔｒｏｎｉｃｓ：ＴＲＥ）――［恒星炉］関連会社であるステラデバイステクノロジー、東京臨海電力、ステラウォーターを傘下に置く形で、出資はＦＬＴと神坂グループ、白河グループとプリズム・マーセナリー（三矢家が運営する小型兵器関連会社）の四者で２５％保有の合弁会社。

　理事長は悠元が務め、常任理事は達也と元継、そして元治と三矢家の血縁者が多く占める形となる。その釣り合いを取る為、四葉家関係から深雪が、そして東道家から佐那を理事に加えている。

東道家の係累を加えるのは、これまで積極的に関与してこなかった側にチャンスを与えるためのもの。尤も、親世代の皺寄せを受ける形となった佐那は深い溜息を漏らしていたが。
これまで［トーラス・シルバー］の功績に与って来たも同然の連中からすれば、達也の功績を奪うことも出来なくなる。更に司波龍郎と司波深夜の〝表向きの関係〟は完全に解消されることになり、司波家から深夜と達也、深雪が離れて別の司波家という形になる。
「ただ、これまで販売したＣＡＤのアフターサポートがいきなり途絶えるのもマズいから、第三課の人たちも合わせて出向にした上で［トーラス・シルバー］関連のサポート窓口も兼ねることになる。ある意味ＦＬＴが下請けみたいなことになるが、気にしないことにした。深夜さんも『別に構わないわ。今まで怠けていたあの人達へ一撃を加えられるし』と喜んでいたけど」
「……お母様なら確実にそう言いかねないのが目に見えてしまいます」
それに、［恒星炉］の中核を成す人造レリックの作製にはこれまで［トーラス・シルバー］で培ってきた技術が必要となる。それを実現させるだけの技術力や情報の秘匿を両方成立させるとなれば、開発第三課の人間以外に適任者がいなかったのだ。
なので、前以て主任の牛山には『ＳＴＥＰ』に関する情報を教えているが、『そんな大プロジェクトに参加できるとあっちゃ、俺も腕が鳴りますぜ』といいつつ、しっかり秘密を守ると公言した。
「連中に時間をくれてやるわけにもいかないから、もう一つ策を講じようと思っている。それも、エドワード・クラークが来日したとしても霞んでしまう様な大物を日本に呼び寄せる形でな」
原作よりも前倒しをして［トーラス・シルバー］を解散するが、出向先で改めて［トーラス・シルバー・プロジェクト］のチームとして再出発を行う。これまでメディアによって個人を示す形となっていた［トーラス・シルバー］がチームとしての名を持つために、明後日ＦＬＴの会見を実施する。
そして、ＵＳＮＡ方面の動きでエドワード・クラークが来日を考え

ているような素振りが見えていた。恐らく言質を狙ってのことだろうが、それすらも本気で霞ませる策を講じることとした。
今の状況で計画に賛同しているスタンスの新ソ連が何らかのアクションを起こせば、ディオーネー計画への波及は間違いなく避けられなくなると踏んでの策。そして、その相手はＵＳＮＡの政府機関の人間ですらも霞かねない相手。
「尤も、その招待状は既に現地の大使館を通す形で送付した。向こうの態度次第だが、乗ってくる可能性は極めて高い」
「悠元兄様、どうしてそこまでされるのでしょうか？　ＵＳＮＡが逆上して過激な手段を取る可能性も出てくると思われますが？」
「寧ろ、最悪そうなってくれた方がディオーネー計画を頓挫させやすくなる」
水波が述べた疑問は、エドワードの面子をこれでもかと潰す様な悠元の策でＵＳＮＡ側が過激な手段を取らないか、という至極尤もな疑問。だが、ディオーネー計画に関しては〝相手を怒らせるほうが潰しやすい〟という最大の利点がある。
何せ、これまで軍事的な魔法技術の利用を促進してきたＵＳＮＡにとって、魔法の民生産業での利用など〝御法度〟に近しい所業。その方向転換を高らかに謳いながらも、一方で同盟国の戦略級魔法師を殺す様な真似をすれば建前と本音の乖離が激しくなって、最悪計画の頓挫で参加の意思がある国同士が責任問題の追及になる可能性が高くなる。
そうなると、その先に待ち受けるのはＵＳＮＡと新ソ連での戦闘。それも、魔法師同士の大規模戦闘となり、暗闘という規模で済まない公算が高くなるのは目に見えている。
「今のＵＳＮＡに正面切って新ソ連と戦う理由がない。寧ろそうしたら戦略級魔法師を失いかねないリスクを支払うことにも繋がるし、ディオーネー計画を提唱した当事国の発言力に説得力が無くなる」
８年前の暗闘では、スターズの半数近くにも上る一等星級（スター・ファースト）――部隊長クラスの魔法師を喪っている。その補強をするだけでも十年近く掛かって漸くというレベルだったため、そんな経験など二度とし

たくないのが国防総省（ペンタゴン）の本音だと思う。
　そして、それは新ソ連側にも当て嵌まる話だが、それを補って余りあるベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］がＵＳＮＡの戦力状況を固定化させてしまっている。ひいては、それがリーナの〝アンジー・シリウス〟としての戦力を手放せない理由にも繋がっている。
「深雪と水波を降ろしたら、雫たちを連れて帰るから、それまではマンションで大人しくしてくれると助かる」
「……ちなみに、雫たちをわざと残したのは理由があるのですか？」
「端的に言えば、誰かが暴走しても冷静に判断して止めてくれる意味で、雫が適任だったからだ」
　先日の国防軍情報部のようにほのかが張り切りすぎる（光波干渉系魔法で情報部の視覚を悉く封じており、これには光宣もやや引き気味だった）ことは無いにせよ、一昨年の一科生と二科生の諍いの件もある。ほのかのストッパーという意味で雫を残した事を伝えると、深雪もそれには納得したような素振りを見せつつ、一つ溜息を吐いた。
「お兄様もほのかを囲んでしまえば、ほのかがここまで暴走する可能性を考慮しなくても済む気はいたしますが」
「うーん、どうだろう……それはそれで逆に怖い気もしなくはないが。水波はどう思う？」
「私の意見ですか？　そうですね……」
　結局、達也がほのかを抱く件については『当事者間で納得するまで話し合うように仕向ける』ということで結論を締めたのだった。
「？　今、何か悪寒がしたが……ピクシー、反応は？」
『いえ、ありません。強いて言うのならば、マスターの恋関係と存じますが』
「……」
　そして、人里離れた別荘で何か嫌な予感――――悪意とも殺意とも異なるもの――――を感じた少年は３Ｈに尋ねるが、〝彼女〟が述べたことに関して少年は心当たりがあったのか、黙る他なかった。
◇　◇　◇

伊豆にある深夜の別荘の他に、四葉家所有の物件がある。そこから少し離れた所に小さな一軒家で、目的は深夜の療養を邪魔にならない程度に見守るためのもの。

四葉家の特性というよりも、一族の中で特異的な魔法資質を有している深夜。真夜が誘拐された事実を踏まえ、深夜の誘拐を目論む輩を排除するために建てられた小屋。事実、数回の襲撃を撃退したこともあり、決して無駄ではなかった。

そして、深夜が神楽坂家の使用人となったことで使用する機会は無くなったかに思われたが、達也の滞在によって小屋も使用の機会が再び訪れることとなった。

「お嬢様。調度品はすべて調っております」

「ご苦労様。荷物を置いたら、すぐに取り掛かりましょうか」

部下の報告に対して頷いたのは、四葉分家・津久葉家の長女にして悠元の婚約者序列第５位、津久葉夕歌であった。

夕歌がこの小屋に来たのは、四葉本家の命を受けて。目的は達也が滞在している別荘に結界を掛け、周囲からの認識を逸らしてしまうもの。結界の類は本来古式魔法の分類に入るが、精神干渉系魔法に長けた津久葉家の術者として夕歌が抜擢された。

原作の夕歌ならば時間も掛かっただろうが、悠元から魔法の手解きを受けた影響で魔法師としての実力も上がっただけでなく、悠元から結界型術式の提供も受けた。

本人曰く『金沢からとんぼ返りして、今度は暫く一緒に居れませんから』というお詫びに対するものだが、その術式の凄さよりも悠元への好意が勝った結果、達也を守る任務にも一層力が入っていた。

「（まあ、達也さんや悠元さんに迷惑を掛けたら深雪さんが何を言い出すか分からないもの……）あら？」

「どうかいたしましたか？」

夕歌の実力が上がった結果として、結界の展開はそこまで時間を擁さなかったが夕歌は直ぐに結界の中にいる人物の存在に気付き、何事かと部下の一人が声を掛ける。

「結界の中に誰かいるわね……別荘の北西側、結界のギリギリ範囲内

にいるみたい」
「そこまで把握できるのですか」
「え、ええ、まあね（あの時は悠元君に対して浮かれてたけど、将来古式の家に入るからと言って、津久葉家に存在する結界よりも強力な術式なんて外に漏らせないじゃないの）」
夕歌が引き攣ったような笑顔を浮かべたがる理由は、悠元が渡した結界型魔法［深奥樹海（ディープ・フォレスト）］にある。
この魔法の雛型は周公瑾や陳祥山が使用する［鬼門遁甲（きもんとんこう）］のみならず、天狗術の［隠れ蓑］も合わさった悠元オリジナルの魔法で、術者が定めた対象以外は全ての認識を強制的に喪失する。存在のあるなしだけではなく、本当はそこにあるのに〝何もない〟という認識を情報として認識させてしまう。
更に、対象物に近付くと無意識的に進行方向をずらされるが、本人の認識は〝まっすぐ歩いた〟と誤認させる形となるので、結界の中には何もないと判断させられてしまう。
話を戻すが、不審者をそのまま放置しておくわけにはいかない。夕歌は直ぐに監視者を捕らえる様に指示を出す。部下が出て行って一人となったところで、夕歌は深い溜息を吐いた。
「はぁ……（ま、まあ、惚れた弱みといえば否定はしないけれど、悠元君も少しは説明してくれてもよかったのに）ん？　メール？」
悠元への愚痴を零した夕歌だが、実のところ悠元は夕歌に対して魔法の説明をしっかり行っていた。そのことが抜け落ちていたことにも気付かずにいた夕歌だったが、端末のメール着信音で悠元からのメールだと気付いて、端末を操作する。
『お疲れ様です。夕歌さんには一応魔法の説明はしたのですが、あの感じだとちゃんと聞いていない様子だったので、魔法の説明書を添付しておきます』
「……あーダメ。今鏡を見たら私が恥ずかしさのあまり死んじゃう……うへへ」
鏡を見ずとも、夕歌の顔が火照っているような感覚から恥ずかしさのあまり顔が熱くなっているのが丸分かりだった。それよりも、ちゃ

んと仕事を労ってくれる辺りは流石だと思いつつ、頬を緩ませていた。
……なお、夕歌のその様子が部下が監視者を連れて来るまで続いたのは言うまでもなく、機嫌が良い夕歌の邪魔をしないように部下たちが空気を読んでいたのはここだけの話。
そして、監視者を詰問した後に真夜へ報告をした。
「結界の展開は無事に完了したしました。それと、曲者を捕らえました」
『あら、たっくんを監視した不届き者はどなたかしら？』
「富田家の術者です」
富田家の魔法師は魔法協会の専属みたいな形で活動している。その術者によれば、危害を加えるつもりなどなく、達也が何処かに行方を晦ますと考えての行動であり、魔法協会の指示によるものだと白状したことも報告した。
それを聞いた真夜の笑みは、まるで鋭い刃を覗かせるような鋭さを夕歌は覚えていた。
「それで、如何いたしますか？」
『そうねえ……何もせずに解放して差し上げなさい』
「宜しいのですか？」
『こちらが疚しい事をした訳ではないですもの。それに、この事実だけで魔法協会へのマイナス加点は避けられないでしょうし』
真夜が直接手を下すことも想定したが、真夜が下した判断の理由を聞かされると、夕歌もそれが誰にとっての評価なのかはすぐに理解したようで、特に異論を唱えることはしなかった。それを知ってか知らずか、真夜は夕歌に問いかける。
『夕歌さんはこの決定にご不満かしら？』
「いえ、不満はありませんが……そういえば、これは任務と関係のないことですが」
『構いませんよ。大方、［誓約（オース）］のことについてでしょうか？』
「はい。母が気に掛けていらっしゃったので」
気に掛けていた――――というのは夕歌なりに噛み砕いた結果だが、

実際には愚痴に近いものを夕歌は母の冬歌から聞かされる羽目となった。
「御当主様は問題ないと判断されたのか、そこが気になりまして」
『その判断の可否は今の私にありませんもの。何故なら、［誓約（オース）］の解呪の権限は悠元君に渡しましたもの』
「あー……それでしたら、確かに御当主様が判断なさる範疇にありませんが、よろしかったのですか？」
『達也だけじゃなく深雪さんの問題にも関わりますもの。その意味で、深雪さんの婿となる悠元君が権限を有しても妥当だと、私と葉山さんが判断いたしました』
［誓約（オース）］を完全解除できることそのものの問題よりも、真夜は［誓約］の問題が達也だけでなく、その枷となっている深雪にまで波及するとなれば、悠元に権限を委ねることで問題の解決を図った。
それと、真夜としても自分から息子が何の制限もなく実力を発揮できるような我儘を言う訳にはいかない。その上で、悠元からの提案は渡りに船だったとも言える。
『それでも不満なら、冬歌さんが悠元君の使用人になればいいと思うのですよ』
「……それだけは本当に止めてください。悠元君がまた頭を抱えますので（今更ながら、深雪さんは本当に強いわよね……深夜さんが使用人となっているのに、それを認めてるなんて）」
真夜の爆弾発言に対し、夕歌はせめてもの抵抗という形で拒否の姿勢を見せた。それと同時に、心の中で実母が愛する人の使用人兼愛人となっている事実を受け入れている深雪の強さに改めて感服すら覚えていた。

政務に似つかわしくないストレス解消法

四葉分家の一つ、新発田(しばた)家次期当主・新発田勝成(しばたかつしげ)の職業は、防衛省の事務官である。勝成自身の魔法師としての実力は高いが、自ら魔法を使って戦うのではなく、魔法をどう使っていくべきかという戦略・戦術方面を考える職務に従事している。

新ソ連方面での魔法戦闘やメキシコ方面での暴動、そして日本海から宗谷海峡に掛けての新ソ連によるものとされる軍事行動の数々。ただ、ディオーネー計画の発表以降は小康状態となり、防衛省の職員もその時と比べると比較的早い時間で帰れるような状態となっていた。

19時すぎに庁舎を出た勝成は、自宅ではなく都心の高級ホテルに出向いていた。VIPクラスが宿泊するような海外にも名を知られたホテルではないにせよ、ビジネスマンの間では食事も良くセキュリティもしっかりしていると評判の場所。

待ち合わせた相手は、指定されたレストランですぐに見つかった。風貌こそ一見するとただのビジネスマンにしか見えないその人物の名は黒羽(くろば)貢(みつぐ)――新発田家と同じ四葉分家の一つである黒羽家当主――であった。

「いきなり呼び出して済まないね」

「いえ、都合がつかなかった父の代理として出向いたことをお許しください」

「それはこちらに非があることだ。今日いきなり会いたいと申し出た以上、出向いてくれただけでもありがたいと思っている」

「そう仰っていただけるだけでも感謝いたします、貢さん」

そのやり取りを交わした後、席に座る勝成。ウェイターに酒と軽いつまみを注文して、下がっていったところを見計らって貢が話を切り出した。

「さて、呼び出した本題についてだが、彼のことについて相談したかったからだ」

「彼というのは、達也君のことですね？」

貢は達也の名前を出すことを避けたが、四葉に関することで尚且つ喫緊のこととなると勝成も達也が最も該当する話であり、名を出して尋ねると貢は顔を顰めるも、それが表に出ないように隙を見せることなく話を続ける。
「そうだ。とうとう［トーラス・シルバー］の正体が知られてしまった訳だが、君はどう思うかね？」
「これは御当主様に伺ったことですが、元々［トーラス・シルバー］の正体を明かすことは魔法科高校の卒業時と取り決めていたようです。その時期が早くなっただけであり、達也君に非がある話とは思えませんが」
勝成は自身のガーディアンである堤琴鳴との婚約を認めてもらった後、真夜と直接対話する機会を得た。真夜曰く『私が理さんを説得した方がいいでしょう。そうすれば勝成さんが要らぬ労力を費やすことも無くなるでしょうから、ね？』とのことで、その折に達也のことについていくつか尋ねていた。
その情報の一端を勝成は口にしたが、それが貢の望むものではないような感じを勝成は感じ取っていた。
「しかし、そもそも彼が一高への進学などをせず本家で大人しくしていれば済む話だったのではないか。ディオーネー計画が［トーラス・シルバー］の実績ではなく、昨春の［恒星炉］実証実験を念頭に置いていることは明らかだ」
貢の言葉に勝成は頭を振った。
「一高への進学は彼の意思によるものではありません。四葉のガーディアンとしての立場として深雪嬢の護衛の役割を帯びるのも含めてのもの」
「勝成君は知らないだろうが、横浜事変の後、私は達也君を本家で謹慎させるように申し入れをした。だが、御当主様は『今ここで達也を謹慎なんかさせれば、彼が戦略級魔法師だと内外に明かす様なもの』と取り合わなかったのだ」
勝成は父親の新発田理も真夜に申し入れをしていた事実を知っている。その時は父親の暴走とも思わなくは無かったが、貢からの情報

を聞けば四葉分家が本家に叛意を有しているようにしか聞こえない。
慶春会で味わった悠元の存在感。勝成はそれだけしか感じられなかったが、近くにいた父親が顔を蒼褪めて冷や汗を流している姿に、勝成は彼の勘気を被らなかったと自らの幸運に感謝したくなったことがあった。
話を戻すが、達也を謹慎なんかさせた場合、深雪の護衛を務めるのが間違いなく悠元になってしまう。その時点で神楽坂家次期当主となっていた彼に深雪の護衛を負わせるということは、四葉家は対価として深雪を神楽坂家に嫁として送り出すことにも繋がる。
結局、慶春会での顛末によって分家の罪を背負う形で深雪が神楽坂家に嫁入りとなった。その重みを忘れて達也の処遇に口を出せば、今度は神楽坂家当主の悠元が出張るという事態が読めないのか……と勝成は口に出したかったが、まずは貢の言い分を聞いてからだと自分に言い聞かせつつ、自分の考えを述べることとした。
「お言葉ですが、あの局面で［マテリアル・バースト］を使わない選択肢はありませんでした。戦争は単純な勝ち負けでなく、その後にも大きく影響してきます。現に、『ハロウィン』後の大亜連合の動きを見れば一目瞭然でしょう」
「今後も国防に彼の魔法が必要という考えは分かった。ならば猶更、彼の身柄をアメリカに引き渡せない」
勝成の一般論に対し、貢は納得したような言葉を返した。だが、それがどこかで引っ掛かる様な感覚を勝成は感じた後、貢が言葉を発する。
「ならば彼を、四葉の奥深くで保護すべきではないか？　急死したことにすれば、ＵＳＮＡも諦めるだろう」
「……（正気で仰っているのか？）」
勝成は貢の口から出た言葉に顔を顰めた。達也を保護――――いや、この場合は〝監禁〟に等しい状態に置くということを意味する。この時点で、勝成は貢が達也を恐れているのだと読み取れてしまった。
これはもう、荒療治しかないだろうと思っていたところで扉の外からウェイターの声が掛かり、会話はいったん中断された。冷酒のグラ

スが並んでウェイターが退室したのを見計らって、勝成は貢を見据えるように視線を向けた。
「貢さん。仮にそうしたとして、神楽坂殿に一体何と説明する気なのですか？　彼は達也君の最大の理解者にして親友とも呼べる人間。その彼に対して黒羽家――――いえ、分家当主の方々は何を対価にして納得してもらうつもりですか？」
　そんな要求など悠元が到底呑むはずなどない、と勝成は慶春会での一幕で体感していた。そして、先日防衛省の庁舎で出くわした事を考えると、彼は国防軍に多大な影響力を有している。いわば中核に位置するであろう悠元からすれば、国防の一端を担えるであろう達也を除外するなど〝論外〟でしかない。
　勝成の問いかけに対し、貢は完全に黙ってしまった。だが、勝成はそれで止まることなく話を続ける。
「先日、父に達也君へ向ける過剰な敵意の真意を尋ねました。中々白状しませんでしたが、最終的には折れて話してもらいました。それを知った上でハッキリと述べさせていただきます。貴方がたは神楽坂殿から勘気を一度被った。二度目を受けるようなことがあれば、今度こそ貴方方の首が物理的に飛ぶでしょう」
「いや、流石の神楽坂殿でもそこまでは」
「しないと断言できますか？」
　貢は辛うじて反論したが、勝成の物言いに対して反論する言葉を失った。何せ、貢は慶春会以前に悠元の圧力を直に感じていた。あの時は〝脅し〟の範疇で済むものだったが、慶春会で受けたそれはＦＬＴの応接室で受けたものとは比にならなかった。
　まるで、首元に鋭い刃物を軽く押し付けられているにも等しい感覚……その時は本家当主の真夜の取り成しで命を助けられたが、今度同じことがあれば助けて貰える保障など無い。
「彼がいれば、達也君を独裁者にすることなどない。貴方方がやろうとしていることは、四葉の未来すら潰しかねない所業……この場に父ではなく私が来た。この行為で意味を悟って頂きたい」
　そう言って勝成は席を立つと、座ったままの貢を見ることなく、琴

鳴が食事の支度をしているマンションへの帰路に就いた。

◇　◇　◇

勝成と貢が喧嘩別れの形となった頃、南アメリカ連邦共和国軍所属の軍人ことハンス・エルンストは、民間の国際線でワシントン行きの飛行機の中にいた。大統領からは専用機を出しても構わないと言っていたが、その直後に日本大使館が持参した手紙によって当初の予定を変更せざるを得なくなった。

とはいえ、ハンスがワシントンに行く予定に変わりはなく、元々こういう動きには慣れていたためか、大人しく民間機で移動することとなった。とはいえ、大統領の意向でファーストクラスに搭乗しているわけだが。

すると、ハンスの脳裏にもう一人の〝ハンス〟が話しかけてきた。

『エルンスト。私は軍人故にあまり政治のことに詳しくはないが、連中は破滅を望んでいるのか？』

（……ルーデルもそう思ってしまうか）

『当然だ。私の頃は魔法を軍事に使うことなどなかったが』

尤も、ルーデルに魔法師が対抗したところで返り討ちに遭いそうな気がしないでもない……とハンスが端末に目を落としていると、妙なメールを受信したことに気付く。宛先人は不明だが、セキュリティソフトによるウイルスチェックでは異常なし。

ハンスが端末を操作すると、そこには何故か〝ＵＳＮＡが日本のＵＳＮＡ大使館宛に送られたエドワード・クラークの訪日予定と司波達也氏との会談要請〟が書かれたメールであった。

（ルーデル、どう見る？　これを俺宛に送ったものとは思えんが……）

『ああ、それは私の仕業だ。最近情報を知る方法を覚えたものでね。ちょっとした魔法みたいなものだ』

（……うん、お前ならいつかやりそうな気がしただけに、驚く気も失せたわ）

内容を見るに、エドワード・クラークは司波達也なる人物を［トーラス・シルバー］として知り得ていた、という証左に繋がる内容。しかも、日程を見る限りでは今週末――それも、ディアッカ・ブレス

ティーロ大統領の訪日日程と綺麗に重複する。
　ルーデルがやらかした人外の所業に対し、ハンスは諦めたように思考の海へと意識を傾けていく。
（これで、エドワード・クラークが執拗に［トーラス・シルバー］――――彼を求める理由としてディオーネー計画を立てた、という根拠が成り立つ。そうなると、やはり彼は『ハロウィン』を成した戦略級魔法師の公算が高くなる……いや、ダメだろ）
　ハンスが出した結論に対して吐き捨てるように出た答え。その意味をルーデルは敢えて問うことはせず、ハンスの言葉を待った。
（訪日した際に彼が四葉家の次期当主ということは事実だと知った。その彼が戦略級魔法師であり、［トーラス・シルバー］でもある。夢物語に聞こえなくはないが、クラーク博士が彼の排除を目論んで計画を立てたのだとすれば……もうひと波乱起きるな）
『その根拠はあるのか、エルンスト？』
（ある。何せ、ここで四葉家の脅威を減らせるとなれば、ここで敏感に反応するのは間違いなくＵＳＮＡと新ソ連の軍部だ。仮にあの魔法が『ハロウィン』の時に最大出力で放たれていなかった場合、最悪国土の半分が消えてもおかしくはない）
　『灼熱と極光のハロウィン』で使われた二発の戦略級魔法。それを日本が保持している時点で脅威と見做す理由も分からなくはない。だが、日本が複数の戦略級魔法を自力で保有するに至ったとなれば、ＵＳＮＡからすれば新ソ連のヘイトを分散させることにも繋がり、本土への攻撃も抑えられることになる筈だ。
（目先の利益ばかりで、未来の利益を全く考慮していない。連中は一世紀半前の栄光にでも縋りたいとしか思えん）
『イワンもイワンだが、メリケンやジョンブルたちも変わらなかったということか』
（単にそれだけなら、まだ気は楽なんだがな）
　直接日本ではなくワシントンに出向く――――ハンスの手荷物の中には厳重に保管された封筒があり、それをワシントンへ送り届ける任を帯びている。エドワード・クラークの件を考えれば、態々ＳＳＡが

ＵＳＮＡに対して配慮する必要もない。だが、そうしなければならない理由があると鑑み、ハンスはその任を受けることとした。
　そして数時間のフライトの後、ニューヨークのジョン・Ｆ・ケネディ国際空港へ到着。搭乗員の案内でハンスは本来関係者以外立ち入れない場所から降りると、そこには一台のリムジンと数名のＳＰが立っていた。
　更には、ハンスが日本で出会ったＵＳＮＡの要人――――ワイアット・カーティス上院議員がそこにいた。ここは既にＵＳＮＡであるため、ハンスは英語で言葉を交わす。
「ハンス・エルンスト君、だったかな。日本の西果新島以来だね」
「覚えていてくださり光栄に存じます、カーティス議員殿」
「これはご丁寧に。さて、早速乗ってくれたまえ」
　ワイアットに導かれる形でリムジンの後部座席に乗り、対面する形でワイアットが座る。
　ＵＳＮＡきっての有力人物という話はディアッカから聞き及んでいたが、よもや魔法師である自分とこうやって同乗することに不安はないのかと訝しんでいると、ワイアットが話しかけてきた。
「不思議と思うかね？　政治家の私が魔法師である君と同乗することに対して」
「これは失礼しました。顔に出ていましたでしょうか？」
「なに、勘みたいなものだよ。にしても、見るからにまだ２０歳前後というのに、なかなか気苦労を背負っているようにも見受けられるが」
「もう諦めたようなものではございますが、お気遣いに対しては感謝いたします」
　ワイアットから労いにも近い言葉を受け取り、ハンスは静かに謝罪と感謝の言葉を口にする。そうして走るリムジンの行き先はＵＳＮＡの中枢の一つ――――大統領府（ホワイトハウス）であった。
　入念なボディチェックを受けた後、大統領執務室に招かれたハンスを待っていたのは、ＵＳＮＡの国家元首であるジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領。そして、部屋の片隅には即席で用意されたと思しき巨大な丸太が設置されており、あちこちに窪みが出来ていた。

一体何のためのものなのだとハンスが訝しんでいると、ジョーリッジがハンスに話しかけてきたため、ハンスは意識をジョーリッジに向ける。
「先日はうちの馬鹿な役人が迷惑を掛けた。改めて、ＵＳＮＡ大統領ジョーリッジ・Ｄ・トランプだ。君の噂はドイツの首相から聞いている」
「それは……南アメリカ連邦共和国軍、ハンス・エルンスト准将であります。この度、我が国の大統領閣下より任を帯びてまいりました」
「うむ。君の宿泊先は既に手配しているから安心してくれ……君としては、部屋に不釣り合いなアレが気になるのかな？」
「ええ、まあ……」
大統領執務室という豪勢な装飾品や調度品が並ぶ中、明らかに自然を取り入れようとしたとしても浮く代物でしかない丸太の存在。ハンスが躊躇いがちに尋ねると、ジョーリッジは間髪入れずにまだ無事な部分の木皮に向かって拳を振るった。
激しい衝撃と音が鳴り響くが、それで丸太が倒れることはない。だが、振るった部分の拳が離れると、握った拳の形がハッキリと見えるぐらいに凹んでいた。非魔法師らしからぬ所業を見たハンスに対し、ジョーリッジは笑顔を浮かべていた。
「これは私のストレス解消法でね。良かったら君もやってみるかい？」
「いえ、遠慮させていただきます。私がやったら被害が出かねませんので」
「そうか。それならば仕方がないな」
『ふむ、面白い御仁だな。メリケンの大統領にしておくには勿体ないほどに』
（……ホント、ルーデルと関わってから世界の非常識を目の当たりにしてるみたいだ）
そうして始まったジョーリッジとの会談で、ハンスは親書をジョーリッジに手渡す。その存在がどう生きるのか……その時のハンスには与り知らぬことであった。

意味合いを変える話し合い

『第一賢人』――――レイモンド・クラークによる［トーラス・シルバー］の正体の暴露。だが、悠元が仕掛けた策により、メディアの関心は次第に薄れた。魔法に携わる者ならば達也がどういった存在なのかも理解しているし、仮に『第一賢人』の証言が真実だとしても、自ら『触れてはならない者たち』の逆鱗に触れたくなどないのが魔法界に関わる人たちの共通認識。

大体、実用レベルと定められる魔法師が人口に占める割合は、成人後の年齢別人口比率で約1万分の1。仮にそのレベルを満たさなくとも、政財界や治安維持機構に魔法師と関わりを持つ人間もいることから、99．99パーセントの人間が全く関与しないということにはならない。

反魔法主義という存在や間接的に魔法の恩恵を受けている人間がいても、大多数の人間は魔法に関心を寄せるという事態には至らない。

魔法は平穏な生活を送る上で必須なファクターではない。だからこそ、大多数の民衆は無関心を貫くことが出来る。仮に罪かどうか定かではない魔法師が迫害されようとも、無関心でいることに罪の意識を覚えない。

［トーラス・シルバー］を名乗る一人の少年が望まぬ未来を押し付けようとされていても、世間から見れば三面記事の一つでしかないレベル。そんな情勢の中、百家・五十嵐家の当主夫人である五十嵐亜澄は、映像電話で相手を気遣うような仕草を見せていた。

通話の相手は日本魔法協会会長・十三束翡翠であった。

「――――それはまた大変ですね。ですが、宜しいのですか？」

『どうせいずれは明るみになることですから……』

明らかにヒステリックと表現するのが正しいぐらいに、亜澄の視点でも翡翠の表情は参っているように見えていた。

亜澄が夕食を終えて3Hに後片付けの指示を出すと、一息入れようとしたところで息子の鷹輔から『十三束会長から相談したいことがあ

る、って』という伝言を受け、亜澄はその通話に出ることとした。
本来なら百家ゆえにそこまで詳しい情報は流れてこないが、娘が十師族・六塚家と婚約している関係だけでなく、翡翠の前任者として魔法協会の関係者ともつながりがあり、ディオーネー計画によって魔法協会が忙しいとも聞き及んでいる。
そして、困った様子の翡翠がせめてもの助けと言わんばかりに説明されたことについて、亜澄はまず聞きに徹することで翡翠の留飲を下げることとした。
「それで、ご相談というのは？」
『はい。本当に申し訳ないのですが、確か六塚殿のご子息が司波達也さんと仲が良いという話を聞きまして。彼にエドワード・クラークとの面会をお願いしたいと』
「……それならば、十三束会長の息子さんに頼むのが早いのでは？彼も同じクラスの筈ですが」
『それは……』
達也への繋ぎを考えるならば、五十嵐家と六塚家を経由するよりも十三束家から頼んだ方が早い。亜澄の正論は尤もだが、翡翠にはそれが出来ない理由を正直に吐露し始める。
『実は、司波達也さんの所在がハッキリとしないどころか、学校にも来ていないのです。息子に確認したところ、間違いないと』
「そうでしたか……」
翡翠の説明を聞いて、亜澄は考え込む。娘の話を聞く限りでは、義理の息子になる六塚燈也は司波達也と仲が良い。つまるところ、連絡先を知っていてもおかしくはない。あの『アンタッチャブル』の勘気に触れたくはないが、翡翠の状況を見ていると同じ立場を経験した人間として助ける形に傾いた。
「わかりました。申し入れはしてみますが、申し出が断られる可能性があることは留意して頂きたいです」
『本当ですか!?　いえ、働きかけをしていただけるだけでも助かります』
亜澄は前置きを置いた上で翡翠に提案すると、モニターに映る彼女

は〝申し訳ない〟と言いたげに深く頭を下げた。そうして通話を終えると、亜澄は一つ深い溜息を吐いた。
「私の時は三矢悠元さんの件で、彼女の場合は司波達也さんの件……本当に、大変よね」
ひとつぼやいた上で、亜澄は端末を操作して電話を掛けたのであった。

◇　◇　◇

燈也は六塚家所有の邸宅にいて、自室でのんびり読書に耽っていた。電子端末による読書が便利でも、中には昔ながらの紙媒体で実際に手を取って読む需要も少なくなく、燈也は紙に書かれた字を読みたいという理由で選んでいる。
すると、着信音が鳴って燈也が本を傍に置き、端末を操作すると壁掛け式のモニターに姉である六塚温子が映った。
『こんばんは、燈也。婚約者との営みだったら後でもいいのだけれど』
「あのですね……そこまで盛りのついた獣じゃないのですから」
温子の冗談にやや呆れつつも燈也が本題を促すと、温子は『ごめんなさいね』と断った上で話を切り出した。最近の情勢で自分に連絡が来るとなると、大方友人絡みではないかという燈也の予測は見事に的中する形となった。
「達也に土曜の都合を聞いてほしい、ですか？」
『ええ。実はまだ内密の話なのだけれど、ディオーネー計画の提唱者であるエドワード・クラークが来日すると十三束会長から聞いてね』
「成程……（大方、姉さんも話を聞いたけど、それが実現するかどうかは別問題として話を受けたんだろうなあ）」
燈也は先日、友人たちと一緒に達也を襲撃しようとした国防軍情報部の部隊を撃退している。その後で達也から少し事情を聞いたが、ディオーネー計画に参加する意思は無いというのが明らかだった。
その上で、自分の話を持ち込んできたとしても、肝心の達也がどう反応するかなど分からない。最悪会談の申し出を蹴る可能性も残っている。一応、このことは温子にも報告しており、その時の反応は『六塚家としても四葉家の助けになったことは良かったでしょう』と好意

的に見ていた。
「姉さんはどう考えているのですか？　一歩違えば四葉家への利敵行為になってしまいますが」
『別に達也君が断ったところで、こちらが徒労に終わるだけという結果にならないのは確かです。既に師族会議で達也君の意思を確認していますし、これは寧ろ達也君の明確な意思を当事者にぶつける意味でも良いと判断したまでのことです』
「……確かに、僕も達也も公的には高校生の身分ですから、向こうから話に来てくれるならありがたい、と考えているのですね？」
『ええ、その通りよ。にしても、燈也は達也君を「トーラス・シルバー」だと思っているの？』
　既に明確な参加拒否を確認している達也は、四葉家の係累であろうとも公の立場は魔法科高校の高校生でしかない。こちらからアメリカに出向くリスクを鑑みれば、態々計画の提唱者が日本に来てくれるのなら、日本魔法協会の申し出を断る必要もない。
　会談をセッティングしてくれた魔法協会の面子を潰すことにはなるが、達也の考えているプランは日本に多大な利益を齎すもの。この国の未来と人類の未来という二つの重みは違うが、今を生きる人々が自身に対する利益という観点でどちらを選ぶか……既に分かり切ったも同然の話だ。
「あれだけのことをしたら、仮に『第一賢人』の言い分が逆に納得出来る気もします。ただ、彼の人生は彼が決めるものであり、大人たちが言い出す領分ではありません。エドワード・クラークなる人物は達也を支配したいとでも思っているのでしょうか、と思いたくなりますよ」
『……随分辛辣ね、燈也』
「まあ、僕の生まれが生まれだけにですけど。ともかく、達也に聞いてみますがあまり期待はしないでください」
『ええ』
　温子との通話を終えた後、燈也はすぐさまメールで達也に一連の事情を説明した。この申し出を断っても構わないという文言を付け加

えてのものだったが、数分後に達也からの返信メールで『その申し出を受けると伝えてくれるか？』という概要の文章を受け取り、燈也はそのまま温子宛にメールを転送した。

◇　◇　◇

ホクザングループの総帥、北山潮（きたやまうしお）（ビジネスネーム：北方潮（きたかたうしお））は政財界に強い影響力を持つ日本でも指折りの企業グループの一つ。政府の会合などに自ら出向くことは少ないが、そんな場合でも事前に予定を聞かれて、彼の都合に日程を合わせるケースが圧倒的に多い。

五月最後の火曜日、潮は都内の高級料亭にいた。本当ならば予定を全てキャンセルしてでも出向かなければならない相手だが、その相手が『商談や予定に都合がつく時間で構わない』と丁重に述べてくれたため、予定を整理した上で会談に臨むこととなった。

元老院四大老（げんろういんしだいろう）――俗に良く言われる〝黒幕（フィクサー）〟とは異なり、その名を知ってはいても実態を知る者はごく一部に限られる実力者たちの名称。

その一人は東道青波（とうどうあおば）だと知っているが、その当人から『今宵、新たな四大老の一人が出向く。くれぐれも礼を失せぬことだ』と釘を刺す様な連絡を受けた。かの人物が別の四大老を紹介するなど、これまで潮自身も経験したことが無ければ、財界の知り合い伝手でも聞いたことがない。

新たな四大老ということで思わず緊張する潮だったが、仲居が恭しく襖を開けると、そこにはスーツに身を纏った一人の少年が立っていた。だが、潮は気軽に声を掛けたりすることなど許されない、と彼の纏う雰囲気で察した上で、深く頭を下げた。

「遅れてしまって申し訳ないな、北山殿」

「いえ、お気遣いを頂けるだけでも感謝しております。神楽坂殿」

潮からすれば、娘の婚約者にして護人・神楽坂家当主。そして、青波の述べていた〝新たな四大老の一人〟ということは、彼が言わずとも既に肌で感じ取っていた。仲居が静かに下がっていったところで、新たな四大老――神楽坂悠元は静かに潮の対面の席に座った。

「さて、東道青波より簡潔な説明を受けていることと思うが、私が新た

な四大老の一人――――護人・神楽坂家当主こと神楽坂悠元だ。北山殿には家族ぐるみでお世話になっているが、くれぐれも線引きはしていただきたい。宜しいか？」
「それは無論であります」
「ならば……四大老としての挨拶もそこそこに、ここからは年齢に沿った話し方をさせてもらう。改めて、お久しぶりです潮さん」
「久しぶりだね、悠元君。娘が迷惑を掛けていないか心配なところもあるけど」
　四大老としての挨拶を終えた所で、悠元が年齢に沿った話し方をすると潮もそれに応じる形で世間話に花を咲かせた。これまで東道青波との関わりから他の四大老の印象は厳しめだったが、これは好感が持てると感じていた。
「迷惑どころか、むしろ世話になりっぱなしです……情操教育がどうなっていたのかは疑問しかありませんが」
「その辺は妻の領分だったからね……どうか、娘のことを末永く宜しく頼むよ」
　とはいえ、相手はこの国の裏舞台を統べる立場の人間。その権威を軽視した顛末を潮は知っているだけに、いくら娘を通して外戚となろうとも礼を失してはならない、と己の心の中に言い聞かせるような素振りを見せる。
「年齢が年齢なので私は酒を遠慮させていただきますが、潮さんは遠慮せずにどうぞ」
「いや、君相手に失礼なことは出来ないからね。今日は茶でも頼むこととしよう」
　この店は使用人に三猿――――「見ざる」「聞かざる」「言わざる」――――を叩き込んでいるが、いきなり本題に入らなかったのは情報漏洩を危惧してのこと。それに、婚約者の親という立場の潮と仲良くしておきたいという目論見もあったりする。
　悠元が切り出したのは、食膳が出尽くした後でのことだった。
「さて、今日出向いたのは潮さんと親睦を深めたかったのもありますが、明日正式に設立する会社が興す事業の出資者となって頂きたく、

お声を掛けさせていただきました」
「事前に娘から話のあった［恒星炉］関連事業ですな？」
「ええ。会社名はトライローズ・エレクトロニクス。既に事業化している水素ガス関連事業のみならず、［恒星炉］による核融合発電事業やそれに伴う各種事業を集約した合弁会社です」
［恒星炉］に関する４つのスキームが『ＥＳＣＡＰＥＳ』とするなら、その４つのスキームを利用して多方面の事業を展開するのが『ＳＴＥＰ』の基本骨子。それを実現させるための社会的な手段として合弁会社の設立に踏み切った。
「会社自体はＦＬＴと神坂グループ、白河グループとプリズム・マーセナリー（三矢家が運営している小型兵器を取り扱う株式会社）の四者による株式持ち合わせとなりますが、潮さんには財界からの出資を取りまとめる〝窓口〟を担っていただきたい。必要ならば傘下の会社を設立しても構いませんし、その手伝いも致しましょう」
「成程、それは大役ですな。お引き受けしましょう」
潮は悠元から望まれた役目をすんなり引き受けた。これに対して、悠元はあっさりと決断したことに少し疑問を抱いたため、潮に問いかける。
「潮さん、よろしかったのですか？　いくら自分が四大老の一人となったからといっても、断る権利ぐらいはあると思われますが」
「魔法師の君なら知っているだろうが、妻は長いこと『兵器』として働いてきた。今はその役目を退いているが、雫はまだしも航が戦争に駆り出されるのを見たくはない。父親としての我儘みたいなものだがね」
苦笑する潮に対し、悠元はそれを否定するような素振りを見せなかった。原作ならばまだしも、この世界の北山航は魔法の資質を有している。彼がどういった形でそれを行使するのかは分からないが、少なくとも雫が『神将会』に所属している以上、家族に迷惑を掛けるような行動は慎むだろう。
「身内が絡むとなれば、我儘ぐらいの一つ言っても罰は当たらないと思います。では、潮さんから見たディオーネー計画の印象は如何です

か？」
「あれは『兵器』以前に魔法師を『奴隷』とするようなもの、としか言えなかった。アメリカの陰謀なのか、エドワード・クラーク個人の陰謀なのかはさておき、あれが実行されれば達也君一人の犠牲で済む話ではなくなる。無論、君も巻き込まれることになるだろう」
「ええ。ですから、こういった話をしているわけですので」
潮の出した結論は、悠元や達也の出した結論とほぼ同じものであった。夢物語のヴェールを剥がせば、杜撰極まりない魔法師追放計画という現実を、殆どの大衆は気付いていない。そして、それが遠い未来で人類の滅亡に繋がるものだという可能性にも。
「惑星一つのテラフォーミングは、少なく見積もっても億単位の動員が必須となる。そうなると、魔法師の殆どが地球から追い出される可能性も出てくる。それが煮詰まって遠い未来に魔法師が反旗を翻して、少数の魔法師に大多数の民衆が支配されるという未来も生まれてしまう。無論、可能性の一つではありますが、ディオーネー計画は悪夢を生み出しかねない危険なもの」
誰だって平穏な生活を望みたい。だが、そんな未来を作った場合、エドワード・クラークは〝史上最悪の犯罪者〟という烙印を魔法師から押されるだけでなく、それを大義名分として魔法師が地球を支配する未来だって起こり得ないとも限らない。
「その意味で、軍事一辺倒の魔法師政策に一石を投じなければならない。魔法師が民生産業に割かれるリスクは生じるが、それを補うために魔法師教育分野も改革をした。それが芽吹き始めるのは、そう遅くはない時期になるかと」
［恒星炉］関連事業を進めるにあたって最大の難点となる魔法師の確保だが、それを解消するために魔法科高校以外にも国立魔法医療大学と付属校の〝受け皿〟、そして新たな教育理論に基づいた方針。加えて、魔法師としての心を育成するべく、己を律するための〝武道〟も取り入れることが決まっている。
「君はその若さでそこまで考えているとはね……私もまだまだ学ぶことが多いものだと感心を覚えるよ」

「こういう立場になったらこそ、とも言えますが。ちなみに、日本政府の現政権と話は既につけておりますので、潮さんは財界方面に集中して頂くだけで十分です」
「分かりました。改めて、宜しくお願い致します」
悠元が『日本政府と話を既につけている』という台詞を聞き、潮は姿勢を改める形で深く頭を下げた。

トーラス・シルバーの解散

――２０９７年５月２９日、水曜日。

フォア・リーブス・テクノロジー本社には、多くの報道陣や記者が詰めかけていた。目的は勿論［トーラス・シルバー］に関する発表であり、１０時からの発表にもかかわらず記者やカメラマンの大群が押し寄せて業務妨害はおろか交通障害にもなりかねない状態を想定して、異例の朝７時から記者会見の会場を開けていた。

普段は魔法産業に対して興味を示さない伝統的大手新聞社も、取材チームを組織して前列に陣取っている。彼らの偉そうな態度には同業者も眉を顰めるが、第三者からすればメディアそのものが〝同じ穴の狢〟としか見えなかったことだろう。

彼らの無秩序なお喋りも、ＦＬＴ広報担当の従業員が登壇したことで一気にトーンダウンしていく。係員が照明やマイクのチェックを行っている様子を固唾を呑んで見守っている。

そして、デジタル時計が１０時を示すと、会場前方の扉が開いて達也と牛山の二人が壇上に入っていく。

一斉にシャッターが切られる中、達也は一切表情を崩すことなくマイクスタンドの前に立つ。そして、達也の背後にある大型スクリーンには『魔法恒星炉エネルギーラインプロジェクト』という文字が表示されたことにメディアからも訝しむような声が上がる。

まるで新規事業の発表会ではないかという困惑が会場内に広がる中、進行役の従業員によって達也と牛山が挨拶をする。

「トーラス・シルバーのソフトウェア開発を担当している司波達也です」

「トーラス・シルバーチームの統括並びにＣＡＤ作製を担当している牛山欣治です」

その挨拶でメディアは更に混乱する。何せ、スーツ姿の少年（見た目だけならば成年と評しても不思議ではないが）だけではなく、工場のユニフォームと思しきジャンパー姿の男性まで［トーラス・シルバー］を名乗ったのだ。

一人だけだと信じ切っていたメディア側の落ち度だが、そんな混乱を無視するかのように牛山が話し始める。
「えーっ、先程の挨拶通り［トーラス・シルバー］という名は個人の研究者の名ではございません。そして、この他にもハードウェア開発担当を担っている上条洸人の合わせて三名によるチームでございます。先程出願者個人情報を公開に切り替えましたので、特許庁よりご確認いただけると思います」
「……何故そんな、人々を騙す様なことをしたのですか？」
牛山の説明に対して一人の女性記者が質問を投げかける。明らかに喧嘩腰とも言えるような無神経の問いかけに対し、答えたのは達也だった。
「騙していたと言われるのは遺憾なものですが、私と上条が未成年故に個人情報を非公開にしていたまでのことです。個人だけでなくチームでの特許申請や情報非公開は昨今において珍しい事ではありません」
「し、しかし、トーラス・シルバーはＣＡＤのソフトウェアとハードウェアの両面において、わずか１年で１０年分進歩させた天才技術者と評価されていて、御社もそれを否定しなかったではありませんか」
「以前、我が社よりメディア各社にお送りした［トーラス・シルバー］に関する取材自粛のお願いをまともに取り合わなかった側がそれを仰るというのですか。これ以上難癖をつけるようでしたら、係員によって退出して頂くことになります」
それに、先日の『第一賢人』の件でメディアはＦＬＴに対して大きな負い目を負っている。政府発表でテロリスト同然ともなった人物の声明を何の裏取りもせずに、ただ［トーラス・シルバー］に関するスクープによる話題作りが裏目と出た。
達也に食いかかろうとした記者だが、周囲からの冷たい目線を感じてそれ以上の追及を取り止めた。
「では、先の『第一賢人』を名乗る謎の人物が語ったことは半分事実なのですね？」
「先程牛山からも申し上げましたが、私と牛山、そして本日都合により

出席できなかった上条の三名によるチームです。よって、その認識は間違いであると述べさせていただきます」
別の記者からの問いかけに対して、こちらも達也が答える。
『第一賢人』が述べたことは〝トーラス・シルバー＝司波達也〟というもの。だが、達也の述べたことは〝トーラス・シルバー＝司波達也、牛山欣治、上条洸人〟。
数学的に見れば同一に見えるが、仮にトーラス・シルバーが一人ならば、ソフトウェアだけでなくハードウェアやＣＡＤ作製まですべて一人で担っている、という認識になってしまう。そんな自覚など達也にはないし、そこまで万能な人間もないと自覚している達也からすれば『そんな評価など過分過ぎて必要ない』と切り捨てたくなる。
「とはいえ、誤解を招くような対応をしてきたのはこちらの落ち度でもあります。よって、この場で［トーラス・シルバー］の解散を宣言いたします」
「解散ということは、ＣＡＤ開発を止めるということですか？　御社がこれまで販売されたＣＡＤについての対応もお尋ねします」
達也の宣言に質問を問いかけたのは、魔法産業に詳しい報道記者。［トーラス・シルバー］によって発表・販売されたＣＡＤはかなりの数に上り、そのサポート面について専門分野の記者らしい質問が投げかけられた。
「いえ、これまで販売したＣＡＤのサポートは勿論、今後のＣＡＤ開発は牛山と上条に引き継ぐ形となり、私は別の事業に移ることとなります。では、ここから説明役に登壇して頂きます」
達也の言葉に訝しむメディアの面々だが、ここで会場前方の扉が開いてスーツ姿の少年が姿を見せた。その登場にざわめき、慌てふためくようにシャッターが切られる。そして、少年は達也に近付いて握手を交わすと、達也が退く形で空いたマイクの前に立つ。
「お初にお目に掛かります。私は株式会社トライローズ・エレクトロニクスの理事長を務める神楽坂悠元と申します。ここからはそちらにいらっしゃる司波が担当される事業――魔法核融合炉、通称［恒星炉］を主体とした新事業についてのご説明をさせていただきます」

少年――――悠元の登場に騒めくメディア。何せ、九校戦ではあの[クリムゾン・プリンス]一条将輝を完膚なきまでに破った著名人の一人。そして、かの英雄の一人である神楽坂千姫と同じ名字を持つ人物。

その彼が聞き慣れない会社名の理事長を名乗り、更には[トーラス・シルバー]の片割れが参加する事業の説明をするというのだから、騒めかない方が無理な話だ。

「魔法核融合炉――――[恒星炉]による事業ですが、現在既に発電用・工業用の水素ガス供給を開始しており、一部はインド・ペルシア連邦やアラブ同盟向けに輸出されております。日本国内への水素ガス発電は伊豆・相模方面での実証実験の後、都心から順次にカバーしていく計画となっております」

核融合による発電、その発電によって生成される水素ガスの利用、海水の利用に伴う浄化による海水中の有害物質の抽出。[恒星炉]による事業の内容を係員による簡単な動画の放映も交えながら行われた。

流石に報道陣の中には悠元の説明を遮る様な愚か者はおらず、一通りの説明に区切りがついたところで工業系業界紙の記者が問いかける。

「核融合発電による直接送電は将来的な計画の一つとされていますが、具体的な段取りは決まっていらっしゃるのでしょうか？」

「既に実現へ向けた工事は進んでおりますが、[恒星炉]は既存のエネルギー供給システムを生かしつつ災害に強いライフラインの一環として位置付けております。ですので、早くとも数年以内に目途がつく形となります」

「核融合炉の稼働には、相当数の魔法師が必要になると思われますが」

今度は魔法産業関連の記者からの質問だった。

「仰る通りです。プラントの立地上の観点から、事業に参加される魔法師の方には離島もしくは海上基地への移住をお願いして頂くことになります。既に事業化されている分野についても、魔法師当人の了解を得た上で離島への移住を実施しております」

原作ならば反魔法主義のメディアが噛みついただろうが、昨春の一件はおろか『第一賢人』の件で失点を稼いでしまっているし、そういったメディアは意図的にお断りしている。なので、会場に来ている報道陣は魔法に対して好意的ないし中立、あるいはあまり関心を示していなかったメディアとなる。

イエスマンで固めたことで『報道の自由に対する横暴だ！』と騒ぎ立てるだろうが、大体先に失点を犯したのはメディアの側であり、悠元が行ったことは法の範疇で片が付く話。

「唐突な質問ですが、ディオーネー計画へ協力される可能性はあるのでしょうか？」

ここで質問を投げかけてきたのは、魔法産業系雑誌の記者。きちんと断りを入れた上で問いかけたのは、［トーラス・シルバー］がいなくなって新事業の話一辺倒になっているため、肝心のディオーネー計画への対応をどうするのかという疑問が浮かぶのは至極当然だろう。

悠元は達也に視線を向けると、それで察した達也が頷いたので悠元が問いに答える。

「では、その質問に対して［トーラス・シルバー］のハードウェア設計担当の上条洸人こと私がお答えします。既にプロジェクトが進行しており、ここにいる三名ともに新事業の中心メンバーとして参加しております。よって、素晴らしい大義名分が掲げられているとしても、この国を強き国にするための大事な事業を放り出すという中途半端な事など出来ません」

「……今述べられたことは事実ですか？　あなたも［トーラス・シルバー］であったと？」

躊躇いがちに別の記者が尋ねたので、それに対して悠元はハッキリと答える。

「ええ、そうです。それに、今年の４月中旬に宗谷海峡で起きた小規模の衝突を起こした原因が新ソ連側にある以上、かの国が積極的に平和を唱えるという名分で参加しているディオーネー計画そのものにも、私は大変疑問を抱いております」

「では、今後ＵＳＮＡ側から参加の打診が来たとしても、お断りする方

針だという認識で宜しいのでしょうか？」
「その認識で構いません。繰り返しになりますが、既に私だけでなく、ここにいる司波と牛山もプロジェクトの中核メンバーとして参加しております。この国の強き将来を作る為のプロジェクトに参加しており、既に一部が事業化している状況で他の大型プロジェクトに関与できる余力などない、と申し上げさせていただきます」
マンションでの会話では［トーラス・シルバー］を明かさないという方針で話をしていたが、ここに来ての方針転換に疑問を抱く人間がいると思う。別に悠元が乱心したわけでもやけっぱちになったわけでもない。元々、悠元が［トーラス・シルバー］であるという事実は、どの道公表する予定だったものを前倒ししたに過ぎない。
では、何故ここでその事実を公表したのか。理由は簡単で、『ここで発表しても問題なくなった算段が付いた』からに他ならない。もっと端的に言えば『トーラス・シルバーそのものが解散した以上、どうあってもディオーネー計画に参加する前提条件が消滅した』というもの。
それに、この世界の［恒星炉］は既に一部が事業化している為、本格的な事業としての稼働として元々携わっている面々が抜けるようなことなど出来ない。勿論、それに見合った報酬や対価は達也や牛山を始めとした関係者に支払っている。
達也の為人を知らないからこそ、大人たちは名誉や栄光という若者なら飛び付きそうなものを選んで達也に押し付けようとした。実際的に金銭面や生活面での保障が十分にされていたとは思えないし、その用意があるとも思えなかった。
そもそもの話、追い出したい相手の環境整備なんてこれっぽっちも考えられていなかっただろうと思われるが、その側面が達也の『ＥＳＣＡＰＥＳ』によって表面化した。名誉などの〝社会的な付加価値〟を考慮しないで見ることのできる者にとっては、魔法師にとって悪夢を生み出す事業でしかないと一蹴された。
ＵＳＮＡと新ソ連の接近を脅威と見たり、魔法の平和利用を狭めるような動きを警戒したりと様々な要因が重なる形だが、諸外国の動きが新ソ連の暴発を招く結果となった。

とどのつまり、『達也が戦略級魔法師である』という一点だけで立てられた計画なだけに、今と直近の未来だけしか見えていないお粗末さ。その先に待ち受けるであろう最悪の可能性を無視した悪魔の所業。

それでもＵＳＮＡがエドワード・クラークを迂闊に切れないのは、彼が［エシェロンⅢ］の開発者の一人という事実が重くのしかかってくる。それに、ディオーネー計画自体も進んでしまったがために今更国際魔法協会を止めるための交渉材料が存在しない、という事実もＵＳＮＡがエドワード・クラークを即座に切れない理由に繋がっている。

加えて、『第一賢人』ひいては『七賢人』そのものがアメリカ国内で完結出来ていた存在だったのに、レイモンド・クラークの暴露で世界に知らしめてしまった。顧傑の時のようにＵＳＮＡが処断すればいいのに、その正体を知る人間はごく僅かしかいない。それこそ、政府高官は［フリズスキャルヴ］の存在を把握しているが、そのオペレーターを把握しきれていない。

原作と違って［フリズスキャルヴ］がヴァージニア・バランス大佐に渡ったが、エドワードは情報の漏洩を危惧してレイモンド以外のオペレーターアカウントを停止した。とはいえ、バランスに渡した端末はまだ生きていて、大統領にとっては有益な情報源なのは間違いないが、細心の注意を払った上で運用しているとみられる。

セリアの持っていた端末も［エシェロンⅢ］を覗ける為に動かすことは可能だが、本人曰く『あんな曰く付きの端末を今すぐにでも壊したい』とのことで、使用するにしても世界のファッション分野やリーナ関連に限定して使用している為、ボロが出る可能性は低いとのこと。

「トライローズ・エレクトロニクスの情報につきましては、先程公式のウェブサイトを開設いたしました。更に、本日午後に政府の発表で先程お話したプロジェクトについての発表がありますので、詳しい内容につきましては其方へお問い合わせをお願いいたします」

そして、締めくくりに放たれた悠元の言葉で、メディア陣が更に騒

めく。日本政府の発表をいち早く掴みたいという思いが走ったのか、政府向けの取材を絶好の場所で撮りたいという思いから、係員による閉幕の言葉で堰を切ったかのようにメディア陣が足早に会場を去っていく。

◇　◇　◇

「……現金な連中だこと」

「あそこで御大将が特大級の爆弾を落としましたからね。何にせよ、これからも頼みますぜ主任に御曹司」

「だから、主任呼びは止めてください」

会見に付き合ってくれた牛山に対して愚痴を零す様に放たれた悠元の台詞に、達也は思わず苦笑を滲ませていた。何にせよ、まずは［トーラス・シルバー］自体が居なくなったので、ディオーネー計画の参加リストにあった人物がいなければ参加する義理は無くなった。

とはいえ、言質を取ろうとエドワード・クラークが来日するのは確実。普通ならば他の協力者の了解を取り付けて達也の包囲網を狭めればいいものを、そこに考えが至らない時点で達也の持つ〝戦略級魔法（マテリアル・バースト）〟を排除したい公算が透けて見えてしまう。

「ディオーネー計画は直近のＵＳＮＡの未来しか見ていない。そんな我儘に付き合う道理などない。そもそもの話だが、仮に計画が進行するとして誰が音頭を取るんだ、って話になる」

「普通に考えれば、そのエドワード・クラークなる人物じゃないんですかい？」

普通に関えれば、牛山が名を出したエドワードが計画の提唱者として音頭を取る。だが、彼が［エシェロンⅢ］の開発に関与しているとしても、その情報と権限で軍部を脅すことが出来たとしても、彼はＵＳＮＡという国家を直ぐに動かすまでの力を有していない。

加えて、非魔法師である彼が［十三使徒］と対等でいられるのは［フリズスキャルヴ］による情報の強みであり、彼が達也を直接殺す手段を有していない。それが原因でベゾブラゾフの暴走が起きてしまったということになる。つまり、彼の暴走の責任はエドワードにも波及

する、ということになる。
　ＵＳＮＡが戦略級魔法師を出して対等に出るとしても、国外に公表されていて尚且つ動けるのが〝アンジー・シリウス〟しかいないという現実。だが、肝心のリーナは達也と婚約している為、将来自由に動ける戦略級魔法師を喪うことになる。
　尤も、その後のことはＵＳＮＡが責任を持って行うことであり、日本が責任を負う必要などない。仮にエドワード・クラークの件が片付いたら、〝原作のその後〟のＵＳＮＡは達也に頼らざるを得ない状況になっていたと推測できてしまうだけに。
「寒冷期のドサクサで東欧や中央アジアに侵攻し、沖縄の件で佐渡に侵攻した挙句、横浜の時も佐渡に対して軍を派遣して、とどめに宗谷海峡の件だ。名を使ってる時点で〝拘っている〟にも等しいが、ここまでやっておいて平和を語るなど、頭の湯気で水蒸気発電が出来るんじゃないかと思うわ」
「……御曹司、大将も大変ですね」
「ええ、その通りです」
　誰が音頭を取るにしても、絶対に揉める案件なのは間違いない。一番の被害者は誰なのかと問われると、達也よりもＵＳＮＡの大統領のほうが間違いなく上に来るだろう。なお、最近ストレス解消で大統領執務室に丸太が置かれ、表面の木皮は剥がれ落ち、彼の拳の跡で減り込むほどだった。
「何にせよ、まずはディオーネー計画を完全に頓挫させる。向こうの連中が騒ぐだろうが、人の夢にケチをつける意味を本気で理解させてやる……なんだよ、二人とも？」
「いやはや、流石は御大将だなと思いまして」
「そうですね。悠元にしか出来ません」
「お前らなあ……」
　何にせよ、まずは『ＳＴＥＰ』の第一歩が踏めたということで安堵したい気分だが、まだ予断を許さないという予感をひしひしと感じ取っていたのだった。

意外な援護射撃

悠元と達也は、牛山と会場の設営に協力してくれたスタッフを労い、更衣室で制服のロングブレザーに身を包んだ。なお、龍郎には声を掛けないつもりらしく、この辺は達也自身の感情というよりは深雪の心情を慮ってのものだと感じつつ、悠元が乗り付けたエレカーで第一高校に向かう。

運転席に悠元が、助手席に達也が座って走り出すと、悠元が尋ねた。

「そういや、今週末にエドワード・クラークが来日するらしいが、その関連の話は来ているのか？」

「ああ。燈也から土曜の午後に日本魔法協会での会談を打診された。燈也曰く『ハッキリと断るいい機会だから』ということらしいが、確かにその通りだと判断して話を受けた」

「まあ、こちらからアメリカに出向く方が支払うリスクも大きいからな」

暗殺や襲撃などのリスクを鑑みても、エドワード・クラークが態々日本に来て、しかも日本魔法協会が会談をセッティングしてくれるのだ。そこまでのお膳立てをされた以上は断る理由もない、というのが達也の出した結論だった。

燈也から話が来たときは流石の達也も驚いたが、燈也の婚約者の一人が五十嵐家で、しかもその母親が日本魔法協会会長の前任者。となると、現在の会長である十三束翡翠と繋がりがあっても不思議ではない。

「ちなみにだが、悠元。そのことに何か仕掛けていたりするのか？」

「どの道バレることだからいいけど、ＳＳＡのディアッカ・ブレスティーロ大統領を招待した。更にフランスのヴィクター・セナード大統領とドイツのクルト・シュミット首相も金曜に日本へ到着する」

「それはまた大層な顔ぶれだな。一体何をする気なんだ？」

ＳＳＡだけでなく、東西ＥＵでも有数の国家の元首までも招待したという悠元の言葉に、達也はどういった意図を持つのかが気になった。

「決まってる。東西ＥＵを合併させて欧州に対新ソ連を見据えた連合国家を樹立するためだ。その為の根回しは既にやっているが、その第一歩としてフランスとドイツで［恒星炉］に関する条約を結ばせる」
　現状、欧州における魔法のパワーバランスは国際魔法協会の本部があるイギリスが一歩抜きんでている。旧ＥＵ各国内で戦略級魔法［オゾンサークル］の起動式が共有されているが、独自の戦略級魔法を有したいという欲目から、ドイツというかローゼン・マギクラフトがレオやエリカにちょっかいを掛けて大目玉を食らっていた。フランスの場合はエフィア・メンサーを嫁がせることでコネクションを形成させることに腐心した。
「イギリスの面子を潰す格好になるが、そんなのは俺の知った事じゃない。そして、ブレスティーロ大統領にはその立会人となってもらう。対価は輸出用の［恒星炉］になるが」
「成程、［恒星炉］を軸とした共同条約をフランスとドイツで結ばせるという訳か」
「そういうこと。立地条件の関係でベルギーやオランダにも関与してもらうけど」
　［恒星炉］の基幹技術については無償提供するが、そこから先は日本政府とのライセンス契約という形で国家間交渉のレベルになる。これまでエネルギー資源を輸入する側だった日本が輸出する側となり、契約による利益は莫大なものとなる。
　既存のエネルギーとの兼ね合いをするために、この国では『災害時のライフライン確保』という理由で既存のエネルギー発電施設は更新しつつも使用し続けることが決まっている。
「イギリスを含めなかったのは、ディオーネー計画のことがあるからか？」
「それもあるが、一番の理由は〝時計塔〟の連中への報復だな」
　剛三との旅行でイギリスを訪れた時、英美の実家であるゴールディ家を含めた複数の古式魔法の関係者が襲撃してきたので、全員地面に脳天から埋めてやった。ちゃんと呼吸する用の穴は確保していたので、それで死んだとしても責任は取れない。

なお、剛三に至っては全員〝お星様〟にしていた……生死の如何なんて、今更問うことは出来ないだろう。そもそも、一つの戦いで１００万の兵士を殺した人間からしたら、数人も数十人も誤差の範疇なのかもしれない。
そんな風に思ってしまうあたり、自分も転生前の価値観が完全に擦り切れた形だが。
伝統を重んじる者からすれば、より効率化された革新的な動きを嫌う。古今東西、技術のみならず人種や宗教、思想などといった多種多様の要素で起こり得ていたこと。これが更に先鋭化されたのが〝なろう系〟における成り上がりや逆転劇に他ならない。
神楽坂家や上泉家の場合は出始めの時点で天神魔法が完成され過ぎたがために、それをより効率化する革新的な要素を取り入れることに腐心した。それでも魔法の全てを十全に使える人間が限られている時点で、この魔法の開発者は『強すぎるが故に使い手を厳しく選ぶ』ことを重視したのかもしれない。
「英国の王室や政府への恨みはないが、こちらとしては人生の未来が懸かっている以上、向こうの言い分を認める気にもならない。そうだ達也。すまないが、エドワード・クラークとの会談は達也と市原先輩に任せることになる」
「別にそれは構わないし、寧ろお前に任せっきりでは立つ瀬がないからな。別件があるのか？」
「さっき言った国家元首たちと会わなきゃいけないのでな」
現状は悠元がトライローズ・エレクトロニクスの理事長――代表取締役を兼ねる形となる為、[恒星炉]に関する対外的な窓口は悠元を通さなければならない。フランスはまだしも、ドイツはローゼン・マギクラフトの件で負い目を負っている為、今回はハンス・エルンストの誼を通じてＳＳＡからの申し出を受ける形での来日となる。
基礎構造に関する部分は公表しても、肝心の輸出用人造レリック[マジストア]の製法は公表しないし、万が一軍事転用が出来ないようにブレーカー記述を仕込む。その辺については伝えるだけでなく、ＵＳＮＡや新ソ連、大亜連合への漏洩を防ぐために契約として書かれる

こととなる。
「しかし、［恒星炉］を軸とするとしても東西ＥＵが統合できるのかという疑問があるのだが」
「普通はな。だが、新ソ連が［トゥマーン・ボンバ］の存在を隠さなくなった以上、欧州が蹂躙される可能性だって出てきた。それに、万が一マクロードが居なくてもいいように、フランスに戦略級魔法師を紹介しておいた」
　安全保障という観点では、現在緊張状態にある北欧・東欧の情勢を見たとしても、反魔法主義運動の過熱を勘案しても日和見など許されない。そして、悠元は一人心当たりのある戦略級クラスの魔法師をフランスに紹介するよう図らった。
　ウクライナ・ベラルーシ方面で暗躍する［ドラキュラ］と呼ばれる一人の少女。剛三によって鍛え上げられた愛弟子ならば、立派な抑止力として機能することになるだろう。
「そして、ローマ法皇猊下の声明を起点として欧州連合の再結集を行う。スイスは無論対象に入らないが、フランスとドイツを共同提唱国として欧州に一つの経済圏を再構築する。イギリスの扱いは両国に任せることとするけど」
「対応を放り投げるか。酷な事をするものだな」
「ただで手に入るものじゃないし、相応の対価を支払ってもらうのが道理だと思うからな」
　最終的には日本、インド・ペルシア連邦、アラブ同盟、アフリカ連邦、そして新生ヨーロッパ連合（仮称）による新ソ連包囲網を構築し、更には新ソ連内部の反体制派を活性化させて連邦体制をもう一度崩壊させる。これによって、大国の一角を完全に滅ぼす。
　そうなると問題はＵＳＮＡと大亜連合になるが、前者は今後の展開でマズいことになると確定しているし、後者は日本への敵意を収めている。だが、どうせ忘れた頃に再発するのは目に見えている為、もし何かやらかした場合は大亜連合に対して経済制裁のトラップを仕掛ける腹積もりだ。
「それと、ＵＳＮＡ（むこう）にいるリーナたちには日本へ帰る時に一つ仕事を

頼もうと思ってな。ヨーロッパに点在する反魔法主義の結社の拠点リストを意図的に各国の政府へ流して、制圧の協力をしてもらおうと思ってる」
「……リーナたちならば問題ないだろうが、その意図は何処にある？」
「欧州がディオーネー計画の参加に傾いているのは、その大本が反魔法主義による人権侵害の運動のせいだ。ならば、その大本をこの際駆除してもらい、ディオーネー計画への傾倒を阻止する」
　原作ならば日本に直帰していたリーナだが、帰る際にフランスを経由する形にしたのは、ヨーロッパ各国に点在する反魔法主義の拠点を潰すことで魔法師の人権抑制運動を逓減させることにある。ＵＳＮＡの戦略級魔法師〝アンジー・シリウス〟としても、新ソ連の西側に位置するヨーロッパ各国が動ける状態になれば、最終的にＵＳＮＡへの負担が減るという利にも繋がる。
　本来ならばジブラルタルにいるＵＳＮＡの戦略級魔法師が積極的に動くべきなのだが、欧州に見向きもしなかった結果として大陸ヨーロッパ諸国の魔法師に対する人権侵害に繋がった。
　ここでリーナもといアンジー・シリウスの魔法師としての功績を稼ぐことで、仮にリーナに対してスパイ疑惑が掛かったとしても、国家のために働いた戦略級魔法師をスパイ疑惑に仕立て上げた側の正当性が問われることとなるし、派遣を依頼した日本とＵＳＮＡの両政府への好感度稼ぎにも繋がる。
　乱暴な言い方をすれば、『お宅の戦略級魔法師が欧州の反魔法主義の抑止に貢献してくれたというのに、それをスパイなどと謳うのか？　正気か貴様？』ということにもなる。そうなると、その事実を否定したいＵＳＮＡ政府と、その事実を肯定したいＵＳＮＡ軍で意見の乖離が発生して、ＵＳＮＡ国民の前に明るみになる形となる。
　こうなれば、反魔法主義としても好機と見て、ヨーロッパを脱出してＵＳＮＡになだれ込む形となるが、元を返せば彼らを利用して同盟国を嵌めようとしたツケが返った結果でしかない。
「欧州に一大勢力が出来たとなれば、新ソ連としても他人事じゃない。かの国の首都であるモスクワからすれば、日本よりも近い欧州の連合

国家の方が脅威になってしまう。まあ、それで戦略級魔法を乱発するような事態になった場合、新ソ連の方が先に潰れることになるが」
「お前なら物理的に潰しそうな気もするが」
「面倒事になるのは御免だからパス」
剛三との旅行の場合、大抵は剛三に巻き込まれる形か相手が先に襲撃してきたので某バンカーのように『やられたらやり返す。倍返しだ』の心情で対処したに過ぎない。尤も、剛三自らが関わった場合は百倍返しでも足りないわけだが。
エレカーを学校の駐車場に停めて、悠元と達也は教室ではなく事務室に向かった。達也でも問題はないだろうが、悠元はここで護人・神楽坂家当主および師族会議議長としての立場を使い、『突然で済まないが、百山校長に会いたい』と申し出た。
アポなしの面会希望など追い返されるか説教されるのが普通だが、流石に一高の職員は悠元と達也の事情を把握していたためか、対応は早かった。
元々予定が空いていたのか、或いは態々空けたのかは不明だが、二人は直ぐに校長室へ通された。以前の面会では悠元の勘気を被っただけに、百山の表情は神妙なものだったのは言うまでもない。
「このような時間に突然の面会を申し出て、快く受けてくださったことに感謝します」
そう切り出したのは達也のほうだった。悠元のほうは百山から聞かれるまで喋らないつもりのようで、この場合はまだ穏便に済む側が話す方がいいだろう、という達也の判断によるものだった。
「中継は見せてもらった。君たちがディオーネー計画への参加を拒んだのは、あの事業が念頭にあったものだったからか？」
「そうです」
百山がＦＬＴからの中継を見ていたとなれば話が早い、と達也は百山の問いに答える。
「魔法核融合炉エネルギーラインプロジェクト……もっと短い略称は無いのかね？」
その問いかけに対して、ここで悠元が口を開いた。

「元々は『特型恒星炉太平洋循環エネルギー送電システム』、Ｅｓｐｅｃｉａｌｌｙ Ｓｔｅｌｌａｒ ｄｒｉｖｅ ＣｉｒｃｕｌＡｔｉｏｎ Ｐａｎ ｐａｃｉｆｉｃ Ｅｎｅｒｇｙ ｌｉｎｅ Ｓｙｓｔｅｍという名称を非公式に持ち、公式の名は『恒星炉システムに関する総合的魔法技術による経済活動およびエネルギーライン計画』、Ｓｔｅｌｌａｒ－ｇｅｎｅｒａｔｏｒ ｓｙｓｔｅｍ Ｔｏｔａｌｉｚｅ ｍａｇｉｃａｌ ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ Ｅｃｏｎｏｍｉｃ ａｎｄ ｅｎｅｒｇｙ ｌｉｎｅ Ｐｒｏｊｅｃｔを訳してＳＴＥＰ（ステップ）計画と呼称しています」

「成程、ステップか。前者の略称が何を意味するかは聞かない方が良さそうだな」

悠元は意図的に『ＥＳＣＡＰＥＳ』の名を出さなかったが、百山はその意図を察した上で呟いた。無論、何に対しての第一歩なのかということも問いかけることはしなかった。

「神楽坂君。君が名を出したトライローズ・エレクトロニクスを含めた魔法恒星炉だが、どこまで信じてよいのかね？」

「一番早いのは公式のサイトをご覧いただくことですが、既に事業化している分野の対外貿易データを閲覧したいのでしたら、この場で提示いたしますが」

「……いや、それには及ばない」

百山の口調を見るに、サイトに掲示されたデータに一応目は通したものの、どこまでの信憑性を有しているのかが読み取れなかったのだろう。確かに、昨春の段階では検証レベルのものでしかなかっただけに、そう思われても仕方がないと踏んでいた。

彼は悠元の言葉を聞き、嘘や誇張ではないと判断したかのように、両手で体を支えるような形で座ったまま頭を下げた。

「……今回の件は、私が全面的に悪かった。実は先程、国立魔法大学の学長より厳しく叱責を受けていた。『百山校長は魔法界の未来を切り開く可能性を危うく摘み取る愚を犯すところだった』とな。そして、学長より君たちの授業免除の継続と魔法科高校卒業単位の保証、国立魔法大学への推薦を取り計らうように通達を受けた」

まさかの国立魔法大学の方からの援護射撃に、これには達也や悠元も若干困惑していた。百山との以前の面会では魔法大学の名を出したが、特に大学側へ働きかけをしたつもりなどないため、恐らく総理大臣から文部科学大臣を経由して国立魔法大学の学長に働きかけをした線が濃厚だろう。

「私は、ディオーネー計画を魔法師にとって大変名誉あるものだと思っていた。だが、叱責を受けて改めて精査した……私は、教え子たちを地球から追い出す様な計画を信じ切っていたのだと思うと、魔法学の教育者として失格と言うべきなのだろう」

第一高校の学長、それも魔法学の権威とも呼ばれる人間が自らの非を認めて謝罪だけでなく頭を下げた。別にそこまで求めるつもりもなく、ただ理解してくれればそれでよかった側からすれば、これはこれで困る反応とも言えた。

なので、場を収めるという意味で悠元が口を開いた。

「こちらの事情を理解して頂けただけでも十分ですが、そう仰られる以上は甘んじて受け取ろうと思います。その〝名誉挽回〟になるかは分かりませんが……百山校長、今年中止になった九校戦の代替案となる魔法科高校交流競技会の呼びかけを魔法医療大学の付属校も含めた九校にお願いできますか？」

「……分かった。いや、畏まりました、神楽坂殿」

流石に魔法医療大学の付属校にはまだ1年生しかいないため、いきなり本戦クラスに出すのは経験のアドバンテージが大きいので新人戦のみの出場となるが、それでも番狂わせが起きないとも限らない。何せ、悠元が自ら編纂した魔法教育理論に基づいて教育を受けている為、下手をすれば実戦主義の三高1年組はおろか一高1年組すら凌駕する可能性もある。

今後、一高が総合優勝が取れなくなったとしても別に構わない。それぐらい歯ごたえがあればあるほど、競争心をより掻き立てることにも繋がる。それこそ、剛三が言っていた『最後に勝つ者は誰よりも諦めなかった者』に繋がるのだから。

物理的に耐えきった椅子

校長室での話を終えて退出すると、悠元はそのまま生徒会室に向かう。達也も伊豆に帰ろうかと思案したが、そこまで急ぐものでもないと判断して悠元についていく形となった。他の生徒に見られないように、遠回りする形で4階の一番端の部屋に入った。

「そういえば、俺がいない間は悠元がいたんだったな。感謝する」

「生徒会の仕事は基本的にノータッチだけどな」

「いや、それが普通だと思うんだが」

悠元がいたのはあくまでも深雪の機嫌取りの側面が強く、達也の［精霊の眼］から見ても深雪の様子はかなり安定していた。時折……いや、最近はかなりの頻度で深雪から激しい愛情を感じ取って意図的にシャットダウンすることが多くなった。

性欲がない訳ではない達也にとって、妹（実際は従妹だが）の欲深さに溜息を吐くのと同時に、これがもし自分に向いた場合を想定した時……悠元に感謝せざるを得ない、というのが達也の素直な感想だった。

「達也、お昼はどうする？　この分だと、食堂でもさっきの会見の録画が流れそうな気がするんだが」

「そうだな……とはいえ、お昼を抜くと深雪が怒りそうだな」

「ああ、それは分かるわ」

幸か不幸か、生徒会室にはダイニングサーバがあるので、どこかで適当に昼食を済ませればいいかと結論付けたところで各々端末に座って時間を潰すことにした。そして、昼休みの時間となって駆け込んでくるように入ってきたのは深雪だった。

手には複数人分の量と思しきお重を風呂敷に包んで持参しており、それを静かにテーブルに置いた上で悠元に抱き着いていた。

「お疲れ様です、悠元さん。勿論、お兄様も」

「ああ、ありがとう。見るからに達也の分も入っているようだが」

「はい。放っておくと食事すら平気で抜くお兄様を無視はできませんから」

「……まあ、有難くいただくことにしよう」
流石の達也も長いこと一緒に暮らしてきた深雪に言われては苦笑しか出てこず、観念したような言葉を零した。すると、ほのかや生徒会役員でない雫、学年が違う泉美や香澄に理璃、水波まで姿を見せた。
普段なら放課後の活動でしか使わない（九校戦や論文コンペなどの行事前を除く）生徒会室に何か用事があるのだとすると、その推測を悠元が口に出した。
「ここまで集まったとなると、ＦＬＴでの会見の録画をみんなで見ようってところか……覚悟を決めろ、達也」
「とうに諦めたことだがな」
互いに溜息を吐きつつ呟いた言葉に、女子たちが笑みを零したり苦笑を浮かべたりと様々だった。結局、深雪が持参した弁当を食べつつ、モニターに流れた自分たちの会見の録画を見るという羞恥プレイに近い有様となった。
「そういえば、悠元。授業免除の件はどうなったの？」
「その件は継続というか、魔法大学から高校卒業と大学推薦を確約するように言われたそうだ。俺だけじゃなく達也も同様だが」
「それにしても、悠元兄も［トーラス・シルバー］だったなんて驚いたよ……言えなかった理由も察せるけど」
雫からの問いかけに対して、事実をありのままに答える悠元。それを聞いた香澄が率直な感想を述べる。なお、泉美は完全に映像を見てトリップしている為、誰も率先して触れようとしなかった。
「私も吃驚したよ。雫は知ってたの？」
「まあ、当事者側に近い立場だし、一昨年のアレを見せられたら逆に納得出来たから」
雫はここにいる面々の中でも悠元の魔法の実力と魔法技術の高さを目の当たりにしている。だからこそ、［トーラス・シルバー］の事実を聞かされても特段驚くような素振りは見せなかった。
「……雫さんの中で俺は一体どんな存在になってるんだ？」
「人類のカテゴリに収めちゃいけないジゴロ」
「別の人種扱いかよ」

小学生の時から一般的な同年代の男子と隔絶した生活を送ってきたことは否定しないが、ジゴロの単語をまるで人の固有名詞のように扱うのはジゴロに対して失礼なのではないか、と思いたくなってくる。
「私は悠元お兄様が人でなくとも、愛しておりますので」
「……ものすごく反応に困る語弊はやめなよ、泉美」
「あ、あはは……」
すると、我に返ったように放たれた泉美の言葉に対して冷静にツッコミを入れる香澄、それを聞いて苦笑を漏らす理璃。テーブルに突っ伏したくなる気持ちを抑えようとしたところで、右腕に柔らかい感触を覚える。その感触を齎した主はというと、言うまでもなく深雪であった。
「深雪さんや。慰めてくれるのは嬉しいが、人目があるから自重しなさい」
「私はただ癒したいだけですから」
「……好きにしてくれ」
その後、その行為を見た雫と泉美に囲まれて身動きが取れなくなり、終いには深雪が水波まで巻き込んで四人相手に何とか理性を保った悠元。その時ほど、昼休みの終わりを知らせる予鈴の音に感謝したことはなかった。
寧ろ『よく耐えきった』と座っていた椅子に対して褒めてやりたい気分になったのは言うまでもない……物に対して感謝するということがおかしいと言われてしまうと否定できない事実でもあるが。
なお、女性陣が去った後に達也から「すまない」と労われたのは言うまでもない。
◇　◇　◇
昼食は針の筵状態となりつつも過ごし、午後は演習場の一角で魔法の訓練をこなしていると放課後の時間となり、真っ先に姿を見せたのはレオとエリカだった。天刃霊装での手合わせの後、休憩を入れることとした。
いつもならば行きつけの喫茶店に行くところだが、今日は悠元が車

を運転しているために校内で完結する形を取ることとした。そして、差し入れのコーヒーとフルーツサンドは何とエリカが頑張って用意したらしく、その主な要因を察した上で悠元が言葉を発する。
「頂けるのはありがたいが、大方俺と達也による味見役も兼ねてか？」
「あはは、やっぱバレちゃうわね。で、お味はどう？」
　エリカからすれば、幼馴染に料理全般で負けてるような格好となる為、悠元に食べさせようと思ったのは贔屓の無い意見がもらえると思ってのことだったようで、悠元が食べる様子を見ていたのに気づきつつも、呑み込んだ上で声を発する。
「エリカが心配するようなことはないし、寧ろ美味しい……どうした？」
「ホント？　別に辛辣な意見でもいいのよ」
「武術や魔法なら厳しいことは言うが、他人の作った料理を無意味に貶す趣味はねえよ」
　某料理漫画のように『この料理を作ったやつは誰だぁっ!?』とか言い放ってクレーム紛いの文句をぶちまける料理人ではないのだから、味の良し悪しは判断すれど、そこまでハイレベルのものを求めるつもりはない。
「だって、前にウチの絡みで上泉家に行ったとき、詩鶴さんだけじゃなくて元継さんも料理が上手だったし。味もうるさそうに思ったから」
「いや、漫画やアニメの世界でしか存在しないような厳しい料理評論家になった覚えはないんだが？」
　確かに、身近（婚約者限定）で言えば深雪がずば抜けており、次点では夕歌とセリア、アリサに姫梨や真由美、その次位に沓子や雫が入ってくる。なお、ここで名を挙げなかったからと言って料理が下手というわけではないことは一応述べておく。
「万が一不味かったとしても、レオの前で言うのは流石に憚られるしな」
「そこまで気を遣われると逆に恥ずかしく感じるんだが……そういや、午前中の映像は見たぜ」
「ある程度締めだしてはいたんでしょうけど、バカを手玉に取るだな

んて流石は悠元ね」
「エリカ……」
流石に恥ずかしかったのか、レオは話題を悠元と達也の記者会見の録画映像に切り替えた。それに乗っかる形で放たれたエリカのオブラートが微塵も感じられない言葉に達也が思わず呆れるような素振りを見せた。
すると、更に来訪者として幹比古と美月、佐那が姿を見せた。
「四人とも、ここにいたんだね」
「あら、三人でイチャイチャしててもいいのに」
「エリカちゃんに言われたくないんですけどね？」
「……美月がどんどん逞しくなっていきますね」
エリカの為人を理解しているからこその美月の返しに対し、佐那が感心するような素振りを見せる。とはいえ、不意打ちでからかわれると慌てふためくのは言うまでもないが。
そんな話はさておき、話題は再び悠元と達也の記者会見に移った。
「「恒星炉」を使ったエネルギープラントか。もっと分かりやすい名はあるのか？」
「公式の名はＳＴＥＰ計画。Ｓｔｅｌｌａｒ－ｇｅｎｅｒａｔｏｒ ｓｙｓｔｅｍ Ｔｏｔａｌｉｚｅ ｍａｇｉｃａｌ ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ Ｅｃｏｎｏｍｉｃ ａｎｄ ｅｎｅｒｇｙ ｌｉｎｅ Ｐｒｏｊｅｃｔの略称だ」
「成程、元々のプロジェクト名を略したというよりはステップに合わせて組み上げた感じかな？」
「ご名答だ、幹比古」
レオの問いかけに達也が答え、それを聞いた幹比古が疑問を述べると、悠元が答える。ここには当事者二人がいるのだから、当然こうなってしまうのは言うに及ばず。すると、ここでレオが問いかけてきた。
「何に対しての第一歩なんだ？」
「魔法師の普遍的かつ基本的人権の確立、軍事一辺倒の魔法技術からの脱却、そしてこの国が抱えてきた数多の呪縛からの解放。それらを

含めての『ＳＴＥＰ』というわけだ」
「それはまたでけえな……」
　この中でレオの出自を事細かく知っているのは悠元とエリカだけであり、その彼が言い放った言葉にはあらゆる方面からの〝脱却（エスケイプ）〟を含んでいることに気付き、レオが率直な感想を述べた。
　話は演習林から校内のカフェテリアでも続くこととなり、そこからは生徒会（深雪、ほのか、水波、泉美、理璃）や風紀委員会メンバー（香澄、雫）も合流してきた。そこで改めてレオに答えた内容を述べる。
「そうなると、お二人とも学校はどうするのですか？」
「俺は普通に通うよ。そろそろ本格的に九校戦の代替に関する話を進めないといけないけど」
「俺の場合はもう少し落ち着いたら通うつもりだ」
「そうなんですか。よかったです」
　美月からすれば、とりわけ達也が同じクラスメイトかつ友人関係にあるため、このまま学校を辞めてしまうのではないかという不安が少しあったのかもしれない。すると、雫が何かに気付いて端末を操作していた。その動作に一区切りがついたところで悠元と達也に話しかけた。
「悠元に達也さん。父が会いたいって」
　悠元ならば雫絡みだと邪推する輩がいても不思議ではないが、達也まで絡むとなると『ＳＴＥＰ』関連だと直ぐに察することが出来る。そもそも、雫も悠元の婚約者の立場だということは公然の秘密になっている為、特段問題はない訳だが。
「俺は問題ない。元々週末の予定は空けてるからな」
「俺も大丈夫だ。何時伺えばいい？」
「それなんだけど……悠元の都合に合わせるって」
「えー……」
　想定外の潮からの都合に対し、悠元は怪訝そうな表情と声を見せていて、これには周囲からも笑みが漏れるような雰囲気だった。とはいえ、時間を決めないことにはどうにもならないと判断した上で、雫に

伝える。
「なら、日曜の昼過ぎに北山邸へ伺うと返信しておいてくれ」
「分かった」
事前に達也からエドワード・クラークとの会談の時間は聞いているし、異なる日であれば特段問題はないだろう。懸念事項があるとすればレイモンド・クラークの存在だろうが、公人ですらない彼に一体何が出来るというのか。
クラーク父子の情報による包囲網は既に想定している為、ならばこちらは実体経済による包囲網で締め上げていくだけだ。その意味でも［恒星炉］のスキームの一部を事業化したのは都合が良かったと言うべきだろう。
◇　◇　◇
エドワード・クラークの来日――――彼自身の目論見としては、多くの報道陣に注目して貰うことでＵＳＮＡ政府の陰をちらつかせるとともに、達也への間接的なプレッシャーを掛けるためのものであった。だが、想定に反して報道陣の数がやや少ない様にも見られた。
彼がその原因を知ったのは訪日の直前で、ＳＳＡのディアッカ・ブレスティーロ大統領、フランスのヴィクター・セナード大統領、そしてドイツのクルト・シュミット首相の三名がその前日に各々の政府専用機で来日する運びとなり、メディアの関心はそちらに向けられていた。
ディオーネー計画への参加態度を示していない南アメリカ大陸国家の国家元首だけでなく、イギリスと同じ西ＥＵの構成国であるフランス、そして東ＥＵの中核を担うドイツのトップが来日するとなれば、彼らの狙いは［恒星炉］にあると読んでいた。
達也を宇宙に追放したいエドワードからすれば、もしここで欧州がディオーネー計画からの離脱に動くとなると、間違いなくイギリスが東西ＥＵから爪弾きに遭う公算が高くなる。こうなると、ＥＵの存在意義だけではなく、イギリスに本部を置く国際魔法協会の意義にまで関わる話となってしまう。
東京湾海上国際空港に降り立った三国の政府専用機は出迎えられ

たリムジンに各々乗り込み、警察省から派遣された選りすぐりの魔法師に護衛される形で都心へと入った。
彼らの行き先はまず、首相官邸の特別応接室。そこで総理大臣と会談を行い、その後の四か国首脳による共同記者会見では、欧州で運動が激化する反魔法主義に対しての共同見解を発表。その際に先日、日本政府が［恒星炉］を含む次世代エネルギープロジェクトを発表した事に関する質問も飛んだが、今回の政府間交渉ではその分野に関する交渉は行わないと日本の総理大臣が返答した。
次に向かったのは迎賓館赤坂離宮。その中で最も格式が高い〝朝日の間〟で三者を待っていたのは、公にトライローズ・エレクトロニクス理事長と名乗った神楽坂悠元その人であった。
「沖縄以来となりますが、お久しぶりですブレスティーロ大統領閣下にセナード大統領閣下。それと、昨年はそちらの国の人間がお世話になりましたね、シュミット首相閣下」
ディアッカとヴィクターには英語を用い、クルトに対してはドイツ語で流暢に話しつつ挨拶をする悠元。これには三者も驚きつつ順番に握手を交わす。まさか日本人が複数の言葉をまるで母国語のように話したことから、同伴していた通訳も驚いていた。
とはいえ、彼らの仕事を奪うのは忍びないので悠元は日本語で話す。
「態々お越しいただいたのですから、まずはお座りください」
「では、そうさせていただきましょう」
「そう仰るのでしたら、失礼いたします」
「……では、お言葉に甘えまして」
今回、悠元が招待した三国の国家元首はいずれも直接面識を有する人物たち。ディアッカとヴィクターは言わずもがなだが、クルトの場合はバスティアン・ローゼンがまだ生きていた時に剛三を介する形で面会した。
今頃、達也は日本魔法協会関東支部でエドワード・クラークと会談しているだろうが、補佐役として鈴音をトライローズ・エレクトロニクスの理事付秘書として同伴させている。物怖じしないという点で

は心強くある。
　それを思いつつも悠元から話し始める。
「ブレスティーロ閣下。先んじて今回の会談に関する内容をお伝えいたしましたが、こうして出向いたということは、承諾して頂けると解釈しても宜しいですか？」
「ええ、無論です。世界から見れば新参者の大統領ではあります故、判断は即決した方が良いと考えました。貴方と司波氏が参加なされる魔法核融合炉のエネルギープラント計画に南アメリカ連邦共和国の国家元首として賛同させていただきます。先んじて連邦議会も全会一致で日本政府に協力する方針で固まりました」
　ディオーネー計画を主導するＵＳＮＡに対し、日本との誼からＳＴＥＰ計画を支持する方針に舵を切ったＳＳＡ。ディアッカはＵＳＮＡから横槍を入れさせないためにハンス・エルンストを派遣し、ＵＳＮＡ大統領への親書を託した。
「ＵＳＮＡは何か言っておりましたか？」
「今のところは公にしておりませんし、先んじてうちの虎の子とも言える魔法師を派遣しました。仮に向こうの軍部が騒いだとしてもＵＳＮＡ政府が認めないようにお願いはしております」
「分かりました。もしお力になれることがありましたら、遠慮せずにご相談ください」
「そのお言葉が聞けただけでも感謝に堪えません」
　かの英雄に育てられた少年。ディアッカの目の前にいる人物は、数年前に現地で襲ってきたゲリラ集団を瞬く間に鎮圧した。その腕前を誰よりも間近で見たからこそ、彼を単なる魔法師ではなくあらゆる災厄を跳ね除ける力を有する実力者として見ている。

悠元の〝夢〟

フランスはまだしも、ドイツからすれば世界的な魔工メーカーのローゼン・マギクラフト絡みで日本との問題を起こした加害者。ルーカス・ローゼンの名誉回復はバスティアン・ローゼンの遺言通りに進められ、国防軍の基地内で騒ぎを起こしたローゼン・マギクラフトに対して関係者の厳罰な処罰を求めた。無論、それが遠因で自国内の反魔法主義勢力が力を増した。

そして、自国で覚醒した新たな戦略級魔法師であるハンス・エルンスト・ルーデル。新ソ連からのヘイトを避ける意味合いとＳＳＡへの売り込みという形で送り出したことで、こうやって日本との会談を漕ぎ着ける立場になっただけであり、クルト自身が働きかけをした訳ではない。

その辺を察したのか、悠元が声を掛けた。

「シュミット首相閣下。ローゼンの件は既に当事者間と決着がついたことです。それに、今後問題が起きても当事者間の示談となるように手を尽くします」

「それは……正直、頭が上がらない思いで一杯です」

クルトはカーラ・シュミットの従兄にあたるが、彼女のように魔法資質を有していないがために政治家への道を進むことが出来た。最近勢力を増す魔法師に対する人権抑制を掲げる勢力に頭を抱えつつ国家の舵取りをしている彼からすれば、今回の申し出はまさに〝藁をも掴む〟ようなものであった。

「さて、本題に入りましょうか。トライローズ・エレクトロニクスは日本政府の要請に応じる形で［恒星炉］の技術輸出に向けた準備を進めております。その足掛かりとして、フランスとドイツには東西ＥＵを統一して頂きたい」

「なっ!?」

「これは……かなり大掛かりなことですな。神楽坂殿、その根拠をお教え願いたい」

悠元が述べた要求に対し、クルトは驚きを隠せず、一方でヴィク

ターは考え込む素振りを見せた。第三次大戦によって分裂した東西ＥＵを再編し、かつてのローマ帝国のような統合国家を欧州に形成する。長い歴史の中で古代にしか存在しえなかったものを形にするのは容易な事ではない。
「現状進められているディオーネー計画はＵＳＮＡ、新ソ連、そしてイギリスが名目上の主導を握っております。ですが、我が国はＵＳＮＡと軍事同盟の関係にあると言えども、その誼に殉じる意味はございません。問題なのは、万が一ディオーネー計画が頓挫した場合の責任問題がどこに飛び火するか不透明なことにあります」
　なまじ二大国に加えて国際魔法協会の本部があるイギリスが参加している為、欧州諸国の大半はなし崩し的に参加を検討している側面がある。もし、ここで計画が立ち行かなくなった時に利害調整を誰が担うのかという問題にもなってくる。
「今年の新ソ連の軍事行動を見る限り、ディオーネー計画を本当に推し進めたいと新ソ連政府が考えているのか不明です。そして、彼らが仮に暴走したとして、そのとばっちりが欧州にまで影響してくる可能性は低くありません」
「成程、我々に新ソ連へ対抗できるだけの下地――言うなれば、『新生欧州連合』をフランスとドイツ主導で形成してほしいということですな？」
「無論、こちらもタダでとは申しません。その先駆けとして燃料発電用水素ガスの輸出枠と水素燃料発電の技術輸出を行います。対象はフランス、ドイツ、スペイン、イタリア、ギリシャ、そしてＥＵには含まれていませんが、トルコにも打診する予定です」
　水素ガスを用いた燃料発電システムは元々独立したシステムとして構築しており、その後に［恒星炉］を導入すればそのまま生かすことも可能。水素ガスの輸出量は減るが、その代わりに［恒星炉］のライセンス料を支払ってもらう形で技術供与を行う。人造レリックに関する部分はその要となるもの。
　今回の対象はスエズ運河を経由して地中海沿岸に運び入れることを想定してのものであり、予め東南アジア同盟、インド・ペルシア連

邦、アラブ同盟とアフリカ連邦に話は通している。
「更に、今後ＵＳＮＡでひと騒動起きる可能性が極めて高く、現在当該国に滞在している魔法師たちがフランスを経由する形で日本に帰るプランを考えておりますが、その際に欧州各国で跋扈している反魔法主義の結社を潰す様に依頼します」
「そこまでしていただけると……セナード大統領」
「そうですな、シュミット首相。これは、断る理由はありません。神楽坂殿、我がフランスも貴方と司波氏が進めている魔法核融合炉プロジェクトに賛同させていただきます。そして、必ずやイギリスに一泡吹かせてみせます」
［恒星炉］の技術輸出に加え、その先駆けとして水素エネルギーの輸出だけでなく水素発電の技術供与。更には、大陸諸国で暗躍している反魔法主義の結社を潰して、魔法師への風当たりを抑制するという申し出。
東洋の島国が大国の圧力に屈することなく独自の路線を進んでいる以上、それに負けていては伝統ある欧州の国家として名折れに等しくなる。ヴィクターは座ったまま深く頭を下げた。それを見たクルトも静かに頭を下げた後で述べる。
「本来、ローゼン・マギクラフトの件で貴方の機嫌を損ねるような真似をしたにもかかわらず、この場に招待いただけただけでなく、そこまで買っていただけるならば東ＥＵの諸国を説き伏せて欧州連合の再結集を必ずや成し遂げてみせます。我がドイツも貴方と司波氏のプロジェクトに賛同いたします」
「……分かりました。貴方方の決意は結果を以て見届けさせていただきます」
第三者から見れば、未だ十代の少年にいい歳の大人たちが頭を下げるという不思議な光景。だが、ここにいる三人は悠元がどういった存在なのかを良く知るからこそ、まるで年上の人間を相手にしているかのように振舞った。
三人に対して『折角ですから、日本観光でもしていってください』と労いの声を掛け、各々護衛や通訳を連れて出ていき、部屋には悠元一

人となったところで深く椅子に座る様に凭れ掛かった。
「……自分が蒔いた種だが、エドワード・クラークと直接対話する羽目にならなかっただけマシか」
大方、今頃会談している達也から『悠元と交渉できないか』と言われている可能性もあっただけに、それを回避できたことは大きかった。余りにもしつこい場合は保有している米国債の半分――――５０兆円分を今すぐにでも売却する構えを見せるつもりだっただけに。
すると、部屋の隅からひょっこりと顔を見せて近付く姿に気付いて、悠元が声を発する。
「ご足労を掛けたな、深雪」
「いえ、先程まで交渉されていた悠元さんほどではありませんよ。先程お兄様からメールが来まして、きっぱりとお断りしたそうです」
「そうか……」
深雪からのメールによると、エドワード・クラークが直球を投げかける形となったが、達也は『ＳＴＥＰ』計画への参加を理由に固辞した。日本魔法協会の面子を完全に潰した形だが、先日達也の別荘を見張っていた件からして〝自業自得〟だろう。達也からすればどこ吹く風と言わんばかりのものでしかないが。
深雪はそのまま悠元の隣の空いている椅子に腰かけて、悠元に視線を向けた上で問いかける。
「これで、ディオーネー計画へ参加する心配はなくなったとみていいのでしょうか？」
「そうなってくれるのが一番だが、連中には前科があるからな」
ＵＳＮＡの前身となる旧合衆国時代に遡る話だが、第二次大戦前に日本へ幾度となく無茶苦茶な持論を振り翳して、最終的に戦争参加への口実に利用した事実がある。そもそも、当初の入植者の大半は欧州系の人間が多いため、その意味で欧州系白人の気質が更に先鋭化したといっても過言だと言えない側面がある。
力を向けられるのが怖いのならば、欲するものを与えることで相手の機嫌を取ればいいのに、この辺は古来の人種差別に端を発した気質がどうしても拭い去れない。長年に渡って恨みや妬みも混じったプ

ライドという部分は時間を以てしても解消されない事実は、東シナ海を挟んで日本の西側にある大陸国家がその代表例。
「今講じている策も、まだ当人たちの面子を潰しているだけのもの。これで諦めないというのならば、次は当人たちの社会的地位を完全に潰す策を講じる。対象はエドワード・クラークにレイモンド・クラーク、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフにウィリアム・マクロードの四人には死ぬよりも辛い目に遭わせてやる」
前者の父子についてはＵＳＮＡに責任を負ってもらい、後者の［十三使徒］についてはベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の新ソ連内における信頼を破壊する。そして、もう一つの戦略級魔法［オゾンサークル］についてだが、フランスとドイツに新たな戦略級魔法の起動式を一つ提供することでＥＵ諸国内での［オゾンサークル］の相対価値を下げるのが狙い。
その魔法の名は［氷河期（グレイシャル・エイジ）］――本来は深雪の戦略級魔法となるはずだった魔法を悠元が改良した代物で、［オゾンサークル］や［トゥマーン・ボンバ］を見据えた相転移分子凍結魔法。そして、この魔法は先んじて剛三が鍛え上げた［ドラキュラ］と呼ばれる少女に渡している。
使わずに済めば越したことはないが、相手が相手なだけに意固地となって攻撃してくる可能性は捨てきれない。そう思いつつ悠元は静かに立ち上がったので、深雪もそれを見て静かに立ち上がって悠元の隣に立つ。
「さて、今日の用事は終わったから帰ろうか」
「畏まりました、ご主人様」
「……せめてこういった場所では遠慮しような」
この部屋には悠元と深雪しかいなくとも、公の場である以上はせめて控えてほしい……という儚い願いを込めて呟きつつ、二人は揃って部屋を後にした。
◇　◇　◇
そして、翌日の日曜日。雫には先んじる形で北山家の屋敷に行かせた（実家なので〝帰らせた〟という表現の方がいいのかもしれない

が）あと、昼食までマンションでゆっくりと過ごしてから神楽坂家のリムジンで北山家の屋敷に出向いた。
　先日の悠元と潮の会談はあくまでも元老院四大老と国内のいち財閥グループのトップの会合であり、今回はトライローズ・エレクトロニクスのトップとして出向くため、体面上は新興企業のトップが出向く形を取った。
　とはいえ、潮からすれば娘婿が国内でもトップクラスの企業グループを有する実業家となるため、雫の絡みで訪れた時よりも更に丁重なことになっているのに対して、どう反応していいのか分からなかった。
　潮がＳＴＥＰ計画に賛同してくれることも、財界からの申し出を引き受ける窓口となることも確約してくれた。今回の会談はより踏み込んだ部分――――全スキームを事業化させる際に伴うプラントの建設費や運営費の試算について、潮との会談で出すこととなった。
「これが、現時点での試算となります。物価や法定時給などの時勢による変動は発生いたしますが、誤差は大体５パーセント以内に収まると見込んでおります」
「いや、現時点でここまで出ているとなれば、こちらとしても財界での交渉材料として使えるだけに助かるよ。ついては、グループ内に海水中の資源採集を研究している会社も参画させたいが、構わないかな？」
「はい。当社の機密に関する情報管理事項を遵守して頂ければ問題ありません」
　高校生という身分ながら、経済や工業技術などの知識は大の大人ですら感服させてしまうほどの頭脳を有する悠元。前世で得た夢の実現への武器を最大限に駆使しているわけだが、悠元の倍以上を生きている潮からすれば、娘の相手がここまで〝出来ている〟というのは父親として嬉しく思えてしまった。
　そして、ＳＴＥＰ計画に関する話を終えたところで悠元から話を切り出した。
「そういえば、雫はどちらに？　てっきり同席するものかと思ってお

りましたが」
「娘は今、留学していた頃に知り合った男子学生の相手をしていてね。昨日いきなり会いたいと申し出てきて断ろうかと思ったんだが、無碍にも出来なくてね。君たちにも無関係の人間ではない」
「その男子学生の名は？」
「彼の名は、レイモンド・クラークと言うらしい」
レイモンドが雫に会いたいと申し出ていたのは雫経由で聞いていて、下手に断るよりは受けた上で現実を見せた方が早いと判断して、雫に『偶には家に帰って家族と団欒を過ごす時間位過ごしても罰は当たらないから』と言い含めた上で北山家の屋敷に行かせた経緯がある。
悠元としては別に問題ないが、そう決意した上で達也と深雪をみやった。
「なら、会ってやるか。達也に深雪はどうする？」
「俺も行こう」
「私も同席します」
三人のやり取りを聞き終えた上で、潮が使用人に命じて三人を雫がいる場所に案内させた。案内された先は雫の部屋ではなくティールームで、流石に嫁入りが決まっている北山家の令嬢を悠元以外の男性と二人きりで過ごさせるわけにはいかなかったが故の配慮なのだろう。
「雫、失礼してもいいかしら」
「深雪……うん、どうぞ」
深雪が率先する形で声を掛けると、雫の目線が廊下に向けられる。その表情にはどこか安堵のようなものが垣間見えていた。
「二人きりを邪魔して悪いな、レイモンド・クラーク」
「それは皮肉にしか聞こえんぞ、達也。同席させてもらってもいいか？」
「司波達也に神楽坂悠元……うん、どうぞどうぞ」
深雪と達也、そして悠元の乱入に戸惑う素振りを見せたが、すぐに気持ちを切り替えるように三人を招き入れる姿勢を見せた。

「達也とは昨日ゆっくり話が出来なかったし、悠元とは一切話す機会が無かったからね」
「達也はまだしも、俺に何の用だ？　何をされようとも何も出てこないぞ」
　雫を口説いていたのではないか？　とも訝しんだが、レイモンドの興味が移ったことに対してあまり追及されないように皮肉を込めて呟く。それまでレイモンドの正面に座っていた雫のところに悠元が座り、その両側を固める形で雫と深雪が座り、深雪の隣に達也が座る形となった。
「何せ、君の考えや想いは一切分からなかったからね。ねえ、悠元。あの計画の〝ステップ〟はどういう意味なのかな？」
　パラサイト事件の時に言い放った「殲滅神（エクスキューショナー）」みたいな呼び方をしたら一発どついてやろうかと思ったが、それに比べれば馴れ馴れしい呼び方をされる方がマシと判断して、レイモンドの問いかけに対して答える。
「今ここでハッキリと言ってやった方がいいか？　最悪の可能性を回避するための一歩だということを」
「その口ぶりからすると、本気みたいだね」
「福利厚生はおろか、魔法師の労働環境がブラック企業よりも真っ黒の想定しか出来ないディオーネー計画に参加なんかできるか、って次元の話だ」
　元々達也の戦略級魔法を本土に向けられたくなくて立案されたものなだけに、見通しだけでなく魔法師の扱いにも細心の注意を払う気が一切見られない。命と隣り合わせが不可避となる危険な環境での仕事など、それこそブラック企業ですら〝まだマシ〟扱いになってしまう。
「酷い事を言ってくれるじゃないか」
「だが、事実だろう？　この地球ですら各地に人類が定住するまで数千年はザラに掛かってるんだ。金星のテラフォーミングだけでも百年単位なんて、現世代だけでは到底不可能なことだ」
　別に夢を見ること自体を否定はしない。だが、一つの惑星を魔法で

テラフォーミングするとしても数世代に渡るのが確定事項となる。そんな気が遠くなるような年数が掛かる計画に参加しても、自分自身が納得できなくなる。
「別に宇宙に夢やロマンを追い求めること自体にケチをつけるつもりはないし、お前が本心から父親の推進するディオーネー計画に協力するなら、お前の好きにすればいい話だ」
「……まるで、他人の夢に興味がない言い方をするね」
「人間の夢はロボットのように画一的じゃないからな。同じ夢を見る奴がいれば同じように追いかければいいし、違う夢を見てはいけない権利など誰にも存在しないのだから。その意味で、俺の夢はお前の夢と違うが」
「へぇ、参考までに聞いていいかな？」
悠元の持つ夢。それに興味が出たのか、好奇心で尋ねるレイモンド。その問いかけに対して、悠元は無意識的に抑えていた気配を出した上で言い放つ。
「これまで夢を見出せなかった者達が夢を見れる世界。諦めることしかできなかった人々に〝諦めなくてもいい〟と思わせる世界。その世界を実現させられる国家形成の為、俺は護国の力となることを決めた」
前世で諦めたものや妥協したものは数え切れず、とりわけ身近に世界的な有名人が二人も出たことから命を狙われたり誘拐紛いの経験も数え切れなかった。だが、迷惑を掛けたくなくて警察の人に幾度も頭を下げた。
『被害者だというのに、そこまでする必要があるのか』と問われるだろうが、身内に要らぬ心配を掛けたくないが故のお節介に近かった。
そんな経験をする人間をこの世界で見たくなどない。
かつて自分が受けた過去を誰かがそんな目に遭うことは許さない。
全てを救う事など一人で出来る範疇に無いため、せめて手の届く範囲で守り切る。
自分が叶えたい世界を実現させる邪魔をするのならば、誰であろうとも排除する。

「改めて言わせてもらう。お前が夢やロマンを求めて宇宙に飛び出したければ好きにしろ。だが、お前の夢に俺や達也だけでなく、世界まで巻き込むのはお門違いの話だ。お前にこれ以上話す口は持たないから、とっとと帰って父親にこう言っておけ。『魔法だけを見て魔法師の為人を考慮しないどころか、日本に敵意を隠そうともしない戦略級魔法師と手を組む人間と話す気になど到底ならない』とな」

「……」

達也がクラーク父子に対して明確な参加の拒絶をしたのならば、悠元がレイモンドに言い放ったのは純然たる事実の提示。そしてそれは、仮にＵＳＮＡそのものやディオーネー計画に賛同している新ソ連とイギリスが敵に回ったとしても一向に構わない、という意思表示を込めてのもの。

どうせ、最後の手段として悠元や達也を暗殺しようと目論むだろうが、その時は暗殺部隊を完膚なきまでに叩きのめすだけでなく、黒幕全ての情報を全世界に公表して面子を完全に潰す。戦略級魔法を使った場合は、相手が［十三使徒］だろうと殺す。こちらを殺すということは、当然殺される覚悟を以て行うことであり、これで逆上したら金融・経済面を含めての報復も辞さない。

悠元は一切殺意を込めていないにもかかわらず、レイモンドに出来た反応は顔を蒼褪めさせるのが関の山であった。

理想にしがみ付く者、現実を見据える者

レイモンドはよろよろと立ち上がり、雫に「もう帰るよ」とだけ呟いて部屋を後にしていった。流石に悠元だけであの様ならば、達也への問答など死体蹴りにしかならないと踏んでのものだろう。悠元と達也に対して『まだ諦めない』と言いたげな視線は感じたが、悠元から厳しい視線を向けられて逃げるように出ていった。

レイモンドの存在が屋敷の外に出たことを確認すると、悠元は気配の抑制をして一息ついた。

「ふう、流石に肩が凝りそうだったわ。雫、お茶を一杯貰えるか？」

「そうだね。悠元や達也さんたちの分をお願い」

雫は使用人に声を掛けると、それを聞いた使用人が静かに出ていく。ついでに今まで開けていた扉を閉めていった。ようやく落ち着いたところで達也が声を発する。

「結局、俺への問答はせずに行ってしまったな。あの様子だと諦めていないようだが」

「みたいだな。折角だから何か見るか」

悠元が手元にあったリモコンを操作すると、モニターに映ったのは番組に出ているエドワード・クラークの姿だった。先程のことで悠元が機嫌を損ねるのではないかと達也や深雪は思ったが、当の本人は逆に呆れるような素振りを見せていた。

『――ですから、魔法を本当の意味で人々に役立てるのならば、宇宙開発で活用すべきなのです』

テレビの中にいるエドワードは英語で喋っており、字幕が彼の台詞を同時翻訳している。

『魔法核融合炉は素晴らしい発明だと思います。しかし、それは燃料の補給が困難で太陽光の供給が不安定な、例えば木星の衛星上で用いられるべきです。核融合発電なら、衛星が公転によって木星の陰に入る時期でも安定的に電力を供給できます』

「魔法師でない人間が知ったふうな口を利くな、と言ってやりたいな」

エドワード・クラークが述べているのは、ＳＴＥＰ計画をディオー

ネー計画の下に見ているという優劣の差別が含んだもの。大体、電力を確保したとしても長期間滞在するための食料や水、それに居住環境に目途が立たなければ人が生活する上で意味がない。
　規模のスケールで言えばディオーネー計画に軍配が上がるのは確かだが、そもそも魔法師に対する扱いでいえば、不透明過ぎるディオーネー計画に対して透明性が極めて高いＳＴＥＰ計画。夢やロマンという理想を除けば、真っ当な魔法師ならどちらを選択するかなど自明の理だろう。
『海洋開発は、他の技術でも十分代用できます。海上太陽光発電や地熱発電を使えばプラントに必要な導力は確保できる筈です。魔法という稀少な才能は、もっと有意義な用途に使われるべきなのです』
「……レイが言っていたことと被って聞こえるね」
　雫が率直な意見を口にした。悠元たちが来たときにはそこまで具体的な言葉を発しなかったので、恐らく二人で話していた時にレイモンドが述べていたことだろうと思われる。
　魔法の才能は個々の資質に依存するため、有意義な用途に使われる前に軍事の分野で用いられてしまっている。それを防いで社会的な貢献を積み上げるための手段が［恒星炉］だというのに、モニターに映る人物は建前を力説して魔法の平和的な利用は宇宙開発しかない、とでも言いたげな持論を展開している。
　まるで、『魔法師が自ら望む将来を選んではいけない』とでも宣うかのように。
「それで、悠元。今後ＵＳＮＡからの妨害は想定されるが、それ以外にも気を付けた方がいい部分はあるか？」
「新ソ連とイギリスの動き次第だな。特に前者はベゾブラゾフが計画に賛同しているような素振りを見せている以上、連中の工作が停滞すれば仕掛けてくるだろう」
　これは原作知識に限った話ではなく、この世界では悠元と達也によって［トゥマーン・ボンバ］の発動を阻害されている。大体、佐渡に関する事や宗谷海峡でやらかしておいて、達也を物理的に排除しようと目論まないということにはならない。相手の国家が〝ソビエト

〝の名を使う限り、その野心と気質が簡単に変わっていないことの証左とも言えよう。
悠元は『これ以上見る価値もない』と判断して別の番組に切り替えると、ディアッカ・ブレスティーロ大統領とヴィクター・セナード大統領、クルト・シュミット首相が揃って首相官邸の一室を借りる形で記者会見を行っていた。
『よって、我が南米連邦は真なる魔法の――――いえ、それを行使する魔法資質保有者の人権を守るという意味で、トライローズ・エレクトロニクスが進める魔法核融合炉事業に対する支援の意思を日本政府にお伝えしました。両側にいらっしゃる東西ＥＵの中核を成すフランス共和国、ドイツ連邦共和国の国家元首の方々も我が国の方針に賛同いただけました』
「さて、世界はどう動くのやら……」
［恒星炉］が齎す影響は並大抵のものではない。これまでのエネルギー産業システムに大きな変革をもたらすこととなる。ＳＳＡがいち早く支持を表明することで［恒星炉］技術供与のレースに先んじる形となった。
そして、東西ＥＵの主要国がＳＳＡを後押しする構図が完成したことで、欧州諸国をはじめとした世界各国がどういった対応を取るのか。
なお、事前に水素ガス輸出・水素発電技術の絡みでスペイン、イタリア、ギリシャ、トルコに打診したところ、好意的な反応が返ってきた。それとは別に、海岸線を有するポルトガル、オランダ、ベルギー、アイルランド、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ポーランドから水素ガスと発電技術輸出の打診を受けたが、ジブラルタル基地を有するＵＳＮＡからの通行許可が難しいとして回答を保留にしている。
仮に国家間で融通するとしても、まずは旧ＥＵ諸国内で水素ガスに関する共同管理条約が必要となる。その為に、足掛かりとしてフランスとドイツで共同条約を結ぶことにより、ジブラルタルを通過せずともドイツで水素発電が出来るモデルケースを作る。そうすれば、ガス

もしくは電力供給の融通を旧ＥＵ諸国間で出来るようになる。
　更には、イギリスもそれに加わるとなるとフランスとドイツの同意を得なければならず、更には海路での輸送となれば、大洋南部海上連携協定に関与している日本とＳＳＡ、インド・ペルシア連邦やアラブ同盟、東南アジア同盟の了解まで取らなければならない。仮にドーヴァートンネルを介するとしてもフランスが了解しなければ無理な話となる。
　仮に欧州方面でパイプラインを形成するとなれば、それだけで国家規模の公共事業として成立するため、イギリスの存在を無視してでも打診をしたのは自国に対する利益を最優先した結果とも言える。
「仕掛けるって、軍隊を派遣するってこと？」
「それもあるかもしれんが、それよりも確実な手がある。ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］による遠距離攻撃だ」
　原作と異なるのは、日本国内にいた新ソ連のスパイと思しき工作員は全員国外追放している。親ソ派または親米派の人間を通じて情報を入手する可能性は捨てきれないが、仮にベゾブラゾフが攻撃した場合は新ソ連に対して厳しい態度で臨むように日本政府へ要請する。
「ベゾブラゾフの情報は逐一探っておくから、達也は安心して自分のことに専念してくれ」
「……そうだな。そうさせてもらうことにしよう」
　その後は親しい友人のお茶会ということで、他愛ない話をした。折角だからということで夕食にも同席することとなり、北山家の送迎で町田のマンションに帰ったのは夜のことだった。
◇　◇　◇
　テレビ出演をした後、日本魔法協会にはお座なりな謝礼の言葉を掛けて、エドワード・クラークは息子と共に帰国した。ロサンゼルス国際空港に到着したのが、現地時間の午前６時。一休みしてエドワードが自分のオフィスに赴いたのは午後２時のことだった。
　国家科学局のロサンゼルス支局には、エドワードの上司はいない。支局長も、エドワードが何をしているのかを全く把握していない。
　彼には完全な個室と、完全な自由裁量権を与えられている。元々は

全世界傍受システム［エシェロンⅢ］を同僚に漏らさないための措置であるが、現在は日本の大陸間戦略級魔法対策の為のものに切り替わっていた。
「向こうは朝の7時か……待つべきか？　いや……」
　エドワードは少し思慮した後、通信機に向かった。見た目は普通のヴィジホンだが、［エシェロンⅢ］を利用した盗聴防止のシステムが組み込まれている、通話先を限定した通信機であった。
　連絡先は新ソ連。ウラジオストクにある新ソビエト科学アカデミー極東支部。相手は言うまでもなく、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ。
「おはようございます、ドクター」
『おはようございます。いえ、そちらは既に昼過ぎでしたね』
　画面を見る限り、ベゾブラゾフの表情に眠気は感じられなかった。
「朝早くから申し訳ありません」
『お気になさらず。態々こちらの時間を考慮した上で連絡を寄越したとなれば、喫緊でご相談したいということでしょう？』
「急ぎと言うほどではありませんが、ご相談したく連絡を差し上げたのは事実です」
『伺いましょう』
　社交性を考慮していたベゾブラゾフの表情が真剣なものに変わったことで、相手に眠気など無いと確信を得つつ、エドワードが話し始める。
「既にご存知かもしれませんが……日本の戦略級魔法師、司波達也はディオーネー計画への参加を拒否して、別のプランをぶつけてきました」
『把握しております。記者会見の様子は、リアルタイムで見ていました』
　しまった、という思いがエドワードの脳裏をよぎった。
　戦略級魔法師の前に魔法研究者でもあるベゾブラゾフが司波達也の記者会見に興味を持たない筈がない。昨日の時点でベゾブラゾフも情報を把握しているという前提で考えておかなければならない事

だった。
　ベゾブラゾフは、既に独自の対抗策を考え出しているのかもしれない。いや、既に進めているのかもしれない。そうなれば、最早ディオーネー計画の体裁は崩壊してしまう。
『重力制御魔法式熱核融合炉――――［恒星炉］によるエネルギーラインプロジェクト。実に魅力的なプランですね。共同研究を申し出たいぐらいだ』
「ドクター、お人が悪いですよ……」
　ベゾブラゾフの物言いがイニシアティブを取るものだと理解しつつ、エドワードは何とか冷静を取り繕うように窘めた。それでも、エドワードの狼狽の後は隠せなかった。
『申し訳ない。ですが、魔法技術によるエネルギープラントが国内外を問わず魅力的に映ったことは事実でしょう。こうなると、司波達也だけでなく日本にもう一人いるであろう戦略級魔法師を木星圏に追放することが難しくなるのでは？』
　エドワード・クラークが息子レイモンドの『第一賢人』に関する指名手配の件を棚上げにしてでも訪日したのは、達也を利用してもう一人の戦略級魔法師を探るのが狙いだった。だが、結局手掛かりとなるものはゼロだった。
　日本政府関連の情報を探っても一切見つからず、国防軍関連でも痕跡が全く存在しない戦略級魔法師。唯一分かっているのは、達也と同時期に戦略級魔法師として非公式に登録された〝上条達三〟と呼ばれている人物の可能性が高いということだけ。
「ディオーネー計画が頓挫したとは思っておりません。日本政府にエネルギープラントを建設させないよう、我が国の政府に圧力を掛けます。建設途中のプラントに事故を起こさせても良い。なので、ドクターには引き続きディオーネー計画への協力をお願いしたいと考えております」
　エドワードの提案に対し、ベゾブラゾフは「フム……」と漏らしながらも思案する素振りを見せた。
『私はもっと、そうですな、よりダイレクトな方法で戦略級魔法［マテ

リアル・バースト」を無力化することを検討していたのですが』
「ドクター！」
『ミスタークラークがそう仰るのであれば、暫くは静観することにいたしましょう。まだ判明していないもう一人の戦略級魔法師のこともありますので』
「……感謝します」
　エドワードはベゾブラゾフが短絡的な行動に出て、失敗することを恐れていた。攻撃に成功すれば問題ない。彼が司波達也を抹殺してくれれば、ＵＳＮＡにとっても大きな利となる……少なくとも、エドワードはそう考えていた。
　だが、失敗するリスクに加えて、未だ判明していない戦略級魔法師の存在がベゾブラゾフを押し止めてくれた。これまでエドワードが望んで手に入らない情報など［エシェロンⅢ］の前には存在しなかっただけに、ＵＳＮＡ軍上層部が［シャイニング・バスター］と呼称している戦略級魔法の所在もその術者も全くと言っていい程出てこなかった。
　唯一、息子のレイモンドが神楽坂悠元に対して戦略級魔法師の目星を付けていたが、目立った功績は佐渡侵攻を食い止めた［クリムゾン・プリンス］を魔法競技で破ったというものだけ。それ以外にも様々な功績の情報が存在したが、どれも戦略級魔法師に繋がる決定的な証拠にはなり得なかった。
　だが、ベゾブラゾフの話はこれだけではなかった。
『ですが、ミスター。もし司波達也をディオーネー計画に引き込むことが不可能と判断した場合、我が国は独自の路線を進むことになります。質量エネルギー変換魔法の脅威を解消するためならば、如何なる手段でも行使します』
　ベゾブラゾフの述べた〝手段〟に戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の使用も含まれている、ということを悟ったエドワードは喉の渇きで咳き込みそうになり、ミネラルウォーターのボトルに口を付けた。
「――――失礼。そうならないよう、至急手配します」
『私もそう願っています』

ベゾブラゾフの顔がモニターから消える。向こうから電話を切った形だ。
エドワード・クラークは焦燥に駆られて、別の電話機に手を伸ばした。
この時点で、ベゾブラゾフにイニシアティブを握られたような形となったエドワード。だが、エドワードに対する苦難はこれが始まりに過ぎないことを、彼自身も知らない。
◇　◇　◇
所変わってＵＳＮＡ首都――――ワシントンＤ．Ｃ．にある大統領府（ホワイトハウス）。その大統領執務室では、一人の男性が書類仕事を終えてコーヒーブレイクを満喫していた。なお、部屋の片隅にある丸太は真新しいものに交換されており、これまでに犠牲となった丸太は余すことなく別の形で再利用されている。
「ふぅ、ディオーネー計画などという馬鹿げるにもふざけ過ぎた計画のせいで落ち着かなかったが……」
そうやってのんびりしていたジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領のもとに、ノックの音が響く。ジョーリッジが入室を促すと、入ってきたのは秘書官の一人であった。
「失礼します。大変恐縮でございますが、こちらを」
「ふむ、そこまで急ぎという感じでもないが……」
ジョーリッジが秘書官の様子を見つつ、渡された端末に目を通す。それを見終えたジョーリッジは静かにコーヒーカップと端末を置き、ゆっくりと立ち上がると丸太に近付いて、見る人が見れば綺麗な正拳突きが丸太に直撃した。
丸太には綺麗に拳の跡がつくが、丸太自体は跡以外に罅などの痕跡がなく、大統領の拳には傷や出血の痕は一切見られない。信じられないだろうが、本当に魔法師の資質がなく、己の肉体だけで成している。そして、今更それを咎める人間などホワイトハウスにはいない。
「か、閣下？」
「……君、今の手配は何処からの差し金だ？」
「あ、はい。発信元は……国防総省（ペンタゴン）からとなっております」

「そうか……スペンサー国防長官に『今すぐホワイトハウスへ来い』と指示を出せ」
「は、はい！　直ちに！」
大統領が目にしたもの――――それは、日本政府に対して圧力を掛けるという内容。ひいては魔法核融合炉によるエネルギープラント計画への妨害要請だった。
ジョーリッジも日本のＦＬＴで行われた『ＳＴＥＰ』計画の記者会見を見ていた。その中には孫娘たちの婚約者が揃って壇上に立っており、計画の中心メンバーとしてトライローズ・エレクトロニクスの理事長と名乗った神楽坂悠元は、大統領にとっても決して無視できない存在だった。
その彼を怒らせることに加担しろなどと言われても、ジョーリッジにとっては到底承服しかねることだった。大使館による報告では司波達也がエドワード・クラークに対してディオーネー計画への参加を明確に拒否したと聞き及んでいる。
現政権の長官クラス以上はおろか連邦議会が乗り気でない上、財界も先の見えない膨大な負担に怯えている。一方、北米魔法協会や航空宇宙局（ＮＡＳＡ）は独自のプレス発表を取り止めるつもりもなく、軍部に至っては日本の戦略級魔法を無力化することを諦めていない。明らかに国内の各方面で意見の乖離が見られることに、一国の元首として深い溜息を漏らした。
「こうなると、メイトリクス大佐の予想も現実味を帯びて来るであろうな……せめて、リーナたちが無事に脱出できるように手配はせねばなるまい」
ジョーリッジは少し思案した後、机の通信機で電話を掛けたのであった。

無責任なやり方など許されない

エドワード・クラークはＵＳＮＡ政府を通して日本政府へ妨害を掛けようと工作を始めた。それに気付いたジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領はすぐさま国防総省のリアム・スペンサー国防長官を呼び出し、事の次第の聴取を始めたのだった。

ジョーリッジ自身、スペンサーの意思ではないにせよ、政府内に［恒星炉］の出現を快く思わない輩が出ることは想定の内だった。

ＵＳＮＡ政府からすれば日本に対してかなりの失点と借りを有している為、これ以上日本の機嫌を損ねるような真似は慎めと強く釘を刺していただけに、ジョーリッジの怒りはただで収まらない状態だった。

「――――それで長官。こんなバカな真似をした連中は如何程になる？」

「どうやら、先日のジード・ヘイグの件で割を食った一派が協力しているようです」

「与党の窓際に追いやられた連中か……野党に付け入る隙でも与えて嬉しいのかね？」

「我々はそういう立場の生き物ですからな」

スペンサーの調べによれば、ジード・ヘイグ（顧傑）の件で旧型兵器の手引きをしたとして水面下で処罰された一派が妨害要請を主導しているとのことで、その中にはＦＢＩ（連邦捜査局）やＣＩＡ（中央情報局）の一部も加担している、という結果が出た。

ジョーリッジの愚痴にも近い言葉に対し、スペンサーは窘めるように呟いた。

「それで、その連中を焚き付けた輩がいるはずだが、足取りは掴めたか？」

「いえ、見つかった暗号メールは全て宛先が追跡できないように細工されていました」

「……それが出来る者は限られるが、下手に法を振り翳すことも難しいな」

水面下で処罰することも可能だが、エドワード・クラークだけを捕まえるのではなく、その息子であるレイモンド・クラークも何らかの形で政府の監視下に置かなければならない。だが、公の罪とするにも状況証拠が足りず、しかもディオーネー計画の中心にいるがために干渉するのも難しい。

このメールの件を根拠にして法的な拘束を行うにしても、［エシェロンⅢ］でこちらの動向を把握した上、更には悪用して何処かに行方を晦ませる可能性もある。つまり、クラーク親子は［フリズスキャルヴ］もとい［エシェロンⅢ］そのものを人質としてＵＳＮＡへの圧力を掛けているに等しい状況となっている。

一番手っ取り早いのは［エシェロンⅢ］を停止させることだが、ディオーネー計画が仮に頓挫すれば新ソ連が動き出すことは容易に想像がつく。その時に有用な情報収集ツールを失った状態で新ソ連に対抗するのは大きなリスクを支払うことになる。

「ディオーネー計画が頓挫すれば、新ソ連は間違いなく動く。狙いは第一に日本だろうが、それが起きた時に……」

「大統領？」

「スペンサー長官。新ソ連が軍事行動に相当する行為を行った際、我が国は『同盟国としての責務』を果たしたい。私と長官で〝アンジー・シリウス少佐〟に任務を与えることは可能かね？」

「え、ええ。大統領だけでも十分可能かと存じますが……懸念がおありで？」

スペンサーが訝しんだのは、ＵＳＮＡ軍全体の最高司令官という立ち位置にいるジョーリッジが国防長官の許可まで求めたという点だ。その疑問に対して、ジョーリッジは静かに話し始める。

「最近の軍部は、どうにも日本の戦略級魔法を無力化することに拘り過ぎている気がする。いや、どちらかと言えば〝四葉〟という悪名に対してなのだろうな」

「……かの国が我が国を脅かすのではないか、という意見は耳にしておりますが」

「そこで大国の力を使って日本を脅すとなれば、第二次大戦（リメンバー・パール・ハーバー）以上

の惨劇は免れない。大漢軍（ダーハン）に強烈な被害を齎したという上泉殿の件もある。私に旧合衆国のフランクリン・ルーズベルトのような役割を担えと言うのか、連中は！　……スペンサー長官、すまない」
「いえ、大統領が怒るのもご尤もかと思われます」
　数十人で一国の中枢を潰した四葉の一族。それだけならばまだしも、大漢軍の殆どを壊滅に追いやった上泉剛三。その二人の血筋は司波達也と神楽坂悠元にそれぞれ継がれた。彼らの実力は不透明だが、少なくとも悠元は昨年の時点で〝アンジー・シリウス〟はおろか〝セリア・ポラリス〟すら完封した。
　この時点で、日本に勝てる見通し（ヴィジョン）があるというのならぜひ教授してほしい……というのが、ジョーリッジの偽らざる本音であった。
「私やヴァージニア・バランス大佐でも十分可能だが、ＵＳＮＡ政府としての正当性を確保する意味で、スターズを管轄するペンタゴンの長である長官にも協力してほしい。頼めるな？」
「今回の組織の失態を取り返す意味で、私に選択肢などありません。それで、名目は如何いたしましょう？」
「そうだな……ならば、欧州各国にいる反魔法主義組織の検挙協力並びに新ソ連の軍事行動の抑止という形で派遣する。向こうもこちらの虎の子とも言える［十三使徒］の派遣ならば首を横には振らんだろう」
　現在、ＵＳＮＡにはＳＳＡ（ハンス・エルンスト）、イギリス（アニエス・ヴィンセント）の関係者もいるため、事が起これば彼らも無事に国外へ送り出さなければならない。その為には、彼――ジェラルド・メイトリクス大佐にも出張ってもらうことになるだろう、と踏んでいた。

◇　◇　◇

　日本政府――より正確に言えば、外務省の親米派の役人――による妨害工作は、ＵＳＮＡ政府――こちらも顧傑の件で割を食った一派――からの要請に基づくものだった。これを知った総理大臣は外務大臣に対して魔法協会への圧力を直ちに止めるよう要請した。
　原作の時点では貿易面と外交面で不利益が生じないようにＵＳＮ

A政府の要請を受けていたが、既に株式会社として成立しているトライローズ・エレクトロニクスの株主の素性を知っているだけに、総理大臣はＵＳＮＡからの妨害を食い止めることに腐心した。
　多忙を極める状況にあった政界を知ってか知らずか、経済界のほうはかなり順調な流れが形成されていた。
「北方さん、早速例の事業に関わっているようですね」
　北方という名は北山潮のビジネスネームであり、非公式の昼食会でもビジネスネームがある場合はそちらで呼ぶのが一種のマナーとなっている。とはいえ、政府や地方自治体の公式行事の場合は本名しか名乗れないことの方が多い。
「流石は室町さん、お耳が早い」
　潮が言葉を返した相手――――「室町」という名も勿論ビジネスネームである。グループの規模こそホクザングループに劣るが、遥かに伝統がある旧財閥系企業群の実質的オーナーで、潮の兄貴分的存在だ。
「もう出資が決まっているとも耳にしました。一体どのようなご縁なのですか？」
「そこまでご存知だとは。岩田さん、何方からお聞きになったのですか」
「そこはそれ。いろいろな方面からですよ」
　そうやって話しかけてきたのは、潮にとって敵対的なライバルグループの総帥。つい先日も海外の大口案件を奪い合ったわけだが、そこに神坂グループが介在して互いに利のある形で決着を見た過去がある。
　とはいえ、そんな事情を顔には出さず、互いに会話を通じて破顔していた。
「別に隠すことではありません。神楽坂君と司波君は娘と同じ第一高校の生徒でしてな。とりわけ神楽坂君は娘と同じクラスメイトでもありますので」
「それは良縁とも言えますな。親しくされていらっしゃるんですか？」
　潮に尋ねてきたのはまた別の同席している者だが、こうまで噂が流

れるのが早いとなると、大方『四大老』が大きく関与しているのだろう、と潮は内心で感じていた。東道青波も無論だが、先程名を出した彼も少なからず関わっているのかもしれない、と。
いきなり新事業に金を出すという行為は正直博打でしかない。だが、既に大口の出資者がいれば少なからず『出してみるのもいいかもしれない』と思わせることにも繋がる。
それに、経済界でも〝神楽坂〟の名を知らぬ者はいないに等しい。神坂グループの経営母体と噂され、政界や魔法界にも強い影響力を有する大家。類を見ない経営手腕で、この国でも最大級の企業群を束ねる財閥が関与しているとなれば、お近づきになりたいという欲が出ても何ら不思議ではない。
「北方さん、神楽坂君と司波君を紹介していただけませんか」
一人がそう申し出れば、こぞって潮に申し出が殺到するのは自明の理。この辺は悠元からも財界の取りまとめを任されているだけに、『彼は人の心を掴むのが上手いな』と感心しつつも「皆さんのご要望はお二人にお伝えします」と答えたのだった。
◇　◇　◇
リーナは一時期日本にいた頃、魔法や体術の訓練を欠かさずに受けていた。正直スターズでは学ぶことのない分野を学んだことによって、帰国したリーナからすれば、今まで辛いと思っていた訓練も涼しい顔で受けられるまでに成長していた。筋肉がついて引き締まった分、その分の体重増加で体重計と睨めっこすることも増えていたが。
そんな個人的事情はさておき、訓練を終えたリーナに呼び出しがかかった。
訓練の終了後に呼び出すというのは今に始まった事ではないが、先日エドワード・クラークの護衛という形で出向いた際、知りたくもないＵＳＮＡ軍の暗部を知ってしまった。
『今回の会議に際して、貴方の上司に報告する必要はありません』
会議終了後、エドワード・クラークに脅迫を仄めかす様な言葉を掛けられた。事前に大統領である祖父から『報告の必要はない』という言葉が無ければ反論していただけに、内心で感謝の念を禁じえなかっ

た。また、悠元の説教に比べると〝優しい〟と思ってしまったため、その時は正直に『了解しました』と簡潔に述べておいた。
流石の相手も若干面を食らったような素振りを見せたが、直ぐに取り繕うようにしつつエンタープライズのことについても報告はしないように釘を刺してきたため、そのことについても簡潔に返事を返していた。
もし、あの時エドワード・クラークが達也の名を出そうものならば、反射的に拳が出ていただろう。それで問題となったとしても、堂々と日本に帰れる口実を作れたかもしれない……と、リーナが少しばかり後悔したのはここだけの話。
そんな過ぎたことはともかくとして、司令室の前までもうすぐというところで、リーナにとって見知った顔が目に入った。
「ベン!? 貴方も呼ばれたのですか？」
「そう仰るということは、総隊長殿もですか」
リーナとカノープスが揃って呼ばれること自体珍しいことではないし、カノープスが同席するとなれば安心できる材料もある。だが、最近の時勢からして絶対にロクでもないことが待っているとしか思えなかった。
「アンジェリーナ・シリウス少佐、参りました」
「ベンジャミン・カノープス少佐、参りました」
「入れ」
指令室の扉の前で声を発すると、扉の向こうから返ってきたのは女性の声。それもリーナにとっては聞き馴染みのある声に驚きつつも、カノープスを制する形で扉を開けるリーナ。すると、司令室の椅子にはヴァージニア・バランス大佐が二人を待ち構えていた。
カノープスも中に入って扉が閉まったところで、二人はバランスに対して敬礼をした。それを見た上でバランスも答礼をする。
「楽にしてくれ。まずは私がここにいる理由だが、大統領府（ホワイトハウス）の命を帯びてこちらに出向いた。ウォーカー大佐には暫く休憩を取らせているから、安心するといい」
「ホワイトハウスの……失礼ですが、大統領閣下の命令ということで

しょうか？」
「その認識で構わない、カノープス少佐」
　この時期に大統領府の命を帯びてバランスが出向くこと自体、異例と言えば異例である。更には、スターズを監督するウォーカーにも聞かせたくない内容のようで、バランスがカノープスに目配せをすると、その意図を察したカノープスが遮音フィールドを部屋に展開する。
　その一連の動作を終えたのを確認してから、バランスが口を開く。
「まず前提の話だが、司波達也が『灼熱と極光のハロウィン』を引き起こした戦略級魔法師という事実は両名とも承知の話だと思う。実は、新ソ連に対して使用された戦略級魔法の術者に私は直に会ったことがある」
「それは何時の話でしょうか？」
「我が軍の脱走者が日本へ逃げた時のことだ……その様子だと、シリウス少佐は知っていたようだな？」
「ハッ。当人より妹の誼で詳細を聞かされております」
　この場の会話が漏れる可能性は極めて低いため、バランスの問いかけに対してリーナは正直に情報を開示した。それを聞きつつ、バランスは説明を続ける。
「カノープス少佐。その片割れの名は神楽坂悠元。上泉剛三の孫にして、神楽坂千姫の養子となり、かの［トリックスター］と呼ばれた九島烈に認められた次代の日本魔法界を担う少年」
「彼が……成程、ラルフがあっさりと敗北させられたのにも頷けます。この事実を参謀本部は？」
「いや、知らない。ＵＳＮＡ政府でも大統領閣下を含むごく一部にしか開示されていない情報だ。なので、国家重要機密に準じる秘匿と心得てくれ」
「了解いたしました」
　バランスがカノープスに悠元の素性を明かしたのは、彼も悠元の実力を肌で感じ取っていたからこそであり、スターズにおいても指折りの常識人という為人からくるものだった。カノープスも事の重大さ

を把握した上で了解の意思を示すと、バランスは机の上で両手を組む様な仕草を見せた。
「話を戻そう。その両名が国家科学局（NSA）の要請を蹴って新たなプロジェクトを立ち上げたことは聞いているか？」
「存じ上げております」
バランスの問いかけに答えたのはカノープス。リーナは『達也がディオーネー計画の参加を蹴ったらしい』ということは知り得ていたが、その詳細については分からなかった。
「重力制御魔法式熱核融合炉を用いたエネルギープラント建設を含む日本の次世代エネルギーラインプロジェクト。幸いにして、これによる資源産業へのダメージはまだ想定の範疇に収まるだろう、と政府は見ている」
燃料エネルギーが化石燃料から太陽光、風力、地熱、バイオ燃料などと言った分野にシフトしたことにより、石炭・石油、天然ガス、原子力の関連企業は甚大なダメージを被った。だが、日本が提唱する次世代エネルギーは既存のものを生かしつつ、工場などの計画停止に相当する時間帯の電力供給によって、災害に強いライフラインの構築という形を取っている。
広大な国土を有するＵＳＮＡにとっても、大型のハリケーンや竜巻、大雪などといった自然災害に直面する頻度は高い。その状況下でも安定した電力供給は課題とも言えた。
なお、原子力に対する人々の忌避感は低下している。それでも、現在使用されているのは低日照地域向けの小型原子炉が関の山であり、主な要因はウラン資源の高騰と放射能抑止の為に雇わなければならない魔法師の人件費であった。核兵器は封印され、プルトニウムも民生用に放出されないように厳重な管理を徹底している。
「問題はここからだ。参謀本部の中に両者が関与するエネルギープラントに破壊工作を仕掛けてはどうかという意見が出ている。その大本は戦略級魔法を無力化出来ないことに対する我が国の不都合を解消するため、というのが彼らの言い分だ」
「……大佐殿、率直に申し上げます。仮にそんなことをすれば、ＵＳＮ

Ａが世界的な損害を真っ先に被ることとなります。いつからスターズはマフィア紛いの殺し屋集団となったのでしょうか？」
『最悪』などという言葉で片付けられれば、どれだけ良かったことだろう……と思いながら、リーナは自分自身の立場からではなく、これまで見知った情報から弾き出した事実を口に出した。
「昨春の［セブンス・プレイグ］でも、我が国は多大な賠償を強いられてしまいました。いくら同盟国が相手とは言え、そのような行為は立派な内政干渉に相当します。何より、［恒星炉］に関する会社のトップである神楽坂悠元は敵意を向けた相手に一切容赦しません。魔法のみならず、あらゆる手段を講じてＵＳＮＡの面子を底抜けにしたとしても何ら不思議ではありません」
達也だけでも脅威なのに、悠元まで敵に回す気になど到底ならない。更に、彼が敵に回るとなれば深雪や双子の妹（エクセリア）まで確実に敵に回ることとなる。
「それに、実力で言えば小官よりも上の彼女――――エクセリア・シールズが彼の味方に付くことが想定されます。未だ軍籍を持つ身で大変失礼なことかもしれませんが、小官としては負けることが分かっている相手と対峙して、部下に『死んで来い』と無責任な命令など下せません」
その四者を敵にしたとなれば、ＵＳＮＡが相手であっても無事に済む保証などない。この国の軍上層部は馬鹿なのか？　と内心で愚痴りたくなる反面、リーナの口から出た言葉は冷静さを保っていた。

５０００兆パーセント無理な難題

リーナの発言に対し、バランスは個人の感情ではなくＵＳＮＡ軍人としての発言だと察しつつも、カノープスに視線を向けた。
「カノープス少佐、貴官はどう考える？」
「暗殺の是非以前に、エネルギープラントの破壊工作も止めるべきであると具申いたします。小官はジード・ヘイグ追跡の件で日本の力をまざまざと見せつけられました。最早、かの国は国土の大小にかかわらず、世界における主導権を握れる立場に立ったとみるのが妥当です」
ジード・ヘイグの件では、かの英雄である上泉剛三に完敗を喫した。南盾島では、その孫である悠元に対して有効な攻撃手段を見いだせなかった。そして、隣にいるリーナはおろか、〝ポラリス〟相手ですら歯が立たなかった相手を一体どうやって暗殺するというのか、という根本的な疑問にぶち当たる。
カノープスとて決して弱い訳ではない。だが、スターズの一等星級（スター・ファースト）クラスが敗北を喫する相手など、決して敵に回すべきではないと痛感した。
「軍と経済界が持ちつ持たれつの関係にあるとはいえ、経済界の不利益を排除するために軍を派遣するということを許せば、最悪はＵＳＮＡ軍のみならず、我々スターズが国内外を所狭しと飛び回ることになってしまいます。これでは第二次大戦後の状態に逆戻りとなり、国外派兵に対する負担増加は免れません」
「……そうだな。両名の意見は確かに尤もなものだ」
仮に破壊工作を行ったとしても、仮に痕跡を残さなかったとしても、相手は状況証拠を全て掴んだ上で報復を行う。その経験をした側として、バランスも参謀本部の意見には反対の意向を示していた。
それでも、バランスの表情が晴れないことにリーナが訝しんで尋ねる。
「大佐殿、如何されたのですか？」
「……シリウス少佐。この後、時間はあるか？」

「はっ、本日の訓練は既に終えております」
「なら、少し付き合ってほしい。カノープス少佐もご苦労だった」
「いえ、お気になさらず」
　そうして、カノープスが遮音フィールドを解除した上で、三人は揃って司令室を出た。カノープスは別行動となったが、バランスは別室を借りてリーナをその部屋に案内した。ここは自分がやるべきだろう、と遮音フィールドを張った。
「さて、リーナ。未だ帰国させてやれないことに関してすまないと思っている」
「そんな！　大佐殿が頭を下げるべきことではありません！」
「そう言ってくれると肩の荷が下りたような気分だ。さて、カノープス少佐に聞かせられない話があってな」
　〝アンジェリーナ・シリウス少佐〟ではなく、〝リーナ〟と呼称したバランスの謝罪にリーナはバランスの責任ではないと窘め、それに対して感謝の言葉を述べた上で真剣な表情を浮かべたので、リーナも背筋を正した。
「ベンに聞かせられない話、ですか？」
「正確には、カノープス少佐も与り知らない話と言うべきだろう。国防総省（ペンタゴン）に関する話は先程もしたと思うが、妙な噂もあってな」
「妙な噂、ですか？」
「ああ。詳細は不明だが、どうやら軍の内部に司波達也や神楽坂悠元を暗殺、もしくはエネルギープラントへの妨害によって戦略級魔法を無力化しようと目論んでいる連中がいるのは確かだ。それも、スターズ内部に」
　スターズの統制は一枚岩と言えない。その大きな要因は総隊長にリーナが置かれている為であり、それに引き摺られる形で階級の塩漬け状態が蔓延してしまっている。いくら隊長クラスがリーナの実力を認めていたとしても、リーナより年上の人間が多い軍において『たかが小娘の分際で』と陰口を叩く者は少なくない。
「これまではセリアがそのガス抜きと抑止を担ってきていたが、昨春に除隊してからはその噂が段々増えていく兆候が見られた」

「……まさかとは思いますが、セリアに『軍に戻れ』などと仰るのですか？」
「そんなことなど出来ない。彼女の不興を買えば、スターズの基地が更地になるのは不可避だ」
「あ、あはは……」
　セリアが軍に入る段階ですら揉めに揉めたというのに、これで軍に再入隊なんて話になれば、彼女がどんな条件を突き付けてくるのかも分からない。下手をすれば『リーナに頼り切らないとやっていけない部隊なんて解散してしまえばいい』と言いかねない……と言いたげなバランスの心情を察し、リーナは苦笑を漏らした。
「では、一体どうされるのですか？　将来的には私も〝アンジー・シリウス〟としての籍を抜けます。その後のスターズの統制については一切口を出さないつもりですが」
「貴官の意思は既に分かっている。となれば、心当たりは身内にいるが……彼もそう簡単に承諾はしないだろう」
「身内？　大佐殿の親族に魔法師がいらっしゃるのですか？」
　リーナとバランスの付き合いが長いとはいえ、リーナはバランスの親族関係についてあまり知らなかった。そもそも、上司の家族関係を聞かされたところで『そうなのですか』としか答えられないのも事実だが。
「リーナも一度は会っている筈だ。表向き〝ジェラルド・メイトリクス大佐〟と名乗っている彼が私の甥にあたる。しかも、彼の母親は君の前任者――ウィリアム・シリウスその人だ」
「前任の〝シリウス〟の息子……彼が魔法師なのですか？」
「ああ。実力をひた隠しにしているが、本気を出せばスターズの隊長クラスすら歯牙に掛けないほどだ。何せ、彼を鍛えたのはかつて『鬼神』とも謳われた〝バルクホルン・カノープス〟なのだから」
「……」
　リーナですら知らなかったＵＳＮＡでも屈指の実力を有する魔法師。大統領府で出会った時はそこまでの魔法力を感じなかったが、バランスの述べていることに嘘や偽りは全く感じなかった。しかも、８

年前に亡くなった〝シリウス〟の血を継ぎ、〝カノープス〟の前任者の教えを受けた実力者。
「何故彼が〝シリウス〟にならなかったのか疑問だろう？　私と夫が根回しをして彼を魔法師にしないように働きかけた。だが、軍がそれでも諦めなかったため、安全保障局に根回しをしてエージェントという形で在籍することで決着をみた。８年前のベーリング海で母親を亡くした直後に軍へ行かせれば、彼の心が間違いなく壊れていた」
　仮にそんなことになれば、彼の母親が黄泉返りをしてでも叱責することが目に見えていた。彼を救うために、あまり魔法に触れさせないようにしつつも、魔法を自衛の力として身につけさせるために軍を辞めた前任の〝カノープス〟に頼み込んだ。
「リーナとセリアがその割を食う形となってしまったのは、私の落ち度とも言える。だからこそ、二人には己の望む生き方をして欲しいと思っている」
「大佐殿……」
「私如きに出来ることは少ないが、二人の不利益となるような行為を慎むように働きかけはする。叶うのならば、リーナが子どもを連れて私の許に遊びに来ること願っているよ」
「いや、何年後の話になると思ってるんですか……私はまだ学生と呼ばれてもおかしくない年齢ですよ」
「確かに、貴官の言う通りだな」
　まるで実家の母親のような台詞を述べたバランスに対し、これには思わずジト目をしつつ率直な事実を口にしたリーナであった。
◇　◇　◇
　そんな会話がリーナとバランスで交わされていた頃、司令室に戻ったウォーカーがスターズ第三隊のアークトゥルス隊長と、第四隊のベガ隊長を呼び出した。
「アレクサンダー・アークトゥルス大尉、参りました」
「シャルロット・ベガ大尉、参りました」
「入れ」
　ウォーカーが二人の声を聞いた上で部屋に招き入れる。

総隊長の階級を考えれば、二人の隊長の階級が下という事実も納得出来る。逆を言えば、リーナが総隊長に置かれているせいで、各隊の隊長以下の階級が年齢にそぐわない状況が放置されている。
事実、リーナの十歳以上年上のベガは、リーナより階級で劣っていることに不満を抱いている。尤も、セリアに対しては以前議員がらみのトラブルを代わりに解決してくれたことから、リーナほどの感情は有していない。リーナに敵視はしても、セリアに対しては中立的な態度であった。
アークトゥルス大尉は、リーナに対して反攻的ではない。だが、同じ隊の部下であったフォーマルハウト中尉の件で弁明も与えずに処刑したことについて快く思っていない。彼がパラサイトに寄生されたという事実は公然の秘密として理解しているが、納得できていなかった。
ウォーカーが二人の隊長を選出したのは、リーナとカノープスから心理的距離を置いているという理由であった。
「これから話す任務は、一切他言無用だ。総隊長のシリウス少佐にも伝えてはならない」
「了解しました、サー」
アークトゥルスは命令に従う姿勢を見せつつ、直接の上司に当たるリーナにも伝えてはならない任務という性質に対して訝しむ。一方、ベガは目を輝かせている。〝年甲斐にもなく〟という前置きが付くのは言うまでもないが、いくら魔法師であろうとも嫉妬にそんな理屈は通用しない。
ウォーカーもベガの個人的な感情が入り混じっていることに気付いているが、それを見なかったこととして振舞うように話を続ける。
「日本の戦略級魔法師、司波達也が計画しているエネルギープラントの建設を妨害せよ。なお、その手段には司波達也の暗殺も含む」
アークトゥルスが驚きを露わにする。スターズが同盟国のプロジェクトを阻止しろというのだ。失敗すれば、間違いなくＵＳＮＡが莫大な損害を被ることとなる。
「小官とベガ大尉で、それを達成せよと？」

「プロジェクトの妨害が第一目的だ。それが達成されれば、暗殺に及ぶ必要はない」
「妨害が困難であれば、暗殺でもいいのですよね？」
ウォーカーに割り込む形でベガが笑顔でそう問いかけた。これでもウォーカーは動じることなく話を続けることを選択した……咎めることで話を拗れさせたくない、という心情があるのは言うまでもないが。
「元々、［グレート・ボム］と仮称していた頃から、あの質量エネルギー変換魔法は、手に入れられなければ最終的な無力化も止むを得ないという方針だった。そこに変更はない。現在はディオーネー計画を通して無力化することを第一案として優先しているだけで、それが上手く行かなければ本来の計画に立ち戻るだけだ」
「……其方は理解しました。では、未だ判明していない［シャイニング・バスター］については如何されるつもりですか？」
アークトゥルスは、気になる質問を投げかけた。
仮に司波達也の戦略級魔法が無力化出来たとしても、もう一つの戦略級魔法を無力化しない限り、ＵＳＮＡへの報復は免れない。一つだけを追うのならばまだしも、二つの戦略級魔法を同時に無力化などという難題に発展すれば、スターズの隊長クラスが二人だけではとても対処できる領分を超えてしまう。
「それについてだが……軍参謀本部でもその正体が未だに判明していないため、対応に苦慮している。まずはプラントの工作妨害、もしもの場合は司波達也を暗殺せよ。もう一つの戦略級魔法についてはそれが成功してから改めて対応することとなる」
アークトゥルスは気が進まない様子を見せたが、渋々命令を受諾した。だが、ベガの方はやる気に満ち溢れていた。
ベガは女性士卒間のネットワークで、リーナが達也に好意を寄せている（正確には『婚約している』わけだが）という事実を知っている。まだ「潜在的」にではあるが、「最大の脅威」であり、「最大の敵」になるかもしれない男に心を寄せるなど、ＵＳＮＡの軍人としてあってはならないことだ。

――自分が先輩として、司波達也の首を突きつけることで、シリウスの目を覚まさせてやろう。
そんな建前で張り切っているベガだが、そんな彼女をもしリーナの双子の妹が見ていたならば、こう呟いたかもしれないだろう。
「……ご愁傷様。お姉ちゃんの想い人を殺せたら、間違いなく世界最強を名乗れると思うよ。５０００兆パーセント無理な話だけど」
「セリア？　唐突に呟いて何かあったの？」
「今、私の義兄を殺そうと目論む輩の悪意が聞こえたような気がして……」
「??」
やる気に満ちているベガの想いを知ってか知らずか、そう呟いたエクセリア・シールズの言葉に首を傾げるアビゲイル・ステューアットであった。

◇　◇　◇

ハンス・エルンストは、ワシントンの市街地を観光していた。元々表沙汰になってないとはいえ、自分の正体を掴んで接触してくる可能性も少なくないため、申し訳程度にサングラスを掛けた上で出歩いていた。
ディオーネー計画が発表されてからというものの、情報誌にディオーネー計画についての特集記事が書かれること自体珍しくもない。ただ、大衆の興味を引くという意味では些かインパクトが弱いというのも確かであった。
ただ、今後日本へ渡航することも考えると、今から荷物を増やすわけにはいかない。そう思いながらホテルの部屋に帰ると、それまで珍しく黙っていたルーデルが〝声を上げた〟。
（エルンスト、妙なメールを見つけたぞ。端末に送っておく）
『へいへい……今度はどんな怪文書を見つけたんだか……』
魔法にすぐさま適応しただけでなく、飛び交う電子情報を観察してセキュリティすらぶち抜いた上で収集してくる。ハンスからすれば、どこまでも進化する辺りは〝魔王〟の名に相応しいと思いつつも、端末を操作してメールを見やった。

差出人は不明だが、宛先はロズウェルのＵＳＮＡ軍基地。その内容は、ハンスですら目を見開くものだった。
「はあ？　マイクロブラックホール実験が日本人の工作員の仕業？　どこぞの馬鹿かは知らんが、とうとう同盟国に責任転嫁でも始めたのか？」
そうぼやいてしまったハンスがメールを読み進めていく。書かれていた文章は以下の内容となる。
●マイクロブラックホール実験は日本の民間魔法師組織が使嗾（しそう）したものだ。
●当該組織は、実験によって霊的な「何か」が呼び出されるのを知っていた。
●当該組織は日本で実施できない実験を、代わりに実行する国を探していた。
●当時、質量エネルギー変換魔法のヒントを血眼（ちまなこ）で探していたＵＳＮＡ軍の科学者は、そこにつけ込まれた。
●当該組織は更なる実験データを求めている。もう一度マイクロブラックホール実験を行えば、組織のエージェントが観測にやってくるだろう。
●フォーマルハウトは不意を突かれたため、パラサイトに憑依された。意識をしっかりと持ち、目的を強く念じていれば、ハイレベルな魔法師がパラサイトに憑依されることはない。
メールを読み終えたハンスの感想は『正直、怪文書の類としか思えない』という結論に帰結した。メールの中に記載されている〝フォーマルハウト〟という名を考えるとすれば、確かＵＳＮＡ軍の魔法師部隊であるスターズが星のコードネームを有していることを思い出す。
となると、このメールの宛先に挙げられるのはスターズの基地、あるいはそれに準じる軍事施設かつメールの中に書かれた人物と同僚ないし彼と仲が良かった魔法師に宛てられたもの、ということになる。
（エルンスト、どう見る？）
『……なあ、ルーデル。ものすごく最悪な可能性を考えたんだが』

（奇遇だな。私も恐らくエルンストと同意見だろう）
パラサイト事件のことは、当時ドイツ軍にいたハンスは噂程度に聞いたに過ぎない。だが、ルーデルが情報を集めれるようになってからというものの、［パラサイト］の正体や性質、その原因に至るまで知り得てしまった。
ある意味ルーデルの〝お節介〟みたいなものだが、彼のお陰で今まで知り得なかった［パラサイト］の知識を学ぶことが出来たことは正直良かったと言えるだろう。
『誰かが日本の仕業だとでっち上げて、マイクロブラックホール実験を再実施する。そこに居合わせたスターズの魔法師にパラサイトを憑りつかせる……最悪なんてものじゃないぞ。一種のバイオハザードじゃねえか』
ディオーネー計画に日本の［トーラス・シルバー］＝司波達也が参加しないことは知っている。そして、彼が四葉家の人間ということも知り得ている。このメールは、司波達也にありもしない責任を押し付けて、一種のテロを敢行しようと目論んでいるに等しい。
更に性質が悪いのは、魔法という目に見えないもの――精神的な要素が強い部分での〝憑依〟に明確な対策をＵＳＮＡ単独では成し得ない可能性がある、という事実だった。
（どうする？　これをそのまま放置するわけにもいくまい）
『……伯父にメールを転送する。信憑性の如何はともかく、この時期にこんなメールをスターズに送る時点で何もないなんて言えない』
ハンスがＵＳＮＡの大統領に見せたところで、この情報の入手手段を問われることになる。ルーデルの存在にまで触れる可能性を考慮すれば、伯父であるディアッカならば適切に処理してくれるだろう。
メールの送信をしようとしたところで、転送用のメールは自然と消えていった。ウイルスの類かと思ったが、ルーデルが〝任せておけ〟と呟いたことで対応を放り投げた。
きっと、彼の生前の行動に振り回された後部座席の相棒たちが味わっていたのも、こんな感覚なのかもしれない……とハンスは思ったのだった。

ストレスの捌け口

週明けの水曜日。本来ならば帰国の途に就く筈だったＳＳＡのディアッカ・ブレスティーロ大統領から『急遽会談したい』という申し出を受け、悠元は学校を抜け出してＳＳＡ大使館に出向いた。向こうも悠元の素性は把握している為、簡単なボディチェックを受けて大統領がいる応接室に入る。

「すまないね、神楽坂殿。急に呼び出してしまって申し訳ない」

「いえ、お気になさらず。帰国直前の忙しい時にとなると、喫緊のことお見受けいたします」

「ああ。実は、うちの戦略級魔法師であるハンス・エルンスト准将が妙なメールを入手してね」

〝傍受〟ではなく〝入手〟というところに、恐らく偶発的なものと見受けられた。恐らくはハンスに憑依している〝何か〟の仕業なのだろうが、西果新島で会った時に感じたものからして、多分『ハンス＝ウルリッヒ・ルーデル』ではないかと思われる。

つまるところ、チート的存在に憑依されて強制的に実力を引き上げられたとみるべきなのだろう……そこに数日とはいえ剛三の教導を受けたことで完成されてしまった。年齢はまだ２０歳らしいのだが、３倍以上の年齢分の気苦労を一身に背負っているように見えてしまったのは……気のせいということにしておこうと思う。

そして、ディアッカはプリントアウトしたと思しき一枚の紙をテーブルの上に置いた。

「拝見しても宜しいですか？」

「ああ。少なくともこの内容通りに日本の魔法界が関与しているとは思わないがね」

悠元が紙を手に取って内容を読み進める。それを見終えて静かに紙をテーブルの上に戻すと、頭を抱えたくなるような気分を抱いた。

「少なくとも、十師族が国外工作でＵＳＮＡの研究者を唆してマイクロブラックホール実験を行わせたという事実はありません。完全に悪魔の証明ですよ、これは。寧ろ、自分の祖父である上泉剛三がＵＳ

ＮＡの大統領にマイクロブラックホール実験の危険性を諭しています」
「……そこまで危険というのかね？」
「はい。この国で陰陽師として名を馳せた安倍晴明ですら、『次元を歪ませる事象は現世に妖を呼び込む危険な儀式に等しき行為』と警鐘を発していました」
　これについては嘘をつく理由がない。しかも、このメールの中に書かれている〝フォーマルハウト〟というのは、恐らくパラサイト化して処刑されたスターズ第三隊のアルフレッド・フォーマルハウト中尉で間違いないだろう。
「恐らく、このメールはフォーマルハウトのコードネームを持っていた魔法師の関係者に送られたとみて間違いないでしょう」
「星のコードネーム……まさか、ＵＳＮＡのスターズ？」
「ええ。そして、マイクロブラックホール実験によって再びパラサイトを呼び込み、今度はスターズの一線級の魔法師をパラサイト化する腹積もりなのでしょう」
　正直、スターズを手駒にするという悪辣な手段を取っている時点で、第三者から見れば外部の仕業だと見做すだろう。だが、最も可能性が高いのは同じＵＳＮＡの人間。それも、軍のセキュリティをあっさりと掻い潜れるだけのハッキング技術を自在に制御できる者。
「ブレスティーロ大統領閣下。我が国は昨年、ＵＳＮＡ軍からの脱走者――パラサイト化した魔法師と交戦しました。その際に得られた詳細データを貴国にお渡しします。可能性は低いですが、万が一のことがあってはなりませんから」
「――感謝いたします。ハンス・エルンスト准将は現在ＵＳＮＡにいるが、任務を帯びる形で日本に滞在させます。もしもの時は遠慮せずに使っていただきたい」
「協力の申し出に感謝いたします。かの［魔王の帰還（リターン・オブ・ルーデル）］が味方となれば、大変心強いです」
　スターズのパラサイト化阻止をＵＳＮＡ政府に根回しをするとしても、ＵＳＮＡ軍もといスターズがどこまで自制できるのかも不透

明。ディオーネー計画を第一にして行動しているだろうが、こちらの妨害や暗殺も目論んでいるとみていいだろう。
その意味で、戦力となる味方がいるのは感謝しかない。
「事に道筋がつけば、約定通り［恒星炉］の技術輸出に関する手続きに入らせていただきます」
「いやはや、恐れ入る。大国の連中は剛三殿の爪の垢でも煎じて飲めばいいと思うばかりだ」
「別の意味で人間を辞めてしまいそうな未来が見えそうですが」
「……否定は出来ませんな」
剛三の爪の垢を煎じて飲んだところで、今度は『人間を辞めるぞぉっ!!』とか言い出しそうで正直不安しかない。言葉のあやというものだが、単独で万夫不当の偉業を成した人間が大本だと、正直起こり得ないという保証が皆無だった。
そうして1時間ほど会談した後、悠元は学校に戻ったのだった。
◇　◇　◇
学校に戻っても特にやることもなく、強いて言えば魔法競技交流会の準備位しかない。とはいえ、学生の領分というか部活連会頭が学校に不在なのはマズいと思った悠元がそのまま生徒会室に向かうと、其処には生徒会長の机を挟む形で相対している深雪と十三束鋼の姿があった。
雰囲気を見る限り一触即発の状況なのは言うに及ばず、深雪も魔法を暴走させないように感情を抑えている。すると、深雪と十三束を除く人間の視線が悠元へ向けられることになる。
「……これはどういう状況だ？　とても友好的な雰囲気とは思えんぞ。詩奈、説明を頼む」
「あ、はい。実は……」
この状況だと、当事者以外で一番冷静に状況を説明できる詩奈に説明を求め、話を振られた詩奈が簡潔に説明をする。
十三束が生徒会室を訪れた理由は、達也の予定もしくは居場所を教えてほしいというもの。それならば、達也が登校するまで待てばいいというのに、我慢できなかった理由は母親の十三束翡翠がストレスに

よる急性の胃潰瘍で倒れたとのこと。
　十三束自身、ディオーネー計画に参加することが正しいと思っている節があり、悠元と達也が提唱した『ＳＴＥＰ』計画を〝我儘〟と評した。
　詩奈の説明をすべて聞き終えた上で、悠元は珍しく冷徹な口調で十三束に話しかけた。これによって深雪も漸く悠元の姿を認識して、怒りを抑えていた。
「十三束、話は詩奈から聞かせてもらった。随分と勝手なことを言ってくれるじゃないか。人様の夢を我儘だと？　お前に一体何が分かるというんだ？」
「か、神楽坂会頭？」
「以前、部活連の会合で話したことをもう忘れているとなれば……司波生徒会長、俺と十三束で決闘をする。今回ばかりは譲る気など無い。これは部活連内の問題でもあるからな」
「……分かりました」
　明らかに、十三束は身内が倒れたことで冷静な判断力を欠いている。そのことを指摘したとしても、『自分は正しい事をしている』と思い込んでしまう。ならば、本気で痛い目を見せなければ話にならない。
「十三束。お前が勝てば達也の居場所を教える。だが、俺が勝った場合は金輪際俺と達也のやることに口を出すな。俺が介入しなければ、四葉家と十三束家の〝戦争〟に発展していたのだからな……異存はないか？」
「……それで構わない。司波君の居場所を教えてもらえるというのであれば」
　実力で言えば、明らかに差が開き過ぎている。普通ならば、決闘を許可してもらうことも難しい。だからこそ、悠元には〝とある方法〟を取ることで風紀委員長の許可を得る腹積もりであった。
「――白兵戦形式？　しかも、悠元は素手でやるって？　これでもハンデになるのか微妙なんだけれど」
「吉田委員長もそう思われますか」

「そりゃあね……悠元の規格外さは幾度となく味わっている立場だし」
ルールは十三束の希望に沿う形で白兵戦形式のルールを採用。十三束は模擬ナイフを使用するが、悠元は武器を一切持たずに戦うというもの。これでも彼我の実力差を埋めるには至らないため、更なる追加ルールがある。
それは、悠元が十三束側のフィールドに侵入してはいけないというもの。フィールド全体を使用できる十三束に対し、行動範囲を半分に制限される形となるため、自ら近付けば反則負けとなってしまう。
だが、相手に近付かなければ十全に戦えない十三束からすれば、ハンデにも成り得ていないというのが幹比古と泉美の共通見解であった。
部活のユニフォームに着替えた十三束に対し、ブーツこそ試合形式を想定して履き替えているが、ロングブレザーを脱いだ状態の制服で悠元は相対している。
「神楽坂会頭、いいのですか？」
「別に構わない。そもそも、喧嘩を吹っかけた側にどうこう言われる筋合いはない」
「（……珍しく怒っているね）双方とも、ルールは理解しているね？寸止めありのルールだ。そして、審判の判定には従ってもらう」
幹比古の問いかけに悠元と十三束が頷く。正直、昨年の悠元と琢磨の試合の比では済まないだろう、と幹比古は心配しつつも、試合開始の合図を出す。
「では、はじめ！」
その掛け声とともに、双方は魔法を発動させた。だが、その直後に十三束の身体が後方に吹き飛んだ。対物理フィールドに跳ね返る形で床に叩きつけられる十三束は、今何が起きたのかを理解できなかった。
（何だ、今のは……まるで、想子の津波に吹き飛ばされたような……）
考えていても埒が明かないと判断し、十三束は「セルフ・マリオネット」で急接近して悠元の懐に潜る。そこからアッパーを繰り出した

が、悠元はそのアッパーを食らった――――いや、正確には顎の下に防御術式を張ることで、その力を使う形で上に飛んだ。
天井を視界に捉えると魔法で姿勢を反転させ、天井を蹴り飛ばした瞬間に悠元の姿が消えた。
（防御――――いや、ダメだ!!）
カウンターか［接触型術式解体（グラム・デモリッション）］による魔法無効化を狙ったが、悠元がやろうとしたことを直感で察したのか、［セルフ・マリオネット］で自身のフィールド側へ強引に移動することで悠元の攻撃を回避した。
悠元の攻撃は演習室への被害をゼロにしていたが、今の攻撃を食らえば骨折は免れなかった。あれほどの超高速移動をこの短距離で可能にするなど、魔法師でも数えられるぐらいしかいない。
時間切れでは引き分け。そして、悠元は自分のフィールドにいながらでも十三束を攻撃する手段を持ち得ている。接触状態に持ち込まないと魔法を発動できない十三束からすれば、悠元に課せられたハンデなど最早意味を成していないことに気付いている。
十三束は移動魔法を発動させ、再び切迫する。今度は［セルフ・マリオネット］で死角からの攻撃を試みる。
［接触型術式解体（グラム・デモリッション）］は対象を取る魔法に強い。それは、原作で達也が［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］を使用しても無力化されたことからも分かることだ。
魔法と魔法式がセットになっているからこそ、［術式解体（グラム・デモリッション）］は最強の対抗魔法として名を知られている。では、魔法式が付随しない魔法に［術式解体（グラム・デモリッション）］を使えばどうなるか。
答えは、こうだ。
「――――遅い」
「ぐっ!?」
悠元の振るった拳は、十三束の腹を直撃した。前屈みになった状態を見逃すことなく、悠元は容赦なく蹴りを食らわせて再び吹き飛ばした。
悠元は確かに魔法を使用している。だが、十三束の［接触型術式解

体］では対処できていない。それもそのはず、悠元が使う魔法の魔法式は対象の〝上空〟に存在しているのだから。

相手が意識しなければ、魔法師は必ず相手へ視線を向ける。現代魔法の性質上、視覚で認識できなければ離れた相手へ正確に魔法を行使することが出来ない。

悠元の事象改変能力は固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］によって底上げされている為、例え魔法式が対象に隣接していなくとも、相手の相対座標さえ認識できていれば自前の演算能力で絶対座標を割り出して魔法を行使することも可能となった。

見るからに息を荒くしている十三束に対して、悠元は涼しい顔をして無防備を装うように立っている。だが、その恰好が無防備とも思えない十三束は、今までにないぐらいに意識を集中させて［セルフ・マリオネット］を発動させる。

（せめて、一矢は報いさせてもらう！）

これまでにない程の速力を以て突撃する十三束。だが、音速クラスの物体すら捉えてしまう悠元の眼は、十三束の姿を確かに捉えていた。そして、悠元は左手を十三束が向かってくるであろう方向に向けて翳した。

「――［音響術式解体（サラウンド・グラム・デモリッション）］、発動」

本来、塊として飛ばすだけの［グラム・デモリッション］に振動の概念を持ち込むことで、一種の想子爆弾（サイオン）を作り出して相手の魔法にぶつけることで魔法式を吹き飛ばすだけでなく、想子体へのダメージを通して肉体と精神を消耗させる悠元専用の対抗魔法――［音響術式解体（サラウンド・グラム・デモリッション）］。

この魔法の最大の特徴は、［術式解体（グラム・デモリッション）］でネックだった有効射程距離の短さを解決している。それでも、この魔法には緻密な想子制御が求められるため、膨大な量の想子保有量が必須となる。

悠元がこの魔法を作るに至ったのは、自身が克服した異常聴覚の現象を利用して、相手に対して意図的に想子の異常感知を引き起こさせることで、冷静な判断力と魔法発動に必要な精神力を奪うことができないかと思案した結果として誕生したもの。

そして、幾度も第三研で軍人魔法師との手合わせを行い、完成させた悠元だけが使える対抗魔法。その効力は、直撃した十三束が意識を手放して床に倒れ込んだほどであった。

「――そこまで！」

そして、試合続行は不可能だと判断した幹比古の合図により、模擬戦という名の茶番は終わりを告げたのであった。結果は無論、悠元の勝利で幕を閉じた。

◇　◇　◇

十三束は保健室に運ばれたが、軽い脳震盪程度のもので魔法はおろか命に直結するようなことではなかった。十三束が目を覚ましたところで、悠元は十三束を屋上に連れ出した。説教をするのかと思った十三束だったが、悠元が魔法を使った瞬間に周囲の景色が一気に変わり、見たこともない場所に立っていたことに驚く。

「え、え？　ここは、どこ？」

「――病院だよ。京都のな」

「どうして……あっ」

悠元の説明に目を見開く十三束。すると、屋上に待ち構えていたような形で一人の女性医師が二人の到着を見て頭を下げた。

「神楽坂様、お早い御着きですね。そして、そちらは十三束さんの息子さんでいらっしゃいますね？」

「あ、はい」

「初めまして。十三束さんの担当をしております鴨野（かもの）と申します」

ここは神坂グループ系列の総合病院で、魔法師の患者を優先的に引き受けている数少ない病院。翡翠が倒れてどこの病院に運ばれたのかを調べたところ、偶々この病院だったので悠元が問い合わせをして、可能であれば面会を申し出た。

鴨野奏（かものかなえ）――鴨野甲（かつて司甲（つかさきのえ）と名乗っていた）の母親で、元々は魔法大学附属病院に勤務していたが、司の一件で京都の魔法師を受け入れている病院に勤めることとなった。

奏の案内で二人が通されたのは個室タイプの病室。そして、点滴で安静にしているが、十三束翡翠その人なのは間違いなかった。翡翠は

悠元もそうだが、息子がまさか京都へ見舞いに来るとは思っても見なかったようで、思わず目を見開いていた。
「鋼⁉　それに、神楽坂殿まで……もしかして、見舞いに来て下さったのですか？」
「まあ、そんなところです。こちらへは自分の魔法で来ましたのでお気になさらず。今の状態では食べ物を差し入れるのも失礼でしょうし、お花の手配だけにしました」
「そんな……学校もあるというのに、わざわざ見舞いに来てくださって感謝します」
　ディオーネー計画の件で対立関係を生じてしまったとはいえ、悠元自身が翡翠に対して含むところなどない。周囲からの無言の圧力に耐えながらも職務を全うしていただけであり、寧ろ責められるべきは圧力を掛けた側である。
　十三束はベッドの傍の椅子に座り、翡翠を心配するような表情を見せていた。
「倒れたと聞いて、父さんも心配していたんだよ」
「……ごめんなさい、鋼。心配を掛けさせてしまって。それで、神楽坂殿が態々同席して見舞いに来てくれたということは、私が倒れたことで何かご迷惑を掛けてはいないでしょうね？」
「あ、えっと……」
　親子の暖かい風景だったが、翡翠が珍しく強気な言葉を発したことで十三束は言葉に詰まった。まさか、母親が倒れたことで自分が暴走して、学校の生徒会長に決闘を申し込もうとしただなんて言えるはずもなかった。
　翡翠は十三束から答えを引き出せないと察したのか、悠元に視線を向けて頭を下げた。
「神楽坂殿、息子が大変ご迷惑をおかけいたしました」
「お気になさらず。一高の生徒会長に決闘を申し込もうとしたところで割込み、自分も立場故に人の夢を我儘だと宣う様な言いようを許せなくて十三束殿の息子さんを叩きのめした事実がありますので」
　今回は十三束が加害者側ではあるが、同時にある意味被害者の側面

も否定できない。それに、悠元が無理矢理割り込んで腹いせに十三束を叩きのめしたことは事実なので、それについては謝罪のような形で述べた。
「十三束会長、私と司波は自分の夢の為に［恒星炉］によるエネルギープラント計画を進めていきます。日本魔法協会ひいては国際魔法協会の方針に背くことにはなってしまいますが、もし何かお困りの時は師族会議議長として相談には乗りましょう。会長がまた倒れてしまっては、魔法協会の職員も胃を痛めかねませんから」
流石に病人に対して追い打ちを掛けるような真似は出来ない。だからこそ、決意表明に加えて師族会議議長としての役目として翡翠の相談に乗る意思を示した。それを聞いた翡翠は何があったのかを悟って、右手で十三束の左頬を抓った。
「い、いひゃい!?　か、かあひゃん!?」
「鋼、私は会長着任の前に言いましたよね？　私が留守の間に問題を起こす様なことは許さないと。四葉殿だけでなく神楽坂殿までも怒らせて、最悪十三束家が取り潰しになっていたかもしれないんですよ！　きちんと反省しなさい！」
「ご、ごめんなひゃい!!」
「……（ストレスがかなり溜まってたんだろうなあ）」
母親に叱られて涙目となっている息子の構図がそこに形成されていた。
翡翠が一応病人ということで宥めるべきなのか、療養の一環で彼女のストレスを吐き出させるべきなのか……奏が医師の判断で止めようとするまで、暫くは静観することにした悠元だった。

見えてしまった未来を憂う老将

十三束が翡翠に怒られたその日。十三束については百山に掛け合って『身内の見舞い』ということで木曜と金曜の授業を公欠として計らう様にしておいた。そして、十三束家の当主にも事情を説明しておいた。

流石に当主も事情を聞いて顔を蒼褪めていた。一歩間違えれば十師族でも最強格の四葉家を敵に回すところだっただけに。そして、十三束を公欠にする理由も述べると、十三束家当主は深く頭を下げて感謝した。

悠元は行きこそ［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］を用いたが、帰りは［鏡の扉（ミラーゲート）］で一度学校に立ち寄り、京都の病院へ飛んで十三束に学校の荷物を渡して、町田のマンションへ直接飛んだ。

このマンションには悠元が［ミラーゲート］を使用する前提の小部屋も用意されており、そのキーは悠元にしか開けられない。キーを通して玄関に入ると、帰宅を待ち構えていたように私服姿の深雪が待っていた。

「おかえりなさいませ、悠元さん。十三束君とはお話が付きましたか？」

「そっちは彼の母親に任せた。俺や達也が説明するよりは受け入れられやすいと思ってな」

冷静に判断させるとなれば、悠元や達也が説明するよりも身内に説明させた方がまだ聞く耳を持つだろうと判断し、十三束を京都に置いてきた。親子揃って頭を冷やしてもらうことで、余計なノイズを取り除くというものだった。

悠元はそのまま自室に入って私服に着替えると、リビングに降りたところで珍しく茉莉花が抱き着いてきた。

「――――ミーナが抱き着くのは珍しいな。何か相談事でもあるのか？」

「まあ、あるにはあるけど……アーシャばっかりズルいし」

「別に俺から抱き着いている訳じゃないんだがな……」

一同が揃って夕食の時間を過ごし、シャワーを浴びてから茉莉花の部屋を訪れると、部屋にはアリサもいた。そして、テーブルの上にはマーシャル・マジック・アーツ関連の雑誌が開かれた状態で置かれていた。
「お兄ちゃん。見て見て！」
アリサが嬉しそうに雑誌の一つを見せると、ゴールデンウィーク明けに行われたマーシャル・マジック・アーツの中学関東大会でアリサが優勝、茉莉花が準優勝という結果が書かれていた。
アリサは元々争いを嫌う性格だったはずだが、自分のこともあってか茉莉花に対して親友兼ライバルという関係を構築しているようだった。
「アーシャが優勝か、凄いじゃないか。でも、俺に見に来てほしいなんて言われた記憶がないんだが……俺が忘れていたのなら謝るが」
「いや、悠兄は悪くないよ。アーシャったら、悠兄に見られて無様な結果に終わったどうしようって悩んだ結果として悠兄に伝えなかっただけだし」
「ちょっと、ミーナ!!」
大好きな人の前で恥を掻きたくないという心情は理解できるため、こればかりはアリサを責めることも出来ないと思いながら、アリサの頭を撫でた。
「何にせよ、次は全国大会か。何時なんだ？」
「うん。次は7月の予定だけれど、九校戦が中止になったから開催時期の延期もあるって」
「そっちにまで波及しているのか……ん？」
確かに、メディア放映も含めれば魔法競技会としてビッグイベントとも言えなくはない九校戦が中止しただけに、他の魔法競技の大会にまで影響が波及するのは当然の流れとも言えた。悠元は久しぶりに雑誌を読み進めたところで、気になる記事を見つけた。
それは、関東大会と同日に行われた中部大会（北陸・中部・東海地方）の結果で、圧倒的な強さを見せつけて優勝していた一人の少女の姿があった。名前は一条茜――悠元の婚約者の一人だった。

茜とは面識を持っている為、二人も茜の姿に気付いて声を上げた。
「この人って、ゴールデンウィークあたりにお兄ちゃんに会いに来た人だよね？」
「そうだな。って、この記事は見てなかったのか？」
「私たちの活躍の記事を見たくて買ったものだから、他は飛ばして読んでたんだよね」
「成程」
　にしても、茜にも『見に来てほしい』と誘われた覚えはないので、こちらもある意味アリサと同類かも知れないし、思春期特有の恥じらいと言えるかもしれない。せめて、この恥じらいを少しでも他の婚約者に持ってほしいと思ってしまうところもあるが、ここまでのことになった以上は諦めることも肝要なのかもしれない。
「そういえばこの前、茜ちゃんから連絡が来てさ。お兄さんに関する愚痴を聞かされたよ。あたしも兄貴のことがあるから、その意味で意気投合しちゃって」
「あ、あはは……」
「まあ、仲がいいに越したことないがな」
　茜の兄である一条将輝と茉莉花の兄である遠上遼介（十神遼介と呼ぶべきかもしれないが）。二人とも現在は十師族の直系で、互いに想う人がいるという現実。しかも、その対象を両方とも悠元は知っているという有様。
「そういえばさ、悠兄。兄貴が何しているか調べられる？　あたしは勿論、父さんや母さんも分からないって言ってるし、師族二十八家に復帰して十神の名字を名乗った以上は放置するわけにもいかないし」
「知ってるが、聞きたいか？」
「……う、うん。何か嫌な予感はするけれど」
　茉莉花の言い分には筋が通っており、「数字落ち（エクストラ）」から復帰した以上は遼介が長子かつ長男として十神家次期当主に近い位置となる。留学したきりでロクに連絡も寄越さない遼介の事を知っていると悠元は公言した上で尋ねると、茉莉花は冷や汗を流しつつも頷いた。
「結論から言うと、遼介さんは生きてる。そこはいいんだが……バン

クーバーにある魔法結社［ＦＥＨＲ（フェール）］の一員として活動してるようだ」
「魔法結社の構成員？　何でまた……」
「そのトップがレナ・フェールという女性で、調べたところによると、遼介さんは彼女に惚れて結社に入ったようだ」
　悠元から言い放たれた衝撃の事実を聞いた茉莉花の反応はというと、ゴンッという音と共に、盛大にテーブルに突っ伏した。これにはアリサも気遣う様に声を掛けた。
「……えっと、ミーナ？　大丈夫？」
「あのばがあにぎー……いっだいなにやっでるのよ……」
　テーブルに突っ伏しているせいで、茉莉花の答えがまるで呪怨を唱えるのかのような濁点交じりに聞こえていた。
　ただ、茉莉花の気持ちも分からなくはない。身内が無事なのはまだしも、海外で女性に現を抜かした挙句、向こうで魔法結社の構成員になってしまったのだ。安心というより、心配するだけ無駄だったという表現が一番妥当なのが今の茉莉花の心情だった。
　暫くすると茉莉花は起き上がったが、先程突っ伏した影響で額のあたりが少し赤くなっていた。
「茜ちゃんのお兄さんといい、自由な兄貴を持つと苦労するよ……今からでも悠兄が本当の兄貴にならないかな」
「婚約者兼義理の兄って、すでにアーシャがそうなってるんだが……てか、ミーナも俺からしたら義理の妹みたいなものだし」
「じゃあ、問題ないね。ついでに悠兄の子どもが」
「それは道徳と倫理と法律を勉強してからにしようか？」
　流石に中学2年の二人（茜も含めると三人）と関係を持ってしまったことは実家の件もあるので諦めたが、最後の一線を越えるのはマズいというか法に触れることとなる。公だと恥じらいを持っていても、プライベートで簡単に枷を外してしまうのは如何なものか……と訝しんだ悠元だった。
「へっくしゅん！……うーむ、風邪かな？」
　そして、噂されているとは露知らず、盛大なくしゃみを発した青年がいたのであった。

◇　◇　◇

２０９７年６月６日、木曜日。悠元と達也を巡る情勢に大きな変化があった。

インド・ペルシア連邦における魔法研究の中心地、旧インド中南部のハイダラーバード大学に勤める魔法工学の第一人者にして、同国の持つ戦略級魔法［アグニ・ダウンバースト］開発者として知られている女性研究者、アーシャ・チャンドラセカールが記者会見を開いた。

『――以上の理由により、私たちはＵＳＮＡの金星開発計画ではなく、日本の恒星炉計画を支持します』

この時点で、既にＳＳＡとフランス、ドイツが揃ってＳＴＥＰ計画を支持し、これによってドイツのローゼン・マギクラフト社長であるフリードリヒ・ローゼンも公式声明で『ドイツ政府の方針に従い、ディオーネー計画への参加を中止して日本のＳＴＥＰ計画に賛同する』と公表している。

ここにきて更に追い打ちを掛ける形で口火を切ったのが、インド・ペルシア連邦だった。日本とはＳＥＰＡによって経済的な繋がりを有するだけでなく、既に［恒星炉］の恩恵を受けている当事国として、今後も水素ガスの安定供給を取り付けるという意味を持つのは言うに及ばずだった。

南半球側の二大国が声明を発表したという事実だけでなく、さらに追い打ちを掛けるようにアラブ同盟、アフリカ連邦、東南アジア同盟も声明を発表し、日本の恒星炉計画を支持する動きに回った。更に、アフリカ連邦大統領が日本を電撃訪問し、水素発電技術と燃料用水素ガスの輸出枠の契約を日本政府と結んだことを二国の首脳による記者会見で公表した。

そして、ＳＴＥＰ計画を支持する動きは世界各地に飛び火していった。その一つが、トルコの戦略級魔法師――［十三使徒］の一人であるアリ・シャーヒーンがＵＳＮＡとフランスのメディアのインタビューに応じた映像が流れたことだ。

生中継とはいかなかったが、同日の内にＵＳＮＡや東西ヨーロッパのメディアを通じて映像が流れた。

『――――では、トルコ政府はＵＳＮＡの宇宙開発計画に他国民の参加を強制するべきではないとお考えなのでしょうか？』
『いいえ。これはあくまでも私個人の見解ではございますが、魔法の平和利用は宇宙に活路を見出すという道一つに決めるべきではないと考えております』
　インタビュアーの問いかけに対し、シャーヒーンはディオーネー計画に対して消極的な意見を述べた。
『例を挙げるとすれば、日本のＳＴＥＰ計画と呼ばれる次世代エネルギーラインプロジェクトが発表されました』
『それは、先日チャンドラセカール博士が名を挙げていたプロジェクトですか？』
『ええ。このインタビューを聞いているであろう皆さんは御存知でないかも知れませんが、重力制御術式による核融合炉は現代魔法研究において難問とされていたものです。司波達也や神楽坂悠元という二人の青年は、これに目途を付けるばかりか既に実用化していて、インド・ペルシア連邦やアラブ同盟がその恩恵を受けていると耳にしています』
　大半の非魔法師からすれば、核融合発電に関する知識を持つのはそれこそ専門分野を齧った人間でなければ知る筈もない事。シャーヒーンはそのことを念頭に置いた上で、悠元と達也の名を挙げた上で彼らの功績を誉め立てるような口ぶりを見せた。
『では、トルコもその恩恵に与りたいと思っていらっしゃるのでしょうか？』
『今すぐに、というのは難しいかもしれません。ですが、我が国と日本は浅からぬ縁があります。その縁と祖先たちの恩を仇で返す様なことなど許されませんし、魔法の平和利用として声を上げてくれたのならば、その芽を摘み取る様な行為は許されない。私はそう思っております』
　昔に自分らの祖先を救ってくれた恩人である東洋の国。その恩と縁を大事にしたいというシャーヒーンの言葉は、欧州のみならずＵＳＮＡの人々に広く受け入れられた。

◇　◇　◇

世界の各国がＳＴＥＰ計画への支持を表明する一方、ディオーネー計画の側にいる人間としては面白くない顔をするものもいる。エドワード・クラークは無論だが、それに協力している新ソ連側としても、同様の意見を持つ者は少なくない。

ただ、原作と唯一違う点を挙げるとするならば、［十三使徒］の一人であるレオニード・コントラチェンコ少将はＳＴＥＰ計画に一定の理解をしつつ、画面の向こうにいる同じ［十三使徒］のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフを見ていたことに他ならない。

「シャーヒーンの小僧の魂胆は分かっておる。奴の言葉全てに嘘偽りがあるとは思えんが、これ以上ＵＳＮＡと新ソ連が接近するのを良しとしていないのだろう」

アリ・シャーヒーンの年齢は３０歳。７０歳を超えているコントラチェンコからすれば『小僧』と呼称しても不思議ではない。

「ディオーネー計画で我が国とＵＳＮＡが協力体制に入ったと見做しても特段不思議ではあるまい。既に各方面でディオーネー計画そのものに対する疑問が噴出しているこの時期に、あの小僧は負の印象を更に強調することで、ディオーネー計画を頓挫させようと狙っておるのかもしれん」

『日本に使嗾されたという可能性はありませんか？』

「それはない。シャーヒーンにトルコ国外の者が接触すれば、儂には分かります。今回のことは、小僧が自分でやったことだ」

ベゾブラゾフの可能性の問いかけに対し、コントラチェンコは明確に否定した。国家公認の戦略級魔法師であるアリ・シャーヒーンの情報は逐一把握しており、とりわけ黒海を挟む形で対峙しているコントラチェンコにとっても、彼の動向は死活問題とも言えた。

『それにしては、タイミングが良すぎませんか？』

「日本のエネルギープラント計画が発表された後、相次いでＳＳＡとフランス、それにドイツまで日本の支持に回った。恐らくですが、博士（ドクタル）がディオーネー計画に参加すると表明してから、何か反論の材料を探していたのでしょうな」

先週水曜の時点では、日本単独のものだった計画。だが、いざ蓋を開けてみれば、既にインド・ペルシア連邦とアラブ同盟が事業の恩恵を受けており、更には南アメリカだけでなくディオーネー計画の協力者リストに入っていたドイツまで味方につけて切り崩した挙句、イギリスと同じ西ＥＵに属するフランスがＳＴＥＰ計画の支持を表明した。

ここまで複数の国家が介在するとなれば、シャーヒーンとしても反論の材料として申し分なかったのだろう、とコントラチェンコは冷静に呟く。

「その時点である程度渡りを付けておいた。本人が直接国外の者と接触するのではなく、恐らくトルコ政府を介在させる形でメディアに取材の申し出を行ったとみるのが妥当だろう。それで博士、如何なされるつもりか？　最早エドワード・クラークは当てにならぬと思うが」

コントラチェンコの推測にベゾブラゾフは一切反論しなかった。恐らく、同様の結論に至ったのだろう。そして、エドワード・クラークが国際世論の工作に失敗したと判断した点では、コントラチェンコもベゾブラゾフも同じ意見だった。

『今日にでも、ウラジオストクへ向けて発ちます。今度は［イグローク］を連れて』

「……今回は本気ですな」

『ええ。未だ不明である日本の戦略級魔法の存在もありますが、判明しているものでも排除しなければ、何時我が国に牙を向ける戦略級魔法を放置すべきではないと判断しました』

「せめて、御武運を祈っておりますぞ」

そのやり取りで通信が消え、ブラックアウトした画面にはコントラチェンコの表情が見えていた。周りに誰もいないことを確認した後、頭を抱えていた。

ベゾブラゾフが［イグローク］を連れて行くという意味は理解しているし、そこまでして彼が失敗するという可能性は低い……これはＵＳＮＡを相手にした場合の話。

では、日本を相手にした場合の勝率はどうなるのか。

現在、最大の脅威である司波達也を除けば、かつて戦略級魔法の使い手で名を馳せた上泉剛三は現在日本国外にいる。日本の［十三使徒］である五輪澪の［深淵（アビス）］は海上に対して強力なものの、［トゥマーン・ボンバ］のような地形を問わない点で論外。

最大の懸念は、ＵＳＮＡが［シャイニング・バスター］と呼称している日本のもう一つの戦略級魔法の正体が何も分からないという点。まるで、かつてコントラチェンコが味わった剛三による蹂躙劇のような不気味さをどうしても拭い去れなかった。

「仮に成功したとしても、新ソ連が滅ぼされる未来しかないことを分かっておるのか、博士（ドクタル）は」

コントラチェンコはベゾブラゾフがエンタープライズから戻った際に詳細を聞かされることは無かった。聞かされたのはあくまでも司波達也が戦略級魔法師という事実だけであり、彼が四葉家の次期当主だという事実は知り得ていなかった。

もし、この情報がコントラチェンコに伝えられていたら、彼は間違いなく『〝四葉の一族（アンタッチャブル）〟に手を出すべきではない』と発言していただろう。その発言が読めていたからこそ、ベゾブラゾフも新ソ連政府もその情報をコントラチェンコに伝えなかった。

「……万が一の場合は、儂も覚悟を決めねばならん。ナターリヤ、すまんな。儂は最期まで其方の良き祖父ではいられないようだ」

コントラチェンコが何を覚悟したのか……その魂胆を知る者は、彼以外に誰も存在しないのであった。

覚悟（けつい）、宿命（さだめ）、疑念（じつじょう）

６月８日、土曜日。悠元は町田のマンションの自室でモニターと睨めっこしていた。モニターに映るのは新ソ連の広大な土地で、それ以外のウィンドウには数多の情報が表示されている。それを見た結果、ベゾブラゾフが専用列車［アルガン］でウラジオストクに到着したことを確認した。

（ここまでは、ある程度原作をなぞっている。だが、問題はここからだ）

日本国内にいた新ソ連の工作員は全て国外追放もしくは処分したかのどちらかで、新ソ連に繋がりのある民間企業などは粗方洗い出した上で、関係を切る様に言い含めた。別に脅迫はしていないが、向こうも事の重大さを把握したのか頷いてくれた。話がすんなり進むのは良いことだが、解せなかった。

深雪と水波には達也の別荘へ向かうように伝えた。折角の休日だし、ピクシーがいるので達也一人でもどうとでもなるわけだが、家族の団欒ぐらいはしてもいいだろうということで送り出した。なお、深夜は『旦那様のお世話が最優先ですので』と言って残っていた。

ともかく、ベゾブラゾフの情報を掴んだ以上は伝えないわけにはいかない。悠元は耳にレシーバーを付けてヴィジホンを掛けると、ワンコールもしない内に達也の姿がモニターに映った。

「達也、折角の家族の団欒だというのにすまないな」

『気にしないでくれ。それで、何か掴めたか？』

向こうもベゾブラゾフのことで連絡を寄越したのだと理解してくれたので、悠元はそのまま本題を切り出した。

「ベゾブラゾフが動いた。大型ＣＡＤを牽引した専用列車でウラジオストクに入ったのが確認出来た。今回のターゲットは間違いなく達也だろう。俺の場合は戦略級魔法師として狙うには根拠が薄すぎるからな」

『確かにそうだろうな。ところで、その大型ＣＡＤとは？』

「向こうのコードネームで［アルガン］と呼ばれるもので、要は意図的

に七草姉妹やシールズ姉妹のようなことを行うためのもの。一番近いのは昨年の南盾島で達也が分解したあのＣＡＤだな」
　南盾島の海軍研究所にあったＣＡＤの違いといえば、ベゾブラゾフが意識して魔法を行使するか研究者が魔法発動の指示を出すかの違いでしかない。単一の魔法に特化させることで、魔法発動速度を殺さずに戦略級魔法を行使する手法を使うあたり、余程［トゥマーン・ボンバ］に自信があるのだろうとみている。
「とはいえ、ベゾブラゾフが［恒星炉］関係者として俺を狙う可能性もゼロじゃない。先日の戦闘データの時点で連続して距離の離れた２か所を同時爆撃する可能性が完全にゼロじゃない以上、こちらが下手に動くこともできない」
『……すまないな、悠元』
「別に達也の責任じゃないだろうに。大体、ベゾブラゾフに喧嘩を売ったような格好となったのは俺が原因だ。なので、自分を追い込むなよ？」
『そうだな。ありがとう、悠元』
　よもや、達也から謝罪だけでなく感謝の言葉まで出てきたことに思わず苦笑を浮かべた。モニターの向こうからも笑みを漏らす様な声が聞こえてきたので、大方深雪だろうと思った。
「それで、攻撃が予想される時間は明け方の時間帯。天気予報では、小雨で風も弱い状態になるとみているから、仕掛けてくるとすれば大体朝５時ぐらい。多少前後することもあるし、大幅に時間をずらして攻撃するかもしれないことは留意してくれ」
『分かった。情報提供に感謝する。そちらも気を付けてくれ』
　達也との通信を終えた後、悠元はふと机の引き出しから一つの箱を取り出した。ルービックキューブサイズの金属の箱で、表面に魔法障壁の魔法陣が刻まれたもの。魔法訓練の時、レオにこの箱を使って魔法障壁のデモンストレーションをした訳だが、実はこの金属製の立方体自体、悠元が自作したものではない。
　剛三との旅行で登山用の装備もなしにエベレストへ登山するという苦行というか、常人なら無理難題に挑んだ際、頂上まであと少しの

ところで一息入れていた悠元が近くのクレバスの中を覗くと、氷の中に不釣り合いな黒い立方体があり、氷を溶かして取り出し、そのまま日本に持ち帰った。

魔法陣は魔法障壁を発動させるものだという単純なものだが、術式を逆に読み込むという手法を覚えた悠元が改めてこの箱を解析した結果、この箱に対して特定の条件が満たされた場合、黒い立方体と対になっている〝何か〟が引き寄せられるという解析結果を得た。

地下深くに封印するとしても、その〝何か〟の容積次第では封印区画そのものが潰されかねない。ただ、この箱の発動条件が『戦略級魔法に相当する霊力を注ぎ込む』というものなので、いつどうなってもいいように目の届く範囲で置いていた。

「……未知のリスクはあるが、保険として託すべきだろうな」

今の達也や深雪、水波が［トゥマーン・ボンバ］を防ぎ切る確率は高いが、それでも絶対という言葉で保障できないため、悠元は悩んだ末にメールを達也へ送り、その黒い箱を達也の居る伊豆の別荘へ［鏡の扉（ミラーゲート）］で送った。

国防軍が何かしらの情報ルートでベゾブラゾフの動向を探っているのは間違いないし、どうせ達也に情報を伝えないのは分かっている話だ。その行為自体が達也と国防軍に決定的な亀裂を入れることに繋がると認識もせずに。

そして、悠元は椅子から立ち上がると、壁に取り付けられたコンソールのキーを叩いてコードを打ちこむ。すると、壁の一部が開閉して、其処には直刃と思しき太刀の形状をしたＣＡＤが鞘に納められた状態で置かれていた。見た目は刀というより木刀に近しい形状と言える。

これまで悠元が手掛けた［サード・アイ・ゼロ］に始まり、［サード・アイ］と［サード・アイ・エクリプス］の稼働データを基に悠元が一から図面を引き、全て自分の手で作製した太刀形状特化型ＣＡＤ。開発コードは［サード・アイ・ティターニア］――自身の異名である［殲滅の奇術師（ティターニア）］の名を冠し、これまでの技術の粋を一本に集約することで完成した代物。そして、太刀ということで［布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）］と名を

付けた。
銃ではなく太刀にしたのは、悠元にとって一番手に馴染むものとして選択した結果で、太刀の刃は潰されている形だが、セリアが使っていた［レーヴァテイン］の機構を読み取った上で再現したことで、現代魔法の戦い方でも天神魔法をＣＡＤに付与して戦闘することが可能となった。
そして、この形状にしたのはもう一つ理由があり、天魔抜刀の触媒として金属の実体を用いた武器を使う必要があった。とはいえ、現存している聖遺物（レリック）を使い潰す訳にもいかないため、刃の金属構成は神楽坂家が保有している〝真打の［草薙剣］〟から解析したデータを基に［複製］を用い、人工的な聖遺物として完成させた。
神や悪魔ですら御しきり、陰陽の力を均衡に保ち、現（うつつ）の表と幻（かがみ）の裏を一つに束ねることで、あらゆる災厄を断ち斬る力と成す――これが、天魔抜刀の完成を見ることなく亡くなった神楽坂家三代目当主の文言。
悠元はその太刀を手に取ると、静かに鞘から抜く。金属は眩い光を放ち、無機物の筈なのにまるで力が込められているようにも見えた。それを再び鞘に納めると、壁のスペースに戻すことなく机の横に立てかけた。
その太刀は、まるでこの先に立ちはだかるであろう困難を主人と共に闘える喜びを噛み締めるような雰囲気を漂わせて、静かにその時を待ちわびているようにも見えた。
◇　◇　◇
ベゾブラゾフはウラジオストクに着いてすぐ、情報部からの報告を受けていた。とはいえ、日本国内の工作員は粗方追放されているだけでなく、新ソ連に通じる情報も根こそぎ破壊されている為、頼りになるのは大亜連合などから経由して日本入りした僅かな工作員の情報と新ソ連軍の軍事衛星による〝予測情報〟ぐらいしかない。
それでも、無暗に攻撃しては新ソ連の面子どころかエドワード・クラークから非難が飛ぶのは必至。何より、司波達也を確実に葬る為に一撃で片を付けなければならない以上、予測情報とはいえベゾブラゾ

フが頼りに出来るものならば何でも使う腹積もりだった。
「本人の滞在予測は、東京・町田か伊豆の別荘地か……」
もし、ここで東京に向けて放とうものならば、ベゾブラゾフの行いで新ソ連が火の海になってしまうという最悪のシナリオを引くことになるし、東京には十文字家の［ファランクス］があるため、狙うにしては論外。そこから、ベゾブラゾフが民間人への被害を最小限に抑えるという意味で伊豆の別荘を狙うことに照準を絞った。
照準の判断材料の一つとして、第一高校付近で司波達也の姿が確認できていないという工作員からの情報で狙いを一つに絞った。もし、これで当たりを付けることが出来れば、もしかすれば日本にあるもう一つの戦略級魔法――――ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］を発動不能にさせた［シャイニング・バスター］も引き摺り出せると考えた。
一人でいてくれることを願うばかりだが、こればかりは運の要素とも言える状況で贅沢など言えるはずがない。仮に誰かがいて、それが強力な魔法師だとしても、今回は彼の魔法力を強化するための外付け端末［イグローク］も連れて来ているし、宗谷海峡での交戦を経てベゾブラゾフの作戦も念入りに練られている。
ベゾブラゾフは人工授精によって誕生した魔法師で、昔流で言えば『試験管ベビー』だ。
遺伝子操作は行わずに無数の受精卵を作り出し、その中から選ばれた最高傑作。それが新ソ連の戦略級魔法師イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ。
当然、その成功例の受精卵は生化学的にコピーされ、彼の〝妹〟とも言える存在（クローン）が七人も生み出された。彼女たちはベゾブラゾフと同じように戦略級魔法師となることが期待され、実際に戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］をマスターするに至った。
だが、人間の遺伝子は２１世紀初頭の時点でも機械のように画一的な性質を引き出すための構造全てを解析できていたわけではない。いくら大本が成功したからといって、それを複製して１００パーセント同じものが出来る事など皆無に等しい。

それは彼女たち――――［アンドレエヴナ］と名付けられたベゾブラゾフのコピー体にも当て嵌まることで、彼女たちは無菌室の中でしか生きられないという身体的な欠陥を抱えてしまった。さらに、一応［トゥマーン・ボンバ］を発動することは出来ても、実戦レベルで使うには余りにも乏しい発動速度と射程距離しか有さなかった。

そこで、新ソ連は彼女たち単体での運用ではなく、ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］に上乗せをさせる形を取った。元々ベゾブラゾフの遺伝子情報をコピーして生み出されたので、魔法演算領域を同調させるのはさほど難しくなかったからだ。

本体であるベゾブラゾフが精神の浸食を受けないよう徹底的に自我を奪われ、ただ魔法の発動を補助するだけの生体機械『奏者（イグローク）』となった。香港系マフィアが扱っていた［ソーサリー・ブースター］は魔法師の大脳を生きたまま封入して魔法補助に用いていたが、それ並みに性質が悪い話だろう。

だが、現代魔法の進歩の過程において、人道を著しく外れた生体実験などザラにあったことで、その一端は日本にもかつて存在した（現在は悠元の治療で全員真っ当な人間に更生中だが）強化調整体もその一端だった。

ベゾブラゾフは『指揮者（デイリジオール）』として、七人の［アンドレエヴナ］を意のままに操る立場。当然、彼に彼女たちを憐れんだりするなどという躊躇いは一切有していない。

それはもしかしたら、ベゾブラゾフ自身の運命だったのかもしれない。

作られた存在であり、生存競争の勝者として敗者を貪っているのも、彼が勝ち得た結果でしかない。新ソ連における魔法研究の第一人者として名を馳せても、彼はその生き方以外を選ぶ権利などなかった。

彼は新シベリア鉄道の軍用列車で牽引してきた大型ＣＡＤ［アルガン］の最終調整を係員に指示した。

◇　◇　◇

戦略級魔法師――――とりわけ国家公認の［十三使徒］の動向を掴む

のは、世界各国の軍事関係者にとっては死活問題といえた。特にこれまで表に出てこなかったベゾブラゾフはディオーネー計画への参加という出来事によって、［十三使徒］の中でも注目を浴びている形だ。
そして、日本にとってベゾブラゾフは国境を接する非同盟大国の戦略級魔法師。直接的な脅威であり、一昨年秋に佐渡沖で戦略級魔法を行使し、今年に入ってからは佐渡沖と宗谷海峡で使われた魔法の当事者の可能性が極めて高いと目される。
ベゾブラゾフの行動を把握・監視することは、国防上の重要課題とも言えた。
防衛省内の国防陸軍最高司令部。その司令室に座る蘇我大将が参謀部からベゾブラゾフに関する動向の報告を受けたのは、6月8日の午後のことだった。司令室には蘇我のみならず、参謀長を務める大友中将の二人がいて、互いに司令の執務机ではなく、応接用のテーブルに座って相対している。
「――ベゾブラゾフがこの時期にウラジオストク入りですか。そうなると、狙いはやはり」
「我が国だろう。いや、正確には司波達也君を狙っての攻撃とみるのが妥当だな」
世界の世論がディオーネー計画とＳＴＥＰ計画の二極化となっている今、その中核を担っている元［トーラス・シルバー］の片割れである達也を狙ってのものだろう、と蘇我は推察した。
「ちなみに、〝彼〟を狙う可能性もありますが」
「そちらこそ一番の悪手だ。そもそも、我々ですら明確に所在を掴めないことが多い彼を新ソ連はどうやって狙うというのだ？」
「……不可能の所業、ですな」
別に悠元が自身の所在を公開していないわけではない。だが、日本屈指の監視システムでも明確な所在を掴ませない彼をどうやって狙いを付けた上で殺せるというのか、という根本的な疑問を蘇我は口にした。
人質を取って誘き出すという手法も考えられなくはないが、以前彼が中学生の時に友人が攫われそうになった際、魔法は最小限の行使と

しつつ、武術のみで大の大人たちを叩き伏せた。武術だけでも達人級の腕前なのに、魔法まで用いられると勝ち目がない。それは、沖縄方面の魔法師部隊が悉く叩きのめされたという報告で明らかだった。
　それに、５年前の沖縄で前線を張ったことと、一昨年秋の戦略級魔法による新ソ連艦隊消滅およびウラジオストク軍港の破壊。この時点でも一線級の実力を有していた彼が複数の戦略級魔法を有している事実を蘇我は把握している為、彼ならば相手の戦略級魔法すら封じる魔法を編み出していても不思議ではない……というのが、蘇我の偽らざる感想だった。
「仮に闇雲にベゾブラゾフが戦略級魔法を行使すれば、それこそ彼が協力を表明しているディオーネー計画そのものの信憑性にまで発展する。それが分かっていながらここまでのことをするとなると……新ソ連が痺れを切らしたとみるのが妥当だろう」
「堪え性がありませんな、新ソ連は」
「上条大将も以前述べていたが、ソビエトの栄光という旗頭を明確に示している以上、領土的野心など消えていないのだろう。今回のことだけを見ても、確かにその通りだと思う。先んじて、独自ルートで四葉家に警告の手紙は送っておいた」
　気休め程度にしかならない、と思いつつも、四葉家を正面切って敵に回すことなど出来ない。四葉家だけでなく、神楽坂家や上泉家まで出張ってくる可能性があるだけに、蘇我は国防陸軍としての最大限の配慮をすることしかできなかった。
「参謀長、ここで気になるのは司波達也君が〝大黒竜也特尉〟として在籍している第１０１旅団の動向だ」
「よもやとは思いますが、佐伯少将が何かされるとお思いで？」
「ないことに越したことはないが、彼女は九島退役少将の正式な引退宣言後、どうも司波君を使いたがっているように見えてしまうのだよ」
　国防陸軍としても、達也が別名で国家非公認戦略級魔法師として在籍している事実は把握しているが、その情報は陸軍最高司令部と第１０１旅団の佐伯、そして独立魔装大隊のメンバーに限定されている。

戦略級魔法師という秘匿性も無論の事だが、最大の理由は彼が四葉家の人間という事実を隠す為。日本の国防が四葉家によって左右されている事実を知れば、四葉家を排除しようと大国が動き、かつての大漢崩壊のような大惨事が世界各地に発生するのを防ぐためでもあった。

「確かに、彼の戦略級魔法は強力だ。だが、『ハロウィン』の件でも抑えた上であの威力となれば、地球上で迂闊に使わせるわけにもいくない。相手の拠点のみならず、何もかも〝消す〟魔法など、他国からすれば恐怖に見られても不思議ではない」

「その結果が昨年に起きたＵＳＮＡから我が国への妨害ですからな。今後、軍部へ圧力を掛けてくることも想定されますが……」

「聞く理由もないな。我々は自国を守るのが最優先で、同盟国の政府の要請を聞くのは二の次だ。尤も、国家間の交渉事は役人や政治家の仕事。我々が関与する範疇に無い話だ」

話を戻すが、第１０１旅団がある意味達也という存在に支えられているのは事実。先日の西果新島での工作阻止は、偏に悠元や達也の協力があったからこそ人的に大きな被害を出すことなく成功した。

十師族に頼らない魔法師部隊の筈なのに、実態は十師族に頼ってしまっているという矛盾。そうなると、佐伯が考えるのは〝十師族よりも強い〟という実績を作るということ。単純に実力ということではなく、権威や権力による実績という意味で。

「参謀長。直に動かせる諜報部隊を見繕って、第１０１旅団または独立魔装大隊の動向を監視せよ。無理に追跡する必要はないし、目的が判明次第帰還させよ……本音を言えば、こんな情勢下で味方を疑いたくなどないのだがな」

「……了解いたしました」

蘇我とて、佐伯が逸った行動を起こすとは思えない。だが、この情勢下に妙な動きを見せていることも事実。最悪、大黒竜也特尉を第１０１旅団から切り離して〝彼〟の部下につける形とすることも考慮せねばならない……と思いながら、大友に対して命令を下す。

大友も蘇我の心情を察しつつ、敬礼をして任務を受けたのだった。

予期せぬ迷い人

――２０９７年６月９日、日曜日。

悠元は武術訓練の名残で朝４時半に目が覚める。外を見やると、小雨で風は無い状態。梅雨の時期に入ったのだから仕方がないことだが、ベゾブラゾフからすれば絶好のコンディションなのは間違いない。

悠元はそのまま浴室に向かいシャワーを浴びる。昨晩は『考える事とかがある』と言い含めて久々に一人で寝たが、この先のことは出来るだけ婚約者を巻き込みたくないという我儘であった。

体を乾かすと『神将会』の戦闘服を纏い、ＣＡＤを身に着けていく。流石にすべてのＣＡＤを使用するという状況にはならないだろうが、今回は［布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）］の最終テストも兼ねているため、油断は決してしない。

悠元はそのまま屋上に上がる。普通ならば雨に濡れるわけだが、［ファランクス］で小雨をシャットアウトして相手の出方を待つ。悠元は［天神の眼（オシリス・サイト）］でウラジオストク方面に目を向けると、ベゾブラゾフの姿を捕捉した。

◇　◇　◇

悠元に捕捉されたという感覚を覚えることもなく、ベゾブラゾフは二人の［イグローク］――アンナ・アンドレエヴナ、ベロニカ・アンドレエヴナを無菌カプセルごと大型ＣＡＤ［アルガン］に収容し、自身はオペレーター席に座る。

アルガンは単なる通称に過ぎず、意味は楽器の『オルガン』。ベゾブラゾフのチームは『パイプオルガン』の意味で使っている。こんな通称が付いたのは、一車両を丸々占拠するほどの規模を持つＣＡＤを見た政府高官が発した感想から名付けられた、という至って単純な理由。

似ているとはいっても、サイズの大きさと筐体の左右前後にパイプが走っている形状だけであり、別に演奏するための装いがされているわけではない（実用性を重視する新ソ連にとって、そういう〝遊び〟

の要素など皆無なわけだが）。
更に、［イグローク］だけでなく術者のベゾブラゾフ本人も豪華な椅子に座ったまま筐体の中に閉じこもる。
［イグローク］は七人いるが、全員を一度に使うことはない。［トゥマーン・ボンバ］を使うだけならベゾブラゾフ一人で事足りる。彼女たちはあくまでも補助であり、安全装置でしかない。
ＵＳＮＡが［シャイニング・バスター］と呼称した戦略級魔法の存在も気に掛かるところではあるが、所在どころか正体すら掴めないものを一々気にしていては、今回の作戦を遂行することは出来ない。
まずは司波達也を抹殺し、然る後に［シャイニング・バスター］と呼ばれる戦略級魔法をＵＳＮＡよりも先に暴き出し、その術者も抹殺する。現在の時刻は朝６時、日本時間は朝５時。ターゲットがいると目される現地の天候も［トゥマーン・ボンバ］の発動に最適だと判断。
未だ眠りについているであろうターゲットを永眠に変えるべく、ベゾブラゾフは魔法発動の準備を始めた……その思考の全てが、ベゾブラゾフの中に漂っている小さな想子の塊に〝読み取られている〟とも知らずに。

◇　◇　◇

ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］では、離れた２か所を同時に狙い打てない――――ベゾブラゾフの中に仕込んだ想子のマーカーから情報の全てを得た悠元は、狙いを達也たちがいる伊豆の別荘一本に絞ったことを確認し、［鏡の扉（ミラーゲート）］を発動。
行き先は伊豆の別荘の中庭に指定して飛ぶ。
飛んだ先は静かな雰囲気を漂わせていて、達也と深雪はまだ寝ているが、水波は辛うじて起きて家事をしているような様子が気配で感じ取れた。傍にはピクシーもいるので、特に問題は無いと判断しつつ悠元は頭上を見上げた。
薄暗い雲から降り注ぐ小雨。それを［ファランクス］で凌ぐ形を取っている。悠元は持っていた端末に目を落とし、現在の時刻を確認する。もうすぐ朝５時を指そうということろであり、ベゾブラゾフの攻撃を迎撃すべく、意識の抑制をより一層〝深める〟。

◇　◇　◇

大型ＣＡＤ［アルガン］に付属する大型コンピューターが、観測機器から得られるターゲットの位置データをＣＡＤが利用できる形式に変換する。併せて、魔法式構築に必要な起動式の元データがベゾブラゾフのオペレーションにより大型コンピューターで作成される。

ベゾブラゾフは自分の精神内で魔法式の諸元を指定する代わりにコンピューターのコンソール上ですべての条件を指定して、それを元に起動式を組み立てている。彼はそうすることで、普通の魔法師には不可能な、極めて複雑な魔法式を構築していた。

［アルガン］と同じように大型コンピューターを使用したＣＡＤは、新ソビエト科学アカデミー極東支部にも置かれている。むしろ、性能という面ではそちらの方が上になる。だが、［イグローク］を使用できるシステムがそちらに備わっていないため、態々［アルガン］を持ってきた。

電気的な刺激により、強制的に眠らされている二人の［イグローク］から想子を抽出する。無菌カプセルの中で体温と同じ温度に調節された生理食塩水に浸かった二十代前半の全裸の女性は、意識のないままに呼吸用マスクの下で苦悶の表情を浮かべた。

だが、カプセルには［イグローク］の様子を確認するための覗き穴はなく、既に［アルガン］に収容されている為に彼女たちの様子を伺い見ることは出来ない。そもそも、そんな様子を見たところでベゾブラゾフも彼のスタッフも眉一つ動かさないだろうが。

［アルガン］の本体部分へ想子が注入され、直ぐに起動式の準備が始まった。ベゾブラゾフは自らの意思で、［イグローク］の二人は意識によらずに強制的に。［アルガン］がイグロークの起動式の読み込みを調整することで、三人の魔法式出力タイミングを合わせる。

ベゾブラゾフを含めた三人が、魔法式構築終了を以て自動的に、そのタイミングはベゾブラゾフすら彼の意思によらず、戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］を発動した。

◇　◇　◇

『マスター、戦略級魔法クラスの魔法行使を確認しました』

「――来たな」
［アリス］からの警告を確認したように呟くと、明確な殺意が上空から感じ取れた。この感じは一昨年秋に［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］を発動した時と同一のもの。間違いなく、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］だと直ぐに察した。
すぐに動くことも考えたが、別荘の中から達也が魔法を行使した。［術式解散（グラム・ディスパージョン）］や［魔導解散（キャスト・ディスパージョン）］ではなく、［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］を行使して水分子から酸水素ガスの生成プロセスを省略させることで［トゥマーン・ボンバ］の発動に必要なガス生成の定義破綻を起こさせる。
そして、深雪は［凍火（フリーズ・フレイム）］ではなく、［減速領域（ディーセラレーション・ゾーン）］で分子運動を極端に低下させることで、［トゥマーン・ボンバ］の発動を抑止する。
「――だが、まだ終わりじゃない」
悠元の視線の先には、既に次の［トゥマーン・ボンバ］が達也や深雪の認識外で発動準備を整えていた。正直、大規模魔法の行使は普通時間がかかるのが当たり前だが、悠元は剛三という埒外を目の当たりにしている為、ベゾブラゾフの魔法すら遅く感じてしまうほどだった。
この状態だと、いくら原作よりも強化した達也たちといえども無事では済まない。悠元は［布都御魂剣］を抜き放ち、頭上に構える。
「天を貫き、地を裂け」
悠元は全ての気配抑制を切り、自身の魔法力を手に持つ［布都御魂剣］に注ぎ込む。その力の波動は、当然別荘の中にいる達也たちも強く感じていた。
「お兄様！　この感覚は……」
「悠元……まさか、先に完成させたというのか。あの時言っていた〝アレ〟を」
それは当然、別荘の中に限った話ではなく、監視小屋の中にいた夕歌も、別荘の周囲にいた人々も、悠元から発せられる力の波動を強く感じていた。だが、想子を感知するセンサーには何も映らないし、反応しない。
「［叢雲］――天魔抜刀」

想子ではなく、魔法師の本質の力――――霊子を発する悠元が光に満ちた［布都御魂剣］を振り下ろす。すると、それまで白銀の太刀であった［布都御魂剣］の刃が漆黒に染まり、ＣＡＤに無かった筈の漆黒の鍔には竜の紋様が刻まれていた。

悠元は上空に視線を向けると、地面を蹴って上空に飛ぶ。急上昇する彼の目前には、逆漏斗状の霧の塊が見えてくる。紛れもなく［トゥマーン・ボンバ］による攻撃のバリエーション。そして、［トゥマーン・ボンバ］によって酸水素ガスに分解され、外側から内側に、同時にではなく連鎖的に燃焼した。その衝撃波の先にあるのは達也たちがいる別荘。

「させねえよ、ベゾブラゾフ。月牙、天衝!!」

それに割り込む形で、悠元が天魔抜刀［天都御魂叢雲（アマツミタマノムラクモ）］を構える。そして、音速を超えた速力を以て放たれた彼の魔法斬撃――――高密度に圧縮した霊力と情報次元に［分解］の概念を持ち込んだ斬撃で森羅万象を斬り伏せる［月牙天衝（げつがてんしょう）］によって、かつてウィリアム・シリウスを葬ったバリエーションの［トゥマーン・ボンバ］をたった一撃で完全に無効化した。

だが、悠元はこれで終わらせる気など無く、新ソ連の方向に視線を向けた。

「達也にはああ言ったが、人様を殺そうとした報いを忘れたと見える……今度は半殺しだ。万が一手足をもがれても因果応報だと思え」

達也なら先程の［トゥマーン・ボンバ］からベゾブラゾフの位置を割り出して攻撃を加えると信頼しつつ、悠元は右手に［ラグナロク］を構えて［天神の眼（オシリス・サイト）］で照準を捉える。

今回の目標点はただ一つ――――新ソ連の首都モスクワにあるクレムリン宮殿。そして、宮殿の執務室に国家元首の姿を捉えると、躊躇うことなく引き金を引く。

［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］、発動」

そして、悠元が引き金を引いたタイミングとほぼタイムラグが発生することなく、クレムリン宮殿に光の柱が落ち、折角再建した宮殿の半分が消え去るという前代未聞の事態に新ソ連が混乱することにな

るのは、別の話。
悠元は魔法の発動を確認した後、直ぐにベゾブラゾフがいるであろうウラジオストクに眼を向けた。当人はＣＡＤの外に脱出している様子で、この辺は達也が上手くやったのだろうと思う。
悠元は天魔抜刀を解除して［布都御魂剣］を鞘に納めると、地面に衝突しない程度の速度で降下した。そのまま別荘のベランダに降り立つと、それを見計らったように窓が開いて寝間着姿の深雪が走って来て、そのまま悠元に抱き着いた。
流石に寝間着の下に下着は身に着けていた（そもそも、そんなことをすれば達也が窘めるだろう）ので、内心でホッとしたような心境を抱いたのは決して口に出さない。
「悠元さん！　ありがとうございます。また助けられてしまいましたね」
「まあ、達也がいれば万事切り抜けられると思ったが、流石に心配だったからな。怪我はないか？」
「はい。ただ、妙なことになりまして」
深雪の述べた〝妙な事〟という単語を聞き、流石に首を傾げる。
「妙な事？　もしかして、ピクシーが人間になったとか？」
「それはそれでほのかがまた困りそうなことですが……ともかく、来てください」
少なくとも、達也と深雪、水波とピクシーに怪我はおろか、魔法行使の後遺症が残る様な事象は発生していない。深雪に急かされる形で悠元が靴を脱いで中に入り、1階に降りると深雪の言っていた妙な事が目に見える形で確かに存在していた。
「達也」
「悠元。また助けられてしまったな」
「まあ、ベゾブラゾフへの直接的な対処は達也に任せてしまったが。それで……何で水波が二人に増えているんだ？」
「それは俺が知りたいところなんだが……」
深雪と来たときの構図を示すと、応急処置を施す達也と横になって倒れている水波。それを見て気絶したと思しき水波を支えるピク

シー。まるでドッペルゲンガーを見てしまったような感覚に陥ったと考えれば、気絶するのも止むを得ないだろう。
「俺らも困惑してるが、一番困惑したのは水波だろうと思うが……ピクシーの意見は？」
『概ねその通りで間違いない、と判断いたします』
ピクシーに支えられている方は気絶しているが至って健康で、［領域強化（リインフォース）］の影響を受けた〝この世界の桜井水波〟で間違いない。問題は、達也が応急処置を施した側の〝桜井水波〟のほうだ。
見るからに魔法演算領域のオーバーヒートによる衰弱状態なのは間違いない。悠元がそのまま治療してもいいのだが、彼女がどういう経緯でこの世界に迷い込んだのかを知る必要がある。
それに、同一の魔法を施したことで、この世界の桜井水波に対してどんな影響を及ぼすのかも不透明。故に、今すぐ治療するという段階に無いのは確かだった。
「心当たりがあるとしたら……達也の許に送ったあの黒い立方体かな」
「あの箱か？　俺が改めて［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］で見ても、何も分からなかったのだが」
「魔法障壁を張る役割があるのは間違いないが、あの術式は戦略級魔法級の霊力を感知すると発動して、何かを引き寄せる効果があるらしいとは分かっていたんだ。ただ、半信半疑の部分も多かったからな」
「成程な……それにしても、こんな事象に遭遇するなど、お前に関わらないと出来ない経験だな」
達也は悠元が転生者だと知っているが、そうやって言われると心に来るものがある。ともあれ、とりあえず悠元は意識を覚醒させる魔法でピクシーに支えられている方の水波を目覚めさせた。
「あ、私は……ゆ、悠元様!?」
「大丈夫か、水波？」
「は、はひ、だいじょうれす！……あう、舌を噛んでしまいました」
目が覚めたら、いきなり目の前に自分の主兼想い人がいたため、慌てて取り繕ったところで舌を噛んでしまい、思わず悶えるという光景

に場の雰囲気が和んだのは確かだった。だが、それも水波の言葉で現実に戻される。
「あ、そうでした！　私に似た人が突然目の前に現れて……もしかして、悠元様が？」
「いや、一先ずの応急処置は達也に任せた。俺が治療してもいいが、水波に対する影響が未知数だからな。暫くは様子を見ることにした。水波はどうしたい？」
「……そういうことでしたら、悠元様と達也様に委ねます」
　水波も自身に対する影響が分からないとなれば、下手に〝治してほしい〟と訴えることも難しいと判断したのか、水波は静かに頷きつつも自分の力で立ち上がった。
　すると、達也が悠元に話しかけた。
「達也、そちらの……〝桜井さん〟と呼称しようか。彼女は？」
「一応［再成］で想子情報体は復元したが、幽体の領域となると難しいようだ。視てくれるか？」
「それぐらいならお安い御用だよ。鏡合わせの世界に飛び込めと言われないだけマシだ」
　悠元は達也の頼みに頷きつつ、［天神の眼（オシリス・サイト）］で桜井水波の精神領域を具に確認する。すると、精神体（幽体）と想子情報体の結節点である［リンカーコア］――その内部に通っている魔術回路が焼き付いて、人間が生きる上で無意識的に行っている生命維持の為の想子回路までやられてしまっているのが確認出来た。
　［リンカーコア］自体は魔法師に限らず、この世の〝生きとし生けるもの〟全てが有するが、魔法師はその中でもコアの性能が優れている。魔法資質に関する遺伝子が存在するのは、魔法師が魔法を行使する上で最適な神経の配列パターンが存在するため。
　幸い、生命維持に必要な想子回路自体は修復可能なレベルなので問題はないが、魔法演算領域に接続する魔術回路が損傷している以上、ここを修復しない限り魔法演算領域の修復は望めない。この辺の知識は魔法力訓練を経ることで得た悠元しか知らない知識の一つ。
「……原因は掴めたし、ただ修復するだけならば早いんだが。水波、と

りあえず気絶するまでのことを話してくれるか？」
「はい。実は……」
水波の証言では、［トゥマーン・ボンバ］の魔法を感知したピクシーの呼びかけで別荘に対する衝撃波を拡散する性質を付与した［ファランクス］を別荘の上空に展開した。十文字家の秘術である［ファランクス］を水波に教えたのは悠元で、水波が使いやすいように改良を加えている。
ただ、衝撃波は悠元が無効化したことで水波は安全だと判断したところで突然目の前が光り、光が収まった後には、今の自分と全く同じ格好だけでなく、容姿（一部分は異なるが）まで似通った人物が床に倒れているのを見て、思わず自分が突然幽霊になったのだと勘違いして気絶した……というピクシーがいつの間にか録画していた映像をモニターに表示する形で確認した。
なお、水波が恥ずかしさのあまり赤面しているのは言うまでもなかった。

次元の壁を超える可能性

ピクシーによる水波の映像説明（しゅうちプレイ）はともかくとして、一先ず床に倒れたままの桜井水波（以後は桜井と呼称）をソファーに寝かせる。達也は四葉本家に対して説明するために端末を操作する間、悠元は周囲の気配を探る。

すると、本来近寄れない筈の結界の中に入り込んでいる装甲車が一台存在していることに気付く。元々認識阻害の為の結界なので、ファンタジーのような〝魔除けの結界〟ではないために入った相手を無条件で排除するようにはできていない。

「……誰かが夕歌さんの張った結界の中にいる。それも、読み取れる情報からして国防陸軍の装甲車？　だとすると……」

悠元謹製の結界魔法を欺ける人間はそうそう居ない。そして、その数少ない人間が装甲車に乗っているとすると、選択肢はほぼ一人しかいない。桜井のことは達也に任せつつ、深雪に視線を向けた。

「深雪、どうやら国防陸軍の〝知り合い〟がいるようだ。俺が対処するから、達也にはそう伝えておいてくれ」

「分かりました」

「水波、万が一のこともあるので、暫くは直ぐに魔法を展開できるようにしておいてくれ」

「畏まりました」

深雪と水波にそう伝えて悠元はベランダに出て靴を履くと、そのまま魔法も使わずに飛んで中庭へ着地して走り出す。悠元が気配を見つけた先には一台の装甲車がいて、感じられる魔法の波長から術者の見当をつける。

そして、躊躇うことなく悠元は装甲車の上に飛びあがって降り立ち、「ラグナロク」を装甲車に向けた上で魔法を併用する形で装甲車の中に呼びかける。

「さて、こんな真似をした以上は説明して頂こうか、第１０１旅団独立魔装大隊・大隊長、風間玄信中佐？」

明らかに〝怒り〟を込めたような口調を発した悠元に対し、装甲車

から降りたのは風間一人だけ。他の部下もいると思われるが、中から感じられる気配に敵意や害意は一切認められなかった。
　風間も悠元の怒りを感じ取ってしまったため、部下に対して抵抗の意思を見せるような真似は慎めと言明した上で、一人で悠元の前に相対した。だが、悠元は［ラグナロク］を下ろすような真似は見せていない。もし、ここで風間が敵意を見せれば、その瞬間に装甲車が〝消滅する〟ことも覚悟せねばならない……ということは、無論風間も理解している。
「ロクに支援も寄越さず、必要とあらば達也の力を当てにして、終いには達也を囮にでも使うような真似をした。そんなのは軍人の範疇ではなく工作員の領分だ。いつから独立魔装大隊は魔法師の工作部隊へと堕ちたのですか？」
「そのようなことは……」
「無いと？　じゃあ、何をしていたのか当ててみせましょうか？　恐らく、ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の観測でしょう？」
　悠元の問いかけに対して風間は何も答えない。いや、何も〝答えられない〟。何せ、悠元は気配の抑制を切った上で風間と相対しているが、殺意は一切見せていない。気配だけで相手を完全に黙らせるという所業を受けたのは、風間からすれば〝二人目〟だった。
「敵の戦力分析という意味では、達也を〝取り返しが利くコラテラルダメージ〟と位置付けてベゾブラゾフの戦略級魔法を解析する……達也でなかったら破綻している行動ですし、そもそも未来ある若者を平気で犠牲にしかねない行為を国防陸軍がやったという自覚をご存じなのですか？」
　正直、原作の達也が今回のことで国防軍に見切りをつけていたとしても、何ら不思議ではない。原作の展開では、水波が居なければ深雪を喪っていたかもしれないという最悪のケースを考えた場合、達也が深雪や水波のことすらも〝国防を預かる軍人の救う対象として見なかった〟ことに内心で憤っていても、それは当然の帰結と言える。
「言っておきますが、俺は別に貴方の謝罪を望みません。ですが、貴方

の上司の命で立ちはだかった場合は、この国を護る使命を帯びたものとして本気で叩き潰します。今回の件は不問にするので、とっととお帰り下さい」

これ以上何も言わない風間に言い放ったところで何も返ってこないと判断した悠元は、[ラグナロク]を懐に仕舞って姿を消した。そうして悠元の気配が消えたことを確認した風間は、その開放感からか思わず片膝をつくような格好となった。

額からは汗が噴き出しており、悠元との相対は風間にとってかなり精神を消耗した形となった。

「……剛三殿のように、殺意を出さずにあそこまで圧倒されてしまうとはな」

そう呟いた風間だが、早くここから出なければ四葉家の関係者に何を問われてもおかしくは無いと考え、自らを奮い立たせるように立ち上がると装甲車に乗り込み、ここから急いで去るように指示したのだった。

◇　◇　◇

悠元は伊豆の別荘ではなく、そのまま箱根の神楽坂本家に飛翔した。本家の使用人がいきなり姿を見せた現当主の姿に驚かない様子を見せていたため、先程の[トゥマーン・ボンバ]の兆候を察知して周知した可能性が高い。

そのまま屋敷の離れに案内された悠元が目にしたのは、寝起き気味で寝間着姿の千姫(ははおや)だった。

「母上、叩き起こしてしまったようで申し訳ありません」

「別にいいのよー。寧ろ〝汚い魔法〟で叩き起こされたようなものだし……あ、勿論達也君や深雪ちゃん、悠君の魔法じゃないよ」

古式の術者からすれば現代魔法師を快く思っていない節があったりするが、ベゾブラゾフの[トゥマーン・ボンバ]を〝汚い〟と表現するのは、後にも先にもこの人か剛三ぐらいしかいないだろう。

ともかく、伊豆の別荘で起きた一連の流れを説明すると、千姫は使用人が持ってきた濃いめのほうじ茶を啜りながら思案していた。そして、一息吐いた後に悠元へ視線を向ける。

「他の世界から来た経験をしている悠君からして、もう一人の桜井さんはどう見えたのかな？」
「本人に仔細を聞かないことにはどうにも言えませんが、恐らく他の世界から〝飛ばされた〟とみるのが一番妥当でしょう」
少なくとも、原作世界に〝三矢悠元〟と呼ばれていた存在は確認出来ていない。そうでなくとも、三矢家に達也や深雪と同学年の人間がいたことも無い。彼女が飛ばされた元々の世界がどうなっているのかも不明なため、まずは日常生活を送る分には支障のない程度に回復はさせた。
「防御による反動を受けていない筈の水波とそっくりの人間が魔法演算領域のオーバーヒートと思しき症状で倒れていたのを見るに、想定される状況では自分のような干渉をしなかったが故に発生した、と推察しました」
「成程ね。とりあえず、その子は魔法医療大学付属病院で入院させることにしましょう。にしても、深夜ちゃんだけじゃなくて真夜ちゃんまで女にしちゃうなんて、流石悠君ね」
「その片棒を担いだ側がそれを言いますか」
四葉家と言うか、達也と敵対しないために友好的な関係を築こうとしただけで、結果的に四葉家の関係者だけで五人（深雪、夕歌、水波、深夜、真夜）と関係を持ってしまった形となる。
別に自らハーレムを望んだ訳ではないし、一夫一妻となったら間違いなく深雪を選んでいただろう。それが、『悠元の性欲を深雪一人で処理するには重すぎる』という理由も含めて愛人込みで１７人の女性を囲う形となった。
最初は『そんな訳ねえよ……』と否定したが、関係を深めるにつれて収まることのない欲の深さに対して、思わず溜息が漏れたのは言うまでもない。
「ちなみにだけど、真夜ちゃんは『たっくんが独り立ちしたら家督を譲って、姉さんと同じように悠元君の愛人として転がり込んでもいいですか？』って。どこぞの馬鹿の仕業とはいえ、あんな辛いことを経験したのだから、悠君が責任を持って囲ってあげてね」

「……もうこれ以上増やさないでください」
真夜は深夜のように魔法治療を施していないが、万が一の保険を使った副作用として悠元の魔法の影響が真夜にも及び、見た目は２０歳ぐらいに若返っていた。これで四捨五入して５０歳と言われても信じようがない有様だった。そのせいで深夜にも更にせがまれたのは言うまでも無かった。
真夜の女性としての辛い経験を持ち出されては、流石に断ることも難しくなる。せめて、もうこれ以上は勘弁してほしいという言葉を漏らすことしかできなかった悠元だった。話が逸れてしまったので、桜井水波に関する話に戻す。
「それにしても、国防軍のねえ……情報部の件といい、そんなに悠君や達也君を支配したいのかしら。魔法を縛るのは法ではなく、本人たちをどれだけ納得させられるかの交渉材料を提示することでしょうに」
例えば、国防軍で使う銃器などの兵器類は国防軍法という軍規（ルール）に課せられた範疇で使用している。民間レベルで言えば、銃刀法というルールを用いて無用な殺生を固く禁じている。感情という衝動的なものを法規という形で律するのが法治主義の在り方であり、人間は各々の国に課せられたルールで暮らしている。
だが、魔法は縛る為の明確な規則が存在しない。緊急時を除く魔法行使には厳しい制限が課せられているものの、それが法律としての体を成しているとは言い難い。とりわけ、戦略級魔法クラスとなれば逆に国家でも重要な戦力として成立するため、術者個人を止めるというのは極めて膨大な負担を強いられることもある。
「自分の場合、名誉や栄光に拘らなければ常識の範疇で別に構わないですがね。だからこそ、［トーラス・シルバー］のことも一切明るみにしてきませんでしたので」
「悠君のように考えられる戦略級魔法師なんて、それこそ義兄（あに）ぐらいでしょう。後は達也君ぐらいかしらね」
個人で強大な力を持っているがために国家では抑えきれない。下手に国内へ刃を向けられるぐらいならば、国外に矛先を向けてもらうことで最終的に国家の利へと変換する。ベゾブラゾフが政府を気に

することなくあれこれ行動出来ていたのは、彼個人を止めるための選択肢が新ソ連政府に〝あまり存在しない〟という側面が大きいのだろう。
「それで、今回ベゾブラゾフは殺さなかったみたいだけど、国家元首の方は？　悠君がクレムリン宮殿を半分綺麗に吹き飛ばしたんでしょう？」
「まあ、命がある様に撃ち込みましたよ……あれだけの威力を叩き出しておいて魔法兆候がほぼ関知されなかったのは、当人としては正直複雑ですが」
神楽坂本家へ来る前に［天神の眼（オシリス・サイト）］で確認したところ、新ソ連の首相は泡を吹いて気絶していた。護衛に運び出される形で宮殿の外に出たが、これでも懲りないならば、今度は新ソ連の軍事施設を片っ端から［トゥマーン・ボンバ］で永久凍土層を溶かして地盤沈下させてやろうと目論んでいる。
魔法自体の行使は確認できるが、なまじ基礎単一系程度の感知しかされないという事実は一昨年の『灼熱と極光のハロウィン』で確認済みだが、今回改めて国防軍が観測したデータを確認したところ、主に目立ったのはベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］のデータだけで、達也や深雪、水波と同じ規模での魔法感知しかされなかった。
相手に実力を隠すという意味では理に適っているが、それでも常識の範疇であってほしかった……という思いを込めてぼやいた悠元に対し、千姫は口元に手を添えつつも笑みを漏らしていた。
「そんな所業は、この家の初代様以来のことです。もしかしたら、悠君が初代様の〝先祖返り〟なのかもしれませんね」
「過去の偉人のぶっ飛び具合に勝てる気が全くしないのですが……」
「悠君？　どうしたの？」
「ふと思ったのですが、この世界に迷い込んだのが彼女だけと結論付けていいのか、と思いまして……母上には話します。突拍子もないことかもしれませんが」
そして、悠元はこの世界――――『魔法科高校の劣等生』という世界のことを創作物という認識で知っているということ。そして、桜井水

波は物語上重要なキーパーソンの一人ということも付け加えた上で。
それを聞いた千姫は少し思案した後、悠元に対して話し始める。
「成程。それで水波ちゃんを治療したのね。そうなると、同じような立場の人間がまだいるのね？」
「はい。名は九島光宣。この世界では壬生家の養子になりましたが……もし、桜井水波が世界の修正力に干渉する形で迷い込んだとするならば、彼も何らかの形でこの世界に迷い込んだと想定されます」
千姫が信じたのは、神楽坂家と上泉家で分割管理している究極魔法［夢想天成］のことが念頭にあるのだと推測した。
にしても、伊豆の別荘に保険として送った漆黒の立方体――悠元が名付けた名称は聖遺物（レリック）［時空の道標（エターナルポース）］――がこんな効力を有するものだとは思わなかった。桜井の面倒を達也に任せた際、そのレリックは回収した。
そして、悠元が改めて［エターナルポース］を取り出すと、今まで魔法障壁の魔法陣しか彫られていないただの箱だったものが、刻まれた魔法陣が淡い光を放っていた。
「これが、悠君の言っていたレリックね。しかも、今まで死んだに等しい状態だったのに……悠君は世界に認められたのかも知れないわね」
「聞かなかったことにしていいですか？」
このレリックを改めて［天神の眼（オシリス・サイト）］で確認したところ、世界各地に存在する〝文明の遺跡〟に瞬間移動できるような魔力の接続（パス）が確認出来た。
つまるところ、このレリックは異なる次元を繋ぐだけでなく、その力を応用して遠く離れた二点を繋ぐ〝鍵〟のような役割を果たしている。ようは悠元の［鏡の扉（ミラーゲート）］に近い能力を発揮できることになる。現状、［ミラーゲート］のような使い勝手の良さはないのだが、これを解析して2点間を接続する［瞬間移動］が出来る可能性がある。
あの勾玉の件だけでも正直腹一杯の気分なのに、厄介事がまた増えることになろうとは思いもしなかった。
「仮に、九島光宣君が飛ばされていたと仮定して、悠君はどうするの？」

「まずは話し合ってみようと思います」
仮に水波が今のような状況に陥っていたら、即座に治した上で対抗策を考えることに注力していた。だが、オーバーヒートを起こしているのは桜井のほうで、現状では彼女を回復させた影響が水波に及ぶ可能性は極めて低い。さらに、同じ遺伝子を有している同一の存在であるはずなのに、双子のような共鳴現象も確認できていない。
これはあくまでも水波の場合であり、光宣の場合はその限りではないかも知れないが。
「言い方は悪いですが、桜井さんは他人みたいなものです。相手が何を望んで行動する気なのかを確認するだけでも大分違うでしょうし」
「それもそうね」
「それに、上手く行けば彼に一芝居売ってもらうことも考えていますので」
考えて見れば、原作のこの段階での日本はＵＳＮＡ、新ソ連、大亜連合、イギリスと面倒事のオンパレードというか、強制的に四正面作戦を強いられているような状況になる。もし、仮に九島光宣が転移してきたとすれば、彼にＵＳＮＡ方面のヘイトを一時的に請け負ってもらうことを提案する気でいる。
「ともかく、現状では彼女一人だけしか確認されていない以上、まずは彼女から事情を聞けるような雰囲気づくりが大事でしょう」
「そうなってしまいますね。そう言えば、義兄(あに)と姉さんから連絡が来て、イギリスの〝時計塔〟を沈めたそうよ」
「……」
別にビッグ・ベンそのものを沈めたわけではなく、英国に古くからいる古式魔法師たちの組織を潰したそうだ。何でも、奏姫に手を出そうとしたところで剛三が殴り込んだとのこと。
「予定だと、この後ＵＳＮＡに向かうんですよね……スターズのロズウェル米軍基地が更地になるという悪夢が脳裏をよぎったのですが」
「奇遇ですね。私の脳裏にもそう見えてしまいます」
基地を潰したりすることは、別に今始まった事ではない。正直、同情の念を禁じえないと思ってしまえるほどに、ＵＳＮＡの情勢が極

まっていたのは言うに及ばずであった。

過去からの来訪者

桜井は旧群馬県にある国立魔法医療大学付属病院に入院することとなった。彼女の護衛には神楽坂家から連絡を受けた上泉家が非魔法師の女性の門下生を派遣している。普通ならば魔法師を派遣するだろうが、こういったケース自体は古式の術者からすれば既に知っている現象であり、彼女の自然治癒の妨げにならないような配慮の結果だった。

魔法に関する知識に強い医者がいるのならば、無理に付き添う必要も無いと判断して町田のマンションに戻ったのが午前１０時。達也らもマンションに戻ることとし、四葉本家から人員を派遣するらしいと達也から聞くこととなった。

「悠元さん。彼女は大丈夫でしょうか？」

「……どうとも言えんな。最悪の場合は俺が治療することになるが」

仮に治療したとして、今度は水波をどうやって元の世界に送り返すかが重要となる。一番早いのは［夢想天成］によって次元の壁にワームホールを開通し、水波を送り出すという方法。だが、単独で送り返すには多大なリスクを負う危険性があるだけでなく、もう一つの問題もある。

それは、［夢想天成］発動による次元の壁への干渉は、最低でも半年の期間を置いてから発動せねばならないという点。このことは天神魔法の創始者である賀茂茂明と安倍晴明が警告していた事項の一つとして語られている。

短期間にホイホイ連発なんかすれば、重力の壁が揺らいで実体世界と精神世界の境界が曖昧となり、実体世界に［パラサイト］が蔓延するということにも繋がる。悠元が［夢想天成］を使用したのは今年の２月下旬。なので、修復のサイクルを考えると使用できるのは最短でも８月下旬の話になってしまう。

あれこれ考えても仕方が無いと溜息を吐き、悠元はテーブルの上に［時空の道標（エターナルポース）］を置く。

「これは確か、一昨年の時に使ったものですよね？」

「ああ。どうやらこいつが彼女を呼び寄せたようだが……コイツの対になるものがどこかにあるはずなんだ」
［エターナルポース］は単体でも2点間の遠く離れた場所を繋ぐ力を有するが、次元を繋ぐとなると、当然桜井の世界にも［エターナルポース］が存在しているということになる。だが、彼女は戦略級魔法を放つには魔法演算領域の出力が足りない。
そうなると、似たような状況が桜井のいた世界でも生じたということになる。
「この世界にですか？」
「いや、彼女の世界にあると思しきものだ。なので、彼女がコイツの所在を知らなかったとしても不思議ではないんだが」
水波と瓜二つの恰好で飛ばされたことを考慮すると、〝西暦２０９７年６月９日前後の並行世界（正確には彼女が衰弱するほどの攻撃を受けた時点の世界）〟と考えるのが一番可能性の高い線となる。戦略級魔法クラスの事象干渉力という点で言えば、ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］クラスを防御しきった反動で倒れたとみるべきだ。
彼女の記憶を魔法で読み取っても良かったのだが、目を覚ました彼女が混乱してしまう状況を考えると、そこまで性急な判断は出来なかった。
「このレリックがここまでのものだとすると、正直［シャンバラ］の存在も強ち伝説と呼べなくなってしまうが……その話はまた今度だろうな」
悠元は徐に立ち上がり、出掛ける準備を始めたことに深雪は首を傾げた。
「どちらに出掛けるのですか？」
「……ああは言ったが、もしかしたら目を覚ますかもしれないからな。それに、元継兄さんと今後のことを詰めておかないといけない」
ディオーネー計画の工作が頓挫したと見做してのベゾブラゾフの攻撃。そして、修正力が働いたかのようにこの世界へ飛ばされたもう一人の桜井水波。繋がる形で発生した二つの事象は上泉家も既に把握していることだろうと思うが、直に会って話をするのが妥当と判断

した。
「深雪はどうする？　人員次第ではエレカーになってしまうが」
「ご一緒しても宜しいですか？　水波ちゃんにも声を掛けてきますね」
　そう言って部屋を出ていく深雪を見送ると、悠元は徐に［エターナルポース］を手に取った。もし、この存在が数多の世界を繋ぐものだとすれば、この世界の修正力に呼応する形であらゆる人間が飛ばされてくる可能性がある。
「……まさかとは思うが、死んだ人間すら次元を超えるなんてことにならないよな？　仮にそんなことになれば、いよいよ収拾がつかなくなるぞ」
　ぼやき気味に述べた悠元だが、そのつぶやきに呼応する形で［エターナルポース］が光り輝く。流石に手放すとマズいと判断したのか、悠元は事象干渉力を使って［エターナルポース］の発動を抑え込もうとするが、レリックは更に輝きを増す。
　光り輝いたのは数秒。流石に某大佐のような目潰しを食らうことは回避したが、悠元が閉じていた瞼を開いた先には、一人の男性がそこに立っていた。金髪碧眼の若い男性なのは間違いないが、少なくとも悠元が知る人間ではなかった。
「……どちら様ですか？」
「ここは……君は、日本人かい？」
「ええ。正直に言うと日本ですが」
　男性が英語で話しかけてきたので、悠元も英語で答える。すると、男性は土足だったのですぐさま靴を脱いでいた。ともあれ、自室にいたのでは話にならないと判断してリビングに移動した上で男性と話すこととなった。
「それで、貴方は……えっと」
「アルフレッド・フォーm……いえ、すみません。アルフレッド・ストライフといいます」
「……（今、フォーマルハウトと名乗ろうとして訂正したように聞こえたな）」

悠元は近くにあった端末でスターズの情報を読み出す。そして、アルフレッド・フォーマルハウト中尉の情報にあった顔写真と目の前にいる人物の容姿が見事に一致した。その様子を緊張した面持ちで見ているフォーマルハウトに対し、悠元は尋ねる。
「ストライフさんとお呼びしますが、まずはこちらからの質問にお答えして頂けますか？　そうすれば、貴方の知りたい情報を提示することが出来ます」
「……分かりました。お答えしましょう」
そうして始まったフォーマルハウトとの質疑応答。
まず、彼が最後に認識していた日付が２０９５年１０月３１日――『灼熱と極光のハロウィン』があったという報告を受けた日までの記憶しかない。つまり、彼がダラス国立加速器研究所の実験に護衛として参加し、［パラサイト］に寄生されてリーナに処断されるまでの記憶はない。
この時点で、フォーマルハウトは過去から飛ばされた人間ということで間違いない。しかも、悠元が起こした事象の一端を把握しているとなると、ほぼ同一の世界線上から飛ばされたとみて間違いないと思われる。
「えー……まずはストライフさん。結論から言いますと、貴方がいた世界の未来となり、更に貴方は死んでいます。国家に叛逆したという罪で処断されたのです」
「そんな……スターズの人間でもある私が……」
ショックのあまり、フォーマルハウトは自分がスターズの人間であることを取り繕える余裕を無くしていた。無理もない。『そんなことをするはずがない』と思い込んでいた人間ほど、未来の自分の顛末を聞かされたらショックを隠せないものだと思う。
「――――ＵＳＮＡ軍魔法師部隊・スターズ第三隊隊員、アルフレッド・フォーマルハウト中尉。それが貴方の肩書きですね？」
「……ええ。その通りです。だが、何故君が？」
「自己紹介がまだでしたね。護人・神楽坂家当主、神楽坂悠元。貴方方が血眼になって探している日本の戦略級魔法［シャイニング・バス

ター」――――正式名称［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］の術者です」
「っ!?　君が…新ソ連の部隊を倒してウラジオストク軍港を消滅させた……」
　フォーマルハウトは悠元の正体を知り、臨戦態勢を取ろうとするが全く動けないことに気付く。魔法による事象干渉ではなく、彼が放つ気配で自身の無力さを体感する羽目となったことに、フォーマルハウトはただ悠元を見つめる事しか出来ない。
「ここで俺を殺そうものなら、返す刃で貴方を殺す。どうする？　この情報を持ってＵＳＮＡに帰ったところで、死んだとされている貴方を信用されるだけの根拠などない」
「……」
　嘘や偽りなどは感じない。それが、悠元の雰囲気と言葉から感じ取れたフォーマルハウトの出した結論。そして、彼は辛うじて両手を挙げて降参の意思を示した。それを確認した悠元は気配を抑えると、フォーマルハウトは大きく息を吐いた。
「参った。どうやら、君の言っていることは真実のようだ……私をどうする？」
「別に何もしない。だが、こちらの知る貴方が既に死んでいる以上、貴方の身元を保証してくれる国家はない。もし、この世界で生きたいと思うのなら、身元を保証できるように計らうことは可能だが」
「……未来の私がどうやって死んだのか、それを教えていただけますか？」
　そして、フォーマルハウトは自身の辿った『灼熱と極光のハロウィン』以降の歴史を見て、彼は確かに『自分が死んだも同然』なのだと悟った。そして、ＵＳＮＡに戻ったところで信用してもらえるとは思えないし、既に鬼籍に入っている人間が生きていたら、今度は日本の仕業だと騒ぎ立てる輩が出ないとも限らない。もしくは彼に扮してスターズ内部を混乱に貶めようとしている、などと嫌疑を掛けられてもおかしくはない。
　そこまで理解した以上、フォーマルハウトは静かに頭を下げた。
「お願いがあります。どの道私が知る過去に戻っても、私はただ殺さ

れるだけです。せめて、この世界で生きられるようにしていただきたい」
「フォーマルハウト中尉。いえ、アルフレッド・ストライフ。もしかすると、かつて貴方がいたスターズの隊員や隊長と敵対することも起こりうるかもしれない。その時、貴方は躊躇いを持つことなく引き金を引けるか？」
「……はい。私の居場所はＵＳＮＡにありません。この国を祖国だと思い、この国に骨を埋める覚悟は決めました」
「分かった。では、手配をしておこう。暫く同行してもらうが、構わないか？」
「はい。宜しくお願いします」
この後、深雪と水波、そして達也にもフォーマルハウトもといアルフレッドのことを説明した。その際に達也から「お前に出来ない事なんてなさそうだな」と言われた。解せぬ。
正直、リーナだけでなくセリアまで向こうに行っているのは、不幸中の幸いとも言うべきことなのかもしれない。そして、もう少し自分の発言に気を付けておこうと思った悠元だった。

◇　◇　◇

日本の伊豆高原に対する〝戦略級魔法に相当する大規模な魔法行使〟。そして、ほぼ同時にウラジオストク郊外で観測された大規模魔法発動の兆候。
今年４月初めにモスクワ郊外で起きた大規模な爆撃によって神経を尖らせていた各国の諜報機関は、これが新ソ連の［十三使徒］ことイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］ではないかと判断。
日本政府は午前中の段階で内閣総理大臣による記者会見を開き、今回の一件は５年前の佐渡侵攻、一昨年秋の佐渡・北陸方面への艦隊による侵攻、そして今年４月の佐渡沖の不審船と宗谷海峡での小規模な衝突に加えた今回の一件で、『新ソ連による日本への領土侵攻を目論んでいるに等しき攻撃行為だ』と強く断定。
国家公認戦略級魔法師［十三使徒］イーゴリ・アンドレイビッチ・

ベゾブラゾフに対し、宣戦布告に相当する重大な破壊行為を行ったとして新ソ連政府に説明責任を果たすよう強く迫っただけでなく、ベゾブラゾフが参加を表明しているディオーネー計画そのものについても『我が国が進めるエネルギーラインプロジェクトを害する極めて悪質な面を持つ疑念が生じた』と置いた上で、ディオーネー計画に対して明確に反対の姿勢を見せた。

身柄を要求しなかったことについては、新ソ連が馬鹿正直に［十三使徒］の一人であるベゾブラゾフの身柄を差し出すとは思えないため、ＳＥＰＡの全加盟国を通して新ソ連関連の貿易について〝新ソ連に対する輸出入の全封鎖〟という極めて重い措置の要請を実施した、と公表。

これに続く形で、ＳＳＡ、インド・ペルシア連邦（ＩＰＵ）、アラブ同盟、東南アジア同盟も政府発表で新ソ連関連の貿易をストップすることを発表。もし大亜連合が新ソ連に協力する姿勢を見せた場合、大亜連合向けの輸出品に対して従来の倍以上――――最大５０パーセントという高関税を掛けることも想定しての動きだった。

世界が日本のＳＴＥＰ計画に向けて支持・支援の方向に傾きつつある中、ディオーネー計画の一角を担うＵＳＮＡの中には、状況を打破するために中核人物となる神楽坂悠元と司波達也を暗殺すべきと唱える人間がいるのも事実。

ただ、達也や悠元の為人を知る人間からすれば、明らかに負けると分かっている博打に掛ける時点で〝時間と人材の無駄遣い〟と評価できてしまう。［十三使徒］〝アンジー・シリウス〟の肩書きを未だに有しているリーナも当然その一人であった。

「なお、この攻撃のターゲットになったのは、日本の新たに判明した戦略級魔法師タツヤ・シバであるとみられる」

（……この国もこの国だけど、新ソ連もバカなのかしら？　達也や悠元に勝てるなんて幻想を抱く時点で負けたも同然じゃないの）

現地時間（ＵＳＮＡ・ニューメキシコ州）では６月８日の夕方。ブリーフィングルームで新ソ連の戦略級魔法が日本の一地方を狙ったという情報を齎したのは、ウォーカー基地司令の、魔法師でない副官

だった。
　それを聞いて、まるで既にＵＳＮＡの人間でないような感想を吐き捨てたかったリーナ。何せ、［ブリオネイク］ですら耐えきった彼に殺せる人間がいるとは到底思えなかった。それはある意味、婚約者としての信頼からくるものだったのは言うまでもない。
　そして、率先する形でリーナが声を発する。その問いかけに副官はウォーカーを見て、彼が頷いたのを確認した上で答えを発する。
「それで、当該人物の消息は？」
「詳細は不明ですが、健在であるようです」
　やはりか、という思いをしつつも、リーナは出来るだけ表情に出さないように努めた。リーナの隣にいるカノープスも真剣な表情を崩さなかった。すると、同じように基地司令室に呼ばれたベガが不敵な笑みを浮かべ、アークトゥルスが落胆の色を隠せないことに疑問を持った。
　ベガの場合は、リーナに対して敵対心を持っていることからして、何かしら〝鼻を明かしたい〟という疑念がどうにも拭えなかった。一方、アークトゥルスのことは以前リーナがフォーマルハウトを処断したことに関係するものだと思いつつ、ウォーカーに視線を向けた。
「我が国は本件に対して、基本的に不干渉のスタンスを取ると参謀本部から通達があった。諸君が対外的に発言する機会はほぼないと思われるが、心に留めておいてくれ」
　ＵＳＮＡ軍部に戦略級魔法［マテリアル・バースト］を排除したいという意見があるのは事実。だが、ここでベゾブラゾフが起こした行動に便乗すれば、間違いなくＵＳＮＡと新ソ連に対して厳しい意見が飛んでくるのは、決して想像に難くない。
「では、解散」
　ウォーカーの言葉に、ＵＳＮＡの頂点に立つ１３人の魔法師が一斉に敬礼で応える。その際、ウォーカーはアークトゥルスだけ残るように指示を出した。
　本来、スターズとしての作戦は総隊長であるリーナを通す形となるが、彼女の頭越しに命令が各隊長へ下るケースはそう珍しくない。そ

れはリーナも自覚している為、アークトゥルスだけ呼び止められたことに何ら疑問を抱くことはなかった。

『ドラキュラ』を継いだ少女

ジェラルド・バランスはエンタープライズでの任を終え、国防総省のいつものオフィスで書類を片付けていた。安全保障局のエージェントといっても、他の対外機関を専門としているエージェントに比べれば専門の仕事は少なく、四六時中国内外を飛び回るわけではない。普段はしがない政府機関の役人としての職務をこなしていた。

ディオーネー計画による殺人的な忙しさは鳴りを潜めたものの、航空宇宙局や北米魔法協会方面がらみの書類を見るたび、ディオーネー計画を諦めていない節が見られる。

（こんな計画が実行されたら、ＵＳＮＡでも爪弾きになりがちな俺が真っ先に飛ばされることになる。そんなことに巻き込むなら、最悪亡命も辞さないぞ）

ただでさえディオーネー計画の被害者だというのに、更に被害を求めるほどジェラルドはマゾな気質など持ち合わせてない。書類仕事を引き受けていたのだって、大方は自分がそう望んだ訳ではなくどこかの政府役人や政府機関の人間による〝嫌がらせ〟が大半だった。

尤も、明らかに国益に害をなす人間はジェラルド本人が出張って処分したこともあったが……すると、ジェラルドは一枚の書類を見て首を傾げた。その書類というのは、ボストンの国立研究所の実験に伴うスターズの派遣に関する書類だった。

本来、参謀本部を通さなければならない案件の筈なのに、それが何故国防総省にまで来ているのか疑問でならなかった。しかも、スターズとして作戦は総隊長を通さなければならないが、その総隊長の了解が取れているとは思えない形式の書類にジェラルドは首を傾げた。

（何でこんなものがまた紛れてるんだ？　大体、スターズを派遣するという時点でそんな大掛かりな実験でもやるつもり……）

ここで、ジェラルドは嫌な予感が脳裏に過った。

あれは『灼熱と極光のハロウィン』があった一昨年秋のこと。ジェラルドは今見ているものとよく似た書類を処理したことがあった。その書類を見終えてそのまま通した結果、スターズの脱走とパラサイ

ト化した魔法師の事件が発生した。
もし、この書類から読み取れる可能性を考慮した際、一番最悪のケースはスターズの隊長クラスがパラサイト化するという悪夢。その実験だけに限定されるのならばまだしも、そこからウイルスのようにパラサイト化が進行した場合、スターズそのものがパラサイト化するというもの。そうなれば、最早ＵＳＮＡとしての国家そのものが存亡の危機に瀕することになる。
「……冗談じゃ済まなくなるぞ」
そして、ボストンがいくらＵＳＮＡの魔法研究における中心地だとしても、ＵＳＮＡ政府も理解した上で魔法師による警備を厳重に施している。それこそ、スターズの隊長クラスが態々出張らなくてもいいような体制になっているはずなのに、そこに敢えて派遣する意味も不明。
となると、恐らくこの書類は〝フェイク〟の意味も込められていると踏んで、ジェラルドは席を立ち、国防総省内を早歩きで進んでいく。向かった先は国防総省の国防副長官室。そこには、ジェラルドの養父でありヴァージニア・バランス大佐の夫であるキャスバル・バランスがデスクに座っていた。
伯父と甥の関係だが、家では実の家族のように仲はいい。ただ、公私の区別を付ける意味で職場では互いに立場を弁えた上で接している。キャスバルは息子同然のジェラルドが態々訪ねてきたことに疑問を抱きつつ、ノック音の跡に聞こえた彼の声を聞いた上で入室を促す。
「失礼します、副長官閣下。上司の許可も得ずに直接訪ねたことをお詫びいたします」
「謝罪はいい。君がそのルールを破ってまで私に直接来たということは、君の手に握られている書類が関係することだろう？」
「はい。こちらになります」
ジェラルドはキャスバルにスターズ派遣に関する書類を見せる。すると、キャスバルの眉間に皺が寄り、難しい表情を浮かべる。少し思案した後、長く息を吐いた上でジェラルドを見つめた。

「この情勢下で、確かにスターズをボストンに派遣する意味はないな。ジェラルド君、君が想定している最悪の可能性は何なのだ？」
「結論から述べますと、またダラスでマイクロブラックホール実験が行われ、今度はスターズの隊長クラスがパラサイト化するということ。そして、更にはそれが波及してパラサイト化がスターズすべてに蔓延するという危険性です」
「……その確率は？」
「正直、五分五分としか言えません」
　ジェラルドとて全ての事象を把握できる立場にいない。自分の目に見える範疇で情報を収集し、そこから推測を立てているに過ぎない。
「ですが、起こり得ないと断言できない理由も存在します。その一つがアルフレッド・フォーマルハウト中尉の処分に関する報告です。自然発火（パイロキネシス）による被害を抑えるために〝アンジー・シリウス〟が処分しましたが、厳しすぎるという意見があったのも事実です」
　とりわけ、フォーマルハウトはアークトゥルスに近しい実力を有していただけに、次期隊長としての評価もそれなりにあった。その人間の言い分も聞かずに殺害したのはあまりにも厳しすぎるという意見がスターズ内部にもあった。
「仮に隊長クラスをパラサイト化するとして、その背後にいる連中は誰だ？　もしや、日本の魔法師の仕業か？」
「いえ、それは決してないでしょう」
「何故だ？」
「確かに、昨年のパラサイト事件を最終的に解決したのは日本の魔法師によるものですが、そんな彼らが報復としてスターズを唆すとしても、下手をすれば自国に被害が及ぶリスクを考えても釣り合いが取れません」
　『解決できる能力がある』のと『自国で解決出来るから、相手をその状況に陥らせて混乱させる』のでは、全く意味が異なってくる。それに、日本にはＵＳＮＡの国債を個人で保有している人間の存在もある。

仮に彼へ敵意を向ければ、国債の全売却による経済混乱は免れない。そんな手段を持つ人間が、態々リスクを冒す意味もないし、その彼が［恒星炉］にも関わっているとなれば、逆にやる意味がない。
「だとすると、一体誰がそんな事を唆すというのだ……」
「心当たりはいます。エドワード・クラーク、そしてレイモンド・クラークの親子なら、軍のセキュリティを易々と突破してメールを送り付けても不思議ではありません。それこそ、［トーラス・シルバー］の一人こと司波達也氏に罪を擦り付ける形で」
「……目的は何だ？　やはり戦略級魔法か？」
キャスバルの絶句にも近い有様に、ジェラルドは何も言わなかった。何せ、魔法の平和利用を高らかに宣言した人物が国内に混乱を齎そうとしているなどといわれても、正直信じ切れる要素があまりない。
だが、彼らならスターズを唆すことも可能だし、下手をすれば今年初めに起きた旧式兵器の紛失事件にも関与している可能性が高い。そうなると、彼らが目的としているものも自ずと絞られる。
「それもあると思いますが、最終的な目標は〝触れてはならない者たち（アンタッチャブル）〟の完全抹殺でしょう。これは表沙汰になっておりませんが、エドワード・クラークの父親が四葉の復讐劇に巻き込まれて亡くなったようで、その復讐を兼ねているのかもしれません」
「父親を殺された復讐、か……ジェラルドなら共感しそうなものだが」
「あちらから勝手に敵視された挙句、書類を積み上げさせて過労死させようとした輩と同類にしないでください」
「そ、そうか。すまなかった」
ジェラルド自身、魔法師でありながらも軍人にならなかったことで嫌味を言われることは覚悟していた。だが、ちゃんと国益に適うような行動を心掛けてはいたので、明らかに国益を害するようなクラーク親子と同一に見られたくない、という愚痴にも近い言葉にキャスバルが謝罪した。
「話を戻しますが、そうなれば四葉家に近しいアンジェリーナ・シリウ

ス少佐も無関係とはいかないでしょう。パラサイト化かそれに近しい形で洗脳。それが叶わない場合は……」
「抹殺、か」
「恐らくは」
だが、そうなった場合が一番最悪のシナリオを歩むことになってしまう。四葉家を怒らせて葬られた大国という前例がある以上、ＵＳＮＡが同様の末路を辿ることになりかねない。それを察した以上、ジェラルドも座して待つという事など出来ない。そして、それはキャスバルも同じ意見であった。
何かを決意したかのようにキャスバルはゆっくりと立ち上がり、ジェラルドの前に立った。
「スペンサー長官のもとに出向く。今提示した可能性によってＵＳＮＡが滅ぶようなことは避けねばならん。ジェラルドも同行してくれるな？」
「無論です、副長官閣下」
キャスバルとジェラルドは揃ってリアム・スペンサー国防長官のもとに出向き、ダラス国立加速器研究所でのマイクロブラックホール実験の可能性を説き、スペンサーも事態を重く見てすぐさま研究所に問い合わせた。
だが、研究所からは『当該実験を行う用意はない』という返答のみ。手詰まりとなってしまった彼らが事態の把握の遅さを呪ったのは、スターズ本部のウォーカー基地司令から提出された三名の軍人に対する禁固刑の手続きを知ってからであった。
◇　◇　◇
［ドラキュラ］――ウクライナ・ベラルーシ方面で名を馳せた謎の魔法師。別に人体から血を抜き去って自らの血肉として活動している訳ではないが、本来ならば光が無いとまともに進めない地を優雅に歩き、日の出とともに見ることが出来る痕跡は足跡だけ。その神出鬼没さから『吸血鬼（ドラキュラ）』と呼称されている。
姿も分からなければ、年齢や性別も不明。それでも新ソ連が血眼になって探しても見つからない。ここだけの話、［十三使徒］レオニー

ド・コントラチェンコの孫娘が暮らしていた村（正確には元村と表現すべきだが）は［ドラキュラ］の潜伏地として壊滅させられた、という噂も新ソ連軍の兵士の中で噂された。
その［ドラキュラ］と呼称されている魔法師の少女は、フランスのパリにいた。
「――ここがパリね」
やや眠たげに呟いたアッシュブロンドの少女。見た目は十代半ばだが、年齢もその見た目通りに14歳。彼女――ナーディア・エルンストは、目の前に見えるパリの風景に目を輝かせていた。
そんな彼女の名字がハンス・エルンストと同じなのは単純明快で、彼女はハンス・エルンストの実妹にあたる為だ。どういうことなのかを簡単に説明すると、彼女は［ドラキュラ］の名と技を継いだ魔法師。
ドイツ人の父親、ポーランド人の母親の間に生まれたエルンスト兄妹は揃って魔法師の資質があった。だが、なまじナーディアの資質が高かったため、〝劣等生の兄〟と呼ばれて蔑まれるハンスの姿に心を痛めていた。
兄を苦しめたくないと考えたナーディアは才能のあった音楽方面に進むことを決め、オーストリアのウィーンに伯父がいる伝手を頼る形で留学した。厳しいカリキュラムをこなす毎日を送っていたナーディアに転機が訪れたのは5年前の夏。
教会にお祈りに来ていたナーディアは、何処からか聞こえる〝音〟に興味を持って一人墓地へ赴く。そして、彼女は墓石に背を預けるようにして座り込む男性と出会った。
――君は、どうやら〝僕〟の音が聞こえるようだね。ならば、君に託そう。僕がこれまで［ドラキュラ］として培ってきた技術の全てを。
そして、彼から継がれた技術を受け取った時、彼の姿はまるで塵となって消えていき、後に残されたのは古びた手記だけだった。それを読み取ったナーディアの取った行動は、音楽院を中退してポーランドにある魔法学校へ転校。そこで魔法の知識を学ぶと同時に、［ドラキュラ］としての活動を始めた。

普通の人間ならば突拍子もなさ過ぎて行動原理が不明すぎる、というのが普通だが、彼女自身も新ソ連を放置すれば次は故郷が火の海に晒される、という危機感を持っていたのも事実だった。

そして、そうなれば真っ先に戦場へ駆り出されるのは兄のハンス……兄が生き延びる為に何かできることがしたいと考えた時、ナーディアが出した結論は手にした力で新ソ連を掻き乱すことだった。

簡単に言ってしまえば、彼女も相当の実兄が大好きすぎる性分を拗らせていると言えばそれまでの話だが。

そして4年前、ナーディアは上泉剛三とその孫である長野佑都――――のちの神楽坂悠元と出会った。その際に彼女はウクライナ所縁の人間と名乗ったが、手記にあった情報から引用したので、嘘はついていない格好となる。

閑話休題。

その彼女の許に届いたのは、差出人不明の手紙と同封されたパリ行きのチケット。手紙の内容は『貴殿にお願いしたいことがある』というもの。事情はともかくとして、ナーディアに断る理由もないし、ただでパリに行けるのならば安いものだと安請け合いの恰好でキャリーケースを引っ張りつつ民間機に乗り、空港からバスに乗ってパリに到着した。

すると、彼女を待ち受けていたかのように立派な車と一人の執事らしき人がナーディアに話しかけてくる。

「ナーディア・エルンスト様ですね。私は此度の迎えを仰せつかったものです」

「迎え？　一体何方にですか？」

「ここでは人目がありますので、まずは車にお乗りください」

まさか、フランス人である人から〝ドイツ語〟で話しかけられるとは思わず、ナーディアは内心で驚きつつも何とかドイツ語で返しつつ、荷物を迎えの執事に渡して車に乗り込んだ。まさかのリムジンにナーディアは目を輝かせつつ、一体どこに連れていかれるのかと思った先が大統領府の大統領執務室ということを聞かされた時、ナーディアの表情が凍り付いたのは言うまでもない。

そして、対面したのがフランス共和国大統領という事態に、ナーディアは緊張で冷や汗が流れていた。そんな彼女に対し、ヴィクター・セナード大統領が和ませるように声を掛けた。
「大丈夫かね？」
「あ、は、はひ！　あう、舌噛んじゃった……」
緊張のあまりに舌を噛んで悶絶するナーディア。それを見たヴィクターは笑みを零しつつ、通訳を通す形で落ち着くように宥めた。通訳の女性もナーディアを気遣ってくれたおかげで、彼女の緊張は何とか解れた。
「さて、あのような内容の手紙を送ったことをまずは謝罪する。とはいっても、あの手紙自体は君の素性を知る者によるものだ。長野佑都、という名に聞き覚えはあるかな？」
「はい。私に武術と魔法を教えてくれた物好きな偉丈夫の息子だと言っていましたが」
「彼は今、神楽坂悠元と名乗っている。私の見立てでは、間違いなく世界で最強の魔法師だと思っている」
「……そんなすごい人が何故私に手紙を？」
ナーディアからすれば『何故？』という感情が強かった。新ソ連を手玉にとれるだけの実力は有していると自負できるが、一国の国家元首が他国の、それも東洋の島国の魔法師を〝世界最強〟と呼ばせるだけの実力は持ち合わせていない。
そんな人間に目を掛けられたという意味で、ナーディアは首を傾げていた。

世界からの難題という名の修正力

ナーディアの疑問に対し、ヴィクターは『それもご尤もな話だ』と頷きつつ、説明を始めた。

「まず、君に聞きたい。君は［ドラキュラ］――――正確には、その名と技術を継いだ人間という認識に間違いはないかね？」

「……はい。私に力を渡した人は消えてしまいましたが」

今にして思えば、ナーディアに力と技術を渡すための魔法だったのだろう、と推察した。何せ、彼女が継いだものの中には命と引き換えに自らが持っている知識と技術の情報を全て対象に継がせる魔法の存在があったからだ。

フランスの大統領府に呼ばれている以上、下手にごねて祖国にいる家族に迷惑を掛けたくない（一番は兄に迷惑を掛けたくない）と判断し、ナーディアは隠すことなく素性を打ち明けた。

「ここからが本題だが……ナーディア・エルンスト君、私の娘にならないかね？」

「……え？」

理解の範疇がナーディアの許容範囲を超えてしまい、彼女に出来た反応は何処か気の抜けた返事であった。理解が追い付かない彼女に対し、まずは落ち着くように通訳を通す形でヴィクターが宥める。

「まあ、まずは落ち着いてくれ。君も知っての通り、旧ＥＵ諸国は東西ＥＵとして分裂したが、国家間の繋がりはかつての欧州連合よりも下だ。そして、先日発表されたディオーネー計画を先導するイギリスが同じ西ＥＵ諸国に対して圧力を掛けている。尤も、事態が変わればいきなり手を返すかもしれないが」

そうやって三度の世界大戦を生き延びてきた国の事情はさておくとしても、フランスとしてはＳＴＥＰ計画を支持することで将来の［恒星炉］提供に弾みを付けたい。

そして、その条件として提示されたドイツとの水素発電関連技術・共同管理条約（ＥＵｒｏｐｅ　Ｈｙｄｒｏｇｅｎ　ＣｏｏｐｅｒＡｔｉｖｅ　Ｍａｎａｇｅｍｅｎｔ・ＥＵＨＣＡＭ（ユーカム））を皮切りにＥＵを再

統合し、新ソ連およびＵＳＮＡに対抗できる欧州の一制大勢力を構築する。
「そんな中で、ナーディア君の存在は特に際立つ。君には日本から提供された戦略級魔法を修得してほしい。その意味でも、私の養子としてフランスに移住してほしい」
「……私は一応ドイツの人間ですが、それでもいいと？」
「そこは承知の上だ。それに、今や新ソ連にとって畏怖となっている［魔王の帰還（リターン・オブ・ルーデル）］――ハンス・エルンスト君もＳＳＡの非公認戦略級魔法師となったからな」
「ん？　え？　に、兄様が戦略級魔法師？　しかも、南アメリカに？」
　明らかに言葉がバグっているような口調なのは仕方がない。今まで魔法の資質で劣っていた兄があのルーデルの再来とまで言われただけでなく、今は南アメリカ連邦共和国の戦略級魔法師となった。一体どんなバグかチートを用いればそんなことになるのか……とナーディアが混乱してしまうのも無理はない話だ。
「もし、この話を引き受けてくれたら、ある仕事を君に頼みたい。実は君の兄が今ＵＳＮＡにいるのだが……」
　そうして話された依頼に対し、ナーディアは『兄がいる場所なら』と即答してヴィクターの養子とフランスの国家公認戦略級魔法師となることが決まった。
「……今、海の向こうから並みならぬ執念のような何かを感じた気がする」
（ほう、執念か。それならば私も負けてはいられんな）
『お前は少しぐらい屈しろ』
　そして、そんな気配を心なしか感じてしまった兄：ハンス・エルンストがいたのは、ここだけの話。
◇　◇　◇
　桜井を見舞うために悠元が運転するエレカーは、まず上泉家の本屋敷に出向いた。現当主の元継と話す為でもあるが、更に出来てしまった用件を片付けるのに適していると判断して、上泉家への訪問を優先した。

門下生の一人が案内する形で中に入ると、一番大きな武道場で上段同士の手合いを静かに見つめる元継の姿があった。元継も気配で悠元たちの訪問を察したのか、ゆっくりと立ち上がった上で師範代の男性に指示を出すと、悠元たちに近付いた。
「わざわざ来てくれたのか。それに、何か面白い拾い物でもしたみたいだな」
「拾ったというか飛んできたというか……アルフレッド、彼は私の実兄です」
「上泉家当主・上泉元継だ。事情は聞いているぞ、アルフレッド・フォーマルハウト。失敬、アルフレッド・ストライフ殿」
「いえ、お気になさらず。アルフレッド・ストライフです」
スターズの性質上、他国の言語も取得する関係で日本語を嗜んでいたようで、アルフレッドはきちんとした日本語で言葉を交わす。元継は悠元が彼をここに連れてきた意味を察しつつも尋ねる。
「悠元、彼を鍛えればいいか？」
「ええ。まあ、爺さんがいない今だからこそ、というのもありますが」
「それは言えてるな。あの爺さんのことだから、今度は太平洋横断とかやらせかねん」
「……」
剛三の常識崩壊の訓練を受けずに済むという点で、悠元と元継は互いに同意し、明らかに物騒なことを話しているのだと察した達也は無言を貫いていた。
「それと、目途が付いたら桜井さんの護衛に回そうかと思います」
「成程な。それならばしっかりと仕上げてやろう。アルフレッド、武術の訓練である以上、泣き言は許さん。その覚悟はあるか？」
「――無論です。私とて伊達に元スターズではありませんので」
「良い答えだ。誰か、彼を更衣室に案内してやれ！」
そうして呼ばれてきた門下生に連れられてアルフレッドが奥に姿を消し、元継の案内で客間に案内された悠元たちは意外な人物――綿摘未九亜が運んできた茶菓子と茶を頂くことになった。
「九亜ちゃん、元気そうですね。他の子たちもあんな感じですか？」

「まあな。爺さんもそうだが、奏姫さんも〝お祖母ちゃん〟と呼ばれて嬉しそうだったよ。で、だ。実は悠元たちが到着する数分前に付属病院から連絡があってな。彼女が目を覚ましたそうだ」
目を覚ましたことは確認したが、事実確認は敢えてしていない。何分、彼女も激しい魔法戦闘後で消耗している為、医者が安静にするよう言い含め、桜井も大人しく従っているとのことだ。そして、元継は水波の方に視線を向けた。
「ふむ、特に健康面での異常はなさそうに見えるな。しかし、彼女を見た時はドッペルゲンガーの類を疑ったぞ」
「大丈夫、元継兄さん。それは俺も同様だから」
「そうか」
まずは、桜井の様子を見るために元継が同伴する形で国立魔法医療大学付属高崎病院へ足を運んだ。今回は特に秘匿性が求められるということで、桜井の入院を知るのは四葉家・神楽坂家・上泉家の人間に限定している。
そして、看護師の案内で個室に入ると、電動ベッドを起こしてはいるが、上半身をベッドに凭れ掛ける状態の桜井が目に入った。
「深雪様に達也様！　それに……え、え？　これは一体、どういうことなのですか？　奥様が私と同じ姿の調整体魔法師を派遣なさったのですか？」
達也と深雪までは予測できても、流石に自分と瓜二つの人間が近くにいて、更には見知らぬ人間を見るような有様だった。だが、これで桜井がこの世界の人間でないことは確信を持てた。
この場は桜井からすれば顔見知りの形となる深雪と達也が対応する形となった。
「えっと、水波ちゃん。まずは落ち着いてほしいの。その上で幾つか質問をしていいかしら？」
「え？　あ、はい。深雪様のご命令とあらば」
深雪が宥め、達也が冷静に桜井へ質問を投げかける。この部分は事前に悠元と達也で擦り合わせを行っている。
まず、桜井が意識を失った日が西暦２０９７年６月９日。ここはま

だいいが、彼女は何者かが放った魔法による衝撃波を防ごうと対物障壁魔法で防御し、意識を失った。この時点で、この世界の人間でないことは確定。

次に、桜井が知る達也と深雪の扱いだが、深雪が四葉家次期当主、達也がその婚約者として公表されていて、水波は深雪のガーディアンとして務めている。つまるところ、原作世界にかなり近い筋書を通っているということ。

そして、決定的に異なる点は、神楽坂家と上泉家が存在しないという点。桜井の問いかけに対して、こればかりは達也や深雪も驚きを隠せなかった。

粗方の質疑応答を経た後、悠元が桜井に問いかけた。

「桜井水波さん。自分は護人・神楽坂家当主の神楽坂悠元という。これから話すことは常識の範疇を外れることになるが、落ち着いて聞いてほしい。それは、そこにいる君と同じ名と姿を持つ彼女にも関係する話だ」

「……分かりました。話していただけますか？」

「結論から言おう。君は飛ばされたんだ。場所とかのレベルではなく、君が元々いたであろう世界からこの世界に飛ばされた」

「えっと、つまり私にとっては異世界だと？」

「その証拠が達也と深雪の扱いの違いだ。達也は四葉家の次期当主、深雪は私の婚約者だ」

桜井が小説を嗜んでいたこともあって、異世界に対する理解も早かったようだが、達也と深雪の扱いがここまで変わったのは桜井も驚きを隠せなかった。では、ここで桜井にとって一番無視できない存在に連絡を取ることとした。

映像通話もできる端末を操作すると、そこには桜井にとって〝一番の主〟とも言える四葉家当主・四葉真夜が姿を見せた……だが、彼女の服装がセーラー服だったことに、一同の表情が凍り付いた。

『ふふ、どうかしたのですか？　別に驚くことでもありませんでしょうに』

「敢えて述べさせていただくなら、四葉殿の身なりに違和感が無さす

ぎる点ですね」
『あら、お世辞でも嬉しいですわ』
「……」
「深雪さんや、抓らないで」
　自分が言葉を発するしかないと思った悠元が正直な意見を出来るだけオブラートに包み、それを聞いた真夜が嬉しそうに答える反面、深雪が頬を膨らませて悠元の脇腹を抓っていた。
　この状況でも四葉家が〝変わっている〟ようにしか思えないし、現に桜井の思考は完全にバグっていた。そら、[夜の女王]とか魔女とか言われている四葉家の当主がこんな姿だったら、明らかに御乱心でもない限りは自分の知る世界ではないと判断する他なかった。
『さて、そちらの水波ちゃんは私に聞きたいことがあるのでしょう？
　遠慮せず訊ねてくださいね』
「あ、え、は、はい！　それでは――――」
　遣り取り自体は１０分程度だが、水波の問いかけたことに対して真夜が答えると、『やはり私が知る世界ではないのですね』と小さな声で呟いた。そして、真夜は達也と会話をしたいということで、達也が端末を持って外に出ていくと、悠元は桜井に話しかける。
「それで、君を元の世界に戻す算段はあるが、どう頑張っても二月半（ふたつきはん）は掛かる。そして、君を治療する方法もある。問題は、君がどうしたいのかという意思の確認だ」
「私が……ですか？」
　これまでガーディアンとして生きることを宿命づけられた人間に、いきなり人間としての生を全うするための〝欲〟を問うのは難しい。幸い、送還の儀式を行うにしても時間を置かなければならない。
「まあ、急ぎはしないし、どうせ２か月半はこの世界に居なければならない。その間にゆっくりと考えるといい」
「あ、はい。えっと、もう一人の私というのも変ですけど……どうか、己の力が及ぶ範疇で、そして達也様と深雪様を悲しませないように御守りなさってください」
　それは、桜井が歩んだ道を水波にも辿って欲しくないという思い

と、大切な人を護り切って欲しいという願い。いかにもガーディアンらしい言葉に、水波は桜井の手を握って桜井と同じ目線に合わせた上で頷く。
「ありがとうございます。その思い、決して無駄にしません。なんだか鏡に向かって話しているような気分になってしまいますが」
「それは私も同じです」
過去と未来の自分同士で殺し合ったりする創作物も存在するが、異世界とはいえ水波と桜井がそれとなく打ち解けたのは何よりだった。面会の時間を終え、一度上泉家に寄って元継と別れ、そのまま東京へ帰る悠元たち。
なお、アルフレッドは上泉家に住み込む形で預けられることとなり、帰り際に見た時は中段者を相手に格闘している様子が見られた。あんな未来を見てしまったのだから、生きるために死ぬ気で鍛錬に励む様子は分からなくも無かった。
これは余談だが、桜井は水波との胸部を比較して羨ましがったのは言うまでも無かった。
◇　◇　◇
水波の見舞いを終えて悠元は町田のマンションに、達也はそのまま伊豆の別荘に戻った。ただ、メディアからの干渉が想定よりも緩かったため、別荘に運び入れた荷物の中で必要なものをマンションに運び入れるらしい。
そして、別荘の方は築年数の関係で一度取り壊し、新たな別荘を建てるとのことだ。尤も、解体と建築に取り掛かるのはベゾブラゾフの脅威が明確に消えてからとなるのは確かだが。
夕食とシャワーを済ませた悠元が自室に戻ると、タイミングよく鳴った端末の着信音。悠元はそのまま座ってレシーバーを付け、端末を操作すると光宣の姿が映った。彼の様子からして、どこか具合が悪そうには見えないが、どこか不思議な面持ちを浮かべていた。
『こんばんは、悠元さん。今大丈夫ですか？』
「ああ、丁度部屋に戻ってきたところだよ。それでどうした？　何か不思議体験をしたかのような表情のようだが」

『敵いませんね。実はですね……』
事の次第はベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の発動による攻防の後にまで遡る。光宣は大規模の魔法発動兆候を感じ、跳ね起きるようにベッドを飛び出してＣＡＤを反射的に構えた。
だが、魔法の兆候は伊豆方面――――達也がいる方向だと察したものの、何か事情を知らないかと電話を掛けた響子が通話中で出れなかったため、国防軍の軍人である彼女も任務があると結論付けて、暫く時間を置いてから夕方辺りに電話を掛け直した。
『響子姉さんと今日話すのは初めてなのに、「今度は顔を見せたけど、どうしたの？」って言われたんです。これは流石におかしいと思って尋ねたところ、どうやら僕が九島家との仮想ホットラインから電話を掛けたことになってるようで』
「物理的距離を勘案しても、光宣が九島家に居れる距離じゃないからな。そもそも、九島家とは完全に縁を切っている筈なのに」
『そこなんです。しかも、その〝僕〟は攻撃を受けた相手どころか、独立魔装大隊がその場に居合わせたことも看破したらしく、響子姉さんもそこまで説明されて不思議に思ったようで』
どうやら、間違いなく〝九島光宣〟は転移されているとみて間違いない。しかも、九島家は九島光宣の出現に際してそこまで気にしていない。おまけに、九島烈は距離を置く関係で伊豆にいるため、九島家が既に支配下に置かれていても何ら不思議ではない。
すると、そこに加わる形で連絡をしてきたのは、光宣が話していた響子の姿だった。
『悠元君。って、光宣君も一緒だったのね』
「ええ。先程光宣から不可思議な現象について伺っていました」
『なら、話は早いわね。今回の件が光宣君を騙って何かをしている可能性はないかと思って……』
響子も、光宣が連絡をくれたことで九島家との仮想ホットラインで話していた光宣は誰なのかと訝しんでいた。だが、自分だけでは分からないと判断して悠元に相談してきた。それを聞いた悠元は二人に対して、もう一つの事実を告げる。

「それと同じような現象が、実は達也が滞在していた別荘で起きました。ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の攻撃を退けた後、別荘の中で二人の桜井水波がいるという状況に遭遇しました」
『えっと、片方が幽霊ってこと？』
「いえ、両方とも実体を伴っています。ただ、今回自分が対処したことで重篤な状態にならない筈なのに、片方の桜井水波が魔法演算領域のオーバーヒートによる症状を起こした状態になっていました」
　誰も魔法による深刻なダメージを負わない状態になっていた筈なのに、深刻なダメージを負った少女が倒れていた。この時点で、桜井が他の世界から転移してきた可能性を強く疑った。
「更に、目を覚ました桜井水波から事情を聞いたところ、彼女が知る四葉家の状況が違うことからして、彼女が並行世界から転移してきた可能性が極めて高いという結論に至りました」
『……悠元さん。もしかして、九島家のホットラインから掛けた〝僕〟もその可能性が高いとみているのですね？』
「ああ。彼を〝九島光宣〟と呼称しておこう。その場合、九島家が彼の支配下にあっても不思議ではなくなった」
『そこまで……冗談よね？』
「冗談で言えたら、こんな可能性に触れることもしませんよ」
　何せ、現象は異なるが魂の転生という形でこの世界に生まれ変わった人間がいる以上、生身のままでこの世界に迷い込むことも起きなくはない。響子は目を見開いているが、ここまで来た以上は何が起きても不思議ではないとみるのが自然だ。
　にしても、同一人物がいるのに世界のルールに反しないとするならば、恐らく水波が悠元に惚れたことと光宣が九島家を離れたことで、修正力の範疇の対象外になったとみるのが現状の最も高い可能性の一つ。
　それでも、まだ油断は出来ない。ある日突然魂魄に支障を来すことも有り得る。正直、世界のルールがどうなっているのかすらも良く分かっていない。
『それで、どうしますか？』

「……響子さん、その光宣にはどこまで伝えました？」
『あ、うん。一応無事とだけ伝えたから、逸る様な真似はしないと思うのだけれど』
　響子と光宣は知らないが、〝原作の九島光宣〟はこの時点で周公瑾の亡霊を吸収している。悠元も周公瑾の亡霊を吸収した格好となるが、前者は亡霊を従属させたのに対し、後者は知識という情報だけを吸収し、完全な自我を消滅させた上で魔法力も吸収している。なので、悠元には［アリス］という存在はいても、周公瑾という存在は完全にいない。
　そして、周公瑾は顧傑の弟子で方術や道術に長けており、それこそ目的の人物を探すための〝占術〟にも長けている。
「光宣。もしもの場合は在らぬ疑いを掛けられる可能性がある。その時は暫く〝療養〟という名目でこちらが用意する隠れ家に避難してもらう」
『……そう、ですね。確かにそうした方がいいかもしれません。その時はお願いします』
「感謝する。響子さん、とりあえずご実家の藤林家に九島家の様子を探ってもらうようお願いできますか？　いざとなれば自分の名を出しても構いません」
『え、ええ。神楽坂家からの頼みとならば、父も了承してくれるでしょう』
　二人の桜井水波と二人の九島光宣。ここにきて世界の修正力が差し向けた迷い人という難題に、悠元が思わず頭を抱えたくなったのは言うまでも無かった。

世界を渡った者同士の茶番劇のはじまり

僕の名前は九島光宣(くどうみのる)。

十師族(後に師補十八家へと降格した)・九島家の三男として生を受けた。九島烈の孫世代である僕を含めた兄弟姉妹の中で秀でた魔法資質を有しているという事実は決して過信ではなく、祖父や従姉の響子姉さんからも認めてくれている。

だが、その優れた魔法資質と引き換えにする形で僕を苦しめたのは不安定な体調という肉体的な現実。一年の半分以上をベッドで過ごさなければならないという状況を打破することも出来ず、更には自分の家が十師族から降格したことに対して、より一層自分を恨むようになった。

今にして思えば、僕が自分の状況に納得しようとすれば、相応の人生は送れていたかも知れない。けれども、桜井さんを助けたくて吸収した周公瑾の知識に導かれた。厳密には、それに縋って信じ切るしかなかった――――というのが一番正しいのかもしれない。

そうして、僕は僕の在り方を保とうとしてパラサイトになった。

けれども、代償として失ったものは僕にとって大きすぎた。別に生きている世界で居場所が無くなるのはまだ耐えられた。だが、僕にとっての最大の理解者とも言えたお祖父様を……僕が殺した。

その後、同じくパラサイト化したレイモンド・クラークなる人物やＵＳＮＡ軍の兵士と協力したが、僕からすれば桜井さんを救えればそれで良かった。だが、僕のせいで桜井さんを苦しめた。

いくら魔法に秀でていても、感情を律せていなかったと反省することは多い。でも、既に起こってしまったことを無かったことになど出来はしない。そうして僕は、日本に戻って達也さんと戦い、パラサイトになることを受け入れてくれた桜井さんと共に、深い眠りに就いた。

そう、そこまでは間違いなかった……だが、こうして考えられるということは、もしかしてコールドスリープが解けてしまったのだろうか。僕は重い瞼を開けると、そこは最後にいた場所ではなく見覚えの

ある部屋――――生駒にある九島家の自室だった。
「……夢でも、見ているのか？」
九島光宣（以降は九島と表記）は思わず頬を軽く抓るが、感じる痛みからして現実なのは間違いない。自分の服装も、九島家で過ごしていた私服の姿だった。そして、近くにあった端末で現在の時刻を確認した九島は驚きを隠せなかった。
「２０９７年６月９日……確か、この日は」
伊豆高原の別荘に滞在している達也たちが魔法による攻撃を受け、桜井水波が負傷する日。そして、時刻は午前５時すぎだとすると、九島の記憶にある感覚では、既に攻撃を受けた後だとされる。
ここから飛んでいったとしても間に合う確率は低い。そもそも、自分が何故ここに居るのかも分からない。判断材料が余りにも少ないため、九島は少し考えた後、魔法を行使することを決めた。それは、この屋敷にいる人間に対しての精神干渉系魔法。
（まずは、僕が置かれた状況を知らなければいけない。申し訳ないとは思うけど……）
自責の念を呑み込んで九島は精神干渉系魔法を発動し、九島家の屋敷全体に自分の認識を偽らせる魔法を行使した。その判断が九島にとって良かったと知るのは、後々のことであった。
まず、九島は屋敷で祖父の仕事を手伝っていた経験を基に端末を操作して情報を探る。すると、明らかに九島が知らない事象がいくつもあった。
一昨年秋の事象が『灼熱のハロウィン』ではなく『灼熱と極光のハロウィン』となっていること。
今まで悩みの種だった『伝統派』が解散していること。
そして、師族会議体制に見知らぬ家がいることもそうだが、十師族体制も大きく変わっていること。
これらの出来事からするに、九島は自分の知る世界の過去に来たのではなく、もしかすると並行世界の過去に来たのではないかと訝しんだ。
桜井水波が負傷して入院している病院は、周公瑾の知識から得た占

術で何とか突き止めることは出来たが、国立魔法医療大学付属高崎病院という名称も九島からすれば初耳だった。専門の病院ということなのだろうが、魔法に関する高等教育機関など国立魔法大学しか聞いたことのない九島からしたら、驚くことばかりだった。
「……要らぬお節介かもしれないけど、同じ過ちは繰り返してほしくない」
何故、自分がここにきてしまったのかという疑問はある。だが、こうして夢ではなく現実を見せられた以上は自分にも何かできることはある筈だ……九島は自身にそう言い聞かせると、個別列車（トレーラー）で一路関東方面に向かった。
駅に着くと、そのまま病院へ足を運ぶことにした。
「驚かせてしまってすまない。こちらも悪気があった訳じゃないことは事実だよ」
「いえ、こちらこそ慌ててしまって」
流石にいきなり面会を申し出て大丈夫なのかと思い、最悪魔法でどうにかしようと考えつつも受付の人に相談した。水波さんの知り合いということで名前を伝え、病室に入った僕の姿を見て水波さんはとても驚いていた。
幾つか質問をしたが、僕が経験した時よりも状態は遥かによく、暫く魔法の行使を控えれば回復の目途も立つという結論に至った。それは、僕の中にある周公瑾の知識もそう判断していた。
それにしても、ここまで魔法演算領域に修復の目途を付けられるとなれば、やはり僕が生きてきた世界とは違うと改めて実感していた。
「……一つ、お願いをしていいかな？」
「は、はい。私に出来る事であれば」
僕は、ここに来る途中で住所と日時を記載したメモを作った。
それは、もし桜井さんが僕の知る状態如何に関わらず、今度は感情ではなく話し合いで解決できる方法を探りたい。
僕が犯した過ちを、他の誰にも味わってほしくないという思いを込めて水波さんに渡した。
「そのメモを君が信頼できるであろう人に渡してほしい。そこに書か

れた場所と日時に僕が――――九島光宣が会いたいということも伝えてほしいんだ」
「……分かりました。確かにお預かりします」
違う世界といえども、水波さんがいるとなれば達也さんや深雪さんもいるはずだ。とはいえ、ここまで過去の事象が違うとなれば、達也さんや深雪さんだけではなく、〝この世界の僕〟がいてもおかしくはない。
だが、九島家に目立った痕跡はなく、もしかすると既に亡くなっているのかもしれない。そんなことを思いながら、見舞いを終えて周公瑾の隠れ家の一つに身を寄せることにしたのだった。
◇　◇　◇
6月11日、火曜日。昨日は達也が見舞いに訪れているが、別荘を引き払うための準備の為、悠元が見舞いに訪れた。
桜井の様子は元気で、特に身体的な支障はみられない。魔法演算領域のほうも回復の兆候に転じている。とはいえ、［トゥマーン・ボンバ］を直に防御したため、特に手を加えなければ半年以上は掛かってしまうのが悠元の見立てだった。
すると、桜井が思い出したように近くの棚にあったメモ紙を悠元に手渡した。
「悠元さん、こちらを」
「これは、メモ紙？　誰からだ？」
「は、はい。九島光宣さまが渡してほしい、と預かりました」
桜井の言葉に対し、疑念が確証に変わったことで悠元から疑う余地はなかった。だが、原作からすればかなり理知的な行動にも見える。そうなると、この世界に迷い込んだ九島光宣は水波と同じ時間で飛ばされた可能性が低いのかもしれない。
メモ紙に書かれた場所は横浜・中華街の一角。そして、日時は今日の夕方。
「ありがとう、確かに預かった」
「あ、あの！　どうか、光宣さまを責めるようなことはなさらないでください」

「いや、いきなり喧嘩腰になる必要は無いと思っているが……もしかして、好きなの？」
悠元の問いかけに桜井が顔を赤らめている為、間違いなく脈があると思っていいのだろう。
それに、九島光宣と名乗るということは、間違いなくこの世界の光宣ではないことは確定。昨晩の光宣本人から聞いた話からすれば、特に疑う余地もない。
「青春をするのはいいことだと思うよ。まあ、まずはゆっくり体を休めて。起き上がれるようになったら、体を動かすようにした方がいい」
「あ、はい。その、何から何までありがとうございます」
「気にしなくていいよ。どうしても達也だとフォローしにくい部分もあるだろうからな」
「あ、あはは……」
別に達也が悪い訳ではない。ただ、本人の朴念仁は彼の婚約者たちに改善してもらう必要があるのも確か。何かあれば連絡するように言い含めると、そのままとんぼ返りする形で町田のマンションに戻り、支度をしてから横浜・中華街に出向くこととなった。
◇　◇　◇
指定された場所は中華街の一角にある中華飯店。悠元は同行者を考えたが、今回は相手が相手ということで一人で出向くこととした。
そして、扉を開けて店員にダメ元でメモを見せると、何かを察した店員が案内してくれた。案内された先は二階の個室。そして、入り口の向こう側の上座には一人の少年――――九島光宣が座っていることにもすぐに気付く。
店員がお辞儀をして下がると、九島が声を掛けた。
「ダメ元でしたが、まさか来てくれたのが達也さんでも深雪さんでもなく、僕の見知らぬ人とは……お名前をお伺いしても？」
「はじめまして、と言うべきだな九島光宣。元十師族・三矢家三男、現在は護人・神楽坂家当主の神楽坂悠元という」
「元十師族の方とは……その言いぶりからするに、この世界にも僕が

存在しているのですね？」
「ああ。今は壬生家の養子になってるからな」
九島から感じられた気配からするに、間違いなくパラサイト化している。だが、今までのパラサイトのような本能的な行動はもとより、悠元が近付いても逃げ出そうとしていない。
「まずはお掛け下さい。お食事の方もご用意いたしますので」
「なら、有難くいただこう」
九島の方も、まさか四葉家の関係者ではなく元とはいえ三矢家の関係者が出張ってくるとは思いもしなかった。だが、桜井に渡したメモを託すに値する人物ということから見れば、九島も特に悠元を疑うような素振りは見せなかった。
そうして中華料理に舌鼓を打ちながら、互いに情報交換を交わす。
「――なるほど、２０９７年の８月２８日から飛ばされた、というわけか」
「はい……驚かれないのですか？」
「お前が会った桜井水波も同じように飛ばされてきた。ただ、向こうは６月９日の襲撃直後に飛ばされたことを確認している。そこまで聞かなかったのか？」
「流石に僕の憶測で混乱させるわけにはいきませんので……」
悠元は原作終盤の流れをほぼ知らないが、セリアから聞いた情報からすれば、間違いなくある程度の処理が済んだ段階で九島光宣と桜井水波が冬眠する形になったのだろう。
「それと、桜井さんを見ても混乱しなかったようだが」
「流石に状況が違うと集めた情報で判断しまして。九島家に飛ばされた時は夢でも見ているのかと思いましたが……すみません、特に混乱させるような事態を招きたくなくて、九島家に精神干渉系の魔法を掛けて僕の存在を誤魔化しました」
「ああ、成程ね。別にいいよ。そんな魔法に対処できない時点で今すぐ十師族に戻せないと評価できるに等しいし」
「て、手厳しいですね……」
別にこちらへ危害を加えるつもりでなければ、九島の掛けた魔法に

ついて問い質す気はなかった。流石に［パラサイドール］を持ちだしたら追及していただろうが。
　食後のお茶を飲みつつ、今度は悠元から話を切り出した。
「それで、九島光宣。お前を元の世界に戻す方法はあるが、色々な都合で最短でも８月下旬まで待ってほしい。主に魔法の儀式的な面での問題と思ってくれ」
「それは構いませんが……何かお手伝いできることはありませんか？」
「ふむ……」
　最初は話し合いの展開自体が不透明だったが、ここまで九島が協力的な姿勢を見せてくれるならば、こちらの描く展開に持っていった方がまだいいと考えた。少し考えた後、悠元がこう切り出した。
「なら、桜井さんを攫って、一定の期間が来たら一時的に海外へ脱出してくれるか？」
「……はい？」
　何を言っているのだろうか、と疑問を呈している九島に対し、悠元が説明をする。
「筋書はこうだ。お前が経験しているであろう部分をある程度なぞり、海の向こうからやってくるであろうパラサイト化したＵＳＮＡ軍兵士と一時的な協力体制を構築する。そして、時が来たら桜井さんを連れて海外に行ってくれ」
「……つまり、ＵＳＮＡ軍のパラサイトとしての戦力を分断するのですね？　それには、僕がＵＳＮＡ軍の兵士と協力しているシナリオを作る、と」
「それもあるが、もう一つの役目としてパラサイトに対して敏感な連中を炙り出してもらう。まあ、そっちはお前が動けば勝手に騒ぎ出すし、後始末はこっちで請け負うから心配しなくていい」
　正直、大亜連合に対して釘差しはしたが、何かしらのちょっかいを掛けてくる可能性は残ったまま。この状況で大亜連合・イギリス・新ソ連・ＵＳＮＡの四正面作戦という愚かの極みなんて御免被る。そのために、フランスとドイツに対して経済的な技術支援を通してイギリ

スを抑え込む方向に持って行った。
　新生欧州連合が出来れば新ソ連も日本にばかり労力を割いていられなくなるし、実を言うと反魔法主義が新ソ連内部の反体制派と結託して各地で暴動を起こしているのが確認された。こんな状況を無視して日本に執着するベゾブラゾフを放置し続けることは新ソ連政府としても深刻なダメージを負いかねない。
「更に、もう一つ。多分というか十中八九、ＵＳＮＡからパラサイト化した兵士の対処をして欲しいと依頼が来る。だが、日本を出ることにヒステリックな反応を見せる連中がいるかもしれんからな。〝国外に連れ去られた日本人の救出〟という表向きの理由の根拠として桜井さんを国外に出す必要がある。お前はその為の護衛とも言える」
「護衛が出来る水波さんの護衛ですか……責任重大ですね」
「桜井さんが手を出さなくてもいい様に、お前にはいくつか魔法を提供する」
　目に見える対立を作るのではなく、九島にはＵＳＮＡ軍兵士の手助けと連れ出した後の桜井の護衛という役割を担わせる。これによって十師族が桜井の護衛に就くような事態を避けつつ、パラサイト化したＵＳＮＡ軍兵士やレイモンド・クラークの行動に制限を掛け、分断させて確実に叩き潰す。幸い、九島家には秘術の［仮装行列（パレード）］があるので問題はないだろうが、この筋書きをある程度の人間に話しておかなければならない。
「まあ、これはあくまでも提案に過ぎない。お前が拒否するならば、別の案を考えるまでだが……」
「いえ、僕は既に覚悟を決めた人間です。それで桜井さんが助かるのならば、甘んじて道化に徹します。彼らも驚くような演技を見せつけてやりますよ」
「何気に楽しそうにも見えるんだが？」
「……そうかも、しれませんね」
　既に過ぎてしまった過去は変えられない。でも、自分の行動で同じ目に遭う人間を減らすことが出来るかも知れない。それに、九島には一つの想いがあった。

「この世界では、まだお祖父様が生きていることも把握しています。せめて、この世界の僕が頑張って曾孫をお祖父様に見せてやって欲しいと思います。これは、我儘でしょうか？」
「我儘だな。でも、いいんじゃないのか？　そういうお節介があっても、誰も咎めたりはしないだろうからな」
〝転生者〟の神楽坂悠元とパラサイトの九島光宣。奇しくも他の世界からやってきた異質同士が手を組んだこの日。それは、僅かな希望を持っていた敵を恐怖のどん底に叩き落すための茶番劇だということを知るのは、当事者以外に存在しなかった。

トリックスターのお茶目

横浜・中華街の一角で対面している悠元と九島。互いに現状の打破をする為の芝居をすることで一致を見た。ここで気になって九島に九島家の要望を尋ねると、九島は一つ深い溜息を吐いた。

「そのことですか……今の僕は既に実家に対して何の思いも抱いていません。そこから再起したとしても、それはもう僕の与り知らないことですから」

「俺が知る光宣もそうだが、やはり家の居心地が悪かったのか？」

「そうですね。それに、この世界ではどうだか分かりませんが、僕がお祖父様の仕事を手伝っていても、兄や姉たちは率先してお祖父様の負担を軽くするようなことをしていませんでしたので」

九島の言葉には、もうじき９０歳の大台を迎えても、魔法師としての働きをしていた烈に対する負担を軽くすべきという愚痴も含まれていた。いくら魔法師といっても人間であることに変わりはなく、その一端が烈だけでなく剛三や千姫も働いていることだろう。

「その、神楽坂さんも三矢の家を出たのは、やはり家の居心地だったりします？」

「俺の場合、十師族の柵が面倒だったし、能力の関係で長兄が爪弾きになりかねなかったからな。その意味で爺さんには感謝しているが」

「め、面倒ですか……肩書きに興味が無いと？」

「そんなのがあったところで、結局要らぬ面倒事が舞い込んでくるだけだ。それは達也がいい例だろう」

四葉家直系の人間にして戦略級魔法師、更には研究者や魔工技師としての側面も併せ持つ司波達也（なろうけいのきわみ）を国内外の人間が放置できるわけがない。とりわけ世界の秩序を脅かしかねない力の担い手ともなれば、現在の実質的な世界秩序を担う［十三使徒］が達也を放置できない理由も分からなくはない。

だが、平穏な生活を望んでいる達也からすれば『迷惑極まりない』と吐き捨てたくなるだろう。無秩序に戦略級魔法を放つ気が無くても勝手に怖がられた挙句、殺してくるような真似までする相手が達也の

みを狙うならばまだしも、達也の大切な人間――――原作だと深雪、この世界だとリーナが筆頭になるが――――にまで危害を及ぼせば、最早排除も辞さなくなる。
その意味で、〝不器用な優しさ〟が達也の根底に存在するのだと思う。
「三矢の家にいた時はそんなことを考えた時もあったが、あくまでも体裁を整えるための方便にしかすぎないものに拘っても、それが魔法力の向上に繋がるわけでもない。プライドでブーストが懸かるなら、世界中の人間がとうにそうなってるだろう」
「そこまでドライに考えられる人に出会ったのは、達也さんに続いて二人ですよ」
「一応誉め言葉だと思っておく。それで九島。仮に事がスムーズに進んだとしても、周公瑾の隠れ家に籠ってもどうせ暇だろうから、向こうが動くまで仕事を手伝ってくれないか？」
「仕事ですか？」
仮にパラサイト化したスターズの兵士が来るにせよ、まだ時間はある。なので、九島には一つ仕事を頼もうと考えていた。それは、光宣にとっても決してマイナスにならないことだった。
「ああ。今、九島閣下は伊豆高原の別荘に滞在していてな。流石に魔法界を引退した人間を殺すような真似はしないと思われるが、念には念を入れて九島に護衛を頼みたいと思っている」
「この世界のお祖父様の……それぐらいでしたら、お引き受けしますけど。どういう意図があるのですか？」
「簡単に言えば、九島の身分証明を九島閣下に頼むということ。この世界に居る間の身元保証人になってもらうということだ。その対価として護衛を引き受けてほしい」
それに、烈がいる別荘にはシルヴィア・マーキュリーもいる。彼女を攫って人質にする可能性もある以上、九島に護りを任せることで悠元や達也の行動を狭めないという意図がある。
九島と桜井の身分証明の事由については、『九島烈の隠し子とその付き人』ということで決着した。この辺については烈と以前会談した

際に光宣の治療条件の一つとして、〝こちらからの要請に対して異論なく受け入れる〟ことを約束させている。
その期間自体は長くて3か月程度なので、特に問題は無いと判断した。
「で、九島の都合が良ければ明日にでも伊豆の別荘に向かおうと思うが、どうだ？」
「……下手に身分偽装で捕まるよりはマシでしょうし、宜しくお願いします」
「決まりだな。閣下にはこちらから連絡しておく」
「分かりました」
九島からすれば、今後自由に移動できるメリットを考慮すると、悠元の申し出を受けることでこの世界に居る正当性を得られることになる。流石に九島家や藤林家、通っていた第二高校へ行くことは出来ないが、それでも周囲の視線を気にすることなく歩けるのは九島にとって都合が良かった。
無論、パラサイトに協力する際の身分証明などは周公瑾絡みの部分が残っている為、其方を活用させてもらうこととした。この辺は九島も周公瑾の知識を持っているからこそ通じることだった。
翌日、伊豆高原の別荘に出向いた悠元と九島を出迎えたのはシルヴィアで、リビングには烈が既に座った状態で待っていた。魔法界を引退したとはいえ、立ち振る舞いが一切衰えていないあたりは流石の〝老師〟とも言える存在。
そして、九島の姿を見て驚くが、彼の内包しているものにも気付きつつ挨拶を交わす。
「悠元君。それに話は聞いていたが……さぞや、君の知る私も苦悩したのだろうな」
「いえ……僕は」
「何も言わなくて良い。君は悪くないのだ……」
九島が何を言いたいのか察したようで、烈は九島の発言を宥めながらも自責の念を捻り出すように呟いた。「わかりました」とだけ答えた九島を見た後、悠元と九島に着席を勧め、二人も座る。その上で悠

元を見つめる。
「メールには目を通させてもらった。以前の約定通り、彼と桜井君の身元保証人となろう」
「申し訳ありません、閣下」
「君に閣下と呼ばれるだけでもこそばゆい感じだし、この先いつまで生きられるか分からぬ身に面子など最早不要の産物よ。それで、『あの方々』のほうは？」
「それはご心配なく。『四大老』の一角として余計な声は控えさせますし、一連の事件に片が付けば、ご老人共に〝安心して過ごせる老後〟をお送りするつもりですので」
　九島を匿うことで口煩く宣う連中については、自ら排除する力がないのにピーチクパーチク鳴いて喚くこと自体が最早〝害悪〟でしかない。そもそも、『伝統派』の件で古式魔法師を説得して妥協点を探らなかった時点で、日本の国益に適うことよりも自らの基盤を支えるための忠実な部下欲しさの行動としか思えない。
　東道青波は四大老の一角を担う家に生まれたがために、術士としての力を磨くのではなく古式魔法師を統括する権威と権力を欲した。原作ならばまだしも、この世界の四大老を担う神楽坂と上泉は言うなれば〝実力主義〟に基づいて当主を選んでいる。そんな彼らからすれば、衰退といっても過言ではない老人たちに幻滅したとしても不思議ではない。
「彼らと比べれば、悩みながらも最近まで日本魔法界や九島家の為に奮闘なさっていた閣下の方が百億倍マシです。それはきっと、母上や爺さんも同じ意見を述べると思います」
「……いやはや、参ったよ。〝光宣〟も覚えておくといい。こういう人間が一番敵に回してはいけない人間だという見本だ」
「あ、え、ええ……僕も嫌というほど肌で感じてしまいました」
　烈の忠告にも近い台詞に対し、九島は名前を呼ばれたことに動揺しつつも同意した。なお、それを聞いた悠元はジト目をして烈を見ていたが。
　その後、九島はこの世界で〝宮藤真一（くどうしんいち）〟（以後は真一と記載）、桜井

のほうは〝桜庭愛波(さくらばまなみ)〟（以後は愛波と記載）という名と戸籍を得て、数ヶ月の短い期間だが、この世界で生きる形となった。

余談だが、九島もとい真一の偽名は烈が、桜井もとい愛波の偽名は真夜が考えた。例えパラサイトでも九島家の魔法全てを会得したことから、〝真なる一番の魔法師〟の意味を込めたらしい。ただ、この世界に存在する漫画の登場人物とフリガナが同一で、しかも九島は自宅療養中に電子書籍でそのタイトルの漫画を読んでいたためか、ジト目を烈に対して向けたのは言うまでも無かった。

愛波の方は特に混乱などなかったが、寧ろ真夜の方から『全てが終わったら遊びにいらっしゃい』と悠元に対して投げかけ、それを聞いていた深雪が連絡を終えた直後に悠元を部屋に連れ込んで押し倒した。その後、何があったのかは割愛する。

その時の行動を、偶々連絡役で訪れていた亜夜子が熱心にメモしている横で、悠元に対する同情と姉に対する呆れが入り混じった表情を浮かべる女装した文弥がいたのはここだけの話。

◇　◇　◇

事情はどうあれ、真一を味方に引き入れることに成功した悠元は、真一と一緒に町田のマンションに［鏡の扉(ミラーゲート)］で移動した。真一が直ぐに理解したあたり、達也クラスの［精霊の眼(エレメンタル・サイト)］に覚醒したわけだが、当人から『こんな演算力なんて僕でも引き出せません。本当に人間ですか？』と言われた。

真っ当な人間と言われると疑問だが、それを真一には言われたくないと思いつつ、そのままリビングに招き入れた。すると、そこには達也と深雪、更には〝この世界の九島光宣〟である光宣もその場にいた。

「待たせてしまったか？」

「いや、俺と光宣が早かっただけだ。にしても……驚きだな」

「達也さん、それは僕が一番驚いていることですから」

「あはは……」

何せ、双子と言われても違和感が無い位に瓜二つの人間がいるのだ。それも、本来邂逅することが無かった筈の未来の並行世界の人間

ならば猶更だろう。改めて、互いに自己紹介する形となった。
「初めまして、この世界では宮藤真一という名を頂いた九島光宣です。皆さんは勘付いているかもしれませんが――――僕はパラサイトです」
「君がパラサイト……にしては、そこまで本能的な行動をしているようには見えないですけど」
　真一の自己紹介と告白に対し、真っ先に反応したのは光宣。彼の知っているパラサイトの性質からすれば、真一が自我を保っていること自体が奇跡としか思えなかった。
「紆余曲折ありまして。ただ、その過程で取り返しのつかないことをたくさん経験しましたし、僕の知る達也さんや深雪さん、それに水波さんにも迷惑を掛けてしまいました」
「成程。それで、真一と呼ばせてもらうが……お前は何を望む？」
「悠元さんにはお伝えしましたが、僕は可能であれば桜井さんを元気な状態へ戻していただきたい。それ以上は高望みが過ぎるというものです。その対価の一つとして僕の知る歴史をお話します。これがその通りになるとは思いませんが、一つの判断材料として聞いていただければ幸いです」
　真一を達也らに引き合わせたのは、真一が知る２０９７年６月から８月にかけて発生した出来事を話してもらうため。その全てがその通りに進むとは思っていないが、幸か不幸か、これまでの出来事は原作に沿う形で展開が流れている。
　その意味で、国外にいる連中が採る未来の選択肢の〝判断材料〟には成り得ると判断しての結果だった。
「感じられる魔法力からしても、それ以上を望んでも罰は当たらないだろうが……生きる場所がなかったのだろう？」
「やはり、達也さんは凄いですね」
「止めてくれ。俺なんかより凄い奴はいる。そこにいる悠元がいい例だ」
「それは分かりますね」
　真一の褒めに対する達也、そして光宣の畳み掛けにも近い言葉の暴力に泣きたくなったが、それを堪えた上で真一に話しかける。

「それはさておくとして、真一。話してもらえるか？」
「はい」
　そうして真一が話し始めた彼の経験と、彼が知る司波達也が真一に話した出来事の知識。真一が述べたことは概ねセリアが以前話していた原作世界に極めて近い流れとなっている。そう表現したのは、いくら主要人物が原作と同じ流れをなぞっていたとしても、それ以外の人物が全く同じ流れを辿っているとは断言できないためだ。
「一番近い出来事ですと、ＵＳＮＡのダラスでまたマイクロブラックホール実験が行われ、今度はスターズの隊長クラスがパラサイト化する出来事ですね」
「その兆候は確認した。更に言えば、ＳＳＡのブレスティーロ大統領からＵＳＮＡ軍人に宛てたとみられるメールの存在も確認している。その内容だと、実験を使嗾したのは十師族ということになってるようだが、悪魔の証明だな」
　ＵＳＮＡ政府が止めようとしても、実際に研究者がそれを遵守するかどうかは別の問題。南盾島の件で極秘裏に戦略級魔法の研究をしていた件からすれば、この辺は〝魔法の空間に対する影響の研究〟という名目で誤魔化すことは目に見えている。
　政府もとい政界が魔法という実効性のある影響力を有しないが故に、魔法を有する勢力に対する干渉が極めて難しい。この辺は権力と魔法の関係性に基づくものが大きい。
「悠元さんは手を打たれないのですか？」
「それも考えたんだが、あんなメールの信憑性を高める方がもっと危険だと判断した。まあ、セリアがいる以上はスターズに勝利という二文字が皆無に近いが。真一、セリアというのはエクセリア・クドウ・シールズといって、アンジェリーナ・クドウ・シールズの双子の妹にあたる」
「そんな人が……」
　そして、スターズの叛乱でリーナもとい〝アンジー・シリウス〟に冤罪を吹っかけた挙句、日本に脱出したリーナを追いかけるような形でパラサイト化したスターズの兵士が日本に来る。悠元が真一に共

闘を持ち掛けたのは、十師族をスターズにぶつけるのが狙いだった。
真一に対して術式提供はするが、彼はあくまでもＵＳＮＡ軍にとって〝協力者〟であって〝共犯者〟となることは極力避ける。
「というか、国家の抑止力の要となる［十三使徒］に冤罪を被せて殺そうとするとか、正直まともじゃないわ」
「確かにそうですよね。僕もリーナさんと直接話す機会を得た際に色々聞きまして」
原作だと全十二部隊のうち三分の一にあたる四部隊の隊長・副隊長クラスがパラサイト化するわけだが、この世界の場合は何処まで波及するか分からないし、セリアの勘気に触れてどこまでズタボロになるかも未知数。
しかも真一の情報を勘案した場合、リーナが襲撃される日に剛三がニューメキシコ州にいる弟子の退役軍人を訪ねる予定だと聞いていて、下手するとパラサイトの気配に気付いてロズウェル基地に道場破りの如く侵入するかもしれない。
「それで、リーナの件もそうだが、新ソ連がねえ……達也。［チェイン・キャスト］の基礎術式データは手元にあるが、いっそのこと派手に魔改造してもいいか？」
「魔改造と言ったが、具体的には？」
「大型ＣＡＤなんて使わなくても済むように術式の効率化をするのと、組み合わせた魔法の威力向上。ド派手な魔法でベゾブラゾフの面子を木っ端微塵に破壊してやるつもりだ」
悠元はそう説明したが、実際には既に完成している［天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）］から相転移昇華魔法の記述を消した状態の［リンケージ・キャスト］の基礎記述データを一条家当主宛に送る。
原作だと真紅郎に送ったことから達也の術式提供が明るみになった訳だが、今回はその対策として師族会議を通す形で一条家に術式提供を行う形を取る。その際、達也を国家非公認戦略級魔法師という事実も併せて公表することで、戦略級魔法師に対する責任を平等に負ってもらう。
『灼熱と極光のハロウィン』に関する事も聞かれるだろうが、既に七

草家当主が知り得ていることを彼に独占させて余計な勘繰りを回避するためにも必要なことだ。
「それでも殺すことを諦めないようなら、今度は直接出向いてでも殺す。ついでに新ソ連の国家元首をＵＳＮＡにでも送りつけてやることも辞さない」
「えっと……その、達也さんに深雪さん。悠元さんはそういうことが出来るのですか？」
「出来ないことを探すのが難しいな」
「何でも出来てしまうのには困ってしまいます」
「お前らなあ……」
いくら何でもそれを司波兄妹（おまえたち）が言うな、と苦言を呈したかったのは言うまでもない。

指し手の数の暴力で戦いを進める

真一から述べられた〝彼が知る世界の歴史〟。
パラサイト化を逃れるためにベンジャミン・カノープスを含めた三人の魔法師がミッドウェー刑務所に送還されることや、窮地に追い込まれたエドワード・クラークやイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの動き、そして平然と裏切ったウィリアム・マクロードの動向。
無論、国外に限らず国内もパラサイト化したスターズの兵士が暴れるという構図に、流石の達也も呆れるような様子を見せていた。
「……悠元がこれまでＵＳＮＡに対して愚痴を零した意味も何となく理解できるな。これはいくら俺でも困るものだ」
「流石に達也さんでもそう思いますか？」
「そうだな。自分の力が――――［マテリアル・バースト］が人の手に余るものなのは確かだ。だが、それの権限を他の誰かに委ねる気はない……悠元を除いての話だが」
「やめて。俺の胃のライフがマッハで削れるから」
達也に対して協力や支援はしても、達也の行動に対して一々許可を求められるのは正直困る。管理責任は負うとしても、どう行動するかは達也の自由裁量に委ねている以上、それに対する許可自体を口にすることはあっても、選択肢は達也自身が決めることでしかない。
「それで、達也と深雪、光宣にも話しておくが、桜井さんもとい愛波さんを真一の手によって一度国外に連れ出してもらう。その意図は言わずとも分かるだろうが」
「安全の確保、というわけでは無さそうですが……もしかして、ＵＳＮＡが関与してくるのでしょうか？」
「ああ。さっきも触れたスターズのパラサイト化現象に関する話になる。勿論、こちらが懸念される予測が外れてくれれば御の字だが」
もし、ベンジャミン・カノープスらのパラサイト化の影響を受けなかったスターズ隊員がＵＳＮＡ本土の刑務所に収監されるのならば話が変わってくるが、セリアから聞いたベンジャミン・カノープスの為人を考慮するならば、パラサイトの影響を避けるという意味でミッ

ドウェー刑務所への収監を希望する可能性はゼロではない。
「なので、連れ出すにしても状況が整理次第となる。愛波さんには俺から話を付けるし、念のために治療はしておく。真一もそれで構わないか？」
「ええ。正直、悠元さんみたいな魔法師がいれば、僕もここまで悩まずに済んだのですけれど」
　魔法技術による治療という部分では、原作では達也の［再成］に匹敵する治療となるとパラサイトの自己治癒能力ぐらいしかない。真一がそう零したとしても無理は無い位に、原作時点での魔法医療技術ではどうしても限界は生じる。
「だが、マイクロブラックホール実験を日本のせいにするとなると、誰かが唆した……まさか悠元、これはレイモンド・クラークの仕業か？」
「十中八九そう見ている。俺は別にアイツの夢を否定はしていないんだがな。画一的な夢なんて、それこそ最早人間ではなく機械的思考になる」
　何かに縋りたいという欲望。面倒事から逃げ出したい欲求。そして、恐怖に対する反動。それをレイモンドが唆した結果、パラサイトの再来が起ころうとしている。パラサイトを［パラサイドール］以外の手段で人間の力として使うことは出来るが、下手すれば軍事バランスの崩壊につながりかねない技術の為、これを外に漏らすことは出来ない。
　ただ、［守護霊（サーヴァント）］の霊力を感じて何か聞きたそうにしている真一に対して、悠元が声を発する。
「そうそう、真一。俺や達也、深雪は［パラサイト］を使役する形で力を行使している。だからこそ、パラサイト化しているお前を受け入れることも出来ている。ただ、その技術は流石に教えられないが」
「成程。流石に僕でもそこまで厚かましい真似は出来ませんよ。兄や姉たちが聞いたら、教えてほしいと強請りそうですが」
　パラサイトを自らの中に取り込むのではなく、相互関係を保つことで秩序ある力の均衡を保つだけでなく、パラサイトに対する脅威から身を守るという意味で［守護霊（サーヴァント）］を定義化している。

なお、リーナとセリアには帰国の直前に新型の思考操作型ＣＡＤを渡している。従来はメダル型だが、二人に渡したのは宝石の付いたネックレスタイプ。理由は彼女たちに［守護霊（サーヴァント）］との資質があったためだ。
「そっちの世界でも九島家はそんな感じか……九島閣下が真一や光宣を可愛がっていた理由が分からなくもないな」
「そっちでも……もう一人の僕もそうなのかい？」
「ええ、まあ。尤も、僕の方は兄や姉たちがお祖父様の仕事に関与しないせいで変に苦労を背負っていたかもしれませんけど」
まさか、こんな形で互いの愚痴を零せる相手が出来るとは真一も思わず、光宣の答えに対して苦笑を滲ませていた。なまじ九島烈が後天的ながらも力を持ってしまったがために、子孫たちが苦労する羽目になった。
話が脱線してしまったので、愛波を国外に連れ出す算段の話を続ける。
「話を戻すが、恐らくＵＳＮＡからベンジャミン・カノープス少佐の救出に協力してほしいと内密に要請が来るだろう。それが来た段階で、俺と達也で少佐を救い出し、ついでにパラサイト化した兵士全員を叩き伏せる。戦力を分散させるという愚を犯させるために、真一には大変な役割を負わせることになるが」
「それぐらいは別に構いません。この世界のお祖父様を生かす為なら、僕は喜んで道化に甘んじましょう。何なら、［トリックスター］の名を受け継ぐに相応しい演技を見せつけてやります」
誰かが魔法師のことを『優れた情報の詐欺師』と謳ったことがあるらしいが、真一は祖父である烈の［トリックスター］になぞる形で相手を騙し切ろうと画策している。魔法に関しては一線級の実力を有するだけに心配していないが、問題は他のパラサイトからの精神汚染ぐらいだろう。その辺は悠元が術式提供をする際に対応することも決めている。
「ただ、どうやって信頼を勝ち得るかという疑問は出てきます。同じパラサイトとはいえ、いきなり僕が接触しては向こうも訝しむでしょ

うし」
「つまり、愛波を一時的に外国へ出すにしても、連中を納得させられるだけの判断材料か……悠元、どうする気だ？」
「いくつか思いつく手段はあるが……真一、九島家に掛けた精神系魔法は生きているか？」
「ええ。数か月は解けないかと思いますが、何か策でも思いついたのですか？」
どうせ落ちるところまで落ちた。向こう６０年は這い上がってこれない……〝数字落ち（エクストラ）〟の決定打まで既に持っているから、今の九島家には退場して貰って〝別の九島家〟を立てるために、真一に一働きしてもらうことにする。
「九島家を動かして、連中の隠れ家でも提供してくれ。もうどうせ現行の九島家は師族会議の除名処分不可避のレベルにまで踏み込んだのだから」
「え？　一体何をしたのですか？」
「その様子だと、光宣はおろか真一も知らないのか。達也なら分かると思うが、昨年の九校戦で用いられた［パラサイドール］――それの製造が九島家傘下にある大阪の研究所で製造が続けられている。それも、資金の出所に国防軍の一部が関与している事実も判明している」
流石に懲りればよかったものの、一度魅せられてしまっては簡単に捨て去ることも出来ず、九島家が魔法研究所の跡地に新たな研究所を建てて、［パラサイドール］の製造を続けている。しかも、その場所というのが大阪湾近くにあり、見た目は民間の大型倉庫にしか見えない。
「嘘……ではないんですよね」
「嘘をつくんだったら、光宣や真一にもう少し利のある嘘をつくわ。更に、国防軍の一部が問題といえば問題でな」
「……まさかと思うが悠元、その一部というのは」
「大方達也の予想通りだと思うぞ」
［パラサイドール］関連の出来事は国防軍で限定すると、詳しい事情

を知るのは独立魔装大隊では風間と響子の二人だけ。その直属の上司である佐伯は烈を始めとした『九』の数字（ナンバー）を冠する家の先代当主たちと交渉しているため、当然［パラサイドール］の事情も知り得ている。

当時は剛三と千姫に後事を任せたので、周公瑾の処分に関与している四葉本家と黒羽家は知り得ている。だが、パラサイト事件で素体を持ち帰った四葉家の方は上泉家と神楽坂家の了承を得る形で保持を許され、魔法研究の素体として使用されている。

達也も響子を通して風間や佐伯が関与している可能性に気付いたのか、悠元に問いかけた。それに対する答えは敢えて口に出さなかったが、今の答えで達也も理解できてしまったのだろう。

「ただ、性急すぎるやり方は変な軋轢を生むことになるからな。まずは一つずつ丁寧に片付けていく。それと光宣」

「は、はい。僕にも何か仕事があるのですか？」

「仕事というか、今回のディオーネー計画を含む一件が片付き次第、今の九島家を師族会議から除外して新たな九島家を興す。その初代当主はお前になるからな、光宣」

「え、ええっ!? 僕がいきなり当主に!?」

流石に九島の家から出た光宣からすれば、完全に寝耳に水の有様だろう。だが、これにも当然理由が存在する。

４月の時点で十山家を除外して十神家を復帰させたが、九島家に代わる家といっても現在の〝数字落ち（エクストラ）〟に九島家の代わりを担えるだけの家が無いのも事実。とはいえ、百家から選ぶにしても九島家の血縁者を見繕う必要が出てきてしまう。

そこで、九島家の縁者且つ優れた魔法師という意味で光宣が新たな九島家の当主となってしまえばいいと考えた。

「そう驚くことも無いだろう？　俺は既に神楽坂家当主だし、達也は四葉家次期当主だ。養子に入った壬生家は先輩も光宣も両方婚約が決まっている様なものだし、壬生家の跡取りが女性ではダメという法律もないからな。それがダメなら、四葉家と六塚家に喧嘩を売ることにもなるし、神楽坂家の先代も俺の母上だからな」

「い、言われてみれば確かに……ただ、今の九島家に出戻りではダメだと？」
「そうなると、［パラサイドール］の製造責任問題を光宣が負ってしまうことになるからな。あくまでもそれの責任は先代および今代までのもので、次代へ継がせないためにここで一つの区切りをつける」
　それに、最悪は烈が九島の名乗りを認める形で光宣を孫から養子という立場に置き換えることも考えている。既に烈は責任を取っているし、九校戦後の［パラサイドール］製造に関与していないことは本人との会談で判明している。
「光宣は既に婚約者がいるんですね」
「ああ。十文字家の当主である十文字克人の従妹にあたる。ただ、魔法資質は克人をも凌ぐとみられる」
「成程……守ることを得意とする魔法師を好きになるという意味では、好みが似通ったかもしれませんね」
「ははは……」
　いずれにせよ、真一を味方に引き込むことで多少はマシな対応が出来るようになるだろう。とはいえ、油断が出来ないのはまだ変わりない事実だが。何せ、達也はベゾブラゾフ本人を殺すに至っていない。
　いや、正直に言えばベゾブラゾフを戦闘不能にする方法はあるが、今の時点で殺せばマズいのは達也自身も理解している。
　達也本人の気質上、自身に対する敵意や悪意が達也だけに向けられる分にはある程度許容する。だが、その害意が自身の大切な人間にまで波及するとなれば、最悪自分が責を負う形で危険を排除する。
　それは、達也がこれまで対峙して倒してきた相手の処遇の差を見れば明らかだ。
　リーナの場合は達也が気に掛けたからこそ生かされた形で、原作の『ブランシュ』や『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』は深雪に害を成そうとしたからこそ達也が容赦なく対処した。もし『ブランシュ』の件で克人や桐原が出張らなかった場合、跡形もなく［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］で灰燼に帰していただろう。
　原作でベゾブラゾフ本人ではなく［アルガン］を破壊することに舵

を切ったのは、もしその時点でベゾブラゾフを殺した場合、新ソ連が逆上して大軍を差し向ける可能性が高い。そうなると、［マテリアル・バースト］の使用するリスクがかなり跳ね上がることになる。

それに、原作の時点でＥＳＣＡＰＥＳ（エスケイプス）計画は本格的に事業スキームを構築する前段階だったため、ベゾブラゾフが攻撃することによる時間のロスを防ぎつつ、ディオーネー計画に対する明確な拒否を示すためにもＥＳＣＡＰＥＳ（エスケイプス）計画を着実に進行させる必要があった。

そこに加えるとしたら、九島光宣が桜井水波を執拗に狙うような事態が重なったため、一時的な危険の排除をしてでも九島光宣の対処を行うための時間を確保する必要があった。戦略級魔法師としての縛られるリスクを回避するため、殺すという手段を講じなかった。

◇　◇　◇

真一との話し合いを終えた後、病院の許可を取って愛波とヴィジホンで一連の経緯について説明をした。真一がパラサイトという事実にも驚いていたが、彼の素性と希望を伝えた上で愛波の意思を確認した。

愛波は少し考えた後、『この私がお役に立てるのでしたら、喜んで協力させていただきます。きっと、それぐらいの我儘なら達也様や深雪様もお許しになると思いますので』と協力の意思を見せた。

とはいえ、残る懸念はＵＳＮＡでのパラサイトに関する動向となる。

原作では争う姿勢を見せていなかったＥＳＣＡＰＥＳ（エスケイプス）計画とディオーネー計画。だが、ＥＳＣＡＰＥＳ（エスケイプス）計画の正式名称としてＳＴＥＰ（ステップ）計画が表舞台に上がり、更には日本政府が次世代エネルギープロジェクトの中核としてＳＴＥＰ（ステップ）計画への支持を表明したことにより、ＵＳＮＡと軍事同盟を結んでいる国々でも反応は様々であった。

そこに拍車を掛けたのはベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］によるものと思しき魔法攻撃を受けたことで、日本の現政権はＳＴＥＰ（ステップ）計画への支持を改めて閣議決定し、大洋南部海上連携協定（ＳＥＰＡ）をさらに一歩進めた経済連携協定を締結。

南洋経済連携協定（Ｓｏｕｔｈｅｒｎ—Ｏｃｅａｎ　Ｐａｒｔｎｅ

ｒｓｈｉｐ　Ａｇｒｅｅｍｅｎｔ：ＳＯＰＡ）――悠元の前世で存在した貿易に関する経済協定を参照する形で立案され、その中核を握る［恒星炉］関連技術を始めとした魔法技術の輸出入に関する機密情報の管理を含む広域経済条約。

６月１２日、提唱国の日本が赤坂離宮にＳＥＰＡ加盟国の特使を招き、条約に調印。各国政府が批准することで協定が効力を発揮する。この席には関連技術の提供を受けるフランスとドイツ、更にはトルコの政府特使も招かれ、協定にサインをしている。

これによって、南アメリカ、アフリカ、西・南・東南アジア、そして東アジアの日本だけでなく、イギリスを除く西欧や東欧までＳＴＥＰ（ステップ）計画を支持するという裏付けを得た形となる。

その動きを更に加速させたのは、世界各国に存在する民間軍事会社（ＰＳＭＣ）もこぞってＳＴＥＰ（ステップ）計画への支持を表明したことだ。第三次世界大戦中、そして戦後暫くは戦闘魔法師を国軍が囲むという状態があったが、ある時期から在野の戦闘魔法師の存在も許されるようになった。

代表的なのはイギリスの『アンシーンアームズ』やスペインの『ソルダードミステリオ』などだが、普通ならば魔法師の民生分野への活用という点では、戦力の減衰という憂き目に遭う意味で〝商売敵〟と見做してもおかしくはなかった。

だが、そうならなかったのはこうしたＰＳＭＣの会社のトップが例外もなく剛三の教導を受けていた弟子たちが興した会社だったからだ。

彼らは［恒星炉］で用いられる魔法師の数よりもディオーネー計画で動員される魔法師の数が桁外れに違うという点に気付いていた。時勢を読んで自らを売り込んでいくＰＳＭＣからすれば、先が全く見通せず途方もない労力を支払うことが出来るメリットとリスクよりも目に見える損害だけで済むＳＴＥＰ（ステップ）計画を支持するのは、もしかすると水素発電施設や［恒星炉］プラントの護衛という〝需要〟も見込めると踏んでのもの。

自分たちの仕事場を増やせるという意味ではどちらも可能だが、よ

り現実的な線で会社の運営に支障が出ない方を選ぶとすれば、間違いなくＳＴＥＰ（ステップ）計画に軍配が上がる。
　別にＳＴＥＰ計画自体がディオーネー計画に喧嘩を売ったわけではない。だが、ＳＴＥＰ計画の持つ現実性という利益はディオーネー計画がそう簡単に出せるものではない。
　この戦い自体に審判などいないが、盤面を操る指し手（プレイヤー）は無数に存在する。予め指し手を決めてしまったディオーネー計画と最初から指し手を指名しなかったＳＴＥＰ計画。『戦いは数によって決まる』という誰かが述べた言葉の通り、数という暴力に抗えるはずなどない。
　この状況でエドワード・クラークが取った手段は……権力という搦め手に頼るという手段であり、それが一層ＵＳＮＡを窮地に陥れるものだということは、情報という要素で視野を狭められた彼には理解できる筈など無かった。

非常識は理解が追い付かない

防衛省庁舎内の国防陸軍最高司令部。その司令官室には蘇我大将ともう一人の士官がいた。本来ならば、国防陸軍でもあまり触れたくない実績を持つ人物のうちの一人。

彼の名前は風間玄信（かざまはるのぶ）。大亜連合とベトナムの間で起きた大越戦争に介入し、後に「大天狗」と呼ばれるほどの実績を挙げた古式魔法師。だが、その為に出世コースから外れるという憂き目に遭った。

蘇我は長話になることを想定して、応接用のソファーに向かい合う形で座る。無論、先に座るのは蘇我であり、風間は蘇我の呼びかけに応じる形で静かに座る。

本来、今日呼ばれていたのは佐伯だけだったが、蘇我が独自のルートで風間の同期に当たる兵士経由で風間を呼び出していた。佐伯に対しては『昨今の情勢を鑑み、魔法師部隊の指揮を執る風間中佐に魔法師部隊の実態調査をしたく、直接聞き取りを行うこととした』と断る形を取っていた。

「さて、風間中佐。まずは貴官のような忠実な兵士に対して労ってやれなかったことを謝罪する」

「いえ、大将閣下がお気になさる事ではありません。寧ろ、軍法会議で処罰を受けても仕方が無かった身ですので」

「そうか。何れにせよ、貴官に対しての功績に報いることはする。それで本題だが……貴官は先日、新ソ連の戦略級魔法師であるイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフによるものと思われる魔法攻撃があった日、貴官は現場にいたと聞いている」

蘇我の風間を評価するような言葉を掛け、それに対して風間が『気にしていない』という意思を伝えると、蘇我は早々に本題として風間の行動について問い質した。これには流石の風間も表情を引き締めた。

「今回の聞き取りは国防陸軍最高司令官としての問いかけである。無論、虚偽は認めない。この聞き取りに際し、事前に現場で対処した上条大将から大方の事情と推測の見識を伺っている。それで、貴官の回

答は？」
「……確かに、第１０１旅団の佐伯少将の命令により、部下数人と共にイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］のデータを観測せよ、との命を受けたことは事実です。その際、上条大将より警告と早々に現場から立ち去るようにとの勧告を受け、撤退いたしました」
　蘇我の厳しい目つきに加え、事前に悠元から事情を聞いているのでは誤魔化しなど出来ない。そう判断した風間は正直に受けた命令についてと悠元との相対についても触れた。
「その命令の理由は伺っているか？」
「いえ、それについては問い質しておりません。ですが、小官の意見を述べさせてもらうのであれば、恐らく達也とベゾブラゾフの両方を攻略する方法を探ろうとしたものと思われます」
「……成程」
　風間は命令に際して意図を尋ねなかった。いや、逆に佐伯の意図が読めてしまったからこそ、風間は深く問い質すことをしなかった。その結果、達也の近くに居ながらも達也を助けるようなことなど何一つできなかった。
　風間の回答を聞いた蘇我は少し考えた後、より一層険しい表情を風間に向けた。
「風間中佐。今回のことに際して上条大将は憤慨していた。いや、あれは最早『第１０１旅団が信を置ける状態に無い』と公言しているに等しい様子だった。君に責任が全く無いとは言わないが、最近の佐伯の行動はどうも軍人の領分を超えつつある」
「……小官にも責任の一端があることは、上条大将閣下や大黒特尉との関わりで痛感しております」
　ベゾブラゾフによる魔法攻撃の後、蘇我は悠元から戦闘詳報の報告を受けた。ただでさえ、一昨年の動員命令やその後の国防軍絡みの案件を処理してくれただけでなく、今年の春には悠元を動員しようとした件を聞いた蘇我が防衛大臣に相談し、悠元を異例の特務大将にまで昇進させた。

これで佐伯がまだごねるようならば、中央から最前線に飛ばして彼女の手腕を発揮させる方が有益と考えるようになっていた矢先に、今度はベゾブラゾフの件が追加された。

本来、国家の利を守る筈の国防軍が四葉家を守らなかった――――この事実だけで十分国防軍と四葉家の契約を破棄するには十分すぎる理由とも言える。しかも、今の達也は四葉本家直系の血筋を引く次期当主。

そんな彼を捨て石にするようなことなど、悠元が一番許さない事など蘇我は当然理解していた。そして、そのことは蘇我の視線の先にいる風間も、その上司である佐伯も理解している筈なのだ。

十師族ひいては師族会議を民間人だと見做さない人間も国防軍にはいる訳だが、その杓子定規は決して許されない。魔法という力を有しているが故に、彼らを〝兵器〟だと見下す者もいる。

だが、それは今年の十師族選定会議までの話。護人の二家が十師族に名を連ねることにより、師族会議そのものが政府や国防軍から完全に独立。実質的に皇族直属の治安維持組織として生まれ変わった。時代の変わりを示すかのように、九島家が師補十八家に降格し、十山家は師族会議内での行動が問題視されて〝数字落ち（エクストラ）〟となった。

とはいえ、表向き民間人であるのならば国防軍が守るべき対象なのも事実。本来、流すべき情報の伝達を怠っただけでなく、都合のいい時だけ利用しようとする。最早、そんな行為自体許されないものだと知るべき時に来ている。

「本日、佐伯少将が防衛省に出向いている。詳しくは聞いていないが、会議には書記官だけでなく外務省北米局の課長も同席していると聞いている。外務省の連中は大方司波達也君を説得しろという命令を受けたのだろうが、そんなことをしてどうなる？　連中の頭の中はアメリカ贔屓の思考しかないのか？」

国防を十師族に頼らないという反十師族の急先鋒である佐伯だが、実際には十師族の人間である達也や悠元を頼ろうとしている。いや、〝手元に置こう〟とするような行動が見られる。更には、風間の副官である響子も九島家の血筋を引いている。肝心な部分を十師族に依

存している時点で矛盾を来している状況を打破しようとしている佐伯に、蘇我は『陸軍将校としての領分』を口にした。
「防衛大臣は今回の一件で相当御冠だ。下手すれば、防衛省と外務省人事に嵐が起きても不思議ではなくなった……愚痴を零したな、済まぬ」
「いえ、閣下の心情をお察しいたします」
陸軍将校という意味では悠元も当て嵌まるが、彼は様々な立場の肩書きを以て事に当たる為、その意味では佐伯よりも遥かに正当性がある。しかも、反十師族の立場を掲げている佐伯からすれば、悠元はその十師族のトップに立つ存在で、かの九島烈から直々に指名を受けて師族会議議長という肩書を認められた。
「まだいいのだがな……〝彼〟の名が一言も出ないのが唯一の救いだ。仮に一文字でも発しようものなら、その瞬間に千姫殿が飛んできてここら一帯が更地になりかねん」
「それは……冗談、ではありませんよね？」
「無論だ。私は特別に千姫殿の魔法を見せてもらったことがあったが、あれは最早戦略級魔法という枠組みに収めてよいものではなかった」
いわば〝日本国における世界最強クラスの魔法師〟といっても過言ではなくなった悠元だが、自ら最強だと公言することはない。そんなことをしたところで利が無い、と彼なら言ってのけてしまうだろう。
彼だけでも問題なのに、その養母である千姫も戦略級魔法師といっても差し支えない実力を有している。それだけ神楽坂という名がこの国における魔法師の頂点を指し示す証明に成り得ているのは確かだ、と蘇我は率直に感じていた。
「我々は軍人として国を、国に住まう民を守らなければならない。そして、それは幾ら師族会議の人間相手とて同じこと。風間中佐、貴官の上司は四葉家のみならず、神楽坂家や上泉家まで巻き込んで彼らによる大惨事（カタストロフィ）を招く一歩手前の状態だと認識してもらわねばならん。そこで、だ……風間中佐には本日を以て〝大佐〟へ昇進してもらうこ

ととなる」
「……はい？」
　厳しい言葉の後に言い放たれた昇進の内示。これには流石の風間も気が抜けたような言葉を発してしまった。一体何の意図があっての昇進なのかと訝しんでいる風間に対し、蘇我がそのまま説明を始める。
「実は、上泉家より魔法師の戦力提供の話を受けることとなった。だが、規模が規模故にまとまった人数を受け入れられる余力のある魔法師部隊が現時点で独立魔装大隊しかいないのだ」
「人数の規模は如何程ですか？」
「ざっと１０００人規模となる。なので、編制自体は大隊から連隊に変更されることとなるわけだが、受け入れ準備を８月初めまでに整える様、先程第１０１旅団に要請した」
　蘇我から提示された内容――――第１０１旅団に対し、戦力補充の関係で魔法師部隊の再編制に対する受け入れ態勢を約１か月半で整えろという厳しい命令。風間が驚いたのは、独立魔装大隊でもそれなりのレベルになる魔法師が揃っている形だが、いくら上泉家からの申し出とはいえ、それに見合うレベルの実力者を一度に四桁単位も確保できるとは信じられなかったからだ。
「せ、１０００人規模の魔法師ですか？　それも、我が大隊クラスの実力を有する魔法師など、一体何処から……まさか」
「そのまさかだよ、風間大佐」
　そう、そんな大規模の人数を調達できたのは、この国にいた強化調整体を全員真っ当な魔法師に更生する作業が終わったからだ。その作業が終わったからこそ剛三は嬉々として奏姫と一緒に海外旅行へ出向いたわけだが、事情を知らない側からすれば、まさに寝耳に水と言うべきことであった。
「新ソ連だけでなく、大亜連合が講和状態の沈黙を破る可能性もあれば、昨年のＵＳＮＡ軍による〝内輪揉め〟のこともある。この状況下で他国に頼ることもできない以上、せめて国土を守れる体制を作らねばならん。風間大佐には苦労を掛けることになるが、しっかりと頼む

ぞ」
「（これは断れんな……）了解いたしました」
　大隊の再編制となれば、当然大隊長の風間も負担を強いられる。今までの塩漬け分を含めつつ、再編制の迷惑料を込めての大佐への昇進。心の中で整理した上で、風間は立ち上がって敬礼をしつつも蘇我の意図に気付いた。
（まさか、これは悠元が佐伯少将に仕掛けた策の一つなのか？）
　一度に１０００人規模の受け入れとなれば、当然独立魔装大隊全体が受け入れ準備に追われる形となる。更には、大隊を連隊編制にするという蘇我の言葉からして、確実に第１０１旅団も編制変更の対応に追われる。そうなると、佐伯が下手に策を弄する時間を確保することも容易に出来なくなる。
　風間は蘇我から提示された要請に悠元の意思が介在していると読んだ。だが、そうされてもおかしくはないことをしてきた自覚はあるし、責任の一端は間違いなくあると風間は認識している。
（戦力の増強は、軍人としてはありがたい話だ。ただ、彼らを怒らせているという事実を知れば知るほど、佐伯少将には自制してほしいのだが……）
　その後、基地に帰った風間を待っていたのは、不機嫌の様子を隠さない佐伯から〝外務省が大黒特尉の引き渡しを求めてきた〟という愚痴にも近い問いかけを聞かされ、その結論は〝何もしない〟ということで話を流したのだった。
◇　◇　◇
　伊豆高原の別荘に対する攻撃失敗後、エドワード・クラークは度々ベゾブラゾフに電話を掛けているが、一向に捉まらなかった。
『やはり、ベゾブラゾフ博士には繋がりませんか』
「ええ、サー・ウィリアム」
　エドワードが話している相手はイギリスの［十三使徒］ウィリアム・マクロード。エドワード・クラークがいるロサンゼルスは真夜中、マクロードがいるケンブリッジは早朝の時間だが、ベゾブラゾフがモスクワにいるのかウラジオストクに留まっているのかも掴めないため、

時間帯に関する体裁を取り繕っている余裕などなかった。
「残念ながら、ベゾブラゾフ博士はこちらとのコンタクトを拒むようです」
『仕方がありませんね……。博士は我々と敵対する東側の人間だ。彼と私たちは同床異夢。独自の行動を取ると決めたベゾブラゾフ博士をコントロールするなど、最初から無理だったのでしょう』
「では、ベゾブラゾフは再攻撃を諦めていないと？」
伊豆高原で起きた魔法戦闘のデータはエドワードも［フリズスキャルヴ］を通して観測したが、ベゾブラゾフが使用した戦略級魔法と思しき魔法兆候に対し、日本で観測できた魔法行使の兆候は、現代魔法で言えば基礎単一系の系統魔法を行使した時と同規模のものでしかなかった。
『そうでしょうね。彼はあくまでも実力で質量エネルギー変換魔法を葬るつもりなのでしょう』
「もう少し待ってくれれば良いものを……」
この時点で、相手が戦略級魔法を使わずしてベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］を無力化したという脅威を認識したが、その詳細に関しては何も掴めなかった。ここまで調べても何も出ないという結果に、エドワードの内心では焦りも見え始めていた。
まさか、ベゾブラゾフが自棄を起こすというのは到底考えづらいことだが、彼の［十三使徒］としての矜持がそれに納得できるかと言われると、『それは極めて難しい』というのがマクロードの出した結論だった。
その結論に対し、エドワードは乱暴に自分の髪を掻き回した。
「サー・ウィリアム。ベゾブラゾフが再攻撃を実施するとして、成功の見込みはどれほどあるとお考えですか？」
『良くて五分五分、でしょう』
「では、悪い方は？」
『……ゼロ、とお答えするほかありません』
マクロードが楽観視するような答えを一切吐かなかったことに、エドワードは目を見開いた。それよりも、成功確率が半分以下という博

打など失敗するに等しい。エドワードは、その根拠をマクロードに対して尋ねる。
「サー・ウィリアム、その根拠をお聞かせ願えますか？」
『一番の問題は、「灼熱と極光のハロウィン」で未だに判明していない［シャイニング・バスター］とそちらの国で呼称した戦略級魔法の正体と術者が未だに掴めぬことです。どうやら、先日クレムリン宮殿を半壊させたのはその魔法のようですが、日本の中にその術者がいるのかも分からない状態で、司波達也だけに照準を絞ったとしても勝てる見込みが無い。それが根拠です』
　どちらも判明させて、同時に排除しなければ日本の戦略級魔法を無力化することが出来ない。マクロードの根拠は、それを暗に示しているも同然だった。別にエドワードを侮辱するつもりなどない訳だが、得られない情報など無いと自信を持っていたエドワードのプライドは大きく傷つけられた。
「上泉剛三が［シャイニング・バスター］の術者の可能性もある、とサー・ウィリアムはお考えなのですか？」
『あくまでも可能性の一つに過ぎませんよ、クラーク博士。いずれにせよ、今我々が出来るのはベゾブラゾフ博士の再攻撃が成功することを祈るだけです』
「そうですな。サー・ウィリアム、朝早くに失礼いたしました」
『いえ、こちらは既に起きていた時間ですので。クラーク博士、良い夢を』
　そうして切れるマクロードとの電話。
　マクロードは定型句として『良い夢を』と使ったが、明らかにＳＴＥＰ計画へ傾いている世界情勢を鑑みると、ゆっくり眠れるような状況ではないとエドワードは察していた。

天魔抜刀

日ノ本の国における最高峰と呼ばれた陰陽師、安倍晴明（あべのせいめい）とその師である賀茂茂明（かものしげあき）が編み出した神霊魔法の［天神魔法］。妖と戦い、悪鬼を打ち払う力として完成したその技法は、天神魔法の存在が安倍氏や賀茂氏の御家騒動に繋がらないよう、時の帝の力を借りる形で一つの家が生み出された。

安倍氏と賀茂氏、そして皇族の血筋を継ぎ、この国を陰から護る者――神楽坂（かぐらざか）の名を持つ護人の一族の始まりだった。

そして、三代目当主であった神楽坂光明（かぐらざかみつあき）は、自らの心霊を神霊に匹敵させる力の顕現に成功。それが後に［天刃霊装（てんじんれいそう）］と呼ばれる神霊武装の始まりだった。

だが、身体と精神を極限まで研ぎ澄ませることで漸く顕現に至るとされる天刃霊装は、第三代以降の当主が顕現に至ることは無かった。神楽坂光明が幼少期に武術の指導を後の武家から教わっていたことが後世に伝わらなかったのも、永らく天刃霊装の存在が世に出なかった原因でもあった。

その長き沈黙を最初に破ったのは、神楽坂家の神楽坂千姫と神楽坂奏姫、同じ護人の上泉家の人間――上泉剛三の三人。だが、彼らは天刃霊装に至ってもその解放段階を踏むまでには至らなかった。

天刃霊装の［七聖抜刀（しちせいばっとう）］、そして神霊甲縛式［天魔抜刀（てんまばっとう）］。この二つの解放段階は神楽坂光明によって示唆されていたものの、編み出した本人ですら到達しえなかった二つの扉。

現実にあるかどうかも分からないとされた二つの解放の扉を開けたのは、神楽坂家第１０８代当主・神楽坂悠元。そして、彼はその二つの扉を開けるための鍛錬法まで編み出してしまった。

最早、神楽坂家当主足り得る功績を叩き出した彼を羨む者は居れど、それに対して不満や不平を唱えることは許されない。だが、それでも文句を述べたい輩がいるのは別におかしなことではない。

何せ、先代当主の姉の孫という本家筋から見れば傍系の血筋。無論、彼を養子にした千姫にもそう言った声が出るのは想定の内。だか

らこそ、千姫は厳しい表情を目線の先にいる面々に向けていた。
「さて、息子に継がせて漸く穏やかな老後を過ごせるかと思えば、この体たらくとはの。どう落とし前をつける気なのか述べてもらえるかのう？　宮本殿に高槻殿」
「「申し訳のしようもございませぬ」」
状況を簡潔に説明すると、神楽坂本家の大広間で上座に座って気だるそうな表情を見せている千姫に対し、深く土下座をしている宮本家当主・宮本宗司（みやもとそうし）と高槻家当主・高槻寿人（たかつきひさと）。
どうしてこんなことになっているのかと言えば、発端は悠元が昨年正月に見せた天刃霊装［叢雲（ムラクモ）］が原因だった。
その後、同じく天刃霊装が使える宮本家三男の修司と高槻家次女の由夢を巡った御家騒動にも発展し、結局は二人が新たな家を興す形で決着を見たわけなのだが、今度は天刃霊装の存在で割を食った連中――主に宗司の息子たちや寿人の息子たち――が天刃霊装の顕現を〝過ぎた力〟だと主張して悠元を排除するように迫った。
それを『星見』や『九頭龍』経由で知った千姫が静かにキレて、両家の当主に『直ちに本家へ来い』と簡潔な召喚命令を送り付けた。そして、今の状態に至るという訳だ。
「妖が出てくるリスクが避けられなくなったこのご時世に、漸く世に出た天刃霊装を捨てろというか……主等の愚息共は時勢が読めぬのか？　これ以上おいたが過ぎるなら、今すぐ家の縁を切らせるぞ」
「……弁解のしようもございませぬ。先代様のご処置に従うまでのことだと覚悟しております」
「右に同じくであります」
慶賀会の時は悠元が怨恨を持たないために穏便な対処を求めたので、両家はそれに従って厳しい説教を彼らに行った。だが、それで逆に〝力を捨てろ〟という同調圧力を生み出したことについては、千姫の耳に入った時点で自身の進退も極まったと両者は覚悟してこの場に出向いた。
千姫は左手に持っている扇子を器用にクルクルと回し始めた。
「悠君はそこまで気にしないけど、悠君だけじゃなくて愛弟子の修君

と由夢ちゃんまで口を挟むなんて、いつから偉ぶれるようになったというのでしょうね……ねえ、〝宗君〟に〝ひさっち〟」
「……私どもの教育が至っていなかったのは事実であると認めます」
千姫は［六道眼］でベゾブラゾフの襲撃の様子を見ていたが、悠元の天刃霊装が最終段階の［天魔抜刀］に至ったのだと直ぐに理解した。その彼が神楽坂家当主たる資質を示しているのに、そこまで認めないというのは当主として指名した立場の千姫の面子にも関わる問題なだけに、彼女の怒りは尤もだろうと宗司や寿人は率直に感じていた。
「ここだけの話、悠君は天刃霊装の最終解放――神霊甲縛式［天魔抜刀］に至ったことを確認しました。最早彼の力を外に出す事など許容できないのです。そして、彼に導かれる形で私もこの歳で天刃霊装の解放に至りましたから」
そうして千姫が右手に顕現させたのは、漆黒に染まった扇子。［月読］を受け継ぐ神楽坂家を象徴するかのような彼女の［天刃霊装］――名は［月天孔雀］。これには、頭を上げた宗司や寿人ですら再び頭を下げるほどの霊力を感じるほどだった。
「分かりましたか？　彼の存在はこの国を強き国にするための要なのです。家に帰ってしかと聞かせなさい。それでも納得し得ないというのならば、妾自ら出向いて息子の道を阻むものとして処断する……よいな？」
「は、はっ！　先代様のご配慮に感謝いたします!!」
そうして面会を終え、離れに戻った千姫がクッションにダイブする形でだらけると、丁度姿を見せた支倉が話しかけてきた。
「奥様……お茶でもご用意いたしましょうか？」
「今はいいかな。支倉君、ちょいと話に付き合ってくれない？」
「……畏まりました」
神楽坂家の使用人では新参者である支倉だが、千姫の愚痴や無茶ぶりに付き合わされているという点で先輩の使用人たちから『頑張ってくれ』とエールを送られている。支倉が聞いた限りでは、現在四葉家の筆頭執事を務めている葉山忠教が千姫の弟子であり、しかもこんな無茶ぶりを長年受けていたと先輩たちから聞かされた。

こんな人の傍に長年仕えた経験があるのならば、あの四葉家の執事を務めあげられないわけがない、と心なしかそう思ってしまった。
「それで、如何いたしましたか？　大方悠元様のこととお見受けいたしますが」
「流石〝サブちゃん〟。天刃霊装っていう魔法の武装があるんだけど、それを危険だと見做して騒ぎ立てた阿呆がいるんだよね」
「……成程。過ぎた力を恐れたということですか」
過去にいた演歌歌手のようなあだ名で呼ぶことは諦めつつ、支倉は千姫の言葉に対して率直な感想を口にした。支倉が名倉三郎（なぐらさぶろう）と名乗っていた時、〝数字落ち（エクストラ）〟という立場から力を求めていたことはあった。
力が足りなくて求める事よりも、強大な力を恐れて喚くことに力を割いた……昔の支倉からすれば、そうしたかった事実があるのも確かだった。
「力を怖がるのは人間らしいと思うよ。でもね、魔法師を道具として扱うような世の中を脱するために悠君は戦っているんだよ。それを理解できない時点で彼らは魔法の道具に成り下がりたいのかって言いたくなったけど」
師族会議という政府や国防軍にとって都合の良い〝道具〟があったからこそ、古式魔法師は古来の在り方を通すことが出来ていた。だが世界情勢が緊迫していけば、現代魔法師のみならず古式魔法師も戦場に駆り出される事態になるのは目に見えている。
その現状を打破するために神楽坂家現当主の悠元は師族会議を政府や国防軍と切り離し、国家の象徴たる皇族から認められることで〝君臨すれども統治せず〟の信念を持つ組織へと作り変えようとしている。
社会的な観点から経済的な支配は避けられないとしても、魔法師として社会的な地位を占めることは極力避ける。仮に地位を手にしたとしても、それを笠に着るようなことはしない。それを体現するかのように、悠元は日本の国家の在り方そのものを変革させつつあった。
「劣る者を知るからこそ、優れた者としての立場と責任を果たす。言

葉では簡単に言えるけど、行動で示すのは難しいんだよね。サブちゃんなら、それが一番理解できるんじゃない？」
「……そうですね。かつての私ならば、それを一番痛感していたことでしょう」
「そんなサブちゃんに朗報。近いうちに見合いをするから」
「……え？」
　真面目な話から一転して投げつけられた千姫の爆弾発言に、支倉は目を丸くしていた。確かに以前から見合いをするとは聞かされていたが、まさかこの場で出てくるとは思わなかった。
「ちなみにですが、お相手がどのような方なのかをお尋ねしても？」
「見合いの後にすぐ結婚とはいかないけど、実質的な婚約になるかな。相手は十文字家の次女。慶子ちゃんは私の教え子の一人で、向こうも非常に乗り気だったって」
「……ええっ？」
　相手がまさかの十師族。しかも、かつて七草家でボディーガードとして働きつつ七草弘一の仕事の手伝いをしていたことからも知り得ていたことで、その相手は確か現在小学六年生……周公瑾の身体を利用する形で若返ったとはいえ、今まで生きていた分からすればおおよそ三回り近い年齢差の婚姻に、支倉は戸惑いを隠せなかった。
「これにはちゃんと理由もあるの。先日十山家の件で十文字家が已む無く助けに入ったの。それで現当主と三矢家の婚約は解消させなかったけど、その代わりに私が慶子ちゃんへ提案したのが和美（かずみ）ちゃんをサブちゃんと婚約させること」
「成程、体面的な部分で十文字家がペナルティを負ったということを示す為、私にそれを背負えということでしょうか？」
「本当なら、悠君のように複数の妻を宛がうことも考えたのだけどね」
「それは勘弁してください……」
　若返ったとしても精神は名倉三郎の時のままであり、現当主や四葉の次期当主のような状況など、普通の男子なら喜びそうなシチュエーションが現実になって降り掛かってくるのは、さしもの支倉であっても許容できなかった。

後日、支倉は千姫の付き添いという体で十文字家を訪れ、その際に見合いをすることになったのだが……周囲の圧力に屈して即日婚約を結ぶ羽目となった。これまで闇の部分を見てきた支倉であっても、周公瑾以上に勝つことが出来ない相手を前にしては、最早降参する以外に生き延びる術を持たなかったことは事実であった。

◇　◇　◇

所変わって第一高校の演習場。ベゾブラゾフによる魔法攻撃の件は波紋を広げたが、それを聞いたことで一層鍛錬にも熱が入っていた。タンクトップ姿のレオが真剣に両手で振り上げと振り下ろしをしている光景に対して、似たぐらいの露出を見せているエリカが若干呆れ気味に問いかけてきた。

「レオ、少し休んだら？」

「ん？　おお、気が付いたら１０００回以上やっちまってたぜ……って、どうしたよ？」

「ちょっと見せなさい……って、んげっ!?」

レオがエリカの表情を見て首を傾げていると、エリカはレオの手に持っていた木刀――正確には、木刀型の鍛錬用ＣＡＤ――を手に取り、刀身の根元部分にある設定画面を見て引き攣った表情を浮かべた。

そのＣＡＤは悠元謹製で、木刀自体の質量を自在に変化させられる代物なのだが、振っていた状態の設定が〝６００キログラム〟になっていることに引いていた。

「アンタ、夜だけじゃなくて昼まで獣になるつもりなの？　人間辞めてるじゃない」

「いや、流石に素の状態でやったら脱臼するから、自己強化術式込みでやってるだけだぞ？　てか、学校でそういう話はするんじゃねえよ」

「おや、興奮しちゃう？」

「否定はしねえが、誘惑は止めてくれ」

最初は互いに口喧嘩する間柄だったが、一緒に鍛錬を重ねていくうちに恋仲となった。〝喧嘩するほど仲が良い〟とはよく言ったものだとは思いつつ、レオは近くの樹木に凭れ掛かる形で腰を下ろした。

すると、それを見たエリカはレオの隣に座った。
「それで、どう？　悠元が言っていた［天魔抜刀］だったっけ。そこまでいけそう？」
「手ごたえは十分に感じてる、って感じだな。ただなあ、俺の場合だと剣で戦うよりも拳で戦う感じが性に合ってるからな」
あの達也ですら未だに至っていない［天魔抜刀］を現時点で修得しているのは悠元だけ（レオやエリカを含めた達也近辺の人間に限定すれば）であり、その顕現を目の当たりにしたことがあるレオとしては、その時の感覚に近い手応えは感じていた。
ただ、レオは祖父が遺してくれたガントレット型ＣＡＤのこともあったし、これまで新陰流剣武術を学ぶまでは剣術に触れることも無かった。基本的に体術で何とかしてきたことが多いレオからして剣を振るうこと自体に抵抗はなくとも、拳で戦うことが一番肌に合っていた。
「別にどちらかを選ぶ必要はない、って悠元は言ってたじゃない」
「確かにそうなんだけどよ……てか、エリカはどうなんだよ？」
「あたし？　形は朧気に見えているのよね。ただ、あたしはどんな剣を振るいたいのかなって思っちゃって」
エリカも［天魔抜刀］に至る道筋を掴んでいた。ただ、根底に存在する千刃流の剣術から、どんな在り方が自分にとって一番納得できるのかという根本的な問題にぶつかっていた。
「この力だって、元々あたしがここまで鍛え上げたわけじゃない。悠元に引っ張られる形でその高みに立っているだけだもの……もっと、強くなりたい」
「そうなると、目標は悠元ってことか？」
「うーん、アレを目標にしたら、人外の埒外にまで上り詰めることになるんじゃないかって」
「流石に本人の前では言うなよ……っ!?」
人外の時点で人間を辞めているに等しいが、その埒外となると最早〝人の皮を被った何か〟としか形容できなくなる。目標を悠元に定めるか躊躇しつつも貶す様な発言に対し、レオが窘めた。

すると、二人は近くから膨大な量の霊力を感じ取って身構えたが、その波長が知り合いのものだと直ぐに分かったのは、その人物が姿を見せたからだ。いや、正確にはその霊力によってレオたちの近くの樹木が一瞬にして〝消失〟したからだった。
「ん？　……すまん、レオにエリカ。二人きりの時間を邪魔したな」
「いや、それはいいんだが……修司、そいつは？」
「ようやく形を成せたんでな。天魔抜刀［千子都牟刈村正］……正直、こいつをきちんと制御しねえと、ここら一帯が更地になっちまう」
その現象を成した人物――宮本修司は右手に持つ自身の［天魔抜刀］状態の天刃霊装を見つめながらぼやき気味に呟く。初期解放の天刃霊装の時点でも高火力だったが、［天魔抜刀］のそれは遥かに凌駕していた。何せ、修司が［千子都牟刈・村正］を軽く地面に突いただけで、そこから１００メートルほどの地面に炎が立ち上るほどであり、これには修司が慌てて水属性の天神魔法で消火するほどだった。
「修司のコレでここまでなるなんて、悠元のアレはどうなるのかしら？」
「悠元の［天魔抜刀］顕現の際は俺も見ていたが、下手すると戦略級魔法を付与した斬撃を繰り出すかもしれん」
「……俺らも強くならんとな」
「そうね……」
いくら悠元でも味方を殺す様なことはしない。だが、彼から教わっている身としては、彼に必要以上の負担を掛けないことが自分たちの安寧に繋がる……と確信に近い何かを覚えていたレオとエリカであった。

デーモンを知る者

ベゾブラゾフの攻撃失敗により、ディオーネー計画はその信憑性を大きく低下させていた。それを裏付けるかのように、ＵＳＮＡの魔工メーカーであるマクシミリアン・デバイスが公式サイトに掲示された文書でこう記載されていた。

『――以下の理由により、我が社はディオーネー計画そのものの信憑性が確保されるまで中立の立場を取るものとする』

文書には社長であるポール・マクシミリアンのサインが記載されており、ディオーネー計画自体が暗礁に乗り上げつつあった。それに対してエドワードが奔走する中、レイモンド・クラークによる計画が着々と進んでいたのを知るのは、その当人以外に居なかった……はずだった。

２０９７年６月１５日、土曜日。

北アメリカ合衆国（ＵＳＮＡ）テキサス州ダラス郊外。ここには、全長３０キロメートルにも及ぶ線形加速器（リニアコライダー）を備えた国立加速器研究所がある。その研究所にはジェラルド・バランスの親友であるエルドレッド・バラッドがいた。

彼も魔法師であるが故に軍人の誘いを蹴り、軍からの余計な干渉を跳ね除けるために政府機関の人間として働いていた。バー自体は父親が経営しており、研究所で働きながら休みの日はバーで父親の手伝いをする日々を過ごしていた。

普通ならそこまで忙しくない研究所が忙しいのは、実施される秘密実験にあった。研究所の中でも重要な立場にいるエルドレッドは、この実験を聞いた際に頭を抱えた。何故ならば、実施される実験は『余剰次元理論に基づくマイクロブラックホール生成・蒸発実験』――昨年初めに騒がせたＵＳＮＡ軍の脱走事件での原因とされる［パラサイト］を呼び込んだ実験。

（一体何を考えているんだ……連中はリスクというものを分かっていないのか？）

前回の時はエルドレッドが丁度非番だった為に回避できた。だが、

今回は加速器（コライダー）の操作を担当するためにバックレる訳にもいかない。他の研究者が久々の実験ということで舞い上がっている様子に水を差すわけにもいかず、黙々と作業を進めた。

エルドレッドが水を差さなかったのは、研究者としての性としてでもあるが、それ以上に管制室にいる〝この場に似つかわしくない警備〟がいたからだ。そして、それはエルドレッドにとって不快とも思えるような存在――スターズの隊員がいたからだ。

今回の実験の許可が出た際、一体何処から出たのかとエルドレッドは訝しんだ。流石に自分がパラサイト化するリスクなど無視できる筈が無く、実験の情報を掴むとすぐさま父親に相談した。すると、父親は何かを思い詰めたようにデスクから何かを取り出すと、エルドレッドに押し付けた。

『――これは、ペンダント？』

『母さんの数少ない形見だ。俺もそいつで命を救われた。今後はお前が持っていろ』

８年前のベーリング海での暗闘で生き残った数少ない魔法師の一人であるバルクホルンから渡されたとなれば、その効力はあるのだろう。正直気休め程度で持たされたのかもしれないが、精神干渉系魔法を学んだことのないエルドレッドからすれば、それが唯一の道だと思うしかなかった。

最悪、パラサイト化したら親友（ジェラルド）に引導を渡してもらいたい。そんなことを思いつつ、コンソールを操作していく。

（しかし、何故にスターズが……いや、多分フレディの件を〝誰かの関与〟だと決めつけた。それも、ＵＳＮＡ国内にいる人間ではないとするなら、日本の仕業だと唆した可能性が高いという訳か）

この可能性に至った時点で、エルドレッドは父親に全ての推測を託した。最悪の可能性を自分が受けることも見越した上で。

研究者たちは殆どが非魔法師なので［パラサイト］の影響を受けることはない。だが、エルドレッドの近くにいるスターズの兵士も含め、この研究所にいる魔法師がパラサイト化するリスクを抱えている。

午前１１時。エルドレッドの近くにいた科学者が実験開始を告げた。
膨大な電力を呑み込んで、線形加速器が稼働する。
加速器両端に陽子ビームを注入し、正反対方向へ衝突軌道で加速する。本来ならば望むデータが得られるまで何度も行うのだが、今回は１回で終了した。実験が成功したからだった。
その直後、エルドレッドは嫌な予感を察して首元に掛けたペンダントを握りしめた。
（俺には精神干渉に対抗できる手段はない。親父、ジェラルド……もしもの時は、俺を躊躇うことなく殺してくれ）
ダメ元でエルドレッドが魔法を行使する時のように想子をペンダントに注ぎ込む。すると、ペンダントに付いた透明な水晶が淡い光を放ち、エルドレッドの身体に浸食しようとした〝何か〟を取り込んでいく。
時間は一瞬……だが、まるで数分にも及ぶような時間を感じたエルドレッドが現実を直視したのは、自我を持った状態でコンソールが視線に入った事だった。そして、ペンダントに括り付けられた水晶は何かを取り込んだかのように蒼く変化していた。
（助かった、のか？　母さんの形見は……役に立ったようだよ、親父）
エルドレッドは母親のことをあまり知らないし、父親はあまり語ろうとしない。だからこそ、父親が渡したペンダントにも懐疑的だった。エルドレッドは一息吐いて立ち上がろうとしたところで、嫌な悪寒を背後から感じていた。
何かに浸食されるような感じではなく、まるで人ならざる者が近くにいるかのような感覚に近い。エルドレッドが感じた方向にいる人間といえば、間違いなくスターズの兵士でしかなかった。
エルドレッドは確信に近い何かをその感覚から感じ取っていた。彼はパラサイトになってしまったのだと。だが、ここで一悶着を起こしたとしても、仲間がいるかもしれないパラサイトの兵士に襲われるリスクは勘弁願いたい。
スターズ隊員が全員帰投したところを見計らって、エルドレッドも

休暇申請を出してワシントンに着くと、そのまま実家のバーに顔を出した。だが、そこで彼が見たものは……家はもぬけの殻状態で、デスクには一枚のメモが残されていた。
『エルドレッド。お前がきっと〝人間〟のままこの場を訪れることを見越してこのメモを残す。逃げろ。詳しいことは近くの金庫の中にある。お前なら開け方を知っている筈だ』
　あの屈強な父親が逃げなければならない事態ということにエルドレッドは訝しみつつも、近くにあった金庫――――普段は売上金などの一時的な管理に使用している――――のコンソールを操作すると、ロックが解除されて金庫を開く。すると、中にはエルドレッドが普段使いしているＣＡＤにマネーカードやパスポート、更には一台の端末が置かれていた。
「流石に親父の連絡先は……ねえか」
　このまま店で待つという選択肢も無くはない。だが、あの父親がそんな選択肢を取らなければならなかった理由を知らなければならない。エルドレッドは端末を操作して、アドレスを暗記していた親友宛に一通のメールを送信する。
『エルだ。詳しいことは分からんが、親父が居なくなった。そんで、マイクロブラックホール実験の影響で俺も暫くは身を隠さなきゃいけないようだ。この件が無事に解決することを祈っている……死ぬなよ、ジェラルド』
　エルドレッドは端末を懐に仕舞うと、手早く身支度を整えてワシントンの駅に来ていた。すると、彼の視線の先には息を荒げて走ってくる親友の姿が目に入った。
「エル！　お前、本当に行くのか!?」
「ジェイ！　行き先は伝えてなかった筈なんだが」
「親友だからな。お前の考えていることぐらい見通せなきゃやってられん……いいのか？」
　まさか、見送りに来るとは思わず、エルドレッドもジェラルドの姿を見て動揺した。だが、既に状況が動いていることを認識しなければならない時にいる。エルドレッドは、父親の突然の失踪でそれを確信

してしまった。
　エルドレッドはジェラルドと隣り合う形でベンチに座り、遮音フィールドを展開する。
「ダラスでマイクロブラックホール実験が実施された。俺は親父から託されたペンダントで事なきを得たが、あの場に居合わせたスターズの隊員がパラサイト化している可能性が高い」
「何だと……ダラスの連中には養父経由で問い合わせた時には『その事実はない』と一蹴していたが。その時にエルと連絡していれば……」
「過ぎたことは仕方がない。で、だ。多分親父が逃げろと伝言を残したのは、その時のことでパラサイトが浸食できなかった俺を排除するように動き出す可能性を考慮してのことだろうと思う」
　バルクホルン自身がパラサイトと相対した可能性は未知数。だが、エルドレッドに託された対抗手段の件からして、バルクホルンはパラサイトに関する深い見識を得ていたのだろうとみていた。
　それはエルドレッドのみならず、ジェラルドも同じ意見だった。
「御しきれないから排除する――――本能的な行動としては理に適う、か。エル、お前が把握しているスターズの人間は？」
「〝レグルス〟のコードを有していた人間が近くにいたから、多分フレディがいた第三隊、それに第六隊の人間も確認できた。それと、あの場に似つかわしくない金髪の少年の姿を目撃したが、誰も咎めないから無視していた」
「金髪の少年？　……もしかして、コイツか？」
　ダラスの研究所で目撃すること自体が違和感しかないというエルドレッドの証言に『もしや……』と思ったジェラルドが端末を操作してレイモンドの顔写真を見せると、エルドレッドは間違いないと言いたげに頷いた。
「ああ、見間違いでなければ彼だ。臨時職員のパスを持っていたから俺もその時はスルーしていたんだが。前にテレビで見たような気がするが……ジェラルド？」
（レイモンド・クラーク……もう、最悪なんて言葉が陳腐でしかなく

なってしまったぞ）
　もう、ＵＳＮＡ自体が取り返しのつかない段階にまで踏み込んでしまった。レイモンド・クラークの行動によって、スターズで叛乱が起きる可能性は〝ほぼ確定〟となってしまった。
　ジェラルドの様子を訝しむエルドレッドだったが、乗る予定の鉄道の時間が迫っているのを確認すると、遮音フィールドを解除してスーツケースを手に掛けつつ立ち上がった。
「……ジェイ、すまないがここから先は何も助けてやれない。悪いな、出来の悪い親友で」
「気にするな。この鬱憤は騒ぎを起こした連中にぶつけてやるさ……エル、元気で帰ってこい」
「――――ああ。お前こそ、嫁がこれ以上増えないように気を付けるんだな。寧ろ、子供でも出来てそうな気はするが」
「いや、嫁って誰のことだよ……って、余計なお世話だ！」
　そんな遣り取りの後、その場から離れていくエルドレッド。左手を上げて左右に振りながら去っていく親友の姿を見送ると、ジェラルドも踵を返して真剣な表情を浮かべた。
　この時は、エルドレッドもジェラルドも分からなかった。まさか、〝あのような事〟になるなど……それが予想できた人間は神様だと思わんばかりの出来事に遭遇するなど、彼らには想定すら出来なかったのだった。
　◇　◇　◇
　エルドレッドに行き先を告げなかったバルクホルン。彼が行き先を一切告げなかったのは、彼自身の人生にも大きく関わっていた。
　バルクホルンは元々捨て子で、彼は本当の両親を知ることなく生きてきた。そんな自分を拾って育ててくれたのは、ロッキー山脈に集落を構えて生活している先住民の一族だった。そして、今は亡き彼の妻は先住民のシャーマンの血を色濃く継いでいて、バルクホルンが村を出る際に駆け落ち同然ともいえる形で山を下りることとなった。
　その彼が再び村を訪れるなど、今度はどんな誹りを受けるか分かったものではない。だが、彼の来訪を待ち構えるように村の入り口に立

つのは、妻の父親であり、自身の養父である村長であった。
「久しぶりじゃな、バルク」
「……お久しぶりです。本当ならば、ここに来る資格など無いと思っておりましたので」
「何を言う。可愛い息子の帰省を喜ばぬ親などいるものか……ここでは人目もある。家に来るとよい」
　そうして家の中に招かれたバルクホルンを待っていたのは、歳を取った感じを一切感じさせない美貌を持つ村長の妻――――バルクホルンにとっては、養母ともいえる――――が出迎えてくれた。
「あら、バルク！　やっと帰ってきましたね」
「……すみません、〝母さん〟。彼女は……」
「貴方は気にしなくていいのですよ。娘が貴方に好き好んで付いていっただけなのですから」
「……ありがとう、ございます」
　そうして久々の語らいとなったが、長が一息ついたところで話しかける。
「さて、バルク。星の精霊が語り掛けてくれたが、どうやらデーモンがこの世に来たようだな」
「……息子も、その可能性を強く感じておりました。自分が得意でなかったが故、息子に精神干渉系魔法は教えれませんでしたが、彼女が遺してくれた御守りがきっと役に立ってくれると思っております」
　普通ならバルクの養母が強い気質を有しているが、養父は男性でありながらも強いシャーマンの資質を有していたため、邪悪な気配や敵意を具に感じ取っていた。
　だが、それを知っても必要以上に首を突っ込むことはしない。それが、古より伝わる言い伝えであり、自らの守れる範疇を認識することで守れるべきものを限定化する。それによって、この一族は長き時を生き永らえてきた。
「そうか。それで、その息子を連れてこなかった理由は何故だ？」
「――――実は、自分は以前にも何度か［パラサイト］による攻撃を受けたことがあります。幸い、彼女がいたことと二人が教えてくれた呪(まじな)い

で事なきを得ていましたが」
　ダラス国立加速器研究所で起きたパラサイトの憑依現象。だが、一昨年まで表面化しなかった。１０年前を最後にマイクロブラックホール実験が封印されたこともそうだが、それまで実験の警備をしていた隊員に魔法資質因子の保有者を含めないように言い含めていた。それを具申したのは、先代の〝シリウス〟であったジェラルドの母親と先代〝カノープス〟であったバルクホルン、そして先代の〝ポラリス〟だったバルクホルンの妻に他ならない。
　双方共に［パラサイト］に対抗できる資質を有していたから問題なかったが、次代以降のスターズがもし関与することになった際、ＵＳＮＡ軍における精神干渉系魔法では対処が極めて難しいという見解も一致していた。だが、その見解を出す直前にベーリング海の暗闘に巻き込まれ、バルクホルンはＵＳＮＡ軍のやり方に嫌悪を抱いて除隊した。
「［パラサイト］は極めて本能的な行動を起こす可能性が極めて高い霊子（プシオン）で構成された情報体――というのが、自分と妻、当時のシリウスが持った見解です。話を戻しますが、息子が仮に防御に成功した場合、息子の抹殺を目論んでパラサイトが行動を起こすことも十分考えられます」
「そのために、バルクは息子の行動の支障とならないようにしたのですね。人質などによって身動きが取れない状態を作り出さないために」
「はい。今の息子は私以上の実力を既に備えています」
　［パラサイト］が再びこの世に出てくるとは必ずしも言えない。だが、物事に絶対はないし、その筋の研究者が簡単に諦めるとは思えなかった。息子やその親友を鍛え上げたのはあくまでも魔法師の自衛のためだが、奇しくも彼らが巻き込まれる側になってしまうとは皮肉としか言いようが無かった。
「それに、息子なら残したメモの意図を悟って既に行動しているものと思います。行き先は――――」
　せめて、この騒動の後に起こる後始末は自分の手でケリをつける。

そう決意したバルクホルンに迷いはなく、せめて息子とその親友が生き延びてくれることを切に願った。

独眼竜

九島家の実情と、それに佐伯が関与している事実はいったん棚上げとする形とした。その辺の策は既に講じているし、それでも佐伯が抗うようならば、決定的な戦力としての決別をすればいいだけの話だ。

ただ、風間に関しては個人的な誼と本人の意思を既に確認している為、彼には便宜を図る対価として国防軍の主力として頑張ってもらう方針を固めた。ただでさえ大越戦争の件で冷遇されたのだから、その分の蓄積が今になって降り掛かってもらったと思ってほしい所だ。

原作で起きていた達也と九島光宣の対立や戦闘は回避できたため、その結果として真一の件で十師族の招集を掛ける必要は無くなったし、この世界の水波や光宣が被害を受けていない以上は特段問題にすべきことではない。

一条家に［リンケージ・キャスト］の術式データを渡すのは、ベゾブラゾフが次の行動を見せてからということで元継と話し合った。一応、事前説明という形で一条剛毅に話を通したが、その際に将輝が戦略級魔法師となることは〝本人の意思次第〟という形とした。

――ＵＳＮＡの現地時間、２０９７年６月１６日。

日本がそんな情勢になっている頃、剛三と奏姫は北アメリカ合衆国のニューメキシコ州アルバカーキにある一軒家を訪れていた。

「ミスター剛三！　お久しぶりです。隣にいるのはもしや、奏姫殿ですかな？」

「ハッハッハ、軍を退役してもお主も変わらぬな、ランディ。お主の息子は元気でやってるか？」

「愚息は軍人を生真面目にこなしておりますよ。聞けば、先日は愚息が迷惑を掛けたようですな」

剛三に〝ランディ〟の渾名で呼ばれた退役軍人の名はランドルフ・ロウズ。年齢は剛三よりやや年下だが、かつて世界群発戦争で剛三と肩を並べて戦った戦友の一人。そして、彼の息子の名はベンジャミン

――現在〝カノープス〟のコードネームを有する軍人魔法師。

「気にしてはおらん。わしとて国の面子でジード・ヘイグを捕まえた

だけで、その後始末はＵＳＮＡに任せたからの」
「と、夫はそう仰っていますので、気にしなくて結構ですよ」
「では、そうさせていただきます。にしても、旅立ってしまった戦友たちの墓参りにしては急な訪問ですな……何か、懸念をお持ちですか？」
　ランドルフは剛三と奏姫の訪問に対して少し疑問を抱いた。流石に９０歳近いとなれば、動けるうちに亡くなった戦友たちの墓参りをしてやりたい気持ちは理解できる。だが、昨今の情勢を鑑みた時、今この時期に彼らが自分を訪問したということに意味があるのではないかと訝しんだ。
「懸念か。まあ、あるといえばあるかのう……ランディ、お主も感じておるのではないか？　具体的には南東方面から」
「……ええ。何かを蝕むような、そんな気分を抱いているのは事実です」
　昨日の昼までは明らかに感じなかった悪寒にも似た感覚。ランドルフは基地内で何かあったのではと思い、息子のベンジャミンに『元気でやっているか？』とメールを送った。内情を聞き出すのは軍規に違反するため、あくまでも親心としての体裁で尋ねたものの、ベンジャミン本人からは『何か悪いものでも食べたのか？』と心配される始末だった。
「ただ、その感覚も剛三殿や奏姫殿、千姫殿に関わっていたからこそ感じたものであり、息子には把握できぬでしょうな。もしや、『七賢人』が言っていたマイクロブラックホール実験によって呼び出された［パラサイト］なる存在ですか？」
「ええ、私と夫はそう見ています」
　昨年の場合は非戦闘員やスターズの中では低級のクラスが殆どで、前回の被害者の中で階級が一番上だったのはアルフレッド・フォーマルハウト中尉だった。だが、それがもしスターズに蔓延したとなれば、今度は大尉や少佐クラス――――隊長格となる一等星級（スター・ファースト）がパラサイト化したという懸念が出てくる。
「だが、ランディ。退役軍人のお前が手を出せばちとややこしくなる。

なので、お前は大人しく留守番しておけ。もし手を貸してもらうことがあるとすれば、この騒動が終わってからにしてくれるか？」
「……そうですな。傍観者に徹しなければならないとは歯痒いものですが、致し方ないでしょう」
　ランドルフが首を突っ込めば、下手をするとロウズ家そのものがパラサイトによる攻撃を受けかねない。その代わりを剛三と奏姫が担うことに関しては正直同じ戦友として悔しいが、その後の責任や後始末は必ず自分の手で行うと心に決めた。
「ランディさん、息子さんのことは如何いたしますか？」
「……ベンが助けを望めば、その思いに応えてやってください。最悪息子がパラサイト化したら、どうか人としての死を叶えてやってほしい」
「心配するな、ランディ。そういう妖を滅ぼして人を救う術は心得ておる。それに、その技は次代で更に進化したようだからな」
　悠元が天刃霊装の［天魔抜刀］を完成させたことは、国外にいた剛三と奏姫にも悠元が発した凄まじい霊力で察していた。才溢れる祖先ですら完成しえなかった極致に至ったことに、二人は我が子のことのようにとても喜んだ。
「何はともあれ、まずは腹ごしらえと休息だな」
「今日はお二人が来ると聞いて妻と息子の嫁に孫娘が張り切っておりましてな。遠慮せず寛いでいってください」
「では、お言葉に甘えさせていただきますね」
　ともあれ、『腹が減っては戦は出来ぬ』という諺に倣う形で剛三と奏姫はロウズ家の歓待を受けることとなったのだった。

◇　◇　◇

　アンジー・シリウスもといリーナは現在進行形で不満の極みにあった。
　自分がお飾りの総隊長であることなど承知の上だし、小娘などと侮られても別段気にしてはいない。全十二隊存在する部隊の全ての行動を把握しなければならない立場にいるはずだが、そのことすらも知らされないことなどザラにあった。

なので、リーナが軍人の扱いに対して不満を有しているわけではなく、一時的な帰省扱いの筈なのに日本への帰国許可が下りないことに不満を持っていた。とはいえ、下手に八つ当たりするわけにもいかず、それで基地司令の小言を聞くのも勘弁願いたかった。

「私が総隊長ということに対してそんなに不満なら、今すぐにでも肩書きを返上して辞めてやるわよ、こんな組織なんて」

それに、どうせ妹のようにシリウスの肩書きを捨てることを固めた身としては、この先スターズがどうなろうと自分の知った事ではない。それでも、自分に余計な迷惑が及ばないように自制している結果、不満を蓄積させていた。

半ば自棄気味に言い放った後、リーナはブランケットを捲って中に潜り込み、音声コマンドで照明を消した。そんな状態のリーナは気付かなかったが、悠元から渡されたペンダント型ＣＡＤに括り付けられた透明の水晶が淡い光を帯びていたのだった。

（……ここは、夢？）

まるで、現実では無いような浮遊感を持っている状態。そして、彼女の眼の前には仮想モニターのように映し出された映像が視線に入って来た。それは、一昨年や昨年で自分が〝アンジー・シリウス〟として［パラサイト］を処断する映像。

まるで、自分の夢を押し付けられたかのような既視感を抱いたリーナは、ふと背後に何かの気配を感じて振り向く。すると、そこには白髪で黒を基調とした鎧を身に着けた女性がいた。何故か、卓袱台にあるご飯を食べているという光景付き。

『もぐもぐ……あ、どうも。貴女も食べます？』

（誰ええっ!?）

リーナからしたら、夢に対する既視感も目の前にいる女性もまるで理解の範疇から逸脱した形となった。夢の中で精一杯叫びつつも、大人しく座ってその女性がよそってくれたご飯を口にする。

（で、貴女は誰なの？）

『ああ、申し遅れました。私は長尾景虎（ながおかげとら）と言います。簡単に言えば、貴女と波長が合った守護霊（サーヴァント）です。またの名を自我を持ったパラサイト

とも言いますが』
（……私、パラサイト化しちゃったの？）
『ああ、それは心配要りません。私がマスターの精神を守護しています。なので、浸食や同化の恐れは一切ありませんよ』
［守護霊］という単語にも懐疑的だが、そもそも自我を持ったパラサイトに身を守られるということ自体、リーナからすれば常識の範疇を遥かに超えてしまった出来事。スターズの中には精神干渉系魔法に長けている隊員もあることは知っているが、これはもうそんなレベルで語れるようなものではなかった。
（それって、あの映像が深く関係しているの？）
『あれこそがパラサイトによる精神への干渉です。まあ、マスターが夢に対して疑問を抱いた時点で失敗したも同然ですが……問題はこの先です』
食事（夢の中で食べても現実の腹が膨れるわけではないが）を終え、どこからか出てきた湯呑に入っている緑茶を口にしつつ、リーナは景虎の言葉を静かに聞いていた。
『パラサイトはこう考えるでしょう。マスターを同化できなかった時点で、貴女を危険の対象と見做して排除しようとするかもしれません。それに、マスターに不満を有する兵士もパラサイトによる思考の誘導で釣られる可能性は極めて高いでしょう』
（……貴女の言う通り、私が総隊長であることに不満を持っている兵士は少なくないけど、そう簡単に行くものなの？）
『そこでもう一つの事実――マスターが司波達也さんの婚約者である事実を引用して、マスターが司波さんに唆されて工作活動をした結果、パラサイトによる浸食を受けたのだと騒ぐでしょう』
（冗談じゃないわよと言いたいけど、やりかねないと思ってしまうのも事実なのよね）
軍部の中には達也を排除しようという主張があるのも確かだし、リーナに対する不満を持つ兵士がいるのも確か。達也とリーナの婚約関係を〝ハニートラップ〟と見做して達也やリーナに責任を負わせるとなれば、不満の矛先が軍部に向くことを抑えられる。

（そもそも、達也からしたら敵対する気もないスターズに工作なんて仕掛ける意味がないわよ。寧ろ、この事実を知った達也を怒らせるほうがもっと危険じゃないの……しかも、そのとばっちりを私が受けることになる訳ね。それで景虎、私が襲われるとしたら何時になると思う？）

『この夢が覚めたら――――翌朝になるかと。どうしますか？　マスターが宜しければ私が今すぐ叩き起こして差し上げますが』

（そうね。なんなら今すぐにでも……って、その槍は何!?）

リーナは、自身の命に直結するとなれば今すぐにでも行動するべきだと思った。幸い、基地に持って来たケース一つで足りる荷物しかないし、今すぐにでも帰れるような状態にしていたので問題ない。

だが、そう決意したリーナの目線の先には、槍を持って構える景虎の姿があった。

『大丈夫ですよ。目覚めは抜群ですから』

（え、姿が消えて……にゃあ?　し、尻があぁっ!!）

忽然と姿を消した景虎。そして、リーナの臀部あたりに強烈な痛みが走った瞬間、リーナは飛び起きるように上体を起こした。

「はぁ、はぁ……し、尻は……無事だったわ」

夢の中の出来事であったとしても、間違いなく達也に四肢の付け根を穿たれたとき以上の強烈な痛覚を覚えたリーナだったが、自身の肉体には問題ない事を確認して深い溜息を吐いた。

リーナはすぐにベッドから飛び降りるような形でクローゼットを開け、動きやすい私服に着替える。時間は午前3時で、普通ならば軍人が目を覚ます様な時間ではない。

そして、一応メモを残した上で、リーナはケースを持った状態で飛行魔法を行使し、宿舎の窓から飛びあがった。

念のために「仮装行列（パレード）」を併用する形でリーナが基地のフェンス外に降り立つ。すると、そこにはリーナが見知らぬ一組の男女の姿があった。いや、リーナは正確に言えば男性の方を写真や映像で知っていた。

「貴方たちは……いえ、貴方は確か、上泉剛三殿ですか？」

「君は……成程、健の孫娘か。こんな時間に基地を抜け出したようだが、大丈夫だったか？」
「ああ、はい……っ!?」
　剛三の問いかけにリーナが答えようとしたとき、三人に対して魔法攻撃が飛んでくる。だが、それを障壁のような何かでシャットアウトした。
「あなた、今の魔法攻撃は……」
「リーナ君、今のは分かるか？」
「間違いなく［レーザースナイピング］です。となると……あれは、ジャック!?」
　リーナがジャックと呼んだのは、スターズ第三隊のジェイコブ・レグルス中尉。彼はフェンスに一番近い建物の屋上から銃のようなものを構えていた。
　そして、今狙われたのは間違いなくリーナだった。だが、リーナは夢の中で［守護霊］から教わった事実が現実のものとなったことに、悲しげな表情を浮かべた。
「……どうやら、基地内のスターズ隊員の殆どは無力化されている形のようだな。現状で叛乱に加わっているとみられる隊員は１０人か」
「如何しますか？」
「潰してもよいが、ランディを困らせるのも宜しくないからの。それに、その叛乱に対して尽力している者もおるようだが……何か来るぞ」
　奏姫と剛三の冷静な分析に対して、飛翔してくるナイフやトマホーク。だが、剛三からしたら飛んでくるだけの武器など〝的〟でしかない。
　剛三は手を翳すと、蒼穹の雷光と共に顕現する太刀。片手三本ずつの六本持ち。そして、剛三は自らの天刃霊装［独眼竜（どくがんりゅう）］を振り下ろす。
「舐めた真似しか出来ねえのか……スターズ（メリケン）も落ちぶれたものよのう。そおらっ!!」
　振るわれた太刀から発せられた巨大な雷光の爪が容赦なくナイフやトマホークのみならず基地のフェンスを溶解し、レグルスの立って

いる建物すらも容赦なく切断した。その攻撃が通った後は、超高温プラズマによる融解で溶けている痕跡が残ったままで、切断面からは高温による蒸気が立ち上るほどだった。これにはリーナが引き攣った笑みを浮かべながらも冷や汗を流していた。
（ただの斬撃だけで［ヘビィ・メタル・バースト］と同等の破壊力って……ＵＳＮＡが終わったわね）
　この時点で、リーナは相手の心配よりも自分が生き残ることだけを優先することに舵を切った。こんな攻撃を次々と繰り出されたら、基地なんてものの数分で更地になるのが目に見えているからだ。
　そう思っていたリーナに近付いて来る一台の車。リーナはそれが基地内にあったはずの実験車だと直ぐに分かった。車はリーナを助手席側に向ける形で停車した。
「総隊長、お乗りください！」
「ハーディ!?　……貴方たちはどうします？」
「そうですね……あなた、ここは一先ず」
「そうじゃのう。このまま更地にしてやりたいが、今は健の孫娘の安否を守るのが先決よ。ただ、一発だけ置き土産をしておくとするかのう」
　車に乗っていたのはスターズ第一隊二等星級、ラルフ・ハーディ・ミルファク少尉。リーナは反射的にケースをピックアップトラック型の車の荷台に積むと、そのまま助手席に飛び乗った上で奏姫と剛三に声を掛ける。
　奏姫は荷台に飛び乗りつつ剛三に判断を仰ぎ、剛三は少しばかり考えた後、荷台に飛び乗りながらも握っていた［独眼竜］に膨大な量の雷を蓄積させる。
「え、えっ!?　総隊長殿、まさかあの御仁は……!?」
「……ええ。上泉剛三――――かの戦争を終結に導いた英雄の一人で、かの四葉の復讐劇の生き証人」
　驚きを隠せないミルファクに対し、驚くことすら諦めたように呟くリーナ。そして、奏姫が視線を送る先には、荷台に立っている剛三が手に持っている霊装を振り下ろした。

「さあ、てめえらが吹っ掛けたこの喧嘩（パーリィ）、一先ずこれで区切り（ピリオド）にさせてもらうぜ。［轟龍雷鳴（ヘル・ドラゴン）］!!」

超高圧縮された雷のエネルギーを特定の地点に撃ち込み、その地点を基点とした半径5キロメートル内に強烈な電磁パルスを起こすことで、全ての電気信号に関連する対象全てを動作不能にする剛三の戦術級魔法［轟龍雷鳴（ヘル・ドラゴン）］。なお、その対象は剛三が任意に選択することもできるため、今回はスターズの本部基地内にいるパラサイト化したと思しき隊員やそれに協力している兵士に限定して使用した。

「さて、これで暫くはこちらを感知できなくなるだろう。運転手、運転は任せた」

「え、あ、は、はい！　……総隊長殿が仰っていた意味がようやく理解できました。我々は戦う前から負けていたのですね」

「その通りだと思いますよ、ハーディ」

〝アンジー・シリウス〟の脱走の件よりも、スターズの本部基地が半壊かつ機能不全の状態に陥った件で国防総省（ペンタゴン）だけでなく大統領府（ホワイトハウス）も騒然となり、この騒動で一番頭を抱えたのが誰なのかと言われると……間違いなく、USNA大統領であるジョーリッジに他ならないだろう。

「……君、丸太を手配してくれ。飛び切りデカい奴をな」

とうとうホワイトハウスの中庭には彼のストレス解消として巨大な丸太が置かれて、その光景を見物する国民たちから同情のような支持を受けることになったのは、また別のお話。

過剰戦力の極み

ミルファクの運転するピックアップトラックは、一旦アルバカーキに到着した。だが、時間が時間なので空港に行ったとしても国内線や国際線は飛ばない時間帯。しかし、剛三はミルファクに対してそのまま空港へ向かう様に指示した。

本来は空港関係者しか入れない専用の入り口を顔パスで通過したが、ミルファクはパラサイト化した隊員を撹乱するために西海岸方面へ車を走らせていった。車を降りた剛三が先導する形で空港の構内を歩くと、其処にはリーナも見知った機体――ＵＳＮＡ大統領しか本来乗れない筈の大統領専用機（エアフォース・ワン）が発進準備を整えていた。

「こいつは大統領に無理を言って貸してもらった。リーナ君、一先ずはワシントンに飛ぶ。そこから協力者と共に欧州を経由して日本に帰ることとなる」

「……最早、何でもありですね」

「気持ちは分かりますが、そういう人間ですから」

「ともかく、其方の味方が時間を稼いでくれている間に儂らはワシントンへ飛ぶ。彼も言っていたであろう？」

アルバカーキへ移動する際、リーナはミルファクから今回の叛乱に関する現時点での情報を全て聞いている。そして、基地内には彼らを止めるためにベンジャミン・カノープス少佐が残っているということもそうだが、ミルファクに指示を出したのは他ならぬカノープスだった。

「ベンは……大丈夫ですよね？」

「お主が信じなくて、誰が彼を信じるというのだ？　彼の意志の強さは対峙した儂が保証する。尤も、彼をパラサイトにしようとすれば、連中も要らぬ労力を使う羽目となろう」

「……そう、ですね。分かりました」

剛三の言葉にリーナも気をしっかり持ったことを確認した上で搭乗し、緊急離陸のプロセスを取る形で離陸する大統領専用機。念のためにロッキー山脈を掠めるような形で北上した後、時計回りに旋回し

てワシントンへ飛ぶ大統領専用機。
　リーナは、風景の中に映るスターズの本部基地あたりに視線を落としていた。
（ベン……今度は、救ってみせる）
　［パラサイト］そのものを倒す方法など、今のリーナには持ち合わせていない。だが、不思議な出会いによって自分も変わっていけるのでは……と、心なしかそう感じていたリーナだった。
◇　◇　◇
　アルバカーキからワシントン・ダレス国際空港まで極超音速飛行機による約４５分のフライト。だが、リーナたちが降りることはなく、そのまま待機を命じられた。それは、この機体に搭乗してくる面々に大きく関係していた。
「お姉ちゃん、生きてる？　うん、パラサイト化はしてないね」
「セリア……うん、でもベンは基地に残って……」
「しっかりしてよ、お姉ちゃん。ここは『ベンなら石に齧りついてでもパラサイトになんかならない』って断言するぐらいは言わないと」
「そんなことを平気で言えるセリアの性根が羨ましいわよ」
　セリアが投げかけてきた言葉に、リーナは溜息を吐きたい気分だった。だが、更に姿を見せた同乗者にリーナは驚くこととなる。
「って、貴方は確か沖縄で出会った!?」
「おや、君は確か司波達也君の婚約者の……どうやら、君も巻き込まれた口か。南アメリカ連邦共和国軍所属、ハンス・エルンストだ。今回は大統領閣下のご厚意で同乗することとなった」
「おや、ハンス君ではないか。腕は上げたかね？」
「これは上泉殿。何分、振り回されている様なものですが」
　セリアの次に姿を見せたのはハンスで、リーナに対して自己紹介をしつつも事情をそれとなく察した上で理解を示すと、剛三が話しかけたことに対して律儀に答えていた。無論、同乗者がこれで終わりではなかった。
「シリウス少佐。ダラスで働いていた親友から大まかな事情を聞いている。どうやらパラサイトによる叛乱がおきたようだな」

「これはメイトリクス大佐。はい、その通りです。大統領府（ホワイトハウス）や国防総省（ペンタゴン）はその事実を」
「認識している。だが、連中は知らぬ存ぜぬを貫き通すのが目に見えている。それと、貴官は知らない事実だと思われるが、つい先程スターズの本部基地から発生した叛乱に対して三名の隊員に対して禁固刑の処分を下したと報告があった……アンジー・シリウスの脱走を幇助したという冤罪でな」
　更なる同乗者――――ジェラルド・メイトリクス大佐はリーナに対して更なる事実の提示を行った。そして、ジェラルドは一息吐いた上で説明を続ける。
「二国の要となる戦略級魔法師に冤罪。それも色仕掛けによる犯罪幇助とか、正気の沙汰どころか狂気の沙汰でしかないとしか言えん。そんなことが起きるぐらいなら、ＵＳＮＡにある軍事基地全てが灼熱に呑み込まれていてもおかしくはないだろうに。なので、本官は貴官に対する疑いに関して一切疑う余地を有していない」
「メイトリクス大佐……その、三名の幇助者というのは」
「ベンジャミン・カノープス少佐、ラルフ・アルゴル少尉、そしてアリアナ・リー・シャウラ少尉の三名が禁固刑。一種の司法取引という奴だろうが、収監先は現時点で不明だ。だが、カノープス少佐ならパラサイトと物理的な距離を取ろうとするだろう。なので、最悪は回避できるかもしれない」
「いえ……教えてくださり、感謝します」
　自分が脱走扱いされただけでなく、その幇助をしたとして知り合いが捕まってしまった。だが、悲観する必要はないと言いたげなジェラルドの言葉に、リーナは静かに頷いた。そして、その場にもう一人重要な人物が姿を見せた。
「リーナ、無事だったか」
「お祖父様!?　いえ、大統領閣下」
「今は気にせぬ。剛三殿、此度は御助力いただいたようで感謝いたします」
「なに、こちらの我儘で専用機まで貸してもらったのだ。連中を連れ

て一旦フランスに出ればよいのか？」
　剛三と奏姫はＵＳＮＡから感じた妖の気配にリーナが巻き込まれることを［星見］の報告を受けた千姫経由で知り、ジョーリッジに直談判して大統領専用機を貸してもらえるように働きかけた。
　ジョーリッジは政府の代表として迂闊に動けない歯痒さから、剛三と奏姫に望みを託してその申し出を受けた。
「ええ。それと、イギリス王室の特使も同乗させてほしいのです」
「はじめまして。イギリス王国軍中佐、アニエス・ヴィンセントです」
　そうして姿を見せた女性――――アニエス・ヴィンセントが自己紹介をして、互いに言葉を交わす。とはいえ、ハンスはドイツ人、アニエスはイギリス人でジェラルドはアメリカ人。だが、各人とも日本に対して興味を持っていたことから日本語も喋れるため、会話はすべて日本語となっていた。
　そんな中、ジョーリッジはリーナに対して視線を向けた。
「リーナ。私は君に〝アンジー・シリウス少佐〟としての最後の任務を言い渡す。司波達也君と添い遂げて、彼と君に降り掛かる災厄に対して躊躇うことなく討て。リーナなら、きっとできるはずだと信じている」
「お祖父様……了解しました。アンジェリーナ・シールズ、大統領閣下の命に従い彼の敵を排除してみせます」
「それでいい。その任務が終われば、もうＵＳＮＡ軍の軍人ではなくなる。セリア、リーナのことは任せた」
「任せて、お祖父ちゃん」
　ジョーリッジは伝えたいことが終わったのか、そのまま専用機から姿を消す様に去っていった。そして、離陸体制に入る専用機の様子を、ジョーリッジはじっと見つめていた。
「リーナ、セリア……君たちの人生は君たちだけのものだ。自由に羽ばたいていきなさい」
　それは一国の大統領としての言葉ではなく、魔法の才によって青春を奪われてしまった二人の孫娘に対する〝償い〟を含むかのような言葉。この国の現状を打破してくれる一縷の望みを託すかのように、

大統領専用機は東の空に向けて飛び立っていった。
◇　◇　◇
フランス共和国で本来のフライトプランに無いＵＳＮＡの大統領専用機を迎えるというのは、本来ならば民間機にも大きな影響が出かねない。だが、この事態を事前に予想していたかのようにシャルル・ド・ゴール国際空港の滑走路の一つに大統領専用機が着陸し、管制塔の指示に従って誘導される。
そして、タラップを通ると彼らを出迎えたのはヴィクター・セナード共和国大統領だった。
「ミスター剛三にミズ奏姫、久方ぶりでございます。此度は大変な長旅でしたな」
「久しいなヴィクター。こちらからの要望は叶えてもらえるのか？」
「ええ。我が国の極超音速輸送機でお送りいたします。その代わりと言ってはですが……」
「話は伺っております。こちらとしても魔法師の人権を抑制するような動きは看過できませぬので」
そうして、大統領の計らいでフランスでも指折りの高級ホテルに宿泊することとなった一同。ＵＳＮＡから脱出するようにしてきたリーナはようやく一息入れることが出来た。
「はぁ……色々驚くことが多すぎたわ」
そんなリーナだが、その夜から魔法師の人権抑制を謳う組織を次々と壊滅させていくことに尽力する。本来なら1週間かかる筈の作業だが、まるで居酒屋をはしご酒でもするかのごとく欧州各国を超高速で飛び回るという剛三の破格的な移動に巻き込まれ、本来なら一か月単位でかかる作業を貫徹気味とはいえたった４日で全て片付ける羽目となった。
世界大戦の核による最悪の危機を救った英雄の一端を味わうことになった若者たち。その非常識さには、〝アンジー・シリウス〟とて疲労困憊の有様を呈していた。
「お姉ちゃん、生きてる？」
「……辛うじて」

そして、現地時間の６月２２日早朝。フランスの極超音速輸送機をベースとした政府専用機で日本までの送迎をしてくれることとなった一同。そして、ヴィクターはとある提案をした。
「実は先日、私が養子として迎えた戦略級魔法師クラスの子が居ましてな。その子を魔法の鍛錬や勉学も兼ねて同行させたいのです」
「そこまで仰るとなれば、余程気に入ったのですか？」
「そうですな。っと、噂をすれば……」
「あ、お兄ちゃーん!!」
「ぐはあっ!?」
ヴィクターと奏姫が話している所にケースを引っ張ってきた一人の少女。すると、ある人物――ハンス・エルンストを見たとたんに荷物を置いて走り出し、タックル気味に抱き着かれた反動でうめき声を上げたハンス。
倒れるすんでで堪えたが、ハンスはその痛みを齎した人物を見て驚いていた。
「いてて、一体何を……って、ナーディア!?　お前、音楽院はどうしたんだよ!?」
「とっくの前に辞めちゃった。今は［ドラキュラ］として活動してるよ」
「……お前が、あの［ドラキュラ］って……両親から何も聞いてないんだが」
「だって、言ってないもの」
まさか、自分の妹が音楽への道を捨てて魔法師になっていたとは露にも思わなかったし、東欧方面で聞いていた［ドラキュラ］に身内がなっていたという事実。そして、ハンス以外でナーディアと面識のある剛三が盛大に笑っていた。
「ハッハッハ、類は友を呼ぶとは言ったものだが、兄妹共々奇妙な縁を抱えるものよの。ナーディア君、久しぶりだな」
「あ、先日は嘘をついてしまい、申し訳ありません」
「気にするでない。何か事情があったのならば仕方のないことよ」
「……ナーディア、剛三殿といつ知り合ったんだ」

よもや、兄妹共々剛三の世話になるとは思っても見なかったようで、ハンスは盛大に頭を抱えていた。なお、展開についていけない面子というのはどうしてもでてくるわけで、その筆頭がアニエスだった。
「え、ええ？　あの［ドラキュラ］がエルンスト准将の妹さん？　どういうこと？」
「俺に聞かないでくれ……」
「いやー、色々賑やかになりそうだね」
「賑やかどころか、ここにいる面子だけでも過剰戦力じゃないの……」
世界群発戦争に関わった上泉剛三と上泉奏姫。
先代〝シリウス〟の息子ことジェラルド・バランス。
［魔王の帰還（リターン・オブ・ルーデル）］の異名を有するＳＳＡのドイツ系軍人、ハンス・エルンスト。
その妹にして［ドラキュラ］と名乗った少女ことナーディア・エルンスト。
そこに加えて、現〝シリウス〟ことアンジェリーナ・クドウ・シールズ。
ＵＳＮＡでも制御を諦めた双子の妹のエクセリア・クドウ・シールズ。
（リーナたちは知らないが）［十三使徒］ウィリアム・マクロードの孫娘ことアニエス・ヴィンセント。
ここにいる面々が勝てる人間がいるとしたら、最早達也か悠元ぐらいしかいないだろう……とリーナは率直に感じていた。
「……メイトリクス大佐。この状態でもヤバい面子が日本に滞在するというのに、連中は正気なのでしょうか？」
「正気の沙汰など連中には既にないだろう。ブレーキ役を務めれるはずのカノープス少佐を追い出した時点で、後退のネジなどないに等しい」
そもそも、［パラサイト］なる存在を引き入れてしまった以上、今のスターズに制御できる仕組みそのものが機能していない可能性もある。こうなると、本部基地のウォーカー大佐もパラサイトの影響を強

く受けている可能性が浮上することとなる。
「こんな事態を招いた連中も大方予想がつく。御しきれないからと言って人様に厄介事を投げた連中全員を俺は許す気になどなれん……シリウス少佐。いや、リーナ。大統領からの命令のついでに一つ頼みごとをしたい。それは、貴官にしか出来ないことだ」
「私にしか？」
「それはいずれ話す。その時が来るまで、貴官は閣下からの〝願い〟に応えてやるといい」
「――了解しました、大佐」
戦うことを嫌ったジェラルドの頼み事。そして、それはジェラルド・バランスという人間にとって、一つの決意を固めた瞬間だったのかもしれない。
◇　◇　◇
時は少し遡って、日本時間６月１７日の夕方。ＵＳＮＡでの叛乱は、無論悠元も情報端末ですぐに把握していた。ただ、国内では本来起こる筈の水波と光宣のイベントがまるっきりなくなったため、日本だけで言えば表向きは平穏な日常に戻っている。
流石にリーナのこともあるため、スターズの叛乱のことは達也と深雪にも伝えておくこととなった。
「リーナは……無事なのか？」
「偶然爺さんと祖母さんが基地の外で合流したらしくてな。爺さんが戦術級魔法で基地の機能を麻痺させて脱出したそうだ。パラサイトの駆逐に動かなかったのは、リーナの安全確保を最優先にしたそうだ」
剛三ならば平気で基地を更地に出来るが、そこまでやってしまうと日本に対するヘイトを必要以上に溜めることになるから、というのが剛三の出した結論だった。剛三だけに向けられるのならばまだしも、そのヘイトが自身以外に向けられるのは許容できないという我儘も含んでいたりする。
「それで、先日も話した通りにリーナは欧州での仕事を終えた後、フランスから日本に来ることとなる。マンションにそのまま住まわせて

もいいとは思うが、真夜さんから四葉家内部へのポーズとして巳焼島に住まわせたいと要望があった」
　元々研究プラントしかない島だが、業者によって急ピッチで開発が進んでいる。航空機が発着陸出来る４０００メートルクラスの滑走路も魔法を併用した土木工事で既に完成している。この辺の技術に関しては悠元が無意識で作り出してしまった魔法のサルベージという形で上泉家に提供していた。
「宿舎も日常生活を送る上で問題ないレベルの設備が整っているし、後は［パラサイト］対策でリーナを防衛戦力として活かすこともできる。あとは、リーナと同行してくる外国の魔法師たちの受け入れ先としても有用だと判断した」
「悠元さん、何かしらの干渉が発生するかもしれませんが」
「それはあるだろうな。だが、リーナを〝アンジー・シリウス〟の役目から放したがらないのはＵＳＮＡ軍全体の責任であって、俺は知らん。そこまで面倒を見ろというのはお門違いの話でしかない」
　力だけを見て、人の人生を平気で踏みにじった側に言われる筋合いはない。そもそも、リーナの愛国心を煽るだけ煽って、彼女の待遇にすら配慮しようとしなかった軍部のメンタリティにも大きな問題がある。
　この世界だとセリアがいたことで多少はマシになっていたが、それが無かったらリーナの心は完全に死んでいただろう。尤も、セリアの存在が却って見切りの速さに繋がったのは言うまでもないことだろうが。

他所は他所、此方は此方の道を往く

私の名前は東道佐那（とうどうさな）。東叡山の名を冠する寺の一人娘。その実態は、この国の秩序を守る『元老院』――そのトップである四大老の一角を担う一族として生まれた。

ある意味将来を約束された私がその事実を知ったのは、確か小学校に入学するぐらいの時。魔法の勉強が楽しくて蔵に入り浸っていた際、『元老院』に関する事を知った。でも、あの頑固な父親が素直に白状するとも思えず、結局父親が話したのは中学生になったばかりの頃だった。

東道家の娘として――ひいては古式魔法師の家に生まれるということは、いずれ結婚も考えなければならないということでもあり、家での勉強は魔法よりも花嫁修業のものが多かった。

魔法師の家なのだから、自己防衛の為の手段を怠る事など普通ならば許されないこと。だが、私の父は魔法師としての実力ではなく、古式魔法師を統べるための権威や権力に縋ってしまった。私からしたら、己の身に降りかかる危険は平等であり、それは『元老院』に属していたとしても同じことと考えた。

あの父親が何を考えて行動しているのか……私はその最大の理由を知ってしまった。

四葉の復讐劇。四葉の一族と上泉剛三殿のたった31人で成した、大陸南部にあった大漢（ダーハン）の国家蹂躙劇。私も知識程度には知っていたことだが、偶々四葉家先々代当主とのやり取りを記した手紙を見つけた時、私は疑問を感じた。

東道家と四葉家に存在した浅からぬ縁。今ではあまり見る影もないが、何故縁を切るような事態になったのか。その答えは、父親の部屋を掃除した際に奥から出てきた古びた手記で全ての事実を知った。

東道家が縁を切った――正確には、東道家が四葉家を滅ぼそうとした。元を辿れば四葉家とて古式魔法師の血筋を受け継ぐ一族であり、更には先々代当主の父親が神楽坂家の縁戚だという事実も知った。

私は父にこの事実をぶつけた。すると、父は観念したかのように話してくれた。私からすれば祖父であった人物が四葉家の力を恐れ、排除する口実として四葉の復讐劇に至る道筋を作った事。

当時、この国に表向きは居なかった戦略級魔法師。国の抑止力の代わりとする形で四葉家を生贄にした。結果として四葉家は〝触れてはならない者たち〟と呼ばれ、世界から恐れられることとなったが、人を人とも思わぬ所業を古式・現代の違いがあるとはいえ同じ魔法師が成したことに、私は怒った。

『――――ふざけないでください！　それが人の成す所業ですか!?　我々に力が無いからと言って、兵器として生み出されてしまった現代魔法師にその在り方を押し付ける時点で、人を喰らう妖と何ら変わりありません！　違いますか!?』

しかも、祖父は復讐劇の真実に至った上泉剛三殿の一人息子までも殺した。それを聞いた剛三殿と神楽坂千姫殿によって抹殺されたという事実まで聞いたが、私は剛三殿と千姫殿を恨む気持ちなどなかった。

元々こちらが四葉家の人生を弄んだに等しい所業。それに対して、本来父がつけるべきけじめを担ってくれた恩義を強く感じているし、私が生まれた時には既にいなかった人物のことを尊敬できるかどうかも怪しかったからだ。

この事実を知った後、私はいっそのこと東道家を出ていこうかと考えたことも有った。だが、母が私を引き留めた。『その気持ちがあるのならば、尚のこと貴女が精進しなさい』と。母は私が強くなることを一切咎めなかったどころか、魔法の訓練に沢山付き合ってくれた。母が上泉剛三殿の娘だと知ったのは、高校入学前だったが。

魔法科高校へ進学せず、普通科の高校に通っていたある日、父親が置いていった見合い写真のアルバムの山を気怠そうに見ていると、その中に九校戦に出場していた人物があった。名は吉田幹比古で、精霊魔法を行使する吉田家の次男。

実は、九校戦で活躍しているミキを見て、思わず頬のあたりが熱く感じた。それを母に聞いたら、母は『漸く貴女にも春が来たのね』と

上機嫌に話していた。その時はよくわからなかったが、思えばミキへの初恋だとするなら、見合いの写真を持ってきた父に対して生まれて初めて感謝したのは間違いない。

知り合いの私立探偵に調べてもらったが、どうやら既に恋人がいるのは確実だった。古式の術者なら内縁の妻がいてもおかしくは無いと考えが振り切ってしまい、『別に愛人でもいい』と公言したら父が泡を吹いて倒れた。意味が分からなかった。

あれだけ古式の術者としての矜持に拘る父が気絶するなんて、それでも古式の術者かと言いたくなったが、母から『それだけ一人娘の貴女を大事に思っているということですよ』と諭してくれた。

結局、美月を唆す形でミキと関係を持ったけど、これはこれで悪くないと感じていた。一つ不満があるとしたら……あの父親の後を継いで四大老にならなければならないという点ぐらいだった。

◇　◇　◇

日本時間の6月18日、火曜日の夕方。

〝アンジー・シリウス〟ことアンジェリーナ・クドウ・シールズが巻き込まれたＵＳＮＡ軍統合参謀本部直属魔法師部隊『スターズ』の叛乱から現地時間で1日経過したが、肝心のリーナは既に出国済みだった。

そして、ＵＳＮＡ大統領が軍統合参謀本部に対して〝活発化する新ソ連の動きに対し、同盟国の責務としてアンジー・シリウスの国外派遣に踏み切った〟と説明。彼女に対する嫌疑に対してその根拠の提示を参謀本部に要求した。

『第一賢人』のメールを提示したとしても、リーナと達也が面識を持ったのは一回目の実験の後。そもそも、リーナがマイクロブラックホール実験に参加した事実が無く、当日のアリバイもセリアによって大統領府（ホワイトハウス）と国防総省（ペンタゴン）が把握しているため、リーナが工作活動に関与したという証明を参謀本部が立証しなければならず、軍参謀本部の上層部は対応に苦慮していた。

レイモンド・クラークが仕掛けたこの策謀にＵＳＮＡの内部が混乱している最中、第一高校の面々――主に悠元や達也を含めた友人た

ちは、揃って［天刃霊装］の研鑽と［天魔抜刀］の修得に励んでいた。天神魔法における極致だが、そもそもこの技術自体は完全に独立しており、きっかけが天神魔法で神霊を操ることに起因している。
その技術こそ秘匿すべきなのではないかと思うが、この極致に至る為には各々が持つ〝限界点〟を超えなければならない。教えたところで全員がその境地に至る保証がないのだ。
「――今日はここまでだな。これ以上は支障を来す」
「つ、強すぎる……」
「武術や剣術のことは聞いてましたが、こうやって鍛錬を受けると悠元の凄さが改めて理解できますよ」
疲労困憊になっている面々を見つつ、悠元は［叢雲］の展開を解除する。新陰流剣武術の師範を務めているだけあり、この中では剣術に得手があるエリカでも汗だくの状態になっていた。
古式の術者として鍛錬をこなしている幹比古や佐那でも疲労によって座り込むほどで、複数を相手にして平然と立っている悠元の異質さは群を抜いている。
「ここにいる面子の中だと一番得手がある人間だからな。どこかの住職の言葉を借りるなら『得意な土俵で戦っていた』に過ぎない」
「いや、森の中でも平気で天刃霊装を振り回せる悠元が異色過ぎるのよ」
「そうか？　爺さんは平気でやってることだぞ？」
「……上泉家も大概人間を辞めていますね」
最初は悠元と達也だけだった訓練は、レオとエリカ、幹比古と美月といった元二科生組、深雪に雫、ほのかやセリア、修司と由夢、姫梨に燈也の元一科生組も加わり、更には詩奈や侍郎も加わっただけでなく、泉美に香澄まで加わった。
結果として一クラス分の規模にもなる大所帯のため、平日は学校の敷地内にある演習場の一角を借り、休日は九重寺の裏手にある山中で訓練をしている。これは八雲が『九頭龍』の長だからできる事であり、彼も天刃霊装の修得に精を出している。
八雲が天刃霊装を修得したい理由は『体術で敵わない達也君に勝て

る武器は欲しいからね。勿論、本気の殺し合いなんて勘弁だけど』ということで、あくまでも鍛錬の範疇で達也に対して優位に立てる手段を有したいということであり、本気の殺し合いは御免被るというのは……まあ、理解できなくもない話だと思う。

「[七聖抜刀]と[天魔抜刀]では難易度が格段に違う。本来、２０年以上も掛けて修得する方法を最短２週間に圧縮して叩き込む方法だけに、天刃霊装を修得していることが前提となるし。まあ、爺さんはその内至るだろうけど」

「……ちなみに、その[天魔抜刀]は悠元と修司以外に誰が修得しているんだ？」

「現状だと、俺と元継兄さん、深雪に雫、それと母上の五人が確定かな」

悠元が[天魔抜刀]に至る為の鍛錬法を編み出す際、それに協力してもらったのが悠元以外の四人。結果として深雪が達也を追い越したため、八雲が理想としていた『護衛（たつや）より強い護衛対象（みゆき）』の構図が完成してしまった。

「あれ？　姫梨は入ってないの？」

「道筋はついたが、最後の扉を開けるところで四苦八苦してるようだからな。まあ、そこまで行けばあとは自分自身で解決しなきゃいけない問題になるし」

限界を超える。それは即ち、人に与えられた運命（さだめ）を変える力――魔法の限界を否定するということ。ひいては、魔法の存在を一度否定するところから[天魔抜刀]への道筋が始まる。

科学で説明できない概念の領域を技術として行使する魔法。その力を疑うのではなく、明確に否定するということは魔法を行使する力を失うリスクも孕んでいる。悠元は、そのリスクを限りなく排除した鍛錬法を編み出したが、それでも魔法を喪うリスクは決してゼロではない。

結局のところ、何かを対価にしなければ力は得られないという等価交換の法則（ルール）は、魔法においても健在と言えるだろう。

「[天魔抜刀]に至るとしても、その最後の扉を開く鍵は己の心の内にしかない。その意味で自分をどこまで突き詰められるかが修得出来

るかどうかの分岐点になる」
「確かにな。俺も漸く至った訳だが、悠元の言葉通りだったからな」
修司が修得した［千子都牟刈村正（センジツムカリムラマサ）］、悠元が修得した［天都御魂叢雲（アマツミタマノムラクモ）］。［天魔抜刀］に至る為には、現代魔法における戦略級魔法師クラスの魔法制御能力と魔力保有量（現代風に言えば霊子（プシオン）保有量）の両方を獲得する必要がある。
つまり、［天魔抜刀］は戦略級魔法を超高密度に圧縮した魔術武装という言い方もできるということだ。
「その意味だと、達也が未だに至れてないのが不思議だよな」
「レオ……いや、僕も正直達也が直ぐに会得するものだと思ってたよ」
「二人とも……流石の俺でも出来ないことはあるからな」
達也の場合、資質としては十二分すぎる。だが、彼にとって最大のネックとなっている〝プシオンの感知の鈍さ〟が［天魔抜刀］に至る為の道筋を見いだせずにいた。これを改善する方法は当然あるわけだが、達也から『どうにもならなくなったら助けを借りたい』と固辞されている。
激しい情動が出せなくなったとしても負けず嫌いなところは人並みに出るため、レオと幹比古の言葉に対して溜息を吐いた達也の姿に周囲からは笑みが漏れていた。
「悠元から見て、僕らはどうです？」
「そうだな……達也はともかくとして、他の全員は何かしら切っ掛けは掴んでいる。俺からすれば、容赦なく叩きのめすことしか出来ないが」
「それでいてメンタルケアも欠かさないよね。流石ジゴロ」
「別にそう言う意図はないのですが、雫さんや」
原作だと達也が突出するような形となったが、悠元の影響で達也と同等以上の実力者が乱立するという事態になっていた。まあ、魔法師は自分を守れないと他人を守ることも出来ないので、これはこれで仕方が無いと諦めたが。
「別に競争する必要もない訳だし、魔法師として自己防衛の手段は必須だろうに。その最たる例を一昨年の事件で経験しているだろ？

特にほのか辺りは強く思ったんじゃないか？」
「う、うん。雫や先輩方、燈也君に守られちゃって、悔しいって思った」
「まあ、ほのかは性格的に仕方がない。ただ、それは許さない」
「雫!?　今は関係ないことだよね!?」
　雫から飛んできた攻撃に対してほのかが顔を赤らめて問い詰めている光景が形成される中、悠元が視線を別の方向に移すと、詩奈に膝枕されている侍郎の姿があった。
　侍郎は矢車本家から〝相模（さがみ）矢車家〟の分家創設を認められ、彼が成人となった時に初代当主となることが矢車・三矢・神楽坂の三家による合議で確定した。師族会議に抵触するのではないかという疑問は出てくるわけだが、あくまでも主体は矢車家内の問題で、三矢家と神楽坂家はオブザーバーとして意見を具申したに過ぎない。
　そうなると詩奈は自動的に侍郎の〝第一夫人〟となるわけで、侍郎が娶ることになる嫁の数は最低でも三人以上は確定している。なお、それを聞いた詩奈が侍郎を自室に連れ込んだ……その先の展開は説明する必要も無いと思うので省略する。
「あら、悠元ってばシスコンの気が出たの？」
「馬鹿言え。自分にベッタリだった妹もようやく身を固めたと思うと、肩の荷が下りたような気分を抱いただけだ。まあ、寂しいという気持ちもなくはないが」
「それがシスコンってことじゃない」
「どこかのブラコンさんのように、理不尽な理由で恋人を叩きのめすことはしていないがな」
　侍郎に対して厳しくなるのは魔法や武術の訓練だけであり、それ以外は兄貴分として真摯に接していた。しかも、エリカのように理不尽な理由をぶつけることは一切しておらず、あくまでも詩奈の婿候補となるように技術を叩き込んでいるに過ぎない。
「アタシだって最近は次兄（つぐにい）のことを考えて手は出してないわよ」
「手を出してないというか、そもそもラウラの一件以降千葉家に帰ってないだけだろう？」
「う、流石にバレてるか」

ラウラの一件とは、千葉家長男の千葉寿和（としかず）とラウラ・カーティス（帰化して三矢ラウラとなり、詩奈の妹にしてアリサの姉ということになる）が婚約したことに起因している。

その一件が引き金となって悠元とエリカの婚約問題が再燃しかけたため、千葉家長男の寿和と次男の修次（なおつぐ）が当主の千葉丈一郎（じょういちろう）を抑え込んだ。結果、寿和が千葉家の家督を継ぎ、修次が千刃流の総師範を継ぐ羽目となったため、兄弟の仲が深まったのは言うまでもない。

丈一郎は千葉家所有の別宅（元々エリカの母親であるアンナ・ローゼン・鹿取が千葉家の離れに住む前に住んでいた家で、丈一郎の私費で購入していた）に引っ越し、警察や公安などの武術指南役として今後の人生を送るそうだ。

なお、エリカは千葉の肩書きに対してコネ以外の価値を見出していないため、千葉家を離れることは寿和や修次も理解している為、レオへの嫁入りに対して一切の障害が消滅したこととなった。

それを聞かされたレオはというと、どう反応したものか困ったらしい。

大人たちの余計な横槍よりはマシ

６月２０日、木曜日。

元々梅雨の時期というのもあるが、東京は朝から雨が降っていた。国立魔法大学付属第一高校がある八王子周辺も、しとしとと雨が降り注いでいた。達也は普段通り授業に出ていたが、悠元は武道場で真剣を振るって汗を流していた。

別に授業自体がつまらなくてこうしているわけではなく、悠元が必ず出ようとしている授業が今日は無かったし、交流競技会の資料も完成したので汗を流すことへ舵を切ったに過ぎない。

尤も、それだけが理由という訳でもない。何せ、今の状況は６月９日早朝――――ベゾブラゾフの攻撃を受けた時の状況と非常に酷似しているからだ。

新ソ連が戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］の排除＝達也の抹殺を目論んだのは、伊豆の別荘を攻撃した時点で判明している。そして、ベゾブラゾフ本人が健在なのは対処した達也も自覚していることだ。

それを指し示すかのように、事前に調べた情報では［アルガン］が接続された専用列車はウラジオストク郊外ではなく、その北方であるウスリースク郊外に移動されていることが確認された。

恐らく、前回の攻撃で使った座標を参考にされては困るというものだろう。だが、安全を期すべきならばウラル山脈以西でも別に良かった筈だ。つまり、ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］は一定の距離を超過すると正確な照準が難しくなるということの証左だと思われる。

達也なら［サード・アイ・エクリプス］の衛星照準（サテライト・サイト）を用いれば地球はおろか宇宙の特定地点も狙い撃てるが、不幸中の幸いとして小惑星破壊の時のデータまで把握していないのだろう。この辺は宇宙開発に対する関心の低下が功を奏した形なのかもしれない。

普通なら攻撃が失敗した時点で策を練るのが普通だし、新ソ連の置かれた状況からしてベゾブラゾフが極東地域に居続ける意味もない。だが、それでもベゾブラゾフが諦めない理由を考えた時、それは最早

〝妄執〟としか表現できなかった。
悠元もチートじみた能力を持つとはいえ、剛三との鍛錬を通して敗北を喫してきたことがある。それでも、負けたことに対して自身の弱さと見つめ合い続け、最終的には勝ち得てきた。言うなれば、ベゾブラゾフは我慢比べが出来ないとしか言いようが無かった。
（クレムリンを半壊にしたというのに、ベゾブラゾフは戻ろうとしない。そして、この周辺に新ソ連の工作員がいることは確認している。なら、仕掛けるとしたら最短で今日になる）
事前に粗方の工作員は排除したが、ある程度間引く形でわざと残していた。無論、ベゾブラゾフの今回の攻撃後に全員拘束して国外追放処分にするが、残した理由はベゾブラゾフの執念を逆に利用して、経済的にも追い詰められつつある新ソ連に〝決定的な一手〟を撃ち込む。
先日は達也に任せたし、既に［トゥマーン・ボンバ］のオリジナルの起動式・魔法式データは達也も把握している。最悪［魔導解散（キャスト・ディスパージョン）］でどうにかなることを考えれば、今の達也に負ける要素はない。
ならば、悠元が狙う目標は新ソ連の軍事力そのものの逓減。
レイモンド・クラークは自分が戦略級魔法師だという認識を有していた。だが、どんな戦略級魔法を使うのかはまだしも、エドワード・クラークが納得しなかった時点でベゾブラゾフやマクロードには一切伝わっていない。
本来なら、九校戦であんな魔法を使った時点で疑われるのが普通だろうが、彼らの中で納得しえない部分があるからこそ、自分に対して疑いを向けるのが難しいのだろう。
それに、悠元と剛三の関係はそこまで公になっているわけではなく、日本の政財界や魔法界、海外の要人でもごく一握りとされている。これで剛三の孫という事実が連中に伝わっているようならば、自分が戦略級魔法師ではないかという疑いで排除する方向に舵を切ったのかもしれないが、そうなったらなったでこちらも〝敵〟に情け容赦など一切掛けずに排除していただろう。
「人様を狙うということは、相応のリスクを考慮しろと言ってやりた

いが……どこぞの三番隊組長の台詞を借りる訳じゃないが、馬鹿は死んでも治らなかったようだな」

時間は午前最後の授業終了の三分前。悠元は近くに立てかけていた［布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）］を徐に掴むと、鞘を抜き放って天魔抜刀――漆黒に染まった太刀である［天都御魂叢雲（アマツミタマノムラクモ）］を顕現させる。

達也は既に掴んでいるようで、校舎内から［術式解散（グラム・ディスパージョン）］の発動を確認した後、悠元は［天神の眼（オシリス・サイト）］で魔法の痕跡から〝線〟を辿って発動地点を正確に割り出す。

（ウスリースクから２１キロ離れた場所での発動。敵は……［トゥマーン・ボンバ］を三連続発射させて、達也を確実に葬る気でいる）

というか、目標にしている場所が魔法科高校という時点で魔法を観測されるというリスクを完全に無視しているとしか思えない。寧ろ、達也を含めて爆散することで目撃者を粗方消してしまおうという魂胆なのだろうが……その時点で、四葉家の怒りを買うということに気付いていない時点で〝馬鹿は死んでも治らない〟が正しく的を射ている発言かも知れない。

前回の攻撃の後、ベゾブラゾフが対策を練った様に、達也と悠元も対策を練っていた。前回達也が消したのはベゾブラゾフのクローンだと断定、ベゾブラゾフはそのクローンを隠れ蓑にして逃げるように［トゥマーン・ボンバ］を発動させていると結論付けた。逆に言えば、そうまでしないとベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］は使い物にならない戦略級魔法という結論にも至った。

予め言っておくが、決してベゾブラゾフが弱い訳ではなく、特化した魔法演算領域を有する達也と固有魔法による恩恵でほぼ無限の演算領域を有する悠元が比較対象では、そもそもの地力が違い過ぎるだけの話でしかない。

達也としては、［魔導解散（キャスト・ディスパージョン）］のデータを魔法科高校に把握されるのはマズいため、今回は［術式解散（グラム・ディスパージョン）］で対処すること。そして、［トゥマーン・ボンバ］発動の際に掛かるタイムラグ――正確には［チェイン・キャスト］の魔法式複写プロセスにかかる時間――よりも式一つを分解するだけなら［術式解散（グラム・ディスパージョン）］の方が速い事。

相手の攻撃が分かっているのならば、その手段をカウンターの要領で潰し、その上で相手の追撃の手段を完全に奪う。博打ではなく、明確な勝算に基づいた結論を以て達也と悠元はベゾブラゾフを迎撃する。

「……術式付与。［鏡の扉（ミラーゲート）］、［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］、［ヘビィ・メタル・バースト］、［零点銀世界（ゼロ・ニブルヘイム）］」

悠元が［天都御魂叢雲］を構え、そう呟くと刃の先に収束する光。それを構えると、武道場の壁に向かって振るう。

天魔抜刀の最大の利点――それは、本来事象干渉力の関係で使うことが出来なかった複数の魔法効果を併せ持つ複合術式による広範囲攻撃を実現させた点。三矢家が得意とする［多種類多重魔法制御］でも、各々の魔法発動は出来ても魔法の効力を重ねたりするのは極めて難しい。

これは以前にも述べたことにも関連してくるが、魔法自体が一つの完成形として事象改変を行う際、想子だけならば別に情報の重複自体は何ら問題が起きない。だが、この世界の魔法は想子と共に霊子の塊をエイドスに投射している為、想子と連結した霊子情報体は想子の情報に依存した性質を有している。

異なる魔法が同一の対象に投射しても望んだ効果が反映されなかったのは、想子で構成された魔法式同士の情報が紐付けされている霊子情報がエイドスの許容できる改変領域から溢れてしまった結果の現象。例えれば、小さなペットボトルの口に複数のホースを突っ込もうとしているような状況に近い。

だが、三矢家の［スピードローダー］を改良した［ライトニング・オーダー］、そして天魔抜刀によって悠元は異なる魔法同士を連結させて複数の魔法効果を有する魔法の構築に成功した。世界でもただ一人にしか出来ない魔法技術の名は［魔術融合（マテリアル・フュージョン）］。

そして、達也、リーナ、深雪が各々得意としている魔法を融合して放つ先は、新ソ連の主要なミサイル基地。核ミサイルを含むすべての対象物を分子レベルに分解し、無害化するという悠元の対多方面拠点特化型戦略級魔法。

悠元は照準を定めると、［天都御魂叢雲］を振り下ろす。だが、その魔法によって悠元の周囲に一切被害が及ぶことはない。

「月牙天衝（げつがてんしょう）・極北（きょくほく）の段――天雲世界（てんうんせかい）」

指定された全ての構造物を分子レベルに分解し、一度プラズマ状態にしてから超低温状態に下げることによる膨大な熱収縮のエネルギーを以て内部の圧力を極端に下げ、構造物そのものを粉塵に帰した上で圧壊させる魔法。そして、最終的には内部に蓄積する形となった粉塵自身の圧縮限界を超えると、脆くなった壁を突き抜ける形で扮陣爆発を起こすというもの。

そして、悠元が狙った先は――中央アジア方面を照準に収めることが出来るミサイルサイロのほぼ全て。日本を狙い撃つことが出来るミサイルサイロにも攻撃を加えることとなるが、そもそも数度にも及ぶ約定破りを先にしたのは新ソ連側であり、それを咎められる謂れなど無い。

悠元の攻撃により、新ソ連の中部および極東部に存在したミサイルサイロは、ミサイルの自爆ではない爆発によって、数十にも及ぶ箇所が一斉に吹き飛んだ。それらはすべて無人だったこともそうだが、サイロの警報装置すらも粉塵に帰したため、新ソ連軍は突然の機能不全となったサイロを疑問に思うものは少なくなかったが、一度に数十ものサイロが使えなくなったことに軍内部の陰謀論が囁かれるようになった。

そしてほぼ同時刻、ウスリースク郊外にあった［アルガン］は達也の［術式解散（グラム・ディスパージョン）］と［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］によって粉塵に帰したのだった。

◇　◇　◇

第一高校に対する魔法攻撃は、未遂であろうともしっかりと観測されていた。悠元と達也が行使した魔法行使の履歴はピクシーによって消去された。

第一高校を含めた魔法科高校全てに言えることだが、国立の高等教育機関ということもあって魔法を観測する設備が充実している。こと第一高校に至っては、それこそ国防軍の主要基地に匹敵するだけの観測体制を整えている。

そのお陰で、頭上に酸水素ガスを生成する兆候が確認されたことと、新ソビエト連邦沿海州から放たれた魔法であるという客観的なデータが魔法大学を経由して日本政府に提出された。
これを受けて内閣総理大臣が緊急の記者会見を開き、第一高校で観測されたデータに基づいて『新ソビエト連邦の［十三使徒］イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの我が国に対する極めて悪質な戦略級魔法による攻撃』と断定した。
その上で、現在当該人物が協力を表明しているディオーネー計画の主要国である北アメリカ合衆国とイギリス連邦の両政府に対して両国の大使館を通す形で『ディオーネー計画をかつてのヤルタ会談のような体制で構築し、我が国の独立国家としての面子を著しく貶めたいのか』という質問状を送付したことを発表。
そして、『我が国の主権を脅かす大国がディオーネー計画に参加していること自体、危険極まりない野心を見せている』と断言した上で、新ソ連が今後日本に対する軍事行動を起こした場合、『国家を守るために、軍事力の行使も含めたあらゆる手段を排除しない』という日本政府の方針を表明した。
それは、積極的自衛権の行使として『灼熱と極光のハロウィン』のように戦略級魔法を使用することも選択肢の一つとして含むことを暗に示した形となった。
6月22日、土曜日。
悠元は朝食を摂りつつモニターから流れるニュースの音声を聞いていた。
「……正直な感想を口にするなら、ここまで馬鹿だとは思わなかった、というのが本音かな」
「えらく率直だね」
「そりゃあなぁ……」
別に悠元とて新ソ連に面と向かって戦いを挑む気になどなれなかった。別に滅ぼせないというわけではないが、新ソ連が旧ソ連と同じように解体した際、確実に巻き込まれる未来が見えてしまったからだ。

だが、彼らは喧嘩を売った。原因の半分は剛三による蹂躙劇への復讐だが、そもそも喧嘩を売らなければ買う気など起きるはずもない……と含めつつ、雫の言葉に返答した。

「大国の面子など、俺には与り知らないことだ。そもそも、大本の原因を追及していいのならば、間違いなく旧合衆国ひいてはＵＳＮＡを始めとした先進国が現代魔法の方向性を勝手に定めたことが原因だからな」

核兵器の抑止という目的で発展した現代魔法は、本来の目的を達する代償として核兵器の代替という役割を背負うこととなった。そうして現代魔法が日の光を浴びてしまうことで、古来より伝わる古式魔法や古代文明の遺産が軍事的な価値を有することとなってしまい、魔法を用いた暗闘にまでスポットが当たることとなってしまった。

なので、『伝統派』が出来てしまうのは現代魔法の発展において避けられなかった出来事の一つともいえるし、古式魔法師たちが現代魔法師と人間と見做さないような目を向けるのは自然な流れとも言えなくはない。

だが、古式の術者たちは現代の魔法師が古式魔法の能力を継いでいるという事実に目を背け、遺伝子操作をしているという自然の摂理に反した行いだけで、彼らを道具として見做している。その極みが『元老院』に他ならない。

「とはいえ、ＳＴＥＰ（ステップ）計画は既に事業化しているし、日本政府もとい現政権の協力も取り付けた。国土を強靭化する意味でも、こちらの提案は断れないだろうしな。それに、他にもいろいろテコ入れはしておいたが」

そのテコ入れの一つが、国立魔法医療大学の付属校に関するもの。既に小田原にある湘海高等学院の他に、実は京都と大宰府にもそれぞれ付属校の開設許可を文部科学大臣から取り付けたというか、既に建物が完成して新入生も入学している。

だが、表向きは全寮・全日制の普通科高校としつつも、魔法科高校入試に落ちた生徒に対して優先的に入学を認めている。これは、医療大学の設立時点でもかなりの数の厄介者が多かったため、新入生の安

全を確保するためにそうした。ディオーネー計画が正式に取り下げとなった時点で、これらの学校の存在も公表する。
更に、剛三の教練によって一線級の魔法師となった古式魔法師に彼らの教導を任せることとした。これまでは現代魔法主体の学校だったが、その二校は古式魔法主体の傾向となる。尤も、魔法理論は悠元が確立したものを採用している。
大宰府の聖凛(せいりん)高等学院、京都の城山(じょうざん)高等学院は今年度の競技会には選手として参加はせず、招待という形で競技会の見学は許可する。だが、来年度はこの二校も加えた12校で競技会の頂を争うこととなる。
来年度からは『国立魔法科高校・総合魔法競技交流会（通称：総校戦(そうこうせん)）』という形で委員会メンバーの選定も進めており、会場の関係で国防軍からも数人選ぶこととなるが、そこは悠元の専決事項ということで既に選んでいる。
「俺らはまだしも、現1・2年やこれからの一高生の面々は大変だろうな」
「あの、私やアーシャがその影響を真っ先に受けるんだけど」
「別にいいだろうに。どこかの香港系マフィアの賭け事に巻き込まれて選手が負傷したり、どっかの阿呆の企みで人道に悖る兵器を競技のトラップとして繰り出すよりは遥かにマシだ」
「……それを聞くと、わしらも他人事ですまないのじゃが」
「一昨年の九校戦が変に出来すぎてたのは、そのせいだったのですか……」
茉莉花が引き攣った笑みを零しながら呟いた懸念事項に対し、悠元が発した爆弾発言で大方の事情を察してしまった沓子と愛梨が率直な台詞を零したのだった。

シリアスなのにコメディ基調

達也が本来手を出せなかった部分を悠元が担っている為、結果として達也の行動には余裕が生まれていた。その反面、妹が悠元に対して甘えているという現実から苦労を抱えていることになり、原作よりも事態が差し迫る様な性急さは生じていないが、原作で起こり得ていたであろう出来事の矛先を悠元が受けていることについて、達也は「すまない」と謝ることしか出来なかった。

「計画のことはまだいいが、母上から愛人をもう一人抱えてくれって頼まれたんだよな。流石に相手のことを慮ると断ることも出来ん」

「……予想がつくのですけど、誰ですか？」

「四葉真夜」

「……」

「深雪、しっかり」

悠元の口から放たれた愛人候補の名に深雪が笑顔で固まり、それを見た雫が深雪を宥めるように声を掛けた。そして、悠元は盛大にテーブルに突っ伏した。

「なんでだよ。いや、自業自得かもしれんが、相手に対してアプローチとか起こした気など微塵もないんだが……それも、達也の実母だぞ。俺が一番解せねえよ」

「悠元さん……今夜は寝かせませんから」

「深雪、まだ朝だから」

「ツッコむところがそこなの!?」

関係を持ってしまっていることについては今更だが、深雪が変に拗ねたりするよりかは……マシだと思いたい。雫の言葉に対して思わず反応したのは真由美であった。

「母上にまで言われている以上、引き取ること自体は問題ないが……これで七草家現当主が癇癪を起さないか不安でしかない」

「え？　なんであのタヌキが……あー、成程ね」

「心配要りません。もしもの時は私とお姉様であの下賤なお方を叩きのめしますので」

「泉美ちゃん!?」
悠元が真夜を引き取ることによって、元婚約者の七草弘一に対する懸念を口にすると、真由美が事情を察して納得した後、泉美が真由美を自然と巻き込む形で血縁上の父親を叩きのめすと公言し、これには真由美が思わず声を荒げた。
「い、泉美ちゃんは容赦ないですね」
「当然です。私の煌びやかな将来を一度奪ったのは万死に値します。それが例え血の繋がった父親であっても」
「……真由美。七草家の情操教育はどうなってるんだ？」
「言わないで……あのタヌキにそこまで気が回ると思う？」
娘たちを家の発展の為に利用し、自分の後悔まで無意識的に押し付けていた。それを何となく感じていた真由美は悠元の問いかけに対して、せめてもの弁明に似た言葉を発することしか出来なかった。

◇　◇　◇

一昨日の達也が取った行動――――授業中にいきなり立ち上がり、ＣＡＤを天井に向けて構えて魔法を使用した――――を目撃していたのは魔工科のクラスの人間のみで、更にはその後の政府発表から放たれた魔法に対処したのは達也なのではないか、という事実に限りなく近い客観的な噂が流れていた。
達也の実力を知るからこそ、彼に近い友人たちは達也の成した行動について咎めることは一切しなかった。放課後、喫茶店『アイネブリーゼ』でその話題に触れたのは珍しく美月からだった。
「達也さん。あの時の行動からして、達也さんが魔法を対処したのですか？」
「……そうだな。美月の眼は誤魔化せないから言っておくが、あれは紛れもなく戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］だったことは事実だ」
「やはり……まあ、達也なら出来なくは無いと思っていましたし、そのお陰で僕らは全員無事だったのですから」
もし達也が防げなかったとした場合、第一高校に通っている神楽坂、三矢、四葉、六塚、七草、七宝、十文字の七家を確実に敵に回すことになり、四葉の復讐劇すらも軽く上回る蹂躙劇が幕を開けること

になったのだろう。
「うーん、達也君と悠元が進めてるプロジェクトを気に食わないという理由で攻撃したとは思えないし。大方、達也君の魔法の実力に嫉妬でもしたのかしら」
「いや、いくらなんでもそいつは……有り得なくもねえか」
「エリカにレオ……」
　エリカの予想にレオが最初は無いと思ったが、よくよく達也や悠元の実力を考えれば有り得なくもないという予想に行きつき、幹比古は余りに突拍子もない結論に窘めようと思ったが、以前自分が悠元や達也に嫉妬のような気持ちを抱いたことを思い出して、それ以上窘めるのを止めた。
「魔法に嫉妬か。俺からすれば、普通に魔法が使える魔法師が羨ましく思えるんだが」
「例えば、悠元とか？」
「それは最早論じていい範疇の対象じゃないと思っている」
「ん？　喧嘩売ってる？　今なら夏に向けての新作デザートの試食会という形で買ってやるぞ？」
「それを俺が受けてもノーダメージでしかないのだが……」
　達也に対してはダメージが無くとも、達也の婚約者はそうもいかない。悠元のデザートによる被害は後を絶たず、それを食した女性たちの殆どが女性らしさを磨こうと対抗心を燃やすことになり……それが行き着いた先に彼女たちが恋慕する男性たちへの愛を高めていく。
　何が起きることになるのかを察した達也は、諦めたように溜息を吐いた。
「マジでプロ級よね、悠元の作る料理や菓子は。いっそのこと料理店とか開いたら？」
「専門職の仕事を奪うような恥ずかしい真似なんて出来るか。これでも俺はまだまだなんだから」
「……あれで、まだまだ？」
　住んでいるマンションでは家事当番に悠元が含まれることはなく、時折急な用事が入った時にキッチンに立つことがあるわけだが、その

都度悠元の婚約者や愛人たちは彼の作った料理に思わず嫉妬してしまうほどだった。

その中で一番の年長者となる深夜曰く『身も心も掴まれた挙句、胃袋まで掴んでしまうご主人様はズルい存在です』という感想に対し、他の婚約者や愛人たちは納得するように頷いていた。それを聞かされた当の本人はジト目をしていたが。

「雫がそこまで言うってことは、やっぱりってことなんだね」

「ん。お父さんやお母さんですら唸らせる出来栄えの料理なんてそうそうお目にかかれるものじゃない。その意味で悠元はジゴロ」

「やめて。俺の固有名詞をジゴロにしないで」

昨年の話になるが、北山家の屋敷で雫に昼食を作ってあげた所、使用人を介する形で雫の家族にも知れ渡り、その日の夕食（昼は和食だったので、剛三との旅行を通じて覚えた洋食のフルコースにした）を作ったことがあった。

正直財界や政界の会食で舌が肥えている潮にどう評価されるか不安だったが、その潮が一口目を口にした後、思わず『このようなものを食べれるとは、生きていてよかったと本当に思うよ』と言われた。まるで意味が分からなかった。

「北山さんのご実家って、確か財閥のホクザングループの」

「お父さんがそこのトップ。正直、お母さんがあそこまで褒めたのは癪に障ったけど」

「前にも言ったが、俺に人妻を寝取る趣味はないから！」

別に変な薬物とかを混入させた覚えなどないし、食材や調味料も事前に［天神の眼（オシリス・サイト）］で確認して余分なものが入っていないことを確認している。調理技術も欧州各国を訪問した時に剛三の知り合いの料理人から教わった技法を使っているだけに過ぎない。

イタリアやバチカンでの騒ぎの約半年後、剛三に連れられて再訪問したイタリアでは被害を受けた料理店が復活しており、そこで出稼ぎ感覚でアルバイトをしていたが、帰る際に店長から『学校を卒業したらウチで働かないか？』と言われたことがあった。

同じようなことはアメリカやイギリス、フランスやドイツでも言わ

れたことがあったわけだが、フランスの時は〝かの有名なブック〟に三ツ星で載るほどの著名なシェフから直接スカウトされたこともあった。
　とはいえ、自分が目指すのは魔法師なので丁重にお断りした。
「いっそのこと、潮さんが紅音さんを押し倒して弟か妹でも作れば、まだ違うんじゃないかとは思うんだが」
「……」
「雫？　黙っちゃって、どうかしたの？」
「すっかり忘れてたけど、お母さんが妊娠４か月だって」
「雫さんが一番忘れてちゃダメでしょうに……何か見繕って贈っておくよ」
　悠元からすれば紅音は義理の母親になる相手だが、金銭面で困るような相手ではないにせよ、せめてもの礼儀を示しておこうと思っている。というか、時期を逆算すると大体今年２月の頭ぐらい……時期的にはバレンタインデーあたりに仕込んだのだろうと思わなくもない。
「そうやって気遣いを見せれるから、悠元さんはモテるのですよ」
「別に疚しい気持ちとかじゃなく、紅音さんは雫を介せば義理の母親になるであろう人だからな。社交辞令だよ、社交辞令」
「まあ、それが悠元の場合だと好感度を稼ぐ結果に繋がってるけど」
「意味が分からねえ」
　結局、紅音の懐妊については達也たちも合わせる形で何か送ることで決着を見た。
◇　◇　◇
　そんな会話が繰り広げられた後、マンションに帰って来た悠元を一番に出迎えたのは、リーナと一緒に帰って来たセリアだった。彼女がそのまま悠元にしがみ付くように抱き着いた。
「おにいちゃああん……こわかったよぉ……」
「お前のキャラじゃない台詞を吐くのを止めろ。ついでに離れろ」
「お兄ちゃん成分が不足してるので、離れませぇん。なに、興奮しちゃ」
「やかましい」

「あああああ!?　久しぶりのアイアンクロォッ!?」
普通ならば無事を祝うところだろうが、明らかに冗談半分で誘惑までしてきたため、反射的にアイアンクローで黙らせた。なお、セリアの表情は痛がりつつもどこか気分の良さそうな表情を浮かべていた。解せぬ。
ようやく離れてくれたセリアをそのまま米俵でも担ぐかのように肩に乗せ、リビングに移動するとリーナだけでなく黒羽姉弟も居合わせていた。リーナは悠元に担がれているセリアの姿で大方の事情を察して溜息を吐いた。
「あ、悠元。セリアは……ダメみたいね」
「ポンコツなお姉ちゃんに言われたくないのです」
「悠元、殴っていいわ。出来れば本気で」
「お姉ちゃんの鬼畜！　悪魔！　ダメ超人！　でも、お兄ちゃんの拳骨なら」
これ以上放置するとまた良からぬことを言いかねないと判断した悠元は、セリアをソファーに座らせた上でトールハンマー（こめかみグリグリ）をお見舞いし、これを食らったセリアの絶叫がリビングに響き渡ったのだった。
「まったく、そっちはそっちで大事になってるというのに、こんなところにコメディ要素を持ち込むな。達也たちには？」
「先程まで真由美さんが居まして、連絡してくれるとのことです」
「そっか。まあ、何にせよ無事に帰ってこれて何よりだ。リーナ、事情の説明は達也たちが来てからでもいいか？」
「ええ」
それを確認すると、悠元はそのまま自室で私服に着替えてリビングに戻る。同じように私服へ着替えた達也たちも既にリビングへきていた。
「待たせたか？」
「いや、俺も丁度来たばかりだからな。早速だがリーナ、説明してくれるか？」
「無論、そのつもりよ」
原作ならば亜夜子が説明していたが、リーナが基地の叛乱に乗じて

逃げ出したため、そこまで精神的な動揺が少なかったからこそリーナは自ら見たものや聞いたことをそのまま伝えた。
「ＵＳＮＡというか、ＵＳＮＡ軍の叛乱か。それも、今度は隊の隊長・副隊長クラスともなると、少しは厄介だな」
「す、少しって……まあ、悠元からしたらそうなるわよね」
何せ、悠元の実力はリーナ自身も知っている。数年前に基地への侵入者を対処した時、リーナが詳細不明の魔法によって気絶させられたことがあった。顧傑の事件の際にリーナへその情報――――基地に侵入したのは悠元であり、リーナを倒したのも悠元の魔法によるもの――――を開示したが、それを聞いたリーナは最早納得せざるを得なかったほどだった。
「単に実力だけで言えばな。だが、問題はパラサイトだ……」
「お兄ちゃん？　どうかしたの？」
「あー、セリアとリーナには話しておかないといけない事項があってな……アルフレッド・ストライフって名前に聞き覚えはあるか？　もしくは、アルフレッド・フォーマルハウトという名に」
リーナとセリアが知らぬはずなどない。何せ、一昨年のクリスマス前にパラサイト化して処断した当事者とそれに近しい関係者なだけに、フォーマルハウトの名を悠元が出したことにリーナが思わず動揺を覚えていた。
「フレディ？　フレディがどうかしたの？」
「簡潔に言うと、聖遺物（レリック）の力でこの世界に飛ばされてきた。それも、パラサイト化する前の〝過去の彼〟がだ」
「え、ええ？　ＵＳＮＡでも聞いたことのない現象なんだけど？」
リーナとセリアにとっては、パラサイトに関わることになった因縁の相手。まさか、殺したはずの相手がパラサイト化する前の時代から飛んできたと言われても、正直困る話だった。だが、リーナは隣にいる達也の表情でそれが嘘ではないと察してしまった。
「俺も未知数過ぎるし、レリックは俺が厳重に管理することにした。しかも、〝並行世界の桜井水波〟と〝並行世界の九島光宣〟まで呼び込んでしまった。もう意味が分からないわ」

「……共通点はアレだね。お姉ちゃんと面識を持つであろう人物たち」
「それを言ったらセリアだって同じじゃないの!?」
　話を戻すが、セリアが積極的にリーナの救出に関与しなかったのは、セリアはセリアで別件を片付けていたからだ。それはＵＳＮＡ大統領からの依頼らしく、何でもＵＳＮＡ国内にあるレリック管理のシステム構築をセリアに頼んでいた。
　その代わり、救出には剛三が出張ってくる形となったが、スターズ本部基地は機能がかなり麻痺した状態で、しかもその事実は大統領府（ホワイトハウス）や国防総省（ペンタゴン）にまで事態が知られている。
　ただ、スターズがＵＳＮＡ軍の主力である事実と国家に対して明確な損益を被っていない点、そして達也の戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］を排除すべきという強硬的な意見が参謀本部にも存在することで、国家の舵取りをするにしても〝進退を決めても地獄〟という有様でしかない。
「で、ベンたちは予想通りミッドウェー刑務所に禁固刑で収監されるみたいだね。表向きの理由は〝外征任務〟という形でだけど」
「セリア、いつの間にそこまで調べてたのよ？」
「私が今までやってきた仕事なら、それぐらい朝飯前なのですよ、ワトソン君」
　セリアが調べ上げた情報では、原作通りの面々がパラサイト化されているのが確認された。そして、リーナたちと同じ輸送機で日本入りしたジェラルド・メイトリクス大佐なる人物の情報によると、彼の魔法師の親友がダラスの研究者として当日実験に参加したが、彼はそのまま行方を晦ましたらしい。
「名前はエルドレッド・バラッド……ん？　もしかして、あの人の親族か？」
「悠元、心当たりがあるのか？」
「まあ、爺さん絡みなのは言うに及ばずだが」
　ＵＳＮＡ内を横断する際、立ち寄ることになったロッキー山脈の麓にある小さな集落。その集落の長が名乗っていた名字がバラッド

だった。とはいえ、同じ名字などザラにある為、このことが直接関与しているとは限らない。
「だが、杞憂とも思えん。上泉家の兄さんにはメールで知らせておく。それで、リーナに関してだが……いっそのこと帰化の手続きを進める」
「え、ええ？　迷惑じゃないの？」
「忘れたのかリーナ。今の俺がどういう存在なのか」
魔法界では神楽坂家現当主にして九島烈から引き継いだ師族会議議長の座にいて、公的にはトライローズ・エレクトロニクスの代表取締役兼理事長。更には国防三軍の特務大将として就任（空軍・海軍も十山家の一件で悠元を特務大将に昇進させた）し、『元老院』の四大老として就任している。
そして、現在世界で存在する［十三使徒］の戦略級魔法全てを使うことが出来る唯一無二の魔法師……なお、そんな彼が一番戦いたくない相手が達也であり、達也としても一番戦いたくない相手が悠元という始末。
その結論に至る最大の理由が深雪なのは言うに及ばずで、真夜や深夜ですら想定しなかった最大の抑止力として機能する現実。尤も、当の本人は悠元に対して従属している始末だが。

いるかどうかも分からない抑止力

リーナの帰化手続き。これ自体は既に魔法師の家へ養子縁組に入る形で進めることが決まっている。本来ならば血筋の関係で九島烈や光宣が関わってくる話なのだが、九島家の処置は既に決まっている以上、そこにリーナを突っ込んで話をややこしくするつもりなどない。

そうなると、問題はリーナの養親となってくれる家をどうするかだが、ここについては〝とある家〟に頼み込むことで決着している。当初は祖父の舞元の関係で三矢家で話を進める予定だったが、ラウラの帰化手続きで苦労を掛けてしまったので別の家に頼むこととした。

「それでリーナ、明日と明後日は予定を空けておいてくれ。その家に挨拶に行かなきゃいけないから」

「え？　私は構わないけど、二日も要することなの？」

「大事を取るという意味で必要な事なんでな。それと、俺の場合は学校でやる作業が大体済んだし、元々授業免除を言い渡されたからな」

こちらから面倒事を頼み込むため、権限で呼び出すということは極力したくない。そして、二日も空けるというのは相手の家のことを慮る意味もあれば、リーナが日本へ帰って来たことに対する国内の反応を見るためでもあった。

「ちなみに文弥と亜夜子ちゃん。四葉本家としてはどのようなスタンスを取るか聞いているか？」

「はい。奥様からは『悠君の指示に従う様に』と受けています」

「……リーナも含めて、来日した面々については本家以外に誰が知っている？」

「神楽坂家と上泉家には。ただ、政府と国防軍には一切知らせていませんが」

文弥や亜夜子の受け答えを見るに、どうやら真夜としては『政府はまだしも、たっくんの手助けもしなかった軍なんて信用できるものですか』と言いたげな癇癪を起していても不思議ではないと判断した。

それも納得できる話だろう、と悠元は一息吐いた。

「悠元、リーナの養子縁組をどこに頼むつもりなのか聞いてもいいか？」
「六塚家に頼もうと思っている。燈也のことを考えれば前向きに対応してくれると思うが……達也、真夜さんにお願いをして一筆認めてもらえるか？」
「それは……成程、そういうことか」
六塚家現当主・六塚温子は真夜のシンパみたいな存在とも言える。なので、真夜に一仕事をお願いすることで、達也（むすこ）との会話の時間を作ってやるだけでなく、温子としても真夜からのお願いとなれば快く受けてくれるだろう。
このことによって六塚家は神楽坂家と四葉家に婚約者を送り出した功績を得ることになる為、十師族としての地位を更に高めることに繋がる。
「悠元さん。リーナの帰化を一気に進める理由は彼女の〝肩書き〟にあるのですか？」
「無論、それもある。だが、一番の理由はリーナを閉じ込める理由を作らないことにある」
原作のアンジェリーナ・クドウ・シールズは、アンジー・シリウスの肩書きが名前と紐付けされているが故に国内外で自由に行動できなかった。だが、彼女が正式に帰化して日本人となってしまえば、少なくとも日本国内で罪を犯さない限りは堂々と生活しても何ら問題はない。
そして、リーナとアンジー・シリウスの関連性はあくまでも噂の領域を出ておらず、三矢家や四葉家、神楽坂家に上泉家、そして彼女の武術教練をしている八雲しか事の詳細を知らない。
国防軍に伝えなかったのは原作知識の部分もあったりするが、自分が受けた仕打ちを鑑みれば、必要以上に義理立てする道理は無いと判断した。
「リーナを帰化させた後、俺の国防軍の権限でリーナを〝達也と深雪の護衛〟という形で雇う。どうせ持っているのならば、活用させてもらうのが筋ってものだ」

「悠元のことだから、リーナに軍の仕事をさせる気はないのだろう？」
「そもそも、俺の場合は開発依頼や緊急の出動が無ければ、いないに等しい将校だからな」
「ある意味タダ働きいいいいっ!?」
　余計なことを抜かしたセリアに再びトールハンマー（こめかみグリグリ）をお見舞いすると、悠元は深い溜息を吐いた。
「話を飛ばしてしまったが、今のリーナとアンジー・シリウスが密接に繋がってしまっている以上、その関係性を明確に断ち切る必要がある。あくまでもＵＳＮＡ軍人になれるのはＵＳＮＡの国籍を有する人間だというのなら、国防軍になれる条件の一つである日本国籍の取得をすることで、リーナを日本人として扱う」
「それで納得しない輩が出た場合はどうする？」
「死んだ方がマシという状態になるまで社会的に殺してやるだけだが？」
「……エグイわね、それ」
　話を聞く限りでは、現大統領はリーナとアンジー・シリウスを切り離す覚悟はとうについていると判断できた。だが、その思いを踏みにじる様にスターズの一部がパラサイト化し、ＵＳＮＡ軍統合参謀本部や国防総省（ペンタゴン）が排除に動き出そうとしている。
　だが、そんな状態であっても悠元の名前が一切出てこないことに当の本人が一番訝しんでいた。
「ただ、おかしいと思ってる部分もある。明らかにトライローズ・エレクトロニクスの理事長として［恒星炉］関係者という形で名乗ったのに、俺に対して一向に牙を剥かないこと自体が不可解でならない。いや、命を狙われないことはいいことだと思うんだがな」
「うーん、私も流石にお兄ちゃんがここまで狙われないとなると、誰かの意思が介在してるんじゃないかって調べたんだけど」
「だけど？」
「ＵＳＮＡ（むこう）の現政権や議会の上院・下院、それに財界が敵対しない意思で統一されているし、軍に関してはお兄ちゃんの脅威度が極端に低いことは確かだけど、誰かが積極的に働いた痕跡は無かったの」

「ええー……」
悠元に対する脅威度の低さの根拠にあるのは、どうやら新ソ連に対する厳しい姿勢なのではないか、とセリアは想定した。そもそも約定を破った挙句、達也に対して危害を加えようとしたから容赦ない反撃を行っただけであり、別にＵＳＮＡへの利を稼いだつもりなどない。
「リーナやセリア、それに第一隊の面子と交戦したにもかかわらず？」
「寧ろ、お兄ちゃんがそのことで報復をしなかったからじゃないかな。確か、ＵＳＮＡ政府との［セブンス・プレイグ］の交渉だってお兄ちゃんのお母さんに頼んでいたでしょ？」
「確かにそうだが……俺が一番納得できん」
今の地位になったのだって、根本を突き詰めれば達也の味方になろうという意思が根底に存在している。とはいえ、ここまで相手から敵対されないというのは不可解でしかなかった。
いや、敵対したという意味では『ブランシュ』などといったテロリスト連中から謂れもない因縁を吹っかけられたりした。外国での因縁は大概剛三（じいさん）経由だったので、出来ればノーカウントにしたい。
あと、強いて言えば国防軍情報部もとい十山家ぐらいだが、既に内閣の厳重な管理下に置かれた彼らに待っているのは……それ以上関与する気も無いので、無関心を貫くことにした。
「新ソ連に対してあれだけ報復しておいた上、九校戦の成績や母上のことも鑑みれば、俺が脅威に見られてもおかしくはない筈なんだが」
「多分あれじゃないかな。史上最強の生物理論（ハ○マユ○ジロウ）」
「強すぎて触れたくもないって……俺は世界最強の肩書きに興味なんてないんだが」
「そうやって一切慢心しないのが、却って存在を捻じ曲げているのかもしれんがな」
何せ、パラサイト事件の時は世界屈指とも言えるＵＳＮＡの軍事衛星ですら存在を捉えることが極めて難しい。いるかどうかも分からないという意味で、悠元の存在は既に一種の抑止力として機能している事実に、当の本人は深い溜息を吐いた。
「いずれにせよ、リーナには一緒についてきてもらうこととなる。達

也はどうする？」
「そうだな……俺は東京に残ろう。悠元がいて間違いが起きるはずがないからな」
「そんな事態、俺が勘弁願いたいわ」
いくらなんでも親友の婚約者を寝取る趣味なんてないという悠元の発言に対し、周囲からは苦笑が漏れたのだった。
◇　◇　◇
翌日、悠元とリーナはリニア新幹線に乗っていた。無論、二人は向かい合う形で座っている。悠元からすれば義理の兄嫁かつ義姉で、リーナからしたら将来の夫の義弟にして妹婿。誕生日からしても悠元が弟の立場になるが、リーナにとっては先日の司波家の一件で力関係を悟り、悠元を兄のように見ている節があった。
無論、そのことを一々咎める気はない訳だが。
「そういえば悠元、どうして直接会いに行くの？　師族会議議長なのだから、別に通信でもいいでしょうに」
「通信だけで済ませられない内容もお願いするつもりだったからな」
通信で済ませればいいのではないか、という疑問もあるだろうが、六塚家に悠元自ら赴くのは別の理由もあった。それは、実力的にかなりの伸びを見せている燈也に戦略級魔法の提供を行う算段を立てるつもりだからだ。
現状、日本人で戦略級魔法を使えるのは以下の面子となる。
○神楽坂悠元（[天鏡霧消（ミラー・ディスパージョン）]、[星天極光鳳（スターライトブレイカー）]、[太極八卦陣（コスモ・ノヴァ）]など）
○司波達也（[質量爆散（マテリアル・バースト）]、[瞬速極散（ソニック・アクセラレーション）]）
○上泉剛三（[雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）]）
○神楽坂千姫（[神無月読（かんなづくよみ）]）
○五輪澪（国家公認戦略級魔法師：[深淵（アビス）]）
○エクセリア・シールズ〈九重瀬理亜〉（[ヘビィ・メタル・バースト]、[リバース・ヘビィ・メタル・バースト]）
国家非公認も含めれば、単独で戦略級魔法を行使できるのが六人という陣容の厚さだが、このうち二人が既に８０歳代という高齢を考えると、次が十代ないし二十代という状態。実に最大で６０歳以上も開

いている状態でよく独立国家としての体を保てていただろうと思う。
寧ろ、原作だと達也が出てくるまで五輪澪しかいなかった状態の日本。こんな状態を作り出した責任は、国の中枢に関わる者すべての責任としか言いようがないだろう。
話を戻すが、都心・関東圏に戦略級魔法師が集中している状態を少しでも解消するべく、新ソ連に対しての抑止という意味で北陸の一条家、山陰の一色家、東北の六塚家、そして北海道の七宝家に魔法技術を提供する。
将輝だけが得られていた恩恵を日本海側および新ソ連の脅威を受けやすい他の十師族にも享受させることで、国としての護りを強固なものとする。ここから悠元や達也が戦略級魔法を放つことも考えたが、それよりも現地で対処できるのならばそうしてもらったほうがいいという算段があった。
「今回の予定を二日にしたのは、六塚家だけでなく一条家にも立ち寄る予定だからだ。なので、今回の旅についてはリーナの肩書きを俺の護衛という形にした」
「……私より強い護衛対象なんてどうなのよ？」
「それは達也や深雪も味わったことだから」
深雪に武術を教える段取りを組むことになったのが最たる例で、『深雪君が達也君よりも強くなる図は僕が一番見てみたいからね』と八雲から言われたことは今でも覚えている。ただ、あの無敵超人を地で行く達也を超えられるかどうかという点については……一般的な魔法師の基準で行けば超えられる可能性はあるかも知れないが。
「達也にはあの後で内密に話したが、俺と将輝は深雪絡みで因縁を抱えているからな。尤も、顧傑の事件後に模擬戦を挑まれて、向こうの条件を全部呑んだ状態でボッコボコにしてやったが」
「その映像は達也にも見せてもらったけど、あんな波状攻撃はベンでも無理でしょうね」
「見たのか、アレを。俺からしたら半分腹いせの産物だからな」
リーナが見た映像――それは悠元と将輝の模擬戦で、将輝の魔法を封殺した上で悠元による魔法の波状攻撃で将輝を叩きのめす構図。

魔法の絨毯爆撃とも言える悠元の攻撃に、さしもの達也ですら引いていたのは記憶に新しい。
「達也ですら『これを見て耐えられたら凄いことだ』と言っていたわ……深雪に聞いたら目を輝かせて散々自慢されたけど」
「そこまでしても諦めてないって友人の真紅郎（ジョージ）から聞いたときは、互いに深いため息が出たほどだけど」
「ジョージって、あの［カーディナル・ジョージ］？」
「ああ、そのジョージだ」
　将輝が金沢に帰った後、真紅郎から来た連絡では『どうしたらいいのか分からない』と言いたげな相談事というか、愚痴にも近い呟きを聞く羽目となった。そもそも、深雪に振られたという事実を『司波さんに振られたのは、神楽坂との婚約のせいだ』と思っている節があると聞かされた時は引き攣った笑みが出たほどだった。
「どうしても埒が明かないと判断した場合は、家の面子なんて全部棚上げして将輝をぶん殴る。自分が犯したヘマに対して素直に謝れない奴に深雪を素直に渡せるか……どうした？」
「いや、深雪が惚れる理由も分かってしまうって思ったのよ。セリアの場合はいろんな事情込みなんでしょうけど」
「さいですか」
　リーナの情報をセリアが読めるのだから、その逆も然り。図らずも悠元とセリアが前世の従兄妹の関係だと知った時、リーナは小説や漫画が現実になったのだと思ってしまうほどで、必要以上の追及をしなかった。

◇　◇　◇

　仙台駅で降り、軽めの食事を済ませてそのまま六塚家に出向くこととなった。仙台市郊外に建てられた六塚家の屋敷だが、これにはリーナが見たままの感想を漏らした。
「これって、一般的な家屋よね？」
「流石に敷地の大きさからして大きいとは思うが」
　洋風の屋敷というよりは、周囲の景観を意識して武家屋敷を改造したような平屋の趣を見せていた。

朝一番に四葉本家へ飛んで真夜から書状を受け取る際に聞いたことだが、現当主の祖父に当たる人物が何でも伊達(だて)氏に連なる系譜だったらしく、剛三の母親とその人物が従兄妹の関係にあったらしい。

その為、六塚家の屋敷がこうなっていても何ら不思議ではなかった。

ともあれ、インターホンを押すと女性の声が聞こえてきて、『話は伺っております、中にお入りください』と声の後に門のロックが開いたのでそのまま敷地の中に入る。すると、玄関の扉が開いて姿を見せたのは、六塚家当主・六塚温子その人だった。

「六塚殿、此度は急なアポと訪問をしてしまい、大変恐縮でございます」

「いえ、神楽坂殿。四葉殿からも簡単な事情は既に伺っております。そして、そちらが」

「初めまして、九島烈の姪孫のアンジェリーナ・クドウ・シールズと申します」

「成程、九島閣下の……六塚家当主・六塚温子です。さて、中にお入りください」

簡単な自己紹介を交わした後、応接室に通された悠元とリーナが隣同士で座り、その向かい側に温子が座る。持て成しのコーヒーと茶菓子が置かれて使用人が退室したのを確認すると、悠元は懐から書状をテーブルに置いた。

「こちらは四葉真夜殿から六塚殿に宛てた書状にてございます」

「四葉殿の……拝見いたします」

温子が書状を手に取り、どこか嬉しそうに書状を読み進めた後、包みに仕舞い込んだ上で悠元とリーナに視線を向けた。

「事情は把握いたしました。神楽坂殿と四葉殿の頼みとあれば、断るのも失礼でしょう。縁組の手続きについては如何程に？」

「法的な手続きは彼女が四葉家次期当主殿の婚約者となった時点で既に整っていました。ですので、六塚家で養子縁組の手続きにサインして頂ければ、１週間以内に終わる話となっています」

今年初めの時点でリーナに帰化の意思があることは確認している

し、達也の婚約序列を考えるとリーナが帰化していれば法的な問題もなくなると考え、春までに殆どの手続き準備を終えていた。ただ、ラウラの帰化問題が湧いてしまったため、リーナの帰化について一旦棚上げとなった。

悠元は話しつつ、予め持ち込んでいた鞄から封筒を取り出して温子に差し出した。

「書類についてはこちらに。六塚殿がサインするだけです」

「……ここまで手際がいいと、今代の議長殿は実に働き者ですね。私も見習わないといけません」

「六塚殿はまだお若いのですから、そう仰るのはどうかと思いますが」

（……ホント、人の心を掴むのが上手いわよね）

悠元と温子のやり取りを見て、同じ十代なのに大の大人たちと対等に渡り合えている悠元を羨ましそうに見つめるリーナだった。

一条家への訪問

六塚家が担う手続きのサインは終わったため、悠元は六塚家を出たところで鞄に仕舞う振りをして［鏡の扉（ミラーゲート）］で書類の入った封筒を神楽坂家本邸に飛ばした。そして、その上でリーナを見やった。

「じゃあ、ここからは俺一人で動くことになるから、リーナには安全に帰ってもらう。ここから起こることは秘密にしてほしい」

「……多分、悠元の魔法のことなんでしょうけど、それを断れる理由がないじゃないの」

「じゃあオーケーということで」

人目のいないところで［鏡の扉（ミラーゲート）］を発動させ、リーナを潜らせた。接続先は達也の部屋に設定して飛ばしたので、多分問題はないだろう。なお、その直後ぐらいに達也から連絡が来て『心臓に悪いから控えてほしい』と言われたのはここだけの話。

（しかし、光宣のことで変にトラブルが起きないのがここまで楽になるとは……）

ＵＳＮＡではパラサイトのことで再び慌ただしくなっているというのに、真一（九島光宣）を味方に引き入れることが出来たため、そこまで慌ただしくないというのが救いだった。

ただ、どこから話を聞きつけたのか、『元老院』の元老たちが口煩く喚いていた。彼らの言い分は分からなくもないが、自ら排除できるだけの実力もない人間が命を惜しむのなら、古式魔法師としての矜持はないのかと苦言を呈したくなるほどだった。

四大老の座を継いだことも喚いていたが、千姫が高齢という理由で座を継いだことに何の問題があるのかと尋ねたい。

（いずれにせよ、事を片付けるのはエドワード・クラークとベゾブラゾフのことに決着をつけてからになる）

最終的に排除する方針に変更はない。だが、エドワード・クラークはまだしもベゾブラゾフを討ったことで新ソ連が余計な行動を起こさないように、その為の抑止力として一条家に魔法技術を提供する。

金沢駅に着くと、悠元はそのまま一条家の屋敷に赴いた。前もって

会談の要請をしていたため、一条家側は現当主の剛毅が自ら出迎えてくれた。
「一条殿、此度は感謝します」
「いえ、こちらとしても礼を欠く訳にはいきませんでしたので。ただ、将輝は学校がありますので不在ですが」
「お気になさらず」
武家屋敷風建築となっている来客の為の区画にある長い回り廊下を歩き、辿り着いた先は座敷であった。剛毅の言葉に従う形で悠元が敷かれた座布団に腰を下ろした。
「先日お伺いした件については、此方としても異存はありません。将輝としては思うところもあるでしょうが、そこは将来一条を継ぐ者として泥水を啜ってもらう他ないと考えております」
「一条家の家内の問題は、此方に被害が及ばなければ穏便に解決して頂けることを切に願ってやみません」
「……その言い分ですと、既にご存知のようですな」
悠元が一条家を訪れたのは、単に剛毅と会談を持って今後の魔法技術提供に関する話を詰めるだけではなかった。悠元にとっては無視できないこと――――将輝が未だに深雪のことを諦めきれていない問題を一条家がどう思っているのかを問い質す為だった。
「師族会議では話題に触れませんでしたが、顧傑の事件の際に一高へ留学していた将輝から勝負を挑まれました。向こうの条件全てを呑んだ上で私が叩きのめし、それで全て解決したものと思っていたのですが……吉祥寺真紅郎とは個人的な誼で連絡をすることがあるのですが、その際に将輝のことも聞きました」
「そうですか……神楽坂殿は、一条家に対して如何なる処罰をお求めになるのですか？」
息子に自立を促す意味で半ば放任主義とも言える教育方針を取って来た剛毅からすれば、将輝の余りにも諦めが悪すぎることに対して頭を抱えていた。この件絡みでは正月に娘の茜を怒らせたことに加え、妻の美登里からも手厳しい苦言を呈された。
苦し紛れながらも出た剛毅の問いかけに対して、悠元は首を横に

振った。
「新ソ連の状況を鑑みないとしても、佐渡の事情を考えれば抑止力として機能する家を外す方が愚策というものです。それに、九島家や七草家のような明確な敵対行為を起こしていないことは把握しておりますので」
「……」
「だが、一条殿の息子が人様の婚約者に色目を使うようなことは許さない。これは婚約者云々としてではなく、彼女を愛している一人の男性としての我儘みたいなものですが」
周りからほぼ丸裸にされた状態で結ばれた婚約とはいえ、悠元が深雪に対しての好意は間違いなく存在する。それを指し示すかのように、恋人関係となってからの司波家での生活は、水波が来るまでほぼ毎日深雪が部屋に来て一緒に寝るような状態だった。単に寝るだけだったのかどうかは……敢えて口に出すことは避けさせてもらうが。
「現在、九校戦の代替として競技交流会の準備を他の八校にプラスして国立魔法医療大学付属湘海高等学院の十校で開催する方向で準備を進めています。無論、私も選手として出場するつもりですが、もし一条殿の息子と対戦することになったとしたら、容赦なく叩き潰しますので」
現状、競技会の競技は一昨年のスピード・シューティング、クラウド・ボール、アイス・ピラーズ・ブレイク（競技方式は昨年のソロ・ペア方式で実施）、男子限定のモノリス・コード、女子限定のミラージ・バットに加え、昨年のロアー・アンド・ガンナー、更にはレッグボールを更に発展させた透明のフィールドに覆われる形で行われる魔法を使ったサッカー競技のマギテクスボール（レッグボール自体は魔法科高校の授業で行われるため、問題は無いと踏んでいる）を新規競技として提案している。
競技自体は増えるが、選手一人が参加できる競技枠は２つまでという一昨年までの条件を付けている為、将輝が出てくる競技は自ずと絞られることとなる。仮に対戦することとなっても、一昨年や昨年同様に叩き潰すだけの話だが。

「これでも諦めないようなら、家とかの事情を無視した上で男として将輝を鉄拳制裁します……すみません、あまり気分のいい話ではありませんでしたね」
「いえ、神楽坂殿は悪くありません。息子の増長や思い込みに対して厳しく咎めなかった私が責められるべきことであり、神楽坂殿の将来の奥方を諦めきれない愚息の責任でもありますので」
悠元の謝罪に対し、剛毅は自分と将輝の責任であると明言した。そう述べた上で言葉を続ける。
「そういえば、今日はお泊りになられるとか。茜には事情を話しておりますので、彼女もきっと喜ぶでしょう」
「その様子ですと、将輝には？」
「変な諍いになるのを避けるために言っておりません。もしもの時は自分が叱りますので、お気遣いなく」
普通なら、諍いのある家に泊まるとか正気ではないだろう。だが、今後数十年は付き合うことになる一条家から逃げるわけにもいかないし、今回は茜のこともあるのでそうしたに過ぎない。
そうして姿を見せた美登里が悠元を案内する形で出ていくと、剛毅が溜息を吐いた。
「将輝（あのバカ）……分かっているのか？」
剛毅は師族会議で既に何度も悠元と顔を合わせているが、悠元の纏っている雰囲気は最早息子と同年代にありながらも他の十師族当主と同格以上――〝老師〟ですらも及ばない領域にあると感じた。
彼は最早十師族・三矢家三男ではなく、護人・神楽坂家当主。一条家の当主を継ぐ位置にあるだけの将輝とは、魔法技術だけでなく地位ですらも別格の立場。それは、あの九島烈ですらも後継者と公言しただけのことはあると強く感じた。
顧傑の一件後に落ち込んでいた将輝に発破を掛けたまでは良かったが、婚約している相手に振られても尚諦めないというのは、どう取り繕っても殺傷事に発展しかねない最悪の可能性を秘めてしまっている。
そして、それは将輝が想う対象である司波深雪の婚約相手――神

楽坂悠元を怒らせることとなることも、普通ならば理解できる筈なのだ。
九校戦のアイス・ピラーズ・ブレイクで将輝が行使した［爆裂］を無力化出来るだけの防御力を有している時点で、悠元相手に勝てる手段などない。剛毅ですらもそう感じているのに、将輝は悠元に勝てると信じ込んでいる。
「真紅郎君も言っていたが、息子のあの自信は一体何処から出てくるのか疑問だ……」
親友の真紅郎でも分からず、父親の剛毅ですらも理解できない。〝子の心、親知らず〟という状況が実に当て嵌まるような有様に、剛毅は再び溜息を漏らしたのだった。
◇　◇　◇
悠元は美登里に案内される形で客室に着いた。一息ついたところで美登里がお茶請けを用意してくれたので、二人で談笑することとなった。
「にしても、悠元君も普通なら学校に通っていてもおかしくないでしょう。やっぱり、例の［トーラス・シルバー］の件が大きいのかしら？」
「ええ。その件で百山校長経由で国立魔法大学からお墨付きをもらいました。でも、自分や達也が授業に出ているのは、学ぶ内容如何ではなく〝けじめ〟でもありますから」
学ぶ内容が既に通った道だから学ぶ必要が無い、という大人の意見も分からなくもないが、人様の青春の時間を奪って大人たちの都合のいい様に生きるのは御免被る話だ。きっと、達也も［トーラス・シルバー］の功績を奪うことはまだしも、自分の生き方を誰かに委ねることは許容できなかったのだろうと思う。
「自分は神楽坂家の当主ではありますが、まだ高校生の身分であることも事実です。社会的にズルをして後ろ指を指されるような人生なんて真っ平御免ですので」
「成程ね……ふふっ、茜が惚れるのも無理はない程に弁えているのは、長野佑都を名乗っていた時と変わりませんね」

「名を変えたら生き方まで器用に変えれる人間じゃありませんから」
４年前の初対面の時、剛三の付き添いという体でパーティーに参加はしていたが、将輝や真紅郎と顔を合わせないように振舞っていた筈が、そんな自分を見つけたドレス姿の茜に質問攻めを受けたのは記憶に新しい。
その後、将輝のロリコン発言で関節技を駆使して将輝と真紅郎を締め上げ、二人の親に謝罪したこともそうだが、茜から『私、佑都さんの立派なお嫁さんになります』と発言したことに、傍にいた美登里が思わず笑みを漏らした。
「爺さんの付き添いとはいえ、佐渡侵攻自体は部外者の立場でしたから。それに、ジョージのお祝いも兼ねている席で偉ぶるなんて以ての外です。尤も、主賓の二人を締め上げたのは自分の落ち度でしたが」
「あの時のことは私も見ていましたが、あれは流石にデリカシーが無い息子の過失です。寧ろ、それに対してすぐに謝ることが出来た貴方が息子ならと思ったほどで、こんな息子を持つ三矢殿に思わず嫉妬してしまいそうになりましたから」
「ははは……」
無関心を平気で貫くような雰囲気を漂わせつつ、原作の九校戦における達也のような振る舞いを参考にして会場の壁際にいたのに、まさか逆に目立ってしまう羽目になるとは思いもしなかったのは確かだ。
「後から聞いた話ですけど、茜もあの時は将輝の妹ということで周りの大人たちから声を掛けられることにうんざりしていたようで、そんなときに避難場所として誰かいないかと見つけた先に貴方がいたようでして」
「まあ、主賓が主賓ですからね。うんざりしたくなる気持ちは理解できます。ただ、そこから惚れるまでの過程が理解できないのですが」
関係も持ってしまった今となっては受け入れたが、当時は恋愛に対する感情が皆無だったために、何故そうなるのかという過程が理解できなかった。疑問に感じている悠元に対して、美登里が「ふふっ」と笑みを漏らしながらも答える。
「悠元君はあの時、茜に対して話すことはあっても何処か避けたいよ

うな雰囲気を持っていたじゃない？」
「恋愛に発展したら、折角三矢家で自由になったのに一条家に縛られることになりかねませんし、その当時は恋愛に対して積極的になれませんでしたので」
「それでね、茜が『私って魅力が無いのかな』ってパーティーの後で落ち込んじゃってね。女性として見てくれて無いような雰囲気が茜の恋心に火をつけちゃったようなの」
「ええー……？」
　別に茜を女性として見ていなかったわけではない。あの時のことを思い出すと、『将輝と親戚関係になるのが面倒だ』という感情が根底にあったのは間違いない。ただ、それが回りまわって茜の恋愛感情を奮い立たせたことに悠元は首を傾げた。
「別に茜を女性として見ていなかったわけではありませんよ。強いて言うなら、将輝の親戚になるのは面倒だからという理由がありましたが」
「成程ね。でも、結局は受け入れてくれたことに感謝しているの。茜のこと、どうか幸せにしてあげてね」
「……それは、無論です。一人の男性として、彼女のことは幸せにしてみせます」
　結局は将輝と義理の兄弟関係になってしまう訳だが、茜のことを思うと拒否するわけにはいかなかった。ただ、懸念があるとすれば茜の妹である一条瑠璃が真紅郎に惚れている件ぐらいだが。そのせいで自分にもしょっちゅう相談事が舞い込む。
「将来の義理の息子として述べることがあるとすれば、『あの将輝（バカ）はとっとと恋人の一人ぐらい作って両親を安心させろ』と言ってやりたいですね」
「……悠元君の立場を考えると、一番説得力が生じる言葉ね。でも、恋愛ごとに不器用な剛毅（あのひと）の息子だから、女の子から好かれていても付き合うなんて難しいでしょう」
「今の言葉を聞いている限りですと、美登里さんが一番手厳しいと思いますよ？」

茜と瑠璃が積極的に動いているのは、実際には将輝が恋人を作らないことに美登里が娘に発破を掛けた結果……というのが、内密に剛毅から聞いた話だった。ただ、その結果として生じているのは深雪への恋慕を諦めないという始末。

この場合、茜や瑠璃は無論のこと、美登里や剛毅も悪くない。一番悪いのは、想い人に振られながらも『その時は実力が足りなかったからだ』と勝手に結論付けて人の話を聞かない一条将輝（バカのきわみ）にあるとしか言いようがない。

正直、こんなことで一条家を潰したら逆に馬鹿らしくて変に後悔しそうな気がする。とはいえ、将輝がストーカー化して殺傷事になるのも困る。この辺は真紅郎も言い含めているようだが、親友ですら手を焼いている将輝の頑固さには、ほとほと呆れる。

「そうかもしれませんね。けれども、好きな人に振られて失恋だと思い込みたくないという諦めが悪い子に育てた覚えは私にもないのですよ。責めはあの人に任せておくこととします」

「ひょっとしてですが、耳に挟んだ正月の一件が関与しています？」

「それが大きいでしょうね。あの人には秘密にしていますが、茜が通う中学の校長にお願いをして、来年の春から東京の中学校に通わせますので」

「……さいですか」

茜が東京に引っ越してくるということは、将来的には〝あの人物〟まで東京に来ることも意味する可能性が極めて高い。美登里としては、愛娘の願いを叶えてやりたいという思いを感じ、悠元はただ受け答えすることしか出来なかったのだった。

弱い者虐めは勘弁

客室で一息ついていた悠元だが、暫くしてから剛毅が姿を見せた。剛毅は一息吐くと、悠元に対して頭を下げた。

「お願いをしたいことがある。一条（ウチ）のお抱えの連中を鍛えてやって欲しい。無論、報酬はお支払いする」

「武術指導ということですか。ええ、どうせ部屋にいてもやることが無いので構いませんよ」

剛三の付き添いで新陰流剣武術の師範代として武術教練をしていたことはあるし、一条家お抱えの魔法師に対して教えるのはこれが初めてというわけではない。それでも剛毅が申し訳なさそうに頼み込んだのは、恐らく将輝のことでへそを曲げられる可能性があったからだろう。

「よろしいのですか？」

「別にいいですよ。今の時間帯ですと前田校長もお忙しいでしょうし」

「？　何故そこで前田校長の名前を？」

「成程、ご存知ないようですね。彼女も新陰流剣武術の門下生の一人ですよ」

この世界だと、第三高校の学校長・前田千鶴（まえだちづる）は新陰流剣武術の門下生の一人だった。トラブルで国防海軍を辞めた後、数年ほど高崎の総本山で修行を重ね、そこから魔法教育界に殴りこんだ。

第三高校の尚武の理念は彼女の功績とも言えるだろう。だが、その功績が生徒の気質に繋がるとは必ずしも言えないわけだが。それはともかく、悠元は立ち上がった。

「着替えますので、数分ほどいただけますか？」

「分かりました。では、扉の前で待っておりますので」

別にそこまで律儀にしなくてもいいとは思うが、彼の性格を考えると仕方が無いと思いながら動きやすい恰好に着替える。そうして客室を出ると剛毅は言葉の通りに待っており、彼に続く形で一条家の魔法師が訓練をしている訓練場に案内された。

そうして始まった魔法師に対する武術教練。剛毅は未だ知らないが、悠元は多数の敵を相手に戦い、生き延びてきた実力者。彼は一条家の魔法師に対して、こう言い放った。
「一条家は新ソ連の軍人に勝てるだけの実力があるのか、試してやろう。言っておくが、自分は剛三(しりあい)の繋がりで新ソ連の特殊部隊相手に生き延びているからな」
ある意味挑発に近い形だが、悠元のその言葉を皮切りに始まる乱取り形式の稽古。一条家側は一切魔法の使用を制限していないが、悠元は魔法を使わずに武術だけで相手を次々と捻じ伏せていく。
正直、最大五桁にも及ぶ剛三の飛ばす音速の斬撃を生き延びれてしまった以上、悠元からすれば約１００人の魔法師など〝片手間〟に近い。三矢家のように多種類多重魔法が１００人から飛んでくるわけではないのもあるが。
３０分後、悠元の足元には疲労困憊で倒れ込む魔法師で床が埋め尽くされており、さながら死屍累々の有様だった……死人は一切いないが。息を吐く悠元に対し、剛毅が近付いてきた。
「流石ですな、神楽坂殿。ちなみに、先程仰っていたことは……」
「事実ですよ。一条殿なら察しもつくかと思われますが」
「成程、そう言うことでしたら理解できますな」
剛毅は剛三と悠元の関係を知っている為、悠元が述べたことに嘘や偽りが含まれていないと直ぐに察した。剛毅は魔法師たちに声を掛けて立ち上がらせ、今日の武術教練は終了した。そのまま剛毅に案内される形で訓練場から一条家の屋敷に戻ると、時間は既に夕方だった。
悠元はシャワーで汗を流し、私服に着替え終えると扉の向こうから何かにぶつかる音が聞こえた後、ノックの音が鳴った。そのまま入室を促すと、姿を見せたのは婚約者の一人である一条茜だった。
「悠元兄様、お久しぶりです！」
「ああ、久しぶり。で、さっきの盛大な音は……ああ」
悠元は開いた扉の先で横たわる将輝の姿と、それを介抱する形の真紅郎を見て大方の事情を察しつつ、抱き着いてきた茜の頭を撫でてい

た。茜は少し驚くも、嬉しそうに抱き着く力を強めていた。
とはいえ、そのまま放置するのもアレなので、茜の気が済んで離れた後で将輝を客室に引き摺り込んだ。何とか起き上がった将輝を宥めるために簡潔な事情説明をした後、将輝の言い分を聞いた時点で悠元は深い溜息を吐いた。
「――それはお前が悪いだろ」
「いや、何でだよ!?」
「俺は別に命に直結するようなことでもない限り、多少の悪口なんて許容する。だが、俺が許しても茜ちゃんが許すかはまた別の問題だ」
将輝は真紅郎と一緒に帰宅すると、嬉しそうに歩いている茜を見つけた。茜から悠元の来訪を聞いた将輝が茜に詰め寄った訳だが、余りにもしつこい有様に茜がビンタで将輝を追い払った。その衝撃で将輝が壁に激突し、横たわる羽目となった。
同じように妹を持つ身として、悠元は率直な言葉を吐き捨てるように言い放った。
「そもそも、実の妹に対してデリカシーが無さすぎるだろう。もしかして、シスコンの気でもあったりするのか？」
「そんなものはない！　……それよりも神楽坂、お前も学校があるんじゃないのか？」
「[トーラス・シルバー]の一件で俺も授業免除を言い渡されたからな。それも、国立魔法大学からのお達しだ。だから、こうして出歩けるわけだ」
話題は悠元が口にした[トーラス・シルバー]の件について。当然、九校戦や論文コンペで達也の凄さを目の当たりにしていた真紅郎が尋ねる。
「一昨年の九校戦や論文コンペで司波達也の凄さは身に染みていましたが、君もまさか[トーラス・シルバー]の一人とは思いもしませんでしたよ」
「変に注目されて命を狙われる面倒事は御免だったからな。だからこそ、[トーラス・シルバー]に俺の名は一文字も使われていない」
念頭にあったのはディオーネー計画への対応の為だが、悠元からす

れば［恒星炉］への道筋の為に［トーラス・シルバー］を位置付けたのであって、それ自体を目的とすることは避けた。
　ただ、昨年の実験でも結構目立ったのに、結局達也は狙われているのに悠元はその対象にすら置かれていない。
「一昨年の時点で十師族の一角として目立つことが分かっていたというのもあるけどな。尤も、一時的に十師族を抜けたものの、ある意味返り咲いたわけだが」
「将輝から聞きましたけど、師族会議現議長ですか……あの〝老師〟が認めたというのも凄いです。尤も、隣の親友は納得いっていないようですが」
「納得がいっていない訳じゃない。九校戦で俺に勝ったとしても、実戦はまた――――」
　真紅郎は悠元の異質さを理解している為か、納得していた。だが、それでも納得していない将輝に対し、悠元は衝撃的な事実を口にした。
「将輝、以前京都で伝えたことは覚えているな？」
「え？　あ、ああ。確か国防陸軍の特務士官だと言っていたが……それが何と関係あるんだ？」
「5年前の沖縄海戦、それと一昨年の『灼熱と極光のハロウィン』。俺は国家非公認戦略級魔法師としてその戦いに参陣している」
「なっ!?」
　信じられないような衝撃の事実に対し、将輝は何処か信じられないような表情を浮かべていた。少し考えた後、将輝は飛び出す様に部屋を後にした。閉じられる部屋の扉を見た後、悠元は部屋に残った真紅郎と茜を見やった。
「……追いかけなくていいのか？」
「多分、親父さんのところに行ったと思うから。それで悠元、その話は本当なんだね？」
「嘘は一切ついていないぞ、ジョージ。一昨年については、佐渡島上空から魔法を行使して新ソ連の艦隊を消滅させたからな。言っとくが、このことはこの国における最重要機密だ」

真紅郎は悠元の問いかけにそう答えた上で問うと、悠元はその問いに答えた。戦略級魔法師という事実は国家重要機密に属するという事実を伝えると、二人は静かに頷いた。
「てか、あそこまで意固地になるとか、深雪を諦めていないと言ってるも同じだろう」
「私もそう思うよ。散々兄さんに対して忠告はしてるんだけど、『そんなはずがない！　婚約のせいでああ答えるしかなかったんだ！』の一点張りで」
「……そこまでの気概があるのなら、四葉殿に対して直談判すればいいのに」
確かに、創作物には親の決めた婚約に縛られているせいで不自由な状態となっている可哀想な女性の姿が描かれたりすることはあるし、十師族クラスとなると親の決めた婚約に従わざるを得ないという事情は確かに存在する。
「父さんから聞いた話だと、一条殿に対してこちらの心情は全て伝えたはずなんだが……何時から将輝の頭の中は『親の決めた婚約が本人の事情を鑑みずに全て強制されたもの』となったんだ？」
「それは……悠元が複数の女性を娶ることになったから、深雪に対する愛情が本当にあるのかと疑問に思ってるんじゃないかな？」
「婚約が親のせいなのは否定しないが、嫌な相手だったら断ってるわ」
いくら婚約の段取りが千姫や剛三によるものだとしても、最終的にはお互いの心情を慮る形で結ばれていることを将輝は知らない。それに、申し込みに対して断った数の方が多く、丁重にお断りの書状を全てに送った側の苦労なんて知る筈もないだろう。
「最たる例は千葉家の長女だ。俺は次女のエリカと幼馴染だし、彼女の機嫌を損ねたくもないし、好きでもない相手と婚約なんてしたくないからな」
「……じゃあ、私は良かったの？」
「約束してしまったからな。結果的に婚約者内の序列は低くなったが、それは許してくれ」
「あ、ううん。それはいいの。どうせ兄さんのせいだって分かってる

から」
　茜からすれば、結婚の約束をした相手と結ばれることが嬉しかった。とはいえ、そこに至るまでに実の兄が迷惑を掛けているという事実からすれば、婚約の序列が低くなったとしても甘んじて受けるつもりでいた。
「複数の婚約者を娶ることになったが、それでも序列の一番は深雪以外に考えられん。惚れた弱みと言われたら否定はしないが」
「それを簡単に許容できる悠元は大物だと思うよ」
「最初はそう簡単に割り切った訳じゃないけどな」
　婚約のことは確かに家のことも有るのでほぼ丸投げにしたが、深雪はまだしも雫や姫梨まで娶るとなった時は法律に喧嘩を売ったのかと訝しんだほどだ。そこから沓子や夕歌、セリアまで娶るとなった後は、せめてもの抵抗として嫌な婚約は積極的に断ったが。
　悠元からすれば、一体どのような形ならば将輝が一番納得できるのかという疑問が浮かんでいた。確かに、婚約自体は神楽坂家と四葉家によるものだが、互いの当主が相手の気持ちを理解した上で婚約を結んだ。つまるところ、悠元と深雪の婚約は〝親世代による交際の公認〟を形として成したに過ぎない。
「深雪に対して丁重に断る様言い含めたことはあったが、それでもどう判断するかは深雪に委ねたんだがな。それでいて完膚なきまでに叩きのめされてあの有様とは……」
「やっぱり、悠元が将輝を負かしたんだね？」
「ああ、その認識で間違いない」
　真紅郎がそう訊ねるということは、将輝の中で悠元に負けを認めたくないという心情が働いた結果とも言えなくはない。本来、深雪の心情を将輝がちゃんと理解しているのならば、いくら断られたとはいえ相手を慮って身を引くのが普通なのではないかと思う。
　前世で付き合った恋人を兄に取られることはあったが、それでもお互いに納得がいく形で決着をつけたし、それ以降は兄を責めたり元彼女を付き纏う様なことは一切しなかった。将輝と同じぐらいの歳だった自分がそこまで出来ているのに、将輝に出来ない道理が理解で

きない。
「詳しくは聞かなかったのか？」
「司波深雪さんのことで落ち込んでいたのは直ぐに察したけど、将輝は話したがらなかったからね。そうなると、悠元に何かしら勝負を挑んで負けたんじゃないかって思って」
「別にジョージ相手なら事情ぐらい話すのに」
　別段隠すことではないし、模擬戦を見たエリカ曰く『振られた腹いせで悠元に勝負を挑むなんて、無謀以外の何物でもないじゃない』と述べていた。なお、それを聞いた悠元はジト目でエリカを見ていた。
「親父さんは発破を掛けたけど、将輝がどう解釈したのか……正直、将輝が人様の婚約者を攫うことになったら、僕は恥ずかしくて家から出られなくなるよ」
「まあ、今頃その将輝は一条殿から厳しい説教を受けているかもしれんが」
「……本当に申し訳ありません。家のどうしようもない兄がご迷惑をおかけして」
　結局、将輝がどうなったのかと言えば、同席した夕食では一言も発することなく先に食べ終えてそのまま部屋に戻っていった。いくら魔法の実力が優秀でも、為人は年齢相応の少年だと感じた。まあ、この場合は悠元や達也が年齢に対して不相応の生き方をしてきたせいでもあったりするが。
　風呂に入ってから客室に戻ると、茜が悠元を待ち構えるように客室の前に立っていた。彼女の誘いで茜の私室に立ち入ることになったが、部屋は年相応の少女の部屋といった感じで、壁際には恐らくマーシャル・マジック・アーツの大会で獲得したトロフィーや賞状が置かれていた。
「これは、マーシャル・マジック・アーツの大会で貰ったやつか？」
「うん、そうだよ。って、私がやってることを知ってたの？」
「厳密には知り合いがいてな。そこから聞きかじった程度だよ」
　そうして二人で談笑していたが、ノックの音を聞いて茜が立ち上がり、扉を開けると将輝が姿を見せた。彼の目的が悠元にあることを茜

は察して不満げだが、将輝の表情を見た悠元が二人に近付く。
「何か用か？　昼間のことはあれ以上詳しく話す気はないが」
「……少し、付き合ってくれ」
　そうして振り返って歩いてく将輝。どうせ深雪のことなのは言うに及ばないため、茜を宥めた上で悠元は将輝についていく。そうして二人が辿り着いた先は一条家の敷地内にある中庭。互いにＣＡＤを持っていない状態で相対する二人に対し、将輝が問いかける。
「お前は、司波さんのことをどう思ってるんだ？」
「愛している。無論、一人の異性として。でなければ婚約相手として納得しなかったからな」
「……」
　変な小細工などいらない、と言わんばかりに悠元は直球で答えた。達也ならばいざ知らず、血縁上において神楽坂家の遠縁同士という関係はあるが、それでも婚姻に対して何の問題もないことは事実。
「で、お前が言いたいことは……まあ、聞くまでもないな。それで？　お前は俺に何を要求するんだ？　お前が深雪と添い遂げたいから俺と深雪の婚約を解消しろ、などと馬鹿げたことを言うんじゃないだろうな？」
「それは……あれだけ複数の女性と婚姻を結ぶ神楽坂に、司波さんを幸せに出来る筈なんてない！」
　一夫一妻の原則からすれば、将輝の言い分は日本人らしいものと言えなくはない。だが、将輝は悠元が置かれている状況そのものを否定するかのように叫んだ。
「お前さあ、深雪に丁重に断られておいてまだそんなことを抜かすのか？」
「あれは……お前と結ばれた婚約のせいで断られたに決まってる！」
「……はあ？」
　どうしてこう、十師族というものは恋愛を拗らせる性分でもあるのだろうか、と思う。自由に恋愛が出来ないからこそ、条件に合致する好いた相手を探したいという願いは理解できなくもない。
「将輝、お前の言っていることは深雪の気持ちを踏みにじっているに

等しいぞ。大体、一昨年の九校戦モノリス・コード決勝で達也と幹比古に向けて撃ちこんだオーバーアタックの件を謝罪すらしていないお前に深雪を愛せる資格なんてない」
「そ、それは関係ないだろう!?　俺はお前と違う！　俺なら、彼女の全てをきっと愛せる！　俺の方が、深雪さんにとって相応しい！」
　そうして右手を振りかぶり、悠元に対して殴り掛かる。最早話し合いの範疇に無いと判断した悠元は、将輝の冷静さを欠いた拳を躱し、懐に飛び込んで左手を将輝の鳩尾に撃ち込む。
「がっ……か、かぐ……」
　たった一手。別に武術の技巧無しの殴り合いでも良かったわけだが、悠元の場合は無意識的に［相転移装甲（フェイズシフト）］が発動してしまうため、将輝がいくら殴ろうがノーダメージにしかならない。明らかに弱い者いじめも勘弁だったため、早期決着という形を取った。
　悠元が撃ち込んだ一撃によって意識を手放し、芝生に倒れ込む将輝。息を吐く悠元に対し、近付く人の存在を察しつつ悠元が声を発する。
「全く、躾はしっかりとしていただきたいですね、一条殿？」
「申し訳ありません。まさか、このようなことまでするとは思いませんでした」
　姿を見せたのは剛毅で、中庭の方から悠元と将輝の言い合いが聞こえたため、最悪の事態も想定してＣＡＤまで携帯した上でここに来たようだった。悠元は倒れ込んでいる将輝を見つつ、剛毅に視線を戻した。
「では、彼のことはお任せします。自分は茜ちゃんの機嫌取りをすることにしますので」
「それは……重ね重ね、ご苦労をお掛け致します」
　倒れている将輝のことは剛毅に任せ、悠元は屋敷の中に戻った。すると、屋敷の勝手口のところに茜が立っていて、目を輝かせていた。
「流石兄様、兄さんを一撃で沈めるなんて。ささ、私の部屋に来てください」
「……（将輝、頑張れ）」

よもや、身内からも煙たい様な扱いをされていることに対して、悠元は心なしかほんの少しだけ将輝に同情してしまったのだった。
「……お兄様、私は思うのです。一条さんはとんだ大馬鹿者だと」
「深雪……（これは、ストレスが溜まっているな。悠元、すまない）」
そして、同じ頃に深雪が発した言葉（悠元が一条家に行ったことをリーナから聞いた）を聞いた達也が、悠元に対して心の中で謝罪を口にしたのだった。

通じ合う者同士の邂逅

６月２４日、月曜日。

早朝に金沢を出た悠元は、[鏡の扉(ミラーゲート)]でマンションに直帰した。昨晩は茜から『一緒に寝てほしい』とせがまれたため、これも婚約者としての責任として一夜を過ごしたわけだが。

そのまま自室に入って荷物を置き、リビングに来ると早起きしていた水波と遭遇した。

「おはよう、水波」

「おはようございます、悠元兄様。お早い御帰りですね。今日は学校に行かれますか？」

「いや、今日は別件があるから、深雪の護衛は任せた」

水波にそう伝えた上で、シャワーを浴びる。他の婚約者が乱入してくることは今日に限って無かった（普段は同じく早起きしてくる深雪が突撃してくる）わけだが、シャワーを浴び終えて着替えたところで深雪が脱衣所に入って来た。

「……おはよう、深雪」

「おはようございます、悠元さん。さくばんはおたのしみでしたね」

「何も言い返せないのが悔しいわ」

今の深雪なら何も言わずに理解してしまうため、流石の悠元も婚約者の勘の鋭さに降参のジェスチャーを示した。すると、深雪は口元に手を置いて笑みを零していた。

「別に私は怒っていませんよ。それも悠元さんの甲斐性なのですから」

「……それは、褒めているのか？」

「勿論ですよ」

惚れた弱みと言えば否定できない。ただ、深雪が何かしらストレスを溜め込んでいるのはひしひしと感じていた。心当たりはいくつかあるが、そこまでストレスを蓄積するような出来事は無かった筈だ。

悠元の疑問に対して、深雪は笑顔でこう答える。

「ちなみに、私は一条さんのことをまだ許したわけではありませんの

で。一条さんとの会話は社交辞令ですから」
「さいですか」
多分、一条家に行くということから一昨年の一件を思い出してしまったのだろう。結局、将輝にその事実をぶつけても駄々をこねた挙句、殴り掛かって来たので一撃で沈めたが、深雪には敢えて伝える必要も無いと思いながら会話を続ける。
「で、深雪さんは何をしに？」
「少しシャワーを浴びようと思いまして。悠元さんがお望みなら」
「気持ちだけ受け取っておく。流石に学校の前はマズい」
「むぅ……悠元さんのイケズ」
正直に言えば、このまま深雪を抱きたい衝動は無くもないが、学校を休むような事態は避けるべきだと判断した。深雪もこれには渋々納得しつつも、せめてもの不満を言葉として示したのだった。

◇　◇　◇

悠元が二日も余裕を持たせたのは、一日は六塚家と一条家への事情説明の為。もう一日はリーナを含めた海外からの客人の応対の為だった。滞在期間が不透明の為、その便宜を図る代わりに協力の申し出をするためでもある。
巳焼島の施設内に設けられた会議室のような空間で、悠元はリーナやセリアと同行した魔法師たちと面会する。
「――事情は把握しました。こちらとしても大統領閣下やバランス大佐の意向も含めればシールズ少佐を喪う事態は避けたい。ジェラルド・メイトリクスは神楽坂殿の要請をお受けします」
「ＳＳＡの軍人として、日本の危機は見逃せません。こちらも異存はないです」
「助かります」
ジェラルドはリーナを殺させないために、ハンスはＳＳＡ大統領からの要請という形でリーナの護衛を引き受けた。ナーディアはハンスが受諾したということで芋蔓式に承諾し、アニエスはジェラルドの誼で話を受けることとなった。
ここで気になるのは、イギリス軍の軍人魔法師であるアニエスが祖

国に帰らず日本まで来たこと。その理由は本人が語ってくれた。
「女王陛下と首相閣下からの特命で、先日の西果新島の件で迷惑を掛けた以上、その償いをするのが英国としての責務ということで日本への派遣を命ぜられました」
「……女王陛下は何か仰っていましたか？」
「神楽坂殿に『会いに行くから待っててね』とラブコールみたいな伝言を託されましたけど……お知り合いですか？」
「数年前にパパラッチを追い払った縁で少し」
　アニエスの口から語られた女王の言葉に悠元が冷や汗を流し、それを見たアニエスは女王が恋した相手というのが目の前にいる少年だと察した。
「求婚されたときは反射的に拳骨を落としましたけど……何で自分に寄ってくるんだって思いますよ」
「えっと、その、幼馴染がご迷惑をお掛けして申し訳ありません」
「つまり禁断の恋って奴だね〝っ!?」
「全く、これから世話になる人をからかうな」
　悠元が諦め気味に呟くと、アニエスが丁重に謝罪した。それを聞いたナーディアが興味津々といった感じで言い放ったところにハンスが拳骨を落とし、一連の流れを見たジェラルドが溜息を吐く。
「はぁ……［パラサイト］のことも有るというのに、暢気すぎる気もしますが」
「まあ、変に気を張って空回るよりは遥かにいいかと」
「それは確かに」
　かたや『灼熱と極光のハロウィン』の片割を担った戦略級魔法師。かたや先代〝シリウス〟の力を受け継いだ戦嫌いの魔法師。心なしか、互いに仲良くなれるのではという気がした。
「暫くこの島で生活してもらうこととなりますが、必要なものがあれば遠慮なく仰ってください。極力不自由を強いるつもりはないですし、リーナを守る対価もとい必要経費に糸目は付けないので」
「ちなみにですけど、予算は如何程？」
「1兆円」

「……え？」
悠元の口から言い放たれた金額にナーディアのみならず他の面々も驚くが、現時点で戦略級魔法師クラスが最低でも四人プラスリーナとセリアまで加わると、六人相手に1兆円を支払うのは十分元が取れるどころか、逆に安い位だ。核兵器の管理などを鑑みれば、国家予算規模の金額をつぎ込んでも元が取れるどころの話ではない。
補足だが、これまで達也が戦略級魔法を行使したり、独立魔装大隊として活動した際の報酬は悠元の国防軍将校の給与から支払っていた。ただ、今年の春からは蘇我の手引きでこれまでの功績の未払い分も含めて達也に直接支払われたが、当の本人は困惑していた。
「最低数か月の予定とはいえ、戦略級魔法師クラスを滞在させるとなると、慣例に照らし合わせて将校相当の待遇が求められます。ただ、内密の滞在なので政府から支払わせるつもりもありません。となれば、ポケットマネーから出した方がまだいいと判断したまでです」
「……神楽坂さんって、実は金持ち？」
「金目当てならお断りだぞ。邪な気を起こさないようにタイキックをくらわすが」
「あ、そういうつもりはないですので（心なしか、嫌な予感がしたんだけど……）」
言葉遣いが砕けているが、互いに実力を肌で感じてしまったからこそ、悠元のほうから謙ることを止めた。ナーディアは興味本位で尋ねただけだが、悠元の言葉を聞いて嫌な予感を察したためか、大人しく引き下がった。
「神楽坂さん、一つ聞きたいことがあります」
「悠元でいい。それで、メイトリクス大佐殿は何か聞きたいのか？」
「自分もジェラルドでいいです……貴方は『灼熱と極光のハロウィン』に関わった戦略級魔法師なのか？」
「ああ、その通りだ。そちらの国で名づけた［シャイニング・バスター］――正式名称は［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］の術者にして、かの英雄である上泉剛三の孫が自分だ」
あっさりと認めるのはどうかという疑問は出るだろうが、相手に

リーナの守りを任せる以上はこちらも切れるカードは切る。そもそも、エドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの処分が済んだら正式に名乗りを上げることは決めている為、ここにいる面々に対しては、所属する国家に対する〝釘差し〟も込めている。
「上泉殿の孫……もしや、伯父――――ブレスティーロ大統領が仰っていた少年というのは」
「それは自分だ。尤も、地方政府に壊滅的な打撃を与えたのは祖父であって、自分は襲撃してきたゲリラ兵を叩き伏せたに過ぎないが」
剛三の存在によって南アメリカとアフリカに国家が形成され、新ソ連は大きな打撃を受け、ＵＳＮＡは混乱の極みにある。大漢（ダーハン）の件もそうだが、たった一人で国家の趨勢を逆転するなどとは誰も予想出来ないだろう。
「成程、悠元さんがあの人と一緒に居たのは、その実力があったからですか」
「修行も兼ねて半ば強引に連れ出されたことは否定しない。正直、他の人だったら普通に死んでもおかしくない」
「……英雄が遥か彼方の存在に思えてしまいます」
それが普通の反応だと思うし、英雄の中でも剛三と千姫は別格だろう。奏姫の場合は二人の陰に隠れてしまっているが、核兵器を瞬く間に無力化してしまう実力を有しており、天神魔法の技術を応用してウランやプルトニウムを貴金属に変えてしまう原子構成組換魔法［放射錬金（ほうしゃれんきん）］が彼女にしか使えない固有魔法ということは千姫から聞いた。
それはともかく、問題は今後の情勢だった。
「［パラサイト］の執着心――――本能的な衝動は驚異的なものと考える。とはいえ、貴方方がそれに対する手段を有しているか。それが最も重要となる」
「つまり、［パラサイト］は物理的な手段では倒せないと？」
「それは昨年ＵＳＮＡのパラサイト化した兵士を対処した我が国が一番理解していることだ。それと、ＵＳＮＡ側も理解していると思われ

るが？」
「ああ。それは知己の魔法師からも確証を得た情報なのは間違いない」
［パラサイト］に対して有効なアプローチは二つ。一つは［パラサイト］と接続する想子情報構造体に干渉すること。そしてもう一つは、霊子情報体そのものに対する攻撃手段を有すること。
前者は魔法式に対して［術式解散（グラム・ディスパージョン）］を使う様なもので、後者は精霊や［天刃霊装］などといった魔法の根源に直接干渉するもの。
「効力の上下はともかく、手段の有無があるかどうかは聞いておきたい。無論、魔法の詳細は伏せて構わないが」
「私は持ってるけど、お兄ちゃんはどうなの？」
「……修得してしまった、と言うべきだな」
［ドラキュラ］と名付けられるぐらいなのだから、当然精神干渉系魔法を有していてもおかしくはない。ナーディアが先んじて答えた後にハンスへ問いかけると、当の本人はまるで〝覚えさせられた〟と言わんばかりに呟いた。
詳しく聞いたところでハンスの心労が嵩むと判断して、悠元はジェラルドとアニエスに視線を向けた。
「私は父方に古式魔法の得手がありますので、当然精神干渉系魔法は会得しています。ジェイはどうなの？　貴方のお母さんが得意だったとは聞いたことが無いんだけど」
「……実はある。奇しくも母が遺した魔法の一つに［パラサイト］を倒す魔法が存在する」
アニエスはともかくとして、ジェラルドの言い方からするに、既に亡くなったジェラルドの母が遺していた魔法の中に［パラサイト］を倒せる魔法があるという事実。現代魔法主体のＵＳＮＡにしては、北米大陸由来の古式魔法にも通じている人間がいてもおかしくはない。
「なら、心配は要らないと判断していいか」
「よろしいのですか？　嘘をついている可能性を考慮しなくていいので？」
「そんな素振りを見せている雰囲気は一切感じなかったからな。最

悪、自分が対処するまでだから」
悠元の場合、［陽光疾走（サンライズ・オーバードライブ）］のきっかけとなった古代文明魔法や天刃霊装があるため、パラサイトの侵食を水際で止めることは十分に可能と判断した。
「それに、この状況で嘘を付けばパラサイト化するリスクを負ったまま戦うことにもなるからな。いくら他国の人間と言えども、寝覚めが悪くなりかねん」
「……その言い方からすると、パラサイト化した兵士が誰かを狙うってことだよね？」
「一番の候補はリーナで、それとほぼ同格なのは俺の親友である司波達也。ただ、向こうも正気とは思えん選択なんだが」
原作だと、達也とリーナが恋仲になるような関係性は達也の情動を考えると極めて難しいが、この世界では二人が恋仲となっている。達也が深雪への［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］のリソースを減らす代わり、リーナへの割合を増やしているのは確認できていた。
その状況で達也を本気で怒らせることがどれだけ危険なのかを連中は理解できていない。態々教えてやる義理もない訳だが。
「やはり、悠元も同じ意見か」
「ジェラルドも？」
「ああ。大体、〝アンジー・シリウス〟を蔑ろにしている時点でＵＳＮＡの落ち度だ。こればかりは俺も庇い切れん」
正確にはクラーク親子の落ち度なのだろうが、今の今まで達也によって消されていない時点で、彼らは達也によって生殺与奪の権利を掌握されていることに気付いていない。恐らく、達也はタイミングを計っているものとみられる。
それは、彼らを切り捨てても自分に不利益が掛からないこと。
「あの、仮にパラサイト化した兵士が攻めてくるとしても、そこまで馬鹿正直に攻めるものなのですか？」
「その一端は昨年の一件で強く感じている」
当時は憑依された対象が下位だったからこそ、その傾向が顕著に出ていた。今回は上位クラスになったとしても、『スターズ』の中では蚊

帳の外に置かれるような立場にいたリーナがいる以上、同様のことが起きるのは間違いないとみている。
「賢くなったのならば、もう少し頭を使えばいいものの……やることは魔法によるゴリ押しばかりだったからな」
「逆に脳筋になってるような気がするんだけど」
「本能的な衝動に基づけば妥当なのだろうが」
パラサイト化した兵士が強気でいられたのは、ＵＳＮＡが元の彼らで戦力勘定を行っていたため。その保険としてリーナを派遣したのだろうが、霊子情報体に対する有効な攻撃手段を用いなかった時点で、最悪の事態に繋がるリスクを日本へ押し付けようとした。
「恐らくだが、リーナの引き渡しに関する何かしらの手を打ってくる。だが、此方からすれば取り合う義理はない。最悪スターズを派遣することも想定はしているが……もしスターズのほぼ全軍が差し向けられた場合、彼らを全員殺すことも辞さない。ジェラルドにとっては酷だろうが」
「いや……この状況でパラサイト化していない保証が無い。それも止むを得ないと思っている。俺の任務はあくまでもシリウス少佐の護衛であって、そこまでの手心を見せる余裕も無いと思っている」
ジェラルドとしても最優先すべきはリーナの身の安全であり、スターズに対する配慮や助命を求める気など無かった。
「それが、ＵＳＮＡが衰退する一途を辿ったとしてもか？」
「行き過ぎた愛国心が国を亡ぼす事例はいくつか存在する。自分だって国が衰退するのは見たくないが、今のＵＳＮＡ（ステイツ）は大国の驕りを捨てる時に来ている……そう考えている」
過去の栄光と、過去に受けた仕打ちの報復への恐怖。新ソ連ですら混乱の極みにあり、それにつられる形でＵＳＮＡも国の存亡にかかわる事態に繋がりつつある。ジェラルドが念頭に置いたのは、過去の遺物であった［セブンス・プレイグ］と［アルカトラズ］の件だろうとみられる。
「日本は最早、第二次大戦直後のような主従の関係など存在せず、一つの独立国家として抑止の力を示した。ＵＳＮＡ（ステイツ）の政府や財界はそれ

を一番理解しているというのに、軍部――それも強硬派の連中は四葉の排除を諦めていない。その対処については悠元の力を借りるつもりはない」
「……そうか。まあ、何か力になれることがあったら言ってくれ。何故だか、俺とお前は似ているような気がしたから」
「……そうだな。主に婚約者が複数になりそうな事態への相談を切に望む」
神楽坂悠元とジェラルド・バランス。生まれた国は違えど、生まれと資質が呼んだ共通の事態を感じ取った二人は互いに握手を交わしたのだった。

即刻シュレッダーに掛けたい気分

悠元との会談を終え、ジェラルドは宛がわれた自室のベッドに腰掛けると、深くため息を吐いた。状況が状況なので待遇に不満はない。離島に建てられたプラントで勤務する関係者向けの寮とはいえ、設備だけ言えばＵＳＮＡ以上。

これだけでも、日本の凄さが身に染みるような心境だった。

（噂などは聞いていたが、改めて目の当たりにすると凄さが実感できた……俺よりも年下なのに、複数の婚約者持ち。俺だったら逃げ出してるな）

実をいうと、ジェラルドも魔法師なので婚姻の話は出るに出ている。リーナとセリアが日本に帰化することで大統領が身内になる事態は回避できたが、ティナ・フェールに関してはワイアット・カーティスが関与していて逃げ出せないし、国防総省（ペンタゴン）では上司絡みで見合いの話も聞こえるほど。

そのどれもが十代半ばから二十歳前後という状態で、明らかに先代〝シリウス〟の血脈を残そうと躍起になっているとしか思えず、それから逃げるためにジェラルドは積極的に海外でエージェントとしての仕事に没頭していた。

「そして、『灼熱と極光のハロウィン』の当事者の一人……最重要容疑者に挙げられながらも存在自体があやふやすぎる［幻影（ファントム）］が彼とはな」

昨年の［パラサイト］事件が起きた時の戦略級魔法師に関する調査では、ＵＳＮＡが誇る軍事衛星ですら欺くため、対象の魔法師の生死すらも謎とされてしまった。そのため、ペンタゴンでは［幻影（ファントム）］というコードで彼を探ることはしていたが、調査は事件終結後に打ち切られた。理由は大統領の鶴の一声によるものだが、詳細は伏せられたままだった。

ジェラルドですら存在しているかどうかも分からない相手、という認識を持っていた。その彼と面識を持ったことで、ジェラルドの中には一つの考えが浮かんでいた。

すると、扉のノック音が聞こえたので入室を促すと、入ってきたのはアニエスだった。
「ジェイ、お邪魔するね」
「ああ、かまわない」
アニエスはそのままジェラルドの横に腰掛ける。普通なら男女の雰囲気なのだろうが、ジェラルドとしてはイギリスに縛られる未来が見えているので手を出そうとしない。
「むー、ここで口説いて押し倒してもいいのに」
「俺の行き先が地獄という名の墓場でしかないだろうに。それで、何か話したいことがあったのか？」
アニエスは不満げだが、『まあ、機会はあるしいっか』と意味深な発言を零しつつもジェラルドに問いかけた。
「リーナさんだっけ。彼女が〝アンジー・シリウス〟なのは知った形になるけど、［十三使徒］を殺そうとする時点で常軌を逸していると思って」
「彼女の場合は現在判明している［十三使徒］の中で劉麗雷（リウリーレイ）に次ぐ年少組の一人だからな」
『灼熱と極光のハロウィン』によって劉雲徳が死亡し、劉麗雷が公表されるまでは間違いなく最年少の［十三使徒］。彼女の愛国心を揺らがせたのは間違いなく司波達也との関わりを経てのことだろうとジェラルドはそう思っている。
だが、そのことと［パラサイト］を呼び込んだことは全く別の問題でしかないとも考えている。
「未だ十代の少女が大人たちよりも力のある立場というのは、どうあっても軋轢を生むのは確かだ。それは魔法という技術が顕在化した現代では顕著に表れている」
「言いなりにならないから殺すって、それって最早奴隷や傀儡の考え方じゃない」
「傀儡か……確かにその通りなんだろうな」
現代魔法の成り立ちからすれば、現代魔法師は力の制約が多い。古式魔法師に何の制約もないといえば嘘になるが、スターズでも古式関

連の軍人魔法師がいるため、彼らも何かと比較されることは少なくなかった。
ジェラルドはその光景を母親――――先代の〝シリウス〟が生きていた時に目の当たりにしていた。そして、何故古式魔法を習得している人間を差別しなければならないのか、という疑問を強く抱いた。
そんなジェラルドが今代の〝シリウス〟を選定する監督官として携わることになった際、リーナを選定するという段階で一度差し止めた。それは彼女の愛国心を疑うようなものではなく、未だ十代の人間に最悪『人殺し』という重責を担わせることで、彼女の精神を崩壊させることに繋がることへの危惧を抱いたからだ。
結局、軍統合参謀本部は〝シリウス〟の穴埋めを急いだ結果、同時に〝ポラリス〟として入ったセリアの行動によって胃薬が手放せなくなった。こればかりは軍上層部の責任であり、ジェラルドもフォローする気など起きなかった。
「言い方は悪いが、今の時代を生きる魔法師は〝軍事の道具〟として生きる道以外の選択肢が少なすぎる。俺は養親のお陰で事なきを得たが、魔法資質を持つ人間全てをフォローできているわけじゃない」
「その一端が欧州での反魔法主義の増長、というわけだね」
「そうだな。そして、国際魔法協会自体もロクに機能していないに等しい以上、魔法師を守れる手段が国家単位で存在しないのも問題だ」
軍事的にかかわる保護は出来ても、実戦レベルにない魔法資質因子の保有者全てを保護しきれていない。そして、反魔法主義はそういった人達までも巻き込んでしまっている。魔法師と因子保有者は必ずしも同じというわけではないが、魔法を忌避したがる人間からすれば、魔法を使える時点で同じに見られてしまう。
「……ディオーネー計画で失った国家の信頼を回復させるとしたら、ここを提示するしかない。アニエス、すまないが席を外す」
「どこに行くの？」
「悠元に話をしてみる。今すぐは無理だろうが、将来の生存のために出来ることはしておきたい」
「なら、私も行くよ。私だって祖国がこのまま没落するのは見たくな

いもの」
「……好きにしろ」
　部屋を出る前に連絡を取ると、悠元は内容を聞いてすぐに会談のセッティングをした。てっきり既に帰っているのかと思われたが、巳焼島の施設を視察してから帰る予定だったために会談が実現した。
「魔法資質因子保有者まで対象を広げた国際的な非政府組織の設立か……自分も考えていた案だが、両国の政府をどうやって説得する？生半可な対価では話を聞くとは思えないが」
「……最悪の場合、俺は抜けることになる〝シリウス〟の後釜となる」
「ジェイ!?」
「アニエス、もう決めたことなんだ。ここまでしなければＵＳＮＡ（スティッ）の連中は納得しないだろうし、彼女に人殺しを強要させたくない」
　ジェラルドが考えていたこと。それは、リーナが帰化して抜けた穴をジェラルドが埋めるというもの。先代〝シリウス〟の実子にして、先代〝カノープス〟の教えを受けた魔法師。そして、その実力はこれから迫りくる脅威を退けることで証明するつもりでいた。
「そこまで決めてるならいいが……ヴィンセントさんはどうする？どうやってイギリスを説得する？」
「私が女王陛下を説得します……ウィリアム・マクロードの孫である私がジェイに嫁ぐことで、祖父の奇行に対する詫びをするとともに、祖父をディオーネー計画から引き離します」
「ここにきてマクロードの身内か……そうなると、俺の母上のことも？」
「聞いてはいますが、あれは曽祖父が完全に悪いかと思いました」
　アニエスは幼馴染である英国の女王を説得することでイギリスをディオーネー計画から引き離しつつ、ＵＳＮＡ軍上層部に対する抑止力としてアニエスがジェラルドに嫁ぐという大胆なプランが提示された。
　マクロードが狙っているのは日本の突出したパワーバランスを抑えたい――――日本の戦略級魔法がイギリスに向けられたくない――――という目論見なので、それは成功する公算が高いだろう。だった

ら、最初から話し合うという選択肢を取らなかった時点で日本に対する敵愾心が少なくないということでもあるが。
尤も、アニエスの言い放った発言に対してジェラルドは完全に頭を抱えていて、他人事とは思えない悠元が憐れむような視線をジェラルドに対して向ける。
「その、まあ、頑張れ」
「……気遣いに感謝する」
尤も、ジェラルドが更に阿鼻叫喚の様相となるのはまた別の話。
◇　◇　◇
その頃、未来の平行世界から来た九島光宣――――真一は伊豆高原の別荘にて烈と将棋を打っていた。考えてみれば、こうやって祖父と魔法のことも含めて勝負をしたことは殆どなかった。それこそ、真一が烈に殺されることを受け入れようとしたのに、烈が死んだということぐらい。
あれは真一からすれば勝負ではなく、最早〝事故〟に近かった。だからこそ、こうやって祖父と向き合うということなど、思いもしなかったことだろう。
「強いな、真一は」
「いえ、油断をすればあっという間に足元を掬われそうですよ」
盤面と烈の顔を交互に見る真一。そんな彼の様子を見た烈が言葉を呟き始める。
「……君のよく知る私も、きっとこうやって穏やかな日々を過ごしたかったのだろうな」
「そう、なのですか？」
「無論、全てを察することはできないがね。私は彼ではないのだから。けれども、真一の知る私が何を考えていたのかは、君を通す形だが朧気ながら見えてくる」
烈は真一から彼の知る九島烈の為人を聞いた。彼が九島家の中でどう行動していたのかを。
無論、真一が全てを把握していたわけではないだろうが、彼が元々いた世界とこの世界での違いを考えたとき、烈の脳裏によぎったのは

剛三や千姫、悠元の存在だった。
「この歳になれば、いくら魔法師と言えども限界というものが否応にも見えてくる。例外というものは存在してしまうわけだが、後天的に力を得た私がここまで無事に生き永らえたこと自体が〝奇跡〟と言うほかない」
「それは……」
「気を遣わずとも良い、真一。誰よりも私がそれを実感していたのだから」
　師族会議を設立したまでは良かったのだが、烈は九島家や光宣の存在を考えるあまり、結果として師族会議の後継を誰に託すかを考える余裕がなかったのだろう。加えて、力を継げなかった子孫世代の穴埋めをやらなければならず、結果として烈が九島家の家督は手放したが、家業の件は捨てきれなかったし、魔法界の重鎮として見守り続けなければならなかった。
「だが、私は幸運だった。光宣を治し、私の立場を継いでくれる若者が現れたことだ。彼は最早、この国において無くてはならぬ人間となった。それが、私と〝真一の知る私〟との決定的な差なのだろう」
　一番理解してくれたであろう実の弟がＵＳＮＡへ出ていき、更には『元老院』との関わりで烈は益々一人になっていってしまった。この世界の九島烈は、上泉剛三や神楽坂千姫の存在があったからこそ悠元に後を託すことができた。
　力こそ恵まれなかったが、人の縁は恵まれた。それを蔑ろにしてしまったからこそ、九島烈という人物は苦悩の連続に死ぬまで見舞われてしまったのだろう……と、烈はそう感じていた。
「魔法師は、良くも悪くも自分で考えて実行せねばならない。誰かの命令に従うのはいたって簡単だが、それは魔法師がただの兵器に成り下がってしまう。私はそれを良しとせず、「パラサイドール」の開発を指示した。それは真一も知っていることだろう」
「……」
「だが、私はそこで思い知らされた。常識の埒外にいる人間相手には、兵器では勝てないのだと。それに、その行動こそが兵器でいることに

甘んじているのではないかとな」
　九島家の作った［パラサイドール］を倒したのは司波達也と神楽坂悠元、そして六塚燈也の三人。次代の魔法界を担うことになる若者たちの力を烈は決して軽んじたわけではなかった。そして、国防軍や剛三、千姫によって蛮行は阻止された。
「正直、私は悩んでいた。師族会議の後を託すのが真言（むすこ）でよいのかと。かと言って、教え子の弘一や真夜へ託すのは確実に軋轢が生じる。若いからと言って六塚殿や十文字殿に託すのも同義。そこに、悠元君が師族会議の舵取りを担ってくれた」
「大変、だったんですね。御祖父様も」
「君が知る私のほうが、よっぽど苦労していただろう。本来なら、彼はもっと青春を謳歌すべきところなのだろうがね。それは無論、真一もだ」
　魔法の資質があるが故に、本来思春期にある少年少女たちが青春を謳歌する時間を奪った。その責任を大人たちが十二分に取れるはずもないのに、責任や義務を押し付ける。その意味で、烈も当事者の一人として言い逃れなどするつもりなどなかった。
「真一、パラサイトになった以上は普通に生きることは難しいかもしれん。だが、私は精一杯生きることを望んでいる……きっと、彼もそれを一番望んでいることだろう」
「御祖父様……」
　烈は真一の頭に手を置いて撫でた。真一のパラサイトのコントロールは十全に働いているため、烈の力が吸い取られるということはなかった。
「そして、王手だ」
「あっ……狡いですよ、お祖父様！」
「はっはっは。それも若さというものだよ」
　油断も隙もあったものではない。第一線を退いても［トリックスター］の名は確実に生きている。真一は不満を漏らしながらも、元の世界で味わう事など無かった祖父との交流を心の底から喜んでいた。
◇　◇　◇

防衛省内の国防陸軍総司令部。その司令官室で蘇我大将と大友参謀長がテーブルを挟む形で相対している。テーブルの上には数枚の紙媒体の書類が置かれていて、二人の表情は晴れない。その理由は、書類に書かれた内容――『アンジー・シリウス少佐の保護要請』というものだった。
「参謀長。この件に関して言うならば、私は見なかったことにしてシュレッダーに掛けたい気分だ。それが一番心労を重ねない方法だと思うのだが」
「それは小官もでありますが……四葉家や神楽坂家、上泉家が関与しているものに触れろとは、ＵＳＮＡも無責任すぎますな」
蘇我大将は内密に悠元から連絡を受け、ＵＳＮＡから脱出した外国籍の軍人魔法師を滞在させる旨を通達された。この時点で神楽坂家の関与は強いと判断して、防衛大臣と総理大臣にこの事実が伝わっている。
流石にすべてを自分一人で抱えるのは辛いため、情報の秘匿性を考えて大友参謀長にだけ話した。その直後にＵＳＮＡからアンジー・シリウスについての要請を受けた。そして、今に至るという形だ。
「第１０１旅団にこのことは？」
「いえ、伝えておりません。佐伯少将の立場を考えれば……」
「そうだな。それにしても、事情も知らせずに［十三使徒］を寄越した……いや、ＵＳＮＡで予期せぬ事態が起きたと考えるのが自然か」
ＵＳＮＡによる介入は今に始まったことではない。だが、ここ最近で言えば年１回以上のペースで日本に来て騒動を引き起こしている。今回のパターンを考えたとき、昨年のパラサイト事件が最も近いと蘇我は考えていた。
「日本に騒動の種を持ち込んだ、ということですかな？」
「もしくは、これから持ち込むつもりなのかもしれん。新ソ連の件もあるというのに、二大国相手に立ち回れとは難しいことを押し付けてくれる……」
新ソ連の件は、ベゾブラゾフに対する反撃を実施したことも悠元から聞かされた。日本に対する攻撃能力を奪うという意味では理に

適っている。そこまでのことをしても疑われはするが暗殺されない彼の異質さは千姫によく似ている、と蘇我は率直にそう感じていた。
「その新ソ連方面ですが、大亜連合側に侵攻の兆しが確認されました。目標は恐らく……」
「新ソ連か。ウラジオストクを抑えれば、半島方面の安全を確保できるからな……だが、ベゾブラゾフが死んだと確認できたわけでもないのに、安易すぎると思うがね」
　ベゾブラゾフの安否についても蘇我は悠元から確認しており、ベゾブラゾフが一時的な戦闘不能状態にあるだけで、死んだわけではないという情報も得ている。情報の有無でここまで判断できる余地が生まれるとなれば、蘇我としても悠元に対する信頼度は完全な頭打ちに近かった。
「とはいえ、火事場泥棒的な衝動で対馬及び九州・奄美・南西諸島方面に動きを見せないとも限らん。講和状態にあるとはいえ、気を抜くなと伝達してくれ。空や海にもこの情報は伝えてくれ」
「了解いたしました」
　結局、アンジー・シリウスの引き渡しの件は軍令部の中で止めることが決定され、第１０１旅団に対して一切この情報が入ることの無いよう〝国家機密に準ずる秘匿〟が厳命された。

目に見えてくる後始末への流れ

６月２５日、火曜日。

悠元は九重寺（きゅうちょうじ）を訪れていた。悠元と八雲は立場で言えば悠元が格上になるが、表向きは一介の高校生と寺の住職。そんな立場であるがゆえに、悠元は表の面子を重んじて態々赴いた。

悠元が山門を潜ると、人の気配は無かった。元々約束や連絡などしていないため、別段こんなことになっても特に文句をつけるつもりなどなかった。

「……門下生がいないと思ったら、そういうことですか」

そう独り言ちると、悠元に突如襲い来る「モノ」。膨大な密度の想子流に対して、悠元は手刀――小指側の刃先に相当する部分に想子の刃を収束させたもの――であっさりと斬り裂く。そして、悠元に攻撃を仕掛けた想子情報体もとい［精霊］が攻撃を仕掛けようとしたところで、悠元が自身の聴覚制御を切る。

「――来い、［応竜］」

目には目を、歯には歯を。悠元の意志に従って顕現した［応竜］は、敵対した風の精霊を鎮圧し、支配権を奪取。支配権を喪失した精霊は逃げるように飛び去ったため、悠元は敵意の有無を確認した後で［応竜］の喚起を解除した。

その手際を褒めるように無人の境内に突如姿を見せたのは、この寺の住職である八雲だった。

「いやはや、ＣＡＤはおろか呪符や道具もなしに精霊を御してしまうとはね。かの安倍晴明の再来と言われても何ら不思議じゃないか」

「九重先生……今のは、達也に対する新たな悪戯の実験ですか？」

「それは否定しないよ」

立ち話もそこそこに、庫裏へ案内された。八雲は悠元の訪問についてもある程度目途はつけていたようで、それに触れながら話を始める。

「アメリカでの出来事は僕も知っているよ。それに、厄介なお客さんが来てしまったようだね」

「まあ、敵対しない方向に持って行けたのは僥倖です。尤も、元老たちは文句を言いそうな気もしますが」
「まあ、あの人たちはね……心配しなくても、僕は悠元君の味方だよ。君に殺し合いなんて挑みたくもないから」
　根底にあるのは剛三から武術や魔法を教わったことだが、変に考えなくても済むというのは非常にありがたかった。正直、光宣の暴走の件がないだけで策を講じる時間が増えたのは非常にありがたいと言う外ない。
「気付いていると思いますが、新ソ連のミサイルサイロを破壊したのは自分です。その関係でベゾブラゾフはモスクワに一度帰ったようです」
「ベゾブラゾフは死んでいないんだね？」
「今の時点で殺した時のリスクが大きすぎますから」
　新ソ連とて、まともに行使できる戦略級魔法を手放すという選択は取れない。かと言って、洗脳などを施せば［トゥマーン・ボンバ］がまともに機能しなくなるという状態に陥る。ベゾブラゾフを単なるパーツとして扱うことはできるだろうが、それではいつか来る限界に耐えられなくなる。
「ディオーネー計画が新ソ連によって明確な頓挫を見せれば、エドワード・クラーク自ら動く状態に陥るでしょう。その状態を作り出すために、自分もベゾブラゾフの排除は先送りにしました」
「……戦略級魔法師として名乗ることはするのかい？」
「ええ。尤も、その時は明かしても問題ない戦略級魔法を用いる形で公表します」
　戦略級魔法師として名乗ることはするが、戦略級魔法の［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］は秘匿する。その代わりとして千姫の戦略級魔法である［神無月読（かんなつくよみ）］の使い手として公表する。
　彼女から既に魔法は教わっており、実演の結果でも千姫から満足のいく言葉を貰えた。ただ、『悠君の魔法を見ちゃうと、私が嫉妬しちゃうぐらいに巧いんだもの』と言われた。解せぬ。
　世界情勢で言うと、まずはＵＳＮＡ。

国防総省内（ペンタゴン）（厳密にはＵＳＮＡ軍内部）では達也を抹殺するべきという意見と、[恒星炉]と抑止力の観点から達也を利用すべきかで二分化してしまっている。どちらにせよ、ＵＳＮＡの視点でしか物を語っていない。剛三の放った魔法の影響でロズウェルのスターズ本部基地は麻痺状態にあり、完全に復旧するまで２週間は要するという推測データを得ている。

ただ、今回の件を達也に押し付ける形で処刑チームを派遣する可能性は残ったままだし、レイモンド・クラークが意見をゴリ押しして来日する可能性もある。ただ、彼がどんな感情を持って行動しているかまでは読めていない。

カノープス少佐をはじめとしたリーナの脱走を幇助したとされる魔法師はミッドウェー刑務所へ移送されたのが確認済。救出すること自体は別に難しくないが、[鏡の扉（ミラーゲート）]はあくまでも最後の保険としつつ、タイミングを見ることとした。

なお、ＵＳＮＡ政府関係は軍の暴走に頭を痛めていた。この辺のガス抜きや抑止をセリアが担っていた形だっただけに、抜けた穴の大きさに痛感したのだろう。その辺のフォローを自分からする気はないが。

「つまり、その時にエドワード・クラークなる人物を殺すということかい？」

「ただで殺しませんよ。ベゾブラゾフには惨たらしい死を与えるつもりですが、エドワード・クラークはＵＳＮＡ政府に〝目で見える形での社会的抹殺〟を要求します」

達也なら殺すことを躊躇わないだろうし、セリアから聞いた原作の情報も自ずと腑に落ちたほどだ。だが、元はＵＳＮＡ自体の問題でもあるため、自浄作用の行使を要求する。それが出来ないというのならば、前以上の大規模買収工作をＵＳＮＡに対して仕掛ける。

今度はマクシミリアン・デバイスを含む魔法関連企業を中心に仕掛け、ＵＳＮＡの軍事部分を間接的に掌握する。第二次大戦後に旧合衆国が散々やっていたことを仕返すようなものだが、直接戦略級魔法を撃ち込まれるよりはマシと思ってほしい。

次に新ソ連。
イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフは立て続けの攻撃失敗に加え、達也が［アルガン］を分解したことによる反動で戦闘続行不能状態となり、現在はモスクワに移送されて治療を受けているとのこと。
新ソ連政府内部には、壊滅したミサイルサイロの件も含めてベゾブラゾフの責任問題を追及すべきという意見が少なくないが、現連邦政府はベゾブラゾフに代わる戦略級魔法の使い手がおらず、加えて極東方面の戦闘経験を有するレオニード・コントラチェンコの身体的問題もあり、結局ベゾブラゾフを［十三使徒］として続投させるという方針となった。
「その辺の線引きはどう判断しているのかな？　やはり、脅威度の違いかい？」
「それが一番大きいかと。明らかに敵意を隠そうともしない相手など、いっそのこと滅んでもらったほうがありがたいこともありますから。ただ、今すぐはやりません」
新ソ連対策の一環として、トルコの［十三使徒］であるアリ・シャーヒーンに新たな戦略級魔法を提供した。元々日米共同で開発された戦略級魔法［バハムート］が存在するが、悠元は自身が編み出した［天極劫火（オメガ・フレア）］のダウングレード版となる［極竜火葬（メガ・フレア）］の提供を水素ガス輸出・発電技術の提供に先んじる形で実施。
更に、フランスに渡った［氷河期（グレイシャル・エイジ）］がドイツと結んだ共同管理条約の担保としてドイツの［十三使徒］カーラ・シュミットの手に渡った。これにより、悠元が戦略級魔法を行使せずとも、新ソ連に対して抑止力の行使をすることが可能となった。
ここに一条家へ渡した技術も加われば、新ソ連を東西から抑え込む構図が完成することとなる。
「ただ、ここまで大きく動いたというのに、新ソ連方面の情報を見ても自分に容疑が掛かっていないようでして。その反面、達也に対する敵意は膨らんでいるようですが」
「うーん、達也君がそんなヘイトコントロールを器用にできるとは思

えないからねえ。そもそも、一つの魔法で複数を同時に破壊するなんて現代魔法の範疇を超えているから、君とてそこまで出来ないと見られているのかもしれないね」
「喜んでいいのか微妙な気分ですよ」
命を狙われないのはいいことだと思うが、逆に不気味すぎて世界の不条理を別の意味で味わっているような気分を覚えていた。前世では身内のせいで散々狙われたというのに、いくら隠形を身に着けたとはいえ、ここまで敵視されないのは怖気すら覚えそうになるほどだ。
「悠元君が新ソ連に対して表立って喧嘩を吹っ掛ければ、流石に敵意ぐらいは向くかもしれないけどね」
「そうなる前に国家元首をモスクワから引き摺り出して、天皇陛下の前で土下座させますけどね」
「師匠もやっていたようなことを平気でやってしまうから、敵意が向く前に畏怖を植え付けられるのだろうと僕は思うけどね」
大亜連合に対して魔法技術の提供はしないが、台湾に対して戦略級魔法の提供は実施した。日本に対してあそこまでのことをした以上、失点回復の一環として台湾を含めた南シナ海方面への圧力を掛けることも想定されるためだ。
尤も、提供したのは改良された［霹靂塔］だが。
「そういえば、国防軍の蘇我大将からアンジー・シリウス少佐の引き渡しに関する情報を得ました。ただ、彼女はＵＳＮＡ大統領から直接命令を受けて日本に滞在している以上、言い分を聞く必要はないと判断しています」
「向こうは大変のようだね……それで、僕に何かしてほしいのかな？」
「母上からの伝言もありますが、九重先生には天刃霊装を完全に修得してもらいます。正確には、最終解放の［天魔抜刀］まで」
「これはこれは……こんな一介の和尚にそこまで求めるとは、先生も酷なことを仰るものだ」
八雲に天刃霊装を修得させる――――『九頭龍』に連なる家系の修司や由夢、姫梨が天刃霊装を修得した以上、その長を務める九重家にも技術を会得させる。養子となったセリアも先日［天魔抜刀］に至った

ため、養親となる八雲が天刃霊装を修得する必要がある、と千姫が下した判断からくるものだ。
　元々八雲は天刃霊装を修得するために鍛錬を重ねていたため、事実上の追認ということになる。
「『今果心』とまで謳われた人がそれを言いますか。下地は整えてあるから、あとは吹き込むだけで行けるというのが母上の判断です」
「先生にそこまで言われると、買い被られているようにしか聞こえないんだけどね」
　八雲にそこまでの道筋となる鍛錬法を口頭で伝えると、伝えられた側の八雲は思わず唸った。五十代にして新しいことを覚えるということもあるのだが、神楽坂家にとって長らく姿を見せなかった天刃霊装――――最終到達形態の［天魔抜刀］を自分が修得するなど考えもしなかったからだ。
「そういえば、一つ聞きたいと思っていたことだけど……元老院はどう説得するつもりなのかい？」
「説得なんて考えていません。ただ、物事には順序を立てないと、合従されて面倒なことになりますからね。エドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフに一定の目途がついたら、彼らには引退していただきます。そんなに自分の身が可愛いのなら、これ以上関わらないという〝引き際〟を弁えてもらうだけです」
　自らの力を磨くことを辞めて、裏の権力にしがみついた。そして、四葉に抑止の役目を負わせて引き籠もった時点で、彼らに魔法を統べる資格などない。四葉を陥れた当事者の東道氏と樫和氏は既に死しており、その処罰を担った剛三や千姫は既に引退した。残るは、黙したままの元老を全て〝入れ替える〟。
「亀の甲より年の功とは良く言ったものですが、長らく生きてきた功も行き過ぎれば毒にしかなりません。国の象徴たる天皇陛下が手本を示した以上、彼らにはこの先の世界を見守る役目を降りていただきます」
「殺す、とは言わないんだね？」
「ごねればそうするのも辞さないつもりですが、可能な限り穏便に事

を進めるつもりです。政財界が混乱するのは避けたいですし」
　別に長らく生きてきた人間の意見を全て無視する気はない。だが、自ら律することもせず命欲しさに現代魔法師を盾に引き籠もる老人など、この先の世界において邪魔者にしかなり得ない。ならば、最悪自分の手を汚してでも排除する。現代魔法師における弊害を掃う為には、彼らのような存在が確実に障害となりうるのは目に見えていたから。
「それと、先生にはもう一つお願いがありまして。風間大佐を含めた国防軍方面の抑止をお願いしたいのです」
「確かに、彼を抑えるとなれば僕の言葉が一番効果を発揮するね。分かった。他でもない御当主様の命とあれば、しっかり釘を刺しておこう」
　風間ならば達也や悠元への連絡手段を有するが、独立魔装大隊に関わる契約は全て神楽坂家と上泉家で管理している。
　大黒竜也（おおぐろりゅうや）特尉――――四葉家と独立魔装大隊の契約――――についても神楽坂家の預かりとなっており、先日のベゾブラゾフによる伊豆高原の別荘への魔法攻撃未遂の件で、神楽坂家は大黒特尉の契約に関して『第１０１旅団および独立魔装大隊との契約ではなく、国防陸軍総司令部からの出向という形での契約に変更』の旨を防衛省に通達した。
　これによって、達也の戦略級魔法だけでなく軍籍までも悠元の管理下に置かれることになり、聞かされた悠元本人が深いため息を漏らしたのは言うまでもないし、それに伴う未来を察した達也も溜息を吐いた。
「にしても、僕が『元老院』を抑えろなんて言われそうだったけど、そこまでは求めないんだね？」
「どちらにしても一旦整理するのに、今ここで九重先生が労力を払う意味がありませんので」
「確かにその通りだね。そうなると、東道殿はどうするんだい？」
「体が動かなくなるまで扱き使うつもりです。今までサボったツケの分を支払うのですから、文句は言わせません」

３４年前の崑崙方院崩壊を含めた四葉の復讐劇を座視した側の人間を〝サボる〟と表現するのはどうかと思うが、父親の蛮行を止められなかった彼には四大老の役目として元老たちの排除を率先して実行してもらう。なので、安易に命を奪うつもりはなかった。
「干渉できる意思があるということは、自ら動けると証明している様なものに等しい。神楽坂や上泉に対して一度叛意を見せたからには、信頼の回復に一生を賭してもらわなければならない――――違いますか？」
「いやー、君が言うと重みがあるね。先生に聞いたけど、中々過酷な前世を送っていたみたいだね」
「……聞いたのですか？」
「正しくは〝聞かされた〟というべきかな。心配しなくても、このことは言いふらしたりしない。他でもない忍びとして約束しよう。無論、君の部下としても」
八雲が千姫から悠元の素性を聞かされたのは別に驚くことでもなかった。寧ろ、八雲としては『達也君以上に振り切れている君の実力や性格が納得できたから』とのこと。
「このことを元老の連中が聞けば、益々自分に対するヘイトが強まるでしょうから、くれぐれも頼みます」
「分かっているよ。尤も、その連中が僕を頼りにしてくるとは考えづらい面もあるけど」
確かに、八雲は青波と面識を有しているため、下手に干渉すれば八雲は青波に対して相談を持ち掛けることは容易に予想がつく。尤も、八雲と青波が会談するとお互いに腹の探り合いでまともな展開など期待できないだろうが。
「正直、僕からしたら君のように振る舞う四大老のほうが末恐ろしいと思うけど」
「自分や大切な人に危害が及ばなければ、多少のことに目を瞑らないと秩序に縛られて身動きが取れなくなりますから」
「そうやって割り切れるからこそ、君を脅威に感じる人間が少ないのかもしれないね」

『元老院』の役割は十分理解している。かと言って、それを念頭に置いてしまっては、いつか目的が手段化することも十分ありうる。

強固に固めた秩序ほど脆いものはない。それは古今東西の国家の歴史が証明しているだけに、悠元のスタンスを聞いた八雲は末恐ろしさと頼もしさを含むような言葉を呟いたのだった。

次を継いだ者達と更なる未来への苦悩

九島光宣による桜井水波への執念。そして、ディオーネー計画に端を発したレイモンド・クラークによるスターズのパラサイト化。だが、前者を実質的に封じたことで後者に専念できるという強みが生じた。

これによって達也が無系統魔法［封玉（ふうぎょく）］に至る道まで閉ざした形となった訳だが……その達也は天刃霊装を通してパラサイトの封印方法を探っていた。天刃霊装自体は心象を現実に描き出す魔法技術であり、いずれ来る妖魔の封印が解けたときの対策を第一として編み出された経緯がある。

幹比古の力を借りる形で道を模索している達也に対し、悠元は他の面々の鍛錬も行いながら［天魔抜刀］を研鑽していた。かつての祖が最終解放とした極致だが、悠元はここから更に進化させることを念頭に置いていた。

元々魔法自体が人の手に余るものだからこそ、己を厳しく律さなければならない。ただ、今の現代魔法師の殆どが、その現実を直視できていない。無論、それは十師族にも言えたことだ。

「凄いな、悠元は。そこまで力を扱えてるなんて」

「色々人を辞めかけた事実も付随するけどね。元継兄さんもあっさり至ったし」

「あの爺さんに散々振り回された結果というのは釈然としないが」

第一高校の演習場にはＯＢでもある元継が足を運んでいた。目的は天刃霊装の研鑽で、元継は天刃霊装である［龍爪］の［天魔抜刀］形態――［大典太光龍宗世（おおてんたこうりゅうそうせい）］を手にしながら、ぼやき気味に呟いた。

「それと、あのジジイの戦略級魔法まで受け継ぐ羽目になるとは。いや、上泉家の宿命は理解しているがな。あの魔法を継ぐ意味も分かっているが」

「釈然としない感じは分かる。俺も母上から継いだから」

「悠元もか……正直、兄貴が家を出る羽目になって騒動が起きるよかはマシなんだろうが」

元継が［天魔抜刀］に至ったことで、剛三の戦略級魔法［雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）］を使いこなすことができる算段まで整ったこととなり、これによって元継は名実ともに上泉家当主としての地位を確立させた。

「確かに、下手にお家騒動にならないだけマシだと思う」

「神楽坂家のことは爺さんから聞いている。うちの場合は、あのジジイが直接殴り込んでいたみたいだからな」

元継が上泉家を継ぐ段階に入った際、剛三が自ら分家に殴り込んで元継に家督と家業を継がせる旨を伝えただけでなく、その際に決まって『儂が自ら決めた後継者に文句があるのなら、儂に勝ってから物申せ。いつでも挑戦は受け付けておるのでな』と言い放っていたらしい。

「母上の場合は『私に直談判したら話ぐらいは聞いてあげるといいましたのに、誰も来ないんですもの。それでいて外野で騒ぐのはいかがなものかしら』とぼやいていたけど」

「かつての英雄に面と向かって喧嘩なんぞ普通は売れんからな。俺の場合は主に家族絡みか武術絡みでしか啖呵を切ることはしていない」

その際は当主だけでなく家族単位で集めた上で公言しており、それでも文句を言いたそうな直系の孫世代に対して『強くなりたいなら遠慮せずに言うといい。儂の鍛錬はおぬしらが受けているものの十倍以上はきついがな』とも言い放った。

それが決定打となり、元継の後継者指名に対して文句は一切出なくなった。上泉分家でも各々鍛錬は積んでいるようだが、剛三直々の鍛錬の辛さは風の噂レベルで流れてくるためか、自ら無謀な挑戦を試みる輩はいなかったようだ。

尤も、十倍以上という単位自体が剛三の価値観によるものなのは言うに及ばずで、それが一般的な新陰流剣武術の鍛錬量に当て嵌まらないのは……悠元と元継、それに彼の愛弟子たちが良く理解していることだった。

「しかも、分家の連中から天刃霊装の技術を捨てるべきという声まで出始めて、とうとう母上がキレて呼び出した挙句、最悪自刃させるこ

とも厭わない状態にまで発展したからな」
「パラサイトが再出現するリスクは向こうも知っているはずだと思うが……悠元はいいのか？」
「最悪本気で叩きのめして、死んだほうがマシと思わせるまで心を折る。それで廃人となったとしても、それは自業自得の結果だと認識してもらうまでだ」
「そうか……（物理的に死ぬか、精神的に死ぬか……どちらも苦痛だな）」
　元継は上泉家に入ったことで価値観が家に染まった訳だが、悠元の場合は元々の価値観が神楽坂家のそれに最も近いが故に、違和感なく馴染んでしまった。悠元の恩情で一度は許したことを知っていたが、そう言い放ってしまうあたり、彼も正直嫌なものは嫌と言いたいのだろう……と、元継はそう思った。
「天刃霊装だって元々はパラサイトを念頭に置いた妖魔対策の一環で、専門的に処理する人間の幅を狭めないために確立した魔法技術だ。天神魔法の技巧に抵触しないかどうか母上と確認して纏めた苦労を何だと思っているのやら」
「つまり、この技術はある程度外に出すと？」
「いっそのこと魔法科高校で教えていくのもありだと思ってる。天刃霊装が現実的な技術になれば、魔法の可視化にも繋がるから」
　どうあっても犯罪に用いられるリスクは付き纏う為、教える人間をある程度限定する方策も考慮しつつ、天刃霊装については世に出していく技術として道筋をつける。尤も、最初の解放段階へ至るまでに自身の精神を形にする関係で己を律する必要があり、現時点での魔法科高校の一般的な生徒では精神の成熟が難しいだろうと思われる。
「現代魔法を行使するように想子を感知するだけでは、天刃霊装に至ることは決してできない。想子はあくまでも世界の理にアクセスするための手段（キー）でしかない」
「……悠元。それでは、想子だけで魔法は成立しないと？」
「想子の性質を考えれば、それは元継兄さんにもわかるだろう？　特に［天魔抜刀］に至った兄さんなら、それが一番理解できるはずだと

思う」
　想子単体で〝想子同士による同一座標上の情報の重複〟は発生しても、想子で構築された〝魔法式の重複による同一対象への魔法効果の重複〟は発生しない。同じ情報を有する想子の観点で言えば、魔法は想子だけで完結しないことが誰の目から見ても分かる。
　これまでの魔法研究では、魔法式は次元の壁から事象改変に必要なエネルギーのすべてを引っ張ってきているという通説も存在するが、仮に短時間で戦略級魔法を放つのに必要な事象干渉力を生み出すとなれば、その反動が術者に対して即座に掛かる。
　たとえ魔法式が形成された時点で魔法式との接続が切れるとしても、膨大なエネルギーを扱うとなれば、少なくない負担が圧し掛かる事は明白。それは、天刃霊装とて同じことが言えてしまう。寧ろ、継続的な展開を求められる天刃霊装のほうが術者に強い負担を強いる形となる。
「想子を以て世界の理と調和し、霊子の力を以て世界の運命を変える。ただ一つの例外もなく、この世界に存在する全ての魔法はこのプロセスを以て事象を改変している。尤も、現行の古式・現代の魔法は霊子の存在をそこまで重く見ていない。強いて言うなら、精霊魔法が一番それに近しい使い方をしているけど」
「……その常識を聞かされると、確かにその通りだと思わされるな。今まで何故疑問に思わなかったのかと恥じるばかりだ」
「十師族の形成過程が、そもそも政府や『あの連中』にとっての都合でしかなかったから」
　魔法の使い方が限定されてしまったのは、核兵器という強大な力が明確に存在していたからこそ。核抑止を担う為に現代魔法が生み出され、ウランやプルトニウムといった放射性物質を扱うリスクを無しにできる利点から、魔法は核兵器に代わる軍事力として世の中に広がった。
　だが、魔法を軍事力として扱うということは、同時に国家として扱える範疇の力を超えてしまうリスクを孕んだ諸刃の剣。それを制御する方法の一つとして、この国が取った方法は師族会議の設立による

相互抑止。
悠元は、それを理解しつつも師族会議のあり方を根本的に正し、師族会議そのものをこの国の抑止力として外敵からの侵略を退ける組織に作り替えようとしている。
「けど、それじゃこの国はまた戦火に見舞われる。国土の大小で国の価値が決まるというのなら、そんな固定概念諸共叩き壊す。新ソ連が攻めるつもりなら、その動きを見せた時点で二度目の崩壊を味わわせる。今度は二度とソビエトの夢など見れないぐらいに完膚なきまで」
「ＵＳＮＡはどうするつもりだ？」
「いっそのこと、日本に停泊する米軍の兵器全部徴収してやろうかなと思ってる。そんなことをしたら政府や国防軍が泡を噴きかねないけど、人に迷惑をかけた以上は責任を全部押し付ける」
兵器を一から作ると金や労力がかかる。ならば、ライセンス関連もふんだくった上で兵器全部を接収することも辞さない。更に国防軍仕様に魔改造すれば、ＵＳＮＡに支払うライセンス料も大分安く抑えられるし、国防軍としても大幅な装備更新ができる。
元々過去の経緯からして旧合衆国時代から兵器を買っていたことも含めれば、整備関連で慌ただしくなるだろうが、それは必要経費と割り切らせることにしようと考えている。国防軍で接収できない場合は、次善策も考えておくこととする。
「レイモンド・クラークもパラサイト化した裏付けが取れた以上、エドワード・クラークがパラサイト化していようがいまいが、奴が四葉の排除を諦めるとは考えづらい。米軍の兵器を用いた時点で、向こうの判断を待たずに『神将会』として敵性勢力の排除を敢行する。その前に来るであろう連中の排除も考えないといけないけど」
「パラサイト化したスターズの連中か。達也君のことは理解できなくもないが、新ソ連との暗闘で苦心した件を取っ払ったとしても、時間稼ぎに利用して新ソ連の軍事力を削げると考えられる思考が欠落しているとしか思えん」
苦労した人間とそうでない人間では、当然考え方が異なるのは言うに及ばずだ。当事者に近い立場を経験した側（主にジェラルド・バラ

ンスを含めた周囲の人間）からすれば新ソ連の脅威を分担する方向に舵を切るが、そんな苦労を味わったこともない人間からすれば達也という明確な脅威を排除する方向に舵を切る。

それだったら、パラサイト事件や日本にスターズを送り込んで暗殺するような真似をしている時点で、日本を同盟国ではなく〝属国〟のように見ているとしか思えない。国土が広がって名前が変わっても、結局国としての性根は変わり切らなかった。むしろ悪化したようなものだろう。

「苦労の違いか……ジジイが現場主義に拘る理由も分かってしまうのがなんとも。その意味で、『あの連中』はどうする気だ？」

「九重先生には話したけど、一連の件が終わってから手を付ける。いつまでも第三次大戦に引き摺られていられる余裕などない」

繰り返しになってしまうが、四葉の悪名に頼り切って怠けるなどということはもう許されない。達也がその再来になってしまうリスクは避けられないとしても、いつまでも墓の下に眠る故人の成したことにしがみ付くのはもうお終いだ。

「爺さんと母上が一線を退いた時点で察するべきだったのに、意味を理解しようともせず与えられた椅子にしがみ付く時点でいい大人がみっともないと思う。まあ、自分は直系世代が当主に足り得ると判断したら一線を退いて世界を気ままに旅行するつもりだけど」

「……爺さんとの旅行が波乱含みだったのは聞いていたが、その言葉で現実味を感じたよ」

九島烈のように長年居座るつもりなどなく、自分がいなくてもやっていけると判断した時点で魔法界の表舞台から退いて、残りはトライローズ・エレクトロニクス関連の仕事に従事しつつ、世界を気ままに旅するつもりでいる。

なお、元継も自分の子が成熟したら家督と家業を継がせるつもりのようで、互いに似た思考となったことに苦笑を零したのだった。

◇　◇　◇

巳焼島に建設された職員用の宿舎には、魔法師も定住してもらう関係でＣＡＤ調整や魔法訓練のための設備が充実している。［トーラ

ス・シルバー」を擁するＦＬＴ製の設備が多いため、世界トップレベルの充実ぶりを味わいながら生活できるという環境。
宿舎の地下に建設された広大な訓練場は高さ１０メートル、四方５００メートルという広大さを誇り、魔法に耐えられる障壁展開機能がつけられた支柱によって、この島で起こりうる火山活動に伴う地震にも耐えられる構造となっている。
その訓練場では、ハンス・エルンストがタンクトップにズボン姿で汗を流していた。その様子をハンスの中にいるルーデルが話しかける。
『今日は一段と気合が入っているじゃないか、エルンスト』
（そりゃあな……俺よりも年下なのに、あれだけの実力を肌で感じれば『負けていられない』と思ったからな）
ハンスが汗を流しているのは、鈍っていた体をたたき起こす意味合いもあるが、それ以上に悠元との二度目の出会いが彼を奮起させていた。これまでルーデルに振り回されて訓練を強制されていたようなものだが、自ら訓練をすることにルーデルは喜んでいる様な口ぶりを見せていた。
『そうか、そうか。なら、本気で飛ばしてもいいな？』
（俺を殺す気しかしないんだが!?）
「あ、お兄ちゃんだ！」
流石に慣性を無視して飛ばされたら死ぬ未来しか見えないと反論したところで、運動着姿のナーディアが姿を見せた。普通のジャージ姿なので露出度は無いわけだが、それを見たハンスは内心でホッと息を吐くような心境を抱いた。
「一人で訓練してたの？　実家にいたときもそうだけど、マメだよね」
「俺はお前のように優れているわけじゃないからな」
伯父から貰ったペンダントによって第二次大戦のエースパイロットが憑りつき、図らずも戦略級魔法師としての実力を得た兄：ハンス。一方、奇妙な出会いで［ドラキュラ］の力を継いだ戦略級魔法師の妹：ナーディア。
日本に到着後、ハンスはドイツの実家に経緯を報告したところ、母

が意識を手放して倒れた。その事実を電話越しに父が母を介抱しつつも伝えつつ、ドイツ首相から直々に説明を受けていたことを明かした。
『うちは名立たる魔法師の家ではなかったのだがな……まあ、二人とも早めに孫の顔を見せてくれ』
そう言い放った父親が、まるで一気に精神が老けた様な達観を滲ませていたのは……気のせいだと思いたかった二人だった。
「親父に今度何かプレゼントしてやろうと思ったよ。あとお袋にも。ナーディアもちゃんと贈っておけよ？」
「うん、それは流石にそうしようって思ってる。でも、孫って……私はお兄ちゃんに勝てる人でないと交際を受ける気なんてないのに」
「恋人の判断基準に俺を巻き込むな」
ルーデルというチートブーストはさておくとしても、妹の交際基準に兄の強さを指定するな、とやや諦め気味に呟く。正直、二人の父は現実逃避気味に呟いたのだろうが、ハンスの場合はあと5年以上は待つ必要が出てくる問題だ。
「じゃあ、そんなことをいうお兄ちゃんはどうなの？　恋人がいるなんて話は聞いてないけど」
「……ドイツと伯父公認の婚約者はいる。歳はお前より年下だが」
「……マジ？」
「嘘は一切言わん」
ナターリヤのことをもう受け入れることは確定しているが、それ以外にも複数の愛人候補を宛がうと言われた際、ハンスは正直血が吐けそうな気分に苛まれた。戦略級魔法師の確保が難しいことは承知しているが、それでも複数の女性と関係を持つことなど、考えてもいなかったことだった。
「そっかあ……じゃあ、お兄ちゃんよりも先に恋人を作って、お兄ちゃんを伯父さんにさせてあげないとね」
「お前は人のことをどう思っているのか聞きたくなってきたんだが？」
苦労性の兄と賑やかな妹。本来ならスポットを浴びることなかっ

た二人は、常識の埒外によって歴史の表舞台に立つこととなった。それが果たして本人たちにとって幸せだったのかどうかは……本人たちが決めるべきことである。

自分たちの不始末は自分たちでやれ

６月２５日、火曜日。リーナたちが日本に戻ってきて三日が経過した。

結局、セリアは学校に復帰したが、リーナは巳焼島の宿舎に入り浸ることとなった。そして、達也の別荘に持ち込まれていた［リモートパペット］は施設の地下訓練場に運び込まれることとなったが、八雲は嬉々として外国の軍人相手に体術を叩き込んでいた。

彼曰く『彼らを教えることで、達也君に対する試しのアイデアが増える切っ掛けにもなるからね』とのことだが、そのテストを受けることになる側の気持ちも考えてほしいと思う。

悠元はリーナのもとを訪れ、一対一でコーヒーを飲みながら話をしていた。

「にしても、我儘ぐらいは想定していたんだが」

「流石に匿ってもらう立場なのに、悠元に迷惑は掛けられないわよ。それにしても、いくら壊しても弁償しなくていいって言われたときは正直引いたんだけど」

地下訓練場以外にも、魔法実験用の市街地フィールドも島の西部に置かれているが、これはプラントの建設が本格化した際に取り壊すことになるため、ついでということでリーナだけでなくハンスやジェラルドなどの軍人魔法師にも開放している。

「ＵＳＮＡの場合だとリーナ以外のスターズも使うことになるから、そればかりは弁償しろと言われても不思議じゃないからな。あそこのフィールドは将来プラント建設予定地に入ってくるから、どのみち取り壊すことになるし」

「それは聞いてたけど、ＣＡＤも正直消耗品扱いなんて若干引いたわ」

「だって、使わせてるものの大半が試作品で市販も出来ない代物ばかりだから」

「……トーラス・シルバーとしての凄さが身に染みるわね」

リーナがスターズで元々使っていたＣＡＤは全て基地に置いてきたらしく、本人曰く『もうじき辞める人間がいつまでも持っているぐ

らいなら、辞意の意思表示になると思って置いてきたほうがいいと思った』とのこと。セリアの場合は悠元に渡され、悠元の手によって魔改造された上でセリアの手元に戻っている。
「帰化手続きが全て完了するのは来月に入ってからとなるが、当分は四葉家へのポーズとしてここでの生活になることは了承してほしい」
「寧ろ、居心地が良すぎて離れたくなくなりそうだけど」
「目途がつけば、マンションに戻ってもらうから」
そのためにもスターズの連中を早々に退ける必要はあるが、いろいろ策を講じるので、そこまで深く考えていない。建設中のプラントが破壊されても、その復旧に時間が掛かるということにはならない。
最悪、達也の［再成］か悠元の［天陽照覧］で瞬時に直せるため、どうあっても無駄足を踏むということになる。それを知ってムキになった挙句、部隊を増強して攻めよってくる可能性は残ったままだが、同盟国内で暴れた時点で彼らは立派な犯罪者でしかない。
「……私、達也に襲われないかが心配だけど」
「リーナの場合は襲う側じゃないのか？」
「うぐっ」
南盾島自体は表向き国防海軍の海洋研究所として再出発させているが、地下には［恒星炉］を含めたプラント施設が建造されている。巳焼島の受け入れ準備が整い次第、南盾島から移転して都心部を含む関東圏への水素ガス輸出および送電の準備に取り掛かる。
その空いたスペースに何を施すのかと言われると、宇宙方面からの〝中継監視地点〟を作るための拠点を構築するつもりでいた。周囲からの警戒を逸らすために天体観測施設の構築も合わせた上で。
宇宙に出ていくこと自体に興味が無いわけではない。だが、強制された宇宙の一大事業で一生を終えるということを許容できなかった。とはいえ、地球で暮らすということは宇宙からの飛来物によるリスクはどうあっても避けられない以上、その対抗手段と観測拠点は必須だと考えた。
無論、もともと存在する天文台の協力を得られれば御の字だが、それが叶えられなかった場合のリスクヘッジを考慮した場合、自前で天

文観測のための拠点は必須と考えた次第だ。
「まあ、リーナと達也の恋路に首を突っ込む気はないから、互いに納得がいくまで話し合ってくれ。カノープス少佐については、こちらに来るであろう連中を追い返してからになるが、そこは我慢してくれ」
「達也から聞いたの？」
「リーナから聞いた情報は全てな」
　達也からはリーナから聞かされた情報と巳焼島を案内していた時に得られた判断材料を提示された。達也がリーナのＣＡＤ調整をしていた際、Ｔシャツ一枚の姿だった彼女を危うく押し倒そうとしたが耐えたことまで聞かされた。
　恋愛だけでなく行為に至る部分まで確かに先輩なのかもしれないが、それに対する答えは『よく頑張ったと思う』と励ますことぐらいだった。流石にそのことはリーナに話す気などないが。
「ミッドウェー刑務所に関しての情報も逐一入手できる状態にしてある。その手段を教えることはできないが……まあ、リーナならセリア経由で聞かされているだろうけど」
「聞かされているという言い方をしていいのかは分からないけどね」
　セリアに固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］と［領域強化（リインフォース）］を話すということは、精神感応を通してリーナにも伝わることは当然覚悟していた。ただ、リーナ自身も悠元の恐ろしさを肌で感じ取ってしまったためか、ＵＳＮＡ内部で情報が拡散するという事態にはならなかった。
「そのついでに、ロズウェルのスターズ本部基地で起きた叛乱の情報を集めておいた。端末に送っているから、あとで見てみるといい」
「……そうやって全て丸裸にされると、白旗を即座に掲げる覚悟しか生まれてこないわよ」
　悠元が叛乱に関する情報を集めたのは別にリーナのためではなく、今後来日するであろう面子に含まれる可能性が極めて高いからこそ、戦闘能力に関する情報を収集するための一環に過ぎない。リーナに渡したのは、彼女が一番気にかかっているカノープス少佐の安否を確認するために最も有効な判断材料として送信しただけ。
「別にいつも脅迫や圧力を掛けるための材料探しをしてるつもりはな

いからな。ただ、今回は自分や達也に向く可能性のある危険を察知するための情報収集でしかない」
「セリアからは色々聞いてたけど、本当に面倒事を嫌ってるのね」
「当たり前だ。大人たちがしっかりしていれば、国防軍の将校や師族会議議長などになんかなるものか。余計なことしかしない奴らの尻に泣くまでタイキックを浴びせたい気分だ」
　誰も率先して音頭を取らなかったからこそ、自らが立候補する形で大人たちの制御をする羽目となった。悠元の言葉に夢の中で味わった経験がフィードバックしてきたのか、リーナが若干青褪めた表情を見せた。
「そ、そういえば、一条家では穏便に済んだの？　深雪が何か不機嫌になったのは知ってるけど」
「将輝に殴り掛かられた。リーナは知ってるだろうが、あの「クリムゾン・プリンス」が」
「ええー……想い人を取られた腹いせに殴り掛かったってこと？」
「その認識で間違ってない。明らかに時間の無駄になると判断して一撃で沈めた。その後は一条家当主に任せたから、どうなってるかは俺も知らん。というか知りたくもない」
　リーナは悠元と深雪、それと将輝のことも知り得ていたため、よもやと思ったことがまさか現実に起きたとは思えず、悠元の答えに対して引き攣った笑みを零した。
「てか、容赦ないわね」
「深雪に振られ、俺に模擬戦を挑んで完敗してのコレだからな。正直、三高の校長に鼻っ柱を一度折られて痛い目を見たほうがいいと思ったぐらいだ」
「そんなに強いの？」
「一条家当主と歳が近く、当時学生だった一条殿が先輩の学校長に痛い目を見させられたらしい。ちなみに、俺の母方の実家である上泉家で武術の手ほどきを受けていたと聞いている」
　真紅郎からその後のことに関してメールを貰ったが、剛毅の説教に加えて美登里が無言の圧力で将輝を黙らせた挙句、事態を剛毅経由で

聞いた三高の前田校長が『私の師に関わる案件に加え、一条の頼みとあらば重い腰を上げようじゃないか』とやけに乗り気だった。
そして、魔法抜きの模擬戦で将輝の鼻っ柱を圧し折ったとのこと。尚武の気質を有する三高の学校長らしいやり方と結末だが、学校のOGとしても若い者にはまだまだ負けないという意思の表れを感じ取ったそうで、元継からのメールでは事の次第を聞いた剛三が盛大に笑ったらしい。
模擬戦の後、前田校長は将輝に対して『女のことで落ち込んだ挙句、自棄を起こしたように挑んで二度も負けた。私はアンタの様な軟弱者を生徒に持ったことが残念だよ』と言い放ち、将輝に対して『一条家で精神を鍛え直せ』という名目で授業免除を言い渡した。それが実現したのは、師である剛三が国立魔法大学に働きかけた結果だ、と元継から聞き及んだ。
そして、前田校長は剛毅に対しても『自分の子に自ら考えさせることは大事だが、言うべき時に言わなければ父親失格だよ』と言い含め、剛毅が深く頭を下げたとのこと。それからは一条家の家業を手伝っている様子が見られると真紅郎からのメールで知っていた。
「リーナが体術を教えてもらっている九重八雲和尚は上泉家で武術を習った一人でな。かく言う俺も上泉家で武術や剣術を学んだ。魔法はそのついでに修得したが」
「あの上泉剛三の家の……魔法をついでに学んだ魔法師がそこまで強くなったら、魔法を専門に習ってきた人たちの立つ瀬がないじゃないの」
「でも、魔法師は体が資本であり、自身を鍛えることで魔法の汎用性が大分異なる。それはスターズを含めた軍人魔法師の訓練をこなしてきたリーナなら分かることだろう?」
「それは……否定できないのが悲しいわね」
魔法師と身体の因果関係は、魔法が技術として体系化されてきた時から大きく取り上げられたテーマの一つ。遺伝子調整のみならず、薬物や催眠などの措置によって意図的に魔法師を生み出す――調整体や強化体などと呼称されることになる実験体がこれに該当する――

――ことに繋がった際、身体の強靭化は強大な魔法を使う上で必須である、とされている。
最も該当する例が原作の九島光宣であり、遺伝的な問題があるにしても生来の病弱によって本来発揮できる活躍が出来ず、結果的に肉体の強化を［パラサイト］に頼ることで克服した。
九校戦では出場する選手の魔法技能のみならず身体技能まで要求される競技が多く、これらを通して生徒たちに身体技能を磨くことも重要であると暗に説いている。尤も、生徒の大半が勝負に感けてしまっているだけでなく、将来の戦力を欲する国防軍側の怠慢も合わさった結果、ここ最近の九校戦に纏わる不祥事に繋がったという訳だ。
「そんなリーナも九校戦に出てもらう。一高の編入手続きは一応済ませたが、学校に通うのは来月になってからだな」
「……まさか、スターズがいつ来るか予測がついたの？」
「今月末から来月初めなのは確定した。第一陣が関空経由、第二陣がハワイから、第三陣が日本にいる『インディペンデンス』経由なのは向こうの情報で掴めた。ただ、達也に話してもいいが、深雪には伏せておいてくれ」
「それは構わないけど、なぜ？」
リーナは首を傾げた。達也なら良くて、深雪だとダメな理由がいまいち要領を得なかったためだ。その理由を悠元が話し始める。
「宮藤真一もとい向こうの九島光宣と結託して、入国してくるパラサイト化したスターズの兵士全員を完全な支配下に置く。そのために俺も動いて一芝居打たなきゃいけないからな。深雪に話したくないのは、単に俺の我儘も含んでいるが」
「……方法は敢えて聞かないし、悠元ならやりかねないから別に不思議じゃないけど。一体何をする気なの？」
「一言で言えば『ハンムラビ法典』を体感してもらう」
ハンムラビ法典１９６・１９７条にあるとされる『目には目を、歯には歯を』――――――旧約聖書、新約聖書の各福音書にも同様の記述があるこの一文を、今まで勝ってきた側にも味わわせる。

「俺自身や達也がやり返すのは簡単だが、それでは要らぬ恨みを買うリスクがあるし、達也や友人――――最終的にはリーナ達にまで危害が及ぶ可能性も否定できない。なら、ＵＳＮＡで起きたことはＵＳＮＡの人間によってケリをつけてもらうのが筋だと思う」
「それは道理だけど……具体的には？」
「パラサイト化した兵士を操ってミッドウェー刑務所を襲撃し、カノープス少佐以下三名の冤罪によって捕まった兵士を解放し、ＵＳＮＡ本土へ送還する。無論、パラサイト化した兵士はその後治療して人間に戻すこともするし、その罪を問われないように工作しておく」
「……」
パラサイトによって受けた人的被害を日本に押し付けた以上、その代償として今回の騒ぎを起こした連中には法による正当な裁きを受けさせる。そして、彼らが起こした叛乱で冤罪となったカノープス少佐を含む三名を助け出すことで、彼らが起こした罪を自らの手で償わせる。
いわば汚名返上や名誉挽回の類で、その後はパラサイトの影響を排除することも実施する。無論、彼らがＵＳＮＡに帰るのもよし、日本を新たな祖国として骨を埋める覚悟を持つのならば、職を斡旋することもする。流石に自分へ好意が向かないように仕向けることは確定済みだが。
ちなみに、悠元が考えていたプランを聞かされたリーナの反応はというと、笑顔で凍り付いてしまったような状態となっていた。
「ただ、ＵＳＮＡ側に怪しまれないよう適度な騒ぎを起こすことになるし、その際の対処をリーナに任せる可能性もある。それだけは許してほしい」
「ようはヘイトコントロールとコラテラル・ダメージということね。それぐらいは許容するけど（……悠元が戦っているフィールド自体が常に彼のホームグラウンド状態って、どうあっても勝ち目がないじゃない）」
リーナ自身、日本に帰化することを受け入れた身であるし、祖父の大統領からも達也を守ることがアンジー・シリウスとしての最後の仕

事だと明言された。いくら軍上層部が騒ぎ立てたとしても、最高指揮官である大統領に対して自身や達也の暗殺を申し出るには、ＵＳＮＡの国益に適う説得材料を提示しなければならないことも理解している。

　こうして話すことで、リーナは悠元の強さの根幹を改めて実感した。時として相手の懐に入り込む潜入もしなければならない状況において、敵の弱みすらも己の力として取り込み、相手の国内問題クラスで片を付けてしまおうとする強さは現状の［十三使徒］ですらも上回る、と率直に感じてしまった。

「被害を最小限に抑えるよう努力はするが、何せ［パラサイト］の実態を把握している訳じゃないから、想定外の挙動を見せることも考えられる。その場合は排除しても構わない」

「ただ、悠元は知っていると思うけど、私にパラサイトそのものを排除できるだけの力なんてないわよ？　どうする気なの？」

「……どうやら〝目覚めている〟のは確実だから、達也たちにも協力してもらうか」

「？」

　意味ありげな言葉を呟く悠元に対し、言葉の意図が分からず首を傾げるリーナ。

　悠元は立ち上がり、リーナに対して告げる。

「リーナ。お前に渡したＣＡＤだが、一般では流通していない特殊な感応石が内蔵されている。ロズウェルのスターズ本部基地で［パラサイト］が干渉した際、〝誰か〟に会った筈だ。俺が名付けた呼称は［守護霊（サーヴァント）］――『彼女』を介する形で、［パラサイト］に対抗できる手段を会得することが出来る。無論、そう簡単な事ではないが……どうするかはお前が決めろ」

「……やるわ。セリアのことだから、どうせ会得しているのでしょうし。私自身、達也の足手纏いになりたくないから」

「分かった」

　悠元がそう呟いた直後、どこからともなく姿を見せた太刀によって、リーナの心臓が貫かれる。だが、その太刀によってリーナから出

血することは無かった。悠元が刀を手放すと、刀が光となって消えていき、リーナの中へ吸い込まれるように消えていく。
リーナは慌てて自分の胸辺りを擦る様に確かめるが、傷を負ったような痛覚は一切なかった。
「え、え？　今何をしたの？」
「本来の手順を少し簡略化して、プシオンで構成された情報体をリーナの中に流しこんだ。さて、後のことは九重先生と達也に任せているから、頑張れ」
「悠元が教えるんじゃないの？」
「リーナがこれから覚える技術の名は［天刃霊装］。自身の精神を具現化する魔法技術の極致。その第一歩は、リーナの中に流した〝浅打（あさうち）〟に自身の魂を刻み込むことだ」
本来は実体を持つ太刀などに対象の血を流し込み、同時に膨大な量のプシオンを流し込む修行方法が手記に書かれていた方法。だが、プシオンを収束させる技法自体が現代魔法はおろか、古式魔法にも存在しない。
リスクを考慮した結果として悠元が編み出した方法は、何も刻み込まれていない霊子情報体を直接対象の体内に注ぎ込み、その情報体に精神の霊子情報――〝魂（こん）〟を写し取ることで［天刃霊装］の形状を生み出す方法。
魔法師は無意識的に［情報強化］による肉体・精神の保護を担っている。つまり、魔法師は意図せずして想子と霊子を高密度に有した容器を有しているに等しい状況であり、体外に意図的な場所を作るよりも確実に高密度の環境を作り出せるため、［天刃霊装］の修得確率はかなり跳ね上がる。
一番ネックとなった霊子情報体に何の情報も持たせないことだが、ここは想子構造に特殊な記述を刻み込むことで、情報を初期化（フォーマット）することに成功した。
正直、その技術のヒントを一昨年の軍事衝突の要因ともなった勾玉に対して正直に感謝することは出来ないが、この先の戦いを生き抜くための手段を確立できたことに関しては、ある意味〝怪我の功名〟と

表現するほかないだろうと思ったのだった。

茶番の仕込み

――日本の６月２６日、金曜日。

悠元は伊豆高原の烈が滞在している別荘を訪れた。目的は真一に協力してもらうためで、応対した真一も意図を察した上で悠元の提案を受け入れ、二人はリニア列車と鉄道を乗り継ぎ、九島家経由で黒いバンタイプの自走車を調達した上で、関西国際空港に張り込んだ。

「僕の場合は周公瑾の占術によって漠然とした形で来ましたけど、間違いないんですか？」

「向こうの空港の監視カメラは確認した。該当するロサンゼルスからの直行便にハイジャックされた形跡がないし、予定通り１９時過ぎに当該人物が姿を見せるだろう」

「……そこまで把握してるとなると、僕ですら脱帽ですよ」

真一ですら半ば漠然としつつも動いたというのに、彼の視線の先――運転席に座る悠元は膝に置かれた端末であらゆる情報を多角的に判断しつつ、最適化された行動をしていた。達也はおろか、克人にすらない魔法以外での強みとなれば、真一であっても悠元に勝つビジョンが全く見えなかった。

「それにしても、［パラサイト］を制御して使役ですか……確かに、僕でも制御できるか疑わしい分野の話ですし、悠元さんが協力してくれるならば心強いですけど。悠元さんはいいのですか？」

「［パラサイト］に侵食するリスクならば問題はない。自分の場合、気配を下手に出すと逆に逃亡するという経験をしたからな」

（……パラサイトの生存本能を考えた時、確かに悠元さんと敵対した時のリスクが未知数過ぎる。その対応は納得できてしまうね）

居るかどうかも分からないどころか、実力すら未知数。そんな相手を支配下に置くとしても、最悪〝自爆特攻〟に近い代償などリスキー過ぎて支払えない。真一は悠元が話した事実に対して冷や汗を流しつつもそう思った。

なお、悠元は顔バレを防ぐためにスーツとサングラスを身に着けている。真一からしても一介のボディーガードにしか感じ取れないた

め、これから来る人物にも正体がバレるリスクは極めて低いだろう。
「制御の権限は真一に委ねる。基本は被害が最小限となるよう適当に動かしてもらうが、新ソ連方面が小康状態になったら、愛波を連れて一度国外に出れるようにしておく」
「ところで、愛波さんは大丈夫なのですか？　そこだけが気掛かりですが」
「治療自体は済ませたんだが、彼女が『もっと強くなりたい』と申し出てきてな。今は上泉家に対応させている」
　愛波の魔法演算領域は悠元の［天陽照覧］で修復したのだが、愛波は「誰かを無事に守り切って、私自身がそれを見届けられるぐらいの強さが欲しい」と懇願した。恐らく、水波と会った際に彼女の力を直に感じ取ったことで、健在な状態で誰かを守れる強さが欲しいという結果に至ったのだろう。
「上泉家には婿養子に行った実兄がいるから、任せることにした。彼女が帰ったら、彼女の知る達也や深雪、光宣も驚くだろうな」
「仮にそんなことになったら、向こうの僕が不憫になりそうな気もしますが……悠元さん、空港の方からテレパシーの反応です」
　苦笑を滲ませた真一がテレパシーの波長を感じ取って悠元に伝える。無論、魔法に関わる聴覚に敏感な悠元も精神感応（テレパス）の波長を肌で感じており、自走車のハンドルを握る。
「大半が非魔法師とはいえ、魔法師の警察官がいるということと京都に近い立地を舐め切っているとしか思えんぞ。真一、連中の引き込みと話し相手は任せる」
「［仮装行列（パレード）］はどうしますか？」
「それはこちらでやる。真一は渡した術を行使して、騒ぎを起こした奴らを黙らせてくれ」
「分かりました。お言葉に甘えさせてもらいます」
　そうして、玄関に走って出てきた二人組が当該人物だと判断した真一がテレパシーで呼び込み、その二人――レイモンド・クラークとジェイコブ・レグルス中尉が乗り込んで扉が閉まったのを見計らって、悠元が［仮装行列（パレード）］を展開。真一は悠元から提供されたパラサイ

トの制御術式で二人の精神を完全に掌握した。
二人は完全に黙ってしまい、まるで人形のような状態となっている。だが、それに対して情けや情状酌量の余地は持ち合わせていない。
「……完了しました」
「どうする？　このまま神戸の中華街に運び込むか？」
「そうして頂けると助かります」
自走車は関西国際空港から離れ、道中一度も怪しまれることなく神戸の中華街にある周公瑾の隠れ家に到着した。当分はレイモンドとレグルスを隠れ家の中華飯店に置き、普段は住み込みのアルバイトとして匿わせる形とした。
「真一、お疲れ様」
「いえ。悠元さんが居なかったら精神汚染を食らっていたでしょうから、この場合は僕がお礼を言うべき立場です」
「……なら、その言葉はありがたく受け取ることとしよう」
形式上は密入国を手助けした形となるが、綺麗事だけでは国の舵取りなど出来るはずがない。敵を欺くためには、まず味方を欺かなければならない。尤も、事情説明という形で達也に対しては今回の流れについて説明はしている。
その際、達也から『また深雪が迷惑を掛けることになるな』と言われた。
「にしても、この世界では悠元さんが深雪さんと付き合っていることにも驚きですが……その、男女の関係でもあるのですか？」
「そうなってしまったというのが正しいがな。お陰で、学校では『深雪はもう妊娠しているのでは』みたいな噂も流れたほどだ。流石に学校を中退させる事態なんて俺が許容できん」
いくら魔法界の実力があったとしても、それは表舞台の肩書きや立場があってこそのものだと悠元は思っている。力を振り翳して下手な諍いを避ける狙いもあるが、女性たちの社会的立場を確立させることで、男尊女卑のような流れを生み出さないためにそう対処していた。

「その様子だと、水波とどう関係を持つか躊躇っている感じか？」
「お恥ずかしながら……恋愛の先輩としてアドバイスを頂けると助かります」
「参考になるかは分からんが、話すぐらいなら問題はない」
　これで第一弾は確保したが、次は第二弾の連中を確保しなければならない。連中は恐らく共同基地や日本に駐留している空母を経由して入国する可能性が極めて高いため、首都圏の共同基地には既に〝網〟を仕込んだ。
　それと、大亜連合の動きの方だが……ここで気に掛かる動向を見つけた。それは、陸路経由でウラジオストク方面を制圧する部隊とは別に、東欧方面への工作部隊が送りこまれているのが確認された。その筆頭は陳祥山（チェンシェンザン）と呂剛虎（ルウガンフウ）が所属している部隊が確認出来た。
　確か、原作知識では新ソ連（正確にはベゾブラゾフ）の策略で大亜連合の戦略級魔法師が日本に亡命し、その引き渡しを巡って軍事衝突が発生した。その際、裏切り者の粛清という形で呂剛虎が送り込まれたものの、千葉修次の奥義によって死亡した――これが原作の流れ。
　だが、呂剛虎が中央アジア・東欧方面にいるとなれば、彼が死ぬルートは発生しないとみていい。ただ、新ソ連の特殊部隊との暗闘で死ぬ可能性は無くもないが。
「俺から言えることがあるとすれば、遅かれ早かれの問題ならば覚悟を決めろ。水波を治すためにパラサイトになる道を選んだのなら、その道を完遂して生き抜け。失ったものを取り戻すことは極めて難しいが、生かされた以上はお前にも出来ることがきっとある筈だ」
「……僕の世界に居る達也さんが、眠りに就いた僕を必要とする時が来ると？」
「来る。とりわけ、達也は何かと敵が多いからな。その意味で、達也を理解してやれる味方は一人でも多い方がいい」
　ただ、呂剛虎が来なかったとしても、劉麗雷が日本に亡命しないという可能性まで潰えたわけではない。新ソ連が戦局をどう動かすのかは不透明だが、少なくともベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］に

よる攻撃は実施されるだろう。
「お前のいた世界に俺のような存在はいないだろうからな。尤も、真一はまだまだ強くなれる。今まで相手にしたことの無いような連中と相対することも出てくる可能性がある。達也にとって不得手の相手を真一が対処できるようになれば、それだけでも意味は出てくるだろう？」
「……これは盲点でしたね。僕も一層精進しなければならないと痛感させられました。負ける悔しさは達也さんを通して味わった筈だというのに、それを忘れていました」
大亜連合が新ソ連侵攻を開始するのは、早くとも明日から。その動きによって、各国で動きが見えてくるだろう。
エドワード・クラークの動向もチェックしたが、国家科学局ロサンゼルス支局から大きく動いた形跡も無ければ、自宅に帰った形跡も監視カメラの解析で確認。恐らく［フリズスキャルヴ］を駆使して逆転の道を見つけ出そうとデータの海の中で足掻いているのだろうが、その行動自体がエドワードの首を一層絞めてしまっている。
原作では四葉家という悪名によって強大化したバックボーンに加え、日本の財界の協力を取り付けることで道筋を見出した。この世界では、そこに神楽坂・上泉・三矢の三家とその関連企業、日本政府のみならず、南半球の国家はおろか欧州方面の国家まで味方につけている。
エドワード・クラークがディオーネー計画に達也を参加させるためには、ＳＴＥＰ計画そのものを頓挫させるか、達也の味方となっている人間を策によって切り崩すかの実質的二択を強いられている。
次世代のエネルギー事情を激変させるだけのポテンシャルを秘める［恒星炉］を喪う代償。どう取り繕ったとしても、国民生活に直結する生活基盤に大きな支障を来すこととなり、国家予算規模の損失は免れない。最悪、世界群発戦争（第三次世界大戦）以上の被害が出ることも想定される。
だが、エドワード・クラークには財界に対して強固な権力を有していない。いくら政界と軍部に影響を発揮できたとしても、まず国民の

代表とも言える大統領をどう説得するかという根本的な疑問にぶつかる。
仮に説得できたとしても、兆単位は免れない支出を誰がどのように負担するのか、という問題に直面する。ただでさえ［セブンス・プレイグ］や［アルカトラズ］の件で莫大な支出を支払っただけでなく、実はリーナとセリアの婚約でも大統領や長官クラスがポケットマネーから〝結納金〟という名目で支払っている。
金額は一般社会の範疇内に加え、恐らく〝エドワード・クラークの暴挙に対する慰謝料〟も含んでの包みとなり、一人当たり1億円は下らないという有様。彼らの誠意がハッキリと見えたので、金額に関して細かいことは言及しなかった。
ＵＳＮＡ政府からしたら、穏便に事を修めようと苦心したところでディオーネー計画の発表と軍部の不審な動向が表面化した。この時点で米政府の堪忍袋の緒が完全に切れた形だ。そんな彼らをエドワードはどう説得する気なのか。
これで脅しなんか使った場合、大統領の鉄拳が炸裂してエドワード・クラークがミンチより酷い有様になっていたとしても、こればかりは〝自業自得〟と評することしか出来ないだろう。
「まあ、仕方がないことだと思うがな。真一の場合、人間だった頃は自分の体調以外に負ける相手がいるとすれば、女性関係ぐらいだろうからな」
「うっ……（否定できない……）」
別に真一を責めるつもりなどないが、こればかりは追及を免れないことだと真一も理解したようで、虚を突かれたが如く喉を詰まらせるような声を漏らした。ともかく、一つ仕事が片付いたところで悠元が尋ねる。
「それで、真一はどうする？　俺はこのまま東京に帰るが」
「そうですね……流石にあんなことがあった後ですから、東京へ移動するのは事態が起こってからにします。それまでに鍛錬もしておきたいですので」
「分かった。何かトラブルや相談事があったらメールを入れてくれ」

真一に確認を取った後、誰も使っていない部屋を借りて［鏡の扉（ミラーゲート）］で町田のマンションの専用部屋に飛ぶ。そのまま玄関に入ったところで、出迎えたのは珍しくも沓子だった。
「お、帰ってきたの。おかえりなのじゃ」
「ただいま、沓子。てっきり深雪が出迎えると思ったが」
「悠元に夜食を作るとキッチンに行ってしまってのう。手すきだったわしが出迎えた次第じゃ」
「……別にそこまでせんでも、俺は文句を言わないし、最悪自分で作るのに」
深雪の勘の良さはともかくとして、悠元としては腹が空いていたら冷蔵庫の余り物で作る腹積もりでいた。小腹が空いているので夜食を食べてから寝ようと思っていたのは事実だが、誰かの手を煩わせようなどとは全く考えていなかった。
「いや、寧ろそれが拍車を掛けとるとおもうのじゃが」
「別に貶すつもりなど微塵もないんだがな」
「わしらからしたら、もっと頼って欲しいということじゃ。なので、甘んじて出された夜食を食べるとよい」
「……分かった。ただ、その前にシャワーだけ浴びてくる」
沓子と別れて自室で着替え、シャワーを浴びて寝間着姿でリビングに降りてくると、丁度夜食が運び込まれてくるところだった。それを手にしているエプロン姿の深雪は、料理をテーブルにおいてから悠元に近寄って腕にしがみ付いた。
「お疲れ様です、悠元さん。何があったのかはお尋ねしませんが、夜食を作りましたので召し上がってくださいね」
「せっかく作ってくれたのなら、食べないという選択肢はないな……どうした、雫」
「やっぱジゴロだね」
「やめて」
ともあれ、深雪の作った夜食代わりの軽食を綺麗に食べ終えると、感謝の言葉を述べた上でそのまま自室へと戻ることにした。机の上に置かれた端末で情報を具に確認していく。

（それにしても、エドワード・クラークぐらいの人間ならば俺が関与していることぐらい当に知っている筈なのに、ここまで自分に敵意を向けてこないとはな）

別に侮るつもりも無ければ、トライローズ・エレクトロニクスの件で既に達也の協力者として姿を見せた。更には、達也絡みであちこち動いたことは否定できず、その絡みで情報部の連中が関与してきたことも有った。

それを考えれば、［フリズスキャルヴ］を有するエドワードが悠元の存在を認識した上で、達也と共に排除しようと試みてもおかしくはない。それか、悠元に近しい人物を人質にして脅すという線も十分考えられたが、そういった動向も見られない。

最優先は達也の排除のようだが、その動向すらも既に手綱を握られていることに気付いていない。

エドワード・クラークが［フリズスキャルヴ］を用いても逆転の手を見いだせなかったことは達也だけしかいなかった原作の時点でも起こり得ていたこと。何故なら、原作の達也の公的な立場は『四葉家の縁者』兼『元トーラス・シルバーの一人』、そして日本国籍を有する魔法科高校の生徒。

原作の深雪が次期当主となった段階で、達也を深雪から切り離す選択肢など有りはしない。例え［誓約（オース）］の制約が外れたとしても、達也の根底にある〝深雪絡みだけに向けることのできる激しい情動〟がそれを許せるはずもないし、とりわけ深雪が達也との離別を許さない。

そもそもの話、達也に対して支払うことのできるもので、尚且つ達也の願いである〝穏やかな安寧の日々〟を十全に叶えるだけの対価を相手が支払う気など無い時点で、達也とエドワード・クラークの意思は完全に対立してしまっている。

達也が安易に排除しない選択肢を取っているという意味を彼らは全く理解しようとしていない。それは無論のこと、ベゾブラゾフが達也との対決で得た情報をエドワードに流していれば、まだ退く余地はあったのかもしれない。

尤も、ベゾブラゾフは新ソ連とＵＳＮＡの緊張状態を作り出した挙句、達也に負けたという時点で一流から遠くかけ離れた魔法師に成り下がったという事実は最早覆せないものとなったわけだが。

急転編

過去から来た戦略級魔法師

　真一は悠元の帰りを見送った後、隠れ家の奥に引っ込んだ。真一を新たな主として乗り込んでも、そこで働く者たちは何の疑問も抱かなかった。なお、宝物庫の中に置かれたガラクタの類は悠元が全て持ち帰った。

（しかし、パラサイトを利用する形で戦力にする。それも、［パラサイドール］とは異なる形で使役し、同調していた。凄いな、彼は……）

　真一もとい九島光宣であっても、周公瑾の知識と九島家の魔法を駆使して漸く自我を保ったままパラサイトに至る道筋を見つけ出したというのに、人間のままでパラサイトの力を行使することなど思いもしなかった。

　ただ、真一の場合は生来の病弱を克服するために肉体の強化が急務であり、その結果としてパラサイトになることを選択した。そうなったことで、真一は多くのものを失った。

（しかも、敵を騙すために彼らを含めた面々に襲撃を起こさせる……その真意を聞いたときは僕も納得せざるを得なかった）

　本来なら、敵を抑止した時点で何もさせないのが何の被害も生まない。敢えて襲撃を起こさせるという悠元の意図を真一が尋ねると、悠元はこう答えた。

『今は良くても、科学技術の発展によって今後［パラサイト］に侵食されないという保証などない。それならば、今の内に［パラサイト］に対する知識を否応なしに身に着けてもらう必要がある。この国だけでなく、国外を含めた世界の魔法師が負うべき責務なのだから』

　今ここで防いでも、今後再発しないリスクが無いとは言えない。科学技術が進歩すれば、ブラックホール関連の研究も本格化する可能性がある。その際に日本から一々派遣する手間やリスクを負っている余裕などない。

　ならば［パラサイト］の知識を学び、戦闘経験を積むことで世界各

国で［パラサイト］に対する抑止力を修得させる。それが悠元の述べた答えだった。
（そして、それは僕にも同じことが言える）
周公瑾の知識やパラサイトによるアドバンテージを有しているが、これが通用しない可能性も出てくる。真一の場合、戦闘経験の意味では日本国内での対魔法師戦闘やスターズの兵士相手ぐらいしかないため、それ以外の魔法師を相手にしたときのリスクも当然生じる。
（幸い、戻るまでの時間は沢山ある。この時間を使って、もっと強くなろう。手始めに、支配した二人の制御がどこまで出来るか試してみる必要がある……僕も結局は〝井の中の蛙〟だったというわけですね、お祖父様）
優れた魔法師として生を終えたい――――その我儘によって、いろんな人間を巻き込み、最終的には自分が好きになった人間まで同じ道を歩ませてしまった。今更後悔など出来ないが、もし自分があの場所で再び目覚めることがあれば、今度は達也たちの助けとなれるように……真一は、自分が手に掛けてしまった祖父のことを思いつつ、静かに立ち上がったのだった。

◇　◇　◇

6月27日、木曜日。
原作ならば大亜連合が新ソ連への侵攻を始める前日。ここまで穏便に事が進んでいたことは僥倖だと思っていたが、悠元の許に置かれた［時空の道標（エターナルポース）］は、更なる人物を呼び込んだ。
まだ日が昇らない早朝の時間。悠元が目を覚ますと、近くには金髪碧眼の女性が覗き込んでいた。流石に全裸ではなかったが、誰かが招き入れたわけではないというのは直ぐに理解できた。とはいえ、ベッドには他の婚約者たちも寝ている為、彼女たちを起こさないように女性を肩に担ぎ、そのままリビングのソファーに座らせた。
女性は驚きこそしたものの、ソファーに座らせた後の機嫌は良かった。
「それで、何方様ですか？　貴女のことは知りませんが」
「自己紹介がまだでしたね。ヴィルヘルミナ・バランスと言います」

「バランス？　ヴァージニア・バランス大佐の御親族ですか？」
「大佐!?　姉さんが大佐って本当!?」
「……」
　この時点で［エターナルポース］によって未来に来たとみるのが妥当だと判断した悠元は、特殊な暗号回線でヴァージニア・バランス本人に連絡を繋ぐ。向こうは夕方の時間帯の為、直ぐにモニターに表示された。
　向こうも悠元の側から連絡を貰うとは思わなかったが、開口一番謝罪を口にする。
『これは、神楽坂殿。この度はエドワード・クラーク博士のせいで多大な迷惑をお掛けしている件に加え、リーナの件でもご迷惑をお掛け致しております』
「いえ、『スターズ』の件はどの道起こるべくして起こった可能性もありますので……それで、大佐殿に連絡したのは自分の隣にいる女性絡みでして」
『……まさか、ルミナなのか？』
「そう呼ぶってことは、ニアなんだね！」
　死んでいたと思っていた人物がモニターの向こうにいる事実。それを見た瞬間、バランス大佐は大きな息を吐いた。彼女自身、スターズやディオーネー計画の件でてんやわんやになっているというだけでなく、身内と話せる機会が来るとは思っていなかったようだ。
『どういうことだ？　ルミナは８年前のベーリング海で死んだはずでは？』
「それについては、自分から説明します」
　バランス大佐に連絡を取る前、悠元はヴィルヘルミナから粗方の事情を聞いた。
　まず、彼女が８年前に戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］に巻き込まれた直前まで記憶を保持していること。そして、彼女は魔法の直撃こそ避けたものの、衝撃波によってアラスカの山中まで吹き飛ばされた。
　そうなると後は凍傷による死を待つような状態だったが、そのすん

でのところを［エターナルポース］が拾い上げた。更に、彼女の肉体の状態が一気に若返り、２０歳相当まで巻き戻っていた。服装は自宅で寝ていた時の寝間着という話も確認した。
　何故そうなったかまでの理由は不明だが、ヴィルヘルミナが死ぬ直前に『せめてあったかい布団で寝たかったなぁ……』と思ったらしく、その願いが反映されたとみるしかなかった。
『……魔法によるもの、ということでしょうか？』
「そう認識していただいて構いません。ただ、その詳細は教えられませんが」
『むしろそうして頂けると助かります。軍上層部がそれを知ったら、政府がブチ切れて血の雨が降りかねないので』
「そうしそうなのはジョー君だけど、まだ大統領なの？」
　政府と言うよりは大統領なのだろうが、彼とて自然の摂理を捻じ曲げてでも戦力補充をする気など無い。それが常態化すれば、その技術を巡って世界大戦が起きかねず、損失が桁外れになってしまう……というバランス大佐の言葉。彼女としても、これ以上の心労など重ねたくないという気持ちの表れなのかもしれない。
　ヴィルヘルミナの言葉によって、彼女が先代の〝シリウス〟であるという確証を得ることになったのはどう反応すべきか困る部分もあったりする。
『……ルミナは、ＵＳＮＡに戻る気はあるのか？』
「無いよ。旦那はもう死んでるし、私だって既に死んだも同然の身。気掛かりはジェイのことだけど、それは悠元君から聞いたよ。ありがとう、ニア。ジェイを立派に育ててくれて」
『いや……私は特に何もしていないさ。神楽坂殿、お願いがあるのですが』
「彼女のことは不自由がない様に手配しておきます。なので、大佐殿はご自分の職務を全うしてください。何か困りごとがあれば相談に乗らせていただきます」
『……重ね重ね、苦労をお掛けします』
　そうして通話を終えると、リビングに姿を見せたのは寝間着にガウ

ンを羽織った姿の深雪。隣に悠元がいなかったことで起きてきたのだろうが、隣にいるヴィルヘルミナを見て大方の事情を察した。
「おはようございます、悠元さん。新しい愛人候補が時を超えてやってきたのですか？」
「おはよう、深雪。俺とて何でもかんでも愛人にする気はないんだが」
「？」
笑顔を浮かべる深雪、深い溜息を吐く悠元、そして首を傾げるヴィルヘルミナ。三者三様の姿を早く起きてきた水波が目撃する形となった。朝食後、悠元はヴィルヘルミナに改めて現在の状況を説明する。
「――以上が現在の世界情勢です。それで、どうしますか？　一応外に出ても問題が無いように戸籍の手続きはしておきますが」
「そうねえ……悠元君は、今困っていることとかないの？」
「そうですね、強いて言うなら諸外国の対応ぐらいですが……驚かないので？」
「私や『ノア』が居なくなったとなれば、多分バルクも軍を辞めてるでしょうし、今の腑抜けたスターズに対して〝既に死んだ〟私が義理を果たす理由はないから」
『ノア』と呼んだのはセリアの先代として〝ポラリス〟を名乗っていた人物で、バルクと呼んだ人物は先代の〝カノープス〟とのことらしい。
ヴィルヘルミナから現状のスターズについても尋ねられたため、リーナの脱走とパラサイト化した兵士による叛乱まで伝えると、彼女は盛大な溜息を吐いた。奇しくも彼女が危惧していた事態が現実のものとなったためだろう。
「そして、今の私が義理を果たす相手は命を救ってくれた悠元君だもの」
「正確には自分が所有している聖遺物（レリック）のせいなのですがね」
「それでも、貴方は私の命を救ったも同然よ。貴方が望むなら、何でもする覚悟はあるわ。何なら、妾でも」
「婚約者だけでもお腹一杯なんですが……」

正直、別にプレイボーイ的な事を望んで［エターナルポース］を所有しているわけではない。まるで前世の分の皺寄せを受けるが如く女性関係が連鎖しまくっていることに、匙を月に向けて全力投球したい気分だ。

話し合いの後、ヴィルヘルミナは婚約者たちの魔法の教師兼愛人というポジションとなり、その日の夜は婚約者たちだけでなく愛人たちまで押し掛けられて、無差別級・時間無制限の夜間戦闘（バトルロワイヤル）に発展した……流石に学業への影響が出ない範囲での行為となったことは言うまでもないが。

翌朝、ヴィルヘルミナからは『婚約者がここまでいるのも納得できるだけの強さね。私も服従させられちゃった』と述べていた。解せぬ。

後日、このことをジェラルドに話すと、彼はその場で綺麗な土下座をした上で『本当にうちの母が申し訳ありません』と述べた。ヴィルヘルミナと再会したことは良かったものの、その彼女が悠元の愛人となったことを聞かされると、ジェラルドがその行動に至った。

「悠元が義理の父親か……義父（とう）さんと呼ぶべきか？」

「やめて、俺の胃のライフが音速で削れるから。こうなってくると、ロッキー山脈で暮らしている九島閣下の弟さんが羨ましく思えてくるな」

「九島将軍か……その気持ちを理解できてしまうのが何とも」

ヴィルヘルミナの存在で義理の家族の関係になってしまった二人がそんな噂をしたころ、ロッキー山脈の麓の小屋で盛大なクシャミをした男性の姿があったのだった。

◇　◇　◇

リーナの引き渡しの件は、国防陸軍の上層部の判断で差し止められた。蘇我大将曰く『君を敵に回すリスクに加え、アンジー・シリウスがＵＳＮＡのトップから直々に命令を受けているという事実は大使館経由で国防総省（ペンタゴン）の関係者から確認が取れた』とのことで、第１０１旅団へ情報が漏洩するリスクは格段に減った。

そもそも、ＵＳＮＡ政府としては『新ソ連方面の情勢を鑑み、アン

ジー・シリウスの入国については必要以上に新ソ連を刺激したくなかったため、極秘の入国措置を取った』というスタンスで動いている為、同盟国の責務として新ソ連に近しい日本へ派遣した、という体裁を取っていた。

ヴィルヘルミナ・バランスは帰化への手続きを取ることで合意に至り、養子の受け入れ先は東道家が全面的に責任を負うこととなった。これで戦略級魔法師がまた一人増えることになる為、抑止力を欲する意味でも四大老の一角として責任を負ってもらう。青波が盛大に頭を抱えたとしても、こればかりは四葉の悪名を放置したツケである。

真一は神戸の中華街に留まり、制御下に置いたレイモンドやレグルスを操りつつ、自身の鍛錬に余念が無かった。彼も思うところがあったのか、鍛錬に励んでいるらしい。

原作に近しくも全く異なる流れが形成されている中、6月28日の金曜日。世界を震撼させるニュースが飛び込んで来た。大亜連合軍による新ソ連侵攻だった。朝食中ではあったが、悠元も箸を置いてニュースを見ていた。

「ウスリースク郊外での衝突か。狙いは十中八九ウラジオストクの奪取による半島方面の安全確保だな」

「けど、ウラジオストクを放棄するとは思えないわね」

「流石に完全復旧したばかりの軍港があるからな。新ソ連軍も全力で抵抗するだろう」

大亜連合側には戦略級魔法[霹靂塔]があるが、原作で乱発しなかったのはアフリカでの戦闘によってインフラ破壊に伴う負担が大きかったことに起因する。

別に[霹靂塔]に限った話ではないが、魔法の威力や改変規模・強度が増せば増すほど、魔法に要求される制御能力も当然増える。更に、現代魔法の特性で魔法式に必要な事象干渉力が揃った時点で術者との接続が切れてしまうため、そこから魔法を制御することが出来なくなる。その結果として何が起こるのかと言えば〝魔法の暴走〟に他ならない。

「この時点で踏み切ったとしたら、先日一高を狙ったベゾブラゾフの

魔法攻撃が関係しているのですか？」
「関係は無くもない。それに加えて、未確認情報だが新ソ連国内にあるいくつかの無人ミサイルサイロが破壊されたそうだ」
　簡単に言えば、遠隔で設置した時限爆弾を放置するような行為に等しい。しかも、魔法式で制御しているとはいえ、事象次元内の事象改変に伴う想子の復元力が働いたとしても、事象改変に伴う余波によって科学的な干渉が起きた場合、科学的変化に対する復元力は一切働かない。
「つまり、ベゾブラゾフが居ない、あるいは簡単に動けないから踏み切ったってこと？　確かな確証も無いのに？」
「日本は別に、ベゾブラゾフの生死について何も発表していない筈なんだがな。それを拡大解釈して〝死んだ〟もしくは〝人事不省〟とみるのはおかしな話だが」
　モニターに映るニュースではアンカーパーソンとコメンテーターが話しているが、大亜連合軍内ではその噂が流れた結果として軍の侵攻に踏み切ったとみる線が濃厚だった。とはいえ、実際に首を獲った訳でもないのに、ベゾブラゾフの生死を明確に把握できていない時点で詰んでいる。
「悠元兄様から見て、ベゾブラゾフの生存確率はどうなのです？」
「９割生きているのが濃厚だな。残る１割は死んでいる確率だが、現状ではそれもないだろう」
　佐渡沖の不審船の一件から含めたとしても、ここ数か月で数回も「トゥマーン・ボンバ」を行使していたベゾブラゾフが突然消息不明となったという時点で、噂になっても何ら不思議ではない。
「根拠は？」
「新ソ連の性格上、そんな噂を流されてしまってはベゾブラゾフの健在をアピールさせるしかなくなるし、対処をした達也も『ＣＡＤの破壊しか狙っていない』と明言してたからな。俺はクレムリン宮殿を半分消し飛ばしただけだが」
「全壊じゃなくて綺麗に半壊させるなんて芸当、悠元君以外に出来る人がいないと思うわよ……」

気になるのは、ここから劉麗雷が原作通りに日本へ亡命してくるのかという疑問が出てくる。スパイを粗方国外追放した際、当然大亜連合方面の工作員も追放している。まともに身内の伝手を取れない国へ亡命するとは思えない。

そもそも、劉麗雷の近くにいた新ソ連の工作員の存在からして、この侵攻自体が最初から新ソ連もといベゾブラゾフの描いたシナリオではないかという線が浮上する。

「大亜連合の矛先がこちらを向かない限り、俺や達也が出張ることも無いし、強いて言うならリーナ絡みでパラサイトの連中が密入国することにリソースを向けられる。尤も、リーナにはその対処が率先してできるように叩き込んでる最中だが」

「となると、[天刃霊装]を修得させるつもりなのじゃな？」

「ああ。セリアはあっさりと[天魔抜刀]まで会得したわけだが……押し付けるな」

「スキンシップなのですよ、お兄ちゃん」

ここまで来た以上は、それの是非について敢えて問うことはしない。だが、敵意を向けた以上は相応の報いを受けてもらう。別に彼らをストレスの捌け口にしているつもりなどないが、図らずもそうなっている有様に対して悠元は一つ息を吐いたのだった。

閑話　英国首相の呟き

ＵＳＮＡが提唱したディオーネー計画と日本が提唱したＳＴＥＰ計画。いずれも魔法師を主体とした計画であることは間違いないが、ロマン色が強い前者に対して、後者は現実的な事業として既に成立している。

とはいえ、魔法に関わりを持たない大半の人間からすれば、現実味が少ない部分が出ていても何ら不思議ではない。だが、魔法による人類の未来の展望を切り開くという観点は、世界各国で様々な反応を見せていた。

そこに、新ソ連の戦略級魔法師イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが日本に対して魔法攻撃を二度も仕掛けて失敗。その代償として、戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の詳細――酸水素ガスを生成し、攻撃範囲を自在に変更できる爆撃魔法――が世界に暴露された。

この時点で日本に対する評価は上がり、新ソ連の評価はダダ下がりした。ましてや、新ソ連は否定しているが、２０９２年の佐渡島襲撃の件も新ソ連が強く関係していると世界各国の諜報機関はそう睨んでいる。

この事象だけを見ても、日本は独自の力で新ソ連の非人道的な魔法攻撃を退けている、という事実は明白。それを聞いたＵＳＮＡの国防総省（ペンタゴン）は達也に対する意見が二分してしまっている。

人間は機械やロボットのように画一的ではないし、元［トーラス・シルバー］の一人である司波達也に対してどう評価するかは多彩な評価や意見が出てきても何ら不思議ではない。そこに関して脳死気味に日本側の意見を肯定しろなどと言うつもりはないし、出来るはずも無い。

ディオーネー計画もといエドワード・クラークがベゾブラゾフを巻き込んだが故に苦しんでいるという事実と、ディオーネー計画に対する各方面の足踏み傾向が進んでいる事実。そして、それはＵＳＮＡと大西洋を挟んだ対岸の国家――とりわけイギリスにとっても他人

事ではなかった。
首都ロンドンの中心部、シティ・オブ・ウェストミンスターのダウニング街の一角に位置するイギリス首相の官邸――――通称『ダウニング１０番地』――――にて、イギリス首相のロバート・チャーチル・ヴィンセントは諜報機関からの報告の山を見つめながら頭を抱えていた。
日本とイギリスの関係は、過去にイギリスが第二次大戦前に裏切ったというだけでなく、祖先たちが行ってきた〝三枚舌外交〟によって世界各地の戦争を引き起こした遠因にもなったが、それでも互いに長い歴史を有する王家・皇家を有することから、関係は大分改善されていた。
だが、それに罅を入れたのは3月に起きた西果新島の記念式典パーティーを狙った工作活動を阻止された件。日本側は『フランスやＳＳＡの関係者までも狙った極めて悪質なテロ行為』と断定し、使用されようとしていた戦略級魔法［オゾンサークル］を行使できる魔法師は、日本へ渡航前にイギリスの［十三使徒］ことウィリアム・マクロードとオーストラリア軍基地で会談をしていた事実まで日本は把握していた。
マクロード本人は否定していたものの、この数か月後にディオーネー計画が立ち上がり、マクロードは何ら疑うことなく提唱者のエドワード・クラークや同席したイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフと会談していた。王室と政府は早くとも２０９２年の時点でマクロードとベゾブラゾフが関係を持ち、その後にマクロードとエドワードが関係を持ったと推測した。
そして、新ソ連による日本への魔法攻撃は司波達也に対する攻撃と断定。ディオーネー計画に対する信憑性はおろか、日本に賛同して独自の経済制裁を科す国まで出ている。
水素発電や［恒星炉］の技術提供に対しての誠意でＩＰＵやアラブ同盟、新興国家のＳＳＡやアフリカ連邦まで動いているだけでなく、東ＥＵもドイツを主体として動いているほか、西ＥＵもフランスやスペイン、ポルトガルなどと言った主要国までディオーネー計画を見限って日本に賛同している。

ディオーネー計画というバスに乗ることを拒否し、独自の魔法民生産業を事業として確立した。宇宙開発という人類の定住可能範囲を広げることに対し、ＳＴＥＰ計画は魔法師を技術者として――『人』として扱うという問いかけを世界に投げかけた。

「……やはり、こうなってしまったか」

ロバートはディオーネー計画への参加を国際魔法協会から打診された際、宇宙開発という点においてはあまり縁のないイギリスが関与する利点が余り見いだせなかった。それに、今春に騒ぎを起こしていた新ソ連が計画に参加するというエドワード・クラークの発表を見た際、明らかに〝机上の空論〟の領域を超えていないと判断した。

未確認情報は多いものの、８年前にベーリング海で観測された大規模魔法行使に伴う魔法発動の兆候をイギリスは掴んでおり、マクロードを伴う形で訪米した際にＵＳＮＡ大統領と会談をしたが、彼がその兆候前後で新ソ連に対する嫌悪の度合いが変化していることにロバートは気付いた。

つまり、８年前の兆候は魔法師同士による暗闘の結果として引き起こされた、と推察した。

話を戻すが、マクロードは信頼の置ける軍関係者に日本のパワーバランスを懸念するような言葉を漏らしていた。その結果として、３月の西果新島の件とディオーネー計画への参加、そして大西洋上の『エンタープライズ』での会談に繋がった。

マクロードが帰国次第事情を聞いたが、肝心の情報は齎されなかった。この時点で、ロバートは計画発表時に明かされなかった十人目もとい日本の高校生の正体をマクロードが既に把握していたと睨んだ。

その後に起きたイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフによる戦略級魔法の攻撃。そして、『第一賢人』なる怪人物が齎した［トーラス・シルバー］の正体。この二つとマクロードの動きが連動したものだとすれば、一番該当し得る人物は日本の司波達也。そして……第二の候補者にロバートは心当たりがあった。

「あの場に出てきた〝彼〟も［トーラス・シルバー］だったという事実……マクロード一人の首で国家が存続するならば、安い代償かもしれ

ないな」
　数年前、イギリスの女王に対する恋愛報道が加熱し、前世紀で起こったパパラッチ紛いのような行いをするものまでいた。ただ、その中には女王を亡き者にしようと暗殺者を潜り込ませていた勢力がいた。
　だが、それを一人の偉丈夫と一人の少年が魔法を駆使してパパラッチごと全員拘束し、暗殺者諸共『女王陛下の命を脅かした不届き者』という英語で刻まれた鉄板を吊り下げられた状態で警察署の前に放り出された。
　暗殺者を送り込んだ勢力は政治工作で全員闇に葬ったが、彼らに対しては偉丈夫こと上泉剛三と少年の長野佑都――――後の神楽坂悠元に勲章を贈った。その際、女王が『君と結婚したい』などと言った瞬間に少年が拳骨を落とした。
　ロバートからすれば、一国の象徴が命を救った少年を欲しがる理由も分からなくはないが、それでも彼を縛る様なことがあってはならないと思った。根拠がある話ではないにせよ、かの英雄の一人である上泉剛三が気に入っている人物を取り上げる様な事など、彼には出来ないと判断せざるを得なかった。
「ＵＳＮＡは……『スターズ』の叛乱と思しき騒動で、我が国のエージェントが日本に同行している件か。確か、アニエスが役目を帯びてＵＳＮＡに向かったことは陛下から聞いていたが……このままだと、我が国も泥船に引き摺り込まれかねん」
　新ソ連の暴走、ＵＳＮＡの［パラサイト］による騒動。そして、それはディオーネー計画に連動する形で起こってしまっている。このままでは、イギリスも底なし沼に引き摺り込まれるのも時間の問題であった。
「最大の懸念であった〝時計台〟の連中は殆どが亡くなった……私だ。国防大臣を呼んでくれ、大至急とな」
　イギリス政府でも無視できない魔法師の組織――――〝時計台〟と揶揄される魔法師たちは、今月中旬に突如として謎の壊滅をしていた。当初は内部分裂による殺し合いとみられたが、辛うじて生き残っ

た魔法師の証言により、上泉剛三の妻を誘拐しようとして逆襲されたという結論が出た時点でロバートは捜査の打ち切りを命じた。
誰にだって触れてはいけないものぐらい理解できる。ロバートは過去の事件からそれを理解していた。だが、彼らは理解していなかった。その差が明暗を分けたのだと率直に感じた。
この後、イギリス政府は国際魔法協会に対してディオーネー計画の再検討を要求すると共に、王室の後ろ盾を得る形で日本が提唱したＳＴＥＰ計画に対して賛同の意思を表明する。ただ、ロバートは女王が未だに悠元を諦めていない素振りが見られることに対し、神楽坂の名を継いだ彼が不利益を被らないように努めようと決意したのであった。
この時、現地時間６月２７日１７時、日本時間６月２８日２時であった。
◇　◇　◇
翌日――――現地時間６月２８日９時、日本時間６月２８日１８時。ロバートは夜中に叩き起こされる形で大亜連合の新ソ連侵攻を聞いた際、最初は『夢でも見ているのか？』と訝しんだ。とりあえず情報収集を徹底させて、改めて就寝。そして睡眠時間をしっかり確保した上で閣僚との会議を終えて執務室に戻った。
「ベゾブラゾフの姿が見えないことは情報で得ているが、それにしてもおかしい……それならば、極東方面に詳しいコントラチェンコを動かしてでもフォローするはずだ」
新ソ連の［十三使徒］の一人、レオニード・コントラチェンコ。黒海を臨む沿岸の基地にいて、東欧やトルコ、西・中央アジア方面を抑えている。仮にベゾブラゾフが死んだとすれば、いくら彼がそこまで十全に動けなくとも、彼を動かさない理由はない。
東ＥＵのカーラ・シュミットやトルコのアリ・シャーヒーンといった抑えを喪うリスクは避けられないし、先日の日本の呼びかけに応じた南半球諸国による経済制裁を鑑みれば、コントラチェンコが動けない理由も納得は出来る。
ただ、ここ最近の情勢を鑑みれば、新ソ連政府がベゾブラゾフの穴

埋めとしてコントラチェンコの派遣を決めるか、あるいは大規模な動員を掛けて圧倒するかの二択を迫られる。後者は戦略級魔法の存在もあって決め打ちは出来ないのだろうが。

「それに、大亜連合も大亜連合だ。香港方面からの情報では海軍の損耗が回復し切れていない……噂だけを頼りに仕掛けるリスクなど、誰しもが理解できるはずだ」

大亜連合内で権力闘争が起き、日本に対抗するべく国力を増大させようと考えた結果として新ソ連侵攻に至ったと考えるのが妥当だろうが、大亜連合軍は数年前にアフリカ方面へ十万の兵を派遣したものの、その殆どが壊滅したという噂がある。

その際に二人のアジア系の人間が成したという都市伝説レベルの噂も出回ったが、ロバートはそれを聞いた瞬間、その二人が自分の思った二人ならば『成し遂げることは可能』と弾き出したものの、他の人からすれば『有り得ない』という言葉で一蹴されるのが目に見えたため、何も言わなかった。

話を戻すが、コントラチェンコが黒海から動いた形跡もなく、ベゾブラゾフの死亡に対する明確な根拠もない。となると、大亜連合がいくら戦略級魔法師を有していても、半信半疑のレベルで軍を動かすには納得できる説得材料が無い。

確かに、日本への攻撃と思しきベゾブラゾフの魔法は今年だけで少なくとも二回行使されている。一回目は伊豆高原に対して、二回目は国立魔法大学付属第一高校に対して。その二度の共通点として、間違いなく司波達也なる人物が関与していると報告を受けている。

一回目と二回目の攻撃間隔は凡そ１０日前後。そうなると、次の攻撃が想定される６月３０日前後（６月２９日～７月１日あたり）が分水嶺になる。それを確認した上で軍事行動を起こしたとするならば自然だが、軍事行動の準備を考慮すれば１週間も経たない内に行動を起こした、ということになる。

日本政府はベゾブラゾフの攻撃に対して厳しく非難し、彼の身柄引き渡しを要求した。だが、ベゾブラゾフが日本へ引き渡されたという情報は入ってこない。そうなると、新ソ連がベゾブラゾフの存在を隠

しているのが濃厚。
ロバートは考えていくうち、ある可能性を考え始めた。
（もしやと思うが……仮に新ソ連と大亜連合が共謀していたとしたらどうなる？）
その二国は旧国家時代から諍いこそあれども、新ソ連としては大亜連合からの供給によって生き永らえることのできる〝最後のライン〟。そして、新ソ連は躍起となって司波達也を葬ろうとしているような動きを見せている。
大亜連合は一昨年の『灼熱と極光のハロウィン』によって日本と講和を結んだ以上、日本と表立って事を構えることは出来ない。
だが、大亜連合内には対日強硬派なる派閥が存在しているのも事実で、もし彼らが新ソ連からの〝甘い言葉〟――例えば、『そちらの国を苦境に立たせた日本の戦略級魔法師を葬る企みに協力してくれないか。貴方たちの悪いようにはしない』など――によって、対日融和派の影響が強い部隊を送り出し、融和派の影響力を削る。
だとすれば、ウラジオストク侵攻部隊に一万数千人規模で済ませるという楽観視し過ぎた見立てなど、本来軍を指揮するものならば戦略級魔法の如何に関わらず悪手でしかない。
亡きロバートの父は厳しい軍人で、かつて世界群発戦争の国際部隊に参加していた。そんな彼は亡くなる数日前にこう呟いていた。
――いいか、ロバート。戦略級魔法というものは、核兵器よりも遥かに後世へ深い爪痕を残す代物だ。仮に、彼らに国家を滅ぼす力があろうとも、結果的に物を言うのは物量。即ち兵士の数だ。
（……戦略級魔法師がいようとも、ウラジオストクを占拠して領有権を主張するにしても、結局は兵士の数が要る。それも、最低でも数万から十数万……まさか、大亜連合へ送り出された部隊は〝生贄〟？だとするならば、同行しているとみられる大亜連合の［十三使徒］は……この可能性は、間違いなく出来る）
ウラジオストクからウスリースク、大亜連合内への兵站を確保しようとした場合、将来のシベリア侵攻まで鑑みれば十数万から数十万の大部隊を派遣しなければならない。仮に戦略級魔法師の力を頼みに

したとしても無秩序に領土拡張を行う羽目になり、どうあっても派兵している一万少々の兵士では足りない。
仮に大亜連合軍の侵攻部隊が〝生贄〟とした場合、大亜連合の［十三使徒］劉麗雷の行き先は主に三択へ絞られる。一つは大亜連合への帰還、二つ目は新ソ連への引き渡し、そして……三つ目の選択肢は大亜連合と講和条約を結んだ日本へ逃げ込むこと。
一つ目はベゾブラゾフが生きていた場合、大亜連合の領土全てが［トゥマーン・ボンバ］の射程圏内に入ってしまうリスクを負う。二つ目は対外的な抑止力を喪うため、大亜連合で内戦が勃発する危険を孕む。よって、この二つの選択肢は実質的に有り得ない。
だが、三つ目の選択肢を取った場合、新ソ連が日本に対する攻撃の大義名分を得るだけでなく、大亜連合にとっても対日強硬派の溜飲を下げられる利点を生むことが出来る。更に、劉麗雷を日本国内で暗殺することが出来れば、無理難題を突き付けた上で新ソ連と協力体制を結び、講和条約を破棄して日本への侵攻を行うことが出来る。
（確かによく出来た策だと思うが……大亜連合政府は馬鹿なのか？新ソ連共々泥船に乗せられて沈む未来しか見えんぞ）
ロバートは上泉剛三を知っているし、その孫である神楽坂悠元も知っている。更には、父の繋がりで神楽坂千姫と上泉奏姫も知っている。彼らが本腰を入れて事態の対処に当たった場合、新ソ連と大亜連合が揃って国家の体裁を保ったままでいられるとはとても思えなかった。
「……オーストラリア軍の件の償いになるかは分からないが、孫娘経由でその危険性を伝えておくとするか」
なお、その際に取った連絡で孫娘のアニエスがジェラルドに嫁ぐという話を聞かされ、卒倒して首相官邸内が大騒ぎになったのは……また別のお話。

対岸の火事で済んでくれればいい

アンジー・シリウスの件は第１０１旅団に決して伝わらないように厳命されている。そもそも、匿っている場所は四葉家の影響下が強いとしても、当の四葉家は神楽坂家に〝臣従〟している状態になりつつあるため、交渉する以上は悠元が矢面に立つこととなる。

正直、深夜はまだしも真夜まで引き取る形になるとは思いもしなかった。普通ならば５０歳近くの人間を引き取る――――母親のような相手を囲う様な形は、ファンタジーものなら一歩間違うと破滅フラグになりかねない。

ただ、この世界の魔法師の特性に加え、悠元の魔法によって若返った形となった。そうなった以上は断ることも難しくなる。そこにヴィルヘルミナ・バランスが加わったことにより、愛人が五人に増えるという意味不明の有様。

ただ、それでも婚約者たち曰く『悠元が相手だと体力が持たない』とのことで、そこまで夜の生活的な意味で化物になった覚えなどない。寧ろ遺憾の意を表したいぐらいだ。

「そこまでがっついているつもりも無ければ、自堕落になりたくもないし、させるつもりもないから加減はしているんだが……とりあえず、セリアは後で直々に［天刃霊装］の訓練な」

「え、お、お慈悲を」

「だが断る」

「のおおおっ……」

セリアが悲鳴に近い声を上げながら崩れ落ちたことはさておき、手を止めていた朝食の残りを食べ始める。ここで暮らしている面子で一番［天刃霊装］を使いこなしている自信はあるが、それを過信にするつもりはない。

「［パラサイト］の件で自身を守るのは必須なんだ。その意味で疎かにするようなら俺が直々に叩き込むまで」

「あの、悠兄。それって私やアーシャも？」

「性急なことをするつもりはないが、ゆくゆくは修得してもらう」

茉莉花は［リアクティブ・アーマー］に代わる新たな防護障壁術式を修得中で、アリサは［領域強化（リインフォース）］によって変化した［オーバークロック］――――［ブーストローダー］の制御訓練に集中して取り組んでいる。

少なくとも悠元の婚約者全員に［天刃霊装］は修得させるが、その子孫世代については情勢を見ながらの判断となるだろう。未来のことは未来を生きる人間に任せることしか出来ないわけだが。

「まあ、セリアの鍛錬の件は確定として、今日は家にいる」

「何か懸念があると？」

「多分、防衛省あたりから呼び出しがあるんじゃないかって思う。杞憂に終わってくれればいいが」

なお、セリアが嫌がったのは、こと武術の訓練に関して悠元は一切手抜きをしないということを知っているからに他ならなかった。

◇　◇　◇

そんな悠元の懸念は的中し、朝食後の呼び出しで防衛省庁舎内の国防陸軍最高司令部に出向いていた。勿論スーツ姿であり、軍服でないのは悠元自身が軍人としての立場を示さないというもので、これには蘇我も納得している。

「態々出向かせてしまって申し訳ない。君を呼んだのは主に報告と相談だ」

「相談は分かりますが、報告ですか……アンジー・シリウスに関わる案件とみても？」

「話が早くて助かる。出所は国防総省（ペンタゴン）だが、内容を見るに『スターズ』の意向が強いと判断し、大友参謀長と相談した上で秘匿した。空と海も君を敵に回すリスクを鑑みて秘匿に賛成してくれた。無論、防衛大臣や総理大臣も把握している」

ＵＳＮＡの機嫌を損ねるリスクよりも悠元の機嫌を損ねる方が遥かにヤバいという言葉の裏返しだが、大国よりもリスクの高い扱いをされたことに悠元はジト目を向ける。

「つまり、第１０１旅団へ情報が流れることは無くなったと？」

「佐伯の持つ情報ルート経由で漏洩するリスクはあるだろうが、その

際は此方で処理を受け持つ。それも織り込んだ上での秘匿と思ってくれ」
今のところ、達也や悠元に直接引き渡しを求めるような連絡は来ていない。そもそも、アンジェリーナ・シールズの帰国を手伝ってくれた外国の魔法師たちを匿った事実はあっても、アンジー・シリウスそのものを匿った覚えなどない。言い訳がましく聞こえるだろうが、当のリーナ本人とＵＳＮＡ大統領で話がついている以上、彼女を処罰する必要もない。
それこそ大統領が一連の騒動を理由として自らアンジー・シリウスに対して除隊勧告を行い、リーナがそれを受理したという流れにすることは簡単で、軍を辞めたも同然の人間に一体何の罪を問うことが出来るのかという話になってしまう。
俗に言う〝引責辞任〟の形式を以て軍を辞めたリーナと、それを許可したＵＳＮＡ軍の最高司令官。二人に血縁関係という贔屓目があったとしても、政府兼米軍の長が認めたことを国防総省麾下の部隊に過ぎない『スターズ』が不満を漏らす理由など本来あってはならない。それを許せば、文民統制（シビリアンコントロール）そのものの存在意義にも関わる話となる。
尤も、その問題解決を行うのはＵＳＮＡそのものであり、日本には全く関係のない話である。
「了解です。一応述べておきますが、アンジー・シリウスに関する件はＵＳＮＡの大統領が既に除隊の意思を当人に提示したことは確認済みです。それと、今後『スターズ』が出張った際は自分も含めた『神将会』で処理します」
「了解した。それで、相談事と言うのは他でもない大亜連合による新ソ連侵攻だ」
蘇我が悠元を呼び出したのは、大亜連合と新ソ連の趨勢。それに伴う今後の動きについてのもの。ベゾブラゾフに関する情報は既に教えている為、其処についての可能性は触れずにベゾブラゾフが健在という前提で話を進めていく。
「上条大将はどう見る？　やはり新ソ連が勝つとみているのかね？」

「ええ。大亜連合側は［霹靂塔］を用いているようですが、どうにも勝ち切れる形には持っていけていないようでして」
　これは［霹靂塔］などの戦略級魔法に限った話ではなく、物理法則と現代魔法の性とも言うべきもの。元々抑制という内向きの力を軍事的に反転させた場合、周囲に対する抑制が働きにくくなる。
　核抑止の場合は核兵器と言う外向きの力が終着点となるが、戦略級魔法の場合は事象干渉力が次元世界の復元力を上回り続ける限り、終着点は存在しない。分かりやすい一例は原作の［質量爆散（マテリアル・バースト）］で、海上対象の消滅の余波によって生じた津波が発生するという事態にも繋がった。
「そうか……上条大将なら、［霹靂塔］をどう使う？」
「一番手っ取り早いのは、インフラ設備を破壊してウラジオストク市民を煽り、暴動を生じさせて新ソ連軍の統率能力を逓減させる。或いは、夜間に乗じてウラジオストク軍港や関連施設の機能を破壊する。自分なら［霹靂塔］をこう使うでしょう」
　広範囲に電気エネルギーの攻撃を与えるとなれば、有効射程及び有効範囲は極めて重要となる。ただ、［霹靂塔］は魔法の特性からして精密攻撃に一番向かない戦略級魔法でもあったりする。
　剛三の戦略級魔法［雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）］はその欠点を一切取っ払い、敵だけを悉くプラズマに近い雷で殲滅する最強最悪の戦略級魔法。それを独学で編み出したというのだから、剛三は古式・現代の魔法師の中でも文句なしの最強と言えるだろう。
「中々に苛烈だが、それが一番味方に損害を出さない方法か」
「ええ、自分の場合はそれを実行した上で速やかに引き揚げることも加わりますが。理由はベゾブラゾフの生死について噂レベルを超えない根拠があるからです」
　死体を見つけたわけでもなければ、モスクワ方面で公開処刑されたわけでもない。ベゾブラゾフ自身の生存を直接確かめる術がない以上、一定の戦果を挙げた時点で大亜連合本国に引き揚げるというのが妥当な戦略である。
　仮にベゾブラゾフが報復として［トゥマーン・ボンバ］を大亜連合

に向けて撃ちこんだ場合、大亜連合は新ソ連に対する報復を正々堂々と名乗れるし、新ソ連による被害を受けた日本を巻き込むこともできる。正直、長年人の国を脅かすような輩を簡単に信じ切れる材料など皆無なわけだが。
「そもそもの話、噂程度で攻め込むというのは本来の戦略・戦術の観点から言えば〝愚策〟でしかないと自分は考えます。我が国が発表したのはあくまでもベゾブラゾフの関与であり、彼自身の生死については一切言及していない」
「それは確かにその通りだ……上条大将。仮に、新ソ連がスパイを通じて大亜連合政府や軍を唆したとして、その目的は何になる？」
漠然とした状況証拠をでっち上げ、戦争状態に持ち込んだという事例は古今東西において存在するが、横浜事変で喪った海上戦力の補填を待たずに敢行した。仮にベゾブラゾフが不在だとしても、明確な死亡の根拠を掴まない限りは徒に自軍の戦力を削ることになる。
それに、圧倒的な力を見せつけるという意味では［霹靂塔］を先制攻撃という形で撃ち込み、混乱した敵を自軍で蹂躙するほうが人的被害も少なくて済む。横浜事変であれだけの立ち回りや暗躍を見せた大亜連合軍が、大軍による単純な力押しを選択したという疑問も生じる。
「国家を滅ぼすというのは現状において選択肢に入らない、と考えます。ディオーネー計画への参加を表明したベゾブラゾフの面子を潰すことになるだけでなく、新ソ連の増長は流石にＵＳＮＡやイギリスでも看過できる範疇を超えることになるので」
「私もそう考える。では、真意はどこにあると？」
「まず、この戦い自体は最終的に新ソ連が勝つと思われます」
反体制派がいくら暴れたとしても、大亜連合と新ソ連の戦いはベゾブラゾフが［トゥマーン・ボンバ］を使った時点で勝敗が決する。
「そうなれば、これ以上の被害を防ぐために大亜連合政府は新ソ連政府に対して休戦協定を申し出ます。当然、勝者の側である新ソ連政府は賠償金の支払いや戦争犯罪人の引き渡しなどを要求するでしょう」
「……新ソ連が大亜連合の戦略級魔法師である劉麗雷の引き渡しを求

めると?」
「ここから大亜連合政府が取れる選択肢は三つ。大人しく彼女を引き渡すか、彼女を死んだことにして新ソ連の追及を逃れるか」
原作で覚えている知識の範囲では、劉麗雷のいる部隊の動向を掴んでいたにもかかわらず、新ソ連軍は包囲も攻撃もしなかった。更に、大亜連合政府も本来大事な戦略級魔法師を見捨てるような動きを見せた。
こうなると、大亜連合も新ソ連とグルの可能性が拭い去れない。体制が一枚岩とは言い難いが、そんな行動を見せた時点で日本を貶めようとする意図が見えてしまう。もしかすると、新ソ連と日本が衝突して消耗したところを漁夫の利で侵攻することも考えられるだろう。
「最後の選択肢は、彼女をどこかの国に亡命させ、ほとぼりが冷めたら帰国させる手段。自分はこの選択肢が一番高いと睨んでいます」
「確かに、虎の子とも言える戦略級魔法師を喪うことは避けたい……上条大将、まさか亡命先に我が国が含まれると?」
「逃亡手段にも依りますが、現行のジェット機の航続距離を考えれば、我が国も当然対象に含まれます」
現状では確定していない未来の話でしかない。だが、ベゾブラゾフなら劉麗雷をピンポイントで狙い撃てる手段を有するのに、それをしなかった時点で新ソ連と大亜連合に何らかの政治的取引があったと考えるのが妥当だ。
「現状は未確定の事項が多いため、推論の域は出ません。ですが、ベゾブラゾフの生存は間違いないとだけ断言できます」
イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフは8年前のベーリング海で先代の〝シリウス〟を殺した。ディオーネー計画に引き込めなかった達也を実力で排除しようとした。この流れに則るならば、劉麗雷も殺さなければ一貫性が伴わない。だが、原作のベゾブラゾフはそれをしなかった。逆サイドで二つの騒動を起こせば、達也が対処できる範疇を超えられるとみてのものだろう。
ベゾブラゾフは何も分かっていない。達也が殺そうと思えば、何時でも殺せたのに見逃されたという事実を。彼の『平穏な生活』という

少なくない欲の為に、ベゾブラゾフは生かされたという事実を何も理解していないことに。
「暫くは趨勢を見守りつつ、日本海側の警戒をすべきということか……分かった。貴官の意見を防衛大臣や総理大臣に伝える」
「そうして頂けると助かります」
「ふふ、別にタメ語で話しても私は咎めないのだがな」
「変に増長したくありませんので」
魔法師としては異例の上級将校。だが、それでも偉ぶったりしないし、派閥争いに対して一切関与しない姿勢を見せる若者。こういう人間こそが一番怒らせてはいけないのだと理解しているからこそ、蘇我は悠元の疲れ切った表情を見て、笑みを漏らしたのだった。
「万が一の場合、上条大将はどのような行動を講じるのか尋ねてもいいかね？」
「誰かの許可が取れなくとも、国家を脅かす行動に移った場合、問答無用で排除します。いざという時は東ＥＵ・北欧・トルコに協力を依頼して新ソ連に圧力を掛けます」
悠元が戦略級魔法を提供した際、悠元本人ではなく日本政府を経由して提供するという体裁を取った。新ソ連への牽制を行えるという意味で政府も許可のサインを出しており、国防の観点で各軍の最高司令官も承認している。
蘇我はその時点で魔法の開発者が悠元ではないかという推測は立てたが、ただでさえ国防に貢献している彼の機嫌を損ねる必要も無いと判断。詳しいことは何も聞かなかった。
「多方面へ喧嘩を売るのは愚策中の愚策。最悪、新ソ連に存在する全ての核ミサイルを無力化することも視野に入れて行動をします。ですが、あくまでも皇宮警察『神将会』としてであり、国防三軍の将校として動く気はありません」
「餅は餅屋の仕事、というわけだね？」
「私に軍を統制する能力が無ければ、利害調整をする気もありませんので」
悠元の階級は特殊な状況を鑑みてのものであり、それを笠に着て威

張ることなどしたくない。自身の行動に正当性を持たせる意味で利用することはあっても、自国に対して不利益を被らないように匙加減はする。
「あの人の孫にして実績は示しているのだから、私は別に咎めはしないつもりだが」
「これでも九島閣下から師族会議の纏め役を任された身ですので。その意味で、国防軍内の反十師族派とは一線を引かねばいけません。彼らが不当な理由で圧力を掛けようものなら、国内にいる古式の術者たちにも協力してもらって、彼らの性根を鍛え直させますよ」
「……ふふ、やはり君は上泉殿の血を色濃く受け継いでいるようだね」
今の悠元は師族会議議長の大任を任された護人・神楽坂家現当主。反十師族派のことは別に変な反発さえしなければ関与する気などないが、こちらを害する気ならば相応の報いを受けてもらう。それを明言した悠元に対し、蘇我は自らの師でもある剛三を思い出しながら呟いた。
「話を戻しますが、万が一劉麗雷が日本に亡命した際、独立魔装大隊もしくは一条家に彼女の身柄を保護してもらいます。一条家に動いてもらう際は此方から依頼の体を取ります。それと、藤林〝大尉〟にウラジオストク周辺の暗号情報の収集を依頼します」
「承った。上条大将も苦労を掛けるが、宜しく頼むぞ」
「はっ」
どの道ＵＳＮＡ関連の情報は蘇我を通す形で入手できるため、響子には新ソ連と大亜連合方面――特に戦場となっているウラジオストク周辺の情報を入手してもらう形とした。蘇我が立ち上がったところを見て悠元も続いて立ち上がり、互いに敬礼を交わした。

魔法師も池に落ちる

悠元が防衛省で蘇我と話している頃、達也は巳焼島にいた。正確には、深雪たちを学校まで見送った後、自宅に戻って着替えてからエアカー（飛行魔法車両）で巳焼島に出向いた。リーナの様子を見に来たというのも理由の一つだが、自宅や九重寺ではなくこの島を選んだのは、達也は新たな魔法を編み出すためだった。

「新たな魔法？　そんなことをしなくても達也は強いじゃない」

「あくまでも対人戦と言う括りで言えば、リーナの言葉も決して間違いじゃない。だが、俺とて全ての魔法を把握しているわけではないからな」

達也が想定している相手は、それこそ埒外の領域にいる魔法師たち。目標は悠元に他ならないが、別に達也は悠元を倒すために魔法を作り出しているわけではない。仮にそんなことをしたら、深雪に勘付かれて凄味のある笑顔で問い詰められるのが目に見えているからだ。

「てことは、悠元に勝つための魔法を作るってこと？」

「リーナ、それは俺でも無理難題の領域に入る。リーナにとってのセリアみたいな状態になるぞ」

「あ、それは無理ね……じゃあ、何で？」

達也がその考えを持つようになったのは、顧傑の一件が最も大きかったが、最大の理由は［誓約（オース）］の完全解除によって得た膨大な魔法力を生かす魔法が戦略級魔法の［質量爆散（マテリアル・バースト）］や［瞬速極散（ソニック・アクセラレーション）］ぐらいしかないというもの。

［天刃霊装］も修得に至ったが、［天魔抜刀］に至るまでに克服せねばならない課題は多い。悠元の力を借りれば早いだろうが、それでは達也自身が納得できないと考えていた。

「リーナも習得に励んでいる［天刃霊装］は既に修得しているが、今の俺はそれと本来得意とする魔法を合わせるのが難しい。だが、態々専用の魔法を用意するにも時間が掛かる。ならば、二つを橋渡しするための方法を編み出さなければいけない」

「？　そういうのって共通じゃないの？」

「俺も最初はそう思っていたが、悠元に聞いた時点でその認識は無くなった」
　達也も全てを聞くことはしていないが、それでも修得に至るまでの基本知識は悠元から教わっている。その中で［天刃霊装］に自身の修得した魔法を纏わせる方法も聞いている。
「悠元曰く『魔法と天刃霊装を両立させるためには、術者当人が自分の根底にある〝願い〟を理解すること』と言っていた。両立させている人間が言うのだから、まず間違いないだろう」
「願い……」
　魔法はあくまでも想子を介することで行使するもの。天刃霊装は術者の霊子を想子に写し取って具現化することで物理次元・情報体次元に干渉するもの。同じ想子を介しているように見えるが、魔法式は定数・変数の数的要素が伴う一方、天刃霊装は術者の深層心理という情動的な要素が強く反映される。
　理を以て行使する魔法と、情動を行使する天刃霊装。この二つを両立させるためには、術者本人の情動を理として定義化しなければならない。つまり、それが悠元の述べる『願いを理解する』ことに他ならない。そして、それこそが［天魔抜刀］に至る為の重要な鍵となっているということは、達也とリーナは知らない。
「ちなみに、達也の願いって何？」
「そんなのは決まっている。魔法師が人として生きられる世界を目指す……そうか、そういうことか」
「達也？」
「ありがとう、リーナ。お陰で道が見えてきた」
「？　えと、お役に立てたのならありがたいけど」
　別に自分が何かアドバイスしたわけでもないのに、いきなりお礼を言われたことに首を傾げつつも達也の言葉を受け取ったリーナだった。
「そうやって自己解決する力は流石ね。深雪も自慢の兄だと褒める訳よ」
「何でもかんでも自己解決出来てきたわけじゃないがな。力の及ばな

いところは悠元に助けられてばかりだ。尤も、そのせいで深雪が突っ走ってフォローすることが増えてしまったが」
「……既に籍を入れれてても十二分におかしくないわね」
「悠元からは高校卒業後に深雪との籍を入れると聞いた。ただ、結婚式は他の婚約者との兼ね合いで大学卒業後にするらしく、身内のみになりそうだとぼやいていたが」
「それもそうよね……お祖父様が来たら、私がとばっちりを食らうことになるし」
　悠元の結婚式となると、これを公でやったら国内外から要人がこぞって集まりかねない。リーナの祖父であるＵＳＮＡ大統領が来て、回りまわってリーナに結婚のプレッシャーが飛んでくることは想像に難くない。
「……ちなみだが、リーナ。向こうの一件が済んだら渡したいものがある……どうした？」
「そういうのって死亡フラグってセリアから聞いたんだけど、達也ならフラグを捻じ曲げてでも実現しそうね」
「酷い言い種だな。俺はそこまで無敵超人ではないぞ」
　いくら［再成］があったとしても、治らないものはある。それを誰よりも自覚している達也がリーナの呟きに対して窘めるように返した。
　結果として達也の死亡フラグは回避されたことになったが、それがリーナにとっての苦悩が増えるという結果に繋がることは……誰にもわからなかった。
「そういえば、何で悠元は一条家に出向いたか分かる？　単に深雪のことで出向いたとは思えないんだけど」
「悠元は一条の奴を戦略級魔法師に仕立て上げるつもりだ。その為に、先日見た［トゥマーン・ボンバ］の基幹技術を一条家に提供した」
「……言ってもいいの？」
「『リーナもセリアを介せば身内になる』と悠元は言っていたからな。どの道事情説明しなければならない以上、ここで誤魔化す道理はない」

リーナの言葉には『未だ〝アンジー・シリウス〟の肩書きが残る』という意味も含まれているが、達也は深雪とセリアによる二重の縁を考慮した上でリーナに告げた。そしてそれは、日本に新たな戦略級魔法師を誕生させるということであり、環太平洋地域におけるパワーバランスが更に変化するという意味でもある。

「悠元の奴は台湾や東西ＥＵ、トルコにも戦略級魔法を提供したそうだ。目的は無論、大亜連合と新ソ連への牽制だな」

「達也……私、悠元に対して無条件降伏することしか出来ないんだけど」

「安心しろ、リーナ。俺でも悠元に敵意を向ける気がしないからな」

着々と積み上がっていく新ソ連と大亜連合に対する包囲網。直接手を下していない（リーナは悠元がやった魔法攻撃を知らない）が、周囲を巻き込んで大国を抑え込む所業は、世界の中でも片手に収まるレベルの話。

一つの戦略級魔法を作るだけならばまだしも、相手の国の事情まで慮って提供してしまうあたり、リーナはおろか達也ですらも敵意を向けたくないという意見で一致した。

「へっくし！　……季節外れの風邪か？」

原作でも割と上位クラスの人たちにそうやって話していることなど露知らず、盛大なクシャミを発した少年がいたのが言うに及ばずであった。

◇　◇　◇

その頃、旧群馬県高崎市にある上泉家の本家屋敷。当主の書斎にて元継が読書に耽っていた。三矢家の兄弟姉妹では一番武闘派だが、がっしりとした出で立ちのせいで勝手に怖がられてしまうため、勉学による成績で周囲を黙らせていた。

その一環で武芸に関する書籍を読んでいたところ、襖の外から呼ぶ声が聞こえる。

『御当主様、先代様がお呼びです』

「む、分かった。直に仕度する」

支度とはいっても、軽装姿から着替えることはしない。それは護

人・上泉家が武芸の一族であり、特に家内では動きを制限するような恰好を『武芸の妨げになる』という理由で禁じている。流石に冠婚葬祭などの特別な行事で正装をすることは言うまでもないことだろうが。

元継は身だしなみを整え、使用人の案内で出向いた先は応接の間。そこには上泉家先代当主こと上泉剛三の姿があった。

「爺さん、何故ここに？　家族の話なら私室に呼び出すだろうに……それとはまた別件か？」

「察しがいいな。実は、わしの弟子に関する話でな」

「弟子……誰なのか見当もつかないが。話を続けてくれ」

元継が『見当がつかない』と漏らすのも無理はなく、剛三は若かりし頃の武者修行や世界群発戦争によって国内外を転々としており、彼に指導を受けて弟子となったものは多い。とりわけ感銘を受けた国外の魔法師が態々教えを請おうと出向くことも少なくない。現にアルフレッド・ストライフ（フォーマルハウト中尉）がその一人だ。

数えるだけでも万単位は下らない剛三の教え子。彼が認めた弟子に絞っても三桁はいる。悠元ぐらいのレベルとなると絞り切れるが、こうなるとお手上げだと言わんばかりに元継は剛三に話の続きを促す。

「その弟子は元『スターズ』の一人でな。その息子に対して万が一の手段を言い含めたらしく、その人物が今日の夕方に東京へ着く算段となっている」

「アルフレッドに続いてＵＳＮＡ（ステイツ）絡みか。で、その彼の名は？」

「エルドレッド・バラッド。ダラスの研究所勤務の魔法師とのことだ」

「……」

剛三が話した内容に対して、元継は沈黙してしまった。ダラスの研究所と言えば、間違いなく［パラサイト］絡みなのは十中八九の確定事項。剛三が相談したとなれば［パラサイト］の侵食の可能性は極めて低いが、念には念を入れなければならない。

「門下生に迎えを行かせた。精神干渉系に得手のある連中を送り込んだから、心配はせんでも良かろう。ただ、それに追随するようにハワ

イから座間に米軍の輸送機が来るそうだ。そちらは明後日の晩らしい」
「連中はこの国を蔑ろにしてるとしか思えんな。悠元が聞いたら、次の日にＵＳＮＡの大企業がこぞって買収されても不思議とは思えん」
「わしもそう思う。そういう強かさは千姫によく似とる」
　前者はともかく、後者の方は間違いなく［パラサイト］に侵食された『スターズ』の兵士が乗り込んでくる可能性が極めて高い。そうでなくとも、日本近辺に存在するＵＳＮＡの空母や潜水艦を全て悠元が把握していることも元継は聞き及んでいる。
「元継、お前には一応彼の面倒を見てほしい。あ奴が望めば稽古をつけてやれ」
「それは構わんが……爺さんは何かやることがあるのか？」
　別に今のところは『神将会』としての役割を担うレベルには至っていないし、元継自体も［天魔抜刀］の研鑽を除けば新陰流剣武術の指導ぐらいしかない。ただ、武術指導となれば意固地になりやすい剛三が人に頼んだこと。それを不思議に感じた元継が問いかけた。
「向こうの烈の孫が動いている為、烈の守りが薄くなっておる。あやつには生き抜いて責任を全うしてもらわねばならん。その守りとしてわしが出向く。奏姫も同行させるつもりだ」
「……爺さん相手に喧嘩を売ろうという気概がある奴か、単なる馬鹿でもない限りは決して足すら踏み入れたくないな、それは」
　九島烈を生かすという意味は元継も理解している。ディオーネー計画を含めた一連の騒動が一段落した後、烈にはもう一つ仕事を完遂してもらう必要がある。彼を生かす意味では過剰戦力気味だと元継がぼやいた。
「何を言うとる。その若さで［天魔抜刀］に至ったお主が言えたことか」
「俺の場合は悠元に教わったのが大きいに過ぎない。それを自然と会得した爺さんには及ばねえよ」
「武術でわしに勝ち越し始めた元継らしからぬ台詞じゃの」
「あれは一応ルールの範疇での話だろうに」

元継も実戦を経験しているからこそ、剛三の凄さを手合わせの度に感じてしまう。それと同時に、こんな彼と一緒に旅行をして無事に帰って来た悠元の凄さも改めて実感を覚えるほどだった。
尤も、帰国した剛三が詩歩に長時間説教されたのはここだけの話。
「そういえば、悠元から『場合によっては米軍の空母や潜水艦を含めた武装一式を接収する』と言っていたが……そんなことを言い出すあたり、［トーラス・シルバー］の一角として迷惑だと感じていたのだろうな」
「魔法や武術ではなく、理知的かつ法的に首を締めあげていくからのう。日本に滞在しておるのは『インディペンデンス』か……可能性はあるというわけか」
「そういうことか……」
単に直接輸送機に乗ってくるだけでなく、潜水艦や空母を経由して日本に上陸するという手法。これで『スターズ』の派遣について言及しなかった場合、悠元は日本に存在するＵＳＮＡ軍の兵器を合法的な手段で取得する腹積もりなのだろう。
例えば、ディオーネー計画について日本に多大な迷惑を掛けた件。それに協力してきた新ソ連への抑止を本気でやるつもりが無ければ、同盟国としての責任問題も追加。未だ社会的制裁を科されていないクラーク親子への厳罰要求。
それらが実行されなかった場合、それに伴う罰金だけでも百億ステイツドル（約１兆２０００億円）は下らないだろう。
「沈めるぐらいなら法的に奪い取って自軍で運用させるか、或いは神楽坂家で民間軍事会社でも設立して運用する手法もある。そうなると、国外のＰＭＣも伝手を作ろうと売り込んでくるな……アイツは、どこまで読んで行動しているのだろうな」
「国防軍を信用しきれていないからこそ、自ら守れる戦力をのう……それは面白そうじゃな」
「民間軍事会社云々はともかく、爺さんが本気で関わると従業員が物理的に潰れるから止めろ、マジで」
民間軍事会社云々はさて置くとしても、悠元自身は国防軍そのもの

をあまり信用していない。だが、それでも悠元が国防軍の将校に身を置くのは、互いに利があると納得した上でのこと。
悠元の力を国家の守りと出来る政府側の利と、政府の後ろ盾を得ることで行動の正当性を持たせる悠元の利。これが成立しているからこそ、バランスが保てている。達也の軍籍が悠元の管轄下に置かれたのも、達也の力を悪用させないための抑止力として悠元が選ばれたという事実。
「尤も、独立魔装大隊は此方が送り込んだ教育済みの兵たちで絶賛身動きが取れなくなっている。それに引っ張られる形で第１０１旅団の動きも鈍くなっている。残るは……彼女に恨みはないが、弟を利用した罪は償ってもらう。その明晰な頭脳を存分に発揮できる場所でな」
元継は佐伯に対して特別な感情を有していない。だが、悠元に対する扱いは身内として許せる範疇を超えた。新ソ連が何かしらのアクションを起こした段階で、元継は動く腹積もりでいた。
彼女が成した大越戦争での功績。それを生かせる場所に送り込むことで、これ以上の干渉を阻止する。
「そうなると、行き先は無論北海道方面になるな」
「そうなってしまうな。ただ、風間大佐を含めた独立魔装大隊は切り離しておく。連隊への部隊編成が整い次第、風間大佐には更に昇進して貰う。同年代の階級や当人の功績を鑑みれば、蘇我大将も納得してくれるだろう」
話が大分逸れてしまったが、その日の夜。東京湾海上国際空港に到着したロサンゼルスからの直行便で日本に降り立ったエルドレッドは、上泉家から寄越した迎えによって上泉本家に来た。到着したのが夜遅くだが、エルドレッドは［パラサイト］への侵食は無いと判断されて、その日は客室にそのまま泊まることとなった。
「フ、フレデイ!?　何でお前があっ!?」
「エルゥ!?」
次の日、エルドレッドが死んだはずのアルフレッドと相対して、エルドレッドが理解の範疇を超えた余り、そのまま倒れた拍子に池の中

へ落ちるというトラブルがあったのはここだけの話。

合間の恋愛・婚約事情

ＵＳＮＡ軍が共同利用協定に基づく通告前に上泉家が情報を入手したのと同時に、神楽坂家も情報を入手していた。表向きでは新ソ連に対する牽制の一つだと見做す専門家もいるだろうが、乗員の中にアレクサンダー・アークトゥルスの名があれば話は別だ。

悠元は情報の共有を達也とすることにした。

「ハワイからの輸送機か。到着予定は？」

「通告に掛かる時間を考慮すると、明後日の夜になる。新ソ連が変な動きを見せる前に片を付けたいし、向こうの状態を見る上で指標になるだろうが、どうだ？」

「こちらは問題ない。到着次第仕掛けることにする」

水際で被害を抑制することも重要だが、アレクサンダー・アークトゥルス以外にパラサイト化した兵士の数で、『スターズ』の侵食度合いを見定めることも目的の一つ。そして、悠元は今回の封印に際して他の面子も巻き込むことにした。

「俺と幹比古がか？」

「パラサイト化した人間との戦闘経験で言えば、レオと幹比古が妥当な人選になるからな。それに、今回は封印が目的であって殺すことはしない。彼には利用価値があるから」

「……何も聞かなかったことにしておくよ」

悠元に目を付けられた時点で『ご愁傷様』と幹比古は内心で呟きたそうにしつつ、幼馴染として悠元を咎めることなくスルーした。その一方、文句を言いたそうにしているのはエリカだが。

「何であたしじゃないのよ」

「今回潜入するのは国防軍の共同利用基地だ。エリカだと些か目立つだろうに」

「……分かったわよ。その代わり、レオを好きにしていいわよね？」

「俺に聞くな。レオに聞け」

恋人同士の絡みに関与する気はないので、悠元はエリカの問いかけを投げやり気味に返した。

「僕は関与しなくてもいいのですか？」
「流石に〝色々忙しい〟燈也を引っ張り出す訳にもいかんからな」
「あはは……お手数をお掛けします」
　人には限度というものが存在する。燈也の場合、現時点で三人も囲う羽目になっているわけだし、達也も二桁は下らない婚約者を囲うことが決まっている。尤も、一番囲う羽目になっているのが悠元に他ならないが。
「正直、燈也や達也が羨ましい。もう増えるなと何度願ったことか……」
「何かあったんですか？　また愛人が増えたとか？」
「ああ。今度はアメリカ人でな」
「……悠元って、歩くフラグ製造機ですか？」
「んなわけあってたまるか」
　しかも、愛人とかの枠とか関係なしに英国の女王までもが子種をせがもうとしている始末。彼女を鍛えたのが神楽坂家もとい千姫のため、既に話が通ってしまっているし、千姫を通して婚約者や愛人たちにまで話が既に通されている。
　その代表として深雪曰く『悠元さんが素敵な存在だからこそ、惹かれてしまったのでしょう。でも、一番を譲る気などありません』と言われた直後にベッドへ引き摺り込まれた。その後のことはと言うと……まあ、夜間戦闘が発生不可避となったとだけ。
　仮に子が出来ても父親は公表せず、『精子提供者のプライバシーを考慮して発表は控える』という公式見解で通すとのことらしい。流石に金銭面で支払っておこうかと思ったら、千姫曰く『そこについてはイギリスに責任を負わせます』とのことで、イギリス連邦政府には既に話を通しているそうだ。
「ここだけの話、新たな愛人は先代のスターズ総隊長だ。しかも若返ってるし、最近知り合った外国の魔法師の母親だと……家に引き籠って不貞寝でもしたい気分だ」
「……達也君。悠元ってある意味この世の不条理を一身に受けてる気がするんだけど」

「奇遇だな、エリカ。俺も同じ意見だ」
繰り返しになるが、自分はハーレムルートを開拓した覚えなどない。あくまでも友人関係は築くが、一線は弁えるように立ち回った結果、最終防衛ライン以外が既に攻略されている有様に発展した。
戦略シミュレーションで例えると、周りの国家を刺激しないように立ち回った結果、何故か周りの国々から次々と嫁を迎えることとなったようなもの。『一種のなろう系じゃねえか』と独り言ちてしまったほどだった。
容姿に対する一目惚れもあるのかもしれないが、こちらとしては原作知識を知っているが故に距離を置いたし、社交辞令以上のことを積極的にやろうとは思わなかった。深雪に対する感情が九校戦まではっきりとしなかったのもあってか、それ以外の女子に対しては親切にしても踏み込む様なことは避けていた。
自分から言わせれば、もう少し世の中の男子連中がしっかりしていれば、自分や達也に婚約を申し込もうとする女性が減ったのではないかと思う。これに関しては、達也も『確かにその通りだが、俺たちが特殊過ぎるのも悪いと思う』と呟いていた。それに関しては達也だけだと声を大にして言いたかった……え、違う？
「マジでしっかりしろよ、世の中の男子連中……」
「それは少し同意できます。ミキはもっと積極的になっていいですのに。美月ももっとがっつくべきです」
「佐那ちゃん!?」
「似たような意味で、ほのかはもっと積極的になるべき。立派な武器があるのに勿体ない」
「何か飛び火したんだけど!?」
いや、そもそも高校生の段階で許嫁までいる方がおかしいのかもしれない……五十里と花音、修次と摩利の件は確かにあるが、魔法師全体から見ればそこまで数が多いというわけではない。
自身の場合だと泉美との婚約は存在したが、一度破棄されて再婚約している。この場合は国防軍絡みなのでどうとも判断できないが、泉美の年齢からすれば早いとも言えなくはない。

「魔法師は結婚が早いとはよく言ったものだが。まあ、五十里先輩と千代田先輩のことも有るから一概には言えん……唸らないの、深雪さんや」
「悠元さんの一番は絶対に渡しません」
「……別の誰かに渡す気は毛頭ないんだが」
　話を［パラサイト］絡みに戻す。原作ではアークトゥルスを放置する形を取ったが、封印が解けて暴れ出すリスクなど誰も負いたくないのが本音だ。そこで、アークトゥルスに関しては封印後に真一の許へ送り出す腹積もりでいた。
　先に制御しているレグルスやレイモンドと同じように支配し、真一の手駒として働いてもらう。表向きはあくまでも軍の任務を遂行しているように見せかけた上で、ＵＳＮＡ軍に対する反撃を担ってもらうために。
「達也からしたら排除したいだろうが、ここは堪えてくれ」
「いや、別に俺とて無秩序に相手を滅ぼすことはしないんだが……」
「あたしたちからしたら、二人とも異質なんだけど」
「黙れブラコン」
　独立魔装大隊もとい国防軍に対しては、悠元の権限で『米軍に対する臨検』の名目で襲撃を行うと説明している。超法規的措置の一環だが、パラサイトのリスクについては八雲から風間や響子に昨年の九校戦の時点で伝えられている。
　現代ではその存在すらも聞かなくなりつつあった〝デーモン〟＝［パラサイト］が科学技術と魔法技術の進歩によって表面化した。いや、実際のところはこれまでも観測されていたが、水際で止める方法があった。
　その事情についてはヴィルヘルミナから聞いていた。ただ、その教訓が生かされずにスターズのパラサイト化が発生した。『現代魔法の先進国として胡坐を掻いた結果』だと彼女は辛辣に吐き捨てていた。
「そっちはいいとして……〝第三陣以降〟が来る可能性が高まったからな」
「まだ増えるの？　ゴキブリみたいな増え方をされても困るんだけ

ど」
「どうにも、達也やリーナを排除したくてたまらない連中がいるようだからな。まずは兵士を早急に捕まえて、唆した奴ら全員のアキレス腱を消滅させるようなスキャンダルをぶち込むのは確定事項となったが」
「……達也。苦労していますね」
「俺が狙われる程度など、まだ可愛い方なんだろうがな」
ＵＳＮＡはおろか、大国から一切脅威に思われない悠元。その反動がハーレムとして形成されたと考えれば、自分の命を狙ってくることなどまだ児戯のレベルなのではないかと思えるほどに……達也は燈也の労いにそう返したのだった。
「更に付け加えると、九島閣下のシンパである部隊の指揮権を譲渡されたが……そんなものを貰っても使い道に困るだけだと蘇我大将に押し付けた」
「普通の軍人なら喜びそうな案件のはずだが……」
「俺や達也は〝特殊〟すぎるんだ。ワンマンアーミーや少数精鋭ぐらいならばまだしも、一個小隊なんて扱う領分を超えてる」
国防陸軍第一師団所属・遊撃歩兵小隊――通称『抜刀隊（ばっとうたい）』。いかにも癖が強い名称であるが、事実九島烈が指導した魔法師部隊の一つで、彼に対するシンパの性質が強い部隊。
悠元に指揮権を譲渡したいと申し出たのは、他ならぬ第一師団長。彼は新陰流剣武術の門下生であり、剛三のシンパでもある。悠元の素性を知っているが故に、指揮権の譲渡を申し出たのだ。
「さらに問題があるとすれば、その部隊に仮所属している防衛大生が二人。エリカなら一番よく知ってる二人だ」
「……あー、次兄に摩利先輩ね。って、ミキ。何を驚いてるのよ？」
「いや、今まで渡辺先輩のことを〝あの女〟って言ってたじゃないか。それと僕の名前は幹比古だ」
エリカの摩利に対する呼び方の変化に反応したのは幹比古。何せ、今まで摩利のことを認めないような呼び方をしていただけに、名前呼びは何かしらの変化があったのだと思わざるを得なかった。

「……考えても見なさいよ。先輩の義理の姉が三矢家――――悠元の元実家に嫁いでるのよ。つまり、この時点で三矢・渡辺・千葉のラインが完成しちゃうの。あたしがレオに嫁いでも、千葉の繋がりは切りたくないでしょうし……あのクソオヤジは特に」
剛三の渡辺家に対する我儘もあったりするが、桜井穂波が渡辺家に養女として入り、三矢家長男の元治と婚姻を結んだ。そして、摩利が修次と恋仲ということは周知の事実。この時点で、渡辺家を介する形で千葉家と三矢家が近付いている。
先代当主となった丈一郎は幼馴染の悠元とエリカを結びたがったが、互いに悪友の領域を超えることはなく、それぞれ好いた相手と結ばれている。事あるごとに口煩かった父親の有様に、エリカからすればいつの間にか摩利への不満よりも父親への不満が上回ってしまった。
「えーと、つまりエリカっちは父親への反抗心が摩利先輩への不満を上回ったってこと？」
「そういうことね。それに、いつまでも次兄に迷惑なんてかけられないし、次兄が本気で先輩を好いているのも事実だし」
「まあ、ようは納得したってことでいいのか？」
「そういうこと。ちゃんとわかってくれて嬉しいから、今日はサービスするわよ」
「……程々にしてくれ」
それに、エリカ自身が恋をしたことで摩利の心境も理解できるようになり、兄の幸せを考えるのならば口煩く言うべきではないと心を入れ替えた。その反面、レオに対して積極的なアプローチも見せるようになってしまい、当のレオ本人は程度を弁えてほしいとリクエストするのが関の山だった。
「聞いてるだけでも色々大変なんだね……で、泉美は何故に目を輝かせているの？」
「無論、色んな人の恋路を聞いて参考にするだけですが？」
「……ボクより先に女子を卒業した泉美が何を言ってるのさ」
双子だからこそ、互いの変化というものに敏感でもある。一種の

精神感応(テレパス)みたいなものだが、香澄は自分より先に行ってしまった妹が他人の恋路に目を輝かせていることに対して、半分諦めが混じりつつも窘めるように呟いた。
「何を言っているのですか。私などまだまだです。詩奈ちゃんの話を聞くだけでも、精進せねばならないことは山ほどあるのですから」
「……詩奈」
「すみません。泉美ちゃんがその、どうしても参考に聞きたいと止まらなくて」
「いや、詩奈は悪くないから。悠元兄のことになると暴走気味な泉美が全面的に悪い」
「嫉妬が強いお姉様ほどではありませんよ。尤も、兄様の包容力で骨抜きにされてましたが」
ガールズトークの領域を超えてしまった〝夜の事情〟。泉美、香澄、詩奈の三人が話している合間を見て、悠元が侍郎に話しかける。
「侍郎、妹が苦労を掛けるな」
「い、いえ！　自分も精進せねばならないことは一層自覚しましたので」
「そうか。ちなみに……どんな感じだ？」
「……一人で寝る時間が消滅しました。奥様の命令で、一緒の部屋で寝泊まりまですることになりまして」
侍郎と詩奈が一緒の部屋で暮らしている。普通ならばプライベートの空間を作るべきなんだろうが、孫の顔が早く見たいという詩歩の我儘によって一緒の部屋にさせられたのだろうと推察した。
「仕郎さんが良く認めたな」
「……母からも『孫が早く見たい』とせがまれた結果、父も黙認せざるを得なかったようで」
「あー……その、頑張れ。ちゃんと心身は鍛えておけよ？」
「そうしないと早死にしそうな気がしますので」
まだ放課後の時間だというのに、話していることが生々しいのは……そこまで切羽詰まった状況ではないというのも大きいのだろうと思う。侍郎に関しては矢車本家からの嫁ぎもあるため、一層鍛える

と発言した。
「正直、世の中の魔法師を志す男子連中に真っ当な人材がいたとして、確実に俺や達也たちの二の舞が増えるんだろうな」
「いや、前例を作る様なことになるのは確かだが……こればかりは環境も左右されるだろうからな」
「でも、確か来年度には二科生制度が廃止になるという噂もありますし、〝青田買い〟の流れは生じるでしょうね」
悠元、修司、そして燈也の言葉。それらの発言の真意は、今後の魔法科高校で将来の嫁ぎ先確保という競争が激化しかねないという可能性が出てくるということ。
「こうなったら来年度以降は師族会議議長として壇上に立って、初っ端からエリート意識を粉砕することも辞さない。それで心が折れたとしたら、魔法師として社会に立つことが出来ないも同義だし」
「……鬼だな」
「場合によっては殺傷事にまで踏み込みかねない職業だからな、魔法関連の職業というものは。狙われるリスクを覚悟してもらわないと、その先なんてやっていけるはずがない」
とりわけ一高の現3年生組は一昨年のテロリスト襲撃を体験しているし、今年の初めごろに反魔法主義による執拗なストーキングの件もあった。魔法に関わるということは、狙われる対象として家の出自など関係がなくなる可能性も秘めている。
悠元や達也の場合は極端な例なのかもしれないが、それに匹敵することをレオや幹比古だって経験している。魔法師を志すということは、自分の身を自分で守り切れるようになることが必要最低条件になりつつある。
だが、魔法の魅力に憑りつかれるが余り、そのことを自覚していない輩が多すぎる。
「正直、生徒のセキュリティを考慮するなら全寮制にしてでも囲い込めばいいのに、そこまでする勇気が学校側に無いのも問題だと思う。一発国立魔法大学の学長の尻にタイキックでも撃ち込みたい気分だ」
「お兄ちゃん、そんなことをしたら学長さんが弾け飛ぶと思うよ。物

理的に」
「加減はする」
「本気でやればできるんですか!?」
蹴り一発で人一人を大西洋横断させたのが数年前。そこから成長した悠元も、流石に本気で蹴り飛ばそうと思っていない。何せ、その旅行中に加減を間違えた蹴りによって生じた衝撃波だけで、新ソ連の特殊部隊――約１００人を消滅させてしまった。
なので、剛三との旅行は魔法のみならず武術の手加減の手法を学ぶ鍛錬の意味も含まれていた……現状で本気を出したら、多分衝撃波だけで建造物を破壊できるんじゃないかと思えてくる。
自分で言ってて悲しくないかって？　……笑えよ、野菜王子（ベーダ）。
「どんどん人間を辞めていくね、悠元は」
「そんな悠元に惚れてしまったわしらも大概じゃが……パラサイトすら取り込みそうじゃな」
「……自分の守護をしてくれている存在にその可能性を言及されたんだが」
「パラサイトすら敵わないって十分凄いと思いますよ」
［アリス］に言われた際、正直自分の耳を疑いたくなったほど。が、周公瑾の亡霊に襲撃された際、彼を消滅させて知識を得た。それに伴って、周公瑾が保有していた魔法力も吸収してしまったと教えてくれた。
原作の九島光宣が行ったのは亡霊の〝制御〟。一方、悠元が行ったのは亡霊の〝吸収〟。この時点で彼我の魔法力の強さが歴然となっているのは『言うに及ばず』と述べるべきだろう。
「絶対自堕落な生活なんて送りたくないが……色に溺れているに等しい状態で言っても何の説得力もないな」
「寧ろ、私たちが溺れているに等しい。それについていけてる深雪が一番〝潜ってる〟と思う」
「もう、雫ったら。私はもう堕ちているに等しいだけよ」
「……男子の連中に絶対聞かせちゃいけない発言ね、それは」
学校ではカリスマのある生徒会長。その実態は悠元の婚約者兼下

僕（ここに愛人関係で義父という要素も加わる）で、「とでもではないが聞かせられない」とエリカがぼやくほどだった。

奮闘する若者たち、苦悩する大人たち

６月３０日、日曜日の夜。
原作ならば座間基地の外にいる形だったが、悠元と達也、レオと幹比古、そして修司は基地の中にいた。悠元は自分の部隊や派閥を持たない代わり、監察・査察に関する権限を防衛大臣から附託されている。
以前、宇治の国防軍基地における洗脳騒ぎの件に対するお詫びも含んでいるが、ワンマンアーミーの気質が強いものの、過去の沖縄の件や横浜事変に関する事も含めれば『妥当』であるという総理大臣のお墨付きもあった。
「しかし、こうやって堂々と基地の中に入れるとは……良かったのか？」
「別に構わん。階級を剥奪されても俺にとっては枷が一つ外れたに過ぎなくなるからな」
「悠元の枷を外したところで相手にデメリットしか生まないというのも大概だけれどね」
そんな中、達也が［イントレピッド］のチェックを済ませ、［フリード・スーツ］のヘルメットを被る。今回の件は国防軍と無関係とまではいかないが、アンジー・シリウスに関する超法規的な臨検という体裁を整えた。
輸送機はゆっくりと滑走路を走っている。ここ１週間で記録されている中で唯一の米軍機だ。
「つーか、パラサイト化した『スターズ』を放置するとか正気か？　この分だと、『スターダスト』や非正規部隊（イリーガル）の連中も疑わしくなってくるぞ」
修司は輸送機から感じた〝気配〟を見ながらぼやく。それを言い終えた後に、達也の乗る［イントレピッド］がアクセルを吹かして格納庫の中から発進して輸送機へ一直線に向かっていく。
そして、達也は輸送機の壁を［分解］すると、バイクから飛んで壁の中に入り、壁は［再成］によって自然と修復されていく。
「……レオ、幹比古の守りは任せる」

「え？　そりゃ勿論だが……何をする気だ？」
「修司、行くぞ」
「ああ、承った」
　悠元と修司は同時に駆け出し、超高速の走りで輸送機に向かう。そして、壁にぶつかる直前に突如として空いた穴へ二人が飛び込み、壁は瞬く間に修復された。その非常識を目撃してしまったレオと幹比古の反応はと言うと、そこまで驚いていなかった。
「……幹比古」
「言わないでくれ、レオ。さて、達也からの合図が来たら封印するから、レオは周りを頼む」
「おうよ」
　二人が何をするのかという懸念よりも、幹比古は頼まれた役割を果たすことを優先し、レオもそれに頷いた。
◇　◇　◇
　パラサイト化した兵士は四人。だが、それ以外にも意識誘導によってコントロールされた米軍兵士が数十人乗っていた。悠元と修司が輸送機へ突入したのは、その兵士を無力化するためでもあった。
　銃を向けてくる兵士。だが、放たれた弾丸は悉く跳ね返って的確に兵士の四肢を撃ち抜いていく。痛みでのたうち回る兵士が次々と増える有様に、一人の兵士が英語で叫ぶ。
「この、悪魔が！」
「――別に呼び方に拘る気はないが、人様に対して随分な物言いだな」
　悠元が英語でそう返した後、［天都御魂叢雲］を振るって想子の情報体〝魄〟にダメージを与えて兵士の意識を刈り取る。［天刃霊装］は物理的なダメージと精神的なダメージの取捨選択までできるようになれば［天魔抜刀］の領域に踏み込める。
　悠元の視界の向こうでは、纏った炎の結界で放たれた弾丸を蒸発させ、全員を斬っていく修司の姿があった。時間にすればたった1分。完全な無力化を果たしたところで悠元が［天神の眼（オシリス・サイト）］を達也の方に向けると、アークトゥルスに対して封印の要となるナイフを突き立て

た。
　達也自身はまだパラサイトに対する有効な攻撃手段を持っていない。なので、今回はナイフを介する形で幹比古が封印を施すという段取りとなっている。それをアークトゥルスは察したのか、手に持ったトマホークを輸送機の外に向けて放り投げ、その軌道は幹比古に向けてのものだった。
「……遅いな。レオなら簡単に止めるぞ」
　狙いは確かに間違っていない。アークトゥルスの決死の攻撃は、対象を的確に狙い撃った。だが、それを守る相手が悪すぎた。その顛末など分かり切っているが如く［オシリス・サイト］を解除した。悠元はそのまま輸送機のコックピットに乗り込み、［天都御魂叢雲］をパイロットに突き付けた。
「国防陸軍特務大将、上条達三だ。貴殿らにはパラサイトに協力した嫌疑で拘束させていただく。このまま指定通りに所定の格納庫へ輸送機を移動させろ」
　パイロットたちは驚きを隠せなかったが、悠元の有無を言わせぬ気配を察して大人しく従った。そして、蘇我大将の命令で格納庫内で待機していた『抜刀隊』の隊員によって非パラサイトの兵士は連行され、輸送機に残されたアークトゥルスを含むパラサイトの兵士は悠元によってさらに厳重な封印が施された。
　一連の処置が終わった後、パラサイト化した兵士は一旦〝旧〟特殊戦術兵訓練所に存在する地下牢に収容された。
　こうして、アレクサンダー・アークトゥルスを含む四名の兵士が拘束された。
　その後、［パラサイト］に知見のある魔法師によって確証を得る形で、日本政府はＵＳＮＡ政府に対して『昨年の脱走兵事件の再発』という体で大使館を含めた外交ルートで正式に抗議。納得のいく回答が得られない場合や更なるパラサイトの侵入が起きた場合、共同基地利用の申請を受け入れられないという申し出を行った。
　ＵＳＮＡ政府は国防総省（ペンタゴン）に対して早急な事態の説明を要求。だが、ペンタゴン内の達也に対する強硬な意見を有する派閥が匿う形で、

『特にパラサイトによる問題は生じていない』という返答しか返ってこないことに、大統領の手によって被害を増す丸太の数が増えていった。

余談だが、ＵＳＮＡ大統領によってボコボコにされた丸太の行く先はと言うと、ヘルシーブームの再来でキノコの原木として活用された挙句、『ジョーリッジ』という品種の食用キノコまで生まれたのは……近い未来の話。

◇　◇　◇

現地時間６月３０日１０時。達也や悠元がＵＳＮＡ軍の輸送機を襲撃し、乗っていた兵士に［パラサイト］化した『スターズ』のアレクサンダー・アークトゥルスに関する情報を掴んだヴァージニア・バランス大佐は、すぐさま大統領府（ホワイトハウス）の大統領執務室に駆け込む様な形で訪れた。

普通ならばボディチェックなどを介しなければならない事案だが、ジョーリッジは既にデスクに座った状態でバランスを待っていた。気分が晴れない大統領の表情は、その事態を既に把握していたように話し始める。

「来てくれたか、バランス大佐。日本で何が起きたということか？」

「はい。それでは報告させていただきます」

そうしてバランスがアレクサンダー・アークトゥルスに関する報告をした後、ジョーリッジはカップを手に取り、一口コーヒーを啜って静かにカップを置くと、席を立って丸太に正拳を一発撃ちこんだ。それだけならばまだしも、彼は憤りを言葉として発した。

「どいつもこいつも馬鹿しかいないのか！　新ソ連が暴れている状況で、彼らに同調や協調するような動きをしている連中も連中だ！……すまないな、バランス大佐。怒鳴ってしまって気分を害しただろうに」

「……いえ、お気持ちは察します。それと、これは秘密なのですが……」

バランスはヴィルヘルミナ・バランスの生存――〝蘇生〟に近い現象を報告。それを聞いたジョーリッジの反応はと言うと……動揺

や驚きと言うよりも、納得が上回ったような表情を見せてデスクに戻った。
「……その事実は君と私以外には？」
「少なくとも、ＵＳＮＡにおいてはいないかと。エドワード・クラークが掴んでいるかもしれませんが」
「彼女を人質にとるようなことをしたら、私は大統領権限を以てエドワード・クラークをこの場で〝処刑〟する。それはともかく、そうか……ジェラルド君もきっと会えたことだろう」
「……彼女をこちらに戻す気は無いと？」
ジョーリッジの口ぶりからするに、ヴィルヘルミナをＵＳＮＡに戻すことはしないように聞こえ、バランスは尋ねた。それに対するジョーリッジの反応はと言うと、静かに頷く仕草であった。
「既に死んだ人間を戻して、スターズを更に混乱させること自体が悪手だろう。連絡した際、彼女は何か言っていたか？」
「『彼女とバルクホルンがいないスターズに戻る気はない』とのことです。この分ですと、日本の彼の許に身を寄せることとなるでしょう」
「……彼に払う迷惑料を法律に照らし合わせても、１００億ドルは下らなくなるな」
半数近くの恒星級の魔法師の穴埋めがまだ完全に終わっていないところで、スターズの騒動が発生した。国防総省（ペンタゴン）の言い分では『叛乱は鎮圧した』となっているが、リアム・スペンサー国防長官からの報告では、司波達也への対応の強硬派が抵抗しているために、『スターズ』関連に踏み込めないという報告を受けている。
その皺寄せを司波達也や神楽坂悠元を含めた日本が受けている為、同盟国や大国としての面子などに拘っている場合ではないとジョーリッジは痛感していた。そんな二人の許に、突然の来訪者が姿を見せた。
「ジョーリッジ」
「ケン!?　どうしてここに!?」
「教え子のバルクホルンやランドルフから事情を聞いた。どこぞの馬鹿がまたマイクロブラックホール実験を敢行して、今度はスターズの

隊長クラスにまで波及したこともな。バランス大佐も久しぶりだな。義理の息子さんは元気でやってるか？」
「お久しぶりです、九島将軍。息子は今日本で任務に当たっています」
「そうか……」
九島健――――リーナとセリアの母方の祖父にして、九島烈の実弟。
過去の功績により、日本のみならずＵＳＮＡでも影響力を有している人物。その彼が元教え子の知らせを聞いて、ロッキー山脈からワシントンまで出向いてきた。その目的は、ジョーリッジやバランスも自ずと察していた。
「ジョーリッジ。以前、このまま日本に迷惑を掛け続ければ、その報いは政治生命どころですまなくなると警告したな？　だが、この状況はどういうことだ？　該当し得る［パラサイト］に感染したと思しき兵士は皆日本へ派遣されているようだぞ？」
健は軍部に強いシンパを持っている為、そこから［パラサイト］と思しき兵士の情報を得ていた。いくら［パラサイト］に意識誘導されていたとしても、その意識に反しないならば情報を得る方法は幾らでも存在する。
「な、何だと!?　……何を要求する？」
「国防総省（ペンタゴン）の掃除を敢行するから、許可をくれ」
「正気ですか!?」
「俺は本気だ。どうせ、老い先などたかが知れている人間ならば、その先のことに大きな影響は出にくいだろう」
足を引っ張られているのならば、政治的な制裁で社会的に抹殺する――――それが健の出した結論だった。そんなタイミングを見計らったように、バランスの端末に一本の連絡が入る。
「私だ。……何、メディアが？」
バランスが執務室のモニターを操作すると、ＵＳＮＡでも大手のメディアが国防総省（ペンタゴン）に関する政治献金を含めたスキャンダルに繋がるリーク情報の報道をしていた。これにはジョーリッジのみならず、健までも目を見開いた後……健は盛大に笑った。
「は、はは、あはははっ！　これは私も一本取られたな！　多分だが、

千姫か彼女の後を継いだ彼の仕業だな」
「私もだよ……バランス大佐、スペンサー長官に指示を出せ。今すぐ対象のスキャンダルを洗い出せとな。人員が必要ならばＣＩＡやＦＢＩにも要求しろ。ただし、主導はあくまでも内部監察局だと私が書類を作っておく。メディアにはリーク情報の提供を要求してくれ」
「はっ、了解いたしました」
　対象となったのは、先日の顧傑の一件で割を食った一派や、達也に対して強硬な派閥に関するリーク情報。ジョーリッジはバランスに指示を出すと、彼女は急ぎ足で執務室を出ていく。そうして部屋の中にジョーリッジと健の二人しかいなくなったところで、ジョーリッジが話しかける。
「孫娘の婿たちは本当に優秀だな。その優秀さを見習う意味でも、彼らの爪の垢でも煎じて飲んでみたいものよ」
「何を言うか。ジョーリッジが凡人なら、大半の役人は凡骨未満になるぞ」
「私はただ恵まれただけに過ぎんよ」
　ジョーリッジが軍人として働いていた頃、日本から来た健と出会った。互いに意気投合した結果、自分たちの子を婚約関係としてリーナとセリアがこの世に生を受けた。二人の孫が生まれたばかりの時、彼らはＵＳＮＡにとって益を成す可能性と害をなしてしまう可能性の両方を見てしまった。
　そして、その可能性が奇しくも現実のものとなったことは……ジョーリッジはおろか健ですらもどう評価すべきか悩ましかった。
「私はかつてスターズの基地司令を経験したからこそ、魔法師に対する理解の深さもあって、政治家として大成したに過ぎない。だが、［パラサイト］については私も迂闊だった……肚を括らねばならんな」
「日本の要求全てを呑まざるを得なくなる――そういうことか？」
「［恒星炉］関連技術の提供を受けるとすれば、自ずとそうなってしまうのは仕方がないことだ。『スターズ』の再編成に軍上層部の刷新、処分されてしまった兵士の名誉回復も含めて、やるべきことは多い……あの馬鹿共が」

エドワード・クラークに［エシェロンⅢ］を好き勝手に運用させたがために、ここまでの事態に発展した。軍に蔓延る［パラサイト］化した兵士の数も不明。とはいえ、流石に米国内で戦略核・戦術核に匹敵する威力の爆弾を使ったことろで、忽ち無力化されてしまうのがオチだろう。

魔法師が無事でも非魔法師は決して無事で済まない。リスクが高すぎてどうにもならないのが腹立たしくあった。

「ケン。今回の新ソ連にも関わる一件が収束次第、リーナを正式に軍から除隊する。そういう風に命令を出しておいたが、軍の連中には彼女を国外に追放してパワーバランスを崩すことを危惧したがあまり、暗殺を目論む輩がいるのも事実」

「……そちらはスキャンダル絡みで追い出すにせよ、『スターズ』の兵士が動くとみているのか？　いや、正確には［パラサイト］がか」

「護衛としてメイトリクス大佐を送り出した。彼ならば立派に務め上げることだろう。その彼がフランスから日本へ向かう前、大使館経由でエアメールを寄越してくれた。彼は……『母が誇りにしていた〝シリウス〟の名を継ぐ覚悟を決めた』とな」

戦争を嫌う魔法師が世界最強の魔法師部隊――『スターズ』の総隊長の称号である〝シリウス〟を継ぐ。国家元首としては頼もしく思える一方、孫同然の青年に重責を背負わせることに心苦しさを感じていた。

彼が別に政府の役人として一生を終えることでも、ジョーリッジは決して文句などなかった。だが、世界が次世代への流れを加速させている中、彼にそこまでの決意をさせてしまったことに、内心で謝罪の言葉を浮かばせたほどだった。

「私は無力だ。青春を謳歌しても許される年頃の若者に、この国の抑止力を担わせることを止める権利などない。なにがステイツの大統領だ……私など体の良い傀儡だよ」

「ジョー……それを言えば、欲を掻いた連中たちを止めきれなかった俺も同罪だ」

なまじ強大な魔法力を手にしてしまったが故に、彼らを体の良い道

具として扱おうと画策した者達。決してそうなってはいけないと思いつつも、結局は彼らの未来を守ることが出来なかった。

愚痴同然の言葉を零したジョーリッジに対し、健も『同罪』と言いたげな言葉を漏らした。

空を飛ぶ自律の重要性の一例

２０９７年７月１日、月曜日の夜。
横須賀基地に米軍の空母『インディペンデンス』が寄港する。夜の入港は夜間離発着訓練を行ったためで、日本側に対して事前に通知されていた。
だが、日本側に通知されていない事実も含まれていた。
空母には最新鋭の複座式ＶＴＯＬ戦闘機が三機着艦している。国防軍はそれが超大型潜水艦から発艦した機体だと知らされなかった。その戦闘機には、本来後部座席に乗る筈のレーダー迎撃士官（Ｒａｄａｒ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ　Ｏｆｆｉｃｅｒ：ＲＩＯ）でも、兵装システム士官（Ｗｅａｐｏｎ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｏｆｆｉｃｅｒ：ＷＳＯ）でもない女性士官を搭乗させていたことも。
シャルロット・ベガ、ゾーイ・スピカ、レイラ・デネブ――リーナがＵＳＮＡを出国後にパラサイト化した『スターズ』の士官が三名、横須賀基地に潜入した。
何も知らされていない国防軍とは打って変わって、ＵＳＮＡ方面の情報収集に精通している悠元は、既にこの情報をキャッチしていた。関係者ということで、部屋に元〝ポラリス〟のセリアと元〝シリウス〟のヴィルヘルミナを呼んで、この事態について話し合うことにした。
ヴィルヘルミナの知る〝ポラリス〟の元後継者と対面した時、彼女は少し羨まし気にセリアを見ていた。曰く『彼女ぐらいの魔法力があれば、今頃はベゾブラゾフを葬れていたことでしょうに』とのこと。それを聞いたセリアは苦笑を漏らしたが。
「――というわけで、パラサイト化したスターズが三名、横須賀基地に潜入したことが確認された。これ以上増えるような事態になったら、流石にＵＳＮＡのロズウェルに直接飛んで基地ごと潰すことも考慮しなければいけないが……」
「ねえ、お兄ちゃんはまた愛人候補を増やすの？」
「絶対に嫌。ルミナのことですら渋々だし、いくら欲が強くても心が

耐えられるかはまた別の話だ」
「あ、あはは……その節はゴメンナサイね」
　三名が女性士官だからこそ、セリアが問いかけた内容に対して明確な『ノー』を突き付けた。いくら精力が強いとはいっても、それはあくまでも情動的なものであり、理性的な部分での心が許容できるかはまた別の話だ。
「衝突事故に近いが、責任を取らなければならないのは事実だからな……あっさり受け入れてしまうのもどうかと思うが」
「夫はジェイが物心つく前に亡くなってるし、私を下僕にしちゃったご主人様は、今の私にとって生きる意味になったから」
「……流石お兄ちゃん」
「その代名詞は達也だけで十分だ」
　話が逸れたが、真一が東京に戻り次第彼女たちも真一の支配下に置き、当初の予定通りに巳焼島を襲撃してもらう。ＵＳＮＡ軍を欺く目的もあるが、真の狙いは巳焼島に滞在する魔法師たちに対［パラサイト］の戦闘経験を積んでもらうため。
「話を戻すぞ。その三名は一先ず監視下に置き、事態の進展が見られたところで愛波には真一と共に海外へ出て行ってもらう」
「？　こっちの味方なのに、あえて送り出すってどういうこと？」
「ミッドウェー刑務所にいる冤罪の兵士の救出に、俺や達也が直接関与することはしない。ＵＳＮＡの問題はＵＳＮＡに片を付けさせる。その為に、彼女らを含めたパラサイト化した兵士には、ミッドウェー刑務所を襲撃してもらう」
「……自業自得、ってことですか」
　どの道、自分や達也にＵＳＮＡから依頼が来ることは想定済み。だが、襲撃というか暴動を敢えて起こさせて、その隙にリーナの依頼である『ベンジャミン・カノープスを含めた三名の兵士の救出』を達成する。
　無論、魔法による目眩ましは必要だろうが、その匙加減は状況を見つつ判断する。
「愛波を一時的に海外へ連れ出してもらうのは、俺や達也が正当な理

由で外国に行くための方便でもある。適当にでっち上げてもいいが、どこぞのボケ老人に働いてもらうためにもそうすることにした」
「ボケ老人って……」
「？」
悠元が揶揄した人物に心当たりのあるセリアは苦笑を零し、事情を知らないヴィルヘルミナは首を傾げる。それだけこの国にいる『元老院』や『四大老』の存在が国外に殆ど知られていないという証左でもある。
「それで、セリア。日時が前後する可能性はあるが、7月上旬に新ソ連のベゾブラゾフが［トゥマーン・ボンバ］を使った後、何らかの理由をでっち上げて新ソ連の艦隊が南下した場合、その対処自体は一条にやらせる。その際に、真一と愛波には国外へ出てもらうこととする」
「そこまで急がせるとなると……エドワード・クラークに時間を作らせないため？」
「それと、国防軍に余計な手出しをさせないためだ」
原作の展開ならば、九島光宣が桜井水波を病院から連れ出し、富士の樹海の隠れ家で達也と魔法の攻防を繰り広げた後、九島家の力を借りる形で国外へ脱出した。その際に八雲もとい『元老院』の介入があった訳だが、それは置いておく。
本来ならば国防軍に対する配慮を考える上でネックになっていた達也の特務士官の階級だが、悠元はこれを活用して『国外から飛来した災難への対処として、［パラサイト］に得手のある大黒特尉を派遣する』という筋書きを構築した。
そして、以前の［パラサイト］事件で悠元がアドバイスした内容を基に、幹比古の協力を得る形で達也が精神体をこの世から存在出来なくさせる魔法――実質的な〝死〟を齎す魔法を会得した。名称は［アストラル・ディスパージョン］と名付けたが、達也は［天刃霊装］である［交差する機械仕掛けの運命（クロス・エクセリオン）］からも発動できるように研鑽を積んでいる最中とのこと。
セリアから聞かされた達也の修得魔法の殆どが［天刃霊装］を経由する形で会得したことになる為、真一がパラサイドールを盗み出す必

要も無ければ、それに伴う罪状の追加も一切なくなるし、何より九島烈の死亡リスクが格段と減ったことになる。
そして、これが最も大事なことだが……事態が一気に急変すれば、さしものエドワード・クラークでも読み切れなくなるという点にある。
確かに、全世界の情報を収集されるというデメリットは大きいだろう。だが、何も［エシェロンⅢ］そのものが敵対してくるわけではないし、いくら計算し切れたところで彼が差し出せる対価は［エシェロンⅢ］に関する立場の放棄と、自らの持つ技術の提供ぐらいしかない。
情報を操作して金融市場を掻き乱すリスクはあるだろうが、真っ先にやったところでこちらは保有している米国債を全額売却するという切り札を持っている。国内に残っている［パラサイト］を掻き集めたところで〝焼け石に水〟のレベル。
ハッキリ言おう。エドワード・クラークは既に詰んだも同然のレベル。だが、万が一のことも考えて念には念を入れておく。
「新ソ連の艦隊が南下すれば、いくら日和見している者でも危機感を覚える。なら、その危機感を緩和するためには、何が一番効果的だと思う？」
「強大な抑止力を有する何かを北の備えに置くってことね。そして、ご主人様にはその心当たりもあると」
「そういうこと。って、ルミナはいいのか？」
「私はもうステイツの人間じゃないも同然だし、ご主人様の忠実な下僕ですから」
「分かってくれるのはいいけど、俺は愛人であっても下僕扱いはゴメンなんだが……」
平日は基本的に婚約者たち、週末は深雪と愛人たちとの関わりの時間が多く、月に二度は自分一人で過ごす時間を作る様な形でローテーションが組まれている。とはいえ、序列第一位の深雪に対する優遇もあって、結局その日は深雪と一緒に居る時間が自ずと増えている。
一緒に居るだけなのかと言われると……するべきことはしているとしか答える事しか出来ないが、そのお陰で自分や深雪のストレスも

大分軽減されている。
ただ、経験をいくら重ねたとしても公の場に影響が出るようなことは避けているし、周囲からの負の視線を浴びないような配慮はしているわけだが。
「深雪から下僕扱いを懇願されたのに？」
「それこそ意味不明だと思ったよ……妻に鞭を打つような真似はしたくないんだが」
「でも、その子の気持ちは少しわかるわ。こうやって話しても無秩序に押し倒さないから、もっと好きにしてほしいって思ってしまうのでしょうね」
「あ、それは分かります。お兄ちゃんはもう少しがっついても罰なんて当たらないと思う。いっそのこと、空き教室とかでしても」
「それをやり過ぎたら色々マズいから、学校では自制してるんだよ」
それに、学校でそういった行為に走らないのは、部活連会頭としての面目もあったりするが、変に噂が立った挙句の結果として同級生や下級生から求められるというリスクを避けるための結果として、学校では一切しないと心に決めている。
創作物だと次々とクラスや先輩・後輩の女子を堕としていくハーレムルートものもあったりするが、そんな二の舞を踏んで自分の心の平穏を減らしていくような真似など出来ない。
「仮に英国の女王まで入れて２０人でも多すぎるわ。世の中の男子連中はもう少し精神を磨けって思う」
「凄い甲斐性ですね……うちの息子も似たようなことになりそうだし」
「流石ハーレムおぶっ!?」
結局、熱い夜を過ごすことになったのは……今更特筆すべきことではないのかもしれない。
◇　◇　◇
７月２日、火曜日。
巳焼島の訓練場でジェラルドは汗を流していた。すると、ベンチに置いていた情報端末に着信が入る。彼はそれがエージェントとして

の活動をする際に設定した着信音で、ジェラルドは慣れた手つきでそのまま暗号を解析してメールの内容を確認する。
「……ああ？　とうとうネジすら失くしたか、連中は」
「ジェイ？　どうかしたの？」
　ジェラルドの文句に近い台詞を聞いて近寄ったのは、同じように訓練をしていたアニエスだった。流石に下着は付けているが、上はそれにタンクトップを着ているだけの状態なので、肌の露出と彼女の胸の谷間が見えてしまう。
　それに一々動揺していたら精神が持たない、と判断しつつジェラルドが話し始める。
「伯母さんからの暗号メールで、イリーガルＭＡＰをハワイに移送したという情報が流れてきた。だとすると、一番可能性が高いのは『ホースヘッド』ということになる」
　イリーガルＭＡＰ（Ｉｌｌｅｇａｌ　Ｍｙｓｔｉｃ　Ａｓｓａｓｓｉｎ　Ｐｌａｔｏｏｎ）。ＵＳＮＡ軍における非合法魔法師暗殺者小隊。表沙汰に出来ない魔法師の暗殺を請け負う部隊の名称で、『コールサック』『コーンネビュラ』『ホースヘッド』の三分隊で構成されている。
　ジェラルドが彼らを快く思わない理由は、彼らが暴れすぎたせいで８年前のベーリング海における魔法戦闘の原因を生み出してしまったからに他ならない。
「だが、７年前にミッドウェー刑務所へ収監されたはずの連中が何故また表沙汰になりかねない舞台に……アニー。こいつらの狙いを考えた時、真っ先に司波達也や神楽坂悠元を狙うとは考えにくい」
「そもそも、どういう部隊なの？」
「暗殺を専門とする魔法師部隊だが、真っ当な手段をこいつらに求める方が間違うほどにヤバい。目的達成の為ならば、近しい人を誘拐して洗脳し、洗脳対象にターゲットを殺させることも厭わない。要は、テロリスト紛いのことを平気でしでかす奴らだと思ってくれ」
　問題は、一体誰がイリーガルＭＡＰの釈放を許可したのか、ということになる。

当然、政府側はトップの素性からすれば先代〝シリウス〟を失ったことを鑑みても到底許すとは思えない。だとすれば、国防総省（ペンタゴン）内における強硬派が根回しをして、裏には相当名のある政治家が関与しているのだろうとジェラルドは推測した。
「……彼らに伝える？」
「俺が悠元にメールを送る。傍受されるリスクはあるが、連中が日本に来るだけでもヤバいのに、それで騒ぎを起こしたら日本に支払う賠償額が天井を突き抜けるぞ」
現時点で『ＳＴＥＰ』に対する妨害工作という点だけを見ても、支払うことになる額は億単位を決して下回る事など無い。寧ろ、これまでの不義理を問われた際にＵＳＮＡの国家予算一年分で足りるのかすらも怪しくなりつつある。
『セブンス・プレイグ』や『アルカトラズ』の件でも、交渉した結果として３０兆円の枠組みに収まっただけであり、それが日本によって改めて公表された際、ＵＳＮＡの世界における国家の信用度は底すら抜けることになる。
それを分かっていながらエドワード・クラークは司波達也の排除を目論んでいるわけだが、ジェラルドからしたら体の良い道化（ピエロ）になってしまっているとしか思えなかった。
「変に無秩序になっていないところを見ると、パラサイト化の範囲はまだ限定的に抑えられているようだな。それを喜ぶべきか悲しむべきかは分からんが」
「ジェイは本当にいいの？　〝シリウス〟の、ジェイのお母さんが名乗っていた名を継ぐことに関して」
「もう決めたことだ。誰かに継がせて無茶苦茶なことになるよりは、俺が母さんとリーナの〝シリウス〟を継ぐ。そうすれば、『スターズ』の問題も多少は緩和されるだろうからな」
〝強さ〟という定義は人によりけりだが、ヴィルヘルミナが〝シリウス〟を名乗っていた時は、文句がある人間を片っ端から実力で叩き伏せていた。一切小細工を擁しないやり方をした結果として、『スターズ』を一つの集団として纏め上げていた。

そんな事情を無視してリーナを〝シリウス〟として継がせようとしたため、ジェラルドは監督官として真っ向から反対意見を出した。もし彼女を総隊長とするならば、彼女を補佐する役割の人間を入れることが前提条件だと付け加えた。

未だ十代の人間に個の強い魔法師部隊を纏め上げることがどれだけ困難なのかを、ジェラルドは当時生きていた頃の母を見て学んでいる。リーナの愛国心を煽り、軍の重職に置いた側の人間も当然責任を問われる問題だ。

「実力を見せるチャンスも貰えるらしいからな。願わくば、エドワード・クラークに一発殴ってやりたいぐらいだ」

「……ジェイが殴ったら、頭部が破裂すると思うけど」

「そこまで筋肉ゴリラになった覚えなどないんだが？　ガタイの良さなら、ハンスのほうが上だろうに」

体型的には『細マッチョ』と呼ばれる部類だが、ジェラルドとしてはもう少しがっしりとした体型が欲しくて鍛錬を続けている。ジェラルドの願望を聞いたアニエスの指摘に対し、彼は『そこまでして殺したいわけではない』と言いたげな台詞を呟く。

その直後、上の方から悲鳴にも近い声が響いてくる。二人が上を見上げると、残像が発生しそうなぐらいに飛んでいくハンスの姿があった。

「やめろろおおおおっ……!?」

「……上泉剛三さんの無茶ぶりに付き合ったこともそうだけど、力を持つのも考え物だね」

「そうだな……魔法師は己を律しろ、と言う意味がよく分かる事例だな」

半ば悲鳴に近いハンスの叫びを聞いた二人はハンスの事情も内密に聞いた。かの英雄の霊魂が憑りついたというのは「パラサイト」に近いが、生存本能というよりは爆撃機乗りとしての性が強く出ている有様を見て、これで無差別に被害を出していない時点で『問題なし』と見做した。

別の言い方をすれば、『見なかったことにしておきたい』という現実

逃避でもあったりするが。

地の果てか海の底か

達也や悠元が慌ただしく動いている中、四葉家も決して他人事ではないために動いていた。ただ、黒羽家の文弥と亜夜子を動かすことについては真夜の一存で差し止めていた。別に利敵行為を疑うわけではないが、彼らを含めた四葉の諜報部隊には九島家と藤林家の監視を頼んでいたからだ。

「奥様、定時報告でございます」

「向こうに動きは？」

「ございませんな。しかし、時を超えた来訪者とは……私も想像の範疇に無かったことでございます」

「それは仕方がないことよ。たっくんでも２４時間が限界の［再成］以上の出来事ですもの」

過去から来たアルフレッド・フォーマルハウト、並行世界から来た桜井水波と九島光宣。そして、千姫から聞いた情報では先代のシリウスまでこの世界に来てしまった。とはいえ、彼が意図して招いたわけではないし、真夜とて失った過去を要求するつもりなどなかった。

「父を蘇らせる可能性が出てきたことだけど、この辺は姉さんと話し合ったわ。ただでさえ悠君にお世話になっているのに、これ以上の対価を支払える対象が無いもの」

「つまり、先々代様を生き返らせることはしないと？」

「漸く故郷の地に帰って墓の下に眠ったのに、私たちの我儘で叩き起こしたりなんかしたら罰が当たるわ。この先の世界は悠君やたっくんたちが未来を切り開く番。私たちはその背中を押してあげるだけでいいのよ」

「左様でございますか。これは失礼なことを申し上げました」

真夜は当主引退後に悠元の愛人となることを受け入れてもらったのに、これ以上の心労など重ねさせるわけにはいかない。彼との関わりで若返ってしまうということも起きたが、彼の異質さを守るためにも、深夜と一緒に決めたと葉山に述べた。

「別に気にしないわ。葉山さんからしたら、気苦労を背負えあえる人

が欲しいのかしら？」
「強いて申し上げるならば、この老骨の後を継ぐに相応しい人物が出てきてほしいと願うばかりです。先々代様ならば、きっと厳しく見定めるでしょう」
「葉山さんほどの実力者なんて、早々出てくるものじゃないと思うのですけれどね」
『元老院』のエージェントという肩書を差し引くとしても、真夜が知る限りにおいて巧みな魔法を使いこなす人間など数えた方が早い。葉山を超えるだけの信頼と実力を他の執事たちが勝ち得れないからこそ、葉山が未だに四葉家の執事長をしているという事実もある。
「それとも、葉山さんもそろそろ引退なさりたいのかしら？　私は一向に構いませんけど」
「そうですな……それこそ、兵庫が達也様の傍に相応しき人物として大成するまでは、この立場を譲る気など有りませぬ」
「ふふっ、彼も大変な頑固者に目を付けられてしまったみたいですね」
「頑固という点は否定しません」
忠教は四葉の復讐劇の時点で葉山家の家督を譲っており、現在は息子の忠成が孫世代を厳しく育てている。彼以外にも忠教の子は多く、既に亡くなった妻は宮本家の傍系でもあった。
「奥様。僭越ながらこの葉山からお願いがございます」
「あら、改まってどうしたのかしら？　父の代から世話になっている葉山さんのお願いとあらば、遠慮せずに申し上げてください」
「では……実は、長女の子を達也様に嫁がせたいと考えております」
葉山からの婚約者の申し出。これには真夜も少し驚くものの、思わず笑みを漏らしてしまった。何せ、彼の功績を考えれば婚約の募集を始めた時に便乗しても真夜は一切咎めるつもりなどなかったからだ。
とはいえ、一段落してからの申し出となると、何かある……そう考えた真夜は葉山に視線を向けた。
「葉山さんほどの人なら、別に私へ直談判しても許されるでしょうに。何か理由があったりするのかしら？」
「その孫娘は第三高校に通っておりまして、その際に申し込めば男子

生徒から要らぬ厄介事を押し付けられることを危惧してのものでした」
「ああ、ディオーネー計画でたっくんが巻き込まれた件に絡むのね。それで、その子の名前は？」
「――渡良瀬奈々枝（わたらせなな え）。現在、国立魔法大学付属第三高校の専科３年生にてございます」
　真夜とて葉山家の全容を把握しているわけではない。プライベートのことをほぼ漏らさずに仕えていてくれるため、まさか彼の孫娘が達也と同い年だとは思いもしなかった。
「確か、たっくんの婚約者の十七夜さんと友人関係みたいだから、問題はなさそうね。こうなると、たっくんの子どもが出来たら当主を引退することにしようかしら」
「……それで、神楽坂様の許に転がり込むのですな」
「葉山さんには一切漏らしていないのに、何故分かったの？」
「深夜様に全て教えていただきましたので」
「姉さぁん!?」
　大漢によって失ったものを取り戻すかのようになっていく双子の姉妹。それをまるで父親のように温かく見守る執事長が放った一言に対して、真夜は叫びにも近い声を上げたのだった。
「真夜もまだまだね」
「そう言いながら体を密着させないでくれ。勢いで押し倒してしまいたくなるから」
「私はご主人様の使用人であって、下僕でもあるので。娘共々可愛がってください」
「はぁ……今更取り消すのはナシだからな？」
「あっ、ご主人様ったら積極的すぎます」
　その頃、自分の娘と一緒に愛する人のスキンシップを満喫していた深夜の姿があったのだった……それでも最終防衛ラインは維持されたままだという事実は、変わらないままである。
◇　◇　◇
　現地時間７月１日１７時、日本時間７月２日午前８時。

ＵＳＮＡニューメキシコ州ロズウェル郊外にあるスターズの本部基地に、第五隊隊長であるノア・カペラ少佐が帰投した。
「カノープス少佐以下二名の護送、並びに『イリーガルＭＡＰ』の移送を完了いたしました」
「ご苦労だった。ゆっくり休みたまえ……何か言いたいのかね、少佐？」
基地司令であるポール・ウォーカー大佐は労いの言葉を掛けたが、それに対して動こうともしなかったカペラに対して改めて問いかけた。それに対する彼女の表情は、納得できないような様子を垣間見せていた。
「その『イリーガルＭＡＰ』のことです。彼らを再び野放しにするようなことをして、誰が責任を負うのですか？」
スターズの中で軍歴が最も長いカペラは、同じ名前を持っていたノア・ポラリス――――セリアの先代に当たる人物に可愛がられていた。彼女や先代の〝シリウス〟を含めた恒星級の半分以上を喪った要因の一つに、彼ら『イリーガルＭＡＰ』と新ソ連の秘密部隊との暗闘が大きく関係している。
軍人として私情を挟むべきでないことは理解しているが、それを抜きにしたとしても、彼らを釈放する理由など本来ならば無い。カペラが尋ねたいのは、カノープスらと入れ替わる形でミッドウェーからハワイに護送された彼らの処遇と責任に関して。
「だが、彼らの任務遂行能力は確かだ」
「過剰殺戮（オーバーキル）は任務を正しく遂行したとは言えません。彼らにアンジー・シリウス少佐を狙わせるのですか？」
「いや、違う。彼らの次のターゲットは、日本の戦略級魔法師、司波達也だ」
カペラとて、日本の戦略級魔法師に思うところがないわけではない。だが、同盟国――――それもベゾブラゾフに伍することが可能とされた相手を殺すという時点で、最早正気で事を進めているとはとても感じられなかった。
この時点でも、スターズのパラサイト化は止まっていた。基地構成

員の殆どがパラサイトによる意識誘導で日本の非公式戦略級魔法師――無論、達也のこと――に対する警戒を優先させられ、その行動に協力するよう仕向けられているに過ぎない。恒星級隊員に限定しても、凡そ三分の一未満でしかなかった。

「……質問は以上かね？」

「はい、大佐殿」

「少佐、下がってよい」

そう述べて部屋を出たカペラは、そのまま第五隊隊舎の自室に帰った。彼女は中立的な立場だからこそパラサイトによる侵食の対象から逃れることが出来ていた。

（［パラサイト］に感染した隊員たちが次々と居なくなっている……間違いなく、行き先は日本か。だが、今の段階で私に出来る事など無いに等しい）

下手に叛意を見せれば、カノープス少佐たちと同様に収監されるのが関の山。かと言って、〝悪魔（デーモン）〟に心を売ってしまったも同然の者たちを擁護する気もない。恒星級隊員への侵食は止まったようだが、衛星級や『スターダスト』が［パラサイト］による侵食を受けている可能性もある。

そして、カペラはヴァージニア・バランス大佐から内密に任務を受け取っていた。それは、［パラサイト］の侵食度合いと『スターズ』の混乱の蔓延の阻止。どちらもカペラにしか出来ない任務であった。

◇　◇　◇

魔法科高校も試験期間中は午後早々に放課後となる。悠元は試験が免除されているとはいえ、勉強していた。

『［トーラス・シルバー］とも謳われた人間が勉強する必要があるのか？』と疑問を呈する者も少なくないだろうが、いくら授業免除を言い渡されているとはいえ、悠元は部活連会頭の要職にいる。謂わば全校生徒の手本となるべき一人でもある為、そのケジメとして受ける授業を受けている。

カフェテリアで珍しく一人ではあるが、悠元の噂と言うよりは三矢家の人間としての噂のせいで声を掛けようとする人間は少ない。悠

元からすれば、それはそれで有難いと思いながら端末を見ていた。
　すると、悠元に近付く女子生徒がいた。
「あの、お兄様。同席してもいいでしょうか？」
「詩奈か。別に構わないぞ」
　この時期は生徒会役員も主だった仕事はないため、試験勉強に明け暮れる日々。詩奈が侍郎と別行動をしているのは別におかしな話でもない。ただ、詩奈がどう切り出そうか迷っている節は感じられたため、そのまま向かいの席に座るよう勧めた。
「あの、他の人たちと一緒じゃないのですか？」
「深雪や雫のことを聞いているのかと思うが、何か話し合っていたみたいだからな。メールだけ入れておいて一人で勉強していた」
「そうだったのですか」
　別に仲が悪い訳ではなく、悠元は悠元の、詩奈には詩奈の人付き合いがあるため、互いに話す機会が減っているだけに過ぎない。このままだと『何も話さない』と判断した悠元が切り出す。
「詩奈。何か聞きたいことでもあるのか？　いや、俺に何か伝言でも言い付かったのか？」
「……」
　その問いかけに対し、詩奈は遮音フィールドを張った。つまり、周りには聞かせられない事情があると判断して、詩奈の言葉を待つ。そして、彼女は静かに話し始めた。
「お父さんからお兄様に伝言がありまして、国防陸軍の佐伯少将がお兄様の動きを懸念していると。細かい事情は教えてもらえませんでしたが、私と侍郎君が修得している［天刃霊装］に大きく関係していることだけは聞きました」
「懸念ねえ……」
　そもそも、向こうから人を便利屋扱いした挙句、達也を見殺しにするような策まで講じておいて『海外に出ていくな』と忠告する方が正気を疑う。大体、佐伯は実績を有するが、それが彼女の功績かと問われると微妙なところだ。軍人としての倫理（モラル）からすれば妥当な反応だが、国防陸軍全体で見れば彼女は一人の女性将校でしかない。

一方、悠元はここ数年の軍功によって特務大将の地位に就いているが、達也に関する権限を有していても、それ以上の権限を持つ気など無い。蘇我をはじめとした陸軍最高司令部や防衛省の制服組もそれを理解しているからこそ、最大限の便宜を図る形で支障が出ないようにしている。
「向こうが吹っ掛けたに等しい喧嘩だというのに、今更『懸念する』だ？　爺さんがそれを聞いたら、マリアナ海溝に沈められても文句は言えないぞ」
「……お兄様は、怒っていないのですか？」
「俺自身を利用したことは一応決着がついた話だからな。それ自体に因縁を持ち込む気はない。だが、家を離れた身とはいえ三矢の家に迷惑を掛けた時点で、彼女にはその頭脳を発揮させるに相応しい場所を用意してやらないといけない」
（あ、これ怒ってるときの口調だ）
悠元は表情をあまり表に出そうとしない。常に怒っていてもストレスが蓄積するだけで、逆に疲れてしまうのが分かっていたからだ。だからこそ、その反面として言葉遣いに感情が乗ってしまう。
詩奈は以前、侍郎が黙って悠元のおやつを食べたことで、満面の笑顔を浮かべて侍郎の尻を叩く悠元の姿を目撃したことがある。その時の経験もそうだが、魔法に関する感覚が敏感な詩奈だからこそ、言葉から感じてしまう感情を読み取ることが出来た。
「父さんには『そちらが気に病む必要はないから、聞くだけ聞いて適当に流してくれ』とだけ言っておいてくれ。対処は此方で全部やるから。あと……元治兄さんには『事が整ったら、次の当主として一仕事頼みたい』と」
「分かりました。あと、お母さんから『孫は３０人ぐらい欲しい』と」
「元治兄さんの子が夏に生まれるのに、そこから追加で３０人って……元継兄さんや姉さんたちに言うべきことでしょうに」
穂波に宿った子たちは順調に成長しており、出産予定は８月中旬になるらしい。最も忙しくなりそうな８月上旬ではないだけマシだろうが、本当に激動の時代だと思う……自分や達也限定なのかもしれな

いが。
「そういえば、深雪お義姉様と高校卒業を目途に結婚するとお母さんから聞きましたけど」
「その件ね……多分、少し早まることになりそうなんだよな」
　最初は深雪が１８歳を迎えてから――――３月２５日になる予定だった。ただ、深雪が内密に千姫へ相談を持ち掛けたことで、悠元の誕生日である２月１４日に婚姻届を提出して、書面上は正式な夫婦になる予定であることが千姫から知らされた。
　ただ、深雪以外の婚約者には１８歳未満の人間（茉莉花、アリサ、茜、エフィア）がいるため、彼女たちの序列を考慮して第７位の愛梨までは今年度中に、第８位のアリサ以降は茉莉花とアリサ、茜の年少組が卒業次第となる。
「誕生日にバレンタインに結婚記念日まで重なるとか……プレゼント代は増えることになるが、これも男としての責任だな」
「逞しいですね、お兄様は。侍郎君は愛人候補がどんどん増えてますが……」
「言っとくが、俺は侍郎の鍛錬以外に何かしらの作為的なことはしてないからな？」
　詩奈の話を聞く限りでは、矢車本家絡みに加えて上泉家でも元継の従妹（詳しくは知らなかったが、剛三の娘は何と１２人もいて、各々分家や武家所縁の家に嫁いでいるため、孫の数も多かったりする）を侍郎の使用人として置くらしい。
　学校絡みで言うと、侍郎は風紀委員に入ってはいるが、家の事情もあって部活動には正式に所属しておらず、偶にマーシャル・マジック・アーツ部へ出入りすることはあるらしい。
「侍郎君はお兄様を見習って、断れる勇気を持つべきだと思うんですけど」
「俺も全部が全部断れてるわけじゃないんだがな……」
　最近だと、マーシャル・マジック・アーツ女子部１年女子の北畑千香（きたはたちか）に勝負を挑まれることが多い、と漏らしていたらしいが、詩奈からすれば『新たな愛人候補の出現』だと睨んでいた。ある意味詩奈一筋だ

からこそ、色恋沙汰に目もくれずに努力している姿勢が却って侍郎の魅力として映っているのだろう。

何故だか、今の侍郎の姿がかつての自分と被って見えてしまうことに関して、流石に侍郎が精神的に死なないようフォローしようと心に決めた悠元であった。

もう一人の戦略級魔法師の認識

エドワード・クラークの提唱したディオーネー計画。原作では多少の躓きで許されていたが、この世界ではその比にならないほどに頓挫していた。

本来のターゲットであった［トーラス・シルバー］＝司波達也を引き込めなかったどころか、当初は協力の姿勢を見せていたエルンスト・ローゼンがドイツ政府の意向を受けて撤退。国内においてはマクシミリアン・デバイス社長のポール・マクシミリアンが『計画の信憑性』を理由に計画の参加を保留。

これだけならばまだしも、日本と経済的な繋がりを有する東南アジア同盟、インド・ペルシア連邦（ＩＰＵ）、アラブ同盟、南アメリカ連邦共和国、アフリカ民主主義共和国連邦が相次いで司波達也が関わるＳＴＥＰ計画に賛同した。南半球に属する全ての国々が日本の支持に回った。

更に、北欧諸国やトルコ、東西ＥＵまでもが日本の［恒星炉］プラントに対して積極的な交渉を行っており、協力者の一人であるマクロードが属するイギリス連邦ですらも日本の支持に回ってしまった。

ディオーネー計画自体はクラーク一人の手を既に離れているが、国家科学局（ＮＳＡ）内では各国の協力を取り付けられない状態で計画を進めても実行できるか疑わしいという他の科学者の意見もあり、精々〝暇つぶし〟程度の産物に成り下がりつつあった。

プラントの構想自体は決して珍しいものではなく、かつて計画された核融合発電プラントをベースに組み立てられている。エドワードにとって最も誤算だったのは、［恒星炉］自体が発表時点ですでに稼働していたという事実を［フリズスキャルヴ］でも掴めなかったことにあった。

従来技術では採算が取れなかった事業を、魔法核融合炉によって採算を成り立たせる。クラーク自身もその公算を否定することは出来ない。そして、司波達也と同じく［トーラス・シルバー］として名乗った人物――――神楽坂悠元の存在をエドワードはそこで初めて認識す

ることとなる。
かつて世界群発戦争で名を馳せた神楽坂千姫の養子。旧姓は三矢。司波達也と同じ第一高校の生徒で、息子のレイモンドが指摘した〝もう一人の戦略級魔法師〟。ここまでくると、クラークであってもかつて息子が述べていたことを呑み込まざるを得なかった。
だが、神楽坂悠元を［フリズスキャルヴ］で調べれば調べるほど、クラークは袋小路に追いやられる気分に苛まれていた。彼の成したと思しき功績を噂レベルに広げたとしても、脅威と見做す以前に『有り得るはずがない』という事象しか出てこない。
しかも、傍らには神楽坂千姫と同じ英雄にして、四葉の復讐劇を知る生き証人の上泉剛三がいた。彼が見出した戦略級魔法師という見方をすることもできるが、それだけで脅威と見做すことが出来ない。
最大の理由は、上泉剛三がＵＳＮＡ国内にもあらゆる方面でシンパを有しており、ＵＳＮＡ政府のトップである大統領は彼の弟子の一人。いくら危険性を訴えたところで、如何なる対価を支払えば納得してもらえるのかという難題が待ち構えていた。
このままでは、ディオーネー計画の真の目的は達成できない。だが、迂闊に手を出すわけにはいかない。ただでさえ政府内部からもディオーネー計画に対する信憑性の有無を問われている以上、勘のいいジャーナリストが嗅ぎ付けてディオーネー計画の真実を突き止められる確率は無視できない。
世界からも見放されつつある状態であるのに、エドワード・クラークはまだ諦めていなかった。状況を引っ繰り返す糸口を探して、オリジナルの［フリズスキャルヴ］が集めてくる膨大なデータと格闘を続けていた。
オリジナルの［フリズスキャルヴ］は世界中にばら撒いた端末と違い、大型コンピューターに接続してデータを保存・整理できる。クラークは戦略シミュレーションＡＩのアシストを受けながら、かれこれ十日以上も家に帰っていない状態が続いていた。
なので、レイモンドがパラサイト化したことなど知る由もなく、訪日することに関する連絡もメールでしか遣り取りしていない。そも

そも、直接顔を合わせたのは半月以上も前のことになるわけだが。
だが、司波達也を暗殺する事すら失敗している状態で、神楽坂悠元まで殺そうとしたとしても、ほぼゼロに近い可能性の糸口を見出すという無理難題という事実。
そんな状況をかの撃墜王（ルーデル）が見たら、『哀れと言う他ないだろう』と同情に近い言葉を投げかけられるぐらいに、クラークの精神状態が追い込まれ、疲れから諦めを呼び込め始めた時に電話がかかってきたのは午後3時のことだった。
電話の相手は、最近コンタクトが取れなかったイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフであった。
『クラーク博士、ご機嫌は如何ですか』
「ベゾブラゾフ博士、お久しぶりです。気分は芳しくありませんが」
『そうですか。しかし、それは私のせいではありませんよ』
「何を言っている」と罵声を発したい気分だったが、クラークは自制してベゾブラゾフの言葉を待った。一方、ベゾブラゾフはクラークの様子を一切気にすることなく続きの言葉を発する。
『私が失敗したのは事実ですが、元を返せば恒星炉プラント計画を政治工作で阻止できなかったことが原因なのですから』
「博士の立場からすれば、そうなるでしょうな」
ここで喧嘩別れをしても有害無益。下手をすれば、彼の［トゥマーン・ボンバ］がＵＳＮＡに向けられるリスクを伴う危険性も生じる。だが、口調に棘が混じってしまうのは抑えられなかった。
『ご理解いただけて幸いです。私の立場では、司波達也を放っておくことは出来ませんでした』
「事態は余計悪化してしまいましたがね！　司波達也を暗殺する。それは結構！　失敗したのも仕方がないでしょう。相手が一枚上手だっただけのことです」
余りにも反省の見られないベゾブラゾフの態度に、クラークはとうとう怒りを爆発させてしまう。ベゾブラゾフは不快感を表情に滲ませていたが、「知った事か」という心境だった。
「ですが、日本のもう一人の戦略級魔法師は確定できました。名前は

神楽坂悠元。神楽坂千姫の養子にして、先日ＦＬＴの記者会見に姿を見せた元［トーラス・シルバー］の一人です。恐らく、一昨年佐渡沖で博士の［トゥマーン・ボンバ］を無力化したのも彼の仕業でしょう」
『それは……ならば、尚のことこちらから提案があります』
「……伺いましょう」
　ベゾブラゾフはクラークの情報に少し考えた後、先程までの不快な表情が消え去って真剣な表情でクラークを見据えるように話し始めたため、クラークも気分を落ち着けた上で彼の言葉を待った。
『ご存知の通り、我が国は現在大亜連合による侵攻を受けていますが、それも明日には決着がつきます』
「博士が［トゥマーン・ボンバ］を使用されるのですな」
『その通りです』
　戦略級魔法を投入しただけで戦争が決着するというケースは、戦争をあまりに単純化しているようにも見えてしまうかもしれない。だが、局地戦レベルである今回の戦いに焦点を当てた場合、ベゾブラゾフの発言は決して誇張されたものではないというのはクラークも理解していた。
　大亜連合側はベゾブラゾフの不在を基に立案されたものだが、ベゾブラゾフが健在となれば戦闘続行の名分が喪失するし、戦略級魔法の損害によって継戦も極めて難しくなる。この場合、ベゾブラゾフが［トゥマーン・ボンバ］を使用することによって大亜連合軍が大打撃を受け、敗走するのは免れない。
『我が軍はこの勝利に乗じて、日本海を南下する予定です』
「日本に攻め入るのですか!?」
『大義名分は用意するのでご心配なく。それに、本州へ上陸する計画もありません。そもそも、領土を求めての侵攻作戦ではありませんので』
「……」
　新ソ連艦隊の南下。だが、領土への侵攻はない……ベゾブラゾフもとい新ソ連側の言葉をどこまで信用できるかは不明だが、クラークはベゾブラゾフの策の真意がどこにあるのかを悟った。

『お分かりのようですね。そう、これは陽動です。司波達也の恒星炉プラントがどこに建設されているかは、ご存知でしょう』
「……東京南方１８０キロ、『巳焼島』と呼ばれる火山島ですね」
『その通り。我が軍が南下する海域のちょうど逆サイドです』
新ソ連の陽動に際し、ＵＳＮＡが建設中のプラントを攻撃する。ベゾブラゾフの策をクラークは考慮したものの、一方のベゾブラゾフは臆することなく発言した。
『別に難しい話ではありますまい。施設が国籍不明のテロリストの標的になったと知れば、プラントに出資する資本家も考え直すのでは？
恒星炉プラント計画は中止せざるを得なくなり、司波達也はディオーネー計画参加を拒む口実を失います。そのついでにクラーク博士が仰った彼も巻き込めば、一石二鳥というものでしょう』
理性的に考えれば、即座に蹴るべき提案だ。仮にいくら誤魔化そうが、全て明るみにされるリスクはどうあっても拭い去れない。神楽坂千姫がその最たる例で、彼女に敵意を向けた人間はだれ一人の例外もなく闇に葬られていることは収集したデータで把握していた。
もし、彼女の息子となった神楽坂悠元に同じことが出来るとすれば、それは確かに脅威だ。だが、彼は国内外の公人に信の置ける人間が多く、現ＵＳＮＡ大統領もその一人だ。
しかし、閉塞感で苦しんでいたクラークにとって、ベゾブラゾフの申し出が魅力的な打開策にしか聞こえなかった。彼が唆す作戦案は、クラークにとって甘美な悪魔の囁きと化していた。
「……艦隊の出動は何時になりますか？」
『作戦が順調に進行すれば５日後、７月８日になります』
「５日後ですか……」
そこで急を要する訳でもない計画というのが、クラークへ更に拍車を掛ける形となっていた。
「分かりました」
『引き受けると思っていただけました』
ベゾブラゾフが満足げに笑う。クラークには、以前司波達也に敗れる前の彼からは感じられなかった寒気を覚えたのだった。

◇　◇　◇

その頃、巳焼島の宿舎の一室。寝ているというよりは突っ伏している状態に近いハンス・エルンストが目を覚ました。別にルーデルに体を乗っ取られているわけではなく、魔法の制御をルーデルに任せると慣性法則とかどこ吹く風と言わんばかりに物理的におかしい動きをやらされる羽目になる。

すると、扉が開いてナーディアが姿を見せた。両手にはカップを持っている為、気付いたハンスは起き上がってナーディアからカップを受け取り、コーヒーを一口啜った。

「すまないな、ディア（ナーディアの愛称で、基本的に家族にしか呼ばせていない）。訓練はいいのか？」

「流石に休憩。相手がアンドロイドとはいえ、幻術まで使ってくる人が相手なんて、やっぱり日本にはニンジャっているんだね」

「色々話は聞いたが、正直驚くことばかりだ」

すると、枕元に置いていたハンスの端末に着信音が鳴る。空いていた手で端末を掴み、そのまま操作してメールを開くと、それはハンスの中にいるルーデルが端末に送った通信記録と思しき会話のやり取りだった。

その画面をナーディアはハンスの後ろから覗き込んでいた。

「……お兄ちゃんの中にルーデルさんが憑りついたのは聞かされたけど、アナログ時代に生きていた人がここまで電子機器に精通しているの？」

「憑りついた中で色々学んだらしいが……」

ナーディアにはハンスの中にルーデルが憑依していることを教えたが、これまでハンスが成した功績を聞かされた結果、『それは確かにルーデルだね。お兄ちゃん、良く生きてたね』と憐れまれた。

それはさておき、その内容がエドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの会話だということは直ぐに把握し、更には新ソ連艦隊の南下とＵＳＮＡ軍による巳焼島襲撃まで画策したことが判明した。

「……なあ、ディア。仮にここを襲撃するのがＵＳＮＡ軍だとして、

［パラサイト］の公算が高くなったとみるべきだが、ディアの意見は？」
「私もそう思う。てかさ、露見してＵＳＮＡの評価がマイナスを突き抜けることになるし、エドワード・クラークなる人物を殺した方がいいと思うけど」
「物騒なことを言うな。ただ、それに関しては俺も同意見だ」
　彼が一体何を目的としているのか……恐らく、日本に最近出現した戦略級魔法師。無論、悠元もその一人に含まれるだろう。
「俺らですら敵わないと分かり切った相手に挑む時点でバカとしか言いようがない。無秩序に恐怖を煽る方が国家にとって害悪でしかないと俺は思うがな」
「だとしたら、国家にとってアキレス腱になっている何かを握られてるとか、かな？」
「ただなあ……これで、新ソ連とＵＳＮＡが組んでいるような事実が露見すれば、間違いなく最重要容疑に挙げられるのはイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフとエドワード・クラーク。それと、イギリスのウィリアム・マクロード」
　本来、敵対する主義と思想を有する二大国が協力すると言う時点で異常事態だ。しかも、ＵＳＮＡにとっては同盟国でもある日本を嵌めようとする動き。この時点で、第二次大戦の逆襲を恐れているようにも見えてきてしまう。
　その仲介をしたということでイギリスにも少なくない疑いの目を向けられるのは避けられない。既に日本への支持をしていたとしても、ディオーネー計画に一時協力していた時点で二国を結び付けた責任を取らされる可能性は出てくる。
「その絡みで一つ妙な情報をルーデルが持ってきた。大亜連合軍の真の狙いは……どうやらシベリア鉄道のようだ。中央アジア方面に大規模の動員情報が確認された」
「えっ!?　虎の子の戦略級魔法師を捨て石にするってこと!?」
「流石にそんな真似を大亜連合政府がするとは思えんが……このメールの件も合わせて悠元に伝えておくか」

局地戦単位で見れば大亜連合の負けは確定的だが、どうやら中央アジア方面からシベリア鉄道を占拠しようとする動きが見られる。更に、ナーディアには伝えなかった未確認情報として、大亜連合軍の特殊部隊が新ソ連内に潜伏しているらしい。
「全く……変に恐怖を煽る奴も奴だが、相手の為人を考慮して妥協を探るという話し合いをせずに排除しようと考える辺り、野蛮人と言われても反論できない所業だな。いや、こればかりは魔法師の置かれた境遇のせいなのかもしれんが」
――魔法師を『人』と見做さず、『兵器』と見做す。
これが現代魔法が成立して、現在までに根付いてしまった思想。核兵器という強大な力を抑え込めるが故に、それ以上の強大な力として成立したが故の宿命。そして、各国の政府が人道や道徳を完全に無視した魔法師製造研究を進めた結果、簡単に否定のできない性質となってしまった。
「それは……私も分かるかな。魔法の力があるというだけで、離れていった友達も多かったし。お兄ちゃんは強いね」
「俺はある意味両方を知るからこそ、ここまで達観できているだけだ。その意味で、悠元はこの世を変えていく要なのかもしれんな」
次代を担う人間というのは、常人とは違う何かを持っている。それが例え異質に見られようとも、強き意志によって魔法師の未来が変わっていく……何故だか、ハンスはそう思えてならなかった。

蚊帳の外は平穏な日常

西暦２０９７年７月４日、木曜日。大亜連合と新ソ連の武力衝突は１週間が経過した。

事態が動いたのはこの日の朝。先に行動を見せたのは新ソ連側で、ハバロフスクに配置した東シベリア方面軍――――南側で防衛に当たっていた機甲部隊が南下を開始。同時に、ウスリースク郊外で大亜連合軍を食い止めていた沿海地方軍は、ムラヴィヨフ＝アムールスキー半島――――ロシア沿海地方南部のピョートル大帝湾（日本海の北西部）にある半島で、半島の先端にウラジオストクがある――――の入り口を目がけて後退を開始する。

新ソ連の意図が、東シベリア軍と沿海地方軍による挟撃を目論むことは明白。ここで大亜連合側が取れる選択肢は二つ。一つはこのままウラジオストクまで押し切って占領し、籠城作戦を取る。もう一つは、ハンカ湖西岸の占領地域まで退き、同地域の支配を固定化すること。

前者が成功すれば、高麗自治区からの軍が北上する際に海上からの攻撃を受けずに済むという利点に加え、ウラジオストクを橋頭保とすることで沿海地方を一気に占領できる――――大亜連合の理屈では『取り戻す』――――ことが出来る。

大亜連合軍は急戦を選択し、一路ウラジオストクへ進撃する。その動きに気付いた新ソ連も追撃を開始するが、決断の差と戦闘車両自体の速度も相まって、両軍の差は離れていく。そして、差が２０キロメートルを超えた時、進撃する大亜連合軍の前に突如霧が発生する。それは瞬く間に兵員輸送車を含む６０００人の兵士を載せた車両を覆いつくした。

部隊の指揮官や参謀が退避を促したのは早かったかもしれないが、それを嘲笑うかのように複数の魔法式が覆いつくし、酸水素ガスが点火。イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］による超広域爆撃が大亜連合軍を襲った。

爆発による衝撃波ではなく、摂氏２０００度超の高熱が容赦なく兵

士へ曝露される。
２０９７年７月４日。現地時間８時５５分、日本時間７時５５分。
大亜連合軍はこの攻撃によって侵攻部隊の７割以上を無力化され、実質的な全滅に近い敗北を喫した。
◇　◇　◇
ベゾブラゾフの放った［トゥマーン・ボンバ］による強烈な魔法の波動は、当然日本でもキャッチされた。伊豆高原で朝食を摂っていた九島烈は、その波動を感じて静かに箸を置いた。
「……今のは、新ソ連の方向から感じたな。剛三」
「みたいだな。大方［トゥマーン・ボンバ］だろう……ただ、魔法としてはお粗末だな」
「それを言えるのは世界が広くてもお前や千姫ぐらいだろうな」
烈は隣の席で湯呑のお茶を啜る剛三に話しかけ、剛三は放たれた魔法を察した上で〝お粗末〟と吐き捨てた。これには烈のみならず、同席している奏姫やシルヴィアも苦笑を滲ませた。
「自国の被害も鑑みずに放たれる魔法など、俺からすればお粗末以外の何物でもない。ただ、問題はこの後だろうな」
「この後？　まさか、新ソ連が日本に侵攻すると？」
「威嚇や脅迫に近いことは想定されるだろうよ」
剛三は数十年前に新ソ連の艦隊を迎撃し、自身の戦略級魔法で壊滅に追いやったことがある。その復讐めいたことは一昨年の横浜事変でも起きたが、ほぼ似たようなことを成し遂げた悠元に対し、正直『流石わしの孫だな』と称賛を送ったほどだった。
すると、そこで質問をしたのがシルヴィアであった。
「剛三さん、質問があります。仮に新ソ連が大亜連合と講和が成ったとして、日本が要求したベゾブラゾフの引き渡しを突っぱねて軍事行動に出るという時点で、新ソ連側に非があるとしか思えませんが」
「シルヴィアさんの疑問も分かる。だが、連中に目的そのものを問う事など意味が無いのだ」
「意味がない、ですか？」
「うむ。奴らはいわば面子で生きているに等しいからな」

でなければ、態々一度崩壊した〝ソビエト連邦〟の名称を再び使うという事態にはならない。かつての栄光を取り戻すという夢物語のために、反発する者は悉く粛正する。そうやってソビエトは生き永らえてきた。ただ、余りにやり過ぎたがために、旧ソビエト連邦は崩壊してしまった。

「まあ、うちの孫のことだから、何か考えておるのは間違いない。それよりも……奏姫、感じておるか？」

「ええ。横須賀方面から妖の気配を感じます」

「まさか……パラサイトがまた!?」

「……私が言えた義理はないが、愚かと言う他ないな」

奇しくも、ここに居合わせている面々は全員［パラサイト］との関わりを持ってしまった者達。

「剛三、こちらから何か手は打つのか？」

「それに関しては悠元と元継に任せようと思う。あ奴らなら、［パラサイト］の対抗手段を既に得ておるからのう」

もし、手を拱くようならば手助けをすることも考えていた。だが、悠元が何かしらの意図を以て実行しているとするならば、手を貸す必要も無いと感じていた。それに、自分たちがいつまで生き永らえるかなど分からない。本人たちで対処できる能力があるのならば、態々出張る必要もないと判断した。

「お茶のおかわりを貰えるか？」

「はい、ただいま」

「あ、私も手伝います！」

「……魔法に関わらなくなると、ここまで平和になるとはな」

「全くだ」

自ら選んだ道であっても、そこから外れたことで見えるものは平和に見えてしまう。烈の呟きに対して剛三は同意の言葉を口にしたのだった。

◇　◇　◇

その頃、悠元は他の生徒と同じく定期考査を受けるために登校していた。授業免除されていたとはいえ、受講登録している魔法科高校の

カリキュラムに関しては深雪たちの協力を得て勉強していた。
そして、魔法の発動兆候は3年A組の教室にいた人間も感じ取っており、教室の外から聞こえるざわめきで他のクラスも［トゥマーン・ボンバ］の発動を感じ取ったのだろう。
「自席で待機するように」
試験監督官の教員も、そう手短に告げて教室を後にした。悠元は出ていく教員を横目で見つつ端末にウラジオストク近辺の地勢図を表示させる。
（一歩間違えれば、防衛している新ソ連軍まで被害が出かねなかったところで攻撃か……とはいえ、侵攻部隊の7割以上が喪失した以上は大亜連合軍が〝全滅〟したに等しい）
すると、悠元の後ろに深雪が立っていた。特に問いかけることはしなかったが、心配そうな表情を覗かせていた。それを察しつつ、悠元は静かに呟く。
「今すぐ事態が動くことにはならんだろう。今は定期考査を乗り切ることだけ考えておけよ」
「は、はい。すみません、悠元さん」
「別に謝る必要はないからな？　悪いことをした訳じゃないんだから」
だが、完全な躓きによって大亜連合軍は侵攻を継続することが困難となった。自宅でウラジオストク周辺の情報を集めた所、艦隊出動の兆しは見えている。そうなると、残るは艦隊を動かす為の大義名分。
（剛毅さんに［リンケージ・キャスト］の基礎設計データは渡した。向こうも渡された意図に気付いて行動を起こしてくれるだろう。残るは……ここからクラークとベゾブラゾフに渡してやる時間はない）
お膳立ては全て整った。まずは、USNA方面の［パラサイト］を完全に無力化。然る後に新ソ連が介入できないような状態を作り、大亜連合に対しても一定の制裁を加える必要が出てくるだろう。
真一たちの移動手段に関しても問題はなく、貨物船を手配して海路で横須賀港へ移動させる手筈は整えた。新ソ連の艦隊を利用して巳焼島のプラントを攻めるのだから、こちらも利用した上で全てを茶番

劇に変える。
「……人の厚意を無碍にする意味を、骨の髄まで理解させてやるよ」
ほぼ聞こえないぐらいの小声で囁かれた悠元の言葉。幸か不幸か、その言葉を耳にした者は誰もいなかったのだった。
◇　◇　◇
大亜連合の戦略級魔法師こと劉麗雷は友軍崩壊の際、その部隊へ同行せずに後方待機していた。部隊が敵部隊を捕捉したところでヘリによる合流の予定だったため、ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の被害を免れることが出来た。
劉麗雷の護衛部隊を率いる隊長は、ハバロフスク方面から新ソ連軍が侵攻していることを把握しながらも敢えて北上し、ウスリースクの北にあるヴォズドヴィデンカの飛行場を占拠した。
護衛部隊の隊長は、大亜連合軍司令部に即時帰国を具申。部隊が全滅判定同然の壊滅をした以上、当然とも言える申請であった。しかし、軍司令部が下した判断は現地待機――実質的な〝見殺し〟に近い命令。
ハバロフスクから南下した部隊はその部隊の動向を把握していたにもかかわらず、ヴォズドヴィデンカを攻撃することはおろか、包囲すらもしなかったのであった。
◇　◇　◇
放課後、帰宅した悠元のワークステーションに受信メールが二件届いていた。直に悠元はオフライン専用端末に転送して開く。
一件目はハンス・エルンストからのもので、〝ルーデル〟が掴んだエドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの通話を文章データにして書き起こしたもの全文が届けられた。しかもご丁寧に日本語へ翻訳しており、魔王と呼ばれた人物の凄さを垣間見たような気がした。
「ベゾブラゾフの提案にクラークが乗った。そして、向こうもとうとうこちらを認識するに至ったか。ただ……これで、遠慮は要らなくなった」
そのまま二件目のメールを開くと、差出人は真紅郎からのものだっ

た。［リンケージ・キャスト］の基礎設計データ提供に対する感謝と合わせて、相談したいことがあるという文言があったため、レシーバーを付けて真紅郎の通信端末に電話を掛ける。
　三高も試験期間中だが、基本的な試験の時間は魔法科高校共通の為、この時間ならば真紅郎は帰宅しているだろうと睨んでいた。その推察通り、真紅郎は数回のコール音の後、モニターに姿を見せた。
『悠元。珍しいね、君から連絡をしてくるなんて』
「メールは読んだ。何か相談したいような文言に見えたから、こちらから連絡はした。剛毅さんから渡された［リンケージ・キャスト］――［トゥマーン・ボンバ］に使われている［チェイン・キャスト］の改良版となる技術の基本設計データは、俺と真紅郎が〝共同開発者〟として体裁を取ってくれ」
『え、えっ？　僕自身は全く関わっていないのに？』
　悠元が放った言葉――――将来、達也が槍玉に挙げられないための方便として、悠元と真紅郎で共同開発した体裁を取るということ――――に、真紅郎は動揺を隠せなかった。
「俺が昨年の九校戦で［インビジブル・ブリット］を散々弄り回したことがあったからな。そのお詫びとして受け取って欲しい」
『……お詫びの方が重すぎる気がするんだけど』
「後はそうだな……将輝のお守りに対する労いということで」
　別に真紅郎は将輝の保護者でないのだが、原作でもこの世界でも一条家に入り浸った結果として縁者に好かれる現象が発生している。それに、一条家を介せば将来の義兄弟ともなってしまうため、これまでの迷惑料も加えての対価。これには真紅郎も苦笑を禁じえなかった。
『何を言ってもダメそうだね……分かった、甘んじて受け取るよ』
「それで、進捗度合いはどんな感じだ？　［爆裂］の広範囲相転移爆撃魔法は」
『それを見越して提供しているだろうから、バレてしまうのは仕方ないか……明日には完成する。将輝には一度テストしてもらうけれど……変に増長しないか心配だよ』

真紅郎は将輝(しんゆう)の頑固さを誰よりも知っている。三高の前田校長に鼻っ柱を折られても、そう簡単に直るものなのかと訝しんでいた。
「流石に余り度が酷い場合は、直接剛毅さんに相談しておけ。それに、今真紅郎が完成させようとしている魔法の大本は俺が昨年の九校戦で放っているから。名称は「天澪環海(ゼロ・オーシャン・ブラスト)」」
『あー、成程。でも、それだったら悠元が対処しないのかい？』
「出来る奴がいるならやらせる。それでも対処できなかった時は別の手段を講じる。このスタンスを変える気はないからな」
何でもかんでも自分で対処なんかしていたら、明らかに猫の手であっても借りたくなるような状態に陥ってしまう。だからこそ、独力で乗り切れるのならば自分が無理をする必要も無くなる、と判断してテコ入れをしている。
新ソ連が如何なる理由を持ち出すかは分からない。だが、ハバロフスクから出動した新ソ連軍がヴォズドヴィデンカを意図的に避けるような動きを見せている。間違いなく、そこには劉麗雷を含めた部隊がいるとみて間違いない。
『それにしても、新ソ連がこの時期に日本へ攻め込むと？』
「奴らにとって大義名分などどうでもいいだろう。何せ〝ソビエト〟の名を敢えて名乗った連中に信用など置けるものか」
『……何か、嫌な経験でもあったのかい？』
「爺さんの付き添いで訪れた時、特殊部隊に襲われた挙句、三個師団に包囲されたことも有った。全員雪の中に埋めてやったが」
『……はは、はぁ（将輝、君の相手は最悪よりさらに下の実力者だよ）』
疚しい方法で入国したわけでもないというのに、一方的に因縁を吹っかけられた挙句、銃を向けるような連中に信用など出来るはずがない。流石にその時のことを持ち出しているとは思えないが、少なからずそんな感情はあるのかもしれない。
悠元が言い放った事実を聞いて、真紅郎は将輝に対する言葉を内心で思いながらも、苦笑の後に溜息を吐いた。
「もしもの時はこっちから掛け合って護衛とかを手配するから、最低でも自分の身を守れる様にだけはしておけ」

『それもそうだね。それじゃ、悠元。もしもの時は将輝を殴ってでも止めるから』
「……何か見繕って贈っておく」
　真紅郎の心労が垣間見える台詞を聞き、悠元は通信を終えると、彼に対する労いの贈り物を直ぐ手配した。後日、真紅郎から感謝のメールと共に一条瑠璃へのかかわり方を相談されたのは……また別のお話。
　通信を終えると丁度夕食の時間となったので、リビングに降りると婚約者たちが準備をしていたため、ソファーに座ると隣に座っていた五輪澪が話しかけた。
「悠元君。長いこと部屋にいたけど、何かしていたの？」
「ジョージと連絡を取っていて、今後も見据えたプランを彼に頼んでいた」
「それって、今朝の新ソ連の［トゥマーン・ボンバ］と関係が？」
「それは夕食後に話すので」
　そうして夕食の時間は雰囲気を壊さないために定期考査の話となって盛り上がったが、夕食後のコーヒーが置かれたところで悠元が話を切り出す。
「澪さん……コホン、澪には触り程度に話したが、今朝の新ソ連の動きで日本に矛先が向く可能性が高くなった」
「何故？　向こうは達也さんを殺そうとして二度も失敗しているのに？」
「失敗したからこそ、ですか？」
「大まかに言えばな」
　ディオーネー計画はあくまでも隠れ蓑でしかなく、本当の目的は達也を含めた四葉家の完全抹殺。奇しくも顧傑が実現できなかった案をクラークが実行しており、ベゾブラゾフもそれに便乗した形となる。
　いや、［フリズスキャルヴ］の端末の件を含めてもクラークが顧傑を手足のように操って、四葉家を社会的に抹殺しようとしたのは明白。
「新ソ連の戦略級魔法師、［十三使徒］イーゴリ・アンドレイビッチ・

ベゾブラゾフは達也を敵視している。そして、知り合いからの情報提供で俺が戦略級魔法師の一人という情報も向こうに伝わった」
「……悠君は、これからどうするの？」
「黙ってやられるつもりはない。既に段取りは整ったが、ここからは皆にも手伝ってもらう必要がある。無論、強制をするつもりはない」
「え？　お兄ちゃんの命令なら喜んでやるけど」
「お前がそれを言うと洒落にすらならんから止めろ」
　婚約者たちの身の安全を考えるのならば、変に関わってもらう必要はないし、悠元も強制するつもりはない。だが、彼女たちは積極的に協力したいと申し出るような雰囲気を漂わせていた。
　セリアの言葉がその代名詞に聞こえてしまい、悠元は窘めるように呟いたのだった。

ブラッディ・ペンタゴン

セリアの言葉で一旦出鼻を挫かれた様な格好となったが、悠元は気を取り直して話を続ける。
「まず、深雪と雫、姫梨と愛梨、沓子の現3年組はエリカたちのフォローに入って欲しい。厳密に言えば、非戦闘要員になってしまいがちなほのかや美月、それと達也の婚約者たちだな」
「具体的に名前を挙げるということは、誘拐紛いのことが起きるとみているのですか？」
「そういう類の連中がハワイから来ると情報提供を受けた。最悪の場合は殺してもいいと許可は貰っている」
根底にあるのはジェラルド・バランスからの情報で、イリーガルＭＡＰの『ホースヘッド』がハワイから日本に来る手筈となっているそうだ。聞けば、８年前のベーリング海の暗闘の遠因にもなっているらしく、長らくミッドウェー刑務所に収監されていた連中が来るとのこと。
その時点で〝問題児〟以外の何物でもなく、どんな手を用いるかも分からない。なので、誘拐に備えて暫くは集団下校してもらった方がいいと考えている。
「水波は深雪の護衛を頼む。今後、俺が長らく一人で動かなければならないことも増えるからな」
「は、はい！　承りました」
「そこまで気張らなくても……学内のことは怜美に任せる」
「この中だと私が一番非力なんだけれど」
当時は幾ら二科生とはいえ、後に達也の婚約者となった平河千秋を関節技で抑え込んだのだ。それでいて非力というのは筋が通らないが。
「大学方面や三矢家への連絡は夕歌と真由美に任せる」
「それは構わないけど、悠君の元実家絡みで何かあったの？」
「正確には国防陸軍絡みで元実家に圧力を掛け始めてる。そっちの対処は自分でやるので」

「……（悠元君に目を付けられた時点で、物理的に潰れる未来しか見えないんだけれど）」
　大学生組の真由美と夕歌には、彼女らの友人や後輩、それと悠元の姉たちを介して三矢家への連絡網を構築しておく。直接連絡を取ることは可能だが、ある程度バレても問題が無いようにコントロールすることで、相手の出方を探る目的もある。
「茜は金沢方面で頼む仕事があるからいいとして、澪は立場上東京から動かせないが、場合によっては外敵の排除という体で仕事を頼むことが出てくる。ミーナとアーシャは上泉家から護衛を頼んでおいたし……」
　深夜にはマンション周りのことを任せることになるし、泉美は香澄と一緒に動ける状態を作る為、役割は押し付けない。そうなるとエフィア、セリア、ヴィルヘルミナの上位戦力勢が残る形となる。
「フィーは深夜の護衛という体でマンションを守ってほしい。セリア、ルミナの二人には……俺の講じた策に協力してほしい」
「どんな策ですかな、ワトソン君ぴゃっ!?」
「誰がワトソンだ、誰が」
　真一とレグルス、レイモンドの乗った貨物船は大阪港を出発し、今夜に横須賀港へ到着した後、ちょっとしたコネを使って空母『インディペンデンス』に乗り込ませる。そして、レイモンドを唆してＵＳＮＡの輸送艦を調達し、ハワイ方面に逃亡してもらうのが一連の流れ。
　ただ、輸送艦とて瞬時に調達できるわけではないため、その時間稼ぎとして新ソ連の艦隊を利用させてもらう形とした。
「ここだけの話にして欲しいが、現在ＵＳＮＡから入ってくる「パラサイト」に侵食された『スターズ』の兵士らを制御下に置けるように仕込んでいる。『インディペンデンス』にも同様の人間がいることは確認済みだ。真一には彼女らの制御も任せる」
「ちなみに、そっちには誰が？」
「レイラ・デネブ、ゾーイ・スピカ、シャルロット・ベガ――――『スターズ』の三名が監視カメラ映像で確認出来たが……ルミナ、知り合いか

？　いや、元職場なら知っててもおかしくは無いと思うが」
　悠元が話した内容に関してセリアが尋ね、悠元が答えるとヴィルヘルミナが「へぇ」とでも言いたげな表情を見せたことに、悠元が気付いて問いかける。ちなみにだが、ヴィルヘルミナの素性は婚約者や他の愛人らにも開示されたが、セリアという前例がある為にそこまで追及が来なかった。
「その三人なら、元職場で教育係として教えていた子たちよ。［パラサイト］に負けるような軟弱者に育てた覚えはないんだけれど……これは、元教官として活を入れないといけないわね」
「……説教や扱きは事が済んでからにしてくれ」
　その三名がヴィルヘルミナの教え子という事実に加え、彼女たちはパラサイトを治療した後にヴィルヘルミナの扱きを受けることが確定したわけだが……自分が剛三から受けた人間卒業の為の鍛錬よりはマシだと思い、止めることはしなかった。
「話を戻すぞ。制御した［パラサイト］の連中を巳焼島に送り出し、向こうで滞在している連中と対戦させて［パラサイト］との戦闘経験を積ませる。保険という形でセリア、ルミナが巳焼島に出向くことになる。その際、〝彼女〟には真一の守りということで一緒についていってもらう」
「彼女って、水波さんとそっくりで最近道場に来ていた桜庭さんのこと？」
「ああ。彼女の実力は十分だと兄さんも言っていたからな」
　実は［領域強化（リインフォース）］で愛波を治療した際、水波と同じ現象――ブラのホックが盛大に千切れると共に、意味を成さなくなった。水波の胸の大きさを羨ましく思っていたのが反映された形で、これで元の世界に戻った時、向こうの世界の深雪が羨む事態になるのでは、と思わなくも無かった。
　体格的な面だけでなく魔法の部分でも成長が見られ、魔法演算領域の性能で言えば真一にほぼ匹敵する能力を獲得した。その能力を十全に生かすため、上泉家で新陰流剣武術の手解きを受けていたのだ。なお、その場面に立ち会った水波から甘えられて、結果的に水波を押

し倒してしまったのはここだけの話。
「問題が出てくるとすれば、その後のことになる」
「？　どういうことでしょうか？」
泉美が首を傾げるが、これも仕方がないことだ。
確かに、東シベリア方面の局地戦は新ソ連の勝利で終わるだろう。大亜連合政府は新ソ連政府に対して東シベリア方面で休戦を呼び掛けるのも確認済み。だが、そうなると残る問題は中央アジア方面で見られる大亜連合軍の動きと、西方面へ潜伏している大亜連合軍の特殊部隊。
考えられる線としては、破壊工作を行って東欧や北欧に新ソ連の目を向けさせるという策。特殊部隊のメンバーの中に陳祥山（チェンシェンザン）や呂剛虎（ルウガンフウ）が含まれていることからして、劉麗雷を暗殺する方法自体が不明となるが……可能性があるとすれば、護衛部隊の中に〝もしもの場合〟を想定した人員が組まれているというもの。
どうせ真一たちを輸送艦に乗せてハワイまで行かせたとしても、確実に時間が掛かるのは明白。ならば、その間にＵＳＮＡ政府との交渉を済ませた上でミッドウェー刑務所を襲撃し、ついでに支配下に置いた［パラサイト］を全員殺す。無論、憑りついたものを排除するだけなので、その時は達也の魔法の練習台になってもらう算段だ。
「大亜連合側がどう動くかは分からんが、自国の利益の為に悪者を切り捨てることは大陸国家の〝御家芸〟に近い以上、最悪は劉麗雷を切り捨てることも躊躇わないだろう」
「［十三使徒］の一人を切り捨てるって……そんな簡単に？」
「連中なら確実にやる」
大亜連合の国民全員がそうであるという保証はないものの、〝先鋭的かつ民族的な思想を持ち得ている国家の集合体〟という言い方をしても不思議ではないほどに、彼らのやり方は悪質極まりない。それは５年前の沖縄侵攻もそうだし、一昨年の横浜事変、それと今年３月の西果新島絡みの一件。
最後のものは大亜連合軍の脱走兵という〝失点〟を隠す為に協力を申し出たのであって、これが数か月後に手のひらを返して嫌がらせ

をしてくる可能性だって十分考えられた。その結果が、今まさに日本へ亡命しようとしている劉麗雷の存在に他ならない。
「だが、人様に責任を押し付けるというならば、その対抗策は既に周辺国家と協力体制が得られている。大亜連合には対象品目１０００種以上の高関税制裁を科す。それで軍事行動に出るのならば、爺さん以上の損害を覚悟してもらう」
「……悠元が戦略級魔法を使用するってこと？」
「ああ」
一昨年春に使った精神干渉系魔法［流星雪景色（ミーティア・スノーライト）］。その魔法は国内の強化体・調整体の更生に用いたわけだが、この魔法は本来〝別の用途〟が存在する。
この魔法の本来の用途は〝振動反転魔法〟――――自分の先天性異常聴覚を基に、粒子の振動によって生じる現象全てを無効化するために作られた。極端な言い方をすれば、摩擦係数を極端に跳ね上げることで運動エネルギーをゼロにしてしまう魔法。
無論、この魔法を作った真の目的は別に存在するが、今ここで明かすことはしない。
「どうせ、相手に認識された以上は隠す理由も無くなった。今後明かさないというリスクを負うぐらいならば、こちらから名乗り出る。尤も、師族会議には相応の責任を負ってもらうこととなるが……主な対処は将輝にやらせる」
「一条に？　そう上手くいくでしょうか？」
「愛梨、同じ三高の人間として少しぐらいは信用してもいいと思うんだが……」
「実力を信用しているのは否定しませんけど……」
将輝が何処か頼りなく感じる、と言いたげな愛梨の疑問に対して窘めると、愛梨も将輝の実力だけは認めるような答えが返ってきた。これには同じ三高組の沓子が苦笑を零した。
◇　◇　◇
所変わってＵＳＮＡのバージニア州。国防総省（ペンタゴン）の長官室でリアム・スペンサー国防長官は積み上がった報告書の山に頭を抱えていた。

ディオーネー計画のものが少なくなったかと思えば、今度はメディアがリークしたスキャンダルによる調査報告書が段ボール単位に膨れ上がっていた。
世界群発戦争によって隣国のカナダとメキシコを吸収した結果、闇に葬られたものは数知れず。流石に時効レベルのものまで対処することは出来ないものの、これまで見逃されてきたに等しいものまで。
だが、一番頭を悩ます問題は［パラサイト］が『スターズ』の隊長クラスに蔓延してしまっただけでなく、その殆どが日本へ出国している。目的は〝アンジー・シリウス〟ことリーナの抹殺と司波達也の暗殺。
そして、部下が持ち込んだ軍参謀本部によるプラント破壊工作の命令を聞いた瞬間、スペンサーは護身用に立て掛けていた特殊合金製の棒を掴んだ。それが何を意味するか悟った部下たちは、スペンサーを抑えにかかった。
「は、離せ！　私は今から愚か者たちを病院送りにする仕事があるのだ!!」
「長官を人殺しにさせる訳には行きません！　誰か、手伝ってくれ！」
リアム・スペンサー……原作でもＵＳＮＡの国防長官だったが、この世界の彼は先代〝カノープス〟から武術の手解きを受けたことがある元軍人出身の政治家。大統領ほどではないにせよ、敵対勢力から銃撃を受けた際は犯人を自らの手で殴り飛ばし、ＳＰがスペンサー本人を取り押さえるというエピソードまで存在した。
スペンサーを複数人の屈強な職員が取り押さえる喧騒。そんな騒ぎが遠くから聞こえつつも、ペンタゴンの国防副長官室では部屋の主であるキャスバル・バランス副長官と、バージニア州上院議員ワイアット・カーティスが面と向かって会談していた。
「まずは、この時期に訪問したことを詫びよう。長官のフォローもしている君も大変な身だからな」
「いえ、カーティス閣下の申し出とあらば、例え多忙でも時間を捻出することは必要なことだと心得ておりますので。今日の訪問は、現在ミッドウェーに収監されているご親族関連とみても？」

「無論、それもあるだろう。だが、本題はもう一つ存在する。この国を蝕んでいるデーモン――［パラサイト］の排除について」
カーティスも水面下で［パラサイト］と現在の『スターズ』の状況を情報収集していた。だが、現代魔法が発展しているＵＳＮＡでは決定的な有効打が見いだせないと結論付けた。
「別に政府の怠慢を唱える気はない。だが、魔法戦力の殆どを『スターズ』に依存したが故に、それを監査・抑止する力が無いのも事実だと思われるが」
「……否定は出来ません。閣下はペンタゴンに……いえ、現政権に何をお望みですか？」
「明日、日本行きの軍用輸送機に同乗して訪日する。デーモンの排除が出来そうな者たちに心当たりがある故な。大統領には既に話を通したが、彼らの行動の正当性を担保してほしい。それが私の希望だ」
〝彼ら〟と言葉をぼかしたカーティスだが、キャスバルの脳裏には最近話題の人物となっている司波達也なる少年が関与している、とそう結論付けた。日本は昨年の［パラサイト］関連事件を自力で解決し、その後［パラサイト］による侵食は確認できていない。カーティスの行動は、ＵＳＮＡ政府にとっても利となるのは明白だった。
「……分かりました。スペンサー長官には後で話を付けます。この国に跋扈する悪魔を排除するためならば、私は喜んで泥水を啜りましょう」
「そうか。君のところで引き取った先代〝シリウス〟の息子とは何度か面識を持つが、彼は良き養親に恵まれたな」
「私はただ、彼の人としての心を守りたかっただけです。魔法の力があるからといっても、彼は彼だ。亡くなった従兄もきっと同じことをしていたでしょうから」
政府上層部の意向としては、エドワード・クラークを直ぐにでも処断したい。だが、彼の行動や『スターズ』のパラサイトによる侵食を好機として日本の戦略級魔法師を排除しようと考えている派閥があるのも事実。
更には全世界傍受システム［エシェロンⅢ］にバックドアシステム

を付けて私物化するような動きがあるのを既に把握していた。だが、これまで国益に反しないと見做されたからこそ、見逃されてきた。
だが、もうそんな悠長なことを言っていられる状況でないことはキャスバルも把握していた。
「先日、ＦＲＢ議長が直々に来訪しました。『軍部の暴走を抑えないと、我が国は国家予算規模の賠償を迫られることになる』という伝言を聞いた次第です」
「こちらも財界の陳情を受けることとなった。現大統領が悪い訳ではないが、国家の利益という名目で同盟国の抑止力を低下させることを許容した覚えはない。多少苛烈に行かなければ、立ち直ることは出来ぬぞ？」
「心得ております、カーティス閣下」
カーティスとしては、別にキャスバルの不徳を問うつもりなどなかった。ただ、最近財界の度重なる陳情を受け続けた身として、一言ぐらいは言わないと気が済まなかったからこそ出たものであり、それはキャスバルも実感していた。
『マジで許さんぞ！　博士（あのバカ）を庇った奴はこの棒の錆にしてくれるわぁ!!』
『長官が逃げたぞー!!』
『追え、逃がすな!!』
外から聞こえてくる長官の怒りとも言える叫びと、職員たちの喧騒。その言葉を聞いたカーティスがせめてもの配慮を口にすると、キャスバルが丁重に頭を下げた上でカーティスを労る。
「流血事になったとしても、私が責任を持とう。ただ、相手が死んだら私でも責任は取れんが」
「重ね重ね、ご足労をお掛け致します」
「気にしなくともよい。この程度など、大統領に比べれば可愛い方だ」
「……確かに、その通りですな」
この騒動の結果、対日強硬派が軒並み閑職もしくは新ソ連との最前線になるアラスカ方面へ左遷という処分が下された。その半数が長官が引き起こした暴走劇によって病院送りとなって、収容先の病院に

対して大統領がポケットマネーから謝礼を支払うことになったのは別のお話。

失してしまった希望の花

国防総省（ペンタゴン）で対日強硬派の粛清が進行している（ある意味〝侵攻している〟側面もあるのだが）最中、スターズ本部基地司令のウォーカー大佐は、軍参謀本部から送付された命令文に絶句していた。

彼は［パラサイト］にこそなっていないが、意識誘導を受けているのは事実。だが、それでも人並みの思考力全てを誘導されているわけではなかった。そんな彼が絶句した命令内容というのは、『日本の恒星炉プラントの破壊工作』であった。

このプランは急に出てきたものではない。戦略級魔法師・司波達也の脅威を取り除く方策として、彼が提唱する恒星炉プラント計画を潰した上で国際的な圧力によってディオーネー計画への参加を強制するというプランで、兼ねてから検討されていた作戦案。

対象を直截暗殺することによるリスクよりも現実的で、確実性が落ちるというデメリットを考慮したとしてもまだ有効であるということから検討されていた。だが、スターズ本部基地での［パラサイト］による叛乱により、この作戦案は棚上げとなっていた。

「建設中の恒星炉プラントに対する破壊工作は理解できるが……新ソ連の艦隊による陽動に乗じて任務を遂行せよとは」

ウォーカーのような高級士官ですら、新ソ連との協力が軍事的な分野に及ぶところまで至っていることに、驚きを禁じ得なかった。何せ、現大統領が新ソ連に対する嫌悪を抱いていることは現役の軍人ならば誰もが知り得ていること。

この時点で、政府のトップの了承を得ていない作戦であることは疑いようもない。だが、軍人として命令に従わなければならない。作戦の実行を命じようとウォーカーは通信機を掴んだ時、脳裏にある言葉が浮かんだ。

――ウォーカー大佐。もし、軍が姉を殺そうとするのならば、私は躊躇うことなく知己であろうとも殺します。この言葉をどう捉えるかは、大佐のお好きになさってください。

それは以前、スターズの女性兵士にセクハラ行為を働いた著名の退

役軍人に対して、セリアが容赦なく魔法の射撃訓練の的にしたことに際して、ウォーカー大佐が事情聴取という形で呼び出した時のこと。
当時、大統領直属の魔法師であった〝セリア・ポラリス〟――エクセリア・クドウ・シールズは臆することなくこう言い切った上で司令室を出ていった。
そして、セリアが除隊して日本にいることはウォーカーも当然知っている。その彼女の逆鱗に触れる行為であることも、それは理解している。どうするべきか悩んだ結果、ウォーカーは日本へ既に潜入した『スターズ』の兵士に命令を下したのは……悩んでから数時間後のことだった。

◇　◇　◇

7月5日早朝。
国防軍横須賀基地では、敷地内を走る二人の米軍女性士官の姿が見られた。
現在横須賀には、ＵＳＮＡの空母が寄港している。米軍士卒が歩き回っていても、それだけで何かを咎められたり注目を集めるということにはなっていない。彼女たちが目立っていたのは、二人がともにファッション誌の表紙を飾っても違和感が無い程に整った容姿を持っていたからだ。
「あっつぅい……日本ってこんなに暑いんでしたっけ……」
「今の季節は、熱帯海洋性気団の影響で高温多湿になるらしいわよ」
片方は栗色のショートヘアに茶色の瞳の、都会的な美女。訓練用の飾り気のない半袖のシャツ姿であってもおしゃれに見せる雰囲気を有しているのは、シャルロット・ベガ。
一方、銀髪ロングに青い瞳の、グラマラスな北欧系美人。タンクトップを盛り上げる胸のボリュームを有し、男性兵士にとって目の毒とも言えるスタイルを有するのはレイラ・デネブ。
二人とここにいないゾーイ・スピカの合わせて三名は、［パラサイト］に侵食されたスターズの兵士。半ば騙し討ちの形で侵食を受けたが、それに対して文句や不満を漏らすことは一切しなかった。
尤も、いくらパラサイトに侵食されたとは言っても、あらゆる状況

に対して万能でいられるという訳ではなく、物理的な拠り所とする人間の五感にどうしても引っ張られてしまう。そのため、暑さに対する不満を漏らしてしまうのは仕方のないこととも言える。
「『インディペンデンス』が戻って来たわね」
二人が宿舎に戻る途中、潜入に使った空母が沖合に姿を見せた。
歴史的には六代目の『インディペンデンス』で、世界群発戦争（第三次世界大戦）前に建造された古参兵で、当初は原子炉を積む予定だったが、大戦中に戦闘艦船へ原子炉搭載が禁じられたため、水素タービンエンジンが搭載された（ことになっていて、実際には原子炉が搭載されている）。
「良い報せがあるといいのだけれど」
「裏切り者の小娘の居場所が早く分かるといいのですが」
『インディペンデンス』が夜間、沖合に出ていたのは夜間発着訓練のためだった。だが、その裏では本国からの極秘命令・マル秘情報を受け取る目的があった。レイラが言い放った〝小娘〟というのは言うまでもなくリーナのことであった。
「見つからなければ、差し出させるまでよ」
リーナが日本政府以外の組織に匿われていることは把握している。だが、それを日本政府が――――日本軍が知らない筈がない、と思い込んでいた。日本がどういう理由で「裏切り者のシリウス」を匿い続けているのかは分からないが、圧力を掛ければ遠からず白状するはずだ。
「……元〝ポラリス〟が牙を剥いたら？」
「一緒に葬るまでのこと。この国の人間に絆されるような軟弱者など、生かす価値もないわ」
元々、シャルロット・ベガは政治的な損得を考えるような性格ではないが、こんなことを平気で考えるような軍人ではなかった。パラサイトの侵食による思想の変質化において、彼女の場合はより顕著であった。
「軟弱者はどちらなのかな、シャルルマーニュ。私は止まらねえからよ……」

「疲れの余り、地面に這いつくばっている奴が言えた台詞じゃないぞ？」

その頃、意味深な台詞を吐きながら某団長のような恰好で地面に這いつくばっているセリアの姿を見て、彼女を見下ろしながらも深い溜息を漏らした悠元の姿があった。

◇　◇　◇

日本時間7月5日午前9時。大亜連合政府が新ソビエト連邦政府に対して東シベリア地域における戦闘の休戦を呼び掛けた。その1時間後、新ソビエト連邦政府から休戦に関する条件提示があった。

その中には戦争犯罪人の引き渡しも含まれていた。当然、このリストの中に［十三使徒］劉麗雷（リウリーレイ）の名が入っていた。

原作の彼女は周りに流されてばかりの少女だった。だが、その彼女の在り方を変えたのは一人の少年との出会いだった。当時、まだ生きていた祖父の劉雲徳と引き合わされる形で出会ったのは、同じアジア系の少年だった。

『長野佑都という。君の国とは色々諍いを持つ日本の生まれだけど、よろしく』

『……劉麗雷です』

日本人なのに流暢な大陸の言葉で挨拶を交わし、普通なら話せないようなことも聞いてくれた。気軽に手紙を出すことは出来なかったが、届いた手紙を楽しむように読んでいた。いつしか、彼女の中には祖国の外の世界を見てみたいという欲求が生まれていた。

だが、一昨年秋の大亜連合の実質的敗北と祖父の戦死、そして昨今の世界情勢が劉麗雷を［十三使徒］に祀り上げてしまった。それでも、自分らしくあろうと祖国の為に奮闘し続けてきた。

今回の戦闘において大亜連合政府の取った判断は愕然としたが……劉麗雷にとって、それほど驚くべきものではなかった。

劉麗雷は横浜事変後に聞いた話だが、別に祖父が出撃する必要もなく、日本軍を迎撃する格好で防戦を行い、停戦もしくは休戦に持ち込む案も考えられたらしい。だが、対日強硬派が朝鮮半島に程近い対馬要塞を攻撃し、その隙に奄美・沖縄方面へと侵攻、そのまま太平洋へ

と横断して首都を直接攻撃するプランが採用されてしまった。
その陽動として祖父が［霹靂塔］で対馬要塞を攻撃するべく準備をしていたところに、日本の新たな戦略級魔法が軍港ごと呑み込んだ。
日本に対して恨みが無かった、とは言えない。だが、今の自身の在り方を形作ってくれた日本人の少年に対する感謝と大亜連合政府に対する不信が芽生えた今、劉麗雷はこのまま祖国に戻るという選択など取れるはずが無かった。
日本時間7月5日午前10時、現地時間同日午前11時。
ウラジオストクの北、ウスリースクの更に北のヴォズドヴィデンカに潜伏している劉麗雷は、護衛部隊の隊長に呼び出された。
「……確認の為にお尋ねします。新ソビエト連邦政府は私の身柄を要求しているのですね？」
「ええ、その通りです。新ソ連政府が引き渡しを要求した戦争犯罪人のリスト上位に劉校尉の名がありました。これは確かな情報です」
劉麗雷の護衛部隊は全員が女性。隊長の林（リン）隊長も少尉。だが、対外的な階級とは別に劉麗雷は『校尉』という階級を有する。いわば特務士官という括りの一つで、戦略級魔法師であるが故に戦時の最高指揮官直属の士官としての立場を有する。
そのため、前線の指揮官が劉麗雷に安易な命令を下すことは不可能であり、護衛部隊隊長の林少尉よりも階級は上となる。
「もう一つ確認しておきたいことがあります。我が国の政府はその条件を呑むと思われますか？」
「はい。これが成されなければ、我が国は新ソ連の戦略級魔法の脅威に曝されることとなります。これは将来の懸念も含まれますが、小官はそう予測しております」
「……少しだけ、考える時間を貰えますか？」
林隊長にそう断りを入れ、劉麗雷は考え始めた。林隊長も目の前にいる少女が安易に命を絶つような素振りは見られなかったのか、「構いません」と彼女を見つめた。
（この状況で祖国はもう当てにならない。かと言って、このまま立て籠もるのも難しい。この飛行場からどうやって……飛行場？）

そこで、劉麗雷はこの場所ならあるであろうものを林隊長に尋ねる。
「林隊長、この飛行場にジェット機はありますか？」
「え？　あ、はい。部下に指示をして準備を整えさせている所ですが……何を考えておられるのか、聞いても宜しいですか？」
「日本に亡命をします。勿論、林隊長たちに強制することは致しませんが」
「いえ、軍人として校尉を守る立場上、御供させていただきます」
「……ありがとうございます、隊長」
劉麗雷の問いかけに一瞬驚くような素振りを見せるものの、気を取り直して答えた林少尉。それを少しだけ訝しむが、突拍子もないことを提案したが故の驚きだと判断して深く追及するようなことはしなかった。
「劉校尉は必ず安全に送り届けてみせます。これから直ちに脱出の準備に掛かりますので」
「宜しくお願いします、隊長……って、もう行っちゃった」
原作では互いに愛称を決めていた二人。だが、劉麗雷側からの提案で林少尉が急いでしまった結果、互いの友好を深めるという決定的な要素を喪ってしまった。これが劉麗雷にとって祖国のことを忘れようと深める結果に繋がることを、この時は誰も知らなかった。
劉麗雷を含む部隊が潜伏していたのはヴォズドヴィデンカの民間空港。幸いなことに２０００キロメートルを超える航続距離を飛べるビジネスジェットと、タンクを満タンにする燃料が保管されていた。
「準備はどこまで進んでいる!?」
「完了まであと５分です！」
「機体コンディション、滑走路の状態は共にオールグリーンです！」
機体の整備自体は昨夜から進められていた。劉麗雷がそう指示する前から――――最初からヘリではなくジェット機での逃亡を図るつもりであった。部下の作業を一通りチェックした後、林少尉は管制塔に上がった。室内には、彼女以外の人影はない。

彼女は通信機の前に座り、無線のスイッチを入れた。
「こちらガスパジャー・タイガ。応答願います」
彼女の呼び掛けは〝ロシア語〟で行われた。『ガスパジャー』は英語の『Ｍｓ.（ミズ）』に相当する言葉であり、『タイガ』は亜寒帯針葉樹林の意味を持つ。大亜連合軍旗の『虎』とも掛けている、林少尉のコードネーム。
『こちら「ユキヒツジ」。現状を報告せよ』
帰ってきた返答も当然ロシア語であった。
「劉麗雷の説得に成功。これより予定通り、日本へ向かいます」
『了解。ハバロフスクの部隊があと1時間弱でヴォズドヴィデンカに到着する。それまでに脱出を完了せよ』
「タイガ、了解しました」
この一連のやり取りから察することは出来ると思うが、林少尉は新ソ連軍に寝返った工作員だった。
そして、確かに人影はなかったが……管制塔の片隅に佇んでいる漆黒の蝶が、林少尉の通信を聞き終えると共に痕跡一つ残すことなく消え去った。
現地時間正午前、ヴォズドヴィデンカの民間空港から一機のビジネスジェットが南に向けて飛び立った。まだ休戦が成立していない状況での出来事に、新ソ連軍が反応したのはジェット機がウラジオストクの東を通過した後だった。
追跡の戦闘機が離陸したが、ジェット機が公海に出た時点で追跡を断念して帰投。日本軍のレーダーはこの動きをキャッチしていたが、日本やＵＳＮＡへの刺激を回避するために断念したと考えられ、現場レベルで深く考えられることはなかった。
小型ジェットはそのまま日本海を横断し、領空侵犯に応じてスクランブル出動した日本国防空軍戦闘機の指示に従い、旧石川県の小松基地に着陸した。
◇　◇　◇
この報せはすぐさま防衛省にも通達された。本来、空軍の管轄として陸軍に助けを求めることはあまりないものの、今回ばかりは状況が

異なっていた。
蘇我も統合軍令部の人間として話を聞いた後、直ぐに悠元へ召喚要請を出した。立場上同じ階級の人間に命令は下せないが、要請ならば任意の出頭となるし、彼もこの事態は把握しているとみている。
スーツ姿で出向いた悠元が敬礼をすると、蘇我も敬礼をした上で応接用のソファーに座った。
「すまないな、上条大将。君も学校や家庭があるというのに」
「あの、蘇我大将。私はまだ妻帯持ちじゃないですが」
「ほぼそれに近いではないか。というのはさておき、君の懸念が見事に的中した」
蘇我は端末を差し出し、悠元がそれに目を通す。そして、悠元が端末をテーブルに置いたところで蘇我が尋ねる。
「劉麗雷の亡命の件だが、どうにも偽装の疑いが払拭できないというのが小松基地司令の意見だ」
「普通なら、国家ぐるみで『亡くなった』と隠蔽してしまえば済む話ですからね。劉雲徳の件もそれで約1年半は誤魔化しましたから」
「つまり、今回の件は普通ではないとみているのだね？」
蘇我も、大亜連合政府としては［十三使徒］――戦略級魔法師をそう簡単に手放せる状況ではないと睨んでいる。
ただでさえ一昨年秋の損害を回復し切れていないのに、新ソ連に対する抑止力を代償に自国の安全を確保するなど、国家の安全保障を鑑みれば重大な過失になりかねない。
そして、それは蘇我の向かいにいる悠元も同意見だった。
「まず、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの生存の件は予想通りだったとして、劉麗雷を何らかの形で利用している可能性は捨てきれないでしょう」
８年前のベーリング海でＵＳＮＡ軍――先代の〝シリウス〟を殺し、一昨年は自分に対して攻撃を仕掛け、今年に関しては達也へ二度も執拗に魔法攻撃を行った。それも、戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］によるもの。
新ソ連の国家方針に基づくならば、大亜連合の要とも言える［十三

使徒」の劉麗雷を殺すことも当然視野に入らなければおかしい話となる。
「これまでＵＳＮＡの戦略級魔法師を殺し、達也に対して二度も「トゥマーン・ボンバ」を平気でぶっ放すような輩が、今更怖気づいて劉麗雷ですら殺せなくなったなんて思えません。侵攻した大亜連合軍の大半を壊滅に追いやった以上、新ソ連の国家方針からすれば、ヴォズドヴィデンカの民間空港ごと「トゥマーン・ボンバ」で執拗に爆撃してもおかしくなかったはずです」
　新ソ連軍の安全を確保する意味では、ヴォズドヴィデンカの民間空港にある燃料を狙い撃つ形で爆撃して逃げ道を塞ぎ、ピンポイントで爆撃して劉麗雷を生きた状態で連行することも出来なくはない筈だ。何せ、広範囲を爆撃するのに時間が掛かるのならば、多少計算する情報量が変化することは避けられないとしても、そういう器用さを既に実行しているのだから、出来ない筈はない。

軍人としての裁量

悠元が述べたこと――――これまで相手の戦略級魔法師を容赦なく攻撃してきたベゾブラゾフにしては些か詰めが甘すぎるという状況に対し、蘇我も一考せざるを得なかった。

「だが、それをしなかったということは……もしや、劉麗雷の生存を新ソ連は把握しておきながら日本へ亡命するように仕向けた、と？」

「その辺は直接話を聞かない事には分かりませんが……ただ、逃げてきた一行の中に新ソ連軍のスパイがいることは確定事項です。こちらが映像データの入ったカードになりますので、扱いは十分気を付けてください」

そう言って悠元はテーブルの上にメモリーカードを置き、蘇我はそれを受け取って端末に差し込んだ。そして、流れてくる映像とロシア語の音声データ。その翻訳結果を見た蘇我は深い溜息を漏らしつつ、カードを悠元に返した。

「君に掛かれば、どんな軍の諜報員であっても丸裸にされてしまうな。『抜刀隊』には小松基地への出動命令を下したが、この場合は一条家にも彼女の対処を頼むべきだと思うか？」

「ええ。一条家の御曹司は第三高校の学業を免除されている形ですので、恐らく大丈夫でしょう。ただ、事態の進行によっては私も国防陸軍の将校として出向きます」

「分かった。その際は私と防衛大臣の連名で君を統合軍令部の特使として派遣する。責任はこちらで持つので、君の思う通りにやるといい」

事態の進行――――劉麗雷の亡命を根拠として新ソ連が圧力を掛けてくる姿勢を見せることが表面化した際、劉麗雷と護衛の兵士を完全に切り離し、連中は全員大亜連合に強制送還する。その際の手続きと説明責任は政府と軍令部で負うと蘇我が明言した。

「そこまで既に話が？」

「君の懸念は統合軍令部も納得してくれた。新ソ連軍が無理に撃墜を狙わなかったことも、君の説明に説得力を持たせる結果となったよう

だからな」
　現場レベルでは、新ソ連軍が日本やＵＳＮＡに刺激を与えたくない、という解釈が通ってしまうのも無理はない。現状戦端を開いているのは新ソ連と大亜連合であって、日本と新ソ連は正式に交戦状態とは認められないが、一触即発の状態にあるのは確かだ。
　仮に［質量爆散（マテリアル・バースト）］でウラジオストク軍港を吹き飛ばせば、それをきっかけとして新ソ連軍が攻めてくることも考えられる。だが、この国には［深淵（アビス）］や［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］、［雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）］などといった複数の戦略級魔法が存在する。
　無理に攻める必要はないし、海や空を越えないと日本列島に乗り込むことは出来ない利点を生かし、専守防衛ないし積極的自衛権の行使によって敵の攻撃能力を破壊するだけで十分お釣りがくる。
　強いて言えば、そのドサクサで旧国家時代の強奪した樺太・千島列島だけでも取り返してしまえば、ウラジオストク以北の港を封鎖することが可能となり、東シベリア地域のオホーツク海側における海路での輸送がほぼ困難となる。
「可能であれば、実績のある将校を送り込んで新ソ連の抑えに徹させるのがいいかと思われます。十師族の存在に反発するのなら、その言葉に見合う実績を示すための場を整えてやるのも立派なガス抜きになるかと存じます」
「……そうだな。それで、仮に劉麗雷を我が国で受け入れるとして、将来的に大亜連合へ返すのか？」
「いいえ。今回ばかりは幾ら対日強硬派が仮に関わっていたとしても、大亜連合政府として彼女を切り捨てた以上はケジメをつけて頂きます。断るというのならば、諸外国と連動して高関税の経済制裁を科す用意がありますので」
　国家の常に使える抑止力を手放すか、あるいは大亜連合の抱える大勢の国民による民主化運動が激化してしまうかの選択。尤も、かの国の気質からして一番大事なのは己の身と権力だという事実は昔から変わらないただ一つの真実。
「彼女を将来の大義名分にすることは許しません。本当だったらこれ

までの諍いの分も含めて高額の賠償金を要求しなかったことに感謝すべき立場という事実も理解していない。そんな輩に魔法師を人道的に扱えるだなんて思えませんので。それと、蘇我大将に一つお願いが」
「お願い？　別に命令でも構わないと思うのだが、聞こう」
「ＵＳＮＡ軍に対し、万が一新ソ連の艦隊が動いた場合は日本に停泊する『インディペンデンス』の搭載機を日本海側に派遣するよう要請してください」
　これは、悠元が日本にいるＵＳＮＡ軍に対する〝篩〟。［パラサイト］の影響が日本にいるＵＳＮＡ軍のどこにまで波及しているのかを見るための指標。
　横浜事変であんな対応を取った以上、新ソ連の艦隊を阻止する意味でも同盟国として働いてもらわなければならない。仮にこちらの要請を蹴った場合、ＵＳＮＡ政府に通告した上で『神将会』を動かし、空母『インディペンデンス』と艦載機全てを接収する。
　自分の国で対処できずに災厄を持ち込んだのだから、その対価の一部を支払う意味でも空母の接収は理に適っている。それに、どうせ『インディペンデンス』が原子炉搭載艦だという事実は既に掴んでいる為、必要な措置を施した上で［恒星炉］搭載艦に作り変えてしまう腹積もりだ。
　国防軍への払い下げも考えているが、国防軍の中に十師族や師補十八家が独自の戦力を有することを快く思わないのならば、いっそのこと民間警備会社を立ち上げることも視野に入れている。ただでさえ［恒星炉］や基幹技術のレリックのことを考えると、別にあっても困る様なものではないし、国防軍が常に頼れるとは思えないからだ。
「分かった。それと、ＵＳＮＡ政府からの申し出だが……本日の午後７時にアンドリュース空軍基地から政府関係の航空機が座間に到着すると通知を受けた」
「……小官がそれに立ち会えと？」
「どうやら、悠元君と司波達也君に会いたがっている人物とのことらしいが……どうするかね？」

単なる通知ならばアークトゥルスの件の二の舞を警戒する。だが、悠元や達也を態々指名したとなれば、ＵＳＮＡ政府からの要人を載せた輸送機ということは容易に想像がつく。そして、決定打となる言葉を蘇我が発した。

「衛星のレーダーで確認したところ、どうやら向かってきているのは大統領専用機（エアフォース・ワン）だと判明した」

「……会わないという選択肢は有りませんね。分かりました、小官の権限で人員を選定して現地入りします。蘇我大将には申し訳ありませんが」

「箝口令は直ちに敷こう。念のため、座間に別の師団を派遣して警戒はさせる」

「それでしたら、独立魔装大隊のメンバーを数名ほど寄越させてください」

相手がどんな陣容になるかも不明。ならば、下手な邪魔が入らないように最初から関わらせる。［パラサイト］の危険性を唱えられては風間も断ることは出来ない。

「佐伯に情報が流れるかも知れないが、良いのか？」

「半ば縁が切れた状態なのに今更ですよ。それに、この状況でも良からぬことを企まれる方が面倒です。適度に情報を与えた上で、それでこちらを害するつもりならば必要な処置をするまでですから」

確かに、原作ならば〝民間人〟である四葉家やその出自を持つ達也の跳梁を許さないという佐伯の軍人としての言い分も理解できなくはない。だが、先に関係の罅を入れたのは他ならぬ佐伯でもあることも事実。

ベゾブラゾフによる伊豆高原への攻撃の際、一切手助けを禁じたのは佐伯の命令によるもの。動向を把握しておきながらも報告や相談を怠って見逃した時点で、四葉家が佐伯に対する不信を露わにしても『当然の結果』でしかない。

軍人として、軍や政府に縛られていない魔法師の個の力を恐れる意味は理解できる。下手をすれば国家に害を齎す危険性を秘めた諸刃の剣。その意味で、佐伯は良くも悪くも〝軍人としての思考の範疇〟

で物事を考えてしまっている。
だが、魔法師は単なる兵器ではなく、自我を有して自己の判断で行動できる〝人間〟。都合のいいように解釈したとしても、魔法師を完全に制御下に置くというのは本来不可能な話だ。
これは創作物でも避けては通れないことだが、他人よりも遥かに飛び抜けた実力者を囲みたい場合、その実力者が望むものを恩赦として渡す代わり、その実力者を国家や世界の抑止力として機能させることはよくあることだ。
その実力者を洗脳や篭絡などをして制御に置くという手法もあったりするが、大概はまともな結果を生むことなどなく、逆襲によって国家や世界が滅ぶ未来の可能性がある。どうあれ、ロクな未来が待っているとは思えない。
では、これを独立魔装大隊内で当て嵌めた場合はどうなるか。
佐伯に独立魔装大隊や第１０１旅団内での配慮は出来ても、国防陸軍における達也への恩赦を与える立場にない。その辺の裁量権を担うのは総司令部や統合軍令部でもなく、それを統制する政府側の管轄だ。
達也が〝大黒竜也特尉〟として行動しているのならば、佐伯は監督責任として達也を制しなければならない。だが、軍関係を除いた達也の行動は〝司波達也〟としてのものであり、四葉家直系の人間として行動した結果に他ならない。
沖縄の件はまだしも、横浜事変の時と『セブンス・プレイグ』の件は風間を通す形で佐伯が戦略級魔法の使用許可を下している。このことを彼女が分からない筈など無い。
つまり、司波達也の行動に対して佐伯が干渉することは、いち軍人としての裁量を越えてしまっている、ということになる。それどころか、必要な時に頼っておきながらも彼が困った時に手を差し伸べようとしない時点で、不義理を働いたに等しい所業としか言いようがない。
だからこそ、悠元は国防軍の関与は自分経由にすることで第１０１旅団や独立魔装大隊の介入を阻止し、同時に上泉家から大量の戦力を

送り込ませることで身動きを出来なくさせる。そして、非十師族の主要人物が動けないということは、言い換えれば十師族や師補十八家の関与が増えるという裏返しにも繋がる。
「それと、偽装入国したＵＳＮＡの関係者はこちらで掌握しております。新ソ連の艦隊が南下した時点で一仕事してもらい、彼らには大人しくＵＳＮＡに帰らせますのでご心配なく」
「……君に掛かると、大国ですら道化になってしまうな」
「別に国家に対して正面切って喧嘩を売るつもりなど有りませんが。ただ、人の生命を脅かすのならば『死んだほうがマシ』と思わせるぐらいに心を折りますが」
　そう出来る力があるとしても、国家に対して喧嘩を売るのはまた別の話だ。力を見せつけることは必要だろうが、実力行使に伴う被害は最小限に抑える――――このスタンスを崩すことはしない。
「蘇我大将。今夜到着する大統領専用機（エアフォース・ワン）に誰が乗っているかは不明ですが、少なくとも日本に潜伏している［パラサイト］関連であることは間違いないとみています。場合によっては、本官や大黒特尉が直々にＵＳＮＡへ出張ることも想定されます。ですので、国防軍方面を抑えて頂きたい」
「……分かった。直ちに防衛大臣へ具申する。そして、君らに不利益が被らないよう、私も同席出来るように相談してみる」
「宜しいのですか？」
「現状、君らに頼らなければ対処するのが難しい案件というのは把握している。政府もそれは重々に理解していることだ」
　悠元が想定している反十師族の派閥――――主に佐伯を抑えることは蘇我も納得した上で、今回の一件に国防軍が許可を出すことで悠元や達也を含めた若者たちの正当性を担保する、と明言した。
「本当ならば我々だけで対処できれば一番だが、それが出来る人間は現行の国防軍でも数少ないどころか、昨年の件は十師族に全て投げたようなものだ。国防を担う者としての面子だけの話ではなく、この状況で派閥争いをしている暇などないことを痛感させねばなるまい。その矢面に立たせてしまう君らには申し訳ないと思うが、出来るだけ

の配慮はしよう」
　ここ最近の国防軍の動きは目に余り過ぎた。情報部の暴走もそうだが、佐伯が軍の規律を乱しかねない行動を見せていることに憤慨していた。だが、被害者側となる悠元や達也が表立った報復の意思を見せないため、蘇我もそこまで口煩く言わずに黙ることとした。
「でしたら、独立魔装大隊から風間大佐を寄越してください。彼ならば対外的な功績もありますので、面子は立てられるかと」
「そうだな。彼ならば相手に対する面子も立てられるな……そういえば、劉麗雷を我が国で引き取るとして、処遇はどうする気かね？」
「彼女の意思次第ですが、祖国に戻る意思が無いのならば、帰化させて日本で暮らしてもらいましょう。彼女を強引に軍へ引き込む輩がいた場合は、容赦なく処罰します」
　この国があくまでも法の下の平等を謳っている以上、その法に基づく自由意志を行使する権利が劉麗雷にも生じる。彼女の戦略級魔法目当てに動こうとする輩も出てくるだろうが、彼女が軍人を目指すかどうかは彼女自身が決める事であり、大人たちに決める権利も義務もない。
　戦略級魔法は兵器ではなく、あくまでも〝技術の極致〟の一つでしかないのだから。
「確か、彼女の年齢で言えば一条家の長女と同い年の筈ですので、いっそのこと一条家の養子にしてしまうのもアリかと思います。ただ、あくまでも劉麗雷の意思を第一に尊重する――これは厳守していただきたい。良からぬ輩が彼女を害そうというのならば、容赦なく〝殺す〟ことも視野に入れます」
「承知した。しかし、君のような若者がそこまで律せているとなると、今の若い連中に見習わせたいと思うほどだ」
「自分は平和な生活を送りたいだけなんですけどね。その為に力を行使しているので」
　魔法一つで目くじらを立てる奴らが多いからこそ、その膿を出そうとしたら雪だるま方式に積み上がっていく過去の罪。それを達磨落としの要領で一つずつ解決しているわけだが、本当だったらそれをや

らねばならないのは現政権を含めた政府と国防軍の仕事。これも、四葉の悪名に長らくしがみ続けてきたツケと言えば、そうなのかもしれない。
「ここだけの話、更に愛人が増えまして。魔法的な方法によって先代のスターズ総隊長が若返った姿で……」
「……そのことは私の中に留め置く。何か入用になったら、遠慮なく言ってくれ。君や大黒特尉の負担を減らすことなら、総理大臣とて首を横に振ることはしないだろう」
「その時は遠慮なく頼らせていただきます」
蘇我からしても、悠元が将来の魔法師社会を担う起点になってしまうのは言うに及ばずで、彼の言葉で更なる苦難が降り掛かったことを察し、せめて政府や国防軍上層部だけは彼の苦労を軽減しようと発言したのだった。
「余談だが、劉麗雷については」
「自分が引き取ることになるのは絶対に避けます。いっそのこと将輝に好意が向くようにヒール役でも買ってやろうと思ってます」
セリアから聞いた原作知識では、劉麗雷が一条将輝に惚れるような流れが形成されたらしいので、そういう風に流れを構築しようと思う。呂剛虎（ルウガンフウ）が日本に来る可能性は極めて皆無だが、それ以外の勢力が入国しないように見張る必要が出てくる。

兄の優柔不断に呆れ返る妹

悠元は蘇我大将との会談を終え、[ドレッドノート]を駆って防衛省庁舎を後にする。プライベート用に所持しているものと同じ白銀のカラーリングは目立ってしまうリスクも孕んでいるが、外見の細部さえ見られなければ普通の二輪車をカスタマイズしたものと大差なくなる。

悠元が風間の同席を願い出たのは、彼の軍功を鑑みた場合からして『対外的に見合う』と睨んでのものであり、更には風間にもこの先の責任を背負わせることを意味する。

別に彼もこちらの仕事を請け負ってもらうことなど考えていない。だが、このまま佐伯に対して苦言を呈することも出来なければ『道連れ』になりかねない。

風間は九島烈がかつて考えていた十師族の置かれた在り方――魔法師を単なる『兵器』として扱おうとする認識を子供や若者に強要する遣り口――を否定したいのであり、十師族ひいては師族会議そのものに対して嫌悪感を持っているわけではない。でなければ、悠元や達也はもとより、九島烈の血縁を有する藤林響子すらも自身の部下に加えることを許容しなかっただろう。

ならば、彼はまだ〝話せる範疇の人間〟と見做すことができる。

大亜連合の工作員は軒並み国外追放か抹殺しているし、精々残っている周公瑾絡みも真一が元の世界に戻り次第処分する。経済的・文化的交流を持つことと、国防や国益に関わることはまた別の話で、前者だけならば許容することも必要だが、後者に範囲が及んだ場合は容赦なく対処する。

佐伯あたりなら劉麗雷の暗殺を画策しているのかもしれないが、そんなことはさせないし、第１０１旅団は絶賛部隊再編の真っ只中にいる。数人程度ならばまだしも、一度に四桁の魔法師を受け入れるとなると基地の設備も急ピッチで刷新しなければならない。

そうなると、人員整理や書類の決裁で時間を容赦なく割かれることになり、部隊の大本を管轄する師団長は確実に多忙となる。別に彼女

を過労死させる気など無いが、自分も兵器開発部で解析を担当していた時は1日で百枚近くの申請書類を裁くこともザラにあった。
別に、書類仕事の苦労を知れ、などと宣うつもりなどないが。
人様に厄介事を押し付けて身動きを取れさせなくしたり、原作では本来報告すべき呂剛虎の密入国を意図的に見逃していた。軍事法廷に掛けられたら国家反逆罪スレスレのことをしている訳だ。
大越戦争で風間の派遣を決定・支援していた時の感覚が今も残っているのかもしれないが、２５年前と今では世界情勢も国内情勢も違う。
（いずれにせよ、劉麗雷をこちらで引き取るのはあまり宜しくないからな。多少苛烈に行ってでもフラグを折らないといけない）
自身が戦略級魔法師で、それに匹敵し得る資質を有する深雪に、リーナすら上回る実力を持つセリア。そして、国家公認戦略級魔法師の澪がいて、愛人に先代〝シリウス〟までいる。他の婚約者たちもそれに準ずる実力を身につけるべく鍛錬している為、非公認の戦略級魔法師が小国に二桁いるという状態になってしまう。
達也のほうはというと、魔法の訓練についてはこちらもヴィルヘルミナが面倒を見てくれることとなった。何せ、あの曲者揃いの『スターズ』を率いた実績があるのだから、問題は無いと判断した。八雲も『[分子ディバイダー]』を編み出した本人が教えるとなれば、僕も負けていられないね』と相乗効果も生み出していたが。
◇　◇　◇
帰宅後、悠元は夕食と入浴を済ませて自室に戻った。その間に何もなかったかと言われると……婚約者やら愛人らに押し掛けられることは最早日常の光景になりつつあるが。
それでも、一人になりたい時間はどうしても出てくるため、自室に招かない限りは勝手に入れないようにしている。その最大の理由は自身の固有魔法による情報収集を見せることで危険が拡散しないようにするためだ。
（さて、新ソ連艦隊の方は……）
いくらベゾブラゾフとクラークが暗号でやり取りしていたとして

も、実働部隊そのものの動きまで隠しきることは出来ない。単独行動やごく少数の精鋭部隊による動向を掴むのは難しいだろうが、大型の複数の艦船を衛星まで誤魔化せる術式となれば大掛かりになるのは明白である。

ウラジオストク周辺の情報収集は響子に依頼しているものの、第１０１旅団が握りつぶすことも想定していた。そもそも、響子への依頼は〝隠れ蓑〟であり、自分が情報収集していることを悟られないための一環でもある。

度々九重寺を訪れているのも悠元に情報収集能力が無いと誤認させるための行動で、独立魔装大隊内でも悠元の極めて高い情報収集能力を把握しているのは、風間と響子の二人だけ。しかも、昨年の時点で八雲から『彼の機嫌を損ねたくなかったら、何も言わない方がいい。最悪は僕の名前を出しても構わないよ』と言い含めていたらしい。

佐伯は八雲と風間の関係性も知っているので、上手い具合に隠れ蓑として機能する。ここにきて〝忍び〟らしいやり方だと思った。

話を戻して、ウラジオストク軍港にいる新ソ連艦隊が出動の準備を始めていた。燃料や弾薬はまだしも、船員の食料などと言った消耗品の移動全てをステルスで誤魔化すのは難しいし、軍港の出入りが激しければ何かしらの行動を疑わざるを得ない。

「狙いはやはり、亡命してきた劉麗雷か……だが、分かってるのか？」

原作ならば、一方的に因縁を吹っかけて緊張状態を作り出すだけで良かった。だが、この世界では日本政府が［十三使徒］イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの引き渡しを要求している。このまま強引に艦隊で圧力を掛ければ、その引き渡しすら拒んだ上で一方的な因縁を吹っかけた〝ならず者国家〟の烙印を押されることとなる。

これが分からないベゾブラゾフではないと思うのだが、悠元の存在を知ったからこそ更に躍起になっているのだとしたら、最早面子を潰された腹いせに実行しているとしか思えない。

「一番犠牲になるのは詳しい事情を聞かされない兵士達だというのに……なら、ベゾブラゾフには決定的な敗北をくれてやるだけだ」

今はまだベゾブラゾフを殺さない。だが、彼の面子がこの先の戦い

を引き起こすというのならば、その面子を完膚なきまでに粉砕する。それでもまだ殺意を向けてくるのならば、彼に敵意を持つ者達に殺させる。

そして、今回の戦いの責任を新ソ連と大亜連合に負わせ、きちんとケジメをつけてもらう。その意味で劉麗雷を生かすことは必要最低条件となる。大国だからと胡坐を掻く様ならば、今度はクレムリン宮殿と大亜連合の旧共和国時代から存在する人民大会堂を綺麗さっぱり〝消し飛ばす〟だけ。

「ジョージの奴に釘は刺したから、達也に矛先が向くことは無くなった。後は、タイミングを見て真一に愛波を連れ出してもらわないといけない。元継兄さんにはメールで伝えておこう」

新ソ連との緊張状態でＵＳＮＡに対する警戒を緩めざるを得なくなったからこそ、原作の司波達也と九島光宣の応酬が長引いてしまった側面がある。だが、そんな事態を引き起こさせる前に連れ出せば、藤林家はおろか九島家が余計な介入をすることも無くなる。

あとはイリーガルＭＡＰへの対応ぐらいだが、そちらは『神将会』も動かして対応する。相手が手段を選ばない相手ならば、こちらも相応の選択をするだけのこと。

「……面子を潰されて怒る時点で、魔法師としての実力不足だと思うんだがな」

相手の実力が高く、それでいて自身の能力が劣っていると自覚できるか否か。悠元の場合は前者で、ベゾブラゾフは間違いなく後者の類に含まれる。

尤も、悠元は剛三という〝埒外〟を知り、達也という〝無敵超人〟を知っていたからこそ、せめて並べるようにと努力を重ねているだけであり、遺伝的に勝者となったベゾブラゾフと比べることすら失礼な部類に入る。

そもそも魔法使いに限ったことではないが、昔の技術者や職人は師から技を〝盗み〟、研鑽することで己の技術へと昇華させるのが、黙認された慣習みたいなものだった。源流から様々な要素を各々が取り入れ、己が最も納得し得る技術の大成によって様々な流派・技巧が

生み出され、後世に継がれた。
現代魔法において［インデックス］のような魔法の権威が出来たとしても、別に同じ魔法を使ってはいけないというルールなど存在していないに等しい。
だが、一条家の［爆裂］、三矢家の［エアライド・バースト］、十文字家の［ファランクス］などといった一種の固有魔法に近い秘術は、その家の〝存在意義〟として直結する形へと変化した。なので、軍用に開発された魔法を除けば一種の特許権のようなものが存在するようになった。
その意味で、ベゾブラゾフたらしめるためのものが［トゥマーン・ボンバ］であり、その一部でも転用されたとなれば彼の存在意義すらも脅かしかねない事態となる。なので、原作の達也が行ったことに対してベゾブラゾフが酷く憤ったのも、彼の存在意義を脅かす行為をされたがための反応だった。
新ソ連の国家公認戦略級魔法師［十三使徒］――――ベゾブラゾフにとって、数々の競争を生き抜いた結果として戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］と共に得た存在意義。ならば、その存在意義など通用しないことを根底から分からせる。
悠元はベゾブラゾフ本人ではなく、彼を彼たらしめるもの全てを破壊し尽くす気でいた。それをベゾブラゾフが認識しているのかどうかは……その当人にしか分からない事であった。
◇　◇　◇
7月6日、土曜日。授業を免除されているとはいえ、定期考査を終えて帰宅した一条将輝は、そのまま父親の剛毅に呼び出された。
昼食前だったので空腹を抱えたまま書斎に赴くと、部屋の中には上の妹である茜がいた。正直、悠元との一件で兄妹の仲に隔たりが出来ていたが、それに対して不満を漏らすことなく茜が座るソファーに一人分の間を空けて隣に座る。
「昼食後でもいいとは思ったが、出来るだけ早く決めたいと思ってのことだ。少しは我慢してくれ」
いつもなら粗暴な言い方をする剛毅だが、どこか申し訳なさそうな

態度を見せたことに将輝は躊躇いながらも頷き、茜もそれに続く形で頷いて肯定した。それを見た上で剛毅が話を始める。
「現在、大亜連合から劉麗雷が亡命してきている」
「劉麗雷？　［十三使徒］の一人であるあの？」
「そうだ」
　将輝が驚きを隠せなかったのも無理はない。国家に公認された――国家という後ろ盾を得たも同然の戦略級魔法師の一角が、祖国への帰還ではなく日本に亡命してきたのだ。剛毅は将輝を咎めなかったが、この報せを聞いたときは彼自身も耳を疑ったからだ。
「彼女は現在、同行してきた護衛部隊の兵士と共に小松基地で保護されている」
「そうなると、国防軍から何か要請があったのか？」
「話が早いな。だが、指名してきたのはお前ではなく茜だ」
「あたしっ!?」
　本来なら国防に関わる部分となれば剛毅か将輝の領分。何故呼ばれたのかを理解できていなかっただけに、茜の驚きはオーバー気味なリアクションになっていた。
「な、なんでっ!?　こういうのって本来は兄さんの領分じゃないの!?」
「順を追って説明する。まず、劉麗雷の亡命には不審点が拭えないと小松基地の司令が相談した」
「偽装亡命の線か」
「その通りだ」
　慌てふためく茜を宥めるようにジェスチャー混じりで説明する剛毅に対し、将輝は亡命が彼女の意思によるものなのかを懸念していることに対し、剛毅が肯定する。
「だが、一色家の［神経撹乱（しんけいこうらん）］では必要とする対象との距離が短すぎる。もし基地の中で［霹靂塔］を使われた場合、小松基地の防空網が被害を受ける可能性もある……茜。もしこの話を受ける気があるのならば、これを使え」
　そう言って剛毅が見せたのは一台の端末。そこにはある魔法の起動式データが記載されている。茜がつぶさに確認していくと、この魔

法が茜ならば使うことのできる魔法だと察した上で問いかけた。
「お父さん、この起動式は何時手に入れたの？」
「先日、神楽坂殿から提供された茜専用の魔法だ。それをどう使うかは本人に委ねてほしいとも言われた。名称は［静電氷結（フリーズ・インパルス）］だそうだ」
　将輝たちの母親・一条美登里は一色家の傍系だが、一色家の切り札である［神経撹乱］を使うことは出来ない。だが、遺伝の悪戯ゆえか、茜には［神経撹乱］の適性があった。そして、それを見越したように渡された魔法――［フリーズ・インパルス］。
　この魔法は神経インパルスに対して電気信号の伝達をシャットアウトし、威力次第では相手を疑似的なコールドスリープ状態に陥らせることすら可能とした魔法。最悪の場合――茜一人でも対処できることを想定して開発された経緯がある。
「この魔法はあくまでも『迷惑を掛けたお詫び』として神楽坂殿が置いていったものだが、幸か不幸か役に立つかもしれない時が来るとは思わなかった。無論、無理強いをする気はないが……」
「……あたしは、話を受けるよ。置いてけぼりが一番嫌だし」
　茜の根底にあるのは、悠元の婚約者の中で唯一距離を置かれてしまっているという点だ。別に悠元が茜を嫌っているわけではなく、一条家と神楽坂家の物理的な距離が大きく影響してしまっているためだが。
　それに、茜は悠元の婚約者の中に近い年頃の婚約者がいることも聞いている。剛毅の述べたことも事実かも知れないが、茜の為に作ってくれた魔法だというのならば、自分が今成せることを成したい。
「そうか。将輝、お前はどうする？」
「どうするって……俺はもしもの時に劉麗雷を倒さなきゃいけない役目を負うということだろう？　俺も行く」
「分かった」
　将輝の根底にあったのは、茜が出張って自分が引っ込むのは兄としての矜持に関わると強く感じたからだ。二人の強い決意を感じた剛毅は満足そうに頷く。
「ところで親父。俺たちが出向くよりも一条家で預かった方がいいん

じゃないのか？」
　そこでふと出た将輝の疑問。剛毅が「何故そう思う」と問い返した。
「確か、彼女はまだ１４歳で茜と同い年だ。一条家で預かれば、大人たちに唆されて事を起こすリスクを減らせると思うんだが」
「……一理あるな。分かった、それについては相談してみよう」
「当てがあるのか、親父？」
　心当たりがあると言いたげな剛毅は表情で語るだけであり、将輝はそれに対して首を傾げる。そして、その様子を見た茜は一つの心当たりに辿り着いて顔を背けた。
（多分、悠元お兄様を頼るってことだよね……お父さんが敢えて語らないってことは、兄さんが変に拗れないためだよね）
　そもそも、今の悠元は護人・神楽坂家当主兼師族会議議長という要職に就いている。この時点で信頼を受けている人間に差が出ているということを茜の隣に座る兄は知らないはずがない。
　というか、これまでの件で将輝が悠元に対して多大な迷惑を掛けていて、そのとばっちりを受け続けてきた身としては『いい加減諦めろ』と吐き捨てたくなるほどに、茜は実の兄に対してうんざりしていた。
「……兄さんの残る課題は、将来の嫁さん探しだね。そもそも、恋人を作れるか疑わしいけど」
「んなっ!?　今ここで出すべき話題じゃないだろうに！」
「妹に言われて悔しいなら、けじめをきちんとつけた上で実行して見なよ。あ、お腹空いたから私は先に行くね」
「お、おい、待てよ！」
（茜は理解してくれたようだな……いっそのこと、将輝と劉麗雷がいい関係になることを願うか？）
　廊下から漂ってくる食欲をそそる香りに気付き、茜が先に部屋を抜け出して将輝が追いかけるように書斎を出ていく。その光景を見送る格好となった剛毅は、将輝と劉麗雷の邂逅がいい結果を生んでくれることを内心で少し期待したのだった。

本来なら国家交渉のレベル

7月7日、日曜日。世間的には七夕で、魔法科高校の生徒からすれば定期考査が終わった後の初めての休日。本来ならば九校戦の準備が始まるところだが、中止と代替の大会実施が夏休み中の期間に開催できないという結論となり、何もない普通の休日……となる予定だった。

ＵＳＮＡから来る大統領専用機（エアフォース・ワン）。昨晩座間基地に到着したその機体に乗ってきたのは、バージニア州上院議員ワイアット・カーティス。ラウラ・カーティスの大叔父にあたり、ＵＳＮＡ国内において政府関係者や上院・下院に対して強い影響力を有する〝黒幕（フィクサー）〟の側面を有する人物。

原作ならばこの後に来日する形となったが、親族であるラウラの存在によって3月に一度来日し、今回は二度目の訪問。態々大統領専用機で来るということは、間違いなくＵＳＮＡ大統領の意向を受けてのものと見られる。

なので、悠元は関係者となる達也と深雪に水波、ＵＳＮＡ方面の関係者としてセリアとリーナ、そしてＵＳＮＡの軍籍を有するジェラルドにも同席を願った。更に、千葉寿和とラウラにも身辺護衛を兼ねてエリカ経由でお願いをした。

「達也、それに悠元……」

「風間大佐。伊豆高原の件は水に流すこととします。だが、今回の会談の内容を外に漏らすことは禁じる。これは国家重要機密に準ずるものと心得よ」

「……承知しました」

国防軍方面は防衛大臣の命を受ける形で蘇我が同席し、対外的な功績を有する軍人として風間もその場に居合わせることとなった。

風間の表情がどこか申し訳なさを感じるのは、達也の件で悠元を怒らせたことに起因しているが、当の悠元本人は『とうに終わった事だ』と断言して引き摺ることを止めるように言い繕い、風間もそれを受け入れて一息吐いていた。

そして、独立魔装大隊からの同行者はもう一人。副官でもある藤林響子であった。
「分かってはいたことだけれど……達也君。また[パラサイト]が出たのは本当？」
「ええ、本当のようです。ただ、対処自体は悠元に任せている形ですが」
「成程ね……」
現状、九島家に引っ張られる形で藤林家が協力するような格好にはなっていない。その最大の理由は、神楽坂家が京都・奈良の『伝統派』を和解させたことに起因するもので、皇族の『君臨すれども統治せず』を体現したような功績を成した悠元が「いくら三矢家所縁の人間でも、祖父世代となる上泉・神楽坂の血縁を無視することは出来ない」と藤林家現当主がそう結論付けたためだ。
会談の場所として選ばれたのは、赤坂離宮の応接の間。今回、会議に際してワイアット・カーティスは『ミスター神楽坂とミスター司波に話がある』と通告しており、深雪は四葉家の代理で、水波はその護衛。リーナとセリアの同席はカーティスからの提案で、ジェラルドはリーナの護衛役としてその場に居合わせることとなる。
国防軍関係者はあくまでもオブザーバーとしてのものであり、今回はカーティスが大統領特使として出向いているとしても、口を挟むことは許されない。
先に悠元たちが到着して席に着き、その5分後。案内の職員に続く形で姿を見せたのは初老の白人男性とパンツスーツ姿の女性。男性ことワイアット・カーティスは悠元に歩みより、悠元も立ち上がって近寄った。
「神楽坂様、お久しぶりでございます。此度は急な訪問をお許しください」
「そこまで畏まられると恐縮でございます、閣下。自分はまだ若輩の身でもありますので」
互いに握手を交わすと、カーティスは達也とも握手を交わす。カーティスはラウラの元気そうな姿を見て安心そうな表情を見せたが、今

はその時ではないと表情を真剣なものに切り替えつつ、席に着いた。
　それと同時に悠元と達也も席に着き、話は悠元が切り出す形となった。
「さて、閣下。本来の慣習を破ってまでも態々大統領専用機（エアフォース・ワン）でお越しになった理由は、其方の国で冤罪となったベンジャミン・ロウズを含めた人間の兵士の解放、それと蔓延る［パラサイト］の対処の依頼――その認識に違いはございませんか？」
「その通りにてございます、神楽坂様。ＵＳＮＡ政府はその対価として、如何なる要求を受け容れると大統領より確約を取り付けております」
　カーティスが悠元の敬称を〝殿〟ではなく〝様〟としているのは、彼は悠元の素性を知る数少ない一人でもあるためだ。普通ならば十代で成し得ることのできない功績の数々だが、カーティスはこれまで培ってきた政治家としての経験でそれを察していた。
「如何なる要求ですら受け入れるとは、これはまた思い切った対価ですね。念頭にあるのは［恒星炉］の技術提供でしょうか？」
「その通りです。ダラスの件も含め、此度の騒動を引き起こしたエドワード・クラークには厳しい罰を与えねばならない。最早飼い殺しにするのも国家に害しか齎さないと結論に至った次第です」
　単なる処刑では最早溜飲を下げることもできない。ならば、最悪はエドワード・クラークの生殺与奪の権限ですらも放棄して、日本に処罰の判断を委ねることも覚悟の上で交渉に臨んでいた。
「閣下。現在、心ある仲間と共謀して日本に来た［パラサイト］化した兵士を次々制御下に置いております。彼らには日本に対しての代償としてパールアンドハーミーズ環礁方面へ集中させ、ミッドウェー監獄への攻撃を行わせた後に〝浄化〟させて人間に戻します」
「何と……いや、その詳細は敢えて訊ねませんが、ダラスの件はやはりそちらの人間が唆したという線はなさそうですな」
　悠元が言い放った策の概要を公表すると、カーティスはおろか達也たち、同席していた大人たちも驚愕していた。一旦［パラサイト］化された強化の影響はどうしても残ってしまうが、侵食された［パラサ

イト」を殺すのではなく、侵食元の人間の意志で〝塗り潰す〟。その為の魔法も既に存在するからこそ、悠元の策が成り立っている。
「閣下にお願いしたいのは、大きく分けて二つ御座います。一つは先程話した策の際に自分と隣に座る司波がベンジャミン・ロウズを含めた兵士を助け出した後、こちらに被害が及ばないように処理して頂くこと。もう一つは……こちらが指定する艦船と戦闘機を含めた日本周辺にある米軍所有の兵器類の接収。そして、空母『エンタープライズ』の提供を要求します」
「その空母を……」
　ＵＳＮＡにおける最大級の空母。そして、原子力が搭載されていないにも拘らず６００メートルクラスを有する。そして、カーティスは内密の情報でその空母を動かしている方法を知っていた。魔法師をパーツのように使うことは許容しない――悠元の要求は、それをＵＳＮＡに対して突き付けているも同義だった。
「神楽坂様。その兵器群をお渡しするとして、其方の国の軍に加えようとなさっているのかをお伺いしたい」
「最初はそれも考えておりましたが……自分が受けた仕打ちを考えた結果、神坂グループで民間軍事会社を立ち上げて保有戦力にしてしまおうと考えた次第です」
　根底にあるのは、師族会議そのものが天皇より附託を受けた治安維持組織になったとしても、国防軍からすれば国家を守る立場として私設戦力を認めたくない論理がどうしても発生するためだ。
　ならば、表立って動ける組織を作る方が良いと判断した。どうしても〝傭兵〟というイメージが付き纏ってしまうため、書面上は民間警備会社として立ち上げるが、既に存在する他の業者ではカバーリングできない部分の警備や護衛を担う。
「あくまでも自国の安寧を守る――その主観の許に会社の設立を行うことをこの場で確約させていただきます。尚、接収した後の穴埋めも既に手配しておりますし、そちらとしても〝特需〟が見込めるかと思われます」
「……成程、既にそこまで考えておられるとは感服いたしました」

失ったものを補填するという意味で、国民に対して雇用の需要を生み出すことに繋がるし、人員そのものは日本への帰化を望まない限りはＵＳＮＡに雇用の権利が存在する。人民の溜飲を下げるということは同時に現政権への支持にも繋がるため、安定した長期政権運営も見えてくる。

ライセンス関連は全て政府間交渉とするものの、全て提示金額よりも上乗せして買い上げて国内生産を行う形とする。国内の企業グループ群ならば神坂グループからの提案に飛び付くことは想定される。

「金銭に関してですが、私個人で保有している米国債を倍の２００兆円に拡張できないか相談して頂けませんか？　無論、無理強いするつもりはない案件ですので、断ったとしても一切ペナルティは課しませんが」

「……いえ、対価に関して無条件を提示したのはこちら側ですので、帰国次第大統領に掛け合って認めさせます」

何せ、勝手に放置しても異常な上がり方をしていく悠元の個人資産。ここで１００兆円ほど消費しても、とうとう１０００兆円の大台が見え始めた側からすれば、どうすればいいのかも分からなくなり始めていた。

［トーラス・シルバー］としての活動は無くなったものの、トライローズ・エレクトロニクス理事長としての収入に切り替わり、軍関係も合わせると一か月単位の収入が国会議員クラスになってしまっている。マンションでもそこまで贅沢をしない性分だし、生活費自体を婚約者や愛人の分まで賄ってもお釣りが出過ぎるレベル。

なので、悠元の提案はあくまでも支出先としての提案であり、ＵＳＮＡの財政の紐を握りたいという欲求ではなかった。一番分かりやすい大きな買い物という点に加えて、カーティスが対価に糸目をつけないと明言してのことであり、裏からＵＳＮＡの財界を牛耳る気など無い。

「それと、今回の騒動を引き起こしたエドワード・クラークについてですが、裏で新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフと繋

がりがあるのが確認されました。それを仲介したのはイギリスのウィリアム・マクロード。閣下にお願いをしたいのは、国内の［パラサイト］が出来切ると見込めた時点でエドワード・クラークを日本へ向かわせるように誘導して頂きたい」
「……そこまでしていただけると？」
「現状のＵＳＮＡに［パラサイト］への対抗策が無い以上、こちらで引き受けましょう。ですが、その際に持ち出された兵器群は全てこちらで接収しますが、宜しいですね？」
「勿論でございます」
［パラサイト］化した兵士の処遇――特に『スターダスト』あたりとなるとまたこちらで引き取ることになりそうなため、それについては許容するつもりでいた。現代魔法主体に傾倒していたツケを支払うのだから、カーティスも悠元の要求に対して異論は唱えなかった。
「……閣下。ここまでかなりの損失をＵＳＮＡは負うことになります。閣下ご本人として、政治家の面子に傷をつけることにならないかと思われますが」
「成程、その若さで政治の力学も心得ているとは……確かに、この交渉で私を蔑む輩が出るのは当然の報いでしょう。ですが、核兵器に対抗できる存在が魔物に跳梁されてしまっているのは、政府としても見過ごせるレベルを超えてしまっている」
単純に生物兵器などによるものであれば、爆撃などの処分で基地ごと葬り去る選択肢も存在した。だが、目に見えない魔物は核兵器ですら無力化する存在に侵食した。物理的に殺せるかも分からない相手に核兵器を使うことすらも出来ない。
しかも、『スターズ』は先代の〝シリウス〟が遺した［分子ディバイダー］をベースとした術式を使う隊員が少なくない。その意味で、相手に対する有効手段を政府は見いだせないが、かと言って跳梁を許せるはずがない。
「ＵＳＮＡ政府として、その影響を排除してほしいという提案。大国として恥を忍んでお願いしているのですから、提示する対価を呑むことも大国としての面子に関わることです。大統領も『最悪は自らが政

治家生命の全てを賭して責任を取る』と明言しておりました。神楽坂様、それと司波殿。どうか、我が国の［パラサイト］による跳梁を取り除いていただきたい」
　カーティスは座ったまま深く頭を下げた。これにはカーティスの噂を知るリーナが驚きの声を上げるも、セリアが関節技で締め上げてリーナの叫びを掻き消した。代わりに呻き声に近い悲鳴が聞こえてくるが、聞かなかったことにしつつも達也に視線を向けた。
「達也、どうする？」
「……母上からは『たっくんの好きにしなさい』と言われたが、お前が決めてくれるか？」
「まったく……閣下。その申し出を引き受けさせていただきます。ついては、こちらをお渡ししておきます」
　そう言って悠元がテーブルの上に置いたのは一台のマイクロフォン付きレシーバー。それをカーティスが受け取った上で悠元が説明を続ける。
「それは私へ直接連絡することが出来るものです。特殊な代物ですので、他人に極力見せることは禁じます」
「成程。準備整い次第、これで連絡すれば宜しいのですな？」
「はい。閣下や政府の御希望に添えられるよう、微力を尽くす次第です」
　カーティスは新ソ連の艦隊が南下するであろう7月8日から数えて5日後――7月13日に船を派遣することを約束し、悠元や達也と握手を交わした。カーティスが去った後、悠元は蘇我に話しかけた。
「そういう訳ですので、民間軍事会社の設立に関する書類は防衛省を通します。書面上は巳焼島の［恒星炉］プラントを守るための警備会社となりますので、ご承知おきください」
「分かった。人員についてはどうする気だ？」
「そっちは当てがありますのでご心配なく」
　実は、［時空の道標（エターナルポース）］は更に人を呼び込んでいた。その一報はジェラルドから舞い込んだものだが、何と巳焼島の地下訓練場に十数人が同

時に飛ばされてきたらしい。
　そして、いつもは冷静なジェラルドが珍しく動揺していた。というのも、彼の知己――――正確には８年前のベーリング海の暗闘でベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］によって死体すら発見できなかった一等星級（スター・ファースト）の隊長・副隊長陣ばかりだったらしい。
　そして、そちらも８年前当時よりも若返っており、年齢で言えば２０歳前後程度という有様。飛ばされた側もジェラルドを見て驚いたそうだ。
「悠元、その様子だと何かあったのか？」
「……レリックによって、ベーリング海での暗闘で死んだはずの人間が飛んできました。そこにいるジェラルドの話を聞いて、彼らは日本に帰化することを希望するらしいです」
「……」
　悠元から放たれた言葉に、風魔の末裔とされる一族に連なる風間ですら絶句した。過去に横浜事変の引き金となったであろう聖遺物（レリック）のことは風間も報告で聞いているが、理解の範疇を超えると言葉が出なくなるのは当然の反応だろう。
　すると、それまで黙っていたジェラルドが口を開いた。
「それだけならばまだいいが、中には当時１４歳だった俺を知っている奴が多いからな。ノアさんに求婚までされたときは思わず逃げ出したが」
「ノア？」
「エレノア・ポラリス――――先代スターズ総隊長の副官だった女性士官と聞いています」
　ジェラルドから聞いた話だと、当時３０代半ばだったが、容姿は２０歳にも満たない様な美貌を有していた。当時からヴィルヘルミナとの誼でジェラルドを可愛がっていた。なお、彼女には双子の妹がいて、そちらはエルドレッド・バラッドの母親とのこと……彼女も〝生き返った〟らしい。
「言っておきますが、あくまでも彼らの意思を最優先とします。それを無視した場合は『関係者全員を泣いて謝るまでタイキックの刑』に

処します。何か質問は？」
「……お兄ちゃん。笑顔が怖い」
「何のことかな？　セリアには後で鍛錬を付けてやる」
「藪蛇だったあ!!」
なお、エレノアの嫁入りについてはヴィルヘルミナ曰く『いっそのこと押し倒して子作りしちゃえばいいと思う』と全面的に肯定したため、母親の許可に息子が阿鼻叫喚したのは言うまでもないことだった。

歳の近い師弟関係

その頃、真一はレグルスとレイモンドを連れて空母『インディペンデンス』に移動を完了していた。悠元が［パラサイト］の制御を真一に任せたのは、真一は極めて当事者に近い立場で動いていたからこそ、図面を描くことも可能だと判断したからだ。

（以前の僕ならアークトゥルスの封印を解除するために居残った訳だけど、そこまでする義理は今の僕に存在しない）

もし、関西国際空港にて匿った時点でレグルスやレイモンドに明確な自我があれば、真一は従う振りをしてアークトゥルスの封印を解除した後に支配下へおくつもりだった。だが、悠元が設計した魔法は二人を完全な支配下に置いていた。

［パラサイト］になった自分ですらも敵対したくない相手――そんな経験は初めてだったが、向こうが『敵対しない』と明言している以上は真一も敵対する必要もない。そして、そんな風に思案する真一に近付く少女こと愛波が、カップを載せたトレーを持っていた。

「真一様、コーヒーが入りました」

「ありがとう、愛波さん。手間を掛けてしまってすまないね」

「いえ、お気遣いなく」

愛波は真一たちが横須賀港に降り立った際、上泉家の手引きで合流した。そして、そのまま空母に乗り込んでいる。この空母には別の［パラサイト］もいるが、三名については既に真一が支配下に置いている。空母には〝客人〟として乗り込んだが、戦力として加わることはしない。それは愛波を守るためのものである。

すると、愛波がコーヒーを一口啜った後で尋ねる。

「真一様。その、お伺いしても宜しいでしょうか？」

「何だい？　僕が教えられることならば、何でもいいけれど」

「……その、真一様はどのような経緯で［パラサイト］になったのですか？」

愛波の素朴な疑問――真一もとい九島光宣が［パラサイト］になる選択をした理由。それに対して、真一は驚きこそしたものの、彼女

が飛ばされてきた時間軸を考えれば納得も出来る質問だった。
そして、真一は躊躇うことなく愛波に経緯を説明する。
桜井水波が新ソ連の戦略級魔法を防御したがために負傷し、魔法師としての生き方を絶たれそうになっていたこと。
九島光宣は持てる知識の全てを以て考えた時――――周公瑾の知識に導かれる形で、[パラサイト]による肉体の強化で常人の限界を超えることにより、自我を保ったまま魔法に耐えうる力を手にする。
尤も、後から考えて見れば祖父である九島烈が確率の低い強化措置を受けて成功してしまったが故に、同じような道を辿ったという事実は真一ですらも苦笑を禁じえなかった。
「僕は、水波さんを救おうとあらゆる知識に縋った。そして、強大な精神力に耐えうる肉体が必要と考えた。その結果として……僕は人間を辞めてしまった。一時期は人間らしからぬ発想や行動をしていた時もあった。でも……僕は結果として水波さんに救われたんだ」
「そのようなことが……では、私の知る光宣様も？」
「君の知る僕は僕じゃないから、そうなるとは言えない。でも、君が健在ならば、命を賭して何とかしようとすることは避けられるかもしれない」
ただ、それは逆に九島光宣が魔法師として大成する可能性の芽を摘んでしまう行為。人を捨ててまでも魔法師として大成するか、例え一瞬でも人の記憶に残る大輪の花を咲かせ、散っていくか。
「……この件が終わったら、僕は悠元さんに頼んでみようと思う。君の世界に居る九島光宣が生き永らえるための方法を教えてもらう」
「そんな！　真一様がそこまでしていただかなくとも」
「いや、これは僕が頼むべきことだと思う」
愛波（桜井水波）と真一（九島光宣）が仮に同一線上の世界線を歩んでいた場合、愛波の変化は確実に光宣へ影響を及ぼすこととなる。もしかしたら、九島家の凋落に落胆して［パラサイト］を取り込むという可能性も無い訳ではない。
だが、可能性がある以上はそれを取り除くための方法を知る必要がある。幸いにして、この世界はそれを克服するための方法も存在す

る。でなければ、この世界の九島光宣が［パラサイト］を一切経由せずに健全な状態へ快復することなどない。
「いずれにせよ、まずは悠元さんから頼まれた芝居を完遂する。互いにきちんと生き残らないと、待つ人たちへ迷惑を掛けることになるからね」
「そう、ですね。私もそう思います」
真一はいずれ来るであろう目覚めの時のために、愛波は自分の命をとして守った人たちの許へ帰る為に。
「ところで、愛波さんはその世界に居る僕のことが好きなのかな？」
「あ、え、あ、はい……」
「そっか。僕が言うのもなんだけど、強引に迫りでもしないと受け入れてくれないから、回りくどいことはせずに押すことをお薦めするよ」
「は、はい！　是非参考にさせていただきます！」
この遣り取りによって、愛波の世界に居る九島光宣がどうなったのかは……神のみぞが知る。

◇　◇　◇

午前9時。国防軍小松基地を、男子高校生と女子中学生の二人組が訪れた。一般論で言えば不釣り合いな組み合わせの正体は、一条将輝と一条茜の二人。
父親である一条家当主・一条剛毅はこの場に同行していない。とはいえ、既に［クリムゾン・プリンス］の異名を持ち数々の戦闘を経験している将輝からすれば、今更基地のゲートを潜るぐらいでビビったりはしていない。
茜の方はというと、戦闘経験は一切ないが『兄に負けたくない』という思いからか、一介の少女らしからぬ強さを垣間見せていた。とはいっても、若干強張った印象は拭えないが。
彼らが身分証を見せると、直ぐに迎えの車が来た。別に疑っていたわけではないが、既に話が通されている証左なのだろう。流石に沈黙が続くのは耐えきれなかったのか、茜が口を開く。
「どんな子かな？　話は通じると思う？」

「劉少尉は日本語が堪能ですよ」
　茜の問いに対して返したのは、将輝ではなく車の運転手を務める士官であった。ただ、相手がいくら十師族の人間とはいえ、不安材料を回避しようと話を続ける。
「話を聞いた限りでは、祖父の劉雲徳を通じて知り合った日本人がいるそうで、日本語の手紙を読むために独学で覚えたそうですよ」
「なら、話は通じそうな気はするかな……兄さんはどう思う？」
「何にせよ、通訳を通さずに意思疎通できるのはありがたいことだと思う」
　変に煽ったりする雰囲気は無事に回避されたわけだが、運転手を務めた兵士が実は新陰流剣武術の門下生で、彼らに理解があるからこそ運転手に抜擢された、という事実があることを二人は知ることなく、そのまま文官用の宿泊棟に案内された。
　劉麗雷一行が保護されている宿泊棟は、一応「ホテル」と呼べるだけの設備が整っていた。将輝と茜が劉麗雷と引き合わされたのは1階のロビー。当然だが、内外には魔法師が見張っており、少なくとも十人以上の魔法師の気配を将輝は感じ取った。
　基地の兵士が将輝、茜、劉麗雷、林護衛隊長の順に紹介した後、劉麗雷は通訳を使わずに自己紹介をした。
「はじめまして、劉麗雷です」
「初めまして、一条将輝です」
　自己紹介の時点でも日常生活で話せるレベルだと窺わせるほどの話し方。一方、将輝は無難に自己紹介を交わす。だが、初対面で茜は思わず呟きを漏らした。
「うわっ、可愛い…」
「おい、茜」
「も、もう、分かってるよ。――――将輝の妹の一条茜です。宜しくお願いします」
　こういう場に慣れていないのだから、茜の反応も普通の女子中学生としては真っ当な反応とも言える。ただ、将輝が小声で叱ったので、小声で文句を呟きつつも挨拶をした。その反応を見た劉麗雷はとい

うと、『仲が良い兄妹ですね』と何処か羨ましげに見ていた。
一条家の兄妹と大亜連合からの亡命者の顔合わせは、本来和やかな雰囲気で進められるはずだった。実際のところ、部屋の半分は和やかな雰囲気が形成されていた。
「へえー、兵士さんから少し話は聞いてたけど、今もやり取りをしてるんだ」
「はい。ただ、最近は色々忙しくて、返事の手紙が出せないことも多くて」
「にしても、ちゃんとマメに手紙を寄越してくれるなんて、いい人なんだね。それに引き換え、うちの兄は……」
最初の自己紹介の時にちょっとしたドジをしてしまった茜だが、劉麗雷はそれを見て『この人となら話せるかも』と思い、林護衛隊長と将輝が会話をする合間を見計らって談話に華を咲かせていた。
これだけ見れば、彼女が戦略級魔法を使用することを抑止できると思えるわけだが、そう感じられない言い争いがお互いのソファーの反対側から繰り広げられていた。
「……うちの兄がゴメンね。えっと、レイちゃんって呼んでもいい？」
「いいですよ。その代わり、私も茜と呼ばせてください」
「それは構わないよ」
どういうことかと言うと、将輝は劉麗雷が唆されて戦略級魔法を使用されるリスクを下げるため、一条家で預かりたいと提案したのだが、林護衛隊長は頑なに反発したのだ。
その上で林護衛隊長は十師族のことを〝軍閥〟などと蔑んだりして、流石に劉麗雷としてもあまり気分のいい言い争いとは思えず、茜も互いに助けを求めた結果として談話することにしたのだった。
ただ、流石に会話の邪魔となる為、茜が遮音フィールドを張っているわけだが。
「そういえば、その人の名前って？」
「あ、はい。確か、長野佑都と……」
「え？　長野佑都？　悠元兄様だよね、それって？」
「え、ええ!?　ご存知なんですか!?　というか、お兄様って血縁関係な

のですか!?」
思いもよらない劉麗雷と悠元の繋がりを聞いた茜が思わず漏らしたことに対し、劉麗雷が食いついた。これによって言い争いを繰り広げていた将輝と林護衛隊長が完全に蚊帳の外に置かれた瞬間だった。
「えっと、実の兄じゃなくて、兄のような存在と言えばいいかな（流石に婚約者の関係です、とか言えるわけがないよね）」
「そうだったんですか……では、その人は日本にいるのですね？」
「うん……好意でもあるの？」
「いえ。でも、私を私らしくしていただいた〝師匠〟にお礼を言いたくて」
「し、師匠？」
茜からすれば、兄と同い年の婚約者が劉麗雷と師弟関係を結んでいた、ということになる。何ともちぐはぐな関係性に対して茜は首を傾げてしまったため、劉麗雷が説明を始めた。
彼女の説明では、大亜連合国内で出会った時、お互いに好意を抱かないことで納得していた。祖父が許嫁にしようと画策したが、それを悠元が拒否した。曰く『彼女が目指したい道を見つけるのは彼女自身の権利だ。それを止めることも縛ることも出来ない』と。
その代わり、日本語の読み書きを文通の形で行った。聞くことと話すことはほぼ独学だが、その切っ掛けをくれた悠元は、劉麗雷にとって〝先生〟とも言える存在になっていった。
「何にせよ、兄様が安堵しそうなことだね」
「？　何かあるのですか？」
「聞いた話だと、十人以上に囲まれているらしいって」
「……普通なら干からびませんか？」
「私もそう思うよ」
婚約者の一角を担う茜も、そこに拍車を掛けている一人。いずれにせよ、劉麗雷が悠元の婚約者もしくは愛人に名を連ねることを回避できるのならば、悠元も少しは安堵するだろうと茜はそう感じた。
「まさか、こんな形で師匠との繋がりがあるなんて。あの、もっと聞かせてほしいです」

「いいよ、どうせまだ掛かりそうだし」
「……そうみたいですね。って、私自身のことなのにすみません」
「気にしなくていいって」
劉麗雷と茜が同年代の少女らしい会話に没頭していく横で、将輝と林護衛隊長が未だに言い争いを続けていて、そこから茜が耐えきれずに口を出したのは……そこから15分ぐらい経った後のことだった。
◇　◇　◇
劉麗雷と護衛隊長は宛がわれた部屋に戻っていった。同席していた基地の士卒も持ち場に戻ったところで茜が将輝を咎める。
「お父さんも意向を伝えるとは言ってたけど、いきなり引き取る話をするとか性急すぎるにもほどがあるでしょうに」
「……それは、そうだが」
「ちゃんと相手の感情も考えなよ。こういう場に慣れているのは専ら兄さんのほうなんだから」
正論に近い説教を受けては、さしもの将輝であっても回答に窮するのは無理からぬことだった。
「大体、レイちゃんは14歳なんだよ。自分で散々言っておきながら高圧的な態度を取る方が問題だと思うけど」
「ちょっと待て。『レイちゃん』は劉麗雷少尉のことか？」
「そうだよ。兄さんが護衛の人と言い争っている間に話が進んで、本人からそう呼んでいいって言われたから」
「そ、そうか……」
劉麗雷に対する呼び方に気付かなかったとなれば、当然二人の会話に出てきていた悠元の存在に気付いていない可能性が高い。寧ろ、その方が変に話を拗らせることもないし、茜も一条家でのトラブルを考慮すれば話さない方がいいと判断した。
すると、基地の兵士が二人に割り込む形で声を掛けてきた。
「失礼します。一条将輝さんにお客様です」
「ここに？」
将輝が問い質したのは、自分に用件があるという意味ではなく、客人が将輝の所在を把握して尚且つ追いかけてきた、という意味から来

るもの。とはいえ、手持無沙汰となった将輝に断るという選択肢は存在しなかった。
「分かりました。案内をお願いします」
いくら十師族とはいえ、将輝の立場は〝客人〟に近い。将輝はそのことを直ぐに思い返し、丁重な言葉遣いで案内を促した。
「こちらです」
兵士に続く形で将輝が動き出したが、茜はそれに続く形で後ろをついていった。ここで『付いてこなくてもいい』と言いだしたら、それはそれで後々問題になると踏んで、将輝は何も言わなかった。
将輝に用件がある客は宿泊棟ではなく、軍の魔法師が使う装備をメンテナンスしている施設であった。呼び出しに来た兵士の運転する車で到着し、案内された先は2階の一室だった。
そこで将輝と茜を待ち受けていたのは、彼らが良く知る人物――吉祥寺真紅郎であった。
「待っていたよ、将輝。茜ちゃんも同行していたとは剛毅さんに聞いてたけど……その様子だと、言い争いでもしたのかい？」
「お、正解です真紅郎君」
「……ジョージ、その為だけならば態々小松基地に来る必要もないだろうに。俺に用事があると聞いたが、どんな内容か教えてもらえるか？」
真紅郎は将輝がまたやらかしたような表情に気付いて冗談気味に問いかけると、茜が代わりに応えたことで「やっぱりか」と苦笑を見せていた。一方、弱みを握られたような感覚に陥った将輝は話題を逸らすために真紅郎の訪問理由を尋ねた。
「その前に、一つ話しておきたいことがある。これも重要な事なんだけど、先程悪いニュースが飛び込んで来た」
「悪いニュース？」
「うん。新ソ連政府が戦争犯罪人・劉麗雷の引き渡しを日本政府に要求してきた。勿論、日本政府がそれを認めることは出来ない」
日本と新ソ連は正式な国交を結んでいない。それでいて、佐渡沖や宗谷海峡の件についてしらを切り続けている有様。その相手が厚か

ましく亡命してきた劉麗雷の引き渡しを要求してきたのだ。
「何よそれ！」
「落ち着け、茜。それでジョージ。新ソ連が侵攻する可能性が高まったからこそ、俺が動かなければならない状況にあるということだな？」
「話が早くて助かるよ。だからこそ、将輝には試してほしい魔法がある」
　真紅郎は真剣な表情で将輝に迫った。それに対して、将輝は真紅郎の様子が嘗て［基本（アストラル）コード］に関する発見をした時と酷似していることに気付いていた。
「新たな魔法？　この状況で……まさか、ジョージ」
「そのまさかだよ、将輝。君に使ってもらう魔法は〝戦略級魔法〟だ。覚悟は……なんて、今更問い質す必要もないだろうけど」
「無論だ」
　将輝の力強い頷きに対し、意志の硬さを感じ取った真紅郎。
「なら、色々試したいことがあるのは……そこも言わなくても分かるか」
「ああ。先に行って待ってるぞ」
　先程のことについてあまり触れられるのを避けたかったためか、先に出ていった将輝の後ろ姿を見た後、深い溜息を吐いた。
「はあ……これでちゃんと吹っ切れていてくれたら問題もないんだけど。流石に前田校長や剛毅さんに絞られてるから、大丈夫だよね？」
「……真紅郎君は、兄さんがまだ悠元兄様の婚約者を諦めてないと思ってるの？」
「ただでさえ曲がったことが嫌いな将輝だからね……杞憂に終わってくれてればいいんだけれど」
　真紅郎からすれば悠元は、友人の一人にして魔法研究者としての目標の一人。茜からすれば、悠元は既に想いを通じ合わせた婚約者。互いに悠元と将輝のことをよく知っているからこそ、真紅郎の漏らした杞憂に対して茜が問いかけ、真紅郎は無駄な思考に終わってくれることを切に願ったのだった。

「仮にそんなことになったら、父さんが上泉さんのところへ修行に出すとか言いかねないかも」
「……とっとと諦めてくれたら、僕たちは楽できるのに」
一人の少年の恋慕によって、周りに多大な迷惑を掛けているという現実を知れ……と言いたげな真紅郎の呟きに対して、茜はウンウンと言いながら頷いていた。

不可思議すぎる旗頭

臨界前核実験――――核分裂爆発を起こす臨界直前でプロセスを停止させて、シミュレーションに必要なデータを収集目的の実験。なぜここでその話題を出したのかというと、将輝と真紅郎がこれからやろうとしているのはそれにほぼ近いプロセスを踏んで行われるためだ。

戦略級魔法はその性質上、実験とはいえ戦略兵器に匹敵する威力となり、当然及ぼす範囲も桁外れとなる。民間人の居住地区――――分かりやすく言えば市町村の近くで実施するのは極めてリスクが伴う。

そこで戦略級魔法を発動直前でキャンセルするテスト方法が用いられる。仮に魔法をキャンセルしても、魔法師本人の手応えと観測されたデータから８０パーセントから９０パーセントの精度で使用した魔法が設計通りに動いたかどうか分かる。この方法ならば民間人への被害は及ばないし、衛星による魔法観測の対象となることはない。

１０パーセントから２０パーセントの誤差を許容できるのかという疑問は当然出てくるが、発動規模が大きくなればなるほど、当然要求される事象干渉力も増大するため、普通ならば一発目で成功すること自体難しくなる。それに、今回はあくまでも実験であるため、いきなり最終プロセスまでぶっつけ本番で成功させる必要性もない。

将輝と真紅郎、そして茜は国防空軍小松基地から国防海軍金沢基地に移動していた。真紅郎が一条家から提供された魔法技術を用いて設計した海戦魔法を実験するには、その実験に適した場所として選んだ形だ。

本当なら、将輝は茜を家に帰すべきだと力説したが、茜はそれを固辞した上で『今回は兄さんのお守り役をお父さんから言い付かっているから』と今まで開示されなかった理由が飛び出し、これには将輝が反論しそうになったが、真紅郎が宥めつつ三人で移動することとなった。

「将輝。分かっていることだろうけれど、事象干渉力のコントロールを間違えないで」

「勿論、分かっている」
魔法は魔法式を対象のエイドスに投射し、事象干渉力を注入することで発動する。今回の実験は魔法の発動をさせない前提の為、魔法式の投射レベルにまで事象干渉力の注入を抑えることになる。
茜は二人の邪魔をしないように、真紅郎の後ろで実験の様子を見守っている。そして、将輝は真紅郎から渡されたゴーグルを身に着け、拳銃によく似た照準器を海が見える窓の外へ向ける。その様子を見た上で真紅郎も実験の準備を進めていく。
真紅郎は将輝に伝えていないことが〝二つ〟ある。一つは、一条家から提供された魔法技術の中に悠元が設計した［リンケージ・キャスト］――［トゥマーン・ボンバ］に使用されている［チェイン・キャスト］の改良版――があること。
そして、もう一つは将輝が持つ照準器とゴーグルは［トーラス・シルバー］――神楽坂悠元と司波達也によって共同開発されたもの。これについては、術式提供と時間を合わせるように真紅郎名義で送られている。
本来、真紅郎が想定していたデバイス設計データでは、中型のコンピューターを介することで魔法師で補えない部分の変数演算を行う必要があった。
だが、送られてきた拳銃形状の照準器――全体的に深紅のフォルムを有し、銃身の側面には波をイメージするようなレリーフが刻まれている――は、小型コンピューター程度の演算で全ての演算を賄えるという、これまでのＣＡＤの常識を覆しかねない魔法技術が含まれていることに気付く。
更に、ゴーグル自体もＣＡＤと連動することで魔法に必要な最適の情報のみを魔法師に提示する仕組みとなっており、魔法の発動予測範囲を上空からの俯瞰図を見るように把握することが出来る。
真紅郎も気付いていないことだが、悠元はこれらの技術を一昨年の九校戦の時点で明るみに出している。傍から見ても一切気付かれないレベルだったので、誰も気が付かなかったとしても無理はない。
更に、そのデバイスの調整は開発元を除けば将輝本人か真紅郎にし

か出来ないように設定されており、無理にデータを抜き出すと周囲１００メートルに対して強制催眠の術式が発動するようになっている。このセキュリティーは真紅郎本人でも『術式が難解すぎて解読できない』と匙を投げたほどだった。

話を戻して、将輝はデバイスを操作してゴーグルにテスト用のターゲットエリアを設定する。今回は実験も兼ねている為、照準器とケーブルによって接続されたコンピューターのモニターを真紅郎が見守る。

「テストを開始する」

真紅郎の開始の合図を聞き、将輝がデバイスのトリガーを引く。デバイスに内蔵された起動式データと、ゴーグルによって最適化された座標データがグリップ部分に内蔵された感応石に送られる。

変換された想子信号はグリップを握っている将輝の右手を介して魔法演算領域に送られる。本来ならば０．５秒以内で完了する魔法式だが、１秒の時間を要した上で魔法式を出力する。

将輝が意識することなく、ターゲットエリアの中央に魔法式が投射され――魔法が中止される。その直前、指定した１０００メートル×５００メートルのエリアを埋め尽くすほどの無数の魔法式が展開された。

「テスト、成功だ！」

実験に協力していた基地の研究者がどよめく中、真紅郎は満面の笑みを浮かべながら、高らかに宣言した。ただ、真紅郎の心中には同時に懸念も僅かに生まれていた。

――この魔法を使えば、将輝は間違いなく戦略級魔法師として認められることになる。

――ただ、それで舞い上がるってことは……流石に、ないよね？

いくら大人顔負けの実力を有していても、精神は年相応の将輝。それに対し、同等以上の実力を有する悠元はとても同年代の人間とは思えないほどに達観している。これでまた将輝が悠元に対して諍いを起こした時は、本気で親友の縁を切ることも考慮しなければならない。

「真紅郎君、大丈夫？　凄い汗だよ」
「え？　あ、本当だ……理由は聞かないでくれると助かるよ」
「あ、うん。今ので大体察したから」
　茜に言われるまで、いつの間にかすごい汗を掻いていることに気が付かなかった真紅郎は、茜に対してこの汗の理由を聞かないでくれと頼みこみ、茜はその汗の原因を悟って深い溜息を漏らした。
「ジョージ、大丈夫か？」
「大丈夫だよ。興奮しすぎて汗が出ていたみたいだから」
「そ、そうか……」
　そして、将輝にも同じことを聞かれたが、実験の成功による興奮で汗が出ていたと誤魔化すことにし、将輝もそれを疑うことなく頷いたのだった。

◇　◇　◇

　7月7日、午後3時。
　巳焼島の地下訓練場で魔法訓練を行っていたジェラルドだが、休憩を挟もうと端末を見やると、そこにはまたしも暗号メールが送られていた。安全保障局のエージェントとしては、別に頻繁な連絡を疑うような真似はしないが、流石に『第一賢人』のことも有るためにデコードをした上で内容を読み進めると、差出人は伯母のヴァージニア・バランス大佐からだった。
「……高速輸送艦『ミッドウェイ』が『スターダスト』の実働部隊の兵士２０名を輸送。到着予定は今日の午後６時。輸送された兵士は［パラサイト］に侵食している可能性大か……何処まで愚かなんだ、連中は」
　ジェラルドは母のヴィルヘルミナを通して、ベーリング海での事件前後の『スターズ』を見てきた。過去から蘇った母から［パラサイト］の性質に関する情報を得た上で、スターズの制御がパラサイトの領域内に収まっているのは僥倖と言うべきなのかは不明だが。
　ともあれ、相手の素性が割れている以上は対応しないわけにもいかない。ジェラルドの呼びかけでここにいないリーナを除く面々――――ハンス・エルンスト、アニエス・ヴィンセント、ナーディア・エル

ンストの三名がジェラルドの自室に集う形となった。
「ジェイ、呼び出したということは［パラサイト］のことに関して？」
「ああ。ＵＳＮＡにいた『スターダスト』を呼び出して、『インディペンデンス』にいる［パラサイト］の指揮下に加わるようだ。この時点でひと騒動起こす先として濃厚なのはここだ」
　元々、ジェラルドたちを巳焼島に置いているのは［恒星炉］プラント防衛のこともあるため、彼らもそれに同意した上でここに滞在している。アニエスの問いかけにジェラルドが事情を説明した。
「人数的にはどれぐらいの規模だ？」
「『スターズ』を含めた［パラサイト］は想定の範囲で２５人。一人頭六人ないし七人を相手にすれば事足りる。もしもの時は『スターズ』級の連中を俺一人で相手をする」
「もしも？　何か厄介な魔法でもあるの？」
「それは［分子ディバイダー］ね？」
　ジェラルドからすれば実母が開発した魔法である［分子ディバイダー］。現在の『スターズ』ではその派生形も含めると隊長・副隊長クラスが多用する術式。だが、その術式には〝決定的欠陥〟が存在すると母から聞かされるまで知らなかった。
　そして、その欠陥を突くことで術式を無力化出来る。
「ああ。尤も、ここにいる面子なら心配は要らないだろうとみている。あの魔法は、一定の条件をクリアしないと人体への直接干渉は極めて難しい」
「その、話してもいいの？」
「母曰く『あんな使い方を許容させるために［分子ディバイダー］を生み出したんじゃない』と憤っていたが、あの様子だと連中がぐうの音も出なくなるまで扱かれるのは確定のようだ」
　当然、ジェラルドは母に付き添って基地の中に入ったことも有り、士官の厚意で訓練の様子を見せてもらったことがあった。その時の様子を当時の記憶に基づいて述べるとするなら、あれは正しく『死屍累々』であった……無論、誰も死んではいないが。
「話を戻すぞ。連中が攻めてくるのは確定事項で、早くとも明日なの

は間違いない。こちらには増援としてリーナとセリア、それに司波達也も来るそうだ」
「……例の戦略級魔法師が、ですか？」
「ああ。悠元は『別件があるので日本海側に行かなきゃいけない』とは言っていたが……彼が来たらほぼ〝勝ち確定〟の状況だろうな」
　ここにいる四人でも対処は可能だし、各々のＣＡＤについては取り上げられずに携帯を許されている。それは、各々が戦略級魔法師クラスの実力を有しているからこその証左であり、ここで大人しくして外敵の排除に力を貸す対価として認められている権利。
「悠元がそちらに行くということは、早くても明日には新ソ連の艦隊が動く。その結果如何を問わず、連中が動く。特に主導しているのが第四隊の人間ならば、時を置くことは許容しないだろう」
「夜間に仕掛ける可能性は？」
「無くはないだろうが、それをやったら本来夜間にいてはいけない海域に高速輸送艦がいるという状況になってしまう」
　仮にこれが露呈すれば、ＵＳＮＡ政府（ホワイトハウス）はＵＳＮＡ軍統合参謀本部に対して説明責任を要求することになる。政府高官ですら許容していない司波達也の排除を実行した理由と、仮に失敗した場合の責任問題へと発展する。こうなると、『スターズ』を制御できなった責任は基地司令のウォーカー大佐が全面的に被ることとなる。
「というかな……俺の見立てが正しければ、悠元は二大国に対してとんでもない代償を要求することになるぞ」
「とんでもないって……第一次大戦後のヴェルサイユ条約みたいな？」
「有り得なくもないだろう」
　ジェラルドの見立てからすれば、司波達也以上に実力の全容が見えない神楽坂悠元。かつて第三次大戦で敵対したものを全て闇に葬った『神楽坂』の名を継いだ者。昨年の事件でも所在すらまともに掴めなかった相手を敵に回す時点で、もう既に何もかもが〝遅い〟と感じざるを得なかった。
「表立って交渉するのは政府同士だろうが、間違いなくイーゴリ・アン

ドレイビッチ・ベゾブラゾフとエドワード・クラークの身柄引き渡しか……あるいは、両者の公的な抹殺理由の担保を両政府が認めるか」
「それは……新ソ連側は認めんだろうな」
「だからこそ、悠元は新ソ連を旧連邦のように解体させるかもしれん。仮にそれが現実となれば、大亜連合も日本に感けていられる余裕がなくなる」
　ジェラルドは内密に聞いたが、悠元は剛三との旅行中に計四個師団の新ソ連軍を壊滅へ追い込み、連邦政府首相に不干渉の覚書をサインさせたものの、特殊部隊まで動員した結果として悠元がキレた。その結果、クレムリン宮殿が半壊したという有様。
　ジェラルドの率直な感想は『馬鹿にも程がある』と吐き捨てたくなったほど。
「ただ、大亜連合の増長も許されない。少なからずペナルティを科せられるだろう。例えばそうだな……劉麗雷を帰化させて、［十三使徒］から外してしまうという手だな」
「本人を生かしたら、新ソ連が逆上するんじゃ？」
「仮に極超音速ミサイルであっても、現在残っているとされているミサイルサイロの有効射程範囲に日本は一切入っていない。艦隊や潜水艦であっても、発射した時点で新ソ連は〝負ける〟」
　いくら独裁政権に近い在り方であっても、国家の基盤を支えるのは国民に他ならない。もし、国家の体裁を保てないほどに国民が激減した場合、政府が暴走するか周囲の国家に食われるかの実質的な二択となる。
「それに関係がある話だが、ウクライナ・ベラルーシ再分離独立派が欧州の支援を受ける形で反旗を翻す、と関係先からのメールで把握した。現地の義勇兵や外国人傭兵も含めると、想定兵力は１００万を超えるらしい」
「１００万!?　そんなに良く集まったね」
「どうやら、大亜連合との取引で得た金を元手に兵力と装備を揃えたようだ。しかも仕掛ける日は明日で、旧ウクライナ並びに旧ベラルーシ地域の各都市で一斉に蜂起する手筈らしい」

ウクライナ・ベラルーシ再分離独立派は以前、大亜連合と［アンティナイト］の取引を行って資金を稼いでいた。それが滞ると、今度はＵＳＮＡから逃げ込んで来た人間主義者を丸め込んで資金を調達し、結果として兵力だけならば新ソ連軍に匹敵するほどの戦力を得た。
こうなると、問題は戦略級魔法――――新ソ連にいる［十三使徒］の二人をこの対処に当たらせるためには、極東方面の問題を解決しなければならない。
「だが、新ソ連には二人の国家公認戦略級魔法師がいる。そこはどうする気なんだ？」
「俺も懸念しているのはそこなんだ。誰かが旗頭になったのかが分かれば……は？」
ハンスの懸念にはジェラルドも同じ意見を述べつつ、改めてメールを吟味する。そして、とある人名を見つけたところでジェラルドは唖然にも近い言葉を発してしまった。
「どうしたの、ジェイ？」
「……彼らの旗頭となったのは、新ソ連の［十三使徒］レオニード・コントラチェンコ……とメールにそう書いてある」
「はあっ!?　あの爺さんが!?」
「ええっ!?　なんであの人が!?」
アニエスの問いかけにジェラルドが答えた内容を聞き、一番驚きを見せたのはエルンスト兄妹の二人。その驚きが気に掛かったジェラルドは二人を見やる。
「二人とも、知ってるのか？」
「……俺の婚約者がそのレオニード・コントラチェンコの孫娘なんだ。当人から孫娘を頼むと預けられてしまってな」
「私の場合は、［ドラキュラ］として侵入した際に出会って、もし孫娘に会えたら『不義理な祖父で済まない』と伝えてくれって言われて……」
「それって……死ぬことも覚悟でってことじゃないの」
各々会った時期は違うが、ハンスとナーディアがレオニード・コントラチェンコと面識を有していることに驚きを隠せなかった。それ

を聞いたアニエスの言葉は、正しくコントラチェンコの未来を映し出すようなものだった。
「まずは、明日の襲撃を乗り切る。考えるのはそれからだ」
「そうだな。あの爺さんには何だかんだ借りがあるからな……下手に死なれたら、ナターリヤが悲しむことになる」
「にしても、１０歳年下の婚約者なんて……お兄ちゃんって実はロリコんべっ!?」
「もう、訳が分からない事ばかりよ」
何故、コントラチェンコは新ソ連の「十三使徒」という安泰な立場を捨てたのか。彼は如何なる理由で祖国に刃を向けると決めたのか……分からない事ばかりの彼らは、まず明日の襲撃を撃退することに意識を向けるのであった。

新ソ連艦隊侵攻

西暦２０９７年７月８日の月曜日、日本時間午前０時。
新ソ連極東艦隊はウラジオストク軍港を出港した。
この報せを受けた時点で、日本側の対応は早かった。
日本海側に面する東北・北陸・山陰・山陽地方では、多くの企業が臨時休業または臨時休校の措置が取られた。また、シェルターへの避難準備が勧告され、三地域に隣接する北海道・九州・近畿、そして太平洋側の関東・東海・四国地域に対しても厳重注意が呼び掛けられている。
横浜事変の際は事前の避難勧告もあって一部地域を除けば民間人への被害は最小限で済んでいる。だが、今回は目に見える形での侵攻。しかも、一昨年の時のように佐渡島への直線航路ではなく、能登半島沖の北西側に艦隊を進め、そこで停止した。
新ソ連艦隊の構成はフレミングランチャーを有する対地攻撃艦二隻。対空・対艦ミサイル艦四隻。対潜・対艦ミサイル艦四隻。小型戦闘艇１２隻に加えて、後方１０海里に空母と護衛艦二隻が控えている。
新ソ連側の要求は、戦争犯罪人・劉麗雷の引き渡し。
これに対する日本側の要求は、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの早急な引き渡しとこれまでの戦闘行為に対する謝罪と説明責任。
この事項だけ見れば、二国間で〝戦争状態〟に入ったとみるのが一番妥当な認識となるだろう。だが、互いに公的な宣戦布告を出していない以上、あくまでも小規模な武力衝突に留まってしまう。
新ソ連側がここまでの規模の艦隊を出していることに加え、先に戦略級魔法を使っておきながら〝小規模〟という解釈をするのは、些か過小気味な気がするのは否めないが。
劉麗雷を匿っていることに対する非難の声も当然存在するが、そもそもそれ以前に日本政府の要求を呑まずにいた新ソ連政府に対する非難の声が大きかったし、ニュースで劉麗雷の映像が流れると、非難

の声よりも同情の声が大きくなっていた。彼女がまだ１４歳という年齢と、美少女という点が同情を買った形だ。
その当人は小松基地から動いていない。そして、彼女の許を一条茜と、彼女の父親である一条家当主・一条剛毅が訪れていた。
◇　◇　◇
国防海軍金沢基地。そこに到着する一台の軍用二輪。そして、彼はライディングスーツ姿のまま士官の案内で基地司令室に通された。その人物の登場に、基地司令とあれども立ち上がって敬礼をせねばならない人物は上条達三（かみじょうたつみ）海軍特務大将――悠元であった。
「これは上条大将閣下！　このような時期にお越しいただいたということは、もしや新ソ連が本気で武力を行使するとお考えなのでしょうか？」
「いえ、彼らとて真正面から我が軍と刃を交えれば、少なくない損害を被ることぐらい承知だろう。だが、彼らにはこちらに刃を向けた意味を知ってもらう必要があると考えている」
「……では、戦略級魔法をお使いになると？」
「無論、我が軍に対する被害は一切出ないと明言させてもらおう」
金沢基地の司令は事前に統合軍令部から悠元の派遣を通知されていた。
国防海軍でも異例の特務大将で、陸空軍でも同階級を持つ戦略級魔法師。だが、それ故に派閥を持つことはおろか、国防軍に対して強権を揮わずに関与しないことを貫く。そんなことをまだ十代の少年が成している事実など、聞いただけでは「信じられない」と思ってしまうだろう。
だが、統合軍令部はおろか防衛省、ひいては政府の信を勝ち得ていることを聞かされては、信じるよりほかにない。しかも、彼は軍人でありながら軍の指揮系統に加わっていない。だが、既存の指揮系統に干渉しないどころか、国防軍に対する貢献の度合いは群を抜く。
「差し支えなければ、具体的に何をなさるのか教えて頂いても宜しいですか？」
「本官の予測では、同伴している小型艦が佐渡方面へ動く可能性が高

いと睨んでいる。新潟から小型艦が緊急発進（スクランブル）を掛けたとしても、間に合うかどうかは五分五分。なので、心ある友人にそちらの対処を任せている」

念のため、新潟基地の司令にはその話をしている。［トゥマーン・ボンバ］の標的にされる可能性が高い訳だが、悠元は彼らを犠牲にする気など無かった。寧ろ、ベゾブラゾフの攻撃を〝積極的自衛権の行使〟の口実として利用する気でいた。

「ただ、人々の不安を取り除くという意味で新潟にも対処はしてもらうが、その際に敵から魔法攻撃を受けることが想定される。その対処はこちらで受け持つ故、安心してほしい」

「分かりました。統合軍令部から最大限の配慮をするよう言い付かりましたので、何かご要望があれば遠慮なく仰ってください」

「そうですな……その攻撃の後、新ソ連をこちらに引き付けるため、能登にいる敵を全て拿捕する。敵から攻撃したとなれば、積極的自衛権の行使という面目は立つし、政府の交渉材料として使うこともできるだろう。司令にはその辺の差配をお願いしたい」

佐渡での攻防を自衛権の行使根拠として名分を得て、能登半島沖にいる新ソ連極東艦隊（潜水艦含む）を全て拿捕し、更にもう一つ〝あること〟を実行する。今まで実行可能だった策だが、敢えて使わずにいたもの。

新ソ連が大人しく理知的になれば、この方法を取る気はなかった。だが、ベゾブラゾフがこちらを明確に敵だと認定した以上は、こちらも加減をする気など無い。

とはいっても、ベゾブラゾフを直接殺すわけではない。では一体何をするのかというと、現代の軍事行動において最早なくてはならない存在を制御下に置く。その対象は――――宇宙に存在する新ソ連の軍事衛星全て。

この方法を模索していた当初は、地球に飛来する小惑星の破壊をいち早くキャッチする目的で考えていた。ただ、その過程で衛星軌道上にある人工衛星全てにアクセスする方法を確立してしまった。［万華鏡（カレイドスコープ）］による情報収集には、各国の人工衛星全てから得られる軍

事情報を集約・整理する役割も備わっている。
この方法を実行すれば、新ソ連は軍事分野の〝目〟をすべて喪う。国民生活に影響を及ぼさないよう民生分野の機能ぐらいは慈悲として使えるようにしておくが、そこまで強奪して使おうとした場合は、容赦なく通信機能を麻痺させることも辞さない。
そして、軍事分野において情報を使えなくなるということは、ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］がベゾブラゾフの目視ができる範囲に限定されてしまうということ。仮にコンピューターをオフラインで行使して狙い撃つとしても、現地の工作員がいなければまともに使用する事など出来ない。
範囲を最大にまで広げて超広域爆撃する手段もなくはないが、それをやったらベゾブラゾフが魔法師としての価値が戦術級に格下げとなるのは避けられない。
更に、新ソ連の情報収集能力を奪うということは、ウクライナ・ベラルーシ再分離独立派による大規模蜂起も容易になる。その旗頭が新ソ連の［十三使徒］であるレオニード・コントラチェンコとなると、黒海基地は〝既に陥落した〟とみるのが妥当だろう。
原作の彼ならば、そんなことに手を貸すとは思えない。だが、現実として彼は新ソ連を裏切る選択肢を取った。どこか思うところがあったのだろう。こうなると、トルコも対岸の火事ではなくなるため、何かしらの手を打つ可能性はある。東欧・北欧もその一帯が再分離独立を果たせば、これまで新ソ連に依存していた食糧事情が改善する見込みも立つ。
ただ、新ソ連としても外貨の収入源ともなっている穀倉地帯を安易に手放すことは出来ないため、ベゾブラゾフを西側に呼び戻す可能性も出てきた。政府の要請ともなれば、ベゾブラゾフとて無視は出来ない。
ならば、彼にはもう一度『人事不省』の痛みを味わってもらう。それで懲りなかった場合は、彼に〝人を殺す意味〟を味わってもらう。それが、悠元がベゾブラゾフに対する報復であった。
閑話休題。

「それは責任重大ですな。分かりました、直ぐに手配を致します。後は何か必要でしょうか？」
「でしたら、基地の屋上をお借りしたい。作戦行動中は人が近寄らないように手配をお願いしいたいが、宜しいか？」
「その程度でしたら、快くお引き受けいたします」
基地司令に許可を貰った後、悠元はそのまま一人で基地の屋上に上がった。周囲に人の存在がいないことを確認した上で、悠元はライディングスーツの内側から［オーディン］と［ラグナロク］を取り出すと、［ラグナロク］のスイッチを操作する。すると、［ラグナロク］のコンソールが付いている部分が上に開き、その空いた穴に［オーディン］を接続する。
［セラフィム］と［ラグナロク］はこれまで使ってきた［ワルキューレ］や［オーディン］の代わりではなく、それらの二機の対応範囲を拡張させるために開発・設計された。この機能を応用したものが達也に渡した［ブリューナク］にあたる。
同じように［セラフィム］も［ワルキューレ］に接続して、準備を整えた。
本来ならば［サード・アイ・エクリプス］のようなものや［布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）］を持ち込むべきなのだろうが、今回は場所が場所故に持ち込めないと判断した。それに、今回は悠元でも初めてとなる複数個所への同時魔法攻撃を実施するため、安全のマージンを確保するべく万全を期す形を取った。
悠元は接続した［ワルキューレ］と［オーディン］を両手に構えた。元々拳銃のようにそこまで重量を必要としないため、片手で構えるぐらいは問題ない。そして、悠元は［天神の眼（オシリス・サイト）］を発動させ、能登半島沖を見やる。そのタイミングで、艦隊に随伴していた小型戦闘艇１２隻が佐渡島方面へ移動を始めた。
（……イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ。一昨年の時は偶発的なものだったが、今回は態々こちらから出張ったんだ。てめえの立てた策で、てめえ自身の首を縛ってやるよ）
こちらが現時点で打てる手は整った。巳焼島方面も達也を派遣す

る以上はヘマを打つ可能性が極めて低い。それでも何かしらのトラブルが起きてしまった時は、その時に考えることしか出来ない。
ただ、これによって［パラサイト］が日本を出ていく算段が整ったことになる。尤も、［パラサイト］は治療するものの、真一に関しては治さずにそのまま返し、その治療法だけは教えておくことにする。
並行世界の未来ならば、こちらに影響が及ぶ可能性は極めて低い。ただ、ひとつ懸念が残っているとすれば、稼働中の［エターナルポース］ぐらいだろう。不幸中の幸いは、敵となる人物を呼び込んでいないことに尽きるが。

◇　◇　◇

7月8日の正午過ぎ。将輝と真紅郎は佐渡島にいた。
将輝は当初、能登半島沖の新ソ連艦隊を対処するものと考えていた。だが、それを一蹴したのは朝の一条家で剛毅と将輝、真紅郎の三人で行われた話し合いが大きく関係している。まだ夜が明けない時間帯に叩き起こされる格好となった将輝と、偶々一条家に泊まっていた真紅郎だったが、剛毅の新ソ連極東艦隊南下の話を聞いて、表情が真剣なものへと変わった。
「――――将輝。小松基地には俺が詰めて茜の補助をする。お前は吉祥寺君と共に佐渡へ向かえ」
「親父？　この場合は俺が能登半島沖にいる新ソ連艦隊を対処すべきだと思うが」
「確かに、それも一理あるだろう。だが、この状況で佐渡を再び狙い撃たないとは限らん」
将輝の気持ちがやや浮ついていたのは、先日完成したばかりの［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］で撃退するつもりだったからに他ならない。だが、剛毅の意見に賛成したのは将輝の隣に座る親友だった。
「剛毅さん。僭越ながら僕も同じ意見です。五年前の侵攻と一昨年の艦隊侵攻がそれを物語っている、と結論付けています」
「ジョージ!?」
「その二回とも助けが無かったら、僕の両親は死んでいたかも知れなかったんだ」

「それは……」
　将輝と真紅郎の佐渡行きの理由は、佐渡島の軍事的な価値に基づくものからくる根拠だった。本州との直線距離は３０数キロしかなく、ウラジオストクからみればほぼ直線距離で日本の首都である東京を狙い撃てるラインが構築できる。仮に佐渡を橋頭保として確保出来てしまえば、本州の一部や北海道、九州に上陸するよりも軍事的なリソースをつぎ込む度合いは遥かに減ることとなるだろう。
　５年前の侵攻や一昨年の艦隊侵攻があっても、佐渡には軍事的に耐えられる設備が存在せず、小規模の防衛部隊が置かれている程度。新潟基地に配慮した結果なのかもしれないが、それならば対馬要塞のように大規模改修して新ソ連の備えに置く方策もあってしかるべきだった。
　そして、佐渡が〝島〟という点でも新ソ連にとっては有利に働くものが存在する。それはイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが行使する新ソ連の戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］。その魔法の性質上、水があるところであれば威力を発揮する。
　佐渡はその意味において［トゥマーン・ボンバ］を防衛に生かすことが出来るため、大規模の人員輸送だけでなく海上戦力を実質的に封じられることとなる。
「新ソ連とて愚かではない。特に一昨年は十数隻の艦隊を一瞬にして失った。その意味で艦隊そのものが国防軍へ刃を向けるとは考えにくいだろう。将輝、吉祥寺君。佐渡で新ソ連の襲撃を防げ」
「――――分かった。やってやるさ、俺のこの魔法で」
　そう張り切って先に出ていった将輝の姿を見て、部屋に残った剛毅と真紅郎は互いに目線が合い、互いに思ったことを悟ったのか……ほぼ同時に深い溜息を吐いた。
「はぁ……神楽坂殿に対抗心を抱くのは分からんでもないが、魔法抜きでも一撃で沈められた将輝（あのバカ）に勝つ見込みなどないだろうに。いっそのこと、神楽坂殿と司波深雪嬢が結婚してくれれば、アイツとて諦めるだろうに……吉祥寺君も苦労を掛けるな」
「いえ。悠元の苦労は僕も聞いてはいますが……将輝にあんな甲斐性

など無理でしょう」
　真紅郎は悠元と交友関係を持つからこそでもあるが、茜を通して悠元の婚約者事情も聞き及んでいた。複数の婚約者だけでもお腹一杯になりそうなのに、複数の使用人兼愛人まで囲うことになったと聞いた際、『悠元が早死にするんじゃないの？』と問い質したほどに驚愕していた。
「そこまでハッキリと言うか……いや、それぐらいは是非言ってくれると助かる。瑠璃のことをどうかよろしく頼むよ」
「剛毅さん……ドサクサに紛れて衝撃発言を放たないでください」
　剛毅としては、立場故にこうやって腹を割って話せる相手がいない。だからこそ、将輝の親友である真紅郎には〝義理の息子〟となることを期待していた。一方、瑠璃との婚約を認めるような発言が出たことに対して、もう少し節度を持ってほしいと願った真紅郎であった。
「へっくし!!　うーん……一体何なんだ？　って、茜はどうしてそんな表情をしてるんだ？」
「……兄さんは一度心を折られて屈服させられるべきだと思う」
「いや、一体何の話だ!?」
　そして、廊下で盛大にくしゃみをした将輝とばったり出くわした茜は、将輝に対して辛辣な言葉を吐き捨てた。その言葉の真意を将輝が聞き出す前に真紅郎と剛毅が合流したため、その続きが語られることはなかった。

海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）

国防海軍金沢基地――――その屋上に悠元は一人で立っていた。小松基地には一条剛毅と一条茜、佐渡島には一条将輝と吉祥寺真紅郎が襲来に備えている。現時点でも万全に整っているが、新ソ連の動きを完全に封じるため、悠元はもう一手を講じることに決めた。

悠元は一度［ラグナロク］を接続した［オーディン］を床に置き、ライディングスーツの内側からサングラス型バイザーを掛けて、改めて［オーディン］を手に取った。そして、バイザーにはあらゆる情報が表示される。

元々、戦闘スーツ型のバイザーでは頭部だけでなく装置の保護も備えるとなると重量が嵩んでしまう。かといって戦況を正確に把握する能力を失うのは致命的だった。この問題を解決するため、一昨年の九校戦で雫に対して行ったサポートによって十分なデータを取得できたことにより、このバイザーの完成に漕ぎ着けることが出来た。

悠元の固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］による情報収集能力を最大化し、情報体次元（イデア）の持つ膨大な演算能力を生かした全世界観測システム――名付けた名称は［八咫烏（ヤタガラス）］。身に着けたバイザーは、そのアクセスのためのツール。

（新ソ連艦隊の通信を傍受。能登沖にいる小型戦闘艇がここから分離し、佐渡沖に行く作戦内容を確認。金沢基地にこの情報を転送――――完了）

思考操作自体はＣＡＤの歴史から見れば真新しいものだが、悠元は［トーラス・シルバー］として活動する以前から思考操作型ＣＡＤの設計に取り組んでいた。公的な戦闘記録に残っていないが、沖縄防衛戦において悠元は初めて実戦で思考操作型ＣＡＤを使用し、大亜連合軍を悉く葬っている。

尤も、その記録が残らないように悠元が細工をしていた。理由は余計な情報漏洩によって日本へのヘイトを向ける輩を減らすのが目的だった。

能登半島沖の新ソ連艦隊から小型戦闘艇が発進したのと同時に、新

潟基地から高速艦が発進した。悠元はここで視点をウラジオストクに向けて読み取る。
（ベゾブラゾフはウラジオストクの新ソビエト科学アカデミー支部にいる……あれから1年半以上は経っているから、再建していてもおかしくはないか）
以前存在したコンピューターは、悠元の［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］の影響を受けて融解した。悠元がそのことを知ったのは『灼熱と極光のハロウィン』が落ち着いて戦後の情報整理をしていた時だった。
そして、当該の建造物からベゾブラゾフの魔法発動兆候が確認された。それを確認すると、悠元は左手に持った［ワルキューレ］を構える。
「……いくら茶番劇とはいっても、味方を失わせはしない」
悠元が引き金を引くのと同時に、遥か先に感じる魔法発動――――［トゥマーン・ボンバ］の目標は言うまでもなく新潟からの高速艇。それに対して悠元が発動した魔法は［鏡の扉（ミラーゲート）］によって、味方の高速艇を佐渡島の南側に強制転移させた。それと同時に、北方に何故かいる漁船団の周囲に霧を発生させ、１００キロ東側にずらした。
余りの出来事に味方の高速艇群が停止したようで、これで将輝が戦略級魔法を使う懸念材料は解消された。そして、佐渡方面から立ち上る水蒸気爆発と、魔法の発動によって制御しきれなかった余剰想子の波動を悠元は感じる。
（正義感を持つのは別にいいが……こちらにとばっちりが来ないことを祈りたいわ）
内心でそうぼやくと共に、ウラジオストクにいるベゾブラゾフがまだＣＡＤと接続していることを確認し、［貫通衝撃（フィードバック・ブラスト）］を将輝の戦略級魔法［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］と接続させ、［トゥマーン・ボンバ］とベゾブラゾフ本人の魔力パスを［天陽照覧］で再構築して対象に膨大な情報を流し込む。
［天神の眼（オシリス・サイト）］で確認すると、ベゾブラゾフは情報の過剰流入で床に倒れ込んでいたが、辛うじて息はあるようだ。別に死んだとしても、それはそれで儲けものだが……やはり伊達に［十三使徒］の一角を担っ

ていないようだ。
　ベゾブラゾフに対する処置を終えると、悠元は能登半島北西沖に［オーディン］を構えて引き金を引く。
「――［流星雪景色（ミーティア・スノーライト）］、発動」
　悠元が引き金を引いた瞬間、新ソ連艦隊が〝凍り付いた〟。
　戦略級魔法［流星雪景色（ミーティア・スノーライト）］。本来の用途は、気体に近い粒子として浮遊する想子や霊子の振動――情報関連粒子の活動を全てゼロにすることで、一種の〝時止め〟に近い状態を生み出す魔法。
　加減次第では心臓の鼓動すらもゼロに出来てしまうため、相手に何もさせることなく完封出来てしまう凶悪な魔法。元々異常聴覚を克服する一環でその感覚を制御する方法を模索中に完成してしまった魔法で、真夜から［流星群（ミーティア・ライン）］を修得したことで完成した魔法である。
　悠元はそのまま飛行魔法で飛び上がり、マッハ２近い速度で新ソ連艦隊のミサイル艦に何の躊躇いもなく降り立った。艦のエンジンが止まっているだけでなく、船員たちもその時の状態で〝止まった〟まま。まるでワンシーンを切り取ったかのような光景は、不気味な静けさを漂わせていた。
　悠元はそのままバイザーに内蔵された通信機能で、対峙している国防海軍の艦艇に連絡を入れる。
「こちら、国防海軍大将・上条達三。聞こえますか？」
『こちらミサイル艦「わかさ」。ハッキリと聞こえている。先程新ソ連の艦艇に降り立ったのは貴公か？』
「ええ。魔法で新ソ連艦隊を無力化いたしました。こちらで艦隊全てを領海内に引き込みますので、人員を手配して新ソ連兵の拘束をお願いしたい」
『……了解した。味方の被害を出さなかった手腕に感謝する』
　そして、悠元は移動魔法で潜水艦を含む新ソ連艦隊を領海内に引き込み、小松基地から緊急発進した空軍機や出撃していた艦隊が見守る中、金沢基地に全て収容された。艦船の乗員については、基地地下の収容所に一旦収監される形となった。
　西暦２０９７年７月８日。一条将輝は新たな戦略級魔法師となっ

た。
　悠元は仕事を終えた形だが、まだもう一仕事残っていた。そのまま［ドレッドノート］を駆って国防空軍小松基地に出向いた。今度は国防空軍特務大将の肩書きを用いてのものだが、基地司令は悠元の存在を予め伝達されていたためか、悠元をそのまま司令室に案内させた。
「国防空軍特務大将、上条達三である。此度は統合軍令部の委任を受けて現地に出向いた次第だ」
「これは……それで、大将閣下は如何なる御用でしょうか」
　基地司令は大佐、そして悠元は最高位に準ずる特務大将。一体どんな用件で参ったのかと尋ねたわけだが、司令は彼の目的が当基地にいる劉麗雷ではないかと睨んでいた。
「今回の訪問目的は〝事情聴取〟。戦略級魔法師・劉麗雷の亡命の真偽が難しいと相談を受け、本官が自ら出向いた次第だ。ただ、その際は人数に制限を設けないが、見届け役の士官を最低でも一人は置いていただきたい。この状況で酷な要求かと思われるが」
「いえ、一人ぐらいならば問題はないでしょう」
　それこそ十数人を要求されるのでは、とも思っていたところに『一人でも構わない』と公言した。このことで司令の眼の前にいる人間が魔法師だという証左でもあった。
「それと、一条家から派遣されている方々にも御同席願おう。ただし、劉麗雷の護衛部隊は別室での待機となるようお願いしたい」
「もし、聞き入られなかった場合は？」
「その時は本官が対処する。最悪殺すことも覚悟して頂きたい」
「……畏まりました」
　劉麗雷、一条剛毅と一条茜は同室にいたため、事情聴取のセッティング自体はスムーズに進んだ。護衛部隊の林隊長は最初難色を示したが、あくまでも事実確認であることを言い聞かせたのか、渋々認めた。
　悠元が三人のいる部屋に入ると、茜が表情を明るくさせて悠元に抱き着いた。
「悠元お兄様！　でも、何故ここに？」

「――茜ちゃん、今日は神楽坂悠元としてここに来たわけじゃない。国防空軍特務大将・上条達三としてここにいる。それは理解してほしい。一条殿も宜しいですか？」
「……ええ。心得ました」
　剛毅は悠元が国防軍と深い関わりを有することは知っていたが、九島烈よりも高位の階級を有するということに対して、彼が戦略級魔法師でもある証左を感じ取って頭を下げた。そして、悠元は視線を劉麗雷に向けた。
「そして、劉麗雷少尉。こんな形での再会になるとは思ってみなかったが、ここでの生活は大丈夫か？」
「は、はい。その、お師匠様もお久しぶりです」
「お師匠様って、手紙の呼び名を使わんでくれ……まあいい。それでは、ここに来るまでの経緯を尋ねたいから、嘘偽りなく教えてくれるか？」
「分かりました」
　そうして和やかな雰囲気で始まった事情聴取は、悠元が劉麗雷に対して亡命迄の流れを事細かく聞くという形式だった。元々〝音〟に敏感な悠元だからこそ、劉麗雷が嘘をついていないと直ぐに読み取れた。
　そうして事情聴取を終えると、悠元は一息吐いた。
「成程、ご協力に感謝する。さて、ここからは神楽坂悠元として振舞う訳だが……劉麗雷。申し訳ないが、君の護衛部隊は拘束させてもらった」
「えっ……その、理由をお尋ねしても宜しいですか？」
「端的に言えば、〝スパイ〟の線が濃厚だからだ」
　劉麗雷は確かに日本への亡命を望んだ訳だが、そのことをヴォズドヴィデンカ脱出の直前まで誰かに打ち明けなかった。これを真と見た場合、彼女の同行を事前に把握できた人間はいないはずだ。
「ヴォズドヴィデンカからビジネスジェットが飛んだ――この事象だけ切り取ったとして、もしかしたら民間人がドサクサに紛れて日本へ逃げ込んだ、という可能性も当然残る。だが、新ソビエト連邦政府

は『戦略級魔法師・劉麗雷の引き渡し』を真っ先に要求した」
「……神楽坂殿は、新ソ連がその時点で、劉麗雷がそのジェットに乗っていたことを把握していた、と考えているのですか？」
「考えているのではなく、劉麗雷の述べた状況と明確な証拠に基づく発言と思ってくれていい」
もし、新ソ連が『ヴォズドヴィデンカから逃亡した人物に劉麗雷が乗っていた可能性が高く、日本に逃げ込んだビジネスジェットの乗員の引き渡しを要求する』となれば、偶発的な現象だと認識してしまう可能性もあった。
だが、新ソ連は最初から劉麗雷がビジネスジェットに乗っていることを把握していた。その気になれば、ヴォズドヴィデンカを戦闘機や戦車、［トゥマーン・ボンバ］によって爆撃し、彼女を拘束する手段も採れたはずなのに、それをしなかった。
「その要因を生み出したのは護衛隊長の林衣衣（リンイーイー）――――新ソ連のスパイ〝ガスパジャー・タイガ〟。彼女がヴォズドヴィデンカの民間空港にいた際、管制塔の通信で新ソ連軍側の〝ユキヒツジ〟と呼んでいた工作員と通信を交わしていたことが判明した」
「林隊長が……彼女は、どうなるのですか？」
「この国に害を齎した元凶とも言うべき人間だが、それを裁くのは大亜連合の責任だ。護衛部隊全員の聴取が終わり次第、殆どの人間は大亜連合に強制国外追放とする」
この国で裁くことは可能だが、敵国のスパイを自国内で処理して面倒になるよりは、大亜連合に押し付ける。併せて、今回のスパイに関してメディアへリークしておくことで、メディアのガス抜きと大亜連合に対する不信感を根付かせることにある。
元々長い歴史を見ても、変わりようがない民族主義者と仲良くするなど無理難題に近い。だったら、適度な付き合いをしつつ、必要に応じて肘鉄を撃ち込めばいい。大亜連合側が艦隊を繰り出した場合、軍港諸共消え去ってもらうだけだ。
「え？　じゃあ、レイちゃんはどうするの？」
「そこまで仲良くなったのか……劉麗雷には帰化してもらうつもり

だ。引き取り先は一条家にお願いしようと思っている。対外的に見れば、戦略級魔法師となった将輝が劉麗雷のストッパー役となるわけだが」
　正直、劉麗雷のストッパー役の方が遥かにマシだと思う。悠元の場合は達也だけでなく深雪のストッパー役に成り得ている為、心労の度合いを比べると将輝がどれほど楽なのかが分かるだろう。
　最初は単なる友人関係の構築だけだったはずなのに、どうしてこうなったのだろうと思う。まあ、こちらも深雪に惚れた弱みがあるから、仕方がない部分もあるのだろうが。
「一条家に……宜しいのですか？」
「元々対処していたのは其方ですので、このままそちらにお任せした方が劉麗雷本人も気が楽でしょう。幸い、茜ちゃんと仲良くなっているようですし……自分に対する脈が無いのは助かりました」
「…婚約のお話は噂ながら聞いてましたけど、本当だったんですね」
「レイちゃん、お兄様はこれでも婚約者だけじゃなくて愛人もいるからあいたっ!?」
　剛毅の問いかけに悠元が答えると、劉麗雷が驚きつつも呟き、茜が悠元の実情を吐露したため、悠元は茜に対して軽いチョップを脳天にかました。
　その実情を耳にした剛毅の率直な感想は、将輝に無い甲斐性を持ち得ている時点で勝負以前の問題だと改めて感じた。
「神楽坂殿の甲斐性があの馬鹿息子に1ミリでも備わっていたら、少しは安堵できるのかもしれませんが……ところで、現在婚約されている方と婚姻を結ぶのは何時になりますか？」
「自分が１８歳になってからとなりますので、婚約者の半分は今年度中になりますが……成程、将輝に対する牽制ですか？」
「あ奴には事実を認識してもらわねば、安心して一条の家督を渡せませんからな。その際に神楽坂殿のお力を借りるやもしれませんが、その時はどうかお願いしたい」
「構いませんよ。最悪、自分が将輝の顔面を凹ます勢いで殴り飛ばしますが」

どうやら、将輝が深雪に対する想いを諦めきれていない危機感が残っている……ということなのだろう。真紅郎が『もしもの時は一発殴る』と公言する辺り、将輝の諦めの悪さは筋金入りなのだろうと思う。
「どうせなら、劉麗雷が将輝といい関係になれば、多少は薄れるかも知れませんが」
「それはナイスアイディアだね。レイちゃん、そうなったら私は応援するよ！」
「え、ええっ⁉　まだそんなに会っていませんのに……」
悠元の唐突な提案に茜が乗っかると、劉麗雷は慌てふためく。そして、彼女の頬が微かに赤く染まっている所を見るに、これは脈があるということを剛毅もすぐに判断した。
「息子には、早まった真似は控えるように釘を刺しておくとしよう。両方の意味で」
「一条さん⁉」
「ただ、問題はあのおバカな兄さんだね。深雪さんから直々に振られたのに、諦めていない時点でバカの極みだよ。だって、それって深雪さんの言葉を信じていないに等しいんだもの」
「……まあ、もしもの時は相談に乗らせていただきます。事態の回避目的でしたら魔法を教えることもできますので」
［封精霊魂］は天神魔法に名を連ねつつも、厳密に言えば天神魔法ではない。現代魔法における物理的なフィルターを特定の行為に限定することで効力を高めている為、他人に教えることにハードルは存在しない。
ただ、その魔法が蔓延して犯罪行為が増えても困る為、天神魔法の中に組み込まれることで必要以上の教導を避けている形だ。
「それで、深雪さんと結婚するのは何時？」
「俺の誕生日である２月１４日の予定だ。尤も、結婚式をやるとしても身内だけに限定するし、茜ちゃんは高校を卒業してからになる」
「……そうやってちゃんと気遣われるから、皆お兄様に支配されたいって思うよ」

「将来の妻や使用人を下僕扱いなんて、失礼にもほどがあるだろうに。親しき仲にも礼儀ありだよ」
深雪だって二人きりの時だけ許容しているが、それ以外の場面では居候の時の呼び方で通している。その反面、マンションで住み始めてから愛を確かめ合う回数が軒並み増えている。一条家に戻った後で深雪に誘惑されたこともあった。その場は一旦断ったが、その日の夜は激しい戦闘へと発展した。
「お師匠様。私に恋愛のイロハをご教授願えませんか？」
「俺にって……」
魔法戦闘による疲れよりも、夜間戦闘に対する経験値が増えてしまうのは仕方がない事とはいえ……18人全員を一晩で屈服させても尚、尽きることのない性欲の化身を見て、深い溜息を吐いた記憶は今後も忘れることはないだろう。
結局、その後も深雪に強請られて熱い夜を過ごしたのは……ここだけの話。

奪還・未来編

卵が先か、鶏が先か

　巳焼島のＣＡＤ開発研究棟にて、ハンスはテスターをこなしていた。研究者からすれば、世界最高峰レベルの魔法師によるテストデータなど滅多に取れるものではないため、ハンスの申し出を快く引き受けていた。

　そんなハンスが彼らのテストに付き合っているのには、理由があった。

　元々ルーデルによって魔法力や魔法知覚力をかなり引き上げられた形だが、それに伴ってローゼン・マギクラフト製のＣＡＤでは、最早足枷になりつつあった。それに代わるＣＡＤの試作品を悠元から渡されたが、それのテストデータを基にハンス専用のＣＡＤを製作してくれる手筈となった。

　ハンスとしても、十全に戦える状況でなければ守り切れない。小休止を入れていたところで突然想子波動が襲ってきた。

『ほう、想子波動か。しかし戦略級魔法にしては荒っぽいな』

（今のを戦略級魔法だと判断できるお前も大概だがな……ん？　北東から妙な気配？）

　ルーデルの価値観など今更驚くことではないにせよ、ハンスはその波動の直後に島の北東部から気配を察した。そして、それは無論のことルーデルも察していた。

『どうやら、目的の相手のようだが……どうする？』

（増援は来てくれるみたいだが、俺らで片を付ければ御の字だ。しかし、あの魔法で本当に行けるのか？）

　対パラサイトの魔法――――ハンスはルーデルに言われるがまま覚えた形だが、ほぼぶっつけ本番で通用するかどうかも未知数。別にルーデルを疑うわけではないが、魔法師ですらなかった人間……いや、魔王じみた存在に今更常識を問うのも馬鹿らしいと結論付ける。

（……まあいい。ルーデルに慣性抜きで飛ばされるよかマシだ）

『それでいいのだよ、エルンスト』
常識をあまりにも逸脱したからこそ、常識に縛られることを諦めたハンス。言い換えるとするならば、現実逃避にも近い有様なのは言うまでもないが。
◇　◇　◇
本来ならば島の守備隊が防衛に出る形だが、そのさらに前方には装甲服を身に纏ったジェラルド・バランスが立っていた。輸送艦とそこから発進する二隻のボート。それらから［パラサイト］の気配を感じていた。
その傍には、同じく装甲服を身に纏ったアニエス・ヴィンセントがＣＡＤを構えていた。
「……いいの、ジェイ？」
アニエスが心配したのは、同じＵＳＮＡの人間同士が戦うということ。だが、ジェラルドの表情はより一層真剣なものとなった。
「俺は大統領閣下からリーナの護衛を任されている。連中がリーナの殺害を目論むというのならば、たとえ相手が同胞であっても討つ」
ジェラルドは飛行デバイスを起動し、拳銃形状のＣＡＤを構えて飛び上がる。ジェラルドは［分子ディバイダー］で二隻のボートを瞬く間に破壊し、各々のボートからパラサイト化した兵士が上陸する。
スターズが四名にスターダストが２０名。だが、それを見てジェラルドの引き金が鈍ることはない。
「……余りにも愚かだな。母が見れば『軟弱者』と吐き捨てるだろうよ」
「その声……ジェラルド・バランス!?」
「シャルロット・ベガ、レイラ・デネブ、ゾーイ・スピカ、ジェイコブ・レグルス……揃いも揃って悪魔に魂を売ったか」
少なくともジェラルドが見た記憶の中では、『スターズ』がこれまでパラサイトに屈することはなかった。だが、現代魔法の性ゆえに古くからの知識が捨て去られ、結果として己の首を絞める有様となっていた。
「そこをどきなさい！　私たちには裏切り者のシリウスを粛清する任

務がある！」
「俺は大統領閣下から直々にリーナの護衛を任されている。お前らがいくら軍としての任務で来ていても、よもや閣下の言葉を嘘だと吐き捨てるような真似をするのか？」
「黙れ！」
デネブが移動系魔法で距離を詰めるが、ジェラルドはそれを意に介することなく彼女の首を締め上げるように掴み、そのまま地面に叩きつける。
「ガハッ!?」
「てめえらはもう人間じゃないんだろ？　なら、多少荒っぽくとも回復ぐらいするだろう」
「貴様！」
レグルスが自己加速魔法でジェラルドに突っ込むが、その合間に入ったアニエスが対物理シールドで侵攻を阻む。ベガとスピカも攻撃に加わろうとするが、そこへ隕石のように飛来する気配を感じて飛びのく。
地面に衝突して衝撃波が響き渡り、二人の人物――――ハンスとナーディアが姿を見せた。
「悪い、遅刻した。この分の埋め合わせはする」
「おー、化物が雁首揃えてるねえ。あの『スターダスト』は私がやっちゃうね」
そういってナーディアは『スターダスト』の一人に切迫すると、首筋に噛み付いて血を吸い上げる。ほんの1秒程度だが、血を吸われた『スターダスト』の兵士は、まるで糸が切れたように地面へ倒れ込んだ。
「うへー、まっず……やっぱり不純物が混じってると美味しくないよ」
「……人の血を吸って美味しいと言い始めたら、それはそれで人間を辞めてますよ」
「そうだね、それもそっか」
「暢気に話している場合か!!」
ナーディアとアニエスの言葉に対し、何故か敵であるレグルスが

ツッコミを入れるという始末。だが、彼の攻撃はアニエスのシールドで完全に防がれている。
「貴様ら……っ!?」
「――――遅い」
スピカが［分子ディバイダー・ジャベリン］を行使しようとしたところで、ハンスが彼女の胸元に強烈な拳を撃ち込み、触れた先から強烈な衝撃波を放たれて、スピカも意識を飛ばされる。
いくらパラサイトと言えども、憑依している人間抜きでは行動が制限される。いくら再生が早かったとしても、意識の有無は憑りついたものに依存してしまう。それが例え周囲に同じパラサイトがいたとしても。
「ジェラルド・バランス、貴様分かっているのか!!」
「そうだな……分かっていることがあるとすれば、てめえらがやっていることは同盟国で堂々とテロ行為を働いていることだな……じゃあ、どこまで回復し切れるのか勝負だ」
「っ!?」
ジェラルドがそう呟いた直後、デネブが叩きつけられた地面の周囲が崩れていく。そして、地面が砂となってデネブが呑み込まれていく。
「貴様、道連れに……!?」
「安心しろ、殺しはない。だが、その悪魔は排除させてもらう――――
［スピリット・ディバイダー］、発動」
デネブの下半身が呑み込まれたところで、ジェラルドが新たな魔法を発動。その魔法を放った直後、何かがデネブの背後から抜け出し、その背後には拳ほどの大きさの透明な石が転がった。
その行為によってデネブの意識が途絶えたことを確認した後、ジェラルドは素早くその石を拾って懐に仕舞い、ベガに照準を向けた。
「デネブ!? ジェラルドォッ!!」
「哀れ過ぎて目も当てられん。貴様も沈め」
ベガの攻撃など悠長に待つことなく、ジェラルドは［スピリット・ディバイダー］でベガの意識を飛ばし、生成された石を拾った。

「……すまんが、後は任せていいか？」
「別に構わん。まあ、休んでおけ」
「ああ、助かる」
　残った敵をハンスとナーディアが蹴散らしに行く光景を見つつ、ジェラルドは砂地となった地面に座り込んだ。その様子を見たアニエスがメットを外して駆け寄った。
「ジェイ、大丈夫？」
「ああ、問題ない。慣れない魔法を使って少し疲れただけだ」
　［スピリット・ディバイダー］――――対人戦闘特化型戦略級魔法で、［分子ディバイダー］の雛型とも言うべき魔法。母のヴィルヘルミナがベーリング海での戦闘直前に完成させ、ジェラルドの手に渡されたＵＳＮＡの第四の戦略級魔法。
　この魔法は想子構造体を破壊し、精神と肉体の接続を完全に切り離すことが可能で、今回は憑依したパラサイトの接続構造体を破壊することで行動不能に至らしめた。
　しかも、この魔法は母が独自で設計をしていたらしく、『こんな魔法を持たせたところで、スターズがただの殺し屋集団に成り下がるだけ』と述べていたことからして、スターズに対して技術提供するつもりはなかった。
　その代わり、数段ダウングレードさせた［分子ディバイダー］を提供することで、［スピリット・ディバイダー］への追求を避けた。ジェラルドは今回使用して、改めてこの魔法の恐ろしさを肌で感じた。
「それで、彼女たちは本当に死んでないの？」
「ああ。この魔法で［パラサイト］に侵食された精神は封じれたが、この先の処置は悠元に任せようと思う。正直、こんな代物だなんて教えてくれたらよかったのに……」
　しかも、分離された精神を実体的に封じ込めるというのは、さしものジェラルドですら予想していなかったことだった。ただ、この先の処置は悠元に任せることとなるが。
「……って、いつの間にか元『スターズ』の人たちが加勢してるんだけど」

「……本当だな」
　二人が見つめる先では、ハンスとナーディアに加え、生き返った形となった元『スターズ』の隊長・副隊長クラスがこぞって『スターダスト』に攻撃していた。これまでの鬱憤をぶつける様にも見えてしまい、正直パラサイトに侵食されているとはいえ、余りにも不憫に思えてならなかった。
　そして、二人の許に装甲服を着た一人の女性――――エレノア・ポラリスが近付く。
「ジェイ君、無事？」
「ノアさん……ええ、少し疲れただけです。でも、良かったのですか？」
　彼らとて、元はＵＳＮＡの人間。かつての同胞に対して力を振るうことに抵抗が無いとは言えない。そんな疑問に対して、エレノアが微笑んだ。
「皆とも話したけど、私たちは既にこの世から一度去ったようなもの。家族や友人が生きていたとしても、彼らが折角立ち直りつつあるときに野暮なことはしたくないもの」
「ノアさん……」
「これからはジェイ君たちが時代を作る番。次の〝シリウス〟を背負うということは、大変だよ？」
「そんなもの、散々見て来ましたから」
　先代の〝シリウス〟を間近に見てきた。今代の〝シリウス〟も陰ながら見守っていた。エドワード・クラークが残した爪痕は深いが、それでもやらなければならないことは多い。それが、母から戦略級魔法を託された責任だと感じていた。
「そっか……それで、ジェイ君の一番は誰になるのかな？　そこにいるアニエスちゃん？」
「ノアさん!?」
「……それはもう少し考えさせてください」
　結果、巳焼島に上陸した２４名のパラサイトは全員無力化された。その後、巳焼島に来た達也らがその功績を聞いたとき、ジェラルドに

対して『色々大変だろうが、頑張ってくれ』とエールを送ったのだった。
ただ、その身柄についてどうしようか思案していたところ、彼らを輸送していた高速輸送艦『ミッドウェイ』が巳焼島に接近してきた。また敵襲かと思ったが、その船の甲板には戦闘服を身に包んだ修司と由夢が立っていた。
そして、悠元が立てた計画に必要な人員として無力化したパラサイトを連れていく――という修司の提案に対して、代表する形で達也がそれを受け入れた。
「――というわけだが、連れて行ってもいいか？」
「そうしてくれるとありがたい。下手に拘留すると母上が余計な興味を持ちかねないからな」
「……達也君も家族には苦労してるんだね」
「この歳になってからするとは思わなかったがな」
元々、戸籍上の父親の件で面倒だったことに加えて、妹同然の深雪のことで悠元に対する詫びの気持ちもあった。そこに加えて実母である真夜の我儘となれば、いくら情動があまり動かない達也でも疲れていた。
すると、ジェラルドが懐に仕舞っていた石を修司に差し出した。
「こいつがレイラ・デネブとシャルロット・ベガの精神を封じた石だ。処置は任せていいか？」
「ああ、受け取っておく……話は悠元から聞いているよ、ジェラルド・バランス。いや、未来の〝シリウス〟と呼んだ方が良かったか？」
「ジェラルドかジェイで呼んでくれ。俺の方が年上だが、実力で言えばお前たちの方が強いだろうからな」
このまま持ち帰ることもできたわけだが、ジェラルドとしてはパラサイトの面倒事を処理してくれるならば、その専門家に引き渡した方がいいと判断した。それに、悠元の知り合いならば悪いようにはしないと確信めいた思いを持っていた。
「何にせよ、一段落した訳だが……」
そうハンスが呟いた直後、背後に突如何かが落下した。気配も音も

感じずにいきなり衝撃波と巻き上がった大量の砂が飛んできたため、ジェラルドらは警戒した。だが、達也はその気配の消し方で誰が来たのかを一瞬で悟ってしまった。
　そうして晴れる土煙の先には、悠元が立っていた。
「すまん、日頃の癖で音を遮断していた」
「お前なら今更だが……新ソ連の方は大丈夫か？」
「ああ、ケリをつけてきた。修司に由夢、『ミッドウェイ』のほうは任せた」
「了解、悠元。さてさて、人様に喧嘩を売ったあぶちっ!?」
「お前が喧嘩を売りに行くな……」
　修司と由夢が収容されたパラサイトたちを『ミッドウェイ』に乗せ、そのまま巳焼島から離れていくのを見送ると、悠元はハンスとナーディアの二人に視線を向けた。
「さて、ハンス・エルンストにナーディア・エルンスト。何か頼みたいことがあるんじゃないのか？」
「あ、ああ……恥を忍んでお願いしたい。レオニード・コントラチェンコをどうにかして助けられないか？」
「私からも、その、お願いします！」
　二人がレオニード・コントラチェンコと何かしらの繋がりを持っていることは調べがついていた。そして、この二人が危惧しているのは……コントラチェンコが戦略級魔法で特攻紛いの行動に出る可能性を考えてしまったということ。
「ふむ……なら、会いに行くか」
「へ？」
「えっ？」
　そう思案した直後、悠元は二人を掴むと［鏡の扉（ミラーゲート）］を発動させ、黒海沿岸の新ソ連基地――レオニード・コントラチェンコの私室に直接飛んだ。そこには銃をデスクの上に置いて思案するコントラチェンコの姿があり、彼の目前が突然白く輝き、そこから三人の若者が突然姿を見せたことに目を丸くしていた。
「お、お主は……ＦＬＴの会見に出ていた少年で、神楽坂悠元と名乗っ

ていたな」
「初めまして、レオニード・コントラチェンコ閣下。今回は知己となった二人の要望で話し合いをしに来ました」
「知己……ハンス・エルンストにナーディア君までとは」
　互いにロシア語で会話をしているわけだが、コントラチェンコはハンスとナーディアの姿を見て、悠元の述べたことが真実である、と信じざるを得なかった。
「いきなり引っ張るとか……って、コントラチェンコの爺さん！」
「コントラチェンコのお爺ちゃん！　よかった、まだ生きてたんだね……」
「いや……お主たちが来なければ、戦略級魔法を放った直後に命を絶つつもりだったが……生き永らえてしまったか」
「やはり……」
　悠元はハンスとナーディアの表情からして〝時間は余りない〟と判断し、バレるのも覚悟の上で［鏡の扉（ミラーゲート）］を使用した。それが結果的にコントラチェンコの自殺を食い止めた形だった。
「閣下、一つお聞かせください。何故ウクライナ・ベラルーシ再分離独立の旗頭となったのですか？」
「……いろんな理由はある。だが、そう決めた最大の理由は、娘と義理の息子、孫を無実の罪で葬った現政権に対する復讐だ」
　コントラチェンコの説明では、元々義理の息子は政府の役人として要職に就いていた。娘とは恋愛結婚だったが、ナターリヤだけでなく、彼女と歳の離れた孫もいた。孫は既に成人しており、新ソ連軍の士官として勤勉だった。
　だが、それを妬んだ軍の上司が無実の罪を被せて殺し、それが露見しないように村ごと焼いたのだ。結果として、コントラチェンコは娘夫婦と孫を同時に失った。
「わしは軍人だ。それに異論を唱えることも出来なかった。そんな中、辛うじて生きていてくれたナターリヤの存在は嬉しかった。だが、その生存が知られればわしであっても殺すだろう。そのためにベゾブラゾフ博士を差し向けることも想定できた」

だからこそ、生存が知られないようにハンスへ預け、そのまま国外に逃亡させた。南アメリカ連邦共和国まで逃げ込んでしまえば、いくらベゾブラゾフと言えども［トゥマーン・ボンバ］で抹殺を目論んだ場合、漏れなく［シンクロライナー・フュージョン］が新ソ連の領土を焼き払うのが目に見えている。

そんなリスクを新ソ連政府とて許容できる筈がない。

「博士（ドクタル）の興味が日本に向けられていることも幸いして、儂は今日まで生き延びられた。だが、こんな状態の儂が戦略級魔法を使えなくなれば、奴らは喜んで粛清するだろう。ならば、せめて一矢は報いたい……これが、儂の決めた道だ」

レオニード・コントラチェンコ……新ソ連の軍人でありながらも、家族を政府に殺された。唯一生き残った孫娘を守るために、せめてもの復讐を成し遂げようとする。それはまるで、かつての四葉元造を思い起こさせるような在り方であった。

戦略級魔法師の在り方

レオニード・コントラチェンコの覚悟。それを聞いたハンスとナーディアは黙りこくってしまった。だが、それを聞いた悠元の反応はというと、逆に呆れていた。

「――全く、どいつもこいつも優柔不断に程がある」

「悠元？」

「どうせ死ぬつもりならば……［十三使徒］レオニード・コントラチェンコにはここで退場してもらうか」

「ま、まさか殺す気なの!? それだけはやめて！」

悠元はハッキリと〝退場〟という言葉を使ったが、それに対してナーディアが〝殺す〟のだと過剰に反応した。だが、ハンスは悠元の言葉の真意を悟って、ナーディアの肩を掴んで抑えた。

「落ち着け、ディア。悠元は何も彼を殺すとは一言も言っていないぞ？」

「で、でも！ そんな風に聞こえるような言い方をしたから……！」

「……誤解があるようだから言っておくが、俺はあくまでも新ソ連の軍人魔法師としてのコントラチェンコを退場させると言っただけで、コントラチェンコ当人を殺すとは言っていないぞ？」

「あ……お騒がせしました」

誤解を抱いたナーディアに対し、悠元が改めて説明をすると、早とちりしたことに対して顔を赤らめながら謝罪の言葉を口にする。その一方、一体何をする気なのかを悟れずにいたコントラチェンコが躊躇いがちに尋ねる。

「神楽坂悠元……貴殿は儂に何を望むのだ？」

「軍人としての最後の務めを果たした後、人間として余生を送って頂く。貴方の孫娘の身元をきちんと保証できる人がいれば、ＳＳＡのブレスティーロ大統領も納得して頂けるでしょうから……私の祖父に続いて、こんな形で助けることになるとは思いもしませんでしたが」

「祖父……名は？」

「上泉剛三――自分の母方の祖父です。その祖父から伝言を預かっ

ていましたが……『儂に助けられた命を無駄にして、孫娘を泣かすような真似をしたら、地獄から引き摺り戻す』とのことです」
　コントラチェンコは悠元の素性を聞かされて、椅子に深く凭れ掛かった。よもや、数十年前に新ソ連艦隊を葬った上泉剛三の孫に命を救われるということに対して、最早勝つとか負けるとかの次元の話ではない……と察してしまった。
「……そうか、上泉剛三殿に……それで、いかにして儂をここから連れ出すのだ？　外には兵士の目もある。そう簡単には脱出できぬぞ？」
「いえ、その心配は要りません。部屋ごと入れ替えますので」
『???』
　一体何を言っているのだ……と首を傾げるハンス、ナーディア、コントラチェンコの三人に対し、悠元は［鏡の扉（ミラーゲート）］をコントラチェンコの執務室に範囲指定して発動。それと同時に［ラグナロク］を取り出し、黒海基地と新ソ連の主要軍事施設に対して［天極劫火（オメガ・フレア）］を発動させた。
　一通りの作業を終えて［ラグナロク］を仕舞い込むと、三人に話しかけた。
「さて、コントラチェンコ〝さん〟。後は残りの余生を緩やかにお過ごしください」
　そう述べた直後に扉が開かれ、姿を見せたのはＳＳＡのブレスティーロ大統領夫妻。そして、コントラチェンコの孫娘であるナターリヤであった。彼女は祖父の姿を見て、一目散に駆け寄って抱き着いた。
「おじいちゃあん！」
「おっと……これは、夢ではないのですな？」
「ええ、夢ではありませんよ、レオニード・コントラチェンコ殿。エルンスト大佐に悠元君、それに……君がセナード大統領から聞いていた大佐の妹君だね？」
「は、はい！　え、ええっ!?　一体どうなってるの!?」
　扉を開けたらＳＳＡの大統領が姿を見せること自体不思議な話。何せ、この部屋はＳＳＡの大統領官邸の空き部屋と入れ替えられたの

だ。事情が呑み込めないナーディアは無論のこと、ハンスも何が起きたのかを理解できなかったため、悠元に尋ねた。
「その、悠元。一体どういうことなんだ？」
「遡るとしたら、今年3月の話になるかな」
　西果新島での事件解決後、ブレスティーロ大統領から内密にナターリヤの祖父であるレオニード・コントラチェンコを政治的な取引で亡命させることは出来ないかと相談を受けた。ただ、相手が［十三使徒］である以上、何かしらの情勢の変化が無い以上はコントラチェンコが動く見込みは無いと踏んでいた。
「彼女――ナターリヤ・コントラチェンコの身元保証をする意味でもコントラチェンコ閣下の生存は必須。最悪はベゾブラゾフを拘束して政治取引で引き渡しを要求しようかと思ったんだけど、まさか閣下がこんな行動に出るとは思ってなかったからな」
「成程。ここまで来た魔法のことは……聞かないことにしていいか？」
「そうしてくれると助かる。説明するのが面倒だし」
　ハンスは悠元の非常識さを改めて実感した。相手に姿を掴ませず、世界各地に神出鬼没の如く姿を見せることが出来る。そんな魔法師など、上泉剛三以上に脅威としか言いようがない。そんなのを敵に回すぐらいならば、互いの妥協点を探って干渉しないことが一番だと感じた。
「へー、君がナターリヤちゃんなんだね。私はナーディア・エルンスト。ハンスは私のお兄ちゃんだよ」
「えっと……お姉ちゃん？」
「……お兄ちゃん、絶対に結婚しないと私が許さないよ」
「お前まで堀を埋めに来るなぁ!!」
　そして、ナターリヤとナーディアの邂逅によって、ハンス・エルンストの堀がまた一つ埋められる羽目となり、絶叫に近い叫びが部屋中に木魂したのだった。
◇　◇　◇
　ハンスはＳＳＡに残る形となったが、ナーディアは悠元に同行する

形で日本へ帰ることとなった。彼女曰く『日本でお目当ての彼氏を見つける』とのことらしいが、その当ては適当に見繕うとのこと。なお、悠元や達也はその対象外のようで、本人の言い分としては「フランスに連れていくこともできないし、逆に破滅しそうで怖い」らしい。誠に遺憾である。

ただ、逆に増えないという保険が出来た以上、それはそれで良かったのかもしれない。すると、着信音が鳴ったので端末を取り出して操作する。

「……メール？　真一からか」

真一からのメールでは、輸送艦『ミッドウェイ』によってパラサイト化した兵士の引き取りが完了し、このまま『ミッドウェイ』でパールアンドハーミーズ環礁の海軍基地に移動するとのこと。

輸送機で封印したアークトゥルスについては『そのまま治療しても構わない』との文言が書かれていた。原作とは違ってベガやデネブ、レグルスが生存している為、これ以上抱えて余計な騒ぎになることを懸念してのものだった。

「それで、悠元さん。この先は本当に手伝わなくてもいいの？」

「こっから先は日本とＵＳＮＡ、新ソ連の問題だ。まあ、ベゾブラゾフが手を出す前に全ての片を付けるつもりだが」

ベゾブラゾフを再び動けない状態にしたし、［アルガン］クラスのＣＡＤを準備していたとしても、今度は列車どころか線路諸共消し去る。それに、新ソ連軍の主要施設に対して同時爆撃を実施したため、魔法の観測データからしても『［トゥマーン・ボンバ］が行使された』と誤認されるように仕向けている。

「予算は潤沢にあるから、多少の要望ぐらいは聞けるが」

「それだったら、東京に行けるようにしてほしいかな。折角日本に来たから観光したいもの」

「その程度なら別にいいが……今回の報酬代わりとして買い物の請求はこちらに回してくれ」

「え、いいの？」

ナーディアが首を傾げているのは無理からぬことだが、今回の目安

の予算の殆どが使用されていない以上、別にショッピング程度ならば変なものを買わない限りは高が知れている。
「こちらの都合で振り回した以上は当然の対価だと思うが？」
「……そうやって普通に支払えるって時点で異常だと思うんだけど」
「これまでの魔法師に対する扱い方が雑過ぎただけだと思うがな」
　ともあれ、ナーディアを巳焼島に送り届けた後、そのまま達也らと合流。東京への帰りは四葉家で開発したエアカーを悠元が運転する形となった。悠元も軍事的な関係で船舶免許は持っている為、運転自体は問題なかった。
　流石に戦闘はしないが、動きに支障のない程度の私服姿となっていた。
「色々暴れたようだな、悠元」
「片手間にコントラチェンコを亡命させて新ソ連を混乱させてきただけだよ。そのついでにベゾブラゾフの意識を飛ばしてきた。最短で約2週間、最長で3週間は動けないだろう」
「随分と念入りな事をしたな。言ってくれれば消すことも吝かではなかったが」
「今はまだ〝その時〟じゃなかったからな」
　今の状態でベゾブラゾフを消したとしても、新ソ連政府が素直に負けを認めるとは到底思えなかった。ならば、ディオーネー計画を根拠として、新ソ連を国家解体に追い込む。今はその状況を作る段階の話。
「ウクライナ・ベラルーシのラインが新ソ連と完全に切り離されたら、新ソ連とて日本や大亜連合に構っていられる余裕がなくなる。全兵力を注ぎ込んででも奪還に動くだろう」
「……ちなみにだが、約１００万の兵をどうやって集めた？」
「それについては少し関与した。上泉家も間接的に関わっている」
　それだけの大量の動員を可能としたのは、飛龍海運による部分もあった。具体的には、大陸間の港の移動の護衛として傭兵を雇い、到着地で契約満了となった傭兵に報酬を支払い、そのまま別れる形。創作物で言うところの道中護衛に冒険者を雇う様なものだ。

傭兵の利点としては、労働力を提供することで渡航に掛かる費用を抑えることが出来る。雇う側としては、その労働力によって船を護衛してもらうことで従業員の負担を減らすことが出来る。そんな対応が出来るのは、水素ガス燃料の運搬というハイリターンが見込まれる事業だからこそ出来る芸当だ。

そして、悠元は少し資金提供をして食糧や消耗品などを揃えられるように計らわせた。資金提供とは言うが、厳密には［アンティナイト］の購入代金を少し上乗せしたぐらいで、購入した代物についてはＦＬＴの新しい研究棟で厳重に管理している。

「こちらとしては［アンティナイト］の購入代金を支払っただけで、物自体はちゃんと防衛省を通して所持の認可を貰っている。その金をどう使うかは連中の好きにすればいいだけの話だ。金や物自体に罪はないのだから」

「傍から聞けば、まるで闇の商人みたいなムーブだな」

「別に好き好んでやっているつもりはないんだが」

無論だが、ちゃんと国内・国際法に照らし合わせて、必要な手続きを行使した上で実施している。その点については誰かに非難される謂れはない。このことを仮に佐伯が指摘しようものならば、いっそのこと千島方面を切り取った際の方面軍指揮官として駐在してもらうことも視野に入れる。

「何にせよ、向こうから迎えが来るまで５日も余裕が出来た。攻め込んでいた艦隊や乗員の引き渡し交渉は政府に全て丸投げした。尤も、直ぐに学校が再開したところで俺や達也には縁のない話だろうが」

「それは確かに……」

悠元と達也は［トーラス・シルバー］の件で授業免除を言い渡されていた。当然試験も免除されていたが、二人とも律儀に試験を受けていた。曰く『いくら免除を言い渡されているとはいえ、高校生としての領分を無視出来ない』と意見が一致したことに関して、それを聞いていた深雪が笑みを零したほどだった。

とはいえ、５日も魔法の訓練に費やすだけでは意味がない。そう思案していた悠元は達也に向けて問いかける。

「……達也。もしかしたら荒っぽいことになることも想定されるが、少し付き合ってくれるか？」
「何を今更、という感じだな。別に構わないが……行き先は？」
「――国防陸軍・霞ヶ浦基地」
悠元の発した目的地の時点で、目的が独立魔装大隊――第１０１旅団にあると悟った達也は、彼が一体何をするのかという興味半分の意味も込めて、拒否はしなかったのだった。
◇　◇　◇
７月８日午後５時、二人を乗せたエアカーは霞ヶ浦基地に到着。そのまま基地内にある第１０１旅団司令部を訪れていた。
ここに来る前、達也が響子を通す形で連絡を入れ、すぐに返信がきた。どうやら四葉家がアンジー・シリウスを匿っているのではないかという嫌疑を問い質すつもりのようだが、そもそもリーナ当人の軍人雇用は日本に来た時点で〝半分切れている〟。
それ以上に、これまで独立魔装大隊本部に顔を見せることはあっても、第１０１旅団司令部に足すら踏み入れようとしてこなかった悠元が同伴するとなれば、話は別だ。今回、悠元が達也と一緒に訪れることを決めたのは、これまでの全ての決着をするため。
「両名とも、よく来てくれました」
形ばかりの笑みを浮かべている佐伯に対し、悠元と達也は会釈をした。正直、達也からすればこの場にいる最高位の将校は悠元であるにも拘らず、佐伯は〝閣下〟の敬称を付けなかったことに疑問を抱いた。
それは佐伯の隣に控えている風間も僅かに表情を顰めたし、佐伯も悠元や達也の態度に疑問を抱いたかもしれない。だが、彼女は訊問をそのまま進めようとした。
「――佐伯広海少将。貴女が何を聞きたいのかなどとうに分かっている。だからこそ師族会議議長・神楽坂悠元として、上条達三特務大将として敢えて言わせてもらう。これ以上十師族ひいては師族会議に迷惑を掛けるような行為は止めろ。これは最後の警告だ」
滅多に存在感を露わにしない悠元。彼が怒りの感情を載せて放っ

た言葉は、その部屋全体の空気を凍り付かせるような感覚を漂わせていた。そして、怒りの矛先が向いていない筈の達也でさえ、悠元の感情を肌で感じ取れるほどだった。
「……どういう意味ですか？」
何とか堪えて振り絞るように放った佐伯の言葉を聞き、悠元は冷淡な表情を彼女に向ける。
「貴女は昨年の九校戦において、九島烈退役少将を含めた『九』の家と取引した際、『国防軍は魔法師を兵器に強要することはしない』と公言されていたそうだな。このことは九島閣下から直接確認している」
「それが、何だというのですか？」
「――――ふざけるな。だったら、俺や達也のような人間には『何をしてもいい』ことにはならん。そんな公約を唱える貴女の正気を疑いかねんほどにな」
確かに、悠元は自らの意思で国防軍に在籍することを選んだ。達也の場合は戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］のせいで国防軍と契約することとなった。
だが、二人の領分を逸脱するような命令を下したことはおろか、特殊な立場にある人間を平気で犠牲にするような軍人など、味方を犠牲にしてでも助かりたい下劣な将官と一体何が違うのか、と疑問を呈したい気分に苛まれる。
「俺や達也はあくまでも人間であって、本来己が修得している魔法も己の技術の一端に過ぎない。それが偶々極まって戦略級魔法を有しているだけであり、貴方方の利益の為に技術を使っているわけではない。何だったら、これから防衛省に赴いて退役手続きを取っても一向に構わんが？」
戦略級魔法が濫用されるのを防ぐべく、悠元は契約時にかなりの制限を設けた上で国防軍に入隊している。それは当然、一時期は直接の上司にいた佐伯とて理解している筈なのだ。
「貴方たちは戦略級魔法師なのですよ。そんな身勝手が通用するとお思いですか？」
「自分から言わせれば、その戦略級魔法師を管理しようとしているあ

なたの性根が信用できん」
佐伯の言葉に対して悠元がそう吐き捨てるのと同時に、悠元は懐から紙の束を取り出してデスクの上に放り投げた。その中の一枚に大きく書かれた『戦略級魔法師管理条約』という名に、佐伯の目が大きく見開かれた。それは、隣に控えた風間ですら驚愕を禁じえなかった。

誰が描いた構図なのか

――戦略級魔法師の管理。

このワードだけを切り取っても、魔法師を人間ではなく『兵器』と見做す様なやり方にしか聞こえない。悠元が自分の知らない原作知識――一条将輝が戦略級魔法「海爆（オーシャン・ブラスト）」を修得し、達也が巳焼島に援護しに行った頃、深雪が水波を守るために光宣と対峙し、光宣に止めを刺そうとした深雪が水波に停められ、それを見た光宣が水波を攫ったところ以降の流れ――を、昨年春の段階でセリアから聞き及んだ。

「戦略級魔法師の管理ねえ……それをしたがるのは確かに国家や政府の領分だが、佐伯少将がやりたがる仕事でもないだろうに……普通なら」

「普通じゃない、ってこと？」

「おかしな話だろう。第二次大戦前・戦中の軍事政権でもない限り、軍人が政治家の真似事をしている時点で異常でしかない」

軍人が政府の要職に就くという事例は存在していても、現役の軍人が政治家（詳しく言えば、国民の信任を得た議員）に就くことは認められていない。それは余程の国家でない限り原則として通用すること。

昨秋で九島烈と会談した際に、佐伯のことも改めて尋ねた。その際に『君ならばよく知っているのにか？』と疑問を呈されたが、自分の目から見た彼女と烈から見た彼女の存在が異なることも有り、その理由を聞かされた烈は納得した上で話してくれたが。

「多分だが、九島烈を引退に追い込んだことで要らぬ欲を抱いたんじゃないかって思う」

「……彼の教え子に七草弘一や四葉真夜がいるから、九島烈を利用して押さえ込めると？」

「その可能性もあるがな」

日本魔法界で多大な影響力を有する九島烈の引退。当然、９０歳間近まで働かせ続けた側の責任も生じてくる。強大な力を取り除けた

となれば、次に狙うのは戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］の術者である達也。そして、その実家である四葉家。
だが、長いこと［触れてはならない者たち（アンタッチャブル）］の異名を名乗ってきたわけではない。師族二十八家において表立った会社の重職に就かず、間接的な支配によって利を得つつ魔法研究に邁進してきた一族。それを崩すとなると容易ではない。
「ただな、達也がそんな境遇に陥った場合、深雪をどう説得するつもりだったのかが疑問に残る。いくら公権力による管理とはいえ、下手すれば政治家や軍人を筆頭に暗殺のオンパレードを起こしかねん」
「……それをしたら、漏れなくお兄様が［雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）］で消し去りまくる未来しか見えないね」
「地獄絵図の方が遥かに生易しく思えて来るな」
新発田勝成が黒羽貢に対して達也の在り方を説いたのは、正しくこの部分を危惧してのことだと思う。最悪、一族纏めて日本を出ることになりかねず、そうなったら東道青波が本気で憤慨して古式魔法師で粛清する構図も出来上がっていたことだろう。
この世界で言えば、上泉剛三と神楽坂千姫の二人による粛清（という名の蹂躙）劇が幕を開けていたことだろうと推察できる。
「話を戻すが、佐伯は誰かの後ろ盾を得る形で提案していた可能性が高い。外務省にＵＳＮＡ政府・イギリス政府やイギリス軍の対日強硬派、ディオーネー計画に賛同していた国際魔法協会、それと元老院クラス……ここまで繋がれば、納得できる部分が多い」
「そこまで繋がるの？」
「でなければ、原作のオーストラリア軍人の引き渡しにマクロードが出張るという事態にならん」
そもそも、風間は無論のこと、佐伯が表立って軍人としての功績を示したのは大越戦争によるもの。この戦争にイギリスは関与していないため、どこでパイプを繋げたのか不透明過ぎる部分が多かった。
だが、ディオーネー計画に国際魔法協会が協力を表明したことと、佐伯と外務省の繋がり。それに、ＵＳＮＡ政府だけでなくイギリス政府の内部にも当然対日強硬派の派閥が存在する可能性も鑑みた場合、

後は元老院が最後の接点を担えば、全て説明がつく。
「そもそも、西果新島での一件の時点で独立魔装大隊はイギリス軍の関与を把握していた。当然旅団長である佐伯も把握しているであろう事項だ」
「ディオーネー計画に賛同するような意思を見せたイギリスとの交渉……もしかしたら、脅しの材料にお兄様を使ったって可能性はある？」
「十分考えられる」
ウィリアム・マクロードは日本に新たな戦略級魔法が生まれたことで、アジア地域におけるパワーバランスの変化を警戒していた。
大体、日本とイギリスでは最短の直線距離で約９０００キロ以上も離れているし、ユーラシア方面でも大亜連合・新ソ連という二大国が存在する。逆に太平洋・大西洋方面でもＵＳＮＡを間に挟む形となる為、本来ならば大国への抑止力として期待するのが筋。
だが、日本の戦略級魔法の台頭によってそんな言い分を生じさせたとなると、当然イギリスの政府や軍に対日強硬派が居るのは間違いないだろう。
普通に考えれば、日本に新たな戦略級魔法が誕生したとなれば、欧米からすれば新ソ連の抑止力として機能させたいと考えるのが普通。だが、なまじ［質量爆散（マテリアル・バースト）］威力が高すぎたが故に、抑止力としての期待よりも将来の報復を恐れてしまった。
約一世紀半の過去に遡及して〝仇討ち〟という概念を持ち出すなど、明らかに現実が見えていなさすぎる。正直、そんな謂れのない恐怖を押し付けられる方が迷惑極まりない。
「今後の動向を見なければいけないことに変わりはないが、何にせよ情報提供は助かる」
「お、お礼はわたしいいっ!?」
「昼間から色に溺れるほど堕落するつもりはない」
「つまり落ちる」
「沈め」
その後、悠元のキャメルクラッチによってセリアが撃退された……

無論、死んではいないが。なお、意識を取り戻した後に『お兄ちゃんの愛が激しい』と宣った直後、悠元によるジャーマンスープレックスが炸裂したのだった。

婚約者兼前世の近親者に対して酷い仕打ちだろうと思われるかもしれないが、向こうも期待してやっている節を隠そうともしていないため、結局はこうなるのだった。

閑話休題。

霞ヶ浦基地の旅団長室にて、悠元が佐伯のデスクの上に放り投げた戦略級魔法師管理条約に関する交渉資料。佐伯と外務省の交渉内容、日本外務省とイギリス大使館との通信記録に、イギリス大使館からイギリス政府・イギリス軍との通信記録。そして、イギリス軍空母『ジブラルタル』がこの時期にインド洋経由で日本へ向かっている情報。

驚愕に包まれている佐伯や風間を横目に、悠元は冷淡な表情を隠そうともしなかった。

「調べはとうについていた。尤も、この調査を請け負っていたのは風間大佐ならよく御存知の人だ」

「……師匠か」

悠元が度々八雲を訪れていたのは、自身の軍事的な調査結果と八雲が独自に調べていた調査結果の擦り合わせで、それを基に八雲が詳細を調べていく方式を採っていたため。なので、傍から見れば神楽坂家当主が［今果心］と内密に会っているとしか思われない。

通信を多用しないのは傍受を警戒してのものであり、いくら［フリズスキャルヴ］でも破れないセキュリティを有していても、どこから漏れるかも分からない以上はやり方を下手に変えないことで信憑性を持たせる方向に舵を切っていた。

「自分から言わせれば……佐伯少将、貴女は立派な独善者としか言いようがない。確かに軍人としての論理に基づけば、貴女の言い分や道理も通ることになる。だが、師族二十八家を人間扱いしないということは、師族会議に加わっている護人二家――――元十師族出身の当主である俺や元継兄さんにも同じことを宣うつもりか？」

いくら戸籍が変わろうとも、血縁そのものを消すことは出来ない。

ましてや、護人二家の現当主は二人とも元十師族の人間。達也を人間扱いしないということは、同じ十師族や師補十八家の人間も漏れなくその対象に含むことを意味する。
佐伯のやっていることは、最早師族会議に喧嘩を売っている行為。それも、国防軍から売ってきた喧嘩であり、今までその被害を受けた悠元や達也は買わずにいた。
「……ならば、貴方方は国家の為に戦略級魔法を使うと確約できるのですか？　特に上条特尉。貴方は既に新ソ連へ向けて数々の戦略級魔法を放っている。その責任を貴方自身が負えるのですか？」
ここ最近、新ソ連国内で起きている数々の不審な破壊・消滅。佐伯はそれが悠元の戦略級魔法によるものだと推察していた。だが、それを統合軍令部に具申しても、蘇我大将曰く『我が国としては、隣の大国の国力が下がることは我が国の利益に適うという方針だ。よって、貴官の申し出は参考程度に留め置く』と返されてしまった。
「お言葉だが、佐伯少将。これまでの行為に関して、統合軍令部ひいては防衛省の事後承諾を得て実施しているし、事前に戦略級魔法の使用を視野に入れることも相談・通達している。今の自分は統合軍令部に属する人間であり、旅団長である貴女の指揮下に存在していない人間であることも承知の筈。立場を弁えるべきは貴女の方だ、佐伯広海」
それに、悠元は直接戦闘に発展するような破壊行動は行っておらず、間接的な軍事力の逓減および敵国の戦略級魔法による攻撃の無力化を実施しているに過ぎない。それによって周辺国家の動向が慌ただしくなるわけだが、仮に新ソ連が揺らげば、大亜連合は日本に注視している余裕がなくなる。
「これまでの5年間、お世話になりました」
そして、悠元が止めと言わんばかりに言い放った時点で、この論戦に決着がついた形となったのは言うに及ばず、隣にいた達也も『悠元の完勝だな』と内心でそう呟いた。だが、言葉で決着が付かなかった時点での予測は、奇しくも的中することとなった。
「――――風間大佐、上条特尉と大黒特尉を拘束しなさい」
「隊長」

「――柳、やれ」
佐伯の言葉に対し、風間は命令を下そうか躊躇っていた。だが、彼の部下の声掛けで已む無く命令を下した。それを耳にした悠元は、一息吐いた後で呟く。
「――身の程を知れ」
そう呟いた直後、柳を含めた四人の士官が蹟いた。その瞬間、悠元は四人の士官を移動魔法で全員自身と達也に引き寄せると、二人は続けざまに体へ掌底を撃ち込む。その衝撃によって、柳を含む四人の士官が床に倒れ込んだ。
「悪いな、達也」
「いや、こちらこそ助かった。俺だけだと力業になるからな」
互いに言葉を交わした後、二人の目前には風間が立っていた。恐らく［天狗術］によるものだが、悠元は全て把握した上で達也に目線を送り、達也が後ろに下がる。風間の動きを見た悠元は、瞬時に［天狗術］で風間の意識を逸らした。
風間ほどの相手かつごく短時間の発動。わずか1秒にも満たない意識の誘導。だが、悠元からすればそれで十分であり、風間の脇腹に拳を撃ち込む。悠元は風間からゆっくりと離れると、佐伯によってロックされた扉の前に立つ。
そして、悠元は［叢雲］を顕現させると、扉に向かって振るう。すると、扉がまるで豆腐でも切るかのように、賽の目状に崩れ落ちていく。［叢雲］を解除すると、悠元は視線を風間やその後ろにいる佐伯に向ける。
「言いたいことは既に言ったが、改めて口にさせてもらう。これ以上余計な干渉をするな、佐伯広海。これが守れなかった時、いくら知己でも容赦はしない。さて、後はお願いいたしますね、蘇我大将閣下？」
そう述べて斬られた扉の向こうに目を見やると、そこには数人の部下を連れて姿を見せた蘇我の姿があった。悠元はここに来る前、蘇我に連絡を入れていた。内容は『第１０１旅団への出向の契約満了のため、話し合いに出向きます。その際に諍いごとになることも考慮されますが、そうなった場合は国防陸軍内で処理してください』と伝えて

いた。
悠元が敬礼をすると達也もそれにつられて敬礼をし、蘇我も二人に対して敬礼をした。
「上条大将、それに君が大黒特尉か。陸軍最高司令の蘇我だ。後のことは我々に任せて、君たちはこの場を去ると良い」
「では、お言葉に甘えまして……あとは、宜しくお願い致します」
蘇我の厚意によって部屋を去っていく悠元と達也。蘇我は護衛の兵士に倒れている士官の介抱を指示した後、部屋に入って辛うじて立っている風間とデスクに座ったままの佐伯に近寄る。
「風間大佐、座るといい。悠元君に手加減されたとはいえ、立つのも辛いであろう？」
「……お気遣い、感謝いたします」
蘇我の言葉で片膝をつく風間。彼が歴戦の猛者であっても、上泉剛三の手解きを直に受けていた人間相手では分が悪かった。そして、動揺していた佐伯はようやく事態を把握したのか、立ち上がって敬礼をした。
「こ、これは蘇我大将閣下！　本日はどのようなご用件で参られたのでしょうか？」
「……佐伯少将。本日は多忙である当旅団に命令を直接伝えるために直接来た。これは統合軍令部発令の命令である故、心して聞くように。第１０１旅団は新ソ連軍の抑えとして、明後日〇九〇〇（マルキュウマルマル）までに北海道へ向けて出立せよ。なお、本日を以て独立魔装大隊は陸軍最高司令部直轄部隊として昇格し、大隊長は留任とする」
「……命令は理解いたしましたが、何故この時期になったのかを説明願いたく存じます」
この命令は上泉家および神楽坂家の要請に基づく部分もあるが、佐伯の卓越した謀略を期待してのものだということも考慮しての命令。
これを聞いた佐伯は、蘇我に対して説明を要求する。それを聞いた蘇我の表情は、一層険しくなっていた。言葉で言い表すならば、それは〝怒り〟も含んでいたのだった。
「佐伯少将。君は軍人ならば非常に優秀な人材だ。ただ、我々軍人に

はいくら影を担う部分があったとしても、人としての一線を超えてはならない。この命令を拒否するというのであれば、君には旅団内の軍規遵守や予算執行について問い質さねばならん」
「っ……」
蘇我の言葉に首を傾げる士官が多い中、佐伯はその言葉に冷や汗を流した。蘇我がそれを示唆したということは、佐伯の指示によって執行された〝表向き用途不明金〟の支払先も把握されているも同然と言えた。
「それに、新ソ連の脅威が完全に消え去ったとは言い難い。東欧方面の動きがあるとはいえ、戦略級魔法の脅威も完全に消え去ってはいない。君には、大越戦争で発揮した戦略・戦術眼を我が国の国防に生かしてもらいたい。それで、貴官の返答は如何に？」
最早、佐伯が取るべき道は二つ。これまでの違法行為を咎められて犯罪人に成り下がるか、軍の命令に従って北海道に飛ばされるか。そして、これまで手駒であった独立魔装大隊を手放せという命令。それを陸軍のトップが通達した以上、最早退路は無かった。
「……了解いたしました。第１０１旅団は明後日、北海道に向けて出立します」
「確かに聞き届けた。風間大佐は明日、霞ヶ関に出向いてくれ。そこで改めて話をする」
「……はっ、畏まりました」
佐伯を含む第１０１旅団は、この二日後に北海道へ向けて出立。そして、その後起きる新ソ連の国家解体騒動によって得た千島方面軍の総括を任されることとなり、彼女は中央への舞い戻りを夢見ることなく定年退役まで北方離島での生活を送る。
一方、陸軍総司令部直轄部隊となった独立魔装大隊は、その後上条達三特務大将を〝総隊長〟とした連隊体制に再編成され、連隊長として風間玄信が少将に昇格することとなった。本拠地は第１０１旅団の本拠だった霞ヶ浦基地をそのまま流用する形となり、日本版『スターズ』を目標として部隊編成が進められることとなったのだった。
なお、風間には妻と子供がおり、彼の子たちが色々巻き込まれるこ

とになるのは……未来の話。

パターン・ヴィルヘルミナ

国防軍方面は解決というかほぼ丸投げに近い形だが、これで決着を見た。将来悠元や達也が戦略級魔法師として名乗ることはするが、それはあくまでも日本政府の責任を以て行使する。そして、それが成された場合は五輪澪を国家公認戦略級魔法師[十三使徒]から解任し、一条将輝をその後任に充てる。

この辺は達也にも話しているし、一条家現当主・一条剛毅にも事情を伝えている。とはいえ、これまで澪当人の行動範囲が狭められていた故の法的拘束力については、将輝がまだ十代かつ未婚ということも鑑みて幾分か緩む見込みだ。

あと、吉祥寺真紅郎にもその旨を伝えている。理由は魔法の開発者としての説明責任が生じると考えたからだ。

そうなると、五輪家が十師族から外される危機感が生じる訳だが、ここにもテコ入れをしている。澪は確かに[十三使徒]の任を降りるが、代わりに国家公認の魔法師としての名誉が与えられる。強制的な動員ではなく任意的な動員に切り替わるだけで、既に名を出している以上は[十三使徒]でなくなってもリスクは変わらない。

なので、五輪家が十師族から外れる可能性は低いし、島国の日本にとって海の情報を得られるという利を捨てるわけにはいかない。残る問題は五輪家長男の嫁探しだが、これは当人の気概次第だろう。

なお、メディアの取材が殺到することも考慮して、そう言った対応は現内閣に丸投げとしつつ、魔法科高校に対する取材は昨春の一高の一件を考慮した上で〝原則禁止〟の処置を通達するよう要請。

〝言論の自由〟はあれども、それはあくまでも〝公共の福祉〟に基づくもので、全てを明るみに出せば国際的な取り決めまで全て公開せざるを得なくなる。秘密があるからこそ信頼が構築できるのであり、何もかも明かせというのは『約束を守らない』と公言している様なものだ。

大体、国会議員とて国民の信任を受けてその地位にいるのであり、彼らとて日本国民の一人。それがメディアに忖度して政府機関に無

理矢理立ち入る時点で、法的な常軌を逸しているのだから。
　そうして慌ただしい一日も既に夜となり、悠元と達也の乗せたエアカーはＦＬＴツインタワーマンション南棟の地下駐車場に停車した。
「やっと一日が終わったな」
「そうだな……真一たちのことは気掛かりだが、上手くやるだろう」
　そうして互いに別れると、悠元は徒歩で北棟に移動し、直通のエレベーターで３８階のフロアに降り立つ。事前にメールは入れていたわけだが、悠元が扉の前に立った時点で扉越しにいる存在を感じつつ扉を開けると、私服に着替えた深雪が立っていた。
「おかえりなさいませ、ご主人様」
「……まあ、ただいま。何か変わったことはあったか？」
「いえ、いつも通りですよ」
　隙を見ては容赦なく主人呼びを使う深雪に深く突っ込むことはせず、悠元は深雪についていく形でリビングに姿を見せた。すると、そこで［アリス］が悠元に話しかけた。
『マスター、自室に想子の活性反応があります』
「……？（え、どういうこと？）」
　自室にある自発的な代物となると、無論［時空の道標（エターナルポース）］しかない。だが、悠元の知己となると大分限定されるし、変なフラグが立たないように出来る限り配慮はしていた。
　ともかく、深雪に「着替えてくる」と伝え、そのまま自室に入った悠元が見た光景は……ベッドの上に眠っている私服姿の少女だった。だが、一度会った人間なら忘れない悠元でも、その女性と会った覚えがないことは確かだった。
「……誰？　でも、見た目だけならアーシャに似ているが……マジで分からんぞ」
　その対象は眠っているが生きていることは確かで、特に病弱という雰囲気は認められない。ただ、長い金髪の質感がどうにもアリサと似通っているのは確か。すると、少女が声を漏らしながら上半身を起こした。
「ん、んぅ……えっと……ここはあの世ですか？」

「残念ながら現実です。というか、日本語がお上手ですね」
「あ、えっと、ありがとうございます？」
　話がやや脱線しかかっているが、悠元はとりあえず話を聞くことにした。
「自分は神楽坂悠元と言います。貴女はどちら様ですか？」
「私は伊庭ダリヤと言います。元々ロシア人なので、この身なり……って、若返ってる!?」
「……またこのパターンか」
　伊庭ダリヤ――元の名はダリヤ・アンドレエヴナ・イヴァノヴァ。亡命した新ソ連の人間で、悠元からすれば婚約者の一人であるアリサの実母。それが肉体年齢で十代へ若返ったということにダリヤは部屋の姿身を見て驚き、悠元はヴィルヘルミナのパターンの再来ということに深い溜息を漏らした。
「伊庭さん、こちらから幾つか質問をしますので、それにお答えください。その上で貴方が現状置かれた状況を説明しますので」
「あ、はい。分かりました」
　まず、ダリヤは自身が〝死んだ〟という認識を有していること。それは一言目の台詞で想像がついていたが、間違いなかった。そして、その時点で一人娘を遺してしまったこと。これはアリサのことで間違いないだろう。
　次に、歴史関連で言えば間違いなく〝この世界〟だと分かった。その根拠は剛三と千姫の存在。流石に両方がいる並行世界など……あったとしても、ロクでもないだろうと思う。そして、上泉詩歩が三矢家に嫁いでいて、彼女と知己である点も加味すれば、ほぼ十中八九間違いないとみている。
「ありがとうございます。それで、現状置かれた説明をしますと……西暦２０９７年の日本で、貴女が亡くなってから８年以上が経過した形です」
「そんなに……あの、娘は何処にいるか分かりますか？　名前はアリサと言いまして」
「知ってます。というか、望めばすぐに会えますが……お会いになり

ますか？」
「ええ、お願いします」
　ダリヤとしては８年以上も経ったからこそ、母親として娘の安否が気になるのは仕方がないことだろう。悠元が案内しようと思ったところで、端末の呼び出し音が鳴る。悠元のプライベートフロアは本人の許可が無いと入れないため、呼び出すための端末が備え付けられているためだ。
　悠元がダリヤに断ってから端末のスイッチを押すと、モニターには茉莉花の姿が映った。
『悠兄、夕食の準備が出来たよ……って、その後ろにいる人は新しい愛人？』
「何でもかんでもそういう勘繰りは止めてくれるか？　つーか、ミーナ。お前も知っている人だぞ？」
『え、ええ？　……アーシャに似ている気はするんだけど、マジで誰？』
　ダリヤと一応面識がある茉莉花ですらもこんな反応となっていることはさておき、悠元はモニターに映る茉莉花の後ろにアリサの姿があるのを確認した。
「ともかく、彼女を連れてそっちに行く。色々話さなきゃいかんことは多いが」
『分かったよ』
　通信を終えてダリヤの方を見つめると、感極まったのか泣いていた。茉莉花というよりアリサの姿を見てのものだろうと思うが。
「……ハンカチ、使います？」
「あ、ありがと……ちーん」
　ダリヤを慰めてからリビングに降り、夕食を冷めないうちに頂いた後、改めて事情の説明をすることとなった。
「――――以上が経緯なんだが」
「ア、アーシャのお母さんって……見た目だけで言ったらアーシャのお姉さんにしか見えないよ？」
「う、うん……凄く吃驚してる」

悠元や茉莉花ですら驚いたのだ。当然、近しい人物であるアリサも目を丸くするほどだった。
「ミーナもアーシャも大きくなって、それに貴方が詩歩さんの息子さんだなんてね」
「こうなった要因は貴女の遺言も関係していますが」
リビングへ降りる前に身の振り方をどうするかは尋ねたのだが、彼女の回答は『味わえなかった青春を謳歌したいのと……貴方の傍に居させてほしい』と言われて、思わずジト目を向けてしまった。
元恋人――――十文字和樹(じゅうもんじかずき)のことも合わせて尋ねたが、彼女曰く『色々思うところはあるけれど、14年間も放置するような人にアリサを預けたくない』と返した。
「アーシャ、密着しているんだが？」
「当ててるもん」
「あらあら、もうそんなに仲良くなってるのね」
「悠兄は凄いよ。それに引き換え、うちの兄貴は……」
結局、ダリヤのことは千姫に報告したのだが、千姫からの回答は『もう20人ですか。少ない様な気がしますけど』と返ってきたことに対し、遺憾の意を示すことになった。そして、その日の夜がどうなったのかというのは……敢えて触れる必要性も無くなっただろう。

◇　◇　◇

翌日――――7月9日。
世界の情勢は一気に変化した。
新ソ連の西部にあったウクライナ・ベラルーシ地方の各都市で一斉に蜂起。約120万にも及ぶ大軍勢が瞬く間に占拠し、ウクライナとベラルーシは東EUへの加入承認を経て再独立を宣言。一方、新ソ連はこれを〝西側諸国の卑劣な懐柔工作〟と国営放送を通じて大々的に放映し、大規模な軍事作戦の行使を示唆。
そして、西EUは東EUの支持に回る形で再統合の根拠となるライン条約を締結。これによって、東西EUは新欧州連合として再出発することとなり、共同提唱はフランス・ドイツを主体として実施された。

これによって実質的に欧州と新ソ連の戦争へと発展することになるが、新ソ連の動きはかなり鈍くなっていた。新ソ連の軍事施設はおろか、軍事衛星が軒並み使用不可の状態という前代未聞の有様。

悠元の戦略級魔法による攻撃で軍事行動すらも大幅な制限を受けることとなり、大敗に近い状況となった極東方面へも動員を掛けることになった結果、民衆が度重なる徴兵や軍事行動による物価上昇へ反発を見せるようになり、警察や軍隊まで動員して鎮圧する事態にまで発展する。

これが新ソ連にどのような未来を齎すかは、まだ見えてこない。

「……二方面に攻めるとか正気の沙汰じゃないと思うんだがな」

昨日の艦隊を拿捕して交渉は日本政府に任せたわけだが、新ソ連政府は〝無条件の解放〟と〝劉麗雷の引き渡し〟を要求。あそこ迄痛めつけても懲りる様子が無いとなると、追加の攻撃も含めて対応せねばならない。

悠元はそうぼやきながら、学校ではなく都内にある百家・森崎家を訪れていた。何故森崎家なのかというと、〝とある人物〟に関わりがある為だった。

悠元が名乗ると、使用人らしき人が応対して応接室に通される。そして、姿を見せた男性――森崎家当主・森崎駿斗が応対した。

「朝早くに突然の訪問となり、お許しください」

「いえ、これまでうちの愚息が幾度も迷惑を掛けた側として、この程度は許容しております。して、此度の訪問は如何なる御用でしょう？」

「実は、大亜連合の劉麗雷に関わる話になりまして……」

劉麗雷の護衛部隊はほぼ全て国外追放処分としたのだが、悠元が唯一例外にしたのは孫美鈴――『無頭竜』の首領だったリチャード・孫の養女。大亜連合に渡航していたことは把握していたが、まさか劉麗雷の護衛部隊に配属されていたとは思わなかった。

ちなみに、劉麗雷の日本語による会話を教えていたという事実も判明した。

「森崎殿の息子さんである森崎駿が、その彼女と面識を有しているようでして」

「話は伺っていましたが…もしやとは思いますが、息子の婚約者に彼女を？」
「それは当人同士次第として構いませんよ。こちらとしても森崎家の将来に口を出すことはしたくありませんので」
「……そうですな」
　孫美鈴が森崎に対してどのような感情を有しているのかは彼女次第だし、ここから先は森崎がどう対応するかに委ねる。尚、この話を持つ前に孫美鈴と会談したが、彼女は日本に帰化することを躊躇わなかった。一昨年夏のことがあったにせよ、元々何も知らない立場だった彼女も日本に対して恨みを持つような様子は見られなかった。
「森崎殿にお願いをするのは、孫美鈴の身元保証人になって頂きたいのです。無論、タダでとは申しません」
　引き受けてくれるとなれば、当分困らない養育費として２０００万円を支払うことと、神楽坂・上泉系列の企業グループの護衛業の斡旋を明言。元々卓越した護衛はいるにせよ、ただでさえ魔法師の数が限られている以上は専門職を扱う家にも斡旋するのは当然の流れ。
　それを聞かされた駿斗は深く頭を下げた。
「そこまでしていただけるとは……正直、四葉家の勘気を被ったに等しい我が家に対し、そこまでの温情をいただけることは感謝以外の何物でもありません。その話、快く引き受けさせていただきます」
「分かりました。法的手続きについては神楽坂家で全面的に請け負いますので、彼女の引き渡しは明日の午後辺りで問題ないでしょうか？」
「ええ、其方にお任せいたします」
　そうして孫美鈴の行き先は決まり、悠元は帰宅した。流石に平日なので学校や仕事がある婚約者の大半が家にいないが、その代わりに出迎えたのは五輪澪だった……何故か車椅子に乗った状態で。
「おかえりなさい、悠元君」
「ただいま帰りましたが……何故に車椅子なので？」
「流石に誰がどこから見ているか分からないからね。偶に乗っておかないと感覚を忘れちゃうし」

表向き澪が健康な人間でないことはいまだ健在の為、下手にボロを出さないよう車椅子に乗って感覚を鈍らせないようにしているとのこと。流石に電動なのでボロが出るとは考えにくいが、彼女がそう思っているのならばそうさせてやることにした。
リビングに入ると、丁度深夜がお茶の準備をしてくれていたので、そのままご馳走に与りつつ話をすることにした。
「それで、どこか出かけていたの？」
「森崎家。ちょっと訳アリの人間を引き取ってもらう相談をしに行ってた」
「訳アリねえ……詳しくは聞かないけど」
モニターに映るニュースは、新欧州連合――ヨーロッパ大陸連合（Ｅｕｒｏｐｅａｎ　Ｃｏｎｔｉｎｅｎｔ　Ｕｎｉｏｎ・ＥＣＵＮ）と新ソ連の戦争状態に関してコメンテーターが意見を述べていた。
知らない側からすれば、戦略級魔法師が健在な状態の新ソ連と形成されたばかりの新連合。だが、新ソ連のレオニード・コントラチェンコは既に亡命しており、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフも現在意識不明の状態。非公認の戦略級魔法師がいるにしても、湯水のごとく投入する愚は置かせない。
「何にせよ、日本は一時の平穏を手にした形だな。ただ、決着の時はそう遠くないが」
「私も手伝った方がいい？」
「そこは依頼という形でお願いしようと思っている……何故抓る」
いくら婚約者と言えど、大掛かりの危険な仕事を頼むのだから、当然対価は支払って然るべきだ。だが、それを聞いた澪は悠元の脇腹を抓った。
「私は別に無償でもいいんだよ？」
「……表向きは国家にとって重要な戦略級魔法師という自覚を持とうな？」
澪としては、悠元にこれまで多大な恩を受けている以上、その対価として無償奉仕でも構わないと思っていた。こういったことに関しては悠元の正論も道理だが、それでも納得できないという意思を見せ

た形だ。

出世欲を諦めた大天狗の憂鬱

――風間玄信。

国防陸軍に従事する古式魔法［天狗術］の使い手である軍人魔法師。過去、大越戦争において独断で投入され、ゲリラ戦を通して大亜連合の侵攻を食い止めた実績を有する。

その功績を以て国内外から『大天狗』と呼ばれているが、その代償として国防軍士官としての出世を止められてしまった。長いこと不遇を強いられてきた訳だが、風間はそのことに対して、異を唱えることはしなかった。

その転機が来たのは5年前の沖縄防衛戦。当時臨時の方面部隊指揮官として参戦しつつ、二人の戦略級魔法師の誕生を目の当たりにした当事者。その後、大越戦争で縁があった佐伯広海少将の招集で魔法実験部隊『独立魔装大隊』の大隊長となった。

風間自身のこれまでの経緯もあったものの、大隊に転属してからは順調に昇進している。ただ、それによる昇給の度合いは同期と比較して少なかったが、元々が元々なので特に気にすることも無ければ、そこまで贅沢する性分でもないため、普段の生活も彼の実直な性格が反映されて機能面を必要最低限に揃えた程度のものとなっていた。

その彼は、霞ヶ浦基地に宛がわれた大隊長執務室――将来の連隊指揮官室にいた。この部屋は元々第１０１旅団長の執務室として使われたが、第１０１旅団の転属に伴って全ての管理権限が風間に譲渡されている。

風間は一枚の紙を見つめていたが、それをデスクの上に置いたところでコールの音が鳴った。

『隊長、藤林です』

「――入ってくれ」

「失礼します」

独立魔装大隊の構成メンバーは変更されず、貴重な魔法師戦力が第１０１旅団に持っていかれるという事態は蘇我大将が差し止めた。曰く『煽る必要もない』とのことだ。なお、第１０１旅団は北海道へ

の出立の為に朝の段階で座間基地へ向けて出発した。
「第１０１旅団、座間基地に到着しました。予定では本日夕方に北海道へ移動が完了するとのことです」
「……そうか。ご苦労だった」
「いえ、大した苦労ではありません」
　悠元に叩きのめされ、蘇我によって佐伯のこれまでの所業を垣間見た時、風間としては佐伯との縁を切ることしか選択肢が無かった。そのため、第１０１旅団の見送りには姿を見せず、響子を代理として遣わせることにした。
「今後は統合軍令部副司令官直轄部隊の連隊長とはな。出世などとうに諦めていたようなものだが、ここにきて将校に名を連ねるのは正直驚きしかない」
「悠元君や達也君に関わったのが運の尽きでしょうね」
「それを言わないでくれ……」
　悠元と達也が霞ヶ浦基地を訪れた翌日、防衛省庁舎内の国防陸軍最高司令官室にて風間は蘇我から辞令を交付された。
　独立魔装大隊は、7月9日付を以て統合軍令部副司令官に任ぜられた上条達三〝大将〟直下の魔法師部隊となり、風間の上司に悠元が立つという状況を国防三軍ひいては政府が認めた。そして、彼の管理下には大黒竜也特尉もとい達也がいるため、達也と風間は実質的に対等の立場となった。
「悠元もとうとう非常任職ではなく、常任職の階級に置かれたようだな。尤も、彼からすれば国防軍の派閥争いなど『時間と労力の無駄』だと切り捨てるだろうが」
「ですが、周辺の大国の存在を鑑みれば、彼の言い分は正しく正論でもあります」
「確かにな……」
　これまで表立った常任の役職を有さなかった悠元が常任の軍人将校となる――それは、来年2月の誕生日を迎えれば、彼も国防軍としての軍籍を隠す必要が無くなるため。なお、これまで上条達三として通していた軍籍の氏名は、紆余曲折あって〝三矢悠元〟に落ち着く

のが決まった。
　今名乗っている姓ではない理由は、過去神楽坂家において軍人になった当主はいるものの、そのいずれも神楽坂の名を出さずに所縁のある姓を名乗るのが仕来りだった。その為、悠元も元実家である三矢の姓を名乗ることにした。
　なお、その許可を取りに三矢家へ赴いたところ、現当主・三矢元が苦笑を滲ませていたことは蘇我に同行していた風間もよく憶えていた。
「むしろ、『給料の使い道に困る』とぼやいていたほどです。これは達也君から聞いた話ですが、ＵＳＮＡや欧州大手の航空機メーカーのライセンスを買収した挙句、その技術を元手に日本で国産の航空機メーカーを立ち上げるそうです。噂では早速欧州から問い合わせを受けているそうで」
「……剛三殿も大概と思っていたが、悠元はその血を見事に受け継いでいたようだな」
　現状では不明だが、将来的には［恒星炉］で得た水素燃料をベースとした旅客機や輸送機まで見据えての国産飛行機メーカーの設立。国家予算クラスを捻出できる悠元だからこその〝力業〟だった。
　話が脱線したため、風間がわざとらしく咳払いをする。
「コホン。それで藤林、達也のほうに話は出来たのか？」
「はい。彼も『悠元の指揮下ならば異存はない』と述べていまして」
「成程、そうか……」
　大黒竜也特尉――――達也も〝司波達也〟の名で国防陸軍に正式登録されることとなり、本来曹長や軍曹以下の階級を挟むところだが、彼の戦略級魔法を鑑みて開始時の階級は〝少佐〟からスタートとなる。奇しくもリーナと同じ階級に宛がわれることとなるわけだが、その事実を風間はおろか響子も知らない。
　四葉の名を使わない理由だが、徒に名を振り翳して恐怖を煽るのは達也の本意ではないことを示す為。それと、四葉の名を大義名分にして増長させないようにするための措置でもあった。これがどこまでの効力を発揮するかは不明だが、その兆候が出た時点で悠元の視界内

に入る。その時点で終わることは風間や響子にも理解できていた。
「一個人で大軍を滅ぼす存在……だが、彼らが望むものを与えてやれば、敵対することも無い。尤も、それを理解できている人間が少なすぎた……佐伯少将もそうだった」
昨年の九校戦後、佐伯の様子が変わったと明確に気付いたのは先月のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフによる魔法攻撃。本来、日本として新ソ連の攻撃を許容することは許されず、積極的自衛権の行使によって達也の魔法攻撃で牽制することも十分考えられた。
だが、佐伯の取った手段は風間に監視させるというもの。当時は「トゥマーン・ボンバ」の観測だけだと思っていたが、得られた魔法データを引き渡した時点で、風間は佐伯の目的に達也も含まれていることを感じた。
「達也だけならば、まだ知らぬ存ぜぬでいい部分はあったし、互いに利用価値を認め合った上で行動していただろう」
達也の気質からすれば、こちらから対立や不利益を与えるようなことをしなければ、国防軍ひいては国家にとって利のある協力が出来ていたことだろう。だが、そんな風間の想いをぶち壊すかのように佐伯は動いてしまった。
そして、その彼に不利益を与えるという行為が、悠元を怒らせるに至った。
「だが、悠元は違う。国家にとって害を為すと認めたものは、情け容赦なく叩き潰す。単に魔法ではなく、全ての正論と証拠を突き付けて社会的・法的に抹殺している。無論、彼の異質さもあるのだろうが……戦略級魔法抜きでも恐ろしい人間など、私からすれば数えた方が早いレベルの話だ」
「大概は政治家や財界の重鎮レベルの話ですから……祖父から聞いたときは、思わず驚きの声を上げてしまいました」
「それが普通なのだ、藤林」
普通ならば長いこと政財界に君臨している人間が成す様な所業。それを悠元はまだ十代の身で成している。達也なら出自故に分からなくもないが、悠元の元実家である三矢家はまだ裏側の人間というに

は優しい部分も存在する。
「師匠も態々『君らに死ぬ覚悟があるというのなら、僕は決して止めないからね』と釘を刺したほどだ。私も彼に『敵対したくない』と公言はしていたが……あの時ほど、死の覚悟を痛感したことはなかった」
「ですが、隊長はこうして生きておられます」
「彼によって生かされたに過ぎないのだ、藤林」
風間はこれまで国防軍を通して悠元の為人を見てきた。
味方に対しては優しく、敵に対しては一切の容赦をしない――それは5年前の沖縄の件で一番分かっていたこと。先日の一件では、彼から殺気を一切感じなかったにせよ、彼の一撃は風間を動けなくするに十分すぎた。
流石に肉体的なダメージは回復しているし、部下の一人である山中の診断も信用している。だが、風間としては思い出すだけで撃ち込まれた脇腹に再び痛みが走りそうな錯覚がどうにも拭えなかった。
「彼を怒らせれば、たとえ相手が大国であろうとも滅ぶだろう。これは佐伯少将にも話さなかったことだが、数年前のアフリカにおける大亜連合軍の壊滅劇や、一時期国防軍内で出回った新ソ連首都方面軍の壊滅の噂は剛三殿と二人で成したことだそうだ」
「……地形すら変えてしまう達也君の戦略級魔法（マテリアル・バースト）がまだ優しく聞こえてしまいますね」
「確かにな」
しかも、別に悠元の側から喧嘩を売った訳ではない。向こうからトラブルを持ち込んで巻き込まれた側として行ったことであり、聞かされた側の風間は「聞かなかったことにしておく」と半ば現実逃避気味に流すことを決意したほど。
当時はまだ中学生でそのような所業を成したのだ。この時点で新たに戦略級魔法師となった一条将輝とは比較にならないほどのレベルの格差が生じていた。
「その彼が今度は民間警備会社――実質的に民間軍事会社を立ち上げる。国防軍の軍人としては複雑だが、一個人としては歓迎している部分もある」

風間は悠元が提出した民間軍事会社『ヘキサライン・マーセナリーズ』（表向きは民間警備会社の体裁を取り、トライローズ・エレクトロニクスの傘下企業として名を連ねる）の詳細は風間も目を通した。
従来の魔法師を雇っている企業のやり方だけではなく、魔法資質の優れた人間を中学生の段階から専門的な教育によって育てることも主眼に置かれていた。これは開設されている国立魔法医療大学付属高校からスカウトすることが主体だが、魔法科高校九校の現代魔法の評価に乏しい生徒も雇い入れることも視野に入れている。
「私も書類は拝見しましたが、そこまでの見込みがあると？」
「寧ろ、その勝算があったからこそ我々や師族二十八家内での競争を避ける方法を採用したのだろうな」
人的資源を育てるのは時間と金が掛かる。だが、決して疎かにしてはいけない要素。ここで躓けば、将来の国家が滅亡する未来を避けられなくなる。ただでさえ優秀な魔法師を十師族・師補十八家と国防軍で取り合っているような状況を改善するべく、悠元が撃ち込んだ一手は確かに十分効果を発揮し得るものと言えた。
「つまり、これまでの魔法力の概念を覆す何かを掴んだ……そう考えている。その一端は第一高校で既に出ているようだからな」
将来の軍人魔法師を確保する意味でも、風間は佐伯を通す形で第一高校に関する情報を聞いていたわけだが、先日の定期考査では驚くべき結果が飛び込んで来た。
二科生――入試時に下位１００人となった生徒を中心に魔法実技・魔法理論の科目で大幅に点数を伸ばし、総合結果が上位１０人を除く１１位から１１０位までを二科生が全て独占するという結果になったと聞いたときは、これまでの常識に対していきなり滝の如き水を頭上から掛けられたような驚きを顔に出したほどだった。
「それを教えたのは悠元の姉の一人だが、悠元も大いに関与しているだろう。将来の人材を確保する意味では歓迎したい部分もあるが……こうなると、誰も悠元に対して頭を上げられんだろうな。その意味で九島閣下を超えたとみるべきだろう」
「……」

彼の非常識さをこれまでも味わってきたのは確かだった。だが、こうやって国の利益に直結し得る功績を打ち立てられてしまっては、響子であっても驚きを禁じ得なかったのだった。

◇　◇　◇

そんな話をされているとはいざ知らず、悠元は学校にいた。とはいえ、武道場や図書館ではなく、彼がいたのはカウンセリング室だった。彼と向き合う形で使用人兼愛人であり、第一高校の学校医である安宿（あすか）怜美（さとみ）がタブレットを持ちながら話した後、タブレットを机の上に置いた。

「これで定期カウンセリングは終わり。にしても、二人きりならここで迫っても私は受け入れるのに」

「それをやったら歯止めが確実に効かなくなる未来しか見えないんですが？」

ただでさえ、それを平気で言いだしそうな輩が婚約者の中にいるというのに、彼女らを差し置いて愛人を学校の中で抱く行為は御法度すぎる。その噂が広まって婚約者や愛人が増えてしまう未来を抑制する意味でも、悠元は頑なに学校での誘惑を拒否していた。

「学校外でも十分すぎますし、こないだまた増えた愛人のことを考えると、肉体的な心配よりも精神的な疲労がマッハで加速しかねません」

「律儀ねえ……言葉遣いも別に丁寧じゃなくてもいいのに。誰も聞いていないのだし」

「物好きな誰かが耳を澄ませている可能性も無くはないので」

学校外（主にマンションや一条家）でのことは、もう諦めた。だが、それでも無責任なことはしないと心に決めており、婚約者たちが成人や社会的立場を確立してからでも遅くはないと思っていた。

三矢家に限った話で言えば、次期当主の元治が生まれたのは元が２８歳頃の話なので、最短でも２３歳で父親になるのは師族会議に範囲を広げても割と早い部類に入る。だから、深雪らの同年代組が卒業してから家族設計が本格化しても問題が無いと判断された。

尤も、婚約者たちどころかその親・祖父母世代にまでせがまれてい

るのは色々複雑だが。
「そういえば、中止した九校戦を開催する噂が立っているけど、本当にやるの？」
「やりますよ。ただ、時期はずれ込みますが」
　元々の予定は８月初めからだったが、情勢の整理に掛かる時間を考慮して１０日ほどずれこむこととなる。これでも１週間ぐらい工程を早めているが、これでも安泰とは言えない。更なる保険を掛ける必要は出てくるが、ここについては対策を講じるつもりだ。
「昨年と色々立場は違いますが、自分や達也も出ます。というか、出場を認めさせます」
「色々文句を言う人が出てきそうだけれど？」
「努力を尽くさずして喚く人間に魔法師を目指してもらおうとは思いませんので」
　辛辣な言い方だが、悠元も達也も人並み以上の努力を重ねて今に至る。いくら十師族の血族と言えども、努力なしに才能が開花することなどない。それは、先日の考査で１位を取った詩奈も同じことが言える。
　大体、これまで表面化していなかっただけで、過去の十師族直系の人間が九校戦に出場して並外れた成績を叩き出していることにも触れなければならない。そうなると、単に四葉家のみならず師族二十八家や護人二家にまで話が波及する。
「環境が恵まれていた部分は否定しませんが、その環境を使って努力した結果まで否定される謂れはないので。尤も、新人戦のみの参加となる湘海高等学院の生徒相手に同じことが言えるのかと問いかけたいですが」
　その湘海高等学院だが、男女クラウド・ボールだけではあるが他の魔法科高校と遠征試合を組んで悉く打ち負かしている。なお、一高は詩奈が助っ人に入ったことで勝ち、四高は亜夜子によって何とか勝ち、三高は敗北したらしい。流石に三高は愛梨抜きで善戦した方だと思うような結果だと聞いたが。
「今はまだ新人戦だけの参加ですが、来年度からは本戦にも参加して

総校戦へと体制が変わります。なので、今年が最後の九校戦となります。前人未到の五連覇を果たして有終の美を飾ってやるつもりです」
「ちなみに、一条君と対戦することになった場合は？」
「問答無用で瞬殺します。モノリス・コードで対戦する形になった時は、［攻撃型ファランクス］の雨でも降らせますよ」
なまじ将輝の持つ主要な魔法は威力が〝高すぎる〟ため、ルールをある程度無視できるアイス・ピラーズ・ブレイクならばまだしも、モノリス・コードでは得意の［爆裂］が使用不可となる。
威力を落として川などを蒸発させる程度ならばまだしも、フィールド次第では魔法そのものが意味を成さなくなる。そうなると、将輝が使える魔法の選択肢はかなり制限されてしまう。
『［ファランクス］を使って問題ないのか？』という疑問は生じるだろうが、その術式の根幹技術は三矢家が提供したものであり、それにアリサの件で散々駄々をこねた相手に対しての〝意趣返し〟も含んでいる。
なお、ダリヤの件について元と詩歩に連絡を取ったが、彼らで色々話し合った結果として『悠元が責任を持って妾として娶る』ということになった。解せぬ。
アリサが対抗心のように『お兄ちゃんの子どもが欲しい』と主張するようになったことも触れておく。流石に中学生を人妻にしたら倫理的な意味で自分の精神が死ぬ未来しか見えない。
だからこそ、最終ラインの線引きだけは譲れない。意固地だろうが頑固と言われても構わない。そう主張したら茉莉花から『私らをそうやって気遣えるから、どんどんのめり込む気がするな』と言い放ったことと、その後に起きたことは……最早恒例行事と言ってもいいだろう。
決してこの先も慣れるということはないに等しいだろうが。
「いっそのこと、大粒の雹を大量に降らせて体力を削る戦法でもいいんですけどね」
「地味に痛い戦法ね……」
余談だが、深雪は達也を今年は〝選手〟として選出したいという思

いがあった。とはいえ、エンジニアの仕事も頼みたい部分もある為、上手く達也の負担を減らす方向にシフトした。その結果、生徒会の準備は今年の九校戦がいつ開催されてもいい様に手はずを整えていたのだった。

魔法使いたちの津々浦々

『戦い』というのものは、決して実弾を必要とはしない。互いに対立している国家や組織などの団体同士が弁舌という言葉の銃弾を以て交渉に当たることも、国家の利を賭けた立派な戦いの一つだ。

そして、そんな戦いというべき発端は、放課後の第一高校のカフェテリアで起きたのだった。

「――――ローテーションを教えてほしいって？」

首を傾げているのは、第一高校3年風紀委員の北山雫。そして、その向かいに座っているのは親友兼クラスメイトにして生徒会会計の光井ほのかだった。二人は家族ぐるみで仲が良く、腐れ縁にも近い幼馴染の関係も持っている。そして、親友から持ち込まれた相談事について、雫は疑問を呈していた。

「う、うん。流石に住んでいる人数の違いもあるけど、どうしてるのかなって。悠元さんに渡しているお弁当のことも有るし」

「成程ね。でも、私が料理できないと早とちりした恨みは忘れない」

「その一言って必要かなあ⁉」

現在、悠元は学校に来る頻度も減っているが、学校に来た際は必ず婚約者が用意した弁当を食している。元々は深雪、雫、姫梨、セリアの四人だったが、そこに泉美、真由美、愛梨も加わっている。

それ以外の面子については、現在神坂グループ系列の調理師育成専門学校に在籍する教員の指導によって勉強中。いずれは一条茜もその面子に加わることとなるだろう。

「使用人の人たちが基本的に家事をやってるけど、悠元のお弁当作りは基本的に私たちの仕事。というか、私たちが作らないと悠元が作ってしまう。前例はほのかも良く知ってるはず」

「……あー、あったね。懐かしいね」

雫が述べた〝前例〟というのは、中学2年の時に都心郊外で学校のキャンプ行事があり、その際に悠元が調理したカレーが人気を博してしまったこと。同じ材料と調理器具を使っている筈なのに、まるで高級料理店で口にするような味わいを覚えた。

同じ班に宛がわれた雫とほのかは悠元の作る料理に驚愕し、雫は不満げに悠元の脇腹を抓り、終いには雫が悠元の寝ている寝袋に潜り込んで朝を迎えるということも起きていた……その時点で『それ以上の行為は無かった』のは幸いだが、ほのかもまさか雫がそこまでの行動に移すとは思いもしなかった頃だった。

「本当に驚いたよ……悠元さんも『訳が分からん』と言ってたぐらいだし」

「……あれで手を出さなかったのは不満だったけど」

「あの時はまだ中学生だから」

その件は雫の素性で事なきを得たわけだが、悠元はその後に『療養』という名目で海外に連れ出されてしまった。1年も経たない内に戻ってきたが、度々連絡をしていたので雫が不満に思うことはなかった。

「話を戻すけど、ほのかはどうしたいの？　達也さんに手料理を作ってあげたいの？」

「……うん、そう。だから、料理を教えてほしくて」

「分かった。一応伝手を当たってみる」

この後、ほのかの相談事が他の女性陣にも拡散した。結果として大人数となったため、それを聞いた悠元がグループの専門学校に相談したところ、翌日に料理教室を開く段取りを組むこととなった。

そして、その先生というのは……誰しもが驚いていた。

「三矢詩歩と申します。既に上泉家や神楽坂家に移った息子たちの母でございます」

「……はは、おや？」

詩歩の風貌に一番驚愕していたのは、他ならぬエフィアだった。無論、他の参加者も驚きを隠せない。そんな風景を見て笑みを零す詩歩に対し、隣で笑顔のまま溜息を吐いたのは助手役の女性こと矢車詩鶴（旧姓：三矢詩鶴）だった。

「母様、あまり放置していると話が進みませんよ」

「そうでしたね。さて、今日はまず手始めに……野菜炒めでも作ってもらいます」

まず最初に課題として選択されたのは、野菜炒め。調理の基本である〝切る〟と〝炒める〟の習熟度合いを見るためのもの。その上で、詩歩はこう付け加える。
「なお、調理に直接影響する魔法を一切使ってはいけません。よろしいですね？」
「……だってさ、お姉ちゃん」
「何故ワタシなのよ!?」
そんな風に料理教室が進行している中、肝心の男性陣はというと、海の上にいた。正確には、大型の漁船に乗って相模湾に来ていた。漁船に船を出してもらい、沖合で海釣りをすることとなった。
「正直、新ソ連のゴタゴタがあるというのに、こんな暢気に釣りをしていいのかとは思うけどね」
「それは確かにそうなんだが……達也や悠元はいいのか？」
「今すぐ動けるような状況じゃないからな」
「右に同じく」
どうせ、ＵＳＮＡからの迎えが来る７月１３日までは日本から無理に出る必要が無い。元を辿れば、ＵＳＮＡが引き起こしたことに日本を巻き込んだ以上は責任を取ってもらう必要がある。
「それに、俺はあくまでも差し迫った事態で表立った行動をすることはあっても、形振り構わず敵を作りたいとは思わん」
「……そのスタンスは決して変えないんだね」
すると、男性陣の垂らした釣り糸が引っ張られたため、各々引っ張り上げる。それなりの大きさの魚を釣り上げる中、悠元だけが異様な重さに顔を顰めた。
「……糸を張り直すのは面倒だから、やるか」
悠元は釣竿に［相転移装甲（フェイズシフト）］を付与し、その重さの主を強引に引っ張り上げた。すると、甲板に打ち揚げられたのは……立派な大きさのマグロであった。悠元は徐に近付くと、釣り針を外して素手で掴んだ上で、クルーザーの生簀に放り込んだ。
そして、一連の流れを終えた悠元が見たものは、周囲からの驚愕の表情だった。

「……すげえな、悠元」
「うん、凄いという言葉しか出てこないよ」
「全くだ」
「お前ら……」
その後、釣竿で耐えられないはずの大物を大量に釣り上げた悠元は、昼前の段階で切り上げて不貞寝を敢行した。釣果が明らかに飛び抜けた格好となったため、達也らはそれを咎めるどころか気遣うほどだった。

◇　◇　◇

クルーザーは昼過ぎに横須賀港へ到着し、釣果は各々の家に送られることとなった。なお、悠元の釣果の一部は達也らにも分配された。理由は『いくら養える人間がいても限度はある』とのことで、吉田家は確実に驚きの声が上がることだろう。
悠元がマンションに帰宅すると珍しく出迎えは無かったが、奥から漂ってくる匂いで大方の事情を察しつつ自室で着替えた。
そうしてリビングに降りてきたところでタイミングよく着信音が鳴り、悠元がパネルを操作すると、モニターには四葉家当主・四葉真夜の姿があった。流石にセーラー服姿ではなかったが、お洒落に気を遣ってのものなのか、カジュアルな私服姿となっていた。
『あら、悠元さん。この場合は神楽坂殿とお呼びすべきでしょうか？』
「そこはご自由に。今は師族会議の場ではございませんので。して、誰かに用事があったのでしょうか？」
『元々は深雪さんあたりに頼む予定でしたが、悠元さん本人がいるのならば、直接お話ししておきます』
悠元はただでさえ多忙の身となったため、深雪あたりに近況報告をさせた上で伝言を頼む予定だったが、本人がいるのならば話が早いと言いたげに真夜が説明する。
『勝成さんのことは御存知でしょうけど、彼から調布にある四葉のビルに出向いていただきたい、と頼まれまして。日時は明日ですが、その際にたっくんも同席させるつもりです』
「……こちらとしては問題ありませんが、会って欲しい人がいるとい

う解釈で宜しいのですね？」
『その通りです』
　この時期に会ってほしい人間で、尚且つ新発田勝成が関与しているとなると、選択肢は大分限られる。流石に父親との面談で頼み込むとは思えないため、そうなると勝成の職務である防衛省関連の客人とみられる。
　そして、ここ数日の内に来日している要人となると、大分絞られてくる。
「もしかして、ＩＰＵのチャンドラセカール博士でしょうか？」
『流石ですね。ただ、私としてはもう少し的外れの冗談が欲しかったのですが』
「余りに脱線し過ぎると、周りに迷惑が掛かるじゃないですか……」
　悠元の的確な回答に笑顔を見せた後、どこか不満げに頬を軽く膨らませるような素振りを見せた。これには流石の悠元も深い溜息を漏らした。
「にしても、チャンドラセカール博士ですか。直接対面するのは４年ぶりになりますかね」
『もしかして、剛三さんの付き添いですか？』
「ええ」
　インド・ペルシア連邦では、正当な方法で入国した後に反魔法主義のテロ被害を受け、結果的に無傷ではあったが、剛三が容赦なく組織のアジトにいた構成員全員をプラズマで蒸発させる事態に至り、悠元が関わった部分は全員を眠らせた上でＩＰＵ軍に引き渡している。
　その後、政府から勲章と報酬を受け取ることとなり、首相官邸に出向いた際にアーシャ・チャンドラセカールと対面する機会を得たことがあった。
「正直、一番穏便に終わったのはその国とＳＳＡだけですよ。チャンドラセカール博士もこちらの事情を把握した上で、『あなたに害が及ばないよう配慮する進言を政府に対して行います』と確約してくれたので」
　世界各地でトラブルと婚姻に関する話まで持ち込まれ続けた身と

しては、インド・ペルシア連邦と南アメリカ連邦共和国ぐらいが婚約の話を持ち出さなかった。偶々歳の近い女子がいなかったこともそうだが、ここでは剛三の異名が抑止力として働いてくれた格好だ。
『千姫さんから話は聞きましたが、愛人も含めると２０人になるそうですね』
「……受け入れることに関して異論は唱えませんが、真夜さんはそれでよろしいので？」
『いいのですよ。だって、今更まともに結婚できるとは限らないし、そもそも年齢が年齢だから難しいもの。それに、悠元さんが私を女にしたのだから、尽くすのは当然でしょう？』
「何か論理が飛躍し過ぎている気がするんですが」
　愛人だけを見ても、司波深夜、安宿怜美、桜井水波、ヴィルヘルミナ・バランス、四葉真夜、そして先日の騒動で加わった伊庭ダリヤの六人。それでいて１４人の婚約者がいるのだ。普通の男性ならば精力が枯れて死んでしまうのがオチだろう。
　その一般的な範疇に自分も入りたかったが、どうやらそれは転生した時点で許されなかったようだ。転生できたことについて今更どうこう文句を述べるのはどうかと思うが、もう少し加減というものを覚えて欲しかった。
　前世譲りの価値観は、この先も一生変わることが無いのだろうと思う。
『あらあら、悠元さんとしてはもう少し絞りたかったのかしら？』
「単純に他の男子からの僻みを減らしたかった、というのが本音です。当初は『三人でも足りない』などと言われてましたが……同年代の他の男子にそれを求めるのは酷なことかもしれませんけど」
　いくら魔法資質があれども、極端な例で言えば達也のような過酷な環境に置かれていた事例自体がレアケースそのもの。それに、悠元の友人絡みで燈也、レオ、幹比古の三人に焦点を当てても、各々苦労しているからこその性分が強い。
「それに、彼女らとの対面では変に色目を使わないことで避けようとしたわけですが、何故か逆に詰めよられる羽目になったんですよ。ま

るで意味が分かりません、としか言えないです」
『そうやって礼儀として振舞った一線が、彼女たちの琴線に触れたのでしょうね。無論、私もですが』
「……」
当時は恋愛感情のことを深く考えず、変な絡みで婚約に持ち込まれることを忌避するように立ち回っていた。深雪と交友を持ったのは、もしもの時のストッパーをお願いする繋がりを持つためだった。
結果として、深雪のストッパーという原作とは逆の現象を発生させてしまった訳だが。
なお、真夜の通話を終えた後に物陰から覗き込んでいた深雪が悠元の腕に抱き着いてきたのは……当然の流れであった。
◇　◇　◇
同じ頃、金沢の高級料亭で一条家当主・一条剛毅は向かい側にいる女性こと第三高校の学校長・前田千鶴との会談を行っていた。剛毅としては、自分の息子に対する配慮の件だけでなく、本来親としてせねばならないことを代行してくれた。
それに対する恩義を示す意味もあるが、それ以上に将輝の扱いを学校はどう見ているのかという思いもあった。
「いきなりの呼び出しになってすまないね、お前も忙しいというのに」
「いえ、神楽坂殿のお陰と国外情勢によって幾分か小康状態になりましたので」
「彼か……あたしは師から聞いた話や九校戦の結果ぐらいだが、息子に圧勝しているという事実ぐらいしか把握していない。お前から見た神楽坂悠元の評価は？」
「正直に申し上げれば、超一流の評価を与えても過分ではないと感じております」
何せ、ルールという制限内でも悠元は将輝を2年連続で下している。今年の九校戦が再開催される見込みは聞いているが、もし開催された場合、今度は将輝の戦略級魔法師としての実力を試されることとなる。
それに悠元が勝った場合、彼も戦略級魔法師としての表明を余儀な

くされる可能性も出てくることになる。師族会議において悠元が戦略級魔法師であることを告白している為、政府の方針としては有り得なくもない。
「先日の新ソ連艦隊南下では、能登沖の艦隊全てをたった一人で掌握し、佐渡で息子が撃破した艦艇を除いた新ソ連艦隊を無傷で拿捕していたと伺っております」
「そこまでとはな……九島退役少将が後継者に指名したというのも、事実か？」
「はい。他の師族二十八家の前でそう公言した以上、疑う余地もないでしょう……それで、そのことに何か関係が？」
剛毅は前田が悠元の功績に関して興味を持ったことに疑問を抱いた。悠元から前田が新陰流剣武術の門下生の一人ということは聞いていたが、それならば同門の誼で尋ねることぐらいしてもおかしくはない。
そんな剛毅の疑問に対し、前田は静かに口を開く。
「お前のご子息に対して直に説教をしたわけだが、先日の件で再び増長しないとも限らない。それはお前も危惧しているのだろう？」
「ええ、もしもの際はお手を煩わす様なことはしないと考えておりますが」
「あたしも色々考えた。ご子息が本気で諦める方法となると……神楽坂悠元に本気を出させるしかない」
「……あれで本気ではないとお考えなのですか？」
前田が述べたこと――神楽坂悠元の本気を一条将輝に味わわせるという究極の荒療治。下手をすれば将輝の心が折れて再起不能になる可能性がある諸刃の剣。剛毅が驚愕の表情を見せる中、彼女が説明を始める。
「これまで一定のルールの範囲内で戦ってきたわけだが、それを全て取っ払った場合、間違いなく神楽坂悠元はご子息を瞬殺できると睨んでいる。無論、殺し合いをさせろと言うつもりはないがな」
「では、一体どうすると？」
「これは一つの提案なんだが、九校戦に〝個人戦〟を採用できないか

相談してもらえるか？」
　前田の提案とは、九校戦の個人競技による個人戦の導入。ここ最近では、スピード・シューティング、バトル・ボード、シールド・ダウン、ロアー・アンド・ガンナー、クラウド・ボール、アイス・ピラーズ・ブレイクがソロでも出来る個人競技に該当するが、ここから何競技かを通算して総合ポイントで競うというもの。
「無論、個人戦の成績を団体戦に反映させるかという議論も出るだろうが、まずは独立した成績で競わせる。この提案はどうだ？」
「複数の競技に亘って優劣を競うことで、選手個人の実力を見る……確かに理に適ってはいますが」
　剛毅が懸念したのは、悠元は戦略級魔法師であるのと同時に元［トーラス・シルバー］の一人。〝戦略級魔法師〟兼〝世界屈指の魔工技師〟という事実だけでも、剛毅からしたら心を折られそうな相手でしかない。
　だが、息子の将輝に対して現実を見せるという意味では、前田の提案は理に適っているものと言えた。
「分かりました。神楽坂殿との伝手がありますので、相談してみます」
「そうか。正直、学校として不純異性交遊を認めるわけにはいかないが、ご子息が新たな恋に振り切ってくれればこちらとしても助かるよ」
「……ええ、その通りです」
　自分の息子の我儘で学校にまで迷惑を掛けている……このことだけでも頭が上がらないというのに、多方面で迷惑を掛けていることに関して、剛毅は深い溜息を漏らしたのだった。

◇　◇　◇

　翌朝――――夜明け前に悠元は九重寺を訪れた。普段なら悠元がアポなしで出向くわけだが、今回は八雲から『君に会いたい客人がいる』と連絡を受けた。この時間に訪れたのは、先方が指定した時間でもあったし、元々鍛錬の名残で早く起きることは問題なかった。
　いつもならば何かしらの試しをしそうなものだが、今日は珍しく何も起きることなく八雲が姿を見せた。

「やあ、こんな時間にすまないね。君の婚約者には悪いことしてしまったかな？」
「別に構いませんよ。それで、九重先生。客人と言うのは？」
「既に到着しているよ。まあ、君が良く知る人だから」
そう言って八雲が案内したのは茶室。そして、そこには元老院四大老の一人である東道青波が座っていた。
「神楽坂殿、こんな時間にすまぬな」
「お気になさらず、東道殿。どうせこちらの予定を把握された上でこの時間を指定したとみるが？」
「……否定はせぬ」
悠元がチャンドラセカールと会談することを織り込んで、この時間を指定したという悠元の問いかけに青波は実質的な肯定をみせた。そうして、八雲が点てたお茶を一杯飲み干した上で青波に尋ねる。
「それで、東道殿。今回は如何なる要件か？　言っておくが、この事態に関して元老院が横槍を入れた場合、私の権限で元老たちを隠居させることも辞さない。まあ、隠居が遅かれ早かれの違いでしかないが」
「……樫和の仕業か？」
「それもある。が、有益なことをせずに座する人間など居てもらう必要が無い」
悠元の脳裏に浮かんだのは前世の某大手自動車メーカーの会長で、元々培った技術を実働的に生かして次の世代への架け橋として担っている。そう言った施策を政財界に提案して未来の日本に繋げるのが元老院の本来あるべき役目なのに、あくまでも現時点の改善を放棄して未来につなげようとする。
保守的な思想に基づけば正しいのだろうが、現代魔法はまだ１００年しか経っていない新興の技術。無論、魔法の秘匿に関する部分は多くあるのだろうが、魔法の基本中の基本を理解していない状態で行使すること自体危険極まりない。
残念なことに、それを積極的に指摘しないことが現実の問題だと思う。
「人任せにするのは実に簡単なことだ。だが、その責任を負おうとも

しない輩に国の未来を託せる事など出来ない」
「……それは、お主の〝前世〟が強く影響しているのか？」
　青波が発した言葉に、悠元の表情が険しくなる。これでも古式の卓越した術者なのだから、悠元に起きた変化を見破ることも不可能ではない。そもそも、自分が転生する前の三矢悠元は先天的に固有魔法を備えていなかったからこそ、そこから推理したとしてもおかしくはない。
「仮にそうだとして、アンタは何を望む？　ここで俺を排しようというのなら、お前をこの場で血祭りにあげることは簡単なことだ……尤も、九重和尚が困るのでそのようなことはしないが」
「……私にその意思はない。父が上泉や四葉を殺した以上、ここで其方を殺せば東道家が歴史から完全に消える。其方ほど名誉というものを重視していない若者など……四葉達也ぐらいであろうな」
　誰彼構わず殺す気はないし、後片付けが面倒なことはしたくない。悠元の問いかけに対して、青波は相対している人間を若造などと侮るような素振りは見せず、顔を俯かせた。なお、立ち会っている八雲は茶を点てながら笑みを浮かべていた。
「さて、東道殿。そんな問答ではなく用件を伝えて頂きたい。こちらとしても用事が詰まっている身なのでな」
「そうだな……」
　なお、悠元が転生者という情報の出所は後で尋ねたが、東道青波が悠元に起きた変化から察したもので、問いかけによって確証を得た形らしい。ただ、このことは誰にも相談していないと公言したため、深く追及することはしなかった。

閑話　とある出家人のけじめ

儂の名は東道青波（とうどうあおば）。既に出家している身なので、青波入道（せいはにゅうどう）という呼び名で俗世から認識されている。ただ、これはあくまでも〝この体〟の固有名詞――まるで自分ではない言い方をしているが、本当の自分は俗に言う〝転生者〟だ。

前世は研究者だったが、海外の論文発表会に赴く最中、飛行機が墜落してそのままお陀仏。そして、気が付けば赤ん坊に乗り移っていた。成長していく中で魔法の存在や様々な単語を聞いた結果、私の出した結論は、ここが『魔法科高校の劣等生』の世界――それも、主人公が生まれる前の世界だという事実を知った。

正直、救えるものならば救いたかった。いくら古式魔法と現代魔法の違いこそあれども、同じ人間。魔法という価値が無ければ、等しく生ける命。

だが、それを妨げたのは……当時生きていた私の父だった。

「……何が元老院四大老よ。変えるべきことも変えられぬものに、何の意味がある」

元老院――この国の秩序を逸脱しないように見守るための組織。現状維持・保守的という意味では良く聞こえるが、悪く言えば腐敗しても構わないようにも聞こえてしまう。そもそも、組織としての体を保とうとすることに腐心するあまり、その時点で腐り切っていたのかもしれない。

当時、東道家次期当主・四大老となることが確定している身として、そんな椅子に一体どれほどの価値があるのかと自問自答することは少なくなかった。そんな最中、四葉真夜が誘拐され、当時婚約者だった七草弘一が大怪我を負った。

その時点で、私は疑問を抱いた。

大陸の気質を考えれば、当時十代でも期待のホープとされた七草弘一を一緒に連れて行かなかったことが何故かおかしかった。彼らなら、魔法師の実験が出来るとなれば嬉々として連れ去っていただろう。

だが、連れ去ったのは四葉真夜だけ。しかも、子を成せない体にされるまで実験道具にされたこと。それを聞いて激怒した四葉家が一国を相手に復讐戦を敢行した。その戦が進む中、父親が見るからに表情を綻ばせていたところを見て、嫌な予感が過った。

『この父親は今回の経緯に至る何かを知っている』と。

父親が外出した隙を見て、あらゆる情報を調べた。その結果、予感は現実として突き付けられた。私は飛び出す様に家を出て、頼ったのは同じ四大老の一角である上泉家。東京の別邸で応対してくれたのは、当時存命だった上泉剛三の子息こと上泉碇綱だった。

私は全ての情報を話した。この際、私の命はどうなっても構わない。その代わり、四葉を助けてほしいと願い出た。彼が『約束しましょう』と聞き遂げたのを見て、やるべきことはやったと立ち上がろうとした瞬間、突然碇綱が自分を突き飛ばした。

何が起きたのかを私が知った時には、彼の胸にぽっかりと穴が空いており、既に事切れていた。

『上泉、どの……っ!? 何故、何故助けたのですか!!』

何故……何故助けたのだと……問いかけても答えなど返るはずもなく、泣き崩れた私に声を掛けたのは、見るからに麗しい若い女性だった。

『……何があった、東道の倅』

『どちら、様です……か？』

『四大老が一角、神楽坂家当主・神楽坂千姫よ。話してくれるな？』

『……はい、勿論です』

何故その場にいる事などは聞かなかった。気が付けば、泣いていた筈なのに涙が枯れていた。その時から、最早私は泣くことを止めてしまったのかもしれない。事の仔細を全て話すと、千姫殿は手を翳して碇綱の血痕を綺麗にしていた。

その光景に見惚れる間もなく、彼女の視線を感じて踵を正した。

『……お主には覚悟をしてもらう。ここから先、四大老たる道化を演じ続けることを死ぬまで。よいな？』

『異存は……有りません』

もし、あの時碇綱が居なければ死んでいた命。ならば、精々精一杯足掻いてやろうではないかと。そして、千姫殿の連絡を受けて戻って来た上泉剛三殿も加えて自宅に戻った。

武家の趣を強く残す上泉家らしくない振舞いで部屋を荒らす様なことはせず、剛三殿は一目散に父の許へと向かった。そして、躊躇うことなく真剣を突き付けていた。

『……事の仔細はお前の息子から聞いた。真夜も深夜も、元造だけじゃなく、四葉の一族の半分が命を賭けて魔法師の人としての在り方を貫いた。ならば、次は貴様が人間としての命を完遂してもらう――――その命と引き換えにな』

『な、何を言っているのだ、剛三殿。儂は何も』

『黙れ！　家の没落という危機も顧みずに命を賭けてくれた貴様の息子を碇綱が救った。その術者は当然殺すが、その雇い主である貴様も同罪。上泉家を貶めた罪も含めて、ここで引導を渡してくれるわ！』

父の命乞いが最期の断末魔として響く中、父の首が宙を舞った。その首は私の胸元に飛んできたが、私はそれを拒否することなくキャッチした。何故だかは分からないが、私なりの覚悟を示すため……きっと、そうだったのかもしれない。そして、これは紛れもない私の罪なのだと受け止める意味においても。

その後、東道家の家督と四大老の基盤を継ぎ、そして上泉家から嫁を宛がわれることとなった。一種の政略結婚に近いが、今の私に断る気など無かった。その際に剛三殿から警告にも近い言葉を投げかけられ、私は臆することなくその言葉を心に刻み込んだ。

不幸中の幸いなのは、その嫁が非常に理解のある人間だということ。私にとっては過ぎたる妻とも言えるだろう。

それから３０年以上が経った。私は転生前に趣味の一環で原作小説を読んでいたので、歴史の流れは歳による忘却があっても忘れることはなかった。そんな中、私は一つの変化に首を傾げた。

十師族・三矢家の家族構成もそうだが、その三男が突如として義父の道場に通っていると聞いたときは、流石に物の怪の類を疑ってしまった。

何度か彼を見て、その動きがまるで原作世界の価値観に囚われない動きを見せていたことが、私にとって衝撃的だった。そして、それは私にとって少なくない興奮を覚えていた。彼も、恐らくは私と同じ存在である、と。

先日、思わず尋ねてしまったのは迂闊だったが、見逃された形となったことに改めて自分のしたことを恥じた。

彼が神楽坂家に移った直後、次々と増えていく婚約者や愛人たち。聞いた話では２０人にも上るそうだが、その意味で私は実に幸運だったのだろうと思う。今でも２０歳代後半の若さを保っている妻にせがまれて断れない辺りは……ここだけの話にして欲しい。

流石に養子を迎えるのに、これで子供が増えた日には東道家のお家騒動に繋がりかねない。かといって、女性として魅力的な妻を蔑ろにも出来ない……きっと、彼も似たような気持ちなのだろうと思う。だからこそ、するべき処置はきちんとしているわけだが。

そんな事情を九重八雲が知ったらからかうのが目に見えている為、私はいつも決まって〝不味い茶を馳走になった〟と吐き捨てていく。流石に原作世界では別の理由があるのだろうが、これは私なりの意趣返しだ。

言っておくが、決して味は不味くない。彼といると見定めをしてくるような目を向けるため、居心地が悪くなるが故の〝不味さ〟を言葉に示しているだけだ。幹比古君には悪いと思うが、彼が高校卒業したら当主として就任してもらい、暫くは後見としての日々を過ごすことになるだろう。

だが、死ぬまで道化は演じる。それは彼らが亡くなったとしても続ける。これが、前世に遺してきてしまった〝息子〟やそれを引き取ったであろう兄の息子たちに対する、自分が唯一出来る『けじめ』なのだから。

◇　◇　◇

放課後の詩歩と詩鶴による料理教室。詩歩からすれば義理の娘たちにあたる面々なので、気合が一層入っていた。そんな中、味見役として座っていた面々の中で達也は少し満腹気味だった。

「……無理に食べんでも良かったのに」
「流石に自分の為に作ってくれたものを残すなんてことは出来なかったんでな」
「惚気かよ」
　料理教室は悠元の婚約者たちだけでなく達也の婚約者たちにまで波及し、達也は参加した婚約者（ほのか、リーナ、スバル、英美、鈴音、香澄、小春、千秋、栞）の料理を食べきっていた。なので、休憩の為に居座っていた。
「ただ、俺の場合は１３人分だからな……出てくるもの次第だが」
「そう言って、この前食べ放題のバイキングで米４合も食べてたよね？　どこに消えてるの？」
「もしや、ブラックホール内臓なのか？」
「永遠に空腹はシャレにならんが？」
　単純に魔法や武術で消費したエネルギーを補っているだけだが、正直太らないというのはありがたいことだった……その代わり、夜の激しさは累乗加速の気配を漂わせている。それでも週末は自分だけの時間を作れている。
　結局は深雪が尋ねてきて熱い夜に発展しているわけだが。
「……いやさ、モテないよりはモテる方がいいというのは確かなんだが、物事には限度があると思うのよ」
「唐突な発言だけど、それは同意するよ」
「確かに」
「ああ……」
　事の発端は『達也と対立する関係にならない』ということを決めてからだった。最悪中立の立場も覚悟していたわけだが、達也以上の立場に置かれるなんて想像すらしていなかった。
　そもそも、戦略級魔法抜きでも強い達也を本気で管理・制御しようとしていた輩は、元から頭の理性のネジそのものが消滅していたのだろうと思う。でなければ、国際問題などお構いなしに戦略級魔法をぶっ放したりすることなどない筈だ。
　その意味で、セリアから聞かされたこと――――原作の達也が述べて

いた『戦略級魔法師は特殊である』と言う台詞――――は実に的を射ていると思う。
女性陣の料理を待っている最中、ふと言葉を漏らしたのはレオだった。
「なあ、悠元。三高の一条のことなんだが、どうしてアイツはあそこまで諦めないんだ？」
「……悠元の実力は既に証明されているし、司波さんの言葉は僕やレオも聞いていたからね」
直接場面を見たわけではないが、３月の時に一緒となって交流していたレオ。将輝の告白を断ったことは深雪がエリカからの質問でハッキリ断言していたため、それを傍から聞いていたレオや幹比古も把握していた。
レオの言葉を聞いて、幹比古も首を傾げている。
「まさかとは思うけどよ、戦略級魔法師になったから悠元と同等になったとか思ってるのか？　彼には悪いとは思うが、無理だろうに」
「ハッキリ言うね、レオ」
「そりゃそうだろ。悠元と深雪の仲の良さは目の前のお兄さんが認めてるわけだからな」
「……俺は深雪の兄であっても保護者じゃないんだが」
第一高校において悠元と深雪の仲の良さを知らない人間はいない。そして、それはネットワークによって第三高校に伝わっていても何ら不思議ではない。悠元は元十師族でありながらも護人二家の当主として師族会議を取り仕切る立場にいる。その意味で、魔法界に影響を与えている重さはかなり違う。
レオと幹比古の会話に対して、達也は溜息を漏らしながら呟いた。
「例えばよ、アイツにも婚約者なりいるんじゃねえのか？　十師族直系の男子ならそういうのが一人ぐらいいても不思議じゃないだろ？」
「将輝に婚約者ねえ……案外、レオの予測は合ってるかもしれん」
「何か心当たりがあるのかい？」
「ああ。本人絡みで少しな」
一条将輝という人間を対外的に見た時、家柄で言えば十師族・一条

家次期当主という肩書を有している。当然、彼の夫人の座を狙ったりする女子は少なくないだろう。それと、彼が政略結婚に対して余り気分のいい反応を見せていなかったこと。これらのことから踏まえれば、将輝に許婚の関係を持つ人間がいたとしても不思議ではない。
「ただなあ、それであんなアプローチかましてたとしたら、男として最低な部類だわ。それを見越してやっていたとしたら強かだが……」
　前世も含めて、そこまで積極的に動かない（必要最低限の礼儀だけはしっかり払うが）スタンスを継続してきたため、将輝が何を考えて行動しているのかが読めなかった。ましてや、深雪に振られた挙句、悠元に対して殴り掛かったのだ。
　普通に考えれば神楽坂家の信用問題にも関わる為、時代が時代なら下手すると一条家が取り潰しになる案件だった。なので、レオの発言にも一定の説得力が生じるのは確かだった。
「もしくは……婚約相手を恋愛の対象として見ることが出来ない、とかはあるかもな」
「あー……それは何となくわかるかな。一番の代表例は悠元とエリカだよね」
「アレはそれ以前の問題だからな」
　だとしたら、まず一条家の殆どの人間が把握できる範疇にない、ということになる。そして、現段階では婚約として通達する段階に無いことも事実。何せ、当の将輝本人が深雪にその感情を向け続けている限りは、現当主・一条剛毅と言えども無理強いは出来ない。
　それに、将輝の自主性を重んじている点において述べるとするならば、剛毅としては将輝の結婚相手を自分で見つけてほしいという思いもあるのだろう。立場的に政略結婚の線が完全に消えない点に加え、彼が戦略級魔法師となったことで重婚の可能性まで生まれてしまったことを将輝当人はまだ深く認識していない。
「ただ、将輝はどうあっても避け得れない婚姻を強いられる可能性が生じてきた。なまじ戦略級魔法師になったが故にな」
「……流石に、悠元や俺のようなことにはならんと思うが」
「俺や達也の場合は例外中の例外だと思いたいぐらいだよ」

将輝がどこまで食い下がろうとも、一条の名と戦略級魔法師の名誉を捨てない限りは逃げることなど出来ない。なお、将輝がそのゴタゴタに巻き込まれていない最大の理由は、将輝と深雪に関する問題が一条家と四葉家、神楽坂家と当事者に近しい関係者にしか明かされていない点が大きい。

悠元は千姫にその公表をするかどうかの判断を尋ねられたが、その時点で深雪との入籍時期まで話していた。なので、どうせ入籍した時点で公表したも同然となる為に公表は控えることとした。

「九校戦の個人戦の申請はどうやら通ったようだし、代表は俺が務める。十師族当主達全員を驚愕させるような魔法を連発する……無論、ルールの範疇ではあるが」

「寧ろ、悠元相手に誰が勝てるんだ？」

「うーん……達也は？」

「俺は普通の魔法に関して苦労している側だからな。その意味で悠元に勝てない」

「お前ら、今度饅頭食わすぞ」

結局、この話は女性陣が完成した料理を持ってきたことで中断されたのだった。

悠元は頑張って女性陣の料理を食べきり、特に不満は唱えなかった。そこまで極端な味付けもなく、普通に合格点をあげてもいいとは思ったが、それを拒否したのは深雪だった。曰く『悠元さんに合格点を貰ったら、逆に惨めに感じてしまいますので』とのことだった。解せぬ。

その日の夕食は、エフィアのリクエストで一品だけおかずを悠元が作った訳だが……その後に起きたことを敢えて表現するとなれば、〝激しすぎて表現することすら出来ない一夜〟となった。

翌日、朝食を終えた悠元は食後のお茶を啜っていた。今日は受けたい授業も無いため、大人しく家にいることを選択した。その様子を深夜がにこやかな表情をしながら見ていた。

「昨晩は大変だったわね。私も腰が抜けちゃったわ。ご主人様でも精神的には大変かしら？」

「……まあ、否定はしない」
　これでも年頃の男子なので、当然性欲はある。ただ、好きな人に対して箍が壊れているのはどうかと思わなくもない。ただ、それでも深雪曰く『ご主人様は優しすぎて、もっと激しくしてほしくなります』とのこと。
「結局、魔法で治して学校に行かせたが……ハーレムも楽じゃない。というか、深夜まで惚れるとか想定の範疇に無かったんだが」
「……ご主人様は、魔法のことじゃなくて達也や深雪を気遣って私を治した。そんな気質の人なんて、私が知る中だと父や剛三さん、それに千姫さんぐらいだもの」
「いや、流石に限定的すぎなくも……ないな。それで、頭に当たってるんですが？」
「誘惑してますから」
　直球の言葉と悠元に対するスキンシップ。その結果に起きたものは……既定路線とだけ述べておくことにする。

臨む会談と望まぬ来訪

九重寺における元老院四大老同士の会談。東道家当主・東道青波と神楽坂家当主・神楽坂悠元。話は呼び出した側の青波から語られ始める。

「他でもない新ソ連・大亜連合方面の仕置きについてだ。大亜連合にとって重要な周公瑾が消えたことはこちらとしても利である。無論、その黒幕とされる顧傑についてもだ。一番聞きたいのは、大亜連合の戦略級魔法師である劉麗雷の処遇」

「それについては、暗示の類が無いかを専門家にお願いした上で、一条家に引き取ってもらう。大陸の暗示となると多少骨は折れたが、こちらで処置はしておいた」

実は、劉麗雷に事情聴取している最中に暗示の類となる要素はすべて取り除いた。周公瑾の知識を取り込んでいたからこそ、容易に対処できた側面がある。

「新ソ連の艦隊群については、殆どを神楽坂家で引き取ることとした。一部は国防軍の演習用として引き取って頂いた形だ」

「演習用……〝見せしめ〟か」

「別に人的被害は出ないのだから、問題は無いと判断させてもらった」

艦艇については装備の互換性が無いため、一度材料ごとに分別した上で再構築する。民間軍事会社で取り扱う戦力が増えることに文句を漏らす人間は出るだろうが、それだったらこちらの力を借りることなく成し遂げるのが筋合いではないだろうか、と思う。

捕らえた新ソ連軍の兵士についてだが、新ソ連と正式な国交がないので直接交渉することもできないし、そもそも向こうの一方的な言いがかりで攻めてきた側に挙げた拳を振り下ろすタイミングがあるのかも不透明。

そのため、悠元は新ソ連と関係を有する国に兵士たちを国外追放することとした。無論、ただで新ソ連に返すほどお人よしではない。

「捕らえた兵士については、要求を呑まずに一方的な言いがかりで追加派遣することも視野に入れて、全員大亜連合政府に引き渡した。彼

らをどうするのかは向こうの裁量に全て委ねた」
「……今回の侵攻に対する報復も兼ねて、か？」
「そもそも、劉麗雷の自発的な意思とは言え、二国間の争いに日本を巻き込んだのは事実。ならば、その責任を大亜連合政府に果たしていただく。これで拗れても私は知らん」
　そもそも、こんな事を仕組んだのはベゾブラゾフの仕業で、エドワード・クラークもそれに便乗して巳焼島に攻撃を仕掛けた。その報復として新ソ連の軍事力を完全に麻痺させた。軍事衛星全てが悠元の支配下に置かれ、［天陽照覧（てんようしょうらん）］によって新品同然となった衛星は半世紀以上の稼働を可能にした。
「もしや、新ソ連国内における［トゥマーン・ボンバ］と思しき爆発も其方の仕業か？」
「正解だ。戦略級魔法［天極劫火（オメガ・フレア）］――――［トゥマーン・ボンバ］でも実現できなかった限定された範囲内のみを爆撃する魔法を新ソ連国内で行使した。そして、レオニード・コントラチェンコは既に新ソ連にいない」
「……敢えて方法は訊ねないが、義父以上の傑物とも言うべき所業であるな」
　ウクライナ・ベラルーシは新ソ連からの脅威に備える形で連合国家として独立。その初代大統領は元コメディアンという経歴を持つポーランド系ウクライナ人が就任。そして、国家公認戦略級魔法師として公表されたのはジョン・シュヴァルツ。
　この男性だが、実は原作におけるジョー・杜（ドウ）――――顧傑の手助けをしていたＵＳＮＡ軍人で、事件後に［天陽照覧］で治療した後、上泉家で３か月ほど修行して渡欧、イギリスの民間軍事会社に身を寄せた。上泉家での鍛錬を経て戦略級魔法師クラスの実力を身に着け、悠元の手によって戦略級魔法［氷河期（グレイシャル・エイジ）］を修得している。
　悠元がレオニード・コントラチェンコをＳＳＡにそのまま送ることが出来たのは、代わりの戦略級魔法師がいるという状態を確約していたことから
　なお、その彼が最初にメディアの前で発した言葉は、『私は日本に

よって人生を救われた。この国の独立は、新ソ連相手に奮闘している東洋の島国を救う恩返しになると考え、話を受けた』と公言。
本人からの手紙では、かつて『ジョン・ドゥ』として飼い殺しにされていた時から成長したとはいえ、力を持つことで現〝シリウス〟の気苦労も察してしまった……と書かれていた。
「それで、国外に出した［パラサイト］はどうするつもりだ？」
「貴方方からすれば、国にいないことが一番の利ではないのか？　そもそも、積極的に力を貸そうともせず、ピーチクパーチク騒ぎ立てるしか能がないなら、元老たちの頭脳は最早動物以下だ」
「……手厳しいな」
真一（九島光宣）を除く［パラサイト］の連中は、予定通り『ミッドウェイ』でパールアンドハーミーズ環礁の基地に送られた。愛波に術式提供や魔法力の訓練を課すことで強化したが、ＵＳＮＡ軍が余計な手出しをさせないようにホワイトハウスやペンタゴン経由で要請した。
「では、準備が整い次第ミッドウェー監獄に出向くと？」
「ここから身柄を保護することは可能だが、彼らには怒らせた人間が誰なのかを認識してもらわなければならない。ミッドウェー監獄に侵入はするが、救出対象を含めた痕跡全てを抹消する。そして、救い出した彼らにはＵＳＮＡの軍人としての責務を果たしてもらう」
どうせミッドウェーに出向くのだから、そのままワシントンＤ．Ｃ．まで飛ぶことも考慮に入れている。ただ、あの大統領のことだから、事態を知ってハワイかミッドウェーに直接飛んでくる可能性もある。
「それにも関わる話だが、イリーガルＭＡＰの情報を近隣国に提供したところ、台湾の空港で身柄を拘束したという情報が入った」
「……罪状は？」
「ミッドウェー監獄からの無断釈放――――〝脱獄〟という体裁で国際指名手配をしておいた。事態を聞いた大統領が大使館を通して日本政府に許可をくれたのでな」
日本に入国させた上でフルボッコにしてから追放する手も考えた

が、彼らとて非正規でもＵＳＮＡ軍の統制下に置かれているのは事実。なので、ＵＳＮＡ大統領が日本にある大使館を通す形で国際指名手配の手続きを日本政府に要請した。

そして、ＳＥＰＡ及びＳＯＰＡ批准国に通達された翌日、見事に捕まった。なお、彼らはＵＳＮＡ行きの便で強制国外退去となり、ワシントン行きの臨時便へ帰路に就いた。いくら非正規の人間と言えども、下手に表で暴れてＵＳＮＡの心証を下げるような行為は御法度と思ったのかもしれないが、真相は闇の中である。

なお、この手続きをしたであろう首謀者を捕まえるべく、全ての段取りをカーティス経由で伝えている。これでエドワード・クラークが暴走して日本に攻め込んできた場合、容赦なく殺せるお膳立てが整うことと成る。

◇　◇　◇

会談を終えた悠元は、そのままの足取りで東京湾海上国際空港に出向いた。悠元はそのままチャーター便専用のラウンジに通されると、先に来ていた達也らと合流した。

「おはよう、達也にリーナ」

「ああ、おはよう。朝早くから忙しかったようだな」

「単なる事実確認程度のものだけどな」

そして、そのままの足取りで向かった先には極超音速輸送機が停まっていた。この機体はイギリスが保有しているものをベースとして、動力源には水素燃料を用いたジェットエンジン、そして姿勢制御・空力制御に魔法を併用することで、最高マッハ１０という最高巡航速度と約３万キロの航続距離を達成した神楽坂家保有というか悠元のプライベートジェット。

なお、この機体のベースは西果新島の件で迷惑を掛けたとしてイギリス政府から無償で払い下げられたものであった。正確にはイギリス王室から同政府に働きかけた結果の産物らしいが、それ以上のことを考えるのは疲れる気がしたので何も言わずに受け取った。

悠元と達也の他には、深雪と水波、そしてセリアがついていくこととなった。操縦は先日免許を取得した支倉が担当する形で、一路巳焼

島に向けて飛翔する。
巳焼島に新設された４０００メートルの滑走路に着陸して、ジェットから降りてきたところで悠元は別のジェットエンジン音に気付いて西側の空を見上げる。すると、ビジネスジェット――――国内線のチャーター便で使用される機材が巳焼島に向けて降下する。
それを見届ける前に、悠元らは出迎えの車に乗って飛行場を後にしたのだった。
◇　◇　◇
車の行き先は研究所やプラントのある東部ではなく、西部にあった魔法師用監獄の管理スタッフが駐在していたビルに案内された。そして、その理由は立派な装飾が施された旧所長室にて待っていた女性――――四葉家現当主・四葉真夜であった。
「これは真夜さん。この場は四葉殿とお呼びすべきでしょうか？」
「どちらでも構いませんよ。この場においてもっとも立場が高いのは悠元さんなのですから」
「では、真夜さんとさせていただきます……深雪、抓らないで」
「……はぁ」
悠元と真夜のやり取りに対して、悠元の脇腹を抓る深雪、それをキョトンとした表情で見ているリーナ、からかおうとして悠元に拳骨を落とされるセリア、そして疲れたような表情を見せる達也に、その状況を微笑ましく見つめている葉山の構図が出来上がっていた。
「今日は島の様子を視察に来たのです。余り本家で引き籠ると、分家の当主達が煩いんですもの。なので、夢女（ゆめ）叔母様に次第をお願いして此方に来ました」
四葉夢女――――四葉元造の妹にして黒羽貢の母親。四葉直系の祖父母世代で唯一の生存者、そして年齢は神楽坂千姫と同い年に当たり、学生時代は同級生だったらしい。
「それと、悠元さんに確認しておきたいことがありまして」
「自分にですか？　答えられる範囲内なら構いませんが」
「では……今後、カーティス上院議員の要請に応えるとして、ただ救い出して終わりとされるわけではないと思いまして」

真夜の疑問は、悠元ならベンジャミン・カノープスを含めた冤罪の兵士の救出だけで終わらせるとは到底思えなかったからこその疑問。達也や深雪の視線が向けられる中、悠元が一息吐いてから言葉を発する。

「ええ、その為の手筈も全て打とうと思います。なので、ＵＳＮＡ大統領との会談の際は師族会議議長として、そして日本政府特使として出向きます。達也は表向きの肩書きとして自分の護衛ということでお願いしようと思います」

「護衛……心配はしていないけれど、たっくんに務まるかしら？」

「それはどういう意味なのかをお聞かせ願いたいのですが？」

悠元が放った言葉に真夜が首を傾げ、呆れつつも達也が辛辣な言葉を吐き捨てた。確かにガーディアンとしての経験から達也は適任だが、真夜の冗談に対して深雪とリーナが揃って笑みを漏らした。

何せ、互いに戦いたくない相手として認めている以上、特に諍いが生じることはない。とはいえ、達也と同等以上の護衛対象という意味で、真夜の述べた疑問が決して間違った反応ではないとも言える。

「ふふ、冗談ですよ。そういえば、悠元さんにはもう一つお尋ねしたいことがありまして。この島にイギリス海軍の空母が迫っていると報告を受けましたが、特に攻撃する意思は無いという返答を頂きました。この船も悠元さんの差し金ですか？」

「そちらに関しては、佐伯少将が勝手に色々進めていた一端です。とはいえ、何もせずに帰らせるのも国の面子が立たないでしょうから、この島に寄港して代表者との会談を設けます。あの船には［十三使徒］ウィリアム・マクロードが乗っていることは確認済みです」

巳焼島はヘキサライン・マーセナリーの拠点を置くことが神楽坂家と四葉家の交渉で決定し、島の西部はそれに向けての改修工事が急ピッチで進められている。この管理ビルが残っているのは、拠点で駐在する幹部クラスの生活空間の確保が目的でもあった。

話を戻すが、港は複数の大型艦クラスの停泊を可能としている為、海軍空母クラスは余裕で入ってしまう。それを利用して悠元はマクロードと会談を持つつもりであった。

「イギリス連邦の構成国にも含まれるであろうインドを有するＩＰＵの方にも同席して頂くようお願いはしますが、議論の主導は自分が音頭を取ります」
「宜しいのですか？」
「連中には〝対価〟を支払ってもらう必要がありますので」
そうして会談を終えると、リーナとセリアは真夜が引き留めたので部屋に残し、悠元と達也、深雪と水波が迎えに来た堤琴鳴の案内に従う形で部屋を出た。応接室の前に来た琴鳴がノックをした上で「神楽坂様と達也さん、深雪さんをお連れしました」と伝え、応えが返ってきたのを確認した上で中に入る。
部屋の中には四葉分家の一つ、新発田家次期当主・新発田勝成の姿と二人の女性の姿があった。肌の色が濃い推定四十代半ばの女性と、その後ろにはココア色の肌を持つ背が高いスレンダーな二十代の美女が立っていた。
そして、前者の女性――――インド・ペルシア連邦の魔法研究の中心、旧インドの中南部のハイダラーバード大学教授で、戦略級魔法［アグニ・ダウンバースト］の開発者であるアーシャ・チャンドラセカールは悠元の姿を見て、微笑みながら近寄って来た。
「お久しぶりです、ミスター長野。いえ、今はミスター神楽坂でしたか」
「こちらこそお久しぶりです、チャンドラセカール博士。いつぞやの時は大変お世話になりました」
「いえ、我が国の［アグニ・ダウンバースト］の完成度を高めてくれた功績と、［恒星炉］による恩恵を多大に受けている身として、我が国の首相より感謝の言葉を伝える様に仰せつかりました」
インド・ペルシア連邦では、剛三と訪れた時に戦略級魔法［アグニ・ダウンバースト］に対する意見を求められた際、欠陥点を全て書き出した上でその対策案まで提示し、そのメモはチャンドラセカールに渡していた。
インド・ペルシア連邦の戦略級魔法の完成度が高まれば、隣接する大亜連合への牽制にも繋がるし、その北方にある新ソ連への対抗策に

も繋がる。その意図を込めて悠元が意見を出したわけだが、その影響で［アグニ・ダウンバースト］を修得したのだった。
悠元とチャンドラセカールが互いに握手を交わすと、これには勝成があっけにとられていた。さしもの勝成であっても世界のＶＩＰの一角と面識を持っているとは思わなくても無理はないだろう。
とはいえ、ここに招き入れたのは勝成であるため、悠元は勝成に目線を送ると、勝成はその意図に気付いて声を発する。
「教授。こちらが司波達也、そして司波深雪です。達也君、深雪さん。こちらはハイダラーバード大学教授のアーシャ・チャンドラセカール教授でいらっしゃる」
「司波達也です。ご高名はかねてより伺っております」
「こちらこそ、かの四葉の次期当主にお会いできて光栄です」
最初に達也とチャンドラセカールが自己紹介と共に握手を交わす。
「司波深雪です。よろしくお見知りおきください」
「こちらこそよろしく、神楽坂殿の未来の奥方様」
深雪とチャンドラセカールが握手を交わしたのを見届けて、勝成は三人に席へ座るよう勧めたので、そのままソファーに腰かけようとしたところで、チャンドラセカールが隣にいる護衛と思しき女性に視線を向ける。
なので、座る動作を中断してチャンドラセカールの言葉の続きを待った。
「彼女はアイラ・クリシュナ・シャーストリー。私の護衛で、今年の３月に［アグニ・ダウンバースト］を修得した国家非公認戦略級魔法師です」
紹介されたアイラは言葉を発することなく、それでいて丁寧にお辞儀をした。その仕草だけで護衛としての厳しい教育を施されてきたのだと分かるほどだった。
チャンドラセカールがソファーに座ったのを見て、悠元と達也、深雪が座り、水波は深雪の後ろに立つ。勝成はサイドに置かれたスツールに腰を下ろし、琴鳴がその背後に立った。
そうして、悠元らとチャンドラセカールの会談が始まった。

二代に亘る仕打ち

悠元らがチャンドラセカールの会談に臨んでいる頃、リーナとセリアは真夜との会談に臨んでいた。ただ、その雰囲気というものは非常に和やかだった。

「にしても、セリアさんがそんな簡単に割り切れたなんて、祖国に対する未練はなかったのかしら？」

「隣にいる姉のことはさて置くとしても、小娘扱いばかりする大人たちの面倒を見たいがために軍人の道を選んだわけではありませんでした。なので、婚約が決まった時には喜んで辞表を投げつけてやりましたよ」

「あら、噂程度に聞いていた九島閣下の弟さんに負けず劣らずですね」

（……なんでそこまで喜んで話せるのよ）

セリアは悠元の婚約者。一方、真夜は当主を辞めたら悠元の愛人として転がり込むことが決まっている。普通ならば諍いごとに発展する事案だが、悠元の精力を鑑みた時に愛人の存在は逆に救われるようなものだった。

とはいえ、その対象となる悠元本人はいささか疑問を呈していたが。

「って、セリア。何でそこまで親しげに話せるのよ」

「だって、真夜さんはお兄ちゃんの未来の愛人だよ？」

「え？　は？　……悠元ってそっちの傾向が強すぎるの？」

「それ、お兄ちゃんに言ったら、漏れなく関節技（にくたいげんご）の餌食だからね？」

なお、セリアも転生特典で強力な自己修復術式を有している為、悠元に関節技を掛けられても即座に回復してしまう。寧ろ、強大な魔法力を維持するために強制的な発動を促す意味で悠元をからかっていることが多い。

流石にそんな関係をリーナに話すこと自体は避けたが。

「リーナさんは、何か不満とかはありますか？」

「いえ、寧ろ軍にいる時よりも豪華すぎるぐらいで恐縮するほどです。些かオーバーすぎるのではないかと思うぐらいでして」

「何か要望がありましたら、遠慮なく言ってくださいね。そういえば、学校には何時から通うのかしら？」
「来週からの予定です。クラスは聞いていませんが」
　リーナの帰化手続きは既に完了しており、彼女が日本国内にいても咎めるような人間はかなり限定されるため、来週から第一高校に通うこととなった。戸籍上は『六塚（むつづかり）理奈（な）』となり、燈也とは叔父・姪の関係、泉美と義理の姉妹になる。
　なお、それを聞かされた燈也は盛大に頭を抱えたが。
「リーナさんは……覚悟はいいの？」
「はい。ただ、その為に一度ＵＳＮＡに出向いて全ての決着をつける必要があると考えております」
「お姉ちゃんがまともな事を言ってる……」
「セリア!?　折角の台詞に茶々を入れないでよ!!」
　真夜の問いかけに対するリーナの決意にセリアが呆れ気味に呟くと、リーナがそれに噛み付いて取っ組み合いに発展する。それでも用意された菓子やお茶に被害を及ぼさない範囲での争いを見て、真夜が笑みを零していた。
「ふふ、リーナさんは妹さんに愛されているのですね」
「あ、す、すみません。セリアも謝りなさい」
「すみませんでしたー」
「ふざけてるんじゃないわよ！　ワタシにとっては未来の姑なんだから！」
　結局、リーナとセリアの取っ組み合いは二人の気が済むまで続けられてしまい、それをまるで試合観戦するかのように見つめる真夜であった。

◇　◇　◇

「神楽坂殿は、現在の魔法師の境遇についてどうお考えでしょうか？」
　チャンドラセカールが悠元に尋ねる。悠元に対しては名字呼び、達也は『ミスター』、深雪は『ミス』、そしてチャンドラセカールは『博士』の呼び方となった。悠元自身の功績もあるが、それ以上に〝神楽坂〟の肩書きの強さが色濃く出た結果であった。

「もっと具体的に言うと、各国政府による魔法師管理の在り方についてです」
その問いかけに対して、悠元は考えることなく答えを返す。
「現状における話であれば、どの国も十分な管理がなされているとは言いにくい――――魔法師の側からすれば、不十分と評しても不思議ではないでしょう」
「そうですね。私もそう考えております」
何せ、佐伯主導であんな案が罷り通ろうとしたほどだ。確かに、魔法による〝見えない恐怖〟を感じてもおかしくはないし、それならば目に見える形で管理するのは道理である。だが、それをされた側からすれば『魔法資質を有しているだけで管理される』という恐怖を抱くことにも繋がる。
そこから反発して、最終的に少数の魔法師が多数の非魔法師を支配する未来の可能性を誰しもが危機として受け止めていないことも問題と言えた。だからこそ、悠元は魔法師でありながらも合法的・社会的な方法で相手を駆逐する手段の構築に余念が無かった。
「現在の世界は、魔法師に認められるべき基本的人権が軽視されている傾向にあります。民主主義社会においても、彼らを人間として扱おうという基本的なことが蔑ろにされています。魔法師の軍事利用はその顕著な例です」
元々、チャンドラセカールは魔法師として十分な能力を持っていない。だが、戦略級魔法をはじめとした軍事用魔法を開発した手腕を以て、魔法師の軍事利用に加担した側――――政府側の人間の彼女がその意見を持ったことに、達也や深雪は驚きを見せていた。
「神楽坂殿は、本来私が考えていた魔法師の併存ではなく、共存の道を模索している。そして、欧州に蔓延っていた反魔法主義の芽が潰され、魔法師の人権について真剣に議論する場を作り出した。その行動に感銘を受け、相談したいとこの場に現れた次第です」
チャンドラセカールは、悠元と達也が『灼熱と極光のハロウィン』の戦略級魔法師であることも推察している。だが、戦略級魔法が持つ可能性と危険性を誰よりも理解しているからこそ、彼女は今回の訪日の

目的を明るみに出した。
　達也と深雪が悠元に視線を向ける中、悠元は少し考えてこう切り出した。
「私は、国際魔法協会そのものが全てをカバーできる組織ではないと判断し、魔法資質保有者の基本的人権を守る国際組織の立ち上げを考えております。ですが、仮に日本が音頭を取ったとしても、中立性を保つための本拠地選定は必要と考えております」
「……関与はするが、統治はしない。そういうことですね？」
「その通りです」
　何かしらの関与は避けられないとしても、魔法資質保有者の基本的人権の保障・保全はあくまでも中立的な視野の下で実行されるべきこと。それに、ＥＳＣＡＰＥＳ計画とＳＴＥＰ計画はその根幹を成す目的で提案されたもの。
　無論、チャンドラセカールの来日も悠元や達也の［恒星炉］を利用したいと考えている筈。ならば、インド・ペルシア連邦の政府中枢に近い彼女の協力を得られるのは、これ以上ない好機でもあった。
「ならば、市民（シビリアン）と一定の線引きをするという意味で『ｍａｇｉａｎ（メイジアン）』という呼称は如何でしょうか？」
「『ｍａｇｉｃｉａｎ（マジシャン）』でないのは、奇術師のイメージが拭えないからですね？」
「ええ……神楽坂殿が一番実感していると思われますが」
「それは今更なので諦めたことです」
　その後、魔法技能師については『魔法を組み立てる者（マジック・コンストラクター）』ではなく『ｍａｇｉｓｔ（メイジスト）』――メイジアンの専門職業人（テクノロジスト）という意味だが、魔法専門職のスペシャリストという意味合いも込められての言葉と位置付けられた。
　そして、会談が一区切りついた後に悠元から話を切り出した。
「博士。この後、時間はございますか？」
「ええ、元々プラントを視察する予定もありましたので。何かご用件でも？」
「実は、この島にイギリス軍空母が寄港する手筈となっております。

そして、その艦に乗っている人物――――［十三使徒］ウィリアム・マクロードとの会談に御同席願いたいと考えておりますが、如何でしょうか？」
　旧インドを有するインド・ペルシア連邦からすれば、イギリスは連邦の首長国にして過去の因縁を有する欧州の先進国家。悠元の提案にチャンドラセカールは少し考えた後、悠元に尋ねる。
「時間は何時になりますか？」
「昼食後の時間を指定しておりますので、休憩時間は当然ございます。その分、プラント視察の時間が削られることになりますが」
「……私どもとしても、この時期にイギリス空母が寄港すること自体異例な事です。その提案、快く受けさせていただきます」
　普通に考えれば、増長する新ソ連の抑制の為に派遣されたという筋は通る。だが、イギリスは新ソ連やＵＳＮＡとディオーネー計画の部分で協力を結んでいた背景がある。いわば日本に対する敵対行為に近い所業を見せておきながら、堂々と空母が派遣されてくること自体〝異常〟だとチャンドラセカールも感じ、悠元の要請を承諾した。
「分かりました。それで昼食ですが、ご希望のものを可能な限りお出し出来ます」
「では、日本に来たことですから、『スシ』を所望します。数年前に剛三殿が握ってくれたものが忘れられなくて」
「……悠元」
「あの爺さん、若い頃は家督を継がなかったら寿司職人になるって修行してたらしいから」
　寿司のことを知るには、色んな職人を見なければいけない――――そう思った剛三は剣術修行の片手間に寿司屋の住み込みで働いていたことがあった。それこそ老舗の寿司店で働いていたこともあり、上泉家の家督を継がなかった時は店を開いて寿司職人になりたかったらしい。
　だが、父親や兄、息子の急逝によって家督を継がなければならず、更には四葉の復讐劇で多くの仲間や親友を喪った。剛三が東道氏や樫和氏を殺したのは、自分の夢を奪ったことに対する復讐の一面もあっ

たのだろう。
　とはいえ、長男を除けば娘ばかり子沢山となった剛三。女系で言えば１３人もおり、その内の一人は剛三が住み込みで働いていた寿司店の店主の息子に嫁がせた。彼は父親から『剛三の技を盗んで職人として大成せよ』という名目で一時期修行に来ていたらしい。
　その店には剛三と何度か訪れているが、前世でも食べたことの無いような美味さに感動したほどだった。以降、上泉家だけでなく神楽坂家や三矢家御用達の寿司店となったのは言うまでもなく、お祝い事には必ずここの店の寿司を頼むほどだった。
　閑話休題。
「なら、出前になるけど頼んでみるか」
「え？　この島で出前が出来るのですか？」
「出来るよ。ちょっと手の込んだ方法だけど」
　離島となると、当然食生活が本土と変わってきてしまう。当然、当たり前のように出来ていた出前やデリバリーサービスが受けられないという不便さも生じる。それを解決するため、悠元は［疑似瞬間移動］を用いた方法を模索していた。
　仕組みは単純で、本土の特定の場所（神楽坂家系列の企業）に配達してもらい、そこから［疑似瞬間移動］系列の魔法を用いて品物だけ移動させる方法。刻印型術式を用いるため、決まった二点間での移動に制限されるが、それでも海の天候に左右されない確実性の高い方法。
　そうして、悠元が端末で連絡をして３０分少々……リクエストのあった寿司が立派な器に入って届けられた。流石に量が多いため、リーナとセリアも同席する形で昼食の時間となった。
「う、美味い……これが、日本の寿司……」
「流石に向こうのアレはねえ……」
　別に貶すつもりはないが、悠元も前世の『ＳＵＳＨＩ』がイメージにあったためか、苦笑を滲ませたのは言うまでもない。
　◇　◇　◇
　巳焼島の空港拡張工事と共に、南部の港湾部分も大幅な工事が行わ

れ、戦艦・空母クラスの停泊が可能なほど大規模の施設が整っている。これを見て四葉家が異常だと論じる人間もあるだろうが、巳焼島の土地利用は神楽坂家が最終決定権を有している為、誰しもが口を挟めない。

そして、港にイギリス軍空母『ジブラルタル』が接岸し、出迎えに来た車が島西部のビルに到着したのは13時過ぎのこと。車から降り立った人物は、イギリスの［十三使徒］ことウィリアム・マクロードだった。そして、その隣にはスーツ姿の中年ぐらいの男性が険しい表情を見せていた。

悠元と達也からすれば、西果新島の件にイギリスが関与しているのは明白であり、その事実はイギリス王室と政府に事態の説明責任を要求した経緯がある。本来ならばマクロードが言葉を発するところだが、その代わりとして隣にいた男性が深く頭を下げた。

「イギリス王室特使、アーヴィング・ヴィンセントと申します。此度は、隣にいる我が国の戦略級魔法師（おろかもの）が多大なご迷惑をお掛けしたにもかかわらず、会談の申し入れをしていただけたことに感謝しております」

「師族会議議長・神楽坂悠元です。それで、此度の訪問理由をお聞かせいただいても宜しいでしょうか？」

「無論です。事情を問いただしたところ、こちらの国の軍人から何かしらの提案をされてのものだと聞き、王室としては看過できないと私が派遣された次第です」

その男性もといアーヴィングは、佐伯広海によって何かしらの交渉を持ち掛けられたところと、日本の戦略級魔法を抑止する方法の模索ということでマクロードが出向こうとしたところを王室と政府が特使としてアーヴィングを派遣し、その真意を探れと命ぜられたこと。

事情を話すアーヴィングに対し、口を噤んだままのマクロード。確か、日本に来ているアニエス・ヴィンセントはマクロードの孫娘だと聞いている為、マクロードはアーヴィングの舅にあたるのだろう。

「恐らく、戦略級魔法師を管理・制御しようということなのでしょうが、神楽坂殿は如何お考えかお聞かせ願いたい」

「予め言っておきますが、交渉相手だった佐伯広海少将は新ソ連に備えるため、北海道に異動しております。それと、彼女が提案していたのは『戦略級魔法師管理条約』――その事前交渉を国際魔法協会経由で貴方方の国と行っていた事実も掴んでおります。必要ならばその資料をこの場で提示いたしますが」
「何と……馬鹿な真似を……」
悠元が述べた事実にアーヴィングが絶句した後、彼はマクロードを睨んでいた。
アーヴィングは魔法師だが、誰しもが疑わぬほどの国家に対する忠誠をイギリス王室に買われ、イギリス王室の要人として働いている。そして、彼の娘も魔法師として十分な資質を備えており、政府機関所属の魔法師として勤務している。
だが、彼の目の前にいる人物は国益と謳っておきながら日本を貶めようとした。そこに新ソ連を加えれば、どんなことになるかなど明白だというのに、それを止めるどころか焚き付けたことはアーヴィングも把握していた。
第二次大戦前に国交を絶たれ、その後に伝統ある王国同士としての国交を回復させた信頼を、マクロードは根本から絶とうとしたも同義。
「ウィリアム・マクロード。アンタがどう取り繕うとも、西果新島の件をエドワード・クラークと共謀して実施した事実は把握している。イギリス王室の配慮から直接的な報復は実施しなかったが、東西ＥＵの再統合によってイギリスは面目を失した」
「……成程。その差し金は其方か、神楽坂悠元」
「御明察。俺にとって魔法はあくまでも差し迫った事態に対する手段の一つでしかない。この場でイギリス連邦に対して戦略級魔法を行使はしないと明言する。だが、日本に対する不利益を被る様な行為に加担した場合、その限りではないと心得てもらう」
ディオーネー計画そのものに対する言及はしなかったが、悠元の言葉でマクロードもその本気度を肌で感じ取り、冷や汗が頬を伝うほどだった。

「さて、ウィリアム・マクロード。これまでの二国間の信用に泥を塗った対価を支払ってもらう。エドワード・クラーク及びイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフとの会話によって得た情報全てを話してもらおう。特使殿もよろしいでしょうか？」
「無論です。女王陛下より神楽坂殿に対する最大限の便宜を図るよう言い含められた上、『マクロードが嘘を吐いた場合、容赦なく罰せよ』とも仰せつかっております故」
「分かりました。言っておくが、俺は先天的な聴覚で相手の真偽を見抜ける。騙せるとは思わないことだな？」
「……分かった。いえ、承知いたしました。私の知る事実の全てをお話いたします」
父親は先代の神楽坂を蔑んだがために半殺しに遭い、そして自身は今代の神楽坂に詰め寄られる事態となった。事ここに至っては無力だと察したマクロードは、エドワードやベゾブラゾフとの会談で得た情報全てを正直に話すことでしか生き延びる手段を見いだせなかったのだった。

目的地：ミッドウェー・パールアンドハーミーズ

会談は夕方に終わり、イギリス海軍の空母『ジブラルタル』は横須賀港へ寄港後、イギリス本国に帰らず対新ソ連の戦力として滞在することが日本政府に通達された。なお、アーヴィングとマクロードは極超音速輸送機でイギリス本国へ帰国した。

彼らの親族であるアニエスは二人と面会したが、戦略級魔法師管理条約の話を聞いた際はマクロードに対して平手打ちで彼の頬を叩いた。曰く『貴方も魔法師なら、この条約がどんな影響を与えるのかも分かっていない筈がない』と言い放ち、イギリス本国へ帰る意思がないことを明言した。

そのままジェラルドの許に転がり込むつもりなのだろうと思うが、当のジェラルドは絶句に近い有様であった。そんな彼を気遣ってなのか、アーヴィングはジェラルドの肩に手を置き、「すまない」と声を掛けたのだった。

チャンドラセカールとアイラはチャーター便で帰路に就いた。国際機関の立ち上げについては時間を要するし、それに新ソ連や大亜連合方面が慌ただしくなるのは目に見えている為、あまり長居するのも危険だと思ったのだろう。

ただ、機関立ち上げの際には日本で調印式を執り行うことが決定している。どんな組織とするかは大まかな構想を有しているが、これから詰めるべき内容が多い。

そして、悠元は師族会議議長として臨時師族会議の呼びかけを行い、1時間後にはオンライン経由とはいえ全当主がそろい踏みとなった。なお、場所の都合もあって悠元と真夜が隣に座る形での参加となっている。

「急な呼び掛けに拘わらず、集まって頂いて感謝する。此度のことは全当主が情報共有せねばならない事態と考え、会議の体裁を取った」

『それは、神楽坂殿と四葉殿が同じ場所にいることも大いに関係しているのでしょうか？』

「当たらずも遠からず、とだけ述べさせてもらう」

そもそも、［トーラス・シルバー］の件で神楽坂家と四葉家が協力関係にあることは師族会議メンバーも周知の事実の為、ここについては繰り返すことなく八代雷蔵の問いかけに簡潔な答えを返した。
「今回、外国の要人と会談する機会を得たが、インド・ペルシア連邦のアーシャ・チャンドラセカール博士、そしてイギリスのウィリアム・マクロードの二人と会談した。前者は四葉殿の計らいによるものだが、後者は国防軍絡みでの来訪だったようで、其方については既に対処した」
『国防軍絡み、ですか？』
「より正確に言えば、国防陸軍の佐伯広海少将が外務省や国際魔法協会を通してウィリアム・マクロードに戦略級魔法師管理条約の締結を持ち込もうとした。だが、その企みは既に阻止した故、安心して頂きたい」
『……息子にとっても聞き逃せない案件だったみたいですな』
六塚温子が首を傾げ、それに対して答えた悠元の説明に剛毅が唸った。ましてや、先日戦略級魔法師となった一条将輝のことに関わるとなれば、父親としても看過できる案件ではなかった。
『ところで、チャンドラセカール博士とは何を話されたのですか？』
「主に魔法師の基本的人権に関する認識の話をさせて頂いた。その意味で、魔法協会が十全にその役目を担えているとは言い難いことも伝えている。無論、それは我々にも当て嵌まる話であることは認識して頂きたい」
決して他人事ではない、というのは師族会議にも当て嵌まることであり、これまで魔法師の取り合いを国防軍と繰り広げて来たのは言うまでもない。即戦力の魔法師を確保することで体制を安定させるのは理に適っているが、そもそも需要の受け皿が広すぎるのに、供給自体が全く追い付いていない現状を誰も触れなかったのが一番の問題だと思う。
「今後についてだが、根本の原因となるエドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ――この両名の対処が最優先事項となる。ただ、北陸の一条家と山陰の一色家、九州の八代家と奄

美・沖縄の七草家については、新ソ連もしくは大亜連合方面の警戒に注力して頂きたい」
『つまるところ、神楽坂殿が対処に当たると理解しても？』
「無論、そのつもりだ。それと、彼らが標的にしている［恒星炉］プラントの立地上、神楽坂家と四葉家がその対処に当たる。何か進展があれば改めて会議を開催する方針で宜しいか？」
今回は別に腹の探り合いをする場ではないため、臨時師族会議は穏便な雰囲気で終了した。神楽坂家と四葉家の協力体制については、そもそも悠元と深雪が婚約関係にある為、異論が挟まれることはなかった。
会議を終え、悠元は真夜に視線を向けた。
「では、真夜さん。巳焼島の防衛体制については基本的にお任せしますが、こちらも『神将会』全員を動員することは御承知おきください」
「分かりました。にしても、九校戦の再開催で忙しいのに、エドワード・クラークには困ったものですね」
「忙しいのは一部の人間に限られますが」
その九校戦だが、会議前に一条剛毅から九校戦・個人戦の開催提案を持ち掛けられた。提案の主は三高の前田千鶴校長らしく、彼女曰く『悠元の本気を一条将輝に見せつける』とのことらしいが……今回はテスト要素があるため、団体戦に出れないデメリットは出てくるが、個人戦でのエントリー枠が増えることになる。
個人戦は各校の各学年男女一名ずつの計六名。第一高校で想定している出場メンバーは、男子が1年矢車侍郎、2年壬生光宣、3年神楽坂悠元。女子は1年三矢詩奈、2年十文字理璃、3年司波深雪。各々の魔法特性を鑑みた場合、これが安定した布陣となるだろう。
個人戦の種目はスピード・シューティング、ロアー・アンド・ガンナー、アイス・ピラーズ・ブレイク、男子：シールド・ダウン、女子：ミラージ・バットの4種目による総合成績で競う方式で話は固めた。団体戦の戦力ダウンは免れないが、こればかりは仕方がないことだろうし、他校も同じ条件で戦うことになる。一高や三高以外の魔法科高校からすれば躍進のチャンスにも繋がってくる。

「まずはミッドウェー刑務所やパールアンドハーミーズ環礁米軍基地の対処が最優先です。その上でエドワード・クラークを嵌めて合法的に抹殺します」
「ベゾブラゾフはどうされるのかしら？」
「無論、ベゾブラゾフも排除するのは確定ですが、彼にはとっておきの役目を与えてあげます。戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］の強さを誇示するという意味でも」
　国防軍の妨害を排除したことで、原作のように達也を偽装入院させる必要も無くなった。合法的に国外へ出ていける手筈は整えたため、こればかりは『元老院』もとやかく言える立場ではなくなった。
「そう仰るということは、何か大きな花火でも打ち上げるのかしら？」
「余り見た目の良い花火ではありませんが……それで、何故抱き着いているのですか？」
「悠君成分を補充したくて」
　なお、その光景を見た深雪が、空いている客室に悠元を連れ込んでいく光景を達也は目撃した。その光景はリーナも目撃しており、冷や汗を流していた。
「……達也、いいの？」
「俺に出来るのは、悠元を労ってやることだけだ」
「そこは深雪じゃないのね……」
　そして、〝記載することが出来ない行為〟によって深雪の腰が抜けたため、悠元のお姫様抱っこで帰路に就いたのだった。

◇　◇　◇

　７月１２日深夜。横須賀港から一隻の艦船が出港した。事前に許可を得て動いている船の名は日本の最新鋭空母『ずいかく』。横須賀港を出発後、房総半島沖を経由して旧千葉県房総半島の東に針路を進める。
　そして、房総半島東約５０キロのところで停止し、甲板から大型エアカーが発進して更に東を目指す。ただ、エアカーを操縦しているのは達也だが、悠元はエアカーの上に乗っていた。理由は達也以外の同乗者がいて、リーナとセリア、それにジェラルドの三人だった。

なので、誰かが爪弾きに遭う形となる為、単独でも迎えを把握して乗り込める悠元が外にいて、[幻影行列(ムーンエスケープ)]でエアカーの存在を完全に欺いていた。
こうなった経緯は5時間前に遡る。
「え？　ワタシも行くの？」
元々、救助だけだと思っていたリーナは首を傾げていた。だが、その提案をした達也の言葉に理解を示したのはセリアだった。
「あー、成程。達也(おにいさま)は単に助けただけで終わるとは思っていないんだね？」
「その通りだが……流石に同い年から兄呼ばわりは止めてほしいんだが」
「だって、お姉ちゃんが達也と結婚したら、私からしたら義理の兄だよ。だからお兄様」
「……達也、すまない」
ＵＳＮＡ政府があれだけの誠意を見せたことに加え、大統領の性分ならば直々に出向くことが想定される。なので、単に助けて御終いという流れになるとは思えない。最悪、ＵＳＮＡ本国に足を運ぶことにもなるため、一応パスポートだけは携帯していく必要があった。
「だとしたら、ジェラルドも同行させた方がいいな。リーナの護衛になるし」
「そうなると、エアカーの定員がオーバーするんだが……どうする？」
「俺は外でいいよ。最悪飛んでいくし」
「飛ぶというより、むしろ瞬間移動」
「少し黙れ」
悠元の関節技でセリアが沈められ、これには周囲から苦笑が漏れていた。事実なのは間違いないが、もう少し言葉の節度を弁えてほしいと思わなくもない。そんな彼女を婚約者として受け入れた側が言えた台詞ではないのかもしれないが。
閑話休題。
悠元が乗る関係で低空を走行しているわけだが、悠元がエアカーの上に乗っているのは、彼の目線の先に見えてきた物体――ＵＳＮＡ

海軍の原子力潜水空母『バージニア』にいる人物との折衝役の為だった。
　エアカーは展開されたフライトデッキに着陸し、艦外殻のスライド式ハッチが閉じたところで悠元はデッキに降り立った。すると、その到着を待っていたかのように、一人の男性が近付いてきた。その男性は悠元も知っている人物であった。
「これはカーティス大佐殿。お久しぶりでございます」
「こちらこそ、神楽坂殿。いつぞやのテロ騒ぎでは剛三殿共々感謝しております」
　悠元と『バージニア』のマイケル・カーティス艦長は知己で、数年前のワシントンで起きたテロ騒動と自由の女神像倒壊阻止の際に知り合った。当時、カーティス艦長は非番で家族と共に来訪しており、已む無く応援として駆り出された時に知り合った。
「伯父より事情は伺っている。君らに仕事を頼むのは思うところもあるが……どうか、我が国の災厄を祓っていただきたい」
「無論、そのつもりで来ましたので、お引き受けいたしましょう」
「助かります。そして……君も一緒とはな、メイトリクス大佐」
「カーティス大佐もご無沙汰しております」
　年齢が違うのに、同じ大佐の階級を有する二人。だが、カーティス艦長はジェラルドの実力をその目で見たことがある者の一人。故に、彼を若造扱いすることはせず、頼もしい同僚として見ていた。
「今回のことは自分としても看過できませんし、閣下より命令を受けてのものです。必要とあらば我が国を脅かす［パラサイト］の排除を敢行いたします」
「……君も、変わったな」
「覚悟を決めただけであります。無駄な殺生など自分の望むところではありませんが」
「それでいい。君はそれでいいのだよ」
　カーティス艦長はジェラルドの内に秘めた何かを感じ、それ以上のことは話さずに艦内へと案内した。リーナとセリアについて触れなかったのは、彼女たちの素性も聞き及んでいたためであった。

潜航モードとなった『バージニア』は、一路ミッドウェー諸島およびハワイ諸島方面を目指して針路を向けた。

◇　◇　◇

神楽坂本家の離れにて、千姫は支倉佐武郎より報告を受けていた。

「御当主様は司波殿らも含めて無事に『バージニア』へ到着しました」

「そうですか。全く、佐伯少将も軍人としての心構えがあれば、北海道へ飛ばされることも無かったでしょうに」

そう漏らしたのには理由があり、佐伯は一時期千姫の教導を受けていたことがあった。軍人としての資質は優秀だったが、その裏には九島烈への対抗心が見え隠れしていた。そんな部分を感じ取ったのか、支倉が問いかけた。

「畏れながら、それは九島退役少将が大いに関係なさっているのでしょうか？」

「そうね。より正確に言えば、烈と佐伯少将の父親――佐伯広治（さえきひろはる）退役陸軍少将の因縁ね」

佐伯の父親である広治も陸軍将校であり、九島烈とは同期の誼であった。そんな彼は、烈が魔法師強化措置に成功したという話を聞き、彼も志願した。

「佐伯退役少将は烈が羨ましかったのでしょうね。でも、天使は微笑んでくれなかった。彼は強化措置に失敗して、長いこと病院での生活を強いられてしまった。亡くなったのは措置を受けてから２０年後の話になるけど」

「……力を欲するが故の末路、ですな」

「そうね。だからこそ、佐伯は烈をライバル視した。寧ろ、憎んだのかもしれないわね。烈が成功してしまったから父は死んだのだ、と」

当時、魔法師の実力を上げる方法は確立されていなかった。その道を今代の神楽坂が見出す以前は、人体実験を通して得られた理論に基づくもので育成されていた。そして、烈が勝ち得た未来は広治を敗北に追いやった……と、佐伯がそう思って烈を見ていても、何ら不思議ではなかった。

「でもね、いくら魔法師を守るためとはいえ、人の道を外れるのは大概

にすべきなのよ。悠君はその典型例かも知れないけど、あの子ほど権力や権威に頼ることの危険性を理解している若い世代はいない。だからこそ、私は彼に次の神楽坂を託したの」
「どこまで行っても実力と論理に基づく行動を見せておりますから。あれだけ女性に好かれるのも納得できる話です」
悠元が〝転生者〟という事実はさて置くとしても、彼はあくまでも実績と実力で道を切り開いている。だからこそ、彼を慕おうとする女性の数が多くなったのかもしれない。この分だと、曾孫の数は両手で間違いなく足りないのだろう、と千姫は笑みを零した。
「そんなサブちゃんも、和美ちゃんに対して律儀に手紙を出しているそうね。この前は一緒に出掛けたことも聞いているわよ？」
「あれはデートと言うよりも相談事に付き合ったようなものですが……」
「いっそのこと、手を出しても私は一向に構いませんよ？」
「相手は小学生なので、流石に倫理の面でアウトですよ」
破天荒な先代当主とハーレムに巻き込まれてしまった現当主。その一端を食らったような形の支倉としては、せめて相手が婚姻可能な年齢になってから考えるべきだと窘めるように呟いた。

現場に出向いてきた国家元首

原子力潜水空母『バージニア』は日付変更線を越え、艦内時計が設定し直された。時間は18時を示しており、見込みではあと1時間でミッドウェー監獄に到着する。

当初の予定では達也と悠元がミッドウェー監獄を襲撃後、パールアンドハーミーズ環礁基地にいる面々が合流して暴れる予定だったが、真一の方で予定変更をしなければならなくなった。理由はハワイ諸島に向かっている大統領専用機（エアフォース・ワン）。そこに搭乗している人間は定かでないが、少なくともUSNA政府高官なのは間違いない。

そのため、パールアンドハーミーズ環礁米軍基地では真一が支配下に置いた［パラサイト］を全員冬眠状態にして、愛波と共に日本へ帰還する方針を固めた。そのため、達也にはエアカーで真一と愛波を連れ帰ってもらうこととし、［パラサイト］の治療は悠元が担当することとなった。

今回、あくまでも達也は〝協力員〟の立場であるが、四葉家としてもUSNA政府とのパイプを持っていても問題は無いと判断している。向こうとしても、かの『触れてはならない者たち（アンタッチャブル）』と誼を結べるのならば、多少の不利益には目を瞑るだろう。

そして、悠元はカーティス艦長の招きで『バージニア』の艦長室にいた。

「かの上泉殿に付き添っていたということから只者ではないと思っていたが……伯父の言葉も腑に落ちる次第だ」

「まだ何もしていないのですがね。少なくともこの国に対して本気で敵対した覚えもないので」

「……その〝本気〟でなくてあれだけのことをしたとなれば、十分すぎるだろう」

ワシントンでの反魔法主義者によるテロ騒ぎの際、悠元は一人を大西洋方面に飛ばしたわけだが、残りの面子は市街地への被害を避けるように海の方向へ全員吹き飛ばした。尚、剛三が吹き飛ばした輩は全員〝お星様〟となった。無論、生きているとは到底思えないだろう。

悠元の言葉に対し、カーティス艦長は率直な意見を述べた。
「君の言葉を疑うわけではないし、風の噂で君がスターズ最強格の魔法師を倒したことも聞いている。親族であるカノープス少佐からも君のことは聞いた。あの乱暴者のラルフを難なく沈めたことも」
「あれですか……あの時は同盟国とはいえ他人様の問題に首を突っ込んできて何様かと思いましたよ。本来、自国のことは自国だけでケリをつけるべき問題であらねばなりません」
「……そうだな。実に耳が痛い話だと思う」
南盾島の件に関しては、戦略級魔法という観点で出張る意味も分からなくはないが、日本国内で片が付けられる問題に首を突っ込んだ挙句、危うく核戦争の再来になり掛けたのだ。その意味をしっかり反省してほしい――という意味を含んだ悠元の言葉に、カーティス艦長は「ご尤もだ」と呟きながら頷いた。
「その君の実戦を間近で見られるのだから、私は幸運だと思うよ。かの万夫不当を成した上泉剛三殿の傍らにいた少年が織りなす戦い……軍人としては失格なのかもしれんがね」
「ご期待に沿えるかどうかは分かりませんが、少なくとも頼まれた要請を完遂することだけはお約束いたします」
「それを明言できるというだけでも、非常に心強いよ……伯父に代わり、どうか親族を含めた冤罪の兵士たちを救ってくれ」
「心得ました」
カーティス艦長は、まるで少年のように心躍っていた。彼も上泉剛三に憧れ、彼のように意志が通った人間でありたいと心掛けてきた。
その憧れを傍で見続けて来た少年がどんな戦いの構図を描き出すのか……軍人として味方に被害が出ることを喜んではいけないが、伯父が認めるほどの人間が織りなす戦いの在り方に、カーティス艦長はその期待も込めて悠元に頭を下げたのだった。
◇　◇　◇
現地時間7月16日午後6時（日本時間7月17日午後3時）。原子力潜水空母『バージニア』は所定の位置に着いた。悠元は既に戦闘服へと着替え、達也の準備を待っていた。リーナとセリア、ジェラル

ドについては後詰という形で待機することとなった。いくら秘密裏にとはいえ、同じ国同士の兵士が争えば［パラサイト］の問題が表面化しかねない。

悠元とて必要以上の混乱など望まないため、その事情については了承した。

そして、午後７時半。悠元は達也と共にエアカーへ乗り込み、一路ミッドウェー監獄へ飛ぶ。今回はエアカーに搭載されたステルス機能のテストという側面と、それにパールアンドハーミーズ方面にいる真一たちに〝合図〟を送る意味で派手に暴れることで合意していた。

ただ、派手にとは言ったものの、ミッドウェー監獄そのものを消滅させることは禁じられている。別にそんなことをする必要が無いし、今回はターゲットの救出が主目的。よって、如何に手っ取り早く事を進めるかが鍵となる。

ミッドウェー監獄はミッドウェー島（島というよりは小島からなる諸島）のサンド島東半分を占める大規模な施設。魔法師を閉じ込めるという意味では、これほど規模が大きくなっても無理はないだろう。

エアカーは既に監獄の対空砲火の射程圏内に入っているが、発砲はない。その理由はエアカーに搭載されたステルス機能にあった。

［恒星炉］に使われている人造レリックを用いたシステムで、ドライバーの魔法技能に依存することなく高度な探知妨害・認識阻害の魔法を発揮する。この開発には無論悠元が関わっており、最大持続時間は当初の１２時間から２４時間へと大幅に伸びている。

尤も、四六時中ステルスすることが出来る悠元本人に比べれば大したものではない、と達也が完成時に述べた言葉に対し、悠元がジト目を向けたのは言うまでもない。

島の北西部に着陸した後、達也は［フリード・スーツ］に着替え、二人は監獄施設に向かう。悠元は平然と塀を越えるが、それでも警報は鳴らない。だが、流石に達也が塀を越えようとしたところで警報が鳴るが、それを見た悠元の動きは早かった。

起動しようとした迎撃兵器に対し、悠元は［ラグナロク］で兵器全てを無力化。その上で対空レーザー砲を土台ごと強引に〝引き抜い

た〟。一体何をする気なのかと達也が見つめる中、悠元はレーザー砲本体を空高く放った。
そして、悠元は耳に付けていたレシーバーに話しかけた。
「セリア、やってくれ」
『了解、お兄ちゃん』
その短い遣り取りの直後、上空に放り出されたレーザー砲がプラズマ状になり、上空で強烈な爆発を起こす。その衝撃波は悠元の［ミラーフォース］で中和されたので被害は出ていないもの、監獄の正門部分に相当する部分は見事に融解していた。
「……いいのか？」
「派手に引き付けるのは常套手段の一つだ。達也はこのままカノープス少佐とシャウラ少尉を頼む。達也ならカノープス少佐のいる場所も〝視える〟だろうからな。俺はアルゴル少尉を救出する」
「分かった」
ミッドウェー監獄を〝全壊〟させてはいけないのなら、〝一部を破壊〟することは許容されている――という悠元の解釈。それに、派手な動きは敵の動きを一箇所に集めやすくなる。それに、どうせ後片付けの手段を持ち得ている以上、達也としても任務を優先することに舵を切った。
悠元は南盾島の件でラルフ・アルゴルと直接対峙している。なので、その情報はよく覚えている。だが、彼が囚われている部屋の前で立ち止まった悠元は中にいる存在が数人いることに気付いた。
（罠……にしては、稚拙という言葉を覚えようか）
分かり切った罠など罠ではない。悠元は［ラグナロク］を部屋の向こうに向けて［オゾンバレット］を放つ。いくら魔法師であっても、肺の中にある空気をオゾンで満たされてしまえば、忽ち意識を失う。
これが達也ならば若干力業になっていたが、悠元は［叢雲］を展開して鍵を破壊し、ベッドの下から感じた気配を頼りに確認すると、ラルフ・アルゴルが縛られた状態で見つかった。薬を嗅がされた形跡があるようで、揺すっても起きる気配はなかった。
「……このまま運んだ方が早いな」

起こしてもいいが、過去に対決した人間同士での諍いは勘弁だと考え、悠元はアルゴルを肩に担ぐ形で監獄ビルを後にした。悠元はそのまま達也の存在を確認した上でビルの屋根伝いに走り、ほぼ魔法を使わずに合流した。

そこには達也だけでなく、ベンジャミン・カノープス少佐とアリアナ・リー・シャウラ少尉もいて、カノープスは悠元の姿に驚きを隠せなかった。

「神楽坂悠元……いや、今は必要な詮索をするべきではないな。ここからどうする？」

「早急に脱出しましょう。てなわけで達也、彼らを頼む」

悠元はそう呟いて［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］でエアカーのある場所に達也を含めた四人を飛ばした。それを確認すると、悠元はそのまま上空へ飛び、パールアンドハーミーズ環礁米軍基地へ向けて飛翔する。

◇　◇　◇

「ミスター司波から帰還のシグナルが発信されました」

通信士の報告に艦橋が騒めく。それを聞いたマイケル・カーティス大佐が報告を促す。

「出撃して２０分、実質１５分か……被害の状況は？」

「正門部分に大きな被害と、迎撃兵器の全無力化を確認。主要な監獄部分に対するダメージや人的被害は現時点で認められません」

「そうか……」

日本で新たに生まれた戦略級魔法師。カーティス艦長は事前に伯父のワイアット・カーティスから彼らの素性を聞き及んでいた。

『……彼らが、あの復讐劇を起こした一族の子孫だと？』

『このことは国家機密に準ずるものと思え。これを明るみにした場合、一族が歴史から抹消される覚悟を持て。私から言えるのはそれだけだ』

大漢を滅ぼした四葉の一族と上泉剛三。そして、神楽坂の名を持つ少年の存在。カーティス艦長も噂ながら耳にしたことがある名。勘気を被れば、歴史から存在諸共抹消される……それは、世界群発戦争における神楽坂千姫の公表されている功績からすれば、容易に想像で

きることだった。
　そして、今回は『バージニア』から放たれた戦略級魔法のことがあったとしても、少ない被害で最大の利を得るという戦いの最適解を証明させられてしまった。これを目の当たりにしたクルーの中には動揺を隠せないものも少なくなかった。
（……これでは、戦う前に負けを宣告されたも同じだ。伯父の言う通り、私に出来るのは彼らと敵対しない道を選ぶだけ。我が国屈指の魔法師でも負けたのは……当然の結果とも言えような）
　カーティス艦長はそんな心の内を表情に出すことなく、現在与えられた任務を全うすべくクルーに指示を飛ばした。
◇　◇　◇
　達也らと別れた悠元は、飛行魔法で一人パールアンドハーミーズ環礁米軍基地へと飛んでいた。ミッドウェー監獄襲撃の報が既に伝わっていたのを示すかのように、Ｆ―１４１のコードを持つマルチロール機にして米空軍の主力機――『ホーンドアウル』が４０機ほど向かってきていた。
　その奥には空母『シャングリラ』と駆逐艦『シュバリエ』『ミラー・デービス』の姿も確認された。更には……［パラサイト］に侵食されたスターズの兵士が二人いることも確認できた。
（『シャングリラ』に搭載されている『ホーンドアウル』は６０機……本気だということか）
　悠元はそう悟り、高度を下げて海面に〝降り立った〟。そして、左手を眼前に翳した。その刹那、悠元を中心として白銀の光が誰の目から見ても分かるほどに光の柱となって形成されていた。
　そして、悠元は自らの武装の名を呟く。
「――天魔抜刀、［天都御魂叢雲（アマツミタマノムラクモ）］」
　光の柱が崩れるように消えていくと、悠元の手には［天都御魂叢雲］が握られていた。
　これまで［布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）］を介することで安定させていた［天魔抜刀］。だが、この状態でも［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］を完全制御するには至らなかった。

色々考えた末、悠元は発想を変えた。外から制御できないのであれば、［ロンゴミニアド］そのものを媒体として［天魔抜刀］を発現させるという方法を考案した。

規格外の能力を触媒として［天魔抜刀］を発現させる――――それは、三代目神楽坂家当主が目指していた［天魔抜刀］の最終到達点。悠元は、意図せずしてその領域に到達せしめた。

悠元は［天都御魂叢雲］を構え、横一線に薙いだ。その瞬間、空母も駆逐艦も……４０機の戦闘機も全て『時が止まった』。そして、悠元が［天都御魂叢雲］を振り上げ、振り下ろすと……艦載機はまるで自動操縦でもしているのかのように空母へ帰還していく。空母のクルーもそれを疑問と思わずに誘導していく。

そうして空母と駆逐艦しかいない状態となったところで、悠元は海面を蹴り飛ばし、姿が〝消えた〟。

遠隔座標固定魔法――――いや、正確には空間座標情報連結魔法［鏡の扉（ミラーゲート）］。この魔法の真骨頂は、あらゆる〝情動〟に関する情報を座標と連結させることで、世界のあらゆる場所に転移できる能力を有する。

仮に悠元が知らなくても、第三者が当該人物に対して何らかの感情を有していれば、第三者を介する形で座標を結び付ける魔法。〝人の縁（えにし）〟を結ぶ魔法であり、悠元にしか使うことが出来ない唯一無二の術式。

悠元が飛んだ先にはアンタレスとサルガスが眼前に迫っており、二人も突然姿を見せた悠元の姿に驚愕する。この一瞬の隙をつき、悠元が［天都御魂叢雲］を振るうと、二人は操り糸が切れたように崩れ落ちた。

二人に対して悠元は［領域強化（リインフォース）］を使用し、残っているアンタレスとサルガスの自我で［パラサイト］の本能を全て塗り潰す。掛かった時間はほんの数秒程度で、二人は当分目を覚まさないが、［パラサイト］の治療に極めて有効だと証明できた形となった。

事が全て済んだところで、悠元はレシーバーのスイッチを入れて空母『シャングリラ』に向けて通信を入れる。

「こちら、日本の師族会議議長・神楽坂悠元。当方に戦闘継続の意思はない」
『こちら空母「シャングリラ」。貴公の要求を聞こう』
　遣り取り自体は英語だが、向こうも一体何が起きたのかという混乱からまだ抜け出せていないのは明白だった。それを感じつつ、悠元は要求を述べる。
「パールアンドハーミーズ環礁基地に連れていかれた友人の救出と、我々の追撃の断念。もしこれを破れば、貴国の政府と結んだ約定を破棄することも視野に入れる。なお、そちらにいた［パラサイト］に侵食された兵士は治療したので、安心して頂きたい」
『……そうか。要求を受け入れよう。そして、図らずも悪魔に憑りつかれた同胞を助けて頂いたことは、必ず報告することを誓おう。貴公に神の加護があらんことを』
　その言葉を聞いて、転生した時に出会った女神のことが脳裏に過り、ある意味加護が付いているのは否定できないと思いながら、悠元は飛翔して一路パールアンドハーミーズ環礁米軍基地に飛んだ。
◇　◇　◇
　原作のパールアンドハーミーズ基地では、九島光宣の［人体発火］によって多数の犠牲者が出ていた。この世界の場合だと基地の兵士は生存していても、全員が眠りに就いていた。恐らく真一が精神干渉系魔法で余計な被害を出さないよう配慮した結果なのだろう。
　悠元が存在の在処を頼りに進んだ先は、病院棟だった。誰かが負傷したのだろうかと思いながら歩を進めると、出迎えるように立っていたのは真一だった。
「悠元さん、思ったより早かったですね」
「ああ。で、何故病院棟に？　まさか、愛波に何かあったのか？」
「いえ、彼女は無事です。ただ……とにかく、来てください」
「???」
　何かを言い淀む真一に悠元は首を傾げるが、彼の案内で病室の一角に案内された。すると、部屋に入ると同時に衝撃が響いた。
「この、軟弱者があっ!!」

「ごはっ!?」
日本で著名な某プロレスリング漫画の代名詞と言わんばかりの投げ技が炸裂し、股関節を抑えて悶えているジェイコブ・レグルス。そして、その技を掛けた当人――ジョーリッジ・D・トランプＵＳＡ大統領は平然とした顔で二人に声を掛けた。
「お、ミスター真一。それにミスター神楽坂、久しぶりだな」
「ええ……成程、病院にいた意味が分かった」
「察して頂けて何よりです」
さしもの［パラサイト］に侵食されていたとしても、相手はＵＳＡ軍の最高指揮官。しかも、魔法師相手でも平然としている政治家の存在に、真一が動揺するのも無理はないと納得したように呟いた悠元だった。

怒りの説教（肉体言語込み）

ジョーリッジ・D・トランプＵＳＮＡ大統領の登場――――原作知識にはない行動の為、さしもの真一であっても動揺を隠しきれなかった。一国の国家元首がいることもそうだが、［パラサイト］の侵食を受けることなく圧倒出来てしまう実力。

その理由を悠元は［天神の眼（オシリス・サイト）］で改めて確認したところ、納得したように息を吐いた。

「……真一、この人は天然の超能力者だ」

「え、ええ？　でも、魔法の兆候は確認できませんよ？」

「その少年の発言も尤もだ。私は、現代魔法を発動できなかったのだよ」

ジョーリッジの能力は、自身に対する全ての魔法を打ち消してしまう強力な体質を有していた。似たような能力は悠元の姉である美嘉も有しているが、こちらは完全に防御へ振り切った形と言えるだろう。

しかも、先天的な能力故に魔法師相手はおろか、［パラサイト］などと言った霊子情報体相手でも能力が有効なため、相手がいくら強かろうが魔法を無視できる。いわば『魔法師殺し』の存在とも言える。

だからこそ、魔法師が傍にいても何ら支障が無かったわけだ。その反面、魔法を使うことが出来ないという側面があった。

「……悠元さん、僕は一体何を見せられているのでしょうか？」

「この世の非常識の塊の一端」

かつてジョーリッジは『スターズ』の本拠地であるロズウェル基地司令として勤務していたことがあり、武術指導もしていたことがある。中にはズルをして魔法を使う人間もいたりしたが、真正面から拳で叩きのめしていたらしい。

そんな話はともかく、悠元はジョーリッジに対して話しかける。

「それで、閣下は如何なる御用で此方に？　どうせ単独で乗り込んで来たのでしょうけれど」

「うむ、ハワイから戦闘機に乗ってな。久しぶりに『スターズ』の連中

を揉んでやったが、妖魔如きで自我を無くすとは嘆かわしいものよ」
相変わらずだな、と心の中で呟きつつも悠元はジョーリッジの説明を受けた。
ＵＳＮＡ政府としては、神楽坂悠元および司波達也に対して敵対しないことを明言。これは何度も大使館経由での手紙で伺っている為、そこに嘘はないだろう。そして、財界や北米魔法協会もＳＴＥＰ計画への賛同を取り付けたことに加え、ワイアット・カーティスとの話で出していた要求を全て？むとジョーリッジは口にした。
「元々、我々の身勝手で始めたようなものだ。出来れば我々の手でケリを付けたかったが、日本を巻き込んだ以上は隠しきることも出来ん。神楽坂殿、どうか妖魔の脅威を祓っていただきたい」
「分かりました。真一、この部屋に該当者を集めてくれ。その方が早いだろう？」
「ですね。直に取り掛かります」
そうして、真一の支配下に置かれたパラサイト化した『スターズ』と『スターダスト』の兵士に対して［領域強化（リインフォース）］で自我を拡大し、［パラサイト］を完全に塗り潰す。時間ではほぼ一瞬だったのと、実験の実施日以降から読み取ったために負担は重くなかった。
なお、輸送機で封印したままだったアークトゥルスは巳焼島で追い返した連中と一緒にしていたため、彼もようやく意識を取り戻した。
ただ、レイモンド・クラークについてはわざと治療しなかった。何故なのかと疑問を抱く人間もいるだろうが、今の状態で彼を人間に戻しても『利が無い』という結論に至ったためだ。尤も、流石にパラサイトのリスクを考慮して、制御は預けたままにしている。
話を戻すが、自我を取り戻した『スターズ』の兵士が表情を強張らせていた。部外者である悠元や真一、それと様子を見に来た愛波に対してではなく、笑顔だが口元が笑っていないジョーリッジを見た瞬間、一斉に敬礼をした。
『か、閣下!!』
「……諸君、私はいま非常に機嫌が悪い。何故だと思うかね、アークトゥルス君？」

「い、いえ……その、理由に心当たりはあるのですが……」
　これはマズい雰囲気になると判断した悠元は、聴覚に指向性を持たせて真一と愛波を呼んで静かに部屋を去った。そうして1分も経たない内に聞こえてきたのは……悠元にとって一番聞いたことのある展開だった。
『貴様ら！　一回り位下の小娘に対して嫉妬するのはまだいいとしても、あまつさえ同僚に刃を向けたことは言語道断！　いつから貴様らはマフィア擬きになり果てたのだ!!　それでもスターズやスターダストの兵士か！　答えろ、レグルス君！』
『そ、そのようなことは決してありません、サー！　ごはあっ!?』
　そして、聞こえてくるのはジョーリッジの怒号と必死に取り繕う兵士たち。そして、明らかに尋常ではない打撃音が扉を介していても聞こえてくる始末。これには真一や愛波が完全に引いていた。
「あの、悠元さん。本当にあの人は一国の大統領なのでしょうか？」
「それは間違いない」
『唆されたという意味では、貴様らにそのような言い分が通用すると思うな！　デーモンに唆された貴様らの愛国心は所詮その程度か!!』
　ジョーリッジの気持ちは分からなくもない。何せ、愛国心の強すぎる連中によって国家の存亡に関わりかねないインシデントをいくつも抱えてしまった。最大のものとしては、エドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがディオーネー計画によって〝繋がってしまった〟こと。
『これならば、まだウジ虫の方が遥かに利口だ！　今の貴様らはウジ虫にも満たないと思え！』
「……何にせよ、ＵＳＮＡ国内の問題に戻してくれたと考える方がまだ楽だと思う。変に考えるのは疲れるだけだ」
「そう、ですね……パラサイトになっても、まだまだ至らぬ部分があると痛感させられてしまいます」
「そら、真一は知識があっても２０年も生きていないんだから」
　扉の向こうから聞こえる音は敢えて遮断することもできるが、事が済む見通しが見えないために切らなかった。そうして１５分程経っ

た頃に扉が開き、非常ににこやかな表情を浮かべているジョーリッジが出てきた。
「いやはや、本当にお恥ずかしい所をお見せしたようだな」
「それはいいのですが……死んでませんよね？」
「あの程度でくたばるようならば、スターズ以前にＵＳＮＡ軍人として失格だ」
「ええ……」
会話自体は日本語で交わされており、とても彼らと同胞とは思えないようなジョーリッジの言葉に愛波が真一の背後に隠れるほどだった。これにはジョーリッジも苦笑を滲ませた。ともかく部屋の中に入ると、いつの間にか部屋に来ていたセリアが左手の油性マジックで『スターズ』の連中の顔に落書きをしていた。
「あ、お兄ちゃん……ダメ？」
「好きにしろ。誰か一人は額に肉の漢字でも書いとけ」
「オッケー」
悠元は別に彼らを辱める気などないが、セリアのストレス解消ならば大目に見ることとした。ただ、度が過ぎれば容赦なく関節技を行使することとなる。

◇　◇　◇

そうしてジョーリッジとセリアによる仕置きが終わった後、達也へ連絡をして一足先に日本へ帰るよう言い含めた。達也もこの先のことを考慮してなのか、『リーナのことを頼む』とだけ述べた後に通信を切った。
その後、達也の運転するエレカーに真一と愛波が搭乗し、三人は日本へ向けて飛翔した。なお、レイモンドは強制的に眠らせて真一が連れ帰る形となった。
今回、日本への襲撃を行った治療済みの『スターズ』と『スターダスト』は輸送機でＵＳＮＡ本国へ送られることとなる。そして、ＵＳＮＡ組と残った悠元の眼前にあるのは、ＵＳＮＡでも最新鋭のステルス実験戦闘機であるＦ―Ｘ３５０『ソニックラプター』だった。
「……大統領閣下。操縦は出来なくもないですが、何故この機体を？」

「カーティス上院議員からの要求だけを呑むのは溜飲が下りないと判断し、君に提供する。魔法技術を使っているので、航続距離は太平洋横断ぐらいならば問題ない。私も何度か乗っているからね」
「政治家が何をやっているのですか」
ジョーリッジとしては視察も兼ねて乗っていたのだろうが、いくら元軍人と言えども大統領が戦闘機に乗るというのは創作物の範疇の話になる……この世界も転生前の自分から言えばその範疇に含まれるが。
何を言っても無駄だと判断した悠元は、申し訳程度にヘルメットを被って操縦席に乗り込む。そして、後部座席にはセリアが乗り込んでいた。隣には同型機が停泊しており、そちらにはジェラルドとリーナが搭乗することとなった。
「お兄ちゃん、いつ経験していたの？」
「国防軍絡み」
簡潔に答えつつ、計器類を立ち上げていく。分からないところは[天神の眼（オシリス・サイト）]で必要な情報を入手して操作するため、特に困ることはない。
この戦闘機は魔法師が搭乗する前提の機能もいくつか実験的に搭載されているが、悠元はそれを使うつもりなどなかった。最大の理由は『検証もせずに使って痛い目を見たくない』というものだが。
それ以外は既存のＦ―３５『ライトニングⅡ』（Ｆ―２２ならラプター）を踏襲している為、基本操作自体は魔法が無くても操縦できるようになっている。なので、ジョーリッジが操縦出来ていてもおかしくは無い、という訳だ。
基地の兵士は大統領の指示を受けた『スターズ』と『スターダスト』によって起き上がり、早急に発進準備が進められる。
予定航路はまずハワイ・ホノルル島のコナ国際空港へ向かい、ジョーリッジが大統領専用機（エアフォース・ワン）に乗り換える。そして、必要な補給を受け次第ロズウェル基地へ向けて飛び立つ。いわば二機の実験機は護衛ということになり、ＵＳＮＡ空軍――――『ファントム』の認識コードを暫定的に与えられる。

基地の兵士による誘導のもと、滑走路へ自走する三機の戦闘機。まずジョーリッジの乗る戦闘機が飛び立った後、ジェラルドとリーナの乗る戦闘機が離陸する。そして、最後に悠元とセリアの乗る戦闘機が離陸体制に入る。

その際、基地の管制塔から言葉が掛けられた。

『ジャパニーズの若きサムライ、此度の救いに感謝している。其方に神の加護があらんことを。ファントム1（ワン）、発進を許可する』

「――ファントム1、離陸する」

スロットルを上げるとエンジンが唸りを上げ、急加速して次第に機首を上げ、滑走路から飛び立った。セリアは任務上、空軍の戦闘機に乗せてもらったこともあったが、その彼女からしてもベテランパイロットと遜色ないほどの機体コントロールに感心を覚える。

「おー、流石お兄ちゃん。パイロットでも食べていけるんじゃない？」

「変な恨みなど買いたくないからパス」

そうしてスロットルを更に上げ、先行している二機の後を追う形で飛び立つ。

ここで気になるのはミッドウェー監獄から救助された三名だが、ラルフ・アルゴルとアリアナ・リー・シャウラの二人は輸送機組となった。残るベンジャミン・カノープスはというと……ジョーリッジの操縦する戦闘機の後部座席に搭乗していた。

大統領の命令とは言え、カノープスの心中は複雑だった。そんな心境を見越してか、ジョーリッジが話しかける。

「カノープス少佐は疑問に思うかね？　何故貴官だけ同行させようとしたのか。厳密にはシリウス少佐もいるから、君だけではないが」

「それは……否定は致しません。もしや、大叔父上のご依頼でしょうか？」

「いや、そこまでの要求はしていなかった。これは私からの不躾な願いもある故な」

「願い、ですか？」

ジョーリッジが零した言葉の真意を測れず、カノープスは首を傾げるような素振りを見せる。だが、その話は誘導灯に照らされたホノル

ル空港の滑走路が見えてきたために中断されることとなった。
　そして、カノープスが更に驚いたのは親族であるワイアット・カーティスが出迎えたことだった。これには反射的に敬礼をしてしまう始末で、カーティスはそれを見た上でゆっくりと敬礼で返した。
「ベンジャミン、元気だったか？」
「はい、大叔父上。大分無茶なことをされましたが、よろしかったのですか？」
「構わん。この程度など、ケインの大馬鹿者の尻拭いには足りんよ」
　日本を巻き込んだことによる代償を懸念するようなカノープスの問いかけに対し、カーティスは吐き捨てるように呟いた。そうして、ジョーリッジとカーティス、カノープスに加え、リーナとジェラルドの五名が大統領専用機（エアフォース・ワン）に乗り込んだ。
　なお、護衛ということで悠元とセリアはそのまま戦闘機に乗り込んだ。悠元曰く『帰る際の言い訳が省ける』という理由からくるものだった。ただ、今度は悠元とセリアがそれぞれ二機の戦闘機を操縦する形になっている。
　現地時間７月１６日午後１０時（日本時間７月１７日午後７時）。ハワイ州ホノルル島・コナ国際空港を飛び立った大統領専用機（エアフォース・ワン）が安定飛行の体制となったところで、ジョーリッジが話を切り出すと共に座ったまま頭を深く下げた。
「ベンジャミン・カノープス少佐。君とラルフ・アルゴル少尉、アリアナ・リー・シャウラ少尉に掛けられていた容疑を最高指揮官の最終判断によって〝無罪〟とする。これは国防総省（ペンタゴン）との共通見解である……窮屈な思いをさせてしまい、すまなかった」
「頭をお上げください、閣下。［パラサイト］による跳梁があったとはいえ、疑われるような行動を取った小官やアルゴル少尉、シャウラ少尉にも一定の責任が生じる話です」
「……貴官は生真面目だな」
　ジョーリッジは頭を上げてそう零す。これにはジェラルドやリーナも苦笑を滲ませていた。カーティスもこれには表情を緩ませたほどだった。

「ならば、カノープス少佐にはその責任を全うして頂く。現在、エアフォース・ワンはニューメキシコ州――ロズウェル基地へ向かう。ベンジャミン・ロウズ少佐には、今回の責任を果たす形でスターズ第一隊隊長の任から外れてもらう」
「……その言葉を額面通りに受け取るならば、小官は別の立場を担うことになると想定されますが」
「その通りだ。貴官にはポール・ウォーカー大佐の〝引責辞任〟に伴い、スターズ本拠であるモンドサード空軍基地司令ならびにスターズの統括役に任命する」
ジョーリッジが口にした意味は、無論［パラサイト］による騒動が大きいのもそうだが、本来あるべき統制が全く取れていない、というのが大きな問題だった。それを正す意味でも、ジョーリッジは軍人としての教育を受けているカノープスに『スターズ』の統括を任せることとした。
その上で、ジョーリッジはジェラルドに視線を向けた。
「そして、ジェラルド・メイトリクス大佐。略式だが、貴官にはアンジー・シリウス少佐の後任としてスターズ総隊長の任を与え、これより［十三使徒］ジェラルド・メイトリクス・シリウス〝准将〟と名乗るように」
「……閣下、小官のような若輩者がポンポンと昇進したら反感が生じかねませんが」
「仕方が無かろう。塩漬けになっている佐官・尉官を昇進させようとした場合、据え置きだと階級が足りなくなるのだ。なので、ベンジャミン・ロウズ少佐も〝中将〟へ昇進だ。ただ、時間を置いての昇進となる為、手間がかかることは承知してほしい」
「は、ハッ！」
何せ、アンジー・シリウス（リーナ）の階級によって約6年間も塩漬け状態が続いていた。魔法師部隊ということで昇進に反感を抱く者も出てくるだろうが、反感を抱くぐらいならば職務を全うして正当な評価を稼げ――というのが、ジョーリッジの率直な感想だった。
「それとシリウス准将。君には幾人か妻を娶ってもらうこととなる。

流石に私の孫娘たちは嫁ぐ先が決まっているので無理だが、『スターズ』や『スターライト（スターズの隊員候補の名称）』から募ることは覚悟してくれ」
「……フフフフフ」
「大佐!?　いえ、シリウス准将!?」
そして、ジョーリッジから衝撃の発言が飛び出した後……ジェラルドは分かっていたこととはいえ、現実となったことに不気味な笑い声を発し始め、これにはリーナが驚きを見せていたのだった。

シリウスの代替わり

ＵＳＮＡ連邦軍参謀本部直属魔法師部隊・スターズの本拠地はニューメキシコ州ロズウェル郊外にある。なお、『ロズウェル事件』で有名な旧ウォーカー空軍基地ではない。

この基地にはモンドサードというネームが与えられたが、その由来は〝金剛（ダイヤモンド）〟と〝三（サード）〟から捩ったもの――かの英雄である上泉剛三に匹敵する英雄の誕生を願ってのものだった。

奇しくも、その当人によって基地が混乱させられたのは皮肉としか言いようがないが。

ニューメキシコ現地時間７月１７日午前６時（日本時間同日午後８時）、二機の戦闘機に護衛される形で大統領専用機（エアフォース・ワン）が滑走路に降り立った。国防総省（ペンタゴン）から事前の通達があったにせよ、早朝の時間帯に政府の専用機がスターズの本拠地に降り立つこと自体異例のこと。

そして、見慣れない二機の戦闘機――現行の空軍で使用されているものとは異なる仕様――も含めて、マーシャラー（滑走路誘導員）や整備員は不満と不安を覚えていた。停泊した戦闘機から降り立った悠元の姿に基地の職員は驚いているが、それに対して声を発したのは先に降りていたジョーリッジだった。

「基地の職員諸君、ここにいる彼は私の客人だ。くれぐれも礼を失するようなことがあれば、私自ら拳骨を落とすと知れ」

『ハ、ハッ!!』

あくまでも権力ではなく物理的な実力行使を口にしたが、それを聞いた職員たちは敬礼をした後、戦闘機や大統領専用機の整備に取り掛かる。専用機からはカノープスとアンジー・シリウスに扮したリーナ、ジェラルドに加えてカーティスも専用機から降りていた。

すると、戦闘機から降りてヘルメットを取ったセリアがジョーリッジに話しかけた。

「それで、お祖父様。ここからどうするの？　こんな時間だと国防総省（ペンタゴン）には誰もいないんじゃ？」

「そこについても手筈は整えておる。お前さんたちは見ているだけで

良い」
　ここからはＵＳＮＡ国内の問題――――そう言いたげなジョーリッジが先に向かった三人の後を追う形で歩き出し、悠元とセリアはその後をついていく。ジョーリッジが部屋の中に入ると、奥側にはウォーカーとその副官が、手前側にはリーナとカノープス、それと用意された椅子に座るカーティスの構図が出来ていた。
　ウォーカーはジョーリッジの登場もそうだが、その後ろにいる悠元とセリアの姿にも驚いていた。何故ならば、排除を目論んでいた対象の片割れが眼前に姿を見せたからだ。
　だが、ここで声高に排除を叫ぶことは許されなかった。その機先を制する形でジョーリッジが声を発したからだった。
「さて、ウォーカー大佐。何故私がこうやって足労を重ねた理由は分かるか？」
「い、いえ。今はシリウス少佐にバランス大佐から与えられた任務の如何を尋ねていたところですので」
「そうか……では、私が問おう。カノープス少佐以下三名の独断による収監手続き、スターズやスターダストの日本への外征手続き、更にはイリーガルＭＡＰのミッドウェー監獄からの無断釈放手続き。いずれもホワイトハウス――――私への連絡や許可を得ていないものだが、連邦軍最高指揮官たる私を侮蔑するようなものとしか思えない所業。これらについて、貴官はどう説明してもらえるのかな？」
　リーナやジェラルドはジョーリッジが直接関与しているし、リアム・スペンサー国防長官の事後承諾を得て許可された案件。つまり、二人の行動はＵＳＮＡ政府が保障している。一方、ジョーリッジが口に出した案件はいずれもホワイトハウス――――政府への通達が握りつぶされた格好となっていた。
　ジョーリッジの睨むような視線に対し、ウォーカーは言葉に詰まった。その態度が気に障ったのか、ジョーリッジはカノープスに指示を出す。
「カノープス少佐、ペンタゴンに繋げろ」
「は？　今の時間帯ですと、参謀本部には誰もいらっしゃらないかと

思われますが」
「そこは心配しなくていい。前日の段階で手筈は済んでいる」
ジョーリッジの命令にカノープスは少し躊躇ったが、語気が強い彼の言葉を信じる形で動き、ウォーカーの副官を押し退けてペンタゴンとの直通回線を開く。すると、モニターにはリアム・スペンサー国防長官とキャスバル・バランス内部監察局長、そしてクラウス・バラッド統合参謀本部議長の姿が映し出された。
思いもかけない姿にウォーカーが言葉を詰まらせている中、三名はジョーリッジに対して敬礼を行い、ジョーリッジも敬礼で返す。そして、ジョーリッジが目線によって訴えるような形でクラウスが口を開く。
『シリウス少佐。事前に大統領閣下から事情を伺っているが、改めて君の口から状況説明をしていただきたい。宜しいか？』
「ハッ！　無論であります」
クラウスの言葉を受けてリーナが説明を始めようとする。
「お待ちください、議長閣下！」
だが、ウォーカーは我に返るとそれを遮った。すると、それを嗜めたのはスペンサーだった。
『ウォーカー大佐、君の言い分は後で聞こう。まずはシリウス少佐の主張を聞くのが先だ。宜しいか？』
ペンタゴンのトップであるスペンサーにそう言われたのであれば、ウォーカーも引き下がらざるを得なかった。彼が黙ったのを確認した上で、クラウスがリーナに呼びかけた。
『では、シリウス少佐。貴官が止むを得ずモンドサード基地を脱走することになった経緯に加え、日本で貴官が見知った今回の件に関する事象を全て話してほしい』
リーナはパラサイト化した隊員に襲われ、已む無く基地を脱走し、その際に上泉剛三・奏姫夫妻の助けを受けたこととカノープス、アルゴル、シャウラの三名によって難を逃れたこと。
抵抗した三名の士官に無実の罪を被せ、ミッドウェー監獄へ収監した事。

パラサイト化した兵士が日本まで追いかけ、リーナはおろか達也や彼に近しい友人までも害を為そうとしたこと。
尤も、その情報全てを悠元とセリアが把握し、全て都合の良いシナリオの駒として利用されたという事実は……流石に証言を控えることとした。さしものリーナでも、未来の夫の危機に繋がるような情報など流せるはずがなかった。
「――以上が小官の実体験も含んだ今回の件に関する報告であります」
『そうか……では、ウォーカー大佐。貴公の言い分を聞こう』
クラウスに促され、ウォーカーは自らの無罪を主張した。その言い分を聞き終えたところで、クラウスはキャスバルに話を振った。
『ということだそうだが……内部監察局の意見をお聞きしたい』
『ポール・ウォーカー大佐。アークトゥルス大尉、ベガ大尉、レグルス中尉、スピカ中尉、デネブ少尉の出動に関して参謀本部の許可を得ていないようだが、これは一体どういうことかね？』
キャスバルはウォーカーに問いかけるも、その答えは余りにも不十分すぎるものだった。
いくら日本の新たな戦略級魔法が脅威となったにせよ、スターズを出動させるということは貴重な魔法師を派遣することになるため、政府及び国防総省への報告・連絡・相談は必須とされている。
それを怠った時点で〝越権行為〟と呼ぶには十分すぎた。
『カノープス少佐以下三名についても、略式の軍事法廷しか開かれていない。そこまで急を要する案件なのかも疑問に残るが……一番はイリーガルＭＡＰ「ホースヘッド」および「コーンネビュラ」の釈放手続きという重大な報告を何故怠った？』
キャスバルからすれば、身内を喪った遠因を生み出した部隊。その彼女が蘇ったことは妻から聞いていたが、これ以上彼女を軍人として働かせる気など無かったし、彼女にその意思がない以上は無理強いする必要もない、と判断した。
いつの間にか語気が荒くなっていたことに気付き、キャスバルは一つ深い息を吐いた上でスペンサーに視線を向けた。

『長官閣下。以上の点を鑑みた場合、ウォーカー大佐に対する疑惑は解けないものと判断いたします』
『了解した。ポール・ウォーカー大佐、現時点を以てモンドサード基地司令並びにスターズ本部司令の任を解く。また、本日中に内部監察局へ出頭せよ』
「――了解しました」
ウォーカーが背筋を伸ばしてそう答えたのは、せめてもの意地と矜持だったのかもしれない。そして、大統領専用機に同乗していたであろう軍の兵士に連行される形で、ウォーカーは部屋を去っていき、副官は逃げ出す様に部屋を出ていった。
そうして当事者だけとなったところで、スペンサーは唯一の日本人である悠元へ視線を向けた。
『気分のいい茶番でなかったことは詫びよう、神楽坂悠元殿。此度のことはカーティス議員閣下から聞き及んだ。エドワード・クラークに対する処遇についてもな……君は、それで納得していると解釈して宜しいのか？』
「国内で解決できるのならば、それに越したことはありません。ただ、貴方方は三度もそれを破った。〝四度目はない〟――それだけは明言しておく。日本の師族会議議長としても、『灼熱と極光のハロウィン』で新ソ連相手に戦略級魔法［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］を行使した人間としても」
ここにはＵＳＮＡ政府でも重鎮と呼べる人間しかいない。だからこそ、悠元は自分が戦略級魔法師であることを明るみにした。
余り驚かなかったのは、事情を聞かされているであろうジェラルドとジョーリッジにキャスバル、それと近しい人物であるリーナとセリア。一方、スペンサーは溜息を漏らし、クラウスは苦笑を滲ませた。
『君が、そうか……エドワード・クラーク絡みでまた迷惑を掛けるが、そこについては御了承願いたい。一つ聞いておくが、彼を殺す気なのかどうか』
「それも考えたが、エドワード・クラークの罪は最早国際問題のレベルにあり、隠しきることなど不可能。よって、彼を拘束した上でＵＳＮ

Aに送り返し、貴方方の国の法で裁いてもらう。有耶無耶にするような真似をすれば、あらゆる手段の行使も辞さない」
勘のいい人間ならば、ディオーネー計画の発表から今日に至るまでの流れの中でエドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの共謀による疑念は決して消えない。
ましてや、『第一賢人』が暴露した［トーラス・シルバー］の正体判明後、ベゾブラゾフの魔法攻撃が日本の国土を二度も襲った。これでいて関係が無かったというのは無理筋な証明となる。
『……君のような若者を〝怪物〟と揶揄する輩も少なくない。だが、少なくとも我々は君の味方であろうと心掛けるつもりだ』
「そうして頂けるのならば、此方としても労力をかける手間が省けるというもの。軍事的な低減は［恒星炉］提供の対価と心得てもらう。ただ、交渉は全ての諍いが済んでから。それだけは遵守して頂きたい」
別に魔法を行使する必要はないし、もしもの時はあらゆる手段を以て敵を弱らせ、戦う意思や気力を根こそぎ奪う。いくら個の意志が強くとも、一人で動けば必ず結果の余波が周囲に及ぶ。それが国家間となれば尚更だ。
スペンサーは言いたいことを言い終えたのか、黙った。すると、次に言葉を発したのはキャスバルだった。
『……血は争えない、とはよく言ったものだ。ジェラルド、君はそれで良かったのか？』
「誰かがやらなければならないとなれば、もう逃げるわけにもいかないと判断したまでのことです。それに、母から託された戦略級魔法を他の誰かに委ねるようなこともできない。これは私自身のけじめであり、これまで守ってきてくれた伯父上や伯母上に対する親孝行だと思ってください」
ウィリアム・シリウスの血を継ぎ、図らずも託された戦略級魔法［スピリット・ディバイダー］。その存在を誰かに委ねるぐらいならば、自分が矢面に立つ。それに、ジェラルドは二十代前半でかつ正規の軍人としての階級も有している為、姿を隠さなければならないリーナより

は正当性が生まれると考えてのもの。
「これより、ジェラルド・メイトリクス・シリウス准将はアンジー・シリウスの後任としてスターズ総隊長の任に当たります。長官閣下、内部監察局長閣下、ならびに統合参謀本部議長閣下。至らぬ点もありますが、どうかご承知おきください」
『……君が至らなければ、大半の同年代の兵士など凡骨以下なのだがな。了解した、シリウス准将。まずはスターズの立て直しという重大な任務が待ち受けているが、引き受けてくれるか？』
「了解いたしました」
この遣り取りにより、アンジー・シリウス少佐はスターズ総隊長の任を外れ、ジェラルドが新たな〝シリウス〟としてスターズのトップに立つ。部隊の立て直しには伝手がある為、そこを活用する腹積もりだった。
そうして、通信が遮断された。
一連の流れを終えた後、司令官の席に暫定ながら座ったのはジョーリッジだった。リーナとカノープスに関する処遇についてペンタゴン側が何も申さなかったのは、既にホワイトハウスとペンタゴンで話がついていたからに他ならない。
その場にはカーティス上院議員や悠元、セリアもいるが、彼らはいわば立会人のようなもの。少し落ち着いた上でジョーリッジが話を切り出す。
「さて、ベンジャミン・カノープス少佐。既にエアフォース・ワンの中で話したと思うが、そこにもう一つ重要なことを伝える。君には〝ポラリス〟のコードを名乗ってもらうことだ」
「閣下、その名は……」
「そうだ。アンジー・シリウスをコントロールしていたセリア・ポラリスにあやかる形で、君にはスターズをコントロールする立場に置く以上、その肩書きは有って然るべきだ。それに、君がロウズの姓を明るみにした場合、良からぬ連中の追及を避ける意味合いもある」
念頭にあったのはケイン・ロウズが関与した件。このままカノープスをスターズから外した場合、ロウズのファミリーネームで野党から

追及が飛ぶことは想定の範囲内。ならば、現在空席になっている〝ポラリス〟のコードをカノープスに与えることで、スターズを統括する司令のコードネームとして機能させることを選んだ。
「今後、この措置を続けるかは次代の人間に任せるが、国家に忠誠を誓う魔法師たる君に対する私からの勲章だと思って受け取って欲しい。それと、今回の一件が済んだら叙勲式を行う故、必ず出席するように」
「……了解いたしました。ベンジャミン・ポラリス中将、スターズ総司令の任を拝命いたします」
ジョーリッジとカノープスもとい新ポラリスのやり取りを終えた後、ジョーリッジはリーナに視線を向けた。リーナはそれを見て[仮装行列(パレード)]を解除し、元の金髪碧眼の姿に戻った。
「アンジェリーナ・シリウス少佐。本日を以て戦略級魔法師[十三使徒]の退任と連邦軍からの退役を勧告する。過去の功績も鑑みて名誉大佐の称号を贈る」
「閣下、小官は殉職しておりませんが」
「本当ならば、功績を鑑みて昇進させなかった軍の怠慢に対する私の気まぐれだ。別に何かしらあるわけでもないので、受け取ってくれ」
「……了解いたしました。そして6年間、お世話になりました」
ジョーリッジの言葉に嘘があるとは思えず、リーナは渋々ながらも答えつつ、ハッキリとした口調で感謝の言葉を述べたのだった。

新たな英雄の旅立ち

モンドサード基地の格納庫前では、悠元にセリア、そしてリーナが『ソニックラプター』に搭乗して帰る準備を進めていた。元は実験機なのでＵＳＮＡ軍の識別コードを持っているが、悠元はプログラムを追加して国防軍の識別コードを入力しておいた。

「よし、これで国防空軍の戦闘機として日本の領空内に入れるようになった。とはいえ、着陸先は巳焼島になるわけだが」

「……大丈夫なの？」

「緊急発進（スクランブル）の懸念なら問題ない」

悠元が国防三軍の大将職――――統合軍令部の将官として籍は置くが、軍の指揮は基本的にノータッチとする。なので、『抜刀隊』については統合軍令部最高指揮官直属部隊とした。

独立魔装大隊（将来は独立魔装連隊になる）の場合はと言うと、元々佐伯少将の指揮下であったが故に十師族ひいては師族会議を快く思わない部分が存在した。それでも戦力の中核に十師族の人間を据えている時点で意味が無いに等しく、隊員たちも頭ごなしに否定するような素振りは見せていない。

では、何故悠元の統制下におくような形になったのかと言えば、単純に言えば『連隊の引き取りの手段が、悠元に紐付けする以外の方法を取れなかった』に帰結する。

独立魔装大隊は魔法技術の実験的な要素を多分に含んだ部隊に加え、大隊長の風間が国防軍の中でも〝訳アリ〟の部類に入ってしまう。いくら蘇我が風間の名誉を回復したとしても、長いこと塩漬け状態だった彼の在り方を知る者が多い上、彼が軍人としての気質を有していない。

なので、いくら実績があろうとも、主だった師団が風間を好き好んで指揮下に置こうとしたがらなかったことに加え、魔法師部隊を扱える師団も受け入れられるだけのキャパシティを持っていなかった。結果、悠元の指揮下に置く形で決着を見た。

『抜刀隊』へのフォローは彼らが心酔する九島烈本人に任せること

とした。結果、統合軍令部直属部隊に収まったことで、悠元に魔法師戦力が集中する事態は避けられた。
　話を戻すが、悠元は国防空軍の階級昇進に際して〝現地徴用した戦闘機の認識コードの付与権限〟を求めた。空軍最高司令官は首を傾げつつも同意したが、こんなに早く使うことになるとは思っていなかった。最悪［音速瞬動（ソニック・ドライブ）］で巳焼島まで直接飛ぶことも考えていたので、その手間が省けただけありがたいと思うことにした。
「じゃあ、セリアはリーナを頼む」
「オッケー。これでも空軍のパイロットプログラムを修了してるから、大船に乗った気でいてね、お姉ちゃん」
「……私、初耳なんだけれど」
「だって言ってないもの」
　先程無事に飛行できていた点も含めれば、帰りは長距離移動となるが、問題はないだろう。すると、悠元の許にジェラルドが近付いてきた。
「ジェラルド。いや、この場合はシリウス准将と呼ぶべきか？」
「普通に名前で構わない。多分、また日本に行くこととなるが、互いに頑張ろう」
「ああ、そうだな。なんか、女難の相が見えているんだが……」
「……普通でいることは諦めたさ」
　悠元が把握している部分でも二人だが、多分今回の［パラサイト］騒ぎで当事者を引き取ることも十分考えられる。なので、多分１０人前後は下らないだろう。なお、当のジェラルド本人は深い溜息を吐いた。
「今後は友人として付き合おう。偶には相談ぐらい乗るよ」
「そうだな……お前とは良き付き合いが出来そうだ」
　互いに力を持ったが故に、複数の女性を娶ることになった。しかも、悠元の愛人の一人はジェラルドの実母。義理の家族関係になってしまうが、さしものジェラルドでも悠元を義理の父親扱いするのは流石に止めた。
　その頃、セリアとリーナは出迎えに来ていたベンジャミン・ポラリ

スと話していた。
「お世話になりました、ベン。まあ、今後も連絡を取ることはあるかもしれませんが」
「そうですね。その時はこういった諍いごとでないことを祈るばかりです」
　それはご尤も、と言いたげな表情を互いに見せる。そして、ポラリスはセリアに視線を向けた。
「セリア。まさか貴女のコードネームを名乗ることになろうとは思いもしませんでした」
「あー、別にそこまで気負う必要はないからね？　私が暴れたのだって大概はお姉ちゃん絡みだったし。寧ろ、悪名を背負わせるようで申し訳ないんだけれど」
「構いません。却ってそれぐらいの方が望むところです」
　ポラリスの言葉に先代となったセリアが苦笑を滲ませた。元々こういった生真面目さがあるからこそ、第一隊の隊長を務められていた側面があるし、スターズの隊長級の選抜に深く関与していた。
「ベンはそういう性格だものね……これから大変だけれど、頑張って。日本人となった私には応援ぐらいしか出来ないけれど」
「いえ、気持ちだけでも十分すぎるほどです。リーナ、セリア。お二人の輝かしい未来を祈っております」
　そうして話している中、そこに姿を見せたのはいかにも戦闘機に乗ると言わんばかりの恰好のままのジョーリッジだった。片手にはヘルメットを持っていて、その背後には慌ただしく動く基地の整備員たちの姿が見えていた。
「あの、お祖父様？　何をしていらっしゃるのですか？」
「なに、基地の郊外まで戦闘機で見送るだけよ」
「……セリア」
「無理。こうなったお祖父ちゃんは私でも止められない」
　正直、原作のＵＳＮＡよりも戦闘色が強く、仮に新ソ連が攻めてきたら数日で新ソ連が崩壊していてもおかしくないと思えてしまうほどだった。そもそも、素手でも強い大統領に対して誰も逆らおうとし

ない辺り、逆に諦めている部分もあるのでは……と思うほどだった。
「ジェラルドは……流石に厳しいか」
「ああ。士官学校時代に手合わせしたことはあったが、俺を含めて同期の人間は誰も勝てなかった。今でも厳しすぎるだろうな」
「……」
〝シリウス〟となったジェラルドですら諦め、ポラリスに至っては遠い目をしていた。恐らく、彼もその被害を受けた一人なのだろうと悟り、悠元はジョーリッジに視線を向けた。
「此度は大変ご迷惑をお掛け致しました」
「いや、寧ろ此方が謝るべきことなのは言うに及ばずだ。じゃじゃ馬の孫娘のことをどうかよろしく頼む」
「はい。自分の力が及ぶ限り、しっかりと守り抜いてみせます」
「お兄ちゃんが守れなかったら、誰も守れないと思うんだけど。精々おに」
「そこから先はダメだ」
そんな遣り取りがあった後、二機の『ソニックラプター』とジョーリッジが乗る戦闘機が基地の滑走路から飛び立っていく。ポラリスやジェラルドだけでなく、基地の兵士全員が飛び立っていく戦闘機に対して敬礼で見送った。
この国を救った新たな〝英雄〟――その誕生を祝するかの如く。
モンドサード基地から西に10キロほど飛行したところで、ジョーリッジの乗る戦闘機が離れていく。そして、去り際に電文を二機に対して送った。英文で〝幸運(グッド・ラック)を祈る〟という簡潔な文章。それを見た悠元は、CADで魔法を発動させる。
使用する魔法は［音速瞬動(ソニック・ドライブ)］。それを二機に対して発動させた瞬間、二機の姿はまるで突然消えたかのようにUSNA本土上空から姿を消したのだった。
巳焼島上空に到達したのは7月18日午前0時。魔法によるUSNA本土から巳焼島までの瞬間移動。1万キロ以上の工程を省略した二機の戦闘機は直ぐに巳焼島の管制塔によって認識され、誘導案内によって滑走路に着陸する。そして、地上に降り立った悠元に駆け

寄って抱き着いたのは深雪だった。
「お帰りなさいませ、悠元さん」
「ただいま、深雪。帰る連絡はしていなかった筈なんだが」
「乙女の勘です」
「……深雪が言うとシャレにならないわよ」
　達也が先に帰ってきたため、悠元も遅れて帰ってくることは伝わっていたのだろうが、魔法のことを勘案してもちゃんと間に合うように来ている時点で末恐ろしく感じる。これにはリーナが辛辣気味に吐き捨てた。
　すると、遅れる形で達也が近付いてきた。
「おかえり、悠元にリーナ。それにセリアも」
「ただいま、達也。大事なかったか？」
「半日で劇的に変わったら大変だがな」
「それはそうだな」
　真一と愛波は巳焼島に滞在するため、宿舎の客室に泊まっている。国防軍方面は完全に抑えたので、特に咎められる謂れも無い。空港から宿舎に移動した形だが、ここにいる中では悠元が完全に上位となる為、最上階の一室を与えられた。
「それで、向こうで何かあったのか？」
「強いて言うなら、リーナが米軍の人間でなくなったことだな。後は政府関係者との渡りも付けられた」
　本来の歴史から大幅に逸脱した未来。これには真一も驚愕していたらしい。曰く『ここまでの人物が日本に居たら、僕がそこまで意固地になることも無かったでしょうね』とやや自棄気味に呟いたそうだ。
「残るはエドワード・クラーク絡みだが……ベゾブラゾフの復帰度合いを鑑みるに、7月22日以降が濃厚だな」
　悠元が「貫通衝撃（フィードバック・ブラスト）」によってベゾブラゾフに与えたダメージの回復見込みは、以前対人戦闘で得られたデータから予測したもの。そして、悠元の「天神の眼（オシリス・サイト）」によってベゾブラゾフは監視対象に含まれているため、彼の回復進捗も含めての総合的な予測だった。

「達也。エドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフを葬りたいという気持ちはあるだろうが、奴らは合法的に殺す。俺らが手を下すのではなく、彼らを生み出した国家に殺させる」
「そうなると、エドワード・クラークはまだしも、ベゾブラゾフは顧傑の時のようなことをするのか？」
　達也が思いついたのは、以前顧傑を確保した時のように［鏡の扉（ミラーゲート）］で身柄を強制的に移動する方法。だが、悠元は首を横に振った。
「新ソ連という国家がある限り、因縁はどうあっても付き纏うだろう。5年前の佐渡侵攻だってベゾブラゾフが関与していたようだからな」
　マクロードとベゾブラゾフがディオーネー計画以前に会談したのが5年前――その時に起きた出来事と言えば、沖縄防衛戦と佐渡侵攻の二つ。
　大亜連合と新ソ連がまるで共謀したかのように襲った出来事。流石に原作で一昨年のような艦隊南下は起きなかったが、本来異なる国家同士が日本を貶めようとした。多かれ少なかれ何らかの協力・共謀関係は否定できない。
　それは、劉麗雷を巡る両国間の不可思議すぎる戦闘行為からしても明らかだった。こうなると、香港方面でマクロードが関与していたのは間違いないし、巳焼島での会談でマクロード本人もその事実を肯定した。
「それは本当か？」
「ああ。何せ、ほぼ同時期に小規模とはいえ威力偵察の部隊を差し向けた時点で、誰かが入れ知恵したのは間違いなかった」
　こうなると、5年前の件も『元老院』の人間が関与していたという線まで浮上してくる。物語の都合で考えれば司波達也（しゅじんこう）の強さを見せるという意味で妥当だが、達也を含めた司波家が沖縄に行くことを予め知っていて事を起こしたとしか思えない。
　そして、新ソ連が日本海側で同時に動きを見せれば、東京にいる五輪澪を奄美・南西諸島方面へ動員させることが極めて難しくなる。こうなると、当時動きを全く見せていなかったＵＳＮＡが『レフト・ブラッド』を唆して裏切らせた線まで出てくる。

だとすれば、その後の横浜事変における動きの鈍さや、達也の戦略級魔法を探ろうとするような動きに加え、終いにはディオーネー計画を許容したところまで繋がることになる。達也が正直にＵＳＮＡ行きを許容しなかったのは、この辺の事情も大いに関係しているのかもしれない。

「今年の佐渡沖や宗谷海峡の件を踏まえれば、ベゾブラゾフの関与の疑いは決して消えない。ならば、ベゾブラゾフには新ソ連解体の一手となってもらう。奴の戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］によって、新ソ連内にある全ての核ミサイル全てを起爆させる。勿論、放射能対策は講じるが」

「……［トゥマーン・ボンバ］を核の起爆スイッチ代わりにするという訳か。流石の俺でも出来ない芸当だな」

破壊するのは核ミサイルとサイロだけで、魔法によって放射能汚染を無害化する。しかも、ベゾブラゾフが魔法を行使した時点で発動するように仕組んだため、当人はおろか新ソ連政府も一切気付いていない。

核兵器を懸念する各国にとっても新ソ連の非核化はありがたいことだし、とりわけ陸続きもしくは海を隔てて隣接している周辺国家にとっては安全の度合いがかなり変わってくる。この事実について公表する気など無いし、日本国内の勢力を徒に増長させるつもりもない。

「尤も、ベゾブラゾフにはもう一つ大事な仕事をしてもらう。事が済み次第、連邦政府の要人諸共自爆してもらうつもりだ。聞いていて余り気分のいい話ではないと思うが」

「俺が言うのもなんだが、そこまで割り切れているのは感心に値する」

「人様の厚意を無下にしたからな。ならば、相応の報いを受けてもらうだけだ」

折角助かった命を投げ捨てるようならば、せめて国の将来の為に役立ってもらう使い方を強制させる。こんなことは前世ならば忌避していただろうが、この世界に生まれ変わった以上は情けや容赦などするつもりもない。ましてや、自身の生命に関わっているとなれば尚更

だった。
　すると、ここで言葉を発したのはリーナだった。
「ねえ、エドワード・クラークに関してはどうする気なの？　向こうでの会話だと司法取引で引き渡す様な事を言ってたけれど」
「奴は合法的に殺す必要があるからな。ベゾブラゾフに協力を持ち掛けた挙句、日本に災いを齎した道義的責任を全て被せるための〝生贄（スケープゴート）〟として」
　既に歴史の表舞台へ出た情報だけでもエドワード・クラークの追及は免れない。それに加えて、ディオーネー計画の信憑性を揺らがせたベゾブラゾフを協力人として指名した側の任命責任も当然問われることになる。
「奴のディオーネー計画の提唱によって、同盟国である日本が貶められた。この事実はどうあっても覆ることなどない。言い出しっぺの人間として責任を取らせるというのは、日本・ＵＳＮＡ間のみならず、ディオーネー計画に振り回された他の国家の溜飲を下げる意味でも重要なことだ」
　とりわけ、その余波を一番受けたのは欧州方面に他ならず、今回の責任をエドワード・クラークが被って社会的に抹殺されれば、ディオーネー計画の中止に対する大義名分を各国政府が得る形となる。
　原作だとこじつけに近い形だが、この世界では明確な証拠に基づきＵＳＮＡ政府が責任を持って対処する。事の発端を起こしたのはＵＳＮＡなのだから、当事国がその責任を果たすのは道理である。
「どうせ、俺や達也をテロリストだと宣って攻めてくるのが目に見えている。ならば、奴を捕まえるついでに持ってきた兵器全てを接収する。被害は少なからず出るだろうが、奴以外の真っ当な人間は全員祖国に送り返す」
「「パラサイト」が出張ってくる場合は如何しますか？」
「今度は『神将会』全員を出動させる。それと、奴らには思い知ってもらう――――俺を本気で怒らせる意味がどういうことなのかをな」
　悠元は、これまで怒っても『本気で実力行使する』という段階まで踏み切ったことはない。面倒事が一気に増えてしまうという懸念が

発生するからこそだが、今度はそうも言っていられない。
世界に名を知られた二人の英雄の力を継ぐ者がいるという事実を。
世界に日本を怒らせるという意味がどういうことなのかを思い知ってもらうためにも。

普通の概念の行方

時は悠元らが日本へ帰還する少し前。モンドサード基地との通信を終え、スペンサーとクラウス、そしてキャスバルはそれぞれの宛がわれた執務室へ戻った。そして、キャスバルの執務室には一人の男性が静かに座っていたが、キャスバルが戻ってきたところで視線を向けた。

「キャスバル、終わったのか？」

「一通りの通信は、ですね。あとは大統領閣下の仕事でもありますので……お前も災難だったな、バルク」

「なに、それは養父に拾われた時から覚悟していたことよ」

キャスバルの部屋にいたのはバルクホルン・バラッド――――ベンジャミン・カノープスの先代に当たる元『スターズ』第一隊隊長兼副長だった人間。そして、新たに〝シリウス〟となったジェラルドの魔法の師匠でもある。

「にしても、ジェイの奴が〝シリウス〟になるとはな……血は争えなかったか」

「複雑か？」

「当然だな。何せ、あんな無利益に等しい戦いでヴィルヘルミナやエレノアだけでなく、数多くの同胞を喪ったんだ。いくら全面戦争の回避とはいえ、そのとばっちりを受けた我々からすれば堪ったものではない」

バルクホルンは昔を懐かしむように呟き、テーブルに置かれたコーヒーを啜る。そうして喉を潤してから、続きの言葉を発する。

「いくら忘れ形見の恰好となったとはいえ、彼に軍人の道など強要できん。そのとばっちりを九島将軍の孫娘たちが被ってしまった訳だが……その意味で、俺もこの事態を招いた加害者側の人間だ」

「バルク……」

本来、大人の尻拭いに若者を巻き込むべきではなかった。だが、新ソ連の明らかになった戦略級魔法の恐怖を払拭するが余り、軍の序列や秩序を無視した人事案を敢行してしまった。その結果として生ま

れた歪みが［パラサイト］によって表面化したのは事実。
　バルクホルンも被害者の立場にあるが、危険性をきちんと周知できなかったのは自らの落ち度でもある、と自らを戒めるように呟く。
「今更裁けというのは無理だぞ？　そうなると、色々掘り起こさなきゃいけないところまで行きつく羽目になる」
「分かっている。だから、俺が頼むのは連中の指導係に抜擢してほしいという頼みだ」
「……バルク、熱でもあるのか？　もしくは悪いものでも食ったのか？」
「人を異常者扱いするでない。いや、言いたいことは分からんでもないが」
　キャスバルが驚くもの無理はない。これまで、軍を辞めても一線級の実力を有していたバルクホルンに度々打診はしていたものの、その悉くを門前払いという形で断られていた。それが一転して本人からの打診ということで、キャスバルの疑問にバルクホルンは溜息を吐きたそうな表情を見せた。
「だって、アンジー・シリウスが就任してからも打診は時折していたからな。それが一転して本人から希望を出されたんだ。誰だって心境の劇的な変化を疑いかねん」
「言うようになったな、キャスバル〝元副隊長〟」
「お前の教えがあったからこそだよ、バルクホルン元隊長」
　キャスバルは内部監察局入りする前、『スターズ』に在籍していたことがあった。最終軍歴は『スターズ』第一隊・副隊長――次期隊長の呼び声もあったが、ベーリング海での一件を機に軍を除隊し、妻の誼で内部監察局に転職した経緯を持つ。
　二人は同期の親友かつライバルみたいな間柄で、互いの模擬戦の勝敗はほぼ五分だった。
「こちらとしては、寧ろお願いしたいところだ。大統領閣下だけに負担を負わせるわけにもいかないからな」
「まあ、あの人からすればストレスの捌け口が無くなることに不満を漏らしそうだが」

キャスバルが軍を辞めた理由は、引き取った甥のジェラルドを守る為だった。それに、彼は自身の能力の限界を悟り、意固地になるのではなく別の形での国家に対する貢献の道を歩み始めることとした。
尤も、キャスバルとバルクホルンからすればジョーリッジは教官でもあり、彼に勝てたことはなかった。
「それで、あのエドワード・クラークなる人物はどうする気だ？　放っておけば、こちらの軍人を買収してでも無茶をしでかしかねんが」
「……日本にいる戦略級魔法師、神楽坂悠元から提案を受けた。此方にいる［パラサイト］に侵食された兵士全てを治療する名目で、エドワード・クラークに『誰の目から見ても明確な罪を背負わせる』とな」
「傍から見れば結末が決まった茶番劇か……話は聞いてるが、ジェイよりも若いというのに彼も苦労しているようだな」
魔法という存在が歴史の表舞台に顕在化して早一世紀。本来当時の世代で支払うべきだったツケを次代を担う人間が背負っている。バルクホルンから出た言葉は、悠元に対する恐怖よりも同情が勝る様な格好の台詞であった。
「その上で、人的資源にほぼ被害を出さない形で戦闘を終結させ、その際に使われた兵器群は全て接収すると通告を受けた。それと、空母『インディペンデンス』と『エンタープライズ』も彼に引き渡すこととなる」
「そうか。普通なら、警戒してもおかしくはないレベルの話だとは思うが」
「普通なら……確かに、その通りだと思う」
キャスバルは悠元が成した功績やＵＳＮＡに対する策謀を本人からの証言も含めて聞き及んでいる。単に魔法のみならば力押しを考えることも有るだろうが、彼にとって戦略級魔法はあくまでも〝最後の抑止力〟でしかなく、多方面・多分野のルートを駆使してＵＳＮＡの動きを封じた。
しかも、別に強制したわけではなく〝努力義務〟の体裁を取っている点において、取引先からすれば『却って放置することで不利益を被りたくない』という心理が働き、結果として彼が描いた通りの筋書き

となっている。
　彼に敵対した場合の前例は、日本のメディア関連企業で起こった神坂グループの大規模買収劇が如実に示しており、ＵＳＮＡ最大手のメディアもその余波を受けている。ならば、同様のことが多方面で起きないとは必ずしも言えない。
「あの若さで多方面の力学を熟知している――――しかも、彼はあの上泉剛三の孫だ。彼直々に教わったことも否定しなかった辺り、彼と四葉家を怒らせた場合、我々の首が瞬時に飛ぶだろう」
「国家が滅ぶ程度で済めばマシ、か」
　世界の全面核戦争という最悪の事態を回避した超法規的な魔法師部隊。その先頭に立っていたのは上泉剛三と神楽坂千姫、そして四葉元造と九島烈。そのうちの一人が二人の英雄に連なる血筋と家督を得た。
　四葉の復讐劇の陰に隠れているが、剛三の成した莫大な被害は各国の諜報機関でも大まかに把握しているが、情報源が限られるためにまるでかのルーデルのような有様で、とても一人の魔法師で成したような非常識さがどうにも拭えなかった。
「非常識さは魔法で散々学んできたというのに、いざ目の当たりで遭遇すると信じられんことばかりだ」
「それは否定しない。俺は直に会ったことがあるが、それでもあの強さは異次元レベルだ」
　軍が彼らのような存在を恐れるのも無理はない。だが、彼らのような創作物に出てきかねない存在を無視は出来ない。だからと言って、彼らを害するような行動は論外。キャスバルとバルクホルンはどちらかと言えば当事者側に近しいが、そんな彼らでも悠元や達也の存在は〝異質〟としか評価せざるを得なかった。
「いずれにせよ、事が済めば忙しくなる。頼みましたよ、バルクホルン・〝カノープス〟中将」
「……ちょっと待て。カノープスのコードもそうだが、何だその階級は」
「貴方を復帰させる際に大統領閣下および国防長官殿との申し合わせ

で決定したことです。諦めてください」
「はぁ、俺は一度軍を辞めた軟弱者だというのに……バルクホルン・カノープス、改めてよろしくお願い致します。内部監察局長閣下」
先々代〝シリウス〟のサポートとして名を馳せた敏腕の魔法師。既に根回しされていた事実を已む無く呑みこむようにして、バルクホルンは立ち上がって敬礼をした。それを見たキャスバルも立ち上がって敬礼で返した。
◇　◇　◇
日本の東京。その路地裏を一人の少年が走っていた。まるで、何かに追われて振り切るかのような足取りと、その表情には焦りが見えていた。
「有り得ないでしょうに……！　僕の術すらも効かないなんて、化物じゃないか……！」
そう呟いたのは誘酔早馬（いざよいそうま）――――本当の名は十六夜早馬（いざよいそうま）。百家の中でも最強格に位置する古式魔法の流れを汲む家。彼は兄よりも優れた術者だが、その素質を〝とある人物〟に見いだされ、十六夜家から切り離された。
彼自身、魔法に自信はあっても過信などしていなかった。だが、そんな魔法すら効かない相手に追われるのは想定外だった。そして、そんな彼の眼前に降り立ったのは……アッシュブロンドの髪を持つ少女だった。
「もう鬼ごっこは終わりかな？　かな？」
「いやあああああっ!?」
その夜、少年の絶叫が木霊するも……その声を聞き取れた人は誰もいなかったのだった。
◇　◇　◇
翌日、悠元はナーディアから相談事を受けて喫茶店『アイネブリーゼ』で面談することとなったが、そんな彼女の隣には顔を俯かせる少年の姿があったことに悠元はジト目を向けていた。一方、喜んでいるナーディアの姿を見て何があったのかを悟った。
「相談事があると聞いたんだが……何があった、誘酔早馬」

「その……隣の人に僕の童貞を……」
「あー、うん。それで察した」
本来なら神楽坂家と十六夜家は悠元の件で因縁や諍いを持つため、こうやって面を突き合わせること自体しない。だが、ナーディアに対して最大限の便宜を計らうと約束したため、この場は仕方が無いと妥協することにした。
「それで、ナーディアはどうしたいのか聞いてもいいか？」
「うん。この人をフランスに連れ帰って私の夫にしたいんだけど、いいかな？」
「俺としては別の家の人間だから、そこは十六夜家やそいつの〝雇用元〟との話し合いで折り合いをつけてくれ」
まさかの国際結婚の許可という有様。ただ、悠元としては直接被害が及ぶ話でもなければ、十六夜家と樫和家にダメージが飛ぶ話なのでスルーするつもりでいた。だが、ここで声を上げたのは早馬だった。
「ま、待ってくれ！　助けてくれないのか!?」
「はあ？　お前の実家である十六夜家が三矢家を含む十師族・師補十八家に対して散々詰ってきたことは事実だろうに。そんな因縁に対してお前の実家が誠意を見せない以上、俺が関与できる余地などない」
いくら百家の最強と名高くても、政府によって作られた最強の魔法師集団に対する心証を心の中に留めておくならばまだしも、実際に散々詰ったことは覆しようもない事実。だからこそ、早馬の懇願に対して突き放す様に言い放った。
「ちなみになんだけど、彼の実家や雇用元からは了解を貰ってるから、安心していいよ」
ナーディアはそう言ってポケットから古めかしい書状を取り出し、悠元に手渡す。悠元が中身に目を通すと、そのままナーディアに返した。
（樫和も良く許可したな……せめてもの逃げ道の構築のつもりなんだろうが）
彼の雇用元――――樫和主鷹直筆の書状には十六夜早馬の国外への

連れ出しを認める趣が記されており、国籍に関する手続きも『十六夜家側に事情を伝える』と記されていた。フランスの戦略級魔法師の夫となれば、ひいては十六夜家の箔にも繋がると踏んでのものなのだろう。

「まあ、話し合いが済んでいるのならば、俺が別に出る幕はないんだが……何かしでかしたのか？」

「いやー、その際に樫和家だっけ？　そこの連中が襲い掛かってきて返り討ちにしちゃって。取り成しをお願いしたいの」

「あー、そういうことね」

本来ならば既に話が済んでいる段階で悠元が呼ばれた理由――穏便な解決手段ではなかったので、悠元に取り成しを頼みたいということだった。

「お、お願いだ、神楽坂悠元！　どうにか出来ないの!?」

「……どうにかしたいのなら、自分で十六夜家と樫和家を説得しろ。俺に頼るのはお門違いだ」

冷たく突き放す形だが、そもそも自分たちで蒔いた火種で火傷している様なもの。そこに同情こそすれども、こちらがやけどを負う理由も無ければ道理もない。

ガックリと肩を落とした早馬を引き摺るようにナーディアが出ていったところで、マスターがケーキセットを持って近寄って来た。

「お疲れ様、悠元君。これは差し入れだよ」

「ありがとうございます、マスター。別にコーヒー一杯でも私は構いませんが」

「なに、ここのケーキメニューの考案は殆ど君のものだからね。その礼みたいなものだよ」

しかし、事が済めば一度肘鉄を撃ち込もうかと思っていた矢先にナーディアの騒動があった。この先はフランスのセナード家と十六夜家の〝話し合い〟になるため、完全に蚊帳の外の話となる。元老院四大老として首を突っ込むことは出来なくもないが、それを態々する必要も無い、と判断した。

人の恋路に邪魔をして蹴っ飛ばされる未来など御免なのだから。

「売り上げも大分伸びたし、君には色々感謝しているよ。けど、こうやって学生の君と顔を合わせるのもあと7か月ぐらいかな」
「……気が付いたら、もうそんなになりますか。一昨年のことが昨日のように思えます」
　物語の宿命とはいえ、季節代わりごとにトラブルが舞い込んできていた。大体周公瑾とエドワード・クラークのせいで片が付いてしまうのも複雑な気分だが。
「卒業式の日の夜に予約しておいていいですか？　親しい人を招いて卒業パーティーでもしたいので」
「構わないよ。というか、君なら直前でも構わないけれど」
「流石にマスターをドタバタさせたくありませんから」
　達也と対立せず、上手く折り合わせる。そのついでに深雪や達也の友人たちと友好的な関係を築いて、平穏な生活を送る……これが、転生した当初の目標だった。それが何の因果か、深雪はおろか四葉の複数の関係者と親しい関係を有し、気が付けば複数の婚約者と愛人を囲う羽目になった。
　変な色目を使わないことで却って興味を持たれたのは自分の落ち度だろうが、それが紆余曲折あって婚約・愛人関係に発展したのは色々複雑だった。前世の自分が嫌ったことを相手にしないだけでここまでのことになってしまったのは……同年代の魔法資質保有者に対して『その人の為人を見てやれ』と吐き捨てたくなったほどだ。
「話は聞いてるけど、後でお土産を渡すから君の同居者たちに渡してくれないか？」
「それぐらいはお安い御用ですし、寧ろすみません」
「いいさ。これぐらいしか出来ないからね」
　まずは巳焼島での戦闘を切り抜ける。そして最後の九校戦を戦い抜く。正直なところ、前者よりも後者の負担が大きいと思ってしまうのは……自分の気のせいではない、と思いたい。

フルスロットル

原作ではミッドウェー基地（監獄兼補給基地）とパールアンドハーミーズ基地の陥落という事象自体、知らせを受けるまで大統領府（ホワイトハウス）と国防総省（ペンタゴン）は把握していなかった。

だが、この世界においては大統領自身がゴーサインを出した上、ワイアット・カーティス上院議員によって厳しい箝口令が敷かれ、おまけにペンタゴン・内部監察局・連邦軍統合参謀本部のトップが〝事件性無し〟という決着を既に見ていた。

もしもの時の追及を避けるべく、書面上は〝国外からのテロリストの炙り出し〟としており、同盟国である日本から応援の魔法師を招いて事態の収拾に当たった――というのがホワイトハウスとペンタゴンの共通認識として完成しきっていた。

［パラサイト］を国外からのテロリストとするには多少乱暴な部分もあるが、元々国民でない存在がＵＳＮＡ本国を脅かした以上は言い分として成立しており、口を挟める人間などほぼ皆無に近かった。

ＵＳＮＡ内部でほぼ完結した事案として基地の襲撃を棚上げにする流れが形成されていくその一方、危機感を募らせた人物もいた。今更言うまでもなく、エドワード・クラークその人だった。

彼はミッドウェーとパールアンドハーミーズを襲ったのは司波達也と神楽坂悠元の二人が強く関係していると推測していた。［フリズスキャルヴ］で詳しい情報は手に入らなかったものの、二人が戦略級魔法の無害化を目的とした策謀や実力行使に対する、警告を含めたデモンストレーションの側面があると強く感じていた。

達也はもとより、悠元の場合はその功績全てがとても十代の人間が成せるような領域を逸脱していた。だが、エドワードが信頼している情報源ですら曖昧になるとなれば、最早彼の関与を疑わないわけにはいかなかった。

そして、『ディオーネー計画』においてベゾブラゾフと一定の関係を有していた以上、ベゾブラゾフが起こした騒動の責任を負わされるリスクまで生じてしまった。

――こうなってしまっては、もはや後戻りは出来ない。
――ステイツにとって明確な脅威となった司波達也と神楽坂悠元を斃す。
――こうなってしまっては、殺るか殺られるかだ。
エドワード・クラークは、そこまで追い詰められていた。自分で自分を追い込む様な格好となっていた。
◇　◇　◇
現地時間7月18日。エドワードは今後の方針を協議すべく、イギリスのウィリアム・マクロードに電話を掛けた。マクロードは『ディオーネー計画』を仕掛けた当初からの同志で、ベゾブラゾフが袂を分かってからも協力関係を維持してきた相手だ。
謂わば戦略級魔法師・司波達也および神楽坂悠元を排除する陰謀の、最も信頼のおけるパートナー。少なくともエドワードはそう考えていた。そして、モニターにはマクロードの姿が表示された。
「こんばんは、サー・ウィリアム。急な連絡をしてしまい、申し訳ありません」
『時差については以前も申しましたが、致し方のないことでしょう。それでクラーク博士、此度はどのような用件なのかお伺いしても？』
「ええ。先日、我が国の北西ハワイ諸島基地が襲撃されました」
本来、国の失点になる事案は隠すべきだが、エドワードがここまで追い詰められているためか、ある程度の情報を公表しないと協力は得られないと踏んでのものだった。
『その情報を明かしても宜しかったので？』
「必要なことだと判断したからです。その基地を襲撃したのは日本の戦略級魔法師・司波達也と神楽坂悠元の仕業と見ています」
『……失礼ですが、明確な証拠はあるのですか？』
「いえ。ですが、得られた情報や状況が両名の関与を否定できなかったのです」
エドワードの言葉にマクロードは考え込むような素振りを見せる。表向きいち政府機関の要人でしかないエドワードと異なり、マクロードは国家公認戦略級魔法師［十三使徒］の一人。彼を動かせれば、少

なからず彼の影響下にあるイギリス軍やイギリス連邦の構成国家の軍隊を動かせると睨んだ。
だが、考えた後にマクロードが放った一言は、エドワードの望んだものとはあまりにもかけ離れてしまった。
『……クラーク博士。申し訳ないが、最早私には貴方を弁護できる余地が無くなりました』
「それは、どういうことですか？」
『クラーク博士もご存知のこととは思いますが、新欧州連合が立ち上がり、我がイギリスも連合に加盟する運びとなりました。ただ、その条件として提示されたのは「ディオーネー計画からの完全撤退」――――その中には、クラーク博士やベゾブラゾフ博士の引き渡し要求も含まれております』
「な、何ですと!?」
これは、悠元が仕掛けたもう一つの策。新欧州連合発足時、イギリスを意図的に省いたのはディオーネー計画からの完全撤退宣言とその関係者を社会的に裁く段取りを組むためだった。
無論、首謀者に近しい立場のマクロードも無関係ではなく、次の国家公認戦略級魔法師指名後に強制引退となり、責任を全うするという意味でオーストラリアへ送られ、二度とイギリス本国の地を踏めなくなる。
ただ、彼の親族の名誉を重んじて表向きは〝イギリス本国で培ってきた魔法技術を連邦構成国のオーストラリアに教導する〟形で決着を見ており、移住するのはマクロード一人だけ。彼の子孫たちは『マクロードの罪は彼らに掛かるべきものではない』とイギリス女王が明言したため、そのままイギリス本国で暮らすことが認められている。
エドワードやベゾブラゾフの引き渡し要求はあくまでも〝努力義務〟に近いものの、[恒星炉]をはじめとした技術提供を受ける側として看過できる事案ではない。そのため、ＵＳＮＡや新ソ連に対して身柄の引き渡し要求の圧力を掛け始めている。
これが以前の東西ＥＵならば歯牙にも掛けなかったが、大国に匹敵する勢力として再結集した以上は無視できる筈も無い。

『クラーク博士、これは私からの最後の警告です。大人しく彼らの排除を諦めることです。尤も、博士が狙っている片割の神楽坂悠元殿は貴方を敵として認識しております……最早、この先会うこともありませんでしょうな。博士が利口な選択を取ることを切に祈っております』

エドワードが何かを返す暇もなく、通信が切れた。慌ててエドワードが再び通信を繋げようとするも、相手との連絡が繋がる気配は微塵も感じられなかった。ここにきて、マクロードという協力者を喪ったことに、彼はますます追い詰められていく。

そうして彼が思考の算盤を弾いた結果として、ＵＳＮＡにとっての競合国――無論、日本のこと――における戦略級魔法師をアメリカの覇権の脅威という観点からみれば排除の方向に舵を切れるのでは……と睨んでいた。

（その為には［フリズスキャルヴ］の存在も明るみに出さなければならないが……それはもう、仕方がない）

エドワード・クラークは連邦軍のシギント（盗聴・傍受・暗号解析などによる諜報活動）システムである［エシェロンⅢ］の開発者の一人で、［フリズスキャルヴ］はそれにバックドアを仕込んで利用したハッキングシステム。このシステムが明るみになれば、エドワードは国家反逆罪で終身刑に処される可能性が高い。無裁判で脳をスキャンされて廃棄処分という可能性も十分に考えられる。

しかし、このままではどのみち彼に未来はない。

全てを打ち明けた上で、一か八かの賭けに打って出る覚悟を、クラークは固めた。

ただ、エドワード・クラークは何も知らない。

ここまでの全ての流れを筋書きとして描き出したものの存在を。

エドワード・クラークが全てを知った時、彼に未来という文字は最初から無かったのだと知るのは……そう遠くない未来の話である。

◇　◇

現地時間７月２０日午後。ＵＳＮＡ――ペンタゴンの長であるリアム・スペンサー国防長官はこれ以上ない程に不機嫌だった。

何せ、ここ数日のスキャンダルによる上院・下院からの書類提出要求や議会での公開質疑。更にはメディアを前にしてほぼ連日の記者会見。加えてスキャンダルの当事者・関係者の処遇などで忙殺された結果、1週間をペンタゴン内で過ごす羽目となった。

その余波によって長官自らが出向いて制裁を行ったという騒ぎまで起きたわけだが、当の本人に対しての世論の評価は『武闘派とも謳われた国防長官に対する同情が勝っている』という始末。

過去に暴力を振るう政治家がいなかったわけではないが、彼の矛先となった者たちは過去に重大なスキャンダル容疑が掛かった者たちが炙り出された格好で、それを裁いた長官への好評に感情が寄っており、次期大統領候補の呼び名も高い。

それが漸く落ち着いたころに、エドワード・クラークがアポイントメントを求めてきた。これが別の人ならば快く会談に臨んでいただろうが、よりにもよってペンタゴンを忙殺にしてきた当事者ともなれば、流石のスペンサーでも顔を見た瞬間、殴りたい衝動に駆られるほどだった。

とはいえ、流石に公の場所で表向き『何も起こしていない』エドワードを邪険にするわけにもいかず、スペンサーは面会を受諾して適当な会議室を会談場所に指定した。

エドワードは挨拶もそこそこに、本題に入った。

「閣下。ミッドウェーをパールアンドハーミーズの二つの基地を襲撃したのは、日本の戦略級魔法師・司波達也と神楽坂悠元の仕業に違いありません」

「(……神楽坂殿が仰っていた通りになったな)その根拠は存在するのかね？」

「物証はありません。ですが、状況があの者たちの仕業だと物語っております」

スペンサーからすれば『関与した当事者』として把握している為、神楽坂悠元との対話を［フリズスキャルヴ］で読み取っている可能性について考慮したが、幸か不幸かエドワードはその辺を滲ませるような言葉を出さなかった。

既にＵＳＮＡ政府として決着させたことを穿り返す意味があるのか……と、スペンサーは逆に訝しむほどだった。そうまでして日本の四葉家と神楽坂家を怒らせた代償がまだ大きくないことに目の前の人物は気付いていない。
「君の御自慢の［フリズスキャルヴ］でも分からないのか？」
「……［フリズスキャルヴ］をご存知でしたか」
確かにエドワードは［エシェロンⅢ］の開発・設計を担当したが、全て彼一人が担っているわけではない。そして、［フリズスキャルヴ］の存在はその開発者の一人であるティナ・フェールからの密告によるもので、顧傑（ジード・ヘイグ）が逃亡の際に使用したツールはそのシステムを利用したものだという事実も聞かされている。
「エドワード・クラーク、見くびっては困るというものだ。国家科学局を含め、国防総省にいる情報のエキスパートは君だけの専門分野ではない」
「私は、見逃されていたということですか」
「元々、君たちが何をしようとも、ステイツに対して明確な被害が無かったからこそ追及をしなかった……君がディオーネー計画を発表し、イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフを協力者として引き込んだところまでは、の但し書きは付くが」
その出来事を境として、ＵＳＮＡは明確に苦境の立場へ追いやられた。別に日本が意図的にＵＳＮＡを嵌めたわけではなく、協力する立場となった新ソ連の暴走を抑えるどころか、それに乗じて日本の［恒星炉］プラントを破壊しようとせしめた。
そして、日本がそんな状況なのに競合相手としての面子で助けることを渋った。横浜の件で嫌疑をかけられ、パラサイト事件と南盾島での介入行動で痛手を負い、とどめは顧傑の件での拘束妨害。
当然、政権側は荒れに荒れた。スペンサーもその余波を間違いなく受けたわけだが、追い打ちの恰好でディオーネー計画やそれの反撃として放たれたスキャンダルの嵐となれば、ブチ切れて直接制裁する方向に思考が向いても何ら不思議ではない話だ。
「その話は一先ず置いておくが、仮に君の話が本当だとして、どうせよ

と提案するつもりなのかを聞きたい」
　スペンサーからすれば、遅かれ早かれ処罰せねばならない相手。その相手がこの状況で提案するとなれば、それは日本への攻撃に他ならないと踏んでいた。
　そしてエドワードが提案したのは、スペンサーというか悠元が予見した通りのものだった。
「最早、軍事行動を躊躇うべきではありません。司波達也は高い確率で、恒星炉プラントを建設している島に滞在しています」
「神楽坂悠元の名が無いが、それは何故かね？」
「彼については、司波達也が危機に瀕すれば必ず出てきます。そこを狙えば勝機は必ず生まれます」
（……この男は馬鹿なのか？　いや、こればかりは神楽坂殿が上手すぎるというのもあるか）
　スペンサーがそう思ったのは単純明快で、数年前に起こった自由の女神像倒壊未遂事件（メディアでは首都でのテロ未遂事件として称されることも有る）の際、偶然現場の近くをお忍びで視察していたところでテロに遭遇し、悠元と剛三に会ったことがあった。
　その時点でテロリストを大西洋の向こうへ吹き飛ばした実力ならば、数年後の現在時点でそれ以上になっていてもおかしくはない。
　その逸話だけでも現実離れしているというのに、ＵＳＮＡにおける最新鋭の軍事衛星ですら姿を捉えられない戦略級魔法師・神楽坂悠元。当該人物を敵に回した時の末路など、現在甚大な被害を受けて動けなくなった新ソ連がいい例すぎる。
　スペンサーの本音としては『この話題を切り上げて、とっとと帰ってくれ』と言いたげだが、それを表情に出すことなくエドワードとの会談を進めていく。
「ミスター・クラーク。君は既に存じていると思うが、我が政府は従来のスタンスを変更した。日本と対等のパートナーとして見做した上で、新ソ連の脅威に備えることで決着している」
「それは存じております。ならば尚のこと、将来のリスクを減らすためにも日本の戦略級魔法師を排除すべきです」

エドワードは声高に達也と悠元の排除を主張しているが、それを仮に実行した場合、日本へ行ったアンジェリーナ・シールズ（アンジー・シリウス）とエクセリア・シールズ（セリア・ポラリス）の逆鱗に触れるというリスクを考慮しているとは思えない。
「……どうにも、君の言葉は国の事情というよりも君自身の進退に重きを置いているようにも聞こえるな」
「そんなことは……」
「無いと言えるのかね？」
それに、一番の問題は達也の戦略級魔法［マテリアル・バースト］と悠元の戦略級魔法［スターライトブレイカー］の発動限界点が〝分からない〟という点に尽きる。
これまで数回使用されたことは掴んでいるものの、発動規模の限界点が見えない以上は上限の予測が出来ない。つまるところ、仮に師団規模の部隊を送り込んでも無駄死にさせる公算しか弾き出せない。
それに、魔法を使用した状況はこれまで対面の構図で放たれたものでしかなく、多方向に向けて放たれた事案は現時点で存在しない。それを成すことが出来たとすれば、最早戦略級魔法師という枠組みを超越している存在としか思えない。
「しかし、ステイツにテロを働いたものを放置することは出来ません」
「……君の主張はご尤もだ。だが、正規の連邦軍を派遣することは出来ない。この決定は大統領の判断ゆえ、覆ることは決してないと思え」
そして、スペンサーはエドワードの会談を終えて執務室に座った後、深い溜息を吐いた。どうにかエドワードにイリーガルＭＡＰを〝押し付ける〟ことは出来たものの、気になるのは彼の行く先だった。
「世界の大半が日本を……いや、彼の味方に回っている状況で、あの者が何を成そうとも無理な話だな」
そう吐き捨てた後、スペンサーは何処かに電話を掛け始めたのだった。

面倒事の前では戦略級魔法ですら無力

リアム・スペンサー国防長官との会談を終えたエドワードは、その足で南アメリカ連邦共和国（ＳＳＡ）に飛んだ。

機中で一泊し、現地時間７月２１日朝、旧ブラジル領のブレスティーロ国際空港――プレジデント・ジュセリノ・クビシェッキ国際空港が南アメリカ連邦共和国建国時に改称され、正式名称はプレジデント・ディアッカ・ブレスティーロ国際空港――から首都のブラジリアにあるＵＳＮＡ大使館へ。その後、大使館員の案内で連邦大統領府の置かれた大統領官邸に出向いた。

「……そうか、分かった。出迎えは丁重にしておくようにな」

その情報をディアッカ・ブレスティーロ大統領はＵＳＮＡ経由で聞かされていた。普通ならば足蹴にしてでも追い返すのが筋だが、そうしなかった理由は先日神楽坂悠元がレオニード・コントラチェンコを連れて来たときに渡されたものが起因している。

その上で、ディアッカは目線の先にいる［十三使徒］ことミゲル・ディアス、そして南米連邦陸軍参謀総長のフィーリョ中将に視線を向けると、フィーリョが先に口を開く。

「大統領閣下、例の人物が来たのですな？」

「ああ。エドワード・クラークがＵＳＮＡの大使館に入ったと連絡を受けた」

「まさか、ここまで読んでいるとなれば……末恐ろしくありますな」

フィーリョが『恐ろしい』と評したのは、エドワード・クラークの行動を全て読み切った上でここまでの筋書きを考え出した人物。だが、彼は同時に頼もしい気持ちを抱いた。その表情を見てしまったディアッカは溜息混じりに言葉を呟く。

「中将、その表情で恐ろしいなどと言っても説得力が皆無なのですが？」

「これは失礼しました。そう仰る閣下も言葉遣いが昔に戻っておりますぞ？」

「仕方がないでしょうに」

元々、ディアッカはフィーリョの部下で参謀としての勉学を積んでいた。だが、南米統一にあたって政治家の才能が否応にも開花してしまい、周囲からの支援を受けて政治家への転身を余儀なくされた。上泉剛三は無論のこと、かの少年――――神楽坂悠元との出会いは非常に大きいものだった。

その思い出に浸る間もなく、ディアッカはコホンと咳払いをした上で話を戻す。

「この国は幸いにも魔法師に対する非難の様子は小さい。だが、求められた以上は対価を支払わねばならん。とはいえ、エルンスト准将を出すわけにもいくまい。そこでディアス中佐、もしエドワード・クラークが助力を求めた場合、君には道化を演じてもらわねばならんが……いけるか？」

これは、悠元から提示された［恒星炉］技術提供に関わる交渉も大きく影響している。悠元は交渉時、人的被害をほぼ出さない〝茶番劇〟を起こすつもりでいた。そして、エドワード・クラークが万が一戦力提供を求めてきた場合、快く引き受けてくれれば助命の請負をすると明言した。

「構いません。寧ろ、自分のような人間がどこまで通用するかを見ることと、彼があれからどこまで成長したのかを見てみたい。私自身や弟の我儘も含んでおりますが」

「すまないな。神楽坂殿には内密に話を通しておく故、余程のことにはならんと思うが……無事を祈る」

「ハッ」

話を終えて出ていったディアスとフィーリョ。そして、入れ替わりになる形で執務室へ入ってきたのはハンス・エルンストだった。彼はディアッカの前に立つと、敬礼をした。

「ハンス・エルンスト准将、参りました。先程ディアス中佐やフィーリョ中将閣下とお会いしましたが……昨日連絡のあった例の人物が？」

「その通りだ。全く、ここには君と私しかいないのだから、言葉を崩しても咎めないのだがね」

「自分の中にいる御仁のような振る舞いをしたら、自分が人間でなくなりそうなので」
　ディアッカはハンスの中にルーデルがいることを知っている為か、別に丁寧さなどは求めなかった。しかし、ハンスとしてはそうやって振舞うことで人間らしさを喪うのが怖かった……魔法師としてやっていることが既に人間離れしているという事実は置いといて。
「そうか……話を戻そう。本日朝、エドワード・クラークがＵＳＮＡ大使館入りした。目的は我が国を引き込むつもりなのだろうが、この辺は既に決定している。ディアス中佐には、彼を騙す意味も含めて協力させる」
「もしや、それは日本とも既に話が付いていると？」
「ああ。全てはエドワード・クラークの罪を世界中に知らしめ、彼を合法的に抹殺する算段だ。それを考えたのは神楽坂殿だがな」
　現時点でエドワード・クラークに協力する［十三使徒］はいないに等しい。ベゾブラゾフにしても、どうせ達也とクラークの戦闘に乗じて二人諸共殺す腹積もりということも想定している。
　だが、それでは日本の強さを示したことにはならない。そこで、悠元は［恒星炉］関連技術提供の対価として、万が一エドワード・クラークがＳＳＡへ協力を求めた際、ミゲル・ディアスを敵側の戦力として提供するよう計らってほしい、と願い出た。
「私も最初は耳を疑った。だが、既に［恒星炉］を実用レベルにまで持っていっている彼からすれば、恐らく［シンクロライナー・フュージョン］の対抗策も持ち合わせているとみるべきだな」
「［シンクロライナー・フュージョン］や［トゥマーン・ボンバ］を封じる強さ。『盾』としての強さは証明されますが……『矛』は如何する気なのでしょう？」
「それは分からんが、彼はその戦いでこれまで出すことのなかった〝何か〟を世界に見せるつもりなのだろうと思う」
　ディアッカは交渉時に欧州への戦略級魔法提供に関する話も聞いていた。彼は最早、戦略級魔法師という枠組みで語るにはあまりにも埒外の領域にいる。

ただ、彼は自分や大切な人に対して害が及ばなければ積極的に関与しない性格であり、それはこれまでの行動で証明されているし、ディアッカもそれを目撃していた。
「それに、その戦闘で日本が強さを証明すれば、ＳＥＰＡやＳＯＰＡの〝盟主〟に足り得ることを世界に示すことにも繋がる。神楽坂殿は自身の名誉ではなく、国家や政府の名誉に重きを置いて策を講じているようだ」
「自身に対する評価や名誉、栄光を一切求めない……そんなのは、後にも先にも滅多に出て来ませんよ」
「そうだな。だからこそ彼は強い。もうじき迎える２２世紀において、世界最強の戦略級魔法師は間違いなく彼以外にいないだろう」
悠元自身は上泉剛三に振り回されての恰好だっただろう。だが、それでも彼は結果を示した。だからこそ、次代の日本を担う立場へと成り上がった。彼の機嫌を損ねるというだけでも大国が転覆しかかっている現状を踏まえれば、国家の興亡は彼のさじ加減に掛かっている様なものだ。
「そうそう、エルンスト准将にディアス中佐から伝言だ。『うちの長女を側室扱いでも構わないから娶ってくれ』とな」
「……ディアス中佐ぁ!?」
ディアッカの爆弾発言投下により、ハンスは周辺国家で起こっている〝戦略級魔法師の重婚化〟の余波を自分が受けることになるとは思わず、盛大に叫んだのであった。

◇　◇　◇

新ソ連国内は軍事力の明確な低下だけでなく、連邦政府体制にも陰りが見え始めた。政府側は積極的な情報発信や国内統制で一貫した姿勢を見せ続けているが、その影響で人間主義による支援を受けた反政府主義者による無差別攻撃が後を絶たない。
そんな中、新ソ連に唯一残った国家公認戦略級魔法師のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフがハバロフスクの病院で目を覚ましたのは、現地時間７月２３日のことだった。
ベゾブラゾフはモスクワへの召喚命令を固辞し、ハバロフスクに留

まることを決めた。黒海基地が謎の爆撃によって破壊され、欧州方面を守る筈のレオニード・コントラチェンコが〝行方不明〟となったことは聞き及んだが、そんな事情を聞き流してしまうほどに……ベゾブラゾフは雪辱に燃えていた。

伊豆高原の別荘では発動こそしたものの無力化され、第一高校を直接狙った攻撃によって貴重なクローン体と大型ＣＡＤを喪い、自身も深刻なダメージを負った。更に、７月上旬に行使した魔法は敵を葬れず、更には未知の魔法攻撃によってベゾブラゾフは再び地に伏した。

司波達也と神楽坂悠元――日本にいる二人の戦略級魔法師。この二人を殺さないことには、ベゾブラゾフは安心して眠ることすら許されない。

しかも、ベゾブラゾフを更に燃え上がらせたのは、再び意識を飛ばされた佐渡沖・能登沖での一件の後、日本に新しく誕生した戦略級魔法師の一条将輝。５年前の佐渡侵攻で［クリムゾン・プリンス］と謳われるほどの活躍を見せた彼が使う魔法を解析した結果、［チェイン・キャスト］に非常に酷似した魔法技術が使用されているという結果が得られた。

魔法に特許という概念はある程度存在するが、軍事的に開発された魔法――それも戦略級魔法となれば声高に主張する事など出来ない。

ベゾブラゾフがハバロフスクに留まることを選んだのは、達也と悠元に対する雪辱を強く望んでいる部分もあるが、それ以外にも情報収集のメリットがあるからこそだ。

地理的な距離を考えればハバロフスクよりもウラジオストクの方が近い。一時期ウラジオストクが東部の要として機能していたが、ハバロフスクは帝政ロシア時代から新ソ連とその前身となる国家において東の首都的な役割を果たしている。

日本と大亜連合に限ればウラジオストクの方が早いかもしれないが、日本にいた工作員は全て国外追放を受けてしまった。なので、世界中からの情報を得やすいハバロフスクにいるほうがまだ情報を得られると考えた。

だが、その中の情報でベゾブラゾフは首を傾げた。
（エドワード・クラークがミゲル・ディアスを引っ張り出した……？
これはどういうことだ？）
ＵＳＮＡとＳＳＡはエドワード・クラークの提唱した『ディオーネー計画』の観点で対立軸にある。とはいえ、エドワード・クラークの提案に乗っかるというほど追い詰められてもいない。ベゾブラゾフの知らない情報で〝脅した〟という線も無くはない。
（まあ、向こうの事情などどうでもいいことだ）
彼からすれば、最早ＵＳＮＡ内部の事情や諸外国の不可解な動きなど〝些事〟でしかない。主たる目的は司波達也と神楽坂悠元の抹殺。彼の心に刻まれた屈辱を克服するためには、その目的を達することがどうしても必須だった。
（エドワード・クラークの軍事的才能は不明瞭だが、あっさりと撃退される可能性は低い。その二人とて、襲撃の最中に意識を割くことは不可能だろう）
ベゾブラゾフの目論見は、達也と悠元がエドワード・クラークと対峙している最中に［トゥマーン・ボンバ］を撃ち込み、三人諸共抹殺することだった。
そんな思案するベゾブラゾフの様子を、漆黒に染まった蝶が部屋の片隅から見ているなど、知る由もない。
◇　◇　◇
時間は遡って、日本時間７月２２日。防衛省庁舎内の国防陸軍最高司令部――その司令官室にて、蘇我は同じ階級を有することとなった悠元と向かい合わせにソファーで対談をしていた。
常任職とはいえ、大将の階級は本来１８歳未満でなるべき職ではない。だが、総理大臣と防衛大臣を含めた現内閣、今上天皇を含めた皇族、そして国防三軍の長が揃って意見の一致をみたため、已む無く任命した経緯がある。
そして、現在空白となった霞ヶ浦基地の書面上の統括は悠元だが、彼自身が特殊過ぎるために陸軍最高司令部直轄の管理基地となり、現在は約１３００名にまで膨れ上がった独立魔装大隊のみが運用して

いる。
「――報告は以上です」
「ご苦労だった、上条大将。それで、まだ終わりとはならないのだろう？」
「ええ、まあ。エドワード・クラークなる人物が自棄を起こす可能性がまだ残っていますが。ただ、ここではかなり策を講じることになりますので、国防軍の皆様方には一つお願いを」
「君相手なら大半の我儘も通るだろうが、話を聞こう」
何せ、魔法師部隊の装備関連もそうだが、ここ最近の国防軍の不祥事絡みも彼によって解決している。蘇我もとい陸軍のみならず、海軍や空軍においても彼の要請となれば聞かないわけにもいかない。
なので、蘇我は悠元の言葉の続きを待った。
「巳焼島への襲撃を想定し、皇宮警察『神将会』を島に派遣します。自分がその長でもあるので、三軍大将の権限で彼らに国防の任を与えます。その際、蘇我大将には権限付与の根拠となって頂きたいのです」
「……その程度など、お安い御用だ。寧ろ、部隊派遣を要請しても罰は当たらんと思うのだが。君が管理している独立魔装大隊は動かさないのか？」
蘇我の問いかけに対し、悠元は首を横に振った。
「今回ばかりは〝本気〟で見せつける必要があります。なので、戦場に出ている人間の数は少ない方が被害を抑えられます。一応、風間大佐と藤林中尉に来てもらって証人となってもらう腹積もりです」
「上泉殿に鍛えられた君の本気の実力か……クレーターが出来るだけで済めば御の字だな」
「クレーターの一件は新ソ連郊外でやらかしたことはありましたが」
「それを聞かされると、大黒特尉の戦略級魔法がまだ有情に聞こえてしまうよ」
大黒竜也特尉――達也の戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］の威力は世界でも知れ渡ってしまった。だが、悠元の戦略級魔法［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］の真の力は未だ発揮されていない。
その時点で完成していなかったことも理由の一つだが、この魔法が

真の完成を達成した段階で、本来対抗策として思いついた[太極八卦陣(コスモ・ノヴァ)]がほぼ不要になってしまったという出来事まで起きてしまった。
　とはいえ、折角出来た以上は無下にする必要もないため、民生産業へのダウングレードも含めた技術開発に生かされる格好となった。その技術の一部は稼働している[恒星炉]にも活用されているため、全く無駄にならなかったのは幸いだった。
「やっと完成した戦略級魔法[スターライトブレイカー]ですが、これを本気で発動させると自分が行使している魔法以外の全ての魔法をキャンセルしてしまいまして。実験に協力してくれた大黒特尉は完全に面食らっていました」
「君以外の魔法を無差別に無効化する凶悪な戦略級魔法か……制御は出来るのかね？」
「対象外となる相手を選択することは出来ます。ただ、それをやると一万分の一秒ほどロスすることになりますが」
「……ほぼ誤差なしとは恐れ入るよ」
　計算上では間違いなく達也の[再成]による自己修復が発動する前に殺し切れる……これまで倒せないと考えられていた無敵超人の牙城を崩す魔法。その結果を弾き出した時には達也と深雪もいて、達也は苦笑していた。
　なお、その時は三人しかその場にいなかったため、『こんなんで達也を殺せたとしても、その後の負担で俺が過労死するから、絶対達也相手に使えない』と零した際、達也は『確かに』と納得するような素振りを見せた。
　四葉分家の懸念も理解できなくはないが、ここまで力を見せた以上は達也を日本から切り離すこと自体『国益に直結し得る重大な案件』と捉えるべきだったはずだ。
「ただ、こんなんで最強になったとしても、後始末が雪だるま式に積み上がっていく未来しか見えないんですが……」
「世界広しと言えども、そんな風に冷静な事を言える君が末恐ろしいと思うがね」

「現在進行形で色々受けている身でもありますので」
なお、一応千姫に戦略級魔法のこととその懸念点を伝えると、千姫は納得していた。曰く「強さを抱えるって大変ね」とのこと。
力を示すというのは簡単なようで難しい。それが魔法となれば尚更だ。だからこそ、悠元は力の在り方を次の戦いで示す。
――その時は、確実に近づいていた。

飛び交う梅の花びら

７月２３日火曜日。東欧方面を除いて世界が一旦の小康状態となった。

とはいえ、完全に事が片付いた訳ではない。ウィリアム・マクロードを切り離すことは成功したが、エドワード・クラークとイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの二人は未だ健在。だが、悠元は原作の達也が取った〝排除〟の手段を安易に取ることはしなかった。

そして、魔法科高校も事態の経過を重く見たのか、少し早い夏休みとなった。なお、1学期末の定期考査の結果は言うまでもなく学年主席の座を死守した……死守と呼ぶには点数の開きがあったのは事実だが。

その日の午後、話し合うということでＦＬＴツインタワーマンション北棟の共同スペースに集まり、悠元と達也、深雪とリーナの四人がその場に集った。

「……ねえ、悠元。エドワード・クラークはいいとしても、ベゾブラゾフはどうする気なの？　達也から聞かされた方法は悠元なら実行できそうだけれど」

「リーナが聞きたいのは、ベゾブラゾフそのものよりも新ソ連に対する行動の問いかけか？」

「まあ、そうね。帰化したとはいえ、ステイツのこともあるし」

魔法師個人――それも［十三使徒］を排除したところで、新ソ連が事実を誤魔化すために軍事的行動を起こすことは目に見えている。リーナはＵＳＮＡと新ソ連の諍いが遠因で軍人となった経緯がある為、そこに不安を覚えるのは無理もない。

「まだ話していない部分はいくつかあるが、新ソ連については革命を起こさせて現政権および国家体制を解体し、新国家の樹立にまで漕ぎ着ける算段を整える」

「……ちなみに、何をする気なのか聞いてもいい？」

「ああ。これまでにしてきたことを火種にして、現政府首相を大亜連合に送り付ける」

「うわぁ……」
新ソ連のトップを大亜連合に送り付け、新ソ連と大亜連合での諍いを拗らせる。それを実行するのは巨焼島での戦闘が済んだ後となるが、下手に合従されるのを防ぐためにはこれぐらいしなければ割に合わない。
「言っとくが、直接的な関与を徹底的に避けていることは理解してくれ」
「それはいいんだが、代わりの旗頭に宛てはあるのか？」
「宛てがあるというか、既に用意はしておいた」
「は、早いわね……」
『灼熱と極光のハロウィン』後、どうせＵＳＮＡが本格的に動き出すまで2か月ほどあることを見越し、世界各国の情報を探っていた。すると、新ソ連で粛清の動きが見られた。
「実を言うと、一昨年秋に俺が行使した［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］だが、意図的に人員だけ蘇らせてウラジオストクに飛ばしておいた。その中に妙な関係者もいたんで、目を付けておいた」
「誰なのですか？」
「新ソ連の［十三使徒］レオニード・コントラチェンコの親族。俺も流石に驚いたけどな」
正確にはコントラチェンコの娘夫婦とその子息。家族関係で娘がいることまで掴んでいたが、救出時には近くにいなかった。三人を救ったのは新ソ連領内の村郊外の森で、村の近くに反体制主義の集団がいたため、村に近寄らなかったのだ。
「それで、彼らには娘もいるようで、何の因果かＳＳＡにいるハンス・エルンスト准将の婚約者だそうだ。なので、親族も纏めてＳＳＡに一度亡命してもらった」
「そうやって救っていくあたりは流石だな。俺だと脅威を排除するので精一杯だ」
「別に無償奉仕は御免被るが」
ベゾブラゾフを排除した後、コントラチェンコの孫には新ソ連崩壊後の旗頭として新国家樹立までの支援をする。新国家の国家元首は

別の人間になってもらうこととなるが、国家樹立後最初の仕事が大亜連合との交渉になるのは不可避。
「その辺の目途も付けているし、日本も無関係ではいられない。何せ、二度の佐渡侵攻及び佐渡沖での小規模戦闘についての説明責任、宗谷海峡や能登沖での衝突や終いにはベゾブラゾフによる日本本土への魔法攻撃に対する賠償が発生するからな」
「確かに……何か提案はされているのですか？」
「旧体制時代に強奪した樺太・千島列島の領土返還交渉。それを呑むというのならば、神坂グループによる無利子での融資を検討すると申し出ている」
　このまま放置しても腐るだけならば、投資をして支配力を高める方向に持っていく。無論、表立った支配はしないものの、神坂グループによって新国家の経済を完全に掌握する。
「ただし、魔法技術に関するものは一切提供しない。恨むのならば、人様の信頼をぶち壊した新ソ連とベゾブラゾフを恨んでくれ、とも言い含めておいた」
「……私が言うのもなんだけど、十代でやっていい仕事の領域を超えてるわね」
「否定はしない。というか、俺らのような若者に仕事を任せている時点で大人たちの怠慢と無能が明るみになっているという始末だ」
　あと数年で成人になるとはいえ、本来年齢や学歴など――――ましてや魔法師という特殊な事情を差し引くとしても、大人たちがやるべき領分に踏み込んでいるのは色々複雑な気分である。
「そういえば、言い忘れていた。達也、意図的にビロビジャン基地のミサイルサイロを破壊しないで残している。その意図は読めるな？」
「大体はな。ベゾブラゾフを封じるための策だというのは薄々感じているが、俺はどう動けばいい？」
　達也が尋ねたのは、巳焼島襲撃の際の行動についてだった。いくら四葉家次期当主といえども、真夜からは『悠元君から指示があれば、それに従っておきなさい』と昨年末の時点で言い含められている。
　それを感じ取りつつも、悠元は説明を始める。

「達也は基本的に遊軍での動きを想定して策を組んでいる。なので、主だった対処は四葉家側の戦力の補助と［パラサイト］の殲滅になるが、任せてもいいか？」
「その程度ならお安い御用だ。ただ、その場合だと悠元はどうする気だ？」
「今回の防衛には目的がある。俺自身が〝本気で戦う〟という意味を世界に見せるためにも」
　悠元が持つ戦略級魔法［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］。新ソ連の艦隊を消滅させ、ウラジオストク軍港を破壊せしめた事象だけでも十分凄いが、それはあくまでも加減された状態での出来事。
「別に達也との手合わせで手抜きはしていないが、今回は魔法を使う相手が相手だ。人を何だと思っているのか理解していないやつには、相応の報いを受けさせてもらう。どうせ、ベゾブラゾフは達也とエドワード・クラーク諸共［トゥマーン・ボンバ］で葬る可能性が高いしな。ならば、彼には新ソ連解体の〝英雄〟になってもらう」
　散々プライドを傷つけられたベゾブラゾフにとっておきの〝栄光〟を渡す。軍人ならば名誉の戦死に報いる意味で二階級特進があるが、それに近しい所業で彼を利用する。悠元は戦闘終了後に声明を発表するが、ベゾブラゾフに対しては『ベゾブラゾフの行動責任は彼と国家に帰属する』と明言する。
「彼の死をどう利用するかは新ソ連の勝手だ。尤も、彼の死をトリガーとして新ソ連内にある全ての核ミサイルが全て灰燼に帰すのは確定事項だが」
「それって、やっぱり戦略級魔法？」
「別口の魔法だ。詳細はリーナでも教えられんが」
「いや、遠慮しておくわ。魔法のことを聞かされただけで思考がパンクしそうだから」
　いずれにせよ、事態が動くまで時間は出来た。悠元に手ほどきを受けた主要メンバーは［天刃霊装］および［天魔抜刀］の修得に力を入れることとなった。
　悠元は既に［最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）］を利用した［天魔抜刀］の顕現

に成功しているが、その制御を完璧にするべく自室のベッドの上で胡坐を掻き、瞼を閉じて集中していた。
『何時休んでいるのか分からない』と言われたことはあったりする。それが司波家での居候生活やマンション生活では尚更だった。悠元の側からすれば、情動の吐き出す先として婚約者や愛人たちに頼っている部分が大きい。
それでも、彼女らを女性として見ることはあっても、奴隷や道具のような扱いなど決してしない。それが却って夜の生活が激しさを増しているわけだが。
そうして1時間ほど経った頃、端末の呼び出し音に気付いた。悠元は床に降りて、端末の通話ボタンを押す。そうして姿を見せたのは雫だった。
『あ、悠元。邪魔したかな？』
「別に構わないが。それで何かあったか？」
『うん、流石に悠元の意見を仰ぎたいって思って』
別に鍛錬自体は早朝にもしているし、時折九重寺に出向いて八雲の[天刃霊装]の進捗を見る目的で手合わせをすることも有る。ただ、八雲曰く『君は達也君以上に隙が無いし、幻術も効かない。一体どうやったら勝てるのか見えてこない相手は久々だよ』と言われたことには苦言を呈したかったが。
それはともかく、雫が意見を求めるとなると相当だろう……と思い、通信を終えると自室を出て共同生活スペースの一室に出向いた。
そこには雫だけではなく深雪や姫梨、愛梨や沓子をはじめとした魔法科高校メンバーがいて、端末を操作する水波は半袖のシャツとハーフパンツの上にエプロンを着て端末を操作しているわけだが、それ以外の女性陣が白い水着を着ている。
その様子を見て大方の様子を察した悠元は、一つ息を吐いた。
「服装とかの新調か。それで、直接オンラインで繋いでいるのか？」
「ううん、最初はそうしようかって話もあったんだけど、私が止めた」
「フォローしてくれて助かる」
そうして悠元は近くにあったＡＲグラスを掛ける。この部屋は仮

想試着室としての使用も想定した造りとなっており、部屋の四方にはＡＲディスプレイを兼ねた姿見が備えられている。この部屋の設計は言うまでもなく千姫の差し金だろう。
　鮮やかなグラデーションを目の当たりにするかのようなファッションショーを間近で見ている気分だったが、特におかしなところは見られず、感想を求められたときは言葉が被らないように気を付けた。
　ただ、それに気付いた沓子が『お主からなら似合うと言ってくれるというだけでも嬉しいのじゃが』とこっそり伝えてきた。
　雫は一体何を懸念していたのかと思い、悠元は水波に声を掛けた。
「水波、端末を見せてもらえるか？」
「あ、はい。どうぞ」
　水波から渡された端末を受け取り、試着の履歴を操作する。そして全てを察した悠元が視線を女性陣に向けると、恥じらうような素振りを見せていた。履歴の中には、明らかに露出度が高すぎるものが並んでいたからだ。
「……選ぶこと自体は別に咎めなどしないが、どういうＴＰＯを想定してのものなのか聞いてもいいか？」
「えっと、それは……悠元さんはイケズです」
「意味が分からんのだが」
　服装とかファッションの類で言えば、どうしても異性のものとなると疎くなってしまう。将来のことを考えれば、女性陣がその分野に強くなってもらえるとありがたい部分もある。かと言って、自分を誘惑する目的で服装に気合を入れすぎるのはどうかと思わなくもない。
「まあ、余程変なものでもない限りは着飾っても似合うだろうし、いいと思う訳だが……雫は何故そこで抓る」
「だからこそ悠元はジゴロ」
「やめて」
　結局、履歴にあったものは全て買うようで、その辺は千姫も『悠君は優しいからこそ、皆がこぞって押し掛けるのですよ』と言われた。だからと言って、この生活を受け入れることはあっても、それに慣れ

切ってしまうということはないだろう……多分。

◇　◇　◇

原作なら誰しもが気付かなかった脅威。だが、悠元の存在によって全て明るみに晒された上、悠元はそれを利用して世界に力を示す。他でもない〝神楽坂〟の名を継いだ者として。

とはいえ、いくら当主でも先代当主の意見は無視できない……とはいうものの、その当人曰く『別に悠君なら全てを破壊しても構わないんだけどね』と言いのけたことには、流石に苦笑を禁じえなかった。

７月２３日午後、悠元は神楽坂家本邸を訪れた。目的はこれまで組み立てた段取りの報告と、それに対する意見を千姫に貰うため。本邸の離れに足を踏み入れると襖が開いたままとなっており、静かに覗き込むと……うつ伏せの状態で書状らしきものを見て唸っている千姫の姿があった。

「母上、どうかなさいましたか？」

「あ、悠君。ちょっと見てほしいの」

千姫は視線を動かすことなく手招きをしたので、そのまま踏み入れて千姫の横に座り、書状に目を見やる。それが『星見』による天文占術による報告だというのは直ぐに読み取れた。

「珍しいですね、『星見』の長期的な予報とは」

「そうなんだよね。多分、こんな時期だからこそだと思うけれど……で、ここの解釈をどう読み取れる？」

そう言って千姫が指差した先には、とある一文が書かれていた。

――『初夏に梅の花が舞い降り、大樹は枯れる』

普通に考えれば、季節外れの梅の花が咲いて、その木が枯れる……という風にも読み取れる。ただ、悠元は昨年京都へ出向いたときに聴いた〝あの声〟がどうにも空耳とは思えなかった。

「母上はどうお考えなのですか？」

「うーん、何かを揶揄しているのは間違いないけれど、私が知っている情報だと限界があるんだよね。だから、悠君なら何か知っているんじゃないかって」

「……心当たりはあります」

昨秋に京都を訪れた際、天神様と思しき声を聴いたことを千姫に伝える。すると、彼女は少し考え込んだ後、悠元に視線を向ける。
「悠君は、天神様が動くと思っているのかな？」
「魔法という存在がある以上、無いと否定することも出来ないでしょう。ただ、この文を読み取って起こりうる展開を想像するとなると……現実味がない、というのが正直な感想です」
〝呪い〟や〝祟り〟の類みたいなものはある為、別に神様の存在を否定する理由もない。ただ、肯定しても盲信などする気はない。
「確かにそうだねえ。ただ、天神様を嵌めた藤原氏の人間をピンポイントで狙い撃ったって伝承で残っているし、もしかしたら元々天然の超能力者だったのかもね」
「力と想いが強すぎて現世に残ってしまった存在……前例はありますから、別におかしくはないでしょうね」
その最たる例は周公瑾だった。いや、正確には〝周公瑾の身体を借りていた亡霊〟と称すべきなのだろう。大陸系古式魔法に通じつつも、彼はかつての栄光を求めていた。結局は悠元が滅ぼしたので、その夢が叶うことは未来永劫無くなった訳だが。
「何にせよ、こうなっているからには必要以上に触れる必要もないでしょう。それはそれで、此方にも優位に働くわけですし」
「触らぬ神に祟りなし、ね。悠君なら、神様が逆に頭を下げそうな気もするけど」
「そんな事態になったら、タイキックで追い返してやるだけです。生きている人間如きに頭を下げるなと言い含めた上で」
前世から転生したという事実があったとしても、自分があくまでも人間の領域を超えることは出来ない。それが例えこの世界の根幹にアクセスできる魔法があったとしてもだ。いくらチートを貰ったとしても、世界のルールに抵触するような行動は慎むべきなのだ。
尤も、レリック――［時空の道標（エターナルポース）］の存在によって次元を捻じ曲げられた上で愛人が増えるという事態になったが。

リスクヘッジの極致

九重八雲が住職を務める『九重寺(きゅうちょうじ)』は、旧東京都府中市の小高い丘の上にある。力仕事のボランティア活動に熱心な寺として――――寺に住み込んでいる門下生曰く「修行の一環」――――ご近所に親しまれ、街の風景を構成するパーツの一つとして社会に溶け込んでいる。

だが、この寺が元々この場所にあったわけではない。ざっと１００年前ぐらい昔の地図を見れば、誰しもが『なかった筈の寺が存在している』と驚くことだろう。

これには様々な要因が重なった結果として生じた風景。

世界群発戦争後期に遡るが、首都圏防衛の一環で調布、府中、三鷹の旧東京都中央部武蔵野地区に首都圏防衛部隊が配置された。その一帯にいた住民は平民分離の原則に基づいて疎開を余儀なくされた。九重寺の建っている丘は、そこに大規模防衛施設を建造する際に生じた残土が集まってできたものだ。

この時は、上泉剛三と上泉奏姫が海外を飛び回り、神楽坂千姫が首都圏防衛の最終ラインとして箱根に陣取っており、首都圏の被害はほぼゼロに抑えられた。そして、『武蔵野対空要塞』によって旧都区内の被害も生じずに済んだ。

結局、町の住民が戻ってこれたのは国費によって（この際、所在者不明の土地を神楽坂家で全て買い上げ、上泉家は土木業で貢献して白河グループを立ち上げた）町が再建した後だった。

とはいえ、建造された要塞は出入り口の封鎖で済まされた（将来的に使わないという保証がないため）し、区画整理の関係で元いた住居に戻れない家庭もあった（ここについては神楽坂家が関与して十分な補償を行っている）。

公共交通機関である『個別列車(キャビネット)』の敷設も含め、現代と近未来の風景が入り混じる中、「小さな丘の上に建てられた寺」――――それが九重寺である。

この寺の初代住職、九重八雲にとって師である人物は、魔法技能師開発第九研究所に協力した代償に、弟子――――僧侶と言うよりは『忍

び』の弟子――――を育成する拠点を手に入れた……というのが、原作における経緯だった。
だが、この世界ではまるっきり事情が異なっていた。
九重寺の初代住職である九重早雲（ここのえそううん）は、元々伊勢家の人間だった。神楽坂本家の意向を受けて、『星見』の情報を伝達させるための『忍び』を育てるために九重寺を建造し、ひいては『九頭龍』の統括を任せられるまでに至っている。
一応第九研に出入りしていた事実はあるが、魔法技術の提供は必要の範囲内のみに留めており、天神魔法に繋がらないよう細工を施されていたらしい。
早雲自身に家族はいたものの、『九頭龍』の重要性を重く見た彼は弟子の一人である八雲に住職の座を渡して隠居した。なお、現在も生存はしているが、普段は諏訪方面の山奥で暮らしているとのこと。
話を戻すが、九重寺自体が古風な伝統のある造りをしているのと対照的に、敷地の地下深くには最先端技術で固められた広い空間の訓練施設が備わっていた。
悠元は、その地下訓練施設の最下層に来ている。壁は内側から厚さ１０センチのコンクリート、厚さ３０センチの鉛、厚さ６０センチの中性子遮断コンクリートの三層構造となっている。そして、この部屋は達也が［トリリオン・ドライブ］の訓練に使っていた部屋だった。
訓練施設の使用を申し出た際、八雲は「君ならそこまで頑丈にしなくとも大丈夫な気はするんだけどねえ」と漏らしたほどだったが、それ以上何かを言うこともなく使用を許可した。
そこまでしなければならない理由は一つで、いくらデータでのシミュレーションで望んだ通りの結果が出たとしても、今回は実際の魔法行使でデータを取る目的でこの部屋を選択した。
念のために訓練室は水が注水されており、半袖のトレーニングウェアに着替えた上で［セラフィム］を構え、引き金を引いた。［セラフィム］から複数の起動式が展開され、悠元の左腕に吸い込まれていく。
魔法が展開した瞬間、有った筈の水が全て消えた。それに合わせて、悠元はもう一度引き金を引く。すると、悠元の頭上から大量の水

が降ってくる。
普通ならば人体に負荷が掛かるほどの量だが、無意識的に展開されている［相転移装甲（フェイズシフト）］で全ての負荷を無効化する。
それをひたすら1時間ほど繰り返した頃に八雲の魔法による声が聞こえ、水が引いていく。完全に水が引いたところで発散系魔法で水を乾かし、加重系魔法で部屋の外にあるボタンを押して扉を開く。
そして悠元は梯子を掴むと、反動をつけて一気に地上方面へ〝飛び上がった〟。
なお、地上に上がって来た悠元を見た八雲は、『そんなことを出来る時点で僕には白旗を揚げる事しか出来ない』と呟き、悠元に睨まれたのだった。

◇　◇　◇

その日の夕食後、悠元が食後のお茶を啜っていると、隣に座る深雪が話しかけてきた。
「悠元さん、少しお聞きしたいのですが」
家事のローテーションは基本愛人組に一任されている為、これまで司波家の家事を担っていた深雪からすれば、どうにも慣れないところはあったりする。ただ、それでもいざという時に動けないのはダメだということで婚約者組も持ち回りで家事をすることはある。そのせいで悠元が割を食っているのは言うまでもないことだが。
「別に構わないけど、何だ？」
「はい。最近九重先生のところに通っているとお兄様経由で聞きまして。ただ、お兄様も詳しいことは教えられなかったみたいですので」
「成程ね。心配しなくても、達也を負かすためのものじゃないから……何故その表情を向ける」
八雲としては、悠元がやっていることについて把握している。だが、それは悠元個人に関わるものであり、聞きたいのならば本人に聞いた方が早い……というのが、八雲が達也の問いかけに対しての答えであった。
「この魔法自体は、俺が小学生の頃に謎の高熱から快復した時から取り組んでいるものだ」

「そんなに前からなのですか？」
深雪は悠元が転生者の側面を有することについて知っているし、彼の魔法技術は達也ですらも一線を画するほどの高さを有する。そんな彼でも長いこと取り組んでいるテーマがあるというのは初耳だった。
「俺が二つの固有魔法を有することは知っていることだろうが、この魔法はそれとほぼ同時期に生み出してしまった魔法だ。その魔法は純然な攻撃魔法なんだが、超高圧縮した陽電子を相手にぶつける砲撃魔法だ」
言うなれば〝三つ目の固有魔法〟。だが、悠元がそれを表で使ったことは一切ないし、これまで使う素振りも見せなかった。
何故ならば、この魔法の本質が超高圧縮された陽電子収束砲撃魔法――国際魔法協会に真っ向から反旗を翻しかねない禁断の魔法だからだ。
何の対策もなしに使用すれば間違いなく地球を汚染しかねない魔法の為、暫く使用するということはしないと心に決めていた。当時、父親の元から新陰流剣武術へ通うことを薦められたときに快諾したのは、この魔法に頼るということを考えないためでもあった。
「周りに深刻かつ甚大な被害を出してまで勝つというのは俺の本意じゃない。とはいえ、いざという時に使えないようでは話にならない。なので、実戦での使用こそしなかったが、臨界前実験のレベルで練習は積み重ねていた」
「九重先生のところに通っているのは、それが必要だと考えられているのですね？」
「ああ」
ハード面において［バリオン・ランス］もとい［トリリオン・ドライブ］の完全制御を達成したことから、戦略級魔法［ローエングリン］の使用に際しての環境問題も解決した。これから起こるであろう脅威――巳焼島の襲撃の際、悠元はこの魔法を行使する腹積もりであった。
「これまで表に出さなかったから、達也の魔法の二番煎じは否めない

が。前以て達也に話したが、当人は苦笑していたけど」
「お兄様もそこまでの火力と出すとなれば限定されてしまいますので」
本来、原子核を分離して陽子・電子・中性子に分離するのは膨大なエネルギーの発生を伴う。無論、悠元の持つ［ローエングリン］も無関係ではない。多大なエネルギーの放出先を考慮しないと、徒にメルトダウン規模の被害を齎すことに繋がりかねない。
「だが、達也を介する形で技術提供をし続けた結果、漸くこの魔法を表に出すことが出来る。その意味で達也には感謝しかない。尤も、本人曰く『その程度では今までの恩を返すまでには至らんな』とのことだが。親しき仲に礼儀ありとは言うが、友人関係に貸借の勘定を持ち込まんでくれと思う」
「あはは……それはそれでお兄様らしいですが」
それを解決したのは、達也に提供した［瞬速極散（ソニック・アクセラレーション）］に使われた技術や［トリリオン・ドライブ］に用いられた原子核復元プロセス。一応達也に確認は取ったものの、本人曰く『俺が使う魔法を使えるのだから、是非使ってくれ』と言われた。

◇　◇　◇

7月25日、木曜日。
事態が進んでいるということは既に把握していた。エドワード・クラークはSSAの［十三使徒］ミゲル・ディアスを引っ張り出した（正確には悠元とSSAの政治的取引によるもの）挙句、USNA軍兵士の一部を買収して強襲揚陸艦『グアム』を含む三隻の艦船がハワイ州オアフ島より出港した。現地時間7月24日正午、日本時間25日午前7時のことだ。
到着予測は日本時間7月29日、戦闘は恐らく30日以降となるのが濃厚。
ベゾブラゾフは23日の時点で意識を回復したが、モスクワに戻らずハバロフスクに留まっている。十中八九こちらへの復讐を考えているのだろう。
要であったレオニード・コントラチェンコが抜け、東欧方面が慌た

だしくなっている上に新欧州連合・ベラルーシ・ウクライナの連合軍が旧バルト三国方面を奪取、南方面からトルコの圧力を受けて黒海沿岸を喪失。ただ、奇しくも悠元が以前戦闘で生成してしまったモスクワ郊外のクレーター群が天然の土堀となって侵攻を抑えているようだ。

そんな事情もあって、連邦政府もベゾブラゾフのモスクワ召喚を強く言えないのが本音であった。

話をＵＳＮＡ方面に戻すが、『グアム』を含めた三隻の艦船が出港後、最新鋭空母『エンタープライズ』がパナマ運河経由で太平洋に回航され、複数の護衛艦と共にそのまま日本へ向かう段取りとなる。表向きは対新ソ連および大亜連合に備えた日米合同軍事演習の体裁だが、巳焼島の襲撃後に支払う対価としてジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領とリアム・スペンサー国防長官がサインをしたもの。

とはいえ、一個人に支払うというのは体裁が悪いため、表向きは日本政府へ新ソ連の脅威に対応する海上戦力提供となり、いくつかのクッションを挟んで悠元へ無償提供される。そして、巳焼島に現在整備されている港湾施設を拠点とする為、巳焼島は首都防衛網の要になり得る。

更に今後の協力体制を維持するため、新たにスターズ司令官となったベンジャミン・ポラリスの意向により、スターズの隊長・副隊長を含めた隊員を定期的に日本へ派遣する方針を固めた。潜在的な脅威ではなく、太平洋を挟む形で協力関係を構築する。その意味でも『スターズ』の鼻っ柱を折ることは必要だと司令官自身が判断したためだ。

派遣内容には魔法師の合同訓練も含まれており、ＵＳＮＡだけでなく日本の魔法師のレベルも合わせて高めることが出来る。門戸自体は特に制限を設けないが、風間には合同訓練の教官として頼むつもりでいる。

なお、元継も教官として立つことが決まっている為、死屍累々の光景が広がることになるのは確定事項。寧ろ、剛三が表立って出てこないだけまだマシだと思ってほしい。

達也らは巳焼島に向かい、エリカやレオ、幹比古らも巳焼島に向かった。だが、悠元はまだ都内にいた。理由は防衛省庁舎にある国防陸軍最高司令部に呼ばれたからだ。蘇我は悠元から粗方の事情を聞かされているが、『グアム』を含めた艦船に関する知見を悠元に尋ねようと呼び出した。

「すまないな、上条大将。折角青春を謳歌したいところなのだろうが」

「魔法師を志した時点でまともな青春など期待はしていませんが」

「そうか……ＵＳＮＡからの問い合わせの結果も含め、君に伝えておく」

原作では有耶無耶だった回答結果だが、今回の場合はＵＳＮＡ政府から『全ての事情は神楽坂悠元殿に尋ねる方が早い』という簡潔な有様だった。それを聞いた時点で日本政府は強引に聞き出せる雰囲気でもないと判断し、軍務的な管轄も含めて蘇我が矢面に立たされる格好となった。

「まあ、その方が簡潔に済みますからね。ＵＳＮＡ政府と交渉した中には、エドワード・クラークなる人物の引き渡しも含まれますから」

「つまり、三隻の行き先は巳焼島という認識で間違いないということかね？」

「そう仕向けましたし、何故か軍事衛星でもまともに認識されない自分よりも明確に捉えられる達也に照準が向くのは想像がつきます……正直、認識を歪めているつもりなど皆無なんですが」

無意識的に他人の意識を逸らすこと自体は否定しないが、ＧＰＳそのものに干渉した覚えも無ければ、軍事衛星に捉えられないよう動くことは必要な時だけしかしていない。

「船にはＳＳＡの［十三使徒］ミゲル・ディアスの姿もありますが、魔法の発動痕跡が残ったとしても、ＳＳＡとは既に話を付けております」

「そちらも分かった。君を前面に立たせてしまうのは不徳の致すところであるが……その戦いの後、手筈通りに事を進めても良いのかね？」

「構いません。名に頼るのは好ましくありませんが、今回ばかりは四

葉家の為にも必要なことと認識しております」
巳焼島での戦闘後、悠元が考えているプランには日本政府と国防軍に協力を仰いでいる。それは、悠元と達也を国家公認戦略級魔法師として公表すること。
これまで、四葉家の悪名によって日本の秩序は保たれてきた。だが、既に亡くなった者たちに縋り続けるのは停滞しか生まない。だからこそ、悠元と達也を公的に認める算段を立てることとした。
当初――『灼熱と極光のハロウィン』直後に遡るが、悠元だけで事を進めようとしたものの、達也に気付かれた挙句深雪にも泣き落としを食らった。そのため、〝司波達也〟という名を残す形で戦略級魔法師とすることにした。
どうせ四葉直系かつ四葉家次期当主という事実が表に知れ渡るのは時間の問題でもある為、明確に力を見せつけることで日本の力を世界に証明することとした。
「そして、もう一つお知らせしておきたいことがあります。今回、自分は二つの戦略級魔法を使用します。先日申し上げた［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］、そして陽電子収束砲撃戦略級魔法［ローエングリン］」
「陽電子砲……いや、君なら出来るであろうが、放射能関連は問題ないと認識して構わないかね？」
「でなければ、巳焼島で使用する事すら選択肢に入れませんでした」
「そうだな。君の性格ならそう判断するであろうな……武運を祈っている」
何せ、［恒星炉］――核融合炉を実用・事業レベルにまで完成させた手腕を持つ人間である以上、それに対する対策についても疑うことはなかった。悠元の言葉を聞いた蘇我は、静かに頭を下げたのだった。

襲撃そのものが既定路線

蘇我との会談を終えた悠元は、マンションに立ち寄って私服に着替えた後、専用の転送部屋から巳焼島へ［鏡の扉（ミラーゲート）］で転移した。巳焼島には悠元しか立ち寄れない専用の部屋が設けられており、これは四葉家現当主の意向も含まれている。

悠元がその部屋に飛ぶと、部屋の外に気配を感じつつカードキーで扉を開ける。すると、待ち構えるように立っていたのは深雪だった。

「お早い御着きですね、ご主人様」

「……何時から待っていた？」

「5分前ぐらい」

まるで悠元の移動を悟ったかのような動きに悠元が問いかけ、雫が淡々と答える。なお、深雪はそのまま悠元の左腕にしがみ付くような形で腕を回していた。普通なら他の婚約者が窘めるところだが、雫曰く『悠元に甘えると貸しが増える』とのことらしい。

言っておくが、別に婚約者や愛人に対して貸し借りの関係など持ちこんだ覚えなどない。

「まあ、どうせ5日後まで事態は動かないから、訓練の面倒でも見るか」

「いつもと変わりない気もするけど」

「そんな簡単に変わったら、俺の精神が磨り減るわ」

悠元らがそのまま小食堂に足を運ぶと、達也ら3年主要メンバーに加え、燈也と五十嵐亜実、ミカエラ・ホンゴウの三人もいた。どうやら話を聞くに、レオが燈也を誘い、それを聞いた亜実とミアが同乗した形となったようだ。

「お、深雪の旦那のお出ましね」

「茶化すな、エリカ。とりあえず、現段階で判明している情報をお前らにも教えておく」

「……いいのかい？」

「変に突っ走りかねないから、今話すんだ」

幹比古は悠元が何を話すのかを悟ったが、変に首を突っ込みたがる

連中が多いからこそ、情報の提示に踏み切った。深雪はそれを聞いて掴んでいた腕を離した。そして悠元は携帯端末を取り出し、操作すると近くの大型モニターが点灯して詳細のデータが表示された。
　それを見ている人間の中で、最も軍事に関わっている達也が感嘆の言葉を漏らす。
「これは……凄いな。南盾島で使っていた情報システムか？」
「正解。正確には俺の固有魔法［万華鏡（カレイドスコープ）］を用いた全世界情報次元探査システム［八咫鏡（ヤタノカガミ）］による全世界の軍事情報だ」
「……悠元の規格外さは色々味わってきたけど、これはもう驚く以外の反応が出来ないわよ」
　エリカの言い分に周囲の人間が頷くが、悠元はそれを無視して端末を操作する。そして、表示されたのはハワイから巳焼島への予定航路を示している三隻の艦船の予定航路図だった。
「エドワード・クラークが一か八かの賭けに出てきた。そして、この船にはＳＳＡの［十三使徒］ミゲル・ディアスが同乗している」
「ＳＳＡのって……裏切ったのか？」
「いや、これは俺の策によるものだ。相手に戦略級魔法師がいないと、単に〝弱い者虐め〟の構図にしかならない。如何なる［十三使徒］が相手でも勝ち切ることが出来る証明の為、ＳＳＡには一芝居売ってもらうこととした。なので達也、彼らについては魔法を無効化することはあっても見逃してくれ。そこら辺は『神将会』で請け負う」
「分かった」
　どうせ艦船をこちらで接収することも含めて、達也にはベゾブラゾフに集中してもらう算段を立てている。そして、原作では戦場に立たなかったレオ、幹比古、エリカの三人に視線を向けた。
「レオ、エリカ、幹比古に燈也。俺は師族会議議長として四人に巳焼島防衛の協力を頼みたい。無論、危険事なので報酬は支払う」
「そりゃ、確かにその通りなんだが……念のために聞いておくが、いくらなんだ？」
「危険手当込みで一人５０億円」
「……は？」

どういう勘定を立てたらそんな金額になるのか分からない、と言いたげにエリカが唖然としたわけだが、これにもちゃんと理由が存在する。その最たる理由は『[恒星炉]プラントの防衛』と『要人の警護』に他ならない。
「相手は曲がりなりにも外国の正規軍に加え、[パラサイト]に侵食された連中もいる。[天魔抜刀]にまで至った今のお前らなら遅れは取らんだろうと判断したまでのことだ」
「いや、エリカは多分そういうことが聞きたいんじゃないと思うんだけど……５０億円は水増しし過ぎじゃない？」
「そうか？　[恒星炉]のポテンシャルの一部で既に莫大な利益を上げているんだ。ここから本格的に電力供給まで踏み込めば、日本が世界一の技術立国になることも可能なほどだ。それを守るという意味からすれば、四人合わせて２００億円で済む方が安い買い物だよ」
何せ、戦略級魔法師を囲い込むために国家予算の一部を割くことを考慮すれば、２００億円支払うこと自体安くなるだろう。創作物における埒外の存在を囲うために支払った代償のことからすれば、この世界の魔法師に対する存在価値は明らかに〝安すぎる〟ぐらいだ。
「それに、この先のことを考えればお前たちに功績を積んでもらう必要がある」
「？　どういうことだ？」
「そうだな……幹比古はまだいいとして、エリカに元老院四大老の座を継いでもらう」
「元老院？」
普通の魔法師ならば聞かずに一生を過ごすであろう存在。首を傾げるエリカに対して現四大老である悠元が元老院の説明をする。
「元老院はこの日本において魔法の秩序を守る存在として置かれ、日本の『表』の秩序が『裏』の力――怪異や妖魔、道を外れた魔法師や異能者の力――で乱されないよう、そうした存在、そうした者たちを退治し、封印し、排除することにある」
「……ようは、表に出来ない治安維持組織みてえなものか？」
「目的だけを聞けばな。だが、元老の大半は自身にそこまでの実行力

を有さないのが実情だ」
元老院に属するメンバーの中、上泉家と神楽坂家は独自の戦力を有することで四大老としての発言力に伴う実行力を保ち続けてきた。だが、それ以外の面々は実行力のある存在を権力で囲うことに腐心した。
これが原作の場合、全てその傾向に染まっていたことを考慮すると……将来的に達也が[雲散霧消(ミスト・ディスパージョン)]で組織諸共消し去る未来しか見えない。東道青波が辛うじて見逃されたとしても、それ以外の四大老が消え去る可能性は決して低くないだろう。
閑話休題。
「東道家に幹比古が入り、残る四大老の一角である樫和家を挿げ替えれば全ての四大老に実行力が伴う算段が付く」
「いやいや、あたしなんて愛人の子よ？　どうやって正当性を持たせる気なのよ？」
「その答えはエリカの母方の祖先にある」
確かに、エリカの出自を考えれば、四大老となり得る明確な根拠はないに等しい。
だが、ここで一つの疑問が出てくる。それは、いくら剛三の手引きがあったとはいえ、ルーカス・ローゼンを婿養子とした鹿取家の背景に何があったのか。
以前、西城家の祖先に三条西家の存在があることは説明したが、鹿取家にも特殊な事情が存在した。それは、鹿取家は香取家の分家筋ということ。香取家は香取神宮の神職を務める家柄で、クォーターとはいえその血を継ぐエリカは広義的に香取家の人間にも成り得る、ということになる。
「一応エリカの実家に当たる鹿取家にも確認は取れた。本家筋である香取家に事情を聞いたところ、エリカを養子に迎えられないかと好意的な返事を貰えたほどだ」
「……ちなみに、それを受け入れればあたしは千葉の娘じゃなくなるのよね？」
「血縁関係までは消せんが、表向きの関係は解消できるだろう」

その前例はエリカの目の前にいる悠元であり、神楽坂家の人間となったものの三矢家や矢車家との関わりは続けている。それを理解しているからこそ、エリカは納得したように軽く頷く。
「そこまでは求めないわよ。いくらあのオヤジがあたしとレオとの婚約を認めたくなくて、今まで駄々をこねていたとしても」
「……ストレスが溜まっていたんだね、エリカ」
「当然よ、ミキ！　あの憎たらしい姉の顔を見なくていいと思えば、レオの放浪癖なんて1億倍マシよ！」
「そ、そうか……あと、僕の名前は幹比古だ」
エリカを出しに使うような形となったが、このままエリカが四大老になれば、四大老そのものの世代交代が一気に進む。その際に元老たちの一新もせねばならないが、その際に得たものを全てエリカに渡すだけで強固な力を確立することに繋がるし、神楽坂・上泉・東道の三者で協議した結果なので、誰の文句も言わせない。
「にしてもよ、そんな簡単に挿げ替えてもいいのか？　絶対反発するんじゃねえのか？」
「実は最近占術を覚えてな。それで未来を占ったら樫和家に良くないことが起きると結果が出た」
「悠元がそんなことを言ったら、現実に起こりそうで怖いんだけど」
「俺は無関係だと主張しておく」
正確には『星見』による天文占術によるものだが、一応周公瑾の知識の中に占術もあったため、それで試した結果は全く同じだった。こうなると変えられない未来だと思って見ない振りをすることにした。
「なので、樫和家が没落する未来を確定事項とした場合、早急に次の座を確保する必要が出てくる。とはいえ、流石に神楽坂・上泉・東道の身内から出すこともできない。色々考えた末に出した結論は、傍系とはいえ香取家の血を引くエリカに四大老を継がせる方法だ」
「……腐れ縁もここに極まれりね」
「エリカ……」
具体的にどう没落するのかは分からないが、その背景に〝天神様〟が関わるとなれば、絶対ロクでもない未来としか思えない。それが分

かり切った以上は救いの手を差し伸べる気にもならない。
『触らぬ神に祟りなし』とは、まさにこのことだろうと思う。
「言っておくが、無理強いする気はない。これを聞いて判断するのはエリカ自身だからな」
「……まあ、いいわ。あのクソオヤジに頭を下げるよかマシだと思うことにするわよ」
これで、四大老全てが悠元の幼馴染・親類で固められた形となる。権力の基盤となる部分は香取家にも協力を仰ぎ、元老たちを刷新した際に生じたものをエリカに丸投げする腹積もりだ。
「あと、こんな金額に設定したのは、事後処理を此方に委任してほしい部分も含んでのものだ。俗に言う『箝口』だな」
「箝口？　別に戦闘のことを大っぴらに話す気なんてないけれど」
「今回、『神将会』七人全員を戦闘に出す。本来、『神将会』の素性は国家重要機密に位置付けられている為、その秘匿をお願いしたいからな」
エリカたちは悠元、雫、そして深雪が『神将会』だと知っている。姫梨、修司と由夢についても薄々は勘付いているだろうが、今回の戦闘では全員を巳焼島の戦闘に参加させる。多少の損害は最悪魔法で修復できるため、最高戦力による蹂躙を見せつける算段は立った。
「俺と元継兄さん、姫梨、修司、由夢、雫に深雪。この七名が現行の『神将会』だ」
「あー、納得ね……そういえば、色々あるだろうけれど国防軍に援軍は頼まないの？」
「こちらの数を増やしてフレンドリーファイアする方が危険だ。俺を含めた『神将会』にエリカたち、四葉家の戦力と真一にも協力を仰ぐ。これでも十二分すぎるぐらいだが」
別に頭数自体が問題ではなく、天神魔法を使用する意味で味方を巻き込む公算が高くなるリスクを減らす方がいいと判断した。とりわけ修司と由夢の火・金属性は陰陽五行の中でも苛烈な攻撃力を有するので、防衛に当たる人間が巻き込まれる可能性を捨てきれない。
「[天魔抜刀]まで有していればそこまで気にすることでもないんだ

が、念には念を入れたい。達也、一応見届け人として風間大佐と藤林〝中佐〟が来る手筈になっているから、四葉家に説明を通してくれるか？」
「それはいいが……響子さんも苦労しているな」
響子の階級が上がったのは、連隊長副官という立場からして連隊長に準ずる階級を有するのが妥当という判断によるもの。なお、昇進した当人は辞令の書類を見つめて『殉職した覚えもないんだけれど』と達也の前で溜息交じりに話していた。
敵側の戦力だが、原作ではほのかを誘拐したイリーガルＭＡＰが追加戦力として含まれているが、今更増えたところで『焼け石に水』程度のものでしかない。今回は加減を考えずに敵を殲滅するため、手心など加えるつもりもない。
それと、沈黙を保っているベゾブラゾフが現時点で巳焼島へ攻撃を加えないのは、以前の失敗を踏まえてのものであり、達也とエドワード・クラークのいざこざに乗じて戦略級魔法を狙い撃つ腹積もりなのだろう。
その証拠として、巳焼島の南方を目指して潜行している新ソ連の潜水艦『クトゥーゾフ』の存在も明るみになっている。
「話を戻すぞ。部隊撃退後、俺は東京に飛んで日本政府との合同記者会見に臨む。その際、自分を国家公認戦略級魔法師として公表させる。多少目立つリスクは避けられないが、その後の九校戦がある以上はさほど変わらない、とみている」
「ちなみに、達也も戦略級魔法師として名乗るのですか？」
「そちらも『どの道を取ったとしても同じ』だからな。尤も、本人の希望によるものだと述べておく」
そもそも、本気を出せば風間や八雲ですら認識を掴むのが難しい悠元。そんな人間が国家公認の戦略級魔法師となったところで、リスク自体が大きく変動するというわけではない。達也の場合は四葉家――『アンタッチャブル』の悪名が噂程度に流れている以上、ここいらで確定させることで〝明確な抑止力〟として顕在させる。
「尤も、それに異を唱えられる人間がいれば、是非お目にかかりたいも

のだと思うよ。国家を引っ繰り返すリスクを承知の上で敵対する気概があればの話だが」
「……お兄ちゃんの存在だけでＵＳＮＡが味方に付いている時点で、誰も勝とうなんて思えないような気もするけど」
「分からんぞ？　西の大国が敵対の意思を見せない保証なんてないから」
　達也は巳焼島で戦略級魔法を使用しない。だが、悠元は戦略級魔法を使用する。この辺は存在の認識に対する明瞭・不明瞭の差もあるわけだが、神楽坂の継承者として明確な力の誇示をしなければならないことは千姫から言い含められていた。
　イリーガルＭＡＰが含んだところで趨勢に大差が無い。だからこそ、敵方に［十三使徒］クラスの魔法師を入れておく必要があった。その代わり、ＳＳＡに対して［恒星炉］の技術教導に伴う技術者の受け入れを決定している。
「話を変えるが、九校戦の練習は進んでるか？」
「勿論だよ。燈也には申し訳なかったけど」
「いいんです、幹比古。僕もようやく因縁にケリをつけれますので」
「……そんなことを平気で言えるあたり、燈也も立派に十師族の一人なのね」
　個人戦に悠元が出るため、団体戦（従来の九校戦）では達也と幹比古、燈也の三人が本戦モノリス・コードへ出場する手筈となった。更に、復活する運びとなったバトル・ボードと昨年から引き継がれるロアー・アンド・ガンナーの女子ペアにリーナが出場する。
　昨年度のソロ・ペア出場方式がそのまま継続となり、エリカはクラウド・ボールの女子ソロとアイス・ピラーズ・ブレイクの女子ペア、レオはアイス・ピラーズ・ブレイクの男子ペア、燈也は先述した競技とクラウド・ボールの男子ソロに出場する。
　幹比古はモノリス・コードとアイス・ピラーズ・ブレイクの男子ソロ、ほのかはバトル・ボードとミラージ・バット、雫はスピード・シューティングとアイス・ピラーズ・ブレイクの女子ペア、姫梨はアイス・ピラーズ・ブレイクの女子ソロとミラージ・バットを受け持つ。

個人戦に出る六人を除くとしても、〝歴代最強〟という名を冠されても否定できる材料は皆無だった。

仙人ですら葬りかねない存在

九校戦は今年で最後となり、来年度からは新たに湘海高等学院・聖凛高等学院・城山高等学院の三校が加わって総校戦の名称となる。競技種目は一昨年と昨年の事情を考慮したものとなることは確定だが、これまで九校で戦ってきた魔法科高校側からしても、これまでのカリキュラム全てを見直さざるを得ない状況に追い込まれる。

普通ならば、魔法科高校側からすれば『新参者の学校に何ができる』と侮る人間は出てくるだろう。だが、実力が未知数の相手を侮ることがどれほど危険な事なのかも理解できないようならば、将来魔法師として大成することも極めて難しくなる。

寧ろ、高校生の魔法競技の段階で学べるのだから、却ってありがたい経験と言えるだろう。大人の段階でそういった事態に遭遇すると、良くて怪我は免れないのだから。

「力は示す。だが、必要以上の殺しはしない。仮に心を折られたとしても、敵のことを調べ切らずに手を打った側の責任だ」

「そうなると、[パラサイト]はどうする気なんだい？　封印が最優先になりそうだけど」

「そのための[天魔抜刀]――[天刃霊装]だからな」

パラサイト事件の際は必要だったからこそ封印に止めた。今回は必要以上に拘る必要もないため、[パラサイト]を向こう側に送り返すこと自体は『問題なし』と判断している。

「にしても、大人たちの怠慢には呆れるほどだ」

これまで悠元は数多の魔法を生み出し、その一部を提供することで歴史の流れに介入してきた。流石に主要人物を直接害するような行為は慎んでいたが、その最たる理由は敵と言えども彼らに賛同する人間が少なくないことも起因している。

◇　◇　◇

７月２４日。鍛錬以外に手持無沙汰となっていた悠元は、巳焼島飛行場（将来的には羽田・成田でカバーしきれない国内線のハブ空港の役割を持たせる予定）の格納庫を訪れていた。そこにはＵＳＮＡから

乗って来た『ソニックラプター』が駐機しており、２機の戦闘機にいくつものケーブルが接続されているものの、機体調査の為の分解というよりはオーバーホールの様相を呈していた。
　作業員が慌ただしく作業している所を邪魔しないように見つめていると、そこで指揮を執っていた新発田勝成が悠元に対して頭を下げた。
「これは神楽坂殿。どうされましたか？」
「流石に自分が乗って来た機体なので気に掛かりまして。御当主様のご命令ですか？」
「はい、データ収集の上で国防軍に売却するようでして。一応先代の神楽坂家当主に確認を取ったと伺っておりますが、不味かったでしょうか？」
「いえ、構いませんよ。自分が関わったものではありませんので」
　自分が大きく関わった技術が入っているならばまだしも、その程度ならば別に目くじらを立てる必要もない。一部を除いて技術を独占する腹積もりなど無いのだから、四葉家が上手く活用してくれるならそれでいい、と結論付けた。
　戦闘機の技術を民間機に応用し、国産の航空機メーカーを立ち上げることは決めていたが、その共同出資者にホクザングループを取り込むこととした。既に航空機製造に関するライセンス・特許関連の買収交渉は済んでおり、総計で５兆円ほどＵＳＮＡ・欧州の航空機メーカーに支払った。
　流石に向こうも現金一括で支払ってくるとは想定外だったためか、各社で設計していた次世代民間機の設計データの供与を受けた。その代わり、此方のメーカーで製造された際は優先購入権を得たいという目論見を感じ、契約書にサインしている。
　この戦闘機には空力制御を魔法で補完する実験装置が付いており、悠元はそれを片手間で改良した。これまで軍事的に難しい代物を作ってきた人間からすれば、その装置など玩具を弄るぐらいのレベルに成り下がっていた。
　国産の航空機メーカーは『フェネクス』――――〝不死鳥（フェニックス）〟を捩る形

で名付けた。本拠地は巳焼島に設置し、主力飛行機組立工場は将来の空港に隣接する形で建設が始まっている。
　操業自体は本年末を目途にしており、水素タービンエンジンを取り扱う関係で複数の工業系メーカーとの業務提携交渉も始めている。書面上の取締役は悠元が担うものの、工場の立地の関係で人選は四葉家に丸投げしている。
　そうなった理由は単純明快で、水素ガス生成は［恒星炉］の主要事業でもあり、その意味で達也の占める役割は非常に大きい。その意味を四葉本家・分家が理解できない筈など無い。それに、今年正月の慶春会で深雪が嫁入りとなった罪を償う意味でも、四葉分家を扱き使うこととした。
　これでもまだ達也に関して文句を述べるのならば、実母である真夜が黙っていないだろう。実際のところ、真夜は叔母である四葉夢女の協力を得て分家当主を〝説教〟したらしい……ということを忠成経由で聞いた。
　悠元は格納庫を後にし、島西部のビルに戻ったところで一人の青年と出くわした。青年は悠元の姿を見つけると、深々と頭を下げた。
「おかえりなさいませ、旦那様」
「……母上の差し金かと思われますが、どちら様ですか？」
「申し遅れました。葉山忠成の長男、葉山成政（なりまさ）と申します。以後は旦那様付きの執事となるべく研鑽するよう言い付かっております」
　歳は２０歳で、学年で言えば克人や真由美、摩利たちと同級生になる。魔法師ではあるが、最近までＵＳＮＡに留学していたらしい。達也も花菱兵庫を宛がわれた以上、そうなったとしても別に不思議とは思わなかった。
　近しい年齢という意味で支倉佐武郎はいるものの、支倉は主に諜報分野で悠元の指示を受けて働くこととなる。なお、十文字家の娘と婚約することとなり、当の本人は深い溜息を漏らしていた。
「して、こうして姿を見せたということは、何かしら預かっていると解釈しても？」
「はい。こちらが奥様よりお預かりした書状でございます」

成政が差し出したのは一通の手紙。悠元は封を開けて中身を確認すると、その場で［分解］を発動させて手紙を消した。その理由は手紙に書かれていた内容に関係してくる。
「成政さんは、手紙の内容については何か？」
「いえ、私は何も伺っておりません」
手紙に書かれていた内容は神楽坂家当主のみに開示することを許されたもの。なので、成政が知らなくても無理はない。
「にしても、自分の姉と近しい歳の使用人というのは……成政さんは自分のことをどう思っていますか？　別に取り繕う必要はないですよ」
「そうですね……最初は懐疑的な部分があったのは否定できません」
成政が悠元の執事となるよう言われたのは、それこそ悠元が神楽坂家の人間となった一昨年の時点で、最初は訝しんだと明言した。
「ですが、既に先代様へ仕えていた父だけでなく、四葉家に仕えている祖父からも厳しく言われたほどです。あの祖父が手放しに誉める人間など数えた方が早いぐらいでしたので」
「成程。まあ、自分としてはここまで婚約者や愛人が増えたことには苦笑しか出て来ませんが。これからは成政さんに対して言葉遣いを崩しますが、構いませんか？」
「ええ。尤も、自分の性分故にこの言葉遣いは許してください」
ちなみに、成政も悠元ほどではないが妻と愛人を囲うことになるらしく、二人の女性を娶るらしい。そのうちの一人は上泉剛三の末っ子にあたる。更には元同級生の子を愛人として娶ると聞いた際には卒倒したらしいが。
「自分としては、そこまで囲っても先代様に『あの子の精力だと女性陣がもたないのよね』と言わしめた旦那様に尊敬の念を抱いております」
「……精力云々の前に精神が尽きかねない気しかしないんだが」
優秀な魔法師の血筋を残すという古式魔法の大家らしい一面ではあるものの、物事には程度という部分を考えてほしいという意見について、悠元と成政は互いに同意したのであった。

◇　◇　◇

７月２７日、土曜日。

現時点で差し迫った脅威というものは存在しない。『グアム』を含めた襲撃の線はあるわけだが、この辺については昨日の時点でＵＳＮＡ大使館からの手紙を千姫経由で受け取っている。

ＵＳＮＡ政府としての言い分は、『最高指揮官の事前・事後承認に基づかない、極めて悪質な軍規違反』という位置付けは取るものの、罪を背負うのはあくまでも首謀者のエドワード・クラーク、そして無断釈放されたイリーガルＭＡＰのみであり、［パラサイト］に侵食された『スターダスト』ならびに軍関係者・協力者に罪を問う余地はないとしていた。

この辺は悠元も承知していることだし、取引の時点で確定していることを今更蒸し返すつもりもない。

「突然だが、鍛えに来てやったぞ」

「兄さんが来るのは既定路線でしょうに。それに、千里さんもすみません」

「いいんですよ。お祖父様ほどではないにせよ、放っておくと無茶をさせかねませんから」

「フォローはなしか……まあ、事実だが」

「否定しないとか惚気かよ」

ＶＴＯＬ機でやってきたのは上泉元継・千里夫妻。千里についても将来を鑑みて［天刃霊装］を含めた天神魔法の修得に励んでおり、悠元も義弟の立場で協力している。そして、同じ機体には宮本修司と高槻由夢も同乗していた。

「達也に悠元、世話になる」

「寧ろ、お前たちに世話を掛けるようなものだが」

「いいのいいの、私たちはいざこざから逃げれたし」

修司と達也の会話に対して投げかけられた由夢の意味深な言葉。それを聞いた悠元は事情を一番知っていそうな表情をしている元継を見やった。

「……兄さん、また何かあったの？」

「ここへ来る前、神楽坂本邸に立ち寄ったんだが……」
元継が言うには、宮本家・高槻家の現当主が相次いで『出家したい』と言い出した。元継は丁度千姫と会談していた時に立ち会うこととなり、神楽坂分家のいざこざに巻き込まれた形となった。
とはいえ、同じ護人として看過できないと判断した元継は、三家の言い分と千姫の言い分を聞き、互いの妥協点を探る裁定案を提示した。
「本来、神楽坂家のことに首を突っ込むのはご法度だし、そういうのは悠元の領分だからな。とはいえ、先代様から意見を求められては無碍にも出来ん」
「で、今度の原因は？」
「先日の先代様の勘気が原因とのことだ。当の本人は笑っていたが、あれは喜びの笑顔と言うよりは敵意をむき出しにした猛獣のような笑みだった」
［天魔抜刀］を含めた［天刃霊装］の扱い。最終的に『九頭龍』の意見は纏まった訳だが、一朝一夕で変わればそこまで苦労はしない。なので、各々の家の跡継ぎは宮本家が四男、高槻家は三男が継ぐことで決まった。
ただ、そうなると問題は後を継げない面々の扱い。下手に殺すのも不味ければ、放逐して犯罪者に成り下がるのも宜しくない。悩んだ末に宮本・高槻の分家当主が考えたのは、寺を建立して押し込んでしまうという手法だった。
「俺の提示した案は、九重八雲和尚に協力してもらう形で叡山に送り込み、修行の後に仏僧として九州・中国地方に差し戻す。叡山に協力してもらう意味で悠元にも手間を掛けさせることになるが」
「別に書状を書くぐらいなら労力にも入らないけど……利口と言う言葉は無かったのかね」
「宮本家はちょっと特殊だからな」
宮本家の当主は長男・次男が前妻の子で、修司以下の子は後妻の子とのこと。前妻が亡くなった原因については、魔法の体質的な問題によるものとだけ答えた。

「じゃあ、高槻家は？」
「あー、うちの場合はねえ……」
　高槻家は出雲大社の神職にも関係してくる問題もあり、加えて由夢の扱いの問題も燻ぶったままだった。こうなると、神楽坂本家・現当主である悠元も無関係とは言えなくなってきている。
「この騒動が終結次第、自分の名で本家に全員出向かせるか。目の前で四霊を喚起すれば口を噤むだろう」
「それを平気で言っちゃう辺り、やっぱりチート主人公だよね」
「チートは否定しねえけど、創作物の主人公たちのメンタルには勝てねえよ」
「……悠元のお陰で、俺や元継さんが平穏でいれているわけだしな」
　いくら自分が神楽坂家の血筋を引いているとはいえ、尾を引いてしまうのはやはり仕方がないことだろう。元とはいえ十師族直系ともなれば、当然現代魔法と古式魔法の軋轢にも影響してくる。それを気にすることなく意見を通し切った剛三と千姫の影響が大きすぎた。
「当主となってから言うのはお門違いかもしれんが、俺だってこんな早急に当主となることは想定の範疇を超えてた。もう少しほとぼりを冷ましてからでも遅くは無いと思ったんだが……やっぱり、懸念事項は年齢という点だったのかもな」
　現時点の容姿からして、長生きする可能性は高い。けれども、実年齢という観点から見れば当主として君臨するには余りにも引っ張り過ぎている。その一例は数年前に師族会議議長を退いた九島烈が該当する。
「それはあるかもしれませんね。旦那には漏らしていませんでしたが、時折『早く大成して楽をさせてほしい』とぼやいておりましたから」
「あの爺さんは……まあ、俺は二十代だからまだしも、悠元はまだ十代だ。一昨年に話を聞いたときは溜息しか出てこなかったぞ」
「大丈夫、兄さん。俺が一番困惑したから」
　人として長生きをすることと、家の主として影響力を有することは違う。それを誰よりも弁えていたからこそ、剛三は元継に、千姫は悠

元に家督を継がせた。孫（曾孫）をせがむのは、自分達の二の舞を避ける意味合いも含まれているのだろう。
「自分の勝手なイメージだと、古式の家ってもう少し厳格なイメージが付き纏っていたんだが……ものの見事に粉砕されて跡形も無くなったよ」
「悠元、その気持ちはよく分かる。俺もお祖母様の愛弟子になる際、散々振り回されたことか」
「寧ろ、分家の方が割と古式の仕来りが多い位だよ。上泉家はどうなんですか？」
「あの爺さんが当主をやってた時点で察してくれ」
「あ、あはは……」
　別に『こうあるべき』と指図するつもりはない。けれども、割と厳格だと思っていた家風や仕来りなどのイメージが悉く粉砕され、最早見る影すら無くなった。
　元々陰陽師の家系である神楽坂家は裏方だったが故に口煩く言える相手が皇族しかいなかった。上泉家の場合は後ろ盾に神楽坂家がいたことに加え、剛三の打ち立てた功績によって物を申せる相手が居なくなってしまった。
　そして、それは同じ四大老といえども東道家や樫和家に御することが出来ない存在へと変貌を遂げたことに繋がる。
「一番凄いのは、いつ亡くなるか不透明過ぎることかな。その内仙人にでもなるつもりなのかと思ってしまうよ」
「寧ろ、仙人ですらポックリ逝きそうなことをしでかすかもしれんな」
「……」
「反論できないね」
「全くです」
　魔法師の容姿詐欺は今に始まった事ではないにせよ、あの二人（プラス奏姫）に関しては最早人間というカテゴリそのものに当て嵌めてはいけない部類なのだ、と統一した見解を見出すこととなったのはここだけの話。

問題の帰結

２０９７年７月２９日、月曜日。

ハワイから出航した三隻の艦船の行き先は、対象の予定航行データを基に算出。セリアから聞いた〝原作の配置〟通りとなることに、悠元は端末を見ながら一つ溜息を吐いた。別にそうなってくれるのならば「話が早い」し、掛ける労力も必要最小限で済む。ただ、本来創作物にありがちな〝修正力〟がここまで出てきていないのが不思議でならなかった。

その反動形成が全て『レリックで飛ばされた存在』という形で跳ね返ってきているという意味では、悠元の行動に対する反動として成立しうるわけだが、それはそれで釈然としなかった。

流石に婚約者や愛人たちの殆どはマンションに置いてこざるを得なかったため、護衛については神楽坂家と上泉家にもお願いをしているが、ＦＬＴの敷地内ということで黒羽家と新発田家に出張ってもらっている。

説得自体は真夜が率先して行ったらしいが、どういう文言で説得したかについては深く追及しなかった。通信をしてきた文弥と亜夜子が揃って苦笑したあたり、大方の想像はつくが……触らぬ神には祟りなし、である。

前日の２８日には、統合軍令部特使という形で風間玄信大佐と藤林響子大尉の二人が派遣され、島の宿舎で寝泊まりすることとなった。どうせ暇を持て余すのも癪なので、風間には四葉家の魔法師を鍛える臨時指導教官として働いてもらうこととなったわけだが。

今回、民間への避難指示は巳焼島周辺海域および伊豆・小笠原諸島方面に留めている。というのも、幸か不幸か大型の台風が巳焼島に接近している。太平洋上を東進する形の進路予想となる為、日本本土への上陸の可能性は低いが、巳焼島は間違いなく暴風雨に見舞われる予測となっている。

なので、表向きは『高波・高潮による一次・二次被害を避ける』ということで該当地方の住民は箱根の神坂グループのリゾートホテル

に避難して貰っている。体裁はあくまでも〝宿泊〟ではあるが。
台風と聞いて真っ先に思い浮かべるのはイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］。彼にとって格好の燃料だと思われがちだが、単なる雨ならばまだしも、強い風が伴うと話は大分変わってくる。
［トゥマーン・ボンバ］もそうだが、戦略級魔法において肝となってくるのは、一定の空間内における情報量の変化許容量に他ならないからだ。
例えば、風が余りない小雨程度ならば、多少雨量の変化はあっても爆発に支障のない許容範囲で済む。だが、暴風雨の場合は固定された地点の水分子を酸水素ガスに変換しても風に流されてしまう現象が生じる。いくら魔法式を構成する想子が流されなかったとしても、魔法によって生じた化学変化をその場に留めておくには、魔法式で生成したガスを留める空間を保持する分の魔法力を消費せねばならない。
魔法式が展開して魔法が発動するまでのタイムラグは1秒未満だが、情報量の変化に伴う魔法力の消費は大きく変化する。ましてや、［チェイン・キャスト］の特性において遅延・同時爆発ともなれば、暴風雨下での発動は情報量の急激な変化による魔法力の消費増大は避けられない。原作で二度にも亘る攻撃を6月に限定していたのは日本の〝梅雨〟を利用したもので、巳焼島の場合は太平洋上の湿った真夏の気候を利用した形だ。
「ねえ、悠元君。襲撃を阻止しないの？」
「それも考えましたが、内輪で片を付けて諸外国が有耶無耶にするのも困るので、明確な力の誇示をしようと思いまして。仮に国際魔法協会が出張っても、何も言わせません」
「そこで国際魔法協会の名を？　今度は何の魔法を使う気なのかしら？」
「陽電子を用いた戦略級魔法です」
「……とうとう完成させてしまったのね」
以前、響子は悠元から『対小惑星を想定した魔法を練習している』と聞かされていただけに、陽電子を用いた魔法にこそ驚きはしたもの

の、達也に魔法を提供している事実を聞かされた時点で『問題は何も生じない』と判断せざるを得なかった。
「達也君もそうだけど、悠元君がその魔法を使う時点で問題をクリアしたに等しいもの。別に強権を揮っても許されると思うのに」
「要らぬ諍いの種を生み出すのは御免なので」
　自分に力があろうとも、それを他人がどう思うかは別の問題となる。それに、未だ十代の人間がしゃしゃり出れば、既に社会の第一線で活動している大人たちが快く思わない場面も出てくる。その一端はリーナが〝アンジー・シリウス〟として活動することになった際の『スターズ』が顕著に出ている。
「悠元君らしいわね。そういえば、父が『来月に悠元君を訪ねたい』って相談されたんだけど」
「藤林家当主がですか？　珍しいですね」
　原作と異なり、九島家の活動を烈の引退と佐伯の異動によって押さえ込んだことで、藤林家が必要以上の関与や疑いを持つことは無くなった。それが却って九島真言の妻の実家である藤林家との関係構築にも繋がった。
　九島家の凋落を見ての動きだとは思うが、この時期に藤林家が神楽坂家を訪ねたいという意向は少し気になった。
「私もほとぼりが冷めてからでもいいとは思ったのだけれど、昨年の事について改めて謝罪したいそうよ。それに……」
「それに？」
「光宣君の進退についても話し合いたいって」
　状況的に、神楽坂家が光宣の動向に関与した事実を隠しきるのは難しい。九島烈が主体となって動いたにせよ、彼が難しい所業となれば疑いの矛先が向くのは想像に難くない。
　悠元としては、壬生家や烈に予め新しく興す九島家のことを相談している。壬生家については紗耶香が桐原と婚約関係にあるし、二人の仲を考えればそこまで大きな問題とはならない。
　残るは今の九島家に対する処遇についてだが、それは烈に全て一任している。ここから先は九島家の家内の問題で完結するからだ。既

にそう決まったものを一々蒸し返す必要は無いと思っている。
「……まあ、九島の縁戚となった以上は思うところがあるのかもしれませんからね。来月下旬あたりを目途に会談を設けますので、都合の良い日程をお教えください」
「それに関しては『其方の都合でいい』って投げられたんだけど」
「はぁ……分かりました。後始末の目途が付き次第、連絡をします。響子さんにはその連絡役をお願いしたいのですが」
「それぐらいは構わないわ。寧ろ達也君のことを考えれば、ね」
　原作の達也は自身の立場を利用して交渉を持ち掛けた。傍から見れば『子供の我儘』に見えるかも知れないが、セリアから聞いた話を総合した結果、これでも達也としてはまだ譲歩している様なものだ。
　その気になれば［分解］で消し飛ばしてしまうのも可能という〝最悪の手段〟を持ち得ていても、達也はその手段自体を口に出さなかった。彼にとって一番狙われたくない大切なものさえ守れれば、それ以上の価値を求めようとはしないだろう。
「と言いますか、こんな風に話していたら普通は要らぬ疑いを持たれそうなものですが……達也には感謝しかないですね」
「本当にそうよね。逆に悠元君の婚約者たちには色々勘繰られそうだけれど」
「人様の婚約者を奪う気なんてないです」
　響子には当事者ということで真一と邂逅させたが、響子の感想は『悠元君の手に掛かると、非常識も常識に変わってしまうのね』と言われたことには遺憾の意を示した。
　真一と愛波は予定通り８月末に送還させる予定だが、そうなると問題となるのは未だに［パラサイト］を除去していないレイモンド・クラークの扱いとなる。その辺の打診はＵＳＮＡ側に提示したが、まずはエドワード・クラークの社会的抹殺が最優先となるのは避けられない。
「自分の身上や能力を過小評価する気はありませんが、精々片手で収まるものだと想定していたところに、結果として魔法科高校の一クラス弱の人数の女性を囲う羽目になった訳で。国防軍のことだって、基

本的に強権を揮う気はありませんし」
「まあ、そうよね。大佐も『悠元に逆らえる人間がいるのならばお目にかかりたい』と漏らしていたぐらいだし」
　原作だとＵＳＮＡに引き取られて宇宙に飛ばされるわけだが、この世界では離婚したエドワード・クラークの元妻が引き取りの意向を示した。神楽坂家の関係者ということで話がスムーズに進んでいたためで、今回の襲撃後にレイモンドの治療を行う。
「大人たちの中には自分や達也を含めた『頭一つ抜けた若手』を早々に社会へ出すべきだという意見も出るでしょうが、全部無視します」
「理由を聞いてもいいかしら？」
「魔法大学に進学するからです。公的にトライローズ・エレクトロニクスの理事職を名乗っているのに、これ以上を求めるようならば全員地面に埋めます」
「……出来ない、とは言わないのね」
　大体、現時点で悠元と達也は［トーラス・シルバー］を通す形で魔法界の技術貢献に寄与している。「進学して何を学ぶことがあるのか」と疑問を呈する輩が出るだろうが、その価値の如何を決めるのは各々の価値観に基づくものであり、大人たちの価値観による判断を当てにする気など無い。
「自分の場合、理由の一つに魔法大学在籍者がいるからです。婚約者が大卒なのに、自分が高卒と言う状態を社会的に見た時、甘く見られることだって無きにしも非ずです。家名の威光に頼るのではなく、確固たる社会的な肩書きは魔法師が人として生きるには立派な武器になりますので」
「それは……確かに納得出来る理由ね」
　魔法界や軍事的に見ればそこまで重く見られない部分も出てくるだろうが、政財界をはじめとした一般社会ではそうもいかない。魔法科高校卒業の時点で十分箔になるかも知れないが、国立魔法大学を卒業することで『日本政府が公的に認めた高等教育機関のカリキュラムを全て終えた』という実績を作ることが出来る。
　トライローズ・エレクトロニクス関連については、基本的に現場で

全て完結できるように体制を組んでおり、自分の役目はあくまでも最終許可の可否を決済するだけにしてある。

◇　◇　◇

昼食後、のんびり寛いでいたところに水波が近付いてきた。

「悠元兄様、お電話です」

「電話？　相手は？」

「三高の一条様からです」

悠元がトライローズ・エレクトロニクスの理事だと公表して以降、色んな電話やメールが来るわけだが、非通知番号やアドレスの場合は容赦なく着信拒否にして対応している。神楽坂家の重要な連絡は『九頭龍』や『星見』があるし、悠元の持つ通信端末に入っている友人の連絡先で事足りるからだ。

将輝に連絡先は教えているし、別に着信拒否の設定もしていない。にも拘らず巳焼島へ直接かけて来たということは、通話の相手は達也になるはずだ。

「将輝が？　アイツに連絡先は教えてるんだが……応接室か？」

「はい、第一応接室です」

悠元は残っていた麦茶を飲み干し、空になったグラスを水波へ渡すと、そのまま立ち上がって応接室に向かった。中にはモニターを見つめる達也とモニター越しに映る将輝の姿があった。

「達也、来たぞ」

「すまないな、悠元。こればかりは俺だけで判断できないと思い、水波に頼んだ」

「ふむ……久しぶりだな、将輝。早速だが、戦力提供と見たが……どうだ？」

『あ、ああ……話が早くて助かる』

この場は別に深雪や魔法のことが絡む事項でないため、そこまで険悪な雰囲気は見られなかった。将輝の姿はやや日に焼けたような肌の色が見えており、一条家で厳しく扱かれている様子が見られた。

『司波に話したのは、援軍が必要かどうかということだ。場合によっては俺が出向くことも覚悟している』

「一条殿は何と？」
『その辺の采配は「四葉殿と神楽坂殿の意向を聞いてからにしろ」としか言われていないが、肯定的な意見は貰えてる』
能登沖で悠元が艦隊を拿捕した件に加え、［十三使徒］レオニード・コントラチェンコの亡命や東欧方面の混乱。いくら新ソ連と言えども自棄気味で二正面作戦の愚を犯すことはしていない。
だが、将輝の申し出に対する悠元の答えは決まっていた。
「申し出自体は感謝する。だが、一条家にはそれ以上に重要な役目を担ってほしい」
『重要な役目？』
「新ソ連に対する抑えと、帰化した劉麗雷もとい一条レイラの護衛。茜ちゃんに魔法提供はしたものの、余計な気を起こす輩がいないとも言えない」
原作では色々有耶無耶にしていたが、この世界での劉麗雷の帰化は明文化しておいた。日本政府を通して大亜連合政府に通達したが、連中が特殊部隊を送り込まないとも限らない。なので、風間を通す形で独立魔装大隊のメンバーが金沢基地に派遣され、更には『抜刀隊』も合わせて派遣した。
単に『人喰い虎』レベルならばまだしも、大亜連合には切り札とも言える『八仙（はっせん）』と呼ばれる連中がいる。八仙は、東亜大陸に伝わる伝説の仙人たちの名前。その名を冠した道教系古式魔法師の集団で、主に大亜連合国内か中央アジア方面での活動が目立つ。
尤も、彼らの動向全てを把握しているので、距離的な観点から彼らが関与してくる可能性は極めて低い。
『……それは、新ソ連だけでなく大亜連合が攻めてくる可能性もあるということか？』
「兆候の一端は先日の西果新島での件だ。可能性は低いだろうが、５年前の件がある以上は無視できることでもない。一条殿の技量は疑うべくもないが、今や戦略級魔法師となったお前が日本海側にいるだけでも意味がある」
能登沖・佐渡沖での一件後、将輝は国家公認の戦略級魔法師となっ

た。五輪澪に代わる表舞台の抑止力を担うという意味を将輝とて理解していない訳が無い。将輝もそれを聞いて、自ら戦場に立った経験から危惧しているような素振りを見せた。
『……分かった、俺は北に備える。神楽坂、生き残らないと許さないからな』
「言われんでも生き残ってやるさ。次の九校戦で泣いても笑っても最後だ」
そう互いに声を発したところで将輝の通信が切れた。
画面が消えて応接室が明るくなったところで、悠元は一つ溜息を吐いた。
「やれやれ、やっぱり最後は直に殴り合う必要があるか……どうした、達也？」
「……殺すなよ？」
「身内が絡むと過激になりがちなお前が言うな」
なりがち、と言葉を濁したものの、原作であった『無頭竜』の壊滅劇を思えば、過激という言葉で片が付けば〝まだマシ〟と思わざるを得なかった悠元であった。

気苦労の永久機関

将輝との会話を終え、達也と別れた悠元が廊下を歩いていると、廊下の向こうから風間の姿が目に入った。流石に国防軍の制服では要らぬ疑いを持たれるため、風間とここにいない響子は私服姿で巳焼島を訪れている。

互いに近寄って1メートルほどの距離になった後、風間は頭を下げた。

「色々済まなかった、悠元。これからは部下として君の指示に従うことになる」

「お気になさらず。こちらとしても理不尽な命令はしませんし、事を起こす際は相談しますので、その際は忌憚の無い意見を述べてくれると助かります」

「……はは、やはり勝てんな。剛三殿があれほど入れ込んだ理由も納得出来る」

独立魔装大隊――後に連隊となる際、統合軍令部直属部隊へと再編される。悠元が三軍の大将職を賜り、統合軍令部・統合参謀本部長特務補佐へと昇進するに伴う措置。陸海空の垣根を越えて実働することとなり、神楽坂家が保有する戦力――プリズム・マーセナリーは防衛省と契約する形で伊豆・小笠原諸島方面の海上護衛を担う。

個人で統括するには余りにも私的戦力の範疇を越えているのは道理だが、それを可能にしているのは上泉家先代当主の教えを受け、神楽坂家先代当主の信託を受けた神楽坂家現当主。

「変に気に入られた部分もありますが……立ち話もあれですし、食堂に行きませんか？」

「そうだな、そうさせてもらうか」

食堂へ出向き、各々飲み物を注文して互いに向き合う形で席に着いた。

国防軍絡みで色々対峙した二人だが、今後は悠元が上司として、風間は部下として向き合うことになる。風間自身、悠元が大いに関与しているからこそ自身の進退を速やかに決められた。

なお、北海道へ出向いた第１０１旅団はそのまま対新ソ連を想定した北方防衛部隊に組み込まれている。佐伯については統合軍令部の監視付きで職務に従事しているという報告は蘇我経由で聞いている。
「話は藤林から聞いた。君が新たな戦略級魔法を使うこともな。君はどこまで行きつくのか、正直師匠ですら『僕に予測できるわけないじゃないか』と完全に匙を投げていた」
「時折達也絡みの試しのネタにされてはいますが」
「悠元だからこそ出来るのであって、自分には到底無理だろう。寧ろ師匠に揶揄われることは多いが」
別に敵意とかを向けるというよりは忍びとしての〝興味本位〟が勝ると分かり切っている為、そこまで本気に捉えることはない。だが、それでも苦言を呈することは止めない。
「風間大佐に話しておきますが、響子さんに話したのは今度使う[ローエングリン]の半分にも満たないです」
「半分にも、だと？」
「ええ」
元々は単なる陽電子収束砲撃魔法だった。だが、環境を配慮しようと試行錯誤した結果、核関連技術や達也に提供した[ホーリー・トライデント]、ハード協力をした[トリリオン・ドライブ]――――原作では[バリオン・ランス]という呼称になった代物――――の技術を取り込んだ。
その結果として生じたのは、中性子・荷電粒子・陽電子を用いた直射型収束魔法。それが現在の戦略級魔法[ローエングリン]の正体だ。
「闇雲に使って犯罪者扱いされるのは困る為、これまで自分が関与してきた技術を用いて完成した魔法です。これによる放射能汚染のリスクは完全にゼロへ抑えられます。更に、この魔法によって核兵器の燃料となるウラン・プルトニウムなどといった放射性物質の組成変換が発生し、放射能の完全除去と核兵器を抹消できるようになりました」
「……疑うわけではないが、立証できるものはあるか？」
「そのテストは既に実施しました――――ＵＳＮＡで」

ここ数日、悠元はＵＳＮＡへ渡航していた。流石に飛行機だと時間が掛かる為、［鏡の扉（ミラーゲート）］を駆使する形だが。ホワイトハウスで会談した際、ジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領に戦略級魔法の試射許可を取り付け、マーシャル諸島で実施。

この魔法は無機物・有機物の範囲対象を選ぶことも可能で、既存の建物を破壊することなく放射性物質を除去できる特性も備わっている、というのは最終臨界実験や九重寺での訓練で確認済み。

早速マーシャル諸島で前世紀の水爆実験による被害を受けたビキニ環礁・エニウェトク環礁で［ローエングリン］の発動実験を敢行。直接海に撃ち込むため、結果として大量の海水が雨となって環礁周辺の島に降り注いだのだが……その後、まるで息を吹き返したかのように草花が生い茂り、数多の大きなヤシの木が島に乱立した。

流石に既存の家や施設を潰す様なことにはならなかったが、島の様子を視察したジョーリッジは笑みを零し、政府高官たちは唖然としていた。後日、北米魔法協会の調査によって『土壌および海洋の放射能汚染は認められない』という結果を得られている。

『……君は現代に降りた預言者かね？』

『絶対に違います』

その上で、旧合衆国時代から存在するＵＳＮＡ国内・周辺の高レベル核廃棄物についても［ローエングリン］で放射性物質を除去し、奏姫から教わった［放射錬金］でレアメタルに変換して引き取った。なお、ジョーリッジはＵＳＮＡ政府として日本政府に５０兆円を支払うことを明言。

曰く『タダ働きさせようと目論む輩に対するお灸だ』と述べ、悠元個人に対しては年間１兆円の支払いで決着した（最初は１００兆円クラスになり掛けたが、悠元が固辞した）。なお、後代の大統領の申し送り事項にも『神楽坂家を蔑ろにすれば天罰が下る』が追加されるらしい。

「日本にもある高レベル廃棄物についても、ＵＳＮＡでの実験結果を同封した上で許可を取り、実施しました。ただ、この魔法を後世に伝えることはあっても、世に広める気はありません」

「それほど便利な戦略級魔法なのにか？」
「元は攻撃魔法の側面もありますし、それにこれの演算をまともにしようとしたら、並の魔法師だと確実に死にます。魔法師を鉄砲玉にさせるような真似など御免ですので」
　この世界の魔法は不自由な部分が多い。神楽坂家や上泉家の書庫に収められた古今東西の魔法に関する知識を紐解いても、魔法を覚える最短の方法は魔法演算領域に〝書き込む〟ことだった。それは、エジプトのピラミッドに刻まれた壁画にも似たような文言が記載されていた。
　ただ、この常識をこのまま現代社会へ流すわけにはいかない。これを悪用して魔法師を使い潰す可能性も生じてくる。それは政府や国防軍に限らず、十師族をはじめとした日本魔法界にも言える話。
　その未来を改善するために『ＳＴＥＰ』を提唱したのだから、魔法師の未来に逆行しかねない事実を広めるのは言語道断。
「大佐なら達也の事情をご存知でしょうが、ああいう状態の魔法師が『都合の良い戦力』として囲われる未来になりかねません。そんな未来は御免被ります」
「悠元は強いな。九島閣下が後継者として推した意味がよく分かる」
「大人たちがしっかりしていれば、俺や達也はもう少し余裕のある青春を送れていたんですがね」
「……耳が痛い話だな」
　物語の創作物に〝平穏〟を求めるのは如何な事かと思われるだろうが、人生の刺激は程々が丁度良いのだ。前世で人間の欲望の闇を散々見てきた悠元からすれば、転生してもその柵が付き纏うことにうんざりした。
　だからこそ、周囲を巻き込む形で日本を根本から改造することに決めた。既得権益を有する人間に真っ向から叛逆するようなものだが、血縁の後ろ盾を得たことで強硬な策を講じることが出来ている。
　それでも、末端で働いている人間が不利益を被らないように手は尽くしている。いつの時代も上の被害によって下が理不尽な被害を受けているからこそ、生活に困らないような策を講じている。実験に

よって幽閉された強化調整体の更生もその一環だ。
◇　◇　◇
達也や友人たちとの夕食を終え、入浴を済ませた悠元は深雪と一緒に居た。雫と姫梨は敢えて別室で泊まることになり、水波も自室に戻っていた。なので、こうやって会話する機会は慶春会以来だろう。マンションでのことは……そちらは〝事〟があるので抜きにしておく。
深雪が淹れてくれたアイスハーブティーを供にする形でティータイムを楽しんでいたが、悠元は真剣な表情を深雪に向けた。それに気付いた深雪も視線を向けた。
「深雪。本来なら戦場に立たせたくないのが俺の本音だ。フィアンセを平気で送り出せるほど精神が太くないからな」
「ご主人様……」
深雪の悠元に対する呼び方で若干話の腰を折られかけたが、それを堪えて表情に出すことなく話を続ける。
「ただ、深雪の頑固さも良く知っている。『神将会』に入ることを受け入れたのも、覚悟の表れだと認識している。それを言ってしまうと、雫や姫梨に対しても同じだろうが」
「……そうですね。私はご主人様の陰に隠れたくないのです。何より、第一夫人としてご主人様の隣に立って戦いたい。それが私の紛れもない本心です」
悠元は深雪の強さを知っていたからこそ、直々に新陰流剣武術の稽古をつけていた。
剛三が悠元に総師範の座を渡したがっていたほどの実力は、深雪にも大きな影響を与えていた。同年代の女子で言えば、魔法のみならず武術にも精通している時点で国内はおろか世界でもトップクラスに位置している。
「私は、何をすれば宜しいのでしょうか？」
「深雪に渡した［氷結六花（ダイアモンド・ダスト）］――それのリミッターを既に外しておいた。今の完全解除された深雪なら巳焼島周辺の海を凍らせることは出来るが、今回の標的はあくまでも三隻のＵＳＮＡの艦船と新ソ

連」
悠元の言葉の意図には、深雪が悠元の影響を受けて［精霊（エレメンタル・サイト）の眼］を覚醒している部分も含まれる。これは悠元も慶春会の前に知ったことだが、この世界の司波深雪の出生――――正確には深雪の『本当の父親』――――も原作と大きく変わっていた。
原作の場合は司波龍郎だったが、この世界では伊勢家当主・伊勢佑作が本当の父親だった。家系的には叔父・姪の関係だが、孫世代の血縁である以上は特に問題はない。千姫が真夜や深夜を可愛がっていたことからして、別にそうなっても不思議ではなかった。
出生自体が古式魔法師に近しかったからこそ、達也しか持ち得ていなかった［精霊（エレメンタル・サイト）の眼］を覚醒した。尤も、深雪がリソースを振り分けている相手は悠元に限定されており、悠元が深雪に対して振り分けている［天神（オシリス・サイト）の眼］の影響で、1パーセント前後の容量で済んでいる。
「新ソ連に対する行動は自分と達也が受け持つ。雫と姫梨には深雪のフォローを頼んでいるから、存分に力を揮ってくれ……必ず生きて帰る事。それだけは約束してほしい」
「畏まりました、ご主人様。事が済んだら、沢山愛してください」
「分かりやすいのは助かるが、それでいいのか？」
「はい。寧ろ、身も心も捧げている私が払える対価が無くて困るほどです」
「……別に対価を求めてなどいないんだがな」
正直、司波家での居候生活もそうだったが、魔法や武術の教導に関して対価を口にしたことはない。深雪を含めた友人たちが強くなれば、相対的に悠元自身へ降り掛かるリスクも減る。恐怖に感じた輩の数が増えるデメリットも存在するが、弱点を的確に突けば魔法抜きで対処できるところは積極的に講じてきた。
その反面、比例的に増えていく夜の生活の営みについて、悠元は最終的に匙を投げたわけだが。
「それは私だけでなく、お兄様も感じていることです。だからこそ、ご主人様の力になりたいと足掻いているのですよ」
「まあ、自己努力の気概は評価するけどさ」

そもそも、自分は達也の気質を知っていたからこそ、達也の望む道に立ち塞がる障害を全て取り除こうと動いていたに過ぎない。そして、それは自身の未来を叶える上でも邪魔になると分かっていたからであり、自己の利が達也の利と重なったからこそ、この道を選んだ。

「俺が人間であることを捨てずにいられるのは、達也や深雪をはじめとした人たちのお陰だ。一つだけ文句があるとするならば、［パラサイト］のような存在に逃げられること自体が納得いかないことぐらいだが」

「それは……ご主人様がそれだけ凄いという事かと」

「そんなものなのかねえ……」

この辺は前世の価値観を引き摺っているせいかもしれないが、そこまでの才覚を有していたとしても、結局は当人の努力の積み重ねが大事だと思っている。とはいえ、その結果として生じたものだとしても、認識されただけで逃げられるのは釈然としなかった。

「ご主人様は、宜しいのですか？　戦略級魔法師として表舞台に立つことについては」

「そうなったからと言っても、政府による公的な肩書きを手にしただけであって、俺に義務は生じない。それについては達也も同様の措置となるように働きかける」

公人としての肩書きはあくまでも政府や軍との交渉事においての〝立場〟を示すものであり、魔法を利用するというのであれば相応の対価を要求する。ボランティア感覚で迫る奴がいれば、容赦なく追い詰めて心を折る。

「三軍の階級についても同じだ。あくまでも日本魔法界――――師族会議議長としてのスタンスに加え、トライローズ・エレクトロニクス理事長としての立場を最優先する。まあ、一番優先するのはプライベートの部分になるから、支障が出ないためなら手段は選ばん」

得られた肩書き全てを許容したら、それこそ私人としての行動範囲が極めて狭くなってしまう。なので、あくまでも神楽坂家当主として許容できる範疇の中で行動していく。その中でどうしても必要ならば軍の肩書きを使えばいい、と悠元はそう思っている。

「爺さんや母上も言っていたことだが、戦略級魔法を他人に管理させること自体が危険だ。どんな魔法であれ、技能の制御は当人の意思が最も優先される。誰かにトリガーを預けるということは、私的濫用の危険が孕んでくることにも繋がる……達也にはそう言ったんだがな」
「あー……何故かお兄様が述べた言葉の想像がついてしまいます」
達也の戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］については、悠元が最終許可の判断を下すことは残ったままとなり、達也がそれを希望した。曰く『大切な人を傷つけられて衝動的に撃たない保証などない』とのことで、悠元に深雪が嫁いだ影響も含んでいるのだろう。
悠元の溜息交じりの言葉に対し、深雪が苦笑を浮かべながら答えたのだった。
「まあ、『ブランシュ』での一件やレリック絡みでの有様を鑑みると妥当かもしれんが、それで加速度的に増える気苦労を抱える身にもなってくれ……とか言ってると、別の意味で苦労が増えるんだよな」
「？」
達也絡みの気苦労が増えると、深雪からの関わりが増える。それによって達也の気苦労が増え、回りまわって気苦労のサイクルが完成している。原作にはなかった筈の苦労のループ……関わった以上は諦める他ないが、それでも口に出した悠元の言葉に深雪は首を傾げたのだった。

戦っている領域のズレ

西暦２０９７年７月３０日。
この日、世界は再び魔法の力を目の当たりにする。
そして、二人の英雄に認められた少年が……日本の蘇った力を世界に誇示する。
全ては、安寧の日々を齎すために。

◇　◇　◇

７月３０日午前８時。ＵＳＮＡの強襲揚陸艦『グアム』が巳焼島沖合二十四海里のラインを通過した。『グアム』はそのまま西へ針路を進めるが、同行していた駆逐艦二隻の内『ハル』は速度を落とし、『ロス』は南西へ針路を取った。
通常兵器を考慮すれば『不可解』と評されるような動きだが、魔法師による戦力を考慮すれば『妥当』と判断できるような動き。この流れは島の収容施設を改造した私設防衛指令室の指揮官席に座る国防陸軍・風間玄信大佐が各所のモニターを見ていた。
風間がこの席に座っているのは、他でもない〝上〟からの意向があったためだ。具体的には、防衛省ひいては日本政府の意向。
政府や国防軍としては私設戦力の保有を公に認めづらいが、状況と神楽坂家からの要請となれば迂闊に派遣することもできない。ましてや、島を実効支配している四葉家の悪名を考慮すれば、返す刃を受けて滅ぶ未来など誰も許容できない。
ならば、せめてもの配慮をする意味で、国防軍が私設戦力の〝監査〟という名目で島に滞在している風間と響子に白羽の矢が立った。
「単なる物見になると思えば、こんな立ち回りになるとはな。藤林、状況はどうだ？」
「グアム、間もなく領海に侵入します。到達予測時間は約５分」
「了解した……やれやれ」
指揮官席に座っていても、風間は状況を伝えるだけで実際の指揮を執る権限はない。何せ、この島には風間の直属の上司がいる上、国防軍内でも最高の階級を有する三軍の大将。彼が全て作戦の立案をし

ており、もしもの際のバックアップまで三重に組まれている。
　暫くすると、西進していた『グアム』に動きが見られた。
「グアム、減速します。領海ラインの直前で停止する模様」
「そうか……悠元、来てくれるか？　敵艦に動きがあった」
　いくらＵＳＮＡ――――同盟国の艦船とは言え、パラサイト事件と南盾島、顧傑の件に次ぐ〝傍若無人〟とも取れる行動は最早『敵』と判断するほかない。風間はインカムのマイクに向けて悠元にそう告げた。
◇　◇　◇
　防衛指令室に姿を見せた悠元は『神将会』の戦闘服――――和服を基調としたものだが、魔法技術によって現代のライディングスーツと遜色ない動きを実現している――――を身に纏っていた。
「態々済まないな、悠元」
「構いませんよ。それで、艦艇の動きは？」
「ああ、君の予想通りの配置となるような動きを見せている。ただ、各個撃破をされそうな状態に戦力を分散させるのはどうかと思ったが……まさか」
　風間が懸念したのは核兵器による攻撃だが、悠元は首を横に振って否定した。
「流石にそんなことを許せば、ＵＳＮＡの権威は完全に失墜します。新ソ連のせいにする可能性もありますが、そんなことになれば米ソ間で本気の戦争になりかねません。尤も、この戦いを以て新ソ連には泥沼の道を歩んでもらいますが」
　新ソ連が混乱すれば、大亜連合や中央アジア、新欧州連合は他人事ですまなくなる。日本も影響は出るだろうが、海を隔てている以上は地続きの国家よりマシなほうになるだろう。
「そうなると、考慮されるのは魔法攻撃によるものだが……敵が無知すぎると嘆きたい気分だな」
「そちらは自分が中心となって対処します。大佐殿はその席でこの戦いを見届けてください」
「分かった。自分が言えた義理ではないが、武運を祈っている」

悠元はその場で［鏡の扉（ミラーゲート）］を展開し、その場を後にする。消えていく光の壁を見つめながら、風間は目を逸らすことなく悠元の姿を見送った。

◇　◇　◇

７月３０日午前８時５０分。停止していた『グアム』が行動を開始した。格納庫から艦尾のスリップ・ウェイを通って小型高速艇が次々と海面に降りてくる。携行武器を所持した戦闘要員を乗せた搭載艇だけでなく、戦闘車両を積んだ揚陸艇の姿もあり、それを遠目で見ていた『神将会』の戦闘服を身に着けている修司が溜息を吐いた。

「戦闘要員だけでなく、機動兵器まで持ち出してきたか。愚かな」

「仕方がないんじゃない？　誰だって現実を直視したくないもの」

「それは……そうだな」

修司の言葉に同じく戦闘服を纏っている由夢が答えると、納得したように呟いた上で悠元に視線を向けた。

「動員規模は１４００名ほどと推測。我々だけでも十分対処できると判断できます」

「１４００か……まあ、この規模の島に１０万も送り込んだところで足手纏いが増えるのは明白だし、エドワード・クラークからすれば頑張った方か」

動員の規模が原作よりも増えているのは想定内だし、島への被害を最小限で済ませるためにエリカたちの協力を仰いだ。なお、達也に与えた依頼は『最終防衛ラインの死守』で、島に滞在しているリーナとセリアには、達也のサポートに加えて非戦闘員となってしまうほのかや美月の防衛を頼んだ。

水波の役割は非戦闘員の護衛で、彼女の魔法適性を考えれば妥当な役割だと判断した。ただ、お願いをした際に『強く命令して頂いても構いません』と言われた時は苦笑を滲ませたが。

計十隻の高速艇が先攻する形で同時発進し、一路巳焼島東岸へ向かってくる。別々の場所に上陸する腹積もりだろう。そして、その後方には六隻ほどの揚陸艇に加え、『グアム』の飛行甲板から無人攻撃機が飛び立つ。

前世で言うところの『軍事用ドローン』に相当するもので、全長は約５メートル。武装は対物ライフルの１２．７ミリ機関砲を備えるのみ。各艦を護衛するように飛び交うものを含めて、合計５０機。
普通の陸上戦力ならば十分脅威でしかない配置に対し、悠元は息を吐いて気配の抑制を切る。
「……てめえらが始めた戦争だ。今更泣いて謝っても許されると思うなよ。天魔抜刀――――天都御魂叢雲」
悠元が名を呟いたその瞬間、彼を中心に膨大な量の霊気が巳焼島を中心に吹き荒れる。それは普通ならば魔法師でも感じることが余りない人間でも肌で感じとれるほどだった。
「これは……そうか、悠元か」
旧神奈川県・厚木市の三矢家本邸にいた元はその波動を感じてゆっくりと立ち上がる。
「……この気配。もしや、神楽坂殿？」
日本の裏側に位置する南アメリカ連邦共和国の大統領官邸。ディアッカ・ブレスティーロ大統領はその波動を感じてゆっくりとペンを置き、首元に掛けていたロザリオを握りしめて祈った。
世界各地で野生動物たちが躍動し、海の生き物たちがそれを示すかのように、イルカやクジラが大きく飛ぶ。大勢の鳥が存在の出現を示すかの如く、数万単位の鳥が空を駆けていく。自然すらも呼応してしまうほどの英雄の存在は、今ここに魂を刃として示した。
そして、その様子は箱根・神楽坂本邸の離れにいた千姫にもハッキリと感じ取れていた。
「……行きなさい、悠君。貴方の力は、世界そのものを変える変革の力なのだから」
誰よりも人の闇を知るからこそ、人の光を導く立場に置かれた少年。千姫も剛三も、次代を担ってくれるものの誕生を祝うかのように、千姫は湯呑に入れたお茶に映る自らの姿を見つめていた。
そして、吹き荒れる霊気の中心に立つ少年は、現れた光の槍を掴みとり、振り払うように降ろす。顕現した漆黒の太刀を握る悠元は天刃霊装［天都御魂叢雲］を振り上げた。

「『神将会』総長、神楽坂悠元が発令する。各員、誰一人欠けることなく生き残り、我々の強さを知らしめる。日のいづる国の矜持を彼らに思い知らせよ」
『ハッー!』
悠元が［天都御魂叢雲］を振り下ろした瞬間、艦艇の上空にいた無人攻撃機が全て斬り刻まれ、爆発を起こす。事ここに至って最早問答は無用――その意図を汲んだ悠元以外の『神将会』メンバーと協力者は、迎撃を開始するべく各所に散開した。
◇　◇　◇
原作ならば敢えて攻撃をさせてから防衛するのが筋だったが、公的な演習でもない上に日本の領海内で武器を所持したままうろついている時点で銃刀法違反の範疇に含まれる。それがいくら同盟国のＵＳＮＡであっても、日本の領域に踏み入れれば治外法権の適用など許されない。
それに、数々の肩書きを有する悠元からすれば、国防的にも今回の一件を〝テロ行為〟だと断定して取り締まることもできる。そこまであえて踏み込まなかったのは、悠元は今回の一件でＵＳＮＡ内のパラサイトを一掃するためでもあった。
強襲揚陸艦グアムを発進した兵士は、パラサイトだけではなかった。
エドワード・クラークはリアム・スペンサー国防長官との密談において、『ＵＳＮＡ国籍を有する正規の兵士を使わない』と合意していた。エドワードは残っていたパラサイトから暗殺部隊を調達する腹積もりだったが、思ったよりも少ない数にまで減ってしまっていた。
そこで、外国籍を有する帰化希望の兵士に対し、作戦〝成功〟後の市民権取得を餌にして兵士を調達していた。その中には低レベルの魔法師もいる。パラサイトは『スターダスト』のメンバーが約１００名で、残るは『スターズ』のメンバーで、第六隊のリゲル大尉、ベラトリックス少尉、アルニラム少尉も含まれる。
この三名はパールアンドハーミーズ環礁にいたものの、悠元が意図的に治療せず、今回の策の為に放置した。どうせ遅かれ早かれパラサ

イトを駆逐するのだし、そこまで長期的に放置する見込みはないという判断からくるものだった。
なお、原作ならば約２００名だった予定が約七倍にまで膨れ上がったのは、ここにも悠元の策が講じられていた。
原作だと戦乱が絶えなかった南アメリカとアフリカを独立国家として成立させたため、自ずと傭兵の需要も大々的に激減する。それで割を食うのは世界各地を転々としているフリーランスの傭兵で、悠元は間接的な資金援助と飛龍海運による護衛依頼を駆使してＵＳＮＡに送り込み、その際に『エドワード・クラークなる人物を頼れば、ＵＳＮＡの市民になれるかもしれない』と吹き込んだのだ。
別に嘘は言っていないし、向こうからしても戦力が増えるのはありがたいと考えるだろう。尤も、一番割を食うのは当事者たちというオマケつきだが。
今回の作戦に参加した者の中には、過去の雪辱を誓うものがいた。アレハンドロ・ミマス二等軍曹――昨年のパラサイト事件の際に派遣され、達也との交戦で負傷したスターズのメンバー。その雪辱を晴らすべくパラサイト化して、今回の作戦に参加した。
だが、上陸艇で向かっていく先から感じた力の波動に、ミマスは冷や汗を流した。達也への雪辱の気持ちが強かった彼の心は揺れ動いていた。
（先程の波動は何なのだ……何故、ここまで恐怖しているのだ？）
パラサイトになる以前において、魔法戦闘で後れを取ることはあっても、戦う前から恐怖するという事例はミマスにとって未体験のゾーンであった。そして、それは同じ艇に乗っているパラサイト達にも見られていた。
だが、上陸艇が接岸するとなれば、最早泣き言は言っていられない。自身の得意魔法［生体発火］が対物破壊に向いていない――［分子ディバイダー］を使用できる魔法師にも拘らず――と判断したミマスが叫ぶと、発射されたグレネードがフェンスを破壊する。
そうして足早に次々と降りてくる兵士達だが、彼らを嘲笑うかのように突如として襲い来る炎。それはまるでマグマの津波のような有

様に、ミマスは咄嗟に横へ飛んだ。
「状況報告……っ!?」
ミマスが直ぐに上陸艇の方向を見やると、上陸艇は完全に溶かされており、砂浜には多くの兵士が横たわっている。身体が炭化している兆候は見られないものの、それまで上陸艇に同乗していた［パラサイト］の精神感応（テレパス）も消失していた。
そうして驚愕していたミマスの視線は声を発する方向に向けられた。そこには、漆黒の戦闘服を身に着け、紅蓮の二刀一対の太刀を持つ少年が立っていた。
「一撃で終わらせる腹積もりだったが、やはりご先祖様のように上手くはいかないものだな」
「貴様は……何者だ。四葉の魔法師か」
「まあ、半分は当たらずとも遠からずだ。アレハンドロ・ミマス二等軍曹――いや、パラサイトに憑りつかれて人間を辞めたものよ。ここで朽ちるがいい」
ミマスは反射的に得意としている［生体発火］をその少年に向けて発した。その直後、少年の姿が炎に包まれるが、その炎はまるで生きている蛇の如くミマスに憑りつき、締め上げていく。
「ぐ、ぐあああっ!?」
「そんな魔法如きで俺を燃やせると思うなよ。せめてもの情けとして、一撃で逝け」
その直後、ミマスの胸元を何かが通り過ぎる。彼が首を動かして視線を向けると、そこには高熱に熱せられたと思しき光の刃が突き立てられていた。
「宿業両断、千子一閃（せんじいっせん）」
その言葉と主に、ミマスに放たれる数多の光の刃。その衝撃波は海岸近くの海水に触れると、まるで水蒸気爆発を上げるかの如く海水が巻き上がった。少年はその光景を少し見つめた後、興味なさげにその場を立ち去った。
後に残ったものは、海岸に倒れ込んでいる兵士達と、溶けて原型を完全に無くした上陸艇だけであった。

埒外を常識の世界に持ち込むと、無双になる

巳焼島に押し寄せている勢力の中で、最も戦力が高いのはスターズ第六隊隊長、オルランド・リゲル大尉が率いている部隊だ。

今回の襲撃の際、襲撃側は戦力を均等に分けなかった。参加している兵士や傭兵の性質上、連携を模索する時間もないため、元々の連携が取れている人間同士を組み合わせることとなった。第六隊はリゲルの他にイアン・ベラトリックス少尉とサミュエル・アルニラム少尉も含まれており、元々三人での連携戦闘が得意という観点から、多少戦力バランスが突出しても『止むを得ない』という判断が下された。

結果的にこの三人がいる部隊の戦力が突出する結果となったが、海岸沿いの道路から先に進めずにいる。彼らの前に立ちはだかったのは、師族会議副議長にして護人・上泉家現当主こと上泉元継の姿があり、彼の手には天刃霊装［大典太光龍宗世（おおてんたこうりゅうそうせい）］が握られていた。

◇　◇　◇

上泉元継――――三矢元継は十師族・三矢家の次男として生を受けた。

彼は元々家督や家業に興味を示さなかった。その最大の理由は自身の持つ先天的な［認識阻害］であった。自身でも制御に四苦八苦していたこの体質を改善できたのは、他ならぬ弟の存在だった。

『悠元、生きてるか？』

『あの爺さん、いつかしばき倒す』

『……』

元継自身、病弱から一転した悠元を訝しむことはあったが、それよりも自身の力を高めてくれた弟に恩義を感じていたし、同じく祖父に振り回されている身として理解者の仲間を得た心境だった。

そして、悠元の天刃霊装の研鑽に付き合うことで元継自身も天刃霊装を覚醒した。その力を得ることで、自ずと剛三が好き勝手にやっている理由を悟ってしまった。

「……本当に、感謝の言葉しかないな」

元継は巳焼島北側の道路に陣取っていた。西岸には深雪と雫、姫梨

が控えており、東岸は修司と由夢、それにエリカたちが加わっている。そして、南側は遊撃状態の達也と〝援軍〟が張っていて、北側には元継に加えて悠元が陣取っていた。

「俺はやり方を教えただけで、会得したのは兄さんの努力の結果だよ」

「分かってはいるのだが、それで天狗になるわけにもいかんからな……来たな」

最重要拠点となる東西の接点。敵の最大戦力が狙うとすれば、見晴らしのいい北側の車道が最も適している。上陸艇をわざと接岸させ、上陸部隊の姿が見えた瞬間に、悠元は［天都御魂叢雲］を、元継は［大典太光龍宗世］を振り翳し、刃先から高密度の〝刃〟が唸りを上げる。

「喰らえ、月牙天衝！」

「穿て、氷狼牙突」

高密度に圧縮された霊気の刃の［月牙天衝］、同じく練り上げられた霊力の刃をほぼ一直線に放つ［氷狼牙突］が上陸部隊を容赦なく呑み込む。部隊の殆どが戦力を喪失し、残っているのはスターズ第六隊の三名と上陸艇に残っている最低限の人員のみ。

涼しげな表情を見せている両名に対し、リゲルの表情は驚愕と恐怖が入り混じったものだった。

（何なんだ、今のは……何故、『逃げたい』と思ってしまうのだ!?）

いきなり白銀と漆黒の刃が飛んできたのかと思えば、瞬く間に部隊の人間は地に伏せていた。シールドを咄嗟に張ったと思しき魔法師も、意識はあるが消耗によって砂浜に倒れ込んでいる。

それ以上に、目の前にいる刀剣を持つ二人の魔法師に対して、リゲルは逃亡したいという衝動を覚えた。リゲルが選んだ選択肢は、それを振り払うように魔法を放つことだった。

（［降雷（サンダー）］を使う。合わせろ）

（了解）

（了解）

リゲルたちはパラサイトの意識共有でタイミングを合わせ、眼前にいる二人の魔法師――悠元と元継に対して放出系魔法［降雷］を放つ。

これが別の魔法ならば、まだ余地はあったかもしれない。だが、より
りにもよって一番選択してはいけない魔法を使ってしまった。
それを見た元継の判断は早かった。
「悠元、俺がやる。バックアップは頼む」
「了解、兄さん」
元継の言葉に悠元が５メートルほど後退すると、元継は［大典太光龍宗世］を高く掲げる。すると、刀身を基点として周囲の地形が次々と削られていく。
正確には地面の分子構成を全て陽子と電子に分解することで、常人では扱えない電力を生み出してしまった上泉剛三の戦略級魔法。その魔法を上泉家の戦略級魔法として受け継いだ元継は、敵の［サンダー］の電撃すら吸収した上で魔法を放つ。
「吹き飛べ――――雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）」
振り下ろした［大典太光龍宗世］の太刀筋を追いかける形で放たれた超高プラズマの奔流――――戦略級魔法［雷霆終焉龍（ヘル・エンド・ドラゴン）］は第六隊を防御させる暇もなく、容赦なく肉体はおろか内部に憑りついた［パラサイト］まで蒸発させた。
そして、攻撃の余波は堤防と北側の海にまで及び、攻撃の余波に触れた海水は瞬時に蒸発し、巨大な水蒸気爆発を起こした。威力の射程は抑え気味だったが、それでも島の北岸から約１０キロほどに掛けて水蒸気爆発による水柱が発生したほどだった。
◇　◇　◇
当初の予定では、『神将会』をここまで大々的に投入するつもりはなかった。だが、本気で痛い目を見せる必要があると考慮したことに加え、エリカたちが大分仕上がったとはいえども、万全を期すために全員投入を決めた。
別に不安要素があったというわけではないが、ここまで起きたことからすればマイナス面における反動が少ないようにも感じた。悠元にしてみれば、物理的な反動というよりは精神的な反動を受けている形だが、どうにも『これで終わるとは思えない』という感覚がどうにも抜けきらなかった。

それと、もう一つの理由が達也の魔法を隠す為でもあった。
原作の時点では深雪によって明るみにされていた［分解］と［再成］だが、この世界では桐原たちが前線に出なかったことで殆どが隠された状態のまま。
戦略級魔法［質量爆散（マテリアル・バースト）］のプロセスを鑑みれば明るみになるリスクは出てくるが、今の完全解除された達也ならば他の魔法を修得するのにもそこまで苦労はしなくなるだろう。
投入された部隊と兵器は確かに強い。一線級でも非魔法師の兵士ならば苦戦を余儀なくされるだろう。だが、迎撃に当たっているのは『神将会』とその協力員。悠元によって人並と言う領域を外れた者たちが遠慮なく力を揮えばどうなるか……その答えは、モニター越しに見ていたリーナ達の反応に集約された。
「達也も強いけど、これはこれでエグイわね」
「お姉ちゃんもいずれああなるんだよ？」
「……部屋に籠っていい？」
各所に設置された監視カメラで戦闘の光景が映っているわけだが、これまで『スターズ』で様々な任務を請け負っていたリーナですら引き気味になっていた。将来的にその領域へ引き込まれることはセリアの言葉が無くとも理解はしているが、せめて今だけは常識に縋りたいという心境が垣間見えていた。
「まあ、リーナの気持ちは分からなくもないですね。僕もかつて前線を張ったことはありましたが、これを見せられると今まで学んできた魔法そのものが〝陳腐〟としか言えなくなります」
「……それは確かに」
燈也の言葉を聞きつつリーナが視線の向きを変えると、あまりの光景に気絶しているほのかが佐那の看病を受けている一方、美月は持ち込んだスケッチブックに何かを書き込んでいたことに幹比古が気付いて覗き込んだ。
「柴田さん、何を書いて……風景画？」
「はい。夏休みの課題で『幻想的な風景』のテーマが出てまして」
「幻想……うん、そうだね」

線画の時点で『最早この現世のものとは思えない光景』が描き出されており、流石の幹比古もツッコミを入れることを諦めた。いくら魔法という現実には見えづらいものを扱っていたとしても、どうしても受け入れられない〝常識〟というものは存在する。
「幹比古は、古式の術士としてどう見ています？」
「そうだね……もうじき東道家に入る僕としては、悠元の領域に踏み込める人間なんて数えるほどになると思う。その人数は増えるかもしれないけれど、悠元ほど個人の栄光や名誉を求めない人間なんて、この先数百年レベルで出てこないだろうね」
幼馴染だからこそ、初めて会った時から自分を偉ぶったりすることはなく、それでいて自身の力を過大評価することのない悠元の姿に幹比古は感嘆すら覚えた。彼の根底にある性根を十代にしてもつ人間など、出てきたとしても世紀単位の話になるだろう……というのが、幹比古の正直な感想だった。
『『恒星炉』に関しては達也と共同してのものだと思うけれど、基幹技術の交渉事となると悠元が表立つことになる。明確な対価を示さなければ彼は決して動かない。僕も最初に出会った時は『変な奴だな』と思ったほどだけど」
当時は吉田家の神童と持て囃されていただけに、悠元の存在は異質に見えた。転機となった［竜神］の喚起についても、幹比古が父親に相談した時は『彼みたいなことをしても自滅するだけだ』と釘を刺されたわけだが、強行した挙句失敗してしまった。
だからこそ、悠元という存在を改めて受け入れることが出来た。
「無暗に力を揮わないからこそ、彼の勘気に触れた時の反動が凄まじいものになる。尤も、その力のせいであれだけの婚約者に囲まれているわけだけど……正直、僕や燈也、ここにはいないレオなんかはまだマシだと思う」
「それは同感ですね」
優れた魔法師の血筋を残す意味は幹比古や燈也も理解している。とはいえ、それが行き過ぎた末路を同年代の友人で見ることになるとは思わず、互いに苦笑を漏らした。

「そのレオですが、対峙した相手が海の向こうまで吹き飛んでいますね」
「エリカもカメラに残像すら映っていないね……いや、他人事にしちゃいけないんだろうけれど」
「ははは……」
戦闘が開始して僅か一分弱。ＵＳＮＡの上陸部隊約１４００名は瞬きしたかのごとく蹂躙された。
◇　◇　◇
各員が戦闘を完了した頃、悠元は巳焼島の上空に立っていた。厳密には超低温にまで低下させた空気を固形化し、温度を遮断するフィルターを付与した［ファランクス］の上に立っている。
既に地上に残っていた［パラサイト］は全て殲滅されたが、それでも解放した［天都御魂叢雲（アマツミタマノムラクモ）］はまだ左手に握ったままだった。その理由は島の東西に停泊している駆逐艦『ハル』と『ロス』の上空に出現している水素プラズマの雲。
島を挟んで等間隔に配置された船から放たれた物体。そして、悠元はその意味と正体を既に把握していた。
（魔法発動兆候を確認――［シンクロライナー・フュージョン］に相違ない）
それを判断した直後、雲が直径５メートル程に圧縮され、各々東西から音速の十倍以上の速度で巳焼島へ向けて放たれる。到達速度は約六秒と普通ならば少ない。
だが、悠元からすれば……一秒もあれば〝十分すぎた〟。
悠元は［天都御魂叢雲］を構え、息を吐く。その刹那、［天都御魂叢雲］から膨大な量の光が発せられる。本来ならば見ることすら出来ない非魔法師も、その眩い光を波動を受けたように感じていた。
そして、悠元は技を放つ。
「月牙天衝・極南の段――剛摩天楼（ごうまてんろう）」
膨大な剣圧と霊気を圧縮した刃で森羅万象を斬り伏せる悠元の剣技により、［シンクロライナー・フュージョン］を瞬く間に無力化。だが、悠元は攻撃元に対する追撃はしなかった。何故ならば、それを指

し示すかのように巨大な氷柱が『ハル』と『ロス』を閉じ込めてしまった。
　それを見つめていると、戦闘スーツ――――悠元が一から設計した専用(ワンオフ)の［ストライク・フリード・スーツ］――――を纏っている達也が飛行魔法で近付いてきたので、悠元は足場を形成すると達也はその上に乗った。
「悠元、助かる」
「気にしなくていい。にしても、アレはやり過ぎだと思うんだが……」
「ああ、それは俺も思ったほどだ」
　魔法は深雪の［氷結六花(ダイアモンド・ダスト)］によるものだが、艦船のクルーは全員冬眠レベルの昏睡状態に陥っている。この辺は一昨年の〝失敗〟が生きた形だろうが、これには二人揃って深い溜息を吐いた。
「……済まない」
「別に謝らなくていいんだがな。一目惚れして受け入れたのは俺自身の意思だし……そして、ベゾブラゾフがとうとうキレたか」
　制限を解除した悠元は、固有魔法［万華鏡(カレイドスコープ)］を通して情報の変化を具に読み取ることが出来る。今回はベゾブラゾフを［黒死揚羽(ニアデス・ハピネス)］で監視していたわけだが、とうとうビロビジャン基地から極超音速ミサイルの発射を指示させていた。
　そして、当人は巳焼島上空に向けて［トゥマーン・ボンバ］を放つ腹積もりのようだ。それは達也も瞬時に把握したようだった。
「達也、［トゥマーン・ボンバ］の無力化を頼む。俺は極超音速ミサイルを破壊する」
「分かった。足場は大丈夫か？」
「その程度なら寝ずに一ヶ月ぐらいは持続展開できるから」
「……埒外だな」
「お前が言うな」
　互いに軽口を叩き合いつつも、悠元はビロビジャン基地へ向けて右手で［ラグナロク］を構える。悠元がトリガーを引くと起動式が読み込まれ、銃口に相当する部分で魔法式が展開される。そして、光が収束するにつれて、周りの彩られた景色が剥がれるように光が収束さ

れ、周囲はまるで夜空のように変化する。
月の代わりに太陽が光っているが、その光景は巳焼島のみならず世界各地に『夜』が訪れた。そして、悠元は［天都御魂叢雲］を口に咥え、左手に［セラフィム］を構えて起動式を読込、もう一つ魔法を発動させる。
巳焼島に出現した巨大な光の玉が二つ。それはまるで、地上に姿を見せた太陽の如き輝きだった。
「［スターライトブレイカー］、発動」
悠元の言葉によって放たれた光の玉は、光の奔流となって島の南北へ向けて放たれる。南へ向けて放たれた奔流は海中へ吸い込まれ、その直後に巨大な水柱と共に一隻の潜水艦が舞い上がり、島南西部の砂浜に突き刺さる形で座礁した。
そして、北側へ放たれた奔流はミサイル六発を呑み込んだだけにとどまらず、ビロビジャン基地のミサイルサイロへ直撃し、内蔵されていたミサイルや兵器類全てが連鎖爆破。盛大な爆発によってキノコ雲が形成されたのが衛星でハッキリと確認できるほどだった。
「達也、この場は任せた」
悠元はそう告げると、ＣＡＤを懐に仕舞って咥えていた［天都御魂叢雲］を手に取り、［鏡の扉（ミラーゲート）］を発動させて、光の壁の中に消えていく。その姿を見送った達也は足場を蹴って空へと飛びあがった。
◇　◇　◇
悠元が飛んだ先はハバロフスクの新ソ連科学アカデミー支部の屋上。悠元は躊躇うことなく屋上の床を斬り飛ばし、そのままベゾブラゾフのいるフロアへ突入。ベゾブラゾフがその姿を視認した時には、ベゾブラゾフは四肢が穿たれて意識を飛ばしていた。
流石に戦略級魔法を使用する関係で周囲に人影はいないため、悠元は気絶したベゾブラゾフを引っ張る形で屋上へと一気に飛び上がる。そして、ベゾブラゾフを力任せに空中へ放り投げ、悠元は［天都御魂叢雲］を構える。
「イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ……アンタが問われる罪があるとするならば、俺の大事な人を傷つけて怒らせた。受けろ、俺

の怒りを」
悠元が［天都御魂叢雲］を背面に向けて構えると、刃先から膨大な量の光が迸る。ベゾブラゾフを放り投げた先はハバロフスクから見て西側――ベゾブラゾフの〝着弾地点〟目掛けて、悠元が魔法を行使する。
「月牙天衝・極東の段――坤天舞創（こんてんぶそう）」
この剣技は悠元が持ち得る最大出力の戦略級魔法を行使するために編み出した技。そして、この剣技に込めた戦略級魔法は［ローエングリン］――超高密度に圧縮した荷電粒子の奔流がハバロフスクからほぼ一直線にモスクワ方面へ向けて放たれた。
意識を失ったベゾブラゾフは最早成す術もなく、光の奔流に巻き込まれる。だが、この時点でベゾブラゾフはまだ死んでいない。技を放ち終えた上で、悠元が［ラグナロク］を構え、トリガーを引く。
「新ソビエト連邦……お前らの武器全てを灰燼に帰す。人様の恩を仇で返した罪を受け取れ」
その直後、新ソビエト連邦内に存在する核兵器群全てが融解し、最初から何もなかったかのように消え去った。そして、新ソ連内に存在するウラン鉱床も全て消失し、これで新ソビエト連邦から核兵器を自前で調達できる手段を喪った。
そして、ベゾブラゾフが着弾した先はクレムリン宮殿で、魔法が着弾した瞬間に激しい光が宮殿を中心に発せられた直後、修復中だった宮殿は元の姿を完全に取り戻していた。
ベゾブラゾフは一体どうなったのかと言えば、彼の膨大な魔法力がクレムリン宮殿を修復したのと同時に、現政権の首脳陣を一人残らず強制発動させられた［トゥマーン・ボンバ］で吹き飛ばしていた。そして、彼はその意識を取り戻すことなく分子レベルで分解され、宮殿の中に分子レベルで分解されて〝組み込まれた〟。
その顛末を知っているのは魔法を行使した悠元本人以外に存在せず、事が済んだのを判断した悠元は［鏡の扉（ミラーゲート）］で再び飛んだ。
◇　◇　◇
彼が飛んだ先は強襲揚陸艦『グアム』の甲板。突如現れた悠元の出

現に驚くが、悠元が視線を向けただけで兵士たちは完全に委縮して、武器を床に放り捨てて投降の意思を示していた。悠元が通り過ぎても、武器を拾って狙い撃つ者はいない。兵士の勘なのか、人間の生存本能による警鐘なのかは分からないが、中には自らうつ伏せになる兵士の姿を見つつ、戦闘指揮所に足を運んだ。

そこには『グアム』の艦長であるアニー・マーキスと、エドワード・クラークがいた。悠元とエドワード・クラークに直接の面識がなくとも、ディオーネー計画を巡って対立した者同士。

悠元は油断することなく二人の前に立った。

「師族会議議長並びに日本政府軍・統合軍令部特使、神楽坂悠元だ。同盟国に対する重大な傷害案件として両名を拘束させてもらう。余計な抵抗さえしなければ、手荒な真似はしないと約束しよう」

「……分かりました、武装解除に応じます。ドクターも異存はありませんね？」

「……ええ」

武装解除という点では、悠元も問題は無いと判断していた。何かを言いたそうにしているエドワードに対し、悠元が話しかけた。

「何か言いたそうだな、エドワード・クラーク」

「……君は、何故そこまでの力を有しながらも、広大な世界を見ようとしないのですか？」

それは、単に宇宙へ目を向ける以前の問いかけ。ここまで常識外れた力を有しながらも、自分勝手で力を揮わない姿に疑問を抱いたのだろう。

その問いかけに対する悠元の答えは、この世界に転生した時から既に決まっていたことだった。

「そんなのは出来る人間がやればいい。いくら力があろうとも、人間はどうしても己の思考の範疇から脱することなど出来ない。それがどんな独りよがりの独裁者であっても、結局は己の思考に縛られ続けて破滅する。そんなのは古今東西の歴史が散々証明していることだ」

誰よりも人の醜さを理解してきたからこそ、自身の欲の範疇が理性を越えることにならないよう律してきた。いくら日本魔法界の重鎮

になったとしても、国防軍の重要な職に就いたとしても、そしてこの国を陰から支える立場になったとしても……その性根を今更変えることはしない。
「お宅の国の大統領に伝えるがいい。俺は誰であろうとも屈しないと。国家が破滅を望むというのならば、情け容赦なくその道を歩ませてやると……まあ、伝えるまでもなく既に話は付いている。エドワード・クラーク、お前とはこの先出会う事など無いだろう」
――西暦２０９７年７月３０日・日本時間午前９時。
戦闘開始から僅か１０分の出来事により、ＵＳＮＡの部隊は完全に壊滅。非正規部隊による攻撃とはいえ、大国の軍隊を難なく退けただけでなく、使用された戦略級魔法を無力化した手腕は世界各国に震撼を与えた。
だが、これはまだ日本の強さを示した序章でしかなかったということに、世界はまだ気づいていなかった。

世界への波及

戦闘は終了した。いや、最早戦闘と呼ぶには余りにも惨すぎる結果がそこに描き出されていた。『グアム』の戦闘指揮所が空になり、悠元以外の人間が救命ボートに乗った事を確認すると、悠元はコンソールに手を触れて［万華鏡］を発動。

その瞬間、『グアム』が瞬く間に光り輝き、1秒にも満たない時間で光が収まると、戦闘指揮所の姿が〝変わっていた〟。

その変化を一番驚愕していたのは、救命ボートで海上に避難した『グアム』のクルーたちのみならず、アニー・マーキス艦長とエドワード・クラークも含まれていた。強襲揚陸艦だった『グアム』は瞬時に中型の軍艦へと変貌した。

軍人として魔法師と接触する機会があったとしても、これこそ『魔法』と呼ぶべきものだとマーキスは評価することしか出来なかった。

その一方、エドワード・クラークは悔しさを滲ませていた。日本の強さは最早エドワードの常識の範疇にすらなかった。だが、現政府は既に彼らの存在を許容している。先日の会談でもエドワードを必要にしてもらえるとは思えなかった。

こうなれば亡命も止むを得ないと思っていたエドワードだが、そこに近付いて来るのは戦闘スーツを身に着けて飛行してくる数名の人間。エドワードにはそれがＵＳＮＡの［スラスト・スーツ］だと直ぐに理解してしまった。

兵士の一人が速度を落とし、ボートを引っ繰り返さないよう近付く。その後ろに数名の兵士がアサルトライフルを構えている。

『エドワード・クラーク。ＵＳＮＡ連邦法ならびに連邦軍法違反の容疑で連行する。既に日本政府の許可も取り付けているため、抵抗は無意味と知れ』

「……私は、最初から負けていたのか」

ボートに近付いたのは現『スターズ』のメンバーで、総隊長ジェラルド・メイトリクス・シリウス准将と総隊長補佐となったアニエス・ヴィンセント・〝ミルザム〟大佐（アニエスの階級はジェラルドに準

ずる形となった)。そして、第一隊から派遣されたラルフ・アルゴル中尉とラルフ・ハーディ・ミルファク中尉（部隊再編の際に両名は昇進）の四名。

今回の後始末を悠元は事前に考案しており、エドワード・クラークを社会的に抹殺する意味で『スターズ』の派遣をＵＳＮＡ政府に要請。米政府側も自らの不始末をつける意味で受諾し、現戦力で十全に動ける面子の派遣に踏み切った。

最早退路がないことを悟り、エドワードは敵対した時点で負けていたことを悟った。

◇　◇　◇

海岸に刺さった『クトゥーゾフ』は達也の［分解］で部品レベルに分解され、一先ず地下倉庫に保管することとなった。乗り込んでいた搭乗員は法的手続きが面倒になると判断し、悠元が［無敵砲弾（インビンシブル・カノン）］でモスクワ方面に吹き飛ばした。

今回の襲撃部隊は修司によって殺されたアレハンドロ・ミマス軍曹を除き、全員が生存。蘇らせることも選択肢にあったものの、これについてはジェラルドが固辞した。曰く『彼は他にも問題がある』とのことで深くは追及しなかった。

「お疲れ様、ジェラルド」

「それはこちらが言うべき台詞なんだがな……いや、これからが大変なのか」

悠元とジェラルドは宿舎の食堂で談笑していた。すると、モニターには日本政府の記者会見がリアルタイムで流れており、神楽坂悠元と司波達也を国家公認〝魔法技能師〟とする発表が成された。

「しかし、戦略級魔法師でも構わんとは思ったが、公的に認めた魔法技能師とすることで着地点を置いたか」

「そりゃあ、悠元は英雄の孫だし、達也はあの『四葉』の人間なのだろう？　変に恐怖を煽りたくなかったのだろうな」

「大亜連合が駄々をこねたら、今度は向こうの政府要人全員を地下労働送りにするけど」

「ウチの大統領なら鉄拳乱舞案件だな……」

既に将輝が国家公認戦略級魔法師[十三使徒]となっているため、同年代の人間が揃って戦略級魔法師としてしまえば、日本に対する負荷がかなり重荷になると判断してのものだろう。
「予定通り、エドワード・クラークはＵＳＮＡへ送還し、その後は法的処分を下す。そういえば、その息子のレイモンド・クラークは知ってるか？」
「まあな。まだ訳あって監視下に置いてるけど、そっちも治療して引き渡した方がいいか？」
「そうしてくれると助かる」
法的処分という割と優しい表現を使ったが、文字通りの『死刑宣告』に限りなく近い。そして、レイモンドについては政府の保護観察処分とすることが決まった。法的保証人はレイモンドの実母――――離婚したエドワード・クラークの元妻が彼を引き取るらしい。
悠元としても真一が離脱した後にレイモンドを野放しにするつもりもないため、ジェラルドの頼みを快諾した。
「そういや、セリア経由で聞いたが、複数の婚約を迫られてるんだって？」
「……もうその片鱗を受けているがな」
ジェラルド曰く、アニエスと既に関係を持っただけでなく、ティナ・フェールと言う政府要人にまで押し掛けられ、更には士官学校時代に告白された女性に押し倒された。
この時点で三人だというのに、エレノア・ポラリス（セリアの前任者）に好意を抱かれた挙句、[パラサイト]となって敵対したシャルロット・ベガ、レイラ・デネブ、ゾーイ・スピカまで娶ることになっていた。
「しかも、『スターライト』からも数人嫁を取れとか言われるし……ポラリス中将からは『頑張ってくれ』と単調に言われた挙句『娘を嫁がせる』とか言われたし」
「まだいい方だと思うがな。俺なんて親友の母親を愛人として囲う羽目になったんだから」
「……力があるのも考え物だな」

「全くだ」
　ジェラルドが今回の任務を受けたのは、そんな日々から現実逃避するためでもあった。尤も、帰ったら帰ったで徹底的に囲われるオチしか見えない。無論、ジェラルド本人もそれを理解しているだけに、深いため息が漏れたのだった。
「世の中の魔法師を志す男子連中は、まず己の内面を磨けと苦言を呈したい。そのせいで俺らがとばっちりを受けているのだから」
「悠元……それは、確かにな」
　なお、この会談の後にジェラルドの嫁が増えることとなり、彼が絶叫したのは別のお話。
◇　◇　◇
　所変わって北アメリカ合衆国首都ワシントンD．C．の大統領府（ホワイトハウス）。その大統領執務室に座るジョーリッジ・D・トランプ大統領は連絡を受けていた。
「そうか……了解した。先達に失礼を働かぬようにな」
　連絡先は国防総省（ペンタゴン）からで、日本の巳焼島における戦闘報告を受けていた。その連絡を終えたところでノックの音が響く。ジョーリッジは躊躇うことなく入室を促した。入ってきたのは一人のスーツ姿の女性――合衆国連邦軍内部監察局・副局長のヴァージニア・バランス大佐であった。
「失礼します。先程リーナから連絡を受けました。そちらも事情は把握されているでしょうが」
「その通りだよ、バランス大佐」
　ジョーリッジとバランスの見立て通り、襲撃部隊は数分も掛からずに全滅。いくら傭兵や非正規の部隊が混じっているとはいえ、『スターズ』込みの部隊でも難なく退けたことに驚嘆しか出てこなかった。
「こちらも本気でないとはいえ、これまでの魔法師がまるで〝児戯〟にも等しいようなもの。そして、ＳＳＡのミゲル・ディアスの［シンクロライナー・フュージョン］すら防いだ。この分だと、ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］も難なく無力化せしめてるのだろうな」

ジョーリッジは剛三の実力を肌で感じていたし、悠元の実力も目にしている。使っていた魔法がこれまでの常識の範疇にないとしても、彼らを敵に回すこと自体が『自殺行為』でしかない。
そして、その見解はバランスも同じであった。
「後で日本政府から公式の発表があるようですが、新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフは『独立国家を脅かす危険分子』として抹殺したようです。それを成したのは神楽坂殿のようですが」
「そうか……不幸中の幸いは、エドワード・クラークを我が国で処罰できるという〝汚名返上〟の機会をくれたことだな」
その機会を貰えるとならば、ジョーリッジは『スターズ』の日本派遣を躊躇わなかった。今回は『連邦軍法の軍規違反者の取り締まり』という名目で派遣されているが、これについては決して嘘を言っていない。
「……正直、今回の件に片が付いたら任期途中でも退任したい気分だよ」
「それは……心中をお察しいたします」
現状、政府内部のゴタゴタが片付いていないところで退任すれば国内情勢が荒れるのは必至で、それはジョーリッジが一番よく理解していた。ここ数か月だけでも数年分の気苦労を重ねたような気分に苛まれるほどで、ジョーリッジの言葉をバランスは肯定も否定もせず、ただ同情に近い言葉を掛けるに止めたのだった。
◇　◇　◇
７月３０日正午。日本政府が緊急の記者会見を実施。メディアたちの前に姿を見せたのは内閣総理大臣だけでなく、在日北アメリカ大使のジェフリー・ジェームズとの共同記者会見であった。
今回の一件――――巳焼島を襲撃した〝ＵＳＮＡ出身者を含むテロリスト〟が新ソビエト連邦のエージェントと共謀して日本を侵略しようとした――――について、日本政府と北アメリカ合衆国政府が公式の見解を発表。
さらに、今回の襲撃を阻止した二人の魔法師――――神楽坂悠元と司波達也の名を挙げ、日本政府は『特例』の形で、彼らを公的に魔法師

として認める旨を発表。北アメリカ合衆国政府としても彼らを『我が国を救った英雄に足る働きを見せた』とジェフリー大使が代理でジョーリッジ・D・トランプ大統領の声明を公表。

実際には非正規部隊や『スターダスト』、果ては『スターズ』まで含んでいる形だが、その事実を公にすればUSNAの国際的評価は確実に〝底を突き抜ける〟ことになる。

それで引き起こされる国内情勢の混乱や国際情勢への波及を考えた時、USNA政府は悠元の提案した事項を全て引き受けることで、軍事的損失の代わりに特別な需要の創生を得ることとなる。

新ソ連に対する追及をそこまでしなかったのは、新ソ連政府が意固地になって軍事行動に踏み切るのを恐れてのものではなく、単に新ソ連方面がそんなことも言っていられない状態になってしまっていた。

巳焼島の襲撃当日、クレムリン宮殿にいたはずの新ソ連の現政権メンバーが軒並み『神隠し』にでも遭ったかのように行方知らずとなり、更に新ソ連内部の反体制派がウクライナ・ベラルーシ方面と共同戦線を張ることで、この一か月後にはモスクワを含む新ソ連西側が連合軍に占拠される事態となる。

更に、ウラル山脈を挟んで東側が旧ロシア帝国の皇帝家の末裔を旗頭に独立を宣言。名称は『ロシア共和国』。USNAとの経済協力を取り付けることで、ベゾブラゾフの喪失を世界に知らしめていた。

日本へは旧ソ連時代に奪った千島列島全島および樺太全域の返還を提案することで、日本から独立国家としての承認を取り付けるだけでなく、経済的な支援を求めた。日本としても北からの脅威を減らすという意味で承認し、北海道に駐留していた防衛軍を千島列島・樺太に派遣することも閣議決定された。

ただ、最前線への魔法師の派遣は最小限の人員に留める形とし、タタール海峡（日本名は間宮海峡）によって国境が一番近くなるロシア共和国側への配慮を示した。

新ソビエト連邦が旧連邦時代の二の舞を演じる様な形で解体されることになるのは……巳焼島襲撃からちょうど一か月後。これによって大亜連合が存在感を増すこととなるが、それはまた別のお話。

話を戻すが、当初は悠元が直接声明を発表するつもりでいた。だが、日本政府の長たる内閣総理大臣が『君だけに泥を被らせるわけにはいかない』という理由で、一条将輝と一線を画しつつも国家公認の魔法師として認めるという世界でも類を見ない発表がされた。
日本政府が行動の責任を取るというのであれば、既に肩書きを有している身としてお任せすることとした。
改めて名を明かしたことで近付いてくる輩は少なくない。だが、同年代の中で誰よりも経験値が高い悠元相手に騙し切れる人間などほぼいない。セリア曰く『お兄ちゃんを騙すぐらいなら一国の国家元首になる方がまだ簡単だよ』とのことだが、それだけは解せなかった。
戦闘を終えた一行の殆どは巳焼島に滞在することとなったが、その中に含まれなかった悠元に加え、ジェラルドが同行していた。水面下で開発が進められている水素ジェットエンジン搭載のプライベートジェットで巳焼島から東京湾海上国際空港へ移動、迎えのリムジンに乗って赤坂離宮へと出向いた。
「すまないな、ジェラルド」
「いや、此方としても変な誤解は持たれたくないからな」
二人がこの場所へ出向いたのは臨時師族会議を開催するため。今回の『巳焼島事変』に関する最終報告と、ＵＳＮＡ側の意向を十師族各当主に伝えることでリーナとセリアの軍事的価値を極めて低くするのが狙い。
提起人は師族会議議長・神楽坂悠元が主体となり、副議長・上泉元継に加えて三矢元と四葉真夜の三名が賛同する形で共同提起した形となった。
こういった行為が師族会議の規則に抵触する可能性もあるが、そもそもこれまでの師族会議において水面下でやってこなかったというわけではない。最たる例は七草家が該当するし、師補十八家となった九島家にも波及する。
「しかし、十代で魔法界のトップに立つか……成り上がりの極致だな」
「ジェイ、俺はあくまでも日本魔法界としてトップに立ったとしても、世界を牛耳る気なんてないんだが」

「悠元の言い分は分かってるが、悠元の功績が世界を変えた以上、世界はお前の言動を無視できんだろうに」
「それで怖がられて暗殺を目論まれても困るだけだ」
いろいろ手を貸したり策を講じても、最終的な判断は現地の当事者に委ねている。それで敵対するようならば社会的な手段を以て潰すだけだ。尤も、現地の人々が平穏な生活を送れるように手を貸したりはするが。
離宮の広間の一室には人数分のイスとテーブルが置かれていて、最初に来た形となった悠元とジェラルドが席に着く。少ししてから元継が到着したのを皮切りに、十師族の各当主達が席に着いた。
今回は全員オンラインでなく実際に顔を合わせる形での会議。全員が席に着いたのを確認した上で悠元が切り出した。
「今回は情勢が多忙の中、集まって頂いて感謝する。今回は巳焼島事変に関する報告とＵＳＮＡ側の意向をお伝えするべく現〝シリウス〟であるメイトリクス准将に同席頂いている」
「お初にお目にかかります。スターズ総隊長のジェラルド・メイトリクス・シリウスと申します。此度はジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領閣下のメッセンジャーとして参加させていただきます」
「……見たところお若いですが、歳はいくつですか？」
「２２になります。まあ、先代のシリウスほど若くはございませんが」
悠元の紹介でジェラルドが自己紹介を述べると五輪勇海が率直に尋ねてきたので、ジェラルドは〝アンジー・シリウス〟――――リーナのことも含めつつ返したのだった。

当主となった家族の会話

開かれた臨時師族会議。ジェラルドの自己紹介も終わり、巳焼島事変に関する最終報告が悠元の口から述べられる。
「今回の巳焼島襲撃について、既にＵＳＮＡ側と落としどころについて協議済みだ。今回の事変に加担した新ソ連のイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフは私が直接出向いて殺した」
「何と……いやはや、議長殿の言葉を信じていないわけではありませんが、我々のような魔法師と言えども〝不可思議〟というものを耳にするとは思いもしませんでした」
悠元の報告を聞いて真っ先に反応したのは八代雷蔵（やつしろらいぞう）。とはいえ、彼も師族会議では若い部類に入る為、悠元の言い分を認めつつも率直な感想を口にした。
「新ソビエト連邦政府がその事実を認めずに暴れる可能性はあるだろうが、軍事力の急激な低下に加えて首脳陣も合わせて消し飛ばした以上、新ソ連の解体も秒読みの段階となるだろう。新ソ連内の核兵器も消し去ったからな」
「……恐怖以上に頼もしくもありますな。私ども七宝家だけでなく、日本海側を守る一条家や一色家、八代家にとっても脅威の逓減は望ましい展開でしょう」
続いての報告に反応を示したのは北海道地方を守護・監視する七宝家当主・七宝拓巳（しっぽうたくみ）。なお、息子の琢磨については魔法大学への進学も考慮して東京の自宅を別宅として所持しており、琢磨が家を継ぐのは大学卒業後らしい。
拓巳の言葉に一色家当主・一色義道（いっしきよしみち）も深く頷いていた。
「全くですな。それで、議長殿。貴殿が使った魔法はやはり、戦略級魔法なのですか？」
「ええ。素粒子収束砲撃魔法［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］、そして荷電粒子砲撃魔法［ローエングリン］。今回は使いませんでしたが、現状の［十三使徒］が使用する戦略級魔法全てを行使することが出来ます」
ここには含めなかったが、達也の［質量爆散（マテリアル・バースト）］や深雪に渡した

［氷結六花（ダイアモンド・ダスト）］も当然含まれることとなる。本来一人で一つがやっととされる戦略級魔法の複数保持――その意味を他の十師族当主が理解できない筈が無かった。

悠元は自称こそしていないが、紛れもなく世界最強格の魔法師であるという事実。それをこの場にいる人間すべてが知ることとなった。それを聞いた父親の三矢家当主・三矢元は深く息を吐いた。

「議長殿の並外れた才覚は幼い頃から見ておりましたが、それを聞かされた身としては複雑ですな。まるで蛇が龍でも産んだかのような御伽噺を聞かされたような気分です」

「……三矢殿」

なまじ元はここにいる面子の中で悠元が〝転生者〟であるという事実を知っている。これまで不可思議な体験をしてきただけに、元に対して二木舞衣が気遣うような視線を送った。

「三矢殿に色々言いたいところではあるが、ここで言うべきことでもないために進めることとする。シリウス准将、ＵＳＮＡ政府の見解を述べていただけるか？」

「畏まりました」

気を取り直す形でジェラルドがＵＳＮＡ政府の見解を発表する。

今回を含めたここ最近の無礼に対する謝意として、日本政府に〝［恒星炉］の経済協力金〟として６０００億ステイツドル（約７０兆円）を支払う事と、技術提供交渉の準備も含めてジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領が来日すること。

今回の首謀者であるエドワード・クラークの処分は〝誰も目から見ても分かる形〟――軍事法廷にて判決後、即日の刑執行を執り行う事。息子のレイモンド・クラークについては軍による厳重な監視がついた〝保護観察処分〟となる。

海軍空母や戦闘機を含めた米軍の機材提供についても、神楽坂家に提供される形となるため師族会議で公表された。

「米政府がそこまで……議長殿はその戦力を如何様にする気なのだ？」

「自国の領土の大半は海である以上、マフィアなどを含めたアンダー

グラウンドの連中がいるのも事実。それに、今後発展していく我が国を狙おうとする輩もいるでしょう。それに対する〝目に見える抑止力〟は必須と考えた次第です」
　それだけならば色々不満が出るため、悠元は更に付け加える。
「そして、国防軍や各地の造船所と折衝を続けた結果、自衛のための戦力を有して頂くこととした。手始めに佐渡の陸上要塞化に伴い、一条・一色・七宝の三家に護衛艦船の提供を実施する」
「それは……新ソ連に備えてのものということですか？」
「単に新ソ連のみならず、今後増長することも予想される大亜連合への対策も含んでいる」
　形式上は国防軍の装備更新に伴う払い下げの形だが、艦船自体はオーバーホールによって最新鋭の装備を搭載した状態で引き渡される。これまで自衛の範疇となる装甲船程度しか持たなかった十師族が〝目に見える戦力〟を有するわけだが、悠元がこれを実施したのは師族会議と国防軍が同じ土俵で戦える余地を作ることにあった。
「九州方面の八代家、奄美・沖縄方面を守護する七草家についても、艦船を優先的に配備することはこの場で公言する」
「それは、責任重大となりますな」
「……」
　反応を示した雷蔵に対し、七草家当主・七草弘一は複雑な表情を見せた。自衛のためとはいえ艦船を保有するということは、各々の動きを〝見られる〟ということにも繋がってくる。そういったものを大々的に持たない状態で働きを見せた人間が師族会議議長にいる以上、反論など出来るはずも無かった。
「太平洋方面は配備の都合により、当面国防海軍とヘキサライン・マーセナリーズで受け持つが、将来的には自衛の戦力を有してもらうこととなる。それについてはご了承願いたい」
　悠元が高校生の段階で魔法教育の人材育成基盤の構築を急いだのは、自衛戦力の増強に伴う魔法師獲得競争の激化を抑制するためでもあった。現状１２校とはなっているが、初等・中等教育の段階で魔法教育を進められる基盤づくりについても水面下で進めており、そのモ

デルケースとして巳焼島に学校の創設をすることで四葉家と合意している。
魔法師の基本的人権や保護を謳うようならば、それに見合った働きをするのが普通だと悠元は考えている。
だが、実際はどうだ。魔法協会は魔法師の保護を謳っていても、実働的な戦力は完全に外部委託の恰好となっている。十師族や師補十八家、百家をはじめとした魔法使いの家は魔法科高校や国立魔法大学の卒業生を囲うことに精一杯で、即戦力の確保という概念しか持たないのが問題である。
護人の二家が師族会議入りすることで、十師族や師補十八家が増長しないか不安視する側面もあった。だが、九島烈亡き後の師族会議の音頭を取るには、誰を選んでも確実に軋轢が生じてしまう。
だからこそ、悠元は元継を説き伏せた上で師族会議入りすることで、師族二十八家の抑止力として護人を機能させることとした。こんなことをしなければならなかった原因を作った輩共についてはしっかり報いてもらう。
閑話休題。
「日本政府はそれで納得されたと？」
「我々は既に政府の管理下ではなく、天皇家の管轄に置かれていることは御承知の筈だ。だからと言って全て反発するようなこともできない。我々魔法師は仙人のような存在ではないのだから」
今後、魔法師を囲ったり〝製造〟したりすることは水面下で増えていくだろう。余りにも行き過ぎた場合は完全に取り潰すことも想定している。その為の抑止力を有する立場として、悠元は静かにそう述べた。
◇　◇　◇
会議が終わり、参加者が次々と退席していく。そうして会議室に残ったのは悠元と元継、そして二人の父親である元であった。三人が当主である前に血縁関係があることは誰もが知っており、誰もそれを咎めようとする者はいなかった。
ジェラルドはＵＳＮＡ大使館からの迎えが来たということで、その

まま退出した。
　そうして三人だけが残ったところで使用人が緑茶の入った湯呑と和菓子を差し入れ、使用人が部屋を出たところで元が一息吐いた。
「まさか、悠元が複数の戦略級魔法を……しかも、［十三使徒］の戦略級魔法すらもとは。大方は義父の影響によるものだろうが、良かったのか？」
「別に隠す理由が無い。というか、変に疑いを掛けられて大切な人に危害が及ぶぐらいなら、秘密は共有してもらうに限る」
　変に腹の探り合いをするよりは、此方の力を明るみにすることで等しく責任を負わせる。ましてや戦略級魔法師の詳細に繋がるとなれば、悠元がバレると同じ立場の達也にも波及する。つまり、変に情報を漏らしたら四葉家への導火線も含まれている形だ。
「言わんとすることは分かる。元治には当主継承の際に話すが、構わないか？」
「それぐらいは許容するよ。まあ、あまり表沙汰にはして欲しくないけど」
　力を求めつつも、常識の範疇の外にあるものを直ぐに受け入れるというのは極めて難しい。悠元とてそれを押し付ける気など無かった。
「出来るわけが無かろう。全く、蛇が龍を生んだとは口にしたが、寧ろ空想上の表現すら出来んかもしれんな」
「あの、父さん……それはストレスでやられるから止めて」
　この世界に来てまだ１０年も経っていないが、数々のトラブルやアクシデントで１０倍以上の年数を味わったような気分を覚えていた。それでいて家族からのツッコミには異論を唱えたくなった悠元で、それを見た元は笑みを零した。
「元継も大変だな。義父の後を継ぐことになるとは」
「いや、俺なんてまだマシすぎる方だろう。悠元に比べたら〝全然〟だろうな」
「それは……確かにな」
　恋愛結婚とはいえ、表向き政略結婚の側面も垣間見えていた元。そして、その煽りを受けたような形となった元継に比べれば、２０人以

上の女性を囲う羽目となった悠元が一番大変なのは言うに及ばずだった。
尤も、その当人は疲れたような表情を見せていたが。
「流石に爺さんあたりから嫁を押し付けられることは想定していたけど、こんな未来になるなんて想像もできなかったよ」
「悠元は、良かったのか？」
「もう今更かなって。それに、本当に嫌なものは全てお断りしたから」
変な興味を持たれないよう立ち回った結果、逆に興味を持たれたのは自分の落ち度だとしても、余りにも認識のない人間と婚約を結ぶことだけは許容しないと自分の意思を示した。婚約関係はまだいいが、それでいて愛人関係（表向きは専属使用人の契約）を結ぶことだけは最初釈然としなかった。
「好感度を稼ごうとカッコつけたつもりなんて微塵も無かったんだけどね」
「その点は私も同じだな。やはり悠元は私の息子だよ」
真夜や深夜、怜美や水波は仕方が無いとしても、自分が持ち込んだレリックの影響があるとはいえ知り合いの母親まで巻き込んでしまった。しかも、悉く元の世界に帰ることなく愛人関係を許容してしまった（帰ったところで墓の下に行く未来しか見えない、というのもあるだろうが）。
関係を持ってしまった以上は責任を完遂する腹積もりだが、被独占欲が強まる婚約者・愛人たちを見て色々複雑だった。どう転んだとしても、彼女たちを道具扱いする気はない……と思っていたら、零から『その振る舞いがジゴロ』と言われてしまった。解せぬ。
「ただ、懸念点はいくつか残ってるんだけどね……主に将輝に関して」
「一条殿の息子の件か。ただ、それは解決したと思っていたのだが」
「普通ならそうなんだけれどね」
悠元と将輝。戦略級という括りこそ違えど、日本政府から認められた魔法師という点では〝同格〟とも言える。それを盾にしてどうこう述べるのは筋違いだろうが。
そもそも、深雪が将輝の告白を丁重に断ったのが今年３月の話。一

条家も四葉家や神楽坂家の意向を今年2月の師族会議で既に把握しており、現当主の一条剛毅は息子である将輝の主張に無理筋があることを認識している。
「リーナの件も含めて一条家へ出向いたとき、将輝に問いかけられた挙句に殴り掛かられたよ。男同士の殴り合いに発展させても良かったけれど、此方は無傷になっちゃうから一撃で沈めた。後のことは一条家に放り投げた」
「……一条殿の苦悩に比べれば、三矢（うち）の悩みなど贅沢が過ぎるやもしれんな」
恋愛結婚が羨ましいという部分は、男性の魔法師として理解はする。だが、自分の気持ちを押し通そうとして相手の都合を無視するのは如何なものかと思う。深雪を第一夫人として確定させた自分も一目惚れしてのものなので、将輝を悪しく言える立場ではないだろうが、せめて深雪の心情を慮るぐらいの配慮は見せてほしいものだと思う。
「というか、達也と深雪の関係に気付いた段階で、自分の非を認めて謝らなかったのは将輝の失点だと思うけどね。それで深雪の印象が変わるかどうかは知らんけど」
「……将輝君と吉祥寺君を沈めた件は義父から聞いたが、それを言いのけて実行してしまう悠元が凄いと思うがね」
「それには同意する。同年代の男子でそんなことが出来る奴の方が稀少だろう」
「二人とも……」
強さを示す立場として弱さを認めるような行為は、相手を付け上がらせることにも繋がる場合がある。
それを考えれば将輝の態度も別におかしい訳ではないし、懇親会の場で謝罪なんかすれば他校の生徒にも目撃され、新人戦モノリス・コードでのオーバーアタックが表沙汰にされるリスクもあったし、一条家の問題が回りまわって師族会議に波及する可能性もあった。なので、将輝の取った対応が間違っているとは言い難い。
悠元の場合、あの時は三矢の名字を名乗らずに剛三の親族として参

加していた。そんな人間が十師族と同格の対応なんか出来る筈もないし、ましてや人をロリコン呼ばわりした主賓の二人（明確に誤解を招くような発言をしたのは将輝だけだが）を容赦なく気絶させたのだ。

普通ならば後々尾を引く問題となるわけだが、一条家と吉祥寺家は謝罪を受け入れてくれた。その引き換えとして一条茜に惚れられてしまった。彼女を婚約者としたのは、その件に対する明確な謝罪の意味も含まれていた。

尚、茜にその辺の事情を説明したら『人らしく対応できている悠元さんは間違っていません。人を平然と侮辱した兄さんと、それに便乗してしまった真紅郎君が悪いんです』と返してくれた。

「ところで、穂波さんの方は？　そろそろ出産の時期だと思うけど」

「大事を取って魔法医療大学付属病院に入院している。元治も暫くは付きっきりだそうだ」

「家が近いので俺も様子を見に行っているが、大きな問題はなさそうに見えたな。この前は四葉殿と葉山殿に出くわしたが」

元治にとっては初めての子、元にとっては初孫になるので、万全を期す意味で入院するのは妥当な判断だろう。何せ、悠元にとっても「領域強化（リインフォース）」で治療した人間が出産前後でどのような影響を及ぼすかというのは今後を考える上で大事なケースになってくる。

にしても、今までは隠してた穂波と四葉家の関係をここにきて出し始めたということは、四葉家も代替わりを進めるという意思が見えてきたということになる。

「……その四葉殿が当主を引退したら、自分のところに転がり込んでくるんだよね。俺はそこまで節操無しと思われてるのかな？」

「２０人以上の女性を完全に捌き切っている悠元にしか出来ない芸当だと思うがな。俺には一生考えられん」

「ははは……」

ちなみに、戦闘が終わった後で深雪と雫、姫梨とセリアに部屋に連れ込まれた。何があったのかは察して頂きたいところだが、その際に真夜まで乱入してきた。

流石に一線は弁えているので問題はないが、『近々引退しそうな四葉家現当主を使用人として引き取る』というチートでも使わない限りは無理筋なルートを開拓してしまったことになる。

精神を安定させたり、性欲を発散させる意味で非常に助かっているわけだが、節度という概念は存在しなかったのかと問い詰めたい気分に苛まれたのは……気のせいではないと断言しておく。

後片付けの為の案件

原作世界では、巳焼島に関する事と同時に九島光宣と桜井水波の件が存在していた。だが、この世界では既に解決した事案であるため、下手にＵＳＮＡを動かしたりする必要も無くなった。それを理解しつつも、巳焼島の援軍として戦闘を見つめた宮藤真一（並行世界の九島光宣）は自室に戻ると、シャワーを浴びてから備え付けのベッドに腰かけた。

「ふう……こんな風に落ち着いたのは、何時ぶりだろう」

考えて見れば、真一は水波の件で介入を決めてからというものの、周公瑾の知識による隠れ家を転々としたり、あるいはＵＳＮＡ軍（正確には［パラサイト］に侵食された兵士）や九島家を利用して追跡を逃れたりしていた。明らかに平穏な生活ではなかったことに、真一は苦笑を漏らした。

「僕が選んだ道なのは事実だけど、些か性急だったのは確かだろうね……」

水波を救おうとするが余り、九島光宣はどんどん意固地となってしまい、達也や同年代の人間と対立するだけでなく、祖父までも敵に回した。自らを犠牲にするやり方を実践しようとして、結局は愛する人に同じ道を歩ませてしまった。

そうして、愛する人と一緒に眠ることを選択して、それで納得していた……いや、そうすることで九島光宣の自己意識（アイデンティティ）を保とうとしていた。

（……確かに、僕は九島の魔法全てを会得した。周公瑾の亡霊を取り込んだことで大陸の魔法も覚えることが出来た）

偶発的な産物も含んでいるとはいえ、真一は確かに九島の魔法師として完成しきった。だが、それはあくまでも九島家と周公瑾の有する魔法知識の範疇でしかない。［パラサイト］の精神感応（テレパス）を介して魔法を行使させることは出来るが、あくまでも宮藤真一（九島光宣）の知識の範疇での話。

（でも、悠元さんは言った。達也さんが僕を必要とする時が来ると）

その理由は分からなくもない。
司波達也はあの四葉の一族の一人。本人が望まなくとも、四葉の悪名を恐れて敵意や害意を向けてくることは十分考えられる話だ。そして、彼が提唱した［恒星炉］の有するポテンシャルを鑑みれば、諸外国の諜報機関や特殊部隊が彼やその身辺を狙うことは『不思議ではない』。
無論、達也が遅れを取るとは考えづらい。ただ、歴史の表舞台に立った達也を誰が裏から支えるとなると、四葉家だけで事足りるとは思えない。ただでさえ達也は政府や国防軍と距離を置いているのだから、実効的な力がどうしても必要となる。
確実に近づくタイムリミット。それまでに出来ることを……と考えた真一は、静かに立ち上がって部屋を後にした。
◇　◇　◇
巳焼島での戦闘――――四葉家・神楽坂家の合同部隊によってＵＳＮＡの兵士・傭兵の混成部隊を撃破したという一報を真っ先に聞いたのは統合軍令部だった。今回の一件は国防軍の監督下において魔法師が本土防衛を行ったということで既に決着しており、日本政府および現政権もその認識で閣議決定されている。
襲撃の翌日である２０９７年７月３１日。風間玄信大佐は防衛省本庁舎・国防陸軍最高司令部に呼び出された。風間と相対したのは陸軍最高司令官の蘇我だった。
「風間玄信大佐、召喚に応じて参上しました」
「ご苦労だった、風間大佐。疲れたのではないかね？」
「肉体的には疲れておりませんが、精神的に驚き過ぎて疲労はしました……それで、疑問があるのですが」
悠元や達也の実力を身近で把握しているだけに、彼らに追随する実力者たちの存在を見て頭を抱えたくなっていた風間だが、この部屋にいる〝三人目の人物〟に視線を向けた。国防陸軍に関する部屋なので蘇我と風間は当然軍服だが、その人物は動きやすい道着姿で、頭は綺麗に剃髪されていた。
見る人が見れば〝住職〟としか言えない人物の名は九重八雲――

―風間にとっては師とも呼べる存在だった。
「色々言いたいことは山積みですが……何故師匠がここにいるのですか？」
「流石だね、風間君。僕も引退が近いかな？」
「試しているようにしか思えない気配の偽り方はやめてください」
どう見ても、この場にいること自体が似つかわしくない八雲もそうだが、世捨て人の彼が防衛省にいること自体〝異常〟としか言いようがない。風間の疑問に対して八雲が答える前に蘇我が口を開く。
「風間大佐。九重殿は今回上条大将の代理として出向いてきたそうだ。その証拠に彼の書状を持参してきた以上、追い返すわけにはいかないと判断した」
「悠元の……了解しました」
色々驚くことはあるものの、あまり驚いてばかりだと近くにいる師匠が調子に乗って揶揄うのが目に見えている為、風間は納得して話の続きを蘇我に促した。その意を汲みとった蘇我は風間と八雲を応接のソファーへ座るよう勧めたわけだが、八雲はソファーの上に胡坐を掻いて座った。
普通ならば窘める行為だが、風間でも師匠の八雲を破るのは容易ではない。下手すれば命のやり取りに発展しかねないため、風間はおろか蘇我も八雲の行いを嗜めなかった。それを示すかのように蘇我は書類閲覧用の端末をテーブルに置いて、風間の前に差し出した。
「本官に目を通せと？」
「ああ。確認してもらえるか？」
「了解しました」
蘇我の許可を得る形で風間は端末を手に取る。そこに表示された文字列に目を通し、内容を理解したところで端末をテーブルに置いた。
「……政府も悠元の恐ろしさを痛感したようですな」
「正確には野党の連中だな。それと親大亜連合派の与党議員や役人もそこに名を連ねる。それと国防軍内の親大亜連合派も軒並み影響を受けることになる」

悠元が行使した戦略級魔法の威力をモニター越しながら目撃した風間でも、外から感じた力の波動を受けて冷や汗が流れたほどだった。かつて大越戦争でゲリラ戦による命掛けの実戦をしてきた人間と言えども、彼の実力は最早〝異次元〟としか評することが出来なかった。

端末に表示されていたのは、今回の一件を受けて国防軍ひいては政府内部の〝人事異動〟だった。特に親大亜連合派の軍人は予備役送りか北海道行きを余儀なくされていた。その背景にあるのは、5年前の戦闘で起きた[レフト・ブラッド]の叛逆行為によって民間人を襲ったという事実からくるものだった。

「上条大将が戦略級魔法を行使したことで、シベリア方面も一気に慌ただしくなるだろう。彼らが軍人である以上、軍人の職務である軍務に励んでもらうのは道理が通る話だ。元上司がそちらに居るのが気に掛かるかね？」

「いえ、小官の今の上司は上条大将ですし、彼は殆ど無茶を言ってきません。その代わり、鍛錬はこれまで以上に厳しくなりましたが」

理不尽な命令や法的に問題のある行為を頼み込むことはない。ただ、魔法師部隊として『スターズ』に伍する力を有するべく、厳しい訓練を科せられることが多くなった。上泉家から武術指導が頻繁に来るようになり、風間も参加してはいるものの、上段者相手では[天狗術]を使っても苦戦することが多い。

別に風間とて油断や慢心はしていない。なまじ相手にしてきた面子が面子なだけに、実戦経験が豊富な彼でも勝てない相手はいる。

「ですが、彼の言い分も納得しております。他でもない彼がそれを沖縄や佐渡に能登沖、そして巳焼島で成したのですから」

「確かにな……」

味方の損害を最小限に抑え、敵の損失を最大化させる。戦闘における理想論であるのは間違いないが、悠元はそれを実現してみせた。不幸中の幸いとしては、彼が護人として日本から出ていくつもりが全く無いという点であった。

蘇我とて国防軍を使って意図的に悠元を縛る気など無かった。だ

が、第１０１旅団から切り離した独立魔装大隊の引き取り先を考慮した時、彼らを御し切れる人間が悠元しかいなかったのも事実。
　なので、国防軍ひいては日本政府の基本方針として、悠元に対して最大限の便宜を図ることで決着している。
「彼とてイエスマンで固めたいという訳ではないでしょう。ですが、敵意や悪意を見せたものを野放しにする道理もない――これは彼の決意表明なのかもしれません」
「決意表明、とは？」
「これは小官の憶測にすぎませんが、彼はこの世界に投げかけたのでしょう。魔法師を〝人類とは異なる存在〟と見做す様な反魔法主義の在り方に。そして、ひいては人類全体に対して魔法師の存在意義に関する問いかけをした……そう思えてなりません」
　国防軍とのトラブル（主に情報部や佐伯）に関しても、悠元は一貫して魔法師の扱いが〝人ならざるもの〟となっていることについて疑問を呈してきた。
　確かに見えない力というものは強大だが、それは政治家や役人などと言った公権力を有する者たち、財力によって強権を揮う者たちの存在、そして裏世界から表の世界を握ろうとする者共にも該当する。
「大将閣下は御存知でしょうが、小官は軍人魔法師でありながら九島退役少将の唱えた師族会議体制について批判的な立場にありました。彼らに兵器であることを強要するなど、我々に出来なかった役目を押し付ける時点で大人として失格に等しい所業です」
「……」
「ですが、国難を前にして小官も命令とはいえ彼らを送り出し、大黒特尉と上条大将閣下に戦略級魔法を使わせてしまった。いくら上官の命令とは言え、小官は退役少将のことを悪しく言えない立場になりました」
　出来ることならば、風間が出来る範疇で事を収めたかった。だが、いくらゲリラ戦においての経験が豊富でも、見晴らしの利いたフィールドという条件下で大軍を相手に切り抜けるような力量を持ち合わせていなかった。

蘇我は何も言わず、風間の言葉に耳を傾ける。
「彼らを何度も利用してしまったこと。そして、それを平然と実行した元上官に対して何も気づかず、咎めなかったことは小官の落ち度でもあります」
「そうか。ならばこちらから提示する案件に対し、断ることはしないと？」
「無論であります」
彼自身が悪い、とは言い難い。仮に軍人としては欠陥があろうとも、これまで数多くの軍人魔法師を育て上げてきた実績は無視できるものでもない。それでも風間の生真面目さを鑑みた蘇我は真剣な表情を浮かべて風間を見やり、風間は踵を正した。
「風間玄信大佐に通達する。明日付けを以て独立魔装大隊を第十三首都防衛旅団の中核部隊とする。それに伴って貴官を副旅団長兼大隊長に任命し、階級を少将に昇進するものとする」
「……は、はい？　部隊編成は理解いたしましたが、小官の昇進は如何なる理由でしょうか？」
蘇我から言い放たれた言葉に風間であってもすぐに呑み込めず、躊躇いながらも蘇我に問いかける。なお、二人の会話を聞いている八雲は面白そうな笑顔で風間を見ていた。
「まず、独立魔装大隊を管轄する霞ヶ浦基地の最高責任者である旅団長は上条大将だが、彼をその為だけに霞ヶ浦へ留め置くわけにはいかない。そして、各旅団の階級に準じる形とするならば、次に位が高くならなければならないのは風間大佐となる」
「彼を基地に留め置いたら、婚約者たちに袋叩きにされてもおかしくありませんからな」
「袋叩きで済めばいいがね。最悪我々の身体が粉微塵になりかねん」
悠元の婚約者たちに対する危険視と言うよりは、彼を軍務に拘束することで要らぬ争いを生まないため――――それを念頭に置いた蘇我の説明に、風間は頷いて肯定の意を示す。
「彼はそんな未来を一切望まないと思うが、将来に繋がる懸念を払拭するためにも貴官には奮闘してもらいたい。これが私なりに考えた

貴官への〝罰〟だ」
「……了解いたしました」
ちなみに、八雲は二人のやり取りに対して言葉を発することはなく、会談が終わったところでそのまま立ち去っていった。風間も自分の師に揶揄われることが無かったためか、安堵に近いため息が漏れたのは……ここだけの話。
◇　◇　◇
悠元が仕込んだ国家魔法技能師の国家資格。無論、日本で制定したために日本国内の公的な資格としての機能でしかない。いや、先日までは〝そうでしかなかった〟というべきなのだろう。
その切っ掛けは襲撃の二日後、南アメリカ連邦共和国のディアッカ・ブレスティーロ大統領が電撃来日したことから始まった。表向きは今回の襲撃に対しての支援表明だが、裏向きではエドワード・クラークに協力したミゲル・ディアスの引き渡し。
無論、この件は悠元が仕組んでいた策に協力しただけであり、ミゲル・ディアスは表向き『ブレスティーロ大統領の護衛』としてメディアの前に姿を見せていた。［十三使徒］の国外派遣は類を見ず、日本とＳＳＡの友好に一役買う格好となっていた。
［恒星炉］の技術提供も既に調印が済んでおり、ＳＳＡにいる魔法技術者が日本へ派遣される形で技術移転を実施する。なお、人造レリックに関する製造技術は軍事転用を危惧して移転させず、［マジストア］の現物とメンテナンス技術を輸出することで合意に至っている。
その後、日本とＳＳＡの共同記者会見でブレスティーロ大統領は日本の国家魔法技能師に関する事柄に触れ、現状の魔法協会では魔法師に対する実効力が乏しいため、日本の法律を参考に国家魔法技能師の法整備を明言した。
この法整備の動きはＳＥＰＡ加盟国で急激に加速し、インド・ペルシア連邦も連邦首相自ら日本を訪問する運びとなり、各加盟国の首相クラスがこぞって日本を来訪する事態となる。
これに危機感を持つのは当然国際魔法協会。特にイギリスの国際魔法協会本部は日本に対する危機感を抱いていた。だが、過去の戦争

で多大な功績を有する英雄を擁する日本に対し、有効な手段などなかった。
何せ、ディオーネー計画を推進した挙句、エドワード・クラークの策謀があったとはいえ達也に参加を強要するような働きをしてしまったことは事実。無論、達也としては必要以上の敵意や害意が無く、更にそれが大切な人に及ばなければ彼とて気にする素振りはない。
『これは神楽坂様』
「どうも、兵庫さん。達也は不在ですか？」
『達也様は只今別の方と連絡をしておりまして』
悠元は［恒星炉］に関する技術移転の取りまとめを話し合う関係で達也に連絡を取ったところ、モニターに映ったのは兵庫だった。流石に間が悪かったのかと思えば、兵庫の表情からして達也が婚約者の誰かや四葉家の関係者と連絡を取っていないことがそれとなく察してしまった。
「その口ぶりですと、婚約者や四葉家関連では無さそうですね。どちら様です？」
『流石の御賢察です。お相手は日本魔法協会の百目鬼（どうめき）関東支部長ですが、如何いたしますか？』
「ふむ……（何で日本魔法協会？　しかも十三束会長じゃない？）」
セリアから聞いた話や、真一が話してくれた原作世界の流れからするに、達也が世界へ向けたメッセージが大人たちに大きな波紋を与えたのだろう。それに納得できないと腹を立てる輩が一定数生じるのは無理からぬことだ。
だが、この世界ではそのメッセージ自体出していないどころか、日本政府が全面的に表立って世界を牽制した。政府の庇護を受けている日本魔法協会の一支部長に過ぎない彼が出張る意味がよく分からなかった。
「そのまま繋いでくれますか？　相手に対する釘差しも引き受けますので」
『宜しいのでしょうか？』

「貸し借りの勘定は勘弁してください」
よもや、当事者どころかその従者にまで損得の貸借勘定を持ち出される羽目になると思わず、悠元は深い溜息を漏らしながら達也へ連絡を繋げる様に頼んだのだった。

外よりも複雑な内側の案件

兵庫にお願いをして十数秒後、達也の姿がモニターに映った。流石に実家で四葉の人間として認められなかった時期を乗り越えた人間からすれば、魔法協会の人間相手では逆に可哀想としか言いようがない訳だが、それを押し退ける形で悠元が切り出した。

「すまないな、達也。いきなり割り込む様な形で連絡をして」

『いや、特に気にしてはいない。大方俺に対して釘差しをしたかったのかもしれんが』

「達也がそうなるなら、俺も対象になりそうなものだが」

なお、兵庫から聞いた事象をそのまま京都にいる十三束翡翠にメールで伝えている。『伝統派』の和解によって京都・奈良方面で多大な影響力を有した神楽坂家――その現当主が態々メールで伝えたという時点で、翡翠の治った胃にまたダメージが入りそうな案件だ。

百目鬼については、十三束翡翠に加えて日本政府からの圧力を掛けてもらう。特に後者は政治的な〝仕分け〟によって、悠元から多大な恩恵を受けてしまった。なので、彼からのお願いを断ること自体が無礼ということで積極的に動いてくれている。

予め言っておくが、悠元がお願いをしたのは日本魔法協会への〝お願い〟であって、決してそれを実施しなかった時のペナルティは口に出していない。責任を負ってもらう翡翠に対しては暑中見舞いということで何かしら見繕っておくことも念頭に置きつつ、意識を達也の方へと向ける。

『各方面で多大な影響力を有してしまった悠元に口を出せば、百目鬼支部長の首が物理的に飛ぶだろうな』

「俺は何でもかんでもスプラッターな光景を作る気なんてないぞ。精々百目鬼を沖ノ鳥島に突き立ててやるぐらいだが」

『……そんなことを思いついて実行できるのは、お前を含めても数人しかいないんだが』

百目鬼がどうなるかなど知った事ではない。

そんな話は置いておいて、悠元は本題を切り出した。

「事前に暗号メールで送っておいたが、問題はなかったか？」
『ああ。正直、俺の方が悠元に聞かなければならない事ばかりだが』
「得意分野の差は仕方が無いと思うけどな」
　魔法工学の分野はまだしも、一般的な工業・工学分野の技術はほぼ悠元が担っている。軍艦や輸送機を設計・製造できる能力まで有しているわけだが、流石にどれも［太陽炉］の複製に比べれば些事になってしまう。
「それに、会社自体は俺が前面に出なくとも回るようにしてあるからな。俺が必ずやる仕事は最終決裁の認可ぐらいだよ。達也も婚約者たちとの時間が取れるように配慮はするから」
『……一番歓喜しそうなのは母上だろうが』
　感情を記憶化させられても、そこから感情を取り戻せないというわけではない。ただ、長い事誰しも真夜・深夜の姉妹をフォローしようと積極的に動こうとする者は殆どいなかった。その可能性があった剛三でさえも、復讐劇の心の傷で動ける状態に無かった。
　長い時間を経ての反動で漸く得た最愛の息子の為なら何でも平気でやりそうだからこそ、達也はその光景を想像した上で深い溜息を漏らした。
「自分からしたら、親友の母親を娶るも同然なことに溜息の一つでも出そうだが……まあ、もう諦めたから気にするな」
『そうか……真一から聞いた〝向こうの俺〟と別の意味で苦労する羽目になるとは思わなかったが』
「予想なんて出来たら、それはもう神の領域だよ」
　その真一だが、愛波と共に予定通り［夢想天成］でゲートを開き、元の世界に送り返す。問題は正確な時間を伝える触媒だったが、それは奇しくも［時空の道標（エターナルポース）］で解決する形となった。
　これを併用することで二人を異なる時間軸に送り返すことが出来る算段が整った。尤も、あくまでも計算上の範疇を抜け切れていないため、博打の要素があるのは否定できないが。
「それで九校戦の話だけど、８月１０日から実施の目途が付いた」
『思ったよりも早いな。新ソ連方面は大丈夫なのか？』

「ベゾブラゾフを喪い、コントラチェンコも亡命した状況でどうにかするようなら、今度は自分が戦略級魔法で吹き飛ばす」
『吹き飛ぶ前に攻めた痕跡すら残さないような気がするのだが』
ＵＳＮＡとは話が付き、大亜連合とは講和状態、そして新ソ連は国内が混乱の極み。日本にちょっかいを掛けられる大国が不在となった今、九校戦を再開催する算段が整ったことになる。
そして、会場となる旧富士演習場南東エリア――神坂グループ所有の『メイジアン・アクティブフィールドセンター』へと名称を変え、神坂グループが全面的にスポンサーとなり、魔法産業や財界からのスポンサーも募る形で魔法競技の研修センター兼競技会場の性質に特化させた。
設備もエリア買取に合わせて一新し、最新鋭の魔法技術を用いることでＦＬＴの価値を高める形に繋げている。尤も、基本的なサポートはトライローズ・エレクトロニクス傘下の子会社が担うこととなるが。
「まあ、それは否定しないが……にしても、ようやくまともな九校戦になりそうで安心できるよ。大概周公瑾絡みのせいでもあるわけだが」
『……言われてみれば、そうだな』
一昨年の九校戦は『無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）』の我儘のせいで危険な目に遭いそうになった（悠元は無傷で乗り越えたが）し、昨年の九校戦は［パラサイドール］のせいで余計な気苦労を背負う羽目となった。そのどちらも周公瑾が関与しているという事実を口にすると、達也が納得したように軽く頷いていた。
『ただ、お前と一条の因縁は三年連続のようだが』
「こっちとしてはいい加減にしてほしいんだがな。将輝も間違いなく個人戦に出て来るだろうから、ピラーズ・ブレイクとシールド・ダウンで叩き潰す」
『殺傷事にはするなよ？』
「流石にルールの範疇で収めるわ」
婚約者がいる手前、負ける気はない。ただ、勝ったら勝ったで押し掛けられる未来しか見えないというのは……男としては冥利に尽き

るのだが、何とも言えない気分だった。

◇　◇　◇

西暦２０９７年８月１日、ＵＳＮＡのジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領が来日。傍にはジェラルドとアニエスの姿に加えて、彼の親友であるエルドレッド・バラッド・〝フォーマルハウト〟中佐の姿がいた。

彼は父親であるバルクホルン・バラッドが軍に復帰したことを受けて、彼の推薦という形でダラスの研究所から引き抜かれて『スターズ』入りした。そんな彼もジェラルドと同じ目に遭っているのは……今更な話かもしれないが。

話をジョーリッジ方面に戻すが、彼は日本の現総理大臣に加えて上皇・天皇陛下との面会を許され、ＵＳＮＡの長として日本に対する非礼を謝罪した。横浜事変における有事対応の遅延行為のみならず、日本の戦略級魔法を排除しようとして軍事的な行為に踏み切っていた事実を明るみにし、改めて謝意と賠償の意思を示した。

だが、そんな彼の本題はこの国を真の意味で支配し得る立場にいる人間――悠元との会談にあった。

会談の場所は赤坂離宮の一室を借りての会談。悠元としては別にジョーリッジが泊まるホテルに出向くのでも良かったわけだが、ジョーリッジが謙った結果としての折衝案だった。悠元のほうはセリアと深雪に水波、達也とリーナを同行者として伴った。

ボディチェック自体は銃刀法に抵触するレベルのものが無いかぐらいのもので、ＣＡＤについては確認程度でしかなかった。相手に直接干渉する魔法を無力化してしまう大統領だからこその対応と思いつつ、部屋に入るとジョーリッジが立って出迎えてくれた。

「ロズウェル以来になりますな、ミスター神楽坂。今回の会談を快諾して頂き、感謝しております」

「お久しぶりです、大統領閣下。こちらとしても心中をお察しいたします」

「心遣いまで頂き、感謝に堪えませんな」

ジョーリッジは普通に日本語で喋っている為、悠元も無論日本語で

応対する。互いに握手を交わした後で同行者の自己紹介を行い、ジョーリッジは丁重にした上でそれぞれ握手を交わしていた。
達也は握手をした時点で大統領の特異体質を把握し、魔法が効かないからこその警備なのだと思った。現に、ＵＳＮＡ側はジョーリッジを除くとジェラルドにアニエス、そしてエルドレッドの三人しか連れていない。
自己紹介を終えたところで、テーブルを挟む形で席に着いた。そして切り出したのは悠元のほうだった。
「此度の訪問の意図は重々把握しています。既に軍艦や各種装備の引き渡しについては了承を得て進めております。今回の一件が済み次第、個人で保有している国債の半分を政府にお売りいたします」
「何と……いえ、其方の要求を呑むのは既に決定している為、異存はありません」
国債の保有を減らすのは単純明快で、変に頼られ過ぎて日本国内にいる時間を減らしたくないのが本音だった。原作よりも強化された人員が居るとはいえ、何かしらのトラブルが起きないとも言えない。
それに、経済的な手綱によってＵＳＮＡ国内で反乱分子を生み出す効果を逓減させる意味合いも含まれている。ただでさえ莫大な金を貰う以上、いくら大統領の申し送りがあろうともよからぬ感情を持ちうる人間が生じる可能性は決してゼロではない。
自身の特異魔法であちこち飛べるからと言っても、変に煽ったり敵を作るのは御免被る……という悠元の意思を感じ取り、ジョーリッジは苦笑を滲ませていた。
「いやはや、ミスター剛三やミズ千姫の規格外さは若い頃に何度も味わったが、ミスターはその薫陶を受けていらっしゃるようだ」
「大体爺さんや母上の無茶ぶりに付き合わされての結果ではございますが」
「それに付いていけただけでも十分凄いとしか言えぬのだがね」
ジョーリッジの話し方について一切言及するつもりはなかった。何せ、公的に見ればトライローズ・エレクトロニクスの理事長とはいえ、まだ十代の高校生の身分であることも事実。年齢で軽んじて若僧

と呼ばれても、それは事実なので何も言えない。
ただ、逆に歳を食っていると言われると、転生者という立場では地味に効くのも確かだが。
「話を戻しますが。［恒星炉］の技術提供についても、そちらの要求通りで段取りを進めます。流石に魔法技術そのものを教えることは出来ませんが」
「そこまで厚かましいことは言えません。何分、宇宙の上にあった遺産を片付けてくれた身としては、国を丸ごと差し上げても足りぬでしょうからな」
それは紛れもなく［セブンスプレイグ］や［アルカトラズ］のことだろう。確かに、その二つが地上へ落下して放射能汚染が起これば、最早国家予算が吹き飛ぶほどの損害と遺恨が残る。
人造レリック［マジストア］の製造方法は既に確立しているが、おいそれと広める気はない。軍事転用される可能性は残ったままだが、それが明るみになった時点で潰すことも厭わない。
「実は、こちらで選りすぐりの技術者を同行させております。ミスターが宜しければ直ぐにでも滞在させることは叶いますが、いかがでしょう？」
すると、ジョーリッジから出した提案に少し驚きを見せた。達也に視線を送ると、達也は『悠元に任せる』と言いたげな視線を送りつつも頷き、それを見た悠元はジョーリッジに視線を戻す。
「大丈夫です。既に滞在準備は整っておりますので。つきましては閣下にもご同行願いたいのですが」
「それは是非。何でしたら戦闘機でも構いません」
「……相変わらずですね、お祖父様は」
普通の国家元首なら絶対言わないであろう言葉を聞き、それに対して思わずリーナが呟いたことに、周囲の人からは笑みを漏らした人も少なくなかった。
◇　◇　◇
普通ならば、目立ってしまった側となる達也と悠元。とはいえ、九校戦の再開催が決まるとなれば、エンジニアと選手の要とも言える二

人でも外を出歩く必要が出てくる。ただ、政府の釘差しによって興味本位で取材を敢行しようとする輩はいなかったし、そもそも無意識で認識阻害を駆使する悠元を相手に取材できる方が極めて難しい。
ジョーリッジの巳焼島訪問は決まったものの、政府高官の会合などや外遊日程もある為、会談の二日後に訪問することで調整した。
「正直、国外の人間を相手にするより疲れる案件が待っているというのは……分かっていてもかったるい」
「悠元……」
悠元が達也や深雪、水波と一緒に登校しているのは九校戦の最終打ち合わせのため。普段なら学校も夏休みで最低限の人員しかいないが、九校戦の再開催が決まってからは教職員たちも余程の事情が無い限りは出勤している。
その背後に百山校長の職務命令があったという噂もあるが、真実のほどはあまり気にしていない。
「いや、達也たちに愚痴を言っても解決しないのは分かってるけどな。気を悪くしたのならすまない」
「気にしていない。日頃俺の方が散々世話になってるんだ。これぐらいは聞かないと貸しが死ぬまでに返し切れない」
「寧ろ、お前がどうやったら死ぬのかが一番気になる疑問なんだが」
達也からすれば、本来悠元がいなかった場合に背負うであろう気苦労を鑑みた時、自分の苦労を肩代わりしてくれた親友に感謝しかなかった。真一から聞いた〝達也と深雪が婚約した後の話〟を聞かされた時、自ずと将輝の間に何が起きるのかを想像できてしまった。
殆どの情動を消されても、深雪に対する情動だけは消されなかった。深雪を巡る問題となれば、いくら達也と言えども冷静に対処できるとは思えなかったからだ。流石に魔法を使って対処することにはならないと思うが。
「新ソ連方面が小康状態になったから、九校戦が出来るという訳で。連中からしたら憤慨ものだろうが、向こうの都合に付き合っている余裕なんてない」
「悠元さんからしたら、一条さんとの問題が最優先ですか」

「間違ってはないかな」
いずれにせよ、一度は中止した九校戦の開催ということで、生徒たちのやる気が復活している。それに伴って達也の問題――――元とはいえ［トーラス・シルバー］の参加――――も再浮上しかけたが、そこについては部活連会頭として他校の部活連に一喝した。
『誰かのせいで勝てないと泣き言を抜かすのならば、まともな魔法師になどなれる筈などない。死に物狂いで努力を積み重ねてから意見を述べて頂きたい』
別に物申す気など無かったが、将輝や真紅郎が許されて達也が許されない道理が不明すぎる。それこそ『四葉』の名を理由にするようならば、そのまま再中止にする算段もあった。ただ、ここまで進んでおいて社会的損失を考慮した場合、中止せずにそのまま進めることとした。
そんな四人の会話は、友人たちが合流したことによってお開きとなったのだった。

電光石火の如く

一高の校内は多くの生徒で賑わっていた。前々から九校戦の再開催は決まっていたものの、新ソ連方面の動向が注視されていたため、再び中止になるのではという危惧は少なからずあった。だが、日本政府が新ソ連方面に『その兆候は認められない』と公表したため、九校戦の開催はそのまま続行となった。

更に、これまで会場として使用していた富士演習場南東エリアは神坂グループが施設ごと買い上げた（実際には〝接収〟に近い形だが）ため、態々国防軍に対して機嫌を伺うような真似をする必要も無くなった。

流石に国防軍も将来の軍人魔法師を確保できなくなるのは困るため、『メイジアン・アクティブフィールドセンター』となった再整備計画に対して異論を唱える者はほぼ皆無だった。

「団体・個人戦の選手選定は提出した通りになるが、何か異論があれば遠慮なく言ってくれ」

「悠元さんが選んだのならば、問題ないと信じておりますので」

「深雪さんや……」

こんなやり取りが生徒会室であったものの、個人戦の追加による人員変更は最小限の混乱で済んでいた。学校側も九校戦となれば本腰を入れてくれるようで、出場選手及びスタッフには授業に対する便宜が図られることとなった。

達也については、出場競技の兼ね合いということで本戦モノリス・コードへの出場以外はエンジニア専念という理由で固辞した。流石に四葉直系かつ次期当主としての誇示は必要であったし、その裏では真夜が達也に我儘を述べたという事実もあったりする。

早速各々の練習に入るわけだが、悠元は競技の練習ではなく生徒会室のワークステーションと睨めっこしていた。すると、丁度戻って来た達也が悠元に声を掛ける。

「悠元、行き詰ってる感じか？」

「達也か。行き詰ってるというか、ルールの範疇でどうするかを考え

ていた」
何せ、これまでアイス・ピラーズ・ブレイクもしくはモノリス・コードに絞って考えたり、他の選手が出場する競技の補助程度だったものが、複数の競技に亘るのだ。当然、得意分野によっては複数の魔法を準備せねばならない。
今回は個人戦が初めての試みとなる為、実施競技はスピード・シューティング、クラウド・ボール、アイス・ピラーズ・ブレイクの三種目に絞られた。更に、男子の個人戦出場者が新人戦（1年）・本戦（2・3年）のモノリス・コードに、女子は新人戦・本戦のミラージ・バットへ出場するシステムとなった。その裏に何があったのかは語りたくないわけだが。
その点で言えば、悠元はこれまでの経験で全競技に対する経験点を得ており、他校の出場者よりもアドバンテージを有する。
「以前の達也のように制限されている範疇であれば、そこまで考える必要はなかった。ただ、今回は対外的な力の誇示も含むからな。面倒なものだが」
一度目は十師族・三矢家の人間として、二度目は護人・神楽坂家次期当主として……今年は師族会議議長として、その強さを見せなければならない。別に魔法をただ放つだけならば簡単な話だが、それで変に恐怖を煽るのも避けたい。
そして、日本政府に認められた魔法技能師としての強さを見せつけることで、対外的な力の誇示もせねばならない。
「他人事には聞こえないが、苦労を掛けるな」
「別に気にしてないよ。意趣返しを散々やっても二番煎じにしかならんから……一応プランは立てた」
そう呟く悠元が座るワークステーションには複数の起動式データが表示されていた。それを視ただけで理解できてしまう達也は、改めて悠元の規格外さに感心するような素振りを見せた。
「そういう訳で、ハード面のサポートはするけど、エンジニア方面は達也に任せることとなる。後で光宣も加えてモノリス・コードの打ち合わせもしておくか」

「そうだな。尤も、お前と光宣がいてくれたら俺はかなり楽できるが」
四葉家次期当主の達也、新たに興す九島家次期当主の光宣、そして神楽坂家現当主の悠元。いずれも並みならぬ苦労と努力を重ねて力を手にした者達。だからと言って偉ぶる気など毛頭もないが。

◇　◇　◇

２０９７年８月３日。ジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領を乗せたエアフォース・ワンは巳焼島空港（プラント建設に伴って国土交通省が空港の設営認可を出した）へ着陸。大統領と数人の魔法師の護衛に続く形で十数人の技術者らしき人物が空港に降り立った。
出迎えは悠元と深雪、水波にセリア、そしてＵＳＮＡ関係者ということでリーナが抜擢。その中の一人の女性技術者にリーナとセリアが気付いた。
「アビー!?」
「おや、リーナにセリアじゃないか。軍を抜けてから腑抜けては無いようだね」
「腑抜けるって……そういう性格でしたか？」
「言葉の綾だよ。特にリーナはね」
リーナはその女性に対して『アビー』という愛称を口にし、親しげに話している三人。すると、その女性は悠元の姿を見つけて近寄った。
「はじめまして、ミスター神楽坂。アビゲイル・ステューアットと申します。元とはいえ［トーラス・シルバー］の一角に出会えて光栄です」
「これはご丁寧に。師族会議議長・神楽坂悠元です」
アビゲイル・ステューアット――リーナとセリアの戦略級魔法［ヘビィ・メタル・バースト］と［ブリオネイク］を設計・開発した人物。そして、セリアから彼女が〝転生者〟という事実も聞かされている。
自己紹介を簡潔に済ませ、案内役として待機していた達也にジョーリッジたちを任せると、悠元はセリアと共にアビゲイルとの会談に臨んだ。三人にしたのは彼女がジョーリッジから折衝役を任されているのもあるが、彼女がどんな前世を歩んでいたのかを少し聞いておこ

うと思ったからだ。
　使用人によって茶菓子とコーヒーが置かれ、三人になったところでセリアが話を切り出した。
「いやー、久々だねアビー。漸く日本に来れた感想はどうかな？やっぱり前世でやり残したことは叶えられそう？」
「ちょ、ちょっとセリア!?　彼の前でその話は」
「心配しなくてもいい。俺もそういう人間だからな、アビゲイル」
「あー、成程。それと、私のことは『アビー』でいいよ」
　セリアが躊躇わずに前世の単語を出したことで動揺するアビゲイルだが、悠元が自らも転生者という事実を明かすと、アビゲイルは納得したように頷きつつ呼び方に関するお願いをした。向こうからそう望んだのであれば、断る理由もないと判断して悠元も頷く。
　そうしてアビーに前世のことを尋ねたわけなのだが、それを聞いて悠元とセリアが絶句していた。
「……セリア、そこまで聞いてなかったのか？」
「聞けるわけないじゃん。というか、私の知ってる『彼女』がオタク趣味だなんて知りもしなかったし」
「え、え？　あの、どうかしたんですか？」
　彼女から聞いた事のあらましの中に『付き合っていた人と別れて、その人の兄と最終的に結婚した』という文言が含まれていたため、それを耳にしたセリアが前世の名前に加えて結婚した相手の名前まで聞いた事で、アビーの前世が誰なのかを悟ってしまった。
「どう説明すればいいか……元々付き合っていた人の名前が『ゆうと』か？」
「え、は……ま、まさか」
「その本人が俺だ。で、コイツが妹と言えば分かるか？」
「は、はひ!?」
　アビゲイルも漸く事を理解したのか、驚愕していた。まさか元彼女が転生して技術者になっていたなんて誰しも思わないだろう。セリアが気付かなかったのは、彼女が隠れオタクだった事実を知らなかったからこそ、雰囲気こそ似ていても赤の他人だろうと判断していたか

らだった。
「今更寄りを戻そうとか、謝罪は必要ない。前世のことは前世のことだ。それで納得してくれるか？　というか、これ以上女性関係を複雑化させたくない」
「最後のが本音って訳ですか。そういえば、セリアも婚約者の一人でしたね」
「愛しのお兄ちゃんと結婚できるなら、国も立場も捨てた女です」
「胸を張って言う事じゃねえよ」
　悠元とセリアのやり取りを見て、前世の様子を思い出したのか……アビゲイルはクスッと笑みを漏らした。その上でアビゲイルは自身の前世の締めくくりが老衰で亡くなったことも述べた。
「兄貴は満足して逝ったか……なあ、セリア」
「多分、どっかに転生してまた気苦労を背負う気がするね。アビーはまた兄貴と結婚したい？」
「流石に女性関係はお腹一杯だよ。一応婚約者はいたんだけどね……」
　聞くところによると、相手は『スターズ』の魔法師だったのだが、パラサイト事件によって処刑されてしまったらしい。その名前がアルフレッド・フォーマルハウトと聞いた悠元とセリアは顔を見合わせた。
「その彼だが、何の因果か生き返ってるぞ」
「生き返ってる⁉　今どこにいるの⁉」
「確か、今日はこの島の地下訓練場で合同訓練に参加してる予定だった筈。確認してみる」
　悠元が端末を取り出してスケジュールを確認すると、フォーマルハウトは巳焼島へ訓練の為に出向いていた。それを聞いたアビゲイルは悠元に詰め寄った。
「会いたい！　今すぐ会わせて！」
「分かった、分かった。とりあえず滞在についての交渉は終わってるし、案内する」
　そうして三人が地下訓練場に出向くと、十数人の魔法師が汗を流し

ていた。その中のフォーマルハウトの姿を見たアビゲイルは一目散にダッシュした。それに気付いたフォーマルハウトは何かに怯えるような表情を見せながら逃げ出し、アビゲイルが猛追していった。
「待て、フレディ！　今日こそは押し倒す!!」
「来るなあああ!!」
　二人の叫びが木霊しながら訓練場から消えてく様子を悠元とセリアは見送っていた。
「……彼女が一途なのは変わらずか」
「いや、前の場合はお兄ちゃんを振ってるじゃん」
「あれは兄貴が悪いし、俺に魅力が無かっただけだ」
　それに、前世のことは『もう終わった事』であり、それを気にすると却ってストレスを蓄積しそうな気がする為、悠元はあまり触れるつもりも無かった。
「彼女が彼とくっつけば、俺が気にする必要も無くなるからな。２１人なんてお腹一杯どころか食傷気味だよ」
「でも、全員を奴隷にしちゃあだだだだっ!?」
「妻や使用人を奴隷にする輩なんて、ただの鬼畜野郎でしかねえよ」
　なお、婚約者組の被独占欲が日に日に強まっていて、上限が見えてこない恐ろしさを感じているのは……ここだけの話にしておこうと思う。
「それに、フォーマルハウトが捌け口になってくれるというなら、それを拒否する権利なんて俺にはないからな」
「分かったから、とめてええ!!」
　尚、セリアが悲鳴を上げても止めようとする魔法師は誰一人として居なかったのだった。

◇　◇　◇

　予定通りＵＳＮＡからの技術者は巳焼島の宿泊施設で寝泊まりしながら［恒星炉］の技術供与を受ける。ただ、アビゲイルについてはその辺を全て他のメンバーに放り投げて、アルフレッドとのデートに費やしていた。
　アビゲイルから必死に逃げていたのは初日だけで、あとは観念した

ようにアビゲイルと一緒に居る様子が見られた。一晩で何かあったのかは言うまでもないが。
九校戦の準備自体も既に整っている為、あとは各々の選手が競技に向けて練習を重ねる中……時は経って8月6日、火曜日。早朝とも言える時間だが、悠元は『星見』からの緊急連絡――――伝書鳩を象った[精霊]を用いての念話によるメッセージ――――を受け取り、事情を尋ねるために九重寺へと赴いた。
昨晩は珍しく滝のような雨が都内に降ったためか、山門へと続く階段は水で濡れていた。そして山門の前には軽く手を振る八雲の姿があった。
「九重先生、珍しいことも有ったものですね。何かありましたか？」
「何かあったからこそ、彼らに連絡をお願いしたんだよ」
立ち話もそこそこに、庫裏へと通された。門下生が粗茶の入った湯呑を差し出してから下がった後、八雲は人除けの結界を庫裏の区画に張り巡らせた。その上で頭を掻いていた。
「まず、事の発端は東道殿が昨晩遅くに尋ねてきてね。彼には珍しくずぶ濡れの状態だったから、魔法で乾かしてから事情を聞いてみたんだよ」
「東道殿が？」
遡ること昨晩遅く。八雲はそろそろ山門を閉めようと思ったところで、階段を少し早い足取りで近付いて来る気配に気づいた。普通の視界では雨で見づらかったが、八雲は相手の気配を見て流石に驚いたと話す。
いくら古式の術者でもずぶ濡れのままでは風邪を引きかねないため、魔法で乾くのを待ってから話を聞いたそうだ。
『それで、東道殿。態々お越しになった理由をお尋ねしたいのですが』
『よく聞くがいい、八雲。樫和主鷹が亡くなった。死因は落雷による感電死だ』
『……はあ？』
『その反応も分かる。一番最初に応対した儂でも驚いたからな』
樫和主鷹に家族はいても、現在は一人暮らしの身。元老院四大老の

立場であっても、流石に使用人ぐらいはいるものの、幸か不幸か誰も在宅していなかった。
「事情を聞くと、庭先にいたところをピンポイントで落雷の被害に遭ったらしい。家屋の柱が多少焦げたりはしたようだけど、家屋の火災に至るまでではなかったようだ」
「……罰が当たった、ということなのでしょうかね」
「こればかりは僕も『運が悪かった』としか表現できなかったからね。剛三殿ならやりかねない所業だけれど」
　確かに、剛三なら出来なくはないが『やる意味がない』と吐き捨てるだろう。悠元も可能なラインだが、それはあくまでも樫和に社会的責任を全うしてからの話にするつもりだった。となると、これは〝天災〟……天神様の怒りが落ちたとみるのが一番妥当だと判断した。
「爺さんがやるとするなら『死ぬまで扱き使われるか、大人しく死ぬか』を突き付けてからでしょうね。先代の東道は身内を殺したからこそ問答無用でしたが」
「それは納得できる話だね。で、問題は空席となった四大老の一角だけど、予定通り〝彼女〟を宛がってもいいのかい？」
「本人には了承を貰えています。エリカ自身、千葉の家には殆ど未練がないですから」
　普通ならば樫和家の誰かが継ぐことになるわけだが、四大老の後継者となる樫和家現当主は今回の事態を聞いて『四大老の座を退く』と東道家に通達。そこから上泉家と神楽坂家にも辞退の経緯を聞くことになるが、自主的な辞任ならば咎める理由も無くなった。
　いずれにせよ、元老院四大老は神楽坂、上泉、東道、そして香取が加わる。九校戦が終わり次第エリカの籍は母方の実家である鹿取家を通して香取本家の養子となり、武蔵香取家の当主となることまで決まっている。
　元老たちが騒ぐことになるだろうが、九校戦前の一仕事で黙らせることは確定事項だ。
「そういうことですので、根回しの件はお任せします。自分が関わると贔屓に見られかねませんので」

「了解したよ。そうそう、達也君とリーナ君に『僕を負かすぐらい本気で掛かって来なさい』と伝えておいてくれ」
「その程度でしたらお安い御用です」
余談だが、流石のリーナでも九重寺での鍛錬は厳しく、それを涼し気な表情でこなしている達也に嫉妬して、最終的には達也を誘惑して押し倒される羽目になったそうだ。
そして、それを目撃した達也の婚約者たちの歯止めがどうなったのかは……ピクシーから『達也様のお子さんたちをお世話するのが楽しみです』というメッセージを送られたことで察した。

高校最後の九校戦準備

この国には、『元老院(げんろういん)』と呼ばれる非公式の権力組織が存在する。またの名を『玄老院』。

１９世紀、大日本帝国議会開設前に『元老院』と同名の立法機関が存在したが、現代の元老院はその後継機関ではない。憲法外機関だった『元老』とも無関係だ。ただ、法の内外から国を操っている面で言えば〝似ている〟と評されるかもしれないが。

元老院では『四大老』と呼ばれる四人が特に強い権力を有している。政治勢力の裏側に詳しい人間からすれば、元老院と四大老をイコールで考える人間は決して少なくない。だが四大老だけでなく、元老員――元老院の構成員――たちも「政界の黒幕」と呼ばれるに足る、隠然たる権力を有する者達だった。

元老院は『院』という名前こそついているが、定期的に開催される会議は一切存在しない。そもそも何かを決議することが無かった（問題があれば剛三や千姫が解決していた）ため、会議が無くても別に不思議ではない。

政界の重鎮や彼らに近い権力を有する人間にのみ知らされた組織の為、制度化された組織ではない。労働組合や政党などのように意思を一本化して何かに取り組む意義も無い。似たような立場にある者たちの懇親会、もしくは意見交換会の意味合いが強い。

８月６日の夜、某所で持たれた会合も元老院の全員に通知されて開催されたものではなかった。それどころか半数も参加していない。元老院の中でも親しい者達の小規模な宴会――ただし、酒も肴も超高級品――だった。

「……さて、そろそろ本題に入りましょう」

「今朝方亡くなられた樫和殿のことですな？」

この会合の中で最年長者が切り出し、対面に座る老人が応じた。

「しかも、樫和家は四大老の座を退くとも聞きました」

「空いた椅子を他の四大老の方々が座視するとは思えませぬが、これはこれで好機ではないかと」

元老員は過半数が五十代後半以上の老人で占めている。中年の男性や熟年の女性もいるが、青年や少女は二十代で四大老の座を継いだ神楽坂千姫以外存在していなかった……今年の冬までは。

四大老は大幅に代替わりが起き、今年の春に神楽坂・上泉の二家が現当主に四大老の座を譲渡。東道家は直系の子女はいるものの、婿養子入りする娘婿との折り合いの為、高校卒業後を目途に四大老の座を譲渡する。

一気に四大老の年齢構成が刷新されるため、樫和家が降りた椅子を狙おうとする輩が居ても何ら不思議ではない……ただ、その席が『先約有(よやくずみ)』という事実など知る由もないが。

参会者が次々と発言する中、無礼とも取れる発言が一人の老人から飛び出した。

「――よくもまあ、べらべらと都合の良い事を言えるものだ。権力以外何も持たぬ先の短い老人たちが」

「言い方を慎みたまえ。今なら謝罪で済ませるが」

「これは失礼した。この姿で喋っても意味が無かったな」

最年長者の窘めに一応謝辞を述べつつも、老人は顔の前に自らの右手を翳した。すると、老人の姿は少年の姿へと早変わりし、参会者一同を驚かせた。何せ、そこにいたのは元老院四大老の一角――神楽坂家当主・神楽坂悠元その人だったからだ。

最年長者は驚きつつも、恐る恐る言葉を呟く。

「こ、これは神楽坂殿。参会者の老人は如何なされました？」

「ご心配なく。彼なら家でのんびりしておる……さて、私が出向いた理由は至極単純。貴方方の存在はこれからの日本の未来に阻害を来す。なので、引退して頂きたい」

正直な話、日本が抱えられる人口のキャパシティなどたかが知れている。そうなれば魔法師の許容上限が生じるのは言うに及ばずだ。この先、現代魔法の発展によって魔法技能師の割合が増えていくことは恐らく避けられない。

いくら国を護るためとはいえ、自らの手を汚さずに配下の手を汚させる――それは最早〝独裁者〟の考え方にも近いだろう。

「魔法師は貴方方の手駒ではない。優秀な者を引き抜いて、劣る者を徹底的に排除する。競争原理に則れば理屈は通るが、そんなことを続ければ衰退の一途を辿るだけだ」
「では、神楽坂殿はそれを覆す術があるということでしょうか？」
「『既に実行している』という表現が妥当だと思っていただこう」
悠元自身がある意味〝劣等生〟だったからこそ、魔法資質保有者の底上げを行うために魔法教育や魔法医療教育にも口を出したし、一高の二科生にも梃入れをした。
「裏の組織であるが故、元老院に何かを決める権限はない。ならば、いくら表の秩序を守ることは許容したとしても、日本の国家の舵取りを決める権限など有してはいけない――――それが元老院の貫くべき道理だ」
師族会議議長として師族会議に対する影響を及ぼしたり、国防軍大将として国防軍に貢献することがあったり、［トーラス・シルバー］としての功績は有ろうとも、それらの功績が横に渡って影響を及ぼさないように苦心していた。
総理大臣との会合でも、命令の類に準ずる要請はしていない。いくら皇族に次ぐ権力を有しているとしても、変に乱発させて混乱を招く方が秩序を守るという目的からかけ離れてしまう。
「……」
「伝えるべきことは伝えた。どうされるかは各々ご自身で判断されるがよかろう。酒は飲めぬが、肴は馳走になった」
そう言い残して悠元は立ち上がると、その場に光の嵐が巻き起こる。たった数秒ののち、悠元の姿は完全に消えていた。
残された元老員たちは誰も言葉を発することが出来ず、漸く言葉を発するようになったのはこの３０分後のことであった。
◇　◇　◇
２０９７年８月８日、木曜日。
今年が最後となる九校戦。来年からは新規開設校の三校が加わり、十二校による総校戦へと名称が変わる。競技内容自体が劇的に変わるわけではないが、魔法競技の練習試合で既に頭角を現している三校

に対して早くも警戒を示している学校も少なくない。
尤も、今年が最後となる三年生組からすれば、そこまで警戒する人間はあまりいなかったりする。その一人である悠元はバスの座席で眠っていた。
「……ぐっすり寝てるね」
「最近忙しかったようですから」
深雪は詳細を聞かされていないが、悠元が二日前に九重寺を訪れた後は学校へ行かず、部活連幹部に仕事の差配をメールした後、各地を飛び回っていたことだけは知っていた。
樫和主鷹の急死により、その支持基盤を根こそぎ掌握した後で香取家へ譲渡。後はエリカへ四大老の座を継がせることで元老院の体制を整える手筈は整った。ここまで自分がやるべき仕事は終えたので、あとは全て放り投げた。
元老たちの〝刷新〟は千姫が引き受けてくれた。曰く『私や義兄が揃って身を引いたというのに、少し若いからと言って椅子にしがみ続けるのはみっともない』と話していた。それこそ二十代から四大老の椅子に座っていた千姫だからこそ、元老たちの怠慢は看過できないと見たのだろう。
秩序を守るには相応の力が求められてしまう。それは創作物に限った話ではなく、古今東西において確固たる支持基盤を有する人間が強大な力を有するのは自明の理である。それを頂点にいる人間が望むか否かに関わらず。
「深雪も知らないの？」
「『時が来れば必ず教える』と言われましたから、無理に聞こうとは思いませんでしたので」
「そ、そうなんだ……」
四葉の人間でも弁えるべき一線の存在は理解している。婚約序列筆頭とはいえ、まだ神楽坂の人間でないからこそ深雪は必要以上の追及をしなかった。深雪の言葉に事の深刻さを垣間見たのか、ほのかは躊躇いがちに言葉を返した。
すると、眠っていた悠元が目を覚ました。

「ん……すまん、寝てしまってた」
「いえ、いいのですよ。もう少しでホテルに着くところです。欲を言えば、到着まで寝ていて欲しかったですが」
「それは当然の権利」
「二人とも、欲が駄々洩れすぎるよ」
　起きた悠元に対する二人の言動が余りにも欲塗れだと反射的にツッコミを入れてしまうほのか。すると、後ろの座席から話しかけてくる輩がいた。
「そうそう、お兄ちゃんはもっと甘えていいと思うのですよ。てなわけでカモン！」
「公衆の面前という状況でやるかバカ」
「のおおおう!?」
「……学習しなさいよ」
　悠元の後ろに座るセリアが揶揄ったので、悠元が［ファランクス］で疑似アイアンクローをお見舞いし、それをセリアの隣に座るリーナが溜息交じりに呟いた。周りに人もいるため、お仕置きは1分程度に収められた。
「でもまあ、『龍』絡みとか『霊』絡みとかを考えなくて済むのは正直有難いけどな」
「普通は私たちが考える事じゃないんだけどね」
　悠元の婚約者や近しい人間には、一昨年と昨年の九校戦に関する情報を既に教えている。結局は組織どころか唆した人物や黒幕まで滅んでいるため、『報復が既に成立しているので復讐をする必要がない』こともきちんと伝えている。
　まあ、周公瑾の場合は仮初の肉体どころか精神まで滅んでいる為、復活する可能性はゼロに等しい。
「そういえば、作戦関連は何もタッチしないの？」
「妨害無しとなれば、ほぼ正攻法で問題ないと踏んだ」
　今年の九校戦は、来年からのことも見越して現2年を中心に作戦を立案させている。
　ぶっちゃけ、各々実力がインフレしていて某漫画のような瞬間移動

バトルが繰り広げられてもおかしくない次元にいる人間が１０人前後いる（大半が現３年）ため、３年に偏らせるのではなく、１・２年のメンバーも積極的に入れる形を取っている。
　特に今年は新団体競技としてマギテクス・ボールも加わる為、各競技の出場選手はマギテクス・ボールとの掛け持ちとなる場合もある。こちらは元々の競技が１チーム五人で構成されるため、男女別で実施される。
「ＣＡＤの製作は知り合いに頼んだけど、張り切り過ぎて翌日納品は流石に苦笑したわ。朝方にメールしたとはいえ、早すぎるでしょ」
「設計は悠元がやったんだ？」
「元とはいえ［トーラス・シルバー］であることは明かしたからな。でも、基本は個人戦に集中したいし、エンジニアも詩奈と侍郎しか担当しないし」
　一高の全選手が使用する九校戦競技用のＣＡＤ設計は悠元が担当し、プログラムは達也が組み上げた。更に、達也は昨年以前と同様に３年女子の調整と作戦立案を担当し、悠元は個人戦の負担を考慮して新人戦に出場する詩奈と侍郎の調整と作戦参謀を担当する。
　悠元がこの二人を担当する理由は単純なもので、二人の実力が１年生の中で際立ってしまっている実情があるためだ。
「使う魔法も決めた。テーマは『今までの総決算』という形でいく」
「あの、どの魔法を使える悠元さんがそれを言っても見当がつかないのですが……」
「ネタバレしても面白くないからな」
　別にここで話しても問題はない訳だが、誰かが盗み聞きしている可能性は……ゼロではない。誰かが話している所を聞いて他校に漏れるパターンだってあり得なくはないのだから。
「達也には調整の関係上、事前に全て話している。その時の反応は『埒外の天才』だった……俺からしたら、達也が天才の類だよ」
「それはそう思う。悠元は寧ろジゴロ」
「無理矢理定着させようとしないの、雫さんや」
　競技会場のメイジアン・アクティブフィールドセンターへ走ってい

くバスと数台の車両は、問題なく会場エリアへ入っていったのだった。

◇　◇　◇

旧富士演習場南東エリア改めメイジアン・アクティブフィールドセンター。『魔法資質保有者を対象にした魔法力向上のための総合トレーニング施設』を主題として掲げており、土地自体は神坂グループ所有の社有地で、施設・設備は神坂グループや白河グループの他、ホクザングループなどの国内財閥グループやＦＬＴなどといった魔法産業企業も参画している。

尚、公的な管理会社はトライローズ・エレクトロニクス傘下のステラデバイステクノロジーが管理・運営を担っている。

外国将校向けのホテル――――施設利用者向けの宿舎については、これまで通り荷物の搬入出を自分たちでやらなければならないことは変わりない。これは九校戦の出場選手に限っており、一般・ＶＩＰの宿泊客に対しては荷物運搬サービスが適応される。

これまではエンジニアである達也が先行する形だったが、今年は個人戦もある為に悠元と深雪も同行する格好となった。達也の部屋に着くと、三人で手分けして準備を整えた。

「思ったよりも速く済んだな。これだと俺が出る幕は無かったか」

「いや、ハードの接続を躊躇いなく実施して一発で起動させられた時点で悠元の功績だろう」

「私から言わせれば、お二人が異常なだけです」

「……フッ」

謙虚がちに皮肉る悠元、悠元の功績だと述べる達也、そして二人纏めて『おかしい』と評した深雪。こんなやり取りは悠元が司波家に居候してから幾度もあった遣り取りであり、これには思わず達也から笑みが漏れた。

「それよりも、個人戦の打ち合わせを済ませよう。二人もいいか？」

「ああ」

「はい」

今年から導入された個人戦。作戦全てを達也が考えるのはオー

バーワークとなる為、各学年の男女と同学年のエンジニアが担当することで今年は様子を見ることとなった。なので、学校でもツートップの二人を任せられるのは自ずと達也の役割になった。
「後半の二種目については、特に変更はしない。深雪の魔法については手持ちで十分行けるという判断だ。悠元については……やり過ぎない程度にしてくれ」
「罷り間違ってもダイレクトアタックする気はねえよ」
個人戦４種目の内、ピラーズ・ブレイクと男子モノリス・コード、女子ミラージ・バットについては各々出場経験がある為、戦略面に大幅な変更点はない。ただ、深雪が［誓約］の完全解除によって魔法力を十全に扱えるため、出場選手の中でも頭一つ以上抜けている形となる。
一方、悠元のほうは出力を絞らないと大惨事になる為、形式上の釘差しを行った。
「それで納得しておく。残るはスピード・シューティングとクラウド・ボールのほうだが……いけそうか？」
「はい。二木先輩から『それは反則でしょ』と言われるぐらいのお墨付きを貰いましたので」
「俺は映像で見せてもらったが、ルールに反していないからこそ強いんだよな」
悠元はスピード・シューティングを佳奈に、クラウド・ボールを美嘉に見てもらう形で調整を行った。深雪の場合は２種目の経験がある真由美が調整の相手を務めた。調整の負担分散という面はあるが、実力面を考慮しての分け方という側面もある。
「悠元さんの方は、お姉さん方から駄々をこねられていましたが」
「主に美嘉姉さんのほうだけどな」
調整についてはエンジニアの観点で達也も様子を見ていたが、不安と思える要素は限りなくないに等しかった。三高の［カーディナル・ジョージ］がいくつか作戦を立ててくるだろうが、制限を解除した今の達也以上に魔法を工夫できる人物がいるため、そこについても不安視はしていない。

「お兄様の方から何か不安要素があれば、是非仰ってください」
「……いや、特に不安はないな。強いて挙げるとすれば、悠元が怒って将輝にダイレクトアタックを仕掛けないかどうかぐらいだな」
「あのな、達也。俺でもルールに反する行動は慎むわ」
「ふふっ……」
これまで明確なルール違反をしたことがない悠元だからこそ、冗談だと分かる達也の言葉に対して悠元は溜息交じりに返答し、そのやり取りを聞いた深雪は笑みを漏らしたのだった。

懇親会の挨拶回り

九校戦懇親会。九校の出場選手やスタッフが一堂に会しての立食パーティーだが、親睦を深める意味よりも〝鞘当て〟の側面が強い。悠元は一高の部活連会頭として深雪や幹比古と共に他校への挨拶を行った。

挨拶回りの順序は身内に生徒会長経験者がいるため、聞いた事項に留意しながら他校との挨拶を済ませていく。そして、一番最後に三高の三役と対面する。

三高の部活連会頭は悠元が一番知っているが、風紀委員長は委員会同士で連絡を取ることが少ないために面識がゼロ。そして、生徒会長の一色愛梨が挨拶をする。

「これは一高の方々。色々含むところはありますが、真剣勝負させていただきます。特に司波生徒会長、今年は一騎打ちですね」

「……ええ。ですが、負けるつもりなどないことは御承知おきください」

悠元との関わりで愛梨も強くなっている。あの言い方からするに、愛梨も個人戦で出場するということなのだろう。すると、三高の集団の中に居てもおかしくないであろう将輝はおろか真紅郎の姿がないことに気付く。

「一色生徒会長。悪目立ちしそうな男子二人はどうしたんだ？」

「あー、沓子から聞いた話では、将輝が真紅郎を捕まえて明後日からの戦いのプランに備えるみたいでして。やる気になっているのを削ぐのも面倒だと思って無視しました」

愛梨の言葉に、両隣にいる会頭と風紀委員長が苦笑を浮かべており、深雪や幹比古も将輝のことを知っているので、思わず苦笑が漏れてしまっていた。そういう事情ならば無理に呼び出す必要も無いと思い、悠元は愛梨に改めて視線を向けた。

「一条に会えたら伝えておいてくれ。泣いても笑っても最後だ。その結果ですら駄々をこねるのは十師族の存在意義に泥を塗る行為だと知れ、とな」

「（どうあっても初めから勝ち負けがついている勝負ですけれど……）分かりました、神楽坂会頭。一言一句違うことなくお伝えしておきますわ」
仮にこの勝負で将輝が勝ったとしても、逆に深雪が駄々をこねて余計に悠元への依存が高まるだけなのではないか……と愛梨は内心で思いつつも、悠元の伝言を受け取った。
挨拶回りを終えて悠元たちは一高の集団がいるテーブルに戻ったのだが、深雪は悠元へ食べ物をよそったりしつつ、悠元の傍を離れようとしなかった。二人の関係は一高の人間なら誰もが知っていることなので、余計な飛び火が来ないように突かない選択を取るものが多かった。
そうなると、結局テーブルに集まるのが悠元や達也をはじめとした友人グループとなるのは無理からぬことだった。
「別にそこまで噛み付くつもりもないのに、逆に距離を取られるのが癪に障るわ。まあ、別にいいけど」
「悠元からしたら、そう言っても無理ないわね」
この会場には将輝や真紅郎と言う否応にも目立つ存在がいない。そうなると、［トーラス・シルバー］で世間を賑わす形となった悠元はおろか、同じ立場だった達也にも興味本位の視線が向けられるのは想像に難くない。
事実、他のテーブルにいる他校の生徒から視線を感じる始末であった。
「［トーラス・シルバー］絡みは部活連会頭として一喝したからな。そもそも、ＣＡＤのお陰で勝てるというのならば、ほぼ自力で勝っている奴らに同じことを言えるのか、という話になる」
「ほのかがいい例だね」
「わ、私は達也さんの作戦のお陰だし……」
ＣＡＤはあくまでも魔法師の補助演算を担うものであり、それ自体が勝負の結果に直結しているわけではない。起動式・魔法式の創意工夫に加え、魔法師自身の合理的な演算方法、それらを支えられるだけの魔法師自身の肉体的・精神的資本。この三つが勝敗に大きく直結し

ている。
　尤も、それを高校生の段階でハッキリと認識できている人間がどれほどいるかは未知数のレベルになってしまうが。
「仮にそうだとしても、最後まで諦めなかったのはほのか自身の意思じゃない。ま、あれだけの根性があればああなっちゃうのも無理はないけど」
「エリカ、あまり突いてあげない方がいいかと思うよ」
　エリカが突いたのは［ピクシー］に関する部分であり、それを察したほのかは「わ、私お手洗いに行ってくるね！」と赤面しながら駆け出し、それを見た雫と深雪が付いていく形でほのかの後を追った。
　それを見送った悠元の傍にセリアが近付いてきた。
「しっかし、変に目立つのは仕方が無いと思うけど、お姉ちゃんが心配に思えてくるのですよ」
「あのね、セリア。いくら私でもルールの範疇ぐらいは守れるわよ」
　原作に無いリーナの九校戦参加。尤も、国防軍にリーナの素性が元［十三使徒］アンジー・シリウスという事実は伝えていない。九島烈の縁戚という事実は知られている為、その関連の釘差しは既に終えている。
「本当？　この前の料理も危うく魔法を使おうとしたくせに」
「そ、それは言わないでって！」
「……達也も苦労していますね」
「悠元に比べれば楽だろうがな」
　懇親会のステージでは来賓の挨拶が進んでおり、魔法産業界や魔法師社会でも著名の方々が壇上に立っては挨拶していく。そして、来賓の一人として九島烈がステージの上に立った。流石に一昨年のような試しはせず、高齢とは思えぬ足取りでマイクの前に立つ。
『まず、昨年の九校戦では都合により挨拶が出来なかった事を詫びよう。若き魔法師たちに私のような〝時代遅れ〟の老人が通用するかどうか分からぬが、一つの言葉を送ろうと思う。それは、「使い方を誤った大魔法は使い方を工夫した小魔法に劣る」ことだ』
　それは、一昨年の九校戦でも口にした言葉。それに聞き覚えのある

各校の3年生徒は驚くような素振りを見せていた。それを視線で追った後、烈は言葉を続ける。
『今の3年生には聞き覚えがあるだろう。そう、私が一昨年にこの場で同じ言葉を投げかけた。いかに優れた魔法があろうとも、いかに優れたツールを使っても、それで勝敗が全て決するわけではない。最後に勝負を決めるのは、ここにいる選手の意思とスタッフたちの意思が噛み合った時だと私は思っている。私はその創意工夫を期待させて頂く』
烈が言いたいことを終え、会釈をして退場していく。その姿に会場から拍手が贈られた。色々罪は有れども功績が大きい一端を示した形となり、これには選手として会場にいる光宣も嬉しそうに見ていた。
そして、魔法師社会の著名人となれば当然悠元も無関係ではない。
『最後に、師族会議議長・神楽坂悠元様』
司会のアナウンスで会場が騒めく。烈の挨拶の前に戻ってきていた深雪や雫に「行ってくる」と告げると、返事を待つことなくそのまま歩き出し、数歩歩いたところで飛び上がった。
そのままステージの上に立ったまま着地すると、マイクの前で会釈をしてからマイクを手に取った上で話し始める。
『ご紹介に与りました、第一高校部活連会頭ならびに師族会議議長・神楽坂悠元です。まずは昨今の世界情勢に関わらず九校戦が再開催へ至ったことは喜ばしいことです……では、ここから色々言わせていただきますが』
わずか十代で日本魔法界のトップに立った人間。しかも、元十師族・三矢家直系という事実は現3年生世代なら知られている事実。その彼が一体何を言うのかと他校の生徒の注目が集まる。
その視線を感じつつも、悠元は話を続ける。
『再開催が決まる前、我が第一高校の出場に関する賛否――――主に解散された［トーラス・シルバー］に関しての事象が多かった。言い方は悪くなるが、仮に出場していなかった場合は「所詮その程度のレベルでしかない」と自分たちが認めてしまっていたことになる、と気付

いていたのか？』

世界的に名を知られた三高の［クリムゾン・プリンス］や［カーディナル・ジョージ］という前例が認められているのに、同じく世界的に知られた［トーラス・シルバー］を認めない時点で九校戦のレベルを〝著しく下げる〟事に繋がりかねない。ひいては出場する選手が相手に［トーラス・シルバー］がいるだけで勝てない時点で、選手のレベル上限が〝視えてしまう〟ことにも繋がる。

確かに、勝利の裏側に［トーラス・シルバー］が貢献しているのは事実だが、いくらお膳立てしても最後に物を言うのは選手自身の力量と確固たる意志、そしてエンジニアを信じ切れる勇気。それらがすべて噛み合った人間は順当に成績を残しているだけ。

『一昨年、私の祖父にあたる上泉剛三はこの場でこう述べた。「最後に勝つことが出来る者は、最後まで諦めなかった人間」と。それは我が第一高校の選手たちも例外ではない。口を出す暇があるのならば、一つでも多く努力すべきだと思うのが賢明な判断である――と、九校の部活連会議でも述べさせてもらった』

一昨年の新人戦アイス・ピラーズ・ブレイク優勝と新人戦モノリス・コード優勝、昨年のピラーズ・ブレイク男子ソロ優勝とスティープルチェース・クロスカントリー男子優勝。誰も文句がつけられない成績を残す人間の言葉に、会場は静まり返っていた。

『今年は魔法科高校九校で行う最後の九校戦。ここにいる選手全員が悔いの残らない戦いを切に望む』

言いたいことを言い終えると、マイクをスタンドに戻してステージ横に退場していく。会場に声が戻ったのは、悠元が一高の集団がいるテーブルに戻ってからであった。

◇　◇　◇

懇親会後、私服に着替えた面々は一高の作業車に集まっていた。1年メンバーとなる詩奈と侍郎は話程度に聞いていたものの、キャンピングカータイプの作業車には目を白黒させるほどだった。

「にしても、随分ハッキリ言っちゃったわね」

「あれぐらい言っても尚文句を言うのなら、俺には関与できん範疇の

問題となる。それこそ強力な陣容を擁する三高ですら文句を言ってたらしいからな」
　大体、［トーラス・シルバー］云々で文句を言うのであれば、それこそ歴代の一高メンバーに対して同様の発言が出ていてもおかしくはないし、三高の［カーディナル・ジョージ］こと吉祥寺真紅郎が選手兼作戦参謀を務めていることだって他校からすれば槍玉に挙げられる案件になってしまう。
「三高の連中もか……まあ、達也は何だかんだ強いからな」
「レオ、俺はこれでも普通の魔法師には負けるんだが」
「そうやって弱さを認められるのが達也の強みだと思いますけど」
　保持している魔法のせいで誰よりも強さと鋼の精神を求められたからこそ、今の達也がある。その事情全てを明るみにすることは出来ないが、達也の周囲にいる人間はその背景を多少なりとも把握している。
「しかも、『棄権しろ』とか宣った奴らもいたから、部活連合同会議で『文句を言うようなら九校戦に出てもらわない方が賢明な判断だ』とハッキリ言ってやった。そのついでに国立魔法大学学長にも話を通しておいた」
　別に脅迫はせず、ただ『同調圧力で一校に出場を辞退させるような事態を国立教育機関たる魔法大学は許容されるのでしょうか？』と質問を投げかけたに過ぎない。それを送ったのは［トーラス・シルバー］の解散直後だったこともあって、対応はすさまじく早かった。
　大学側としても入学の確約を取り付けたところで辞退なんかされれば、魔法界からの信頼が地に落ちかねない。なので、魔法科高校各校に対して九校戦の再開催の支障となるような誹謗中傷の流布を禁じた。
「2年連続で種目優勝している悠元に物を言える人間なんて、そうそういないからね。僕ですらも少し恐縮しちゃうよ」
「俺は別に幼馴染や友人相手に高圧な態度を取る気なんてないんだが」
「嘘ですらも現実にしちゃう悠元はジゴロ」

「やめて」
競技は明後日からで、それにしても『リラックスし過ぎている』と言われれば否定できない。既に準備が整っている中でこれ以上何をすればいいのかと言えば、精々最終調整と作戦の確認ぐらいしかない。
「言うまでもないだろうが、個人戦に入ると俺はほぼ団体戦の面倒が見れなくなる。なので、采配に関しては七宝に放り投げたから、部活連メンバーは必要な時だけフォローしてやってくれ」
個人戦の日程は団体戦の後で実施される形となる。今年の場合は試験的な運用も加味されている為、午前中は団体戦の試合が実施されて午後に個人戦の試合が組み込まれている。一昨年のような人数配分に戻した場合はその限りといかないだろうが。
更に、3年組の調整部分は悠元が単独で行い、達也には深雪に集中してもらう算段だ。
「ちなみにだけど、一昨年みたいなＣＡＤの乱発は考えてたりする？」
「アレは二木先輩の我儘もあったから、そこまで酷くはならんよ。ＣＡＤに関しては」
「含みのある言い方をしてるあたり、魔法はそうじゃないんですね……」
変に新型ＣＡＤを乱発したところで、開発第三課の仕事を増やすだけでしかない。なので、ＣＡＤについては競技用にダウングレードしたものを使用することで折り合いをつけている。その代わり、魔法については更にブラッシュアップさせたものを投入する。
「今回の競技で使用する魔法については、殆ど達也に目を通してもらってる。見せていない隠し玉もいくつかはあるが」
「や、やっぱり……大丈夫でしたか、達也さん？」
「問題は一切なかった。既存術式のブラッシュアップでここまで改善させるとなると、俺でも出来ないことだからな」
無理に新たな術式を出す必要はないし、それならば既存の魔法をブラッシュアップするだけでも戦っていける。万が一を考慮して新たな術式は何個か用意しているが、少なくとも本戦において大きな変化

を迫られることは無いと踏んでいる。
「さて、休憩も済んだから調整の続きでも進めるか」
「まだ調整するの？」
「モノリス・コード用に投入する新型の術式がいくつかあるからな。完成すれば、相手の視認を完全に封じた上で勝利できる」
２年連続で勝っていても、将輝がれっきとした実力者なのは確かな事実。だからこそ、完膚なきまでに叩き伏せる必要がある。これまでの戦績で心が完全に折れていない頑丈さだけは尊敬に値すべきことだが、この心情を本人に対して述べる気はない。
「自重をかなぐり捨ててもいいのなら［ファランクス］の絨毯爆撃で瞬殺する方法はあるが、達也と光宣の活躍の場を奪う気はないからな。あのバカはいい加減自分のやっていることを学べって言ってやりたい」
「まあ、例え勝負がどうあろうとも私は悠元さんのものですけれど」
「深雪……」
他の友人がいる前で堂々と〝悠元のもの〟だと発言した深雪に対し、隣で聞いていた達也は反射的に頭を抱えながら呟いたのだった。

高校最後の九校戦①

２０９７年８月１０日。いよいよ最後の九校戦が開幕する。今年は昨年の競技変更に伴う各種目の運営要領が用いられている部分が多い。

一昨年までの実施競技だったスピード・シューティングとクラウド・ボール、バトル・ボードが復活。スピード・シューティングとバトル・ボードの性質を併せ持つロアー・アンド・ガンナーは〝バイアスロン要素〟という理由で継続が決定。

昨年の実施競技だったシールド・ダウンとスティープルチェース・クロスカントリーは実施競技の種目数という理由で廃止となった。昨年も実施したアイス・ピラーズ・ブレイク、モノリス・コード、ミラージ・バットについては継続。そこに新団体競技としてマギテクス・ボールが加わり、計８種目で優勝を競うこととなる。

スピード・シューティングとクラウド・ボール、バトル・ボードは各学校から男女各一名ずつで三校ごと3ブロックの予選リーグ（新人戦は新規校がいるため、３・３・４校構成）を行い、各ブロック1位と各ブロック2位の中から成績優秀者一名の四名で決勝リーグを実施する。

ロアー・アンド・ガンナーとアイス・ピラーズ・ブレイクはソロ・ペアの各校三名で、ロアー・アンド・ガンナーは予選リーグ3ブロック制の1位のみ通過、決勝は命中率および走破タイムによる採点方式で決着をつける。ピラーズ・ブレイクは三名・三組による予選トーナメント方式と総当たりの決勝リーグ方式。

ミラージ・バットは昨年の各校三名選出による四名ないし五名一組の抽選方式から変更なし。飛行魔法の連続使用時間も1分間の制限は解除されていない。それ以外のルールについては昨年と同様のルールとなっている。

モノリス・コードについては、新競技や個人戦も加味されて一昨年の変則予選リーグ・決勝トーナメント方式が採用。昨年の本戦モノリス・コード優勝校である一高と準優勝校の三高は別々のリーグに割り

振られている。一種のシード権みたいなものだが、どちらかに偏って割を食う学校が出ないだけマシだと思ってほしい。
マギテクス・ボールは新規団体競技の関係上、モノリス・コードやミラージ・バットの後に設定されている。こちらは3ブロック制予選リーグで各ブロック1位と勝点・得失点差が最も高い2位以下のチーム一組の四組で決勝トーナメントを戦う方式。
昨年はスティープルチェース・クロスカントリーが全員参加（に等しい様なエントリールール）の関係で複数競技への参加は出来なかったが、スティープルチェース・クロスカントリーの廃止でエントリールールも一昨年のものを基本とした形となった。
ただ、競技の掛け持ちは2種目が上限であることと、個人戦出場選手は時間の都合で団体戦の出場競技が制限されてしまう。エンジニアへの負担も考慮すれば、こればかりは仕方がないことだ。
大会一日目は団体が本戦スピード・シューティングの予選・決勝と本戦バトル・ボードの予選。個人戦はスピード・シューティング予選・決勝が実施される。
これまで以上にエンジニアの負担増加が否めないため、ここにルール変更が加わっている。これまでのエンジニアに対する枠は八人だったが、個人戦を考慮して更に四名の上限で追加を認めている。
一高はこの枠を最大限に使うことで達也の負担増加を抑え込んでいる。
「悠元、問題はなさそうか？」
「しっくり馴染んでる。流石の仕事だわ」
一高ではエントリーギリギリまで参加選手の人選を行った。その結果、団体の男子スピード・シューティングは七宝琢磨、女子スピード・シューティングは明智英美という組み合わせとなった。
個人戦は本戦・新人戦に準える形となる為、本戦組に該当する2・3年男女の四名――悠元と光宣、深雪と理璃が出場する。個人戦は各学年代表戦の形式になる為、スケジュール自体で言えば一昨年レベルの忙しさとなる。
「達也のほうは、今日は深雪とほのかの担当か」

「そうだな。二人の時間が被らないから楽はできるが」
スピード・シューティングは団体・個人の同時並行で試合が展開される。午前中までに予選、午後から決勝に入る関係で悠元と深雪の試合が被るのは避けられない。その意味で悠元が単独で調整できるのは他にない強みでもあった。
「すまないが、新人戦に入るまでは基本寝ることになるから、細かい調整や修正は任せた」
「それは構わないが……お前が多少だらけても、誰も文句など言わないだろうに」
「無断でやるのも失礼だからな」
別にそこまでせずとも勝てなくはない。だが、万全を期すために時間が惜しい。なので、団体戦の方針や調整は全て丸投げする、と悠元が達也に伝えると、聞かされた当人は溜息が出そうな表情を滲ませていた。
「それじゃ、開幕ぶちかましてくるわ」
「ああ。罷り間違って一条を撃つなよ？」
「俺は癇癪持ちの子どもかい」
互いに分かっているからこその冗談を言い合うと、悠元はＣＡＤをケースに仕舞い込んだ上でそれを持って本部テントの外へと出ていった。ちなみに、この場に深雪が居なかったわけではなく、二人の調整の様子を見てうっとりしていたからであった。
「……深雪、最終調整をしようか」
「はい、お兄様」
最早何度思ったことか分からないが、こんな妹（正確には従妹だが）の手綱を握っている悠元に尊敬の念を送りたくなった達也だった。
手綱を握っているというよりは〝押し付けられた〟と表現するのが一番正しいのだろうが、それを指摘しようとする気概のある者は誰一人としていない事実も添えて。
◇　◇　◇
スピード・シューティングの予選リーグは３つのシューティングレンジを用いて３回の試技で決勝進出者を決める。もし１位のスコア

が並んだ場合は最後の得点から時間切れに至るまでの残りタイムから算出する形式となる。
悠元の試技は高校順ということで一番目。今までの慣例ならばライフル形状のＣＡＤを使用することが多い訳だが、悠元が選択したのは拳銃サイズの砲身型照準器を備えたタイプ。無論、既定ではオーバースペックとなる［セラフィム］や［ラグナロク］ではなく、競技用に調整された［シルバーホーン］を持ち込んだ。
悠元が［シルバーホーン］を構え、試技開始のシグナルと共に射出されるクレー。そして悠元がトリガーを引くと、得点有効エリアを挟み込む形で左右に展開される二つの長方形。クレーがその長方形のエリアを通り抜けようとした瞬間、クレーが粉微塵へと化した。
観客の中からは感嘆にも近い声が漏れており、それは各校の本部テントにおいても他校の驚愕が詩奈の耳に聞こえてくるほどだった。
「……やっぱり、お兄様は凄いです。あれは振動系魔法でしょうけれど、少なくとも見たことが無いです」
「詩奈でも悠元兄の魔法を見てたわけじゃないの？」
「はい。お兄様が中学生の途中までは殆どお祖父様のご実家に居ましたし、魔法の訓練は高校に入ってからもあまり見たことが無かったので」
三矢の人間というよりは上泉の人間として生活していたためか、詩奈は悠元の魔法を殆ど見たことが無かった。魔法や聴覚制御の訓練に付き合ってもらったことはあるが、それでも悠元が魔法を詩奈に披露することは殆どなかった、と詩奈は話す。
「達也さん。あれって［能動空中機雷（アクティブ・エアーマイン）］を改良した魔法かな？」
「ああ、悠元からはそう聞いている。名称は［氷鏡機雷（マッチング・ミラーマイン）］だそうだ」
スピード・シューティングの性質上、射出されたクレーが得点有効エリアの外側を通過する仕組みになっていない。そこで、悠元はポイント管理ではなくエリア管理の方法を取った。１辺１５メートルのエリアの左右から各１メートルほど内側にエリアを設置することで、どの軌道を描こうとも大半のクレーが設置されたエリアを通ることになる。

山なりに飛んできたクレーに対しては無力だが、その軌道が飛んで来ても対策は取られている。設置されたエリアの内側には疑似的な電子の網が張られており、設置エリアを通らずに通過したクレーが入ると、電撃を発生させてクレーを粉砕する仕組み。

この仕組み自体は戦略級魔法[シンクロライナー・フュージョン]を流用したものとなっているが、殆どの人間はその事実を知らない。達也はエンジニアとして魔法の仕組みを聞かされたが、戦略級魔法を競技用に仕上げる発想は流石の達也でも脱帽ものだった。

そして、最後のクレーが粉砕されたところで悠元はＣＡＤを下ろし、日差し対策用のゴーグルを外した上で観客に対して軽く手を上げてからシューティングレンジを後にした。

「文句なしのスコアですね。タイム的に見てもこれを越えるのは難しいでしょう」

「そうだな。これでも本気を出していないわけだが」

悠元が本気を出した時の魔法力を知るからこそ、ルールという上限付きでは流石に本気を出すのが難しいことも理解している。尤も、その事実を敢えて他校に言いふらすつもりなどない訳だが。

「さて、俺もそろそろ行ってくる。留守は任せたぞ」

「おう、頑張れよ達也」

「頑張るのは主に選手の方なんだがな」

エンジニアとして尽力せねばならないことは分かっている。とはいえ、用意したお膳立てで結果を残すのは選手の仕事。その意味も含めながら達也は立ち上がって本部テントを後にした。

◇　◇　◇

1日目の結果は、スピード・シューティングが男女共に優勝。バトル・ボードの予選も男女予選通過。個人戦スピード・シューティングは四人全員が1位と順調な滑り出しとなった。

「正直、七宝があそこまで食い下がった上に逆転するとは思ってなかった」

「それは私も思った」

男子決勝は琢磨が三高の吉祥寺真紅郎と対戦。序盤は真紅郎が優

位に進めたが、進め過ぎたが故にクレーが狙いやすくなり、その隙を突いて琢磨が［ミリオン・エッジ］でクレーを破壊し、僅差で逆転勝ちを収めた。
　女子決勝はこちらも一高対三高で、しかも達也の婚約者同士となる英美と栞の対決。一昨年の新人戦アイス・ピラーズ・ブレイク以来の再戦ということもあり、得意な魔法でクレー破壊のＲＴＡのような様相となり、此方も僅差で英美が勝利を収めた。
　なお、英美はこの試合で魔法力切れに陥ってぶっ倒れており、部屋で大人しく休んでいる。
「悠元は悠元で一条さんを瞬殺してましたし」
「何と言うか、あまり手応えが無かったかな」
「そんなことを言えるのは悠元ぐらいですよ……」
　個人戦男子スピード・シューティングの決勝トーナメントは予選と魔法構成を大幅に入れ替え、［魔弾の射手］に加えて［インビジブル・ブリット］を改良した［ショットガン・ブラスト］を主体に勝ち抜いた。色々言われそうな気がしないでもないが、一昨年に真由美の手伝いをしていた関係で術式を把握しているため、仮に追及が来ても言い逃れる方便は準備済みだ。
　試合の前に将輝から宣戦布告のような言葉を投げかけられたわけだが、何だか相手が空回りし過ぎて拍子抜けに終わっている感が拭えなかった。それでも手を抜くことは一切しないが。
「そう言う深雪も愛梨を倒してたし」
「私としては少し緊張しましたが、上手く行って何よりです」
「あれで緊張してたって……」
　女子の決勝トーナメントは深雪が圧勝する結果となった。相手が得意分野でなかったという部分も勝因に繋がったのだろう。なお、２年組の光宣と理璃は対抗できるライバルが他校に居なかったため、完全な圧勝に終わった。
　得点としては団体・個人のトータルで一高が３００点、三高が１８０点と続く形となり、大きくリードを稼げた結果となった。
「明日は団体・個人のクラウド・ボールに、団体ロアー・アンド・ガン

ナーの予選・決勝。団体ピラーズ・ブレイクペアの予選・決勝か。ここが一つ目の正念場だな」
「そうだな。尤も、悠元からすれば準備運動にもならないだろうが」
「流石にウォーミングアップが長すぎるわ」
スピード・シューティングはどちらかと言えば固定された二点間の射撃に近い。だが、次のクラウド・ボールは魔法師の魔法力だけでなく体力も要求されてくる。一日で決勝まで消化することになる為、消費する体力はかなりのものとなるだろう。

◇　◇　◇

一高の面子がそうやって話している中、三高の主要メンバーは将輝と真紅郎の宿泊する部屋に集まっていた。面々が集ったところで真紅郎が切り出した。
「1日目は誤算もあったけど、概ね想定の範疇に収まった。明日と明後日が正念場だと思ってくれていい」
「そうだな」
新人戦の結果はまだ出ていないが、一高のパワーアップを噂話で聞いていた真紅郎は、間違いなく一高が新人戦の殆どを取ってくると想定し、モノリス・コードやミラージ・バットを除く2日間の本戦競技が正念場だと話し、将輝も同意するように頷いた。
「将輝に一色さん。特に一色さんはクラウド・ボールの上位入賞経験があるけど、相手が相手なだけに気を引き締めて頑張ってほしい」
「……ええ、無論全力をぶつけますわ」
愛梨は誰よりも深雪の実力を肌で感じているからこそ、真剣な表情を浮かべていた。それを見た真紅郎は安心しつつも将輝に視線を向けた。
「将輝、例の作戦は神楽坂悠元との対戦まで温存する。流石にリスクが高いからね」
「そうだな……ジョージの言うことに従おう。あれが無くとも神楽坂以外なら勝てるだろう」
将輝と愛梨の意識は完全に悠元と深雪へ向けられていた。愛梨の方は純粋なライバルとしてのものだったが、将輝の場合はそうでない

ために真紅郎は内心で溜息を吐いたのだった。
　そうして話し合いを終えた後、愛梨は真紅郎を呼び出す形でホテルのラウンジへと場所を移した。議題は言うまでもなく将輝のことだった。
「一色さん。話というのは……問うまでもないか」
「ええ、他でもない一条君のことです。贔屓目抜きに見たとしても、とてもではありませんが悠元さんに勝てるビジョンが見えないのです」
「……一応作戦は考えたけど、僕も通用するとは思っていない。どんな奇策を用いたとしても、彼がそれ以上の奇策を使われたら詰んでしまう」
　一昨年の新人戦では、悠元はアイス・ピラーズ・ブレイク決勝で一条家の秘術［爆裂］を完封し、モノリス・コード決勝では将輝の攻撃全てを無力化せしめた。
　昨年のスティープルチェース・クロスカントリーはさておくとしても、アイス・ピラーズ・ブレイク決勝では［爆裂］を利用された挙句、将輝の戦略級魔法［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］の雛型となる［天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）］を使用したことは佐渡沖・能登沖での戦闘前に聞いていた。
「将輝から聞いた話だけど、九島閣下は『悠元に全てを譲られた』と仰っていたらしいって」
「ええ、その場に関係者として居合わせた私もしっかり耳にしております。正直、次代の［トリックスター］に恥じないと思ってしまうほどです」
「次代の［トリックスター］にして元［トーラス・シルバー］の片割れ……僕の異名が霞んでしまいそうだよ」
　真紅郎は友人としての付き合いを持ってから数年になるが、悠元の埒外さには舌を巻くほどだった。そして、愛梨は悠元と友人関係を持ち、そこから恋愛関係に発展して婚約者の一人に名を連ねた。
「金沢の研究所での魔法実験を難なくこなしてしまう時点で、一条君とは天地の差があると思っていましたが……そういえば茜ちゃんから聞きましたが、一条君が悠元さんに喧嘩を売って返り討ちに遭ったそうですね」

「みたいだね。僕は剛毅さんから聞かされたけど、最初聞いたときは本気で頭を抱えたよ」

確かに将輝は戦略級魔法師として魔法界の地位を確立した。だが、いくら同じ高校生と言えども悠元は既に神楽坂家当主として師族会議に参加している。その違いを理解せずに悠元の婚約者の一人が諦めきれないからという理由で行為に及んだ将輝のことを考えると、二人は揃って溜息を吐いたのだった。

高校最後の九校戦②

８月１１日、大会二日目。
団体クラウド・ボールは個人戦の関係でペアのみとなり、男子は修司と十三束、女子は由夢とエリカが出場。ロアー・アンド・ガンナーはバトル・ボードの都合で予選から決勝まで試技が行われるが、男子はソロが燈也でペアは五十嵐鷹輔と森崎駿、女子はソロがセリアでペアはリーナと英美が出場する。
そして、アイス・ピラーズ・ブレイクペアは最終的な調整の結果、男子はレオと幹比古、女子は雫と泉美が出場する運びとなった。
個人戦は会場の都合で午後からの出場となる為、午前中が丸々空いた。それでも悠元には仕事が生じる。それは、多忙となるエンジニアのフォロー役だった。
「調整が終わったから、感触を確かめてくれ」
「……やっぱり、悠元はズルい」
「そこでズルいと言われても、肝心な部分は達也に負担が生じる（これまで達也がエンジニアとしての仕事を全うした結果とも言えるが）ため、フォロー役として悠元がピラーズ・ブレイク女子ペアのＣＡＤ調整を担当していた。
流石に競技の関係で午前の予選までしか関与できないため、決勝に関しては他のエンジニアにすべて引き継ぐことになってしまう訳だが。
「泉美ちゃんはどうだ？」
「本当に素晴らしい調整です。出来れば泉美自身の調整」
「泉美？」
「な、なんでもありません、あはは……」
奇しくもこの二人は同じ悠元の婚約者だが、序列の力関係には流石の泉美も逆らえず、言いかけた言葉を呑み込んだ上で苦笑を浮かべた。その光景を見た悠元も苦笑を滲ませた。
「予選は作戦通りに事を進めれば問題ないだろう。午後の決勝リーグ

は関与できないが、そこは許してほしい」
「寧ろ、こうやって手伝ってくれただけ感謝してる。深雪へのフォローはするけど、ガンバ」
「何かあることを確定事項にしないでくれ」
　言っても無駄なことはある。それは幾らでも味わってきた。その状況を甘んじて受けている時点で自分も『まだ甘い』のかもしれない。その意味で気を引き締めようと心の中で思った悠元だった。
◇　◇　◇
　午前の競技が終わり、団体クラウド・ボールは男女共に優勝。アイス・ピラーズ・ブレイクペアも両方が午後の決勝リーグへ進出、ロアー・アンド・ガンナーも男女ペア全てが優勝となった。
　現時点で一高が６００点まで伸ばす形となり、三高がロアー・アンド・ガンナーで七高に苦戦を強いられたために３４０点と２６０点差がついている格好だ。
「……滑り出しが良ければいいとは思ったが、流石に良すぎると思うわ」
「まあ、それは確かに」
　常勝を掲げている一高からすれば上出来すぎる結果だが、あまり出来すぎて後の競技で手を抜くような行為はして欲しくない。とはいえ、こうまでなってしまった片棒を担ぐ身として悠元が呟くと、それに同意する形で燈也が述べた。
「さて、次は俺の番だな」
「悠元なら心配はしていませんが、頑張ってくださいね」
「おうよ」
　深雪は達也と共に会場へ向かっており、悠元は部活連会頭として本部テントに立ち寄ってから会場入りする関係で別行動となっていた。燈也に軽く声を掛けつつ、彼の励ましに軽く手を振ってからテントを後にしたのだった。
◇　◇　◇
　試合の観戦となると、知り合いが複数出ている場合は別々の観戦となってしまう。ピラーズ・ブレイクはエリカや佐那が見に行くという

ことで、修司は由夢や姫梨の三人で男子個人戦クラウド・ボールを見に来ていた。
　既に試合は予選リーグ第二試合まで進んでいるが、そのスコア差に競技経験のある修司や由夢ですら引き攣った笑みを見せていた。その理由はスコアボードに表示された得点にあった。
「さ、３００点差って……どんな回転を掛けたらそんなに稼げるのか聞いてみたいよ」
「多分、聞いたところで由夢の思考回路が焼き切れるだろうな」
「否定できませんね」
「二人とも、酷いよっ!?」
　悠元のブロックは四高と九高が対戦相手だが、初戦が第１セット終了時に３５０―０という大差をつけ、相手のギブアップで試合終了。そして続く九高との対戦も第１セット終了時点で３３５―０の大差をつけている。
　体をストレッチしている一高側の悠元に対して、九高側は選手が疲労困憊の状態を見せており、作戦スタッフが審判団と話している様子が見られた。その数分後、審判団から九高の試合棄権が宣言され、悠元は計２セットで決勝リーグへ進出を決めた。
　悠元の調整は達也の担当だが、達也には深雪の調整に意識を向けてほしいという理由で個人戦の細かい調整は悠元自身で行っている。予選は全て小銃状のＣＡＤで切り抜けたが、決勝リーグは魔法とラケットの同時並行で試合を進めるつもりだ。
　予選での感覚を基にラケット型ＣＡＤに調整データを打ち込み終えたところで控室の扉が開き、セリアとリーナが姿を見せた。
「お兄ちゃん、愛しの妹が応援しに来ました」
「邪魔するなら帰れ」
「酷い一言!?　でも、お兄ちゃんの言葉なら受け入れちゃう」
「……ごめんなさいね、悠元」
　普段はセリアが主導権を握るのに、悠元のこととなると正反対になってしまう有様にリーナが溜息を吐きながら悠元に謝った。
「コイツの言動は今に始まった事じゃないからな。というか、リーナ

たちは深雪の応援に行ってたんじゃなかったか？」
「丁度休憩の合間ということで来たのよ。それに、深雪の決勝の相手が相手だから、達也の邪魔をしちゃいけないと思って」
「成程。まあ、こっちも試合の準備は終わったから、暇になってしまったが」
　リーナは傍で深雪の実力に加えて愛梨の実力も見ている為、深雪のフォローをする達也の邪魔をしてはいけないと悟ったのだろう。
「そういう悠元も三高の［クリムゾン・プリンス］と二高の選手が相手でしょう？　問題は無いと思ってるけど、勝てそう？」
「将輝のことだから、クラウド・ボール対策は考えてきていると思うが……こちらも全力で勝ちに行く」
　昨日の個人戦の成績を考慮すると、将輝はクラウド・ボールで優勝しなければ悠元を逆転する方法が無くなる。なので、懇親会に出席せず真紅郎と話していた作戦を実行するのは目に見えていた。
「長期戦になれば不利となるのは一昨年の新人戦モノリス・コードで将輝自身が理解している筈だ。だが、裏を掻いて長期戦に持ち込む可能性も捨てきれない。だから、短期決戦に持ち込む」
「……お願いだから、コートは破壊しないで欲しいわ」
「どっかの誰かさんみたく訓練施設を壊すことはしないと思うのですよ」
「セリア!!」
「やれやれ……」
　なんだかんだ言って息抜きになったのは事実で、最後はリーナが諦め気味にセリアを引っ張る形で控室を後にした。すると、彼女らと入れ違いに入って来たのは技術スタッフ用ユニフォームであるブルゾンを着た達也だった。
「悠元、邪魔したか？」
「彼女らなりにの応援を貰っただけだよ。深雪の方はいいのか？」
「ＣＡＤの調整は終わらせたからな。それに、深雪から『様子を見に行ってくれませんか？』と言われると、どうにも断れなかった」
「……さいですか」

彼女なりの我儘と兄離れが組み合わさった有様に、流石の達也も断り切れずに職務を全うする方向へ舵を切った。それを聞かされた悠元は若干呆れ気味に言葉を返した。すると、女子個人戦の方向から歓声が聞こえたので、女子の決勝リーグが始まったのを悟った。
「男子の決勝は二高と三高だが、問題は後者だな」
「昨日の成績を考えると、ここで仕掛けてくるだろう。短期決戦を仕掛けてはみるが、場合によっては想子切れを起こさせるまで長期戦も想定しておく」
正直なところ、悠元の保有想子量がどこまで伸びているのか分からない部分がある。悠元の使う魔法自体が現代魔法と比べて消費魔法力に大きな隔たりがある為、試合がどう転ぼうとも瞬時に対策を打てる時点で将輝の勝ち目は極めて低い、というのが達也の率直な感想だった。
「俺から言わせれば、一条は喧嘩を売る相手を間違えすぎた、としか言えないな」
「達也、それが一番酷い言葉だと思うぞ」
尤も、この先の〝見え過ぎている〟試合結果について異論を唱える者は……殆ど存在しないに等しい、という残酷な現実が待っていることを付け加えておくこととする。それが誰に対してのフォローなのかは……察してほしいと思う。
「達也はこのまま戻るのか？」
「そのつもりだったが、美月と千秋に気を遣われてしまってな」
彼らに関わった者たちの成長面は魔法師としての実力に留まらなかった。
達也と同じ魔工科にいる美月や千秋も完全マニュアル調整を行えるまでに成長しており、決勝リーグで両方を見ることに苦でなかった達也でも千秋から『私じゃ司波君の代わりは務まらないの？』と投げかけられ、困った達也が同席していた美月に助け舟を求めた結果として深雪の調整は美月と千秋がフォローすることとなった。
「そういうわけで作戦の打ち合わせをしておこう。二高は予選で使った魔法のままで十分だろうな。問題は一条だが……ＣＡＤの魔法構

成を見た時、お前もあくどい事を考えるものだな」
「別に使っちゃいけないなんてルールに無かったからな。想定できない運営側が悪いし、そういう作戦を考案したのは達也だろうに」
元々作戦自体は達也の立案だが、その作戦に即した魔法を準備したのは悠元。さながら要求したプログラムに即したハードウェア作製を行ってきた［トーラス・シルバー］で培った経験が今も生きている証左だった。
◇　◇　◇
四葉家直系世代の子女――司波深雪と、三矢家直系世代の子息――神楽坂悠元。両方ともに祖父世代の〝悪名〟が根強いこともあり、観客の中には政府関係者や軍関係者が私服姿で紛れ込んでいる。
そして、その一人であるＵＳＮＡ魔法師部隊『スターズ』総隊長ことジェラルド・メイトリクス・シリウスもといジェラルドは深い溜息を吐いていた。その最大の理由は彼の隣で熱狂的なファンばりに観戦している隣席の人物――私服姿のジョーリッジ・Ｄ・トランプＵＳＮＡ大統領だった。
「溜息を吐いてどうしたのかね、ジェラルド君。こういう時位楽しまねば損というものだよ」
「分かってはいるのですが……（両親が色々苦心してた話は伯父母経由で聞いていたが）」
本来ならばＶＩＰ席にいるべき人間が九校戦の観戦をしている。この時点でバレれば大騒ぎになること間違いないが、当の本人は気にする素振りを見せていない。堂々として居ればバレにくいだろうが、周囲の人間が観客に扮した護衛のため、最悪そっくりさんで通すことも出来たりする……護衛からすれば胃薬案件でもあったりするが。
というか、国内事情は大丈夫なのかと思われるだろうが、そもそも司法手続き自体がお役所仕事の為に時間が掛かるし、ジョーリッジの滞在期間は１か月を想定している。外遊にしてはあまりにも長いだろうが、他の諸外国も相次いで日本へ来日することを考えれば、日本で首脳会談を持った方が掛ける労力を軽減できる。
なお、その裏で……次期大統領候補とも呼び声が高いリアム・スペ

ンサー国防長官による暴走劇がペンタゴンで繰り広げられている。理由はエドワード・クラークがやらかした買収劇の後始末やら日本への兵器譲渡手続きに関する忙殺が原因だったりする。
　なお、そんなジェラルドの周囲はスターズの同僚で固められている為、万が一の対応も完璧だったりする。
「しかし、クラウド・ボールは中々面白い。帰国したらスターズの訓練メニューに取り入れてみるかね」
「……」
　尤も、ジョーリッジ相手だと魔法を無効化されてしまう（彼の手に持ったもの経由でも魔法の無効化が働いてしまう）し、彼の身体能力は政治家に転身した今でも健在。この前に「パラサイト」へ侵食されたスターズの兵士を説教した時は、一等星級（スター・ファースト）レベルの人間でも疲労困憊に陥っていた。
　セリアの非常識さは祖父を鑑みれば妥当だ、とジェラルドはそう納得していたほどに。
　会場では個人戦女子クラウド・ボールの決勝リーグが開始しており、第一試合の一高と二高の試合は二高側が途中棄権したために一高の勝利。続く二高と三高の試合は第一試合の影響でドクターストップが掛かったため、三高の不戦勝。
　１５分の休憩を挟む形で第三試合の一高と三高の試合が始まる。一高側は司波深雪、三高側は一色愛梨。十師族直系子女同士の対決であり、一部しか知らないが悠元の婚約者同士の対決。
「ジェラルド君はどう見るかね？」
「そうですね……この際、試合の有無のハンデは無いと考えますが、予選と同様の戦い方を取った場合は第一高校側に有利となるでしょう」
　深雪は魔法による返球を主体とするのに対し、愛梨はラケットによる返球スタイル。どちらがいいというには一長一短あるが、ジェラルドは冷静に分析した上で呟く。その言葉に反応したのは、ジェラルドの右隣に座る女性――アニエス・ヴィンセント・ミルザムだった。
「ジェイ、その根拠は？」
「三高の彼女の試合を見ていたが、アレは恐らく視覚と運動神経を疑

似的に直結させることで超人的な反射を実現させているのだろうとみている」
　愛梨の魔法技術は理論上可能だし、相手が短時間で倒せるのであれば身体への負担もそう重くはならない。だが、それは『愛梨よりも下の実力者』が前提になる、とジェラルドは含みつつ呟いた。
「普通ならば神経が焼き切れますが、十師族の中には有機物干渉を得意とする魔法師の一族もいると耳にしたことがあります。それに、彼女こと一色愛梨の数字（ナンバー）を鑑みた時、同じ数字を冠する一条家と同じく有機物干渉に長けているのでしょう」
「成程な。彼女が魔法での返球に切り替える方法は取れないというわけか」
「無論それもあります」
　ジェラルドは司波深雪と直に会ったことがあり、偶々魔法訓練を見させてもらうことがあったわけだが、実際に戦闘を行った司波達也や神楽坂悠元に比肩すると感じつつも、その報告は出さずにジョーリッジへ直接口頭による報告で済ませた。
　理由は『ただでさえ強いのもそうだが、その婚約相手が世界最高峰の戦略級魔法師であり、彼女の兄もそれに準ずる実力者。彼女を襲えばＵＳＮＡという国が歴史から抹消されてもおかしくない』というもので、ジョーリッジもその理由に納得して神楽坂家・上泉家・四葉家に対する箝口令を敷いた。
　それに、彼らがいれば大亜連合や混迷している新ソ連方面の抑えになる側面もある為、ジェラルドは同盟国の心ある友人としての道を選択した。尤も、彼の気遣いは自分の母親を娶る羽目になった友人に対する詫びの気持ちも含んでいる。
「司波深雪の魔法力はこの九校戦出場選手の中でも群を抜いています。自分の予測が正しければ、ルールの範疇でその全てを出し切るのは極めて難しいでしょう」
「そ、そこまでなの？」
「でなければ、婚約相手に彼が選ばれないだろう」
　一部の一高生のレベルが明らかに人間離れしている事実は確かだ

し、それを皮切りにする形で日本の魔法教育学はますます進歩している。

尤も、それを知ってスパイを送り込むぐらいならば、素直に頭を下げて教えを乞うべきだと提言したところ、娶る嫁の数が増えて頭を抱えたのは……政府でもごく一部の人間しか知らない公然の秘密。

ローマ教皇ですら『女性を泣かさないよう励むことです』と匙を完全にぶん投げた手紙を送り付け、更には側室候補として教皇の孫娘まで送り出した始末。ＵＳＮＡ政府としては受け入れざるを得ないため、ジェラルドの逃げ場が完全に消滅したのだった。

高校最後の九校戦③

個人戦女子クラウド・ボール決勝リーグ第三戦。

第一高校代表：司波深雪と第三高校代表：一色愛梨。前評判では一昨年新人戦で準優勝した愛梨と圧倒的な魔法力を有する深雪ということもあり、評価が完全に拮抗していた。なので、大方の予想では魔法返球主体の深雪とラケット返球主体の愛梨の試合は実質的な決勝戦という見方だった。

だが、その大方の予想を崩したのは深雪が持ち込んだラケット――正確にはラケット型ＣＡＤだった。そして、彼女の左手にはブレスレット型の競技用ＣＡＤが装着されている。九校戦の全競技に当て嵌まるが、ルール上複数のＣＡＤを持ち込むこと自体ルールに干渉しない。

そもそも、ＣＡＤの同時使用自体が〝現行の現代魔法の特性〟――魔法発動時に魔法行使の余剰想子が波長として発生してしまうため、同時の魔法行使では威力が極端に低減する――に引っ掛かってくるため、大概は一つの競技に一つのＣＡＤしか持ちこめない。

魔法行使の簡略化ツールとして思考操作型ＣＡＤの存在もあるが、九校戦では〝使用の推奨〟がルールとして明文化されている。

思考操作型ＣＡＤ使用に伴う『魔法行使の簡略化自体による時間の短縮』という点はさて置くとしても、より魔法師らしいパフォーマンスを十全に発揮してもらうことで将来魔法科高校への入学を目指している中学・小学生へのアピールにも繋がるし、魔法の競技性を高めることでエンターテイメント性の向上にも繋げるのが狙い。

話を戻すが、深雪は無論ペンダントタイプの思考操作型ＣＡＤを装着している。だが、それでも態々ラケットタイプを選択する理由は本来ない。だが、愛梨はその意図をきちんと理解していた。

「愛梨。向こうはやる気みたいだけど、大丈夫？」

「ええ、いつものようにやるだけですわ（深雪、これは私に対する挑戦状なのですね）」

同じ悠元の婚約者と言う立場があろうとも、同じ十師族直系という

関係があろうとも、今は一人の選手としてライバルと戦う。意図を悟った愛梨の感情は昂っていた。
そうして、審判の合図で双方が定位置に付き、ラケットを構える。試合開始と同時に1個目のボールが射出され、互いにラケットでの返球でポイントはほぼ互角。２０秒毎に追加されるボールによって応酬は更に増していく。
第一セットは３０―３２で愛梨が先取したものの、愛梨の表情は晴れなかった。何故ならば、序盤から[稲妻]で攻勢を掛けたものの、終わってみればポイント差はたった2。どこかで小さなミスをすれば逆転されかねないのは確かだった。
(少なくとも、ベストな返球は出来ていたはず……どこかで見逃していた？)
愛梨が試合内容に疑問を浮かべる一方、深雪の傍には美月と千秋がいた。深雪の体調は万全で、とても3分間打ち合っていたとは思えないほどに涼しげな表情を見せていた。
「深雪ちゃん、惜しかったですね」
「いえ。寧ろ、体術だけであそこまで食い下がれれば上出来すぎます」
(確かに、大仰な魔法は使ってないのよね……)
積極的に深雪のフォローを担当している美月の傍では、冷や汗を流しつつも端末で深雪の状態をチェックしていた。
第一セットは『体術のみで行く』――――これは深雪の我儘によるものだった。達也はどうしたものかと悩んだ結果、体術を指導している悠元の判断を仰いでの結果が深雪の試合運びに繋がった。
結果としてセットは落としたものの、相手がかなり本気の状態でたった2ポイント差に収めてしまった。これだけでも深雪のスペックの高さが窺い知れる有様だ。尤も、深雪当人としては婚約相手兼武術の師匠である悠元のお陰だと隠すことなく言いのけてしまう訳だが。
すると、インターバル終了のブザーが鳴ったので、深雪は立て掛けていたラケットを手に取って立ち上がった。
「では、次は2ポイント差で勝ってきますね」

「頑張ってね、深雪ちゃん（ああ言ったら本気でやりそうなところは達也君とそっくりだよね……）」
「……もう何も言えないわ」
「千秋ちゃん!?」
深雪と愛梨がコートの定位置に立ち、第二セットが開始と同時に射出されるボール。再びラリーの応酬となるが、深雪は一分経過――――四個目のボールが射出された時点で自陣に魔法式を投射。
無論、この動きを［稲妻］発動中の愛梨でもハッキリと捉えていた。
（一体何を？　でも、ただ返ってくるボールを打ち返せばいいだけ！）
そうして深雪のフィールドから飛んでくるボールを返球しようとラケットを振る愛梨。だが、今までにない違和感が愛梨を襲う。
（ぐっ!?　何これ、ボールが重い……！）
それでも返球できないレベルではないため、これを何とか返し続ける愛梨。一体何が起きているのかを殆どの人間が認識できていない中、試合の様子をモニター越しに見つめている悠元が呟く。
「……［超越氷炎地獄（オーバード・インフェルノ）］を使いこなせる深雪なら使えると踏んで渡したが、想像以上にエグイな」
「あの魔法を一から設計したお前が言うとはな」
深雪が使っているのは［透過反転（ベクトル・エクスチェンジ）］。分類上は現代魔法の複合術式。術者の前に透過されたフィールドを投射し、術者に向かってくる対象物を減速させる一方、術者側から射出された対象物を加速させる性質を有する。
これだけならば深雪側へ減速された時点で失速して手前に落ちてしまうが、この対策としてごく短時間の飛行魔法を付与することで減速による飛距離の低下を防いでいる。飛行魔法の断続的な連続使用を伴ってしまうが、そもそも飛行魔法に慣れている深雪からすれば『飛行魔法を使いながら他の魔法を使っている』という認識でしかない。
「あの魔法は地味に難易度が高いからな。今のセットは［ベクトル・エクスチェンジ］だけしか使っていないようだが、これだと第三セットは荒れるな」

魔法の同時使用は、九校戦での歴史で見れば現在悠元しか見せていない。だが、その技術を深雪も使えると踏んで、武術の鍛錬と並行して修得させた。その事情を知っている悠元や達也の見つめているモニターでは、第二セットが５０―４８で深雪が取り返し、次の最終セットにもつれ込む格好となった。

双方の点差は第二セット終了時点で同点。泣いても笑っても第三セットの点数で優勝が決まる。この勝負の行方がどう転ぶか分からないとみているものが多い中、第三セット開始のブザーが鳴り響く。

互いにラリーの応酬が繰り広げられている様子を観客席にいたスバルは思わず息を呑んでいた。

「……凄いね。相手の一色選手も一昨年から格段に速くなってるのに、深雪はそれについていってる」

「寧ろ、人間という領域にいる動きじゃないような気がする」

「ななみん、それは本人たちの前で絶対に言わないでね」

スバルの言葉に人間離れを示唆した春日菜々美に対し、釘を刺すように述べたのはようやく回復した英美だった。その上で、菜々美が話を続ける。

「でも、深雪の実力なら第一セットから飛ばしても行けてたような気がするけど……やっぱり警戒してたのかな？　一色選手は序盤からかなり飛ばしてたし」

「それはあるだろうね。けど、司波君あたりならそれも見越して作戦を立ててると思うよ」

「寧ろ、それに加担してそうな悠元が何をしたのか次第なのよね……」

第三セットは中盤に差し掛かり、深雪のリードが段々と広がっていく。明らかに深雪の優勢が見えて終盤に差し掛かった時、突然愛梨がコート上に倒れ込んだ。その反動でラケットがコート横に転がるようにして飛んでいき、透明のフィールドに当たって止まった。

すぐさま審判団が駆け寄り、一色選手の状態を確認。当人の意識喪失状態に伴い、深雪の優勝が決まった。だが、深雪の表情は晴れなかった。

「……何が、起きたの？」

「分からない。ボクの目にも一色選手が突然倒れ込んだようにしか見えなかった」
「うーん……司波君あたりに聞いてみれば分かるかな？」
一方、その様子をモニター越しに見ていた悠元。出来ればすぐに駆け付けたいが、自身の魔法がバレるリスクは最小限に止めるという観点から、大人しく控室にいる選択を取った。
「悠元、良かったのか？」
「生命に直結する事態でないのは読み取れたからな。察知されないように応急処置程度の魔法は掛けておいた」
本来、精神と肉体の間に神経ネットワークや脳が存在するのは、五感を通して得られた情報をフィルタリングすることで過剰な情報が行き交わない様にするためのリミッターでもある。愛梨の［稲妻］はそのリミッターを解除することで全ての伝達情報を直結させている。
言い換えれば、肉体が本来出してはいけない領域の力を発揮させるということにも繋がる。一例では危険な状況下で爆発的な力を発揮する『火事場の馬鹿力』があるが、その現象を魔法で疑似再現したのが愛梨の［稲妻］に他ならない。
本来短時間での決着用に使うべき［稲妻］を愛梨は感情の昂ぶりからフルセットで使用したのだ。いくら悠元との関わりで強くなっていたとしても、悠元の見立てでは〝8分〟が使用限度とみていた。
そして、使用限界に達したがために愛梨は意識を失って倒れた、という事態に繋がった。
「俺でも人体のリミッターを無暗に外すことはしない。それをするぐらいなら自己身体強化で疑似的に［稲妻］並みのスピードを出すだけで事足りるからな」
「それを出来る人間が世界でも指で数えるぐらいなんだがな……」
会場は一時騒然となったが、競技自体は数分の遅延が発生した程度で個人戦男子クラウド・ボール決勝が実施される。愛梨は念のためにセンター近くのメディカルセンター（正式名称は国立魔法医療大学付属富士山麓医療センター）へ運ばれたことは男子の試合終了後に知ることとなった。

◇　◇　◇

愛梨は瞼を開けるが、覚醒はとても緩やかなものだった。

意識が朧気で、正確な状況が把握できなかった。

何とか意識を手繰り寄せて視界が開けると、そこは白い天井が見えていた。自分が女子クラウド・ボールで深雪と戦っている際に意識を失ったところまでは覚えているわけだが、そうなると自分がどういった状況なのかも自ずと把握できてしまった。

「目が覚めたか、愛梨」

聞こえてきたのは男性の声。だが、愛梨のことを名前で呼ぶ男性となると、家族か自身の婚約者しかいない。愛梨が視線を向けると、そこには自分の父親である一色義道が椅子に座っていた。

「お父様。すみません」

「なに、命に別条が無くて何よりだし、魔法師としての活動にも支障は無いようだと言ってくれたからな……お前は司波さん相手に精一杯頑張った。神楽坂殿からも『今はゆっくり休め』と言付かっている」

「悠元さんが……」

そこでふと愛梨の視線の先に時計が映る。時間としては既に夕方で、個人戦男子クラウド・ボール決勝も予定では終わっている。愛梨が何を聞きたいのか悟った義道は横になっている愛梨の頭を撫でた上で説明をする。

「個人戦男子クラウド・ボールは神楽坂殿が圧勝した。一条君相手に１２００ポイント以上の大差をつけた上でのストレート勝ちだ」

「……お父様。それは御伽噺の類なのでしょうか？」

「私もモニター越しに見ていたが、最早人智の範疇に無いものを見させられた気分だったよ」

何せ、超高速でボールが行き交っているのに悠元の姿がコート上から〝動いていなかった〟のだ。正確には悠元の動きが速すぎて残像による影響で動いていないように見えただけなのだが、現代魔法や古式魔法の知識でも補えない範疇の戦いに、義道の話を聞かされた愛梨は目を白黒させていた。

「言い忘れていたが、医者の指示で大事を取って明日のピラーズ・ブレ

イク個人戦は棄権扱いとなる。悔しいと思うが、その悔しさはミラージ・バットで果たすといい」
「……お医者様の言い付けならば仕方がありませんわね。三高の皆には迷惑を掛けてしまいますが」
愛梨も悔しい思いはあるが、自身の魔法師としての活動に支障が出る可能性は排除しておきたい。なので、大人しく目を閉じたのだった。
なお、愛梨が不在となったことで沓子が栞に弄られる回数が増えてしまったのは……ここだけの話。
◇　◇　◇
二日目の全日程も終わり、食事の後は作業車に集まって談笑していた。個人戦女子クラウド・ボールで愛梨が倒れたことは気掛かりだったが、今後に支障が出ないという説明を聞いて深雪も安堵の表情を浮かべていた。
「これで、深雪の優勝は堅いね」
「雫、まだ二種目残っているのよ。私としてはまだ安心できないもの」
「慢心していないというのが怖いな……」
３年代表組は悠元と深雪が揃って1位をキープし、２年組も光宣と理璃が1位を保っている。ただ、２年代表戦は男女共に三高が苦戦を強いられていて、両方ともに2位となっているのは四高。その理由は四高に在籍している黒羽文弥・亜夜子の姉弟であった。
「明日はピラーズ・ブレイクがあるけど、悠元はどんな作戦を取るの？」
「いつも通り速攻で片を付ける。予選の魔法はこれまでに使ったもので事足りるだろうから、それの使い回しにする予定だ」
今年からのルール変更では、個人戦の絡みでミラージ・バットの得点配分がモノリス・コードと同様に1位１００ポイント、２位６０ポイント、３位４０ポイント（新人戦はその半分）となっている。理由は飛行魔法の登場によるエンターテイナー性の向上にある。
なので、深雪が気を抜けない理由はここにある。
「それじゃ、決勝リーグは？」

「予選通過前提で話をするなと言いたいが……魔法構成自体は大幅に変えるとだけ言っておく。達也にだけは調整の観点で話してあるが」
「そうなのか？」
「ああ。とはいえ、誰が聞いているかも分からないから迂闊に話せないが、悪知恵が働いていると感心したほどだ」
　これまでアイス・ピラーズ・ブレイクでの大戦で将輝に対して使用したのは天神魔法の［天照（アマテラス）］と［天澪環海（ゼロ・オーシャン・ブラスト）］。今年は更に趣向を変えて将輝を負かす算段は立てている。
「あの程度で悪知恵なら、まともな策が神算鬼謀の類になりそうだけどな」
「……つまり、将輝の［爆裂］に対しての策は一昨年や昨年と変えるってことか？」
「ああ。同じ手だけで完封しても観客は面白くないだろう？」
「他校の対策よりもそういう理由で変えるのは悠元ぐらいですよ」
　今回の将輝に対する手法を考慮した際、念を入れてルール確認はした。そして問題ないことが確認できたため、魔法構成を組み立てた上で達也にだけ伝えている。その時の感想は『こんな単位で精密な魔法が出来るのが異常すぎる』と言われたことには遺憾の意を示した。
「それに、考え方自体は雫が使ったことのある魔法を参考にしているから、そこまでの目新しさはないんだけどな」
「……成程、大方の予想は付きました」
「え？　深雪は分かったの？」
「ええ」
　目新しさが無くとも、既存の技術や知識を応用して新たな戦術を組み立てる。それを平然とやってのけている悠元に対して、大半の人間は冷や汗を流していたのだった。

高校最後の九校戦④

九校戦三日目。本戦団体はバトル・ボード男女決勝とアイス・ピラーズ・ブレイクの男女ペア決勝リーグとソロの予選・決勝、個人戦はアイス・ピラーズ・ブレイクの予選と決勝リーグという日程となる。

一高の選手はバトル・ボード男子に六塚燈也、女子に光井ほのかの二人が決勝に進出。ピラーズ・ブレイクは男子ソロに宮本修司、男子ペアは吉田幹比古と西城レオンハルト、女子ソロは千葉エリカ、女子ペアは北山雫と六塚泉美の布陣となっている。

本来、氷柱の精製に時間が掛かる都合で試合数が制限されていたが、神坂グループが施設を買い取ったことに伴って改修工事を行い、天神魔法に抵触しない範囲で氷柱の魔法精製技術が確立したため、試合数の制限はほぼなくなった。

元々は悠元が夏に美味しいかき氷を作りたいがために魔法を設計した結果、高さ１００メートル程度の氷柱が精製されたものをダウングレードした産物だと知るのは……彼と親しい友人のみが知る事実であった。またの名を黒歴史。

「他で忙しかったからあまり関われていないが、問題はなさそうか？」

「そうだな。しかし、エリカは意外だな」

「……否定できないのが悔しいわね」

エリカの魔法スタイルからすれば、自身から動くことがないピラーズ・ブレイクは肌に合わないと思っていた。だが、他ならぬエリカがピラーズ・ブレイクの出場に意欲的だったため、今回のメンバーに加えた経緯がある。

「九校戦が終われば、あたしは千葉の人間じゃなくなるけどね。あのオヤジに意趣返しの一つぐらいはしておきたいのよ」

「理由は分からなくもないけど、てっきりミラージ・バットに立候補するかと思ってたよ」

「ミキ、あたしの場合は基本地上限定だから」

それと、ペアに選出されたレオの存在もエリカにとって拍車を掛けていた。戦闘スタイルが似た者同士の人間が出るとなれば、負けてい

られないという面が出た形だ。
「その為の魔法は用意して貰っちゃったけど……［トーラス・シルバー］に掛かると朝飯前のように準備されたのは笑いしか出てこなかったわよ」
「元という但し書きは付くけど」
基本近接戦闘特化型のエリカで、入学したころは遠隔操作型の魔法に一苦労していた。だが、悠元との関わりで強化された結果、基本的な現代魔法――八系統魔法を使いこなせるまでに成長し、一科生でも頭一つ以上抜きん出た実力者にのし上がった。
「それに、今回の技術は大陸の魔法を参考にしながら組み立てたからな。エリカなら行けると踏んで渡してるし、練習でも問題なかったからな」
「……まあ、頑張るわ」
どこか釈然としない様子を見せつつも、調整を終えたＣＡＤを手にしてエリカが先に天幕を後にしたのだった。

◇　◇　◇

本戦は今日の競技が終わるとミラージ・バット、モノリス・コード、マギテクス・ボールの三種目を残す形となるが、大差をつけている一高がここでも上位入賞すれば三高の優勝の可能性は大きく低下する。
新人戦で挽回は十分可能かもしれないが、今年は新人戦だけ湘海高等学院が競技に参加する。当該校の成績は新人戦における順位として残るが、本戦に参加しないため九校戦の順位にはカウントされない。だが、他の魔法科高校からすれば順位変動に少なくない影響を与えることにも繋がってくる。
午前の最初はバトル・ボード決勝とアイス・ピラーズ・ブレイクの男女ソロ・個人予選が並行する。バトル・ボードの結果はと言うと、男子は燈也が危なげなく優勝した。
「ほのかはずるいのじゃ。わしの取っておきすら躱しおって。その胸に秘密があるのかのう？」
「何もないから!!」
３年女子決勝は一昨年の決勝でデッドヒートを演じた一高・光井ほ

のかと三高・四十九院沓子。今回も沓子の妨害を達也への想いで乗り切ったほのかに軍配が上がり、沓子は2位となった。
「沓子の気持ちは分かるけど、沓子も十分ズルい」
「雫!? な、何をする気なのじゃ!?」
「言っとくけど、ほのかも同罪」
「えええっ!?」
数分間、三人だけとなった控室……何かをやり遂げた雫と疲れ切っていたほのかや沓子の姿を見たものは、何があったのかを悟って黙っていたのだった。
そうして予定通り午前の試合が終わり、昼休みの休憩となった。
「六塚君とほのっちが優勝、ソロは修司とエリカっちが無事に決勝進出、個人も予定通り全員が決勝リーグに上がったね」
「正直、出来すぎな部分もありますが……」
由夢の指摘に苦笑を浮かべたのは光宣。予選がそこまで強敵に遭わなかったのも一因だが、決勝は四人以外の知り合いで言うと、3年組は一条将輝、2年組は黒羽亜夜子・文弥の姉弟が決勝リーグに上がってきている。しかも、二人は三高の選手と同ブロックにいたが、それを破っての決勝進出。
なお、愛梨は医師の判断で大事を取って棄権となった。自力優勝の可能性は無くなってしまったが、こればかりは仕方がないだろう。
「達也は何か聞いてたりするか？」
「母上に聞いてみたが、どうやら母上が発破を掛けたようだ」
「叔母様がですか？ 珍しいですね」
達也が聞いた限りでは、どうやら真夜が黒羽家を焚き付けたらしい。その背景には慶春会で悠元に対する無礼を働いた部分もあるようだが、現当主である貢の達也に対する態度を見た真夜が『冷酷な怒りを見せた』形だと達也は述べた。
「『昨年の時点で目立った以上、出場を控えさせたら逆に悪目立ちしますもの』と言っていた」
「それって、黒羽姉弟が噂の通りだと捉えていいのかい？」
「ああ。正確には再従兄弟だが、四葉の血は引いている」

秘密主義の四葉家にしては思い切った判断だが、黒羽姉弟の噂を事実化することで黒羽の真の役目を隠すと共に、達也や深雪、彼らと親しい人間に対する脅威を分散化させる狙いもあるのだろう。

尤も、達也は口にしなかったが、真夜との通信の中でモニターの下方向から呻き声のようなものが聞こえたが、それについては敢えて触れなかった。画面に映る母親の機嫌を損ねると何かしらの被害が来ると判断してのもので、葉山をはじめとした使用人の負担を考えてのものだった。

その後、葉山から『賢明な判断を頂き、真に感謝します』という文言を聞いた事で、達也の気遣いはプラスに働いていた。

「にしても、エリカっちの魔法は凄かったね。影の斬撃で氷柱を破壊しちゃうなんて」

「悠元が開発した魔法でないと出来ないわよ、あんな芸当」

剣術を嗜むエリカの戦闘スタイルを生かすため、悠元は魔法を提供した。

術式名は［幻影奇襲（ファントム・レイド）］――――周公瑾が苦心した［哮天犬（シャオビエンチェン）］と千葉家の秘剣［切陰（きりかげ）］の術式をベースにして、影を媒体とした遠隔操作型の魔法斬撃で任意の対象を斬る魔法。

斬撃の形状や効果範囲、数などは術者が自由に決められるため、自由度が高い代わりに術者の技量が要求される。そして、使用している術式の関係でエリカの専用魔法（ワンオフ）となっている。

「まあ、あの魔法はエリカが使える技術を使ってるから、エリカ以外には使えないのも事実だけどな」

「悠元なら真似できそうな気がするけど」

「その魔法を使う理由が無い」

新陰流剣武術は千刃流の大本となっている剣術だが、態々ダウングレードさせた技を使う理由が無い。それならば使い慣れている技術で威力を抑えた方がまだマシという判断だった。とはいえ、エリカがいる手前なので『敢えて同じ魔法を使う理由が無い』と返した。

「そんな悠元も予選で氷柱を全て斬り倒していたがな」

「面倒になりそうなら［爆裂］で片を付けていたけど」

「あはは……」
悠元の予選は全て魔法の斬撃で片を付けて決勝進出。深雪の場合は［氷炎地獄（インフェルノ）］を主体とした戦術で危なげなく決勝に進んだ。多彩な術式を駆使する光宣は言うまでもないだろうし、理璃に至っては［ファランクス］で容赦なく氷柱を圧壊させていた。
「決勝リーグは特に作戦を変える必要もないだろう。悠元は予定通りに行くのか？」
「ああ。ルールに抵触しないのは確認できたからな」
悠元の決勝リーグは一高と二高、三高の代表による形となった。なお、アイス・ピラーズ・ブレイクではある意味暗黙の了解となっている服装については、一昨年と同様に羽織袴姿となったが用意したのは千姫で、この大会の為だけにオーダーメイドしたことも耳に挟んでいる。掛けた金額については耳にしたところで何も出来ないため、聞くのを止めた。
深雪の服装については一昨年と同様に白の単衣と緋色の女袴となったが、これは深雪の我儘が主な原因だった。曰く『一昨年と同じ格好にすることで、私が誰のものなのかを示すことが出来ますので』という言い分。
それを聞かされた側の悠元としては惚れた弱みもあって黙認せざるを得ず、達也も諦めたように衣装の注文をした事実があったことを述べておく。
◇　◇　◇
午後からアイス・ピラーズ・ブレイクの決勝リーグが開始。今年は個人戦の好カード――主に悠元と将輝の対戦が控えている――があるため、団体ソロ・ペア決勝リーグが男女同時に開始。これまで氷柱の精製能力で出来なかったスケジュール進行が可能となったため、４つの試合会場で次々と試合が消化される。
団体ソロの男女決勝が終了次第、個人戦の３年代表戦決勝が実施。ペア決勝終了後に２年代表戦決勝となるため、技術スタッフや作戦スタッフに掛かる負担はこれまで以上に重くなっている。
「悠元の気遣いが無かったら、俺でも倒れていただろうな」

「本気なのか冗談なのか判断に困る台詞は止めろ」
　団体ソロと個人3年は達也が調整を担当していた。今年になって漸く同性同士でのサポート体制が出来たという点では一つの進歩であり、これまでフォローしていた深雪なりの〝兄離れ〟の形なのかもしれないと達也は内心で感じていた。
「修司とエリカは問題なく優勝、ペアの方も問題はナシか。第一試合は呆気なかったな」
「開始1秒弱で相手のピラーを全て破壊した側がそれを言うのか」
　決勝第一試合は悠元と二高の代表の対戦だったが、持ち前の魔法展開能力で相手の魔法を待たずに試合を終わらせた。控室の向こうでは第二試合が始まろうとしている所だった。とはいえ、二高の代表と将輝では勝負の結果など分かり切ったようなものだが。
「将輝との対戦が控えている以上、無駄に魔法力を消費する道理もないからな」
「悠元は一条が［爆裂］以外の手を使ってくると考えているのか？」
「無論だ」
　最有力候補は将輝の戦略級魔法［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］に他ならない。元々［爆裂］によって昇華系統の相転移魔法を使える彼にとって、［爆裂］が効かない相手ともなれば使わない理由が無い。
　魔法競技で戦略級魔法は大人気ないと思われるかもしれないが、効果範囲や威力を調整すれば戦略級魔法を競技のルール内に収めることは可能。あのベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］やジャスミン・ウィリアムズの［オゾンサークル］でも器用な使い方が出来ていたので、似たことが他の戦略級魔法で出来ない道理はない。
「一番の最有力候補は将輝に渡した［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］だ。俺の［星天極光鳳（スターライトブレイカー）］や達也の［質量爆散（マテリアル・バースト）］と比較すれば、［チェイン・キャスト］を介する分で威力の変動はかなり容易に出来る部類だ」
　それに、ピラーズ・ブレイクでは威力の上限を定めていない。範囲や会場設備への損害を考慮するべきところはあるが、対人戦ではないために殺傷ランクを度外視することが出来る。なので、過去の九校戦で悠元は躊躇わずに高威力の魔法を連発していた。

「成程、そういう見方からすれば範囲が限定されるピラーズ・ブレイクに使うことは出来るか」
達也が返した後、会場の方から歓声が聞こえてきた。モニターでも将輝が完勝した様子が映し出されていた。これによって1勝同士となる悠元と将輝による決勝戦が確定した。
「それじゃ、頑張ってきますかね。達也には念入りに調整してもらったから、不敗神話を傷つけないように最善を尽くすけど」
「俺は別に気にしていないが……勝ってこい、悠元」
「ああ」
元から［トーラス・シルバー］の功績に対してもあまり執着していなかった達也からすれば、別に一敗ぐらいしようとも構いはしなかった。だが、担当している人間の実力からすれば、また不敗神話に新たなページが刻まれるのは確定的。
達也は悠元に激励を送り、衣装に着替えた悠元はＣＡＤを受け取って控室を去っていった。
◇　◇　◇
個人戦：第3学年代表戦の第三種目、個人男子アイス・ピラーズ・ブレイク決勝リーグ第三試合。会場は立ち見の客が出るほどに満員の様相を呈しており、ＶＩＰ席には十師族当主らがその様子を見守っていた。
第一高校代表の神楽坂悠元。元十師族・三矢家三男で護人・神楽坂家現当主、史上最年少で師族会議議長に就任した人物で、師族会議の提唱者である九島烈が後継者と公言した国家公認魔法技能師。
第三高校代表の一条将輝。十師族・一条家長男で、５年前の佐渡侵攻で敵を食い止めて［クリムゾン・プリンス］の異名を持つに至った魔法界若手ホープの一角にして国家公認戦略級魔法師。
双方共に日本政府から認められた魔法師同士の対戦。銃状デバイスを持つ将輝に対し、両腕にブレスレット型のＣＡＤを身に着け、腰にも脇差程度の武装一体型デバイスを持つ悠元。会場にいる観客が固唾を呑んで見守る中、試合のカウントダウンを告げるランプが灯り始める。

灯火が色を変え、試合開始を告げた瞬間――――双方が魔法を展開した。
将輝はこれまでの敗戦を鑑み、まずは自陣側の氷柱を[情報強化]で強化する方針を取った。速攻で[爆裂]を仕掛けて敗北した事実からすれば、悠元は過去二年間でカウンター戦法を主体としていた。
一方の悠元も自陣側の氷柱を強化していた。だが、悠元が掛けた魔法は大半の魔法師が見れば[情報強化]のように認識できているが、達也はその魔法に仕込んだ仕掛けに気付いた。エンジニアとして深く関わっているのだから、その魔法のことも聞き及んでいた。
(強度的にはギリギリ一条の[海嶺爆裂(オーシャン・ブラスト)]で破れるようにしてあるようだな)
双方共に一手目を防御に割り振った。だが、その選択を取ることも悠元からすれば想定の範疇。次に動いたのは悠元で、[偏倚解放]で将輝側の氷柱に攻撃を仕掛ける。フィールド内に風が吹き荒れるものの、被害は全くと言っていいほどない。
それに対して一々驚く素振りを見せることなく、次から次へ[偏倚解放]を繰り出す。
窓の外やモニターを見ながら観戦している達也の許に、扉が開いて来訪者が姿を見せた。
「お兄様、試合は終わりましたか?」
「いや、はじまったところだよ深雪。その様子だと結果は聞くまでもないが、おめでとう」
「ありがとうございます」
訪れたのは深雪だけでなく、別の会場で試合していた修司やエリカ、レオや幹比古、それに雫やほのかまで訪れて控室は一気に賑やかとなっていた。そして窓の外に映る試合の様子を見たエリカは、膠着状態の試合を見て〝察してしまった〟。
「で、悠元と一条君は……あー、完璧に悠元の術中に嵌ってるわね」
「そうだね。一度に出せる手数の時点で悠元に分がある」
エリカと幹比古は悠元の魔法の強みを誰よりも知っているからこそ、今の戦況が悠元にとって有利な状況を作り出していることを誰よ

りも察した。
「昨年の練習で私がやられたパターンですね。一条さんには申し訳ありませんが、ご主人様の完封で終わりますね」
「深雪。ここに知り合いしかいないからって、その呼び方は止めた方がいいと思う」
「あ、あはは……」
既に見えた勝負に対する深雪の言葉を聞き、雫は悠元への呼び方に対して一応釘を刺し、ほのかは二人の会話を聞いて苦笑を漏らしたのだった。

高校最後の九校戦⑤

試合会場の三高側の控室では、真紅郎が作戦参謀として悠元と将輝の試合を見つめていた。

「はあ、一応作戦通りになったと言えばそうだけれど……」

これまで過去二年間の試合では速攻勝負で敗北していたため、将輝が提案したのは長期戦による息継ぎが切れるタイミングか魔法行使中止のタイミングで大会用に調整した［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］を使って破壊するプラン。

真紅郎も聞いた最初は道理だと思ったが、そのプランに最後まで反対したのも真紅郎。理由としては、悠元の元実家である三矢家の人間が例外なく［多種類多重魔法制御］を修得しているという点だった。

「確かに、悠元との試合で彼はそこまで魔法行使をしていない。それは事実だけど」

将輝との試合以外に視線を向けると、水素結合による完璧な相対固定防御を行使しながら苛烈な攻撃魔法で相手を完封していた。そんな芸当が出来る時点で十代の魔法師レベルではない。

それに、将輝が悠元に勝負を挑んだ今年3月の模擬戦のデータは悠元経由で貰ったが、悠元は十文字家の秘術である［ファランクス］を駆使しつつ現代魔法の範疇で決着をつけたことも把握していた。

この競技で悠元が古式魔法の行使にまで踏み込めば、将輝の勝機は最早ないに等しくなる。

「それを正直に伝えたところで、将輝が聞く耳を持たなければそれまでだよね……」

別に将輝自身の聞き分けが悪いとは言えない。それは親友として付き合いが長い真紅郎だからこそよく知っていることだ。ただ、それが将輝の恋愛事情に絡むとよくない方向へ傾いてしまう。

すると、会場の方からどよめきが聞こえてきた。真紅郎が視線を窓の外に移すと、そこには真紅郎ですらも目を見開いていた。

「あれは……火の鳥!?」

真紅郎ですらも冷や汗が止まらないほどの威圧感を放つ存在。そ

れが会場のフィールド上空に顕現していた。
◇　◇　◇
（変に攻めてこないな……多分、息切れか魔法力の枯渇を狙ってのものだろうけれど）
そもそも、悠元が選んだ手法は［偏諱解放］によって将輝を焦らす戦法だったわけだが、将輝はそれにも耐えていた。
そもそも悠元の想子保有量は公表されていないし、悠元自身も正確な数値を把握していない。固有魔法ありきとはいえ天刃霊装を常時展開した状態で［鏡の扉（ミラーゲート）］を駆使し、更には数発の戦略級魔法を放っても〝軽い運動〟という認識に収まった時点で、剛三や千姫のことを言えなくなりつつあるのは確かだった。
そんな自分の心にダメージを負いそうなことは一旦心の隅に追いやり、悠元は一息吐いた上で［偏諱解放］の発動を中断。一瞬静寂になるフィールドを見据えながら、悠元は左手を前に翳した。
「では、その脆弱な現代魔法でどれだけ耐えられるか見せてもらうよ、一条。天神喚起――来い、［鳳凰］」
悠元が呟くと同時に、悠元の周囲を七色に光る精霊たちが顕現し、更にはフィールドの上空に巨大な魔法陣が出現。それを門のように潜って姿を見せたのは、真紅に染まった巨大な鳥。その鳥が羽ばたくと、周囲を覆うように赤き光を纏う。
この会場にいる者ならば、その神霊の存在を知っている。赤き炎を纏い、再生の象徴とも謳われた伝説の不死鳥。最上位神霊が一角、［鳳凰］の顕現に魔法を扱う者達は存在感に圧倒されていた。
そして、それは一高の控室にいた達也たちも例外ではなかった。
「神霊を喚起して、それを使役するって……味方で良かったと心から思うよ」
「それは分かるぜ、幹比古」
「あたしですら冷や汗が止まらないわよ。本当に人間なのかも疑わしいわ」
（エリカは後で悠元からお仕置きされるな）
幹比古、レオ、そしてエリカの言葉に内心で反応しつつ、他の面子

の様子を見る。ほのかは存在感に中てられて気絶してしまい、雫が面倒を見ていた。修司は真剣に窓の外を見つめていて、残る深雪と泉美はと言うと

「流石悠元お兄様です。もはやあの人など目ではありません」

「泉美ちゃん、思っても口にしてはいけませんよ。ご主人様がかっこいいのは認めますが」

「……」

こちらはある意味通常運転（いつものはんのう）だったので、達也は関わるべきでないと判断して窓の外に視線を移した。その直後、将輝側の氷柱の一本が突如音を立てて崩壊したのだった。

試合の均衡を破ったのは悠元が［鳳凰］を喚起してから。将輝のフィールド全体に高温のフィールドが形成された。将輝側の残り８本となった氷柱も溶けだしており、いつ倒壊してもおかしくはない。

（神楽坂……！）

長期戦を選択したのは将輝自身の選択。その様子を見た悠元が膨大な霊圧を持つ存在を呼び出すと、将輝は不利に陥った。この状況を見た将輝は悠元の想子保有量がもたないと判断して勝負を決めに来たのだと推察した。

どの道［情報強化］で耐え切ったとしても、負けは必定。せめて一矢報いると決めた将輝はコンソールを操作して悠元側のフィールドに狙いを定めた。

「これで勝負を決める――――［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］！」

そうして放たれた将輝の戦略級魔法［オーシャン・ブラスト］は悠元側のフィールドを魔法式で埋め尽くした。無効化される素振りも無く、悠元側の防御も左程強固ではない。氷柱に付着した水滴が気化し、水蒸気となって悠元側のフィールドが一瞬にして蒸気による濃い霧で覆いつくされた。

氷柱が崩れる音も聞こえたことで、真剣な将輝の表情が一瞬綻んだ。だが、霧によって遮られた向こう側の悠元は口元に僅かな笑みを見せた。

「……これで決着をつけるぞ、一条」

そう呟いた直後、［鳳凰］の姿が光に包まれて巨大な魔法式が展開されると、悠元と将輝のフィールドを囲うように四角柱の半透明のフィールドが形成。悠元は開いた左手を高く掲げた。

「術式展開――［天極劫火（オメガ・フレア）］、発動」

開いた手を握った直後、フィールド内に巻き起こる爆発。衝撃波が将輝や観客を襲うことはなかったが、将輝側のフィールドにあった氷柱は全て消え去り、悠元側のフィールドは８本消失したが中央の１本は綺麗な状態で健在だった。

戦略級魔法［天極劫火（オメガ・フレア）］――新ソ連の戦略級魔法［トゥマーン・ボンバ］を改良した戦略級魔法で、特定地点のみを爆撃することによって少ない魔法力で最大威力を叩き出すことに主眼を置き、状況次第では味方への被害を一切出すことなく敵のみを葬り去る戦略級魔法へと昇華した。

今回は将輝の［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］によって昇華した水蒸気や破壊された氷柱の残骸を利用して［天極劫火（オメガ・フレア）］の触媒とすることで、相手の［情報強化］を無視して膨大な化学変化に伴う熱量変化で将輝の氷柱を全て水蒸気に昇華させた。

自陣のピラーが１本でも残っていれば勝ちは勝ちなので、完勝よりも相手の油断を誘った上での作戦勝ちを狙った悠元が上手だった。念には念を入れて［ファランクス］で防御を強固にしていたのは試合後の魔法解析で発覚するだろうが、別にバレても現在の魔法師でそこまでの魔法行使を出来る人間が限定されてしまうため、十文字家の優位性は揺らがない。

別に無傷で勝つことも出来ただろうが、色々考えた結果として相手を油断させる手段を取った。将輝は有している戦略級魔法に自信を抱いているだろうが、その魔法を完成させるための技術を提供したのは悠元。

佐渡沖では［トゥマーン・ボンバ］に対抗する形で世の中へ出た［海嶺爆裂（オーシャン・ブラスト）］。それに対する皮肉も込めて［トゥマーン・ボンバ］を改良した［オメガ・フレア］を行使した。

呆然とする将輝に対し、悠元は服装を正した上で頭を下げた。この

場にいる者やカメラを通して放送を見ている者達にも、日本政府が認めた神楽坂悠元の強さが知れ渡る形となったのは言うまでもないことだろう。

◇　◇　◇

悠元が控室で制服に着替え終えたところで、珍しい来客があった。それは一条家現当主・一条剛毅であった。彼は部屋に入って悠元の前に立つと、深々と頭を下げた。

「此度は申し訳ありません、神楽坂殿。あの馬鹿息子に喝を入れてくれて感謝いたします」

「頭を上げてください、一条殿。個人戦男子はまだモノリス・コード本戦が残っておりますので、将輝がせめて一矢報いようとしてくるかもしれません」

「それは……そうでしたな」

流石に一昨年のようなオーバーアタックは慎むだろうが、感情の昂ぶりで威力の調整ミスをしないとも限らない。その意味でモノリス・コードまで終わってからが本当の〝話し合い〟になるのだろう……殴り合いになるかもしれないが、流石に弱い者虐めとなるのは御免被る。

悠元の声掛けに応じる形で剛毅は下げていた頭を上げて悠元に視線を向けた。

「前以てお話しておきますが、今回の件で一条家を罰することは致しません。私も当事者側の人間であるが故、変な利害関係に発展させないと断言しておきます。跡継ぎなどの問題についても一条家の家内で決着をつけて頂きたい」

「……温情ある判断に感謝します」

モノリス・コードまで負けて深雪をまだ狙うようならば、将輝を本気で物理的に沈めるしか治療法はないだろう……別に殺す気は毛頭ない。将輝の魔法師としての能力は本物なので、彼が居なくなって日本海側の守りまで担う真似は勘弁してほしいのが本音。

「それと引き換えになるのか分かりませんが、将輝には許婚ないしそれに準ずる存在と言うのは居るのでしょうか？」

それは以前レオが抱いた疑問。気になって悠元は少し調べたものの、あまりの複雑怪奇さに匙を投げたほどだった。何故かと言えば、それは将輝の父母の家系構成が原因。

まず、将輝の父方については一条の本家側なのでそれはいいし、父方の祖母についても特に問題はなかった。問題は母方のほうで、一条家現当主夫人の一条美登里の旧姓は『若狭(わかさ)』。

この若狭家は魔法界の血統で言えば〝新参者〟という扱いで、美登里の母親は『鶴画(つるが)』の旧姓を名乗っていた。早い話が、若狭家は鶴画家の分家筋にあたる。更に、婿養子という形で美登里の母親と結婚したのは一色家先代当主の弟。

一色直系である愛梨から見れば大叔父で、将輝の母親は一色と鶴画の血筋を引いている。つまるところ、血縁関係で言えば将輝と愛梨は再従兄妹（もしくは再従姉弟）にあたる。

「確か、神楽坂殿の婚約者には茜だけでなく一色家の令嬢も含まれていますが、お聞きにならなかったのですか？」

「変に心労を重ねたくありませんでしたので。結局は将輝の件で悩むことはありましたが」

「重ね重ね、申し訳ありません。一色殿には自分の方から詫びさせていただきます」

なぜこんな問いかけをしたのかと言えば、同年代かつ一色家令嬢である愛梨に婚約者騒ぎが起きていて、将来の一条家を担うことになる将輝にそれがない、という理由付けにならないからだ。

将輝の女性に対する付き合いが不慣れな部分は家庭環境の影響もあるだろうが、直系で唯一の男子となれば将来の一条家を担う身として政略結婚をする公算は自ずと高くなるだろうし、将輝だってそれを理解していない筈がない。

自分の場合だと高校入学前に泉美との婚約が結ばれていたが、国防軍の件で一度はおじゃんになった。それについては大本の素材世代となる三枝家絡みと言うのもあったそうだ（この辺は剛三や千姫から聞いていた）が、自分に〝転生による心身の融合〟という変化が起きた段階で二人が元に『悠元の婚約は此方で決めたい』と申し出をし、元

も三矢を安定させる意味と悠元の宣言を聞いて了承したと聞いている。

剛三が悠元を『魔法治療』の名目で国内外へ連れ回したのは、将来の嫁探しという側面もあった。結果として英国の女王の子作りに協力するだけでなく、過去に分かたれたゴールディ家の本家筋を受け継ぐ少女をフランス政府が認めた婚約者として迎えることになった。

悠元の事情は置いといて、国家公認戦略級魔法師となった将輝には将来を託せるだけの存在を求められてしまう。実際に子を産むのは彼と結ばれた女性の役目だが、だからと言って男性側がお役御免とは決してならない。

単に魔法資質を受け継がせるだけでは意味がない。今までに受け継いだ全てを継承する役目を担うのは間違いなく将輝の義務となるし、一条家に課せられた〝重み〟を受け止められるだけの心を育てるのも大事な仕事だ。

将輝は5年前の佐渡侵攻で活躍して［クリムゾン・プリンス］と呼ばれるほどの才覚を見せた。だからと言って家の主が直ぐに変わるという事態へは発展しなかった。法律という問題もあるが、現当主が現地での活躍に加えて多方面との交渉事や折衝役を担うことで迅速に対応できた。

悠元の場合は16歳で神楽坂家の当主となったが、長年の問題となった『伝統派』との和解によって京都・奈良方面の問題事が良好な方向へ傾いたことが功績として評価された。加えて引き継いでいた家業でも実績を出したことで、年齢上は高齢である千姫から家督と家業を継いだ。

この辺は悠元が転生者という強みもあるかも知れないが、将輝が一条家当主として引き継ぐにはこれまで以上の研鑽や努力を求められる。時として人に頭を下げることで自らの非を認める度量も必要となってくる。

実際のところ、一昨年のオーバーアタックの件は剛毅も観戦していたために気付いており、九校戦後に将輝は『謝罪はした』と述べていたが、当事者の一人である悠元に話を聞いて嘘をつかれたことに激怒

した。だが、どうせ痛い目に遭うのが分かっているからこそ、悠元は敢えて剛毅に『本人が折れるまで容赦するつもりはありませんので、その件はこちらに任せてください』とお願いをし、剛毅も茜のことがあるので了承してくれた。

「それで将輝の許婚の件ですが、確かに妻の本家筋である鶴画家の令嬢を許婚に推されています。鶴画家は名前ぐらいなら御存知かと思いますが」

「あー、成程。黄里恵（きりえ）ちゃんですか」

「ご存知だったのですか？」

「ええ、自分からしても親族にあたりますので」

原作世界では分からないが、〝この世界〟では三矢家と鶴画家に繋がりが存在する。悠元の父方の祖父である三矢舞元の妻だが、旧姓は鶴画であった。厳密には鶴画家先代当主――――黄里恵の祖父の妹が舞元の妻にあたる。つまり、悠元と黄里恵は再従兄妹の関係になる。

直接的な家ぐるみの付き合いこそほぼ皆無だった（舞元が四葉の復讐劇に手を貸していたことと、その後に元へ家督と家業を継がせて三矢本家だけでなく鶴画家とも距離を置いたことが大きい）が、上泉家経由（正確には剛三に付き合わされて）で鶴画家を訪れた際に黄里恵と面識を有することとなった。出会った当時は互いに中学生だったこともあったが、その時点で黄里恵には好いている人がいる印象を強く受けた。

黄里恵当人も『家から既に婚約のことを言い渡されていますので』と述べていたので、変に気遣われることも無かったし、自然体で話すことが出来た数少ない相手の一人でもあった。

「とはいっても、それを知ったのが中学二年の時でしたが……その時には既に？」

「ええ。厳密には佐渡侵攻が起きてから1か月経ったぐらいですが、妻経由で話を持ち込まれましてな。将輝にもそのことは話しています」

佐渡侵攻で将輝は一条の魔法師として存在を示し、功績を挙げた。そうなれば、将輝に期待されるのは彼の子孫世代に繋がる跡取り的な

存在。これは別に将輝だけそうなっているというわけではない。現に悠元もそうなってしまっている一人なのだから。
将輝が駄々をこねても、一色家や鶴画家が諦めるとは思えない。ましてや一色家や鶴画家のみならず、十師族の一角を担う一条家にとっても後継者の確保は今後の師族会議にも大きな影響を与える。
この部分は将輝以外の直系が女性という現状も大きいのだろうし、現に茜は悠元の婚約者で瑠璃は真紅郎に好意を寄せている。鶴画家としては世界的な実績を有した婚姻が一条直系の姉妹によって期待できる以上、残る将輝に白羽の矢を乱立させるのは無理からぬことだ。
最悪、将輝に子どもが出来なくとも茜や瑠璃の子が魔法師もしくは魔法学の研究者として期待できるため、将輝に対するプレッシャーが必要以上に掛けられていない。これが却って将輝の恋心の暴走劇に繋がっているのは否定できない。
遺伝子同士の相性で許婚を決めるのは倫理的・道徳的な問題がどうしても付き纏う。しかし、これまでの現代魔法の発展における過程でその傾向が顕著に出ているとなれば、それに縋るのが魔法師の家として一番最善策とも言えるだろう。その最たる例は上泉家と神楽坂家で数代おきに行っている婚姻で、これによって護人としての資質の喪失を防ぎながらも更なる研鑽を積み続けた。
一番いいのは血統の良し悪しに関わらず恋愛結婚出来れば最良だが、現在の魔法界を鑑みるとそこまでに至っていないのが実情。これも魔法を軍事に取り込もうとしたが故の弊害の一つなのだろう。
「……将輝が親の定めた許婚について快く思っていない理由は察せました」
悠元や達也も実家から婚約者を決められたが、それ以前に各々の人付き合いが発展しての婚約者であった。悠元の場合は何故か第一夫人のガーディアンだったり、父母世代の未亡人やら元国家公認戦略級魔法師やら、終いには実家の繋がりで通っている学校の保健医のみならず、世界最高峰の実力を有する十師族現当主が愛人となる始末だが、それは一旦置いておく。

達也の場合は片思い（ほのか）や尊敬からくる恋慕（亜夜子）もあれば、殺し合いに発展してからの関係構築（リーナ）や敵の洗脳による妨害から恋愛感情を抱いた（千秋）ケースがある。関係構築の複雑怪奇さで言えば達也に勝てる相手はいないだろう。

では、将輝の許婚は違うのかと言えば、結論から言えば〝同じ〟だった。

元々一色家の繋がりが存在するため、将輝と黄里恵は過去に親戚ぐるみでの付き合いが存在する。更には茜が悠元へ恋慕したことで、同じ悩みを持つ立場となった黄里恵と茜、そして真紅郎に惚れた瑠璃は本当の姉妹のように仲良くなった。

一色家や鶴画家の父母・祖父母世代は二人をくっつけようと画策していたわけだが、黄里恵の感情を見て鶴画家が若狭家を通す形で一条家に黄里恵を将輝の許婚へと推した。だが、妹らとの拗れで女性との付き合い方に慣れていない将輝は黄里恵の感情が汲み取れず、親が決めた関係に強制されてのものだと信じ切っている。

簡単な話、将輝が早合点しているせいで拗れに拗れ、その手段として深雪への恋慕を諦めていないという行動に繋がると考えれば、もっと納得がいく。しかも、当人の女性への気質も相まって、将輝は自分の身を削りながら振舞っている始末だった。

更に言えば、黄里恵は元々大人しい気質であり、将輝の家柄もあってか自分の意見を押し通せずにいる部分も大きく影響している。

「自分が言えた義理ではありませんが、不器用にも程があり過ぎるでしょう……何はともあれ、お教え頂き感謝しております」

「いえ、この程度の事など苦労にもなりません」

最悪、将輝の関係者繋がりで愛梨や茜に話を持っていくことも考えつつ、悠元は剛毅よりも先に部屋を後にしたのだった。

◇　◇　◇

宿泊先のホテルは基本二人一組。それは選手もスタッフも同様であるし、悠元も当初はそのつもりでいた。

だが、神坂グループ取締役にして師族会議議長という肩書が働いた結果、グループ役員専用のスイートルームが大会中の悠元が泊まる部

屋となってしまった。そして、それは悠元の婚約者たちも例外ではなかった。
　もはやキングサイズと言っても差し支えない天蓋付きのベッドを筆頭に複数の人間が泊まれるよう配慮されており、この部屋には悠元だけでなく深雪や雫、姫梨や水波、セリアに泉美といった一高組だけならばまだしも、三高組の愛梨と沓子までもが同じ部屋で寝泊まりしていた。
「愛梨、大丈夫か？」
「ええ、優勝こそ出来ませんでしょうが、残るミラージ・バットで活躍をお見せいたします。父経由で見舞いの言葉まで頂いて感謝しますわ」
「流石に突然倒れたと聞いたら、心配しないのも変だからな」
　九校戦では対決する形だが、それを引けば悠元の婚約者の一人。魔法師としての活動に支障が出るようならば治療していたが、それが無かっただけでも幸いだった。
「とはいえ、九校戦では敵チームだ。それは許してほしい」
「……深雪さんをはじめ、惚れてしまう理由が分かってしまいますね」
「人付き合いでは結構人見知りを決め込んでるけどな」
　容姿で寄ってこないように振舞っているわけだが、それに反してバレンタインのチョコの数が増えたという実績がある。それを見た深雪が不満を溜め込んだ結果、悠元に襲撃して放送コードに激突するぐらいの勢いで引っ掛かった事態に至ったのは……今更なのかもしれない。
「お兄ちゃんなら学校で好き勝手やっても許されると思うのですよ」
「どこかの元会長みたいに職権を乱用したらアウトすぎるだろうし、後々の悪しき慣例になりかねん行為はアウトだろうが、阿呆が」
「にゃああっ!?　でも、これはこれで新しい世界が」
「くたばれ」
　シリアス空気を平気でぶち壊すセリアに対して悠元が関節技で気絶させ、これを見た周囲の人たちが苦笑を零したのは言うまでもない。

高校最後の九校戦⑥

九校戦は新人戦に入る。今年は新人戦のみだが湘海高等学院が出場するため、試合形式も多少変更が加わる。とは言っても、ミラージ・バット以外は予選リーグ形式を採用している為、1ブロックだけ四人ないし四組となるだけで、ミラージ・バットの場合はすべて五人のブロック分けへ変更されるだけ。

今回の新人戦は定期考査の結果からメンバー選出されている為、一部を除くと二科生が半分以上を占めている。悠元が担当するのは侍郎と詩奈の二人だけだが、二人とも個人戦に出ることとなる為、試合が被った場合は技術スタッフにも協力してもらっている。

この二人だけに限らず、数人の一科生も団体戦競技に出場する。流石にエンジニアの部分は1年でフォローするのは難しいために魔工科主体で構成された技術スタッフに任せることとなるが。

「……ここまでとはな」

ある意味悠元の〝肝入り〟とはいえ、現時点でどこまで出来るのか疑問でもあった。その結果は新人戦一日目のスピード・シューティングとバトル・ボード予選で如実に出ていた。第一高校は団体男子スピード・シューティングで2位、女子で1位。バトル・ボード予選は男女ともに通過と上々の滑り出し。個人戦は男女共に1位となった。

湘海は男子スピード・シューティングで1位、女子では3位。バトル・ボード予選も同組の三高を破って男女共に通過し、個人戦は男子3位、女子2位の結果に終わった。その割を食ったのは三高で、スピード・シューティングでは男子3位の女子2位、バトル・ボード予選は男女ともに予選落ちを喫した。個人戦は男子2位、女子3位の結果に終わっている。

点数は本戦の半分で湘海高等学院が新人戦参加のみとはいえ点数計算されることになるが、新人戦だけで一高が９０点、三高が５０点、湘海が６０点。大きな開きこそないが、一高と三高の二強に一石を投じた結果となった。

「三高が苦戦したようだが……あくどいな」

「そんな意趣返しの為に湘海を設立させるよう漕ぎ着けたわけじゃないけどな」
魔法科高校で掬いきれていなかった魔法資質保有者を引き取り、将来的に魔法分野と軍事分野で人材の取り合いを避けるための施策。ただ、この時点で既に一高や三高と伍するだけの実力を見せたとなれば、大人たちも決して無視は出来ないだろう。
尤も、彼らを道具として使い潰そうとする輩は徹底的に排除する腹積もりだが。
「しかし、詩奈が二木先輩のようなことをしていたのには驚いたが」
「先輩が熱心に教え込んでたからな」
体格的な部分でシンパシーを感じたのか、真由美が詩奈を熱心に指導していたし、かつての経験から佳奈も詩奈の面倒を見ていた。アイス・ピラーズ・ブレイクやミラージ・バットについては身内の観点から深雪が教え込んでいたのは言うまでもない。
「侍郎に関しては俺が徹底的に叩き込んだからな。あれぐらいは平然とやってもらわないと困る」
「明日はクラウド・ボールだけど、悠元みたいなバグった動きにならないわよね？」
「さあな。最近は爺さんや祖母さんが教え込んでいたし……エリカには新作夏スイーツの刑な」
「ぐえええっ……」
こんな一幕もあったが、新人戦全体で一高が団体・個人で新人戦優勝をものにし、2位には新規校ながら湘海高等学院が入賞した。三高が新人戦3位となったことで、本戦競技三種目を残しているにもかかわらず一高の九校戦五連覇が確定したのだった。

◇　◇　◇

いくら五連覇が確定しているからといっても、気を抜いていい理由にはならない。とりわけモノリス・コードとミラージ・バットは状況次第で怪我などのリスクが伴うため、作戦の立案はより慎重なものとなる。
新人戦最終日の夜、悠元は達也と共に光宣の部屋に集まっていた。

部屋の広さならば悠元が泊まっている部屋のほうがいいわけだが、流石に三高の人間がいる前で作戦会議など出来る筈がない。
愛梨や沓子が口の軽い人間ではないことぐらい理解しているが、あくまで気持ちの問題でもあったりする。
モノリス・コードは昨年の総当たり形式から一昨年の変則リーグ戦・決勝トーナメント方式に戻っており、対戦表は既に公式サイトで公表されている。一高は二高・五高・七高・九高と戦うことになる。
「達也の用事は済んだのか？」
「やるべきことは済んだからな。美月や千秋なら大丈夫だと信じている」
達也なりの妹離れはさておき、三人は作戦の打ち合わせに入る。一昨年の場合は光宣の代わりに幹比古が入っていたが、あの時とは状況が大分異なる。悠元は古式魔法を大っぴらに使っても問題なくなったし、達也も制限の解除で使える魔法の数が増えている。
「基本は達也がアタッカーでいいだろう。魔法の数を敢えて抑えても決勝まではいけるだろうし」
「そうなると、僕は達也さんや悠元さんのサポートも踏まえながら動く感じですね」
「場合によっては達也を陽動に使って光宣がモノリスの解除に回るのもありだな」
奇しくも三人がオールラウンダーに近い訳だが、予選で手の内の全てを見せる必要はない。三高がどんな作戦を考えて来るかは不明だが、まずは決勝よりも予選を勝ち抜くことに集中する。決勝トーナメントや三高対策を考えるのはその後でも決して遅くない。
「今のところは第一試合のフィールドしか告知されていないが、森林フィールドなら俺が休んでもいいだろう」
「自陣のモノリスを守ることを休むと言いのけるのは悠元さんぐらいですよ……」
なお、達也の泊まっている部屋も悠元ほどではないにしろ、婚約者で固められて宿泊している。光宣の場合は理璃との関係が公然の秘密と化している為、彼女の出入りを考慮して一人部屋になっているの

は言うまでもないが。

◇　◇　◇

大会九日目。本戦のミラージ・バット予選・決勝とモノリス・コード予選リーグ。施設改修によってミラージ・バットを昼間でも夜間と同様にできるようになったため、昼間に予選を行い、日が落ちてから夜に決勝が行われる。

選手兼エンジニアである達也としてはハードスケジュールになるが、深雪の調整は既に完了しており、〝奥の手〟も含めて準備は抜かりなく行っている。

そして、出場校の中で一際目立つ一高の選手陣。

現師族会議議長にして護人・神楽坂家現当主の悠元、四葉家現当主の長子で次期当主の達也、そして九島烈の孫である光宣。良くも悪くも名立たる祖父を持つ三人となれば、優勝の最有力候補と見られても別段おかしくはなかった。

その中でも悠元は誰の目から見ても大きなデバイスを左手に持っていた。一昨年に試作した［小通連］よりは小さいものの、木刀サイズの武装一体型ＣＡＤを持っていることに訝しむ人間は少なくない。

そして一高と五高の第一試合のサイレンが響き渡ると、悠元は木刀サイズのＣＡＤ［小烏丸（こがらすまる）］に想子を流し込む。すると、刀身の部分が細かく切り離されて、敵陣のモノリスに向けて飛んでいく。

「仕込みは飛ばした。後は頼むぞ」

「ああ」

「了解しました」

悠元の言葉と共に達也と光宣が自陣のモノリスを離れていく。二人を見送ったところで悠元は印契を結ぶような素振りを見せると、悠元の周囲に光が集まり、光は数多の揚羽蝶へと姿を変える。

悠元の指示で本来の蝶とは比べにならない速度で森林の中へと飛んでいき、その内の二羽が達也と光宣の肩に乗っかる。二人はそれが悠元の魔法であることを知っている為、驚く素振りを見せることなく各々のポジションに向かう。

そして、先に飛ばした刀身がポジションに到着したのを確認する

と、悠元は静かに瞼を閉じる。
「――――見えた。情報を送る」
悠元の魔法［月光揚羽（ルミナス・ハピネス）］。光の蝶をアクティブソナーとして活用することで、敵に悟られることなく索敵を行うためのもの。しかも、光の屈折度を変えることで周囲の景色に溶け込むことが可能なため、仮に魔法の存在に気付いても気付かれる可能性は極めて低い。
更にそれが見破られたとしても方向を狂わせる認識阻害の効果も備わっている。これは周公瑾が使用していた［鬼門遁甲］の技術を応用しているため、大陸系魔法に馴染みの薄い魔法科高校の生徒相手では極めて破りにくい。
そして、術者を介して味方に必要な情報を送ることで的確な動きや連携を容易に行うことが出来る。この魔法は昨年に琢磨との模擬戦で見せた［天壌流星群（ミーティアライト・フォール）］をより索敵に特化させた結果として生み出された魔法。
悠元への負担についてだが、そもそも悠元の固有魔法の特性で負担がほぼ負担にならないという意味不明なことになっており、これだけの魔法を使っても別に片手間程度の負担にしかなっていない。
悠元は敵陣のモノリスの位置を確認すると、魔法を発動。すると、周りに誰もいない筈の敵のモノリスのガードが敗れ、５１２文字のコードが露出。それを確認した悠元はコードを入力し始める。
規定では特定の魔法を使ってモノリスのガードを解除しなければならない。その射程は１０メートルだが、悠元は別にその術式以外でモノリスのガードを解除していないし、規定された魔法を使用して解除している。
その秘密は先に飛ばした刀身にある。複数に分裂した刀身は刻印型術式が組み込まれており、悠元は飛ばした刀身を中継する形で鍵の魔法式を発動。通常、鍵の魔法式は１０メートル以内でないと発動しないが、悠元は魔法の発動起点をモノリスの１０メートル以内とすることでモノリスを解除した。
従来の魔法では術者が発動起点となるケースが大半で、術者から離れた場所で発動させるとなると、従来は呪符や精霊などの触媒を介す

る形でのケースが殆どだ。ましてや、術者が視認できない地点から魔法の発動起点を自在にコントロールできるとなれば、それは最早魔法師としての領域を超え、『超能力者』の領域に踏み込む。

その気になればそうすることもできるが、それを隠す為の武装一体型ＣＡＤ。５１２文字目を打ち込んで送信した瞬間、試合終了のサイレンがフィールドに鳴り響く。一高と五高の試合は一高の完勝となった。

流石に一昨年の様な妨害による負傷もなく、一高は予選を全勝で通過。同じく全勝の三高と並ぶ形となるが、試合時間の差で一高が予選一位通過、三高が二位通過となった。そして、決勝トーナメントは勝敗数の関係で二高と四高が勝ち上がり、準決勝は一高と二高、三高と四高という形で決まった。

◇　◇　◇

モノリス・コードが一段落したころ、ミラージ・バットも全予選を修了。一高は個人戦の深雪に加えてほのかと理璃が出場しているが、全員予選を突破した。ただ、決勝進出の六名の顔ぶれはというと、全て悠元と達也の顔見知りで埋まる格好となった。

どういうことかというと、深雪とほのか、理璃の三人に加えて三高の愛梨と沓子、四高の亜夜子という有様で、ほのかと亜夜子が達也の婚約者で、深雪と愛梨、沓子は悠元の婚約者という有様。これには達也のみならず悠元も苦笑を滲ませていて、深雪もこれには苦笑を禁じえなかった。

「一高の人間としては三人を応援したいところだが……怪我が無く終わることを祈るよ」

「そうだな」

「二人からしたら、そうとしか言えないものね……」

そうして始まったミラージ・バット決勝。悠元から教わっている魔法訓練や飛行魔法の洗練度合いも相まって某超次元アクション漫画でも見ているのかのような激しいポイントの応酬。最早誰が勝ってもおかしくない試合の結果、タイムアップギリギリでポイント取った深雪が優勝を勝ち取った。

あまりの喜びで飛行魔法を使って悠元に抱き着いたことから、その喜びようは本物だった。
「やりました、悠元さん！」
「おめでとう深雪。嬉しいのは分かるが、淑女らしくない行動は感心しないからな？」
「あう……でも、そんな風に言ってしまえる悠元さんに惚れ直しちゃいます」
「……達也」
「すまないが、俺には何も出来ない」
何を言ってもプラスに変換されてしまうのは今に始まった事ではないが、深雪の様子を見た悠元が達也に助けを求めても、求められた側の回答は『打つ手がない』という残酷なものだった。
流石に明日はモノリス・コード決勝が控えている為、流石の深雪も自重したわけだが、この後に待っている展開が予測可能回避不可能となっていることに、悠元は人知れず溜息を吐いたのだった。
いくら惚れた弱みだとしても、限度というものはある。それを無暗に嫌うつもりはないが、かつて千姫に言われた自身の精力を鑑みると〝自業自得〟の側面もあったりする。
◇　◇　◇
九校戦最終日。マギテクス・ボールの予選・決勝とモノリス・コード決勝が行われる。マギテクス・ボールは男子がレオ、幹比古、燈也、侍郎、そして碓氷威満と全学年混成チームになった。女子はエリカ、由夢、香澄、泉美、詩奈の五人でこちらも全学年混成。
基本ルールはフットサルに準じて前後半各２０分の計４０分で競い、魔法については接触の有無を問わず相手に直接干渉する魔法は禁止されるが、プレイヤー自身のみを対象とした魔法あるいはボールを蹴る際にボールへ魔法を行使する行為は認められている。
魔法科高校ではレッグ・ボールが体育実技のカリキュラムに組み込まれているが、それよりも更に実戦的な競技。とはいえ、一高のエースクラスが揃ったメンバーだと、自ずとこうなる。
「レオが鉄壁すぎよ……相手の心が折れてたわよ？」

「そうか？　けどよ、練習の時はああでもしねえと悠元のシュートを防げなかったし」
「そう文句を言ってるエリカっちもあまりのドリブルの速さにゴールネットまで突撃してたし」
「やめて由夢」
　点数差はあまりにも他校が可哀想なので言及しないが、圧倒的大差で一高男女が優勝。そうなると残すは本戦モノリス・コード決勝トーナメントのみ。とはいえ、三高は苦戦を強いられる可能性が高い。その理由はメンバーの中に黒羽文弥がいるからだ。
　彼の固有魔法［ダイレクト・ペイン］はルール上使える（名前を誤魔化して使用している）ため、四高が決勝に上がってこれたのは文弥の功績が大きい。三高側も対策が無いとは思えないが、三高と四高のステージは渓谷となった。
　そして、決勝トーナメント第一試合。一高と二高の試合は岩場ステージ。
　視界が開けているステージの為、モノリスの解除よりも相手を戦闘不能にしたほうが速い。そのため、誰かが矢面に立つ形となるのは必定なわけだが、立候補したのは悠元だった。
「……暇だな」
「まあ、否定はしませんが」
　達也と光宣がぼやいている眼前には悠元が平然と敵陣地へと歩いている。二高のチームは魔法を放って悠元を止めようとするが、岩が飛んでこようが電気を浴びせられようが、悠元は立ち止まることなく歩を進めるだけでなく、傷を一切負っていない。
　別に悠元が魔法を使っていないわけではなく、武装型干渉装甲魔法という魔法を使用している。これは［情報強化］や［接触型術式解体］のように術者の周囲を覆うタイプのもので、この魔法は現在悠元しか使用できない。
　纏っているのは［ファランクス］だが、あらゆる物理現象を受けても無傷でいられている。彼我の距離が２０メートルに差し掛かったところで、悠元は手を翳して［偏倚解放］を発動。二高チーム三人を

瞬く間に気絶させて戦闘不能に追い込んだ。

一昨年で将輝が八高にやった時のような戦いで完勝した一高。これは悠元の将輝に対する〝返礼〟でもあり、無論挑発も兼ねていたのだった。

高校最後の九校戦⑦

吉祥寺真紅郎は悩んでいた。四高との準決勝は何とか勝利を収めることに成功したものの、一高と三高の決勝フィールドは草原――――奇しくも一昨年の新人戦決勝と同じ構図になった。

（こちらもベストメンバーといえばベストなんだけれど……一高の三人目があの九島退役少将の孫とはね）

真紅郎からすれば、昨年の論文コンペで優勝した当人が九校戦に出場してきた――――それも相応の実力が求められるモノリス・コードに出てきたことだけでなく、これまでの試合結果を見れば実力は明らかだった。

尚、昨年については真紅郎が発表者でなかったため、達也や悠元ほどの因縁は抱いていない。それを差し引いても、一高側は将輝と真紅郎の実力を把握している。少なくとも［インビジブル・ブリット］は確実に対策されているとみていい。

（一昨年のように将輝を悠元にぶつけるとしても……ダメだ、これじゃ勝てない）

実を言うと、真紅郎も自分なりに術式の改良を試みていた。それで行き詰っていたところに一条家経由で技術提供を受け、将輝の戦略級魔法を完成させた経緯がある。［チェイン・キャスト］を更に改良された技術とはいえ、真紅郎の魔法演算能力では厳しいということも理解していた。

一応形にこそなったが、この術式を使えば『一発でも使えば、僕は確実に気絶してしまう』と演算結果から弾き出した答えを得ていた。まさに自滅覚悟の魔法の為、真紅郎は使うべきかどうか悩んだ。

結局、恥にならないための方便も込めてＣＡＤにインストールしたわけで、これを使わずに決勝へ行けたのは大きい。だが、相手は元も含めて十師族直系の三人チーム。

色々悩む真紅郎のところに、将輝が姿を見せた。

「ジョージ、まだ悩んでたのか？」

「将輝……そうだね。正直、僕の頭脳でも相手が本当に読み切れない」

――歴代の九校戦で数々の不可解な強さを見せつけてきた三矢直系の三男。
――世界に悪名を轟かせた四葉の系譜を継ぎ、不敗神話を打ち立てたエンジニア。
――九島烈の孫にして、昨年の論文コンペで二高を優勝に導いた立役者。
もはや攻略法が息をしていないレベルで見いだせないのは、後にも先にも彼らぐらいなのだろう……と真紅郎は正直に思う。だが、目の前にいる親友が未だに諦めていないという部分だけを見れば、『棄権』の進言を口に出すことも極めて難しかった。
「仕方がない……当初の作戦通りに将輝が悠元を抑えてくれ。残りは僕らで何とかするよ」
「ああ、分かった」
どうせなら、真紅郎が思いついた術式を使う暇などなく派手に負かしてほしいと思ったのは……彼なりの〝諦め〟であったが、それを口に出すことや表情に示すことを避けたのだった。
◇　◇　◇
九校戦を締めくくる本戦最終種目――モノリス・コード決勝は第一高校と第三高校の対決となった。しかも、双方の3年生は一昨年の新人戦モノリス・コード決勝で対戦した者同士の再戦。
当時は達也が四葉家の人間であることを隠し、悠元は三矢家の人間だった。だが、二年という月日は人々に驚愕を齎した。日本政府から認められた三人の魔法師が、ルールの制約こそあれども激突する。
その様子を観客席から見つめていた真由美だったが、隣には克人が座っており、反対側の隣には摩利が座っていた。一昨年の試合をモニター越しとはいえ目の当たりにしていたからこそ、三人は直に試合の様子を見ていた。
「流石に前の様な小細工はしないようだけれど、悠君たちが負けるビジョンを抱けないのよね」
「真由美……でも、あたしも同意見だな」
一昨年は幹比古が出ていたが、今回は2年から光宣が選抜されてい

る。三人の中では真由美が光宣と面識を有している為、彼の雰囲気からして『出来る』人間だと察していた。そして、それは実戦経験の点で抜きん出ている克人も頷いていた。
「三高も一昨年から成長しているのは確かだが、神楽坂と司波の成長は群を抜いているだろう。俺から見ても神楽坂は間違いなく世界最高峰の魔法師に過言などない存在だし、その影響を間近で受けている司波もそれに準じているとみるべきだ」
克人がそう評し終えたところで試合開始を告げるサイレンが鳴り響き、三人の視線は草原フィールドに向けられる。すると、開幕直後に一高から攻撃魔法が三高のモノリスを急襲する。
目立った威力を起こすものではなかったが、その直後に草原フィールド全体が濃い霧に覆われる。将輝が圧縮空気による砲撃を前方へ向けて撃ちこむが、発生した霧は圧縮した空気に寄って吹き飛ばされるどころか、圧縮空気を〝打ち消した〟。
「霧が全く晴れない……魔法か」
「間違いなく悠君ね。こんな不可解な霧を生み出すなんて、悠君にしか出来ないものの」
「それと、どうやら［ファランクス］の技術も応用されているな。圧縮空気を打ち消したのはそのせいだろう」
明確な形を有さない［ファランクス］――――克人は理解したのと同時に冷や汗が流れた。
フィールドに展開された霧は悠元の意思で形を有している。以前、アイス・ピラーズ・ブレイクでピラーの水素結合を応用した硬化魔法の行使を考えれば、原子単位で相対固定をすれば一定の空間内に障壁の役割を持たせることは理論上可能。
だが、それに掛かる演算規模が現代魔法において戦略級魔法クラスとなってしまうため、とても現実的な魔法ではない。だが、大会に持ち込めるレギュレーションをクリアした上で悠元は魔法を行使している。
「相手の姿が見えない以上、攻撃する手段を喪う。現代魔法では最早対処できないだろう」

「真由美なら行けるんじゃないか？」
「無理言わないで。傍から見ても桁外れた事象干渉力が働いている状況なら、此方が狙って攻撃した時点でアウトよ」
真由美が摩利からの問いかけにこう返したのは単純明快で、魔法の練習台として度々悠元に付き合っており、今回悠元がモノリス・コードで使っている魔法も練習台として付き合ったことがあった。
物の試しに［ドライ・ブリザード］や［魔弾の射手］で悠元をスナイプしようとしたが、あっという間に戦闘不能へ追い込まれて降参した。なお、それで不機嫌となった真由美が下着姿で悠元を襲撃した……結果は鎮圧された格好となったが。
そして、数分経過後に霧が晴れていくと、草原に倒れ込んでいる三高メンバーに対し、平然と立っている一高メンバーの姿がそこにあった。
「まあ、これで悠君が完勝の恰好ね。というか、悠君に意識を向けている深雪さんが心変わりする筈なんて無いのよ」
「つぐみんから話は聞いていたが、やっぱりそうだったのか」
「……」
そもそも、将輝が一昨年の時点で失態を演じただけでなく、謝罪の言葉すら口にしていない以前に、深雪は悠元以外に異性への強い興味を有していなかった。
生徒会を通して悠元や深雪の一番近くにいたからこそ理解している真由美の言葉に、摩利は納得したような台詞を呟く一方、将輝にチャンスを与える様進言したことのある当事者としては『藪蛇でしかなかった』と内心で反省していた克人であった。
◇　◇　◇
観客席の別のところでは、微笑む女性――神楽坂家前当主・神楽坂千姫と、笑みを零す偉丈夫の男性――上泉家前当主・上泉剛三、そして更にはジョーリッジ・D・トランプ大統領が試合の様子を見つめていた。
ジョーリッジは魔法師でこそなかったものの、特異的な体質を買われて超法規的国際部隊の一員として活動したことがあった。その縁

で千姫や剛三と知り合い、奇しくも孫世代同士で婚姻を結ぶことになった。
「お二人の縁者は実に強いな。私も実際に会っているが、あの［クリムゾン・プリンス］すら完封するとは……うちのジェラルド君も友人として認めているわけだ」
「鍛えたのは儂だが、よもや儂がやった鍛錬全てを乗り越えたのは間違いなくあやつの才能よ。美味しい所は隣の義妹に持っていかれたが」
「別に掻っ攫ったつもりはありませんよ。ジョーはお孫さんが嫁に行って寂しくないですか？」
「喧噪が無くなった時は流石に寂しかったがな」
　ジョーリッジにしてみれば、セリアが暴れた影響こそ大きかったものの、図らずも政敵を一人残らず排除してもらう格好となった。なので、彼女が除隊する際に名誉准将の勲章を大使館経由で送っていた。
「だが、悪魔を祓ってくれただけでなく、負の遺恨となっていたものを全て浄化してくれた。誰しもが無視できない功績を打ち立てた彼に対して、私は今後の政権に対して『日本を決して侮るな』と念を押すことにした」
「そう述べるということは、引退でもするのか？」
「任期は全うするよ。その後は九島将軍のように俗世から離れたところで隠居生活でもするさ」
　剛三は元継に家督と家業を継がせ、千姫も悠元へ段階的に家督と家業の譲渡を行っている。その流れを見たジョーリッジも、残る任期を全うして政治の世界を去る腹積もりだと明かした。
「いっそのこと、日本へ移り住むことも考えている。そうすれば孫たちの顔が見られるからな」
「その気がおありなら是非声を掛けてくださいね。お安い値段でいい物件をご紹介いたしますので」
　大きな戦争を駆け抜けてきた世代は、遅かれ早かれこの世を去ることになる。次の時代を担う若者たちの存在は、三人にとって大きな財産だった。

「っ!?」
「どうしたの、お姉ちゃん？　突然身震いして」
「今、身内が私の近くに来るんじゃないかって悪寒が走って……」
「……お祖父ちゃんならやりかねないのが困るね」
　そんな会話を何故か悪寒という形で感じ取ったリーナと、その予感が強ち的外れとは思えないセリアであった。
◇　◇　◇
　九校戦後夜祭の合同パーティー。高校生の身分でスポーツ競技のように『ノーサイド』と踏まえられるものではないにせよ、十日間の激闘を終えて各校の選手やスタッフたちは和やかな雰囲気だった。
　これまではダンスの前に大人たちが話しかけてくることも有った訳だが、今回の開催に合わせて悠元は事前に後夜祭への関係者以外の立ち入りを大幅に制限している。理由は色々あるが、会場が神坂グループの敷地内であり、加えて国内最大級の財閥グループを敵に回す理由を考慮した時、財界のみならず政界やメディアも及び腰となった。
　尤も、最大の理由は『将輝との清算をする』という我儘に集約されてしまうが。
　とはいえ、学生やその親御・親族のみとなっても、悠元に対して話しかけてくる者は多い。現師族会議議長という魔法界のトップなのだし、悠元もそれを認識しているからこそ嫌とは言わなかった。
　最大の驚きは公の場へ姿を見せた四葉家当主・四葉真夜の登場であり、悠元へ親し気に挨拶を交わしていた。それを見た深雪が拗ねて、達也とリーナが宥めるという一幕まで起きていた。
「深雪さんや、拗ねないの」
「単に挨拶するだけなら拗ねていません。叔母様のあの目は悠元さんに色目を使っていましたから」
　深雪とて真夜が悠元の愛人となることに一応理解を示している。とはいえ、実際に深雪の眼前で色目を使われるのは感情的に堪えるものがあるのだろう。
「悠元は凄いわよね。こんな深雪の手綱を握っているのだから」

「語弊を生みかねん言い方は止めてくれ、リーナ」
「うん、ちゃんと言うなら悠元はジゴロ」
「やめて、雫さん。それだと俺がプレイボーイになるから」
　高校生としては色欲塗れの生活になってしまったが、それでも無差別に襲ったりすることはないし、婚約者や愛人以外との関係は一切持っていない。寧ろ婚約者や愛人たちから襲われて、結局は熱い夜へと発展しているケースばかりだ。
「婚約者だけじゃなくて愛人まで囲っちゃう時点でお兄ちゃんはプレイボーイ」
「良い度胸だ。夏の新作スイーツ試食の刑に処する。逃げ出そうとした場合は足つぼ1時間の刑も追加で」
「お、お慈悲を……深雪さん……」
「悠元さん、私にも足つぼをお願いしますね」
「逃げ場はありませんでしたね」
　死刑宣告を言い渡された人間のように崩れ落ちたセリア。そんな一幕が過ぎた後、会場は学生だけとなって恒例のダンスパーティーとなった。悠元や達也は各々の婚約者と踊ることになり、そして悠元が深雪と踊るのは一番最後になった。
　意外だったのは、悠元が詩奈と踊る形になったことだ。詩奈曰く『お兄様と出られる最初で最後の九校戦なので』という思い出作りの一環だそうだ。なお、詩奈は悠元や侍郎と踊った後、侍郎に引っ付いて離れようとせず、侍郎の精神が若干死にかけていた。
　将輝については、社交辞令という形で深雪と踊り、その後で深雪に『改めて話がしたい』と申し出ていた。それを聞いた深雪は特に断る理由が無いし、ここでしっかり話を付けたいという思いもあったので申し出を受けたようだ。
「申し訳ありません、悠元さん」
「まあ、ここでしっかり言っておいて遺恨を残さないのは大事だろうからな」
　別に同伴する必要もないし、深雪に［天神の眼（オシリス・サイト）］のリソースを振り分けているので、何かあれば［鏡の扉（ミラーゲート）］で急行することもできる。

「それに、俺がいると変に拗れる可能性もあるからな。すまないが、その場は深雪一人で切り抜けてくれ。最悪の場合は駆けつけるから」
「駆けつけるというか、颯爽と登場するヒーローになるね」
「容姿云々はともかく、俺はそんなに清廉潔白な人間じゃねえよ」
今年3月の時点で一度振られていて、しかも手紙などと言った間接的な方法ではなく、直に対面した上で深雪が丁重に断った。おまけに、その事態を一条家側も把握しており、その謝罪の一環として茜を来春から東京方面の中学校へ通わせる、と一条家夫人が公言した。
こうなると問題は預かっている劉麗雷だが、将輝が魔法大学へ進学するとなれば、自ずと東京へ引っ越す公算が高くなる。新ソ連方面が内部でゴタゴタしている状況を鑑みても、難民対応や小規模の戦闘は国防軍単独でも事足りるし、必要ならば風間へ掛け合って独立魔装大隊を定期的に派遣することも視野に入れる。
話を戻すが、実は3月に将輝が振られた時点で剛毅は神楽坂家と四葉家、妥協案を出してくれた十文字家へ向けて詫びの書状を送付していた。ただ、その中には将輝が未だに深雪を諦めきれていない旨も記されていたため、変にストーカーとなる事態を避けるべく公の批難をしていない。
「俺が真っ当なら、燈也や光宣、幹比古が聖人君子の領域へ入ることになるわ」
「いやいや、僕なんかが聖人だなんて烏滸がましいですよ。それでしたら吉田先輩の方が相応しいですよ」
「だそうよ、ミキ」
「やめてくれ。それと、ミキ呼ばわりは止めてくれ……」
特に目立ったトラブルも無く、後夜祭のダンスパーティーの時間は過ぎていくのであった。

全てにケジメを

後夜祭のダンスパーティーがそろそろ終わりを迎えようとした頃に、深雪は庭へと抜けだした。すると、そこには先に抜け出していた将輝が立っていた。将輝は深雪の姿に気付くと、少し申し訳なさそうな表情を見せた。

「司波さん、祝賀会もあるのに抜け出させてすまない」

「いいえ、構いませんよ。それで、お話があるとのことでしたが……」

軽いやり取りを終え、将輝は真剣な表情を深雪に向けた。それに対して深雪は冷静を装うような仕草を見せて将輝を見つめる。見つめられた将輝は一瞬動揺したが、それに臆することなく話し始めた。

「司波さん、俺は君が好きだ。司波さんが神楽坂と婚約していることも承知している。だが、俺は神楽坂よりも君を幸せにすることが出来ると思っている」

「……」

内心、深雪の心情としては『自分の愛している異性を貶された』ことと、婚約はあくまでも『二人の関係を公に認める』ものでしかない。それを知らずに告白した将輝に対して少しばかり怒りも抱いていた。

更に、深雪の婚約は四葉分家が達也と悠元に対して掛けた迷惑を形として示した性質も併せ持っており、ここで婚約を解消するようなことがあれば、達也を快く思わない分家当主達が叛意をぶり返すことになるかも知れない。

そして……一昨年の新人戦モノリス・コード決勝で将輝がやらかしたオーバーアタック未遂の行為についても深雪は未だに許していなかった。二人が怪我を無かったことに出来るとしても、審判が三高に忖度したとしか思えない判定を下した格好で、それに甘えて将輝は謝罪もしなかった。

十師族――――〝最強〟の一角を担う身として公の場で頭を下げない意味は、四葉直系の次期当主筆頭として数多くのことを学んできた深雪も理解している。だが、最強でありながらも自分の非を認めて平然と謝罪できることも立派な強さの一つということも知っている。

「好いていただける気持ちはありがたいのですが、私に一条さんの気持ちを受け取ることは出来ません。先日の時と似たような答えになってしまいますが、私は心に決めた人と婚約しております。ですので、金輪際諦めてください」
　達也や悠元は別に気にしてないようだが、深雪からすれば兄同然の従兄と好きな人を殺しかけるような相手を好きになれる理由が無い。それに、将輝の文言にはどことなく〝魔法師としての司波深雪〟を見ている節が感じ取れてしまい、魔法師ではなく人として見てくれている悠元とは比較にならない、と思ってしまった。
「何故ですか？　アイツと婚約しているからですか？」
「誤解なさっているようですので説明しますが、私と悠元さんがお付き合いしたのが先で、婚約は私たちのお付き合いを正式に認めて頂けた表明でしかありません。一条さんが婚約に対して如何なる気持ちを抱いているのかは分かりませんが……私の考え方と貴方の考えをご一緒にしないで頂きたいです」
　ここでしっかりと突き放すような言い方をしないと、将輝はまだ甘える……そう感じた深雪は冷たく突き放す様な言い方を将輝にぶつけた。それでも諦めようとしていない将輝に対し、深雪はとどめの一言を言い放つ。
「そして、来年の2月には悠元さんと正式に入籍いたします。私のことは綺麗に諦めて、別の幸せを掴んでください。一条さんなら、貴方を好いている人はきっといるでしょうから」
　悠元との結婚を言い放つと、将輝はその場に崩れ落ちた。彼に対してそれ以上の言葉を掛けることなく会場へ戻る深雪だが、その先にいた人物を見つけると表情を綻ばせた。
「悠元さん。迎えに来てくれたのですか？」
「それもあるが、やっぱり将輝と話しておきたいからな」
　一条家ではまともに話そうとしたところで殴り掛かられ、結局は一撃で鎮圧した。あの時は自分も大人気なかったと思った節があるのは事実だった。
「まあ、祝賀会まで時間はあるからな。先に戻っていてもいいんだぞ

？」
「いえ、ご一緒させていただきます。私はただ見ているだけになりますが」
「別に構わないけど」
深雪が後ろに控える形で悠元が将輝に近付く。将輝も近寄ってくる足音に気付いたのか、顔を上げた。余りのショックで泣き顔になっていたが、悠元の姿を見て慌てて袖で涙を拭いていた。
「か、神楽坂。何だ、俺を笑いに来たのか？」
「何でそう喧嘩腰なんだ……一条家ではまともに話せていなかったからな。このタイミングなら話せると踏んだからこそ出向いた」
深雪のことは妥協しないが、それ以外の部分では折り合えるだろうと悠元は考えていた。実際のところ、将輝との諍いはほぼ全て深雪のことが原因になっており、それ以外の理由での諍いは……茜との会話を見ていたことに対する侮蔑の発言を悠元が断罪した件ぐらいだ。
「お前の父親こと一条殿から謝罪の言葉を受けたついでに、お前の婚約に関する事情を全て尋ねた。一昨年の九校戦後に愛梨がその類で巻き込まれた前例がある以上、将輝も決して無関係とは思えなかったからな」
「……神楽坂は、婚約についてどう思ってるんだ？」
「将輝の懸念する点はまあ、俺も決して無関係とは言えんからな」
遺伝的に相性の良い家同士で婚姻して、魔法使いとしての力を後世に継がせる。一般的な社会常識からすれば古典的な考え方であるものの、血を統制する考え方は皇族や王族などと言った立場の一族なればこそ必要とされるケースは少なくない。
悠元も十師族・三矢家の時に泉美と婚約していたわけだが、婚約を結んだ正式な時期は沖縄防衛戦直後だった。もし十山家の一件が無かった場合は泉美が高校入学した際に公表される形となっていたらしい。この辺は破棄の段階で元から聞き及んでいた。
長男の元治こそ例外中の例外だが、元継は幼馴染の縁で上泉家へ入った。矢車家との繋がりを考慮して詩鶴と詩奈が嫁ぎ、佳奈は四葉家へ、美嘉は十文字家に嫁ぐ。養子組ではラウラが千葉家に入り、ア

リサが神楽坂家へ嫁ぐこととなった。
「婚姻を決めていたのは主に祖父母世代だが、そこまで厳しい制限は設けられていなかった。相手との顔見知りの有無も考慮されていたから、選択肢の範囲でお前が俺よりも狭いのは否定できない」
悠元によってブーストが掛かり、三矢家は養子を含む全員が将来を既に確定している。その影響は多かれ少なかれ他の師族二十八家にも影響を与えていて、悠元だけでも一条（茜）、一色（愛梨）、二木（真由美）、三矢（アリサ）、四葉（深雪・水波・夕歌）、五輪（澪）、六塚（泉美）、九島（セリア）と十師族クラスの縁を結んでいる。
特に大きいのは四葉家と五輪家で、前者は愛人も含めると五人と結ばれることになるし、後者については前任者とはいえ国家公認戦略級魔法師［十三使徒］の一角を担っていた。言い訳がましくなるが、別にこんな未来を望んで接してきたつもりなど皆無ではあった。
「将輝がそれから逃げ出したいのなら、お前が今もっている全てを投げ捨てなければならない。一条家の人間であることも、［クリムゾン・プリンス］の肩書きも、国家公認戦略級魔法師の地位も、そして国籍も全て。それは言わずとも理解しているだろうが」
「……」
「お前が一条将輝として生きる選択をする以上、どうあっても付き纏う。茜ちゃんと瑠璃ちゃんの事を鑑みれば、尚のことお前に対する風当たりは強くなる。なら、逃げるのではなく自分なりに婚約と向き合ってみせろ」
将輝の女性に対する振舞いは家族的な面と遺伝子に基づく婚姻の面が変に絡み合った結果。将輝が全てを捨てたとしても、今度は一色家や鶴画家の養子にする可能性だって無くはない。それは口にせずとも将輝だって想定位はしているだろうと思う。
「大体さあ、お前は相手の意思をちゃんと聞いたことはあるのか？」
「いや……でも、こうしてれば相手はきっと嫌がるだろうと思うから」
「そんなてめえの我儘に俺や深雪を巻き込むな。現状でもお前の家族やジョージまで巻き込んでいるだけじゃなく、美登里さんの関係筋である一色家や若狭家にまで謝罪されたんだぞ」

一条家で将輝を一撃で沈め、茜との関係を構築（伏せた言い方なのは察してほしい）してから数日後、一色家当主と若狭家当主が神楽坂家別邸を訪れて土下座も含んだ謝罪を受けた。

最初は愛梨のお見合い騒ぎの件で新たな不祥事が出たのかと思ったが、話を聞くと将輝が暴力をふるった件に関するものだった。第三高校で前田校長と将輝が模擬戦を行い、その後将輝が授業免除を言い渡された件で両者が剛毅に事情を尋ねたそうだ。

剛毅も同行するつもりだったが、両当主が『一条殿は息子さんの教育に集中してほしい』という理由で謝罪の伝言だけを預かるかたちになった。結局は今回の九校戦で謝罪を受ける羽目になったわけだが。

「だから、お前に与える罰は責任を持って黄里恵ちゃんと麗雷ちゃんを娶ってやれ。黄里恵ちゃんから話を聞いたが、彼女からの告白に誤魔化して逃げたことも把握してるからな」

「……」

「さて、そろそろ祝賀会が始まるからお暇させてもらう。後はしっかり話し合えよ」

将輝は気付いていないが、彼の後ろには黄里恵が立っていて、彼女は悠元に対して頭を下げた。それを見た悠元は目礼を返した上で、深雪の手を握って連れて行くようにその場を後にした。

ここ最近は深雪が悠元の腕にしがみ付く感じが多かったためか、手を握って歩くという行為に深雪の頬は真っ赤になっていた。

「深雪さんや、顔が真っ赤ですが」

「不意打ちはズルいです……今夜は私を頂いてくださいね」

「……やれやれ」

手を握ったまま会場に戻ると、クラスメイトから生暖かい目を向けられてしまったのは……ある意味お約束な展開であった。

◇　◇　◇

祝賀会の夜は……まあ、大変だった。雫とセリアが焚き付け、そこに沓子が悪乗りまでしただけならばまだしも、そこに煽ったのは千姫だった。

『今日ぐらいは羽目なんて要りませんよね』

『羽目なんて言葉が宇宙の彼方に飛んで行っている人に言われたくないです』
『悠君がいじめる……』
千姫はあろうことか婚約者たちを巧みに酔わせて、悠元への襲撃を後押しした。九校戦も無事終わったということで今日ぐらいはいいかと思った結果……一緒の部屋で寝ていた婚約者たちの腰を全員抜かせる事態にまで発展していた。
最悪［天陽照覧］で戻すことも可能だったので、何事も無く良かったと思った。
「達也、おはよう」
「ああ。おはよう、悠元……昨日は大変だったようだな」
「もう諦めてるけどね」
神楽坂家から婚約を言い渡されてからというものの、司波家では水波が来るまで深雪と一緒に寝る（だけではなかったが）事が多く、同居者の達也は［精霊の眼（エレメンタル・サイト）］の関係で深雪との繋がりがある為、いくら音や振動が響かなくとも〝眼〟を通して影響を受けることは否定できなかった。
なので、流石にラインの線引きを決める際は達也への影響を最小限に抑えるということで深雪も合意している。そして、上位互換版の［天神の眼（オシリス・サイト）］を有している悠元が情動に関する部分のリソース制御を達也にも教えた結果、深雪や水波、偶に司波家を訪れる夕歌との逢瀬も増えたわけだが。
「何というか、まだ２０歳にもなっていない身だけど、とっとと引退気分にも苛まれる気分だよ。いや、婚約者や愛人を嫌う理由はないんだけどな」
「お前を見ていると、俺は遥かに有情ではあるな」
婚約者が複数の段階でも一般常識からかけ離れているのに、複数の愛人に加えて外国の王室から子種まで迫られている。前世なら修羅場など生温い地獄の光景しか出来ない所業だが、婚約者同士はおろか愛人との関係も良好。
愛人のうち半分は第一夫人である深雪の身内という部分もあるが、

若返ったとはいえ元人妻が三人（深夜、ヴィルヘルミナ、ダリヤ）もいる。あのレリックのせいもあるが、千姫がすんなり認めたのは子育ての経験者という点も大きいのだろう。
「魔法界を引き継ぎ、国防軍や政府も押さえ込めるようになったわけだが……裏のことは爺さんと母さんが嬉々として引き受けていたよ」
「母上も関与していそうだな。亜夜子から聞いた限りだと、貢さんも多忙を極めてるらしい」
剛三と千姫曰く『二十二世紀への遺恨は全て排除する』とのことで、奏姫が元継の補佐をする形で上泉家に残りつつも二人は実働部隊として粛清しているそうだ。復讐劇後の反動で武術に傾倒した時も奏姫が差配をして上泉家を支えていたようで、特段問題はなかった。
更に四葉家へも裏家業という形で依頼をしており、報酬の総計は政府の政策予算クラスにも匹敵するらしい。元手は『元老院』の元老たちを整理した際に生じた用途不明金の一部を使っているらしく、四大老として詳しいことは聞いているが、『懐が痛まなければ別にいい』と匙を投げた。
「なお、この前母上の下敷きにされていたようだが」
「……達也としては何とも思ってないだろうが、嫁の実家だし一応フォローしておけよ？」
「そうしておくことにする」
そう言えば、司波家の〝便宜上の父親〟だった龍郎だが、ＦＬＴが淡路島で新たに新設することになる研究施設の所長に就任した。とはいえ、実情は本社から派遣される取締役が全ての権限を握る形となり、彼の役割は高い給料を貰って座っているだけに等しい。そして、愛人から妻となった小百合も会社の厚意で同じ勤務地となった。
このことは嬉々とした表情で深夜から聞かされることになった。
「達也からしたら、もしかしたら自分が殺されていたかも知れない相手なのに、暢気と思われても仕方がないけれど」
「それは否定できないだろうな。実際、亜夜子からも『あの父親を跪かせて土下座させましょうか？』と笑顔で提案されたが、流石に断った」
達也のスタンスとしては『変に危害を加えない限りにおいて自発的

な制裁はしない』という価値観がある。国防軍を嗾けられることはあったものの、慶春会において悠元と真夜による制裁を受けた以上、それに対してどうこう述べるつもりはなかったし、[トリリオン・ドライブ」の披露によって達也への態度も大分変化した。

「仮に俺が乗り気だと、母上が葉山さんまで巻き込んで大事になってしまう。暫くはこちらの味方を増やすほうがいいと判断した。その意味だと悠元の敵は少なそうだが」

「普通なら敵が多いレベルだという自覚はあるんだけどな。どうせ、爺さんの悪名を良い意味でも悪い意味でも引き継ぐことになるのは避けられんし」

感情の振れ幅が一定を超えると『よく分からない感情に変化する』というのは古今東西あることだが、悠元は剛三との付き添いで世界各国を旅して要人と顔を合わせている。驚きも麻痺して『いつものことか』と諦めるようになっていた。

「俺とは別の意味でハードな人生だな」

「もう諦めたことだけど」

世界を渡り歩いて第三次大戦の爪痕をいろんな形で味わうこととなった。そんな経験があったからこそ、『恒星炉』のことについても達也と出会う前から準備を進めていた。

雫経由で潮と面識を持った際、将来のプランとしてそれとなく話したことがあり、潮も現実的な可能なラインとなったら相談してほしいと話していた。南盾島の件にも積極的に関与してくれ、ホクザングループがライバルグループと案件で競っていた時に話を持ち込んで、神坂グループが仲立ちする形で事業の斡旋をしたこともあった。

前世でも社会人になっていなかったのに、今世で未成年なのに社会人同然の働きまでさせられ、色んな人間に対して『しっかりしやがれ』と罵りたくなったのは言うまでもない。

働きに出すだけでも大変なこと

九校戦は終わり、学生としては夏休みに突入するわけだが、既に働き始めているも同然の悠元は本来ならグループの決裁案件を見なければならないわけだが、その辺については手を打った。というか、積極的に根回しをしたのは千姫だった。

『悠君は世継ぎを作る仕事もありますし、代わりに仕事が出来る人を置くべきでしょう』

この一言で決まり、誰がその役目を引き受けるのかと思っていたが、その役割を担うことになったのはダリヤだった。彼女曰く『何も返せずに依存するのは私の性分ではありませんので』とのことで、昔は十文字家の家業である建設会社の経理を担当していたそうだ。

よくよく考えれば、その時点では『数字落ち(エクストラ)』だった十神家に十文字家が態々関わることもないだろうし、変に助けて自分たちの首を絞めるのもリスクが大きい。十文字和樹の婚姻を勧めていた人間こと十文字凱の気質については元から聞いており、それらの情報から推察してもダリヤの話は真実だと判明出来る。

なお、一応勤務記録などと言った証明は会社側に残っていたので、すぐに確認することが出来た。これについてはアリサの親権調査の過程で調べたものでもある。

で、ダリヤが実質生き返ることで生じそうな問題も同時に浮上することになる。

アリサの親権に関する問題となった際、慰謝料などの請求は一切せずにダリヤの遺言状をベースとして手続きを進め、十文字家に対しては直接釘差しをした。これは自身や神楽坂家に膨大な資産を有していることもそうだが、金銭の支払いによって十文字家の家族問題が表面化する可能性も孕んでいたためだ。

一般的な家庭なら別に気にしていないが、十文字家の置かれている役割を鑑みると、問題の表面化によって十師族ひいては師族二十八家の評判、更には日本魔法界への波及は必至。結論として、十文字和樹が三矢家ひいては悠元に対する責任を取る形で克人へ家督を譲った

ことと、婚約した美嘉による改善への期待を鑑みて金銭要求はしなかった。

一番の理由は、悠元一人でも使いきれる見込みのない資産が塩漬けになることへの抵抗が最も大きい訳だが。子や孫世代を考えればあるに越したことはないが、将来の子どもの嫁ぎを考えただけで頭が痛くなりそうだ。

似たような立場のヴィルヘルミナに関しては近親者（主にジェラルドとバランス大佐）が生きていたため、ＵＳＮＡ大統領を通じる形で戸籍を一時的に復活させたのち、帰化して日本人となった。引き取り先は九重家で、八雲の養女となったのでセリアとは戸籍上の姉妹になった。

だが、ダリヤの場合は出生がややこしい。何せ、彼女の出自が『既に亡くなったイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフのクローン』という事実が出て来たとき、迂闊に変なところへ話を持っていくことが出来ない。

とはいえ、絶賛混乱中の新ソ連政府が知れば、喪った戦略級魔法師の穴埋めとして狙ってくることは簡単に予想がつくし、こんな情報をおいそれと渡せるほど甘くない。

そこで、千姫はとんでもない案を持ち出してきた。それは自分の護衛である支倉佐武郎の養母という形で縁組をするという手段に打って出たのだ。

支倉は現在十文字家次女の十文字和美と結婚前提のお付き合いをしており、相手が学生なので表向きは家庭教師兼護衛の体裁を取っている。なので、結婚が成立するとダリヤと和美は義理の嫁姑関係となる。

支倉家は完全に神楽坂家の管轄なので、自由に縁組が出来る強みを生かしてのものだったし、魔法使いとしては新参者の部類となるため、変に目くじらを立てられなくて済む利点も大きい。

尤も、家族構成がロシア人のダリヤに中国人（身体的な意味で）の支倉、そして日本人の和美というあまりにもチグハグすぎる有様なのはツッコミ不可避なのかもしれないが。

実際のところだが三人の関係は良好で、ダリヤは支倉と和美に自身のことを包み隠さずに話したそうだ。それを聞かされた和美の反応は『私だったら、一発殴ってます』と述べており、同席していた支倉は苦笑を滲ませていた。

ただ、十文字家ではその話を一切せず、秘密にしてくれているようだった。この辺は和美にも何か思うところはあったのかもしれない。

一度〝亡くなった〟と認められたダリヤの戸籍修正は本来厄介な手続きが多いものの、仕方ないので四大老の権力で面倒な手続きを全て合法的に処理させた。そして、伊庭家から支倉家へ縁組した手続きを完了したことで伊庭ダリヤとしての戸籍は再び眠りに就いた。

権力を揮ったとは述べたが、具体的にはダリヤに関する手続きを総理に相談しただけで、それを聞いた政府側が僅か一日で死亡扱いを取り消してくれたのには苦笑してしまったが。

十文字和樹がダリヤを妊娠させ、ダリヤは北海道でアリサを産んでいた事実が１４年間も放置されていた――――これは彼女の意向もあったため、十神家（当時は遠上家）もその意向を叶える形でダリヤとアリサを見守っていたし、ダリヤの死後はアリサを遠上家で住まわせていた。

遺伝的な面で強制されたとはいえ、十文字和樹が親からの婚約を受けることになった最中でダリヤの妊娠が発覚。彼女が北海道へ逃げたのは、当時国防軍の影響が強くて師族二十八家からの追及が無く、かつ遠上家が居ることが大きかったのだろう。

実は、千姫はダリヤが東京から北海道へ帰る際に力を貸していた。実姉である奏姫から相談を受けており、彼女の意向を汲み取った上で遠上家へ事情を話し、アリサと茉莉花の養育費として５０００万円も支払っていた。

曰く『奏姫姉さんが「彼女の子どもや引き取り先となる遠上家が不自由することなど無いよう、将来の縁戚の嫁候補として囲っておきましょう」として提案したので、全力で後押ししておきました』とのことで、悠元が快復して三矢家から婚約の権限を貰った際、剛三にも事情を話して然るべき時まで北海道で暮らせるようにしてたそうだ。

彼女の子が順調に育つかも分からないのに、そこまで買っていた時点で先見の明が優れていたという証左なのだろうし、仮にそれが頓挫しても神楽坂家はダリヤやアリサ、ひいては遠上家との繋がりを得ることで、政府に冷遇された魔法使いの家を真っ当な人間として扱うようにしていた。

そこに加えて、神楽坂家と九島家の確執の点で九島烈が『数字落ち（エクストラ）』に対する態度を見極める目論見もあったそうだ。その辺は家業継承に伴う引継ぎで聞かされた内容の一部。この時点で神楽坂家は遠上家を単なる『数字落ち（エクストラ）』と見做していなかった、ということに繋がる。

政府の都合で捨てた魔法使いの一族を古来から続く古式の大家が拾い上げることで、政府にとっての〝弱点〟を握る。元々神楽坂家は尼送りになりそうだった皇族を迎えていたので、その意味で当時の権力者と言えども下手に逆らえない一族と言えた。

更に、悠元が『伝統派』を和解させたことで、日本政府は神楽坂家に対して逆らうことが出来なくなった。自分たちの過失で迷惑を掛けた以上は異論など出るはずもない。尤も、それを成した悠元や『伝統派』の交渉を引き受けた千姫はさして気にしていない。

その静かさが逆に二人への畏怖を強化する羽目となっているのは言うまでもないが。

話を戻すが、泉美との一度目の婚約時点ではアリサに加えて茉莉花との婚約まで既に視野に入れていたということになる。結局は深雪と雫、姫梨との同時婚約になったものの、どう転んでも手始めに三人を囲うと聞かされた時は驚きを通り越してドン引きした。仮に十文字家が探偵を雇おうとも、矢車家に頼んで誤魔化す形にしていたあたり、本気度がガチでヤバかった。

ダリヤの社会復帰に伴って問題となるのは、十文字家に発覚した場合の問題。こちらとしてはバレたところで別に問題ないが、十文字和樹がどんな行動をするのかが分からない。下手をすれば内縁の妻として復縁を求めてくる可能性もあった。

なので、話を持っていった先は克人と婚約している美嘉だった。彼女は既に十文字家へ引っ越しており、今年のクリスマスイブに入籍す

るとのこと。曰く『慣習のイベントを記念日にすれば、相手が絶対忘れることはないからね』とのことで、悠元の誕生日がバレンタインと被っているのを参考にした結果らしい。
結婚式は大学の春休みに合わせて行うそうで、貰った招待状は既に返信している。
九校戦が終わった翌日、悠元は十文字家を訪れた。美嘉は悠元を自室に通すと、悠元好みとなるようにカフェラテと茶菓子を用意してくれた。そうして談笑しながら本題を真剣に聞いてくれた。
「……悠元って、人妻に好かれるよね。お義母(かあ)さんにも好意を持たれてるし」
「寝取る気など毛頭ない。やったら地獄しか見ないし」
「それは理解してるよ。むしろより取り見取り放題だから、夜は困らないでしょ」
「ちゃんと自制はしてるけどね」
美嘉へ話を持ち込んだのは、彼女が十文字家のことを贔屓目に見ないことが大きい。夫となる克人に対しても臆せずに発言するが、それはあくまでも『誰が見ても真っ当な意見』を口にするだけ。自分が我儘を言うにしても、まずは身内を含めた他人の利益を鑑みてから妥協できるような範囲に収めている。
それに、困ったことがある時は極力自力で解決できる手段を取ることが多く、誰かの助けを借りるのは最終手段のスタンス。学生時代もそんなスタンスを貫いたからこそ人付き合いも多く、交友関係の広さで言えば三矢家直系の子女では一番だろう。
「一度かっちゃんに相談するよ。アリサちゃんのことで結構参ってフォローしたことがあったから、お義父さんが変な事をしないようにしないと、かっちゃんが引き籠りかねないし」
「……楽しそうに聞こえるのは気のせいかな」
「かっちゃんはああ見えて一途で頑固だからね。怖い見た目で勝手に諦めちゃう子も多いけど、心を開いてくれると凄く優しいんだよ」
「弟にまで惚気ないでください」
そして、美嘉は惚れこむと一直線な性格。とは言っても、それで誰

かに流されるように浮ついてもいない。克人のことは学生時代から割と好意的に見ており、父親である元のような体格に加えて当人の性格が気に入ったので婚約を受け入れたと聞いている。
　美嘉は悠元に断ってから一度立ち上がって部屋を出ていく。数分してから部屋に戻ってくると、十文字家現当主兼婚約相手である十文字克人に加えて、先代夫人の十文字慶子が部屋に入って来た。
　二人は悠元の姿を見ると頭を深く下げた。
「これは神楽坂殿。美嘉から大切なお話があるとお聞きしましたが」
「まずはお座りください……と来客側の自分が言うのはどうかと思いますが、流石に長話にもなりますので」
「分かりました。美嘉さん、ごめんなさいね」
「いいんですよ、お義母さん」
　そうして四人が座り、美嘉が追加分のコーヒーを二人に差し出してから座ったところで、悠元が切り出した。流石に当事者である以上は自分が説明をするべきだと思ったからだ。
「実は、以前お話していたアリサ絡みの件で更に厄介なことが増えまして。詳しくは話せませんが、魔法的な要素によって彼女の母親である伊庭ダリヤが〝蘇った〟のです」
「……美嘉、本当なのか？」
「うん、それは本当。アリサちゃんや茉莉花ちゃんにも確認したから」
「あの子が……成程、主人絡みですね」
　悠元の言葉に克人は疑問を浮かべ、その疑問に答える美嘉。そして、慶子はダリヤのことを聞かされたことで思い出す様に考え込み、自分の夫絡みであることを察した。
「母さん、知っていたのか？」
「ええ、あの子はうちの会社で一時期働いていてね。とても優秀だったし、気配りも出来て評判も良かったの。突然退職届を出した時は『一身上の都合で辞めさせていただきます』とだけしか言わなかったのよ」
　慶子はこの時期に十文字凱から彼の息子にあたる和樹との婚姻を勧められ、それと時期が重なるように辞めていったダリヤのことが気

掛かりだったと話した。ダリヤの勤務記録が長期間残っていたのは、もし彼女が頼ってきたときに再就職しやすい判断材料を残しておくのが目的だった。

「あの人はバレてないと思ってるみたいだったけど、彼女が居なくなってからのあの人は凄く分かりやすい位に落ち込んでたもの。まさか隠し子まで拵えていたのは想定を超えてたけどね」

何せ、二股関係までして無責任に妊娠までさせてしまった（当時の慶子はダリヤが妊娠していたことを知らなかったが）のだ。慶子は竜樹を出産後に凱へ和樹とダリヤの交際に関する説明責任を求め、納得のいく条件が得られない場合は離婚まで視野に入れていた。離婚こそしなかったものの、家庭に関する決定権は慶子が握る形となったらしい。

勇人や理璃の引き取りも慶子が決めたことで、どうしても異母兄弟（兄妹）間での諍いを少しでも和らげるのが目的だったそうだ。

「あ、ごめんなさいね。それで、ダリヤさんが今後外へ出て働くことになるから、もしもを考えて夫に釘を刺してほしいというところかしら？」

「そうして頂けると助かります。自分にとっては婚約者の母親となりますし、自分専属の使用人として雇う関係上は警察沙汰にさせたくないので」

「成程……自分からも釘差し致します」

流石に若返った挙句自分の愛人となることは言えなかったし、最早関係を持っている所も言えるはずがない。複数の婚姻を有している身としては、公私混同をしないようにルールを定めていたりする。

権力を振り翳すことは出来るが、それで十文字家との関係を拗らせるのは違うと考えた。元々アリサの件で仲が拗れたのは十文字和樹だけであり、克人とは互いに割り切った関係を構築しているし、自分からすれば血縁上の義兄にもなる。それに、和樹や克人以外の十文字家の人たちとも良き関係を持っているので、既に一線を退いたも同然の和樹と関係を再構築する気も無い。

「私も気を付けておくよ。万が一の時は半殺しにしてでも止めるか

ら」
「美嘉姉さんが言うと洒落にならないんだが」
「いやいや、私なんてまだ生易しい方だと思うよ。詩鶴姉さんや佳奈姉さんを怒らせた時のことは悠元も知ってるでしょ？」
「あー……話を聞いたレベルではあるけど」
　三矢家の女性陣は母親の気質を主に受け継いだせいなのか、怒らせた時の反動が凄まじい。詩鶴が生徒会長となった際のトラブルでは主に佳奈が対処していたが、詩鶴も『私は生徒会長になる気なんてなかったのに、貴方方が傷害に至るまでのトラブルを起こした』という理由で、魔法抜きでトラブルの加害者全員を病院送りにしたそうだ。
　普通なら警察案件とかの類だが、ここで秘かに千姫と剛三が介入したことでお咎めなしになり、病院送りにされた生徒は全員退学扱いとなって普通科高校への編入を余儀なくされた。第一高校としてもこんな大騒動でブランドを傷つけられるのは困るからなのだろう。なお、近況の詩鶴は妊娠したようで、順調に行けば来年初めごろに出産する予定だそうだ。
　学校では真由美の権力の濫用が目についた訳だが、まさか自分が入学する前にそんなことになっているとは知らなかった。遥に事情を聞いた後で盛大に落ち込んだのは、その沙汰のことまで聞いてしまったためだ。
　一応相手の生徒には示談金ということで各数百万ずつ支払ったとのことで、上泉家が全面的に責任を負ったと剛三から聞いたが、『その程度の端金で済むのなら、治療費を含めてもプラスだからな』と言いつつ、白河グループ系列の不動産会社が管理する物件に引っ越しまで薦めていた。
　ある意味マッチポンプ紛いの行動には流石に何も言わなかったし、示談金を家賃を含めた住居費用として回収する発想には若干引くほどだった。
「この分だと、悠元が囲うってことになりそうだからね。実家のお母さんはすごく喜ぶと思うよ」
「アリサのこともあって、既にそうなってるけどね」

「お話は聞いていましたが、大変なご様子ですね。でも、うちの旦那と違ってしっかりされているので、きっとダリヤさんも安心できるのでしょう」
「……とても自分には真似できませんな」
別に無理して真似る必要はない。というか、女性陣が結託して複数の婚姻を結ばれた、というのが一番妥当な気がする。それでも断ろうと思わなかったのは、悠元にとっては最優先となる第一夫人の深雪が許していることに他ならない。
彼女の気質ならば独占する可能性もあった。ただ、深雪を含めた三人の襲撃を受けた翌日の話し合いで、深雪らが更に増える可能性を尋ねたことがあった。つまるところ、その前日の時点で千姫から更に複数の婚姻を結ぶ段取りがあったことを知っていた、ということになる。
本人から聞いたところでは、『ご主人様を引き留めるためには、私如きの力では足りないと判断いたしましたので、ご主人様を好いている女性に協力者が欲しかったのです』と返された。まるで俺が飛翔して遥か彼方へ飛んでいくような表現には遺憾の意を唱えたい。
「一般常識からしたら異常すぎて修羅場案件なのですがね」
「……うん、それは否定できないね。でも、それが悠元の人徳だと思うよ。あの子たちの幸せをちゃんと叶えられるだけの立場と財力も持ってるわけだし」
「程度は考えてほしかったと思うけれど」
何せ、転生した当初は何も目立った権力などなかったし、特典による規格外な資質は在ろうとも見合うだけの実行力も無かった。剛三の下で修行したのだって、達也に伍するだけの実力を身につけるのが目的だった。散々国内外を連れ回される羽目になったが、誰かに入れ込む気はないに等しかった。
どうせ婚約が決められるとしても、元としても変な婚約を結ばせるとは考えづらいだろうし、仮にそうであれば元だけでなく詩歩からストップが掛かりかねない。まさか母方の実家から選定されるとは思いもしなかったわけだが。

「結果的に１４人の婚約者って、普通なら精神的に参る案件だよ。比較しちゃいけないんだろうけれど、二股に隠し子がまだ生易しく聞こえるレベルだと思う」
「話は聞いておりましたが、大変なことですね……うちの息子もそれぐらいの甲斐性は見せてほしかったのですが」
「無茶を言わないでくれ、母さん」
そして、神楽坂家で雇った弁護士を通す形で念書を纏め、万が一和樹がダリヤを見つけて復縁を願おうと接近した場合は罰金を科すことで決着したのだった。

九島家絡みの交渉事

九校戦は終わったが、まだ片を付けなければならない大きな案件は一つ残っている。それは、宮藤真一と桜庭愛波――――元の世界から飛ばされた九島光宣と桜井水波の帰還についてだ。

愛波については悠元の［領域強化（リインフォース）］で治療したので、調整体に見られる寿命の短さについては解消されている。その際に愛波へ治療魔法を提供したが、彼女の立場や境遇を鑑みれば、四葉家も無下にすることはないだろう。特に向こうの穂波は死別しているようで、彼女に何らかの感情を持っている達也も無下にすることはしないだろう。

「ここまで魔法を提供して頂いて、本当に感謝しています」

「お礼は要らないし、元々使うのかどうかすらも分からない魔法を押し付けたようなものだからな。それでも気に病むようなら、向こうの世界の達也たちや九島光宣を救ってやってくれ。それでチャラにしたということでお願いする」

「……成程、この世界の私が惚れてしまうのも無理はないですね」

そもそも、自分の転生特典のせいで絶賛増えまくっている魔法だし、中には現行の魔法水準を大幅に超える魔法が量産されている始末。かと言って、それらすべてを世の中に出すわけにはいかないが、一先ず神楽坂家の書庫へ残せるように全て書き出した。

それが一月前のことだが、その時点で数億の魔法を書き出す羽目となり、結果として書庫を現在の百倍以上も拡張工事する羽目となった。大事には出来ないので、悠元が過去に三矢家の地下訓練場などを設置した際に使った方法を取った。

後日、千姫に報告したら『今度は古式の家から愛人でも取りましょうか』と言い出したので固辞しておいた。

「それでなぜ納得されるのかは分からないが……時期的に達也が国防軍との諍いで大変なことになるだろう。向こうの深雪をしっかり守ってやることも大事だが、まずは己の身を守り切ることが前提だ」

愛波のレベルアップも兼ねて、同じタイプの理璃や十文字勇人に十文字和美、それにアリサや茉莉花とも手合わせをさせて経験値を稼が

せた。勇人はアリサの資質に気付いたようで、理璃から説明をしたので納得していた。本人曰く『弟には今の時点で話しても反抗しそうですからね』と呟いていたのか、竜樹には話していないそうだ。
「真一のほうは……かなりレベルアップしてるようだな」
「これでもまだまだですけれどね」
真一は自ら学んだ魔法に驕ることなく、九島烈やこの世界の光宣と手合わせをしているし、何と達也とも手合わせをしているそうだ。達也自身も『自分よりも手数が多い相手と手合わせをする経験は欲しい』とのことだし、真一も『自分の魔法全てが通用しない相手に遭遇した時の対処を学びたい』と述べていた。
やはり、一度達也に敗れているという事実は真一も痛感しているようで、それに九島の魔法と周公瑾の知識を有していても世界全ての魔法に精通したわけではない、ということは当人が感じていた。
8月末に向けて準備を進めている中で、以前響子から伝えられた藤林家当主が直に話し合いたいという事を思い出し、響子に改めて連絡を取った。丁度向こうも暇だったようで、モニターには制服姿の響子が映し出されていた。
響子はというと、モニターに映し出された悠元を見て敬礼をしていた。
『これは大将閣下。今日はどのようなご用件でしょうか？』
「響子さん、わざとやってますよね？　お時間は大丈夫でしょうか？」
『ええ、新ソ連の混乱に関する情報収集の解析を頼まれることはあるけど……それで、何か急ぎの用事でもあったかしら？』
専用回線で連絡したからこその対応だろうが、響子に揶揄われたことを窘めつつも響子に用件を話し始めた。
「以前、響子さんから『藤林家の御当主が直にお話したい』と仰っていた件で、三日後に九島閣下が過ごしている伊豆高原の別荘へ出向いていただけませんか？　都合が合わなければ別の日を指定いたしますが」
『その件ね……今父に確認してみるわ』
そう言って響子は携帯型の端末で連絡を取った。すると、返事は思

いのほか早く帰って来たのが見てとれた。
『父はそれで了承してくれたわ』
「それはありがたいのですが……何も悪いことをしていない筈の藤林家が自分に会いたいと言ってくるのか一番の疑問なのですが」
烈のことを考えれば策謀で九島家を嵌めた張本人と言っても差し支えないし、寧ろ達也に会いたいと言ってくる方がまだ自然に思えた。『それもそうよね』とモニターに映る響子は疲れたような表情を浮かべた。
『私も流石に疑問だったの。だから、独立魔装大隊の再編の合間に実家へ帰って問い詰めたの』
響子は悠元と実家の仲介をした際に疑問を抱いたようで、仕事の合間を縫って実家へ直接帰って問い詰めたそうだ。連絡で済ませなかったのは、下手に盗聴される危険性を考慮してのことだった。
『悠元君が「伝統派」を正統派の魔法師と和解させたでしょ？　その皺寄せが実家に波及したのよ』
百家の中には古来の忍びや修験者、僧侶などと言った古式魔法師が現代魔法師として活動している事実が存在しているし、古式魔法師の一部は師族二十八家へ連なる血筋を残している。その事実はあろうとも、やはり古きものを守ろうとする者達には新たな方法を受け入れることに理解できなくても無理はない話だ。
だが、元十師族・現護人にして古式・現代の二つの血筋を持つ悠元が『伝統派』を和解させたことで、京都・奈良方面における神楽坂家の地位が向上した。嵐山に建立中の神宮が完成すれば、本家が無くとも影響力が更に高まる。
「響子さんの実家が元を辿れば伊賀上忍の一族に繋がることは把握していますが、そこまでの事態になったのですか？」
『話を聞かされた私も半信半疑どころか不可思議としか思えなくてね』
元々『九』の家に対する諍いが先鋭化して『伝統派』へ発展した。だが、その和解をしたのは彼らではなく別の家の人間だった。それもかつて京都に本拠を構えていた古式の大家の人間が出向いたことで、

『伝統派』に危機感が募ったそうだ。
攻撃的な奈良方面の人間が悠元らへ攻撃を行い、悠元が結界術式で鎮圧した事実は京都方面へ伝わり、更に嵐山や鞍馬山の案件を瞬時に片付けたことで二の舞を避けるべく神楽坂家の仲裁案を全て?んだ。
京都方面の和解に加えて正統派の力が増すことは、隣接する奈良方面にも影響を与える。奈良の正統派は高野山の一派を中心として結束し、過激な行動をとる『伝統派』に対して通牒を送付。過激な手段すら辞さないという姿勢に奈良の『伝統派』が神楽坂家に助けを求め、神楽坂家が一括して行った正統派との会談の結果、『伝統派』は復讐を諦めて古式魔法師らしい穏やかな暮らしを手にした。
「京都に行ったのは周公瑾の件やコンペの件絡みでしかなかったわけですが」
『そう言えばそうだったわね。随分派手にやったことは上司から小言で言われた位よ』
「でも、俺が大々的に介入しなければ国防軍と大亜連合の癒着疑惑まで浮上しかねませんでしたよ?」
『……終わったこととはいえ、耳が痛い話ね』
これで危機感を抱いたのは九島烈をはじめとした『九』の家の先代当主達。烈はこの件に悠元が大いに関係していることを悟り、箝口令を敷きつつも自身の不徳を償う機会を考えていた。
その最中、四葉家当主・四葉真夜が烈にコンタクトを取ってきたのだ。京都市内にある四葉系列のホテルで密会を行い、真夜は元造の遺言に従って烈を許す代わりに、七草家を糾弾する権利を要求した。
それを聞いた烈は、七草家の行いを黙認していた自身も〝同罪〟と述べた上で、七草家の降格の代わりにパラサイドールの件で迷惑を掛けた代償として現九島家の降格と十師族昇格権の剥奪を提案したとのこと。
「『伝統派』のことだって、向こうが変に首を突っ込んでこなければ適当にあしらうつもりでしたし。結局は周公瑾が暴走したせいで、俺も無駄に知識を得る形になりましたが」
『そのことは達也君から聞いたけれど、問題ないの?』

「前例という形でピラミッドのファラオの悪霊を祓ったことがありましたので、その経験が生きてくれました」
その結果が師族会議での顛末となった。話を聞いたのは西果新島の一件を頼む時だが、真夜は元造の遺した手紙を読んで『自分なりに気持ちの整理をした』と語った。『姉さんも姉さんだけど、揃いも揃って自己犠牲が強いって悟ってしまってね。父さんもそんなきらいがあったから、自ずと納得出来ちゃったのよ』とも話してくれた。
加えて、元造の為人を剛三経由で知っている葉山からも詳しく聞き、遺してくれた手紙の信憑性を疑うことなく受け入れたらしい。それを抜きにしても悠元の使用人（愛人）になるというルートになるのは不可解としか言いようが無かったが。
そのことについても葉山から聞いたが、曰く『しがない執事の私からすれば、年齢の差があるとはいえ奥様が添い遂げるお相手を見つけたことに嬉しく思います』とのこと。
「もしかしてですけど、ご実家関連で何か？」
『実家と言うか、厳密にはお祖父様絡みのようでね。父もパラサイドール開発を黙認していた手前、反対できなかったようなの』
響子の説明では、今年の正月に藤林家を電撃訪問していた烈が藤林家当主・藤林長正と会談した。長い時間の会談だったにもかかわらず、長正はその内容を家族に打ち明けなかった。そして、国内事情が落ち着くタイミングを見計らって悠元へ会談を持ちこんだという事実を聞き、悠元は納得したような表情を浮かべた。
「成程、閣下は律儀に約束を履行してくれていたようですね」
『え？　悠元君は父の目的が理解できたの？』
どうやら、響子にはパラサイドール関連の件での謝罪ということで話を纏めていたようだ。彼女を含めた三者が関与していて国防軍絡みとなると、パラサイドール開発の件か周公瑾の件ぐらいしかないため、彼女もその話を疑わなかった。
「昨秋、九島家を訪れた際に閣下と直接会談したことは御存知でしょうが、光宣を治療する条件に複数の条件を持ちかけました。そのうちの一つが『光宣を軸とした九島家の再構築』です」

パラサイドールの件と七草家の工作黙認、そこに周公瑾への便宜を看過した件で現九島家を信用できる材料が無くなった。その為、師族会議の提唱者である烈本人に責任を持ってもらう意味で九島家を一度師補十八家へ降格させ、更に現当主を含めた連帯責任で数字(ナンバー)を剥奪する。

そして、光宣を一時的に養子縁組で九島家の外へ出し、九島烈と藤林長正の連名で光宣に再び九島の姓を名乗らせる。戸籍上は長正の養子として登録した後、烈が後見という形で九島家を再出発させることになる。藤林家を選んだのは、九島真言(まこと)の実妹が嫁いでいることもあり、遺伝上の光宣の母親なのだから血縁関係も成立する。

光宣が烈の仕事を手伝っていたことで、九島家の家業についてもそれなりに顔が利く立場。他の兄や姉たちと比べても魔法資質が優れている事実を加味しても、光宣が当主となり得る材料は揃っている。

「別に私怨は含まれていませんが、客観的に見ても今の九島家直系では関係の再構築など望めないでしょう。折角和解させた『伝統派』が再び生まれかねない状況を放置するのは『得策ではない』と考慮したまでです」

『……ごめんなさいね、悠元君。本来なら私たち大人がケリをつけなければいけない問題なのに』

「別に響子さんが謝る問題ではないですけどね」

現状、九島家には15期60年の昇格権破棄という枷が掛けられているが、光宣が当主となった際にはこの枷を外すことも明言している。実際、パラサイドールの件では光宣からのメールで早期に気付けた部分も多く、その恩を返すには一番分かりやすい形となる。

そして、新生九島家には現状護人が管轄している京都・奈良方面の〝守護〟を担ってもらう。監視については安宿家に当面任せるが、子孫世代が成熟すれば分家を新設して担ってもらうことを考えている。

いきなり十師族へ復帰というのも大仰すぎるだろうが、彼の正妻となる理璃は十文字の縁族だし、戸籍も直系の養子縁組をしているために血の繋がりを考えても反論は出にくい。本家を断絶して分家を新たな本家として再興させる手法は過去にも事例が存在する。

その後ろ盾として十文字家や神楽坂家・上泉家のみならず、四葉家や三矢家、更には七宝家も申し出てくれた。七宝家は昨年の息子に関するトラブルで十文字家にも少なからず迷惑をかけたので、その罪滅ぼしの様なものだ。

「それに、今の自分は師族会議議長の立場ですので、閣下より託された日本魔法界の行く末を律する必要があります。相互に高め合うための研鑽は歓迎ですが、足の引っ張り合いは許しません」

『悠元君の場合は十山家や七草家の一件があるものね。それに九島家のことも』

「大概彼らが自爆して終わったようなものですが」

まだ十代の人間がやるべきことではないだろうが、自分の何倍も生きている人間の不始末をここまで見る羽目になるとは思いもしなかった。これならば好き勝手に生きている剛三や千姫の方が後始末もしっかりしているだけに、彼らの爪を直接飲むぐらいの気概は見せてほしいと思わなくも無かった。

『そういえば達也君から聞いたけど、深雪さんと来年には入籍するそうね。これからは義理の従姉弟になるわけだけど……お姉さん呼びはしないで頂戴ね』

「何故です？」

『出来の良すぎる弟を持つみたいで恐縮しちゃうから』

「貴女の能力も大概だと思うのですが」

九島烈はこの件が終わると国防軍の顧問役も降りて、伊豆高原の別荘で遅すぎる隠居生活を過ごすらしい。それだけではなく、健康の一環で本格的な運動を始めることになり、それを聞いた剛三が新陰流剣武術の道場へ連れ込むつもりらしい。その辺は奏姫からの連絡で知った。

あの見た目に反して肉体は所謂〝細マッチョ〟だったようで、武術の鍛錬をしながら精力的な老後生活を過ごすようだ。光宣はその話を聞いた際に『まあ、一度決めたことは梃でも動かないので、僕でも止められません』と苦笑しながら評していた。旧第九研の面々を纏めていたのは、その気質もあって逆らえる人間がいなかったのもあるだ

ろう。
現九島家は〝工藤(くどう)〟の姓を与えられることになる。現当主の保有している会社の経営権などは長正が後見とする形で光宣が保有することになり、業務などは光宣が社会的地位を確保するまで九鬼家や九頭見家がフォローすることで既に合意。騒動のお詫びに神坂グループ系列会社で大口の取引を持ち掛け、十年単位での合意形成も既に取り決めている。
既に社会人となっている現当主直系の子女については、今後の日常生活で不利となる様な裁定はしないが、彼ら自身が師族二十八家の人間へ返り咲くことは出来なくなる。それに不服があるようならば、法的措置も含めた対応をする用意があることも既に伝えているし、最悪裁判沙汰になっても構わない。
過去の悠元に対する態度も要因の一つになっている為、もしもの時は烈が一喝することも約束してくれたし、現当主の妻の実家も味方につけているので、彼らに拒否権は存在しない。まあ、彼らの子どもが師族二十八家へ嫁いだりするのは敢えて止めないが、それで工藤家が外戚面をすることは許さない。
『ベゾブラゾフを瞬殺したどころか、新ソ連の首脳陣を消し去ったのは達也君から聞いたけど、間違いなく剛三さんの孫だって実感したわ』
「念書を書かせても襲い掛かって来た自己中心的な連中に持ち合わせるだけの情けはございませんので」
『達観してるのね……』
光宣の嫁は理璃一人に決めたかったようだが、藤林家以外の上忍三家の血筋を引く服部家や百地家が嫁を送り出したいと申し出て来たらしく、長正が会談を持ちたかったのは神楽坂家の許可を得たいのだろうというものだろう。
話を戻すが、実は理璃の実父が長正の実弟で、その事実は烈と長正の両親以外知らなかったのだ。長正よりも優秀だった実弟は長正の居場所を残すためにも烈に相談し、絶縁同然で藤林家を飛び出した。その部分は理璃の母親が遺した日記にも書かれており、理璃が高校生

となった時に明かすつもりだったらしい。
実弟は真言の妻の実家である富士林家の養子となり、国防軍に従事していた。富士林家に対しても烈は『知人の息子の法的な後見人になってほしい』とだけ頼み込んでいたのだ。これは自身の弟である九島健に対する後悔も含まれていた。
なお、千姫にそのことを聞いてみたら知っていた。八雲へ直々に頼んで調べていたらしい。そのことを公に話さなかったのは、烈への切り札として持つことで黙らせる意味も含まれていたようだ。義理の母親ながら逞しいと思った。
「婚約者の間で色々話がついているので、俺はかなり楽させてもらってますが」
『それでいて愛人もいるんでしょ？　深雪さんのお母さんもその一人だってことも』
「意味が分かりません、としか言いようがありませんが」
なお、こんな会話の裏側で将輝が恋慕されている二人に関係を迫られて追い込まれているのは……ここだけの話である。その事実は真紅郎から一条家の養子に関する相談を受けた時に知ったということも付け加えておく。

未定の未来

そうして迎えた藤林家との会談。会場は伊豆高原の別荘ということで、烈には話し合いの立会人として同席してもらうが、彼は『私は許可を貰うまで何も話さない』と述べていた。

話し合いには悠元と長正、各々の随伴として深雪と達也に水波、長正の随伴は響子のみだった。更に、驚くべきだったのは長正がすっきりと剃髪して坊主頭になっていたことだった。これに対して真っ先に驚いたのは響子だった。

「お父様⁉　何故そこまでのことをしたのですか⁉」

「妻の実家とはいえ、私は咎めるべき時に咎められなかった。これは私自身に対するけじめだ」

そんな言葉から始まり、長正は悠元と達也に対して深く頭を下げた。

「神楽坂殿に司波殿、此度は申し訳ありませんでした」

「それは、何に対しての謝罪なのかをハッキリさせて頂きたい。此方としても身に覚えがない状態で頭を下げさせる気など有りませんので」

「それもそうでしたな。では、ご説明させて頂きます」

長正の説明では、昨年の九校戦スティープルチェース・クロスカントリーにおいてパラサイドールの実験を敢行したことについての謝罪。本来なら女子だけで済ませる予定だったが、悠元の存在で更に脅威度を跳ね上げ、実験中の強化体まで持ち出して差し向けたこと。

藤林家は九島家のパラサイドールに関する事を知ったものの、調査は続けていたが結局黙認することとなった。悠元自身は後片付けを剛三と千姫に丸投げしたので、報告は聞いていたものの、その後の周公瑾に関する対応を進めていくうちにあまり考えないことにしていた。というか、面倒になって放置した。

響子にとっては実家だし、達也との関係を考慮しても遺恨になることは避けたい。達也にもこの辺は話したが、『互いに面倒事となることはしない』ということで決着して、藤林家への制裁は無しで決まっ

た。
「本来であれば、黙っていた私も罰せられるべき立場でした。ですが、お二方は私を含めた藤林家への制裁はしないと娘から聞きました」
「ええ。親友の妻となるであろう同僚の実家を必要以上に困らせる必要も無いと感じましたので。ならば何故今になって会談をしたいと申し出て来たのかが気に掛かります」
「謝罪に加え、実は同じ上忍の一族である服部家と百地家から、光宣君へ嫁を送りたいという申し出を受けまして。その際にパラサイドール看過についての叱責も受けてしまったのです」
恐らく、服部家と百地家は独自に調べて藤林家の行いを知ってしまったのだろう。パラサイドールの件では八雲が態々叡山を訪れていたこともあるので、彼が意識していなくてもどこかしらで不審点が出てきてもおかしくはない。
両家が求めているのは光宣へ嫁を送ることと、現当主の引退。次期当主については普通なら響子へ移譲されることになるが、これについては響子が拒否した。当人もパラサイドールに関与していた側ということも有るし、達也との結婚を控えている状態で実家へ出戻りするわけにはいかない。
悠元は伊勢家からその事実を把握し、藤林家がその案を呑むと神楽坂家の案が実行されなくなることを考慮して、この会談前に対処しておいた。
「……お話については分かりました。実は、服部家と百地家に対しては私の方で話をさせていただきました。今回に関する賠償はこちらで立て替えましたので、その対価として藤林家には神楽坂家の管理下でお仕事を依頼したいと考えております。異論はございますか？」
「いえ、ございません。下手をすれば取り潰しも覚悟しておりましたので、寛大な対応に感謝を禁じ得ません」
管理という言い方をしたが、実際的には〝部下〟という言い方に近いだろう。衣食住についてはきちんと保証するし、賠償の支払いも仕事報酬からの天引きで数年程度あれば完済できる額にしている。別に恨みもないし、九島家はこれから罰を受けるので藤林家に咎を背負

わせる気など無い。
神楽坂家で光宣の婚姻相手を取り決める旨を伝えると、服部家と百地家は丁重に申し込んでくれた。結局千姫と同じことをやっていることに内心で呆れる羽目となったわけだが。
「それと、九島閣下よりお話を聞いているとは思いますが、光宣を新たな九島家当主として定めることで再興させ、十師族の〝十三番目〟として近畿方面の守護を担っていただきます。なお、監視については古式魔法師の件もございますので、神楽坂家が全面的に責任を負います」
「……異存はございません。その旨は義父にも全てお伝えしております」
長正が悠元の発言に対してそう述べたところで、悠元は視線を烈に向けた。烈はそれが発言の許可と受け取った上で、長正に対して話し始めた。
「これから、君は光宣の父親として責任を果たしてもらいたい。私は娘に酷な事をさせる愚かな父親だが、光宣のことは九島家全体の責任でもある。無論、私も例外ではない」
烈が強化措置に成功してしまったがために、様々な人の人生を狂わせてしまった。身内のみならず、彼が関わって来た人間まで多大な迷惑をかけてしまったのだ。
最早世界規模で深い傷を残した以上、それが完全に修復されることはない。烈は自分の年齢で老い先が短い事を承知しているからこそ、それを誰よりも痛感してしまった。真一から聞いた〝もう一人の九島烈〟の存在が、まるで鏡合わせのように思えてならなかったようだ。
「来月末を以て私は国防軍の顧問も引退する。残る人生は剛三に誘われていてな。だから、私のことはもう気にすることなく各々の人生を生きるがいい。もし死んだときは密葬にして欲しいこともこの場で宣言する」
来月末で別荘も引き払うようで、その手続きは既に終わらせているらしい。元々上泉家管理の物件だったので、その手続きも早く済んだ

のは納得がいく話だった。
「神楽坂君に司波君、昨年の周公瑾に関する件で改めて謝罪させてほしい。そして神楽坂殿には『伝統派』との和解を旧第九研出身者として謝罪させて頂きたい。本当に申し訳なかった」
周公瑾に関する件は、パラサイドール製造だけでなくその後の逃亡劇も含めてなのだろう。そして、悠元には敬称を変えた上で『伝統派』に対する謝罪を口にした。それを聞いた悠元は達也と顔を見合わせ、互いに頷いた上で烈に視線を向けた。
「閣下、頭をお上げください。周公瑾の件については光宣君も頑張ってくれましたし、『伝統派』については周公瑾を追い出すために大掛かりな仕掛けの副産物でしかありません」
「……積年の遺恨解消を副産物と述べるのは、君は間違いなく剛三や千姫の血を引いた魔法師だ。私が嘗て名乗っていた［トリックスター］も君に相応しい称号だと思うよ」
悠元は軍関係や学校関係で散々色んな渾名を付けられているわけだが、烈から［トリックスター］の渾名を継承してほしい様な言葉には苦笑を浮かべた。この分だと剛三経由で広められそうな気もしたので、断ることを諦めた。

◇　◇　◇

会談を終えた後、食事会ということで穏やかな空気で話が進んだ。長正としては達也が義理の息子となるので、娘が粗相をしないか親馬鹿な一面を見せたことに響子が頭を抱え、それを見ていた烈も微笑ましそうな表情を見せた。
食事を終え、ＶＴＯＬで巳焼島に移動した四人を出迎えたのはリーナだった。
「あら、おかえり三人とも。話は済んだ？」
「俺や深雪に水波はほぼ付き添いだったからな。全て悠元に任せる格好となったが」
「こっちは大体済んだ話を再確認するだけだったからな」
正直『自分は結婚斡旋所ではないのだから、そういうことは当事者同士でちゃんと決着しろよ』と述べたくなったが、自分の複雑怪奇す

ぎる婚姻関係もそういう経由で成立した手前、あまり強く言えるはずも無かったし、専属使用人兼愛人についても殆ど咎められなかった。
その代わりとして加速している愛情表現のオンパレードなわけだが、容姿に加えて多彩な収入を得ていて、更には社会的地位も確立している始末。ものの見事に男性としての好条件を兼ね備えている形となった訳だが、もうこれ以上女性を囲うのは勘弁してほしい。
「でも、世界がこれで落ち着かせてくれるとは思えんわけよ。とりわけ俺や達也の存在は下手すると脅威にも成り得るからな。面倒事は金輪際断りたい」
「……そうね。私が言うのもどうかと思うけど、そういう輩って絶対出てきそうだし」
「困ったことだな、本当に」
「あはは……」
悠元と達也に加えてリーナもそう零したことに対して、彼らに近しい実力を有する深雪は苦笑を浮かべていて、水波も困惑したような表情を見せていた。
彼らを抑え込むために力を欲しても、その力を疎んで排除してこようとする輩は絶対に出てくる。画一的な思考を持つロボットではない以上、人間故に生じる問題はどうあっても切り離せないだろう。
「とはいえ、見て見ぬ振りも出来ない事象がある……と言ったら、信じてくれるか？」
「悠元が言うと嘘も真実になりそうで怖いんだけれど」
「何の得にもならん嘘なんて吐けるか」
悠元は［鏡の扉（ミラーゲート）］を発動させ、達也らを島西部の宿舎へと導いた。応接室に移動したことを確認すると、悠元は［ミラーゲート］から一枚の純白の石板を取り出した。明らかに魔法文明関連の遺物だと判断した達也はそれを見つめていた。
「明らかに不自然すぎる産物だな。悠元はどこでそれを？」
「中学時代、爺さんに連れられて世界横断をした話は知ってるだろう？　その拾い物の一つがコレだ」
丸太を投げ飛ばして太平洋横断を成功させたまではいいが、着弾地

点がシャスタ山だった。先住民の聖地に到着するのはどうかと思ったが、丸太が着弾した際に巻き上がった岩に紛れて純白の石板が出てきた。
剛三にも見せたが、彼は『コイツの処遇はお前さんに任せる』と述べていて、このまま放置するとよくないことが起きると考えて回収することにした。
「で、流石に石板一枚だけというのはおかしいと思ったから、あの近辺を虱潰しに探して計１６枚の石板を回収した。その保管場所は俺と爺さんしか知らないところにある、と言ったら……何かしらヤバい代物だというのは理解してくれたか？」
「それだけでも十分伝わるわよ。で、まさか戦略級魔法に相当する代物とか言わないわよね？」
「……単純なヤバさで言えば、俺の戦略級魔法である［スターライトブレイカー］に相当する代物だ。そして、石板から解析した結果から、魔法師を使い潰す前提なら理論上誰にでも出来かねない魔法が存在するという事実も判明した」
石板からして、間違いなく魔法文明時代の産物だと思われる。しかも、この石板には何故か神代日本語が使われていた事実からすると、この石板が日本を経由してアメリカに流れ着いたという事実にも繋がる。
「これを考えると、勾玉やアンティナイトなんてまだ可愛げがある部類だと思ったよ。今はまだいいが、この先これ絡みの件が起きないとも言えない。とりわけ［恒星炉］を本格的に世の中へ出せば、間違いなく良からぬ連中が仕掛けてくるのは火を見るより明らかだ」
「それは確かにそうですね。では、悠元さんが［恒星炉］の事業を早めに固められたのは、これがあったからですか？」
「その通り。全ての経営体制が整ってしまえば、俺や達也の動ける時間は大幅に増える。魔法大学に通う時間も考慮しなければならないが、その時はその時だ」
図らずも石板を見つけてしまった以上、見て見ぬふりは出来ない。とはいえ、迂闊に話せる内容でもない。悠元が選んだ選択肢は、この

石板を悪用させないために厳重な封印を施すことだった。
だが、封印しても誰かが偶発的に発見する可能性もあるため、悠元自身に加えて達也が動ける時間を確保するために［恒星炉］の事業化と株式会社設立を大幅に前倒しした。どうせ石板絡みでなくとも悠元や達也を狙おうとする輩の可能性が完全に消えない以上、身動きが取れなくなる要因は全て排除できるように尽力した。
「一応、この事実は真一にも話そうと思う。杞憂に終わればいいが、向こうの世界に［エターナルポース］のトリガーが存在している以上、無関係とは言い切れない」
「確かに、可能性がある以上は話さないというわけにもいかないか。それにしても、お前は色んなものを呼び込んでいるな」
「俺がそう望んでないのに、勝手に飛来している側なんですが？　災難投げてくる奴ら全員に慰謝料か損害賠償請求したい気分だわ」
「……そのとばっちりをＵＳＮＡ（スティッ）が受けている訳なんだけれどね」
大本が闇鍋状態の様相を呈した世界だからこそ、何かを治すだけでも一苦労では済まない。何せ、万夫不当の実力を有する剛三や千姫、それに準ずる実力を有する奏姫ですらも手を焼いた問題なのだ。彼らには戦争を終わらせた功績を以て表舞台から引退してもらうのが、次世代としての役目だと考えている。
それに、石板や［エターナルポース］、それとピラミッドの一件で魔法文明や当時の魔法も修得している以上、当事者として厳重な管理が必要だと悟った。
悠元は島に滞在している真一に連絡を取ると、すぐに来てくれた。そして、悠元が今までに得た情報を全て真一に伝えると、彼はとても驚くような表情を見せていた。
「そこまでの代物が……僕の世界にも存在していると？」
「可能性は極めて高いと考えている。レリックが存在している以上、お前が目覚めてからの役割も必要になるだろう」
可能性としてはゼロであってほしい。だが、僅かでも可能性が残っているとしたら無視できない。真一にはシャスタ山に眠っている石板の存在と、見つけたポイントを全て伝えておいた。この世界と変

わっている可能性は否定できないが、虱潰しに探すよりは効率的に出来ると参考程度に伝えた。
「とりわけ［恒星炉］の存在が世に出れば、その秘密を掴もうと動く連中は多岐に渡るだろう。無いに越したことはないが、この世界の事象でない以上は確証なんて言えない。なので、真一の役目はそれを真実かどうか見極めて行動する役割になってくる」
「……僕の責任は極めて重大ですね。伝えて頂いて感謝しています。何分、僕自身の考えや周公瑾の知識だけではどうにもならない分野ですので」
問題なのは、こういった遺跡が世界各地に点在しているという事実があるということ。単に［シャンバラ］だけならばまだしも、その敵対勢力を仄めかす様な存在まで浮上している。
もしかすると、剛三が無理矢理にでも世界横断旅行へ連れ出したのは、その存在を伝えたかったのかもしれない。剛三らが戦争への介入で世界各地を飛び回ったと聞いている為、その折に魔法的な力を感じていてもおかしくはない。
自分達では寿命的な問題でカバーしきれない。ならば、存在を示唆することだけでも伝えるべきだという心遣いだと思えば、態々世界を渡って苦労した甲斐もあるというものだった。
「当分は［恒星炉］で掛かりきりになるだろうし、真一も向こうに帰ったところで自由に歩けるわけじゃない。必要ならば魔法知識は与えるから、遠慮せずに言ってくれ」
「……達也さん。こんな人物を敵に回せる人間の思考が知りたいです」
「真一、それは俺が最も知りたい欲求の一つだ」
「お前ら、夏の新作スイーツの刑な」
一難去ってまた一難、という言葉が存在しているが、平穏な未来を築かせてくれない人間の欲深さには若干呆れる始末だ。だからこそ、人間は衰退することなく文明を永らえさせ続けることが出来たのだろう。
未来は未だ来たらず、と見事に名で体を示しているものだと思う。

遠近の将来設計

転生して数か月が経過した。

現状はイヤーマフ型ＣＡＤ無しに外出どころか部屋の外まで出るのが難しいわけだが、日常生活を送れるほどに快復した。魔法への感覚を鈍らせることなく聴覚の制御をあれこれ試みているわけだが、すぐ下の妹である詩奈も同様のことで悩んでいる為、一緒にいることが多くなった。

ただ、中身が変わったとはいえ肉体的な血縁関係は不変であるために彼女を娶る気はないし、それをやってしまったら九島家の〝彼〟みたいな人間を生み出すことに繋がりかねない。そもそも倫理的にアウトな事項は慎みたいのだから。

その絡みで矢車家次男の侍郎に睨まれることがある。どないしろと言うのだ。

ＣＡＤ弄りや筋力トレーニングは積極的に行っているし、魔法の制御訓練も試行錯誤しながらやっているが、ここで前世に学んでいた工学知識が生きてくるとは思いもしなかった。ＣＡＤ自体は工業的要素と生物学的要素を含むため、小学生の身分で大学レベルの専門書を読む羽目になった。

書物は十師族の一角だけあって十二分に揃っていたし、家の近くにある第三研――魔法技能師開発第三研究所に出向いて鍛錬や研究を積み重ねていた。体は小学生なのに、やっていることは前世の年齢に引っ張られている。どこかの高校生探偵みたいな有様だ。

自分の身体に関して自覚があろうとも、前世の自己価値観によって形成された精神に引っ張られるのは仕方がないことだろう。それでも、周りに違和感を持たれない程度の振舞いはしている。幸いにも、この体の元の持ち主も自身の寿命を弁えて子供らしい振舞いを極力捨て去っていたようで、それを喜ぶべきか悲しむべきかは判断できなかった。

そんな中、第三研でトレーニング中に声を掛けてきた女性がいた。彼女は〝遠山つかさ〟と名乗っており、聞けば父親の部下に連れても

らって来たと話していた。当然、原作知識で彼女のことを知っていたので、適当に話を流していた。

その際、彼女の眼がどうにも自分を〝駒〟としてしか見つめていないことに気付いた。三矢家と十山家のことを考えれば、そんな風に考えるのも無理はない話だ。

国防軍関連で斟酌しなければならない事情があるとしても、十山家が偉ぶれる意味自体〝根拠不十分〟だと思う。同じ研究所に属する『十』の家に対してならばまだ分からなくもないが、家業の関係で便宜を図れということ自体に無理がある。

広義的に見れば、裏方で国防軍の利になる行動という点では一致するのに、国防軍に属しているという理由で十山家に分があるという現実。しかも、あんな家を平気で看過している他の師族にも問題があると思う……必要以上に関わる気なんて毛頭ないけれど、自分が動けば自ずと目立ってしまうのは避けられないだろう、とは思っている。

自分個人としては、彼女に対する配慮なんて知った事ではない。いくら十山家の都合があろうとも、向こうの都合で実家を不都合に巻き込むことは許さない……そうなると、自分が三矢家を出ていくことも考慮せねばならない。

将来達也や深雪に敵対しない道を考えるとしても、実家にいたままでは確実に疑われかねない可能性もある。三矢家単独で達也らへの妨害があることも含めて、自分の将来への道筋を立てる必要が出てきた。

現時点で将来のことは不明だが、詩奈をそのまま巻き込んだ場合は十山家を合法の如何に問わず潰す……こうやって発言しているだけでシスコンの台詞そのままなことに落ち込んだのは、ここだけの話。

明らかに利己的な思考だが、今現在の年齢を考慮すれば達也や深雪との関与は避けられない。仮に自分から避けたとしても、回りまわって関わる気がしてしまうのは……彼らの主人公&ヒロイン気質によるものだと思わなくもない。

それに、いくら能力的に優れたとしても、能力を笠に着て馬鹿を見るのは避けたい。その意味でも聴覚の完全制御は課題とも言えるし、

自分が克服できれば詩奈の問題も解決することになる。
傍から聞けば『シスコンの気がある』と言われても否定は出来ない。せめて侍郎が詩奈の捌け口として機能してくれればいいが、その為にやることは山積みだ。
◇　◇　◇
つかさとの出会いで自身の将来について考慮し始めた翌日、悠元は元に呼び出された。書斎には元と悠元の二人のみだったが、扉が閉められたところで元は立ち上がって［スピードローダー］を展開していた。
正直、ここまでの自分の行動で訝しむ要素があったのは落ち度である。何せ、使用人からも必要以上に心配されて外出すらままならなかった時期があった。受け継いだ記憶の中で〝まともに部屋の外へ出れなかった〟事に今更ながら気づき、この肉体と血縁関係を持つ父親が疑っても致し方が無い。
「悠元。私が何故こうしているのか、分かっているな？」
「ええ」
純粋な敵意というよりは、色々抱いた疑念に対する戸惑いも含んだ表情。それを見た悠元は両手を挙げて降参の意を示した。これには元も躊躇うような素振りを見せた。
「自分がこんなことを言う資格があるのかどうかは分かりませんが、父さんの疑念にお答えします。今の自分は、貴方が知っている三矢悠元の精神ではありません。この世界とは異なる現実世界から飛ばされ、この体に刻まれた三矢悠元の記憶を受け継いだ者です」
「……」
元がこのまま魔法を放つならば、三矢家を飛び出す覚悟はあった。だが、悠元の言葉に対して元は魔法の発動を中断し、椅子に深く腰掛けて頭を抱えた。悠元は何も言わずに両手を下ろし、元の言葉を待った。
「実は、古式魔法使いの知り合いに頼んでお前が［デーモン］なのではないかと疑ったが、それに関してはシロだった……嘘はついていないのだな？」

「ここで嘘を吐くメリットがありません。それに、仮に自分が家を飛び出した場合、どの道迷惑を掛けることになりますし」
十師族直系の小学生の男子が家を飛び出したとなれば、魔法協会どころか児童相談所、下手すれば家庭裁判所行きの案件になる為、どう足掻いても三矢家に不利益が生じる。それぐらいならば元だけでも本当のことを知ってもらうことで、三矢家での居場所を確保したい思いがあった。
「それもそうだな……記憶を受け継いだとは述べていたが、どこまでだ？」
「謎の高熱で意識を失う直前まではハッキリと。半年前に父さんと母さんが隠れていちゃついていたところも覚えています」
「……あの時、誰かの視線はあったが、悠元だったのか」
半年前となれば、確実に自分が三矢悠元として転生する前のことなので、その話題を出せば納得してもらえると思った。なお、聞かされた元は恥ずかしそうに頬をポリポリと掻いていた。
「仮に、お前の話を信じるとしよう。お前はこの先どうするつもりだ？」
「それに先んじる形ですが、この家で暮らすことの代わりに自分を三矢家の家督と家業の継承権から排除してほしいのです」
「なっ……!?」
悠元の口から出た言葉に、元は思わず驚きの言葉を口にした。十師族と言えども長子継承に拘っているわけではないものの、兄弟姉妹で能力の優劣差が生じるのは無理からぬこと。元の目の前にいる人物がどれほどの潜在能力を有しているか分からないが、自ら三矢を継ぐことに対して拒否の姿勢を見せた。
「その考えに至ったというのは、何かあったのか？」
「理由は二つ。一つ目は十山家のことです。昨日、第三研で十山家の令嬢に会いました。彼女と色々話した際、自分に彼女に下げる頭など持ち合わせる気が無いと悟り、面倒事の回避の為です」
「成程。もう一つは？」
「先程も言った通り、自分は前世の記憶を持つ人間です。自分の身内

が優秀だった余り、凡人だった自分に人間の闇をこれでもかと見せつけられました。家督や家業の総領という椅子は一つしかない以上、御家騒動など相手の思う壺にしかなりません」
　悠元の言葉に、元はとても小学生が経験したとは思えない発言だと頭を抱えた。彼が話し始めた時点で小学生離れしているものの、ここまで思考が成熟しているとなれば、兄や姉たちよりも遥かに大人になってしまったのだ、と認めざるを得なかった。
「それは、仮にお前が三矢家当主に足る力を有するとしてもか？」
「はい。誰かの居場所を奪って逆恨みを買うよりは、自分が退いて別の幸せを見つける方が建設的だと思っています。自分を含めた七人の中では、間違いなく元治兄さんが割を食いかねません。血の繋がった兄弟姉妹で争うなんて中世時代の様な事態が起きれば、益々十山家につけ込まれるだけです」
「そこまで考えていたのか……私からすれば、一気に子離れしたような気分だよ」
　悠元の言葉にショックを受けつつも、元は色々と思慮を巡らせた。そうやって一分ほど考え込んだ後、元は悠元に視線を向けた。
「分かった。悠元の望み通り、三矢の家督と家業はお前に継がせない。だが、どんな形であれ悠元を生き永らえさせてくれたことに対して、私と詩歩の子であることは変わりない。お前が何をしようとも、十山家には何も言わせない……悠元の父親として、お前の我儘ぐらいは聞かんと面目ないからな」
「住まわせてもらえるだけで十分我儘ではありますが」
「なに、それこそ『家族と一緒に暮らしたい』と言っているだけのものだ。それに、お前を下手に追い出したら、詩歩や詩奈に何を言われるか分かったものではない」
「……辛辣かも知れませんが、詩奈の嫁ぎ先を確保する意味でも兄離れはさせてください」
　詩奈に関しての釘差しに関して、元は驚きを隠せなかった。曰く『妻にも言われていたが、お前から言われるとはな』とのこと。同じ父母から生まれた人間同士で結婚なんて御法度すぎるため、彼女の将来

に暗雲を落とさないことも兄としての務めだと割り切ることにした。
　こうやって言い訳を積み重ねていくと、転生して数か月しか経過していないのに、詩奈の兄としての自覚を持っていたことに驚かされてしまう。これは前世での経験もあるのだろうとは思うが。
「それは考えておこう。それで悠元、何か要望があれば遠慮なく言ってほしい。その対価というわけではないが、武術を習う気はないか？」
「武術？　軍人系統のマーシャルアーツの類ですか？」
「いや、元は上泉信綱公を端に発する剣術と武術を組み合わせたものでな。私は中伝程度の実力しか修めていないが、元継や詩鶴は母方の実家に住み込む形で修行している」
　剣術と格闘技自体相容れないものだが、剣を持たずに敵と相対した際の護身という意味で格闘技を取り入れているのだろう、と推察した。話を聞いていくと、詩歩の実家が道場の総本山であり、元継と詩鶴は住み込みで修行しているらしい。
「その気があれば妻に頼み込む形となるが、どうだ？」
「是非お願いします」
「……いいのか？」
「魔法師の如何に関わらず、身体は資本そのものです。それに、魔法が使えなかった時の防衛策として武術を嗜むことは自己防衛の一環だと考えています。色々迷惑を掛けることになるかと思いますが、よろしくお願いします」
「その思い切りの良さを元治にも見習ってほしいと思うのは、私の我儘だな……」
　互いに腹を割って話したことから、元と悠元の仲は良くなった。
　将来、悠元が三矢家を出て神楽坂家当主となる未来こそ予想はしていたが、悠元の婚姻関係を聞いて驚く羽目になった三矢元であった。
◇　◇　◇
　九校戦が終わり、元は書斎の机に座って一息吐いていた。悠元が生まれ変わって１０年という年月に、まるで駆け抜けたかのような心境を感じていると、ノックの音と外から聞こえる声に表情を正して入室

を促すと、三矢家の使用人筆頭である矢車仕郎が姿を見せていた。
「旦那様、お茶をお持ちしました」
「ありがとう。全く、迷惑を掛けて済まないな」
「いえ、私の倅共がお世話になっている身ですので」
元と仕郎は家ぐるみの付き合いに加え、二人は同級生の間柄。加えて、仕郎の妻は元の妻と従姉妹の関係にある。元は仕郎が生真面目な性格かつ頑固者だと知っている為、三矢家と矢車家の関係は一定の秩序を保っている。
給仕を終えた仕郎は下がろうとしたが、元が引き留めて『話がしたい』と告げたので、仕郎は予備として備えていたカップにコーヒーを注いでソファーに座り、元は向かい合う形でソファーに移動した。
「あれから、かれこれ１０年か。侍郎はお前のお眼鏡に適う男になったか？」
「魔法の資質ならば長男よりも上ですね。ただ、あの様子ですと詩奈様の尻に敷かれそうですが……悠元様のように振舞えないかと思ってしまうことはありますよ」
「勘弁してくれ。あの子だって私や詩歩がそうしたわけではないのだから」
仕郎は元から内密に相談を受けていた。彼が転生した存在ということには驚きこそしたものの、実際に料理などを教える時は以前の彼と何ら変わりなかった。しかも、悠元は仕郎を『料理や菓子作りの師匠』と仰いで尊敬している。
悠元が神楽坂家当主となっても、度々学びに来ている。世界で名を馳せたフレンチのシェフにスカウトされたという腕前を見せてもらった時、『私に教えることがあるのか？』と訝しむことはあった。
悠元は『腕前の問題ではなく、初心を忘れないためにも仕郎さんへ教わりに来ているのです』と述べており、これには仕郎も苦笑を禁じえなかった。
「彼は本当に師匠泣かせの愛弟子です。彼の作った菓子を妻に食べてもらったら、妻に連日寝かせてもらえませんでした」
「……一応尋ねるが、法に触れるものは使っていないよな？」

「材料は全てこちらにあったものしか使ってません。それでいて女性を惚れさせてしまう彼は罪作りの料理人ですよ」
悠元本人の話では、ＦＬＴツインタワーマンションに移ってから時折料理や菓子を作ったりする機会は増えたが、その反面女性陣に襲われる回数も増えたと愚痴を聞く羽目になった。元としては節度ある付き合いをしてくれればいい訳だが、詩歩や母方の実家は孫(曾孫)が欲しいとせがんでいる。
当人は『大学卒業して社会的立場を確立できるまで子どもはつくらない』と明言しており、自分自身だけでなく婚約者たちの立場を気遣っている。だからこそ、彼女たちの実家も快く送り出している形に収まっている。
「その意味だと、元治はいかんせん優しすぎる……贅沢なのかもしれんがな」
「そう言えば、元治様はどちらに？」
「家業の仕事が終わり次第、奥さんを見舞ってくるそうだ。出産予定も近いからな。ちなみに、出産したら知らせてほしいと四葉家から連絡を貰ったよ」
四葉家からすれば、当主の実姉の元護衛が渡辺家の養女となって三矢家に嫁いでいる。しかも、その実姉の娘が悠元に嫁ぐし、佳奈は当主の実子と婚約している為、三矢家と四葉家は三重の親戚関係となる。
「元治、元継、詩鶴、佳奈、美嘉、悠元、詩奈……嫁を迎えた元治もそうだが、他も名立たる家に嫁いだり、養子に迎えられたのは、間違いなく悠元のお陰だ。それを考えれば、ラウラやアリサを養子に迎えるのは苦でもないと思えるよ」
「まるで、当主としての仕事を終えられたような台詞ですが」
「アリサのことはあるが、もうじき家業については元治に引き継ぎが終わる。四年後の十師族選定会議前に私は当主の座を降りて、詩歩と一緒に元治の補佐へ回る」
悠元の転生は、元にも大きな影響を与えた。それまでは抑え気味だった家督や家業に関する仕事を元治に教え始めた。十代からいき

なり当主としての勉強はきつかっただろうが、悠元をきっかけとして兄弟姉妹が奮起しているのを見て、元治自身も覚悟を決めていた。
　年齢を考えれば、まだ働けるのは確かだ。しかし、この先の時代を担うためには親として厳しくしなければならない。次期当主の跡継ぎが生まれるとなれば、この先の人生に見通しを立てる必要があると感じていた。
　その結果、五十代で元治に全てを継がせる段取りが整った。これまで主だった地方を管轄していなかった三矢家だが、七草家の配置換えによって関東地方を十文字家と共に守護・監視する役目を負った。十文字家には美嘉が現当主夫人として嫁ぐため、自ずと協力体制が整うこととなる。
「ならば、私も同じタイミングで三矢家の執事長としての任を降り、長男に全ての仕事を託したいのですが、宜しいですか？」
「……どうせお前のことだ。どう説得しても変える気はないのだろう？　好きにしてくれ」
「ええ、お好きにさせていただきます」
　これで、十師族の現体制に元治（三矢家）、元継（上泉家）、悠元（神楽坂家）と元の息子全員が同じ立場に座ることとなる。かと言って、元はそれを偉ぶるつもりなどない。『出来過ぎにも程がある』とは言うものの、自分の子たちが全員立派に育ったのは奇跡を目の当たりにしているような気分だった。
「そこから５年ほど様子を見て、石垣島にいる父の面倒でも見ながら老後の生活を迎えることにする。九島閣下のように長く貢献することも考えたが、どう見ても私の性分ではないと思ってな。妻も了承してくれたよ」
「悠元様の影響ですか？」
「否定はしない。あいつは５０歳手前で魔法界の一線を退き、その後は妻たちと何処かに移住すると述べていた。元継も似たような考えらしい……私はおろか、話を聞いた元治も絶句していたからな」
　元から理由を聞かれた悠元は、以下の理由を述べた。
　――九島閣下の長きにわたる師族会議議長の任期と、悪名として

知れ渡った四葉の復讐劇。日本が表向き薄氷の独立を保てたのは、大きく言えばその二つが原因です。そんな危ない綱渡りをしなくてもいいように確固たる力を確立するのが自分の役目であり、それが済めば俺は自分の人生を自由に過ごさせていただきます。

細かく言えば元老院などの影響もあるのだろうが、悪名が一種の抑止力として機能した挙句、その悪名を証明する形で台頭してしまった達也の存在。人間の寿命という問題がある以上、縋り続けるにも限界はある。

ならば、次代へと続けられる持続的な力の保有という意味で、魔法師の育成システムの確立は急務であった。その為の方法や手段を悠元は作り上げた。後は、ここから合法的かつ持続的に戦略級魔法師クラスの人間を輩出できるかが勝負となってくる。

「誰かに頼り切ること……それを悪とは断じていなかったが、〝怠慢〟だと言いたげであった。全くその通りだと思ってしまうよ。私も十師族当主として九島閣下が長年議長職を務めたことに異議を唱えなかった。他の十師族当主達も含めて、甘え過ぎていたことを痛感した」

烈が一線を退く決定機となったのは、悠元の存在と彼が成した功績。そして、十師族の推薦を受けて最年少で師族会議議長を務めることとなった。十代で日本魔法界の重鎮を務めるということは、悠元が議長足り得る能力と実績を持ったも同義。

「悠元が生まれ変わって、現実を突き付けられた時……私は愕然とした。私はここまで弱かったのだと痛感した。彼の方がこの世界の現実と誰よりも向き合っていた。だからこそ、私は元治に次の三矢を託す」

幸か不幸か、元治は沖縄防衛戦を――――〝戦争〟を最前線で目撃した。その経験がどう生きるかは分からないが、少なくとも自分のような決断は下さない……と、元はカップに入った紅茶に映る自身の表情を見つめていたのだった。

セキュリティで血反吐を吐く始末

ＵＳＮＡ首都ワシントンＤ．Ｃ．の大統領官邸ことホワイトハウス。

８月２０日、大統領執務室を訪れていたのはスターズ総隊長ことジェラルド・メイトリクス・シリウスと、スターズ総司令官となったベンジャミン・ポラリスの二名。二人は軽いボディチェックを受けた後、執務室に通されて大統領の前で敬礼をした。それを見たジョーリッジ・Ｄ・トランプ大統領も敬礼をし、二人をソファーに座るよう勧めた。

「両名共に多忙を極める激務の中、呼び出してすまないな」

「いえ、我が部隊の混乱は既に収束しておりますし、政府内部の混乱に比べれば些細な事です」

「そう答えてくれるということは、君を総司令官に据えたことは正しかったようだな」

エドワード・クラークは連邦軍の軍事法廷で死刑を言い渡され、即日執行された。彼の頭脳からデータを抜き取る案も存在したが、彼程度の人間を喪っても問題はなかったし、何より全世界傍受システムの私的利用は公人として許される範疇を超えてしまっていた。

エドワードに関する資産は全て没収され、彼に掛けられていた生命保険の保険金に相当する額を〝レイモンド・クラークの養育費〟という名目で彼の元妻へ支払った。エドワードの両親はまだ生存していたものの、今回の一件をジョーリッジ自らが話した結果として絶縁となり、本来キリスト教では禁忌となる火葬に処して死没した犯罪者が眠る墓地へ内密に葬られた。

今回の罪状が国家の利益に直結している結果まで招いたため、処遇は〝国家の利益を著しく脅かす大罪人により、死刑の判決が下された〟という事実だけメディアで公表された。そして、彼が提唱したディオーネー計画は完全に頓挫する格好となった。

「さて、両名を呼び出したのは今月末に再訪日するための護衛役だ。別に私は一人でも構わないが、煩く言われないためにも協力してほし

い」
「そういう事でしたら、別に特暗号メールでも構わない案件だと思われるのですが」
「その特暗号メールが今使える状況ではなくなったのだ」
ジョーリッジが話した内容の理由は、今年1月にリーナ宛で送られた特暗号メールに起因する。本来の手順を守らないという軍規違反の犯人を探った結果、レイモンド・クラークがエドワード・クラークの保有していた特暗号メールシステムを使ったことが明るみになった。
ジョーリッジはセリアからその事実を聞き、容疑者をある程度絞り込んでＦＢＩやＣＩＡに調査させていた。そして、エドワード・クラークの出国と同時に自宅を家宅捜査した結果、レイモンドの特暗号メールシステムの流用が明るみになった。
特暗号メールはあくまでも『スターズ』を軸とした連邦軍最高機密の通信システム。その私的流用は厳禁であり、とりわけパラサイト事件で神経質になっていた所に来てのコレであるため、国家科学局は現在進められている次世代型暗号メールシステムの開発を急ピッチで早めることになった。
無論、国家科学局が夏休みを返上してまでフル回転するという有様となり、流石に過労で倒れては困るということで、連邦政府からも必要な人員を派遣することとなった。このために［エシェロンⅢ］の処理能力を用いる事態にまで発展しており、［エシェロンⅢ］の停止は当分できない見込みとなってしまった。
「彼も公人だったので下手に流通させていたとは考えにくいが、そのシステムが自宅で管理されてしまっていたのだ。よって、可能性がある以上は無視も出来ない」
「確かに、万が一アンダーグラウンドに流れていれば、我々の行動が筒抜けになってしまう可能性も有り得ます」
「理解が速くて助かるよ」
そもそも、本来持ち出しを禁じられている筈の機密を自宅に持ち込んでいたどころか、更には身内の私的流用まで至った。こんな人間を

放置したら、いくら愛国心を有していても国家への損害は免れない。
実際のところ、『エンタープライズ』をはじめとした兵器類の引き渡しは痛手となったが、その損失を埋めるための施策を発表することで経済面にフォローすることで国民の溜飲を下げた。
「話を戻そう。日本政府もとい〝彼〟が提唱していた魔法資質保有者の人権保障を行うための国際機関設立に際し、私も調印に赴く」
魔法師に関する機関は国際魔法協会が存在するが、前提となるのはあくまでも『核兵器』に関する事項や実戦レベルの魔法師に対する保障。魔法資質保有者そのものに対する人権を保障する機関とは決して言えない。
魔法協会は当然否定するだろうが、これまでの動きからしてもそれを否定する材料が無い。更には、下手すれば反魔法主義者を勢いづかせる計画を推進しようとした時点で、彼らに魔法資質を有している人間の保護なんて出来ない。
なので、悠元は如何なる魔法資質であろうとも有用性を見出し、その上で魔法資質保有者の人権保障の必要性を国立魔法医療大学の設立や第一高校における二科生の躍進などで証明してみせた。
国土で見れば小国の日本で先進的な魔法教育が確立しつつあるとなれば、他の国々も黙っていられない。しかし、それの中核に居るのが十代の少年と言われても侮る輩は決して少なくない。
「彼の存在を甘く見る輩は少なくないが、私からすれば『今までの人生で最も敵対したくない存在』だと言いたくなる」
「確かに、彼の年齢なら栄光や名誉に拘る自己主張をしてもおかしくはありません」
「それを一切見せないどころか、要求する素振りすらしない。いや、彼にとって過去の栄光は過去の偉人や著名人に対する評価なのだ、と割り切っているのだろうな」
魔法資質保有者の互助組織――――機関名は『メイジアン・ソサエティ』。本拠地はインド・ペルシア連邦の領土となっているスリランカを独立させた上で設置。スリランカ独立の際は日本の国際開発援助による形で神坂グループ・白河グループ・ホクザングループの合同

出資会社を立ち上げ、経済発展を後押ししていく。
ただ、現在スリランカは独立交渉の真っ只中ということで、暫定本拠地は奈良市の旧第九研――――第九種魔法開発研究所跡地に建築したトライローズ・エレクトロニクスの西日本支部内に事務所を置く。そのため、組織の設立調印式は提唱国の日本で実施する。
調印式には日本、ＩＰＵ（インド・ペルシア連邦）、東南アジア同盟（台湾・オーストラリアを含む）、ＵＳＮＡ（北アメリカ合衆国）、ＳＳＡ（南アメリカ連邦共和国）、アフリカ連邦、アラブ同盟、新欧州連合と、新ソ連と大亜連合を除く世界各国が調印する。
新ソ連については国家情勢の問題で、大亜連合についてはインド・ペルシア連邦との領有問題が片付いていないことと、過去の日本への侵攻に対する正式な賠償が成立していない件によって爪弾きとする形にした。
実は、チャンドラセカール経由で大亜連合に関する取り決めを内密に相談していた。その結果、横浜事変における賠償請求をインド・ペルシア連邦に交渉してもらう形で任せただけでなく、５年前の二国による日本同時侵攻の説明責任と賠償請求を国際裁判という形で訴訟した。
この中には日本にいた大亜連合のスパイのみならず、顧傑や周公瑾が引き起こした問題も含まれている。総額で換算すると数十兆円規模に膨れ上がる為、そんなものをまともに払えば大亜連合と言えども無傷とはいかない。
いかに顧傑や周公瑾が仮に大亜連合の人間で無くとも、彼らが大亜連合の特殊部隊を密入国させた事実は横浜事変の時点でバレている。国土を脅かす危険分子に手を貸した時点で大亜連合政府が無関係で通すことは出来ないのだ。
「大亜連合に対しては強気に出ていると報告を受けておりますが、彼らが逆上するリスクも高まるのではないかと」
「寧ろ、却って暴発させることで大亜連合内を引っ掻き回すつもりなのかもしれんな……手を出せば、剛三殿が叩き出した大漢軍の被害など些事のレベルになりかねん」

大漢壊滅の件はＵＳＮＡでも内密に調べていた。とりわけ大量の難民を抱えた身からすれば、難民が発生した背景を調べるのは当然と言えるだろう。その過程で四葉の復讐劇を知り、それに加担した剛三のことも把握していたわけだが、『あまりに大きい被害の有様に人一人で完遂できる規模ではない』という調査結果と共に一時闇へ葬られてしまった。

ジョーリッジは政治家へ転身した際に封印された調査結果を大統領権限で掘り起こし、そして剛三と実際に出会ったことで大漢軍の殲滅劇を剛三だけで完遂したのだと納得していた。

「以前、閣下に教えて頂いた『四葉の復讐劇に隠れてしまった惨劇』のことですね？」

「ああ。彼ならば何を起こしても不思議ではないだろう。我らの負の遺産を取り除いてくれた以上、私の役目は彼を怒らせるような行為を慎むように伝えることだけだ」

「その意見に賛同いたします、閣下」

ジェラルドは悠元の実力を目の当たりにしているし、ポラリスはカノープス時代に彼の実力を目撃している。誰よりも悠元の実力を把握している人間たちがトップにいるという意味は大きい、とジョーリッジは内心でそう思っていた。

「新ソ連方面で混乱しているというのは、我々にとってもいい時間稼ぎとなっている。人選はポラリス司令に一任する。場合によってはシリウス准将の出国も許可する」

『ハッ！』

なお、この後にポラリスの親切心で彼の娘とデートの約束を取り付けられる羽目となったジェラルドだったのは……ここだけの話。

◇　◇　◇

旧群馬県・上泉家本邸。

その大広間には現当主の元継と夫人の千里、神楽坂家当主の悠元と正妻筆頭の深雪、東道家次期当主の佐那とその婚約相手である幹比古、そして香取家の跡取りとして継ぐことになるエリカにその婚約相手となるレオがいた。

これまで長いこと続いてきた『元老院』。その四大老が一気に様変わりする格好となった。更に元老たちも一新されることが決まっており、その選定は進んでいる。
「新ソ連方面は国家が分裂するようだ。幸いシベリア方面は親日派が多いため、水面下で支援を決定した。その一環として樺太および千島列島の全島返還に応じた……悠元のやったことが大きかったようだ」
「最近やったことはベゾブラゾフを葬ってクレムリン宮殿を復元させただけだよ」
「それをしれっとやっちゃう悠元が怖いわよ」
歴史的な背景から返還を渋るかと思えば、新国家は日本に独立承認を取り付ける意味で要求を全て?んだ。隣国にある大亜連合のことを鑑みれば、早急に事態を収めることで隙を作らないことに注力した格好となる。
ただ、大亜連合も日本政府やインド・ペルシア連邦政府からの賠償請求で難しい舵取りを迫られている。とりわけ日本が「恒星炉」という莫大なエネルギー資源を手に入れてしまったため、その恩恵を受けているインド・ペルシア連邦と受けられない大亜連合でもパワーバランスが変化していた。
仮に軍事行動を新国家に対して起こせば、それこそ大亜連合が首を絞める格好となる。
「だからと言って、その功績を公言するつもりはないがな。メリットよりもデメリットが大きすぎて、後々面倒なことになるのが避けられない」
領土問題の交渉は、あくまでも外務省ひいては日本政府の範疇に収めることで決着。下手に魔法師の介入で交渉事が進んだという事実が知られれば、それこそ反魔法主義を勢いづかせる結果しか生まない。
変に目立ったのは仕方がないし、「トーラス・シルバー」の件で表舞台に出た以上、有名税の発生はどうしても避けられないのだから。
「そういや、日本に逃げ込んでいた大亜連合の戦略級魔法師がいたよな？　その子はどうなったんだ？」

「彼女は大亜連合と完全に切り離して日本人に帰化させた。その代償に大亜連合へ沖縄防衛戦で亡くなった兵士の遺骨を押し付けたけど」
元々その兵士は魔法で痕跡一つすら残さずに消滅させたが、四葉の復讐劇で亡くなった四葉一族の遺骨を回収する方法を用いて復元し、火葬して遺骨の状態で押し付けてきた。しかも、政府にではなく遺族へ直接送る形で返したのだから、彼らが火種となって大亜連合内が荒れたとしても責任は取れない。
むしろ、沖縄や横浜であんなことまでしておいたというのに、自国の兵士の遺骨を返してくれるだけありがたいと思ってほしい。それを反故にした場合のペナルティが非常に重くなることは覚悟してもらいたい。
「流石に返しきれなかった部分は共同墓地へ内密に弔うようお願いをしたけど」
「……主に裏切った［レフト・ブラッド］の連中か」
彼らが主犯格だが、それ以外にも基地内部の反乱分子には厳しい処分を科した。処分内容は全て国防軍へ丸投げしたため、当時特尉でしかない自分には関与の無い話として完結した。というか、その時は深夜のスキンシップ攻撃を耐えるので手一杯だった。
正月の挨拶で深夜と深雪に絡まれた際、その辺についてもバレる形となった。深雪は深い溜息を吐きつつも『私があの時悠元さんへの気持ちを自覚していたら、きっとお母様以上に誘惑していたでしょう』と半ば認めるような発言が飛び出しつつ、悠元に襲い掛かっていた。
その結果として正月三が日に何があったのかと言えば……倫理的に言えるラインを超過しまくっているわけで、冬なのに熱い夜を過ごすことになった。
「それに関して付け加えるが、劉麗雷は春に東京へ越してくるそうだ」
「そうなの？　やっぱり戦略級魔法師だから？」
「無論、その事実もあります。最大の理由は一条家当主の意向です」
将輝は現在、父親の剛毅から一条家の家業を厳しく叩き込まれている最中だが、彼は新陰流剣武術を習わせる意味でも東京に引っ越させることを思案していた。加えて、国防軍ひいては日本政府から国家公

認戦略級魔法師となった将輝を首都に近い場所へ置くことで守りの要としたい思惑があった。そして、極めつけは新ソ連の国家解体がカウントダウンの状態となったことで、将輝が日本海側で睨みを利かせる必要性が薄れた。

そんな思惑に加え、剛毅としてはしっかりと勉学や社交性を積ませる意味でも魔法大学への進学を勧めており、一条家夫人の美登里も夫の意見に賛同している。更には彼の親友である真紅郎がいち早く魔法大学への進学を決めていた。

「ジョージの奴からすれば気の毒だがな。本人としては『僕抜きでもしっかりと独り立ちしてほしい』と思っての進学なのに、結局は将輝も大学進学になりそうだからな」

「そういう悠元は進学するのか？」

「進学は決定というか確約事項だからな。『何を学ぶの？』と宣う奴らはいるだろうが、人の意見を聞いて新たな発見を得る探究心を忘れたら、成長はそこで終わってしまう」

「どこまで進化する気なのよ、アンタは……」

無敵超人とまで言わしめた達也の牙城を崩せる魔法まで会得したものの、結局は自分が過労死する未来しか見えないどころか、深雪と達也によるマッチポンプの無限ループまで成立してしまった。達也は真一から聞き及んだ〝彼の知っていた司波達也〟を耳にした際、『俺の平穏は悠元によって成し遂げられたという訳か』と口にしたほどに。

「世界を回っても、世界全ての魔法を会得したわけじゃない。それに、これが終わっても火種はまだ燻ぶったままだ……世界各地に眠っている古代文明魔法という存在がある限り、諍いは止まらんだろう」

別に、それはこの世界に限った話ではない。力を求めるがゆえに禁を破って闇に堕ちる人間の存在が出てきても何ら不思議ではない。それに比べれば、『伝統派』や強化調整体の問題など〝些事〟でしかなくなってしまう。

「そう考えれば、爺さんに無理やり連れられた意味はあった。当代側の人間になるとはいえ、良からぬことを考える輩が出るのは致し方が

無い。後は、その被害を少なくすることが求められる」
「そこまでの規模の話になるんだね……僕も他人事で済まないのは自覚してしまうよ」
　文明が滅ぶというのは、当時の人間でも回避できなかった事象によるもの。それは当然、今の世界に生きる自分たちも決して無関係ではない。過去に遺したものが歴史の舞台に出た時、結果がどうあれ歴史に刻まれてしまうのだから。

違う、そうじゃない

高校生活最後の夏休みはあっという間に過ぎていく。とりわけ悠元と達也は魔法科高校から卒業単位の確約のみならず、魔法大学への推薦入学も確約された状態。だからと言って、勉学や魔法の訓練に手を抜くということは決してしない。

「おーい、生きてるか？」

「……あと5分休ませて」

普通なら夏祭りとか海水浴とかになるわけだが、水着姿であっても魔法の訓練は欠かせない。来客用のプライベートビーチとして再開発されている巳焼島南西部では、白い砂浜の上で死屍累々の状態となっているエリカたちの姿があった。

「強すぎるわよ、悠元は」

「俺だって、初めからいきなり強かったわけじゃないぞ？　爺さんに散々叩きのめされたり、時には無茶ぶりに付き合っていた結果でしかないからな」

「それでへこたれずに生き抜いたのが凄いと思うよ……」

悠元の場合は、それこそ達也と対等に居れる存在を目指してのものであり、別に強さを自慢したくてやり抜いた訳ではない。誰よりもストイックすぎる有様に、砂浜で座り込む面々は苦笑が漏れていた。

なお、この場でやっているのは「天魔抜刀」状態の制御訓練。現状、達也らも次々と修得しており、その状態を安定して展開するための制御の一環として悠元が相手をしている。

「ま、俺にはそもそも目指すべき目標があったからな。挫けることなくやってこれたのはそれが大きい」

「目標と言うと……お爺さん？」

「アレを目標にしたら、人間を辞める選択肢しか無くなるぞ」

かなり大仰に述べている部分はあるが、大漢軍（ダーハン）の陸海空戦力を根こそぎ奪ったのが〝たった一人の魔法師〟なのだと知られれば、日本は間違いなく戦後も面倒事に巻き込まれていた。その意味で痕跡が完全に消えていて、その直後に大亜連合によって占領・併合されたこと

で有耶無耶になった。

その意味で〝ツイている〟のは間違いないと思うぐらいだ。

「ここだけの話、俺が目標にしたのは達也だ。実際に会ったのは沖縄防衛戦直前だが、その前から爺さんに『四葉に面白い奴がいる』とは聞かされてたからな」

上泉の戦技教導の一環で弟子を派遣しており、本人の様子や英作の話を剛三伝手で聞かされた。どこまでもストイックにこなしている達也と、無茶ぶりを初見で次々とこなしていく悠元。その姿がどことなく重なって、悠元に対する無茶ぶりが加速したのは言うまでも無かった。

そんなこんなで夏休みが過ぎていき、あと数日で新学期が始まるという時期。悠元と達也、深雪と水波、そして真一と愛波は四葉家所有の伊豆高原の別荘に出向いた。単に儀式をするだけならば別に場所は関係ないが、二人がこれまでに得た記憶や経験をすべて引き継いだ上で元の世界へ返すとなれば、確実に〝触媒〟が必要となる。

真一もとい九島光宣がパラサイトとなることを決断した出来事――桜井水波がイーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフの［トゥマーン・ボンバ］を防御した影響で魔法演算領域のオーバーヒートを引き起こした事象の起点となる場所。達也がほとぼりを冷ますために用意された深夜の療養用の別荘に他ならない。

そして、悠元はその引き金の一端となった［エターナルポース］を取り出し、魔法力を込める。レリックに刻まれた魔法陣が光り輝き、［エターナルポース］を基点として周囲に光が満ちる。

「これから、お前たちを元の世界へ帰す。帰すとは述べたが、この世界のお前たちの魂魄を情報化して元の世界のお前たちに〝上書き〟する形だな。何分初めてのことだから、どこまで成功するかは保証できない」

「……僕はもう覚悟を決めています」

「……私も、皆さんには大変お世話になりました」

元々この世界の人間ではなかったからこそ、二人は平穏に暮らせただけでも悠元に感謝していた。光宣は将来に繋がる貴重な判断材料

を貰い、水波は魔法師としても暮らせるだけの能力と寿命を得た。
それがどこまで元の世界へ還元されるかは分からない。だからこそ、悠元は絶対成功するとは明言しなかった。しかし、それを聞いても真一と愛波は悠元に信頼するような表情を見せていた。
これ以上覚悟を問うのは野暮だと判断し、悠元は［エターナルポース］を達也に渡すと、ジャケットの内側から［セラフィム］と［ラグナロク］を抜き放つ。そして、悠元は一息吐いた上で両手に持った二丁のＣＡＤを前方へ構えた。
「領域展開――八仙結界［北星陣］」
悠元がそう呟くと同時に、真一と愛波の周囲を囲むように展開する魔法陣。全ての準備が整ったことを確認すると、悠元は二人に対して声を掛けた。
「真一に愛波。いや、九島光宣に桜井水波。君たちがどのような人生を歩むのかは君たちの意思で決めるといい。ただ、他人に迷惑を掛けるような行動は慎んでおくといいよ」
「僕にとっては耳が痛い話です」
「あはは……」
「世界が大変な時代へ進むのは避けられない。でも、その中で君らが望むこととすべきことをやり遂げるといい――［夢想天成］、発動」
悠元がトリガーを引くと魔法が発動し、二人の姿は光となって空の向こうへと飛翔していく。そうして光は空の途中で弾け、何かに吸い込まれたように消え去った。それを見送った悠元はＣＡＤを仕舞って陣を解除したところで、達也が［エターナルポース］を悠元に差し出した。
「お疲れ様、悠元」
「別に苦労はしてないけどな。全く、コイツの無邪気さには呆れるばかりだ」
達也から［エターナルポース］を受け取ったところで、またもや［エターナルポース］が光り輝く。流石に『これ以上女性は止めてくれ』と思っていた悠元の意見を汲み取ったのかは不明だが、光が収まって姿を見せたものに悠元は愕然とした。

転がっていたのは鞘に納められた一本の騎士剣。神々しい雰囲気を放っている代物が〝前世の創作物でよく見た物体〟であり、昨年の騒動で感じていた代物と同一ということに盛大な溜息を洩らしつつも、騎士剣を拾い上げた。

「それは、騎士剣のようだが強い力を感じるな」

「……俺の知識が間違ってなければ、コイツは神造兵器だ。しかも、昨年の騒動で刃を交えた［約束された勝利の剣（エクスカリバー）］とか、どうなってるんだよ」

一難去ったらそれ以上の騒動の種を拾ってくるとか想定の埒外である。しかも、おまけに［遥か彼方の理想郷（アヴァロン）］までセットで付いてきている時点で、最早溜息しか出てこない。

一応確認したところ、達也や深雪だけでなく悠元以外の全員が触れられない状態だった。剛三や千姫、更には奏姫も触れなかったため、［エクスカリバー］と［アヴァロン］は悠元専用の武器として保有することが決まった。

剣に〝選ばれた〟ということなのだろうが、俺は王になる気などない。四大老の座だって、そうしないと継ぐ人がいないという状況もあったし、［恒星炉］関連なんて自分が主導した事業なのでトップに立っているだけに過ぎない。国防軍関連も然りだ。

子世代へ継ぐ話はどう計算しても４０歳前後になる可能性が高いし、神楽坂家の家業や家督を継がせるにしても次代を担う人間にとっては重荷になるかもしれない。神楽坂家を継いだ際は千姫が自身に関わる柵を自らの手で解消したように、自分が退く際は次代への遺恨を残さないようにする。

まだ１７歳の若者がこんなことを考えこんでいるのはどうかと思われるだろうが、それだけ国内・国外を含めた世界情勢が〝食えるかどうかも分からない味付けの闇鍋状態〟なのだから、少しでも改善するために出来るところからやるしかない。

そんな出来事の数時間後、国立魔法大学付属病院から連絡が入った。元治の妻である穂波が産気づいたというのだ。四葉の関係者ということで達也と深雪が同伴する形となり、病室に通されると元治と

穂波がいて、近くのベッドには双子の赤ん坊がスヤスヤと眠っていた。
「元治兄さんおめでとう。穂波さんもご苦労様です」
「ありがとう、悠元。達也君に深雪さんも来てくれてありがとう」
「三人とも、ありがとうございます」
お祝いということで果物の入った籠を元治に渡して、双子を見つめる。これで悠元は双子の叔父という立場になったことに若干傷つきつつも、会話に華を咲かせていた。その後、病室には三矢家や矢車家、穂波の義実家である渡辺家ならばまだしも、更には四葉家から真夜が直々に穂波の病室へと赴いた。流石に葉山が随伴なのは言うまでもないが。
「おめでとうございます、元治さん。穂波さんもお元気そうで何よりです」
「あ、はい。態々来てくださってありがとうございます」
曽祖父母となった剛三や奏姫は早速曾孫への愛情を爆発させており、これには元のみならず詩歩も呆れ返っていた。とはいえ、上泉家は過去に剛三の息子を喪っていることもあったし、孫である悠元が病弱で短命に終わる可能性だってあった。
そんな事情を乗り越えての曾孫誕生なので、喜んでしまうのは仕方が無いと諦めたらしい。
「……父さんは知ってた？」
「私は何も聞いていない。多分義父が教えたのだろうな」
三矢家は数年以内に長男の元治以外の全員が実家を離れることになる。詩奈は侍郎に付いていく形で矢車本家に行く予定へと変更し、タイミングを見て京都の守護を行う修司と由夢の補佐につけるとのこと。
元と詩歩は元治たちの子の面倒を見つつ、5年を目途に当主の家督と家業を全て元治に継がせて隠居することを決めている。当面は本屋敷の近くに住むようだが、手が掛からなくなったら舞元のいる石垣島へ引っ越して琉球空手の道場を引き継ぐとのこと。新陰流剣武術はあらゆる武術に精通していることも有り、武術の指導面での融通も

利くらしい。
　つくづく上泉家が化物染みていると知る羽目になった。
「あとは、元治が私の想像を超える当主になってくれれば御の字だよ……義父さんみたいになってくれとは思わんが」
「アレはもう人間のカテゴリで語っちゃいけない類のモノだから」
「……決断した私やお前が言うのもなんだろうが、アレは最早呪いの類とさえ思うよ」
　ややカオスになっているこんな状況でも無邪気に笑っている双子に、少しばかり彼らの逞しさを感じたのは言うまでもない。
◇　◇　◇
　この出来事から少し遡り、８月２２日。悠元は神楽坂家別邸でエリザベスⅢ世ことエリーとの会談に臨んでいた。
「お久しぶりです、女王陛下」
「もう、ここには見知った人しかいないのだから、私のことはエリーでいいじゃない」
「流石に挨拶まで砕けさせたら収拾がつきません」
「相変わらずねえ。でも、そんな貴方だからこそ好きになったのだし」
　世界群発戦争の終結日は国家によってまちまちだが、この国では第二次大戦の過ちを省みる意味でも８月１５日に設定して政府主導の慰霊祭を執り行っている。特に今年は３月の西果新島の件でイギリスも関与している側面を考慮し、国家代表の形でエリーが赴いた。
　流石に一人では不味いので護衛も付いているし、最短経路となる新ソ連上空は国家分裂の危機で危険という判断が下された。その為、行きはアラブ同盟・ＩＰＵ経由で、帰りはＵＳＮＡ経由で帰路に就く。
「話は聞いてると思うけど、お願いしますね。貴方に養育費は求めないけど、子どもたちが貴方に会いたくなったら会って欲しいの」
「ちなみに、そちらのご両親は何と？」
「『彼ほどの人間なら、そういうことになっても仕方がない』と認めてくれたわ。父なんて貴方に返品不要の頸飾を贈りたいって話してたほどだったから」
「……無駄にハードルが高くなってる気しかしないんですが」

剛三と共にロンドンを訪れた時、普通に観光しようとしたところで黒服の連中に追いかけられた。そいつらを返り討ちにして警察へ引き渡したまではいいが、連中を捕らえられたことで逆恨みに遭う羽目となった。

その翌日、女王陛下が乗っていると思しき高級車を追いかけ回す数台のバイクを見つけ、前世の惨劇を避けるべく悠元が自ら介入してバイクを分解した後、ライダー全員の素性を暴いた上で警察へ突き出した。

その1時間後、事情を知った剛三によってロンドンのビルが数棟地下へ沈むという珍事に発展した。その際に反政府・反王室の犯罪組織がいくつか潰れ、彼らの資産は剛三を経由して悠元に支払われた。額としては数百億ポンド規模に膨れ上がった。

「私としては、貴方の婚約者たちに申し訳なく思ってるけど、そこは先生からお墨付きを貰ったわ。まだ十代で父親なのは大変だと思うけど」

「倫理観がバグり過ぎて頭が痛くなりそうなんですけどね」

政府が組織の金を受け取らなかったのは、過去の剛三が成した功績に対する支払いが履行されていなかった事実を有していたためだった。当時は戦争状態で魔法師に対する報酬の取り決めも曖昧だったため、これには剛三も渋々受け取る羽目になったそうだ。

当人曰く『ここで止めないと対岸の火事で済まない代物を放置など出来なかった』とのことで、核兵器の威力だけでなく放射能汚染の被害まで含めれば、遺恨を残さないことに集中したのは分からなくもない話だと思う。

「私は女として不十分？」

「いや、寧ろ魅力的ですよ。でも、俺には婚約者がいますので、あまり胃薬案件は抱えたくないんです」

「使用人兼愛人もいて、それでも『彼女たちは大丈夫かしら』と先生がぼやいていたのも聞いているけど」

「精力的にオーバーでも、精神的には普通の人間ですよ、俺は」

この世界に転生してから前世の価値観を悉く破壊されている――

―順応している、とも言えなくはないが―――としても、婚姻関係はどうしても前世というか一般的な社会常識や民法の観点で常軌を逸している。魔法師の後継という意味で必要な措置だと分かってはいても、大概の魔法師は一夫一妻の家庭で、強いて挙げるなら愛人がいるぐらいだろう。

自分自身の気持ちとしては、婚約者たちの気持ちを無碍にすることは出来ないし、行動に至っている時点で好意は有している。それでも無秩序にすれば一般社会にまで波及することは確実なため、場所と時間に制限を掛けている。『一人に決められないヘタレ』と言われてしまわれると否定は出来ないわけだが。

「そんなに一途な性格だからこそ私も惚れちゃったし、貴方の子どもが欲しいって先生にお願いもしたのよ。父だって『彼の役割が無ければイギリス王室に婿養子として迎えようか』って話したぐらいだし」

「俺に対するハードルが大気圏を突破してるようにしか聞こえないのですが」

「まあ、父からしたら娘の命を助けてくれた恩人だったからね。知らなかったとは思うけど、悠元君たちが捕まえてくれた連中には反政府・反王室の組織の人間もいてね。警察が不敬罪の一環で大々的な家宅捜索までして芋蔓式に逮捕者まで出たの」

イギリス政府からすれば、自分たちと敵対する勢力が減った上に証拠を残すヘマまでやらかしたため、嬉々となって取り締まったのだろう。まあ、その後にマクロードのやらかしで騒然となったわけで、巳焼島訪問の後、特使の報告を聞いた上でマクロードに勲章を与え、ケンブリッジ大学の客員教授の任を解いてオーストラリアの魔法研究所に〝永世顧問〟という形で送り出したらしい。

これで、マクロードはこの先イギリスに戻るどころか、オーストラリアから出られなくなるという状態に陥った。なお、彼のオフィスにあった通信機器は全て〝迷惑料〟という形で悠元に引き渡され、通信系に強い響子へ解析を依頼した。

イギリスの件で一番被害を受けたのが誰か、と問われると……間違いなく佐伯に振り回されてしまった風間だと断言できてしまう訳だ

が。

道のりは遥か先に

悠元とエリーの会談。子どもに対する扱いは既に決まっているし、悠元としては定期的に顔見せはすることとした。

「事情は分かりましたが、何故自分にその役目を？」

「私の恋愛感情もあるけど、私の祖父がお師匠様と約束をしていたみたいでね」

エリーの祖父こと先々代国王は千姫と知己であり、『孫同士をくっつけて曾孫の顔を見れるようにしたい』と話していたらしく、悠元は日本を出れないためにこんな方法と相成った。正直、結婚の法的な合法範囲に含まれていないのに、やっていることが倫理的にアウトすぎる。

「エリーのことは魅力に見れても、法を積極的に犯す気にはなりませんよ」

「私が法律よ」

「それは独裁者の台詞です」

大体、同年齢か一回り上程度までは許容していた。魔法師の特性を考えれば若作りの領域など広すぎるからだ。

だが、いざ蓋を開けてみればいきなり三人と婚約し、次々と増えるだけでなく専属使用人兼愛人まで増えてしまった。結果的に自分の心の平穏は消失してしまったわけだ。しかも、夜の戦闘まで突入している訳なので、こうなると色々複雑な心境を抱くことになる。

せめて倫理的な問題となるような事態は避けてほしい……というのは、養母の時点で無意味なのだと気付くには時間が掛からなかった。

「ここまでハーレムを築いたら、男子から羨ましがられそうだけれどね」

「俺からすれば、気が重いんですよ」

「その生活ですらお師匠様に『足りない』と言われていても？」

「相手を潰す前に俺の精神が逝きかねません」

原作世界からかなり乖離した存在がいるだけでも、それだけで大き

な影響を及ぼす。転生直後に固有魔法を会得した時点で片足を突っ込んでいたのは認めるが、気が付いたら体ごと沈んでいたようなものだ。
過去に泉美との婚約解消を聞かされた時も、元の表情は複雑だったのを覚えている。元々家督や家業を継がない宣言をしておいての十師族直系との婚約。泉美から好意を持たれていたのは知っていたし、自分としても見知らぬ相手よりはマシだと思っていたほどだ。
『そうですか、泉美ちゃんとの婚約が……父さんは大丈夫？』
『義父から散々愚痴を聞かされたよ。詩歩がキレて義父にハイキックをお見舞いしていたが』
『……本当に仲が良いんですかね？』
『あれで義父もケロッとしているのだから、スキンシップだと諦めたよ』
神楽坂家を継いだ時に千姫から聞いたが、悠元の婚約を神楽坂家と上泉家が進めていたのは戦略級魔法師クラスの実力を国外へ出さないためでもあった。
けれども、肝心の悠元本人は名誉やプライドに拘らないし、金を無駄遣いせずに堅実な生活を送る始末。両家が色々考慮した結果、周りの思惑を叶える意味で複数の婚姻を認めさせることとし、人の縁で囲うことに決めたらしい。
「というか、エリーも良く認めてくれましたね？」
「この国の皇族の血筋を引くことも大きかったみたい。父は深い溜息を吐いたし、母は『孫はよ』って急かしてきてたし」
「お兄さんたちに頼めばいいでしょうに」
「兄たちも『いい加減結婚しろ』って口煩くてね。だから、君の子を妊娠して遠距離の事実婚にしようって思ったの」
過去の件を考慮すれば、エリーに対して強硬な態度を取ったとは思えない。エリーの兄たちと連絡先を交換しているので、当然当人たちからも連絡が入るし、彼らの妻からもお詫びのメールがきたりする。
今回の押し掛けにも謝罪の文面が並んでおり、エリーからすれば長

兄の皇子曰くこんな文面となっていた。
『あのバカな妹を素直に応援したくはないが、本人が強く子供を希望している以上は止めきれなかった。メディアへの説明や養育などの責任はこちらで負うので、どうかバカ妹の願いを叶えてやってください』
次兄の皇子からも似たような文言でエリーに仕込むことを渋々ながら許可してくれた。無論、悠元側に問題があるというよりは、英国女王としての権限を振り翳して我儘を通した妹に呆れたようなものだが。
「今の時点で２０人と関係を持っているだけでも満腹感を遥かにオーバーしている気分ですよ」
「そんなことを言いながらも、関係を持った相手に責任を果たしているからこそ、悠元君がモテるってことだよ」
「責任を果たさなかったら、ただのクズ野郎じゃないですか……」
そもそも、アリサの件であそこまでやっておいて、自分が同じ穴の狢になることは避けたかった。いや、そもそも複数の婚姻関係を結んでいる時点でもっと悪いかもしれんが。
剛三に連れられて世界を飛び回った時は自分の恋愛感情の希薄さが念頭にあったので、言い寄られても丁重に断っていた。一昨年の九校戦後に神楽坂家を継ぐことになった折、いきなり複数の婚姻関係を持ち出されて反対したい気分はあった。
千姫はおろか、一夫一妻を貫いた剛三にまで反対はされなかった。十師族当主であっても法の柵から逃げれなかったのに、それはいいのかと訝しんだ。政府との取引で一体何を支払ったのかと思ったが、先日総理大臣と話したことで、当時の交渉記録を開示してもらうことが出来た。
交渉材料で持ち出されたのは、世界群発戦争における超法規的国際部隊派遣の報酬未払い分。そして四葉の復讐劇に際して生じた四葉真夜を含む四葉家への損害賠償請求権。
前者は世界規模の戦争となったことで支払の目途が立たなかったため。後者も３５年も経てば消滅する代物だが、千姫は事前に生前の

元造から代理請求に関する書類を預かり、真夜や深夜を含む四葉家の請求権を一元化して管理していた。当時の政府に対して『請求権に関する時効の永久放棄』を持ち掛け、誓約書にサインまでさせていた。

悠元に深雪が恋慕している事実を知り、更には雫や姫梨の心情を叶える意味で千姫は二つの請求権放棄と引き換えに、戦略級魔法師クラスやそれに準ずる実力者の遺伝存続を叶える意味で民法における重婚の適用除外事項の新設を要求。

「その生活をしていてケロッとしている君は十分大物だと思うけど」

「別に好き好んでこんな立場を選択したかったわけじゃないですよ。元々十師族という立場にいたくなくて家の相続を放棄したのに、気が付けば柵の鎖まみれですから」

「あー……その気持ちは分かるかも」

エリーは年齢でいえば二人の兄に国王の継承の面で劣る。だが、先代国王である父親が国内情勢を鑑みてエリーに継承を決め、兄たちは反発するどころかエリーを喜んで女王となるよう背中を押していた。

「兄さんたちに王位継承を迫って、無事に済んだら悠元君のところへ愛人として転がり込むつもりだったのに、父さんが『それをしたら、悠元君に頼む話を無しにしてもらう』と脅したから、泣く泣く了承したの。年に一回は日本に来るつもりだから、私を愛してね」

「……」

余談だが、エリーの父親からは丁重に謝罪を受けるだけでなく頸飾まで受け取ることとなり、イギリス王室から感謝状を受け取る羽目になって、神楽坂本家に飾られることとなるのは……また別のお話。

◇　◇　◇

九重寺では、達也やリーナが八雲の指導を受けていた。体術のみとされていた約束だったが、九校戦後に再開した朝練後、達也に話しかけた。

「達也君。これまで体術を教え込んできたわけだけど、古式魔法を覚える気はないかい？」

「……師匠、何か気を狂わせるようなものでも食したのですか？」

「これは手厳しい」

達也もそうだが、九重寺に通っているリーナや燈也についても、あくまで体術の面倒を見る（プラス魔法の訓練のために地下訓練場を貸している）程度のもので、忍術をはじめとした本質に関わるものは『弟子ではない』という理由から教わることはなかった。
「訝しむ理由は当然だね。僕も自ら学んだ忍術を弟子でもない人間へ教えるのは道理に反してしまう。けれども、そう言っていられない事情が出来たとしたら？」
「後継者の問題に首を突っ込む気はありませんが」
「そんなことをしたら、君の母上に風穴を開けられてしまうよ」
古式魔法と言っても、八雲が達也に教えたいのは自ら学んだ叡山の忍術ではない。過去に家が断絶したことで魔法の継承が出来ずに倉庫送りとなった古式魔法を教える、と説明した。
「これは神楽坂家と上泉家からの依頼もあってね。特に四葉家は古式魔法に近しい気質を有しているから、君なら修得できると踏んでのものだ」
「自分からすれば有難い申し出ですが、強くなることに対して懸念はされないのですか？」
「君が将来背負うことになる名の力――名の意味を戦略級魔法以外の手段で示せるのは、君にとっても都合がいいと思う訳だよ」
八雲の提案にどこまで関与しているかは不明だが、多かれ少なかれ悠元が関与しているのだろう、と達也は推察していた。
「悠元に頼まれたのですか？」
「彼からは頼まれていないよ。まあ、風間君から拝み倒されるほどに頭を下げられたのは事実だけどね」
九校戦が終わった次の日、九重寺を訪れた風間は八雲と対面して素直に頭を下げた。彼の気質を考えれば、おいそれと頭を下げる性分ではなかったからだ。そんな疑問を抱いた八雲に対して、風間は素直に胸の内を明かした。
「一昨年や昨年の九校戦は色々あったからね。当事者だった達也君ならすぐに思い出せる案件だとは思うけれど」
「確かに、自分が色々対処したのは事実です。しかし、それならば何故

風間中将が師匠に頭を下げるのですか？　謝罪の時機を逸しているとしか思えませんが」
「僕もそれは気に掛かってね。語気を強めて尋ねてみたのさ」
　昨年にせよ、一昨年にせよ、謝罪を受けるにしても時機が遅れすぎている。昨年の場合は数か月後に周公瑾絡み、その一月後に実家絡みで国防軍の襲撃を受けてしまった。更に付け加えると今年は情報部や佐伯少将の件で要らぬ迷惑を被った。
　ここまでされると、流石の達也も切り捨てようかと迷った。それでも付き合いを切らなかったのは、悠元への義理立てと響子との婚約関係による部分が大きい。
「色々話を聞いて、直ぐに氷解したよ。風間君の奥方は鳴瀬家の人間で、ようは神楽坂家からの勧告と防衛省からの要請で僕に依頼を持ち込んだという事なんだ」
「師匠への依頼が自分に古式魔法を教えることである、と？」
「平たく言えばね。僕としても師である先代殿の顔を立てないと、太平洋上を走って横断させられる羽目になるからね」
「……」
　自分の元上司が親友と縁戚であることも驚いたが、八雲が言い放った人間卒業コースの訓練内容には、これまで血生臭い鍛錬をこなして生き残って来た達也であっても押し黙るほどに引いていた。
「それに、僕は以前達也君に『古式魔法の方が気質に合っている』と言っていたのは覚えてるだろうけど、それは世辞じゃなく僕の本心だよ」
「師匠が仰りたいことは理解しました。しかし、何故今になって？」
「寧ろ、今だからこそというのもあるのだろうね」
　この数日前、八雲の許を剛三が訪れていた。引退したとはいえ四大老の一角の為、八雲は粗茶と羊羹を出したところ、質素なものを好む彼は美味しくいただきながら話し始めた。
『八雲。儂や義妹のところで腐っている古式の術式を提供したい。それをお前が稽古をつけている奴に教えてやってくれぬか？』
『御前様の頼みとあらば、拙僧に断る理由がありますまい』

『元ではあるがな。門下生への衣食住もある故、寄進という形で支払っておく』
　剛三は、悠元が見つけていた古代文明のアーティファクトについて説明し、その上で悠元に並び立てる実力者として達也に白羽の矢を立てた。老い先が見えている剛三や千姫でも、次世紀のことまで面倒を見切れることなど出来ない。
「僕も詳しいことは聞いていないんだ。けど、剛三殿の表情を見て察してしまってね。達也君なら心当たりがありそうだけれど、どうかな？」
「そうですね……師匠であっても話すことが出来ない節は存在しますが」
「つまり、そういうことだと思うよ。僕は敢えて聞かないことにするけど、困った時は悠元君に相談するといいし、僕も相談に乗ろう。安寧な日常の継続は僕としても有難いことだからね」
　出来る事ならば、平穏な日常が一番望むべきもの。だが、魔法に限らずとも大きな力の存在は人々を狂わせる麻薬みたいなもの。それを巡って争いが起きないとは言えない。図らずも古今東西の歴史がそれを証明してしまっているのだから。
「そう仰るということは、師匠も何かしら経験を？」
「こう見えて僕も五十代だからねえ。人生経験は達也君よりも多いという訳さ。当然、人に言えないことは経験しているから」
　『九頭龍』の長という立場こそあるものの、八雲は先代の九重から厳しい教えを受けていた。四葉の復讐劇の時は青年だったが、千姫からの要請で樫和氏や東道氏の件にも携わっている。
「剛三殿から四葉家での君の扱いも聞いたよ。普通の子どもなら逃げ出しそうな環境なのに、君はやり遂げてしまった」
「……そうですね。今になって思えば、不器用ながらも親に認めてもらいたいという想いがあったのかもしれません」
　封印された魔法力を得たことで、それまで大幅に掛けられていた激しい情動も達也の中に芽生え始めている。それを発露させたらどうなるかなど分かり切っている為、自らへの戒めという形で鍛えること

は止めていない。
八雲から魔法と体術で〝お役御免〟と言われるまで鍛錬に通うことは止めない。大学生活やトライローズ・エレクトロニクスでの仕事で忙しくなるとは思うが、都合を付けて通うことぐらいは八雲も嫌とは言わないだろう。
「ただ、そんな俺からしても悠元は異常かと」
「まあ、彼は教わった相手が相手だから。剛三殿の無茶ぶりに対して、愚痴は零しつつもやってのけてしまった。終いには本気の剛三殿相手に打ち負かしたぐらいに極まっている」
「師匠なら、どれぐらいで勝てますか？」
「……正直に言って、彼に殺意を向けられた時点で僕が死ぬ確率は九割を超えるね」
巳焼島での一件を風間伝手に聞いており、その際に八雲は風間に『君なら悠元君に勝てるかい？』と尋ねたところ、次のような答えが返って来た。
――実は、先日霞ヶ浦基地で対峙した際、本気の［天狗術］を使ったにも拘らず、一瞬で看破された挙句に一撃で沈められました。彼が本気を出せば、一瞬で基地そのものが無くなっていたでしょう。その意味で、私では彼に勝てません。
事実上の降伏宣言。そして、独立魔装大隊は悠元の指揮下に組み込まれた。歴戦の猛者でもある風間でも分が悪いとなれば、それ以上の実力を有する八雲でも勝てる見込みはない。それを確かめるために表向きは〝達也君へ仕掛ける試し〟として悠元に度々テストしていた。
「敵対しなければ報復はしない。けれども、一度でも敵に回れば容赦しない――良くも悪くも剛三殿の薫陶を受けている。そんな相手は僕でも嫌という他ないね。仮にそんな依頼が来ようものなら、依頼主を徹底的に潰すぐらいには」
「成程。その点は師匠に同意できます」
達也でも勝ち切れないレベルの人間ですら『勝つか負けるか以前』と述べてしまうだけでも、悠元の異常さには感心すら覚えてしまう。

奇しくもその点で八雲と同意見だったことに達也は溜息を漏らした。
「では、残る一割未満で勝てるとお思いなのですか？」
「それこそまさかだよ。彼の妥協点を探って僕が無抵抗で降参する確率でしかない」
「……」
妥協点という意味においては、達也は深雪というカードによって命を救われた形となる。寧ろ、深雪が先走って悠元に見初められたからこそ、却って達也の立場と状況もそこまで悪化しなかった。
尤も、そのことを深雪に述べたところで、その夜に悠元へ押し掛ける未来しか見えないため、達也に出来ることは悠元を労う事ぐらいしかなかったのは……ここだけの話にしようと思ったのだった。

運命が盛大に捻じ曲がった兄妹

ＵＳＮＡや日本で再訪日の会談が進む中、南アメリカ連邦共和国は国内にある国際空港の名称を変更したと発表。名称は『エルンスト・ルーデル国際空港』で、表向きの理由は退役後にこの地で暮らしていた英雄の名と、ミゲル・ディアスの後を継ぐ形で［十三使徒］となったハンス・エルンスト准将の名から捩った。

そして、新空港名の記念式典に際してハンス・エルンストがミゲル・ディアスの後継者として［十三使徒］の地位を継ぐ、とディアッカ・ブレスティーロ南米連邦大統領が公表。大統領の親族から戦略級魔法師が出たことも有り、ＳＳＡ国内のみならず世界各国のメディアの話題は一気に持ちきりとなった。

ミゲル・ディアス自身はまだ戦略級魔法師として健在なものの、巳焼島での戦闘を経て自身の魔法師としての限界を認識し、日本の魔法教育を現地に持ち帰って後進育成に充てるべく［十三使徒］の任を辞して日本へ数年滞在することを決めた。

彼の家族も日本へ行くとのことだが、ハンスと婚約した娘だけはＳＳＡに残り、面倒はブレスティーロ大統領一家が見ることを公言。年齢の関係で結婚までの時間が必要となるものの、正妻となるであろうレオニード・コントラチェンコの孫娘とは仲が良く、時折共謀してハンスに襲撃している光景も見られるようになった。

「エルンスト准将、すまないな」

「もう諦めたことです。寧ろ妹がやったことに比べたら、俺なんてまだマシだと思っておきます」

ハンスはナーディアからのメールで『日本で夫を見繕って結婚することにしたから』と聞かされ、盛大に頭を抱えた。しかも、相手は日本の由緒ある古式魔法師の一家の人間らしく、一連の事件で仲が良くなった悠元とのメールで確証を得る羽目になった。

二人の両親は母親が押し掛け女房的な感じで結婚に至ったらしく、良くも悪くも母親の気質を妹が受け継いだということなのだろう。そう言われてしまうと、押し掛けられた父親の気質を継いでいるとい

う点で『血は争えない』と深い溜息を吐いていた。
「兄妹共に［十三使徒］の仲間入りとは、何かの因縁めいたものもあるのだろうね」
「……俺は〝コイツ〟に会うまで落ちこぼれの魔法師でしたが」
「それもそうだな。おっと、本題に入るとしようか」
　ディアッカは日本への再訪日に関する日程を説明。その際にディアス一家も同行するが、トライローズ・エレクトロニクスに雇用される形で日本へ滞在することが決まっている。彼の素性を考慮して住居は神楽坂家が用意し、彼と家族の就職や就学については上泉家で面倒を見ることが決まっていた。
「ディアス中佐が戦略級魔法師とはいえ、受け入れ先も随分大盤振る舞いですね」
「剛三殿が仲介に入っているからな。それを聞かされたら、私でも首を横には振れんよ」
　考えてみれば、先代のシリウスもといリーナや将輝の存在、更には劉麗雷が出るまで［十三使徒］の年齢は一部を除いて壮年や老年の域にあった。世界群発戦争の影響とはいえ、当時次世代と持て囃された人間たちが引っ張っていたわけだが、それにも限界が来ていることは確かだった。
　その一人は間違いなくレオニード・コントラチェンコだろう。尤も、今は孫娘を可愛がる優しい祖父でありながらも『保護して貰ってばかりでは、儂の立つ瀬がない』と訴えたため、現在は連邦軍魔法師部隊の戦技教導顧問として後進の育成に当たっている。
　コントラチェンコは悠元によって飛ばされた際、悠元が内密に治療していた影響で杖無しでも歩けるようになっていた。コントラチェンコ本人はその影響を及ぼした人物を察しつつ、『祖父と孫に助けられるとは、儂も随分老いた』と零したらしい。
「それに、［恒星炉］の技術提供も絡んでいるからな。ＵＳＮＡとは水素ガスに関する国際的な取り決めを交わすことで合意したが、［恒星炉］の稼働は我が国の方が早くなりそうだからな……雇用支援策まで提示されては、流石に断れない」

「そこまでしても、彼らが払った損など駄賃にしかならなそうですね」
「全くだ。私には白旗を掲げて降参する意志しか出て来そうにないよ」
普通ならば海外に対する雇用支援や技術指導も含めて日本が被る損は大きい。だが、[恒星炉]の基幹技術は全て神楽坂悠元が関与している。彼を怒らせればどうなるかなど、今までＵＳＮＡを以てしても揺らがなかった新ソ連の凋落を見れば一目瞭然だ。
大漢を滅ぼした上泉剛三。その血を継いだ孫が大国を潰したに等しい所業を聞かされると、大半の人は夢物語だと一蹴するだろう。だが、その物語を信じる者は少なくない。ディアッカも彼らの所業を見てその認識を持つに至った一人なのだから。
「准将は知らないだろうが、この国が成立前の状態の時は君も多少は聞き及んでいるだろう」
「それは勿論であります。こんな国が成立する羽目になるとはだれも想定しておりませんでしたので」
南アメリカ連邦共和国成立前の南米大陸は、ブラジル以外の国々が国家としての体裁を成しておらず、地方政府が乱立するだけでなくゲリラ戦による紛争が後を絶たない状態だった。当時中学生だった悠元が剛三とともに訪れた際、地方政府のゲリラ部隊によるテロに巻き込まれた。
ブラジル軍が現場に急行すると、現場には関節部分を押さえて痛みを訴えるゲリラ部隊と、その一人を地面にめり込ませて訊問する悠元と剛三の姿があった。更には、周囲の住民が縄で部隊の兵士を縛り上げていたほどだった。
「当時、鎮圧部隊の副官として出向いた際、驚いてしまった。魔法によるものなのかは分からなかったが、銃を持つ相手など歯牙に掛けないほどだった。事情聴取に協力してもらったが、報酬について尋ねたら『美味いご飯が欲しい』とな」
「……食べ物の恨みなら、仕方がないですね」
「……そうだな」
折角観光気分で昼食を楽しもうとしたところに水を差された格好

の為、二人と周辺住民の怒りを買ってしまった部隊のみならず、その背後にいる地方政府軍の拠点が次々と謎の落雷によって焼失。それを聞いて焦った地方政府がブラジル政府に助けを求め、ブラジル側の要求を全て？んだ上で南アメリカ連邦共和国として南米大陸が統一された。

一つの国を生み出した奇蹟に対し、表向きは剛三を〝英雄〟と称える名誉を与え、実の部分は悠元が全て受け取った。

「本人にも一応確認したが、彼は『「こんな所業を成した」と説明しても一般常識からかけ離れていますし、反魔法主義という火にガソリンを注ぐような行為など、総じていい結果を生まないでしょう』と言い放っていたからな。彼が聖人君子だと言われても納得できてしまうよ」

「それと、下手に依存されるのを避ける為でもあると思われます」

いくら彼が突出した実力者であっても、彼に頼らないと国家が成り立たないようならば、それは最早国家として存在する意味すら失うことになる。個人だけに限った話ではないが、傑出した存在に頼らなければ体裁を安定させられない組織ほど、体裁の要を喪った時の反動は凄まじいものとなる。

「自らの立場を誰よりも理解しているからこそ、何らかの形で関与はしても統治はしない――――その気持ちは今の立場になったからこそ痛感するほどです」

「成程な……」

だが、この世界は魔法という存在によって、戦略級魔法師――――特定の個人に依存せざるを得ない状況となってしまった。その筆頭となり得るであろう悠元は日本政府公認の魔法師となったが、戦略級魔法師と公言されていない。とはいえ、世界各国の首脳陣は彼の祖父や養母を知るからこそ、悠元に対する配慮は決して怠らなかった。

「本来、ＵＳＮＡが支払うべき代償はそれこそ国家予算規模の賠償金を支払っても済む問題ではありません。現に、彼の勘気を受けたオーストラリアは積極的外交政策への転換を余儀なくされたようですので」

西果新島の件で強制帰国を受けたジャスミン・ウィリアムズとジェームズ・ジャクソンに持たされた親書。その中身は公表されていないが、東南アジア同盟への加盟を余儀なくされたのはその親書が原因だった。

中身はそっち系の台詞で簡潔に述べると『お宅の政府が余計なことをした挙句、お宅らの魔法師のせいでうちは迷惑を被ったんだ。どう落とし前付けてくれるんだ？　ああ？』と、剛三と悠元が以前被害を受けた件や横浜事変において大亜連合軍の偽装船に対する船籍貸与も含めて莫大な賠償金を請求したのだ。

請求額は９０００億ステイツドル――――約１００兆円規模の請求額に上り、この請求対象は〝親元〟のイギリス連邦や構成国家にまで波及した。当然、イギリスのみならずカナダを含むＵＳＮＡやＩＰＵ、ＳＳＡやアフリカ連邦すら巻き込んでいた。

ＵＳＮＡに対しては国債の買取増額や兵器の押収、ＩＰＵやアフリカ連邦に対しては［恒星炉］の水素ガス発電に伴う権利などの交渉、ＳＳＡに対しては［恒星炉］の技術交渉のカードとして利用した。

別に『現金一括で支払え』などとは言わず、それだけの損失を補填するだけの交渉材料を持ち込めば柔軟に対応することとなった。ただし、当事者であるオーストラリアに対してはその半分の４５００億ステイツドル（約５０兆円）を４５年分割で支払う形にして合意させた。

「彼とは度々相談事もあって連絡していますが、曰く『有って困るものじゃないが、程度は考えてほしかった』とぼやいておりました。その気持ちは何となくわかってしまったほどですよ」

普通ならそこまで吹っ掛ける事案ではないのかもしれない。だが、旅行中の二人を追跡した際にオーストラリア陸軍はおろか海軍や空軍まで動員していた事実まで発覚した。エアーズロックに突き刺さった軍艦らは当然のこと、戦闘機がその周辺に不時着する事態にまで発展していたのだ。

オーストラリア政府は何とか誤魔化そうとしたものの、親書に加えて日本政府が公表した賠償内容によって黙秘が禁じられた形だ。

「それは、君ほどの魔法師であってもか？」
「俺は力を求めて足掻いていましたが、いざ力を持つと別の意味で苦労してしまうことに気付かされました。彼ほどの実力は無いにせよ、自制したくなる気分は分かってしまいます」
ハンスはドイツ軍に在籍していた時、周囲や身内の才能に嫉妬していた。周りが成長していく中で取り残されて、自暴自棄になろうかと思ったことも有った。だが、そんな彼を救ったエースの存在によって戦略級魔法師へと上り詰めた。
そのエースが時の独裁者ですら制御できない存在であったための副産物なのだろうが、程度を考えてほしかったと心の中でぼやいたことは数え切れないし、魔法訓練では何度も天国を垣間見ている状態だった。
〝彼〟曰く『私についていけてるだけで、君は相棒たち以上の傑物だよ』と評価されたことに対し、ハンスが本気でブチ切れた結果、人喰いサメが海面に姿を見せた上で謝罪するような光景を多くの人々が目撃する羽目となった……当人は休暇として海釣りに来ていただけであったが。
「時の総裁ですら匙を本気でぶん投げた人物に憑かれたのは幸か不幸か……自分でもよく分かりませんよ。それで、大統領閣下にお伺いしたいことがあるのですが」
「何かな？」
「俺の部屋に届けられる大量の見合い写真は何ですか？」
「……妻が乗り気でね。私には止められなかった」
戦略級魔法師としての力の継承――――喫緊の課題として各国が抱える問題であるのだが、ディアッカの妻はハンスの伴侶を複数決めるための見合い写真を持ち込ませていた。大統領夫人ということで無作為とはなっておらず、身辺調査で問題ないこととナターリヤ・コントラチェンコを正妻とする条件を呑める女性だけを写真にして持ち込んでいた。
中にはハンスがドイツで暮らしていた時の知己も含まれており、ハンスが偶々開いた写真に幼馴染が映っていた時は顔が引き攣ってい

た……なお、その彼女の大叔母にカーラ・シュミットが居る事実を彼は知らない。
「ナターリヤちゃんが正妻となる条件を呑み、尚且つうちの妻が認めたものしかリストアップしていない」
「伯母さんの目利きは信用しておりますが、母がまた倒れかねませんよ」
　戦略級魔法師を含めた魔法師の重婚については民法上の議論も出てくるだろうが、それにしたって敬虔な教徒である義伯父があっさり認めているのはいいのか？　とハンスは訝しんだ。それに気付いたディアッカが口にした。
「一教徒としては不満や不平はある。だが、南アメリカを統べる国家元首である以上は、国家としての体裁を保つために判断せねばならない。個人の宗教的感情で国家を陥れる事などあってはならないのだ」
「それは、確かに……」
「それに君が子を成せば、張り切っている妻の捌け口としても機能してくれるからね。私の娘も嫁がせるから、子どもは遠慮せずにつくってくれ」
「個人的な感情と家庭環境の改善を俺に押し付けないでください」
　特定の感情に拘って国家の舵を握れば、間違いなく破綻することは目に見えていた。今の時勢に限らず、過去に存在した国家の衰退原因に人間の感情が左右していたのは言わずもがなである。
「それに、教皇猊下からあのような手紙を頂いた以上、私に妻を止める理由が無くなったも同然だ」
「……俺からすれば、とんだとばっちりですよ」
　ローマ教皇は世界各国の国家元首に手紙を送付した。戦略級魔法師に対する婚姻に関して『世界規模の宗教の権威として喜ぶことは出来ない時勢だが、世界の平穏を願うために秘する覚悟を遂げる』という内容を綴っていた。
　聖書に反する内容を論ずることは簡単だが、キリスト教の範囲に及ばない宗教を軸としているに強要することは出来ない。仮に実行した場合、欧米諸国に影響を及ぼせたとしても日本や大亜連合をはじめ

としたアジア諸国が対象から外れることになり、世界のパワーバランスが著しく崩れてしまう。
　当人も物凄く悩んだのだろう……ということは文言の端々に表れていた、とディアッカは口にした。
「世界の平穏を取るべきか、宗教の権威として叱責すべきか……だが、宗教を政治に持ち込めばどうなるか、という結末は歴史が証明してしまっている。それに、反魔法主義も元を糺せばキリスト教の一派が尖兵化したようなもの。そんな人間に政治を口にして欲しくなどない」
「手厳しいですね」
「同じ神を崇拝しているとは思えんからな。ちなみにだが、摘発した組織は今度の海賊船爆破と共に消えてもらうこととなった。処分はディアス中佐に任せた」
　戦略級魔法のデモンストレーションで反魔法主義者を消す――――彼らにとってはこれ以上ない程の屈辱を味わわせる。
「「恒星炉」の導入で、非魔法師でもライフラインの確保という恩恵を受けることになる。君には長らく貢献してもらうことになるが、出来る限りの配慮はする」
「でしたら、せめてナターリヤが子を産んでも問題ない年齢まで婚姻関係は保留にしてください……」
　ドイツにいた時点でナターリヤを妻に迎えることは確定していた。なので、子や孫のことについては彼女の身体を慮ることで問題を先送りにした。それがどの道諦めてくれないとしても、今だけはまだ青春を謳歌したいというハンスなりの足掻きだった。
『軟弱者め。だが、気遣いをするということは覚悟したのかね？』
（今更投げ出したところで、妹が全力で追跡してくる未来しか見えねえんだよ。アイツにかくれんぼで勝てたことがねえからな）
　変に塞ぎ込んで精神を病むか、規格外に振り回されて生きる道か……なってしまったものはどうしようもない、とハンスはルーデルからの問いかけに対して妹を持ち出す形で答えたのだった。
「ん？　今、お兄ちゃんが私を褒めてくれた気がする」
「あ、あの、少し休憩を」

「だーめ」
「ああっ!?」
そして、そんな妹は夫となった少年を絞り上げていたのだった……
〝そういう〟意味で。

触れ得ざる者としての未来

西暦２０９８年３月１５日、土曜日。
国立魔法大学付属第一高校は卒業式を迎えた。無論、第一高校のみならず各地の魔法科高校八校も卒業式を迎える。新ソ連もといシベリア・モスクワ方面の情勢が国家解体によって鎮静化したため、厳戒態勢が解かれたためだ。
向こうの情勢が緊張下にあれば、三高や六高は卒業式を延期する事態となっただけに、事態の鎮静化は当事者としてもその保護者としても喜ばしいことだろう。
例年よりも早咲きした桜の木の下にあるベンチで、悠元は瞼を閉じて眠っていた。すると、人の気配を感じて瞼を開けると、そこには親友の姿があった。
「悠元、ここにいたのか」
「すまないな、達也。探させてしまったか？」
「いや、師匠のように気配を掴ませてくれないことはなかったからな」
本来なら悠元はリハーサルの関係で式場にいる時間なのだが、今更やるべきことなどない状態なのに、態々型に填まる道理もないとリハーサルは師族会議議長として断った。これまで学校内で権限など使ってこなかったのだから、最後の最後ぐらいは許してほしい我儘だと思ってほしい。
その意図を読み取ったのか、達也が深い溜息を吐いた。
「お前の場合はこの後新婚旅行があるからな。深雪が粗相をしないかだけが心配だ」
「そこはこれまで実妹のように育ってきた従妹を信頼してやれよ」
「それが出来たらな……」
本来、生徒会役員の慣例があるために深雪は一般入試で入学の予定だった。ところが、昨年末の段階で深雪に推薦入学枠を設けると国立魔法大学側から打診があった。その話を受けることで何が起きたのかと言えば、累乗加速ばりに増えてしまう愛情溢れた夜間戦闘訓練（肉体言語的な意味で）だったのは言うまでもない。

悠元と深雪は２月１４日――――悠元の誕生日に入籍した。彼女を皮切りに愛梨まで入籍することになり、一気に七人の妻を持つ意味で気が重くなるが、これはまだ皮切りに過ぎない。しかも、結婚はしないがエリーが無事妊娠したという報告は受けた。エリーは子供が出来ても年に一回は日本を訪れる予定とのことで、平穏など欠片も無かった。

彼女の報告によってさらに加速していく始末だが、それでも平然と耐え切って妻たちの腰を抜かしてしまう自身の規格外さにも溜息を吐きたい……と悠元は思った。

「ともあれ、もうじき本番だ」

「ああ、分かった」

そうして始まる卒業式。大勢の父兄や来賓に見守られて、卒業証書の授与が厳かに進む。この辺りは悠元が経験した前世と何ら変わりない印象だった。

今年度の卒業生は一科生、二科生、魔工科生合わせて１９５名。いつもならば３０名ほどの中退者が出ているわけだが、たった五名で済んでいるのは奇跡的だった。特に魔工科と二科は誰一人欠けることなく卒業を迎えている。

魔工科新設の影響で人数減少の皺寄せが二科に来ている形だが、それを差し引いても入学時に成績下位だった生徒が全員卒業を迎えるのは快挙と言えよう。尤も、それを成したのは彼らと同じ年に入学した一人の生徒の影響だが。

卒業生の人数のみならず、進路先も大幅に影響した。通年ならば半分程度だった国立魔法大学進学者が推薦・一般合わせて１６０名と大躍進。一方、防衛大学校への進学は１０名ほどに止まった。魔工科新設の影響とは言い難いが、カリキュラム見直しによる成績の向上は証明されたと言える。

卒業生は最初に最優秀卒業生――――学業のみならず課外活動なども加味した評価で選ばれた生徒が最初に受け取り、以降は成績の如何に関わらずＡ組から順に受け取る方式だった。

無論、最優秀卒業生こと最初に受け取ったのは悠元。そして、一番

最後に受け取ったのは達也だった。二人とも百山から祝福の言葉を受け取り、確りと卒業証書を受け取った。
そして、卒業生代表の答辞は深雪が務めることとなった。最初は悠元が務めることも考えられたが、昨年の入学式と同様に師族会議議長の祝辞を務めることで回避した。卒業生が自身に対する祝辞を述べるという頓珍漢な現象が発生しているが、こればかりは仕方がないと諦めて祝辞を読んだ。
流石に門出をぶち壊す様な発言は控えたが、『現実はそう甘くない』と国家公認魔法技能師として卒業生や在校生、父兄や来賓を前に堂々と発言した。それに対して真っ先に拍手を送ったのは、他ならぬ九島烈や上泉剛三、神楽坂千姫という世界の命運と戦った者達。
「……解っちゃいたことだが、身動きが取れないんだけど」
今年は全ての生徒が一つのパーティーに参加するということで、中庭でガーデンパーティーとなった。悠元は後輩たちに尊敬の眼差しを向けられながら応対すると、今度は妻や婚約者たちによる囲い込みに遭っていた。
「これも悠元の責任。今日ぐらいは羽目を外すから」
「流石に辱める気はないからな？」
「やはりお兄ちゃんは世界最強のジゴロ」
「悪魔合体させるな。というか、高校生活の最後でもオチを求めるな」
「のおおおっ!?　久々のアイアンクロォッ!?」
悠元は深雪と雫、姫梨とセリアに囲まれていた。達也は達也でリーナやほのか、英美やスバル、千秋に囲まれている。こういう時に揶揄ってきそうなエリカはレオを捕まえている為、何事も無くてよかった……と安堵していいのかは不明だが。
男子から羨望の眼差しは受けるものの、敵意などは一切感じられない。自分や達也にそう言ったことをした場合、漏れなく深雪からの制裁を受けることが分かっている為だ。
「泉美ちゃんもそうだが、香澄ちゃんもこちらへ来ようとしないな」
「本人たちにも聞きましたが、『どうせ家で会えるのだから、今無理をする必要もない』とのことで」

「迷惑とは思っちゃいないんだが、本人たちがそう決めたのなら無理強いも出来ないな」
その当人たちは光宣と理璃に話しかけていた。初々しい彼らを揶揄いたい部分もあるが、既にお互い婚約している身なので節度は弁えている。
セリアから『達也と深雪が婚約した後の展開』を聞いていたが、この世界では三高も卒業式の為に将輝や真紅郎が出張ってくるという事態は無くなった。ただ、それを引き換えに卒業式が終わり次第東京へ異動してくるそうだ。
新ソ連方面の情勢がいったん沈静化したため、国家公認戦略級魔法師として首都に詰めてもらう建前であり、一条家の別宅で暮らしながら国立魔法大学へ通うそうだ。立場もあって防衛大学校へ進むのかと思ったが、これについては一条家から事情説明を受けた。
『――色々考えましたが、息子には社会通念などを教え込まなければならないと強く感じて、国立魔法大学への進学を勧めました』
卒業式の1週間前、神楽坂家の別邸で対面した一条家現当主・一条剛毅は悠元に対してそのように説明した。元々は将輝の妹である一条茜の転校手続きを神楽坂家に依頼することと、その際に茜の戸籍を一条家から抜いて高槻家が引き取ること。
結局千姫は悠元に対して偉そうな態度を取った面々を本家で処断することはせず、分家単位で各々の判断を取らせた。茜の引き取りは分家による本家への謝罪の一環で実施する。
実害と言えば精々真剣を振るわれた程度だが、剛三の本気の刃を交えたことがある人間からすれば『余りにも寝惚けた太刀筋』という評価しかもらえないだろう。いくら世界が広かろうとも、木刀で海を割ってしまう芸当なんて剛三以外に出来て欲しくはない、と切実に思う。
その位の実力が備わっているのならば、千姫もあまり悩まずに次期当主を選定できたと思われる。今更終わってしまった結果に〝もしも〟は求められないが。
「ただ、結婚というか入籍まで告知しといてあのバレンタインのチョ

コの数は流石に引いたわ。お礼は全部返したが」
「そうやって律儀にお返しするから、頼りがいのある殿方だと思われるんじゃないかと」
「社会的な礼儀を返してるだけなんだがなあ」
将輝のことがある為、年初めに師族会議議長として手紙を送った。第一婚約者である深雪と入籍し、その他の婚約者については時期を見た上で入籍をすることも併せて記載しておいた。バレンタイン前に告知したのにも拘らず、送られてくるチョコの数は減る兆しを見せなかった。
深雪以外の婚約者たちからは事前に貰うパターンとなり、深雪からはチョコを貰う代わりに結婚指輪を贈った。流石に学校で填めている訳にはいかないため、ネックレスの形で身に付けている。
その日の夜のことについては……最早聞くまでもない恒例行事かもしれない。
「これから忙しくなる日々は確定だが、今ぐらいは平和を享受したい」
前世で身内絡みを嫌と言うほど経験し、今世でも結局は身内絡みに巻き込まれることもあった。
でも、悠元は前の人生を決して否定はしないし、今の人生も否定しない。
それはこれまでを構成している神楽坂悠元の為人は、二つの人生を通して得たもののなのだから。
いつもより早く開花した桜が散り始め、桜の花びらが風に乗って舞っていく。
桜色の花びらに彩られた空は、綺麗な青を佇ませていた。

三矢家を規格外の存在に仕立て上げた一人の少年。
彼の存在は劣等生たちを優等生にまでのし上がらせ、誰も手が付けられなかった劣等生の兄が優等生となるほどの実績を稼いだ。
その縁で優等生の妹と縁を結んだだけでなく、様々な人との縁を繋ぎ、更には世界との縁すらも繋いだ。この世界の内に止まらず、並行

した存在の世界ですらも救おうと尽力した。
神楽坂悠元は国立魔法大学へ進学。トライローズ・エレクトロニクス理事長兼現師族会議議長である人物が国立魔法大学へ進学することは日本魔法界で疑問を呼んだ。だが、日本政府が異を唱えずに沈黙したことで、噂は瞬く間に消えた。
司波達也・深雪兄妹（実際には従兄妹）も同じく国立魔法大学へ進学。この三人はカリキュラムの都合で一緒に行動することが多いものの、達也は同じく進学したリーナやほのかたちと一緒に行動している為か、悠元は深雪と一緒に行動していることが多い。
『恒星炉』関連は理解のある所属ゼミに在籍しているが、事業準備は既に高校の段階で終えており、財界とのすり合わせは北山家が仲介してくれている為に大きな仕事はない。なので、悠元や達也は大学生活を謳歌出来ているという訳だ。
先に名を挙げた光井ほのかやアンジェリーナ・シールズ、北山雫やエクセリア・シールズ、六塚燈也などと言った元一科生組。そして千葉エリカ改め香取エリカや西城レオンハルト、吉田幹比古や柴田美月などの元二科生組も大学生活を謳歌している。しかも、彼らの所属ゼミも悠元や達也と同じだ。
実を言うと、悠元が進学する際に三矢美嘉（２０９８年春には入籍して十文字美嘉となる）が大学教員として採用され、悠元や達也の所属ゼミを美嘉が受け持つこととなった。そのゼミには他のゼミにいた十文字克人や二木真由美も転属となり、元一高生が主体となる一大勢力になっていた。
その集まりには三高出身者もおり、一色愛梨や四十九院沓子、十七夜栞もそのゼミに所属している。ゼミでは『魔法教育の発展に寄与する魔法教育理論の研究』を主題としており、美嘉も高校時代にはぶっ飛んだ内容で論文コンペに応募して蹴られたが、その内容を精査した大学側が懇願して教員になった経緯がある。
実績を第一高校で示している以上、誰も文句など言えなかった大人の事情が存在するのだった。
三高出身と言えば、一条将輝と吉祥寺真紅郎も何と同じゼミに所属

している。悠元と将輝は深雪を巡って対決した恋のライバルだが、昨年の九校戦で全てにケリをつけた。なので、将輝も納得して割り切った関係を構築し始めている。
一方の真紅郎は悠元と構築していた関係もあり、すんなりと打ち解けていた。九校戦でのことは純粋なライバル心から来るものであり、魔法研究者として元［トーラス・シルバー］である悠元と達也のことを一目置いている。なお、一条家次女との仲は親公認で引き返せない様子。
「ごしゅじ……コホン。悠元様、そろそろお時間ですよ」
「ありがとう、深雪。そういうところは律儀だよな」
「私がそう望んだからです」
この先の未来が激動を迎えることは理解している。
だからと言って、見て見ぬふりなど出来ないことも納得している。
ならば、堂々とその力を示すことで世界の在り方を問い続けよう。
それが、『触れ得ざる者』として自分に出来る役目なのだと。